# 永遠の美少女になって永遠の闘病生活に入った件

名無し野ハゲ豚

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

両親から「一番優しい子に育って欲しい」という願いを込めて名付けられた「石山優一（いしやまゆういち）」は、その名前に反して乱暴で粗野で怒りっぽい性格に育ってしまった。

親の名付けの希望を裏切ることに引け目を感じつつもやめられない中、授業中に突然倒れて病院に運ばれてしまう。

気付いたその次には「永遠の美少女」になってしまったと告げられる

序中盤あたりにどうしても外せないシリアスシーンがあります。作者が無能なので消せませんでした。

既に終盤まで完成してますので途中からはハイペースで上げていきます。書き溜め分が投稿し終わったら、通常の更新速度に戻ります。

本編完結しました。現在番外編を執筆中です。

マグネットでも連載開始しました↓ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｍａｇｎｅｔ－ｎｏｖｅｌｓ．ｃｏｍ／ｎｏｖｅｌｓ／５１００８

# 目次


プロローグ
プロローグ　1
第一章　新しい人生へ
突然の激痛　5
起床しての違和感　11
突きつけられた現実　前編　18
突きつけられた現実　中編　28
突きつけられた現実　後編　36
決意　46
打ち明ける想い　前編　56
打ち明ける想い　後編　66
女の子の修行1日目　前編　76
女の子の修行1日目　後編　86
女の子の修行2日目　前編　95
女の子の修行2日目　後編　106
女の子の修行3日目　前編　117
女の子の修行3日目　中編　129
女の子の修行3日目　後編　140
女の子の修行4日目　前編　151
女の子の修行4日目　後編　162
第二章　女の子として見て
復学初日　前編　173
復学初日　後編　183
孤独な体育　193

変質者現る　203
久々の安息　212
運命の日　前編　221
運命の日　後編　231
和解の種　241
女の子として扱って！　前編　251
女の子として扱って！　後編　263
幕間　ここまでの登場人物の紹介　275
第三章　恋する乙女になりたい
美少女の休日　前編　283
美少女の休日　後編　295
天文部への誘い　306
変わり始める日常　318
精算と未来　330
季節の変わり目梅雨の兆し　339
もっと深く、女の子に　351
球技大会　前編　363
球技大会　後編　373
優子、優しい子　386
初めての水泳　397
林間学校実行委員　408
永原先生の望み　418
秘密の告白　428
２人はＴＳ病　439
教頭の撃退　450

水泳での祝福 461
林間学校前夜 471
林間学校初日　出発 481
林間学校初日　到着 492
林間学校初日　休息と夕食 502
林間学校初日　初めての共同浴場 512
林間学校二日目　可愛い優子、美人の優子 524
林間学校二日目　一緒に山に登ろう 536
林間学校二日目　下山と休息 548
林間学校三日目　集団朝風呂と森林教室 561
林間学校三日目　長い自由時間 572
林間学校三日目　バーベキュー 583
林間学校三日目　小さな花火大会 594
林間学校四日目　ホテルでの最後の時間 606
林間学校四日目　優子の恋 617
林間学校四日目　原点への旅 629
林間学校四日目　永原先生の罪 641
幕間　ここまでの舞台設定等 653
第四章　男を好きになるということ
お人形さんで遊ぼう 666
補講　前編 678
補講　後編 688
かしまし娘たちのお泊まり会　前編 700
かしまし娘たちのお泊まり会　中編 711
かしまし娘たちのお泊まり会　後編 723

模様替え　前編 ―― 734
模様替え　後編 ―― 745
水着と浴衣 ―― 757
海へ ―― 769
優子の荒療治 ―― 779
日焼け止めクリーム ―― 790
本能を女の子にするということ ―― 803
スイカ割り大会 ―― 814
海辺の昼食 ―― 825
ビーチサッカー ―― 837
楽しい夏祭り　永原先生の着物 ―― 850
楽しい夏祭り　浩介くんとお化け屋敷 ―― 861
楽しい夏祭り　浩介くんと屋台巡り ―― 873
楽しい夏祭り　みんなで盆踊り ―― 885
楽しい夏祭り　終わりの花火 ―― 896
デートのお誘い ―― 908
初めてのデート ―― 919
優一と優子 ―― 930
草野球の観戦 ―― 940
数奇な運命 ―― 952
水族館へ ―― 961
蓬莱教授の野望 ―― 972
蓬莱教授の予言と水族館ショー ―― 983
夏休み明け ―― 994
期末試験 ―― 1006

文化祭　出し物を決めよう　1015
メイド喫茶を準備しよう　1026
小谷学園ミスコンの意外な刺客　1037
永原先生の憧れ　1047
文化祭が始まる　1059
嫉妬の種　1070
浩介くんのご機嫌を取り戻そう　1081
優子の本性　1093
ミスコン本戦へ　1105
水着審査でまた嫉妬　1116
志賀さくらの想い　1125
優子の裏表　1138
優子の歪んだ心　1150
後夜祭　～優子の最後のご主人様～　1160
浩介くんの告白　1171
幕間　ここまでの登場人物の紹介　第４章　1182
第五章　彼氏と青春
初めての経験　1204
変化する優子　1216
恋人としてのデート　清楚編　1226
恋人としてのデート　淫乱編　1237
恋人としてのデート　余韻編　1249
日本性転換症候群協会への誘い　1260
協会本部　前編　1271
協会本部　中編　1282

協会本部　後編 …… 292
体育祭への準備 …… 302
協会会合への参加 …… 312
優子の後輩 …… 324
初仕事 …… 334
優子の母性 …… 346
幸子さんの服選び …… 358
船と飛行機 …… 369
体育祭へ …… 379
体育祭　前編 …… 389
体育祭　中編 …… 399
体育祭　後編 …… 410
都会の２人旅 …… 422
少女たちの空間 …… 434
奇妙な温泉施設 …… 445
後戻りはもうできない …… 456
塩津幸子は生まれ変わる …… 467
それは呪いか祝福か …… 477
初めての冬 …… 488
カリキュラムの様子 …… 498
幸子さんの修行　前編 …… 508
幸子さんの修行　後編 …… 520
永原先生最後の教え …… 532
戻り始める日常 …… 542
優子ちゃんが羨ましい …… 552

変化する協会 ―― 1562
浩介くんの両親 ―― 1572
気に入られた優子 ―― 1582
クリスマスイブの電気屋さん ―― 1594
天体観測 ―― 1603
記者会見と家デート ―― 1613
背徳から純愛へ ―― 1624
クリスマスの日 ―― 1635
蓬莱教授の緊急会合 ―― 1646
元旦 ―― 1657
新年の登校 ―― 1668
スキー合宿への展開、そして突然の来訪者 ―― 1678
2回目の大きな決意 ―― 1689
永原先生の救い ―― 1699
スキー合宿1日目　北への出発 ―― 1710
スキー合宿1日目　布教活動 ―― 1720
スキー合宿1日目　ホテルの粋な計らい ―― 1731
スキー合宿2日目　ホテルの朝 ―― 1743
スキー合宿2日目　子供たちとスキー ―― 1754
スキー合宿2日目　初めてのお風呂 ―― 1766
スキー合宿3日目　永原先生と午前スキー ―― 1777
スキー合宿3日目　永原先生の挫折 ―― 1788
スキー合宿3日目　浩介くんの晴れ舞台　～スキーとお風呂～ ―― 1798
スキー合宿4日目　終わりの食堂、終わりのお風呂 ―― 1812

スキー合宿４日目　あるホテルの死 ―― 18
近付くバレンタインデー ―― 31
バレンタイン当日 ―― 45
期末試験と進路指導 ―― 56
卒業式　前編 ―― 61
卒業式　後編 ―― 75
幕間　ここまでの小説に出てくる歴史上の人物 ―― 84
第六章　彼氏彼女のその先へ
春の遊園地 ―― 88
スカートを賭けたお化け屋敷 ―― 91
恐怖と驚きそして恥ずかし嬉し ―― 94
昼のひととき ―― 98
最後の遊園地 ―― 101
始業式 ―― 105
永原先生と蓬莱教授の作戦 ―― 109
急変する天文部 ―― 112
午前の会議揺れる思惑 ―― 119
幸子さんの確かな成長 ―― 122
知的な優子 ―― 126
意外な訪問者　前編 ―― 129
意外な訪問者　後編 ―― 133
反響 ―― 142
ゴールデンウィークの過ごし方 ―― 145
花嫁修業１日目　前編 ―― 152
花嫁修業１日目　中編 ―― 160

花嫁修業1日目　後編 …… 72
花嫁修業2日目　前編 …… 83
花嫁修業2日目　中編 …… 94
花嫁修業2日目　中編―2 …… 105
花嫁修業2日目　後編 …… 117
花嫁修業最終日 …… 128
パーティーの準備 …… 139
1年目の日 …… 148
パーテイドレス …… 158
パーティーが始まる …… 169
友達の友達の交流会 …… 180
パーティーの終幕 …… 191
浩介くんがいない天文部 …… 202
再び夏服 …… 212
優子の球技大会 …… 222
小谷学園のグランドスラム　前編 …… 233
小谷学園のグランドスラム　中編 …… 244
小谷学園のグランドスラム　後編 …… 255
反省会 …… 267
スカウト行為 …… 279
2年目の初夏 …… 292
修学旅行1日目　いざ西へ …… 302
修学旅行1日目　カルチャーショック …… 312
修学旅行1日目　京都へ着いて …… 322
修学旅行2日目　古き古都の新しき名所 …… 333

修学旅行２日目　永原先生の意外な趣味 …… 343
修学旅行２日目　永原先生の昔話 …… 352
修学旅行２日目　大いなる遺産 …… 363
修学旅行２日目　京の夜 …… 373
修学旅行３日目　明朝の女湯 …… 384
修学旅行３日目　いざ大阪 …… 395
修学旅行３日目　分かっている人の苦悩 …… 405
修学旅行３日目　駅の街、街の駅 …… 415
修学旅行３日目　ミナミを進む …… 424
修学旅行３日目　鉄道と深海 …… 434
修学旅行３日目　神戸のお肉屋さん …… 443
修学旅行最終日　古き京都のお寺たち　前編 …… 455
修学旅行最終日　古き京都のお寺たち　後編 …… 465
修学旅行最終日　のんびりとした帰り道 …… 476
ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　前編 …… 486
ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　中編 …… 497
ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　後編 …… 506
アフターデート …… 514
浩介くんとプールで遊ぼう …… 525
篠原浩介、性欲との戦い　前編 …… 534
篠原浩介、性欲との戦い　後編 …… 545
プールからキャンプ場へ　喧騒と静寂と …… 558
キャンプ場でのバーベキュー …… 569
母と「義母」との大浴場 …… 580
静かな川岸にて …… 590

残暑と初秋の日々 ―― 601
多忙になる優子 ―― 612
思い出の数々 ―― 622
圧倒的な得票差 ―― 626
永原先生の青春 ―― 634
優子の罪と恵美の誤算 ―― 642
成長する桂子 ―― 644
ミスコンから後夜祭へ ―― 654
最高の思い出 ―― 662
幕間　ここまでの登場人物の紹介　第５―６章 ―― 667
第七章　最後の高校生活
新たな戦い ―― 687
再び二正面作戦 ―― 700
体育祭、いちゃつき、そして新しい患者のこと ―― 717
永原先生の怒り ―― 727
アメとムチ ―― 735
優子の新しいポスト ―― 746
場外乱闘 ―― 758
クリスマスプレゼントを選ぶ ―― 769
決められたプレゼント ―― 781
クリスマスイブ　帰省 ―― 791
静かなクリスマス ―― 802
２０１９年 ―― 812
どんよりバレンタイン ―― 822
衝撃的な企画 ―― 833
―― 844
―― 856

転校生 …… 67
受け入れられた転校生 …… 72
3年1組　永原マキノちゃん …… 88
夢の終わり …… 98
2つのリハーサル …… 109
石山優子最後の時 …… 122
幕間　ここまでの時系列整理 …… 129
第八章　新婚
時間つぶし …… 142
結婚式　前編 …… 143
結婚式　中編 …… 152
結婚式　後編 …… 165
2人きりの夜　前編 …… 174
2人きりの夜　後編 …… 182
別れ　そして新たな始まり …… 196
新婚旅行1日目　最初のスポット …… 198
新婚旅行1日目　古き日の鉄道 …… 203
新婚旅行1日目　時代は変わる …… 213
新婚旅行1日目　鉄道技術とアトラクション …… 223
新婚旅行1日目　新たなホテルへ …… 230
新婚旅行2日目　午前の東北 …… 243
新婚旅行2日目　東北の昼時 …… 253
新婚旅行2日目　別荘を借りて贅沢しよう …… 265
新婚旅行3日目　午前の秘め事 …… 279
新婚旅行3日目　激しい運動をたくさんしよう …… 293

新婚旅行最終日　長き帰路　前編 ―― 135
新婚旅行最終日　長き帰路　後編 ―― 147
新たな生活 ―― 315
第九章　女子大生　篠原優子の物語
佐和山大学へ ―― 168
蓬莱教授の薬 ―― 178
ガイダンス ―― 189
非常識なサークル ―― 199
２００歳の記者会見 ―― 210
学業と不老の両立 ―― 220
永原先生の非情 ―― 229
分裂 ―― 237
夫婦水入らずの２日間　ついついしちゃう２人きりの誘惑 ―― 247
夫婦水入らずの２日間　優子の罪悪感 ―― 258
夫婦水入らずの２日間　閉鎖空間での暴走 ―― 269
夫婦水入らずの２日間　異常な日常 ―― 280
夫婦水入らずの２日間　篠原夫妻危機一髪!? ―― 291
夫婦水入らずの２日間　戻る日常進む情勢 ―― 302
早すぎる決着 ―― 311
戦後処理 ―― 322
幸子さんの失恋 ―― 333
闘争を仕掛ける協会 ―― 342
新天文部の出し物 ―― 353
優子の撃退劇 ―― 363
世界に広がる作戦 ―― 373

誘爆に次ぐ誘爆 ―― 384
優子の素朴な疑問 ―― 339
再び海へ ―― 334
優子のリベンジ ―― 340
少女たちは遊び尽くす ―― 416
浜辺の宴 ―― 429
午後の海辺で ―― 344
鑑定番組への出演 ―― 403
永原先生の家宝　前編 ―― 450
永原先生の家宝　後編 ―― 461
余波 ―― 472
美少女の休日　博物館編 ―― 484
後期の始まり ―― 494
さわわ祭りの開始 ―― 504
ＴＳ病の存在意義 ―― 514
審査員長になった優子 ―― 524
蓬莱教授の演説 ―― 535
無縁の演劇 ―― 546
祭りが終わる ―― 555
篠原家の師走 ―― 565
大晦日の帰省 ―― 575
五輪の年 ―― 586
夫婦のバレンタイン ―― 598
久々の再会 ―― 611
天才テニス選手と天才再生医療学者 ―― 623
364

はじめての結婚記念日　高校生に戻ろう　―――― 3663
はじめての結婚記念日　暴走する６人　―――― 3665
第十章　女子大生　篠原優子の物語　上級生編
意外な仲間　―――― 3668
２つのＴＳ病　前編　―――― 3669
２つのＴＳ病　後編　―――― 3703
初めての家族旅行　１日目　ダム湖畔の温泉　―――― 3714
初めての家族旅行　１日目　浩介くんのマッサージフルコース
初めての家族旅行　２日目　長いトンネルに取り残されて　―――― 3727
初めての家族旅行　２日目　４８６の道　―――― 3737
初めての家族旅行　２日目　要塞の地下駅　―――― 3749
初めての家族旅行　２日目　名前ばかりの交通機関　―――― 3760
初めての家族旅行　最終日　颯爽とした帰路　―――― 3771
蓬莱教授の罠　―――― 3782
五輪前の駆け込み　―――― 3794
五輪観戦　―――― 3804
懐かしい顔　―――― 3816
２度目のさわわ祭り、ダンスサークルの賭け　―――― 3826
蓬莱教授と浦島太郎　―――― 3837
蓬莱教授の栄誉　―――― 3848
永原先生の野望　―――― 3859
行く年来る年　クリスマスから正月へ　―――― 3869
成人式　―――― 3879
同窓会と禁酒　―――― 3889

嫉妬との付き合い方 ―― 39
国際反蓬莱連合 ―― 39
政権との交渉　前編 ―― 39
政府との交渉　後編 ―― 39
永原先生の拠り所 ―― 39
不気味な安息 ―― 39
反旗の狼煙 ―― 39
集まった人々 ―― 39
出発前の演説 ―― 39
デモ行進 ―― 39
団結力の勝利 ―― 39
次なる戦いへ ―― 39
行政内の利害 ―― 39
クリスマスから２０２２年へ ―― 40
結婚記念の大会議 ―― 40
２１歳の国会議員 ―― 40
研究の最前線 ―― 40
遠くでのせめぎあい ―― 40
更なる蜜月関係 ―― 40
夏の夫婦旅行１日目　最後の夏休み ―― 40
夏の夫婦旅行１日目　新たな戦略を秘めいざ富山へ ―― 40
夏の夫婦旅行１日目　遺産を活用して ―― 40
夏の夫婦旅行２日目　朝の出来事 ―― 41
夏の夫婦旅行２日目　地方の足 ―― 41
夏の夫婦旅行２日目　宇奈月 ―― 41

夏の夫婦旅行２日目　絶景と電力と　160
夏の夫婦旅行２日目　終点の山奥　169
夏の夫婦旅行３日目　遙かなる立山へ　178
夏の夫婦旅行３日目　天にとどく　189
夏の夫婦旅行３日目　雲上の世界で　200
夏の夫婦旅行３日目　天空から地底へ　210
夏の夫婦旅行３日目　文明の偉大さ　220
夏の夫婦旅行３日目　残りの道　232
秋へ向けて　242
久々の小谷学園　342
頓挫した企み　342
懐かしい思い出　344
注目の的　425
小谷学園の伝説　426
学園祭の面談　427
いけないこと　428
蓬莱教授の驚愕　429
龍香ちゃんの結婚式　430
卒業とサプライズ　431
幕間　ここまでの小説に出てくる歴史上の人物　第十章　433
第十一章　解答への道　436
どんより結婚記念日　443
蓬莱教授の大学院　443
往生際の悪い抵抗勢力　444
不老と世界征服　441

海外の動向 …… 425
楽しい水遊び …… 443
世界を使った宣伝準備 …… 444
大学院の文化祭 …… 455
教え子の巣立ち　前編 …… 466
教え子の巣立ち　後編 …… 478
いつもの休日いつもの誕生日　前編 …… 489
いつもの休日いつもの誕生日　後編 …… 500
突然の成功 …… 512
困難は続く …… 522
政府共同の記者会見 …… 532
官房長官と記者会見 …… 543
会社発足会議　篠原夫妻の衝撃 …… 553
博士の道と役員人事 …… 563
永原先生の宗教接触 …… 572
新会社の立ち上げ …… 581
予定地を絞り込もう …… 591
市長の歓迎 …… 602
工場の土地 …… 613
論文の掲載 …… 623
安らぎのない日々 …… 633
女性常務のお茶出し …… 643
支配者の論理 …… 654
始動 …… 665
宣伝活動 …… 675

工場ができていく　684
高月章三郎の指摘　694
北海道へ　704
北海道での歓迎　714
支店建設　724
明かされた秘密　733
久々の永田町　745
また師走の時　754
忘年会の始まり　765
社員との交流　774
幹部同士の交流　785
永原先生の意地悪問題　794
浩介くんと抜け出し　804
忘年会が終わって　814
マネー・ゲーム　824
桂子ちゃんのお仕事　835
移住計画　前編　845
移住計画　後編　855
蓬莱教授の戦略的慈善　864
初めての株主総会　前編　873
初めての株主総会　後編　882
新天地へ　890
豪邸生活1日目　前編　900
豪邸生活1日目　中編　913
豪邸生活1日目　後編　925

豪邸生活２日目　前編 ―― 35
豪邸生活２日目　中編 ―― 46
豪邸生活２日目　後編 ―― 49
１本の電話 ―― 57
日程の確認 ―― 68
２０２７年１２月６日　成田への道 ―― 94
２０２７年１２月６日　Ｓｋｙ　ｔｏ　Ｄｒｅａｍ　～空から夢へ～ ―― 97
２０２７年１２月６日　空の宮殿 ―― 99
２０２７年１２月６日　遥か空からノーベルの地へ ―― 104
２０２７年１２月７日　ホテルの中で ―― 120
２０２７年１２月８日　伝説の足跡へ ―― 125
２０２７年１２月８日　偉大な人々 ―― 130
２０２７年１２月８日　記録を残す ―― 135
２０２７年１２月９日　リハーサル ―― 145
２０２７年１２月９日　明日のこと ―― 150
２０２７年１２月１０日　当日の朝 ―― 165
２０２７年１２月１０日　国王陛下 ―― 185
２０２７年１２月１０日　荘厳な空間 ―― 198
２０２７年１２月１０日　永遠の美少女になって永遠の栄誉を得た件 ―― 218
２０２７年１２月１０日　晩餐会へ ―― 238
２０２７年１２月１０日　晩餐会が始まる ―― 251
２０２７年１２月１０日　盛り上がる晩餐会 ―― 260
２０２７年１２月１０日　少女に歯向かう者 ―― 271

2027年12月10日　全部は救えない　5180
2027年12月10日　ノーベル・レクチャー　蓬莱教授の場合　5190
2027年12月10日　ノーベル・レクチャー　浩介くんの場合　5199
2027年12月10日　ノーベル・レクチャー　優子の場合　前編　5209
2027年12月10日　ノーベル・レクチャー　優子の場合　後編　5218
2027年12月10日　舞踏会　5227
2027年12月10日　式典の後　5237
2027年12月11日　嵐の後の静けさ　5248
2027年12月11日　さらばスウェーデン　5259
2027年12月12日　時代と言語　5269
2027年12月12日　逃避行　～見捨てられた遺産駅～　5279
2027年12月12日　逃避行　～戻ってきた家～　5291
兆候　5302
激動の1年が終わる　5313
先輩たちの教え　5323
本格始動　5333
母親　5345
小谷学園に残す遺産　5356
記念館のこと　5366
資産家たちの昼食　5376

復職 387
安定感のある所 396
初めてのメッセージ 407
自然の中の安らぎ 418
新たな悩み 430
11回目の記念日 440
夏の過ごし方 450
始まりの場所 460
入院生活 471
今日の夕食 481
健康診断 491
お見舞い、そして意外な鉢合わせ 501
永原先生との中華料理 512
赤ちゃんの名前 522
最後のシグナル 531
やっと見つけた　最高の幸せ 542
エピローグ 555
エピローグ 556
編集後記 560
登場人物まとめ 569
世界観紹介 585
この小説に出てくる歴史上の人物 630
当時の古典 652
番外編1　TS娘、塩津幸子の物語 563
俺こと塩津悟が女の子になった日 656

どうすんだよこれ！ ―― 60
訪問者の宣告 ―― 66
最初の日の終り ―― 65
再びの忠告 ―― 67
大学へ戻った日　前編 ―― 56
大学へ戻った日　後編 ―― 82
感情のもつれ ―― 25
希望の光 ―― 70
運命の訪問者 ―― 15
壮絶な人生 ―― 57
石山優子という少女 ―― 92
新しい装い　前編 ―― 69
新しい装い　後編 ―― 76
せめぎあい ―― 61
いざ、東京へ ―― 52
都会の２人旅　幸子サイド　前編 ―― 74
都会の２人旅　幸子サイド　中編 ―― 44
都会の２人旅　幸子サイド　中編―２ ―― 73
　都会の２人旅　幸子サイド　後編 ―― 35
芽生え ―― 55
本来の姿 ―― 72
ついに来てしまった ―― 45
一歩一歩、女の子へ ―― 71
塩津幸子、女の子へ向けて　１日目 ―― 15
　塩津幸子、女の子へ向けて　２～４日目 ―― 70
58 76 58 68 58 58 84 95 83 85 82 75 81 65 80 75 79 75 78 75 77 95 76 95 76 15 75 25 74 45 73 55 72 45 71 55 70 85 70 15 69 25 68 25 67 45 66 65 66 60

塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　前編 ―――― 5
塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　中編 ―――― 8
塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　後編 ―――― 9
塩津幸子、女の子へ向けて　6日目 ―――― 14
本格復帰 ―――― 59

# プロローグ

## プロローグ

「だから、てめえが悪いんだろうがこの野郎!!」
「お、おい、そんなに怒らなくてもいいだろ……」
食事が終わった後の昼休み。今日も、些細なことから喧嘩だ。
俺は毎日怒りながら高校生活を送っている。怒ればますますストレスが溜まるとわかっていつつも、これをやめることが出来ない。
「あー全く!!!」
これ以上の不毛な喧嘩をしても仕方ない。周囲が野次を飛ばす中、黙らせるために扉を思いっきり締めつつ水でも飲もうかと水飲み場に向かう途中だった。
「ねえ優一……」
一人の女子生徒が話しかける。
俺の名前は「石山優一(いしやまゆういち)」だから、明らかに俺に向けてのものだ。
「あ?」
「また喧嘩したの? 飽きないよねえ……」
「仕方ねえだろ、頭に来ることがあったんだ」
「でもさ、そうやって怒っても、何にもなんないじゃない」
「うるせえな、分かってんだよ。俺にも……俺にだってこんなこと不毛だってことくらいはよ」
「じゃあどうしてやめられないのよ?」
「……きっと、多くの大人が酒や煙草、あるいは麻薬をやめられないのと同じだろうよ。イライラする事があれば怒らずには居られなくなる。この前も芸能人が麻薬取締法違反で捕まったけどあいつなんてもう何度目だ? 染み付いたことをやめると言ってやめるのは難しいということだ」
「……根深いわね」
「あんただって、田村と喧嘩ばっかしてるじゃないか」
「あ、あれは、あいつが悪いんであって……」

「……ほら、似た者同士だろ？」
「も、もう……」
「俺には、女子の2グループがどういう意地を張っているのかは知らんが」
「あー、深く追求しても仕方ねえな。とりあえず、俺は頭冷やすために水でも飲むことにするよ。休み時間ももう短いからな。遅れるなよ」
「そう、いってらっしゃい」
今話したこいつは「木ノ本桂子（きのもとけいこ）」といって、俺の高校では唯一小中学校からの同級生だ。
まあその縁もあってこうして話すこともある。木ノ本も木ノ本で曲がりなりにも以前より面識がある相手と言うのは話しやすいらしい。
そうは言っても友人というほどでもない単なる話し相手だが、幸いなことにこいつは「田村恵美（たむらえみ）」と並んで、うちの学年の女子グループを2分する勢力のリーダー格ということや、俺が（意図的に触られないようにしているのは明らかとは言え）女子には喧嘩を売らないというのもあって田村のグループの女子はともかく、木ノ本のグループの女子からはそこまで悪感情を持たれていない。
まあ、こいつはこいつで田村と喧嘩に明け暮れてるからな。そう言う意味では似た者同士かもしれんし、もしかしたら木ノ本のグループからは俺が男子ということで「威圧」の役割も期待されているんだろうな。
後は木ノ本が俺によく話しかけてくる理由としては、俺が男だという所もあるだろうな。
木ノ本はよく見なくてもクラスでも一番可愛くて美人なのだが、どうも女子グループの二大勢力のリーダーということで男子からも高嶺の花としてやや敬遠されてて俺くらいしか話す男子は居ない。
あいつのことはまあいいや。それよりも水でも飲んで落ち着け無いと。成績にも影響するからな。普段の態度が悪いんだ、せめて学校の成績くらい真ん中には居たい。

キーンコーンカーンコーン
しまった、予鈴だ。にしても前のやつ遅いな。
お、よしよし。飲み終わったかな？
……んだよ、こいつうがいまでし始めやがったぞ。
まずい、飲むのも長いくせに時間ばかりが過ぎていく……
ああ、水が飲みたい、早く飲みたい、どうすればいいんだ！
くそ、埒が明かない！　この野郎!!　こうなったらこうしてやる!!!
「おい!!!」
前の男子生徒がビクッとする。
「な、何だよ……」
「いつまで飲んでんだこの野郎！　後ろの俺のことも考えろ！」
「いや、人間後ろに目ついてないし……」
「こおのお……いいからどけってんだバカ！」
背中の襟を掴み、強引に引き剥がし、俺はようやく水にありつけた。
水を飲み終わり、教室へ戻ると、再び木ノ本が声をかけてきた。
「優一、さっきまた怒鳴ってたよね？　ここまで聞こえてきたけど、また何かあったの？」
「ああ、水飲み場を占拠してるやつが居て、予鈴も鳴ってたから、カッとなって無理やり引き剥がしちまった」
「相変わらずだね。喧嘩っ早いことはさ、私はいいんだけどさ、あんたの名前、両親が悲しむわよ」
「……やめてくれよ。俺だって、名前と行動の不一致で悩んだりするんだ」
「ごめん、気にしてるのわかってるんだけど、どうしても言わずには居られなくて」
「悪気はないのは分かっとるよ。だけど、その話は……」
「あ、ごめん。もう予鈴が鳴ってたね。早く席につかないと」
「あ、ああ。」
小学生時代のことだ。
俺の名前、「優一」と言うのは「一番優しい人に育って欲しい」という意味で名付けたんだと親に聞かされた。

そんな俺が、ひどく乱暴に育ってしまったこと。親はまだ、少なくとも表面上は気付いていないようだが、俺が乱暴な性格になったと知ったら間違いなく悲しむはずだ。名は体を表さず。というわけだな。

乱暴者なんて辞めたいが、どうしても辞めることが出来ない。怒りを抑えることが出来ない。

ひどく怒り続ければ、いつか皆は近寄らなくなるはず。なんて思ったこともあったが、学校生活を送る以上、それは無理な注文だ。

高校も2年の5月になったが相変わらず中学時代と変わらずに、俺はあちこちで周囲と衝突を繰り返している。

もしかしたら、これが俺の天命かもしれん。

「うっ……」

「ん？　どうしたの？　珍しいじゃない、苦しそうにして」

「ああ、いや、何でもない」

「そ、そう？」

「気のせいだったみたいだ。悪い悪い」

うーむ、どうも下腹部が一瞬痛んだと思ったんだが、なんか悪いものでも食ったか？

反射的に腹を抑えてしまったが、どうも腹の何処かが悪いというわけでもないし……

うーん、今は考えても仕方ない、とりあえず次の数学の授業に集中しよう。気分が悪くなったら保健室に行けば大丈夫だろう。

# 第一章　新しい人生へ

## 突然の激痛

「えー、この様にですね、二回微分を行い、二次導関数を使うことによって、これまでのグラフよりも、より詳細な再現が可能になります。つまり傾きの向きが変わる。これが変曲点です。更に、今までやってきた一次二次三次と言った関数のグラフの他にも、三角関数や指数関数などを合成した関数のグラフもかけるようになるんだ」

数学の小野先生の授業は分かりにくいと不評だが、俺はそうも思わない。

きちんとノートにとって見直しさえすればうまくいく筈だ。

残念なことに、俺は全く勉強せずに理解できるほど頭が良くないらしい。

「では、次の問題、この問題を木ノ本、解いてみろ」

「はい」

木ノ本桂子が指名され、黒板に答えを書いていく。

「……出来ました」

「よろしい。関数と微分の性質にも、皆慣れてきたと思うから、応用問題に入ります。問題集の１３６ページを開いてください」

授業は何の滞りもなく進む。

幸いなことに、授業はおしゃべりするバカも居ないでゆったり進んでいる。

……まあ俺が授業中喋っていて気が散ったら「授業に集中できない」と怒りに身を任せて怒鳴り散らしたせいであるが。

「では、まずは例題から解いていきます」

「んんっ……!!!!」

な、何だ？　さっきよりも下腹部が……!!!

「えーまずは……石山、どうした？」

先生が声をかける、思わず声を上げてしまったのか！

は、腹が……何だこれは、目が……前が見えない!!!

痛い、痛い痛い痛い痛い!!!　保健室、保健室に行かねば!!!
ぐあぁぁっ！　もう限界だ！
「あああああああ

口から僅かに空気を出すだけで、痛みの神経はますます強まり、呼吸さえもままならない。
ああ、これはもう助からない、死ぬかもしれない。そう思った矢先、痛みが急に引いてきた。視界は相変わらずだが動けるかもしれない。
しかし、身体に反応がない。くそ、何で、何で動かないんだ！
腕を動かすように脳が命じているのに、腕には何の反応もない。おそらく、運動神経が麻痺してるせいだ。
木ノ本らしき女子がモップを持ってきて血の跡を掃除している。
今覗けばパンツ見えるだろうがそんな余裕はない。それどころかますます視界が霞んで、ぼやけ、黒く染まっていく。
もはや視覚のことにはかまっていられない、とにかく体を動かしたい。
……どれだけ時間が経ったかわからないが、反応しない身体と格闘していると、何やら騒がしくなった。
運動神経は麻痺し、視界はこの頃は完全に暗転していて、床の感触すらなくなった。
耳と脳だけが機能している状況だ。
「倒れている生徒はこっちです!!!」
「おい、大丈夫か!?」
知らない男性の声だ。大丈夫じゃない、と言いたいが言い出せない。
パンパンパンとおそらく俺の頬を叩く音が聞こえるが、叩かれる感触がない。
声も出せず、手足も動かせず、そのくせ脳と耳だけはしっかりしている。
救急隊員は必死に呼びかけるものの、応答が出来ない。時間ばかりが過ぎていき、極めてもどかしい。
「意識が無いぞ!!!」
「おいおいおい、死んじゃったんじゃねえか……!?」
「でもそんなことってあるのか!?」
「でもよ、いきなり倒れて血を吐いたって、なんか急性の持病でもあっ

たんじゃないか!?」
　意識不明という事実を伝えた救急隊員に、普段俺のことを嫌っていた生徒連中もさすがに動揺している。いくら嫌いなやつとはいえ、死体になる瞬間なんて見たくないものなのだろう。
「呼吸、心臓は正常だ！　口内にも異物なし！」
　救急隊員は手早く状況確認と応急措置をしている。
　運動神経の麻痺はもはや抵抗は不可能と判断すると、急に暇になった。
　今の俺は目も見えない言葉も話せない、体も動かせない、感触さえわからない。耳しか聞こえない。
　教室はますます騒がしくなり、他のクラスも異変に気づいていて、野次馬と思しき足音までが聞こえる。

「このまま担架で運び出すぞ」
　やはり病院直行だろうとは思った、数秒の間、何やら位置に関して話し合っているようだ。
「よし、せーの！」
　全く感覚がないが、どうやら持ち上げられているらしい。おそらく担架だろう。そのまま担がれている中で、もう一人女性の声が聞こえた。
「すみません、私も行きます。うちのクラスの生徒ですから」
「分かりました」
　この声は間違いなく担任の「永原（ながはら）マキノ」先生だ。
　車輪の音が消え、そのまま救急車の中に入れられたらしい。
　会話から推察するに救急車の中は救急隊員が二人と、俺、そして永原先生の４人だ。
　救急隊員が受け入れ先の病院に電話をかけている。
「１６歳男性、高校の授業中に下腹部に痛みを訴えた後に倒れた。吐血あり。呼吸心臓ともに正常だが意識がない、即刻入院、緊急治療が必要である。急患として受け入れて欲しい」
「はい、はい、場所は私立小谷学園（しりつおだにがくえん）です。はい、はい、すぐに向かいま

す。」
しばらくすると、例のけたたましいサイレンの音だけが聞こえ始めた。
車とサイレンの音のみが聞こえ、揺れが聞こえない。まるで寝ながら音楽を聞いているかのようだ。

……どれだけ時間がたったか、どこかの病院へとたどり着いた救急車のサイレンの音が止み、また車輪の音が聞こえ、救急隊員が誰かと話している。
知らない声だ。おそらく病院スタッフに引き継がれたんだろう
ここでまた下腹部が僅かに痛み始めたが、運動神経が相変わらず麻痺しており、痛みを訴えることは出来ない。もしかしたら反射で体が動いているかもしれないが、俺にそれを知るすべはない。
永原先生が「病室は個室でお願いします」と強く訴えていた。そしてドアを開ける音がして、そのままベッドの中に寝かされた。
徐々に痛みが増していく。だがまだ思考が停止するほどじゃない。
しかし、時間の感覚はとっくになくなっていた。倒れてから5分後なのか1時間後なのかも分からない。
下腹部の痛みはどんどん強まる、何かが動いているような気がするが何かはわからない。
今までの痛みとは比較にならないような痛み、人間ってここまで痛みを感じるのかと言うほどのような痛みが襲った。
身体の奥の奥から抉られるような痛み、もしかしたらまた血を吐いているのかもしれないがそれはわからない。

な、何だ!!????
突然身体の何処かに血液が大きく集まっていく感覚がする。そして、得体の知れない何かが急速に太く大きくなっていく。
いけない、いけないいけないいけない！　これ以上はダメだ、やめてくれ。
身体の何処かが、俺の制服や下着に圧迫されたのを感じた。ここだ

け触覚が戻った。
五体が破裂してしまうのではないのか？　そう言う感覚とともに、これまでさんざん痛みに苦しんできたが、いつの間にかそれも引いてしまい、今や恐怖を感じるほどの快感に襲われる。
もう無理だと思った瞬間、ある時にいつも感じている快感を何倍にも爆発させたようなとてつもない快感を感じた。
あー！　あー！　あー！　あー！
どこまで出るのか、かつて経験したことのないような長時間の快感が終わったと思った途端、聴覚もなくなり、頭もぼーっとしてきた。
ああ、死ぬんだな……それなら、最後に気持ちよく死ねたからいいだろう。
そう思いながら、もはや何の抵抗もできなかった。

# 起床しての違和感

「んっ……」

瞼に重みを感じる。

眠っていたということか。

徐々に意識がはっきりしてくる。

まず下半身に何かがぽっかり空いているような違和感を覚える。

次に上半身に逆に何かあり得ない重みを抱えているような違和感を覚える。

目を開くが視界が暗い。太陽光が遮断されているか、夜なのか。そういえば何でこんなところで寝てるんだ？

……思い出せない。

困った、とりあえず真っ暗と言っても僅かに光を感じる。

どこからかライトが僅かに光ってる。とにかく光源を探る。

今度は後頭部に違和感を感じる。なんかいつもより頭が重たい。寝起きのせいだろうか？

小さなデスクライトが小さく光っているのを見つけた。

よし、これを引っ張って最大にしよう。

デスクライトを最大出力にすると、ライトのすぐ下に手紙とＡ４用紙が何枚か入っていた。

まずはともあれ、この手紙を開けてみるか。

「石山優一君へ

これを読んでいるということは、あなたはもう起きたんだと思う。

今あなたはとんでもない病気になった。それも、死期の早まるような難病よりも遥かに質が悪いものだと私が考えている病気。でもあえてここの手紙には記さない。あなたが発見して、それで現実を見てほしいから。

でも心配しないで、私も同じ病気だから。

２年２組担任…永原マキノ

追伸…今日の午後のカリキュラムで行った内容のプリントを渡して

おきました。学校は今週一杯お休みすることをすすめます」

「な、何だこれ……ってえ？」

思わずつぶやいて出た言葉、自分の声にひどく違和感がある。

「あー、あー、あー」

おかしい、明らかに女の子の声だ、それも女子の中でもかなり甲高い部類だ。

でもこれはどう考えても自分から出た声。俺の声は男子の中でも低い部類だ。

ん？　どういうことだ？

待て待て、まず落ち着け、状況を整理だ。

そもそもここはどこだ？　顔を左右に振る、俺はベッドで寝ているがかなり小さい部屋だ。

先ほどのデスクライトの付近より、更に壁側を見ると、何やら複雑なコードと、よく分からない機材がいくつかあった。正面にはテレビも一台ついている。

ベッドの横をよく見ると「ナースコール」と書かれたボタンが有る。どうやらここは病院で、俺は入院中らしい。

よく服の袖を見ると着慣れた制服ではなく、白い服になっている。どうやら、知らぬ間に病院服に着替えさせられていたみたいだ。

では次、俺は何故入院している？

えーっと、そうだ！　確か数学の授業を受けていて、下腹部がいきなり痛み出して、倒れて血を吐いてそれから……

そうだ、血を吐いて視界が悪くなり、聴覚だけが活きてる感覚。

そのまま救急車で運ばれて、えーっと。そうだ、この部屋に入れられた直後あたりでとんでもない射精をして意識を失ったんだっけ？

待てよ、この特徴的な病状って……

……まさか、そんなまさかだよな。あれは物凄い珍しい病気だって聞いた。でも、この症状は典型的すぎる。

その可能性を考慮した途端、自分の下半身の違和感に気づく。何かが足りない。

とにかく、この布団をどかして、起き上がってみよう。
腰を上げてから身体を起こし、次いで下半身をずらしてベッドから降りようとする。
ベッドから立ち上がり、足元を見た時におかしい点に気付く。
ん？　胸が膨らんでる？
まさか、まさかまさか。やっぱりそうなのか!?
もう一度目が覚めてからの経緯を思い出す。
上下半身に違和感を感じた。上半身には何か余計なものを感じ、それは胸の膨らみだと気付いた。
下半身はなにかが足りないと感じているが、おそらく嫌な予感は的中するだろう。
そして、先ほど確認した所、声は信じられないくらい女の子の声になっている。
そして、倒れた時の状況と病状の経過……
インターネットの某百科事典サイトで見たことがある。
「完全性転換症候群（かんぜんせいてんかんしょうこうぐん）」、別名「性転換病」とか「ＴＳ病」と呼ばれる病気。
若い男性のみがなるもので、症例は全世界でも１３００人と少ないが、そのうちの９００人以上が日本人で占めている。
原因遺伝子は一切不明で、発症する際には突発的で、下腹部の痛みと吐血を伴う。
医学実験で証明されたわけではないが、患者の証言では一様に、意識を失っている間もしばらく聴覚のみはよく機能するとされている。
まさに、俺が倒れた過程も「ＴＳ病」そのものだ。
そうだ、さっきの永原先生からの不可解な内容の手紙も、納得がいく。にしても、そういえばこの病気、もう一個大きな特徴があることで有名だったが、うーん、ダメだ。思い出せない。
死期の早まる難病より質が悪いっていうのはどういうことだろ？
……いや、普通に性別が変わるってことだろう。それもここまではっきりと。
待てよ、まだＴＳ病とは決まってない。身体が少し女性よりになっ

てるだけかもしれないし、さっきの声は聞き間違いかもしれない。もう一度声を出してみよう。
「あー、あー、あいうえお！」
……だめだ、やっぱり女の子の声だ。
喉に手をやる、結果は予想通りだ。あるはずの喉仏が存在してない。と言うか、首がかなり細かったぞ。俺の首、もっと太かったはずだ。
そして、さっきから違和感のある下半身。正直その先にある現実を見るのが怖いが、調べないわけにも行かない。
いつの間にか着替えさせられていた病院服のズボンから手を突っ込んで見る。
……ああ、なくなってる。やっぱりだ。そして、あったはずの場所に指を近づける。
「んぅっ!!　あぁあっ!!」
やばいやばい、とんでもなくエロい声を出してしまった！
ともかく今はここには無闇に触れないほうがいい。
今わかったことは、どうやら今の俺の体は男と女の最大の違いとも言われる下半身の部分も、女の子のものに変わっていたということだ。
……パズルのピースが埋まっていく、もうこの時点でほぼ１００％、俺はＴＳ病になったんだと確信した。
しかしまだ現実が飲み込めない。飲み込めない、が！　どの手がかりから分析しても、どうやら俺は「ＴＳ病」になってしまい、女の子になってしまったという事実の反証は何一つなく、むしろここまではその事実の裏付けばかりが揃っていっている。
……男の時の俺の身体は高校生にしては髪も薄めで髭や体毛だけは伸びていた。目つきも悪く、自分で言うのも何だがやや「悪人顔」みたいだった。そんな中で身体だけ女になったら。
……おえっ。想像しただけで吐き気がする。そんなのは嫌だ。とにかく、ど、どこかに鏡はないか???
そう思って後ろを振り向くと移動式の姿見があった。でも蛍光灯

だけじゃそれなりの距離もあってしかも光量が少なすぎて姿は輪郭しか見えない。どうもやや丸みを帯びてるみたいだ。
とりあえず、もう一度横に振り向き直して、蛍光灯のもう少し奥側にスイッチが見えるのを確認。これを押せば電気が点くだろう。
とりあえず身体をベッドにつけて……
……あれ？
おかしい、本来の俺の身長なら十分届くはずなのに届かないぞ。
そうか！　女の子になって身体が小さくなってるせいだ。
と、とにかくベッドに足を乗っけよう。そうすれば点くはずだ。
それにしても、なんか胸が擦れて微妙に痛い。そうか、女の子なのにブラジャー付けてないんだもんな。
えっと、電源は……あった。これだ。
「うっ」
一気に全部点けるスイッチを押したせいか、眩しさに目がくらむ。とっさに布団を掴んで目を覆い、徐々に光を入れて慣れさせていく。
そしてもう一度、姿見のあった場所の前に立って、自分の姿を確認する。
「……え？　誰だこいつ？」
鏡の中に映っていたのは今までの俺とは似ても似つかない少女の姿だった。鏡の中の少女は自分の姿に明らかに動揺した顔をしている。
ともあれ、俺と思われるこの少女をもう少し観察してみたい。
まず、やっぱり背が縮んでいた。それもかなり。届くと思ったはずの姿勢で電気のボタンに届かなかったのもこのせいだ。
更に、髪は男だった頃以上に深い漆黒のような黒髪。そしてきれいなストレートで、癖毛の一つ無い。しかも長さは背中まであるロングヘアーだ。
そして、服の上からでも分かるような大きな胸、クラスの女子どころか、俺が贔屓にしているアイドルでさえこんな大きいのは見たこと無い。それこそ巨乳グラドルを名乗れるくらいだ。
更には、手足は透き通るくらいの美しい白い肌。肌の色もだが、首

も腕も、見るからにデリケートで細い。
そして顔、少女は幼さの残る童顔で、はっきり言うと「物凄い可愛い」、うちのクラス一の美人で可愛い子と言えば木ノ本桂子だ。
その彼女と比べても、好みの差もあるだろうが俺だったら今鏡に映っている女の子の方が遥かに可愛いと断言する。
というよりも、俺が知ってるアイドルグループの顔をひとりひとり思い浮かべたが、それでもこの子ほどじゃないという結論になった。
飾りっ気も何もない病院服でさえ、そう言う結論になるんだから、おしゃれしたらとんでもないことになるだろう。

「で、誰なんだよこいつ……」
可憐な声に似つかわしくない男言葉が出る。
いや、俺だよな。ま、まさかドッキリだとか？
……足を上げてみる。
……鏡の中の女の子が足を上げた。
……腕を前に突き出す。
……鏡の中の女の子は腕を前に突き出してきた。
……恐る恐る胸を揉んで見る
……鏡の中の女の子が恐る恐る胸を揉んでいる、自分もちょっと気持ちいい。
鏡像認知できないほど俺もバカじゃない。それにもしドッキリなら反応がワンステップ遅れるはずだがそれがない。
やはり、この実験でも、この鏡の中に映った可愛い女の子は、どうやら自分らしいということを雄弁に物語っていた。つまり、どうも自分は可愛い女の子になってしまったということだ。
現実逃避してはいけないな。うん。
……ともかく理屈では納得出来た。
感情的に納得できるか、という問題はともかく置いておこう。理屈で納得できればいつかは受け入れざるを得なくなるだろう。
いや、仮にそうじゃなかったとしてもとりあえず今はそう信じるしか無い。

それよりも、さっきの永原先生の手紙……
手紙をもう一度確認すると、そこには「でも心配しないで、私も同じ病気だから」と書いてあった。
つまり、永原先生もＴＳ病になった元男ということか。
さて、状況は整理できた。でも今何時だ？
病室の時計を探す。すると、自宅から持っていったと思われる電波時計が目に入った。
……午前５時５５分だ。日にちは倒れた日の翌日、５月９日火曜日になっている。つまり１７時間近くも意識を失っていたのか。
うー、なんか眠い。一気に色々と考えすぎたかなあ。
まあいいや、これだけの大事だ。どうせ朝になれば親や永原先生が来るでしょ。今あれこれ考えても仕方ないや。
とりあえず、今のところは「俺は病気になってとびきりかわいい女の子になってしまった」ということがわかれば良しとしよう。
寝よう。寝たらもしかしたら、これは夢だったというヲチになるかもしれない。

# 突きつけられた現実　前編

ゆっくりと意識を回復する。
えーっと、何をしていたんだっけ？
そうだ、女の子になっちゃったんだ。下半身と上半身に相変わらず違和感を感じつつ、ゆっくりと起き上がる。
午前７時、いくら眠いと言っても１７時間も寝た後でまた寝てもそこまで寝られないわけか。
「あ、起きた。あなた！　ゆうが起きたよ！」
身体を起こした直後、母さんの声が聞こえた。どうやら親父も一緒らしい。
「おお！……ところで、変なことを聞くが、君の名前は石山優一、でいいんだよな？」
「そ、そうだけど。俺……の、名前は、っ！　確かに石山優一だけど」
普段使ってる一人称の「俺」だが、今の声だと物凄い違和感がある。そのせいで一回使っただけで詰まってしまった。
「ねえ、私達が優一って名前をつけた理由は？」
「一番優しい人に育って欲しいから？」
「通っている高校と血液型と誕生日は？」
「私立小谷高校の２年で血液型はＡ、誕生日は６月２２日」
「うーむ、どうやら本人らしい」
親父がうなりながら肯定する。
まあ、疑うのは当然だよな。
「うちの子が突然倒れたって聞いたけど永原先生が『面会謝絶』って言ってきて、それを無視して病院に行ってみても病院の人も『決して命に別状はない、今は何もしないのが治療法だから明日にまた来てください』ってことで私達もたった今到着したところなのよ」
「ゆうが寝ている間に少し布団を持ち上げてみたんだが、お父さんもお母さんも驚いたよ」
「それで、こっちからも聞きたいことがあるんだけど」
「何だ？」

「やっぱり女の子になってるか？」
「ああ、今のお前はどこからどう見ても女性だ。それどころかその辺に歩いている普通の女性と比べてもかなり女が強調された女性だ」
どうやら、さっきのことは夢じゃなかったらしい。まあ、声が相変わらずの少女声だった時点で薄々感づいていたが。
にしても、女が強調されたってのは、やっぱこの胸のこと言ってるんだろうなあ……
これからどうなるのか、頭の中が「真っ白な闇」になって何も考えられないでいると、ガチャッと扉が開く音がして、誰かが入ってきた。
「あ、石山君……いえ、石山さん。起きた？」
入ってきたのは予想通りの人物、うちのクラスの担任の永原マキノ先生だ。
「あ、先生。その、息子……ああ、いや……む、娘はどうなったんですか？」
永原先生が「君」を「さん」と訂正し、親父ももう「娘」と呼んできた。何気ない訂正でも、俺の中では現実という重圧がのしかかる感覚を受ける。
「見ての通りです。ＴＳ病と言われる病気になりました。ええ、私がここに居るのも、私も遠い昔これになった事がありますので、何かとお役に立てることがあると思いまして」
永原先生は、淡々と答える。しかし、遠い昔というのはどういうことだ？
いや、そんなことはどうでもいい、とにかく女の子になってしまった以上、色々な手続が必要だ。
まずそのことについて質問せねば。
「それで、名前とか戸籍の性別とか変えられるんですか？」
「ええ。問題ないわよ。この病気になったら性別や名前の変更は性同一性障害よりも遥かに簡単よ」
先生曰く、性同一性障害での戸籍の性別変更には色々な条件があるが、完全性転換症候群の場合は、医師の診断だけでＯＫみたいだ。
今はまだ前例は一件もないが、婚姻中にＴＳ病になった場合は婚姻

関係そのものがなかったことになるらしい。
まあ、当たり前といえば当たり前か。
少なくとも肉体的にはもはやどう見たって女性だ。むしろこんな姿で「お前は男だ」と言われたらそれはそれで嫌な気分もする。
うーん、でも女の子でいいのか？　いやいや、人間は男でも女でもないなんてあり得ないし……ダメだ、頭が混乱してきた。
「で、石山さん、名前のことも大事だけど、これからもっと大事な話が医師の方からあるわよ。７時２０分からだから後１５分よ。急いだほうがいいんじゃないかな？」
「おっと、そうだ。この服、着替えたいんだけど……」
歩くと胸が擦れて不快になりそうとは言わないでおこう。
「ごめん、お母さん着替え持ってきてないわ。……あー、でも、持ってきたとしても胸が入らないと思う」
うっ、それは困ったな……
「大丈夫ですよ、こちらの方で用意しておきました」
お、助け舟だ。
「あの、サイズは大丈夫ですか？」
「大丈夫です。病院の人がちゃんと測ってありますから」
「え？　おいおい、いつ測ったんだ？　そういえば服もいつの間に変わってるし」
「昨日の夜１０時位です。だいたいその頃なら体つきなどの変化が終了するので、病院服にも着替えさせてもらいました」
「プライバシーとか無いのかよ!!」
「ゆう、お世話になった病院の方に失礼だぞ……！」
親父が注意する
「あ、ああ……でも……」
「心配しないでください、ちゃんと女性の看護婦さんがやってますから」
うーん、それでいいものなのか？
身体は女の子、今の俺は正真正銘の女の子。そんなことわかりきってるのに、どうにも納得がいかない。

多分、納得できない俺が愚かなだけだろう。いや、そうでも考えないとこの現実から目を背けた感情を処理できん。
いきなり倒れて女の子になるという滅茶苦茶な話だ。しかし、実際極めて珍しいものの同じ境遇の患者はいる。現に永原先生だってそうらしい。
「そ、それよりも着替えなきゃな。こんな話をしていても仕方ない」
「そうだな、お父さんは外に出ていた方がいいかな？」
「できれば、お母さんと先生も外に居てくれると助かる」
「分かったわ。じゃあ早く着替えてらっしゃい」
両親と永原先生が部屋の外に出る。改めて、用意されていた服を見る。
普通に男性でも着られそうなジーンズと上も無地のシンプルなセーター。下着は……ブラジャーはしょうがないとして、パンツも女物か……
ううむ、どうにも抵抗感があるが、今穿いてるのはぶかぶかだし汗も酷いだろうしなあ……
とりあえず、服を脱ぐ。全部脱ぐ。
ふと、何の気なしに姿見を見てみた。
「う、うわっ！」
思わず声を上げてしまった。そこには可愛い女の子が裸になってた。
大きいのに形も見事なおっぱいがエロい、やばい。下半身もさっきは分からなかったが、丸みを帯びた肉体に下腹部に程よく肉がついてる。一言で言うなら「安産型」だ。
いけないいけない、自分で興奮するのはおかしい。ここはなるべく医学的に……医学的に観察するんだ。
男だった時の俺は、髭や胸毛や脚、腕など、頭以外はかなり毛深かったが、この少女の裸体にはその手のムダ毛が全く無く、長い髪の毛に全部吸い取られたようだ。
そして、喉仏を始めとして、本来男であるはずの俺にあるべきものがことごとくなくなっていたことにも気付いた。新しいことを見つ

けるたびに、改めて自分が女の子になってしまったことを思い知らされる。
まずいまずい、時間もあんまりないのにこんなことで感慨にふけってる時間はない。どうせこれから嫌でも自分の裸と付き合わなきゃいけなくなる。
とにかく今は目の前の課題に集中しよう。
まずブラジャーから手をつかむ。えーっとこれは、どこで留めるんだ……？
えっと、前で留めるのか。
えーっと、胸につけるからこうやって……よし、ＯＫだ。
にしても、これ物凄い大きいな。何だろう、肩がこりそうな気がする。
それから、えーっと。このパンツ……やっぱ穿かなきゃいけないよなあ……。
まさかノーパンにするわけにも行かないし、男物のもぶかぶかになってしまったし、それに「あれ」がなくなったから穿き心地悪かったし……
とすると、だ。
あー！　もうヤケクソだ。どうにでもなれ！
意を決して穿いてみる、ん？　おおお、布面積小さいのにぴったりフィットしててすごく穿き心地いいぞ！
素材もいいしこれはもう男物には戻れないな。これからは男物のパンツは穿かないようにしよう。
……なんか男という性別にとって大事なものを窓から思いっきり投げ捨てたような気がするがまあいい。しかしこれ、どうして男に応用できないんだ……？
……あそっか。例のアレがあるせいだ。ちょっとだけ例のアレに恨みを覚えた。
で、ジーンズだ。まあ、これは普通に着れば大丈夫だろう。
うん、これは男の時の着方と同じだ。チャックちゃんと閉めないとな。

ふう、どうやら十分に間に合いそうだ。ブラとパンツに手こずったくらいだな。
パンツはともかく、ブラはぺたんこならともかく、こんな大っきけりゃ付けざるをえないだろうし、早くこれには慣れとかないとな。
俺はドアに手をかけて、着替え終わったことを報告する。
「あ、終わった？　じゃあお医者様のところに行きましょうか」
「にしても、意外と早かったな」
「あ、ああ。その……ブラつけるのにちょっと手こずっちゃっただけだから」
「そ、そう？　でもこれから大変なことがたくさん来るわよ。」
４人で並びながら病院の廊下を歩く。やがてスカイブリッジが見えてきた。どうも入院患者の病室棟と一般の診断棟との間の連絡橋の役割らしい。
それにしても、最初の服がユニセックスな感じでよかった。いきなり超ミニスカートとか言われたら病院服着替えるのをやめたかもしれん。あーでも、流石に症例も極めて稀とは言えそれなりにあるわけだから、こういう配慮は行き届いているということか。
うーん、でも元に戻れそうにないなら、このまま一生女として生きてかなきゃいけないということになるよな。
そうなると、学校だって女子の制服になるし、スカートを避けて通るのは難しいよなあ。
そうこう考えているうちに担当のお医者さんの部屋の前に来た。名前を見るに女性の看護師さんだ。
「じゃあ、先生は授業があるから。ちょっと席を外すね？　午後にはまた戻ってくるから」
「いってらっしゃいませ～」
母さんが挨拶し、永原先生は病院から学校に向かう。
救急車で運ばれていた時はよくわからなかったが、この病院は通学路の途中にある病院で、学校からもかなり近い。と言うより最寄りの病院で、一応うちの学校とも提携もしている病院だ。
部活中に大きなケガをしたり、生徒や先生に何かトラブルがある

と、ここに通うことになっていて、先生の持病や、定期健康診断もこの病院で行われる、大きめの総合病院だ。
「石山さん、石山優一さん、４番にお入りください」
　中年女性と思しき声が聞こえ、俺と両親が中へ入る。
「はい、えーっと、今日の気分はどうですか？」
　やはり、声の通り中年女性のお医者さんだった。
「あまり良くないです」
「そうですね。これから健康診断をするんですが、その前に『完全性転換症候群』について説明しますね」
「はい」
「……名前の通り、今石山さんは完全な女性の身体になってます」
　まず、一つ疑問をぶつける。
「なあ、完全な女性ってことは、まさか子供産んだりとか……」
「前例はあります。妊娠率も一般の女性と変わりません。男の子も女の子も産まれ得ます。もちろん生理も来ます」
　ひ、ひえっ。無慈悲な一言だ。
「あ、あの……優一は、男性に戻ることはできますか？」
　親父が質問する。
「この病気になった患者は二次障害として性同一性障害に陥るケースが多いんですが、そこで性別適合手術を受ける人は多く居ます。これで戸籍上は男に戻ることも出来なくはありません」
　俺達は、医者の話を良く聞いてみる。
「ですが、私個人としてはオススメしません。何より肉体的に完全な男性に戻ることは……前例もありませんし医学的にも不可能です」
「そ、そうですか……」
　親父も母さんも、やはり突然のことでショックを受けてる
　にしても、結構容赦ないなこの先生……
　でも、現実から目を背けて、有りもしない希望を追いかけるよりはマシか。
「よくわかった。じゃあ、これから女として生活する上で気をつけることはあるのか？」

俺が質問する。
「そうですね、古くからあるＴＳ病患者で作る団体の特別な要望であまり明かされていないんですが、実はこの病気、もう一つ大きな特徴があります」
「???」
「それは、老化しなくなるということです」
「えっ!?」
３人が一斉に声を上げた。驚くのは当然だ。老いなくなる？　それってつまり……まさか……！
「死なないという意味ではないんですが、１００歳以上若いまま生きる人は居ます」
「つ、つまり俺は余命はどうなったんだ？」
「理論上は１０００年でも２０００年でも生きられますよ。最も、この病気は不吉とされていたのと昔の衛生環境の悪さもあって１０００年前から生きてる患者は居ませんが」
おいおい、そりゃ恐ろしい話だ。俺の同級生や子供、孫の世代が死んでも、俺だけ……いや厳密にはこの病気の人だけずっと生き続けるということか。
そうだ、今朝最初に起きた時に引っかかっていたのはそこだ。何かもう一個、大きな特徴を見落としていると思ったら、そこだったのか。
「そうですね、これ以上は午後にやるカウンセリングで詳しく話し合いたいと思います……私の話としてはまずは以上です。石山さんの方から何か質問ありますか？」
「……ああいや、今は聞きたいことはないな」
「ではこれから、石山さんの身体に異常がないか、健康診断を実施します。時間は８時からですからその間に朝食を取って下さい。時間になりましたら病院の方で呼び出ししますのでご安心下さい。健康診断の結果は後日お伝えいたしますね。健康診断は１２時終了予定で、それが終わったら一応『退院』という形になります。ですが１３時からはカウンセリングがありますからまだ家に戻らないで下さい」
結局医者の話しは５分足らずだ。病室に戻った時も、８時まで３０

分の余裕がある。
「じゃあ、お父さんは仕事があるから」
そう言って親父が病院を後にする。
そして母さんはと言うとまだ現実を飲み込めてないから洗濯物を片付けながら気持ちを整理したいと言って家に帰ってしまった。
なんか薄情だと一瞬思ったが、少し考えれば親だっていきなり息子が娘になったら離れて一人で気持ちの整理でもしたいと思うのは、まあ不自然じゃない。
母さんの方は午後のカウンセリングに出るということなので、まあ健康診断に同行してもしょうがないと言うのもその通りだ。
そういえば、洗濯物の片付けと言えば、服もなんとかしないといけないなあ。
今家にある服は、男物はサイズ的にも論外だし、母のお下がりをもらうと言っても、胸の大きさが違いすぎて着られないし、幸いサイズは既に測られているのでそれを元に買えばいい。
もし退院したら真っ先に服屋に行かないとな。
俺の病室の中には看護婦が一人いて、挨拶の後に病院食を持ってくると告げて出ていってしまった。
大きなことが立て続けに起こったから忘れていたが、そういえば喉も乾いたしお腹もすいたなあ……
ともあれ病室に入る。いつの間にか姿見と電波時計、更にプリントと手紙もなくなっていた。代わりにいつの間にか置いたのか永原先生の新しい手紙があった。
それによると、姿見は永原先生の私物で電波時計とプリントは自宅に送られたらしい。
今まで病院用のスリッパだったが、ご丁寧に足のサイズも測られていたのか、新品で小さめの黒い靴が置いてあった。ありがたく使わせてもらおう。
あ、そういえば立て続けに大きなことが起きてたから見落としてたが財布と携帯はどこに行ったんだ!?
……ああ、テーブルの上にあった。これでとりあえず家に帰れる

な。

# 突きつけられた現実　中編

病院食はまずいという話を聞いていたが、噂に違わぬまずさだ。確かに健康というものにはいいんだろうがいくらなんでも味が薄すぎる。

それでも大半は気絶していたとは言え昨日の昼から何も食ってなく、空腹を満たすのにはありがたい。

量は少ないはずだが、思ったより腹が膨れた。

何故だ？　いやいや、言うまでもないだろ。いい加減学習しろ、俺。

食べ終わって横になって考える。

「男に戻る方法はない」

医者の先生ではそんな話だ。まあ、そうなんだろう。

でも女として生きるってどうやって？

この細くなりきった腕を見れば、以前出来ていた力仕事も多分多く出来なくなっているのは容易に想像がつく。

背も縮んだし、こんな身体じゃ痴漢なんかに襲われたらどうしようか？

……しばらくは、女になったがための「違い」で戸惑うことになるだろうが、考えれば考えるほど、不安ばかりだ。

でも、だ。そもそも常識的に考えて、一夜で男が女になったというのは重大事件だ。

まず自分の体のことが心配だ。とにかく心を落ち着けて、健康診断に備えないと。

……おっと、そういえば、トイレに行ってなかったな。健康診断もあるし、少し行きたい気分だ。

えーっと、トイレはどっちだ？

えーっと、そうだ、さっき見たじゃないか。よし、こっちだな。

……おいおい、ちょっとちょっと、したくなるのが早くないか？

急いだほうがいいな、少し足早にして……おわっ！

危ない、焦りすぎて壁の存在を忘れてた。なんとか転ばずに済んだ

が、まだこの体の距離感がつかめないな……よし！　ここがトイレだ！

俺は思い切って青い方のトイレに入ろうとして奥の鏡に写った自分の姿を見て踏みとどまる。

おい、おいおいおい！　待て待て待て！　そっちは男子トイレじゃねえか。

……えっと、じゃあ女子トイレに入るのか。

って、常識的に考えてそうだよなあ、俺は女子なんだし女子トイレ入るのおかしくないよな……

いやいや、そうは言っても、今まで「絶対に入るな」とこれでもかと教えこまれてきた女子トイレだぞ……

って、それは俺が男子だったからじゃねーか！　もはや女の子となった俺に女子トイレに入っちゃいけない理由はもうないのに何をためらってんだバカ！

よし、そうと決まれば女子トイレに足を踏み入れ……

……ダメだあ！　女子トイレに入る決心がつかない！　いやでもこの体で男子トイレ入ったらもっと変だぞ。

ああ、まずい漏れる……！

あ！　そもそも正面に多機能トイレがあるじゃないか！　よし、今はこっちに入ろう。

……まずい！　あれこれ考えてたら漏れそうになってる！　早く閉めてトイレに入らないと！

大急ぎでズボンのチャックを下ろして……って、女の子じゃ立ったまま出来ねえじゃねえか！

あー、まずいまずい。とにかくズボンのボタンを外してパンツごと脱ぐ。何とか便器に座った次の瞬間に出始めた。

「ふうーーーーー」

間一髪セーフだ。

それにしても、トイレに行きたくなるに気付くのが遅かったな……

そうか、女の子の身体になったからだ。

不便といえば不便だが、愚痴を垂れて男に戻れるなら苦労しない。
考えてみれば、俺も男の中じゃイケメンでも何でもなかったけど、今の俺は超が付く美少女だし、案外悪くないかもな。
……いやいや、現実逃避してどうするんだ、俺！　これから性別が変わったことで色々と不便なことが押し寄せるはずだ。
そんなことを考えつつ、ようやく全てを出し切った。
えっと、そういえば、「ビデ」ってなんだ？
男だった時はこの年で痔持ちだったからウォシュレットの「おしり」は欠かせない存在だった。
とはいえ、女性のマークの書いてある「ビデ」を押したことはもちろん一回もない。
あーそういえば、これ「おしり」からは出てないよな。つまりこれで洗うと。
……ええい、物は試しだ！　どうせこれから女として避けて通れないことはいくらでも出てくる。今は多機能トイレに逃げたが、学校に女子として戻れば女子トイレも避けて通れないだろうし、だったら今のうちにビデを体験しておこう。
えいっ！
「はぁあっんっ……!!!」
またエロい声、でも声が出ちゃう。どうやら女になってからというもの、かなり敏感になったらしい。
でも、実際に発射されて洗われている場所から逆算すれば、何をするべきものかはよくわかった。
最初こそビクッとなったものの、次第に刺激にも慣れてきた。回数重ねれば時間が解決してくれると信じよう。

ともあれ、適当なところでビデを止め、乾燥ボタンを押して乾燥させ、トイレットペーパーで拭いたら、流すボタンを押して流れる音を確認し、もう一度服を着直してからトイレを出る。
ふと、女子トイレが目に入る。今回は避けてしまったが、いずれ入らなきゃいけない場所。

ってそういえば、動揺して手洗いをしてないじゃないか。
うーむ、まずはそこから始めるか。
何も恐れること無いはずだが、恐る恐る入る。病院のトイレとあって女性特有の匂い等もなく、中は男性用の小便器がないのと、その分個室が多めなこと、タイルの色が女性向けにピンク色な事以外、男子トイレとほぼ同じだ。
それでも長年染み付いたピンクのタイルのトイレへの抵抗感からか、手洗い場で手を洗ったら、足早に立ち去ってしまった。

……自分の病室に戻る。ベッドに座りながら考える。
さっきは多機能トイレに逃げられたが、今後はそうも行かないだろう。学校は多機能トイレなんて数えるほどしか無い。いちいちそこまで移動していたらあまりにも時間的なロスだ。というより、短い休み時間じゃ間に合わない可能性だってある。
それだけじゃない、女の子として学校に通うということは、女子の制服を着て、木ノ本か田村のどっちか……多分木ノ本だろうが、ともかく女子のグループに入って、話についていくために女性向けの本とか読んで、えーっとそれから、体育の時は女子更衣室に入るんだよな。
「ごくりっ……！」
俺は女子として学校生活を送った時に起こり得ることを考えて唾を飲み込む。
えっと、通常、男は女を、女は男を愛することになるんだよな。
待てよ……ってことは、俺は男を好きにならなきゃいけないってことか!?
彼女じゃなくて彼氏作るの!? バレンタインデーでは好きな男性にチョコ作らにゃならんてこと？
待て待て、別に独身でもいいし、いっそ百合っちゃっても……！
って、落ち着け！ よく考えたら俺は不老になっちゃったから誰かに恋しても寂しく死別するのは目に見えてる。あーでも最近の遺伝子テクノロジーの進歩はすごいしもしかしたら……
あーくっそー！ ダメだ！ 俺の頭じゃ一気に考える事が多すぎ

て思考が追いつかない。
とにかく、今は健康診断の呼び出しを待とう。
思考が整理できず混乱をきたしていた時、看護婦の一人がドアをノックしてきた。
「石山さん、健康診断の準備ができましたよ」
「はーい」
「荷物忘れ物がないか確認して下さい」
こういう時は別のことをしていると案外後でいい答えが出るとも言うしな。俺は言われるがままに、忘れ物がないか確認する。
と言っても、もはやこの病室にある私物は財布と携帯だけで、それもポケットにしまってあるから大丈夫なはずだ。
ともかく今は看護婦について行こう。
俺は病院の地下にあるいかにもな機材の集まった検査場に連れて行かれた。
最初に目に入ったのは、身長計と体重計が一体になった機材だ。
「じゃあまずは身体検査しますね。こちらの身長体重計に乗って下さい」
言われるがままに台に乗り、いつもの頭に測りがのしかかる感覚を受ける。
どうも身長体重の他にも体脂肪率も計算するらしい。病院の人の話だと体重計と身長計が連動していてそれで測れるらしい。
計測によると、男だった時と比べて身長は２０センチ、体重も１５キロも減っていたのに、体脂肪率だけ何故か９％も増えていた。
原因は……まあ、おっぱいだろうなあ……。
続いて座高とスリーサイズの計測が行われた。
スリーサイズも凄まじい数値だ。最も、男だった頃の自分のスリーサイズなんて知らないから何とも言えないが、それにしても胸がこんなに……あーやめとこう。
検査はどんどん進む。

次に受けたのが視力検査と次いで動体視力のテスト、更には聴力・色覚・血圧検査に血液検査に心電図、脳波の検査にレントゲン、ＭＲＩの検査・腹部の超音波検査・口の中を調べる検査・歯の検査・尿検査に呼吸器系の検査、更に胃カメラまで飲まされた。

本当に検査の総合商社という感じだ。学校の健康診断とはまるで違う。

……まあ、そうは言っても、俺の身体には一夜で性別が変わるなんて言うとんでもない事が起きたんだ。むしろ入念に検査するのは当たり前だ。

終わったのは予定よりも5分遅れた１２時5分だった。

看護婦さん曰く、「２―３日後には結果が出ます」ということだった。

ともあれ、これで退院という扱いになるから、もう病室には戻れない。カウンセリングの場所と時間は紙にもらったのでジーンズのポケットに入れておこう。

結局さっきの問いの答えは出そうにない。今はあれこれ考えず、時間が解決することを信じるしかないということか。ともかく、お腹が空いたので病院の外に出ることにしよう。

確かここは通学路上だ、少し先に学校があって学食が一番安く、行って帰ってきても十分間に合うが、今は制服がない。

こんな格好、特にこんな胸では、今はないがあのぶかぶかの男子制服じゃ露骨に怪しまれるし女子制服もない。

とすると、値を張るがハンバーガー店だ。

うちの学校は幸いにも校則は緩く、この手の帰り道の立ち寄りは自由だ。学食だけでは午後の授業終了後に腹が減ってしまった時の帰り道や昼休み気分を変えたい時に俺も何度か寄っていた店だ。とにかく、新しい環境だ。なるべく変化は少なくしたい。

……とは言ったものの、いつもはしないことをしないとな。

店に入る前に、メニュー表と格闘する。

男の時は、学校からの帰り道の場合、普段は大チーズバーガーと大ポテトのセットを頼むものだが、さっきの病院食の感じから推察する

に、間食と昼食という差を差し引いても、相当食が細くなってるはずだ。
念のため中チーズバーガーと小ポテトのセットにしよう。
もし少なかったらまた近くのコンビニで何か買えばいいだろう。

自動扉が開く、「いらっしゃいませ～」という女性店員の笑顔が眩しい。でも、考えてみたら今の俺はこの女性店員より可愛んだよな。
俺は中チーズバーガーと小ポテトのセットを頼み、番号札を渡されて店の壁側の一人カウンター席に座った。

うー、予想はしていたとはいえ、足が床につかない。なんか靴が外れそうな変な感じだ。大丈夫だよな、きつく結んだつもりだし……
……店内はかなり混雑していて、皆自分のことで手一杯という感じだ。
「5番でお待ちのお客様、お待たせしました、中チーズバーガーと小ポテトです」
数分後、そんな掛け声と共に、座席にハンバーガーが来た。
とりあえず一口食べてみる。
あーんん!!??
……あれ？　おかしいな。予想以上に一口が小さいぞ。そうか！
さっきは病院食で細かくなってたから、口の大きさがわからなかったんだ！
……うーむ、食っても食ってもなくならない感覚だ。一口一口が小さいせいで、中サイズのはずなのに、以前の大サイズより、大きな感覚だ。
とはいえ、今朝は病院食だけ、昨日も昼からは失神してて食事なし。そう言う空腹状態だったのもあって、少しだけ物足りない感じで完食した。
この辺の力加減はよく分からないな。特にこの体だ。今回は安直にハンバーガーで済ませてしまったが、油ものとか甘いものとかは食べすぎないようにしないと……

……あれ？　どうしてだ？
うーん、何で俺は今そんな感情になったんだ？
……あ！　そうか、胃が小さくなったから、予め外食などの時は気持ち少なめにしておけば苦しまないって話だったんだ。
ともあれ、トレイを返却口に返したから、もう長居は無用だ。他のお客さんの迷惑にもなるし、とっとと出よう。
うーん、食べるのに時間がかかったとはいえ、まだカウンセリングまで余裕があるなあ。
そういえば、学校においてきた他の私物はどうなったんだ？　うーん、多分家に返されてるだろう。何分、永原先生から今週一杯、あーつまり倒れたのが月曜日だから、今日を入れてあと火水木金土日で……6日の休みを勧められたしな。
仕方ない、病院の待合室でカウンセリングの時間までニュースでも見て時間を潰すか。
そういえば、この時間はそろそろ母さんが帰ってくる頃だな。

# 突きつけられた現実　後編

「石山さ～ん、７番にお入り下さい」
「ゆう、行きましょう」
　待合室で母さんと無事に合流し、これからカウンセリングだ。重要なカウンセリングになること間違いなしだ。
　それにしても、案内放送でも他の人は名字の後フルネームだけど俺は名字だけと言うのはなんだか申し訳がない。さっきはフルネームだったのに変わってるし。
　まあこんな姿で「優一」なんて言われたら白い目で見られるしな。
　それにしても、何かさっきからどうも気配に違和感があるなあ。女の子になって背が低くなったせいで視界も低くなったからかなあ。まだ視線の高さもそこまで慣れないし。
　まあいいや、カウンセリングルームに入ろう。
「あ、石山さん、こっちに座って？」
　って、おいおい、何で永原先生が座ってるんだ!?　そういえば、永原先生も午後に戻ってくるとは言っていたけど。まさかカウンセラーなのかよ!?
　親子で驚きながらもとにかく言われるままに座る。
「驚いちゃいましたか？　すみません。その、手紙にも書いてあったと思うんですけど、この病院、カウンセラーの方は他にも居るんですけど、今回の病気はかなり特殊ですので、同じ病気の私がやることになりました」
「うん、分かった。それで、おれ……あー、あ、あたしはこれから何すればいいの……よ？」
「あらあら、もう順応しようとしてるの？　いい心がけだとは思うけど、早まり過ぎちゃ駄目よ」
　永原先生が俺を好意的な目で見ている。
「い、いやその、この声だと俺って言うのはなんか違和感があるっていうか……でも今まで男だったからつい癖で出ちゃうからこうなってるだけで……」

「あの……先生、いい心がけっていうのはどういうことですか？」
「うふふ、それはね。私も教師を本業にしているけど、実はＴＳ病患者の手助けをする仕事もしてるのよ」
「手助け？」
まあ確かに珍しい病気だし、そういうのを手助けするってのは分かるけど。
「……私は実は『日本性転換症候群協会』の会長なのよ」
そういえば、妙に出張の多い先生だと思ってたらそういうことだったのか。
「もしかしたら午前中のお医者様にも言われたかもしれないけど、この病気になると二次障害として性同一性障害にとてもなりやすいのよ」
性同一性障害、つまり自分の心の中の性別と肉体との性別が違うことで苦しむというあの病気か。
本来は極めて例外的な状況を除いて先天的な病気とされているわけだが、確かに後天的に、それも突然性別が変わればそれに陥るのはむしろ自然の道理かもしれない。
「それで、これは私が今まで会ってきた患者さんに何度も言ってることなんだけど……男に戻りたいと思ってはいけないし、仮にそう思ってしまったとしても、絶対に性別適合手術をしちゃ駄目よ」
「ど、どうして？　たしかに医者も個人的にはおすすめしないって言ってたけど……」
「理由は簡単よ。そんな手術をしたところで見た目が男性に似始めるというだけ、生殖能力もなくなるし、『以前のような『完全な男性』に戻れない』という現実を突きつけられるだけで、その手術を受けた患者の大半がその後自殺してるわよ」
「つまりあれはあくまでも、肉体的な男性として生活したことのない人向けってことか」
「そういうこと。それでも、藁にもすがる思いなのかもしれないわね。男に戻りたいなんて思った患者の殆どは、私や周囲の忠告を無視してしまうわ」

「どうして無視しちゃうんだ？」
「……石山さん、女性になってみてどう？　なんか不便を感じたこと無い？」
「あ、あります。背が縮んで届くはずのものが届かなかったり、食べる量が減っていたり、トイレが近くなったり……」
「そう、多分予想できてると思うけど、他にも外出の準備や風呂に時間がかかったり、体力がごっそり落ちて疲れやすくなったり、力もなくなって重いものも運べなくなるわよ。男性ホルモンの注射だけじゃ男女の力の差は補いきれないわよ」
　確かに、それはよく分かるわね。
「実は性別適合手術を受けた患者の多くがそれらも取り戻そうとしてステロイドのような筋肉増強剤を手に入れようとしたりもしちゃうのよ。こうなると健康も害し始めちゃうの」
　俺と母さんは、ＴＳ病患者がバッドルートに進んだ場合どうなるかを聞きいっていて話さない。どうも恐ろしい話なのだ。
「……でもね、何をどうやっても、完璧に男性に戻ることはない。男性としての生殖能力を取り戻すことは絶対に不可能だと知って絶望して、多くの人が自ら命を絶ってきたわよ」
「なるほど、とにかく、そっちのルートは無理ってことか」
「あの……永原先生、うちの子は……うちの娘はどうすればいいんですか？」
　母さんが質問する。
「決まってるじゃない。現実を受け入れて、女性として生きることよ」
　そりゃあ、自ずと選択肢はそれ一択になるよなあ……
　でもどうやって？
「あの、女性として生きるというのは……」
「もちろん、心から女の子にならないと駄目よ。慣れるまでは男女の違いに戸惑ったときには、自分は女の子、女の子なんだから女の子らしくしないとダメって心に念じ続けるの」
「……でも、それだけでいいのか？」
「もちろんそれだけじゃダメよ。早く女の子として慣れるために、ま

ずは私の作ったカリキュラムを受けてもらいたいの。だけど、このカリキュラムも厳しいわよ。今週一杯、正確には日曜日まで休むように言ったのも、この間はずっと私のカリキュラムを受けてほしいからなの」
「ど、どうしてですか？」
　母さんが質問する。
「石山さんには、まず学校生活の前に、日常生活の訓練をしないといけないからです。石山さんには、言葉遣いの矯正はもとより、女性としての風呂の入り方、女子トイレでの振る舞い、生理の対処法、ミニスカートを穿いての外出、更に少女漫画や女性誌を読む訓練もしてもらいます」
「うわあ、盛り沢山の内容だなあ……」
「もちろん、石山さん、あなたの人生だから、このカリキュラムを受けなさいとは言わないわ、半端な覚悟だとカリキュラムに耐えられなくて投げ出しちゃう人も多いもの、そうなれば最期男に戻ろうとして悲惨な末路をたどるわよ」
　うぐぐ、今の俺の状況、結構厳しいんだな。
「……カリキュラムを受けずに、少しづつ女性としての振る舞いを自然に身につける方法もあるにはあるわよ。これだと、一部だけ男性の人格を保ちつつなあなあでやっていけることもあるわ。でも、途中で女性の生活の不便に耐えられなくなったら……」
「バッドルートに入るってことか？　先生はどうやってそれを回避したんだ？」
「先生は……もう男性だったのは遠い昔だからねえ。あの病気になった日のことは覚えてるけど、前後の記憶はもう殆どないわね。女になってしばらくした頃からはよく覚えているんだけど。いつの間にか女性化してたって感じ？　実はあんまり覚えてないのよ」
「お、覚えてないって!?　先生は一体何年……！」
「あらあら、女性に歳を聞くなんて失礼ね！」
　ですよねー。
「ご、ごめんなさい。うちの娘が……」

慌てて母さんがフォローする。
「……まあでも、教えない訳にはいかないよね……今から話す話は決して口外するなとは言わないけど、なるべく話さない方がいいわよ。何も知らない人に話しても変な人扱いされるから」
「う、うん」
「私永原マキノは、元々は鳩原刀根之助（はつはらとねのすけ）って名前だったの」
「随分古そうな名前だな……」
「生まれたのはそうねえ……確か永正１５年だったから……そう、４９９年前の話ね」
「よ……よんひゃくきゅうじゅうきゅうねん……」
「し、信じられないわ。永原先生、そんな昔から生きてるって」
あまりの衝撃的事実に俺も母さんも固まってる……
「私は信濃の国、今の長野県で伝令役の足軽をしていたわ。真田源太左衛門、あー去年大河ドラマでやってた真田丸の主人公のお祖父様に仕えてたのよ」
へえ、真田幸村の祖父ってそう言う名前だったのか。
「そ、そんな昔って……」
「あれは２０歳のときだったわ。あの日のことだけは、今でも鮮明に覚えているわよ。一人で農作業してたら石山さんと同じように下腹部が痛み出し、血を吐いて、耳だけ聞こえる状態で、最後は精力を出し尽くして、誰かが屋敷に運んでくれたみたいだけど、次に気付いたときには、女になっていたわよ」
「……」
母さんはまだ固まってる。状況が飲み込めないのも無理はない
「じゃ、じゃあまさか!?　１２２歳が人間の長寿記録ってのは嘘なのか？」
代わりに俺が質問する。
「そう、先生こそが長寿番付真の１位なのよ。ただ、本当の年齢がバレると色々とまずいから非公表なのよ」
「ど、どうやって生きてたんですか？」
「私はよく覚えていないんだけど、確か隣の村に逃げた記憶があるわ。

明治頃まではこの病気になると不吉だとして殺されていたのよ。あの時代は難民も珍しくなかったから特に怪しまれなかったわ」
なるほど、それで昔から生きてる人はいないのか。
「数年くらいしてから、信濃の元の村に戻ったわね」
「名前を変えてしまえば同一人物だとは思われなくて、行方不明扱いになっていた刀根之助の家にも戻ったわ。気がかりだったのは知らない間に私の土地の主君が代わってたことくらいよ」
気付いたら主君が変わっていたって、結構衝撃的なことのような気がするけど。
「まあ、その状態もすぐに私の主君、真田源太左衛門様の調略で元に戻ったんだけどね」
「まさか当時は私が老けない体になっていたなんて思いもしなくて、確信したのは天下が本能寺で織田前右府が明智日向守の謀反で討ち取られたという話で持ちきりだった頃だったかしら？」
ん？　本能寺の変？　織田前右府ってのは織田信長のことか？
明智日向守はおそらく明智光秀のことだろう。何で先生はこんな言い方するんだ？
「その頃からは村人にも怪しまれるようになっていてね……本能寺の変身後に信濃が戦乱に巻き込まれて、その時に危険を感じて諸国を流浪していたわよ。関ヶ原の戦いも見物したわよ。小早川中納言殿の裏切りは本当に突然だったわね」
せ、関ヶ原の戦いを見物したって……小早川ってあの小早川秀秋だよね？
「大坂の陣が終わって天下が太平になると江戸に住んだわ。『不老の娘』はすぐに噂になったけど、戦乱の世も終わって年長者を重んじる儒教に助けられたわよ」
ふむふむ。
「幕府が開かれてちょうど５０年目だったかしら？　私は時の徳川将軍に拝謁が許されたわ。当時、私の主君の孫君で、私の直接の主君とも幼少期に面識があった真田伊豆守がまだ生きていらしたのが幸いだったわね」

ん？　またよく分からない人が出てきたぞ。
「伊豆守殿も『自分の領地に老けない町娘が居た』という噂はお聞きになっていたようで。私が遠い昔、真田に仕えていたことをどうやって話したか……それは覚えてないわ」
「永原先生は、何を覚えているんだ？」
「……肖像画に書かれなかった源太左衛門様の顔の特徴を伊豆守殿の前で話したことは覚えているわ、でもどうやって信じてもらえたかまでは……もう３５０年以上も前のことだから……」
３５０年以上前……恐ろしく昔だけど永原先生のその時は１５０歳近かったってことだよな？
「でも、私の心に一番残ってるのは伊豆守殿の『よう、よう戻りてきたり、刀根之助』というお言葉ね。私はその言葉を聞いて、上様の御前だと言うのに大泣きしてしまったわ」
永原先生の話を黙って聞く。
「家老の一人が『無礼者』と私に怒鳴ったんだけど、上様が『よい』と仰せになって制止されたわ。４代様は幼少だというのに立派な御方だったのを覚えているわね」
永原先生が、当時の将軍のことを話す。
「それ以来、明治維新まで江戸城に定住して、江戸城で働いていたわ。本当は元鞘に戻るためにも伊豆守殿に士官したかったんだけど、上様が許してくれなかったわ」
「と、ところで、さっきから聞き慣れない名前が出てくるんだが……真田源太左衛門とか真田伊豆守と言っても誰のことかさっぱりわからないんだが……」
「……やあねえ！　私の口からそれを言わせるの？　それは無理な注文よ」
突然、永原先生の口調が変わる。
「え？　どうして？」
「石山さん、あのね。本来本当の名前を口にするのはものすごく無礼なことなのよ。よっぽど憎む敵でもない限り、例え主君であろうと臣下に対して仮名を使うものなのよ。ましてや自分の主君やその筋の

御方の諱(いみな)を口にするなんてできるわけがないじゃないの」
今までよりもかなり諭すような言い方で俺を咎める。
よく分からないが、どうも先生の中では重大なタブーらしい。深く詮索はしないでおこう
「続きを話していいかな？」
「はい」
「……単なる町娘と言ってもこの時は既に１４０歳くらいにはなってたから幕府も丁重に扱ったわ。私の存在は幕府の最高機密とされて、戦乱の時代から生きているというのは比較的武士の間では知られてはいたけど、私の本当の年齢を知っていたのは歴代将軍や一部の大名とか旗本だけだったわね」
「じゃ、じゃあ江戸城に住み続けていた女がいたっていう都市伝説は……？」
「ああ、あれは私のことよ。最も、名乗り出るつもりはないけどね。私に関する記録文書は明治維新の時に全部私が持ってっちゃったけど、それでも隠し通すのは難しかったということよ」
確かに、ずっと江戸城に住んでたら嫌でも目立つものね。
「明治以降はまた各地を放浪する旅に出ていたわ。身分証を偽装する腕ばっかり磨かれた記憶があるわね。日清戦争の頃になるともうＴＳ病患者も殺されなくなっていったから、私もようやく表に出ることが出来たわね」
俺も母さんも、永原先生の話に耳を更に傾ける。
「とにかく、紆余曲折を経て今の名前になったのは３０年前のことかな。さすがにこの病気の理解もある程度は深まってきたし、もう変える予定はないけどね。私は、ＴＳ病患者の中でも最高齢だったということで、自然と『日本性転換症候群協会』の会長になったわよ。２番目に年上の人でも、まだ私の半分も生きてないから、私が生きているのは本当に奇跡よ」
「……でも、先生はどうやって年齢をごまかしたんです？　先生、確か最初自己紹介の時３０歳って……」
永原先生は、常識的には３０歳でもかなり若く見えるから怪しいと

思っていた。
　でも実際には逆で、とんでもなくサバ読んでたんだよな……
「うふふ、その辺はＴＳ病患者のための国のシステムがあるから大丈夫よ。でも、長生きしたいなら、私の話をよく聞くことよ」
「じゃあ、お……わわっ、私はそのカリキュラムを受ければ……！」
「受けるっていう選択肢は私個人が勧めるものよ。少しずつ女性としての振る舞いを自然に身につける方法で上手くいくというのが一番ストレス無いわよ。私もそうだったからね」
「で、でも、先生の話を聞く限り、どう考えてもカリキュラムを受けるのが低リスクで最善としか……！」
「そうね。でも、もう一度家族で話し合ってみて。このカリキュラムを受けるということは、今までの男性としての人格を一気に捨てることになるのよ。少しずつ、自分のペースで捨ててくよりも、ずっと辛いことになるわよ」
　そうは言っても、死んでしまうよりはマシだろうし。
「……今はここにお父様がいらっしゃらないみたいだから、カリキュラムのことに関しては、もう私が話せることはもう無いわよ。最も、他にもまだまだ話すことはあるけど」
「永原先生、一つ質問いいですか？」
　俺はもう一つ、質問したいことがあった。
「何ですか？」
「永原先生にとって５００年というのはあっという間ですか？」
「そうねえ、正直言うと最近の２００年、特にここ１００年はそれまでの３、４００年に比べると時間の進みが遅く感じるわね。それまでは３００年でさえあっという間だと思ってたんだけど、今や７０年前でさえ遠い遠い昔に感じるわよ」
　なるほど、激動の時代ほど時間の進みを遅く感じるのか。
　そういえば、先生は古典の先生だったが、教え方が独特だと評判だった。時に学者の間でも異端だとしていた説にも、まるで見てきたように断定的な口調だったのも、こういうことだったのか。
　そういえば、先生は稀にだけど「え」が「いぇ」のような発音になっ

ていたり、「せ」の発音が「しぇ」のようになっていたり、「は」や「ひ」を「ふぁ」「ふぃ」と発音していたりしていた時があったのも、昔の名残なのかもしれないのか。

「じゃあ、次の話をするわね……」

その後は、3者で心理状態の確認などをして終了した。生命保険がどうたら言ってたがまあ俺には関係ないや。

最後の方は雑談も多くて、「大河ドラマの登場人物や当時の様子が私の見てきたのと似てなさすぎる」という愚痴も聞けた。

ちなみに、この服は先生からのプレゼントだそうなので、そのまま使って良さそうだ。

ともあれ、ようやく精神的にも落ち着いてきた。という確信を持てるに至った。

## 決意

「ねえ、ゆう。この後買い物に付き合ってほしいんだけど？」
　病院から出ると、早速母さんが「買い物に付き合って欲しい」と言う。
「え？　またどうして？」
「どうしてって……ゆう、私服がこれだけじゃダメでしょ……」
「あそっか」
　よく考えれば当然よね。
「うふふ、よく見ると可愛い娘ねえ……これは服の選びがいがあるわね……」
　な、なんか母さんの方角から悪寒がしたような気がするが、まあ気のせいだろう。
　ともあれ、地元のデパートで服を買う。１種類だけじゃどうにもならない。
　さて、若い女性向けのエリアに着いた。しかも、よりにもよって最初に連れて行かれたのがここだ。
「し、下着コーナー……！」
「ええ、ゆうも女性として生きてくんでしょ？　まずはこういう所に慣れないと」
「そ、そうは言っても段階が……」
「先延ばしにしてもしょうがないわよ。さあ、サイズはもうお母さんが把握してるから、ゆっくり回るわよ」
「はいはい」
　正直まだ目が慣れないが、一応暫定的だが男には戻らずに数百年数千年と女として生きていくということになっている以上、こういうところに慣れるしかあるまい。

「ねえねえ、こんなのどうかしら？」
「ちょ、ちょっと大胆すぎるよー！」
「何言ってるの？　似合うわよ？」

母さんが取り出したのは、今穿いてるのよりも明らかに布面積が小さく、色も派手な色のパンツだ。
俺はつい昨日の昼まで男だったから分かるが、こういうのは中年オヤジとかじゃないと男受けしない。
「そ、その……そういうのは、あんまり男には受けないっていうか……！」
「まあ！　お母さん女だからよく分からないけど、こういう勝負下着でお父さんを落としたのよ」
「どうだか……？」
「じゃ、じゃあゆうはどういうのがいいのよ？」
「俺……わ、私はっ、こっちの方がいいと思う」
今穿いてるのと同じく、シンプルな白いフルバックショーツ。男受けする色といえば色々意見が別れるが、少なくとも白なら悪い印象は絶対持たれない。
「えー、これダサいわよ……」
「お母さん、若い男はこういうのが好きなんです」
何故か丁寧語で話す。しかし、最初こそ緊張した下着売り場だが、30秒で慣れてしまえばどうってこと無いな。
その後、またさっきみたいな大胆なパンツを勧めてきた母さんに対して、俺は縞パンに手を伸ばす。これも派手と言えば派手だがさっきのよりはずっとマシだ。
やっぱ、俺が女として可愛いと思うのはこれなんだよね。まあ、わざと見せるわけじゃないけどさ。ミニスカートじゃどうしたって見える時は見えるだろうし現に俺の学校でも女子がそれなりにパンチラしてるし。
お母さんはまた「子供っぽい」と反論してきたが、若い男の視点を知ってる俺がなんとか説き伏せることが出来た。
母さん曰く、「ま、ゆうが言うと説得力半端ないからね」ということだそうだ。
さて、パンツは白、縞パン、後は薄い色中心に固めてく。母さんが

出してきた黒や紫のようなどぎつい色は全部却下だ。
さて、パンツの方はともかく、ブラジャーはデザインが少なかった。
とにかくこのサイズだと、なかなか難しい。更に母さん曰く「上下デザインを揃えないと駄目」というんだ。
元男子としても、そこまでこだわらなくても、と言ったものの、母さんはこれだけは頑として譲らなかった。
ともあれ、大半がセットになっていて、色が揃わないと言って却下されたオレンジの縞パン以外は全て揃えられた。
ブラジャーの方は、そこまで多くの選択肢もなく、割りと意見の衝突もなかった。
母さんは、俺用の大量の下着を持ってレジへと行く。

さて、下着選びと購入が終わったら、次は服のコーナーだ。
母さんはますます張り切ってる様子だ。
「さあさあ、可愛い娘のために、選んじゃうよー」
「はい、これ！」
「う、うわっ短っ！」
いきなり渡してきたのはデニムのミニスカート、しかもめちゃくちゃ短い。街でも極稀にしか見ないようなものだ。ってこれじゃ座れないだろ……！
「ちょ、ちょっと短すぎない？」
「何言ってるの、今のゆうは美人なんだから肌は見せてなんぼよ。さ、試着して試着して！」
「わっ……わっ！　押さないでよ！」
母さんに押される、以前なら押されてもびくともしなかったのに、この体になって簡単に押されるようになってしまった。
母さんが素早くカーテンを閉める。もちろん外で監視しているから脱出は不可能だ。
ううっ、着るしか無いか……
着ていたジーンズを脱ぎ、そのままこのスカートに穿き替える。
うわあ、凄いスースーする。落ち着かないよこれ。

鏡で見る。凄い脚が露出していて……うううううっ、自分しか見てないのに恥ずかしいよお……
「ゆうー？　大丈夫ー？」
母さんが催促する。見せたくないけど、いつまでもここに居たら開けられるよなあ。
意を決してカーテンを開けてみる。
「ど、どうかな……？」
「まあ、可愛いわねえ！　我が娘ながら嫉妬しちゃうわあ！」
「た、確かにこれは可愛いけど、こ、この服じゃ座れないよ！　パンツ見えちゃう！」
「ま、まあまあ。可愛ければいいのよ可愛ければ。恥ずかしがったり隠したりする仕草だって可愛いのよ」
「そ、そりゃそうだけどさ……」
ど、同意せざるを得ないのが元男の悲しい性だ……
「それに、永原先生のプログラムでも、ミニスカート穿いて外出するってのがあったでしょ？」
「う、うん……でもそれは……こっちの方がいいと思うよ！」
俺が指差したのは青いフレアミニのスカートで今試着中のデニムミニと同じくらいの丈だけど、デニムミニよりはまだ座れる分マシだと思いたい。
「まあ！　それも可愛いわね、試着してみてよ！」
良かった、今着てるほうが可愛いと言われて押し切られたらたまらない。
もう一度試着室に入り着てみる。デニムミニを脱ぎ、畳んだら、このフレアミニを着る。
うわっ、可愛いけど、脚にフィットしてない分さっきよりももっとスースーする……
とにかく、母さんに見てもらわないと。
「ど、どうかな？」
「まあ！　とって可愛いわよ！」
「あ、ありがとう……」

内心こそばゆかったが、ここまで可愛い可愛い言われたら不感症にもなる。
そもそも、俺自身が最初に姿見で女の子になった自分を見た時の第一印象も「可愛い」だったし。
「ふふ、でもさっきのも可愛かったから、両方買っちゃうわね。そうそう、こっちはどう？」
また別のデザインのミニスカート、巻きスカートっていうのかな？
さっきよりは丈が長めだが真っ赤な服で、少し色使いが派手なような……
そう考えてる間に、母さんによって試着室に入れられる。

「……まあ可愛いわね！　これも買っちゃうわ」
もう知らん……買いたきゃ買え。
母さんはせわしなく会計と売り場を往復する。
スカート攻勢が終わったかと思えば更にワンピースやトップスなどにも手を出し始める。
「ねえねえ、ゆう、これはどう？」
ヒョウ柄のワンピースを出してくる。これじゃ「大阪のおばちゃん」じゃないか。
「えーこれは可愛くないと思うよ。こっちがいい」
「そう？　地味じゃないの？」
「白は清純の象徴だからさ、頼むよ」
俺は真っ白なワンピースを指差した。まだこっちの方が男子受け狙える分マシだ。
「分かったわ。でも、少しはお母さんの言うことも聞いてね。あんまり男子受けばっか狙ってると、女子から嫌われるわよ。お母さんでさえ、ゆうの今の身体には嫉妬しちゃいそうだし」
女子受けと言われてもなあ……女の子が女の子に好かれてどうするんだろ？
……あれ？　そういえばどうしてさっきから俺は男子受けなんか狙ってるんだ？　母さんの趣味から逃れるためだっけ？

えーっと、もう一度整理すると、今の俺は女の子で、女の子だから可愛い服ってのは女の子の視点……のはずなのにさっきから男子の視線ばっかだぞ。
えーっと、女の子は男の子に好かれたい生き物だから男子受け狙ってるとか？　って、だとしたら半日足らずで俺は精神の女性化が始まってるということか？　いやでも、今日の永原先生の話ならむしろそれはいいことで、いやでもでも……
……ええい、もうどうでもいいや。
「あ、ゆう、これもいいんじゃない？」
「え？　ちょっと小さすぎない？」
今度はTシャツを取り出した。でもサイズが小さい気がする。
「まあまあ、さっきのフレアミニと組み合わせて着てみてよ？」
それにしても、さっきから試着しすぎだが、大丈夫なのか？
とりあえず、再び試着室に入る。
今回は上下の試着だから上下脱いでまず下着姿になる。うわっ、エロい。
まずフレアのミニから穿く。そして、小さそうなシャツを着る。
……ちょっと待て！　これ、丈が足りなくてへそが見えてるぞ！
それに胸元も空いていておおよそ下着が見えない範囲なら最大限に露出が高い格好だ。
「ちょ、ちょっと！　これは流石に嫌だよ！」
俺は母さんに訴えかける。
「まあ、ちょっと見せてよ」
そう言うは早く、問答無用でカーテンを開けてくる。
「あらあら、とってもスケベで可愛いわよ！　これなら男子はイチコロよ！」
「いや、これはやりすぎだから、逆効果だから！」
援助交際の時ならいいけどさ、と言うかそれくらいしか使い道がない。
「えー、そうなのー？」
「そうだよ、こんな格好して出歩いたら命がいくつあっても足りない

よ!!!」
「あらそう、確かに痴漢には持ってこいよねえ……でもね、将来彼氏や旦那さんができた時に『いざ』というときに使いなさい」
なっ……何を言うんだ……いやいや、女の子なんだから彼氏作るもんだっていってもなあ……
「そ、そう言う服はで、出来てからでいいでしょ」
「まあまあ、それに夏場の暑い日に家でいるときなんかにも使えるわよ」
俺は「いくら家の中でもこれは嫌だよ」と訴えたが、結局これも買い物かごの中だ
「さて、一通り買い終わったけど、次はパーティー用のドレスね……」
「あ、あの！　可愛いのもいいんだけど、動きやすかったり過ごしやすい服も買ってよ！」
「そういえばそうねえ、パジャマとかも必要だよね」
ふう、ようやくラフなズボンとかも買ってくれるようになった。
パジャマもパジャマでまたピンク色中心だし、何故かスカートのパジャマもあったけど、まあ着心地良ければいいや。というか、現実逃避しないとやってられん。

母さんが「これがいい」と言うと、大抵は買ってくれたのも幸いした。まあ、今の服でさえそうだけど、何着ても似合っちゃうってのも考えものだよなあ……

下着やパジャマの他にも、普段着は夏用と冬用も必要だ。
防寒のためのコートやマフラーといった類のものも買っていく。とにかく男時代に使ってた衣類はほぼ全て大きくなりすぎて使い物にならなくなっているということもあるだろうが、それにしてもあまりに大量だ。
途中には母さんに1時間ほど待たされて近くのホームセンターから台車を買ってくる有様だし。

「それにしても、こんなに買い込んじゃって大丈夫なのか？」
「大丈夫よ、さっきの永原先生の話、聞いてなかったの？　ＴＳ病は国指定の難病かつ極めて稀な病気で、しかも体格が変わっちゃうから衣服代も含めてある程度は生命保険が降りるって」
「そ、そうなのか……！」
「だから、今のうちに買っておくのよ！　さあ、パーティー用のドレスを買うわよ」
パーティ用のドレス、女性用のスーツ類、家事の際のエプロン、そういったいつ使うのか？　と言うような服も買わされた。
更に別のフロアに移動、ここでは靴を買わされた。普段の外出用とサンダルもいくつか買ってくれた。
更に様々な形状の靴下や、防寒対策としてストッキングや手袋、更には長い髪を止めるための髪留めや、明らかにオシャレのための髪飾りやリボンまである。
おいおい、これ保険で全部降りるのか？　ちょっと信じられないんだけど。

こうしているうちに、あれよあれよという間に荷物の量は膨れ上がった。
昨今某国人によって行われている「爆買い」さえ真っ青な状況だ。というか、エレベーター大丈夫かこれ？
「あ、お客様、その荷物はエレベーターには難しいと思います。こちらの貨物用のエレベーターを使って下さい」
ああ、やっぱり誘導された。まあ、店側としても大量に買ってくれるのはありがたいから買いすぎとは言わないけどってことだろうな。
家に帰る頃には、すっかり日が暮れてしまっていた。

あー、なんか凄い懐かしい。
俺の部屋に入る。男の部屋ということもあって、片付けられていない乱雑さだ。
気分転換にエロ本でも読むかなあ。

……いや、やめておこう、なんかそう言う気分じゃない。当事者になっちゃったせいか。
ともあれ、疲れは不思議と出なかった。まあ、あんだけ寝てればねえ……
それよりも、大変なのは今後の生活だ。まず気持ちの整理だ。
今の俺の気持ちとしては……消極的だが永原先生のカリキュラムを受けたいと思う。
というよりも、リスクが一番小さい方法はそれしか無い。
家族で相談しろと言うが、「男に戻りたいなんて願っちゃ駄目」なんて言われれば、安全な選択肢なんて永原先生のプログラムを受けて一気に内面から女の子になりきってしまうしか無い。

……それに、俺は両親を裏切り続けた。せっかく「優一」と言う名前をもらったのに、名前と真逆のことをしていた。本当に、本当に申し訳ないと思っているが、結局男の頃はやめられなかった。
でも、女の子になったら、優しくなれるのだろうか？　女の子らしくなれば、優しくなれるのだろうか？　分からない。でも、少なくとも乱暴な女の子は女の子らしいとは言わないことくらいは分かる。
「ゆう、ご飯よ！」
「あいあい！」
実際にはこう言ってもできるまで時間かかるから後数分待てという意味だ。
……「ゆう」か、名前も変わるんだよな。
「優一」のまま女の子として生きるのは不便だろう。
でも、なんて名前になるんだろう？　また両親が決めるのか？
この年で？　でも、俺が決めるにしてどうするんだ？
……そういえば、小学生の時、木ノ本桂子が言ってたよな。
「私、子って名前なんて古いって言われたけど、そうじゃないって。お父さんがね、子は一と了……はじまりとおわりって文字にわけられるから、最初から終わりまでずっとそう言う心を持ってほしいって意味があるんだって」

桂の意味は忘れてしまったが、木ノ本が言っていた「子」と言う字にこめられた意味は今でも鮮明に覚えている。

「優子（ゆうこ）」っかあ、優しい子、ずっと優しい子か……

……いいじゃない、おあつらえ向きだよ。果たして今後の俺の人生に「了」があるのかさえわからないが、でももし死ぬ時があったとしても、優しい女の子として死にたい。

「優一」が「優子」、適当だって？　安直だって？

……否！

そうだ、これから生きる俺には、乱暴に育った俺が、名前を汚した俺が生まれ変わるには「優子」という名前以外にない。そう確信できる。

そうだ、だったら、カリキュラムは真剣に取り組まないと。今まで両親を裏切り続けた精算と償い、そして何より、俺自身が変わりたい。

だから、女の子に、俺はなりたい。

よしっ、気持ちの整理ができた。

食卓に向かう。

案の定まだ準備していた。母さんが「どうしてすぐに来ないの？」と言った。

家の中では大人しい子を演じていたからそのまま黙り込むことも多かったが、今回は「自分の将来について考え事をしていた」と正直に答えた。

でも、まだ俺の決意は話せない。

母さんが「今夜ゆっくり考えなさい、明日の昼食の後、永原先生も含めて聞くから」と言ってきたからだ。

……にしても、食事の量が多い。最後の方はかなり苦しみながら完食した。

いつもと変わらない量のはずなのに……あーそっか、両親はまだ男の頃の感覚で作ってるんだ。伝えそこねたのは俺のミスだな。やはりこういう状況では「ほうれんそう」が肝心だ。

# 打ち明ける想い　前編

夕食を食べ終わったら「風呂に入りなさい」と母さんが言う。
そういえば一昨日の夜以降、風呂に入ってない。昨日の今頃はちょうど身体を女の子にされていた時間帯だ。
お風呂の脱衣所に入る。
母さんが「援助はいる？」と言ってきた。実際の所、本音では願ってもないありがたい申し出ではあったんだが、午後の服選びのこともあってなんか嫌な予感がしたから「嬉しいけど」と言う感じで丁重に断った。

シャツとズボンを脱ぐ、ブラを外す、パンツを脱ぐ。本日二度目の全裸。
鏡に映る裸の自分を見る、ああ、可愛いしエロい。きっとこんな可愛い子が彼女だったら男は幸せだろうな。しかも老けないというおまけ付きだ。
でも、中身は男だ。って、これから中身も女に変わらなきゃいけないんだよなあ。
ともあれ、少し寒い。
……と言うかかなり寒い。もとより暑がりよりもやや寒がり寄りだったが、ここまで寒がりじゃなかったぞ!?
ま、まずい！　冷たい冷たい！　手が急速に冷えてく！
こ、これも身体の変化のせいかな、ともあれ、急いで湯船に行かないと！
身体にお湯をかけ、少し温まる。
そういえば、女性は「冷え性」ってのがあったよな。温泉に行くと大抵「効能」にあるあれだ。
ともかく身体を洗う。いくつかあるタオルの中から1つを選び、よく濡らして石鹸をこする。
うまく泡立ったら身体につけて……
って、あんまり強くこすらないほうがいいだろうな。見ぬからに痛

みやすそうな肌をしてる。
……慎重に……慎重に、ってこれじゃ洗えない、少し、もう少しだけ強くっと。
ええい！　まどろっこしい！
さすがに、強くしても大丈夫だろう。
「うっ……！」
やばいやばい、男のときのような力の入れ方をしたら、流石に痛覚を感じた。
これよりは弱くしないと。
ふう、ともあれ全身を洗い終わったので、シャワーで流す。
次に髪の毛だ。これは大変だろう。
女性の場合はシャンプーの他にリンスというものがあるが、とりあえず今日は使わないでおこう。まずはこの長さの髪洗いに慣れてからにしないと、勝手もわからないうちに下手に手を出すとろくなことになりそうにない。
まずは頭と背中までの髪全体をシャワーで洗う。
シャンプーを取り出して泡立ててっと。頭を泡立てる。これは男も同じはずだ。
頭の部分をゴシゴシっと。おおっ洗えてる洗えてる。
……あ！　首から下の髪の毛を洗い忘れてた。流す前に気づいてよかった。
とりあえずさっきと同じようにシャンプーを押してっと。背中に手を回して……うー大変だ。
うーん、母さんもロングじゃないけど、ヘルプ断らなかったほうが良かったかなあ。
まあいいや、とりあえず、何とか手を工夫すれば届くはずだ。重力の助けも借りれば……よしっ！
髪の先端までシャンプーが行き届いたのを確認したら、とにかく流す。うーん、今回はこれでもいいか。
にしても寒い。
湯船を見る。早く入りたい。

「あ、そういえば髪が湯船に浸かるとまずいよなあ……」
「……ん～？」
「……まあいっか！」
って。よくない気もするけど、もし失敗したらしたでそれはまた次に活かせるだろう。
ふう、うーん、とは言っても、やっぱ髪入り込むのはなあ、それに先端だし。
まあ、次からは髪留めを使おう。
「ふう、暖かい……」
いつもより熱く感じる風呂だが、いつもより冷えてる状況ならこれでいいだろう。
一通り温まると風呂から出る。
身体を拭く、次いで頭と髪の毛。よし、こんなもんだろう。
脱衣所に戻り、バスタオルを拭く。鏡をもう一度見る。
やっぱ可愛いしエロいよなあこの子……これが自分の姿だってんだから驚きだ。
悪人顔で性格も乱暴な俺が、一夜にして絶世の美少女か。しかも老けないと来た。こんなことがあり得るんだから驚きだ。
そんなことを考えながら一通り体を改めて拭く。
あ、着替え持ってくるの忘れた。あーバスタオル巻いて部屋まで行くしか無いか。
バスタオルに手をやる、えっと、下だけという訳には行かないよな……
これで大丈夫かどう鏡を見る。なんか心許ないし、家の中とは言えこれで歩くのは……
っていつの間にかご親切に着替えが置かれてるじゃないか。まあ、バスタオル1枚というのも、主に親父には精神衛生上悪いからな。
まずはブラから……
って、これ後ろで止めるタイプなのか。
う～難しい、はあっ……

……よしっ！　ついた。前で留めるブラより着心地はいい。前につけるやつはどうも継ぎ目が胸に当たっていたが、これはそういうものではないということに気付いた。
付け外しは大変だけどどうも俺の新しい身体は肌も敏感みたいだし、こっちの方にしていきたいかもしれない。
ともあれ、パンツも穿いて更にパジャマに着替える。うむ、着心地もいい。
しかし、何やら違和感がある。
背中に髪が張り付いてる。あちゃー十分拭ききれてなかった。
そうか、髪を湯船に入れちゃうとこうなるんだな。やってしまった！
うー、地味に辛い。
なるほどなあ、洗うのも大変だし世の女の子が髪を切りたがるのも分かる気がする。
とにかく、今の違和感は時間が経てばなんとかなるだろう。
自室に戻り、テレビのニュース番組でも見て気を紛らわせよう。
そういえば、今日の授業分のプリントもあったな。でも今はやる気が起きない。
勉強以前に、今後の日常生活が心配だ。永原先生のカリキュラムも、日常生活レベルらしいから、学校生活もまた違うだろう。
夜９時４５分、いつもより早めにベッドに入る。
あまりにも一日が濃すぎて、いつもより睡眠時間が長くなる。
……
……
……
目覚まし時計が鳴り、朝起きる。
クローゼットを開けてハンガーを見たら制服がない！
そしてようやく、自分が女の子になっていたことに気付いた。クローゼットにあった鏡を見て確認する。
とりあえず、学校は休みだ。そもそも女子の制服を調達しないと行

きようがない。
リビングに行くと両親がもう朝食を食べ始めていた。
「あ、ゆう起きた？　今朝ごはん持ってくね」
「あんまり作りすぎないでくれるか？　この体、結構少食みたいだから」
昨日、苦しい思いして食っていたから、俺の体のことを考えてそう伝える。
「ああ、ごめんなさい。そうよね、ゆうももう女の子だもんね」
家計的には食費がかからなくなってありがたいものなのかな？
よく分からないけど。
ともあれ、いつもよりかなり少ない朝食を食べる。
これまで病院食、ハンバーガ屋、そして昨日の夕食に続いて女の子になってから４回目の食事だがやっぱ一口一口が遠く感じる。
汁物の時なんかは早く食べないと冷めたりしちゃうからな。今後は考えものだ。
ともかく、４回食事をしてみてわかったのは、どうやら幸いにも味覚の好みにはさほどの変化はなさそうだということだ。
そうだ、昨日考えた決意について話さないと。
「ねえ……」
「ん？」
「あ、あの……お……わ、私、大事な話があって」
「ああ、昨日の話だろ？　ゆう、お前はどうしたいんだ？」
初めて親父が声をあげる。
「あの後考えたんだけど……わ、私！　今日から石山優一じゃなくて石山優子になろうと思う！　そ、それで、それで、明日から永原先生のプログラムを受けて……一人前の女の子に、女の子になりたい！」
「……本当にそれでいいんだな？」
「ゆうの人生だから、私たちはどんな選択肢をしても止めないけど、一個だけいいかな？」
「何？」
「優一に対して優子って適当すぎない？」

「ううん、違うんだ……」
「どうして？」
「あ、あのね、実は……お……あ、あたし。本当は優しい性格じゃなくて、その」
「……ああ、そういうことか」
「そんなこと、まだ気にしてたの？　ごまかしたって無駄よ。ゆうには言ってなかったけど『お宅の子は乱暴です』って先生に言われてたもの。とっくに知ってたわ」
　そうだ、先生の家庭訪問やらその手の報告は当然ある。冷静になればすぐに気付けそうなことだったのに。意外と俺もバカだ。

「で、でも……あ、あたし、本当にこの性格は嫌だった！」
　俺は、両親の前で胸の内を暴露する。
「だ、だから！　昔木ノ本……けっ、桂子ちゃんが、子の意味を教えてくれて。桂子ちゃん、子は一と了にわけられるから始まりから終わりまでって意味があるって」
　俺が新しい名前を「優子」に決めた理由を、丁寧に説明していく。
「今度は、今度は本当に優しい子になりたいんだ！　終わりは来るかわからないけど、最初から終わりまで優しい女の子に！」
　決意を伝える。もう迷ったりはしない。
　今度は、今度はちゃんと自分は女の子に、優しい女の子になる！
「……決心は堅いようね」
「ああ、永原先生に、連絡してくれ。石山優一改め石山優子は、これから女の子としての人生を歩むつもりだ。決意は堅いと」
「ええ、でももう少し待ちましょう」

　学校の朝礼が始まる少し前の時間、母親が電話を取って学校の電話番号を入力する。
「もしもし、永原先生いらっしゃいますか？　……石山優一の母です……はい、はい……それでですね、優一は優子に名前を変えて……ええ、カリキュラムを受けたいと……はい、はい……決意はとて

も堅いです、はい。あ、じゃあお願いします」
電話で母さんと永原先生が話している。
「……永原先生、授業終わったら家に来るって」
おお、これはありがたい。しかし、つきっきりで大丈夫なのか？
いくら自分が難病で永原先生がＴＳ病の支援員も兼業しているとは言え、他の仕事もあるだろうに……
そのことについて聞いてみよう。
とにかく今日は学校が休みだ。高校はまだ休んだことがなかったが、いざ休むとなるととても暇だ。
ともあれ、部屋に入る。女の子として生きると言っても、自分の部屋にあるのは男向けの本ばかりだ。
ＰＣゲームで時間を潰そう。
……あれ？　ここはこれでクリアできたはずなんだけどなあ。
もう一回やってみよう。
……あれ？　このパターンで間違いないよな？
攻略サイトを見る。その通りだ。つまり反応が遅れているんだ。
あー、くそっ！　おのれ！　今まで出来たことが何で……！
あーあ、これも女の子になったせいか。それにしても、女の子の生活ってないない尽くしだぜ。
一旦ゲームを止め、女の子の不便さを思い出す。
高い所に手が届かない、すぐにトイレに気づけない、たくさん食べることが出来ない、重い物を運べない、すぐに疲れて長時間の作業ができない、早く走れない、さくっと準備ができない、短時間で身体の手入れが終わらない、そしてさっきは反射神経まで衰えていることにも気付かされた。
これで生理まで来るってんだから困った話だ。
翻って女でしか出来なくて男ができないことってなんだ？
うーん、あ！　そうだ！　男はスカート穿けないな。後はそういえば出産もできないな。ってこれはメリットなのか分からんなあ。むしろデメリットの部類か？
後はそうだなあ……女性専用のサービスも受けられるんだよな。

最近じゃレディースなんちゃらとかよくあるし。
他には男に守ってもらえるとかもかなあ、昨今じゃ日本は女にとことん甘いしなあ、さっきのデメリットも「女だから」と言って辞退することもできるだろう。
それに、甘えれば金持ちとか寄ってきそうだ……ってこれは美人の特権じゃないか。
うーん、幸いにも客観的に見て今の自分の容姿は超が付く美人でしかも超がつくほど可愛いから間違いではないか。
でもどうなんだろう？　メリット釣り合ってるのかな？
いくら女に甘い社会になったと言っても、やっぱり身体能力が衰えたのは、出来たことが出来なくなるということで、単純に嫌な話だ。
……なるほど、男に戻りたいという思いを募らせてしまう患者が続出するのも頷ける話ではある。しかも老いて死ぬわけじゃなく、自分の周囲が死んでも生き続けなければならない。
不可能と言われても奇跡を信じたくなるってことか。
でも、それはもっと酷い結末を招く、昨日の永原先生もそう言っていたし、その前の医者の先生も、性別適合手術は止めていた。
今更決意は変えるつもりは毛頭ない。これは俺に対する試練だ。逃げちゃダメなんだ。

とにかく、ゲームを続けよう。攻略法はわかってるんだ。この身体に慣れれば少しはましになるはずだ。
……あーやっぱダメだ！　あれ？　そういえば女の子になって怒ったのってこれが初めて？　出来たことが出来なくなってるのもあるけど、そう言えば女の子になって気持ちが少し落ち着いている気がする。
ゲームで自分の感情変化に気付けるものなのか！　また一つ、新しい発見をしてしまった！
……お、よしよし、行けた行けた。
ふうクリアできた……よし、これで難易度を一個上げられるな。最も、このハードモードは男だったときも無理だったからなあ。

……えい！　えいっ！
ああーやっぱここかあ……
なんだろう、随分と新鮮な気持ちだ。こんなにゲームが楽しいと思ったのも久しぶりだ。
不自由ばかりで嫌だと思っていたが、それを克服する喜びは何にも代えがたいものだ。何だろう、明日への希望が湧いてくる気がする。これから来る女の子としての生活に、とてもワクワクしていることに気付いた。
単なるゲームだが、それでも俺に希望をくれたことは感謝したいものだ。
「ゆう、お昼だぞ！」
親父が呼んでいる。よし、ゲームも切りが良いし、これで切りあげよう。
昼食はラーメンだが、いつもより少ない。早速順応してくれて助かる。
……ずるっずるっ
うむ、上手い。自分は味が濃いのが好きな質だが、これについてもやはり変わっていないようだ。
……ふう、よしよしスープも飲めたぞ。
「ゆう、ご飯を食べたら、先生がいらっしゃるから着替えなさい」
「はーい」
早速自室に戻る。
引き出しを開けるとまだ男物の服が残っていたが、当然多すぎて使えない。親父の体格とも微妙に合わないし、これらも古着屋行きだろう。
昨日買った女物の服を取り出す。
先生が来るとして、どうしようか……
とりあえず、履き心地のいい白ズボンとTシャツにしよう。
うーん、でもこれもちゃんと普段着でのスカートの経験も必要だよな。だとしたら今のうちにスカートに慣れておくべきか？
……まあ、そのあたりはカリキュラムでやるだろう。先生が来るん

だ、スカートで何かまずいことをしたら大恥かくことになるし、今はこれでいいか。

昼食の後、着替えも終わり、更にゲームに夢中になっていたら玄関の呼び鈴がピンポーンと鳴った。

# 打ち明ける想い　後編

「ゆうー！　永原先生よー！」
「はーい」
　母さんの呼び出しに応じて玄関に行くと、そこに永原先生がいた。
「こんにちは、石山優子さん」
「こ、こんにちは」
　一瞬、「あれ？　優子？」って思ってしまった。なんともバカな俺だ。自分で新しい女の子としての名前を考え抜いた上で決めたじゃないか。
　両親は相変わらず「ゆう」と呼ぶし、考えてみれば女の子の名前でちゃんと呼ばれたのはこれが初めてだ。
　でもこれからは慣れないといけねえな。
「ちゃんと女の子してるかしら？」
　永原先生が質問する。
「い、いえ……わ、私、がっ……決心したのも昨日、伝えたのも今日の朝ですので、まだ女の子らしいこと全然……」
　正直に答える。
「あら、でも仕方ないよね。ま、これから女の子になるためのカリキュラムについて話すから、まずは失礼させてもいいかしら？」
「ええ、お構いなく」
　母さんが一声上げ、ともあれ永原先生をリビングルームに通す。
　そして机に俺と母さんで隣に座り、対面に永原先生が座る格好になる。そして永原先生は持っていたバッグから書類や本を取り出し山にする。
「じゃあ、まずカリキュラムのことの前に、一つやってほしいことがあるの」
　永原先生は、そう言うと書類や本の山の中から2枚の書類とボールペンを取り出してきた。
　早速見せてもらう。
　1枚目には「名の変更届」と書かれていて、改名事由には「完全性

転換症候群のため」と書かれている。
大半がすでに書きこまれていたが、３箇所だけ大きな空欄があった。
「ここととここに、以前までの名前、そしてこっちに変えたい名前を書いて、それから印鑑を押してくれる？　あ、後一応間違いがないか確認しておいて」
既に書かれている情報を見る。間違いはない。
そして名前欄、ここは自分で書かなきゃ駄目ってことか。
永原先生のボールペンを借りて、「名を変更する人の氏名」の欄に「石山優一」、もう一箇所の「変更前」の所にも「優一」、そしてそのすぐ右の変更後の欄には「優子」と書き、ふりがなに「ゆうこ」と書き込む。
その間に親が持ってきたハンコと朱肉を受け取り所定の場所に押す。
随分と簡単な作業だが、この辺の書類も役所に提出しないといけないということか？
「本当は家庭裁判所なんだけど、ＴＳ病の場合は争う余地もないから役所でも大丈夫ってことになっているのよ」
また一つＴＳ病の知識が増えた。
次に永原先生が２枚目の書類を出す。
そこには「性別変更届」と書かれていた。
変更事由も先程と同様「完全性転換症候群のため」と書かれている。
「ここに名前を書いて。名前は新しいので大丈夫よ」
言われるがままに「石山優子」と書き、再びハンコを押す。
「うん、大丈夫。後はこれ、医師の診断書よ。これも渡しておくわ。あ、これに書くことはないわよ」
見てみると患者名に以前の名前と「完全性転換症候群」と言う診断書があって、２名の医師の名前が書かれていた。
そのうち１名はこの前診察してくれたお医者さんの名前だ。
「さ、書類のことはこれで大丈夫。最も、石山さんに役所に提出してもらいますけど。ともあれ、まずはカリキュラムについて話しますね」

永原先生が再びカバンをあさり、そこから一冊の本を取り出す。
「お母さんの方に、こちらの本を渡します。石山さんには見せないでね」
「分かりました」
おそらくカリキュラムの具体的な内容が書かれているのだろう。
題名は「ＴＳ病の事後対処カリキュラムとその実行法」となっている。
「正式には明日から始めるから、今日はガイダンス的なことをやるわ」
「はい」
「まず、このカリキュラムの目的から話すわね。分かってるとは思うけど、このカリキュラムは石山さんのようにＴＳ病となって、学校や仕事に戻る前に、女性としての日常生活や女性としての感覚を理解し、身につけるためのものよ」
永原先生の話に、俺達は耳を傾ける。
「このカリキュラムは、いわゆる女になって不便になったということに対する対策の他にも、男の感覚や男心を女心に上書き……とまでは行かなくても、少なくとも表面上はそういった振る舞いが出来るようにするものよ」
「表面上？」
「ええ、私みたいに余程女になってから長いとかじゃなければ、このカリキュラムを受けて女の子になることに前向きな人でも完全に女の子になりきるのは難しいのよ。もちろん、出来る限り内面も女の子にしていくけどね」
「そういうもんか？」
完全になりきるというのは、どこまでなのかよく分からないけど。
「ええ。例えば、自他共に女の子そのものになったと思っていても２０年位たってもとっさに『男』が出ることもあるわ」
うげえ、まあやっぱ生まれつきのことは中々変えられねえよな。
「……それでも、これを受けずに表面上も女の子になっていない状況で学校生活にいきなり入るよりはずっといいわよ。ちなみに、本以外にも教材はたくさんあるけど、都度郵送するから心配しないでね」

そういえば、少女漫画とか女性誌って言ってたもんな。
「それで、本格的なカリキュラムに入る前に、今からできることがあるわ」
「何ですか？」
「お母さんに今からしてほしいことは、まずは男言葉が出たらとにかく訂正させることです。特に一人称には気をつけて下さい。そして、優子さん、もし男言葉を使っちゃった後は必ず『私は女の子……私は女の子』って心の中で暗示し続けて下さいね」
「は、はい」
「分かりました」
永原先生の話に、俺達が頷く。
うーん、心の中で暗示するのか……
「そして、振る舞いも同じです。カリキュラムでは『スカートに慣れる』事が重要になりますし、そうじゃなくても女性として良くない振る舞いがあったら注意するように今から心がけて下さい。石山さんもわかったかな？」
「う、うん、わかったぞ」
「ほらほら、それじゃ駄目よ」
うっ、早速やっちゃった。
「う、うん、分かった……わ」
「何か変ねその間は」
「分かったわ！　その通りにするわよ！」
「うん、いいわよ。じゃあちゃんと暗示もかけてね」
早速永原先生からダメ出しと特訓を受ける。うぐ、もうトレーニングは始まってるってことか。
私は女の子……私は女の子……何か間違えたらこう暗示しなきゃいけないわけだな。
「それじゃあお父様、お母様、カリキュラムをよろしくお願いしますね。メールで構いませんので毎日が終わったらその日の成果を報告して下さい。アドレスと簡単なテンプレートは教材の中に挟んである紙に書いてあります」

「分かりました」
母さんが確認する、どうやら簡単に発見できたようだ。
「……石山さん、以前から言っていますけどもう一度確認です。このカリキュラムは結構厳しいものになりますよ。本来なら幼稚園から小学校中学校と上がるに連れて覚えていく女の子としての日常生活や立ち居振る舞いを、しかもこれまで男子として生きてきた感覚を捨てながら1週間程度で終わらせなければいけないものです」
永原先生が、さっきよりも真剣な表情で話す。
「このカリキュラムは、今までの自分を全否定して、男としての人格を捨てる決意がある人にだけ受けて欲しいんです……最も、この病気になった以上それ以外の選択肢は殆どないんだけど……とにかく、生半可な気持ちで受けないでね」
「わ、分かっています。もう、乱暴だった男は捨てる。そう決意しました」
それはもう、後戻りすることはしない。
「実は言葉遣いの課題は結構簡単なんです。男子の身体でもやろうと思えばうまくいくことがあります、ですが長年染み付いた習慣はそう簡単には変えられないですよ」
「心当たりあるな。病院でトイレに入ろうとしたときのことだな」
「こらこら」
うー、またやっちゃった。気をつけねえと。
「こ……心当たりがある、わ。病院でトイレに入ろうとしたときのこと、よ」
「うーん、まだぎこちないけど今はそれでいいわ。ちゃんと暗示もかけてね」
……私は女の子、私は女の子……
「それで、トイレに入ろうとした時にどうしたの？」
「そ、その、最初男子トイレに入ろうとしちゃって、奥の鏡で自分の姿を見たら間違いに気づいて、それから女子トイレに入ろうとしたら抵抗感があって……それで、最終的に目の前にある多目的トイレに入っちゃって……」

「そうね、トイレ。私の時代はそんな区別なかったけど今の時代は特に気をつけないといけないところよね」
「そうですね、ところで先生、他には何かありますか？」
　今度は母さんが質問者になる。
「他にも、お風呂とか、スカート穿いてる時の座り方とかもあるわ。後はそうねえ……女の子の座り方の訓練もあるわよ」
「う、うん」
　とにかく、こうなってしまった以上、カリキュラムは受けねえとな。
「それじゃあ、この本は親御さんに渡しておくから石山さんは見ないようにね」
「分かりましたわ」
「よろしい、その調子で頑張ってね」
　短い一文とはいえ、もう女の子の言葉がすらりと出てしまった。
　なるほど、男でも言葉遣いはやろうと思えばうまくいくというのはこういうことか。考えてみれば「オカマ」何ていう人種も居るわけだしな。
「さて、それじゃあ先生の方から話すことは以上よ。あ、この改名届などは石山さん持っててね」
「は、はい」
「他に何か質問あるかしら？」
「あ、あの、先生！　一点だけ」
　母さんが声をかける
「はいなんですか？」
「暗示をかけてるかどうかってどう判断するのです？」
「それは判断しようがないから、ちゃんと逐一指示をして下さい」
　もちろん、暗示をかけたつもりになる気はこちらとしてもない。
「分かりました」
「他にはありますか？」
「あ、あの！」
　今度は俺が声をかける
「はい、何でしょう？」

「永原先生、お……わ、私にこんなにつきっきりで大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ、カリキュラムそのものは親御さんにしてもらいますし、それに、ＴＳ病の支援の仕事もあるので、部活の顧問はしてないです。ですから、石山さんが心配することじゃないですよ」
そ、そういうものか。まあ永原先生がそう言うなら納得するしかあるまいな。
「あ、そうだ、忘れてました。先生の方からもう一点だけ親御さんにお願いがあります」
荷物をまとめていた永原先生が、再びこちらに首を向けてくる。
「何でしょう？　私たちにできることなら」
今度は親父の声だ。
「石山さんの呼び方、『ゆう』ではなくちゃんと『優子』って呼んであげて下さい」
「……」
「確かに彼女は『ゆう』ではありますが、それでは『優一』だった頃と同じ呼び方になってしまいます」
確かに、それは重要な事かもしれないな。
今の俺は「優子」として、まだまだよちよち歩きだもんな。
「ちゃんと『優子』と呼んであげることで女の子になったという自覚が強くなると思います」
「わ、分かりました」
「それじゃあ、今度こそ失礼します。カリキュラム、厳しいけど途中で投げ出したりとかしないようにね」
「は、はい」
永原先生が家から帰っていった。
時間は午後５時、これからしばらくすれば夕食だ。

部屋に戻って、今度はゲームではなく、本を読む。
それも保健体育の教科書だ。
ふと、男の子の身体と女の子の身体の違いを見る。そこにはおなじ

みの子宮の図があった。
あの日、最初に下腹部に激痛が走ったのは、これが出来るせいなのかなあ……
月経について書かれている。女の子になった今、これも付き合わなきゃいけない問題だ。それに、間違いなく、今後の人生で閉経することはないだろう。
それだけじゃない。妊娠のこと、受精のこと、卵子のこと、これらは全く他人事ではなくなってしまった。
そのことも、これからカリキュラムでやるのだろうか？
ともあれそれは明日以降分かることだ。
更に読み進めていく。思春期のページ、「異性への関心が深まる」とある。
異性への関心、ついこの間までは、それは女性への関心だった。
美人だが孤高で、異性の話し相手も付き合いが長いと言うだけで自分だけだった木ノ本桂子のことを思い出す。
恋心はなかったが、いつか変化するかもしれないと考えたこともないわけじゃなかった。
でも、これから異性への関心というと、男性への関心ということになる。むしろ、これまで通り女子に関心を持ったままなら、それはいわゆる「レズビアン」ということになるわけだよな……
別に自分は同性愛者でも何でもないしわざわざなるつもりもない。それに女の子になると決めた以上、恋愛対象も変えなきゃいけないということは明らかだ。
でもこれまでの十数年の人生が、そんなすぐに反転するんだろうか？　今はまだ、男に恋をする自分が想像できない。

ふと、本棚の端にあった昔の写真集が目に入る。
男性時代の俺への関心？　もし関心が深まったとして、それはナルシストになるのか？
自分自身ではあるが、姿形はもう過去のもの。それに惚れることは果たして自己愛に入るのか？

疑問は尽きないが、考えてもよく分からない。
性自認だって、主観的にも客観的にも、今の俺はどこからどう見ても女の子だと断言できる。
生物学的にも、そして自分の意識も、ともに女性で一致している。それこそ性同一性障害でも何でもない。
自分はついこの間ＴＳ病になった元男と言うだけで、それ以外は普通の女の子だ。
それなのに、何故迷うんだろうか？
ああ！　ダメだ！　答えが出ない。

考えるのをやめ、保健体育の教科書をもう一度丁寧に読み返した。以前やっていた保健体育の授業の内容のことも思い出す。
それにしても、今までは保健体育の授業なんてあんまり真剣に聞いてなくて、ろくに予習復習してなかったのに、いざこういう重大事が起きてから学ぶ。自分が典型的な「愚者の行動」をしていることに呆れるばかりだ。
教科書には、第二次性徴期における女性の体の成長の特徴が書いてある。胸が膨らむ、お尻が大きくなる、性器にも毛が生えてくる、月経が始まる。
……でも、この体は明らかにそれが終わっている。
胸を見る。やっぱり大きい。
胸に隠れているが、お尻だって大きいはずだ。
この身体とこの顔なら、何もしなくても男にはモテる。はずだ。
……いや、それは違うだろうな。
性格が最悪だったら男からはすぐ悪女扱いだ。
そのためには、「立ち居振る舞い」も女の子にならないといけないよな。どうせもう戻れないんだ。早く気持ちを切り替えないと。
スポーツ選手も、結果が悪いときにはよくそんなことを口にするじゃないか。
「優子ーー！　ご飯よーー！」
母さんの声がかかる。

「はーい」
ともあれご飯を食べて、それから考えよう。とにかくお腹空いた。
「お、今日は唐揚げか！」
よっしゃ！　大好物じゃないか！　よし、これを食べて明日以降に備えよう。

# 女の子の修行1日目　前編

ゆっくりと意識を回復する。
女の子になって3日目の朝、俺にとっては今日は少し起きるのが遅かった。親父はもう出勤してる時間だ。
ともあれ、今日から永原先生のカリキュラムが始まることになっている。
ともあれ、パジャマのままではまずい。服が入ってる箪笥を引こう。

男物の服は別の引き出しの棚に隔離されている。あれはもう使われない。
代わって、母さんが買った女物の服が大量にある。これだけ選択肢が多いと迷う。
……そうだ！　今日は思い切ってスカート穿いてみよう！
いきなりミニはまずそうだ……俺はそう思って、くるぶし丈のロングスカートを手に取る。
これで外に出るのはまだ抵抗感があるが、そうも言ってられない。
何分復学するには制服のミニスカートに慣れなきゃいけないわけだからな。現実逃避しても、あとでもっとひどい目に遭うだけだ。
ともあれまずはロングからだ。
幸いまだ時間はある。
ともかく着替えよう。

「おはよー」
「あ、優子おはようっ！　あらスカート？」
スカート姿の自分を見て、母さんはとても驚いている。
「うん、そうだよ。お母さん、女の子がスカート穿いちゃ駄目なの？」
「ううん、そんなことないわよ。優子も成長したわねって。お母さん感心しちゃった」
母さんが優しそうな目つきで俺を見つめてくれる。

「わ……私も、まだ外を出歩くのはちょっとあれかなって思うけど、まずは家の生活で慣らさないとって思ってて」
　でも、勇気出してスカートにしてよかった。
「そうよね、お母さん昨日本をゆっくり読んだわ。今日から早速カリキュラム開始よ」
「お、お手柔らかに？　お願いします？」
「……今日一日は外に出ないで家の中の生活の訓練をするわよ。さ、お母さんと一緒に朝ごはんを作りましょ」
「え？」
「カリキュラムはもう始まっているのよ、今日は簡単な料理の他にも、掃除や洗濯もしてもらうわよ」
　料理かあ、自分は学校の家庭科でほんの少しやっただけだ。
「じゃあまず、ご飯を炊きましょうか」
　俺に課せられた最初の課題はご飯の炊き方を学ぶことだ。母さんに拠れば、基本的にはレシピの本に書いてある通りにやればいいという。
　慣れてきたら自分なりにアレンジしてみるのもいいが、まずはレシピ通りのことが出来るようになってから、とのことだ。
　もちろん俺はついこの間まで男子高校生だったから、家事なんて殆どやったことないから基本から勉強しなきゃいけない。
「はい、じゃあこのボタンを押してみて」
「うん」
　言われるがままに押す。とにかく習得しなければ。
「この炊飯器は『蒸らし』の機能があるから、炊けたという合図があったらすぐに盛り付けて大丈夫よ」
　蒸らしってなんだ？　うーん、よく分からないけど、とりあえず今は炊飯器の指示に従えばいいとだけ覚えておこう。
「炊飯器は時間がかかるから、その間テレビでも見ててね」
　ということなので、リビングのテレビを見る。
　テレビではニュースをやっている。最近は殺人事件のニュースさえ珍しく、どこどこで変質者が出たとか祭り中にトラブルで数人軽傷

だとか、動物園でトラブルが起きたけどけが人は居なかったとかそんなのが報じられている。
マスコミにとってはネタ切れだが、世間にとってはまあいいことだろう。
一昔前は体感治安の悪化と言われていたが、やはり本格的に犯罪が減っているらしい。いよいよマスコミも隠しきれなくなったということか。
そうこうしているうちに「もうすぐ炊けるからこっち来て」と言われた。
「そういえば、親父の飯はどうしたんだ？」
「こら！　言葉遣い！」
「そ、そういえば、お、お父さんは、ご飯はどうしたの？」
「カリキュラムにお料理のこともあったから、優子にやらせるために昨日少しだけ多めに作っておいたのよ。お父さんにはそれを食べてもらったわ。さ、暗示かけて」
私は女の子、私は女の子、女の子の言葉を使わなきゃいけない……
「か、かけたよ」
あまり効いてる気がしないが、続けるのが肝要だろう。カリキュラムはまだ始まったばかりだ、焦る必要はない。
「ふふ、じゃあ続きをしましょう。パンを焼くわよ」
我が家の朝食はご飯とパン、そしておかずは基本的には昨日の残りだ。
パンの場所を指示され、それを開ける。トースターにはパンのワット数と必要時間が書いてあるから指示通りに合わせて起動する。
トースターがパンを焼いている間に、マーガリンと麦茶、コップを2人分出す。
そして冷蔵庫から朝食用の昨日の残りを取り出し、電子レンジの中に入れる。
今の電子レンジは便利で、ワンタッチで「温め」が出来る。
「本当は微調整したほうがいいのよ」
母さんがアドバイスする。

「でも、どれがどれくらい必要かなんてわっ、私にはわからない、わよ」
「それもそうね、とにかく今は作ることが肝心よね」
ともあれ、電子レンジで温め終わり、自分と母親に分ける作業をした。これはそれほど難しくはなかった。
食卓に持っていき並べ付けている間に、トースターが鳴り、パンが出来た。
母さんからの「熱いから気をつけてね」という注意を聞いたので、念のために取り箸を使ってパンを取り、お皿に盛り付ける。
まずはパンの皿を両手に2つ持って食卓へ、更にマーガリンも食卓へ。
すると炊飯器が「炊き終わりました」の合図を送る。
ここでも、「ご飯が熱くなっているから、蒸気でやけどしないように」と言われた。
そこで慎重に蓋を開けてご飯を少しかき回し、二人分盛り付けて、これも食卓へ。
最後に箸と箸置きを持っていって完成だ。
「うん、初めてにしては上出来よ」
「あ、ありがとう」
「じゃあ、いただきます」
「いただきます」

朝食を食べる。俺が大事件に巻き込まれてからまだ日も浅いが、朝食自体はいつもの朝食だ。
「そういえば昨日風呂に入った？」
「うん、最後に入ったよ」
「そう、それは良かった」
「でも、この髪、手入れが大変でさ。髪を縛り上げて湯船に入らないようにするだけでも一苦労だから切りたいの」
「ふふっ、ダメよ。髪が短かったら男っぽくなっちゃうから。この本にも、もし髪を切りたいって言ってきたら止めるように書いてあるわ」

「ですよねー」
まあ、だいたい予想していたことだから特段驚きはない。それに、この顔なら髪切っても美人だろうけど今ほどじゃないだろうとは思う。
そうこうするうちに食は進む。男だった時は、俺のほうが食べるのは早かったが今では逆転した。
それでも量が俺のほうが少なかったため、ほぼ同時に食べ終わった。
「ごちそうさまでした」
「お粗末様でした」

「さ、食べ終わったら次にやるのは座る練習よ」
「座る練習？」
母さんの指導は慌ただしく続く。
「ほら、女の子座りよ」
そう言うは早く、母さんが手本を見せてくれた。どうも次は座る課題らしい。
「え？　こんな姿勢できないでしょ？」
母さんが見せてくれたのは、足を開いて「W字」型になり、その間にお尻を落とす座り方。
以前にも母さんがやってみせたが自分も親父もできなかったことを思い出す。
「まあやってみてよ」
「う、うん」
恐る恐るW字にする。ここまででも結構痛かった記憶があるが、今回は痛くない。そのままお尻を床に持っていく。
ペタン
「あれ？　出来た……！」
「ふふっ、これは女の子座りというのよ。女子の特権なのよ。ただしやりすぎると骨盤とか痛めるから程々に。ね」
「そしてもう一つ、これもやってみて？」

今度は両膝を片側に放り投げた座り方だ。
「うん、やってみる」
女の子座りから少し腰を浮かせ、そのまま真似てみる。うん、出来た。
これは男の時でもできそうだが、母さんからは「スカートの時は体育座りやしゃがむような座り方とかは絶対ダメ」と言って「スカートで座り込む時はこの2つのうちどちらかをやるように」とキツく言われた。
まあその理由は簡単に分かる話だ。
「さ、座り方の訓練はここまでよ。今後間違った座り方をしたらダメだからね」
「う、うん」
「今日は忙しいわよ、次は洗濯してもらうわ」
そう言うは早く、私は脱衣所にある洗濯機に連行された。
「これが昨日の洗濯物、これを洗濯機の中に入れるんだけど、場合によってはこんな風に下着ごと脱いでるケースがあるから、その時はちゃんと分けてね」
母さんは器用な手つきで洗濯物を確認しながら入れていく。
「さ、やってみて」
先ほどの手本を元にやってみる。
洗濯物を確認し、洗濯機に放り投げ、下着ごと脱いであるケースを発見し、分離していく。
……よし、これで最後だ！
「はい、よく出来ました」
「次に洗濯物はどこまである？　見てみて」
自分は、洗濯機の中を覗いてみた。
「えっと、この線まで」
「じゃあこの線の位置とグラム数を覚えて、水を入れて見て」
指示通り水を入れはじめる。
「そしたら、さっきのグラム数に合わせて側面に書いてある洗剤の量を入れてみて。今回は洗濯物の量が多いからちょうど1杯だよ」

粉末洗剤をすくい上げ、そして側面に押し付けることでちょうど1杯になる。
これをなるべく均等になるように入れてみる。
「水位が洗濯物よりも上になったら、後は『しっかり洗う』のボタンを押して待つだけよ」
「便利なもんだなあ」
「ええ、お母さんが子供の頃なんて脱水作業するためには手で移さなきゃいけなかったのよ」
そうこう話しているうちに洗濯物の水位が上がってきた。
「そのくらいでいいわよ」
「はーい」
そして、水を止め、洗濯機の蓋を閉じて、「しっかり洗う」のボタンを押した。

「さて、洗濯機の次は掃除機のかけ方だけど……」
「そ、その前にトイレいいかな？」
「あら、どうぞ」
トイレまで歩き、電気を点けて中に入って鍵を閉める。
……そういえば、スカートでトイレってどうするんだ？
うーん、このロングスカートだと面倒くさいな。
とりあえず、パンツごとスカート下ろすか。
……よし、これでいい。

「あ、優子、トイレどうやって入った？」
トイレから出ると母親が待ち構えていた。
「え？　スカート床におろしてだけど」
「だめよ！　それじゃスカート汚れちゃうわよ」
わわっ急に怒られた。まずったか。
「え？　でもどうやって？」
「そうねえ、明日はもう少し短いスカート穿いてきなさい。くるぶし丈じゃなくて膝丈下くらいで。いきなりそれだと難しいでしょうか

ら、今は床につけちゃダメってだけ覚えておいて」
「う、うん。わかった……わ！」
「じゃあ掃除機のかけ方をやるわよ！　昨日わざと掃除していない部屋があるから、優子にはそれをやってもらうわ」
そう言うと、近くにあった掃除機を指差した。コンセントに入れることは分かっている。
コンセントに入れて、とりあえず見よう見真似で構えてみる。
母さんからは特に異議はないようだ。
「ハイパワーにすると電気代がもったいないから普通のモードで大丈夫、ただし大きなゴミとかがあった場合は切り替えてね。じゃあやってみて？」
「はーい」
言われるがままに掃除機のスイッチを押し掃除をしてみる。普段自分の部屋もろくに掃除していなかったから結構新鮮だ。最も、それは経験不足という意味でもあるんだけど。
部屋を掃除していて気付いたが、どうもゴミは部屋の四隅や家具同士の配置で四角くなっている部分、家具の下に溜まりやすいようだ。
そこで掃除機を使って隅を掃除しようとするが、思うように吸い込めない。
よし、ハイパワーにしよう。
……うーん、ハイパワーでもイマイチ効果がないぞ。
「あ、隅はね。これを使って！」
取り出したのは先端が丸い箒みたいな形のだ。
「先端は取り外せるようになっているからやってみて」
よし、まずは一旦電源を切ってっと。
えっと、これを引っ張って……よしっ！
次にこれに変えて、もう一度隅をめがけて掃除機を構えて電源を押す。
「おお、ちゃんと取れた！」
「このように、部屋の真ん中の方は広いタイプで、隅や小さい所は細かいの。と使い分けるといいわよ」

その後、俺は部屋を徹底的に掃除させられた。掃除機の他にもモップやはたき、エアコンの掃除何ていうのもやらされた。主婦は大変だ。

一通り掃除が終わると、昼食の準備だ。
昼食と言っても、今回はラーメンだ。
インスタントというわけではなく、スーパーで売ってる麺とスープを使う。
「じゃあ、まずは野菜の切り方をやるわよ」
「えっと、猫の手だっけ？」
「そうね、このへんは家庭科でもやったかな？」
「まあでも復習しないとね。今日は覚えることたくさんよ」
ともあれ、ラーメンのための野菜を切り続ける、その間に母親の方は容器を持ってきて、中にスープを入れるとラーメン用の大鍋に水を張り、ＩＨを強火にした。
「野菜を切り終わったら、次は麺よ。これは袋を切って入れるだけでいいわ。今回は二人なので二玉よ」
一方野菜の方も別の鍋に入れる。
野菜と麺を茹でて、まず野菜の方の鍋をスープにしてそれと同時に麺をザルに移して均等に分けていく。
「二人いると助かるわ」
とは昼食準備中の母さんの言葉だ。
「さあ、のびないうちに食べるわよ」
ラーメンの容器は熱いので、まずはトレイの上に乗っけてそれで運ぶ。
うっ、意外と重い……
そうか、自分が女の子になって筋力が弱くなったせいだ。
とは言え持てないわけじゃない。余裕で机に持っていき、対面に食器を分け、完成だ。
「いただきます」
「いただきます」

俺のラーメンの食べ方は、男の時と同じだ。久々に安らげる時間帯だ。

昼食を食べながら、今日を振り返る。まだ半日だが、今日は自分にとっても昨日より充実した半日だと思う。

新しいことを覚えるのは大変だが、一個一個身につけて行けている実感がある。

小さなことでも積み重ねられていると感じるだけでも、全然違うものだ。そうしていけば、いつか自分もきっと、内面から女の子になれると信じたい。

# 女の子の修行1日目　後編

昼食を食べ終わって数時間の休憩の後、今度は「洗濯物を干す」という作業が俺を待っていた。
まずは洗濯機から洗濯物を入れ物に移す作業、これは反復的な力仕事だ。女の子には辛い。
母さん曰く、「今日は天気が良いから外に干しましょう」ということなので、今度は洗濯物のかけ方を習う。
服を干すための洗濯バサミの使い方や、どこに干すのが良いのかといったことも言われた。
「いい優子、洗濯物は、ベランダや庭などに干すのが基本よ」
「はーい」
庭に出て物干し竿が段々になっているものを指差し、そこに洗濯物を置いていく。
一通り干し終わると、今度は「部屋干しの仕方を教えるね」と言われた。一旦室内での部屋干しでのやり方も習うのだろう。
「さ、部屋干しをやるから一旦これは部屋に戻すわよ」
「え？　外に干したのにまた部屋に戻すの？」
何のためにここに干したんだ……
「ふふっ、これは学習も兼ねてるからよ」
無為な行動といえばその通りだが、これも自分の学習のためということか。
「今後優子が女の子として生きていく上で、家事ができないと立派なお嫁さんにはなれないわよ」
お、お嫁さんって。でも女の子ってそういうものだよな。以前も誰かの嫁になる自分を想像したが、まだ想像しきれない。
「そもそも……わ、私をお嫁さんにもらってくれる男なんて居る、の？」
「あら、優子ほどの超がつくような美人なら引く手数多よ」
母さんは楽観的な様子で話している。
「でも、老けないってマイナスじゃないの？　最初の２０年くらいは

よくてもさ」
「うーん、お母さんはそこまで想像できないな～。でも少なくとも家事ができないなんてなったら美人でも愛想つかされちゃうわよ」
　そもそも、不老の病気はＴＳ病だけだ。換言すれば不老になる方法なんて男がこの病気になる以外の道はない。
　仮に女として生きていくとして旦那を貰ったとして、間違いなく先立たれる。先立たれた後も１００年２００年と人生が続いていく。
「うーんでもさ、母さん思うんだけど、ずっと独身で一人過ごすとしてもさ。今やってる家事は重要だと思うのよ。つまりどっちにしても、女の子は家事を学習しておく必要があるわ」
「そうだね、覚えて損はないよね」
「じゃあ、部屋干しの仕方を始めるわよ」
　部屋干しで気をつけなきゃいけないのは「臭い」だという。そのため、なるべく部屋の中央に干しておくということを言われた。
「晴れた時に出しやすいからって窓の近くで干すと乾きにくいわよ。それでも、スペースがなくてどうしても端に置かなきゃいけない時は、扇風機を使うのよ」
「はーい」
「更に臭いを取るためには、時折空気を換気扇で入れ替えたりしてね」
「うん」
「さ、部屋干しはこの辺にして、もう一回干す所はお母さんがやっておくから、その間にポスト見てきてくれる？」
「はーい」
　玄関から外に出る。何気にスカートで外に出たの初めてだ。
「こんにちは」
「こ、こんにちは」
　誰かが声をかけてきた。聞き覚えのある声だと思って振り向く。
「あ、あの、石山優一さんの、お姉さんですか？」
　そこにいたのは制服姿の木ノ本桂子だ。そうか、そろそろ学校も終わる頃合いなのか。
「えっと……」

待て待て、こんな姿で「俺が優一だ」なんて言っても信じてもらえるわけがない。
「そ、その……し、親戚です」
「優一、あの日倒れてからずっと学校に来てなくて、心配になったのでプリントを渡すついでに来てみたんですけど……」
「その、優一……なら来週には復帰するつもりですよ」
うー、罪悪感が半端ねえ……
「ど、どういうことですか？」
「ちょっと大変な病気になっちゃって……で、でも命に別状はないから心配しないで」
「そ、そうですか」
「プリント持ってきてくれたんだ？　じゃあ……私が預かっておく……わね」
「あ、ありがとうございます」
そう言うと、プリントを受け取ったのを確認すると木ノ本は足早に立ち去っていった。
騙すような感じになってしまい、わずかながら罪悪感も覚えるが、仕方あるまい。本当のことを教えても絶対に信じないだろうからな。
プリントを一旦玄関に置いておく、もう一度ポストを見る。特に何もない。
そう思っていると、遠くから何やらトラックがやってきた。
お、郵便局だ。何だろう、大きな荷物でもあるのかな？
そう思っていると、トラックが家の前で停車した。
「すいませーん、石山様のお宅ですか？」
「はーいそうですけど」
配達員のおじさんが声をかける。いつも話すときより視線がやや下に向いている気がするが、目の錯覚だろうか？
「こちら、永原様よりお届け物が届いています。こちらに、判子を押してもらえますか？」
「は、はい」
玄関に戻り、ハンコを取ってきて押す

「はい、ありがとうございます。それでは」
そう言うと、配達員が手渡しをしようとして一旦躊躇し、床に置く
「重たいので気をつけて下さい」
そう言って、配達員はトラックに戻り車を発進させてさっていった。
とりあえず、持ち上げてみる。
お、重い……!
中に何が入っているかわからないが、持ち上げることが出来ない。
これは相当筋力が落ちてる。
全く、女ってこんなに弱い生き物なのか。散々思い知っていたはずなのに。
ともかく引きずることしか出来ない。万策尽きたと思い、母さんを呼ぶ。
「優子、これ持てないの？」
「う、うん」
「どれ？　わっ！」
母さんも重たさにびっくりしているが、それでもなんとか浮いているだけ俺よりマシだ。
「ふ、二人で持とう」
「え、ええ」
二人がかりで持つと案外余裕だった。
玄関に置き、ドアを閉めてから、配達物の中身を見る。
中身を開けると、そこにはかなりの数の女性誌と少女漫画の単行本、更に少女漫画雑誌まで3種類揃ってた。
更に一番上には紙が一枚あって、その紙に曰く、「これらは全てカリキュラムの教材です。空いた時間にはこれを読んでください。家にある本のうち男性的なものは、男の時来ていた服とともに別の部屋に並べて下さい。永原マキノ」とある。
「じゃあ早速本棚に移しましょう。これによると少年漫画とかは外に出さないといけないってことね」
「そういうことになるのかなあ……」

「じゃあ、公平を期すために、どける本はお母さんが決めるから、優子は空いたところに本を入れてって」
「それにしても、入りきるのかなあ……」
元々、そこまで本を買わないタイプだから、本棚も開いているとは言え……
ともかく、まずはこれを数回に分けて俺の部屋の前に持ってくところからだ。
まずは持てそうな分を持ち、自分の部屋の前に一旦置く。そして玄関に戻り、また自分の部屋の前に持っていく。
……2往復したがまだ足りない、もう一度玄関に戻り、木ノ本が持ってきたプリントともども全ての本を部屋の前に置き終わると、既に、部屋の前には別の1山ができていた。
そこには少年漫画の単行本の他、いわゆる可愛い女の子の出て来る萌え系の漫画やライトノベルなども少しだけあった。
とりあえず、空いたスペースに、まずは少女漫画の単行本の全巻セットを1巻から本棚に入れていく。
母さんの方は選別が終了したらしく、クローゼットに向かっていった。
こっちは簡単だろう。もはやブカブカで役に立たなくなった男物の服を出していくだけだ。
単行本は棚に入れるが、雑誌の方は机の上に出しておく。
……よし、これで大丈夫だ。母さんの方も、ちょうど隔離作業が終了したようだ。
整理し終わって一息つこうとしたら、母さんが部屋に入ってきて、あの日買った服の一部を持ってきた。
「男物をどけたら全部入るわね。さ、お母さんがこの作業してる間に、優子は別の部屋に入れる本はこれでいいか確認してくれる？」
「はーい」
念のために自分でも確認するというわけか。
部屋からどけられた本を見る。そこには少年漫画や、萌え系漫画、ハーレム系ライトノベルなど、明らかに男性向けの本がそこに並んで

いた。
隠してあるエロ本はなく、自分としても特にこれで異議はない。
本棚に残っている本でどけるべき本があるか調べたが、これも母さんはどけなかったが自分の方でどけたほうがいいと思った1冊を追加で指定しただけで、それにも母さんも特に異議を唱えなかったので問題なく終了した。
「それじゃあ、お母さんは夕食作りするから」
「あ！　手伝わなくても――」
「夕食については明日することになってるから心配しないでね。それまではこの少女漫画読んでてくれる？」
「う、うん」
そう言うと、母さんは台所に向かっていった。
夕食の手伝いは、また明日にする必要があるわね。
「とりあえず、読まなきゃいけないよな……」
俺は本棚にある少女漫画の単行本を睨みつける。
しょ、少女漫画なんて生まれてこの方読んだことないぞ。
とは言え、こうして機会が巡ってきたんだ。せっかくだ。ちょっと読んでみよう。
最初にしまった本棚左上にある第一巻を手に取り、読み始める。
……なんか妙に目が大きいな。いわゆる「萌え絵」も目が大きいことで有名だが、少女漫画はそれ以上だ。
というより、この手の技法は少女漫画からの輸入らしいな。でも、萌え絵と違って目がキラキラしてる。これはこれで女の子が可愛い。
……ふむふむ、舞台はお坊ちゃまとお嬢様が通う学校か。
そんな中で庶民派の女の子が主人公なわけか。
……ふむ、ふむ。主人公は隣のクラスの学園一の金持ちのイケメンお坊ちゃまに恋してる。と。
うおっ！　主人公がいじめられてるぞ。
いかにも意地悪な美人のお姉さんが出てきた。
むむむ、第一巻はここまでか。
この漫画、月刊誌連載で全3巻なのか。長くないから一気に読めそ

うだ。

よし、第二巻を読んでみよう。

ふむふむ、悪役の女の子のいじめにもめげず、主人公の女の子は恋心を持ち続けているわけか。

あ、さっきの悪役が出てきた。恋愛感情を周囲に言いふらしてるよ……

……可哀想に、集団でいじめられてる。靴を隠されたり、通りすがりにセクハラされたり……って結構セクハラされるシーンがエロいぞこれ。

何だこれ、少年漫画よりドロドロしてるじゃないか。

こ、こんなものを少女が読むのか。今まで読んでた少年漫画はどちらかと言うと力と力って感じだが、これは心理を深く抉る感じだ。殴り合いよりも質が悪いぞこれ。

……にしても可哀想だなあこの主人公。恋心を持ってるってだけで悪役の子のせいでひどい目にあってばかりじゃないか。泣いちゃってるし。

しかも、悪役の子は、想い人と「婚約してる」のかよ。そして主人公の女の子の絶望顔で第二巻終了か。

第三巻、相変わらず悪役の子はお坊ちゃまに恋を続けてて積極的に話しかけてる主人公に対していじめを続けてる。

……まあ、この子からしてみれば自分の婚約者につきまとうってのはいい気分はしないだろうな。

にしてもやりすぎだろうこれ。うわっ、今度はクラスの前でスカートめくられてるよこの子。

あーあ、ついに「もう嫌だ」「もうお嫁に行けない」って、教室で泣き出しちゃった可哀想に。

……あ！　お坊ちゃまに目撃されてた。

むむむ、問い詰められてるぞ。一転攻勢ならぬ一転守勢ってやつか。

しどろもどろになる悪役だな。
お、「お前がこんなやつだとは思わなかった。父上に婚約のこと考え直すように言う」か。ここちょっとかっこいいな。
悪役の子は必死になって許しを請うけど、ますます断罪されるってやつか。
お、主人公の女の子が告白してるぞ。
お、お坊ちゃまも悪くない雰囲気。
……あ、結局悪役の子のいじめが世間の噂になって婚約破棄になっちゃったよ
で、今度はお嬢様の会社が傾いて倒産、転校した後行方知れずになっちゃったのか。ざまあみろって感じだな。
で、主人公は憧れのヒーローとキスをして、最後は幸せに結婚式でめでたしめでたし。か。何だろう、時代劇みたいな勧善懲悪って感じだ。短くまとまっててとても読みやすい。
えっと、これの感想文も書かなきゃいけないんだよな。

うーん、主人公の子が報われてよかった。悪役の子は因果応報だと思う。でも会社が傾いたのはこの子悪くないよね。
あと所々エロかった。少年漫画のラブコメものとは全くベクトルが違うエロさだけど。
男の子はすごくかっこよく書かれていたけど、なんか人形みたいな印象も受けたっと。
うーん、こんなところかな。

「優子ー！　ご飯よ～！」
「はーい」

短い読書感想文を書き終わると、ご飯のお知らせが来た。少女漫画を読んでいた途中で親父も帰って着たので、今日も3人で夕食だ。
夕食が終われば風呂、風呂入ったらまた別の少女漫画を読み、感想文を書いて今日は寝る予定だ。

そういえば、この感想文はどうするんだろうか？　永原先生に提出するんだっけ？

ちなみに、食事の後のトイレはスカートを床につけないように程々に脱いでやりました。足が自由に動かせなくてちょっと不便だったな。

# 女の子の修行2日目　前編

目覚ましの音は鳴らず、今日はかなり朝早く起きてしまった。
ゆっくりと目を覚ます。まだ日の出からも時間がたってない。
両親はまだ寝ているようだ。
さて、どう時間を潰そうか……
えーっと……そうだ。女性誌を読んでみよう。
こうして手に取ったのが少女漫画雑誌だ。男の頃も名前だけは聞いたことがある。表紙には目が大きくかわいい女の子が書かれてる。目が輝いていてどこか艶めかしい印象を受ける。
この子なら自分でも負けるかもしれない。
えーっと、雑誌冒頭には何か商品の宣伝があるみたいだけど、よくわからないからとりあえず飛ばそう。
最初に出てきたのは看板漫画家みたいだ。物語はどうだろう？
中盤くらい？
ふーん、あらすじによると主人公は有名芸能人と同一人物だけど、校則のきつい学校では地味な格好で隠してるって感じか。
そんな中でクラスの男の子に惚れている。と。
いわゆる「隠し通し」ものだな。まだバレていないようだけど、なるほど今後が楽しみだ。

で、こっちは今月号で最終回か。ふむふむ、こっちは部活の先輩に惚れてるのか。
お、告白した告白した。
で、男の子がＯＫしてる。にしてもこの男、かっこいいよな。
周囲からも祝福されてキスシーンか。
お、場面が変わったって……え？　え？
何だこれ……明らかにヤっちゃってるじゃん……！
おい、エロいぞこれ。なんだこれ、こんなのを少女が読むのか。
あ、でも数コマだけだな。なんだろう、エロいっちゃエロいんだが描写的にはそこまで割かれてないのな。あくまでメインじゃないっ

てやつか。
それでも少年誌のそれに比べればかなり直接的だ。「赤ちゃん欲しい」とか言っちゃってるし……
その後も少女漫画雑誌を読み続ける。
どれも途中からで、新連載はないようだが、あらすじもしっかりしていて、途中からでも入り込みやすくなるように工夫されている。
で、今回の雑誌を読んだ感想はこうだ。
まず、少女漫画は恋愛ものばかり、というかほとんどそれしかない。もちろん恋愛の中にもいろいろ多様性はあるんだろうけど。
そしてもう一つ。エロ描写に限らず精神的なものは少年誌よりずっとえぐい、さらにいじめられるシーンなどでは主人公も精神的にひどい目に遭うケースが多いということだ。
主人公の心情描写も多くて、女の子の顔も赤くなりやすい気がする。男の漫画と比べるとかなり内面重視な感じだ。
よし、これを感想文に書いてっと。ともかく、これを読んでいれば、ちゃんと女性の感性を理解できるのだろうか？
自分はまだよくわからない。

さて、着替えるかな。今日はうーんどうしようか……
ガチャッ
「あ、優子！」
母さんが入ってくる。
「お、おい！　ノックしないで入ってくるなってずっと言ってるだろ!?」
「ご、ごめんなさい。そうよね、優子も女の子だもんね……」
母さんがバツが悪そうに言う。
「あっ！　でも気持ちはわかるけど言葉遣い訂正してね」
うっ、手厳しいなあ。
「えっと……ちょ、ちょっと！　ノックしないで入ってこないでっていつも言ってるじゃないの！」
「うん、よろしい！」

私は女の子……私は女の子……
うむむ、この暗示、癖になっちゃいそうだ
「で、本題なんだけど、今日の服はスカート、それも出来れば今日は昨日よりも短めの膝丈くらいのスカートにして欲しいの」
「え？　どうして？」
「今日は一昨日書いた書類の提出やデパートでの買い物といったように、女の子としての日常生活の主に外出をやるのよ。で、カリキュラムには『その際には必ずスカート着用』って書いてあるのよ」
「う、うん」
き、昨日玄関に出て知り合いと会話したし、大丈夫だよ……な
「じゃあ、着替えたら台所に着てちょうだい、朝食の手伝い……昨日の復習をするわよ」
「はーい」
そう言うと、母さんが部屋を出ていった。
スカート選びに戻る。
とりあえず、タイト系は歩きにくそうだし、この赤い巻きスカートにしてみるか……
……いや、さすがに少女趣味すぎる。小学校高学年って感じだし、いくらなんでもこれで外を歩くのは恥ずかしいぞ……
うーん、とりあえず茶色いこのスカートにするか。で、上の方も考えないとなあうーん……
何だろう、俺もファッションに迷うことが増えた気がするぞ。確かにスカート穿けるようになった分ファッションのレパートリーは増えたけど……男だった頃より迷いやすくなってるのか？
まさかそんなことはないだろうとは思いたいが。
……よし、上もこれにしよう！
「おはよー」
「おはよう」
「あら、おはよう」
3者3様にあいさつする。石山家の安らぎのひと時だ。
「それにしても、服選び時間かかったわね」

「え？　そ、そうかな？」
「うん、最初に病院で着替えた時よりかかってた気がするわ。うん、優子もファッションを考えるようになって、女の子らしくなってきたわね～」
「あはは」
　笑ってごまかす。女の子らしくなりたくて永原先生のカリキュラムを受けてるはずなのに、理屈で分かっていてもどうもまだ素直に喜べない。
「それじゃあ、朝食の作り方の復習をするわよ」
「う、うん」
「じゃあ炊飯器の炊くボタンを押してみて」
「うん、ところで、米はどうやって入れるの？」
「それは今日の夕食作りの時にやるわ。お米は基本的に研がないとだめよ」
　とりあえず今は気にしないでおこう。昨日の指示を思い出し、炊き出しボタンを押す。
　その間にパンを食べてもらう。そしておかずも温めなきゃ。結構大変だ。
「優子ー！　コーヒー入れてくれ！」
「優子、お父さんがコーヒーをご所望よ」
「はーい！」
　えっとコーヒーってどうするんだ？
「母さん、これコーヒーどうやって入れるの？」
「インスタントコーヒーだから、お湯に注ぐだけでＯＫよ」
「まずポットを見て」
「お湯の量をここのメモリで確認してみて」
　言われるがままに確認してみる。見にくいがどうやら1リットルあるらしい。
「電源を入れたら再沸騰ボタンを押すのよ。湧いたらお湯を入れればいいから」
「はーい」

そうこうしているうちにおかずが温め終わり、パンも間近だ。
……これは忙しい。
ともあれおかずを食卓に並べ、次いで麦茶を2人分出し、パンが焼き終わったらマーガリンとともに持っていき、そしてお湯が沸騰したのでインスタントコーヒー豆を説明書通りに入れてお湯を注ぎ、スプーンでかき混ぜた後親父の場所に持っていく。
「あ、ダメダメ」
「え？」
「いい、コーヒーに限らずお茶もだけど、カップが右手側に来るようにして？　お父さんも右利きでしょ？」
「う、うん」
それってビジネスマナーなんだろうか？
「お母さん、家の中ではそこまでとやかく言う必要もないんじゃないか？」
親父が異議を唱える。
「駄目よ、女性は将来お茶出しの機会も増えるわよ」
「そ、そういうものなのか？」
「ええ、優子なんて特に美人なんだから、会社の士気を上げることも重要よ」
まあ、ここではそういうものだと思って納得しよう。しかもよく考えたら美人な上に老けないもんな。
「それじゃあ、いただきます」
「いただきます」
母さんの音頭で昨日より早い朝食が始まった。
朝食を一足先に食べ終わったら親父が仕事へ、その後は昨日と同様に「復習」と称した洗濯物の家事手伝いだ。
それが終わったら、母さんが「出かける」と言い出した。
そうか、昨日言っていた役所への書類提出か。
「必要書類は持った？」
「うん、改名届と性別変更届と医師の診断書……だよね？」
「はいそれで大丈夫よ」

そうだ、これを提出してないから、戸籍上ではまだ「石山優一、男性」になってるんだ。それじゃ不便すぎる。
「あ、そうだ。これも付けて！」
母さんが何やら自分の頭で何かしている。リボンだろうか？
「どうしてこれを？」
「なくても十分すぎるくらい可愛くて美人なんだけど、黒い髪に白いリボンは映えるわよ」
そう言うと素早く手鏡を開いてきた。
「確かに可愛いけど、なんか恥ずかしいなあ……」
「オシャレを恥ずかしがってたら女の子らしくないわよ」
「そういうものですか……」
「そうよ、恥じらうのはもっと違う機会に残しておきなさい」
……とりあえず、今は納得するしかない。

うちの市はいわゆる「政令指定都市」と言うやつで、一連の手続きは市役所じゃなくて区役所でやってくれる。
区役所までは電車で2駅、更にそこから徒歩で数分だ。
駅のホームに立つ。
何だろう、凄い周囲の視線を感じる。
向かいの電車が停車し、発車していく。
するとホームに立っていた何人かの男性が自分を見ている。特に、明らかに一人のオヤジが自分を凝視している。
「あらあら、優子はやっぱり大人気ね」
「なんか凄い視線を感じる……」
「そりゃあまあ、こんな美人な上に体つきもこれじゃあねえ……」
「いや、望んで生まれ変わったわけじゃないし……」
「ま、諦めなさい。こう見えてお母さんも若い頃は美人だったから、視線を感じたことはあるわよ」
「そ、そうなんだ……」
イマイチ信用がない。
「間もなく一番線に、電車が参ります」

電車が来た。弱い風が吹く。スカートはびくともしないがそれでも気になってしまう。
今になって改めて思ったが、やっぱりスカートってかなりスースーする。でもこれでも長い方なんだろ……
学校行く時とかどうしようかと不安になる。パンツ見えたらやっぱり恥ずかしいし。

少数のお客さんが降り、続いて入る。２駅先だから席に座る必要はないな。
「優子、座りなさい」
「え？」
「座り方も訓練よ。日曜にはもっと短いスカートで電車にのることになるわよ」
「う、うん」
言われるがままに座る。こういう風に言われたらどうしてもスカートを意識して足を閉じる。
「ＯＫよ、いい？　スカートは男子の視線が常にあると思いなさい」
まあ、これは元男として説得力のある話だ。
にしてもやっぱり、スカートって心許ないな。
「女の子って大変だなあ。こんな視線を浴びるもの穿かないといけないなんて」
「まあ、優子の場合はどんな服でも視線浴びるわよ」
「それに、女の子は見られて、意識すると可愛くなるわよ」
「いやでも……私、もう十分に可愛いし」
「ダメよ、向上心をなくすとすぐ女はダメになるのよ！　それに優子は年齢で衰えたりしないんだから尚更意識が大事よ！」
そういうものですかい……
そうこう考えているうちに、あっという間に目的の駅だ。
膝の上に置いていた荷物に手をかけ、電車から降りて、駅の階段を降りて母さんとともに改札に出る。
改札から出てすぐ、追い越していったはずの３０代くらいの若い男

性が振り返る。
「またかよ……」
「優子、声に出てるわよ」
「あ……！」
「優子、もし自分がまだ優一だったとして、優子みたいな女の子が近くを歩いてたらどうする？」
「うーん、確かに凄い可愛いとは思うけど……」
「でしょ？　つい振り返っちゃうのも当たり前よ。いい？　優子はもっと自分の可愛さを自覚するべきよ」
　確かに客観的に見ても明らかに今の自分は可愛いし美人だとは思うけど、にしたってなあ……

　ともあれ、そんなことを考えている間にも、母さんの案内の通り、役所の窓口の手前まで来た。
　この時間の役所はジジババ、特におばあさんが多いので流石に振り返られたりとかはしない。
「さあ、優子、あなたの書類だからあなたが渡しなさい」
「はーい」
「あ、そうだ。手続きの前に来れを飲んで」
　母さんが差し出したのはスポーツドリンク、よくわからないがとりあえず飲むことにする。
「じゃ、行ってくるね」
　まあ、役所の窓口に行くだけだしな。
「すみません」
「はい」
　おばさんの係員が応答する。
「この3つの書類を提出したいんですけど」
「あ、はい少々お待ち下さい」
　書類を持ち、上司に何やら相談している。まあ、珍しい書類だろうし、その事由も事由だ。
　しばらくすると「はい、これで大丈夫です。手続きはこちらでして

おきますのでもう大丈夫です」とのことだった。

ふう、書類提出終わりっと。

あれ？　なんかトイレ行きたくなってきた

「母さん、トイレ行きたいんだけど……」

「いいわよ、あそこにあるから行ってらっしゃ～い」

とりあえずトイレに向かう……

「な、なんでついてくんだよ！」

「こら！　言葉遣い！」

「な、なんでついてくるのよ！」

「よろしい、優子がここの役所の多機能トイレに入らないか監視するためよ。さ、トイレ行きたくても自己暗示かけるのよ」

ううっ……私は女の子……私は女の子……女の子は女の子らしくしないといけない……って早くトイレに行かなきゃ！

「さ、ここはジジババも多いから多機能トイレは絶対駄目よ。もちろん、男子トイレに入ったら１１０番するわよ」

つまり女子トイレに入れというお達しである。

「わ、分かってるよ～」

もはや迷っている時間はない、女子トイレに入る。律儀に母さんは個室の前までついてくる。

ドアを閉め、鍵をかける。

今回は病院の時と違い、物理的にトイレまで近かったのでまだ漏れるまで相当な余裕がある、

「スカート床に着けちゃだめよ～」

「はーい」

えーっとスカート下ろしちゃいけないとすると……

そうか、このスカート丈ならすぐにやり方わかったぞ。

私は手を後ろに回し、思いっきりスカートをまくりあげ、そのままパンツに手を入れてパンツだけを下ろす。

便器に座ってこれで大丈夫のはず。

ふう……それにしても何でトイレに行きたくなったんだろう……

ってそれは普通の生理現象だろ……

とりあえず出し終わったらビデを押す。

「んっっ……っ！」

だいぶ慣れたつもりだが、それでもまだ若干ビクンとなる。

適当なところで切り、乾燥機能がないのでトイレットペーパーを使って拭く。

この刺激には慣れる必要がありそうだ。

ふうっ、とりあえず流すボタンを押して、パンツを元に戻してっと。

よく考えるとスカートの方がトイレが楽だな。また一つ知識が増えたぞ。

さて、立ち上がってドアに手をかけて……

ん？　なんか違和感が……

あ！　危ない、危ない危ない危ない！

……パンツの中にスカートが入り込んでいたよ。これは細心の注意を払わないと、パンツ丸出しで公衆の面前を歩くことになって大恥かくことになるぞ。

とりあえず元に戻す。うん、これでよし！

スカートのトイレはこの事故さえ気を付ければズボンよりはかなり楽だろう。そう考えると、スカートも悪くないと思えてきた。

ともあれ、最初の最初で失敗したのは不幸中の幸いだった。慣れ始めた時に失敗してたら間違いなく自分では気付けなかっただろう。そうなったら大変だ。

ドアを開けると目の前で母さんがとおせんぼしていた。

「ふふっ、優子、あなたどうやってトイレに入った？　まさか昨日みたいにしてないわよね？」

「えっと……あ、あんまり言葉じゃ言いにくいんだけど……」

「ふふっ、教えてくれるまで、このトイレから出してあげないわよ」

「えー」

「さ、どうやって入ったの？　早くしないと誰か来ちゃうわよ」

「そ、その、スカートを上げて、パ……パンツ下して入り……ました」
　ううううっなんでこんなこと報告しなきゃいけないんだよ……
「うん、それだと７０点かな」
「えー？　まだ何か足りないの？」
「そこまで細かくは言わないけどスカートを便座に着けちゃダメよ。脇に挟むといいわ」
「う、うん。ところで、これもカリキュラムなの？」
「……正解よ、朝ご飯の時やさっき渡したドリンクを飲ませれば必ず出かけてる時にこうなると分かったもの、『スカートで出かけて、その過程で女子トイレに入る』ってのも永原先生のカリキュラムにあったのよ」
　むむむ、なんか納得できないが、カリキュラムならしょうがない。って、よく考えたら永原先生って変態なんじゃないか……
　……いやいや、これも女の子になるための修行なんだよね、うん。
「はーい、じゃあ手を洗ってね」
「い、言われなくても分かってるよ！」
「あらごめんなさい」
　手をかざすと自動的に水が出る。まず軽く洗ってそれから隣にある液体状の緑色の「例の石鹸」を下から手を押すことで出して泡立てる。
　十分洗ったらもう一度手をかざして流して、次に乾燥器で手を乾燥させ、最後にハンカチをスカートのミニポケットから取り出して拭いて終了だ。
　ようやく、この恥ずかしいトイレプレイも終わり、無事に役所から出ることに成功した。

# 女の子の修行2日目　後編

「それじゃあ、母さんはこれで帰るから、お昼ご飯食べてその後帰りにこれを買ってきてくれる？　レシートを出せばお代は後で出すわよ」
そこには、納豆とハムとごま油、そしてネギをそれぞれ買うようにあった。
「これもカリキュラムなの？」
「そうよ、一人でお使いするの。内容は簡単だけど女の子の格好で一人で出かけるってのがミソよ」
そ、そうだよな。お使いなんて小学生じゃあるまいし、でも女の子になって一人で女の子の格好をするというだけで途端にハードルが上がるわけか。
「じゃ、お買い物よろしくね」
「はい」
母さんが去っていく、役所から最寄りのスーパーまでは駅までの帰路上にあるから、寄り道するだけで道のりは同じだ。
まず役所から出る。そして道を歩く。買い物の前にまずは昼食だ。
むむむ、広い道だけどさっき向かい合ったスーツの男性がまた自分のことをジロジロ見てたぞ。
……今度は休憩してた工事のおじさんも見ていたし、視線がとにかく半端ない。会社もお昼休みみたく地域の会社の人も休憩中だ。
とにかく、スーパーのすぐ近くにある蕎麦屋で昼食にしよう。
「いらっしゃいませー1名様ですか？」
男性店員だ。
「あ、はい」
「カウンター席の方お願いします」
「はい」
うわっ、また胸見てる。確かに大きいけどさあ。うーん、男の本能だから仕方ないとはいえ、こうもジロジロ見られるとさすがに嫌だなあ……
でもまあ、自意識過剰ってことも考えられるし、あまり気にしない

ようにしないといけないよな。
むしろあれだ！　男の頃の経験則として、変に隠すと余計覗かれるだろうし見せつけるくらいがちょうどいいかもしれない。
「ご注文お決まりでしたらこちらのボタンを押してください」
ともあれ、カウンターにつく。
よし、ざるそば大盛り……はまずいな。普通のざるそばにしよう。
ボタンを押してみる。
するとすぐに別のウェイトレスが来る。
「お待たせいたしました、ご注文をお伺いいたします」
「ざるそば1つお願いします」
「はい、ご注文他にありますか？」
「いえありません」
「ご注文確認させていただきます『ざるそば1』でよろしいでしょうか？」
「はい」
「では少々お待ちください」
何の気なしに待つ。カウンターにはそば湯とコップ、そして氷水がセルフサービスで置かれている。
とりあえず水を注いで一杯飲んで待つ。
何分経ったか分からないが、「お待たせいたしました。こちらざるそばになります」という言葉とともにざるそばが来てくれた。
とりあえずネギを入れる。わさびは男だった時から苦手だったし、入れないでおこう。
大分女としての食事のペースにも慣れてきた、大盛りにしてなかった分を差し引いても、男の頃より食べるのに時間がかかるが、その分きちんと味わうということに重点が置けるようになった気がする。
注文の控えをもってレジに並び、お金を払う。
さ、スーパーだ。
スーパーで買い物をする。まず買い物カートを……っと思ったが、さすがにこの数ならいらないか。
買い物かごだけを持ち、買い物をスタートする。

昼過ぎということもあって、客は主婦がほとんどだ。自分は若い女性という感じかな。さすがに主婦には見えそうもない。あ、でも永原先生もそんなもんだよな……

最初に野菜コーナーが目に入る。えっと、ネギだな。ふむ、この値段に一番近いのを選べ。か。

単純に一番安いというというわけじゃないのか。わざわざ注意書きまでしてある。

えっと、こっちが＋２０円で、こっちが―３０円か、じゃあこっちの＋２０円の方を選ぶんだな。

野菜のコーナーを道なりに進むと、ウインナーやベーコン、肉などが目に入った。

たぶんハムはここにもあるはず。

お！　あったあった！　ハムは……具体的に商品の詳細が書かれているな。

えっと……これかっ！　うん、間違いない。

納豆はどこだ？

うーん、とりあえず一周してみる。どこにもない。よし、中を探そう。

あ、中にあったあった。外側ばかり見ないでちゃんと中も見ないと、うーん俺も買い物術身につけないとなあ。

納豆は一番安いのを３セット買うようにと書いてある。えっと一番安いのは……これか。

よしよし、順調だぞ。

ごま油はさっき納豆探す時に見たな。記憶を頼りに戻る。

えっと、これは容量が書いてあるな。

うーん、でもこれ一種類しかないや。幸い容量はあってるみたいだし、怒られはしないだろう。

女性の多い環境は自分もそこまで視線を感じない。でも一部、主に胸の小さい女性からものすごい「殺意」のようなものを感じる。

ううっやっぱ同性からも嫉妬されるよなあ。

誰がどう見たって「美人じゃない」「可愛くない」なんてとてもとても謙遜にならない容姿だし……

……ともあれ、品ぞろえをそろえたし長居は無用だ。会計を終わらせればミッションコンプリートだ。

とりあえず列に並ぶ。うーん、ここでいいかな。隣が開いてればいいんだけど……

あ、前の人が長そうだな。しょうがないか。

「お待ちのお客様こちらの列も空いてまーす」

お、隣のレジが解禁だ。よしよし、真っ先に並べたぞ。

会計を払って袋を受け取りこれで終了だ。

買い物かごをレジ奥の机に入れて、とりあえずレジ袋に商品を詰めて……

あ、買い物かごはここに回収するのか。よしよし。これで出ればOKだ。

後は駅まで行くだけだ。

道行く途中、やはり特に男性からの視線を感じる。というよりも駅に近づくに連れ人通りが多くなると尚更だ。

不良と思わしき3人組の男がすれ違う、後ろで「な、なあ今のめっちゃ可愛かったよな」なんて言葉が聞こえてきた。

嫌な予感がしたのでとりあえず小走りに人混みに紛れ込む。

……やっぱり少しスピードが落ちてる。ともあれ、ＩＣカードを取り出し「タッチ・アンド・ゴー」だ。

お、後2分で次の電車だ。エスカレーターでホームに上る。

……何だろう、よく分からないけど見られている気がする。

膝が隠れてくれているこのスカート丈ならパンツ見える心配はないだろうけど、学校の制服とかどうしようか、階段とか登ってる時は絶対男子から姿勢を低くして覗かれるだろうし。

ともあれ電車で帰る、ホームにちょうど来た電車に入る。まだ昼間だったのでそこまで混んでなかった。

ともあれ、2駅は短いようで長いようで短い。ただ感じるのはとにかく男性と、若干名の女性からの視線、それも老いも若いもだ。

確かに自分も男だった頃は巨乳の女性がいるとジロジロ見る傾向にはあったが、いざ自分がされる立場になると、なんか嫌な気分だ。
でも髪を切るのを不許可にされたくらいだ。胸を小さくしたいなんて口が裂けても言えないだろうし、これは私石山優子の女の子としての魅力。これを捨てるなんてとんでもないということは自分にも分かる。
「ただいまー」
「おかえりー優子、言われた通りのもの買ってきてくれた？」
家に帰ると母さんが早速玄関に来た。
「はいこれ」
スーパーの袋を渡す。
「うん、全部ＯＫよ」
母さんは満足した表情を浮かべた。よしよし。
「じゃあ優子、休憩したら早速夕ご飯の準備をするわよ」
「どれくらい休憩？」
「……とりあえず５分休憩よ、根を詰めたと思うからリラックスしてきなさい」
「はーい」
ともあれ自室に戻る。５分で出来ることは多くない。布団にそのままうつ伏せでダイブする。
確かに疲れたしリラックスしていたい。

休憩中、ふと自分が受けているカリキュラムについて考える。
今自分は「女の子らしく」を徹底的に叩き込まれている、男っぽい言葉遣いをすれば怒られるし、しかもその後「女の子」であることを徹底的に自覚するように言われる。
そして、男との違い。男だった頃の価値観は全く通用しない。トイレでも、風呂でも、そしてスカートで外出して、視線を感じてそう思った。
男としての人格を捨てなきゃいけないのがこのカリキュラムだと永原先生は言っていた。

最初は名残惜しいとは思わなかった、名前に反して乱暴な性格をしていた自分が嫌いだった。
でも、こうやって上書きしていくに連れ、自分の中で新しい発見と、新しい習慣にワクワクし、そして喜びを見出すと同時に、辛い気持ちも出てきた。
……人間とは、難儀な生き物だ。そして今これから、夕食の準備をするわけだ。ここでもまた一歩、男を捨てて女の子になっていく。
ともかく、今は休もう。きっと女の子としての人生はこれまでのろくでもない人生よりはマシになるはずだ。

ガチャッ
誰かがドアを開ける。
「こらあ！」
「う、うわっ」
母さんが怒ってる、一体どうしたんだ？
「もう、パンツ丸見えじゃないの！」
母さんはそう言うと素早くスカートの裾を摘んで揺らす。どうやら見えてしまっていたらしい。
「もう！　家の中だからってだらしなくしちゃダメでしょ！　全くはしたない！」
「ご、ごめんなさい」
「ほら、もう一回、うつ伏せになって、パンツ見えないように直してみて！」
「う、うん」
さっきと同じようにダイブし、スカートをちょっと直す。
「ダメ！　見えてる！」
母さんが覗き込んでいる、するといきなりスカートをぶわっとめくり上げてきた。
「ちょ、ちょっと母さん！」
「これは罰よ。ふふっ、パンツ見られて恥ずかしいって暗示かけなさい」

「パ、パンツ見られて恥ずかしいよお……」
「あらあら、声に出てるわよ。まあでも可愛いからよしとしましょう」
「いい？　パンツ見えてるかどうかは、どんな時でもちゃんと注意しないとダメよ。恥じらいもなく女の子がパンツ見せるのは一番ダメなのよ！　女としてもそうだし、何より男にも幻滅されるわよ！」
　うううっ、ぐうの音も出ないほどの正論に全く反論できない。
「じゃあもう一回やってみて。ちゃんとするまで続くわよ」
「う、うん」
　もう一度布団にうつ伏せにダイブし、今度は丁寧にスカートを直す。更に足と足の間にスカートを入れることで見えない工夫をしてみた。
　というか、ダイブした最初の段階ではパンツ見えてるよねこれ……
「うん、ＯＫよ」
「あ、あの、母さん、これもカリキュラムに出てるの？」
「うんそうよ。『そろそろ疲れてくる頃であり、休憩を言い渡されたため、患者の気持ちも緩み始める。スカート着用なのでパンツが見えている場合は強く注意する』ってあって、今みたいにパンツが見えてたら『スカートめくりをして恥じらいの心を育成すること』って書いてあるわ」
　な、永原先生、そこまで考えているのか……
「まあ、実際スカートの中とその恥じらいについては後のカリキュラムでもやるみたいだけどね」
「えーまたやるの？」
「そうよ、乙女の恥じらいを身につけるのはこのカリキュラムでも特に重要って書いてあるから」
「さ、それよりも夕食の準備よ」
「分かりました」
　今日は御飯と味噌汁に加え、キャベツとベーコンを混ぜ、塩昆布と胡麻油をかけた謎料理と冷奴だ。
「さ、お米の研ぎ方よ」
「まずお米はこの機械に入れるのよ。そして、ここのボタンで一定量

出すのよ。1食あたり1人1合が目安よ」
3人なので3合、俺は適量を押し、そして出てきた米を移す。
「水を入れて研ぐのよ。2、3回かき回したら水を捨ててね」
かき回してみる。母さんは「うん、いい感じ」とのこと。この調子で忠実に行う。そこまで難しいことじゃない。
「うん、そしたら水を入れて、炊飯器に入れてね」
「じゃ、ここからは朝と同じだからやってみて」
昨日今日の朝と同様の方法で炊飯器のスイッチを入れる。

「それじゃ、おかずに取り掛かりましょうか」
「はい」
おかずはまず、この謎料理からだ。
これは比較的簡単だ。
母さんの教わるとおりにキャベツをむしる。よし、いいぞ。
そして塩昆布の場所を教えてくれたのでそれを取り出し、まぶしていく。この時なるべくキャベツの山の中に入り込むように入れるのがコツらしい。
最後に胡麻油と醤油をかけて出来上がり。シンプルだがこれがなかなかうまいんだよな。

次に豆腐の冷奴だ。最近のスーパーの豆腐は最初から切り分けられているらしく、浄水と氷の中に入れればＯＫみたいだ。
「いい？　料理は手をかけなきゃ美味しくならないって言うけど、それはプロレベルの話よ。私達主婦はいかに少ない手で美味しい料理にするかにかかっているの。最も、今日は優子のために特に簡単なメニューにしたけどね」
「カリキュラムが終わった後も、覚えていく料理のメニューは増えていくから、覚悟してね」
「う、うん」
次に、味噌汁の作り方を習う。
母さん曰く、冷めたら味が損なわれるものは必ず最後に作るように

とのこと。
　さっきの豆腐の中で残った一部を味噌汁に使い、更にネギ、ワカメを切る。
「ネギはこうやってなるべく細かく切るのよ。手を切らないように気をつけてね」
　よし、切ってみよう。
「味噌汁は味噌だけじゃなくて味噌汁の素も必要よ。これを1杯につき1袋、今回は3人だから3袋入れてみて」
「うん」
「次に具材を入れて、沸騰したら味噌をといでうまく3人分にしてね」
「さ、沸騰するまでそこで見てて、お母さんはその間にご飯を盛り付けるわよ」

「しっかし、手際いいな。優子が家事をするようになって、お母さんも助かってるんじゃないか？」
　リビングから親父の声が聞こえる。
「いえいえ、教えるのに苦労してますわよ」
　母さんが答える、まあ、そうだよな。
　……おっと、味噌汁が沸騰し始めた。
　味噌をお玉ですくって、味噌汁の中に入れてっと。
　そのままお玉を使って母さんが用意してくれた容器に素早く三等分していき、最後はトレイに載せて、よしっ！

「「いただきます」」
　こうして、慌ただしい夕食の準備が終わった。
「あ、そうそう、優子。健康診断の結果が出たわよ」
「あーそう言えばそろそろ出てくる頃なのか」
「お、で、どうだったんだ？」
　自分と親父が食い入る。
「全体としては少し血圧が低めなことと、血小板がほんの少しだけ少ない以外は、特に異常はないそうよ」

「つまり、そこまで重大なことじゃないということね」
「そうね」
まあ、女になると言うだけで、他の病気を併発するものではないから、そこまで心配することもないか。

「さあ、今日はこれでは終わりじゃないわよ！」
夕食を食べ終わって風呂に入ろうとすると、母さんが止めてきた。
「優子、これからやるのは皿洗いの極意よ！」
まあ、皿洗いは来ると思ったよ。
「で、どうやって洗うの？」
「これを使うのよ！」
母さんはキッチンの端にある食器洗い機を引き出した。
「ここにお皿をこうやって入れていくのよ。ほら、こうやって。優子、やってみて」
お皿を傾けていく。中央を中心に「集団見合い」のような形になる。母さんによるとこの中央から洗浄液が出るのでこう置くといいらしい。
「で、カップの方はこんな風に置いてね」
カップの方は普通に下向きにして空いた場所においていく。
「……箸と箸置き、スプーン、フォークなんかは、ここにあるこれに入れて」
入れ物のあるところに入れていく。案外狭い。
「今回は大丈夫だけど、足りなくなったらこれを敷いて2段にしてね。あんまり使わないし、オススメしないけど」
そう言うと、閉じ方まで習った。
「電源を入れて後は『洗う』のボタンを押すだけ。今回は『中』でいいわ」
「目安はどんな感じなの？」
「2段になったら『強』、1段びっしりの半分以下なら『弱』と言ったところよ」
「ふむふむ」

「まあ、これは感覚で覚えるしかないわね」
そういうものか。
「乾燥まで自動でやってくれるから、明日以降の適当な時間に元の食器棚に戻せばいいからね」
うーん、家事も案外牧歌的だな。
「それじゃ優子、今日はもうお風呂入って寝なさい」
「はい」
家の棚からパジャマを持っていき、脱衣所に持っていき、そのままお風呂に入る……っとその前にトイレだ。
早速今日母さんから習ったように、自分のスカートをべろんとめくってパンツを下ろしスカートを脇に挟んで見る。
おお、便器につかない。でもこれ、結構疲れるな。
まあ、毎回毎回１００点満点じゃなくてもいいよな……

そういえば明日は土曜日だよな。明日はどういう課題が来るんだろうか？
風呂で髪を洗い、髪を縛って湯船に浸かりながら、まだ見ぬ明日に楽しみと不安を抱え続けた。

# 女の子の修行3日目　前編

朝起きる。
……よし、鍵をかけよう。
さて、今日は何を着ようか。
うーん、まずはトップスから考えるか。
よし、今日はこの赤い服にしようかな？　女の子の服はポケットが少ないから、この薄手の上着も着てみようか。これで財布や携帯を入れられる。
まずは、パジャマを脱ぎ下着姿になる。ここから更に着替えていく。
まずブラを取り替える。
最初につけたのはフロントホックだったが、課題中にはフロントホックのブラジャーは着用が禁止されている。
最も、実は胸に当たる継ぎ目がどうしても気になっていたから自主的にも着用はやめることにした。
前かがみになって少し大変だけど、慣れればどうってこと無い。
その後、赤い服を着る。これで上はＯＫだ。
次に下だ。
どれがいいかなあ……

コンコン！
ドアノックの音だ。
「はーい」
「優子ー！　今日は学校行くわよ！　制服選びするから、それなりの格好していきなさーい！」
「はーい、入ってこないでー！」
いよいよ学校行くのか。昨日着ようと思って辞めた赤い巻きスカートが目に入る。
永原先生は、自分に何を期待しているのか考える。
それはもちろん女の子らしくなった自分だ。かなり幼く見えるけ

ど、これにしてみよう。
まずはパンツを脱いで新しいのに穿き替える。
そして、意を決して巻きスカートを穿いてみる。えっと、このボタンで留めるんだな。
スカート丈は昨日よりやや短い感じかな、昨日は膝が隠れるか隠れないかだったけど、今日はちょうど膝のてっぺんの丈になっている。
クローゼットの鏡で見てみる。
お、上下赤い服で結構可愛いじゃん。幼さがやや強調された印象だけど、逆にそれがいいってやつだ。
うーん、でもちょっとダサいかもしれない。あーでも「少女」を演出するならこれしかないよね、うん。

「おはよー」
「おはよー優子！　あらあら、どんどん少女趣味になっていってお母さん嬉しいわ」
「おお、優子も可愛くなったな！」
親父まで乗ってきたよ……
ちょっと幼すぎて、ダサいかなって思ってたけど……可愛いって言ってもらえて……ちょっとうれしい。
「カリキュラムの成果出てるってこと？」
「そうよ！　女は褒められて更に伸びるものよ。さ、朝ごはん作りましょ」
母さんの家事指導の成果もあって、私も朝ごはんはそれなりの戦力となっていた。
「そういえば、エプロン使ってないよね？」
「あーそうね。でも、服が汚れかねないほどの料理ってしてないでしょ？」
「うーんどうなんだろう？」
「朝ごはん食べたら準備して、学校に行くわよ」
「はーい」

学校ではいよいよ復学に向けた制服選びをする。他にも体操着やスクール水着も着るらしい。
ついに学校生活までこぎつけたということか。

「それじゃあ、優子、学校へ行くわよ」
「はい」
朝食が終わると、学校の制服と体操着、スク水を試着して、取りに行くために出かけるのだ。
持っていく持ち物は財布と携帯と、それらを持って帰るための鞄だけだ。
教科書やノートの類は男だった頃のものを使い回せばいい、名前欄も「一」のところを「子」と書き換えればいいだけだ。
でも、当然制服はそうもいかない。新しく女子用の制服と体操着・スク水を注文してもらうしかないのだ。
「あれ？　母さん、その持ち物は？」
「ああ、これ？　永原先生のカリキュラム教科書と優子が読んだ少女漫画の読書感想文よ」
「そ、それにしては多すぎない？」
「ふふっ、優子もまだまだね。いい？　女の子は荷物が多くなるものなのよ」
「……そういうものなの？」
「ええ。それじゃあ行きましょうか」
学校への道のりは市役所とは逆方向の電車に乗ればいい。駅では昨日と同じく、いやそれ以上に周囲の視線を感じる。
どうも真っ赤な色の服で目立つようだ。ちなみに、母さんはご丁寧に靴まで赤色のを用意していたが、頭のリボンだけ昨日と同じく白色だ。
母さんは、「男たちはみんな優子に夢中よね。お母さん妬いちゃうわー」と言っていたが、「一体いくつだよ」とは言わないでおこう。
学校への通学路、土曜日とあって制服はまばらだ。

もちろん、通る人は誰も自分がかつて「石山優一」と名乗っていた人と同一人物とは思わない。もちろん、母さんの顔もクラスの人で知っているのは木ノ本桂子くらいだ。
テニスコートに目をやると、ちょうど田村恵美が部活にいそしんでいた。熱心なことだ。
って、女の子になったらこういう部活はいるのかな？　まあ俺は面倒で部活入ってなかったけど。
「とりあえず、校舎の中に入りましょう、先生は職員室の前にいるって。お母さん学校の地理はわからないから案内してくれる？」
言われるがままに職員室に案内する。
扉をノックする。
「すいませーん、永原先生はいますか？」
「あーら、石山さん、いらっしゃーい」
他の教師たちは一瞬怪訝な目で自分を見るが、永原先生が事情を察したのを見てすぐに納得した表情になっている。
どうやら、ＴＳ病のことは他の先生にも知られていたようだ。まあ当たり前といえばそうか。

「こんにちはーそろそろ来るころあいだと思ってたのよ。じゃあ、教室を借りているから行きましょう」
永原先生の案内の下、いつもの教室に入る。教室は、休日には使われないから普段は鍵がかかってるが、永原先生が鍵を取り出して開けてくれた。
そしてそこには既に制服が置かれていた。
「たぶんこのサイズで大丈夫だと思うわ。スリーサイズは、先生もう把握済みですから」
「あ、ありがとう……」
どうも複雑だ。
「じゃあ、制服に着替えてみて？」
「え、今すぐ？」
「ええ、制服の着付けもやりたいからね」

「いやいやいや、ふたりとも外に行ってもらいますよ。先生、母さん」
「どうして？」
「どうしてって、誰かにジロジロ見られて着替えなんて恥ずかしいですよ……！」
「あらあら、何を遠慮してるの！　女の子同士別にいいじゃない……」
「ねー」
　何で母さんまで意気投合してるんだよ……
「女の子?!」
　あえて「の子」を強調する。
「あらまあ、石山さん、先生のことおばさんだと思うのー？　それは聞き捨てならないわねー」
「い、いやその……」
　確かに見た目はおばさんと言うには若すぎるけど……
「まあ、お母さん永原先生よりずっと若いのよ！　それなのに先生はおばさんじゃなくてお母さんはおばさんなの!?」
　あーもう、話をややこしくしないでくれ……
「まあ、いいわ。その代わり条件があるわよ」
「な、何？」
「ふふっ、石山さんが復学するのは二日前だからね。少し急ぎたいからちょっと女の子になるためにちょっと強化した暗示をしてもらうわよ」
「せ、先生どういう？」
　母さんが質問する。
「ふふっ、娘さんが着替えている間にこっそり説明しますわ」
「な、何を企んでるの？」
「ふふっ、でも石山さんのためでもあるのよ。着付けの指導を恥ずかしいって言ったんだから、ちゃんと着付けてちょうだいね。もちろん厳しく判定するわよ」
「もし、制服着付け間違いがあったら……ふふっ、今までよりも罰がちょっときつくなるわよ。あ、スカート丈は特に何も言わないわよ。よっぽどじゃない限り。ね」

「う、うん」
「でも、今のうちに間違えておいたほうがいいのも確かなのよね。罰を受ければ受けるほど、石山さんも女の子らしくなっていくわよ」
「で、でもわざと受けたりはしないよ」
女の子らしくなりたいといっても、さすがにMじゃない。
「ふふっ、じゃあ、頑張ってねー」
母さんが最後にそう言うと、永原先生がドアのカーテンを閉めて、二人は教室の外に退場した。
制服を取る。
まずはブラウスから。今の赤い服を脱ぎ、ブラウスを着るボタンを上まで止める。
あれ？　一個ずれた。もう一度やり直してボタンをずらし、今度はちゃんと揃った。
着替えている間、廊下で永原先生と母さんが何やらヒソヒソ話してる。時々笑い声も聞こえる。だ、大丈夫かな……
何されるかわかったもんじゃない。細心の注意を払わねば。
次にリボンだ。これは、うむ。後ろ留めて、正面に持ってくれば完成だ。
よしよし順調だ。
次に私服のスカートを脱ぎ、制服の紺チェックのプリーツスカートを手に取る。
こ、これは相当無防備だぞ……
女子はよくこんなの着られるな、これじゃパンチラするのも頷ける。って自分も女子だぞ。他人事じゃない。そんな余裕ぶった態度はダメだ。
とにかく、一番下に着てる白シャツと、制服のブラウスをスカートの中に入れて完成のはずだ。少しスカート丈を上げたほうがいいかな？
他の女子は膝上で股との中間より短いし特にスカート丈では文句は言われない見たいだし、よし、スカートを折って短くしよう。
ううう心許ない。本当にこれ、服の役割果たせるのか心配だ。

……でも、鏡がないからわからないけど、多分めちゃくちゃ可愛くなってるはずだ。
女の子がスカート短くしたがるのは、結局可愛いからなはずだ。
……よし、もう間違いはないはずだ。
意を決して教室の扉を開け始めるとすぐに勢い良く母さんが開けてきた。
「とっと」
少しよろけそうになる。
「母さん、そんなに急がなくても……」
「うーん」
永原先生が自分を見る。
「あら、可愛いわね。でも……」
母さんも見てる。ちょっと恥ずかしい。
「リボン曲がってる、ダメよ！」
永原先生はそう言うといきなり制服のスカートの端を握ってぶわっと上にめくり上げてきた。
「ちょ、ちょっと先生！　何するんですか!?」
「ふふっ、石山さん。今日から私のカリキュラムも後半戦よ。今後は男言葉を使ったり、がさつな態度を取ったらスカートをめくりますからそのつもりでいてね！」
「え、え……え……??」
あまりに突拍子もない宣告に動揺してしまう。
しかし、そんな動揺もよそに、永原先生は続ける。
「そして、暗示も『私は女の子……私は女の子……』じゃダメよ。『私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ』って暗示しなさい。さ、やってみて」
私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよー
あ、暗示するだけでも顔が赤くなりそうだよお……
……女の子になってスカートをめくられたのは、昨日母さんに怒ら

れた時以来二回目だが、とにかくスカートをめくられるのって凄い恥ずかしい。
　こんなに恥ずかしいなんて思わなかったくらいだ。女子が必死になってパンツ見られないようにする気持ちが痛いほどわかった。
「うー暗示しなくても恥ずかしいって」
「ふふっ、それはいいことよ。でも本当に心の底から恥じらいを持つには時間がかかるからね。復学するまで続けるわよ」
「さ、さっきの話に戻るけど、リボンが曲がってるわ。ちなみに、スカートを短くしたのはむしろ加点ポイントよ」
「先生、どういうことなの？」
「スカートは短くすればするほどパンツ見えやすくなるわよ。そうすれば男子の視線にも晒されやすくなるのよ。そうなればそれを意識することになる。女の子はそうやって可愛くなっていくのよ」
「ただし、あんまりに短すぎたらダメよ。そう言う意味で、今の石山さんは手本ね」
「あ、ありがとうございます？」
「見せたくないという気持ちが、より男子を刺激して、良い視線になっていくわ、そうすれば女性ホルモンがよく出て、より魅力的な女の子になっていくわよ。そうすれば男子も刺激されるわ」
　なんか悪循環な気がするけどまあ気にしない。
「ふふっ、ちゃんと3人で着付けていればリボンは曲がらなかったのにね」
　母さんも悪魔の笑みを浮かべている。
「いい？　この教室には鏡がないけど、普段は家の鏡を見てやりなさい」
　すると先生が、部屋の窓のカーテンに隠してあった姿見を取り出した。あーくそ、嵌められた。目立たない所に置いてあったのか。
「ま、実は着付けするって言ったとしても罰がスカートめくりになるのは既定路線なんだけどね」
　それを先に言ってよ……普段優しいのに永原先生意地悪すぎるでしょ。

そして姿見の前に立つ。確かにリボンが左に少し曲がっていた。軽く調整をすると先生もＯＫをくれた。
「制服の着付けはこれでＯＫね、でも今日の講習はまだまだ続くわよ」
「じゃあ次は、授業を受ける想定で、椅子に座ってみて？」
「う、うん」
言われるがままに何気なしに座る。椅子にパンツがついててひんやりだ。
「はい立って見て！」
立ち上がる。
すると永原先生が急に近づいてきてスカートの端のひだを摘んでスカートをめくられた。
「わっわっ！」
慌てて両手でスカートを抑える。ってまずかったかな？
「あらあら、今のすごくいいわね。石山さん、あなたすごく模範生よ！ボーナス点を１０００点くらいあげたいわ！」
あ、あれ？　怒られるどころか凄い褒められた。
「うんうん、そうやって抵抗するのは、母さんもすごくいいことだと思うの。無抵抗じゃめくりがいもないからね」
「そうそう、今のは石山さんにも恥じらいの心が出てきた証拠よ。言うなれば、カリキュラムの成果が出てるってことよ。本当に凄いわ。ここまで急成長してくれる人、なかなかいないわよ」
「ほ、褒められるのはいいんですけど、何でめくられたの？」
「ふふっ、座る時、あんな座り方したらパンツ汚れるし、見えちゃいやすいわよ。教室の椅子だから良かったけど、もし自転車に乗る時にあんな座り方したら絶対ダメよ。というわけで、暗示かけてね」
私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……
「じゃあどうすればいいか、石山さん、自分で考えてやってみて？　考える時間は制限しないわよ」
えーっと、女子の座り方……クラスの女子の座り方……
木ノ本はどう座ってたっけ？　あ、そうだ、スカートの後ろを間に

挟むんだ。
今度は座る時後ろに手をやってお尻を撫でるようにして椅子に座る。
……うん、これならパンツも嫌な感じしないし、だらしなくならない。
「はい立って！」
「ふふっ、石山さん飲み込み早いわね」
お、今度は良かったか。
「……でもまだ惜しいわね」
……まためくられた。
今度は両手で前をへそまで。
「足を閉じてないわ。先生の角度からだとパンツ見えてたわよ」
あー、一個のことに気を遣いすぎたんだ。

暗示をかけさせられた後、もう一度座る訓練をする。どうしても足を開きたい時は、スカートを意識して足の間に落とすように言われた。これは電車のときも同じそうだ。
「じゃあ次は非常階段に行くわよ。学校内でも、いや、学校こそ男子の目を気にしなきゃいけないのよ」
非常階段は避難訓練のときでしか使ったことがないが、基本「早急に降りる」ことを前提としているのかうちの学校はやや傾斜が急だ。
「石山さんのスカート丈は、他の女子と同じくらいね。その長さだと、この急な階段は登る時にはパンツ見えてしまうわ」
「最も、非常階段は降りる前提だからあまり関係ないけど、逆に言えばこの訓練には最適よ」
「で、でもそう言うときは丈を長くすれば、このスカートも折ってるし……」
「……優子、女の子は男子に見られてこそ。よ。だから男子の声は大事だけど、隠すなよって声は無視しちゃってもいいわよ。見せたら見せたで幻滅されるんだから」
母さん鋭い……

「じゃ、階段を上がってみて、もちろん見えたらアウトよ」
右手でスカートの後ろを抑えながら階段を上がる。
ふう、やっぱ結構きつい。急峻故に女の子には余計きついわけだ。
はあ……はあ……よし！　ゴールだ！
登りきったら右手を外しそのまま左に曲がる。
「はーいいいわよ！　降りてきて！」
永原先生の声が聞こえたので降りる。
……どうせまためくられる。
そう思ったので予めスカートをガードしながら降りる。
「あらあら？　気持ちは分かるけどそれはダメよ」
「だ、だって……」
「だって？」
「そ、外はさすがに恥ずかしすぎるから嫌よ！」
「ふふっ、何のために３人いると思ってるの」
え？
「先生、誰も見てませーん」
か、母さん……
「はーい」
母さんの言葉を確認すると、母さんに気を取られた隙を突いた永原先生が後ろに回り込みスカートをめくってきた。
「何でめくられたか言ってみて？」
「え？　わからないよ」
「まあ、これは本物の女子でもやっちゃうミスなんだけど、階段に上がりきってすぐ手を離したのは一番ダメよ」
「……一番見られやすくなる角度だし、それどころか抑えてた反動が出るわよ。見てくださいって言っているようなものよ」
い、言われてみれば……ってよく考えたら……！
「じゃあ、暗示をかけてね」
ううううっ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……あううっ……屋外でスカートめくられて……穴があったら入りたいよお……

「せ、先生！」
「あら何？」
「今までだとこういうミスとかコツって最初に教えてくれたのに、学校来てからそういうのがないんですけど」
「ていうか、予め教えてくれれば、ほとんどスカートめくられないで済んでたような……」
「ふふっ、これはわざとよ」
「え？」
「カリキュラムの本にも書いているわよ。『間違えて恥をかけばかくほど女の子らしい女の子になるから間違いを誘発させるためにコツを教えずにノーヒントでまずは失敗させてスカートをめくること』ってね」
　な、何なのよそれ……
「実は以前のカリキュラムでは最初からこうなってたんだけど、流石に脱落者も多いってことでこうなったのよ」
「優子、投げ出しちゃダメよ」
「わ、わかってるわよお……」
　確かに私もこうやってめくられるのに抵抗感出てきたわけだし、否が応でも効果を認めざるを得ない。
「さ、あと少し制服での振る舞い方を教えたら、次は体操着よ」
　体操着か、今度は着付けがあるか分からないが、素直に先生に従っておこう。

# 女の子の修行3日目　中編

永原先生に連れられて、非常階段から教室に戻る前にいつも普段自分たちの使っている下駄箱に来た。
「石山さんの所は、『2年2組　石山優一』って書いてあるけど、ここはもう使えないわ。あ、そうそう、学校の上履きはお母さんが持ってて」
元々あった男だった頃の上履きを母さんに渡す。
そうだ、うちは男子と女子で下駄箱も別れている。
「はい、分かりました」
「で、明後日からなんだけど、こっちを使ってくれる？」
永原先生は女子の下駄箱の方に移動する。
「はいこれ見て」
そこには新品のシールで「2年2組　石山優子」と書かれていた。
下駄箱はちょうど一番端で膝あたりの位置だ。
何だろう、こうして見るとすごく嬉しい気がする。
「中開けてみて、石山さん」
「うん」
一旦しゃがんで身体を右に傾けて、中を開けるとローファーが……
ふぁさっ！
「ひゃあっ！」
……って後ろからめくられたよもー
「こら！　女子の下駄箱だからって油断しない！　ここは男女共学よ」
「下駄箱に正面向いていれば確かに見えないけど、この短さだと今みたいにちょっとした拍子で見えちゃうわよ。身体を右にやったらアウト、いいね？」
「は、はい……」
「ちゃんとずっと女の子やってる子ならいいけど、優子は女の子初心者なんだから！」
「は、はい……」

「ささ、女の子がはしたなくした罰よ。暗示かけてね」
私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……
なんか永原先生にいいように乗せられてる気もするけど、乗ったほうがいい案件なんだろうなあ……
と、とにかく、前屈のような姿勢で取るしか無い。
でも骨硬いしなあ……お、意外とうまく言った。
手探りで靴を取り出すと、やはりローファーが見えた。女子用の外履きだ。
「履いてみて？」
「う、うん」
靴を履いてみる。窮屈さはない。
「きつくない？」
「大丈夫」
「じゃあこれも履いてみて？」
永原先生が取り出したのは学校指定の内履きだ。
「うん、これも大丈夫」
「そういえば、今気づいたんだけど……」
母さんが言う。
「うん？」
「私達、土足で上がっちゃいましたけど大丈夫ですか？」
「うーん、そういえばそうねえ……」
「ま、休日だし大丈夫よ！」
お、おいおい……
「じゃあ次、私達の教室に戻るわよ」
私たちは内履きのまま、元の教室に移動する。ちなみに、他の靴は母さんが持っている。
「石山さん、ロッカー見てみて？」
そういえば、ロッカーのことを気にもとめていなかった。
「うん」
そこには、先程と同じく、真新しいシールで「石山優子」と書いて

あった。
　さっきもそうだった、学校が、女の子になった自分を受け入れてくれることに、言い様のない嬉しさを感じた。
「あ、筆記用具あるかしら？」
「お母さんが持ってるわ」
「うん、じゃあ石山さん、ロッカーにある自分の教科書やノートの名前、変えちゃって」
　お、そうだったそうだった。これを変えないとな。
　教室の方のロッカーは幸い上段なのでしゃがむ心配もなく、自然な姿勢で取り出せるのでスカートをめくられる心配もない。
　家にある教科書ノート、辞書は月曜日のもの以外は幸い存在せず、体操着が置いてあるだけだ。
　そして、自分の席に座る。
　……おっと行けない、危うく直接座ってしまうところだった。
　なんかどっかから「チッ」って声が聞こえた気がするが気にせず、そのままスカートを丁寧に揃えて座る。
　そして、名前欄のあるところの「一」の所に「了」の字を加えていく。

「石山優一」と言う名前・痕跡がどんどん「石山優子」に上書きされていく。
　女の子になって、最初は自分の決意として頭のなかにあっただけの「優子」が、戸籍になり、性別も変わり、そして今この学校に「石山優一」がいたという事実が消されようとしている。
　でもそれが私の望んだこと。未練はない……と完全に断言するのは嘘かもしれないが、少なくとも、完全に無いようにはしたい。
「さ、制服での実技はこれまでにして、次は講義形式にするわよ」
　今度は普段の教室を舞台にする。よく見ると先生の机の上に今度自分が着ると思われる体操着とスク水があったが今はこっちに集中だ。

「うちの学校でも全校集会があります」
「さて、制服に限らず、スカート、特にミニの場合絶対にやってはいけない座り方があります」
　これは私にも分かる。
「はい先生！」
「どうぞ石山さん」
「体育座りとか、しゃがみとかあぐらとかですか？」
「はいそうです！　特に前者２つは厳禁よ。アニメみたいに都合良くは行かないからまず丸見えになると思って下さいね」
「はーい」
「では、学校の全校集会とかで床に座る時はどの座り方ですか？やってみて下さい」
　げっ、これはまたスカートめくりの流れだ。
　とは言え拒否権はない。とりあえずぺたんこ女の子座りしてみる。
「うん、それでもＯＫよ。ちゃんと見えないようにスカートに気を使ったのもマルね。でも一個デメリットが有るわ。立ってみて」
　あ、そうか。ここでパンツ見えやすいのか。
　そのまま正直に立つのではなく、一旦足を横に投げ出し、そこから中腰になって、慎重に片足から立ち上がる。
「あら、凄いわね。今回はめくる隙きがない完璧な動きだわ」
　そりゃ、あんだけスカートめくられて、その度に暗示込みで恥ずかしい思いさせられたら慎重にもなるよ。でも、めくられポイントを上手く交わしたのは快感だ。
「それからもう一つ、財布と携帯はどこに入れますか？」
「えっと……」
「スカートにポケットはないわよ。ブレザーの内側のポケット、夏服はブラウスの胸ポケットか、あるいはカバンの中に入れてね」
　そうだ、これが女の服の不便さだ。華やかになったはいいが、ここだけは男の方がいい。
「そうそう、ここでちょっと石山さんの写真を取るわよ」
　先生が教卓からデジタルカメラを取り出す。

よく分からないがカメラに顔を向ける。
「もう少し笑って、はいっ、そのまま……3……2……1……」
カメラのフラッシュが光り、永原先生も満足気だ。

「それじゃあ次の課題、体操着に着替えてみて？」
「あ、あの……！」
「何？　カーテン閉めたい？」
「い、いえ、その……着付け教えてください！」
「あら、いい子ね」
「と言っても体操着はそこまで重要なポイントはないけどね」
「失敗してもスカートめくったりしないから、とりあえずやってみて」
まずは体操着の短パンを手に取ると永原先生が話しかけてきた。
「これを穿く時のコツはわかる？」
これは流石に分かるぞ。スカート脱ぐのは後というわけだな。
まず短パンから穿いて、パンツ見えてないか確認してからスカートを脱ぐ。
「はい正解、上はどうする？」
「うーん、これはしょうがないと思う」
「そうね、特にこれから夏は。ね」
普通に制服を脱ぎ、ブラの上から体操着を着る。こんな感じか？
「はいＯＫよ、体育の授業の前にもう一つすることは？」
「えっと、服を畳むの？」
「はい正解、畳み方は知ってる？」
「えっと、スカートとかは知らない」
「じゃあ、先生が実践するから続けてみて」
「う、うん」
スカートの端を持って普通に折るやり方。
「体育の授業の間だけだから、畳むと言ってもそこまでしなくてもいいわよ」
「ブレザーもこんな感じで……簡単な感じ」
「でも、家に帰ったらちゃんとハンガーにかけてね」

「はーい」
「じゃあ体操着はこの辺にして、制服に着替え直すのをやってみて」
　ということで、さっきと逆にやればいい。上はしょうがないと分かっているので、これを元の制服に着替え直す。
「母さん、手鏡！」
「はい、優子」
　さっきリボンが曲がっていると言われてスカートめくられたので特に注意しよう。
「あらあら、成長したわね」
　次に下だが、こちらは先ほどとは逆にまずはスカートを穿いてから短パンを下ろし、畳む。
　最後に体操着を所定の袋に畳んで入れて完成だ。
「グレートね。じゃあ最後に水着よ」
　先生がスクール水着を持ってくる。
「こ、これも……着付け……お願いします！」
「……分かったわ。制服からの着替え方、見えない着替え方があるんだけど、流石に難しいからイチから教えていくわね」
「お願いします」
「あ、細心の注意を払ってね。お母さん、もし見えてたら報告して下さい」
「分かりました」
「え？」
「イチから教えていくと言っても、スカートめくられないとは言ってないわよ。最もめくるのは最後にまとめてだけどね」
「ひえっ」
「でも、見えたらある意味めくられるよりずっと恥ずかしいことになるから、本当に注意してね」
　うん、水着だしただ事じゃないことは分かる。
「まずパンツ脱いでそこから水着を着てみて」
　言われるがままにパンツを脱ぐ、やっぱり恥ずかしい。
　もう何回も見られたパンツだけど、何だろう、スカートをめくられ

て見られるというのがより一層恥ずかしい気がする。
次に先生はそこから着るように指示してきたから……こうかな？
「うん、そうだね。じゃあちゃんと着れてるか確認したら、スカートを脱いでみて」
スカートを脱ぐ、うん大丈夫。
「じゃあ次、上着は脱いでブラウスだけを着たまま水着を着てみて」
え？　難しくないの？
まあ、でもやってみるしか無い。
とりあえず、ブラウスの下に着ていたＴシャツを脱ぐために一旦ブラになってもいいか聞いたが、これはＯＫらしい。
ブラの上からもう一回ブラウスを着て中で着替える。
あ、途中でブラを脱がないと、でも落ちないようにして……
あー大変だ。悪戦苦闘するが見えてるわけじゃない。とりあえず、スク水をなんとかブラウスで抑えつけつつ、ブラを脱いでパンツと一緒に机に置く。
うー、手が三本欲しい。ともあれ、肩紐をなんとか通すことに成功。
最後にブラウスを脱ぎ、完成だ。
って胸がきつい……
「はーいよく出来たわね。石山さんの場合は、最後にもう一つ必要よ。もう一度スク水の入った袋を見てみて」
よく見ると、２つほどパッドが入っていた。
なるほど、これを使うのか。とりあえず、見よう見真似でなんとなく装着してみる。
もう一つの手で抑えつけてっと。
「うんうん、素晴らしいわね。石山さん飲み込みが早い！」
「先生、見えてなかったわよー！」
「え、えへへ……」
「ところできつくない？」
「大丈夫よ」
「あ、そうそう、今日の内容はプリントにもしておくから、忘れた時にもう一回見直せるようにするわよ」

「あ、ありがとうございます……」
「じゃあ早速だけど制服への戻し方もやろうか」
「せ、先生、これは見えちゃうんじゃないですか？」
「いい？　先生の言うとおりにして？」
「うん」
「まずパッド外してブラを付けてみて」
「え？　水着の上から？」
「ええそうよ」
　そう言うんじゃ仕方ない。ともあれ言われるがままにする。
「次にシャツとブラウスを着てみて」
「うん」
　シャツとブラウスを着る。
「そこからまず肩紐から上を脱いでいってみて」
　お、うまくブラの中にスク水が抜けてく、このまま勢い良く……っと、行けない。ポロリしちゃうところだった。
「うん、ここで勢い付けすぎるとダメよ」
　でもよく考えてみると、意外とかさばってて引っかかるようだ。
　ともあれここからならもう分かる。まずスカートを穿き直す、そのままスク水を全部脱いで最後にパンツ穿いて完成だ。
「うん、スカートめくらないから大丈夫よ」
「あ、そうそう、着替えのことなんだけど……」
「何ですか？　女子と着替えるんでしたっけ？」
「あー実はそのことなんだけど、石山さんだけ職員室の更衣室を使うことになっちゃったのよ」
「え？　ええ何で!?」
　本来教室ごとに別れ、男子と女子が着替えるようになっている。
「ごめんなさい、私も反対したんだけど、学年主任の小野先生が『保護者のクレームになりかねない』って言ったらみんな……」
「……」
「ごめんなさい、本当は女の子として扱ってあげなきゃいけないのに」
「わ、分かったよ」

でも、気持ちもわからないでもない。下心抜きで残念な気持ちもあるが、決まったものは変えられない。
「……じゃあ、今日の先生が出来ることはこれだけよ。まだ明日もあるから頑張ってね」
「あ、ありがとうございました」
「今日やってみてどうだった？」
「あの、すごく……すっごく恥ずかしかったです」
「ふふっ、その気持ち大事にね。成績不良者だとこの時点でもジーンズとかジャージ着てスカート嫌がったり、暗示かけても全然効果なかったりするのよ」
「だから、赤いスカートを着て現れた石山さんを見て、とても感激したわよ」
「でも、その割には怒られていたような」
「そりゃ怒られて恥ずかしい思いしてもらうのが今日明日のカリキュラムの目的ですもの、でも石山さんはとても少ないわよ。むしろ今までの最小記録に近いわ」
「そ、そうなの？」
「そうそう、女の子らしく恥じらいを身につける人ほど、めくられる回数も少ない傾向にあるからよ」
「……半端な覚悟で受けた子はね、石山さんとは逆にめくられ慣れちゃうのよ。逆に石山さんはめくられる度に恥ずかしがり度も上ってたでしょ？」
「う、うん」
「これは、ちゃんと覚悟を持って女の子になろうという強い意志がある証拠よ。カリキュラムにスカートめくりを入れたのもそう言う意味があるのよ」
なんか妙に憎らしいな。単なるセクハラおしおきじゃないってことか。にしても他に方法はないのか……
「ふふっ、優子ったら下駄箱でスカートめくられた時、背筋ビクってなって可愛い声あげてたわよー」
母さんが何故か笑顔、なんか背筋がゾクゾクする。

「お母さんの言い方はあれだけど、それだけ女の子らしくなれてるってことよ。もちろんまだまだトータルじゃ修行足りないけどこの調子なら大丈夫よ」
このカリキュラムを受けたばかりでは全然だったのに、今はもう、女の子らしくなれてるって言われると嬉しいと感じるようになった。
これって洗脳？　ううん、私が、自分が望んだことだもん。
そう思いながら、制服から私服に着替える。流石に二人には出てもらった。
赤いブラウスと赤い巻きスカート姿になり、下駄箱に内履きを入れ、靴も最初に来た物に戻す。
「あ、石山さん、この後、石山さんが書いてくれた読書感想文とかでお母さんと話があるから、石山さんはここで待っててくれる？」
「はーい」
どうやら、二人だけの打ち合わせがあるらしい。
教室に一人取り残される。自分が座っていた席に座ってみる。どうしても倒れたあの日のことを思い返してしまう。今は私服状態。でも学校に来てるのはみんな部活動で、教室に人がいるとは思われていないから、誰も気にも留めない。
自分が血を吐いたと思われる場所はもう痕跡もなく拭き取られていた。そういえば、木ノ本が掃除してくれたんだっけ？
二人の打ち合わせはあまり時間がかからなかったのか、すぐに教室のドアが空いた。
「じゃあ、今日はここまでよ。最後に、下駄箱の靴、上履きを入れておきなさい」
「ありがとうございました」
永原先生が下駄箱まで送ってってくれる。
言われたとおりに上履きを入れてローファーはしまい、学校に最初に来た靴で帰る。
「それじゃあ、石山さん、さようならー」
「ありがとうございましたー」
「明後日、教室で会いましょう」

母さんと私は、学校から出た。
「あ、そういえば、読書感想文とか渡してた？」
「うん、優子が最初制服に着替えている時に渡したわよ。面談の時にもちょっと触れられたわ」
「そ、そう……」
「そうそう、優子。永原先生の講習は終わったけど、家に帰る前に、まだもう一つやることがあるわよ」
そう言うと、母さんがさっきから持ってた荷物の中から、袋を取り出す。
「はいこれ」
「わっわっ……」
勢い良く渡されたのでほんの少しだけ重たい。中には男子制服と以前までの体操着が入っていた。
冷静になると、そこまで重くない。
「これから、リサイクルショップに寄るわ。そこで優子、あなたの手でこれを売るのよ」
うちの学校の近くにあるリサイクルショップは制服の再利用なんかも手がけている。確かに、男子の制服、男子の体操服はサイズも合わないし何より今この身体で着たら色々とまずいものだ。
「でも、どうして私が？」
「今日、教科書やノートの名前を変えたでしょ？　それの一環よ」
母さんが今回の意味について教えてくれる。
「『女の子として生きるため、男への未練を断ち切り、捨てる覚悟を身につけさせる』そう言う意味があるわ……本当は燃やしちゃうのが一番なのよね。でも、土地がないしお金もかかるからリサイクル店で代用よ」
なるほど、そういうわけか。所々「おいおい……」と思うところもあるが、よく考えられているカリキュラムだ。

# 女の子の修行3日目　後編

リサイクルショップは学校から徒歩数分のところにある。
通学路上を進み、最初に運ばれた病院を抜け、左に道を少しそれれば到着だ。
土曜日ということもあって、主婦だけではなく、家族連れも居る。
リサイクルショップに入るのは初めてで、入学時に学校が紹介していたのをちらっと聞いた程度だが、中は意外と広い。
「さ、お母さんがついていくのはここまでよ。後は自分でなんとかなさい」
母さんは入り口からは動かない。
「う、うん」
制服と体操着の袋を持ち、案内をさがす。
しかし、学校の制服をどこでやっているのか分からない。
こういう時は職員に聞くものだ
「あの……すみません」
「あ、はい」
男性の職員に聞く。
「小谷学園の制服を売りたいんですけど」
チラッ
あ、胸見た。何だろ、昨今言われてる「チョロイン」よりはるかにちょろい気がする。
「えっとそれでしたら、3階へ上がってもらいますか？　階段を上がって正面です」
「ありがとうございます」
早速階段で3階に上がる。今着てる巻きスカートは丈も制服よりは長いし、幸いにもこの緩やかな階段なら見える心配はまったくない。
だいぶ女の力にも慣れてきた。
今までは一瞬「重い」と感じると今度は力を出しすぎるきらいがあったが、今では一瞬戸惑うことはあっても、自分の身の丈にあった

力加減をだいぶ出せるようになってきた。
このあたりの身体の感覚は、カリキュラムではどうしようもないだろう。自分でよく体を動かして、慣れていくしか無い。
階段をあがると3階の案内を見るまでもなく、服のコーナーが目に入った。
窓口ではたった今1組の夫婦が受付を終わっていた。
待合の椅子には誰も座ってないので、早速窓口の女性職員に声をかける。
「すみませーん」
「はい」
「これお願いします」
「はーい、分かりました」
そう言うと店員さんは番号札を渡し、待つように指示してきた。
これでもう自分は手持ち無沙汰だ。リサイクルショップを見渡す。
この辺は服の他にもおもちゃやゲームのリサイクルもある。掘り出し物もあるんだろうなあと考えつつも、今は気持ちを男時代の服に戻す。

女子制服を手に入れた、そして女子としての制服や体操着、水着の着方を叩き込まれた。
男子制服はもう無い。自分で捨てた。
戸籍も、性別も、教科書も、ノートも、全て優子になった。
もう二度と、「優一」と呼ばれる日は来ないだろう。もしかしたら、遠い未来、自分が男だったことを忘れてしまうかもしれない。
……いや、それはないな。５００年近くも生きて４８０年間も女をやっている永原先生でさえ男の頃は覚えてるし。幼少期の記憶は今後も残り続けるだろう。
改めて、今着てる服を見る。
上下赤い服だ、巻きスカートがかなり幼い印象を見せる。その割に、胸はかなり大きい。
そして黒い髪の毛も長く、頭に白いリボンをつけていて、これが女

の子女の子している。
もう何度も覚悟を決めたはずなのに、こうやって自分で男の痕跡を消すのは、やっぱり身を斬られるような思いだ。
でも、永原先生のカリキュラムの目的を考えれば、これが課題に上がるのは必然だ。
よく分からないが、おそらく「成績不良者」だと捨てられないんだろうな。
未練を感じた直後に、これから来る新しい生活への憧れもあった。
この気持ちは、私が本格的に女の子としての生活を始めるまで、整理できるものじゃないのかもしれない。
「受付番号８番でお待ちのお客様ー！　お待たせいたしました」
呼ばれたので受付の元に歩く。
「はい、こちら制服と体操着ですね、リサイクルとして買い取り料がこちらになります」
そう言うと店員はレジの画面を買取価格にしてきた。正直言うと、この価格が安いか高いかは分からない。
まあ、とりあえずレシートと価格を受け取り、レジを後にする。
１階の元の場所に戻ると、母さんが待っていた。
「おかえり、どうだった？」
「うん、場所を聞いてすぐにたどり着けたよ。あ、これレシートとお金」
「ありがとう、お金は優子が持っていいわよ」
「え？　いいの？」
「……カリキュラムでセクハラされてたの可愛かったし、それの埋め合わせよ」
「……何か急に受け取りたくなくなってきた」
「優子気付いていなかったけど、めくられる度に女の子になってくの可愛かったわー」
あの時舌打ちしたの母さんだったのか……
「それに、他の振る舞いとか言動とかも、今まで以上に女の子になってるわよ。やっぱり効果てきめんねー」

「そ、そうかな？」
「ええ！　さ、帰りましょ」
「うん」
相変わらず主に胸に視線を感じつつ電車で帰宅した時には昼ごはんの時間をとっくに過ぎていた。
お昼ごはんは食べられなかったが、代わりに母さんは「おやつ」と称してお菓子をくれた。
うーん、甘いもの美味しいな。
今日は土曜日なので親父もゆっくり自室で休んでいる、私も休もう。
……おっと、昨日みたいにならないようにっと。
仰向けになり、念のために薄い布団をかぶせて完全に見えないようにする。
本棚にあった別の少女漫画を手に取り、読書開始。これも感想文書くのかな……
コンコン
「優子ーちょっと来てー！」
ドアをノックする音と共に母さんが部屋に入って開口一番そう言う。
またカリキュラムか何かかな？
「優子、いい寝方ね」
「え？　どうして？」
「だって今のようにすれば見えないんですもの、極端な話中が丸めくれでもね」
「たしかにそうだけど……」
「で、やってほしいのはアイロンがけと服の畳み方と、後もう一つ生徒手帳よ」
あーアイロンがけもあったか。
母さんは、寝室にあるアイロンがけ用のテーブルの前まで案内した。
「はい、アイロンのかけかたをやります！　熱いから気をつけてね」

見ると、親父のYシャツが一つあり、これで練習するみたいだ。
「まずこれを見て見て」
そこには取扱絵図がある、アイロンの絵の中に「中」の字がある。
「今回はアイロンの設定は中に最初からなっているわね」
私もそれを確認する。
「じゃ、早速本作業に入るわよ。まずはこれ」
母さんが霧吹きを持ってシュッシュッとYシャツに吹きかける。
「やってみて」
言われるがままに吹きかける、服全体に染み渡った。
「うん、大丈夫よ」
「よし、アイロンをかけよう」
「あ！　こら！」
母さんに怒られた。「スカートめくられちゃう！」と思った次の瞬間に後ろから思い切り勢い良くスカートをめくられる。
「はぅあっ！」
へ、変な声が出ちゃった。抑えて必死に抵抗する。
「あらあらまあまあ可愛いわねえ……」
永原先生はめくったらすぐに手を離してたのに、母さんは相変わらずめくろうとしたままだ。
「や、やめて！　スカート引っ張らないでー！」
「はいはい」
ようやく手を離してくれた。
「いい？　水を吹き付けたら細かいシワを伸ばしてからアイロンを掛けないとダメよ。さ、指示を守らずに先走った罰として暗示よ」
「私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
「あらあら、声に出ちゃって可愛いわねえ……」
うううっ……もう暗示かけなくても恥ずかしいのに、こんな暗示かけさせられたらもっと恥ずかしくなっちゃうよ。
「さ、両手を使ってやってみて」
「う、うん」

細かいシワを伸ばし、これでＯＫだ。
「じゃあ、まずは襟からよ。アイロンかけてみて？　まっすぐに直線的にかけるのがコツよ？　やけどしないようにね」
「うん」
ゆっくり丁寧に、数往復アイロンをかける、「両端にしわができた時は、先の部分を押し当てるといいわよ」と言うアドバイスもあり、順調に進む。
「アイロンは表と裏、どっちからかけるべきだと思う？　間違えてもスカートめくらないから答えてみて」
「えっと、裏なの？」
「正解よ。なぜなら、表からやると表にシワが残りやすいからよ」

「さ、まずは肩の部分をかけてみて？」
「はーい」
アイロンをかける。言いつけどおりに直線的にかける。アイロンがけ中にスカートめくられたらやけどしちゃうかもしれないから、特に慎重に慎重に……っと。
「よし、いいわよ。右肩をやったら今度は右袖を、その後に左裏よ。同じように慎重に一直線にね」
言われた通り丁寧に仕事をする。
「うん、じゃあ次は前よ。Ｙシャツのポケットのある部分は気をつけて。膨らみを意識して、やってみて」
「はーい……あ、母さん、ボタンはどうするの？」
「ボタンはアイロンの先を入れてやってみて」
「はーい」
丁寧にシワを伸ばす、僅かに残ったシワも見逃さず、直線的にアイロンをかけていく。
「うん、ＯＫだね。反対側も同じようにやってみて」
丁寧にアイロンがけをする。まためくられたくないし……
「あらあら、凄いわね。これで完成よ。後はアイロンの電源を落としてちゃんとハンガーにかけて完成ね。もう一個注意点としては暖か

いうちに畳んだり着たりしちゃダメよ。もちろん、まだまだ教えることは多いけど、とりあえず、アイロンはここまでよ」
「は、はい」
「それじゃあもう一つ、これを受け取ってくれる？」
「ん？」
母さんが小さい紙を渡す。よく見ると、そこには男だった頃の俺の写真と名前、生徒手帳にはめこむ学生証部分だ。
「これを、このシュレッダーにかけるのよ」
母さんは、シュレッダーを指差す。
「個人情報なんかは読まれたりしないように、必ずこれにかけて細かく刻むのよ。まずはボタンを押してやってみて？　指は絶対に入れないでね」
シュレッダーのボタンを押す。一瞬回ったような音がしたが何も起こらない。
紙を隙間に入れると、一気に機械が動き出した。
ういいいいいんという音とともに紙が飲み込まれ、切り刻まれていく音がする。
ふと、男時代の写真が目に入る。シュレッダーはそんなこともお構いなしに、写真ごと切り刻んでしまった。
どこかで、名残惜しい気分も出てきた。もう戻れるわけがないのに……
「はい、よく出来ました。じゃあこれ、生徒手帳と、新しい学生証よ」
母さんはそう言うと、生徒手帳と、学生証部分を渡してきた。そこには、今日取ったと思われる写真と、「石山優子」と書かれた氏名欄、新しい学籍番号が付与されていた。
「母さん……これ？」
「ええ、優子の手で、シュレッダーにかけさせないと、渡せないものだったわ」
改めて、女の子の証をもらえた。人生の途中から女の子になった自分が、女の子として扱われることへの喜びを胸に秘め、新しい学生証を生徒手帳にはめこんだ。男の頃の記録を消す辛さは、女の子になれ

る、認めてもらえる喜びに、簡単に消されてしまった。
夕食まで休む、先程と同じく少女漫画を読みながらスカートを布団で覆いつつ。
早速夕食の手伝いに母さんに呼ばれる。
……よし、夕食も頑張るぞ！

「あ、そうそう優子、明日のカリキュラムなんだけど」
「うん」
夕食を手伝っていると母さんが明日のことについて話しかけてきた。
「制服あるでしょ？　あれと同じくらい短いスカート穿いてくれる？」
「あ、うん」
そういえばミニスカートのカリキュラムまだやってなかったな。
制服はまた別だけど。
「明日はそれ穿いてお出かけするのよ」
「うん、それで？」
「お出かけが終わったら最後に一個やって全部のカリキュラムが終わるわよ。ただし、言葉遣いや振る舞いが悪かったら今日みたいにおしおきだからね」
「え、まさか外でスカートめくり!?」
「ふふっ、大丈夫よ、お出かけの時はそんなことしないわ、それに、ミニスカートのお出かけは一人で行ってもらうわよ」
「そ、そうなんだ……」
安心した。皆が見てる前でスカートめくられるって、下手したら通報案件だ。いや、このお仕置きも通報案件だよね？
んー、なんだかよくわからなくなってきちゃった。

「……お、優子、カリキュラムは順調か？」
「うん……順調よ」
夕食の準備をしていると、親父が書斎から出てきた。

月曜日に向け、ゆっくり休憩するのが親父のスタイルだ。
「あらお父さん、ええ、順調よ。これならちゃんと、明後日にも復学できそうよ」
「そうか、良かった。優子は大変か？」
「ああ、うん。特に今日からは後半ってことで一段と厳しくなったよ、あはは……」
不適切なことしたらおしおきにスカートめくりされて、しかも恥ずかしがらないといけないなんて言わないほうがいいだろう。
「でも、優子は優秀みたいよ。永原先生も褒めてたわ」
「そうか、それは良かった」
今日の夕食は天ぷらとからあげと言う揚げ物攻勢で、母さんから油の使い方を習っている。
ちなみに、初めてエプロンを着た。
こういう時には「失敗してもスカートめくりはしない」と最初に宣言するんだから、分別は一応あるみたいだ。
「さ、油に気をつけて」
「はい」
海苔やかき揚げ、野菜の天ぷらを盛っていく。
我が家のメニューは特にローテーションが決まっていない。基本的にその場の気分で作る。幸いにも親子三人は食べ物の好き嫌いが似通っているから、その手のトラブルも起きない。
「はーいできたよー」
親父はやや孤独感を感じる表情をしている。
考えてみれば、男だった頃は自分と二人で世間話をしながらのんびりと母さんを待っていた。
幸いにも親父は知的好奇心が旺盛だったから、どんな話にも食いついてきた。
親父は、「興味ないからもういい」なんて口が裂けても言わない人だ。
そうやって会話が盛り上がっていると母さんが食事を持ってくる。
今までは男二人に女一人の家庭が、男一人に女二人となってしまっ

た。
そして、自分は女の子として生きていくために、こうして家事を覚えさせられている。
親父は話し相手がいなくて、テレビばかり見る日々が続いている、カリキュラムが終わったら、家事手伝いばかりじゃなく、親父の話し相手にもなってあげないと。
「「いただきます」」
3人で食事を食べる、自分が女になったため、それ以来作る量は今までより少し少ない。
そして、食べ終わるのも、一口の小ささにまだ戸惑ってるのか、自分が一番遅くなったから、全体でも少し遅くなった。

「「ごちそうさまでした」」
一人息子が一人娘になるだけで、家庭のいろいろな部分が変わってくる。今日も母さんに頼まれた皿洗いを、前回の復習通り行う。特に怒られず、また訂正もされず、スカートもめくられなかった。
母さん曰く「お父さんには刺激が強すぎるからめくらない」ということだった。
ただし、「今回は隙がなかったけど、もしお仕置きが必要になったら後でまとめておしおきされる」らしい。
ご飯が終わったら風呂だが、その前にトイレに行こう。
トイレに入り鍵を締める。そして私はスカートをぺろりんと上までめくる。
そういえば、今日は何度もされたけど、トイレではいつも自分でしてるんだよな。
それがもうあんまり恥ずかしくないというのは、やっぱ他の人に見られるという要素が大事ということだ。
ともあれ、パンツを脱いで準備完了だ。
脇に挟むのは結局気分次第になった。
終わったらビデを押して、トイレットペーパーでよく拭いて流した後パンツとスカートを元に戻す。

そして自室にある箪笥からパジャマを取り出して脱衣場へ。
脱衣場へ行ってみて初めて気づいたが、今日は唯一のワンピースタイプのパジャマだ。
スカートで寝るって絶対寝ている間にめくれちゃうと思うんだが、どうなんだろう？
うーん、安全策を取るならもう一回箪笥に戻って撮り直すだけど、例のごとく身体が寒くなってきた。早くお風呂に入りたいと言っているし、このまま行こう。

「明日で終わりかあ……」
髪と体を洗い、髪を縛り上げて湯船に浸かる。ようやく私の憩いの一時が訪れる。
風呂なら裸だからパンツ見えてるとかそう言うのを気にする必要もない。
明日はカリキュラムの最終日、冷静に考えて、一番厳しいことをする日だ。
それにしても疲れた。いきなり怒られるしいきなり褒められるし、その基準が全くよく分からない。
むしろいきなり怒られるよりも、いきなり褒められる方に疲れた気もするよ。いや怒られるよりましなんだろうけど、なんというか褒め方が……うん、悪気はないしあれが一番効果的なんだろうけど……
……考えても仕方ないか。なるようになるでしょ。女の子らしくなってるって、先生も、母さんも褒めてくれてるし。
でも、明日は終わりじゃない、むしろようやくスタート地点に立つためのものだ。
今日という日が終わりつつある中、風呂で色々と考えていた。
少しのぼせたけど、いつもより充実した風呂だった。

# 女の子の修行４日目　前編

朝起きる。寝返りを打ったのかな？　ちょっと体を捻っている。
一旦仰向けになって、うーんもうちょっと寝ていたい……
すると目覚ましの音がなる。
「……分かったよ起きるよ」
目覚ましに怒っても何にもならないが、ともあれ、ボタンを押して起床する。
ベッドから脱出して……ってパンツが丸見えだ！
そうか、昨日ワンピースタイプのパジャマにしていたから、寝ている間にスカートがずれ上がったんだ。
ともあれ立ち上がってみる。すると重力に従ってスカートが元の位置に戻る。
箪笥に向かい、今日の服を考える。
確か今日のカリキュラムはミニスカートで出かけるだよな……
水色のワンピースのひらひらしたミニスカートを手に取ってみる。昨日の赤い服に負けず劣らずの可愛らしさと幼さを強調した服だ。
「こ、これでいいかなあ……」
とにかく、丈が制服程度に短ければなんでもいいんだし、これにしようそうしよう。
ともあれ、下着を着替えて着てみる。膝の上までかなり短く、中がとってもスースーする。
自分の容姿もだんだん記憶できてきたので、鏡を見なくても、今の自分がどういう恰好なのか、ある程度想像できるようになった。うん、可愛いんじゃないかな。
服を着る時間は短くなったが悩む時間も増えてトータルでは変わらなかったが、今日は即決できた気がする。
「優子おはよう。さ、今日がカリキュラム最後の朝ごはんよ」
「うん、知ってるよ」
「そうね。で、カリキュラム終わったらご飯は学校のある日は手伝わなくていいわよ」

「はーい」

母さんの話によると、カリキュラム終了後もアフターとして態度や言葉遣いに対する注意もあるけど、そこまで厳しくはしないらしい。あんまり厳しくしすぎるとそれはそれで問題だとか。よくわからないけど。

「じゃあ優子、これを持っていって」

朝食を食べ終わり、以前本を分けた所に誘導される。

そこには男時代にあった男物の服と、少年漫画などが入った2つの袋が台車に縛られていた。

とにかく数が多い。そのために台車付きだ。

「これらを、古本屋と古着屋で売るのが今回の課題よ。荷物が多いからお店の最寄り駅までは車で送っていくわ。ただし帰りは一人で帰ってきてね」

「はーい、じゃあ台車を押すよ」

「うん、段差のある所はお母さんも手伝うわね」

台車を押す。玄関の段差がきついのでそこら辺は二人がかりだ。

母さんは車の準備もしている。

そして、なんとか車の収納スペースに入れる。不格好だが仕方ない。

「ミニスカートで車に乗り降りする時は、どこに人の目があるかわからないから見えないように気をつけなさい」

「う、うん」

「特に、降りる時には気が緩んでパンツ見えちゃってることがあるから、十分注意してね」

「はーい」

言われた通り、周囲の目を気にし、足を開きすぎないように慎重に車に乗る。女の子として慣れればうまく素早く見えずに乗れるんだろうけど、私はまだ女の子初心者だから慎重にしないといけない。

母さんが車を運転し、助手席には自分が座る。

車は順調に、リサイクルショップのある駅に向かっていた。
信号待ちの分、電車よりは少しだけ所要時間がかかる。
ともあれ、特に何事もなく駅についた。
「パンツ見えないように、足に気をつけてね」
「はーい」
よっぽどのパンチラスポットなのか、母さんは重ねて注意している。気が緩んだら後でスカートめくりされるんだ。慎重に車から出る。よし、ＯＫだ。
そして母さんと協力して、台車に縛られた荷物を取り出す。これで台車を押せばいいんだな。
「それじゃ、お母さんは帰るから、ちゃんと売ってちょうだいね」
「分かりました」

区役所の最寄り駅と同じ駅、区役所とは反対の方向に、巨大デパートがある。
その中に、古着屋や古本屋など、リサイクル店街がテナントにある。
元々は商店街だったが、商店街の人が協議して、このデパートに「発展的解消」が成された経緯があるそうだ。
経営の効率化による利便性の向上と、商店街の雇用を守るという２つを上手く達成したわけだ。
ともあれ、リサイクル店が並ぶ４階に行くためにエレベーターを探す。
台車を押しているからエスカレーターはダメだ。それに、今穿いてるスカート……この短さだとエスカレーターにはちょっと近づきたくない。
エスカレーターは省スペースのために折り重なっているから、真下から覗かれたらひとたまりもないことを、知っている。
にしても、台車効果もあるためか、以前よりも更に周囲の視線が激しい。
外から見れば、巨乳の美少女が多くの荷物を持って台車を押してい

る光景に見えるはずだ。
ともあれ、エレベーターの列に並ぶ。私は台車のために乗り切れないので、後ろに並んだ人を通す。
ちょっとイライラするが、すぐに二つ目のエレベーターが来たので安堵した。
後から来た人を先に通したくらいだから、次のエレベーターは私が最優先で乗る。
上を向いて案内を見て、自分の記憶が間違っていないことを確認し、ボタンを押す。
エレベーターには自分の他には１０人ほど乗った。自分の荷物スペースもあるから人数の割には混んでる印象だ。
若い不良風の男性３人組が居て胸をジロジロ見てる。
それを見て、猫背になる。見られるのはちょっと嫌な感じがする。
これが普通の女性なら気持ち悪がるだけで終わりだが、ついこの間まで男だった自分としては、３人の胸を見たくなる気持ちがわかってしまう。
彼らに悪気がないことは分かりきってるだけに余計に辛い。
ピンポーン
「4階です」
エレベーターの音声が伝えるので、台車を押してエレベーターを降りる。親切な誰かが「開」ボタンを押してくれていた。
また、さっきの男性３人組も、率先して一旦降りてくれた。
「すみません、ありがとうございます」
お礼を言う。男性３人組も顔が綻んで小さく頭を下げる。不良風だがとても親切だ。男だった頃はこういう気遣いをされた記憶が殆ど無い。というか、印象にも残らない。
エレベーターのドアが閉まる直前、「いやー可愛かったよなー」という話し声がかすかに聞こえてきた。
ふと疑問に思う。おばさんとか男だったら、あの３人組やエレベーターで「開」ボタンを押していてくれた人は今の私と同じように扱っただろうか？

「いやだねえ……」
あんまりいい考え方ではないことは自分でも分かっている。
でも、そういうことを考えざるを得ない。「人は見た目が9割」という説さえあるんだ。
今の自分はこれ以上無いほどの見た目だ。
いや、むしろ常に視線に晒されてジロジロ見られるんだ。多少の特権がなきゃやってられない。
頭で浮かんだ疑問を強引な回答で解決させた後、エレベーターの外にある案内を見つけ、古着屋への道を探る。
ん？　誰かの視線を感じたぞ。いつもとちょっと違う感じだ。
……うーん？　でも視線はいつものことか。
そんなことを考えながら、まず、古着屋に到着した。
「いらっしゃいませー」
「すみません、古着を売りに来ました！」
台車の紐の一つの結びを解き、2つの大きな袋のうちの一つを取る、しゃがまないように注意して袋の上をつかむ。うーん、かなり重たい。
すかさず別の店員が寄ってきて、とっさに古着の入った袋を持つ。
すると重たかった袋もぱっと持ち上がった。
「あ、ありがとう」
自分も自然と笑顔になる。男の頃は当然として、女の子になってからもあんまり笑わなかったから、笑顔になるのも新鮮だ。
「えっと、こちらの中ですね。袋開けても大丈夫でしょうか？」
「はい大丈夫です」
すると、店員さんは器用な手つきで袋の結び目を解いて、袋を破らずに開け、服を全て取り出してきた。
女性客に似合わない男物の服を見て一瞬怪訝な表情を浮かべたが、すぐに営業スマイルに戻り「では、こちらを取り扱います。しばらくお待ちください」と言って番号札を渡してきた。
買い取りの査定には時間がかかるはずだ。その間に、古着屋の隣りにある古本屋に立ち寄る。

「すみません」
「いらっしゃい！」
古本屋のおじさんが対応する。いかにも昔風のおじさんだ。
「古本買い取りって出来ますか？」
「お、買い取りだね。わかったぜ」
さっきと同様の作業を行って、本や雑誌などが大量に束ねられている束を台車から持ち上げる。
結構重い……並の女の子よりも筋力が落ちている上に、何気に胸が邪魔だ。
「お、おう大丈夫か？　ちょっと待て」
そう言うとおじさんがレジからこっちに回ってきて。本の束を代わりに持ってくれた。
「あ、ありがとうございます」
何だろう、今日は他人に感謝してばかりだ。
「よし、じゃあお嬢ちゃん、これを渡しておくぜ。中央に待ち合い広場があるから呼び出されてもそこで確認できるぜ」
「は、はい」
こうして、番号札を二個受け取った。
台車は折りたたみ式なので、荷物が切れた時は折りたたんでそのままコンパクトに持ち運びができる。何気に便利だが、それでもスペースを取るのには変わらなく、これで電車に乗れるかちょっと疑問だ。
中央の待合所に行ってみると、家族連れなどで少し混んでいた。
疲れたのもあったので、トイレの近くにあるベンチに座って広いスペースで休む。
「はー疲れたー」
リラックスしながら、これまでを振り返る。
重いもの、助けてもらってばかり。あんなに重く感じたもの、以前の自分なら難なく運べたはずだ。実際、店員さんやおじさんはひょいと持ち上げた。
でも、こうやって大変そうな所を助けてもらったという経験もないし、あるいは他の人が助けられているのを見たという経験もあまりな

かった。
女の子の生活は不便だと言った。永原先生も言っていた。
実際、病院で起きてから、早速不便の数々を味わった。確か最初は、背が低くて届くはずのものが届かなかったんだっけ？
でもこうやって、男の人に助けられた。古着屋の店員さんも、古本屋のおじさんもだ。
今日捨てたのは昨日と同じ、かつて自分が男だったということを示す服と本だ。
これらを全て、女の子の格好をし、女の子として捨てる。
荷物が重いから、男性に助けてもらう。もう十分知っているはずだったのに、改めて自分がいかにか弱い女の子かということを思い知らされた。何もかも、切り替わっている。
今日は日曜日、倒れたのが月曜日の昼。まさしく、今週は男女の違いを思い知る1週間だった。
「ふう……」
またため息。この一週間、男から女になって、昨今世間で騒がれている男女平等がいかに絵空事かということを、嫌でも思い知った。
ともあれ、そろそろどちらかが終わっているかもしれない。
待合所に戻る……お、空いてる空いてる。
とりあえず座る。っと周囲の視線が気になる。
昨日習ったようにパンツが直にならないようにスカートの裾を抑えながら、膝を揃えて座る。
……んー何か視線感じるなあ。今までの好奇心と下心に溢れた視線という感じじゃない。
とは言え、それを知るすべもない。モニターの表示を見ると、どちらもまだ完了していないようだ。
あてもなくボーっとする。
……少し体を丸める、胸への視線が気になってしまう。でも、猫背はあんまりいいことじゃないだろう。
もっと自信を持ちたいところだけど、どうしようかなあ……
そう考えていると、古着屋の番号に自分の番号が点灯していた。

「すみませーん」
「あ、番号札お見せ出来ますか？」
番号札を見せる。
「はい、えーっと、買取価格はこちらになります」
昨日と同様、相場はよくわからないがともあれ言われるがままに買取価格とレシートを受け取る。
そして、もう一度元のスペースに戻る。古本屋はまだのようだ。
……結構時間が経った。母さんにお昼ご飯を食べていっていいか聞いてみよう。
「お昼食べていってもいいですか？」っと。
……お、すぐに返信が来た。
「はい、大丈夫です」か。
さて、許可も出たし今日の昼は何にしようかな……
……おっと、その前に古本屋の買取査定が終わったみたいね。
「お、嬢ちゃん。こちらがレシートと買取額だ」
「はい」
「あ、状態悪くて売れない本は返すぜ。それともこっちで処分するかい？」
「あ、お願いします」
処分せずに持って帰る訳にはいかない
「あいよ、じゃ、毎度あり」

「ふう……終わった終わった」
今日の課題はここまでだ。さ、デパートのレストランへ行って帰ろう。
「うーん、どこにしようかな？」
だいぶ迷う。うーん、うどん屋さんにしようかな。

うどん屋さんに入る。
1名であることを告げカウンターの席へ。
「えっと、たぬきうどん1つお願いします」

「温かいうどんでいいですか？」
「はい」
待っている間、暫く考える。これが終われば後1個のことをやって終わりだという。
一体何をするんだろう？
料理や掃除、洗濯、アイロンがけは既にした。
女の子としての座り方や、パンツ見えない方法とか、少女漫画を読んで感想文を書くとかたくさんあった。
そして、男時代を捨てるために、わざわざ女の子を強調した格好をさせて、リサイクル店に売るという課題まであった。
うーん、まだやらなきゃいけないことって何があるんだろ？

そんなことを考えていたら、うどんが来た。
うん、まずはこれを食べよう。
うーん、やっぱ本場さぬきうどんを名乗るだけあって美味しいなー。
でもうどん大好きの某県民からはまだまだなのかな？　よく分からないや、ともあれ私はこれでも満足ね。
「ありがとうございましたー」
会計を払い、店を出る。
これから電車に乗る前にトイレに入ろう。
トイレでの台車を引きながらの移動はちょっと苦心した。幾分他の人の通路を狭めてしまうからだ。
ともあれトイレに寄ってからデパートを出る。
うーん、なんか付けられてる気もするけど、まあいいか。
駅へ向かう道すがら、少し風が強くなる。
「とっと」
まだ脅威じゃないけど、少しだけスカートがはためいている。
突風で一気にめくれそうになった時のために、常にスカートを警戒……

ドンッ
「あ、すみません」
「すいません」
サラリーマン風の人とぶつかってしまった。相手も謝る。
うーん、スカートに気に取られすぎてもいけないのか。でもパンツ見られるの嫌だしなあ……
とりあえず、反射神経を鍛える必要性がありそうだ。
そういえば、永原先生が短いスカートを穿き続けると女の子らしくなると言っていたけどこういう緊張感もあるのかな？
ともあれ駅についた。ＩＣカードの余裕があるかどうか調べてみたが、まだあった。
……改札だ、ギリギリ通れそうだ。
ピッという音とともに台車を横にすることでなんとか……
「ピンポーン」
あっ遅すぎた。
うーん、ＩＣはタッチしたし……お？　駅員さんだ。
「大丈夫ですか？　今通しますよー」
「は、はいすみません……」
次はもう少し素早く出ないと。
また男性に助けられてしまった。
駅は高架なので例によってエレベーターを使いホームに出る。
電車は後４分で来る。その間、ホームの行列に並ぶ。
「間もなく、４番線に、電車が参ります」
……電車が来た。風が吹き付けるが前の人の影に隠れていたためなんともない。最前列じゃなくてよかった。
電車に乗って自宅の最寄駅に到着。今度は予め掴み上げながらタッチすることで、制限時間をオーバーしなかった。
さすがに２回も駅員に助けてもらうのはみっともないだろう。
ともあれ、無事に家に帰ることができた。帰りはほとんどいつもとは違う視線を感じなかったし、どうやら「付けられている」と言うのも気のせいだったようだ。ここの所、私も流石にナーバスになりすぎ

たみたいだな。

# 女の子の修行４日目　後編

「ただいまー」
「おかえりー」
家の鍵を開けて「ただいま」と言うと親父の返事がしばらくして返ってくる。いつもは母さんに遠慮して返事をしないから、母さんが居ないということだ。
玄関の靴を脱いだ先に置き手紙を発見した。
それによると、「優子へ、母さんは夕ご飯の食材に買い物に行っています」だそうだ。そういえば玄関に何故か車がなかったが、買い物に使っているのかな？
台車は玄関に置いておけばいいだろう。とりあえず鍵を締めて自室に戻る。
あー物凄い疲れた。
早く横になりたいと思い、布団に仰向けにダイブする。
スカートが空気圧で捲れてパンツがべろんと丸見えになる。
一瞬、たまにはだらしないのもいいかなと思ったが、「万が一」のことを考えて元に戻す。
もし見られていたら大目玉だ。結局昨日と同様に、リラックスできるようにスカートを布団で隠す。
少し疲れでうとうとし始めた頃、母さんの「ただいまー」という声が聞こえた。
「優子ーちょっと運ぶの手伝ってー？」
「あ、はーい母さん！」
母さんに呼ばれ、食卓まで買ってきた品物を運ぶ。
夕食まではまだかなり時間がある。
「優子、お疲れ様」
「うん、疲れたよ」
「疲れている所悪いんだけど、一ついいかな？」
「何？」
「優子、休むのはいいんだけど、あんな風に休んじゃダメよ？」

「え？　え？」
　一体、何のことを言ってるんだろう？
　あの場に母さんは居ないはずなのに。
「ふふっ、お母さん、あの後尾行させてもらったわよ」
「ど、どうして？」
　そうか、あの視線は母さんのだったのか！
「カリキュラムの本にも書いてあったわよ、『一人で行動することになるため、気が緩みがち』って。優子、４，５人の男にパンツ見られてたわよ」
　ぜ、全然気付かなかったよ。
「しかも、結構じーっと見られてたわよ、あれ、絶対帰ったらあれするパターンよ」
　ちょ、ちょっと……想像すると嫌な気分になる。まさか自分がアレの材料になるなんて……
「というわけで優子、外ではスカートめくりは出来ないから、代わりに家でスペシャルなおしおきをするわよ」
「あ……あの……」
　こ、怖い……恐怖を感じる。母さんの目が笑ってるのに笑ってない。
「優子……スカート、自分でめくりなさい！」
「えええええええ!!???」
「ふふっ、スペシャルって言ったでしょ？　明日はもう学校よ。そんな直前でこんなはしたないことしたんだもの。もう普通のおしおきじゃダメよ」
「うううっ、嫌だよお……恥ずかしすぎて死んじゃうって……」
「恥ずかしさのあまり死んだ人間なんて聞いたことないわ。さ、やらないとごはん抜きよ」
「ちょっと、それはさすがに虐待に片足突っ込んでるわよ！」
「ふふっ、でもそれが優子のためよ。優子が女らしくなるためにも、女らしくない行動したらおしおきしなくちゃ」
「は、はい」

女の子になれてない自分が悪い。そう言い聞かせながら、意を決してスカートの袖をつまむ。既に両手は震えて目も細めている。
「じゃあ、お母さんがいいって言うまでめくりあげてね」
「は、はい」

少しスカートをめくる、パンツ見えない程度に上げてみる。
「あ、あの……」
「全然ダメよ。ほらっもっと」
「あうううう」
更にめくる、パンツが完全に見えている。
恥ずかしい、恥ずかしいよお……早く終わってよー
「まだよ、もっともっとよ」
おへそが外気にさらされる感覚がする、下乳の部分に手が当たる。ワンピースを選んだことが裏目に出て、完全に丸見えになっている。
「ふふっ、いいわよ」
「あの、もう戻してもいい？」
「ダメよ。この状態で暗示かけてね。ちなみに、やってしまった過ちと反省を最初に加えるのよ。そして、今回はちゃんと声に出してね！」
注文が多いよお……
「わ、私石山優子は、デパートでだらしなく休憩して、パ、パンツ見せてしまいました……お、女の子らしくない、は、はしたないまねをしてごめんなさい……」
「ほら？　で、今はどうなの？」
「パ、パンツ丸見えで恥ずかしいよお……」
「ふふっ、スカート下ろしていいわよ」
ようやくお許しの言葉が出る。
「ふえええ。恥ずかしかったー」
「ふふっ優子、今までにないくらい可愛かったわー」
私は、恥ずかしさのあまりその場でへたり込んでしまった。顔がすごく熱い。

「あらあら、やりすぎちゃったかしら？　でも、本当に女の子になったわね優子」
「……」
　とっさに顔を手で覆う、私の顔は今文字通り顔から火が出るような状況になっている。
「ふふっ、カリキュラムの成果が出ているわ。さ、優子。気持ちが落ち着いたらお母さんのところに来てね。まだカリキュラムが少し残っているわよ」
「は、はいっ」
　へたり込んだ私を尻目に、母さんがリビングに消えていく。おしおきというシチュエーションがますます恥ずかしさを強めている、そんな気さえしてきた。
　しばらく茫然自失していると親父がトイレに行きに書斎から出てきた。
　私のへたり込んでいる場所は親父の通行の邪魔にはなっていないが驚いて近寄ってくる。
「どうした？　優子。そんな所に座り込んで……」
「はっ、あごめんなさい！　お母さんに呼ばれてるんだった……」
「何かあったのか？」
「ごめんなさい、何でもないわよ。ちょっと疲れただけ」
「そ、そうか……」
　本当のこと話すと色々と厄介になりそうなのでやめておこう。

「……母さん」
「あ、優子。それじゃあ最後のカリキュラムに行くわよ」
「は、はい」
「ところで優子、あなたは今まで女の子としての生活を体験してきたけど、まだ生活を送る上で足りないわ。一人前の女の子になるためには、どうしても習得しなきゃいけないことがまだあるわ」
「う、うん」
「これはある意味家事より重要よ……そしてこれは男子禁制だから、

優子の部屋で鍵をかけてやるわ」
「ごくりっ」
い、一体何をするんだろう？　今までのカリキュラムと違って妙に仰々しい。
「それは……これよ！」
そう言うと母さんは、何やら白い布切れを出してきた。
「こ、これって？」
「ずばり、生理用ナプキンよ！」
せ、生理……
「優子も女の子になったんだから、必ず来るってお医者様言っていたでしょ」
そ、そうだった。お医者さんも生理も来るし、それどころか妊娠もするって言ってたもんな……
「本当はカリキュラム中に来てくれることが最良だったんだけど、最後まで来ない場合は最終日に行う決まりになってるのよ」
やはり、女の子になる以上、この話は決して避けて通れないというわけね。
「じゃあ、優子！　部屋に行くわよ。それからこの張り紙を貼るわ」
そこには「お父さん立入禁止！　聞き耳を立てるの禁止！　これに違反した場合は1週間食事抜き！」と、わざわざ母さんの署名付きで赤い色で書かれている。もちろん部屋に鍵をかけた上で、だ。
そんな厳戒令の中、母さんによる講習が始まった。
まず、ナプキンの使い方の前に、生理周期の話を叩き込まれた。生理については重い人軽い人がいて、母さんは若い頃は重かったが今は落ち着いているそうだ。
おおよそ２５日から４０日くらいが周期らしい。とにかく重いと気分が悪くなったり、下腹部が痛くなったりするそうだ。
そして、重要なのが、生理になると血が出ること。そこでナプキンが必要になるという。
「いい？　ナプキンはここを摘んで広げるのよ？　やってみて」
「うん、こうかな」

「これは羽つきだから……あ！　そうだったわ、練習用のパンツが必要ね」
　幸いにもここは自分の部屋なので、私がパンツを2つ箪笥から持っていく。
「あーこれじゃダメよ。ちょっと待って」
　母さんが箪笥に来る。
　そして、奥の方のパンツを取り出してきた。
「はい、これが生理用パンツよ。生理の時はこれを穿くの。で、これをこうやって……こんな風にするのよ。やってみて」
「えっと、こうやって……こう？」
「そうそう、これでパンツが汚れなくなるのよ」
「ふむふむ」
「ナプキンには昼用と夜用、後は重い時軽い時で使い分けなきゃいけないわよ」
「ぜ、全部覚えるの？」
「うーん、それでもいいけど、いきなり暗記してねは大変よ？」
「うん、無理だと思う」
「というわけで、はい。このプリントを渡しとくわ」
　母さんが渡したプリントは夜用昼用で、更に用途に合わせたマークや経血の多さで推奨される商品を表にしてまとめたものだ。
「さ、まだまだナプキンについては話すことはあるけど、今日はこの辺にしておくわ。どうしても経験で覚えないと覚えられないこともあるからね」
「はーい」

「さ、次にタンポンについてよ。もしプールや試験なんて言う時に来ちゃった時はこれを使ってね」
　母さんはポケットからその「タンポン」を取り出す。
「これは、生理中に中に入れれば大丈夫よ。ただし、ヒモを切ったり、あんまり長時間入れたりしないでね」
「う、うん……」

大事なことだけど、やっぱり覚えていくのは大変だ。
「これはナプキンだと不安だという時に使うのよ。でも、最初は慣れないと思うから、ナプキンから初めてね」
「はーい」
「タンポンは副作用もあるから、ちゃんと説明書を読むのよ。じゃ次はおりものについてね」
「おりもの？」
また新しい単語が出てきた。
「そう、これは生理とは違うんだけど、パンツが白く汚れることがあるのよ。そう言うときに使うのがこれよ」
母さんはナプキンと似ている別の形状のものを取り出してきた。
「これがパンティライナーっていうものよ。たまにＣＭでやってるでしょ？」
「う、うん」
「これは生理の時は使えないけど、おりものには効果を発揮するわ。使い方は……ここに、こうやって……こうするの。やって見て！」
母さんの手本を真似る。よし、こうかな！
少し一手間かかったけどなんとか出来た。
「薄くて快適だからおりものが気になったら試してみてね。で、このパンティライナーとナプキンだけど」
「う、うん」
「もちろん、学校に持っていかなきゃいけないものよ」
「当たり前よね。でも、どうやって持ち運ぶの？」
「それ用のポーチを持ち歩くのよ。ほら、これとか」
それは、服選びの時に買っておいて使っていなかった小さな入れ物だ。
「いい？　ナプキンは絶対に他人に見せたりとかしないでね。女子校だと『ナプキン恵んで』とか言って宙を飛び交う光景もあるらしいけど、そんなことをしたら女の子として失格よ」
「う、うん」
それは男の感性でも分かる。

「じゃあ明日から女の子の日が来てもいいように、この中に優子の生理用品を入れていくわね」
　そう言うと、先ほどのナプキンとタンポン、パンティライナーを入れていく。
「学校にはしばらくこれを絶対忘れちゃダメよ」
「そしてもう一つ、これも入れておくわ」
「え？　カレンダー？」
　母さんが入れたのは小さなカレンダーだ。
「そうよ、これを使って日にちを記録していくのよ」
「う、うん」
「生理は周期になっているわ。優子は老けないからずっとそのままよ」
　なるほど、これを使えば次にいつ生理になるかというのも分かるのね。
「さ、これで本来なら講習は全て終わりなんだけど、母さんからもう一つどうしても優子に講習してほしいことがあるわ」
「え？　何？」
「それは……化粧よ！」
「け……化粧!?」
「ええ、化粧は女の武器よ。でも、このカリキュラムにはなかったわ」
「そ、それって多分ＴＳ病になると老けないからじゃ……」
「そうねえ、でもお母さんは納得行かないわ！」
「そ、それにほら。あ、あたしぃ……け、化粧なんかしなくてももう十分可愛いし」
「ダーメーよー！　いい？　化粧は女として、絶対、ぜーったい必要なものよ！」
「で、でもどこで化粧なんてする機会が……」
「ふふっ、それはありとあらゆるところよ。それに、優子みたいに化粧しなくても美人な人でも『ナチュラルメイク』をするともっと輝くわよ」
「そ、そうかなあ……」

なんか騙してるみたいな気もするんだけど、やっぱりそれって男の考えなのかな……
「この短い時間で教えられることは多くないけど、ともかく今日は口紅からよ」
「う、うん」
母さんはポケットから口紅を取り出す。これはカリキュラムにない、いわば個人レッスンだ。
「いい？　口紅は女の口を艶やかに見せるわ」
「こうよ、力を入れすぎないで。さっやって見て？」
正直に言うと、私は乗り気じゃないが、やらないとまたスカートめくられて恥ずかしい暗示をかけさせられると思ったのでやってみることにした。
「えっと、こうかな？」
「うーん、初めてにしてはいいけど。はい鏡」
「……」
なんか不自然に唇が強調されているような……
「母さん、やっぱり化粧ない方がいいわ！」
「うーん、ちょっと待ってて。お母さんが家の化粧のすべてを持って優子を更に可愛くするわ！」
だ、大丈夫かな？　可愛くしてくれるのは嬉しいけど……
母さんは洗面所の方向へ消えていった。ぼーっとしているのも何なんで別の少女漫画を読んで見る。
しかし、冒頭を読み進めていると、すぐに母さんが戻ってきた。
箱一つ、化粧を持ってきた。
「さあ、母さんが優子をもっときれいにするわよ！」
随分と気合が入っているなあ。
「さ、優子はじっとしててね、母さんが化粧の威力を見せてあげるんだから」
「か、母さん、な、なんか目的が変わってる気がするんだけど……」
「これは女としての意地よ！　化粧のすばらしさを教えてあげるんだから！」

そう言うと母さんは、しきりによく分からないいろいろなものを取り出して、顔にかける。
パウダー？　他にもなんか小さな叩きで眉毛調整したり。
何よこれ!?　何分掛かるのよ!?
「まだよ、まだ動かないで」
結構じっとしてるのも辛い。早く終わってほしい。
「はい、出来たわよ」
ふう、と安堵の表情を浮かべたのも束の間、母さんが手鏡を取り出す。
「どう？　きれいでしょ？　見違えた？」
「……」
何だろう、確かに所々まつげとかも整って入る気はするけど……
なんか違う。
「母さん、私、あんまり違いがわからないよ」
「え？　そう？」
「確かに少し綺麗にはなっている気がするけど……気がするってだけで時間と労力に釣り合ってないわよ」
「……優子、それじゃダメよ」
「私、やっぱり化粧しなくても十分だと思う。永原先生が化粧をカリキュラムから除外したのだって老けないからだし」
「うーん、優子がそこまで言うなら仕方ないわね」

「お母さんー！　夕食の準備しなくていいのかー!?」
部屋の外から親父の声が聞こえてきた。
「あ、大変！　こんな時間！　お父さん呼んでるわね。さ、夕食の準備するわよ」
「それよりこの化粧どうやって落とすの？」
「ちゃんと顔を洗うのよ！」
なんか面倒が一つ増えただけな気もする。
あ、親父は夕食中化粧のこと全然気付いていない様子で、母さんの愚痴を聞いて初めて気付いたという反応でした。やっぱり自分には

いらないな。と思ってしまいました。

夕食が終わり、洗面所で化粧を落とし、そして風呂に入ってパジャマに着替える。このルーティンはいつものことになった。そして、残りの時間、少女漫画を読む。

少女漫画を読みながら、明日からいよいよ学校だということを考える。

「皆、びっくりするだろうなあ」

自分はもう女の子になって6日間経つが、学校のクラスの中ではまだ私のイメージは粗野で乱暴で悪人顔な「石山優一」だ。

明日は月曜日、倒れたのが先週の月曜日。ちょうど一週間休んでいた計算だ。

その間、勉強は殆どしていない。勉強以前の事が必要だったとはいえ、流石に取り戻すのに苦心しそうだ。

少女漫画を読んでいた。さっきより少し長い物語で、魔法使い、魔法少女の物語だ。

でも結局、クラスの憧れの男の子とそのまま結ばれる。そう言う意味ではこれも結局恋愛ものだ。

本当は悪役のラスボスがその憧れの男の子で、クライマックスでその正体を明かす。

何やかんやでラスボスを倒した後に、告白してハッピーエンドだ。

少女漫画や女性向け漫画ばかり読んでいたから、女の子が考える素敵な男の子の姿も分かってきた。

そして分かったのは、間違いなく男の頃の自分はそうではなかったということ。

ともかく明日だ。

明日、クラスがどういう反応を見せるのか、期待半分不安半分でなかなか眠れない夜だった。

# 第二章　女の子として見て

## 復学初日　前編

目覚まし時計が鳴る。手を合わせる。起きる。

今日は女の子になって初めて学校に行く日。色々準備があるということで永原先生に「いつもより１０分早く職員室に来て」と言われているが、まあいつもだいたいそれくらいの時間に学校に来ていたからいつも通りで大丈夫。

……とは言えそうにない。

着付けをしたとはいえ、まずはあの日と同じように制服を着付けないといけない。

カリキュラムも終わったのでもうスカートをめくられるおしおきをされることはないが、それでも登校初日から着崩すのは良くないだろう。

寝ている間に汗をたっぷり吸い取ったパジャマと下着を脱いで全裸になる。

やっぱりこの姿はすごくエロいと思う。

パンツとブラを取り出して穿いていく。さすがに1週間も繰り返せば苦労することはなくなった。

まだブラを止めるのに少し時間がかかるだけだ。

一昨日やったように制服を着ていく。スカートを穿いて丈を調整する。気持ち短めだ。

次に、シャツとブラウスを着て、そしてリボンだ。

一昨日はリボンが曲がっているというお叱りを受けたからここは特に慎重にっと。

更にまだギリギリ冬服だからブレザーも着る。そして一旦洗面所の鏡に移動する。

そこには制服姿の自分が居た。制服の上からでも目立つ巨乳、ストレートの黒髪、ふと髪飾りが目に入った。

そうだ、白い花型の髪飾りをつけてみよう。

……ってあれ？　つかないなあ……あ！　ここで留めるのか。うーん難しい。
ともあれ、初めて登校するにはこれでいいだろう。
自室に戻り、通学用のカバンを取り出す。
月曜日に倒れていて、教科書もこの中だ。
「あっ！　名前がまだ『優一』になってる」
危ない危ない。急いでボールペンで「優子」に直す。
……よし、これでもう大丈夫。朝食を食べよう。
「おはよー」
「はーいおはよう」
「お、優子、今日から学校か？」
「うん」
「頑張ってこいよ」
「そのつもり」
カリキュラムの時は毎日やっていた朝食の手伝いは今日はない。
母さん曰く、休日には手伝ってほしいとのこと。
いつものように、おかずは昨日の夕食の残り、そしてごはんと焼きパンという組み合わせだ。
朝食の後、しばらくニュースを見て学校へ出発する。いつものライフサイクルだ。
駅まで歩く道すがら、制服姿で学校外を歩くのはこれが初めてだが、いつも以上に凄まじい視線だ。
そりゃあそうよね。女子高生の制服姿、ましてやこんな可愛くておっぱい大きな子がいたら、見入ってしまうのは当然だ。心配なのはむしろ歩行者より車の運転手かもしれない。
脇見運転しなきゃいいけど……せっかく不老になったのに脇見運転の車にはねられたじゃシャレにならない。うーん、でも不老って言っても不死じゃないから死ぬ時はそうやって死ぬんだよな？
あーダメダメ、今からそんな遠い未来のこと考えても。今はとにかく、クラスにもう一度、「石山優子」として受け入れてもらわなきゃ。
カバンの横から定期券を取り出す。

ここの記名欄はまだ「イシヤマユウイチ」になっている。教科書や体操着などほとんど優一の痕跡を自分から消してしまったが、まだここだけは残っている。

有効期限が切れたら新しく「優子」として買えばいい。ということだった。

学校は幸いにも朝のラッシュ時とは反対方向にある。比較的空いているパターンだ。

列の先頭に並ぶ。

電車が来て少しだけ風を感じる。かなり弱い風だが、それでもほんの少しだけスカートが舞い上がる。

制服のスカートは、今まで穿いてきたスカートと比べても、風に弱いから特に注意しないと。

電車はダイヤ通りに運行し、異常なく学校の最寄り駅に到着。自分と同じ制服を身にまとった男女が歩いている。

改札口に行くために、一旦跨線橋を渡る。幸いにも行列になっていて、覗かれる心配はない。

そして改札口に再びＩＣカードをタッチして出る。

学校までの道のりもいつも通り。ただ、他の生徒の視線は突き刺さるようだった。

「あんな子居たっけ？」と言っているような感じだ。というよりも、後ろの女子がその話をしている。「見かけない顔だ」とか何とか言っているのが聞こえた。

学校の正門をくぐり、下駄箱へ行く。一昨日見た「石山優子」の場所を見つけ、開ける。

ローファーを脱ぎ、内履きを出す。周囲をよく見つつ、ローファーはしゃがまない程度にかがんで中腰のような格好で入れる。

上履きを履いて、職員室の方向に進む。

教室とは逆方向だが、永原先生に呼ばれているから仕方ない。というより、この姿でいきなり教室に行ったら、それも石山優一の席に座ったら不審者そのものだ。

職員室のドアをに近づいていると、トイレから永原先生が出てき

た。
「あ、石山さん、いらっしゃい」
「おはようございます永原先生」
「今日は一日目だね。それでいくつか確認しておきたいことがあるの」
「う、うん」
「石山さんも分かってると思うけど、ホームルーム前に石山さんの身に起きたこととについて話すわね」
「うん」
「全く無関係の転校生ということにするよりもいいでしょ？」
「うん」
　極めて稀とは言えＴＳ病自体は知られているし、石山優一がいなくなって石山優子じゃすぐにバレる。
　……というか、木ノ本にも一回この姿を見られてるし。
「そういえば、石山さん。月曜日の教材の名前欄、ちゃんと優子にしてある？」
「はい、今朝気付いて直しておきました」
「そう、よかった」
「それじゃあ、先生準備してくるからちょっと待ってて」
「はーい」
　一人取り残される。先生方が忙しなく動いているが、誰も気に留めない。
　職員の方は既に石山優一が女の子になったということを知っている。
　ふと数学の小野先生が目に入る。一昨日言ってたっけ？
　体育の着替えが男子とも女子とも離されたのは学年主任の小野先生の提案だと。確かにちゃんとした女の子として扱われないのは不満だけど、小野先生を責めるのは酷だ。
　きっと、私だって小野先生の立場になったら同じことを言うはずだから。

「お待たせーじゃあ行こうか」
永原先生が出てきた。教室へと急ぐ。
一時間目は永原先生の古典なので、いつも教材を持っている。
「新しい生活、頑張ってね」
「うん、まだまだ女の子としては足りないところはたくさんあるけど、カリキュラムが役に立つと思う」
「そうそうその調子、後もう一つ、学年主任の小野先生もだけど、この病気だということを知ると、女の子扱いしてくれないこともあるわよ」
「うん」
「石山さんは今までの患者さんの中でも、特に女の子になりたい気持ちが強いよね。こういう患者さんは珍しいんだけど……過去に一人だけ知っているわ」
永原先生が話す途中で予鈴が鳴る。廊下に残留していた生徒は一様にこちらを見ている。
転校生じゃないかと噂しているのも聞こえた。
「でもその子、今も生きていて７０歳位なんだけど、女の子扱いされない時はそれだけで随分怒って、荒れてしまう頃もあったわ」
「……」
「男に戻りたいなんて思うよりはずっとマシだけど、女の子として生きていく気持ちがあまりに強いのもそれはそれで苦労するわよ」
「先生、いいんです。私が望んだことですから」
「そう、じゃあ呼ぶまでここで待っててね」
そう言うと永原先生はドアを開け、待機している。
幸いクラスの人には見られていなかった。

「はーい席についてね」
永原先生も見た目若くて美人の先生だから、男子がちゃんと言うことを聞く。
「皆さんにお伝えすることがあります。今日から石山くんが学校に復帰することになりました」

男子を中心とした「えー！」という不平不満の声が聞こえる。あんだけ怒ったんだ、女の子になってみて分かる。これは因果応報だ。
「ですが、ちょっと特殊な事情がありまして。おそらく口で説明するより目で見たほうがいいと思われます」
男女の困惑の声が聞こえる。「先生は一体何を言っているんだ？」という感じだろうか？　ここからではよく分からない。
「石山さん、入ってきてー！」
その声と同時に私はドアを開け教壇側に立つ。
「え？　え？　女の子？」
「ちょ、ちょっと待てよ!?　え？　これが石山？」
「何だよあれ、滅茶苦茶可愛い上におっぱいでけえな」
明らかに男子が動揺している。
特に高月章三郎（たかつきしょうさぶろう）と篠原浩介（しのはらこうすけ）の動揺が大きい。高月はともかく、篠原は男時代、気が弱くてしょっちゅう怒鳴ってた相手だ。
そして女子も、男子ほどではないものの、一様に驚きの目を隠せない様子だ。
「はーい、皆驚いているのも分かるけど一旦静かにして。石山さん、自己紹介をお願い」
「石山優子です。先週はご迷惑をおかけしました。ちょっと大変な病気になってしまって1週間学校をお休みさせてもらいました。今日からまたよろしくお願いいたします」
クラスに更に動揺が広がる。
クラス一、あるいは学年一の美少女と言われていた木ノ本桂子を超える美少女がそこに立っていて、しかもそれが乱暴狼藉の石山優一が女の子になった姿だというのだから。
「石山さんは、ＴＳ病という身体が女の子になってしまう病気になりました。世界でも稀な病気ですが、比較的日本人には多い病気です。みなさんも、これから石山さんは女子の一員として、よろしくお願いします」
「「はーい」」
クラスメイトたちも動揺しつつ、一応の返事をする。

そのままかつて自分が座っていた机に座る。もちろんスカートは揃えて。
「じゃあ出席を取りますね……」
永原先生が出席を取り始める。
「石山さん」
「はい」
あいうえおのいだから割合すぐに呼ばれた。

「それじゃあ今週の連絡事項は以上になります。1時間目は古典ですから、まずは課題を提出して下さいね」
とは言っても、この時間、永原先生はぼーっとしているだけだ。
すると案の定、男子が二人近寄ってきた。
高月と篠原だ。
「な、なあおい」
「ん？」
「お、お前本当に優一なのか？」
「……今は違うわよ。優子、石山優子よ」
「お、俺達が聞きたいのはそんなことじゃねえよ」
高月が非難する。
「お前は本当に、あの時倒れた石山優一が女子になった姿なのか？」
「ええ、確かに1週間前までは優一と呼ばれていたわよ」
「なあおい、俺の名前なんて言うんだ？」
「篠原浩介さんですよね？」
「そ、そうだ。こいつは篠原だ。じゃあ俺は？」
「高月章三郎さん」
「あ、ああその通りだ。どうやら本人らしいぞ」
「ったく、あの時はビビったけどよ、なんだってんだこれ。何で女の子になってんだよ！」
「篠原さん、永原先生の話聞いてなかったの？　私ＴＳ病になったのよ」
「お、俺が聞きてえのはそうじゃねーよ！」

じゃあ何なんだよ。女の子になった理由なんて突然ＴＳ病になった以外答えようがないって。
「まあまあ篠原。お前の聞き方じゃ石山もそう答えるしかねえだろ。それよりも、ＴＳ病ってのは俺も知ってるけど、どうも怪しいぜ」
「どういうことだ？」
「んー、まあ本当にこいつは女子なのかってことさ。最近は性転換手術も技術凄いからな。見た目はこんな美人だけど……」
「なっ!!!　あ、あたしはちゃんとした女の子よ!!!」
　声を上げて抗議する。
「おいおい、いっちょ前に女の子ぶってるぜ。突然女の子にされてたった1週間でこうもなるか？」
「まあまあ高月、もう少し様子見ようぜ。それに、もう一人、石山に用があるみたいだしな」
「おっと、すまんすまん」
　二人が去っていき、もう一度見ると、そこに木ノ本がいた。
「ね、ねえ……あなたあの時の……」
「だ、騙してごめん！　でも、あの時木ノ……桂子ちゃんに言っても信じてもらえないと思って」
「木ノ本でいいわよ。で、本当にあなた、優一なの？」
「う、うん。1週間前まではね。あの日倒れて、次に目を覚ました時には、この姿になってた」
「ねえ、ゆうい……ごめん。ねえ、優子、悪いんだけど、私もまだ状況を飲み込めてないわ」
「む、無理も無いわよね……」
「だからごめん、あなたのこと、やっぱりまだ女子としてみるのは難しいと思うの」
「え？」
「ああうん、悪気はないのよ。その見た目だと、男子として扱うつもりもないわよ、ただ……ごめん、気持ちを整理させてほしいんだ」
「う、うん。分かったわよ」
　木ノ本の言い分は最もだ。突然倒れて、一週間も学校を休み、似て

も似つかない姿になって「同一人物です」と言われて、「はいそうですか」なんて言えるわけない。
流石にこんな見た目で男子扱いというのもおかしいことはみんな分かっているだろう。だからといっていきなり女子扱いするのも難しいのか。
クラスの皆を責めることは出来ない。
自分だって、もしクラスの男子の誰かが同じ状況になったら、同じように対応しただろう。
熱心な生徒が永原先生に先週の課題を提出している。
私は永原先生のもとに向かう。
「せ、先生、あの……」
「先週の課題？　石山さんはいいわよ。あの病気だし、休ませたのは私ですから、出席扱いにしてますし、課題も提出扱いにするわ」
「す、すみません」
「さっきの会話聞いていたけど、まだクラスの皆は状況を飲み込めてないみたいね」
「でも、クラスの皆を責めることは出来ないと思います」
「石山さん、大人になったわね。さ、もうすぐ予鈴よ」
「はーい」
ともあれ椅子に座る。
するともう一人、意外な人物が声をかけてきた。
木ノ本と勢力を二分する2年の女子グループのリーダー、田村恵美だ。
「あんた。ほんとに石山なの？」
「うん、って高月に篠原に木ノ本も同じこと言ってたよ」
「あーあいつらはいいんだよ。でもよ、あたいら皆、つい昨日まで石山は単なる病気だと思ってたんだ。いきなりこんな格好で来られて、この人が石山です。ってのは納得行かねえよ」
「……」
「まあよ、さっきまでのやり取りを聞くと、同一人物だと納得せざるを得ない。ところであたしの名前、フルネームで言ってみ？」

「田村恵美さん。ですよね？」
「おう、正解だ。先生の出欠じゃ下の名前までは分からんからな」
「でもよ、あたいが認めんのはあんたがどうも石山優一と同一人物、少なくとも同一の記憶を持っているというところまでだ」
「普通に考えりゃ性別が変わるなんてあり得ねえし、あまりにも珍しすぎる、さっき高月が言ってたように性転換手術でもしたんじゃねえかって、考えちまうもんだ」
「あ、あの……！」
「ん？」
「今は、少なくとも男子扱いしなければいいです」
「それってつまり、女子扱いしろってことだろ？　まだちょっとそれは無理だぜ」
「え？　でも……」
「でもって何さ、人間男か女かだぜ。小学校の時やっただろ？」
　田村とこんな長く話す機会はなかったが、随分と威圧感がある。
「う、うん。確かにそうだけど……」
「でもよ、まあよくわかんねえけど、女子扱いせずに男子扱いもしない方法……あたいはそこまで頭よくねえけどよ。ま、考えてやんよ」
「あ、ありがとう」
「礼には及ばねえよ……ただ、状況次第じゃ男子扱いもあり得るってこと、忘れんなよ」
　少し不安もあるが、今はまだ最終的に男扱いされなければそれでいい。
　まだ復学して、1時間も経っていない。急ぐことはない。
　本令が鳴る。永原先生の「はいじゃあ1時間目を初めますよー」との声で、授業が始まった。

# 復学初日　後編

古典の授業、休んでいる間飛んでしまった。今週は後で復習する必要に迫られそうだ。

授業と授業の間の休み時間は、みんなそれぞれ教材の用意などもあったことや、皆気持ちの整理ができていないのか、私の話でもちきりであった一方で今後どういう扱いをしていくか。男なのか女なのかという話はしていない。

男子は胸が大きいどうのこうので女子は雰囲気が変わっただの内面のことが中心だ。

休み時間、昼食。ともあれ今日は学食に行く。

学食では、他のクラスや他の学年の生徒の目にも晒される。

登校時間はまちまちだから、当然自分のことを見ていない生徒も多い。

「な、なあ、うちの学校にあんな可愛い子いたっけ？」

「てか胸でけえな」

「わっ、こっち見た。頭のリボン似合ってるよな」

予想していたとはいえ、男子の下心はとんでもない。しかし、その気持ちに一番同情してしまう自分も大概だ。ただ、その辺は女として生きていく上でも、知ってて決して損のないことだ。「知識」は生かさなきゃいけない。

券売機で食べたいものを買う、そして食堂で半券を受け取り、これを待つんだ。今日はカレーだ。

水を取り、机に置くことで自分のスペースを確保。そして数分もしないうちに、食堂のおばちゃんの神業で自分のカレーが来る。

「１９７番の人！」

「はーい」

呼ばれて私が１９７番であることを証明するため半券を提示する。

トレイごとさっきの場所に戻りカウンターで一人黙々と食べる。

ただ、待っている間、食べている間にも、やはり自分のことを周囲が話題にしている。

しかし、まだ噂が広まっていないのか、話の趣旨としては、「あの乱暴な石山優一が美少女に生まれ変わった」ではなく、「謎の美少女が学校にいる」というだけだ。

とは言えうちのクラスは木ノ本桂子と田村恵美は2年生の女子全体に顔が利くし、部活などの女子トークを通じて、この美少女の正体が判明するのは時間の問題だろう。

いつもより遅い時間に学食を出る。原因はやはり一口の遠さだ。

男だった頃は休み時間はたいてい他人と喧嘩していたが、今は特に何も起こらないだろう。

教室に入ったが、実際みんな話しかけ辛そうだ。中身はあの「石山優一」だということもあるだろう。

「あ、優子……」

「あ、木ノ本さん……」

木ノ本桂子だ。

「調べたわ、あなたの病気のこと」

「そ、そう」

「私も、優子のことどう扱っていいかわからないのよ。TS病になると、医学的にも女性になるから出産も出来るんでしょ?」

「そうみたいなの。もちろん私は実際にしたことはないけど前例はあるって」

というか、出産以前にヤったこともない。童貞のまま処女になってしまった。

「私、優一の意識がそのまま優子という別の入れ物に入ってる感覚がするわ」

「あの、木ノ本さん!」

「ん?」

「たしかにあたしは、かつて優一だったわ。でも今は優子なの。今すぐにとは言わないけど、いつか気持ちの整理がついたら、女の子扱いして欲しいと思う」

「……」

「今日はまだ、クラスの皆も気持ちの整理はつかないと思うの。だから今日一日は待つ。今日だけは、たとえ男扱いした人が居ても、怒らないわ」
「そう」
「でも明日、明日言うわ。私は……今はもう女の子だから、女の子扱いしてほしいって思ってるわよ」
「……」
「だってさ、子宮も出来て、妊娠して、出産まで出来る体になっちゃったのに。男なわけないじゃない。これでも男だなんて主張するなんて、現実逃避も甚だしいわよ。だから私、心から女の子になりたいの」
「そう、でもまだ、まだ気持ちの整理がつかないわ、グループの皆とも話し合ってみる」
「わかった。いい返事を待っているよ」
椅子に座る。木ノ本桂子は石山優一だった頃からの話し相手だったから話せただけで、他の皆は話しかけ辛そうにしている。当たり前だろう。
しかも、男子から女子に変わるとしても、姿形は全く似ても似つかない。面影さえ見当たらない。
男だった頃は髪が高校生にしては薄かった。それも丸刈りにしているという意味で薄いのではない。
そのくせに体毛は制服からも隠しきれないほど毛深く、顔も悪人顔だった。
今、石山優一と同一人物だと主張する少女はおっぱいが大きく、体毛は何一つない。制服のミニスカートの脚は見事にムダ毛どころか毛穴一つなく輝いていて、髪の毛は男の頃とは対照的に豊富な黒髪ロングだから、何もかもが正反対だ。
何もすることもなく、ひたすら座ってぼーっとしていたら、トイレに行きたくなってきた。
学食で少し水を飲みすぎたかな？
まだ時間があるし、教室前のトイレに行こう。

トイレからはちょうど田村恵美が出てきた。
「あ、おいっ！」
「な、何!?」
「あんた、女子トイレ入るのか？」
「う、うん。女の子が女子トイレに入っちゃダメ？」
「うっ、ダメじゃねえけどよ、あんた、中身は元々優一なんだろ？」
「そ、それは一週間前までのことよ！」
「でもよ、納得行かねえんだよな」
「ちょ、ちょっと通して下さい」
私は女子トイレの中に入ろうとするが、田村恵美が通せんぼして通れない。こうしている間にもどんどんタイムリミットは迫っている。
「いやでもよ、この間まで男だったんだろ？」
「でも、この姿格好で男子トイレなんて入れないよ……」
というか、女の子になって男子トイレは一回も入ってない。逆に訓練で女子トイレに入るように言いつけられているから女子トイレに入るしかない。当たり前だが。
「うっで、でも――」
「お、お願い……漏れちゃうから……」
「……ったく。分かったよ」
危機感を煽ることでなんとか通してもらう。女子トイレの個室に入る。
……間に合った。
学校の女子トイレはもちろんこれが初めてだ。
落ち着いてみると、そこは独特の雰囲気がある。今まで入った女子トイレとも違う。
女子の話し声もそうだし中々男子には言えないだろう会話もあることは容易に想像がつく。
常に男子の目に晒される共学校の中で、唯一女子だけが安らげる場所でもあるわけだから。
……ふと考える。田村の取った行動。私は責めることが出来ない。
心の中でアイデンティティが揺れる。

自分は本当の意味で女の子なのか？
今まで、「女の子になる」と決心してから、少しでも女の子らしくなれるように、一生懸命頑張ってきた。
親父も母さんも永原先生も、そして街の人達も、私を女の子として扱ってくれた。
でもそれは、結局良き理解者か、はたまた私をＴＳ病患者だとは知らないからのどちらかでしかなかった。
クラスのメンバーからすれば、乱暴を働いていた男、言うなればクラスで悪目立ちして煙たがられていた男が、可愛い女の子の皮を被っているだけ。そう見えても、不思議ではないのかもしれない。
人は見た目、そう思っていたが、それは間違いだった。
むしろ、中途半端な理解に陥るともっと厳しいということだ。
クラスのメンバーが理解しているのは結局「どうやらこの女の子はかつて石山優一と言われていた男と同一人物」という所までだ。
それはつまり、「結局男なんじゃないか？」という疑念を生む。
そして、さっきの田村のようなことが起こり得る。
田村から見れば、私は「女子トイレの侵略者」、もっと言えば味方になりすました「忍者」だと思われてもしょうがないことだ。
いくら身体や姿形が女の子そのものでも、抵抗感を持ってしまうのはどうにもならないということか。

３時間目、数学の時間。学年主任の小野先生が入ってくる。
思えば月曜日のこの時間、倒れた。小野先生には悪いことをしたと思う。
数学の内容は、どうも私が救急車で運ばれた影響もあってやや遅れ気味だそうだ。
そのため、授業はやや急ピッチで進んでいる。
「えーでは。微分法の内容はここまでにして、ここからは、積分法に入りたいと思います」
「積分は微分の逆ですが、以前やった積分とは比較にならないくらい難しい内容になります。まずは基本的な公式から紹介します。単純

な次数は既にⅡBでやりましたから、まずは三角関数から入りましょうか」
「まずサインの積分ですが、これはコサインを微分するとマイナスサインになることを利用して、マイナスコサインだということがわかります」
「コサインは簡単ですね。サインの微分がコサインですから」
いつの間にか積分に入っていた。微分法の応用含め、よく復習しておく必要がありそうね。
「えー次の公式です。指数関数ですがｅのｘ乗の積分です。これは微分しても同じなので積分しても同じですね。あー不定積分はもちろんCが入りますが」
順調に授業は進んでいく。必死にノートを取る。幸い復学直後に新しいところに入ったのは不幸中の幸いだった。

キーンコーンカーンコーン

「おっと、では本日はここまで」
3時間目も無事に終わった。
結局今日の授業は大きな事件も起こらなかった。やはりみんな、扱いに困っているという感じで、腫れ物にさわるような感じだ。

私は元々部活には入っていない。それは不幸中の幸いだった。運動部ならまた着替える時に色々言われただろうし、男子の部ではなく、女子の部に入り直さらなきゃいけない。
文化部でも色々と扱いが異なってくる。
特に男子が多い部だったら……
考えても仕方ない。ともかく、結果的に部活関係で面倒が減っていたのは良いことだ。
ともあれ帰宅を開始する。学校から駅までは平坦な道。行きは跨線橋を渡る必要があるが、帰りはホームの位置が逆だから改札を通ってまっすぐに進めばいい。

数分の待ち時間とともに、電車が来る。
電車に乗って席が空いているので座る。
向かいには男子生徒が座っている。もちろん警戒して、私は足を揃えているがそれでも見られている。視線が脚に集中しているのが露骨に分かる。
私も男の頃、前に女子が座っていたら結構見ていた。エロいよなあと思ってたけど、まさか自分が男子に見られる時が来るなんて思いもしなかった。
インターネットの書き込みでは、こういう男の視線は嫌がる女性が多い。実際私もいい気分はしないが、どうしても男子が視線を向けたくなる気持ちが分かってしまう。
また一つ、何気ないところで立場が入れ替わった気がする。
目の前の男子は私よりも先の駅で降り、私はそこから更に1駅先で降りる。
いつものように最寄り駅の階段を登る。
隠すならミニ穿くなよという男はよくいるが、さっきトイレに入ってわかったが制服のミニでのトイレは物凄い楽だ。
それに可愛さも制服効果とあいまっていつもの数割増だ。
最も、この駅の階段は緩やかだから見える心配はないが。

「ただいまー」
「あ、優子おかえりなさーい」
家に帰ると、母さんが出迎えてくれる。
「どうだった？」
「うーん、まだ女子として認めてはくれてない感じ」
「……そう、でも優子なら大丈夫よ」
「そうかなあ……」
正直、心の何処かでは、このいかにも女の子を強調した見た目ならば、結構すんなり受け入れてくれると楽観視していた部分もあった。
「大丈夫、みんな最後は結局見た目に引きずられていくわよ」
「とりあえず、今日はもう制服着替えるよ」

「はいはーい」
流石に母さんとはいえ、生着替えを見せるの恥ずかしい。というよりも、服選びやカリキュラム中、どうも本来の目的を逸脱し始めていた気がするので警戒せざるをえないわけだが。
ともあれ、私服に着替え直そうとしたが、面倒なのでパジャマに着替えることにした。これから外出する予定はないし、今日くらいは手を抜こう。
とにかく今日は疲れた。復学初日だから当たり前だが、できればこのまま寝てしまいたいくらいだ。

「ただいまー」
制服から着替え、楽な格好になってリラックスしていると、親父も仕事から帰ってきた。
「「おかえりー」」
別方向から、私と母さんがそれぞれあいさつする。
コンコン
「はーいどうぞー」
扉をノックする音が聞こえ、親父を通す。
「優子、どうだった学校は？」
「うーん、まだみんな戸惑ってる感じよ」
「無理もない、お父さんも、まだ会社の同僚や部下には話していないんだ」
「とりあえず、今日はまだ様子見だよ」
「そうだな、明日以降が勝負になると、お父さんも思うよ」
そう言うと、親父は自分の書斎に入っていった。

ＴＳ病、確かにこの病気はものすごく珍しいが、その病状と後遺症のインパクトから知名度そのものは高い。
この病気は男として生きていた人が急に女になり、女として生きる覚悟を要求される病気だ。しかし、周囲の人たちはどうしても以前男だった頃を知っているからどう扱っていいか迷ってしまう。

しかもこの病気になってしまうと老化しなくなってしまうから、中には永原先生のように５００年近く前から生きている人もいる。

永原先生は、世間も周囲も完全に女性扱いだ。無理もない、男だった頃を知っていたのは戦国時代の人間だ。もちろん、永原先生以外誰も生きてない。

でも、永原先生が自分と同じＴＳ病だということを知っているのは、クラスでも私だけ。学校の他の先生でさえ、知っているかは怪しいところだ。

いわんや話したとして、周囲の扱いはどう変わるんだろう？　せいぜい年長者としての敬意（あるいは真田の戦国武将や徳川将軍との面識があることでその時のエピソードを聞かれるくらいか？）と、おばあさん扱いされることくらいじゃないか？

永原先生が男性だったのは２０年だけ、残りの４８０年近くを女性として生きていても、他の人はこの事実を知ればまた男扱いされるのだろうか？　男時代の２４倍を女として生きてきてなおも生まれが男だからといって男扱いするのは流石に考えにくい。

されないなら、自分には「時間の解決を待つ」という方法もある。最近ではノーベル賞学者の蓬莱教授の不老研究もあるみたいだが、自分は懐疑的だ。

とはいえ、時間の解決を待つというのは、最悪今生きてる同世代がみんな死ぬのを待つということにもなる。永原先生もそうやって生きながらえた。

永原先生が再び主君の真田家に会ったのも１２０年近くも経ってからだ。

いや、永原先生くらい生きていればそれも待てるだろうが、自分の人生はまだ１６年……永原先生の３０分の１しか生きてない自分からすると、それは途方もなく先の話に聞こえる。

それに、まだ５月の３週目、２年生が始まったばかりでまだ３年生もある。いくらずっと老けないと言っても、本物の女子高生としていられるのは今年と来年だけなのには変わりはない。

散々やりたい放題していて、今更虫が良すぎると言われればそれまでだけど、それでも、受け入れられなくても、せめて残りの学園生活、ちゃんと女子として生きていければ……

「優子ーご飯よー」

母さんがご飯に呼ぶ。まだ明日がある。明後日もある。

明日、クラスの前で女の子として生きるためにしてきたことを話そう。そうすれば、希望の扉に一歩近付けるはずだ。

# 孤独な体育

朝目が覚め、することは制服を着るということ。
これまでは「今日は何の服にしようか?」と悩むことも多かったが、迷わなくていいというのは大きいわね。
制服は自由を奪うなんて言うアホみたいな話もあるが、女の子になってみて制服のありがたみが分かった。
単純に私服と比べてもかわいいしファッションに悩みがちな年頃の女の子にとってはそれを決めなくていいというだけで大きなメリットだ。
今日は体育の授業があるので、体操着を持っていく。もちろん女子用に新しく仕立て上げたものだ。男子用は今頃リサイクル店で売られているか、誰か別人のものになっている。
「おはよー」
「あ、おはよー」
母さんとあいさつ。親父は今日は早めに出勤するということでご飯を食べ終わり、出かける支度で忙しそうだ。
「じゃあ行ってくるぞ。優子もがんばれよ」
「はーい」
母さんが食事を作る。
そして朝食を食べる。朝食を抜くとどうも力が出ないのは男の頃そうだった。
そして女の子になってからは朝食を抜いたことはない。
「いってきまーす」
二日目の学校生活、通学路もいつもと同じ。
来た電車は昨日と同じ便だが、車両は違う。以前別の生徒の会話を盗み聞きしていたが、直通先の会社の車両がどうたらこうたら言っていた。
あいにく私は鉄道マニアではないのでそのあたりのことはよくわからない。
いつものように学校の最寄り駅に到着し、大勢の生徒とともに跨線

橋を渡る。
うちの学校は幸いにして通学マナーがいいと評判だ。学校が自由な校風なのがいい影響をもたらしているんじゃないかなんて言う話もある。
逆に変に厳しい校則の学校だと学外ではマナーが悪くなりがちという話だ。
まあ、都会の高校だし、電車も混むことも多いから、必然的にマナーが身につくらしい。
これが地方の高校になるとひどいというのは聞いたことがある。車内のほとんどが同じ高校の高校生で占められているなんていうケースも珍しくないらしいから、群集心理上無理もないだろう。
改札を出て通学路、ここはさすがに生徒でにぎわう場面。
で、会話を聞くと、やっぱり昨日と同じ話題。
「何あの子？」「あんなかわいい子いたっけ？」というたぐいだ。
昨日と違うのは時折「でも、あれって中身男だって噂よ」「え？　あれが男？　んなわけねえだろ。胸出てるし」という会話も出ていること。
……噂に尾ひれがついて、私のことをいわゆる「男の娘」だと勘違いされているということね。
でも、見せるわけにはいかないけど、もし裸になったら、そんな噂は一瞬で消えるはず。

さて、今日は昨日と違い、いつも通り教室の扉から登校する。
下駄箱から靴を履き替え、教室にまっすぐ向かい、閉まっていた扉を開けて、中に入ったら閉める。
全員が一斉に私を見る。好奇と不信の目だ。いや、そういう「目に見える」というだけか。
悪く考えては態度も悪くなって、結局優一の二の舞を演じてしまうかもしれない。
鞄を椅子の下に置き、鍵をもってロッカーに入り、一時間目の教科

書を出しておく。
「なあ優一！　石山優一くーん!?」
……その名前で呼ぶのは、篠原浩介だ。
もう私はその名前を捨てた、そんな名前の人はもう居ないんだから無視だ無視。
「おい！　しかとすんなよ！」
「……」
「おい!!!!」
体がビクッとなる。何で？　こいつ、気が弱かったはずなのに……
「はあ……なんだよ、人が呼んでんのになんで返事しねえんだよ！」
顔を正面にしてそんなことを言ってくる。
「あのねえ、あたしは優子。石山優子よ！　もうその名前で呼ばないで！」
「何言ってんだよ、昨日あの後高月と話したんだけどよ。やっぱおめえは女とは思えねえぜ」
「何でよ!?　わ・た・し、どう見ても女じゃないの！」
「高月の家は美容整形外科医なんだぜ。整形手術の可能性は排除できねえんだよ」
「なっ……！」
「ま、仮にＴＳ病だとしてもよ、結局お前の頭の中は優一と変わってねえんだろ？」
さらに高月章三郎も近づいてくる。
「それに、俺は美容整形外科医の親を持つからこそ、中身を重視したいと思う」
「……あたしは……あたしは中身も女の子になりたいのよ！」
「おいおい、今まで１６年も男やってた奴が１週間で女？　俺は認めないな」
「……あの、あの!!!!　みんな聞いて!!!!」
私はクラスに聞こえる大きな声で叫び、椅子から立つ。
クラス全員が私に注目する。
「私！　私、女の子なの！　だから、女の子として扱ってほしいの！」

「私、1週間学校を休んだわ。その間、私は女の子としてのふるまい、言葉遣いを叩き込まれたわ。まだ至らないところはあるけど、でも……それでもちゃんと女の子になろうって決めたから！」
「だからお願い！　私を受け入れてとは言わないわ。でも、女子として、女子として扱ってほしいの！」
「はあ……はぁ……はぁっ！」
　女の子になって、こんな大きな声を出したのは初めてだった。前までは大きな声なんてしょっちゅう出していたのに。
　伝えたいことは伝えたいので、椅子に座りなおす。もちろん、スカートはちゃんと手で揃えてだ。
　そして、誰かが声を発する前に、永原先生が入ってきた。

「はーい、朝のホームルーム始めるわよー！」
　何事もなかったかのようにホームルームが始まり、そして終わる。
　ホームルームが終わると、永原先生が手招きしてきた。
「さっき大きな声出してたけど、どうしたの？」
「あ、あの、実は高月と篠原が……」
　私は先生に、二人から受けた仕打ちと、それに対して女の子扱いしてほしいことへの決意表明について話した。
「……石山さん、あなたは本当にまじめでいい子よ。男だった頃を知ってる身としては信じられないくらいに」
「う、うん。だって……」
「分かってるわよ。あなたが真剣にそう願っていることくらい。でもね、このクラスは高校生の集団よ。あなたみたいに聞き分けのいい子ばかりじゃないわ」
「でも心配しないで、必ず味方がいるんだから。それに、先生は何があってもあなたの味方よ。じゃ、一時間目の準備しなさい」
「はい」
　永原先生もＴＳ病だということ。それに私たちから見ればいわば最年長の立場だ。
　これ以上ない頼もしい味方がいることを再確認し、1時間目、英語

の授業に入った。

休み時間、もう田村恵美の妨害もなく、女子トイレは事実上フリーになったが、やはりまだ心中穏やかではないのか、私が入るとざわつく。

ただ、木ノ本のグループの女子は、そこまでざわついていない。木ノ本に感謝しないとな。

昼休み、食事が終わると木ノ本が声をかけてきた。

「優子、あのね、私……」

「うん」

「優子は……優子ちゃんは女の子だと思うの」

「……け、桂子ちゃん！」

私は嬉しかった。幼馴染だが、クラスメイトで初めて女の子として扱ってくれる理解者を得られたんだから。

少しだけ涙目になった気がする。それを知ってか知らずか、木ノ本桂子は話し続ける。

「実はね、ホームルームの後永原先生に少し聞いたの。優子ちゃんは本当に一生懸命だったって。私もグループの女子に話したわ。昔のことより今を大事にしようって。それに優子ちゃんは私たちよりずっとずっと長い未来を抱えているんだから。より一層今を大事にしてあげなくちゃいけないって」

「う、うん、ありがとうね」

「でも、田村のグループはまだ懐疑的よ。永原先生に話も聞いてないし、それに私にたいする反目心もあるから」

「そうよねえ……」

でも、とりあえずこのクラスの女子の半分、まだ4分の1だが、味方が増えたことは、頼もしいことには変わりなかった。

昼休み終了後、相変わらず男子は私のことを故意に「優一」と呼ぶ。いじめのつもりなのか、でも無視すればいい。

反応したらまたそれで集るに決まっている。幸いにも木ノ本が適

当な理由を付けて「優子ちゃん」と呼んで声をかけてくれたのでなんとかなった。

５時間目は体育だ。私は永原先生に言われた更衣室までこっそり移動する。

途中、「おい、石山、どこに行くんだ!?」という男の声が聞こえた気もするが、気にしないでおこう。

先生方も事情を知っているため、特に気に留めるわけでもなく更衣室に一人で入る。

やや広めの更衣室を一人で使う。

広々とした場所を贅沢に独占できるが、気分は憂鬱だ。

男でも女でもないかのような扱い。でも、そんなことは本来あり得ない。

田村は言っていた、「人間男か女かだぜ」と。半陰陽という人もいるらしいが、少なくとも今の自分の認識では「女」だ。医学的にも社会的にも法的にもそうなっているはずなのに。

親も、永原先生も、きっとこの措置を決めた教師も、いや篠原や高月と言ったクラスの男子たちだって、それはわかってる。

でも内面が、内面が女として認められていない。

でもどうして？　頑張ってきたのを認めてくれたのも、木ノ本だけだ。ただ、私が以前石山優一だったからという、ただそれだけの理由なのか？　でも過去を変えることなんて出来ないのに……

着替えながら、あてもなく自問自答を続ける。

そして、体操着に着替えた男女が来るのを避けて、校庭に入った。

「はい、じゃあ体育の授業を始めるぞー」

体育の先生が集合をかける。でも私はどこに行けばいいかわからない。

男女別に集合するわけだが、当然男に混ざる訳にはいかない。

とりあえず、女子の方の一番後ろに並ぶ。

もう一つ、体育で懸念していることは、二人一組での準備運動だ。

これまで私たち２年２組は、男子１６人、女子１６人のクラスで、女

子は木ノ本グループと田村グループが８人でちょうど2分されていて、うまく回せていた。
男子の方は、俺と組みたいというクラスメイトはいなかったが、例によって強引に怒鳴りつけてペアにすることを強要出来ていた。嫌がるそぶりを見せてもまた怒鳴ればいいだけだった。
しかし、私が女の子になったことで、その均衡が崩れて男子１５人、女子１７人になってしまった。
もちろん学校を休んだ時なんかは先生が組んだりしたし、男女ともに奇数となったときに3人で組ませる場合もあった。
でも私はどうだろう？　今日は欠席者がいないから先生はどうするんだろう？
「よし、今日から少し変わった準備運動をする」
「なんだろうなんだろう」
クラスがざわつく。こうしたことはこれまでほとんどなかった。
どうやら授業中話をすると容赦なく怒鳴りつけてくる石山優一がいなくなったために、クラスの秩序がやや乱れているようだ。
「これからやる準備運動は一人でもできるものです」
「ではまず屈伸運動と、腹筋と、背筋について説明しますね」
そう来たか！　でも、これは言うなれば自分が女の子になったせいで、指導方法を変えざるを得なくなったということも意味している。
何人かは、このようなことになった意図を知っているが、黙々と運動を続ける。
そして準備運動が終わると、体育の先生は「今日から走り幅跳びの練習だ」と言ってきた。
男として最後に授業を受けた時は、走り高跳びだったからその続きだ。
体操着で、制服以上に胸が強調されている。いい機会だ。
体育の授業は着替えにしても準備運動にしても、それまでは特に悪感情などなかったものだが、嫌なことばかりになってしまった。
しかし、転んでもただは起きないというように、私もこの走り幅跳びで挽回する機会を得た。

幸いにして、外見は胸もクラス一大きく、飛び切りの美少女だ。
うまくいけば男子も本能で欲情するはずだ。そうすれば私を女子扱いするようになってくるはず。という計算だ。
「よし、次。石山！」
「はい」
先生に返事され、助走を開始する。クラス中が注目する。
女の子になって小走りしたり、少し急いだことはあったものの、全力疾走をしたのはこれが初めて。
「はぁっはぁっ……えいっ！」
助走中でさえ息が切れそうながらもわざとらしく声を上げ、胸を揺らしながら、砂に向かって突っ込む。
「……」
先生が計測する。
「2メートル19センチ」
「はぁはぁはぁ……」
女子の中でも、暫定的ながらダントツの最下位記録だ。とにかくこの身体、体力の落ち方も半端ない上に胸が大きくて、とにかく運動能力についてあらゆる指標で悪い。下手したら卒業できないんじゃないかというくらいだ。
唯一男の頃より良くなったのは体が柔らかくなったことだけだ。
1年生、男子の頃のテストでは、体育の成績は良い方だったはずなんだがなあ……
「優子ちゃん……」
木ノ本桂子が話しかけてくる。
「うん？」
「何か走るのも遅くなってたし、体大丈夫？」
「大丈夫じゃないっぽい。女の子になってから、とにかく身体能力が弱くなってるんだ」
「そう……でも、女子の中でもさすがにあの記録は心配よ」
「優子さん、体力付けた方がいいですよ」
別の女子が話しかけてきた。確かこの人は……

「あ、龍香」
そう、河瀬龍香だ。
木ノ本グループの女子の一人で、優一時代は会話がなかったが、木ノ本と話してて「あいつは必要よ」みたいな話をしてたのを思い出す。
「木ノ本さんから聞きました。大変だったって。まだぎこちないですけど、優子さん、すごく女の子らしくなってますよ……田村とかに比べたらですけどね」
「あ、ありがとう」
「でもすごいよね、それ私も思ってたよ。言葉遣い直すのだって大変なのに、座るときとかもさ」
「ちゃんとスカートをそろえていましたよね。感心しちゃいますよ。私の友達の女子校の女なんかそんなの気にせず直座りでしたよ！」
「あ、あはは」
「優子ちゃん、女の子のトレーニング受けたんでしょ？　どうやって身に着けたの？」
「ちょ、ちょっと言いにくいわ……」
「えー教えてよ。減るもんじゃないし……」
「そ、その……恥ずかしいから」
さすがに永原先生と母さんにスカートめくりと自己暗示のおしおきをされてたなんて言えない。
「ふーん、ま、いいわ。優子ちゃんがそう言うなら無理に聞き出さないわ。龍香もそうするといいわ」
「うん、分かりました」
「ところで、優子ちゃんはどこで着替えていたの？　女子のところにはいなかったけど」
木ノ本が着替える場所について聞いてくる。
うん、不審に思うよね普通は。
「実は、学年主任の小野先生が男子とも女子とも引き離す措置をとったのよ」
「そう、じゃあ優子さんは一人で？」
「うん、すごく嫌。私はもう、一人の女の子だから、みんなと一緒に女

子更衣室で着替えたいの」
決して下心だけで言っているわけじゃない。確かに、他の女性が着替えるところを見たことはない。興味がないというわけじゃない。
でも、今はもう、その手の興味よりも私を受け入れてほしいという気持ちの方がずっと強かった。
「そうなの……」
「でも、女子として扱うとしても、それにはまだ抵抗感ある女子は……田村はもちろん、私のグループにもいるんじゃないかな……」
「そうだよね」
こうして体育の授業は過ぎていく。
そしてまた制服に着替える時、孤独に、憂鬱な気分になりながら、6時間目に向かった。
私はこの4日間、「女の子は見た目を大事にしなさい」「女の子は女の子らしくしなさい」と何度も何度も叩き込まれた。
でも、1週間前まで男だったという、ただそれだけの事実が、皆の目を曇らせた。

放課後、私は逃げるように足早に去った。男子は相変わらず、わざとらしく「優一」と呼ぶ。もちろんすべて無視している。だけど、「優一」と呼ばれる度に心が抉られるように痛い。
それは言うまでもなく、私の努力が踏みにじられているということだから。教科書も、ノートも、そして戸籍からも全て「優一」を消したのに。
永原先生も言っていた、「物わかりのいい生徒ばかりじゃない」と。
そうだ、これは罰なんだ。今まで乱暴してきた男子からの仕返しというわけだ。
帰宅後、今までワクワクしていた明日は、迎えたくない日になった。
心の支えは永原先生と、幼馴染の木ノ本と彼女のグループの女子だけだった。

## 変質者現る

学校に復学してから４日目、木曜日。
朝起きるのが少し遅かった。気が緩み始めたかもしれない。
普段のスカートを短くする作業は、学校に行くまでにしようと決めた。
この日は電車が遅れていた。線路内人立ち入りということだが、迷惑なことだ。
一応出発時間は同じくらいになってくれるのは良かった。にしても人が多い。
制服の上からでもはっきりわかるほど大きな胸に対する視線がいつも以上に激しい。
身体が猫背になる。胸を隠したいと思っちゃいけないんだろうけど、いくらなんでもこの視線は我慢しきれない。
いつもは座れないがそれなりに人がまばらだが、この日は反対方向のような激しい混雑だ。
中に入ろうとする。
「んーーーーーーっ！」
何とか電車の中に入ろうと、押すがびくともしない。男よりもはるかに弱くなったために押すことが出来ない。
別のサラリーマン男性が押してくる。これにつられ、何とかスペースにとどまることができた。
駅員さんの協力もあってドアが何とか閉まる。ドアの四隅に追いやられた。学校の駅までは扉は反対方向だからこのまま目立たないようにしていれば大丈夫なはずだ。
女の子になって、体も小さくなり、その分ラッシュ時の苦しさも増した気がする。とにかく早く、ついてほしい。
「んんっ!?」
突然、スカートの外に違和感を感じる。違う、何かがお尻に触れてる……！

「やっ、やだっ……！」
気持ち悪い。スカート越しでお尻を触られてしまった。
状況から考えても、明らかに痴漢されてる。
扉の真ん前で、しかも四隅の目立たない位置が逆に痴漢の利点になってしまってる。
嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！
左のわきの下から手が伸びる。私の胸を触ろうとする。
脇を締めると、痴漢も嫌がったのか手を引っ込めたが、相変わらずお尻を触り続けている。
徐々に痴漢の手がスカートの中に侵入するために一旦めくろうとし始めた。
や、やめて！
そうだ、叫ばなきゃ！　助けを呼ばなきゃ！
私はそう思い、両手を使って痴漢の右手を掴んだと同時に叫んだ。
「いやあああああああ

だ。
「今、鉄道警察の人が来てるから」
「は、はい」
「その制服、小谷学園だよね？」
「はい」
「学年と組、それから名前を教えてくれるかな？　担任の先生に連絡したいんだ」
「2年2組、石山優子です。担任は、永原マキノ先生と言います」
「分かりました」
　そう言うと、駅員さんが電話を掛ける。
「あの、小谷学園様ですか？」
　どうやら駅員さんが永原先生と連絡を取ってるようだ。
「はい……はい……ええ、なので遅れます」
「学校には連絡しておいたよ。今、隣で犯人を取り調べているから、悪いけど待っててくれるかな？」
　そのまま待たされる。ずいぶんと長い。
　何分立ったのか分からないが、しばらくすると婦警さんが入ってきた。
「大変だったわね。目撃者も大勢いるから安心して。あの男、性犯罪の常習犯なのよ。全く、刑務所から釈放されて1週間もたたず再犯よ。えっと事情を話してもらえる？」
「その、スカートの上から触られて……」
　私は状況を細かく説明した。
「……それで、すぐに叫んだわけね。見た目に似合わず機敏ね。あのまま行ってたら間違いなく直接されていたわよ」
「え、えへへ」
「で、常習犯とはいっても、最近は冤罪にうるさいから一応物的証拠は必要なのよ。犯人の手を今調べてて、細かい繊維を特定したら、少しだけスカートを貸してくれるかしら？」
「う、うん。分かりました」
「あーでも制服だから、明日の学校が終わったら、着替えてスカートを

持って警察署に来てくれる？」
「はーい」
そう言うと婦警さんは去っていった。
入れ替わりで駅員さんが入ってきて「今日はもう大丈夫」とのことだった。
学校へ行くと1時間目が終わっていた。
高月が「おい優一、遅刻とはいい身分だな！」などと言っていた。反応したいのを我慢して無視する。

「優子ちゃん、どうしたの？　遅かったじゃない！」
木ノ本が声をかける。
「あ、あの……その……」
「どうしたの慌てて？」
心配そうな顔で見つめてくる。
「そ、その……ち、痴漢されちゃったの！」
「ええ!!??　それは災難ね。私も何回かあるけどさ……本当に軽くだから当たっちゃっただけかもだけど」
「う、うん。すごく気持ち悪かったよ……」
「で、優子ちゃん、どういう状況だったの？」
「その、ちょうどドアの隅で周囲に背を向けるように前かがみで立ってたら、スカートの上から……」
「ははあーん」
木ノ本が把握したかのような声を出す。
「優子ちゃんそれ、痴漢してくださいって言っているようなものよ」
「え？　どういうこと？　目立たないようにしたのに……」
「いい？　優子ちゃん、痴漢は地味で大人しそうな子を狙うのよ。胸が大きいからとかそういう理由じゃないのよ」
「だからまず猫背にならないことよ」
「うん」
「そしてスカートも短くすることよ！　そういう服装すれば自己主張が強いと思われて痴漢も寄ってこないわ」

「そう言えば今日は起きるのが遅くて、スカート短くしてなかった」
「ほらね、それに優子ちゃんは猫背でしかもドア隅で後ろ向きだからやられたんだと思う。無理してでも車内の奥に入るか、それがダメならドアを背にするといいわよ」
「……本当は髪を染めるのが一番いいんだけど、その黒髪を染めるのは抵抗あるわよね？」
「うん、この髪はこのままがいい」
　本当は手入れが大変だから切りたいと思ったこともあるけど、今はもう慣れてしまった。本当に同じことを繰り返すと、それが普通になるってのは本当だ。
「後は……優子ちゃんは大きいから腕を組んで胸を強調するのもアリよ。一般的なイメージとは逆に、挑発的な感じにすれば、痴漢は寄ってこないわよ」
「う、うん、今度からそうして見る」
　元男としてはそういうのは不安もあるが、木ノ本も美人だ。変質者に狙われることはあり得るだろう。
　ともあれ、2時間目の準備をしないと。な。

　放課後、ホームルーム終了直後に永原先生に呼び出された。
「石山さん、痴漢されたんですって？」
「う、うん」
「大丈夫だった？　って、大丈夫なわけないよね」
「うん、すごく気持ち悪くて怖かった。お巡りさんの話だと、常習犯ってことなんだけど、このスカート、金曜日の放課後に提出することになったわ」
「あー、金曜日ね。うん、月曜日には戻ってくるよう便宜を図っとくわ。もし無理そうなら代替のスカートをこっちで手配しておくわよ」
「あ、ありがとうございます」
「うん、それじゃ、今日も一日お疲れ様」
「うん」
「優一！　何したんだ!?」などと、男子の誰かが囃し立ててたが、や

はり無視する。
本当は「痴漢された」って言いたい。痴漢はすごく嫌なことだ。だけど、優一と呼ばれることに比べれば、精神の傷がまだ浅いことに気付いた。
本当の女の子で、自分も女の子になろうとしているのに、それを認めずに無理やり男扱いされることが、どれほど辛いことか。
それを理解してもらうのは無理だ。あの二人も、他の男子もＴＳ病になるなんて確率が低すぎる。
「なあ石山」
足早に帰ろうとすると田村が声をかけてきた。
「えっと、田村さん、何でしょうか？」
「あんた、痴漢されたんだってな。あたいもおっさんが連行されるのを見たぜ」
「そ、そうなの。痴漢されたの」
「大変だったな。しかし、あんたが元々男だって知ってたら、あのおっさんも痴漢してたか？」
「そんなの、痴漢に聞いてみないと分からないよ」
「……それもそうだな。しかし、確かによく見なくても、あんたは可愛くて美人だ。身の処し方、考えとけよ」
「それ、桂子ちゃんにも言われたわよ」
「けっ、あたいは名字であいつは名前に『ちゃん』かよ……！」
「じゃ、じゃあ恵美ちゃんでいいですか？」
「うっ、あーごめん。忘れてくれ。あたいが悪かった。今まで通りでいいよ」
「？　そう？」
「……ねえ、あんた」
別の女の子が声をかける。振り返ると木ノ本桂子だった。
「優子ちゃんと何話してたの？」
「あ!?　てめえの知ったことかよ！」
「あ、あの……田村さんは……」
「何よ、知られちゃまずいことなの!?」

「はっ、そうじゃねえけどよ、てめえに教えたくねえだけだぜ！」
「あのあのあの……」
「ふん、ケチな女は嫌われるわよ」
「はっ、男に媚びなきゃ生きられねえてめえとは違うんだよ！」
「やあねえヒガミかしら？　男にモテテこそ女でしょ？　それともあんたレズなの？」
「こ、こんのおっ……！」

「け、喧嘩はやめて下さい!!!」

　思わず大きな声を上げてしまった。木ノ本も田村も驚いている。
「あ、あの、田村さんは、今朝私が遭った痴漢のことを話してたの！」
「なっ……」
「これでいいでしょ？　もうそんなことで喧嘩しないで！」
「わ、分かったよ」
「え、ええ……」
「ご、ごめんなさい。私、まだ女子グループのことよくわからなくて、でも、私のせいで喧嘩になったらと思うと……」
「わ、分かったよ、あんたは悪くねえよ。あたいもちょっと意地を張りすぎた」
「ごめんなさい優子ちゃん。つい頭に血が上ってしまって。怖がらせるつもりはなかったわ」
　木ノ本と田村は散り散りになる。そのうちの一人、田村にはまだ用がある。
「あの、もう一つだけいいですか？　田村さん」
「ん？　なんだ？」
「私、痴漢されたでしょ。痴漢だって男だったら多分しなかったわよ」
「……何が言いたいんだ？」
「私が、女の子だってことよ」
「あー」
「少なくとも、私の正体を知らない人が、私のことを男だと思う？」

「それは思わねえだろうな」
「むしろ世界にいる７０億人のうち、この学校のこのクラスの……桂子ちゃんのグループの子はもう認めてくれたから、３０人にも満たない人だけよ。私を男みたいに扱うのは」
「待て待て、そりゃあよ、いくらなんでも暴論だぜ」
「何で？」
「だいたいあんた、その７０億人の人のうち、何人と親しいんだ？　１００人も居ねえだろ」
「それに、７０億人全員があんたの正体を知ったら、少なくとも億単位の人間は、あんたを男だと思うだろうよ。もしかしたら、あのおっさんだってそうかも知れねえぜ」
「……」
「ま、悲観すんなよ。まだあんたを男扱いすると決めたわけじゃねえんだ。まだ女扱いするのに躊躇いがあるってだけだ」
「……いい答えを待ってるわ」
「あ、ああ」
「ふうっ」とため息を付き、下駄箱に行く。
ローファーを履く。そして下校する。帰りの電車は空いていたので何にもなかった。
変質者、不審者情報は他人事と思っていたけど、そうではないことを改めて思い知らされた。

「ただいまー」
「あ！　おかえり優子！　大丈夫だった!?」
「大丈夫って？」
「やあねえ、今朝痴漢されたんでしょ？　相手は常習犯だったって言うけど、怖くなかった？」
今日はもうこの話題で持ちきりだ。でも、そのおかげで男子による男扱いといういじめから目を逸らすことが出来るのが悲しい。
「こ、怖かったよ。すごく」
「そうでしょう。ほんっと卑劣よね」

「で、でもちゃんと捕まったし、明日スカートを警察に届けないといけないけど、月曜日には返してくれるって」
「それは良かったわね。さ、今日はゆっくり休みなさい」
「うん」

金曜日の放課後、一旦家に帰って着替えたらすぐにスカートを警察に届け出た。余程のことじゃないと日曜日に返しに来てくれるとのことで良かった。
警察署の人の話によると、今回スカートの上から私のお尻を触って痴漢した犯人は、かなり悪質な常習犯なので、迷惑防止条例違反ながらも実刑になるんじゃないかって話だ。
被害者の私が「女子高生」ということで、学業を優先したいため裁判所には母さんが代理で行ってくれるそうだ。
簡易裁判所で一応慰謝料ももらえるらしい。何に使うべきかということを今から考えている。

## 久々の安息

「優子ー！　起きてご飯手伝ってー！」
　土曜日、女の子として学校に戻った最初の一週間が終わって最初の休日、母さんが起こしにかかる。
　制服から着替え終わったときもファッションに迷うわけだが、朝起きた時に迷うのとはややベクトルが違う。
　母さんが急かすのもあって久々にラフなズボンを穿く。
「おはよー」
「おはよう。あれ？　ズボン久しぶりね」
「へへ、1週間大変だったから今日はちょっと楽になりたくて」
　一昨日は痴漢されたばかりだし。
　復学して初めての休日は、まず朝ごはんの手伝いから。
　そして昼と夜の食事や家事の手伝いをする。
　これらはカリキュラムを受けた時とほぼ変わらない。同じことをやっていれば大丈夫だ。
「優子、一週間どうだった？」
　朝食準備中、母さんが話しかけてくる。
「うーん、あまり良くなかったかな？」
「お母さんも分かってたわ、優子が何か悩んでいるって」
「……」
「無理に、とは言わないけど。お母さんに話してご覧なさい」
「……う、うん。わかったわ」
　私は母さんに今週私の身に起こったことを話した。
　クラスの男子が故意に「優一」と呼ぶこと。
　理解してくれたのは木ノ本とそのグループの女子だけということ。
　田村とそのグループの女子はまだ判断を決めかねていること。
「桂子ちゃんって言うのは、もちろん木ノ本桂子ちゃんでしょ？　あの子は小学校から一緒の学校だったから……思ったより深刻よそれ」
「そ、そう」
「でも、どうしたら良いかなあ……うーん、今はその『田村さん』って

いうのを味方につけることよ」
「どうやって？」
「それはお母さんにもわからないわ。ただ、意外な所にきっかけは潜んでいるものよ」
「うーん、何なんだろう？」
「お母さんが思うに、多分今の優子は皮だけ女だと思われてると思うのよ。ニューハーフとか性別適合手術を受けた人とは違い、本物の完全な女の子だということを、どこかで示せればいいのよ」
「つまり、昨日痴漢されたと言っても説得に応じてくれなかったのは……」
「優子が本当に改心したことを示すか、他の証拠を見せて内面から女の子であることを、クラスに示すしかないわよ」
「……分かったわ。私、頑張ってみる」

家族で朝食をとった後、自分の部屋に戻る。
今日はやることもない。どうしようかと迷う。
今までは、カリキュラムとして色々なことをさせられた。
先週の今頃は初めて女子の制服を着て、着付けや態度が悪いと「おしおき」されていた。
でもそのおかげで、内面も女の子になれたと思う。
とりあえず、教材として渡されていた少女漫画や女性誌、これらがまだ読んでないのがほとんどだ。
回収に来ないのを見ると、これも最初に渡された服と同様、プレゼントなのかもしれない。
……少しトイレに行きたくなった。
考えてみれば、パジャマ以外のズボンでトイレに行ったのも久しぶりな感じだ。
トイレに入って鍵を締め、まずズボンを脱ぐわけだがえっと上のボタンをはずしてチャックを下して余裕を作って下すっと。
その後で再びパンツを下す。
……な、なんか面倒だ。パジャマなら緩いからすんなり降りるけ

ど、これは不便だ。
ましてスカートならぴらりとめくりあげればすぐにパンツを下せた。
女の子になってからというもの、トイレが近くなったから、ズボンのトイレの不便さはちょっと問題だ。

ともあれ、用を足し終わって流したら元に戻す。これもスカートより一回作業工程が多い。
何だろう、久々にパンツ見られる心配がなくて楽をしたいからズボンはいたけど、またスカートが好きになった気がする。お、女の子らしくなれていいのか、な？

ともあれ自室に戻る。部屋のレイアウトはまだところどころ男の部屋だった頃の名残が残っている。
机の上の雑誌置き場に、若い女性向けの美容・ファッション雑誌が目に入る。
これを読んでみるかなあ……女性の考えを理解するのも、大事だしなあ。読み進めてみよう。
うーん、この雑誌、ちょっとよく分からない。というのも、「これはいけないぞ、男性受けしないよ」と思ってしまう記述が多々ある。
女の視点で可愛い、女に好かれる女というのはどういうものかというのを知るにはいいが、木曜日に木ノ本が田村と喧嘩している中で「同性に好かれたいとかあんたレズなの？」って言ってたしなあ。
うーん、ちょっとまだこの辺がよくわからない。まだまだ女の子になり切れてないのか、それとも、男の感性を「知識」として知っているせいなのか……
母さんたちも言ってたよな、「男に好かれてこそ女の子らしくなる」って。木ノ本も同じ考えのはず。
でも何で女性は同性受けを優先する人がいるんだろう？
雑誌だって売り上げが大事だから、それなりの数がいるはずだ。
コンコン

部屋で、主に成人女性向けとされている美容関係の女性誌を読んでいると、母さんがドアをノックしてきた。
「優子！　買い物に付き合ってくれる？」
「あっ、はーい今行くわー！」
返事もそこそこに母さんとともに玄関へ。すると見慣れない靴が置いてあった。
「じゃあ優子、これを履いてくれる？」
「え？」
母さんが指さしたのは、靴のつま先からかかとにかけて傾斜があって、かかとには柱が立っている靴。いわゆる「ハイヒール」と呼ばれるものだ。そういえば最初の買い物の時買ったっけ？
「ど、どうして？」
「ふふっ、カリキュラムにはなかったけど、ハイヒールに慣れるのも、女として重要と思ったのよ」
「どうして？」
「どうしてって、ハイヒールは女の子のファッションの一つよ。それに化粧はともかく、これなら少しだけ背を伸ばせるわよ」
「うん」
正直背を伸ばしてどうするんだろう？　男なら重要だけど、女の身長ってそこまで重要か？　実際男子はそんなこと殆ど気にしていないし。
と思ってしまったが、まあ反論しないでおこう。
ともあれ、ファッションの幅が増えるのは魅力的だ。カリキュラムを受けた当初のことを思い出し、チャレンジ精神でハイヒールを履いてみる。
ハイヒールの入れるところにめがけて足を移動していく。
「あっ！」
足がやや右にずれていたせいで履くのに失敗し、ハイヒールが倒れた。これはしゃがんで直す。ここはズボンだから問題ない。
「お母さんは手伝わないからちゃんと履いてみて」
「う、うん」

もう一回チャレンジする。今度は座って靴を持って足に入れていく。
もちろん反対側も同じようにする。
「できれば、立ってやってほしかったけど、今はいいわ」
とりあえずこれで立ち上がって……ってうわっ！
「おっと、大丈夫？　気を付けてね」
かかとを支えるヒールが心もとなく、立ち上がるときにバランスを崩してしまった。母さんに支えてもらわなかったら転んで大惨事だった。
「今みたいに、立ち上がるときにはヒールに力が入るのよ。そして、ヒールがタイルなどとの凸凹に当たってしまうと、今みたいにバランスを崩してしまうわ」
「う、うん」
「もちろん、道端の障害物は気を付けて。今はズボンだからまだいいけど、スカート、特にミニだと下手したらすってんころりんで丸見えよ、後はハイヒールでミニだと階段もいつも以上に気を付けてね」
「き、気を付けます」
「後、ハイヒールを履くときに注意すべきことは、ハイヒールを履きすぎないことと、履くときもつま先に力を入れすぎないことよ。外反母趾（がいはんぼし）になりやすいわ」
「外反母趾？」
「足の親指が曲がっちゃうのよ」
うげっ、それは嫌だ。
「本当はハイヒールそのものを履かないのが一番いいんだけど、女社会そうもいかないからね。もし外反母趾になりそうで心配なら、それ用のサポーターを買ってくるから付けてみてね」
「さて、ハイヒールはここまでにして、買い物に行きましょ」
「はーい」
母さんの案内で、また区役所のある中心街に電車で行く。駅まではかなり慎重に歩いたので幸いにもハイヒールで躓くことはなかった。

また、電車賃は母さんがその場で往復分を払ってくれた。現金ではなくＩＣで処理したので、ＩＣ料金を現金で手渡ししてくれた感じだ。

今回は駅の目の前にあるスーパーマーケットが目的だ。最寄駅にも同系列のスーパーはあるが小さく、品ぞろえはこちらが比較にならないほど良く、また安売りセールも多いため、電車賃を余裕で回収できるらしい。

母さんはさっそく安売りセールの部分に向けて進んでいく。

「いい？　安売りセールは逃しちゃダメだけど、買いすぎも駄目よ。こういうのは裏があって賞味期限が近いだとか、品質に問題があることさえあるわ。特に口に入れる食品は安売りを見ても飛びつくんじゃなく、理由をよく考えから買いなさい」

「は、はい。でもどうやって判断するの？」

「賞味期限が近いだけなら比較的大丈夫。だけどその場合でもなるべくすぐに調理するのよ。安全性は……そうねえ産地とかを見るといいわ。後は見た目ね。安いアウトレット品は形が崩れているだけで味が変わらないと言っても、あんまりに形が崩れているといろいろ良くないことがあるわよ」

「……」

「そんな所ね、他に質問はあるかしら？」

「ううん、ない」

「じゃあ、買い物始めるわよ。優子はこれをお願い。手分けして買うわよ」

「はーい」

買い物に付き合った後は、そのまま家に帰りあわただしく昼食の準備を開始した。

昼食中、ふと思う。ズボンで外に出たのは、入院したあの日以来だ。

カリキュラム中はずっとスカートを穿いていたし、制服はもちろんスカートだ。ここ一週間も、学校から帰ったらそのままパジャマか、あるいはスカートだった。

普通の女子でも、ここまでスカート率高くないんじゃないかな？

と思う。

「それにしても、優子のズボンも久しぶりね～」

「うん、お父さんも久しぶりに見た気がするよ」

昼食中、母さんが話しかけ、親父が同調する。

「う、うん。考えてみたら、カリキュラム開始してからパジャマ以外ほとんど……というよりも全部スカートだったよ」

もちろん、スカートだけと言ってもバリエーションはある。

家の私服に関しては、やっぱりまだまだミニを穿くのは少なくて、ロングスカートやひざ丈スカートが多いが、その中でもマキシやシフォンなどバリエーションもある。

スカートを穿く動機としてもう一つ、母さんが色々買ってきてくれたので、今後女の子として生きていく上で、着心地を一個一個試してみたいという動機もあった。

そのことを母さんに話すと、とても喜んでくれた。教科書によると「成績不良者は、カリキュラム終了後になっても頑としてスカートを穿かなくなってしまう」んだそうだ。

既に分かっていたこととはいえ、他の子よりも「成績優秀」と言われるのはやっぱり嬉しい気分だ。

そういえば、そんな私でも、タイト系のスカートだけはまだ穿いてないことに気付いた。

あれは何となく窮屈で動き辛そうで、スカートのメリットが活かせそうになさそうという予感と、個人的にも男の頃からそこまで好きなタイプのスカートじゃなかったからかなあ……

とはいえ、いつかは穿く機会があるだろう。直前になって慣れるのもいいし、特に意味なく衝動的に挑戦してみるのもいいかな。今は考えないでおこう。

とにかく、ズボンは男の頃も穿けたけど、やっぱりスカートに比べると地味って感じがする。

そう言えば、木ノ本も「地味な格好だと痴漢されやすい」って言っ

てたな。母さんの意見も聞いてみよう。
「そういえば、桂子ちゃんがね、地味な格好だと痴漢されやすいって言ってた」
「あー、そうみたいね。私からすると挑発的な格好の方がされやすいと思うんだけど、実際には違うみたいなのね。変質者とかもそういう叫ばなさそうな地味な子を狙うんだって」
「でね、髪は染めたくないから、外出時もなるべくスカートにしようかなって」
「うん、それがいいと思うわよ。優子、ズボンだと結構お尻が強調されちゃうし。後、ハイヒールも速く走れそうにないから狙われやすくなるみたいよ」
そうは言っても時と状況はあるから、ズボンやハイヒールも残しておく必要があるとは母さんの言葉。
ともあれ、変質者対策については母さんも同意見のようだ。何も変質者は電車の中だけじゃないだろう。
それも踏まえて、外出の時はなるべくスカートを穿くようにしよう。

日曜日、この日は完全にお休みの日だった。
家事を手伝った以外は、服もパジャマのままで、インターネットとゲームをやり続けて1日が過ぎた。少女漫画や女性誌も読まずに画面と向き合居続けるのも久しぶりな気もする。
女の子になりたいのはやまやまだが、最近根を詰めすぎていた。こういう休日も悪くないだろう。
ただ、日曜日の昼食以降、少し気分が悪くなった。
母さんにそのことを話したら「疲れが出たのよ」ということだった。
でも、疲れと気分の悪さのほかにも、少しだけお腹も痛い気がする。明日は大丈夫だろうか？
何せ明日は月曜日、もう休みはない。
私は月曜日の朝とかよりも、日曜日の夜が憂鬱な気分になるタイプだ。

先週は、明日からの女の子としての学校生活のことを思い、楽しみな月曜日だったのに。
女の子になろうと頑張っても、女の子として扱ってもらえない悲しみ。今は田村が判断待ちで、男子連中はいまだに男扱いをやめていない。
今日は痴漢の証拠提出のためのスカートも戻ってきたが、明日から学校だということを思い出してしまった。
親父も「明日から月曜だ」というため息混じりの声はよく日曜夜に言っていたが、まさか自分がそうなるとはな……
それにしても、気分が悪い。これは単に明日が憂鬱だからなのか？
よく寝ればよくなると信じたい。
そう思って、やや気分が悪い中で、布団へと入った。とにかく今は、寝て忘れよう。

# 運命の日　前編

意識が朦朧としながら徐々に回復する。
布団から出たくない。精神じゃなくて、体がだるい。
めまいがする、病気にでもなったのか？
「はぁ……はぁ……」
また意識が朦朧とし始める。とにかく気分が悪くて眠い。
もう少しだけ寝よう……
「優子ー！　起きなさーい！」
大きな母さんの声が聞こえる。
「んあぁ……？」
「ほら、時間よ！」
ああ、そうか、今日は月曜日だ。
母さんに促され、起きる。
やっぱり体が重い。苦戦しながらもいつものように制服を着る。
スカートを短くするのを忘れずにっと。
猫背になりながら身体を傾けながら、ふらふらして食卓へ付く。
確かに起きるのはいつもより遅いが、そんなに慌てる時間ではなかった。
「さ、食べて食べて……って、優子、大丈夫？」
「大丈夫じゃない……体がだるい。後ちょっとお腹痛い……」
「あらあらそうそう、でも大丈夫よ。優子、今までの訓練を思い出してみて。必要なものはカバンに入ってるから、学校で役に立つわ」
「う、うん」
ご飯を食べながら母さんの優しい声と言葉で自分の症状に気付く。
そうだ、私、とうとう生理が来てしまったんだ。女の子にだけ来る、強烈な症状。だけど、女の子の特権である子供を産むのに必要な症状。
これが毎月襲い掛かってくる。しかも他の女性と違い、私の場合死ぬまでだ。しかもその死もおそらく数百年数千年、ひょっとしたら数万年先の話になる。

あー、すごく憂鬱だ。これから、何回これと戦わなきゃいけないんだ。

朝ごはんを食べ終わると、もう行く時間になった。いや、実際には少し早いが、こんな状況だ。早めに出て帳尻を合わせないと。バランスがおかしいが、学校には行かなきゃ。

……いつもより駅までが遠い、というかバランス感覚もおぼつかない。

保健体育の教科書に拠れば、初経はそこまで強烈なものじゃないから、徐々に慣れることも出来るけど、私の場合いきなり成熟した女の子の体になったから、慣れないうちにいきなり「大人の生理」を体験する羽目になった。

女の子らしく生きていき、なおかつこれを止めるは難しい以上、来月以降、慣れるようにしていかないといけない。

少しだけ、だるい身体にも慣れてきて、駅に到着。

相変わらず、おっぱいに突き刺さる男どもの視線。いつもならばまだある程度余裕も持てるが、こういう時に来るのは本当に嫌な気分だ。生理の時で気分の変化でもあるのだろうか？

とにかく来た電車に入る。残念ながら座席は空いて無い。優先席でも座りたい気分だがそこも六人の老人がそれぞれ座っていて断念した。

結局、学園最寄り駅まで座れなかった。駅についても跨線橋への階段を上るのはやめて、エレベーターを使うことにする。

普段なら階段の方が早いんだけど、流石にこの日は体力的にも時間的にもエレベーターがいいだろう。

見るともう一人、リボンの色から一学年下と思われる女子生徒も、だるそうにしながら並んできた。

もしかしたら、「同志」かもしれないな。

そう思いつつ、来たエレベーターに乗り、誰も乗ろうとしないのを確認してからエレベーターを操作して、出る時は私から出る。

改札に定期券のＩＣをタッチして通学路へ。

通学路、一歩一歩が重い。歩幅も小さくなったし、足も上がりにく

くなっている。そのうえややよろめきながらの歩きだ。後から歩いてきた生徒に続々と抜かれているが、心配そうに振り返る人も多い。
とは言え、学校が近づくに連れて気持ちが楽になったのか、少しだけ体調も良くなる。
校舎に入って永原先生の言いつけ通りに何とか下駄箱を開け、靴を履き替える。
「ふぅ……ふぅ……」
荒くあえぎながら、廊下を進む、またかなり気分が悪くなった。そういえば、ナプキンをしていない。
まだ朝の休み時間もあるし……いや、でもまずは少し休みたい。
教室の扉を開け、よろけながら机に向かう。
「おい、優一のやつ、風邪引いたんじゃねえか？」
「どうだかね、ま、俺達の知ったこっちゃねえな」
「女になって弱い子ちゃんアピールしてんだろ」
「ったくよ、それで男だった頃の免罪符にしようってんだからな」
またこれだ、最近この手の「聞こえる陰口」が多い。
女の子として認めてくれないのが、とにかく辛い。でも今は、この直接的な「これ」のほうが辛い。
「優子、どうしたの？」
木ノ本桂子だ。
「あ、ああ。うん、桂子ちゃん。ちょっと気分悪いだけ」
「そ、そう？」
「うん。昨日悪いもの食べちゃったみたい。お腹も痛い……はぁ……はぁ……」
「あ、うん。分かったわ、耐えられそうになかったら、保健室で休んでもいいからね。でも、ちゃんと『処理』するのよ」
さすが女の子、男子にわからないようにそれとなく会話している。
こういう技術の有無が、やっぱりまだ私の至らない点だなあと思いつつも、いつもより遅かったのか、すぐに永原先生が入ってきた。
「はーい、ホームルーム始めるわよー。石山さーん？　大丈夫ー!?」
「だ、大丈夫……です」

本当は大丈夫じゃないんだけど、ともかくホームルームを聞く。
頭に余り入ってこない。連絡事項はなんだっけ？
……まあいいや、ともかく、1時間目までの間にナプキン付けなきゃ。
そう思い、鞄の中からナプキンの入ったポーチを取り出し、女子トイレに向かう。
さっきよりも更に体がだるい。これは保健室に行かないと行けないかもしれない。

「痛っ！」
「あだっ！」
「す、すいません……」
だ、誰かとぶつかった。
「お、何だ石山か？　何か今日は気分悪そうだな、どうした？　……って悪い！　今のは、なしにしてくれ」
田村恵美だ。どうやら気分が悪そうなのと、ポーチを持ち歩いていたことで、察してくれた。本当、男とは違う。
「あ、うん、ありがとう。私、急いでるから」
「お、おう。邪魔してすまない」
よろけながら女子トイレに入り、個室のドアを開ける。
鍵をしっかり締めて座り込む。本来はスカートをめくってからだが今はそんな余裕はない。
パンツを脱ぎ、先日の訓練の通り、ナプキンを併せて穿き直そうとする。
「んんっ……！」
まずいまずい、かなり下腹部が痛い！
そう思った瞬間、いつものあれとは違ったものが流れた気がした。
「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」
苦しさであえぐ。ともかく一旦収まったみたいなのでビデに入れる。
「んぁあああ……！」

久々にビデで声が出る。そして入念に洗う。予鈴がなっていたが気にしない。
羽つきナプキンをもう一度確認し、パンツを穿き直す。
「ふぅ……ふぅ……はぁ……」
しばらく休み、立ち上がって便器を見る。赤い液体が目に入った。
ああ、やっぱり。と思った。気分は改善するどころか、めまいが酷くなった。
そういえば、この箱にナプキンが入ってるんだよな。女子トイレ独特の匂いの正体ってこれなのか？　今は考えている余裕はない。
1時間目は永原先生の古典だ、うん、男の先生はもちろん、他の女の先生でも、理解してもらえないかもしれないけど、永原先生なら理解してくれるだろう。
そう思い、向かう先を変更。教室を過ぎて保健室の方向に、よろめきながら進もうとしていた。
「い、石山さん！　大丈夫!?」
下向きに歩いていたので、声をかけられるまで気付かなかった。
わざわざ廊下に永原先生が出てきてくれていた。永原先生は私を心配そうに覗き込んでいる。私はなんとか顔を上げる。
「ぜ、全然駄目です……ぜえ……めまいがして……頭と下腹部が痛くて……はぁ……はぁ……重いです」
「そ、そう……保健室で休みなさい」
「はい……そうします」
というよりもこんな体調じゃ止められたとしても保健室に行くだろう。
保健室への道のりは幸いにして短く、階段を降りればいいだけだ。人気がなくなった廊下を進み、扉を開ける。
ガラガラガラ
「はーい」
保健の先生が立ち上がる。
「どうしましたー？」
「き、気分が悪いので……休ませて下さい」

「どういう症状です？」
「その、せっ、せい……ふうっ、下腹部が痛くて重くて体がだるくてめまいがしてます」
「ああ、はいはい。じゃあそこのベッド使ってね」
保健の先生が指差したベッドのカーテンを開ける。保健の先生も当然生理のことはよく知っているが、やはり直接口にするのは、どうしてもはばかられる感じだ。今も危うく言ってしまいそうになった。気をつけないと。
そして布団をずらして、中には入れるようにする。
靴を脱いで、横になる。中でスカートがめくれてパンツが直接布団についていたので入って直す。
目をつぶる。とにかく、今は休みたい。辛くてたまらない。
だるさと疲労、倦怠感から意識が飛ぶのには苦労しなかった。

……ふと起きる。お腹すいた。人参が食べたい。ほうれん草が食べたい。
まだ気分の悪さは続いているが、寝る前よりはかなりマシだ。
とにかく布団を起こして座り、スカートとリボンを直して上履きを履いて立つ。
そしてカーテンを開ける。
「あら？　起きました？」
保健の先生が声をかけてくれる。
「はい……眠って少し良くなりました」
「まだ顔色がよくありませんので無理しないで下さいね」
「は、はい」
時間を見ると昼休み少し前、２時間目の途中だ。この時間なら、学食もまだ空いてるし、早めの食事と行こうかな。
さっきよりはやや軽い足取りで、それでもいつもよりはかなり重い足取りで、少なくともよろめかずに学食の前まで来た。
誰もいないが、この時間には準備はほぼ終わっている。
食券欄を見る。「野菜ラーメン」という文字か見えた。

よし、これにしよう。なぜか分からないが、猛烈に野菜が食べたい。
「あれ？　授業はどうしたの？」
食堂のおばちゃんが声をかけてきた。
「そ、その、すごくお腹痛くて……気分が悪くて、保健室で休んでました……今もまだ気分が悪いです……」
「あ、あらそう、それは大変ね……って、あなた石山優子さんじゃない!?」
「え、わ、私を知ってるんですか？」
「知ってるも何も、あなた今学園で一番の有名人よ」
し、知らなかったわね。
『外見は小谷学園一の美少女、木ノ本桂子をも遥かに超える美少女。しかしその中身は乱暴で問題児だった石山優一』ってことで、学校中であなたが男なのか女なのかで論争中よ」
というか、木ノ本ってクラス一でも学年一でもなく、学校一だったのかよ。そっちの方が驚きだ。たしかに木ノ本は美人でかわいいけどまさか学校で一番だったなんて知らなんだ。
「私、女の子扱いして欲しい」
「……そう思うのね。永原先生が感心してたわよ。稀に見る立派な子だって」
「そ、そうですか、ありがとうございます」
「でも、そう言う永原先生だって、若いのに立派だと思うわねえ」
「そうそう、もう一人の古典の先生、あの人おじいさんでかなりのベテランなのに、『永原先生はわしより知識も教え方のスキルも段違いにいい。学ばせてもらっている』なんて言うんだもの、びっくりしちゃったよ」
私は、「おばちゃん、それは永原先生の実年齢が若くないからよ、むしろそのおじいさんよりずっと年上よ」と言いたいが、狂人扱いされるのがオチなので止めておく。
「おっと、長話しすぎたね。ともあれ注文を聞くわよ」
「これ、お願いします」
「はーい、野菜ラーメン入りましたー！」

この学食を独占する気分。悪くないわね。
普段のこの時間は、下ごしらえが中心だが、たまに用務員さんや休憩中の教員が軽く食べたりもするらしい。
学生に不人気なメニューはそう言う意味で残っているそうだ。
「はい、野菜ラーメンよ。野菜たっぷり食べて、元気を取り戻しなさい」
「あ、ありがとう」
トレイを取り、適当なカウンター席に座る。
そして野菜をむしゃむしゃと貪るように食べる。カウンターということで足も開く。向こうの壁から見てる人が居たら丸見えだ。そして食べ方もいつになく、男の頃のような荒っぽい食べ方だ。
もしこれがカリキュラム中だったら、とっくにスカートめくりの羞恥プレイだ。
みるみるうちにラーメンがなくなっていく。今は麺もスープも完食したい。
まるで食欲だけが男に戻ったようだ。
太ったりしないだろうか？　むしろこの頃は食べたほうがいいのかな？
久々にスープまで完食し、トレイを取ろうとすると、誰かが注文していたのが見えた。
……よく見ると永原先生じゃない。どうやら食パンをかじっているようだ。
邪魔すると悪いだろうし、見なかったことにしよう。
相変わらずだるい身体を返却口に持っていき、気付かないふりをしながら食堂から出ようとする。
「……石山さん！」
「!!」
本来なら授業に戻らなきゃいけない時間帯、思わず身体がびくってなる。
「大丈夫よ、怒らないわ。石山さん、今日は初めての女の子の日でしょ。保健室どころか本来なら家で休まなきゃいけないくらい具合

悪くしてまで学校に来て……人混みを避けたいと思うのは当然よ」
「あははっ、す、すみません」
「謝ることないわよ、今日は特別。私はもうとにかく苦しかったことしか覚えてないけど、ＴＳ病の子の最初は本当にみんな苦しむのよ」
「あ、ありがとうございます」
「確かに教師としては叱らなきゃいけないところだけど、ＴＳ病のカウンセラーとしての知識も加味すると、今は優しくしなきゃいけない場面なのよ」
　ともあれ、この場は見逃してくれるみたいなのでありがたく受け取っておこう。
「で、石山さんに確認しておきたいことがあるの。これは、女の子になるための最後の大きな関門よ」
「う、うん」
　キーンコーンカーンコーン
「あ、ここはまずいわね。相談室に行きましょ」
「は、はい。相談室ってどこですか？」
　恥ずかしながら、行ったことがない。
「ええ、職員室の向かいにある２室よ。放課後にスクールカウンセラーの先生が来ていて、昼休みは基本的に誰も使わないけど、今回は入っていいわよ」
「だ、大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ、これは教師としてと言うよりは、日本性転換症候群協会の会長として、ＴＳ病のカウンセラーとして、石山さんと話したいのよ」
「どういうことですか？」
「いい？　私は教師として小谷学園２年２組の担任だけど、同時に日本性転換症候群協会会長として、石山優子さんの担当カウンセラーでもあるのよ。さ、行くわよ」
　永原マキノは２つの顔を持ち、それを使い分ける女性、ということね。
　両者が相反した時には苦渋の選択もありそうだ、今の私の場面みたいに。

ともあれ、初めてきた生理のことの他にも話したいことがあるから、お言葉に甘えさせてもらおう。

# 運命の日　後編

職員室の向かいにある相談室に永原先生が入る。
それに続けて自分が入る。体の怠さは食事もあってかなり緩和されたが、それでもかなり残っている。足取りは重たいし、生理に伴う極度の体調不良とはいえ、午前をすっぽかしてしまったからクラスメイトに会いたくない気持ちもあった。
ドアを閉めると、永原先生が着席を促してきたので、座らせてもらう。
「さ、石山さん。ここには私とあなたしかいないから、単刀直入に聞くわね……生理が来て、気分はどう？」
「さ、最悪です」
「うん、正直だね。で、もう一度聞くわ。石山さん、こんな辛い痛みを経験しなきゃいけないと知って、男に戻りたいと思った？」
ぶんぶんっと首を思いっきり横に振った。偽ざる思いだ。
「そう、それでいいのよ。でも、もう一つ聞きたいわ。石山さん、あなたは『どうして』生理に直面してなお男に戻りたくないと思ったの」
「少し、考えてもいい？」
「ええ。即答できる話じゃないもの」
永原先生の出した難題について考える。
……生理、確かにとても辛い。股から血が出るし、ナプキンを付けなきゃいけないし、気分も悪く、お腹が痛くて保健室で寝込んでしまった。
でもそれは、女の子の役目である妊娠と出産に欠かせないこと。そして自分の身体の中で、赤ちゃんを作り、産むことが出来るという意味でもある。
赤ちゃんを産む。まだそのことに関して考えたことはないが、少なくとも、卵子が私の中にある事はわかる。
女の子として、子供を産む。とても大切なことだ。子孫を残さなければ、人類は滅びてしまう。
だから、生理も含めて、毎月の痛み、辛い痛みも含めて女の子だと、

私は思う。
そう考えると、何故だろうか……しばらく言葉で言い表せない思考が頭をぐるぐる駆け巡った。
……どうしてそう言う考えになったのか、もう混乱して自分でもわからない。だけど、今はなぜか、この痛みが嬉しかった。
ともあれ決心がついた、永原先生に話そう。

「先生」
「はい」
「あの、私……この痛みと向き合いたいの。これが来るってことは、赤ちゃんが産めるってことだから。一人前の女の子になるのに、これは、絶対に避けられないから……だから……」
「この痛みも受け入れて、辛いけど……でも、本当に女の子なんだって実感できることだから……どうしてそう思ったのかはまだよく分からないけど、今は痛みが嬉しいの」
「……私は女の子として、痛みを感じながら、生きていきたい！　痛みから逃げたら、女の子じゃない！　この痛みは、私が女の子だという証だから！」
「石山さん、あなた……」
永原先生は言葉に詰まる。
返答を待っていると、永原先生はおもむろにポケットからハンカチを取り出して顔を拭っていた。
泣いているの？　そう聞く勇気はなく、自分はただ返答を待っている。
「……ご、ごめんなさい。私はＴＳ病の子を……１３０年以上見てきたわ……でも、あなたみたいな子は……初めてなのよ」
永原先生は、またハンカチで顔を拭う。明らかに泣いている。
「こんなに……こんなに一生懸命に向き合って……最初の生理の時に……痛みも受け入れなきゃいけないって……健気になる子なんて居なかったわよ。ましてや、それを女の子になれて嬉しいって……」
永原先生は涙声になりながら、そう話す。ふと永原先生の目の下を

見ると、一筋の涙が流れていた。
「石山さん、他の子は、ね。成績がいい子でも『どう頑張っても戻れないから仕方ない』とか『男は辛いから、生理痛を差し引いても女がいい』とか、そう言う答え方をするのよ」
「もう一つ聞いてもいい？　石山さんは『どうして』他に例がないくらいにそんなにも一生懸命なの？　やる気は感じていたわ。でもその理由が知りたいの」
「……私、以前自分が嫌いでした。すぐに怒って、乱暴する。両親がせっかく『一番優しい』って願って『優一』って名前をつけたのにって。でも結局やめられずに、ずっと両親の想いを踏みにじりながら生きていたんです」
「でも、あの日、私は神様にもう一回チャンスをもらえたんです。今度は『優しい子』になれるようにって……多分、この痛みを覚えないと、私は本当の意味で『優しい子』にはなれないから。だから、受け入れたいんです」
「うん……うん……ごめんなさい、少し、感慨に浸らせてくれるかしら？」
　永原先生も、教育者として、カウンセラーとして、思うところはあったんだろう。こちらに背を向け小さく泣いている。
　でも、しばらくするとそれを抑えて、再びこちらに向き直った。
「多分これから、石山さんの永い人生において、何度も男女の違いで困難は来ると思う。でも、今の心を忘れなければ、きっと最後に、あなたは救われるわ」
「先生、そのことでもう一つあるんです」
「何？」
「実は、あのあと私の想いを伝えたんですが……クラスの男子が、私のことをまだ……いえ、ますます激しく『優一』って呼ぶんです……高月が私の事……性転換手術したんじゃないかって疑い始めて、他の男子まで……」
「それに桂子ちゃ……木ノ本さんのグループは理解してくれたんですが、田村さんはまだ判断を決めかねてるようで……」

「うーん、そうなの。でも、男子の説得は難しいわよ」
「やっぱりですか」
「男子にはこの痛み、苦しみは分かりませんから」
「……そうなんですか？」
「ええ、文章や口頭で説明しても、結局体験しないとわからないこともあるんですよ」
確かにそうだ。辛い、痛い、気分が悪くなる。
男の頃より、生理に関するそういった話を言葉では知っていたが、こうして実際に体験するとその辛さは格別だった。
「しかも、これは毎月やってくる。一旦は女になる決意をした患者でも、この生理を超えられずに、結局また戻りたいと思ってしまって、悲惨な末路をたどることになってしまった人もいるのよ」
「それでも、石山さんは乗り越えられると思ってたわ。でも、こんな答えが返ってくるとは思わなかったわ……」
「……石山さん、なぜあなたが嬉しいと思ったか。教えてあげますよ」
「わ、分かるんですか？」
「もちろん推測だけど……多分、クラスの男子から男扱いされて、石山さんはアイデンティティが揺れた。でも、この痛みを体験したことで、改めて、完全な女の子なのだと知ることが出来たからよ」
そうだった。生理が来たということは、自分は決して「皮だけの女」ではないことを証明するものでもあるんだ。
「それじゃあ、そろそろ私の話は終わるわね。午後も辛いでしょうけど、頑張ってね……男子は無理でも、木ノ本さんと田村さんにはあなたのことを伝えておきます。必ず良い結果になりますよ」
「は、はい」
とりあえず、あまり戻りたくないけど教室に戻る。荷物を椅子の下に置きっぱなしだ。
また少し重くなった体を引きずりながら、教室の扉を開ける。
「はぁ……はぁ……」
休み時間、それも多くが学食などで食事を取ってるだろう時間とあって人もまばらだ。

「おい、どこ行ってたんだよ？」
男子の一人、篠原浩介が声をかける。
「保健室で、休んでたわ」
「嘘つけ、昼休みはいなかったぞ」
「昼休み前に、永原先生に呼ばれたのよ」
嘘はついてない。
「けっ、何の用だよ！」
「私の病気のことで、相談に乗ってくれるのよ」
永原先生は、私に感激していた。
「はっ、贔屓かよ。どうせ仮病のくせに……」
でも、この男に、それはわからない。通じない。
「ちょっと！　男子！」
違う、と言おうとしたところで、一人の女の子が声を上げた。
その間に、椅子に座りぐったりする。
「な、なんだよ！　木ノ本、お前には関係ねえだろ」
「あんた、デリカシー無いの!?」
「だ、だからこいつは仮病だろ……」
「私も女の子だから、優子ちゃんの苦しみが嘘じゃないことくらいわかるわよ！」
「ふんっ、大方、こいつがお前の唯一の男の話し相手だった石山優一だから肩を持つんだろ？」
「……あんたに、何を言っても無駄みたいね。こんなに辛そうにしてるのに、優子ちゃんが可愛そうよ」
「うるせえ、これは男の喧嘩だ。女はすっこんでろ」
「きゃっ!!!」
「ちょっと篠原！」
うつぶせになっててよく見えないが、大方篠原が木ノ本を押したんだろう。
さすがに、他の女子も非難の声を上げる。河瀬龍香が間に立って守っているようだ。
あくまで男として接しようとする男子と、そうはさせまいとする木

ノ本グループの女子たち。
騒ぎも大きくなり始めたため、篠原浩介がいったん引いた。
数分後、高月章三郎が教室に帰ってきた。
「篠原、何かあったのか？」
「あ、ああ。木ノ本が優一をかばうから。でもほかの女子にも阻止された」
「頭悪いなあ、こういうのは誰もいないところでやるんだよ」
「あいつ、生理の演技までしてるぜ。なのに女子のやつは――」
「篠原、もう本当かウソかなんてどうでもいいんだ」
「どういうことだ？」
「今こそ、あいつに仕返しするチャンスじゃねえか。実際どうかは知らないが、あいつは自分を女の子だと思ってる。それをとにかく否定し続けて、男の土俵に引きずり込むんだよ」
「なるほど、そうすれば女子も近寄れねえってか、頭いいな高月は！」
ああ、そうか、それじゃあもう、どうにもならないじゃないの。
もう私に、力はない。怒鳴って力ずくはもう通じないし、したくもない。
私は弱い存在になった。私はこのまま、男子にいじめられて過ごすんだ……

篠原浩介は、本当は気弱で怖がりな性格だったはず。だから、私は男の時一番よく怒鳴ってた。今は豹変している。それがあの忌まわしい時代の記憶を思い起こす。
因果応報と言われればそうかもしれない。これも含めて私への罰。だとしても、耐えることができるかな？　とても不安だ。
チャイムが鳴る。重い身体を起こしながら、３時間目の授業が始まった。
今日のホームルームが終了する。木ノ本桂子が永原先生に呼ばれていた。何を話しているのかはよく聞こえないが、おそらく昼休みに

言っていたことだろう。木ノ本が何かを感情的に訴えているようだった。
私のことかどうかはわからないが、ともあれ、重い身体で下駄箱に移動する。
ローファーに履き替え、いつもよりゆっくりした速度で、何人もの生徒に抜かれながら駅へと向かった。
学校から帰ると、制服からすぐにパジャマになった。
「優子ー！　入るわよー！」
「はーい」
普段より元気なく返事をする。
「優子、今日、来たでしょ？　アレ」
「う、うん」
いつぞやの痴漢された日のように、今日はこの話題で持ちきりだ。
「そうそう、寝る時もナプキンを付けるのよ。つけないと寝てる間に下着が血で汚れるわよ」
「う、うん」
「で、ナプキンには夜用と昼用とかもあるから、ちゃんと用途によって使い分けなさい」
「はーい」
「使い方は変わらないわよ。ナプキンはちゃんとそれ用のごみ箱に捨てなさい。学校とかにもあるからね」
「はい」
「それじゃご飯になったら呼ぶからね、辛くても食べないとだめよ」
「わ、分かってる」
むしろ、私の場合生理中には食欲が出てしまうタイプだ。
結局この日は、食事とお風呂以外の時間を、ベッドに横になって過ごした。

翌日、相変わらずだるく、下腹部は痛い。
でも昨日よりは遥かにましだ。単純にちょっとうざいくらいで普通に動くことができる。

とはいえ、今日も念のためナプキンを付けて登校することにした。
また男子のことを思い出す。木ノ本に慰めてもらうかなあ……
そんなことを考えながら通学路を歩く。最近では私の存在も慣れてきたのか、誰も話題にしていない。
しかし、クラスは違う。
教室の扉を開けるとまた別の男子の一人が言った。
「よお、優一、今日は仮病はやめたのか?!」
「……なんだこいつ、またしかとしてやがるよ!」
本当は態度に表せずに我慢しきれるだけで、ちょっと苦しいのに。
そう思いつつ、いったん荷物を椅子に落とし、ロッカーへ向かう。
1時間目の教科書とノートを出す。よし、これでいい。
「はーい、ホームルーム始めるわよ!」
永原先生の号令とともに、ホームルームが始まった。

「そうだ、見学の旨を話さないと……」
ホームルームが終わり、職員室に戻ろうとした永原先生を呼び止める。
「せ、先生。すみません」
「はい、石山さんどうしました?」
「今日の体育なんですけど……」
「ええ、昨日の今日でまだ痛いでしょ? 見学のことは私の方で体育の先生に行っておきます」
「ありがとうございます」
何とか連絡は終了した。
とにかく気分もまだ悪いので、休み時間はずっと座って体力を温存する。
身体を机に引っ付ければ体力も温存できる。
「なあ、あいつのことなんだけど」
田村がグループの女子と何か話している。
「昨日の様子だけど……」
「ああ、あたいも見たよ」

「あれは、どう考えたって性転換手術なんかじゃないよ」
「ああ、性転換手術ならアレは来ないはずだ。わざわざ希望するバカもいねえだろうよ」
「ねえ、恵美。私、いくら考えてもあいつは中身も女にしか見えないよ」
「ああ、あたいも、もしかしたらとんでもない間違いをしてるんじゃねえかって思い始めてる。でも、まだ決心がつかないぜ」
田村のグループが、私の扱いで動揺している様子が聞き取れる。
彼女たちもまた、昨日私に何が起きたのかは理解していた。
「どうして？」
「そりゃあ、あいつを女と認めるとすると、先に女扱いした木ノ本に負けを認めるってことになる……だけど、今はあたいの面目を潰してでも、あいつに謝るべきなんじゃないかって考え始めてる」
「なるほど……それは嫌ね」
「でもよ、いきなり倒れて……女にされて……男子からいじめられてる今のあいつの辛さから比べれば、小さいんじゃねえかって……」
「わ、私は反対です。あいつの軍門に下るなんて」
「じゃあ、男子と一緒になってあいつを男扱いすんのか？」
「そ、それは……」

キーンコーンカーンコーン

「あ、予鈴だ。悪い、もう少し、考えさせてくれねえか」
「ああ、うん」
結局、彼女たちの議論は予鈴によってかき消されてしまった。

体育の授業、実は高校に入ってから見学になったのは男時代を含めて初めてだ。
でも、男女から引き離された場所で着替えなくていいのは、楽だった。もっとも、生理とは全く釣り合ってないけど。
「はーい、今日は石山さんが体調不良で見学です。では、いつものよう

に準備運動を始めます」
今日で走り幅跳びは終わりだ。みんな先生の指導で少しだけ記録が伸びている。
自分の記録は、高校生女子と言ってもかなり低い方だ。先週金曜日に受けた体育の授業でも、終始自分のひ弱さを見せつけられるだけだった。
体育の授業中、私への視線はそこまで感じない。みんな授業に集中している感じか。
体育の先生は男の先生だが、それでも私の事情は察してくれたようだ。
体育の授業が終わり、着替え終わる。6時間目になると、だるさもだいぶ緩和されてきた。久しぶりに授業に集中できた気がする。
帰りのホームルームが終わる。
この日、今度は田村恵美が永原先生に呼び出されていた。田村は何か、激しく後悔するような素振りを見せていた。
詳しいことはよくわからないけど、とにかく自分の体調もまだ万全とは言えない。
家に帰って、ゆっくり休まねば。

# 和解の種

水曜日、もう痛みはかなり引いた。まだ残ってはいるものの、2日前のあの地獄に比べれば、かなりマシだ。

いつものように制服に着替える。男子のいじめはひどいけど、永原先生や木ノ本のことを考え、心の支えとしながら登校している。

でも、どうしよう？

このままではよくないことが起きる。今はまだ男子呼ばわりしているだけだ。でもそれだけでも、心はひどく傷つく。

そういえば、木ノ本と田村が呼び出されていた。何を話しているかはわかったが、あの反応はいったい何なのか？

教室に入り、席に座ろうとする。今日はぐったりしなくても我慢できる。

「な、なあ石山！」

男子がいつもの優一呼ばわりをする前に、いきなり田村が声をかけてきた。

「え、えっと、田村さん、どうしたの？」

「あ、ああ悪い、まだ具合悪いだろ？　席に座ってくれ」

「うーん、もうだいぶ良くなったけど、ありがとう」

「あんたの話、昨日先生から聞いたぜ」

「どういうこと？」

「あの日、昼休み、あんたは先生と話してただろ？」

「う、うん」

例の相談室でのことかな。

「あんたの覚悟のことだ。あたいはよ、それを先生から聞いて……すげえ、後悔してるんだ」

「なあ、石山……本当に……本当に……」

「本当にすまなかった!!」

田村は大きな声で謝ると同時に、自分に対して頭を深々と下げてきた。

クラスも動揺している。あれだけプライドの高い田村恵美が、ここ

まで直球に謝る姿を、誰も見たことがない。
「あ、あの……」
「あたいはよ、先生の話を聞いて、女子扱いできないなんて思ったあたいが……本当に情けなくてよ……何で、何でもっと早く、あんたの頑張りに気付けなかったんだって」
「昨日からずっと後悔の念で押しつぶされそうだった。あたいは、木ノ本に負けるのが嫌だって……そんなちっぽけなことで、あんたを苦しめちまったんだ！　あんたはまだ女の子になって、日は浅い。だから、グループには入ってねえのによ」
田村さんは、やや涙声になりながら、まるで懺悔の告白をするかのように私に謝ってくる。
どうしよう、あまりの予想外の展開に、なんて応えればいいかわからない。
「……これは、あたい個人の謝罪だ。グループとしては、まだ木ノ本のグループへの反抗心が残っとる。それも含めてあんたには申し訳ないと思ってる。だけど、あたいはあんたの味方をすることにした。それだけ、覚えてくれ」
「う、うん！　ありがとう！　その言葉だけで、嬉しいよ！」
「ああ！　あたいも、そう言ってもらえて、嬉しいな！」
私と田村さんが、感激の言葉を述べる。
クラスの前で謝罪、田村さんにとって、とても辛い決断だったはず。
それでも、私が受けてる仕打ちよりはずっとマシだって。面目を潰してでも謝罪した彼女の決断は、決して私の辛さに引けを取るものじゃない。
男子も、あまりの事態に動揺していて、私へのいつもの優一呼びの嫌がらせをしてこない。
「はーい、ホームルーム始めるわよー」
永原先生のいつもの声によって、今日も1日が開始された。
「ねえ、優子。話があるんだけど……」
昼休み、食堂から帰ってきた私に、今度は木ノ本桂子が声をかけて

きた。
「うん、いいよ」
「こ、ここじゃまずいからさ、ちょっと私について来てくれる？」
「う、うん」
そういえば、木ノ本と並んで歩いたのも久しぶりだ。
男の頃は単なる話し相手だったし、女になってからも。だ。
廊下を木ノ本の先導で横になって歩く。
他の生徒の視線が凄まじい。一部では私達を見て何かざわついている。
よく考えれば、外から見れば学校一の美少女と学校第二の美少女が揃い組になっているのだから無理も無いかもしれない。
その後、廊下を出て中庭の影になっている部分に来た。この付近は空調機の近くでその音が少ししていて、また少し湿度も高めかつ暗い場所ということで、人気がないところだ。
「ここなら、人気もないわよ」
「……ありがとう。それで、話ってのは？」
「月曜日のことよ。今朝、田村がすごい勢いで謝ってたけど……」
「あ、ああ、同じ話題よ」
「田村、優子ちゃんの味方になってくれるんだってね」
「う、うん。すごく後悔してるって。ともあれ私を助けてくれるみたいで嬉しかったよ」
「そう、優子ちゃんは……そうだよね、味方は多い方がいいもの。ただでさえクラスの半分が敵なんだから」
「うん。桂子ちゃんと田村さん、どうして仲が悪いのか、まだ私にはわからない。でも、この問題は、そういうことを持ち込むべき問題じゃないと思うの」
「そう……ね。田村もああやって頭下げたんだもの。ここで私が意地を張ったら、私の立場がないわね」
「……ねえ、桂子ちゃん。桂子ちゃんも私のこと、永原先生から？」
「……うん、聞いたよ。あの時の優子ちゃん、傍目にも辛そうに見えた。でも、先生言ってたよ。優子ちゃん、そのおかげで女の子として

の自己を確立できて嬉しかったって」
「うん、でもあの時はちょっと頭が混乱してて……」
「そう……でも、私は本心だと思うわよ」
「私も女子だから分かるわよ。それに、優子ちゃんの場合、生きてる限り、永遠にこの痛みから逃れられないんでしょ？」
「う、うん」
「それでも、そこから逃げないで、向き合おうとする優子ちゃんに心を打たれない女子は居ないわよ」
「……」
「……ねえ、優子ちゃん、あの時教えてくれなかったけど、優子ちゃんが休んでた一週間、何をしてたの？」
「……それを言うのは恥ずかしいよ」
「そう、無理にとは言わないけど、優子ちゃんがよければ教えてくれる？　優子ちゃんの頑張りを知りたいの……だめ？」
信用してもいいかもしれない。
「……う、うん。分かった」
私はカリキュラムの詳細な内容を木ノ本に教え始めた。
女の子としての仕草、態度、言動を叩き込まれ、家事の仕方を指導されたこと。もし言葉遣いや態度を間違えれば都度修正した後、自己暗示をかけさせられたこと。
永原先生からは、学校生活の仕方、制服の着方、体操着や水着の着方などを叩き込まれたこと。
途中からは、もし間違えればスカートめくりのおしおきと、「乙女のはじらいを身につけさせる」という名目で、恥ずかしがるように強要されたこと。
女の子を強調した格好で外出させられ、男時代の制服、体操着、私服、本をリサイクル店で売ることになったこと。生理用品の扱い方を学んだこと。
木ノ本桂子は途中、「スパルタ教育」と言った。当たってなくもない。
だけど、これらに何一つ後悔なく、全部自分から進んでやったこと。

永原先生が、「成績優秀」だと言って褒めてくれてとてもやりがいを感じていたことを特に強調して話した。
「優子ちゃん、辛くなかったの？」
「ううん、カリキュラムは楽しかったよ。新しい発見が毎日あったし、女の子らしくするとすごく褒めてくれたし。何より、優しい子になれるって思うと、嬉しかったよ……スカートめくられるのは、さすがにすっごい恥ずかしかったけど、でもそう感じることが女の子らしいんだって言ってくれて……」
「健気……だね……うん、ごめん」
　木ノ本は顔をそらすとハンカチを出してきた。やっぱり、永原先生と同じ。何か思うところがあったのか、少し泣いていたのかもしれない。
　しかし、木ノ本はすぐに向き直った。
「それと、もう一個気になることがあるの」
「何？」
「永原先生のことよ。優子ちゃん、永原先生との関係で、何か隠していること、ない？」
「……正直に言うと、ある」
「確かに担任の先生として、いきなり女の子になった優子ちゃんを気にかけるのは分かるのよ……でもそれにしては、親身にすぎるのよ。こんな特殊な病気、普通は専門医やカウンセラーが付くはずなのに」
「……私のカウンセラーは……永原先生なの」
「ど、どうして!?」
「……言わなくちゃダメ？」
「無理にとは言わないわよ。ただ……やっぱり気になるから教えて欲しいの。永原先生と優子ちゃんの秘密」
「……うん、桂子ちゃんが言うなら。話すよ」
「あ、ありがとう」
「でも、口外するなとは言わないけど、あまり人に話さない方がいいわよ」
「え？　どういう？」

「……実はね、永原先生は……私と同じ病気なのよ」
「そ、そうなの!? じゃあ永原先生は元々……」
「私と同じように、昔男だったのよ」
「……そうだったのね。だからあの日も、保健の先生じゃなくて永原先生が飛び出してきたのね……」
「う、うん。多分」
「ねえ優子ちゃん、永原先生って３０の割には若いと思ったんだけど、それもＴＳ病のせいなの？」
「うん、だけど……永原先生が３０歳ってのは嘘なのよ」
「え？ じゃあいくつなの……」
「信じてもらえないと思うけど……永原先生の本当の年齢は……４９９歳だよ。永原先生は戦国時代の生まれで織田信長よりも年上なの」
木ノ本の顔が硬直した。久々に見た、顔全体が驚きに染まる様子。
「し……信じられないわ……！ だってそんな、そんなまさか……！」
「信じろっていうのは難しいのはわかってる。だけど、ＴＳ病っていうのはそう言う病気なのよ」
「自分の手で人生を終わらせるか、事故や事件に巻き込まれるかしない限り、半永久的な時間を過ごす。永原先生は、長野県で真田家の足軽をしていたのよ」
「そう……だよね……うん、ちょっと羨ましいかもしれない」
「昔はこの病気は不吉だとして殺されていた。永原先生は戦国時代を運良く生き延びて、今この地球で一番長く生きる人となっているのよ」
「そうだったのね。先生の古典の教え方があんな感じなのも納得しちゃったわ」
「ええ、まるでじゃなくて、本当に当時を知ってたってことよ。永原先生の秘密は、これが大筋よ。他に何か、話すことはない？」
「ううん、もう大丈夫……優子ちゃんのために出来ること。私も考えてみる」
「ありがとう、桂子ちゃん」
「じゃあ私、教室に戻るから、優子ちゃんも昼休み終わったら教室で

ね」
「う、うん」
教室に戻りたくない。でも、戻らなくちゃいけない。3時間目の授業も、もうじき始まるのだから。
「よう、優一！　お前、木ノ本と何処行ってたんだよ」
また篠原浩介だ。もう、無視するのも辛くなってきた。
「ねえ、男子！」
誰かが大声を張り上げた。木ノ本桂子だ。
「もう、優子ちゃんをその名前で呼ぶのはやめてあげて！」
「何だ？　また女か！　またお前か！」
今度は高月章三郎だ。
「これは男の喧嘩だ、女はすっこんでろってんだろ！」
「いいえ、優子ちゃんは女の子よ！」
「な、何だよ。俺達が男だと言ったらこいつは男なんだよ！」
「そんな横暴、私は認めないわよ。優子ちゃんを女の子として扱ってあげて！」
「……またそれか。俺たちはな！　この野郎に……こいつの怒りにどれだけ恐怖してきたと思ってんだ」
「今こそ仕返しのチャンスだってんだ。邪魔すんな」
私の中で一つ、邪悪な発想が生まれた。
そうだ、高月章三郎を殺してしまおう。
でもどうやって？　いや、無理だ、この貧弱な身体じゃ、銃でもない限り返り討ちだ。じゃあナイフで脅す？　でも奪い返されたら……
……私は無力だ。どこまでも無力だ。
……そうだ。
「ねえ、男子」
「お、何だよ？　お前も男子だろ？」
「石山優一は……もう死んだのよ」
「は？　何言ってんだこいつ、お前がその優一だろ!?」

「そうねえ……残念ながら不正解よ」
「な、何でだよ!?」
「……私はもう、石山優子だから。石山優一はもう、この世には居ないわ。私の生徒手帳も優子のもの。戸籍にも、学籍にも、優子でしか載ってないよ」
「それがどうしたんだ!? どう言い繕っても、てめえの意識はあの時と同じだ!」
「お願いだから、もう認めて! もう地球上で、私を男扱いするのはこの男子だけよ」
私は気力を振り絞って懇願する。
「はっ、やだねっ!」
「どうして?」
「そんなの俺の認識だからだ」
「……もう、そう思うならそうでもいいよ。そこは譲歩するわよ。でも、せめて呼び方だけは、苗字の石山でもいいから変えてちょうだい」
「やだね、優一くん」

「……何が嫌なのよ! あんたたちの男扱いで、優子ちゃん嫌な思いしてるんだよ!」
いたたまれなくなった木ノ本桂子が口を挟む。
「俺は嫌な思いしてないから。それにこいつが嫌な思いをしようが俺の知った事ではないわ。だってこいつはムカつく奴だし。大袈裟に言おうがこいつが死んでもなんとも思わん。それは俺達がこいつにさんざん嫌な思いさせられたから。つまり石山優一に対しての情などない!」
「おいおい、かっこいいな高月……」
高月がしたり顔でひどいことを言う。それに対して、周りの男子も同調する。
……もう泣きたい。大声を上げて、辛いことを全部吐き出すように、泣いてしまえばどれだけ楽だろう。でも泣いちゃダメ。泣いたらきっと……またいじめられる……!

「最低よ……あんた」
「ふん、何とでも言え。俺は犯罪にならない程度に、こいつに復讐するだけだ」
「あんたはどうせ、一生結婚できないわよ。あんたみたいな最低な奴に、誰もお嫁さんなんか来ないわよ！」
「ふん、今からそんなこと、分からねえよ。じゃあな木ノ本、あんたもあんまりこいつの肩を持つんじゃねえぞ。男子にモテなくなるぞ」
「あらそう？　どうかしらね？」
「どういうことだ!?」
「男子は単純だもの、私だって、自分の顔の良さくらい知ってるわよ」
「なっなっ……!?」
「男子は見た目で選ぶものでしょ？　可愛い子が好きだものねー」
「こ、こんのお……！」
その後も、木ノ本と高月は昼休みが終わるまで口論を続けていた。
そのおかげかは分からないが、放課後の頃には、男子の中にもいじめを躊躇する勢力も徐々に出始めていた。
何せ木ノ本桂子は美人で女子グループのリーダー、グループ内のルックスも田村のグループと比べて高いとあって、彼女たちを敵に回すのを良しとしない男子も出てきたということだ。
それに、田村だって彼女個人ながらも私の味方をするという宣言をしたばかりだ。旗色の悪さを自覚して撤退する男子が出てくるのは当然のことだ。
でも、特に過激派の高月と篠原の二人にとっては、そんなことはお構いなしだった。
女の子として、男にいじめられるのは、同性からのいじめなんかより、よっぽど辛いものがある。
でも仕方ないという一面もある。
それだけ、私のしてきた横暴に対する、彼らの恨みも深いということなのだから。その事実は、私を更に辛い思いにさせた。
下駄箱から靴を取り出して学校に帰る。

ふと、下駄箱の名前欄を見てみる。
そこには、真新しいシールで「石山優子」と書かれていた。
ふと、鞄から生徒手帳を取り出した。そこには、女の子の私の写真と「石山優子」という女子生徒の学生証。
「何をやってるのよ、何度も確認してきたじゃないか優子」心の中の自分がそう話しかけてきている気がした。
でも、私の心中は収まることはない。帰り道、私は女の子としての生きていくことについて、まるでカリキュラムの時に逆戻りしたように自問自答し続けた。
木ノ本も田村も、もう私の味方をしてくれているのに、何故……
その問いに、私はどうしても答えることは出来なかった。

# 女の子として扱って！　前編

金曜日、今週の学校も終わる。女の子になって3週間、石山優子として学校に戻ってから2週間を迎えようとしていた。
今日を耐えしのげば次は土日だ。もし、来週も駄目なら、永原先生に相談しよう。
もう木ノ本も田村も味方だ。いじめだということで、何らかの措置を取ってくれるかもしれない。
そう思いつつも、やはり学校への足取りは重い。
電車に乗り、駅で降りて、そして通学路を歩く。
胸が大きく可愛い顔のため、自分は特に視線を浴びがちになる。
他のクラス・学年の男子と思われる集団からも「やっぱ可愛いよなあ」とか「でも中身は男だろ？」とか聞こえてくる。
中身は男、本当に嫌になる。
女子は木ノ本や田村の顔の広さもあって、そのことをもう話題にしないのに。
私が受けたカリキュラムは役に立っている。
でも、内面を磨いたのに、永原先生からも褒められたのに、認めてもらえないのは、全く磨いていないで認められないよりも、ずっと辛いことだ。
下駄箱に行く、名前欄を見る。「石山優子」とある。
下駄箱の扉を開けて見た。
「あ、あれ？」
な、無い！　上履きがない！
「ど、どうしよう……何で……」
高月か篠原の仕業だということはすぐにわかった。でも証拠がない。
「ゆ、優子ちゃん、どうしたの？」
途方にくれていると、後から登校して来た木ノ本桂子が声をかけてきた。
「け、桂子ちゃん！　そ、その、上履きがないのよ！」

「え？　……あっ！　本当だ！」
「おい、石山、木ノ本！　何やってんだ？　邪魔になってるぞ！」
「あ、田村さん、ごめんなさい、その……」
「田村、優子ちゃんの上履きがないのよ！」
「な、何だって!?」
「きっと男子に隠されたのよ！　こんなこと言えた義理じゃないけど、協力してくれる？」
「ああっ、分かった！　あたいは先生に連絡して来るから、木ノ本は……悪い、上履きを探してくれねえか」
「うん、分かった。優子ちゃんは先生を待つためにここに居てくれる？　声をかけられたら上履きがないことを他の生徒にも教えてあげてね」
「う、うん」
桂子ちゃんと田村さんが散り散りになる。その後も、「何をしているの？」と声をかけてくる女子がたくさんいた。
「上履きを隠された」と告白すると、多くはそのまま去って行ったが、桂子ちゃんや田村さんのグループに近い女の子は桂子ちゃんに合流して、一緒に探してくれた。

「石山さん、上履きがないんですって？」
田村さんが、永原先生を連れてここまで来ていた。
「う、うん」
「どうしましょう？　見つかるまで代わりの上履きを手配しますね」
まあ、それしか無い。
「あ、あったよー！」
女子の大きな声が聞こえる。
校舎は土足厳禁なので、私は引き続きここで足止めのまま、永原先生と田村さんが対応する。
すると、探してくれた女子がみんな戻ってきた。
「これでいいんだよな？」
田村恵美が持ってきたのは、紛れもない、私の上履きだった。

「あ、ありがとう、みんな！」
目が潤んでしまう。自分のためにしてくれた。ということが嬉しかった。
何とか涙をこらえ、上履きを履き、ローファーを鞄の中に入れる。
「石山さん……」
「ごめんなさい永原先生、でも、また隠されたらと思うと……」
「え、ええ。分かったわ」
「ところで、どこにあったの？　私の上履き……」
「……あ、あの……」
「あたいは、言いたくねえぜ」
嫌な予感がする。でも、どうしても言ってしまう。知らない方がいいのに。
「も、もしかして、私が以前使ってた……」
「う、うん。そうなの」
「うっ……」
目から涙が出る。嫌な思い出の詰まったロッカー。乱暴者だった頃を思い出させるその場所。
今はシールも剥がされ、空きロッカーになっているその場所に入れられていた。
「優子……」
田村さんが名前で呼ぶ。桂子ちゃんも、他の女子も、永原先生も、顔を覆って泣いている私を心配そうに見つめていた。
「あの、ごめんなさい。皆、もうすぐホームルームだから」
「う、うん」
他の生徒は、皆教室に駆けていった。
「あ、廊下は走らないで下さーい！」
それに永原先生が注意する。いつもの学校の風景。でもそこに、私は取り残されていた。
「ほら、石山さんも……」
永原先生に教室へ行くように促され、なんとか涙を拭いて、並んで歩く。

「……日本性転換症候群協会の会長としては、石山さんへの理解を、ホームルームで長時間呼びかけるべきだと思う。そしてあなたを男子扱いした生徒も、改まらないなら停学などの処分にするべきだと思うわ」
「じゃ、じゃあ……」
「……だけど、教師として、今でもグレーゾーンだけど……いくら難病とはいえ、一人の生徒に過度に肩入れは出来ないのよ。今回の靴を隠すのはともかく、ただ昔の名前で呼ばれるだけってことで、中々いじめ認定はされにくいわ」
「永原先生……」
「嫌よね、2つの顔を持つなんて。でも、日本性転換症候群協会の会長なんて、患者も少なくて、小さな団体だから、収入殆ど無いのよ」
「実はね、私も教師をやっていて、直接教え子が同じ病気になったのは初めてなのよ。だからどこまで肩入れすればいいか分からなくて……」
それはそうだろう、有史以来、１３００人程度しか発症例がない。しかもこの病気は発症者も文献に残りやすいから、かなり正確な値だ。
それに不老とはいえ、多くは男に戻ろうとして泥沼にハマり自殺したり、不吉だとして殺されているわけだしな。
「でも石山さん、味方がたくさんいてよかったわね。木ノ本さんと田村さんが協力してるところなんて、私も見たことなかったわよ」
「う、うん。私も……初めて」
「後は男子よね。でも、大丈夫よ。あなたには、悠久の時間がある。いざとなれば、あなたの正体を知る同年代がみんな死んでから、女として恋愛をしてもいいのよ」
「せ、先生は……恋愛は……？」
「実はしたことないのよ。戦乱の時代はそれどころじゃなかったし、江戸時代はもう自分がどういう身体なのか知っていたから、どうしても死別を想像しちゃうのよ。でも私も、かっこよくて素敵な男性がほしいわね」

そ、そうだよな……
私が教室に入るのとほぼ同時に、「はーい、ホームルーム始めるわよー」といういつもの掛け声がかかり、慌ただしくホームルームが始まった。

ホームルームが終わり、1時間目の授業の準備を始める。
「おーい、石山優一くん」
また、高月章三郎と篠原浩介だ。
「君のロッカー、名前間違ってたから変えておいてあげたよ」
「!!!」
よく見ないで開けていたロッカー。一旦教科書とノートを取り、閉めてみると、「優子」の「子」の字の部分が、修正液で「一」にされていた。
「うっ……」
泣きそうになるのを必死でこらえ、筆箱からボールペンを取り出し「一」の字を「子」に直す。
2週間前の土曜日にも、同じ作業をした、その時は新しい生活のために多くの嬉しさと少しの未練を残して。
今は、悔しさと悲しさで。
「おいおいおい、人の親切を無駄にすんなよ」
篠原浩介が言う。
もう泣きたい、でも泣いたら、泣いたらもっといじめられるんだ。
「おい、篠原!」
「何だよ! 田村!」
「優子は優子だ! こんなことはもうやめろ!」
「けっ、女には関係ねえよ……」
実は田村の例の謝罪騒動以降、木ノ本と田村が共闘するような雰囲気になってから、男子の中でも、静観派が多くなった。
単純に今のクラスは男女が半々ではなく、女子が2人多い状態だ。
私が女子の仲間に入ったからだ。田村も、グループとしては木ノ本と共闘はしないということにはなっているが、リーダーがこれならほ

ぼ協力関係も同然。
そうなると、私を除いても15対16で負ける。それでも、一部に残ったいじめ派はますます先鋭化するだけだった。
今日、ついにロッカーを使った実力行使に出た……

「はい、今日はここまで。ではお昼休みに入って下さい」
先生の号令とともに、昼休みに入る。
早く教室から出たかったから学食に向かう。学食の中ではいじめられない。皆食事に夢中だからだ。

一人で食べ終わる。こうして安らぎの時間は終わった。他の生徒の迷惑にならないよう、足早に出口に出る。
すると木ノ本を見つけた。
「あ、桂子ちゃん」
「優子ちゃんじゃない。どうしたの？」
「そ、その、教室に戻りたくなくて」
「そ、そう。じゃあ私がついてってあげるわよ」
「あ、ありがとう」
本当は教室の外がいいけど、休み時間中、木ノ本や彼女のグループの女子と話せば、少しは気持ちも和らぐかもしれない。
教室の扉を開ける。
「ほら、大丈夫よ。入って」
「う、うん」
自分の席に戻る。よく見ると自分の教科書が置きっぱなしだった。
「ロッカーに入れてくる」
そう言って教科書を見た。何かがおかしい！
ここも名前欄が、「子」の字を「一」にされていた。
「なあなあ、お前教科書も間違ってたぞ。自分の名前書けねえってどういうことだよ」
また高月と篠原の二人だ。
「ち、違う、私は優子が本当の名前!!」

「バカじゃねえのかよ。どこまで強情なんだてめえは」
「強情なのはあなたたちじゃ――」
「いつまで現実から逃げてんだよ！」
「優一くん、自分の名前も書けないんだってさー」
「違う！　あ、あたしは女の子で……」
「お前がそう思うんならそうなんだろう。お前の中ではな！」
「俺たち男子の中じゃ、てめえは永遠に優一なんだよ！　諦めろ！」
　無慈悲な宣告をされたその時、突然目の奥が水で満たされる感覚になった。
「うぇ……！！！

「なんてむごい！　あんたたち、女の子をいじめて泣かせるなんて最低よ!!!」
　私の耳に入ってくる音は私自身の泣き声がほとんどだが、その中で木ノ本桂子の声がする。
「何がそこまで気に入らないのよ！　優子ちゃんはね……優子ちゃんはね……一生懸命に、一生懸命に女の子になろうと頑張っているのよ！」
「だ、だからそれは……」
　高月章三郎だ、さすがに叩かれた動揺か、いつものように勇ましくない。
「知らないの？　この病気になると、殆どの人は性別が変わる辛さに耐えられないで自殺してるのよ。でも、優子ちゃんは自分の運命を受け入れて、生理痛でさえ『女の子になれて嬉しい』って言って……」
「あんたたちのしてることは、殴る蹴るなんかよりもよっぽどひどいことよ！　優子ちゃんにとって、一番残酷な仕打ちよ！　優子ちゃん、昔の自分はもう嫌だって、新しく生まれ変わりたいって言ってたよ。あんたたちは、それを踏みにじってるんだ!!!」
「私だっていきなり男にされたら、絶対に耐えられないわよ！　いきなり自分の生活を全部捨てさせられて、女の子にならなきゃいけない……これ以上の罰はないわよ!!!」
「けっ、言わせておけばよ。てめえはこいつの肩ばっかり持ちやがって。同じ小中学校だったのがそんなに大事かよ！」
　今度は篠原浩介だ。
「そんなわけない！　一人の女の子として、男からいじめられてるか弱い女の子を見過ごせないだけよ！」
「俺は、こいつに復讐してえんだ。女子は関係無い！　俺たちが男だと言ったらこいつは男なんだ！　こいつは石山優一だ！　優子だなんて知らねえよ！」
　誰かが椅子から立ち上がった。沈黙が再び教室に流れる。
「な、なんだよ……」
「ふんっ！」

ドカッ!!!
今度は思いっきりグーで殴る音。
「あだぁあっ!?」
誰かの身体が机と接触する音が聞こえる。
「お、おい篠原大丈夫か!?」
「ううっ……は、鼻血が……な、何すんだよ田村！」
「許せねえ……絶対許せねえ！　こいつは、こいつは今までの自分の人格を捨ててまで、新しい生活をしようとしてんだぞ！　てめえらが同じ病気になって、そこまでのことが出来るか!?　あっ!?」
田村恵美が、木ノ本桂子と一緒になって私をかばってくれている。
「痛えなおい。女子だからって図に乗るんじゃねえぞ！」
「質問に答えろ！」
「な、俺達は当事者じゃねーから知らねーよ！」
「優子ちゃんから聞いたわよ。学校を休んでた一週間、女の子としての振る舞い、仕草、言動、全部叩き込まれたって。男っぽいことをしたら怒られて、全部矯正させられたのよ！　しかも男の頃の服や本は全部自分で捨てさせられて……でも、新しい生活のためだって！　女の子になれるのは嬉しいって！」
「お前たちのように、いざ弱くなったらその時だけ強く出るような卑怯者に……こいつみてぇな覚悟はできねえよ！」
「何だよ、てめえら。木ノ本と田村のくせに、何でこいつの肩なんか持つんだ。こいつは、さんざんクラスでやりたい放題してきた石山優一……あだっ！」
今度は高月章三郎を殴る音が私の泣き声に混じって聞こえる。
「二度とこいつを、優子をその名前で呼ぶな!!!」
「なんでお前が木ノ本の味方してんだ!?　お前は、お前は木ノ本が嫌いじゃなかったのか!?」
「ああ、嫌いだよ。それは木ノ本だってあたいにはそう思ってるだろうさ。でもな、あたいらも、木ノ本たちも、優子を絶対に男だとは思わない！　優子は女だ！　お前ら男子から守る！　そのためなら木ノ本も田村も関係無い！」

「ええ。私も、優子ちゃんを守るためなら、そんな些細なことどうでもいいわよ！　もっと、もっと大事なことなのよ！」
「そうよそうよ！　優子ちゃんをあんたたち男子から守るために、派閥なんか関係無いわよ！」
「この子は、仲間はずれなんかじゃない！」
　他の女子も、一斉に木ノ本と田村に同調し始めた。
「優子ちゃんは、体育の着替えも、林間学校のお風呂も、私達と一緒よ！」
「あったりめえだ！　お前らもそれでいいよな！　こいつを、男子から守るんだ！」
「うん！」
　他の女子たちが一斉に立ち上がる。私を囲むように守る。
「ううっ……えうっ……うあああああああああああああああああああああ！！！！」
　いじめの辛さに耐えられず、泣いていた涙とは別の涙が出てきた。
　私をかばってくれた、女子の皆への涙。
　私の泣き声、男子を殴る音なども相まってか、外も騒がしくなってきた。
　男子が沈黙している。さすがのことに動揺し、女子とにらみ合いになる。
「知らねえ、俺は知らねえ！」
　突然篠原浩介の声が響く。
「俺は、こいつがムカつくんだ！　どけっ！」
「きゃあっ！」
「ちょ、田村！　大丈夫!?」
　木ノ本桂子の声が聞こえた、女子も何人か田村に寄り添う。
「どけ！」
「どかない！」
「どけえ！」
「きゃあ！」
　私をかばっていた女子が無理やり引き剥がされている。そりゃそ

うだ、男が本気になれば、女子じゃ喧嘩に勝てない。
「おい！　石山！」
「ううう……えうう……」
私はまだすすり泣いている。反応したくない。
「おいっ!!!」
男の頃の私でさえ発したことがないような大声で怒鳴ると、頭がぐいっと持ち上げられた。
篠原の怒りに満ちた顔が目に入る。
「さんざんやりたい放題しやがって……！　この野郎！」
「いやぁっ！」
篠原が腕を引っ込めようとする。
殴られる！　と思った瞬間女子の誰かが右腕を抑えつけていた。
怖い、怖い怖い怖い！
「やめて……お願い……もう許じてえ!!!」
ひたすらに泣きじゃくる。男の力で殴られることへの多大な恐怖感。
「嫌だ！　やめて！　ごめんなさい！　許して！　お願い！」
「何してんのよ篠原！」
「女子はすっこんでろ！」
強引に女子を振りほどこうとするが、さすがに数人がかりで抑えつけられては男子といえども動けない。
「馬鹿野郎！　てめえ、女の子の、それも顔を殴ろうだなんて、クズのすることだ！」
篠原の腕を抑えた田村恵美が激しく怒る。
「そうよ、サイテーよ！　今すぐ地獄に落ちろ！」
別の女子が加勢している。それどころか、教室の外からも、殴りかかった篠原を非難する声が殺到する。
「何を……！　お前ら、こいつが誰なのか――」
「おい、篠原！　いくらなんでも暴力はやめろ！」
高月章三郎だ。「俺は嫌な思いしてないから」と言っていたくせに、彼にもまだ良心が残っていた。

その声に釣られて「そうだぞ篠原」「殴ったらダメだ」「停学になる」そうした声が男子の中からも聞こえてくる。
私は「嫌だ、お願い、ごめんなさい、やめて、許して」ありったけの言葉を使い、涙を流せるだけ流し、許しを乞うた。
「篠原、優子ちゃんの顔をもう一度見なさいよ」
木ノ本に言われた篠原が私の顔を見る。
私がまた恐怖に襲われ、泣き声も激しくなる。
「ひっ……いや……お願い、もう……もう、許して……えうっ……ぐすっ……ごめんなさい……」
「あっあっ……」
「ううっ……えぐっ……あうっ……」
声にならない声を篠原が上げたと思えば、ひっつかんでいた髪を離してくれた。まだ泣き止めず、また机に突っ伏してすすり泣いた。
「なあ、その力、女を守るために振るいなよ」
「あ、ああ」
「お前は男だ。女より強いんだ。弱いものを守ってやれ」
田村が、篠原にそう声をかけるのを聞いた。

# 女の子として扱って！　後編

「優子ちゃん、大丈夫？」
　ようやく泣き止んだ私に、桂子ちゃんが声をかけてくる。
「大丈夫じゃない」
「そうだよね、うん」
　優しく包み込んでくれる。今は甘えたい。
「ねえ、優子ちゃん。４時間目の体育の授業、一緒に着替えよう？」
　桂子ちゃんが優しく言う。
「で、でも……」
「大丈夫だって、次古典だろ？　あたいらで署名して、永原先生に出しておくからさ」
　恵美ちゃんがフォローする。
「うん、うん……！」
「さ、請願書を作るわよ」
「「はい！」」
　田村のグループの女子と、木ノ本のグループの女子が、あんだけ仲の悪かったクラスのグループの女子が一緒になって、休み時間をわざわざ削って、請願書を作り、署名をしてくれていた。
　今日は一番悲しく、一番嬉しい休み時間だった。辛さに耐えられず、泣き出した悲しい時間は、救われたことへの喜びの時間に変わった。

　３時間目、古典の授業が終わってからのことだ。
　私を含めた女子１７人が永原先生に詰め寄った。最も、私は一番後ろだけど。
「あの、先生！」
「あら、どうしたの？　クラスの女子が一斉に集まるなんて。もしかして、石山さんのこと？　昼休み随分泣いてたみたいけど、どうしたの？」
「優子ちゃんを、優子ちゃんを私達と一緒に着替えさせてあげて下さ

い！」
桂子ちゃんが代表して永原先生に用件を言う。
今日は男子が別教室で着替え、ここは女子が着替える場所だ。
「先生、あたいからも頼む。こいつは……優子は、あたいたちにとって、大事な女子の仲間なんだ。過去がどうとかもう関係無い。仲間はずれにしたくねえんだ！」
「で、でも、それは……学年主任の小野先生に言って職員会議にかけないと……」
「そうかい、じゃああたいたちで勝手に受け入れる。うちのクラスの女子は、優子を受け入れたくないなんて言ってるのは一人も居ねえって、小野先生に伝えてくれ！」
「うっ……恵美ちゃん……」
また涙ぐんでしまった。今日は今まで我慢してきた反動もあって、泣いてばかりだ。
「ともかく、あなた達の意思はわかりました。この署名は預かります。それから、私はあなた達の味方だから、それだけは覚えておいてね」
「あ、ああ」
「先生、ありがとうございます」
永原先生が教室を出た。女子が一斉に着替え始める。私は、この場に居ていいんだ。
でもやっぱり少し遠慮して、自然とできていた2つの輪から外れたところで、窓の外を見ながら、まず、上着とブラウスを脱いで体操着を着た。
「優子ちゃん、何してるの？　こっちに来なよ」
振り返ると、体操着に着替えている途中で、ブラジャー姿の桂子ちゃんだった。
「ほら、こっちに来いよ。皆待ってるぞ」
恵美ちゃんも声をかける。あれだけ仲の悪かった二人が、私のために……
「う、うん！　ありがとう……みんなありがとう……うっ……ぐすっ……えうっ……」

「あーあまた泣いてるよ」
「いいじゃねえか今日くらい。泣かせてやれよ。女の子なんだからさ」
「女の子だ」、そう言ってくれることに対して、今までも嬉しかった。でも、今日の今ほど嬉しい時はない。
泣き止んだら、体操着のズボンを取って女子の輪の中に入る。
ファサッ
木ノ本桂子がスカートをめくってきた。
「やっ！　桂子ちゃんやめて！」
慌ててスカートを抑えるがもちろん間に合っていない。縞パンを見られてしまった。
「ほほう、女の子らしいパンツ穿いてるんだねー安心したよ」
恥ずかしいけど、何か嬉しい……
「桂子ちゃんのえっち！」
そう言いながら、私はスカートを穿いたまま体操着のズボンを着て、スカートを脱いだ。これで完成だ。
「いやーでけえなあ」
今度は田村恵美が私の胸をジロジロ見る。
「ちょ、ちょっと、恵美ちゃん！　あんまり見ないでよ……」
女子同士の生々しいセクハラにドギマギしてしまう。
「ああ、悪い悪い。いやまあ、あたいはテニス選手だからさ。胸大きくても駄目って思ってたけどよ、やっぱ優子のを見ると……なあ」
「わ、私も、好きでこうなったんじゃ……」
「分かった悪かったよ。でも、顔もかわいいし髪もきれいだし、さっきの仕草も女の子そのものだな！」
「あ、ありがとう」
「むしろ田村、あんたのが優子ちゃんより男に近いんじゃないの？」
「はっ、木ノ本……てめ……あー、でも言われてみればそうかもしれねえな、悔しいけど一理ある」
「あはははははは」
女子の間で笑い声が聞こえる。分断されていたクラスの女子が一

つになっている。

私、今最高に幸せ。理解者に囲まれて、差別されることもなく、受け入れてくれることが、何より喜びだった。

時間も近いので、女子全員で体育館へと移動した。

「でさー優子はどう思う?」

「うーん、分かんない」

「あそこが勝負どころだったと思うんだよ。そこで負けたら勝てる試合も勝てねえぜ」

みんなと一緒に廊下を歩く中で、私にも別け隔てなく話を振ってくれる中で、日本に来たある黒人の野球選手の話を思い出す。

彼が日本に来て、一番嬉しかったこと。それはチームメイトに一緒にお風呂に入れたことだった。

日本はアメリカのように差別がないことに感激していたが、どうも腑に落ちない部分が私の中にあった。

でも、今日のことでようやく、彼の気持ちがわかった。

きっと、性質は全く違うものだけど、今の私も彼と同じ気持ちなんだから。

体育館へと移動すると、体育の先生がこう言った。

「これから6月中旬の球技大会に向けて、練習をします。男子と女子でそれぞれ3種目をしてもらいます。今日は室内フットサルの練習です」

「「はーい」」

フットサルのルールは小さなサッカーだが、オフサイドがなく、またファールの反則もサッカーより厳し目のスポーツだ。

プレイする人数が少ないので、より「個の力」が問われるスポーツだという。

本番どおり、2つのチームに分かれて練習試合をする。

私もチームの一人に参加したんだけど……
「はぁ……はぁ……」
ボールをパスしてもらっても、すぐに取られてしまう。パスも威力がなくて簡単にカットされちゃうし、シュートなんて打てもしない。
男だった頃の「勘」を活かそうとしても、単純に身体能力が弱すぎて、身体が追いつかない。
今の私の身体能力、男だった頃は男に混じっても決して悪くなかったけど、今は女子の中でも飛び抜けて悪い。
これじゃ、体育の成績不良で卒業できないんじゃないか？
私はそう感じてしまう。
「優子！　相手がボールを取りに来たときは、『フェイント』をするのよ」
女子の一人がアドバイスしてくれる。確かこの子は安曇川虎姫（あどがわとらひめ）ちゃんだ。
「う、うん。えっと……」
「安曇川よ。安曇川虎姫。サッカー部で恵美ちゃんのグループよ……って、なんかもうあんまりグループ関係ないけどさ」
「な、名前は知ってるよ、そうじゃなくってフェイントの仕方を知りたいの」
「分かった。じゃあまず基本からよ。キックには足の内側で蹴るインサイドでのキックと外側でのアウトサイドのキックがあるでしょ」
「う、うん」
「アウトサイドキックはコントロールが難しいから、逆に言えば裏をかくのにはいいのよ」
「こうやって……こうよ！　やってみて」
「う、うん」
何だろう、例の「カリキュラム」を思い出して、ちょっと懐かしい。
「それ、えいっ！」
「うーん、やっぱり遅いけど、でも形にはなってるよ」
「あ、ありがとう」
数周回遅れ程度だが、それでも前に進めているという、確かな実感

があった。
運動能力だけじゃない、女の子としてだって、まだまだ本当の女子高生たちに比べたら、周回遅れもいいところだ。
それでも、そんな周回遅れでも、認めてくれたのは、この上ない喜びだった。

「はーい、練習そこまで、もう一度本番形式で試合するぞー！」
体育の先生の笛が鳴り、もう一度試合形式をする。
私はいわゆる控えスタートだ。
一人の女子の息が上がっていて、他の女子とも交代するが、一度は出場するように言われているため、私も出る。
目の前にいた桂子ちゃんがボールを持っている。取りに行こうとする。
桂子ちゃんが右に避けようとしたので反応する、しかし、そのまま吹っ切られ前に居たオフェンスにパスが渡る。
為す術もなく1ゴール。
私達のボールで試合再開。私は前に出て、オープンスペースに入る。このあたりは男時代の「知識」が役に立つ場面だ。
山なりにボールがパスされ、男時代の感覚を頼りに胸でトラップを試みる。
ぼよんっ
が、うまく行かなかった。しまった、おっぱいが大きかったんだ。
久々に女子の身体特有のミスをした気がする。
このミスで他の女子にボールを奪われるが、チームメイトがうまく奪い返す。
ゴール前、キーパーと1対1の場面で私にパスが入る。
完全にがら空きになっていたゴールに、インサイドキックで押し込む。
……やった！　ゴールだ！
「優子ちゃん！　凄いね！」
「うん、よくやった！」

９割以上は、アシストしてくれた子の手柄なのに、その子も含めて、私をすごく褒めてくれた。
いつの間にか相手チームの女子たちまでが私を囲んで祝福してくれた。
「うっ……」
「わわっ、優子ちゃん、また泣いちゃったよ……」
「ご、ごめんなさい……ただ、今日はどうしても嬉しくて……」
「辛かっただろうしな。今日ぐれーしっかり泣いとけ……でもほら、全員集合だぞ！」
男子と女子に分かれ、集合して先生の話を聞く。球技大会に関する話だ。
先生の話を聞いている間にも、私は思った。
今日はいじめの辛さに耐えられず泣いた。
今日は私をかばってくれて、受け入れてくれた女子たちの優しさに泣いた。
今日は私に復讐しようとした篠原浩介に殴られる恐怖で泣いた。
泣いてばかりの一日だけど、振り返ると色々な理由で泣かされていた。
でも、私はこう思う。

泣いてもいい、弱くてもいい、甘えてもいい、かっこ悪くたっていい。だって私はもう、女の子なんだから。

体育の授業が終わり、女子と一緒にさっき着替えた教室に入る。
さっきとは違い、胸がドキドキしている。さっきあれだけじゃれ合ったのに、女子の下着とかが見えてしまうことに緊張している。
さっきは、受け入れてくれた女子への感謝と感激で心がいっぱいだったのに、いざこうして二回目になると、元男としての緊張感とその名残である下心が出てくる。
人の気持ちとは、なんとも身勝手なものだ。私は呆れるくらいそう思った。

だけど、この気持ちは押し殺さなければいけない。
桂子ちゃんも恵美ちゃんも、私の頑張りを買ってくれたんだ。私が阻害されないために、それぞれの私心を押し殺して受け入れてくれた。
もしここで男のような真似をしたら、それはもう冒涜どころじゃ済まされない。それこそいじめていた男子以上に最低な女になってしまう。
「どうしたの優子ちゃん？　難しい顔して」
「うぁっ……い、いや、その……ちょっと考え事を……！」
「何だ？　今更緊張してるんだろ？」
「え……え？」
「気にすんなよ、あたいたちだって思春期だぜ。同性とはいってもよ。やっぱ緊張はするもんよ」
恵美ちゃんがそう言う。
「そうそう、だから女子トークとかで場をなごませるのよ。優子ちゃんにはまだ難しいの分かってるけど、一生懸命頑張ってくれればいいのよ」
さっきのセクハラも、彼女たちなりの配慮だったのね。
「そうそう、優子さんはまだ成り立てなんだから、いきなり全ては、あたし達も無理だって分かってるわよ」
「女子として扱うことと、『元男子』として扱うことは矛盾しないわよ、それに『元男子』なのは事実でしょ？　今の優子ちゃんが女の子ってことには変わりないんだから、優子ちゃんもそっちの方がいいでしょ？」
「け、桂子ちゃん、龍香ちゃん……！　うん、ありがとう！」
なんだ、杞憂だったんだ……！
こうして、私は安心した気持ちで、リラックスして女子更衣室に入ることが出来た。
ともあれ、体操着から私の机のところの制服に着替えなければならない。
まずスカートを着て体操服のズボンを脱ぎ、次いでジャージを脱い

でブラウスを着る。
そんな中で、女子たちは女子トークをしている。まだ私は、いまいち話に割り込めず、沈黙している。
「ねえ優子さん」
着替えていると河瀬龍香が声をかけてくる。
ブラジャー姿を見られてちょっと恥ずかしい。
「龍香ちゃん、どうしたの？」
努めて冷静に声を出す。
「女の子になるカリキュラムってあるんでしょ？　気になるのよ」
「あ、それあたいも気になるぜ」
「あたしも」
田村グループの虎姫ちゃんも含めて女子たちが食いついてくる。
今日は助けてもらったお礼だ。少し教えてあげよう。
「そ、その……家事とか。掃除洗濯料理、あとは少女漫画読んで感想文書いたりしたよ」
「へー、なんか私も受けてみたい」
「で、でも厳しいよ？」
「そ、そうなの？」
「男っぽい言葉遣いやがさつな態度したら都度訂正しなきゃいけないし、その度に『私は女の子』って暗示をかけさせられるわよ」
スカートめくられたおしおきのことは話さないでおこう。
「へー」
話しながら器用に着替えていく女子たち。私も制服は上着を着て完成だ。これももうすぐ夏服になる予定だ。
「それから、男だった頃の持ち物を、中古屋さんに売るっていう課題があって――」
ドンドン！
楽しく話していると扉が叩かれていた。
「おい女子！　遅いぞ！」
「あ、ごめーん！」
桂子ちゃんが声をかける。

「みんな着替え終わってる？」
　みんなで見渡す、全員大丈夫だ。
「じゃあ優子さん、声かけてみて！」
「う、うん！」
「入っていいわよー！」
　私が声をかける。
　すると驚いた様子で男子が入ってくる。
　そうだ、男子はまだ、私が女子とも男子とも違う場所で着替えているものとばっかり思っていたからだ。
　でも、反応を見るにこの効果は大きかった。
　着替えという場で、女子に受け入れられている私を見せることで、私を男扱いできなくする、大義名分になり得たからだ。

「はーい、帰りのホームルーム終わりまーす。石山さんはちょっと私のところに来てくれるかな？」
　永原先生に呼び出された。多分、今日の件だ。
「ここじゃ話し辛いとおもうから、相談室に行きましょう」
「は、はい」
　月曜日に使った相談室と同じ部屋。永原先生が「使用中」に合わせる。
「じゃあ座ってくれる？」
「はい」
「複数の人から聞いたわよ。石山さん、教室で大泣きしていたって」
「う、うん」
「何があったの？　今日もあんなに仲悪かった女子が、団結して請願書を出していたし……」
「そ、その……実は……」
　あの後下駄箱の靴を隠された他にも、教科書やロッカーの名前欄を「優一」に書き換えられていたこと、今までも泣きたかったが無理に我慢していて、ついに我慢しきれなくなってしまったこと、桂子ちゃんと恵美ちゃんが私をかばってくれたこと、私が男子だった頃、特に怒

鳴っていた篠原に殴られかかったこと。
念のため、恵美ちゃんと桂子ちゃんが高月と篠原を殴ったりしたことは伏せておいた。
「そうだったのね。石山さん、辛いなら学校休んでも良かったのよ」
「……いえ、いいんです。それに、今は救われましたから」
「この請願書のことは、職員会議にかけます。ですが、小野先生がどう出るかは分かりません」
「でも、クラスの女子全員の署名が入っている」
「それは認めるわ。私が見た限り、同調圧力で嫌々ながらって子は一人も居なかったわ」
「でも、職員が認めるかは分からないわよ」
「……でも、今日ももう女子と一緒に着替えちゃいましたし、認めないなら勝手に着替えさせるとも言ってましたよね？」
「……そうね」
「とりあえず、あたしはもう大丈夫です。男子も、さすがにもう私をいじめることはないと思います」
男子だって女子の好感度は気にする。
むしろそれは女子以上だ。
桂子ちゃん、恵美ちゃんの両方から嫌われるというのは、男子として致命的だ。しかも、お互い反目しあってた二人が、私については団結するとまで言っているのだ。
「そうね、クラスの女子全員を敵に回すわけですもの」
「よくわかったわ、今日は帰っていいわよ。今日のこと、念のため親御さんにも話しておくわよ。他の人にも証言は聞くし、いじめてた子の処分も追って決めるから後は教師陣に任せてちょうだい」
「あの、私にも原因があるので、あまり強い処分には――」
「分かったわ。伝えておくわよ、今日は辛かったと思うし、速く帰ったほうがいいわよ」
「はーい……失礼します」
「気をつけてね」
「はい」

私は相談室から出る。
そして下駄箱に行く。一瞬「ローファーがない」と思ったが、鞄の中に自分で入れておいたことを思い出し、そこから取り出して、上履きだけを中に入れて、ローファーを履き、下校する。
いつもより少し遅い電車、先生と話していたせいだ。

「ただいまー」
「おかえりー遅かったね。先生から聞いたわよ。本当にもう大丈夫なの？」
「うん。みんなあたしの味方をしてくれたから」
「いい？　辛いことがあったら、もっと早く言いなさい。優子は一人じゃないんだから」
「うん」
私は一人じゃない。なんてバカなんだろう。こんなこと、ずっと前から知っていたはずなのに。それどころか、味方はたくさんいたのに。
やっぱり大事なのは「ほうれんそう」だ。そう感じながら、明日の休日に向けて眠りについた。

# 幕間　ここまでの登場人物の紹介

ここの部分は登場人物の紹介です。読み飛ばしても本編には支障がありませんが、第2章までのおさらいとしてもう一度振り返ってみてはどうでしょうか？

裏設定等も一部ありますが、第三章以降のネタバレはありませんのでご安心下さい。

ちなみに登場人物の命名法には一個の共通点があります。某県民以外の方が気付いたら、地理（鉄道）に詳しい方とお見受けします（笑）

・石山優一（いしやまゆういち）／石山優子（いしやまゆうこ）

本作の主人公兼ヒロイン。

両親より「一番優しい子に育って欲しい」という願いを込めて「優一」と名付けられる。

しかし、そうした名付けに反して性格は乱暴者で、気に入らないことがあるとすぐに怒鳴りつけるなど乱暴な性格で煙たがられていた。

本人もこの性格については嫌っており、両親の前では猫かぶりだったのも含め、多大な罪悪感を抱いていた。

それでもやめられないことについては「麻薬みたいなもの」と評している。

話し相手は小学校時代からの幼馴染の木ノ本桂子だけだった。ただし木ノ本桂子が学園一の美少女としても有名だったため、これは皮肉にも男子に更に嫌われる要因となっていた。

優一時代の容姿は髪が高校生にしてはやや薄く、その代わり体毛が非常に濃く、また顔もやや悪人顔というもの。ちなみに全科目の成績も比較的良い方であった。

２０１７年５月８日月曜日の３時間目の数学の授業中に倒れる。

翌日には起床すると違和感を感じ、女の子になってしまった。

ＴＳ病は若い男性のみがなる、全世界でも有史以来１３００人程度しか存在しない極めて珍しい病気だが、日本人が患者の８割を占めて

いる。
　また、この病気は明治頃まではどの国でも不吉として殺されてきたが、実は不老体となることも大きな特徴で、不慮の事故に巻き込まれたり、自殺をしない限り理論上は永遠に生きられる。
　ただし実際には精神的負担が大きく、「男に戻りたい」ともがいてしまうとほぼ確実に自殺に一直線になってしまう病気でもある。そのため、この病気で１００年以上生きられる患者は極めて少ない。
　永原先生より「長生きしたいなら女として生きるしか無い」と言われ、また自らの性格を変えるため、「今度は始めから終わりまで優しい子でいたい」という願いを込めて「優子」と名前を変えて生きていくことを決意する。
　優子としての容姿は背も低くなり、顔は幼さの残る童顔で、学校一の美少女と言われた木ノ本桂子を凌ぐ美少女に。身体にはムダ毛の一つなく、また髪の毛は黒髪のロングストレート、胸は巨乳グラドル並かそれ以上の巨乳というもので、特に身体能力は非常に虚弱体質となった。
　また、優子としての性格も優一時代とは正反対に健気で大人しく、気弱で涙脆い。
　性別の違いや慣習の違いに戸惑いつつも、女の子らしくなるために努力する。
　カリキュラムでは、男っぽい態度や言動は矯正の対象となり、また3日目以降はスカートめくりのおしおきと恥じらうように教育されるようになる。
　男時代の服と本、更に生徒手帳は自分の手で処分し、女の子としての自覚を徹底的に刷り込まれた。
　ただしこれらは、女の子らしくなりたいと自らが望んで行ったため、またカリキュラムでは永原先生より「優等生」と褒められ、新しい発見も多く「楽しかった」と振り返っている。
　学校復学後は、女の子として扱ってもらえないことへの苦悩を示すことも多かった。
　特に、復讐心のあった男子からのいじめはひどく、本人や周囲の女

子たちも「女の子として扱って」と言ってもますます逆効果になっていった。
生理が来た時にも「この痛みを受け入れなければ優しい子になれない」「女の子になれて嬉しい」と告白、感極まって永原先生が涙し、またこのことを木ノ本桂子と田村恵美に話したことが大きなきっかけになる。
最終的に木ノ本桂子と田村恵美の共闘宣言や大泣きした優子を女子たちが守るという宣言以降、いじめはようやく収束に向かった。
一方で、優子は他の女子からも女子として受け入れられることになり、最上の喜びを感じた。
その後「泣いてもいい、弱くてもいい、甘えてもいい、かっこ悪くたっていい。だって私はもう、女の子なんだから」という考えに至った。

・優子の母
石山優子の母、永原先生よりカリキュラムの本を渡され、女の子として教育係を行う。
やや暴走気味で、おしおきがスカートめくりになったときも、永原先生よりもいやらしいめくり方をして優子を恥ずかしがらせた。可愛い女の子になった優子を溺愛するが、料理中や外出時はスカートをめくらないなど常識は弁えている（ただし、その後スペシャルなおしおきとしてまとめている）
「女としての矜持」は捨てておらず、女の子らしさを優子に叩き込み、また家事の指南もした。

・優子の父
石山優子の父、休日や仕事帰りは普段書斎に閉じこもっている。しかし、家族仲は悪くなく、優一とはいろいろな話に盛り上がった。
興味が無いものはないほどに知的好奇心旺盛である。女の子としてのカリキュラムの指導は、本人が男性ということでしていない。
会社の同僚にも、優子のＴＳ病について話しきれていない。

・鳩原刀根之助（はつはらとねのすけ）／永原（ながはら）マキノ
優子たちのクラス、私立小谷学園（しりつおだにがくえん）の２年２組の担任の先生。担当科目は古典。
３０歳にしては若く、美人な先生ということで生徒の人気が高い。
実は地球最高齢の人間でＴＳ病患者。生まれ年は１５１８年で数え年にして５００歳、満年齢で４９９歳である（誕生日は不明のため１月１日ということになっている）、３０歳は逆サバではないかと疑われていたが、実際には４７０歳もサバを読んでいた。
かつては鳩原刀根之助という名前の男性で、長野県の戦国武将「真田幸隆」の元で伝令役の足軽として働いていた。
２０歳の時ＴＳ病を発症、運良く両親が既に死んでいたため殺されず、隣の村に逃走しほとぼりが冷めた時に名前を変えて元の村に戻る。
この時、空き家になっていた刀根之助の家に戻る。この時の主君は海野平の戦いで「村上義清」に代わっていたが、無事に村娘として過ごし、また真田幸隆も主君として復帰。以降不老が発覚しかける本能寺の変の頃まで同地にとどまる。
本能寺の変後は諸国を放浪、１６００年にはたまたま関ヶ原を訪れており、戦いを見物している。
大坂の陣以降は江戸に住む。男余りの江戸にいた独身の美人とあって多くの武士から求婚されたが、既に１００歳前後になっていたため、不老がバレることを恐れて拒否。
しかし、噂はすぐに広まり１６５３年の江戸で当時の将軍徳川家綱に拝謁。かつての主君が８歳の時まで生きていた「真田信之」がまだ生きていることを知り、面会が実現。
１２０年近く行方不明になっていた「鳩原刀根之助」と同一人物であることを示すと、信之は労いの言葉を述べた。
感激のあまり大泣きしてしまい、「上様の前で無礼だ！」と家老に叱責されるが当時１３歳の家綱は「良い、泣かせてやれ」と制止したため事なきを得た。それ以降、家綱を尊敬するようになる。

この時ＴＳ病ということがバレたが、年長者を重んじる朱子学の台頭もあり、戦乱の時代を知る者として丁重な扱いを受ける。
本人は真田への再士官を申し出たものの、将軍家綱は江戸城への常駐を命じ、以降明治維新まで江戸城に住む。
明治維新時は自らの記録のある書物を持ち出して再び諸国を放浪、３０年前より「永原マキノ」と名乗るようになり、教師を本職としつつも、「長老」の立場として「日本性転換症候群協会」の会長も務めている。
石山優子にカリキュラムを受けるように促し、教育係となる。復学後も日本性転換症候群協会の担当カウンセラーとして、度々優子を気にかけるが、教師との板挟みになることも。
また、数多くのＴＳ病患者を見てきており、「男に戻りたい」と思わせないようにしているが、それでもうまく行っていない。
生理と向き合う優子には感激のあまり涙している。

・木ノ本桂子（きのもとけいこ）
優子たちのクラスの女の子。優一の小学校時代からの幼馴染で腐れ縁。優一時代は唯一の話し相手でもあった。「学校一の美少女」という名声を得るほどの美少女で、性格も柔らかい。
田村恵美とそのグループの女子とは仲が悪く、喧嘩が耐えない。
特に「女の子は男にモテてこそ」という矜持は田村恵美と対立しており、田村と彼女のグループの女子を「同性受けを狙うなんてレズのすること」と罵ったことも。
一方で、男子からは高嶺の花であることや、狂犬の「優一」の話し相手ということで避けられても居た。
優一自身も、男子ということで木ノ本グループの女子たちからはあらくれ運動部の多い田村グループへの用心棒としての期待もあり、また女子を標的とはしなかったためそこまでの悪感情を持たれていなかった。
復学初日こそ、女子として扱うことに戸惑いを覚えるが、すぐに優子を女子として扱うことを決定し、他の女子も続いた。

優子からの信用度も高く、最も早い段階でカリキュラムの詳細や永原先生の秘密も話している。また、永原先生より生理を受けての優子の思いを告げられた時には何かを感情的に訴えていた。
田村恵美が面目を捨てでも優子に謝罪したのを見て、優子を守るためなら田村恵美とも協力することを決意。これが雪解けのきっかけになる。
優子がいじめに耐えきれず大泣きした時も、一番に飛び出し高月章三郎を叱責している。

・河瀬龍香（かわせりゅうか）
優子のクラスメイトで木ノ本グループの女子の一人。木ノ本グループの中でも美人で桂子にも近い。木ノ本桂子とともに優子を度々気にかけてくれる。

・田村恵美（たむらえみ）
優子のクラスメイト。テニスの天才で全国でも飛び抜けた実力を持つ。
豪胆な性格の女傑で、木ノ本桂子とグループを2分する。プライドも高く、木ノ本桂子とは何かと衝突することが多く、特に女の価値観については隔たりが大きい。
木ノ本への対抗心から、復学初日に優子をトイレに入れようとしなかったり、また「女子とも男子とも扱わない」という手法を取る。
優子の生理を目撃した後は考えを改め始めたものの、自身のプライドが邪魔してすぐに謝れなかった。
しかし、永原先生が生理を受けての優子の思いを伝えると、自らも優子を追い詰めていた事実に気付き激しく後悔。罪悪感に押しつぶされそうになる。
翌日には真っ先に優子に謝罪し、女子として扱っていくことを宣言。ただし、木ノ本グループへの対抗心から、グループごと共闘までは至れなかった。

・安曇川虎姫（あどがわとらひめ）
サッカー部所属の女子。田村グループへ所属。
虚弱体質の優子を体育の授業で何かと気にかけてくれる。
・高月章三郎（たかつきしょうさぶろう）
優子たちのクラスメイトで篠原浩介の友人。父は整形外科医。彼が石山優子を「性転換手術したのではないか？」と疑ったことで、優子を男子扱いするといういじめが考案された。
その後は篠原浩介とともに、石山優一に散々に怒鳴られていた復讐としていじめの主犯格として暗躍、「今こそ復讐するチャンス」「もう事実かどうかはどうでもいい」とまで発言。
優子の自業自得の面が強いものの、優一呼ばわりや上履きを優一の場所に隠す、ロッカーや教科書の名前を優一に変えるなどのいじめを実行。
復讐心から性格が歪み、木ノ本桂子の「優子ちゃんが嫌な思いしている」という批判に対してさえ、「俺は嫌な思いしてないから」と放言するに至ってしまった。
篠原は田村恵美に一度殴られただけだが、高月は木ノ本桂子と田村恵美にそれぞれ一度殴られている。
しかしそれでも良心は残っており、篠原が恨みを晴らしたい一心で優子を殴ろうとした時にはそれを止めている。
・篠原浩介（しのはらこうすけ）
優子たちのクラスメイトで高月章三郎の友人。
本来の性格は穏やかで温厚で責任感が強い。そのような性格であったため、優一からは特に怒鳴られる対象となり、恐怖の日々を過ごしていた。
優子となって復学後は、高月章三郎の提案に乗り、石山優一に散々に怒鳴られていた復讐としていじめの主犯格として暗躍、他の男子へと伝播させた。
優子の自業自得の面が強いものの、優一呼ばわりや上履きを優一の場所に隠す、ロッカーや教科書の名前を優一に変えるなどのいじめを

実行。
復讐心から性格が歪み、いじめればいじめるほどに更にいじめたくなるという麻薬のような状況に陥る。他の女子が優子を女扱いし始め、また他の男子も静観に舵を切る中で高月章三郎以上に先鋭化。
優子が泣いた時にも女の子を泣かせる罪悪感もなくなっていた。
その後、田村恵美と木ノ本桂子の共闘に至り追い込まれたが、どうしても復讐をするため、優子を守っていた女子を強引に引き剥がし、優子を殴ろうとするが、周囲からの非難が殺到。
高月章三郎からも「暴力はやめろ」と制止され、優子が泣きながら必死に許しを乞う様子を見て良心の呵責が芽生えて離した。
田村恵美からは「その力は女子を守るために振るいなよ」と諭された。

・小野先生（おのせんせい）
学年主任で数学の先生、授業が分かりにくいと他の生徒からは不評だが、優一からは「そんなことはない」と擁護されている。
彼の授業中に突如倒れる所で物語は始まり、「救急車を呼べ！」と生徒に指示していた。
・蓬莱教授（ほうらいきょうじゅ）
名前のみ登場、不老研究をしているが、優子からは信用されていない。

# 第三章　恋する乙女になりたい

## 美少女の休日　前編

「ねえ、今度の日曜日、一緒にゲーセンに遊びに行かない？」
こんなメールが木ノ本桂子から届いたのが土曜日の昼のことだった。休日に友達の女の子と遊ぶのも今後いい経験になると思い、私は二つ返事で承諾のメールを返し、両親も歓迎してくれた。
そんなわけで、私は今、桂子ちゃんと一緒にどんな服で出かけるか考えている。
うーん、どれにしようかなあ……
女の子になってから、というよりも中学校以来、学校の女子と一緒に出かけることになったのは初めてだ。
服を漁っていると、赤い巻きスカートが目に入った。
そういえばカリキュラム中も学校にはこれで行ったっけ？
よし、あの時と同じ格好をしよう！　ついでに頭のリボンも赤くするとより映えそうだ。
着替え終わったら母さんに「今日は桂子ちゃんと遊んでくる」と言った。
母さんは嬉しそうに「いってらっしゃーい」と見送ってくれた。
集合場所は例の区役所の駅の北改札口前だ。
私服姿の木ノ本桂子が見える。何だかんだで私服姿を見るのは久しぶりだ。それに河瀬龍香もいる。あっちはまだ私に気付いていない。
「け、桂子ちゃんおはよう！」
こちらから声をかける。
「あ、優子ちゃん……！」
二人が私の全身をくまなく見る。何かまずい所でもあったかな？
「どうしたの？」
「……いや、ごめん。すごく可愛い服だなって」
「えへへ、そう？　似合うかな？」

「うん、真っ赤な服に赤い靴と赤い靴下に赤いリボンと徹底していていいわよ」
「えへへ……似合ってるって言ってくれてありがとう」
　実はブラとパンツだけ色が違うんだけど、赤いパンツなんて持ってないから仕方ないよね。それに赤いパンツとか男ウケ悪いし。
「でもあたしはちょっとダサい……というか幼すぎる気がするわね」
　一方で、河瀬龍香は反論してきた。
「あ、やっぱり？　実はこの服着るの2回目なんだけど最初は私も同じこと思ったのよ。でも、母さんも永原先生も可愛いって言ってくれたから」
「え？　なんでそこで永原先生が出て来るの？」
　しまった……
「あ、龍香ちゃんたちには言ってなかったっけ？　あたしの受けたカリキュラムを考えたの、永原先生なんだよ」
「へーそうなんだ」
「さて、じゃあ優子さん。立ち話もなんですからゲーセン行きましょうか」
「うん」
　女の子三人組で駅から横並びに歩いてゲーセンに向かう。目立つのかやはり道中の視線が凄い。
「なあ、三人とも可愛くね？　特に赤い服の子！」
「いやいや、こっちの子もすげえ美人だぜ。あーでも赤い服のこと比べるとどうだろう？」
「いや、赤い服の子を選ぶのは素人だぜ。玄人はその左隣の子だぜ」
「なんか私達、すごい噂になってますね！」
　龍香ちゃんが話を振る。
「なんかすっごい視線を感じるのよね……私、女の子になってから外に出るとこればっかりよ」
　さすがに慣れたけど。

「……あー優子ちゃんは、うん。しょうがないと思う。私も結構視線感じること多いし」
「そうね、私も彼氏には優子さんと合わせないようにしないと」
「え？　龍香ちゃん彼氏いたの？」
「ええ、ちょっと変態ですけど、中身重視でかっこいい男ですよ！」
「中身重視なら、別に私に会わせても大丈夫じゃないの？　それでも心配なら正体を言って聞かせればいいんだし」
「うーん、でも念のためよ。優子さんレベルの容姿だと、ね」
　左様でございますか。確かに反論できない。
「そういえば、優子さん！　あなたにもう一つ聞きたいことあるんですよ」
「うん？」
「永原先生って本当は歳、いくつなの？」
「え？　どうして？　３０歳だよ」
「いやいやそうも思えないのよ。何せ優子ちゃんのカリキュラム作ったんでしょ？　話してる間にちょっとスマホで試しに『永原マキノ』で検索したら日本性転換症候群協会の会長になってたしさ」
　い、いつの間に……
「龍香、あんまり女性の年齢を推測しちゃ駄目よ、私達も女性なんだから」
「でもさ、永原先生って２０歳位の見た目だから、３０歳というのもちょっと強引だと思うのよね。でも、本当はサバ読んでたって事になったら驚愕の事実よ！」
「……龍香ちゃん、永原先生はね……」
「うん」
「……信じろっていうのが難しいかもしれないけど、永原先生は戦国時代の長野県生まれだよ」
「えー!?　戦国時代？」
「具体的には去年大河ドラマでやってた真田家に仕えてたんだよ。永原先生の本当の生まれ年は西暦で言うところの１５１８年なんだよ」
「ぎょぎょぎょ！　じゃあ、じゃあ何？　永原先生って真田幸村、いや

真田信繁を生で見たの!?」
「いや、違うよ。見たのは信繁のおじいさんで、元々永原先生は彼に仕えていたのよ。ＴＳ病になったのが２０歳のときだからあのドラマの登場人物としては他には江戸時代に９０歳近くなってた兄の真田信之と時の徳川将軍に謁見したらしいけど」
「いやいやそれでも十分すぎるくらい凄いじゃないの！　で、その後どうなったの？」
「その時からずっと江戸城に住んでいたらしいよ。私は詳しくは知らないけど歴代の徳川将軍とはほぼ面識あるんじゃないかな？」
「それは私も聞いてなかったわね。本当だとしたら歴史の生き証人じゃない！」
「そういえば、他にも私とのカウンセリングの時にも永原先生、関ヶ原の戦いを見物したって言ってたわね」
「ヒエー、羨ましい」
　そうしてしばらく永原先生の人生妄想談義を花開かせながら、ゲームセンターについた。

「優子ちゃん、何やる？　私、ＵＦＯキャッチャーは苦手だし……」
「あ、でも、この人形可愛いですよ。あー、でもこの配置はとても取れそうにないですねえ……」
　最近のゲーセンのＵＦＯキャッチャーは素人が見ても取れそうにないような配置ばかりだ。
　取れそうで取れない程度だと、上手い人が根こそぎ持っていってしまうらしい。
「うーん、景品がほしいだけなら通販でいいしなあ……」
「優子さん、実直派ね……」
「それよりも、こっちの方がいいわよ」
　私が指したのはリズムゲームだ。
　これは手で叩くもので、激しく体を動かすわけじゃないからスカート姿の３人がしていても大丈夫だ。
「へー三人対戦ができるんだね」

「私達もよく分からないから、一番簡単なのにしよう」
「うん、異議なし！」
早速初めて見る。
いわゆる音符が重なった瞬間に叩けばいいのか。
反応速度もあるから、少し手前で……
……ってあれ？　やっぱり少し反応速度が遅く悪い点数になっていく。
家のゲームでの私は、反応速度に慣れてきたけど、ゲーセンはそうも行かない。
結果は私の最下位、曲を変えてやってみたが結果は同じだった。
他のゲームでも遊んで見る。レースゲームやエアーホッケーなんてのもあるが、体の反応が悪いのか、どれも最下位になるのは私だ。

「うーん、優子ちゃんゲーム弱すぎ……」
「うううう……1点も取れない……」
エアホッケーで龍香ちゃんと桂子ちゃんのうち、負けた桂子ちゃんと私が対戦したが、一方的に蹂躙されてしまった。いくらなんでも10—0って……
「じゃあ優子さんにはハンデつけようよ！」
「そうね、そうしましょう」

「う、うん。ありがとう」
龍香ちゃんが提案に対して、桂子ちゃんも同意する。私もハンデがないと楽しめないのは嫌でも思い知らされたので承諾する。
「じゃあ、私は片手でいいわよ」
そう言うと両手で持つホッケーゲームで桂子ちゃんだけ片手になった。
「これなら、手が一個だから優子ちゃんでもそれなりにやれるんじゃないかな……」
「うーん、まだ不安」
「そう？　でもどうしよう？」

「そうです、このゲーム１０点先取ですから、桂子さんが最初に８点自殺点入れてスタートすればいいんじゃないですか？　そろそろ勝たせてあげないと優子さん可哀想すぎるしさ」
「わ、分かった」
かなりの接待プレーだ。桂子ちゃんは手が半分しか動かせず、ゴールもがら空きになってる。
１００円を入れて試合開始。まずは桂子ちゃんがわざと８回オウンゴールして試合開始。
「えいっ！」
「それ！」
「あ！」
ピンポーン！
ダメだ、全く勝てる気がしない。あっという間に５点連取されてしまった。
「あーダメダメ、このハンデでも足りないみたい」
前に出た所をカウンターされてしまうが、前に出ないと威力がなさすぎる。どうしようもない。
私はまた１０連取される前に早々に降参宣言をする。もうここまでハンデもらってるんだし勝つまでいくら厳しくしても大丈夫だろう。
「うーん、じゃあ桂子ちゃんはカウンター禁止で優子ちゃんが準備できるまで攻撃禁止、更に桂子ちゃんは攻撃する時は前に出るのも禁止ね」
「う、うん」
そのルールで再開。もはや将棋なら６枚落ちレベルだ。
攻撃時はカウンターされる心配がなくなったので今度は安心して前に出られる。
「えいっ！」
「あっ！」
や、やっと一点入った！　どうしても私の攻撃の後テンポが遅くなるので、流石に感覚が狂い始めていた。

しかし、それも桂子ちゃんが慣れてしまえばそれまで。冷静に攻撃を防がれ、その後、長期戦に持ち込まれ私の息が上がる頃に2点取られてしまいスコアは9―7。
「えーい！」
「よっと」
あーゴールが入らない！
「隙きあり！」
「あっ！」
一瞬の注意散漫になった場所を突かれて、これで9―8になる。桂子ちゃんのスピードに全然ついていけない。結局まぐれで1点取れただけで、その後もあっという間に負けてしまった。
「はぁ……はぁ……どうしても勝てない……」
「うーん、どうしようか？」
「ちょっとこれは……人知を超えた弱さですよ……」
「はぁ……はぁ……」

「ねえ、お姉ちゃんたち？」
一人の小学生がの男の子が声をかける。お姉ちゃんと呼ばれるのがちょっと嬉しい。
「ハンデつけるなら、この網を動かすといいよ」
「あ、ありがとう」
どうもこのホッケーゲーム、ハンデ用に中央の網を動かせるらしい。
もちろんハンデは一杯まで自陣を広くしてもらう。具体的には桂子ちゃんはフィールドの4分の1を、私は4分の3を使う。つまり私はこれまでの半分の距離から攻撃ができる。もちろん私は両手、桂子ちゃんは片手だ。
そして私が前に出たら戻るまで攻撃禁止のルールもそのままだ。
私の体力の回復を待ってからもう一度コインを入れ、最初にまず桂子ちゃんが8点自殺点を入れてもう一回スタート。
「それ！」

「あ！」
よし取った！
ゆっくりと前に迫り、左から右隅めがけてゴールを狙う。
コントロールをミスし、壁に当たったがこれが不幸中の幸い。1点をゲット！
「や、やった！」
桂子ちゃんの攻撃で再会、2点取られたが3点目を阻止した。さすがにこの距離なら私のシュートもそれなりの威力がある模様で、もう一度ゴールにねじ込んで勝った！

「ふー！　やっと勝てたー！」
「お姉ちゃん嬉しいの？」
さっきの小学生だ。
「まあ、そりゃあ勝ちは勝ちだし……」
「でもいくらなんでもハンデ付けすぎでしょ……そこまでして勝ちたいの？」
「だ、だってここに来てからずっと桂子ちゃんと龍香ちゃんに負けっぱなしだったから……」
「ふーん。ま、いいや」
小学生が去っていった。
「全く、失礼なガキねえ……優子ちゃん体弱い上にまだこういうことに慣れきっては居ないのに」
「うんうん、それに私だって優子さんレベルで何もかも負け続けだったら何でもいいから勝ちたいって思いますよ」
「ありがとう」
「あ、そうです！　プリクラやらない？　これなら対戦要素ないし」
「あっ！　龍香、ナイスアイデア！」
「優子さん、プリクラ、まず優子さん一人で入ってみて！」
「え？　何で？」
「ほら」
龍香ちゃんが指差す先には「男性だけお断り」と書いてある。

ちょうど店員さんが掃除をしてて見張っている。なるほど。でも今更……

とも思ったが、とりあえず中に入ってみる。もちろん何も言われなかった。女を自覚させる。もうとっくに確立されていたと思ってたけど、やっぱりこういう積み重ねも大事だと思った。

その後、桂子ちゃんと龍香ちゃんも合流し、おすすめの機械を教えてくれた。

もちろん、私はプリクラなんて撮ったこと無いからここでも2人に教えてもらう。

「まず、床に小型カメラがないかどうか、スカート抑えながらチェックよ」

「う、うん」

ここが男子禁制なのも、こういう被害がよくあるから。らしい。最も、桂子ちゃんいわく、こういう盗撮の犯人で多いのは金に転んだ女だから意味が無いと言ってたけど。

盗撮カメラが無いことを確認したら、早速プリクラだ。

プリクラの機械の説明を見ると、最近では色々な修正があるらしい。

「うーん、私達別に修正とかいらないよね？」

桂子ちゃんが提案する。というか修正とかよくわからないし。

「ま、こう見えてあたしら美人ですし」

桂子ちゃんほどでもないが、龍香ちゃんも女子高生で彼氏がいると言うだけあってかなりの美人だ。

私達と並んでも、決して「可愛くない」とかネガティブなことは言われないだろう。実際ゲーセンに行くまでの会話でも、そんな会話はなかったし、龍香ちゃんにも「かわいい」という声がああった。

それぞれ思い思いにポーズをとる。顔や体型の修正等はせず、背景に絵を描いていく。

プリントアウトする。うんうん、よさそう。

「うわー桂子ちゃんも龍香ちゃんも可愛く撮れたてるねー！」

ネットに転がってるような下品な感じのプリクラではなく、いかにも上品な感じに仕上がっている。
「可愛いけどなんか個性ないような……」
「そうかな龍香ちゃん、あたしはこれだけ可愛い3人なら特にひねらないほうがいいと思うけど」
「私もそう思うわね。修正したり個性を無理に出さなきゃいけないのはセンスが無いか単純にブスだからそうするのよ」
「それもそうね。ふふっ……」
三人で笑い合う。楽しい時間。プリクラから出て、まだ行ってないコーナーに、出撃する。
「あ、クイズゲームがあるよ」
「それいいかも、クイズゲームなら、優子ちゃんも勝てるんじゃない？」
「う、うん。やってみる」
とりあえず、オフラインの3人対戦モードにしてスタートだ。難易度は易しいのにしておこう。

問題：明智光秀の本能寺の変での呼び方はどれ？
A：明智伊豆守
B：明智日向守
C：明智筑前守
D：明智美濃守
あ、これは知ってる！　Bだ！
「うーん、どれだろう？」
「これでいいや！」
お、桂子ちゃんも龍香ちゃんも間違えてる。これは一歩リードだ。
「あちゃー、これが正解かー」
問題：東北新幹線を走らないのはどれ？
A：やまびこ
B：はやぶさ
C：かがやき

D：つるぎ
うーん、CかDだなあ。Cは確か北陸新幹線だし……
よし！　全く聞いたことが無いDにしようか！
む、桂子ちゃんと龍香ちゃんはCを選んだ！
2対1でちょっと不安になる。
……やった、正解だ！　なるほど、東京から大宮までは東北新幹線って扱いだから北陸新幹線の「かがやき」もそこは東北新幹線を通るのか！　ともあれ2点リードだ。
問題：リーチ無しで上がった時に一番点数が高いのはどれ？（ドラ：發）
A：一萬二萬三萬四萬四萬一筒二筒三筒一索二索三索東東東
B：一萬一萬三萬三萬三萬四萬五萬六萬六萬七萬八萬九萬九萬九萬
C：東東東西西西白白一萬一萬一筒二筒三筒
D：一萬一萬九萬九萬九萬九筒九筒九筒一索一索一索九索九索九索
何よこれ、何を言ってるのか意味が分からない……
「なにこれ、暗号？」
「うーんどうなんだろ？」
よくわからんけど、「萬」でそろってるBが一番高そうだ。
お、桂子ちゃんと龍香ちゃんもBか
……正解発表、正解はDらしい。全員不正解だ。
「えーDなんだー」
こうしてクイズは10問だが9問目の時点で私が二人に2ポイントリードしていたので勝ちが確定した。
最後の問題も、よく分からない問題で全員不正解。
……身体能力関係ないけど、ハンデ無しで勝てたのは嬉しい。
「ふーやったやった！」
「やりましたね優子さん！」
「優子ちゃん優勝おめでとう」
私から笑みが溢れる。桂子ちゃんも龍香ちゃんも祝福してくれる。

気持ちよく終われてよかった。

「優子ちゃん、龍香ちゃん、そろそろお腹減ったしお昼にしない？」

「あ、そうだね」

「賛成ー！」

というわけで、桂子ちゃんの提案で、私達三人娘は、近くのレストランを探すことにした。

# 美少女の休日　後編

今日は日曜日、しかも昼下がりで人が多いから、レディースデーのような都合の良い物があるわけもなく、どこもごく普通の定価販売だ。

いつぞやの中古店も入っているデパートの最上階にあるレストラン街に入った。

「ねえ、優子さん、桂子さん、これが良くない？」

龍香ちゃんが指したのはラーメン屋だ。

「うん、美味しそうなラーメンだけど、私達で食べきれるかなあ……」

「あたしはこっちがいいと思うな」

私が指したのはイタリア料理の店だ。

「うーん、私はこれがいいな～」

桂子ちゃんが指したのはスイーツのお店。お昼ご飯にはちょっと違う気もする。

「見事にバラバラね……」

「地図と格闘してないで、現地に行ってみようよ！」

というわけで百聞は一見に如かずと言うように、私たちは3店をそれぞれ見て回った。

まずスイーツ店、ここはやばい、1時間以上待っている。桂子ちゃんが調べた所、商店街時代から名店として有名だったらしい。

次にラーメン店、ここはそこそこだ。4分の3サイズの女性向けラーメンが安いのも魅力。

そして、最後に私が推薦したイタリア店。ここは逆に客足が少なくてすぐに入れそうだ。

「でも、値段高いね……」

軒並み数千円という形で料理長の写真もあって実績こそあるが、高級店という感じで、女子高生3人が昼食にこれを食べるのは贅沢にすぎる。

「……ラーメン店にしようか」

「うん」

「異議なしです」
私の提案に桂子ちゃんと龍香ちゃんが同意する。
ラーメン店に行くと、券売機前に先客が1組居た。
よし、その後ろだ。
「あいたっ！」ドン
誰かにぶつかった。
「おい」
げ、いかにも目つき悪い男三人組……あれ？　何処かで見たような？
「っと、すみません」
不良三人が目を丸くしている。
「い、いやこっちこそすまん。先にどうぞ」
不良たちは見かけによらずとても親切な態度をする。
「え？　いいの？」
「いいってことよ。ささっ、どうぞどうぞ」
「……あ、ありがとう」
「みんなレディースラーメンでいい？」
「大丈夫よ」
最初に私が一旦3枚まとめて買う。後ろでは桂子ちゃんと龍香ちゃんが話している。
「いいですねえ、見かけによらず、女の子にちゃんと気配りできる紳士的な人」
「そうねえ、見た目だけのイケメンよりもああいう感じのほうが絶対いいわよ」
「うんうん、末永く続くタイプですよね桂子さん」
私たちは、3人共4分の3の「レディースラーメン」の食券を購入し、カウンターに並ぼうとする。
「いやー、お前本当に女の子には優しいな」
「だってよ、あの子、この前台車引っ張ってった子だよ」
「え、なんで分かんだよ!?」

「そりゃあよ、あんだけ可愛くて胸大きければ覚えるっての。それに残りの二人も彼女ほどじゃないけど可愛いじゃん。粒ぞろいよ」
後ろでは不良風の男性3人組が話していた。

「ふふっ、やっぱ女は男にモテてこそよねー」
カウンターに並ぶと桂子ちゃんが開口一番にそう言う。
「うんうん、同性受けなんか狙うよりもずっといいじゃん。さっきみたいに、男の人も親切にしてくれるし」
「そうねえ……実はこのデパート、私が受けたカリキュラムの舞台だったんだけど、その時も見た目は柄悪いけど、とっても紳士的で素敵な三人組の男の人に助けてもらったんだよー」
「へー優子さん、そんなことがあったんだ！」
「ほんと、人は見かけによらないよねー。でも、男はまだいいよ、女の子は本当に見た目が大事だから」
「うんうん、きれい・美しさ、女の武器ですよね！」

「うひょー俺たち紳士的だってよー」
「あんな可愛い子にあんなこと言われたらもう辛抱たまらんなあー」
「でも3人共彼氏とか居るんだろーなー」
「だろうなあ……俺たちも、高望みばっかしてねえでそろそろ固めねえとなあ……」
「やっぱ、見た目変えねえと駄目か」
「だよなあ……俺たちもこんなのから足洗うっかなあ……」
後ろのテーブルに座っていた三人組の会話が丸聞こえだ。
どうもあの時の人と同一人物らしい。
「お待たせしましたー、レディースラーメン3点になります」
店員さんが順番にカウンターに上げてくれるので、机に持ってくる。
さすがにラーメンを持てないほどの貧弱な腕力にはなっていない。
「「いただきまーす」」
3人で頂きますをし、ラーメンをそれぞれ食べ始める。

皆比較的黙々と食べている。もちろん食べ物を含みながら喋るということはしない。
なんとなく、後に出てきた男3人組の視線も気になるからだ。
ウェイトレスの言葉を聞く限り、男3人組の方はラーメン大盛り味濃いめや、チャーシューメン大盛りといったいかにも男らしいメニューを頼んでいた。
私達はゆっくりとラーメンを口に運ぶ。不良風の紳士たちは、私達の後から来て量も多いのに、食べるのは早かった。
私も少し違えば、あそこの輪に入っていたのかもしれないかな、と思いつつ、値段も手頃なレディースラーメンでお腹が膨れる身体に感謝しながら、三人の中で一番最後に食べ終わった。
二人とも話をしないで、待ってくれたから親切だ。無言の圧力も感じない。
「あ、優子ちゃんが食べ終わった。じゃあ行こうか」
「う、うん」
少し休みたかったが、外が行列だ。幸い、レストラン街の真ん中で休むことも出来るから、そこで休めばいいだろう。
「ふう、休もう休もう！」
「そうですね、私も疲れましたー」
疲れたので、つい楽な格好をしたくなる。
「あ、優子ちゃん、足広げないようにね」
「あ、はいはい」
おっと危ない危ない、休憩所は多くの人がいる場所だ。しかもここでパンツ見せてしまったから、後で母さんにこってりと絞られて恥ずかしいおしおきをさせられたことを思い出す。そんなところでパンツは見せたくない。
……いや、一人きりの密室以外嫌だけど。
「そそ、この間買ったこのリボン、これを指に巻くのがオシャレなんですよ」
「ほうほう、へー可愛いねー」
「ちょっとしたオシャレかなあ……私まだよく分からないや……それ

よりも頭につけたほうが似合いそう……」
「優子さん、オシャレはそう単純じゃないんですよ！」
休みながら私たちはガールズトークをしているが、私もついてこれるように、簡単な話しかしてこない。
金曜日、私が救われた日も言ってたっけ？
「女子」としては何も差別しないけど、「元男」としても扱う。そこは矛盾しない。本当にいい人に恵まれているよ。私は。

「そうそう、実は映画の割引券あるんだけど？　みんなで見ない？」
桂子ちゃんが割引券を提示する。
「へーどんな映画？」
「これこれ、アニメ映画！」
「お、メジャーじゃん」
「いいねえ。評判いいんでしょ！」
桂子ちゃんが見せてくれたのは、アニメ映画だ。
いわゆる「国民的人気アニメ」というやつで、大人から子供まで楽しめると評判だ。
ネット上では、前作の映画は評判が悪かったが、今作は感動性が高く、見事に汚名返上したとの評判になっている。

果たしてその評判やいかに？
ということで、デパートの隣のビルの、映画塔にやってきた。
最も、一階下にエスカレーターで降りてそこからスカイブリッジを渡ればいいだけだ。
ポップコーンなどは昼食を食った後なのでなしにしてすぐに行列に並ぶ。
割引券を使って当日券を買って列に並ぶ。日曜日なので家族連れが多く、女の子三人組は結構目立つ。
しかも客観的に見ても美人の三人組だし、特に私は胸も大きいから、お父さんが目を奪われるとお母さんに怒られてそうだ。
……そんな他人のことなど想像はできるが、実際のことは知る由も

なく、私たちは指定された席に3人並んだ。
この映画は、どのシリーズにも共通しているが、主人公の子どもたちがちょっとしたきっかけで、プチ冒険のような旅をする中で、大きな事件に巻き込まれる。
そしてゲストキャラと共に事件を解決し、感動のフィナーレ。というのがだいたいの流れだ。

さてさてどうかな……

ううううっ、すごい心に来る。うわー、これ言われた方はたまらないよなあ……
桂子ちゃんと龍香ちゃんがどういう表情で見ているかはわからない。だけど2時間程度の映画は長いようであっという間だ。
最後の別れのシーン。これが感動的だという噂。
ううっ……あれ？　目から涙が……
おかしいな、感動することはあっても、泣くことはなかったのに……
ポケットからハンカチを取り出して涙を拭う。
でも私が泣いているなんてことはお構いなしに、映画はクライマックスが続く。
そして、いつもの日常になって終わり。だ。
エンディングテーマが流れる。これも評判がいい。
スタッフロールが流れる。一部の観客は既に映画館を出ているが、私達はもう少し余韻に浸りたいので、ラストのラストまで見ることにした。

「いやーよかったねー」
「う、うん……」
「あれ？　優子さん泣いてます？　私もちょっと涙目になっちゃいましたよ！」
「な、泣いてなんか……ううん、泣いちゃったわね」

「うん、感動的だったもんねー」
「でも桂子さん、冷静沈着ですねー」
「心には来るんだけど、体には来ないタイプかな？　私」
「あはははは」

そうだった、泣いてもいいんだ。私はもう女の子だったんだ。泣いても怒られることはない。今みたいな感動系の映画なら、尚更だった。

その後、映画のパンフレットを3人で見回したりして、今日はお開きになった。

「今日は楽しかったですね、優子さん、桂子さん、また明日、学校で」
「うん、龍香ちゃん、気をつけてねー」
まずこの駅が最寄駅だという龍香ちゃんが別れる。
桂子ちゃんと私は電車で同じ駅。２人でＩＣカードをタッチする。
「桂子ちゃん、今日はありがとうね」
「うん、優子ちゃん辛そうだったから私が企画したのよ」
「私のために……ありがとう！」
今度は泣かないで、嬉しい顔になった。
「でも、私も楽しかったよ、そういえば、優子がまだ優一だった頃でも、こんなに遊んだことっていつ以来だったかな……」
「中学入ってから、無かったな」
「そういえば、荒れ始めたのも中学の頃からだったよね。授業中喋り続ける生徒に怒鳴り散らして、殴り合いになったんだっけ？」
「あったわね、そういうこと」
「実は私、内心ありがたいと思ってたのよ。実際あのとき、当時の優一が煩い男子に怒鳴ってたおかげで、授業も静かだったからねえ……」
「でも、私、もうそう言うことしたくない」
「……ええ、ごめん。優子には辛い思い出だっけ？」
「……うん、男だった頃にやってた乱暴なことは、全部消したい、とても辛い思い出だよ」

「そっか。そうよね……ねえ優子、あなたならきっと『優しい子』になれるわよ」
「ありがとう……私ね、今はもう、女の子になれてよかったって思ってる」
「どうして？　あ！　電車来るみたい！」
　駅の案内放送が流れたため、一旦電車に視線を集中させ、ドアが開き降りる人を先に通してから車内へと入る。席はまばらだが近い為2人とも立ちっぱなしだ。
「……で、さっきの話の続きなんだけど、どうして、女の子になれてよかったと思ってるの？」
「うん、なったばかりの時はなんて不便なんだろうって思った。今日のゲーセンでもそうだったけど、私は何もかも弱い存在になったわ」
「そうね、優子ちゃん、体育もちょっとびっくりしちゃったよ。男だった頃はむしろいい方だったんじゃない？」
「うん、女の子の日も来るようになったし、腕力も落ちて重い荷物も持てなくなって、長い距離を走れなくなって、速く走れなくなって、視野も狭くなった。食べる量も減ったし、反射神経も悪くなった。背も縮んだから届いたものが届かなくなったわ。痴漢されたときも手を掴んで叫ぶくらいしかできなかった。もし優一の時にホモに狙われてたりしてたら間違いなく殴り合いだったよ」
「……そう思うと、女の子って弱いよね」
「だけど……私は弱くならないと、『優しい子』にはなれなかったと思うの」
「理由……聞いてもいい？」
「……私が倒れた日の昼休みのこと、覚えてる？」
「うん、あの日の昼休みは忘れそうにもないよ。お腹痛いって言ってたじゃん」
「そうじゃないよ、その少し前。私、名前を裏切ることに負い目を感じていても、中毒者が麻薬をやめられないように、乱暴狼藉をやめられないって言ったのよ」
「あー、あれね……」

「多分力を持ったままだったら、私の性格は治らなかったと思うの。『弱い子をどうしていじめちゃいけないの？』という問いだってきっと、考えることさえ無かったよ」
「優子ちゃん」
「私、弱くなった。でも、これでいいと思う。女の子は、弱くてもいいから。私ね、男と女両方を経験してわかった。女の子にもし、強さが必要なら、男の子に頼ってもいいと思うの」
「そうね。私もそう思うかな……田村は、同意しないだろうけど」
「ははっ、恵美ちゃん、強いから」
「そうね、田村は強いよね。今になって、田村が何故私と女子勢力を二分できたか、分かるような気がするな……」
私が女の子になるまで、桂子ちゃんは学園一の美少女と言われていた。
桂子ちゃんは性格も良くて、結果的にその肩書きを奪うことになった私に嫉妬することも決して無かった。
一方で、恵美ちゃんは女の子らしいというわけでもなく、どちらかと言えば気が強いタイプだ。
ズバズバとものを言うし言葉遣いも荒い上に気も強い。
こういうのが好きな男性も居るだろうが少数派だ。むしろ、本能的にも男性にとって特に苦手なタイプと言ってもいいだろう。
「自分たちが持ってないものに憧れるってことかな」
「そうよね。私も田村も、そんなところがあったのかもしれないわね」
すると、列車の自動放送が聞こえる、間もなく降りる駅だと言っている。
「あ、優子ちゃん、降りるよ」
「うん、分かってる」
扉が開き、前の人に続いて降りる。
人混みの中、階段を上がる。この時は私も桂子ちゃんも階段を登ることに集中して言葉を発さない。
そういえば、「ガールズトーク」するとか、「女子たちで遊びに行く」という課題はカリキュラムにはなかった。

まあ、それを用意できないのは当たり前だし、私が行ったカリキュラムはそれよりも前段階の内容だ。

「それで、さっきの話の続きなんだけど」

「うん」

改札を出ると桂子ちゃんがまた話しかけてきた。

「そう言う意味では、優子ちゃんも、私達に持ってないものがあるわ」

「もしかして、経験？」

「うん、優子ちゃんにとっては嫌な思い出だと思うけど、それでも生粋の女の子には分からない感性を知ってると思うの」

「それが役に立つ、と？」

「うん、多分優子ちゃんが女の子になりきったら、すごく男子にモテると思う。優子ちゃん、ただでさえ可愛いのに、男心まで知り尽くしてるんだから」

「そ、そうかなあ……あたし、正体知られたら逃げられると思うよ」

「だから、女の子になるんでしょ？」

「ううん、そっちじゃないよ。私の人生の長さだよ」

「あ、ああ。そっちね……でも、どうなんだろう？」

「私もね、まだ男の子を好きになるって気持ちはわからないのよ。でもこれを理解しないと、まだ女の子になれないと思うの。だから、機会があったら、そのことについて永原先生に相談してみようと思って」

「そう、頑張ってね」

「あ、ここでお別れだね」

桂子ちゃんの家との分かれ道だ。

「じゃ、また明日学校でね」

「うん、それじゃ」

桂子ちゃんと別れ、家路につく。

家では母さんが「今日はどうだったの？」と聞いてきた。

私が、「とっても楽しかった」と言うと、「それは良かった」ということだった。

先週は憂鬱だった月曜日も、今日はまた大丈夫。
そんな風に感じる、楽しい日曜日だった。

# 天文部への誘い

ピピピピッ

目覚ましの音、それを止める手、そして起きる。

また制服に着替える。なんか肩が痛い。昨日遊びすぎたのかな？

男の頃は殆どなかったけど、なんか最近肩がこってしまっている気がする。

親父の昔の話では、この肩こりというのは意外に曲者で、腕が回りにくくなるし、時折肩も痛くなる、仕事をしていて鬱陶しいとのこと。

私が肩こりになったら、ただでさえ胸に邪魔されているのに更に腕も回りにくくなるわけだし、肩の痛みも大変だろう。

一方で、こった肩は揉まれると気持ちいいらしい。でも揉み過ぎもダメだとか？

いつものように通学し、下駄箱へ。

靴は隠されていなかったので、そのまま上履きを履いて教室の前に来る。

……ん？　誰かが言い争いしているような。

「いいか、優子のことを二度と優一なんて言うんじゃねえぞ！」

「わ、わかってるよ……」

「この事はな木ノ本とも話し合った。優子を男扱いした奴は私達で悪い噂を流す。もちろんグループは関係無い。だから、小谷学園の全女子を敵に回すと思え！」

「す、すまねえよ……やりすぎたと思ってる」

声の主を聞くに、どうやら高月章三郎が田村恵美に詰問されているようだ。

聞き耳立てるのも良くないし、とりあえず教室に入ろう。

「何言ってんだよ、あたいに謝るんじゃねえよ。謝る相手は――」

ガラガラガラ

「ほら、噂したら来たぞ。おら高月、優子に謝れ！」

あーそういうことね……よし、この手で！

「な、なあ石山……」
「ん？」
「す、すみませんでした！」
「う、うん。ありがとうね……今日からちゃんと私のこと女の子として見てくれる？」
「そ、それは……その……まだ……」
「み、見てくれないの……？」
わざとらしく泣きそうな真似をする。
「わ、わっ！　た、頼む！　泣かないでくれ！」
「じゃあちゃんと――」
「うん、見るから。女の子として見るから！　安心して！」
「ありがとうね」
「そ……その……」
「石山さん……ゆ、優子さん、すみませんでした！」
高月章三郎がまた頭を下げる。
「うん、こっちこそ。急に泣いたりして、驚かせてごめんなさい。あと……男だった時に、色々乱暴してしまって」
少しにっこりと、笑いながら答える。
「あ、ああ」
ニッコリ笑顔を向けると、高月はほんのり照れたような振る舞いをする。
この前まで散々いじめてたのに、可愛い顔を見るだけでこうなる。男って単純ね。
「なあ、篠原、お前も――」
「っ!!!」
「あ、おい！」
篠原浩介が逃げている。土日挟んだとはいえ気持ちの整理がつかないのかもしれない。
「……あいつ、謝罪するときはとことんやるタイプだから、もう少し待ってれば自然と謝罪するよ」
「そうかい。ま、しばらく待って来ねえならあたいがまた呼びかける

よ」
「え、恵美ちゃんありがとうね。私のために」
「いいってことよ……あたいも、しょーもねえプライドで優子を苦しめちまったからな」
「う、うん」
「捨てた所で何も悪いこと起きてねえのにな。ほんと、すまねえ……」
「もういいよ。それに恵美ちゃんにはもうとっくに助けられてることのほうが多いし」
「あ、ああ。分かった。じゃあもう謝らない」
「うん、ありがとう」

月曜日の一時間目、古典の授業の準備をする。
どうしてもやる気が削がれがちな月曜一限を若くて美人と評判の永原先生の古典に持ってきたのは中々に気が利いている。
まあ評判の一つは、嘘なんだけど、それを知ってるのはクラスでも3人だけだ。

「はーい、それじゃあ朝のホームルームを始めるわよー」
永原先生が教室に入り、号令をかける。
「それじゃあ連絡事項から伝えるわね……」
連絡事項は、来月に始まる球技大会についてを伝えている。
体育の授業でもやった通りのことだ。
更に金曜日、私が大泣きしてしまったことにも触れた。
「先週金曜日、石山さんが大声で泣いていると言う報告を受けました。泣かせてしまった原因になってしまったと思った人は、必ず謝るようにして下さい。石山さんも、許す心で接して下さいね」
永原先生が続ける。
「石山さんは、とても傷つきやすい女の子です。何気ない一言でも泣いてしまうことがありますので、くれぐれも注意して下さい。もちろん、いじめは絶対ダメですよ。みんな、いい？」
「「はーい」」

「それじゃあ、今日のホームルームはここまでです、いつものように月曜日ですから一時間目は私の古典なのでこのままで行きます。では準備して下さい」
　私は永原先生に先週出ていたプリント課題を提出する。
　1週間休んでいたことで、下がりかけていた小テストの成績も、すっかり男時代と同程度まで回復していた。
「はーい、それでは授業始めますね」
「今日は、今の言葉に比較的近くて読みやすい、江戸時代の桃太郎物語を読みましょう」
「桃太郎は私も昔に読んだことがありますけれど、私が読んだ当時の物語では桃太郎は桃から生まれたわけではないんですね」
　永原先生のこの言葉をリアルタイムと知ってるのは私の桂子ちゃんと龍香ちゃんだけ、私を含めて3人は、いつもの反応ではない。
「それじゃあ読んでいきましょうか――」

　また一つ賢くなれた。
　桃太郎は桃からではなく、桃を食べて若返ったおじいさんとおばあさんが普通にアレをして生まれた子供だったそうだ。

「あ、優子ちゃん、ちょっと来てくれる？」
　昼休み、学食から帰って教室での一時、男子のいじめがないだけで、こんなに安らかなんだと思いつつ、木ノ本桂子が声をかけてきた。
「何？　桂子ちゃん」
「あの、ね。ちょっと2つのことで話があるのよ」
「う、うん。1つ目は？」
「今朝田村が高月を謝らせようとしてたでしょ？　実はあのあと話し合ったんだけど、やっぱりグループとしてはまだ調整はしきれないのよ」
「うん」
「だけど、優子ちゃんを守るというのはどちらも同意ということと、今のところグループが8対8でバランス取れてるから、優子ちゃんは

どっちのグループにも参加しないってことになったわよ」
「うん、まだ色々グループと言われてもわからないし、多分桂子ちゃん寄りにはなるんだろうけど……」
　昨日遊びに出かけたばかりだし……
「で、どちらのグループにも参加しない代わりと言っては何なんだけど、優子ちゃんを介してなら、今まで断絶していたグループ間相互での交流も自由ってことになったわ」
「う、うん」
「本当は私も田村も、和解には思う所あるんだけどね。やっぱり急には難しいのよ」
「そ、そうなんだ……」
　このあたりの女子の作法は、追って覚えていくしかない。言動もだいぶ女の子らしくなってきたと思ってたけど、まだまだこういう深い所では全く女の子にはなりきれてないことを、改めて思い知る。
「一点目はそんなところかな、二点目を話してもいい？」
「うん」
「今日の放課後、ちょっと付き合って欲しいのよ」
「いいけど何に？」
「優子ちゃん、部活入ってないでしょ？」
「う、うん。面倒だったし、私嫌われてたから……」
「それなんだけど、私の入ってる天文部に入ってみない？」
「え？　いいの？」
「もちろん。最も、部員は私と部長の２人だけだけどね」
「ふ、２人？」
「夜に部活動するわけにも行かないでしょ？　だから普段は天文部と言っても、どちらかと言うと『宇宙研究部』みたいな感じなのよ」
　そういえば、桂子ちゃんはすごく宇宙に詳しかったんだっけ？
「うん、分かった。ちょっと見てみるよ。ありがとう」
「部長さんもいい人だし、優子ちゃんの正体を知ってるかは知らないけど、どちらにしても、きっと歓迎してくれるわ」
「うん、楽しみに待ってるよ」

「……お、木ノ本、あんた天文部に誘うのか？」
　田村恵美が声をかけてきた。
「ええ、優子ちゃんは体を使う運動系は無理でしょ？」
「……それには同意せざるをえんな。体育の授業も見てたけど、優子、虚弱体質過ぎてこっちが心配になるぜ」
「そうなのよ、昨日さー私と龍香とで行ったゲーセンでもさ、優子ちゃんゲーム弱すぎて……」
「お、おい、本人の目の前だぞ！」
「ううん、いいよ。私が弱いの事実だし。で、ゲーセンでもほとんどのゲームでダントツ最下位で、あまりに弱いってことでエアーホッケーで桂子ちゃんにかなりのハンデ付けてもらったのよ」
「そ、そうなのか？　どんな？」
「それは流石に私の口からは言い辛いわね……」
　桂子ちゃんが躊躇する。
「私が勝てるようになったのは、桂子ちゃんのフィールド４分の１で、カウンター禁止……つまり私が攻撃して受け止めたら桂子ちゃんは私が戻るまで攻撃不可で、私は両手で防御できるけど、桂子ちゃんは片手だけで、最後に――」
「１０点先取の所、私が８点オウンゴール入れてスタートよ」
「な、何だよそれ……大人と子供でもそんなハンデにしねえぞ普通……」
「でもそこまでしないと勝てなかったのよ、私……」
「威張れることじゃねえぞ……」
「い、いや威張ってるつもりはないのよ……」
「あ、ああ悪い……」
「でも、優子ちゃん、クイズゲームでは優勝したのよ」
「なるほど、それは確かに、体力関係ねえからな」
「うん」
「……引き止めて悪かった。それで、天文部ってわけか」
「宇宙飛行士目指すわけじゃないし、悪くないでしょ？」
「そうだな、部員も少ないけど男子部員も居ねえし丁度いいだろ……

じゃあな」
　そう言うと、田村恵美はグループに戻っていった。
「……田村とまともに会話したのって、いつ以来だっけ？」
「金曜日以来じゃないの？　私の靴がなくなった時、ちゃんと協力してたじゃない」
「あ、あれは……そうね、でもあれを除いたらいつ以来だろう？」
　もともと二人の仲の悪さはこの学校でも極めて有名なことだった。何かあれば衝突と喧嘩、本人同士だけではなく、グループの女子が絡んでも喧嘩していた。

「うーん覚えてないや」
「私も。もしかしたら1年の最初の時以来かもね」
「そうだったの……」
「そう思うと、優子ちゃんには悪いけど……いいきっかけだったかもね」
「ふふっ、ありがとう……」
「そう言ってくれると助かるわ」
「うん、経緯はともかく、少しでも人の役に立てると、それはとっても嬉しいなって」
「そう……優子ちゃん、変わったね。昔だったら、こんな風に言われたらものすごく怒っただろうに」
「ありがとう」
　桂子ちゃんからも評され、私も徐々に改心できている実感がある。
　男子たちもいじめなくなり、私のことを男だと無理に思い込むこともなくなれば、解決は案外早いかもしれない。
　その後も、桂子ちゃんと他愛のない話をし、他の女子も集まっていって、休み時間は過ぎていった。

「それじゃあ、ホームルーム終わります。部活の人も、そうじゃない人も、帰り道は気をつけて下さいね」
　永原先生の言葉とともに、今日も授業は終了した。

私は桂子ちゃんとの約束を守るため、鞄を持って桂子ちゃんを訪ねた。
「優子ちゃん、行こうか」
「う、うん」
「こっちに来て！」
いつぞやの私や先生の秘密を話したときのように、桂子ちゃんの足取りを追う。
校舎を歩くと見慣れない場所に来た。
部活棟だ。もちろん私は用がないので去年の文化祭の時以外入ったことはない。
「えっとね、こっち！」
3階建ての部活棟の最奥の狭い部屋だ。
コンコン
「はーい」
桂子ちゃんがドアをノックすると、一人の女性の声がした。
「失礼しまーす」
中に入るとパソコンに向かっている一人の女子生徒が見えた。リボンを見るに1学年上の先輩だ。
「木ノ本さん、いらっしゃい。その子が紹介してくれた子ですか？」
「はいそうです部長」
「そう……って！　あなた、石山優子さんじゃないですの!?」
「え？　私を知ってるんですか？」
「知ってるも何も、学校であなたのこと知らない人居ないですわよ。学園一の乱暴者が授業中にいきなり倒れて救急車に運ばれて、一週間姿を見せなかったと思ったら、学園一の絶世の美女になってたっていう話ですわね？」
「は、はい……」
「その幼さが色濃く残るタレ目の童顔に見事としか言いようがない黒髪のロングストレート、そしてこれまた学校一の巨乳……木ノ本さんも相当の美人なのに、石山さんはそれ以上ですもの。木ノ本さん、優子さんが来てから学校一の美少女とは言われなくなったのよ」

「あはは、元々学校一は言い過ぎだと思ってたから、むしろ重荷が取れたというか……」
「嫉妬しないのね、本当」
「うーん、私もたしかに優子ちゃん並みにキレイになりたいと思うことあるけど、別に優子ちゃんが一番美人だからって私が美人じゃなくなったわけじゃないし」
「ふーん、まあいいですわ。それで、木ノ本さん、今日はどうしますか？」
「優子ちゃんにまず、部活のことを……それから、部長も自己紹介を――」
「ああ、そうでしたわ……申し遅れました。私（わたくし）、坂田舞子（さかたまいこ）と申します。僭越ながら、天文部で部長をさせていただいております。以降よろしくお願いいたします」
「は、はい。石山優子です。よろしくです」

「それじゃあ優子ちゃん、うちの天文部の活動を説明するね」
「う、うん」
部室には5、6台のパソコンがある。桂子ちゃんはそのうちの2つを起動した。
「優子ちゃんはこっちに座ってくれるかな？　あ、部長は――」
「既に開いてますわよ」
「じゃあ、情報収集お願い」
「分かりましたわ」
「じゃあこっちも……まずは、インターネットを開いてくれる？」
「う、うん」
ブラウザをダブルクリックする。
「で、トップページがＪＡＸＡにつながってるでしょ？」
「うん」
確かに、そこを見るとＪＡＸＡ、宇宙航空研究開発機構のホームページだった。
「ここで、何か新しい動きがないか常にチェックするのよ」

「で、お気に入りを見てくれる？」
「わっ、天文関係のサイトがたくさんあるわね」
　そこにはＮＡＳＡや天文ニュースや某巨大掲示板の天文板まであった。
「天文機材は部費がないからないけど、私の家にあるのを使って、夏休みや冬休みにたまーに天体観測するのよ」
「うんうん。でも私、名前ならともかく、形まで知ってるのはオリオン座くらいしか知らないわよ」
「ああ大丈夫大丈夫、私だって全部は覚えてないわよ。それにうちの部はそういうのともちょっと違うのよ」
「そうそう、普段は様々な研究をしていて、たまに星を観測したりするのよ。珍しいイベントがあったら、もちろん行くけどね。例えば５年前の金環日食とか」
「そういえば次の日食っていつなん？」
「部分日食は結構あるわよ。皆既日食だと……確か２０３５年の９月よ」
「１８年後かあ、３４歳ねえ……」
「その時の皆既日食のシミュレーションもあるわよ。見てみる？」
「どれどれ？」
　桂子ちゃんが見せてくれる。自作らしい。何が起きているのかよく分からないけど、太陽が真っ黒になってる。
　さすがに小学校の頃の理科の授業で習ったから、日食の仕組みは知っている。それにしても珍しい現象みたいだ。
「まあどうしても見たいなら、地球上の何処かで1年に2回、日食は起きてるから、金ためて見に行くといいわよ」
「そうなんだ」
「そうそう、ここに日食のまとめサイトがあるから、調べるといいわよ」
　そう言ってクリックする、うわあ、結構将来まで載ってるんだな。
「……２０９５年の金環日食とか誰が見るんだろう？」
「そうねえ……優子ちゃんとか？」

「え？」
「優子ちゃん、１００年後くらいでも平気で生きてるでしょ？　多分」
「そ、そうだったわね……」
　そうだ、私はＴＳ病だったんだ。
　男だった頃は知っているけど、不老だということはつい忘れがちになってしまう。
「羨ましいわねー、天文好きになるとね、人間の一生はあまりにも短すぎて、やってられなくなるのよ」
「そういうもの？」
「うん、私、絶対ベテルギウスが超新星爆発するまで死にたくないのよ」
「そのベテルギウスの超新星爆発ってのはそんなにすごいの？」
「すごいなんてものじゃないわよ。昼間でも見えるくらい星が光るのよ」
「な、何だそれは……昼間でもって……」
「昼間に月が見えることがあるでしょ？　点光源で半月よりも明るく、場合によっては満月にも近い明るさで見えるのよ」
　お、恐ろしい話だなあ……
「でも、明日起きてもおかしくないけど、数万年後かもしれないとも言うのよ」
「そうなんだ……」
「おっと、話が脱線しすぎたね、じゃあ他のサイトについても説明していくよ……」
　こうして、下校時間になるまで、天文部のガイダンスは続いた。

「ただいまー」
「おかえり、遅かったじゃない」
「桂子ちゃんに天文部に誘われて」
「へえーあの子、天体が好きなのね」
「うん、私も知らなかったよ」
「それじゃ、ご飯もうすぐ出来るから、着替えてすぐに来てくれる？」

「はーい」

女の子としての新しい生活、いじめもなくなって、受け入れられて、ようやく再スタートが切れそうだ。

# 変わり始める日常

5月も30日になった火曜日、いじめられなくなって二日目。私はいつものように学校へと通い始めた。
女の子になって、そろそろ20日、最初の1週間で叩き込まれた仕草も、徐々に無意識にできるようになってきたと思いたい。
そんな火曜日の昼下がりだ。
私はいつものように学食へ向かおうとしていた。
すると、桂子ちゃんが「優子ちゃん、一緒に食べようよ」と誘ってきた。
昼食は一人で食べる派だったが、いい機会だと思い、快諾することにした。

桂子ちゃんと一緒に学食に並んで歩く。列の最後尾を見つけたので2列で並ぶ。
「ねえ優子ちゃん、昨日の天文部、どうだった？」
「うーん、まだよくわからないけど、奥が深そう」
「うんうん、奥が深いのはその通りだけど、雰囲気よ雰囲気」
「えっと、坂田部長だっけ？　物腰柔らかい人だよね」
「あの人なら受け入れてくれるだろうって思ってね。優子ちゃん、いつもすぐ帰っちゃうし、あの人三年生だから一応縦のつながりも出来るかなって思って」
「うん、ありがとう……にしても、やっぱり視線を感じる気がするわね」
「そうねえ……私と優子ちゃんが並んで歩くと、特に。ね」

「おいおい、あれが桂子と優子だぜ」
「やっぱ並ぶと違うよなあ。二人とも可愛いし美人だし……特に優子ちゃんはスタイルも抜群だしさ」
「いいなあ、俺もあの中に混ざりたいよ。両手に花ってね」
「お前それ贅沢言いすぎだろよ。俺は木ノ本桂子だけでいいぜ。だっ

て石山優子は――」
「……何言ってんだよお前、むしろ元々男だからこそ輝くんだろ。俺たちの気持ちもわかってくれそうだしさ」
「ポジティブだなあお前」
　食堂の券売機に並んでいると、列に入ろうとした三年生の男子２人組が私たちの噂をしている。

　列が前に進むと、今度は既に食べ始めていると思わしき一年生の女子集団が噂をしている。
「あ、あれ、石山先輩と木ノ本先輩じゃん。今日も二人ともきれいだねえー」
「あーあ、私も木ノ本先輩みたいに可愛らしい美人になりたいわね」
「石山先輩の方が可愛くない？」
「確かにそうだけど……性格がきつそうじゃない？　何せ元々はさ……」
「……いやいや、私も先輩から聞いてるんだけど、石山先輩って仕草や言葉遣いとか下手な女子よりもよっぽど女の子らしいってさ」
「へえ、どうして？」
「なんか噂によると、石山先輩調教されたらしいよ」
「何それーあり得ないー」
　ちょ、調教って……
「もう……調教ってひどい言い方よねえ……ある意味間違ってないんだろうけど」
「うん、私が自分で望んだことだし、男に戻りたいなんて思ったら悲惨なルートに入るし。永原先生のカリキュラムは間違ってなかったわよ」
「……私もそう思う」
「って、まずい、先輩たちに聞かれてたよ」
「あちゃー嫌われなきゃいいけど」

嫌うも嫌わないも、顔見えてないって……
ともあれ前の列が開き、メニューが見える。今日はカレーだ。
「優子ちゃん何にした？」
「うーん今日はカレーにした」
「私は牛丼よ」
「牛丼かー私もたまに頼むなあ」
「結構気分次第よね」
桂子ちゃんと会話をしながらトレイをそろえる。何だろう、女の子になってから、同時並行作業が得意になった気がする。

「お待たせしましたー牛丼カレーの人――！」
「はーい」
桂子ちゃんが牛丼を取り、私はカレーを取る。前に並んでた水を二人分汲んでくれる。
「ありがとう」
「さ、場所を探すわよ」
「うん」
二人並んでる場所を探すのは大変だ。
「あ、あそこ！」
よし、カウンターに3人空いている場所を発見！
私と桂子ちゃんでそこに向かう。
しかし、男子生徒が真ん中に座ってしまう。
「あっ！」
二人で声を上げた。
「あちゃーこれはダメかー」
「しょうがないわねーもうっ！」
桂子ちゃんが悔しがっている。
すると男子生徒が振り返った。
「あ、あの、ずれていただけないですか？」
私はいかにも残念そうな顔をして頼み込む。
「あ、あの……」

「だめ……ですか……」
「へ、は、はい」
　男子生徒がドギマギしながら席をずれてくれる。
「ありがとう」
「どういたしましてえへへっ」
　桂子ちゃんと私で笑顔を作る。男子生徒の顔がほんのり赤くなってる。本当にちょろい。
　頭撫でたらそれだけで惚れるくらいにちょろい。だけど気持ちが分かってしまうのがＴＳ病患者の悲しい性だ。
「じゃあ食べようか」
「うん」
「いただきます」

「あいつ羨ましいよな、あれ、桂子と優子だぜ」
「我が校きっての美少女二人組に声かけられるなんてよお……くそー……」

「それにしても桂子ちゃん、あたしたちが並ぶと本当に学校中の話題をかっさらうよね」
「まあ、客観的に見ても、私たち可愛くて美人だしー、しかも学校内で1，2を争うわけでしょ？　そんな二人が仲良く並んでたらそりゃあねえ……」
「……それに、しかも片方はついこの間まで男だったってわけだものね……よく考えたら学校で話題にならないわけないわよ」
　そう言いながら、桂子ちゃんは器用に食べる。しかも「食いながら話す」ような声になってない。私はまだ若干そのきらいがあるのに。
　半分くらいまで食べた頃、さっきの男子生徒が食べ終わりトレイを返却コーナーに持って帰る。
「でさー、龍香がさー」
「へー、彼氏とすぐに仲直りできたんだー」
「それにしても、男子っていうのはこういうことには単純よねー」

「ええ、だけど私はその彼氏さんの気持ちわかっちゃうのがなあー」
「ああ、優子ちゃんはそうだよねえ。いいなあ、そのスキル、私たちも欲しいよー」
「いやいや、本当にいいものじゃないって。後天的に女の子になるってすっごい大変だし」
「……そうだよねえ、クラスに受け入れられるのだって2週間かかったし」
「それも、もし桂子ちゃんや恵美ちゃんがいなかったら、私……今頃登校拒否になってたかも」
「そう言ってもらえるとありがたいわね……ごちそうさま」
桂子ちゃんは先に食べ終わったが、途中でペースを私に合わせてくれたのか、私も残り一、二口位の量しか残っていなかった。食堂も空席が目立ち始めたのでそのまま食べてフィニッシュだ。
二人で並び返却コーナーに返す。その後も雑談しながら、周囲の私たちの噂話に耳を傾けて、教室に帰った。

「でさー、やっぱ女と男ってそうそう違いないと思うのよね」
「だなあ、今後は女も強くなっていかねえと……あ、優子、お前はどう思う？」
教室に帰ると、恵美ちゃんのグループの女子が何やら議論していた。
「んー？　何？」
「いや、今後は女もどんどん男社会に入っていかねえと、舐められるんじゃねえかって話してて。男女平等ってやつだ」
「私はそうも思わないけどなー」
「って、木ノ本には聞いてねえよ。あたいは優子に聞きてえんだ」
「うーん、つまり男女均等、男女平等ってこと？」
「平たく言えばそういうことだな」
「うーん、はっきり言って、女の子が男と平等になるのは絶対に無理だと思うなー」
「うっ……何でだよ？」

「そりゃあ、男と女ってあまりにも違う生き物すぎるし、それを平等にしようなんて無茶だと思うのよ」
　これは後天的に女の子となったことによって痛感させられたことだ。
「むしろ男と女でちゃんとできる役割を分担して、それを全うした方がいいと思うなー。男は男らしく、女は女らしくあるべきよ」
　そしてそこから出る結論は当然これだ。
「……あー悪い、やっぱあんたはなしだ！」
「えー!? 田村、何で優子ちゃんダメなのよー？」
「だってよお……優子が言うと説得力が半端ねえんだよ……何も言い返せん！」
「うーん、確かにそうよねえ……」
「あ、あはは。ごめん、話の腰を折っちゃったかな？」
「ああいやいいんだ、すごくいい意見になった。さっきのなしもやっぱなしだ。そうだよなあ……こういう男女の違いとかは優子に聞くのが一番だよなあ……」
「うーん、でも分かる範囲でしか答えられないよ」
「ねえ、そういえば、優子ちゃんって女の子になって何が一番苦労してるの？」
「やっぱり身体が弱くなったことかなあ……女の子になって最初に戸惑ったのは背が低すぎて届くはずのものが届かなくなったことだったけど」
「ほほう、つまり、あたいたちが男になればそういう不便もなくなるってことか！」
「……男に生まれたら男のまま、女に生まれたら女のままの方がいいと思うよ」
「そういうものかなあ……」
「でも、私には分かる気がするわね」
「どっちにしても、今までの違いを受け入れるしかないからねえ。それに、ＴＳ病になったらもう戻れないし」
「そうだよなあ、戻れねえってのはなあ……」

クラスの女子たちと談笑する。内容は男女の違いというやや荒れそうな話題だけど、私が間に入ることで、うまく調整ができている。
楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、3時間目へ向けての予冷が鳴り始めた。

「あ、石山さんー！」
予冷の後、授業ではないけど、私に用事があるということで永原先生が声をかけてきた。
「次の体育の着替えなんだけど、他の先生方は賛成してくれたんだけど、小野先生がどうしても首を縦に振らないのよ」
「……そうですか。でも、女子は誰も反対してないわよ」
「ダメなものはダメらしいのよ」
でも、今更女子たちの場を抜ける訳にはいかない。
「……そうですか、では何を言っても無駄ですね」
「え、石山さん？」
「別にいいですよ、小野先生がどう思おうが。私は、女子のみんなに受け入れられた。その事実がある限り、私はそんな頑固じじいには負けません」
50代にじじいはちょっとまずいかもしれないけど気にしない。
「……そう」
「だって、私にしている措置は、誰も得しないことです。みんなが嫌な思いするだけです。着替えのスペースもわざわざ占領しちゃいますし、全員が損することをする理由を、私には理解できません」
「……分かりました。伝えておきます」
私は、男子が着替え始める前に、教室を出て、今日は火曜日なので女子が着替える更衣室に移動し始めた。
「お待たせー」
「優子、遅かったじゃねえか、来なくなったんじゃないかって心配したぜ」
「ごめん、永原先生に呼ばれて……」
私はまず体操着のズボンを取り出し、スカートを穿いたまま着替え

る。前回桂子ちゃんにめくられた経験からだ。
「へえ、先生は何って？」
「うん、どうもね、小野先生が私と女子を着替えさせるのに強硬に反対してて……」
「けっ、あのじじいは融通がきかなさすぎるんだよ」
「で、優子ちゃんは何て答えたのよ？」
『女子全員の納得の上で、むしろ隔離は嫌な思いをするってことや、わざわざ私一人のために着替えのスペースを占領すること、学校側、生徒側、ともに損するから従わない』と言いましたよ」
「へえ、優子さんってすごいですね。意外と計算高い」
「感情に訴えるんじゃなくて、実利で訴えたほうが、こういうのは通りやすいと思ったんですよ」
「そうだな、あたいだったら強引に押し通しちゃいそうだぜ」
　女子たちは雑談しながら手早く着替えていく。
　私はというと、やはり話しながらだと、ちょっとみんなに遅れてしまう。
「慌てるなよ。まだ時間はあるんだぜ。さ、今日も球技大会に向けて練習だぜ」
「今日は何をやるのかな？」
「2年の女子はフットサル、バスケ、ドッジボールをやるんだ。男子はバレーボール、フットサル、ドッジボールだから……」
「バスケかドッジボールね」
　各クラスともに男女8人2チームに分かれるリーグ戦で、つまり1クラスにつき男子A、男子B、女子A、女子Bの4チームが出来るということね。
「そういえば、私が女の子になって男女16・i6が崩れたけど、どうするんだろう？」
「さあ？　学校側で調整するでしょ、私達が今心配してもしょうがないよ」
「う、うん、そうだよね」
　まあ大方、控えの選手の数を調整するんだろうなあとは思うけど。

ともあれ、着替えが終わった私たち女子一同は、体育館へと向かった。

「はーい、体育の授業を始めます！」
「今日は男女分かれてバスケットボールをします！」
「まずは準備運動からして下さーい」
「はーい」

準備運動をして、バスケを開始したんだが……
「あ、優子、それダブルドリブルだよ！」
「あ、うん」
女子のみんなもポジショニングによっては私にパスすることもあるけど、すぐにバランスを崩して取られてしまう。そこで両手でドリブルしようとしたんだが、反則らしい。知らなかった。
「んーでもさー」
安曇川虎姫が提案する。
「今までの体育の授業見てきてわかったんだけど、ちょっと優子の身体の弱さは尋常じゃないと思うのよ。ここまで悲惨な状況だと努力では補えないと思うの。逆天才？　って言うの？」
「……うん、自分で言うのも何だけど、認めざるを得ないわね」
散々な言われようだが、客観的に見て、女の子になってからの体育に関しては事実それ以外の表現のしようがないくらいひどい成績だから仕方ない。
「正直に言って、今後もそうだけど、チーム競技や対戦競技をする時は、優子には何らかのハンデをあげないとゲームにならないと思うのよ。私達高校生の中に一人だけ小学生が入るようなものよ」
「うーん、でも優子ちゃんにハンデと言ってもどうするのよ？」
「ちょっと考えさせてくれる……うーんと……」
虎姫ちゃんが少し考える。
「……まず優子は人数に数えない、例えば5対5のチームがあったとしたら優子がいるチームは優子をフィールドに入れている限り6人

出せるってこと。後、優子が得点を決めたら他の人のゴールに対して得点2倍にする」
「なるほど……」
「で、今回のバスケなら優子は特別にダブルドリブルと、3歩目のトラベリングを許可する、のがいいと思う」
「賛成ね。優子ちゃんはどう思う？」
「う、うん。あたしもそれでいいよ」
「じゃ、そのルールでゲーム再会ね」
「よし！」

審判と記録係が大変だが、仕方ない。まあ、ゴール決められるかどうかわからないけど……そうだ！　ゴール前で待ち伏せしよう。
どうせ一人多くなったし、私は動かないことを決め、ゴール前で待ち伏せした。
それを見た味方からボールが来る。よし！
キャッチしてそのままシュート……ディフェンスに弾かれた。
相手のカウンターだが、私がディフェンスしても役に立たないのでそのまま棒立ちした。
すると、再び味方から矢のようなワンバウンド返球が帰ってきて、これを前にこぼして補給すると、がら空きの敵陣で2点シュートを決め……られなかった。
しかし、こぼれ球を桂子ちゃんが拾って決めてくれた。
その後、2倍得点を狙って敵陣に待ち伏せしていた私にロングパスが集中する、しかし、うまくキャッチできる確率も低く、そこからシュートを決めなきゃいけないため、ゴールが決まったのは2回だけだった。
そういえば、至近距離の待ち伏せは「3秒ルール」があるという異論もあったが「優子ちゃんだし」で通ってしまった。
「それでいいのか？」という気持ちも無いわけではないが、逆に言えばそこまでしないと超虚弱体質の私が、みんなと楽しめないということも事実、お言葉に甘えるべきだろう。

そのように考えると、ハンデキャップというのは偉大だ。将棋の駒落ちにしても、囲碁の置碁にしても、極端に弱い人が居ても一緒に楽しめるように工夫がなされているわけだから。
「はーい、今日はここまで！　集合！」
「先生！」
虎姫ちゃんが手を挙げる。
「おう、どうした安曇川？」
「石山さんにハンデつけてもいいですか？」
「ん？　どういうことだ？」
「そ、その……」
私が代わる。
「言いにくいんですけど……私あまりにも身体が弱くて、ハンデがないと団体競技で邪魔にしかならないんです」
「うーむ、確かに石山は見てて心配になるくらいのものだが……」
体育の先生も唸る。
「あたしのチームは私を人数に数えないで、得点も二倍にするっていうルールでやりました」
まず虎姫ちゃんが説明する。
「で、バスケの場合は優子ちゃん特別ルールとして3歩までのトラベリングとダブルドリブル、3秒ルールがあり。これでちょうどよくなったわよ」
桂子ちゃんが補足してくれた。
「なるほど。分かりました。ちょうど男女の均衡も崩れていますし、球技大会の特別ルールにしていいか、会議にかけてみます」
「あ、ありがとうございます」
「先生個人としても、石山には特別ルールが必要だと思いますので、生徒たちが特別なハンデを欲していると、確かに伝えておきます」
「ありがとうございます」

「なあ高月……」
「何だ篠原？」

「あいつ、すごい弱くなったんだな……」
「ああ、俺もベンチの時には女子のバスケの様子を見たが、あいつは……見てて可哀想になるくらいだ。ハンデも当然だよ」
「俺もそう思ったな……」
「何だ篠原？　情でも移ったか？」
「少しだけ、な。あいつは嫌なやつだったけどよ……だけどよ……やっぱ可哀想に思ったよ」
「……」
「女子の中に混じって、それでいて低学年レベルの極端なハンデ付けさせられて……男なら意地でも拒否するだろうに、プライドも一切出さずに受け入れざるを得ねえなんてな」
「木ノ本が言ってたっけ？　女の子にされたのが最大の罰って……今になって、何か分かる気がするぜ」
「高月も……分かる気がするのか……」
　高月と篠原が会話している。今になって罪悪感が出てきたみたい。
　もちろん、あのままヘラヘラされるよりはずっといい。そう思い、やや頑張れる気がした。

# 精算と未来

「すみませんでした！」

今日の授業が終わった後、桂子ちゃんと一緒に天文部に行こうとしたら、男子の一人が私に謝ってきた。

それだけならばまだいいんだが、数人の男子が列をなして私に謝りに来ている。

一体何が起きたのか？　私もよく分からなかったため、困惑しながら対応する。一人ひとり謝罪が丁寧ということもあって、長くなりそうなので桂子ちゃんには先に行ってもらった。

「これからは女の子として見るから、どうか許してくれ！」「実は最初の時から女の子にしか見えなかった、だけどみんなが男扱いするから、本音を言えなかった」「不覚にも一目見てヤりたいと思った、おっぱい揉みたいと思った。だけど中身が石山だと思うと……それで無理やり男扱いして気持ちを整理しようとした」「石山には何もしてないけど擁護もしなかった俺も同罪だ」

男子それぞれが思い思いに言い訳を披露する。これがまた面白い。

……というか、明らかに最初から静観していた男子が嘘の罪を自白しているケースさえもあったから複雑な思いだ。

さすがに、嘘の罪で謝罪をされても逆にこちらも対応に困るので、そういう人には、「あなた何もしてないよね？　大丈夫？」と声をかけたが、ますます虚偽の罪を自白するばかりで困ってしまった。謎の団結力だ。

ともあれ、後ろもつかえているのその男子にはひとまず「身に覚えはないけどとりあえず受け取っておく」ということで、何とかお帰りいただいた。

謝罪した男子の人数は多く、何だかんだで篠原と、最初から静観を決め込んでいた男子３人以外の全員から謝罪を受け取った。

……で、その謝罪の列の最後尾。篠原が最後の最後に並んでいた。

何分、私を殴ろうとした篠原の謝罪だ。その場に居たクラス全員の

注目が集まっている。
「す、すまねえ!!!　本当にすまねえ!!!」
　篠原は漫画のような表現そのままに、「ジャンピング土下座」して来た。
「俺は……俺は最低な男だ!!!　クラスで一番ひどいことしておきながら、一番最後まで謝れねえで……!!!」
「優子さんに、ひどいことばっかり……あんな弱くなったのに、復讐ばっか考えて……」
　頭を思いっきり地面に擦り付けながら、涙声で罪の告白をする。私はどちらかと言えば、高月の方に悪感情があったんだが、どっちにしてもちょっとだけ優越感にひたれた気分だ。
　男子がエロの塊であることは分かっていたため、スカートを覗こうとしないように、前かがみになる。
　だけど、篠原の謝罪はちゃんと受け止めないといけない。
「女を殴っちゃいけねえなんて……当たり前のことなのに……仕返しできればなんでもいいなんて……高月でさえ止めたのに……俺は……！」
　でも、篠原の言い分もわかる。私も男の頃、随分この男にひどいことしたんだから。
「……うん、もういいわよ。私こそ、ひどく怒鳴ったり無理やり要求したりしてごめんね」
「え？」
「ほら、もう立っていいわよ。私だって悪かったんだから、少し仕返しされても当然だもの。だから、もうこれで『手打ち』よ」
　実際、篠原は一年の時から怒鳴ってた。２週間のいじめで大泣きした私に謝るのは、今になって冷静に考えれば、いくら男が女に対していじめているとはいっても、釣り合ってない。
「で、でもよお、一発、一発殴ってくれねえと収まりがつかねえんだよ……！」
「……」
「な、なあ……！」

やっぱり、本来の篠原は責任感が強い人だ。
でもやっぱり、あまり殴るのはしたくない。
「うーん、じゃあ立ってくれる？」
「う、うん」
篠原君が立ち上がる。もちろんスカートは覗かれないように警戒する。
見下げる格好が見上げる格好になった。男の頃とは身長差が逆転している。
「えいっ！」
私は篠原君の頬に向かってビンタを浴びせようとした。
ペチッ！
思いっきりビンタしたけど、いつぞやの桂子ちゃんよりずっと弱いビンタ。篠原はびくともしない。
「篠原君のえっち！」
「え？」
「土下座にかこつけて、私のパンツ見ようとしたでしょ？」
教室から「うわ～スケベ～」「変態～」という声が上がる。
「え？　い、いやそんなことは……！」
「……はい、これでおしまいよ！　私、桂子ちゃんに呼ばれてるから、じゃあね～」
「あ、ああ……」
私は流れるように教室から出て、桂子ちゃんの待つ天文部へと駆けていった。
そういえば、篠原君の顔、ちょっと赤かったかも。
篠原は本当は気が弱くて根はとってもいい人だった。私も男の頃、傍目でそういう篠原を見てきた。だけど、私が男の頃にひどいことしたから、2年生になってから特に性格が歪んだ。でも、過去の精算も終わったら仲良くなれるかもしれない。
そんな淡い期待を懐きながらも、私は桂子ちゃんと坂田部長のいる天文部へと向かっていく。

「こんにちはー」
「ああ、優子ちゃん、遅かったじゃない」
「ごめんごめん、男子が殆どみんな謝ってくるから」
「石山さん、大変でしたわね」
「優子ちゃんにとって、今月は一生忘れられない月になると思うよ」
「そうね、あの日は人生最大の転機よ」
「でもすごいですわねえ、一ヶ月足らずで人間ここまで変わるものですか……」
「部長、女の子になったら女の子らしくなるためのプログラムがあるんですよ。私も受けました。そこでは……少しでもがさつな態度したり、女の子らしくない言動したら怒られるんですよ」
「へえ、大変そうですわね……」
「でも、何より優子ちゃんが変わろうとしたのが大きいよね」
「……そうね、永原先生によると、『成績不良者』と言って半端な覚悟でプログラムを受けた人は、女の子らしくなれないらしいのよ」
「そこで何故、永原先生の名前が出るのですか？　……詳しく聞いてみたい気もしますが……長くなりそうですからこの辺で切り上げまして……今日も天文部の活動を始めますわよ」
「はーい！」
　こうして、天文部の日常が始まった。

「あ、部長、例の計画の件はどうなりました？」
「ええ、順調みたいですわ」
「楽しみですよねー」
「でも実際に打ち上げるとなると、相当先の話ですわね」
「それに、プロキシマまで付くのにも時間がかかりますし」
　私がＪＡＸＡなどのホームページを巡回中、桂子ちゃんと坂田部長がまたよく分からない話をしている。
「……何の話をしてるの？」
「実は切手サイズの宇宙船探査機を光速の２０％まで加速させて、４．２５光年離れたプロキシマ・ケンタウリの惑星を探査させようってい

う計画があるのよ」
「ご、ごめんなさい。何を言っているのかさっぱり分からないんだけど……」
「あ、ごめんごめん。じゃあ順を追って説明するよ」
「『プロキシマ・ケンタウリ』っていうのは太陽系から一番近い恒星のことよ。太陽のお隣さんだと思えばいいわ」
「うん、それで？」
「それが４．２５光年離れているのよ」
「光年は確か理科でやったわね、光は1秒間に３０万キロ弱だっけ？」
「そうそう、だいたい１．３秒で月まで届く。あるいは1秒で地球を7週半すると言ってもいいわね」
「それだけの速度で行っても４年と４か月近くかかるのねえ」
「キロになおすと４０兆０２８０億キロくらいよ。太陽と地球までの距離で1億４９６０万キロ、人類が行った月までの距離が３８万４４００キロなのと比べると、人類の勢力圏は本当に小さいのよね。でも、プロキシマ・ケンタウリだって宇宙から見るとすごい近い距離なんだけどね」
　想像を絶する遠さだけど、これでも宇宙ではご近所だというのだから驚きだ。
「で、そんな星がどうしたの？」
「そうそう、この度、このプロキシマに探査機を送り込む計画があるのよ」
「ええ!?　そんな遠くに？　人間のスケールじゃ無理でしょ？」
「レーザーで加速する特殊な素材を使うことで、極限まで軽量化させて光速の２０％まで加速するのよ。すると２２年くらいでプロキシマに着けるのよ」
「でも光の速度でも命令を発して返ってくるまでに往復で８年半かかるから……」
「とんでもない話ね」
「準備期間も含めて、観測結果を得られるのは早くて５０年後みたいよ」

「５０年後ですかあ、私たちは……高齢者ですわね」
「そうだよねえ、それに、予定通り行くかと言えばそうでもないでしょうし……」
「技術的問題点かあ……確かに光速の２０％でも６秒くらいで月に行くって速度よね……そんな速度で制御できるのかとか……」
「……あーあ、寿命がない優子ちゃんが羨ましいよ」
　桂子ちゃんがため息をつく。
「そうねえ、私も天文部だから、気持ちが分かりますわ」
「５０年後……今のあたしにとっては遠い将来だけど……」
「優子ちゃんも永原先生くらいの年齢になればあっという間に感じるかもよ？」
「え？　木ノ本さん、永原先生って古典の先生ですよね？　あの先生って若い先生でしょ？」
「あーすみません、部長、なんでもありません」
「そ、そう？」
　遠い将来の話題になり、私はほんの少しだけ、疎外感を感じる。
　もちろん、男子にいじめられていた頃に比べればとても些細なこと。
　だけど、これとばかりはどうしようもない。私に課せられた、もう一つの大きな運命なんだから。
「にしても、惑星探査でも大変なのに、恒星探査なんてやろうとするんだから驚きよ」

「桂子ちゃん、人類はどうしてそこまでして宇宙を開発するの？」
　私は以前より気になっていた疑問を桂子ちゃんにぶつけてみることにした。
「優子ちゃん……それはね、地球は……永遠に住めるわけじゃないからだよ」
「そういえば、理科の時間でやってたっけ？」
「そうそう、太陽だって永遠に持つわけじゃないから、将来的には別の星に行かなきゃいけないということよ」

「なるほどねえ」
「それに二つの星に人類が住んでれば地球がダメになっても、もう一個の星で生きていけるでしょ？　宇宙開発の意義というのは突き詰めるとそこに集約されるのよ。もちろん、他にも科学的貢献は多いんだけどね」
「そ、そうなんだ……」
「たまにロマンだなんて語る人もいるけど、ロマンだけならＮＡＳＡがあんな予算を受けられるわけないでしょ？　ちゃんと理由があるのよ」
「むしろ、私に言わせればロマンなんて言ってはぐらかそうとするのは『無能な味方』だと思うのよ」
　桂子ちゃんがやや強い口調で言う。
「相変わらず、木ノ本さんは宇宙に関しては手厳しいですわね」
「そういえば、部長は後輩の私や桂子ちゃんにもやけに丁寧ですけど」
「ああ、この人そういう人だから――」
「いえ、私、木ノ本さん尊敬してますのよ？」
　さらりととんどもないことを言う。
「えええ!?　私も今知ったんだけど？」
　桂子ちゃんもびっくりしている。
「ええ、私は天文部の部長です。私も天文を志すファンの端くれですわよ。知識も技量も上の人を尊敬するのは当然のことではありませんこと？　それに、天文の世界での1年なんて、超新星でもない限り些細なことですわよ」
「う、うん」
　まあ確かに、坂田部長の話は理屈では納得がいく話だ。一理どころか二理も三理もある話だ。もやもやしてもしょうがない。
　この会話は一旦途切れ、再び天文部の情報収集に戻る。
「……そういえば、桂子ちゃん、この大きな箱みたいなのは何なの？」
　無理やり気にしないでいたけど、やはりこの直径３ｍ強はある巨大な置物について、そろそろ話題にしようかな。

「あーこれ、先輩が作って私が改良した太陽系のミニチュアよ」
内側のすごく小さいところに密集しているが水星金星地球火星かな？　物凄い見にくいけど水星の軌道がちょっといびつに傾いてる。
木星、土星がその少し外側に、天王星と海王星と思わしき惑星がかなり離れている。
「日にちを進めると……って昨日進め忘れてた！」
日にちが金曜日になっている。
「まあちょうどいいわ、こうやって、年月日を合わせると……」
桂子ちゃんがダイヤルを回すと、星のミニチュアがわずかに動いた。天王星と海王星はわからなかったけど。
「へえ、すごいなあ……」
「そうそう、将来的にはエリス、冥王星、ハレー彗星あたりも加えたいんだけど、どうしても縮尺に合わないのよね……」
「冥王星やエリスは遠すぎてこの箱には収まらないんですの……もともと最初にできた時も、この模型は土星までだったんですが、それを木ノ本さんが改造したんですわ」
実際このミニチュア、かなり大きい。これ以上の拡張は難しそうだ。
「今回の拡張版のほかにも、いくつか新しい作品を作って文化祭で展示したいんだけど、他にいい案ない？」
「うーん、あたし、まだ宇宙のこと全然わからないからなあ……」
「だからこそよ。優子ちゃんは真っ白だからこそ、発想力があるのよ」
「といっても、本当に知識なかったら何もできないよー」
「うぐっ、ううん……やっぱりもう少し勉強が必要かな」
「う、うん。お手柔らかにお願いします……」
「分かったわ、優子ちゃんには学校の理科でやらない範囲で、教えていくわね」
「ありがとう」
「ふふっ、やっぱり新しい仲間っていいですわね」
「そうね……天文部、少なくなっちゃいましたし、私が卒業したらなくなるなって思ったんだけど」

「後輩が入部してくれないとだめですわね……」
「そういう意味で、文化祭は大事なんですわ。来年入って来ようとする志願者とかも来ますから。私にとっても最後の文化祭ですし」
部長がやる気を見せている。
「それじゃあ、アイデアを考えつつ、私が宇宙についていろいろ話すわね」
「ところで、さっきの話だけど、冥王星は知ってるけどエリス、ハレー彗星って何？」
「そこからね、エリスっていうのは……」
桂子ちゃんの宇宙談議が始まった。私も、興味深く耳を傾ける。
壮大な話で好きになりそうだ。

# 季節の変わり目梅雨の兆し

6月1日、季節は6月に入った。
この時の学校生活での大きなイベントといえば冬服から夏服への衣替えだ。
もちろん、私は女子生徒として、女子の夏服を着るのは初めてのことになる。
実は5月末から一部夏服も解禁されていたんだけど、女の子なりたての私はその日の気候によって使い分けるなんて器用なことはできなかった。
来年、あるいは秋口はもう少しうまくやれるといいんだけど……

ともあれ、クローゼットから夏服を取り出す。いつものようにパジャマと下着を脱いで全裸になり、女物のブラとパンツを穿く。
上着を着なくて良くなったので、楽になったが、Tシャツとブラウスは欠かせない。
次に、リボンを付ける。鏡に向かい、リボンが曲がってないか入念に確認する。この癖がついたのも、思えば最初に制服を着た時に、リボンの不手際でおしおきされたおかげだった。
そして夏用のスカートを穿く。
冬服より生地が薄く、また色も薄い。夏服のスカートは冬服と比べ、より風圧に弱くなっているが、夏場は熱を逃しやすい構造でもある。
そして、冬よりもほんの少しだけ短めにする。冬服以上に警戒しないとパンツが見えてしまう。しばらくはいつもより警戒しよう。
……最後に、私の黒髪に白いリボンを付けて完成ね。
洗面所に行って鏡を見る。うん、今日もバッチリ可愛く出来た！

さて、6月1日になって、間もなく梅雨入りということで、週間予報でも傘マークが増えた。
そんな今日も、まだ梅雨入りではないものの雨の日だ。実を言うと

5月は晴れが続いていたため、この日が女の子になってから最初の雨だ。
私は、男の頃から傘の傾け方が下手で服を濡らしがちだった。
登校中も不安だったが、今回は制服を濡らさずに済んだ。原因を分析した結果、「傘の大きさは変わらないが、身体そのものが小さくなったため、防御が楽になった」という結論になった。
唯一、私の胸周りだけは男時代より大きいため、逆にそこを要警戒すればよかった。

さて、女の子として受け入れられてから、最近になって出てきたもう一つの新しい悩み。それが――
「あ、虎姫ちゃーん」
「お、優子、どうした？」
「ちょっと肩がこっちゃって」
「優子、最近すごい肩こるよね？」
そう言いながらも、虎姫ちゃんはマッサージをしてくれる。
「うん、そうそこ……あー気持ちいいー」
実は昨日、肩こりに耐えきれずに、教室の壁の角に肩を押し付けセルフマッサージをしていたんだけど、それに対して虎姫ちゃんが声をかけた。

その時は……
「優子、もしかして肩こりなのか？」
「う、うん、肩が痛くて、触ってみたら肩の筋肉がコリコリしてて……」
「な、なんて贅沢な……」
「ええ!?　肩こりって贅沢な悩みだったの？」
「ふえっ!?　あ、ごめんごめん、なんでもないよ優子。でも、その体じゃ肩がこるの当然ですよね」
「そ、そうだよね……」
「ま、私が揉んでやるよ」

何ていうやり取りがあって、そのマッサージがとても気持ちよかったんだ。
男の頃は肩こりなんてなかったから実に戸惑っていたんだけど、何分この巨乳を支えるわけだから肩に負担がかかるのは当然と思っていた。
「おー、優子、昨日に引き続いて今日もマッサージか!?」
「あ、恵美ちゃん、その……虎姫ちゃんのマッサージが気持ちよくて」
「ああ、こいつは女子サッカー部だからな。整体には詳しいぜ。ま、あたいも負けてねえけどな」
「恵美、代わる?」
「お、ちょっと肩を見せてくれ! 何、強くはやらんよ」
「お、お願いします……」
恵美ちゃんがマッサージを代わる。
恵美ちゃんは肩をさすり、わずかに押すようにし始めた。明らかに下調べの行動だ。
「どれどれ……うわっ、これはひどい……テニスやったら大問題だぜこれ!」
「よし、マッサージだ!」
恵美ちゃんが肩をもんでくれる。虎姫ちゃんのマッサージに負けず劣らず、すごく気持ちいい。
「んっあー気持ちい……うん、よく入ってるよ……恵美ちゃん……そう、そこもっとお……もっと激しくして……!」
「ま、マッサージなのは見れば分かるけど……」
「文章にしたらすごくヤバそうなことになりそうだぜ……」
確かにそうかもしれない。ともあれ、一通りほぐれたので、お礼を言って引き剥がしてもらう。
「お、何々? 優子さん、肩こりですか?!」
今度は龍香ちゃんが食いついてきた。
「そうみたいだぜ。スポーツとは言わねえけどよ、もう少し運動をやればマシになるんじゃねえかな」
「優子の場合はその前に体力作りだと思うよ」

「あーそうかも知れねえな。学校生活だけでも大変だろうしなあ」
「でもさ、優子さんの肩こりはもうしょうがないと思いますよ……だってこんな大きさじゃ……」
「ちょっと、龍香！　それはセクハラだよ」
　今度は桂子ちゃんだ。
「え？　今のセクハラなの？」
　私が疑問を挟む。
「うーん、やっぱまだその辺が女子力低いのよ、優子ちゃんは」
「うんうん、優子さんはまだまだ精進が足りないですよ！」
「セクハラした龍香が言うのはどうかと思うなあー」
　おや、虎姫ちゃんをはじめ恵美ちゃんのグループの子はこれまで他グループの女子は名字呼び捨てだったのに変わったのかな？
「うーん、あたい的には、優子はもう女子力十分だと思うけどなあ……」
「田村がそれを言っちゃ駄目でしょ」
「な、何だよそれ……」
「ごめん恵美、これは流石に桂子が正しいわよ」
「四面楚歌!?」
「そういえば、これは面白い光景だね」
「以前だったら、恵美ちゃんのグループの子が桂子ちゃんのグループの子の肩を持つなんてあり得なかったのに、時代が変わった気がする」
「そうだなあ……」
「何だろう、恵美ちゃんと桂子ちゃんが仲直りできたら……あたしがいじめられたのも、無駄じゃなかったかもって思えるなあ……」
「……」
　桂子ちゃんと恵美ちゃんが黙っている。
「あ、ごめんなさい。そんなすぐに出来っこないよね？　ちょっと言い過ぎたよ」
「あ、いや、いいんだ」
「ええ、私も優子ちゃんを守るために協力して初めて、田村の魅力に気

づいた所もあるし」
「奇遇だな、あたいもだ」
　しばらく、二人で何かを探るように見つめ合っていたが、その静寂を永原先生が打ち破った。
「はーい、今日もホームルームを始めますよ。今日から6月です」

「あ、あの！　そのー……優子さん、学食行きませんか？」
「あら、珍しいわね」
　この子は志賀（しが）さくらちゃん、木ノ本グループの中でも地味でおとなしい子だ。もちろん、あの時も私を守るために団結してくれた、大事な仲間だ。
「あ、優子、私もいいかな？」
　こっちは虎姫ちゃんだ。珍しい組み合わせ、もちろんグループは別。
「う、うん。私は虎姫ちゃんで良ければいいけど。さくらちゃんは？」
　念の為に聞いてみよう。グループ間で何があるか分からないし
「え？　私はいいけど……」
「そう、じゃあ行きましょうか」
　虎姫ちゃんの号令で、三人で学食に向けて並んで歩く。

「なあ、石山のやつ、今度は別の女子と学食らしいぞ……」
「でもなんかあんまり……」
「こら！」
「てかさ、木ノ本と並んでも石山って映えるけど、この二人だとより一層映えるよな」
「うんうん」

「何よ全く、ほんと、男子って失礼しちゃう！」
　学食への道すがら、虎姫ちゃんが本音丸出しで会話する男子に対して不満の声を上げる。
「あたしも、自分が可愛いって言われるのは嬉しいけど……さすがに

あんなに露骨なのはちょっとねえ……」
　元男としても、ちょっとどうかと思ったりもする。
「で、でも、私じゃしょうがないよ……木ノ本さんと並んでも石山さんは際立つくらいだし……」
「もう、さくらは自信なさすぎ。そんなんじゃ可愛くもかっこよくもなれないぞ」
「そ、そうかなあ……うん」
「優子が女の子らしくなったときも、自己暗示が役に立ったんだぜ。さくらも『私は可愛い女の子』って暗示し続ければ自然と行動も変わってくるぜ」
「よく分からないや……」
　さくらちゃんがちょっとうつむく。
「虎姫ちゃん、私の場合は身体が女の子っていう前提があってこその暗示だったから、さくらちゃんの場合はまた違うんじゃない？」
「うーん、そういうものか？」
「まあ、私もカリキュラム以外で暗示をかけたわけじゃないからよくわからないけど……」
「でも、どちらにしても、気持ちから負けてちゃダメだよ」
「う、うん。がんばる」
　まだぎこちない返事だけど、さくらちゃんも頑張って欲しい。
　男に好かれる女性になれば、きっとさくらちゃんもとても可愛くなれると思う。
　食堂の券売機に並び、３人共思い思いのものを頼み、受け取ってからテーブルに付く。
　そして食べ始める。
「ねえねえ、うちのサッカー部、また練習試合で勝ったのよ」
「へえーすごいですね」
「このまま行けば全国はいただきよ！　優子は応援に来てくれる？」
「うーん、どうだろう？　私、桂子ちゃんに天文部に誘われたから」
「へえー天文部か！」
「どんな部活なんです？」

「天文部って言っても、宇宙研究部みたいなもので、宇宙開発の動静を探ったりしてる感じよ。部員は桂子ちゃんと3年生の部長の二人だけよ。あ、後あたしも一応……部員……なのかな？」
入部届とか出してないけど。
「まあ、頑張りなよ。優子、男だった時から部活入ってなかっただろ？」
「う、うん」
「私も……何か入りたいかな……」
「じゃあさくらちゃんも天文部に行こうよ!?」
誘ってみる。
「う、うん……ありがとう……でも天体のこと……あんまり興味ない……です……ごめんなさい」
「そ、そう……」
まあ、私も無理にとは言わない。

「そうそう、昨日の番組見た？　ほら例の……」
「うーん、見てないや」
「そういえば、優子ってテレビあんまり見ないよね？　普段何してるの？」
「実は、カリキュラムを受けた時に少女漫画とか女性誌とか読む課題があったんだけど、読んでない本がまだたくさんあって、それを読んだりパソコンでインターネットをしたりしてる」
「へー、インターネットかあ……」
「そういえば、優子さんってスマホ無いんですか？」
「うん、家にＰＣがあってスマホでネットする機会もないし、何より親とたまにしかメール連絡とかしかしてなかったから小学校高学年の時に買った通話メールだけのガラケーそのまま使ってるよ」
「へえー、エコで長持ちじゃん」
そういえば、携帯もまだ優一のままだったわね。定期券の更新もそうだけど、ちゃんと正しい名前に変えてもらわないと。
そんなこんなで食べ終わる。虎姫ちゃんが食べるのが早い。

さくらちゃんは私ほどではなかったが、食べるのは遅い方で、私たちは少しまばらになり始めてから食堂を出た。

教室に戻ると、今度は龍香ちゃんが話しかけてきた。

「優子さん優子さん、見てください最近流行のファッションですよ」

ふとみると、木ノ本グループの女子たちが雑誌を見ていた。桂子ちゃんは居ないみたいだけど。

「これこれ、ブーツとベルトがなんともオシャレじゃない？」

モデルが来ている服、女性受けするのだろうか？

でも、ブーツやベルトと言われても……

「……」

「ん？　優子さんどうしました？　可愛い服だと思いますよ」

「あ、あの……」

「はい？」

「すごく言いにくいんだけれど……ブーツやベルトに力入れても意味ないと思います……」

「え!?　そうなの？」

「足元のブーツにお腹のベルトなんて、男性は気にしませんよ」

「じゃ、じゃあ男はどこを見てるんですか!?」

「男性の目線はずばり、ここと、ここと、ここよ」

私は胸と尻とスカートと脚の境目の部分をそれぞれ指差す。

「ちょ、ちょっと露骨すぎでしょそれ！」

女子たちも驚きの態度を隠せない。でも男子が正直なのは私もよく知っている。

「……でも、すごい説得力があります……」

「あれ、さくらさん帰ってたんですか」

「ええ、優子さんと、安曇川さんとで学食に……」

「あ、ああ。そうだったね……むむむ、とするとこの女性誌って……」

私は更に無慈悲なことを言う。

「この女性向け雑誌にある女の視点から見た『可愛い服』は、男性から見ると力の入れどころを完全に間違えてて空回りしてる部分が多い

と感じました……私もカリキュラム中にこの雑誌を読んだんだけど、似たような感想だったわね」
「そ、そうなんだ……」
「でも別に、男のためにおしゃれするわけじゃないし」
傍で見ていた虎姫ちゃんが反論する。
「じゃ、じゃあ誰のために？」
私が再反論。
「うーん、自分のため？」
「うーん、そういう考えもあるのか……奥が深い……」
「いやいやちょっと待って下さいよ安曇川さん」
私が納得しかけた所で龍香ちゃんが反論してくる。
「ん？」
「仮に自分のためだとしても、やっぱり男性の方に喜ばれれば嬉しくなりますし、私だと『彼氏に喜ばれたい』というのも、十分自分のために入ると思うんですよ！」
「うむむむっ……言われてみれば……！」
何だろう、みんな一理あって頭が大混乱している。
私はカリキュラム中に「女の子は男に好かれてこそ嬉しいもの」「女の子は女の子らしく生きていかなければならない」と繰り返し叩き込まれてきたから、男性受けしなくても「自分のために着飾る」という概念にカルチャーショックを受けている。
「あ、あの……優子さんが……放心してます……」
「え？　あれ？　優子さん、大丈夫？」
「あ、ごめん、ちょっと衝撃を受けてて」
「どうして？」
「あ、あたし今まで『男に好かれてこそ女の子らしい』って言われて育ってきた？　から……」
「あー」
「でも、実際それも大きな目的だと思うんですよ」
「何だかんだで女の子は男の子好きですから。喜ばれるのはいいものですよ」

なんだかよく分からない、玉虫色の決着がついた。

「……なあ、やっぱ石山って性格込みで可愛いんじゃねえか」

「どうだろう、容姿は文句なしだけどよ、ついこの間まで男……それもよりにもよってあいつだったんだぞ」

「でもよ、乱暴なところとかなくなったじゃん。むしろ下手な女子より乙女になってるし……」

「いやいや、女子として認めるにしても、内面まで女子になりきったかは、まだ様子見るべきだと思うぜ。三つ子の魂百までだろ」

「って、百までじゃ俺たち死んでるだろ……」

「でもあいつは平気で生きてるんだぜ、今見てる姿のまま、さ」

「ヒエー」

男子たちが徐々に私を認める会話をしてくれている。

何故だろう、女子たちに受け入れられるよりも、ずっと男子に受け入れて欲しい気持ちが強い気がする。

それが、人間の欲望なのか、それとも女の子の欲望なのか。私にはまだ分からなかった。

放課後、今日も天文部の扉を開け、宇宙のことについて学んだ。

今回もまた、宇宙開発の歴史やアメリカとソ連のことを桂子ちゃんに教えてもらった。

この季節、下校時間になっても空は明るい。

夏至も近くなってきて、日の長さが長くなっているんだ。

ともあれ今日はもう木曜日、徐々に週末の疲れも出てきたし、早く家に帰ろう。

自宅最寄り駅を出る、自宅までもうすぐだ。

……急に雨が降ってきた。まずいまずい。

慌てて背中で防御しつつ鞄を開けて折りたたみ傘をだし、なんとか開く。

あうう……制服がちょっと濡れてるよ。

帰ったら干さないといけないかなあ……

ともあれ、傘で雨を防御しつつなんとか家に帰る。
「ただいまー」
「おかえりなさーい」
「ふうっ……」
「突然降ってきたけど大丈夫？」
「なんとか傘を出せたよ」
靴を脱いで部屋に向かう。
「ちょっと待って優子！」
「うん？」
「背中からブラジャーが透けているわよ！」
「ふぇ!?」
「ちょっと洗面所で待ちなさい！」
私が洗面所に行くまでの間に、母さんは大急ぎで特殊な鏡を持ち出してきた。そして、見事に背中からブラジャーが透けてるのがわかった。
うう……ちょっと恥ずかしい。
「優子も見たことあるでしょ、街の女性が不注意でこうなるの」
「う、うん」
「優子は下着見せながら道を歩いたということよ」
「ふぇ……？　まずいよそれは」
「うん、というわけで、もうカリキュラムじゃないけど、特別に……」
母さんが素早く忍び寄ると、私はスカートをぶわっとめくられた。
「やっ！」
母さんにめくられたので、慌ててスカートを抑える。恥ずかしいよお……
「あらあらちゃんと抵抗してくれてお母さん嬉しいわ。優子の気が緩んでなくて良かったわ～」
「もう、恥ずかしいからスカートめくるのやめてよお……」
「うふふ、教育の成果が出てるわねえ……でも、こんな大きな失敗したんだからおしおきよ。さ、暗示かけなさい」
「わっ私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子

……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
カリキュラムを受けてた頃よりもずっと恥ずかしい。女の子として成長しているんだろうし、それはとても嬉しいんだけど、やっぱり恥ずかしい思いが強い。
「あらあら、ちゃんと覚えてたのねえ。感心しちゃうわあ～」
「いい？　背中の方は特に透けやすいから雨の日とかは下のシャツの素材選びとかに十分注意しなさい」
「……はい」
恥ずかしくも懐かしいやり取りをしつつ、制服を着替え、パソコンをしながら夕食を待った。

# もっと深く、女の子に

6月も半ばに入って9日の金曜日のことだった。
私が女の子にされてからちょうど一ヶ月の節目のこの日、私はいつものように女の子の制服を着て、女の子らしく朝食を取り、女の子らしく駅で電車を待つ。

表面的な言葉遣いや行動はほとんど女の子そのものになって来た。
永原先生のカリキュラムがとても効いていて、最初は意識しながらの振る舞いも、徐々に無意識で行えるようになった。
永原先生によると、普通は今の私の水準になるのに半年はかかり、長い子だと1年以上、短くても3ヶ月は見なきゃいけないみたいで、私のこのスピードは異例中の異例だそうだ。
永原先生の見立てに拠れば、ここまでのスピードで精神が女の子になった原因は、「今までのどの患者よりも確固たる意志で女の子になろうとする努力、更に過去の自分を変えたいという明確な動機があったことで、後天人格ながらも強固なアイデンティティを持つことが出来たから」だそうだ。
ただ、どうしても解決できない問題が2つ持ち上がってきた。1つ目が女の子特有の「感性」だ。
特に女の子の視点から見た「かわいい」と男の子の視点から見た「かわいい」の違い。これがどうしても習得できなかった。
他にも女子同士の下ネタやセクハラの質。これが男子とは全然違っていて生々しくもドギマギする。特に体育の着替えや女子トイレでは頻発していた。
女の子として受け入れられたばかりの頃は、まだいくらかの遠慮があったが、最近では私も他の女子同士がしているようなおふざけの対象になっていて、特に胸に関してはよくセクハラされる。
もちろんそれそのものは、私に心を許してくれているという、とても嬉しいことなんだけど……

そしてもう一つ、それが恋愛の問題だ。
女の子になった以上、恋愛対象は当然男の子となる。
自分で言うのも何だが、私は超が付く美人であり、超が付くほどに可愛い女の子だ。それも、むしろそう言わないとかえって嫌味に聞こえてしまうくらいのレベルで。
ところが、これだけの美貌を持ちながらも、やはり過去のことが気になるのか、私にアタックしてくれる男子が居なかった。
これは由々しき問題だと思っている。
このまま「男との恋愛とは何なのか？」を知らないまま大人になった時に、悪い男に騙されてしまうのではないか？　という懸念。
何よりカリキュラムで少女漫画を読んで分かっていたことだが、少女漫画は恋愛もの一色に近い。
それくらい女の子にとって、若い少女にとって恋愛は重要な地位を占めている。このままの状況がよろしくないのは確かだ。
私も、恋する乙女になりたいと思い始めた。素敵な男性と手をつなぎ、恋愛する。
でも実感が全然わかない。どうやって男の子と恋愛するんだろう？　それさえわからないまま、前のめりの欲望だけが先行していたのだ。

「おはよー」
「優子ちゃんおはよー」
「おはような、優子！」
桂子ちゃんと恵美ちゃんがそれぞれ答えてくれる。私はよく分からないが、最近ではグループ間の調整以外の雑談にも、この二人が直接話している所を見かけるようになった。
桂子ちゃんに拠れば、「まだ公表はしていないが、正式に和解した」ということだった。

昼休みを過ぎて、４時間目の体育の授業だった。
今日はドッジボールの練習をする。そのために着替えが終わり、女

子の集団の一員として体育館に向かう途中の出来事だった。
「あ、おい」
　小野先生が声をかけてきた。
「はい？　小野先生なんですかこんな時間に？」
　桂子ちゃんが応答する。
「木ノ本はいい。問題は石山。お前がどうしてここにいる!?」
「どうしてって、私女の子だから女子と一緒に着替えてたんだけど？」
「な、なんじゃと……！　お前、先生の言いつけを守らんのか!?」
「別に、クラスの女子は皆さん受け入れてくれてますし」
「ああ、あたいらも誰も異論がねえぜ」
「うん」
　女子全員が団結して首を縦に振る。
「なっ!?　いいか、これは学年主任のわしが決めた規則だぞ！」
「……なあ先生、そんなことより、あたいら体育の授業に間に合わなくなるだけど」
「うぐっ……」
　小野先生を尻目に体育館に行く。
「……まさか、まだ無理解者がいたなんて」
　私は落胆の色を隠せない
「そうね。あの請願書は何だったのかしら？」
「ったくよ、なんでみんなが不幸になる方法に固執すんだあのバカは」
「ちょ、ちょっと、いくらなんでも先生にバカは……」
「でも事実だろ？」
「むむ、反論できないわね……」
「ま、無視し続ければいいでしょ。赤信号皆で渡れば怖くないって言いますしね」
　龍香ちゃんが言う。
「むしろこっちが青信号だってな」
「あはははは」
　女子たちの笑い声がこだまする。うん、それでいい。

「よーし、体育の授業を始めるぞー今日はドッチボールだ」
体育の先生の説明と号令とともにドッジボールの練習が始まった。
ちなみに、私に認められた特別ルールは5つ。
一つ目、私に向かって投げるまでに5秒の猶予があり、取ってから5秒以内に投げたボールが当たっても当たったことにならない。
二つ目、私が投げる時には相手フィールドの半分まで進出していい。相手の陣地はこれで自動的に半分になる。
三つ目、私が逃げる時には相手外野に陣地の半分まで進出していい。これは縦横両方に適応されるから、どこから打たれても距離が1．5倍になる。
四つ目、私に投げたボールをノーバウンドでそのままキャッチされたら私は投げた人を「当てた」ことになる。外野の場合は内野から誰か一人を指名できる。
五つ目、私が投げたボールが誰かに当たった場合、もう一人任意で「当てた」ことに出来る。
また、フットサルでも私はプラスワン扱いで、得点も2倍、アシストでも同じという扱いになった。
私は身体を狙われると、まずキャッチできないが、それでも距離が離れているので、痛みはそこまで感じない。
「あ！」
「よっしゃ！」
当てられて外野に行く。
外野からだと進出できる敵陣が広くなる。
どの方向から攻めるかと言えば、フィールドがやや縦長なので、横から攻めるのが良さそうだ。
「えい！」
半分の距離とは言え、正面から投げても、まず取られてしまう。
足元を狙っても威力が低いためサッカーのトラップのように捌かれることも多い。
それでも、距離半分のハンデはそれなりで、横からの奇襲攻撃なら運動が苦手な子を当てることは出来る。それをもって、恵美ちゃんの

ように運動神経のいい子を2人目に指定するという基本戦法が確立されつつあった。
虎姫ちゃんたちが決めた特別ルールも、ほぼ修正が加えられることはなかった。
こうして、極端に体育が苦手な私も、球技大会が楽しみになってきた。

「はーい、今日はここまで！」
体育の先生が集合をかけ、今日も終了だ。
「えーっと、女子の皆さんにはもう言ってありますが、石山の特別ルールが正式に承認されました。他クラスの担任の先生にも連絡してありますので、理解に努めてまいります」
私の特別ルールは職員会議でも紛糾したらしく、小野先生の強硬な反対もあったものの、体育の先生が私のあまりの惨状を訴えたおかげでなんとかハンデが実現した。
「優子ちゃん良かったね～ルール承認されて」
「う、うん」
「にしても、小野って先生は頭固てえなあ……」
そういえば、今日も体育の授業から出た時にも注意してきたっけ。
「大丈夫、私達みんな優子ちゃんの味方だから」
「そうだよ、どんと構えな！」
とはいえ、先生、それも学年主任の先生と対決するのはやや気が引けるのも事実だ。

「おい、ここはお前の着替えるところじゃないだろ！」
そら始まった。女子たちと着替えようとして、中に入ろうとすると小野先生が止めてきた。
「何？　まだそんなこと言ってるの？」
「ええい、教師の命令に従えんのか！」
「優子ちゃん、入っちゃって」
「う、うん」

「おいこら！」
「先生、勝手に入らないで下さい」
「何じゃと……！」
「例え先生であろうとも、女子の更衣室に入るなんてことは認められねえぜ。１１０番だぞ１１０番」
「ぬぐぐぐぐぐ……ええい、放課後に職員室に来なさい！」
桂子ちゃんと恵美ちゃんの応戦で、ひとまずこの場は守られた。
「ありがとうみんな、私のためにまた……」
女の子になってからというもの、助けられてばかりだ。
何か私の方から、貢献したいという気持ちが湧き出てきているが、十分にできてない。
「気にすんな。あたいたちも、優子という存在を見て、色々と学ばせてもらってんだ」
「そうですね、特にこうやって、女子が団結できたのも、優子ちゃんのおかげよ。このクラスにとっていまいち男子に押されがちだったクラスが変わりましたし」
「そうだな、なあ、木ノ本……いや、桂子」
「どうしたの？　恵美」
「あたいさ、せっかく女子が全員集まってるし……」
「そうね、潮時だね……みんな聞いてくれる？」
女子全員が着替え途中のまま、二人の話を聞き入る。話の内容はだいたい推察できる。
「あのね、私達、グループを解散することにしたの」
驚きの声は漏れない。
「これからは、２年２組女子は一つだ。１７人で一個のグループだ！な！」
そう言うと、桂子ちゃんと恵美ちゃんがガッチリと握手した。
「「はい！」」
１７人、そうだ、その中にちゃんと、私が入っているということ。
もう受け入れられてから時間が経ったけど、改めてこのように言われると、とても嬉しい気分だ。

「2年2組、石山優子くん、至急職員室まで来なさい。繰り返す、2年2組、石山優子くん、至急職員室まで来なさい」
帰りのホームルーム終了直後、小野先生の声で放送が聞こえてきた。
「優子ちゃん……」
「大丈夫、なんとかなるよ」
「石山さん、職員室に……どうしたのあなたたち!?」
「私達も同行します」
「い、いえそういうわけには……それにあなた達も委員会や部活が――」
「そんなことはどうでもいいんだよ！　これは優子やあたいたちの人格に関わる重大な問題だ！　部活なんかよりもよっぽど大事なことなんだ！」
「……分かりました。私としても、小野先生の処置には疑問です。ですが……」
「あたしはどうしても……どうしても一人前の女子として受け入れてほしいんです。このクラス、この学校にもです。手段は問いません、何としてでもあの小野先生に折れて欲しいんです」
私も永原先生に訴える。
「……分かりました……あまり使いたくはないのですが、私に策があります」
「それは一体？」
「ふふっ……来てのお楽しみよ」
「女子ってさ、団結力すごいよな」
「ああ、ある意味で羨ましいぜ」
「あの中に入るんだから、石山も変わったよな……」
「あの乱暴な振る舞いは、どこへ行ったんだろう？」
男子の話し声を尻目に、職員室の入り口に来た。

「遅かったな石山……って何だねその集団は!?」
「私の味方よ、小野先生」
「……まあいい、石山、何故女子更衣室を使っている!?　永原先生も、何故それを黙認しているんだ!?」
「私たち女子全員で、優子ちゃんを受け入れたからよ！」
　桂子ちゃんが声を張り上げる！　他の女子もそうだそうだと合唱する。
「それが何だ!?　学校が決めた規則に従わないとは。このことは教頭先生と校長先生に報告し、然るべき処分をせねばならない！」
「何故？」
「何故……だと？　規則に反したからだ！」
「その規則が必要な根拠は何よ？　私のクラスの女子は全員、あたしが女子更衣室に入ることに誰も異議は唱えてないわよ」
「しかし、学校の立場ってもんがある！」
「……学校の立場としても、私が着替える時にわざわざ職員室の更衣室を開けなければならず、どちらの立場から見ても不利益だと思うんですけど。何故皆が損をすることをするんですか？　全員で不幸な目に遭うなんてそれこそ最悪だと思うんですけど」
　私が利益論に立って説明する。
「うるさい！　大人の事情が絡んでるんだ！」
「大人の事情!?　はっ！　知ったことじゃねえな。どうでもいいんだよそんなことは。あたいたちは全員優子を仲間外れにするのが嫌だってんだ！　それだけだ！」
　恵美ちゃんがバカにしたように小野先生に語る。
「何を言う。これが学外やＰＴＡに知られたらどうするんだ!?」
「あら、むしろ隔離してしまったほうが問題になると思いますけど、小野先生。それに、学外やＰＴＡと言いますけど、実際にそんなクレームでもあったんですか？　無いなら何の問題もないと思いますけど」
　永原先生が初めて口を出す。
　小声で「私に任せて」というのも聞こえた。
「ほう、永原先生に何が分かる？　大人の事情も知らぬとは、まだガキ

だな」
「あらあらまあまあ、私にガキですって！　６０年も生きてないのにねえ……」
　私と桂子ちゃんと龍香ちゃんが吹き出しそうになっている。
「な、ななんだと!?　永原先生、気でも狂ったか!?」
「……ふふっ、小学校６年生の時に教室の窓ガラスを頭で割って散々私を困らせた小野良和くん」
「な、ななな!?　何故それを……」
　永原先生は小野先生に詰め寄り、思いっきり背伸びしてぐいと顔を近づける。
「なんてことをしたのよ！　これじゃ外の風が吹きさらしじゃないの！　これを掃除しきるまで家には帰しませんよ！」
「あ……あ……あ……」
「また職員室の扉にいたずらしたのね!?　何度言えば分かるのよ！　いたずらしてる暇があったら勉強しなさい！」
　耳の近くで怒鳴られた小野先生が酷く動揺し、多大な恐怖感を感じる絶望的な表情が見える。小学生の時に怒られたトラウマをほじくり返されてるんだ。
「そ、そんなはずは……４０年以上も……何故……何故お前が……」
「この愚か者めが！　この期に及んでお前の目の前に立つ私が、誰かもわからぬのか!?」
「あ……あ……」
　小野先生が言葉にもならない言葉をつぶやく。
「あら、何を言っているか分からないわね……ちゃんと先生に分かる言葉で喋りなさい」
　永原先生の「キャラクター」が完全に崩壊している。
　味方のはずなのに物凄く怖い。
「……よろしい、ならば思い出させてあげましょう」
　永原先生が再び小野先生の耳元に近づく。
「なんで宿題を提出しないのよ！　他の子はちゃんと提出してるでしょ！　ご両親にも連絡します！　ほら、今日も居残りしてきなさい

！」
「ひ……ひ、ひ、ひ、ひぃっ！」
「私の教師生活の中でも、お前のことは忘れない。他のどの子よりも、いたずらばかりする『悪ガキ』だったもの。ここまで言えば分かるわよね？　私が本当は誰なのか？　どっちが先輩なのか？　いい加減認めなさい」
「だって、北小松先生は……生きていたら……７０歳を超えて……」
「毎日顔を合わせておきながら、私の正体に気付けぬとは飛んだたわけ者ねえ……私の生徒まで傷つけて……小野くん、お前はあの時と変わらない手のかかる『悪ガキ』ね……私が北小松と名乗っていたのは３０年前まで。永原マキノはその後に付けた名前よ」
　他の女子からも動揺が広がる。そうだ、殆どの女子は、永原先生が戦国時代の生まれで５００年近い時を生きていたことはもちろん、私と同じＴＳ病だということも知られていないんだ。
「生徒の意見と意思を尊重し、守るべき教師の立場にありながら、相談もしていない上司とＰＴＡの根拠もない顔色を窺うとは言語道断よ。恥を知りなさい！」
「あ……う、あ、あああ……」
　小野先生はますます顔面蒼白になる。まさに先生に怒られる悪ガキそのものだ。
「そんな……北小松先生が、こんな所におられるはずが……ま、まさか!?」
「ふふっ、そうよ、私はＴＳ病。こんな身なりだけど、小野良和くんが小学校６年生の時、私は北小松貴子（きたこまつたかこ）という名前で担任をしていたのよ」
　小野先生は今、かつての恩師と対面している。それも、若輩者で自分よりも２０歳以上も年下だと思いこんでいた先生だ。
　しかし、それにしても動揺しすぎている。
「１年だけとはいえ、お前を教えていて……手のかかる子だったわね。６年生も終わる頃には更生してくれたと思ってたんだけど……また私の手を煩わせて……こんな子に育てた覚えはなかったんだけどね

え……」
「ひ、ひいっ！」
「小野先生の言い分が正しいなら、私も女性として扱っちゃいけないことになるんだけど……まさか、そんなことを職員会議で主張するおつもりかしら？」
「わ、悪かった……俺が悪かった……先生！　もう許してくれ！」
「いい機会だわ……教師をしてから私はもう長いですから、小野くんにもう一度教師とは何たるかを叩き込んであげましょうか？」
「ひ……す、すみません先生！」
「じゃあ、ちゃんと今回の規則、撤回してくれますよね？」
「わ、分かりました……はぁ……はぁ……」
　小野先生は動揺しながら、職員室の中に入っていった。
「ふふっ、終わったわね、みんなは部活に戻ってくれる？」
「その前に先生、一つ聞きたいことがある」
　恵美ちゃんが言う。
「先生、絶対３０じゃないだろ？　本当はいくつなんだ？」
「ふふっ、田村さん、女性に年齢を聞いちゃ駄目よ。これは、乙女の秘密よ」
「お、乙女……」
　永原先生がニッコリと笑う。その無言の圧力に女子たちが後ずさりする。
「さあ、みんな、部活や帰宅に戻りなさい」
「は、はい」
　私を除く女子が散り散りに解散する。
「永原先生、小野先生を教えていたんですか？」
「ええ、４０年とちょっと……かなり昔に、ね」
「先生っていつごろから先生に？」
「私が教員になったのは明治の頃よ。１３５年前のことね。日本全国に鉄道が張り巡らされ始める計画を知って、中央集権の明治維新もあって全国放浪も難しくなると考えて、収入のために教師を始めたのよ」

「そ、そうなんですか……」
「今では小中高、どこででも教えられるわ。これも不老者の世渡り術の一つよ。ちなみに、北小松貴子と名乗っていたのは明治が終わって大正になってからよ」
「す、すごいですね……」
「小野くんは本当に手のかかる子だったわねえ。私ももう、教えた生徒なんて殆ど忘れちゃったし、多分もうこの世に居ない子の方が多いと思うけど……小野くんや石山さんだけは、ずっと忘れない自信があるわ」
今までは永原先生は本当に不老者なのか、どこかで疑うようなものもあった。
でも、５０代の小野先生のあの反応……私は改めて、永原先生という人物の偉大さが身に染みた。
「さ、石山さん、あなたも天文部に出入りしてるんでしょ？　木ノ本さんや部長さんが待ってるわよ」
「はい、失礼します！」
私は軽い足取りで、天文部へと向かっていった。

# 球技大会　前編

中間テストが終わった。私の成績は悪くない。そしてテスト期間も終わり、6月も下旬に差し掛かった。梅雨が本格化したこの日は待ちに待った球技大会の日だった。

この日は男女に別れ、学年別で8人のチームを率いて対抗戦を行う。場所は体育館だ。

私のクラスは、女子17人男子15人ということで、私はプラスワン扱いになり、男子の方も1人少ないチームと対戦する際には、くじで一人除外されることになった。

もちろん、私への特別ルールも、他のクラスには説明済みだが、当初は当然のことながらあまりいい顔をされていなかった。

しかし、これも体育の先生の配慮によって、何人か他クラスの女子から代表者を集めて、私の体育の授業の様子をビデオで見てもらった。

すると、みんな「これはさすがにハンデあげないと可哀想よねー」「ゲームにならないもん」と納得してくれたらしい。

逆に言えば、自分たちに不利になるようなハンデさえもすぐに納得してしまうくらいの説得力を持ってしまうくらいに私が弱いという意味でもあるんだけど。

クラスが集まる。男女が着替え終わって一旦教室に集合し、永原先生の先導で体育館へと向かう。

そして、開会式が行われた。

校長先生が短く挨拶し、球技大会の開会を宣言。続いて3年生の男女が選手宣誓をして、球技大会が始まった。球技大会は結構過密で、試合が終わるとすぐに他学年の試合が始まる。

ともあれ、まずは1組の女子Aチームと前後半7分のフットサルだ。

私の特別ルールが絡むということで、この試合の観戦者も割と多い

様子。
うちの学校は、ほぼ全てが弱小チームだけど、室内競技系の運動部の数がとても多いので、体育館の広さが格別だ。
そのため、２試合を並行して行うに十分な広さだ。
私のチームは９人、相手チームは８人、フィールドには５人で交代は自由だ。

「両チーム、礼！」
互いに並んで一礼をする。
「よろしくお願いします！」
「お願いします！」
審判は先生が務めている。この試合は永原先生だ。
各チームが所定の位置につく。キックオフはじゃんけんの結果、相手のチームのボールでキックオフをすることになった。
「それでは……試合、開始！」
ピーッ！
笛が拭き、まず相手がこちらを攻める。
私はオフェンスの一人をマークしているが、簡単に振り切られてしまう。
とにかくチャンスを潰さないと……！
でも全然追いつけない。
「とりゃっ！」
相手が打った強引なシュートは枠外に外れる。
ゴールキックで試合再開。
こうなるとこちらのディフェンスが終わり、今度はこっちがオフェンスになる。
「優子！」
「はい！」
前に居たノーマークの私にボールが渡る。
「いただき！」
「あ！」

しかし、すぐに取られてしまう。こうなると再び相手が攻勢に入る。
「マーク！　マーク！　優子ちゃんはそこに居て！」
キーパーの桂子ちゃんが声をかける。相手チームはほぼ全員が上がっているため、待ち伏せ戦法をするつもりだ。
「うんっ！」
相手のシュート。キーパー正面！
「よし！」
桂子ちゃんがボールを取り返してくれると、今度はすぐさまゴール前の味方へロングパスをしてくる。
このあたりのスピーディな展開はサッカーにはないフットサル独特の駆け引きだ。
「んっ!?」
「通さねえよ」
ゴール前でキーパーがしっかりディフェンスしているが、私には無警戒だ。
「虎姫ちゃん！　こっち！」
「うん！」
虎姫ちゃんが待ち伏せしていてフリーになった私にパスする。サッカー部の虎姫ちゃんがこじ開けたほうが確実に1点だろうが、一気に2点取る方を選んでくれた。
「えい！」
虎姫ちゃんから山なりのボールを受け、胸でトラップする。
当初は失敗してばかりだったこの巨乳でのトラップも、何とか自分の胸の形を考えることで何とか前に落とせるようになった。
私はそのままがら空きのゴールへとシュートを放った。
ピピーッ！
「石山さんの得点ですので2点です！」
よし、これで一気に2点先取！
審判の永原先生が告げる。得点ボードが一気に0―0から0―2になった。

「あの子をマークして！　あの子に決められたら2点よ！」
「はい！」
相手チームの方針でその後、私へのマークが厳しくなった。でもそれでいい。
なぜなら、私が人数に数えられていないため、レッドカードでも出ない限り常にこちらは一人多い扱いになっている。
だから私に一人人数をかけさせることができれば、それで十分なのだ。
幸い身体的基礎能力は不足していても、男時代譲りの「野性の勘」や「状況判断力」はあった。
それを加味すれば、私に人数を割かざるを得ない状況にするのは得策だ。
いくら決められたりアシストされれば2点と言っても、事前のビデオを見ていた他の子は「できやしない」とタカをくくってくる可能性が高かった。
だからこうやって2点を取ってしまうのはまず相手を警戒させるために必須だった。それを序盤のうちに出来たのは良かった。
通常5人対5人で行われるフットサルにおいて、数的優位はサッカー以上に大きい。
私がゴールやアシストを決めれば2点ということもあって、いくら弱くても警戒せざるを得ないみたいだ。
私はボールを受けずに、ディフェンスを一人引きつける役割に終始した。
更に、サッカーにおける待ち伏せ戦法を封じるために作られたオフサイドのルールが無いフットサルでは、待ち伏せ戦法を行って、強制的にディフェンスを1人釘付けにさせるだけでもプラスワンとしては十分すぎるほど役割を果たしていた。
常に前に残り続けることで、全員攻撃を難しくする、万一カウンターで2点取られれば大きな損失だからだ。
ともあれ試合が続く、私はディフェンスをおびき寄せる役割で数的優位を作る。

虎姫ちゃんがシュートする。
ピーッ！
「よっしゃ！　やりい！」
虎姫ちゃんが点を決め3点目、その後、相手も2点返したが私のゴールが2点分であることが決定打となり、ゴール数は同じながらも私たちのチームの勝ちとなった。
「両チーム、礼！」
「ありがとうございました！」
当校は1学年4クラスで計8チーム、時間的都合で1学年2ユニットに分かれている。
それぞれのユニット別にトーナメント制で優勝を決めて、3位決定戦も行うという感じだ。
「優子、すごいよ、役に立ってるよ」
「あ、ありがとう……」
「ふふっ、この優子ちゃんの待ち伏せ戦法で行けば、優勝はいただきよ！」
「け、桂子ちゃん、気が早いって。相手も警戒するだろうし……」
「弱気にならないの！　さ、しっかり休んで決勝に備えるわよ！」

2年男子と1年生、そして3年生の試合を挟み、再び2年女子のターン。決勝は1組の女子Bチーム。さっきと同じように並んで礼をする。
ここでも一回戦と同じく私の待ち伏せ戦法を使った。
私はゴールできなかったが、何度かボールを渡して警戒させることはできた。
また、パスされて私にマークが集中した隙を突いて別のフリーの子にパスする「アシスト」での2点を2回決められた。
虎姫ちゃんに教わったアウトサイドキックがとても役に立った。よもや私が繰り出してくるとは思っても居なかったようで、不意打ちならば相当な効果があった。
相手もこちらのゴールを3度揺らしたが私のアシストのお陰で

ゴール回数は少ないながらも4―3、最後の1点を取りにキーパーを含めたパワープレーをしてきた。
こちらはクリアの時に私にロングパス。私は処理を誤ってラインを割ったけど、決定的な状況だったために警戒せざるを得ず、そのまま終了。
ゴールを揺らした回数は相手の方が多いながらも、私達の勝ちとなった。
「やったよ優子ちゃん！　優勝だよ！」
桂子ちゃんが祝福してくれる。他の女子も私を祝福してくれた。
私はフルで出場にも関わらず、控え含めても一番動いていない。だけど、そんな中でも一番息が上がっていた。
待ち伏せすると言っても、マークする選手とのやり取りがあってそこに手間取ったのだ。
相手チームも、一番息が上がっている私を見て、改めて「あのハンデ仕方ないよね」「しょうがない負けは負け」のような会話をしていた。
もし、このルールがなければ、私は「役立たず」としてみんなに嫌われていたはず。でもそうならないように、女子のみんなで意見を出し合ってくれたんだ。
例えハンデがあっても、こうやって役に立てる喜びは何にも代え難いものだ。
体育祭でも、おそらく同じような特別ルールになると思う。
体を動かすことに関して、「何の役にも立たない」と思われていた私でも、配慮さえあれば楽しめることを知った。
本当に皆の善意が身に染みる。
今に思えば、小野先生が強硬に私の女子更衣室使用に反対したのも、「善意の配慮」だと、少なくとも本人は思っていたんだと思う。
でも、間違った善意こそ質が悪い。あの時の小野先生は悪意を持っていじめをしていた篠原たちよりも、ずっと頑固だった。
現に、男子はいじめを止め、請願書を女子総出で提出し、論理的にも破綻していたにもかかわらず、意見を変えなかった。

永原先生が脅迫じみた行動でトラウマをえぐり返さなければ、どうなっていたか知れたものじゃない。
逆に言えば、ああでもしない限り、間違った善意を止めることは出来ないということだ。
だから、どういう配慮が必要なのかを見極めることが、とても大事なんだと、私は自分の体験で、学習することが出来た。

この後は昼食休憩を挟んでバスケとドッジボールが開かれる予定だ。
ちなみにユニットごとで少し時間がずれているので、男子の方を見て回る。今から急げば、もしかしたらうちのクラスの男子の試合が見られるかもしれない。
「あーくそ、負けだ！」
あ、ちょうど試合が終わったみたいね。
ちょうど近くに、篠原浩介が見えたので声をかけてみよう。
「あ、篠原くーん！」
「いっ石山!?」
「あたし達のチーム、フットサルで優勝したんだけど、そっちはどう？」
「あー、りょ、両方とも負けたよ、一回戦と決勝でそれぞれ」
「……そう、次は頑張ってね！」
笑顔を見せる。
「あ、ああ……」
まだギクシャクしたやり取り。
既に私を受け入れてくれた女子たちはともかく、かつていじめていた男子たちとも関係を修復していかないといけない。
あの一件以来、男子たちも私のことを表向きは女子として扱ってくれているが、本心ではまだ分からない。
だから、こうやってもっと深く突っ込まないといけない。
私の過去は変えられないけど、かつて石山優一であったことを意識させない程度には、女の子らしさを見せないといけない。男の子に認

められて、初めて女の子になれる。私はそう思う。
男に好かれてこそ女の子らしくなれるんだから。

ともあれ、次の男子のユニットの2試合が終われば昼食休憩だ。
「なあ、あれが石山優子だろ？」
「体育すごい苦手なんだってな、特別ルールらいいぜ」
「え？　マジなの？」
「俺も試合見たけど、あいつの運動神経やばいぜ。下手したら一番軽い障害者手帳取れるかもしれないくらいにはさ」
「おいおいマジなのかよ」
「うんうん、とにかく何もかもが最悪だぜ。でも、味方はうまく特別ルールを活かした戦い方をしてたぜ」
「そうだよな、フットサルで優勝したんだろ？」
「ああ、あいつの特別ルールをうまく使ったんだ」
「なるほどねえ、時にはそういう配慮も必要ってことか」
「しかし、あいつも変わったよな。以前だったらよ、物凄い勢いで怒っただろうに」
「俺さ、あいつ可愛いと思うんだよ」
「え!?　でも中身は――」
「……俺は、中身も可愛くなってきてると思う。正体を知らなかったら、多分告ってたよ」
「……考え方の違いだな……」

男子たちの噂話が聞こえる。「中身は男」という常套句に異論を述べる男子。
私のことを、内面から認めてくれる男子も出てきたことを知った。とても嬉しかった。
だけど男子にある呪縛、それは私の自業自得だけど、それでも生易しく解けるものじゃなかった。
まだまだ少数派だったみたいだし。

昼食休憩はチームのみんなと食べた。
実はチーム編成が決まる直前までは、球技大会のチームは旧桂子ちゃんグループと旧恵美ちゃんグループでチームを組み、私は桂子ちゃん側のチームに入る予定だった。
しかし、グループが和解・解散したことで、雪解けの象徴としてあえて４人ずつで混ぜてチームを組んだ。
私が含まれていないチームの方でも、和気藹々とご飯を食べていた。
私達も、それぞれが思い思いにご飯を食べる。学食は混雑が予想されたので、それぞれお弁当を持ってきたんだ。
手作り弁当の子も入れば、コンビニ弁当の子も居た。ちなみに、私は母さんと一緒に作ったお弁当だ。
「優子ちゃん、この弁当はどうしたの？」
「私とお母さんが作ったんだよ」
「へえ、そうなんだ。優子ちゃん、家事もやったんだっけ？」
「うん、このくらいの料理なら作れるんだけど、やっぱり母さんにダメ出しされちゃったよ」
ただ、カリキュラムの範疇は超えていたので、そこまで厳しく言われなかった。
私は相変わらず土日を使って母さんと一緒に家事の手伝いをしている。
そのおかげで、家庭科の成績は良くなりそうだ。
「桂子ちゃんのお弁当は？」
「弁当箱は使いまわしだよ。で、この弁当もいつものパターンだから」
「そ、そうなんだ」
「なあ優子、お前少し量が少なくねえか？」
今度は恵美ちゃんが声をかける。
「どうもこの体、結構少食なのよ」
「にしたってちょっと少ないような気もするけど……」
「まあ、午後も運動があるからね」
「夕食はもう少し多めに食ったほうがいいぜ」

「そ、そう……」
「優子はただでさえ身体弱いんだしさ、食べる量まで減っちゃったらますます虚弱になるぜ。しばらくは腹十分目でもいいと思うぜ」
「うんうん、今はまだ学校生活に支障はないけど、将来仕事する時にあんまりにも弱いと大変よ」
「……う、うん」
確かにその通りだ。少しは体を強くしていかないと、幸い病気にはまだなってないけど。
会話に熱中しすぎて午後に間に合わなくならないように注意しつつ食べ終わる。
身体を休めて、午後のバスケに臨みたい。

# 球技大会　後編

バスケットボールでも、結局私はプラスワン扱いで得点2倍、3歩目までのトラベリングとダブルドリブルが許可され3秒ルールもないというルールになった。

ただ、待ち伏せ戦法はフットサルほど有効ではなく、練習も終わりの頃になるとほとんど得点できていなかった。

そこで、直前の作戦会議では、体力のない私も積極的に動く必要があったし、うまく行けば2倍を狙う。という形になった。

また、ここでも交代自由なので場合によっては私を下げる事も考えたが、「相手フィールド内で休めばそれだけで邪魔になる」という意見もあったのでまたフル出場になりそうだ。

何かこう、スポーツマンシップ的にはどうかとも思ったけど、虎姫ちゃん曰く「勝てばよかろうなのだ」ということだ。

審判に注意されたらその時従えばいいだろう。

第一戦と同じく、列に並んで一礼する。

バスケは偶数奇数でユニットが決まっていて、今回の審判は小野先生だ。

小野先生の手でボールが真上に投げられ試合開始。

私はまず前の方でプレッシャーを掛ける。「決めれば2倍」を意識させる。

「マークしすぎないで！」

相手の女子が指示する。

マンツーマンでマークが来る。私はフリー、よし！

私にパスが来る。近くの子がマークする。

ボールを持って1、2、3、それっ！

3歩目はトラベリングのはずだが笛が鳴らない。私の特権を利用して奇襲攻撃だ。

ゴンッ！

ゴールの枠を上に跳ねる。選手全員が注目する。

ファッ！

ピーッ！
「４点！」
審判の小野先生の号令とともに得点の布が４枚めくられ一気に４―０になる。
よし、偶然だけど決まった！
確率は低いけど、もう私の役目はだいたいやった。
「まぐれまぐれ！　ここから逆転するよ！」
相手も私の運動神経の悪さを知っているのか、まぐれだと鼓舞している。事実なのがまた耳が痛い。
続いて相手の攻撃、私も待ち伏せのため正面へ。
相手が２点を決め、一気に私にロングパス……よし！　ノーマークで絶好のチャンスだ！
ガンッ！
得点できず。
こぼれ球を虎姫ちゃんがシュートするがこれも決まらずに、同点に追いつかれた。
「いい？　ゾーンディフェンスよ！」
「はい!!!」
相手はディフェンスの時、それぞれが担当の区域を決めてディフェンスする作戦に出た。
「ダメね、これは３ポイント狙わないと……」
中に入ろうとすると相手の鉄壁の守備に阻まれ、どうすることもできない。
虎姫ちゃんや他の選手が３ポイントを入れようとするが、決まらず。点差は開くばかり。
「何よあれ、強すぎる……！」
「優子ちゃんお願い！」
４点差へと点差が広がり、３ポイントを狙わせる。
「あー届かない！」
ゴールの枠をも捉えられず、１回戦はそのままボロ負けになった。
結局、この試合の自チームの得点は、私の決めた４点と３ポイント

が２つで１０点だけだった。
「はぁ……はぁ……」
息も絶え絶えになりつつも、一列に並ぶ。
「礼！」
「「ありがとうございました！」」

「あーダメだったねー」
「そう都合よく行かないわねー」
「優子ちゃん、３位決定戦に向けて準備してね」
「はぁ……はぁ……」
正直かなり疲れているので休みたいが……
「疲れてる？　優子ちゃん」
桂子ちゃんが声をかける。
「……うっ、うん」
「次の試合はスタメン外れよっか」
「あ、ありがとう」
「そうだねえ、一番体力ないのに全部フルはまずいよね」
「これからドッジボールもあるんだし、もう優勝はないし」
「次の試合、休んでいいわよ」
「う、うん……ありがとうみんな……」

３位決定戦、今回は恵美ちゃんたちのグループとの同クラス対戦だ。
フルで休むと言っても、最初の一礼には参加する。
審判は再び永原先生になっている。
「礼！」
「「お願いします！」」
私は他の控えの選手とともにフィールドの外に出る。
試合開始だ。
まず相手の攻撃から。ゴール入らない。
桂子ちゃんがボールを取り、虎姫ちゃんにパス。

虎姫ちゃんが3ポイントを果敢に狙う。
……やった、入った！
「すごーい」
「やったー！」
「いいわよー！」
会場からも歓声と拍手が上がる。
もちろん私も休みつつも応援する。
次は相手の攻撃、ボールを奪えず2点決められ3—2。
「虎姫ちゃん、こっち！」
「はい！」
フリーになってた桂子ちゃんにボールが渡り、恵美ちゃんと1対1になる。
桂子ちゃんがその場でシュートするも決まらず、しかし、こぼれ球を虎姫ちゃんが押し込んで5—2。
同クラス対戦、それも3位決定戦ということで、前の試合よりはややゆったりと、どちらかと言えば怪我をしない無理ないプレーが多い。
やはりお互い、次のドッジボールを意識しているのだろう。
「それ、3ポイント！」
桂子ちゃんが狙うが入らず。
「よっしゃ3ポイント！」
今度は恵美ちゃんが狙う……あれ？
「ね、ねえ……」
私は休んでいた龍香ちゃんに話しかける。相手チームだけどいいよね？
「どうしました優子さん」
「さっきから3ポイントしか狙ってないような」
「そう言えばそうですねえ……あ、交代だ。ごめん」
3ポイントなので中々決まらない。というかお互いろくにディフェンスしておらず、明らかに遊んでいる。
「なんというか……露骨ねえ……」

「まあまあ、これも作戦よ。ドッジボールで勝つんでしょ」
観戦者たちからもざわめきが立つ。そしてただでさえ注目が集まる決勝戦に、殆ど全員が行ってしまった。
結局、この3ポイント合戦は恵美ちゃんたちのグループが2点差で勝利して終わった。
「はーい試合終了、みんな並んでねー」
「礼！」
「ありがとうございました！」

「あ、そうそう、次に照準を合わせるのは作戦だというのは分かるけど、あんまり露骨に遊んじゃダメよ」
「……はーい」
結局私も一度も出場機会がなくほぼフルで休み。ルール上は実は完全にサボるのは禁止なので最後の3秒だけ突っ立っていたけど。
ともあれ、3ポイント合戦に敗れ、フットサルで優勝しつつも、バスケでは最下位となった。

この後は他学年や2年男子の試合という名の休憩を挟み、ドッジボールが行われる予定になっている。
女子の試合が終わると、男子の試合が始まるので、見に行くことにする。

「いやーやっぱ女子とは動きが違うねえー」
うちの学校の女子には、何故かバスケ部が不人気だが、男子はそれなりの活動がある。
やはりバスケ部員は身長が高く、それによる優位性が高い。やはり弱小と言っても経験者は違う。
3ポイントもそれなりに決まっている。女子とは大違い。
うちのクラスが決勝でリードしている。これに勝てば優勝だ。

「後は時間との戦い？」

「うーん、そうかも」

ピーッ！

「よっしゃあ！」

篠原くんが2点シュートを決め、これで8点差！

よし、これはダメ押しだ。

「キャー」「頑張ってー」「あと少し」女子たちからの歓声も大きくなる。

男子は士気が上がっている。

……よし、この手で。

「篠原くーん、頑張ってー！」

私の声援に、篠原浩介が一瞬だけビクッとなる。

しかし、その後は何事もなかったかのように試合を続け、2組チームが逃げ切った。

優勝を知らせる笛が吹かれると、私達女子は男子達に駆け寄って祝福する。

「やったね」「優勝おめでとう」「すごかったよ！」

足が遅いから一番後ろからだけどそれでもありったけの祝いの言葉をかける。

優勝といっても、何か記念品があるわけじゃないが、それでも優勝は嬉しい。

この後、1年生と3年生が別競技で試合した後、女子のドッジボールが開かれる事になっている。

体育館のラインを上手く使いながら、私の特別ルールに対応する。

私は体力を回復したので、第1試合に内野として出場する。

両チームが一列に並ぶ。ここは1，4組、2，3組でそれぞれのユニットだ。

審判は知らない先生、多分3組の担任の先生だろう。

「礼！」

「「お願いします！」」

じゃんけんでこちらの先攻が決まり、先生の笛とともに試合が開始

された。
まずは桂子ちゃんが投げる。
避けられ外野へ。挟み撃ちにしてもう一度、しかし、身体を丸められる。
「優子!」
虎姫ちゃんが投げようとした瞬間、前に出ていた私にパス。
「よしっ!」
特別ルールのことを一瞬失念した女子の一人が至近距離になり、膝を狙う。
ピーッ!
「石山さんが当てたので、ボーナスでもう一人指名です」
私は以前より情報のあったソフトボール部の女の子を指名。
彼女は「やっぱりかー」という表情で外野に行く。
当然、これで私にまたマークが行くはずだ。特別ルールに慣れている私達と違い、他の組の子はそれに慣れていない。
序盤、私が不意打ちで作ったリードで逃げ切る。これが基本になるはず。
更に、このドッジボール。私を狙う時は5秒間待たなければならない。
これが結構大きい。振り向く1・5秒を考慮しても、3・5秒は思いっきり背中を向けて逃げられる。
逃げる範囲も他の子よりも広いため、ラインいっぱいまで逃げればまず狙っても当たらない。
ノーバウンドでキャッチすればその子を当てたことにできるが、体育の授業という名の事前練習の経験則では、このルールを狙うのはかなり無謀だとわかった。
それでも何も知らない他の組の女子への威嚇効果としては十分だ。
外野にパスが渡っても、また背中向けて逃げることが出来る。
一方で、攻撃面はさっきのような奇襲以外ほぼ決まらない。
ライン半分までの距離とはいえ、私のボールを投げる威力は極めて弱く、思い切って投げても避けられるか取られるかがオチだ。

むしろ誰かが天に向かって思いっきり打ち上げたほうが、まだ分がいいくらいだ。
つまり、最初のプレーで、ほぼ私は仕事を果たしたことになる。後は囮になって特別ルールでペースを乱すくらいだ。
「てえい！」
私が前に出てさっきの形を作る。これはフェイントで、そのまま虎姫ちゃんが自称「曲がるボール」を放つとキャッチしに行った子の手前でストンと落ちて膝に当たった。
「よし！　3人リード！」
その後も私は逃げに終始、時折前に出て奇襲を見せ、山なりに外野にパスして打つ。という基本戦法が確立された。
「よし、もう一人！」
これで相手は外野スタートの2人を入れて残り4人。外野スタートは任意のタイミングで内野に入ることも出来るが得点としては変わらない。5人分の得点差が付けばコールドで、私は人数に数えないから次に当たらずに行ければコールド勝ちだ。
「あの子の足をねらって！」
相手から指示が飛ぶ。
しかし私の距離が遠く手前でバウンド。
足で蹴りつつボールを得ると、私はそのまま前中央より少し左に出る。
正面ではなく、左や右端に避けるケースが多い。
「よし！」
正面の子を狙うふりをして私は左のスペースの外野にパスする。
これで、左の隅に避難していた子がこちらの外野から見て斜め方向で挟み撃ちになる形になった。
一回目は避けたが身体が低い。
「もらったー！」
外野の桂子ちゃんが上から下に叩きつけるように彼女の背中を狙い、ボールはそのまま外野へ。
ピーッ！

「試合終了です！」
「やったー！　ストレート勝ちよ！」
「あーあーダメだったかー」
「やっぱ特別ルールちょっと強すぎかなあ」
「来年はまた修正かもねえ……」
「組織となってくると違うからねえ……」
口々に相手チームの女子が振り返っている。
とは言え、ルールそのものへの疑問はともかく、公然とした不満はない。
やはり私が弱いことをみんな知っていて納得してのことだからだろう。
このあたり、女子は男子よりも大人だと、私は思った。
「さ、決勝でも勝とうね！」
「はい！」
私達のチームは、実際に試合をしてみて、思ったよりも本番では先程の作戦はハマると考えた。特に試合開始直後は混乱が起こりやすいと。
ただ、恵美ちゃんたちのチームが勝ち上がったらそうも行かない。
向こうも対策をしているためだ。
向こうの試合を見てみる。既に1対1。田村恵美ともう一人に絞られていた。
「それ！」
「ふんっ！」
あ、恵美ちゃんがボールを取った。
「おりゃあ！」
ドカッ！
ピーッ！
「そこまで！　2組Bチームの勝ち！」
「やりい！」
「これで2組同士の頂上決戦かあ……」
どうやらテニス部で腕力の強い恵美ちゃんが主力のようだ。

「それでは、決勝を始めます」
永原先生の号令のもと、フィールドに出る。
「じゃあ、始めるわよ。石山さんの特別ルールも知ってるわね？」
「もちろんだぜ」
「ええ」
「それじゃあじゃんけんで先攻後攻を決めて下さい」
じゃんけんで負け、相手のボールからスタート。
「おりゃあ！」
恵美ちゃんの強烈なボールが私に来る。
でもいくら恵美ちゃんのボールといえど、いっぱいまで距離が離れていれば冷静に避けることが出来る。
避けたら今度は外野からボールが来るから、背中を向けていちにのさんで振り返る。
このドッジボールは元外野が少ないので、序盤は時間を稼げる。
外野のボールが数往復した後、虎姫ちゃんが受け止める。その際に、一気に取ろうとせず、一旦故意に上方へ打ち上げ、数度の緩衝を経てキャッチした。
「へへーん、一回撮り損ねてもノーバウンドでキャッチすればセーフだからね」
虎姫ちゃんの得意技だ。
虎姫ちゃんは前に出た私にパスし、私は自分のラインまで行く。
正面に恵美ちゃんが見える。
私は下手投げに持ち帰ると、無警戒だったさくらちゃんの膝を狙って低空に投げた。
「あっ！」
ピーッ！
「ご、ごめんなさい……」
「ドンマイドンマイ、優子は身体が弱くても頭がいいからな。油断してるとこういう奇襲に晒されるのはよくあることさ」
「さて石山さん、誰をアウトにする？」
「うーん……恵美ちゃん、ごめんね」

「やっぱあたいか。しゃーねーよな」

試合が再開される。
厄介な虎姫ちゃんは後回しにされ、まず桂子ちゃんが当てられた。
更に、外野の恵美ちゃんが大暴れし、3人が当てられ、これでこちらは残り5人、そろそろ元外野を導入したほうがいいかもしれない。

「えい！」
恵美ちゃんからのボール、冷静に避ける。
よし、このまま背中を向けて……
「きゃっ!?」
ドスッ
痛った……しまった、足をひねって転んじゃった。
幸い立てそうだけど……
「あっ！」
近くに相手選手の気配がする。
振り向くと相手選手ともう至近距離になっていた。
「もらいー！」
ドンッ！
「痛っ!!!」
ピーッ
ボールが私の左腕に当たりうずくまる。
何度か当たったことはあったが、至近距離で当てられたのは初めてでとても痛い。
「うっいったあ……」
当たった腕を抑える。痛いよ、立てないよ……
腕をかばっている私を見て両チームの女子が私に駆け寄る。
「ゆ、優子ちゃん大丈夫!?」
「ご、ごめんなさい……強く投げすぎました」
「ううっ……えぐっ……ひぐっ……ふええん……」
痛みに堪えきれず泣き出す私。

「……大丈夫か？　立てるか優子？」
恵美ちゃんが右肩を貸してくれる。
試合を見ていた男子たちも騒然としている。
「歩けるか？」
「えうっ……ぐすっ……うん、大丈夫……ありがとう……うっ……恵美ちゃん……」
私は泣き顔を見られたくない一心で、左腕で目を隠す。でも泣き声は確実に聞かれてしまっている。
恵美ちゃんから、ひとまずフィールドから遠い安全な外野まで連れて行くから、そこで休むように言われた。
涙をゴシゴシ拭き、なんとか立ち上がる。

「なあ、篠原、石山ってあんな弱くなったんだな」
「あのボール、確かに強かったけど……」
「痛くて泣くなんてなあ……」
「篠原、あいつ……守らなきゃいけない存在だったんだよな……」
「あ、ああ……くそっ……」
「あっ！　おい、篠原、どこに行くんだ!?」
篠原くんが体育館から駆け出る様子が見えた。どうしたんだろう？
ともあれ、外野からでも半分出てもいいことにはなっているが、威力不足でもう奇襲は通じない。
逆転を狙って私にパスを出されるがそれも失敗、結局私達のチームは負け、準優勝に終わった。
「礼！」
「「ありがとうございました！」」
「いやー恵美ちゃんたちのチーム強かったねえ」
「う、うん」
「さ、男子の部を見ようか」
「な、なあ先生！」

「どうしました高月君？」
　高月章三郎が永原先生に何かを話している。
「篠原が居ねえんだ！」
「え？　どこに行ったんでしょう!?」
「でも時間は守らねえと……」
「え、ええ……仕方ありません。次の試合、篠原君抜きで始めましょう」
　こうして男子のドッジボールがスタート、1人少ない篠原くんのチームは最下位、もう一方のチームは優勝した。
　こうして私のチームは優勝、準優勝、最下位となって、球技大会は幕を閉じた。

# 優子、優しい子

篠原浩介が消えた。球技大会の終了後もずっと行方不明のままだ。
球技大会終了後は部活または下校となった。私たちは制服に着替え終わると、一部は篠原くんを探すチームとして残り、もう一部は各自部活・下校していった。
私もその一人。桂子ちゃんに頼んで今日の天文部は一旦お休みにしてもらう。
実は私には思い当たる節がある。私がドッジボールで強く当てられて泣いてしまった時、篠原くんが体育館を飛び出していったのが見えたからだ。
私は篠原くんが体育館から駆け出た所を思い出し、近くの物陰を探る。
……ここには居ない。
続いて体育倉庫、しかし内側から鍵がかかっている。
念のためにノックする。反応がない。
一応換気窓がある。しかし、到底背が届かない。男の頃でも届かなかっただろう。
換気窓を見ていると、恵美ちゃんが通りかかった。
「恵美ちゃん！」
「お、優子じゃねえか。あたいはテニス部の用具取りに体育倉庫に来たんだけどよ、どうした？　篠原か？」
「あ、うん……そうなの……篠原くん探してて……」
「何だあいつ、まだ行方不明なのか」
「見つけたら各自携帯に連絡するみたいだし」
「分かった、ちょっと待ってな」
恵美ちゃんはテニス部として体育倉庫の鍵を借りていたため、恵美ちゃんが鍵を開けて中に入る事ができた。
一時的だが、恵美ちゃんも探してくれる。
「優子、そっちにはいたか？」
「ううん、いない」

「あ、あたいはまだこの辺探してないから、後はよろしく頼む。あたいはテニス部に戻らねえと」
「……そう、分かったわ」
恵美ちゃんがテニスコートに戻り、私は探しに戻る。恵美ちゃんが探していない所を探す。一応隠れてることを考慮し、パンツ見えないように意識しつつ。
「うーんここにも居ないわねえ……」
しかし、成果なしだった。
続いて探すのは体育館の中、校長先生の話など舞台でも使うため、そこの控え室が有力な隠れ場だ。
スポーツ大会の時は休憩控え室としても開放されていて、普段から椅子くらいしか無いため鍵もかかっていない。電気も落ちていて隠れるには容易な場所だ。
ガチャッ
体育館の脇から扉を開ける。
暗くてよく見えない、でも少し闇が深い所が見える。
私は電気をつける。
「うっ！」
少し眩しさを感じる。数秒後、ゆっくり目を開く。
「あっ……い、石山……！」
視界に入ってきたのは、紛れもない篠原浩介だった。
「ここにいたのね……どうしたの？　みんな探してるわよ」
「うぅっ……」
篠原くんが目をそらす。
よく見ると、壁に血痕がついている。
「ね、ねえ……どうしたの？」
「……」
篠原くんに近付いてみる。
「!!
!!」
「顔をそらして、どうしたの？」
壁の血のことには触れないでおく。

「ねえ……」
「み、見ないでくれ！」
顔を覗き込むと拒絶される。それでも、頭から血が出ているのが分かった。
「どうしてこんなことしてたの？」
「うっ……」
「話してくれないとわからないよ！」
「う、うあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

「この名前、私で考えたんだよ。私はずっとずっと優しい子で居たいの。これから数十年、数百年後、または１０００年２０００年後もね」
「……何言ってんだ、お前は……元々優一だったから……優子なんだろ……」
「ううん……優一ってのはね、『一番優しく育ってほしい』っていうお父さんとお母さんの願いが込められた名前だった。でも、私はずっと願いを踏みにじってた。そのせいで、あたしは篠原くんも含め多くの男子を傷つけたわ」
「……」
「だから、女の子になって、今度こそ優しい子になるって……私、決めたの。だから優子なのよ」
「篠原くんを許さないで、女子の仲間をけしかけて復讐するのは簡単よ。でもそれじゃ結局優一だった時と同じよ」
「でもよ、俺は……あんなに弱いお前を……なのに俺は……」
「うわあああああああああああああああ!!!!」
篠原くんがまた壁に頭を打ち付けようとする。服を引っ張ってそれを止めさせる。
「もういいのよ、篠原くんをこんな風にしちゃったのには、私にも罪があるのよ。お願い、自分のせいにばかりしないで」
「ううっ……せめて……突き放してくれたほうが……俺にとって……」
「ダメ！　そんなこと言わないの。ほーら！　みんなに顔見せて、保健室行くわよ」
「保健室？」
「額から血が出てるわよ。それからここ、掃除の人が大変でしょ？」
壁に付いた血痕を指差す。
「ああ、うん……」
私は制服のポケットからハンカチを取り出し、壁の血痕を拭き取る。完全には拭き取れなかったが、ほぼ目立たなくなった。
「ほら、そこの血も取るわよ」
篠原くんの額から血が出ている。これも取らなくては。

そう思ってハンカチをかざそうとすると、篠原くんが顔をそらす。
……そうだ、本来の彼は責任感が強く気も弱い子だ。私のせいで、性格を歪ませてしまった。
ともあれ、篠原くんは落ち着いてくれた。
篠原くんを発見した私は携帯を取り出し、永原先生を呼び出す。
「もしもし」
「あ、もしもし永原先生――」
「あ、石山さん、篠原くん見つかった？」
「う、うん。体育館の控え室の所で見つけたから、他の人には戻るように言ってくれる？」
「分かったわ。それじゃあ気をつけてね」
ピッ
「さあ、永原先生にも連絡したから保健室に行くわよ」
「んっ……」
私は篠原くんを引っ張ろうとするがびくともしない。
「ほら、血を流したまま居ちゃダメよ」
「でも……」
「保健室に行って、お願い。篠原くんがこんな血を流したままなんて、あたし嫌よ！」
私がそう言うと観念したのかそのままついてくる。
体育館を出て校舎へ。篠原くんはまだ体操着だが、今は着替えるよりもまず額の手当てをしないと。
私の手当てを拒否したものの保健の先生の手当てまで拒絶はしないだろう。
校舎へ入り、保健室への道をたどる。
その間、会話は一切ない。私が顔を向けると顔をそらす。この状況で話しかけては逆効果だ。今は落ち着かせないといけない。
そうだ、篠原くんはまだあのことで罪悪感に囚われているのだろう。それは無理も無いこと。
いくら「私も悪い」、「気にしないで」と言って聞かせても、大泣きさせ、殴りかかった罪悪感を拭うことは出来ない。これを払拭させ、

水に流させないと本当の意味で「優一」を終わらせることが出来ない。でもどうしたらいいのか、まだ私にはわからない。
私は覗き込まないように配慮しつつ最短ルートで保健室に連れて行く。
幸い途中で誰かにすれ違っても声をかけられることはなかった。私が篠原くんを見つけたからだろうか？
それとも、篠原くんの額の血を見て驚いたのか。

ガララララッ……
ともあれ、保健室に入る。
「はーいどうしました？　って大変！」
保健の先生が応対する、篠原くんの額の血を見て驚いた。
「すみません先生、手当お願いします」
「は、はい」
保険の先生が救急箱を持ち出した。
相変わらず、篠原くんは無言を貫いている。最後にもう一度覗き込むが、やはり顔をそらしてしまった。
「後はやっておきますから、石山さんは帰って下さい」
「はい。お願いします」
私は扉を開けて保健室を後にする。
まだ下校時間まで時間がある。今日は球技大会の日だが、「優子ちゃんに話しておきたいことがある」ということなので、天文部の部屋を目指す。
コンコン
「はーいどうぞー」
「桂子ちゃん、私！」
「あ、優子ちゃんどうぞ」
扉を開けて天文部の部屋に入る。桂子ちゃんと坂田部長がＰＣと向き合っている。
一方で、昨日まで無かった何かの材料が多く積まれていた。
「石山さん、篠原さん見つかりましたか？」

桂子ちゃんから聞いたのか、坂田部長が訪ねてくる。
「はい。何とか」
「で、どこにいたのよ？」
「体育館の控え室の所で……どうも私がドッジボールの時に痛くて泣いた時に……罪悪感に耐えられなくなったみたいで……」
「ふーん、そうなんだ」
「本当の篠原くんは優しくて責任感強い子だから……私のせいよ」
「……優子ちゃん、優しいわね。私ならあんなことされて、そんな風に思えないわよ」
「桂子ちゃん、ありがとう。あたし、名前を守れたかな？」
「うん、優子ちゃんは、名前に恥じない、とっても優しい女の子よ」
優しい女の子、褒められると嬉しいけど、優しい女の子って言ってもらえるのは、特に嬉しかった。
また一つ、女の子に近付けた。昔の自分を捨てられた。本当に嬉しい。

「はいはーい、もう一件落着ですわよね？　この辺でそろそろ天文部の活動を再開しますわよ」
「はーい」
こうして、天文部の活動が始まった。

「そうそう、準惑星と惑星の定義というのは、まだまだ曖昧な所があるのよ」
「そうなの？」
「うん、私達が子供の頃に冥王星の話があったでしょ？　冥王星を外すための『近隣の他の天体を一掃している』のところよ」
「桂子ちゃん、それはどういう？」
「解釈の仕方によっては地球や木星でさえ惑星じゃないって言えかねないのよ」
「どういうことなの？」
「地球の地殻には大量の小惑星があるのよ。場合によっては一時的に

地球の衛星になることになるわね」
「だからもう少しこの定義は詳細にする必要があるっていう意見があるわね」
「ふむふむ」
「冥王星は月よりも小さいですわね、軌道もやや曲がってますし」
「でも軌道という意味では、水星もそうだったりするのよね」
　そういえば、このミニチュアでも分かりにくいが、水星がやや傾いている。
「あ、そうそう、もう一個ミニチュアを作る事になったのよ」
「そうそう、太陽系近傍の惑星たちのミニチュアよ」
「ど、どうやって作るの？」
「ふふ、このソフトよ」
　桂子ちゃんは宇宙ソフトを立ち上げた。
「これは何？」
「地球や太陽があるでしょ？　適当に星空をクリックしてみて？」
「あ、データがある」
「優子ちゃんがクリックしたのは遠い星だけど……実はね、地球から近い太陽系の星の様子を知って欲しいのよ」
「どういうこと？」
「太陽よりずっと大きい星ばかり注目されてるでしょ？　でも実は太陽の明るさは全恒星の中で上位1割位なのよ」
「え？　そうなの？　意外……」
「星座に見える星は、殆どは宇宙全体では珍しいのよ」
「そうなの？」
「うん、主系列星というのが主な星よ。それも宇宙は小さい星のほうが多いのよ」
「えっと……」
「ほら、星の色ってＯＢＡＦＧＫＭでしょ？　実は宇宙の星の９割近くはＫとＭ、それもＭが多いのよ」
「そ、そうなの？」
「そう、特にＭの主系列星のことを『赤色矮星』と呼ぶわね。この前出

てきた『プロキシマ・ケンタウリ』もこの赤色矮星なのよ」
「どんな特徴があるの？」
「まず太陽よりもずっと暗いこと、『プロキシマ・ケンタウリ』も太陽系から一番近いけど光度が低すぎて肉眼では見えないわね」
「そうなんだ……ところで『プロキシマ・ケンタウリ』から太陽を見るとどうなるの？」
「良い質問ね、このソフトを使ってっと」
桂子ちゃんは恒星のデータを引っ張ってプロキシマ・ケンタウリに位置を合わせると、次いで「Ｓｏｌ」と入力し、画面中央に持っていく。
「あ、カシオペア座って書いてある」
「これを見れば、太陽はカシオペア座のＷのところの外側に、０．４等星として見えるってことになるわね」
太陽がクリックされていて、太陽の恒星としてのデータが並べられている。
「その下の光度ってのは？」
「これは単位時間あたりのエネルギー量よ。太陽が基準になっててて、太陽は１．０よ」
「逆にプロキシマ・ケンタウリをクリックしてみて？」
言われるままに赤く大きな星をクリックする
「あ！　すごい小さい値……！」
光度は０．０００５３０と書いてある。明るさは太陽の１万分の１以下ってことか。
その下、スペクトル型と書いてあってＭ５Ｖとある。
「このＭ５Ｖっていうのは？」
「まずＭはＯＢＡＦＧＫＭのＭよ、ちなみに例外はあるけど省略よ。次の数字はそれらをさらに細かく０から９まで高温な順に割り振られているのよ。太陽をもう一度クリックしてみて？」
「うん」
太陽をクリックする、するとＧ２Ｖとある。太陽はＧ型なのか。
「そしてＶ、これは主系列星のことよ、ＩからⅣまでは超巨星から輝巨

星、巨星、準巨星ってあって、いずれも星の晩年よ。ちなみに極超巨星というカテゴリもあって０が充てられることもあるけど、まあいっぺんに覚えなくていいわよ」
「表面温度のＫはわかる。これは理科でやった……直径も分かる。０．１４ってことは太陽の７分の１しか無いのか……」
「ちなみに、質量は８分の１くらいよ。ただし、密度は大きいわね」
「ちょっと待って、立体の場合３乗に比例だから……」
「ふふっ、プロキシマ・ケンタウリの密度は太陽の４３倍弱ですわ」
　坂田部長が答えを言ってくれる。
「よ、よんじゅうさんばい……」
「だいたい金の３倍、地球の１０倍くらいとも言い換えられますわね。赤色矮星は小さい分密度が大きいのも特徴よ」
「なるほど……」
「他にも、赤色矮星の特徴は理論寿命が長いことね」
「どのくらいなの？」
「太陽の寿命が推定１００億年だけど、赤色矮星は数千億年から長いのだと１３兆年くらいになるわね」
「１３兆年って……」
「今の宇宙年齢よりもずっと長いですわよ」
「そう、そして宇宙でも数が多い。今度の文化祭での研究発表はこの赤色矮星に着目したいのよ」
「そうなの？」
「そして、赤色矮星を知ってもらうためには太陽系の近所の宇宙を知ってもらうのが一番なのよ」
「なるほどねえ……」
「というわけで、まずは地球近傍の星、他にも発見されている太陽系外惑星を調べてミニチュア化するのよ」
「これまでの太陽系のミニチュアとは比較にならない労力が必要ですから、文化祭は秋ながらも、そろそろ準備した方がいいですわよ」
「なるほど」
「まずは太陽から。黄色く少し大きめのボールを作るわ」

「そして今回は太陽を中心に、太陽から１２光年までの星３０個よ」
「うまく縮尺どおりの玉を作っていく作業が難しいわよ……宇宙の距離は流石にデフォルメするけどね」
「石山さんは、主に言われたことをやっていればいいですわよ」
「はーい」
こうして、ミニチュアの製作が始まった。まずは星を作るところからだそうで、今日はその予行が主になった。

球技大会の翌日、私に２回目の生理が襲い掛かってきた。土日に連なったのも運が良かったと思う。
そろそろだと思っていたので、寝る前にナプキンを付けておいてよかった。付けてなかったら布団と服が血だらけになるところだった。
母さんが痛み止めを飲むように言ってくれたおかげで、前回よりはマシになった。しかし、痛み止めも万能ではなく、代わりに倦怠感が半端なかった。
後やっぱり自分の体からおびただしい血が出るのはしばらく慣れそうにない。
土日は生理中の家事ということで「特別研修」と称して家事手伝いは免除されなかった。とても辛かったけど、「いい勉強になる」と言われたので、一生懸命に頑張った。
母さんは私を褒めてくれて、嬉しかった。うん、生理から逃げちゃだめだもの。

# 初めての水泳

７月、気象庁に拠ればまだまだ梅雨は開けては居ないそうだが、６月に比べると晴れの日が増え始めた。

実は球技大会前の、６月２２日に誕生日が来ていたんだが、誕生日に気付いたのは誕生日の日の夜だった。女の子になったことばかりに気が行っていて母さんが声をかけたことで初めて思い出した。

その後も球技大会や勉強の事で頭が一杯で取るに足りないイベントだと思ってたけど、考えてみれば女の子になって最初の誕生日だと思い出し、７月になってやっと気付くというもったいないことをした。

ちなみに、誕生日祝いにジャンパースカートをもらった。これは上のデザインにも気を配る必要がある、レベルの高い服に見える。

さて、現在の日付は７月３日。明日７月４日火曜日の体育の授業はプールということで、私は自室で水着の着替え方を復習していた。

「うーん、これでいいのかなー？」

いくら女の子同士と言って、いや気が緩みがちになる女の子同士だからこそ大事な所がぽろりは良くない。

そしてもう一つ、水泳の授業に向けて考えていることがある。既に複数の男子の中で私のことを純粋に女の子として見る動きも出てきて、もしかしたらこの身体、反応する男子が居るんじゃないかと思っている。

もしそうなったら、その時の私はどう思うのか？

嬉しいという気分も出る気がする。例え本能的性欲だとしても、女の子として見てくれているということだから。

でも同時に、エロい心で見られているということに対する嫌悪感も出てくるかもしれない。これとばかりは実際に受けないと分からない。

ともあれ、永原先生がカリキュラムのときに残してくれたプリントを引っ張り出し、もう一度スクール水着の着替え方を練習する。

「これで大丈夫かなあ……」

プールの着替えはちょっと特別で、女子だけプールの近くにある更衣室で着替えることが出来る。
そこは窓もなく扉も厳重で、いわゆる「覗き」や「盗撮」が発生しないようにという配慮だ。

「さて、今日はもう寝るかなあ……」
ともあれ、制服から水着の着替え方への復習も、これで十分だろう。本番緊張しすぎない方がいいんだろうけど……

ピピピピッ……ピピピピッ……
……いつもの目覚ましの音で朝起きる、制服に着替える前に水着を忘れないように鞄に入れる。天気は晴れ。昨日の天気予報での予想最高気温は31度。プールにはいい日だ。
何時ものように寝ている汗を吸い取ったパジャマと下着を脱ぐ。毎日着替える時や風呂に入るときにになっているからすっかり慣れ切った全裸だけどそれでも見る度にエロい身体だと思う。
とにかく、素っ裸になったら箪笥からブラとパンツを取り出す。
うーん今日はどうしよう?
いつもは下着の色は白や縞パンが大半……というより、白と縞パン以外にも薄いピンクやブルーといった薄い色のシンプルなデザインしかない。
派手な色やデザインのパンツは女の子初日の服選びの時に全部拒否したからだ。
というわけで、今日はシンプルにリボンのついた白にした。そういえば、疑問に思わなかったけど、このリボン何のためにあるんだろう?
その疑問を頭の隅に追いやりパンツを穿く、フィット感が素晴らしい。白いブラジャーも手に取り、少し前かがみになってホックを後ろで留める。
着心地のいい女の子の下着を身にまとい、制服を着る。
夏服は冬服よりも作業工程が一つ少ない。シャツとブラウス、そし

てスカートを穿き、所定のリボンをブラウスに取り付けて、曲がってないか確認し、ブラウスをスカートの中に入れる。
最後に頭にオシャレの白リボンをつけて完成！
ほとんど寝ぐせもなく、痛みもないさらさらな長い黒髪を少しだけ梳(と)かす。
うん、今日も可愛くできてる。
「優子ー！　朝ごはんできてるわよー」
「はーい」
母さんに促され、食卓へ。今日もいつものように昨日の残りとご飯などで作られた朝食を食べる。

通学路、7月に入ってすっかり学校に溶け込んだ私は「あの子可愛くない？」とか「おっぱい大きいよなあー」なんていうヒソヒソ話になることはない。
ただ、どうしてもオスの本能というか、男子の視線が胸に行っているのを感じるのも事実。
また私の正体などを知りつつ「優子」としての話題も出てくる。
……やはりその話を効いていると、優一時代の悪名の払拭は難しいらしく、可愛い女の子になったことは認めつつも、どうしてもその影がちらついてしまうようだ。これについては辛いと言えば辛いが自業自得である以上甘んじて受け入れるしかない。
もし腕力や威圧感も男の頃と同じだったら、強引に怒鳴りつけていたけど、今はそんなことはできないし、したくもない。

ロッカーに入り、ローファーから上履きに履きかえる。
いつものように教室を目指す。
ガラガラ
「おはよー」
「優子ちゃんおはよー」
「おう、優子おはよ！」
桂子ちゃんと恵美ちゃんがそれぞれ返事をしてくれる。

自分の席に座り、鞄を椅子の下に置き、ロッカーから一時間目の教科書を出す。
後はホームルームまでのんびりするだけだ。話しかけてくるのはだいたい女子の誰かだ。

「今日から水泳だねー」
「男子が気になるわねえ……」
「ねえねえ、高月はさー」

女子にとって水泳の授業は鬼門だという。私も、男だった去年は、本人には気付かれなかったけど、水着姿の桂子ちゃんで興奮してしまった。
というよりも、学校で一番の美少女だった桂子ちゃんだったから、他の男子も何人か息遣いを荒くしていて、特にその件で高月は女子から一時期かなり嫌われてた。あの時は流石に同情して高月に怒鳴るのをしばらく止めていた。
今年は女子に対して興奮するということは基本的になくなったが、代わりに興奮される側に回ることになった。
いくら「中身は男」と念じ続けたとしても、この身体が水着になったら興奮しないわけがない。視線が胸に行くのと同じ、人間のオスとしての根源的本能だから。
ともあれ、体育の授業は来るんだし、その時になってから考えよう。

４時間目の終わり、５時間目の体育が水泳の授業ということで、早めに女子更衣室に入るように連絡を受けた。
水着を持って、女子たちとともに、プールへと移動する。もちろん、プール近くの女子更衣室に行くのは初めてだ。
途中、小野先生とすれ違う。小野先生はトラウマになっているのか、私と目が合うと恐怖の表情を見せて顔をそらしてしまった。どうも私と歩く女子を見ると永原先生のあれを思い出してしまうらしい。
……さすがに気の毒だ。永原先生が「あまり使いたくない」と言っ

たのも頷ける。
「はい、ここよ」
恵美ちゃんが代表して最初に扉を開ける。私たちが全員続く。ちなみに「女の子の日」を理由に２人ほど見学者が出たので１５人だ。
「優子、鍵閉めてな！」
「はいっ！」
鍵を閉め、まずは小型カメラの警戒作業をする。いつぞやのプリクラの時もだが、やはりこの警戒は怠ってはいけないらしい。
その後は各自自由にロッカーの位置を決める。もうグループのわだかまりはないけど、こういう時に時々名残が出る。何だかんだで同じ旧グループ同士仲がいいということもある。
私も、桂子ちゃんと龍香ちゃんの間になった。
水泳ということで、いつもよりは口数も少なく、黙々と着替える。
やっぱり女の子同士とはいえ、見えるのはダメだ。

まず水着を取り出してから、靴下と頭のリボンを取り、スカートの中に手を入れてパンツに手をかけ脱ぐ。
ノーパンにスカートなのは例のカリキュラムの時と昨日着替える練習をした時以来だが、やっぱりスースー感が半端ない。
パンツ穿いてる時と比べても心許なさは数倍になる。
ともあれ、ノーパン状態になりながらロッカーに下着を入れ、スク水を穿く。
ずり落ちないように気をつけながらスカートを脱いでロッカーに入れ、水着をブラウスの中に入れる。
「わー恵美ったら大胆……！」
「へへん、どうだ?!」
「噂は本当だったのね……」
田村グループの方から何やら声が聞こえてくる。
振り向くと、マッパの恵美ちゃんが見えた。
「……」
「こうやって一気に裸になって一気に水着着りゃ楽ってもんだー！」

豪快な様子を見て、一瞬心があっちに向かうが、「ダメダメ、反面教師にしないと。ああなったら女の子として終わりって何度も何度も言われたでしょ優子！」と自分に言い聞かせて、着替えを続行する。
一旦シャツを脱ぐためにブラウスを脱ぎ、見えないようにまた着直す。ここが少し面倒だが仕方ない。
水着の肩紐を入れ、ブラジャーを外す。ちゃんと着られていることを確認したらブラウスを脱ぎ、最後にパッドを取り出して胸に入れる。
そしてロングヘアー用の水泳帽をかぶって更に髪の毛を中に入れて……よしっ！　完成！
「優子さん、すごいですね、全く見えてませんでしたよ！」
「あ、ありがとう。よかったー」
……と言いつつ、龍香ちゃんは既にスク水に着替え終わっている。桂子ちゃんも既に水着姿だ。
「でも、まだまだだね優子ちゃん」
「うん、もう少しスピードアップできますよ」
「そ、そうなの？」
「でも手順は間違ってないわよ。あっちみたいにしなかっただけでも上出来よ」
「あはは、あれは楽だと思うけど大胆すぎて無理よ……」
「うんうん、特に優子ちゃんがやったらまずいと思うわね……」
「同感ですっ！」
ともあれ、もうすぐ集合時間だから、そろそろプールに行く。
そこには既に男子も集まってて、一部からは「おー」と歓声があがる。
去年、私は「おー」と歓声を上げる男子に混じって苦虫を潰すような表情で見ていた。
今年、私はその男子たちに歓声を上げられ、見られる立場になった。
最後に、水着に着替えた体育の先生が入ってくる。
キーンコーンカーンコーン
授業開始のチャイムが鳴る。

「よし、集合だ！」
クラスメイトたちが喋りながらも集合する。
優一時代の名残か、うちのクラスはそれなりに統率が取れている。
怒鳴りつける人が居なくなって気は緩んではいるものの、先生が「このクラスは秩序がある」などと褒めてくれるため、また理屈の上でもそうした方がいいことは分かっていたためそれなりに続いている。
「今日から水泳の授業だ。知っての通り飛び込みは危険なので今年度より中止になった。本当はうちのプールの深さなら問題ないんだけど、色々あって却下されたんだ。よって、他の泳ぎ方も変則的だが水中からスタートになります」
「では、まず準備運動から。皆もう知っているとは思うが、指導要領に言えとあるので言うぞ。準備運動を十分にしないと足が攣（つ）ったり溺れたりする。先生行う準備運動をしっかりやってくれ……それじゃあ始めるぞ」
「「はーい」」
「1，2、3、4……5，6，7，8！　……2，2，3，4……5，6，7，8！」
まず前後に足を伸ばす、続いて左右。よくあるストレッチだ。
「1，2、3、4……5，6，7，8！　……2，2，3，4……5，6，7，8！」
続いて片手を腰に付けてもう一方は頭の上に持ってきて腰を横に逸らす。これもラジオ体操などでおなじみの運動だ。
「1，2、3、4……5，6，7，8！　……2，2，3，4……5，6，7，8！」
続いて、前に前屈して後ろに倒すを繰り返す。これもおなじみだ。
ざわざわざわ……
な、何？　男子がちょっとざわついているような。
「こらー！　女子ばっかり見るんじゃないぞー次！　深呼吸！」
やっぱり見られてるんだ……！
「1，2、3、4……5，6，7，8！　……2，2，3，4……5，6，7，8！」

身体を上下させながら腕を左右にブラブラさせる。
自分でも胸が揺れているのが分かる。

「やばい、エロすぎる……」
「はぁ……はぁ……」
「うっ……まずい……」
「石山が……はぁ……はぁ……こんなの我慢できねえよ……」

やっぱり男子が興奮していた。
「こら男子！　優子ちゃんを性的な目で見ないの！」
「桂子ちゃん、それは無理な注文でしょ……」
「もう、優子ちゃん甘すぎるわよ！」
「しょうがないわよ。私だって男子だったら――」
「わ、分かったわよ……優子ちゃんが言うと洒落になってないわよ……」

やっぱりこういうところで男子の肩を持ってしまう。理解者になってしまっているのは、もしかしたら一生治らないかもしれない。
だけど、本能とはいえ私の「女」に反応してくれるのはちょっと嬉しくもある。少なくとも男扱いされていじめられてた時よりはずっといい。
私もあの時のトラウマはまだ拭えきれてないのか、女の子として見られたいという気持ちは未だにとても強い。
普段歩いていて男子の視線を感じる時も、今のように性的な目で見られる嫌悪感に勝ってしまうことが度々ある。
これが好ましいのか好ましくないのか、私には分からなかった。
ともあれ準備運動が終わった。

「よし、じゃあ今日は一人一人体力を確認するぞ。５０メートル泳いでみろ！」
うちの学校は水泳部もあるので、水泳部仕様の５０メートルプールになっている。普段は水深が２メートルだけど、飛び込み廃止もあっ

て５０センチ位クッションで嵩上げされている。
というか２メートルもあったら間違いなく泳げない子は溺れちゃうし。
生徒が泳いでいく、３０メートルほどで力つく子もいるし５０メートル泳ぎきる子もいる。水泳部の一人はバタフライで泳ぎきって歓声が上がった。
「よし、次！　石山！」
「は、はい」
私の番になる。水に浮いて壁を蹴りスタート。
私は一番楽な背泳ぎを選択、しかし……
「はぁ……はぁ……」
だ、ダメだ！　３秒と持たない！　というか全然前に進めない！
「むぐ……ぶくぶくっ……がはっ……！」
し、視界に……水がっ……！
「ま、まずい！　優子ちゃん溺れる!!」
桂子ちゃんの叫び声とともに、近くに居た誰かがとっさに私の手をつかむ。
「ぷはっ……げほっ……ごほっ……ご、ごめんなさい……し、篠原くん、ありがとう！」
篠原くんになんとか引っ張り上げてもらう。その後の彼は顔をそらしてしまった。
仕方ないのでプールを見る。自分の身長よりも泳げてないことに気付かされた。
「よし、大丈夫だな……次！　木ノ本！」
「はい！」
木ノ本桂子が泳ぎ始める。
体育の授業では、普通ならば運動音痴はバカにされる対象だ。でも私はそうなってない。
理由は一つ。私のその運動音痴ぶりがあまりにもあんまりだからだ。
私の体育での悲惨な成績の数々。それはバカにすることさえ憚ら

れる。可哀想という感情。
今でこそ、女の子に望んでなろうとしている。でも、最初はそうじゃなかった。
それがより一層の同情を生んでいるんだろう。それは遠い国の地雷で足を失った子供に対する同情心と同じかもしれない。
でも、同情されてもいいと思った。
昔ならそんな同情をされたら怒ってただろう。
でも、私は強くある必要なんてもう無い。弱くていい。私は女の子だから、弱いのは当たり前だもん。
もしピンチになったら、さっきみたいに、助けてもらえばいい。
桂子ちゃんの泳ぎを見る。
クロールで苦しみつつも、５０メートルを泳ぎきっている。
そして、恵美ちゃんの泳ぎ方は雑だが、体力に任せ、息の一つも乱さずに５０メートルを泳ぎきった。
「よし、今日はここまで！　今日の水泳テストの結果で、皆それぞれの組を決める。シャワーを浴びて解散！」
まずは女子からシャワーを浴びる。
ここは１０秒待機する必要がある。
ううう……ちょっと冷たい……
でも身体洗わないといけないからなあ……
ともあれ、持ってきたタオルで身体を拭く。スクール水着は水はけが良く、乾くのも早い素材になっているのが幸いだ。
ともあれ、女子全員で女子更衣室に入る。
水着を乾かしてから着替える必要が有るため、ドライヤーもある。
髪の毛が長い私は特に念入りに乾かさないといけない。水泳帽とは言え全く濡れないということは難しい。
念入りに乾かしたら、他の女子とともに制服に着替える。
カリキュラムの通りに、まずはスク水の上にブラを付ける。
シャツとブラウスを着て、胸パッドを外して中で肩紐を外し、下までずれ落ちないように気をつけながらスク水を脱ぎ始める。
そしてスカートを手に取り穿き直し、スク水を全部脱ぎ、パンツを

穿いて、最後にシャツとブラウスをスカートの中に入れてこれでＯＫだ。
そして最後に頭のリボンと制服のリボンを付け、整える。
……よし、着替え終わり！
「優子ちゃんすごいね！　脱ぐときは見せちゃう子いるのに」
桂子ちゃんが褒めてくれる。
「へへ、永原先生のカリキュラムにあったんだ」
「ほほう、そうなんですか」
「制服の着付けの他に体操着やスク水への着替え方もありましたよ。話さなかったっけ？」
「うーん、忘れちゃいました！」
ま、まあそうだよね……いちいち覚えていないのも無理はない。

全員が着替え終わったことを確認し、外に出る。
しばらくして予鈴が鳴った。
「少し急ごうか？」
「そ、そうね……」
私達は、次の６時間目の授業への準備に取り掛かるべく、教室へと急いだのであった。

# 林間学校実行委員

小谷学園では7月の末、夏休みの直前に林間学校がある。
先生たちの間では、「サマースクール」とか「サマーキャンプ」とか、色々な言われ方をしているけど、私を含めて大勢の生徒は「林間学校」で統一している。
で、最初のプールの日の翌日、水曜日の1時間目に行われる「ロングホームルーム」では、各クラス男女それぞれ1名がそれぞれ実行委員として選ばれることになっていた。
また、実行委員が不調などに陥った時のため、代理のサブリーダーが男女2人ずつ居るみたいだが、こちらは滅多に出てこない。
「はーい、それじゃあロングホームルームを始めますよー」
永原先生の号令でロングホームルームが始まった。
このロングホームルームでは林間学校のオリエンテーションも兼ねていた。
……で、まずは3泊4日のこの林間学校についての詳細が述べられた。
バスへの集合はいつものホームルームの始まる時間で、その時は私服だそうだ。
現地までは途中サービスエリア2箇所で休憩と昼食、時間はパンフレットに書いてある。
休憩時間は1時間で事前に学校の出す昼食かサービスエリアで自由に食べるか選べるらしい。予約をしないと、学校の出す昼食は食べられないというのは去年と同じだ。
締め切りまでは時間があるから、このあたりもゆっくり考えよう。
サービスエリアの案内パンフレットも「欲しい人には自由に取っていいから後で取りに来るように」というのも去年と同じ。
その後、2日目、3日目と様々なイベントが行われている。2日目には登山もあるらしい。
登山の内容を見てみる。去年より少し距離の長い山、今から不安になる。

この体で１０００ｍ級の山の登山なんて無謀だと分かっていた。かと言って登る前から「無理」と決めつけてしまうのもあんまりな気もするのだ。
体育の先生や永原先生なら理解してくれるだろう。いや、もしかしたら登山する前から体育の先生に止められるかもしれない。
３日目はミニゴルフや森林での自然学習、更に天文台に行ってバーベキューもするらしい。
林間学校は服装自由だが、「登山や森林に問題ない服」であることが望ましく、「服選びに迷ったら体操着にすれば無難」というのも去年と同じだった。
そして最終日は日の沈まないうちに帰ってくる。途中行きと同じサービスエリアで昼食。というもので、この林間学校が終わると、いよいよ私たちは夏休みに入る。
夏休み中は一人で過ごすことが大半だった。たまに家族で旅行に行くこともあったが、それだけだ。
でも今年はどうだろう？　女の子になって、色々な所に行きたいなあと思った。
最近は外国人観光客も多いから、そういう人たちに知られていない所にしていきたい。
「はい、これで林間学校の流れは以上になります。何か質問ありますか？」
「はい」
「はい石山さん」
「バスの座席と部屋割りはどうなってますか？」
「そちらに関しては……今年はまだ決まってません。追って連絡しますのでもう少し待っててください」
おかしいな、こんな年なかったのに……
……うーん……まあーいっか
「それじゃ、残り２０分くらいなので男子と女子に分かれて実行委員とサブを決めてください」

「はーい！」
教室が見事に男女に分かれる。これまでも、クラスが男女に分かれるということはよくあった。
その時は、男子は優一時代の私にびくびくし、女子はさらに２グループに分かれ、喧嘩をすることが常だった。
今は違う。男子たちは優一という足かせがなくなったために早々にくじを作りはじめた。

私たちは話し合いなのだけど……

「あたいは桂子がふさわしいと思うぜ」
「え？　そうかな、私こそ恵美ちゃんの方が私よりいいと思うけど……」
「まあそう遠慮すんなって！　あんたには優子の件で借りがあんだよ。だからここはあたいに花を持たせてくれ！」
「そ、そっちこそ！　リーダーシップはあるじゃない！」
「何なんですかねこの譲り合い……」
「喧嘩するよりはいいんでしょうけど……」
このように今回の実行委員は相手の方がいいと言ってきかない。
もちろん、どちらかの所属の女子でも同じことだ。
仲直りしたのはとてもいいことなんだろうけど、こうお互いにいい人になりすぎるとそれもそれで悪い時もあるという典型的なパターンだ。
「恵美ちゃんは普通の女の子にない強さを持ってるのよ。男と実行委員するなら私より恵美ちゃんのほうがふさわしいわよ！」
「桂子は美人だろ？　男をたらし込んでうまく女子の負担を減らせる役割はあたいには無理だぜ！」
何なんだこの尊敬合戦は……
……この喧嘩、今世界で起きてる喧嘩の中でも、最もくだらない喧嘩だと断言できる。

「あ、あのお……」
「お？」
「どうしたのさくらちゃん？」
　それを止めたのは志賀さくらだ。大人しいさくらちゃんにしては珍しい。
「その……私……」
「うんうん」
「……実行委員は……私達の代表は、優子さんがいいと思います！」
「え!?　あたしぃ!?」
　いきなり推薦された私はびっくりして思わず声を出す。女子全員が私を見る。
「そっか……その手があったか！」
　恵美ちゃんがずっと引っかかっていたことが解決したかのような態度を見せる。
「ええ、そうね。優子ちゃんは元々どちらのグループでもないからね。それに私と恵美ちゃんでサブリーダーやればぴったりですし」
「で、でも私……」
「むしろ、優子さんだからこそですよ！」
　龍香ちゃんが私を指差して指摘する。
「ど、どういうこと？」
「ほら、林間学校とか風呂があるじゃないですか。優子さんならスケベな男とかを見破れそうですし！」
「い、今時そんな単純な――」
「でもさ、優子以外だと譲り合っていつまでも決まりませんよ！」
　虎姫ちゃんも催促してくる。
「そ、そうね……」
　周囲の女子たちの視線を見て悟った。これはもう詰んでいるということに。どうしても受け入れるしかなさそうだ。
「はーいお前実行委員なっ！　で、サブはお前と……お前！」
「あーくそー！　運が悪い！」

「ふう俺じゃなくて良かった良かった」
男子陣はくじで実行委員を決めたらしい。メンツのためになりたがり、あまつさえ譲り合う女子と面倒くさいからと嫌がる男子。何とも対照的な両集団だ。

「はーい、じゃあ時間も時間なので元の席に戻ってくださーい」
永原先生の号令の下、全員が元に戻る。
「それじゃあ、実行委員に決まった人は手を上げてください」
「「はい！」」
私は手を上げる。そして教室を見渡す。
なんか教室の空気が微妙な気がする。
手を上げたもう一人の男の子と目が合う。
「……」
「えっと、石山さんと、篠原君ですね」
篠原くんがまた顔をそらす。よっぽど罪悪感があるのだろうか。
「あ、あの！」
私が声を出す。
「篠原くん、実行委員、よ、よろしくね！」
「ぁ……」
何か口を開いて言葉を発するが聞き取れない。
「え、えっと……よよ、よろしくっ！」
「篠原くん、人に話すときは相手の目を見て話してくださいねー」
な、永原先生、それはちょっと意地悪だと思うよ……
永原先生に促され、篠原くんが私のもとに振り替える。
「よ、よろしくお願いします！」
意を決した篠原くんが大きく声を上げる。
「うん、よろしくね。決まったことだし、お互い悔いなくやりましょう」
「はーい、じゃあ着席してくださいねー」
永原先生に促され、着席をする。
「えっとじゃあ次はサブリーダーの人手を上げて下さい」

恵美ちゃんと桂子ちゃん、そして男子二人が無言で手を上げる。
永原先生がそれを記録していく。
「それじゃあ、実行委員の2人は今日の放課後に視聴覚室に来てくれる？」
サブリーダーはあくまで予備という名目で、まず普通の人と同じなため、必要になったら都度するべきことを先生が説明するということになった。
「はい」
「う、うん」
なんか篠原くんはぎこちない返事だ。まあ確かに、気まずい組み合わせなのは否定しようがない。
もうあの日から1か月半前、もういじめてた期間の倍以上の時間が流れている。
傷つけるのに必要な時間と、傷を治すのに必要な時間の違いということなのだろう。私は女子の仲間がいたから立ち直れたけど、もしかしたら篠原くんには仲間がいないのかもしれない。
高月くんは……あの後も友人であり続けているけど、私のケースとも違うんだ。そう思うとちょっと可愛そうに思えた。
ともあれ、放課後、実行委員のオリエンテーションがあるはずだ。決まったことはしょうがないし、2年2組女子を代表して全力でやっていくだけだ。

放課後、私は天文部の部室ではなく視聴覚室へと向かった。坂田部長には桂子ちゃんの方から話してくれるそうなので心配はない。
1学年は4組あるので男女8人の実行委員が視聴覚室に集まる。女子に比べると、男子の表情はなんとなく暗い感じがする。
男女各1人ということで、会話は少ない。
2組の女子ということで、私は左のテーブルの左端に座る。
数分後、篠原くんが空席を幾つか挟んで隣りに座る。相変わらず私には視線を合わせてくれない。
「篠原くん、どうしたの？　私の目をちゃんと見てよ」

「ううっ、やめてくれ……」
「まだ辛いの？」
「あ、ああ。むしろあの時よりもずっと辛い」
背中から、彼の真意を知ることは出来ない。男は背中で語るなんて言うのは嘘っぱちだ。
「どうして？」
「そ、それは……言えない……それだけは、勘弁して欲しいんだ……」
「それじゃあ困ったわねえ……」
本人もひどく混乱している。本来の性格と、私が引き出してしまった歪んだ性格の間で揺れているのは確かだ。
いずれにしても、好ましい状況ではないのは鈍感な私にも分かる。とは言え、実行委員になれば、嫌でも面と向かって話さざるを得なくなる機会は出る。じっくり待ったほうが良さそうだ。
「でも、これだけは覚えておいて。もう私はとっくにあなたのことを許してるってこと、もしどうしても罪に耐えられないなら……私も一緒に償っていきたい。元はと言えば私があなたを歪ませてしまったってこと。忘れないで」
「なあ、石山……お前、本当に石山なのか!?」
「うん、私は石山優子だよ」
「本当変わったな……もうすっかり、お前は名前通りの『優しい子』だよ……でも、それならなおのこと、俺のことは許さないでほしいんだ」
「どうして？」
「……ごめん、そこまでは言えない……ただ、俺はまた、罪を重ねてしまったんだ！」
信じられない言葉が出る。あの時以来、重ねた罪なんて全く身に覚えがない。まるで犯罪をしてないのに犯罪をしたと思いこんでいるようなものだ。
「つ、罪ってなんの罪よ!?」
「……言ったら、軽蔑される」
「そ、そんなことないわ！」
しかし、篠原くんは首を横に振った。

「それに、俺自身、石山にこのことを言うのは……耐えられないんだ！」
「……そう、分かったわ。無理には聞かないわよ。でも、実行委員に決まった以上、あたしを避けては通れないわよ」
「うん、分かってる。それだけは肝に銘じておくよ」
「ありがとう……」

「はーい皆さん、こんにちはー。今年の2年生林間学校担当の永原マキノです。よろしくおねがいします」
「「よろしくお願いします」」
微妙にずれたタイミングで、挨拶する。
「ではですね、実行委員の皆さんに、してもらいたいことはですね――」
永原先生が説明を始めた
「まず初日です。先生と一緒に、ちゃんと全員いるかどうかを確認して下さい。欠席者等が出たらその時に話します」
「他にも、全員がシートベルトを着用しているか、出発時やサービスエリアでの休憩時などに把握しておいて下さい」
その後も、実行委員でやるべきことを、永原先生がプロジェクターを使用しながら説明していく。
私はメモをとることに忙殺された。篠原くんも同じみたいだ。
実行委員のするべきことは多くて、意外と盛りだくさんの内容だ。
なるほど、男子が嫌うのも分かる。
対して女子、特に私の方は永原先生の説明を聞く限り、実行委員にはあまり嫌悪感がなかった。
篠原くんの場合、くじ引きで実行委員を引き当ててしまった。
これは完全に運が悪かったで諦めるしか無い、どうしようもないことになる。
しかし、私の場合はある意味女子たちの話し合いの結果の政治的妥協という「拠り所」があった。この差は大きい。
私はで、運というのはあまりにも残酷なことがあるということを知

ることが出来た。
それに、私が実行委員にそこまで大きな警戒心を抱かない理由がこの身体だ。力が必要なのは男子に助けてもらえるだろうという期待もあった。
でも、懸念しているのが登山だ。ここはひょっとしたらサブリーダーに代役を頼まなきゃならないかもしれない。
他には毎日のお風呂の時間管理、小さなホテルを私達が貸し切ってるので、林間学校に珍しく実は風呂の時間は各自自由、それこそ深夜でもＯＫという緩さっぷりなのだが、一応掃除の時間は入れないのと男湯女湯の時間がそれぞれ３時間毎に交代のため、そこら辺の事故は絶対に防がねばならないのだ。
ちなみに、食事の時間も各自２時間の間で自由になっているが、こちらは単純に食堂のキャパシティーの問題もあるそうだ。
小谷学園はとにかく自由だ。創設者の遺言によるものらしいが、結果的に小谷学園は全国的にも「校則の緩い高校」として有名だそうだ。
受験生の間では、あまりの緩さにかえって敬遠されるなんて話さえあるくらいの高校だ。
実際、生徒は昼休みの昼食を外で食べようが、帰りにゲーセンに寄ろうが、髪を染めようがどんな髪型にしようが「他人に迷惑をかけてないから」という理由でＯＫだ。
制服にしてもスカート丈や着崩しであれこれ言われることは絶対にない。というよりも、厳密には制服を着なくてもいい。小谷学園は一時制服廃止を検討していたそうだが、実は大半の生徒の方が「ファッションで迷いたくない」という「実用的」な側面で「学校側に要望」する形で残っているそうだ。現に私服で登校している生徒は誰もいない。
このあたり、高校野球の坊主問題と似た構図になっている。
……その割には、永原先生が私にしていたカリキュラムはスパルタだったけど、あれは女の子としての振る舞いだし校則とは全く別だ。
ともあれ、こんな緩い高校だから、昔の私も乱暴が出来たとも言うし、生徒の秩序も下手な校則が厳しい高校よりもよっぽど整えられて

いるとも言える。

それはともかく、永原先生が最終日にすることを説明し始めた。

こちらは、バスの人数確認など実行委員の仕事は1日目とあまり変わらない。

解散後はそのまま夏休みというのも同じ。これを利用して、そのまま家族と合流して旅行を継続する、何ていう人が毎年学年で何人か居るらしい。

「以上で、説明は終わりです。何か質問ありますか？」

誰も手を挙げない。

「じゃあ今日はこれで解散です。来週は実行委員同士で話し合いになります」

今日は7月5日、来週の水曜日が7月12日、7月18日に一旦夏休み前の調整と称した全校集会を行い、そして7月19日から22日までが林間学校だ。小谷学園では2学期制を採用していて、終業式は9月になっている。

そして林間学校が終わればそのまま8月31日まで夏休みというのが小谷学園のスケジュールだ。

これから実行委員で何が待ち受けているのか、不安と期待を抱え、あたしは最初の実行委員集会を終えた。

## 永原先生の望み

「あ、石山さん、ちょっといい？　篠原くんも」
「ど、どうしたんですか？　永原先生？」
　他のクラスの実行委員が帰り始めた頃、永原先生が私達を呼び出した。
「実は部屋割りとバス割りの件なんだけど……」
「う、うん」
　嫌な予感がする。
「実は、また小野先生が抵抗してて……石山さんを教師たちの部屋……というよりも私の部屋に入れたがるのよ」
　やっぱり……！
「ど、どうして？　小野先生なら永原先生が弱みを握っているはずじゃ――」
「そのはずなんだけど、教頭先生から圧力をかけられたとか何とかで……」
「つまり後ろ盾ってこと？」
　黒幕は教頭先生ということか……
「そうみたいなのよ。全く、本当に……往生際の悪い子よ」
「先生！　先生が何で小野先生の弱みを……！」
　篠原くんが疑問に思う。
「篠原君、それは話すと長くなるけど……きっとあなたを救うことにもなるから、聞いてくれるかな？　石山さんも」
「え、うん」
「はい」
「……篠原君、石山さんってちょっと変わった女の子でしょ？」
「え？　何でその話を……確かに、石山は男から女になったけど……」
「ＴＳ病って有史以来全世界で発症者は１３００人くらいしか居ない珍しい病気よ……」
「それが一体？」
「まあ聞いてよ……実はこの学校にはもう一人ＴＳ病の患者がいるの

よ」
「ええ!?　だ、誰ですか!?　ま、まさか……」
　篠原くんが驚きの表情になる。
「そうよ、今篠原君の目の前に立ってる。私、永原マキノのことよ」
「じゃあ……先生が３０歳ってのは……」
「世間向け……いいえ、小谷学園で働くための建前のものよ……小野先生の弱みは、私がかつて小野先生の小学校時代に担任をしてたこと。小野先生がその時手がつけられないくらいイタズラを繰り返す悪ガキで私によく叱られてたってことよ」
「で、でも小野先生って５０代じゃ……永原先生は一体……」
「私の本当の年齢は……やめておくわ、信じてもらえるわけないもの」
「そ、そんな。でも知りた――」
「篠原くん、女性には年齢を聞いちゃだめよ！　いいね!?」
　私がちょっと強く注意する。
「あっはい」
　永原先生は実は４９９歳で元真田家足軽だったなんて言ったってしょうがないもんなあ……
　ともあれ永原先生は続ける。
「ところで、先生も同じ病気ってことはもしかして石山のこと?」
「いい着眼点ね。そうよ、石山さんを女の子らしくするために私とお母様で教育したわ」
「どうしてそんなことを?」
「篠原くん、それはさっきの話しより長くなるわよ」
　私が注意する。
「ああ、構わない。石山と、先生の関係を……俺は知りたい。そうしないと……俺は罪を償いきれないと思う」
「……篠原君がそこまで言うなら教えてあげる。私が石山さんを教育したのは単に担任だったからってだけじゃないわよ。私は教師以外にもう一つの顔があるの……私は『日本性転換症候群協会』の会長なのよ」
「な、何ですかその日本性転換なんとかってのは?」

篠原くんが驚く。
「私達ＴＳ病患者で作る団体よ。ＴＳ病の社会理解を深めるという意味で１００年位前に私を会長に作られたわ」
「え？　１００年前から生きてたんですか!?」
篠原くんの表情から更に驚愕の色が強まる。
実際は１００年じゃ効かないわよ篠原くん……
「おっと、これはいけない。ところで、ＴＳ病って医学的な正式名称なんていうか知ってる？」
「え？　知らないですけど……」
「じゃあ教えてあげるわね、正式名称は『完全性転換症候群』よ」
「か、かんぜん!?」
「そう、実はね、元々は単に『性転換症候群』って言われていたのよ」
「……あの……どうして変わったの？」
今度は私が質問する。
「私が政治的な圧力を医学界にかけたからよ」
「永原先生は、どうしてそこまでしたの？」
「……この病気になるとまず生理が来るようになる。もちろん私もまだ来てるわよ」
「更に赤ちゃんを産むことだって出来る。ホルモン分泌だって女性ホルモンになるし、通常は男性が出来ない『女の子座り』もできるようになるわ。私達は『完全な女性』になるのよ」
確かにそうだ。女の子座りのカリキュラムもあった。あんまり使ってないけど。
「身体的には、男性としての特徴は何一つ残さないわ。だから、私達『日本性転換症候群協会』の会員のみんなは『女性』であることを誇りにしているのよ」
「じゃ、じゃあ俺は……ああ、俺は……なんて事を!!」
また篠原くんが頭を抱えてうなだれている。
「……篠原君、石山さんはもうとっくにあなたのことを許しているのよ。これ以上罪悪感を見せると、石山さんをかえって傷つけちゃうわよ」

「で、でも……だって！」
「篠原くんは知らなかったんだもん。仕方ないよ」
　私もなだめの言葉を出す。
「気持ちは分かるわ。でも今は私の話を聞いてくれる？　次の問題、そもそも『どうして』私達は自分たちが『女性』であることにこだわるようになったと思う？」
「もしかして、男だと思うと――」
「そう、この病気になると『男に戻りたい』と思ってしまう患者がとても多いわ。でもそうやってもがいた患者は……みんな有り余る寿命を捨てて、自ら命を絶っていったわよ。特に現代なんてなまじ性転換手術なんてものが出来てしまったせいでね……女性であることを支えにしなければ、私達は生きていけないの」
「だけど、そういう上で立ちふさがるのが、小野先生のケースよ」
「ど、どういうこと？」
「ちょっと前にＬＧＢＴという言葉が流行ったでしょ？　実はその推進団体が私達をその仲間に入れようなんて言う運動を、もちろん私達に相談もなしに勝手にし始めたのよ」
「以前から似たようなことがあったんだけどね……私達はね、性同一性障害で性別適合手術を受けて性別が変わった人とか、単なる女装者やいわゆる男の娘なんて言われている類とは全く性質が異なるのよ」
「もちろん、今までも数多くの患者が性同一性障害に陥ったわ。もしかしたら……いや、まず間違いなく半数以上はそうだったわよ」
「でも男に戻りたいとＬＧＢＴのＴに進んだ患者はみんなすぐに死んだわ。今長く生きている私達は……女の子になる決意をした私達はそうじゃないの」
「で、でもこの病気はちゃんと理解しないと、昔の俺みたいに――」
「篠原君、私達に難しい理解はいらないのよ。私達が欲しいのはただ一つよ。それはね……普通の女性としての扱いよ。生理が来て、妊娠し、出産できる。老化しないということを除けば、私達は他の女性と何ら変わらないの」
「私達が欲しいのは性的マイノリティーとしての権利じゃないわ。世

界の人口の半分存在する、彼女たちの一員になりたいだけなのよ。トランスジェンダー扱いはゴメンだわ。見た目通りの扱いをして欲しいのよ」
「……」
　篠原くんも私も、永原先生の話に聞き入っている。
「でも、教頭先生や小野先生はそれを理解しようとしないのよ。むしろ高月君や篠原君のように、悪意を持って理解しないように振る舞うよりもずっと罪深いことなのよ」
「ど、どうして？　善意なんでしょ？　それがどうして俺より罪深いことになるの？」
「……篠原くん、あなたは私をいじめた時、心の奥底、本心では私のことを男だと思ってた？」
　ここは私が補足する。
「え？　うん、だって……俺は悪意を持って、石山を男だと……」
　私と永原先生は首を横に振る。
「いいえ、篠原君、あなたも心の奥底では石山さんを女性だと思っていたわよ。もちろん、すぐに決めかねた田村さんも、あなたと一緒にいじめていた高月君も最初から、ね」
「どうして、どうしてそんなことが……」
「……篠原君が今、反省して贖罪の日々を送っているからよ」
「本当にひどいのは、篠原君や高月君が石山さんにしたことを『石山さんのためになる』と思いこんでる人のことよ。それは『石山さんをいじめたい』と思って同じことをするよりも、ずっと、ずっとずっとずっと、ひどいことなのよ」
　永原先生が思いを打ち明ける。
「あたしは元は男でも、ちゃんとした一人前の女の子になりたいのよ。だからこそ、みんなにもあたしのことを女の子として扱って欲しい。それが私の願いよ」
　私も思いを打ち明ける。
「石山さんだけじゃないわ。私も……いえ、私達ＴＳ病を受け入れた全ての女性たちの願いよ」

「石山……永原先生……」
「小野先生や教頭先生は……もう並の女性よりも遥かに長い間女を続けてる私はともかく、石山さんのことを本心から男とも女とも付かない存在だと思いこんでいるわね。こうなるともう力と力のぶつかりあいよ」
「じゃ、じゃあ……」
「ええ、あなたは罪深く思う必要はないわよ。悪意者が悪意の自覚を持ってする悪はたかが知れているわよ。善意を持ってする悪事こそ、偽善こそが真の巨悪なのよ。あなたのしたことは、悪だとしても小さな悪よ」
「そういうものなんですか？」
　篠原くんはまだ納得しきってない。
「……ええ。篠原君や石山さんは生まれていないからわからないかもしれないけど、今にして思えば、赤穂浪人とか典型的だったわね」
　うん？　赤穂浪人？　赤穂浪士のことか？　そんな悪い人たちだったっけ？
　……まあいっか。
「で、でも……」
「実際、あなたはとっくの昔に反省してるのに、小野先生や教頭先生は未だに抵抗してるでしょ？　そういうことよ」
「……さ、長く引き止めちゃったわね。もう行っていいわよ」
「失礼します」
　私は一言言って、篠原くんは黙って、それぞれのところへ帰っていく。

「2年2組石山優子さん、2年2組石山優子さん、職員室まで来て下さい。繰り返します、2年2組石山優子さん、2年2組石山優子さん、職員室まで来て下さい」
　視聴覚室から天文部室に寄る前にトイレに行き、それを済ませた直後だった。どうも体育の先生からしい。
　仕方ないので一旦職員室を経由するルートに変更する。

コンコン
「失礼します」
「あ、石山。呼んだのは私だ」
「はい、先生。私、何かしちゃいました？」
「あ、ああいや！　そういうことではないんだが……」
「どうしたんですか？」
体育の先生は何かとても言いにくそうにしている。
「実は……だな……体育の補講を受けてほしいんだ」
「え？」
補講……覚悟してはいたけど……
「実は高校の体育は普通運動音痴だからって落第にはしないんだ。真面目に取り組んでいるかどうかっていうのが重視されるし、成績が悪くてもそれだけで十分卒業できるんだ」
「ただ、石山の場合は……言いたくはないがあんまりにひどい。いくらやる気が重要だと言っても流石に限度を超えているんだ」
「……実は私も自覚がありました」
正直に伝える。
「それに、今年始めに体力テストをしただろ？　あれがまだ男の頃のままなんだが、それも合わせて更新したいんだ」
「……分かりました」
「あー補講の内容も、石山のに合わせて水準をかなり下げているから心配しないでくれ。補講の日程は林間学校の直後辺りになるけど構わないかい？」
「は、はい」
「詳しくは追って連絡するよ。引き止めてすまないな」
「い、いえ……失礼します」
体育の補講かあ……具体的には何をやるんだろう？
私の水準に合わせてやってくれるということだったけど。後は体力テストか……
体育以外の成績は、男時代のものをそのまま使えるだろうが、体育はそうもいかないということか。

水泳も散々だったしなあ……溺れかけてたし。
ともあれ、もうあまり部活する時間も少ないけど、天文部へ行こう。

コンコン
「はーい」
「失礼します」
私はドアを開け、天文部の部室に入る。いつものように桂子ちゃんと坂田部長がいる。
「桂子ちゃん、呼び出されてたけどどうしたの？」
「じ、実は、体育の先生に呼ばれてて」
「え？　またどうして……」
「夏休みに補講受けてほしいって」
「え？　運動音痴なだけじゃ補講にならないんじゃなかったの？」
「そうですわよね」
「体育の先生が言うには、基本は確かにそう何だけど、あたしはどうもその限度を超えているってことみたいよ」
「た、確かに優子ちゃんはそうなるかもしれないわねー」
「で、でもそんな話、聞いたことありませんですわ」
「優子ちゃん、走り幅跳びでさえ2メートルを超えるのがやっとで、球技大会でもただでさえどんくさいのにすぐに息が切れるし、おかげでハンデが必要になったのよ。昨日から水泳の授業になったけど、優子ちゃんは背泳ぎでさえ自分の身長分も泳げないで溺れてしまったのよ」
「そ、それはすさまじいですわね……それにしたって球技大会でハンデなんて……そういえば私が1年生の時、一人聞いたことがありましたわ。その時は得点2倍程度でしたけど……」
「私の時はそれだけじゃなかったわ」
私は球技大会の時に受けたハンデを坂田部長に話す。
「し、信じられませんわ！　そんなハンデを課してあげないと楽しめないくらい身体が弱いって……」
やはり坂田部長も驚いている。

「分かりましたわ。確かにそこまでなら、補講が必要というのも頷けますわね」
「うん、私もあまりショックじゃなかったよ」
「優子ちゃん、覚悟できてたってこと？」
「ま、まあね……私も実際体育のせいで卒業できないんじゃないかって思っちゃったし」
「授業にちゃんと出てて態度も悪くないのに体育で落第するだけでも前代未聞でしょ……」
「まあまあ、決まったことは仕方ないですわ。さ、そろそろ天文部の活動を始めるわよ。今日は恒星のミニチュアを作りますわ」
「「はーい」」

桂子ちゃんはよくわからない繊維状のものを取り出してきた。
「これを球体にするのよ。この大きめのボールが太陽の代わりだから、それに合わせて作るわよ」
「石山さんには、シリウスとプロキオン、それからケンタウルス座α星Aを作ってもらいますわ」
シリウス、プロキオン、私でも知っている星ね。
「直近12光年で太陽より大きい星はこれだけよ。太陽より小さな星々は私が作るわね」
「ケンタウルス座α星Aっていうのは？」
「プロキシマ・ケンタウリの主星だよ。ケンタウルス座α星Bっていうのもあるわね」
「じゃあプロキシマ・ケンタウリはケンタウルス座α星Cとも言うの？」
「うん当たり、プロキシマ・ケンタウリはこの2つの星からは少し離れているわよ」
「桂子ちゃん、この小さな玉は？」
「これ？　これは系外惑星よ。さすがに縮尺はデフォルメするわ」
「そうなの？」
「今回は恒星の位置と大きさの比と距離を重視しますわ」

「そうですか……」
まあ、宇宙の本当の縮尺にしたらこの部屋じゃ足りないことくらいは分かる。
「まずはシリウスから作ってくれる？　シリウスは白だから色を塗る必要はないわ」
「はーい」
私は繊維質の物質を丸め始めた。
「あ、優子ちゃん！　シリウスの大きさを調べてちゃんと太陽と正確な比率にしてね！」
「あ、ゴメン……」
パソコンで調べる。シリウスっと
……えっとシリウスの直径は……太陽の1．7倍くらいか……
で、太陽があのボールだから……うおっ結構大きいな。この辺の太陽のご近所じゃ一番でかい星になるのか。

「それにしても桂子ちゃん……」
「何？」
「いま、今回展示する恒星の一覧を見ているんだけど赤くて小さな星って本当に多いんだね」
「そうね、暗くて目立たないけど、宇宙では一番多いのよ。小さい星ほど数が多いってことよ」
「以前言ってたよね。もしかしてシリウスって……」
「ええ、結構珍しいわよ。A型主系列星だからね」
A型ということは太陽の2階級上？　なのかな？

色々雑談しながらも、私達は12光年の星を作り始めた。距離の正確な位置等はまた別の機会に把握するみたいだ。
短い時間だったから、今日はシリウスの模型もほとんど作れなかった。

# 秘密の告白

金曜日、再び水泳の授業。前回は最初の水泳ということで、はしゃいだりとか色々遅れたりすることもあったが、2回目はみんなそこそこに落ち着いている。

でもやっぱり、スクール水着姿の女子は男子に刺激が強い。

特に私は去年まで居なかった。実は今日は一度更衣室の鏡でちらっと自分の水着姿を見たけどはっきり言ってエロい。想像以上にエロかった。これは男子には刺激が強すぎる。

スクール水着が身体のラインを強調していたんだけど、自分の裸は見慣れていたとはいえ……いや、裸じゃないからこそエロさが際立っていた。

このエロさはもしかしたら女子には分からないかもしれない。

いずれにしても、準備運動をする。

何人かの男子が私のことをじっと見ているのが分かる。というか他の女子は気付いていないが、私を見て大きくなってしまったことを、必死に誤魔化そうとしてる男子が何人か見受けられた。

「よーし、それじゃあ今日も泳ぐ練習だ。あ、石山はまずは水中を１００メートル歩いてみてくれ」

私用に更に嵩上げされた水深１３０センチになったプールのレーンを一つまるごと借り、ともあれまず５０メートルをなるべく早く歩く練習をする。そして、次に浮く練習をするらしい。

端的に言えば、これは小学生用のプログラムだ。

でも、正直に行って今のあたしでは、さすがに低中学年には勝てるだろうけど、高学年の女の子相手となると、体育で勝てるか怪しい。

そう考えれば、体育の先生の判断は残念でもないし当然のこと。

ふと、隣で思い思い泳いでるクラスメイトたちを見る。もちろん２５メートルはともかく、５０メートルを泳ぎ切るのは容易じゃない。

背泳ぎなら難なく泳げる子もいるが、発展的な子は平泳ぎやクロール、バタフライとなると様相は変わって来たり、あるいはタイムを競ったり、水泳部のと思わしき生徒がターンをしたりまでしている。

「はぁ……はぁ……」
　水ってこんなに抵抗が凄かったんだ……そうか、みんなが泳いでて、その影響で波が発生しているんだ。５０メートルからターンして３０メートル、合計８０メートルまでは快調に歩いていたのに、飛ばしすぎたのか少し息が荒れてきた。
　後２０メートル、しんどい。もちろん流石に歩けなくなるとか休みたいとかそういうレベルではないものの、１メートルが遠くなる。
　……とは言え、私は息を乱しながらも、５０メートルの端、スタート地点についた。
「よし、いいぞ。次は立ち泳ぎで水に浮く練習だ。下手にもがくと沈むから気をつけろよ」
「はい」
　ゆっくり、ゆっくりと足をプールの底から離す。
「ふう……ふう……」
　もがくなと言われたけど、それでも手が震える。反射的本能だが、意外に持っている。
　……そうか！　胸のおかげかも。これで何とか浮力を稼げているのかもしれない。
　とは言え、疲労のために１０秒もしないうちにプールの縁に手をかける。
「よし、頑張れ、練習すればもう少し持つぞ。次はビート板を使って泳ぐぞ。ほれ」
「先生、私にばかりつきっきりで大丈夫なんですか？」
「はは、心配いらないよ。皆もう高校生だからね、ほら、自主的に監視役をしてくれてる子もいるだろ？」
「う、うん」
「……石山、確かにお前はかなり体育の成績は悪い」
「もしかして、先生の教師人生の中でも？」
「ああ、おそらく１番だ」
「そっか、仕方ないよね……」
「……でもな。悪いなりに１歩でも進めばいいんだ。今まではあまり

にも悪すぎてその1歩が観測できないだけなんだ。それを観測できるくらいに持っていくことは出来るようになれるよ」
「あ、ありがとうございます」
そうだ、それでいいんだ。私は。
水中からビート板を使って泳ぐ。バタ足のやり方などは既に習っているから、そのあたりはスムーズだ。
私の場合、基礎的な身体能力が致命的にないから、とにかく少しでも省エネルギーを心がけないといけない。
しかし……
「はぁ……はぁ……」
予想したこととはいえ5メートルほどで疲れが来てしまった。間違ったバタ足をしていないのに全然前に進めない……
も……もうダメ……
そのまま溺れそうになり、ビート板にしがみついてやり過ごす。
「よしよし、最初は6メートルだな。じゃあ25メートルを目標に頑張ろうか！」
「う……うん……はぁ……はぁ……」
「よし、集合だ、大丈夫？　あがれるか？」
「な、何とか」
プールの縁に手をかけ、何とか上がる。お腹で呼吸する。
その間に、他の生徒も集合する。
「よし、みんな上達しているな。去年までの感覚を取り戻してくれればそれでいいからな。今日は解散！　シャワー浴びで着替えに入ってくれ」
「「はーい」」
私達もシャワーを浴びて、前回同様水着が乾いたのを見てスクール水着から制服に着替え直す。
「先生！　林間学校の座席と部屋割りはまだですか？」
桂子ちゃんが帰りのホームルームで挙手した。
「木ノ本さん……その……」

「永原先生！　私からもお願いします。何が起きてるのか、クラスで共有して下さい！」
　この問題は、クラスで当たるしかない。
「石山さん……分かりました」
　永原先生は、私と篠原くんに話した教頭先生と小野先生が抵抗していることについて話した。
　そして、善意のたちの悪さについても話していた。
「……ということがありまして」
「ふ、ふざけんな！」
　声のした方向を見る。恵美ちゃんだ。
「何故何度言っても、そいつらは理解しねえんだ！」
「田村さん、それは善意だからよ」
「おうわかったよ。んじゃあ……もう力と力の戦争しかねえよな」
「ちょ、ちょっと田村さん!?」
「もう、優子が男扱いされるのは我慢できねえ……あたいらは１７人だ。女といえども１７人だ。いくら男とは言え中高年の男２人……勝率は１００％だ」
「田村さん……何をする気!?」
　不穏な発言をしている恵美ちゃんに永原先生が問いかける。
「決まってんだろうよ、あたいら１７人で、あいつらが考えを変えるまで、ひたすら殴って蹴ってやるんだ！　死ぬ寸前までリンチを加えてやるんだ！　優子を男扱いすることは、優子に暴力を振るうことと同じだ!!!」
「だ、だからって暴力で返すのは……！」
「じゃあ他にどうしろってんだ!?　こんな頑固なやつは金槌で叩き壊すしかねえだろうよ！　アメリカの大統領だって、拷問は効果あるって言ってただろ!?」
「田村さん、小野先生は既に私が弱みを握ってます。教頭先生は……私にも策があります」
「一体どういう策なんだよ!?」
「教頭先生は、熱心な儒学者です。特に彼は長幼の序を重んじるタイ

プですから、彼のような存在にとって、私はいわば無敵です」
「ちょ、ちょっと待ってくれ先生！」
今度は高月章三郎だ。
「どうしました高月君？」
「永原先生は、先生方の中でも若い方で……確か３０歳なんじゃないんですか!?　何故長幼の序で先生は無敵なんですか!?　先生、俺達に何か隠し事をしているんじゃ……」
「私の本当のこと、知りたいですか？　信じてくれるとは思えないのですが……」
「……俺は信じるから、教えて欲しい。俺は最近、先生のこと、色々と怪しいと思ってるんだ。」
教室で「俺も」「私も」という声が聞こえる。特に永原先生がＴＳ病だということを知らない男子は知りたがっているようだ。
「……分かりました。特に男子の皆さんは知らないと思いますし……それに策を講じるためにも必要なことです……いいでしょう……私のこと、私の正体。全て教えます」
教室が少しざわつく。
「でもそうね……時間的な都合もあるから……悪いけど職員会議が終わってからでいいかな？」
生徒たちがぎこちなく「はい」と返事する。
「じゃあいったんホームルーム終わるわね。部活や委員会の人は、そっちに行ってください。ではホームルームを終わります」

ホームルームが終わる、恵美ちゃんたちは部活なので、女子の中では、今日は部活が休みだという虎姫ちゃんや、桂子ちゃんなど部活の緩い数人の女子が残っている。
男子の方は、高月くんと篠原くんを含め、大半が残っている。永原先生の正体についてすぐに知りたいみたいだ。
よく考えてみれば、永原先生の人となりを完全に知っているのは私と桂子ちゃん、そして龍香ちゃんだけだ。
他の女子と篠原くんは、永原先生がＴＳ病で、年齢も詐称している。

かつて小野先生の担任だったということまで。
篠原くん以外の男子からは、永原先生の３０歳は逆サバなんじゃないかと疑われている、美人で童顔で小柄な女性の先生という知識しかない。
私は残ってもしょうがないんだけど、周囲の反応を見たいので残っている……桂子ちゃんも同じか、あるいは新しい話が出てくるのを期待しているのかもしれないわね。

３０分くらい後、永原先生が教室に戻ってきた。
「あら、結構残っていますね……それでは、何故長幼の序を重んじる教頭先生に対して私が無敵なのか？　それを説明するために私の本当の生い立ちについて話します」
クラスメイトたちが永原先生に注目する。
「……ただ一つだけ言っておきますと……これから話す内容は正直に言って……第三者からすれば到底信じてもらえないと思うような話です。決して口外するなとは言いませんがむやみやたらに他人に口外しない方がいいと思います……私のクラスの生徒は別ですけど」
誰も言葉を発しない。永原先生の話に注力している。
「まず、石山さんがかかったＴＳ病という病気なんですが……皆さんも知っていると思いますが、この病気は突然男の子が女の子になり、老化しなくなる病気です」
「この病気はとても珍しいんですが、実はこの学園には石山さんの他に、もう一人ＴＳ病の人がいるんです……それが私、永原マキノです」
男子がどよめいている。そして次の核心部分。永原先生の「年齢」についてだ。
「私はかつて、鳩原刀根之助と名乗ってました。昭和６２年生まれの３０歳というのは、この学園で働く上での嘘の設定なんです……私の本当の生まれ年は永正１５年です」
普段は静かなクラスが、明らかにざわついている。私と桂子ちゃん以外、皆が思い思い周囲と会話している。
「あ、あの、先生！」

高月くんが手を上げる。
「はい高月君」
「あの……永正１５年って西暦に直すと何年なんですか？」
「……そこの古語辞典にもあると思いますが……１５１８年です」

この言葉を聞いた途端、教室中がどよめく。「嘘だろおい」「５００歳近いじゃねえか」「戦国時代じゃねえかよ」「信長より年上じゃん」といった声が聞こえてきた。

その後、永原先生は、あの時私に教えてくれた人生の経過を話し始めた。
「真田源太左衛門」に仕えていた伝令役の足軽だったこと。
２０歳の時に畑仕事中に倒れ、殺されないために隣村に逃げ出し、名前を変えて数年後に戻ったこと。
そのまま本能寺の変まで真田の村にとどまっていたこと。
全国放浪中に関ヶ原の戦いを見物したこと。大坂の陣後は江戸に住み、１６５３年に当時の４代将軍に拝謁が許されたこと。
主君の孫の真田伊豆守とも会え、大声で泣いてしまったこと。それを上様に許されて以来尊敬するようになったこと。
真田への再士官はかなわず、ずっと江戸城で働いていたこと。
これは知らなかったが歴代将軍のほか、黄門様で有名な「水戸中納言」の他に多くの大名や旗本とも面識があること。上様の命で永原先生のことは江戸城以外の文書に残さないように厳重に管理されたこと。
対外的には江戸初期生まれということになっていて、本当は戦国生まれなのを知っているのは歴代将軍と大名・旗本・江戸城の人々の他にはごく一部の心を許した人だけということ。
江戸城にずっと住んでいる女の都市伝説の正体は自分であること。自分の記録文書は江戸城を出る時に持ち出して自分の家に保管していること。
明治維新後は諸国を放浪し、教師を始めたのは１３０年前のこと。

１００年前に「日本性転換症候群協会」の会長になったこと。
今の名前になったのが３０年前だということ、それ以前には別の名前を名乗っていて、小学校時代の小野先生の担任をしていたこと。

永原先生の話が続くにつれ、生徒たちの口数も少なくなる。
「……以上が、私永原マキノが歩んだ本当の人生です。多分、私の与太話だと思ってる人も多いと思います。それでも構いません」

「せ、先生！」
今度は虎姫ちゃんだ。
「その、『真田源太左衛門』って誰ですか？　真田幸村のおじいさんってそんな名前だったの？　あと真田伊豆守ってのも誰のことですか？」
「……安曇川さん、私にそれを言わせるのは……どうか勘弁してもらえないかしら？」
「え？　何故？」
「畏れ多いからですよ。私の授業でもやったでしょ？　昔の中華文明では本当の名前を言うのは無礼だって。日本でも同じ習慣があるのよ」
「あ……」
そう言えば、永原先生は頑として諱を口にしていなかったことを思い出す。
「安曇川さん、目上の者でさえ、諱を口にするっていうのは褒められたことじゃないんですよ。ましてや、臣下の私が主君やその筋の方の諱を口にするなんて、切腹を言い渡されても文句言えないことですよ」
「す、すみません……」
「大坂の陣のきっかけになった方広寺の釣鐘事件があるでしょ？　あれだって、私は当時生きてたから知っているけど……はっきり言うけど非は豊臣方にあるのよ。歴史の先生が何と言おうが、徳川が一方的に強引な言いがかりをつけたっていうのは大間違いですよ……実際には諱を犯すっていうのは征伐の大義名分になるくらいに非礼なこ

となんです」
「他に何か質問は……はい、高月君」
「その、もしかして永原先生って世界一長生きなんですか？」
「ええ、少なくとも地球上で最長寿は私ですよ。２番目に長生きな人でも私の半分も生きてないですよ」
「ひょえー」
「他に質問はありますか？」
　一つ気になっていたことを質問する。
「……はい」
「永原先生は自分の年齢、どうやって証明したんですか？」
「いい質問ですね。私の本当の年齢は……ここの近くの大学にある蓬莱先生の科学的な検査で証明してもらいました……それより前、協会を立ち上げた時は……江戸時代大名だった華族の方も生きていらっしゃったのでスムーズでした」
「どういうことです？」
「私も詳しいことはわからないのですが、ＴＳ病も含めて、年齢を科学的に調べることはできます。私は４９９歳で間違いないということでした。もちろん、私の意向でむやみやたらに公開しないという扱いにはしてもらいましたけど」
「他に質問は……なさそうなら、これで解散よ。各自自分のしたいこと、するべきことに戻って下さい」
　永原先生はそう言うと、教室を出ていく。男子の中では「信じられない」「嘘だろ……」といった声が多く聞けた。
　私は桂子ちゃんと並んで天文部へ歩く。
「私も知らないこと多くあったなあ……」
「桂子ちゃん、あたしも、永原先生が水戸黄門とも面識があるなんて知らなかったよ」
「江戸城に住んでたってことはやっぱり大抵の大名や旗本たちのことは知ってたのねえ……」

とはいえ、桂子ちゃんには事前に教えていたのでさほど新しい情報はなかった。
それよりも、クラスメイト達の動揺が気になるところだ。
永原先生の話を聞いたクラスメイトたちは、話に参加しなかったクラスメイトに対して、当然今の話を話すだろう。
そうすると、いくらクラス外には話すなと言っても、絶対に噂になる……
「ま、まさか、永原先生は噂になることを見込んで……」
「うん、私も優子ちゃんと同じこと考えた」
つまり、「永原先生はＴＳ病で本当は戦国時代生まれ」という噂が学校で広まったところで、教頭先生に対して「長幼の序」を持ち出す。
そして、教頭先生に対して、女の子になろうとしているＴＳ病患者にとって、欲しいのは一人の女の子としての扱いであって、男性扱いや性的マイノリティ扱いは甚だ不愉快であることを提示するつもりなのだろう。

ガラガラ
「あ、木ノ本さん、石山さんいらっしゃい。遅かったけどどうしたのです？」
「実はちょっと永原先生の話があって……」
「永原先生がどうかなさいましたの？」
「実は優子ちゃんの林間学校での部屋割りの話なのよ」
「どういうことですの？」
「優子ちゃん、私たち生徒の部屋じゃなくて、先生の部屋に入れられそうになっているのよ」
「え!?　それはまたどうしてですの？」
「部長、実は……」
桂子ちゃんが私の身に起きていること、女の子として扱ってほしいことについて話した。
無駄なあがきだと思うが永原先生のことは話さないでいた。
「分かりました……確かに、一度染み付いたイメージはなかなか消え

ないものですわ。ましてや本人が善意でやっていると思い込んでいらっしゃることは……例え客観的にはどんなに独りよがりの偽善でも、本人目線からは行為を無碍にする不届き者にしか見えませんもの」
「それが善意が質悪く、それによって罪が深くなるという理由ですか？」
「……その通りですわ石山さん、まさに地獄への道は善意で舗装されているものですわ」
　私と桂子ちゃんは押し黙る。善意という大敵に、挑むことになるのだから。
「……さ、石山さん、木ノ本さん、天文部の活動を始めますわ。星のことを思えば、暗い気持ちもなくなりますわよ」
　坂田部長の声に目が覚める。そうだね、今は天体のことを思うことにしよう。

# 2人はＴＳ病

土曜日、母さんの家事を手伝いながら永原先生のことを考える。母さんのお料理教室は今も続いていて、私の腕も上達してきたので、私が料理全部を担当することがある。

そんな平穏な休日の中でも、私はやはり永原先生のことが気になってしまう。ついに、２年２組に向けて、自分の秘密をしゃべってしまったことだ。

永原先生は、今までは話しても信じてもらえないと思っていたから隠していた。無理もない。

永原先生は、これまで秘密の全てに関して、同じ病気の私にしかしゃべらなかった。私も永原先生の秘密は女子の中でも特に近い子にしか話したことはない。

「優子、だいぶ上達したわね。これでいいお嫁さんになれるわよ」

「母さん、お、お嫁さんって――」

いきなり振られて驚く。

「ふふっ、優子にも素敵な旦那さんが現れるといいわね」

素敵な旦那さん、男の子と恋愛するということ。

……女の子になったから必然のことだ。でも、でもまだ引っかかる。

男を好きになるというのは、私が身も心も完全な女の子になるための、最大の壁かもしれない。

でも、いつかは乗り越えられると信じたい。

今はまだ、分からないけど、これに関しては出会いと気持ち、そしてタイミングの問題になるだろう。

もし男の人を心から好きになれれば、恋心を抱くことができれば……その時私は、男の面影を完全に消すことが出来ると思う。

……でも今は、まだ遠い先のこと。頂上が見えない山に登るようなものだ。

とにかく、家事は一人暮らしでも重要になる。どちらにしても、今は母さんの下で家事を会得しよう。
問題の先送りではあるが、今はそのように考えることにした。

その夜、桂子ちゃんからメールが来た。
永原先生の正体について、例の話に参加しなかった女子たち全員に電話やメールを使い、あの後話した。とするものだ。
おそらく、男子グループも同じことをしているはず。
そう思いながら考える。
私を含め、１クラスに３２人もの人がいる、それだけいれば１００％口外する人が出てくる。永原先生は学校でも比較的有名な先生だし、その先生についての重大な秘密。絶対流したがりが出てくる。
そして、それが学校中で噂になる。問題は、この手の伝言ゲームでは必然的に尾ひれが付くことかもしれない。
例えば、本来の永原先生は真田家の一足軽だったわけだけど、真田家の隠し子だとか、ひどい時には真田信繁が女体化して大坂の陣の後逃れた、つまり永原先生は真田信繁本人だ何ていう説まで出るかもしれない。
……と、ここまで考えて私は思った。
そもそもこういう噂を流す目的は「長幼の序」を重んじる教頭先生に対する謀略のはず。
永原先生は、実は戦国時代から生きているということさえ広まれば、後は枝葉末節ということに気付いて、その懸念は杞憂だと私は判断した。
「……今は永原先生の策を信じるしかないっか」
永原先生は４９９歳。これまでも戦乱に明け暮れた時代を、ＴＳ病が不吉として殺されていた時代を生き抜いてきた。
明治維新を、２つの世界大戦をくぐり抜けてきた。
年齢も世界一ならば、くぐり抜けてきた修羅場の数だって世界一のはずだ。
今はただ、永原先生を信じ続けることが、あたしにできること。

迎えた月曜日、また一週間が始まる。
とはいえ、今週が終われば来週は終業式と林間学校だけになる。
これで一学期は終わり、後は夏休みに入る。そう思うと気は随分楽だ。
もちろん夏休み中も高校野球とかあるけど、うちの野球部は1回戦コールド負けがデフォだ。
……というよりも、うちの運動部は弱小で有名で、唯一の例外は女子のサッカー部と、更にテニス部だけだ。
恵美ちゃん、去年の全国大会の決勝でさえ6―0、6―0のダブルベーグルで優勝するもんだから、部活ではいつも練習相手は男子だ。でもテニス部も、その恵美ちゃんのワンマンチームだから団体戦では勝てない。
それよりも今大事なのは、永原先生と私のこと。
特に秘密を暴露した永原先生は、この学園での扱いも間違いなく変わってしまう。
私にとって永原先生は最大の理解者。もちろん桂子ちゃんや恵美ちゃんたちもとても大事な友達。
……でも、同じ境遇なのは、私にとっては永原先生だけ。私に、女の子として生きる上での大切さを教えてくれた人。
だから、永原先生の立場が悪くなるのは、あたしの立場が悪くなるようなもの。
それでも、永原先生は自分の秘密を暴露してでも私のために……偽善者と戦ってくれている。
……ううん、これは私のためだけじゃない。永原先生自身にも関わる問題なんだ。
そうだよね、同じ病気だもの。

色々な思考が頭のなかで交錯する中、学校に登校する。
下駄箱で1年生女子の話し声が聞こえてきた。
「ねえねえ、永原先生って、石山先輩と同じ病気だったんだってさ」

「えーうっそーマジ？　じゃあ永原先生って元男!?」
「全然そうには見えないわよねー」
「それがさー、永原先生って、本当は５００歳らしいのよ」
「えー!?　本当なのー？　人間が５００年も生きるなんてあり得ないでしょ！」
「でもＴＳ病になると老化しなくなるからあり得るんだってさー」
「信じられないわー」

２年の教室のある階へ移動し、いつもの２組の教室に向け廊下を渡る。
今度は他のクラスの男子たちが会話している。
「なあ、この学校で石山優子以外に元男の女がもう一人いるって話さ」
「え!?　もう一人って……誰何だよ!?」
「それがさ……聞いて驚くなよ、永原先生らしいぞ！」
「ふえ!?　永原先生が!?　……でもあり得るなあ……」
「確かにあんな若いのに、古典に異様に詳しいもんなあ……教え方もなんか独特だったし」
「でさー、永原先生って戦国時代の足軽だったらしいぜ」
「せ、戦国時代って……まさかあの信長とか秀吉とかの？」
「ああ、噂によれば永原先生って織田信長より年上らしいぞ」
「おいおい、ＴＳ病がいくら老化しないと言ったってさ……まるで歴史の生き証人じゃねえか……」

永原先生の目論見通りか、学年クラス問わず、学校の生徒のみんなが私と永原先生のことを話している。

ガラガラ
「おはよー」
教室で皆にあいさつする。
「あ、優子ちゃん、おはよー」
桂子ちゃんが応対する。また、教室のどこからか「噂をすれば」と

いう声も聞こえてきた。ちょうど私と永原先生のことについて話していたんだろう。
「桂子ちゃん、学校中が私と永原先生の話題になってるよ」
そして、渦中（？）の私もそれを繰り出す。
「そりゃあねえ……誰かが噂流したら、内容的にも一気に出回るでしょ」
「ですが私！　これこそが先生の狙いだと思ってたんですよ！」
突然龍香ちゃんが乱入してきた。
「あ、龍香もそう思う？」
桂子ちゃんが対応する。
「ええ、あえて噂にさせることで、教職員にも噂になりますから」
「確かに、教頭先生は行ってて６０代だろうから、おそらく７―８倍は生きてる永原先生に逆らえるはずもないよね」
「それでですね、どうも別の噂によると、校長先生以外では最年長の教頭先生は、年長者を笠に着て教員の中でも威張ってたそうなんですよ！」
龍香ちゃんが別ルートの噂話を教えてくれる。
「え？　そうだったんだ。これは楽しみなことになってきたわね」
私も、教頭先生が一泡吹かせられている所を想像し、わくわく感を隠せない。
その後も、古典の教材を用意しつつ、教頭先生の反応を妄想しながら、朝を過ごした。
「はーい、皆さん！　私の話もいいですけど、ホームルーム始めますよー！」
永原先生が教室に入る。顔はいつも通りの涼しい顔である。
さらに、遅れ続けている林間学校の部屋割りに関しては、今日中に結論を出す予定という旨が告げられた。
「あ、石山さん、ちょっと私のところに来てくれる？」
ホームルーム終了後、永原先生が手招きをする、林間学校のことだ

ろう。
「石山さん、昼休み……ちょっと付き合ってくれる？」
「う、うん」
「林間学校のことで私の策がありますから。昼休みになったら迎えに行きますので教室で待っててください」
「……分かりました」
連絡はこれだけだった。

「ねえ、優子ちゃん、永原先生は何だって？」
1時間目が終わると、桂子ちゃんが話しかけてきた。
「昼休みに付き合ってほしいんだって」
「林間学校のこと？」
「うん……あたしの推測だけど昼休みは朝の時以上に私と永原先生のことで学校が話題になると思うのよ。多分そのことで別の策があると思うのよ」
「……もしかして、並んで歩くとか？」
「あるかもしれないわね。まあ、昼休みのお楽しみにしておくよ」

キーンコーンカーンコーン
「今日はここまで。昼休みに各自入ってください」
先生の号令とともに、教室は雑談に包まれ、ある者は学食に、ある者は購買に、あるいは学校外のレストランなどに向けて出発した。
でも私は永原先生を待つ。鐘が鳴ってから1分半ほどだろうか？
誰かが教室に入ってくる。
「石山さん、ちょっといいかな？」
「あっ……永原先生！」
私は永原先生のもとへ歩み寄る。
「それで、用件というのは？」
「……学食に一緒に付き合ってくれる？」
「え？　何で？」
「歩きながら話すわよ、ついてきてくれる？」

「……う、うん」
とりあえず、よくわからないけど二人で教室を出る。
「石山さん、私がなぜ、あのタイミングでクラスのみんなに私の正体を話したと思う？」
「噂にするため……ですか？」
「ご名答よ。教頭先生は長幼の序を重んじていて、今までも散々『人生経験』を盾にしてきたわ。私も、何度自分の正体を言ってやろうかとも思ったけど……同じ患者が同じ学校に出来て、女性扱いされない苦しみを見て、今こそ伝家の宝刀を抜く時だと思ったのよ」

「なあおい、あれが噂の……」
「石山先輩と永原先生だろ……僕、まだ信じられないよ。あんな可愛くて美人の二人が以前男だったなんてさ」
「でもよ、永原先生って信長や秀吉なんかも見てきたんだろ？」
「見たのは武田信玄じゃないの？　去年大河でやってた真田家に仕えてたって噂だぜ」
「しかし、ＴＳ病がいくら珍しいと言っても数百年も生きてりゃ話題になりそうだけどよ」
「そのあたり不思議だよな」
一年生の男子たちが噂をしている。永原先生が声をかけようと近付く。
「あらあら、私の噂？」
「わっ、永原先生!?」
「私はただの足軽だったし、真田源太左衛門様が武田大膳大夫様の家臣になられた時には既に女の子になってたわよ。だから、私は武田大膳大夫様とは面識はありませんよ」
「真田源太左衛門？　武田大膳大夫？　先生、先生は一体誰のことを？」
「ふふっ、私の口からは言えないわよ。そこのスマホで調べるといいですよ……さ、石山さん、行きましょう」
「……はっ、はーい」

急に声をかけられてびっくりする。ともあれ食堂に進む。券売機の列に永原先生と横になって並ぶ。
券売機の列に並ぶ頃には、大体の話のネタも尽きてしまった。そのため、ここまでくると私と永原先生はあまり会話していない。
ただ、さっきの作戦を振り返ると、「並んでいることが重要」ということなのでこのままで行く。
それにしても、永原先生があたしと横に並んで食堂に並ぶのはかなりシュールだ。

「ねえあれ、優子さんと永原先生ですよ」
「あの二人がねえ……私まだ信じられないわよ」
「だよねえ……あんなに可愛いのに……」
「でも、何時までも若くいられるなんて素敵よねえ……」

学食に生徒に混じって先生が並ぶ、ということは実際によくある。
特に生徒との交流に熱心な先生や、気分転換をしたいなんて言う時にも、わざわざ混雑している昼間に並ぶ物好きな先生もいる。
小谷学園は生徒の校則も緩ければ、先生の校則もまた緩いということになっているのだ。
とは言っても、流石に今日みたいな日に、私と永原先生が並んで学食を取るのは否が応でも目立つ。
案の定、学食のあちこちから、私と永原先生の噂話が聞こえる。
永原先生も、石山優子と同じくＴＳ病だったということでも話題になるのに、よりにもよってその渦中の二人が並んで学食にいる。
どうしたって目立つに決まってる。
「石山さんは何を食べるの？」
「うーん、今日はしょうゆラーメンかなあ……」
「ふふっ、じゃあ私もそうしましょう」
私と永原先生はシンプルに醤油ラーメンを選択、券売機の列から秩序よく食堂の列に並ぶ。
食堂のおばちゃんに食券を渡し、ラーメンを待つ。手際よく作業す

るため、ラーメンはそこまで待たない。
「それじゃあ席を探しましょうか」
「うん」
永原先生と並び席を探す。
ちょうど長テーブルで空席を見つける。
「よし、ここにしましょうか」
「はい」
永原先生と並んで食べる。時折何かを話す。
食堂の部屋の中央付近のテーブルの、更に中央付近に陣取ったおかげで、私達の存在はどこからでも見ることが出来る。
そして誰かが「あそこにいる」と噂すれば、一斉に私達に視界を向けてくる。そして、単独行動している人にも、「永原先生はＴＳ病で実は５００歳近い」という情報が耳に入る。
私達は、気付かないふりをして、別の話題で雑談をしながら、ラーメンを食べる。
「それで、ＴＳ病の他の患者ってどういう生活を送ってるんですか？」
「だいたい私と同じよ。ただ、名前を変えることはほぼなくなったわね。私が３０年前に永原マキノに改名したのが最後よ」
「身分証とかはどうなってるんです？」
「私が３０年前に永原マキノにした時は戸籍を新しくしたわよ。戸籍上では北小松貴子は明治２５年生まれで昭和６２年に９６歳で死去ということになってるわ」
「それ以前には何て名乗ってたんですか？」
「明治の頃は偽名を５つくらい持ってて……１つを除いて全部忘れたわね。不老を隠しての教師生活でしたし、何より明治ですから身分証の偽装は容易だったので」
「じゃあ江戸時代は？」
「その頃は『柳ヶ瀬（やながせ）まつ』と名乗ってたわよ。結果的にこの名乗りが一番長かったわ。その前に名乗ってたのが『鳩原刀根之助』よ」
「柳ヶ瀬まつの頃って？」
「ＴＳ病になった直後から明治１０年位まで使ってたから……えっ

と、３４０年ね」
「さ、さんびゃくよんじゅうねん……」
「私の人生が５００年だから7割近くはこの名前だったわね。江戸時代は大坂の陣以降は平和だったから変える必要もなかったし、戦乱の時代でも同じ名前で特に問題なかったわ。最も、『柳ヶ瀬まつ』も数ある名前の一つとして正式に『北小松貴子』に統一するまで使ってたけどね」
　改めて、永原先生の壮絶な人生を知る。その太く、そして長い人生。
「生きていく上で一番つらかったのはどの時代だったんですか？」
「……やっぱり江戸幕府以前の時代……それも私がまだ男だった頃ね。戦争において情報は特に重要ですし……伝令役は特に狙われやすかったですから。むしろ女の子になったことで、人生が楽になったと思います」
「……」
「私が男のまま不老でも……何処かで戦死していたと思います」
「じゃあ先生は女の子になれて……」
「うん、今は良かったと思うわ。もちろん男に戻りたいということを、私も考えたことはあるわよ。でも当時は生きることに必死だったし、江戸に住む頃になった時には、もう戻ることは考えなくなったわ……石山さんは……聞くまでもないわよね」
「うん、私、女の子になれて嬉しいの」
　その後は黙々とラーメンを食べ続ける、先に食べ終わったのはやっぱり永原先生。
　速く食べるのは健康によくないとはいえ、あまり遅いのも考えものだ。
　もう少しでいいから、一口で食べるサイズも大きくしよう。早食いでも、別に量は変わらないし。
　ともあれ、永原先生と話しつつ、私も食べ終わり、返却トレイへ向け、並んで返す。
　相変わらず学食はあたしと永原先生の話題で盛り上がっている。

「さ、それじゃあ職員室に来てくれる？　教頭先生と対決するわよ」
「……分かりました」

# 教頭の撃退

永原先生とともに、職員室に向かう。すれ違う生徒たちも、私達の話でもちきりだ。
「今回は、ちょっと助っ人を呼んでもらったわ」
「え？　助っ人？」
「うん、お昼を食べてからっていうのも、その人のスケジュールに合わせてなのよ」
「助っ人って一体……？」
「まあ、来てのお楽しみよ」
「う、うん……」
そんなこんなで職員室の前に来る。
でも助っ人の姿は見当たらない。
「ねえ、まだ来てないみたいですけど」
「大丈夫よ、待機してもらってるから」
「……そ、そう……」
私の不安をよそに、永原先生は一旦職員室に入ると教頭先生が居ないことを確認する。
「教頭先生は職員室には居ないみたいね」
「で、でも来てくれるの？」
「ええ、石山さんのことで話したい事があるとは伝えてあるわ。約束の時間までもう少しよ」

「……おや、永原先生、私に用事があるということのようだが……林間学校の部屋割りなら変えないですよ」
教頭先生がトイレから現れた。私もチラッとしか見たことがない。
「教頭先生、そうは問屋が卸さないのですよ。石山さんは、女性としての扱いを望んでます。クラスの皆さんも同じです」
「……やはり君は青い。青二才と言ってもいい。生徒の要望を聞いてあげるのはとてもいいことだしかし！　それだけで済む問題ではない」

「うふふっ、この私に青いですって。あなたは果たして、何年生まれなのかしら？」
「……昭和３５年だが、何故永原先生がそんなことを聞く!?」
「待ったあああああああああああああ!!!

「……ううん、ありがとう。私のために……うっ、本当に……」
「残念だが……そうも行かないんだよ！」
「教頭先生!?」
　しかし、教頭先生は無慈悲だった。
「これは保護者や林間学校のクレームにも関わることだ」
「この……ふざけんな！」
「篠原くん!?」
　篠原くんが教頭先生の胸ぐらをつかむ。私は驚きのあまり動けない。
「何がクレームだ！　クラスのみんなは、誰も嫌な思いしてねえんだぞ！　てめえのわがままで、優子ちゃんを傷つける権利なんかねえんだよ！」
「俺が嫌な思いするから。君たちが嫌な思いしてないからそれでいいということではない！」
「このお……！　言っても分からねえなら！　こうしてやる！」
「！　篠原くん止めなさい！」
　篠原くんが、教頭先生を殴ろうとした所をすんでのところで永原先生が止める。
「な、永原先生！　離してくれ！　このクズは……この偽善者は……殴らねえと……殺されねえと分かんねんだ！」
「落ち着いて、私に策があるから。大丈夫よ。この男はもう私の罠にかかってるわ！」
　篠原くんは教頭先生の胸ぐらを離した。
「命拾いしたな、篠原君。しかし、永原先生、あなたに何が出来る？新任教師の青二才にな」
「あらぁ……教頭先生、私の本当の年齢をご存じないのかしら？」
「何？」
「学校中で噂になっているでしょう？　私の本当の生まれ年のこと」
　永原先生が右手で何かのサインを作る。合図だろうか？
「教頭先生……教頭先生！」
「!?」

今度は小野先生の乱入だ。小野先生が助っ人？
「どうしました小野先生？」
「教頭先生、わ、私からもお願いします。永原先生に長幼の序を持ち出しても、かか、勝ち目がありません！」
「お、小野先生までそんなことを……」
「なっ、永原先生を怒らせたら……はぁ……はぁ……永原先生は、わ、私の……わわっ、私がしょ、小学校の時のた、担任で……」
小野先生がどもりながら錯乱している。永原先生からかなり脅されたと見受けられる。気の毒に。
「何ぃ？　永原先生は……小野先生が小学生の時の担任？　だったら、とっくに定年だろ！　ええい、私は……俺は信じないぞ！」
永原先生が左手で何かサインを作る。まさか助っ人って二人……？
「……教頭先生、諦めるんだな」
「「!!???」」
全く知らない男性の声が聞こえた、振り向くと来賓のマークを付けている中年の男がこちらに向かっていた。
「だ、誰……うぁ……あ、あなたは！」
小野先生が声を上げる。
「蓬莱伸吾教授！」
教頭先生がその名前を呼ぶ。
「な、何でこんな所に蓬莱教授が!?」
篠原くんも驚く。
「ちょうど、永原先生に呼ばれたんだ。永原先生の髪の毛一本を実験のサンプルとする代わりに、どうか教頭先生に年齢を証明する実験結果の書類を届けて欲しい。とな」
「な、何だと……永原先生が戦国時代の生まれとかいう……あのたわけた話が、事実だというのか？」
「……ああ、その通りだ教頭先生。この書類を渡しとくぞ。中身は、永原先生が４９９年間生きているということを科学的に証明するものだ」

「……教頭先生、蓬莱先生が遺伝学で日本最高の権威たること、ゆめゆめお忘れに無いように」
「分かっとるがな！　書類を読ませろ！」
　教頭先生は書類を読む。書いてある内容がわかるのかは不明だが、書類を読み進めるうち、どんどん顔色が青ざめている。
「さぁて、教頭先生……」
「な、何だ!?」
「ひっ、ひいいいいいい!!!!」
　永原先生が近づく。小野先生が恐怖の声を上げるとそのまま逃走してしまった。
「あなた、今までもさんざん私を青二才とか言ってくださいましたが……その言葉、そっくりそのままお返しいたしましょうか!?」
「……この青二才が！　あんたはクソガキよ！」
「う、うあぁ……」
「長幼の序を重んじるなら、真っ先に永原先生の言うことを聞くべきですよねえ……」
　私も追い打ちをかける。
「……それに、石山さんを男子とも女子とも隔離し、教師の部屋に入れるということは、当然、石山さんと同じ病気の私も、どこかに隔離しろということになりますよね？　そこは考えたんですか？　教頭先生は、もう４８０年近くも女をやってるこの私が、女じゃないとでもおっしゃるつもりかしら？」
「な……な……知らん！　知らんぞ！　俺は教頭だ！　一教員の指図など受けん！」
「あら、さんざん長幼の序を言ってきたあなたが、いざ都合が悪くなると教頭の立場を言うんですね」
「……全く、見下げ果てた男だ。何をそこまで意地になる？　意地になって君に、この子に、学校に、何の得がある？　そこの嬢ちゃんを隔離しろと、教育委員会から命令でも受けたのか!?」
　蓬莱教授が更に煽り立てる。
「違う……これは……予防の……」

「この……見苦しいぞ教頭！」
　篠原くんも怒りに震える。
「な、なんだと!?　教師に向かって――」
「はっ、論破された挙句に結局最後に頼るのは教頭というプライドだけか。何も出来ねえ凡人は、それしか誇れるものがねえもんな」
　蓬莱教授が部外者にも関わらず煽りに加勢している。
　一瞬それでいいのかとも思ったが、どうやら私達の味方になってくれるみたいなので、ありがたく受け取っておこう。
「な、なんだとっ……！」
「私のように歴史とともに生きて悠久の時を過ごし、それを授業に活かせることも出来ない」
「……」
「石山さんや篠原君のように過去の罪を悔いて心を入れ替える気概もない」
「ぐっ……」
「蓬莱教授のように賛否両論を巻き起こしながらも偉大な足跡も残さない」
「……教頭先生、あんたは何も出来ず、地位にしがみつくことしか能がない無能なのよ！」
　永原先生が断罪する。正直気分がいい。
「こ、このお！　言わせておけば！」
　この勢いに乗らない手はない！
「サイテーよ教頭先生、今すぐ辞任して！」
「なんじゃと石山！」
「はっ、てめえが教頭のままでいいと思ってるのはこの学校でてめえだけだろ！」
「そーだそーだ！　やーいこの偽善者のカス教頭！　小谷学園の恥晒し！」
　教頭先生に対して、私、永原先生、篠原くん、更に蓬莱教授まで加わって口喧嘩が続く。
　しかし、それらは一つの声でかき消された。

「……あなたの負けですよ。教頭先生」
「！」
　そこに現れたのは校長先生だった。６０代のおじいさんで教頭先生より年上だ。
「こ、校長先生……」
「永原先生は、確かに５００年の時を生きているんですよ。教頭先生、あなたは人生の先輩後輩を重視されているなら、この世で最も長く生きている永原先生のことを、本来なら最も尊敬するべきなのは当然の道理です」
「し、しかし校長先生……」
「永原先生は戦国時代をくぐり抜け、江戸時代から明治大正昭和平成という激動の時代を見てきた御方です。あなたも儒学を好むなら、永原先生に敬意を払うべきです」
「だ、だが……そうは言っても一教員だ。教頭の私とは立場が違う！」
「……自分の都合が悪くなったら長幼の序を引っ込めるのは、失礼ながら見苦しいと言わざるを得ませんよ」
「う……うぐぐっ……」
　校長先生も、教頭先生の味方はしてくれなかった。
「校長先生まで出て来るとはね……観念することだな教頭先生。それにな……永原先生は、教員だけが顔じゃないのだよ」
　蓬莱教授が重要な事実を告げる。
「な、なんじゃと!?」
「私、『日本性転換症候群協会』の会長でもありますのよ。ＴＳ病患者たちの権利を守るための団体です」
「教頭先生、永原先生……いや、日本性転換症候群協会会長の永原さんは今日、もし学校がこのまま石山さんに差別的な対応を取るようなら裁判を起こすと言ってきたのですよ」
「な、なんじゃと!?」
「……教頭先生、クレーム対策をしたい気持ちはわかりますが、このままだと逆にもっと大きなクレームになりかねません。学校としても、校長としても、もはや見過ごせないのですよ」

「教頭先生、私達ＴＳ病患者で作る『日本性転換症候群協会』が目指すものは、ＴＳ病患者のマイノリティとしての権利じゃありません」
「……何回も言いますが私達ＴＳ病患者たちが欲しいのは、ごく普通の、女性としての扱いです。あなたのしていることはただのはた迷惑な偽善なんですよ」
「しかし、しかしだな！」
「いくら言っても分からないなら裁判所で会うことになりますよ！」
　永原先生が口調を強める。
「な、なんだと!?　小谷学園を訴えるというのか!?」
「私達も小さいながらも団体です。裁判費用くらいなら捻出できますしその筋に詳しいＴＳ病の女性弁護士さんもいらっしゃいますよ」
「教頭先生、あなたはクレーム対策でそのような処置をしたいとお思いですが、校長としても、あなたを放置すればとんでもない不祥事になりかねません」
「し、しかし……」
「……教頭先生、どうか手を引いてくれないですか？　でないと、私の方から教頭先生を処分せざるを得ません」
「う……ううっ……」
「……いい加減に認めることだ。お前にもう味方は誰一人居ない。教頭、お前の負けだ」
「う、うああ……うああああああ

になれば、さぞお褒めになってくださると思いますわ」
永原先生が発狂している教頭先生に向けて不敵な笑みを浮かべている。
その様子に、校長先生と篠原くんは少し恐怖を感じている。４９９年の時を生きた女性の、底の見えない深淵を覗いている気がするのだ。
……蓬莱教授は全く動じていないが。
「教頭先生、部屋割りは私の方で作っておきます。あなたはもう、黙っていなさい」
「は、はい……」
校長先生の死刑宣告とともに、教頭先生も観念したようにうなだれながら職員室に戻っていった。それを確認し、校長先生もまた、校長室に戻った。

「蓬莱先生、ありがとうございました。あなたの証明がなければ、教頭先生を倒せなかったでしょう」
「何、いいってことよ。貴重な実験サンプルをくれるなら、俺はいつでも永原先生に協力するつもりだ。また、何か困ったことがあったら遠慮なく言ってくれ。俺に出来る限りのことをしよう。しかるにどうだ？　今週の土曜日にでも……」
「お断りします。年齢証明で助けてもらった恩はありますが、私の身体を全部実験台にする気はありません」
「……分かったよ。ま、遺伝子情報があるだけでも大きいからな。今日は引き下がっとくぜ……気が向いたら、いつでも来てくれよ」
「……はい、分かりました」
そして、蓬莱教授も去っていった。あれが助っ人だったのか。
「どうもあの先生、イマイチ信用しきれないのよね……」
「ところで先生、どうして蓬莱教授なんかと……」
篠原くんが疑問に思う。これは私も同意見だ。
「あの先生は遺伝学者でしょ？」
「ああ、確か何年か前に『ノーベル生理学・医学賞』受賞のニュースで

やってましたけど……」
「私は自身の年齢証明で蓬莱先生を頼ったって昨日言ったでしょ？
蓬莱先生もＴＳ病を研究しているということで歓迎してくれました。
お互い極秘にするという条件はつけましたけど」
「ふむ、でもそれだけの関係には見えませんでしたが……」
「そうよ……私が年齢証明で頼って以来、私に実験に参加するように
言ってきてしつこかったのよ。どうもＴＳ病の研究において、患者の
遺伝子サンプルがどうしても必要だと。私としても……会としても、
何か怪しいので丁重にお断りしたんですが……」
「そうだったんですか。確かに学会では賛否両論とはノーベル賞の
ニュースの時言ってたけど……」
「ええ。才能と能力は誰もが認めるんだけどねえ……」
永原先生が虚空を見つめながら話す。
「あ、あと先生、学校を訴えるって物騒な表現が……」
「ああ、あれ？　もちろん校長先生にも根回しはしてあるわよ。訴え
るっていうのは本当の本当に教頭先生が最後まで抵抗した場合って
言う条件だったから９９．９７％は脅しよ」
つまり０．０３％の可能性で、本当に訴える可能性があったという
ことね……
「……さ、昼休みも残り少ないから注意してね。まだ予鈴ではないけ
ど」
「は、はい」
「あ、ああ」
私と篠原くんがそれぞれ応答する。

「篠原くん、私のために……本当にありがとう」
「うあ……う、うん！」
篠原くんはまた顔をそらしている。これだけしても、まだ償いに
なってないと思っているのか。
いや、もしかして……って待て待てそれは自意識過剰な気もする。
もしそうだとしても、もう少し時間をかけるのも悪くないだろう。

篠原くんだって混乱するだろうし。
「な、なあ……い、石山！」
「うん？」
「……部屋割り、どうなるのかな？」
「うーん、男子の４人部屋と女子の３人部屋が一つ交換じゃない？」
「……ああ、そういうことか！」
　これまでは１クラスに男子１６人、女子１６人で男女ともに３人部屋が４部屋、４人部屋が１部屋となっていた。
　それが男子１５人、女子１７人になったことで男子の４人部屋を女子に、女子の３人部屋の１部屋を男子に交換することで、男子が３人部屋が５部屋、女子は３人部屋３部屋に４人部屋が２部屋となって釣り合いが取れるということだ。
「むしろ、私を教師の部屋に入れるほうが、不都合が生じるわよ」
「そういうものですかねえ……」
「だからああやって校長先生や蓬莱教授まで出てきたんでしょ？」
「そ、そうだな……」
　キーンコーンカーンコーン
「あ、予鈴ね。私、ちょっと一箇所寄り道するから、先に帰ってて」
「あ、ああ」
　喉が渇いた、少しだけ水飲み場で水を飲む。
　３時間目の準備をし、私達はまたいつもの学校生活に戻った。

## 水泳での祝福

永原先生が教頭先生を撃退した二日後の水曜日のロングホームルーム。この頃になると、徐々に私達の噂も消えかかっていた頃で、人の噂も七十五日ならぬ人の噂も二日という状況だ。ともあれ、この日は校長先生が直々に決めた部屋割りとバスの座席割が配られた。

良かった！　私は桂子ちゃん、虎姫ちゃんとの3人部屋になった。

他の女子グループも部屋割りに一喜一憂しているが、もうグループでの遺恨もなくてよかった。

一方で男子の方は、誰とでもいいのような感じであまり反応はない。男はこのあたりドライだと感じた。

私も元は男だし、男の感性は知っているけど、女の子になって改めて男の特徴を学習することも多くなったと思う。

そしてこの日の放課後、実行委員の最後の大規模打ち合わせが行われた。

「えー、これが三日目の風呂見張りの当番表です」

実行委員の仕事をメモしていく。仕事は意外と多岐にわたっていて、当番のローテーションも決められている。

実行委員用のパンフレットがあるので、しっかり仕事しないと。

最も、登山の時はまだ分からないけど……

さて、この実行委員、篠原くんとうまくやれればいいけど……

「あの……篠原くん」

会合が終わって、私が声をかける。

「え？」

「この間はありがとう。あたしのために、教頭先生に立ち向かってくれて……」

「……」

また顔をそらしてくる。

でも今思い返せば、あの時はっきり、私の中で篠原くんに守られていたんだという自覚を持ったんだ。
「頑張ろうね、実行委員」
「あ、ああ……」
どれくらいの時間が経てば癒えるのかはわからない。でも、篠原くん自身が、今までの自分の行動が、ちゃんと償いになっていることを分かってくれれば、大丈夫。
私はもう何度も許している旨を伝えている。後は篠原くん次第だ。

金曜日、昼食から返ってくると、女子グループの何人かが話しているのが見えた。
「はぁ……最近彼氏とうまくいかないのよねえ……」
「龍香、そんなこと言ってもなんだかんだで関係継続だよね」
「そうなんですよねー、確かに別れるほどじゃないんですけど……あ、優子さん！」
「うん？　どうしたの？」
「優子さん、私、彼氏とうまくいかないんです！」
いきなり龍香ちゃんが私に悩みをぶちまける。
「どうしたの龍香ちゃん？　あたしで良ければ聞くけど……」
「それが、昨日学校帰った後に彼氏とデートしたんですよ……」
「うんうん」
「それが、私服デートだったんですけど……服装に失敗してしまって」
「どんな服で行ったの？」
「私の彼氏、変態だから。スカート思いっきり短くして胸元も強調して、腕に胸を押し付けたりしたんですけど……」
「龍香の彼氏ったら不機嫌になったのよ。そのせいでヤれなかったとか何とかで欲求不満みたいよ」
桂子ちゃんがさらりととんでもないことを言う。
「よ、欲求不満!?」
「優子さん、そりゃあ女子だって好きな人居れば……」
「そ、そうだよね、ゴメン……」

「まあ、それはいいんですよ。ところで私はどうすればよかったの？
どうして彼氏不機嫌だったか、優子さんわかります？」
分かる、デートの時、女子がよくやるミスだ。
「……うん、それは間違いなく嫉妬と独占欲だと思うよ」
「どゆこと？」
「デートって公共の場でするものでしょ？」
「……う、うん」
「龍香ちゃん美人でしょ？　彼氏さんはそんな龍香ちゃんを独占したいのよ」
「そ、それは分かるけど……どうして？」
「だって、彼氏さんからすると露出の多い服で行くと他の男にもエロい龍香ちゃんを見られる事になって、独占できなくて面白くないのよ」
「ほう、なるほどねえー」
「やっぱ優子ちゃんが言うと説得力があるわよね……元男っていう事実を抜きにさ」
「うんうん、優子さん、男子の心がよく分かってて、とにかく説得力が半端ないですよ」
「あ、あはは……」
なんか複雑な気分だ。でも男扱いではなく、元男扱いだから嫌な気分でもない。
「ところで優子さん、不機嫌な理由はわかりましたが、では私はどうすればよかったんです？」
私は男受けするデートプランを考える。
「……うーん、あたしだったら白いワンピースを着ていくわね。スカート丈は膝より下を厳守するのよ」
私は龍香ちゃんにアドバイスする。とにかく服装は色々好みがあるが、白いロングスカートのワンピースのように清楚な感じにすれば絶対に嫌な顔はされない。
龍香ちゃんの白ワンピース姿を想像する。うん、すごく似合うと思う。

「……うん、それで？」
　龍香ちゃんもあたしの話に聞き入っている。
「鞄にもう一つ着替えを持っていくといいと思うよ。その中には思いっきり露出度の高い服を入れておくのよ」
「ええ!?　でも彼氏は好んでないんじゃ……」
「いい？　次のデートは必ず彼氏か龍香ちゃんの家に誘ってみて？　家の中で二人っきりになれたらその服に着替えるのよ」
「え？　つまり……」
「そして『あなたにだけ見せるの。この格好……』って言っておけば、男はイチコロになるわよ」
「ほほう、なるほど」
「それから下着の色だね。彼氏を意識するならこれは絶対に『白』か『明るい色の横の縞パン』を守ることよ。そして彼氏だからって恥じらいの心を忘れちゃ駄目だよ」
　龍香ちゃんに一つ一つアドバイスする。
「う、うん。やってみますよ！」
「なんだろう……私は狙いすぎてちょっとって思うんだけど……確かに男受けはすごいと思うけど……」
　桂子ちゃんが反論する。
「大丈夫よ、男なんて単純なんだから。まして彼氏でしょ？　コロッと落ちちゃうわよ」
「うううう……相変わらず、優子さんの説得力がすごいです……」
「……でも、次のデートは優子さんの言うとおりにやってみます！　土曜日にデートの約束しているし……実践してみる！」
「頑張ってね龍香ちゃん！」
「ありがとう……」
　その後女子としばし雑談の後、永原先生の古典が始まった。
　そして、古典の授業が終わると、私は４回目、今年最後の水泳の授業に望む事になった。
　もちろん女子たちと一緒に着替える。既に小野先生や教頭先生も、私を「一人の女子」として扱うことに同意した。

半ば、というよりも限りなく脅迫に近い形ではあったけど、あのような５０代の男性を説得するにはこうでもしないと無理なのかなあと思った。
今日も女子の雑談に加わりながら女子更衣室で着替え、クラスの女子と一緒にスク水姿になる。
「ふう、これでプールも見納めかあ……」
「優子ちゃん……エロいよねえ」
桂子ちゃんが私の身体を凝視する。
「もうっ！　……ってまあ、自覚はあるけど……」
「おいおい、自覚あんのかよ！」
恵美ちゃんが突っ込む。
「そりゃあ、こんな身体になっちゃったんだもん」
「……お、おうっ」
「ほら優子さん！　そういう所ですよ！　そこんところで恥じらいとか見せないと女の子らしくないですよ！」
「しょ、精進します……」
彼氏とのデートの服装で龍香ちゃんを諭した私だけど、こっちの方は完全に諭されるパターンになっている。
これもまた、ＴＳ病患者と一般女子との違いなのかもしれない。
女の子のデリカシーについては、まだまだ分からない所も多い。
生々しいセクハラには恥ずかしがることは出来ても、こういうオブラートに包むべきなのかどうかという所で、課題を感じだ。
これまでの学園生活でも、私があの時に受けたカリキュラムはまだほんの「女の子道」の入り口でしかないことに、改めて気付かされた。
「よし！　今日で体育の授業も終わりだ！　えー最後まで気を抜かずに怪我なく頼むぞ！」
「「はい！」」
「うむいい返事だ。さあ準備運動だ！」
体育の先生の号令とともに準備運動が始まる。男子の過半数が私を見ている。それもかなり凝視している。

この時間、私にとって今までにない快感を感じる時間にもなった。明らかに興奮して息を上げている男子も居る。
「やべえよ、今日もやべえよ……はぁ……はぁ……」
「思春期男子にとって目の毒だぜ……」
桂子ちゃんが水着姿の私に興奮していた男子に怒ったのを私が止めて以降、彼らの興奮はますます公然性を強めていた。
「たまらねえ……たまらねえよ……」
「ううっ……お、俺！　もう我慢できねえ！」
高月章三郎がこっそり授業を抜け出してトイレに駆け込んでいった。
これから高月くんがトイレですることを想像すると私も興奮してしまう。クラスの男子がみんな私をそういう目で見てることに気付き、僅かに体が温まる感覚がある。
水泳の授業本体は、私だけ別の授業内容で、まるで特別支援学校のような感じで疎外感も感じるけど、準備運動の時間だけはまるで至福の時間だった。
……それは、以前私が女子グループに受け入れられた時の快感とはまるで別質のもの。
真っ黒な、ダークな感じの快感でもあった。そしてそれは水泳の授業を受けた当初にはない感情でもあった。
「よし、準備運動はここまで！　じゃあ今日も授業を……あれ？　高月はどこ行った？」
「高月くん、我慢できないって行ってトイレに駆け込んでいきましたよ。多分休み時間トイレに行き忘れたんじゃないですか？」
私があえてすっとぼけながら伝える。男子の何人かが吹き出した笑い声を漏らし、女子の何人かがざわついている。
「あー、分かった……うん、じゃあ今日も泳ぎの練習だ……石山はこっちのレーンでこれを使って泳いでみてくれ」
体育の先生がビート板を出す。また背泳ぎのためにお腹につけて浮力を補助する機材もある。

他の生徒はいつも通り駆け出し、泳ぎ始めた。
さて、私も一通り息継ぎ等の練習が終わったら、いよいよ背泳ぎだ。
これを補助ありで何でもいいから２５メートル泳ぐのが私の課題。
背泳ぎの仕方は知っていたので、まず浮力補助ありで泳いで見る。
プールは５０メートルなので真ん中からスタートする。

「はぁ……はぁ……」
水泳の運動量は陸上の運動に比べるとかなり高い。
それ故に力尽くのも早い。
８メートルほど腕を泳いだりしたところで力尽きる。
これじゃ、これじゃ２５メートルなんて到底無理だ……！
「ふぅ……」
足もバタつかせずただ水上に浮く。時折プールの縁に捕まる。
ふと青い空が見える。
生徒たちの水泳の声が聞こえる。横を見ると思い思いに泳いでいた。去年まで、私が男だった時はああやって泳げていた。今はほぼ泳げない。
「お、高月、何処行ってたんだ!?」
私が休んでいると、高月くんが帰ってきたようだ。
「す、すみません、トイレが我慢できなくて……！」
「……まあ俺も男だ。高月、お前の気持ちは分かる。すごーっく分かる」
もちろん私も分かる。女子のみんなはキモいって言うだろうけど、数か月前まで男だった私には高月くんがトイレに駆け込みたくなる気持ちが痛いほど分かってしまう。
「あれを見せつけられて理性を保てというのは理不尽な無茶振りだってのも知っている。ただ、教師という立場上、授業中にいきなり抜け出すのはちょっと困るんだ」
私自身が「しょうがない」と擁護したせいなのか、体育の先生も強く出られないようだ。会話もかなり小声で、私以外の生徒に聞かれていない。

「す、すみません」
「ああ、ともあれ授業に戻れ」
「……はいっ」
そろそろ疲れが癒えた。もう一度泳ぎ始める。
でも持たない。今度は5メートル、さっきと合わせて13メートル……
こんなペースじゃ25メートルに達するなんて日が暮れちゃう……
それでもなんとか進む。進めばいい。
「優子ちゃん！　頑張ってー！」
突然、桂子ちゃんの声が聞こえた。
「もう少しですよ！　優子さん！」
龍香ちゃん……
「石山、こっちだー！　みんな待ってるぞ！」
高月くんの声だ。
「おーい、もう少しで25メートルだぞ！」
首を傾け、プールサイドを見る。クラスのみんなが手を振って待ってくれていた。
「うん！」
再びバタ足をつかせ、背泳ぎを再開する。歓声が上がる。
声援が後押しする。でもやっぱり疲れて休む。するとますます声援が大きくなった。
「大丈夫だ！　もう少しだぞ！　あと少しだ！　頑張れ優子！」
「優子さーん、が、頑張ってください！」
恵美ちゃんとさくらちゃんだ。
「優子、泳ぎ切れ！　みんながついてるぞ！」
虎姫ちゃん……
「い、石山……ゆ、優子ちゃん！　が、頑張って！」
篠原くん……うん、頑張ろう！
もう一度泳ぎ始める、身体は悲鳴を上げている。でももう関係無

い。
この補助具がなければとっくの昔に溺れている。もはや背泳ぎではない完全に歪な泳ぎ方になっているが、体育の先生も「もうすぐだ」としか言ってこない。
皆の声援を胸に、少しずつ、確実に前へと進む。
右手が、ふと何か硬いものに触れる感覚がした。
するとクラスのみんなが途端に大きな声で喜びを爆発させていた。

ああそうか……泳ぎきったんだ……私。

何とかプールサイドの手すりに捕まり上がる。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
パチパチパチパチパチパチ!!!
みんなが拍手してくれてる。
「おめでとう優子ちゃん！」
「すごく良かったぜ！　ちゃんと泳げてたぞ！」
桂子ちゃんと恵美ちゃんが、私の身体を軽く叩き祝福してくれていた。
「み、みんな……うっ……ありがとう……」
泣きそうになるのを何とか堪える。本当は堪えなくてもいい。もう女の子なんだから弱くてもいいとは言っても、やっぱり本能的に泣くのを止めようとする。
「よくやったな。まだ休み休みで補助具ありとは言え、２５メートルは２５メートルだ。さ、シャワーを浴びて着替えて今日は解散だ！」
体育の先生が労いの言葉をかけ、解散する。
少し前までクラスでは嫌われていたのに、今ではこうして、とても小さな成功にしても、みんなで喜びを分かち合える。
……ああ、私はなんて幸せなんだろう。
着替えている時もまた私への労いの言葉をみんなでかけてくれた。

体育の授業は、運動音痴には辛い科目だという。

でも、私は違った。
確かに、あまりの惨状に、バカにするのも憚られたというのは事実だ。更に、私が体育で悲惨な成績を残すにつれ、私ほどじゃないけど運動神経が悪い子をバカにする風潮さえ一掃してしまった。
それどころか、小さな進歩に、みんなからすればとても小さなことでも、出来るようになった私に、こんなに暖かく接してくれた。
もしかしたら、それは私がＴＳ病になって、弱くなったことへの同情から来るものかもしれない。
……でも、それでもいい。
弱い私、だけど頑張る。結果が全ての世の中だけど、私の進歩だって、結果には違いないのだから。だからこうして、クラスの皆の心を動かせたんだ。

「ただいまー」
「あ、優子おかえりなさい！　もうすぐ夏休み、これで勉強も終わりよね。お疲れ様」
「……ありがとう」
金曜日の終わり、学校から帰ってきて母さんと話す。
そして自室に入って制服から私服に着替える。
来週は月曜日が海の日で、火曜日が夏休み前の全校集会、そして水曜日からは林間学校だ。
林間学校と夏休みのことを考える。
女の子になって初めての林間学校と夏休み。去年優一だった時はずっとルームメイトを怒鳴りつけていて、嫌な思い出ばかり残したけど、今年は違う。今から楽しみになってきた。

# 林間学校前夜

夏休み前、最後の登校日。
この日は明日に控えた林間学校への最終確認と、全校集会が行われる。
体育館で全校集会が行われる予定だが、まずは教室へと入る事になっている。
ガラガラ
「おはよー」
「おはよー優子ちゃん」
「おはようございます優子さん！」
「おはようだぜ優子！」
教室へ入り、皆と挨拶する。
「あ、優子さん優子さん！」
龍香ちゃんが私の所に駆け寄ってきた。
「うん？　どうしたの龍香ちゃん？」
「デート、すっごいうまく行ったんですよ。もう私の彼ったら興奮しまくってて激しくて激しくて……もう何回も気絶させられて……あーたまらなかったわあー」
龍香ちゃんが顔を真っ赤にしながらのろけ話をしてくる。
「ちょ、ちょっと龍香！」
「あははっ、でも成功してよかったよ」
「でも、優子さんのおかげですよ。初めて出来た彼氏ですけど、このまま結婚しちゃってもいいかなって思えてきました」
「け、結婚って……」
「でも、龍香がそこまで言うって……相当上手く行ったんだと思うよ」
うん、私のアドバイスがうまく行ったのは事実。龍香ちゃんに貢献できたのは嬉しい。
「今後、恋愛相談は優子さんで決まりですね！」
「え……やっぱりそうなるの？」
「うん、優子ちゃんは私たちに無い貴重な感性も持ってるからね」

「そういうものかなあ……」
「私達で優子さんに足りない女子力を補い、逆に優子さんは私達に足りない男心を補うんですよ！」
「ふむ……」
確かに共存共栄の関係にはなれるが……
「ええ、優子ちゃんと今後ももっといい関係になれそうね！」
ともあれ、好感触だったのは良かった。今はそう思っておこう。

「はーい、全校集会に行きますよー」
教室に永原先生が登場し、夏休み前の全校集会へと向かう。
まずは永原先生に誘導され、体育館へと向かい、そこに全校生徒が集合するという予定になっている。
体育館へ入る。大量の椅子があって決められた所に行く。
男女混合であいうえお順なので優一のままだとしても同じ席になるはずだ。
体育館への入り口に振り返ると、他の学年、他のクラスの生徒も多く集まってきている。
「これより、夏休み前の全校集会を執り行います！」
全員が集合して数分後、雑談で包まれていた体育館が一つの校長先生の放送によって静寂に包まれる。
「初めに、私（わたくし）校長の方から挨拶と話があります」
そう言うと校長先生が小走りで体育館の舞台の中央にあるマイクへ向かう。
「えー皆さん、これから林間学校の後、夏休みに入るわけですが、えー自由を基幹とする我が校ですが、節度を持った夏休みを過ごして下さい」
「今年も、えー昨今のニュースに出るような大きな事件事故なく、無事に夏休みを迎えることが出来たのは、大変喜ばしいことと思います」
私にとっては大きな事件ってレベルじゃない事件が起きてるけどね……
「えーあまり私の話を延々聞きたいという人はいないと思いますの

で、私の話はこれで終わります。ご清聴ありがとうございました」
所々で笑い声が聞こえつつも、校長先生の話が終わる。
校長先生が延々に長話しても、誰も喜ばないことを校長先生自身が知っている。
この前の教頭先生にとどめを刺した時と言い、校長先生は実にいい人だ。
校長先生は小谷学園創始者の孫にあたる3代目で、よく「3代目は潰す」なんていうが、この人は初代の遺言をきちんと守ることが使命。とのことだ。
「続いて、生徒会からのお知らせです。守山（もりやま）さんよろしくお願いします」
校長先生がそのまま進行役を兼ね、生徒会からのお知らせを告げる。
うちの学校にも一応生徒会と風紀委員があるが、あってないようなものだ。
一応生徒会は曲がりなりにも活動しているが、風紀委員は完全に休眠組織同然で実体がない。
うちのクラスにも風紀委員はいるにはいるんだが、「委員長の顔も名前も知らない」と公言する始末だ。
それどころか去年なんて当の委員長本人が、自分が風紀委員長であることを忘れてしまっていたという事件があったくらいだ。
その生徒会長が舞台へ上がる。もちろん名前は知らない。
「えー生徒会長の守山と言います。小谷学園の夏休みに当たってですが、『小谷学園は世間知らず』などという噂が一部の掲示板で流れております」
「今年5月には通学中の小谷学園の女子生徒が痴漢被害に遭いました。くれぐれも変質者には気をつけて下さい……僕の話は以上です」
この痴漢って私のことだよね。今でもちょっと思い出してしまうことがあって気持ち悪いという気分になる。
でも生徒会長の口から女子生徒って言う言葉が出て安心感を覚えるのも事実だ。

生徒会長が舞台を降りて、自分の席に戻る。
続いて校長先生が再びマイクの前に来る。
「続いて女子テニス部からのお知らせです」
ガタッと近くで誰かが椅子を立ち、壇上へ駆け上がる。
「えー、皆さん。女子テニス部の田村恵美です」
恵美ちゃんが普段とは違う敬語調で話している。
「この度、あたい田村恵美がテニスのインターハイに出場することになりましたので報告します。８月初旬より開始予定です。よろしければ観に来て下さい！」
一人称だけあたいになってるのがちょっと可愛いと思った。
恵美ちゃんがインターハイ。去年も全国大会に出てたけど、１年生ながら圧倒的な強さだった。
去年はサーブを一回も落とさず優勝、セットの殆どが６―０で決勝もダブルベーグルという徹底ぶりだ。
恵美ちゃんは雑誌等の取材は一切拒否しているみたいだけど、気が早い人は「将来の世界ランキング１位候補」何ていう人さえいる。
「すぐにＩＭＧに来い」という勧誘は何度も受けているようだが、「高卒の資格を取らねえといけねえんだよ」と言ってて、堅実な一面も見受けられた。
恵美ちゃんがこっちへ戻ってくる。更に夏休み前に行われた大会の結果を各部活が紹介する。
だいたいは一回戦敗退だ。まあうちの学校はあまり運動には力入れてないからなあ。そう言う意味で恵美ちゃんは異例中の異例だ。
「えー、各部活、委員会よりお知らせは全て終わりましたので、これにて解散と致します。長い時間ありがとうございました。後ろの席の方から退室して下さい」
校長先生の号令のもと、後ろから生徒が退場していく。結局部活からのお知らせが大半の時間だった。
「さあ、２年２組の皆さん、私の前に集合して下さい！」
永原先生の声掛けとともにクラスメイトが集合する。
「それじゃあ教室に戻りますよ。私について行って下さーい」

永原先生の先導で、再び教室に戻る。
「はーい、皆さん着席して下さーい」
教室に戻ると、永原先生がこう声をかけたが、皆疲れたのかすぐに着席した。
「えー、これから5分間の休憩に入ります。休憩が終わりましたら、明日の林間学校の最終確認を行います。それでは、休み時間にして下さい」
こうして私達は休み時間に入った。

「いやー、うちの校長先生は本当にいい人ですよね！」
龍香ちゃんが声をかける。
「校長先生も長話が好かれてないって分かってるのよ」
「優子さん、その自覚があるだけでも大したものなんですよ」
「確かに、中学の校長先生は倒れてる人がいるのに話を止めなくて、最後には私が『さっさとやめろー！　引っ込めー！』って野次って止めたこともあったわねえ……」
「ああ、あったわね！　優子ちゃんがまだ優一だった頃の話ですけど」
「よく考えれば……私も中学の頃は乱暴ながらも高校の優一時代より嫌われてなかった気がするわね……」
「あの頃の優一って……校長が長話すると決まって野次を飛ばしてたからねえ。内心感謝してた子も……ていうか中学は優一に続いて野次を飛ばす子も居たわねえ……」
「なるほど、それで校長先生は話を止める。と」
「うんうん」
でも今となってはあまりいい思い出じゃない。中学の頃にこうした強引なことを繰り返して「ゴリ押せば通る」という習慣が一層身についてしまった側面があるからだ。
「私の他校の友達も、『うちの学校は校長先生話し長過ぎる』って言ってましたよ」
「本当、小谷学園って恵まれてるよねえ……」
「優子ちゃん、私もそう思うわよ。他の学校だと帰り道立ち寄れない

し制服にも煩いし、ひどい所だと部活強制参加とか下着の色まで指定とかあるらしいですよ」
　桂子ちゃんが他校の校則の噂について話す。
「何ですかそれ!?」
「女子でも髪を切らないといけないとか。ね」
「ははは、あたしそんな学校行きたくないよ……」
　あたしは背中まで伸びる黒髪のロングヘアーをつかむ。
「でもそう言う進学校っぽいことをしてる学校よりもうち程……とは言わなくても、色々と緩い学校の方が実績いいんですよねー」
「龍香、そもそもそう言う抑圧をしなきゃいけないってのは生徒が自制効かないからよ」
「そう言う意味では、優一時代のあたしは結構よくなかったよねえ……」
「そうねえ……」
「そう言う意味でも、私、女の子になれてよかったと思うよ」
　桂子ちゃんと龍香ちゃんで雑談をしていると永原先生が教室に入り、「林間学校への最終確認を行います」と宣言した。
　最も、確認事項は以前のホームルームでやったことだけなので、そこまで時間はかからず、今日は部活もなく半日で下校となった。

「なあ優子、あたいらでハンバーガー屋に行かねえか？」
　下校となった時、恵美ちゃんが声をかけてきた。
「え、あたしはいいけど？」
「よっしゃ決まりだ！　女子一同で行くぞ！」
「おー!!!!」という掛け声とともに、17人の女子が一斉に下校する。
　下駄箱に移動し、ローファーを出して履き替える。

「優子さん優子さん、私の彼はどうしてあんなに惚れたんです？」
　道中龍香ちゃんが話しかけてくる。
「ギャップよギャップ。外では清楚でスカート丈の長い白いワンピースで現れた彼女が、家の中で自分にだけ超エロい自分を見せてるって

思わせたわけよ」
「ふむふむ、ギャップが大事なんですね！」
女子１７人での集団下校は初めてだ。
学校から駅への道は大きな道ではあるものの、歩道はそこまで広くなく、結構威圧感のある集団になっている。
「なあ優子、お前が運ばれたのってここの病院か？」
恵美ちゃんが、私があの日運ばれた病院を指差す。ということは、ハンバーガー屋はすぐそこだ。
「う、うん」
「やっぱりそうか。で、今回のハンバーガー屋って、優子は女になって立ち寄ったことは？」
「うーん、確か一回だけ。倒れて目が覚めたのが翌日で、最初に食べたのが病院食、次に食べたのが確かここのハンバーガーよ」
「へえ、そうなんだ！」
「でも病院食を最初に食べておいてよかった。食が細いのに気付いて、いつも頼んでるメニューより小さいサイズにしたから」
「ふむふむ、よし、１７人じゃ店の人も困るだろうし、４と５で別れるぞ！」
女子が４人ないし５人で小グループを作る。もう旧グループはごちゃまぜだ。
私は桂子ちゃん、恵美ちゃん、龍香ちゃんと同じグループに入る。
「いらっしゃいませー」
３０秒から１分くらいのタイムラグで、それぞれバラバラに座る。
私たちは一番最初のグループで、中は既に小谷学園の制服がちらほら見える。というか、先生もいる。
「優子ちゃんはどれにするの？」
「えっと、中チーズバーガーとポテトの中セット」
「ふむふむ、じゃあ優子ちゃんはこれだけね」
各自が財布からお金を出し合い、一人が代表して会計する。
札を持ってテーブルに付く。他のグループもそれぞれ全くランダムの位置についた。

しばらく待っていると、チーズバーガーの登場だ。
幸い会計トラブルもなく、女子全員が食べ始めている。
「それでさ、優子ちゃん、明日の林間学校なんだけど」
「う、うん」
「登山の時、優子の体力が持つかわかんねえ。あたいたちも一応サブリーダーということになってるから少しだけ教えてくれねえか」
「……はいっ」
通常、サブリーダーが必要になる機会は滅多にない。万一必要な場合でも、先生がその場で引き継ぎつつ、二人共同でリーダーの役割をすることになっている。
登山の時、実行委員がすることは「誰かが道を外れていないかを見張ること」「気分が悪い人が居ないか見張ること」と言ったことが主になる。
真ん中と最後尾に付くことが多く、先頭の先生と共同で見張ることになる。
私は食べるのが遅いので、まずは二人に説明書を見ながら食べてもらう。
チーズバーガーを食べたのは、女の子になって最初の日以来だった。
やはり一口が遠い。ポテトもゆっくり食べる。
私が食べ始めて数分後、食べながらマニュアルを読んでいた桂子ちゃんと恵美ちゃんが食べることに専念し始め、ほぼ同時に食べ終わった。
「……あー、食った食った」
恵美ちゃん、男だった時の私より食ってた。さすがスポーツ選手。
そして、他のグループの女子たちも食べ終わり、迷惑にならないように素早くハンバーガー屋を出る。
「よし、じゃあ駅に行こうか！」
「あ、私ここからだから！」
「あ、そうだよね。じゃあねーばいばーい」
最寄り駅に向かうまでに一人が家に帰る。

学校の最寄り駅からバス通学してる子、反対方向に通学する子などもあって、私の最寄り駅に到着し、降車した頃には桂子ちゃんと私の二人になった。
「なんか静かだね」
「あれだけ賑やかだったのにねー」
「明日、楽しみだよね」
「う、うん！」
「優子ちゃん、実行委員頑張ってね」
「……うん、頑張る」
話が続かない。
お互い沈黙しながら歩く。
「あ、私ここからだから」
「うん。さようなら」
「また明日」
私は桂子ちゃんに、軽く会釈してそれぞれ分かれる。
ここまで来ると家までは近い。鞄から財布を取り出し、財布にあるドアの鍵を取り出してドアを開け、家の中に入る。
「ただいまー」
「優子ーおかえりなさーい！」
母さんが出迎えてくれる。
「明日の林間学校に向けて、服装の準備をしなさーい」
「はーい母さん！」
私は制服からパジャマに着替えると林間学校へ向けての服装を考える。
基本的に登山は登山の格好を考え、帽子などを入れる。
ここはもう夏になってきたけど、林間学校は山ということで半ズボンではなく長ズボンを勧められた。
女の子になって最初にもらったジーンズや白ズボン、更に体操着などを入れていく。
行き帰りの2日は殆ど移動と宿なので、その時はスカートにしよう。あーそうか、初日の服は入れなくていいんだ。トップスはほぼ半

袖でいいだろう。
寒くなった時のために念のため長袖を一つ予備で用意する。
更に下着、去年は使いまわしてたけど今年はそうも行かない。
更に生理用品を入れていく、前回の2度目の生理の経験則から、林間学校中に生理になる可能性が五分五分だ。こちらはサブバッグの方に入れよう。
なんか男の頃より荷物が多い気がするが気にしない。
他には暇つぶし用のゲーム機と少女漫画、筆記用具とノート、本、歯ブラシと歯磨き粉、酔い止め痛み止めと言った各種薬類。そしてお菓子、これらをサブバッグに入れて、メインバッグの方にドライヤーを入れる。
最後に一般のパンフレットと実行委員用のパンフレットだこちらもサブバッグに入れておこう。
ちょっと持ってみる。
……うん、何とか持てる重さだ。土産を買ってしまうとまずいかもしれないがこれなら体力的にも大丈夫だろう。
とにかく今日はゆっくり休むことにして、明日からは忙しくも楽しい4日間になることを祈ろう。

# 林間学校初日　出発

ピピピピッピピピピッ……

目覚まし時計の音とともに、朝起きる。

布団から起きてクローゼットを開ける。中に制服が目に入る。

……違うそうじゃない。今日は林間学校だった。

起きてまずパジャマを脱ぐ、汗をたっぷり吸った下着を脱ぐ。そしてタオルで汗を拭く。最初は裸になるだけでも恥ずかしかったが、今では身体が軽くなるような、ちょっとした開放感も感じるようになった。

すっぽんぽんの状況からまず今日の下着を選ぶ。今日は何となく薄いピンクにしたい気分だ。

すっかり手慣れた手つきでブラジャーとパンツを穿く、そして初日の服装。

初日は移動が主になる予定なので、おしゃれしていきたい。石山優子として私服姿をみんなに見せるのは、桂子ちゃんと龍香ちゃんに赤い巻きスカート姿を見せたのを例外に、みんな初めてだ。私服の第一印象は大事になる。

……とは言え、山に行くわけだし風も強くなる可能性があるからミニはやめておきたい。

箪笥を開けると、膝下15センチくらいの黒のワンピースのロングスカートが目に入った。

セーラー服のようなデザインでワンピースの胸元から肩にかけての部分のみが白いデザインになっているが、その胸元にも黄色い花型のリボンがあしらわれている。

今日は初めての実行委員、初めて女の子として集団での林間学校、緊張感がいつも以上なので、落ち着いた感じの印象を与えたい。

……よし、これにしよう。

背中のファスナーを閉めるのにやや苦労するも、着ることが出来た。

日差し対策のための帽子は、まだ被らなくていいだろう。鞄の中にしまう。
そして、いつも頭につけているちんまりした白いリボンが目に入る。我ながらとても気に入っていて、真っ黒な私の髪に映える小さくてきれいなリボンだ。同じリボンが3つあるのでそれも鞄に入れる。
でも今回はいつもの小さな白リボンとは別のリボンを付ける。今日付けるリボンは、黒く前頭部を覆うくらいの大きなリボンだ。
洗面所に行き髪を梳（と）かす。サラサラとストレートなロングヘアーが美しくなる。
身だしなみチェックのため、鏡で自分の姿を見る。
やっぱりすごい可愛くて、すごい美人だと思う。特に今日は黒の服と黒いロングヘアー、そして前頭部にある黒いリボンがうまくマッチングしてる。
胸元だけは白く、まっくろくろではない。また胸も強調する感じになって露出度こそ低いが、思春期男子はイチコロ間違い無しと心の中で自画自賛する。
実際この服は、着るには人を選ぶ服だとは思うけど、私に似合わない服は我が家には無い。
実行委員に選ばれたので、本来の集合時間の１０分前に永原先生と一旦合流することになっている。
いつもより少し早く、リビングに出る。
「おはよー」
「優子おはよー、まあ可愛いわね」
「ありがとう」
「ご飯できてるわよ。椅子にかけて待ってて」
「うん」
母さんがいつものように出迎えてくれる。こんな日でも、朝ごはんはいつも通り昨日の残りとご飯の組み合わせだ。
「優子、今日から林間学校か？」
「うんそうだよ」
親父が話しかけてくる。

「いつ帰ってくるんだ？」
「３日後の７月２２日」
「おおそうか。実行委員なんだって？　頑張れよ」
無言で頷く。母さんがご飯を出してくれたのでそれを食べる。

「朝食終わったら歯磨きをしなさい」
「はーい、分かってるよ母さん！」
洗面所に行き、歯を磨く。
口を濯いでもう一度オシャレを確認する。
「……よし完璧！」
そろそろ時間なので、鞄を持ち上げ、肩にかけ玄関に向かう。
「いってきまーす！」
「はーいいってらっしゃーい！　鍵閉めておくからそのまま行っちゃってー」
母さんの声が聞こえ、ドアを開けてそのまま駅に向かう。
改札口を通り、駅のホームへ。
周囲の視線をいつも以上に感じる。男性の視線、胸元への視線。
今日はいつも以上に、男の本能を刺激していることを自覚する。
「間もなく、電車が参ります」
アナウンスとともに電車が到着し、いつもより少し空いた電車に乗る。

「あっ！」
席が一箇所空いているので座らせてもらう。荷物は網棚の上に置く。
そして数分後、学校への最寄り駅に間もなく到着する放送が流れる。
「よいしょっと」
席を立ち、荷物を取り出し、もう一度肩にかけて電車を降りる。
今日は体力的な問題もあるので、エレベーターを使って跨線橋へ行く。そして改札を出て通学路へ。

私服姿はまだまばら。実行委員だけではなく、単に早く来た子もいるだろう。
他の生徒は校庭前に止まっている各バスの前に集合するけど、私達実行委員は一旦校舎の下駄箱前に集合することになっていた。
バスを尻目に学校の正門をくぐり、下駄箱の前に行く。
いつも私達が履いている所に行くと、見慣れた顔が見えてきた。
「おはよー篠原くーん！」
制服じゃないので一瞬分からなかったが、顔を見てわかった。
これから林間学校で一緒に実行委員をする篠原浩介くんだ。
「お、おはよう……」
また顔をそらしている。罪悪感だとしてもそろそろ長い。
以前考えた可能性、自意識過剰だと思って一旦捨てた可能性だけど、試してみる価値がありそうだ。
「どうしたの？　顔そらしちゃって？」
「そ、その？」
「……ねえ篠原くん、私のことちゃんと見て！」
「え!?　で、でも……」
「ねえ、私なにかおかしい？」
「そ、そんなこと無いけど……」
「じゃあどうして見てくれないの？」
少しだけ演技して涙声を作る。
「わっわっ、分かったよ！」
篠原くんがゆっくりこっちを見てくる。
篠原くんがどうしていつまでも顔をそらし続けるのか、この『実験』で判明してくれればいいけど……
「ねえ……」
「何？」
「篠原くん……あたしのこの服、似合ってる？」
私は両手を広げて少しスカートをつまんで広げ、腰を動かして篠原くんによく服が見えるようにする。

「う、うん……すごく……可愛いと思う」
「うん、ありがとう。篠原くんにそう言ってもらえると嬉しいな！」
自然と笑みが溢れる。
「あっ、ここ、こっちこそありがとう……」
篠原くんはまた顔をそらそうとするけど慌てて向き直る。
やっぱり、あの球技大会から何かおかしいと思ってたけど……でも、もしそうだとしても、私の方はまだ準備ができてない。
女の子になろうと、女の子らしくしようと努力しない日はなかったけど、それでも１６年も男をやっていて、女になってまだ２ヶ月ちょっと。
確かに女の子になって６０日以上は経ってるから表面上はだいぶ慣れたし、オシャレに気を使うことも出来るようになったけど、深い所や本能、深層心理ではまだまだ女の子になりきれてない。
男の子を好きになるというのは、確かに女の子としては自然なことだけど、ＴＳ病患者にとっては、女の子になりきるための一番の難関の一つだ。
だから、もしそうだとしても、篠原くんにはもう少し時間の猶予を待って欲しい。そう思う。
実際、永原先生の言葉に拠れば、「これとばかりは本人の頑張りもそうだけど、時間の経過と解決も必要」とのことだ。

「今日は実行委員よろしくね！」
「あ、ああ……」
話しかけてもすぐに会話が途切れてしまう。
今はそっとしておいた方がいいかもしれない。ここは一旦引くのがいいと判断する。
もし、実行委員の仕事で支障が出そうなら、その時には押すことにしよう。
「お待たせー！」
微妙に気まずい雰囲気になったが、それもすぐに永原先生の掛け声で打ち消された。

「篠原君、石山さん、今日はよろしくお願いします！」
「はい、永原先生よろしくお願いします」
「それじゃあバスの方に移動するわよ。今のところ、欠席の連絡が入った子は居ないから人数を計算してね」
「分かった」
「分かりました」
バスの方へ移動する。バスの中には3人の生徒が居てお喋りをしているのが見える。
私は外で待機し、篠原くんと永原先生が誰なのかを確認する。
「えっと、木ノ本さんと、河瀬さん、それと志賀さんだったわ」
「座席の方は？」
「ちゃんと指定を守ってたわよ」
「分かりました」
あたしは鞄からサブバッグを取り出す。更にそこから筆記用具とノート、実行委員用のパンフレットを取り出し桂子ちゃん、龍香ちゃん、さくらちゃんの席に鉛筆でチェックを入れる。

「おはよう！」
「あ、田村さんおはようございます」
「お？　優子の私服、可愛いなあ！」
「えへへっ、朝選んだんだー」
「すげえなあ……」
続いてやってきたのは恵美ちゃんだ。篠原くんが付き添い、座席通りに座っているか確認、座ったことを確認したら私がチェックを入れる。
集合時間が近付くに連れ、加速度的に人の数も増える。１０人、２０人、２５人。中には私の私服を褒めたり、リボンがある胸をじっと凝視している男子もいる。そんな中で、永原先生と篠原くんが慌ただしく動く。
「安曇川さんが来たわよ。これで全員ね」

２年２組３２人が揃った。
「すみません、私が最後でしたか」
虎姫ちゃんが申し訳無さそうな顔をしている。
「あ、いや、まだ時間オーバーしてないからＯＫよ」
「そう……」
そして、私と篠原くんと永原先生が最後にバスに入る。ふと横を見ると添乗員さんと運転士さんが私達の荷物を格納庫に運んでいた。
篠原くんが所定の席に座る。バスは４列シートで一番後ろは添乗員の席で、私は一番後ろから２番目の右窓側で永原先生の隣だ。近くには桂子ちゃん、龍香ちゃん、さくらちゃんがいる。
改めて他の女子の私服を見る限り、スカート姿そのものが少なく、中でも私みたいにお洒落してたのは桂子ちゃんと龍香ちゃんくらいだった。

「皆さん、シートベルトを締めて下さーい。いいですか？　絶対外さないで下さい！」
安全のためということだろう。永原先生が注意喚起をする。
「よし、全員締めたわね」
永原先生がシートベルトを確認する。
「出発まで時間がありますので先生からもう一つ。いいですか？　もし危ないと思ったら頭を前に抱えて頭を下げて屈んで下さい」
そんな機会あるだろうか？
でも用心するのに越したことはない。
「それじゃあ、出発まで残り僅かですのでそのまま待って下さいね」

しばらくすると、荷物を運び終わった運転士さんがバスに乗る。続いて添乗員さんが続く。
バスのドアが閉まる音がし、添乗員さんがマイクを取る。
「皆様、発車いたします。おつかまり下さい」
手すりにつかまった添乗員さんの言葉とともに、バスが発車する。
林間学校の始まりだ。

添乗員さんは若い男性だ。最近では男性の添乗員も珍しくないのだろうか？
「えー、今日から４日間、林間学校で皆様と一緒に添乗員を勤めさせていただきます野洲康平と言います。よろしくお願いいたします」
「「よろしくお願いしまーす！」」
クラスのみんながそれぞれ挨拶をする。
「えーみなさんがこれから向かう先はですね――」
続いて、添乗員さんがこれから向かう先、あるいは途中のサービスエリアの見どころなどについて紹介している。
バスはいつもの通学路を抜ける。車道で通学路を走るのは、去年もそうだったが新鮮だ。他の学年とは方向が全く違うため、駅付近で一斉に別れ、私達のバスの梯団は４台になる。
「石山さん、このあたりは来たことある？」
「……ううん、ない」
私は首を横に振る。
「そう、実はここのあたりにあるそば屋さんのラーメンが美味しいのよ」
「え!?　そば屋なのにラーメンが美味しいんですか？」
「そうなのよ、一番人気みたいよ……」
「もうそば屋さんの看板下ろしたらいいのに……」
「いやそれがね……ギャップが人気なのよギャップが」
「そ、そうなんだ……」
永原先生が話しかけてきた。そう言えば龍香ちゃんのデートも私が「ギャップが大事」って言ってたっけ？
人間って案外絶対評価することが苦手なんだなあってつくづく思う。
「ねえねえ永原先生！」
「はいなんですか？」
今度は桂子ちゃんが永原先生に声をかけてきた。
「関ヶ原の戦いってどんな感じだったの？」
「……私が最初に見た時は、石田治部殿の西軍が優位だと思ったわ。

徳川内府殿の東軍は数も少なく見えましたし、何より西軍に山から包囲されてるようにも見えましたから」
　確か、南宮山だったっけ？
「ところが、肝心の南宮山の毛利宰相殿の軍と松尾山の小早川中納言殿が全く動かないのよ。とにかく私たち見物客は不信に思ったわね……その後、何刻経ったかは覚えてないけど、突然松尾山が騒がしくなったのを覚えてるわ」
「小早川秀秋が裏切ったと」
「え……ええ。小早川殿が山を降りたから、いよいよ本格決戦と思ったのに……いきなり刑部殿の陣を攻めるから、みんな目が点になったわ」
「永原先生、刑部殿っていうのは？」
　私が聞く。
「ああ、大谷刑部殿のことよ。現代だと口を覆っているデザインで書かれるかしら？」
　うーん、戦国武将は詳しくないからよく分からない。
「最初こそ小早川隊も山へ押し返されてたけど、多勢に無勢。西軍はあっという間に総崩れになったわ」
「だけど、大方ケリが付いたと思った最後の方で、少し東軍が動揺してたわね。後で調べてわかったんだけど……どうやら島津殿の軍だったみたいね」
「……これが私の見た関ヶ原よ。その後はまた諸国を放浪したけど、関東にいることが多かったわね。特に江戸に幕府が開かれると分かってからは、江戸に住むことを決めたわ。実際に住めるようになったのは大坂の陣の後だったけど」
　永原先生のことを話していると、バスが急に登る感覚を受けた。
　ふと前を見てると高速道路に入ったことがわかった。
　高速道路に入ると、添乗員さんが「ビデオを見せる」としてバスについているテレビの機械を取り出した。
　私達が生まれる前に公開された古い映画で、時間も少々長いが、空前の大ヒットになった豪華客船の映画だそうだ。

途中のサービスエリアでの休憩中は中断するが、ちょうど映画の時間で高速道路の時間を潰せるとのこと。
永原先生や添乗員さんに拠れば「少し懐かしい映画」とのことだ。
私も名前だけは知っていたけど、見たことはないから、少し見てみようと思う。

さて、道中順調に進み、まだ何か大きな事件が発生したというよりは、小さな出来事があったという所で最初のサービスエリアで15分間のトイレ休憩が行われることになった。
バス付近でたむろする生徒が半分、残りの半分がトイレに行くという感じになっていた。
予定ではこの2時間後にもう一つのサービスエリアで昼食ということになっている。
私は何の気なしにサービスエリアの建物に入り、無料の水とお茶を飲んでいた。
バスに戻ろうとして交通情報が目に入る。
「あっ！」
私達の目的地までの間の道路が真っ赤になっていて、先頭部分に赤い？印がある。
これは明らかにこの先事故で渋滞していることを意味している。
「石山さん、どうしたの？」
永原先生が通りかかってきた。やっぱりこの服は目立つみたいだ。
「この先事故渋滞があるみたいなの！」
「……分かったわ、私の方で伝えてくる」
そう言うと永原先生は急いで駆けていった。
私も、この先の長丁場を考え女子トイレに急ぐ。それと同時に、おそらく私の渋滞情報を聞きつけたのか、いくらかの男女がトイレに向かっていくのが見えた。あれに巻き込まれないように、やや小走りで女子トイレに入る。
女子トイレの中で考える。
毎度のことだがここのサービスエリアでもうちの生徒と思われる

男子を含め、男性の視線を釘付けにしていることだ。
お土産店の店員さんがじーっと私の胸を見ていたのを見て、オスの本能に逆らうことの困難性を改めて思い知った。
メスの本能がどういうものなのかはまだ分からないけど、私もいつかメスの本能を自覚できる時が来ると信じたい。
バスへ戻ると永原先生に「帰って来てない人がいないか確認してくれる？」と言われた。
篠原くんも近くにいたので、永原先生と合わせて３人で確認する。
私は真ん中の３分の１に当たる３列１２人を担当する。
「あ、シートベルト絞めてください」
「す、すみません……」
高月くんがシートベルトを着用していないのを発見し、注意する。
素直に聞いてくれて何よりだ。
「篠原くん、そっちは大丈夫？」
「ＯＫー！」
「石山さーん、こっちも大丈夫！」
永原先生と篠原くんがそれぞれ呼応し、一番手前を担当していた永原先生が、運転士にその旨を伝える。
「２号車全員帰還しています」
無線からよくわからない声が聞こえる。
私は急いで自席に戻りシートベルトを着用する。
バスのエンジンの音が聞こえ、次の目的地に出発するようだ。

# 林間学校初日　到着

サービスエリアを出て、再び高速道路を走り始めると、先ほどの客船映画の続きが始まった。
船内を走り回り、そしてラブラブなシーンだったのに、いきなりパニックシーンになった。唐突な印象だが、どうも氷山に接近した挙句ぶつかったらしい。
なるほど、これで沈没するのか。
ふと高速道路の左側の案内を見てみる。
お馴染みの緑の表示機に「１６２０Ｋｈｚ　ハイウェイラジオここから」という看板の上側に、オレンジ色で「渋滞情報」の文字が見える。
先ほどサービスエリアで見た事故渋滞のことだろう。
１０分くらいしただろうか？　避難準備を開始する船員と、危機に気付かない客たちの描写をしている所で、バスは徐々に減速していき、やがて止まった。３０秒から1分ごとにわずかに進む、運転士さんにとってはもどかしい時間だが、幸い映画が放映中なので暇はまぎれそうだ。

船が徐々に傾き始める。女性と子供が優先だという。私はどうなんだろう？
当然ボートには乗れる身分のはず。そうだそのことについて聞いてみよう。
「永原先生」
「ん？　何かしら？」
「私たちがこの船に乗ってたら脱出できたかな？」
「ええ、もちろんよ。私たちは女性（レディー）だもの。でも……あまりいいことではないわね。女性しか助けないと勘違いしたために、ボートは定員以下で出しちゃっていたのよ」
「……そうね。私も、普通に先着順にしないと、かえって混乱して救助が遅れると思う」

実際ボートに乗ろうとしている男性が無理やり排除されているし、それどころか恋人や夫や家族と別れたくないとボートに乗らない女性まで出ている。というかヒロインがそうなっているし。

でも先着順なら、多分私は乗り遅れて海の底だろうけど。

「実はね、この事件があった当時の女性権利団体は、女性ばかり助かったことを『女性差別』だと批判したのよ。だけど今ではこの映画のこの状況はみんな『男性差別』だと批判するようになったわ」

「私もこれは男性差別に見えるけど……どうして女性差別だって怒ったの？」

「つまり女性は庇護すべき守るべきものだという扱いを受けたという批判よ。勇敢に死ねるのを男性の特権にしてるってね。日本だと状況は違うけど、欧米の場合は女性の自立や女性も強いといったことを重視するのよ。そして女性も男性並みに強くなれるという信条のもと、男性に庇護されるのを嫌うわけよ」

「……ばっかみたい」

私は思わず、吐き捨てるようにそう言った。

「……ええ、同感よ。ＴＳ病になった人は、ただの一人の例外もなくフェミニストにはならないわ」

「……」

「……だって、この病気になれば男女の違いを嫌というほど思い知らされるんですもの。むしろフェミニストにとって私たちの存在ほど都合の悪いものはないくらいよ」

私もそうだった。女の子になって弱い存在になった。何が「女も強く」だ。それに、そんなことを目指している女性はみんな行き遅れているじゃないの。私は心の中でそう思った。

相変わらず高速道路は渋滞が続く。渋滞中、この先２０キロ６０分とある……一般道路の方が早いんじゃなかろうか？

事故車両の撤去に手間取っているのか、見物人が多いのか。それは分からない。

映画に戻ってみる。船の傾きはますます激しくなっていて、乗客の

パニック状態は続く。主人公は浸水が激しくなった船から何とか脱出するものの、すでにボートは全部出てしまっていた。
そして案の定、ボートに乗れるのに乗らずに死んでく乗客たちが、同じく船に残った楽団の演奏曲とともに描写される。感動的なシーンだが、さっきの永原先生との会話を聞き、私は冷めた目で見てしまう。

どうも渋滞は思ったより短くなったらしく、バスは渋滞を抜け出した。

結局主人公は死んじゃったみたいだ。あ、こっちのヒロインが主人公なのかな？　まあいいや、こちらは救助されたわけだな。
そして最後の場面か。お、死んだ主人公と船で再開して皆が祝福して終わりか。
よくわからないけど、この映画は大ヒットしたみたいだな。
映画が終わってしばらくすると、もう一つのサービスエリアについた。ここは1時間の昼食休憩だ。
「桂子ちゃん、一緒に食べよ？」
「いいよー、どこで食べよっか？」
「とりあえず中入ろう」
「うん」
私と桂子ちゃんはサービスエリアで食べることになっている。ともあれ中に入ってみる。
「あ、先生もいいかしら？」
「もちろん」
永原先生も加わり、お昼ご飯になった。

「なあ、あの三人可愛くね？」
「すげえよな。美人ぞろいだよなあ」
「特に黒い服の子、俺には刺激が強すぎるぜ……」
「いやいや、一番背が低い子が可愛くね？　最年少だろうし純粋だろ

うよ」
「お前ロリコンかよ！」
「ち、ちげーよ！」
「にしたって見る目ねえぞ。三人とも可愛いけど、この中で一番はどう見ても黒い服の子だろ？」
「俺も黒い服の子を選ぶぜ。お前は？」
「俺は桂子ちゃんって言われてた子が好きかな。黒い服の子は性格悪そう」

４人組の男が思い思いに私たちを吟味している。私に2票、桂子ちゃんと永原先生にそれぞれ1票だ。
これまでもそうだったけど私を選ばない人ってこぞって「玄人ぶる」気がする。
永原先生も若くて美人だけど、戦国時代の人とあって背も低いのだ。確かにロリコンの人なら永原先生を選ぶかも。
それにしても私が性格悪そうって……
「ああいう黒い服みたいな子は、男慣れしていてヤりまくってるんだぜ。この中じゃ一番経験豊富なんだよきっと」
なっ……

「何よもう！　失礼しちゃう！　むー！」
まだ女の子になって3カ月足らずなのに！
私は思わず頬を膨らます。
「まあまあ優子ちゃん……」

「やべえ、聞かれてたぞ」
「そこのお兄さんたち？」
「は、はい！」
「私たちで一番年上なのはこの私よ」
「そ、そうなんですか!?」
「ふふっ……さ、石山さん、木ノ本さん、行きますよ」

「……は、はい」
「え、ええ」
呆然とする４人組の男性を尻目に、サービスエリアの食堂に向かう。
食堂は私たち小谷学園生と一般の客で賑わっている。
「木ノ本さん、石山さん、これなんてどうかしら？」
「何々……地域名産の野菜とそば粉を使った『地産地消そば』ねえ……確かにコンセプトは良さそうだけど……」
桂子ちゃんが私の方を向く。
「私も特に異議はないわよ」
「じゃあ決まりね。券売機に並びましょ」
券売機に並ぶと言っても、他の店にも分散しているためか、あまり行列はできておらず、そこまで待たされなかった。
テーブルも混雑しているがまだ空きがある。まずは飲み物で３人分の場所を取る。座って待っていると、手前の画面で私たちの番号札が呼ばれているのを確認。
３人でそれぞれトレイを持ち、蕎麦屋のおばちゃんからメニューと何かの無料券を受け取ると元の場所に戻る。
「「いただきまーす」」
「おっ！　結構おいしいわよこれ」
「そうねえ……地域のそば粉と野菜というだけあって、鮮度があるわね鮮度が」
桂子ちゃんと永原先生の言う通り、味も決して悪くない。でも鮮度ってのがよくわからない。
「私もおいしいと思うけど、鮮度ってどういう感じで見分けるの？」
「石山さん……素材の味よ。そうねえ……そのあたりは新鮮なのとそうじゃないのをよく食べ比べて覚えるしかないわねー」
「やっぱり経験ですか……」
「ええ、カリキュラムだけではなくて、どうしても時間の必要なこともあるんですよ。その辺は焦っちゃダメよ」
「う、うん……」

その後は黙々と食べ続ける。たまに紙コップを持って水を汲みに行く。

「「ごちそうさまでした」」

私たちは、「いやーおいしかったねー」何て言いながら返却トレイに戻す。「女三人よれば姦しい」なんて言うけど、あたしたちには当てはまらないようだ。

「ふう、まだ時間あるわね。石山さん、木ノ本さん、どうする？」

「わ、私トイレに――」

「こらっ！　石山さん、女の子が気やすくそういうこと言っちゃダメよ！」

あ、怒られちゃった……

「うんうん、女子力足りないわよ」

桂子ちゃんまで……

「ごめんなさい……」

「いい？　お花を摘むって言うのよそういう時は」

「カリキュラムの時はそこまで言われなかったのに……」

「あれは基礎編よ。今の石山さんは応用編なのよ」

「……は、はい……」

「んー、まあ次から気をつけてくれればいいわ。私も行くわよ」

「私も」

「え？　永原先生と桂子ちゃんも？」

「まあ、石山さんが行くなら何となくよ……」

「何なんですかその理由……」

「あー、優子ちゃんやっぱりまだまだだね。おしゃれとか仕草とか言葉遣いとかはもうすっかり女の子だけど、まだまだそういう深いところがなってないのよ」

「深いところと言われても……」

「とにかく！　女の子は下品なことは言わないものよ」

「はぁーい……」

ともあれ、3人で女子トイレに、それぞれ個室に入る。
さて、スカートをめくってパンツを脱ぐ作業に入ろうとしていた矢先、機械的な音が流れてきた。
「石山さーん！　学校にはないけど、この『音姫』ってのを見つけたらちゃんと押してね！」
「あ、うん！」
大事なことらしいので、便座に座ったら早速押す。
なるほど、これで「音」が聞こえなくなるわけか。
慎ましやかなのが乙女とも言うし、これもその一種だろう。よく分からないけど。
……って分からないじゃダメよ優子！　最近女の子らしくなってきたからって気を抜いちゃいけない。私はまだまだ女の子初心者なんだから。

ともあれ、一通り出し終わり、ビデを使ってトイレットペーパーを使い、パンツを元に戻したらトイレの水を流して外に出る。
二人はまだトイレに入っているようだ。
先に手洗いで手を洗い始めていると、二人が合流した。
「優子ちゃん、早かったね」
「あはは……ちょっと一気に出しすぎたかな？」
「まあ、その時の状況次第よ。ところで、出発までまだ後２５分くらいあるけどどうする？」
「……私は2階にマッサージルームがあるみたいだからそこに行きたい」
肩がこってるし。
「え？　石山さんマッサージをご所望？」
「う、うん。ちょっと肩がこっちゃってて」
「ああ、私も仕事疲れでちょっとねえ……木ノ本さんは？」
「私はマッサージは特にいらないわね……サービスエリアの裏側にある森林でも見に行きたいなあ……」
「そ、そう？　じゃあここで別行動ね」

「うん」
「じゃあ気をつけて」
「分かってますって」
そう言うと、私は永原先生と一緒に、先程の建物の2階へ移動し、マッサージ機がいくらか置かれている部屋に入る。
見た感じでは、ジジババが多く、小谷学園の関係者は私達だけのようだ。
「永原先生、この無料券……」
「ええ、マッサージルームの無料券みたいね」
私たちは受付で無料券を提示し、フリーパスでそのままマッサージ機に座る。
私がマッサージしてほしいのは肩だけなので、肩こりに特化した15分コースを選ぶ。

椅子が複雑に動き、背もたれが下がって寝てるような感じになる。
そのまま機械が私の肩を刺激する。
「いっ……」
ちょっと見当違いの所をマッサージされて痛い。
リモコンを操作し、もう少し上をマッサージしてもらう。
「あー気持ちいい……」
このマッサージ、虎姫ちゃんや恵美ちゃんほどじゃないけど、かなり肩こりに効く仕様だ。
最近は特に肩の「頂上」の部分が凝っているため、位置を調整してそこを強く刺激させる。
「ふぁあああああああーーーーー気持ちいいーーーーーー」
爽快感あふれる気持ちよさ。少し痛いけどこれがまたいい。
こっている部分が「コリッコリッ」と音を立てる。この音が骨伝導して直接脳に響き、臨場感が増す。この徹底的にもみほぐされていく感覚がたまらない。
毎日巨大な果実をぶら下げている肩に感謝を込めて、念入りにマッサージする。

「ふうーーーー」
隣の永原先生も日頃の仕事の疲れを癒やし、マッサージに講じている。
気持ちよくしていると、突然マッサージ機が動かなくなった。どうやら15分経過したらしい。
「あ、石山さん、そろそろバスに戻りましょう」
「え、ええ」
永原先生の言葉を聞き、携帯電話で時計を確認する。うむ、戻ったほうが良さそうだ。

バスに戻り、篠原くんと人数確認をする、バスは次のインターチェンジで降りて、一般道路へ入る。
最初は人家や商業施設もまばらにあったものの、道路を進むに連れ、坂は上り一辺倒となり、車線も1車線になり、森林が増える。
やがて前方に中規模ホテルが見えた。
門に4台のバスが入る。そして「歓迎　小谷学園御一行様」と書かれている。
バスは全て無事に駐車場に到着。
「前の人から降りて下さーい！」
永原先生の声とともに秩序正しく前から降りる。
そして最後に私と永原先生が出る。念のために誰か残っていないか左右を確認しながら降りる。
最初に降りていた添乗員さんと、いつの間にか近付いていたホテルの職員さんの手に寄ってバッグが外に出されていた。
篠原くんが「他人のバッグと混同するなよ」と指示を飛ばしていた。
男子も含めみんな物分りがいい。私のことを、かつて男扱いしていた人たちと同一人物同一集団とは到底思えないくらいだ。
私が降りてしばらくすると、バッグの山は殆ど無くなっていた。永原先生と、篠原くんが自分のバッグを取り、最後に残った一つを私が取り終了だ。
フロントが狭いため、まずは屋外で、ホテルの人が挨拶するみたい

だ。
私たちは、全員がちゃんと並んでいるかを確認する。ちなみに、４列に並んでいればいいので順番は考慮しないそうだ。

「えー、本日は、我が『ホテル山のはて』をご利用いただき、誠にありがとうございます。当ホテルでは、山の秘境と温泉をテーマに、隠れた名所を売りにしてまいりました。どうぞ心ゆくまでご堪能下さい。以上」
短いスピーチに拍手が起きる。絶対長々としたスピーチよりも歓迎されるだろう。
ともあれ、ここが今日から3泊4日の拠点となる。無事に過ごせればいいけど……

# 林間学校初日　休息と夕食

さて、まずはこの荷物を自室に持っていく事から始めなければならない。

ホテルは地上8階地下1階で3階から7階までが客室になっていて、私たちの部屋は7階だ。

まず1組からロビーに入る。中ではホテルの施設について改めて説明がある。私達は一旦待機する。

事前のオリエンテーションでも知っていたが、ここは風呂が地下と最上階に、また1階はロビーとお土産店、そしてゲームコーナー、2階がレストランと軽食屋になっている。

朝昼晩は付いてくるが、軽食屋は間食用で自己負担だ。

各部屋にはカードキーがあってそれぞれ一人1枚存在している。呼び鈴を鳴らせば部屋に出入りも出来る。

ちなみに、深夜早朝に部屋を抜け出して風呂に入っちゃり、ゲームコーナーに入り浸ってもいいらしいが、「忍び足で他人に迷惑をかけないこと」が絶対条件で、現実問題毎日疲れるため、深夜早朝に風呂に入るのは先生や添乗員さんやバスの運転士さんくらいだ。

逆に、夜中に起きやすい先生や、ホテル滞在中は暇になりがちなバスの運転士さんなんかは、静かに深夜の風呂を楽しみたいというわけだ。

そして、「先生たちが消灯時間を思いっきり破ってる手前、生徒に禁止するのは如何なものか」という校長先生の鶴の一声で、生徒にも深夜風呂は解禁されているのだが、現実には1年に述べ1人いるかいないかだそうだ。

ちなみに、普段のホテルは内側から鍵がかかっているため、生徒が抜け出す心配はない。

私達も1組に続いてロビーに入る、永原先生が中央に立ち、実行委員として篠原くんとともに左右に立つ。

永原先生が施設の説明を改めて行い、低層階の部屋の生徒から順番にエレベーターへ並ぶ。

最後に私と桂子ちゃんと虎姫ちゃん、そして永原先生が乗り込み、7階の自室を目指す。
私達の部屋は7階のエレベータ降りてすぐのところにあった。
私がまず部屋を開ける。

「ふうーーーー疲れたー！」
桂子ちゃんが開口一番そう言う。
ちなみに、現在時刻は午後3時。夕食までは2時間半あるが、この時間は移動疲れを取るという名目でまるまる休憩時間になっている。
というのも、ある時期に高齢の先生が居た時に、移動してすぐの行事は辛いということで、目的地に付いてから最初の日は休憩時間にするという要望が出た。そしてこれが意外に他の先生や生徒にも好評でそのまま残っているらしい。
こういう緩い所は、いかにも小谷学園らしい。
桂子ちゃんも虎姫ちゃんも、やはりバスはかなり疲れたらしく、今は休みたい気分だ。
私も少しゴロゴロする。
「優子、スカートめくれないように気をつけなよ！」
「あ、うん」
危ない危ない。虎姫ちゃんと違って私はいまスカートだったんだ……って桂子ちゃんもそうだった。
私は部屋のベッドの上に横になり、布団をスカートにかぶせる。
「お、優子ちゃんさすがだねー」
桂子ちゃんが感心する。
「えへへ、実はカリキュラムの時にだらしなく休んでたらおしおきされたんだよ」
「え!?　おしおき!?　そんなことされるんですか!?」
あ、しまった。罰としてスカートめくりされてたこと知ってるの桂子ちゃんだけだった。
「あ、いや……まあその……怒られちゃったっていうの？　パンツ見えてる状態で休んじゃって……」

「ふーん、まあ詳しくは問い詰めないでおく。ともあれ、その『おしおき』のおかげでその習慣が身についたと」
「……う、うん」
「何だろう、私もカリキュラム受けてみたい……」
「あはは、虎姫ちゃん、カリキュラムはあくまでＴＳ病の子が女の子らしくなるためのものだから、生粋の女の子にはちょっと……」
「でもさー、私、そのカリキュラムは一部の女子校の女の子とか、受けるべきだと思うよ」
「け、桂子ちゃん何で？」
「龍香から聞いたんだけど、女子校の子って男が居ないせいでだらしなくなるのよ」
あーそう言えば龍香ちゃんが女子校のお友達について話してたような……
「龍香の友達に、女子校の子がいるんだけど、その子の話になると『どんどん女の子らしくなくなっている』ってそればっかりなのよ」
「そ、そうなんだ……」
女子校に転校しなくてよかった……
私達は雑談しながら時間を潰す。と言っても2時間半は結構長い。
「私、ちょっとシャワー浴びるわ」
「あ、うん」
桂子ちゃんがシャワーを浴びに浴室に入る。
部屋の風呂は自由に使っていい。ここの温泉にも禁忌症状が一応あって、実は以前生徒の一人が偶然それだったケースが有って、一人だけ風呂に入れない事態が発生したらしい。
以来、部屋の風呂も使えるようになったとか。
まあ、どうしても恥ずかしいって子もいるだろうし、部屋の風呂の料金も宿泊代に含まれているから禁止しても仕方ないということか……
でも私は使うかは分からない。
とにかく疲れた。少し横になって休もう……
鞄からまだ読んでなかった少女漫画を出して読む。一巻ほど読ん

で疲れて眠くなったので横になろう。なんかウトウトして考えられないや……

「優子ちゃん、優子ちゃん起きて！」

私は……そうか寝ちゃったのか……

……あれ？　ここ何処だっけ？　頭が回らない。

私服姿の桂子ちゃんが私を見てる。

「あれ？　桂子ちゃん？」

「優子ちゃん、もうすぐ食事の時間だよ。すぐに行かないと入場制限になっちゃうわよ！」

「あっ、ごめん桂子ちゃん！」

あー、林間学校だということをすっかり忘れていた。幸い実行委員の仕事は、お風呂の時間までに全部屋が食べ終わったかどうかを最後に確認する作業だけだが、食事は早めに取りたいのも事実。

「分かった、急ぐわね」

虎姫ちゃんが私達の1日目夕食の食事券を持っている。

私のカードキーを使い部屋をロックする。廊下に出てみると何人かが部屋を出てくる所を見た。

私達はこれから、食事に向かうことになった。

ともあれ私達は、エレベーターから出て、2階のレストランへ向かった。

……あれ？　あんまり混んでない……

「桂子ちゃん、虎姫ちゃん、あんまり混んでないよ……」

「あれ？　そうだねえ……」

二人とも意外な表情だ。

「結構休みたいって人も多かったのかなあ……」

「お菓子食べすぎちゃったとか」

「思いっきりお腹空かせてから食べたいとか？」

三人が思い思いにこの予想外の状況を分析する。

そうしながら入口に行く。虎姫ちゃんが代表して3人分の券を係

の人に渡す。
まずトレイを取る。次に2個の皿とコップ、箸を取る。
「優子ちゃん、もし取り終わってたら先食べててていいよ」
「あ、うん。分かったよ」
バイキングと言っても、私は食が細いからそこまで多く食べられない。
食べ放題とか行くと１００％損することになったから、食が細くなって食費はかからないといっても完全にいいことばかりでは無いということか。
野菜を少量取る。フライドポテトとチキンを少量、2番目の皿にグラタン、3番目の小皿にケーキとフルーツ、更にコップにオレンジジュースを入れ、茶碗とふりかけを取って米を入れて完成だ。
一番最初に取り終わった私は窓枠のテーブル席を陣取る。
「いただきます」
桂子ちゃんから「先食べてていいよ」とのお達しをもらったので、遠慮なく先に食べさせていただく。
「もぐもぐんぐんぐ……」
……うん、美味しい。
「あ、優子ちゃん、ここに居たんだ」
「んっ……ごくっ……あ、桂子ちゃん、虎姫ちゃん」
ちゃんとご飯を食べきってから喋る。食べながら喋ることは、男の頃から「お行儀が悪い」と言われていたわけで、女の子なら尚更だ。
「それでさー、優子ちゃんの寝顔！」
桂子ちゃんがあたしについて話す。
「ふえ？」
「凄く可愛かったですよ！」
「ああ……うん、ありがとう……」
「そうそう眠れる森の美女って感じだったよ」
虎姫ちゃんが私を「眠れる森の美女」に例える。
「あはは、でも王子様がいないよ私……」
「優子ちゃんならすぐ来てくれると思うわよ、王子様」

「うんうん、きっと素敵な王子様だよ」
「うーん……」
私は頭の中で素敵な王子様を思い浮かべる。でも顔が見えない。よく分からない。
「ごめん、よく分からないや」
「……まあ、今は無理しなくてもいいわよ。少しずつ、一歩一歩前に進めばいいんだから」
「そうそう、優子は時間あるんだから」
「う、うん」
そうだよね、ゆっくりゆっくり。もっともっと、女の子らしく、可愛らしくなって行こう。
「ふう……お代わり」
虎姫ちゃんがお代わりをする。
「ねえねえ、あっちにうどんコーナーがあるよ」
お椀サイズの小さなうどんが置かれているらしい。
私もさすがにこの量だと少ないのでうどんを取りに行こう。左手にもう一皿持っていく。
右手でうどんを取ったら野菜を取っていた空の皿には焼きそばを少量だけ入れる。
ちなみに、虎姫ちゃんと桂子ちゃんが先ほど私が取らなかった種類のケーキを取っていた。
ともあれ私たちで食べ始める。

「ねえねえ優子ちゃん、このケーキおいしいよー！」
「え？　そうなの？」
優一だった頃は、甘いものが特段に好きというわけではなかったが、確かにおいしそうだ。
でもまずは、自分で取ったものから片付ける。
このうどん、スープもおいしいなあ……
……よし、完食。最後に焼きそばだ。
焼きそばの味は平凡な感じ。まあ食べ放題だし贅沢は言えない。

……うむ、お腹いっぱい。

「あ、優子ちゃんもこのデザート食べてみてよ」

食べるのに夢中になっていたため、先に食べ終わっていた桂子ちゃんが私用のデザートを持ってきてくれた。

「ありがとう……でも、ちょっとお腹が……」

「まあまあ優子、スイーツは別腹よ別腹！」

「別腹って、人間お腹は一つしか……」

「まあそう言わずにさ、優子ちゃん、これも乙女の修行だよ！」

別腹が乙女の修行って……でも問答しても「深い所で分かってない」って言われそうなのでとりあえずそのスイーツを見てみる。

……んん？　なんかすごい美味しそうな気がする！

食べたい誘惑がある。美味しそう……

「じゃあ一口……」

お腹一杯のはずなのにそんな感覚もなくなってフォークでケーキを刺して一口。

「うーーーーんっ！」

甘い味が口全体に広がる。このバニラの至福の味。

何だろう、味覚は男の頃と変わってないはずなのに、甘いものには弱くなった気がする。

でも、女の子になりたての時はそんなこともなかったような……

「おいしい？　ほらこっちもいいわよ」

しかし、私のその思考は桂子ちゃんに勧められた新しいケーキの誘惑でかき消されてしまった。

今度はチョコレート味のケーキ。食べる前に鼻にいい香りが襲い掛かり、あたしの理性を崩していく。

「あーチョコレート好きだわぁ」

「ふふっ、優子ちゃん、もっと食べる？」

「うーん、そろそろいいかな……」

さすがに2個小ケーキを食べたところで満腹感が強くなった。別腹はすごく小さい。

「じゃあ、優子、桂子、他の人もいるからそろそろ出ますか」
「うん、そうしよっか」
食べた時間は正味３０分、夕食の終わりまではあと1時間２０分ある。風呂は午後８時からだからもう少し後……でもその前に実行委員の私は夕食券のチェックがあったんだ。
ともあれ３人で部屋に戻る。

「テレビ見ようか？」
「うん、そうしようか」
で、合わせた番組が……
「ニュースをお伝えいたします。今日未明東京渋谷の――」
「……私達、何でニュース見てるんだろ？」
虎姫ちゃんが唖然とした表情で言う。
「だって楽しそうな番組ないもの……」
「ねー」
とはいえ、ニュースも時折下手なお笑い番組より面白いことを伝えてくるから油断できない。
私的にも隠れた名番組だと思う。不謹慎だったりすることもあるけど……

「以上、ニュースをお伝えいたしました」
「うーん、面白いニュースなかったね」
「かといって凄そうな事件もあるわけでもなく……」
「行方不明者が遺体となって発見されたくらい？」
「治安いいよね最近」
ともかく息苦しい世の中だと言われているが、治安は目に見えてよくなっている。
そういえばネットで「息苦しさと治安の良さは正比例」なんて意見もあったな。
私の身からすると死ぬとすれば主に事件事故に巻き込まれることだから、治安が良くなるのは歓迎だ。

そして、ニュースに続いて流れてきたのは「気象情報」だ。
「あ、天気！」
「天気予報は大事だよね」
明日は登山が予定されている。最も、高気圧がドカンと居座ってるおかげで、明日の天気は今日に引き続き晴れで、週間予報も全て太陽マークだ。
レーダーにも雲が全く移っていない。いくら山の天気は変わりやすいと言っても、山はそこまで高くないし、これでは雨になりようがないだろう。
「晴れそうでよかったね」
「う、うん……」
明日の登山、やっぱりまだ不安がある。登りきれる可能性は正直１割あればいい方。
「大丈夫だよ優子ちゃん。そんなに険しくないから」
「それに、サブリーダーもついてるだろ？」
「……うん」
やっぱり体力的な負担もあるし、体育の先生から止められる可能性さえある。
１０００メートル級と行っても、身体が弱いとその標高でも気分が悪くなることはあり得る。
さて、気象情報の次は地域のニュースをやっている。
ニュースと言っても地域のグルメや祭りなどを紹介する番組のようなものだ。
「――地域１００年の伝統のお祭りが明日まで開催されています！」
「ねえ虎姫ちゃん、桂子ちゃん」
「ん？」
「こんな急に紹介されても、実際に行く人なんているのかなあ……」
「さあ？　でもテレビの宣伝効果って何だかんだ強いからねえ」
「でも私たち若い子はどうだろう？」
「うーん……確かに……」

「でも面白そうだよねえ……」
「うんうん、私たちの近くの神社でも夏祭りするから楽しみだね」
「優子ちゃん夏祭り行くの？」
「中学行ってから行ってなかったけど今年は行こうかなって」
「それはいいわね……」
番組の内容そっちのけで女の子たちがおしゃべりをする。
で、脱線しすぎたことに気付いて元に戻る。
３人の少女たちの、何気ない憩いの一時が続いていた。

# 林間学校初日　初めての共同浴場

ピーンポーン
番組も終盤に差し掛かった時だった。
「はーい！」
誰かが部屋の呼び鈴を鳴らしたので私が出る。
「石山さーん、食事後処理の時間ですよー！」
「あ、永原先生」
ドアを開けると永原先生が食事後処理の時間だという。
「じゃあ桂子ちゃん、虎姫ちゃん、私行ってくるからねー」
「はーい、いってらっしゃい」
「じゃあ石山さん、行きましょうか」
まず永原先生とエレベーターに並ぶ。中に入り永原先生はレストランのある2階の他に、もう一つ違う階のボタンを押し、「閉」ボタンを押す。
「ドアが閉まります」という音声とともにエレベーターのドアが閉まり動き始める。

「じゃあ私は篠原君を呼んでくるから、先にレストランに行っててね」
「はーい分かりましたー」
なるほど、永原先生が押したのは篠原くんが止まってる部屋だったのか。
私は単独で2階に行き、レストランに行く。
すると他の実行委員と先生が何人かいた。でも全員ではないようだ。
数分後、永原先生と篠原くんを含む数人が到着、全員集まったということで、少し早いが前倒しで仕事を始めるとのことだ。
「券の組数を見てください、先ずはその仕分けから始めます」
「「はい」」

永原先生の実演とともに作業が始まる。
「えーっと、これは3組……」
券を4つの山に分け四つの箱があり、組ごとに区分けていく。
券のデザインは組が一番目立つようになっているのでそうそうミスはしないようになっている。
あたしの身体能力はどんくさいが、これに関しては平均的な速さを確保できている。むしろ篠原くんよりやや仕事が速いくらいだ。
「2組……4組……4組……1組……3組……」
いいぞいいぞ。時折手が交錯しそうになるが、大惨事にはならない。

「……よし、山が空になった！」
「あら、石山さん、篠原くんすごいわねえ。一番乗りよ」
「お、ホントだ」
「分かってると思うけど、ここからクラスの名簿を確認するのよ」
「うん大丈夫」
私達が終わって1分くらい後、全員の作業が終わる。
2組の箱を取り、大きなテーブルに移動する。
篠原くんと共に名簿の書かれている場所に置いていく。
「えっと、安曇川虎姫……石山優子……木ノ本桂子、ああ、あたしたちの部屋かこれ」
「……高月章三郎……志賀さくら……」
クラスメイトの名前をつぶやきながら一人一人対応する所に入れていく。
「あれ？　この名前？」
知らない名前があったので一旦どけておく。3組ってあったぞ……
32枚を2人で16枚なので時間はそこまでかからない。というか4組128人なので全部を一人でも十分やれるような作業量だがまあいいだろう。この弱い身体にとっては負担が減るのはありがたい。

「よし終わり！　篠原くん、そっちは？」
「う、うん。ぜぜっ……全部終わったよ」
やっぱり何か対応ぎこちないなあ……
「すみませーん、誰か3組の券を一枚持ってませんかー!?」
「あ、任せて……はーいこっちでーす」
私が3組の実行委員に券を渡す。
「す、すみませんありがとうございます」
3組の男子実行委員が私の胸を凝視しながら答える。
ここで「やだっ、胸ばっかり見ないで」って小悪魔的に叱ってもいいけど、彼のその後のクラスでの立場を考えて黙っておく。
「よし、とりあえず2組は全員食事に出たわね」
「そ、そうみたいだな」
篠原くんがそっけなく答える。
1組3組4組も、それぞれ実行委員が異常なしを伝えると、永原先生が解散を宣言。
かなり丁寧にやっても15分程度で終わった作業なので、部屋に戻ってパジャマを持ってきて風呂に入るまで十分に間に合う。
最も、2組は、今日は2番目の風呂が予定されている。林間学校の風呂は一斉参加してもいいし、参加せずに敢えて人の少ない時間帯を狙うのもありだ。
まあ、大抵の人は一斉参加のときだけ入るんだけど、特にきれい好きの女の子とか極端にシャイな人とかは後で一人で入ったり、明日の朝にも入ったりするのだ。
私も女の子なので、明日以降は一日2回以上のお風呂を心がけたいと思っている。

ともあれ、部屋に戻る。
「ただいまー」
「あ、優子おかえりー」
虎姫ちゃんが迎えてくれる。
部屋では地域番組の次に報道されていたドキュメンタリー番組を

見ていた。
　人類の謎とやらで、終わる時間がちょうど風呂ときりが良いらしい。
「人類って不思議だよね」
　桂子ちゃんが話を振ってくる。
「私は、ＴＳ病がどうして起きるのかが不思議かなあ……」
「確かに考えてみればとんでもないよねえ……」
　虎姫ちゃんも加わる。
「でも、私が不思議なのはＴＳ病の人が不老になることよ。性別が変わるより不思議よ」
「うーんでも、不老ならほら、ノーベル賞の蓬莱教授の研究もあるしそこまで大きいことじゃないと思うけど」
「うん、優子ちゃん……やっぱり性別変わることの方が不思議よ……」
「うーん……」
　しばらく考えてみるが、ちょっと思いつかない。
　番組は進む、ホモなんとかというのがいっぱい出て、私達は「ホモ・サピエンス」というらしい。
　そうこうしているうちに、番組が終わった。
　どうやら現生人類の誕生でこの番組はおしまいらしい。

「さ、優子ちゃん、お風呂行きましょう」
「……うん」
　お風呂、女風呂。
　そう言えば、女の子になってから温泉や銭湯に行ったことがない。
　ついに私も女の子同士でお風呂。とっくに女子として受け入れられたと言っても、やっぱり緊張してしまう。
　もちろん永原先生が教頭先生を撃退しなければ私は別の時間に隔離される運命だった。もちろんそれよりはずっといいけど。
「女の子同士別にいいじゃないの優子」、いくら自分に言い聞かせても、この緊張は収まりそうにない。
「優子、緊張してる？　私もよ」

「そうねえ、どうしたって身体洗う時は裸になるわけだもの。もちろん分かってるとは思うけど、誰も優子ちゃんのことを拒絶したりしないわよ」
「そうですよ。さ、タオルとバスタオル、それからパジャマを持って行くぞ！」
「う、うん……」
少しの不安を抱え、私達は階段を上る。
そして階段とエレベーターを出て正面がT字路になっていて、右側に男の湯が、左側に女の湯がある。
ちらっと右側を見ると、男子が集合していた。
もう私は右側には行きたくない。
左側を見る。赤い暖簾の女の湯。未知の領域だ。
でも私は実行委員、集団の先頭に入る。
「えっと……皆さん、お、お風呂の時間です！」
雑談に講じていたクラスの女子たちが私を見る。
ちなみに17人全員集合していて何人かは緊張していた。
「これからお風呂に入りますが、泡を湯船に入れたり、湯船で泳いだり、バスタオルのまま入るなどの、入浴マナーに反する行為は、他の人の迷惑にもなりますので、ご遠慮ください！」
よし言えた！
「じゃあ入ります！」
私はそう言って扉を開け、スリッパを脱ぐ。
他の女子も続く。脱衣所に入る。
平常心平常心……でも、今までの着替えるところとはやっぱり違う。
どうしても心臓が凄まじくバクバク行っている。クラスメイトの女の子たちの裸を想像してしまう。女の子に自分の裸を見られることを想像してしまう。
……ああ、やっぱり桂子ちゃんたちの言う通りだ。女の子になりきっているようで、まだ深い所で「男」が出てしまっている。
でも入らないことにはしょうがない。まずは持ってきたパジャマ

を中に入れ、頭のリボンを解き、脱衣所のかごにタオルをかける。
黒いワンピースの背中のファスナーを外し、脱ぐ。
ワンピースを丁寧に畳む。
靴下とシャツを脱ぎ、下着姿になる。
これ以上はみんなに晒したことがない部分。やはり躊躇する。ふと横を見る。みんな脱ぎつつも、バスタオルでうまく前を隠している。よし、これで。
ブラジャーのホックを外し、片手で胸を隠すとバスタオルを使う。幸い胸が大きいため挟んで支えることが出来た。
次にパンツを脱ぐ。両手を使い、うまくバスタオルで隠しながら、いつもの二倍の時間をかけて脱ぐ。小さいタオルと入浴用の髪留めを持ってこれでＯＫだ。
「お、優子、やっぱすげえなその体！」
「え、恵美ちゃん！」
恵美ちゃんが声をかけてきたと思ったら、素っ裸になっていた。私みたいに隠していない。
あまりにも堂々としていて、視線をそらすことが出来ない。
テニスで鍛えているためか、「動ける」体つきだが、胸はもちろん私の圧勝だ。

「あ、優子ちゃん。そういえば優子ちゃんっていっつもリボンしてるよね」
「うんうん、オシャレだと思ってはいたんですが、前頭部にリボンを付けるようになったきっかけってあるんですか？」
桂子ちゃんと龍香ちゃんが食いついてくる。龍香ちゃんは小タオルだけ持っていて上半身を隠してない。緊張はするけど、不思議と興奮度は高くない。桂子ちゃんは私と同じく上下半身バスタオル仕様だ。
うーんと、何だっけ？　あっそうだ！
「その……女の子になって初めて外出した日に、母さんが私の前頭部

に白いリボンを付けてきて、『黒い髪に白いリボンは映える』って言われて、それがやっぱり可愛くて、それ以来そこにリボンをつけるようになったわ」
「へえ、そうなんですか！」
「と、とりあえず入ろうよ……！」
「おう、そうしようぜ！」
あたしの掛け声で、女子たちが一斉に風呂に入る。
まず「かけ湯」の所に行列ができた。
桂子ちゃんと恵美ちゃんがまず湯をかける。バスタオルは濡れ濡れだが仕方ない。あたしは支えないと落ちちゃうけど、他の子は両手離しても落ちてない。
うーやっぱりスキルの差が出ている。でも直接聞くわけにも行かないし……どうしよう……
ともあれ、私も見よう見まねで湯をかける。
風呂は大浴場と露天風呂がある。17人にしては少し広々だ。
まずは身体を洗うため、そちらに移動する。左隣は桂子ちゃんみたいだ。そういえば、桂子ちゃんの裸も見たことはない。
流石に身体を洗う時はバスタオルを脱がざるを得ない。
うううう……やっぱり他の人が居る所で完全な真っ裸は恥ずかしい。

ともあれ、まず桶にお湯を入れ、タオルを濡らし、膝に置いてボディーソープを付けて泡立てる。
念入りに身体を洗う。特に胸の谷間は汗が流れ落ちやすいので注意する。
女の子になったばかりの頃は力を入れすぎて肌が赤くなったりしたこともあったけど、今はもうそういうことはなくなった。
一通り入念に洗ったら一旦流す。夏場は汗がひどい時には二度洗いということもするが、今回はしない。
洗いすぎも肌に良くないからだ。
さっきまで話していた女子たちも一斉にシーンと静まり返り、洗うことに専念している。

左手で小タオルを桶につけて泡を取ると同時に右手でシャワーを操って身体を洗い流す。
桶が泡で大変なことになっているので、一旦捨ててシャワーを使って念入りに洗う。これは身体を拭く時に使うから重要だ。
次に髪の毛を洗う。シャワーでまずよく濯ぎ、シャンプーを頭にかける。鏡を見ながら上向きを意識する。
地肌をよく洗い、次に髪の下の部分を手入れする。
少し時間をかけて、シャンプーがよく通るように待つ。
シャワーで勢い良く洗い流す。
洗い流しつつリンスを手に取る。このあたりは少女漫画雑誌にたまたま載っていたことをそのまま実行する。
そして髪を徹底的に洗ったら、最後に風呂に入るためにヘアゴムで髪の毛を上にまとめて終了。もう一度バスタオルを身体に巻き付け小タオルを腕に乗せ、風呂桶にお湯を張って、椅子を洗えばもう大丈夫だ。
見てみるとクラスの半数以上が既に湯船に浸かっていた。
まずは一番大きな湯船に浸かってみる。そこは龍香ちゃんや桂子ちゃんを始め、何人かが入っていた。
恥ずかしいけど、バスタオルのまま入浴は不可なので素っ裸になってから湯船に入る。
「いやあ、優子さん女子力高いですねえー！」
裸の龍香ちゃんが話しかけてくる。
「え？　どういうこと龍香ちゃん……」
「いやだってほら、リンスなんて使うんですよ。私だって彼氏とのデートのときくらいですよ！」
「そ、そうなんだ……」
でも女子力高いって言われるの嬉しい。やっぱり何だかんだでまだまだ女の子経験浅くて、このバスタオルで早速ボロが出てるし。
「身体も丁寧にちゃんと洗えてましたし、ヘアゴム持って髪を大事にしてる所もマルですよ！」
「あはは、実は女の子になって最初の日に風呂に入った時、髪を湯船に

つけて失敗しちゃって……」
確かパジャマの背中に濡れた髪がひっついちゃったんだ。
「おおう、やっぱり優子さんの今の女子力の間には、涙ぐましい努力があるんですね！」
「でも、バスタオル、まだうまく巻けないのよ」
「あはは、そのあたりは自分の体格とも相談ですよ。特に優子さんの場合は……」
「う……うん……」
やっぱり胸の話題になる。なんかこの胸、浮いてる気がする。
「それにしても、やっぱ優子ちゃんってスタイル抜群だよねえ……」
「え、えへへ……」
桂子ちゃんがあたしのスタイルを褒めてくれる。可愛らしい美人に褒めてもらえるのはやっぱり嬉しい。
「後、やっぱり私が確認した限りでは、優子ちゃん医学的にも正真正銘女の子だったよ！」
「ちょ、ちょっと桂子ちゃん！」
「まあほら、優子ちゃんどうやって洗ってるのかなあって気になっちゃって……」
隣だったけど見られてたのか……
「おーそうですか、まあ知ってましたけど」
「え？　何処で見てたのよ？」
「いやー、優子さんが脱いでいる時にちらっと。バスタオルで隠したつもりでしたけど、私の角度からでも、優子さん女の子だって確認しましたよ！」
「あうううううっっっ……」
龍香ちゃんに裸を見られていたと思うと、恥ずかしくって体が熱い、ゆでダコになりそう……
「まあそう恥ずかしがること無いじゃないわ、すぐ慣れるよ。それに今回はあくまで『最終確認』って言う意味もあったのよ。医療よ医療」
「じゃ、じゃあ桂子ちゃんそのバスタオル脱いでよ！」
湯船から立ち上がり、四隅で後ろ向きになりながらバスタオルを巻

きつつフォローする桂子ちゃんに言う。
「え？」
あ、ちょっとまずかったかな……
「んー、ごめん、やっぱ恥ずかしいよね……」
よかった、納得してくれたみたいだ。
「あ！　私、露天風呂行ってくるね」
危険な香りのするガールズトークを避け、露天風呂へ。女子の何人かが付いてくる。他の子の裸は大分見慣れてきたけど、自分の裸を見られるのはまだ恥ずかしい。これも女の子になって「恥じらい」を意識してきた結果かな？
ともあれ、ドアを開け露天風呂へ。少し寒いのですぐに湯船に入る。
露天風呂からは満天の星空が見えた。もちろん屋根付きだから完全に見通しがいいわけじゃない、桂子ちゃんが、これが何処の星だとか言っている。
私もそれをなんとなく聞く。桂子ちゃんの説明は難しく、覚えたのは、夏の大三角形のうちデネブだけが規格外ということだ。

「残り１０分よー」
脱衣場から永原先生の声が聞こえてくる。
「みんなー、そろそろ出る準備してー！」
「「はーい！」」
永原先生の言葉を受けて、私が指示を出すと、女子のみんなが勢い良く返事する。身体を拭いて脱衣所へ、かけ湯を浴びてる人もいる。
私は、ちょっとだけ打たせ湯のお世話になった。
今日は昼間マッサージ機を使わせてもらったけど、やっぱり肩こりは治ってない。
私は出口前で体を入念に拭く。他の子もそれぞれ自分のことに集中してくれていて、ちょっとだけ安心だ。まあ、もう多くのクラスメイトに見られちゃったし。

体をよく拭いたら脱衣所へ。少し寒い。
脱衣所ではバスタオルをまず乾かして、それから拭く。
身体を拭いたらまずパンツを穿く。バスタオルを胸に挟み、両手を使える状況にすれば大丈夫だ。
次にブラジャーを付ける。これは身体を前にかがめればＯＫ。
次にパジャマを着る。ズボンを一気に穿き、次に上も穿く。ゆったりとしていて着心地がいい。地面に落ちたバスタオルを拾い、小タオルと着ていた服を持つ。頭のリボンも、寝る時はもちろん外すのでこのままだ。
「リボンしてない優子ちゃんって珍しいよねー」
「水泳の時以来かな？」
そんな話を尻目に、残り時間が少ないため、速やかに退出するように促す。
風呂場を出ると男子の姿は殆どない。時間を女子に合わせているので、男子には長いのだろう。
何人かはエレベーターを使い、何人かが階段を使う。
私たちは一階下の部屋なので階段を使用し、桂子ちゃん、虎姫ちゃんとともに部屋に入る。カードキーは桂子ちゃんが代表して持ってきてくれた。

「ふー疲れたねー」
「今日はもう休みたい……」
風呂あがり、やはり私達は3人共かなり疲れている。
「うんそうだね、明日は登山だし、まだ消灯時間じゃないけど、早めに寝る？」
「異議なし！」
「あたしも！」
「じゃあ消すね」
電気が消され、部屋の中央部にあったベッドにそれぞれ入る。
「おやすみー」
「おうおやすみー」

「おやすみなさい桂子ちゃん、虎姫ちゃん」
三人がそれぞれお休みの挨拶。まだ9時前で、就寝時間には早いけど、早く就寝して悪いなんてことはない。
疲れを取るため、会話はなくなり、それぞれが睡眠に専念していった。

# 林間学校二日目　可愛い優子、美人の優子

「んっ……」
　意識を回復する。布団から出る。
「あ、優子起きた？」
「あ、桂子ちゃん……」
　見るとパジャマ姿の桂子ちゃんと虎姫ちゃんがゲーム機で対戦していた。
「ふぇ……桂子ちゃん、虎姫ちゃん、今何時？」
「４時３５分よ」
　虎姫ちゃんが言う。外はまだ薄暗い。
「よ、よじ……」
「あはは、私達寝るのが早かったからねえ……」
「喉乾いた……」
　私は洗面台に行って水を飲む。二回目はうがいをする。
　桂子ちゃんと虎姫ちゃんはゲームで対戦していた。音を聞いていれば分かるように私も一応持っているゲームだ。
「優子ちゃんも一緒にやる？」
「うーん、その前にお風呂入りたい」
「そう、いってらっしゃい」
「いってきまーす」
　私はタオルを取り慎重に扉を開ける。まだみんな寝ているはずだから私は慎重に廊下を歩く。
　階段に続く扉を開け、風呂場のある最上階へ。地下でも良かったけど今日の夜に取っておこう。
　Ｔ字路を見ると男湯女湯が入れ替わっていた。２時半から４時半までは掃除の時間だから、おそらく一番風呂。
　昨日とは逆に右側に進む。脱衣所に行くとスリッパがある。かごを見渡し、服が一つあるのを発見。うーん先客が居たようだ。
　誰が先客かは分からないが、とりあえずパジャマを脱ぎ、バスタオルで前を隠して風呂に入る。やっぱり片手で抑えないとずり落ちて

しまう。
風呂場の内装は、脱衣場、大浴場ともに昨日と同じ。
かけ湯で身体を軽く流す。本格的に洗うのは今日の夜なので、髪を縛り上げて湯船に向かう。
「あら石山さん、おはよう」
「あ、永原先生！」
大浴場にいたのは永原先生だった。永原先生はバスタオルを持っておらず、裸になっていた。
「石山さんも早起きしたの？」
「え、ええ……」
「もしかして、昨日寝るの早かった？」
「はい、風呂の後すぐに……」
「なるほどねえ……確かに二日目はよくあることよ。でもだいたいはゲームコーナーとかにいるものよ？　風呂に入る子は珍しいわね」
「そ、そうですか……では、永原先生はなぜ？」
「え？　ああ、私も早起きしちゃったのよ。どうも山にいると睡眠が浅くなるのよ。だから、お風呂から出たら1時間だけまた寝るつもりよ」
「……そうですか」
「でも、一番風呂はいいわねえ……」
永原先生がしみじみと語る。
「……あたし、露天に出るわ」
「太陽がまぶしいわよ」
……ちょうど日の出日の入りの時間なのか。
永原先生と別れ、たった一人で露天風呂を独り占めする。もちろんバスタオルも脱いで裸で入る。誰もいないから言えることだが、野外で素っ裸になると開放感が段違いだ。
「ふう……」
昨日のように、わいわいがやがやと集団で入っていたのと同じ場所とは思えない。
いや、厳密には違うけど、でもレイアウトはだいたい同じ。

空は明るくなり始め、遥か彼方から太陽のまぶしい光が見えている。
いい景色だ。こんな景色を見ながら風呂を楽しめるなんて、皆早起きして来ればいいのに。なんて思ってしまう。
「うっ……」
美しい光景だけど、ちょっと、いや相当まぶしい。
ガララッ……
「あら、きれいな光景ね……」
永原先生が露天風呂に来る。
「皆に見せたいわね……」
「そうねえ、でもみんな寝てるわよ」
「桂子ちゃんと虎姫ちゃんは起きてゲームしてたよ」
「あらそう……明日も早起きしたら、誘うといいわよ」
「うん、天気が良ければ誘いたいわね」
多くは語らない、ゆったりとした時間。その沈黙は突然破られた。
「じゃあ私、そろそろ戻るわね……でもクラスのみんなは……もしかしたらこの光景より、石山さんの方がきれいって言うかもね」
「え?」
「ふふっ、朝食に遅れないでね」
そう言うと永原先生は去っていった。
改めて私は自分の身体を見る。今までは「可愛い」とか「エロい」という表現でしか、自分の身体を表現してこなかった。「美人」という表現も「可愛くて美人」みたいな使い方が主だ。
たわわに実ったおっぱいに、程よいお腹の肉付き。そしてお尻も大きめだ。水泳の時も、男子たちが興奮していた。無理もない。
太陽が出始めてまぶしさが増したのでもう一度大浴場に戻る。サウナと水風呂は誰も入っていなかったが今回も入らないでおこう。
それよりも、打たせ湯だ。相変わらずこっている肩をマッサージする。最後に大浴場でもう一度温まり、体を拭いてＯＫだ。
脱衣場に出て改めて身体を拭いていると、大きな鏡に自分の裸が目に入った。

誰も来ないだろうという油断から、完全に無防備になっている裸の女の子。もし男子のだれかが入って来たら、１００％襲われそうな気がする。
ふと、「クラスのみんなは、この光景よりも、私のほうがきれいだと言うかもしれない」というさっきの永原先生の言葉を思い出す。
「きれい」……それは今までの私の自分に対する「エロい」「可愛い」とは違った感情。
「可愛い女の子」としての私だけではなく、「美人」としての私。
今までも、あたしのことを「美人じゃね？」と話す男は何人もいた。ただそれは「可愛い」との境界線があいまいなものだった。私自身も「可愛い、美人、きれい」を混同していた。
でも、永原先生は日の出の美しい光景と、私の身体を比較して「きれい」と言った。もしかしたら、女の子の感性ではちょっと違うのかもしれない。
鏡の前で腕を後ろに組んでポーズをとる。なんだろう……ヨーロッパでよくある裸の女性の絵画みたいだ。いや、そんな絵画よりもよっぽど美しくも見える。
これが、永原先生の言っていたことなのか、まだよく分からない。
ともあれ、パジャマに着替える。時間は午前5時になっていた。本来の起床時間まであと1時間半ある。
部屋に戻ると桂子ちゃんと虎姫ちゃんがいなくなっていた。書きお気を見ると1階のゲームコーナーにいるそうなので、少し休んで再び部屋を出て、エレベーターで1階に行く。
すると、人気のないところでゲームに講じている2人を発見した。
「あ、優子」
「桂子ちゃん、虎姫ちゃん、ここにいたの？」
「うん、こっちのゲームでも遊んでみたかったからね」
よく見ると、大量の飴が積みあがっていた。
「どうしたのこんなにたくさん？」
「ここのゲーム、バランスとれてなくてさ。取り放題だよー」
虎姫ちゃんが実践してくれる。アームの一握りで大量の飴が取れ、

台に置くと次々とそれを獲得していく。
「優子ちゃんもやってみてよ」
「う、うん……」
「大丈夫だって」
私は１００円玉を入れて試す。１００円で３ゲームだ。
１回目、さっきのタイミングを思い出し、飴が山になっている部分を狙う。
……よし！
次にレーンが奥に入り切った瞬間にボタンを押す。僅かにこぼれたものの、飴が落ちる音がする。
２回目、３回目ともにうまくいき、私はかなりの飴をゲットできた。
「お、優子ちゃん私より取れてるじゃん」
「そ、そうなの？」
「ううん」
二人が首を縦に振る。お世辞ではないのは明らかだ。
「えへへ……」
「いつも思うんだけど優子ちゃんのその照れ笑い、可愛いよねー」
「あ、ありがとう……」
「優子は愛嬌があるからなあ、深いところではまだまだだけど表面はもう下手な女の子より女の子だよねー」
「うんうん」
可愛い、自他ともにもう数えきれないほど言われてきた言葉。今も言われる嬉しい言葉。でも今はいつもとちょっとだけ違う感情がある。
永原先生のさっきの言葉が引っかかる。
「どうしたの優子ちゃん、難しい顔して？」
「あの……実は……」
私はさっきの永原先生の言葉を話した。ちょっと恥ずかしかったけど……
「ふーん」
「やっぱり深部はまだまだよねえ……」

虎姫ちゃんが話す。
「あの……そう言われてもあたし、何のことやら……」
「ダメだよ優子ちゃん。その答えは、自分で見つけないと」
「そうだね。この問題を解くことは、性根まで女の子になるためのいわば入試問題だよ」
「そ、そう……」
よく分からない。
「もしこの問題をクリアできれば、優子ちゃんはもっともっと女の子らしくなれるわよ」
「ええ。そうなれば、自然と彼氏が欲しいって思えるかもしれないよ」
「え？　彼氏？」
「うん、優子ちゃんも女の子でしょ？　かっこいい素敵な王子様が欲しいんでしょ？」
「え？　どうして？」
自分でもよく分からない。
「優子、少女漫画読んでたでしょ？　あれ、転校生に恋する内容じゃないか」
「う、うんそうだけど……」
「少女漫画をずっと読んでるってことは、恋愛がしたいということよ」
「え!?　でもあれは暇つぶしで、しかもカリキュラムの時にもらっていてまだ読んでなかったからで――」
「違うよ優子ちゃん。暇つぶしってだけなら他にゲームでも何でもある。でも優子ちゃんは少女漫画を読むことを選んだ。優子ちゃんは、恋したいと思うの？」
「う、うん。そりゃああたしだって女の子だもん。まだ恋愛について全然イメージがつかないけど……いつかは男の子にときめきたいよ」
２人に正直な気持ちを伝える。
「それならなおのこと、さっきの問題は自分で考えたほうがいいな。でも大丈夫さ、今はイメージがつかなくても、きっとその違いに分る時が来るからな」
「う、うん」

「急がなくてもいいわよ優子ちゃん。私達だって、小学生くらいの頃はよくわからなかったもの」
「……分かった」
「それよりさ、ここのゲーム、ちょっと優子もやってみてよ」
「うん、いいけど弱いよ……」
「あー優子ちゃんゲーム弱いんだっけ？」
「ゲームセンターでは散々にやられちゃったからね。クイズゲームだけは優勝したけど……」
「あーここにクイズゲームはないねえ……」
「まあでも、せっかくの誘いだし、ちょっとやってみるよ」
選んだのはモグラたたきゲーム。
今日のベスト3に72点と68点と0点とあったので指名してみた。
「このスコアって？」
「72点が私、68点が桂子の得点」
「……よし、やってみる」
コインを投入し、構えてスタート。
まず1匹モグラが出てくる。
「えい！」
「イテッ！」
……よし1点。
次に2匹、これも行ける。
「イテッ！　イテッ！」
だけど、そこからがきつい。一気に数匹出てきて全部叩けない。
「はぁ……はぁ……」
「キャーハハハハ、弱い弱いー！」
ゲームのモグラに煽られる。得点は45点だった。
残念だが当然、虚弱体質らしい最期と言える。
「やっぱり……」
「あ、あはは……」

「でもさ、やっぱり向き不向きあるよ」
「えー私、身体動かすのとか全部不向きだよ」
「でも、運動量の少ないゲームならやれると思うよ」
「うーん、それは確かにそうなんだけど」
家でやってたテレビゲームもある程度うまく行ってたし。
やっぱり大きく身体を動かすのには向いてないみたいだ。

「あ、でさー」
「えーそうなのか!?」
知らない男性の声が聞こえて来た。
「あ、別の客が来たね」
ふと声のした方向を見ると、男子2人組がゲームコーナーに来ていた。
「さ、そろそろ譲ろうか。部屋で休もう」
虎姫ちゃんが提案する。
「うん、賛成」
私達はエレベーターを使い、部屋に戻る。
すれ違う時「やっべ、桂優ちゃんじゃん」「パジャマ姿も可愛いなあ」という声が聞こえてきた。

「けいゆうちゃん？　何それ？」
エレベーターのドアが締まり、私は疑問をぶつける。
「私と優子ちゃんを併せてそう呼ぶんでしょ……何かセットみたいで嫌よねえ……」
桂子と優子で「けいゆう」安直すぎる……
「でも確かに、二人とも優子が男だった頃からつるんでたし……付き合いはいつごろなんですか？」
「虎姫ちゃん、桂子ちゃんとは小学校の時からの付き合いだよ」
「ほほう、そうなんだそうなんだ！」
「でも、よく考えたら、よく話すようになったのは高校からねえ」
「そうなの？」

「うん、桂子ちゃんと私、小谷学園で同じ小中学校の子って学年だとその組み合わせだけだったし」
　会話中、エレベーターが7階へと付く、部屋への道を歩く。
「1年生になって、私は自然と女子の中で頭角を現したわ。もう一人が恵美ちゃんね」
「ふむふむ」
「1年生はクラスが別だったんですが、2年生になって同じクラスになった途端に、もう喧嘩ばっかりだったよね二人とも」
「うん、でも何だろう……優子ちゃんが男だった頃も、恵美ちゃんと喧嘩していた頃も、何だか遠い昔に感じるのよ」
「ああ、それ私も！」
　虎姫ちゃんが同意する。
　でも私はそうは感じないかな。
「たくさんのことが起きたからねえ。でも私は、まだそこまで遠い昔には感じないかな。嫌な思い出はたくさんだったけど」
「そうなんですか？」
　虎姫ちゃんがカードキーで部屋を開けながら疑問を投げかける。
「うん、あたし、乱暴だった自分が嫌いだった。両親が『一番優しい子に育って欲しい』って言う願いを込めてつけてくれた『優一』って名前を踏みにじり続けていたのに、それをやめられない自分が、すごく嫌いだったわ」
「優子ちゃん……」
「桂子ちゃん、私が男の子にいじめられて……救われたあの日、桂子ちゃんが言った言葉でね」
「うん」
「『女の子にされたことが最大の罰』って言ってたでしょ？」
「あー、そう言えばそう言ったわねえ……」
　話し中、部屋の前に来たので3人で部屋に入る。虎姫ちゃんは着替えを持って来るが、私達の話に熱中している。
「……あのね、あたし、確かにそう言う考えをしたこともないことはなかったわ」

２人の目を見る。
「……でもね、今は……これは罰の側面は全くない、純粋な救いだったって自信を持って言えるの」
「……神様なんて信じないけど、もし神様が私を見ていたとしたら……あたしの名前を裏切ることへの罪の告白を聞いて……それでこの病気にしてくれたんだって思えるの」
「優子ちゃん、そう言えば以前、『弱くならないと、優しい子にはなれなかった』って言ってたよね？」
「……あたしは弱くて庇護される存在になったわ。か弱い女の子になって、初めて『優しい子』になれたのよ。これでやっと両親の願いを叶えられたもの」
「……優子ちゃん。あのね――」
「優子は、決して弱い子じゃないよ！」
　虎姫ちゃんが珍しく大きな声を上げる。あたしもビクってなる。
「虎姫ちゃん、それはどうして――」
「だって、優子はとても健気で、あんなに辛いことがあったのに……篠原も、高月も許して……それどころか自分も悪いんだって、自分の罪まで告白して……それに、この病気になったら自殺する人が多いんでしょ？」
「う、うん……」
「たとえ自分を変えたいきっかけだったとしても、そんな病気になって……いきなり女の子にされて……それでも一生懸命に生きていこうとする優子が、弱い子なわけないよ！」
「そうね……優子ちゃんはたしかに身体は弱いわ。でも心は……心は私よりも、恵美ちゃんよりも、２年２組の女子の誰よりも強いわよ！」
「ありがとう……ありがとう……でもね、やっぱり私……心も弱いのよ……だって私、泣き虫だし」
「そう……でも、それでも……私は、優子は強い子だと思う」
「うん、私もそう思う……だって、優子ちゃんの背負ってきたものの重さを考えれば、自殺してもおかしくないんだよ。今こうして、私達と林間学校を楽しめてるだけでも、優子ちゃんは強い子よ」

「虎姫ちゃん……桂子ちゃん……ありがとうね」
「さて……しんみりする話はこの辺にして……着替えますか。今日は登山だよ」
「あ、そうだったね」
まずは虎姫ちゃんがトイレと風呂のある部屋に入る。桂子ちゃんと私は、さっきとは打って変わって他愛もない話に熱中する。
「お待たせー！　次はどっちが着替える？」
「あ、優子ちゃん先でいいよ」
「うん、ありがとう」
今日の服装は、永原先生から最初にプレゼントしてもらった服。
無地のシンプルなセーターとユニセックスなジーンズ。
正直女らしさのかけらもないけど、登山するんだし装飾はまずいと考えれば、贅沢は言ってられない。
それでも、せめて頭にリボンをつければ、ちょっとは女の子らしくなるはず。
桂子ちゃんも待っているため、急いで着替えて、リボンは出てからにしよう。
「ふう、待ったー!?」
「ううん、大丈夫よ。じゃあちょっと待っててね」
私と入れ替わりに桂子ちゃんが別室に入る。
私は髪の毛の一部を取って白いリボンを付ける。
「ほうほう、優子器用じゃん」
「うん、リボンは基本的に付けてるから」
「女子力アップだねえ……」
「えへへ……」
暫く待つと、桂子ちゃんも戻ってきた。
登山ということで、全員オシャレは封印している。
サブバッグに、登山に必要なものを入れていく。さっきゲームコーナーで取った飴玉も入れてある。
「さ、準備は万端だね。後は時間まで休むだけ！」
「でも桂子ちゃん、その休みが大事だよ」

「うんうん」
「そうだね。じゃあベッドで休みましょうか」
私たちは寝るわけでもなく、ベッドで横になりながらテレビを見る。ちなみに、見ているのはメジャーリーグ中継だ。
野球のこととかはよく分からないけどなんとなく流している感じ。
私たちは、朝食の時間まで英気を養い、登山に対して万全の調整をして過ごした。

# 林間学校二日目　一緒に山に登ろう

朝食の時間、内容は昨日と同じバイキング。もちろんメニューは違う。

私はシンプルに御飯と味噌汁と鮭とほうれん草という、いかにもステレオタイプな日本の朝食になっていた。

……といっても、朝に出されるものは似たり寄ったりなので、桂子ちゃんや虎姫ちゃんも同じような食材だった。

「いただきます」

一番最初に選び終わった私から食べ始める。このあたり迷いやすい他の女の子に比べると即断即決が出来る。これもあたしの中にある「男」の残滓だ。

でも、私が一番食べるのが遅いため、うまく時間調整が出来るのだ。

「いただきまーす」

桂子ちゃんと虎姫ちゃんも帰ってきた。

「それでさー、桂子ちゃんもあたしくらい髪を長くするといいんじゃない？」

「うーん、流石に手入れが大変だからねえ……」

桂子ちゃんはツーサイドアップだけど、髪を下ろしてロングにしても可愛いと思うんだ。

「でもさ、優子ちゃんもツインテールが似合うんじゃない？」

「うーん……」

ツインテールのあたしを想像する。

「うーん、あたしは今より似合わないと思うなあ……」

「そう？」

「うん、切っちゃうのはダメだけどやっぱりストレートロングがいいと思うのよ。私、気が強くないし」

「ふむふむ……」

「ツインテールの石山かあ、なあ篠原、どう思う？」

「……優子ちゃんの言う通り、今より似合わないと思う」
「うんうん……ってお前いつの間にそんな呼び方するようになったのか!?」
「え!? ああいや……その……」
「まあ、可愛いしなあ。女子のみんなも名前呼びだし……いいんじゃねえの？」
「お……おう……」

桂子ちゃんと虎姫ちゃんは気付いていないけど、私のことで高月くんと篠原くんが何かを話している。
そう言えば、教頭先生に署名を渡した時も、篠原くん「優子ちゃん」って言ってたっけ？
今まで男扱いしてた人から「優子ちゃん」って言われると、やっぱり嬉しいなあ。

私達が朝食を食べていたのは終わりの方だったので、桂子ちゃんと虎姫ちゃんは先に部屋へ。
そして私と篠原くんは昨日と同じように、食事券のチェックをする。
こちらも、昨日と同様、ほぼ問題なく終了した。
やはりみんなそれぞれ効率化していて、昨日よりも明らかに作業が早くなっていた。
私は……身体能力上難しいかもしれない。でも篠原くんも助けてくれるし大丈夫だと思いたい。

部屋に戻り、桂子ちゃん、虎姫ちゃんと共に思い思いの休息を取っていると、永原先生から「そろそろ出発する」との声がかかった。永原先生、各部屋に声をかけるんだから大変だよなあ……
登山は４組に分かれて行う。
これはもちろんクラスごとに梯団に分かれるという意味だが、列としては長い。私たちはくじ引きで一番後ろの列になった。

永原先生が全体に向けて登山における注意点を述べる。
道中はぬかるみ等もあるため足元には十分注意すること。
気分が悪いなどあったらすぐに先生や実行委員の人に知らせること。
道を外れたりはしないこと。この後１５分準備をするのでトイレは先に済ませておくこと。１階のフロントにトイレがあるのでそこを使うこと。
などなど、まあ基本的なことだが、忘れると大変なことになるものばかりだ。私も気を付けないと。

「よし、それじゃあ出発するぞ！」
３組の担任の先生の号令のもと、第一列の３組が出発する。続いて１組、４組も出発する。そして２組の番になる。
「はーい出発しますよー」
２組の男女が２列になって一斉に歩く。先頭に永原先生、真ん中に篠原くん、そして最後尾が私だ。
最初は登山道に向けての緩やかな階段が続く。ちょうど１０段で踊り場になっている。１０段、２０段……５０段……５８段で終わる。
「ふう……」
永原先生がゆっくり歩いてくれているので私もまだ息は切れない。
三叉路を左に曲がると、いよいよ本格的な登山道に入る。
緩やかな上り坂が続く、時折ぬかるみや出っ張った木があって永原先生が注意を促し、篠原くんを介して伝言する。
私は一番下から、コース逸脱者がいないか見張る。これは篠原くんと二人の作業だ。

「倒木があるぞー気を付けろー！」
「倒木があります、気を付けてー！」

「ぬかるみだ、注意しろ！」

「ぬかるみに注意して！」
ここからだと永原先生の声ははっきりとは聞き取れないが、篠原くんが仲介してくれることで聞くことができる。
「はぁ……はぁ……」
３０分ほどして、中間休憩所まで残り３０分、徐々に足が痛み始めた。他のクラスの子たちはまだ涼しい顔をしている。
少しずつだが、傾斜がきつくなってきた。でも、あと半分、頑張れば１０分休憩がある。
「ああ……待って……！　永原先生、ゆっくり……！」
しかし、声が小さすぎて前に伝わっていない。
「木の枝に注意して！」
「……」
「い、石山！　木の枝！」
「あ、木の枝に注意して！」
最後尾が離れていく。足が……ついていけない……！
「先生ストップ！　石山が出遅れてる！」
出遅れに気付いた篠原くんが声をかける。
「はぁ……はぁ……ありがとう……篠原くん……ふう……」
永原先生が止まる。
皆が私を見る。息を切らしながらなんとか一歩一歩進む。
永原先生と篠原くんが私の下に来る。
「石山さん大丈夫？　これ……」
永原先生は酸素ボンベを出してきた。
「あ、すみません……ふう……ふう……」
「石山さん辛い？　下山した方がいいわよ？」
「で、でも……私……」
「実行委員ならサブリーダーに任せればいいから……ほら、誰かに付き添いをお願いして……」
「そ、そんな……私、一人だけ……うっ……」

また、身体能力で皆の足を引っ張ってしまった。
あ、また泣いちゃった……
「先生！」
「どうしたの篠原くん？」
「その……ゆう……石山は……石山は頂上に上りたいと思う！」
「でも、登山はまだ2時間半もあるのよ。まだ6分の1ちょっとしか進んでないわ。それなのにこんな状況じゃ、とても頂上までなんて――」
「俺が……俺がおんぶしていきますから！」
篠原くんが、いかにも勇気を振り絞ったように言う。
「え？　篠原くん、大丈夫なの？」
あたしも、驚きを隠せない。
「ああ、こう見えて優一だった頃の石山に仕返ししたい一心で少し鍛えてたんだ」
そう言えば、あの日も女子とはいえかなり鍛えてる恵美ちゃんを思いっきり退けていたわね。
「篠原くん、ありがとうね」
「お礼はいい。他の組から遅れているから、早く背中に乗ってくれ」
篠原くんが前かがみになる。
「うん、じゃあ……」
私は恐る恐る篠原くんの大きな背中に乗る。
「よっと……！」
篠原くんの腕が膝を支えてくれる。私も肩に腕を付ける。胸がちょっと背中に当たる。
「あっ……あっ……」
「篠原くん、どうしたの？」
「な、何でもない……」
篠原くんが歩き始める。まあ、胸が当たったら興奮するの当然だよね？
「じゃあ、実行委員の方はサブの方に回すから」
永原先生がそう連絡すると、桂子ちゃんと恵美ちゃんが私達と同じ

役割をしてくれた。
　他の組とは少し引き離されたけど、永原先生が少しペースを上げて帳尻を合わせる。
「ふう……ふう……」
　篠原くんは息の一つ乱さずに私をおんぶしながら登る。バランス感覚だって大変なはずなのに、男の子ってすごいなあ……
　私もちょっと前まではその仲間だったけど、女の子としての生活を続けるうちに、男だった感覚がなくなっていっているのを感じる。

　そして、ややきつい傾斜になって、最初の休憩所に到着した。
「よっと、降りられるか？」
「うん、大丈夫」
「事前に知っているとは思うが、次の1時間が一番きついところだ。遠慮せずに体を預けな」
「う……うん……」
　篠原くんは相変わらず顔をそらしながら答える。でも私も、ちょっと彼を直視できない。

「おい篠原！　お前顔が赤いぞ！」
「だってよ高月……そんなこと言ったって！」
「言ったって？」
「背中に……む、胸があた、当たって……」
「ああーそうだよなー、それじゃあしょうがないわな。くそー羨ましいぜ。俺もお前みたいに鍛えとけばなあー」
「ははは、羨ましいか？　しかし、後の祭りだぞ高月！　それに俺は実行委員だからな。同じ実行委員が困ってるのを助けるのは当然だろ？」
「うぐぐぐぐ」

「優子ちゃん、あっちで話題になってるね」
　桂子ちゃんが男子の会話を聞いて、あたしに話しかけてくる。

「う、うん。これで篠原くんもあたしにアレルギーがなくなってくれるといいんだけど」
「でもさ、優子ちゃんもちょっと赤いかもね」
「え!?　そ、そうかな？」
「ふふ、そんな気がするだけ」
「変な桂子ちゃん……」

ともあれ、しばらく休む。篠原くんはこの次もおぶってくれるということなので飴をなめる程度の軽い休憩にとどめておく。
「――いえ、大丈夫です」
「まあそう言わずにさ……」
あれ？　あれは添乗員の野洲さんと篠原くんだ。何を話してるんだろ？
「実行委員は俺だ！　石山は、俺が責任を持つんだ！」
「ちっ……分かったよ……」
あたしがどうかしたんだろ？　なんか険悪な雰囲気だけど……
……うーん……まーいっか、考えても答えは出ないし、聞くのもちょっと気が引けるし。気にしないようにしよう。

ともあれ、登山は再開された。私と、私をおんぶしてくれる篠原くんは、列の最後尾から最前列に移動し、永原先生が監督することになった。
篠原くんの背中の上で、なるべく負担にならないように肩にかける手の力を抜き、また胸もなるべく当たらないようにする。
……と言っても完全には無理だけど。

篠原くんは息を切らさずに登りきる。どちらかと言うと別の理由で息が荒くなってる気もする。桂子ちゃんと恵美ちゃんが私達の代役を務めてくれている。
「それにしても、篠原君は両手に花ならぬ背中に花よねえ……」
「ちょ、ちょっと先生！」

「あらあらごめんなさい」
永原先生が篠原くんをからかっている。
「さ、ここからが一番きついところよ」
「ふう、ようやく本領発揮できるか」
ふと、篠原くんの肩の横から前を見ると、九十九折（つづらおり）になった山道が続いている。前方には先行している組の生徒たちが折り重なるように登っているのが見えた。
これは傾斜を緩和する工夫のはずだけど、それでもかなり傾斜が厳しい気がする。
永原先生が左に舵を切り、私たちも続く。桂子ちゃんと恵美ちゃんが左に曲がると注意喚起している。
そして右に切り返す。下を見ると、その様子が見える。
一番苦しいところのはずなのに、篠原くんは弱音の一つ吐かないであたしを運んでくれている。
「ふう……」
時折、篠原くんが息を吐くことがある。
疲れているのか、背中に胸が少し当たっているのを落ち着けるためなのかは分からない。
でも篠原くんは全くペースを落とさず、九十九折を登っていく。
前回の休憩から５０分ほど経って、第二の休憩所に到着した。
ここでもやはり１５分休憩、篠原くんは「全く疲れていない」と言っていた。今は彼を信じるしかない。
「ねえ篠原くん」
「ん？」
まずい、篠原くんを直視できない……
でもちょっとだけ勇気を出して振り向く。うん、大丈夫。冷静になった。
「これ……」
「え？」
私は、ゲームコーナーで取ったぶどう味の飴玉を一つ、篠原くんに渡した。

「あ、ありがとう。ぶどう味……うん！」
篠原くんは、その場で袋を破って飴玉を口に含み、舐め始める。
相変わらず顔はこっちに向いてくれない。
でも、私もちょっとだけ顔をそらすようになっちゃったし、おあいこ……だよね？

休憩では一杯だけ水を飲む。おんぶされているとは言え篠原くんに配慮して胸をなるべく当てないようにしたりしてちょっと体力を使うからだ。
私は桂子ちゃんと雑談していたが、篠原くんが急に近付いてきた。
「どうしたの？」
「あ、いや……ちょっとな……」
篠原くんは明後日の方向を見つめる。添乗員さんが急に視線をそらしたような？
何か警戒している様子だけど、私にはよく分からない。
「さあ、あと少し、ここからは山頂まではそこまできつくないわ。出発よー！」
永原先生の号令で出発する、女子を中心に、だんだんと疲れを隠せない人も出てきた。桂子ちゃんはどこから拾ってきたのか、木の杖を持っている。
でも、あの時の私ほどに息が切れてる女子はいない。女子でさえ、私が登った約４倍の時間登山してようやく疲れ始めるということ。改めて、私の弱さを思い知る。
本当に、女の子でよかった。男の頃は体力あった方だけど……
一歩一歩、前に進む篠原くんに身体を預ける。永原先生の言葉の通り、傾斜は先程より緩い。
ふと上を見上げる。山頂が見えてきた。先頭集団が見え、もうすぐそこだということが分かり、周囲もその話をしている。
「な、なあ石山……」
「ん？」
「こっからは、自分の足で、歩いてくれるか？」

「え？」
「やっぱりさ、最後くらい、自分の足で山頂を踏めたって思えてくれれば、いい思い出になるんじゃねえかって……」
「篠原くん……」
私は最初の３０分を歩いただけ、休憩時間を除いても、既にもう２時間は篠原くんにおんぶされている。
最後くらい、自分の力で登れれば、達成感を味わえる。そんな彼の配慮が見て取れた。
「うん、分かった。下ろしてくれる？」
「石山さん!?　あと少しと言っても、空気も薄いですよ！」
「永原先生、お願い。ちょっとだけ、わがまま聞いてくれる？　ほんのちょっとだけ、自信をつけたいの」
「……分かりました」
私は篠原くんに下ろしてもらい、自分の足で歩く。
長く休憩した後だったのもあって、他の人よりは快調に歩き始める。
「残り２０分位ですよー」
「残り２０分です！」
「残り２０分くらいだぜ！」
永原先生の声が聞こえる。
私と篠原くんの代役の桂子ちゃんと恵美ちゃんが声を張り上げる。
桂子ちゃんはやや疲れ気味だ。

「ふぅ……ふぅ……」
「石山さん、大丈夫？　息が上がってるわよ」
永原先生が心配そうに声をかける。
「大丈夫です……んっ……」
水筒を取り出し、水を飲む。まだ殆ど飲んでいない。
「これ、持って？」
さっき吸わせてもらった酸素ボンベ。とりあえず持っておく。
「はぁ……はぁ……すーすー」

山の空気の薄さによる息苦しさも、酸素ボンベでだいぶ薄れてきた。まだそんなの必要じゃないはずなのに、やっぱり私は弱い子だ。
でも、もう弱くてもいいんだ。皆に支えられて、私も頂上まで行ける。
倒木に引っかかりそうになった時に永原先生が支えてくれた、永原先生が酸素ボンベをくれた。
篠原くんがおんぶしてくれた。
でも最後は自分の足で、歩く。少しずつ、登る。頂上まであと少し。
それでも、ペースは急激に遅くなり、後ろのクラスメイトたちに徐々に抜かれていく。
一人、また一人……でもその度に声援をくれる。
「優子、頑張れよ！　もうすぐだぜ！」
恵美ちゃんが声を上げる。
「優子さん！　私も疲れてますけど、頂上まで登りきります。頂上で会いましょう！」
龍香ちゃんの声援の声。
「優子、あんたは強いわよ。抜かれても弱音を吐かないんだもの」
虎姫ちゃんの私を信じての言葉。
「石山、頑張れよ……お前が一生懸命な所は、可愛いからな」
高月くんが応援してくれている。
「優子さん、大丈夫ですよ。あと少しです。私も疲れているけど……頑張りますから」
さくらちゃん……

上を見ると、既に2組でも先頭の永原先生がゴールしていた。
「ふう……ふう、ふう……」
「優子ちゃん、あと一歩だよ！」
桂子ちゃんが声をかける、止まって前を見ると確かにあと一歩だ。
「到着！」
あたしと、あたしのために待ってくれた桂子ちゃんが最後にゴールする。

「よくやったな！　優子！」
恵美ちゃんの声だ。
「でも、あたし、篠原くんにずっと――」
「確かにそうだったかも知れねえ。でも、優子はそれでいいんだ」
「う、うんそうだよね……」
そうだった。
力が必要な時、男の子に頼ってもいいって。そう決めたじゃない、優子！

山頂から眺める景色、これをみんなと一緒に見たい。
もしかしたら、登山家の中には私のことを「この景色を見る資格はない」って言う人も言うかもしれない。
でも、私はクラスのみんなと一緒に見たかったから。私が欠けたら、多分他のクラスのみんなは、脱落したあたしを残念に思いながら、この景色を見るから。
だから、篠原くんも、他のみんなも助けてくれたんだ。
……32人もいるんだもの、もしかしたらあたしのことを登山する人として失格と思っている人もいるかもしれない。
でもみんなで見る景色だから、そうした思いはみんな吹き飛んでいる。私は登山家じゃないもの。
クラスのみんな、永原先生の笑顔で、私はそう確信できた。

頂上の滞在は1時間ほどで、予め先行していた体育の先生とバスの運転士さんたちが運んだお弁当を食べる事になっていた。
シンプルな唐揚げ弁当だが、量は私にはちょっと多い。
食べ切れるか不安だったけど、私は不思議と箸が進んだ。もちろん完食できた。

# 林間学校二日目　下山と休息

下山時、私が転ぶことを懸念して、２組の、それも私が先頭になった。これで、私は一番山頂の滞在時間が少ないということになった。

さすがに下り坂ということ、１０００ｍ級なのでおんぶはなしだ。

下山は2時間の予定、休憩も一回だけだ。

永原先生が私と並んで歩いて付きそう。桂子ちゃんと恵美ちゃんが真ん中で私の代理を、そして篠原くんが最後尾だ。

「永原先生は、山に登ることってどれくらい？」

「あまりないわねえ。日本が戦乱で明け暮れていた時代の頃、少しは登ったんだけど……」

「またどうして？」

「山賊が居る危険性もあったと同時に、隠れるにも良かったのよ」

「ふむ……」

「まあ、それでも出来れば登りたくない場所だったわね。山賊の情報を掴んでから登ることもあったわよ」

「記憶に残る登山って？」

「見物人たちと一緒に関が原の見物に登った山かなあ……」

「そんなに関ヶ原は印象に残ってる？」

「うん、私が経験した合戦とは比べ物にならないくらい大規模で迫力があったもの」

「他にどんな合戦を見てきたんです？」

「うーん本能寺の少し後に信濃で見た合戦があったくらいかなあ。小田原攻めは見てないわね」

「ふむふむ」

永原先生の昔話に付き合う。そして山の風景、下山時に見る登山の時とは違う風景、一番傾斜がきつい九十九折の部分は特に足元に気をつけた。

膝がちょっとだけ痛い。でも何とかなった。

「私、下山列の一番先頭に並んでいて改めて感じたことがあるのよ」

永原先生が声をかける。

「え？　それって一体……」
「山の魅力かしらね……そうそう、山で思い出したけど……今更だとは思うけど、私達は決して女人禁制の場所に入っちゃダメよ」
「それはそうですけど……今もあるんですか？」
「ええ、神仏の聖地に幾つか残っているわ。最も、私は解禁になった山にも行かないけどね。高野山とか登るつもりもないわね」
「ふむふむ。最近でも逆に男子禁制の場所も増えましたよね」
「優子ちゃんも入ったことあるでしょ？」
「う、うん……プリクラとか」
　そう言えばまだ女性専用車両には入ったことがない。
「女人禁制についてはあまり大きな問題にはならないわ。私達が入らなきゃいいだけだもの。男子禁制の場合は……もちろん入っていいんだけど、最近厄介なことになったことが1回あったわね」
「どんなんですか？」
「レディースデーを利用とした時のことよ、そこのレストランのバイトの子にたまたま顔見知りがいて……」
「なるほど……それで割引を巡ってトラブルになったのね……」
「ええ」
「最近だと男性だけって空間は殆どなくなった反面、女性だけの空間は多くなったわ。そのせいでのトラブルも今後は予想されるわね」
「う、うん……」
「石山さんは、本当に理解者に恵まれているわよ。よく外見で差別するなって言うでしょ？　世界の歴史的には肌の色での差別っていうのもあったわ。だけどＴＳ病患者にとっては全く逆なのよ」
「外見だけの第一印象で見たほうが、間違いが少ないってこと？」
「そう言うことね……色々な差別解消運動はあったけど、私達はそのせいで生き辛い世の中になっているのよ」
　何とも、皮肉な話ね。
「あ、石山さん、そこの木に注意して！」
「あ、はい！」
　危ない危ない。危うく引っ掛ける所だった。むしろ下山のほうが

怪我しやすい。私はほぼ篠原くんにおんぶしてもらっていたし、何より下り坂だから、さすがに体力の消耗も少ないけど……
「さあ、ここで一旦休憩よ」
永原先生が声をかける。そして、最初の休憩所に到着。
ここで最後の休憩を取り、いよいよ山の麓に戻ってくる。部屋で休息したら、もう夕食になる。
山を降りるにつれ、傾斜がだいぶ緩くなった。そしてちょうど私が出遅れた所に戻る。
そして、そこから最初の三叉路まで、驚くほど短時間で来てしまった。
「ふう……」
まず私がホテル前に来る。登山時とは違い、先頭だ。
そして「後ろが詰まっているわよ」と永原先生に促され前に進む。後続の生徒たちが次々と入る。
「はーい、みんなお疲れ様!」
なんかちょっとだけ胸に視線を感じる……っていつものことか。
ともあれ、永原先生が各自部屋に戻り十分に休息を取り、食事に来るように言った。
部屋が同じ桂子ちゃんと虎姫ちゃんを探す。
でもその前に篠原くんを見つけた。そうだ、改めてお礼を言わないと。
「あ、篠原くん」
「あ! い、石山……」
私が少し顔をそらしながら声をかける。
「今日はね、本当に、本当にありがとう」
「う、うん」
「あたし、篠原くんのおかげで、山の頂上まで登れたもの……本当にありがとう」
「ん……」
篠原くんが顔をそらす。
「篠原くん、私のこと……仲間はずれにしたくなかったんでしょ?」

「あ、ああ」
「うん、やっぱり、あなたに認めてもらえるのが嬉しいな」
「え……あ、あのどういう？」
「ふふっ、だってあたしを一番いじめてた篠原くんでしょ？」
「い、いや高月が……」
「まあ高月くんでもいいわ……でもね、どっちにしても、篠原くんは……あたしを守ってくれたんだよ」
「え……」
「あたし、女の子だもん。弱い女の子を守ってくれる男の子って……とっても……いい人……だと思うよ」
　この台詞、ちょっと私も恥ずかしい。
「で、でもさ……」
「篠原くん、多分思い出したくないけど、私を殴るのを思いとどまってくれた時にさ、恵美ちゃんから『女を守るために力を振るいなよ』って言われてたでしょ？」
「あ！」
　篠原くんもやっと気付いた。知らず知らずのうちに、また一つ、篠原くんは男らしくなったんだ。
「ふふっ、恵美ちゃんの願い、叶えたね。じゃああたし、桂子ちゃんと虎姫ちゃんを探すから。また食事の後、会いましょう」
　私はそう言って再び虎姫ちゃんと桂子ちゃんを探し始める。
　我がクラスは３２人、それもある程度固まっているので、見つけるのは意外と早かった。
「優子ちゃん、良かったね無事に帰ってこれて」
「うん、ありがとう」
「ところで優子ー、篠原浩介と何話してたの？」
「もちろん今日のお礼よ」
「ああそっか。そうだよね。でもさー、篠原すごいよねえ」
「うん、女の子とは言えおんぶしながら登山するなんて」
「そうそう、あたしもさ。篠原くんが息一つ乱してなくて……男の人ってなんて強いんだろうって思ったよ……それと同時に、自分が

ちょっと前までそんな存在だったなんて……」
「でもさ、あれは男の中でも相当鍛えてるよ。私は無理だけどさ……恵美ちゃんなら、優子ちゃんをおんぶしながらでも登れたと思うなあ……」
「どうだろう？　そのあたりは、本人に直接聞いてみないと……」

「石山さん達ー、そろそろ部屋に戻ったらー？」
　永原先生が声をかけてきた。よく見ると周囲はほぼホテルに戻っていた。
「あ、はーい先生。今！」
　虎姫ちゃんが応答し、私と桂子ちゃんもホテルに入る。
　エレベーターで7階に上がり、自室に戻ってきた。

「ふー疲れたー」
「今日も疲れたねー」
「起きるの早かったからなおのことだよー」
「ご飯は遅めにしようか」
「うん、賛成」
　あたしはまず、ベッドに横になる。
「優子ちゃーん、寝るなよー」
「分かってるってー」
　ここのテレビ、何故かＣＳの一部まで映る。
　虎姫ちゃんと桂子ちゃんがお目当てのチャンネルもなく、「チャンネル争い」ならぬ「チャンネル探し」を行っている。
「ねえ、時代劇見る？」
　虎姫ちゃんが提案する。
「うーん、あんまり興味ないなー」
　桂子ちゃんが答える。
「でもさ、これとか面白そうじゃね？」
　制作が昭和と書いてある、古い時代劇映画らしい。
「確かに興味は湧いてきたけど……こっちは？」

桂子ちゃんが代案を出す。ドキュメンタリーらしい。
「え？　これ航空事故のじゃん。そんなの見てどうするの？」
「なんか色々と勉強になるらしいよ」
「へー、ちょっと見てみよう」
お、どうやらチャンネルが決まったらしい。後ろで傍観していた私も2人の横に移動し、3人でそれを見る。
オープニングの後、これはフィクションじゃないというテロップが出る。
「「なっ!!!」」
高度５０００メートルでパイロットが機外に放り出されている。
「いやいや、死ぬよねこれ」
「だって飛行機でしょ？」
「でも、生存者居るぞ」
「１９９０年かあ……３０年近く前だね……」
もちろん生まれていない。場所はイギリスらしい。イギリス人たちの英語が聞き取りやすい。
「それにしても、飛行機って飛ぶ前にも色々チェックするんだねえ……」
「そうだねえ優子ちゃん。パイロットって大変よね……」
「でも乗客は無事なのかな？」
飛行機は墜落するとほぼ全員死亡らしいし、生存者の証言があるってことは無事ではあったはず。
お、離陸が始まった。
イギリスからスペインまで2時間なのか。
「自動操縦ってあるんだ」
「シートベルトも外すんだねー」
「あっ！」
高度５０００メートルで大きな爆発とともに、機長側の風防ガラスが外れ、急降下したという。
「ぷっ……」

「ちょ、ちょっと虎姫ちゃん！　不謹慎よ！」
「で、でも、これ笑えるよ……」
「桂子ちゃんまで！」
　機長はコックピットの屋根に釘付け……笑い事じゃないんだけど、機長のＣＧが紙みたいにペラペラで絵的には確かに変だ。
　あ、なるほど、足が操縦桿に引っかかって放り投げられなかったのか。
　そして客室乗務員が、機長の足に気付いてしがみついたのか。
「高度５０００メートルでマイナス１７度で時速６００キロって……」
「死ぬよね……絶対」
　どう考えても、既に機長は死んでいるというのが、この時点での私達の見解だ。
　お、機長の足をどかしたのか。でも酸素の関係で急降下継続か。
「いい判断ね」
「確かに高度低いほうがいいよね。副操縦士にとっても」
　機長の身体が屋根から側面に移動していた。
「うわあ……トラウマだねえ」
「うん、確かに死んでるって思うよね……」
「でも離さないのは、生きてる可能性に賭けたのかな？」
　あ、機体へのダメージを避けるっていう意味もあったのか。でもそうだよな。
　ようやく航空管制官と連絡が取れた。英語で「いいえ」って「ＮＯ」だけじゃなくて「Ｎｅｇａｔｉｖｅ」とも言うんだな。
　乗務員たちも死亡していると思いつつも、救急隊に連絡する。にしてもイギリスのサイレンはどうも気が抜けるな。
　飛行機がいよいよ着陸に入る。
　やはり難しい着陸だが、やらない訳にはいかない。副操縦士は着陸に成功したみたいだ。
「まだ半分くらいだね」
　時計を見て虎姫ちゃんがつぶやく。

血まみれの機長が救急車に運ばれている。
「機長が居ないのにすごいよねえ……」
機長の物語に続き?
「ちょ、えええええええええええええええええ!!!!!!!???????」
私がまず驚きの声を上げる。
「生きてたの!? あれで!?」
桂子ちゃんも驚く。
「おいおいマジかよ!? 何で!? 何であれで死なないんだ!?」
虎姫ちゃんが続く。
外に居た時も意識があった。恐ろしいことだ。しかも、横に移動したのも自分の意志だというのだから驚きだ。
本当に機長を離さなくてよかったよなあ……
「諦めない心ってすごいよねえ……」
「うん、そうだよね虎姫ちゃん。しかもこの人、また復帰してるんだから、あたしだったら怖くてもう二度と飛行機乗れないよ」
「私も優子ちゃんに同じー」
飛行機というと、どちらかと言えば男の子の趣味に入る。
それを3人の女子高生がガールズトークをしつつ見続ける。
空軍による急減圧の訓練を挟みつつ、捜査官による捜査パートが始まった。
捜査は難航していたようだ。血が生々しいけどなぜだろうあまりぎょっとしない。
「赤い血が露骨だけどぎょっとしないなあ……」
「あはは、優子ちゃん。あの日も血を吐いたでしょ?」
「そうじゃなくて、何ていうのか……血に慣れたっていうの?」
「あー、優子も大分女の子になって来ましたねー」
「女の子は血に強いのよ」
「って、窓とボルトが発見されたのか!」
「すごい捜査ねえ……」
「ボルトミスかあ……」
ボルトの直径が間違っていてああなったのか……

「問題１３箇所……」
「多いわねえ……」
完全に素人だけど、飛行機は1箇所でも問題があったらまずい事はわかる。それが１３箇所だなんて……
しかもそれを４年間……
「あちゃあ、これはいけないねえ……」
「目視って……」
心理学者を呼び、さらなる原因究明を行う。
へえ、結構正直に話すんだな。
最後は乗務員たちが英雄として表彰されるところだ。
機長はその後別の航空会社に勤務しているのか。本当にすごい精神力だ。
スタッフロールが流れるけど、あまりに速すぎて読ませる気がないのだろうか？
ともあれ、ＣＭも挟んで1時間の時間を潰せた。

「あ、ちょっと出かけてくるね。すぐ戻るから」
桂子ちゃんがそう言う。一体どうしたのかは分からないけどとりあえず見送る。
何処に行ってたのかは気にしないとして、桂子ちゃんが戻ってくると、食事の第一陣が来る頃になっていた。
「優子ちゃん、第一陣が終わった頃合いを見て行こうか？」
「うん、３０分位待とうか」
私達はニュース番組を見ながら、３０分の時間を潰す。
今回は3人がそれぞれ食事券を持って2階へ行くと、ちょうど空き始めた頃だ。
最も、ウェイター・ウェイトレスさんたちは忙しなくバイキングを補充している。メニューは昨日と微妙に違っているが、それでも大筋では変わっていない。
私たちは昨日と同様、雑談をしながらバイキングを楽しみ、そして今回は私だけこの場に残った。

篠原くんと共に、3回目の食事券作業。他のクラスの一人の男子生徒が食べ忘れていたので、その旨を報告した後、お風呂の後に軽食屋で食べるように注意されていた。

二日目のお風呂は地下1階の大浴場。露天風呂が無い分、中の風呂は広いとのこと。

昨日と違い一番風呂なので、時間制限には特に注意するように促し、クラスメイトもみんな返事をする。

脱衣所に行き、今度は端の方を陣取る。ズボンとパンツ、また登山でのシャツを脱ぎバスタオルで隠してから小タオルを持つ。

前回は胸の大きさのところからバスタオルの横に「隙間」ができていたので特にそこには気をつける。

うまく巻きつけるのは四苦八苦したが、ともあれ何とかうまく行った。

昨日よりも少しだけ視線を気にしながら、右端にあるシャワーとカランで身体を洗い、一段落したら風呂を見る。

まず温度別の浴槽が目に入る。43度から37度まで2度刻みで4つの温泉が中央に。

左側には何やら勢い良くお湯が吹き出ている風呂がある。マッサージかな？

左端の方には釜のような形の風呂が2つあって、人が一人入れればいい方のものだ。

正面奥は「天然檜風呂温泉」とあり、右端にはサウナと水風呂がある。そこも稼働はしているが誰も入っていない。

まずは37度の風呂に入る。ちょっとぬるい。

39度、これも何か出たら寒そうだ。

41度、お、ちょうどよくて気持ちいい。でも時間もあるし、43度は……

「あちっ！」

足を恐る恐るつけたけどとても熱い。これは無理だ。

「おう、優子、熱いから気をつけろよ！」

「平気な顔で入っている恵美ちゃんがすごいよ……」
「ま、あたいは熱いの好きだし」
「そ、そうなんだ……あ、あたし、檜風呂の方に入ってくる」
左端の釜の中には既に桂子ちゃんと龍香ちゃんが占領している。
檜の方に入る。４１度の風呂と同じくらいで気持ちいい。
「優子さん、胸が浮いてますよ！」
釜の方から龍香ちゃんの声がする。みんなが私に視線を移す。
「ちょ、ちょっと龍香ちゃん！」
「あ、ごめんごめん。でも本当にすごく大きくて羨ましいなあ……」
女子たちが願望の眼差しを向ける。
今まで、自分の胸が風呂の中でどういう事になっているかということに、あまり意識が向いていなかった。
女の子になってとにかく冷えやすくて、裸になったらすぐに温まりたいという気持ちで押しつぶされていたからだ。
「おっぱいが浮くのは都市伝説」、何ていうのを男の頃に聞いたことがある。でも、嘘じゃなかったみたい。
さて、桂子ちゃんが釜風呂を出たが、恵美ちゃんが入れ替わりで入った。
まあ、釜風呂の方は入れ代わり立ち代わりだし、いざとなれば時間帯をずらして入ればいいだろう。
それよりも、左側にジェット気流のような感じの風呂に入りたい。
こちらは誰も入ってないので、遠慮なく独り占めをする。
「……ったたた」
結構刺激が強い。前からは危なそうなので、後ろから……
「んっんっ……！」
そうか、これはマッサージのためか。
よし、そうと決まれば早速肩を……
「ちあああああーーー気持ちいいーーー！」
「!!??」
「ど、どうしたの優子ちゃん!?」
「あっ！」

しまった！　あまりの気持ちよさに大きな声を上げてしまった。
「ほほう、優子さん、肩こりの治療ですかな？」
「う、うん……龍香ちゃん」
「優子ちゃん、まだこるの？」
「うん、女の子になったばかりの時以外は……もうずっと肩こってるわね」
「やっぱ大きいのもあれだよなあ……肩こっちゃったらスポーツも不利だしよー」
「でもやっぱり、女に生まれたからには……一度でいいから大きいのを身に着けたい！」
「虎姫ちゃん……結構大変だよ？」
「それでもですよ！　私も、ちょっとだけくださいよ！」
「……確かに小さいよりはいいけど……でもあげられないって！」
「なんでー!?」
「いやその、移植は無理でしょ？」
「あ、うん……そうだよね……優子の言う通りだよね」
虎姫ちゃんがちょっと沈んじゃった。でも、あたしはなんて答えたらいいかわからない。
「まあ、気にすんなよ虎姫。優子だって、好きでこんな大きく生まれ変わったわけじゃねえんだしよ」
「……う、うん」
肩マッサージを終え、再び４１度のコーナーに入る。
４３度は誰も入っていない。何人かが挑戦するが良くて数秒が限度だ。
逆に３９度、３７度もそれなりに人気があった。
入浴の時間はあっという間に過ぎ、私達は身体を拭き、昨日と同じようにパジャマに着替え、それぞれの自室に戻っていった。
「あー疲れたー」
「桂子ちゃん、あたしもう眠いよ……」
「うん、私も優子に同じ……」

「じゃあ今日も寝ちゃおっか」
「「賛成～」」
私たちは昨日に引き続き、９時前の就寝を決定した。

# 林間学校三日目　集団朝風呂と森林教室

「うーんっ!!!」
目覚まし時計なしに、朝早く起きる。
「んー」
桂子ちゃんと虎姫ちゃんはまだ寝ている。
時間は昨日より少し早い４時２５分。
桂子ちゃんと虎姫ちゃんの睡眠を妨げないように注意しつつ、ベッドに座る。
今日も朝風呂に、向かう予定なので、バスタオルと小タオルを取る。
今日の服選びを考える。今日は午前中には森林教室で森の生物なんかを学び、午後はバーベキューの準備と、４クラス合同でのバーベーキューで早めの夕食を取り、後片付けした後は夜の草原で花火だ。
ちなみに、花火の準備は私達実行委員も手伝うことになっている。
この時間はまだお風呂は掃除の時間なので、あてもなくぼーっとしつつ、顔を洗っていると、桂子ちゃんが起きてきた。
「あ、おはよー優子ちゃん」
「あ、桂子ちゃんおはよー」
顔を洗い、歯を磨く。これはいつも通りだ。
あたしと入れ替わるように、桂子ちゃんが洗面台へ。
自室に戻ると、虎姫ちゃんも起き始めていた。
「ううん……」
「と、虎姫ちゃんおはよう」
「あー優子ちゃん……んー私が最後かあ……」
虎姫ちゃんが起き上がり、電気をつけ、３人共洗面台で顔を洗い終わるのを待つ。
やはり外はまだ薄暗い。８時間睡眠ということを考えれば、昨日あの時間に寝てしまえば、この時間に起きてしまうのも道理だろう。
「ねえ桂子ちゃん、虎姫ちゃん」
「ん？　どしたの優子？」

「今日は三人でお風呂入らない？」
「えー!?　今から？」
「うん、ちょうど４時半から開くみたいだし」
「お、一番風呂か。いいねえ」
「……うん、特にやることないし、私も行こうかな」
「上の大浴場にしよう。昨日見て景色が良かったのよ」
「ふむふむ。そうと決まれば早速行きましょうか……」
　虎姫ちゃんと桂子ちゃんがタオルを持つ。そして他の人の睡眠を妨げないように、慎重にドアを開閉し、階段を踏みしめ、浴場のある８階へと上がる。
　初日同様、左側に進み、女湯に入る。
　ガラガラガラ……
　ふと中に入ると、一人の女性がちょうど服を脱ごうとしている所だった。
「あら、今日は三人？」
「あ、永原先生！」
　昨日と同じように、永原先生だった。
「私達、優子ちゃんに誘われたんだけど、先生も一番風呂？」
「ええ、そうよ。それにしても３人も来るなんて珍しいわね」
「昨日入ってみてわかったけど、やっぱり早朝で少人数の一番風呂は気持ちいいですから」
「ふふっ、できればあんまり広めないで欲しいかなあ……」
「そ、そうよねえ……」
　少人数で入るからこそ、一番風呂の良さがある。消毒臭なんかもほぼしないわけだからね。
　私達は服を脱ぐ。流石に４回目の風呂とあって心臓はほぼ平常通りだ。
「石山さん、大分慣れたわね」
「まあ、その……脱ぐの四回目だし」
　緊張するのは最初の方だけだったし。
「それでいて、ちゃんとバスタオルは付け続けるんだよね」

虎姫ちゃんがからかう。
「そ、それは……」
「安曇川さん、石山さんは花も恥じらう乙女なのよ。そういうことを言っちゃ駄目です！」
は、花も恥じらう乙女だって……そう言ってもらえるなんて女の子冥利に尽きるわね。
「は、はい……すみません」
それに私だけではなく桂子ちゃんもバスタオル付きだ。逆にバスタオルもなく特に気にしてないのが永原先生と虎姫ちゃんの2人だ。
ともあれ4人で風呂を開ける。もちろん先客は誰もいない。軽くかけ湯で身体を洗って汗を流すとともに、肌をお湯に慣らす。そして全員で大浴場に入る。
「ふうーーーー」
ゆっくりくつろげる早朝の乙女たち安らぎの花園。
特に理由はないけど壁にもたれかからず、浴槽の中央で外を見つめる。
「優子ちゃん！」
桂子ちゃんが話しかけ、肩に手をかける。
「マッサージしてあげるね」
「あ、ありがとう……んーやっぱり肩揉まれるの気持ちいいわー」
桂子ちゃんのマッサージは、虎姫ちゃんや恵美ちゃんと比べると力は弱めだが柔らかくて気持ちいい。
「にしても……んっ……優子ちゃんすっごいこってるよ。いつもこんな感じなの？」
「うん、だいたいこんな感じ……あーそこ、そこが気持ちいいのよ……」
「ちょっと、石山さんだけじゃなくて、私も揉んでくれる？」
永原先生が肩もみしてとアピールする。
背は150もなくてかなり低いけど、その割には胸が大きめだ。普段着てる服が着痩せ効果があるものなのか、こうして改めて見ると、さすがに私ほどではないけどそれなりに大きい。

「はいはい、先生には私が付いてますよー！」
虎姫ちゃんが手を上げ、永原先生の肩を揉む。
「あー安曇川さん、もう少し右上をお願い。んーーーーー！　そう！　そこがいいのよそこが……あー！」
マッサージ師二人の癒やしで、大分肩がほぐれた。
「さ、そろそろ朝日が出るわよ。行きましょ」
「「はーい！」」
永原先生が声をかけると全員で露天風呂へ。
まだ太陽が出ていないが、空はもう明るい。薄明っていうんだっけ？　まあいいや。
ドアを開け、４人の女の子が露天風呂に入る。ホテルの最上階から見下ろす眼下の風景と、山の麓の町並みは、昨日よりも幻想的に見えた。
露天風呂で、桂子ちゃんと虎姫ちゃんが何か雑談をしている。あたしと永原先生も時折そこに交じる。

風呂に入りながら景色を眺めているうちに、空が急速に輝きを増す。今までも明るいと思っていたが、もっと明るくなる。
やがて、遥か彼方から太陽が出る。どうやら、左右どちらからでも日の出が見えるように、露天風呂は東側になっているようだ。
「ほーすごいねー」
「きれいよねえ……」
虎姫ちゃんと桂子ちゃんが感激している。
少し太陽が眩しいけど、朝日の昇る瞬間を温泉に浸かりながら見るというのはやはり素晴らしいものだ。
「そういえば、優子ちゃん」
「ん？」
「この朝日もきれいだけど、確かに優子ちゃんのほうがきれいかな……」
「あ、その話？」
昨日の永原先生の話だ。昨日の日の出を見て、あたしのことを「き

れい」と評したその話。
「うん、でも答えはちゃんと見つけないと駄目よ」
「ええ、木ノ本さんと安曇川さんの言う通りよ」
「せ、先生まで」
「それにしてもおはよーって感じだよね」
「そうよねえ……」
「でこっちは、おはおっぱい！　って感じ！」
虎姫ちゃんのよく分からない台詞とともに、むにっと胸を触られる感覚。
脇の下から腕が出て、私は胸を触られていた。
「やあああああああああ!!!」
私は悲鳴を上げ、慌てて両手を引き剥がす。
「もう！　虎姫ちゃんやめてよ！」
性的興奮という感じではなく、悪戯心からの悪ふざけだと思うけど。
「ごめんごめん、朝日に照らされてる優子の胸があんまりにきれいだったから……つい」
「あうあう……」
女の子同士でも、セクハラされるのはやっぱり恥ずかしい。
「こら安曇川さん！　ダメでしょ。石山さん、とっても恥ずかしがり屋さんなんだから」
「ごめんなさい。でも、やっぱり先生のカリキュラムってすごいよねえ……」
「そうねえ……優一はあんなに乱暴な男だったのに、優子ちゃんになってからはこうも女の子らしくなるんだもん。さすがの私もちょっと嫉妬しちゃうよ」
「う、うん。あたし、生まれ変わりたかったから」
「そうよ、石山さんくらいうまく行った子は居ないわよ」
「うまくいかない場合ってあるの？」
「ええもちろんよ、例えば――」
永原先生が、成績不良者について話している。今みたいなセクハラ

に恥ずかしがることもなく、それどころか積極的に胸を触らせに行ったりしてしまうのが成績不良者の特徴らしい。
特に不良が目に余ると女の子になりきれず、最終的に男に戻る道に入ってしまい、最後は自分の体が嫌になって自殺してしまうパターンもあり得るそうだ。
そして、永原先生は「あの時の繰り返しになるけど、ＴＳ病の女の子は男には二度と戻れない。男を捨てて女の子として生きるしかない」と重ねて強調していた。

「明日も早起きしたらここに来る？」
虎姫ちゃんが提案する。
「いや、明日は地下の一番風呂にしようかなと思ってるんだけど、桂子ちゃんは？」
「うーん、景色はないけど、地下のほうが広いよね」
「それに明日にはここを出るわけだから、一回くらいは地下の朝風呂を経験しておきたいのよ」
「そうね、私も石山さんに賛成ね」
「よっしゃ、じゃあ明日早起きしたらそうしよう」
女子４人組が、一応の合意を確認、日の出後、再び大浴場に戻り、身体を温め、朝風呂が終了した。
着替えている間も、ちょいちょいガールズトークを挟みつつ、桂子ちゃんと虎姫ちゃんにまたセクハラされながらもパジャマに着替え直した。
多分このセクハラは何度されても慣れることはないと思う。というよりも、されればされるほど恥ずかしがり度も上がってる気がする。
「ねーねー、朝食まで部屋でゲームしようよ」
「いいわね。優子ちゃんは？」
「うーん、そうしようか。３人で対戦はしてないよね」
私達が持ってきたゲームはターン制の陣取りゲーム、ゆっくり考えながら出来るゲームで、シンプルながらも奥深く、それでいて頭脳戦、

最大４人まで対戦可能となっている。
「よっし。じゃあ始めようか」
私たちはゲーム機を起動し、それぞれ対戦の準備に入る。
さて、私はゲーム画面に見入り、デッキを見返し、配置につかせる。
「よし、はじめ！」
「「おー！」」
ゲーム画面が進む。戦況は私に有利だ。
罠を仕掛ける。よし、虎姫ちゃんが引っかかった！
桂子ちゃんも私に攻撃を仕掛ける。でも、冷静に守ればＯＫだ。
このゲームはうまくバランスが取られていて、３人対戦といっても２人で１人をいじめようとするとペナルティが出るようになっている。
ペナルティが出ない程度に私はうまく協力関係をかき乱し、最終的に勝利を収めた。
「よし、まず１勝！」
「優子ちゃん強いねー」
「えへへありがとう」
このゲームは優一だった頃にもプレイしていて、その時の貯金もあってややこちらのデッキが強い。
２，３度対戦したが、いずれも私が勝利した。
「うーん、ちょっと強いねえ……」
「ゲーム機変えてみる？　デッキの編成もあるだろうし」
「お、そうしようそうしよう」
私が虎姫ちゃんや桂子ちゃんの方のデッキを使い対戦を再開。
すると７：３くらいで私が勝つくらいにはなった。
「うーん、優子ちゃん強いねー」
「うんうん、別の人のを使うのって大変だろうに」
「ありがとう。でも、そろそろ１５回位になるし、そろそろ食事の準備しよっか」
「そうだね、着替えよっか」
まず桂子ちゃんが着替えのため別室に入る。今日は森林教室もあ

るので、３日目用に黒系統の長ズボンを穿くことにした。
代わりに上の方は、登山はしないので青い無地の服ながらもちょっとだけフリルの付いた感じにする。
もちろん、頭のリボンについてはいつも通りだ。

虎姫ちゃんが着替え終わり、最後に私が着替える。
それぞれ３日目朝の食事券を持ち、今日もバイキングに行く。
今日は昨日と違い、パンとコーヒー、そして野菜サラダという洋風の朝食にしてみた。
虎姫ちゃんは昨日と同じようにご飯味噌汁に鮭という感じ。
桂子ちゃんはご飯とパン、コーヒーとごちゃまぜな感じだ。
「「いただきます！」」
今日の朝食も、３人でガールズトークをしながら食べる。
虎姫ちゃんは恵美ちゃんのグループの子で、グループへの帰属意識も強かった子だ。
でも今は、こうして桂子ちゃんと仲良く話せている。
話してて思う。この学校の人は、いい人ばっかりだ。
朝食をあっという間に食べ終わり、ジュースを２，３杯飲み、私達は自室に戻る。
４０分位して、私はいつものように食事券を整理し、クラス全員の食事を確認する。
そしてその足で、私達はバスに乗り込み、近くの森林教室へと向かった。本当に１０分そこらでついてしまったのだから徒歩でも良さそうな気もするけど。

「えー皆さん、本日は、山と森林の生体について勉強します。クラスごとに２班に分かれ、各インストラクターが皆さんをご案内しますので、指示に従ってください。１組１班が私、１組２班が――」
森林教室の責任者の人が森林教室について説明し、各インストラクターを割り当てている。
この森林教室、先生は無論のこと、何故かバスの添乗員さんまで参

加している。バス近辺の警備は運転士さん任せということだ。

「それでは、2組2班の皆さん。出発しまーす！」

うちの2組2班を担当してくれるインストラクターが声をかけ、先行していた班に続く。

どうやら、森林は遊歩道になっていて、1週をぐるりと廻ることが出来るようだ。

ちなみに「森林の植物を取らない」「動物に餌をやらない」と言った、自然豊かな土地ではよくある注意書きは、ここでも見られた。ちなみに、熊は出没しないらしい。

森林を少し進むと、何か草木を揺らす音がした。

どうやら動物らしいが、それが何なのかは確認できなかった。

うさぎ？　狐？　シカ？　いや、そもそもそれらって森林に住むのかな？

……うーん……まいっか！

ともあれ、インストラクターさんの先導で先へと進む。

「お、あなたは？」

「え？　あたしですか？」

「うん。添乗員の……野洲です」

「ええ、知ってますけど、私に何か？」

「いや、名前を教えてほしいなって……」

んー？　どういうことだろう？　まあいいか。教えちゃいけない理由もないし。

「えっと……石山優子だけど……どうしたの？」

「あ、いやその……ゴホン。石山さんね……」

「???」

何かよく分からない反応だ。

しかしその思考も、インストラクターさんが一本の樹木の前でまた止まり、解説をしたところで止まる。

そうだ、今は添乗員さんのよく分からない行動はどうでもいいし、それよりもこっちを聞こう。後で感想文提出だし。

「えーこの木を見てください、この木は典型的な森林の木です。以前学校でもやったように、ここは森林の中でも比較的外側ですから、陽樹林になっています。もう少し中に入ると、極相林になります」
「ふむふむ……」
真剣に聞いている人もいるし、中には虚空を見つめたり、違う所を見つめたりしている。
でも、移動中はあれこれ雑談していても、インストラクターさんが説明する時は、一応静かにしている。
石山優一に怒鳴られるからという消極的な理由で付いたクラスの習慣だったものの、結果としてはいいことだったかもしれない。
森林の動物も数多く生息していて、それらの動物に関しても、インストラクターさんが多く説明している。
森林の生き物についての遊歩道は1時間半で一周できるほどの長さだ。
時折、遊歩道の道が狭くなっていたり、ぬかるみがあったりする。
インストラクターさんの注意喚起もあって、幸いうちの班では誰かがハマるといったトラブルはなかった。

「ふう、終わったね。どうでした優子さん!?」
森林教室が終わり、龍香ちゃんが話しかけてくる。
「うーん、ちょっとだけ楽しかったかな。森のこと、ちょっと知ることが出来た」
「そうですか、私はあんまり興味がわかなくて、ちょっと退屈でした」
「そ、そうなの？　龍香ちゃん、自然にはあんまり興味ない？」
「……優子さんって、結構なんでも首を突っ込むタイプですよね!?」
「あはは、色々なことに興味を持てるのかなあ？　お父さん譲りかも」
「へえ、そうなんですか。優子さんのお父さんってどんな人です？」
「どんな人って……普通のサラリーマンかなあ……でも、確かに色々なことに興味持つ人だったねえ……」
「そうですか。ふむふむ……」

「でもよ、色々なことに興味を持てるってのもいいよな。あたいなんてテニスばっかだぜ」
「あ、恵美ちゃん」
今度は同じ班だった恵美ちゃんが話しに加わる。
「あーあ、この感想文どうすっかなあ……優子の写させてよ」
「いやいや、それは私もダメだって」
「あー、そうだな。すまん」
この後は、昼食を除いて、バーベキューの準備の時まで自由時間が続く事になっている。
その間、風呂に入る人、軽食屋で食べる人、ゲームコーナーで遊ぶ人、外のアスレチックで遊ぶ人、部屋で遊ぶ人などなど様々だ。
小谷学園の自由を象徴する時間だが、ただ一つだけ義務がある。今日の森林教室を受けての感想文を、提出しないといけない。
ちなみに、この感想文はホテルにあるＰＣコーナーで書いて印刷する人も居たりするが、もちろんとやかく言われることはない。
印刷代も自己負担で必要になるため、よほど自分の字に自信がない人以外は、手書きで提出するようになっている。
桂子ちゃん、虎姫ちゃんと一緒に机に向き合い、感想文を書き始める。
集中すれば以外にすぐに終わる。
面白かったこと、興味深かったこと、気をつけたことをそれぞれ書く。
樹木と森の発達についてはやはり理科の時間通りだったので興味深かった。
奥の方では陰樹林がたくさんあって、極相林になっていた。
気をつけたことと言えばやはりぬかるみや地面にある木の枝だ。転びそうにならないように、靴選びも慎重にしたいと書いた。
あまり長々しく書いても評価は良くならないため、簡潔にわかりやすくまとめる。
桂子ちゃんと虎姫ちゃんも、当り障りのないことを書き、私達は自由時間に入った。

## 林間学校三日目　長い自由時間

自由時間中、私達はルームメイトだけではなく、色々な人達と遊ぼうという話になった。
サッカー部の虎姫ちゃんや、学年の女子グループのリーダーの一人だった桂子ちゃんはともかく、私は女子として、普段は他のクラスの子とはあんまり交流がない。
今回の自由時間で、何か交流でもあればいいんだけど……
「あれ……優子さん！　優子さんじゃないですか！」
「あ、龍香ちゃん！」
龍香ちゃんが声をかけてくる。近くには知らない女子がいる。
「えっと、あなたが石山優子さん？」
「う、うん……」
「元々は男の子だったのにある日突然女の子になったんでしょ？　そのことについてちょっと聞きたいと思って」
「は、はい。あたしでよければ――」
私は、その女子……1組の女の子にＴＳ病の大変さなどを教えた。
でも、自分の意志で女の子になると決めたこと。乱暴だった昔を捨てる決意も語った。

「でさでさー、優子ちゃんってもう生理来てるのー!?」
「ぶー」
いきなり生理のことが出てきて吹き出してしまう。く、口に何も含んでなくてよかった。
「ちょ、ちょっと……女の子がそういうの……はしたないわよ！」
私が抗議する。
「ふへー、本当に女の子らしいなー、そんなの気にしなくてもいいのにねー」
「だめよ！　あたし、女の子は女の子らしくしないといけないって心に決めたんだから！」
「優子さん、こう見えて結構繊細なんですから。デリカシーないこと

言っちゃダメですよ！」
「はいはい堅いこと」
「でも、優子さんはまだまだ、深い所で女の子になれてないんですよ！」
「え？　そうなの？　もうどこからどう見ても女の子そのものじゃんこの子」
　そう言ってくれるのは嬉しいけど……でも課題は課題。
「チッチッチッ……まだまだ女性特有の感性や趣味、恋愛観と言ったところでは、優子さんはまだまだ鈍いんですよ。ガールズトークもついていけないことが多々ありますからねえ」
「うううう……龍香ちゃん容赦ないよお……」
「まあでも、そういった所も、優子さんは少しずつ改善して、女の子になっていきたいと言ってます。本当にすごい人ですよ」
「あ、ありがとう……」
　努力が認められるのは嬉しい。
「でも、優子ちゃんってどういう性格なんです？　やっぱりその辺はまだ……」
「うーん、性格は、優一だった頃に比べるとむしろ正反対って感じですよ！」
「というとーどんな？」
「優子さん、とっても繊細で、傷つきやすくて……すごい泣き虫で……だけど誰よりも健気で、名前の通り優しい女の子ですよ！」
「や、優しいの？　私？」
「うんそうですよ。優しくありたいという気持ちは、誰にも負けてませんよ」
「龍香ちゃん！　ありがとう！」
　女の子らしい性格になりたいと思っていたから、乱暴な性格だった昔と正反対になれたのはとても嬉しいこと。
「ほら、またちょっとだけ、涙ぐんでるでしょ？」
「え？」
　確かに、言われてみれば。心は動かされていたかも。

「なーんて、嘘ですよ。優子さんは確かに嬉しかったり悲しかったりすると、とてもよく泣きますけど、そこまで泣き虫じゃないです」
「もー！　龍香ちゃん！」
「そして怒った時も可愛いんですよ」
「あはははは」
　うううう、完全に遊ばれてる……
「おっと、あんまりいじるのも可哀想だからこの辺にしておきますよ」
「それよりも、実は優子ちゃんにもう一個聞きたいことがあるのよ」
「何？」
「永原先生のことですよ。あの噂って本当なの？　それから誰が証明したの？」
「ええ、永原先生が４９９歳ってのは小谷学園の近くにある佐和山（さわやま）大学の蓬莱教授が証明したそうよ」
「ええ!?　蓬莱教授がですか!?」
　龍香ちゃんも驚いている。
「そうなのよ」
「ふへー、あのノーベル賞学者がねえ……ってことは優子ちゃんも」
「うん、交通事故とかで死ぬ確率なんて早々ないし、多分１００、２００年後、もしかしたら１０００年後でもこの姿で生きてると思う」
「１０００年後かあ……私のおばあちゃん、人生はあっという間って言ってたけど、永原先生に言わせれば、５００年はあっという間っていうのかな？」
「それがね、そうでもないのよ」
「どういうこと？」
「江戸時代までは結構あっという間だと思ってたけど、ここ１００年、特に最近７０年はまた時間の進みが遅くなった気がするんだって」
「たしかに、最近の時代の変化はすごいですからねえ……」
「ねえねえ、石山さんでしょ？　色々話聞きたいんだけど……」
「あ、はい」
　また別の知らない女子があたしに声をかけてきた。

すると、どこから聞きつけたのか。他のクラスの女子が大人数集まってきた。
「ねえねえ、あの日救急隊員が来てたけど、どんな感じだったの？」
「えっと、下腹部が痛くなって、保健室行こうとしてそのまま倒れて――」
「それで、血を吐いたんですよ！」
「ちょ、ちょっと龍香ちゃん！」
「でも、それが私達の見た『優一』としての最後の姿でしたよ」

「永原先生の噂って本当なの？」
「ええ。佐和山大学の蓬莱教授が――」

「ねえねえ、どうやってその女の子らしい仕草と言葉遣い覚えたの？」
「永原先生がカリキュラムを作ってくれまして――」
「どんなカリキュラムなの？」
「えっと、掃除洗濯と言った家事だったり、スカート穿いて出かけたりして――」
「へえ、大変そうねー」

「ねえねえ、女の子の日の時ってどうするの？」
「ちょっと！　その質問答えるのはやだよ！」
てか、まだ来たの2回だけだし。
「えー別に女の子しか居ないしいいじゃん！」
「嫌よ！　何処に男子が居るかわからないのに」
「「えー！」」
女子たちが一同に不満の声を漏らす。
「嫌ったら嫌よ!!　セクハラやめてよ！」
説明するの恥ずかしいし。
「ほらほら皆さん、優子さんは花も恥じらう乙女なんですから。恥ずかしそうにしてますよ！」
龍香ちゃんが永原先生と同じことを言う。乙女って言ってくれる

の、やっぱり嬉しい。
「「はーい……」」
何とか生理の時のエピソードは聞き出されなかったが、ＴＳ病のこと、カリキュラムのこと、永原先生のこと、根掘り葉掘り聞かされてしまった。
「あらあら、女子の皆さんで集まってどうしたんですか？」
「あ、永原先生！」
「ねえ先生、先生が５００歳って本当なんです？」
「江戸時代とかどういう生活してたんですか？」
「はいはい、一人ずつ、一つずつ質問して下さいねー」
最終的には、永原先生本人が登場し、その場を明け渡すことになった。
最も「石山さんも帰らないで」と言われたので、かなりの時間を拘束された。
そのうち男子も集まってきたし。
関ヶ原の戦いの見物談の他にも、江戸城での日常についても話してくれた。年長者ということで、多くの大名や旗本が話を聞きたがったが、公的には江戸初期の生まれとなっていたため、関が原については話せなかったらしい。
最も、戦国生まれだったのはみんな知ってたらしいけど。
それと、９代将軍の言葉はやっぱり分からなかったらしいが、「大岡出雲守」と言う人が通訳になってくれたので戦乱の時代のことを話したそうだ。
また、戦国時代の人とあって、戦争についても「人の摂理」「無くすことは不可能」「珍しいことではない」と言うだけで悲劇性については何も語らなかった。
ともあれ、永原先生が「この辺で解散」と言った頃には、もう昼食も目前だった。
私は携帯電話で桂子ちゃんに「レストランで落ち合うので私の分の食事券を持ってきて欲しい」とメールを送り、２階のレストランに集合した。

「ふー、虎姫ちゃん、桂子ちゃん、食事券」
「あ、はい」
「ありがとう」
「にしても優子、大変だったね」
「え？」
「とぼけないでよ。優子ちゃん、女子たちに捕まったんでしょ」
「う、うん……そうだけど……」
「質問攻めにされてたよね。永原先生が来ても逃げられなかったし」
「うんうん」
「でも確かに、みんなが聞きたがってたのは事実だと思うのよ」
「ええ、私達は優子ちゃんや先生の秘密を本人の口から聞いてるけど、他のクラスの人は又聞きなのよ……だから、まとまった自由時間のあるこの時間に根掘り葉掘り聞きたいと思うのは当然よ」
　確かに、他のクラスの人の立場ならそうなるよね。
「さ、お昼ご飯にしましょ。どうやらバイキングではないようですよ」
　食事券を見てみると、いつもと違うデザインで「１０００円」と書いてある。
　３人がけのテーブルに案内されると、いつもは存在しない呼び鈴が３つある。
「どうやら一人１０００円までは無料らしく、それ以上は追加料金が必要だそうです」
　ふむ……
　メニューにあるのはラーメン、そば、うどん、スパゲッティといった麺類の他、ピザやカレー、とんかつ定食、焼肉定食などもある。
　だいたいどれも1品と飲み物で１０００円前後になるように出来ている。
「よし、とんかつ定食とオレンジジュース」
　虎姫ちゃんが決めると、呼び鈴を押す。
　微かにベルの音が聞こえ、ウェイトレスがこっちに来た。
「ご注文お伺いします」
「とんかつ定食にオレンジジュース」

「かしこまりました」
そして注文表を置いていく。
その後、私は天ぷらうどんと麦茶、桂子ちゃんは醤油ラーメンとミニ餃子を頼んでいた。
餃子は3人で食べていいとのこと。3個だったのでありがたく1個食べさせてもらった。
私だけ10円超過だったので、10円玉を帰る際に支払う。食事の終了までは時間があるので、自室に戻り休憩し、永原先生に呼び出されて実行委員のいつもの仕事をする。
自由時間に夢中になってたせいか3人が食事を失念していたが、幸い2組からは0だった。
今回の昼食の無料券は軽食屋さんでも使えるのが不幸中の幸いではある。後で永原先生が教えてくれたが、このメニューは軽食屋で出しているものらしい。

ともあれ、昼食が終わったら午後の自由時間に入る。女子に捕まることもなかったので、私は自室に戻る。
桂子ちゃんは何処かに出かけていて、私は虎姫ちゃんと、虎姫ちゃんが呼んだ恵美ちゃんのマッサージを受けていた。
というのも、私が1時間5000円のマッサージ師を呼ぼうとしたので、虎姫ちゃんが「恵美と二人でマッサージする」と言ってくれたためだ。
うつ伏せになって肩や背中をマッサージしてもらう。
「あああ、気持ちいいー!!!」
相変わらず虎姫ちゃんと恵美ちゃんのマッサージが気持ちいい。
肩こりには毎日悩まされているけど、こうしてほぐしてもらう時は至福の時だ。
「それにしてもよ。肩揉まれて気持ちよさそうにしてる優子って可愛いよな」
「うんうん、何もしなくても可愛いですけど、やっぱり幸せそうにしている優子が一番よね」

「ええ、そう？　ありがとう……あーそこよそこ、うん、そこがこってるのー！」
「しっかし、重いだろそれ？」
「え、うん。何キロあるかわからないよ……」
「聞くところによるとEカップで大体1キロ位らしいぜ」
「え？　でも私……」
「あー言わんでいい言わんでいい」
今のカップ数はEより大分大きいし、間違いなく1キロじゃ効かない重さ。というか、あの店でブラジャーがあったのが奇跡なレベルだし。
「よし……こんなところかな！」
「ありがとう」
ガチャ
「あ、恵美ちゃん来てたんだ」
部屋に入ってきたのは、桂子ちゃんだった。
「ええ、優子がマッサージ師呼ぼうとしてたから、私が恵美ちゃんを呼んだんですよ」
「あはは、優子ちゃんらしいわね」
マッサージが終わり、私はバッグから少女漫画を取り出し、読み始める。
転校生との恋での障害。転校生はスポーツに夢中で、恋愛に鈍感だということ。
それでも健気にアタックを続ける主人公。
……お、ついに告白した。
私も、頑張れ頑張れと意味もなく応援してしまう。
結局恋は実ることになってハッピーエンドだ。
「優子ちゃん、少女漫画好きですよね」
「なー。あたいなんて殆ど読んだことねえぜ」
「カリキュラムの時に読むように言われて、その時に渡されてからまだ読んでないのがあるのよ」
「そうか」

「まあ、せっかく貰ったし……読まないのも何だかなあって……」
「ふっ、今は、そういうことにしておいてやるぜ」
「でもでも、女の子が少女漫画読むのは普通のことよね？」
「うんうん、優子ちゃんは何もおかしくないよ」
　そうだった。もう女の子なんだから少女漫画読んで何も悪くないよね。
　やっぱり、まだまだ女の子になりきれてないよね、私。
「そうね、堂々と読めばいいのよね」
「うん、優子ちゃんの言うとおりよ」
「よし！」
「どうしたの？」
「読む場所変えるわね」
「そ、そう……」
　あたしは立ち上がり、桂子ちゃんたちを尻目に、少女漫画を2冊持って部屋を出る。
　そしてエレベーターで最も人通りの多い1階に移り、ソファーに座って、別の少女漫画を読む。
　この漫画はやっぱり恋愛系。うちの学校とは正反対に、校則の厳しい学校で、密かに恋愛するという感じだ。

「あれ、あそこで少女漫画読んでるの石山じゃね？」
　篠原くんだ。
「あ、本当だ……」
「おーい、石山！」
　高月くんが声をかける。
「うん？　どうしたの高月くん？　私にどんな用事なの？」
「いや……その……石山って……少女漫画読んでるんだなって……」
「高月くん、女の子が少女漫画読んじゃダメ？」
「あっ！　い、いやいや、全然そんなことないぞ。お、男だって読む人いるくらいだしな！　なあ篠原！」
「あ、ああ。俺は知らないけど……」

「ふふっ。こっちは読み終わったから、篠原くんも読む？」
「ああ、いやっ……え、遠慮しとくよ」
「そう？　あたしはもう少しここで読んでるから、篠原くんたちも自由時間楽しんでね」
「う、うん！」
篠原くんがまた顔をそらしながら、足早に去っていった。
少し経ってふと見てみると、高月くんが篠原くんをいじってるような様子が見て取れた。
その後も、通りがかった何人かの男子がヒソヒソ話している。
私が女の子向けの漫画を読んでいるというのは、やはり結構衝撃的らしい。
絵的には可愛い女の子が少女漫画読んでいるだけなのだが、やはり学校中があたしの正体を知っているためそのあたりのギャップもあるらしい。
しかも、誰かが少女漫画の内容を知っていたらしく、女の子が主人公で、校則の厳しい学校で密かに恋愛する話だということも噂が噂を呼び知られていった。
時折声をかける人も居て、その時はさっきみたいに「女の子が少女漫画読んじゃダメ？」と聞くと、あっさり引き下がってくれた。
何だろう、他のクラスの子からも、少しだけ好感度が上がった気がする。
優一時代、小谷学園で珍しい乱暴者ということで他のクラスまで悪名が轟いていたが、その後も「乱暴者が可愛い女の子になって性格が丸くなるどころか正反対になった」というのが他クラスでのあたしの認識だった。
それが、今は少女漫画を読むようになっている。
内容もとてもメルヘンチックな恋愛もの。障害を乗り越えた恋愛という形だ。
少女漫画は心情描写が多い。
私が心まで女の子になる上で、現在の課題は「深いところ」だ。
少女漫画を読めば、そういった深い心情、主人公の気持ち。これに

共感出来るかどうか。共感は難しくてもまず理解から始める。
少女漫画を読むのは、単なる暇つぶしではなく、そうした意味もあることに、私は気付かされた。
憧れの男の子とデートすることになる。
何だろう、この男の子すごくかっこいい……
ふむふむ、こうすると女の子って惚れるのか……私もちょっとだけ気持ちは分かるかな。やっぱりかっこいいもん。
少女漫画を読み続けていて、ふと時計を見る。
バーベキュー実行委員の集合時間まで残り２５分になっていた。
一旦自室に戻り、桂子ちゃん・虎姫ちゃんと共に少しだけ雑談しつつ、私は永原先生から事前に呼び出されていた集合場所に行くことになった。

# 林間学校三日目　バーベキュー

「はーい、篠原君と石山さん、ちゃんと時間通りね」
食事券の整理の時のみ会う実行委員とともに、今回のバーベキューの準備を聞く。
永原先生の事前の説明でも知っていたが、バーベキューの時に実行委員がする作業は僅かで、それよりもチーム全体を見て、監督する。トラブルがあった時に対応したり、先生に取り次いだりするといった後方リーダー的な仕事が主になる。
まあリーダーはもちろん必要ならば現場に出ることも重要だけど、全体の監督のほうが大事ということだ。

会合が終わってしばらくすると、小谷学園の全生徒が集まり始めていた。
私はいつもの2組の生徒たちの前で説明を始める。
「えーっと、まずは野菜を切る、洗う班と火をおこしたり、炭を入れたりする班に分かれてください」
「はーい！」
「うむ、そんな感じだな」
そして、主に野菜を切ったりあるいは早く焼けるように事前に茹でるグループは主に女子、それも桂子ちゃんグループの女子が中心になる。
木を切る他にも、炭や火おこし、テーブルなどのセッティンググループは主に男子。こちらの方が人数が必要だと言うので、旧恵美ちゃんグループの女子もこっちに編入してもらう。
特に腕力が必要な作業は男子を押しのけて恵美ちゃんが担当することも。
まあ、テニス選手と言っても、さすがに男子ほどの力は出せないようだけど。
まず火おこしグループはバーベキューの台を持っていく。

私と篠原くんはそれぞれ肉野菜グループとセッティンググループを監督する。あたしは肉野菜グループの担当だ。
「あ、さくらちゃん、包丁の持ち方が違うよ！」
さくらちゃんが間違った包丁の持ち方で切ろうとするので止める。
「え？　そうなの優子さん？」
「これだとあんまり良く切れないよ。そうじゃなくて――」
私は母さんの受け売りでさくらちゃんを指導する。
「あ、すごい！　ありがとうございます！」
「さくらちゃんもやって見て？」
「は、はいっ！　わーすごいです！」
「すごいですね、優子さん家庭的ですよ」
龍香ちゃんが褒めてくれる。
「えへへ、カリキュラムの後も休日は家事手伝いしてるから」
「ほうほう、それはすごいですねえ。私なんて全然やってないですよ！」
「母さんの話だと、『ちゃんとお掃除お洗濯お料理ができないと可愛くてもダメ』らしくて……」
「ほうほう……」
「母さん、いつも『優子を立派なお嫁さんにする』って言ってて……」
「ふーん、今でも引っ張りだこだと思うけどねえ優子ちゃんは」
キャベツを切って洗いながら桂子ちゃんが話しかけてくる。
「そりゃあ、あたしも自分のことはよく分かってるし……正体さえ知られなければ第一印象は最高だろうけど……」
「でしょ？　なら十分じゃないの？」
「……でも、いつまでも正体話さないわけにも行かないし、お嫁さんになるんだったら母さんの言う通り、単に可愛くて美人なだけじゃダメだと思うの……だからあたし、家事も頑張る！」
「優子ちゃんってホント健気よねえ……」
「うんうん、容姿と性別が変わると人ってここまで変わるんだって、改めて思ったわねえ……」
「男だった頃は、怒ることが生きがいみたいだったのに……そういえ

ば、優子さんって女の子になってから怒ったことありましたっけ？」
「うーん、セクハラされた時は結構怒ってましたけど……」
「いやいやそういうのではなくて、本気で怒ってる感じの……」
あれ？　そういえば思い出せない。女の子になってから、ほとんど怒った記憶がない。
「うーんそう言われてみれば無いですねえ……」
「……まあ、温厚なのはいいことじゃないの？」
「そうですね。優子ちゃんが本気で怒るって、何か想像がつかないですし」
「うんうん。優子ちゃんって名前の通り優しい子だもんね」
「あ、ありがとう……」
優しい、可愛い、美人、女の子らしい。あたしにとって、いや私だけでなく、女の子なら何回言われても嬉しい言葉だ。
「はーい、あんまりおしゃべりしすぎないでねー」
永原先生だ。
「あ、永原先生すみません」
「皆さん、女の子は同時作業できるからって、油断しちゃダメよ」
「はーい先生」
「分かりました」
「……石山さんも、ちゃんと監督してください」
「はいっ」
永原先生に声をかけられたので、今度はウインナーと人参を茹でる作業を見る。
こちらは田村グループながら野菜班に参加の虎姫ちゃんの担当だ。
火おこし組がまだ到着していないため、水道から水を汲んだ後、野菜を切っている。
ガスコンロなんて言う都合のいいものは無いようだが、一応マッチはあるため、下に新聞紙と炭などを引いて湯をわかすことが出来る。
このあたりは、私もよく分からない。
私が母さんから習っている料理は、現代的なキッチンを前提にしたもので、こういう野外のバーベキューは完全に分からない。

私は現場でトラブルがないか監督しつつ、手が空いた人に油や皿などを取ってくるようにアサインを出していく。
別のクラスで指を少し切った子が居たなんて言うトラブルもあったものの、私達は関係無い。
連絡が入った時には気をつけるように改めて注意喚起するに留める。

ふとセッティンググループを見ると、男子たちがテーブルの作業に入っていた。椅子を立てて８人一組で１つの台を作る。
つまり、野菜や肉を全体で４分割する必要がある。この分割作業はこちらの管轄。注意しないと。
各テーブルでそれぞれどれだけ焼くのかと言った調整もあるし、また焼きそばのこともあるので、料理ができる人を各テーブルに一人は入れなければいけない。
そのあたりも考えて、テーブルを配分する。でも、女子グループの対立の激しかった時代でなくてよかった。
男子たちはバーベキュー用の鉄板を並べる。ほんのり夕焼けになり始めた。
火を起こす前に、まずは新聞紙と炭、更に一部木材をバランスよく入れる。
永原先生によると、まず火である程度鉄板を温め、それから油を敷くといいらしい。母さんも似たようなことを言っていた。温める前に油を敷くのは「略式」らしい。
私は虎姫ちゃんと同じ鉄板に入る。
よし、準備は完了だ。
バーベキュー開始まで１５分の猶予があり、私達のクラスは一番乗りだ。
それまでは自由時間、クラスのみんなが他のクラスの邪魔にならない程度に、思い思いに広い草原で遊んでいる。
私はそれを見て、何か問題がないかどうか見る。
よく見ると篠原くんも同じ仕事をしていた。こういう遊びの時に

トラブルも起きやすいからだ。

「はーい、みんなーそろそろ始めるわよー」

永原先生が号令をかける。

永原先生の号令とともに、各自が集まり、それぞれ割り振られたのテーブルに着く。

私のテーブルでは、男子の一人が太い木の棒に火をつけていて、それを使いそのまま点火する。なんか原始時代みたいだ。

どうも、あちらの方で火を起こして「種火」を作ったらしい。マッチなどで火をつける計画だったが、永原先生が火おこしを実演してくれたので、それをやってみようという話になったそうだ。

一瞬、「永原先生何で火おこし何て」って思ったが、すぐに「戦乱の時代を生き抜いてきたんだから当たり前」だと気づいた。

火の上に鉄板を置き、熱くなってきたのを見計らって油を入れて敷く。

その間、私が鉄板の周りに明日小さな各人の小テーブルの上にタレと紙皿、紙コップに飲み物を置く。足りなくなったら外側にある予備からとっていく感じだ。

頃合いが良くなったら、まず肉と野菜を入れる。少しだけ野菜、それもニンジンやカボチャ、ジャガイモのように固いものが多めだ。もっとも、ニンジンは茹でてあるので、早めにできるはず。

他のテーブルでも時折「いただきます」の声が聞こえ、私たちのテーブルでもバラバラに「いただきます」をする。

まず焼けた玉ねぎを取る。そして口に入れる。

「お、おいしい！」

何だろう、自然な焼き方というのかな？

「家での焼き焼きとはまた違う味わいだね」

「うんうん」

次にニンジン、ピーマン、キャベツなども続々焼けてきて、タレに着けて食べる。

さらに、肉もあったのでそちらも食べる。
女の子になってゆっくり食べることになったのでより味わって食べることができるようになったと思う。
男の頃は、こう、お腹を満たすためという欲望が先行することが多かった。でも、それを簡単に達成できるようになったために、こういった別のことに目を向けることができるようになったんだと思う。
味覚は変わらないけど、こういった細かいところで、男女の違いを感じられるようになった。
肉の味わい、タレと肉汁の重要性、どれくらい焼けばよく焼けるのか。などなど、母さん任せだった料理を習ったことも大きい。
お腹いっぱいになりやすいから、味付けも自然と薄くなった気もする。
ともあれ、皆より少し少ない量を取る。
途中虎姫ちゃんが「優子の食べる量が少なくなっている」と注意喚起したものの、私は「これでちょうどいい」と言った。
まあ、それでも周囲は遠慮してくれたけど。
また、ピーマンやニンジンが嫌いという人もいて、私はピーマンを集中的に食べた時もあった。
「優子、こんな時もあまり多く食べないんだね」
「ええ、女の子になって最初に病院食を食べた時は驚いたよ。すぐにお腹いっぱいになったから」
「ふむふむ……食べ物の好き嫌いはどうなんですか？」
「特に優一の頃から変化ないよ」
「なるほど……」
女の子になっても変わらないこともある。
私はかつて自分が嫌いな男だった。だから、ＴＳ病になったのを契機に、男としての性格も、人格も全部捨てて、今度は優しい女の子になる決意をした。
今ではもう、昔の私も思い出話の一環だ。
林間学校でも改めて分かった。私は、かつての男だった頃の私とは、殆ど正反対になった。

昔の私は、怒りっぽくてすぐ怒鳴る、乱暴な男の子。そしてとても強引で力ずくを好んだ。
今の私は、健気で泣き虫、優しい女の子。そしてとても繊細で力も弱く恥ずかしがり屋。
自分で変わりたから変わった。でもここまでうまく変われたのは本当によかった。
最初はちょっといじめられてたけど、仲の悪かった女子グループも一つになったし、今のあたしは普通に女子として溶け込めた。
歪んだ正義感で偽善を振りかざした先生も、もういない。
「石山、あんまりお肉食べてないよ。ほらこれ食べなよ」
「あ、ありがとう……」
男子の一人が私のために肉を取ってくれた。
この男子も、以前に何回か怒鳴っていた相手だ。
でも今はこうやって、あたしのことを思いやってくれる。
バーベキューは徐々に野菜から肉中心になっていく。
私は、この中では一番最初にお腹が膨れる模様なので、みんなもペースを少し落としてくれる。
「優子、焼きそばもあるから配分に気をつけてね」
「ありがとう虎姫ちゃん……」
男子が一番食べているかと思えば、結構虎姫ちゃんも負けていなくてびっくり。
やはりサッカー部なのか。
「でもさあ……」
「ん？」
「優子ちゃん少食なのに、何でここは大きいのよ……」
虎姫ちゃんが私の胸に視線を移す。
「ちょ、ちょっと虎姫ちゃん！　男子も居るんだから！」
あたしは抗議しながら腕で胸を防御する。
「あ、ゴメンゴメン」
男子も一瞬ビクッとしたが、すぐに元に戻ってくれた。
既にあたしがそう言う女の子っぽい態度をとっても、あまり驚かれ

なくなった証拠だ。女の子として復学したばかりは奇特の目で見られた。女の子が女の子らしくして何が悪いのかと自問自答していた日々も今では懐かしい。
「あたし、あの倒れた日の翌日、朝起きた時には既にこの姿だったから。最初からって言う感じなのよ」
「そうなんですか……」
「ふうー」
「優子、溜息ついてどうしたの？」
「ああ、いやごめん。何でもないよ」
肉も徐々に減っていく。あたしはお腹がかなり膨れてきて、焼きそばを食べられるか心配だけど、他の生徒達はもりもり食べている。
でも、やっぱり周囲が遠慮しないように、無理しないギリギリを狙って食べる。これが結構難しい。
「さ、肉野菜もこれで最後だよ」
虎姫ちゃんの号令とともに、最後の肉野菜を食べる。
私が食べる量は少ないが、他の男子も食べたがりなので、利害は一致している。
この後はシメの焼きそばだ。

「さ、焼きそば行くよー！」
虎姫ちゃんが号令をかけ、改めて油を敷く。
垂れの付いた紙皿を回収し、私がゴミ箱に捨て、その間に別の人が空の紙皿を用意してくれていた。
この焼きそばの調理が私の担当になっている。
まずもやしとキャベツを入れ、満遍なく炒める。
「おおー！」と歓声が上がる。
女子の間では、もうあたしが家庭的であることは知られているが、料理班ではなかった男子の間では知られていないようだ。
最近は女子でも家事ができない子が増えていて、嘆かわしいとは母さんの話。そんな時代だからこそ家事ができ、女の子らしい女の子はモテるのだという。

野菜がいい匂いをしてきたら、次に麺を入れ少量の水を含んでほぐす。少しだけ油と激しい反応を起こすのではねた油に注意する。
箸でほぐし、片方が温まったら両手に鉄のヘラを持ってひっくり返す。
こんなに大量にはやらないので何度かに分けて行う。
火加減の調整が難しいのがこのバーベキューの難点だが、致し方あるまい。
ここは弱火にしたいので、新しい木を増やして火を一時的に少し弱めさせる。
そして麺が大分ほぐれたところで、焼きそばソースを満遍なくふりかける。
これは他の人にも手伝ってもらう。
ソースを麺に満遍なく浸透させ、白い部分がないように箸で慎重にかき混ぜていく。
そうこうしているうちにソースが均等に行き渡ったので、最後に青海苔をかけて完成だ。

「うおお、石山の作った焼きそば！　うまそうだな！」
「いただきまーす！」
私も自分の分を盛り付ける。とりあえず自分で野菜と麺を食べて見る。
……うん、ちょっとだけ失敗しちゃったかな？
ソースがあんまり万遍ないし、野菜の焼き加減もところどころ不均衡なところがある。
でも……

「うおお、美味えな！」
「そうそう、この手作り感がたまんねえよな！」
「優子ってホント完璧な女の子よね」
みんなが心の底から喜んでくれるのを見ると、謙遜する気も薄れてしまう。

夢中でみんな食べるけど、あたしを見るとすぐに声をかけて、あたしの分を取っておいてくれる。
それでも、焼きそばは少しずつなくなっていく。

「あーあ、楽しい時間は本当にあっという間だね」
虎姫ちゃんが言う。
「大丈夫よ、小谷学園に居れば、また楽しい時間は来るよ」
「ふふっ、優子ちゃんらしいわね」
「でもよ、やっぱ人生って短いからさ、今を全力で生きたいっていうの。石山は全力で生きてるよな」
男子の一人が言う。
「え？　そうかな？」
「うん、実行委員やってるの見てさ。俺たち、石山……本当に改心してるんだって……それまではさ、心の何処かで弱い子ちゃんアピールしてるんじゃないかって思ってた」
「う、うん……そう思われても、仕方ないよね」
「でもさ、実行委員……本当に頑張ってるよ。いくら許したと言っても、一番いじめてた相手とあんなに上手くやるなんて……俺だったら出来ねえよ……」
「うん、ありがとう……」
「短い人生の中で、そういう心、特に性格を入れ替えることって、俺はとても難しいと思うんだ」
いいことを言う、でもその言葉は私には的外れだ。
「ふふっ、心を入れ替えるのは難しいのはそうだけど……」
「？」
「あたし、人生短くないよ」
「あ、そうだったね……ごめん」
「いいのよ、あたしの長い人生はもっと後になって考えるよ」
「……」
「さ、話し込んでないで、今は今を楽しもうよ。もうすぐ終わるけど、バーベキュー……ラストスパートしよ？」

「ああっ！」

# 林間学校三日目　小さな花火大会

「「ごちそうさまでした！」」
みんなでごちそうさまをし、後片付けに入る。
まず水をかけて火を消し、火災の危険性を消す。
私達は椅子や紙皿などを所定の位置に捨て、男子はテーブルなどを片付ける。
「うーん」
「どうしたの優子？」
「ああいやゴメン、何でもない……」
「そう？　ちょっと顔色悪いよ」
「う、うん……」
ちょっと3日分の疲れが出ている。多分前回前々回の経験から明日は大丈夫だと思うけど、明後日あたりからはちょっと辛い一日になりそうだ。生理も人生三回目だけど、慣れることはない。
ふと思う。今後の人生で、生理は何回来るんだろう。一番長生きの永原先生でさえ、今も来てるって言ってた。
４８０年間女性をやっているとして、月に1回とすると……４８００に９６０を足すから……５７６０回か……５０００ヶ月長い年月だ……
そしてもし１０００年生きるとしたら1万回以上の生理を経験する。と。
月に一回とは言っても長生きすればそれだけ来るってことか。ちょっぴり憂鬱だ。
ともあれ、生理のことを考えるのはそこそこに、片付け作業を再開する。
折りたたんだ椅子やテーブル、そして鉄板も、所定の位置に置いておけば、後はホテルの人が片付けてくれるそうだ。
私達が片付け終わると、とっくに日は落ちていた。
私は篠原くんと合流し、永原先生のもとへ行く。

「さ、花火大会に向けて、少しだけお手伝いするわよ」
「「はい！」」
「じゃあこっちに来てくれるかな？」
　この後は小さな花火が行われる。そのことで、少しだけ運ぶのを手伝うのだ。他のクラスの実行委員には、それぞれ別の役割が与えられていて、私達は花火師さんたちとともに荷物を運ぶことになっているのだが……
「おっ！　嬢ちゃんはこれだけ持ってくれ。そこのガタイいい兄ちゃん、お前は嬢ちゃんの2倍な。あー危険なもんは運ばんことになっとるから安心せい」
「あいよ」
「……う、うん……」
「どうしたお嬢ちゃん？　女の子でもこれくらい持てるはずだぞ」
　うわーこの量はちょっと厳しいかなあ……女の子でも持てると言っても、あたしは女の子の中でも力ない方だし……でもやらない訳にはいかないし……
　うじうじしてても仕方ない、とりあえず持ち上げてみよう。
「うーん!!!」
　よし、何とか持ち上がって……
「わっわわっ!!!」
　足が、危ない!!!
　……ドスンッ
「はぁ……はぁ……」
「お、おい、大丈夫か？　すまねえ、ちょっと女の子には多かったか……」
　ぜ、全然前に進めない……二回に分けないと……
「……ほら、い、石山。持ってやるぞ」
「篠原くん……ありがとう」
　篠原くんが私の荷物の半分を持つ。ただでさえ私の2倍を持っているのに、最初のと合わせれば、篠原くんは私が持つ5倍の量を持つ

ことになる。
私は半分でも力を入れながら持ち運んでいるにもかかわらず、篠原くんは平気な顔をして持ち上げる。
「ほう、お前相当鍛えてるな！」
篠原くんは、花火師さんよりも多くの荷物を持っていて、花火師さんの方は年齢がいっているためか結構踏ん張りながら運んでいるが、篠原くんは涼しい顔で運んでいる。
篠原くん、篠原浩介くん。本当に力強い男の子。
でも、私もちょっとだけ貢献する。
「おし、ここに置いていてくれ」
そう言われたので、花火師さんに言われた場所に置く。
「おーい、全部運び終わったぞー」
「お、もう戻っていいぞ！」
「「はい！」」
その声を聞き、返事をしていると、永原先生が駆け寄ってきた。
「二人共、お疲れ様、さ。花火見るわよ。2組はこっちよ」
永原先生の声とともに、私達も他の生徒たちがいる元へ。
花火師の人が来る。
花火師さんのうちの一人が代表して、他のクラスの実行委員がセッティングしてくれたマイクと朝礼台の前に立つ。
「えーみなさん。本日は『山のはて花火協会』の花火をご見物いただき、誠にありがとうございます。当花火協会は、えー江戸時代。幕末の創業です。老舗の匠の技を、是非ご覧ください」
よく考えたら創業が幕末期ってことは永原先生の方がこの花火協会より倍以上生きてるんだよな。
江戸時代よりも前からの老舗は、戦国時代の影響もあって激減するって聞くし、やっぱ永原先生ってすごいわ。
「えーこれから行います花火は、まず――」
花火師さんが、花火の内容を説明する。
本当に小規模なもので、小谷学園生だけに開かれた、ささやかなお祭りという感じだ。

時折ジョークも混ぜてくれるが、年齢的なギャップがあるためかあまり受けていない。
永原先生は分かるのか、少しだけ笑ってることがあるなあ……
あ、でもよく考えると永原先生と花火師さんより私達と花火師さんの方が年齢的にはずっと近いはずなのに……
……考えても仕方ないか……

「――えー、以上で私の方からの説明は終わります。何かご質問はありますか？」
「……」
「えーなければ、早速花火大会の方に入りたいと思います。あ、玉屋でも鍵屋でもないのでそこの所はよろしくお願いします、以上！」
花火師さんがそう言うと、また別のクラスの生徒がマイクと朝礼台を片付け、急いで列に戻る。
準備ができたのか、花火師さんたちが合図を送り、火をつけるような動作をする。
ボーン！　バラバラバラ……
天に向かって一筋の光が放たれると同時に激しい音がしたと思ったら、乾いた音と共に円形の花火が開く。
オーソゾックスだが、やっぱり間近で見ると迫力がある。さっきの説明だと控えめで小さいものらしいけど。
「すごいわねえ……花火の進歩……」
次々打ち上げられる花火を見て、永原先生がそうつぶやく。
小さいながらも色々カラフルで、時折拍手も沸き起こっていた。
「永原先生、どういうこと？」
「私も江戸城に住んでいたからね。常駐と言っても街に繰り出すことはよくあったから、時折町娘として隅田川の花火を見たことがあるのよ。その時は色なんて無かったし、火事の危険性ばかり高くて……よく禁止されていたのよ」
「火事……ですか……」
たしかに当時は木造建築だっただろうし、火災になりそうなのは分

かる。
「ええ。私が住んでいた当時の江戸はもう本当によく火事が起きたものよ。中でも江戸城に住み始めて４年後に起きた大火事の凄まじさは忘れようもないものだったわ。江戸城の天守が燃え落ちて……再建もできなかったんですもの」
　永原先生がまた昔話をする。
「永原先生、そんな火事でよく生きていましたね」
「ええ、４代様が私を一番に逃がせと仰せでしたので上様とともに無事に非難することが出来ました」
「江戸城まで燃えるとは……凄まじい火災だったのねえ……」
「……ええ、眼下の江戸の街を見れば、逃げ遅れた人々が次々と……本当に、４代様の江戸城定住の仰せがなければ……あるいは噂の広まりと拝謁が遅れていれば、私もあの火事で死んでいたかもしれません」
「永原先生が元々住んでいた場所は？」
「端の方でしたけどそれでも焼け落ちてました。鎮火しかかったと思ったら別のところから出火するなんてこともありました。ともかく私の４９９年の人生の中で、戦乱の時代を除いて命の危険を感じた唯一の事件ですよ」
　花火を見ながら、当時の大火事の凄まじさを証言する永原先生。
「去年の糸魚川で起きた大火とは？」
「あんなもの、子供の火遊びよ。人が死ななかっただけでも大成果よ」
　永原先生の冷徹な一言。花火もまた、私達の会話を無視して進む。
　これは青い花火でささやかに文字が書かれている。

「そういえば７０年前の戦争の時は？」
　永原先生に質問する。
「あの時は女学校の先生として地方に疎開していたわね、いざとなれば一人で山中に逃げる手立てもあったので問題ありませんでした」
「じゃあ東京大空襲とかは？」
「噂でしか聞いたことないわよ。関東大震災の時は山口に赴任していたし」

「意外と運がいいの？」
「いえ、明治以降、今のこの辺に定住するようになったのは昭和３０年頃からですから。それまでは教師生活するにしても、色々な場所を渡り歩いていましたから。むしろ災害に遭遇するのは運が悪い方でした」
　先生という職業が、永原先生を長生きさせたのかもしれない。
「そう……」
「さ、私のこともいいですけど、花火見ましょう」
「そうね……」
　まあ、花火見ながら話してたんだけど。

「えー、次でラストとなります」
　マイクを持った花火師さんがそう伝える。
　前方を見ると一際大きい花火があった。これよりも大きいというから、さすがに最後はそれなりのものを用意している。
「いきまーす！」
　今までそんな掛け声してなかったが、真打ちは流石に気合を入れるというか。
「それっ！」
　花火師さんは、意味もなく掛け声を上げながら普通に火をつけ、颯爽とした足取りで普通に退避する。
「ドンッ」っとこれまでよりも一際大きな音がしたと思えば、今まで一番大きな円を星空輝く夜空に描き儚く散っていく。
　この一瞬のために長い時間かけて作るのが花火職人だ。
　短い時間のために長い時間をかける。本当にすごいことだ。
　私なら、こんなすぐ終わることに長い時間なんてかけられない。
　まして彼らの人生は、私や永原先生よりもずっと短いのに……
　パチパチパチパチパチパチパチパチ
　ワーワーキャーキャー!!!
　この花火が終わると、どこからともなく歓声と拍手が湧き上がる。
　花火師さんたちが一礼し、再びマイクを持ち、ただシンプルに「あ

りがとうございました！」とだけ言って退場する。
短い言葉に全てを込める。まさに花火師さんの魂だ。
そう言えば、校長先生も話を短くまとめていた。
意外な所で、共通点を見つけることが出来たように思う。

「はーい！　みんな集合よ！」
花火師さんの終了の挨拶の後は、後片付けは花火師さんがしてくれるため、私たちは部屋に戻る。
この後はしばしの自由時間ののち、お風呂だ。今日はまた最上階の風呂である。
「優子ちゃん、永原先生と何話してたの？」
桂子ちゃんが声をかけてくる。
「うん、江戸時代の花火のことと、火事のこと」
「火事って……あの火が燃える方でしょ？」
「う、うん……」
「永原先生は何だって？」
「江戸城に住んですぐの時に大きな火事があって、江戸城も燃えたそうよ」
「へえーそんなこともあったんだー」
やはり桂子ちゃんも驚いている。私も、江戸城まで燃えたという大火事は知らなかった。
「それで、よく花火も禁止されていたんだってさ」
「ふーん……」
「江戸時代に永原先生が見てた花火は色とかもなかったって」
「そうなんだ……ねえ優子ちゃん、話は変わるけど」
「うん」
「今日の花火はどうだった？」
「うん、小規模だったけどきれいだったわね。豪快なだけが花火じゃないって言うの？」
「よく言うわね優子ちゃん」
「あはは……」

エレベーターに乗り、部屋で虎姫ちゃんとも合流し、昨日やったゲームを再開する。

「よし、勝った勝ったー！」

「あーやっぱり優子ちゃん、頭脳系のゲームは強いよねえ」

「優子、何気に頭いいですからねえ」

「それほどでもないよ……」

「でも、優子ちゃん、男の頃より成績が良くなってる気がする……体育は例外だけど」

「あはは、体育苦手ということも含めて当たりかも」

心なしか勉強する時間も増えて小テストの成績も良くなった気がする。荒れなくなったせいだろうか？

男だった頃はストレスばかりたまっていてゲームにぶつけたりすることも多かった。改めて、女の子にされたことを「救い」だと感じる。

「よし、もう一戦！」

もちろん頭脳系ゲームとはいえ、全戦全勝とはならない。もしそうなれば、あの日のゲーセンや球技大会の時のように、ハンデが課されるだろう。

でもそうならないのはちょっぴり悔しいかな。私はいつもハンデをもらう側だったし、たまにはハンデあげて勝てるようなゲームが欲しいなあと思ったりする。

うーん……でも欲を出しすぎちゃダメかな。

「優子、時には欲張りやわがままも必要だけど、今のような欲張りはダメよ」そう言い聞かせて恵美ちゃんから時間だという指摘を受けて、林間学校５回目のお風呂へ。

脱衣所に入り、他の女子たちとともに服を脱ぐ。誰もいない朝とかなら露出に爽快感を覚えることもあるけど、やっぱ他の目があると恥ずかしい。女の子同士と言ってもやっぱり恵美ちゃんみたいに堂々と何ていうのは出来ない。

「いや、出来てもやってはダメでしょ！　ああやって恥じらいを捨てたら女の子失格よ優子！」そう自分に言い聞かせながら服を脱ぐ。
身体を洗い、頭を洗う。
バーベキューの後なので、顔も洗おうと思ったが、残念ながら風呂から上がってからになりそうだ。

「ふうーーー！」
「虎姫から聞いたぜ。優子って家庭的なんだって？」
湯船で近くになった恵美ちゃんが話しかけてきた。
「あ、恵美ちゃん……うん、まだまだ道は遠いけど、母さんに料理を土日に教えてもらってて……」
「へえーすげえじゃん。あたいなんてそんなのからっきしだぜ」
「母さんが、いい料理作れないといいお嫁さんになれないって」
「ふへーそうなのかー」
恵美ちゃんが不思議そうな顔をする。もう十分だろって顔だ。
「母さんね、『優子は美人だからってそれにあぐらをかいちゃダメ。可愛いだけじゃなく家事もできる女にならないと旦那さんは喜んでくれない』ってさ」
「優子のおふくろはもう結婚のこと考えてんのかよ！」
「あはは、そうみたい。あたしなんてまだ結婚相手の見当すらつかないのに……」
「そうか？　案外身近にいるかもよ？」
恵美ちゃんから意外な言葉が出る。
「え？　誰？」
「それは優子が見つけなきゃ意味がねえだろ」
「そう言われても……」
「優子さん優子さん、もう少し、自分に正直になってみるといいですよ。自分はどんな男性が好きなのか。まずそれを考えることからです。私も、彼氏をそうやってゲットしたんですよ」
「うーん……」
龍香ちゃんのアドバイスで好きな男性を想像する。

うーん、ダメだ、うっすらとしか想像できない……いや、うっすらなのかすらわからない……
私の方へ素敵な男性が迫ってきて……
か、顔がイメージできなくて、全く意味が無い……
「優子さん、あまり焦らなくていいのですよ」
「そうだぜ、あたいだってそんなの考えたことも殆どねえしよ」
「そ、そうなんだ……」
「何度も言うけど、焦らないことよ。優子ちゃんには時間がたっぷりあるんだし。それを考えると、本当に危ないのは恵美ちゃんよ」
桂子ちゃんが乱入する。
「なっ……あたいはだって……」
「だって？」
「テ、テニスが恋人みたいなもんだしっ！」
ありきたりな言い訳を言う恵美ちゃんに微笑みつつ、私は露天風呂へと移動する。
そこで山の夜景と星空をしばし楽しみつつ、みんなより少し早めに風呂に出た。
「もう少し入りなよ？」と桂子ちゃんに呼び止められたが「顔を洗いたい」と言って脱衣所に戻る。
顔を洗うと言っても、石鹸ではなく洗顔料を使うだけ。使い方も母さんから講習を受けずともうまくいった。
既に使ったことのある洗顔料だったので、安心して使用できそうだ。
バーベキューの後でちょっと顔を洗いたい気分なのだが、まずパジャマを着ることから始める。
そして他の子がお風呂から出始める頃には、あたしは既にパジャマを着ていて、洗顔料で顔を洗っている所だった。
「優子ちゃん、ねえ優子ちゃん」
「ごめん、ちょっと待ってくれる？」
話しかけてきた桂子ちゃんを静止する。

今は顔洗いに集中する。
手で水をすくい、勢い良く顔につける。とにかく洗い残しがあったら悲惨の一言だ。せっかく洗顔料を使って洗ったのに、何もしない方がいいってことになってしまう。
顔を拭く時も要注意だ、弱すぎても強すぎてもいけない。慎重に拭いていく。顔はやはり女の子の象徴だ。
いくら胸が大きくて身体もムダ毛一つないナイスバディと言っても、顔が不細工じゃ魅力は激減だ。
幸いＴＳ病なのでシミやシワの恐怖に怯える必要はないのが幸いだ。
「優子ちゃんって、顔洗うんだね」
「うん、今日はバーベキューだったし……桂子ちゃんは？」
「あー部屋でゆすぐだけにしようかなと思ってたんだけど……やっぱりここで洗顔料使うわ……先に帰ってていいわよ」
「うん。桂子ちゃんが帰ったら寝るからね」
「ああ、うん。今日も疲れちゃったしね」
桂子ちゃんと、数人の女子を除き、私達は風呂から出る。
「優子って本当女の子らしくなったよな……あんな洗顔なんて、生まれつきの女の子でもめったにしねえぞ」
「だって、女の子は顔大事でしょ？」
「あ、ああ……」
「テニスが恋人な恵美ちゃんは腕や足のほうが大事かもしれないけど」
「ううっ……あたいもちょっとは女子力磨くかなあ……」
「ほう、恵美が珍しい！」
「だってよお、女になって2ヶ月ちょっとの優子にどんどん差をつけられてる気がしてよお……」
「でも私は、そのままの恵美でいいと思うけどなあ……」
「ありがとよ虎姫。でもやっぱ少し、ほんの少し、テニスの練習の合間でも見つけて、一から勉強し直すぜ」
虎姫ちゃんと恵美ちゃんが話す。恵美ちゃんはエレベーター、私と

虎姫ちゃんは階段で。

私達は部屋に戻り、桂子ちゃんの帰室を待って、消灯し、眠りについた。

# 林間学校四日目　ホテルでの最後の時間

意識がゆっくり回復していく。
例によって5時前だろうと思いつつ、ゆっくり時間をかけて起きる。
「ふう……」
「あれ？　優子ちゃんも起きた？」
よく見ると虎姫ちゃんと桂子ちゃんがぼーっとしていた。
「う、うん……今何時？」
「4時11分よ」
「あはは、また早かったね」
「優子ちゃん、テレビでも見る？」
「うん、そうする」
お風呂は4時半まで掃除中なので顔洗いと歯磨きをした後、少しだけ時間を潰す。
見るのは朝のニュースだ。アナウンサーは「今日も暑い」と言っていたが、ここは山の中でいつもの夏よりは涼しい。
そしてニュースが流れる。
交通事故のニュース、更には殺人事件の裁判のニュースもやっていた。
どうも数年前の事件で死刑が確定したという話だ。
「やだねえ、こんな殺人……」
「うんうん」
連続殺人事件らしい。死刑も当然だよなあ……
「あ、優子、そろそろ行こうか！」
時刻は4時27分、そろそろ4時半だ。
私はタオルを持ち、今日の着替えも持つ。
「あれ、優子ちゃんそれ……」
「うん、お風呂出たら着替えようと思って」
「そう、じゃあ私も持ってくわね」
いつもは朝風呂のあとはパジャマのままだったけど今回は変更す

る。
桂子ちゃんと虎姫ちゃんも続き、今度はエレベーターで地下一階に降りる。
途中で別の階に止まる。すると永原先生が乗ってきた。
「おはよー」
「あ、永原先生」
「ふふっ、結局私達朝風呂皆勤ね」
「桂子ちゃんと虎姫ちゃんは2日目に参加してないわよ」
「あ、そうだったわね」

「地下一階です」という音声とともに、エレベーターが1階を飛び越えて地下一階に到着する。
「そう言えば、お風呂の男女入れ替えの見張りってやらなかったわね」
私が思い出す。
「ああ、あれは二日目に私と恵美ちゃんがやったのよ」
「え？　そうなの？」
「優子ちゃん、登山で大変だったから、私が先生に代役を申し出たのよ」
「ええ。数分の見張りだったんですけど。それでも登山の後の立ちっぱなしでしたから、石山さんにはきついかもしれないという話がありました」
「そ、そうだったんだ……」
「気に病む必要はないわよ石山さん。石山さんは女の子、それもか弱い女の子なんだから」
「う、うん……ありがとう、そう言ってもらえると気が楽だよ」
こういったところで意地にならず、助けられることへの抵抗感を緩めていくことも、今後重要かもしれない。
ともあれ、地下の温泉の暖簾をくぐる。
中にはもちろん誰もいない。私達は服を脱ぎタオルを持つ。昨日と同じ光景、桂子ちゃんと私がバスタオルで隠し、虎姫ちゃんと永原先生はそのままだ。

２人ずつ２交代で軽くかけ湯を流す。
せっかくの広さということで、思い思いの場所に散る。私は永原先生とともに、奥の方に入る。
「!?　あっつ……!」
あれ？　かなり熱い。
「気をつけてね。この温泉、結構気まぐれだから」
「う、うん……」
ともあれ少しずつ足を入れて行く。よし、大分慣れてきた。
「下半身入れたら一気に肩まで浸かるといいわよ」
「は、はい……」
永原先生の指示の下、一気に肩まで体を入れる。
うー熱い熱い……我慢我慢、これで体が温まるはず……
「ふふっ、無理のし過ぎもダメよ」
「は……はーい！」
とは言え徐々に身体も温まってきた。体の芯から温まる感覚だ。
「体が温まると、気持ちいいわよ。少し長めに入ってもいいわね」
「ええ……」
そうは言うけれども、さすがにちょっと熱い。４１度に調整した風呂に入る。
「あ、優子ちゃん、あっちどうだった？」
３９度に入っている桂子ちゃんが話しかけてくる。
「ああうん、一昨日入った時よりずっと熱かったよ」
「気まぐれな温泉なんでしょ？　だからこうして温度を調整するってこと？」
「うん、多分ね……でも熱いお湯気持ちいいよ。体温まるから」
「そう……じゃあちょっと行ってみるかな？」
桂子ちゃんが浴槽から出る。バスタオルでうまく隠していて本当にすごい。
あたしなんて、まだ結構見えちゃうことあるし（というよりも初日見られたし）
このあたりの隠す練習は、女の子の自分の身体を理解し、練習と経

験を積んでいくしかないだろう。
そういう意味では、制服のスカートだって今はちょっと自意識過剰と思われているかもしれない。
ミニスカートは可愛いんだけど、やっぱりパンツ見えちゃうの恥ずかしいし気を使わないといけないけど、それでも気を使いすぎて男性たちから自意識過剰女には見られたくない。

遠くでは、永原先生と桂子ちゃんが話している。
窯のところで虎姫ちゃんもいたので、私も近付く。
「あ、優子。ここもちょっと熱いよ」
「え？　そうなの？　どれどれ……お、でも正面ほどじゃないかなあ……」
「今の正面のところは４３度のところより熱いみたいだし」
「そうなんだ……」
そう言いながら私も入る。うん結構熱いお湯だ。
体積分お湯がこぼれるけど、結構勢いがいい。
「うわ、結構こぼれたね」
「優子は体積があるのよ。体重じゃなくてね」
「た……体積って……」
「むう……この無自覚女め……」
虎姫ちゃんが恨めしそうに私の胸を見る。
「あ、うん……ご、ごめんなさい」
「あ、ああいや……気分悪くしたら悪い。そうだよな、優子だって肩こりで悩んでるんだし……」
「ううん、こちらこそ、無自覚だったのは謝るわ。女の子として、やっぱりそういうのに鈍感なのはよくないし」
「そうかい、優子は優しい子ってだけじゃなくて、本当にいい子だよな」
「ありがとう虎姫ちゃん……」
「よし、私は別のところ回るよ。そんじゃっ！」
そう言って虎姫ちゃんが出て、入れ替わりに桂子ちゃんがまた入っ

てくる。
「ふう……ここがちょうどいいかな？」
「そうなの？」
「ちょっとあそこは熱いかなあ……でもしっかり温まれたよ」
「それはよかった」
地下ということもあってみんなと話す内容は風呂そのもののことが多い。
私が出るとちょうど永原先生もいた。
「あ、石山さん、これからあのマッサージのところに行こうと思うんだけど、石山さんはどうする？」
「うーん、私も肩ほぐそうかなあ……」
「ふふっ、じゃあ決まりね。行きましょうか」
４人の女の子が入る朝風呂だけど、実際はそれぞれバラバラの行動。
蛇口から勢いよく無駄に噴出している空の風呂。もったいないと思いつつ私と永原先生が入る。
肩こりの激しい部分に当てると、何ともたまらない至福の痛気持ちよさが襲い掛かる。
「んー！　肩が気持ちいいねー！」
「ええ、私もデスクワークしてるので肩がこることこること……」
永原先生も肩こりの悩みがあるみたいだ。
「でもあたしなんてこの年で肩こりよ……」
「あらあら、先生も外見年齢なら石山さんに負けてないわよ」
「むむむ、確かに……」
「でしょでしょ」
むしろ外見だけなら永原先生は２年２組の中でも１，２を争うほど若い。背も低いし。
胸も……私ほどじゃないけど結構膨らんでる。顔もかなり童顔だし、同じＴＳ病だからかそう言う特徴が出るんだろうか。
「永原先生は、確かに女性の中でもかなり小さいですよね……」
「ふふっ、これでも明治頃までは女性の中では大きな方だったのよ」

「ああ、そうか。昔の人は体格も小柄だもんね」
「そゆこと」
永原先生は戦国時代の人だもんなあ……当時は仏教も強くて肉食もほとんどなかったみたいだし、他の栄養状態もあるだろうしそう考えると当時としては大きな方なのか……
でも肩はこるんだよな。
「ふう……」
さすがに4人せっかく集まったということで、マッサージが一段落したら、全員で熱い風呂に入る。

「うううう……熱いねえ」
「でも芯から温まるよ」
「うんうん」
「さ、一斉に出ましょうか？」

そんな会話をしつつ、私たちは風呂から出る。脱衣所との温度差がまた気持ちいい。
さて、私は新しい私服に着替える。
身体をタオルやドライヤー、さらに扇風機も使ってよく拭く。
脱衣所から下着をまず取り出す。パンツを穿く。今日は水色の水玉模様だ。
続いて同じデザインのブラジャーもつける。水玉が可愛らしくて、この下着セットはお気に入りだったりする。

「優子ちゃんって、結構子供っぽいよねー」
「え？　どうしたの桂子ちゃん？」
私は、膝丈の茶色いスカートを手に取って穿きながら桂子ちゃんと話す。
「いやさ、その水玉とか。小学生っぽい気がするのよ」
「でも、私は好きだけどなあ。子供っぽいと言ってもなんだかんだで……女の子は幼くてもモテるわよ」

白シャツとその上に青色のブラウスを着る。可愛らしくフリルがあしらわれている。
「そうなんだ。あまりに子供っぽいとさすがに男性受けも悪いかなって思ってたんだけど」
「うーん……まあ好き好きかな。でも、子供っぽいなんて思ってても、結構男性にとっては普通に可愛いってこともあるからね。逆に女目線での『大人っぽい』『きれい』みたいな方が危険度高いと思うわよ」
「ふむふむ。やっぱり優子ちゃんからは学ぶことは多いわね」
「桂子ちゃんの役に立ってくれればうれしいよ」
よく見ると他の2人も着替え終わっている。そして、4人で風呂を出る。
風呂への扉を出ると、一人の男性がいることに気が付いた。
「あ、石山さん……でしたっけ？」
「えっとあなたは……」
「ほ、ほら！　添乗員の野洲です！　ゆ……石山さんも朝風呂です？」
なんか明らかに挙動が不審だが、私たちが四人組なのを見て少し冷静さを取り戻した気もする。
「ええ。そうですけど、野洲さんも？」
「はい、今日は帰り道ですので早めに風呂に入ろうと思ってこれから……」
「そう……じゃあ私、部屋に戻るわね」
「あ、ああ……」
エレベーターを使い、永原先生と添乗員さんがそれぞれの部屋に戻る。私たちは7階に行き、部屋に戻る。
CSで以前やっていた飛行機事故の番組をやっていたので、またそれを見る。
今度は副操縦士の些細な操縦ミスで墜落だそうだ。大西洋のど真ん中で墜落したわけだが、間違えた操縦を繰り返した果ての事故で、しかも操縦を変わろうともしなかったんだからひどい話だ。
問題の副操縦士による「こんなの？でしょ……何故なんですか？」という最期の言葉も印象に残った。虎姫ちゃんは「いや、お前のせい

だろ」と突っ込んでたけど。
飛行機の事故率なんて低いはずなのにこういう番組を見てしまうと高く感じてしまう。
桂子ちゃんもそういうことを言っていた。ここでそのまま流される人が詐欺の網や悪い男に引っ掛かる気がするので特に注意しないといけないと思った。
更にもう一本、同じ番組で別の内容が放送されている。こちらも見終わればちょうど7時で朝食の時間が始まるころだ。

「いやーしかしあの番組、謎の中毒性があるよねー」
「うん、私も、乗り物って言うとどっちかというと男子の趣味って感じだったけど」
食堂に向かう途中、桂子ちゃんと虎姫ちゃんが話す。
「こう、調査していくってのが面白いよね。最後のやつなんかは乗客の立場からも勉強になったし」
「うんうん」
朝食は今日は少し早めに締め切られ、残った時間でお土産を買うことができる。もちろん、地域経済の活性化という「錦の御旗」で、お土産の金額に制限はない。
私の朝食はご飯とお味噌汁、そして卵焼きに鮭というシンプルなもので、飲み物もお茶と純和風に仕立て上げた。
虎姫ちゃんもサラダが加わってるだけで私とほぼ同じ。桂子ちゃんは卵焼きが目玉焼きに、味噌汁がサラダになっている。
「「いただきます」」
3人で食べながら、他愛もない話をする。永原先生のこと、これまでの林間学校の振り返り。
帰り道でのサービスエリアを楽しもうということなどだ。人によってはサービスエリアでも追加でお土産を買うこともある。

ともあれ、皆で食べ終わったら、3人で土産店へ。
「ねえねえ、優子ちゃん、これなんてどう？」

桂子ちゃんがご当地クッキーを持ってくる。
「クッキーかあ……たしかにお菓子は無難よねえ……」
「優子、こっちはどうかな？　ご当地のゆるキャラの人形だよ」
虎姫ちゃんがゆるキャラ人形を指差す。
「へーでも、可愛いのかなこれ？」
「うーん……」
「修行がたりないわね優子ちゃんも」
あたしは、女の子の感じる「可愛い」をまだ理解しきれていない。
もちろん、男性からの視点も「知識」として保有しておくのはいい。それは必ず役に立つ。だけど同じ女の子の感覚からずれていると、こういうことも起こり得る。
男性側も、女の子の感覚を勉強しているわけだからあたしも勉強したい、きっと楽しい世界がそこにあるはずだから。

「あ、こっちはどう？」
桂子ちゃんが別の人形を指差す。
「え？　どれどれ？」
よく見ると、全国的にも有名な少女向けの着せ替え人形だ。この間まで男だったあたしでも知ってるものだ。
メインターゲットは１０代後半ではなく一桁から１０代前半までの小中学生向けだが、成人女性にも遊べるようになっていて、今人気だそうだ。
確かに、この人形の女の子は可愛いと感じる。ゆるキャラと違って人間がベースだからだろうか？
「うん、この人形で着せ替えかあ……確かに可愛いかも」
「優子ちゃんこれにする？」
「うん、ちょっとやってみようと思う」
私は財布からお金を取り出す。痴漢事件の慰謝料裁判も進み始めている。
こちらは大分相場が決まっているそうなので、しばらくはお金に困らないだろう。

まあ、もういくらもらっても痴漢されるのは二度と嫌だけど。気持ち悪くて屈辱的だし。

虎姫ちゃんと桂子ちゃんも土産が決まり、一旦自室に戻る。

あたしは空き時間を利用して、早速お土産を開けてお人形遊びをしようとした。

だけど桂子ちゃんに「お土産は家に帰ってからでしょ」と言われたので一旦断念する。家までのお楽しみにしよう。

お土産をメインバッグの中に入れる。

そして４日間分の散らかした荷物を整理する。と言っても、することはそんなに多くない。３人の生理用品のポーチとかもあった。

今日明日危ないと思ったけど、今日はまだ大丈夫みたいだ。

荷物の整理が終わり、少しくつろいでいると、永原先生から「そろそろ時間ですよ」との声がかかる。もちろんあたしの実行委員としての仕事だ。

最後の朝食券整理で、時間的な都合もあって荷物を持ちながら先に出る。４日間お世話になったこの部屋と、みんなより少し早くお別れになる。

「はーい、最後になりますが、今日もいつものように食事券を確認してください。もし食べ忘れている人が居たら、出発時間が足りないので、軽食屋のテイクアウトを使うように急いで連絡してください」

「それじゃあ始めるわよー！」

永原先生の号令のもと、篠原くんと一緒に食事券の確認作業をする。

うちのクラスでは特段誰か忘れたというトラブルはなかった。

また集合時間が近くなっていって、徐々にみんなが集まる。中には最後の時間にもう一度お風呂に入る人もいる。

そしてクラス学年で一斉に駐車場に来る。

初日と同じく、またホテルの支配人さんが来る。そして初日と同じようにマイクを持ち、挨拶をする。

「えー、小谷学園の皆様。名残惜しいですが、本日で当ホテルとはお別れとなります。帰り道、くれぐれも事故等の無いように、お願い致します。以上です」

支配人さんの短いスピーチ、花火師さんと同じ。短い時間に凝縮する重要性。林間学校では何だかんだで今後の長い長い人生を生きる上で色々なことを学んだが、もしかしたらこれが一番大事なことかもしれない。

クラスのみんながバスに乗る。添乗員さんと運転士さんが荷物を入れている間に、バスに入り、篠原くん、永原先生と一緒に人数とシートベルト着用を確認する。

これは初日と同じ作業だ。

全員のシートベルト着用まで確認したら、私達3人が最後に席を陣取る。

添乗員さんと運転士さんが全ての荷物を入れ終わり、1組の1号車から出発する。

「さようならー!」

ホテルの人達が見送ってくれる。

帽振れする人、お辞儀する人様々だ。

ともあれ、バスはこれから3回の休憩を挟み、学校へ帰ってくることになる。行きよりもかなりゆったりとした行程で、それでも日が沈む学校に帰る。

道中、無事にやり過ごせればいいけど……

# 林間学校四日目　優子の恋

バスは出発する。行きのときより心なしか雑談の頻度も小さい。
何より初日に坂を登った下りを運転するんだ。それは揺れるし酔いやすく、みんな警戒している。
シートベルトをしているとはいえ、なるべく遠くの方を見るようにする。
これなら視点がずれにくいから酔いにくいのだ。
普段は同じＴＳ病ということで、行きのバスでは話し相手になっていた永原先生も押し黙っている。
途中、いくつも曲がりくねった道路を進み、バスは慎重に走る。
どれくらい時間が経っただろうか？　実時間よりも長く感じていると分かるほど時間が経った頃、道は徐々に急なカーブも少なくなり、勾配も緩くなる。
時計を見ると出発して２０分後だ。その頃になると完全に山の麓という感じになり、車窓には田んぼが見え上り坂も見えた。山の麓まで来た証拠だ。
そして、農地は徐々に住宅地、商業地となり、街の中心へと進んでいく。
バスの中が賑やかになる。私も永原先生と他愛もない話をして盛り上がる。バスの添乗員さんが麓の町について解説している。
添乗員さんの方を向くと、頭が私の方に固定されている。うーん、気のせいかなあ……
添乗員さんの説明は、主に観光案内。これが終わっても再訪して欲しいってことだろうか？　実際、ご丁寧にこれを運行しているバス会社のツアーの宣伝までしてるし。
ともあれ、添乗員さんの説明が終わると、すぐにバスは上り坂を感じた。緑色のおなじみの看板。ここからが高速道路だ。
一般道路も長いので、高速道路に入って最初のサービスエリアかパーキングエリアで休息となるはずだ。
ここは主にトイレ休憩が主で２０分程度。２時間後に別のサービ

スエリアで昼食だ。
まあ、２０分の間を利用してここで食事したり、コンビニ等で買ってきてバスで食べても、時間さえ守れば怒られないけど。
ともあれ、高速道路に入り、今度は音楽を流し始めた。それを聞きつつバスは道路をひた走り、最初のパーキングエリアに到着した。時間はちょうど朝が終わる頃合いだ。
添乗員さんの「２０分後には戻ってください」という声のもと、ほぼ全員がバスの外に出た。
私も、念のためトイレを済まし、また渋滞情報を見ようと思った。
まずはトイレに入り、音姫ボタンがあるのを確認したら、それを押してトイレを済ませる。
よし、初日に学習したことが出来た！
……ふうスッキリ。スカートをもとに戻し、トイレを流す。
おっと、スカートがちょっとだけ乱れている。気をつけないと。
手を洗っていると、知っている人ともすれ違った。中には3日目の自由時間の時に初めて話した人の顔も見え、ちょっとだけ挨拶もした。

……さて、残りの時間はメインホールに行こうかな。
メインホールに入りすぐの所にある渋滞情報を見る。どうやら行きのように事故もなく、順調に流れているみたいだ。
……さて、特に飲み物とかもまだいらないし、バスへと戻るかな。
「ねえねえ優子ちゃん！」
「？」
バスへと戻ろうとして身体を向けた矢先、突然男性の声がして振り返る。
「ちょっと付き合ってくれない？」
「な、何……？　バスに戻るんですけど……」
よく見ると添乗員の野洲さんだった。
「ほら優子ちゃん、お前可愛いじゃん……ちょっとさ、俺、お前に一目惚れしてさ……」

何これ、ナンパ？　まあ、こんな顔と体だしいつか来るだろうなあとは思ってたけど。
「い、いやちょっとその……」
「まあ固いこと言わず付き合ってくれよ」
「そんないきなり言われてもダメですよ！」
「いいじゃねえかよ、ちょっとぐれえ！」
野洲が腕を引っ張ろうとする。
「ちょっと……やめて！」
弱い力で腕を振り払う。
「っ！　おい、人がせっかく誘ってやってんのに……！」
「お断りします！」
「このお……調子に乗るなよ……！」
まずい、逆ギレされた。本当に理不尽だが、声をかければついてくるとでも思ってるのだから質が悪い。
「あ、あの、バスに戻りたいんだけど……今は離してくれる？」
やんわり言う。
「大丈夫間に合うから、ほら！」
再び腕を捕まえられ、更に強く引っ張られる。
「やめて！」
何とか腕を掴まれそうになるのを振り切り、逃げるが、すぐに捕まってしまう。
「何で逃げるんだよ……そんなに俺が嫌いか!?」
「や、やめてください！」
「ほら、こっちに来い！」
「いや！」
周囲はみんな見て見ぬふりだ。
「んだと……！」
野洲が引っ張ろうとする。その力でよろけてしまう。
怖い、怖い。
「いやあああああああ

思いっきり叫ぶ。叫ぶことへの躊躇心は、急速に襲いかかる恐怖で簡単に吹き飛んでしまった。女の子の叫び声に、周囲は一斉に振り向くが、誰も助けに来ようとはしない。
「あ、このっ！」
「んん!?!? むんぐぐぐぐぐぐぐ……」
口をふさがれる。そしてそのまま引きずられていく。ああ、乱暴される……！
「んーーー!! んーーー!!」
やだ……嫌だ！ 助けて……！
「おい!!!!!」
「!!!!!」
誰かの声がする。必死に声がした先を探していると、篠原くんが目の前に立っていた。
「何やってんだ、離せよ!!! てめえ!!! 優子ちゃんを離せよ!!!」
篠原くんが怒っている。それはあたしのため、あたしを守るための怒り。
「ほう、お前、あの時の……また俺の邪魔をする気か!?」
「聞こえねえのか!? 優子ちゃんを離せ!!!」
篠原くんが更に怒った顔で野洲に凄む。
「はっそんなに言うなら離してやる……おらよ！」
「いやあっ！」
野洲がいきなり手を離したかと思ったら次の瞬間には思いっきり突き飛ばされ、私は床に倒れ込む。
まず痛みと涙をこらえながら、突き飛ばされた反動でめくれたスカートを直す。次に立とうとするが立てない。恐怖と痛みで体が震えて動けない。
「ううっ……えうっ……ひぐっ……」
男の力で思いっきり突き飛ばされ、痛みのあまりまた泣いてしまう。
強打した背中が脳に痛覚を送り込んでくる。

「何をするんだ!?　てめえ、それが女の子への扱いか!?」
「お前に何が分かる。この女、せっかくの俺の誘いを頭ごなしに拒否しやがって！」
「ふぃ……ぐずっ……えうっ……いやぁ……」
「おい、優子ちゃんに謝れよ!!!　泣いてるじゃねえか!!!」
「このお……まずてめえから始末してやる！」
　ゴンッ！
「あだあ！」
　篠原くんが頬を殴られよろける。
「し、篠原くん!!!　いやあ!!!」
　あたしは泣きながらもその言葉を叫ぶ。
「っ……このおっ！」
　篠原くんが反撃のため、素早く重心を下にする。
「なっ！」
　野洲が抵抗しようとするが、それよりも早く篠原くんが思いっきり野洲の腹に抱きつき、そのままの勢いで仰向けに倒した上で両腕をつかむ。
　見事に一瞬で取り押さえた。鍛えているというのは本当だ。
「あっ！　くそ!!!　離せ!!!　おい!!!」
　野洲がもがくが無駄に終わる。
「おい!!!　誰か、誰か警察を呼べ!!!　暴行の現行犯だ!!!」
　しかし、みんな躊躇している。あたしは痛みも引かず、まだ泣いている。
「こ、これは何の騒ぎなの!?　篠原くん、石山さん！」
「な、永原先生！　あ、あの、私……ひぐっ……私……」
「先生！　警察だ警察！　大至急１１０番だ！」
「……分かりました！」
　永原先生が手持ちの携帯電話を取り出し１１０番通報する。
「少し大人しくしなさい」
　電話の先でお巡りさんからサービスエリアの場所を告げた後、永原先生はなおも暴れる野洲の膝の上に座り込んだ。

「うっ……えぐっ……あうっ……」
野洲に突き飛ばされた痛みも一向に引かず、またその余韻もあってか私は２０分くらい後に警察が来るまでずっと泣き続けた。
「何の騒ぎですか？」
「暴行の現行犯です。頬を殴られました。それから、この子に乱暴しました」
お巡りさんが取り押さえられてなお抵抗している野洲の両腕を掴み、篠原くんと永原先生が離れた。さすがに警察に捕まっては野洲も大人しくなった。
「あ、君……大丈夫か？」
まだ床に座り込んだまま泣いている私に別の警察官の人が声をかける。
「だ、大丈夫じゃない……です」
「立てるか？」
「う、うん……」
お巡りさんの手を借りてなんとか立ち上がる。ようやく背中と腕の痛みも引いてきたけど、それでもヒリヒリするように痛い。
「な、なあ……ゆ……石山……大丈夫か？」
私を守ってくれた篠原くんが寄ってくる。
「し、篠原くん……うっ、ううっ……」
また溢れる涙。最初よりもずっと大量の涙。
泣きたい、今すぐ泣きたい。
「うわああああああああああああああんんん

篠原くんが優しく頭をなで、背中を優しく押してくれる。
「うううっ……ふえええええんんんんんんん!!!」
「怖かったか？　もう大丈夫だよ……」
「あああああああんんんんんん!!!」
ああ、もうずっとこのままでいたい。もう周りのことなんかどうでもいい。もうこのまま、ずっとずっと泣いていたい。私を守ってくれた、かっこいい男の子の胸元で。
久々に、ひどく声を上げて泣く。今までも、あたしはよく泣く女の子だった。
でも、ここまで泣いたことは、殆どなかった。

一回目は、篠原くんにいじめられて、殴られる恐怖で泣いた。
二回目は、篠原くんに守られて、抑えていた感情を抑えきれずに泣いた。

この林間学校、篠原くん、ずっとかっこよかった。
登山の時も、篠原くんの力で、私は頂上まで登れた。
花火師さんの手伝いで、物を運ぶときも、私が持てないと知ると私の分まで一気に持ってくれた。
今だって、篠原くんが助けてくれなかったら、私は今頃ひどいことをされていた。
周囲も声をかけ辛いのか、ざわつきの一つしない。ただひたすら見守っている。いや、もしかしたら私の泣き声があまりに大きくて、聞こえないだけかもしれない。
「えう……ひぐっ……うぅっ……」
大泣きする体力もなくなったのか、私の大泣きは、あの時と同じように、やがてすすり泣きに変わった。
「……」
篠原くんが黙ってあたしの頭を撫でてくれる。その時、あたしは心の中で、何かを支えていたものがなくなり、一気に崩れ落ちていく感覚を受けた。

どれくらい時間が経っただろう、ずっと泣いていたいと思っていても、涙はいつか枯れる。急にバスの出発時間のことを思い出した。
「ありがとう篠原くん。とりあえずもう大丈夫……」
ようやく泣き止み、篠原くんから離れる。とても名残惜しく感じる。もっと泣いていたかったのにって。
篠原くんは顔が真っ赤になっていた。うん、多分私も真っ赤かな……うん、まあいいや。
「あの、永原先生……バスは……」
そばにいた永原先生にバスのことを聞く。
「あーそれなんだけど、先に出発してもらったわ」
「え!?　じゃあ俺達、置いてきぼりかよ!」
篠原くんが動揺している。あたしもだ。
「ごめんなさい、バスの添乗員さんが暴力を振るったってことで、色々と問題が起きたのよ。あたしたちのことを待ってたら、あまりに時間がかかり過ぎちゃうわ」
「じゃあここから別行動?」
「そうなるわね。ともあれ、パトカーに乗って、この先にある警察署で事情を聞くことになってるわ。野洲容疑者は先に署についてるわよ」
「あ、うん……」
「荷物はバス会社の方で家に送っておくそうよ。財布と貴重品は持ってるわよね?　それならまずはパトカーに乗りましょうか」
あたしと篠原くんは財布と携帯電話を持っていることを確認する。生理用品がないのがちょっと不安だけど、まあ仕方ない。
「失礼ですが、お名前の方を」
「永原マキノです。こちらが石山優子さんと篠原浩介君です」
「……分かりました。こちらへどうぞ」
案内されたのはオーソゾックスなデザインのパトカーだ。警察官が二人前に乗り、私達は後部座席に3人とも乗り込んだ。
「シートベルト締めてください」
「はい」

助手席のお巡りさんがあたしたちを監視する。やはりこのあたりは警察なのできちんとしている。
締めたのを確認し、出発。
駐車場をちらりと見ると、やはりバスはなくなっていた。
「バスの方は、木ノ本さんと田村さんに任せたわ。パンフレットがあるからそれで何とかやってもらうわね」
「そう、よかった」
「それよりも、今は石山さんのほうが大事よ。怪我はない？」
「うーん、痛みは引いたけど、背中を大分打ちました」
「病院は行かなくて大丈夫そう？」
「うん、とりあえずは。行くとしても帰ってからで」
「了解。篠原くんの方は大丈夫？」
「ええ、問題ないです先生」
パトカーはしばらく高速道路を走る。
一つ先のインターチェンジで降りる。
一般道を逆方向に暫く進む。誰も一言も喋らない。
「随分と長いですね。通報してからはすぐに来たのに……」
「ああ、近くの交番から来ましたので、でも話を詳しく聞くのは警察署になります」
「分かりました」
そんなこんなで警察署に着く。これから事情聴取だという。もちろん被害者なので犯人を追求するような感じには当然ならない
現行犯なのでほぼ事実関係は争われることはないだろうとも言っていた。
私たちは三人で取調室に入る。
「えっと、永原マキノ先生に篠原浩介くん、それから石山優子さんですね。で、暴行罪の現行犯が野洲康平容疑者。間違いないですか？」
「「はい」」
3人がほぼ同時に頷く。
コンコン
「どうぞー」

「あ、こちらなんですけど……」
お巡りさんが書類を渡す。
「はい、はい……ありがとうございます」
書類を渡したお巡りさんが出る。
「そちらの書類は？」
篠原くんが質問する。
「えっと、暫定的ですが野洲容疑者の供述書類です」
「供述には何とあるの？」
「えっと……野洲容疑者によると、石山さんに一目惚れした。彼女にしたいと思った。石山さんを発見して声をかけられたが無碍に断られてついカッとなった。無理矢理連れ出して脅して付き合わせようとしたが、篠原に止められた。まず篠原を倒してから自分のものにしようとして一発殴ったものの返り討ちにされた。と」
「間違いないな」
「あ、でも篠原くんは相手の懐に入り込んでそのまま倒して取り押さえてました」
「ほう、篠原くん、逮捕術の心得があるのかい？」
「あ……いや夢中だったもので。ゆう……い、石山を守らなきゃって思って……」
「かっこいいね君」
「ああ……いや……」
警察官の何気ない一言に篠原くんが顔を赤くしてそっぽを向く。あたしも顔が熱くなってるのがわかる。
「ともかく、分かりました……事実関係は概ね争わないと。目立った内外傷も無さそうですね」
「ええ」
「では暴行罪として扱います。異論はありますか？」
「あたしは特にないです」
「一番の被害者がそう言ってるんだ。俺もない」
「私もです」
３人がそれぞれ答える。

「じゃあ……また何かありましたら警察署の方で対応いたしますので、その時には一旦学校を介す形でいいですか？」
「それでいいです」
　私が答える。
「ところで証拠とかは？」
　篠原くんが質問する。
「一応目撃証言をこちらで聴取しています」
「え？　でも証言だけじゃ難しいんじゃ……」
「……とは言え今回の場合はなかなか難しいですからねえ。初犯だそうなので刑事裁判にはならずに不起訴になると思います」
「不起訴ですか？」
「裁判しないということです」
「そ、そんな……！」
　女の子になって犯罪に巻き込まれるのは2回目だが痴漢の時は常習犯ということもあって刑事事件だけではなく慰謝料まで請求したのに。
「まあそれでも、バス会社の方から何らかの補填が来ると思いますし、客に手を出した野洲容疑者は間違いなくクビになりますよ」
「なるほど、まあそれなら……」
　社会的制裁だけでもまあ大変なものだろうし、これから後ろ指差される人生になるならまあ許してあげようかな。
　その後は雑談が多く、「こうやって犯人を自白させる」とか「証拠を突きつけるタイミングが大事」といったことを言ってくる。
　お巡りさんも大変だなあと思った。これからは無闇に警察批判をすることは慎もうとも感じた。

「それじゃあ今日はここまでにします。どうもお疲れ様でした」
「「ありがとうございました」」
　ともあれ取り調べも終わり、お巡りさんに見送られ、警察署を出る。かなりあっさりと開放された感じだ。
「駅はここから右に2回曲がって、一番最初の大きな道の十字路を左

に曲がれば見えてきます。こちらが地図になりますのでどうぞお持ちください」
「ありがとうございます」

「ふう……災難だったわね石山さん」
「う、うん……それよりも永原先生、これからどうするんですか？」
「帰りの電車代もバス会社の方が払ってくれることになってるから、私達は新幹線で帰るわよ」
「……分かりました」
「でも、今から新幹線で直帰だと流石に早すぎるから……もし２人の都合がよかったらだけど……ちょっと付き合ってくれるかな？」
「え？　何処にですか？」
「私の……故郷よ」

# 林間学校四日目　原点への旅

お巡りさんに言われた通り、まずは警察署を出て右に2度曲がり、最初の十字路を左に曲がり、しばらく歩いていると駅についた。
駅は有人駅であり、券売機があった。駅のデザインを見る限り、私達の地元にもある大きな会社ではなく、何処かの地方鉄道だろうか？
「篠原くん、石山さん、ここからは私が切符を買いますので心配しないでください。まずはとりあえず上田って所まで買うわね」
永原先生が大人三人分を買い、切符を渡してくれる。
永原先生は駅の時刻表と時計を見比べて、次の電車の時間を推し量る。
「目的の電車は後数分で到着するから、ホームで待ちましょうか」
そう言うと永原先生がホームの方に行く。
しかし改札口がない。駅員さんが立っているだけだ。
「……あれ？　自動改札は？」
「そんなの人が多い駅とかにしかないわよ」
永原先生が駅員に切符を見せる。よく見ると切符には鉄道会社の名前が書いてある
「ありがとうございました」
「二人とも、ぼーっとしていないで、ホームに行くわよ」
「は、はーい！」
ともあれ、永原先生に続き、有人改札で切符を見せる。
駅員さんの「ありがとうございました」という声を聞きつつ、永原先生の背中に私と篠原くんも続く。正午前とあって少し人は少ないが、傍から見るとちょっと奇妙な3人かもしれない。
「上田っていうのが永原先生の故郷なんですか？」
「ええ。正確には上田駅から北東の方向にバスを使うのよ」
「どれくらい変わってる？」
「ええ、様変わりと行っていいわね。本能寺の後、大坂の陣の後江戸に住もうとする移動中に一回、その時はそこまで変わってはいなかったんですが、明治になって250年ぶりくらいに訪れた時はもう、当時

の光景ではなかったわね」
「そうなんですか……」
「私が住んでいた時は山に幾つか城や屋敷があったんですが……明治になった時には全てなくなってました」
まあ、無理も無いことだ。
やがて電車が入る。私達の大都会の電車と違い、編成はとても短い。
にも関わらず、車内は私達の路線の昼間よりも空いていて、４人ボックスがちょうど一つ空いていた。
私は進行方向窓側、永原先生が進行方向逆の窓側、篠原くんは進行方向逆の通路側に座った。
ふと、膝に篠原くんの視線を感じる。
気を紛らわせようと車窓に目をやり、あたしは足を閉じる。スカート丈を考えればよほど開かないと見えるはずはないのに。篠原くんのことを意識すると、顔が少し熱をこもる。
そういえば、さっきあいつに突き飛ばされた時、スカートが思いっきりめくれてしまったことを思い出す。
うううう……篠原くんに見られちゃったらと思うと、他の人に見られるよりずっとずっと恥ずかしいよ……
ああ、やっぱり、あたし篠原くんを好きになっちゃったんだとしみじみ感じる。でも、まだ……まだ心も体も準備できていない。
あたしはまだ恋する乙女にはなれていない。もうちょっとのところなのに、もどかしいわ……

「昔はこの形の電車、日本中どこでも見られたけど、今はめっきり少なくなったわね」
「そうなんです？」
「私も先生で色々な所回ってたから。この車両は本当に日本中走ってたわよ。あ、でも今も広島山口あたりなら主力だったわね」
「ふむふむ」
篠原くんが興味深そうに聞く。私はさっきのこともあって聞き流

す。
　別の疑問も湧き出ている。ちょっと聞いてみよう。
「永原先生の故郷って……あの真田家の？」
「ええ。真田に仕える足軽だった頃の一番最初に住んでいた故郷よ。私がまだ鳩原刀根之助だった時代から住んでいた場所よ」
「えーまもなく千曲――」
　かなり長い時間が経った後に次の駅に付くという車掌のアナウンスが流れる。
「上田は乗った駅から6つ先よ」
「結構長いね」
「うん、1駅1駅が長い感じ」
「地方の鉄道はこんなものよ」
　私達の大都会だと、各駅停車の場合、一駅3分以上だと長い印象がある。でもこの電車は違う。
　乗客もまばらで、比較的老人が多く、のんびりとした時間が流れている気がする。
　永原先生が故郷に寄っていくというのはどういうことだろうか？
　なぜそこに誘ったのかは分からない。もしかしたら、たまたま近かっただけかもしれない。
「真田家での生活っていうのは？」
「うーん幼少期のことはほんの少しだけ、他愛もない両親との思い出とかが残っているかな。足軽として奉仕を開始した直後に相次いで死んだのは覚えているわね」
「ふむふむ」
「伝令役だったから足軽身分でも主君にお目通りは叶うことはあったわ。でも私が覚えているのは概ね顔とか任務に対する労いの言葉くらいで……あまりエピソードは覚えていないわ。戦乱の時代を必死に生きていたのは覚えているけど」
　そういえばそんなことを言っていたな。

「ＴＳ病になった当日も、畑仕事をしていて倒れたことと、殺されたくない一心で村を逃げ出したことだけよ」
　永原先生本人が覚えていなくても、それがとても壮絶な人生だったことは分かる。
「次は上田、上田です。乗り換えのご案内です。新幹線下りあさ――」
「降りるわよ」
「はい」
「お、おう……」
　車掌のアナウンスが流れると、永原先生が、上田駅が近いため降りる準備をするように指示する。
　ドアが開いて列車を出る。そしてさっきと同じように有人改札を出る。
「ありがとうございましたー」
　駅員さんの声を聞きつつ、妙に茶色い暖簾をくぐる。後ろを振り向くと、六文銭とその上に奇妙な模様が書いた幕がある。
　やはりこの上田という街は真田を観光資源にしているようで、上田城というのもあるらしい。
「永原先生……これは？」
　あたしが質問する。
「六文銭と、それ以外に使用していた我が主君、真田家の家紋です。六文銭は我が主真田源太左衛門様のご考案です」
「へー、六文銭以外にもあったんだー」
　あたしも驚く。真田＝六文銭のイメージがとても強かったのだ。
「ええ、そうよ。江戸時代なんかは太平の世には物騒ということでこう言った家紋も使われたのよ」
「ふむふむ、そうだったのか」
「さ、この話はこれくらいにして、行きましょうか」
「「はい」」
　ここ上田駅は新幹線の駅とあってそれなりに人で賑わっているが、

こちらの改札も自動改札ではなく有人改札だった。新幹線の方はさすがに自動改札だと思うけど。

「それで、これからどうするの？」

駅構内を歩きつつ質問する。

「あ、ちょっと先生用事があるから……ここで待っててくれる？」

「はーい」

「あの……用事って？」

「ふふっ……内緒よ」

そう言うと永原先生は駅構内の部屋に入っていった。他のお客さんも何人かいるし、きっと次の切符を買う予定なんだろう。

思わぬ状況で、篠原くんと二人っきりになってしまった。あたしの心臓の鼓動が速くなる。

そうだ、さっきのスカートの中を見られちゃったかどうか、確認してみよう。

「ねえ篠原くん……」

「な、何……!?」

「……水玉模様って、篠原くん好きかな？」

直接言うのは恥ずかしいから、この手で行く。

「え？　それは？」

「どうなの？」

「え、えっと……い、石山にはとっても似合ってたぞ！」

篠原くんが顔を真っ赤にして答える。あたしはそれを見てもっと赤くなる。やっぱり見られてた……！

「も、もう！　篠原くん、ちょっとこっちに向いて？」

「え？」

「向・い・て！」

篠原くんが恐る恐るこちらを向く。あたしは、篠原くんの顔を見て恥ずかしさがこみ上げる。さっきスカートがめくれた時の記憶が、篠原くんに見られたという印象で埋め尽くされていく。

それをごまかす意味もあってあたしはあの日のように平手で思

いっきり頬を打つ。
　ペチッ！
「っ！」
　やっぱりあたしの力ではびくともしない。
　だけど、ビンタが飛んできたことに対する、篠原君の驚きの表情が見えた。
「もう！　えっち！」
　恥ずかしい気持ちを何とか発散するにはこれしかない。
「って、しょうがねえだろうよ……心配になって……」
「もう、見えちゃってもごまかすのが紳士でしょ！」
「おまっ、助けてもらってそれは――」
「これは乙女のはじらいよ！　もう、女の子にとってパンツ見られるのすっごく恥ずかしいんだから。ま、ましてその、す……んっ、見てたなんて言われたら――」
　つい勢いで好きな人と言いそうになる。あたしの心は日頃の行いもあってもう殆ど女の子だけど、まだ反射的な本能などに男が残ることがある。
「わ、分かったよ……ご、ごめん……」
　あたしはその後、また目をそらし、ふと何の気なしに駅構内を見る。多分顔は真っ赤だ。
　そう思っていると永原先生が帰ってきた。
「お待たせー！　あれ、二人共どうしたの？　顔が真っ赤だよ」
「べ、別に赤くなってなんか！」
「あ、あたしは……その……」
　二人してごまかす。
「……まあいいわ。さ、次の目的地に行くわよ」
「え？　どこへ？」
「ちょっとお昼には早いですけど……お昼にしましょうか。せっかくだし信州そばにしましょうか」
「ええ」
「俺も異議なし」

昼食のため、上田駅を出る。
駅構内を見ただけで分かるが、永原先生が仕えていた真田家は大河ドラマ以外にも、いくつか長編ドラマになってくるくらいメジャーな家なので、ここ観光地もそれをアピールしている。
駅前には真田家でも最も有名と思われ、「真田日本一の兵」と呼ばれるきっかけを作った「真田幸村像」が立っていた。
「……まだ立ってたのね。これ」
永原先生が吐き捨てるように言う。
「せ、先生……幸村像が何か？」
「何かも何もないわよ！　私の主君の筋の御方の諱を曲げて伝えるなんて！」
「ああ、そういえば去年、真田信繁って言ってたよな……」
「そうよ！　それが左衛門佐殿の本当の諱よ。真田幸村なんて人物はこの世に存在したことはないわよ」
さいぇもんのすけ？　さえもんのすけのことかな？
「あの話、あたしの記憶だと、確か大坂城に入って真田幸村と名乗り始めたとか――」
「大嘘よ!!!!　左衛門佐殿が幸村などと名乗られたことはただの一度もないわ!!!」
「わっ……！」
永原先生が驚くほど大声を上げる。こんなに大声を上げた永原先生は見たことがない。道行く人も何事かと振り返っている。
「せ、先生落ち着いて……」
篠原くんがなだめる。何とか別の話題にそらさないと……
「な、永原先生……その、真田十勇士ってのは？」
「石山さん！　そんなくだらない作り話、忘れなさい!!!」
しまった、ますます怒らせてしまった。
「せ、先生……そんなに怒らなくても……」
「あのね、私にとって真田家はねえ……それこそこの身この命全てを捧げる覚悟でいたのよ！」
「……」

「……豊臣方とは言え私の主君の孫君の嘘話を流すなんて畏れ多いことを……徳川の世ならばともかく……平成にまでなって……我慢などすれば鳩原刀根之助の名が泣くわよ!!!」
「でも永原先生はもう既に……」
「分かってるわよ!!! 私なんてもうとっくに刀根之助などではない、５００年近く……無力な女の子で……主君の役になど立てないってことくらい……!」
永原先生が少しだけ涙声になる。
「でも……でも……私も忠義だけは捨てたくないのよ。確かに私はもう女の子よ。でもかつて……遠い遠い昔に、男だったことを覚えておくためには、真田に奉公してた事実だけは……忘れたくないのよ」
「でも、もう武士の時代は――」
「分かってるわよ! それでも……それでも、誤った名を消すことこそ、左衛門佐殿の本当の姿を一人でも多くの人に知らしめることこそ、私が……私が真田家臣として課せられた最後の奉公なのよ!!!」
なんか珍しく永原先生が感情的に怒ってる。真田幸村にはあまり触れないほうが良さそうだ。
「……えっと、先生……永原先生、お怒りはごもっともですからそば屋に行きましょうか」
「え……ええ……分かったわ。ごめんなさい、熱くなりすぎて……でも、当時を生きてた私には、どうしても許せないのよ……」
ようやく冷静さを取り戻した永原先生と篠原くんと共に、そば屋に行く。
ガラガラ……
「いらっしゃいませー3名様で?」
「はい3名です」
「奥のカウンターが空いています」
昼前だと言うのに、結構混雑している。奥のカウンター席が3席ちょうど空いているのみだ。
私はいち早く席の真ん中を陣取る。篠原くんの、隣になりたい。多分、彼と触れあえば恋する乙女になるための困難を乗り越えられると

思ったから。
　篠原くんが一番壁際に、永原先生があたしの左側に陣取る。
「石山さん、篠原君、何にする？　あ、私のおごりだからいいわよ」
「うーん、天ざるそばにするわ」
「お、俺も！」
「ふふっ、じゃあ私もそうしますわ……すみませーん！」
「はい。ご注文お決まりですか？」
「天ざるそば３つで」
「かしこまりました。オーダー入りまーす！　天ざる３点です」
　無言の沈黙が流れる。
　なんとなく気まずい気がする。どうしよう？　ここで思い切って告っちゃうのもありかもしれない。
　いくら身体が、特に性的な部分でまだ男の感覚が抜けてないとは言っても、この心のドキドキを抑えることが出来ない以上、いつかは塗り替えないといけない部分。
　それはあたしが、あの日に決意したこと。私が一人の女の子、「石山優子」になるために絶対に避けられないこと。
　でも決心がつかない。どうしたらいいのかわからない。
　解けないパズル、私は不老の命とともに永遠の迷路に閉じ込められた気分になった。
「な、なあ……石山」
「ん？」
　沈黙を破ったのは篠原くんの方だった。
「そ……その……な、何でもない……」
　がっくし！
「あ、篠原くん」
　今度はあたしが声をかける。
「何？」
　そう言えば、まだお礼を言ってなかった。
「あのね、今更だけど……助けてくれてありがとう。思えばこの４日間、ずっと助けられてばっかりだったけど」

「あ、ああ……」
「篠原君、ずっと石山さんを守ってたわよね……女の子を守ってくれる男の子って、やっぱりかっこいいよねえ……」
「な!?」
　永原先生が煽る。篠原君がまた顔を赤くする。
「あ、あのさ……」
「うん？」
「あの……と、友だちになってくれないか!?」
「あらっ！」
　永原先生がちょっと驚く。
　でも、篠原君にしても、あたしにしても、まずそこから始めたほうがいいと思うのは同じ。
「うん。いいよ」
　もう両想いだってことは分かってるから、この関係が崩れたりはしないと思う。
　まだもう少し、本当の恋する乙女になれるまで、友達でいよう。もしうまく行けば、友達関係もすぐに終われると思うから。

「お待たせしました天ざるそばになります」
「「いただきます」」
　３つ同時に来る。どうも１０割そばらしい。
「お、美味しいわね」
「うんうん」
　さすが信州、そばは美味い。恐ろしいほど自然と食が進む。
　永原先生はもちろん篠原君も食に夢中で、私に視線を向けない。
　色気より食い気、花より団子ってことかな？　ちょっとだけ悔しい気がする。
　いつもなら篠原くんはもちろん、永原先生とも結構な時間差で食べるのが遅いんだけど、天ぷらもそばも美味しくて、久々にそこまで差がつかなかった。まあ、ビリはビリだけど。
「それじゃあ、行きましょうか。会計済ませるから先に出てくれる？」

「はーい」
篠原くんと歩き外に出る。
「あの、もうあたしたち友達だよね……」
「う、うん……」
「あの……!!!」
あたしは勇気を持って篠原くんの顔に近づく。もっと近くで見たいと思ったから。
でも、その次の瞬間、私は反射的に顔を引いてしまう。
「ど、どうした石山？」
「ご、ごめん何でもない……」
ああ、ダメだ。やっぱり身体が本能的に同性愛だと思って拒絶してる。
どうすればいいだろう？　もし、この気持ちに整理をつけるなら、決して今の不安定な状態はいけない。
でも……
「あのさ……お、俺も、まだ気持ちの整理がつかないんだ。あの時は夢中だったけど……俺……」
「いいのよ。あたしの正体を知ってるだけでもそうなるのが普通だし、それに……お互い思い出したくもないだろうけど……」
「あ、ああ。言わなくていい……」
「あのね、篠原くんはもう……あの時にいじめられた分なんてとっくに返済して余りあるくらいあたしを守ってくれたわ。だからもう、罪悪感じゃなくて、これからはあたしを守ってくれたこと、誇りにしてほしいの」
「う、うん……」

「あのーいい雰囲気な所悪いけどー」
永原先生が声をかけてきた。
「わっ！」
「……バス停に行くわよ。ちょっと急ぐわね」
そう言うと永原先生が小走りで向かう。あたしたちはとりあえず、

二人の今後の関係については先送りにして、今は永原先生の故郷をめぐることにした。

# 林間学校四日目　永原先生の罪

バス停にはバスが何台か停まっていた。永原先生の進む方向に従い、やがて一台のバスにたどり着く。
「……これに乗るわ。ブザーは私が押すから安心して」
永原先生がバスの一番後ろの長い席に座る。あたしと篠原くんもそこに並ぶ。
バスはあたし達を乗せてすぐに、ブザーと運転士さんの声とともに発車する。

「永原先生の故郷っていうのは？」
「このバスで行けば付くわよ。といっても、実は私も自分の家や当時の真田の城の正確な位置までは覚えていないのよ。記録頼りね」
「そうなの？」
「ええ、何分、５００年近くも前のことですから。でも、なんとなくぼんやりと風景は覚えているわね」
バスが幾つかのバス停を通過し、あるいは停車して乗客を乗せていく。
地域輸送に特化したそのバスにとって、私達は珍しい存在。でも、永原先生にとっては、５００年の人生の原点の場所。
やがてバス停の一つで永原先生がブザーを押し、３人分の運賃を払って降り立つ。
バス停の向かいには六文銭の旗がなびいている。近くの交差点に向かうと、何か石碑が見えてきた。
「永原先生、あの石碑は一体？」
「ふふっ、今に分かるわよ」
そう言うと更に歩く、横断歩道の向こうから、石碑の文字を見る。
「さ、真田氏発祥の郷……」
「ええ、この公園は私の主君、真田源太左衛門様を始めとする、真田氏を記念して作られた真田氏記念公園なのよ」
永原先生が公園の中に入る。するとそこには真田氏ゆかりの地の

観光案内がある。色々な記念館や史跡があるみたいだけど、それなりに距離があるみたいだ。
「……そこじゃないわ。もう少しついてきて」
永原先生がそう言うと、更に奥に進む。あたしと篠原くんが慌てて続く。
すると何やら石像が見えてきた。
「永原先生、この石像は一体……」
3つの石像にはそれぞれ名前が書いてある。左から「真田幸村公」「真田幸隆公」「真田昌幸公」とあってそれぞれ「何とかの将」と小さく書いてあり、その上には3人の男の顔が掘ってある。
「先生、この3人の男は一体……」
篠原くんも疑問に思っている。
「真ん中の御方が、私の主君だった真田源太左衛門様よ。私が仕えていた時の諱は別だけど……そうね……後には真田弾正忠とも名乗られたわ。その頃の私はもう女の子だったから、今でも源太左衛門様と私は呼んでいるわ」
「真田幸隆というのね……」
「え、ええ……でも、あまり似てないわね……」
「そ、そうですか……と、当事者が言うと違うなあ……」
大河ドラマも、先生曰く「似てない」そうだからそんなものなのだろうか？
「ところで先生、右の人物は一体？」
「真田安房守殿よ。真田源太左衛門の三男に当たられる方で、兄二人が長篠で戦死なされたので家督を継いだわ」
「あ！　そう言えば、去年の大河でも出てたな。真田昌幸って……表裏比興だっけ？」
「ええそうよ」
確か関が原で敗れて配流先で死んだんだっけ？
「左は……もういいわよね。恐れ多くも安房守殿の次男、真田左衛門佐殿の名を勝手に剽窃して作り上げた架空の人物よ」
やはり、永原先生は真田信繁が真田幸村として周知されることがよ

ほどお気に召さないらしい。
　あまり触れないでおこう。
「ところで永原先生、他に見る所はあるの？」
「ええもちろんよ。ちょっとついてきて」
　永原先生が手招きする。
　あたしたちは公園を出てひたすらに歩く、細い道を歩く。
　１５分位経っただろうか、畑の前で永原先生が止まった。
「そう確か……私の記憶だと、ここら辺に私の家があったのよ」
「え、永原先生……ここって一面が畑よ」
「当たり前じゃない。私がここを離れたのは本能寺の変の時よ。４３０年以上も前の空き家が残ってるわけないじゃないの」
「そ、それもそうよね……」
「せ、先生はここで何を？」
「畑仕事をして年貢を納めて……それをしながらも伝令役の足軽として兵役にもついてたわね」
「以前にも話したと思うけど、畑仕事中に石山さんと同じ症状で倒れて、農民仲間に家に運んでもらったわ。でも……女の子になっていたと知られたら殺されると思って……真田家を事実上出奔したわ」
「でも永原先生、そんな短いのになぜ真田に思い入れが？」
「……詳しいことは新幹線で話すわ……新幹線の時間まで、まだかなり時間があるから、もう一箇所ほど付き合ってくれる？」
　永原先生に言われるがままについていく、先ほどと同じくらい、更に１５分経って、私の足にも疲れが見え始めた。
　小さな狭い道を一本抜け、やがて上り坂に。
「はぁ……はぁ……」
　すると歴史館のような建物が見えた。
　どうやら、真田家を記念しているらしい。
「今回はここには寄らないわ。もうちょっと先よ。この山の向こう」
「せ、先生、石山がちょっと苦しそうです」
「そう？　篠原くん、おんぶしてあげなさい」
「え……え……」

篠原くんがまたちょっと赤くなる。
「あ、あの……無理しなくても」
まだあの登山の時よりは楽だし。
「い、いいよ！　ほら、い、石山！」
「う、うん……ありがとう……」
また背中を貸してもらう。なんだろう登山のときよりドキドキしているのに、心は落ち着いていると思う。
複雑な交差点を左に曲がり、やがて人家もまばらな道路をひたすら進む。
「そこを右に曲がってくれる？」
「はい」
右に曲がる道は明らかな山道だ。
おなじみの六文銭と寺の卍マーク、その下には「真田氏本城跡」とある。
古い神社を尻目に、更に曲がりくねった道を進み、本格的な山になる。
「……ここにはね、かつて堀があって要塞だったのよ。滅多に来ることはなかったけど、今でもこの城のことは思い出すことがあるわね」
「でも、ここ、ただの山じゃない」
「昔は、城だったのよ。はっきり覚えているわ。私がまだ男だった頃の、数少ない記憶よ！」
永原先生が強く言う。そうか、朽ち果てて、僅かに原型を残すのみのこの城が健在だった頃から、永原先生が生きていたということ。
それはあまりにも壮絶な人生だ。もはや４００年以上も前に死んだ主君のことを、未だに想い続けているのだから。
時折掲示があり、史跡を案内する。そんな時代から永原先生は生きていた。中腹あたりに来ると、村を一望できる光景が見えた。
「頂上まで登る？　それとも、もう帰る？」
「うーん、そろそろ帰ろうかな」
「そうね……バスと新幹線の時間もあるから、引き返しましょうか……二人共ごめんね。私の昔話に突き合わせちゃって……本当は

さっきの歴史館とか、他の見どころある場所を1日かけて回りたいんだけど……」
「いえ、いいんです」
「俺も、何か他の人より得した気分だったよ」
本来の林間学校はそろそろみんな遅めの昼食の時間。バスを使うから移動で丸一日潰れてしまうのだ。
体力も十分回復したので、篠原くんに降ろしてもらい、自分の足で歩く。
「えっとね、ここを直進してくれる？　大丈夫よ。私は何度もここに来てるから、地理は知ってるわ」
そりゃあまあ、永原先生にとってここは生まれ故郷なわけだし。
やがて、急カーブし、川を渡った少し先で、バス停を発見した。
かなり待った気がするが、ともあれ、上田駅に戻るバスに乗ることが出来た。
「永原先生、真田への思い入れというのは……」
「さっきも言ったけど……長くなるから新幹線で話すわよ。でも大まかに言うと、私の、罪の記憶のことについてよ」
「罪？」
「このことは……墓場まで持ってくつもりだったけど……石山さんと篠原君にだけ、特別に教えてあげる。このことは、絶対に口外しないって約束してくれる？」
多分永原先生の正体と過去以上に知られたくないこと。
「……う、うん」
「俺も、もし口外したら切腹するよ」
「ふふっ、勇ましいわね。そうね……切腹……かあ……私の身分じゃ無理だったわね」
永原先生は、何処か遠い目でバスの風景を見ていた。
上田駅に到着、次の新幹線までは後３０分あるという。
時間つぶしを兼ねて、おやつと称して駅ナカでお菓子などを買う。
一部は新幹線にも持っていくそうだ。

「あ、そうそう。これ、篠原くんと石山さんの分よ」
「あ、ありがとう」
「お、おう……」
気の抜けた返事で切符を見る。
「乗車券」という切符と「新幹線特急券・グリーン券」という切符の2枚がある。
「グリーン券？　これグリーン車なの!?」
「いや、石山よく見ろ、ここの文字……これ一番高い切符じゃねえか！」
「ええ、どうせ今回の不祥事でお金は旅行会社が払ってくれるんだから遠慮しちゃダメよ。それにあそこならそこまで人もいないでしょうし」
「そ、そうですか……」

ともあれ、時間も潰れたのでホームに降り立つ。
あたしたちが乗る車両は最後尾車両なので結構歩く。自由席指定席の部分にはそれなりに人がいたのに、ここら辺には誰も並んでいない。
夏休み土曜日だって言うのに人がいないのかな？
やがて駅構内の放送で、新幹線が間もなく到着であることを知らせ、青い新幹線車両が入ってくる。
永原先生の言うとおり、ここには確かに殆ど人がいない。横1列あたり3席しかなくて、見ぬからに広い。
座った瞬間の座り心地はたしかに格別だが、切符の料金からするとちょっと躊躇する。
新幹線は発車する。リクライニングを使い、3人共思い思いに心地の良い状況を作る。
「それじゃあ、篠原君、石山さん。話すわね」
「う、うん」
新幹線の発車後、自動放送と車掌の放送が一段落してから、永原先生が話す。

「あのね……私、恋愛したことがないって石山さんに言ったでしょ」
「う、うん……」
「石山さんに……友達になって欲しいって篠原君言ったよね？」
「あ、ああ……」
「でも、今はこの車両に居るのは私達だけだから、単刀直入に言うわね。石山さんも篠原君も……両想いなんでしょ？」
「え!?　そ、それは……」
「な、永原先生!?」
　答えに詰まってしまう。でもあたしと篠原くんの、その態度そのものが両想いですと自白しているようなものだ。
「まあ、どちらでもいいわ。でもね、ＴＳ病の子にとって恋愛は……どう転んでも将来的には大きな困難が伴うわ」
「やっぱりそれって……」
「……ええ、石山さんも私も、篠原君が老いて死ぬ時、よほどのことでもない限り、今篠原君が見てる姿のまま生きているわ」
「それじゃあ……」
「今恋愛していても、数百年後の遠い将来、石山さんの中で思い出は風化していくわよ。どれだけあがいても、あがいきれないのよ」
「じゃ、じゃあ、俺は風化しない思い出にしてみせる！」
「……おすすめはしないわよ。風化しない思い出にするってことはよほど強烈なこと。私の体験みたいにね」
「で、でも永原先生は恋愛したことないって――」
「私も……恋愛には一つトラウマがあるのよ」
「え？　でも先生は……」
「正式な恋愛なんてないわよ。だって初恋が……ひどかったのよ」
「せ、先生の初恋って？」
「ええ。そのことについて話したいの。私の罪深い記憶よ」
「永原先生、初恋が罪って……」
「聞いてくれる？　私はね……同時に二人の男性に初恋したのよ」
「え!?」
「しー、石山さん、声が大きいわ」

「す、すみません……」
「あ、あの、それで先生の初恋の相手というのは……」
「数え年で８８歳の老人男性と……１３歳の男の子だったわ」
「な……何だよそれ!?」
「それっていつごろの？」
「私が数えで１３６歳の時の話よ。笑っちゃうでしょ？　４８歳年下の男性と、１２３歳年下の男性に、同時に初恋するなんてね」
「先生……先生が１３６歳の時って……ちょうど江戸幕府誕生５０年目なんじゃ」
「……篠原くん、鋭いわね」
「ま、まさか……」
「ええ。私が初恋した二人の相手。一人は真田伊豆守殿、これだけでもひどいのにもう一人は……よりにもよって江戸幕府の４代将軍様だったのよ」
「もしかしてそのきっかけって……」
「……ええ。私はあの病気になって、真田家を出奔したわ。そして真田の村に戻りながら、主がお戻りになられても、別人のふりをし続けたわ。ＴＳ病だと知れて、殺されるのが怖かったから」
「……本能寺の時になって、不老がバレ始めると命惜しさにすぐに逃げたのよ。あの後の安房守殿や伊豆守殿、左衛門佐殿がどれだけ苦労なされたのかを知っておきながら、村に戻ろうともせず、諸国を流浪し、平和になったらノコノコ江戸に住み始めて……そこでも不老の噂が流れたのよ」
「でも、『ＴＳ病になれば不老になる』とは知られていなかったから、私は４代様の命で拝謁が許されたわ。伊豆守殿は命惜しさに出奔した裏切り者で臆病な私を、お許しになられたのよ」
　これは以前にも聞いたことがある。
「ただ優しくされた伊豆守殿の膝で、私は考えられないくらい泣きじゃくったわ。そして上様の家老が無礼だと叱責された時、普段は政務を家臣に任せきりだった上様が、ただ一言『よい、泣かせてやれ』と」
「……もしかしてそのエピソードがきっかけで」

「……ええ、泣き止んだ後、私は上様にも労いの言葉をもらったわ。実はね……そこでまた泣いてしまったのよ」
「上様はただ『辛かったろう、気の済むまで存分に泣け』と仰せになって、江戸城に泊まるように言いつけられたわ」
「……」
「その日はただ、今までの我慢してきたものが流れ出ただけでよかった。でも翌日だったのよ。私は……伊豆守殿と４代様の顔をはっきり直視できなかったわ。それでも礼儀作法があるから、必死にやせ我慢したわよ」
「いくら否定してもしきれない。私はそれまで、優しくされたことなんて無かった。戦に明け暮れ、ずっと逃げ惑い、偽ってごまかしただけの１３６年……それを受け入れてくれただけで、私はおかしくなってしまったのよ」
「つまり優しくされただけで、恋に落ちたってことなの？」
「……ええ。普通に考えなくても馬鹿みたいな話よ。でも、あの時の私はあらゆる感情で混沌として、頭がおかしくなっていたのよ」
「ただの足軽、それも事情はどうであれ脱走兵が自分の仕えていた家のご隠居、それも９０歳近い老人と、天下の征夷大将軍、それも１０代前半の少年に同時に初恋するなんて」
「確かに、奇妙な話だ」
「奇妙な上に、あまりにも不敬な話よ。恩を仇で返す無礼極まりない所業よ。このことは、江戸城に住んでいた時に、いつバレないかと心配になったわ。伊豆守殿と４代様がこの世を去り、元禄に入る頃までは気が気ではなかったわね」
「それにね……一番奇妙なのは……私は老化しない、不老の女で、伊豆守殿より更に５０歳近くも年上だったってことよ。更に言えば、初恋の人は二人とも、もう３００年以上前に死んでいるのに、私はこうしてまだ生きてるんだもの」
「そういえば、先生は真田に再士官したかったって……」
「ええ、もう一回真田に普通に奉公すれば、自然とこの歪んだ初恋も消えると思ったのよ」

「永原先生は真田家の子孫には……」
「大正の頃までは当主が変わる度に会っていたわ……ええ、会う度にまた奉公したいって言っていたんだけど、歴代当主様がどうしてもお許しになってくれなくて……いつしか、遠い昔に伊豆守殿に分不相応な恋心を抱いていた罪悪感もあって、子孫の方とはもう５０年以上会ってないわ」
「そうですか……」
「篠原君、石山さん。ＴＳ病の子の恋愛は、将来大きな困難を伴うわよ。かと言って、私みたいに１００年以上も恋愛をしないと、とんでもない事になってしまうわ」
「私は何とか気持ちを押し殺して同年代の死を待つことが出来たわ。伊豆守殿はあの５年後に、４代様も２７年後に病で早死されたわ。そしてそれ以来、恋愛には斜に構える事ができるようになったのよ。でも、石山さんは――」
「永原先生、あたし……あたし恋する乙女になりたいんです！」
永原先生の話を聞いたけど、でも、やっぱり気持ちはごまかせない。
「……」
「将来のことはよく分からないわ。でも、やっぱり気持ちを押し殺したくないって。もしかしたら、クラスのみんなも『元いじめっ子を好きになるなんて』って言うかもしれないけど」
「そう……それなら止めないわ。折り合いを付けるのを先延ばしにする子も、たくさんいるもの」
「……でも、篠原くんはまだ友達だから。そのあたりから整理したい」
「あ、ああ……」
篠原くんも返事をしてくれる。
「そう、じゃあ私の話もおしまい。そろそろ次の駅よ。終点まで乗るからね」
その後は、３人で新幹線の贅沢を楽しんだ。殆ど他のお客さんもおらず、のびのびと楽しめたと思う。
本当は列車によってはアテンダントの車内サービスとかがあるそうだが、こちらはシートのみの営業になっている。

リクライニングでは篠原くんは思いっきりくつろいでたけど、あたしがそのくつろぎ方したらパンツ見えちゃうし……でもそこまでしなくてもいいかな。とも思う。
それぞれのくつろぎ方でいいだろう。
新幹線の後は、在来線に乗り換える。そこから更に何度か乗り換えて、ようやく家や学校がある沿線まで来た。

「既に学校の方には連絡してあるから、そのまま家に帰っていいわよ」
「永原先生は？」
「今回の事件の処理のために学校に行くわ」
それぞれの最寄り駅を考えるとあたしが最初に降りて、永原先生は学校に、そして篠原くんは更にその先になる。
都会の電車はさっきの電車と違い、一駅一駅が短い。
急行・快速といった速達してくれる電車の一駅くらいの距離と時間だろうか？

「あ、次だ……」
次で最寄り駅。
「石山さん、気をつけてね」
「う、うん……」
二人に見送られ、電車を降りる。
一人で駅を降り、いつもの道を歩いて自宅に着く。そういえば鞄も何もない手ぶらというのは珍しい。
財布から家の鍵を取り出し開ける。

「ただいまー！」
「あ、優子おかえりなさい。大丈夫だった？」
母さんが出迎えてくれる。やっぱり事情は知っているみたいだ。
「あ、うん……守ってくれたから」
「あらあら。荷物はまだ届いていないけど、今日には届くそうだから後で洗濯機に入れておくわね。今日は優子、ゆっくり休みなさい」

「う、うん」
久しぶりに自室に戻る。
1時間位ＰＣでゲームをしていたら、運送業者らしき人が荷物を運んでくれた。
気が抜けたからなのか、少々気分が悪いかもしれない。

# 幕間　ここまでの舞台設定等

ここの部分は主に舞台設定の紹介です。読み飛ばしても本編には支障がありませんが、第三章までのおさらいとしてもう一度振り返ってみてはどうでしょうか？

裏設定等も一部ありますが、第四章以降のネタバレはありませんのでご安心下さい。

私立小谷学園（しりつおだにがくえん）

優子たちの通う高等学校。共学。「他人に迷惑をかけるな。そうじゃなければ何をしてもいい」という創立者の意向から、極めて校則の緩い学校として全国的にも有名。

にも関わらず、生徒たちの秩序は良く、地域民からの評判もいい。

一応停学退学といった処分もあるが創立以来殆ど適応事例はない。教頭先生や2年の学年主任小野先生のように頭の固い人物もいるが、概ね風通しは良い。

一方で、運動部は弱小揃いで、安曇川虎姫も所属する女子サッカー部と、田村恵美が一人強い女子テニス部を例外にすれば、地区大会の早期敗退の常連である。

あまりの校則の緩さから生徒会・風紀委員の活動実績は乏しく、生徒会は曲がりなりにも活動しているが、風紀委員はまともに召集さえかけられず、それどころか去年は当の風紀委員長本人が自分が風紀委員長であることを忘れていた有様であった。

制服は男子は学ラン、女子はブレザーにリボン、そして紺チェックのプリーツスカート。

学校側は、制服を廃止する予定だったが、生徒側が「要望」するという形で残っている。そのため実は制服を着ずに登校しても怒られないのだが、誰も実行しない。その日の服選びに迷わなくていいという実用的な側面があるからである。

学校行事は入学式卒業式の他、6月に球技大会、7月には林間学校があり、秋には文化祭や体育祭がある。施設は教室、職員室、視聴覚

室、プール、部活棟など一通りのものが揃っている。プールは水泳部用に水深が深いため、授業では下に柔らかいクッションを置いている。

総合病院

小谷学園のそばにある総合病院、最寄り駅との通学路の途中にある病院で、小谷学園とも提携していて、教師の健康診断や生徒の保健室では対応しきれない怪我などの面倒を見てくれる。

石山優一がＴＳ病を発病した際もここに運び込まれ、優一がまだ優子と言う名前を決めていない時期の、女の子としての最初の生活を始めた場所でもある。

総合病院というだけあってあらゆる科に対応しており、カウンセリングルームもある。

―日本性転換症候群協会《にほんせいてんかんしょうこうぐんきょうかい》

永原先生が会長を務める、ＴＳ病の患者で務める協会。１００年前の１９１７年に創設され、「長老」だった永原先生が会長となる。

会としての主張はいわゆる少数者の権利はいらない。欲しいのは「二人の女性としての扱い」というものである。

そのため、むしろ見た目第一印象で扱ってもらったほうが間違いは少ないとも。

ＴＳ病は極めて珍しい病気であり、なおかつ自殺者も多いため、会員数は非常に少ないが、それでも弁護士を擁して裁判を起こせるだけの財力や、医学界に圧力をかけて「性転換症候群」の名前を「完全性転換症候群」に変えさせるだけの力はある模様。

ハンバーガー屋さん

総合病院のすぐ近くにあるハンバーガーショップ。小谷学園の学生も時折利用する。

優子が２回目の食事をした所で、食べるのが遅く、また一口が小さ

くなっていることを自覚した他、2年2組の女子たちで利用したことも。

地元のデパート

小谷学園や優子の家と数駅離れており、また区役所のある駅の近くにあるデパート。地元商店街が「発展的解消」と称して出来たもの。

女の子になって一日目、優子の女の子としての服を大量に買った他、中古店はミニスカートで男物の服や本を捨てる課題の舞台にもなっている。

ここで優子は一通り売りに出した後の休憩で油断をしてしまい、ミニスカートからパンツを見せてしまった。これを見ていた母さんが家で優子におしおきする。

また、優子と龍香、桂子の3人が昼食を取ったのもレストラン。また、スカイブリッジを挟んで隣のビルには映画館が入居している。

優子の家

学校と区役所との間の駅を最寄り駅とする平凡な一軒家。優子の部屋や父親の書斎、またリビングや寝室、風呂、トイレなども当然ある。

優子の部屋は健全な男子らしくエロ本を隠してある他、少年漫画や萌え系のラノベの他、ゲーム機やＰＣなどもある。

ただし、少年漫画や萌え系のラノベは女の子になったのを機に古本屋へと売られ、代わりに少女漫画や女性誌が置かれるようになっている。

桂子の家

直接には未登場、同じ小中学校だったため、最寄り駅は優子の家と同じ。

地元の鉄道

優子たちの地元の鉄道。沿線には石山優子や木ノ本桂子、小谷学園

の他、篠原浩介や区役所・デパート・スーパーマーケットなどのある街もあり、それなりに賑わっている。
優子の家から小谷学園は朝のラッシュ時とは逆方向であるが、電車が遅延し、混雑が激しくなった時には痴漢をされたこともある。

区役所
優子の所属する「政令指定都市」の区役所。「完全性転換症候群」、通称「ＴＳ病」となったため、改名書類と性別変更届を提出した。
その他、スカートでの女子トイレの仕方を学んだ場所でもあり、優子が始めて女子トイレに入った場所でもある。

そば屋
優子が区役所の課題をクリア後、一人で外食したそば屋

リサイクルショップ
小谷学園から徒歩数分の所にあるリサイクル店総合病院の部分で通学路を少し外れると到着する。
小谷学園の制服もリサイクルされており、ここで優子は優一時代の制服と体操着を捨てた。

スーパーマーケット
優子が母とともに安売りの極意を学んだスーパーマーケット。ちなみにこの時はハイヒールも体験し、転びそうにもなった。

ゲームセンター
優子が桂子、龍香と共に遊んだゲームセンター。区役所のある中心街にある。音ゲーやクレーンゲーム、またエアホッケーなどもある。体育が苦手であることは分かっていたが、ここで優子は体を動かすのがとにかく苦手であることが露呈した。

映画館

優子が桂子、龍香と共に入った映画館、区役所のある中心街にある総合デパートとはスカイブリッジを挟んで隣のビルに入居している。
国民的人気アニメの映画で感動して泣いてしまい、優子は自分が泣き虫になっていることを自覚した。

旅行会社
小谷学園の林間学校を受け持つ旅行会社。バスも所持しており、主に運行を担当する。
最終日、添乗員の野洲康平が優子を強引にナンパし、また篠原浩介に暴力を振るう不祥事を起こす。この時は篠原浩介に取り押さえられ、野洲康平はその場で現行犯逮捕となった。皮肉にもこれが優子に「恋」という扉を開けさせるきっかけとなる。

バス
優子たちが林間学校で使ったバス。暇つぶし用にテレビもあり、そこでは豪華客船の映画を見た。
これは優子たちの生まれる前に公開された映画で、女性ばかり救助されたことが後々に遺恨を残す。優子や永原先生は男女両方の性別を経験しており、男女平等主義の虚しさを語り合っていた。

パーキングエリア・サービスエリア
林間学校での高速道路を進む道中で休憩する場所。トイレ休憩の他、昼食休憩もあり、予め学園側の用意した食事を食べるか、サービスエリア内のお店で食べるか選ぶことができる。
その他、往路では優子が永原先生とともにマッサージ機サービスの無料券を使い、マッサージ機で休憩もしている。
復路最初のパーキングエリアで、野洲康平による事件が起きている。

ホテル山のはて
林間学校3泊4日の起点となったホテル。地上8階地下1階で最

上階と地下は風呂に、1階はフロントとゲームコーナー、お土産屋などが入っており、2階はレストラン・軽食屋、3階から7階までは客室になっている。優子たちの部屋は7階で、木ノ本桂子、安曇川虎姫と同室になった。

レストランは基本的にバイキング方式で、小谷学園ではチケット制を採用し、食べていない生徒が居ないかは実行委員が確認することになっていた。

ただし3日目の昼食のみ軽食屋のサービスが使われ、１０００円まで無料券が渡されていた。

お風呂は温泉、地下は広く温度別に楽しめる他、源泉を使ったかけ流し湯や、五右衛門風呂、更に優子は使わなかったが、サウナや水風呂、ジェットバスもある。一方地上は大浴場と露天風呂で、東側に面していて、日の出が美しい。

客室はベッドとテレビなどがある。ＣＳも見ることが出来、ここで優子たちは飛行機事故の検証番組にハマる（ちなみにモデルとなった事故は豪華客船ともどもいずれも実在の事故である）

ホテルの庭先には草原があり、バーベキューできるようになっている他、地元の花火協会が小さな花火大会を催した。

最終日、ここのお土産コーナーで優子は着せ替え人形を購入した。

山

優子たちが林間学校二日目で登山した山で１０００ｍ級ながらも途中九十九折などもあり、結構長い。２時間で登山する予定が、優子は開始３０分で息を上げてしまい、以降は篠原浩介に大半の区間をおんぶしてもらうことで山頂に付けた。これは、優子が彼に惚れる最初のきっかけでもある。

下山は登山より楽ということもあって、また大半をおんぶしてもらったため、無事に先頭で降りきっている。

なお、この頃には既に野洲は優子に一目惚れしており、密かに付け狙っていた。

森林公園

ホテル山のはてにほど近い場所にある森林公園で、定期的に森林教室を開いている。

ここでは、森林の生態などを学べ、感想文を書くのが3日目の課題となっている。

佐和山大学

ノーベル賞学者蓬莱伸吾教授が所属する大学。小谷学園の近くにあり、偏差値はあまり高くない

山のはて花火協会

江戸時代、幕末創業の小さな花火協会。規模こそ小さいが老舗である。老舗を誇っているが、実は永原先生の半分も生きておらず、改めて永原先生の人生の長さを思い知るとともに、花火という一瞬に全てを掛ける生き様に人生観を感じていた。

江戸城

江戸幕府が置かれていた城であり、江戸幕府５０年目から明治維新までの２００年以上、永原先生はここで過ごしていた。現在は皇居。当然実在。天守閣は「明暦の大火」で失われている。永原先生が花火の時に当時の様子を語っており、焼け落ちた江戸城から脱出した時に、逃げ遅れた人々が次々焼死する様子を見ている。

警察署

野洲が暴行を働いたパーキングエリア所轄の警察署。劇中の台詞から最寄り駅はしなの鉄道「屋代駅」であることが分かり、ここから管轄範囲を割り出しパーキングエリア・サービスエリアも特定可能。

長野県の鉄道駅

警察署から乗った長野県の鉄道駅、永原先生はここから上田駅までの切符を購入した。永原先生によれば、並行在来線の鉄道会社の１つで、北陸新幹線開業に伴って経営分離された旧信越本線を運行してい

る。

永原先生が「昔は日本中で見られたけど今は珍しい。広島あたりならまだ主力」と言った車両は115系電車のこと。

車掌の放送から「千曲駅(ちくま)」より一駅、また上田駅より6駅長野寄りなので優子たちが乗った駅は「屋代駅(やしろ)」であると特定できる。

上田駅(うえだえき)

新幹線も停まる大きな駅。劇中では出てこなかったがもう1つ鉄道会社が乗り入れている。ここのみどりの窓口から永原先生は新幹線の切符を購入した。

上田駅を含め、上田市は「真田」を観光資源にしており、様々な名所を見て回れる。

駅前には馬に乗った「真田幸村」の像もあるが、永原先生は真田信繁を真田幸村として周知させることに強い怒りを感じており、いわゆる「過激な歴ヲタ」によるそれ以上である。

上田の蕎麦屋

長野県信州ということでそばの名産地。上田駅の近くの蕎麦屋で永原先生と優子、篠原浩介が昼食を取った。3人共天ぷらそばで、10割そばが美味であった。

上田駅から出ているバス

上田駅より永原先生の故郷の村に出ているバス。ちなみにこれだけでバス会社も特定できる。

真田氏記念公園

実在の公園。真田氏発祥の郷があり、永原先生が仕えていた真田幸隆、更にその息子の真田昌幸、そしてその息子の真田幸村を記念しているが、永原先生は「真田幸村」に対して「恐れ多くも安房守殿の次男、真田左衛門佐殿の名を勝手に剽窃して作り上げた架空の人物」と評している。

刀根之助の家

かつて永原先生が刀根之助だった頃に住んでいた家、ＴＳ病になった後一旦逃走後、数年で領地に戻り、本能寺の変の頃まで同家で過ごした。現在は跡形もなく取り壊され畑になっている。

歴史館

優子たちが真田本城を目指す時に通りかかった歴史館。真田家に関する様々な縁の品があるが、永原先生たちは時間の都合で立ち寄らなかった。

真田氏本城跡

かつて真田本城と呼ばれていた城で、永原先生が仕えていた城。とされているが、築城は永原先生がＴＳ病になった後の可能性や、真田氏以前から存在していたという記録もある。

永原先生が不老を疑われて逃走した翌年の１５８３年に、真田昌幸が上田城を築城すると本城としての役割を終え、本能寺の変の３年後に廃城となった。

新幹線グランクラス

いわゆるグリーン車よりも高い列車。小さいスペースを活用するため、飛行機のファーストクラスを参考にして作られた。乗車したのはＥ７系もしくはＷ７系電車。

永原先生が乗ったのは「あさま」であるため、アテンダントによる飲み物や軽食のサービスの無い、座席のみ提供の車両。夏休みの土曜日だったものの、逆方向だったことや、時間帯が昼間だったこともあって比較的空いていた。

この車内で永原先生は罪深い初恋話を話した。

永原先生の生涯の年表

永原先生のエピソードが増えてきたのでまとめてみました（関連性

の薄い史実エピソードもありますが参考までに）カッコ内は永原先生の年齢です（1月1日を誕生日とする満年齢）

永正１０年／１５１３年（―）　真田幸綱（真田幸隆）が生まれる

永正１５年／１５１８年（０歳）　鳩原刀根之助が生まれる、この歳は真田幸隆の弟矢沢頼綱も生まれている

大永元年／１５２１年（３歳）　武田信玄が生まれる

天文２年／１５３３年（１５歳）　刀根之助、真田家に伝令役の足軽として奉公するようになる

天文３年／１５３４年（１６歳）　織田信長が生まれる

天文６年／１５３７年（１９歳）　豊臣秀吉が生まれる。またこの歳真田幸隆の長男真田信綱も生まれている

天文７年／１５３８年（２０歳）　刀根之助、畑仕事中に倒れＴＳ病となり不老の女の子へ。この頃には既に両親は死去していたが、殺害を恐れ隣村に逃亡。名を「柳ヶ瀬まつ」と改める。事実上の真田家出奔

天文１０年／１５４１年（２３歳）　信濃進出を図っていた武田信玄の父武田信虎が諏訪頼重・村上義清と同盟し真田家とその本家筋にあたる海野家を攻める海野平の戦いが勃発。真田幸隆は箕輪城主の長野業正のもとに逃亡し、真田の村は村上義清の領地となる。その直後、武田信虎は武田晴信に追放される

天文１１年／１５４２年（２４歳）　徳川家康が生まれる。柳ヶ瀬まつが真田領に帰還、空き家となっていた刀根之助の家に戻る

天文１６年／１５４６年（２８歳）　真田昌幸が生まれる

天文１７年／１５４７年（２９歳）　遅くともこの頃までに真田幸隆は武田家臣となる

天文２０年／１５５０年（３２歳）　真田幸隆が砥石城を攻略し旧領に復帰する、まつ、恐怖心から帰参できず別人を装って過ごす

永禄９年／１５６６年（４８歳）　真田昌幸の長男、真田信之が生まれる

永禄１０年／１５６７年（４９歳）　真田幸隆は真田信綱に家督を譲って隠居する。真田信繁が生まれる

元亀４年／１５７３年（５５歳）　武田信玄病死、武田勝頼が家督を継ぐ

天正２年／１５７４年（５６歳）　砥石城で真田幸隆病死。まつ、自らが不老ではないかと疑い始める

天正３年／１５７５年（５７歳）　長篠の戦いで武田軍は織田徳川連合軍に大敗、真田信綱は弟真田昌輝共々討ち死にし、三男の真田昌幸が家督を継ぐ

天正１０年／１５８２年（６４歳）　織田徳川連合軍が武田征伐を行い、武田勝頼は自害。真田家は独立し、織田信長に臣従するも、織田信長は同年本能寺の変で明智光秀の謀反に遭い自害。明智光秀もまた羽柴秀吉に山崎の戦いで討たれる。まつは村の者にも不老を疑われ始め、命の危険を感じて逃走する。ほどなくして天正壬午の乱で徳川家康が甲斐信濃を平定。そんな中真田昌幸は必死の謀略を駆使し、表裏比興と言われながらも生き残る。この乱の様子をまつは見物している。

天正１８年／１５９０年（７２歳）　関白秀吉が小田原征伐で後北条氏を降伏させ、天下を統一。関東には徳川家康が入った

慶長３年／１５９８年（８０歳）　豊臣秀吉が病死、徳川家康による専横が開始

慶長５年／１６００年（８２歳）　上杉景勝討伐を名目に石田三成と徳川家康との間で関ヶ原の合戦が勃発。真田信之は東軍に付き、真田昌幸と真田信繁は西軍につき分裂。真田昌幸・信繁親子は上田城において後の２代将軍である徳川秀忠の軍を足止めさせ、遅参に追い込んだ。まつ、京の公家と共に関ヶ原の戦いを見物、真田昌幸の援護射撃も虚しく、小早川秀秋の裏切りによって西軍は壊滅し、真田昌幸・信繁親子は本多忠勝や真田信之の助命懇願もあって高野山から次いで九度山へと配流される

慶長８年／１６０３年（８５歳）　徳川家康が江戸幕府を開く。まつ、江戸在住を目指し貯金を開始。

慶長１６年／１６１１年（９３歳）　真田昌幸が配流先で病死

慶長１９年／１６１４年（９６歳）　方広寺鐘銘事件が勃発。徳川

家康の諱を犯したとして豊臣方が避難され、これを大義名分に大坂冬の陣が勃発。真田信繁が大坂城に入り真田丸を作る

慶長２０年／１６１５年（９７歳）　大坂夏の陣、裸同然の大坂城に殺到する徳川軍に為す術もなく壊滅。真田信繁が奮戦するも戦死。柳ヶ瀬まつ、江戸へ移り住みここを定住地とする。

寛永７年／１６３０年（１１２歳）　真田幸隆と同い年とされている永田徳本が１１７歳で死去したことにより、以降現在まで「この世で最も長生きの人」となる。男余りの江戸において非常にモテたものの、不老のこともあって拒否し続けていた。

承応２年／１６５３年（１３５歳）　江戸の街でも不老の噂が流れ、再逃亡を考えていた矢先、当時の４代将軍徳川家綱により江戸城に呼び出される。真田信之がまだ存命であったため、事情を話し、かつて真田に仕えていた鳩原刀根之助と同一人物であると示す。出奔者のまつを許し、「よく戻ってきた」と労うと、感極まって大泣きしてしまう。家老の叱責に対しても徳川家綱が「よい、泣かせてやれ」と言ったため、お咎めなしとなった。その後、徳川家綱もまた労いの言葉を投げかけ「今日は存分に泣け」と言われ、江戸城の一室で泣き続けた。翌日、この二人に恋心を感じてしまい、これが現在まで永原先生を苦しめている

明暦３年／１６５７年（１３９歳）　明暦の大火、江戸城も天守閣などが焼失するが、徳川家綱に誘導され難を逃れる。眼下に広がる大火により、逃げ遅れた人々が次々火に飲み込まれるのを見る。命の危険を感じた最後の時。

万治元年／１６５８年（１４０歳）　真田信之が９２歳で死去

元禄１５年／１７０３年（１８５歳）　赤穂事件勃発、赤穂浪士にはいい感情を抱いて無さそうだが……

この間江戸城で比較的平穏無事に過ごす。歴代将軍に戦話などを聞かせつつも、江戸の街も比較的自由に歩けたようである。

慶応４年／１８６８年（３５０歳）　戊辰戦争により再び諸国流浪。数個の偽名を使い分けて生活する

明治１５年／１８８２年（３６４歳）　全国に鉄道が張り巡らされ

るという情報を入手、逃走は難しいと判断し教師の職業を始める
明治２７年／１８９４年（３７６歳）　日清戦争が始まる。この頃、ＴＳ病は迷信で殺されることはなくなり、大手を振って活動できるようになる
大正元年／１９１２年（３９４歳）　偽名などを整理し、名前を北小松貴子と改める
大正６年／１９１７年（３９９歳）　ＴＳ病患者の人口も増え始めたため、日本性転換症候群協会が設立される。「長老」であった貴子が会長に
大正１２年／１９２３年（４０５歳）　関東大震災、山口に赴任しており難を逃れる
昭和２０年／１９４５年（４２７歳）　戦争による空襲が激しくなり、女学校生とともに地方に疎開、いざという時は単独で山に逃れる手立ても考えていたが、結局爆撃などは来なかった
昭和５１年／１９７６年（４５８歳）　小野先生の学校で当時小学６年生だった小野先生の担任として務める。悪ガキだった小野先生に手を焼く
昭和６２年／１９８７年（４６９歳）　大正より使っていた北小松貴子の名前を改め、永原マキノと名乗るようになる。ＴＳ病患者の改名は珍しくなかったが、この頃には珍しくなっており、最後の改名である
平成１２年／２０００年（４８２歳）　石山優一、木ノ本桂子といった主要人物が生まれた年
平成２９年／２０１７年（４９９歳）　本編開始

# 第四章　男を好きになるということ
## お人形さんで遊ぼう

「優子ー荷物届いたからここにおいておくわね」
「あ、母さんありがとう」
　林間学校に持っていって、バスに放置してあった荷物が届いた。今頃篠原くんのも届いているはずだ。
「着替えはもう洗濯機に入れておいたから……それより優子、このお土産、どうしたの？」
「え？」
　母さんが着せ替え人形セットのお土産を持っている。
「そ、その……お土産店で見て……」
「ふーん……お土産店でねえ……」
　母さんがなにか意味深な口調で言う。
「母さん……女の子がお人形遊びしちゃダメ？」
「ううん、そんなことないわよ。ただちょっとこのお人形、懐かしくて可愛いと思って」
　母さんによると、このお人形はシリーズ化されているロングセラーで、母さんが子供の頃にも遊んだというのだ。
「母さん、あたしね。林間学校とかでも『優子はまだまだ深い所で女の子になりきれてない』って言われてて……特に女の子の感性の理解についてはまだまだだと思うのよ」
「うんうん」
「……女の子らしく、お人形遊びすれば、少しは理解できるかなって」
「そう……そうよね。優子には女の子向けのお遊びも必要よね……母さんも遊んでいい？」
「うん、いいけど……」
　いい年してって言うのはやめておく。あたしはおばさんになることはないんだから。
　まずは箱を開ける。まず人形と衣装の部分を出して、一番奥に取扱

説明書を発見。でも、まずはともあれやってみよう。
最初に取り出したものをもう一度見直す。下着姿になった人形に幾つかの小さな衣装がある。
これを着せ替えて遊ぶんだろうか？　でも服のバリエーションは多くない。
とりあえず、まずはいくつかあるスカートのうちの一つを取り人形に着せてみよう。
……あれ？　うまくはまらない……うーん、サイズが小さいような……
「優子、説明書読んでみて？」
「え？」
「説明書も読まずにいきなり始めちゃ駄目よ。お人形さんが可哀想でしょ？」
「う、うん……ごめんなさい……」
母さんに言われるがままに説明書を読む、スカートはファスナーを降ろさなきゃいけないとある。
そう言えば、そうしないと穿けないサイズのスカートもあるにはあったが、あたしもなんかお尻のファスナーが気になって滅多に穿いてなかった。
早速ファスナーを発見し、それを下ろしてから穿かせてあげる。
次に豪華な装飾があしらわれたドレスが目に入る。
こちらもまずはボタンを外してから両腕にかけさせる。私の身体と違い、胸が出てないのでかなり着せやすい。
ふと人形を見る。やっぱり人形とあって姿形も整っていてとても愛くるしいと思う。
ともあれ、これで上下が完成だ。うん、お人形さん遊び一人でできた！
「できたー！」
「ダメよ優子！　まだ足りないわよ！」
母さんにダメ出しされる。
「え？」

「ほら、装飾品とか、靴とかあるわよ。優子も頭にリボンするでしょ？」
「あ、本当だ」
お人形さんのリボンを取る。
よし、あたしがいつもやっている要領でやってみよう。
……あ、あれ？　うまくいかないわね……
えっと、ここをちょうちょ結びに……また失敗……
「うーん……」
「優子どうしたの？」
「うまく結べないのよ……」
「……頑張って。手先が器用になれれば家事もしやすくなるわよ。繰り返し失敗して覚えていってね」
「う……うん……」
母さんに拠れば、お人形遊びもまた、家事の訓練の一環にもなるということ。
今までを振り返ってみると、立ち居振る舞いや言動、性自認を女の子にすることが主になっていて、こういう女の子特有の遊びや文化を、まだ殆ど体験していなかった。
せいぜい、少女漫画や女性誌を読んで、感想文を書いたくらいだ。

ピーピピピピピー……ピーピピピピピー
ふと、突然携帯電話が鳴る。桂子ちゃんからだ。
母さんが部屋から出る。
「はい、石山優子です」
「あ！　優子ちゃん！　今どこ？　大丈夫？」
「今は家にいるよ……うん、今はゆっくり休んでる」
「どうやって帰ったの？　新幹線？」
「うん、永原先生によるとこのあたりはみんな旅行会社が保証してくれるって言うから大丈夫」
「……警察の人はなんて？」
「逮捕はされたけど、多分裁判までは行かないってさ。でも会社はク

ビになるだろうって」
「そう……」
「あたしからも聞いていい？　みんなはどこまで事情知ってるの？」
「添乗員さんが優子ちゃんと篠原を殴ったって所までよ。優子ちゃん顔とか傷ついてない？」
「ああ、あたしは大丈夫。突き飛ばされただけだから」
「ええ!?　でも痛かったでしょ？　泣き声が外まで聞こえてたよ」
「多分それは痛みじゃなくて恐怖で……泣いた時だと思う」
「ふーんそうなんだ……でも痛かったでしょ？　男の人に突き飛ばされたんだから」
「うん、背中打っちゃって……それと恥ずかしくて……」
「うん、そうだよね。あんな所で泣いちゃたわけだもんね」
「う、うん……それに……」
「それに？」
「突き飛ばされた時スカートめくれちゃって……」
　本当は篠原くんに見られたのが一番恥ずかしかったんだけど言わないでおく。
「あーそっちねえ……うん、とにかく災難だったわね」
「……それよりも、他のみんなも心配してると思うからあたしの無事をちゃんと連絡してあげて」
「あー、うん。分かった。じゃーねー」
「うん、バイバイ」
　ピッ
　電話を切り、母さんに声をかけ、もう一度お人形遊びをする。
　何とか試行錯誤して私のように頭にリボンを付けることに成功。次からはもっと時間を短縮したい。
「ふう、リボンはこれでＯＫ」
　普段と逆の方向から結んでいるのも、難しくしている要因かもしれない。
　他にカチューシャや帽子、靴下や靴も色々なバリエーションがある。

カチューシャを髪にかけてあげる。ちょっと髪に引っかかっているので、傷つけないように丁寧に。
靴の方は足にかぶせる。こっちは案外簡単だ。
よし、今度こそ大丈夫のはず！
「母さん……これでどうかな？」
「うん、可愛いわねえ！」
目がぱっちりとした人形の女の子があたしを見つめている。
「優子、この人形は色々なシリーズがあって、服装などのバラ売りもあるわ。おもちゃ屋さんでたくさん買って、バリエーションをたくさん試すといいわよ」
「……うまく行けば、あたし自身にも参考にするの？」
「うん、だけど優子はこの人形と違って胸がすごいからそのあたりも気をつけないとね」
「か、母さん！」
「ふふっ、優子。それは武器なのよ。存分に使いなさい」
「う……うん……」
また反論したら色々ある……と言うより実際武器という側面もあるのは事実なので、反論もしようがなく、そのままにしておこう。
武器……そういえば登山の時篠原くんに使ったよねこれ……

「はー疲れたー」
「優子、もう疲れたの？」
「だって、林間学校で大変な目に遭って、それで帰ってきたばかりでお人形さん遊びしたんだもの」
「そ、そうだったわね、ごめんなさい……」
また少し肩が痛む。マッサージしたい。
「……母さん、肩揉んで？」
「え？」
「ちょっと肩こっちゃって……」
母さんは困惑しつつも肩を揉む。
「ああー気持ちいいー」

「優子どうしたの？　こんなに肩こって……」
「あはは、女の子になって3週間位でもうずっとこりっぱなしなのよ」
「ああ、そうよねえ……無理も無いわ。ところで林間学校はどうだったの？」
「ああ、うん。えっとね――」
あたしはマッサージしてくれている母さんに林間学校での４日間について話した。
初日に移動し、また初めての風呂ではバスタオルをうまく巻けなかったこと、二日目の登山で篠原くんにおんぶしてもらって山に登ったこと。
この時、母さんから「少しは運動した方がいい」と言われた。
三日目の森林教室やバーベキューのこと、自由時間中に少女漫画を読んでいたら学年中の注目の的になったこと。また花火の時にも篠原くんに助けてもらったこと。
四日目には添乗員さんに乱暴されかけたのを篠原くんに助けてもらったこと。その後は警察署で事情を話した後、永原先生と篠原くんと共に永原先生の故郷を巡ったこと。
もちろん、永原先生が新幹線で話したことは言わないでおく。これは3人だけの絶対の秘密だから。後は個人的にも篠原くんと恋に落ちたことも言わないでおく。
「ふーん、そうなんだ」
「永原先生、真田幸村って言い方がどうしても気に入らないみたいで、珍しく凄い怒ってたよ」
「あー幸村って言わないらしいねー……あ、そういえば永原先生はどうして真田の子孫に仕えないのかしら？」
「うーん、そういえば何でなんだろう？」
理由は知ってるけどすっとぼける。
「まあ、永原先生も教師としての生活もあると思うから、今更なのかも知れないわね」
嘘をつく。本当は今も初恋の罪悪感をのに引きずっているのに。
「そうよねえ……」

「それに仕えてたのも……永原先生が２０歳の時までだから４８０年は前のことよ」
「想像もつかないわね」
「ええ、あたしも、永原先生に以前真田家の人が使っていた城の跡地に行ったんだけど、殆どただの山だったわよ」
「風化するような時間、生きているってことよねー」
「でも、あたしもそんな人生になるんだよね」
「大変よね優子」
「うん。この病気の自殺者が多いのもこういう側面があると思うのよ」
「そうねえ……」
　あたしはまた人形を見る。
　あたしのコーディネートで可愛く出来ている。髪型を変えたりもできるそうだ。
　お人形さんなら、ずっと遊べるのかな？　ううん、そんなことないわよね。だってこのお人形さん、毎日遊んでたら多分１００年持たないもの。

「あ、そうだ優子！　体育の先生から補講の話があって３１日の……再来週月曜日の午前１０時に教室に来て欲しいって」
「あ、うん。ちょっと待って……」
　私は林間学校のバッグから携帯カレンダーを出す。生理の予定から大きくずれている。
　あたしの予測では明日日曜日から3日を特に辛い日と見ている。
「うん、それで大丈夫だと思う」
「じゃあ大丈夫って連絡しておくわね」
「ありがとう……」

　あたしはその後はゲームをすることにした。少し前までゲームと言えば男性向けな趣味だったかもしれないけど、暇をつぶすのにはこれがいいし、幸いユニセックスに遊べるので有害性もない。

そして、「優子、ご飯よー」という母さんの声とともに、久々に我が家のご飯が登場した。
「優子、最終日は災難だったな。大丈夫だったか？」
食卓の場で、父さんが声をかける。
「ああうん。助けてもらったから」
「そうか。実は明日、旅行会社の社長が見えるそうなんだ」
「あー、一応あたしに謝りに来ると」
「ああ、後篠原さんところにも謝りに来るらしいんだ」
「うん……」
「篠原さんの方にお礼は言ったか？　随分世話になったって聞いたぞ」
「ああ、うんもちろん……」
お礼どころか恋に落ちてるなんて言えない。
「まあ、とりあえずお疲れ。明日から夏休みだな」
「あ……うん……」
体育の補講とかもあるんだけどね。

ずっとホテルのお風呂ばかり入っていて、家のお風呂に入るのも久しぶりだ。
でもやることは行く前と変わらない。敢えて言えば、バスタオルを巻いてお風呂に入る必要がないということ。
今はお風呂で汚れを落とす時間も楽しい。きれいになるってやっぱりいいことだし。
今日は朝に続いて二回目のお風呂。
身体と頭をよく洗う。今更だけど大泣きした後なので顔も洗っておく。
湯船に浸かる。久しぶりの水道風呂。身体を温めキリの良い所で素早く身体を拭く。
以前は拭き方に苦労して、冷えに苦しむこともあったけど、今ではそれもだいぶ緩和された。
季節自体が夏に向かっているという面もあるだろう。

持ってきた下着とパジャマに着替える。パンツは生理用で、今日もワンピースタイプのパジャマだ。寝る時もお洒落したいときや、生理が近い時はいつもこれだ。

「ふう……」

自室に戻り、ちょっとだけ夏休みの宿題をする。

少し気分が悪いけど、そう言うときにこそ、宿題を片付けないと行けないと思った。

寝る前に、生理用ナプキンを取る。ワンピースの中に手を入れて、パンツを一旦脱いでナプキンを付け、いつでも眠れるようにする。

生理中になると、もちろん起きているときもあるけど、朝起きたら出血してたなんてこともよくある話だからだ。

ピピピピピッ……ピピピピピッ

「うーん……」

何となく起きたくない。

4日分の疲れと、生涯3度目の生理の痛み。

始めの頃は軽い生理からはじまると言うのに、TS病は重い大人の生理から始まるから、これにはまだ慣れない。

いや、女の子たるもの慣れるものではないと言うが、それでも辛いのを少しでも緩和しないといけない。

でも、この痛みこそ、女の子の証でもある。だから、今は痛みが辛いとともに、ほんの少しだけ「ああ、女の子なんだな」と言う喜びを感じることもできる。

「う、うわっ……!」

重い腰を上げ、生理用ナプキンを見てみると、真っ赤に染まっていた。やっぱりまだ驚きは隠せない。

ともあれ、これを捨てないことにはしょうがない。パジャマがワンピースタイプでよかった。

とにかく箪笥から新しい生理用パンツを出してナプキンを付けて穿き替える。また血が出そうになったので、古いナプキンを捨てるつ

いでに、トイレに入ってそこに捨てるようにした。
最初の時のようにふらふらすることこそなくなったものの、まだ目が回ることが多い。
運良く前回も土日に生理が重なり、林間学校もギリギリ生理に当たらなくて済んだ。どうも、周期と言っても1日2日の誤差はあるみたいだ。

携帯電話を見ると、メールがいくつか届いていた。
クラスの女子たちから私を心配する声だ。
丁寧に返信をしていく。篠原くんからメールはない。アドレスの交換などしていないからだ。
クラスの女子たちからのメールの中には、桂子ちゃんからのメールもあり、こちらは心配する声ではなかった。
内容としては、「恵美ちゃんが出るテニスのインターハイが終わったら今度女子たちで、優子ちゃんの家にお泊まり会をしよう」と言うものだ。
日時を見てみると、体育の補講と重なってしまっている。
その旨を返信すると、起きていたのかすぐに桂子ちゃんから返答があった。それによると、補講が終わってから1泊2日ということになった。
参加する子を何人か呼ぶらしい。でも一応母さんに連絡しないと。
そう思い、リビングへ向かう。
「あ、おはよう優子？　どうしたの？」
「あーうん、今日はちょっとお腹痛いの……」
「あ、そうだったね。朝ごはん食べる？」
「うん……ところで母さん」
「どうしたの？　女の子の日にはもう慣れた？」
「そうじゃなくって、今度の31日の夕方くらいからクラスの女子とお泊まり会しようって話があって……」
「あらいいわねえ。うん、お友達とお泊まり会、優子の成長にも必要なことだと思うわよ」

「お父さんはどうしよう？」
「うーん、まあ書斎に籠もってもらえれば大丈夫でしょ」
なんか扱い悪いけど、確かに書斎から出ること少ないもんなあ……
「さ、今はご飯を食べて元気出しなさい。今日からまた大変だと思うけど、頑張るのよ」
「う、うん……」
さすがに三回目だし、慣れてはいないとは言っても、１回目２回目ほどにひどく辛いというわけではない。
とは言え、それは１回目と２回目の間隔から周期をつかめてたことによる心の準備が出来ていたという側面が大きいもので、痛みそのものとかは、まず間違いなく今後も……例えば平気になるとかは無理だけど。

「ごちそうさまでした」
「優子、ご飯終わったらリビングの掃除しなさーい」
「えー」
生理中くらい勘弁して欲しいと思う。２回目もそうだったし。
「こういう日に家事をすることも大事なのよ」
「はーい……」
久々に一日ゆっくり過ごせる。
そう思っていた矢先に、また家事の指示だ。
２回目の生理の時もそうだったけど、生理の時にきちんと家事ができるように訓練しておかないと、旦那さんに嫌われちゃうそうだ。
生理中に家事をしていて思う。やっぱり女の子も女の子でとても大変だ。
……男よりはマシかもしれないけど。
掃除が終わったら、昨日見たくお人形遊びをしよう。少しは気が紛れるだろうし、少女としても磨きがかかると思う。
あ、それから学校の宿題も、下手には動けないこの時期にやればいいかもしれないのでしておこう。
お人形さん遊びをしていると、旅行会社の社長が見えて謝罪に来

た。でもあたしは体調不良を理由に拒否してしまった。
ただし、母さんには体調が悪いのは旅行会社の責任ではないことを超がつくくらい強調してもらい、謝罪は素直に受け取ること。更に手厚い保証をしてくれたことへのお礼を伝えてもらった。
野洲の個人的な暴走だし、あんまり会社には悪感情を抱けないのも原因かもしれない。

# 補講　前編

生理の辛い日々も終わり、恵美ちゃんが決勝で6―0，6―1の圧倒的な実力で女子シングルスのインターハイを制覇した2日後、体育の補講の日がやってきた。

生理の時に宿題で紛らわせるという作戦は、意外と功を奏した。

夏休みの宿題を多く終わらせることが出来、しかも今日のお泊り会で更に終わらせる事ができるだろう。

とは言え、次の生理まではもちろんある程度ある。1ヶ月より少し後ろにずれる感じになりそうだ。

でもその前に、体育の先生に言われた通りに、補講に出かけなきゃいけない。

今年の夏休み中に制服を着るのもこれが最初で最後だろう。

ともあれ、体操着を持って学校へと行く。

定期券は夏休み中に切れているため、ＩＣカードをチャージする。何だかとても新鮮な気分だ。

車内はいつもたくさんいる私達の学校の制服もほぼなく、不慣れな雰囲気になる。

「ねえねえ、あの子かわいいよね」

「うんうん、俺好みって感じ」

「胸もでけえしエロいよなあ……」

「制服も似合ってて可愛いし、何よりリボンがキュートだよな」

いつもはいない乗客がいるのか、それとも空いているのか、久々にこんな噂話も聞く。

外面で褒めてくれるのには慣れたけど、それでもやっぱり嬉しい気持ちはある。

林間学校の時も、あたしは一貫して女の子として扱ってもらえた。

自分のクラスだけではなく、他のクラスの子たちも、少女漫画を読むという作戦が功を奏して、「元男」という「意識」を「知識」に追い

やることができたと思う。
それでも、潜在意識として、他のクラスではまだ「優一」の印象が残ってしまっているかもしれない。
でもそれも、性格や感性まで女の子になりきれば、男の子を好きになれれば、きっと周りの潜在意識も変わってくるはず。
電車を降りる。いつもなら一斉に降りる小谷学園の制服も殆どまばら。部活の朝練をする人はもっと早く出るとあって、中途半端な時間帯だ。
跨線橋を渡り、改札に出て通学路へ。
通学路も人はまばらで、学校の近くに来ると、部活の練習をしている人たちが見て取れた。
テニスコートではやはり恵美ちゃんが練習している。
……おや？　恵美ちゃん苦戦しているな？　と思って奥を見たら対戦相手が男子だった。
いくら全国一の実力を持つ恵美ちゃんでも、男が相手では中々セットを取れないらしい。
まあそうだろう。テニスの場合男女差が大きくて、高校生男子といえどインターハイに出場出来る実力があれば女子に混じったらプロ選手のレベルらしいからな。
ってサッカーもそうだっけ？　その辺の高校男子サッカー部のレベルは女子の最上位より高いって聞いたこともあるし……うちは例外だろうけど。
ともあれ、正門の下駄箱に来る。
まずは職員室に立ち寄る事になっている。
コンコン
「失礼しまーす」
職員室の扉をノックして開ける。
「お、石山か。よく来た。悪いな来てもらって」
私が体育の先生の名前を呼ぶ前に、向こうから声をかけてきた。
既にジャージの姿だ。
「い、いえ。あたしの成績が悪いのがいけないんです」

「そう言ってもらえるとこっちも気が楽だよ。とりあえず、こっちも準備をするから体育館に来てくれないかな……あー、更衣室だけど今日は他のクラスの子はいないから職員室のを使ってくれてかまわないよ。ここから一番近いからね」
「は、はい……」
あまりいい思い出がない場所だけど、まあ今回はしょうがない。
職員室の更衣室に入り、鍵を締め、使用中であることを示す。
中に入るとやっぱりあの時のことを思い出してしまう。
小野先生の意向で、男子とも女子とも引き離され、一人寂しく着替えた体育。
幸い、その経験は2回で済んだ。3回目の体育は生理で見学だったし、4回目以降は女子のみんながあたしを受け入れてくれたから。
いつもの着替えの方法でもいいんだけど、今回は更衣室一人なのでちょっとだけ楽をしよう。
スカートとブラウスを脱いで下着姿に。そしてそのまま体操着を穿く。
これだとかなり短縮できるし意識も必要ないけど、やっぱりみんなで着替えるときは止めたほうがいい方法だ。誰も居ないからこそしていい方法とも言えるわけだな。
ロッカーに制服とバッグを入れて、鍵をかけて更衣室を出る。
「お、石山か。よし、鍵は預かっておくぞ。じゃあ体育館に行こうか」
「はい」
鍵を体育の先生に渡して並んで体育館へ。
やはり夏休み中とあって、人通りはまばらだ。
体育の補講はあたしの他にも何人かいるが、いずれも生徒先生それぞれの都合から別の日・別の時間に行われる。
特に欠席しやすい女子は補講になりやすい。
ちなみに、前期のあたしは生理で1回見学しただけで、特に授業態度が悪いというわけではない。普通なら補講にはならないのだが……あまりにも成績があんまりということで補講になった。
「本当に、異例のことで申し訳ない」

「いえ、いいんです」
「補講と言っても、体力テストも兼ねてあるんだ。だからやることはほとんどすべて体力テストだと思ってくれ」
「……ええ。優一の頃の成績はもう使えないですから」
「そうだなあ。男だった時の石山の成績はとても良かったし、乱れてる生徒によく檄を飛ばしてくれていたんだがなあ……」
　体育の先生が男だった頃のあたしを懐かしむ。胸がズキリと痛む。
「あ、あたし！　もう男には戻りたくないです！」
　少し強く主張する。
「そうだったな、すまない……だが、男だった頃の石山を懐かしんでる人もいるんだってこと、それは伝えたかったんだ」
「……そんなこと言われたの、初めてよ」
「そうか……知っていると思うが、私は顧問をしている部活では鬼コーチとして知られているんですよ。とは言え……部活でもない授業ではそういうのは封印しているんだ。授業のレベルだと生徒がついてこないからね」
「……う、うん」
「まあ確かに、石山優一がやってたやり方は乱暴ではあったが……高校生なんて本来ならああでもしないと秩序よくなんて難しいもんだ。先生が出来なくなった汚れ仕事をしてくれたって今では思っとるよ」
「でも、あたしはそれが……」
「わかってるよ。石山がそう言う自分が嫌で、ＴＳ病になってからは必死で過去を消そうとしたことくらいな」
　あたしは驚きの気持ちしか無かった。
「優一」の時代は、誰からも嫌われる存在だとばかり思っていたし、現にクラスではそうだった。だから、高月くんや篠原くんにいじめられていた。
　唯一桂子ちゃんと彼女のグループだった女子だけは、必要悪的認識だったくらいだ。
　体育の先生も、おそらく理由は違うけど、「必要悪」と思っていたのかもしれない。

でも、そう言う人がいたとして、仮に優一に戻って欲しいという人がいたとしても、あたしは、優子として生きてく。その決心だけは、絶対に曲げないつもり。

来月初めには、女の子になって3ヶ月目に入る。3ヶ月、まだまだ短い。

でも日数にすればもうすぐ１００日にもなる。そう考えると意外と早い。姿や格好、態度や言葉遣い以外の部分で女の子になるにはまだまだだ。

そんなことを考えながら体育の先生に誘導され、体育館に来た。

「よし、じゃあ準備するからその間に準備体操をして待っててくれ」

「はーい」

体育の先生が奥の控え室の方に消えていく。あそこは確か……球技大会のときに篠原くんが隠れてた場所。

今思えば、篠原くんが「また一つ罪を重ねてしまった」の意味がわかる。

それはきっと、あの時泣いていたあたしを見て、弱りきったあたしを見て、好きになってしまったということ。

かつていじめて、傷つけてしまった相手を、無責任にも好きになってしまったことへの罪悪感。

篠原くんは、きっと「俺には優子ちゃんを好きになる資格はない」と思って、必死で気持ちを押し殺そうとした、それが出来ずに壁に頭を打ち付けていたんだ。

それはきっと、永原先生の初恋と同じ。

自分にそんな資格はないと思っていたからこその、余計に辛い恋のお話。

あたしは少女漫画をそれなりに読み、そうしたことで悩む漫画の女の子たちのことも見てきた。小学校の時、どんくさくていじめていた男の子を、高校に入って好きになるお話も読んだ。

もちろん漫画の中だから、最後は過去を乗り越えてハッピーエンドだけど、現実は中々うまくいかないものだ。

永原先生はともかく、あたしと篠原くんの恋だって、きっとあたしが許し続けなければ、実ることもなかった。
いや、そもそも文化祭の実行委員のくじ引きの時に、篠原くんが選ばれなければ、さくらちゃんが勇気を出してあたしを実行委員にするように勧めなければ、あたしは多分、ずっと篠原くんの思いを単純な罪悪感だとしか見られなくて、今みたいにはなっていないはずだ。
もちろん、まだ正式には「友達」だ。ここからは、あたしたちが頑張らないといけない。

そんなことを考えて準備体操をしていると、体育の先生が幾つか機材を出してきた。
ストップウォッチや握力計の他、おそらく２０メートルシャトルラン用のテープレコーダーもある。
「あー、まだだ。とりあえず全部出させてくれ」
小さく頷くと、体育の先生が再び奥の控え室の方に走る。
準備運動もまだ全て終わっていないので、毎日の授業で何を習ったかを思い出し、順調に準備していく。
しばらくして、体育の先生が残りの機材を抱えて戻ってくる。
本来何回かに分けるものを一日でやるためか、酸素ボンベや水などもある。
「よし、これで全部だ。補講と言ってもほとんど全てが４月にやった体力テストが中心になる。まずは握力からだ」
体育の先生が握力計を差し出す。
やり方はわかっているので、早速開始する。
「ふんっ！　あーーーー!!!」
「ふう……どうですか？」
「うーん、１３キロかあ……」
やっぱり成績は悪い。
「お、男だった時、４倍はありましたよね？」
「あ、ああ……そうだったなぁ……」
体育の先生が、おそらくあたしが男だった頃の成績表を見て言う。

ともあれ、時間もあまりないので続いて上体起こし。先生が足を支えながら器用にストップウォッチを扱う。
「よーい、はじめ！」
「んー！　んー！　はぁ……はぁ……」
胸が大きいせいもあるけど、上体を持ち上げるだけで物凄い疲れて苦労する。1回目と2回目はまだ良かったけど、それ以降は地獄だった。とにかく全然身体が上がらない。
「そこまで、4回っと……」
「ひどい……」
男の時は1秒間に1回は余裕だったのに……

「よし、次は長座体前屈だ。これが終わったら一旦休憩にするぞ」
柔軟性のテストだし、これはそこまで疲れないはず。
壁際に移動し、体育の先生が計測紙をセット。
「よし、はじめ！」
「すぅーーーーーふぅーーーーー」
少しずつ息を吐きながら、身体を前に倒す。お、やっぱりこれはいいぞ。
身体能力は軒並み落ちていたが、柔軟性は以前より男の頃よりは良くなっていた自覚があったものだ。
「お、石山！　これはすごいぞ、48センチ、平均以上だ！」
「え!?　本当ですか先生!?」
「ああ、石山の普段の成績が壊滅的ということを鑑みれば、素晴らしいの一言だ」
「あ、ありがとうございます！」
「それに……石山優一だった頃の記録よりも3センチ伸びているぞ！」
「うわーい！」
あたしは両手をバンザイして無邪気に喜ぶ。予想できたことでも、やっぱり普段ダメな体育で褒められることの嬉しさは、「女の子らしい」と褒めてもらえるのと同じくらい嬉しい。

「よし、疲れただろうから１０分休憩だ。そしたら反復横跳びを開始するぞ。先生は準備しているからちょっと待っててくれ」
休憩中、ゆっくりと休む。よく見ると体育の先生が巻き尺とテープを持っている。
なるほど、あれで反復横跳びをするのか。
「よし、時間は２０秒だ。はじめっ！」
「はぁ、はぁ、ふう、ふう……はぁ、はぁ、ふう、ふう……」
体育の先生の号令とともに、ラインを超える。ちゃんと超えてないとポイントにならないから特に意識する。
２０秒という短い時間もあって、息切れもそこまで激しくならなかった。
「よし３０点だ」
「はは、優一の半分以下かあ……」
そうだよね、今のか弱い女の子のあたしが、昔の強い男だった自分に勝てるわけないもの。
「さ、少し休憩したら、次は２０メートルシャトルランだ」
体育の先生がやはり２０メートルを計測し、ラインを２つ引く。
「これが終わったら次の５０メートル走に向けて昼の休憩に入るぞ」
「はいっ」
「……よし！　じゃあ始めるぞ」
体育の先生がカセットの再生ボタンを押す。
女性の声で、だんだん早くなっていくことを示してくれる。
そして開始。
こちらの方は、最初は歩くような感じでも大丈夫だということを知っているため、最初はとにかくゆっくりを意識。
１０回でもまだ息は大丈夫。
１４回目、ここから少し早くなるので、小走りにする。
「はぁ……はぁ……」
でもジリ貧だ。小走りでも疲れるし、休む暇がなく、何より折り返すのが辛い。

「だ……だめだあ！」
２２回目から更に早くなる。全力で走ろうとするが、息が切れるとすぐにだめになってしまう。
「よし、そこまで。２７回だ」
「ぜぇ……ぜぇ……はぁ……はぁ……」
やはりこの種目は辛い。とにかく果てしないからだ。
それでも、この種目は男の頃は大の得意種目だった。
４月の体力テストの時には篠原くんと最後まで争ってて１３０回目で振り切って勝ったくらいだったのに。
「そういえば、優一だった時って？」
「ああ、１５０回位だったな。運動部でもないのにそれだけの記録出せるのはすごいことだよ……」
「……というより、体力テストの時は無所属のあたしが運動部に勝ちまくっちゃってて結構気まずかったかなあ」
「石山も部活に入ればよかったのに。そしたら大学の頃には２４７回出来たかも知れねえぞ」
「先生、高校２年になってＴＳ病になるから無理ですよ」
「おっと、そうだったな」
それに、仮に運動部に入っていたら、こんなひどい運動神経になったら、男に戻りたいと思うようになってしまい、そして自殺の道一直線だった気がする。
「よし、ともあれ昼食休憩だ。その前に疲れたろ？　マッサージするか？」
「あ、うん」
「よし、うつ伏せになってくれ」
「う、うん……」
野洲のこともあってお尻を触られないかちょっと警戒するが、体育の先生はふくらはぎをマッサージしてくれた。
「よし、どうだ？」
「うん、そこ気持ちいいです」
「午後は外に出て５０メートル走からだ。ちゃんとほぐせよ」

「うん。ところで持久走は？」
「ああ、今回は省略する。シャトルランで代用だよ」
「分かりました。あ、先生、足もいいんですけど……肩も揉んでくれます？」
「え？　肩？」
　困惑する体育の先生を尻目に、あぐらになりやや前かがみになって肩を出す。
　体育の先生が肩をもみ始める。
「んっんー！　やっぱり気持ちいい……」
「おわっ、石山、若いのにこんなこって大丈夫なのか？」
「あ、あはは。女の子になってからずっと肩こりが酷くて……」
「んー……まあ確かに無理も無いか……よし！　午後は校庭に集合だ」
　体育の先生が後片付けをする。
　午後の体育の補講の後は、みんなとのお泊まり会も予定されている。今から楽しみになってきた。

# 補講　後編

まずは昼食を取りに学食へ向かう前に一旦更衣室に立ち寄り財布だけを取る。
体育の補講が午後まで続くので、体操着のまま昼休みを過ごす。
実は女の子になってからだけではなく、男だった頃も含め、体操着で学校をあちこち歩き回るのは実は去年の体育祭以来だ。
制服だと胸などは目立たなくなるけど、それでも私の胸は隠しきれず、かなり目立っていた。
それが体操着ともなると、本当にでかい。とにかく目立つ。目立つだけではなくボヨンボヨンと揺れることもあって、男子たちの視線を一気に釘付けにすることもある。
あたしがＴＳ病だったから、男子に理解があってよかったけど、なるほど胸の大きい女性が猫背になったりコンプレックスになったりしちゃうのも頷ける。
お昼時になると午前の部活練習で疲れた他の生徒達も学食へと向かっている。
そんな中で、男女様々な部活で様々な集団がいる。

「おいおい、あれ体操着の石山か？」
「間違いねえぜ。あのでけえ胸に長い黒髪……かわいい顔。石山優子だぜ」
「なあ、あいつ部活なんか入ってたっけ？」
「どうだろう？　でもよ、やっぱすげえよな」
「うんうん、俺さ、あいつ彼女にしてえと思うんだよ」
「お、おいおい。本気かよお前!?」
「だってよ……うちの後輩の話によればあいつ少女漫画とかお人形遊びが好きらしいんだぜ」
「冗談だろ!?　おいおい、あの乱暴の塊みたいな石山が……例によって少女漫画とお人形遊びって……」
「それどころか、私服もスカートが多いって話らしいぞ」

「一生懸命に女の子らしく振る舞っているって噂本当なんだよな」
「むしろ変わるべきなのは俺らかも知れねえぜ」
「だから、俺は石山優子ちゃんを純粋にかわいい女の子だと思ってるんだ。だからこそ、男として、俺はあいつを彼女にしたいって思ってるんだよ」

3年生の運動部の集団があたしのことを話している。
でも、もうあたし、まだ友達だけど……好きな人ができちゃったから……悪いけど他の人を探して欲しい。あたしは心の中でそう思った。
夏休みの学食に来る。体操着がちょっと非日常だ。
今日の学食は野菜ラーメンにする。生理中と生理終了直後はとにかく野菜、特にほうれん草や人参などを食べたくなる。今日は特に直後と言うほどではないが、何となく野菜を食べたい気分だった。
女の子になってちょっと貧血気味になることが多くなったのかもしれない。
学食を見ると、多くの生徒が体操着のままだ。中にはその競技用のウェアの生徒もいる。

「お！　優子じゃねえか！」
「あ、恵美ちゃん！」
恵美ちゃんが話しかけてきたので隣に座らせてもらう。
恵美ちゃんはあたしの知らない顔の女の子を連れていた。あたしは多分女子テニス部の仲間だろうと思った。
「どうしたんだ？　体操着なんか着て」
「ああ、うん。今日が体育の補講なのよ」
「あ、そうだったな。すまねえすっかり忘れてた」
「……そう言えば恵美ちゃんもお泊まり会来るんだったっけ？」
「おう」
「それと……恵美ちゃんってテニス部だよね？」
「それがどうした？」

「うん、テニスって体操着なの？」
「ああ、テニスウェア？　あれは大会とその前に着るだけだよ」
「そ、そうなんだ」
「うんうん」
　テニス部の他の女子たちも同調してくる。よく見ると林間学校で見たような顔も見受けられる。
「田村先輩、この人が石山先輩なの？」
「おう、そうだぜ」
「は、はじめまして」
　1年生の女子が挨拶をしてくる。
「こちらこそはじめまして。あたしが恵美ちゃんのクラスメイトの石山優子です」
　お互いに自己紹介を交わし、話す。
　1年生の間でも、「今は可愛らしいけど中身は乱暴な性格だった先輩」と認識されているそうだ。
　だけど、1年生の子も、話すうちに「田村先輩より女の子らしい」と褒めてくれる。
　ただ、そんな中でも別の女子が「でも最近は恵美ちゃんも女の子らしさに気を配るようになった」と指摘していた。
　それに対して恵美ちゃんは、「女の子になってまだ時間が経ってない優子にどんどん女子力で差をつけられてしまってて流石にまずいと思った」と返答した。林間学校でも同じことを言っていたっけ？
「そんじゃ、あたいらは午後の練習があるから。またな」
「うん、午後もがんばってね」
「おうよ！」
　私はまだ食べてる途中だけど、恵美ちゃんたちはコンディショニングのこともあって、早速部活に向かった。
　本当に熱心だなあと思った。
　ともあれ、あたしもしばらくして食べ終わったので、午後の体育の補講に向けて準備をする。

財布をもう一度更衣室のロッカーに入れて、校庭へと向かった。
校庭は陸上部が普段使用しているが、陸上部自体小谷学園では不人気の部活なので、補講をしても邪魔にはならない。
ふと見ると、体育の先生が白線を付けていた。
「よし、午後は５０メートル走と立ち幅跳び、それからハンドボール投げだ……どれからやる？」
「うーん、じゃあハンドボールから」
「よしわかった。早速始めよう、こっちだ」
体育の先生が校庭の真ん中へ案内してくれる。
「はい、これがハンドボールだ。合図があったら投げてくれ」
「う、うん……」
正直ハンドボールがずしりと重い。４月にやったときとは全然違う。
所定の位置につき、助走をつけて投げる。
「やああっ！」
かわいい声に似合わない、妙に気合のこもった掛け声とともに投げるが、全然伸びてない。
体育の先生が巻き尺で図る。もちろん片方は持つ。
「６メートル４８センチ」
体育の先生が冷静に告げる。
「はぁ……はぁ……」
「まあ女子ならこんなもんだ。男女差が最も出る分野だからな」
「にしたって４月は３３メートルだったのに……」
いくら理屈では「もう女の子だから弱くてもいい」と分かっていても、流石にここまで記録が激減するとショックも隠せない。
もう一度投げてみたが、結果は一回目より悪く、記録としては一回目を採用する。
「ともあれ少し休んだら立ち幅跳びにするぞ。５０メートル走は疲れるから最後がいいだろ？」

「う、うん……」
「よし、ハンドボールを片付けてくるから砂場に来てくれ」
体育の先生がメジャーとハンドボールとストップウォッチを持ち、体育倉庫の方向へ消える。
その間にゆっくり歩いて砂場へ行く。もちろん、陸上部の邪魔をしないように、だ。
陸上部は走り込みに入っている。中には垂直跳びや走り高跳びに講じるものもいる。
でもだいたいは趣味のノリで、気合を入れた掛け声なんかもほとんどなく、そこまで追い込んでいるという感じではない。
小谷学園は自由な校風だから、体育会系との相性も悪いのかもしれない。
ともあれ、体育の先生がメジャーを持ってこちらに向かってきた。
立ち幅跳びの開始だ。
「よし、初めていいぞ！」
「はーい！」
いち、にの……さんっ！
ズシャッ……
腕の反動も利用し、砂場に向けて一気に飛ぶ。飛んだつもりだったんだけど……
「1メートル2センチ」
「せ、先生この記録……」
「正直言うとかなり悪い」
男の頃は2メートル半だったのを考えればやはり深刻ではある。
というか、優一だった頃の立ち幅跳びに、優子としての走り幅跳びでさえ負けていたことに今気付いた。
「先生、よく考えたら……あたし、走っても2メートル25センチだったような……」
「あー確かそんな感じだったな。石山が4月に出した立ち幅跳びの記録が2メートル49だからなあ……」
「うーん、でもまあ……あたし女の子だし……」

「女の子だとしてもこの記録はまずいぞ」
「あ、あはは……女の子だし弱くてもいいかなあなんて……」
「むむっ、それはいけないぞ。身体があまりに不健全だと心も荒むぞ」
「でも先生、あたし老化しないから……それを考えたら運動神経の悪さを差し引いても超健全だと思いますよ」
「むむむっ……」
　結構痛い所を突いてしまったか。
「……まあ、それを差し引いても、だ。石山は体育の成績が悪いことで不便や迷惑をかけたことがあるんじゃないか？」
「う、うん……」
　球技大会の時にはあまりにもひどいあたしの運動神経に対して、特別ルールのハンデを付けられたし、林間学校では登山や、花火師さんたちの手伝いで、篠原くんに助けてもらっちゃった。

「……石山は、もしかして自分は女だから困ったときは強い男に助けてもらってもしょうがないって考えてたか？」
「う、うん……だって……」
「まあ気持ちは分かるし、男もそう言うので助けたい本能はあるけどな。あんまりに情けなくするのも考えものだぞ」
「……はーい」
「ま、とにかく今は５０メートル走るぞ。陸上部の邪魔にならないようにな！」
「はい」

　体育の先生が所定の位置につくように促す。
　体育の先生の所がゴールだ。
「位置について……よーい……どんっ！」
「はあああああああ!!!!」
　体育の先生の掛け声とともに一気に声を出して全力疾走する。遅いながらも精一杯だ。
「はぁ、はぁ、ふぅ、ふぅ……」

でも真ん中を過ぎたあたりで急にペースが落ちる。走り幅跳びの時も思ったけど、全力疾走が３０メートルと持たない。
「１１秒５！」
後半はほぼバテて急減速してしまい、１１秒５という記録になった。男だった時は７秒をギリギリ切っていたことを考えれば、４秒半以上も遅くなった。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
あまりの疲れっぷりにトラックの脇に倒れ込んで休む。
「……石山、大丈夫か？　何、気を落とすこともない。さ、これで体力テストも全部終わりだ。補講はここまでにする。先生は先に片付けて作業しておくから、休み終わったら着替えて職員室まで来てくれ」
「は……はい……ふぅ……」
体育の先生が後片付けを終え、職員室に戻る間も、ずっと息を整理する。
しばらくして立ち上がり教室へ向かう。陸上部はあたしのことは気にも留めず練習を続ける。
まあ、あれこれ陰口叩かれるよりはいいかな。
十分に休んだら、職員室へ戻ろうとする。
途中、ある部活の休憩時間と思しき集団が前に来る。

「ねえ、あのリボン、あのおっぱいに黒髪……石山先輩じゃね？」
「あ、本当だ！　やっべえ、近くで見るとずっと可愛いよなあ……」
「ていうか、石山先輩のおっぱいってあんなに大きかったのかよ……」
「ちょ、お前聞こえてたらどうするんだよ!?」
「だってよお、あれは反則だろ……石山先輩に挟まれてえと思わねえのか？」
「だから、聞こえてたら俺たち嫌われるだろ？」
バッチリ聞こえているし、よしっ！
「聞こえてるわよ。あたしの胸が気になる？」
わざと腕を胸の下に組む。こうすることであざとく見えずに胸を強調できる。

男子集団の目線は全員胸に行っている。
「わわっ……す、すみません」
「気にしなくていいのよ。本能だもんね本能。今もジロジロ見てるでしょ？」
「あああ、す、すみません！」
「じゃあ、あたしは職員室だから……あたしが可愛いのはいいけど、ちゃんと部活頑張るのよ」
「は、はい先輩！」
「よーし、午後も頑張るぞー！」
「お前ホント単純だな」
「うるせえ――」
1年生の男子たちを元気付けたところで職員室へ進む。
もちろん、職員室と言っても、まず着替える必要がある。目標はその近くの更衣室だ。

職員室近くの更衣室に戻り鍵をかける。
軽くタオルで汗を拭き、いつもならここでスカートを一旦穿くんだけど、今回は体操着をまず全部脱いでその後スカートと制服を穿く。
男子の時のような着替え方。もちろん理屈では良くないことはわかっているけど誰も居ないし来ないと分かっている密室くらいでは気を抜いてもいいだろう。
もちろん、これが家の中のように誰かが入ってくる可能性もある場所じゃダメだけどね。
実際カリキュラムの時も気が緩んだせいで一回おしおきがあったし。
ともあれ制服に着替え終わったらロッカーのドアにある鏡を見て身だしなみをチェックする。
……おっとちょっとリボンが曲がっている。
……これでよしっ。
忘れ物がないかどうか確認してから、更衣室を出る。
すると、既に体育の先生が職員室前で立っていた。

「お、石山か。これを渡しておく。とりあえずさっきも言ったようにこれで補講は全部終了だ。石山は他の科目の成績もいいらしいし大丈夫、留年にはならないよ」
「あ、ありがとうございます……」
「それじゃあ、気をつけて帰れよ」
「はーい」
あたしは携帯電話を確認する。
すると1件のメールを発見した。
届いていたのは桂子ちゃんからのメールで、「優子、体育の補講が終わったら天文部に来てくれる？」だ。
メールで返信してもいいけど天文部に行くまでに何か事件が起きるとも思えないし、そのまま進む。
コンコン
「はーい！　入っていいですわよー」
「失礼します」
一瞬、誰の声だったっけ？　と思いつつ、坂田部長の声だったこと思い出す。
「あ、優子ちゃんいらっしゃい。ごめんね急に呼びつけて」
桂子ちゃんが応対する。
「ああ、うん。それはいいんだけど……何だか坂田部長が懐かしくて」
「そうねえ、林間学校とかもありましたし、久しぶりですわね」
「坂田部長、このミニチュア……」
「ええ、石山さんや木ノ本さんが不在の間、私の方で少し作っておきました」
「でも、坂田部長は受験とかは大丈夫なんですか？」
「ふふっ、大丈夫よ。こう見えて成績は上向いているのですわ」
まあ、坂田部長の心配はしなくていいか。
「ところで、石山さん、木ノ本さんから聞きましたけど林間学校中大変だったんですって？」
「う、うん……添乗員がナンパしてきて……それで……」
「無理には聞きませんわ」

「で、でも永原先生や篠原くんと一緒に観光もできたわ」
「え？　優子ちゃん何処言ってたの？」
「……永原先生の故郷よ」
「故郷って？」
「上田からバスで行くと昔の真田家が治めていた集落があったのよ」
「そうなんだ」
「永原先生、真田幸村って言い方が大嫌いだったのよ」
「え？　どうして？」
「うーん、畏れ多いからって言ってたわね。確かに本来は真田信繁らしいんだけど……永原先生の場合、本物の家臣だったわけだし、あたしたちとは見方が違うのよ」
「石山さん、木ノ本さん。永原先生のことは私も気になりますけど、今はそれよりミニチュア作りのことですわ」
「そ、そうね……」
　坂田部長の声で、あたしはミニチュアに視野を移す。
「それで……どんな感じですか？」
「とりあえず、一番小さな系外惑星や白色矮星を作っておきましたわ。後は恒星を作って位置関係を調べるだけですわ」
「えっと、あたしはシリウスを作ればいいのかな？」
「うん、私は赤色矮星を、坂田部長は――」
「私は近傍恒星の位置関係を切り取った立体図を探しますわ……もしなければ私が作りますわ」
「お願いします」
　林間学校よりも前、数週間ぶりにシリウス作りの続きだ。
　白い綿を太陽のミニチュアと比較しながら作っていく。

　よしっ……こんなものかな？
「け、桂子ちゃん」
「ん？」
「シリウス……これでいいかな？」
「どれどれ？　うーん……」

桂子ちゃんが太陽とシリウスのミニチュアをメジャーで何度も測る。
すごいこだわりだ。
「大きさは後もうほんのちょっとだけ大きくしてくれる？　１センチ位よ」
「う、うん」
「それが終わったら、もう一度見せてくれる？」
「う、うん……」
桂子ちゃんに言われた通り、ほんの少しだけ素材を加えてシリウスを大きくする。
そしてもう一度持ってきて、今度はＯＫをもらった。
「じゃあ次はプロキオンを作ってくれる？」
プロキオン、これも太陽より大きい恒星で、シリウスより更に大きいけど、明るさはシリウスより暗い恒星だという。
ちなみに、この星もシリウスと同じく「白色矮星」の伴星を持つらしい。
「そういえば、白色矮星ってこんなに小さいの？」
白色矮星は、殆ど点みたいな大きさで、球体というよりは「粒」のミニチュアだ。
「うん、地球と同じくらいの大きさに、太陽と同じくらいの重さがあるのよ」
「というと？」
「手の上に車が乗っかっているようなものよ」
「そ、想像できない……」
「実は私もよ……」
桂子ちゃんが珍しく宇宙で弱音を吐く。
プロキオンはまず、大雑把に外側だけを作る。
夏休み中とあって下校時刻もやや早い。他の部活は練習しているけど、天文部はそこまでやらないらしい。
帰り道、桂子ちゃんと並んで帰る。
「あたしも着替えたら優子ちゃんの家に行くから、部屋とかもし散ら

かってたら片付けておいてね」
「集合時間とかは？」
「それはお楽しみよ。私含めて3人で行くから待っててね」
「う、うん……」
あたしと桂子ちゃんは、他愛もない話をしつつ、最寄り駅からいつもの分かれ道で分かれた。
あたしはお泊り会に備え、制服から私服に着替える。
今日は水色のワンピース、可愛らしいミニスカートだ。

# かしまし娘たちのお泊まり会　前編

ピンポーン
「はーい！」
突然、家の呼び鈴が鳴る。
私より早く、母さんが応答する。
「あ、いらっしゃーい！　優子ー！　お友達来たわよー！」
「はーい！」
母さんの声であたしも急いで玄関まで行く。
「こんにちはー優子ちゃん！」
「遊びに来たぜ！」
「こ、こんにちは……優子さん……」
「こんにちは桂子ちゃん、恵美ちゃん、さくらちゃん」
あたしの家のお泊り会に参加してくれたのは桂子ちゃんに恵美ちゃんにさくらちゃんだった。
「いらっしゃい、歓迎するわね」
「へえ、この人が優子のおふくろか」
「あんまり似てませんわね……」
「さ、さくらちゃん……」
「まあ、後天的に変わったからねえ……」
「あ、でもちょっと顔の輪郭とか似てる気がするよ」
桂子ちゃんがフォローする。
「まあとにかく、上がってくれるかしら？　今ジュースとお菓子出しますからね」
母さんが2階のリビングへと走って消える。
「お、お邪魔します……」
「お邪魔するぜ！」
「お邪魔します。へえ、優子ちゃんの家ってこうなってたんだー」
3者3様に「お邪魔します」をする。
「部屋に案内するわね」
スカートはミニだけど、家の階段では見えないようになっている。

思いっきり覗かれたらダメだけど。
ともあれ、あたしは自分の部屋の前につく。
「ここがあたしの部屋よ」
「ほほう、楽しみだぜ」
「うんうん」
大人しめなさくらちゃんは黙っているけど、桂子ちゃんと恵美ちゃんが楽しみにしている。
「じゃあ開けるわね」
ガチャッ
「「お邪魔しまーす」」
3人を先に部屋に通す、恵美ちゃんやさくらちゃんはもちろん、幼馴染の桂子ちゃんも部屋に入れたことがない。
「ほー、優子の部屋ってこんななんだ」
「意外とシンプルですね……」
恵美ちゃんとさくらちゃんが話す。
一方で桂子ちゃんは難しい顔をしている。
「桂子ちゃんどうしたの？」
「うーん、何か女の子の部屋って感じがしないのよ」
「む、たしかにそう言われてみれば……」
「そんな気もしますねえ……」
恵美ちゃんとさくらちゃんまで同調している。
「そ、そんな三人とも……」
正直に言われるとショックな言葉だ。
「きっと優子ちゃんがまだ優一だった頃からあんまり変わってないからだと思うのよ」
「んー……それは良くないですねえ……」
桂子ちゃんが指摘し、さくらちゃんが同意する。
「あ、でも本棚……ここは女の子の部屋ですよ……」
「お、本当だ！　少女漫画がずらりと並んでるな」
カリキュラムで与えられた少女漫画と女性誌だ。もう殆ど読み尽くしてしまったが、まだ未読の本もある。

「うーん、何ていうか……今の部屋の雰囲気だとむしろこの少女漫画が浮いている気もするのよねえ……」
「ううむ、桂子の言う通り、確かにそんな気もするなあ……」
本棚は女性も使っているだろうシンプルな木の棚ではあり、少女漫画などの女性向け中心だが部屋全体からすると浮いているのかもしれない。
「あ！　でも見てください、机の上にあるこのお人形……」
「ああ、これ優子ちゃんが林間学校で買った……お？　早速遊んだの？」
桂子ちゃんが可愛らしい服を着せられている着せ替え人形を見て言う。
「う、うん……せっかく買ったからお人形さん遊び始めてみたけど……あまり衣装が多くないからちょっと組み合わせも切れてきて……」
「ほほう、優子はお人形が好きなのか？」
「そ、そりゃあ……あたし女の子だし……」
「んー、ぬいぐるみとかカーテンの色とか工夫できないかなあ……」
桂子ちゃんが思案している。
「うーん、やっぱ部屋も女の子っぽくした方がいいかなあ……」
「うん、優子ちゃんが今一歩女の子になれないのは、こういうところにも原因があると思うのよ」
「そう言う桂子、お前の部屋はどうなんだ？」
「私？　うーん、少なくともカーテンはピンクだし、布団ベッドも赤やピンクにしてあるわね。後……机周りももう少し整理されているわね」
「そう言えば、机周りもちょっと乱雑してますねえ……」
「優子ちゃん、部屋の乱れは心の乱れよ。女の子らしくない部屋にいるから、深い感性で女の子になりきれないのよ」
「ううう……反省します……」
ど真ん中直球の正論に、反論ができない。

ガチャッ
「はーい皆さん、お菓子とジュース持ってきたわよ……ってどうしたの難しい顔して」
「ああ、おばさん。優子ちゃんの部屋なんだけど――」
桂子ちゃんがあたしの部屋について、少女漫画とお人形さんくらいしか女の子らしいアイテムがなく、足りないと話す。
カーテンや部屋全体の色調、女の子らしい小物類の不足といったものだ。
一方、話している間に開けられた箪笥の中は女の子そのもので、生理用品もちゃんと箪笥の中に入っていたのは概ね好評価をもらった。
「でもよ、あたいはそこまでこだわってねえぜ」
「そんなんだとまた優子ちゃんに差をつけられるわよ」
「うぐっ……」
桂子ちゃんの非情な言葉が恵美ちゃんをグサッと刺す。
「でもそうねえ……優子の部屋も少し女の子っぽくしないといけないわねー」
「おばさん、明日にもホームセンター行きましょうよ。部屋のカーテンとか入れ替えるだけでも違うと思うのよ」
「そうよねえ……よし、そうしましょ！」
母さんも乗り気になる。
「ええ!? でもお金かかるんじゃ――」
「これも優子のためよ。それとも女の子らしくない部屋がいいの？」
「……」
ぶんぶんと首を大きく横に振る。
「あ、あたしも女の子っぽい部屋にはしたいけど――」
「じゃあ決まりよ。大丈夫、ちょうど例の事件の慰謝料も入ったから」
「ええ!? どうして渡してくれなかったの!?」
正直驚きだ。
「ゴメンゴメン忘れてたのよ」
「ち、痴漢されたのあたしなんだから！」
「分かってるわよ……」

高校生には大金だからと言っても、被害者の慰謝料の使い道くらい被害者が決めるのが筋だ。
「ともあれ、その慰謝料で模様替えするってことだな！」
「う、うん……」
まあ、使いすぎて慰謝料が残らないことはないよね？
「でもそうねえ……女の子らしい部屋にすれば、優子もきっと更に女の子らしくになれると思うわよ」
「でもどんな感じにすればいいの？」
「うーん、やっぱりカーテンをピンク色にしたいわねえ」
「あと、机の上だな。優子はここが殺風景だけど、これを女の子向けのキャラクターとか、あるいは女の子らしいアイテムを置くといいと思うぜ」
「お、女の子向けの作品？　少女漫画雑誌なんかにある？」
「そういえば優子ちゃんって、スマホじゃなかったんだっけ？」
「う、うん……」
「あ、でもでも、据え置き機がありますよ」
「後携帯ゲーム機かあ……うーん」
桂子ちゃんとさくらちゃんが何か考えてる。ちょっと聞いてみよう。
「どうしたの二人とも？」
「ああうん、優子ちゃん……乙女ゲームってやる？」
「ええ!?　乙女ゲーム？」
「優子さん、女の子向けの恋愛ゲームのことです。１８禁のもありますけど、コンシューマーで全年齢として出てるものも多くあります」
「ほうほう、桂子やさくらは？」
「私は持ってないわね」
桂子ちゃんが言う。
「私は……1，2作品ほど……」
「おいおい、そんなんで大丈夫なのか？」
恵美ちゃんの言うことは最もだけど……
「まあまあ、こういうのは有名所を買えば大丈夫よ。確かに優子はお

人形遊びはし始めましたけど、まだまだ女の子の遊びや女の子の趣味に慣れていないもの。そう言うところを補うのもいいわね」
母さんまでノリノリだよ……
まあ、もっともっと女の子らしくするためにも、こういうのは必要だと思う。
「あーでも、乙女ゲームはもう少し後にしようかな」
「そうだな。今は部屋の模様替えだけして、様子見した方がいいぜ」
「えっと、じゃあ明日は……」
「模様替えのために、ホームセンターに行きましょう」
「賛成ー！」
当事者のあたしそっちのけで盛り上がる。まあ女の子らしく部屋が変わるのは嬉しいし、それでもいいんだけど。
「よっしゃ！　明日の予定も決まったし、お菓子食べようぜ！」
「賛成ー！」
みんなでお菓子を食べ始める。母さんは空気を読んで外に出る。
あたしはビスケットを一枚食べる。
「それでさー優子ちゃん。体育の補講ってどんな感じだったの？」
「体力テストだったよ。優一のままじゃ使えないから」
「ほほう、で結果は？」
「うん、散々だったよ。握力とか男の頃の４分の１だったし……」
あたしはそう言いながら体育の先生がくれたプリントを渡す。
「うっわーこれは思ってたよりひでえな……」
「あ、でも前屈がそこそこですよ」
「うん、身体だけは優一より柔らかいのよ」
ちょっとだけ自慢する。
「にしたってこれはないぜこれは。優一だった頃の記録もあんだろ？」
「う……うん……」
あたしは机の奥のファイルにしまってあったプリントを漁る。
名前欄が「石山優一」になっている。嫌な思い出もたくさん詰まったファイルだ。

その中で、体力テストの結果を見つけ、恵美ちゃんたちに見せる。
「こ、これ……」
「うえっ何だこれ……！」
恵美ちゃんが開口一番に驚愕の声を漏らす。
「す、すごいですよ優子さん……」
軒並み7点以上の高得点が並ぶ。特にシャトルランはとんでもない数字だ。
「おいおい、男女の差はあるけどよ……テニス全国一のあたいだってこんな点数出せなかったぜ」
もちろん総合評価も一番いい記録、もっと言えば最高カテゴリーの中でも上位だ。
体力テストの総合点、優一時代は学年でも篠原くんと並んでトップレベルだった。
篠原くん体力テストは凄かったけど、気は弱かったから優一時代のあたしによく怒鳴られていたのよね。
「んでこっちが優子さんの点数ですよね？」
「ほとんど1から2じゃねえか……」
並ぶ数字は悲惨の一言。しかも男としての高得点から、女としての低得点なので、落差は一段と激しい。
「上体起こし……何だよこれ……」
「優子ちゃん、上体起こしの回数。いくらなんでもこれはないわよこれは……」
桂子ちゃんと恵美ちゃんが体力テストの中でも一番悲惨な記録になっている上体起こしについて突っ込む。
「だ、だって、あたし……上半身重くて……」
「……あ、うん……すまん……」
「実際、これ本当に重いのよ。最初の数回でもうヘトヘトだったわよ」
あたしが胸の下で腕を組みながら言う。
「んーまあ、あたいもそんなでかいの付けてたらテニスで全国一にはなれなかっただろうけどよー」
「にしてもこの成績はないですよ優子さん……」

「優一がこんなに凄かったんだから余計にねえ……」
3人がそれぞれ言う。
「で、でも……あたし、もう強くなんかなりたくない！」
強くなったらまた、嫌だった日々に逆戻りしそうだから。弱いままがいい。
「うん、優子、お前の気持ちもわかるぞ。でも限度ってもんがあると思うんだ」
「まあまあ恵美ちゃん。優子ちゃんはまだまだ女の子になるための勉強もあるんだから」
「うーん、そうは言っても……」
「それに、優子ちゃん、本当に優一だった頃はトラウマなのよ」
「あたし、乱暴だった自分を捨てられたのも、弱くなったおかげだって思ってて。だから……力を持ちたくないの」
「んまあそうだけどよお……林間学校だってナンパされただろ。あん時篠原が助けなかったら、今頃大変だったぞ」
「うん……でも……やっぱり男の子に守ってもらいながらがいい……」
「……まあ、確かに優子は複雑な過去があるし、あたいも無理にとは言わねえけど……あたい個人としては、やっぱり最低限の自衛くらいは出来たほうがいいと思うぜ」
「……」
あたしは、「また篠原くんに守られたいからいいもん」と小声でつぶやいた。
「ん？　何か言ったか？」
「優子さん、何か小声で言いました？」
「ああ……うん、ごめん。何でもないよ」
「ふーん、変な優子ちゃん」
今までは「好きな男の子に守られたい」と思うのは女の子の本能だと割り切っていた。
でも、もしかしたら今までの意識のせいかな？　とも思い始めた。
あたしは今までも、「泣いてもいい、弱くてもいい、甘えてもいい、

かっこ悪くたっていい。だって私はもう、女の子なんだから」と考えてきた。
林間学校でも篠原くんには2回守られた。
登山の時と添乗員に乱暴されかけた時。前者はさすがに恥ずかしいと思ったけど、後者は違う。
もちろん、篠原くんに守ってもらえたことはとっても嬉しいけど、自分で何とかするべきだったとか、ましてや助けられたのは情けないことだとはこれっぽっちも思ったことはない。
だって、あたしは女の子の中でも特に弱い女の子で、相手は成人男性。「抵抗して勝て」何て言う方がおかしい。
強い女性として振る舞ってる恵美ちゃんだって、本気になった男相手じゃどうにもならないはずだ。
だから、助けられたことそのものは仕方のないことだと考えている。
「どうしたんですか優子さん……考えこんで……」
「ああ、うん。林間学校の時のことを考えてて」
「おう、あの時のか？」
「うん、やっぱりあの時はあたしは多分例え鍛えててもどうにもならなかったと思う」
「……確かに優子ちゃんの言う通りよね」
「でもよ……」
恵美ちゃんが納得行ってない様子だ。
「……恵美ちゃん、相手は成人男性だよ？　仮にあの時ナンパされたのが恵美ちゃんだったとしても、恵美ちゃんは大の大人の男性相手に素手同士で勝てる？」
「うぐっ……自信ない……」
「だって、あたしも恵美ちゃんも女の子だもん。本気になった男相手には、喧嘩で勝てないのが普通でしょ？」
「うー悔しいけど反論できない……」
「恵美ちゃんが武器にテニスラケットを持っていたとかなら話は別だろうけど、あの時のあたしは丸腰だったのよ。助けを求めるのは当然

じゃない」
「何かこう優子の言ってること、理路整然としてて全部正しいんだけど……なんか気に食わねえんだよなあ……あたいが間違ってるだけなのによお……」
　どうにも納得していない表情だ。
「……恵美ちゃんはずっと『強い女』を目指してきたんでしょ？　今更変えるのは無理だし、それに変えたらテニスも弱くなるわよ」
　慌ててフォローする。
「う、うん……」
「あたしはね。女の子も強い女性になってもいいとは思うよ。でもそれはあくまで『女の中で』よ。男と肩を並べようとかそう言う気を起こさないなら、あたしは別に強くなろうとしてもいいと思うのよ」
「ふむなるほど……」
「あたしが体育の補講で行く通学路で、テニス部の恵美ちゃんを見たわよ。恵美ちゃん随分こてんぱんにやられてたけど……男子と練習してたでしょ？」
「あ、ああ。あたいの場合同じ高校生女子じゃ練習になんねーから、大学生の女子とかうちの学校の男子と練習してるんだ。大学生の方はむしろ勝つことの方が多いんだけど、男とやると全然勝てねえんだ」
「でも、恵美ちゃんは女子高生の中ではテニスは最強でしょ？」
「あ、ああ……」
「だったらそれでいいじゃない。もちろんこれから恵美ちゃんはプロになってそこで世界を目指すかもしれない。でも、もし仮に恵美ちゃんが女子で世界ランキング1位になって、四大大会を全制覇したからって、男子プロと混じろうなんて考えないでしょ？」
「……ああ、もちろんだ。男子と女子の試合、あたいも見てるけど、動き、体力、スピード、技術、どれをとっても住む世界が違いすぎる。女子の試合のレベルが低いことは、悔しいけど認めざるを得ねえよ」
「あたしが言いたいのはそういうこと。まあ、心の片隅にでも入れておいてね。もしコーチが違うこと言ったら、そっちを優先させてね」
「お、おう……」

「ところで優子ちゃん、何かゲームある？」
桂子ちゃんが話を変えてくる。
「うん、あるよ。これなんてどう？」
「お、有名所だな。知ってるぜ。桂子とさくらは？」
「私もやったことあるわよ」
「私は今でもやってます……」
一応二人対戦機能のあるゲーム。女の子になって初めて遊んだゲームであり、女の子として生きるためのモチベーションを与えてくれたゲームでもある。
あたしは早速電源を入れ、二人対戦モードにした。

# かしまし娘たちのお泊まり会　中編

「うむむ、桂子ちゃん強い……」
「いやー久しぶりだけど結構覚えてるものねえー」
「桂子さんってゲームの才能ある感じです？」
「うーん、そんなでもないんだけど、何故かこれだけは得意だったのよ」
あたしたちはゲームで対戦しているんだけど、桂子ちゃんが圧倒的に強い。
このゲーム、結構あたしもやっていて、女の子になりたての時は男時代よりもプレイスキルが大分落ちててショックだったけど、努力でなんとか優一時代と互角まで戻せた思い入れのあるゲームだ。
でも、桂子ちゃんにまるで勝てないのだ。
というか、最終ステージまで最難関モードでクリアする人初めて見たわよ……

「優子ー！　ごはんよー！」
「はーい！」
「おし、あたいらも行くぞ」
「うん！」
ちなみに、恵美ちゃんたちはそれぞれ特性の弁当を持ってきていることになっている。
テーブルを増設し、お泊り会の3人も一緒にご飯に参加するのだが……

「うー……」
「お父さんどうしたの？」
「か、母さん……ここ、な、何か居辛い……」
父さんはかなり肩身が狭そうにしてる。
まあ、無理も無いか。ただでさえ普段から女2人男1人の所、今日は追加で3人も呼んだんだから。

「えっと2人共自己紹介してくれるか？　あー、木ノ本さんは知っているぞ」
「あたいは田村恵美ってんだ。テニス部だ」
「えっと、私は志賀さくらと言います……よろしく……おねがいします……」
　恵美ちゃんとさくらちゃんがそれぞれ父さんに挨拶する。
「それにしても3人共違う弁当よねー」
「うんうん」
　あたしと母さんが3人で違う弁当を見比べる。
　桂子ちゃんの弁当は丁寧に盛り付けがされててしかも色々な食材を使って見栄えにも気を配っている。
　恵美ちゃんの弁当はなんかおかずの数も少なく、量は多い感じ。
　さくらちゃんの弁当は盛り付けは丁寧だけど、品目数はそこまで多くない感じだ。
「やっぱり木ノ本さんの弁当がいいわねえー」
「え？　本当？　おばさんありがとう！」
「うーん、やっぱり優子より女子力高いわねえ……」
「へへん。この木ノ本桂子、まだまだ女子力で優子ちゃんに負ける訳にはいかないのよ」
「あ、あの……！　私のお弁当はどうでしょう？」
　さくらちゃんが聞いてくる。
「うーん、もう一歩ってところかな？　志賀さん、もう少し全体の見た目とか品目数とか考えるといいわよ」
「は、はい……」
「それじゃあいただきますか？」
　母さんが聞いてくる。
「ちょっと待て！　あたいの弁当はどうなんだ？　腹膨れるぜこれ！」
「問題外よ」
　母さんが無慈悲に言う。
「うえっひでえ……」

「悔しかったらもっと基本的なところから勉強しなきゃ。ご飯に唐揚げに肉だけって……」
「だってーこれがエネルギー付くんだもん！」
「栄養の『え』の字もないじゃないの。肉はいいけど野菜も入れなきゃ！」
「ふぁーい……」
　恵美ちゃんがしゅんとしている。まあ、確かに恵美ちゃんの弁当は量も多くエネルギーは出そうだけど、女の子らしくない弁当だしなあ……
「さ、三人のお弁当の品評会も終わったし、いただきましょうか……いただきます……ってお父さんがいない！」
「母さん、父さんは書斎に戻ったわよ。自分の分持って」
「あら……ちょっと呼んでくるね」
「あ！　母さんいいよ」
「え？　どうして？」
「何か居場所がないって感じだったし。まあでもあたしが呼んでくる。ちょっとまってて」
　あたしは父さんの書斎の前に来てドアをノックする。
　コンコン
「どうしたのー!?」
「あー優子か。なんか男子禁制な臭いがしたから退避した」
　不器用な人だなあ……
「大丈夫だよー、出てきてよー」
「あ、ああ……」
　ガチャッ
　父さんがあっさりと盆を持ってるが、少しだけ食べている。
　ともあれ、父さんを連れて食卓に戻る。
「あ、お父さん、どうして書斎になんか戻ったの？」
「ああいやその……男がいちゃいけない空気を感じたから。こう、女性だけの空間っていうのか？　そんな感じ」
「そんなわけないじゃない！　ねーみんなー」

「「うんっ」」
　3人がそれぞれ頷く。
「いやさ、だって優子が女の子になったばかりの頃、『お父さん絶対入るな聞き耳立てるな一週間食事抜きだぞ』ってのがあったし」
「あ、あれは特別よ！　本当の本当に男子禁制のことを話してたのよ」
「あ、ああ……」
　まあ、あれはしょうがない。生理用品のこととか話してたわけだし。
「じゃあ、お父さんは先に食べちゃったけど、改めまして……」
「「いただきます！」」
　それぞれご飯を食べる。ちなみに、一斉に「いただきます」をする都合上お味噌汁のように冷めたら美味しくなくなる食べ物は、今回は出していない。
　こういう配慮がある当たりも、母さんの長年の「女子力」である。
　私と母さんと父さんが同じ内容で、桂子ちゃんたちはそれぞれのお弁当。
　最初に食べ終わったのは父さんで、やっぱり女の子だけの女の子らしい会話ということもあって「ごちそうさま」を言うとすぐに部屋に戻ってしまった。
「あらまあ、やっぱり居辛いのかしらねえ……」
「まあ、女ばっかの空間に男を放り込むのも可哀想っちゃ可哀想だよなあ」
「あ、あの……」
「どうしたのさくらちゃん？」
「さっき言ってた……本当の本当に男子禁制って何のこと？」
「あーうん、そのねー」
　お父さんも居なくなって、女子だけの空間になったけど言うのは躊躇する。
「優子が復学する前日の話よ。優子に女の子の日について教えてたのよ」
「ちょ、ちょっと母さん！」

「ふむふむ、それはしょうがない。男子禁制よね」
「だなあ……」
「は、はい……すみません……」
三者三様に反応する。
初めてきた時のことを思い出す。あの時はまだ「優一」呼びのいじめがあって……でも、この最初の女の子の日が、あたしたち女子の団結の、最初のきっかけにもなったのよね。

あんだけ量があったのに、女子の中で最初に食べ終わったのは恵美ちゃん。さくらちゃん、桂子ちゃん、母さん、あたしはそこまで差がなかったけど、やっぱりあたしが一番遅かった。
とにかくあたしは一口が小さいのだ。男だった時は、こう豪快に食うこともあったけど……
「それにしてもよー、林間学校でも思ったけど、優子って私服も可愛いよな」
「えへへ、ありがとう……でも母さんが買ってきたものだから……」
母さんの買ってきた服もスカートが多いし。
「あら、毎日選んでいるのは優子よ。今では家でもスカートが殆どになったのよ」
「へーすげえな。あたいは私服だとスカートあんま穿かねえしなあ……」
恵美ちゃんは今日もズボンだ。
「優子さん、ただ穿いてるだけじゃなくて……短いですよね」
「えへへ、鏡で見るとミニスカートって可愛いから大好きだよ。ちょっと気をつけないといけないけど、それがまた女の子らしくなれるから」
「うんうん、いい心がけだねってお母さん感心してるわ」
「えへへ……」
女の子になりたいってずっと思ってたから、やっぱりそれを認めてもらえるのはとっても嬉しいこと。
もっと可愛くなりたいと思う気持ちもあるし、今でも十分可愛いと

思う気持ちもある。でも、どっちにしても今の可愛さは維持したい。
「わ、私も私服は……もっと大胆にしようかな……」
「うんうん、さくらはちゃんとオシャレすれば見違えると思うのよ。私や優子ちゃんみたいに普段からオシャレな格好するといいわよ」
「だから余計にあの部屋はアンバランスよねえ……何かこう、あれを見ると表面だけ取り繕って女の子になろうとしてる感じがしちゃうのよ」
　桂子ちゃんの厳しい指摘。
「ううう、桂子ちゃん手厳しい……」
「まあでも心配しないで、女の子の先輩が3人いるんだから」
　桂子ちゃんが胸を張る。
「あら、お母さんもいるのよ？　もう女の子じゃなくても、女性の先輩としてアドバイスできるわ！」
「う、うん……」
「ま、優子はどんと構えるんだ」
「うん、優子さんは、一歩一歩直していきましょう……」
「ありがとうみんな！」
「ささ、ご飯片付けるわよ。テレビ見る？」
「うん、みんなは？」
　あたしが意見を募る。
「あたいたちも見るぜ。何にする？」
「ちょっと待って、チャンネル調べるから……」
　母さんが番組表を示す。
　そして見たのは……

「これは実話であり、公式記録、専門家の分析――」
　林間学校でも見た例の飛行機事故の検証番組だった。
　恵美ちゃんとさくらちゃんは乗り気じゃなかったけど、この番組、やはり謎の中毒性があるようで、1個目の番組が終わる頃には恵美ちゃんもさくらちゃんもすっかりはまり込んで、続いて放送される2個目の番組も見ていた。

「ねえねえ、他にはない？」
「うーん、あ！　これなんかどう？　懐かしい時代劇！」
　母さんが古い時代劇を示す。
「えー時代劇!?」
「おじいさん臭いぜ……」
　桂子ちゃんと恵美ちゃんは不満そうな印象だ。
「うーんどれどれ……」
　何にでも好奇心が出るあたしは、とりあえず番組の内容を見てみる。
　ふむふむ、「諸国を旅している商人の隠居が実は幕府の重鎮で、お供とともに悪代官を成敗する世直し旅」かあ。
「これって予定調和の勧善懲悪がとてもいいのよー」
「でもよ、それってマンネリじゃね？」
　母さんに恵美ちゃんが反論する。
「ふっふっふっ……安心感が重要なのよ田村さん」
　母さんがドヤ顔で言う。
「ほほう、じゃあその安心感ってのを見せてもらおうか」
「うん、私もちょっと感じてみたいかな……」
　恵美ちゃんと桂子ちゃんが母さんの挑発にやすやすと乗ってしまう。
　まあ、あたしもたまには時代劇を見てみたいかな？
「あ、あの……さくらちゃんはどう思う？」
　ちょっと置いてきぼりだったさくらちゃんに話を振る。
「時代劇ですか？　私好きですよ。このお話は、確か正体の明かし方がいつもとちょっと違うんですよ。身分証明書のようなものを突きつけるんですが、普段はお供の一人が突きつけるんですけど、この話は――」
「ああ、うん……見てのお楽しみにしたいな？」
「ご、ごめんなさい……私、時代劇のことになるとつい……」
「さくらがねえ……意外だな」
「うん、私も初めて知ったよ。さくらちゃんが時代劇好きだったなん

て」
正直意外な事実だ。
「えへへ……小学校の頃、亡くなったおじいちゃんと一緒に見てて……いつの間にかおじいちゃんよりハマっちゃったの……」
「へー、さくらがハマるのか。余計に見たくなってきたな！」
楽しみだ。
「うん、あ！　後1分で始まるよ！」
「おっと、チャンネルを合わせてっと……！」
何秒か経つと、チャンネルの宣伝から、番組に切り替わった。
古い時代劇のためか、四角いサイズで左右は白枠で埋まっている。
厳かなオープニングが始まる。
人生についての歌詞。何だろう、何だかジーンとくる。
女の子になってからを振り返ると、本当にそう思う。
女の子らしくなるという自分で決めた道を、きちんと進めていると思う。
更にスタッフロールと共に2番が始まる。ちなみに背景画像は同じマークを写し続けている。
2番の方は何だろう、あたしと恵美ちゃんのことっぽい。
あたしに女子力で抜かれているとかよく言っているし、最近ではどんどん差をつけているそうだし。

ともあれ本編が始まる。旅のお供は5人、主人公のおじいちゃんと旅のお供が4人で、そのうち真面目そうな男性が3人と、なんか食べ物に執着してるボケ担当が1人だ。
まず、この老人のご一行が街についた。
お、ここは花火が盛んなのか。
「ご隠居」と呼ばれたおじいちゃんが、一件の花火屋に入った。
むむむ、何かやつれているな。でも、奥さんは美人だ。
でも久しぶりの客だということで、花火を見せてくれるのか。おお、線香花火か。きれいだけど、永原先生によればこれはフィクションなんだよな……

「でもきれいね……」
母さんがしんみりする。
しかし、静寂は突如破られる。
いかにも「札付きのワル」と言った容態の数人の男が押しかけてくる。
彼らは主人に「やいやいやい！　借金を返せ！」と言う。主人は何とか哀願するが「もう待てん」の一点張りだ。
更に、「そこの妻をお代官様にやれば借金はチャラにしてやる」という言い分だ。
人身売買か。この時代だとよくあったのかな？　いや、戦国時代までの話かなあ？
何て考えていると、止めに入ったお供の一人に喧嘩をふっかけ殴りかかってきた。
随分と喧嘩っ早い連中だが、旅のお供一人にコテンパンにやられ、「覚えてやがれー」というお決まりの捨て台詞で退散する。
花火屋が事のいきさつを語ると、3年前にこの花火屋で原因不明の火事があり、損害賠償を負わされ、借金で家が回らなくなってしまったらしい。
しかし、その当時はちょうど花火を盗まれて、在庫を切らしていたのだという。
「どうも怪しい匂いがする」と助っ人の一人が言う。
しかし証拠もないため手出しができない。
所変わって代官所。どうやら、悪徳商人「越後屋」が雇った悪人が花火を盗んだ上で自作自演で放火したらしい。
越後屋はどうしてもあの花火の主人の花火技術が欲しく、そのために追い詰めるため、悪代官も藩主様が花火好きなので、点数稼ぎに越後屋に協力したという筋書きだ。ついでに美人の妻も強奪したいと。
いずれにしても、ひどすぎる話だ。
さて、「こんばんはここに泊まってください」と言われ一行は宿を確保。
翌日には再び役人が来るが、今度は一瞬の隙きを突いて妻を強制連

行してしまった。
そして明後日までに金を払わねば妻を借金の肩代わりにする。それが嫌ならば花火の権利を譲れ。ということになった。
ともあれ代官所に行かねばなるまいということになった。さあ、物語が動き始めた。
助っ人の一人が忍者のような身軽な身のこなしで代官の屋敷に入る。
すると、代官屋敷には越後屋と花火屋に放火した腹心が同席している。
手口をみんなで暴露している。もちろん聞かれているとはつゆ知らずに。
「あの花火屋の権利を売り渡す誓約書を書かせて、後は殺しちまえば全部おしまいよ」
「そして、その花火を越後屋として売って大繁盛、藩侯へ点数稼ぎですなあ」
「ふっふっふっ。越後屋、お主も悪よのうー」
「いえいえ、お代官様ほどでは」
「わっはっはっはっはー」
お決まりの台詞だ。
越後屋と代官はその後も酒を飲むということで、腹心の部下を先に家に帰らせる。
お、部下が忍者に捕まった！
なるほど、こうするのか。
翌朝、忍者役の人が助っ人の一人に手口を取り次ぎ、花火屋の主人が隠居に言われるままに代官所に出頭してきた。
所変わって代官所、拉致された町娘と悪代官が二人きりだ。
「よいではないか、よいではないか」
「駄目ですお代官様！　私には――」
「あんな奴のことは忘れるのじゃ。よいではないかよいではないか」
悪代官が若妻の浴衣の帯を掴み、引っ張る。
「あーれー」という声とともにくるくると回転し、帯が解けて着物が

脱げる。
下に白いのを着ているため裸にはなっていないが、可哀想に床にへたり込んでしまう。
ところが、悪代官は容赦なく更に襲い掛かってくる。
しかし、ふすまを叩く音がする。
どうやら取り次ぎのようで、悪代官は不機嫌になりつつも用件を聞くが、花火屋が出頭してきたと聞いて喜び、急ぎ準備する悪代官。
そして、花火屋と忍者を除くご隠居一行が代官所に入り込んできた。
お、ご隠居が越後屋との謀議を暴露している。
悪代官は「何じゃとこのじじい！」と怒る。なるほど、正体を知らないとこうなるのか。
お、「切れ、切り捨てい！」だ。
ご隠居が「懲らしめてやりなさい」と指示する。
旅の者は二人はいずれも強い。面白いように敵がやられていく。ボケ役は端っこで見てるだけだ。
少し時間が経つと「静まれ静まれ」と言う。ん？　ボケ役が言うのか？
ボケ役の人がどもりながら、例の小物を突きつける。
徳川家関係者であることをネタばらしし、悪代官と越後屋を控えさせ、罪状を並び立てる。
悪代官と越後屋が花火屋を貶めようとしたこと。悪代官はひれ伏したが、越後屋が悪あがきをする。
すると、先程の忍者が縄で縛った腹心を連れていき「こいつがみんな吐いちまったよ」と一言言うと、再びひれ伏した。
これにて一件落着となり、被害者側も報われて、最後はおじいちゃんが高笑いして、次の場所へ旅立って終了だ。
「へー、中々面白かったじゃん」
桂子ちゃんが感心する。
「正義が勝つって分かってても、やっぱスカッとするよなあ……あた

いやっぱこういうの好きだぜ」
恵美ちゃんも満足した表情だ。
「ふふ、桂子さん、恵美さん、時代劇の勧善懲悪の面白さ、分かってくれましたか？」
「うんうん」
「あたしも面白かったと思うよ。世の中単純じゃないからこそ、単純な面白さがあるっていうの？」
「母さんもそう思うわねえー複雑な世の中や物語ばかりじゃ疲れちゃうもの」
全員概ね満足した所で、そろそろお風呂の時間だと母さんが言う。
今日の遊びはここまでにしよう。
あ、でもお風呂でもひと波乱がありそうな気がする。入るのは一人ずつだけど。

# かしまし娘たちのお泊まり会　後編

「「最初はグー！　じゃんけんぽん！」」
「「あいこでしょ！」」
３人の女の子がじゃんけんで風呂に入る順番を決めている。
あたしは「客をもてなす側」という理屈で「一番最後でいい」と申し出たため、桂子ちゃん、さくらちゃん、恵美ちゃんの３人がそれぞれじゃんけんでお風呂に入る順番を決めているのだ。
「よし決まったわ！」
じゃんけんによると、まずは恵美ちゃん、続いてさくらちゃん、最後に桂子ちゃんで、桂子ちゃんのお風呂が終わったら、あたしと母さんの出番。
ちなみに、父さんはその更に後ということになっていて、母さんが風呂に出るまで書斎から出てはいけないことになった。
まあ、実際父さんは書斎にこもりがちで、今日は特にその傾向が強いので特に問題はないのだが、それにしたってちょっと可哀想だとは思う。
とは言ってもだ。やっぱり女の子が沢山お風呂に入るんだから仕方ないかなあとも思ってしまう。
ともあれ、まずは恵美ちゃんがお風呂に入る。女の子たちは全員、自宅から着替えとお風呂のセットを持ってきた。
「そんじゃ行ってくるぜ！　後はよろしくな！」
「「いってらっしゃーい！」」
あたし、桂子ちゃん、さくらちゃんで見送りだ。
恵美ちゃんはパジャマとタオル、その他お風呂セットを持って風呂場へと消えていく。
というよりも、教えていないのに場所がわかるってすごいなあ、ちょっと目をそらした時に確認したのかな？
うーん……まいっか！
「ねえ優子ちゃん、シャンプー何使ってる？」

恵美ちゃんが風呂場に消えた後、３人が残されたあたしの部屋で、桂子ちゃんが開口一番に聞いてきた。
「うーん、男だった時と同じかなあー母さんが使ってたのをなんとなく」
「あらあらダメじゃないの。リンスは？」
「そ、それも何となく母さんのを……」
「ま、まあリンスはともかく、優子さんはシャンプー選びとかしないんですか？」
さくらちゃんが聞く。
「う、うん……」
「ふむふむ、やっぱりツギハギだね優子ちゃんは」
「つ、ツギハギ？」
「例えば髪洗いにしても、洗い方はちゃんとしているのにシャンプー選びになるとことん鈍感でしょ？　こう女子力のバランスが不均衡って言うの？　もちろん全然女子力のないガサツ女よりはよっぽどいいけどさ」
「うーん、確かにそう言われてみれば……」
「まあ、無理も無いことだし、仕方がないことだとは思うけどやっぱりもっともっと女の子を勉強するといいわよ」
「そうですね……優子さんにとっても、新しい発見があると思います」
「新しい発見かあ……」
そう言われるとワクワクする。女の子になって最初の１週間で行ったカリキュラムの日々を思い出す。
あの頃に比べると、女の子としての新しい発見はめっきり減った。
母さんも、カリキュラムが終わってからは急に大人しくなったし、そのカリキュラムだって一応日常的な学校生活をある程度送れるくらいの訓練でしかない。
桂子ちゃんの行った「ツギハギ」というのはそう言うところだろう。今までも「女の子の感性」の不足はよく指摘されてきたが、「ツギハギ」というのは特にぴったりな表現だ。
今のあたしの女の子としての振る舞いや行動は、外見が女の子に

なってしまったがための、とりあえずの応急処理みたいなもの。だから時折「優一」の名残が出る。
もしかしたら周囲の本音は、「もうそれでもいい」というものかもしれない。
でもあたしは、過去が嫌いだから、とにかく捨てたいと今まで何度も言ってきた。多分そのおかげで、みんなもっと女の子らしくなれるようにアドバイスをくれているんだと思う。
……だから、もっと積極的に聞いていきたい。
「シャンプーってどんなのがあるの？」
「うーん、詳しく説明すると長いし、私も全部把握しきれてるわけじゃないから……明日の模様替えの時に、一緒に探そうよ！」
「そうですね、それがいいと思います」
桂子ちゃんとさくらちゃんが提案してくる。
「うん分かった。明日楽しみにしているね」
「それよりも模様替えよ。カーテンのサイズ図らせてくれる？」
「あ、うん。いいよ」
桂子ちゃんはカーテンの外の雨戸が閉まっていて、外しても外が見えないことを確認してから、カーテンを外す。
「あ、そういえば巻き尺がないや……」
「……あの！　私がお母さんに聞いてきます！」
さくらちゃんがすぐに提案しすぐに行動する。
「あ、あのそういうのはあたしが――」
「優子ちゃんはどんと構えてなさいって」
「う、うん……」
桂子ちゃんに止められ、部屋の中で待機だ。
「はーい持ってきました……」
「うんありがとう」
2分もしないうちにさくらちゃんが巻き尺を持ってくる。
「それじゃ図るわね……」
桂子ちゃんとさくらちゃんによる、部屋の計測が始まった。

「ふむふむ、なるほど……」
桂子ちゃんが頷いていて、さくらちゃんがメモ帳にカーテンのサイズをメモする。
更にベッドのサイズも図り、メモする。
「優子ちゃんのベッド、大きいよねー」
「ああうん、男だった時は寝相も悪くて、1．5人分くらいの広さにしたのよ。今も実は寝相はよくないんだけど、ちょっと持て余し気味かも」
「なるほど。そういうことだったんですか……」
「女の子なら二人分入れるわねえ」
さくらちゃんと桂子ちゃんが部屋を歩き回り、あるいは家具の隙間などを把握しながら、あるいはベッドに実際に寝てみたりしたりしつつ、レイアウトを考えている。
二人ともスカートなので、結構危ないシーンもあるんだが、彼女たちの計算力はすごく、すんでのところで見えないようになっている。
「うーん、桂子ちゃんもさくらちゃんもすごいよ」
「え？　優子ちゃん、急にどうしたの？」
「こんなにあちこち動き回って、寝たり起きたりしてるのに、全然パンツ見えないもの」
「え、え？　あの……それは……」
「もしあたしが同じ服で同じことしたら、簡単にパンツ見えちゃう気がするのよ」
さくらちゃんは少し長めと言っても膝丈だし、桂子ちゃんに至ってはあたしと同じくミニだ。
「あーなるほど、そのあたりは計算よ計算。スカートで寝ようとするときにも順序があるのよ」
「なるべく膝を曲げない……それから……足を広げないの2つを守っていれば……見えないんですよ」
「あーそう言えば女の子座りからの立ち上がり方はカリキュラムでやったわね！　それに似てるかも!?」
「え？　そうなの？　優子ちゃん、女の子座りしてみて」

「うん」
　あたしは床に座って両足を後ろ側にW字に広げ、その間にお尻を落とす例の「女の子座り」をする。
「おー、優子ちゃんさすが！　やっぱ女の子よねえ……」
「えへへ……」
　簡単にできることでもやっぱ褒められると照れてしまう。男には基本的に出来ない座り方なので、女の子になったという自覚を強める行為だ。
「じゃあここからパンツ見えないように立ってみて」
「うん」
　カリキュラムの時にやった時のように、まず少し腰を浮かせて足を横に放り投げる座り方にし、そこからまず中腰になって、更に膝もなるべく角度をつけずに曲げつつ、立ち上がってみる。
「おー、すごいねえ……ところでどうしてこれがカリキュラムに？」
「これは学校行事の時に制服で床に座ることもあるからって……その時は制服で体育座りは絶対ダメってきつく言われたわね」
「へえー、そういえばカリキュラムでは『恥じらいの心の育成』に重点が置かれてたんだって？」
「う、うん……特にミニスカートでの振る舞いは叩き込まれたのよねえ……」
　今となってはもう懐かしい思い出の一コマだけど。スカートめくりのおしおきのことはさくらちゃんもいるので話さないでおく。
「そうですねー、小谷学園は比較的スカート短い女子が多いですから……そういえば優子さんも最初から短かったですよねえ……」
「あの時から、とにかく女の子らしくなりたいって気持ちが強くて……」
　復学したばかりの頃は、今以上に優一の面影に怯える日だった。まだクラスの男子も、それを引きずってて、ちょっと嫌な思いをしちゃったし。
「お待たせー！」

「あ、恵美ちゃんおかえりなさい！」
パジャマ姿でタオルを頭にかけ、お風呂セットを持った風呂上がりの恵美ちゃんが部屋に入ってくる。
林間学校で着てたパジャマと同じかな？
「えっと次は……」
「わ、私です……」
さくらちゃんがやはり恵美ちゃん同様パジャマとお風呂セットを持って、部屋に入る。
「およ？　カーテン外してどうしたんだ？」
部屋の異変に気付いた恵美ちゃんが声をかける。
「ああ、明日ホームセンター行くでしょ。そのための準備よ」
「おー気が効くな。そっか、お風呂から出たら勉強の時間だもんなー」
「夏休みの宿題消化でしょ？　恵美ちゃんは？」
「あたいはテニスが忙しくて全然。そう言う優子はどうなんだ？」
「うーん、７割くらいかな？　女の子の日の時にやったら意外に捗っちゃって……」
「へー意外だな。あたいはそんな日はその日用の練習したらぼーっと休むのが日課だぜ……そう言う桂子はどうなんだ？」
「半分くらいよ。優子ちゃんよりは遅れているかなあ……」
テーブルでそれぞれの科目の進捗状況を確認する。
「うわあ、あたいが一番遅れてる。これでも間に合うペースのはずなのになあ……」
確かに計算上はそうだが、少し予定は前倒しした方がいいのも事実。まあ、そのためのお泊り会でもある。

コンコン
「はーい」
ガチャッ
「お待たせしました……」
やはりお風呂あがり、地味なパジャマ姿のさくらちゃんが登場し、桂子ちゃんが入れ替わりで風呂に入る。

「あ、さくらちゃん、夏休みの宿題はどうなってるの？」
「あー殆ど終わってるわよ。あと1つ2つくらい」
「え？　本当？」
「うん……見る？」
　さくらちゃんが問題集やプリントを出す。
「えっと……まず英語と数学は全部終わってます……永原先生の古典はまだ少し残っていて、それから――」
　さくらちゃんが進捗状況を報告する。間違いなくあたしよりいい。
「うへーすげえー」
「あ、私は部活がないから……その分有利なだけで、恵美さんはテニスで忙しいでしょうし……」
　さくらちゃんが申し訳なさそうに言う。
「まあまあ、そう謙虚になるなよ。あたいだって休息日とかにちゃんとやらなきゃいけねえんだしよ」
「……す、すみません……」
　さくらちゃんはどうも気が弱く、こういうことで謝りがちだ。
　気弱なのはあたしもだけど……
「あー、うん。それがさくらだもんな……」
「は、はい……」
「無理して強がる必要はねえぜ。さくらは女の子だからな。女の子らしくなる方が楽ってもんだ」
「恵美さんも……変わりましたよね？」
「そうか？　あたいは相変わらずテニスバカだぜ」
「いえ、そうではなく……」
「うーん、あたいにはよくわからねえや」
「そうですか……」
　会話が途切れ、しばらくすると、桂子ちゃんが出てきた。
　開口一番「やっぱり優子ちゃんはシャンプーが手抜き過ぎる」と言ってきた。シャンプーの知識は明日、桂子ちゃんに教えてもらうことになるだろう。
　最後はあたし。もちろんパジャマを持って脱衣所に入り、まっぱに

なってお風呂場へ。
どれだけ慣れても、この裸をエロくないと思わない日はないだろう。
身体と頭を丹念に洗い、湯船に浸かりながら、さっきの恵美ちゃんとさくらちゃんのやり取りを振り返る。
以前の恵美ちゃんなら「弱々しい奴だ」とか「情けない」と言った言葉を投げつけてきただろう。
あたしがいじめられていた時の一件以来、2年2組の悪い所が……全てがうまく行った気がする。
乱暴で荒れていた問題児の石山優一は、石山優子という女の子に生まれ変わった。彼女……つまりあたしの努力もあって性格は正反対で弱くて泣き虫、だけど優しいとみんなから言われる女の子になれた。
女の子になったばかりの頃は、やっぱり優一の精算ができていなくて、それがいじめにも繋がったんだと思う。
今思えば、あれは罰に近いものだったのかもしれない。優一の乱暴のせいで、男子たちは性格さえ歪ませてしまったんだから。
でも、その「罰」も、あたしが乱暴していた期間に比べれば短い。弱々しくなったあたしは、すぐに耐えられなくなって泣いてしまった。
だけど、あたしが辛かった時、桂子ちゃんと恵美ちゃんが協力するようになった。それまで、クラスの女子は完全に分裂していた。
もしあたしがいじめられなかったら、今も桂子ちゃんと恵美ちゃんは喧嘩してて、こうやって仲良くお泊り会に来ることもなかった。
あたしをいじめていた男子たちも、「優一はもういない」と認識し、そして最終的にはあたしの改悛の情を認めてくれた。
あたしが優一時代に性格を歪ませてしまった男子たちも、やがて本来の性格に戻ってくれた。
もし、あたしが女の子にならなかったら、あたしは罪悪感を抱えたまま、優一として乱暴に過ごし、話し相手も桂子ちゃんだけになっていた。

クラスの女子も、桂子ちゃんのグループと恵美ちゃんのグループで分裂したまま、険悪な関係が続いていたはずだ。
そして、あたしがいじめていた男子たちも、性格の歪みは更にひどくなって、もしかしたら取り返しの付かないことになったかもしれない。
……ああ、やっぱり、あたしが女の子にされたのは「救い」だった。あたしだけじゃない、2年2組のみんなが、救われていたんだ。
いじめられたことだって……あたしはいじめられたからこそ、今までやってきた自分の悪事を深く知り、そして痛みを知ることができたんだと、今になって思うことが出来た。
あの辛い日々のおかげで、より強く、女の子らしい女の子として生まれ変わることが出来たと思う。
そしてあたしにも、好きな男の子が出来た。
その子はあたしが優一だった時に一番いじめてた子で、あたしが女の子になって逆にいじめられたけど、元の性格に戻ってからは、責任感が強くて、女の子を守れる男の子になった。
あたしはその子に何度も助けられて、いつか顔を合わせるだけで熱くなるようになった。
それはその子も同じ、でもその子は、あたしをいじめたことを、引きずってもいる。だけど、何度も守るうちに、その子の中でも折り合いがついた。
……篠原浩介くん。あたしの大好きな人。
でも、まだ迷いがある。心の中では、もう男の子を好きになることがわかった。
あたしは林間学校で篠原くんに守られて、優しくされて、落とされた。多分これ以上ないというくらいに、王道な惚れ方だと思う。
問題は身体的な所。そういった深層面では、あちこちに「優一」の名残が残っている。
もちろん全部消すことは出来ないけど、まだ深層心理が男性になっている。
心は男の子を恋愛対象にしているけど、身体は違うということ。

これはより深い所で女の子にならないと解決できないという。
明日の模様替えでそれが出来るかは分からないけど、でも、もう心が男の子に恋してしまっている以上、もう引き返すことは出来ない。
もし彼氏になるとして、キスとかエッチということも、考えていかなければいけないことだから。
決意を新たにし、湯船から出る。
髪を拭き、身体を拭き、脱衣所でも拭き、ドライヤーをかけてパジャマを着る。
ワンピースタイプのパジャマは着心地も良くてお気に入りだし、今日もお泊まり会だからお洒落したい。さすがに頭のリボンは外すけど。

「お待たせー」
「お、優子、そのパジャマスカートか？」
「えへへ、寝心地いいから気に入ってるのよ」
「そういえば、優子ちゃんそのパジャマ林間学校でも着てたよね？」
「うん、流石にワンピースタイプのパジャマはこれしかないから、あんまり着てないのよ」
「まあ……いいと思いますよ」
「よし、じゃあこの宿題を片付けようぜ！」
「あ、うん……」
もう一度進捗状況を確認し、宿題消化に入った。
ちなみに、意外にも成績はこの中ではあたしが一番だった。さくらちゃんは結構問題を間違えてるところもあった。逆に恵美ちゃんはテニス漬けということもあって、結構学力が危うい印象を受けた。
母さんが「もう11時よー」と言うまで勉強会は続き、あたしたちは眠りにつく。
当初、あたしは床で寝るつもりでそのように申し出たが、強引にベッドに押し込められ、寝相が悪いということでベッドには逆に寝相のいいさくらちゃんが寝る。床には布団を敷き、恵美ちゃんと桂子ちゃんが、それぞれ寝ることになった。

電気を消してみんなで「お休みなさい」をし、一夜を過ごした。

# 模様替え　前編

「おーい、優子ちゃん！　優子ちゃーん！　起きてー！」
目覚まし時計もない夏休みの時間、何か布団から出たくない。もう少し寝たい。
そういえば今日はお泊り会でえーっと……まあいいか……
「おーい、優子！　みんな起きてるぞー」
「うーん、後ちょっとだけー」
「起きませんねえ……」
「よし、あたいに任せろ！」
恵美ちゃんの声がする。
「起き……ろ！」
ガバッ
布団が一気に剥ぎ取られる。
「ひゃ、ひゃあ！」
あたしは驚いて短い悲鳴を上げる。
「わわっ、ゴメン！」
ワンピースタイプのパジャマなので、朝起きた時はおへそまでめくれていたりすることも多い。
林間学校の時もパンツ見えるくらいめくれてたけど一番最初に起きたから良かったし、そうでない時も、これを着ている時は、まず布団の中で、スカートを直す事から始めなきゃいけない。
だからこうやっていきなり布団を剥ぎ取られるとかなりまずいことになる。
「だ、大丈夫大丈夫。見えてない見えてない」
「は、はい……確かに見えてないですよ……」
桂子ちゃんとさくらちゃんがフォローする。
寝た体制で、足元を見てみると、確かに見えてない。嘘はついてなかった。
よかったよかった。もし布団を剥ぎ取ってみてパンツ丸見えになっていたら、私も恥ずかしいし、恵美ちゃんたちも気まずいだろう。

「ご、ゴメン、優子がワンピースなの忘れてて……」
恵美ちゃんが謝る。
「まあ、見えてなかったからいいわよ」
「お、おう……すまん……」
「でも、優子さんも無防備だと思いますよ……」
さくらちゃんがあたしの落ち度を指摘する。
「うんうん、可愛いの着たいのはわかるけど、いくら女の子だけの空間だからって、そのパジャマは危ないわよ」
桂子ちゃんも、ワンピースタイプのパジャマが持つ危険性について語ってくれる。
「す、すみません……」
「まあそういうのは、これから覚えておけばいいだろ……あたいも含めて、な」
恵美ちゃんが自分も含めて、と言う。
そうだ、女子力を学んでいるのは、何もあたしだけではないんだ。
恵美ちゃんも、少しだけ取り戻そうとしているんだ。
「さ、優子ちゃんも起きたし着替えよっか」
「そうね、そうしましょうか」
ともあれ、あたしたちはまず普段着に着替えることになった。
そして、例によって順番を決めることになった。
まず、風呂場の脱衣所で着替えるチームと、あたしの部屋で着替えるチームの2チームができたので、チーム分けと先手と後手をじゃんけんでそれぞれ決める。
あたしは脱衣所で後から着替える方になった。まずは恵美ちゃんが着替えている。
恵美ちゃんはどういう服で来るだろう？　と考える。今回のお泊り会と、林間学校の様子を見る限り、夏の恵美ちゃんは動きやすい短パンが多いと思う。
しばらくするとドアの鍵が開く音がする。
「お待たせー！待ったかー？」
「ああ、うん大丈夫……」

恵美ちゃんの私服でのスカート姿は初めて見る。ちょっとびっくりだ。
「どうした？　浮かない顔して？」
「いや、恵美ちゃんの私服スカートって初めて見たから……」
「ああ、あたいも制服以外だとあんましスカート穿かねえからなあ……」
心なしか恵美ちゃんは前かがみだ。
「うん、珍しいと思って」
「今日はお泊りだけじゃなくて、出かけるわけだからな。あたいだってせっかく女に生まれたんだ。たまにちょっとはおしゃれしねえと」
「う、うん……とってもいい心がけだと思うよ」
「ありがとうよ。じゃっ」
恵美ちゃんと入れ替わり、あたしが部屋に入る。
パジャマを脱ぎ、パンティーとブラジャーを取り換えてから今日の服を手に取る。
今日はみんなでお出かけということで、一段と可愛いデザインを選んで、赤いミニのプリーツスカートと赤いブラウスを選んだ。
この服はほとんどが赤だけど、胸元の大きめのリボンだけは黄色にし、また頭のちょこんとしたリボンも、いつも通り白でメリハリをつける。
最後に身だしなみを少しそろえる。うん、今日もばっちり可愛くできた。
ここはあたしの家なので、昨日着ていたパジャマと下着は洗濯籠に入れる。
「お待たせー！」
「お、優子可愛いな！」
「えへへ……今日はお買い物もするからおしゃれしないとって思って」
「殊勝な心掛けだな。ま、あたいもめいっぱい頑張ってみたんだけどよお……やっぱ差がついちゃってんなあ……」
恵美ちゃんがまた落ち込んでいる。うーん、ちょっと悪いことし

ちゃったかなあ……
とりあえず、あたしの部屋に戻る。
「こっちは終わったわよー」
「あ、お二人とも……こちらも着替え終わりました……」
さくらちゃんと桂子ちゃんもそれぞれ私服に着替え終わっている。
「あれ？　恵美スカートなの？」
「あ、ああ……ちょっとたまにはあたいも……か、可愛くなりたいし……」
恵美ちゃんが少し照れ気味に話す。
「へえ、恵美さん珍しいですね……」
「だ……あたいだって、せっかく女に生まれたんだからって思うこともあるし……」
「でも思ったより可愛いと思うわよ。何より初々しいし」
恵美ちゃんの今の外見は正直そこまで気を使っている感じじゃない。
あたしや桂子ちゃんの方が、普段から気を使ってるし、生まれつきの容姿もあって可愛いというのが正直なところ。
でも今の恵美ちゃんはそういう可愛いのとはまた違った魅力があると思う。こう普段慣れない背伸びをしているというか……
そう……いわゆる内面の可愛さというか……ギャップ萌えというか……
「あ、でもさくらちゃんも可愛いと思うけどなあ」
あたしがさくらちゃんの服を褒める。こちらもギャップ萌えを突いてる気がするのだ。
「え？　そ、そうですか……？」
「うんうん、昨日と比べると別人みたい」
昨日は無地の黒いタンクトップとジーパンといういかにも地味な格好だったのに、今日は明るい白と黒のワンピースで決めている。
「でもやっぱ桂子が一番ファッションはすげえと思うなあ」
恵美ちゃんが桂子ちゃんのファッションを見る。
桂子ちゃんはこの４人の中では一番肌の露出が多い服で、スカート

もあたしより短いし胸元も少し見えているけど、不思議と下品さを感じない。
あたしのように無地頼りでもなく、かといってしつこくないチェック柄のデザインだ。
「あーあ、あたしも桂子ちゃんみたいに、素敵な服を着こなしたいなあ……」
「うーん、優子ちゃんの場合はこの服はちょっとまずいと思うのよ」
桂子ちゃんが言う。
「え？　どうして？」
「優子ちゃんには似合わないというか……優子ちゃんが着たら男どもの性欲を煽り過ぎちゃうわよ」
「うぐっ……」
「うーん確かにそうだよな、特に胸とか！」
恵美ちゃんが私の胸を見ながら言う。
桂子ちゃんも決して小さいわけじゃないけど、やっぱりあたしと比べると小さい。
というよりも、クラスの中でもあたしの胸は特別大きいと言ってもいい。
つまり、胸元の開いた服は、あたしが着るとあまりにも刺激が強すぎるということか。
そういえば、あたしが女の子になった時に買っていた服の中にも、そんなタイプのがあったけど、まだ着ていなかったことを思い出す。今度試してみようかな？
「あ、みんな着替えた？　あら、みんな可愛いわね。ささっ、朝ご飯にしますわよ」
母さんが軽快な足取りで、いつもよりも多い朝ごはんを持ってくる。
「恵美ちゃんが見違えたわねえー絶対評価ではまだまだだけど、昨日との落差を考えるといいわねえー」
やはり母さんも一番に目についたのが恵美ちゃんだ。

「うんうん」
「でもどういう風の吹き回しかしら？　昨日は気も強くて言葉遣いや服装ももあんまり女って感じじゃなかったのに」
「あ、あたいもちょっとは女の子らしくしたくなる時だってあんだよ！」
「ふふっ、いい心がけねえ。そうやって意識していけば、女の子はどんどん可愛らしくなっていくのよ。特に好きな男の子が出来たときとかねえー」
　母さんが意味深な表情で恵美ちゃんにニヤける。
「なっ！　あ、あたいは好きな子なんて……ただ、優子に差をつけられてるって思うと……」
「ふふっ、それでもいいわよ。まずは気持ちからよ気持ちから」
「あ、ああ……」
　ともあれ、今日は母さんが全ての朝食を作ってくれた。
　いつもの昨日の残りもあるが、今日はどちらかと言えば少数派だ。
「優子の家の朝ごはんってどんな感じなんだ？」
「うーん、いつもは昨日までの残りをおかずにして、ご飯とパンや味噌汁なんかを新しく作る感じかなあ……」
「ふふっ、でも今日はいつもより3人多かったし、残り物は先に出ていったお父さんに大半押し付けたから……」
　やっぱり……扱いが悪い……
「さて、じゃあいただきますしましょ」
「「いただきます」」
　いつもと違う朝食を、みんなで食べる。
　桂子ちゃんも、さくらちゃんも美味しいって言ってくれる。
　一方で恵美ちゃんはガツガツとひたすら黙々と食べている。
「恵美ちゃんって、食べ方豪快だねえ」
　あたしが話を振る。
「ん？　そうか？　朝はよく食べねえと、練習が大変なんだぜ。今日は休みだけど、そう言う日はなおさら栄養補給なんだぜ」
「でも恵美ちゃん、お行儀が悪いのはダメだよー」

桂子ちゃんがダメ出しする。
「な!? そんなこと言ってもよお……性分は中々変えられねえぜ……」
「あらあら、優子は性分を変えられたわよ。決めつけないで、頑張ってみてよ」
母さんがエールを送る。
「っ……ったってよお……あたい、優子ほど……心強くねえしよ……」
恵美ちゃんが言う。
「えー? そうかなあ!? 恵美ちゃんテニス選手だし、あたしなんかよりよっぽど――」
「いや、確かにあたいだってメンタルトレーニングはしてるさ。身体的、あるいは技術的には同じ高校生だと負ける要素はもうねえからな。むしろ大事なのがメンタルだ。高校の大会で、あたいが負けるとしたらそこなんだ」
「……」
「でもよ、あたいはそれでも、優子ほど心は強くないと思う」
「あはは、虎姫ちゃんにも同じこと言われたよ……」
林間学校の時のやり取りを思い出す。でも、あたしは本当によく泣く女の子。すごく弱い女の子だと思う。
「優子はな、弱い自分を受け入れられる女の子だ。あたいは、強くねえと気が済まねえ。それだけならまだしも、1番強くじゃねえと気が済まねえ、欲張りで強情な女だ」
「でもそれは――」
「確かにそれはテニスには必要なことだ。でも、ありのままを受け入れられる優子は……やっぱあたいの方が弱いよ」
その後、朝食が進む。
あたしは女の子の中で、強い女の子だと思われている。でも、それは誤解だと言った。
桂子ちゃんが言う、「もう少し女の子を続けていれば、私達が言った意味が分かる日が来る」とも。
そんな日、来るのだろうか? 今のあたしには、こんな泣き虫の自

分の心が強いと言われるのにどうしても納得がいかない。
「よし、朝ごはんが終わったらホームセンターに行くわよ」
「はーい」
「みんな車に乗ってくれる？　優子の部屋の模様替えのために、写真も撮った？」
「はい、ばっちりです……」
「それから、私木ノ本桂子が、模様替え案を持って参りました！」
ビシッと母さんにあらたまった口調で話す桂子ちゃん。
よく見ると部屋の大まかな見取り図みたいなものに、改善点が書かれていた。
更に、「お人形のレパートリーを増やす」「座布団を増やす」「小物を飾る」などと言った具体的な計画案もあった。
優一時代から引き継いでいた殺風景な部屋が、女の子らしさ溢れる部屋になると思うと、ワクワクドキドキだ。

ホームセンターは駅から少し距離が離れていて、車での来訪者が多い。場合によってはトラックを貸し出すこともあるが、今回は使わなくて済みそうだ。
「さて、まず何から買う？」
母さんが提案する。
「とりあえず、私と優子ちゃん、優子ちゃんのお母さんで、優子ちゃんの部屋の大きな模様替えを担当するから、恵美ちゃんとさくらちゃんは、部屋の小物の追加と、後は優子ちゃんに似合いそうなシャンプーの候補を見つけてくれる？」
「優子ちゃんの人形も、小物コーナーにあるから、ぬいぐるみなんかも候補を絞ってくれるかな？　多分恵美ちゃんたちの方が時間かかるから、後で探して合流するわね」
「おう！」
「わ、分かりました……」
桂子ちゃんが的確に指示を出し、メモ帳を持ったさくらちゃんと恵

美ちゃんが飛び出す。
「それじゃあ、私達も行くわよ」
「よし！」
桂子ちゃんの気合の入れ方がすごい。
桂子ちゃんはまず売り場の見取り図を見て、一番近い布団の売り場へとあたしと母さんを誘導する。

「ねえねえ、あれって親子？」
「優子と桂子でしょ？　あの二人姉妹かなあ？」
「たしかに二人ともすごい美人だけど……でもあんまり似てないわよ」
「それになんか親子って雰囲気でも無さそうだよねえ……」
また噂されている。確かにあたしは元々男で、ＴＳ病で今の容姿になったし、桂子ちゃんは血のつながりは当然ない。だから、親子姉妹と考えるのにはあまり似てないかもしれない。
いつものように、ホームセンターの男性客の視線を釘付けにしている私の胸。若い女性の何人かが嫉妬丸出しでこちらを睨みつける。
正直その姿はブサイクで女子力のかけらもない妬みの感情。
基礎がかわいくても、ああいう風になったらダメと反面教師に思いつつ、部屋の模様替えの大コーナーのうちの、布団のコーナーへ進む。

「ねえねえねえ、これなんてどう？」
桂子ちゃんが掛け布団の一つを指差す。それはピンクを基調に花柄でデザインされたもの。
「うんうん、可愛いとおもうよ。優子は？」
「うん、確かに今の布団よりはこれで寝たいかなあ……でも、あたしはこっちもいいかも……」
あたしが指したのは、花柄ではなく薄いピンクの落ち着いた印象のもの。枕カバーとセットになっていて、統一感あるデザインできそうだ。
「なるほどー優子ちゃんって結構シンプルなのが好き？」

「うん、落ち着いてる感じがするの。それでいて可愛いし」
「確かにシンプルなのはいいことよ、でも少しはこういうのにも慣れておいたほうがいいと思うの」
「そうねえ……優子は女物に抵抗はないとはいっても、やっぱり色々な女物を試さないと」
「なるほど……言われてみればそうねえ……」
　確かに一理ある。ということで、桂子ちゃんの花柄布団を買う。もちろんこれはサンプルなので、レジには購入用の紙を持っていく決まりになっている。
　枕カバーの方は、あたしの案でシンプルな落ち着いたピンク色になった。

「さ、次にカーテンと鏡付き机よ」
「え？　鏡付き机？」
「うん、あの部屋で着替えてみて、鏡がないのが一番不便だったわね。一応クローゼットにもあったけどあれじゃ小さいわよ」
「そうねえ……確かに必要かも」
　うーん普段はお風呂場でチェックしてたからよく分からないや……
「鏡の所の机にオシャレのための小物を置いておくのよ。例えば白いリボンとか」
「なるほどー」
　あたしが納得する。
「これならいちいち脱衣所まで行かなくてもいいでしょ？」
「うんっ！」
「優子の部屋はちょっと余ったスペースもあるから、大丈夫そうね」
　母さんが言う。
「これなんてどう？　入りそうかな？」
「うん、確実に入るわね」
　一つの小さな鏡と机の一体型の家具を指差す。後ろが少し膨らんでいるので調べてみたら、三面鏡にも出来るみたいだ。

「さ、次にカーテンね。優子、どれがいい？」
すぐ近くにあったカーテンコーナーで母さんがあたしに選ばせる。
あたしは薄いピンクの上に濃いピンクのバラの花で決めているカーテンを指差す。
「あたし、これがいい」
「ほほう、優子ちゃん成長したわねー、やっぱ優子ちゃん、女子力のことになると飲み込みが早いよねえ」
桂子ちゃんが褒めてくれる。
「えへへ、ありがとうー」
「これは桂子ちゃんもうかうかしてられないかもよー」
母さんが煽る。
「大丈夫よ。私だって日々努力しているし、優子ちゃんが５歩進む間に１０歩先を行くつもりだもん」
桂子ちゃんが胸を張って言う。
「でもここは、あたしもこのカーテンがいいと思うわ。お母さんは？」
「うん、私も異議はないわよ」
「そういえば桂子ちゃん、箪笥とクローゼットとＰＣはどうするの？」
あたしが質問する。
「あれは白だしあのままでいいわ。真っ黒とかだったらちょっと買い替えたかもしれないけどね……さ、恵美ちゃんとさくらに合流するわよ」
あたしたちは、桂子ちゃんの指示で恵美ちゃんとさくらちゃんの元へ合流することになった。

# 模様替え　後編

「お！　優子、桂子！　そっちは決まったか？」
「あ、うん」
　ホームセンター内は広いため、その中で見つけるのに苦労するかと思ったが、案外すぐに発見できた。
　まあ、木材とか日曜大工コーナーも広いし、そんな所にいるわけ無いと分かっていたのもあったけど。
「じゃあとりあえず、ぬいぐるみの候補を発表してくれるかな？」
「ああ、うん。全部じゃねえけどいいかな？」
「ええもちろん」
　恵美ちゃんはまず、小物コーナーに案内してくれ、そこからぬいぐるみを見つけてきた。
「優子さんには……このくまさんのぬいぐるみと……犬さんのぬいぐるみがいいと思います……」
　さくらちゃんが話しながら、恵美ちゃんが茶色いくまさんと犬さんのぬいぐるみを出してきた。
「うーん……」
　確かに可愛いけど……
「あ、あの……あたし……こっちとこっちがいい！」
　あたしが指したのは白いうさぎさんのぬいぐるみと黒い猫さんのぬいぐるみだ。
　ぬいぐるみで遊ぶなら熊とか犬よりも、うさぎや猫といった大人しい動物のほうがいいと思ったのだ。後単純にこっちのほうが可愛いと思ったのもある。
「うーん、どうしたものかねえ……あたいはこっちの方がいいと思うんだけどよお……」
「あ、あの……ウサギさんと猫さんは大人しい動物だから……」
「ほほう……そこまでは考えてなかったなあ……」
「あら、優子には全部あってもいいと思うわよ。どれも可愛らしくて、きっと優子に似合うわよ」

母さんが最大公約数的な提案する。
「え!? でもお金は……」
「大丈夫よ。まだまだ予算はたっぷりあるわよ」
「そ、そうか……」
母さんの声により、ぬいぐるみ４つ全てを買い物カートに入れる。
このホームセンターでは、小物類は全てカートに入れた後に直接レジで精算することになっている。
「それから、私……これも欲しいと思うのです!」
さくらちゃんがぬいぐるみから少し離れた所にある「人工観葉植物コーナー」という所を指差す。
「さくらちゃん、人工観葉植物って?」
「あ、あの……観葉植物のような作り物です」
「天然の観葉植物でもいいんだけどよ、いきなりあれこれ世話するのは大変だろ?」
「う、うん……」
植物の世話なんて小学校の時の課題でしかやったことない。
間違いなく枯らしてしまう。
「このバラの花なんかは置物として女子力を高めてくれるぜ」
「そ、そうなの……?」
恵美ちゃんの言うこと、イマイチ信用できない。
「優子ちゃん、こういうのを毎日見るだけでも、女子力は高まっていくのよ」
桂子ちゃんが言うならまあそうなんだろうけど……
「うーん……」
「優子、今は桂子ちゃんのことを信じたほうがいいわよ。女の子らしくなりたいんでしょ?」
母さんに言われる。
「う、うん……そうだね。じゃあこれも買う……」
とりあえず、机の上に置いておこう。
母さん曰く、本当はアロマグッズとかも買った方がいいけど、それはもっと後になってからとのこと。

続いてきたのは、ぬいぐるみコーナーの隣にある人形コーナーだ。
「ほら優子、着せ替え人形だ」
恵美ちゃんが指差す先には、林間学校で買った着せ替え人形シリーズの衣装がずらりと並べられていた。
「わーかわいいー」
あたしがコーディネートしたお人形さんとは大違いで、とっても可愛く着こなしているお人形さんたち。本当にかわいいと思う。
「服のバラ売りもあるけど、あの人形だけじゃなくて、別のキャラクターも試すのもいいかもしれないわねえ……」
母さんが展示を物色している。
更に、あのお人形さんの服と互換性のある別のキャラクターも買う。
これでお人形さんに出来る衣装の組み合わせは爆発的に増えたという。これでしばらくお人形さん遊びができそうだ。
「さて、人形とぬいぐるみはこの辺にして、次は優子のシャンプーね」
「あ、待ってください……その前に一つ買っておきたいものがあるんです……」
さくらちゃんが止めに入る。
「うん？　何？」
「こっちです……」
さくらちゃんが来た道を戻る。家具コーナーだ。
「これです。このクッションです……」
「え？　これ？」
あったのはハート型のピンクの柔らかいクッションだった。
「はい……どう……でしょうか？」
「か、かわいい……」
思わず声が漏れる。すごくかわいいクッションだと思う。これだけであたしの部屋も格段に女の子らしい部屋になると思う。
「そうよねえ、このクッションの上でカップルなんかが二人っきりってのもいいかもねえ……」
「え、か、カップル!?」

桂子ちゃんの何気ない一言にドキッとしてしまう。
篠原くんの顔を思い浮かべてしまう。二人きりでハート型のクッションの上で見つめ合って……
ボンッと音がして顔が真っ赤になった気がする。もちろん音はしてないはずだけど。
「お、どうしたんだ優子？　顔が真っ赤だぞ」
「う、うん……その……」
恵美ちゃんの声かけに、言葉に詰まる。
「ははあん、やっぱりそうなのねえ……」
桂子ちゃんが勝ち誇ったような表情をする。
「ええ、私も薄々そう思ってました……」
「まあ、あたいもあんなことがあったらそうなるのはわかると思うけどよ……」
さくらちゃんと恵美ちゃんが続く。
「あら？　うちの優子がどうかしたの？」
「か、母さん……その……」
「優子ちゃん、好きな男の子が出来たのよ」
「ちょっ、ちょっと桂子ちゃん！」
「ふーん、やっぱりそんな感じなんだー」
「え？　母さんももしかして……？」
「そんなんじゃないかなあと思ってたのよ。優子、何かそわそわしているし。それに今までもだったけど、最近は今まで以上に『女の子らしさ』を追求したがっていたもの」
「そんで、好きな男の子が出来たのか」
「……」
「ふふっ、沈黙は肯定よね」
あたしは小さくコクッと頷く。
「優子さんも女の子ですから、男の人を好きになるのは何も変じゃないわよね」
それはそうだ、女の子が男の子を好きになって何が悪い。
「で、でも……！」

「あら？　優子、何か悩みでも――」
「は……はい、恋の悩みが……」
「恋の悩みなのは分かるわよ。問題はその中身よ」
　母さんが言う。
「ここで言うのは恥ずかしいから、今は買い物に集中させてくれる？」
「あ、そうだったね。うん、ごめんね優子ちゃん。このクッションはどうする？」
「もちろん買うよ。かわいいし……それに……」
「それに？」
「あ、うん……やっぱり言わない……」
　篠原くんと二人でこのクッションの上……ダメ、想像したらまた顔が赤くなっちゃう……変な人だと思われちゃうよお……
「さて、とにかく次は優子ちゃんのシャンプーなんだけど」
「母さんと同じのを使っているのよねえ……」
「でもロングヘアーの優子ちゃんと違ってショートじゃない」
「え、ええ……」
「それに、優子さんは……お母さんと違って癖毛の一つありませんよ」
　確かに髪の毛の質はあたしと母さんでは全く違う。
　手入れの暇だって全然違う。あたしは特に毛先に気を使わなきゃいけない事情もある。
「……そ、それならこれなんてどうですか？」
　さくらちゃんがシャンプーの一つを差し出す。
「うーん、よく分からない……」
「いい優子？　シャンプーは色々な匂いがするのよ。男の子とデートする時はそれを使って落とすのよ」
「そ、そういうの気にするのかなあ……」
　正直元男としてあんまりそんな気がしない。
「そうねえ……確かに普段から使うシャンプーといざってときに使うシャンプーは分けたほうがいいかもしれないわねえ……」
　母さんが考える。
　確かにそれはそうかもしれない、デートでのギャップの演出は男が

好きなシチュエーションだからだ。
って、篠原くんとデート……
ど、何処に行くんだろ？　どんな格好しよう？　もちろん落ち着いた格好がいいけど……
「優子ちゃん、また赤くなってるわよ」
「はわっ、け、桂子ちゃん……」
「好きな男の子のこと考えてた？」
桂子ちゃんが言う。
「え、ええ!?　ど、どうして？」
「もう、分かりやすすぎ。でさ、優子ちゃんはやっぱり弱さと庇護欲、そういうのを煽っていくのがいいと思うのよ」
「そうだなあ、あたいみたいなアピールは天地が逆さになっても無理だろうし」
恵美ちゃんが言う。実際、あたしは泣き虫だし、恵美ちゃんみたいに振る舞うのは無理だと思う。
「そうすると……これなんてどうでしょう？　優しい香りのするシャンプーだそうですよ」
さくらちゃんがシャンプーを手に取る。
ふわりとしたバラの香りがするという。
「バラの香りかあ……あたしの頭から……」
また想像する。うん、何だろう、メルヘンチックで素敵な感じがするわね……
「優子ちゃん？」
「あ、ゴメン。とりあえず、これ試してみるよ」
「それじゃあ、買い物はこんな所かしら？」
母さんが再度確認する。
「そうね、布団、鏡付き机、カーテン、ぬいぐるみ、人工観葉植物、着せ替え人形、ハート型クッション、そしてバラの香りのシャンプー……」
あたしが一つ一つ今日買う商品について確認する。
「だいたいよさそうだぜ」

「私も……追加はありません……」
「それじゃあレジに行こうか」
母さんの先導でカートを押す。
そしてレジに並ぶ。ホームセンターのレジということで、一件一件時間がかかるが、致し方あるまい。
もちろん小さい買い物の人も居て、その場合は助かる。また空のレジも空き始め、あたしたちもそこにうまく滑り込めた。
「こちらの布団と、カーテンですね……少々お待ちください」
店員さんが何かボタンを押す。おそらく注文のことだろう。
その間に別の小さな商品をレジで打ち、処理していく。
さすがの手際の良さだ。
会計が出る。かなりの買い物だ。でも母さん曰く、慰謝料の４分の１もないとか何とか。
なるほど。たしかにこれならお金には困らない。
その事実を知っても、誰も羨ましいとは言わない。そのあたりは女の子としてちゃんと超えてはいけない一線を知っているということか。
そういうのも、ちゃんと学習しないといけないよなあ……今はみんなあたしの正体を知ってるから理解があるけど、今後はあたしも生粋の女の子と同じように扱われることも多いだろうし。今のままじゃ嫌われる危険性もある。
買い物カートを駐車場に停めてある車の前に持っていき、荷物をトランクに入れていく。
布団とカーテンで大半を占拠してしまったので、残りは運転手の母さん以外でそれぞれ分担して持つことになった。
「よし、これ返してくるぜ」
恵美ちゃんがすごい勢いでカートを押す。さすがスポーツ選手と行ったところか、絶妙の反射神経で、しかもダッシュで帰ってきた。
トランクからはみ出ていた恵美ちゃんの取り分の荷物を持ち、トランクを厳重に閉め、全員で車に乗り込みあたしたちは家に帰る。
座席の後ろでは、３人が部屋の模様替えについて話し合っていた。

「はい、じゃあ荷物持ってきたわね。さ、模様替え始めるわよ。優子ちゃんは悪いけどちょっと出て待っててくれるかな？」
「はーい！」
優子ちゃん、恵美ちゃん、さくらちゃん、そして母さんの４人があたしの部屋を変える。
その間、あたしはリビングで待機中。
いい部屋ができるといいわねえ……何て考えながら、ぼーっとして過ごす。

ジリリリリリ……ジリリリリリ……
ん？　電話？　小谷学園？　とりあえず出よう……
「はい、石山です」
「あ、石山さん？」
かけてきたのは永原先生だった。
「う、うん……」
「石山さんって今度の土日って暇かしら？」
「え、ええ……」
僅かに残った宿題以外、特に夏休みの予定はない。
「夏休みにクラスで親睦を深めようと思って、海と夏祭りに行こうと思ってるのよ」
「へえーいいじゃないですか。どこに？」
「ええ――」
永原先生から海岸の場所と集合時間、集合場所を聞き、メモを取る。
「はい、はい……あの、それで――」
「もちろん篠原君も誘ったわよ」
「う、うん……」
まずい、顔がまた……
「今は石山さんの他には篠原君にしか電話してないわよ。篠原くんがもし断ったら最初から企画倒れの予定だったのよ」
「つ、つまりこれって……」

「そうそう、石山さんと篠原君を応援するためのものよ。今回は私が企画したけど、次からはいつでも会えるように、ちゃんと連絡先は交換しておきなさい」
「は、はひっ……！」
海、海……水着……篠原君に水着……
多くの思考がグルグル回る。
「ふふっ、じゃあ私もクラスのみんなに伝えておくから」
「あ、あの……！」
「ん？　どうしたの石山さん？」
「桂子ちゃんと、恵美ちゃんと、それからさくらちゃんが今お泊り会で家にいるから」
「あ、うんわかったわ。その３人は除いておくわね。それじゃあ切るわよ」
「はい」

永原先生から電話を切り、メモを確認していると、ドアが空いた。
「優子ちゃん！　出来たわよ！」
「あ、うん！」
あたしは、永原先生の話を一旦横に置く。そして模様替えされた自分の部屋を楽しみにしながら扉を開ける。
「お、来たか！　どうだ、ここが優子の新しい部屋だぜ！」
「……」
「ん？　どうしたのですか優子さん？」
「い、いやその……すっごく可愛い部屋ね……」
「ええ、優子にピッタリの部屋でしょ」
殺風景だった勉強机兼ＰＣ机には、横にバラの人工観葉植物があり、白無地の地味なカーテンはバラ色のカーテンに、箪笥クローゼットや本棚と、テレビの間にあった何もない空間には鏡のある机が置かれ、そこには洗顔料やリボン、髪飾りなどがある。
テレビの周りには、画面に支障がない範囲で着せ替え人形が置かれ、テレビの高さを調節するために使っていた何も入っていない机の

下に着せ替え人形の服が収納されていた。
テレビを見ながら、ちょっと視線を下ろせば可愛らしいお人形さんが目に入るようになっている。
極めつけはベッドだ。殺風景な布団と枕だったそれは、壁際と枕元に犬さん、くまさん、ウサギさん、ネコさんのぬいぐるみがそれぞれ置かれ、ぬいぐるみに囲まれながら寝ることができる。
布団もピンク色の可愛らしいデザインへとリニューアルされ、更にハート型クッションも、朝布団から起きるとそこへ立てるように位置が工夫されている。
「どうだ？　気に入ったか？」
「うん……すごく嬉しい！　あたし、こんなに、こんなに女の子らしい部屋で過ごせるなんて幸せ！」
多分あたしが自分でデザインしようとしたら、こうはならなかった。
実際、あたしは今まで、これだけ一生懸命に女の子になろうとしておきながら、部屋のデザインを変えることを思いつかなかったんだから。
「ふう、それは良かったわ。まあ、今更優子ちゃんが女の子らしいものに拒否反応起こすとは思わないけど」
「桂子ちゃんありがとう。ところで、実は――」
「ん？　どうしたの優子ちゃん？」
あたしは、永原先生からの電話の内容を伝える。ただし、篠原くんについては隠しておく。
「なるほど、クラスで親睦会を兼ねて海と夏祭りに。か。いいぜ、インターハイも終わったからあたいはその日も暇だしたまには息抜き必要だしな」
「ええ、私も……行きます」
「私も行っていいけど、優子ちゃん、水着と浴衣あるの？」
「え？」
桂子ちゃんが当然の疑問を投げかける。
「あ、しまった。そういえば優子の買ってないわねえ……」

母さんがまずいという表情をする。
「あたいは2つとも去年のがあるぜ」
「わ、私も……」
恵美ちゃんとさくらちゃんは去年のを使いまわすそうだ。
「うーん、私は……去年は学校の水泳の授業でスクール水着を着ただけで、他に着る機会なかったし買わなかったわね……浴衣も最近全然着てないし……」
「よし、お泊まり会は本来朝解散だし、あたいとさくらは先に帰って、優子と桂子で水着を選んできたら？」
「……そうね、そうするわ」
「う、うん……」
桂子ちゃんとあたしも賛成する。
「よし、じゃああたいらは帰る支度するぜ」
恵美ちゃんとさくらちゃんが帰り支度をする。
それはすぐに終わり、玄関で見送る。
「んじゃ。またよろしくな」
「さようならです……」
「うん、恵美ちゃんさくらちゃん道中気をつけてね」
「おう！」
「はい……」
恵美ちゃんとさくらちゃんが駅に向かって歩く。あたしと桂子ちゃんと母さんで見送る。
「さ、私達はもう一度車に乗るわよ」
「あれ？　母さんも行くの？」
「優子の水着と浴衣だもの。母さんも見ないと！」
「えー!?」
「そうねえ、大人の女性の意見も欲しいわねえ」
桂子ちゃんが同調する。
「け、桂子ちゃんまで！」
「まあまあ、意見は多方面からのほうがいいわよ」
「……はーい……」

結構暴走気味なところもあるからなあ母さんは……
まあ、仕方ない。ここは素直に従っておこう。
あたしと桂子ちゃんは、水着売り場のある例のデパートを目指し、母さんの車に再び乗り込んだ。

## 水着と浴衣

「はーい、ついたわよー」
再び車を駐車場に止める。今度の目的地は課題やら女子との遊びでもお世話になったデパートである。
ちょうど夏の季節ということで、水着の仕入れを大量に行い、大セールを行っているようだ。
駐車場から降りる時、あたしはパンツ見えないように慎重に降り、桂子ちゃんは素早く降りる。だが、遠目にも見えないのが分かる。
あーあ、あたしもああやって優雅に見えないように降りてみたいなあ……
そんなことを思いながらも、私、桂子ちゃん、母さんの三人は、エレベーターで地下から水着コーナーへと直行する。

「うわー、たくさんあるねー」
水着売り場には、男子の水着もあるが数は少ない。一方で女子は様々なデザインがある。こうやって様々なお洒落ができるというのも、女の子に生まれ変われてよかったって思える瞬間だ。
「うんうん、優子ちゃん……迷っちゃうよね……まずは自分のを選ぼうか。一段落したら、見せあいっこしよ！」
「う、うん……」

というわけで、桂子ちゃんは単独行動になり、あたしは母さんと二人で水着売り場を歩く。でもどれを着ればいいのかさっぱりわからない。
しばらくすると母さんが良さそうなのを見つけてくれた。
「優子、これなんてどう？　優子の体にぴったりよ！」
「ちょ、ちょっと母さん！」
持ってきたのはマイクロビキニ。最低限しか隠してなくて、本当にやばい。
いくらなんでもこれは恥ずかしすぎる。

「これを使えば、意中の彼も、即戦闘態勢よ！」
「だ、ダメだよ母さん！」
「えー？」
　母さんが残念がる。何だろう、個人的な欲望で着せたがってる気もする。
「それに、もしこんな水着着たら……篠原くん嫉妬しちゃうよ！」
　マイクロビキニのような極端に露出度高い水着は、実は男受けが悪いことをあたしは知っている。
「へー、両想いなんだねえ……篠原くんって言うんだ。優子の好きな人」
「あ！」
　し、しまった……つい口を滑らせてしまった。
「……まあいいわ。そうねえ、嫉妬ねえ……でも優子のプロポーション考えたらちょっとは大胆でもいいと思うんだけど」
「こ、こっちの方がいいと思う！」
　さっきのマイクロビキニよりは大分控えめだけど、シンプルな白いビキニになっていて、かなり下着に近いデザインだ。
「ほほーなるほどねー」
「これでも多分、彼氏とかだったら嫉妬されると思うけど……ま、まだ友達って関係だから……」
「そうねえ、じゃあこれをまず試しますか」
「桂子ちゃんはどうなったのかな？　桂子ちゃーん！」
　あたしは桂子ちゃんを呼ぶ。
「はーい！」
　桂子ちゃんが返事をし、こっちに向かってくる。
「桂子ちゃん、決まった？」
「うん、だいたいね、２つに絞れたよ。優子ちゃんは？」
「こっちはまだ１つ暫定の候補を絞ってみただけ」
「じゃあ早速試着してみようか？」
「うん……」
　あたしたちは試着コーナーへ移動する。部屋は２つあって、母さん

が前に立つ。
試着室に入る。まずはスカートの中に手を入れてパンツを脱いで一旦ノーパンになってから水着のショーツに穿き替える。この間のスースー感がまた何とも言えない開放感を与えてくれる。
スカートを下ろし、下半身を水着にする。上半身もスク水の要領で一旦ブラ一枚になってからブラウスを着てその中で水着に着替える。
鏡を見る。うわっエロい……エロすぎる。それに滅茶苦茶可愛い。まさにエロカワイイの権化みたいな女の子がそこに居た。
胸を強調し、下側も純白の水着が扇情感を煽っている。
特にシンプルな純白という色が、男受けを更に加速させている。
あたしはカーテンを開ける。
「おお、優子かわいいわね！　これはもう男子はイチコロよ！」
「えへへ、やっぱり母さんもそう思う？」
「もちろんよ！　むしろお母さんのほうが襲いたくなるくらい――」
「ちょ、ちょっと母さん！」
「あーゴメンゴメン」
なんか冗談に聞こえないんだよなあ……
「へーどんな感じなの？」
桂子ちゃんがカーテンを開け、水着姿を見せながら、あたしを見る。
「うわー優子ちゃんすごいわあ……」
「け、桂子ちゃんだって……」
桂子ちゃんの水着は同じくセパレートであるが、下の方が可愛らしくスカートタイプになっている。
丈は水着らしくとても短く、ちょっと動いただけで下のショーツが見えるくらいだ。
桂子ちゃんのブルーの水着がとても海に映えそうだ。
「なんだろう、あたしも桂子ちゃんの着てみたいなあ……」
「そう？　これだとちょっと胸のサイズが小さいから、一旦元の服に着替えたら案内してあげるね」
「ありがとう」
試着室にもう一度入り、服に着替える。一瞬全裸になろうとも思っ

たけど、「ダメダメ。誰か入ってきたら大変でしょ優子」と言い聞かせ、スカートを穿いてから下を取り替えて、上の方もスク水の要領で着替える。
　うん、ちゃんと女の子しなきゃ。
「お待たせー」
「よし、じゃあ優子ちゃん行こうか」
「うんっ」
　桂子ちゃんの案内で水着コーナーを歩く。
「優子ちゃんこっちの方見た？」
「ううん、まだ」
「ほら、これがさっき私が着てた水着、優子ちゃんにも似合いそうねえ……」
「うん、ちょっと試着したい」
　なんか心もとないスカートだけど、まあ水着だし、そんなこと言ったらさっきのは丸出しってことになっちゃうしね。
「あ、これもどうかな？」
「え？　どれどれ？」
　桂子ちゃんが出してきたのは上下が白いフリフリの水着。胸には黄色い花が描かれている。こちらも超ミニスカートタイプだ。
「花をあしらった可愛いデザインだねー」
「これも試着してみる？」
「うん」
「あ、そうそう、これ、脱ぐこともできるのよ」
「へー、そうか水着だからスカート脱げるのね」
「あ、そうそう。水着のスカートは基本的にパレオっていうのよ。優子ちゃん覚えておいて」
「あ、うん……」
　以降気をつけよう。
　意外と胸が大きいから着られる水着も少ないと思っていたが、最近ではあたしのような超巨乳向けの水着も充実してきて、こうやって選ぶのに迷うことが出来る。

候補を3つ4つに絞り、もう一度試着室へ。桂子ちゃんのもう一つの候補が、青いデニム風の水着と黒いブラの水着。
その間に、あたしは桂子ちゃんが着ていた青い超ミニスカートタイプの水着を着る。水着のスカートは最後にして、まずは先程と同じように着替えて、最後にスカートを穿く感じだ。
へー、この水着、スカートを着脱できるのか。泳ぐときなんかに外すといいかも。
まず鏡を見る。うん、これもやっぱりかわいい。
中は水着と分かっていても、この超ミニのスカートがエロい。
ただ、先程のビキニと違うのはお腹周りの肉付きのエロさが出ないところだ。
……うーん、これは迷う。
試着室からあたしと桂子ちゃんが出る。
「あんまり男受けは良くないんだけど、たまにはちょっと抑えて決めてみたいかなあって……」
正直、普段着をちょっと脱いだくらいの印象だ。
「うーん、でもこれじゃあ日常とあんまり変わらない感じがするわよ」
「んー、やっぱりそう思う?」
「うん」
「優子ちゃんが言うんじゃなあ……」
結局これはすぐボツになった。桂子ちゃんはその後考え、もう少し丈の長い、オレンジ色のスカートタイプの水着を選んだ。スカートとブラとこちらも日常生活からちょっと脱いだ印象だが、ブラの露出度が少し高めで、水着にしてはガードが固そうな下とのギャップを与えている。
桂子ちゃん、本当にファッションセンスがすごい。あたしじゃ追いつけない。
なるほど、だから桂子ちゃんよりかわいいと思うあたしと並んでても人気なのかなあ……
続いてあたしの水着の選考の続きだ。ちなみに、母さんはあたしと桂子ちゃんがあまりに熱心なので、あまり口を挟めない。と言うか一

時期行方不明だったような。まあいいや。
まずはこの白いフリフリ水着に着替える。
水着から水着への着替えだが、スカートタイプだったので下は隠しながら着替える。
鏡も見ずに桂子ちゃんの元へ。
「ど、どうかな……？」
「おお、かわいいね。このフリフリ、優子ちゃんらしいよー」
「胸の黄色い花がかわいいわねえ」
いつの間にか戻っていた母さんが久しぶりに発言する。
「そうそう、優子ちゃんの胸には特にいいわよねえ……」
「じゃあ次に行くね……」
試着室の鏡を見る。胸の所にフリフリの花があって、思わず掴みたくなる。
これを脱いで次の水着へ。今度はパレオの丈もかなり長く、片方で結ぶ形だ。水着にしては随分露出度を抑えた格好。
「うーんこっちの水着は可愛いというより、美人って感じねえ……」
桂子ちゃんが言う。確かに鏡を見た時もそんな感じ。
林間学校の時に裸でポーズを取ったときのような、可愛らしさよりも美しさを感じるデザイン。
「大人になると分かる魅力って言うの……化粧とかするともっと映えそうねえ……」
母さんが言う。化粧、あまりいい思い出がない……
「うーん、これはちょっとやめておこうかなあ……」
「えーもったいないよー」
「あたしまだ未成年だし、可愛らしさ重視で行きたいわよ」
「うーんそうかなあ……」
「大人っぽいっていうと聞こえはいいけど、それは一歩間違えればおばさんくさくなるってことだから」
あたしが男時代の感覚を元に意見を言う。
「むむむ、さすが優子ちゃん、そう言うところは本当に鋭いわねえ……」

「女の子だもん、若く可愛くありたいって普通のことじゃない」
あどけなく幼く、それでいて可愛くエロく。理想を目指して幾つもの水着を試行錯誤していく。
「うーん、どれも今一歩なのよねえ……」
スカートタイプ、ビキニタイプ、露出の多少様々に試してみたが、どれもピンとこない。
可愛くエロくを強調すると、ちょっと幼さ・あどけなさが足りなくなるし、逆にそっちを強調しようとすると、胸の大きさもあって不格好になってしまう。

「うーん難しいわねえ……」
途中、「何あの子、何であんな贅沢に悩んでんのよ?」「十分すぎるくらいかわいいのに嫌味よねえ」という声が聞こえてきた。
年齢も30代半ば以上っぽくて、いかにもな行き遅れのおばさんで可哀想だ。その点あたしは老けないからアドバンテージも大きい。
……ともあれ、あたしはもう一度売り場をくまなく見る。
様々な水着がデザインされている。
あれ? ここにも段ボール箱が1つある。
「ねえ桂子ちゃん、これって……」
「うーん、パレオのバラ売りみたい」
「え? 水着ってこういうバラ売りもあるの?」
「そりゃあ着脱できるならそう言う売り方もあるでしょ? 他の水着と組み合わせるのよ」
……そうか! 閃いた!
「ねえ桂子ちゃん、ちょっと今のいいかな?」
「ん?」
「パレオのバラ売りよ、これで組み合わせはずっと増えたわ」
リボンが両腰にあしらわれた水色の超ミニのパレオを手に取る。
あたしは自分のイメージが消えないうちに、もう一つの水着を取る。
それは最初に試着した水着。下着のデザインに限りなく近い白い

水着。
「優子ちゃん、あまり走らないで」
「ご、ごめん。でもちょっと待ってて、すぐに着替えるから」
あたしはそう言うと、試着室に入り着替える。無我夢中でスカートとパンツを脱ぎ、下半身を丸出しにして水着を穿く。
上の方も、さっきまで服の中でゴソゴソやるのも忘れ、おっぱいを丸出しにしながら着替える。
女の子として恥じらいがないのはまずいと思いつつも、早く自分のイメージした水着が見たかった。
鏡で見る。うわあ……可愛い。
胸が適度に強調され、適度な露出を醸し出しつつ、下のあどけないデザインのショーツすれすれのパレオがエロ可愛く、幼さもある。
パレオの色とブラの色が違っているのは良くないと思っていたが、案外見栄えも良い。
そしてちょっとパレオをめくってみる。純白の水着ショーツがちらりと見える。この手の水着はパレオとショーツの色が同じなのが普通なので、このデザインも相まって非常にエロい。
うん、これにしよう。
「桂子ちゃーん、これでいいと思うよー」
「どれ？」
あたしは自信を持ってカーテンを開ける。
「おー」
「あらあ優子可愛いわねえ……」
母さんさっきからかわいいしか言ってないような。
「へへん。可愛いだけじゃなくてエロいのよ」
そう言うとあたしはその場でクルッと一回転ターンする。
ちらりと白い水着が見える。
「あら、優子ちゃん大胆だね」
「水着はさ、恥ずかしくないっていう通念があるから、そこに漬け込むといいと思ったのよ。普段はガード固くてもこの時は開放的になるそのギャップよ。だから見えてると分かっててても堂々とするところ

に魅力があるのよ」
「うーん、その辺は優子ちゃんホント強いよねえ……」
「この水色のパレオはねえ。可愛くてあどけないけどエロさが足りなかったのよ。そこで白いこの水着の出番ってわけ」
「下に穿いてる色が違うから男は喜ぶわよ。しかもそれが白なんだから」
あたしはへへんとドヤ顔する。
「まあ、優子が納得してなら、母さんは止めないわ」
「うんうん、私も似合ってると思うし」
「じゃあちょっと待っててね」
もう一度試着室に入り、普段着に着替え、ようやく水着選びも終わった。
気がつけば1時間は悩んでいた気がする。
続いて浴衣のコーナーだ。ここも数多い。
桂子ちゃんと母さんが何やら話している。なんか笑っているけど世間話かな？
……うーん、まいっか

「優子ちゃんはどんな色がいいの？」
「これかな」
青い色に金魚のデザインの浴衣。胸のサイズはもちろん最大だ。
「早速試着してみてよ。その間に私も選んでおくわね」
ということなので、浴衣コーナーの試着室へ移動する。
こちらはカーテン式ではなく扉式になっている。なんか妙に広い。
鍵を閉めてまずは下着姿になり……ってそういえば帯とかどうするんだろ？
「母さん、帯とかどうやって結ぶの？」
「あ、お母さんが教えてあげるからちょっと鍵を開けてくれる？」
「はーい！」
あたしが鍵を開け手招きする。
ううう……やっぱりパンツ丸見えは恥ずかしい……

「あら優子、まだダメよ」
鍵を閉めるなり母さんが開口一番に言う。
「え？　どういうこと？」
「優子、浴衣なんだからパンツとブラも脱がなきゃ」
「え!?　ええ!?」
あたしは驚愕する。
「だって、これはあくまで洋服のための下着よ。これを付けて浴衣着たら、身体のラインが出てみっともないわよ」
「で、でも……」
「脱がないと教えてあげないわよ。それとも、優子はみっともない浴衣着て出歩きたいの？」
「そ、そうじゃないけど……」
「じゃあ脱ぎなさい。それに浴衣の下はノーパン・ノーブラって、優子も聞いたことないの？」
「あ、言われてみれば……」
うん、確かにインターネットで見たことがある。母さんの言う通りだ！
「いい？　まだ帯は付けないけど、ブラとパンツをつけて浴衣を着るとこうなるのよ」
母さんが浴衣をかぶせて着せてくる。
鏡を見ると、ブラジャーとパンティーのラインが見事に浮き出てしまっている。
いつもは武器になるこの身体のラインが裏目になってしまっている。
「どう？　優子？」
「なんか下品……」
「そうでしょう？　だから覚えておいてね、浴衣の下はノーブラ・ノーパンが基本よ」
「う、うん……」
「というわけで、下着も全部脱ぎなりなさい」
「はーい……」

あたしは思い出したかのように下着を脱ぎ始める。そう言えば、母さんも前で全裸になったことはなかった。
「あらあら、こんなにセクシーな身体だったのねえ……」
「か、母さん……あんまり見ないで……」
「あ、ゴメンゴメン。優子も女の子だもんね」
というより、マジマジと裸を見られたことは初めてだ。林間学校の時に、ちょっと見られちゃったけど。
「はいっじゃあ行くわね」
母さんが浴衣をかぶせる。
「ちゃんと右前にするのよ。逆は死んだ人になっちゃうからね」
それはあたしも知っている。右手がすっと入ったので間違いない。
「さ、ここからが帯の結び方よ。まずこうやって半分に折るのよ」
母さんが半分に折る。
「右肩に乗せて、左巻きに巻いてみて……うん、そうそう。緩まないようにね」
母さんに言われた通りやってみる。
「で、最後に三角折りにするのよ。こんな感じ……そしたら肩の帯を下ろして思いっきり結んで、半回転よ」
「う、うん……」
正直、浴衣の下に何も付けてないので、足元まであるのにとてもスースーする。
「で、ここからちょうちょを作るのよ。シワを広げてやってみて」
ちょうちょ結びなら聞いたことがある。こうやって……よしっ！
「後はこれを後ろに移してみて？」
「うん」
後ろにずらすと、完成！
青い浴衣に赤い帯、とっても似合っている。
試着も大変だし、これで行こうと思う。
「桂子ちゃーん出来たよ……っていない」
「ああ、私もちょっと着替えてるの。待っててー！」
もう一つの試着室から声がするので、そのまま待つ。

しばらくすると桂子ちゃんも浴衣姿に。黄緑色のシンプルな浴衣だ。
いつもはあたしがシンプルで、桂子ちゃんが凝ったデザインになるから今回は対照的だ。
「へー、金魚さんが似合ってて、可愛いわねえ……」
「夏祭りだからね。これがいいかなって」
「じゃあこれで決まりということで、二人ともいいかな？」
「はーい！」
あたしたちはそう返事し、もう一度試着室で着替え直すと、浴衣も購入した。
これで、当日の準備は万端だ。
桂子ちゃんを途中まで送り、あたしは家に帰ると、新しい部屋への喜びもそこそこに、早めに寝ることにした。
ああ、早く土曜日にならないかなあ……夏休みでそんなことを思うのは、久しぶりの感覚だった。

## 海へ

ピピピピッピピピピッ……

「んー！」

目覚まし時計を押し、意識を回復する。うさぎさんの可愛らしいぬいぐるみが目に入る。ピンク色の布団から起き上がり、ハート型のクッションの上に立つ。

今日は待ちに待った土曜日。

いつものように、箪笥の中から今日の服を決める。

新しい部屋になって、より一層毎日オシャレには気を使っているけど、今日は特に意識したい。

今日は篠原くんも来る。林間学校の時から会ってなかったけど、さすがにこのまま会わないと両想いも自然消滅しかねないということで、永原先生に機会を設けてもらえた。

夏休みって意外と長いしなあ……

さて、この日は篠原くんに身体を見られる日。水着姿もさることながら、私服も林間学校の時以上に気を使わないといけない。

うーんどうすれば可愛く見えるだろう？

……そうだ、お人形さん遊びしよう。

あたしは、新しい部屋になってから、お人形さん遊びが日課になりつつある。

パジャマ姿のお人形さんを脱がせ、新しい服を着せてあげる。今日は赤い服を着せてあげた。

「可愛いわねえ……」

あたしもお人形さんに負けないくらい可愛い。お人形さんが老けないように、あたしも劣化を知らない人生を歩む。

そう思うと、あたしはお人形さんに、子供以上に自己投影している。

ふと、赤い服とちょうど膝上丈の赤い巻きスカートが目に入る。

さっきは赤い服を着せたから、あたしもこれかな？

幼さの残る、少女を強調したデザインは、あたしの中でも最もお気に入りの服の一つ。

もう一つの候補は、制服並みかそれ以上のミニスカート、水色のワンピース。
スカートの先が白になっている所がさりげないおしゃれだ。こちらにも幼さはあるが、赤い服よりもよりエロさを際立てる服。
どっちにしよう？
そういえば、今持っている水着のパレオも水色だったことを思い出す。よし、こっちの水色のミニスカートにしよう。
そして下着、本来は見せるものじゃないけど、もし見られてもいいように……もちろんすっごく恥ずかしいけど……でもこっちにも気合いを入れよう。
手に取ったのは水色と白の縞パン。水色のスカートにも似合うだろう。
もし、篠原くんに襲われたら……って、何考えてるのよ優子。
でも、好きな男の子だもの。そう考えても変じゃないのかな？
まあ、考えても仕方ない。とりあえず着替えよう。
そして頭につける白いリボンはいつもと違い、波に流されないようにかなりしっかり固定するタイプにする。
今回は水泳の授業とは違い、思いっきりオシャレする日だ。

「おはよー」
「おはよう優子、その服で出かけるの？」
「うん、可愛いでしょー」
「そうねえ、可愛いわよねえ……」
母さんがニヤける。
「か、母さんどうしたの？」
「いやねえ、その服、今までも何度か着てたけど優子の中でも特に似合ってると思うのよ」
「そ、そうかな？　赤い服とかお気に入りは他にもあるわよ」
「うん、それらも可愛いんだけど、母さんの個人的なお気に入りよ」
「そうなの？　何で？」
「だって、優子ったらこれで最終日の課題でおしおきされるときにス

カートたくし上げて……恥ずかしがってる優子がもう可愛くってねえー」
「あうっ……もう母さん！」
「あら、ごめんなさい。でも何もしなくても可愛いのは本当よ」
「う、うん……」
た、確かにあの時来てた服だけど……あうう、思い出しただけで恥ずかしいよお……
何だろう、おしおきされるってシチュエーションが余計に恥ずかしい気がする。
そのせいで、だらしなくしてパンツ見られたことまで思い出しちゃったし。
「さ、朝ごはんにしますわよ」
「……うん」
今日の親睦会の参加者はクラス全体では半分以下、現地までの交通費や昼食代などは自己負担なのが響いた。
女子からはあたしの他、桂子ちゃん、恵美ちゃん、虎姫ちゃん、さくらちゃんが参加することになっている。本当は龍香ちゃんも参加させたかったけど「彼氏がいる身だし、何より優子さんや桂子さんの水着姿を彼氏に見せたら、惑わすことになってしまいます」と言う理由で丁重にお断りされた。
ただし、二日目の夏祭りには参加してくれるそうだ。その辺は彼氏さんのほうが信頼しているということか。
一方で男子の方は高月くんと篠原くんと他２名で計４人の予定。
そこに引率役の永原先生を合わせて１０人の小団体といった所。
朝食を食べ終わって、歯を磨いて、それでも予定の時間まで少しある。
「ふう……」
昨日まとめた荷物を再確認する。日焼け止めや水分、そして浮き輪なども持った。
これで準備は万端だ。
部屋でテレビのニュースを見てゆっくり過ごす。最近は平穏な

ニュースばかりなのか、昔の小さな事件を繰り返し報じている。
左上の時刻を見る。
出発予定時刻２分前になったのを見て、テレビを消してバッグを持つ。

「いってきまーす！」
「はーい優子、気をつけてねー！」
母さんの声を尻目に、扉を開け、財布から鍵を取り出し閉める。
痴漢事件の慰謝料から、財布の中はかなり潤っているのだが、もちろん大半は自宅の別の財布にしまって置いて、持っていくのは１万円程度で済ませておく。
「あ、そういえばＩＣカードチャージしてたかなあ……」
少し遠目の海岸に行くので、ＩＣカードの残りが心配だ。
券売機に入れて残額確認、うーん１０００円チャージすれば大丈夫そうだ。
１００００円札を崩すついでにチャージも１０００円を選ぶ。
これで５０００円札と１０００円札４枚が出てくるのでまずこちらを財布に入れ、ＩＣカードを抜き取る。
ピッと言う音で改札をくぐり抜け、いつもの学園と同じ方面のホームに進む。
ホームではいつものように男性の視線を感じる。
制服を着ていても、今のように可愛らしく私服を着ていても、あたしは何処へ言っても男性たちの注目の的だ。今は居ないけど、もう顔を覚えてしまった人もいる。
……あたし、まるでアイドルみたい。
でも、あたしにはもう好きな人がいるんだって思うと、視線を投げかけている男性たちがちょっとだけ可愛そうに思えてくる。
いつものように「まもなく、電車が参ります」と言う声とともに、電車が入ってくる。
今回は通学する範囲を超えて、終点まで行き、更に２回乗り換えて海岸にたどり着く予定だ。

車内は空いていたので、座席に座る。
後ろに手をやってスカートを揃えて両足を閉じて膝の上に荷物を置く。
これでガードはバッチリだ。
目の前を見ると、座っていたのは女性、でも、その隣の男性があたしの膝をチラチラと見ている。
何だろう、今は少しだけ、男たちの視線に酔いしれている気がする。篠原くんを好きになる前からそんな傾向はあったけど、好きな人が出来てより気持ちに余裕ができたのかもしれない。
この男の視線は、あたしがＴＳ病になってから、常につきまとってきたこと。
はじめは困惑と、次いで嫌悪感があった。
嫌悪感の中身は、あたしのことをジロジロと見てくる男性たちの気持ちがわかってしまうことへの自己嫌悪が大半だった。
やがて、視線はいつものことと、半ば諦観を持って不感症となってしまったきらいもあった。
でも今は、あたしがかわいい女の子として自信を深めるきっかけになっていることに気付かされた。
部屋を新しくして、４つのかわいいぬいぐるみに囲まれ、お人形さんで遊ぶ。少女らしい部屋になったことで、ちょっとだけ心境が変化しているのかもしれない。
だとしたら、とっても嬉しいこと。あたしの長年の課題が、こうした「新しい部屋」というきっかけで変わるということだったから。
自分の部屋は確かに、日々の生活を送る場所でもあるのだから、部屋のイメージチェンジは、どうやら成功したと見ていいだろう。
電車はやがて学校の最寄り駅に着く。僅かに制服を着た少年少女が降りるのが見える。
こんな時期まで部活、本当にご苦労様だ。
あたしたち天文部は週１回、それも午後からの参加となっている。本当は午前中あたりから参加の予定だったのだが、あたしがミニチュアの制作に加わったことで、予定が大幅に前倒しされているためとい

うのが坂田部長の話だ。
学校の最寄り駅を過ぎ、次の駅へ。
一応あたしの人生でも終点まで行ったことは小さい時は何度もあるはずだが、最近は滅多にはなく、高校に入ってからは一度もなかった。いつもは見ない新鮮な車窓が目に入る。
普段の日常からたった一駅過ぎるだけで訪れる非日常。鉄道とは本当に不思議なものだ。
終点になるに連れて減っていく乗客たち、でも終点間際になると乗り換え駅なのか僅かに増える。
終点の駅の改札口を通る。ここはあまり来たことがない。記憶は薄らいでいて、案内を頼りに進む。
乗り換え路線、さっきとは会社が違うのでもう一度ＩＣをタッチしないといけない。
階段は人もまばらで、覗かれると思ったので、エスカレーターの方を使い、更にバッグを後ろに持つ。
ここら辺のガードは必須だ。特に今は縞パンだし下手したら襲われちゃうかもしれない。
この前の林間学校のこともあったし、ナンパされることは常に想定しておく必要があるだろう。
乗り換え路線に乗る。これに乗ったのは今までの人生でも片手で数えるほどしかない。
アナウンスとともに入って来る電車の色が違う。こちらも海岸の方面に行くわけだが、さっきより少しだけ乗客が多い気がする。
後明らかに浮き輪とかを持っている客も居て、あたしたちと同じ目的地だということが分かる。
「ふう……」
車内の空いている座席に座り一呼吸。
殆ど見たことのない光景、乗客たちの会話は沿線と同じ他愛もない話なのに、どこか違う世界の会話にも聞こえる。同じ日本語なのに。
電車はやがてひとつの路線との乗り換え駅に付く。更に観光客が乗ってくる。よく見ると外国人の観光客も多い。

更に乗車し、終点の2つ手前、ここでもう一度同じ路線の違う列車に乗り換える。今のダイヤだと、ちょうど次の列車に乗らないといけなかったのだ。
車内の乗客は観光客だらけになり、ますます非日常感が高まる。
程なくして、目的地の最寄り駅に着く。少し余裕のある予定を組んだが、ともあれ駅前の集合場所に目をやる。
「あ、永原先生！」
「あ、石山さんこんにちは」
私服姿の永原先生が見える。白いワンピースにいつもはしない頭の青いリボンが目に入る。
「永原先生そのリボン……」
「あ？　これ？　ちょっと私もこんな日くらいオシャレしようと思って」
「そうなの？」
「まあ、普段は先生らしくレディースーツだったからねえ……」
ふむふむ……
「あ、優子さん……こんにちは……」
「さくらちゃんこんにちは」
さくらちゃんはお泊り会の時のように、落ち着いたロングスカートが印象的だ。
今のところ、来ているのはこの3人だけ。

次の電車が入る。まだ集合時間に余裕のある電車。
「あ、先生こんにちは」
「あら、高月君、篠原君こんにちは」
まず来たのは二人の男子。
「篠原くん、こんにちは」
「こここっ、こんにちは石山……」
あたしも挨拶する。まだ面と向かって「優子ちゃん」とは呼んでくれない。
あたしもまだ、顔をはっきり直視できない。どうしても守られた林

間学校のことを思い出してしまう。
それでも篠原くんの隣に立つようにする。
林間学校のときよりも短いスカート。水色の可愛らしいワンピース。篠原くんに見られている。そしてこれから可愛くエロい水着を篠原くんに見せる。
そう思うだけでほんのりと顔が温まっていく。
４０秒位して、その電車の乗客降り終わった頃、桂子ちゃんが現れた。
「こんにちはー優子ちゃん。あれ？　ちょっと顔が赤……っていうん、なんでもない」
「こ、こんにちは桂子ちゃん」
顔が赤いと言いたかったんだろうけど、篠原くんの隣に立っているのを見て理解した顔をする。
やっぱり篠原くんが想いの相手だっていうのは簡単に推測されてしまった。まあそりゃあそうだろう。あのタイミングで恋に落ちる相手といえば、あたしを守ってくれた篠原くん意外考えにくい。
数分後、次の電車が来る。集合時間ギリギリのタイミングの電車から、恵美ちゃん、虎姫ちゃん、残りの男子二人が来て、これで全員集合だ。
恵美ちゃんは、お泊り会の時のように、スカートを穿いていた。それも制服より少しだけ長い程度のミニだ。
虎姫ちゃんも、林間学校では見せなかったタイトスカート姿。女子は永原先生以外全員が膝上のミニではあるが、それぞれに意匠が違って面白い。
「じゃあ、混んじゃわないうちに行きましょうか」
「「はーい！」」
男女が１０人で歩く。高月くんが篠原くんと離れ、あたし以外の女子と男子が話す。
永原先生は黙って先導しているので、必然的にあたしと篠原くんが取り残される。
「ねえ篠原くん……」

「な、何？」
「ああ、あたしっ……きょ、今日のために頑張ってきたのよ」
なんか支離滅裂な言い方だ。
「そ、そうなんだ……」
「きょ、今日はいっぱい遊ぼうね。友達だもの」
「う、うん……」
永原先生がまず入場料を払い、海水浴場へと行く。ここは自己負担だけど、あまり重くない。
……って、無駄遣いしたら大金もすぐなくなる。気をつけないと。
「はーいみんな集まってるね。じゃあ聞いてね、今から着替えるから、着替え終わったら全員で海の家に集合してね。そしたら遊ぶわよ」
永原先生の号令とともに、まず男子が男子更衣室へ入る。
「それじゃあ、女子のみんなも行くわよ」
「「はいっ！」」
みんなで女子更衣室の中に入る。中では知らない女性たちが水着に着替えている。
服を脱いだら水着になった女性の後ろ姿に一瞬ドキッとしてしまう。脱いで水着に着替えている女性たちに目を奪われる。
あたしは、「ダメダメ、あたしはレズビアンじゃないんだから。好きになったのは男の人でしょ優子」と自分に言い聞かせながら冷静になる。
各自がばらばらになって空いたロッカーを探す。
鍵がついているロッカー、まず財布から百円玉を出す。これは１００円が戻ってくる親切設計だ。
財布、携帯電話の貴重品をまず預ける。
そして、水着への着替え、まずパンツを脱ぎ、下の水着をつける。
次に上、前かがみになって後ろに手を回してブラジャーをパチンと外す。そう言えば制服以外での私服、それもワンピースでの水着への着替えは初めてだ。
水着のブラジャーを取り出し、そちらに付け替える。ワンピースの

中でゴソゴソとやりつつ、ちゃんと水着が固定されたことを入念に確認してから、思いっきりスカートの袖を掴んでめくりあげ、裏返しの形で脱ぐ。まずワンピースを元の状態に戻してから、最後に水色のパレオを穿いてこれで完成！

ロッカー付きの鏡を見る。うん、とっても可愛く決まった。

１００円を入れて鍵を閉め、荷物だけ持って行く。

女子更衣室全体をチラッと見る。恵美ちゃんと虎姫ちゃんが雑談しながら着替えている。恵美ちゃん、また全裸から着替えてるよ……

「そういう意識から変えないと女子力の道は遠いわよ」と言いたいが、女子初心者のあたしが言ってもまずそうなのでともあれ黙っておく。

更衣室から出て海の家へ。案内板があるのですぐに場所はわかった。

海の家の手前では、永原先生と桂子ちゃんが手を降っていた。桂子ちゃんはあの時選んだオレンジ色の水着。

永原先生は緑のビキニで布面積は小さく、ショーツには可愛らしくフリルがあしらわれていた。青いリボンとの組み合わせがなんとも「年上のかわいさ」を醸し出している。

少し距離が離れた所に、男子４人も見える。

これから、楽しい海での一時の始まりになるだろう。

## 優子の荒療治

「お待たせー待ったー？」
「ううん、大丈夫よ」
「あら、石山さんその水着……」
「えへへっ1時間以上かけて選んだんだー」
「中々似合っているわねえ……」
「ありがとう……」
　男子達を見る。あえて後ろに向いている。
「篠原くん、みんなーどうしてこっち見ないの？」
「い、いやその……全員登場してからのお楽しみっていうの」
「うんうん。そうそう、今は妄想を膨らませて……」
「さっきから男子はずっとあんな調子なのよ。まあ、今はそういうことにしておきましょう」
　永原先生が言う。まあ確かにそれでもいいかもしれない。
「お待たせしました……待ちましたか？」
　さくらちゃんが水着に着替えてきた。さくらちゃんらしく、落ち着いた濃い青のワンピースタイプの水着だ。
「ああ、うん大丈夫だよ……これで残りは安曇川さんと田村さんね……」
　1分後、虎姫ちゃんと恵美ちゃんが走ってきた。
「悪りい、あたいたちが最後か」
「ごめんなさい、雑談してたら遅くなって……」
　恵美ちゃんと虎姫ちゃんが来る。恵美ちゃんはスポーツ選手らしいのか、競泳水着だ。
「恵美ちゃん海に競泳水着って……」
「へへん、あたいはスポーツ選手だからな。あえてこれで勝負してえんだ」
「でもでも、確かにそれが好きって男子も居るわよ」
「だろだろ？　そうだろ虎姫!?」
　対する虎姫ちゃんは白い短パンのようなデザインにブラジャーも

露出度はやや低め、「日常生活の延長みたい」ということで、ボツになった桂子ちゃんの水着案に似ていた。
「じゃあ全員集まったわね」
「男子ー全員集まったわよー！」
桂子ちゃんがそう言うと、４人の男の子が恐る恐るこちらに顔を向けてきた。
「おおー！」
いきなり高月くんが歓声を上げ、他の男子も感心している。
四人の視線は胸元と下半身に集まっている。
「どうかなどうかな？　絶景かな絶景かなあ？」
「うおお……」
桂子ちゃんが煽る。さくらちゃんと恵美ちゃんは露出低めで、あたし、桂子ちゃん、虎姫ちゃん、永原先生がへそ出しで、露出度は永原先生が一番高い。
「へへん？　誰が一番いいかな？」
ちょっと柔らかい風が吹き、パレオがめくれ上がる。ちらりと白い水着が見えるけど隠さない。
桂子ちゃんの長さだと見えてないみたいで、男子たちがあたしの水着に釘付けになる。
「そ、その……」
「き、決められねえよなあ……」
内心はともかく、男子たちはみんな女子に配慮している。
「あらあら、八方美人ですかあ？　気持ちは分かるけどそれじゃあ駄目よ……」
「だ、だって先生！」
篠原くんが声を上げる。
「はいはいごめんなさい。じゃあ準備運動しましょうか」
永原先生の掛け声とともに、準備運動開始。
まず屈伸運動をする、次に手足をブラブラし、また腰の運動をする。
アキレス腱をよく伸ばす、最後に二人一組で背と背を合わせて伸張運動。あたしは永原先生と、恵美ちゃんが虎姫ちゃんと、桂子ちゃん

がさくらちゃんと組む。
あたしと桂子ちゃんはパレオなので、準備運動するだけでも、中がチラチラ見える。特にあたしは超ミニなので、簡単に見えてしまう。
準備運動の途中、高月くんが下半身を押さえながら大急ぎでトイレに駆け込んでいた。
……悪い子じゃないんだけど、やっぱり反応しやすいのは可愛そうな気もする。最も、この場に優一がいたとして、耐えられるかは疑問だけど。
「はーい、準備運動は十分ね、それじゃ荷物はあそこのテントに置いて、各自自由に遊んでね」
「「はーい！」」
高月くんが戻ったのを見計らって、永原先生がそう言うと、クラスのみんなが勢い良く返事する。
みんなは荷物をテントに置き、荷物番として永原先生が残った。あたしは泳ぐためのビート板を持つことにする。
目のやり場に困るのか、せっかくの親睦会なのに女子は女子で、男子は男子で固まってしまう。
「篠原くーん！」
「な、何!?」
「一緒に遊ぼうよ」
あたしは水着姿になっている篠原くんを呼び止める。
「え……でも……」
篠原くんが顔をそらす。
「ヒューヒューー！」
「くー青春だねえー！」
男子たちが囃し立てている。
「お、おいっ！」
「いいじゃねえか、好きなんだろ？　なあ!?」
……やっぱり男子のみんなも、篠原くんがあたしを好きになっていることを知っていた。
両思いだし、何とか、もう少し親密になりたい。

「篠原くーん男でしょー」
「そうだぞー度胸を見せろー」
桂子ちゃんたち女子まで煽ってくる。
あたしも篠原くんも、顔が真っ赤になっている。
「ほら行こう！」
あたしが篠原くんの腕を引っ張ると、あたしのもとに寄る。
もちろん、あたしが本気で引っ張っても篠原くんはびくともしないから、篠原くんが自分の意志で動いたということ。
他のみんなはあたしたちに配慮してか別の所で遊び始めた。
「ねえ篠原くん……」
「うん？」
「あたしのこれ、どうかな？」
ちょこんとパレオをつまんでアピールする。そういえば林間学校の初日の時も私服で同じことしたっけ？
「そ、その……」
「かわいい？　エロい？　それとも美しい？」
恥ずかしいけど聞いてみる。恥ずかしいはずなのに、自然に両手が胸の横に来て胸を寄せて誘惑してしまう。
こうすることによって、ただでさえ胸を強調している水着で更に強調される。
「あ、あの……」
「うん」
「す、すごく似合ってて……え、エロくてかわいいと思う」
「あらありがとう。嬉しいな……」
自然と笑顔になる。篠原くんが赤くなる。それにつられて、あたしも顔がほんのりと熱くなる。
海岸に来て見る。波が時折打ち寄せて海水が足元を濡らしてくる。
「ちょっと遊ぼうか」
そう言うと、あたしは砂浜にぺたんと女の子座りをする。
「どうしたの？　一緒に座ろうよ」
「う、うん……」

篠原くんが座る。同じ目線になる。ちょっとだけ足を広げる。波が打ち付けてくる。
多分超ミニのパレオの中は篠原くんの視界からはあたしの股間が海水に濡れた水着越しに丸見えになってるはずだ。でも水着だから、恥ずかしくはない。
「あ、あの……」
「石山……その……」
篠原くんが近い。言ったら顔が真っ赤になりそうだけど……言わずにはいられない……
「あのね……こ、浩介くん！」
勇気を振り絞って篠原くんを下の名前で呼ぶ。
「え!?　う、うんどうしたの？」
篠原くんは一瞬驚いた表情を見せたけど、すぐに普通の対応に戻る。もちろん篠原くんは顔が真っ赤だけど。
「あたしね、今日の水着は浩介くんに喜んでもらいたくて必死に選んだのよ。他の目なんて……どうでも……良かったのよ……だからあたしの狙い通り……かわいくてエロいって言ってもらえたの……とっても嬉しかった」
片方だけじゃ駄目だった。２つを同時に達成しようとしたんだから。
「そ、それって……」
「ごめんね。浩介くんも知ってると思うけど、あたし５月初めまで男の子だったでしょ？　実はね、あたし……心はもう殆ど女の子だけど、まだ身体が……言うことを聞いてくれないのよ……」
「それってつまり石山は……」
「そうよ、あたしは浩介くんともっと触れ合いたいと思ってるのよ。でも、身体が拒絶しちゃうのよ。男同士でベタついていると思ってしまっているみたいで……」
「……」
「あたし、そんなの嫌。身体はもう女の子で……心だって、あたしはもう殆ど女の子よ……なのにどうして、本能だけ男のままなの？」

本当に嫌だ。一人の女の子として、あたしのことを優しく守ってくれた一人の男の子を好きになったのに。
理不尽過ぎる。こんなごく普通のことが、あたしがＴＳ病で身体の反射的本能だけ男性のままなんて。
「俺には……俺にはわからない……」
「あたしだって女の子だもん。男の子をもっと自然に……浩介くんを受け入れたいのよ。浩介くんのことを思うと、身体が熱くなっちゃうのに……だから、まだ告白できないし、告白してもらっても受け入れることが出来ないの」
「なっ……そ、それってもう告白そのものじゃねえか！」
あたしもそれは同意見。こんなこと言っちゃったら、殆ど好きって告白しているようなもの。だけど……
「ううん、まだ駄目。まだ友達じゃなきゃ駄目。本当にゴメン。あたしのわがままで……」
「謝るなよ。石山は悪くねえだろ……」
「そう言ってもらえると気が楽よ」
「ホント、石山は立派だよ。女の子だもんな」
「それでね、浩介くんに一つお願いがあるの」
「ん？」
「あのね、あたし泳げないでしょ……」
顔を赤くしながら言う。
「それでね、浩介くんに……泳ぎの練習に付き合ってほしいの……」
一人称は少しずつ変わっていったのに、浩介くんの呼び方は、一旦名前呼びにしてしまったら、すぐに定着してしまった。
そうだよね、元々好きだったんだから。むしろこっちのほうがしっくり来るくらいだ。
「う、うん……わ、分かった……」
「それよりも浩介くん……」
「ん？」
「あたしのここの中気になる？」
浩介くんにパレオの中を覗かれているので聞いてみる。

「え!?　そ、その……うんっ……」
「そう……あたしのこと、エッチな目で見たことある？」
「そ、それはもう……ある……」
「ふふっ、やっぱり浩介くんは正直だね……じゃあ海に入ろうか」
　あたしはそのまま立ち上がる。
「どうしたの浩介くん？」
「あ、ゴメン」
　ローアングルを堪能している浩介くんに声をかける。
　水着とは言っても、やっぱりマジマジと見られると結構恥ずかしい。これもやっぱりスカート穿いてるのと感覚同じだし、水着のデザインも下着に近いものを選んじゃったし。
　浩介くんと一緒に海に入る。やがて膝からお腹へと水深が深くなる。水着の下が水に入ると、ちょっとだけパレオがはためいていて、水中からは見えちゃってるはずだ。
「うんじゃあ泳ぎを教えてくれるかな？」
「う、うん……」
　あたしは浩介くんにビート板を渡す。そのまま海水に横になり、泳ぐ練習を始める。
「流されないように離さないでね」
「あ、ああ……」
　浩介くんが後ろに下がる、少しずつバタ足で泳ぐ。
「うん、うん、いいぞ……いいぞ」
　順調に泳ぐ、直接手を繋いでも良かったけど、まだ反応がちょっと怖い。
　お尻の感覚では、パレオがお尻にひっついてる。後ろからは当然見えてるだろうし、浩介くんの角度でもかなりエロいことになっているはず。
　浩介くんのたくましい胸板めがけて泳ぐイメージで行く。
「はぁ……はぁ……」
「うん、お、泳ぎ方は上手いぞ……」
「はぁ……ありが……はぁ……とう……」

必死に泳ぎながら、返答する。
「はぁ……はぁ……」
よく見ると浩介くんも息が荒くなっている。そうだよね、こんなエロいんだもん。
だんだん疲れて、泳ぎが変になる。
「石山、一旦休憩しよう」
「あ、うん……」
あたしがもう一度海に立つ。一応パレオを直しておく。太腿にひっついていてエロさが増してる気がする。
浩介くんは前に歩く、あたしが横に並ぼうとすると、歩くスピードを上げてしまう。
うーん、まあしょうがないかなあ……興奮してくれたのは狙い通りだから嬉しいんだけど。
浩介くんはごまかすように砂浜にうつ伏せに寝た。少しだけ水着の中に手を入れているのが見える。
「はー疲れたー」
あたしは浩介くんの横でうつ伏せになりながら横になる。
「俺はあんまり疲れてないけど、石山は疲れたの？」
「そりゃあねえ、この水着、見た目重視で泳ぎやすいってほどじゃないから」
もちろん考慮はされているけど。
「そ、そうだよな……スカートとかついてるし……」
「ふふっ、これは別売りなんだよ」
「え？　そうなの？」
「うん、本来このスカートの方は水着セットの方にはなかったんだけど、いまいちエロさが足りないと思って、追加したの」
「そ、そうなんだ……」
「水着だもん、せっかく女の子になったんだし、可愛くエロく……でしょ？」
「うん……」
そうだ、もっと身体を男に慣らさないと……

そう思い、一つ思いつく。
「浩介くん、ちょっとここで待ってくれる？」
いつまでもうじうじしていても、事態は一向に好転しない。
これは言うなれば、あたしの中に残る、「石山優一」が抵抗する最後の本丸みたいなもの。
ちょっとやそっとでは落ちるものじゃない。でも既に戦況は好転している。
もちろん常にうまくいくとは限らないが、圧倒的な大軍でゴリ押せばいつかは城も落城するように。
そう思い、拠点のテントに戻る。永原先生がサングラスを掛けて日光浴をしている。
そう、この日焼け止め、思い切って浩介くんに塗ってもらう。砂の上に直接塗るのは痛いので、持ってきたシートを持ち、ビート板を元に戻す。
「石山さんおかえり、篠原君は？」
「あ、あの……ちょっと待ってもらってるの」
「ふーん、その手に持ってるものは？」
「そ、その……シートと……日焼け止めクリーム……」
「ふーん、それで篠原君に塗ってもらおうと？」
「う、うん……荒療治しないと、駄目だと思って……」
「……石山さん、あなたのいい所は、一生懸命女の子らしくなろうとするところよ。でも、それは弱点でもあるわ」
「え？　どういう？」
「石山さんほど女の子らしさに憧れるＴＳ病の子は今まで居なかったわ。でもね、いくらなんでも焦りすぎよ」
「……でも、あたし……これさえなくせば、何もかも女の子になれるって……」
「石山さん、本来今あなたがやっていることは普通のＴＳ病患者なら発病から数年は見なきゃいけないことよ。あなたはまだ、女の子になって３ヶ月でしょ？」
「嫌なの!!　あたしだって……あたしだって男の子のこと好きになっ

た……恋する女の子なのに……あたしの本能がまだ男のせいで、告白もできない……ううっ……」
　また少し泣いてしまう。
「石山さん……あなたの気持ちもわかるわ。でもお願い、あまり焦りすぎないで。私が心配しているのは……石山さんがあんまりに前のめりになって自殺することになりかねないと思ってるからからよ」
「え？」
　意外な言葉が出る。ＴＳ病が自殺するのはてっきり男に戻ろうともがいた果てだと思っていたから。
「今までも男に戻りたいなんて言って不老の命を捨てて自殺してきた人は多いわ。でも、石山さんほどに女の子になりたいという気持ちが強い子も居なかったわ。だから……もしかしたらそっちの方向に行き過ぎても自殺の道なんじゃないかって怖いのよ」
「でも、あたし、これでも満足できない」
「石山さん、生き急いじゃダメ……今のあなたは誰もしたことのない体験をしているの。こんなに早く、女の子になっていく子はいなかったのよ。あなたは十分に、十分に立派よ。焦らなくても、篠原君が若いうちに、その『病気』も治るわよ」
「……」
「でもね、その病気が治っても、完全に男が消えるわけじゃないわ。私だって本当のごくたまに、『男』が出ることがあるんだから」
「え？　そうなの？」
「ええ。さあ、篠原君を待たせているんでしょ。上手く行かなくても、泣かないでとは言わないけど……思い詰めないでね」
「う、うん……」
「それから、もしどうしてもって言うなら、最初にカリキュラムでやったように『私は女の子』って言う暗示をするといいかもしれないわよ」
「あ、ありがとう……」
　永原先生の言葉を胸に秘め、浩介くんのもとに戻る。
「お待たせー」
「あ、石山どうしたの？」

下半身も落ち着いたのか浩介くんは仰向けに寝ていた。
「あのね、浩介くん。ここ日陰でしょ？」
「うん……そうだな」
あたしはシートを広げ、その上に膝をついて中腰になる。
恥ずかしいけど、意を決して日焼け止めクリームを渡す。
「はいこれ」
「え!?」
浩介くんがキョトンとしている。
「い、石山……これは一体？」
「見て分からないの？　ひっ、日焼け止めクリームよ……」
「うっ……ええ……」
浩介くんは動揺して言葉に詰まっている。
「背中に手は届かないからさ……あ、あの……こ、浩介くん、ぬぬ、塗ってくれるかな？」
あたしはそのままうつ伏せに倒れ、長い髪をカーブさせて肩の上側に寄せ、背中側が全部塗れるようにする。
「え？　あの……その……」
「お願い。あたし、こうでもしないと……女の子になれないから……」
「……」
「お願い、恥ずかしいけど……特に浩介くんだから恥ずかしいけど……でも、恥ずかしいけど浩介くん以外に塗ってほしくないの……」
あたしは何度も恥ずかしいを連呼する。顔はもう火が出そうなくらい熱い。それは夏の日差しの熱ではなく、自分の体内から出しているもの。
心で反応する身体は、もうこんな風に反応してくれているのに。そう思いながらも、浩介くんの返事を待つ。
「あ、ああ。分かった。塗るよ……」
「うん……」
シートが若干きしむ音がする。浩介くんが意を決してくれた証拠だ。

# 日焼け止めクリーム

「ど、どこから塗ればいい？」
「とりあえず肌に塗ってくれればいいから。場所は任せるわよ」
「お、おう……」
パカっと蓋が開く音がする。あたしは何処を触られてもいいように身構える。
ふと左腕が持ち上げられる感覚。
「い、いくぞ……」
「はい……」
左腕に浩介くんの手が触れる。心臓はこれからされることにときめいてドキドキし、体の奥は逆に反射的な嫌悪感。
でもだめ、我慢しなきゃ。あたしは女の子……あたしは女の子……
まず、手のひらから手の裏がクリームで塗られていく、そして腕へ、腋を避けて肩へ。
そのまま首を塗ってくれる。
「そうそう、そこが結構焼けるのよ。ありがとう」
「お、おう……」
突然お礼を言われた浩介くんがぎこちなく返事する。
浩介くんの手が右肩から右腕へと移り、徐々に日焼け止めクリームで塗られていく。そして腕から手の裏、最後に手のひらと、先程の逆を行く。
「ぬ、塗ったぞ……」
「手と首だけじゃダメよお……」
これじゃ背中も足も日焼けしちゃう。
「う、うん……分かった」
ゴクリと唾を飲み込むような音とともに、右足が持ち上がる。
あたしは足の裏をくすぐられた。
「きゃはっはっ……あはははは」
思わず笑い声が出る。
「ど、どうした？」

「ご、ゴメン……く、くすぐったくて……っ、続けて……」
「うん……」
ゆっくりと足の裏をクリームで塗られていく。
「きゃはははは」
浩介くんに塗られると同時に、足の裏を無意識にくすぐられて笑い声が出る。ちょっと水着がめくれてる気がするのでさり気なく戻す。
ちらりと後ろを見ると、浩介くんがあたしのお尻を凝視していることがわかった。
あたしも浩介くんの気持ちが分かってしまう。
浩介くんはきっとあの中に手を入れたい、触りたい、もっと生々しく言えばあたしを犯したいという欲望と必死に戦っているに違いない。
そう考えるとまた体の奥が熱くなる。
あたしの心はそうだ。浩介くんにあの中に手を入れられたい、触られたい、もっと言えばあたしは浩介くんに犯されたい。
まだ露骨に出てないけど、心の何処かでそんなことを考えてしまっていることだろう。でも、身体の反射の方は、さっきから嫌がっている信号ばかりだしている。
あたしは脳を使って、「あたしは女の子」とひたすら暗示をかけ、強引にそれを押し殺す。
右足の膝辺りに来ると、今度は左足の裏をさっきより丁寧に塗ってくれる。
今度はかなり丁寧に塗ってくれたのであまり笑わない。
しかし、またしても浩介くんの手が止まってしまう。
「あ、あの……」
浩介くんが言う。
「浩介くん、太腿もだよ」
「あうあう……」
浩介くんが恐る恐る太腿に触れてくる。あたしは太腿に、クリームと浩介くんの手の感触を感じる。
「んんっ……」

ちょっとだけエッチな声が漏れる。パレオに触れないようにしているのか右と左を忙しなく往復していて焦らしているような感覚を受ける。
「あっとあの……」
浩介くんが話しかけてくる。
「あ、ゴメン、ちょっと待ってね」
あたしは少しだけ背筋で背中を起こすと、背中に手をやり、パチンと水着のブラジャーを外す。
「はい、背中もお願いね」
「う、うん……わわっわかったよ……」
浩介くんの手がまず肩に触れる。背中をゆっくり撫で回され、クリームを塗られていく。
ぐるぐると円を書くように触られる。浩介くんが塗ってくれるクリームの触感が心地よい。何より浩介くんに触られていると思うと否が応でも興奮度は高まる。
心臓はもう破裂しそうにバクバク行っている。普通なら、あたしの水着は外側の海水だけではなく、内側からも濡れていなきゃいけないのに、そんな気配は一向に来ない。
後ろの浩介くんからは、胸がちょっと見えているはずだがそのことには触れない。パレオの上の腰の部分まで満遍なく日焼け止めクリームが塗られていく。
そして腋から腰にかけて、側面に浩介くんの手が回り、クリームでゆっくりと両手で塗られていく。胸の高さの所は特にぎこちなく、だが慎重にやってくれた。
「浩介くん、これ付けてくれる？」
「え？　え!?」
「だって、浩介くんが付けてくれないとぽろりしちゃうよ……」
あたしが意地悪に言う。でも実際に付けてくれないと立てない。
「わわっ、分かったよ……ゴクッ」
浩介くんがまた唾を飲み込む様子が聞き取れた。
浩介くんが水着の両端をつかむ。水着を少し上に引っ張られて、胸

が圧迫される感覚を覚える。
間接的だけど、男の子に胸を弄られちゃったの初めてかも。
今までの女子同士で結構セクハラされてたのに比べれば小さなことだけど、やっぱり異性というだけでドキドキが違う。
「あれ？　い、石山……これどうやってはめるの？」
「うーん？　カチって音が鳴れば大丈夫よ」
その後も浩介くんは何度も悪戦苦闘し、そのたびに胸が押される感覚がし、そのたびにあたしは心臓を興奮させ、代わりに身体の本能が拒絶反応を起こす。
４０秒くらいたち、ようやく背中から「カチッ」と鳴る音がする。
「で、できたよ……こ、これで全部かな？」
「うーん、まだかなあ……」
本来ならこれくらいで十分だけど、あたしは、兼ねてから考えていたことを実行する。
「え？　でもどこが……」
「ほら、水着の中よ」
「ええ⁉　いやいやそれは何でも……」
「お尻は塗らなくてもいいけど、このスカート外すこともあるのよ。だから念のためそこの腰をお願い」
「え⁉　でもどうやって……」
「そ、それは……その……」
ううっ、口で言うのはやっぱり恥ずかしいけど、今更引けないや……
「め、めくるなり、中に手を入れるなりしてくれればいいから！」
はうう……
「ううっ……」
浩介くんがまた息をのむ。緊張で声にならないうめき声を出している。
そりゃあドキドキするだろう。
「み、水着だから恥ずかしくないし！」
明らかに強がった声で言う。

「わ、分かったよ……」
浩介くんにパレオの袖をつかまれる。一気にぶわっではなく、ゆっくりした速度でめくられていく。
パレオで隠されていた白い水着とお尻のラインを丸見えにされ、水着よりも上の腰の部分を塗るため、完全にめくれ上がった状態にさせられる。
「いやーん」
ついエッチな声が出てしまう。計算したわけじゃない。
普段は下着とか見られるのを恥ずかしがるのに、海では開放的にエロくなるギャップが萌えポイントだから、恥ずかしがっても仕方ないはずなのだ。
「うっ……恥ずかしくないんじゃなかったのかよ……」
「だ、だって……いくら水着って言っても……やっぱり浩介くんにめくられると恥ずかしいよお……」
やっぱりスカート状のものをめくられるっていうのは水着でも恥ずかしいのかも。
これって女心が分かってないせいかな？　それとも、女心なんだろうか？
女の子になったばかりのあたしには分からない。
「と、とにかく……塗るぞ……」
「う、うん……」
水着のショーツが風を受けて少し涼しい。本来ならパレオなしの人が多いから、これが普通なんだけど、やっぱり腰にあるパレオの感覚がスカートと、水着のショーツも下着と錯覚してしまう。
「んっ……」
浩介くんがあたしの大きなお尻に触れないように緊張しているのかさっきよりもかなりぎこちなく塗ってくる。
一瞬ビクッと身体が気持ち悪くなる。ダメダメ、あたしは女の子……あたしは女の子……女の子は男の子が好き……
背中から下腹部の横側にかけてを塗ってくれる。これで本当に背中側の日焼け止めクリームは終わりだ。

何だろう、名残惜しい気がする。
「お、終わったぞ……」
「あ、あの……！」
「ん？」
「スカート、元に戻してえ……」
自分でも信じられないくらい甘えた声で言う。
好きな男の子に構われたいがために、立ち上がれば直るという単純なことにさえ気付けないくらい頭が劣化する。
「お、おう……」
浩介くんがゆっくり丁寧にパレオを元に戻してくれる。
水着だからパレオというんだっていうこと、自分でも分かっているはずなのについスカートと言ってしまう。まるでスカートめくりされた女の子がプレイの一環として元に戻す様に懇願しているみたいな構図だ。
「はにゃーやっぱり恥ずかしかったー」
全身が熱くなる感じで、恥じらうあたし。
「い、石山……お前、すげえな……」
「ん？」
「本当にお前は、昔……石山優一って言われていたのか？」
「ふふっ、そうよ。でも、そういう風に思ってしまわれちゃうくらい女の子になれたなら、うれしいわ」
「昔のお前と、何もかも正反対で……な」
うん、努力が実ってる。
「ふふ、とにかくありがとう。あ、ちょっと待って前も塗らなきゃ」
「ふええ!?　まま、前……」
浩介くんが動揺している。ちょっとあたしも赤くなる。
「し、心配しないで！　前はひとりでできるから……ク、クリーム貸して！」
浩介くんが顔をそらしながら返してくる。
恥ずかしいけど見てほしい、恥ずかしいけど見られたい。もっと浩介くんに、あたしのことを知ってほしい。

むしろ、浩介くんの前でもっともっと恥ずかしい目に遭いたい。顔を真っ赤にしたい。赤い顔を見られたい。

……頭が変になっちゃう。恋をすると女の子は変わるというけど、それは本当。

クリームを手に取り、まずおでこに塗る、次いで頬っぺたとあごと耳、耳も後ろも入念に塗る。

首の全部から前の肩を塗る。

浩介くんは顔を赤くしながら顔をそらす。

「浩介くん……お願い……あたしを見て……」

猫のように甘い声。好きな男の子の前で恥ずかしいところを見られる感覚。本来なら恥ずかしい目には遭いたくないものなのに……

パレオをめくられたのをきっかけに、頭がおかしくなっている。

浩介くんが腰を捻りながらこちらを見る。どうしてそんな不自然な体制になったか、あたしにはわかる。

胸の上部、水着で隠れていない部分に手をかける。

むにっむにっと胸の感触がする。浩介くんが顔を真っ赤にして下を向いている。

「嫌なら無理に見なくてもいいけど……できれば見てほしいな……」

少しだけ正気に戻り、無理に見るようには言わないようにする。

やりすぎたらそれはそれで嫌われちゃうということを知っているせいだ。これは他の女の子にはないアドバンテージ。

胸を入念に塗ったら今度は胸の下、おへそを含むお腹の部分だ。

あたしはいわゆる「やせ型」ではなく、お腹もちょっとだけ出ている。だけどもちろんデブというわけではない。

むっちりとしている感じ。

言うなれば男の子の性欲を掻き立てるような体になっている。

続いて前足、膝より下は浩介くんに塗られちゃっているけど膝より上は塗られていない。

こちらも入念に塗っていく。

「浩介くん……」

「どうしたの？」

「何だか、塗り終わっちゃうの名残惜しいなあって……」
「そ、それって……!?」
「あのね、あたし……まだ身体の反射的本能が、男の子のままって言ったでしょ？」
「うん」
「でも、こんなことまでしてもらったのに、どうやら治りそうにないって分かって……」
「……俺には、石山が辛くしている気持ちがわからない」
「うん、浩介くんは悪くないよ。だって……これはＴＳ病の子の、それも女の子になりたいって思ってる子にしか分からない悩みだもん」
あたしはそう言うと、日焼け止めクリームを手元に持っていき、手につける。
何故話しかけたか、それはここから先はやはり特に見てもらいたいから。
下を向いて太腿を視界に入れ、塗っていく。
前側、横側、そして内側へ。足を少し開いているので、浩介くんの目は中身の水着の……女の子の大事な所に向けられているはず。
ちょっと見てみる。浩介くんにあたしの股間をガン見されていた。息も荒くなり、必然的に興奮度も高まる。まさに目で「犯される」感覚。
……でもダメだった。意識はとてもドキドキし、顔はもう真っ赤になっていること間違いなしなのに、どうしても、いくら塗って塗られても、濡れてしまうことが出来ない。
それどころか、身体の反射が、どんどん危険信号を出している。私は女の子だから男の子に興奮するのが普通だって、何度も言ってるのに。
焦る気持ちとともに太腿中がクリームまみれになってしまう。もう作業工程は一つしか残っていない。
あたしは水着をちょっと整え仰向けに寝る。
「恥ずかしいけど、めくる……ね」
水着なのに恥ずかしいという感情、それは水着でも、浩介くんに意

識されていることから来る恥ずかしさかもしれない。
「はぁはぁはぁはぁ……」
浩介くんが息を荒くしている。
あたしはゆっくり水着の裾をつかもうとする。
ガバッ!!!
「あっ！」
しかし、たくし上げようとしたパレオはなく、浩介くんに思いっきり上までめくられていた。
浩介くんに無言でクリームを強奪される。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん……」
浩介くんが我を忘れて「優子ちゃん」と呼ぶ。
ただ息を荒くし、水着の上の下腹部にクリームの塗りだくっていく。
最初の恐る恐る塗られるのとは違う、乱暴な塗られ方。
あたしは浩介くんの方の体を見ないで、顔だけを見る。身体を見たら、何か嫌な予感がするから。
鍛えていた浩介くんは本気になれば多分優一でも勝てるか分からないくらい力は強い。
多分、しようとすればこのまま無理矢理犯すことだって可能なはず。
心と頭はとても興奮している。それを察知して体が動く、でももう一方でやはり反射的な嫌悪感を与えている。
あたしは女の子だから、好きな男の子と愛し合いたいの、お願い、分かって優一！　あなたはもう、役目を終えたのよ!!!
心の中に残る、優一に話しかける。
でも、言うことを聞いてくれない。
あたしの体の中の格闘撃を知ってか知らずか、激しく興奮しながら、乱暴に塗っていく。それとともに、あたしの中の理性もどんどん溶けていく。

ああ、このまま犯されてもいい。あたしはそう思う。

「こ、浩介くん……も、もう大丈夫だから……」

少しして、あまりに塗られすぎていたのに気付く。冷静になった一瞬の隙きを突いてあたしが言う。

「はぁ……はぁ……」

「もう十分塗られちゃったから！」

「はぁ……はっ！　あ……」

浩介くんが我に返る。浩介くんはパレオをめくり、白い水着が丸見えで、下腹部に無理矢理クリームを塗っていた所を見た。

むしろ水着越しに触ったりしてないだけ奇跡のような状況だ。

「わっ……ご、ごめん！」

浩介くんが急いでパレオを元に戻す。

「ごめん……俺……俺、何てひどいことを……！」

「いいのよ、あたしが、あたしが煽ったせいだもん」

浩介くんに罪の意識を感じてほしくなくて言う。

「で、でも……」

「浩介くんは本能に従っただけ、何も悪くないわよ」

「だけど……俺、それでも……」

「お願い!!!　謝らないで!!!」

責任感の強い浩介くんに、謝ってほしくないと思い、強く言う。

「……」

「女の子として、見てくれたから……我慢できなくなったんでしょ？

それでもう、あたしは嬉しいから……」

「あ……ああ……」

「許せないのはあたし自身よ。こんな、彼氏彼女でもし辛いようなこと……治療の為なんて言ってさせたんだもん……なのに、結果は出せないで」

「石山……」

「またそう呼ぶの？」

「え？　だって……」

「できれば面と向かっても『優子ちゃん』って呼んでほしいけど、今は……無理強いはしないわ。こんなわがまま聞いてもらったんだもの」
「……石山は、石山は思い込みが激しすぎる」
「え？」
浩介くんから意外な言葉が出る。
「確かに、女の子らしくなりたいっていう気持ちは分かる。でも、それにしたって……石山はすぐに結果を出そうとしすぎてる」
「……」
「そうすぐに治るものじゃないだろ？　あれからまだ3ヶ月しか経ってないのに、１７年近くも続けていたことを……変えられねえよ……」
「うん、だけどあたし……」
「分かってる！　分かってるよ！　石山がどういう思いで女の子らしくなりたがっているのかも……でも、急がば回れって言うだろ？」
何も言い返せない。それは、浩介くんの言う言葉が確かな正論だからだ。

「ねえ、日焼け止めも塗ったし、もう一回、海で遊ばない？」
「あ、ああ……だけど、その前に……その……」
「ん？」
「ちょっとトイレ！　長くなるけど待っててくれ！」
浩介くんが、急いで立ち上がり、走り出す。
その時、ちょっとした拍子に、彼の水着の短パンを見てしまった。
「うっ……!!!」
急激に吐き気が襲い掛かってきた。
浩介くんを見た瞬間、心と体の本能が、激しく乖離していくのを感じる。
感情は、あたしのことをちゃんと女の子として見てもらえた嬉しさで爆発しそうなのに、今は必死で身体の吐き気と戦っている。身体的な、吐き気による嫌悪感が、あっという間に嬉しさを吹き飛ばしてしまう。

「ぜえ……はぁ……ぜえ……はぁ……」
必死で吐くのをこらえ、吐かずに済み、息を整える。
「ええう……えう……うわっ……うっ……ひぐ……」
ブワッと涙が出る。顔を覆い、一人で寂しく泣く。
ただひたすら、悲しみの感情が支配する。
「すぐに治るものじゃない」と、永原先生にも、浩介くんにも言われた。
悪いのは、ただ欲張りなだけのあたしなのに……わがままなあたしなだけなのに……あたし……どうしてこんなに聞き分けのない子なんだろう……
「うえっ……ひぐっ……ぐずっ……」
今までは、泣いた時もそばに誰かがいた。
そして、泣くたびに、慰めてくれる人が居た。
でも今は居ない。
今までも、色々なことで泣いた。それは多かれ少なかれ、泣かせた側にも理由がある泣き方だった。
でも今は違う。
わがままで欲張りな女の子が、自分の思い通りにならないからと、駄々をこねて泣いているだけ。
例えその欲求が正当であろうとも、今までの涙とは違う。泣けば済む問題じゃないなんて、小学生でも分かることなのに。
だから誰もそばに居てくれない……本当に世の中上手く出来ている。
周りはあたしのことを奇妙な目でジロジロ見ている。まるでわがままなあたしを罰するかのように。
わがままで駄々をこねた罰として、誰も助けてくれず、一人で孤独に、みんなに晒されながら泣かないといけない。
「ぐずっ……ひぐっ……」
ようやく、泣き止み始める。浩介くんはまだ戻ってこない。
「……どうしたの石山さん？」

声をかけてきたのは永原先生だった。

## 本能を女の子にするということ

「……そう、上手く行かなかったの」
永原先生が残念そうに言うけど、表情では「やっぱり」と言う色を隠せていない。
元々永原先生の視点から見れば無謀なことだったのかもしれない。
「うん、あたし、浩介くんが大きくなってる所、頭では嬉しさと興奮でいっぱいだったのに……」
下品だと言われるかもしれないけど、やっぱりあたしのこの身体、好きな人に興奮してもらえるのはとても嬉しいこと。
あたしが本当に、男の子からも認められるくらい、魅力のある女の子になれた証だから。
「石山さん、泣いていたわね。もしかしてそのことで？」
「う、うん……あれだけしてもらったのに……」
「日焼け止めクリーム、篠原君に塗ってもらったんでしょ？」
「……それでもダメだった。せっかく恥ずかしいの我慢したのに……」
「石山さん、さっきも言ったけど――」
「分かってるよ!!! 分かってるわよ!!!」
つい大声を上げてしまう。また涙が出てくる。
「……」
「でも……悔しいのよ。悲しいのよ!!!」
感情任せに思いをぶつけてしまう。感情的になって解決する話じゃないのに。
「石山さん……」
「一生懸命に女の子になりたいって、あたしずっと……ひどく乱暴だった自分を変えたいってずっと頑張ってきて……クラスのみんなに、優子はちゃんと女の子だって言ってもらえて……好きな男の子まで出来たのに!!! なのに……なのに……うっ……」
感情のままに、ワガママを言ったらまた涙が出始めた。
「石山さん……」

「あたし、浩介くんを好きになった時……女の子としての恋を知ることが出来たわ。だからそば屋で永原先生が会計取っていた時……キスしようと思ったのよ……だけど……」
「……そうだったのねえ……石山さんの今日の水着も？」
「……うん、浩介くんを興奮させたくて、選びに選びぬいたわよ」
「その目論見は上手く行ったかしら？」
「う、うん……」
　明らかにトイレにしては長いし、間違いなく上手く行ってる。
「石山さん……あなたがどうしても、今すぐこれを治したいというなら……カウンセラーとしてそれは止めるわ。ひどい副作用が起きかねないわよ」
「……」
　ついにドクターストップまでかかってしまう。もはや早急に結果を出すという当初の目論見は諦めなければならない。
「来年の卒業式、それまではゆっくり夏休みも含めて、デートしながら治していきなさい。大丈夫、あなたにとって1年半何て一瞬に等しい時間よ」
「そ、そう……」
　でも、浩介くんにとっては長いよなあ……
「でもどうして……林間学校の時の登山や……あの時の後のおんぶは平気だったのに……」
「それは石山さんが、時間が経って……本当の恋に、はっきりと目覚めたからよ」
「恋したから、こんな困難がでてきたってこと？」
「ええ」
「うっ……それってあんまりだよ……」
　また涙目になる。
「……実はね、石山さんの症状には荒療治の方法も確立されているのよ。でも、オススメはしないしやってほしくないわ。絶対にね」
　永原先生は水着の可愛さに似合わない神妙な面持ちで話す。
「そ、それってどういう……!?」

正直、藁にもすがる思いだ。例え悪いとしても……治したい。
「それは……妊娠して、赤ちゃんを産むことよ」
「え？　ええ!?　なな、何で赤ちゃんって……」
ある程度身構えていたけど、それでもあまりに衝撃的な発言にしどろもどろになってしまう。
確かに、推奨なんてとても出来ない方法だ。前言撤回、これは無理。
「石山さん、以前にも話したけど、私達は完全な女性だから子供も産めるわ」
「ええ……」
「……私達を惑わす男女の違いの中でも、妊娠能力というのは最も大きな違いと言ってもいいわ。女の子たちは、赤ちゃんをお腹の中に宿して、死ぬほど辛い目に遭って子供を産むのよ」
「知ってる」
「でもね、あれだけ苦しい目にあっても、多くの母親が出産した時に『女に生まれてよかった』と思うのよ」
「どうして？　あんなに辛いんだろ？」
「私にもよく分からないんだけど、お腹の中にいる新しい命に対する、いわばメスの本能なんじゃないかな？　とにかく保護しなきゃいけないって、赤ちゃんがかわいくてかわいくて、心を奪われてしまうのよ」
確かにそういうのがあるかもしれない。よく分からないけど。
「う、うん……でもそれがどうして？」
「石山さん、出産の痛みと喜びは本当に強烈らしいのよ」
「よく分からない」
「私も実際に体験したわけじゃないけど、妊娠と出産を経て『女の子』は『母親』になるのよ。こんな話があるわ」
「？」
永原先生が少し話題を変えた感じになる。
「ある日ね、一組のカップルが居たの。ところがストーカーが彼女を無理矢理犯したのよ」
「ひどいなあ……」

「で、妊娠してしまったから、彼氏と一緒に堕ろすつもりで病院に行ったのよ。二人とも忌々しいレイプ犯の子供なんて産みたくないって思ってたからね」
「ま、まさか……？」
「そうよ。病院に行って妊娠しているかの確認のためにエコーを見たらしいのよ……そしたら彼女は彼氏に涙ながらに『堕ろしたくない！　産みたい！』って言うようになってしまったって」
「またわがままだねえ……」
「そう思うのは子供を知らないからよ。お腹の中の子供を守りたい、自分の子供を守りたいというのは、どんなに自覚なく、否定しようとも思っても否定できないものよ」
「……もちろんこれは極端な例だしそう言う誘惑を覚えたとしても、断ち切って堕ろす人のほうが多いけどね……だけどそう言う人もいてしまうくらい、赤ちゃんというのは大きな存在なのよ」
「妊娠してしまうだけでこうなるのか……」
「そうよ。そして赤ちゃんが生まれると強烈な感情が出るわ。まだサンプル数は少ないけど、私達ＴＳ病の人が出産した時の母性は凄まじいものがあるのよ」
「どうして？」
「だって、男が子供なんか産めるわけ無いでしょ。妊娠と出産は、言うなれば女性にのみ許された特権よ。だから、新しい命を産むっていう行為は、私達を身体の本能から潜在意識まで徹底的に女にしてしまうわ。既にどれだけの覚悟と自覚を持っていても、出産した時以上に『女』を思い知る瞬間はないわよ」
「じゃあ、みんなそうすれば……」
「無理よ」
　自殺よりはマシと思ったものの、永原先生の非情の一言。
「ど、どうして？」
「男に戻りたいと思った人を無理に妊娠させたケースはないわ。それに、そんなことをしたら犯罪よ。つまり、本人の合意のもとで恋愛しなきゃいけないの」

まあそりゃあそうだな……
「でも十分に底の底まで女の子になりきらないで恋愛しようとすると、石山さんみたいな症状が出ることもあるのよ」
「それに、女の子になりきれたとしても、恋愛して結婚するハードルが高いし、あるいは女の子になりきれずに無理に妊娠しても、不幸の連鎖になるだけよ」
「つまり女の子に完全になった上で、更に心の底から母親になりたいと思わないと無理ってこと？」
「そうよ、石山さんはその覚悟はまだできないでしょ？　まだ前段階も達成できてないのに」
「う、うん……」
「それに、妊娠するためにすることがあるでしょ。仮に心が女の子になっていても、身体の反射と本能が男性のままでするのはとてつもない苦痛を覚えるわよ……今の石山さんもそうだと思うけど、自分の中に２つの人格があるように感じてない？」
「え、ええ……確かにそんな感じもします」
あたしも、クリーム塗った時に大きくなってるのを見ただけで吐き気がしたし。
「そこよ。ましてや妊娠のためにすることは、今のとは比べ物にならない事よ」
それがどういうことを意味するかは知っている。間違いなく吐きながらすることになる。これじゃあたしもだけど、それ以上に浩介くんが可哀想だ。
でも正直、あたしも理性が崩壊しかけた時、浩介くんに無理矢理でもいいからされたいと思ってしまってもいた。
「それにね、仮にそれをクリアしたとしても妊娠と出産において私達に立ちはだかるのは、私達の体質よ」
「それって、老けないって言うこと？」
「そう。子供を産んだＴＳ病の人を悩ませるのが旦那さんや子供に先立たれるということよ。それを嫌がって恋愛や出産ができない人が多いわ。私もそうかもしれないわね」

永原先生が遠い目で見る。
「いずれにしても、荒療治の方法は存在しないに等しいと」
「ええ、そう言う理解でいいわ……石山さん、今はその水着で意中の人を興奮させたんだからそれでよしとしなさい」
「は、はい先生……」
「それにしても、石山さんのその水着……」
永原先生があたしの水着をひと通り見てくる。
「本当男の欲望をよく捉えているわね……」
「えへへ……」
正直褒め言葉だ。
「襲われたりしなかった？」
「ちょっとだけ最後の方で……」
「え？　篠原君、一体何したのよ？」
「言わなきゃダメ？」
「ふふっ、ちょっと聞きたいかなあ……」
ううっ、恥ずかしいけど……言ったほうがいいかも……
「前の方は自分で塗るってことになって、む、胸とか……あと正面からももを塗ったのを見せつけて、最後に……パレオの中の下腹部に塗ろうとして……」
「うんうん」
「仰向けになって、恥ずかしかったけど……めくろうとしたら……クリーム奪われて……」
「無理矢理塗られたのね」
「う、うん……」
「篠原君、理性残ってよてかったわね」
永原先生が神妙な面持ちで言う。
あたしも分かる。冷静になればこのまま犯されていても文句は言えない状況。
「ええ、今思えばそのまま処女を奪われなかったのが不思議なのよ……」
「だってここ、海水浴場よ、そんな所で始めたら石山さんも篠原君も捕

まってたわよ」
つまり、浩介くんに理性が残っていたということ。
永原先生と話していると、足音が聞こえてくる。
「あ、そろそろ話を終わるわね。いい？　今日の話、絶対に他の人に話しちゃダメよ」
「わ、分かってるって……」
妊娠だの出産だの、正直まだ早い話だし。
「あれ？　先生もここに居たんですか？」
浩介くんが戻ってくる。息は整っているけど妙に汗だくになっている。
「ええ」
「浩介くんどうしたの？　トイレにしては随分遅かったね」
あえて意地悪を言う。何だろう、小悪魔になった気分だ。
「え？　そ、それは……その……こ、混んでて……」
「今日はそこまで混んでないけど？　ねえ本当は何してたの？」
何をしたかなんて分かりきっていても、つい浩介くんの口から言わせたくなってしまう。
「い、言わせないでくれよ恥ずかしい……」
浩介くんが抗議する。既にそれが何をしていたか自白しているようなものだけど……
「あら、さっきクリームで水着めくられた時も恥ずかしかったわよ。浩介くん教えてくれないの？」
「おまっ、あれは……石山が塗って欲しいって言うから……」
「う、うん……まあ、どうしてもって言うなら追求はしないでおくわね」
こういう所でちゃんと引いておけば嫌われないことをあたしは知っているのだ。
このあたりはＴＳ病らしい駆け引きかもしれない。男の気持ちを理解しにくい生粋の女の子ではなかなか出来ない芸当だと、あたしは思う。
「さ、残りの時間はみんなと遊びましょ。まだまだ長いわよ」

「うん」
永原先生の言葉で、そういえば他のみんなはどうしたのだろうと急に気がかりになる。
浩介くんはまだ座っている時に立ち上がる。
お尻にちょっとだけ違和感を感じる。ちょっとだけ水着が食い込んでた。
何の気なしにパレオの中に手を入れて、水着の食い込みをパチンと直す。
「こら石山さん」
「え？　どうしたんですか永原先生？」
「海で無防備になるのはいいけど、いくら何でも今のはガードが緩すぎるわよ」
何か怒られてしまった。
ふと、足元を見る。
真下から浩介くんが水着の中を覗いていた。
顔が真っ赤になっている。
おっぱいの大きさに目が行きがちだが、あたしはお尻も結構大きい。十分アピールになる。
「な、なあその……石山……」
「あ、浩介くんどうしたの？」
「お、俺……熱で干からびちゃうから……」
「……」
「あらあらまあまあ……」
浩介くんの言った「熱で干からびちゃう」の意味は分かる。
そもそもこの水着自体、かなりエロい。ウブな男の子には、超ミニスカートで無防備にパンチラしているのと何ら変わらないかも知れない。
つまり浩介くんの目線では、超ミニスカートを穿いてパンチラしまくってる女の子がパンツに手を入れて直しているようなもので……って何考えてるんだ……
とにかく、みんなの所に戻らないと。

「あ、桂子ちゃん！」
「優子ちゃんじゃない、どうしたの？」
　あたしは、さくらちゃんと虎姫ちゃん、恵美ちゃんとで泳いで遊んでいた桂子ちゃんに声をかける。
　呼びかけると桂子ちゃんが浜に上がっている。本格的に泳いでいるのかパレオを脱いでいた。
「ああいやその……日焼け止めクリーム塗ってて……」
「ふーん、それにしちゃ背中も塗れてるみたいだけど……もしかして……」
　かあああっという音がなりそうなくらい赤くなる。
「篠原くんに塗ってもらったんでしょ？」
「あうあう……」
「それで、どうだったの？」
「……桂子ちゃん、やっぱり駄目だったよ……」
「え？」
「身体のこと。まだ女の子になりきれてないの、だからあたし……荒療治しようと思って、浩介くんに……」
「そうだったのね。篠原、なんか不審なくらいすごい勢いでトイレに駆けてったから」
「って、おい！」
　浩介くんが桂子ちゃんに抗議する。
「あ、ごめん。いたんだね」
「なんか扱い悪いなあー」
　女の集団に男一人だと、やっぱり扱いも悪くなって可哀想だ。
　お泊り会のお父さんもそうだったし。
「でもね桂子ちゃん……あたしは……その……」
「ああ、優子ちゃん言っちゃダメ！」
　桂子ちゃんが大慌てで止める。
「石山さん、気持ちは分かりますけど、堂々と言ってしまえば失うものもあるんですよ」

うん、そうだよね。公言しちゃいけないよね。
女の子らしく慎ましやかにしなきゃ。
「あ、そうそう他の男子たちはどうしたの？」
「うーん他の3人は他の3人で、沖合競争とか言ってたわね」
「え？　あんまり沖合に出られると困るけど……」
永原先生が心配する。
「っと言っても恵美ちゃんが監視してるし……というか、こっち側に向かってるわよ」
「……そう、それなら良かった」
永原先生がホッとしている。そうだよね、一応引率ってことになっているし、責任取らされちゃうわけだ。
って、それ考えたらさっき浩介くん誘惑したのまずかったかなあ……
治療成果も出なかったし、危ない橋を渡り損になってしまった。
ともあれ、一旦ここで合流だ。

「あら、全員集まったわね」
永原先生が、クラス全員が集まったのを確認する。よく見ると、他のクラスメイトも集まっていたのだ。

「ねえねえ、せっかく集まったし、スイカ割りしようよ！」
桂子ちゃんが提案する。
「え？　でもスイカなんて持ってきてないわよ」
永原先生が言う。
「へへん、こんな事もあろうかと持ってきたのよ！　ちょっと待ってて」
桂子ちゃんが基地に駆け寄るとバッグの中から何かを取り出し始めた。
そこにはやや小さめのスイカと目隠し、そして木の棒があった。
「よし、じゃあ誰に割ってもらおうかな……」
スイカ割り、あたしはなんか嫌な予感するし、立候補しないでおこ

う。
「はい！」
男子の一人が立候補する。
「よし、じゃあこれ付けてね」
桂子ちゃんが目隠しを渡す。男子はちょっとドキッとしている。
桂子ちゃんかわいいもんね。
「じゃあルール説明するね。振り下ろせるのは一回だけ、スイカに触れればそのカウントは無しよ。スイカを割ったらそこで終了、スイカに足が触れたら失格ね」
「ＯＫ」
高月くんがその男子に目隠しする。スイカとまっすぐの位置に数メートルに立ってスイカ割りスタートとなる。
「よし、じゃあいくわよ……よーい、スタート！」
永原先生の掛け声とともにいよいよスイカ割りイベントが始まった。

# スイカ割り大会

目隠しでは真っすぐ歩いたつもりでもどうしても曲がってしまう。
目隠しがなければ、実は案外人間は多少曲がりつつもまっすぐ進めるらしいが、目が見えないとなるとかなりまずい。
その男子もまっすぐ歩いているつもりでも、次第に左へとそれ始める。
浩介くんが「左！　ずれ行き過ぎ！」と言うも、今度はそのまま真っすぐ右に曲がってしまい、違う場所で振り下ろしてしまった。
スカッという音とともに、永原先生が「はーい残念！」と言う。
「うえっ、こんなにずれてたのか！」
驚きの声を上げる。次に挑戦したのは高月くんだ。
高月くんが一気に駆け巡る。さっきまではゆっくりまっすぐ進もうとしたからずれたと思ったからだろう。
「あーストップストップ！」
「ぶつかるぞ高月！」
クラスのみんなが声をかける。スイカに触れたら失格なので高月くんはすぐに急ブレーキをかけると、慌てて前へと振り下ろす。
スカッ！
しかし、感触は砂だった。
「はいそこまで！」
振りかぶり下ろしたときに、棒がスイカを飛び越えていたのだ。
「あーそうか、あの後下がらないといけないんだ。自分の身長を計算に入れてなかった」
目隠しを解いた高月くんが敗因を分析している。普通に考えればすぐ分かることでも、慌ててしまうと判断力がなくなってしまうという好例だ。
「あまり速く歩きすぎるのも考え物だな」
「ほとんど走った感じだったなあ」
３人目の男子は中間くらいのスピードだったが「右！　右！」という声に足を延ばしたら足がスイカに触れて失格になってしまった。

「これで男子は残り一人ねえ……」
「こ、浩介くん……頑張って！」
あたしが応援の言葉を言ったその時だった。
「「え!?」」
他のクラスメイトの男女が驚いた顔であたしを見つめてきた。
「ど、どうしたのみんな？　あたしを見て」
みんなキョトンとした表情であたしを見ていて、あたしも思わず聞き返してしまう。
「優子！　そ、それはこっちのセリフだぜ」
「優子ちゃん、いつから篠原くんのこと、名前呼びになったのよ？」
「あっ！」
桂子ちゃんのその一言で気付く。日焼け止めクリームを塗ってもらうときに、呼び方を変えようと決心したんだ。
元々が両想いだったこともあって、苗字呼びから名前呼びに代わるのはほとんど違和感がなかった。
そのため、かつてカリキュラムを受けた時の一人称の変化とは比べ物にならないくらいスムーズに行っていたために、こんな簡単なことにさえ、気付けなかったのだ。
浩介くんの方を見ると、男子にからかわれてまた赤くなっている。なんかあたしも顔が赤い気がする。
以前まではあたしはよく泣く女の子だったけど、最近は泣くより顔を赤くしてしまう方がずっと多い。
「優子さん……最近よく照れますよね……」
「うんうん、優子ちゃん恥ずかしがり屋さんだったんだね」
「う、うん……」
女の子になってから、恥じらいをとことん叩き込まれたせいかもしれない。
「でも、最近は優子ちゃん以前にも増してかわいくなった気がするのよねー」
「うん、それあたいもそう思ってた。こう振る舞いとか歩き方とか、そういうのも女の子っぽくなってるし」

恵美ちゃんが言う。
「逆に恵美はそういうところが少ないよねえ……」
「ううう、虎姫が鋭い……」
虎姫ちゃんの鋭い一言。
「やっぱり恵美ちゃんも恋をした方がいいと思うのよねえ……」
「うんうん、そうすれば恵美もきっとかわいくなれると思うよ」
なんか話があらぬ方向にそれ始めている。

「なあ篠原、お前本当に羨ましい奴だなあ……」
「くそお！　あの時実行委員になっていれば……」
「それだけじゃダメだぞ高月。あの事件の時ちゃんと優子ちゃんを守ってあげなきゃ」
「うぐっ」
男子たちの会話に注意を向けてみると、浩介くんが力こぶを作っていた。
鍛えていると言っただけあって、すごい力こぶだ。
つい見とれてしまう。あたしもかつて、力こぶはあった。
でもあたしは、それを乱暴に使うだけだった。浩介くんも、あたしを殴ろうとしたのは一回だけ。それも、それはあたしの責任でもあること。
その後は、浩介くんは女の子を……ううん、あたしを守るためだけに、力を振るってくれている。そう思うと、ますます浩介くんの力こぶに惚れてしまう。
ああそうか、やっぱり心はもう女の子なんだ。

「ささ、そろそろスイカ割り始めますよー」
あたしの「浩介くん呼び」で中断していたスイカ割りだったが、永原先生が声をかけたことで、スイカ割りが再開される。
「浩介くん！　頑張ってー！」
あたしはひときわ大きな声で浩介くんに声をかける。今度は周囲もリアクションをしない。

浩介くんはなかなか目隠しを閉じなくて、あたしをじっと見たまんまだ。
水着なので無防備に体育座りしているから、浩介くんは丸見えになっている白い水着から目を離せないのだろう。まさに男の性だ。
女の子は不思議に思うかもしれない。なぜなら永原先生やさっきまでの桂子ちゃんのようにパレオなしで普通にショーツを穿いているビキニが大半だからだ。
それがパレオになっただけで、水着のショーツから目が離せなくなる。超ミニだから簡単にチラチラ見えるものだけど普通に無風で気を付けをしているとぎりぎり見えない。
つまり平常には隠れているものが見えるところに、浩介くんは興奮を感じているのだ。
この辺りは中々生粋の女の子だと理解は難しい。女の子になりきると言っても、男の子の気持ちを理解できなくなる必要まではない。
「知識」は多いに越したことはない。
「おーい、篠原！　早く目隠ししろー！」
「優子ちゃんが好きなのはいいけど、スイカ割ってやれよー！」
高月くんや他の男子の言葉でようやく目隠しし、スタートだ。
浩介くんは「いち、にの、さん」で3段ジャンプをし、その後も片足ジャンプで距離を縮め、そのまま一気に割ろうとする。短期決戦だ。
すさまじい威力で棒が叩かれるが、左にそれる。まっすぐジャンプしたつもりがちょっとだけそれていたのが敗因だ。
「あーくそ！　これでもダメかー！」
最初の男子が時間をかけたため、短期決戦に持ち込もうとする男子たちだったが、結局誰もスイカを割れなかった。
「おっしゃあ、次は女子のターンだぜ！」
恵美ちゃんが気合を入れる。
「誰からにしますか……？」
「うーん、あたしはちょっとねえ……」

誰かがスイカを割ればそれで終了になる。あたしは間違いなくこの手のことは醜態を晒しそうなので遠慮したいのが本音だ。
「よっしゃ、あたいから行くぜ！」
恵美ちゃんが威勢よく叫ぶ。男子と同じスタート地点に立ち、目隠しをしてもらっていざスタート。
恵美ちゃんが今度は普通に歩く。
「よし、この辺かな？」
「あー恵美ちゃんもっと前！」
かなり手前でそういう恵美ちゃんにあたしが声をかける。
「おし！」
恵美ちゃんが思いっきり歩幅を出して前に出す。
「あー！」という間もなく、恵美ちゃんは足をスイカの横にのせてしまった。

「はいそこまで！　田村さんスイカに足を触れたので失格です」
「くそお！　この腕、振るえなかったぜ！」
続いて参加したのは虎姫ちゃん、まっすぐでいい線行っていたのだが、振りかぶるときに何を血迷ったのか右方向に打ってしまい、失敗。
どうやら、最初の男子のことを頭に入れ、まっすぐのつもりでもずれると思っていたために、あえてこうしたのだという。正面に振りかぶっていれば成功だった。
「あの……次は私が……」
さくらちゃんが恐る恐る手を上げる。目隠しにはちょっと恐怖の表情を浮かべ、棒を振りかぶってスタートだ。
「ん……んっ……」
緊張した面持ちで前へとゆっくり歩く。
周りから「頑張れー」「怖くないー」という声が聞こえていく。
しかしそれでも、歩く姿はぎこちない。
「わっ、わっ……きゃっ！」
ドサッ！
さくらちゃんが足と足を引っかけ、転んでしまう。その拍子に両手

がバンザイ状態になり、棒が手から離れ。手がスイカについてしまった。
「ふええ……ごめんなさい……」
転んで謝るさくらちゃんに、みんなが駆け寄って起き上がらせてあげる。これで残るは桂子ちゃんとあたし、そして永原先生。
永原先生は審判も務めているので参加しないということなので、桂子ちゃんが失敗したらもうあたしが出るしかない。
「桂子ちゃん、お願いね。ちゃんと割ってね」
「うん分かってるよ。優子ちゃんこういうの苦手だもんね」
桂子ちゃんの言葉からは、わざと負けるという意思は見受けられない。
目隠しをし、永原先生の「スタート」の号令で始まる。
声援と方向の指示もあり、桂子ちゃんはまっすぐに進んでいく。しかし途中で右にそれ始め、弧を描き始めた。
「桂子ちゃん右に寄ってる！」
あたしが声をかけ、桂子ちゃんは左にずれ、そしてそこからまっすぐ進んでまたあらぬ方向へ。
あたしがまた声をかけ修正させる。
「そこそこ」とは言えないため、最後の判断は桂子ちゃんだ。
「ここかな……えいっ！」
桂子ちゃんは全く違う場所で振りかぶり、外れてしまった。
「あーだめかあ……途中まではうまくいってたんだけどなあ……」
桂子ちゃんが悔しがる。あたしはみんなの失敗を見て、一つの作戦を思いついた。
「じゃあ優子ちゃん、最後にお願いね」
スタート地点に立ったあたしに、桂子ちゃんが目隠しをしてくれる。
「もし私が割れなかったら？」
「その時は私が普通に包丁で割るわよ」
永原先生とそんな会話をしつつ、棒を振りかぶり、いざスタート。
あたしは精神を集中させ、右足を出す。他と違うのは、それがすり

足だということ。足を地面から離すからずれるのではないかと考えての作戦だ。
２歩目、左足を気持ち内側にすり足させ、右足に当たったら、両足をそろえて幅を取る。
これを慎重に繰り返す。これで左右にずれることはほぼない。
「ねえ見て優子ちゃん」
「……ほう、すり足か。優子のやつ考えたな」
桂子ちゃんと恵美ちゃんが話す。
数回それを繰り返すと「もう少し」「近い近い」との声が聞こえる。
あたしは歩幅を大幅に狭める。後ろに下がろうとしないためかメンバーの声がもっと焦りになる。
皆はあたしから見て右側にいるので少し体を左に倒し「危ない危ない」という声を聴きつつ、左足をちょこんとスイカに当てる。
誰もこれには気付いていない。でもスイカの感触から、スイカの球体も含め、イメージがつかめた。
先ほどと逆の要領で右足を大きく下げる。そして左足を気持ち内側にし、足に当てる。
気を付けに近いレベルで足をそろえる。ここで大丈夫のはずだ。
「えーい!!!」
ごんっ！
「おー！」
クラスメイトの歓声が上がる。確かにスイカをとらえていたが、感触がない。
「ええいっ！」
あたしはルールも忘れもう一度振りかぶってスイカを叩く。
「……あれ？」
割れていない。あたしの力が弱すぎる。
「割れて！　えい！　えい！　えい！」
しかしだめだ。渾身のヒットなのに。
「何でよ！　スイカの場所はわかったのに！　狙いは正確なのに！」
あたしは目隠しを投げ捨て、視界をはっきりさせて思いっきりスイ

カを何度も叩く。しかし、それでもスイカはびくともしない。
周囲は「もういいわよ。あなたの勝ちよ優子ちゃん」という声を出しているが、ムキになっているあたしは気にも留めない。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
誰かが駆け寄る。
「石山……」
「こ、浩介くん……」
「ほら、俺の力も使えよ」
浩介くんが顔を赤くしながら、あたしの握っている手の上の部分を握ってくれる。直接手と手が触れているわけじゃないけど、まるで結婚式のケーキ入刀みたいだ。
「よしいくぞ」
「う、うん……」
浩介くんと一緒に振りかぶる。
「……ええい！」
「わっわっ！」
ふりかぶってから振り下ろすとき、浩介くんの勢いに翻弄される。ほとんど運ばれているだけだけど……でも……
スイカは上から勢いよく割れた。ほぼ均等のサイズにパカッといった感じ。
「や、やった……」
「いいぞー！」
「よっしゃあ！」
各人がそれぞれ歓声を上げる。目隠しも何もない、2人がかり、それもほとんど浩介くんの力で割ったようなものなのに。
みんなはスイカに触れたのに気付いてないから、やっぱりちょっとだけ罪悪感がある。
「じゃあ、そろそろお昼にしましょうか」
「「はーい！」」
永原先生の提案にみんな賛成する。
「スイカだけじゃ少ないから、海の家で買ってきてくれるかな？」

「じゃあ優子ちゃんと篠原くんで」
「え？　あたし？」
「うん、二人で行ってきなよ」
「お、おう……」
「うん分かった」
「じゃあその間に残りのみんなはスイカを切るわよ！」
　桂子ちゃんから食料の調達を頼まれた。二人っきりにする時間をくれたのだ。
「じゃあ行こうか浩介くん」
　あたしはさり気なく浩介くんの背中に胸を当てようとするが、やっぱり身体が反射的に嫌悪していて、出来なかった。こんなに好きなのに、あたしは恋人として満足に触れ合えないでいる。
　それは、浩介くんだって……いや、男の子の浩介くんの方が辛いことのはずなのに。あたしに何一つ不満を漏らさない。
　もしかしたら過去のことで罪悪感が残っているのかもしれない。でも、あたしもＴＳ病だからわかる。
　男の子の性欲はそんなこと簡単に吹き飛ばしちゃうことを。
　永原先生も、みんなも少しずつでいいと言ってくれているけど、それでも今は健全な状況とはとても言えない。
「海の家で買うか？　ちょっと混んできてるぞ」
「う、うん……早くした方がいいよね」
「ああ、そういうわけでみんな行ってくるぞー」
「「いってらっしゃーい！」」
　ともあれ、あたしと浩介くんは、他のクラスメイトに見送られつつ、近くの売店などを兼ねている「海の家」に二人で行くことになった。
　今はこうやって、二人きりの時間を過ごすことで、解決の糸口が掴めそうだから。
　昼食の時間、海の家は混んでいる。
　海の家の近くになるにつれ、人口密度が増えていく。そして移動できる速度も落ちる。

「うひょーなにあれ、めっちゃかわいいじゃん」
「おっぱいもでけえしよ、やべっ……」
「おいおい、目立つから気を付けろよ」
「ちっ、隣にいんの彼氏かよ」
「あーあ、つまんねえなあ……」

やっぱり海のビーチでも、あたしは相当注目されている。
胸が大きくかわいい女の子の水着姿というだけで、周囲の男の視線を一点に集めるのに、男の性欲を考えた水着にしたものだからなおのことヤバイ。
さっきの男の会話を聞いて、浩介くんが砂を蹴って顔をそらす。
「浩介くん、あそこの焼きそばにしようよ？」
あたしは野外で売っている焼きそば店を指さす。
「あ、う、うん……」
何時ものぎこちなさとはちょっと違う感じ。まだ友達だし、自分のために選んでくれた水着だから、他の男からも注目されるのは仕方ないと思いつつも、嫉妬をやめられないという感じ。
浩介くんの中で、理屈と感情がぶつかり合っている様子が見て取れる。
ともあれ、そちらの仮設焼きそば店の行列に入る。
「焼きそば、いくつだっけ？」
「えっと、男子が４人で……」
「こっちが５人と先生１人で１０個かな」
永原先生からは５千円札を渡されていて、１個５００円だからちょうどになる。
「ちょうどだね」
「まあそりゃあ事前に見ただけだろ」
「まあねえ……」
それ以降、ちょっと会話がなくなる。たまたま隣になっただけの二人という感じになる。

「なああれ……」
「ああ、ウブそうだな……」
「一発ヤろうぜ」

なんか不穏な言葉が聞こえてきた気がするが、今は前の行列に集中しなければいけない。
少しずつ行列が前に進む。一回「おーい、追加！」という声とともに、焼きそばが補充される。
これは待ち時間は増えるが安堵ももたらす。売り切れの心配はなくなった。
メニューが焼きそばのみなので、個数の確認だけでいい。行列は順調に、だが確実に捌けていく。
全ては順調だった。

# 海辺の昼食

「ねえお姉ちゃん！」
？　誰だろう？　知らない人の声だ。
「ねえお兄ちゃんたちと遊ぼうぜ」
うえーまたナンパだわ……
しかもこの前とは違って今度は3人組、いかにもチャラい恰好をしている。
「えっと、その……焼きそば買いますので」
列を前に移動する。
「まあいうなよ、お兄ちゃんが焼きそばよりもっとおいしいもの食べさせてやるからさ」
「いやその、友達の分とかあるから……」
「固いこと言うなよ……お友達の焼きそばならほら、お兄ちゃんたちのがあるからよお……」
「とにかく、お断りします！」
あたしは無視して前に進む。
「あいたあ！」
わざとらしく男の一人が倒れる。すると焼きそばが落ちる。ちなみに中身はぶちまけていない。
「ったあー……なにすんだよこのアマ！」
無視無視っと。
「おい!!!　無視すんなてめえ!!!」
別の男が大声で怒鳴る。
「おら、こっちへ来いよ！」
「やめて!!!」
また腕を掴まれる。あの時の思い出がフラッシュバックする。
でもあの時ほどの不安はない。何故なら……
「おい!!!」
腕を掴んだ男を引き剥がし、あたしを後ろへと引き寄せる強烈な力。

浩介くんがあたしと男3人の前に立つ。
周囲もざわざわと見ている。
「んだてめー!?」
「……」
「おい!!!」
「優子ちゃんに手を出すな!」
やっぱり無我夢中になると呼び方が変わる。
「んだこのー!」
男が一人殴り掛かる。浩介くんがすんでのところで避ける。
「このお……やっちまえ!」
男が三人がかりで襲ってくる。
「浩介くん!!!」
「ふっ!」
ドゲシッ!
「がはっ……!」
「わあ!」
「キャー!」
周囲が悲鳴を上げる。
浩介くんの拳が一人の男の下半身、一番の急所を直撃したからだ。
「あがあがあああああああああああああああああ!!!」
急所を押さえ込み、倒れもだえ苦しむ男。まさに一撃必殺だ。
「っこのー!　よくも!」
二人目の男と三人目の男が、それぞれ浩介くんの足元を蹴って顔を殴る。
同時の攻撃に一瞬怯んだものの、大したダメージにはなってなくて、浩介くんは更に怒りを強めている。
「はあああああっ!!!」
気勢を上げた浩介くんが右肘で思いっきり二人目の頬を打つと、男がその場で倒れ込む。
こちらはすぐに起き上がろうとするが、素早く三人目の男を足払いにすると、浩介くんは起き上がった二人目の男めがけ、今度は拳を鼻

と口の間にドカンと直撃させる。
　二人目の男が鼻血を出しながら、倒れ込むと、再び起き上がってきた三人目の男の腰を掴み思いっきり持ち上げる。
「わーわあああ!!!」
「た、助けてくれ!!!　悪かった許してくれ!!!」
　持ち上げられた男が恐怖の声を上げる。
「うありゃあああ!!!」
　浩介くんは近くに倒れ込んでいた二人の男の上にそいつを叩きつける。
　下敷きになった2人の男が鈍く声を上げると、男は三人共戦意を喪失した。
　「うわーつえー」「怖い怖い」と言う周囲の声が聞こえる。

「さあ、行こうぜ。早く焼きそば10個買わないと」
「う、うん……」
「すいません、焼きそば10個お願いします」
「お、おい……」
　何事もなかったかのように焼きそばを注文する浩介くんに、焼きそば屋のお兄さんが引いている。
「10個お願いします」
　あたしが5千円札を渡す。
「……お兄さん、彼女を守りたいのは分かるけどよ、限度ってもんがあんだろうよ」
「あ!?　それじゃあお前、3人がかりで襲われて手加減できるってか？　お前はお相撲さんか何かか？　仮にお前がボクサーか力士だろうが相手もそうだったらどうするんだ？」
　浩介くんが怒る。あたしも、自分のために怒ってくれていると分かっているので口は出さない。
「あのねえ……」
「どっちなんだよ!?　3人に襲われて手加減できるくらいてめえは自分の腕に自信あんのかコラ!?」

浩介くんがキレる。
「そう言う問題じゃ――」
「そう言う問題だろうがバカか!?　おら、５千円だ!!焼きそば売ってくれねえってんならてめえも――」
浩介くんがより大声で脅すように言う。
「わ、分かったよ……」
さっきの喧嘩の様子を見て勝てないと思ったのかお兄さんは恐怖の表情で焼きそばを１０個取り出し渡してくる。
「さ、行こうか」
「う、うん……」
ともあれ、永原先生たちも待っている。早くこの場から離れたほうがいいだろう。
さっきの３人の男を見ると、ライフセーバーが声をかけている。
「あ、君！」
あたしたちは何事もなかったかのように立ち去ろうとしたが、そうは問屋が卸さなかった。
「……仕方ねえだろ、３人に襲われるってことは９倍強くねえと勝てねえんだぜ、手加減なんか無理だってよ」
３倍ではなく９倍なのか。どうしてそうなのかはよく分からないが、何となく３倍以上の力が必要なのは分かる。
「あー、まあ確かにそうなんだがねえ……」
「２人だったら４倍で済むだろ？　だから一人は確実に速攻で仕留めねえと不利だったんだよ。とにかく長引けば長引くほど、俺が負けて、優子ちゃんがこいつらの餌食になる確率は高まるんだ」
浩介くんは入念に計算してさっきの戦闘をしていたということね。
「い、いやそうは言ってもねえ……」
「それとも何か？　俺は素直に殴られて、優子ちゃんがレイプされる所を黙って見ていろっていうのか？」
「まあ確かに君の行動も無理はない。周りは見て見ぬふりってこともあるからな。ただ、この急所を突かれた男性の方はちょっとまずいかもしれないなあ……君、名前は？」

「ああ、俺？　俺は敦賀恭一（つるがきょういち）だ。学園は――」
浩介くんが全く別の名前と個人情報を言う。
あまりにリアリティがありすぎる設定だが、おそらくデタラメで架空の個人情報だろう。ライフセーバーはメモを取っていく。
多分これでこの事件は迷宮入りしてしまうだろう。
「なあおじさん……」
「ん？」
殴られた男の三人がライフセーバーの人に声をかける。
「頼むから事件化しねえでくれ。3対1で先に手を出したのは俺たちだからよ……俺達が負けそうだからよ……」
「あ、ああ……」
実際の所は知らないが、まあ確かに2対1ならまだしも3対1ならナンパ男側の分が悪いのは確かだろう。浩介くんは強いけど一介の高校生だし。
「さ、行こう」
「うん」
ああ、また守られちゃった。心の中でそうつぶやいた瞬間、胃の中がひっくり返るようなほどに緊張し、心臓がひどく高鳴る。
あたしの心の中は、ますます浩介くんを素敵な男性と思うようになった。
いくら暴力的だと分かっていても、あたしのことを危険を顧みずに守ってくれた好きな男の子に、より深く惚れない女の子はいない。
それはきっと、女の子という生き物に組み込まれた本能だから。
自分を守ってくれる強い存在を好きになる。逆らうことは出来ない。
「あ、あの……浩介くん……」
「ん？」
「また助けてくれて、ありがとう。それにしても強かったねー」
あたしがにっこり笑う。
「あ、ああ……」
「あたし……また守られちゃった」

「石山は……守られるの好き？」
「う、うん……た、逞しくて惚れちゃうの……」
顔についた水がじゅううと蒸発しそうなくらいに熱くなる。
よく見ると浩介くんも同じだった。もうほとんど告白しているに等しいのに、あたしの身体のせいで満足に付き合えない。
申し訳ない気持ち、悔しい気持ち、悲しい気持ち。でもいつまでもしょげていても、この問題は解決しないだろう。

「あ、あれ河瀬じゃね？」
「え！？」
少し沈黙ムードになった矢先、浩介くんが指さした先、青いビキニに身を包んだ龍香ちゃんが一人の男性と楽しそうに会話しているのが見えた。多分彼氏だろう。
「あっ！！！」
浩介くんとあたしが同時に驚く、彼氏が龍香ちゃんに対して、何の前触れもなくお尻を触ってなでなでしたからだ。
龍香ちゃんは恥ずかしそうに笑いながら「もーえっち」という表情で彼氏を叩く。
シリアスな感じではなく、龍香ちゃんも彼氏から日常的にセクハラされていて、それも笑って流せる関係になっている。
あたしはそれを見て、ちょっと悲しさを覚える。いつかあたしも、浩介くんとああやってじゃれあうことができるのだろうか？
浩介くんも右腕が震えている。そうだ、浩介くんだって、自分の性欲と必死に戦っているんだ。
男子の性欲を女子はキモイという。それで破局したカップルだって多い。
そんな中で、龍香ちゃんは彼氏の性欲を受け入れられた。多分他のところでイケメンなのかもしれない。
せめて手くらいはつなぎたいと思うけど、やっぱり怖い。それに今は焼きそばを運んでいるから無理だ。

「おまたせー」
「あ、石山さん、篠原君、おかえりなさい」
「おう、遅かったな？　なんか海の家の方が騒がしかったけど大丈夫だったか？」
「う、うん。問題なかったよ恵美ちゃん」
　実際には浩介くんがいなかったら危なかったけど。
「それよりも優子ちゃん、焼きそばは？」
「ああうん、これ」
「えっと……1、2、3……お、ちゃんと１０個だな」
　虎姫ちゃんが確認する。これでＯＫだ。
　一人一人に焼きそばを配っていく。
「はーい、こっちもスイカできてるわよ！」
　永原先生が紙皿を出す。さっきのスイカがきれいに均等に１０等分なっている。
「へへん、私と永原先生で切ったのよ」
　桂子ちゃんが胸を張って言う。
　こうして、焼きそばにスイカというやや面白い組み合わせの昼食が並ぶ。
「じゃあいただきますしますよ」
「「いただきまーす！」」
　２年２組のクラスメイト達が一斉に食べ始める。
　あたしはまずスイカから食べる。
　種がところどころあるので、紙皿に捨てていかなければいけない。ちょっと面倒だが、まあ仕方ないだろう。
「このスイカ冷えてておいしいわね」
「ええ、結構鮮度もいいですから」
　スイカ割りしたスイカはそこまでおいしくないという噂もあったけど、どうやら杞憂だったらしい。
　スイカを食べ終わると次に焼きそばを食べる。男子の中にはもうすでに二つとも食べ終わっている人もいる。早い……
　焼きそばをまず一口。うん、まずまず。ただあたしが林間学校で

作ったちょっと失敗作の焼きそばよりはおいしいかな？
「虎姫ちゃん、この焼きそばどうかな？」
この中で、唯一一緒だった虎姫ちゃんに話しかける。
「うーん、優子の焼きそばの方がおいしかったかなあ？」
意外な言葉が返ってくる。
「え？　どうして？」
「何だろう？　身内びいきかなあ……」
「ありがとう、今だから言えるけど、実はあれ、ちょっと失敗しちゃったのよ……」
「えー!?　優子ちゃんあれが失敗って……」
「あの焼きそばは確か……野菜の焼き加減と、ソースの分散かな。それが不均衡だったのよ。本来はこの焼きそばのようにちゃんと均等に混ぜないといけないのよ」
虎姫ちゃんがふむふむと聞き入っている。
「うーん、そう言われてみれば確かにそうなんですけど……」
虎姫ちゃんが不思議そうな表情をする。
「ほら、あの場は雰囲気ってのもあったでしょ？」
「なーるほどー」
虎姫ちゃんが納得の表情をする。
「あー、そういえば優子ちゃん焼きそば作ったんだったっけ？」
「うん、そうだよ桂子ちゃん」
「失敗しちゃったんだ」
「……うんっ」
やっぱり失敗の事実を指摘されると耳が痛い話だ。
「ちなみに、私はうまくいったよ。みんなからもおおむね好評で、この焼きそばとは……同じくらいかな」
「や、やっぱり桂子ちゃんってすごいねえ……」
桂子ちゃん、見た目のかわいさでは、あたしが上回っていると自負しているけど、やっぱりこういった内面的な振る舞いという面では、生粋の女の子とあって大きく水をあけられているのは認めざるを得ない。

「でもさ、優子ちゃんだってすっごい頑張ってるじゃん」
「う、うん……」
「女子力って面倒くさいものなのよ。まあ、あたしは男に好かれようとするの好きだからそこまで感じないけど」
　確かに、服装とかおしゃれとかも面倒と言えば面倒だ。あたしはやっぱり桂子ちゃんと同じで、女の子らしくなるのは楽しいからいいけど。
「あたし、女の子らしくしたいから、面倒だって思ったことはないかなあ……」
「あはは、優子ちゃんは一生懸命だからそう思うのよ。恵美ちゃんみたいに面倒だっていう人も多いわよ」
「確かにそうよねえ……」
　確かに恵美ちゃんみたいに面倒だと思ってる女の子もたくさんいると思ってた。
「というか、そういうのを面倒くさがってモテない女の子が大量に増えちゃったから、危機感の意味も込めてこういう言葉が出てきたのよ」
「ふむふむ確かに……」
「女の子に生まれた以上、やっぱりなんだかんだで男の子に好かれたいからねえ……おかげであたしは、『学園一の美少女』ってまで言われちゃったし」
「でも今は――」
「まあ、さすがに過大評価かなって思ってたし、肩の荷が下りたって感じでもあるけどね」
　そう言えば、以前も似たようなこと言っていたような気がする。
　焼きそばを食べながら、ガールズトークに花を咲かす。
　浩介くんとも話したいけど、浩介くんは浩介くんで、男子同士で会話している。
　少しだけ聞くと羨ましいとかどうとか言っている。
　太陽がさんさんと照りつけるが、この日焼け止めクリームのお陰でほとんど焼けた感じがない。

「そういえば、優子ちゃんは日焼け止めクリームどうしたの？」
「え？　そう言う桂子ちゃんたちは？」
「私達は女子で二人一組になったのよ」
　女子たちの話によると、桂子ちゃんとさくらちゃん、恵美ちゃんと虎姫ちゃんがそれぞれ組んで日焼け止めクリームを塗ったという。
「あ、あたしは……その……」
「う、うん……」
「こ……や、やっぱり恥ずかしいから言えない！」
「あー、うん。優子ちゃん、それ自白しているようなものよ……」
「やっぱりお見通しってことね……」
「そりゃあまあね。私もそろそろ龍香みたいに彼氏作りたいなあ……そしたら彼氏に塗ってもらえるのに……」

　やがてそれぞれが食べ終わり、形式的にごちそうさまをして、所定の位置にゴミを捨てる。
「さあー！　午後も遊ぶぜー！」
　恵美ちゃんの号令とともに、午後はクラスが固まって遊ぶことになった。

「おっしゃあ！　ビーチバレーにビーチサッカーやろうぜ！」
　そう言うと恵美ちゃんは自分のカバンから網と棒を取り出してきた。
　午後になって人も増えてきたので、海水浴場の端の方に移動して行うことになった。
　それに伴い、基地も端の方に移動、男女１０人がみんなで荷物持ちながら運ぶ姿はシュールだ。
　傍から見たら外見年齢が一番年下に見える永原先生が引率役というのも不格好ではある。
　よく考えたら、あたしたち９人の年齢を全部足しても、永原先生の３分の１以下にしかならないということに気付いた。
　永原先生はもう、現代人８０年の人生の８倍も生きている、それど

ころか永原先生の時代は人間５０年、既に１０倍に達しているほどだ。
　ともあれ、この辺は海の家からも遠く、人も少ないので、存分に遊べそうだ。
　さて、海辺のスポーツということなんだが……
「言い出したはいいんだが、どう分けよう？」
　メンバーは男子４人、女子５人、そして永原先生。あたしはあまりに弱いからプラスワンでいいとして……
「でも男女混合だとルール複雑よねえ……」
「女子も女子で運動部の恵美ちゃんと虎姫ちゃんは強いだろうし……」
「うむ、でもあたいらも男子には勝てんだろうしなあ……」
「それに優子ちゃんは……また特別ルールが必要ですよ……」
「少人数でやる感じにした方がいいわねえ……」
「そうだ、サッカーのＰＫ戦見たく１対１の個人戦にしてみては？」
　桂子ちゃん、恵美ちゃん、虎姫ちゃん、さくらちゃんが輪になって議論している。
　桂子ちゃんが体育座りになっていて、パレオからは水着と同じ色の中身が見えているわけだが、男子の一人がチラチラ見ている。
　ちなみにあたしも無防備に座り込んでいるので、浩介くんにジロジロ見られている。
「恥ずかしくないよ、水着だから大丈夫よ。恥ずかしがったら水着の個性がなくなるわよ優子！」と、自分にそう言い聞かせる。
　さっきと比べるとそうしたエッチな恥ずかしい気分は大分落ち着くようになった。
　一方で、あたしを除く女子陣は喧々諤々の議論を続けている。
「なあ、ミックスダブルスみたいにしてはどうだろ？」
「どういうこと？」
「ああいや、サッカーやバレーじゃなくて、このボールでテニスっぽくアレンジできねえかなって」
「恵美、このボールじゃ砂で跳ねないから無理よ」

「あ、そうだった……」
「そうだ、２対２のサッカーっぽくできねえか？」
「なるほど……それはいいですね……」
「問題はゴールよねえ、どう表現しよう？」
「うーん、ゴールライン全部をゴールにするってのはどうだ？上限をこの棒の高さにすればそう簡単に入らねえぜ……まあ頻繁に入っても楽しいけどな」
「よし、とりあえずやってみようか」
「そうね、そうしましょう」
お、議論がまとまったようだ。
どんな種目が出るのか、あたしは楽しみになってきた。

# ビーチサッカー

「おーい、ビーチサッカーやるぞ！」
そう言うと、虎姫ちゃんと恵美ちゃんが棒を使ってラインを書き始める。
色々と話し合われたみたいだが、最終的にはベタなサッカーになった。
「じゃあ、男女別にチーム分けしようか」
「2対2だから……うーん、あたしはとりあえず抜くとして……」
「とりあえず、恵美ちゃんと虎姫ちゃんは分けたほうがいいよねえ」
「あー私はサッカー部だから……桂子とさくらはどっちが運動神経いいんだっけ？」
「うーん……多分桂子さん……だと思います……はい」
ちらっと男子の方を見るじゃんけんをしている。
何だろう、林間学校の実行委員の選出を思い出す。
男子は適当に、女子は色々と話し合って決める。でもこの2つの違いが、今あたしの浩介くんとの関係につながっていると思うと……
本当に数奇な運命だ。
「よし、じゃあまずは男子から行こうか」
「えー!?」と言う声が男子から聞こえる。
「女子が見たいならまず男子からよ」
桂子ちゃんがガード固いアピールをする。
「ううぐぐぐぐぐぐ……」
高月くんが歯ぎしりする。
女子たちが水着で激しく動き回るのを見てから、士気を上げてプレーに望みたいという気持ちは分かるが、まあ仕方ない。
「浩介くーん！　頑張ってー！」
男子は4人なので、2対2だ。もちろんあたしは浩介くんのチームの応援をする。
試合はプレイヤー1人とゴールキーパーが1人で別れる。
ボールをゴールに入れれば勝ち。だけどゴールは狭い。網も棒よ

り大分低く、網を超えるとゴールポストに当たった扱いになってしまう。
じゃんけんでどちらが最初にボールを持つかを決め、スタートする。
浩介くんと高月くんのチームと、残りの男子二人のチームに分かれる。
じゃんけんで勝った相手チームがまず攻撃する。
浩介くんと1対1になる。
「よしっ！」
浩介くんがボールを奪う。
そしてそのままドリブルし、キーパーと1対1！
「おりゃあ！」
浩介くんのシュート、しかし思ったよりも威力が出ず、キーパーに阻まれる。
「ねえ恵美ちゃん、あのボールって……」
「ああ、海用に裸足前提の柔らかいボールだぜ」
普段蹴るときもシューズを履いているので素足でボールを蹴る機会は意外と少ない。
キーパーは前に出ていたプレイヤーに手でパスし、キーパーの高月くんと1対1になる。
こちらも高月くんが冷静にキャッチし、素早くパス。
「浩介くーん！」
浩介くんはうまく足元で勝負する。
時間をかけてしまい、プレイヤーが戻ってくる。
浩介くんはとっさにシュートをバーに当てる。
ボールが柔らかいため音はせず、代わりにゴールの向こう側にボールが転がる。
「はーいそこまで！　高月君篠原君チームの勝ち！」
審判役の永原先生が宣言する。
「よっしゃあ！」
浩介くんが勝ち誇った顔をする。

「さ、女子も見せてもらうぞ！」
高月くんが言う。
「よっしゃ分かったぜ」
チームは虎姫ちゃんにさくらちゃん。桂子ちゃんに恵美ちゃんのチームだ。
ゴールキーパーがさくらちゃんと桂子ちゃんが担当している。
「ねえ、木ノ本がプレイヤーやりなよ」
高月くんが言う。
「高月くん、水着だから中見えても恥ずかしがったりしないわよ！」
桂子ちゃんが言う。
「まあそう言うなよ」
男子からすると水着と下着は結構あいまいだ。パレオで隠されている桂子ちゃんの中身を見たいのも当然だ。
ちなみにあたしは相変わらず普段スカートでは絶対できないＭ字の体育座りを堪能している。
浩介くんの視線を感じると興奮してしまう。他の男子ではそうならないのに……
「それにサッカー部の虎姫ちゃんが相手だよ。運動部の恵美ちゃんじゃないとだめだよ」
「うぐっ」
桂子ちゃんが正論を突き付け、いざ試合開始。
恵美ちゃんがまず抜けようとする。しかし、虎姫ちゃんにボールを取られてしまう。
やはり恵美ちゃんといえど本職のサッカー部に勝つのは難しい。
虎姫ちゃんが一気にシュートする。
しかし、高く上がりすぎた。いわゆる「宇宙開発」とよばれるものだ。
「くっそーこのボール言うこと聞かないー！」
虎姫ちゃんが悔しがる。
桂子ちゃんがボールを取り、ゴールキーパーボールで再開。
「えいっ！」

桂子ちゃんが踏み出して手で投げる。
男子はボールそっちのけで桂子ちゃんのお尻から目を離せない。
本能なのはわかるけど、浩介くんも目線があたしから桂子ちゃんに移ってて妬いてしまう。
他の女子ならただ妬くだけで済むけど、ＴＳ病のあたしは「理解」出来てしまうので余計辛い気がする。
ともあれ、試合が再開。
恵美ちゃんがボールを持つ、虎姫ちゃんが追いかけるが、その前にシュート、こちらはバーに阻まれこぼれ球も恵美ちゃんが取る。
しかし虎姫ちゃんに追い付かれる。もう一度やけくそでシュートを打ったものの、枠を外れた。
さくらちゃんのボールでスタート。
「えいっ！」
山なりに投げて、虎姫ちゃんにパスしたつもりだった。
「やりい！」
威力が足りなかったのにも加え、身長で勝る恵美ちゃんがかなり手前からジャンプしてボールを取りパスカット。
「あ！」
虎姫ちゃんが慌てて追いかけるが間に合わない。
「それ！」
冷静にさくらちゃんを出し抜いてゴールした。
「はーいそこまで、木ノ本さん、田村さんチームの勝ちよ！」
「やったー！」
「よっしゃっ！　虎姫に勝った！」
桂子ちゃんと恵美ちゃんが喜ぶ。
「あ、あの……安曇川さん、ごめんなさい……」
パスの甘さから失点してしまったさくらちゃんがショックで肩を落としている。
「なに、これは遊びだ。あんまり気を落とすなよ」
虎姫ちゃんが慰める。
「は、はい……」

「ささ、今度は男子でもう一試合やろうぜ！」
「あ、あの……」
「うん？　どした高月？」
「石山が参加してないみたいだけど……」
「あー優子ちゃんは運動苦手だし……」
「で、でも何か参加させてあげないとかわいそうだよ！　ゆ……い、石山だってせっかく水着で激しく動き回りたいだろうし！」
　高月くんが下心丸出しで言う。
「おい高月！　お前本音が出てるぞ！」
「だ、だって……」
「い、石山！　無理に参加しなくていいぞ！　こんなスケベ男の言うことは忘れろ！」
　浩介くんが動揺しながら言う。
「うーん、確かに優子ちゃんが動き回ると水着も海も栄えるのは事実なのよねえ……」
「ちょ、ちょっと桂子ちゃん!?」
「そうだ、優子は永原先生とＰＫ戦しようぜ」
「え？　私ですか？」
「先生とはいってもやっぱ一回くらいは参加してもらわねえとなあ」
「そういえば、永原先生って運動神経はどうなんです？」
　あたしが質問する。
「自慢じゃないけど結構ありますよ。戦乱の時代を生き抜いてきましたから」
「それじゃあ試しに私とサッカー1対1してみて」
　虎姫ちゃんが言う。
「……いいですよ」
　というわけで永原先生と虎姫ちゃん、1対1でビーチサッカーのボールを取り合いが始まる。
　永原先生の水着もなかなか扇情的である。
「ふっえいっ！」

「あ！」
虎姫ちゃんが一瞬のスキを突かれ、ボールを奪われる。
しかし、虎姫ちゃんもそこから負けじとスライディングも織り交ぜつつ奪い返す。
「すげえな、あの虎姫と互角って……」
しかし、永原先生の方が息が上がっている。
「先生、すごいですけど、私には勝てませんよ。これでまだ7割くらいです」
「そりゃあ……安曇川さんサッカー部だもんねえ……私は全力全開よ」
永原先生が息を上げて言う。正直言ってかなりエロい。
「でもよ、サッカー経験者ってわけじゃないだろ？　そんで虎姫とあそこまでやりあうのはすげえぜ」
「まあ、ちょっと余興でやったことはあるけど、最後にやったのは……10年位前かしら？」
「んじゃあよ、永原先生やっぱ基礎運動能力がすげえんだよ」
「やっぱり、修羅場くぐってきたから……？」
「まあねえ……でも明治維新の時はちょっと危なかったわよ。何せほとんどずっと江戸城か江戸の町にいたから」
「とにかく、優子ちゃんとPK戦だとやっぱりハンデが必要だよなあ……」
多分永原先生じゃなくても、相手がさくらちゃんでもハンデは必要だと思う。
「とりあえず、優子は守るときにゴールを小さくして、少し距離を離すしかねえかなあ……」
桂子ちゃんと恵美ちゃんが協議する。逆に言えばあたしが蹴るときは近くで広いゴールということになる。
「よし、ゴールはこんな感じかな？」
さっきの試合よりもゴールが一段低くなる。もっとも、あたしの背よりは高いけど。
そして桂子ちゃんが砂浜に二つ点を書く。

「それじゃあ、まず優子ちゃんからキーパーやってみて」
「はーい！」
あたしがゴールの前に、永原先生がＰＫの後ろ側の位置に移動する。
海風がはためき始め、あたしのパレオがまた風に煽られ、男子の視線があたしの下半身に釘付けになる。
「準備はいい？」
「うんっ！」
あたしは男時代の体育の授業を思い出し、身体を少し低くし、両手を広げ、永原先生に視線を集中させる。
「よーい……どん！」
桂子ちゃんの掛け声とともに、永原先生が助走をつける。
ボールを蹴る。右上！
あたしは夢中になってジャンプする。ジャンプの勢いでふわりとパレオが浮遊する。
確かに普通のサッカーや球技大会のフットサルよりは威力がない。でもあたしの反射神経では間に合わないし、あたしのジャンプ力では届かなかった。
ボールは網を揺らし永原先生の得点になる。
下に落ちると一気に下から巻き上げる風圧によって白い水着が丸見えになる。あうう……浩介くんにこれ見せるの恥ずかしい……
「よし、次は石山さんがキッカーで私がゴールキーパーね」
桂子ちゃんと恵美ちゃんがゴールの網の幅と高さを広げる。そしてあたしはさっきより手前から蹴る。
「あらあら、結構ハンデ大きいわね」
「でも先生、優子ちゃんにはまだ足りないかもしれませんよ」
海風はさっきよりも強くなり始め、今までは風では見えてなかった桂子ちゃんも、中の水着が見えるくらいはためいている。
あたしの水着も、時折おへそがパレオで隠れるくらいめくれることがある。

普段スカートの中をみえないように必死にしているギャップからか、平常心を保つあたしの様子に、浩介くんを含めて男子たちが興奮しているようだ。
永原先生はあたしと同様の姿勢を取る。ビキニから見える谷間がまぶしい。あたしほど大きくはないけど、それでも永原先生の小さい身体からすれば、かなり大きい。
「よーい……どん！」
風が収まった所で再び桂子ちゃんの掛け声、あたしはボールの左側を蹴って右側に軌道を描かせる。
蹴った瞬間も、足を上げて中の白い水着を見せることになる。
「あ！」
永原先生は左側に身体を傾けるが、ボールはなく、空を切って倒れる。逆を突き楽々1点を取った。
どうやらこの距離でこの広さなら互角に戦えそうだ。
むしろ大変なのは入れ替わるたびにゴールを調節する桂子ちゃんと恵美ちゃんかもしれない。
再びゴールが狭くなり、後ろの方から永原先生がシュートする。
今度はボールが正面に行き、あたしは思わず身をかがめてしまう。
「トンッ！」
ボールがお腹に当たる。痛くない。とりあえずボールを取る。
「きゃはははは」
「大丈夫だよ優子ちゃん、当たっても痛くないよー！」
笑い声とともに痛くないアピールという声が聞こえる。
うん、確かに痛くなかった。そういうボールだもんね。
ともあれ、これであたしの1点リード。
2回目のあたしのボール、あたしは左側の隅に低い軌道を狙う。永原先生ならノーゴールのコース。
「よーい……どん！」
永原先生は左側へ、しかし、ボールを浮かせると思ったため、体が倒れるより前にゴールネットの下をボールがくぐる。
結局、このままリードしているあたしがメンタルで優位に進め、5

回目のゴールを入れたところであたしの勝ちが決定した。
「やったー！　あたしの勝ちー！」
「石山さん強いわねえ……」
ハンデ考えたらどう考えても永原先生のほうが上手なのに。
「優子ちゃんおめでとう！」
「うん、ハンデ1回目で勝てたのも初めてよ」
だいたいはもっとハンデが必要になるからだ。

「にしてもやっぱあの水着エロいよなあ……」
「うんうん、露出度は先生の方が高いのになあ……」
男子たちがあたしと永原先生の水着で盛り上がっている。
「もう、男子ったらまた優子ちゃんを性的な目で見てる……」
「いいのよ桂子ちゃん」
「え？　でも――」
「だ、だってこれ……こ、浩介くんに……あうう……」
「優子さん……墓穴掘ってますよ……」
でも確かに、浩介くん以外の男子に見られすぎちゃうと嫉妬されちゃうから、次からは露出控えめの水着にした方がいいかもしれない。
「さ、帰る時間まではまだありますから、海でボール遊びしましょ！」
「はーい！」
10人全員が海に入る。今度はルール無用でビーチボールを高く上げるような所作を繰り返す。
海に着水しないように上げ続ける遊び。蹴鞠の海版という感じだ。
「そーれ！　あ、石山！」
「えーい！」
浩介くんに言われ、ボールをつなぐ。
「あ！　先生！」
「はーい！」
他愛もない時間。さっきみたいなスポーツもいいけど、やっぱこう

いう一時が大事だ。
ふと海の家の方を見る。人人人で大混雑している。ここは相当な距離があるので、歩くのも一苦労なのだ。
楽しい時間はあっという間に過ぎる。いつの間にか太陽がやや西に傾き始めた。

「さあ、みんな、そろそろ出るわよ。着替える前にちゃんとシャワー浴びてね」
永原先生の声とともに、全員が荷物を持ち、更衣室まで歩く。結構長い。
まずは一旦ロッカーを開けて１００円玉を取り出し再び閉める。鍵を腕に取り付け、タオルを持って隣のシャワー室に入る。
個室になっているので、鍵を閉めたら水着を脱いで素っ裸でシャワーを浴びる。
まず潮風に吹かれて痛んだ髪を洗う。備え付けのシャンプーをかけて入念に手入れする。
身体も日焼け止めクリームを落とす。水着の中だった部分もきちんと洗う。
海で水着になった後でフルヌードになるのは、誰もいないのにちょっと興奮してしまう。
ついシャワー室にある鏡でセクシーポーズを取ってしまう。って何やってんだ早く終わらせないと。
クリームの効果は絶大で、きれいな肌はほとんど日焼けしていない。そういえば桂子ちゃんも日焼けしてなかったっけ？　対して虎姫ちゃんと恵美ちゃんは結構焼けてたなあ……
そんなことを思いつつ、一通り洗い終わったら身体をタオルで入念に拭いていく。
一瞬ドアを開けそうになる。危ない危ない。
パレオ以外の水着を一旦穿き直して、ロッカーに戻り、私服に着替える。
水着のブラの上に一旦下着ブラをつけて、そして水色ワンピースを

着る。
ワンピースの中で水着ブラを外し、下着ブラに取り替える。
下のみ水着を脱ぎ、代わりにパンツを穿く。後は水着とタオルをビニール袋に入れて、財布などを元の位置に付け直し、忘れ物がないか確認したらロッカーを閉めて外に出る。

「あ、優子ちゃんお疲れー」
「ごめん、待ったー？」
「ううん、そんなでもないよ」
よく見ると、あたしが一番最後だった。
「あ、石山さん、ちょっといいかな？」
永原先生が声をかける。
「篠原君と、連絡先交換した？」
「あ、まだ」
「交換しておくといいわよ」
「う、うん……」
すっかり忘れていた。
「あ、あの……浩介くん」
あたしは高月くんと話していた浩介くんに声をかける。
「おっと、篠原、愛しの彼女がお呼びだぜ」
「お、おい高月！」
顔で焼肉が焼けそうなくらいじゅうじゅうと熱くなりながら、あたしは上目遣いで浩介くんを見つめる。
一瞬ドキッとした表情を見せる浩介くん。あたしまでドキドキしちゃう。
「あの……連絡先……交換してくれる？」
「あ、ああうん。そうだね。メールとかしたいし！」
あたしはプロフィールを見せる。
「あれ？　石山ってガラケー？」
「うん、少し旧式だよ。赤外線はやり方分からないや」
「ちょっと待ってな。確かこれは……」

浩介くんがあたしの携帯を取ってやり方を確認する。すると両手で操作し一人で連絡先交換をしてしまった。
「はい、これで大丈夫。後は電話帳機能で確認してくれ」
「あ、ありがとう……」

「はーい、じゃあそろそろ行きますよー」
永原先生の掛け声とともに、ＩＣカードをかざし、みんなで電車に乗る。
まだ混み始める時間ではないものの、１０人は空いておらず、座席には座らない。
あたしは電話帳で、浩介くんの電話とメールアドレスを見つめ続ける。
名前はシンプルに「篠原浩介」になっている。あたしはそれを、今日から使い始めた呼び名である「浩介くん」に変える。
メールを送ってみる。
題名：テスト
本文：今日は楽しかったね。
これでいいかな？
送信ボタンを押し、「相手にメールが届きました」と出る、直後、浩介くんがスマホを取り出す。
１分も経たないうちにメールが届いた。
題名：Ｒｅ：テスト
本文：うん、俺も楽しかった……ちょっと心臓と下半身に悪かったけど
あはは、浩介くんらしいなあ。そうだよね、うん。
いつかあたしも、下半身が正常になってくれるかな？
そんなことを思いつつ、電車を乗り換える。
何人かはこのまま電車を使い続け、何人かは沿線へ。
浩介くんが降りる。あたしは寂しい気持ちもあったが、明日の夏祭りでまた会えることを思い出す。
明日は露出の多い水着姿とは打って変わり浴衣姿になる。浩介く

ん、喜んでくれるといいなあ……
永原先生は学校に用事があるということで、学校の最寄り駅で降りる。
そして自宅の最寄駅桂子ちゃんと二人で話しながら歩く。
「いやあ、私もだと思うけど、優子ちゃんなんて今日はまさに海辺のアイドルだったねえ！」
「ええ？　そうかなあ？」
「うんうん、盗撮されてるかもよ」
「うげっそれは嫌だなあ……」
「まあ、でも見られてナンボなんだから、今はゆっくり休んで明日のことを考えましょ」
「うん、そうだね。浴衣姿……浩介くん気に入ってくれるといいなあ……」
「そうだね。じゃあここで」
「うん、バイバイ」
桂子ちゃんと別れ、自宅へ戻る。
母さんから「今日は入念にお風呂に入りなさい」と言われる。うん、さっきシャワー室で徹底的に洗ったけど、今日は念には念を入れたほうがいいよね。うん。

## 楽しい夏祭り　永原先生の着物

朝起きる。今日は昨日に引き続き夏祭りの日。でもその日は夕方から集合だ。

夏休み中はすっかり朝の日課になったお人形さん遊びをする。重たそうなドレスを脱がしてあげて、カジュアルな衣装に着替えさせてあげる。

お人形さんは何を着せても可愛く似合う。お人形さん遊びは衣装のバリエーションが多いと意外と楽しい上に、一見とんでもない組み合わせが意外と似合ったりと、新しい発見も多い。お父さん譲りの全方面に対する好奇心もあってか、ついのめり込んでしまうのだ。

夏休みが終わったら、平日は程々にしておこう。

今日は母さんの家事を手伝いつつ、最後の宿題を消化しながら時間を過ごしていた。

宿題を終わらせたあとのことを考える。この後、ひたすら暇になる。

桂子ちゃんたちと遊ぼうかなあ？　海や夏祭りだけではなく、夏休み中にできそうな遊びをたくさんしたい。

山は林間学校があったし……うーんプールとか？　それだとまた水着になるのよねえ……

あ、他にも遊園地とか水族館とかもあるか。

「優子、昨日の海はどうだった？」

昼食の支度をしていると、母さんが話しかけてきた。

「うん、楽しかったよ」

「そう、それはよかった」

「でも課題もできたかな？」

「ん？　どんな課題？」

「えっと……実は……」

恥ずかしいけど、あたしは母さんに、浩介くんと起きたことを話す。

ここでも「名前呼びなんだね」って言われたけど、もういいや。多分夏休み終わったらまた言われそう。

「優子、それ大胆すぎよ……」
「うん、浩介くんには刺激強かったみたいで……」
日焼け止めクリームの話もしたので、やっぱりこう言われた。
「無理も無いわよ……母さんだってお父さんに頼むのは……恥ずかしいわねえ……」
母さん、変なこと言わないでくれ……
「でも、結局それでも治らなくて……」
「……優子、いくらなんでも生き急ぎすぎよ」
やっぱり母さんも同じことを言う。
「……それ、浩介くんにも永原先生にも言われた」
「でしょう？　気持ちは分かるわよ。でも、そういつもうまくは行かないものよ」
「でも心と体の不一致は……」
「うん分かってる。優子が一番辛いことはね。でもね優子、あなたはいつも、女の子になろうとすることで褒められてばかりいたわ」
そりゃあそうだ、多くのＴＳ病の患者は男に戻りたいと思い、不可能と言われても、無駄にあがき、絶望し、自ら命を絶っていく。
そうでなくても、渋々女の子の不便な生活を受け入れるのが普通だった。
永原先生は、そんな患者たちを多く見て長い時を過ごしてきた。
でもあたしは違った。
ＴＳ病になる前、あたしはひどく乱暴で、すぐに怒り、優一の名前を汚し続けた。
生まれ変わるのに必死になった患者は、有史以来殆ど居ないという。
「優子は、一生懸命に女の子になろうとして、困難も乗り越えてきたわ。それはとても立派なことよ。でもね、それがいつも成功し続けるとは限らないの」
「う、うん……分かってる。本来はもっと長い時間をかけて治すものだって、永原先生が――」
「でしょう？　優子、あなたに時間はたっぷりあるのよ」

「で、でも浩介くんは？」
「浩介くんが若いうちに治るものでしょ？」
「う、うん……」
「焦っちゃダメって言われたでしょ」
母さんも同じことを言う。ああ、やっぱりあたしのわがままなのかな……でも、努力は続けよう。

「優子、そろそろ着替えて行ったほうがいいんじゃない？」
「あ、うん」
おっと、いい時間になった。
そろそろ浴衣にしないと。
ううう、今更だけど、浴衣は露出度低いけど、やっぱりノーパンノーブラっていうのは落ち着か無さそうだ。
まずＰＣを開いて浴衣の帯の締め方が載っているサイトを開く。
この前買った浴衣を取り出し、服を全部脱いで全部丸出しになってから浴衣を着る。
鏡付き机で確認する。ちょっと遠いのが不便だが仕方ない。
帯を確認、一つ一つ丁寧にやっていく。
帯の片側を折って肩に巻きつけて、２回巻きつけて、三角に折って、えっと……次がこうかな？
えっと、それでこの結び目を上手くまわして……よし！　できた！
でもやっぱり、中がスースーする。それに大事な部分とは布一枚分しかないからかどうも落ち着かない。
「母さん！　これでいい!?」
母さんに確認してもらうためリビングへ、下半身と胸が落ち着かない……
「んーちょっと待ってね？」
母さんが入念にチェックする。
「帯の位置はもう少しこっち側にして……よし！」
「えへへ、どうかな？」
「うん、かわいいんじゃない？　でも浴衣だとその白いリボンはあん

まり似合わないわねえ……」
「んー？　そうかなあー？」
前頭部、左目の上側にあたしがいつもつけている白リボンについて、母さんが注文をつける。
「花の髪飾りの方がいいと思うのよ」
そう言うと母さんはあたしの部屋に掛けていく。そして1分も経たないうちにあたしの所に戻ると、白い花が数個付いた、いつものリボンよりもかなり大きい髪飾りを持ってきてくれる。
「母さんがつけるからね」
「う、うん……」
かなり時間がかかる。
止め方はいつものリボンとは違い、針とピンで止める感じ。
頭におもりがついているような感覚を受ける。見た目通りの重さでリボンとは大違いだ。
「か、母さん……なんか重たい……」
「あら？　でもかわいいわよ。鏡で見てきて？」
「う、うん……」
言われるままに鏡へ移動する。
頭におもりが付いたためか、さっきより下半身と胸は気にならないが、それでもスースー感がなくなったわけじゃない。
ううう……誰かに襲われたらどうしよう……
襲われてノーパンノーブラなんてバレたら絶対その後も正当化されちゃうよなあ……でも下着つけたらあんまりにみっともないし……あうぅ……ジレンマ……
鏡に付く。
「おおお……」
女の子になった自分の姿はもう見慣れたものだ。男だった頃の姿ってどんなだったっけ？
……ああ、うん、そうだ。悪人顔だったよね。髭が濃くて体毛もすごくて髪がちょっと薄くて……うん、思い出せた。
危ない危ない、さすがにこんな短時間で男の頃のことを忘れてしま

うのはまずい。
女の子になりきるとしても、男の頃のことは、過去に犯した罪の記憶として覚えておかなきゃいけないことだ。
ともあれ、鏡に映っていたのは浴衣姿の、女の子。これが今のあたし。
それはやっぱりかわいくて、特に髪飾りがかなり目立つけど、髪飾りに負けないくらいの可愛らしい顔。
これだけ派手な装飾をしても、顔への注目が行くというのはやっぱりあたしはすごいかわいい女の子だということ。テレビでも女の子の可愛いアイドルがたくさんいるけど、それでもあたしよりかわいいと思ったことは一回もない。
ただ一つ残念なのは、胸が目立ってみっともないことだ。普段の洋服ならあたしの巨乳は一際映えるけど、和服だと中々そうも行かない。
昔は貧乳より巨乳のほうがむしろコンプレックスになっていたというのは、あたしからすると信じられない話だったが、今こうやって浴衣を着てみて、彼女たちの悩みが痛いほど伝わってくる。
しかも、浴衣で歩くとちょっと胸がこすれる事がある。これについては新しい対策を考えないと行けないが、残念ながら今からでは間に合わない。
ともあれ、次に荷物だ。財布や携帯などを入れた小さなポーチを持っていく、こちらも色合いということもあって母さんに注意された。大きさも小さく、帯の中に入る程度にしておく。
よし、これでＯＫ、念のため、帯の中にタンポンも入れておく。でも、そもそもノーパンで生理来たらどうしよう……
日程的にはまずありえないから大丈夫だろうけど。
玄関の前に行くと、下駄が置いてあった。靴のサイズは把握されていたので、こっそり買ったものかもしれない。
まあ、詮索してもしょうがないか。
玄関の靴の高さに降りると、体の中の風通しが更に良くなった気が

する。あうう、心臓がバクバク行ってるよお……
でも、集合時間もあるし行かなきゃ！
「行ってきまーす！」
「はーいいってらっしゃーい。鍵閉めておくからそのままでいいわよー」
母さんの声とともに家の鍵を開け、ドアを開く。
夕方夏の生ぬるい空気が上下から入り込んでくる。
しっかり閉めていても、突然帯が解けて裸を晒すかもしれないという恐怖感が襲ってくる。
家を出て道路に出る。閑静な住宅街で誰もいないのに、そこらじゅうから見られているような感覚。
ノーパンノーブラになるだけで、緊張感が段違いだ。
露出度は普段着ている制服や私服より段違いに低い、なのに、昨日、女の子として不特定多数に出てから、一番露出度が高かっただろう水着になったときよりもずっと緊張感が高い。
やはり、大事な部分に直接フィットしないというのはとてつもない緊張感をもたらすみたいだ。
まあ、普段の服でもパンツ見られないようにしてるから緊張感はあるけど。
普段の道を進む、今回の祭りの神社はあたしの家からの徒歩圏内にある。
まずは桂子ちゃんと一旦合流し、そこから神社の前に集合することになっている。
ゆっくりと道を進む、カランコロンという下駄の音が心地よいが緊張感は勢い高まっていく。
桂子ちゃんとのいつもの分かれ道に来た。
するとちょうど黄緑色のシンプルな浴衣姿で歩く女の子を見かけた。
「あ、桂子ちゃん！」
「優子ちゃんこんにちはーちょうどよかったね」
「うんうん、ナイスタイミングっていうの？」

桂子ちゃんの髪飾りは赤と白の花。あたしよりもオシャレな感じ。
浴衣のシンプルさと上手くギャップを作っている。
そう言えば、桂子ちゃんもノーパンノーブラなのかな？
あたしよりは胸が大きいわけじゃないから、巨乳でもそこまで目立った感じじゃないけど……
うー、せっかく慣れ始めたと思ったのにまたスースー感を感じちゃったよ……
帯はうんときつく締めてあるのに微量の風でも全部解けてしまうような錯覚に陥っちゃうし。もう少し意識しないようにしないと……
「じゃあ行きましょうか」
「うん」
桂子ちゃんの声とともに、横に並んで広い歩道を歩く。
集合場所の神社は駅を過ぎて更に向こう側に徒歩数分、タイミング次第では駅で誰かと合流できるかもしれない。

「優子ちゃん髪飾り可愛いね」
歩きながら、桂子ちゃんが話しかけてくれる。
「えへへ、そうでしょそうでしょ？」
「いつもの白いリボンとは違う感じ」
「やっぱり？」
「そうそう、いつものはちょこんと自己主張してる可愛さがあるっていうの？　でも今のは顔に負けないくらい主張してやるっていう気持ちを感じるわね。でもそれでいて、ちゃんと顔の方が可愛くなってるから素晴らしいわ」
桂子ちゃんが具体的に褒めてくれる。こういうことをスラスラ言えるのは、お世辞ではない証拠だ。
「んっんぅ……！」
少し風が吹く。緊張感が漂う。
「どうしたの優子ちゃん？　そんなに緊張して……」
「だ、だって……浴衣だし……」

「うん、浴衣はガード固いから大丈夫よ」
「あうあう……」
言葉に詰まってしまう。知っているとは言っても、中に何も付けてないなんて言っちゃったらはしたないし。
桂子ちゃんは涼しい顔で歩く。やっぱり以前にもノーパンノーブラを経験しているせいだろうか？
あたしは初めての経験だからこんなに落ち着かないのかなあ？
今のあたしの人間としての年齢は17歳だけど、女の子の年齢はまだ生後3ヶ月ちょっとの赤ちゃんでしかない。
そう考えれば、「生き急ぎすぎ」といった皆の言葉を理解できる。そうだ、赤ちゃんなんだ。
多分この感覚も、いつかは慣れる。そう思いたい。
駅に着くにつれ、人も増える。大勢の話し声が聞こえる。
そんなわけ無いとわかってるのに、周囲の人全員がみんな透視能力や心を読む能力があるように感じてしまう。
あう、見ないで、見ないで……
浴衣だからパンツやブラを付けないのは普通だって分かってても、やっぱり意識してしまう。
「優子ちゃん、大丈夫？　少し深呼吸してリラックスした方がいいよ？」
「う、うん……すぅっーーーーーーーはぁーーーーーー」
言われるがままに深呼吸する、あんまり効果がない。
でも、駅から出ると、同じ祭りが目的と思しき浴衣姿の女の子がたくさんいた。
中には男女のカップルも居る。
そうだよね、彼女たちもノーパンノーブラなんだよなあ……
あれ？　でも意外とラインが出てみっともない子が結構いるぞ。
……嫌な能力だ。面倒臭がって下着を付けてる子を見分けることが出きてしまった。
ってことはやっぱり、あたしがノーパンノーブラなのバレているのかもしれない。

電車の群衆の中に、どうやら知っている人は居ないみたいなので、桂子ちゃんとそのまま神社の前まで進むことにする。
普段この方向は殆ど行かない。駅の向こう側は最近になってちょっとだけスーパーなどの商業施設も出てきたけど、役所の最寄り駅のほうが断然便利だからだ。

「ねえねえ、あの二人美人だよね」
「うんうん、特に黄緑の子、オシャレだよねえ」
「でもさ、青い浴衣の子、顔はかわいいと思うよ」
「うーん、浴衣だと黄緑の子のほうが似合ってると思うけど確かに顔はそうかも」
「黒髪もきれいだしねえ」

「桂子ちゃん、やっぱり噂になってるね」
「まあねえ。今頃つぶやかれてるかもよ」
「ふええ!?」
「自意識過剰でしょ優子」と何度自分に言い聞かせても、スマホで盗撮され、「ノーパン浴衣娘」としてつぶやかれてしまう自分を思い浮かべてしまう。
いくら理屈でわかっていても、不安感を抑えることが出来ない。
夏に珍しく涼しい風が入る。ブラジャーとパンツを付けてない上下半身に刺激が来る。
冷静に、落ち着いて、大丈夫、見えないから。ありったけの言葉を使い暗示する。
「優子ちゃん、落ち着かないのは分かるけど大丈夫よ。みんな付けてないんだから」
本当はそうでもないことは知っている。
「仮に付けてる子が居たとしても、それはみっともなくて女子力の低い女がしていることなんだから、堂々とすればいいのよ」
「わ、わかってるけど……」
桂子ちゃんも桂子ちゃんなりにフォローしてくれる。

あーあー、あたしも浴衣でノーパンノーブラでも桂子ちゃんみたいに冷静になりたいなあ……
「ま、みんなで夏祭りを愉しめば、そう言う感覚もなくなるわよ」
「う、うん……」
ともあれ今は、桂子ちゃんを信じるしか道はない。
神社が近付くにつれ、浴衣の密度が増える。夏祭りは昨日と今日の二日間。
そこかしこに話し声が聞こえる、家族連れ、カップル、友人同士。中には浴衣ではなく、学校の制服だったり完全な私服だったりする人達もいる。
そんな中で、ひときわ目立つ着物を着ている女性。
柄こそ比較的シンプルだが、番傘を持って髪を上にまとめ上げ、かんざしまで付けている。まるで時代劇か京都の観光都市の女性だ。
でもそれが、永原先生であることに気付くには時間はかからなかった。
「あ、永原先生」
「あら、石山さんに木ノ本さん」
「先生、その着物……一体……」
「ああうん、３２０年位前に江戸城でもらったものよ」
「え!?　これ江戸時代の!?」
桂子ちゃんが驚く。かなり保存状態がいい。本来なら美術館ものだ。
「ええ」
「誰にもらったんですか？」
「吉良上野介殿よ」
「え？　吉良上野介？」
誰だっけ？　何処かで聞いたことある名前だけど……
とにかく大名のような偉い人には違いない。そうだとしたらとんでもない値段がつくんじゃないかな？　よく分からないけど。
「……ええそうよ。吉良上野介殿には着物をいくつかもらったわ。どれももったいなくて片手で数えるほどしか着たことないけど、今日は

私も久々の夏祭りということで、特別に着ることにしたわ」
「じゃ、じゃあいつも和服を着る時は？」
「……いつもは石山さんたちと同じような浴衣や戦後に買った和服を来ているわ」
「そうなんだ……ところでその傘は？」
「傘は新しくて戦後のものよ」
　そうか、傘は雨で痛むもんなあ……
「ええ、私も和服を着てた時代の方がずっと長いから、今でもこっちのほうが落ち着くのよねえ」
　確かに洋服が本格的に強くなったのは戦後からだもんなあ……
　あたしたちにはもう半ば神話化しているような時代だけど、永原先生の人生からすれば戦後の７０年だってそんなに長い時間じゃないということだ。
「そういえば、他に誰か来てないの？」
「ええ、まだよ」
　確かに集合時間はまだ先だ。ということで、あたしたちはここで待つことにした。

# 楽しい夏祭り　浩介くんとお化け屋敷

「あ、ごめん待ったかー!?　おー、先生すげえなその着物！　年代物って感じだぜ！」
　次に出てきたのは恵美ちゃんだった。
　恵美ちゃんの浴衣姿だが、何か違和感がある。って、左前になってるじゃない……
「ちょっと！　こら田村さん！」
「？　どうしたんだ先生？」
　永原先生の驚いた顔と対照的に恵美ちゃんはキョトンとしている。
「田村さん、それじゃ死んだ人よ！」
「あー？　何かよくわかんねえから適当にビデオ見ながらやったらこうなったぜ」
「左右逆よ！　もうっ！　あそこにトイレがあるから、今すぐ直してきなさい！」
「えーめんどくせえよ」
「な・お・し・て・き・な・さ・い！」
　面倒くさがる恵美ちゃんに永原先生が凄む。
「わ、分かったよ……」
「いい？　相手から見てｙの字よｙの字」
「お、おう……」
　恵美ちゃんがトボトボしながらトイレに入る。最も、個室ではなく手を洗うところの鏡でやるんだろうけど。

「お、男子一番乗りか！　しかし、先生すげえなその着物！」
　次にやってきたのが高月くんと浩介くん。高月くんも開口一番で永原先生の着物に言及する。
「うん、３２０年位前のよ」
「ヒエー！　そんなに前の!?」
　やっぱり二人共驚く。
「ええそうよ。当時の殿様……高家旗本の方にもらったのよ」

「へえー？　誰なんだ？」
「吉良上野介殿よ、とても温厚で優しい方だったわ」
「へえ、そうなんだ？　その吉良何とかってのは知らないけど、すごそうな着物だってのはわかった」
「ていうか、江戸時代の殿様のくれた着物だろ？　売ったら数百万とかになるかもよ？」
「ダメよ！　これは吉良殿にもらった大切な着物よ。お金では買えないわ」
　永原先生、この着物がよほど大事らしい。まあ確かに思い出の品でもあるだろうし、そう簡単に売れるものじゃない。
「でもよ、美術館とか……」
「うーん、それもダメね。私も吉良殿との思い出は残しておきたいから」
「左様でござるか……」
　浩介くんが何故か侍の言葉になっている。
「おーい戻ったぞ、お、篠原に高月も来てたか」
　恵美ちゃんが戻ってくる。今度はちゃんと左右正しい着方になっていた。
　その後、海の時にも居た男子が二人、その二人も永原先生の着物について話す。
　というか、通行人も永原先生の着物について話している。夏祭りと言うにはちょっと過剰な気もする。まあ、集合する時に目立つからいいかもしれない。

「ごめんー待ちましたか!?」
「あれ？　龍香ちゃんじゃない、どうしたの？」
　続いてやってきたのはさくらちゃんに龍香ちゃんだ。
「私が呼んだんです……」
　さくらちゃんがいる。
「いやーさすがにちょっと顔を出そうかなと思ってー」
「でも彼氏とか大丈夫なの龍香？」

桂子ちゃんが龍香ちゃんに言う。
「あーうん、私の彼もそこまで束縛はしないですよ。それよりも先生、その着物何処で手に入れたんです？」
「あーこれ？　３２０年位前に江戸城で」
「ふぇ!?　これ、本物ですか!?」
さくらちゃんが食いつく。時代劇好きだもんねそういえば。
「ええ、そうよ江戸城で」
「うわああ、すごいですよすごいですよ！」
「おや、さくらさんが食いついてますよ」
「珍しいなあ……どうしてだ？」
男子が不思議そうな顔をする。
「さくらちゃん、時代劇が好きなのよ」
「へえ、あの志賀がねえ……珍しい……」
さくらちゃんが傘を指差す、さすがにこれは新しいものだ。
「で、この着物江戸城でもらったっていいますけど、誰にもらったんですか？」
「ええ、吉良上野介殿よ」
永原先生がまた吉良殿にもらったと話す。
するとさくらちゃんの顔が凍りついた。
「え、えええ!?　これ吉良の着物なんですか!?」
「ええそうよ」
驚愕するさくらちゃんに対して、永原先生は涼しい顔で答える。
「永原先生、吉良がどういう人なのか知ってるんですか!?　あの忠臣蔵の――」
「志賀さん、忠臣蔵何てひどい話のことは忘れなさい！」
永原先生が少し語気を強める。何だろう、永原先生があの時見せた「真田幸村」に対する怒りと同じ感情を感じる。
「いやでも、ほら、刀傷事件に及ぶまでにさんざん嫌がらせしてたって――」
「上野介殿はそんな御方じゃありません!!!　あれはキチガイの浅野長矩が全部悪いのよ!!!」

ま、まずい……本気で怒っている。
「あ、あの……永原先生……？　でも四十七士は……」
永原先生の気圧に、恐る恐る答える。
「あのねえ!!　あんな奴らをそんな名前で呼ぶんじゃないよ!!」
「ひっ……ごめんなさいごめんなさい……」
さくらちゃんの言葉は、永原先生の逆鱗に触れてしまうだけだった。周囲も何事かと振り返っている。
「ちょ、ちょっと永原先生、言い過ぎですよ……」
あたしが慌ててなだめる。
「あら、ごめんなさい……いい志賀さん？　私は当時を江戸城で生きてるから言ってるのよ。吉良殿は何も悪い事してないわよ」
「じゃあ何で――」
「浅野長矩がありもしない怨恨を妄想したからよ！」
「そ、そうだったんですか……」
「ええ。でもその史実に沿っちゃうと浅野長矩は妄想で刀傷に及んだ狂人で、赤穂浪人は妄想で一方的に被害者にされた上野介殿に逆恨みした大馬鹿者ってことになっちゃうから、ああやって無理矢理上野介殿を悪人に仕立て上げたのよ」
「つまり、赤穂浪士を正当化するためにああなったと？」
あたしが質問する。
「……そうよ、私はね、どうしてもそれが許せないのよ。討ち入りの報を受け、その後大衆に上野介殿が悪人に仕立て上げられていって……当時を知る人がみんな死んでも……誰も私の話を聞こうともせず……私は悔しくてたまらなかったわ。昔も……今もよ……」
「でも、服をくれたってだけでしょ？」
あたしが質問する。
「あの時の私は、町娘の町人の服で江戸城を過ごしてて、みんな表向きは不老長寿の女ということで敬意は払ってくれたけど、裏で随分陰口を叩かれたものよ」
永原先生がしんみりとした様子で話す。
「上野介殿はそれを可哀想に思われて、江戸城や諸藩に対して、５代様

を通じて私に陰口を叩くのを止めよと伝えられて、私にこういう服をくださったのよ」
心なしか、少しだけ涙声になっている気がする。
「この服は、吉良上野介殿が、本当は慈悲深く、恩義に手厚い御方だと示す歴史的証拠でもあるのよ。世間が何と言おうと、私には吉良殿に受けた御恩があるのよ」
「そうだったんですか……ごめんなさい……」
さくらちゃんが頭を下げて謝る。
「いい？　時代劇は話を面白くするために色々な嘘を使うわ。例えば悪代官とかもそうよ」
「そうなんですか？」
「ええ、現実の代官は悪事どころか過労死する人も多かったくらいの職業でね。しかもちょっとでも不祥事を起こせばすぐクビになったのよ」
「大変だったんですか？」
「ええ、ブラック企業だ何だ言いますけど、当時の代官の噂を知ってる私からすれば片腹痛いわよ。もちろんいいことじゃないですけど」
「そんなに大変なのですか……」
龍香ちゃんも聞き入っている。
「ささ、私の昔話はここまでにして、そろそろお祭りに行きましょうか」
「あ、うん……」
今日は男子４人に女子は６人になった。
あたしは歩き始めるとまた下着を付けていないことが気になってしまう。
さっきまでは永原先生の話のお陰で気を紛らわせることが出来たが、やっぱりまた落ち着かない状況に追い込まれた。
「どうしたんだ石山？　なんかぎこちないぞ」
「はうぅっ……こ、浩介くん……！」
水着のときよりもずっと緊張感が高い。心臓は激しく鼓動し、呼吸が荒くなる。

「そ……その浴衣……に、似合ってるぞ」
「そ、そう……ありがとう……」
ドキドキドキドキドキドキ
また堂々巡り、ノーパンノーブラってバレたら、はしたない子って思われるかもしれない。
でも、浴衣の時はそれが普通だと知っていたら、もしかしたらちゃんと着付けを守ってるいい子って思ってくれるかも……
鳥居をくぐり、沢山の屋台が並ぶ。
少し風が吹く、浴衣の中に少しだけ風が吹きつけてくる。
その度に身体がビクンとなる。こんな風ではだけるわけ無いでしょ優子！
「石山？　どうしたんだ？　熱でもあるんじゃないか？」
「だ、大丈夫……ごめん……」
浴衣のためにノーブラノーパンになってるから落ち着かない何て言えないよなあこれじゃあ……
「それじゃあ自由時間にしますね。各自1時間半後に一旦集合とします」
「「はーい！」」
みんなが勢い良く散開していく。当然あたしと浩介くんが最後に取り残されてしまう。
ど、どうしよう……大丈夫、バレないバレない。これが普通、これが普通普通普通……これが正しいこれが正式これが正式、正式正式正式……
うう……やっぱり浩介くんが一緒だと緊張度が全然違う……
「あ、あの石山……」
「はっ！　うん、浩介くん何処回ろうか？」
「あれなんてどうだ？」
「さあさあよってらっしゃいみてらっしゃい！　幽霊の、正体見たりは枯れ尾花！　楽しい楽しいお化け屋敷、大人も子供もお兄さんもお姉さんもみんなで楽しめるお化け屋敷だよ！」

よく見ると一人のおばちゃんがマイクで独演していた。
「お化け屋敷」と書かれ、手作り感満載のお化けがたくさん飾られている。まさに「古き良き」だけど……
「お、お化け屋敷……」
「石山は苦手か？」
「そ、その……」
ど、どうしよう……お化け屋敷って言うけど、怖いというよりはびっくりさせるのが多いはず。
もしびっくりして腰とか抜けちゃっやら、すってんころりんしちゃったらどうしよう……その表紙で浩介くんに中身を見られちゃったら……
「どうした？　嫌なら止めてもいいけど――」
「う、うん大丈夫だよ！」
ってバカー！　何で本音と反対を言っちゃったのよー！
うううう……こういう変なプライド捨てられないのってやっぱりまだ「男」が残ってるせいなのかな？
もうあたしがかっこ悪くても浩介くんは怒らないのに……

「さあさあ、大人５００円、学生３００円、子供１００円だよー！」
「石山、財布あるか？」
「う、うん……」
うー墓穴をほってしまった。でも中は暗いはずだし大丈夫だよね。
「さあさ、どうですか？　お化け屋敷というは古今東西色々な妖怪を集めましたよー！」
無言で演説中のおばさんに近付く。
「お、カップル一組が来ましたよ！」
野次馬が注目している。「うわああの子かわいい」「羨ましい」と言う言葉が聞こえる。既に聞き飽きたに近い言葉だけど、それでもちょっとだけ女の子として自信が高まる。
「あの……学生二人」
「ささ、６００円ですよ！　２名様いってらっしゃい！」

カーンと鐘を鳴らしお化け屋敷の扉を開ける。
「おーよく出来てるなー！」
中は予想通り暗い。時折おどおどしい音楽も流れていて、お化け屋敷の外から聞こえるおばちゃんの声がなんとも面白い。
中は何故か学校の廊下風で、教室の近くには何故かロッカーがある。
ともあれ、浩介くんと横に少し離れて歩く。
手をゆっくり近づける。浩介くんの身体に胸を……
「うっ……」
だ、だめ……また拒絶反応が……
手を引っ込める、浩介くんは気付かない。
あたしと浩介くんがゆっくり歩く。
「なあ、石山、これ上手く出来てるよな」
「うんうんこのロッカーとか……うわあああ!!」
び、びっくりしたー、急にロッカーから手が出てきた。
浩介くんもちょっと引いている。いずれにしても浴衣はびくともしなかった。
収まって手を見てみる。
もちろん紙で作った作り物で、近くで見ると中々チープだ。
「何かこう……やっつけかんあるよなー」
「でもそれがいいんだよ」
順路に拠れば、この後教室に入ることになっている。
教室と書いてあるが、広さは小谷学園の教室の半分もない。黒板には赤いペンキを使った血文字で「呪ってやる」とか書いてある。
あたしと浩介くんが教壇に立ってみると「うらめしや～」と言う声が聞こえ、掃除用具入れから幽霊が出てくる。
ちなみに、幽霊なのでこちらは左前が正しい。頭に白い頭巾をかぶっていかにもな感じだが、顔の化粧は結構おどおどしい。
「うらめしや～」
いかにもなポーズをしてあたしと浩介くんの前で踊りを披露する。
「うおお、すごいなこれ」

「うん、顔迫力ある」
「うらめしや～ありがとう～」
「ぶっ……」
「あっはははは!!!」
突然お礼が帰ってきて二人して大笑いする。なんというか真面目なお化け屋敷かと思ったら超ハッチャケお化け屋敷だとわかったからかもしれない。
「うらめしや～この先もどうぞお気をつけて～」
「は、はい……」
「何で恨めしい幽霊がそんなこと言うんだよ」
浩介くんが思わず突っ込む。
「うらめしや～そう言うセリフだからです～」
メタなコントをしつつ、幽霊役の人が体をくねらせながら元の用具入れに戻る。
順路はこの教室から出た扉だ。
扉の近くには何故か理科室の人体模型の骸骨がある。
カラン
「わあっ！」
あたしがちょっと悲鳴を上げる。突然骸骨の顔が首からぽろりと床に落ちたのだ。
「浩介くんは大丈夫？」
「あ、ああ、ちょっと心臓に悪いなこれ」
「うん……」
よく足元を見ると糸がある。なるほどさっきの幽霊役の人の仕業か。
そう思って教室を出る。
すると何故か墓場に来た。
「な、何で教室の先が墓場なんだ？」
「浩介くん、突っ込んだら負けな気がする」
それよりも気になるのは、ひんやり感を味合わせるため、足元に微風が流れていること。

空気の流れが浴衣の中に入り込む。下半身がまた落ち着かない。見えたらどうしよう、見られたらどうしようなんて考えても仕方ないので、今はお化け屋敷に集中する。

墓場を進む、足元を見ると結構死体の描写とかかなりおどおどしい。と言うかグロい。

こっちは驚かせるというよりは、見て楽しむお化け屋敷ということになっていて、最初からお化けがむき出しで正面から堂々と現れてくる。

「結構気楽なお化け屋敷だね」

「遊園地のコースじゃなくて夏祭り用なんだなあ……」

そんなことを話した矢先だった。

「ばあああああああああああ!!!

また少し身体の反射で気分が悪くなったが、心ですぐに押し殺す。
プシューと顔が赤くなるのを感じる。最もお化け屋敷だから見えてないだろうけど。
「あーお客さん大丈夫ですかー？」
驚かせた妖怪役の人にまで心配されてしまう。
「ああ、大丈夫です。すみません」
そう言って墓場を出る。墓場を出ると、大人が一人歩けるくらいのスペースの廊下だ。
「浩介くん！　ちょっとこっち向いてくれる？」
「え!?　また？　正直痛くないけど……」
「向いてくれるかな？」
「お、おう」
浩介くんが振り向く。
ペチッ！
「もうっ！　浩介くんのえっち！」
照れ隠しのビンタ。浩介くんは全然痛そうにしない。
「分かってたけどよお……」
「そう言うときはもう一方の手で支えながら離すのがセオリーでしょ!?　もう……あんなにおもいっきり撫でるなんてぇ……！」
「は、はい……おっしゃるとおりです……」
「まあ、でも触られたのが浩介くんだから……許しちゃおっかな」
「え!?　それってどういう？」
「他の男の子だったら許さないってことよ。と、特に今日は……ね。さ、先に行こうか」
お化け屋敷だからよく分からないけど、浩介くんも顔が赤くなっているだろう。
浩介くんを先に通しながら、お化け屋敷の廊下を進む。
ここは墓場の大部分と同様、オバケたちの人形がたくさん迎えてくれる。
おそらく、作るだけ作ってボツになったのとか、去年以前で使ってたのを出しているのだろう。ご丁寧に妖怪の説明まで書いてある。

なんか西洋っぽい妖怪もいるし、明らかに妖怪というか人間の女の子に近い容姿で「少女」を名乗る妖怪まであった。そのくせ能力はめちゃくちゃ強い。「闇を操る」って何かすごそうだ。こんな可愛いなりして人間をよく食べるのか。

ともあれ、ここは恐怖を煽るというよりは、どちらかと言えば「お化け妖怪の展示コーナー」に近い感じだ。

前の方にも前回の客と思しき2人組が居て雑談をしている。

たくさんの妖怪をゆっくり見て回る。結局大半の時間はここに費やした。

ドアを開けると出口に到着。

「さあさあ、おかえりなさいませ！　色々な妖怪、楽しんでいただけたでしょうか！　さあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい――」

おばちゃんの演説を背景に、あたしと浩介くんは、お化け屋敷を出て、次の場所へ行くことにした。

# 楽しい夏祭り　浩介くんと屋台巡り

どうしよう、浩介くんにお尻触られちゃった……！　しかも浴衣越し、布一枚で……！

反射的な嫌悪感もなくなり、またお化け屋敷から出たのもあって、さっきのトラブルのことを思い出してしまう。

「どうした石山？　また落ち着きが無いぞ？」

「あ、あの浩介くん……」

なんとか会話しないと……

「うん？」

「お、お尻触った時……ど、どうだった？」

ってなんでそんなこと聞くのよ優子！

「お、おう……その、胸に負けないくらい大きかったな！」

うー、だんだんスケベがオープンになってきたような気がする……って昨日あんなことしたんだし当たり前だよね。

「そ、そう……それで、つ、次は何処に行こう？」

「とりあえず一件一件見て回ってみようぜ」

「う、うん」

屋台の多くは食事や遊びといったコーナーが多いが、中には古物商みたいなのもある。

「懐かしのおもちゃ」とあるけど確かにかなり古そうだ。

「あ、これがいいんじゃない？」

目に入ったのは「ヨーヨー釣り」の屋台、１回１００円で３回挑戦で１セット、ただし１個も釣れなくてもボーナスで１個はもらえるという触れ込みだ。ただし手でヨーヨーに触れたら１ミス扱い。うーん……

「お、嬢ちゃんやってくかい？」

座っていたおじさんが声をかけてくる。

「は、はい……」

「俺からやろうか？」

「あ、うん……頑張ってね！」

浩介くんがしゃがみつつ、お金を払うと釣り糸を渡される。
「これに引っ掛けて釣るんだぜ。いいか、引き上げられるのは3回目までだぞ」
「うわー、結構小さい穴だなあ……」
浩介くんが集中しているので、あたしも声はかけない。後ろから見ているだけだ。
「……それっ！」
浩介くんが1回目の引き上げ、しかし空振り。
「うーん……えいっ！　よしっ！」
「おおうまい！」
2回目、今度は成功、青い水ヨーヨーが釣れた。
「ふう……とっ……あ、ダメか……」
3回目は失敗、総じて景品は1個だけだ。
「お兄さん上手いねえ、1回引き上げられる人はそうそう居ないもんだよ」
「そうですか。でも1個はくれるって」
「そうしねえと大量に金注ぎ込んだ挙句キレる客とかいるからなあ。去年から始めたんだ……さすがにそれ以前でも１０００円使った人にはサービスしたけどね」
まあ、原価考えればねえ……多分3つ取られても黒字なんだろうけど。
「さ、次は嬢ちゃんの番だぜ……やるかい？」
「う、うん……」
あたしはしゃがみこんでお金を払い、釣り糸を渡される。
長いから大丈夫とわかっていても、やっぱり落ち着かない。
でもしゃがみ込むと空気の流れが上手く遮断されて、胸の方だけを気にすれば良くなった。
でもヨーヨー釣り屋台のおじさんも胸見てるし、ノーブラってバレたらどうしよう何て思ってしまう。
それが普通だから特に何も思われないと分かっているはずなのに……

ともかく水の中を見る。ヨーヨーがいくつも転がっている。
釣り堀を慎重に慎重に……
水の中に入れ針の先を凝視する。水による光の微妙な屈折が、挑戦者を惑わしてきた原因かもしれない。そう思い、ほんの少しだけ中心からずらして引き上げる。
「よしっ！」
釣り堀の中に見事にヨーヨーが挟まっていた。
「お、嬢ちゃんすごいな、一回目で引き上げた人はそうめったに居ねえぜ」
「えへへ……」
2回目と3回目も同じように引き上げて、いずれも成功し、ヨーヨーを3個もゲットした。
「ひええ、嬢ちゃんパーフェクト！　2年ぶりだぜ。この釣り、意外と難しいんだぜ！　他のヨーヨーよりも輪っかも小せえしよ」
そういえば指がこのままだと入らない。
「あー待ってな。景品はこっちの輪ゴムに変えるんだ」
よく見ると、ヨーヨーにひっついている大きな輪ゴムがある。
「水を付けると剥がれるんだ。で、こっちの小さい方は切ると」
ハサミと水を出しながら、おじさんが言う。にしても、よく見ると上手く大きい輪ゴムが水面につかないようになっている。
「水面に付いてしまったら、また付け直しだぜ」
「大変ねえ……」
「まあな。でも難易度上げるにはこうするしかねえんだぜ」
ともあれ、水ヨーヨーは浩介くんと2つずつで分けることにした。あたしが3個、浩介くんが1個なので、あたしが浩介くんに1個あげることになる。
やっぱり体力やパワーがいらない競技なら、あたしもそれなりにやっていけると確信できた。
水ヨーヨーはとりあえず左手に2つ指に引っ掛けながら持つ。
「お、次はこっちなんかどうだ？」

次にやって来たのはお面売り場。
「うーん、顔にお面かあ……」
「石山はどれも似合うんじゃないか？」
鬼とか猫とか犬とか熊とか空想実在入り混じっているけど、いずれも動物のリアル系お面だ。
「うーん、これえ？　似合うかなあ……」
「似合うと思うけどなあ……」
「うーん……可愛い系じゃないからなあ……」
新しく女の子になった自分の顔は鏡で何度も見ているから知っている。というよりも一瞬男の頃の顔を忘れていたくらいだ。
でもお面の方がよく見えるとは全く思えないのだ。
「ほら、この鬼のお面なんてさ、外した時のギャップとかにちょうどいいと思うんだよ」
「うーん……じゃあ浩介くんはどれがいい？」
「あー、俺はどれも似合わ無さそうだなあ……」
「でもあたしの鬼よりはどれも似合いそうだけどなあ……」
「うーんそうかなあ？　じゃあ他の人の評価も聞いてみようよ。とりあえず、浩介くんはこれを買ってみてよ」
「お、おう。分かった」
というわけで、ここでは鬼のお面とひょっとこのお面を買う。
顔の左側に鬼のお面を付ける。すぐにかぶることもできるけど止めておこう。
「石山、お面を被って店に入って、注文する時に外してみてよ」
「う、うん……」
とりあえず、第三者の評価が欲しい。あたしは鬼のお面をかぶると、すぐ向かいの綿菓子屋さんに行く。
そして屋台でしばらく綿菓子機の様子を見る。本当に何でこの白いのが膨らむのかよく分からない。
「すみませーん」
「へいっ」
「綿菓子一個お願いします」

あたしはお面を外して綿菓子一個を頼む。
「うおっ、こんな可愛かったのかよ。いやあびっくりだぜ」
屋台のおじさんが驚く。
「綿菓子一つくれるかしら？」
もう一度言ってからお金を払う。
「おうよ！　ちょっと待ってな！　よし、やるぞー！」
おじさんが妙にやる気になりながらわたあめを作ってくれる。
いやー、やっぱ美人って得だわ。
「はいわたあめ一個！」
「ありがとう」
ニッコリするとおじさんがほんのり照れているような気もする。
浩介くんが一瞬だけ不機嫌になる。やっぱり男の子だなあと思う。ってあたしもちょっと前までそうだったんだよなあ……
「石山、次の屋台でももう一度お面付けてみてよ」
「う、うん……」
どうやらギャップによってあたしの顔がよりかわいく見えるらしい。まあ確かにそういうのを狙うのはあるっちゃある。
さっきの感じだと、鬼のお面で少し視界が狭まれば、そちらに気が行って下着を付けてないことから気をそらすこともできる。
とは言え、わたあめを食べながらお面は付けられない。再び顔の横に付けておく。
よく見ると浩介くんがりんごあめを買っている。二人して食べ歩きの格好だ。
「ねえねえ、あの子可愛くない？」
「くー彼氏羨ましいなあー」
「本当に楽しんでるみたいだぜ」
「うううう……俺もああ言う青春があればなあ……」
「女友達でいいからほしいよなあ……」
正確にはあたしたち、まだ友達の仲なんだけど、やっぱり傍目から

見れば彼氏彼女に見える。
今のあたしと浩介くんは、傍から見れば左手に水ヨーヨーをつけつつ、顔の横にも鬼とひょっとこのお面があり、右手でわたあめとりんご飴を舐めているように見えているはずだ。
いかにも「お祭り楽しんでいます」と言う感じだろう。
「ねえ浩介くん……」
「ん？」
「やっ、やっぱりあたしたちって、恋人同士に見えるんだね！」
「ま、まあそりゃあそうだろ……」
でも手を深く繋いだりとかはしていない。あたしのせいで出来ないのだ。まあ今はお互い両手塞がってるけど。
「……な、なあ石山！」
「ん？」
「それ食べ終わったらさ、ちょ、ちょっとだけ手をつなごうよ！」
「ふえ!?」
あたしは、突然の申し出に驚く。これまでの浩介くんはどちらかと言えばあたしの「症状」に配慮していたのに。
「ほ、ほら、いきなり恋人繋ぎみたいなことをするからいけないんだよ。昨日クリーム塗ったときみたいに急にやるんじゃなくて、ちょっとずつ、さ。まずはちょっとだけ手をつなぐ」
「う、うん……」
そうだ、すぐに結果を求めすぎちゃダメだ。一歩一歩やっていくしかない。
でも、あたしがわたあめを食べ終わる頃には、既に緊張からか、別の話題をしてしまう。
「ねえ、あの射的やってみようよ」
「お、そうだな。あ、お面しとけよ」
浩介くんも乗ってくる。
夏祭りの屋台で射的をやっているので、手をつなぐ前にそちらで時間稼ぎを試みた。

「あーくそっゲーム機取れねえ！」
「こっちのお菓子！　あー外れたあ……」
　子どもたちが射的に一喜一憂している。あたしはお面を付ける。
「うーんゲーム機とかあるけど……」
「まあ無理だろうな。重りつけて直撃しても落ちないようになってる」
「だろうねえ……」
　最近じゃ上手い人が根こそぎ取ったりとかする上に、インターネットで情報共有もあって平均レベルも上がっているからこういう商法が増えざるを得ないとか。
「浩介くん、お菓子取ってみて？」
　比較的安価なお菓子。これなら取られても元は取れるからそこまで意地悪にはなってないはずだ。
「ゲーム機はいいのか？」
「あれはいいのよ。あたしも子供じゃないから、どういう風になってるかは分かるよ」
　こういうないものねだりのワガママは、男の子から嫌われるワガママだということを知っている。
「そうかい。おじさん、一回頼む」
「あいよ、1回に付き5発だ」
　所定のお金を払う、水ヨーヨーをあたしに一旦預けていざスタート。
　思いっきり前かがみになる。ラインは決められているが、浩介くんの背でも中々行かない。
　って、お尻が強調されるよなこれ……うーん、かなり心配……
　もしさっきみたいに触られたら……って何想像してるんだよ……
　ふと浩介くんの隣にいる女性客の浴衣を見る。お尻のラインがかなり浮き出てみっともない。
　そうか、穿いているせいなのか。
「あーだめかー」
　意外と当てるのは難しい。3回連続で外している。

「よっしゃあ！」
浩介くんが４回目でようやくチョコレート菓子を一個落とす。
屋台のおじさんが浩介くんの前に置く。
５回目は別のお菓子を狙ったが外れ。うーん、やっぱり普通に買った方が安い。
「うーん買ったほうがいいよなあ……」
「まあそう言うゲームじゃないからねえ」
「石山もやってみてよ」
「えー」
正直お尻強調されるの恥ずかしい。さっき触られたばっかりだし。
「まあ固いこと言わず」
「う、うん……」
まあむしろパンツ穿いていた時のほうがみっともないから、むしろノーパンで都合がいいかもしれない。
「すいませーん」
「へい」
「１回お願いします」
あたしはお面を外しながら言う。
「うおっ」
わたあめの時と同じく、また屋台のおじさんが驚いている。
あたしは射的用の弾を５個もらう。水ヨーヨーを浩介くんに預ける。
ともあれ縦長の不安定そうなものを狙う。
あのお菓子の棒が良さそうだ。コンビニか駄菓子屋で２０円位で買えるものだけど。
あたしは重心やや下に狙いを定め、引き金を引く。
ポンッ！
「お、やった！」
浩介くんが取ったのより大分安いお菓子だけど、まあいいや。
屋台のおじさんがお菓子を置いてくれる。

「んっー！」
もう少し身体を前に移動する。
浩介くんからはどう見えてるのかな？　って考えちゃダメダメ。
２つ目、もう少し大きそうな小箱を狙う。
パンッ！
当たった。よし、何とか倒せた。
屋台のおじさんがニコニコしながらまたお菓子をくれる。
まあ、原価は安いしむしろそういうのを狙ってくれた方がありがたいのかも。
「な、なあ、い、石山……あの人形とかどうだ？」
浩介くんが左側にある人形を指差す。角度からして浩介くんの表情はわからない。
人形とかもあるが、間違いなくこの弾の威力じゃ落ちない代物。
「あーあれはちょっと無理かなあ……」
「そ、そうか……石山にお似合いだと思ったんだけど」
「いや仮に打ててもちょっと……」
実は模様替えの時に動物のお人形と一緒に寝ている何て言えない。
やっぱり、そういうのに抵抗を持ってしまうのが「男」が出る瞬間なのかもしれない。
本当は浩介くんに突っ込まれても「女の子がお人形さんと寝ちゃダメなの？」って言わなきゃいけないんだろうけど。
ともあれ、あたしは射的に戻り浩介くんが最初に取ったお菓子を狙う。
しかし、3発とも外れてしまい、取れたのは最初の2発だけだった。
あたしは貰ったお菓子を帯に半分見えるように入れる。ちなみに、わたあめで残った棒も同じだ。こちらはゴミ箱を探すか最悪持ち帰ればいいだろう。
よく見ると、浩介くんは顔を赤くしていた。やっぱりお尻のボディラインが浮き出て、さっきのことを思い出したのかも。
「こ、浩介くん……次は何処に回ろうか？」
再び鬼のお面をかぶり、言う。

「少し暑いから……これなんてどうだ？」
浩介くんは少し先に見える、うちわを並べているお店を指差す。
「ああいいねえ……金魚すくいってのもあるけど……」
あたしは金魚すくいの店を指差す。
「うーん、すぐに死んじゃうだろうしなあ……」
「そうねえ……あたしたちが取っちゃったら可愛そうよねえ……」
というわけで浩介くんの意見が通り、うちわ屋さんへ。
そういえば浩介くんはひょっとこのお面は横にかけてるだけだ。
まあ浩介くんがお面して外してもしょうがないかなあ……
「どれにしようか？」
「うーん、石山はこのピンクのがいいんじゃない？」
いかにも女の子って感じだ。
「浩介くんは？」
「俺はこれかなあ……」
浩介くんが指差したのは青いうちわだ。
「会計はあたしがするね」
「おう頼む。お面外すんだぞ」
「分かってるって」
どれも同じ値段なので、浩介くんが値段分のお金を出す。そしてあたしも、同じように財布からお金を出す。
「すみませーんこれくださーい」
お面を外す。
「お、おうっ……ちょうどだな、へへっありがとよ……！」
また屋台のおじさんが驚いている。何だろう、こうも金太郎飴だとさすがに飽きてくる。
「とりあえずこれで涼めるな」
「う、うん」
うちわで扇ぎながら涼しい風を送る。
でも風を起こしたがために、また上下半身の大事な部分が気になってしまう。

「おっ、優子さんに篠原さんじゃないですか！」
「あ、龍香ちゃん！」
　あたしたちは、神社の中心に向かうと、龍香ちゃんに声をかけられた。お面を付けてないから気付かれたのかな。
「お、河瀬じゃん。どうだそっちは？」
「夏祭り一人ですけど楽しんでますよ。ま、彼氏とは昨日散々遊びましたから」
　うん、彼氏が龍香ちゃんのお尻を思いっきり撫でてた。
「そう言えば、海だったっけ？」
「ええ、優子さんたちも見かけましたよ。それにしても優子さん大胆ですねえ……」
「あ、あのそれは……」
　あたしは顔が赤くなる。
「まったく、あんなの私だって恥ずかしいくらいですよ」
「うーやっぱ見られてたのかあ……」
　浩介くんも恥ずかしそうな表情をする。
「そりゃあバッチリたくさん見られてましたよ。野次馬も居ましたし」
　ですよねー
「ま、まあクリーム塗るだけだし……！」
「強がらないでくださいよ優子さん」
「あうう……」
「河瀬……ど、どこからどこまで見てたんだ？」
「うーん始まりはあんまり覚えてないですけど、塗り終わって篠原さん、トイレ駆け込んでましたよね。そこまでは見てましたよ。野次馬もそこでみんな居なくなりました」
　ということは、一人で泣いていたのは気にもとめられなかったのか。
「と、ところで他の奴らはどうしたんだ？」
　浩介くんが話題を変えてくれる。
「あー桂子さんなら先生と回ってますよ。もうじき神社の中心で盆踊

りもあるみたいですから、そこで一旦集合できるんじゃないですか？」
「よし、じゃあとりあえず盆踊りの場所へ行こう。河瀬も石山もそれでいいか？」
「「うんっ」」
というわけで、あたしたちは盆踊り会場に向かうことにした。

## 楽しい夏祭り　みんなで盆踊り

「あ、そうだ。石山……」
盆踊りに行く途中、浩介くんが話しかけてきた。
「どうしたの？」
「手、繋ごうぜ」
「あ、うん……」
「おお、それでこそカップルですよ、うん」
龍香ちゃんの煽りを無視して、浩介くんが手を近付けてくる。
あたしもちょっとだけびくっとなる。
みんなが見ている前で手をつなぐ。どう見てもカップルがすること。
意を決してあたしは右手を浩介くんの左手に合わせ握る。近くに龍香ちゃんがいることは気にならなかった。
浩介くんが握り返してくる。一瞬だけドキッとしたが、特に何もない。
大丈夫、怖くない。あたしは女の子……あたしは女の子……
……どうやら手をつなぐことは上手く行ったみたい。ちょっとだけ取った水ヨーヨーの輪ゴムが気になるくらいかな？
「さ、盆踊りはこっちだな」
「ええ」
徐々に盆踊り会場が近付くにつれ、人だかりも多くなる。やはり早めに来てよかった。
「あ、優子ちゃんと篠原くんに龍香ちゃん！」
盆踊り広場の端の方に行くと、桂子ちゃんと永原先生を見た。やはり永原先生の着物は良い目印になる。
「桂子ちゃん、いたんだ」
「うん、ところで、二人とも手繋いでるね」
「う、うん……手は平気みたい」
「そう、よかったね。優子ちゃん、慌てないで一つ一つ次のステップに進めばいいのよ」

桂子ちゃんが励ましてくれる。
「うん、ありがとう桂子ちゃん」
「な、なあそろそろ離さないか？」
「あ、うんそうだね」
ともあれ手を繋ぐことが出来たのは大きな一歩だ。こうすれば次は腕を絡めたり出来るし、最終的にはキスやその先まで……ってダメダメ、一気に結果残そうとしてもうまくいかないでしょ優子！
あたしは自分に言い聞かせつつ手を離す。連絡先も交換したし夏休みの残りの時間……デ、デートに誘おうかな……
ま、まあいいや。ともあれ今は盆踊りを楽しもう。あんまり激しく動くのはまずいけど。

「ああこれ、私のおじいちゃんから貰ったものです。２０年位前かしら」
「へえーすごいんですねえ……」
一方で、永原先生の方は知らないおじさんと着物について話している。
おじさん、その着物、そう言うレベルじゃないぞ。下手したら重要文化財ものだぞ。
……と言いたいが、まあ本当のことを言っても信じてもらえ無さそうなので、体のいい嘘をつく。まさに嘘も方便だ。
おじさんたちの会話につれ、永原先生の着物に着目する祭りの参加者が多い。
何だろう、この祭りの主役は永原先生な気がする。ちなみに、永原先生と桂子ちゃんもお面を買っていた。
「桂子ちゃんと永原先生も盆踊りに？」
「うん、ちょっと見てみようかなあって。それにしても優子ちゃんいかにも夏祭りって感じだね」
「うん、自分でもそう思うかな」
そう言うとあたしは鬼のお面をかぶる。
「おお似合ってるねえ……外した時のギャップが大きいよー」

「うんうん、私もそう思いますよ」
桂子ちゃんと龍香ちゃんまで、浩介くんと同じことを言う。でもまだ何か納得がいかない。
……浩介くんも男の子だし、これは「男が出た」というよりは優子個人としての感性のズレだろう。
とにかくお面を付けたままにさせられた。
「そうだ、篠原さんもそのお面被ってみてくださいよ！」
龍香ちゃんが言う。
「あ、そういえば被ってなかったな……よしっ！」
浩介くんがひょっとこのお面をかぶる。
「おお、風流だねえー」
「うんうん、夏祭り感が増してますよ！」
あたしに負けず劣らずの好評ぶりだ。
盆踊りの時間が近付く。
「お、先生ここにいたのか！」
恵美ちゃんが近付く。
恵美ちゃんは鬼のお面をかぶったあたしに一瞬怪訝そうな表情を見せるが、胸元をちら見するとすぐに気付く。
「およ、この鬼のお面……もしかして優子か？」
「正解！」
そう言ってお面を外す。
「うおっ、お面の下は美少女とな。いいぜ、あたいそう言うの好きだぜ」
「屋台のおじさんたちもそうだけど……何かもう反応が金太郎飴だよみんな」
あたしも、こうも同じ反応ばかりでやや呆れた感じに言う。
「それだけ優子がかわいいってこった。だろ？　篠原」
「お、おう……」
急に振られた浩介くんが動揺しながらも答える。
その表情はひょっとこに隠れていてよく分からない。
「おお、当てずっぽうだったけど、やっぱこのひょっとこは篠原か！」

「うん。そうだぞ田村」
お面のまま話しているのは中々にシュール。微妙に声の響きも違うし。
「まあ、そりゃあ優子ちゃんと一緒にいる男子と言ったら彼しか居ないもんねえ……」

話していると3人の人影が近付いてくる。
「お、小谷学園2年2組はここかな？」
「ええそうですよ高月くん」
高月くんを始め男子組が帰ってくる。あたしと浩介くん以外にも、男女で交流があまりないのはちょっとつまらない。
しばらくはこの状態で雑談を続けていたが、虎姫ちゃんとさくらちゃんも「間もなく、盆踊りを開始します」のアナウンスとともにこちらに合流。
これで、最初に集まった時の11人が一個の集団になった。
ちなみに、お面プレイは永原先生を含めた全員に驚かれ、そして「ギャップがいい」と言われた。
……もう知らないのでお面は外し、横につける感じに戻す。

「ねえねえ、あの人、すごい着物よねえ……」
「うんうん、相当な年代物って感じ」
「おばあちゃんの着物とかじゃない？」
「あーそうかも」

この着物が出来るより、永原先生が生まれるときの方がずっと前の話だ。
まあ、着物も着物で十分すぎるほど古いものだけど。
「えー皆様、これより盆踊りを開始します」
マイクで司会の人が放送する。
よく見ると提灯にはスポンサーと思しき企業や個人の名前が書かれている。

中心には太鼓を持った人と、司会の人がいる。
「さあさあ、始まりますよ！」
音楽が流れ、太鼓が叩かれ、レコードから女性の演歌が聞こえ、自然発生的に男女が入り乱れて輪を作る。
「私達も行きますか？」
永原先生が言う。
「そうだな。行こうぜ！」
「おう！　石山も行こうぜ！」
浩介くんを含めて男子全員が輪に入る。浩介くんはひょっとこのお面をかぶる。
「うーんあたしはちょっと待つ」
「ん？　どうして？」
「ちょっと考えがあってね」
ちょっと面白いことを思いついたのだ。
「そうか……」
男子たちに続き、恵美ちゃんと虎姫ちゃんも盆踊りに、恵美ちゃんはさくらちゃんを引っ張っていく。
「ねえ桂子ちゃん、龍香ちゃん、永原先生……」
あたしは計画上桂子ちゃんか永原先生はあたしと行動してほしいので盆踊りに入っちゃう前に呼び止める。
「どうしたの？」
「はいはい」
「はい」
「お面って持ってる？」
「ええ、持ってるけど」
「持ってますよ」
「私も」
三人が浴衣からお面を出す。それぞれ熊のお面、馬のお面、そして鹿のお面だ。
「うん、４人で固まってこれをかぶって派手に盆踊りしようよ。めちゃくちゃにはっちゃけて」

「あら、いいわねえ……」
永原先生が真っ先に賛成する。
「なるほど、終わった時に正体を明かすってこと？」
「そうそう、あたしたち美人だからきっとみんな驚くわよ」
「ええ、特に優子ちゃんが鬼のお面っていうのがいいわね」
「よし、石山さん、木ノ本さん、河瀬さん、是非やりましょう！」
「「はいっ！」」
見ると野次馬ばかりではなく、かなりの人が踊りに参加している。輪が二重三重にもなる。お面を被っている人も何人かいる。
「よし行こう！　一番外側になるようにしてね」
「「ええ！」」
あたしの合図とともに盆踊りに入る。

「あーあーあーよっこいよっこいどっこい！」
盆踊りの曲とともにどんどん盛り上がる。あたしたちはフリーダムに踊る。
必然と野次馬たちの視線も集まる。
うまい具合に空気を読まない。でも司会者も、歌っている人も、太鼓も気にもとめないのだ。
普通に手を振り上げる所で、派手にジャンプしたり、歌舞伎の見得のポーズを取ったりする。
あたしはヨーヨーも使いパフォーマンスをする。
あたしたちは一番外側で奇抜なお面をかぶる四人組を演じ続ける。最初こそざわついた感じだったが、その後は笑いも溢れるようになった。
踊り方もバラバラなのが余計に面白おかしく、盆踊りの輪から抜けてあたしたちを見ようとする人まで出始める。
頭のネジが外れたのか、最初こそ空気がスースーする感じもあったが、あたしはすぐに忘れてしまったのだ。
そして盆踊りも終盤に入る。
「それそれそれそれ！　最後にもう一丁、そーれそれそれそれ!!!」

演歌の人も盛り上がる。
「よおー!!!」
「「よおー!!!」」
あたしが謎の掛け声をすると、他の3人も続く。
そして太鼓の叩きが終わると、野次馬から拍手が来る。
あたしたちは注目を浴びていることを確認する。
「じゃあ脱ごうか」
「ええ」
「そうですね」
「分かったわ」
あたしたちは野次馬の密度が一番濃い所に顔を向け、お面を手に掛けさっと脱ぐ。
「「うおおおおおおおお!!!!!!」」
野次馬が大歓声を上げる!!
「すげえ!!! こんなに可愛い子たちだったのかよ!!!」
「もしかして、アイドルユニットじゃね?」
「ハチャメチャで面白いアイドルグループだよねえ……」
「優子さん、私達アイドルユニットだと思われてますよ」
「あはは、もしアイドルだったら龍香ちゃん大変だよ」
「そうですねえ……全く」
「って優子ちゃんも人の事言えないわよ」
「う、うんそうだね……」
恋愛禁止は嫌だし、アイドルにはなりたくない。
野次馬の歓声も冷めやらぬ中、司会の人が降りてくる。
「いやあ、やっぱりお祭りはこういうのがいると盛り上がるんですよー」
「ああどうも、すみませんお騒がせして」
「ああいや、ほらこのポスター見てくださいよ。この盆踊りはかき乱

し歓迎なんですよ！」
「あ本当だ……」
　お祭りのポスターを見ると盆踊りについて「フリーダム盆踊り」と名付けられていた。
　直球なネーミングだが、ともあれ司会者の意図から鑑みれば、むしろ空気読めてないのは主流の輪の方だったらしい。
「それにしても、アイドルユニットとか何かです？」
「ああいえ、そういうのじゃないですよ」
　永原先生が対応する。
「でもあなた、着物も豪華ですしセンターじゃないんですか？」
「あはは、これはおじいちゃんに貰ったもので……」
　また嘘を言う。
「そうなんですか。いやそれにしても古いんじゃないですか？　明治とかそう言う時代のものですよね？」
「え？　ああいやその……明治じゃないですよ」
　確かにこの着物は江戸時代だから嘘はついてない。
「そ、そうなんですか……ともあれアイドルでは無さそうですね」
「ええ……」
「というか、結構ノリノリだったよね先生」
　確かに、この４人で一番はっちゃけていたのは永原先生だった。
「久しぶりのお祭りだもの。楽しまなきゃ……平成に入ってからお祭りなんて殆ど来てなかったもん」
「そうだったんですねえ……」
「あ、あの……サインください！」
「え？」
　あたしにサインをねだる男が出てくる。
「あの、あたしアイドルとかじゃないよ？」
「いいんですよ、むしろアイドルなんかよりずっとかわいいじゃないですか！」
「写真、写真撮らせて！」
「あ、あの私彼氏いるからそういうの困るのよ……」

龍香ちゃんが困惑する。
「ちっ彼氏持ちかよ……」
撮影者が勝手に落胆している。ほんと身勝手だ。
「ほらここにサイン……」
「いやそのサインなんて……」
「いいじゃないですか！」
桂子ちゃんがサインを迫られている。こっちもこっちで押し問答だ。

「ほらほら、散った散った！」
浩介くんが間に入る。そして他の仲間も集まってくる。
それを見て、野次馬もようやく退散してくれる。
「楽しかったね」
「おう、優子たち結構大胆だな」
「ちょっと見てましたけど……先生が一番張り切っていたような気がします……」
恵美ちゃんとさくらちゃんだ。
「そうですか……」
「ま、祭りだし楽しまんとな！　この盆踊り、フリーダムらしいし」
高月くんも言う。ともあれ、一旦合流した後、手水舎の前まで来る。
「せっかく出し神社に参拝しましょ」
「え、ええ……」
あたしは特に信仰心はないけど、まあせっかく来たし賽銭も入れてちょっと参拝しておこう。
「いい？　手水舎ではまず右手で柄杓を取って水をすくって左手を清めてから、左手に持ち替えて右手を清めるの。そしたらまた右手に持ち替えて左手に水をため手口を濯いでから、片手で元の位置に静かに戻すのよ」
「「はーい！」」
永原先生の指導にクラス全員が返事をする。まあ、近くの掲示板に同じことが書いてあるけど。

あたしはまず、左手にはめてある景品の水ヨーヨーを荷物台に置く。そろそろ邪魔になってきた。
えっと、まずは右手で持って、３分の１……
左手に持ち替えて３分の１……
それから水を……おっと、もう一度右手に持ち替えてからだな
水を飲んで口を清めてっと。
「ぺっ」
ちゃんとした場所に捨てないとな。飲んじゃダメなんだよな……
そして元に戻すっと。よしよし。
「あ、田村さんそれだめ！」
「あ、悪い悪い」
「バチが当たるわよ」
「へいへい」
また恵美ちゃんが永原先生に注意されている。
「田村さんも、優子さんに負けたくないならお行儀よくしないとダメよ」
お行儀悪いのはダメだよね、うん。
「は、はい……やっぱめんどくせえなあ……」
「恵美ちゃん、それじゃダメだよ」
「分かってるけどよお……」
ともあれ、全員が手水舎で手を清め終われば、後は賽銭箱の前に来るだけだ。
賽銭箱のある場所に向けて歩いていると、鳥居が近付いてくる。
「あ、鳥居の前で一礼するのよ」
永原先生がそう言うと、鳥居の前で一礼する。
あたしたちもそれに従う。
そして祭りの参加者で賑わう場所まで来る、賽銭箱は近いが行列ができている。
「えっと、５０円玉でいいかな？」
「賽銭額は自由よ」
そういうのでみんな思い思いの金額を財布から出している。

「参拝の仕方はみんな知っているよね。『二拝二拍手一拝』よ」
永原先生が言う頃には、参拝もあたしたちの番になった、左手の水ヨーヨーはそのままで、賽銭を入れたらまず二回礼をして、拍手を二回打ち、最後に一礼する。そして後ろの人のためにすぐに横に退く。
「お疲れ様、それじゃあもう一回自由時間にしようか。各自夕食代わりに屋台で食べ物を取ってきていいわよ。花火もあるから見たい時は気をつけてね」
「「はーい！」」
全員が返事をする、そしてあたしと浩介くんが二人っきりになれるように上手く配慮してくれる。
二人っきりになった途端、あたしはまた浴衣の下のことを思い出す。もうノーパンノーブラになって数時間が経っているはず。でも落ち着かない。
「ねえ浩介くん……」
「ん？」
「今日のあたしって何か変かな？」
「え？　どうして？」
「ほらいくらお祭りでも、さ。ネジが外れているような気がして……」
「うんそうか？　元気な石山もいいと思うぞ」
「そ、そう……ありがとう……あのね、あのーね！」
「どうした石山？」
やっぱり恥ずかしいけど、ノーパンノーブラのこと、告白しないと！
「ちょっとここじゃまずいから、こっちに来てくれる？」
「お、おう……」
あたしと浩介くんは人気のない神社の小さな森へと入っていく。
襲われるかもしれないけど、その時はその時で割り切ろう。

# 楽しい夏祭り　終わりの花火

祭りの喧騒がやや遠くに聞こえる、まるで飲食店にある背景のミュージックのようだ。
「あの……浩介くん……」
あたしはゆでダコのように熱せられた顔で、浩介くんを見る。
「うん、どうしたんだ？　こんな所に呼び出して」
「実はね……今日、浴衣でしょ？」
「うん、だからそれがどうしたんだ？」
意を決して言ってみる。
「浴衣の下って……下着つけないのよ……」
「え!?　そ、それって!?　本当だったの!?」
やっぱり驚かれてしまった。
「う、うん……母さんにそう言われて……だから……その……」
「た、確かに触った時ちょっと違和感あったけど……ま、ままま、まさか本当にノーパンなのか!?」
「う、うん……パンツ穿いたらみっともないって……」
あたしがコクっと頷くと、浩介くんが真っ赤になる。
「ど、どうして!?」
「ラインが出ちゃうのよ。あれはみんな洋服用だから……」
「つ、つまり……」
「そう、だからこれが本来の着こなし方だって分かっててもね……」
「そ、そうなのか……石山がノーブラ……石山がノーパン……」
浩介くんが動揺している。口と鼻の息がとても荒くなっている。
やっぱり、このことを伝えたら意識して興奮している。
他の男にエロい目で見られるのは、もう何とも思わないのに、浩介くんにエロい目で見られると体の芯から熱くなっていく。
「ごめんね、そわそわしてるみたいで」
「ああ、うん……石山は……悪くないんだ。でもやっぱり……んっ……そんなこと言われるとどうしても……」
浩介くんがまた興奮している。

「いいのよ。それより、さ。夕食食べて花火にしよう」
あたしが浩介くんの手をつかむ。うん、やっぱり手を繋ぐのなら大丈夫。
何かきっかけをつかめれば、多分もっと深くしても、拒絶反応は起こらないはず。
少しずつ、ラインを見極めていかないと。
あたしは手をつないでいたのを更に近づけて、肩同士が接触させてみる。
……うん、大丈夫みたい。
「石山、無理してないか？」
「うん、これは大丈夫だよ」
とりあえず、今はこれで行こう。
永原先生の故郷を巡ったときに、疲れておんぶしてもらっても比較的平気だった。
多分あれが今の限界かもしれない。慎重に見極め、少しずつできることを増やしていけば、改めて一人前の女の子として浩介くんに告白出来る。
でも手をつないで肩を密着させれば、周りからもカップル扱いしてくれるはず。
そんな中で、一部の集団からの敵視の視線がすごい。特に女の集団と単独の男だ。
女の集団はあたしに、男は浩介くんに敵視の視線を向ける。
いやあこれがまた気持ちいい。
「それで、どこで食べる？」
「うーん、とりあえず回ってから決めようよ」
あたしたちは、復習も兼ねて、屋台を回る。

「うわっ、何あれ？　可愛いからって調子に乗って……」
「そうよねえ、普段からああやって男に媚びてるんでしょ」
「ほんっと、ああいうのかっこ悪いわよね」

あたしは心の中で、「女の子が男の子に好かれようとすることの何が悪いのよこのブス」という気持ちを込めて、「あっかんべー」をする。
自分のかわいさを受け止め、自信にしていけば、よりかわいくなれることを、あたしは知っているのだ。
クラスのみんなは、あたしのそういった意識の影響からか、全体的にかわいくなっている。
恵美ちゃんでさえ女子力を意識し始めたんだし。

「なああれ、あの女の子……」
「ああ、さっきの盆踊りの……」
「くーやっぱり彼氏持ちだったのかよ！」
「そりゃそうだろうよ、あんなかわいい子がフリーなわけねえだろ」
「あーあー、現実は厳しいなあ……」

今度は男の集団。こっちは哀愁感もあってやや同情的になる。
浩介くんから奪い取ろうという感じはない。
まあ浩介くんは喧嘩したら強いけどね。って考え方がちょっと乱暴だ。
……これは昔男だった頃の名残、多分これは消えるものじゃない。
でもこれは「知識」をうまく「活用」しているんだと考えたい。
５００年近く生きてる永原先生でさえ男の頃を「知識」として活用しているんだ。

「な、なあ……なんか俺たち注目されてね？」
やっぱり浩介くんも聞いていた。
「そりゃあそうでしょ、さっき盆踊りで一際目立っちゃったし」
「あれはすごかったなあ、なんていうか、先生が一番張り切っちゃってたし」
「永原先生と言えば、ほら、あそこで写真会が開かれてるわよ」
あたしが指をさした先には永原先生が多くのカメラマンに囲まれている様子が見えた。

「これは、私の死んだおじいさんがくれた着物なの」
「へえそうなんですか、随分古そうですねー」
「いやいやこの色遣い……おじいさんじゃなくて先祖代々の着物じゃないですか？」
「え？　いやそうじゃないですよー」
何だろう、世間向けとはいえ、嘘をつき続けなきゃいけないのも辛いよなあ。
ましてや恩義のある人からもらった着物なのに、辛いだろう。
時代劇で悪く書かれているせいで言い出せないでいるのだろうか？　それとも、やっぱり永原先生の出生と同じく、言っても信じてもらえないと思っているからかもしれない。

あたしは永原先生と目が合い、軽く目礼して挨拶すると、さらに神社を進む。
「さあさあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい！　楽しい楽しいお化け屋敷だよ！」
入り口から最も近い、お化け屋敷へと戻る。中からは女性二人組と思われる叫び声が聞こえてくる。
「い、石山……それで……どうしよう？」
「うーん、焼きそばは昨日も食べたし」
「あ、お好み焼きなんてどうだ？」
「うんいいね、たこ焼きもついでに食べようよ」
「ああ」
あたしはお好み焼きとたこ焼きの屋台が隣同士で並んでいる一角を思い出す。
もう一度手をつなぐ。うん、これでいい。
「お、かき氷も近くにあるぜ」
「あ、これも食べたいわね」
海の家で食べてなかったし。
ドンッ

「わっ！」
「あ、すみません」
　通行人と身体が接触する。
「あ、あの石山……」
「どしたの浩介くん？」
「その……むむっ、胸が、あた……あたた……」
「胸？」
　あたしは視線を下す。さっきの衝撃で浩介くんの腕にあたしの胸がむにっと当たっていたのが見える。
「あわっ……ご、ごめん？」
　最後疑問形にしながら胸を離す。
「な……何で疑問形？」
「あはは……いやその……うん……だって……」
　男の子だしノーブラの胸が当たったのは嬉しいはず。というのが理由。
「ま、まあ深くは追求しないよ」
「あ、ありがとう……」
「よし！　気分を切り替えて、まずお好み焼きからにしようか。お面付けるか？」
「いや、もういいよ。さっき盆踊りで顔知られちゃっただろうし」
　屋台の人は来てないと思うけど。
「すみませーん」
「へいらっしゃい！」
「こっちで対応します」
　お好み焼きを調理中のおじさんと、レジ担当の娘と思われる女の子がいる。
「お好み焼き2つお願いします」
　女の子にお金を払い、注文する。
「よっしゃ！　もう少しでできるからちょいと待ったってな！」
　おじさんが料理しながら豪快に答える。
「じゃあ俺、その間にたこ焼き頼んでくるから」

「うんお願いね」
浩介くんが隣の屋台に行く。
「すみませんたこ焼き2パック」
「ありがとうございます」
あっちは若いお姉さん。浩介くんにも営業スマイル。
なんか心が黒くなる。それは間違いなく嫉妬の感情。他の女に浩介くんを奪われたくないという独占欲。
……ああ、あたし、こんなことで嫉妬しちゃうくらい好きになってるんだなあ。
それと同時に、女の子にも独占欲があることを思い知る。でも男の子ほどじゃないよね……男の子の独占欲の強さはよく知っているし……うーん、この感情が男の残滓なのか女心なのかちょっとわからなくなってきた。

「へいおまち」
「あ、はい！」
しかし、その考察も屋台のおじさんの作ったお好み焼き2パックでかき消されてしまった。
よく見ると隣に浩介くんがいて、たこ焼きを2パック持っている。
「よし、食べる場所探そうぜ」
「う、うん……」
かき氷は後回しにしよう。
この時間帯、盆踊り終了直後ということで、結構何処も混雑している。ベンチは全て埋まってしまっていた。
「あ、石山さん！　こっちこっち！」
よく見ると、3人がけテーブルを一人で占領していた永原先生が手を降っている。
「あ、先生」
ともあれ、ありがたく木の椅子に座らせてもらう。ノーパンでいるため、お尻がいつもよりもずっとヒンヤリとする。
「永原先生さっき集団に囲まれてましたよね？」

「ええ、この和服、やっぱり目立つみたいね」
確かに、何度見ても永原先生の着物はとても華やかだ。
「今日の主人公、完全に永原先生だねー」
「やっぱり貴重な着物を持ってきてよかったわよ。久々のお祭りだったから目立ちたくて」
「ところで、ここで食べても大丈夫かな？」
浩介くんが質問する。
「うん、私もちょうど来たところだから、三人で食べましょうか」
「はい」
あたしと浩介くんは持っていたお好み焼きとたこ焼きをテーブルに置く。
永原先生は焼肉弁当だ。
「へー焼肉弁当……」
「ええ、鉄板焼き立てなのよ……それじゃ」
「「いただきます」」
3人でいただきますして一斉に食べ始める。
「うーん、こういう雰囲気で食べるのってやっぱ格別よねえ」
「うんうん」
永原先生とあたしで言う。
「で、でもさ……」
「うん？」
「お、俺は……い……ゆ、優子ちゃんと食べるのがまたいい雰囲気だって思うぞ！」
かあああああ
浩介くんのその言葉に、顔が真っ赤になる。
「って、何言ってんだ俺。すまん、わ、忘れてくれ石山！」
あたしは顔をそらして食べ始める浩介くんの手を取る。
「ううん、絶対忘れないよ。あたしも、浩介くんと食べるのが特別だし！」
そう言えば、昨日はクラス全員で食べたし、二人っきりで食べたのって……

「……コホンッ。お熱いのはいいですけど、みんな見てますよ」
「え、え!?」
「何あれ……バカップル……」
「でもあの着物の人……なんか三角関係?」
「変な感じだねえ……」

周囲から注目を浴びてしまう。
でも何だろう、周囲から注目されてることよりも、永原先生の存在を忘れてたことよりも、浩介くんにあの言葉を言われた瞬間が一番恥ずかしかった気がする。
ともあれ、気まずい雰囲気のまま食事は再開。
「ところで、石山さん」
「うん?」
「石山さん、昨日より何処か落ち着きないわよ。何かあった?」
「ああうん、別に……」
「そう……」
正直言うと、お尻と冷たい椅子の間に、浴衣の布一枚しかないのがちょっと気になっている。
食事中もやっぱりちょっと気になる。下着のラインが出てないのはいいけど。

「ふう、ごちそうさまでした」
量が少なかった永原先生が最初に食べ終わる。
続いて浩介くん、最後にあたしだ。
「二人共、これから予定ある?」
「うーん、かき氷食べようと思って」
「いいわねえ。丁度空いてきたし食べましょうか」
かき氷の屋台は一つ、ここからまた出口側だ。
「あ、優子さん!　先生!　篠原さん!」
「あ、こんにちは龍香ちゃん」

「あら、奇遇ね」
　龍香ちゃんと桂子ちゃんが２人で行動していた。
「これからかき氷食べるのよ」
「へえー！　いいじゃない、私達も連れてってよ」
「うんいいよ」
　５人で歩く。すると高月くんを始め男子３人組が寄ってきた。
「おい篠原！　美女ばっかり連れてずるいぞ！」
　確かに盆踊りの時踊っていた美人４人組に、浩介くんがハーレムのような形になってくる。ちょっとざわついている感じ。
「あたい、ミルク味で！」
　かき氷屋の手前では、ちょうど恵美ちゃんと虎姫ちゃんがかき氷を頼んでいた。
「あら、田村さんに安曇川さん」
「お、先生、それにみんなまで！」
　意外と祭り会場って狭いんだな……これだけの人数で一斉行動していると目立つのか、あっという間に１１人に戻る。
「おう、みんなもかき氷か!?」
「う、うん……」
　あたしが代表して答える。
「よっしゃあ！　全員裏手の森で食べようぜ！　あそこなら空いてるし１１人でも大丈夫だろ！」
「賛成ー！」
「ふふっ、いいわねえ……」
　あたし以外の女子が（永原先生も含めて）盛り上がる。
「あたし、グレープ味で」
「ブルーハワイ」
「オレンジ」
「レモン」
「いちご！」
　みんなが思い思いにかき氷を注文する。屋台のおじさんが嬉しい悲鳴だ。

全員分のかき氷が出来たら、神社の裏の森に11人で入る。
裏の森には小さな山があって、殆ど人も居ない小さな穴場。山頂にはちょうど20人くらいが座りつつ横に並べるくらいの広さで、祭りの喧騒がまた遠くに聞こえる。
あたしはまた座る。森の草木とノーパンの生尻が、浴衣一つで隔てられる。ちょっと痛いかも。
「なんか独り占めって感じだね」
「えへへ、特等席特等席」
すると、パーンという音が聞こえた。見ると花火だ。
「かき氷食べましょう」
永原先生の言葉で、自然とかき氷を食べる。
みんな黙々とかき氷を食べ、時折冷たさで頭を叩きつつ、花火に没頭する。
静かな、それでいて居心地のいい時間。風流の締めにちょうどいい。
最後にあたしがかき氷を食べ終わった頃、花火も終わってしまっていた。
「さ、行きましょうか。そろそろお祭りもおしまいよ」
「ええ」
全員が立ち上がったときだった。
「あ、そうだ。先にみんな下で待っててくれる？　ちょっとだけ石山さんと話したいことあるから」
え？　何だろう……
他の9人も困惑しつつ山を降りていく。

「さて、ここにはもう二人しか居ないから、単刀直入に聞くわよ」
「う、うん……」
何のことだろう？
「石山さん、今日パンツ穿いてないでしょ」
「ええ!?　何でそれを……」
って自白しちゃったー！

「やっぱり、そんなことだろうと思ったわ。ずっとそわそわしてたもの。初めてノーブラノーパンで浴衣着ましたって感じの」
「それに、石山さんくらいの体格だと、もしパンツやブラを付けて浴衣着たらもっとラインが露骨に出るわよ」
「うん、それがみっともないって母さんに……」
「そうねえ……石山さん、『襦袢（じばん）』と『さらし』ってのを覚えておいて」
「じ……じばん？」
「そうよ、今私がこの着物の下に着てるのとかね」
　そう言うと、永原先生がちょっとだけ着物をはだけさせる。
「へーこういうのを着るのか……」
「浴衣の時はこういうのを付けるといいわよ。確かに洋服の下着は和服と相性悪くて、ラインが出てみっともないというのは正解よ」
「う、うん……」
「確かに浴衣の場合は本来外に出るものじゃないから、ノーパンっていうのも間違いではないわよ……でも私が今着てるのより短いタイプの半襦袢とかもあるから。これなら仮にはだけてもすぐ丸見えにはならないわよ」
「はーい」
「そしてもう一つが『さらし』ね。これは今も私は巻いているけど、白い木綿を胸に巻いて、胸を潰すのよ」
「そ、そうなんですか……」
　正直自分の胸を小さく見せるのはどうしても抵抗感がある。
「石山さんは抵抗あるかもしれないけど、これも和服の着付けの時、胸が大きい人には重要な事だから覚えてね」
「は、はい……」
　とにかく今は納得するしかない。
「そんな所かな。じゃあみんなも待ってるし下に行きましょうか」
　花火はお祭りの「トリ」にあたる行事で、屋台はみんな撤収ムードになっている。
「ごめーん待ったかな？」

「ううん全然、何話してたの？」
「ああうん、石山さんの今日の着付けについてちょっと……ねえ」
浩介くんと桂子ちゃんを除き、みんなキョトンとしている。祭りも終わりのため、誰も深くは追求しなかった。
神社の境内を歩き、最初の集合地点に戻る。
「それじゃあここで解散、明日から夏休みを楽しんでね。ただし宿題は忘れないように！」
「「はい！」」
全員で返事をし解散する。
と言っても駅までは一緒で、駅であたしと桂子ちゃん以外は全員電車に乗り込む。
「ふう、終わっちゃったね桂子ちゃん」
「ふふっ、優子ちゃんノーパン作戦大成功だね」
「ふえ⁉　やっぱりあの時の笑い声って……」
この前の水着と浴衣を買ったときを思い出す。
「ええ、襦袢のことは私も知ってたわよ。でも浩介くんに近付くためにはあえてノーパン勝負がいいと思ってね」
「もー桂子ちゃんったら！」
これは一杯食わされてしまった。でも、それで浩介くんとの距離も縮まったし、今回は許しちゃおうかな。
桂子ちゃんと別れ、家に帰りただいまをする。
あたしは自分の部屋に戻り、浴衣をはだけさせ、生まれたままの姿になる。
浴衣を着る前につけていた下着を付けて、パジャマに着替える。
夏休みの残りの宿題、まだ少しだけ残っているので、これを機に全て片付けてしまおう。
就寝時間は意外と遅くなった。

# デートのお誘い

夏休み真っ只中の８月半ば。
夏休みの宿題も終わり、あたしは９月までにやるべきことをすべてやってしまっていた。
今年の夏休みは去年や中学時代と比べても、一番早く宿題が終わった年になった。普通なら肩の荷が下りるところだが、これが時間を潰すのが意外と大変になる。
一方で、たまにある天文部の活動は、徐々に形になってきた。
坂田部長には夏休みの過ごし方を聞かれたので、海と夏祭りを楽しんだということだけ伝えておいた。
永原先生の着物について、吉良上野介にもらったと言い、また「悪い人ではない」と言っていたというと「やはりそうなんですか……」と答えていた。
どうやら史実追求派には「吉良善人説」は結構知られていた説なのかもしれない。よく分からないけど。
ともあれ、天体の完成も近付いて来たある日のことだ。
「石山さん、このセットもう少しこっちですわ」
坂田部長の指示通りに天体を移動させる。
「よし、プロキシマｂも完成！」
「へえこれが最も近い系外惑星なんだ」
プロキシマｂ、探査計画もある惑星のミニチュアだ。恒星ともどもすごく小さい。
「そうだねえ、水があるかもしれないなんて言われているのよ」
それからミニチュアを作って思ったのは、宇宙の星というのは意外と連星系も多いということ。２つの恒星が互いに影響しあって回っているということだ。
全宇宙だとむしろ連星系の方が多いとも言われているが、遠くの星だと極めて明るい星しか見えず、明るい星ほど連星系が多いので、単独星の方が多いんじゃないかという説もあるとは桂子ちゃんの言葉。

「よし、じゃあ今日はここまでだよ優子ちゃん」
「うん」
桂子ちゃんが「今日はここまで」と言う。
後は天文ニュースを見たり、雑談をしたりしてゆっくり時間を過ごすことになっている。
「優子ちゃん最近暇なの？」
「うん、宿題全部終わっちゃったし」
「あら、それはいいことですわね」
坂田部長がねぎらってくれる。
「でも暇なのよねえ……」
「うーん……」
ブーブーブーブー
「あ、ゴメン」
携帯電話が鳴ったので見てみると「浩介くん」とある。
ともあれ読んでみよう。

題名：明日
本文：明日午後なんだけど、遊ばないか？
集合場所と時間は――

「あら、優子ちゃんデートの誘い？」
後ろから覗き込んでた桂子ちゃんが言う。メールにはデートとは書いてないけど、明らかにそれだ。
「ちょ、ちょっと桂子ちゃん!!!」
「ゴメンゴメン、でも大事だと思うよ。夏休みずっとこのままじゃお互いよくないし」
確かに浩介くんと9月まで会わないというのも寂しい。
「そうですわね。篠原さんもきっとムラムラしてますわよ」
「坂田部長まで!!!」
でもデートって言われると急速に意識が凄まじいことになる。
デート……デート……浩介くんとデート……

あたしと浩介くんは奇妙な関係だ。
もう本人も周囲も分かりきってるくらい両想いで、明らかに「友達以上恋人未満」と言う関係ではなく、客観的に見れば「恋人同士そのもの」だ。
でも、あたしと浩介くんの間では「友達以上恋人未満」どころか未だに「友達」のままになっている。
どれもこれも、あたしがまだ本能まで女の子になれてないせい。
これだけの変貌を遂げたあたしでさえ、あたしと浩介くんの関係はどこかに同性愛的な側面が残ってしまっているのだ。
「あら、石山さん、どうされましたの？　妙に考え込んで」
「ああ、その……浩介くんとの関係ですよ」
「あら？　恋人同士じゃないんですの？」
「うーん、私にもそう見えてるけど」
「実は――」
あたしは二人に恋の悩み、本能がまだ「優一」が出てしまうこと、身体を触れ合うと嫌悪感と拒絶感が出ることを話した。
「なるほどねえ……」
「一難去ってまた一難ですわね」
「でももう一つ悩みがあるのよ」
「ふむふむ」
「男として女の子を好きになったことがなくてちょっと不安なのよ」
「なるほど、優子ちゃんが知識を活かせないと」
「う、うん……」
男として好きな女の子ができたことはなかった。
桂子ちゃんは可愛いし、もしうまくいけば……なんて漫然と考えていたもののいつどのように告白すればいいかもわからなかった。
もちろん優一の頃に桂子ちゃんとデートなんてしたことはない。もしかしたら忘れているだけで幼稚園や（幼稚園の時一緒だったかは忘れたけど）小学校低学年くらいの時にしたかもしれないけど、いずれにしても男として女の子と恋愛するという経験はゼロに等しい。
そんな中で、女の子として、女の子の気持ちで、好きな男の子と恋

愛する。実際の所本心ではどこかに怖いところがあるのかもしれない（そしてそれが反射的嫌悪につながっているとしたら重大だ）

「優子ちゃん、緊張しているの？」

「だって、女の子としてどころか、男として恋愛もしたことないし……」

「でも、篠原さんもそのメールを出すのはとても勇気がいったと思いますわ」

「うん、もちろんＯＫの返事は出すけど――」

「ふふっ、石山さんはもう上がっていいですわ。それよりも明日の服のこととかをお考えになるといいですわ」

「ええ、優子ちゃんにとっては天文部より大事なことだから、むしろ今すぐ明日のことに集中してほしいわね」

「は、はい……それじゃあ失礼します」

半ば強制的に部室を追い出される形であたしは学校を出る。

通学路を帰りながら考える。

浩介くん……男の子とデート。休日にクラスメイトと出かけたことは以前にもあった。

桂子ちゃん、龍香ちゃんと3人でゲームセンターに行き、昼食を食べて映画を見たあれだ。

そういえば、あの時プリクラ撮ったっけ？

こ、浩介くんとプリクラ…あうあう……想像しただけで顔が熱くなっちゃうよ……

でもゲームセンターはダメかなあ……女の子同士でも相当なハンデが必要だったのに、男の子の中でも強い浩介くん相手じゃどうにもならなさそうだ。

初めてのデートだしうーん……どこを回るんだろう？　浩介くんにエスコートしてもらって、予定も全部浩介くん任せにした方がいいのかなあ……

女の子の初めてのデートだし……って浩介くんもそうだよね……うーん、やっぱり後ろでゆっくりおしとやかについていこうかなあ……

駅に着く、電車に乗る。自宅の最寄り駅に帰る間も、明日のデートのことで頭がいっぱいだ。

とにかく早く家に帰って、明日の服装について考えたい。

「ただいまー」

「あら優子、どうしたの？　早いわね」

母さんが怪訝に思う。

「ああうん、その……今日は早く終わって……」

「そ、そう……」

やっぱり「浩介くんからデートに誘われたから早退するように言われた」なんて言えない。

言いふらせなくなったのは女の子になったからかな？　って男の子もそうか。

男として知らないまま女になった分野については、男なのか女なのか、それとも両方に見られることなのか分からなくなることもある。そもそもの「知識」がないから仕方ない。

深く考えない方がいいんだろうけど、もし「男」が出ちゃう行為だったらやっぱり嫌ではある。だからこうやって答えの出ない思考を続けてしまう。

ともあれ、あたしは部屋に戻り、制服からパジャマに着替える。

既に箪笥の中にある服はほぼ全て着てある。着てないのは何かのパーティーの時用とか後はパンツすれすれの超ミニスカートのようなものくらいだ。

タイトスカートも一通り穿いてみたけど、思ったよりは動きやすかったものの、やっぱり普段穿いてるスカートに比べるとフィット感がきついのであまり穿いてない。ＯＬとかになったら必要になるのかなあ……

そういえば仕事だよなあ、あたしはずっと老けないから老後って概念もないし、５００歳の永原先生が普通に働いているのを鑑みても、

年金とかそういうのもらえそうにないしなあ……

って今はそんなことどうでもいいや。それよりも浩介くんとのデートを楽しまないと。

あたしは箪笥の奥から赤い服と赤い巻きスカートを取り出した。

水着の日に着ていた水色のミニスカートワンピースと並んで、もう一つの候補になったこの服。

幼さ・少女性の強調という意味ではこれが一番いい。赤い服は可愛く、女子3人で行った時のお出かけの時とか、カリキュラムで初めて学校行った時にも着ていたもので、何気に重要な場面で着ていたあたしの勝負服の一つ。

水色ワンピースとか黒いロングワンピースなどは既に見せたものでこれ以外がいい。

そして次に考えたのが白いワンピースの膝丈下のロングスカート。これと白いリボンを組み合わせ服装と装飾を白に統一して黒髪と栄えさせる方法で、家では何度も着てきたし、男受けという意味では多分どの組み合わせよりも最強だけど、これはもっと後に温存しておきたい。

うーん普段からオシャレに気を配っていた分、デートの時に「もっとオシャレ」するためにどうすればいいのかということが思いつかない。

いつも通りでも十分かわいいから欲張らなくていいと言われてしまえばそれまでだけどうーん……

次に考えたのはセーラー服風のトップスに制服よりもやや青いミニのプリーツスカート。

うーん、いつもの制服とはちょっとアレンジした、他校の制服って感じがする。

ただパンチが効かないかなあ……女子の制服ってエロいけど、当の男子からはあまりエロさが感じられないとも言うらしいし。もちろんパンツ見えたら興奮するけど。

あ？　これがいいかも……

茶色い膝丈の広がったジャンパースカートだ。このジャンパース

カートというのが曲者だ。
というのも、上のデザインでがらりと印象が変わるからだ。
まずは黒い服で試す。うーんだめだなあ……
明るい水色で試す……ちょっと色合いがきつい……
おしゃれのコツについては、まだまだ手探りだ。最近はどうもいくつかのパターンで固定されていて、ここまで服選びに悩んだのも、もしかしたら初めてかもしれない。
そうだ、白いブラウスなんてどうだろう？ちょうど脱いだ制服と組み合わせて肩から吊る。
……うん、可愛い。リボンは制服のではなく、ちょこんと黒いリボンにしてみようかなあ……
うーんこれでぬいぐるみでも持つといいかなあ……お、よさそうよさそう。
ちょっとまってよ……露出度高い方がいいかもしれないなあ……
そう思ってさっきのプリーツのミニに胸元も空いた夏用のトップスを組み合わせる。
うおっ、これはエロい。多分浩介くんはイチコロになっちゃいそうだ。
……いや待てよ水着の時は興奮してくれたけど、デートともなると独占欲と嫉妬が全面に出かねないよなあ……
うーん、とりあえず試着してみようかな。ってそれだと母さんに明日のデートについて……うーんうーん……
一人小田原評定が続く中、決定打を見いだせない。
「優子ー！　おやついるー？」
「あ、うん持ってきてー！」
母さんの声に正気に戻る。
そうだ、母さんの意見も……って、明日のデートのこと秘密にしたばっかりじゃないの……
うーんでも、浩介くんとのデートだし、一人じゃ決められないから……
って、よく考えたら今までも母さんは女視点中心だったからアドバ

イス役に立たないこと多かったことを思い出す。
最初の服選びでも、水着選びでも、やたら露出の高いのばかり推してきたし。
そのことを思い出し、あたしは大急ぎで広げていた服を箪笥にしまう。
コンコン
「優子ー！　入るわよー！」
「はーい！」
ガチャッ
母さんがチョコレートケーキの欠片を持ってきてくれる。
「うわーチョコレートケーキじゃん、どうしたの？」
「優子が帰った時に、1週間分のおやつにしようと思って買ったのよ」
「わーい！」
あたしは上機嫌になる。
あたしは林間学校の時以来、女の子になって甘いものが大好きになっていた事に気づいた。
母さんも気付いていたそうで、優一だった頃より甘党になったとのこと。
特にチョコレート系には目がなくなってしまうのだ。
「いただきまーす！」
あたしはフォークを手に取りケーキを切り分け一口パクッ。
「うーんおいしいー！」
「ふふっ、美味しそうに食べる優子本当に可愛いわね」
「ありがとう？」
語尾がちょっと疑問気味になる。
「ところで優子、服散らかして何してたの？」
「え？」
あれ？　箪笥にしまったはずなのに……
そう思って箪笥を見ると、僅かに服が出ていた。
母さんは立ち上がり、箪笥を引く。
「普段の優子はきちんと畳んで入れるもの。明らかに大慌てで隠した

んでしょ……」
　そう言うと箪笥の中に散らかったまま入れた服を全部出す。
「なるほどねえ……優子、彼氏とデートするの？」
　　ギクッ
「あ、あの……あはははは……」
　笑ってごまかす。これじゃ「うんそうよ」と言っているようなもので……
「優子、これじゃ子供っぽいわよ」
　やっぱり参考になら無さそうだ。
「いいのよ、好きな人、同い年だし」
「そ、そう……」
「あたし、ちょっと顔が同世代より童顔だと思うのよ。それに不老だから子供っぽくするのは間違ってないと思うのよ」
「うーんそうかなあ。やっぱりお母さんは優子なら大人の魅力も出せると思うんだけどなあ……」
　母さんとおしゃれに対する見解の違いで最も顕著な部分なので、この手の押し問答は多い。
「男の子は若い女の子が好きなのよ」
「そうなのねえ……だとするとお母さんは力になれないわねえ……後でこのお皿、台所に持ってきてね」
「うん」
　そう言いながら、母さんは部屋を出て行く。
　チョコレートケーキの残りを美味しく食べる。
　部屋を出て母さんにお皿を返すと、もう一度デートの服装を考える。
　先程の茶色のジャンパースカート、これに制服のブラウスではなくボタンが胸の谷間に有る白い別のブラウスを組み合わせる。
　腰のくびれのラインが強調されているが、それ以上に胸の強調ぶりが凄まじい。
　まあ、和服や制服のように胸の強調を隠すデザインでも強調しちゃうくらい胸が大きいから、このように強調するデザインでのそれはと

にかく凄まじい。
しかしながら、下の方はスカートが膝まであってガードは固くしていて、男の子の嫉妬心にも配慮している。
うん、これなら浩介くんも喜んでくれると思う。
男受けについてはあたしも元男として「知識」はあるけど、デート特有の知識となると薄い。
龍香ちゃんにアドバイスした時は、まだ「嫉妬」だということが分かりやすかったが、いざ自分が当事者になると全然違うものだ。
浩介くんの性格にもよるけど、見た感じではそこまで異端の印象は受けなかった。
多分この服で大丈夫なはず。

服装選びが終わったので、再び暇な時間が出来る。
浩介くんとデート、男の子とデートする。
一人の女の子としてもドキドキするし、女の子になって初めてするデート、未知の世界への不安感もある。
食事をし、いつもよりも入念に歯を磨く。
お風呂では、普段行わない「二度洗い」で髪を洗った。シャンプーも、あの時買ってもらったシャンプーがようやく馴染んできた感じもある。
でも浩介くんにはシャンプーについて何も言われなかったなあ……まあ男はそんなもんか。
お風呂から出て、身体を拭き、パジャマに着替える。
パンツとブラを付けてる時に、そういえば明日の下着をどうするか考えてなかったことを思い出す。
うーん、縞パンがいいかなあ……それとも薄いピンクかなあ……水玉模様も捨てがたい……いや、これはすぐにわかった。
当然「純白」一択だ。
白は清純の象徴、男受けも極めていいし、初めてデートする女の子のパンツとしてはこれ以上ないくらいぴったりな色だ。
って、もちろん見せるわけじゃないよ、好きな男の子に見られたら

すごい恥ずかしいし。
ともあれ、明日のデートの服装は決まった。バッグも自己主張しない程度の、桂子ちゃんと龍香ちゃんとで遊んだので大丈夫だろう。
よし、明日を楽しみにしよう。

# 初めてのデート

デートの集合時間は午後の予定。そのため、昼食を食べてからの集合ということになっている。

母さんはデートということで、朝ごはんも配慮してくれた。

今日出す予定だったご飯に納豆を急遽なくし、海苔巻きにしてくれた他、宿題が終わった後夏休み中に行われていた家事手伝いもしなくていいと言われた。

といっても、今日着ていく衣装はもう決まっていて、朝ごはん食べた後着替える予定だったが、母さんからは「初めてのデートは第一印象にもなるの、清潔感はとても大切だから、念のためにもう一回お風呂に入って、それから着替えなさい」と言われた。

母さんの言ってることは確かに正論なので、素直にそれに従うことにする。

まずは今日の衣装、茶色い膝丈のジャンパースカートと、胸に小さな黒いリボンのある白いブラウス、そして純白のパンツとブラ、そしていつも付けている白いリボンを持ってお風呂の脱衣所に入る。

服を脱ぎ、洗濯かごに入れてお風呂に入る。

身体を洗いながら考える。

「初デートが第一印象になる」と言う母さんの言葉だが、それは本当なのか？

そもそも、あたしと浩介くんは、あたしの身体的な問題のために「友達同士」ということにしてもらっている関係だ。

男女の友情は成立しないという意見には賛成できないものの、少なくとも今のあたしと浩介くんの関係が友情というものではないことだけは確かだ。

でも恋人としてデートするわけでもない。友達でも、恋人でもなく、ましてや友達以上恋人未満でもない。

今のあたしと浩介くんの関係を示す単語が思い浮かばないのだ。

もしかしたら、過去に同じような状況に陥ったＴＳ病の人たちも同じような状況だったのかもしれない。

そういえば、あたしと永原先生以外のＴＳ病の人って何をしているんだろう？
そりゃあもちろん極めて珍しい病気だしそう簡単に会えないものだろうけど……
……まあ、いっか。今は自分のことを考えないと。
髪の毛をもう一度洗う、とは言えシャンプーは付けない。さすがに洗いすぎだとも思ったから、寝てる間の分を考慮するだけにしておく。
うん、清潔なのは大事だけど、女性誌には洗いすぎもダメとあったのでその知識を活かす。
よし、こんなもんだろう。
夏ということで湯船は軽く温まるにとどめ、タオルで身体を拭くと、ドライヤーで髪を乾かし、デート時の服装に視界を移す。
まず下着から。
純白の勝負パンツ。もちろんＴバックのような派手なデザインじゃない。
遊んでいると思われたらマイナスだ。あくまでも清純を貫き通さないと。
ブラジャーも真っ白だ。前かがみになり後ろに両手を移しパチンとかける。
今でもたまに脱衣所のかごに胸をぶつけることがある。この距離感のとり方はとても難しい。
今日はまず上から着る。またもや白いブラウス。胸元のボタンを開け着ると次にボタンを閉める。
よしよし、次は胸元の黒リボンだ。大きさは頭の白リボンよりちょっと小さい程度。
曲がっていないか調べて、次にジャンパースカートに手をかける。
こちらは肩に紐をかけた上でブラウスをちゃんとスカートの中に入れて……うん、ＯＫだ。
くるりと後ろに回り、後ろ姿も確認する、女の子になったばかりの頃より、ほんの少しだけ伸びた髪、そう言えば髪を切る時もロングへ

アーということで、あまり切らなかったかなあ。
母さんは「労力が減った」って言ってるし。
最後に頭につけるいつもの白リボン。あたしのデートの服はこれで完成。
「母さんー風呂から出たよー」
「はーい、あらあらかわいいわねえ……」
もう何度も言われた「かわいい」、言われた回数で一番多いのは今のところ間違いなく母さんだろう。
「かわいい」と言われ続けると本当にかわいくなるという話もある。恋をするとかわいくなるとかエッチすればかわいくなるとかそういうたぐいの亜種だ。
でも今のあたしはどうだろう？
ＴＳ病になって目が覚めた第一印象から「かわいい」だったくらいで、正直外面はあまりかわいくなったという感じはしない。
もちろん、部屋のデザインや言葉遣い、仕草といったような内面的な話なら、あたしは間違いなくかわいくなったと自信を持って言えるけど。
空いた時間、もう一度荷物を見てみる。
ナプキンとか色々あるけど、バッグを肩にかけて熊さんのぬいぐるみを持っていこうと思った。

「優子ー！　ご飯よー！」
「はーい！」
お昼ご飯のお知らせ。今日はスパゲッティだ。
「優子、これかけて」
母さんが持ってきたのは紙ナプキン。丁寧にかけてくれる。
「母さんこれ……」
「普段は使わないけど、今日はデートでしょ。服を汚したら大変じゃない」
「う、うん……」
どうも気が引けるが、まあ今日ぐらい仕方ないだろう。

フォークを取ってソースに絡め、スパゲッティを食べる。
「母さん、あたしが女の子になって、食事の負担減ったでしょ？」
何気なく振ってみる。
「ふふっ、食費は減ったけど、他の費用が増えてて、ちょっと家計簿ピンチかも」
母さんが言う。
「え？　そうなの？」
「なーんて、うそよ。女の子のための服は全部保険が下りてるし、部屋の模様替えも慰謝料でまかなえたし、むしろお金はかからなくなったわ」
そうなんだ……
「あーでも、高校卒業してからはちょっとお金かかるかもね。そのころにはまた別の服とか下着とか買わないといけないだろうし」
そうだろうなあ、諸行無常だしいつまでも同じ服は着られない。この前の夏祭りの永原先生の服なんて言うのは例外中の例外だ。いや、あれだって片手で数えられるくらいしか着てないんだっけ？
「でも今は、愛しの彼とのデートを楽しんできなさい」
「か、母さん！」
愛しの彼という言葉でまた思い浮かべる。浩介くんとデートするあたし、そこでのあたしは浩介くんにべったり触れ合ってて……ああ、やっぱりそうだよね、それが恋人だもん。
今日のデートでもう一つ触れ合えるといいかもしれない。
スパゲッティを食べ終わり、紙ナプキンを母さんに返して、歯を磨いて口をゆすぐ。
デート用の鞄を肩にかける。
「いってきまーす！」
「いってらっしゃーい優子！　鍵は閉めておくからそのまま行っちゃってー」
母さんの声を確認し、鍵を閉めずにそのまま駅へ。駅の近くになるとやはり人が増える。そしてどうしても男性の視線を感じる。
今日は中年男性よりも若い男から視線を集めているような気もし

ないでもないけど、まあ考えても仕方ないか。
あたしが好きなのは、篠原浩介くん。だから、他の男のことは今は関係ない。
電車のアナウンスとともに電車に乗り、そして集合場所になっている駅で降りて、改札口を出る。
あ、浩介くんがいる。
「おっとっと……」
慌てて隠れる。鞄を開けて、熊さんのぬいぐるみを取り出し、もう一度鞄を閉めてぬいぐるみを持ちながら登場することにする。

「あっ！」
「こんにちはー！　待ったー!?」
実は集合時間の5分前。
「あ、ああうん、だ、大丈夫……い、今来たばかりだから！」
「えへへ、よかったー」
本当はずっと前からいましたよって感じでもあるが、ここは素直に笑っておきたい。こういう些細なことからでも、相互不信に発展してそれが積もり積もって破局になったカップルも多いって女性誌に書いてあったし、これはあたしの「知識」からも同意見だ。
「な、なあ石山……その……」
石山と呼ばれる。
「あの、浩介くん！」
「え？」
「きょ、今日くらい……ちゃんと名前で呼んで！」
あたしが気持ち強く言う。
「い、いやその……」
「やだ！　今日はデートでしょ！」
ここは譲れないのでわがままに言う。
「そ、その……は、恥ずかしくて……」
「やーだー！　『優子ちゃん』って呼んでー！」
今度は幼稚園児や小学生の駄々っ子のように言う。

「うっ、わ、分かったよ優子ちゃん……」
浩介くんが小声になる。
「わーい！　ありがとう浩介くーん！」
初めて面と向かって「優子ちゃん」と呼んでもらえた。
好きな男の子に名前で呼んでもらえる嬉しさと、ドキドキ感はたまらない。すぐ慣れると思うけど、でもやっぱり初めて名前で呼んでくれたこの瞬間は格別だ。
名前で呼んでもらうための態度は計算も含めているけど、こっちは純粋に喜ぶ感じになる。まあ、男は単純だから全部天然だと思ってくれると思うけど。
って駄目駄目、そういう計算もいいけど、あんまり露骨だとバレちゃうし……あ、でも「俺のために一生懸命」って思ってくれるかも……
「な、なあ……ゆ、優子ちゃん……」
「ん？」
またドキンとする。あたしがいない場所やあるいは冷静さがなくなったときは「優子ちゃん」と呼ばれていたけど、こういう時に呼ばれたかった。
「どこに行きたい？」
「え？　浩介くん決めてなかったの？」
「ああいや、候補は決めてたんだけど……」
「けど？」
「その……どうしても一つに絞れなくて……」
「……まあいいわよ。とりあえず候補を見せてみて」
「う、うん……」
浩介くんがポケットに手を入れて紙を見せてくる。
そこには、公園、ゲームセンター、デパートでお買い物、スポーツ観戦、郷土歴史資料館とある。
「ふーん、浩介くんはどれがいいと思う？」
「決められないから5つ並んでるんだよ」
「あ、そうだったねゴメン。じゃああたしはどれにしたら喜ぶと思う

？」
「これ」
浩介くんが「デパートでお買い物」を指さす。
「うーん、お買い物って言っても、あたし実はよく分からないのよ」
「え？　そうなの？」
「ほらあたし、元々男だし……男受けしない女の趣味ってしないのよ。ネイルとかね」
「そ、そうなんだ……」
「もちろん、あたしは髪を切るつもりもないし、ましてや染めるつもりもないわよ」
黒髪のロングストレートを捨てたら、胸が大きいと言っても絶対ここまで町の人に注目されなかったと思うし。
やっぱり女の子は見られて自信がついて、かわいくなるというのは本当だ。
「うん、優子ちゃんはそれでいいと思う」
髪染めたらこのリボンも似合わないだろうし。
「逆に聞くけど浩介くんは何か買い物で買いたいものとかないの？」
「うーん、俺は特にかなあ……」
「プラモデルとか模型とか鉄道とかそういう男性に多そうな趣味とかは？」
「うーん、なかったなあ……ジムで鍛えるのは好きだけど、優子ちゃんは連れていきたくないし」
「そ、そう……」
あたしが筋肉ムキムキになっても失望されるだけだろうし、何よりあたしに強さは求められてないもの。
「じゃあさ、このスポーツ観戦っていうのは？」
「あ、うん……実は今日草野球の大会があって……」
「ああ、あそこの野球場なの」
「そそっそこそこ」
ここから少し先にある公園に併設された野球場だ。「郷土歴史資料館」はそこから更に遠くになる。

「じゃあさ、今日はベタに公園にしようよ。初めてのデートでしょ」
「う、うん……どこの公園にしようか？」
「ここから一番近くて広いのが――」
あたしと浩介くんで行く場所を決める。野球場とほぼ同じ場所だ。

「でもよ、公園で何する？」
浩介くんが歩きながら話しかけてくる。
「うーん行ってから決めようよ。それよりも、今日のデートのあたし、どうかな？」
「え、その？　いつもより女の子女の子してるなって思った」
女の子らしいと褒めてくれる浩介くん。
でもその根拠が知りたいかなあ。
「ふーん、どんなところがいつもと違う？」
「そ、そのくまさんのぬいぐるみ抱えてるところとか」
「ああ、これね。お気に入りのぬいぐるみなんだー」
「ええ!?　優子ちゃんぬいぐるみ持ってるの!?」
浩介くんが驚いている。
「そうだよ、女の子がぬいぐるみ好きなのって変かな？」
「ああいや……うん、全然変じゃないぞ。女の子だもんな！　普通だようん……」
やっぱり浩介くんの中でも、優一の面影が残っている。そりゃそうだよな、3カ月しか経っていないもの。
それまではあたしは石山優一と名乗っていて、浩介くんにひどく怒鳴り散らしていたっけ？
もしあの時の自分に、「これからＴＳ病になって浩介くんと両想いになる」なんて言ったらどんな顔をするだろう？
いやそれ以前に、「あたしのこの姿がＴＳ病になった石山優子」と伝えるだけでも信じてもらえそうにはないと思う。
でも、もしかしたらあの時の優一も自分のことが嫌いだったから「将来こんな風に生まれ変われる」って聞くと嬉しく思うかも。
「浩介くんはこのぬいぐるみはどうかな？　男の子にはちょっと難し

いかな？」
「ぬ、ぬいぐるみ単体というよりもその……」
「うん」
「ゆゆ、優子ちゃんが持ってるからぬいぐるみも可愛くなると思うんだ！」
「あうう……もう、浩介くんずるいよお……」
顔が真っ赤になり、お互い顔をそらしてしまう。どこからか「初々しい」という声が聞こえてくる。
うん、当たり。今日が初デートだし。
そう言えば手をつないでいないことに気付く。両手がお人形さんでふさがっているからしょうがないのかなあ……
公園は駅から少し外れた、住宅街の中にある。
広さは都市公園としては結構広めで、隣には例の野球場もある。
今日も地元住民以外にも様々な人が遊んでいて、営業マンと思しきスーツのおじさんもベンチで休んでいた。
公園で小学生と思しき子供たちがサッカーしている。
あたしと浩介くんはベンチに座り、それをじっと見ている。
「元気だなあ……」
「そうだねえ……」
女の子の一人がスカートのまま遊んでいて、ついそっちに視界が行ってしまう。
あ、ダメダメ。それじゃいつまでたっても「男」から抜け出せない。
いや待てよ……こういうのって女の子でも気になるのかもしれないから別に矯正しなくてもいいのかもしれない。
いやでも……うーん、うーん……
「どうしたんだ優子ちゃん、何か考えごとか？」
「ああいや、うん……何でもない」
まあ気にしてもしょうがないか。あ、ちなみにパンツはあたしと同じく白でした。
「浩介くんはこんな風に遊んだの？」
「覚えてないや、優子ちゃんは？」

「うーん、小学校の頃は普通の男の子だったかなあ……」
「え、そうだったの？」
ちょっと浩介くんが驚いている。
無理もないか。桂子ちゃん以外乱暴に育つより前の優一を知らないんだし。
「う、うん……小学校の、特に前半はあんまり記憶もないんだけどね」
「じゃあいつから……あっごめん、思い出したくないなら……」
「あ、うんいいよ。浩介くんだもん。やっぱりあたしの過去から目を背けるばかりじゃだめだよね」
「あ、ああ……」
「話すよ。あたしの過去のこと」
浩介くんもちょっとうつむきがちになっている。
浩介くんにもトラウマがある。あたしをいじめていた時のことだ。
でも、とっくにそれは乗り越えた。だからあたしも、高校に入る前の「優一」について話さないといけない。
「それでね、あたしが乱暴になったのは中学入ってからで――」
あたしは公園のベンチで、優一時代の嫌な思い出について話す。
思い出すのは辛かったけど、浩介くんも被害者の一人だ。
やっぱり中学時代の経緯についてもちゃんと知らないといけない。風化しちゃいけないことだから。
授業中話し声がうるさい生徒に怒鳴り散らしたことについては、桂子ちゃんが「内心ありがたいと思っていた人もいた」ということも付け加えておく。
高校入学後も、浩介くんの知らない悪行の中で、いくつか印象に残っている辛い記憶を話しておく。
「――ということなのよ……こうしてあたしは、両親からの名前だった『優一』を裏切り続けたのよ」
「優子ちゃんは、今は『優一』についてどう思ってるの？」
「何とかして消したい存在よ。完全に消せないけど、それでも……ひどい記憶ばかりだから」

「ふーんそうなんだ……でもさ、俺思ったんだよね」
「え？」
「優子ちゃんはさ、やっぱり優一でもあるんだって」

# 優一と優子

「優子ちゃんはさ、やっぱり優一でもあるんだって」
浩介くんの意外な言葉、あたしは固まってしまう。今まで何度も何度も、「優一」を捨てていくために頑張ってきたのに。
あたしはショックの色も隠せない。今までの努力は、実を結ばなかったのかもしれない。
「あ、あの……浩介くん……あたし……」
「ああいや、女の子になる前の性格がじゃないよ」
浩介くんがちょっと慌て気味に訂正する。
「じゃあどういう？」
「名前だよ名前」
「え!?　名前？」
あたしが聞き返す。
「『優一』に込められた意味だよ」
「あっ！」
言われて気付く。両親があたしに込めた優一の意味。
「一番優しい」人になってほしいという意味を込めての「優一」の名前。
「一番優しい子に育ってほしいから優一なんだろ？　優子ちゃんは……もう俺の中では、十分に『優一』だよ」
「だ、だけどやっぱり……」
でもやっぱり、優一という言葉にはトラウマがある。もちろん女の子になったばかりの頃に、高月くんや浩介くんにそう呼ばれたことも含まれているかもしれない。
「……もう一度言うぞ。優子ちゃんの親は一番優しい子に育って欲しくてそう名付けたんだろ？」
「うん」
「だったら、俺は今の優子ちゃんこそ『優一』にふさわしいんと思うんだ。優子ちゃんは『優一』を消したんじゃない、取り戻したんだよ」
「……」

「優子ちゃんは汚れた『優一』を捨てたんじゃない。きれいにして『優一』を元に戻したんだ」
浩介くんは取り戻したと言った。つまり、あたしは「一番優しい子」ということ。
「でもあたし、本当に『一番優しい子』なの？」
「その……な。俺が一番優しいって言ったら、もうそれでいいだろ？」
「あ、うん……」
また二人して赤くなる。ベタな台詞だけど、やっぱり面と向かって言われると、胸がドキドキしてすごく恥ずかしい。しばらく沈黙が流れてしまう。
そんなこともつゆ知らず、子どもたちは相変わらずサッカーで遊んでいる。
するとボールがこっちへ転がってきた。あたしはボールを手に取る。

「すみませーん」
「はーい！」
あたしは軽く投げ返す。子供が元気な声で「ありがとうございました！」と言う。自然と笑顔が溢れる。
そして、子供たちも何事もなかったかのようにサッカーを再開する。
「……今の、昔の優一だったら、機嫌が悪ければ怒ってたんじゃないか？」
「あはは……さすがに子供にはこんなことはしなかったよ……」
実際、優一の頃も、女子には手を出さなかった。まあ、単に女子は男子よりも怒れる隙が無かっただけかもしれないけれど。
「でもさ、ちゃんと子供の足元に優しく投げてたじゃん」
「あ、あれはほら……女の子になってあたしの力が弱くなったからで……んむぐっ……」
浩介くんが口をふさいでくる。
「だから言っただろ、俺が一番優しいって思ってるんだから……少な

くとも『優一』の名前にふさわしいって思う人が一人いるんだからさ」
浩介くんが優しく言って手を離す。
ちょっとだけ乱暴な仕草。でも、既にメロメロになっているあたしは、ちょっと強引にされたことでまた心臓の鼓動が増す。
「はぁ……うん、分かったよ……」
「俺一人がそう思っていればいい」何てカッコイイセリフを言われちゃったら、もう反論する気概もない。浩介くん、やっぱりちょっとずるい。
「……田村には二度と呼ぶなって言われてるけど、やっぱり言わずにはいられないよ。おかえり、『優一』」
「ううっ……」
その名前で呼ばれたの、何ヶ月ぶりだろう。
あたしは、必死になってなかったことにしようとしたその名前を呼ばれた瞬間に涙が溢れてきた。
浩介くんが優しく「優一」と呼ぶ。そこにかつての悪意はまったくない。
まるで、ずっと居なかった人の帰りを待ちわびるかのように「おかえり」と付けて。
「あたし……あたし……うっ……」
「もう、優子ちゃんは泣き虫だなあ本当に」
また泣いてしまう。でも、浩介くんは優しく頭を撫でてくる。もうダメ、心を奪われちゃう。
あたしは、「優一」を消すことに躍起になっていた。でもそれは、かつて「優一を裏切っていた自分」を消そうとしただけだった。
それは「優一」を消すのではなく、「優一」を取り戻すこと。浩介くんが教えてくれた。
「優子ちゃんだって優しい子に……ずっと優しい子になりたいんだろ？　だったら、俺にとって『一番優しい子』は優子ちゃんだよ」
あたしが泣き止むと、浩介くんが話を続けてくれる。
「……ありがとう、浩介くん……」

「優子ちゃんは2つの名前を手に入れたんだ。少なくとも、俺の中ではね」
「うん……うん……」
嬉し泣きもやがて笑顔に変わる。泣き顔がすぐに笑顔になったのは、女の子になって初めてのことだった。
今までは、ともすれば「優一」という言葉そのものがトラウマでもあった。
あたしはカリキュラムでも、「優一」としての軌跡を消し、そして「優子」で埋める作業をしていた。それは確かにあの時は有効な方法だった。
でも、浩介くんは、「優一」の名前は「優子」になってから手に入れたものだって言ってくれた。
「だからね、優子ちゃんには『優一』も大事にしてほしいと思うんだ」
「うん……うん……」
笑顔で答える。
「それは過去の自分を大事にするってことじゃないよ。優子ちゃんのお父さんとお母さんの願いを大事にしてほしいってことだよ」
「ありがとう……あたし、過去を捨てたいあまり大事な物まで捨てそうになっちゃった……」
今までは、過去の全てを捨てることこそ、あたしの中では最重要課題であった。
乱暴な男だったことを消すには、女の子らしくなっていくべきだと信じていた。
そうやって、感性や本能から過去を追い出し「知識」の中に押し込めてしまい続けた。それは多分、間違いではない。
でも、過去の全てが間違いではなかった。そう言えば体育の先生もちょっと「優一」に名残惜しさを感じていたっけ？
それは例外としても、あたしは、「優一」という名前に込められたことさえ「知識」の中に葬り去ってしまいそうになっていた。
「だからね、さっきの優子ちゃんの話を聞いて『優一』も大事にして欲しいって思ったんだ。もう一回言うよ。優一には、『一番優しく』なっ

て欲しいから」
「うん……うん……」
「もう大丈夫だね。『優一』の名前にトラウマはなくなったかな？」
「……うん、ありがとう」
「でね、優一――」
「あ！　待って浩介くん。やっぱり今後も『優一』はちょっと勘弁かな。心の中に秘めておくだけにしておいて、普段はちゃんと『優子ちゃん』って呼んでほしいな」
「え!?」
　浩介くんが驚く。
「だって……この体で『優一』なんて呼ばれたら変じゃない」
「そ、そうだったね……あ、あはは……」
　あたしはもう女の子の体になっちゃってるから、「優一」と呼ばれるのはやっぱり変だ。
「ふふっ」
　自然と笑みが溢れる。小川のせせらぎのような時間。
「……浩介くん、本当にありがとう。浩介くんのおかげで、ちょっとだけ『優一』に対するトラウマが拭えたよ」
「いいって、俺は思ったことをそのまま口に出しただけだ。もしかしたら、嫌われるんじゃないかって、ちょっとだけ不安だった」
「そう……でも良かったわね」
　浩介くんだって、言うのは怖かったはず。でも勇気を出して、言ってくれた。
　優しく、大きく、強く、勇敢な浩介くん。もう、誰にも渡したくない。

　あたしたちはまた、子どもたちのサッカーを見る。後から来た子供が砂場で遊んでいた。
　何気ない時間が流れる公園でのごく普通の一時、子供たちの遊び場であり、多くの人の安らぎの場にもなっている。
「なあ、せっかく公園に着たんだし、優子ちゃんも遊具で遊ばないか

？」
「うん、懐かしいわね……でもこの服じゃねえ……」
ここには、今では珍しくなった公園の遊具が立ち並んでいる。
たまには童心に帰って浩介くんと遊ぶのもいいと思う。
でも、滑り台とか滑りたいけど下から覗かれてパンツ丸見えになりそうだし、ブランコだって立っても座ってもスカートめくれちゃいそうだからやめておく。
「大丈夫じゃない？」
スカートは膝丈で長いと言っても、やっぱり公園の遊具で激しく動き回ったら見えちゃうと思う。
「浩介くんだけならまだいいけど、他の人もいるから……」
本当は浩介くんに見られるのが一番恥ずかしいけど。
「あ、ああ……」
浩介くんもちょっと残念そう。公園だと分かっていたならズボンでもいいけど、やっぱり個人的にスカートよりかわいくないし、トイレがちょっと面倒なのよねえ。
それに浩介くんスカートダメっていうほど嫉妬深くないみたいだし。あんまり露出高いのはやめたほうがいいけどやっぱりデートはスカート中心で行きたい。
うーん、今後デートでズボン穿くとして、遊園地とかで動き回るときはズボンかな……後は風の強い日とかかな？
今日は初デートで行き先も不明だったので、おしゃれと少女性のアピールのための服装にしてきた。
ぬいぐるみも持っているし、公園みたいに動きやすい恰好ではない。
「うーん、ズボン穿いて来ればよかった？」
「ああいやそんなことないぞ」
何か浩介くんがまた照れている。
「むしろスカートのまま動き回ってほしかった……」
小声で小さくそんなことを言う。もちろんちゃんと聞こえている。
「ん？　どうしたの？　何か言った？」

「ああいや、何でもない何でもない！」
明らかに動揺している。あたしは浩介くんの耳元で囁こうとする。
……んっ!!!
ああ、またよからぬことを考えていたのか、本能的な拒絶反応が出てしまう。
「ど、どうしたんだ？」
「ああうん……ごめん……」
本当は「浩介くん、パンツ見たいんでしょ？　恥ずかしいなあ」と囁きたかった。
「また拒絶反応か？」
「う、うん……」
「……そうか。焦るなよ」
「分かってる。ありがとう……」
また浩介くんに気を遣わせてしまった。
浩介くんの理解があるとは言っても、やっぱり罪悪感が襲ってくる。生き急がないでと言われても、とにかく早く退治しないといけない。どうしてもそう思ってしまう。
「ところで、何て言おうとしたの？」
「……いやね、浩介くんってえっちだなって。あたしのパンツ見たいんでしょ？」
「うっ……!!!　ご、ごめん……その……」
浩介くんが顔を赤くして謝ってくる。
「いいのよ、あたしも男だったから、気持ちはわかるわよ」
パンチラは男のロマンだもんね。林間学校の時も水玉パンツを凝視されちゃったし。
「あ、ありがとう……」
気持ちが分かっちゃうからこその苦悩というのもあるけど、そのことは話さないでおこう。
「ううん、あっ！　あのシーソーなら大丈夫だと思う」
勢いよく持ち上げられたりとかじゃなければスカートが浮いたりとかもしないだろうし。

シーソーはそれぞれ４席あって最大８人が座れる形になっている。
あたしが一番端に座る。まだ子供たちがサッカーで遊んでいるので、エロガキに覗かれないように、またパンツが汚れないようにスカートは手で揃えて座る。
片方には誰も居ないので、シーソーはあたしの方に全開で傾いている。
「浩介くーん！」
あたしが浩介くんの名前を呼ぶと、浩介くんが一番端より一つ手前に座る。
「ん？　ん???」
シーソーはゆっくり浩介くん側に傾くが、水平よりはかなりあたしが重いことになっている。
上から浩介くんが見る格好になっていて、浩介くんはあたしの胸元を凝視している。
「あれ？　もしかして優子ちゃん……」
「う、うん。あたしこれでもちょっと重いのよ」
体重は５０超だけどコンプレックスだと思ったことはない。それというのも胸の重さがかなりあるためというのと、痩せすぎも男受け悪いことを知っているからだ。女子はよくダイエットの話してるけど。
お腹の肉も程よくむちむちなので「優一」の好みからすれば合致している。
「ちょ、ちょっと優子ちゃん……」
「でも別に、重いことは気にしてないわよ。さすがに６０とか７０になったらダイエットすると思うけどね」
「そ、そうか……女子って体重気にするのかなって思って……」
「うーんどうだろう？」
「いやいや、優子ちゃん、そこは考えちゃダメでしょ！」
確かに女の子だけどまだなりたてでそこまでわからない。
「でもさ、浩介くんも別にあたしが重くてもそんなに気にしないでしょ？」

「ま、まあそりゃあねえ……」
「むしろ痩せてるよりちょっとだけお腹出てた方が健康的に見えない？」
「うっ……そ、それは……」
浩介くんが言葉に詰まる。
「ふふっ、どうなの？」
「ど、どんな体型でも、優子ちゃんは優子ちゃんだぞ！」
「ふーん、そうなんだ……」
浩介くんがシーソーから立ち上がる。急に落ちないようにゆっくり慎重に降りてくれる。
それに続いてあたしも降りる。
「浩介くん、嘘つきだね」
「え!?　どうして――」
「だって、さっきからずーっとあたしの胸元見てたよ」
女の子になって、男性の視線には本当によく分かるようになった。
デート中もシーソーの時も、浩介くんの視線はいつも顔より下、ぬいぐるみを抱いても隠しきれない大きな胸に固定されていた。
「うぐっ……」
「図星？　うんいいよ。だってこれは、客観的に見てもあたしの魅力の一つだもん」
「い、嫌じゃないのか？」
浩介くんが不安そうな顔で聞く。
「うーん別に。女の子になったばかりとかは結構そう言う風に感じたこともあったけど、それもどちらかと言えば、あたしが胸を見る男の気持ちを分かっちゃうことへの自己嫌悪が大半だったし」
それに浩介くんは好きな男の子だし。
「それって知識？」
「うん知識」
「……でも、それってやっぱり優子ちゃんの『男』としての個性だと俺は思うよ」
うーんこれは異議ありかな。

「そうかなあ……女の子でも知識は蓄えられるよ」
　実際知識豊富な女性は計算高く、男を騙す能力に長けているし。
「いやほら、分かっていても納得出来ないことってあるじゃない。俺が最初に優子ちゃんをいじめていた時もそうだったし、体育の着替えや林間学校の時の小野先生や教頭先生みたいにさ」
「……確かにそれはあるわね。でも、女の子だってちゃんと割り切れるわよ」
「あ、ああ……」
「浩介くん、あたしだってそれなりに『男』を捨てようと頑張ってきたわ。永原先生から褒められるくらいにはね」
「う、うん……」
「だからね、男の子に好かれたいっていう『女の子の気持ち』に則って、あたしは『知識』を使うのよ」
「そ、そうなんだ……」
　浩介くんも納得してくれた。
「さ、この話はこの辺にして今日は初めてのデートだし、この辺でお開きにしておく？」
「うーん、隣の野球場に行ってみようよ」
　浩介くんが提案する。
「ああ、そう言えばさっき言ってたわね」
「うん、これから草野球の大会があるんだよ」
「へえー野球ねえ……ちょっと見てみようか」
　野球の試合はテレビではたまに見ていたけど、生ではもちろん殆ど見たことない。
　女の子になってからは女の子らしくなるために忙してくて、スポーツ中継なんて殆ど見てなかった。
　久しぶりという感じもあったので、あたしは浩介くんの案内のもと、公園の隣に位置している野球場へと足を運ぶことにした。

# 草野球の観戦

ここの野球場は地域の少年野球チームや草野球チームが使っている野球場で、正確には公園の一部。

浩介くんはここでの観戦をデートプランの一つに上げていたから、今日のデートは公園デートとスポーツ観戦デートを合わせたような格好になった。

よく見ると草野球のチームが練習を終えていた。

観戦者はあたしたちの他、草野球チームの人たちの身内と思しき人達が参加していた。

「結構観戦してる人多いね」

「そうだな、邪魔にならない場所に座ろうか……外野がいいかな？」

「うん」

ファールグラウンドは、あたしにとってファールボールが危険という名目で、外野スタンドから見ることにする。

「結構遠いねえ……」

「だねえ……」

ちなみに、キャッチャーのすぐ後ろのいわゆる「バックネット裏」には既に他の身内客が占拠していて入り辛かった。

あそこならネットが張られてて安全なんだけど。

まあ草野球だしそうそうホームランは飛ばないでしょ。多分。

見ると外野席にはやはり数人の暇そうなおじさんなどが陣取っていた。そして外野席の女性はあたしだけみたいだ。

草野球のおじさんたちが守備に就き、最初のバッターが打席に入る。審判も位置についた。

草野球コミュニティということで、審判もどちらかのチームの人なのだろう、親しそうに話している。

「プレイボール！」

審判役のおじさんの一人が宣言する。

ピッチャーが振りかぶる。

パンッ
「ストラーイク！」
パチパチパチパチ
ストライクが入るだけでも拍手が出る。
確かに草野球だとストライク入りにくいもんなあ。
２球目、低めに外れてボール
３球目、キャッチャーが取れないくらいの暴投をしてボール
４球目、バッター空振りでストライク
これでカウントは２―２になる。
浩介くんもあたしも、野球に集中しているので会話はない。
５球目、ピッチャーがかなり置きに行った遅いボール。しかしバッターはピッチャーゴロ。
これで１アウトだ。
そして２番打者が入る。
もちろん草野球なので、打順守備位置名前が放送される何て言うことはない。
ピッチャーの投球が乱れてストレートのフォアボールになる。
３番打者、２球続けてボール。これで６連続ボール。
ストライクが入らなくなったピッチャーがど真ん中を狙い置きに行く。これは痛打パターンだ。
カキーン！
バッターがボールをとらえようとするも、ショートの正面の併殺コース。
ショートがキャッチしセカンドに……ってアッー！
ショートが投げそこないあらぬ方向へとボールが転々とし、ライトがカバーする。
「うわーこれは辛い」
「うん……」
３アウトでチェンジのはずが１アウト二三塁のピンチに。初回からこれは辛いよなあ……
「でも誰も気にしてねえみたいだな」

「草野球じゃ日常なんでしょ」
むしろゲッツー取る方が難しいのかもしれない。
「さて次は4番だよな」
「うん」
右打席に体格の大きいおじさんが入る。
ピッチャーが初球を投げる。やや高め。
カキーン！
ボールは勢いよく外野へ。
でも打ち上げすぎたのか全力疾走で後退していたレフトの足がやがて止まり補給の構えへ。三塁ランナーがレフトを凝視。犠牲フライの構えだ。
レフトのキャッチを確認し、レフトが勢いよくバックホーム。プロなら余裕で1点だろうけど……
「「あっ！」」
あたしと浩介くんがほぼ同時に声を上げる。
他の観客も一瞬驚いた後でため息も漏れる。
ランナーが転んでしまったのだ。
急いで立ち上がろうとする。
ホームはクロスプレーにはならず、ボールを持ったキャッチャーが前に立ちあえなくタッチされ2アウト3塁へ。
今度は攻撃側のベンチから励ます声が聞こえてくる。
次の打者は四球を狙って全投球見逃ししたものの、三振に倒れこれで3アウトチェンジだ。
「浩介くん、これ……」
「んーまあ草野球だしなあ……」
「でもランナーが転ぶってのはあんまりないみたいね」
「グラウンドの状況にもよるんじゃないかな？」
「あそっか。プロみたいに整備が行き届いているというわけじゃないよね」
色々な意味で、テレビでよくあるプロ野球とは違うわけだ。守備位置も特に外野手はかなり前進守備だし。

かなり迅速に守備が交代される。そういえばピッチャーも投げるのが早かった。プロ野球の様に駆け引きはそこまでないのか。
1回裏、今度は先程の攻撃。1番打者はさっきのピッチャーだ。
カーン！
お、面白い位置に転がった。三遊間……追いついたけど一塁には投げられない。
このおじさん、かなり足が速いぞ。優一とどっちが速いかな？
まあいいや。次に2番打者。構えは送りバント。
草野球のレベルなら守備の乱れも計算に入れられる。
初球は高めに外れてボール。
次にピッチャーが一球牽制を入れるが、悪送球になるのを恐れてか、かなりゆっくり投げている。
2球目、バントをする。
あ！　ピッチャーの正面だ。
ピッチャーはボールを取るのにあたふたしつつ二塁へ投げる。
「「アッー！」」
またあたしと浩介くんがシンクロする。というか観客もシンクロしているし、ピッチャーマウンドからも同じ声が聞こえてくる。
セカンドに誰も居ないのに反射的に投げてしまったのだ。
ピッチャーの表情は見えないが両手を広げながら後頭部を押さえつけているように見える。
その後、左手だけを離している。
何かどこかで見たことあるようなポーズに見えなくもないがまあいいや。
ともあれこれでノーアウト二三塁で3番打者というチャンス。
ピッチャー一球目を投げる。外れてボール。
さっきの動揺が耐えないのか1ボールから1球だけストライクを入れたものの結局フォアボール、更に次の4番打者にはストレートのフォアボールで押し出し。これで1失点。
その次の打者にもストライクが入らず2ボールから2球続けてど真ん中に起きに行ったところ、ヒットを打たれ、2点タイムリーでな

おもノーアウト二三塁。
「ありゃあ、悪循環だなこりゃ……」
「うん、こうなると大量失点コースだよね」
こちらのバッターも待球作戦を採用している。ストライクが入りにくい草野球でこの戦法は脅威だ。
6番打者は三振に倒れたものの、続く7番打者でまたしても珍事が起きた。
「アッー！」
またも同時に声を上げた。高いバウンドになったサードゴロを一塁に投げようとして、三塁手がまたも転倒したのだ。
カバーとランナーの暴走のお陰で、二塁ランナーがホームでアウトになった。
続く8番打者はピッチャーゴロでこの回0—4だ。
「初回から4点かあこれはきついわねえ」
「でもあんまり悲観視してないな」
「うん、こちらもさっきは奇跡的に0点だったけど……」
その予想は的中する、2回表、いきなりフォアボールを2者連続で出し、続くバッターがサードに強烈なゴロ、プロなら最悪トリプルプレーも覚悟しなきゃいけない状況だが、サードはあっけなくトンネル。
このエラーで1点返されなおもノーアウト二三塁、次のバッターが内野フライを打ち上げるが、内野手同士が交錯し、2点目を返され一三塁。
次の外野フライも取り損ねるなどして、この回一挙5点を取られ逆転を許した。
ところが、1点のリードなんて守れるわけがない。
2回裏、今度はエラーこそないものの、フォアボールを過度に警戒したため、ど真ん中にヤマを張っていたバッターに連打を浴びて2失点再び逆転を許す。
3回表、2アウトまではこぎつけたもののそこからエラーとフォアボールで満塁。何とかピッチャーフライで守りきる。

３回裏、再び投手が置きに行きすぎてバッターに痛打されて大崩れし４失点、この時点でリードは５点だが４回表にはセカンドが突然消えたり、バント処理の時にファーストがよそ見してエラーしてしまうなどして再び５失点してすぐに追いつかれてしまう。
４回裏には２アウトから投手が崩れて１点勝ち越し。スコアは既に１０―１１になっている。
ちなみに、この草野球の親善試合、５回で最終回だそうだ。
「熱い譲り合いだな」
「うちの野球チームのほうが強いんじゃない？」
「うん、見るからにもうおっさんって感じだしなあ……」
一回戦敗退常連である我が小谷学園の弱小野球部でもここまでひどいチームではない。
５回の表、早速変わったピッチャーが崩れてノーアウト満塁になる。
「なあ優子ちゃん」
「うん？」
「この試合ってさ、よく言えば最後まで分からない試合だよな！」
「ああ、うん……」
「ここを最初のデート候補地にしないで、公園の後の『ついで』にしておいてよかったよ」
浩介くんが苦笑いする。あたしも同感だ。
「あはは、でもたまにはこういう試合もいいかなって」
プロのレベルの高い試合の方が確かにいいけど、高校野球にプロにはない魅力があるように、このアホみたいな試合にも、魅力がある。
実際、エラーやフォアボールでもみんな笑いながらプレーしている。
プロや高校だったらこんな試合すれば非難なんてもんじゃない。いや、少年野球だって指導者によっては怒鳴られる内容だ。
いや、むしろあたしたちだからこそ楽しめるのかもしれない。どっちを応援しているというわけでもなく、ぼんやりと外野から眺めているからだ。

これがどちらかに肩入れしていたら、あまりにも心臓に悪い試合になったに違いない。もはや何回逆転したかも分からない。
野球で5点差ならある程度安心して見られるが、この草野球はそうも行かないということだ。
さすがにピッチャーも一球一球が長くなる。バッターも見極めようとするのかカウントは2ストライク1ボール。内野は前進守備。
コンッ！
詰まった！　ファーストゴロ、ん？　ファーストを踏んでバックホーム！　間に合わない。
これはダメだ、すぐにバックホームしなきゃいけない場面だ。
どうしたんだファースト！　何のための前進守備だー！
「おいおい、これはいかんでしょ」
浩介くんが言う。
「うん、前進守備してたのに何で一塁に戻ったんだろう？」
取ってホームに投げていればフォースプレーになっていた。その後キャッチャーから一塁に送球してのゲッツーも十分に狙えたはずだ。
これで11—11となりなおも1アウト二塁三塁になる。
さすがにチームメイトからも今のプレーは「おいおい」と言う声だ。
「これはピッチャー立ち直れるかなあ？」
「うーん、きつそうだと思うよ」
実際、今日の試合はこの手のエラーや四球からミスが連鎖することが多かった。
次のバッターは敬遠し、満塁策に出て再び1アウト満塁で内野は前進守備。
いわゆる「馬鹿試合」ではあるものの、点差的には1点を争う試合になっている。
次のバッターは初球攻撃！　再びファーストゴロ。今度はホームでアウトになり、一塁へキャッチャーも投げて、この試合初めてのゲッツーが成立。
これには観客席からも歓声と拍手が起きる。うん、でもあたしたち

にとっては、さっきのミスがあまりに印象に残ってて冷めた表情で見ている。
「ともあれ、これで最終回の裏か」
「そうだね、1点取ればサヨナラで同点なら……どうなるんだろ？」
「延長はやらないんじゃないか？　よく知らんけど」
中身はともかく、点差という意味では一進一退なのか、外野席で観戦している人たちも殆ど帰っていない。
先頭打者、まず四球。そして次の打者はショートが捕球でエラーをしノーアウト一二塁。また絞まらない展開になった。
3人目、ここでバントの構えを見せる。
やっぱりそうだろう、三塁方向に落ち着いて決める。このあたりはピッチャーもボールが遅いのでバントもしやすいのだろう。さすがにここでもミスしたらサヨナラ負けなので、慎重に確実にアウトを一つ取る。
でも1アウト二三塁のサヨナラのピンチなのには変わらない。
次打者は敬遠し満塁策へ出る。敬遠の時も暴投しないように注意しながら外している。この草野球だと敬遠申告制じゃだめだ。
そして次の打者、1ストライク1ボールからの3球目だった。
ゴンッ！
「あがっ！」
バッターにボールが当たり、蹲ったかと思えば、次の瞬間飛び上がって喜びながら一塁へと走っていった。
「さ、サヨナラデッドボール……」
浩介くんが口をあんぐりしている。
究極にグダグダだった試合も、終わってみれば「まあある」程度のヲチだ。
でも、あれだけノーコンの投手だったのに、デッドボールはこの試合初めてだった。
そういえばサヨナラデッドボールだとヒーローインタビューとかどうするんだろう？
新聞記事とかでは見たことあるが、生のテレビ中継とかでは見たこ

とがなかった。
バックネット裏の観客が拍手し、審判役のおじさんが「試合終了、礼！」と言って両チーム握手する。
勝ったチームの一人がマイクを持ち挨拶をする。
「えー今日はご観戦ありがとうございました！　えーこんな試合でしたが、ご観客の皆様にはが少しでも楽しんでいただけたらと思います。以上です」
外野席のあたしたちも含め拍手する。そして両軍ともにベンチの裏へと回る。
外野席の他の観客は帰っていく。あたしたちはもう少しこの試合の余韻に浸りたい。
何より、浩介くんと見た初めてのスポーツ観戦だったけど、プロの試合にない魅力について、少し語り合いたかった。
「優子ちゃんって、やっぱり男も残ってるよね。こういうのが好きなのってさ」
「うーん、そうかなあ？　あたしはずっと見ることしかしてなかったし、するとなるとまた違うと思うけど……見るだけならそんなに男社会でもないんじゃない？」
「うーん確かに……」
「ただ、ファールボール当たりやすい危ない席とかは勘弁かなあ。やっぱりほら、身体……特に顔とか傷つく恐れは極力避けたいし」
「……なるほどねえ、確かに優子ちゃんは女の子だね」
「えへへ、ありがとう！」
浩介くんと話すだけでも、ちょっとしたことで笑みがこぼれていく。
浩介くんはあたしが笑顔を向ける度に赤くなって、それを見たあたしも赤くなって……
うん、幸せな時間だと思う。
「じゃあ行こうか」
「うん、そだね」
無人の球場から、最後にあたしたちが出る。

「次は何処へ行く……ってもうこんな時間か」
「午後からだもんね。しょうがない、初めてのデートだし今日はここまでにしようか」
「そうだね」
　野球の時間は結構長かった。５回までとは言え、あの展開じゃまあ当然だ。
　公園を離れ、もと来た道を戻る。
「浩介くん、今日のあたしどうだった？」
「うん、か、かわいかったぞ」
「かわいい？　うん、ありがとう」
　やっぱり浩介くんにかわいいって言われる時が一番幸せ。
「でもね、あたしからも」
「うん？」
「今日の浩介くん、かっこよかったよ」
「え!?　そうかな？」
「うん、あたしに『優一』を取り戻してくれたこと。すごくかっこよかったよ」
　今までは昔の自分を全否定していたけど、ほんの少しだけ、大切なことを見つけられたから。
「う、うん……」
「そういえばさ、浩介くんのことについて、もっと教えて欲しいな」
「あ、あのえっと……」
　そういえば浩介くんについて、あたしはあまり知らなかった。
　お互いの家族構成、好きなこと、得意なこと、苦手なこと、趣味、そういった何気ない自己紹介を、あたしと浩介くんでしながら、最初の駅前の集合場所に戻る。
　幸いにして浩介くんの最寄り駅も知っていたから、改札口を通って電車へと進む。
「もうすぐお別れだね」
「でも、またいつでも来れるだろ？」
「次のデートはどうするの？」

「うーん、最初に浩介くんが見せてくれた候補で、今日行ってないところに行きたいかな？」
「ああ、いや……あれはちょっと封印。次は優子ちゃんが考えてきてよ！」
「え？　そ、そうだよね……うん、分かった」
「考えるのは明日からでいいよ。今日はむしろ今日のデートを振り返って過ごして欲しいからさ」
「ありがとう……」
　こういう気遣いができるんだから、浩介くんこそ、あたしにとっての「優一」だと思う。
　電車が来る。電車に乗り、まずあたしの最寄り駅から来ることになっている。

「バイバイ、浩介くん」
「うん、さようなら」
「じゃあ次のデートでね」
「うん」
　電車のドアが閉まったあとも手を降っている。
　他の乗客は、一部が殺意の目線を投げかけつつも、大半はあたしのことを見向きもせずにホームへ。
「ふうー」
　一つ息を吐く。改札口を出る。
　そして家までのいつもの道程を経て、家に戻る。
「ただいまー」
「おかえりー優子！　後３０分位でご飯だよ！」
　鍵を閉め、靴を揃えて自室に戻る。
　くまさんのぬいぐるみを元に戻す。そしてベッドに横になる。

「んーっ！　んーっ！」
　あたしは枕を抱きしめて左右に転がり往復する。
　枕がまるで、浩介くんみたいに切ない。

大好きな男の子と、夢にまで見たデート。まだ本能的な部分に「男」が残るから、肉体的な触れ合いという意味では少なかったし、正式に恋人同士ではなかったけど……それでも両想いの男女のデートには変わらない。

今日という日を、忘れちゃいけない。これからの永い人生の中でも。

それに浩介くんは、あたしの、女の子としての初恋でもあるんだから。

# 数奇な運命

「優子ーご飯よー！」
「はーい！」
デートの日の夕食、あたしは食事を食べながら、ずっと今日のデートのことを思い出す。
二人で公園に行き、シーソーで遊び、おっさんたちの草野球を見て過ごした。
そんな他愛もない、というより、デートと言うには分量の少ない内容だった。
「ところで優子、今日のデートはどうだったの？」
「ちょ、ちょっと母さん！」
お父さんもいるのに……
「あらまあ、いいじゃないの。優子も女の子でしょ？　好きな男の子とデートするなんて普通のことじゃない」
「……うー、確かにそうだけどぉ……」
やっぱり、好きな男の子とのデートを話すのはちょっと恥ずかしい。何よりもデートとしてはかなり薄い内容だからだ。
あ、でも「優一」のことは話したほうがいいかな？
「ふふっ、母さんのアドバイスも聞けるわよ。彼とどこに行ったの？」
うーん、あんまり役に立ちそうにないけど、何分信用がない。
まあ、一応聞いておいて損はないかな。
「あのね、公園と野球場が一緒になってる所あるでしょ？」
「うん」
「そこに行ったのよ」
「うんうん、それでどうだったの？」
「それは――」
あたしは、ベンチで遊ぶ子供たちを見たこと。
浩介くんはあたしに、「優一」は捨てたのではなく、取り戻したということを教えてくれたこと。
二人でシーソーで遊んだこと、草野球のとんでもない自滅合戦試合

を見たことを話した。
「へえそうなんだー。ところで優子が好きなその篠原浩介くんってい
うの？　立派な子だねえ」
「うん、お父さんもそう思う」
　珍しくお父さんが発言する。
「優子はね、今まで『優一』の名前も含めて全部無きものにしようとし
てたでしょ」
「うん」
「お母さんもお父さんも、そのことはちょっとだけ違和感があったけ
ど、でも優子を傷つけたくなかったから黙ってたのよ。勇気あるわ」
「うん、それが浩介くんの取り柄だし」
「しかもその浩介くんってその『優一』に一番怒鳴られていた子でしょ
？　そんな子がそういうことを言うんだもの……普通なら彼にとっ
ても一番捨てたい過去でしょ？」
「うん。そうだと思う」
　実際、復学当初はそういったことさえ認めずに、男扱いされてし
まっていたし。
「数奇な運命よねえ、いじめていた男の子といじめられていた男の子
がいて、いじめっ子はか弱い女の子になって……それでいじめられっ
子は復讐したんでしょ？」
「うん」
「それが色々あって、両想いになるなんてね……優子が詳しく惚れた
経緯教えてくれる？」
　母さんが聞いてくる。
「え？　それはちょっと……」
「聞きたいなあ、優子の恋バナ」
「あうあう……」
　やっぱり女の子は恋愛話が大好きだ。
　それは少女漫画を読んで知っていたけど、まさか母さんのような
「おばさん」と呼ばれる年齢の女性まで恋愛話が好きだとは思ってい
なかった。

「じゃあ、復学初日の頃から話すね。既に知ってる話もあると思うけど復習がてら全部話すね」
あたしは復学初日からの経緯を、時間をかけて説明した。
最初は整形外科医の両親を持つ高月くんが「性転換手術を受けたんじゃないか？」と疑念を抱き、そこから男子扱いといういじめが始まったこと。
女の子として見てほしいという訴えは通じず、最初は桂子ちゃんとそのグループの女子しか味方が居なかったこと。
生理が来た時の苦しみとあたしの決意で、恵美ちゃんも味方になってくれたこと。でも、高月くんや浩介くんはあたしのせいで性格が歪み、更に男子扱いといういじめを繰り返すようになったこと。
それでも最終的には、あたしがいじめに耐えきれずに教室で大泣きしちゃった時に桂子ちゃんと恵美ちゃんのお陰でいじめも止まったこと。
その後はあたしも男子たちを許すことにしたこと。球技大会の時最後のドッジボールでボールを当てられた時に泣いちゃった時、浩介くんが飛び出していったこと。
今なら分かるが、多分あの時浩介くんはあたしのことをはっきり好きになった。
それ以来、浩介くんは恋心と罪悪感の狭間で戦っていたこと。あたしは何度も何度も浩介くんを許し続け、最終的には「あたしを守るために力を振るう」と決意してくれたこと。
林間学校の時、部屋割りで教頭先生に向かってくれたこと、ナンパしようとした添乗員から守ってくれたこと。そしてその時、あたしも浩介くんと恋に落ちたこと。
その後は、母さんも知っての通りだ。
永原先生の秘密は、絶対に口外してはいけないこと。本当は話したほうがＴＳ病の女の子の恋愛について分かりやすいんだけど、約束は守らないといけない。
「ふうん……意外とよくある惚れ方よね」
「う、うん……」

少女漫画とかでも主人公の女の子が悪役のお嬢様にいじめられている所を男の子に目撃されて物語が一気に進むことがよくあるし。
「優子は、守られるのに抵抗ある？」
「ううん、ないよ」
あたしは即答する。
「どうして？」
「だって、あたしこれだけ身体も弱い女の子になっちゃったもの。意地を張るメリットなんてもう何処にもないわよ」
素直に本音を言う。
「そうね。確かに優子はもう女の子だし、浩介くんは強いんでしょ？」
「うん。だからこれからもいっぱい守られちゃうと思うの」
「うん、それでいいわよ。でも守られて当然みたいな態度だけは気をつけてね。ちゃんとお礼も言うのよ」
母さんがちょっと注意する。
むしろお礼どころか最初なんて浩介くんの胸で泣き出しちゃったし。
「う、うん……だけど守られたから恥ずかしいとはもう思えないの」
「ふふっ、優子も女の子だね」
「そ……それに浩介くんがあっ、あたしを守ってくれるところ……たくましくて……たまらないのよ」
恥ずかしいけど、やっぱり母さんにも偽りのない本音を伝えたい。
「あらあらまあまあ。教育の成果が出てるわねえ……」
「そうだな。お父さんも、優子はいい娘に育ったと思うぞ」
「えへへ……」
娘、うん。あたしは二人の娘。
女の子に生まれ変わったから、優しい子になるためにも、もっともっと、女の子らしくなりたい。
「さ、デートの後も風呂に入りなさい」
「うん」
あたしは食事を終え、パジャマを持ってお風呂に行く。
お風呂でも同じことを考える。今までのこと、これからのこと。

初めてデートし、少しずつ女の子を深めていくこと。
鏡で顔を見る。恋をすると女の子はかわいくなると言うけど、今のところ自分の中で区別はついていない。
もしかしたら他の人が見たらまた違う評価かもしれないけど、とにかく今日は、デートのことを思い出したい。
浩介くんから、次のデートの宿題は明日以降と言われている。
その言葉に従って、明日デートについて考えよう。

「んんっ……」
ゆっくり意識を回復し、ベッドから出る。ハート型のクッションに立つ。
ふとテレビの下に置いてあるお人形さんが目に入る。
今日は椅子に座らせてあげよう。うーん、まだ何か足りない。
そういえばテーブルやコーヒーカップみたいなのはないんだっけ？
まあ、そこまではまだいいかな。ともあれ、お人形さんの片方の衣装を変えてあげる。
うん、今日はこんな所かな？
やっぱり時間も経つと、徐々に新しい発見も減っていく。それでも、意外なところで見つかるから、お人形さん遊びも馬鹿にできない。
子供っぽいなんて言う人もいるかもしれないけど、あたしはまだ女の子になって４ヶ月足らず。それを考えれば幼稚とは言われたくない。
そんなあたしが最近ハマっているのが女児向けアニメだ。
この作品は「大きなお友達」を意識していることで有名だ。
つまり、製作陣としてはメインターゲットの幼女だけではなく、１０代後半や成人男性、あるいは幼女の親たちも一緒に見ることを前提にマーケティングをしているアニメでもある。
なので、仮にあたしがまだ「優一」だったとしても、見るのはそこまでおかしなアニメではない。
ただ、心が女の子になって、またＴＳ病患者として「男」の知識も

持つあたしにとっては、このアニメが不思議なくらい上手く出来ていることに気付かされたのだ。
あるシーンにおいて、女児、大きなお友達、親においてそれぞれ感じ方が違うだろうなあと思うところがとてもよくある。
このアニメもそれなりにロングセラーなので、最初期のシリーズを見ていた女児はもう成人していてもおかしくない。
そんな時、大人になって昔のシリーズを改めて見返したり、あるいは今のシリーズを娘などと一緒に見ることで、新しい発見も出来るという仕組みだ。
「このアニメ、本当によく出来ているわねえ」とは、母さんの言葉だ。普通こんなにあちこちにターゲットを分散させたら、中途半端になるはずなのに。

朝食を手伝い、洗濯機に洗濯物を入れたら、浩介くんとのデートについて考える。
あたしはこの前の海のことを思い出す。あそこの近くには確か水族館もあったはず。水族館といえば定番のデートスポットだ。
そう思い、ちょっとＰＣで調べてみる。
ちょっと電車賃と水族館の入場料がかかる。あたしは例の事件のこともあって金銭はまだ余裕があるけど、浩介くんの事情はよく分からない。
うん、こういうときこそ「ほうれんそう」だ。

浩介くんのメールアドレスにメールする。

題名：明日のデートの場所
本文：明日はこの前永原先生たち行った海の近くの水族館に行きたいけど大丈夫？

よし、これで送信っと。
あたしはわくわくしながら返信を待つ。題名にデートと入れたけ

ど多分大丈夫。
浩介くんが食事中かもしれないとかそういうことさえ思考回路から抜けてしまう。
数分後、携帯電話がブルブルと震える。
「メールを受信しました」というメッセージとともに差出人が「浩介くん」であることを示している。

題名：Ｒｅ：明日のデートの場所
本文：うん大丈夫だよ。集合時間と場所はいつどこにする？

あたしは返信する。

題名：Ｒｅ：Ｒｅ：明日のデートの場所
本文：前回午後だったから今回は早めに駅前に午前９時５０分でいい？

すぐに今度は返ってくる。

題名：明日のデートの場所
本文：うんいいよ、楽しみに待ってる

あたしはベッドに横になると、また身悶えた。枕を浩介くんに見立てて抱きしめ左右に転がり続ける。こうすると恋する気持ちが強まっていく。
時間が近付くにつれ、明日のことで緊張していく。
お昼ごはんの時も、食べ物の味さえ殆どわからなかった。
たった一日会ってないだけなのに、すごく寂しい思いをしてしまう。あたしが今まで読んだ少女漫画でも、好きな男の子に会えなくて寂しいという女の子はたくさんいた。
女の子として、こうやって恋するにつれ、少女漫画での知識が役に立つ。

カリキュラムを受けた時は、ただ何となくで読んでいた部分もあった。でも、やがて少女漫画に引き込まれるようになった。
それはやっぱり、こういう恋愛話が無意識のうちに好きになったからなのかもしれない。
いや、今まで気付いていなかっただけで、心の奥底では、林間学校よりもっと前から浩介くんが好きで、それもあって少女漫画を読んだのかもしれない。
いずれにしても、今はあまり考えないようにしよう。
それよりも、明日のデートの服だ。水族館に行くわけで、しかも2回目のデートになる。
お人形さんは赤い服を着ている。
そう言えば、赤い巻きスカートってまだ浩介くんには見せてないっけ？
一部からはちょっと幼いという意見もあったけど、男相手ならあたしのこの童顔なら幼い方がいいはず。
よし、それにしよう。
初めてのデートは服装にとても悩んだけど、二回目は気が楽になってもう少し悩まずに済んだ。

翌デート当日、あたしは約束の時間もあるので、お人形さん遊びもそこそこに着替え始める。
あ、そういえば下着の色を決めていなかった。って、2回目も白でいいかな。
浩介くんの好みはよく分からないけど、少なくとも清潔な白なら不機嫌になることは絶対にない。
もちろん布面積も普通のフルバックにして、派手なレースもないタイプにする。
女の子の下着は本当によくフィットして付け心地がいい。
もしかしたらそう言うものに慣れるところが、最初の「女の子への道」だったのかもしれない。
そして上の赤い服に下の赤い巻きスカート。家でも何度か着てい

るけどデートにも使える服。今回は、ぬいぐるみは持っていかない。
そして鏡付き机の前に座り、白いリボンを頭につける。
……うん、これであたしも、女の子らしくかわいくデートできるわね。
「優子ー！　朝ごはん手伝ってー！」
「はーい！」
母さんの家事を手伝い続けていたおかげで、清潔感の大切さを学べたと思う。
母さんも「優子は細かい所に気を使えている」と言ってくれた。うん、やっぱりじわじわとカリキュラムの効果が出ているんだ。
一人暮らしをしてから独学で覚えていたら、こうはならなかったと思う。
朝食も今日がデートと知っているのか、母さんは口臭などに影響しない様に配慮してくれている。

「じゃあ行ってくるよー」
「はーい、鍵閉めておくからねー！」
今度は駅に向かい、1回目のデートとは逆方向の電車へと乗り込む。車内はとても空いている。
この前の乗り換えた電車から、一番前が改札だと知っている。
一番前の車両に乗り込む。やがて、学園の最寄り駅から、浩介くんの最寄り駅へ。
あっ！　ホームに浩介くんがいる。気付いてくれるかな……
ドアが開く、浩介くんが乗ってくると、一目散にこっちへ来てくれる。
集合時間ギリギリの電車より一本前に乗って余裕を持とうと考えていたのだが、どうやら考えていることは同じだった。
「あ、優子ちゃんおはよう」
「うん、おはよう、浩介くん」
約束とは違う集合場所。そして開始時間もちょっと早いけど、あたしたちの2回目のデートが始まった。

## 水族館へ

ガタンゴトンと電車が揺れながら、浩介くんがあたしの隣に座る。
隣り合って座ったのは、野球観戦や公園の時以来だけど、電車の中はまた別の緊張感がある。
「今日はよろしくね」
「う、うん……」
実際には前回のデートから2日しか経っていない。
「そう言えば、浩介くんは宿題終わった？」
「あ、うん。ちゃんと終わったよ。優子ちゃんは？」
「あたしもバッチリ。だからいつでもデートできるよ」
笑顔で言う。
「そ、そうか……でも毎日してたらさすがに……」
「お金が足りないんでしょ。分かってるよ」
毎日会いたいというのは本音だが、飛ばし過ぎはダメだ。
「あ……でも……ああいやなんでもない」
「うん、あたしも毎日だとさすがに疲れちゃうかな」
「あ、ああ、うんうん。そうだよねうん」
あたしがおごってもいいんだけど、浩介くんのメンツも立ててあげなきゃ。
それにさすがに毎日デートだとすぐにネタもなくなるだろうし。
「俺さ、こっち来たのあの海の日の時は久しぶりでさ」
「うん、あたしも。学園までは毎日使ってるのにね」
「いつも使うルートから外れるとたんに非日常になるよねえ」
「うんうん、あたしも不思議な感じがする」
「そうそう、日常と非日常って言うの。それが地続きなんだよね」
あたしは浩介くんと、海へ行った時に思ったことと同じことを繰り返す。
「さ、次で終点だ」
最近では車掌の放送も少なく、自動音声が多くなっていて、しかもドアの上には広告と案内がある。

広告はテレビでも企業のＣＭが流れていて、それは音がない代わりに字幕になっている。あるいはよく分からないクイズなんかもある。ちなみに毎回あてずっぽうだが正答率は結構低い。
「次は終点――」
「あ、終点だね」
「でもこっから乗り換えだろ？」
「うん」
一両目の一番前に進み前の人に続いてゆっくり降りる。
「それにしても優子ちゃんも同じ電車だっただなんて」
「集合時間ギリギリより一本前にしようと思って」
「ははっ。同じ」
「あたしたち相性いいね」
あたしの何気ない一言、浩介くんが赤くなる。
もしかしたら「相性がいい」という言葉に反応しちゃったのかもしれない。
女の子になって考えることがめっきり減ったのが「エロいこと」だ。
それも不特定多数に対し性欲をばらまくということがなくなってしまった。もちろん、浩介くんには身体はともかく、心は性欲も持っているけど。
もちろん男にも女にも性欲はあるが、そのベクトル傾向は結構違うんだということを思い知る。
あーでも女の子になったばかりは「優一」の性欲を引きずってたかも。
「やっぱりさ」
改札を出て、乗り換え駅の改札にＩＣカードをタッチした後、浩介くんが声をかける。
「うん？」
「優子ちゃんってＴＳ病の子ならではの魅力があると思うんだ……老けないということ以外に」
「つまり、生粋の女の子にはない魅力ってこと？」
「そう」

老けないこと以外で、生粋の女の子にない、ＴＳ病の子ならではの魅力って何だろう？
「あはは、そりゃああたし、元々は男だったから、男心について――」
「知識じゃないよ」
「え？」
意外な言葉が出る。
「もしかしたら、突き詰めたら結局『知識』のことかもしれないけど、何ていったらいいんだろう……女の子らしさを追求する中で、優子ちゃんは自己中心的じゃないっていうの？」
「うん、男にどうすれば好かれるか知っているからね」
「でもさ、それって知識じゃないと思うんだよ」
「え？　どういう？」
「例え知識があったとしても、男の為なんて思わずに振る舞うことだって、優子ちゃんには出来たはずだ」
浩介くんが指摘する。
「でもそれはだって……あたしが女の子らしくなりたいと思ったからで――」
「女の子らしくなりたいのはどうして？」
「そ、それは……過去の自分を変えたくて」
「でもさ、その女の子らしさっていうのも、結局『男』がベースな気がするんだよ」
浩介くんの指摘。正直考えもしなかった。
「いや、そうは言っても、女の子らしさを客観的に評価するのって結局は男子でしょ？」
女子同士で女の子らしさを評価することももちろんあるけど、やっぱり男の子からの評価のほうが大事だと思う。
「うーん、そうなのかなあ……」
「うん。あ、電車来るよ」
電光掲示板の表示を見て言う。その数秒後、「間もなく電車が参ります」と言うアナウンスが流れ、あたしと浩介くんが電車の来る方向に視線を向ける。

「なんか兄妹みたいだね」
　あたしがさり気なく言う。
「そうかなあ？　顔とか全然違うし」
　あっさり返されてしまう。
「あ、そうだったね」
　まあいつも会話がうまくいくわけではない。
　さっきよりは電車が混んでいて、あたしたちは車内の奥に行く。
「ところでさっきの話の続きだけど」
「うん」
「確かに男の考える女子力と女の考える女子力は違う。でも優子ちゃんは女の考える女子力を知らなかったし、男にモテたいからと無意識にそれを削っちゃったんだ」
「あっ！」
　浩介くんの指摘で気付く。
「つまり、優子ちゃんには男から見ても『背伸びして空回り』していないということだよ。優子ちゃんは常に男子を意識するから、とても思いやりがある子になったと思うんだ」
「そ、そうなのかな？」
「うん、優子ちゃんはさ、復学当初は女の子しか友達がいなかったでしょ？」
「う、うん……」
「その時に女の集団に閉じこもることだって出来たんだよ。でも優子ちゃんは決して逃げなかった」
　浩介くんの指摘が続く。
「でもそれは、カリキュラムで男に好かれてこそ女は輝くって……」
「最終的には、全部優子ちゃんの意思だろ？　女の子になったばかりと言っても、男としての16年の人生だって全く役に立ってないわけじゃない。優子ちゃんだって、分別付かない子供じゃないだろ？」
「うんそうだけど……」
「だったら自信持ちなよ。優子ちゃんには優子ちゃんにしかない強みがあるんだからさ」

「うん……ありがとう……」
やっぱり、浩介くんは優しいなあと思う。
電車は次々に駅へと向かい、観光客で賑わい始める。海水浴客が多いみたいだ。
「海水浴の人多いね」
「うん、何だか懐かしいなあ……」
ついこの間の話のはずなのに、やっぱり多くのことがあると時間が短く感じる。
「うん、俺も。昔のことみたいに思えてくるなあ」
4ヶ月足らずの短い時間なのに、段々と「男」が遠くなっていく。
こうやって好きな男の子とデートしていけば、女として他の女性たちとも何も変わらずに生きていける。
女の子として生きていく喜びは、きっとこれからもたくさんあるはずだ。
そう思いながら、浩介くんと話す。
「ところで浩介くん」
「ん？」
「今日のデートの服はどうかな？」
あたしのこの赤い服を浩介くんに見せる。
「え、ああその……か、かわいいな」
「ありがとう……ふふーん、前回とどっちがかわいい？」
ちょっと意地悪する。
「え!? き、決められないよ……！」
「まあまあ、どっちも優子なんだから。遠慮する必要はないのよ」
「そ、そうだけど……」
浩介くんが戸惑っている。
「ん？」
「優子ちゃん、この問題……純粋にとても難しいと思うんだ」
「ふーん、そうなんだー……どうして？」
あたしが顔を傾ける。
「今日のは何というか、一昨日のにも増して幼さの残るかわいさとい

うか……少女というか……そういうのはいいんだけど……」
「うん、それで？」
「でも何かこう、おっぱいが大きいのを活かしている服と言う意味では、一昨日が上だったと思う」
浩介くんが面白いことを言う。
「ふーんそうなんだ……」
「つ、つまりその……一昨日はセクシーさもあったというか、今日は純粋にかわいらしさで勝負と言うか……」
「うん分かったありがとう。今後の参考にするね。浩介くんはかわいらしさと幼さが好き？　それともセクシーさが好き？」
「ゆ、優子ちゃんはどっちも似合っていると思うよ！　逃げじゃないよ！　本当だよ！」
浩介くんが必死に取り繕いながら言う。
確かにあたしはどっちも似合うというのはその通りだし、比較するのはものすごい難しいから、無理に聞き出すことはない。
その時の雰囲気や気分に合わせて、配分を決めればいいからだ。
「ねえ浩介くん……」
「ん？」
「手、繋ご！」
そう言うとあたしは左手を浩介くんの右手に合わせ、更に腕を絡める。
うん、ここまでは全く大丈夫。
その時、電車が揺れる。
「わっ」
あたしが少しだけバランスを崩し、胸を浩介くんの腕に当ててしまう。
……あれ？　あんまり嫌悪感が出ない。
よし、ちょっとだけ……
もう一回微妙に揺れたのを利用し、浩介くんの腕に胸を当てる。
……や、やった！　嫌悪感が出ない！
「ゆ、優子ちゃんその……」

「どうしたの？」
「胸が当た……」
「ふふっ、あててんのよ」
お決まりの台詞に浩介くんがビクッとする。
「そ、その……嬉しいんだけど、身体は――」
「うん、どうやら大丈夫みたい」
近くの前の座席に座った女子高生二人組がこちらを睨む。校章を見ると女子校の女の子みたいだ。
そう言えば、浩介くんが「優子ちゃんは女子の中だけで閉じこもることも出来た」って言ってたっけ？
もしかしたら、女子の中で閉じこもっていたらああなっていたかもしれない。
今は恋をして、より一層かわいい女の子を目指して頑張っているし、ＴＳ病は老けたりしないけど……でもあんな風に妬みやヒガミで感情が占められたら、きっとあたしでもブスになっちゃう気がする。
それ以前に、女子だけの世界に自分から閉じこもっておきながら、男女のカップルに殺意の視線を向けていることに、あたしは「同情心なき哀れみ」を感じざるを得なかった。
ともあれ、電車は目的の駅につき、改札口へ。
前回の海と違い、今回は終点の２つ手前で乗り換える必要性がない。
ＩＣカードをタッチする時は、さすがに手を繋ぐのを離し、改札を出てから今度は水族館の方向へ。
多くの客が海水浴場を目指す中で、水族館はちょっと穴場になっている。
海水浴場には家族連れやカップルもたくさんいるが、何故か水族館は海水浴場の知名度に押されてちょっとマイナーだ。あたしは浩介くんともう一回手をつなぎ、腕を絡める。
そしてもう一回胸を……
「っ……!!!」
反射的に胸を引っ込める。

「どうしたんだ優子ちゃん？　やっぱり身体が――」
「ううん、さっきは大丈夫だったのに……」
　うーん、どうしてだろう？
「そ、そうか、とりあえず水族館に行こう」
「う、うん……」
　ともあれ、腕を少しでも長く絡めていれば、原因が分かるかもしれない。
　水族館の入場口から入る。するとチケット売り場が目に入る。
「料金は高校生１６００円かな？」
　高校生であることを証明するものが必要と書いてある。
「優子ちゃん生徒手帳は？」
「うんあるよ」
　「石山優子」と書かれたまだ真新しい生徒手帳を見せる。
「へえー、やっぱ新しいんだな……」
「うん」
　ともあれ、チケットをそれぞれ買って、受付で小谷学園の生徒手帳とともに見せる。
「はいどうぞ、お入りください」
　受付の人がチケット切り取り半券を渡してくる。浩介くんも同様だ。
「優子ちゃんは水族館って最後に行ったのいつのこと？」
　浩介くんが聞いてくる。
「うーん、覚えてないかなあ……小学生の時行った記憶はあるんだけど……」
「俺は全く記憶にないや」
「うーん、どっちにしてもこの水族館は初めて出し……どんな感じなんだろう？」
　エスカレーターを上り、また浩介くんと腕を絡めて手をつなぐ。周囲からは完全にカップルに見えるはず。
　エスカレーターを登って最初のラウンジ、ここでは「今が旬の魚」を展示している。調理された魚なんかの写真もある。

よく分からないけど、こういう魚が漁場に出るのかな？
そういえば、ここは近くに漁港もあったんだっけ？　この辺一体巨大都市だし利便性は高そうだ。
「美味しそうな魚だねえ……」
「ここに展示されている魚も、食用になるとこうなるのかぁ……」
「でもよ、魚はうまいぜ」
浩介くんが言う。でもちょっとこれは趣味が悪いかもしれない。
まあ、確かに魚を展示したりするという意味ではこういう側面もあるという意味を込めてなのかもしれないけれども……うーん……
……まあいっか。
浩介くんと一緒に調理された魚達の写真を見る。中には意外な魚も食べられていたり、あるいは高級食材になっていることも知ることが出来た。
これはこれで、あたしとしても知識が深まった。
これで料理のレパートリーを増やせるかもしれない。館内が撮影禁止なのがちょっと痛い。
まあ博物館だし撮影されたら困るしそれはしょうがないか。
あたしたちは最初の展示場を過ぎ、「身近な海」と言うコーナーに出た。
幾つかの水槽の中で、まず目を引くのが「干潟コーナー」と称し、時折海岸に打ち上がる生き物の展示だ。
潮干狩りなんかでの貝の展示もされている。さっきの調理コーナーにもあったアサリとかだ。
ガラス越しに、この湾の浅瀬で泳ぐ魚達が展示されている。
どれも比較的メジャーな名前の、身近な魚だ。
「やっぱ『身近な海』っていうから、あんまり珍しいのは居ねえな」
「でもさ、いきなりすごい魚なんか出したら後がよくないよ」
「うんそうなんだけど……」
他にも、イワシやシラスなんていう漁業で取れる魚なんかも、水槽から見ることが出来る。
「お、こっちは海藻だ」

「へえ、昆布って海の中だとこうなっているんだー」
普段海に潜らないあたしたちにとって、「身近な海」と言っても新しい発見だらけだ。
魚の水槽だけではなく、食物連鎖を表現した「作り物」による解説図解なんて言うのもある。まあ、食べる食べられるを展示するわけに行かないもんなあ……
「にしてもよ、徐々に水深の深い魚を展示していくんだな」
「あ、そうだね。言われてみれば……！」
つまり最初に「料理された魚」を展示したのも、魚の「地上での姿」という意味も含まれていたんだ。
そこから干潟、海岸線近くの海藻、沿岸漁業で取れる魚、食物連鎖と言った感じで水深が深まっていく。
あたしたちは次の部屋に行く。
今度は「身近な海」から特にピックアップすると言う名目での「クラゲコーナー」だ。
「クラゲの大量発生」はこの近くではよくあることらしく、時折海水浴客に被害を与えていく存在でもあり、また食用でもある。
「クラゲだけでさっきと同じくらいの広いコーナーだな」
「うん、この前の時は大丈夫だったけど、海水浴中は注意しないといけないよねえ……」
「だな、せっかくの楽しい海が台無しになりかねない」
浩介くんが同意する。
浅い海に打ち上げられるクラゲから、ドククラゲ、深海に住む無害なクラゲなどなど、クラゲの多様性は凄まじい。
それらのクラゲが生きたまま展示されていて、実に飽きないものだ。
後半、一つのクラゲの前で立ち尽くす男性がいた。
他のクラゲは見ていないので、男性がどいてくれるのを待っている。
「うーん……」
「なかなかどいてくれないね」

「まあ、気長に待とうか……」
そんな風に話していると、聞こえていたのか男性が振り返る。
「「あっ！」」
あたしと浩介くんが同時に驚く。
見知った顔の男性だった。
「おや、君たちはいつぞやの……」
「ほ、蓬莱伸吾教授！」

# 蓬莱教授の野望

そこに居たのは、以前林間学校の部屋割りの時、教頭先生と対決した時にお世話になった蓬莱教授だった。
「蓬莱教授、どうしてここに？」
「少し研究に行き詰まってな。息抜きに水族館に来てみたんだこのベニクラゲ……」
蓬莱教授が水槽を眺めながら言う。
「これがどうしたんですか？」
「……まあ見てみてくれよ」
蓬莱教授がどけてくれる。
あたしと浩介くんでベニクラゲを見る。
「浩介くん、これ小さいね……」
「うん、よく目を凝らさないと見えない」
僅かに、水槽に顔をくっつける勢いで見ないと見えない。体調は1センチあるかないかだ。
「脇にある虫眼鏡を使ってみてくれ」
蓬莱教授のアドバイスを聞き、右にあった虫眼鏡を使ってみる。そうすると拡大してよく見える。
中央に赤い玉があって下には線が伸びている。
「へえ、こうなってるんだ」
「でも蓬莱さん、これが一体？」
浩介くんの関心をよそにあたしが疑問をぶつけてみる。
「ベニクラゲというのはな……一般には不老不死の生き物と言われているんだ」
「え!?　つまりもしかして……」
「ああ、君の同類だと思うだろう？」
「うんだって……」
「……ベニクラゲはな。別に不老不死じゃない。確かに老衰で死にはしないが……『不老でも不死でもない』生き物なんだ」
「え!?　蓬莱教授、それっておかしいじゃないですか」

確かに、老衰で死んだりしないのになぜ「不老でも不死でもない」のか。
「……ベニクラゲは老いてくると『若返る』習性があるんだ」
「「あっ！」」
あたしと浩介くんは蓬莱教授が言わんとしていることを理解する。
「だから、君……確か石山優子さんだったか……」
「あたしの名前を覚えていたんですか？」
「ああ、こう見えて俺は記憶力に関しては自信がある。伊達にこの歳でノーベル賞学者をやってるわけじゃないからな」
確かに他のノーベル賞学者って大抵おじいさんだもんね。
「とにかく、君の場合は若返るというわけではないのだ」
「つまりどういう？」
「あー、物凄く短いスパンで言えば同じかもしれないがベニクラゲと違って老けきってから一気に若返るわけじゃない」
「確かに、永原先生もずっと――」
「だろう。君たち『完全性転換症候群』、通称『ＴＳ病』と呼ばれる人々は『老衰せず、不老ではあるが不死ではない』という状態だ」
「う、うん……」
「ベニクラゲは不老不死の生命と言われているが正確には違う。おそらく不死は実現不可能だということを考えると、君や永原先生たちというのは生命として理想形とも言えるんだ」
「でもどうしてそれを？」
「俺はＴＳ病も研究していてな。最初はこのベニクラゲの研究でヒントが掴めると思っていたんだ」
うん？　よく分からない。
「蓬莱さん、言っている意味がよく分からないのですが……」
「ふっ、今は知らなんでもいいよ。だがこれだけは言っておく、私の研究は必ず多くの人々に……少なくとも君たちには恩恵をもたらすものだ」
「蓬莱教授の専門って難病解決のための遺伝子研究ですよね？　それって誰もが恩恵を受けられるものじゃないんですか？」

少なくともというものではないはずだ。
「ふん。あれはただの、脇道の研究だ。ノーベル賞を取ったのも含めてな」
蓬莱教授が信じがたい言葉を言う。あたしと浩介くんは固まってしまう。
ノーベル賞は大天才と呼ばれる学者が同じ研究を数十年続けても取れないことが多い文字通り最高権威の賞だ。実際蓬莱教授の受賞した研究成果だってここ10年のノーベル生理学・医学賞で最も偉大なものとさえ言われている。
ところが、この中年の大学教授は「あれはただの脇道の研究」と言ってのけた。
「おっと、驚いてしまったか。だが私と助手の瀬田さんで進めている研究はそんなもんじゃない」
あたしは蓬莱教授が何を目指しているのかが何となく分かってしまった。でも自信がない。
それに、もしそんなことが実現したら、ノーベル賞どころじゃない。全地球が大混乱に陥りかねない研究だ。
「ねえ浩介くん……」
「うん、深く追求しない方がいいと思う」
浩介くんも、何か嫌な予感がしていたみたいだ。
「おや、そうかい。まあ今はそれでいいさ。しかるに、石山さん」
「は、はい何でしょう?」
「君も、俺の研究に参加してみないかね?」
「え!?」
あたしは驚いて素っ頓狂な声を上げてしまう。
「ああいや、昔の人体実験とかじゃないぞ。ただちょっとだけ情報をもらうだけだ」
「おい、いくら蓬莱教授でもそんな怪しいことに優子ちゃんを――」
「あーそうだよな。うん、すまん。信用できねえってのは分かるよ……それにしてもやっぱり、そう言う関係だったんだな」
蓬莱教授が浩介くんを見て言う。

「あ、ああ……」
　隠す理由はない。
「そうか。今は信用出来ないかもしれないが、もしこのまま関係が続くようなら、もう一度私のもとに訪れた方がいい。それも早ければ早いほど。な」
　蓬莱教授が何やら意味深な言葉をつぶやく。
　確かに、あたしの推測が正しいなら、蓬莱教授の言うことも最もだ。でも今は、やっぱり信用ができない。
「ふう……さ、俺はもう少しここにいるよ。こうして会ったのも何かの縁だから一緒に水族館を回るのもいいが……二人で回った方がいいだろう」
「あ、ありがとうございます」
　やはりこの辺の分別がつく辺りが、よく分からない。というよりも、より蓬莱教授を不気味にしている気がする。
「あでも、俺もう一つ蓬莱教授に聞きたいことがあるんだ」
　浩介くんが言う。
「ほう。答えられる範囲でなら答えよう」
「うちの小谷学園の……永原先生と一体……」
「ああ、永原先生か。いいだろう」
　永原先生の証言に拠れば年齢証明のためにお世話になったと言うけど。
「俺が永原先生と会ったのは２５年前だ。その時俺は修士論文を書き上げていてな、博士課程で何をしようか考えていた。その頃から俺は再生医療の道に進もうと思っていた。ＴＳ病という人々の存在が気になっていてな」
「そんな時、たまたま俺の大学で『日本性転換症候群協会』の講演会があった。以前より気になっていた俺はそこに出席し、永原先生と出会ったんだ」
「……」
「彼女はそこで６０歳と称していた。にわかに信じがたいと会場がざわついていた。だが、俺は、すぐにそれさえ嘘ではないかと考えた」

「講演会が終わり、永原先生を問いただした。本当はもっと年齢を重ねているのではないかとな。女性に歳を聞くのが失礼かどうかなんてのはその時の俺にはどうでもよかった」
「永原先生は『本当の年齢は言っても信じてもらえない』と繰り返すばかりだった……だから俺は、博士論文に『ＴＳ病患者の年齢証明』ということを研究テーマに選んだんだ」
「当時調べたのは永原先生ではなく２番目と３番目に年上の患者だった。それでも彼女たちは世界最高齢と信じられている１２２歳を大幅に上回っていたから特に問題はなかった」
「それで結果は？」
「ああ、もちろんいい返事だった。科学的には疑う余地もなく、彼女たちは不老体だったよ。俺はこの業績で、若くして博士号を取ることが出来た。そして永原先生が、俺の研究所を訪れて礼を言うとともに、『今度は私の年齢を証明して欲しい』と言ってきたんだ。ただし『世間に公表しない』ことを条件にな」
　なるほど、そう言う経緯でああなったのか。
「俺の研究成果は……博士課程の時をも遥かに上回る衝撃的なものだった。君たちも知っているだろう？　何せ１番年上の人は永原マキノ先生その人だった。しかも２番目に年上の患者の２倍を優に超える年齢が出てきたんだから」
「その後、永原先生は戦国時代から現代までの人生を語ってくれたよ。俺には、作り話には聞こえなかったね」
「そうだったんですか……」
「ああ、これが俺と永原先生の関係だ。その後、俺はＴＳ病の研究をすることにした。永原先生には協力をよく要請しているが、あまりいい返事はもらえてないな」
「確かにあの時もそんな感じでしたね」
「……とは言え、俺と永原先生の関係は別に何も悪くない。永原先生は昔の人とあって義理堅い人だ。今でも勤務地が近いからふとしたことで会うことがあるからな……さ、これが俺の話せる全部だ。他に聞いておきたいことはあるかね？」

「いえ特には……」
「そうか、じゃあ俺はもう少しクラゲを見ていくから、ここで解散としようか」
「はい」
「分かった」
　あたしと浩介くんが蓬莱教授に挨拶し、次のエリアに行く。
「しかし、蓬莱教授もこんな所にいるとはなあ」
　浩介くんが言う。
「うん、でもあの時はお世話になったからねえ」
「だねえ。永原先生の年齢証明がなければ教頭先生の意見が通ってたかもしれないしな」
「うん」
　あたしたちは再び腕を絡め、「浅い海と河」のコーナーにやってきた。
「ふむ、ここは主にハゼのコーナーかな？」
「ハゼの分類って色々あるんだねえ……あ、でも他にも海や川の魚が沢山あるよ」
「お、大陸棚の魚じゃないか。これは理科の授業でもやったな！」
　このあたりはまだ太陽光がよく届く海の浅部だという。
　エビやカニ、他にもイワシとかシラスの展示もある。

　続いてやってきたのが「浅い深海」のコーナーだ。
　今までとは打って変わって、館内はやや薄暗い。あたしは心なしか、浩介くんに絡める腕をぎゅっと強くする。
　また胸が当たる。今度は反射的な反応はない。よかった。
「浅い深海って、何か矛盾してないか？」
　浩介くんが矛盾していると話す。
「うーん、深海と言っても水深に幅があるんでしょ。深い深海って言うと……例えばマリアナ海溝とか」
「なるほど……するとここは深海魚のコーナーなのかなあ？」

「そうみたいだね。へえー、水深２００メートル以上で太陽光が届かなくなっちゃうのね」
最初の展示にはこんなことが書いてある。
曰く、「地球の海の平均水深は富士山の標高とほぼ同じである。海面の殆どが『深海』に属していて、また深海探査は水圧の問題もあり容易ではない」だそうだ。
どうやらここでは、水深１０００メートル以下の比較的「浅い深海」をテーマに、生態系を展示していると見て良いだろう。
このくらいの生命の場合は、人間の目には見えなくても、僅かながら日光が届いているらしく、目が退化しているというわけではないようだ。
「身近な魚でも、結構深海に住んでいることもあるんだね」
「うん、そうみたい」
とはいえ、徐々に知らない名前の魚が増えている。
だんだん深く潜るにつれ、未知の魚も増える。それに連れて、実物の展示も減っていくのだろうか？
それは次のコーナーで分かる。
さっきよりも暗い館内。今度は「富士山より深い海」をテーマにしている。
いよいよ「深い深海」ということで、深海魚の殆どは未展示だ。
「深海魚は展示できないのかなあ」
浩介くんが残念そうだ。
「水圧の再現とか難しいんじゃないかな？　あ、見てよこれ」
そこに展示されていたのは沈没船の写真、確かこれって……
「お、林間学校の映画でやってたやつか」
「そうだねえ。映画の冒頭だっけ？　そこにもあったよね」
１００年以上前に沈没した豪華客船をテーマにした映画。
「そういえば、あの映画の時、永原先生と話していたけど、何を話していたんだ？」
「ああ、うん。あたしたちは救命ボートに乗れたかっていう話」
「？　そりゃあ乗れるだろ。優子ちゃん女の子なんだから」

「ふふっ、ありがとうね……実はそれだけじゃなくて――」
あたしは浩介くんに話した。
今は男性差別とされているが、当時はこれが女性差別だとされたこと。
男と女の両方を経験し、その壁を埋めることなど到底不可能であることを、身をもって思い知ったこと。
だから、昨今叫ばれている「男女は同じ」などという価値観には到底同意できないこと。
ＴＳ病として長生きしている人の大半が、それに同意していること。
「なるほどねえ……」
「どう思う？」
「確かに、優子ちゃんの変わりっぷりを見れば説得力ある話だよ」
ふと話していると、別のものが目に入る。
「ところで、こっちは深海潜水艇みたいだね」
よく見ると「深海潜水艇」とある。
「お、本当だ。でも結構古いんだな」
「まあそりゃあ現役の深海調査に使うものはここには展示しないでしょ」
身もふたもないことを言ってしまう。
浩介くんと二人で中に入ってみる。
「これで日光の届かない深海に潜るのか」
コックピットにはよく分からない機材が多く並んでいる。
「ライトを照らさないと危ないよねえ」
「でもよ、そこまでして深海に潜る理由って何があるんだろ？」
「あ、こんなことが書いてあるよ」
そこには、「船が沈没したり、飛行機が海に墜落した際、事故調査と再発防止のためにも、深海の調査能力が必要になる。もし深海での調査能力がなければ、航空・船舶の事故の多くが調査不能になり、同じ事故が繰り返されたかもしれない。また深海の生態系を知ることで、強力な素材を作ることにもつながり、私達の生活にも役に立つので

す」とある。
　そういえば、林間学校で見た航空事故の番組でも、「４０００メートル級の大西洋の海底から機体の残骸を探す」というテーマがあったな。まあ、事故原因はお粗末だったけど。
「いずれにしても、深海探査も俺達の生活に欠かせないんだなあ」
「やっぱり研究に予算がつくのは何かしらの『意味』があるからなんだね。桂子ちゃんも宇宙開発について似たようなこと言ってたよ」
「へえ、何て？」
「宇宙開発の意義というのは、究極的には将来的に太陽系がダメになるから、別の恒星系に移住しなきゃいけないんだって。そのための研究なんだって」
「なるほどねえ……それは説得力がある」

　さて、退役した深海潜水艇の展示コーナーの隣には「深海の再現」と書いてある。
　どうやらこの深海潜水艇や、現役で稼働中の深海潜水艇の調査結果を元に、「水深４０００メートルの海」についての再現で、「深海潜水艇の光を当てた」と言う想定になっている。
「ふむふむ、こうなっているんだなあ……」
　もちろん植物は育たないが、意外にも動物の多様性は多く、また海溝の底でも生き物がいるというのが驚きだ。
　最後にやってきたのが、「マリアナ海溝」にある地球の海の最深部である「チャレンジャー海淵」の展示だ。
　海溝に限らず、深海の大半が未踏であるといい、訪問だけでも困難を極めるそうだ。
　こうして、水族館の展示は一旦深海の最深部まで来たことになる。
「ふう、でも水族館はこれだけじゃないよね？」
　その証拠に展示はまだ続いている。
　浩介くんと部屋を出ると、館内は一気に明るくなり、休憩所になっていた。
　扉の向こうは海に面している。

「そうだな、ペンギンとかアザラシとかイルカとかそう言う展示もあるんじゃないかな？」
「だねえ。ここまではどちらかと言うと『博物館』って感じだったけど」
　知識欲のある人にはいいけど、水族館のエンターテインメントを楽しみたい人にはちょっと不親切だ。
　あたしにはお父さん譲りの知識欲があるからいいけど。
「とりあえず、あそこの海に面している部分を見てみようか」
「そうだね」
　あたしたちはドアを開け、海を一望できる場所に来た。
　下を見ると海水浴客たちが海で遊んでいた。
「あ、ここの前来たところだね」
「うん、そうみたい……わっわっ……！」
　少し強い風が吹いてスカートがなびく。まだ大丈夫だけどちょっとスカートを抑える。
「お、優子ちゃんその仕草かわいいな！」
「も、もう！」
「女の子らしいよねえ」
　ストレートに面と向かってかわいいと言われるとやっぱり顔が赤くなる。
　反射的に絡めていた腕も離してスカートに集中する。
「まあ高いところだし、海風も強いよなここ。中に戻るか？」
「う、うん……」
　中でも休めるみたいだし。
「お、レストランもあるのか」
「そうみたいだね。あ、イルカショーの時間もあるよ」
「うーん、でも1時間後か……」
　浩介くんが唸る。
「そうだ、ここで食事にしようよ」
「そうだな」
　というわけで、あたしと浩介くんは水族館の食事コーナーで食事を

することにした。

蓬莱教授の予言と水族館ショー

水族館の食事というと海産物かと思ったが、あるのは普通に「カレー」とか「うどん」「ラーメン」「そば」と言ったものだ。
あ、でも鯨肉カレーなんて言うのもあるんだ。
「何にする？」
「うーん、鯨肉カレー何てどうだろう？」
あたしが水族館らしいメニューということで、これを提案する。
「でもかなり高いよ」
「うーん、でもせっかく水族館に来たんだし……それに限定品だから早めに食べないと」
「そうだなあ……俺もちょっとバイト代持て余し気味だし。今日くらいいいか」
「まあ、ずっとこんなんじゃまずいけどね」
あたしも忠告する。お金は本当にあっという間に無くなるものだし。
浩介くんが「鯨肉カレー」のお代を出す。
あたしの分と合わせる。
「すいません、鯨肉カレー２つ」
「分かりました。ちょうどですね。ありがとうございます。こちらの番号札でお待ち下さい」
食堂の担当者に渡し、空いているテーブルを見つけて空のトレイを置き、暫し待つ。
別の人の料理が作られ、番号札が呼ばれる。
「うーん、４つ先かあ」
「結構掛かるかな」
しかし、来るのは意外と早い。「鯨肉カレー」を注文する人はそこまで多くなく、あたしたちの分ももうすぐになってきた。
「俺はここで取ってくるから優子ちゃんは待っててくれ」
「うん」
番号で呼ばれたら、浩介くんが取りに行く。

程なくして2つのカレーを持ってきた浩介くんが汲んできた水とともに戻ってくる。
「ありがとう浩介くん、気が利くね」
「えへへ。それほどでも……」
ともあれ、備え付けのスプーンを取って「いただきます」し、鯨肉を一口食べる。
「うん、おいしいね」
「ああ」
鯨肉なんかまずいなんて言う言動をネットでよく見ていたが、あたしや浩介くんの口は違うみたいだ。まあまずいという言動もすぐ反論されていたけど。
会話もなく、黙々と食べる。同じ食べ物なので、あーんしても意味が無い……って何を考えてるのよ……！
同じ分量だから浩介くんが食べるのが早い。
浩介くんは「俺はまた海を眺めているから食べ終わったら来てくれ」と言ってくれる。そのまま座っていると急かすようになってしまうという考えからだろう。
浩介くんが先に返却ＢＯＸへと足を運んでいく。
あたしは残りをマイペースに食べ続ける。そう言えば、水族館に来てから一人になったのは初めてだ。
食べ終わって周囲をゆっくり見回す。
家族連れ、カップルと言ったメンツだけではなく、単独行動している人も多い。この水族館、穴場であんまり人が居ないと言いつつも、やっぱり何だかんだで昼になると沢山の人で賑わうようだ。
返却ＢＯＸへと向かう途中、ふと食堂のテーブルを見ると、一人の男性が食べ終わっている。蓬莱教授だ。
「あ、蓬莱さん……」
「おや、彼氏はどうしたんだね？」
「先に外に出て待っています」
「そうかい、引き止めて悪かったね」
「ああいえ、話しかけたのあたしなので……」

「うむ、しかし君……将来佐和山大学で、偉大なことを成し遂げるかもしれないな」
「え!? どういう――」
蓬莱教授から意味深なことを言われる。偉大なこと？
「ああいや悪い。ただ何となくそんな気がしただけだ。だがこれだけは言っておく。大学は偏差値が全てではないということだ、俺に教えてほしいという目的で、佐和山大学を受けてくれる学生もいるんだ」
「……ノーベル賞を取ったのに、なぜ佐和山大学に？」
普通なら全国トップの国立大学から引く手あまたのはず。
「ああ、頭の固い学会連中の嫌がらせだよ。何問題ない。奴らもいずれ、俺にひれ伏す時が来るさ」
蓬莱教授が不穏な言葉を述べると共に、立ち上がって返却ＢＯＸへ
「そ、そうですか……」
「さ、彼氏が待っている。早く行くといい」
二人で返却ＢＯＸを返し終わると、蓬莱教授が別の方向へ向かう。
あたしはもう一度外に出る。今は海風もあまり吹いてない。
「浩介くん」
「あ、終わったか。じゃあ行こうか」
ほんの数分なのに、何だかすごく寂しい気分。
「えへへ、ちょっと寂しかった」
あたしは今まで以上に勢い良く腕を絡める。もちろん意図的に胸を当てているけど、気分は悪くならない。浩介くんもビクッとなるけど何も言ってこない。
どうやら、少しずつ段階を踏んで、トラウマを解消していけばいいみたいだ。
「おまっ、数分だろ？」
「うーん確かに……なんでだろう……デート中だからかな？」
自然と笑顔になる。楽しい時間だ。
「ふふっ、さあ続きを見ようか」
「おうっ！」
次に来たのはペンギンのコーナー、子供の密度が一気に高くなる。

「やっぱ子供が多いなあ」
　結構騒いでる子もいるし。
「やっぱり深海とか海の中とかより、こういうのが人気なのかな？」
「うむ、このガラス……冷たっ!!」
　ガラスの向こうは空調が寒くなっているらしく、浩介くんが手を触れるとかなりヒンヤリとしたようだ。
「どれ……わおっ！」
　あたしも触れてみたが確かに冷たい。でも大げさだなあとも思った。
「浩介くん大げさだね」
「優子ちゃんの手が俺より冷えているんだよ」
「うーんそうだよね……女の子になって冷えたなあって感じること多いのよ」
　あたしが偽ざる本音を言う。
「ああ、やっぱり？　女の人って冷え性とか大変でしょ」
「うんうん、女の子になってはじめてお風呂入った時はびっくりしちゃったよ」
　今は真夏だから、手先が冷える感覚はさすがにしないけど、それでも他の体の部分が熱い時に手を付けると冷たく感じることはある。

「わーペンギンだアザラシだー」
　子供が騒いでいる。子供と言ってもかなり前列を占拠していてペンギンに負けないくらい子供が多い。
「へえ、昔アザラシが多摩川に迷い込んだんだねー」
　展示にそんなことが書いてある。
「他にも関東関西、日本の川に北のアザラシが迷い込むってあるんだな……」
「あれはたいてい行方不明になるんだね」
　あたしたちは生まれてはいるものの、全く物心がついていない時期の話だ。
「でも報道されてないだけで、最近現れたのもあったんだねえ」

こちらのアザラシはちゃんと飼育されているもの。子供たちの声が大きい。
でも心なしか、アザラシの数が少ないような……
「浩介くん、次に行こうか……」
「そうだな、イルカショーもあるしな」
次にやってきたのがイルカとシャチのコーナー。
左の水槽にイルカたちが、右の水槽にはシャチが展示されている。
こちらもやはり子供に人気、だけどあたしたちが目を引いたのは動物そのものよりも次の一文だ。

クジラとイルカの境界は明確ではなく、同じような生き物を身体の大きさで分けている。

「へえ、クジラとイルカって曖昧だったんだねえ」
「そうなんだねえ。鯨類っていうのか」
また、展示コーナーには捕鯨文化も記されていて、そこでは欧米諸国を欺瞞だと批判していた。
特に暴力行為を繰り返すとされている団体に関しては、危険物を投げ込む暴力行為の写真とともにかなり強烈な言葉で批判が書かれてある。
「これって大丈夫なのかなあ？」
「うーん、鯨肉カレー何て提供する場所だしあんまり気にしないほうがいいんじゃないかな」
「確かに水族館の自由ではあるけど……」
「そう言えば、一時期インターネットでこの水族館を応援する書き込みが拡散されてたっけ？　もしかしてこれが犯人なのかな？」
「あー！　あったなそれ！　結局展示継続になってインターネットでは万雷の拍手だったな！」
実際この騒動以降、この水族館は訪問客を増やしているらしい。更に「好評」を理由に展示を強化したらしく、まさに「騒いだことで逆効果になった」といえるだろう。

ちなみに、海水浴場もそれに引きずられて好調だとかネットニュースでやっていたな。なるほど、前半の部分はあまり人は居ないけど、ここは結構人がいるのか。

一方でシャチのコーナー。シャチはとても強い生き物らしく、サメやクジラでさえシャチは天敵だと書いてある。

「結構親しいと思ったらじゃれたりもするらしいけど、それでも危険らしいね」

「イルカと違ってシャチのショーは珍しいってさー」

「結構海外では事故も多いらしいし、シャチのイメージが変わりそう……」

女性二人組がそんな話をしている。

結構この水族館、夢の国というよりは現実の国だ。

「さて、そろそろショーが始まるから席を取ろうか」

順路によると、次がショーの開催所らしい。

あたしは浩介くんと腕を絡めながら次の部屋に進む。

来てみると席はまだまばらだった。一部でガヤガヤと話し声が聞こえるくらいだ。

「浩介くん、あそこにスケジュールがあるよ」

ショーはそこまで長いものではなく、アザラシとイルカのショーだ。

時間が近付くにつれ、他の客も増えていく。あたしたちはカップルで手を繋いでいるのか、避けられていて隣りに座る人はいない。

「ここ開いてるかな？」

「ああはい……って蓬莱教授じゃないですか！」

隣りに座ったのは蓬莱教授だった。

「ああ、すまない。デートを邪魔するつもりはないんだが、他の席が空いてなくてね。すまないね、デートの雰囲気を壊してしまって」

「ああいや、そうじゃないんですけど」
あたしがフォローする。
実際、蓬莱教授に最初に声をかけたのはあたしたちだし、昼食の時だってそうだ。見て見ぬふりをしようと思えば出来たものだ。
「ええ、元はと言えば声をかけたのは俺達からですから」
「ふぅ……そう言ってもらえると嬉しいよ。世の中には自分から声をかけておきながら勝手にキレる愚か者のなんと多いことか」
「あはは……」
実際信じられないがいるんだよなあ……
「まあともあれ、今はイルカのショーを楽しもうじゃないか」
「ええ」
「そうだ、な」
あたしと浩介くんが話し、それ以降会話は続かない。
浩介くんに強く腕を絡める。胸が当たる。
「あ、あの優子ちゃん！」
「な、何？」
「ちょっと当てすぎてない？　ショーを見ようよ」
浩介くんが照れ隠しにショーに集中したいと言ってくる。
「あ、うん……あたしに腕絡まれるの嫌？」
「ああいや、もちろんそうじゃないけど……」
浩介くんがあたふたする。それを聞いてあたしは腕を緩め、離す。
「うん、分かってるよ。あたしも子供じゃないから」
「ああ、うん……ありがとう」
ちゃんと引く時に引けないと、関係は悪化してしまう。
心が女の子になって、男の子の気持ちを分かりたいという感情が強くなった。
おそらく他の女の子も、好きな男の子が出来たらそうなんじゃないかと思う。だから、「知識」を持つあたしにとって、そこはアドバンテージ。
かつて龍香ちゃんに彼氏のデートの服装でアドバイスした時も、そうした「知識」は役に立った。

知識を忘れれば、もっと女の子らしくなるかもしれないが、それはあまりいいこととも思えない。
桂子ちゃんが言うように「男に好かれなくなったらダメ」だということだ。
大丈夫、永原先生だって「男の知識」を忘れてないんだし、少なくとも後４００年は大丈夫だ。
４００年後かあ……まあ今はそんなこと考えてもしょうがないよね。
そうこうしているうちに水槽の向こう側の台に立った司会者がマイクを持つ。
「皆さん、大変長らくおまたせいたしました。只今より２０１７年８月１７日のイルカ・アザラシショーを始めます！」
イエーイ!!!
周囲から拍手喝采が起きる。
ともあれ最初に出てきたのがアザラシだ。
「さあ、アザラシのバランス感覚をご覧ください！」
飼育員さんがボールを渡すとアザラシがバランス感覚を持ってボールを維持する。
「おおお!!!」
観衆の歓声が上がる。確かにあれは人間でも難しい。
そして餌が水槽の中に投げ込まれアザラシがそれを追う。
更に今度はラッコの登場だ。
「あれ？　ラッコなんていたっけ？」
あたしが疑問を呈する。
「この先に展示されているんじゃないか？」
「そうだ、この先にラッコはいるぞ」
浩介くんが推測してくれるが、蓬莱教授がネタバレをする。
「そう、ありがとう」
あらかじめお礼をいうことで悪い空気にならないようにする。
そんな会話があるとは露知らずにショーは続いていく。
ラッコと言えば例の貝殻を打ち付けるのが有名だが、このショーで

もやっぱりそれを見せてくれるらしく、飼育員さんが貝殻と石を起き、ラッコにそっちに向くように促す。
するとどうだろう、お腹が空いていたのかラッコは海に潜って例の貝殻を石で割る仕草をし始める。
歓声と拍手が沸き起こる。あたしも浩介くんも拍手しているが、隣の蓬莱教授は黙って静かに見ているだけだった。
さて、ショーごとには結構準備に時間がかかるため、その合間に司会の人も場のトークで和ませなきゃいけない。
海の生態系とかそう言う話をしているが、子供はつまらなさそうに見ている。
続いてやってきたのが本日の真打ちのイルカ。
まず奥の水門が開き、２頭のイルカが入ってくる。
イルカたちはまず飼育員さんのもとに乗り上げてくる。
飼育員さんが合図を送ると、イルカが再び水の中に入り、輪の中をくぐる。
「わあああああーーーーーー!!!!」
歓声と拍手が一際大きく沸き起こり、飼育員さんはイルカに餌を与える。
なるほど、こうすれば餌がもらえると習性で分からせるわけだな。

「みなさんありがとうございましたー！　引き続き当水族館の展示をお楽しみください！」
そう言うとみんなバラけていく。
「さ、今度こそ本当にお別れだ。私はここからまっすぐ家に帰る。この後にも幾つか展示があるからそれを見ていれば、もう偶然会うこともないだろう。さらばだ」
「うん」
「蓬莱教授、また機会があれば会いましょう」
「うむ、そうしたいな」
蓬莱教授が去っていく。多くの観客が席を離れる。
混雑を避けるため、あたしたちはもう少し時間を潰す。

「さっきのショーどうだった？」
「うん、水族館にありがちだったけど、やっぱり王道はいいよな」
「うんうん」
そんな話をしながら、あたしたちは次の部屋へ。
次の部屋はラッコのコーナー、また向かいにはなぜか植物プランクトン・動物プランクトンのコーナーもある。
「海の微生物が生態系を維持する」などと仰々しく書かれているが、実際その通りだ。
クジラでさえ、プランクトンを食べる種もいるそうだし。そういえばさっき見ていたベニクラゲも小さかったよなあ。
この展示を見ると、生命の歴史は人間の目には見えない微生物の時代が大半だとも言うし、本当に神秘だ。
隣はラッコが展示されている。さっきのショーとは別の個体もいる。みんなお昼寝中だ。

次のコーナーはマグロのコーナーだ。
一面広い水槽に、マグロの集団が猛スピードで泳いでいる。
「うわーすごい」
「でもマグロだけかあ……」
「他の魚を入れるとよくないのかなあ……」
「あ、でもマグロが何か食べてるよ」
どうやら上から餌を投げる仕組みらしい。
あたしたちはここで7分ほど滞在した。

「この次が出口かな？」
「うん、そうみたいだね」
当日に限り再入場可能ということで、スタンプを押して貰う。
時間を見ると正味合わせて3時間ほど滞在したことになる。
「これからどうしようか？」
「うーん、水着は持ってきてないんだよねえ……」
「まあ、この前行ったばかりだしなあ……」

この水族館の入場券を持っていると、入場料が半額になるみたいだけど。
「まあ水着無しで傍観してても仕方ないしなあ」
「うんうん」
「じゃあ……ちょっと早いけど帰るか」
「うん、そうだね」
今日は8月17日、夏休みは8月31日まで残りは14日、ちょうど2週間だ。
「デートは週に一回にしようか」
「そうだね。あんまり行き過ぎても困るし」
「新学期からは毎日のように会えるわけだし」
「そ、そうだな……」
あたしたちは、駅に戻る。そして再び電車に乗り込む。
腕を絡めて胸を当てる。うん、もう完全に平気。
浩介くんは相変わらずあたふたしているけど、あたしの中では、今回の水族館デートは2つのことを得られた。
一つは海の知識、そしてもう一つは、また一歩、女の子に近付けたこと。
名残惜しく浩介くんと分かれ、家に戻る。
楽しい時間もいつか終わる。でもあたしに、終わりはあるのだろうか？
蓬莱教授の言葉が引っかかる。
「いつか俺を頼ることになるだろう。君はいつか偉大なことをするのではないか？」
あれは一体どういうことなのか、あの時は何となく感付いていた気もしたのに、今ではどういう意味なのか、思い出すこともできなかった。

# 夏休み明け

ピピピピピッ……ピピピピピッ……

「んんーっ!!!」

今日は9月1日。夏休みが終わって最初の登校日になる。

夏休み中も、桂子ちゃんとちょくちょく天文部に顔を出していたので、制服自体はずっと着ていないということはない。

浩介くんとのデートも、水族館以降何度か重ねたが、資金的な節約もあって、簡素なものが増えた。

あたしの肩こりがひどいので、家電屋さんでマッサージ器を楽しむデートなんて言う特殊な変化球もあった。

でも今気になるのが……

「あーあ、分かってたけど夏休み終わって早々女の子の日かぁ……」

凄く身体が重たい。憂鬱だ。

前日にナプキンをつけておいてよかった。寝ている間にナプキンに血だまりができてた。

これは所定の場所に捨てないと。

重い身体を引きずりながらパジャマを脱いで生理用パンツを取り出す。

そこの近くにあったナプキンを袋から取り出す。

先に制服を着てから腹痛に耐えつつトイレの中へ。古い生理用パンツを脱いで、使用済みナプキンをトイレットペーパーで包んでゴミ箱に入れる。

自室に捨てたり、トイレットペーパーに包まないで捨てると臭いがひどくなると母さんに言われたのでできた習慣だ。

とにかく不潔になるのは男以上に致命的だ。女の子のかわいさは清潔感に支えられているところもあるのだ。

ともあれ重い身体を引きずりながらリビングに出る。

「おはよー」

「おはよう優子、元気ないわね」

母さんが心配そうに言う
「うん……」
「女の子の日でしょ？」
「ふぇ!?　な、何で――」
「娘の生理周期も大体わかってきたからね」
変態だー、変態がいるよお……
「まあいいわ。今日は夏休み明けでしょ、９月末にはテストもあるんだから勉強しないと」
「う、うん……」
新学期早々なのは嫌だけど、試験と重なるよりはマシかなあ……
「さ、とにかく朝ご飯食べなさい」
母さんが朝ご飯を持ってきてくれる。
朝ごはんは相変わらず昨日の残りが多いけど、ほうれん草をはじめとする緑黄色野菜が中心。
正直ありがたい。生理の日はどうにも食欲が増してしまう上に、ほうれん草と人参を特に食べたくなってしまうからだ。
「ふふん、優子の生理周期を知るのには、こういう意味もあるのよ」
「そ、そうなんだ……あはは……」
確かにありがたいと言えばありがたい。まあ毎日一緒に暮らしているお母さんだし嫌でも生理周期は知られちゃうかな……

「ごちそうさまでした」
「お粗末様でした。優子、辛いのはわかっているけど早めに出ないと遅刻しちゃうわよ」
「う、うん。分かってるって」
学校に行くために生理になったのはこれで2回目。
幸い明日明後日は土日だから月曜日に生理が来た1回目よりはマシだ。
こんな状態では今日の体育は１００％見学になる。だから体操着は持っていかなくてもいいだろう。
バッグを肩にかけ、重い身体を引きずりながら駅へと歩く。

「おはよーって優子ちゃん大丈夫!?」
ホームで桂子ちゃんが話しかけてくる。
「あー大丈夫じゃないよ桂子ちゃん……」
「あ……うん。夏休み明け大変だね」
桂子ちゃんが察してくれる。女子同士ありがたい。
「あはは……」
会話もとぎれとぎれ、でも桂子ちゃんもあまり話しかけてこない。
この辺りは女の子の配慮もある。

「それじゃあ教室で、ね」
「うん……」
桂子ちゃんが先に歩く。あたしは重い身体で、道行く他の生徒に抜かされながら歩いていく。
今でもあたしが通りかかると、男子の噂になる。
でも情報が行き届いていないのか、あたしに好きな男の子ができたことはほとんど知られていない。
下駄箱から靴を履き替え、教室へ。

ガラガラガラ

「おはよー」
「お、優子おはよう！　大丈夫か？　９月早々元気ねえな！」
恵美ちゃんが声をかけてくれる。
「ああ……うん……ちょっとお腹が、ね……」
「ああ、そうか。うん、すまん……」
これだけで何を示すか女子には分かる。
教室を見渡すと、浩介くんを発見する。気分を悪そうにしているあたしを心配そうな顔で見つめてくれる。
ロッカーから1時間目の教材を出し、椅子に座る。夏休みの宿題のために教材の多くを家に持ち帰っていたため、宿題の終わった教科か

ら、夏休みの天文部の活動時に少しずつ入れ直しておいて正解だった。
他のクラスメイト達も次々入ってくる。
最後に永原先生が入ってくる。
「はーいみなさん、9月になりました。9月は特に全校集会はありませんので去年と同じく今日から早速授業を開始します……石山さーん、大丈夫ですか!?」
「だ、大丈夫じゃないです先生……」
意地を張るメリットは何もないのであっさりと言う。実際お腹痛いしめまいがするし。
「あらあら、保健室で休んでもいいのよ」
「は、はい……」
元気なく答える。男子の一人が何か言いたそうだが、虎姫ちゃんが「ギロッ」と睨みつけて黙らせている。
ホームルームは続く。あたしは机に突っ伏しながら聞き流す。
永原先生に体育の見学の旨を話す。1時間目までの休み時間にポーチから痛み止めを取り出して、水飲み場に行く。
痛み止めを口に含み水を飲む。これで少しは効いてくれるといいんだけど、あまり期待しすぎるのも良くない。
ともあれ生理の度に保健室で寝ていたら成績にも影響しかねない。
あたしはそう思い、さすがに体育は見学だけど1時間目からともあれ授業を受けることにする。
「なあ、優子ちゃん大丈夫なのか?」
浩介くんが心配そうに声をかけてくれる。
「あー、浩介くん、心配してくれてありがとう。でも大丈夫じゃないよ」
「大丈夫じゃないなら休んだ方がいいんじゃないか?」
「でもそういうわけにもいかないのよ。『これ』が来るたびに休んでた

ら成績も悪くなるし……」
「そうなんだ、女子って大変だな……」
「あはは、でも男だって……いや男の子のほうが大変だと思うよ……」
あたしが言う。
「そ、そうなのか、優子ちゃんが言うと説得力あるなあ……」
「あ、あはははは……」
嫌でも昔のことを思い出してしまう。でも、過去は変えられない。
今は女の子だけど、昔は男の子だったことは。
1時間目が始まる。9月1日ということで、皆まだ夏休み気分が抜けていない。
でも、授業は秩序良く進む。授業中のおしゃべりとかもあたしが優子になったばかりの頃に比べると減少傾向だ。
でもあたしはほとんどノートも取れず、息を荒くしながら、苦しみながら授業を受けている。
先生からも心配されて、やっぱり「大丈夫じゃない」と答える。
先生の「保健室行ったら?」という言葉も無視していたものの、最終的に1時間目の終わりの方で「保健室に行きなさい」という命令に変わった。
命令なら仕方ない。あたしは立ち上がり、ふらふらと歩く。クラスは騒然とする。
するともう一人立ち上がる。
「先生、俺が連れていきます」
浩介くんの声がする。
「え? 篠原、そういうのは女子が――」
「あ、あの……浩介くんでいいですから……」
クラスがまた騒然とする。
あ、しまった。クラスの中ではまだ名前呼びになったの知ってるの少なかったんだった。
「おい、あの石山、今篠原のこと」
「そういえば石山に彼氏できたとかいう噂あったけどよ……」

「くそう！　ちくしょう！」
「お前悔しいのかよ！」
「だってよ、昔のことはともかくあんなかわいい子だったのに……」
「ま、あきらめるしかねえぜ。林間学校の時、篠原の奴、体張って石山を守ったって話だぜ」
「あーあ、実行委員のくじ引ければあなあ……」

男子が話し込んでいる。浩介くんが肩を貸してくれて教室を出ていく。
「はぁ……はぁ……」
「優子ちゃん、大丈夫か？　歩ける？」
「ちょっときついかも……」
浩介くんに介護されながら、無人の廊下を歩いていく。今日は前回以前の生理よりも重い気がする。
「優子ちゃん、あの……」
「うん？」
「ちょっと止まってくれるか？」
「うん」
言われるがままに立ち止まる。
「ちょっとひざを曲げてくれる？」
「んっ……」
何するつもりなんだろう？

「それ……よっと！」
「わわっ！」
浩介くんがしゃがんだかと思えば、ひざの関節を腕に絡められ、横に倒された格好で持ち上げられる。
いわゆる「お姫様抱っこ」の状態。浩介くんの顔がとても近い。
決して軽いというわけではないあたしの身体をひょいと守るように持ち上げている。
ドキドキドキドキ

キスしようと思えばキスできるくらいに顔と顔が近づく。
「じゃあ行くぞ」
「あ、あの浩介くん……」
「ん？　どうした？」
「お姫様抱っこは嬉しいんだけど……」
「けど？」
「ス、スカート短いから……パンツ見えちゃうよお……」
重力に従い、スカートが垂れ下がってる。横から見たら丸見えだ。
「あ、で、でも……」
「浩介くんに見られるのが一番恥ずかしいけど……浩介くん以外に見せたくない！」
「大丈夫だよ、保健室までは短いし、身体壊すよりはマシだよ！」
浩介くんが自己主張する。
うん、今はちょっと甘えちゃお。
「う、うん分かった。でもちょっと角度変えてくれる？」
あたしは手でスカートを抑えて見えないようにできるように、膝と脚の角度を調整させる。
「うん、これでいいよ、じゃあ……保健室までお願い」
「おう！」
浩介くんが黙ってあたしを運んでくれる。
生理で体が重いためか、反射的な嫌悪反応もなく、浩介くんの近い顔にドギマギしてしまう。
「はぁ……はぁ……」
恋慕と生理でドロドロになった体内の反応で、あたしの息はますます荒くなる。
浩介くんはそんなことを知らず、ゆっくりと丁寧にあたしを運んでくれる。
ふと浩介くんを見る、時折視線が真下に来る。
そこはあたしの胸。水着のときのようではないけど、制服の上からでもはっきりと分かる巨大な果実に目が離せなくなっているのだろう。

でも、そんなことは、浩介くんはおくびにも出さない。
「大丈夫か、頑張れ、もうすぐだ」
浩介くんはあたしを心配する言葉を言う。それがたまらなく嬉しい。
身体が揺れないようにゆっくり、しかし歩幅を大きくすることで早く保健室に着くように配慮してくれる。
おんぶの時よりもずっと重く感じるはずなのに、浩介くんは涼しい顔で一歩一歩を踏みしめていく。
ああ、このまま時間が止まっちゃえばいいのに。
でも、そんなことはなくて、あたしたちは保健室の前まで来る。
ガララララッ……
浩介くんが器用に指と脚を使ってドアを開ける。
「すみませーん」
「はーい！」
保健の先生が立ち上がる。
「ってどうしたの!?」
お姫様抱っこしている様子に驚いている。
あたしもちょっと恥ずかしく、抑えていたスカートを更に強く抑える。
「あ、あの……優子ちゃんの気分が悪くて！　お腹が痛いみたいで！」
「それでここまで抱っこしていったのねえ……とりあえずこっちを使ってください」
保健の先生がカーテンの一つを開ける。
浩介くんが歩き、あたしをそこに寝かせ、優しく布団をかけてくる。
キーンコーンカーンコーンと、ちょうど休み時間のチャイムが鳴る。
「じゃあ俺行くから、ゆっくり休むんだぞ」
「う、うん……」
浩介くんが去り、カーテンが閉められる。
あたしは思わず、「お願い！　行かないで」と言いそうになり、ぐっと堪える。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
全然落ち着かない。
浩介くんのお姫様抱っこ。弱い女の子を守る強い男の子。
また一つ、固い門が破られた感覚を受ける。
浩介くん、そういえば一瞬しゃがんでたけど……もしかしてパンツ見たのかな？
あうう……林間学校の時は偶然だったけど、意図的に見られたとしたら……
って、落ち着かないと……今はゆっくり寝て、気分を落ち着かせないと、せっかく浩介くんが気を配ってくれたんだから。
でも、心臓のドキドキが収まらない。
お姫様抱っこ……でも反射的な嫌悪感がなかった。
もしかして生理のおかげ？　ううん、仮に違ったとしても、これはもう一歩「女の子」へと近付いた。そう思えばきっと、活路は見えてくるはずだ。
もし本当に浩介くんと触れ合い、キスし、あるいはその先……本能の底から浩介くんを愛することができたら、その時あたしの長い苦労も全て終わる。
本当の意味で、これから幸せな女性として生きていくことが出来るんだ。
目を瞑る。この痛みから逃れるように深く、深く眠っていく……

夢を見た。誰かが語りかけている。
低く、やや野太い声で「お前はそれでいいのか？」「優しい子になれるのか？」「男は何処へ行ったんだ？」と語りかける。
あたしは「あなたは誰？」と逆に質問する。
声の主は怒った。
「質問に質問で返すなバカ野郎！」「そんなことも分からねえのか!?」
夢の中で混乱する。あたしはそれっきり黙り込んでしまった。
声の主の方向は、白い霧に覆われ、見えなかった。

「んーっ……」
ほうれん草と人参、野菜類が食べたい。
「あれ？　どうして保健室に？」
そうだ、浩介くんにお姫様抱っこされたんだ。
ともかく今の時間を見る。後７分で昼休み。そうだ、食堂に一番乗りしよう……
あたしは立ち上がり、カーテンを開け、保健の先生にお礼を言う。
保健の先生から、「お礼なら彼に言いなさい」と言われた。もちろん言わなきゃいけない。
でも今は……とにかく食堂へ行こう。
重い足取りで、少しふらつき気味に食堂へ行く。やっぱり、２回目と３回目の生理の時に比べて、かなり重たい。
そういえば母さんが「重い時と軽い時が来たりする」何て言ってたっけ？
食堂に到着する寸前、鐘がなる。もう少しだけど急ごう。
一番乗りを狙って、後１分ほどで大集団が駆け足で来る。
あたしは用務員さんが食べているのを見かけつつ、食券を買う。
買い終わると、物凄い勢いで駆け足の音が強まる。
身体にちょっとだけ鞭を打ち、食堂のおばちゃんに券を渡す。
「はーい野菜ラーメンね」
夏休み明け、昼食最初のお客さんはあたし。その後、男子の集団が食券を買っていく。

「あ、誰かいるぞ！」
「って、あれ石山先輩じゃねえか！」
「本当だ。でも顔色が悪いぞ」
「何があったんだろう？　それもこんな早く」
「保健室で寝ていたとかか？　でも何で？」
「さあ？」

1年生の集団があたしの噂をする。
あたしが気分悪い理由を察せないふりをしているけど、多分分かっているんだろう。
口に出したら確かに嫌われるからね。
あたしはともあれ、一番最初に食堂を使う。
野菜ラーメンをもらい食べる。
普段は食べる量も少なく、遅いあたしが、このときだけ食欲が旺盛になる。
きっとそれは、エネルギーを取り戻すため。
ラーメンを頼んでいた男子よりも食べ終わるのが早い。
この時のお行儀は、がっつく感じでお世辞にもいいとはいえない。
でもこの時だけは、食欲が勝るのだ。
とは言っても、生理の時の一番重い日の時くらいだし、多分みんなもそれくらいは許してくれるはずだ。あんまりストレスを抱えてしまうと、かえってマイナスだし。
食べ終わり、教室に戻る。
「あ、優子ちゃん。もう大丈夫？」
「ああ、うん……ご飯食べて……少し……良くなったよ」
浩介くんに笑顔で答える。
「そうか、良かった」
まずい、浩介くんの顔を直視できない。
「ゆ、優子ちゃんどうしたの？」
「ああうん、ごめん……浩介くん……かっこよくて……」
「かっかっこ……」

「ヒューヒュー！」
「羨ましいぞこの野郎！」
「いつから射止めたんだ？　このぅ！」
教室の男子たちから煽る声が聞こえる。
あたしは顔がじゅううと赤くなる。
ともあれ、これであたしと浩介くんの関係は、教室中の知られる所

となった。
あたしはＴＳ病の美少女で、しかも過去には乱暴者で悪名高く、改心後は下手な女の子よりも女の子らしいという評判もあって、小谷学園でも１、２を争うほどの有名人だ。
そんなあたしに彼氏ができている。
いや、正式にはまだ友達だけど、人の噂にとってそんなことはどうでもいいだろう。

昼休みが終わり、永原先生が古典の授業をする。思えば何だか懐かしい。
今日は夏休み明け初日ということで、課題の提出や見直しが、どの教科も主だった。
体育の授業は見学し、帰りのホームルームも終わって、あたしは生理の苦しさから逃れようと、制服からパジャマに着替えると、すぐに就寝の床ついた。

# 期末試験

前後期制における９月半ばのことと言えば期末試験対策だ。
月末の試験本番が近付くにつれ部活もなくなり、行われる小テストの数も勢い多くなる。
でも、あたしは去年よりも成績がいいから気分は悪くない。
女の子になったことで、乱暴な性格もなくなり、友達もできてストレスが減ったというのがあたしの自己分析だ。
しかし、驚くべきはそれだけではない。
永原先生によれば、２年２組全体の成績も、他のクラスと比べて顕著に良好になっているという。
優一が男子を怒鳴り、桂子ちゃんと恵美ちゃんが喧嘩していたクラス。
それは少しの犠牲と、多くの救いによって、一つになっている。
ギスギスした雰囲気もなくなれば、クラスの秩序も良くなるということだ。チームスポーツにおける人と人との相性は化学反応、すなわち「ケミストリー」という言葉があるらしいが、それに近い存在かもしれない。
しかし、実は今のあたしには試験ではない別の懸念材料があって……

「ねえねえ優子ちゃん、篠原くんとは何処まで行ったの!?　ねえねえ！」
クラスの女子の一人があたしに話しかけてくる。
「はい、それ私も気になりますよ！」
今度は龍香ちゃんも加わる。
本当に女子は恋愛話が大好きだ。
それは少女漫画を読んであたしも知っていたけど改めて思い知らされた格好だ。
「その……浩介くん優しいのよ……」
「ああ、それこの前の優子さんが気分悪かった時も思いましたよ！」

「あたしが気分悪そうにしてると肩を貸すだけじゃなくて……ぽっ……」
　こうやって恥ずかしいのについ話してしまう。女子の恋話には不思議な魔力がある。そういうのに花を開かせられるようになったのは、あたしの心が以前よりも女の子らしくなっているということ。
　それがとても嬉しいから、こうして話してしまうのかもしれない。
「ほほう、林間学校の時みたいにおんぶしてくれたんですか!?」
「あ、あの……はいっ……」
　本当はお姫様抱っこなんだけど。さすがに恥ずかしくて言えない。
「むむむっ……何か嘘みたいな気もしますが……まあいいでしょう」
　ふう、やっぱり彼氏がいる龍香ちゃんは鋭い。
「そ、そんなことより龍香ちゃんこそ彼氏とどうなの？」
　こういう時は相手に話題のボールを移すといいのだ。
「え!?　私ですか!?　私の彼はですねえ……ますますスケベになってキャー！」
　龍香ちゃんが一人で盛り上がっている。
「うわぁ、河瀬の彼って大胆だねえ！　ねえねえどんななの？」
　もう一人の女子が更に煽る。
「海に行った時はもうそれはお尻触られたりとか……水着の胸の中に手を……って恥ずかしいですよお！」
　龍香ちゃんの彼氏はとてもえっちな人。
　浩介くんだって男の子だもん。多分顔に見せないだけで、心の中では性欲と戦っているはずだ。
「でもさー龍香良くそんなスケベ男と付き合ってるねー」
　騒ぎを聞きつけた桂子ちゃんが乱入してくる。
「だって……私だって……あぁあん」
　龍香ちゃんがぽっと赤くなる。
「もしかして河瀬の方がスケベな感じ？」
「なんかそんな気がするわね……」
「そ、そんなことないですよ！　でもだって……私の彼……凄く上手くて……」

またのろけ話。龍香ちゃんが恋話に絡むと決まって変態な彼氏さんにされていることを思い出してベタ惚れする。
龍香ちゃんは気持ちよさのあまりに何度も気絶することがよくあるそうだ。でも、それは恋人や夫婦生活で確かに重要なことだ。
あれは長続きするんだろうなあと思いつつ、あたしはちょっとだけ憂鬱になる。
あたしだって、浩介くんと……龍香ちゃんがしていること……とまではいかなくても、ちょっとセクハラされるくらいならされてみたいし。
それにそういう相性の良さは付き合う上でも重要だ。
「ん？　どうしたんですか優子さん！」
「ああ、うん。ちょっと龍香ちゃんが羨ましいなって」
「そうですかあ？」
「あ、そうか。優子さん、まだ身体の本能が男のままだったんですね」
「う、うん……」
あたしと浩介くんの関係の噂は、あっという間に学校中に知れ渡ってしまった。
しかし林間学校の時のエピソードまで正確に伝わっていたおかげで、浩介くんも他の男子からの敵意が幾分和らいでいた。
やっぱり、変な理由で惚れたわけではなく、「身体を張って女の子を守ったために惚れられた」という理由なら、納得も出来るのだろう。
とはいえ、夏休みも挟んで「優一」の痕跡もほぼなくなり、記憶も風化しはじめたために、あたしは男子たちからは「小谷学園の爆乳アイドル」となりつつあった。
その矢先での彼氏発覚ということで、小谷学園男子の間ではショックの色が隠せないらしい。
自己中心的だと言っちゃえばそれまでだけど、やっぱり「中身も女の子」と思われるのは気分がいいものだ。
でも今はまだ、浩介くんとは正式な彼氏彼女ではない。あたしの身体的問題を解決できなければ、その先へは進めないのだが、そのこと

を知っている人は未だに少ない。
本当は、龍香ちゃんみたいにお尻や胸を触られても笑って流せるような関係になりたい。
……あ、笑って流せはしないかな。恥ずかしいし。
試験勉強もあって最近はデートも封印だけど、期末試験が終わったらまたデートをすることになるだろう。
小谷学園は帰宅時の立ち寄りも特に何も言われないから（教師たちにも巡回の負担がかかり、学校としても経費が掛かり、生徒としても締め付けられるため全員が損するだけという名目らしい）、色々な所をデートできそうだ。
あ、でも期末試験が終わったら学園祭の準備もあるんだよなあ……
試験勉強をしながら、浩介くんとの今後を考え、9月の日々は過ぎていく。期末試験が終わる頃には、制服の夏服とは一旦お別れになる。

そして期末試験の1日目が来た。
さすがに期末試験ということで、小谷学園も神妙なムードになる。
最初は小野先生の数学から。小谷学園の水準だと、今年の終わりには高校の過程はほぼすべて終わらせて、来年は受験が主になるそうだ。
受験かあ……期末試験が終わればこの学園生活も折り返し地点。そろそろ考えないといけないよなあ……
でも、小谷学園に入った時は、まさか自分が美少女になって、更に女子の制服を着るようになり、その上心まで女の子らしくなって、好きな男の子まで出来るなんて考えにも及ばなかった。
ともあれ、頑張って期末試験を乗り切ろう。
「あ、優子ちゃん、この問題分かる？」
「ああうん、ここはね――」
恋の話題がほとんどだった女子たちも、期末試験が近付くにつれ話題は勉強となっていた。
あたしは成績が良く、結構他の女子からも頼られることが多くなっ

てきた。
ちなみに、小谷学園ではテストの点数公開というのは行われない。他の生徒たちも、あんまり点数を聞くという感じはしない。
まあ、優一だった頃に点数聞いてくる生徒に散々怒鳴ったからなあ……去年の中間試験の時点ですでに怒鳴り散らす男ということで悪名高かったし。
でも……そんなことはもう忘れられているのかもしれない。

「ふう、今日の試験終わり」
この時期、「一緒に帰ろう」と声をかけてくる人も少ない。
あたしも明日の試験範囲を最後に確認しながら帰ろうとする。
歩きながら教科書を見る。駅のホームでは特に注意しないといけない。気持ち足下を見る。あるいはホームの壁に寄り掛かるのもいいだろう。油断は禁物だ。

「ただいまー」
「おかえりー優子。試験どうだった？」
「うん、うまくいってるよ」
女の子になってからは、中間試験に続き2回目の試験。
だけど今回は前回よりちょっと違う感じ。中間試験の時以上に、肩こりに悩まされる1日だった。むしろテストの問題よりも厄介かもしれない。
早く試験が終わり、浩介くんと関係を深めたい。

そんな日々を過ごしながら試験も終わった。
「あー終わったー！」
答案用紙の回収が終わり、桂子ちゃんが背伸びする。
「んっんーーーー!!!」
あたしは肩を回す。
「優子ちゃんお疲れ。どうだった？」
「あ、うん……だいたいできたよ」

「そう、それは良かった」
「ふう……んっー肩がぁ……!!」
また肩のこりが痛い。結構やっぱり試験していると来るものがある。
「優子ちゃんまた肩こり？」
「うん、すっごく大変……」
あたしと桂子ちゃんが話す。
「あ、優子ちゃん！」
浩介くんだ。
「浩介くん……あーちょっと肩もんでくれる？」
「え!?　俺が？」
「だめ？　今ちょっと肩こっちゃってるのよ」
多分、ほんの好奇心からだと思う。
とにかく、浩介くんのマッサージを受けてみたい。
「わ、分かった」
浩介くんの手が肩に触れる。うん、何ともない。
この前お姫様抱っこされたおかげで、抵抗感が少なくなってきていると思いたい。
「じゃあ行くぞ……ここかな？」
「うっ……んぁ……もうちょっと右……！」
浩介くんの指が、あたしのしつこい肩のこりを押す。
「よしっ……ここだな！」
ゴリゴリゴリッ！
「うああっ……それ！　あああ！」
今までの女の子のマッサージとは違う、荒っぽいマッサージ。
「優子ちゃん大丈夫か？」
「ううん、もっと強くお願い！」
「あ、ああ！」
「うあああぁぁあああぁぁぁ!!!!」
すごく痛い。痛いけど気持ちいい。
もっと、もっともっともっと！

「お、おい優子ちゃん……」
「お願い続けて！」
「あ、ああ……どうやらここみたいだっ、なっ……！」
浩介くんが一番凝っているところを思いっきり押す。
「んんーーーあーーーーーっ！」
一気にコリがほぐれる。頑固な石が一気に緩まっていく。
やっぱり男の子の力は違う。いや、恵美ちゃんも相当な力だけど、あれは恵美ちゃんなりに加減していた。
でも浩介くんの場合は、加減していたとしても、ベースが男の力だ。
「ふう……うん、ありがとう。大分ほぐれたよ！」
浩介くんにお礼を言う。
実際かなり肩が動くようになった。錘が取れたようで気分もいい。
「そ、そうかよかった」
「じゃあ一緒に帰ろうか！」
「うん」

「なあ、篠原の奴」
「くそう！　あんな声上げさせた上でお礼まで言われるなんて羨ましい！」
「うううう……響く……心に来るよお……」

かわいそうなクラスの男子たち。
ちょっとだけ同情してしまう。
浩介くんと一旦下駄箱で別れる。靴を履き替えて下駄箱の先で再開。
「んっ……」
黙って浩介くんと腕を絡める。浩介くんとは駅から乗る電車の方向が違うので、改札口でいつもお別れになる。
「ねえ優子ちゃん、今度デートする？」
「うーん、浩介くんはどこがいい？」
「あー俺ちょっと金欠だからああ……」

「ふーん、じゃああんまり他の場所でデートしなくてもいいでしょ」
ちょっとだけ恥ずかしいことを言いたい気分になる。
「え!? どういう？」
「龍香ちゃんの彼氏さんは違う学校みたいだからお外のデートが必要でしょ？」
「???」
「あ、あたしたちは学校で毎日デートしているようなものだし！」
案の定あたしの顔が熱くなる。浩介くんも顔を赤くしている。
うううう……やっぱりこういうの恥ずかしい……
でも、浩介くんに伝われば、もっと嬉しいから、恥ずかしいと分かってて、つい言ってしまうのだ。
「も、もちろん気分転換とかも必要だけど、でもお金無理してでも付き合うものでもないしその……」
「うん……うん、優子ちゃん優しいね」
「ありがとう……」
デートと言っても、お互い好きな人が出来るのは初めてだし、ＴＳ病由来の問題点もある。
でも何だろう、解決はそんなに遠い日でもない。そんな風に思える1日になった。

試験の真の恐怖は試験前や試験中ではなく、試験後だという人もいる。
まさに怖いのが答案用紙の返却だ。
でもあたしは手応えもあったし、分からない問題もあまりなかったので、さほど苦にはしていない。
答案用紙が返却され、みんな一喜一憂しているが、あたしはのほほんとした感じだ。
試験終了後は、学校の授業も試験の解説が主になる。間違えた問題をよく復習しておかないと。
さて、試験が終わった後にやることと言えば、部活の再開だ。
学校のイベントというのは意外と目まぐるしく、帰りのホームルー

ムでは「試験問題を返し終わったら文化祭の準備を始める」という連絡があった。
また、制服も冬服への衣替えの季節になる。まあ、小谷学園だと真夏に冬服着たり、真冬に夏服着ても怒られないんだけど、そんな奇特な人はいない。
これは去年と同様だ。
文化祭の出し物は、各部活と各クラス、更に学園全体で出す出し物に分かれていて、試験終了から1週間後までに提出することと決まっている。まあ殆どの部活はそれ以前から制作を始めているんだけど、ともあれうちの天文部はすでに製作も終盤に差し掛かっている。

「いやあ、やっぱり2人と3人では全然違いますわね」
「ええ、優子ちゃんも大分板についてきたし」
「これなら来年を任せられますわね」
「そういえば部長は引退とかないんですか？」
3年生のこの時期になるとそろそろ受験というのもある。
なので部活の引退というのも多い。
「うーん、うちはそういう感じのはないですわ」
ちなみに夏休み中、天体観測はなかった。
大丈夫なのかと心配にはなるが、元々少人数だし仕方ないのかもしれない。
「さ、他の部は今から出し物を決めている所もあるけど、天文部は気にせずラストスパートにしますわよ！」
「「おー！」」
坂田部長の号令のもと、天文部の出し物がほぼほぼ完成し、後は微調整を続ける所まで来た。
ともあれ、問題はクラスの出し物と学園全体での出し物だ。
特に、小谷学園でのミスコンが、不安でいっぱいだった。

## 文化祭　出し物を決めよう

「それでは、クラスの出し物はどうするか決めてください」
　文化祭は１０月末、制服も冬服に戻り、今日は１０月最初のロングホームルーム。基本的にこのロングホームルームで文化祭の出し物は決まる。
　ここで出し物を第三希望まで決め、他のクラスと調整する。
　喫茶店、模擬店、お化け屋敷、更にはオリジナルの映画を撮影した上での劇場やプラネタリウム、他にもアトラクションやゲームコーナー、フリーマーケットに迷路なんて言うのもある。
　先生たちが用意した出し物候補の他、自分たちで考えて提出してもいい。
　その場合は高確率で当選することになる。
「私はプラネタリウムがいいと思うのよ」
　桂子ちゃんがまず発言する。天文部らしい発言だ。
「うーんでもよお……俺たちよく分からねえし」
「ここはお化け屋敷なんてどうだ？　手軽だろう？」
　浩介くんと高月くんとで意見が別れる。
「えーお化けえ!?」
「うん、夏祭りの時に見てちょっと楽しかったよ……カップルに人気になると思うな！」
　そういえばあたしは浩介くんと夏祭りでお化け屋敷に行ったんだよね。
　って、ノーパン状態でお尻触られたこと思い出しちゃった……
「えーそうですかあ？　私はちょっとチープだと思いましたよあれ」
　龍香ちゃんが反論する。というか龍香ちゃんも入ったんだ。
「あの……夏祭りは一部の人しか行ってないので分からないと思うのです……」
　今度はさくらちゃんの反論。
「うーんじゃあどれがいいかなあ？」
「うーん……あ！　そうだ！」

浩介くんが閃いた声。
「どうしました？　篠原君」
「喫茶店だよ、それもメイド喫茶!!!」
クラスがちょっと騒然となる。
メイド喫茶ってあの「おかえりなさいませご主人様」ってやつ？
もちろん知っていたけど、まさか自分がやる可能性なんて考えにも及ばなかった。
「ちょっと男子！　メイド喫茶って……そんなの嫌よ！」
「わ、私も……恥ずかしい……です……」
虎姫ちゃんが怒ったように言うと、さくらちゃんが同調する。
「高月君、メイド喫茶にする理由を教えてくれる？」
永原先生が高月くんに理由を問い合わせる。
「ああいやほら、うちのクラスってさ、先生含めて美人多いじゃん。石山に木ノ本は言うに及ばず、河瀬だって美人だし……志賀や安曇川だって工夫すればきれいになると思うぞ」
あたしと桂子ちゃんの印象が強いような気もしたけど、確かにさくらちゃんや虎姫ちゃんもオシャレすればかなりかわいくなると思う。
「おいおい、あたいはどうなんだよ!?」
恵美ちゃんが食いついてくる。
「ああ、うん。田村も一時期よりだいぶ良くなってると思うぞ」
「いやむしろ田村のメイド服はギャップ演出にはいいかもしれない」
別の男子が同調する。
恵美ちゃんのメイド服姿。うーん、あんまり似合わなさそうなイメージが有る。
対するあたしはどうだろう？　うーん、よく分からない。でも桂子ちゃんはかわいいだろうなあ……
「ふふん、メイド喫茶でクラス優勝間違いなしだぜ！」
「うーん確かに男性客は多くなりそうよねえ……」
盛り上がる男子とともに、桂子ちゃんが何やら思慮している。
あたしもメイド服のことを少し思い浮かべる。
うちの学園祭にも、クラス対抗の出し物の決定戦があって、一般客

や教師陣などから投票がある。
投票数が最も多い出し物には、ささやかな景品も出るそうだ。
「でもメイド服着るのかあ……」
龍香ちゃんはまだ躊躇している。
「そうねえ、私はいいんじゃないかなって思うよ。文化祭はせっかくの晴れ舞台だし」
「むむむ、桂子さんらしいですねえ……」
やっぱり男に好かれたいと考える桂子ちゃんは積極的だ。
今までは優一が怖くて話しかけられなかったが、優一がいなくなっても、桂子ちゃんは男子からは「高嶺の花」のような扱いになっている。
「そうそう、メイド服を試して、うちのクラスのミスコン代表も決めねえと」
「おっ、そうだな」

「あ、その前にまず第二第三希望を決めてください。他のクラスも同じことを考えてないとはいい切れませんから」
「おっとそうだった。第二希望はどうする？」
永原先生の言葉でクラスの軌道が修正される。
でもあたしは第二第三希望についてあまり熱心になれなかった。
メイド服、メイド喫茶、コスプレ。
女の子になっても、今まではそうしたこととは無縁だった。
でもせっかく女の子に生まれ変わったんだから思いっきりいつもと違うコスプレをしてみたいという気持ちも、もちろんある。
とりわけ、海で水着になって以来、そうした目立ちたいという願望が強まり、あるいは恥じらいよりも先行するようになった。
単なる好奇心からなのか、それとも女児向けの朝アニメにあるように女の子が持つごく普通の変身願望なのかは分からない。
あたしが周囲の話に参加せず、メイド服やコスプレ願望についてぼんやりと考えていると、クラスでは第二希望と第三希望がほぼ決まりかけていた。

「はい、それじゃあこれでＯＫです。メイド喫茶については男子の参加方法についても考えてください」
「うーん、厨房でよくね？」
「だな」
「むむむ、女子ばかり目立つのかよ……」
恵美ちゃんが不満そうに言う。
「恵美ちゃん、男が表に出てもしょうがないでしょ」
あたしが言う。
実際小谷学園は去年の文化祭を見る限り、ミスコンの影響もあって男性の参加の方がやや多い印象だし、キチンと役割を分けたほうが、色々と効率的になるという一面もある。
それにうちのクラスはそんなイケメン少ないし……あたしが好きな浩介くんも、あたしは顔や体格に惚れたわけじゃないし。
さて、ロングホームルームはまだ少しだけ残りの時間がある。残り時間で決めることがまだあるのだ。
「さて、次は小谷学園ミスコンテストの２年２組代表決めです」
永原先生が宣言する。そう、この代表決めが厄介なのだ。
「あたいは嫌だぜ」
恵美ちゃんが真っ先に嫌だ宣言する。
男性受けはともかく、女性受けはいいからなあ恵美ちゃん。他のクラスならあえて女性狙いという選択肢も無きにしもあらずだ。
……まあ、実際の所あんまりそういうことはしないんだけど、一応女子ウケを狙いまくって優勝した例も過去にはあるとか何とか。
でも、その戦略で優勝しても、男子とかから不満が爆発したり、後々亀裂になりかねない諸刃の剣でもある。
「とにかく、代表になりたいって人はいますか？」
「はーい先生！」
あたしがさっそく手を上げる。あたしは立候補の他にもう一つの考えがあった。
「はい石山さん」
「あたし代表になりたいです！」

「他には？」
「はい、私もなります」
桂子ちゃんが手を挙げる。
「うーんそうすると、石山さんか木ノ本さんどちらかということになりますが……？」
「あの、あたしはもちろんですけど、桂子ちゃんが出ないのも変だと思います！」
実は、桂子ちゃんは何故か去年のミスコンに参加していなかった。
参加するしないは自由なのでいいのだが、1年生の時点でも「クラス一の美人」何て言われていたから、そのせいで去年優勝した3年生の人がケチ付けられててかわいそうだった。
というか桂子ちゃんだけでなく、女子票のことを考えると恵美ちゃんだって参加してもいいはずだ。まあ本人は嫌がってたって話だけど。
「うーんそうよねえ……どうしようかしら？」
とはいえ、桂子ちゃんが出ないというのはやはり永原先生にも思うところがあるようだ。
「あの、私も代表になりたいんですけど……二人出場はできないんですか？」
桂子ちゃんが質問する。
「うーん原則では無理ってことになっているけど……そうねえ、職員会議にかけてみるわ」
ミスコンテスト、恵美ちゃんが辞退し、あたしと桂子ちゃんが出場したとする。
そうすれば、間違いなく全学年を含めても、あたしが女の子になるまで学園一の美少女とされていた桂子ちゃんと、巨乳美女だけどＴＳ病で元は乱暴男だったという異色の経歴を持つあたしの一騎打ちになることは容易に想像がついた。
もしあたしだけが出れば「桂子ちゃんを出さないのはおかしい」となるし、逆に桂子ちゃんだけを出せば「優子ちゃんを出さないのはおかしい」という声が必ず聞こえるだろう。

ともあれ、クラスから2名出場できないとなると、政治的な妥協の末、2人ともミスコンに出ないという最悪の状況にもなりかねない。
そうなれば他からの不満はもっと高まるし、それで優勝した子も素直に喜べないし、後ろ指を指されてしまう。
あたしも桂子ちゃんも出ないミスコンが盛り上がるとは到底考えにくく、イベントそのものが重大なダメージを負うことになりかねない。
これについては色よい返事を待つしかない。まあ学年主任の小野先生や教頭先生を撃退している永原先生だし安心感はある。
キーンコーンカーンコーン
「それじゃあ、今日のロングホームルームはここまでにします。休み時間に入ってください」
永原先生の号令とともに生徒たちが休み時間に入る。
「いやあ優子ちゃん勇気あるねえ。まあ私も、さすがに去年のことがあるから代表にはなるつもりだったけど」
「ええ、ミスコンの代表になりたいって。なかなか言い出せないものですよ」
桂子ちゃんと龍香ちゃんが話しかけてくる。
「うーん、そうかな？」
「うんうん」
「でも、黙っててもも代表に担ぎ出されると思ったから、いっそのことと思って……」
あたしとしても、これだけかわいくて、小谷学園一の美少女と評判だった桂子ちゃん以上の評価を受けているのに、「私そんなにかわいくない」は嫌味だ。
「ふーんそうなんだー」
「確かにそれはそうですけど……」
でも実際、うちのクラスは美人が多いという高月くんの言葉は間違ってない。その証拠に、龍香ちゃんだって他のクラスなら代表レベルの美人さんだし、さくらちゃんや虎姫ちゃんだって、きちんとオシャレすれば代表になれるかもしれない所まで来ている。

ともあれ、２時間目以降の授業に、今は気持ちを切り替えねば。
「ミスコン代表の件ですが、校長先生が二つ返事でＯＫしてくれました。基本的にエントリー人数は自由だそうです」
帰りのホームルームでそんな話が出る。
永原先生によれば、元々ほとんど自主規制のような感じだったらしい。
まあ、小谷学園の校風考えたら当たり前だ。
「よっしゃ、それなら河瀬も出そうぜ！」
「ちょっと高月さん！」
龍香ちゃんが抗議している。
「志賀もいいと思う。こういうのが意外と人気出るんだよねえ」
別の男子まで盛り上がる。
「あ、あの……恥ずかしいです……から……」
さくらちゃんがうつむいている。
「あ、あの!!」
あたしが声を上げる。
クラスが注目する。
「みんなを出したい気持ちもわかるけど、前例を破るということも考えて、ここはあたしと桂子ちゃんの二人だけで出るから！」
「わ、分かったぜ」
「石山が言うなら仕方ねえよな」
「うんうん」
高月くんが分かったというと他の男子も納得してくれた。
「はーい、盛り上がっている所悪いけど、連絡事項はまだ終わってないわよ……いいですか？」
永原先生が声をかけると、クラスも静かになる。
「……二つ目ですが、模擬店のメイド喫茶が通りました。２年２組はメイド喫茶になりました」
「おお！」
「やったぜ！」

男子陣から特に歓声が上がる。
あたしもちょっとだけ楽しみではある。
「シフトとかどうしよう？」
「混雑する時間帯に、石山や木ノ本を入れてえよなー！」
男子の盛り上がり方がすごい。
「……コホンッ、とにかく連絡事項は以上です。各自部活や委員会等に入ってください」
永原先生の連絡事項を終え、帰りのホームルームは解散となった。

「……優子ちゃん、天文部行くよ」
「はーい！」
桂子ちゃんに呼ばれて天文部へ行く。

「おい、桂優ちゃんじゃん」
「本当だ、二人とも今日もかわいいな」
「最近は特に優子ちゃんがかわいいよな」
「優子ちゃんに彼氏できたんだってな。ついこの間まであいつだったのにな」
「しかもさ、同じクラスの篠原らしいぞ」
「くあーっ羨ましいなあおい！」
「くっそー俺桂子ちゃん狙おうかなあ……」
「そういえば桂子ちゃんはフリーなんだっけ？」
「そうらしいぜ。男子も牽制しあってるらしい」
「そういえばミスコンどうするんだろうな？」
「そっか、同じクラスだよな」
「いやいやさすがに2人とも出てくると思うぜ。お前はどっちに入れるんだ？」
「俺は……って聞かれてるぞ」
「やべっ、退散退散っと」

天文部室の前で別の部活の3年生の先輩たちがあたしたちのこと

を噂していた。
あたしと桂子ちゃんが歩いているとそれだけで学校の噂話を支配してしまうことがこれまでもよくあった。
コンコン
「はーいどうぞー」
「失礼しまーす」
「あら、木ノ本さん石山さんいらっしゃい」
坂田部長が迎えてくれる。
「でねー、さっき隣の漫画研究会が私達の噂していたのよ」
「そうですか。確かに二人が歩くと目立ちますわよ」
「うーんやっぱり二人っていうのが大きいのかなあ？」
「そうだと思いますわよ」
坂田部長が言う。
「ところで、桂子ちゃんモテモテなのに彼氏いないよね」
「そうなのよねえ……いっそのこと私から打って出るっていうのもありかなあ……」
「木ノ本さん、もしかしたら何だか近寄りがたい雰囲気なのかも知れませんわ」
「うーん……」
桂子ちゃん、男の子の人気だって高いし、性格だって悪くない。それでも、いつか誰かが告白するという姿勢だけだとダメなのかな？
「やっぱり桂子ちゃんも積極的にならないと」
「うーん、あんまり自分からって感じしないのよねえ……」
「それじゃあダメですわよ。女子も積極的になるべきですわ」
坂田部長も同意見みたいだ。
「そうなんだけど……何となくそう言う気分しないのよ」
うーん、結構根深い。
「まあ無理にとは言いませんが……さ、展示の最終調整を続けましょうか」
「「はいっ！」」
今日も恒星の位置の調整だ。

宇宙を再現した３Ｄソフトを使いながら数センチ、数ミリの調整を続けていく。

「さあ、これで大丈夫ですわ」
「うん、私もこれで満足……優子ちゃんは？」
「あたしは特に異議はないわ」
正直凝りすぎとも思うし。
「これに去年も展示した太陽系のミニチュアも合わせれば好評になりますわ」
あたしは太陽系のミニチュアに目をやる。
「これも展示するの？」
「ええ、スペースは十分ですわ」
「倍率の比較図とか載せてみてはどう？」
せっかく両方展示するならあたしが提案する。
「あら、良い提案ですわ」
「ええ。私も優子ちゃんに賛成」
「えっと……こっちが１２光年で……こっちが海王星までだから……」
桂子ちゃんが計算している。
「１光年が６３２４１天文単位くらいで……海王星が遠日点３０天文単位強だから……」
ミニチュアはどちらも同じくらいの大きさだから、仮に同じとすると１光年で２１００倍で……１２光年ミニチュアだと２万５２００倍くらいなあ
「そうねえ……両方のミニチュアの大きさも勘案すると２．５万倍くらいかなあ？」
あたしの計算とほぼ一致する。
「木ノ本さん、詳しく測ったほうがいいと思いますわ」
「そうね……それから１光年とか１天文単位の物差しも入れないと……」
殆ど終わりかけていた天文部の展示作業に、追加の仕事が加わっ

た。
そういえばこういう案内ってあんまり作ってなかったのかな？
ともあれ、あたしも仕事に取り掛かる。
少しずつ、文化祭が動き出した。
本番は二日間。頑張っていかないと。

# メイド喫茶を準備しよう

文化祭でクラスの出し物が決定した。この後は具体的にどういった出し物にしていくかということを話し合う。
あたしたちのクラスの出し物はメイド喫茶に決まった。
当然メイド服が必要になるのだが……
「それで、裁縫できる女子っている？」
「うーん……あたしはできるけど、さすがに一人じゃあ……優子ちゃんはどう!?」
「え!? 無理だよ桂子ちゃん……」
カリキュラムにも裁縫なんてなかったし、小学校の家庭科でちょっとやっただけだ。
裁縫に自信あるのは桂子ちゃんだけ、他の女子でもできないことはないという人もそれなりにいたけど、やっぱり本格的なメイド服を作るとなると話は別だ。
「でも買うと言ってもどこで？」
「病院近くのリサイクルショップにあるかも」
話し合いの時、あたしが男子の制服と体操着を捨てたリサイクル店の名前が出る。
でもあそこにメイド服なんてあったっけ？
「うーん、そうだ。優子さん、桂子さん、ちょっと偵察してきてくださいよ」
龍香ちゃんが言う。
「う、うん……」
ともあれこうして、桂子ちゃんとともに帰り道にリサイクル店に立ち寄ることになった。

そして学校からの帰り道、あたしと桂子ちゃんでリサイクルショップへ道を進む。
「本当にあるのかなあ？」
「時期とかにもよるらしいからねえあそこは」

あたしも詳しくは知らないけど。
「桂子ちゃんは立ち寄ったことは？」
「うん、何回かあるよ、優子ちゃんは？」
「あたしは……女の子になってから1回だけ」
「あー、そういえばあったねえ……」
「うん、優一だった頃の制服と体操着を捨てに行ったのよ」
そんな会話をしつつ、リサイクルショップに到着する。
制服も売られている3階に、衣服類は集中している。ということは、他の階は見なくていいということを意味する。
まず目に入ったのが小谷学園の制服。
「もしかして、優一の頃の制服はまだあるのかなあ？」
「あったとしても見分けつかないよ」
あたしの中でも時間とともに徐々に「優一」の記憶は薄れていく。もちろん元の人格を忘れてしまうことはないだろうけど思い出す機会も減っている。
男子の制服も、優一が着ている姿よりも浩介くんが着ている姿の方がイメージしやすい程度には。
ともあれ次に見たのは普段着の古着コーナーだ。
「……ここにはなさそうだね」
というよりも、パッと見た感じではそもそも「中古コスプレコーナー」そのものがない。
普段着のコーナーも念のため入念に探してみるが、もちろんメイド服なんてものはない。
「やっぱりない？　こっちはどうだろう？」
作業着のコーナーやスーツなどのコーナーはあるが、メイド服らしきものはない。
「ないみたいだね」
「うん、じゃあクラスに報告しないと」
文化祭3日前からは本格的に授業も短縮され、文化祭の準備に専念できる。それまでは概要の決定だけで我慢しないといけない。
学生の本分はやはり勉強ということだろう。

「じゃあ帰ろうか」
「うん」
　桂子ちゃんとあたしの二人で帰るというのも久しぶりだ。最近は一人で帰るか、駅まで浩介くんと帰るかだ。
　ちなみに胸を押し付けることはもうすっかり慣れっ子になった。やっぱり一歩一歩結果が出ている。
「優子ちゃんは、篠原くんとはどうなの？」
「うん、大分良くなったよ」
「具体的には？」
「うん、胸を押し付けても大丈夫になったよ」
「あ、うん……よかったわね。でも優子ちゃん、そういうのは直接言っちゃダメだよ」
　桂子ちゃんのごもっともな指摘。確かにはしたない。
「あ、あはは……ゴメン」
「ああいいのよ、優子ちゃんはもう『ほとんど女の子』と言ったって男が出るのは普通のことよ」
「う、うん……それにしても桂子ちゃんって裁縫も出来たんだね」
「出来ると意外と便利よ？　今は優子ちゃんのぬいぐるみさんやお人形さんたちも新しいけど、必ずボロボロになっていっちゃうから」
　ああ、それは嫌だ。
「そうかあ……あたしも母さんにでも裁縫習うかなあ……」
　むしろ、今思えばカリキュラムになかったのが不思議なくらいだ。
「優子ちゃん裁縫したこと無いの意外だったなあ……」
　桂子ちゃんが不思議そうに言う。
　確かに女子力上げるには良さそうなスキルではあるけど。
「うーん……やっぱりできた方がいいよねえ……」
「そうだねえ、できないよりできた方がいいもん。だけど結構難しいからお母さんとかから少しずつ習うといいわよ」
「う、うん」
　ともあれ、お人形さんの修復とかしてみたい。必要になってから習うでもいいけど。

「それよりも桂子ちゃん、メイド服どうしようか？」
「うーん、やっぱり無難に買った方が良さそうだね」
　時間にも限りがあるし。
「買うとしてどういうデザインにしようか？」
「パソコンで調べて候補見つけるのがいいと思う」
「そうだね」
　ともあれ、あたしと桂子ちゃんはそれぞれ別れ際に「宿題」を確認しつつ帰路に就く。

「ただいまー」
「おかえりー優子ー」
　母さんが出迎えてくれる。
「優子、文化祭の出し物決まった？」
「うん、メイド喫茶になったよ」
「ええ!?　メイド喫茶……じゅるり……」
　母さんから不穏なオーラが出る。
「母さん、その……あんまり暴走しないで」
「ふふっ、優子のメイド服姿が今から楽しみよ。メイド服はどうするの？」
「裁縫できるのが桂子ちゃんくらいしかいなくて、結局店で買うことになったわね」
「あら!?　大変！　そういえば優子に裁縫教えてなかったわ！」
　母さんが驚く。
「え!?」
「ああいや、永原先生が最初にしてた日常生活向けのカリキュラムにはなかったんだけど……いつか教えておこうと思って忘れちゃってたのよ……しまったー」
　母さんが少し悔しそうな顔をする。
「う、うん……あたしも詳しく習った方がいいかなって」
　小学校の時やった内容も忘れてるし。
「ええもちろん。服や人形の修復ができると役に立つわよ。なんだか

んだ言って男子はそういうのできない人が多いし、女の子としての魅力アップにもつながるわよ」
うん、もっともっと女の子らしくなれるなら、あたしはそうなりたい。多分浩介くんも、その方が好きだろうし。
「まあでも、今は文化祭の準備に集中しなさい。文化祭のイベントは重要よ」
「うん分かってる」
あたしも何となく、この文化祭で大きなことが起きそうな気がする。
どういう根拠でそういう考えに至ったのか分からない。
これが世に言う「女の勘」というものなのか、それともただの気のせいの迷信なのか、あたしには分からない。
深く女の子になるにつれ、こういうことで悩むケースが増えた。たまたま印象に残ってないだけで男にも見られるような人間共通の事象なのか、それとも男にはない女性の強みが発揮されているのか。
どちらでもいいという人もいるだろう。でも、何だろう、もっと知りたい。女の子を知りたいという気持ちが先行していく。
人間の欲望は無限大だ。男でも、女でも。だから、男っぽい所を消したい、女の子らしくなりたいという気持ちも、今後も限りがない予感がする。
ともあれ、メイド服について詳しく調べる。
男の頃もそんなことしたこと無かった。あたしはＰＣの電源を入れる。
ＰＣが立ち上がったらＷＥＢブラウザを立ち上げ、検索エンジンを頼ることにする。
「えっと……メイド服、種類っと」
メイド服の種類が出てくる。調べた感じではやはりスカート丈、実用的なのはやはりロングスカートのメイド服だが、何だかんだで見栄えがいいのはミニだ。
ミニスカートのメイド服は喫茶店などで使われるそうだ。家事で行うような実用的なメイドの場合はこんなミニスカートだとパンツ

が見えてしまうから、ロングスカートタイプになる。
とはいえ、メイド喫茶では本当の家事を行うわけじゃない。高い所の窓拭きなんかは男子の仕事になるはずだ。
メイド喫茶には段差があったり、あるいはかがんだりするわけではないので大丈夫だろう。
とはいえ、あんまりに短いと普通に覗き魔とかも出るだろうしうーん……
「とりあえず、制服よりちょっと短いくらいにしようかな、それで上のデザインは……」
よし、何とか候補を絞り出せたぞ。後はこれを印刷して……って印刷機使っていいか聞いておこう。
「母さん、文化祭の準備に印刷機使っていい？」
「あ、いいわよ」
母さんから了承を得られたので、カラーコピーを3枚取る。
印刷設定でちょっと戸惑ったけど何とか取れた。
ファイルに入れて明日桂子ちゃんに見せよう。

「優子、どんなメイド服を候補にしたの？」
「え？　この3つだけど……」
母さんにプリントを3枚渡す。
「うーん……」
母さんが思慮している。
でも、母さんの性格からどれを推すかは分かっている。
「うん、母さんはこれがいいと思う」
「ですよねー」
出してきたのは一番スカートが短いタイプのメイド服で胸のリボンと頭のカチューシャが強力に自己主張している。
母さんらしいと言えばそうだ。
「でも、正直に言うとあたしもそれを第一候補に考えてたのよ」
「あら？　優子どういう風の吹き回し？」
「メイド喫茶だもん。この場合は直接的に訴えかけた方がいいのよ」

「ふーん、そういうものなのね」
　もちろんクラスメイトの反応も考えると、これ以上短いタイプは拒否される可能性が高いのであらかじめ却下しておいた。
「でも、もう少し大胆なのない？」
「あるにはあるけど……多分クラスメイトから拒否されると思う」
「ああ、そうか……そうよねえ……うん」
　母さんも納得してくれてよかった。
「でも、これでも優子が着た時はかわいいと思うわよ。きっと人気ナンバー1間違いないわ」
　母さんも太鼓判を押してくれて嬉しい。
　ともあれ、まずは桂子ちゃんに話してみよう。

「へえ、結構かわいいけど……抵抗感もあると思うわ」
「やっぱり桂子ちゃんもそう思う？」
　道行く通学路、駅までの間で桂子ちゃんと落ち合ったので鞄からメイド服の第一から第三候補まで見せあった。
「うん、ちょっと優子ちゃんの制服よりスカート短いし」
「でもさ……あたしが思うに、文化祭なわけだから、不特定多数の男性に好かれる必要があると思うのよ」
　あたしが趣旨を説明する。
「ふむふむ」
「つまり見られてなんぼって言うの？　もちろんパンツ見えちゃうのはまずいけど」
「なるほど。とりあえず休み時間に提案してみましょうか」
　こうして、休み時間にはあたしの第一希望を女子のみんなに提出することになったのだが……
「ちょ、ちょっと……これは大胆すぎますよ……」
　実際の所、私服や水着に比べるとスカートがちょっと短いってだけなんだけど、やっぱりメイド服のイメージからすると相対的に大胆に見えるらしい。
「うん、でもあたしが思うに、文化祭なんだしちょっとくらい大胆なの

がちょうどいいと思うのよ」
「うーん、私も彼氏に嫉妬されそうですよ……」
　龍香ちゃんもやや反対寄りか。
「うーん、私はどれでもいいけど……」
　虎姫ちゃんは中立。
　やや長い沈黙に至る。あたしの趣旨は理解してても、やはり抵抗はあるようだ。
「お、でもよ、あたい……あたいこれ着てみたいぜ!!」
「「え!?」」
　均衡を破ったのは意外な声だった。
「え、恵美ちゃん……メイド服に？」
「あたい、あたいやっぱりちょっとは女の子してみたいんだぜ。普段はよ、テニスで強くなることばっか考えてるけどよ、こういう日くらい……たまには……おう……」
　ほんのりちょっとだけ赤くなってる恵美ちゃん。普段は豪快でかわいいという感じではない分、余計にかわいく見える。
　やっぱり希少価値も大事なのかな。あたしも、もうちょっと身の振り方を考えたい。
　うん、恵美ちゃんからも女の子の魅力を学ぶことはたくさんありそうだ。それは決して反面教師ってだけじゃない。
　恵美ちゃんも、女の子としてはあたしよりずっと先輩なんだし。初心を忘れちゃいけないよね、うん。
「……恵美さんからそう言う言葉が出るとは思いませんでした」
「失敬だな！　……ま、まあ日頃の行いが悪いせいもあるけどよお……」
「恵美が言うなら私もこの服でいいかな。何気に安いみたいですし」
　中立だった虎姫ちゃんも同調する。
「あ……そうでした……予算も……あるんでしたね……私も……これでいいです」
　さくらちゃんも賛成する。
「私も」

「あたしも」
「賛成ー！」
恵美ちゃんの賛成から、まるで雪崩のように女子の間で賛成の声がこだまする。
実はこのメイド服だけ、他の候補とは違い多く買うと割引がついてくるのだ。
「よっしゃ！　じゃあ決まりだな！」
「ええ。それじゃあ１７個注文して――」
「ちょっと待ちなさい！」
「「!!!」」
話し合いがまとまりつつあった矢先、意外な声がかかる。
振り向くとそこに居たのは永原先生だった。
「あれ、永原先生……あ、あの……」
もしかしたらこんな露出度高いのはダメと言いに来たのかも……
「注文する個数は１７じゃないわ」
「え？　それってどういうことですか？」
何を言っているんだろう？
「ふふっ、注文する個数のは１８よ」
永原先生が言う。
「ええ？　１８ってまさか……」
「そうよ、私もメイド服着て、メイドさんをするのよ」
「「えええええ!!!?」」
永原先生の突然の言葉に、女子はもちろん、側で傍観していた男子の間でも驚嘆の声が上がる。
「ちょ、ちょっと先生……先生がメイドって……！」
恵美ちゃんが驚きの声を出す。
「あら？　小谷学園の文化祭、メイド喫茶で先生がメイドしちゃダメなんて決まりどこにもないわよ」
小谷学園らしい永原先生の言葉。
「そ、そりゃあそうですけど……」
確かに永原先生は容姿がかなり若いし、背だってよくよく考えれば

クラスの女子１７人の誰よりも低い。
永原先生が制服やメイド服を着てたら、外部の人は誰も永原先生を先生だとは思わないはず。
「じゃあ決まりでいいわね。フリーダムなのが小谷学園文化祭よ」
永原先生が笑顔で言う。
「と、ともあれメイド服はこれで決まりでいいわね？」
「「はいっ！」」
永原先生の返事が何故か一番大きい。
まあ、小谷学園らしいと言えばらしいかな。
「それで、次にメニューだけど――」
あたしは次に、メニューを提案する。
飲み物と軽い食事。サンドイッチとかパンとかそういった感じの軽食類で、一応トースターと電子レンジ、冷蔵庫が使えるのでそれらで出来る範囲の内容にしていく。
昼休みが終わる頃には大体の概要も完成していた。
後はメイド服を買って、前日の準備日の仕立てに入るのみとなった。
この日の放課後に、永原先生が件のメイド服が売っている店に予約の電話を入れてくれたそうだ。
授業がない準備日に、女子が一斉にお店に行くことになっている。

「ふう、今日も終わった終わったー」
「優子ちゃん、最近ずっと文化祭準備に出ずっぱりだね」
今日は浩介くんと並んで帰る。
腕は絡めているが、今日の恵美ちゃんを見て、胸は押し付けないようにする。
「うん、なんか男子ほとんど参加できてなくてごめんね」
「ああいやいいんだよ、男子は各部活で忙しい人もいるしさ。それに店のレイアウト決めるの大変なんだぜ」
ああ、そういえばそっちが男子担当なんだっけ？
「あとさ、一応厨房が男子担当だから食中毒の講習とか、これがまたつ

まんなくて面倒なんだぜ」
「あはは……よかった男子も忙しくて」
「まあ、サボって文化祭だけ楽しむのが一番だけどな」
浩介くんがサラリと虫がよすぎることを言う。
「あはは、それは都合良すぎだってー」
あたしも笑いながら話す。
「ところでさ、今度のデートだけど」
「うん」
「文化祭の振替休日なんてどう？」
「ああ、いいかも。後夜祭の雰囲気そのままにって感じ」
「うんうん。じゃあ集合場所は――」
あたしたちにとって、ちょっとだけ文化祭が長くなりそうだった。
ともあれ、天文部は今度こそ最終確認とリハーサルも終わり、あたしたちは文化祭に向けての好スタートを切ったのだった。

# 小谷学園ミスコンの意外な刺客

「そっち、机の配置はこうした方がいいんじゃないか？」
今日は授業もない準備日。明日から二日間文化祭になる。
教室では男子が掃除をし、店舗レイアウトを揃えていっている。
「椅子の配置も考えると、この配置のほうがいいと俺は思うんだよ」
「あーそうか」
「この方が女子も曲がらなくて済むだろうし」
「やっぱり厨房からまっすぐ出せるようにしないと」
男子たちが机の配置で議論している。
「おーい、窓こっちは拭き終わったぞ」
「よし、飾りも出来たし、試して見るぞ」
「お、良さそうじゃん」
一方で、別の男子たちは飾り付けに勤しんでいる他、窓に関しては椅子の上に乗った男子が2人がかりでくまなく掃除している。
「よし、積み方はこれでいいか？」
「これだと冷蔵庫のスペース使いにくいよ。こっちの方がいいって」
「ふむふむ」
また、冷蔵庫に食品や飲み物を詰めている姿も見える。

さて、一方であたしたち女子がするのはお店から届いたメイド服の試着だ。
「はーいみなさん、女子更衣室を借りてますから2組に分かれて試着してください」
「「はーい！」」
2年2組の女子17人と永原先生で18人、本番では3人ごとに6回のシフト制になる。
あたし、桂子ちゃん、龍香ちゃん、永原先生、虎姫ちゃん、恵美ちゃんがそれぞれリーダーになって回していくことになった。
ちなみに、あたし、桂子ちゃん、龍香ちゃん、永原先生の4人は我が2年2組が誇る「美少女四天王」ということで、それぞれ混雑時間

帯に配置する工夫をする。ちなみに四天王最強はもちろんあたしだと思っている。
ともあれ、そうやって回していくと2日目の後夜祭だけ1回ローテーションが余るので特別ローテーションとしてあたし、桂子ちゃん、龍香ちゃん、永原先生を出すことになった。
ともあれ、あたしたちがまず女子更衣室でサイズを確認する。
そこにあるサイズはＳＳからＬＬまでだ。
あたしは身長的にはＭサイズだけど……
「うーん、やっぱりＭは入らない……」
胸がきつく、そのせいでなかなか入らない。
下半身の方はむしろちょうどよくフィットしているのに。
最初に服を買った時、母さんはよくサイズを見つけてきたと感心する。うーんやっぱ普段着より需要の少ないコスプレ衣装だとまた違うんだろうなあとは思う。
「優子ちゃんのは特注した方がいいと思うのよ」
「やっぱり？」
胸が大きすぎるとこういうことになるのね。
「そうですねえ。私もＳＳだと胸がきついですし」
メイド服を試着している永原先生が言う。
ややぶかぶかに見えるもＳサイズで上手く行っているように見える。
「仕方ない……Ｌサイズを着てみるよ」
一回り大きいＬサイズ。
これなら入るけどウエスト周りをちょっと締めないとスカートが長くなってしまう。
そのためには服をちょっと工夫しないといけない。
男子の劣情に訴える必要がある以上、他の子よりスカート丈が長いのは、やっぱり何だかんだでマイナスだ。
「うーん、確かにＬサイズなら入ったけど面倒な作業が増えちゃったなあ……」

「あーあ、贅沢な悩みだなあ……」
恵美ちゃんが羨ましそうに言う。
「で、でも、恵美ちゃんも似合ってるよ」
普段はガサツでオシャレも全然しない恵美ちゃんだからこそかわいく見えるというのもある。でもやっぱり他の子を見るとそうでもないと思ってしまう。
……そうか、こういう状況の時に母さんが言っていた化粧っていうのも必要かも。そしたら、恵美ちゃんももっとかわいく見えるかも。
「永原先生、恵美ちゃんなんですけど」
提案してみよう。
「ええ、田村さんがどうかしました？　たしかにいつもよりかわいいですが――」
「あたしが思うに、恵美ちゃんは化粧させるともっといいと思うんですよ」
「え!?　あたいが化粧？　んなんしたことねえし興味もねえよ！」
恵美ちゃんがちょっとだけ驚きながらもそっけなく言う。
「じゃあ文化祭の時してみたら？　普段とのギャップでメイド服との相乗効果でかわいくなると思うわよ」
「……なるほどなあ……確かに、文化祭くらいあたいもちょっとかわいくなってみてえしな」
実際この衣装に決まったのも恵美ちゃんの賛成があったからだ。
「というわけで、永原先生、恵美ちゃんにお化粧させましょう」
「……なるほどねえ……私、化粧はよく知らないんですが……」
「ええ!?　永原先生って、化粧知らなかったのですか？」
龍香ちゃんが驚く。
龍香ちゃんのメイド服姿も実によく似合っている。いつもとは違うベクトルでの美人という感じだ。
「ええ、私老けませんから。必要が無いんです」
確かにカリキュラムにもその理由でなかったしそのせいで母さんに教わることになったけど、あたしは母さんから教わった化粧のことをすっかり忘れていた。

「ひょえー、そうですよね……はい」
永原先生のメイド服姿。こうしてみると、一人だけ新人っぽい。
というか、永原先生がメイド服になると、生徒たちと比べて圧倒的に外見が幼く見えてしまう。頭のカチューシャが特にそう感じるのかもしれない。
「永原先生、その見た目だと幼く見えません？」
桂子ちゃんが言う。
「えっへん、それこそが武器になるのよ木ノ本さん」
永原先生が堂々と胸を張る。
自分の需要がどういう方面なのか理解している証拠だ。
「でも、クラス全員の年齢を全員足しても――」
「石山さん、新年度始まる前から抜かれてるわよ」
「え!?　あ、そうか……」
高校２年生というと、１６歳から１７歳だが、１８歳まで後１日というのもあり得る。
とすると、クラス３２人全員の年齢の合計がとり得るのは５１２歳から５７５歳までだ。永原先生が５００歳になるのは来年のことだ。
「でも、１年生のクラスを担当する時は、最初はもうクラス全員の年齢の合計よりは年上ってことがあるわね。中学校や小学校だともうクラスの全員の合計年齢より年上なのが当然になるわね」
そう考えると改めて永原先生ってすごい人だ。あたしたちの人生がまだ短いのもあるが、女子１７人の年齢の合計よりも永原先生の方が年上なのだから。
「あ、でも私は１年から３年までの残り１１クラスの担任の先生の合計年齢よりは年上よ」
やっぱり永原先生は恐ろしい人だ。
「それにしてもあたしもサイズＬなのね」
正直に言うとこのままだとむちむちを通り越してちょっと太く見えてしまう。
「うーんそうだ！　優子ちゃん、私が着やすいように直しておこうか

？」
「え？　桂子ちゃんやってくれるの？」
「うん、Ｌサイズでもお腹が太く見えないようにしておくわよ」
　桂子ちゃんのありがたい言葉。
「じゃああたしはサイズＬで」
「はーい、そろそろ2組目に託しますね。私は先生ですから、このまま
います。皆さんサイズ覚えてくださいね」
「「はーい」」
　ということで、永原先生以外の女の子が一斉にメイド服から制服に
着替えなおし、もう半分の女子が試着のために入れ替わる。
「桂子ちゃん、どうやって縫うの？」
「優子ちゃん、私に任せて」
　ともあれ今は桂子ちゃんを信じるしかないかな。というわけで「石
山優子　Ｌサイズ」と書く。
　２組目の女子たちも戻ってきたため、それぞれ希望サイズを書いて
いく。
　ちなみに永原先生は「ＳＳサイズで何とか工夫する」ということ
だったので「永原マキノ　ＳＳサイズ」と書いてあった。
　サイズを見る。概ね殆どの人がＳからＬサイズを希望している。
　永原先生だけＳＳ、一番体格がいい恵美ちゃんがＬＬだ。
　ともあれ、１８人分のメイド服は、試着分を除けば、明日にも学校
に届くそうだ。
「さて、これでやることはおしまい。これで後は男子を手伝うもよし、
部活委員会を手伝うもよしよ。では、解散」
　永原先生の号令の下、各自自分の持ち場へと移動する。
　桂子ちゃんとあたしは教室に入り、男子の手伝いに合流することに
した。
「わあ、もうこんなに出来てる」
　見ると男子たちが窓を拭き、机やいす、飾り付けもほぼ全て出来あ

がっていた。後はこれでリハーサルをするだけだ。
普段の勉強机も、一瞬で模擬店に早変わり。椅子の装飾も素晴らしい。
「うん、すごく良さそう」
今日は最後に接客のリハーサルをすることになっている。
その時はメイド服ではなく、一応制服ということにはなっているけど……うーん、「ご主人様」役には男子生徒がなるのかな？
だとしたら、浩介くんが相手だといいなあ……

「あ、そうそう。石山さんに木ノ本さん、二人には伝え忘れていたことがあったわ」
「あ、はい」
「何ですか先生？」
永原先生が声をかけてくる。
「二人はミス小谷学園コンテストの予選のための写真を撮ってほしいのよ。あ、ちなみに制服よ」
「あ、うん。そうだったね」
文化祭1日目に行われるミスコンの予選投票はまずは制服写真での選考になっている。
普通はないが、あまりに得票率が悪いと予選の段階で落選して、一般公開される2日目の本戦に進めないこともあり得るから怖い。
まあ、優勝候補のあたしや桂子ちゃんにはそれは不要な心配事だけど、それでもミスコンの前哨戦として、大事な役割がある。
「後、文化祭2日目は私服審査と水着審査もあるから、私服と水着も持ってきてね」
み、水着審査。そういえば去年もあったなあ……
「えっと、海の時ので大丈夫かな？」
「ええ大丈夫よ」
永原先生が言う。これは追い風だ。
「分かりました」
既に海水浴場で不特定多数に見られているし、あの水着は男受けも

良さそうだったので、当日もパレオをはためかせればかなりの得票を得られそうだ。
……浩介くんが見ていたらまた恥ずかしくなっちゃうかもだけど。
「あ、そうそう。もう一つ伝え忘れていたことがあったわ。実は今年のミスコンだけど……私も出るわよ！」
永原先生の意外な言葉。
「えっ……」
「えええええええええええええ!!?????」
あたしと桂子ちゃんが二人して驚く。
作業中だった男子も作業を中断してみんなこっちに首を向けてくる。
な、永原先生がミスコン出場？
いや、たしかに外見年齢は若いし、永原先生は独身だけど、でも高校の文化祭のミスコンテストに先生が乱入するなんて聞いたこともない。
「ふっふっふっ……普通先生はミスコンには参加しないんだけどね。何か今年はそういう気分になっちゃったから急遽出てみようって思って」
不敵な笑みを浮かべながら永原先生が言う。
「でも先生、制服って……」
「大丈夫よ。例のリサイクル店でもう買ってあるわ」
ヒエー根回しがすごい。
「なんだなんだ、先生がミスコンに参加すんの？」
高月くんが食いついてくる。
「そうよ」
「いやいや、これ生徒のミスコンだよね？」
「ううん、小谷学園のミスコンよ。先生が参加しちゃいけないなんて決まりはないわ」
「むむむ、たしかに小谷学園らしいわね……」
あたしも感心してしまう。
「でしょ？」

「確かに先生は見た目『だけ』なら子供っぽいからなあ……」
高月くんが「だけ」を強調する。
「ちょっと高月くん！」
確かに普段の先生の服はレディーススーツとあって外見年齢は上がっているけど、合法ロリには変わらない。でも本人の前でそれを堂々と言うのは――
「……うふふっ、高月君、誉め言葉として受け取っておくわよ」
「っていいんですか先生!?」
永原先生の意外な言葉に、思わず当の高月くん自身が突っ込んでしまう。
「ふふん、私も自分の何が魅力か？　何てことはわかってるわよ。伊達に女を４８０年やってるんじゃないんだから」
「あっはい……」
最初に突っ込んだ高月くんの方が恐縮してしまっている。
「男の子は何だかんだで若くて幼い女の子が好きだもんねえ。だから制服を着た私は、石山さんや木ノ本さんの強敵になるわよ！　覚悟しなさい！」
永原先生が宣戦布告する。
確かに、顔とかあたしよりもさらに童顔だし、海での水着もかなり似合ってたし、真面目に相当な強敵になるかもしれない。
「ええ、あたしだって、負ける訳にはいかないわよ！」
「私も。やるからには全力で行くわ！」
とにかく、女の子としてこのコンテストに負ける訳にはいかない。
「ふふふ、私にはもう一つ武器があるのよ」
「え？　武器って……？」
あたしが聞いてみる。一体なんだろう？
「それは教師票よ」
「あ！　そうか！」
桂子ちゃんがはっとしたような表情をする。
ミスコンは生徒と教師、一般の人の投票で決まるが、一人一票が原則だ。

また、一般投票を除けば生徒会による重複投票を防いだ上での匿名の投票でもあるから、先生の票を永原先生にごっそり持っていかれる可能性があるのだ。
生徒の得票数に比べれば少ないとはいえ、やっぱり脅威なのには変わりはない。
「ふふふ、教師票は根こそぎいただきよ。特に、約1名からは『天地神明に誓って永原先生に投票いたします』と言う誓約までもらってるわ」
「先生、それって小野先生ですよね……」
桂子ちゃんが突っ込む。
永原先生の教え子で、子供時代しょっちゅう叱られていた小野先生を脅迫したことは想像に難くない。
「ええ、その通りよ」
さすがのあたしも、小野先生が気の毒になってきた。
「石山さん、木ノ本さん。あなたたちは、普段は私のクラスの生徒だけど、このミスコンでは叩き落とすべき『敵』になるわよ。覚えておきなさい！」
「ふふっ、それはこっちの台詞ね」
「ええ、５００歳のおばあちゃんに１７歳のあたしが負ける訳にはいかないわ！」
「ふふっ、言うようになったわね石山さん」
永原先生とあたし、桂子ちゃんで三つ巴のにらみ合いが続く。まさに目から火花を出しているような感じだ。
既に「女の戦い」が始まっているという感じだ。
「それじゃ、先に視聴覚室に行ってて。私は制服に着替えるから……ふふっ、楽しみにしててね」
そう言うと永原先生が別の方向に向かう。きっと職員用の更衣室を使うんだろう。
「じゃあ桂子ちゃん行こうか」
「うん」
「永原先生の制服姿かあ、どんな感じなんだろう？」

道すがら、気になるのはやっぱり永原先生の制服のこと。
普段先生という立場の人が、あたしたちが来ている制服と同じ服を着ると言うシチュエーションはとても珍しい。
「うーん、かなりかわいくなると思うわよ。それも幼い方面で」
永原先生の実年齢が４０歳とかならまだ「美魔女」という呼び方もできるだろうが、４９９歳という実年齢はスケールが大きすぎて、イメージがつかない。
その辺にいるおばあちゃんよりもよっぽど年上なのだが、そんな雰囲気は全くない。
「だろうねえ……さっき試着していたメイド服もそんな感じだったよね」
「うん。それに先生票が脅威だよね」
「うん、先生くらいの年代だといくら匿名でも気を使わざるを得ないし」
ともあれ、あたしと桂子ちゃんで視聴覚室に入る。あたしと桂子ちゃんもミスコンでは敵同士になる。
戦いは既に始まっているんだ。気を抜いてはいけない。

## 永原先生の憧れ

「すみませーん」
「あ、ミス小谷学園コンテスト参加者の石山さんと木ノ本さんですね。生徒会長の守山です」
　そこに居たのは生徒会長さんだった。
「よろしくお願いします」
　そういえば、ミスコンは生徒会が主催という名目だったっけ？
「えっと、それじゃあ前の人が終わったら写真を撮ってください」
「はーい」
「しかし……」
　守山会長が何やら考え込む姿勢を見せる。
「ん？」
「いや、やはりお二人が並んでいると絵になるなあと」
「えー、よく言われるけど本当にそうですか？」
　あたしが質問する。
「もちろん、学園一の美人と評判の木ノ本さんと、ＴＳ病になって木ノ本さんをも超える美人とも言われる石山さんが並んでいるんですよ。うちら生徒会でも、ほぼこの二人、特に石山さんが最有力だという意見で一致しましたよ」
　やっぱりあたしが最有力なんだ。
「うーん、やっぱり優子ちゃんにはちょっと勝てないのかなあ……」
　桂子ちゃんがちょっとだけしんみりした表情で言う。
「ただ、木ノ本さんの場合は女性票ですね。それを取りつつ職員票も取ると勝ち目がありますよ」
「そうねえ……やっぱり優子は？」
「石山さんの優勝には昔の素行不良だった頃の面影をどれだけ引きずらないか、にかかっているでしょう」
　やっぱりそこかあ、そこでも「優一」が邪魔するのね。
「ま、いずれにせよ、今年はあなた方二人が大きな鍵になってくると思います」

「あ、でも会長さん、実は思わぬダークホースがいるんですよ」
「え!? ダークホースですか……それって一体……」
　コンコン
「入るわよー」
　ドアをノックすると永原先生の声がする。
「はいどうぞ」
「噂をすれば」
　ガチャッ
「お待たせー!」
「わっ、な、永原先生その恰好……」
　現れたのは制服姿の永原先生だ。守山会長は驚愕の色を隠せない。
　何せ、「おばさんが無理やり若作りしている」という風には全く見えないからだ。
　それどころか、第一印象としてはあたしたち現役女子高生どころか、現役女子中学生の方が近い。
　制服のミニスカートと、ニーソックスから見える絶対領域がそこはかとなくエロく、髪型もいつものセミロングをちょこんとツインテールっぽくまとめている。
　言うなれば、低身長な未成熟の女の子の魅力と、それと相反する相対的に大きな胸の魅力。この二つの魅力がうまくかみ合い、幼さの中にどこか艶やかさも見える。
　あたしにも似たような魅力があるけど、よりそれを強くした感じ。
　あ、胸の大きさでは勝ってるか。
「どう？　似合ってる？」
「すっ、すっげえかわいいですよ！」
「あらあら守山さん、お世辞が上手ねえ……」
「いや、お世辞だと思ってるの先生だけですから」
「うん」
　桂子ちゃんの突っ込みにあたしも同調する。
「と、とにかく、３人分写真撮りますから、永原先生と石山さんはそこに座ってください」

「「はい」」
「じゃあ木ノ本さん、撮影しますよ」
「了解」
守山会長と桂子ちゃんが出ていく。
控えスペースにあたしと永原先生が取り残される。
改めて制服姿の永原先生を見る。
「永原先生、先生はどうして今回コンテストに？」
「何となくよ。私制服はいくつも見たけど、自分で着たことはなかったし……ただ、石山さんがちょっと羨ましかったのかもしれないわね」
「え？」
意外な言葉が出る。
あたしが羨ましい？
「そ、それって一体……」
「私、学校ではずっと自分がＴＳ病だってことを隠しながら生きてきたわ。小谷学園でも、前の学校でも、その前の学校でも、知っているのは校長先生や理事長先生みたいな一部の幹部の先生だけだったわ」
対してあたしはずっと自分の病気を隠さずに過ごしてきた。
「それはどうして？」
「中高年の人は、ここの教頭先生のように長幼の序を重んじる人が多いからよ。もし職場が私の本当の年齢を知ったら、外見とのギャップにみんな苦しむわ」
確かにそれは容易に想像ができる。
「それによからぬ人が寄ってくる可能性もあるから。もちろん、日本性転換症候群協会の活動も必要だから、そこでは秘密は隠していないわよ」
「……以前にも言ったでしょう？　私、１００年以上の教師生活の中でも、教え子が同じ病気になったのは初めてだって」
「うん」
それはＴＳ病そのものがとても珍しいせいでもある。
「自分の病気を隠さずに、最初こそいじめもあったけど、めげずに女の

子になろうとし続ける石山さんの姿、それを受け入れてくれたクラスの子たち。私、幸せにしている石山さんがとても羨ましいわ」
「私は、この病気になったせいで、忠誠を誓ったはずの主君を裏切ることになったわ。そして、その後のことも含めて、ＴＳ病は今も私を追い詰め続けているわ。ＴＳ病は、私を縛り付ける呪いのようなものよ」
「……永原先生、あたしはこの病気で救われたと思うの」
「石山さん……理由を聞いてもいい？」
「うん……あ、でも桂子ちゃんの撮影が終わったみたい」
撮影スペースから、桂子ちゃんと守山会長が出てきた。
「それじゃあ石山さんお願いします」
「はーい」
カーテンで仕切られたスペースに入る。白い背景の舞台と、カメラがある。
「あれ？　カメラマンは？」
「ああ、僕が兼ねてるんだよ」
そう言うと、守山会長がカメラの前に立つ。
「左側には鏡があるから、そこでポーズを考えてください」
「はい」
言われるがままに鏡を見る。
写真に映るポーズを考える。という。うーん、やっぱり女の子座りかなあ……
こうやって……上目遣いにして……いや待てよ、もう一度立ってみてそれから前かがみになって胸を強調するというのはどうだろう？
そうだ、「レッツゴー」みたいな感じで拳を作って片方を振り上げてもう片方を９０度にして……これで女の子座りして上目遣いすれば……うーんこれも違う。これじゃ混ぜすぎだ。
うーん、やっぱり普通に女の子座りにしよう。上目遣いはやめて正面から普通に笑顔を作る。
ともあれ女の子にしか出来ないこの座り方をするのは、あたしにとっては結構意味のある行動だ。

「会長さん？　これでいいわよ」
「あ、はーい。どこから撮ります？」
「正面からで」
「ＯＫ」
　会長さんがしゃがむ。
「いきますよ……３……２……１……」
　ピピッ！
　デジカメのフラッシュが眩しい。
「これでどうですか？」
　デジカメにあたしの写真が写っている。
　背筋がやや前かがみで笑いながら女の子座りしている。
「うん、これでいいよ」
「了解、じゃあ全員分の写真撮り終わったら壁に貼り付けておくから。じゃあ次の人……永原先生呼んでくれる？」
「はい」
　あたしはそう言うと、控えスペースの方に戻る。
「あ、石山さんお疲れ」
　制服姿の永原先生が控えている。他には桂子ちゃんと、１年生の女の子が一人いる。おそらくミスコン参加者だ。
「永原先生、守山会長が待ってます」
「はーい！」
　元気よく子供のように返事する永原先生。
　やっぱり学校の制服を着ると、性格まで変わっちゃうのだろうか？
「優子ちゃん、私は行くね。天文部のことが心配だから」
「え？　天文部ならもう――」
「念のため。よ。優子ちゃんは？」
「永原先生と話の途中だから、ここに残るよ」
「そう、じゃあね」
　そう言うと桂子ちゃんが部屋を去っていく。
「あの、石山先輩」
「あら？　何？」

一年生の女の子が話しかけてくる。確かにそれなりにかわいい子だけどあたしや桂子ちゃんの敵じゃ無さそうだ。
「永原先生と何を話していたんです？」
「ああ、うん。ＴＳ病について、ね」
「あ、そういえばそうでしたね。石山先輩、ちょっと前まで男だったんでしたっけ？」
「ええ」
「永原先生もでしたっけ？　あの人、ミスコンに出るんですね」
「今年が初めてみたいよ」
「へえー、そうなんですかーしかし驚きですよ。確かに見た目は若いですけど……まさか先生が出てくるなんて」
１年生の女の子と話すなんてことはこれまで殆どなかった。
こういうコンテストに出るくらいしか機会がないとも言えるかもしれない。
「そうよねえ……実はあたしも今日聞かされて……桂子ちゃん共々びっくりだったよ」
「木ノ本先輩も同じクラスなのに出るんですか!?」
「うーん、そりゃああたしが出て桂子ちゃんが出なかったら絶対去年みたいになるし、その逆もまた然りでしょ」
「え？　去年のミスコン何があったの？」
「実は桂子ちゃんが参加しなかったのよ。理由はよく分からないけど」
もしかしたら、ちょうど「女の子の日」だったから水着審査を嫌がったのかもしれない。
まあ、推測してもしょうがないわね。
「ああ、木ノ本先輩が参加しなかったせいで――」
「うん、去年優勝した当時３年生の先輩が『木ノ本桂子がいないミスコンで優勝するなんて』ってケチが付いちゃって」
その頃から、桂子ちゃんはクラス一の美女として評判だった。
ただ、実は学園一だったことまでは知らなかったから、当時のあたしは相当違和感を覚えたのも事実だ。

その時は男だし乱暴者だったから、ミスコンに興味はなかったけど。
そんなこんなで、永原先生が戻ってきて、1年生の子が入れ替わる。
「それじゃあさっきの話をしてくれていい？　あ、相談室使おうか」
「う、うん……」
ここにはもう用がない上に別の人に聞かれるのもよくないという判断だ。

「ねえ、あれ石山優子と……誰だ？」
「よく見ろ。あれは古典の永原先生だよ」
「おいおい……マジじゃねえか！」
「見違えたな。女ってすごいよな」

男子二人組が制服姿の永原先生のことを噂している。
「へへ、やっぱり歩いていると注目の的だったわ。ずっとこの服で通勤しようかなあ……」
「止めたほうがいいと思います。色んな意味で」
ともあれ、あたしたちで相談室に入る。
永原先生はあたしの担当カウンセラーということになっているけど、学校で毎日のように会っているせいか、こうやって相談室を使うことはほぼなかった。
「それじゃあ、改めて教えてくれるかな？　どうして、私には『呪い』でしかないこの病気が、石山さんにとって『救い』なのか？」
あたしは、永原先生に、どうしてＴＳ病で救われたと思ったのか？
その理由を言う。
乱暴な自分を変えられたこと、親の名前を裏切ることがなくなったこと。
それだけじゃない、２つに分裂していたクラスの女子が１つになったこと。
「優一」に狂わされた男子たちも、やがて元の姿に戻ったこと。
男子たちも、あたしの改悛の情を認めてくれたこと。

そして、あたしを許してくれた男の子の一人に、女の子として恋ができたこと。
それまでのクラスと比べれば、この病気であたし自身だけでなく、クラスのみんなが救われたようにも見えたのだ。
「――というわけです永原先生」
「そう……本当に、この病気は人を狂わせるわね。石山さんみたいに、この病気を幸福だと思った人は、本当に稀なことよ」
「はい、実際自殺者が多いと」
「それだけじゃないわ。女の子として生きていくと決めた人たちにも、色々な軋轢が生まれたりするわ」
「でもそれならあたしだって――」
「確かにそうね。でも私が受けてきたことに比べれば小さいわよ」
それは確かにそうだ。
「私は主君を裏切り、村に戻っても帰参できなかったわ。そして不老がバレ始めると死の恐怖からすぐに逃げることにしたわ」
以前聞いたことがある。
「――こうして私は、真田家を裏切った。江戸時代になって、真田伊豆守殿と、４代様に救われた時も、私は裏切ったわ」
永原先生の初恋の話だ。
「でもそれは、永原先生がずっと一人で苦しんできたからで――」
「ええそうよ。でもね、私の不忠を許してくれた人を裏切ったことには違いないの。４代様の命は最後の将軍まで引き継がれ、私は江戸城で……長い時を過ごしたわ」
「真田家に再士官したいと何度も訴えてたけど、ついに叶わなかった。それは私が、少しでも真田家に恩を返したかったからで何の他意もなかった。だけど、真田の歴代当主様は、私に配慮して、腫れ物に触るように扱ったわ」
「まさかそれって？」
「ええ、『善意』で。よ」
以前の教頭先生の話を思い出す。
悪人が悪を自覚してする悪行はたかが知れている。でも、自分が本

当に善意でやっているんだという思い込みのもとで行う悪行は、遥かに質が悪いと。
「そして私は、長生きをするにつれ、またしてもかけがえのない恩人に、何の恩も返せなかったのよ」
「それって一体？」
「夏祭りの時のこと、私の着物、覚えてる？」
「ああうん、確か吉良殿だったっけ？」
「ええ。吉良上野介殿が、町娘の格好で江戸城に居て、陰口を叩かれていた私を支援してくれたのよ」
「実はね、吉良殿を斬りつけた浅野長矩は江戸城で天子様……つまり天皇陛下の勅使を歓待する役目を負ってたのよ。で、実はその時失礼の無いようにと、高家旗本に礼儀作法の指南役をあてがうようになってたの」
「その指南役っていうのが？」
「そう、吉良殿だった」
「あの日のことは、とにかく驚いたわ。いきなり浅野が吉良殿を斬りつけたと……浅野長矩は『意趣これあり候』……つまり『恨みがあります』とばかり繰り返して、『意趣とは如何』と問うても同じことを繰り返していたわ」
　気が狂っていたということか。
「朝廷との大事な儀式を台無しにされた５代様は大層お怒りになられたわ。あの時の怒りの形相は、今でも目に焼き付いているわよ」
「じゃあ、永原先生が言う赤穂浪士というのは……」
「浅野長矩の家臣だった大石良雄を中心とする４７人が、吉良殿の屋敷を襲撃したわ。そこから全て狂ってしまった」
「浅野家は大学殿や本家のこともあって再興したけど、世論に悪人に仕立て上げられた吉良の家は、世論をなだめるために犠牲になったわ」
　あまりに、理不尽な話だ。
「もちろん私は反対したわ。『かようなことは戦乱の世のごとし。喧嘩両成敗はもはや時代遅れであり、生類憐れみの令とも逆行する』と」

「それでどうなったんです？」
「上様は『そちの言うことも最もだ。だが天下の将軍といえど世論を無視できぬ』と」
　意外な話だ。
「私は吉良殿への恩も返せず、吉良殿の本当の姿も伝えられず……当時を知る唯一の人になっても、何の効果もなかったわ」
「赤穂事件の時、私は既に２００歳近かった。普通ならとっくに死んでいる歳よ。もし命を惜しまず、あの倒れた日に、あるいは本能寺の時に死んでいれば……更なる不義を重ねることもなかったのに」
「それだけじゃないわ、明治以降は、もはや真田家と吉良家から受けた恩を返すことは叶わぬと知りながらも、死んでしまえばそれは出来ぬと……本当にバカよ。私は更に不義を重ねることになったの」
　永原先生が鎮痛な面持ちで言う。
「え⁉　まだあるんですか⁉」
「ええ、７、８０年程前より起きた戦争の時、私は『どのようにして命を拾うか』ということばかり考えていたわ。私は戦国時代の人間だから正直に言うけど……久々の大戦争に血湧き肉躍るものもあったわよ」
「じゃあどうして逃げ延びることばかりを？」
「真田家と吉良家のことよ。もはや真田家の当主にさえろくに会ってなかったのに、恩を返さねばという気持ちが勝ってしまったために……私は事もあろうに天皇陛下を裏切ったのよ」
「え⁉　どうして？」
「私はその時女学校の教師として山に疎開していたわ。でも、いざとなった時は単独で山脈の更に奥に逃げる算段で、その時は生徒を囮にする予定だった」
「あ！」
「ええ、そんなことを考えることそのものが、とんでもない裏切り行為よ。でも死んじゃったら二度と恩を返せないって……真田家や吉良家を裏切ることなんかよりも、よっぽど裏切っちゃいけない相手だったのに……私は本当に……最低の女よ……」

敵前逃亡計画は結局実行されなかったけど、永原先生を今も苦しめているのだという。
ピンポーン
「えー小谷学園ミスコンテスト、予選の写真が完成しました。ポスターを張り終わりましたので報告いたします」
守山会長の声で校内放送が流れる。
「ごめんなさい、長く引き止めちゃったね。さ、行きましょうか」
「ええ」
あたしと永原先生は、相談室を出て、教室へと向かう。
「そういえば先生、着替えなくていいんですか？」
「うーん、もう少しこのままでいたいかな」
ともあれ、まずは一旦2年2組の教室へと向かう。
「あれ？　人だかりができてますねえ」
「あ、永原先生だ！」
虎姫ちゃんが永原先生を指差す。
すると人だかりが一斉に永原先生を見て声を上げる。
「あら皆さん、ふふっ、写りはどうですか？」
あたしたちはまるでモーセのように人だかりに避けられ、ポスターを見る。
あたしのポーズも上手く取れているけど、永原先生のポーズはもっと大胆だ。
お尻をこっちに向けつつ、腰を捻って横乳が見えるようにし、顔はこっちに振り向いて、左手をこちらに突き出すポーズ。
お尻から上を上手くひねることで、太腿からお尻、胸、顔と男がよく見るパーツを見せつけている。
男が喜びそうな部分をうまく描写していて、なるほど強敵になるという印象だ。
「さあ、準備もそろそろおしまいよ。後は女子がリハーサルをするだけだから、男子は解散してね」
「はーい！」
2年2組の男子が解散していく。

「それじゃあ、メイド喫茶のリハーサルをするわよ」
制服姿の永原先生は、先生というよりまるでクラスのリーダーみたいだ。
あたしたちはそのまま、女子同士でメイド喫茶の接客練習を行った。
後は本番当日まで、全力を尽くすのみだ。

# 文化祭が始まる

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……！」

ゆっくりと意識を回復し、ハート型のクッションへと立つ。

今日はお人形さんの衣装を着替えさせてあげる。最近はちょっと遊ぶ頻度も減ってきたし、またお小遣いを使って新しく衣装を買ってもいいかもしれない。

今日は学園祭本番。1日目はまだ一般に公開はされない。

文化祭1日目は、いわば一般公開前の前哨戦という意味合いもあるのだ。

ここで行われた失敗などを教訓に2日目に本気を出すという感じだ。

ともあれ、あたしは制服に着替え、文化祭のことを考える。

もちろん、浩介くんと回りたいけど、出し物の時間のこともちゃんと頭に入れないといけない。それにミスコンもだ。

天文部に関しては坂田部長が中心に切り盛りしてくれるそうだ。

しかし考えてみれば桂子ちゃんもミスコンがあるから坂田部長は殆ど動けない感じだ。

坂田部長はそれでいいのかと聞くが「文化祭は他の展示にあまり興味が無いですの。あるとしたらミスコンくらいですわ。ならば天文のことを調べていたいですわ」とのこと。

「おはよー母さん」

「おはよー優子、いよいよ文化祭ねえ」

母さんと挨拶、やはり話題は今日から始まる文化祭のこと。

「うん、母さん、あたし頑張るから」

「何を頑張るの？」

「め、メイド喫茶と……ミスコン！」

「え!?　優子、ミスコン受けるの？」

母さんが驚いた表情で言う。

「う、うん……」

「あらあ、それじゃあ優勝間違いなしねえ……」
母さんは確信的な表情で言う。
「それがそうでもないのよ」
「え!?　小谷学園で優子より美人がいるの!?」
母さんが驚いている。
「そ、その……永原先生が意外と強敵で」
「ふぇ?　先生がミスコンに参加していいのかしら?　でもそうねえ……確かに先生という個性もあるし……ＴＳ病という意味では優子の先輩だし……確かに強敵ね」
母さんはそう言いながら、朝ごはんを準備してくれる。
「いただきます」
「明日はお父さんとお母さんも来るから、楽しみに待っててね」
「教室にシフト表があるから、時間を確認してくれる?」
「分かったわ」
ともあれ、朝ごはんを食べて、学園に行かないと。
今日は土曜日だけど、まだ一般に開放されていない文化祭なので通学路はいつも通りの光景だ。今日から学園祭開始だけど、学園祭の看板はまだ掲げられていない。
このあたりは実行委員が明日掲げてくれるもので、一般の人が迷い込まないようになっているのだ。

ガラガラガラ……
「おはよー」
「あ、おはよー優子ちゃん」
教室に入ると、浩介くんが真っ先に挨拶してくれる。
そういえば文化祭の準備期間中、あまり浩介くんと話せなくて寂しかった。
「いよいよ文化祭だね。一緒に回ろうよ」
「うん、俺もそのつもり」
胸を押し付けても大丈夫になったし、この文化祭で一気に距離を詰めたかった。

「うぇへへ」
だからあたしは、浩介くんと腕を絡ませて胸を当てる。
「おおおお!!!」
「きゃー優子ちゃん大胆！」
クラスから歓声が上がる。しまったあ、教室の中ということを忘れてたわ。
「ちょ、ちょっと優子ちゃん！　は、恥ずかしいから！」
「あわっ、ご、ごめん……」
あたしも急に顔を赤くしてしまう。恋は女の子をかわいくするとは言うけど、間違いなくバカにはしてしまう気がした。
「ちくしょー、ちょくしょおおおおおおーーーーー!!!!!」
高月くんが悔しそうな雄叫びを上げている。

「もう、優子ちゃん、どうしたの今日は？」
メイド服姿の桂子ちゃんが心配そうに話しかけてくる。
ちなみに、教室は模擬店に改装してあるが、椅子の数はクラスの人数と同じなので、みんな思い思いに座っている。
あたしは当然浩介くんの隣。
「あはは……ごめん、文化祭準備期間中は女子と行動することが多くて……それで……」
「はいはい……ところで、今日はミスコンテストの予備投票が行われるわよ」
「あ、そうだったね」
「あんまり羽目をはずしすぎると、投票を逃すかもしれないわよ。気をつけてね」
桂子ちゃんが忠告してくる。ありがたく受け取ろう。
「う、うん……」
「おっと、敵に塩を送っちゃったかな？　まあいいか」
でも既に事実上の彼氏持ちだということは、ほぼ学校に知られているはずなんだけど。
でもあんまり得票率には影響しなかったはず。去年のＴＯＰ３

だって桂子ちゃんが出てないのはともかく、全員彼氏が居たって言うし。
「とりあえず、さ。う……腕を組んだり、手を繋ぐのはちょっと……俺も恥ずかしいし」
「は、はい……」
浩介くんからも禁止令を出されてしまう。むむむ、文化祭で一気に距離を詰める作戦はいきなり前途多難な予感。
ともあれ、クラスメイトが次々に入ってくる。
いつもの朝のホームルームの時間になれば、文化祭開始の放送が流れるはずだ。
ガラガラ
「はーいみなさん集まってますねー」
入ってきたのは永原先生。昨日見せていた制服姿ではなく、いつものレディースーツだ。
「今日明日は学園祭です。特に明日は一般の人にも開放しての学園祭になります。祭りだからといって羽目をはずしすぎないように気をつけてください」
「「はーい！」」
「それじゃあ放送まで待ちましょうか。後1分ほどです」
妙な沈黙が流れる。
短いようで長い時間。
今か今かと待ち構え、ピリピリした感じ。
まさに嵐の前の静けさという言葉にふさわしいこの長い1分間。
かつて「アルベルト・アインシュタイン」が相対性理論の「相対性」について説明したこの時間の感覚の違い。
ピンポーン
「長らくお待たせしました。只今より、平成２９年度、小谷学園文化祭を開催いたします！」
守山会長のアナウンスが聞こえると、「わー!!!」っという歓声が隣の教室からも、この教室からも聞こえてくる。
何人かは既に立ち上がり、教室から我先にと出ていく。

「あたしたちも行こうか浩介くん」
「そうだな」
　あたしは浩介くんの席に移動して声をかける。
「どこからめぐる？」
「う、うんまずはこの学年の他のクラスのを見ようよ」
「うん、そうだね」
　２日もあれば、それなりに回れるはず。
　もちろん全部は難しいだろうけど。
　というわけで最初にやってきたのは２年１組。こちらでは輪投げやフリースロー大会が行われていた。
　どうやらあたしたちが一番乗りらしい。
　ちなみに、得点によって景品は特にないが、スコアランキングとか遊んだ回数ランキング何ていうものを作って遊ぶらしい。

「よし、輪投げだな。輪投げ一回頼むぜ」
「あいよ」
　浩介くんが受付役の男子生徒に言う。
「浩介くん、頑張ってね！」
　あたしが何気なく応援する。
「くー美女を連れて羨ましいな」
「へへっ、渡さないぜ！」
　浩介くんが胸を張って言う。
「分かってるよ。優子ちゃん守ったのお前だからな」
　浩介くんがあたしを林間学校で守ったこと、そしてそれをきっかけに恋に落ちたエピソードは小谷学園でもそれなりに有名な話らしい。
　やっぱり体を張って守った相手に惚れられたんじゃしょうがないという雰囲気もあって、あたしを略奪してやろうという男子はこの学園にはいない。
　もしかしたらそれもあって、桂子ちゃんが男子同士で牽制されているのかも。
「じゃあ制限時間は無制限だから、いつでも始めてくれ」

「おうよ」
ともあれ、浩介くんの輪投げが始まる。
「それっ！」
一番奥はそれなりに遠いが、果敢に狙っていく。
「おっ！　すげえ！」
難なく入れていく浩介くん。
輪投げは１０回行うが、そのうちの７回が一番奥の最高点に、３回はその手前のに引っかかった。
「うひょー、いきなり高得点だぜ。うちのクラスでもここまでは行かなかったぜ」
受付の男子生徒が驚いている。
「よし、次は優子ちゃん。やってみるかい？」
「うん、でもどうして私の名前を？」
この人とは一回も顔を合わせたことがなかったはず。
あたしがその経緯もあって有名人だということは知っていたけど何となく聞いてみたい。
「……おいおい、優子ちゃん。あんた自分が学園一の有名人だって知らないのか？」
「ああいやうん、知っているけど。何となく、ね」
「林間学校でのエピソードで優子ちゃんの好きな男のことも知られてるぜ。本当に変わったよな」
この男も、あたしの胸を見ている。
浩介くんに胸を見られると顔が赤くなってしまうこともあるが、他の男に見られても何とも思えない。
改めて浩介くんと恋に落ちていることを自覚しつつ、少し顔をそらす。
「あ、女子はもう少し手前……って優子ちゃんは子供のラインの方がいいかな？」
「あ、うん。そうしてくれると助かるわね」
やっぱり運動能力が壊滅的だということも知られているらしい。
１投目、一番奥を狙ったが、大きく外れる。

２投目、真ん中辺に早くも切り替える。僅かに外れる。
このまま５投連続で外してしまう。
手前の方の低得点を狙う方針に切り替える。
一番手前の１点をまず狙ってみる。
「やった入った！」
「……」
みんな沈黙している。身を乗り出して真下に落としただけだからだ。
さすがにこれだけじゃあれなので、その少し奥の２点を狙う。
「よし、やった！」
これで３点。
でも２点を狙った２投目は外れ。残る３投のうち２投が入り結果は７点だ。
「あーうん、気に病むことはないよ優子ちゃん」
「あ、あはは……」
子供でも出さないような成績だ。しかも１点は明らかに身を乗り出しただけの点数。
「って、よく考えれば１０点確実に取ったほうが良かったじゃない……」
「あー優子ちゃん、それはその……色々な意味で負けな気がするぞ俺」
受付役の１組の男子が言う。
「そうは言っても……あたしもう、こういうので負けるのが普通になっちゃったし……」
実際その通り。桂子ちゃんと龍香ちゃんでゲームセンター行った時から分かってたこと。負ける度に泣いてたら身が持たない。
「うーん、そう言うメンタルになっちゃうとますます――」
「こら、あんまり優子ちゃんをいじめないでくれ。結構気にしているんだから」
浩介くんが１組の男子の言葉を遮る。
「あ、浩介くんありがとう」
あたしが傷つかないように配慮してくれたお礼を言う。

「いいっていいって」
続いてはフリースロー、バスケットボールではなく、使うのはビーチボールでゴールも一定時間すると動く仕様になっている。
ちなみに、この動かすのは中の人が行うらしく、またしばらく時間が立って一回も入れられないと救済策として前に来てくれる親切仕様だ。
「子供も来る事を考えたら、０点なんて惨めな思いはさせたくないんだ」
１組の男子が言う。
夏祭りの屋台の時もそうだけど、やっぱり最近はこういうフォローをきっちりやらないと不評になってしまうそうだ。
今度はまずあたしからフリースローをする。女性子供のラインは一番前、予め教えてくれたが、前に進むに連れ得点が低くなるものの、最終的には子供でも身を乗り出すだけで入るようになり、しかも１回は入るまでは時間無制限になるので０点は起こり得ないそうだ。
「それじゃあ、よーい。はじめ！」
１組男子の号令のもと、フリースローが始まる。
「えいっ！」
思いっきり両手で投げたが、バスケのゴールに届かない。
「えいっ！」
今度は片手で、斜め４５度にして投げる。
もちろん精度なんて付くはずもなく、かと言って両手でやっても届かず。
バスケゴールがちょっと前に来る。
「えいっ！」
ゴールが前に着たことで、両手で投げてようやく届く距離になる。
でも、コントロールが悪いため、右に左にそれ続ける。あんまり横幅ないのに上手く入らない。
「残り３０秒！」
ゴールが更に一段階前に。
それでも入らない。

「お願い！」
ガンッ
「入って！」
ドンッ
トントン
1組の男子が足を二回鳴らす。
するとゴールが一気に一番手前まで来てくれた。
「わあ……」
ファッ……ファッ……ファッ……
あたしは立て続けにゴールに入れ続ける。ほんのちょこんと身を乗り出すだけで簡単に入る。ああ、何て爽快なのかしら。
「はいっ、そこまで！」
でも、6回ほど入れた時点で時間切れになってしまう。楽しい時間は本当にあっという間だ。
「ふう、やっぱり一番前じゃないと入らないわねえ……」
「ああいや、実は一番前になる前にもう一段階あって、そこで時間切れまで入らない場合に一番前にするんだ」
あれ？　さっきの様子と、この1組男子の説明とが矛盾している。
「え？　じゃあルールと違うじゃん。さっきは一気に一番手前まで来てたよ」
あたしが矛盾点をつく。
「ああ、その……優子ちゃんがあまりにかわいそうだったから……」
さっき脚を二回鳴らしたのはそのためなのね。
「そう、ありがとう」
あたしはニッコリと笑顔が漏れる。その男子がちょっと赤くなっている。
「うっ……ど、どういたしまして……次は浩介くん……ってどうしたの？」
浩介くんがなんか不機嫌そうな気がする。
あーあ、嫉妬させちゃったかな？
「ああいやごめん、なんでもない。優子ちゃんかわいいなあと思って

たらちょっとボーッとしちゃって……」
　じゃあそういうことにしておいてあげよう。
「あら、そうだったの。とにかく、浩介くんの番だよ」
「お、おう……一回頼む」
　浩介くんがあたしが投げていたボールを持つ。
「ＯＫ……よーい、はじめ！」
　男子の掛け声とともに始まる。
　男子は女子や子供よりもちょっと下がった位置からスタートになる。
「おりゃあ！」
　ファッ
　浩介くんの第一投が華麗に決まる。ちなみに１０点だ。
　その後も、浩介くんはシュートを次々決めていく。
　身体能力ではどうしようもなく情けないあたしと違って、かっこよくたくましい浩介くん。
　ふと、女の子になる以前はこんなに強い浩介くんと身体能力で競い合っていたことを思い出す。体力テストでは２０メートルシャトルランなど、一部では浩介くんを凌駕さえしていた。
　そうだ、浩介くんだって、あたしがまだ男だった時に、元はと言えば「優一に仕返しする」ために鍛え始めたんだ。
　あたしは本当に弱くなった。でも、もう強さを求めない、求めろと言われても求めたくない。
　うん、弱くてかっこ悪くてもいいもん。
　今はあたしのために力を振るってくれる、優しくて強い浩介くんが慰めてくれるんだから。
「はいそこまで！　すごいな。７０点だよ！」
「へへっ」
「浩介くんすごいなー」
　あたしも褒める。うん、優一でもこんなにうまくは行かなかった気がする。

ピンポーン

「小谷学園2年3組からお知らせです。後5分ほどで、小谷学園2年3組教室において、自主製作映画『小谷学園異聞記』を放送いたします。上映時間は３０分となっております。どうぞお気軽にお立ち寄りください」

２年3組の生徒と思しき声で放送が流れる。

「お、行こうか。優子ちゃんは予定大丈夫？」

「うん、でもこの上映が終わったら１０分でメイド喫茶のシフトに入るから、一旦お別れだね」

メイド喫茶のシフトのこともあるから、いつも浩介くんと一緒になれるというわけではない。

まあ、厨房で一緒になる時間も多いけど。

「よし、分かった。ともあれ3組の教室に向かうか」

こうして、あたしと浩介くんは次なる展示を求め3組の教室へ向かった。

# 嫉妬の種

３組の教室に抜ける前、各教室の壁には「ミスコン」の全参加者のポスターとクラス代表のポスターがそれぞれ貼ってあるのだが、２組だけは明らかに異様な雰囲気だ。

永原先生とあたしと桂子ちゃんが、それぞれ思い思いにポーズを取って笑顔を振りまいている。

相乗効果もあって、他の教室のミスコンのポスターと比べても、遥かに目立つし、写真写りもとても可愛く見える。

これを見て、あたしはようやくアイドルがグループになる理由のほんの１％位を理解した気がする。

「すげえなあ……２年２組大人気だよ」

「うん、特にあたしが人気だといいなあ……」

でも実際は、結構人気が拮抗している。永原先生という存在が、特に大きい。

「でもよ……なんだかなあ……」

「浩介くん、もっと自信を持ちなよ。ミスコンで人気出るくらいの女の子と一緒に回れるんだからさ」

ついつい彼女と言いたくなってしまう。

でもまだ、反射的本能まで女の子と決まったわけじゃないから。彼女とは言えない。

確かに、徐々に削れている自覚はある。もしキスできたら……告白したい。

そんなことを思いながら、３組の教室に入る。

「あ、いらっしゃいませー」

持ち場を担当している人から、ささやかな紙のパンフレットをくれる。主人公を務める主演は今回ミスコンの代表になった女の子だ。

これはよく考えた。

やはりどこもミスコンに力を入れているのだろうか？　それともクラスによって違うのかな？

まあいいや、ともあれ今はこれを楽しもう。

よく見るとお客さんは結構入っている。最初の上映だからだろう、興味本位という人が大半だ。
まああたしたちも含めてだけど。
「それじゃあ時間になりましたので上映します。上映中の私語は慎むようにお願いします」
そう言うと、３組の男子生徒が何やら後ろで機材をいじり始めた。
ともあれ映画がスタートだ。
主人公の女の子が、クラスの生徒達と何気ない日常を過ごすところで始まる。
カメラワークはそれなりに工夫されていて、かわいく映るようになっている。
さて、学園祭の映画ということで、やることと言えば、ＣＧもなく、大根役者達による三文芝居だ。
だがそれがいいのだ。むしろ、学園祭の映画でＣＧをフルに使い、凄まじい演技力を見せた一流の映画を見せられても反応に困る。
そういうのは演劇部とかの仕事だ。
日常を過ごしている中で、いきなり小谷学園の「悪の組織」とやらが登場する。どうも、金に目がくらんで生徒を拉致して人身売買しているらしい。
ちなみに、「悪の親玉」も明らかに見たことある顔。
……忘れもしない、あたしが「優一」として、最後に怒鳴った人。あたしの「最後の罪」の被害者。
あたしが水飲み場でうがいをしたことに怒ったこと。罪の記憶が薄れつつあっても、この「罪」だけは忘れそうにもない。
この後の、数学の授業中に腹痛で倒れて、あたしは次に目が覚めた時に女の子になった。
そんなことを思いつつも、映画は続く。
主人公の女の子が救出のため、アジトに乗り込む。ということになっているが、明らかに日常パートと同じ校舎だ。
ともあれ敵組織の雑魚を魔法で蹴散らす。
のだが、魔法というのはどうも召喚獣らしい。

そしてこの召喚獣、明らかに人間がお面被ってるだけだ。
でも、何故か敵の雑魚は主人公が「はあっ！」と腕を前に突き出しただけで恐怖して逃げる。
というか、敵役の中に拉致された被害者役の生徒と同じ人が居たような……まあいっか。

「ふはは、よくぞここまで来たな」
「見つけたぞダークオダニマン！」
棒読み演技でお決まりのセリフを吐く。
「てやあ！」
ヒロインの女子高生がハイキックする。
更にスライディングして足払いを工夫する。スカートがその度にふわりときわどい。
上手くカメラを工夫していて、映像上では見えてないけど、これ撮影した時絶対パンツ見えまくっているよね……
そして最終的には、悪の親玉が倒され、拉致されていた生徒たちが救出され、一件落着となった。
最後は主人公兼ヒロインがスカートを摘んでギリギリのところで誘惑して終了。
何でこういうお色気シーンがあるのかと思ったら、主人公の女の子が「ミスコンへの投票をよろしくお願いします」と宣伝していた。
これで映画は終了、よく分からない微妙な出来に拍手はまばらだ。
「ありがとうございました。それでは引き続き小谷学園文化祭をお楽しみください」

「なあ、あの映画……」
浩介くんが何とも微妙そうな顔であたしを見る。
「映画というか、ミスコンの宣伝よねぇ……あれ」
「何処のクラスも必死なんだな」
「うん、とりあえずあたしはシフトもあるから2組に戻るよ。浩介くんは？」

「うーん、ちょっとあてもなくブラブラしてる」
「そう、じゃあシフト終わったらもう一度集合ね」
「おしわかった」
浩介くんと分かれ、２組の教室へ。
「あ、おかえりなさいませご主人様……って優子じゃねえか」
「もう、虎姫ちゃん」
メイド服姿の虎姫ちゃんが挨拶してくれる。よく見ると虎姫ちゃんとともにシフトを組む女子が２人いた。虎姫ちゃん、メイド服が意外に似合ってて、「着飾ればかわいい」というのは本当だった。
「それじゃっ、交代してもいいか？」
「うん、それよりもあたしのメイド服は？」
「ハンガーにあるよ。桂子がちゃんと工夫したから大丈夫よ」
「そう」
あたしはカーテンで仕切られている厨房に入る。中はかなり狭く、男子たちが所狭しと活動している。
「お、石山か。悪い、おいみんな、出るぞ」
「よし、分かった」
男子は男子でまたシフトが別らしい。中で女子が着替えているのか、男子たちが一斉に厨房から出ていく。
更に奥のカーテンを引っ張ると脱衣所にある６つのかごとメイド服のセットがあった。
「あ、優子ちゃんおはよう」
よく見るとあたしと組む予定の二人の女子が着替えていた。
あたしも間に入り、着替えを始める。すっかり女子同士の着替えにも慣れた感じ。
上手くパンツ見えないように工夫する着替え方、永原先生のカリキュラムで教わっておいてよかった。
「優子ちゃん、行こうか」
「うん」
あたしたちは挨拶もそこそこに厨房から外へ。すると男子が入っ

てくるかと思えば、制服へと着替える予定の虎姫ちゃんたちが厨房に入るのを確認してから入る。
なるほど「事故防止」にはああするのか。
「じゃあリハーサルの通りやろうか」
「うん」

ともあれ、ちょうど今は客足が途絶えた頃……と思っていたら……
ガララララッ
男子6人が一気に入ってくる。
「あ、おかえりなさいませご主人様ー！」
あたしが愛想よく笑顔を振りまく。
「うおおおお!!!」
男子たちがやけに気合が入っている。
「こちらにお座りください」
テーブル一箇所あたり3人から4人になっているので2組に分けて座らせる。
「ご注文お決まりでしたらお呼びください」
あたし以外の女子の2人がメニュー表を渡す。
あたしはいわば「看板娘」の役割をして、給仕の役割は他の二人に任せる。もちろん、混雑時間帯はそうでもないけど……って、また来た。
「おかえりなさいませーご主人様ー！」
あたしの笑顔にやられたのか男子の一人がビクッとなる。
こんな露骨な営業スマイルでもやっぱり本能的には「気があるんじゃね」と一瞬思ってしまうのが悲しき男の性だ。
ともあれ、先程の男子たちの近くの席に案内し、メニュー表を渡してあげる。
「いいなーあいつ、優子ちゃんがつきっきりだぜ」
「あーあ、安曇川さんのメイド服も意外とかわいかったけど、やっぱ優子ちゃんのメイド服姿が格別だよなあ」

「うんうん、特にあのダイナマイトおっぱい！　もうあれ犯罪だろ犯罪！」
やっぱり男子からは性的な目で見られている。道行く人の視線もそうだし、水泳の授業でもそうだったし、もう慣れっ子だ。
「おいおい、優子ちゃんはむしろあのお腹周りがいいんだろ。健康そうだしよお」
「ほほう、さすがだなお前。目の付け所が違う」
「いや優子ちゃんは胸に隠れているけどお尻がいいと思うんだよ俺」
胸以外のあたしの魅力について熱く語る男子たち。
あたしがふと二人の女子を見る。
女子たちは嫌悪感を持ってこの男子たちを見ていた。
ダメだぞ、エッチな男子が嫌いなんて言ったら貰ってくれる男居なくなるわよ。
さて、お客さんの注文が決まったので、女子の一人が厨房にオーダー表を見せて、厨房役の男子たちがそれを掲示していく。
これに従って調理をするのことになっている。と言っても簡単なものだけど。
虎姫ちゃんの時間帯は、学園祭も始まったばかりなのであまり人も居なかった。
しかし、あたしのシフトだということは前日の時点で知られていたのか、店内はあっという間に男性客で一杯になる。
急に忙しくなる。男子たちが忙しなくメニューを作り、あたしたちは決められた番号を間違えないようにしつつ、「お待たせいたしましたーこちら何々になります」と言って、お金を徴収し、売上を入れる貯金箱へと持っていく作業を続ける。
本当は色々とサービスをしなきゃいけないんだけど、混雑時間帯故にどうにもならない。
しかもよく見ると教室の外へも行列ができている。
座席の都合上、数人組の男子がバラバラになることも多い。
そして思ったのが、あたしが接客すると男子は露骨に機嫌が良くなり、他の女子二人だと露骨に残念そうな顔をするのだ。

しかも、男子の会話もあたしのことばかり。主にメイド服が似合ってるとか顔が可愛いとか黒髪がかわいいとかという話も多いが、ダントツで多いのがあたしのおっぱいとお尻、更にちょっとかがんだりすると、あたしのメイド服のスカートの話題まで飛び交う。
中には「おっぱい触りたい」とか「パンツ見たい」という話を堂々している男子たちまでいる。
さすがに「ここはそう言うお店じゃないです」と注意しておいた。
男子たちは顔を赤くしながら「えへへ、すいませんすいません」と言っていた。なんかわざとな気がする。

座席が全部埋まり、ちょっとだけ空き時間が出来る。
「あーあ、もう何で男子ってエロい話が好きなんだろ？」
「あたしも、ああいうことに興味ある男子って嫌い」
案の定あたしと同一シフトの女子2人は不満そうだ。
「二人共、エロい男子を嫌っちゃったら貰い手なんて居なくなるわよ」
「……優子ちゃんって本当余裕だよねえ」
「うんうん、強者の余裕っていうの？　羨ましいわねえ……」
「だって、男子ってそう言う生き物だし。ああ見えて、男子はみんな年がら年中エッチなこと考えているのよ。特にこういう文化祭みたいな時は、ね」
「うあー、優子ちゃんが言うとシャレになってないわ……」
「うんうん」
やっぱり、元男子というところでこういうことに関してはあたしの言うことはみんな信用してくれている。
「あーあ、男子とどうやって付き合えばいいんだろ？」
「うん？　好きな男の子が出来るとまた違うわよ」
「篠原だっけ？　優子ちゃんはあいつの何処がいいのさ？」
「ん……それは……あっ、いってらっしゃいませご主人様ー！」
男性客が退店しそうになるのを見て、あたしたちは慌ただしく仕事を再開する。
並んでいた別の客を通し、そんなこんなでシフトの時間が過ぎてい

く。
「うわあ、すごい大繁盛だねえ」
やってきたのは制服姿の桂子ちゃんと他のシフトの女子2人。
「あ、ちょっと手が離せないから、先に着替えててくれる？」
「あ、うん」
桂子ちゃんたちが慌ただしく厨房へ入る。
「3人一斉に着替えてから出るから大丈夫」という声が聞こえてくる。

「お待たせー！　じゃあ交代ね」
「うん、ありがとう」
「ご主人様ー！　只今よりシフトを交代いたしますので少々お待ちください」
桂子ちゃんが大きな声で言う。

「おお、次は桂子ちゃんじゃん」
「優子ちゃんもめっちゃかわいいけど、やっぱ桂子ちゃんだってすごいかわいい部類だよな」
「だよなあ、今年のミスコンはもう桂優ちゃんのどちらかで決まったようなもんじゃね？」
「いやいや、それがさ、永原先生という伏兵が居て――」

男子たちの噂話を尻目に、今度はあたしたちが更衣室に入り、制服に着替える。
ちなみに、女子3人の中で一番着替えるのが早かった。ちょっとだけ自慢。
さて、あたしはこのくらいの時間に浩介くんと約束しているんだけど……
「はいはーい、こっちに並んでくださいねー、最後尾はこちらですよー」
教室を出ると、メイド服姿の永原先生が列形成ついでにミスコン宣

伝のビラを配っている。
「あ、石山さん。篠原君が呼んでたわよ」
「え？　何処に居るの？　あたしも探してたんだけど？」
「ああ、ほらあそこ」
永原先生が指差す先に、浩介くんが居た。
あたしはすぐにそちらへ駆け寄ろうとする。
「あ、ちょっと待って石山さん」
「え？」
永原先生はメイド服のポケットから一枚の折られた紙を取り出す。
「石山さんはもう、反射的な本能も女の子になり始めているわ。だからこれを渡しておくわ」
「これは一体？」
「この紙にはＵＲＬが書かれているわ。もし石山さんが本当に自分は女の子になりきったと思ったら……パソコンなりスマホなりで、ここのアドレスに入ってくれる？」
「え？」
どういう意味だろう？
「今は意味がわからなくてもいいわ。でも、自分はもう完全に女の子だと確信できるまで、絶対にこのＵＲＬを開かないでね。開いたらきっと、耐え難いトラウマにもなりかねないから」
「う、うん……」
正直そんなことを言われると開くのが怖い。
「さあ、もう行ってくれる？　私はもう少しここで仕事するから」
「はーい」
今度こそ永原先生と別れ、浩介くんの元へと駆け寄る。
「浩介くん」
「あ、ゆ、優子ちゃん！」
「えへへ、シフト終わったし、もう一度回ろ？」
「お、俺……俺その……」
何か表情が不機嫌だ。
「どうしたの？　顔が不機嫌そうだよ？」

「うっ……ゆ、優子ちゃん！　あんまりサービスしないでよ！」
浩介くんが嫉妬心をぶつけてくる。
「えー？　それは難しいよー」
「じゃあメイド喫茶なんてやめてよ！」
浩介くんが珍しくわがままを言う。
「そういうわけにも行かないでしょ。この後午後にもシフトがあるんだから」
「で、でも……！」
「ふーん、もしかして嫉妬しているんでしょ？」
「うっ……そ、そういう意味で言っているんじゃねえし！」
そうですって言っているようなもの。
何でだろう、浩介くんがかわいい。
「もう、あたしにはお見通しよ……でも、浩介くんのヤキモチってとっても嬉しいなあ」
「むむむだからヤキモチでもないってのに……」
「どうすれば機嫌直してくれるかな？」
「え!?　べ、別に機嫌悪くねえし」
浩介くんがまた否定する。
「というかさっき『サービスしないで』何て言ってたくせにぃ」
「あ、あれはその……何ていうか……その……」
浩介くんがしどろもどろになる。
「いいわよ無理しなくて。ほらっ、付いてきて？」
「え!?」
あたしは浩介くんの腕を取り、ちょっと引っ張るとあたしに付いてきてくれる。
あたしは校舎の階段を登り、一番上の屋上に来た。
「ここ、屋上……」
屋上には実は何もない。あるのはよく分からない機材と高く張り巡らされた網だけ。
最近の学校では珍しく、屋上は常時解放はされているが、正直ベンチもないので普段ここで昼食食べる人もあまり居ないし、文化祭とな

ると更に人は居ない。
常時開放されているので変なことをしでかす人はかえって少ないらしい。
「ふふっ、文化祭の時はあまり人も居ないし入ろうか」
「う、うん……」
浩介くんの機嫌を直すためにも、あたしが更に女の子になるためにも、この屋上でのこと……す、すっごく恥ずかしいけどやらないと……

# 浩介くんのご機嫌を取り戻そう

あたしが屋上へのドアを開ける。屋上の風が心地よい。
後夜祭の時には、上から校庭を見るためにそれなりに人が来るけど、今は思った通り無人だ。
あたしは、屋上の中でも特に影になってて入り口からは見えない所に浩介くんを誘導する。
「浩介くんもほら」
あたしが、浩介くんにも来るように促す。ここなら誰にも見られないはず。
「それで、俺をこんなところに連れてどう……」
ぴゅうううう
「きゃあ！」
突然強い風が吹く、あたしのスカートが思いっきりまくれ上がり、慌ててスカートの袖を抑えるも全然間に合っておらず、浩介くんからは青白ボーダーの縞パンが丸見えになる。
「は、恥ずかしいよお……」
浩介くんにパンツ見られた。やっぱりすごく恥ずかしい。
「お、屋上は風が強いだろ……」
パンツがいきなりモロに見えたことで、浩介くんが驚きと興奮が混じった顔で言う。
「ね、ねえ浩介くん？」
「ん？」
「パンツ似合ってた？」
「あ、ああうん……かわいいと思うぞ」
浩介くんはもう顔が真っ赤になっている。それはあたしも同じ。
「もうえっちなんだからぁ……もう一回見たい？」
「ふぇ!?　な、何を？」
ちょっと計画が狂ったけど仕方ない。
「ふふっ、浩介くんメイド喫茶で嫉妬しちゃったから、浩介くんにだけしてあげることをしないと、機嫌直らないかなって？」

「だ、だから嫉妬してなんかないよ！」
あたしは静かに首を横に振る。
「背伸びしなくていいのよ。ありのままの浩介くんでいて？　スケベな浩介くんでもいいから……ね」
というよりも、あたしの方がスケベな気がする。
嫉妬心を沈めるためなんて自分に言い訳しておきながら、本当は好きな男の子にセクハラされたくてたまらなくて、すっごく恥ずかしいのにワクワクしているのだから。
「じゃっ……じゃあ……」
浩介くんが恐る恐る近付いてくる。
あたしの心臓がどんどんバクバク言う。何をされるんだろうという気持ちで強まる。
「えいっ！」
ファサッ！
「きゃあ！」
あたしは浩介くんに思いっきりスカートをめくられた。
反射的に悲鳴をあげてスカートを抑えて抵抗する。
「はぁ……はぁ……かわいいよ優子ちゃん」
「あ、ありがとう……あうう……やっぱり恥ずかしい……」
「恥ずかしがってる優子ちゃんがかわいいよ」
「う、うん……ありがとう……」
男の子にスカートをめくられたのは初めて。
カリキュラムの時や、あるいは学校生活において、女の子同士でめくられた時はあった。その時も恥ずかしかったけど、浩介くんにめくられてパンツ見られた時の恥ずかしさはその数倍にもなる。
「よ、よし……もう一回」
浩介くんが唾を飲み込むと、またあたしの制服のスカートの裾をつかむ。
今度はゆっくりとめくられる。
「やーん」
両手で抵抗しようとするともう一方の手で払いのけられる。

「んぅっ……」
あうあう、ちょっとずつパンツが見え始めて、一気にめくられるより恥ずかしいよお……
浩介くんが膝を曲げて目線を下げる。
「あうう……観察されちゃってるよお……」
「お、おい、それ反則だろ……」
「だってぇ……恥ずかしいんだもん！」
「俺だから恥ずかしいんだろ？　もっと恥ずかしがってよかわいいからさ……」
「はうぅう……えっちぃ～」
とんでもなく甘い声が出る。
もうこのまま犯されてもいい。
浩介くんの前なら、もっと恥ずかしい思いをしたい、もっと浩介くんにえっちなあたしを見て欲しい。
信じられない。あたしは今、自分の醜い本性を、浩介くんにさらけ出してしまっている。
ううん違う、これはあたしの「被虐願望」、浩介くんに……乱暴されたい。
あたしの中の女の子が、ううんあたしの中の「メス」が、「オス」に振りまく本能。
「あの……あたし……その……」
「どうしたの優子ちゃん？」
浩介くんにスカートをめくられながら話しかけてられる。
「こ、浩介くんになら……ううん、浩介くんに……その……」
だめ、言えない……恥ずかしすぎる……！
「ん？　もしかして言えないこと？」
かあああっ
あたしはまた顔が赤くなる。
何となく沈黙が流れる、時折風が吹いてパンツに風が吹き付けるのが更に羞恥心を煽る。
あうぅ……恥ずかしくてもう耐えられないよお……

「あの……浩介くん……」
「え？」
「そろそろ……スカート元に戻してえ……」
「あ、う、うんゴメン」
浩介くんが手を離し、スカートが元に戻る。
「浩介くん、機嫌直った？」
「直ったも何も、お、俺……！」
あたしは視線が下半身に行く、黒いズボンだからあまり見えないけど、でも固くなっていそうだ。
「ふふっ、なんかあたしも体が熱いの」
「そ、そうだな」
「ねえ、文化祭一緒に回ろ？」
「う、うん……」
「じゃあ戻ろっか」
あたしは浩介くんの前を歩く。
そして屋上のドアを開けようと手をかけた次の瞬間だった。
わさわさっ
「きゃあ！」
浩介くんにスカートの中に手を入れられ、お尻を触られてしまう。
あの時の痴漢でさえスカートの中に入れてこなかったのに。
「もう！　浩介くんのえっち！　皆の前にいる時にはしないでね！」
さすがに誰かがいるときにはしてほしくない。
「わ、分かってるって……そ、それよりちょっと……トイレ行ってきていいかな？」
「あ、うんいいよ。長くなりそう？」
「う、うん……」
「ふふっ、いってらっしゃい」
浩介くんが屋上の階段を駆け下り、近くのトイレへと向かう。あたしは一人取り残される。
あんなにえっちなことをされたのに、嫌悪感の信号が、全く出なかった。お尻を触られた時もだ。

あたし、ますます女の子になってる。
……うん、これならおそらく、文化祭中に告白できる。
恋人同士になったら、まずキスしたい。
今でも、キスをしたくてたまらない。触れ合えば触れ合うほど、浩介くんが素敵になっていく。
さっきのことを思い出す。風にスカートをめくられ、あたしは悲鳴を上げてスカートを抑えた。
そして浩介くんを誘惑して、スカートをめくられて……あうう……
そういえば、悲鳴の時……あたし「きゃあ」って声あげちゃった。
今までも他の女子があげている所を聞いたことはあったけど、今までの記憶を辿ると、何とあの時にあげたのが初めてだということに気付いた。
確かに屋上は風が強いが、数ヶ月間女の子をやっていて、風に弱い制服のスカートでも大きくめくれちゃったことはなかったから油断していたというのもある。
ともあれ、突然えっちな風さんにスカートをめくられて、思わずあげた女の子らしい悲鳴。
多分、あれが浩介くんを更に興奮させたんだと思う。
そして、恋をするに連れて見えてきたのが、あたしの「醜い」部分。
でも、それをきっと浩介くんは受け入れてくれるに違いないという自信があった。何故なら、男の子はそう言う「醜い女の子」が大好きだということを、あたしは優一の経験から知っていたからだ。
そう言えば、さっき永原先生に渡されたＵＲＬの紙、一体この先に何があるんだろう？
うん、まだ怖い。開くのはもっと後にしよう。
「ふう……浩介くん遅いなあ……」
屋上までの階段は一回転していて、下の様子は会話からはうかがい知れない。
今なら誰もいない。
「んっ……」
あたしは自分でスカートをめくる。しましまのパンツが丸見えに

なり、そしてさっきのことを思い出す。
ただ恥ずかしいだけではなく、もっと強い興奮が、以前からもあったけど……抑えられない。
屋上は何もないことを、生徒はみんな知っていたから、誰もここには来ない。
……ちょっとだけ、触っちゃおうかな？
ふとそんなことを何の気なしに思った。
すると、誰かが駆け上がる音がする。
「わっ」
慌ててスカートを元に戻す。
すると、来たのはやっぱり浩介くんだった。
「ごめん、お待たせ」
「長かったじゃない、どうしたの？」
「え、いやその……」
「ふふっ、もしかして、トイレっていうのは海の時と同じ？」
あたしがぐいっと迫る。ここは肉食系で行きたい。
「あ、あの……女の子がそういうの……！」
「ふふっ、浩介くん、女の子だってそう言う気持ちになることあるのよ。ましてや……浩介くんの前だよ……」
また二人して顔が真っ赤になる。
恥ずかしいけど幸せな時間。
「はいはい、ともあれ、俺も嫉妬なくなったよ」
「ホント？　嬉しいなあ」
「だってよお、あんなことしてもらったらさ……」
「ふふっ、そうそう、じゃあ回ろうか？」
「う、うん……」
もうすぐ正午になる。
生徒会からミスコンの放送が流れ、中間結果が体育館に張り出されるとのこと。
「どうする？　結果見る？」
「あーいや、他のクラスの展示を見ようか」

「う、うん……」
あたしたちは2年4組から文化祭周りを再開する。2年4組は迷路。以外に早く終わってしまった。
「やっぱ壁伝っちゃうとすぐだよなあ……」
「うん」
そうは言っても攻略法を知っているからやめられない。
続いて、3年生の展示を見る。
ここは夏にあった修学旅行のレポートの展示の他、観光案内や無料休憩スペースなんて言うのもある。
確かにこの文化祭、休憩所が少ないので、なかなかうまく穴場を付いたと感心させられる。
ちなみに、この休憩所、更にお金を払えばマッサージなんて言うサービスもあった。
あたしは浩介くんを置いて、肩こり解消のマッサージを頼んだ。
ちなみに、マッサージ師は同性の相手になっているので、浩介くんの嫉妬の心配はない。

「んー！　気持ちよかったー！」
「優子ちゃんは相変わらず肩こりだなあ」
「うーん、どうも治りそうにないわねえこれ」
肩こりの対策は、半ば諦めムードになっている。仕方ないと言えばそうだろう。
時折こうやってマッサージしてもらうことで、肩をほぐしてもらおう。
さて、他の3年生の出し物と言えば、やはり模擬店でアイスクリームやお菓子などを提供している。
「優子ちゃんは何にする？」
「あたし、チョコレートアイスクリーム」
「よし、俺はバニラアイスだ」
アイスクリームの量は少ないけど、これとうちのメイド喫茶の軽食と合わせればそれなりの量にはなってくれる。

ともあれ、これにて3年生も終了になる。
「ふう、とりあえず1年生の所に行く？」
「そうだな。部活周りは明日でいいだろ」
「そうだねえ……」
「お、そうだ。今なら空いているだろうし、ミスコンの中途結果見てみる？」
「うん」
「じゃあ体育館行こうか」
「うん」
あたしたちは体育館へ、行く。すると体育館の壁に、ミスコン結果のポスターが張ってある。
1位から順に上から公開されている。
「ふう、緊張してきた」
「え、あ！　見てよ優子ちゃんが1位だよ！」
「え!?」
あたしが一番上を見上げてみる。
そこには確かに「1位、石山優子ちゃん」と書いてあり、得票数がある。
「2位は誰だろ？　お、同率順位らしいぞ」
2位の位置、あたしよりも一段下には写真が2枚並んでいる。
「お、木ノ本が2位か。それから……永原先生か！」
あたしもそれを確認する。「2位、木ノ本桂子ちゃん」そして「2位、永原マキノちゃん」と書いてある。
永原先生の所は「永原マキノ先生」の「先生」上に横二重線があって「永原マキノちゃん」に書き直されている。
多分、永原先生の差し金だ。
「『永原マキノちゃん』って……」
普段先生だということを知っているからシュールに見えるけど、翌日の一般公開では何も言われ無さそう。
むしろ見た目的にはこの中で一番「ちゃん」が似合ってる。まああたしも呼ばれ方は浩介くん含めて「優子ちゃん」が一番多いけど。

「得票率も僅差だよなあ……」
よく見ると、永原先生は「教師票」が、桂子ちゃんは「女子票」が、あたしは「男子票」が多いとある。
とはいえ、生徒票の方が多いから、永原先生は生徒からもかなりの人気であることが伺える。
ちなみに、予選の時点でこの３人がぶっちぎりで、４位以下に６倍もの差をつけていた。
なんかもう序盤でこんな大差つけられたら他の子達やる気なくしているとしか思えない。
「あれ？　石山先輩！」
「ん？　ああ！　こんにちは」
昨日写真取った時にいた一年生の子だ。
「お、この子は一体？」
「昨日この写真撮った時に一緒になったのよ」
「あーあ、私は真ん中辺かあ……いいなあ石山先輩は１位で」
「えっへん。でも最下位は数票しかなくてちょっとかわいそう」
「そうだな。自分や親友の温情で入れたのも含めれば実質ほとんど０に近いよな……って」
「「あ！」」
あたしと浩介くんが一斉にはっとなる。
「どうしたんですか？」
「いや、その……あたし、自分で自分に入れるの忘れてた」
「俺も、優子ちゃんに入れるの忘れてた……」
「「あはははは……」」
思わず苦笑いしてしまう。
「まあ、どっちにしても予選の中間とはいえ、１位だから良かったんじゃないですか？　それに、予選投票もまだ終わっていないですよ」
「あ、そうだった」
「ほら、あそこの生徒会の人に頼んでみてください」
「あ、ありがとう」
一年生の子と別れ、受付まで行く。

「すいませーん」
「はい」
　生徒会の人、どうやら守山会長ではないらしく、名前は知らない。
「あの、ミスコンの投票をしたいんですけど」
「ああうん。分かった。名前は？」
「はい、２年２組の石山優子です」
「同じく２年２組の篠原浩介です」
「はい、石山優子に篠原浩介……了解」
「じゃあこの得票用紙を持って、記入して、この箱に入れてください」
「「はい」」
　あたしと浩介くんが机に向かう。
　なんかニュースで見る選挙の投票所みたいだ。
　あたしはもちろん「石山優子」と書く。
「浩介くん、書き終わった？」
「おう。優子ちゃんに入れたぜ」
　そう言うと浩介くんが「石山優子」と書かれた紙を見せてくれる。
「よし、それじゃあ投票しようか」
「うん」
　あたしたちは生徒会の受付に戻り、投票箱に紙を入れる。
「投票締め切りは最終結果が午後３時に出ますのでお待ち下さい」
「はい」
「さて、メイド喫茶に戻ろうか」
「そうだな。軽食取りたい」
　というわけで、あたしたちは２年２組のメイド喫茶に戻ることになった。

「あ、石山さんに篠原君。おかえりなさい」
「あ、永原先生」
　メイド服姿の永原先生が出迎えてくれる。
「そうそう、ミスコンの結果どうだった？」
「え、えっとその……」

浩介くんが結果を言うのに躊躇してる。
「暫定だけど、あたしが1位で永原先生と桂子ちゃんが僅差の同率2位だったよ」
「むー、やっぱり石山さんが1位かあ……」
永原先生が残念そうな顔をする。
「でも桂子ちゃんと並べただけでもすごいと思うわよ」
「むむむ、優勝できないと意味が無いのに……」
永原先生結果を知らないということはあの「永原マキノちゃん」は永原先生の差し金じゃなかったのか。
「先生、まだ前哨戦ですよ」
「おっと、そうだったね」
「それに本当にあたしとの順位は僅差でしたから」
「というより、もう予備の時点で3人に絞られたというか、優子ちゃんも油断できないって言ってましたし」
「ちなみに、あたしは男子票、桂子ちゃんが女子票、永原先生は教師票が多かったよ」
あたしはぴーんと胸を張る。
何だかんだで男子票が多いのはあたしの自慢だ。
「むむ、優子ちゃん？」
「あらあら、篠原君嫉妬してるの？」
永原先生が煽る。
「ああいや、別に……ちょっとだけ……」
「もう、またしたいの？」
ちょっと意地悪っぽくあたしが言う。でも思い出しちゃうとあたしのほうが赤くなっちゃうかも。
「ああいや、もう大丈夫。うん」
「こらこら、ここはメイド喫茶だぞ」
「はーい……」
よく見るとあたしがメイドしていた頃よりも男女比が均衡になっているのに気付く。
また、永原先生のシフトなので、時間帯的にもそれなりに混雑して

いているのが分かる。
「へへん、私結構客寄せになっているのよ」
確かに、先生がメイド服着ていて、しかも見た目は生徒たちより幼くてしかもかわいいとあればそりゃあ興味が湧くというものだ。
そしてよく耳を傾けていると、2年2組のメイド喫茶ではそこかしこで客の生徒たちがミスコンの話題をしていた。

# 優子の本性

メイド喫茶はミスコンの話題で持ちきりだ。
「なあ、お前ミスコンで誰に入れたんだよ？」
「そりゃあ俺は桂子ちゃんだぜ。お前は？」
「もちろん優子ちゃんに決まってるだろ。あんたは？」
「俺は永原先生がかわいいと思ったんだよ」
「……見事に割れたな」
「お前は何で優子ちゃんじゃないんだよ？」
「だって優子ちゃんってあまりにかわいすぎてさあ……なんかそれがかえって昔のことを思い出しちまうんだよ」
「何言ってんだよ、桂子ちゃんや永原先生だってめっちゃ美人だろ？」
「それにいくら一生懸命だからって生まれつきの性別を簡単に変えられるのか？　表面的な振る舞いはともかく、さ」
「ふーん、じゃあ永原先生に入れなかったのも？」
「……さすがに永原先生くらい生きていればそういうのもないと思うんだけど、それでも時折出るんじゃないかって。だから桂子ちゃんにした」
「なるほどねえ、でもやっぱ傍から見るにしても、付き合うにしても、優子ちゃんが一番だと思うんだよねえ。実際1位だしさ」

メイド喫茶では男子三人組がミスコンの話題だ。
見事に3人の意見が割れてしまっているようだ。

「ねえねえ、あれ　永原先生と石山先輩じゃない？」
「あっ、本当だ。やっぱり二人並ぶと違うわよねえ」
「更に木ノ本先輩でしょ？　今年のミスコンはあの3人だよねえ……」
「うんうん、他の子がかわいそうになるくらい3人とも美人だし」
「ところで、あんたは誰に入れたのよ」
「私？　うーん、悩んだ末に木ノ本先輩かなあ」

「お、気が合うじゃん。あたしもあたしも」
「あはは……もしかして永原先生に入れたのって私だけ？」
「う、うん……私石山先輩に入れたから……」
「え？　あんた石山先輩に入れたの!?」
「うんそうだけど……だってかわいいし……」
「そりゃあ石山先輩は魅力的だし、めっちゃかわいいと思うけど……」
「私的には木ノ本先輩がかわいいと思うのよ」
「うんうん、石山先輩はちょっと浮世離れしているっていうの？」
「後やっぱり中身かなあ……まだ女の子になりきれてない気がするっていうの？」
「あーわかる。先輩の話だと、もうすっかり生まれつきの女の子と見分けつかないみたいだけど」
「え？　そうなの？　だったら石山先輩に入れても良かったなあ……」
「でもさあ、あたし石山先輩を見てると……何かこう……コンプレックスがねえ……」
「うん分かる。男だったくせに何であんなに大きいのよ……あーあ羨ましい」

あっちでは4人組の1年生の女子がミスコンの話題だ。
うーん、やっぱこの体だと一部の体型の子はコンプレックスになっちゃうわよねえ。
「石山さん、女子にもそれなりに支持されているね」
永原先生が声をかける。
「永原先生も、生徒からの支持も多いじゃない」
「あはは。でも予選はともかく本戦はわからないよ。興味本位で入れてる人も多いだろうし」
生徒を押しのけて先生が優勝したら確かに格好のネタにはなる。
「そうだねえ、本戦の一般票にどれだけ響けるか。そういう意味で、あたしは先生をアピールしていくよ」
「お、永原先生も気合入ってるなあ……」

浩介くんも感心している。
「ふふっ、まだまだ若いもんには負けないわよ」
永原先生が言うと重みが違う。
でも、そんなことは絶対にさせない。改めてあたしはそのように誓った。
「あら、あたしだって若さを見せてやるんだから！」
「むむむっ……！」
「うえっ、女の戦場だ……！」
「あ、浩介くんゴメン。軽食にしようか」
「そ、そうだね……うん」
あたしたちは永原先生の案内で空いている席に座り、それぞれ食事にする。
さっきの話を思い出す。この前も桂子ちゃんも加わった三つ巴でにらみ合いをしていた。
このミスコン、女の子としてのプライド、アイデンティティを賭けているという感じがする。女の戦場に足を踏み入れ、それに燃える。自分がこの学園で一番かわいいんだからという強い承認欲求。
それはもう、ほとんど一人前の女の子として地に足を付けた証拠。
あたしにも、女の子としてのプライドという人格が出てきたということ。
今までは、女の子としての自覚や、それに伴う立ち居振る舞いというような、どちらかと言えば受動的なアイデンティティが多かった。
でも今は違う。
あたしは立派な女の子、かわいさには自信を持っている以上、例え桂子ちゃんや永原先生が相手でも、絶対に負けたくない。
魅力の競い合いという意味では、男の頃よりずっと負けず嫌いになってる気がする。
そういう意味では、今は僅差ながらも1位、それも男性票の多い1位だったというのは、あたしのプライドを相当にくすぐる感覚を覚えたのも事実だ。
桂子ちゃんが言ってたっけ？「女の子は男に好かれてこそ」って。

今はもう、それを身をもって思い知ることになった。
「はーいご主人様、お嬢様。ご注文の品ですよー」
そんなこんなで、永原先生から注文が届く。
「あ、お帰りなさいませーご主人様ー」
それにしてもこの先生、ノリノリである。
幸いなことに、あたしも桂子ちゃんも永原先生も2年2組ということになっているため、誰か1人抜け駆けで宣伝するということはできない。
必ず「永原マキノ、木ノ本桂子、石山優子に清き一票を!」となる。
そのインパクトもあるから、大半の票があたしたち3人に集中したのかもしれないけど。
あたしはゆっくり軽食を食べる。さっきのアイスクリームと、トーストパン、さらにコーヒーだけの内容だ。
うん、ちゃんとお腹膨れてくれた。
「さあて、残りの時間も楽しみたいけど……」
「石山さん、私のシフトが終わったら次の次だよ」
「ちょっと時間に気を付けようか」
「だな」
あたしたちは1年生の教室へと向かう。
1年生の催し物はやや簡素ではあるが、受験案内や学校のアピールと言った学外向けのものや、お化け屋敷何て言うのもある。
「お化け屋敷入ってみようか?」
「う、うん……」
夏祭りの頃を思い出す。
あたしは暗い空間ということで、また浩介くんに腕を絡めて胸を当てる。
「あっ……」
浩介くんもこうした誘惑に慣れることはないみたい。やっぱり男は単純よね。

「ばあああああ!!!!」
「きゃああ！」
「うおっ！」
やっぱりこの手のお化け屋敷は驚かすびっくり系だ。
って冷静になって思い返すとまた悲鳴が女の子になってる。
夏祭りの屋台以上に作り物感が強い。一方で、あそこほどはっちゃけてはいないみたいで、多分真剣という感じなんだろう。まあ全然怖くないけど。

「はあ、終わったねー」
このお化け屋敷をもって学年の出し物はすべて終了。
そろそろ戻る頃合いになった。
「じゃあ戻る？」
「うん」
あたしたちはもう一度2年2組に戻ることにする。
「まだ時間あるから、外で待とうか」
「う、うん……」
「浩介くん一人で見に行かない？」
「うーん、優子ちゃんとこうやって一緒に居たいなあ……」
ドキッ
もうー不意打ちしないでよお。キュンと来ちゃうじゃない。
「ど、どうしたの優子ちゃん……」
「むー、そういうところだけ鈍感なんだからあ……」
だから余計に惚れ込んでしまう。
ギャルゲーなんかで鈍感主人公がモテる理由が優一の頃は全然分からなかったが、女の子になって痛いほどわかってしまった。
「あ、お帰りなさいませー石山さん、篠原君」
再び、メイド服姿の永原先生が出迎えてくれる。
「じゃあ浩介くん、いったんお別れね」
「あ、うん」
「大丈夫、こ、浩介くんは特別だから」

やっぱりちょっと照れてしまう。
「お、おう……優子ちゃんも頑張って」
「うん」
もう一度さっきの女子たちとともに更衣室に入りメイド服へと着替える。

「永原先生、交代」
「はーい。がんばってねー」
「あ、優子ちゃん！」
「ん？　何？」
「ゆ、優子ちゃん……実は俺、今回は同じシフトなんだ！」
浩介くんがそう告げる。
「えー、そうなの⁉」
「うん、厨房から、み、見てるぞ！」
あたしはぱあっと明るい笑顔になる。
浩介くんが見てくれている。一層仕事への士気が上がる。
永原先生たちが更衣室へと入っていく。
「お帰りなさいませご主人様ー」
あたしは営業スマイルを心掛けながら仕事を再開する。
しばらくすると、また男子生徒の客足が増えた。
やっぱりあたしは男子に大人気だ。
しばらくするとカーテンから制服姿の永原先生が出てくる。
「あれ？　永原先生また制服？」
「うん、客寄せの意味もあるし、この後ミスコンの予選の最終結果があるのよ」
「あれ？　そうなの？」
「うん、また後で放送があるわよ。じゃあ私は外に行くわね」
永原先生が外へと去っていく。
予選の中途発表では、あたしが1位だった。永原先生と桂子ちゃんが同率で2位。あたしとの差は僅差だ。
明日、誰が1位になってもおかしくない状況になるだろう。

そう思いながら、接客を続け、特に男子を中心に笑顔を振りまく。
浩介くんも最初は嫉妬してたけど、あたしにセクハラできるのは自分だけという特権を思い知らせた結果、うまく折り合いを付けることが出来たみたいでよかった。

「おう、優子、交代だぜ」
メイド服姿の恵美ちゃんが来る。この時は少しだけ女性客が多いが、意外にも恵美ちゃんは男性にも人気らしい。
男子曰く、「絶対評価では優子ちゃんたちよりもずっと下だけど、普段女らしさの欠片もないことを考えれば云々」って言ってた。
何気にひどい話なので恵美ちゃんには内緒にしておいてある。
ともあれ、ミスコンの結果には興味が無いというのが恵美ちゃんだ。他の担当女子２人もそんな感じだ。
ちなみに、閑散期が予想されることもあって、厨房の担当はこの時に限って、恵美ちゃんに近い２人が担当することになっている。

ピンポーン
「えー皆様、小谷学園ミスコンテスト、予選の結果が出ました。２０分後より、発表会を行いますので、体育館までお集まりください」
「あ、あたし行かなきゃ」
「おう、頑張れよ」
「ありがとう……」
教室を出る。
「あ、石山さん。行こっか」
「うん」
あたしたちはミスコンの参加者なので、体育館の控室に入ることになっている。
途中で桂子ちゃんに会ったので合流し、体育館の控え室前まで来る。
「あ、守山さん」

守山会長がそこには立っていた。
「ああ、永原先生に石山さんですね、とりあえず中で待っててくれますか？」
見るとあたしの他に何人かのミスコン参加者がいる。
1年生の子や、2年3組の映画の主演の子もいる。

「出たよー本命のお出ましよ」
「あーあ、私がクラス一の美人だって言うから代表ってことだから出ることになったけど……あんなんに叶うわけ無いよねえ……」
「学校のミスコンに本職のアイドルが出てる感じだよねえ……」
「いっそ明日はあの三人だけにして欲しいわ」
「うちも同感」

「あはは、私達噂になってるね……」
「うーん、なんかちょっと申し訳ない気分になるわよねえ……」
永原先生と桂子ちゃんが言う。
「うーん、確かに気の毒な気がする」
「でもま、私達が悪いわけじゃないし。それに優勝こそが目標よ」
「ええ。私も、先生と優子ちゃんには絶対負けないわよ！」
「あたしも。明日は絶対桂子ちゃんや永原先生よりも、たくさんの票を入れさせてやるわ！」
さっきからこればっかり話している。
女の意地を賭けての戦いは、ある意味金を賭ける以上の意味がある。
その後、数人の女子が入ってきて守山会長が控室に入ってきた。
「はい、14人全員揃ってますね。じゃあ行きましょうか」
幕が降ろされた舞台の上に登る。ここに登るのは年に一度あるかないか。生徒会とかだとまた違うんだろうけど。
そしてあたしと桂子ちゃん、永原先生が中央に誘導される。
まあ当たり前だろう。
生徒会の人がマイクをセットする。

「それじゃあ、じっとしていてください」
「はい」
　返事したのはあたしだけ。なんかずれた感じ。
「皆様、大変長らくおまたせいたしました。これより、小谷学園ミスコンテストの予選結果を発表したいと思います」
　ワー！　ワー！
　外から主に男性の声での歓声が聞こえてくる。
「まずはじめに、全コンテスト参加者の方にお集まりいただいておりますので、幕を上げてください！」
　幕がゆっくりと上っていく。
「おおおおーーー」という男子の声が大きくなっていく。
　幕が上がりきると、男子の顔が見える。女子の顔の他、先生たちの顔も見えている。
「うおおおかわええ！」
　小谷学園の誇る美人が集まっている。
　その中でもあたしはど真ん中で皆の視線を浴びている。
「それでは、順位と獲得票数と名前を発表していきます」
「第１４位、７票……３年４組――」
　その瞬間「あー」と言う声が一人の女の子の声。それにしても７票って……
　その後も１桁が続き、７位辺りからようやく１０代前半の２桁票数が４位まで続く。
　何だか会場も察している感じがする。つまり上位の３人に票が集中していることは明らかだからだ。
「さて、ＢＥＳＴ３の発表をしたいと思います。４位１４票に対して３位はなんと９８票の支持を集めました……まさかこの人が参戦してくるとは思わなかった……４９９歳の合法ロリこと、永原マキノちゃんです!!!」
「あちゃー！」

永原先生が苦笑いするが、観客は大歓声だ。
にしても、なんだこの痛い紹介文。
守山会長が必死になって考えている所を想像するといたたまれない気持ちになる。
「そして第2位、こちらは１００票と言う得票数を得ました……学園のアイドル、美人の名をほしいままにする天文部の……木ノ本桂子ちゃんです!!!」
桂子ちゃんは無表情、やっぱりかなあと考えているようにも見えるが、観客は3桁の大台に大拍手だ。
そしてこの瞬間、あたしの1位が決まった。
「そして、第1位！　異色の経歴を持つ、爆乳美少女……かつての性格はそこにはもうない……その名の通り心優しい女の子……石山優子ちゃんが１０３票で1位だあ!!!」
「うおおおおお!!!」と言う男子の野太い歓声が聞こえる。
皆の拍手と、あたしに当てられるスポットライト。
あたしは誰に指示されるでもなく、自然と横並びになっていた１４人から前の列に乗り出して手を振る。
「優子！　優子！　優子！」
あたしの脳汁が溶けそうな快感。
あたしが、この女どもを負かしたんだという自負と強い自信。
そして、まだ予備選挙で、それも僅差で1位になってるだけだと言うのに、あたしこそが小谷学園一の美少女。いや、世界一かわいいのはこのあたしだという、根拠もない自信が湧いてくる。
気をつけないといけないという理性は、この大歓声の声であっという間に崩壊してしまう。
「これよりミスコン予選最終発表を終了いたします。みなさん、退場していくミスコン参加者に熱い拍手をお送りください」
周りが舞台から降りるのを見て、あたしも慌ててそれに続く。
そして冷静になり、あたしは「たかが学園のミスコン」ということを思い出す。
でもこの調子で、明日も頑張っていこう。

「いやーやっぱ優子ちゃん強いねえ」
「えへへ……」
「でも、まだまだ予選。ここから挽回可能だからね。私も負けないわよ」
「うん。受けて立つ」
一方で、他のミスコンの女の子の顔は軒並み憂鬱だ。
やっぱり女の子の容姿と言うのは残酷な格差だと思った。
「さて、そろそろ今日の学園祭も終わりだけど、石山さんはどうする？」
「あたしはこのまま帰るけど」
「そう」
実は親と学校への届け出等があればお泊りイベントもあるのだが、あたしは浩介くんとともに不参加だ。
あたしたち3人が会場の片隅で話し込んでいると浩介くんが駆け寄ってくる。
「いやー。優子ちゃん凄かったなあ！」
「ふふん、そんなミスコン1位のあたしを独占できる気分はどう？」
あたしが煽る。
「うん、最高！」
「ちょ、ちょっと、二人共何したのよ？」
桂子ちゃんが問い詰めてくる。
「あはは、別に……まだしてないだから安心して？」
浩介くんも赤くなっている。
「優子ちゃん、行こうか」
「あ、うん……」
浩介くんに連れられて2年2組の教室へ。永原先生たちも付いてくるけど。
「今日はこれで下校時間です。お泊りイベントに参加する人はお気をつけて、それ以外の人は明日に向けてゆっくり休んでください。解散

！」
制服姿の永原先生がそのまま帰りのホームルームのようなことをして解散になる。
あたしは浩介くんを呼び、一緒に帰るように誘う。
帰りはミスコンの話題だった。浩介くんとしてもやっぱりあたしの1位は自慢だそう。
うん、明日。本戦は一般の人も投票に参加する。その時に予備選挙の結果も表示されるだろうから、さあどうなるかな？

# ミスコン本戦へ

「うーんっ！」

あたしはゆっくりと起きる。今日は日曜日だけど制服を着て学校に行く。

今日は大事な文化祭２日目だ。

いつものように制服を着る。更に水着審査と私服審査もあるからあたしも水着を持っていく。

そして問題は私服。水色のミニのワンピースや、茶色いスカートや、最初のデートで着てきたジャンパースカートなど、可愛い服はたくさんある。

「うーんやっぱりこれかなあ……」

幼すぎるという印象も一部である赤い服と赤の巻きスカート。

そうだ、これに猫さんのぬいぐるみを組み合わせるのはどうだろう？

……お、やっぱりぬいぐるみがあると印象が違う！

うん。頭の白リボンと黒髪との相性もバッチリ。更に幼い印象になったけど、少しでもロリコン票を永原先生から奪わないと。

ともかく、あれだけ混戦になったのは、あたしよりも永原先生や桂子ちゃんを魅力的だと思う人がそれなりにいたということ。

あたしのハンデ、もとい課題は、この童顔でロリコン票がイマイチ得られていないこと。

このあたりは体型の問題があるが、艶っぽいエロさが好きっていうのは水着審査で得られるはず。

もう一つはあたしがＴＳ病、それも永原先生と違い、発病してまだそこまで時間が経ってないこと。

あたしとしてはもうそう言うことが影響しちゃうのは心底嫌なんだけど、人間なかなか割り切れるものじゃないみたい。

ともあれ、私服や水着のパフォーマンスと審査は、とても重要になる。

これらの審査が終わって、初めて投票ができるほか、ミスコンの映

像は視聴覚室で投票締め切りまで常時公開される。
私服や水着でのアピールポーズを考える。
赤い服と赤い巻きスカートの方はどうしよう？
やっぱり妥当にスカートをちょこんと広げて摘み上げる感じかな？　ちらりと太ももを見せて、男子を誘惑しよう。
後はやっぱり幼い印象だからぬいぐるみを使ってパフォーマンスをしたい。
私服審査はあどけない感じで行きたい。
私服の次に立て続けで行われる水着審査。
これはどうパフォーマンスすべきかは決まっている。
まず前かがみになって胸を強調する。次に足をちょっと広げて一回転にターン。遠心力でパレオの中の水着をちらりと見せる。
そして体育座りにしてちょっとM字気味に中身を見せる。
そのまま女の子座りになってもう一回胸の下に腕を組んで強調する。
とにかく水着で徹底的に性的に訴えるパフォーマンスを繰り返せば、あたしの魅力を存分に伝えられるはずだと思いたい。
やっぱり女の子としての深層心理が出始めたのかな？
ともあれ、母さんと食事をとる。
「じゃあ母さんとお父さんも後で来るから、楽しみにしててね」
「あ、うん……」
「ミスコンの予選で1位だったんだろ？　お父さんも優子に投票するから」
「あ、ありがとう……」
とりあえず、2票ゲットだ。
朝食を食べ終わったら、荷物を持って文化祭へ。
道中、やはり一般に開放されるということで、制服以外の人もちょくちょく見え、いつもはほとんど制服一色の通学路も、今日は多様性に富んでいる。
ヒュー
「きゃっ……」

今日はちょっとだけ風が強い、正面からの風がやや強く吹きスカートの後ろをぴらりとめくってくる。
もちろんまだ見えないけど、手を後ろにやってスカートを抑える。
昨日の浩介くんとの屋上のことを思い出す。
浩介くん、あたしがメイド喫茶で他の男性客と接客しているところに嫉妬して……それを鎮めるために屋上でしたこと。
そう、パンツ見ていいのは浩介くんだけ。キスだって、胸やお尻を触るのだって、されると一番恥ずかしい浩介くんだけにしてほしい。
でもこのスカートだと、ある程度見えちゃうのは仕方ないのよねえ。

ともあれ、いつもよりゆっくりしたペースで、通学路を進み、あたしは正面の下駄箱に入って靴を履き替え、いつもの教室に入る。
ちなみに、正門には一般客の人もいて、文化祭実行委員会の人たちが、列形成をしていた。何気にこの自由な小谷学園、文化祭も人気なのだ。
ガララララ
「おはよー」
「お、優子じゃん、おはよー！」
恵美ちゃんが挨拶してくれる。
「あれ？　桂子ちゃんは？」
「あーまだ来てねえみたいだな」
朝の1時間目の時間になれば、文化祭は開催される。このときは一般に開放される文化祭のほか、学内のみに開放される後夜祭があることになっている。
後夜祭はミスコンの優勝者はちょっとした特典があるみたい。
しばらくすると桂子ちゃんも入ってくる。今年の文化祭、2年2組は昨日今日と全員出席となった。メイド喫茶の最初のシフト担当の人は、既にメイド服に着替え終わっている。
ガラガラガラ……

「さあ、みんな集まっているわね。じゃあ放送が入ったら文化祭を楽しむわよ」
「おー！」
入ってきたのは制服姿の永原先生だ。髪型もツインテールのような感じにしていて、おしゃれ全開という感じ。
そして、しばらくして昨日と同じように生徒会の守山会長から放送が入る。ついに、文化祭の二日目が始まり、思い思いに飛び出していく。
「浩介くーん！」
あたしはちょっと大きめの声で浩介くんを呼ぶ。
すると浩介くんが近付いてくるので、腕をぎゅっと絡める。
「ねえねえ、一緒に回ろう？」
「お、おう……そうしようか」
「わーい！　嬉しいー！」
クラスも、あたしと浩介くんの甘々な雰囲気に突っ込むことも少なくなる。
でも、やっぱりちょっとだけ視線が痛いような気もする。
「ところで、今日はミスコンが大忙しだろ？」
「うん、でも後夜祭と合わせれば、部活もある程度回れるかな？」
「じゃあどこに行くの？」
歩きながら浩介くんと話す。とりあえず部活棟に向かっている。
「まずは美術部でしょ……文芸部、地理・歴史研究会、茶道部と新聞部に漫画研究会と……天文部！」
「ミスコンだけじゃなくてメイド喫茶のシフトは大丈夫か？」
「ああうん、大丈夫」
そんなこんなで、歩くうちに一般の人の顔も徐々に見え始めてくる。そんな中でまずは美術部を訪れた。
美術部は美術部らしく、様々な絵画を展示している。風景画や人物が、あるいは油絵など、基本的にジャンルは問われないみたいだ。
「きれいだねえ、この絵」
女性の横顔が中々きれいだ。

「でも優子ちゃんの方がきれいだぞ」
「も、もうっ……！」
さらりとこういうことを言ってのけるんだから浩介くんは本当にずるい。
「おや、石山優子さんじゃないですか！」
美術部員の一人が声をかけてくる。
「あら？　あたしを知っているの？」
「そりゃあもう、美術部ではミスコンは優子さんに入れるというのが総意ですから！」
「あら、すっごくうれしいわ！」
美術部丸ごと味方というのは大きい。
「なあ、それなら表にでもそう表明する紙でも出したら？」
浩介くんの突っ込みが入る。
「ああいや、うん……言われてみればその通りだ！　よし、そうしよう！　みんな、手が空いてたら美術部は優子さんを応援するという張り紙を張ってくれ！」
「よっしゃ！　俺の出番だ！」
美術部はノリがいい。ともあれ、応援してくれるのはとっても嬉しい。
あたしたちはそんな美術部を尻目に展示を進む、中には裸の女性の美術画まである。女神の絵らしい。
「あ、そうそう優子さん。できればなんですけど……」
「ん？」
「来年の文化祭のこの美術画、優子さんにモデルやってもらえませんか？」
「え？」
あたしが凍り付く。浩介くんもいつもなら激怒してそうなのに、あまりの提案に身動きができていない。よしここは……
「あのーちょっといいですか？」
「はい優子さん。受け入れてくれますか？」

あたしは右手を振り上げ遠心力を付ける。
ペチッ！
「えっち!!!　この変態!!!」
浩介くんほど強くないのか、びくともしていないわけではなく、一瞬頬を抑える仕草をする。
「あ、ありがとうございます!!!」
「こら、嫌に決まってるでしょ!!!」
浩介くん以外の男の前で裸なんかなりたくない。って浩介くん相手でもしたことないのに。
「ああいや、うん。無理強いはしないよ。ありがとうございますってのはその……別の意味で」

「うわー羨ましい……」
「ビンタしてもらえる上に罵ってもらえるなんて……くー」

ダメだこの美術部、早く何とかしないと……
「行こうか浩介くん」
「あ、うん……」
あたしたちは美術部を出る。
「いやー驚いた、俺相手でもあんな思い切ってやってなかったのに」
「いやいや、あたしのビンタはいつも本気だよ。あたし弱いから」
照れ隠しでビンタしたときも割と思いっきりだったし。
「にしても何なんだよあいつ……確かにああいう裸のモデルっていうのもいるけどさあ」
「美術の世界に入り込みすぎてるわよね」
「うんうん」
浩介くんと話しながら次の部活へと入る。
まだ、「裸見せるのは浩介くんだけ」とは言えなかった。

次に来たのが文芸部。詩や小説などのオリジナル同人誌で、1部200円だという。

「どうする？　買う？」
「うーん、俺はいいや。優子ちゃんは？」
「あの、石山さん！　是非買ってください！」
　文芸部員が買ってほしいとあたしに言う。
「あはは、ミスコンであたしに投票してくれるなら買ってもいいわよ」
「……あーそれさっき木ノ本さんにも言われたよ……」
　むむ、やっぱり考えることは同じか！
「じゃあ約束は？」
「あーうん、部の規則でミスコンの投票権と交換はできないんだ」
「やっぱりそうかあ……まあでも、面白そうだし１冊買うわ。はい２００円」
「あ、ありがとうございます!!!」
　文芸部のメガネの男子がにっこり笑う。
「この作品、『小説家になろう』でも連載しているのでよろしくお願いいたします」
　最後には宣伝をされてしまった。

「良かったのか？　買っちゃって？」
「部の規則で無理と言っても、買っておけば少しは印象がいいでしょ？」
　とにかく少しでも優勝に近付かないと。
「まあ確かに……」
「さっ次に行きましょ」
「うん」

　次にやってきたのは、地理・歴史研究会。こういう名前だが最近では地理の研究がほとんどで、展示もすべて地理の展示になっている。
「へえ、この辺の地名って、こういう由来だったんだねえ」
　今年のテーマは、「地元の郷土の地名と由来」だそうだ。
　文科系の部活だからか、この手の展示が多く、参加型というわけではない。

だからこそ、浩介くんとのんびりしてみるにはいいけど。
「でもなんだかマンネリかなあ……」
浩介くんがそう漏らす。
「うーんそうだねえ……あ、そうだ」
「ん？」
「そろそろミスコンのアピールの時間だから」
あたしは時間を思い出す。
「あ、そうだね。体育館に行こうか」
というわけで、ちょっと早いけど、あたしたちはミスコンのため、体育館へと向かっていった。

「あ、石山優子さん。お待ちしてました」
守山会長が出迎えてくれた。浩介くんは最前列に座ってもらう。
「えーではですね。私服に着替えてください。それから水着の用意もお願いします」
「はーい」
よく見ると既に私服姿の人も、着替え中の人もいる。
でもなんか皆やる気を感じない。
あれだけ引き離されてしまったら確かに消化試合感は半端ないだろう。
でもあたしは1位とは言えほぼ僅差、桂子ちゃんや永原先生に負けたくない思いがとても強い。
制服のスカートを脱がず、まず赤い巻きスカートを制服のスカートの中で巻いて、制服の方は上手く脱ぐ。
上の方も制服を脱いでそして着る。

「うわあ何あの大きさ……」
「肩こりそう……」
「ねー」

うん、肩は相当こるわよ。

にしてもやはりミスコンに出るくらいだからある程度皆大きさもあって、巨乳の悩みというのが分かってくれて居るようで安心。
とは言っても、あたしより大きい子がこの学園にはいないんだけど。
ふう。ともあれこんな所かな。少し待とう。
やがて桂子ちゃんや永原先生を始め、ミスコンの参加者が揃ってくるが、1人足りない。
来ていないのは予選ではビリから二番目だった子で、生徒会長曰く「勝てる望みがないのでもうやめます」とのことだった。
そのことは全校放送で予め述べられることになった。
「うーんやっぱ今年の二極分化は異例だからねえ」
「ま、私達13人で行きましょう」
着物姿の永原先生がそう言う。夏祭りのときとはまた違う着物。
「永原先生その着物……」
「あ？　これ？　これは吉良殿のじゃないわよ。明治の6つ手前の嘉永時代に買った着物だよ。確か160年位前のだったかなあ……」
「ええ!?　これこんなに古いんですか？」
「うん。でも一番古いのは300年以上前のがあるし、だからこれくらいは着ていってもいいかなって」
永原先生がサラリととんでもないことを言う。絶対永原先生の持ち物だけで鑑定番組1年は困ら無さそう。
あ、でも全部本物になっちゃうから緊張感がないか。
それにしても、永原先生という乱入者がいなければ、あたしも桂子ちゃんに対し、ある程度の余裕を持って優勝できたようにも思う。
永原先生に教師票をごっそり持っていかれた上、「興味本位」で入れる人も随分と多いからだ。
特に「TS病」と言う個性を消されたのは痛い。一般には知られていないが、教頭先生を倒すための謀略の一環として、既に学校中が永原先生の本当の年齢を知っている。誰かが言いふらすのも時間の問題という可能性もある。
あの時は救われたが、まさかこんなところでカウンターパンチを食

らうとは思わなかった。
「それじゃあ、準備してください。私服審査が始まります」
守山会長の声とともに、昨日に引き続き舞台に上がる。
「さあ、みなさんお待ちかね、小谷学園ミスコンテストですよ！　果たしてミス小谷学園に輝くのは誰なのか？　というわけで、本日は候補者の皆様に私服を着てもらいました！」
永原先生は着物で勝負をしてきた。でも容姿は大人っぽい。これはあたしの勝ちだと思う。
昨日と同様銀幕が上がる。
おお、昨日よりもずっと人は多くて、一般客の姿も多い。
「それではまず予選１４位の能登川（のとがわ）明美ちゃんから――」
能登川明美と言われた少女がロングスカートをつまみながら一礼する。
拍手もまばらだ。観客の視線を見るとあたしにもそれなりにあるが、何より一人だけ和服の永原先生への視線が凄まじい。
前言撤回、着物にすることで目立つという永原先生の作戦勝ちだ。
そしてよく見ると、桂子ちゃんの私服もいつもよりかわいらしい。
落ち着いた青いワンピースのロングスカートでありながらお腹と胸にある赤いリボンと白いフリルで埋め尽くされたケープはとても少女チックでスカートも端だけは白いフリルになっている。
また髪にかけた赤色のカチューシャもささやかながらも強力に自己主張している。
肌の露出はミスコン参加者の中では一番少ないが、少女性という意味ではあたしのこの服とほぼ互角以上に戦えている。
「さあ、お待ちかね。次は予選第３位……まさかこの人が参戦してくるとは思わなかった……４９９歳の合法ロリこと、永原マキノちゃんです!!!」
守山会長の声が一際大きくなり、観客の歓声も凄まじくなる。
事実上三つ巴とはいえ、ちょっと露骨すぎる気もする。というか、昨日と同じ肩書きじゃないのよもー。

永原先生が数歩前に出ると、右手の番傘を広げ頭の上に広げると、一層の歓声が上がる。
「ありがとうございます!!!　永原せんせ……永原マキノちゃんに、大きな拍手をお願いします!!!」
歓声が一段落すると、守山会長が再びマイクを取る。今一瞬先生と言いかけた。
「さあ、次は予選第2位――」
桂子ちゃんが呼ばれ、前に出る。
スカートをつまみ、少し横に広げる。前後左右にちょっと揺らすが上下には揺らしていない。
よし、これはチャンスだ。
第1位のあたしが呼ばれると、やっぱり歓声はすごい。
他の子よりも更に半歩前に足を進める。

赤いスカートの裾を右手で摘むとあたしは上にちょっとだけたくし上げ、身体をやや右に傾けて、パンツギリギリまで脚を見せてからウインクをする。
あたしがウインクした瞬間、会場のボルテージが最高潮に達し、スカートから手を離すと思いっきり手を振り「みんなーありがとうー」と、大きな声を上げる。
歓声にかき消されてしまったためか、守山会長がマイクを貸してくれる。
「みんなーありがとうー!」
「うおおおおおおおおおおおお!!!!」
こうして、あたしたちは一旦退場し、休憩を挟む間に着替えをして、次の水着審査に入ることになった。

# 水着審査でまた嫉妬

私服から水着に着替える。
この赤いスカートをうまく使い、以前夏で海に来た時と同じように水着に着替える。
今回は審査なので特に水に濡れることがないので、そのあたりが安心だ。
ところで、全裸になって着替えるという横着をしている女子が1人いたけど、案の定最下位の子だった。
まあ、もう殆どあたしと永原先生と桂子ちゃんのイベントになっちゃったから気にしても仕方ないけど、ともあれ今年は例年以上に二極分化が激しいらしい。やっぱり飛び抜けた美人がいるとこうなっちゃうんだろうなあ。
というか、あたしや桂子ちゃんが卒業したら永原先生が連覇しまくりそうで怖い。
……って、今年優勝の可能性もあるのよね。永原先生は、今はあたしの倒すべき相手だ。
「さあ、みなさんお待ちかね、小谷学園が誇る美少女たちが水着になってくれたよー！」
幕が下りているのに、割れんばかりの音量で歓声が聞こえてくる。
他のミスコンの子は表情からも明らかに敗戦処理モードで、中には学校指定のスク水そのままの子もいる。
それどころか「本当はマイクロビキニにしようと思ったけど、やったってどうせ挽回できないからこれにした」とか言っている人もいた。

「それでは、幕を上げてください」
守山会長の号令のもと先程と同様に幕が上がりきる。
観客のボルテージが上がっていく。
幕が上がりきると、特に中央にあたし、桂子ちゃん、永原先生が固まっていたため、観客のほぼ全員があたし達を見ている。

４位以下は露出もかなり控えめな水着にしていて、守山会長も一応名前を呼び上げて、参加者に対しても水着で一礼して挨拶はしているが、観客も申し訳程度に拍手しているだけだ。

「えー、もうぶっちゃけちゃっていいですか？　正直ここからが本番ですよね？　予選３位は先生ながらミスコンに乱入してきた……本人は３０歳を名乗るけど実年齢はもっと上!?　永遠の美少女、永原マキノちゃんです!!!」

永原先生が呼ばれ、観客の歓声が幕を上げる時以上になる。

永原先生の水着は海に行った時と同じ緑色を基調とし、ショーツにかわいらしく、エロくフリルがあしらわれた水着で、露出度もミスコン参加者の中では結果的に一番高い。

永原先生は身体を前かがみにし、その小さな体に似つかわない大きめの胸を強調し、それを見た観客は一層の歓声を上げる。

守山会長からマイクを受け取り「みんなー私に投票してね！　でも投票してくれたからと言ってテストや通知表は融通しないよ」と永原先生が言うと、会場からは笑いも出る。

永原先生は場をなごませるのが本当に上手い。美人で親しみやすいし伊達に教師歴１３０年を誇っていない。

「さあ予選2位は学園一の美少女との異名も持ち、美人すぎて高嶺の花とも言われている木ノ本桂子ちゃんです!!!」

水着姿の桂子ちゃんが手を挙げて前へ出る。

あのオレンジ色の水着でいきなり座り込んでくるりと前転。

あれじゃもちろんパレオの中は丸見えの上、全身が余すことなく見えることになる。

桂子ちゃんが大胆になると、観客の歓声が更に凄まじくなる。

桂子ちゃんもマイクを受け取り、煽るように「私こそ、一番女子力が高いのよ!!!　元男には負けないわ!!!」と宣言。会場からも「うおおおおお!!!!」という声が聞こえてくる。

元の位置に戻る時に少しだけ前かがみになり、お尻が強調されるよ

うに工夫する。
なるほど、かわいさのアピールにはいいが、あたしから見ると、エロさのアピールがもう一歩というところ。
やはりさすがの強敵だが、同時に勝算もつかめた。
「さあ、いよいよ予選1位、女の子らしさが日に日に高まる……優しい心を手に入れた……石山優子ちゃんです！」
あたしが前に出る。
観客の声、あまりの音量に、爆発が起きたのではないかと思ってしまった。
人間ってここまで大きな声を出せるのかと感心してしまう。
あたしはこの水着審査には絶対の自信がある。
まず、身体の素質が他の子とは違う。
毎日の生活の中で、男女の視線、男の性的な視線と女の嫉妬の視線に晒されている。
だから、この場で何をするべきなのかは分かっている。
意を決して身体を前に屈め、おっぱいを寄せて、ただでさえ大きな胸を更に強調する。
観客の誰かが「もっと、もっと、もっと」と手を叩きながら煽り始めたのか、やがてそれが観客全体に伝染する。
あたしはある程度強調したら、予定通り両足を肩幅にするとその場で一回転ターンする。
「わああああああああああああああ!!!!!!!!」
超ミニのパレオが遠心力で舞い上がり!! 中の白い水着がちらちら見える。
観客の視線が一気に下半身へと向けられたところでもう一回転。観客が何かを期待するように煽り続けるような声を出しているので、ここであたしは座り込んで、体育座りになる。
観客の歓声が最高潮に達する、鼓膜が破れると思ってしまうほどだ。
桂子ちゃんのようにいきなり丸見えにするのではなく、徐々に股をゆるくすることで、男子の性欲を煽ることが出来る。

そしてそのまま女の子座りになって、パレオの中をちらりと見せつつ再び胸を強調。下からちょいと持ち上げると、己の性欲に忠実になった男の観客たちの声にも気合が入る、会場をよく見ると、数人の男性客が慌てて体育館のトイレの方向へ駆け出す姿も見える……勝った！

あたしは立ち上がって一礼し、マイクを受け取りすぐに喋らず、もう一度一回転してから「あたしに投票してくれるかな？」と言いながら胸を強調する。

そして後ろに振り返り、桂子ちゃんと同じようにお尻をやや強調しながら列に戻る。

「さあ、これで小谷学園ミスコンテストの全審査が終了となります、生徒会では皆様の清き一票をお待ちしております！」

あたしたちが昨日と同じように退場する。永原先生、桂子ちゃん、あたしには特に惜しみない拍手が送られた。

「はあー終わった終わったー」

水着から着替えたあたしたちを前に、制服姿の永原先生が背伸びする。

「永原先生、何でまた制服？」

ミスコンの審査発表の終了後も永原先生は制服姿のままだ。

「ああ、うん。今日はこれで来たから」

「「えっ……ええ!?」」

あたしと桂子ちゃんが同時に驚く。

「えへへん、男性の視線もいつもより釘付けだったわよ。やっぱり制服っていいわね……私もお金貯めたら一度くらい女子高生になりたいわねえ……他にも仕事あるから無理だけど」

そういえば、永原先生はＴＳ病になったの２０歳の時だから４８０年近く前だもんなあ……永原先生にも、そう言う青春への憧れがあるのだろうか？

そう言えば、永原先生はあたしのこと「羨ましい」って言ってたよね。

でも、今はあたしが永原先生を羨ましいと思う。
あれだけの年月を行きてきたのに、生徒だけでやっていたミスコンに混じって、一番生き生きしているし。
「じゃああたしは浩介くんと回ってくるから」
永原先生と桂子ちゃんと別れ、会場にいるだろう浩介くんを探す。
さすがに人数が多いからか、なかなか見つからない。
「あ、浩介くん！」
「ゆ、優子ちゃん……！」
人が引けてきて、浩介くんを見つけることが出来た。あたしが近付く。
「えへへ。あたしどうだった？」
「あ、ああ……かわいかったぞ！」
「ふふっ、いつもより？」
「あ、うん……」
なんかまた機嫌悪くなっている。
あーあ、また恥ずかしいけど嫉妬心沈めないとダメかな？
「ほら、部活棟、続きまわろうよ」
「あ、うん……」
今は気持ちを切り替えよう。あたしも浩介くんもそう思った。
「次は茶道部だよ」
「茶道ってどんな感じなんだろ？」
「あたしもよく分からないわ」
そんな感じで部活棟へ行く。
あたしは浩介くんとともに茶道部の前にやってくる。
それにしても茶道かぁ……出来るようになればなんか教養が磨けそうな気もする。
「左足から、座布団の縁に足を載せないように――」
「んっ……」
あたしと浩介くんは指導役の茶道部員の人に茶道を教わる。
ちょっとだけ足がしびれる。

「これの蓋をこう……あっちそっち向きじゃなくて……柄杓は親指と人差指の間で――」
正直に言うとすげえ細かい。
「お茶を飲む時は……こうやって……『お点前頂戴いたします』と言うのです」
「お、お点前頂戴いたします……」
こんなのいっぺんに覚えられない。
浩介くんの方をちらりと見ると、やはり悪戦苦闘している様子だった。
ともあれ、あたしがいれたお茶……気に入ってくれるといいけど。
ともあれ、体験講習みたいなのが終わった。

「浩介くん、茶道部ってどう？」
「どうも何も……お茶は美味しかったけどさ、面倒すぎて」
「ねー」

次に来たのが新聞部。ここでは新聞部で発行していた学級新聞の紹介で、一般向けだ。
「あれ、今日発行のもあるぞ」
「え？　あ、本当だ」
そこにあるのは一面トップに映るあたしと永原先生と桂子ちゃんの写真、そして見出しにあるのは「小谷学園ミスコンテスト、事実上3人に絞られる」「まさかの乱入者永原先生により上位3人は混戦模様」とある。
本文は主に票数の結果があり、桂子ちゃんについては「学園一の美少女という名前も優子ちゃんの登場であまり言われなくなったものの、癖がなく手堅い人気がある」とか言う分析がある。
そして、永原先生については「教師票が多く、インパクトと話題性、コネで上り詰めたイメージだが、実際には制服姿の見た目を見ればこの順位も納得」と書いてある。
最後にあたしの分析、「新聞部では当初圧倒的1位を予想していた。

その容姿やもはやアイドル以上と言ってよく、一方で性格面は優一だった頃の性格とは正反対で、心優しいだけではなく、泣き虫な一面もあり、それが更に男性の保護欲を刺激する。また、髪も黒髪ロングストレートと文句なし。ただし、混戦となったのはＴＳ病属性が永原先生と重なってしまった上に、女性票を伸ばせられていない所にあるだろう。また、ＴＳ病ということを除けば完璧すぎる美少女な上に、狙いすぎているのかもしれない」とある。

「うーん、どうなの？」

「狙いすぎているのはあると思うぞ」

浩介くんも新聞部の書評に同意している。

「そ、そうかなあ……」

うーん、男は単純だから、全体的には間違ってないと思うんだけどね。

「よし、じゃあ漫画研究会に行こうか」

「そうだね」

うーん、やっぱり浩介くん、なんか不機嫌っぽいなあ。

しょうがない、メイド喫茶のシフトが終わったらまた機嫌取ってあげないと。

あうう……思い出しただけで恥ずかしい……

「優子ちゃんどうしたんだ？」

「あ、うん、ゴメン。行こうか」

あたしたちは漫画研究会に行く。

ところが、迎えていたのは文芸部と瓜二つ。２００円の部活の合同同人誌を販売するものだ。

それどころか「票を入れてあげたら買ってあげる」→「それは部活の規則出来ない」→「しょうがない、買ってあげよう」というところまで同じだった。

「優子ちゃん、もうすぐシフトの時間だけど大丈夫？」

時間を確認、まだ余裕がある。

「あ、うん、まだ1箇所は回れるよ。天文部に行こう」

「天文部って優子ちゃんと木ノ本の部？」

「後は3年生の坂田部長もいるわよ」
「ああ、あのお嬢様の坂田舞子先輩か」
　坂田部長も、その上品さからミスコンの代表と言う声もクラスであったが、坂田部長まで出ると天文部に人がいなくなるということで辞退にこぎつけた。
　まあ、出たら出たであたしたちの3人の牙城は崩せないだろうし、そうなると下手をすると関係も悪くなる可能性もあるから良かったかも。
「じゃあ、行こうよ」
「うん」
　あたしは天文部のドアを開く。
「あら、石山さん、いらっしゃい……あら、その子は？」
「あ、うん。と……友達の浩介くん」
　まだ彼氏彼女というわけではないから友達として紹介する。
「篠原浩介です。はじめまして坂田先輩」
「あらあら。こんにちは」
「天文部どうですか？」
「端っことあってそこまで入場はよくないですわ。でもそのほうが気楽でいいですわよ」
　天文部の展示と言っても、中が暗いわけではない。それどころか、坂田部長はのんきにパソコンでゲームをしていた。
「おいおい、こんなんでいいのかよ天文部」
「ええ。天文部は緩いですから、篠原さんも歓迎ですわよ」
「え、いや俺はその……」
「石山さんが惚れ込む相手ですわよね？　悪い人とは思えないですわ」
　坂田部長が部員を勧誘する。
「うーん、俺は遠慮しておくわ」
「そういえば浩介くんは部活って？」
「あー俺は入ってないわ」
「え？　じゃあ天文部の時って――」

「ああいや、部活入っていないって言っても、大体は筋トレとかして過ごしてたからさ。いつも通りだよ」
浩介くんが弁解してくれる。
「うん、それはよかった」
「ところで、この2つの展示、左側は何となく分かるけど……右側って？」
「太陽系のご近所さん……といってもものすごい遠くだけどね。例えばこの白いのが――」
「あ、私のパソコンで説明するといいですわ」
いつの間にかゲームをやめていた坂田部長が、例の宇宙ソフトを起動する。
「うわあ、こんなソフトあるんだ……」
「しかも無料で使えるんですわ」
浩介くんは興味津々だ。なにせ広い宇宙がパソコンの中で表現されているのだから。
ともあれ、白い大きな球が冬の空のシリウスだということは理解してもらった。
「へえ、太陽って星の中でも大きい方だったんだ」
「ええそうですわ」
「小さい星かあ……太陽から一番近い星は肉眼でも見えないのかあ……」
「ええ」
あたしは時計を見る。もう少しだけ余裕がある。
浩介くんに天文部のことを紹介する。
浩介くんはあたしに似ていて結構面白そうだと思うと聞き入るタイプらしい。
時間になったら2年2組のメイド喫茶まで戻ることにした。

## 志賀さくらの想い

「交代ですよー永原先生！」
「あ、石山さんお疲れ様」
　あたしは昨日と同様、シフトの時間帯になってメイド服に着替え、交代する。
　昼間の一番混雑する時間帯、浩介くんには「午後は運動部を見て回ろう」と言ってある。
「おかえりなさいませ～ご主人様ー」

「うおっしゃ、優子ちゃんのシフトじゃん！」
「ほほう、俺たち運いいな」
「だなあ、やっぱりミスコンは優子ちゃんの優勝だよな！」
「いやまだ油断できねえぜ。中身は桂子ちゃんが一番印象いいし、優子ちゃんの個性も永原先生に隠れてしまったし」
「優子ちゃん推しとしては永原先生が強敵だよなあ……」
「５００歳、合法ロリ、ロリ巨乳、美人先生、ＴＳ病……属性すごいよなあ」
「優子ちゃんの属性を食ってる所あるよねえ……」
「でも胸なら流石に優子ちゃんがダントツでしょ」
「確かにねえ……」
「優子ちゃんってバストいくつなんだろう……」
「なあ、ちょっと聞いてみるか！」
　正直教えたくない。あたしの数値心理的にもインパクトでかいし。
「えー？」
「聞くだけならタダでしょ」
「でも……」
「すみませーん！」

「はーい何ですかー？　ご主人様ー」
　一応応対する。

「優子ちゃんってバストいくつ？　何カップ？」
　うわっ、本当に聞いてくるとは……
「おい、固まってるぞ……！」
「おい!!!」
　まだその場にいたのか、浩介くんが怒る。
「うわっ、お前……！」
「俺の優子ちゃんに何聞いていんだ!!!」
「げっ、噂の彼氏じゃねえか……」
「す、すんません」

「あ、ありがとう浩介くん」
「……ったく気をつけろよ。今日は一般にも開放されているんだから、セクハラするやつとか居るぞ」
　浩介くんが不機嫌そうに言う。
「ふふっ、やっぱり、嫉妬していたのね」
「なっ……嫉妬なんか……！」
「まあまあ、ともあれありがとう。シフト終わったらまた会いましょうか」
「あ、ああ……」
　その後は一般客も含めて接客していく。
　でも、男性は年齢層問わずあたしの胸に釘付けになる。
　浩介くんはまだ、他の男性の気を惹くのに嫉妬しているけど、それも浩介くんにだけ見せることを増やしていけば……必ずや浩介くんはあたしのことをますます好きになってくれるはず。
　そんなことを考えながら、あたしはメイド喫茶の接客に勤しむ。
　これは、ミスコンの票にも大事なこと。永原先生と桂子ちゃんを打ち負かすために、負けられない戦いの一環でもあるわ。

「あ、優子」
「あれ？　母さん……それに父さんも」

メイド服でお仕事をしていたら、両親がメイド喫茶に来てくれた。
「あらあらまあまあ……んーーーーーー!!!　かわいいーーーー!!!」
母さんがギュッと抱きついてくる。
「ちょ、ちょっと母さん！」
ちょっと苦しい。
「あ、ごめんなさい。あんまりにかわいいからつい……」
「えっと、注文いいか……？」
父さんが苦虫を潰したような顔をしつつ、とりあえず注文を聞く。
「じゃあ、お母さんたちは、ミスコンの結果を楽しみにしているわ」
「あ、うん……いってらっしゃい……」
やっぱり身内の接客って難しいや。

「優子ちゃーん、そろそろシフト交代！」
「はーい！」
メイド服姿の桂子ちゃんのチームに引き継ぐと教室の外に浩介くんがいた。
「浩介くん、お待たせー」
「ああ、うん……待ってないぞ」
「ふふっ、ありがとう。じゃあ野球部に行こうか」
あたしたちのスケジュールは野球部、サッカー部、陸上部、空手部、他には文化系で見ていなかった吹奏楽部と合唱部の合同演奏を聞きに行く予定だ。
「まずは野球場に行こうか」
「そうだな」
途中廊下を歩く中で、背が低い制服姿の女の子とすれ違う。
「あれって永原先生だよな？」
「そうだったね、怖いくらい溶け込んでたよね」
今まで気にしていなかったが、永原先生の制服姿が文化祭に溶け込むとどうなるかと言うえば、若作りしているわけでもないからか、幼すぎて目立つということもない。

しかし、野球場までは会話があんまり続かない。
あたしは浩介くんがミスコン審査以降、また嫉妬していることを確信した。
でも、あえてこれには触れておかない。
野球部はバッティングセンターのような感じだ。
実際に投手のボールを打ち替えることも出来るし、トスで打つことも出来る。
そんな中で野球場の外でずっと見続けている女子が見えた。
「あれ？　さくらちゃん」
「お、志賀じゃねえか」
いたのはさくらちゃんだ。
さくらちゃんはずっとマウンドの方を見ている。
「あ……篠原さん……石山さん……こんにちは……」
「どうした？　マウンドばっかり見つめて……」
「い、いえ……別に……気になるとか好きというわけじゃないですよ……はい……」
さくらちゃん嘘をつくのが下手だなあ……
「さくらちゃん、自分で墓穴掘ってるわよ」
「あ、あの……そそそ、そういうことじゃないのです……」
「あ、唐崎先輩じゃん」
「ひゃうっ！」
普段のさくらちゃんからは想像もつかない声。
「す、すみません……私……唐崎先輩が好きなんです……」
唐崎裕太（からさきゆうた）先輩、うちの弱小野球部のエースで、だいたい一回戦で大炎上して、一部の口の悪い野球部員は「唐川裕児」ってあだ名を付けているけど、あたしは元ネタを知らない。
あ、でも今年は一応1回戦は勝ったんだっけ？
2回戦はコールド負けだったけど。
「へえ、でもあいつイケメンだし人気高いだろ？」
「はい……それで、私……なかなか言い出せなくて……」
「でも言い出さねえと始まらねえだろ」

というかあたしたちもまだ告白してないけど、まあこの際そのことは置いておこう。
「う、うん……」
「さくらちゃん、ほら、一緒に行こう」
「は……はい……」
「いきなり告白するよりはよ。まずはちょっと近付くのもいいかもよ」
「あ、そういえば、あたし思い出したんだけど」
「優子ちゃんどうした？」
「うん、野球部ってマネージャーがいないなって」
「あ、そう言われてみれば」
うちの弱小野球部にはマネージャーが不在なので、男子の部員が兼任している。
「志賀、これはチャンスだぞ」
「う、うん……」
あたしと浩介くんの後押しもあって、さくらちゃんはあたしたちとともに野球部の門をくぐる。
「いらっしゃいませー、小谷学園野球部へようこそ」
唐崎先輩が挨拶して出迎えてくれる。
「ここではバッティング体験ができます。ピッチャーのボールを打つか、トスしたボールを打つかを選べます。どうします？」
「浩介くんだけピッチャーのボールで、あたしたちはトスしたボールを打とうか」
「え、ええ……」
「異論はないぜ」
浩介くんとさくらちゃんが同意し、まずは浩介くんが打席に立ち、あたしたちは安全のため一旦球場の外に出る。
「浩介くーん頑張ってー！」
「……」
「ほら、唐崎先輩を応援しないの？」
さくらちゃんは押し黙ったまま。

……まあ仕方ないか。
審判役の野球部員もいる。
まずは一球目。
ブンッ！
「ストライク！」
浩介くんのバットが空を切る。
「うわー、やっぱはえー」
弱小の炎上屋とは言ってもやはり小谷学園のエース。
いくら浩介くんが鍛えていると言っても素人がそうそう打てるわけじゃない。
ましてや初対戦ということもある。
2球目、浩介くんが見極めてボール。
「うお、君選球眼あるな」
「あ、ありがとうございます」
浩介くんが唐崎先輩に褒められている。あたしたちにも聞こえるようにか、唐崎先輩はかなり大きな声で喋っている様子だ。
3球目、浩介くんは再びフォークを見送って、ボール。これでカウント1―2。
浩介くんは「やっぱり変化球が来たか……」と言っているようにみえる。
キーン
「お、当てた」
「あーでもファールだね」
これで2ストライク。
5球目、唐崎先輩のボールが大きく外れボール。
浩介くんが意外と我慢強い。
「むむ、さすがにフォアボールはなあいけないよなあ」
唐崎先輩はストライクに投げるという宣言。
キャッチャーも真ん中付近に構えている。
「ふんっ！」
来たのは直球。

カキーン！
「お、前に転がったわ！」
浩介くんが走るが、セカンドゴロでアウト。
「あーやっぱダメか」
あたしたちが再び球場に入ると唐崎先輩と浩介くんが話している。
「ははっ、でも筋はいいぜ。パワーありそうだ」
「こう見ても鍛えてますから」
「ははっ、野球では勝てるけど喧嘩じゃ負けそうだ。それにしても何で鍛えているんだ？」
唐崎先輩が言う。
「優子ちゃんがよくナンパされますから」
「あ、そうか。君は確か……うん、あの石山優子ちゃんの彼氏か」
浩介くんとあたしが赤くなる。
でも、鍛えていた本当の理由は別にあるんだけどね。
「まあいいや、そこのお二人さんはトスしたボールを打つんだったっけ？」
唐崎先輩がホームベースの横にボールの籠を持ってくる。
「こっちは基本5球だ。どっちから始める？」
「じゃああたしから行きます」
あたしが前に出る。多分一番ひどいことになるから早めに終わらせたい。
さり気なく折ったスカートを元に戻し丈を長くする。
「へえ、そうなってるんだ」
浩介くんが感心している。
「まあ、走らないし大丈夫じゃないかな？」
「ああ、多分大丈夫だよ」
唐崎先輩も言う。
「でも一応ね、運悪く同時に風吹いたりしたら嫌だし」
「じゃあ始めようか。真ん中を狙うからそのつもりでいてくれ」
ともあれスタート、1球目。宣言通り真ん中へ。
ブンッ！

が、バットが空を切った。
「あー、もう少し早く打ち始めてみてくれ」
さっきとは打って変わって丁寧に指導してくれる。
２球目、気持ちさっきより早くバットを振る。
コンッ……
ピッチャーマウンドの前にボールが落ちる。もしマウンドに唐崎先輩がいたらピッチャーフライだ。
「うーん……」
「どんまいどんまい、もう一球行こう」
３球目、もう一度唐崎先輩に投げてもらう。
キーン
しかし、これもボテボテの内野ゴロだった。
「あー、まあ女の子はそんなものだよ、うん」
「そうかなあ？」
「例外はテニス部のあの子くらいさ」
「恵美ちゃんのこと？」
「ああ。さすがに俺のボールは打てなかったが今みたいにトスしたボールだったら外野深くまで飛ばしてたぞ」
唐崎先輩が恵美ちゃんについて話す。
４球目、今度はサードゴロと思しきゴロになる。
まあ、あたしの足だと外野に転がっても一塁でアウトになりそうだけど。
最後は再び空振りし、これで５球が終わってしまった。
「はい、次はさくらちゃんの番だよ」
「う、うん……」
さくらちゃんが打席に立つ。明らかに緊張して体が硬くなっている。
「あ、あの……よ、よろしくお願いします……はい」
「大丈夫か？　ガチガチになっているよ」
「あうっ……はい、大丈夫……です……」
明らかに大丈夫じゃない。

「そ、そうか……じゃあ始めるぞ」
「はい……」
唐崎先輩がまず1球目を投げる。
「んっ……！」
コン！
ボールはピッチャーゴロになる。
「あうっ……」
「もう少し自然体で打ってみて」
「はい……」
唐崎先輩の指導が、さくらちゃんをより硬くしてしまう。
2球目はバットに当てたが、3メートル程度しか進んでいない。
「うーん、体の力をもう少し抜いてみて」
「は、はい……すぅ……はぁ……」
さくらちゃんが深呼吸をして打席に立ちなおす。
「お願いします」
「よし」
唐崎先輩がボールを握り直してからトスして投げる。
カキーン！
「お！」
さくらちゃんの打ったバットから芯でとらえたような金属音がする。
それでも、ボールはショートに捕球されてしまった。
「お、今のは守備位置次第なら抜けていたぞ」
「そ、そうですか……」
「さ、後2球だ。頑張れよ」
「は、はい……」
さくらちゃんは普段からぎこちない対応だけど今日は特にそうだ。
結局快音が聞こえたのは、3球目だけだった。
「はぁ……はぁ……」
「お疲れ様、これで全員だな」

「ほら、さくらちゃん」
「で、でも……」
「勇気を出してみて。マネージャーになるところからよ」
「う、うん……あ、あの！　唐崎先輩！」
「？」
「わ、私……その……野球部で……マネージャーになりたいんです！」
　さくらちゃんが唐崎先輩に勇気を出して言う。
「おおそうか！　それは歓迎だぜ！」
　唐崎先輩はあっさりと承諾してくれた。
「あ、ありがとうございます！」
　さくらちゃんも今まで見たことのないような明るい笑顔を見せる。
「いやーマネージャーいなくて困ってたんだよ。何せうちは弱小だから全然人気なくてさあ……そうだ、早速部員に紹介するよ。名前は？」
「あ、あの……志賀さくらといいます……」
「志賀さくらちゃんだね……おーいみんなー！　マネージャーになりたいって子が現れたぞ！」
　唐崎先輩がそう言うと、守備についていた他の野球部員からも大きな歓声があがる。
　さくらちゃんは嬉しさと戸惑いの合わさった表情をしながら、野球部員たちに引っ張られていった。
　もう展示のことなんてどうでもいいって雰囲気さえある。

「……」
「……行こうか浩介くん」
「あ、ああ……」

　ともあれ、あたしたちに次にやってきたのはサッカー部、ここではスローインゲームが行われていた。
　何でスローインゲームなのかはよく分からない。

「お、優子に篠原じゃんいらっしゃい」
　出迎えてくれたのは女子サッカー部のレギュラーでもある虎姫ちゃんだ。
「おや、安曇川じゃん。そうか、安曇川の女子サッカー部は強いんだったな」
「うん、男子は弱いけどね」
「というか、部員数が足りないじゃん」
「おっとそうだった」
　小谷学園は運動部が大の不人気で、野球部以上の不人気がこの男子サッカー部。
　部員数が5人しかおらず、何と女子サッカー部と試合して負けるほどだ。
「男女対決に勝つくらいだもんねー」
「ああいや、助っ人呼ばれたらさすがに勝てないよ、本気でぶつかり合いになったら女の子は飛ばされちゃうし」
　小谷学園にも、かつての優一や浩介くんみたいに、部活入ってなくても運動能力の高い生徒はそれなりにいる。
　ちなみに優一は助っ人に呼ばれたことはない。
「やっぱそういうもんなのか」
　浩介くんが疑問を投げかける。
「浩介くん、女の子は弱いのよ」
「いや、優子ちゃんは特別じゃ……」
「そうだとしても、あたしなら浩介くんが守ってくれるから強くなる必要ないわ」
　あたしが言う。浩介くんへの信頼の証。
「はいはい、お熱いこと。スローインゲームというのはね、味方のチームにスローインすれば勝ちという単純なゲームよ」
「そ、そうなんだ……でもどうして？　サッカーって蹴るもんじゃ」
「毎年制服のまま、生パンで動き回る女子が続出したから中止にしたのよ」
「そ、そうなんだ……体操着に着替えようよ……」

あたしとしては、正直見せパンの類を穿いててもはしたないと思うのに。
「とりあえず、3球勝負よ。優子からやる？」
「う、うん……」
ともあれスローインゲームをする。青チームに通れば勝ち。赤チームにカットされると負けだ。
「えいっ！」
よし、1発目は通った！
「お、優子ちゃん筋は悪く無いじゃん。あ、ちなみに、青と赤でも報酬を巡って賭けているから八百長はないよ」
「あ、うん……」
先に言ってほしかった。
「それ……あっ！」
しかし、次の2発は赤チームにカットされたので、トータル1勝2敗で負け越し。
にしても、かなり本気でぶつかりあってたから、確かに八百長では無さそうだ。
「じゃあ次、浩介くん」
「うん、やってみる」
浩介くんがサッカーボールを持ちゲーム開始。
「こんなもんかな」
浩介くんは2勝1敗で勝ち越し。あたしと合わせてちょうど2対2の五分の星になった。
「うちはこれで全部だよ。この先も文化祭楽しんでね」
虎姫ちゃんに見送られサッカー部を後にする。
「よし……えっと、次に優子ちゃんが見ていきたいのは？」
「あーうん、陸上部と空手部」
「じゃあ、空手部が近いな」
浩介くんはややそっけなく言う。
やっぱりまだ機嫌は直っていない。いや、やや悪化しているかもし

れない。
空手部では、瓦割りの実践をしていた。
ちなみに、浩介くんは「俺もやってみる」と言い出した。
空手部員はやんわりと止めたが、浩介くん、そのまま瓦を数枚一気に割ってみせて空手部員を驚かせてしまった。
ちなみに、あたしはうっとりしてしまった。
力を誇示できて、ちょっとだけ浩介くんの機嫌が治ったかもしれない。
陸上部の展示は何かよくわからないものだった。
走り幅跳びと走り高跳びの実演ということだが、正直ありがたみが全く沸かない。
浩介くんは帰り際「何だあれ？」と言っていた。
機嫌が元通りになってしまった気がする。

「ねえ浩介くん……」
「何？」
「やっぱりさっきから機嫌悪いでしょ？　嫉妬なんでしょ？」
「だ、だから嫉妬じゃ――」
やっぱり無理をしている。不機嫌を溜め込むのは良くない。恥ずかしいけど、またやらないと……
あたしは浩介くんの腕を持つ。
「いいのよ。あたしのために妬いてくれるんでしょ？　嬉しいわよ」
浩介くんが真っ赤になる。多分あたしもそうなっている。
「ほら、ちょっとこっちに来て？」
あたしは浩介くんに、桂子ちゃんと以前話した中庭の影へと案内した。

# 優子の裏表

「ここで、いいかな……」
中庭の穴場、空調機の音が鳴り、周囲からもなかなか見えず、湿度も高めの場所。
以前桂子ちゃんとも話した穴場。中庭自体、文化祭のこの時間にはあまり人はいないのだが、ここは更に人が少ない。
「こ、こんなところで……ま、まさかまた……」
浩介くんがごくりと唾を飲み込む。
「うん……浩介くん、ご機嫌斜めだから……浩介くんだけにしてあげること……昨日と同じように……して……いいよ……」
あたしは浩介くんに何をされるんだろうと心臓がバクバクする。
「はぁ……はぁ……」
浩介くんが何かを妄想しているのか？　もう鼻息を荒くしている。
ああ、嬉しくて、あたしまで興奮してしまう。
あたしは周囲からも、女の子らしい女の子で、性格も健気でお淑やかな恥ずかしがり屋で大人しくて泣き虫な爆乳美少女ということで通っている。
でも、本当のあたしは、心を許した男の子にはひどく淫乱で醜いんだ。
もちろん浩介くんの前では、恥ずかしいという気持ちは、むしろいつもより強くなるのに、浩介くんの前で恥ずかしい思いをしたい、浩介くんに辱められたいとさえ思ってしまう。
「いやーん恥ずかしいよぉ……」
浩介くんにまたスカートをめくられる。下を見ると、浩介くんにあたしのパンツを凝視されている様子が見えてしまう。
昨日は縞パンだったが今日は純白の色。
「お願い、浩介くん……あたしを、あなたで染めて……！」
白は清純と純白の象徴、浩介くんに汚されたいと思ってしまうあたし。まだ彼氏彼女じゃないのに、あたしはもう、浩介くんに愛の告白以上のことを告白してしまっている。

浩介くんに恋したばかりでは、こんな感情は出なかった。
「うっ……はぁ……ふぅ……はぁ……」
浩介くんが鼻息を荒くしている。
左手でスカートをめくられたままで、浩介くんの右手が、スカートの中に入ってくる。
「ひゃうっ！」
お尻を昨日よりもゆっくりした速度で、手のひら全体でスリスリされ、思わず声が出てしまう。
「ゆ、優子ちゃん……誰か来たら……」
「あうあう……」
昨日の屋上よりスリルの高い場所。
それが更にお互い興奮を高めている。
浩介くんの手がパンツの上の方に来る。
「あの、優子ちゃん……」
「うん……ちょっとだけならいいよ……」
自分でも驚くほど甘い声で言う。
「うっ……ぐっ……」
浩介くんが唾を飲み込む。
ああいいよ、もっと、もっとあたしをエロい目で見て。お願い……！
はしたないあたしにもっとお仕置きして……浩介くん大好き……！
浩介くんにパンツの上部に手をかけられる。俄然あたしの興奮が高まる。
パンツを少し引っ張られ、間にできた空気に指が入り込む。
「ひゃぅ……！」
そしてついに、あたしはお尻を浩介くんに直接触られた。
最初だけちょっと嫌悪の信号が出るが、すぐに収まる。
微妙なくすぐったさが、また恥ずかしさを強めていく。
「優子ちゃんのお尻……すっげえよ……」
「あうっ……」

また浩介くんが恥ずかしいセリフを言う。触られ心地がたまらないから、きっと浩介くんの触り心地もいいはずだ。
「あのね、浩介くん……」
「ん？」
「こんなことさせてあげるの浩介くんだけだからね」
「うっ……はぁ……はぁ……」
お決まりのセリフだけど、浩介くんがまた興奮している。

「機嫌？　直った？」
しばらく触らせてあげたら、あたしが言う。あんまり長居するのもリスクが高まるからだ。
「あ、うん……優子ちゃんって、意外とえっちな女の子だよね」
「浩介くんこそ、触ったままそんなこと言うなんて……ああんっ恥ずかしいよぉ……」
「わっ、ごめん！」
浩介くんがパンツの中から手を戻し、めくっていたスカートを離す。
あたしはちょっとだけスカートを直す。
今回はパンツの中にも手を入れられたのでそれも直すが、その仕草がまた浩介くんを興奮させる。
「ふふっ、ちょっとスリルあったね」
「あ、ああ……」
「どうしたの？　昨日みたいにトイレ行かないの？」
「きょ、今日はちょっと温存したいんだ」
「あら？　そう……」
今日は何かが進展しそうな気がする。
あたしの中ではもう一つのことが思い浮かぶ。
あたしは浩介くんにお尻を直接触られても、最初だけ嫌悪信号が出た。
でも、これは単純に「男にお尻を触られることへの『女としての』生理的な嫌悪感」なのかもしれないという可能性が高いと思いたい。

そして浩介くんは、昨日と同様あそこを大きくしている。
いずれにしても、夏休み以前と比べても、格段に進歩したことは事実。
一歩一歩、あたしは女の子への道を進んで行く。その実感も湧いてくる。
「それじゃあ、あたし、メイド喫茶のシフトがあるから、終わったら吹奏楽部と合唱部の合同演奏が体育館であるわよ。時間に余裕があるから、ミスコンの投票をして、そこで会いましょう」
「うん」
浩介くんと約束し、あたしは何食わぬ顔で教室に戻る。
「交代だよー」
「あ、うん、優子ちゃんありがとう」
メイド服に着替え、桂子ちゃんとシフトを交代する。
実はあたしのシフトが終わり、合唱部と吹奏楽部の合同演奏の後は、ミスコンの結果発表になる。
それまで少し時間があるので、同じ体育館でミスコンの投票をしてからということになっている。
「おかえりなさいませーご主人様ー」

「うおっ、何あの子、すっげえかわいい……」
「ほら、ミスコンの予選1位の子だよ。生で見るとおっぱいが半端ねえよなあ」
「ああ、あの石山優子ちゃんか」
「で、さっき交代前に話してたのが予選2位の木ノ本桂子ちゃんだよ」
「なるほど、桂子ちゃんもかなりかわいい子だし、他の学校ならミスコン優勝間違いなしのレベルだけど、それでも優子ちゃんの前だと霞むよなあ……」
「でも、得票は意外と僅差なんだろ？　優子ちゃんの性格悪いとかそういうわけじゃないだろうし……」
「それがさ、3位の子、永原マキノちゃんに票が流れているって話だぜ」

「え？　３位の子？　あの子めっちゃ幼いよね。優子ちゃんも幼い顔だけど、あの子はそれ以上だぜ」
「それがさ、聞いて驚くなよ。あの子、生徒じゃなくて先生なんだよ」
「おい、まじかよ……」
「しかも、ＴＳ病で老けないから実年齢は５００歳って噂だぜ」
「そりゃあすげえな！」
「それでさ、今１位の優子ちゃん。実は彼女もＴＳ病で数か月前まで男だったんだってさ」
「なるほど、それがマイナスになっているのかなあ……」
「むしろこれだけ逆風が吹いて１位ってのがすごいわ」
「うんうん」

一般の男性客二人が、あたしたちの噂をしている。
永原先生は教師票だけでなく、ロリコン票や興味本位の票も持っていってしまっている。
また桂子ちゃんにも女子や「元男」というのに抵抗感のある人の票を取られている。
後者は仕方ないにしても、女子ウケの悪さは改善が難しいかもしれない。
メイド喫茶では、あたしのメイド姿を見て、多くの男達がミスコンの話題をしている。
また、審査の映像を見た上での感想としては「優子ちゃんは狙いすぎ」という声も聞こえた。
これも仕方ない犠牲に思う。
何だかんだで男は単純だから、全体の利益としては、あざとくした方がいいのだ。
以前から、あたしが、桂子ちゃんや永原先生、あるいは龍香ちゃんみたいな他のかわいい子と並んでいる時も、あたし以外の女の子を推す声はどれも「玄人気取りのようなもの」が多かった。
そしてそれは声が大きいだけで、実際の所は少数派だということをあたしは知っている。

ともあれ、混雑時間帯なためか、メイド喫茶はかなり混雑している。あたしのシフトは常に混雑中になっている。
やっぱり人気のある女の子のシフトには、混雑時間帯に割り当てるから仕方ないだろう。
そういえば、浩介くんとえっちなことをしてて夢中になってたけど、あたし、ご飯食べてなかった。
……浩介くん、あたしで喜んでくれたよね？
浩介くんに、ミスコン1位の優子ちゃんを独占できると思ってくれるためにも、絶対に負けられない。
そのためにも、2位じゃ絶対にダメなんだ。

このメイド喫茶も、ミスコンの後、後夜祭で他のクラスの出し物と競う形で人気投票が行われる。
これに関しても、あたしたち2年2組の優勝に自信がある。
特にラストスパートになるだろう文化祭最後の1時間と、後夜祭最初の1時間は、シフトが特別にあたし、桂子ちゃん、龍香ちゃん、そして永原先生の4人のなる。
ミスコンでは、今は桂子ちゃんと永原先生とで敵同士だけど、クラスの出し物のアピールでは、もちろん貴重な仲間だ。

「ご主人様ーお待たせしました。こちらコーヒーとサンドイッチになりまーす」
営業スマイルでさっきの2人組男性客にメニューを渡す。

「うひょー、やっぱ間近で見るとすげえよな」
「うんうん、あのでっかいのが前屈みって反則だよな」
「俺、決めたわ。今回のミスコン、優子ちゃんに入れよ」
「俺もそうする。かわいいし胸でかくて性格も最高だしよお……」
「やっぱ女の子らしい女の子が一番だよな」

あたしの営業努力で一般票を2票ゲットする。

こういうことの積み重ねが優勝につながるはず。

「ねえ、今度のミスコンどうするの？」
「私は木ノ本先輩に入れたわよ」
「えーうちは石山先輩にしたよ」
「えー、石山先輩って、さすがにあれ男に媚びすぎでしょ？」
「いやいや、うちら女に生まれたんだし、男子に喜ばれようとするのって、よく考えたら普通のことだと思うのよ」
「うーん、でもなあ……」
「それに、水着ならああいうの普通じゃない？」
「うーん確かに……」
「そう考えると、石山先輩は清純派なイメージがあると思うのよ」
「なるほどねえ……」

石山先輩は清純派なイメージっかあ……
1年生二人組のそんな会話を聞いてしまうと、嫌でもさっきの光景が思い浮かんでしまう。
浩介くんを中庭の影に誘い込んで、セクハラ行為に及んだこと。
スカートをめくられてパンツ丸見えにされ、さらにお尻を直接触られたこと。
しかも浩介くんが無理矢理したのではなく、あたしが自分から誘惑し、誘い込んでのこと。
顔が熱をこもり始める。いけないいけない、今はメイド喫茶のシフト中だ。
あたしは気持ちを切り替え、メイド喫茶の残りの時間を働く。

浩介くんとは体育館で待ち合わせ。
まずやることはミスコンでの投票。
「お、優子ちゃん見つけた」
「えへへ、見つかっちゃった」
浩介くんとちょっとだけふざけたやり取りをする。浩介くんは

すっかり上機嫌になっている。
「じゃあ、ミスコンの投票に行こうか」
「うん」
合同合唱の前で投票所はやや混雑している。
とは言え投票には時間はかからないから、列の捌けるスピードも早い。
「すみませんお願いします」
あたしたちは生徒会の人に生徒手帳を見せて、投票用紙をもらう。
投票所では昨日と同じく投票用紙に「石山優子」と書く。
浩介くんも、「優子ちゃんに投票するぞー！」と、投票用紙を見せながら宣言する。
やっぱり男の子は単純だ。
ああやってエロいことさせてあげれば、すぐに嫉妬も治ってご機嫌になってくれる。
投票が終われば、合同合唱の席探し。まだ人は多くなく、前の方の正面の席に座ることができた。
「いい席だねえ」
「うん。それにしては投票所は混んでいたよな」
「あれかな？　吹奏楽部か合唱部の人じゃない？」
「ああそうか」
「ところで浩介くん」
「ん？」
「なんかさっきからご機嫌だねって思って」
あたしがにっこりして言う。
「そうかなあ？」
「うん、やっぱりさっきのは効果抜群だったね」
「っ……まったくもう、優子ちゃんって意外に変態だよね」
「誰のせいでこうなったのかな？」
あたしが意地悪そうに言う。でも実際半分は本当だったりするけど。
「お、俺のせいかよ！」

「だって、ああいうことするの……浩介くんにだけだよ？」
「むむむ……」
浩介くんといちゃついていると、次第に周囲の席も埋まっていく。
浩介くんから「あんまりいちゃいちゃすると票が落ちるぞ」と言われたので、少し封印する。
「あ、もうすぐ始まるぞ」
「何を歌うんだろう？」
そう思っていると、列の左端からプリントの山が配られる。
「1枚取ってください」という声があったので、プリントを1枚取って浩介くんに渡す。
「えっと……何々……モーツァルトのレクイエム……『怒りの日』ねえ……」
正直名前も知らない曲名だ。もちろん、モーツァルトは知ってるけど。
「優子ちゃんは知ってる？」
「ううん、知らないわ」
「俺も」
浩介くんもやっぱり知らないらしい。
「まあ、聞けばわかるかもよ」
「どうだろう？」
ともあれ、あたしたちは、演奏が始まるのを待つ。
「皆様、大変おまたせいたしました、ただいまより、吹奏楽部と合唱部の合同演奏、『モーツァルト・レクイエム　怒りの日』にを演奏いたします」
パチパチパチ
拍手とともに、幕が上がる。
体育館のステージはそんなに広くないのに吹奏楽部員と合唱部員が集まっている。
中央の指揮者が右手を振り上げ、合唱と演奏が始まる。
何って言っているのか、そもそも何語なのかもわからんが、どこかで聞いたことがあるような演奏だ。

かなり強弱激しい演奏で、これを演奏できるというのは、なかなかだ。
合唱部の歌唱力もかなりのもので、運動部が弱い小谷学園において、文化部の強さを見せつけているようだ。
それ以上に、合唱部の歌唱力が凄まじい。
あれ？　もう終わり？　意外と短い。
「えー、続きまして演奏するのは――」
あ、パンフをよく見てなかった。他にも演奏曲があるんだ。
次の曲は柔らかそうな曲、これもモーツァルトらしい。
パンフレットをよく見ると、演奏している曲は全てモーツァルトということになっているようだ。
最終的には、指揮者が礼をして、盛大な拍手が送られて幕を閉じた。
この次に行うのが、ミスコンの最終結果発表だ。
ちなみに、それまでまだ1時間あるため、現在駆け込みの投票が行われている。
「浩介くん、文化祭も、いよいよ大詰めだね」
「だな、他に何処かあったっけ？」
もう大体は見て回った。というのも、部活同好会の多くが小規模で、文化祭に出展していない所も多いのだ。
囲碁部将棋部のように、単なるおっさんたちの対局場になっている所も多い。
「そうだわ、まだ図書室に行ってなかったっけ？」
「図書室に何かあるのか？」
「うーん、何もないかなあ」
「じゃあしょうがないじゃん」
とはいえ、文化祭中、暇つぶしに読書する人は多い。
「そうだ、メイド喫茶に戻ろうぜ」
浩介くんが提案してくる。
「うーん、今はちょっと混んでいるよ？」
「ああいや、お腹空いてさ」
「あ！　そういえばあたしもお腹すいてたわ……でもそれなら学食に

しましょうよ」
「あーそうだな」
何だかんだでちゃんとした食事を取りたいなら学食にしたい。
それに、お昼ごはんを食べてないせいで、いつもよりちょっとお腹が空く。
これから後夜祭もあるんだし、少し多めに食べておきたい。
あーでも、あたしのお腹に入るかな？
学食のラーメンなら多分大丈夫と信じよう。
今の時間帯はちょうど空いている時間帯なのか、意外とあっさりと注文が来てくれた。
「ミスコン、応援しているわよ」と、食堂のおばちゃんにも声をかけられた。
あーでも、桂子ちゃんや永原先生にも言ってそうだ。もちろん教員枠で食堂のおばちゃんや用務員さんにも予選から投票権がある。
浩介くんと一緒に食べる、もちろん浩介くんが食べるの早いので、外で待っててもらう。

「よし、それじゃあ行こうか」
「うん、俺、優子ちゃんの優勝、信じているから」
「ありがとう」
体育館に戻り、浩介くんと分かれる。
投票受付は既に終了している。
中には既に、制服姿の永原先生と桂子ちゃんがいた。
「さあ、いよいよ最終決戦だね」
「うん、集計、どうなるかな？」
「えへん、私が逆転するわよ」
永原先生が胸を張る。
「まあ、もう投票は終わっちゃったし、祈ってもしょうがないわよ」
「うん、そうだねえ桂子ちゃん」
あくまで実直だ。
ともあれ、全員が見守る中で集計作業をする事になっているのだが

……よく見ると、まだここには永原先生と桂子ちゃんしか居なかった。
「他の子はどうしたんだろう？」
「まあ、そのうち来るでしょ」
「あ、永原先生、木ノ本さん、石山さん……他のミスコンの参加者の人なんですが……」
　控え室に入ってきた守山会長が声をかけてくる。
「うん」
「もう勝利は諦めるということで、最後の参加者挨拶だけ出たいということでした」
「そうですか……」
　永原先生がしんみりとした顔で言う。
「まあ、毎年何人かいるので、気にしないでください」
「そうは言ってもねえ……」
「まあ、仕方ないんじゃない。予選の時点であんなに大差付いちゃったんだし」
　あたしが場の雰囲気を悪くしないように言う。
「それもそうだね」
　集計発表までもう少し、あたしも緊張してきた。

## 優子の歪んだ心

「じゃあ行きますので準備してください」
「「はい」」
守山会長の号令のもと、あたしたちは舞台に進む。
この段階ではまだ、投票結果がどうなったかは不明だ。

「さあ、みなさん、お待たせしました！　只今よりミス・小谷学園コンテストの結果発表会を行います。皆さんも知っての通り、今回のミスコンは事実上３人に優勝が絞られています。今回はその３人に来ていただきました！」
守山会長がそう言うと、舞台の幕が上がり、あたしたちは観客たちの歓声に包まれる。
やっぱりこの瞬間は気持ちいい。特に今回は３人しかいないから、なおのこと注目が集中する。
「えっとですね、ただいま２００票まで集計が行われていまして、１８１票がこの３人に集中しています！」
残り１９票は身内票とかそういう類だろう。
「内訳はですね……木ノ本桂子ちゃんが５９票、石山優子ちゃんが６０票、そして永原マキノちゃんがトップの６２票です！」
「「うおおおおおおおお!!!!!」」
観客は大混戦に歓声を上げる。
でもあたしの内心は穏やかではない。暫定でしかも僅差とはいえ、あたしは初めて永原先生に「敗北」したのだ。
落ち着きながら「まだまだ」と言い聞かせる。
「お、たった今次の５０票が集計し終わりました！　石山優子ちゃんが１６票、永原マキノちゃんが１５票、木ノ本桂子ちゃんが１７票です！」
まだ永原先生がトップ、更に桂子ちゃんにも並ばれる。
その後も、一進一退の攻防が続く。
ちなみに、途中発表に拠れば、生徒・先生と言った身内票が約４０

０票、更に一般の人が約６００票で、合計は約１０００票となっているそうだ。
ちなみに、予選の時以上にあたしたちへの一極集中は凄まじく、ほぼ９割以上があたしたち３人のいずれかに投票されているという。
極稀に、２年３組のクラス製作映画の子などに票が入っているくらいだが、守山会長があたしたち以外に票が入っていることを伝えると、観客は不可思議な反応をする。さすがに可哀想に思った。
一方で、あたしたち３人はデッドヒートを続けている。一時、あたしが２位に１０票ほどリードした瞬間もあったものの、すぐに次の５０票で７票差に、更にその次では４票差、その次で１票差と、すぐに縮まってしまう。
そして、３人がほぼ並び、最後の５０票が開票されることになった。ちなみに、パフォーマンスのためか、端数はこの前段階で処理してしまっていた。
「さあ、ここからは一票一票読み上げていきます……どうやら、この５０票は全てここに居る３人のいずれかのようです！」
現在あたしが３票差で桂子ちゃんをリード、更に桂子ちゃんを永原先生が１票差で追う展開だ。
「えーでは最初は……木ノ本桂子ちゃん、永原マキノちゃん、永原マキノちゃん、石山優子ちゃん、木ノ本桂子ちゃん、石山優子ちゃん、石山優子ちゃん、石山優子ちゃん……」

読み上げが進むとともに、徐々にあたしが引き離していく。それでも１桁の票差。
とはいえ、残り票数が少なくなるにつれ、あたしの逃げ切りの算段が高まり、横に立っていた永原先生と桂子ちゃんの表情に、徐々に焦りが出始めていた。
「さあ、残り１０票です。現在石山優子ちゃんが永原マキノちゃんと木ノ本桂子ちゃんをそれぞれ４票リードしています」
「１票目……永原マキノちゃん！」
「２票目……木ノ本桂子ちゃん！」

更に桂子ちゃんがもう一票、これで残り7票。
「4票目……石山優子ちゃん！」
「5票目……木ノ本桂子ちゃん！」
「さあ、これで残り5票となりました！　6票目は……石山優子ちゃんです！」
観客の歓声が更に大きくなる。
ここで残り4票、永原先生の単独1位はもうなくなった。4票全て永原先生でなければ1位は取れない。
「7票目……木ノ本桂子ちゃん！」
永原先生が一瞬天を仰ぎ、すぐに下を向く。よく見ると顔を手で覆っている。歓声に混じって泣き声が聞こえる。もしかして永原先生が泣いているのだろうか？
ともあれ、これで桂子ちゃんとは2票差、桂子ちゃんが逆転、あるいは同率1位になるためにはもうあたしに1票も許されない。
逆にいえば、あたしに1票でも入ればその時点で優勝決定だ。
「8票目……石山優子ちゃん！」
「「うおおお

あたし、初めて他の女の子を泣かせちゃったかもしれない。
あたしには、永原先生と桂子ちゃんに声をかけることは出来ない。
数秒の間、あたしの中で、歪んだサディズムの感情が芽生えたからだ。この二人をもっと大声で泣かせたい、あたしに楯突いたこの女を罵って、虐めて、この観客の前で辱めて精神をズタズタにしてやりたい。
「何てひどいことを考えるのよ優子！　それじゃ最低よ」あたしはそう自分に言い聞かせる。
それでも、少し時間が経って冷静になれば、あたしは「優子」を取り戻し、そうした醜い感情もなくなり、嬉しいというよりむしろホッとしたという感情になる。
二人とも強敵だった。もしあたしが居なくても、他の年ならば優勝間違いなしの素質だった。
「それではですね、優勝者から3位までの方には、記念トロフィーを差し上げます」
その声を聞いて、永原先生と桂子ちゃんが何とか涙を拭き、泣き止んで表彰式へと入る。
「第3位は、先生という立場ながらも今回まさかの参加となって、見事に多くの票を獲得しました永原先生です！」
永原先生に投票したと思しき観客からの歓声と、盛大な拍手が送られる。
銅色の小さなトロフィー。永原先生はしんみりと受け取る。
「おめでとうございます！　先生の立場でのミスコン参加は初めてですし、大健闘でした！」
「はい……」
永原先生はやや涙声で挨拶している。やっぱりまだ泣き足りないという感じ。
「第2位は、木ノ本桂子ちゃん！　特に女性票を集めての人気です」
銅色のトロフィーよりやや大きい銀色のトロフィー。桂子ちゃんが受け取る。
「自然な美少女ということで、男性票は特に一般の中年以上に人気で

した」
「んー、若い男性の票が取れないといけなかったかなあ……」
桂子ちゃんは永原先生ほどミスコンへの思い入れがなかったのか、既に冷静な反省を行っている。
そうか、若い男性はあたしに票を取られたのね。
「さあ、お待ちかね、第1位は、5月はじめまで男性だった、まだ女の子になって半年足らずの爆乳美少女、石山優子ちゃんです！」
守山会長が一際大きい金色のトロフィーを渡してくれる。
「おっとっと……」
非力なあたしの力ではちょっとだけよろけてしまう。
「優子ちゃんは特に男子学生の中では圧倒的な支持を集めました。また、一般票では性別年代問わず人気でしたが、やはり男性の得票率が圧倒的に高かったです」
あたしはこの優勝で特に自信を得られた。
男性票が圧倒的に多い形での優勝と聞き、あたしはまた桂子ちゃんと永原先生に対する優越感に支配される。
観客たちの「優子ちゃん」コールを聞いてあたしこそ、この小谷学園の女王なんだという気持ちが出る。
女の子として、男に好かれた上で優勝できたということは、特にあたしの中で、嬉しさと征服感がこみ上げてくる。
ああ、ゾクゾクする。今は永原先生と桂子ちゃんは強がっているけど、きっと悔し涙をもっと流したいはず。
もっと泣かせたい、あたしの覇道を邪魔した二人に対する邪悪な感情。
……ああ、そうか、これがあたしの女としての「もう一つの醜い部分」なんだ。
あたしは、自分のことを美少女だと信じて疑わなかった。
それは多分、このミスコン優勝で客観的な裏付けも取れた。
でも、他の美少女を蹴落としてやろうとか、恥をかかせてやろうとか、そういう気持ちは微塵もなかった。
なのに、今はさっきあたしに負けて泣いていた永原先生と桂子ちゃ

んを見てひどく荒んだ心になった。
この気持ちは、受け入れるべきなのか、それとも必要ないのかあたしには分からない。
でも、今までの「知識」から言えば間違いなく捨てるべきものだということは分かる。
だから、あたしは、自分の中に存在する「ブス」を殺すことにした。
何故なら、この心を捨てないと、性格そのものに悪影響を及ぼす、そしてそれは最終的に容姿にも跳ね返ってくると思ったから。
小谷学園のミスコンで桂子ちゃんと永原先生を退けた以上、あたしはこれまで以上に女の子らしくならないといけない。
もし、これに舞い上がって性格を悪くしたら、浩介くんに振られちゃうかもしれないと思い、あたしは桂子ちゃんと永原先生に向き直る。
「2人とも、凄かったよ。あたしだって、2人から学ぶことは多いんだから」
「優子ちゃん……ええそうね。優子ちゃんは確かに優勝したけど、女の子として、まだまだ私に負けているところがあるんだから」
「ええそうね。私も、これからも石山さんに『男』が出たらビシバシやっていくから覚悟してね？」
「ふふっ、ありがとう！」
トロフィーで手が塞がっていて、握手は出来ない。
でも、あたしたちの様子を見て観客の歓声が大きくなる。そうだ、健闘を称え合う方がよっぽどいいじゃないか。
「さあ、ここまでは3人のみでしたが、最後に今年のミス小谷学園コンテストに参加してくださった代表者を全員呼んでいます。どうぞ！」
観客の拍手とともに、11人の仲間が現れる。
「えーまずは能登川明美ちゃん」
呼ばれた女の子がそれぞれ一礼する。
「――最後に、永原マキノちゃん、木ノ本桂子ちゃん、石山優子ちゃんです！」
「「ありがとうございました！」」

あたしたちがトロフィーを持ったまま深く頭を下げる。
そして、他の代表たちが舞台から消え、そして最後に守山会長とともに、あたしたち3人が舞台から出る。
幕が降ろされ、観客の歓声と拍手も徐々に遠くなっていった。

「それでは、お疲れ様でした。優勝者は石山優子ちゃんになりました。おめでとうございます！」
控え室で、あらためて守山会長があたしをたたえてくれる。
「うん、ありがとうね」
「でも、永原先生と木ノ本さんも、上手く大会を盛り上げてましたよ」
「ああ、うん。私、来年も出たい」
永原先生が意気込みを語る。
「えー、先生は来年勘弁してよ。来年は私が優勝するんだから」
桂子ちゃんが言う。ミスコンは一応一度優勝した人は出られないことになっている。
まあ、そのためにケチが付くこともあるけど。
「でも、やっぱり負けたくないのよ。このままでは終われないっていうの？」
「もう、先生は再来年も、その次の年も……それこそ１００年後だってあるんでしょ？」
桂子ちゃんが言う。
「あ、あはは……１００年後も小谷学園があるかわからないけど、そうだね。私は何度でもチャンスがあるよね……でもさ、ほら、来年はちょうど５００歳だから」
「それでもですよ。私はもう来年しかチャンスないのよ。去年は何となく目立ちたくなくて出なかったけど、それでも後悔してるわよ」
「あー、木ノ本さん、去年だったら石山さんも居ないし確かに優勝間違いなしだったよね」
「うんうん」
桂子ちゃんと永原先生が泣いていたことには触れないでおきたい。
あたしの荒んだ気持ちに対する整理が、あたし自身まだ出来ていない

から。
「さて、ここにはもう長居は無用だね。石山さんおめでとう。さあ、行きましょうか」
「はい！」
あたしたちは控え室を出る。トロフィーは持ったままだから、嫌でも目立つ。
観客からも祝福の声を聴くことができる。一応準優勝と3位も記録には残るし、場合によっては3人で行動することもある。
特に永原先生の場合は生徒ではなく先生という立場、しかもＴＳ病で不老ということで、今後学校は大きな宣伝ポイントにできそうだ。
「さて、そろそろメイド喫茶に行きましょう。あたしたち3人と河瀬さんで特別シフトにしますよ」
「ええ」
あたしたちは人混みを押しのけて2年2組の教室に戻る。
文化祭も残り少し。この後の後夜祭に向けての活動も増える。
文化祭実行委員の人が教室前にある出し物の「いいね！」票を入れる箱から投票箱を回収している。
こちらは学生と先生には投票権はなく、一般の人に投票権があることになっている。
「あ、安曇川さん、交代」
「お、いよいよ特別シフトですか」
「ええ、後夜祭の前半まで」
「分かりました」
虎姫ちゃんの他、女子生徒二人が留守居役をしてくれた。
「いやー放送では聞いてましたけど、終わってみれば優子が優勝かあ……」
「虎姫ちゃんは誰にいれたの？」
「ああー、私は桂子に」
「お、ありがとう」
桂子ちゃんがお礼を言う。
「ま、そんなことより早く着替えなよ。特別シフトだってことで、お客

さん殺到するよ」
「おっとそうだった」
　あたしたちは、急いで更衣室に入る。ちなみに、ミスコン開催中は人も少ないため、厨房もさっきの女子生徒が兼任していたのだが、こちらはすでに男子生徒４人が入っていて、そこには浩介くんと高月くんもいた。
　なるほどミスコン終わった後に探してもいなかったのは、ここを目指していたからなのね。
　あたしたちは更衣室に入り、見納めとなる最後のメイド服に着替える。
　よく見ると龍香ちゃんがカチューシャを付ける所だった。
「さ、行きましょうか」
「「はい！」」
　永原先生の誘導で、あたしたちはメイド喫茶に入る。
　まだお客さんはいない。
「それでさー吹奏楽部と合唱部の合同演奏凄かったよ」
「へえ、優子ちゃん、どんな感じだったの？」
「曲はよく分からないけどモーツァルト尽くしだったよ」
「そうなんだ、私も去年はいたけどその時はバッハ尽くしだったよ」
　永原先生が去年の文化祭の話をする。
「あれ、そう言えば永原先生って……」
「ふふんっ、モーツァルトやバッハよりも私のほうが年上だよ」
　ですよねー。あんな歴史に名を残した人より年上って。
「そう言えば物理でニュートンってやってたけど……」
　桂子ちゃんが何の気なしに言う。
「うん、ニュートンやガリレオより年上だよ私」
「本当に恐ろしい人よね……先生って」
　そんな人とミスコンで戦ったんだからすごいわな。
「あっ、おかえりなさいませご主人様ー！」
　一般客の人が２人見えるので、あたしが笑顔を振りまく。

「おいおい、さっきミスコンで優勝してた子じゃん」
「いやまてよ、2位と3位の子もいるぞ、もう1人の子も美人だし……すげえ、特別シフトに来てよかったー！」
あたしが机に案内する。
「ご注文、どうなさいますかご主人様ー？」
すかさず、引き継いだ桂子ちゃんが注文を問う。
「ああえっと、ブラックコーヒーと――」
注文を書き留め、厨房にオーダーを出す。
更に集まったお客さんの案内を永原先生が、列の形成を龍香ちゃんが担当する。
あっという間に噂が噂を呼んだのか、メイド喫茶は大盛況になる。
クラスに居た虎姫ちゃんの話だとある程度の盛況を見越して追加で仕入れの買い物したのでまだ余裕があるらしいが、一部商品は売り切れにせざるを得ないという。
だけど、お客さんは皆喜んでくれる。
一般の男性客が大半だが、みんなミスコンの話をしている。
優勝したあたしだけではなく、桂子ちゃんや永原先生に関する称賛の声も多い。
「優子ちゃんが規格外なだけで、桂子ちゃんや永原先生だってアイドルとして十分すぎるほどやっていける」という声も聞こえる。
それを聞いた桂子ちゃんと永原先生も、何となく表情が柔くなった気がする。
文化祭はもう間もなく終了する、それとともに、一般客が少なくなる。
後夜祭は再び、小谷学園だけのお祭りに戻るのだ。

# 後夜祭　～優子の最後のご主人様～

「只今より、平成２９年度小谷学園文化祭を終了いたします。一般のお客様は速やかにご退場願います。なお、これより後夜祭を開始いたします」

守山会長の放送で、後夜祭に入る。

後夜祭は前半と後半があり、前半はまだ日が完全に落ちきっていないため、文化祭の延長のような形になる。、

あたしたちメイド喫茶も最後の営業を行う。文化祭実行委員の人と、生徒会の人が、大急ぎで教室前の箱を回収する。

あの中には、一般客が入れた「いいね！」の紙が入っていて、これの数を持って、部活別、クラス別の出し物の優勝が決まる。

後夜祭の前半戦はいわばそれまでの時間稼ぎという意味もある。

後夜祭の後半戦は、校庭でイベントが行われる予定になっている。

数年前まではキャンプファイヤーで、様々なイベントを催すということになっていたけど、昨今色々うるさいせいで別のイベントになっている。

最近の後夜祭は校庭で音楽を鳴らしながら皆で色々なボードゲームやカードゲームをするということになっている。

去年はマジックを披露したりする人も居たっけ？

あたしは浩介くんと２人で出来ることを今から考えている。

一方で、祭りの夜の学校という神秘からか、カップルが屋上で告白したり、更に都市伝説レベルながらも、部活棟の奥や人気のないトイレ、体育倉庫や鍵をかけた教室などで性行為に及ぶカップルまでいるという。

後夜祭に参加する生徒は実は多くない。

２年２組でも、半分の生徒は帰宅した。

もちろん、浩介くんは帰宅していない。

一般客は途絶え、いるのは学校の生徒と先生たちの一部。

男子生徒たちが一様にあたしたちのミスコンでの活躍を噂している。

そして「お前は誰に入れた？」「俺は優子ちゃん」といった会話をしている。

男子の中では「もっと優子ちゃんが引き離すと思った」という声もある一方「いや、俺は桂子ちゃんに」「俺は永原先生に」という声も聞こえてくる。

あたしに入れなかった男子は、その理由としては「やはりどうしても優一の影がちらつく」とか「あまりにもかわいすぎてちょっと」とか「水着審査がエロすぎて直視できなかった」という意見もあった。

いずれにしても、男子の心を鷲掴みにしたのだけは事実みたいだ。

「いってらっしゃいませーご主人様ー」

クラスの他の後夜祭の参加者に拠れば、後夜祭にも引き続き出すという他のクラスの出し物はそこまで多くない。

例えば、３組の自主制作映画が後夜祭上映中止になってしまった。

ミスコンの結果があまりに悲惨だったせいだろう。

１組のフリースローの記録は、何と最初の最初に浩介くんが記録した記録がまだ破られていないという。

ボールがバスケで使うボールとはまた違うので感覚が狂うのかもしれない。

「オーダー、トーストとアイスコーヒー！」

「了解！」

後夜祭、ミスコンＴＯＰ３を含む特別シフトということでメイド喫茶に生徒が集中し、また混雑してくる。

あたしは忙しなく動く。これで見納めと思ったのか、男子生徒のみならず、女子生徒も、ミスコンのＴＯＰ３がメイドしているとあって駆け込みでの利用者も多い。

中には単に記念撮影したいだけのお客さんもいた。

ピンポーン

「えー小谷学園の皆さん、あと１５分ほどで、後夜祭後半戦に入ります。後夜祭後半戦では、文化祭での出し物は全て終了します。校庭で

もカードゲームイベントの他、クラス別・部活別の出し物ランキングの発表を行いたいと思います！　皆さんは校庭へとお集まりください。」
　守山会長のアナウンスが聞こえてくる。
「えー皆さん、大変申し訳無いのですが、後５分でラストオーダーにします！　既に食べ終わった人は速やかに次の人に座席を譲ってください！」
　桂子ちゃんが宣言する。
　生徒たちが次々と出ていく、そして皆急いでオーダーを出す。
　中には食物と飲み物を受け取ると、すぐに食べ終わって出ていくお客さんも多い。
　そして列の一番最後のお客さんがラストオーダー２０秒前に入る。
「優子ちゃん、レギュラーコーヒーお願い」
「え？　浩介くん厨房じゃ――」
　そこにいたのは浩介くんだった。
　しかもわざわざあたしを指名している。こんなお客さん初めてだ。
「コーヒー、お願いしていい？　できれば、優子ちゃんが淹れてさ」
「あ、はい！」
　あたしはニッコリしながら厨房へ駆け込んでいく。
「ん？　優子ちゃんどうしたの？」
　厨房担当の高月くんが入ってきたあたしに怪訝そうに言う。
　浩介くんの声が聞こえなかったのだろうか？
「ああ、うん。最後のお客様、あたしの淹れたコーヒーがほしいということなので」
「あ、そうなんだ……」
　高月くんが呆然としている中で、あたしはコーヒーを淹れる。
　インスタントじゃないコーヒーだから、よく説明書を見ながら……
　よし！
　説明書通りに淹れたコーヒーをトレイに起き、最後のお客様に出す。
「お待たせしましたご主人様、レギュラーコーヒーになりまーす」

ふう、終わった。あたしは安堵しようとして踵を返そうとする。
ガシッ
「え……？」
浩介くんに腕を掴まれる。
「あ、あの……」
あたしは何も言い出せない。
「もう誰も居ないだろ？　ラストくらい特別サービスしてよ」
「う、うん……」
あたしは浩介くんの隣の客席に座る。
他のお客さんは、みんな後夜祭に向けて出ていってしまった。
いるのはもう、僅かなクラスメイトだけ。
メイド喫茶最後のお客さん、浩介くんがコーヒーを飲み始める。
「うん、おいしい」
「ホント？　ありがとう！」
あたしがニッコリ笑う。
「もしかしたら……ああいや、うん……その……」
「どうしたの？」
「あ、うん……教室中が見てるから」
浩介くんが言う。確かに、そうだ。今いちゃつくのは色々と危ない。
文化祭開始当初も、それでやらかしてしまったことを思い出す。
浩介くんが一口一口、丁寧に飲んでいく。
「ふぅ……」
浩介くんがコーヒーを全て飲み干せば、小谷学園2年2組のメイド喫茶も閉店になる。
外は夕日が傾き、オレンジ色の空がだんだん黒に変わりかけていた。
「ふう……さあ、次の一口で最後だね」
「ご主人様、名残惜しいです」
あたしが演技して言う。
「何、後夜祭があるさ」

よく見ると、メイド服なのはもうあたしだけ、永原先生も含め、他の人は全員制服姿になっている。
「ずずずっ……ぷはぁ……！」
浩介くんが飲み終わる。
「はい、それじゃあ閉店だね！　みんな、後夜祭に行くわよ！　石山さんもお疲れ様。着替えてすぐに校庭に来てね！」
「おー！」
永原先生がそう宣言すると、クラスメイトたちが一斉に校庭へ向けて歩き出す。
あたしは呆然としながらそれを眺め、いつの間にか教室に浩介くんと二人っきりになってしまう。
「あたしたちも行こう……ちょっと待っててね」
あたしは席を立ち、厨房から更衣室に入ろうとする。
「……」
浩介くんまで中に入ってくる。
「ちょ、ちょっと出てってよ!!」
あたしが顔を赤くして言う。
「いやほら、誰も居ないだろ。ちょっと着替えてるの見せてよ」
「やーだー」
実は寒くなってきたことや夜まで居ることを想定して、上もシャツを着ているし、もちろんパンツ見えない着替え方は知っているから、下着を見せることはない。
でも、着替えを見られるという恥ずかしさは、そういうので割り切れるものではない。
それに、そういう着替え方したら、浩介くんが現実を知っちゃって不機嫌になっちゃいそうだし。
「固いこと言わずさあ……」
「だーめー！」
あたしはいやいやをするが、浩介くんはてこでも動きそうにない。
あうーしょうがないわね……
「はぁ……分かったよ。恥ずかしいけど見ていいわよ」

「わーいありがとうー！」
子供みたいにはしゃぐ浩介くん。
あまりにも直球過ぎてあたしもこれには毒気を抜かれてしまう。
「じゃあ行くよ……」
あたしはまずワンピースになっているメイド服の特性を考え、まず制服のスカートを取る。
そのままメイド服のスカートを穿いたまま、制服のスカートを内側から重ねるように穿く。
次に背中に手を伸ばしてファスナーを下ろし、メイド服が重力に沿ってストンと落ちる。
途中浩介くんは息を呑んでいたが、残念無念。
インナーとして白いTシャツを着ていたので、ブラジャーが見えない。
とは言え、その強烈な胸の大きさは知ることが出来る。
そのまま制服のブラウスを着て、更に胸のリボンを付け、曲がってないか確認し、そして上着のブレザーを着て、下に落ちたメイド服を畳み、最後にカチューシャを外して完成。
「むぅ……」
浩介くんが不満そうな表情をする。
「残念でした。女の子の着替え方の現実はこうなのよ」
あたしが勝ち誇ったように言う。
「うぐぐっ……」
「浩介くん、だからあたし嫌だって言ったのよ」
「だ、だったら見せればいいだろ！」
「嫌よ恥ずかしいし……ましてや浩介くん相手なんてぇ……」
今度は甘えたように言う。
浩介くんに好かれたいがために、こういう使い分けが本当に上手になった。
「うっ……」
浩介くんがまた動揺している。
「ねえ、それよりもさ、後夜祭行こう？　ミスコンで優勝したあたし

は、どうも記念のお菓子をもらえるみたいなのよ」
「へえ、記念のお菓子？」
「ほら、明後日ハローウィンでしょ？　そのためみたいよ。お菓子の種類と量にもよるけど……もしよかったら、浩介くんにも分けてあげる」
「あ、ありがとう……」
「さ、みんな待ってるわよ。後夜祭に行こう」
「うん……」
あたしと浩介くんは二人っきりで校庭へと行く。途中下駄箱が男女別になっているので、そこで一旦分かれる。
そして外履きのローファーに履き替えている間に「後夜祭後半戦をはじめます」という守山会長のマイクの音声が聞こえてきた。それを聞き、浩介くんとともに急いで校庭へ歩いていく。
でも、あたしは割りと早めの小走りだったのに、浩介くんは早歩きに近かった。それは身体能力の差。
どうしても、浩介くんに強くて逞しい様子を見せられる度に、あたしはますます浩介くんの中にのめり込んでいるんだと自覚してしまう。
校庭に付くと、カードゲームの他にもボードゲームに講じている集団もある。
そんな中で、先生たちが麻雀に講じているのを見つけた。

「ツモ！　８０００・１６０００！」
「な、何だよそれ！　おいおい……」
「すげえぞ、俺も生で見たことねえぜ！」
「くそー僕の親被りだあ！」
麻雀はよく分からないけど、何やら永原先生がすごいことをしたということは分かる。
「あ、あれは永原先生じゃない」
「あら、石山さん、篠原君」
制服姿の永原先生が他の先生達と麻雀をしている。

「これはどういう状況……って、永原先生それ……！」
「えへへ、私の勝ちなのよ」
　永原先生は「一萬」と書かれた麻雀牌が3枚、更に「二萬」と書かれた麻雀牌から「八萬」と書かれた麻雀牌が、「六萬」のみ2枚で残りはそれぞれ1枚ずつ、そして「九萬」と書かれた麻雀牌が3枚という組み合わせになっている。
　「萬」で統一されていて、何となくすごそうなのは分かる。
「この役をあがるのは……インターネットも含めて2回目かしらね」
「え!?　永原先生、以前にもこれをあがったことあるんですか？」
　他の先生が驚く。
「ええ。あがってないのはもう後は四槓子だけですよ」
「ひえー、やっぱ永原先生って恐ろしいわ」
　先生たちが驚いている。
「これ出にくいんですか？」
　あたしが質問する。
「おいおい、出にくいってもんじゃねえぞ。永原先生もうすぐ死ぬんじゃねえか？」
「あら？　この役なら36年前にも一回あがったけど私はピンピンしてますよ」
　永原先生が言う。
「永原先生って麻雀よく打つの？」
「まあねえ。先生仲間と打ったりインターネットで打ったりしてるよ……あ、賭けマージャンはしてないわね」
　永原先生、意外な趣味があったのねえ。
　それにしても、永原先生だけ制服姿だから、女子高生が麻雀を打っているようにしか見えない。
　……と言うよりも傍目には小さな一人の女子高生に手玉に取られているオヤジ三人組という絵面にしか見えない。
「というか、先生いつまで制服姿なんですか？」
　浩介くんが気になっている。
「あー今日はこれで来たから。帰りも生徒気分で帰るわよ」

永原先生が笑顔で言う。今日制服で来たということを知っているのはミスコンに参加していたあたしと桂子ちゃんだけ。
他の先生も一瞬「おいおい」という顔をしたものの、むしろ女子高生よりも女子中学生に近い雰囲気なので、違和感は全く無いのが幸いだ。
よく見ると、永原先生はスカートの上にお菓子を広げている。
知らなかった、ミスコンのお菓子は3位までもらえるんだ。
「さ、あたしたちはまず守山会長のところに行きましょ」
「あ、うん……」
浩介くんを引き連れ、守山会長を探す。
生徒会長は案外すぐに見つかる。
トランプ、ＵＮＯ、カードゲーム、ボードゲームをしている生徒たちの合間を縫う。みんな座っているから、くれぐれも浩介くん以外の人に見られないように、スカートの角度には注意しないと。
「あ、守山会長！」
「お、石山さん来たんだね」
守山会長は生徒会の仲間たちとババ抜きと思しきトランプ大会をしていた。
「そこのかごのお菓子。石山さんのだよ。かごは手作りだからそのままかごごと持ってっていいよ」
「ありがとう」
あたしはかごを持ち、お菓子を見る。
どれも市販の、それも安い駄菓子だが、ただで貰っている以上文句は言えない。
「浩介くん、一緒に食べようよ」
「あ、うん……でもちょっと待って」
浩介くんが何か言いたそうだ。
「ん？」
「ほら、中庭」
浩介くんが中庭という。
「ん？　どうして？　みんな集まっているのに」

「ゆ、優子ちゃんと、静かに二人で過ごしたい！」
そうは言っても、小谷学園の校庭に音楽が流れている。中庭にもそれなりの音量で聞こえるはずだ。
でも、今は浩介くんの意思を尊重したい。
「あ、うん。分かったわ」
あたしたちは、ゲームに夢中になっているみんなを置いて、もう一度下駄箱を履き替え、中庭を目指す。
夜の校舎、校庭が盛り上がる中で、校舎は怖いくらい静まり返っている。
文化祭の飾り付けはそのままで、あたしたちは中庭を目指す。
中庭も無人で、誰もいない。
かすかに音楽が聞こえてくる。二人だけの空間。
あたしと浩介くんは中庭の二人がけのベンチに腰掛ける。
「お菓子、あげるね」
浩介くんにお菓子を手渡しする。
「あははっ、少し早いハローウィンだね」
浩介くんが笑う。本当に素晴らしい時間。
あたしと浩介くんの二人っきりの、かけがえのない時間。
安らぎの中で、あたしもお菓子の袋を開けて、ポリポリと食べ始める。
「ねえ、もう一つくれる？」
浩介くんがおねだりする。
あたしは一つのことを思いつく。
うん大丈夫、誰も見てないから。恥ずかしくないよ優子。
そう言い聞かせ、もう一つ、お菓子の袋を開ける。
「浩介くん」
「ん？」
「はい、あーん！」
「え？　あ、あーん……」
浩介くんが一瞬動揺し、顔を赤くしながらも、口を開けてお菓子を食べてくれる。

あたしも、恥ずかしいけど嬉しかった。自然と、ニッコリした笑みが浮かぶ。
浩介くんを「あーん」させて食べさせてあげると、今度は浩介くんが板チョコの袋を開けてくる。
「優子ちゃん……その……あーん……」
今度は浩介くんの「あーん」返し。
「あうう……あーん」
パクッ
板チョコの一部を食べる。
やっぱり恥ずかしい……
「おいしい？」
「う、うん……」
「どれ俺も……」
浩介くんが、あたしの食べたチョコレートを食べる。
「ふふっ、間接キスになっちゃったな」
「も、もう……」
改めて言われるとすごい恥ずかしい。
一人では多いと思ったお菓子の袋も、二人ではあっという間になくなってしまう。

「ねえ、優子ちゃん、ひとつ……話があるんだ」
お菓子を食べ終わると、浩介くんが言ってくる。
「うん、何？」
「とても、大切な話。文化祭での優子ちゃんなら、大丈夫だと思うから……」
そう言うと浩介くんは、ベンチの裏、中庭に埋められている木の下に移動し、あたしもそれに続く。

# 浩介くんの告白

夜の中庭の樹の下で、あたしと浩介くんが見つめ合う。
短い時間だけど長い沈黙。
「俺……俺、優子ちゃんが好きだ！　彼女に、彼女になって欲しい！」
「……」
意を決した浩介くんが放った言葉、それがあたしへの愛の告白だということは分かっていたけど、やっぱり面と向かって言われるとドキッとしてしまう。
浩介くんは本音では、多分球技大会の頃から、告白したかったに違いない。その時はまだ、あたしの浩介くんの恋心に気付けなかった。
本当なら2ヶ月前に、林間学校の帰りに、ナンパから守ってくれた浩介くんと恋に落ちた時に、あたしが告白するべきだった。
もしあの時キスできていれば、もう彼氏彼女になって2ヶ月ということになるはずだった。
でも、あたしがまだ、本能的反射神経に男が残るという身体のせいで、お互い告白ができなかった。なったのは「友達」というものだった。
恋人ともなればこれまで以上に身体の触れ合いも多くなる。
それを拒絶した形で恋人になるなんて、浩介くんにとってあまりにも残酷だからと、あたしたちは彼氏彼女としての関係になっていなかった。
そのせいで、友達という関係のまま、恋人同士でも滅多にしないようなことを時にはした。
そうすることで、あたしの中に残る「男」を追い出せると思ったから。実際、それはうまくいっている、確実に、あたしの中で、「男」が消えていく。
「あ、あの……浩介くん……」
「優子ちゃん……」
ちょっとだけ見つめ合う。短くてとても長い時間。
でも、このままじゃダメ、一歩前に、進まなきゃ！

まだ不安があるということを、伝えないと……！
「あのね、あの……ね、あたしも、浩介くんのこと大好き！　愛してるわよ！　でも――」
「じゃあいいじゃないか」
「え？」
浩介くんがいいじゃないかと言う。
「優子ちゃん、優しいから俺に気を配ってたんだろ？　男の気持ちが分かるもんな」
「うん……浩介くんも男の子だし、やっぱり身体を触れ合えないのに恋人なんて出来ないよ」
「それも踏まえてだよ。優子ちゃん、昨日今日と回った文化祭のこと、思い出してみて？　優子ちゃんはもう、大丈夫だよ」
そうだといい。お尻を触られても、スカートをめくられても、それどころかパンツの中に手を入れられて直接触られても、あたしから「男」が出ることはなかった。
間違いなく、夏休みの時より進歩していたというのは分かる。
あたしと浩介くんは、少しずつ触れ合いを増やしながらここまで来た。今だって、大好きな男の子と2人っきりで、今すぐ浩介くんとキスしたくてたまらない。
でも本能が言うことを聞かないんじゃないかという不安が、どうしても頭をよぎってしまう。
更に今後のことにも不安がある、そのせいで、一歩を踏み出せない。
それは多分、浩介くんは老化して、あたしはしないということの違いも意識してしまっているんだと思う。
浩介くんがあたしの両手を掴み、そしてお互いの中間地点に持っていく。
先に声を出したのはあたしの方だった。
「あのね、あたし、告白されたのとっても嬉しい、でもやっぱり、あの時がまだトラウマに残ってて……それにやっぱりあたしの病気は――」
「うん、優子ちゃん、『優一』らしいね。本当に優しい女の子だよ。俺

にはもったいないくらい」
浩介くんがあたしの昔の名前を言う。「一番優しい子に育って欲しい」というその名前。
そういえば、浩介くんは「優一」へのトラウマも、解消してくれたんだっけ？
「……」
「優子ちゃん、普段優しい優子ちゃんが、ちょっとわがままになるのも、かわいいと思うぞ」
「もうっ……」
浩介くんがキュンとくるセリフを言う。でも、浩介くんは真剣だ。
「優子ちゃん、もう一回言うよ？　俺、優子ちゃんのこと好きで好きでたまらないんだ。ずっと、ずっと一緒にいたい」
浩介くんがあたしの目を見つめて言う。
ずっと一緒にいたい。でもその「ずっと」というスケールの違いで、どうしてもあたしは戸惑ってしまう。
「うん……でも、あたし……きゃっ！」
「わっ……わっ……」
まだ迷っているという意思を伝えるため、手を握られたまま後ろに下がろうとしたあたしは、中庭に突き出ていた木の根に足を取られ、仰向けに転倒してしまう。
手を握ったままだった浩介くんも折り重なるように倒れていく。
「ったった……あっ……」
胸に何かが当たっている感触がする。目を開いて見てみると、あたしは、一緒に倒れ込んだ浩介くんの右手に、左胸を触られていた。
夏の時には出ていた反射的な嫌悪の信号は全く無い。心も体も、今すぐに受け入れたい。早く浩介くんと愛し合いたいという気持ちで満たされていく。
「んっ……」
あたしは、呆然としている浩介くんに対し、目を瞑って口をほんの少しだけ尖らせ上に突き出す。
ドキドキドキ

早く、早くキスしたい。まだ知らない、男の子とのキスの味を知りたい。
「んっ……ちゅっ……」
「むぐっ……んんっ……」
ほんの数秒だけど、長い、長い時間。まるで永遠に時が止まったかのように長い時間。
浩介くんの唇があたしの唇と触れる。柔らかい唇の感触に、あたしの頭の中がところてんのように溶けていく。
あたし……浩介くんとキス……しちゃった……
「ぷはっ……」
浩介くんが唇を外す。
あたしが目を開ける。目の前には、浩介くんの顔。
ああ、これならもう大丈夫。あたしはそう思えた。
そしてあたしは改めて「もう二度と、男には戻りたくない」と思った。
「あのね、あたし……浩介くんが好き。彼氏に……なってほしい」
浩介くんに、あたしからも告白する。もう、迷いはない。
「うん、ありがとう……俺……俺も、優子ちゃんが好き」
浩介くんがまた告白してくる。
「んっ……」
あたしがもう一度、目を瞑って口を少しだけ尖らせて前に突き出す。
浩介くんに「キスして」のおねだり。
チュッ
また唇が触れ合う。破裂するんじゃないかというくらいに心臓がドキドキする。
でも、今は何回だってキスができそうな気がする。
「あ……ごごご、ごめん」
浩介くんが胸を触っているのに気付き、手を引っ込めようとする。
ガシッ
「ゆ、優子ちゃん？」

あたしが浩介くんの腕を掴み、もう一度胸へと持っていく。
「いいの、いいのよ。恋人同士なんだから、このくらい」
恥ずかしいけど、でも浩介くんにこの大きくて柔らかい感触を味わって欲しい。
「え？　で、でも……」
「いいのよ浩介くんだけの特権だよ」
浩介くんの深層心理あるあたしを独占したいという欲望を呼び起こす言葉を言う。
それを刺激すれば、浩介くんはますますあたしにのめり込んでくれる。
好きな人に好かれたい、思って欲しい。あたしだけを見て欲しい。
浩介くんの欲望を刺激すると同時に、あたし自身の欲望も刺激する。
「じゃ、じゃあ――」
むにっむにっ
「やーん」
浩介くんに、両手で胸をむにっと触られる。
うん、やっぱり恥ずかしい。
「あっ……んぁ……」
胸から伝わる刺激で、ちょっとだけ艶めかしい声を上げるあたし。
「やっぱりさ……優子ちゃんってエロいよね」
「あうぅ……あたしやっぱり、えっちな女の子？」
「そりゃあそうだろう？　夏の海の時だって、日焼け止めクリーム塗らせようとして……俺が誘惑に耐えられなくなってさ」
確か最後の方で、浩介くんがクリームを奪ったんだっけ？
「だって、それはあたしの……あ、あれは反射的本能をむ、無理に治そうとしただけで――」
動揺してしまってちょっと舌足らずになる。
「夏祭りの時だって、黙っていればよかったのにノーブラノーパンで来たなんてわざわざ俺に申告してさ」
「あうぅ……」

確かに、言わなくてもいいことだったかもしれないと今になって思い始める。
「昨日と今日だって、俺の嫉妬直したいからって、あそこまで……本当は、優子ちゃんもされたかったんだろ？」
「……」
浩介くんがまた胸を揉み揉みする。あたしの顔がどんどん赤くなっていく。胸を揉まれているのに加え、浩介くんの追求で図星を突かれたせいだ。
「はぅ……んっ……その……」
浩介くんの手のひらがあたしの身体を優しくなで続ける。でもやっぱり、ちょっとした拍子でどこかで乱暴な感じにもなってしまう。
「あ、悪い……でも優子ちゃんがえっちな女の子なのには変わらないぞ」
「だから……浩介くんだから……えっちになっちゃうんだよお……」
「それは認めているってことだな」
「あうぅ……」
チュッ……
また浩介くんが胸を触りながらキスしてくる。
「でもね、俺はそんなえっちな優子ちゃんも好きだぞ」
お決まりのセリフ。でもやっぱり、あたしはそういうセリフには負けちゃう。
「……浩介くんってずるいよね」
「どうして？」
「だって、あたしが惚れちゃう台詞を、簡単に言っちゃうんだもの」
「そう、じゃあ思う存分、俺に惚れちゃってよ」
「うん、そうする……」
もう、あたしは全て女の子になれたわ。以前までのように、あたしはもう「男」の面影に怯えることはないわ。
浩介くんに両手で胸を揉まれ、ますます興奮が高まる。
「はぁ……はぁ……」

明らかに性的に興奮した様子で、浩介くんが息を荒くする。
その時だった。
じわっ……
あたしの身体の何処かが濡れる感覚がした。もしかして、汗かな？
一体何が起きたのか？　胸を揉まれている間に思考回路が回らない中、あたしは反射的に足を閉じる。
しばらくすると、浩介くんの左手が胸から外れる。
右手では相変わらず胸を触られ続ける。
ピラッ
「やーん」
また、浩介くんにスカートをめくられてパンツ丸出しにされる。
「やっぱり、優子ちゃん下半身もかわいいよね」
「もお、浩介くん、えっちなんだからあ……」
「だってよお、優子ちゃんのこの肉付き……男には刺激が強いんだよ」
浩介くんに下腹部をむにむにと触られる。
「う、うん……そうだよね……」
実際、あたしのこれはむちむちな安産型という体型でもあるわけだし。
「……ねえ浩介くん」
「何？」
「浩介くん、あたしのお腹に赤ちゃん作らせたいって思った？」
あたしが甘えた声で言う。浩介くんが固まっている。
「お、おまっ……そ、そういうこと言うなよ！」
「ふふっ、どうなの？」
「正直に言うけどよ、まだそこまで考えたことねえぜ。俺たちまだ高校2年生だしさ」
「あはは、そうだったね、ゴメン」
「ったく、そんなだからえっちな女の子なんだぞ！」
浩介くんがしつけるように言う。
「ご、ごめんなさい……」
ちょっとだけ沈黙が流れる。校庭の方角からは、相変わらず色々な

音楽が流れている。
「ねえ優子ちゃん、そろそろ戻ろうか」
「あ、うん、そうだね。みんな心配しているし……でも……」
「でも？」
「スカート元に戻してよお……恥ずかしいから……」
「あっ……わっ、うん……ごめん」
浩介くんがスカートを元に戻してくれる。
浩介くんがまず立ち上がり、そしてあたしも立ち上がる。ここでも、立ち上がれば普通にスカートが戻ることに気付いたのは立ち上がってからだった。
「ねえ、このことは……」
「うん、俺達だけの秘密にしよう」
「そうだね……」
何時間にも感じられた長い時間、でも時計を見ると大した時間も経っていなくて、後夜祭がまだまだ続いている。
「あ、でも……もう恋人同士だからさ」
「そうだね……」
あたしは浩介くんと腕を絡めて、胸に当てる。文化祭・後夜祭を通じて初めてのことだ。
「ふっ……」
浩介くんが短く笑う。
わさわさっ……
浩介くんに、またスカートの中に手を入れられ、パンツの上からお尻を触られる。
「きゃあっ！　……もう、浩介くん、スケベ！」
「ふふっ、優子ちゃんに誘惑されたらしたくなっちゃうだろ……！」
「もうっ……！」
暗い文化祭の跡を見たくて、浩介くんと校庭までちょっと回り道してから行く。
下駄箱までの道を、今度はちょっといちゃつきながら歩く。
冷静になって気付く、さっきのこと。女の子として、心から浩介く

んに興奮している証拠だった。
もう、あたしは戻れない。戻ろうとも思わないけど……でも、やっとこれで、あたしも他の女の子たちと同じラインに並べた。
愛する人と、やっと愛し合える関係になれたことだけじゃない。
これで、長くあたしと浩介くんの恋路を邪魔してきた反射的本能を、あたしは克服できた。そう思う。
そうだ、このこと、ちゃんと永原先生に言ったほうがいいかな？

校庭に戻ると、相変わらず、みんなゲームに講じている。
永原先生は……あ、あそこかな？
「ロン！　２０００点！」
「うーん、この半荘も永原先生の１位かあ……」
「くそーもうちょっとで清一色だったのに！」
永原先生の「ロン」という声が聞こえる。
「あ、石山さんに篠原君」
「永原先生、また勝ったんですか？」
「ええ。それよりも、石山さん、どうしたんです？」
いちゃついているあたしたちを見てちょっと不思議そうに言う。
「あ、あの……」
「ここじゃ話しにくい？　じゃああそこに行きましょうか」
永原先生が校庭の端、校門の近くを指差す。
「うん」
「じゃあ私、悪いけど抜けますね」
「あ、はい。じゃあ他の先生を呼びますか」

あたしたちは、永原先生についていく。
そしてちょっと離れた所に行く。
「それで、話って何かしら？」
「あの、あたし……浩介くんに告白されました」
「あらっそれで、石山さんは？」
「あたし、受けることにしました。もう、『男』は出てこないと思いま

すので」
「そう、何か根拠はある？」
「あ、あの……恥ずかしいから言いたくないです……」
「そう……でも、それがもう答えみたいなものね……石山さん、昨日私が渡した紙のこと、覚えてる？」
「う、うん……」
　確かＵＲＬがあったあの紙だよね。
「もし、何か下の方にきっかけを掴めたなら、もう開いてもいいわよ」
「下の方？」
「ふふっ、よく考えてね」
　浩介くんがちょっとそわそわしている。
　でも、あたしには心当たりがあった。多分それが、最後にあたしが確信を持てたことだから。
「でもね、石山さん、それでも覚えておいてほしいことがあるの」
「ん？」
「実はまだ、石山さんは、『男』が完全に消えたわけじゃないのよ」
　永原先生の一言。
「え!?　で、でも……」
「石山さん、今の石山さんは、いうなれば敵の最後の砦を落とした状態。あなたの心の中にあった頑固な石、それを金槌で割ったようなものよ」
「どういうこと？」
「確かに石は割れたわ。でも割れた大きな石は幾つもの破片になっているわ」
「破片？」
「もちろんそれらも少しずつ、消えて行くわ。でも、石山さんは１６年間男の子だった。だからどうしてもどこかでその感覚が出ることがあるし、それが完全に消えるのは……とても難しいことなのよ」
　あたしはちょっとだけ憂鬱になる。まだ、まだダメなのかと。
「でも気に病まないで。生まれつきの女の子でも、男っぽくなっちゃうことあるのよ……田村さんみたいに」

「あっ……！」
「今の石山さんは、もう下手な女の子より女の子らしいわよ。それにもう、心も体も、女の子として、男の子が好きになったんでしょ？」
「うん！」
「じゃあきっと大丈夫。もう男の影に怯えなくてもいいわ。あなたは幸せになれるわよ」
永原先生が言う。
そうだ、あたしはもう大丈夫。浩介くんと、これから新しい生活が始まるんだ。
「さあ、後夜祭はまだまだ続くわよ。一緒に楽しみましょう」
「はい！」
あたしと浩介くんは、永原先生とともに、さっきの麻雀卓の所へと戻った。

# 幕間　ここまでの登場人物の紹介　第４章

ここの部分は登場人物の紹介です。読み飛ばしても本編には支障がありませんが、第４章までのおさらいとしてもう一度振り返ってみてはどうでしょうか？

第２章のラストでも同じことをしましたが、登場人物も溜まってきたのでもう一度行います。

裏設定等も一部ありますが、第５章以降のネタバレはありませんのでご安心下さい。

ちなみに登場人物の命名法には一個の共通点があります。某県民以外の方が気付いたら、地理（鉄道）に詳しい方とお見受けします（笑）

あ、でもそろそろみんな気付いてるかも……気付いた方は遠慮なく感想等で突っ込んでください（笑）

・石山優一（いしやまゆういち）／石山優子（いしやまゆうこ）

本作の主人公兼ヒロイン。私立小谷学園２年２組。２０００年６月２２日生まれの１７歳（第３章途中までは１６歳）

両親より「一番優しい子に育って欲しい」という願いを込めて「優一」と名付けられる。

しかし、両親の希望に反して優一は乱暴者に育ってしまい、気に入らないことがあるとすぐに怒鳴りつけるなど乱暴な性格で、特にクラスの男子から煙たがられていた。

本人もこの性格については嫌っており、両親の前では猫かぶりだったのも含め、多大な罪悪感を抱いていた。。

それでもやめられないことについては「麻薬みたいなもの」と評している。

話し相手は小学校時代からの幼馴染の木ノ本桂子だけ。しかし、木ノ本桂子が学園一の美少女としても有名だったため、これは皮肉にも男子に更に嫌われる要因となっていた。

優一時代の容姿は髪が高校生にしてはやや薄くなっていて、その代

わり胸毛や足毛などの体毛が非常に濃く、ヒゲも伸びやすくていわゆる毛深い容姿だった。また、性格の通り顔もやや悪人顔だった。ちなみに全科目の成績も比較的良い方で、特に体育では篠原浩介と張り合うくらいの高い身体能力を見せていた。

優子になってからは、はっきりと「昔の自分は嫌い」と評している

２０１７年５月８日月曜日の３時間目の数学の授業中に突然腹痛を訴えて倒れてしまう。

翌日に病院で起床すると違和感を感じ、女の子になってしまったというところから、この物語が始まる。

ＴＳ病の現実を突きつけられ、永原先生より「長生きしたいなら女として生きるしか無い」と言われる。

女の子になったことをきっかけに、自らの性格を変えるため「今度は始めから終わりまで優しい子でいたい」という願いを込めて「優子」と名前を変えて生きていくことを決意する。

背が縮んで届いたものが届かなくなったり、トイレが近くなったり、風呂の時に湯船に髪を入れて失敗をしたり、体力や腕力が落ちるなど女の子になって人生の不便を感じたことで、男女平等論に否定的になっており、むしろ「男は男らしく、女は女らしくするべき」という結論に至った。これはＴＳ病になるとほぼ全員が同じ感想を抱くため、ある種通過儀礼のようなものである。

優子としての容姿は背も低くなり、顔は幼さの残る童顔で、学校一の美少女と言われた木ノ本桂子を凌ぐ美少女に。身体にはムダ毛の一つなく、また髪の毛は黒髪のロングストレート、胸は巨乳グラドル並かそれ以上の巨乳になった。巨乳のインパクトに隠れているが下腹部の肉付きは「安産型」の証拠で、お尻も大きい。一方で、体重は５０キロ以上だがコンプレックスには感じていない。

特に身体能力は非常に虚弱体質となり、体育の授業や球技大会や身体を動かすゲームでは特別なハンデを必要とするレベルまで落ち込んでおり、体育の授業では補講を余儀なくされた。

また、その巨乳とロングヘアから、肩こりにも悩んでいる。

優子としての性格も、自他共認めるほどに優一時代とは正反対に

なった。
優子としては健気な性格で、一生懸命に女の子になるために努力している。
性格も全般的に大人しく、また痛かったり精神的に揺さぶられるとすぐに泣いてしまうことがあり、自他共に「泣き虫」と認めている。一方で、優子自身は泣き虫を治そうという気持ちにはなっていない。
また、恥ずかしがり屋な性格で、スカートめくりやお尻や胸を触られるなどのセクハラをされると顔を真っ赤にすることも多い。
一方で、文化祭のミスコンの時には女の子としてのプライドが高い一面も見せ、「あたしの邪魔をした二人を辱めたい」という気持ちを持ったことも。
この感情については優子自身は「なくしたい」と思っている。
母親から料理などの家事手伝いをカリキュラム終了後も受けており、林間学校では家庭的な一面を見せて存在感を示している。
過去の反動もあって、女の子らしくしたいという気持ちが他のＴＳ病患者や、生粋の女の子たち以上に強く、少しでも女の子らしくないところは何が何でも直したいと思っている。
また、ＴＳ病患者の元男ということもあって、男子の視点に理解を示すシーンが多く、女子たちからも一目置かれている。
女の子になるためにカリキュラムを受けることになるのが第一章である。
カリキュラムでは、男っぽい態度や言動は矯正の対象となり、また３日目以降はスカートめくりのおしおきと恥じらうように教育されるようになる。
男時代の服と本、更に生徒手帳は自分の手で処分し、女の子としての自覚を徹底的に刷り込まれた。
ただしこれらは、女の子らしくなりたいと自らが望んで行ったため、またカリキュラムでは永原先生より「優等生」と褒められ、新しい発見も多く「楽しかった」と振り返っている。
また優子自身は自覚がなかったがカリキュラムを通じて心の中でも一人称が変化し、また服装も女性を強調するものを好むようになっ

ていった。
一方で、小谷学園に復学後、最初は女の子として扱ってもらえないことへの苦悩を示すことも多かった。
特に、復讐心のあった男子からのいじめはひどく、本人や周囲の女子たちも「女の子として扱って」と言ってもますます逆効果になっていった。
生理が来た時にも「この痛みを受け入れなければ優しい子になれない」「女の子になれて嬉しい」と告白、感極まって永原先生が涙し、またこのことを木ノ本桂子と田村恵美に話したことが大きなきっかけになる。
最終的に木ノ本桂子と田村恵美の共闘宣言や大泣きした優子を女子たちが守るという宣言以降、いじめはようやく収束に向かった。ちなみに、大泣きするまでは強がって無理矢理泣きそうになるのを止めたこともあった。
一方で、優子は他の女子からも女子として受け入れられることになり、最上の喜びを感じた。
その後「泣いてもいい、弱くてもいい、甘えてもいい、かっこ悪くたっていい。だって私はもう、女の子なんだから」という考えに至った。
この考えになることで優子の気持ちから「強がる」「意地を張る」ということが消えた。
その後は男子たちからも謝罪を受け、本格的に新しい学園生活をはじめ、またその性格故に部活に入っていなかったが、木ノ本桂子から天文部へと誘われた他、女子仲間と休日を過ごしたりする中で女子としてのアイデンティティを少しずつ積み重ねていく。
一方で、言葉遣いや仕草など、表面的な部分では女子と見分けがつかなくなったものの、女の子としての感性などは「まだまだ修行が足りない」と他の女子からは度々指摘された。それについては「女の子初心者」ということで、「少しずつ身に付けていこう」となった。
球技大会では最終試合のドッジボールでボールを当てられて泣いてしまう。すっかり弱くなった優子に篠原浩介が恋心を抱くが、この

時はまだ「罪悪感と戦っている」と解釈するのみだった。
一方で、小野先生や教頭先生のように自分を男子とも女子ともつかない扱いをすることにははっきりとした拒絶感を抱いている。この時はいずれも永原先生の謀略で屈服に成功している。
林間学校では、篠原浩介と共に実行委員を務める。そんな中で少しずつ彼に思いを寄せていく。特に山登りの時「一人だけ頂上に行けないのは可哀想」として、おんぶをしてもらったり、花火大会の時に物を運んでくれた時などは守られているという自覚を強く覚えた。
そして林間学校最終日の帰り道、添乗員にナンパされ強引に引っ張られた時に篠原浩介が体を張って守ったことで、彼の胸元で大泣きし、優しく頭を撫でられたことでついに女の子として男の子と恋に落ちる。女の子として男の子を好きになれたことは、優子にとってとても嬉しいことだった。
永原先生と故郷をめぐり、ＴＳ病患者の恋愛の困難さを学んだが、意思は曲げなかった。
一方で、キスをしようとして身体的本能が拒絶感を表したため、恋人として告白が出来ず、新たな苦悩を見せた。
女の子として、男の子を好きになれたことで更に女の子らしくなろうと決意し、夏休み中はお人形遊びやぬいぐるみ遊び、女児向けアニメなどにもチャレンジした他、少女漫画も自主的に新しいのを買ったりしている。
一方で、早く本能からも「男」を追い出したいと考えすぎたため、永原先生や篠原浩介から「焦りすぎている」と言われることもあった。
荒療治と称して、日焼け止めクリームを塗らせてみたりしたがその時はまだ効果はなかった。夏祭りの後、篠原浩介との初めてのデートでは「優一を取り戻した」と篠原浩介に諭されてトラウマを克服した。
篠原浩介とデートを重ねるにつれ徐々に一歩一歩拒絶反応が消えていき、夏休み明けに生理になった時に、保健室までお姫様抱っこされてドキドキしたり、文化祭の時には「嫉妬を直す」という名目で物陰に連れ込み、スカートをめくられたり、お尻をパンツの中から直接触られても拒絶反応が出なくなった。

こうしたこともあって、後夜祭の夜、篠原浩介から告白される。一旦は不老のこともあって躊躇するも、最終的には受け入れた。

この時、身体的本能も完全に女の子のものへと変わっていった。しかし、永原先生によれば、それでも時折「男」が出ることはあるという。

文化祭ではメイド喫茶で人気メイドとして混雑時間帯のシフトを務めた他、ミスコンでは永原先生や桂子と奮戦の末優勝した。

この時悔しさで泣いている二人を見て「もっと辱めたい」と思うようになってしまい、優子は更に悩むことになっている。

・優子の母

石山優子の母、永原先生よりカリキュラムの本を渡され、女の子として教育係を行う。

やや暴走気味で、おしおきがスカートめくりになったときも、永原先生よりもいやらしいめくり方をして優子を恥ずかしがらせた。可愛い女の子になった優子を溺愛するが、料理中や外出時はスカートをめくらないなど常識は弁えている（ただし、その後スペシャルなおしおきとしてまとめている）

「女としての矜持」は捨てておらず、女の子らしさを優子に叩き込み、また家事の指南もした。

カリキュラム終了後も、「一番身近な女性」として、優子が頼りにする。また、休日は料理などの家事手伝いを課しており、生理の日も容赦がない。

母親の教育によって優子は家庭的な女の子へと成長した。一方で、優子に対しては露出の多い格好や派手な服装を好み、「それは男に受けない」と優子に度々指摘されている。

・優子の父

石山優子の父、休日や仕事帰りは普段書斎に閉じこもっていて、読書や休息などの仕事疲れのリフレッシュに充てている。しかし、家族仲は悪くなく、優一とはいろいろな話に盛り上がった。

興味が無いものはないほどに知的好奇心旺盛である。女の子としてのカリキュラムの指導は、本人が男性ということでしていない。
会社の同僚にも、優子のＴＳ病について話しきれていない。
優子が女になったことで、家庭の勢力関係がやや変化しているがあまり気にしていない。
一方でお泊り会の時には自分だけ男だったため、書斎に引っ込むなど、空気を気にする現代人な一面も。
・木ノ本桂子（きのもとけいこ）
優子たちのクラスメイトの女の子。優一の小学校時代からの幼馴染で腐れ縁。優一としては学校で唯一の話し相手でもあった。「学校一の美少女」という名声を得るほどの美少女で、性格も柔らかい。
以前は田村恵美とそのグループの女子とは仲が悪く、喧嘩が耐えなかった。
特に「女の子は男にモテてこそ」という矜持は田村恵美と対立しており、田村と彼女のグループの女子を「同性受けを狙うなんてレズのすること」と罵ったこともあった。
一方で、男子からはいわゆる高嶺の花であることや、狂犬優一の話し相手ということで好意を向けられつつも避けられてもいた。
なお、優一に関しては、男子ということで木ノ本グループの女子たちからはあらくれ運動部の多い田村グループへの用心棒としての期待もあり、また女子を標的とはしなかったため、男子ほどの悪感情を持たれていなかった。
復学初日こそ、女子として扱うことに戸惑いを覚えるが、すぐに優子を女子として扱うことを決定し、グループの他の女子も続いた。
女子の中でも、優子からの信用度も高く、最も早い段階でカリキュラムの詳細や永原先生の秘密も話している。また、永原先生より生理を受けての優子の思いを告げられた時には何かを感情的に訴えていた。
田村恵美が面目を捨てでも優子に謝罪したのを見て、優子を守るためなら田村恵美とも協力することを決意。
優子がいじめに耐えきれず大泣きした時も、一番に飛び出し高月章

三郎を叱責している。
このことをきっかけに田村恵美と歩み寄るようになり、後に正式に和解。グループは解散となる。
その時は「女の子にされたことが罰」と語っていたものの、後に優子はそれを「罰ではなく救い」だとして否定している。
その後も河瀬龍香と共に休日に遊びに誘ったり、優子の学園生活を充実させるため、自らが所属する天文部へと誘ったりした。
また、優子の女子力を高めさせるためにアドバイスは欠かさない。ファッションセンスやおしゃれの能力などは優子を上回っている。
優子の登場後は「学園一の美少女」と呼ばれることは少なくなったものの、重荷に思っていたこともあって優子への嫉妬はない。優子と仲睦まじそうに並ぶ姿は学園の癒やしとなっており、周囲からは「桂優ちゃん」と呼ばれている。
天文部では不老の優子に対しやや憧れの感情を抱いている。
林間学校では、安曇川虎姫とともに優子と同室になるとともに、山登りで優子がピンチになったり、最終日のトラブルの時にはサブリーダーとして田村恵美と共に実行委員として活躍した。
その後も模様替えや海・夏祭りでも優子たちと行動を共にしており、優子ほどではないものの男性たちの注目を集める存在である。
文化祭のミスコンでは女子力を武器に活躍。
女性票こそ多かったものの、男性票を優子に取られたことを悔しがっていた。
ミスコンでは女のプライドを掛けて戦い、優勝できなかったことで永原先生とともに声を出して泣いたものの、永原先生ほど思い入れがなかったのか、トロフィーを貰った時は敗因を分析していた。

・河瀬龍香（かわせりゅうか）
優子のクラスメイトで木ノ本グループの女子の一人。木ノ本グループの中でも美人で桂子にも近い。木ノ本桂子とともに優子を度々気にかけてくれる。
ですます超の丁寧な言葉遣いで話す。

彼氏持ちということで美人として通っており、優子や桂子と並んでも悪口を言われない程度には美人である。
彼氏は性欲の強い変態であるため、露出の高い服でデートしたものの彼氏が不機嫌になってしまい失敗。
優子に嫉妬心を教えられ、家の外と中で服装を変えたところ、彼氏が大満足し、「何度も激しく気絶させられた」と語っている。
なお、彼氏の影響で龍香自身もかなりエロくなっている。
永原先生の主催した海と夏祭りの親睦会は、彼氏とのデートとの兼ね合いから夏祭りのみ参加。
海では優子と篠原に、彼氏に水着越しにお尻を撫でられている所を目撃されている。
その後も彼氏とは上手くやっているようで、別れる気配はない。文化祭のメイド喫茶では特別シフトを担当した。
・志賀(しが)さくら
木ノ本グループの女子の一人、引っ込み思案で気が小さい女の子だが、死んだ祖父の影響で時代劇が好きという一面もある。
木ノ本グループの女子の一人として、優子とも一定の交流がある。密かに野球部のエースである唐崎裕太に思いを寄せているが、打ち明けられないでいる。
文化祭の時は野球部の唐崎先輩を遠目で追っていたが、優子と篠原の加入に寄って野球部のマネージャーになった。
・田村恵美(たむらえみ)
優子のクラスメイト。テニスの天才で全国でも飛び抜けた実力を持つ。去年1年生で挑んだインターハイ決勝でダブルベーグルをして優勝するほどである。貧乳だが「テニスには不要」と強がっている。
豪胆な性格の女傑で、木ノ本桂子とグループを2分していた。プライドも高く、木ノ本桂子とは何かと衝突することが多く、特に女の価値観については隔たりが大きい。
木ノ本への対抗心から、復学初日に優子をトイレに入れようとしなかったり、また「女子とも男子とも扱わない」という手法を取る。
優子の生理を目撃した後は考えを改め始めたものの、自身のプライ

ドが邪魔してすぐに謝れなかった。
しかし、永原先生が生理を受けての優子の思いを伝えると、自らも優子を追い詰めていた事実に気付き激しく後悔。罪悪感に押しつぶされそうになる。
翌日には真っ先に優子に謝罪し、女子として扱っていくことを宣言。ただし、木ノ本グループへの対抗心から、グループごと共闘までは至れなかった。
しかし、個人的には桂子と話し合い、歩み寄りを見せるようになって和解。2年2組の女子グループは一つになった。
和解後も女の子らしさがないところはあり、水泳の授業では素っ裸になってから着替える様子を優子に反面教師にされたりしている。
それでも、元男ながら女性らしくなっていく優子を見て「あたいも少しは女の子らしくなりたい」と考えるようになる。お泊り会では、優子の部屋の改造に協力している。
また、文化祭では、優子の提案した派手なメイド服に引っ込み思案になる中、真っ先に賛同している。
一方で、ガサツな一面も強く残っており、海では水着で一生懸命お洒落をする優子、桂子、永原先生に対して競泳水着という手抜きをした他、夏祭りでは左前を気にしないという有様だった。

・安曇川虎姫（あどがわとらひめ）
サッカー部レギュラーの女子。田村グループへ所属。
虚弱体質の優子を体育の授業で何かと気にかけてくれる。性格はややガサツだが、田村恵美ほどではなく、優子に女子の感性や女子力について教えることもある。
やはり理屈を超えた感情で、貧乳がコンプレックス。マッサージの心得があり、田村恵美とともによく肩こりに悩む優子にマッサージをする。
女子サッカー部は小谷学園に珍しい強豪で、全国大会への出場も決めている。
田村グループの女子の一員として、優子たちにもよく絡む。林間学

校では木ノ本桂子とともに優子と同室になり、風呂や食事などで行動を共にした。
また、海や夏祭りにも登場して、優子たちと親睦を深めている。

・高月章三郎（たかつきしょうさぶろう）
優子たちのクラスメイトで篠原浩介の友人。父は整形外科医。本来は性欲こそ強いが悪い人ではない。優一に怒鳴られ続けたことで性格が歪んでしまった。
彼が石山優子を「性転換手術したのではないか？」と疑ったことで、優子を男子扱いするといういじめが考案された。
その後は篠原浩介とともに、石山優一に散々に怒鳴られていた復讐としていじめの主犯格として暗躍、「今こそ復讐するチャンス」「もう事実かどうかはどうでもいい」とまで発言。
優子の自業自得の面が強いものの、優一呼ばわりや上履きを優一の場所に隠す、ロッカーや教科書の名前を優一に変えるなどのいじめを実行。
復讐心から性格が歪み、木ノ本桂子の「優子ちゃんが嫌な思いしている」という批判に対してさえ、「俺は嫌な思いしてないから」と放言するに至ってしまった。
篠原は田村恵美に一度殴られただけだが、高月は木ノ本桂子と田村恵美にそれぞれ一度殴られている。
しかしそれでも良心は残っており、篠原が恨みを晴らしたい一心で優子を殴ろうとした時にはそれを止めている。
その後は、優子に謝罪し、男子扱いはしなくなると、徐々に優子の改心を認め始め、球技大会でボールを当てられて泣いてしまっている優子を見ていじめていた過去に罪悪感を持つに至っている。
また女の子として意識することで、優子への性欲を感じることが多々あり、水泳の授業では準備運動して揺れる優子の肉体に興奮のあまり授業を抜け出し「抜いて」いる。
その後も篠原浩介の友人として、優子と接点を持ち続けている。

・篠原浩介（しのはらこうすけ）

優子たちのクラスメイトで高月章三郎の友人。

本来の性格は穏やかで温厚で責任感が強い。そのような性格であったため、優一からは特に怒鳴られる対象となり、恐怖の日々を過ごしていた。密かに復讐心を燃やしており、体を鍛えるのが趣味。

これも優一に復讐するという動機がきっかけである。喧嘩も強く、林間学校で優子をナンパし引っ張った添乗員を取り押さえたり、海ではやはりナンパしてきた不良3人を相手に喧嘩で勝利してみせた。

優子となって復学後は、高月章三郎の提案に乗り、石山優一に散々に怒鳴られていた復讐としていじめの主犯格として暗躍、他の男子へと伝播させた。

優子の自業自得の面が強いものの、優一呼ばわりや上履きを優一の場所に隠す、ロッカーや教科書の名前を優一に変えるなどのいじめを実行。

復讐心から性格が歪み、いじめればいじめるほどに更にいじめたくなるという麻薬のような状況に陥る。他の女子が優子を女扱いし始め、また他の男子も静観に舵を切る中で高月章三郎以上に先鋭化。

優子が泣いた時にも女の子を泣かせる罪悪感もなくなっていた。

その後、田村恵美と木ノ本桂子の共闘に至り追い込まれたが、どうしても復讐をするため、優子を守っていた女子を強引に引き剥がし、優子を殴ろうとするが、周囲からの非難が殺到。

高月章三郎からも「暴力はやめろ」と制止され、優子が泣きながら必死に許しを乞う様子を見て良心の呵責が芽生えて離した。

田村恵美からは「その力は女子を守るために振るいなよ」と諭された。

その後は責任感の強い本来の性格を取り戻したものの、それによって「女の子を傷つけ、泣かせてしまった」と罪悪感の日々を送ることになる。

贖罪の日々を送り続ける中でも、優子と中々話せず、優子自身も「篠原くんが克服してくれないとこの問題は終わらない」と考えていた。

球技大会のドッジボールでは、至近距離でボールを当てられて泣い

ている優子を見て、潜在的に感じていた恋心を自覚してしまう。
「最低な男だ」と悩むようになり、球技大会を脱走、控え室で頭を打ち付けるなど自傷行為を行い、優子が優しく包み込もうとしても拒絶してしまった。
その後は恋心と罪悪感で優子のことをまともに直視さえできなくなってしまう。しかし、男子のくじ引きと女子の推薦によって、偶然にも林間学校の実行委員として優子と共に活動することになる。
永原先生のフォローもあって、徐々に過去のトラウマを解消していく。教頭先生の撃退時には永原先生から優子とともに「過去の罪を悔いて心を入れ替えている」と称されている。
林間学校の実行委員を通じて更にトラウマを解消していき、本来の責任感の強い性格が状況を好転させることが増えた。
林間学校2日目の山登りの時には優子をおんぶすることを申し出たり、3日目の花火大会の時には運搬の肩代わりをするなど活躍し、優子も徐々に想いを寄せていく。
そして林間学校4日目に優子をナンパから守ったことで優子に泣き付かれる。その時頭を撫でて優しくすると優子が恋に落ちる。
その後は照れ隠しで「友達になりたい」と申し出る。
「友達」になってからは、優子のアピールにドギマギすることも多い。
特に夏の海では、優子の身体的本能の克服の名目で、日焼け止めクリームを塗るように誘惑されたり、その過程で優子が悩んだりもしていた。
その後は夏祭りでも優子のお尻を触ってしまうなど役得になることも多く、高月を始め他の男子から羨ましがられることが増えた。
デートを重ねるにつれ、優子の身体的本能も徐々に女の子になっていくことを自覚し、更に一歩踏み込むことが多くなった。
文化祭では優子と一緒に回るものの、恋心と独占欲からメイド喫茶やミスコンで他の男性から注目を浴びる優子に嫉妬してしまう。
優子にそれを見破られたため、否定しようとするが、逆に屋上などで優子に誘惑され、性欲に負けてスカートをめくってパンツを見た

り、更にお尻を直接触ったりして、ここでも抜くことになった。
後夜祭では、メイド喫茶最後の客として優子の淹れたコーヒーを飲むと、しばらく考えた後、優子に告白を決意。一旦は躊躇する優子を後押しし、最終的には優子とキスをして正式に彼氏彼女の関係になる。
その時も不可抗力で胸を触って以降、性欲もあって胸を揉んだりスカートをめくったりした。

・坂田舞子（さかたまいこ）
お嬢様口調で話す3年生。天文部部長であるが、木ノ本桂子ほど天体に詳しくはない。
口調そのままに物腰がやわらかく、天文知識のある桂子は後輩ながら尊敬している。
天文部に優子を迎えた後は、良き相談役としても活躍している。

・守山会長（もりやまかいちょう）
小谷学園の生徒会長で3年生、あまり仕事はなく、文化祭実行委員と共に文化祭を主催するのが主な仕事。
文化祭では生徒会としてミスコンの主催を担当した。

・唐崎裕太（からさきゆうた）
小谷学園弱小野球部のエースで3年生。大会ではしょっちゅう炎上することから「唐川裕児」というあだ名をつけられしまっている。
志賀さくらから想いを寄せられているが、恋愛にはあまり興味がない。
野球部はマネージャーが不在でそれを求めており、志賀さくらの申し出を快諾した。

・能登川明美（のとがわあけみ）
ミスコンに出場した女の子の一人、予選では最下位に沈み、最終発表は顔見せで出演したのみ。

・鳩原刀根之助（はつはらとねのすけ）／柳ケ瀬（やながせ）まつ／北小松貴子（きたこまつたかこ）／永原（ながはら）マキノ
優子たちのクラス、２年２組の担任の先生。担当科目は古典。
３０歳にしては若く、美人な先生ということで生徒の人気が高い。
実は地球最高齢の人間でＴＳ病患者。ＴＳ病という意味では優子の先輩に当たる。生まれ年は１５１８年で数え年にして５００歳、満年齢で４９９歳である（誕生日は不明のため1月1日ということになっている）、生徒たちの間では、３０歳は逆サバではないかと疑われていたが、実際には４７０歳もサバを読んでいた。
身長は2年2組の女子の中では一番低いが、胸は優子ほどではないが大きめで「合法ロリ」「ロリ巨乳」と呼ばれ、髪はセミロング。
身長は今でこそ「とても小柄」と言われるが、当時の価値観では、成人女性としてはむしろ大柄な部類だった。
性格はその長い人生を反映してか掴みどころがない。
夏祭りの盆踊りのときなど、明るくノリがいい一面もあり、同じＴＳ病の優子には特に親身になって接するなど、教師としては有能だが、恩義を感じている真田家と吉良家に対する誤解には周囲が驚くほどに不寛容で、極端に融通が効かなくなる。
真田家に仕えていたという矜持があるのか、謀略を好む一面もあり、謀略に嵌った教頭先生に対しては悪魔のような笑みを浮かべたこともある。
趣味は麻雀で、賭けマージャンはしないもののインターネットなどで楽しんでいる。
生涯で九蓮宝燈を2回あがっている他、四槓子以外の全ての役をあがったことがあるという。
かつては鳩原刀根之助という名前の男性で、長野県の戦国武将真田幸綱の元で１５歳の時より伝令役の足軽として働いていた。
２０歳の時ＴＳ病を発症、運良く両親が既に死んでいたため殺されず、隣の村に逃走し、数年の後ほとぼりが冷めた時に名前を「柳ケ瀬まつ」に変えて元の村に戻る。
この時、うまく空き家になっていた刀根之助の家に戻る。この時の

主君は海野平の戦いで村上義清に代わっていたが、無事に一人の村娘として過ごす。
後年真田幸隆も主君として復帰するも、殺されることを恐れて帰参できず、これが永原先生の罪悪感の連鎖に繋がる。以降不老が発覚しかける本能寺の変の頃まで真田の村にとどまる。
１５７５年の長篠の戦いの時に既に５７歳になっていたのに老けない自分に違和感を感じはじめ、本能寺の変後は他の村人にも不老を疑われはじめ、凶事を恐れて再び諸国を放浪、１６００年にはたまたま関ヶ原を訪れており、戦いを見物している。
大坂の陣以降は江戸に住む。男余りの江戸にいた独身の美人とあって多くの武士から求婚されたが、既に１００歳前後になっていたため、不老がバレることを恐れて拒否。
しかし、不老の噂はすぐに広まり、再逃亡を考えていた矢先、１６５３年の江戸で当時の将軍徳川家綱に拝謁するよう命じられる。
そこで、かつての主君が８歳の時まで生きていた真田信之がまだ生きていることを知り、面会が実現。
１２０年近く行方不明になっていた「鳩原刀根之助」と同一人物であることを示すと、信之は労いの言葉を述べた。
感激のあまり大泣きしてしまい、「上様の前で無礼だ！」と家老に叱責されるが当時１３歳の家綱は「良い、泣かせてやれ」と制止したため事なきを得た。それ以降、１００年以上恋愛をしていなかったため、優しくされただけで恋心をいだいてしまう。
かつての主君の孫で、当時８８歳の老人男性と、時の征夷大将軍でもあった１３歳の男性二人に同時に初恋を抱いてしまうことで、永原先生の中でますます「不忠者を許してくれた主君に後ろ足で砂をかけた」と思うようになってしまう。
この時ＴＳ病ということがバレたが、年長者を重んじる朱子学の台頭もあり、戦乱の時代を知る者として丁重な扱いを受ける。
本人は真田への再士官を申し出たものの、将軍家綱は江戸城への常駐を命じ、以降明治維新まで江戸城に住む。ただし、軟禁状態ではなく、江戸の街を出ない範囲なら、ある程度自由に歩けた。

江戸城に住んで４年後、明暦の大火が発生し、この時は徳川家綱より真っ先に逃されている。

しばらくは町娘の服装で江戸城に住んでおり、大名や旗本、江戸城で働く人々も表面上は「戦乱を知る不老者」ということで尊敬の意を示したものの、裏で陰口を叩かれ続けていた。

これを不憫に思ったのが吉良義央で、時の将軍徳川綱吉とも掛け合って立派な服を与えた他、江戸城に住む人として、上方の作法などを教え込んだ。

また、吉良義央の進言を採用した徳川綱吉も、大名や旗本などに対して「柳ヶ瀬殿に心から敬意を払うように」と、陰口を叩くのをやめさせるように命じ、これがきっかけで吉良家に対し強い恩義を感じるようになる。

しかし、１７０１年に江戸城の殿中にて浅野長矩が吉良義央に対して刀傷を浴びせ、浅野長矩は切腹。一方で無抵抗だった吉良側はお咎め無しとなった。これをきっかけに赤穂浪士が吉良邸を襲撃する事件が起きる。

世論が浅野側に一気に傾いたため、将軍綱吉も赤穂浪士は切腹としたものの、遺族には同情的に扱い、浅野家は再興、吉良家は取り潰しの憂き目に遭う。この時も「喧嘩両成敗は時代遅れ、生類憐れみの令の精神にも反する」と将軍綱吉に進言したものの、「そちの言うことは最もだが世論には逆らえない」として却下されてしまう。

これ以降、「吉良家に恩を返せなかった」として、真田家とともに、永原先生の中で強い罪悪感を持つ存在になってしまう。

永原先生は自らの主君を含め武士の諱を口にすることを厳重に避けているが浅野長矩や大石良雄に関しては諱を呼び捨てにしており、永原先生が浅野家を恩人の敵として強い敵意を抱いていることが分かる。一方浅野長矩の弟長広は「大学殿」と呼んでおり、敵意はない。

明治維新以降は自らの記録のある書物を持ち出して再び諸国を放浪、明治時代は数個の偽名を使い分け、１３０年前には全国に鉄道が張り巡らされるということから昔のような逃亡は不可能と判断し教師を始める。大正元年に「北小松貴子」に統一し、１９１７年には「日

本性転換症候群協会」を設立し、「長老」であった貴子が会長となる。
戦時中は「血湧き肉躍る大戦争」と振り返りつつも、「真田家や吉良家に恩を返せていないからまだ死ねない」と思いこんでしまい、当時の教え子を囮に一人山へ逃げる計画を立てていた（未遂）
これが「よりにも寄って天皇陛下を裏切る所業」として後悔するようになり、後に「私は最低の女」とまで考えるようになってしまう。
北小松貴子の時代には、小学校時代の、悪ガキだった小野先生の担任もしていて、後にこの事実を利用し、弱みを握った小野先生に対して脅迫じみたこともしている。
３０年前より「永原マキノ」と名乗るようになり、現在に至る。
２５年前には当時修士課程を修了した蓬莱伸吾教授と出会い、ＴＳ病患者の年齢証明をしてもらった。その恩もあり、現在でも交流が続いている。
本編では優子にカリキュラムを受けるように促し、女の子としての学校生活の訓練においては教育係となる。復学後も日本性転換症候群協会の担当カウンセラーとして、度々優子を気にかけるが、教師との板挟みになることもある。
また、男に戻りたいと思ってしまい、足掻いて自殺してきた数多くのＴＳ病患者を見てきており、「男に戻りたい」と思わせないようにしているが、それでもうまく行っていない。
生理と向き合う優子には感激のあまり涙しており、今までの体験から優子を「優秀」と褒めることが多い。
更衣室を他の女子とともにしない小野先生に対し、自らの正体に気付いていないことを論った上で、小学校時代のトラウマをえぐり返すというパワハラまがいの脅迫をして、以降も度々弱みに付け込んでいる。
また、林間学校で部屋割りについて考えの曲げない教頭先生に対しても、校長先生や親交のあった蓬莱教授などをけしかけ、また自らの正体を学校中に晒した上で、学校に対して訴訟をちらつかせてまで優子のために尽力した。
自らが体験した５００年の人生から「善意でやる悪事、偽善こそが

最も憎むべき敵であり、悪意でやる悪事はたかが知れている」と感じており、これは篠原浩介のトラウマ解消のきっかけにもなる。
林間学校では先生として2年2組を誘導し、無難に仕事をこなしていたが、最終日のトラブルの際には優子や篠原と3人で自らの故郷を見せ、最大の罪の記憶を話した。
ちなみに、この時は毎朝朝風呂に入っていて、早起きしていた優子などと朝風呂を共にしている。
その後、クラスの親睦のため海と夏祭りを企画、引率役を務めた。夏祭りの時には吉良義央に貰った着物を着たりもしている。
優子には自分の過去話をするにつれ、密かに優子に対して憧れの感情をいだき始める。
文化祭では先生の仕事をしつつも生徒としても優子みたいに楽しみたいと思うようになり、メイド喫茶で一緒にメイドをしたり、小谷学園のミスコンテストに参加したりもしている他、文化祭2日目は「制服登校」までしている。
ミスコンでは女性としてのプライドを掛けて優子や桂子と戦ったものの及ばず、3位になる。この時は悔しさのあまり大泣きしている。優子ほどではないもののやや涙もろい一面もある。

・小野先生（おのせんせい）
学年主任で数学の先生、５０代。授業が分かりにくいと他の生徒からは不評だが、優一からは「そんなことはない」と擁護されている。
彼の授業中に突如倒れる所で物語は始まり、「救急車を呼べ！」と生徒に指示していた。
本名は小野良和（おのよしかず）で、小学校時代は悪ガキとして有名で、職員室の扉にいたずらしたり、教室の窓を頭で割ったり、宿題を平気ですっぽかしたりしていて、その度に、当時北小松貴子と名乗っていた永原先生に叱られていた。
このことは彼の中では黒歴史となっており、永原先生に弱みを握られるきっかけにもなった。
ＴＳ病となった優子に対し、体育の着替えで男子女子両方から隔離

するように推進した人物でもあり、クラスの女子も完全に状況を飲み込めていない段階では、優子も「仕方ない」と、辛いながらも理解を示していた。

女子が一つになってからは、なおもその規則に固執するため、永原先生に黒歴史をほじくり返された。

更に、永原先生がかつての北小松先生だとは全く思っておらず、未熟な若輩教師として永原先生を下に見ていた。それも含めて永原先生からは「愚か者」と断罪されている。

自分が馬鹿にしていた先生が実は自分が小学生の時に怒られていた怖い先生だったと知ったため激しく狼狽し、以降は弱みを握られた永原先生に利用される日々を送っており、永原先生が事実上の学年主任になっている。

永原先生がミスコンに出たときも「天地神明に誓って永原先生に投票いたします」と誓約させられていた。この時はさすがの優子も同情心を感じていた。

・教頭先生

小谷学園の教頭先生、頭が固い人物で、小野先生と同様具体的根拠のないクレームに怯えて優子の女子扱いに最後まで抵抗した。

朱子学を好み長幼の序を重んじているが、永原先生が自分より遥かに年上と知ると「一教員の指図は受けない」と手のひらを返したため、蓬莱教授や生徒の優子や篠原からも軽蔑された上、永原先生からは「私のように歴史とともに生きて悠久の時を過ごし、それを授業に活かせることも出来ない。石山さんや篠原君のように過去の罪を悔いて心を入れ替える気概もない。蓬莱教授のように賛否両論を巻き起こしながらも偉大な足跡も残さない。教頭先生、あんたは何も出来ず、地位にしがみつくことしか能がない無能なのよ!」というおおよそ教師として最大級の罵倒を投げつけられている。

最終的には校長先生の介入もあって発狂し、泡を吹いて倒れた。そんな様子に永原先生が冷たい笑みを浮かべており、校長先生と篠原は恐怖を覚えていた。

永原先生は、小野先生や教頭先生は自らの正当性を疑っていなかったため、最後まで抵抗したと推測している。

・校長先生

小谷学園の校長先生、永原先生の実年齢を以前から知っていた数少ない一人。普段は校長先生としての仕事に忙殺されているが、林間学校の時には考えを改めていない教頭先生に代わって林間学校の部屋割りを担当した。

永原先生とは校長と教員という上司と部下の関係の他にも日本性転換症候群協会会長としての関係もあり、その場合は対等な関係になる。

・体育の先生

優子たちのクラスの体育の先生。性格は温厚で生徒への理解を重視しており、性的な目で見てしまった優子に耐えきれず、水泳の授業を抜け出して「抜いた」高月に対しても「気持ちは分かる」と言っている。

極端に成績の悪い優子には補講を命じたものの、成績そのものは融通している。

・蓬莱教授（ほうらいきょうじゅ）

佐和山大学《さわやまだいがく》教授で専門は遺伝学・医学。３０代にして教授になり、４０代にしてノーベル生理学・医学賞を受賞した天才学者である。しかし本人に寄るとノーベル賞を受賞した研究は「脇道の研究」だという。

本来なら名門国立大学の教授になっているはずの学者であるが、その研究内容には一部で非難の声もあり、偏差値の高くない佐和山大学に追いやられている。

しかしこれについても「奴らもいずれ、俺にひれ伏す時が来る」と予言している他、優子に対して「将来佐和山大学で、偉大なことを成し遂げるかもしれない」と意味深な言葉を残している。

本編の登場はここまで2回で1回目は教頭先生を撃退するために永原先生の髪の毛と引き換えに、年齢証明の論文を融通し、その際にも部外者にも関わらず永原先生たちに加勢し、教頭先生を批判している。

2回目は篠原浩介と優子との水族館デートの時で、この時も意味深な言葉を二人に投げかけていた。

永原先生とは25年前、修士課程修了後、博士課程時に出会っておりこの時TS病患者を招いた学会で60代を自称していた永原先生を問い詰めた結果、TS病患者の年齢証明を博士論文に選ぶ。この論文は極めて優秀で、若い年齢ながらも課程途中であるにも関わらず論文博士になってしまった。

その後は勤務地も近いとあって永原先生とは一定の交流があり、個人的な仲は悪くないが、研究は信用されていない。

・野洲康平（やすこうへい）

林間学校での添乗員、優子に一目惚れし2日目にナンパをしかけるも篠原浩介が阻止、4日目に強引に引っ張って彼女にしようと目論むが、これも篠原浩介に阻止され、またその際に篠原浩介を殴ったため、暴行の現行犯で逮捕されてしまった。

# 第五章　彼氏と青春

## 初めての経験

永原先生が、麻雀卓の所へと行く。
よく見ると先生たちだけではなく、生徒と先生が入り混じって麻雀をしている。
なんというか、小谷学園ってものすごいフリーダムな学校だと、改めて思う。
「先生と生徒で公然と麻雀する高校って、日本広しと言えども小谷学園だけだよね」
浩介くんが驚いた顔で言う。
「ふふっ、小谷学園は『他人に迷惑かけるな』っていう校則があるのよ」
「ああ、うん……」
「実はね、ここの創立者の先生はね、小谷学園は日本一、いや世界一校則が厳しい学校だと思っていたのよ」
「え!?　何かの冗談ですか!?」
あたしが驚く。だって、小谷学園はみんな日本有数の校則の緩い学校だと思っているのに、世界一厳しいって――
「あのね、『他人に迷惑をかけるな』というのは創立者自身も含め、とても難しいことよ。小谷学園はそんな難しい、大人でもできないような校則を高校生に掲げているのよ」
確かにそれはそうだけど……
「だからね、ここの創立者は、せめて他人に迷惑をかけない範囲なら最大限自由な学校にしなさいって言ったのよ」
なるほど。確かにこの後夜祭で麻雀したとして、賭博行為でもしない限りは他人の利益に対し、迷惑にはならない。
そもそもやっちゃいけないことのやっちゃいけない理由って、どれもこれも究極的には「他人に迷惑をかけるから」な気もしてきた。
「まあ、それもいまだとちょっと歪んじゃって、単純に他人に迷惑をかけてるようなものでも、校則がゆるくなっている一面も否定出来ない

けどね」
　まあそうはなるわよね。
「あ、でも、過度に気にするからいけないと思うのよ」
　なるほどねえ。
「さ、麻雀を楽しみましょ」
「あ、あの……永原先生……」
「ん？」
「あたし、麻雀よく分からない」
「俺も分からん」
　やったこと無いし。
「あーそうか、そうよね。じゃあ私がルールを説明するね……と言いたいんだけど……」
「え？」
「麻雀はルールが複雑だから……トランプしようか」
「うん、そうしよう」
　あたしたちはトランプのエリアに進む。
「あ、優子ちゃん、篠原君、永原先生」
「こんばんは桂子ちゃん」
　桂子ちゃんが恵美ちゃんや龍香ちゃんたちとトランプしていた。
　何のゲームをしていたのかな？
「ここのトランプ空いてる？」
　永原先生が桂子ちゃんに言う。
「うん空いてるよ」
「じゃあこれでババ抜きでもしようか」
　永原先生の提案、ババ抜きはもちろん知っている。
「うん、そうしよう」
「賛成ー」
　ジョーカーを1枚入れ、ババ抜きがスタート。５３は素数なので何人でやっても何枚か余るようになっている。
　浩介くんがトランプをよく切り、１枚１枚配っていく。
　３人なので、まず同じ数字の組み合わせを探し、捨てていくことか

ら始めていく。
どうやらあたしはジョーカーはない様子。
同じ数字の組み合わせはそれなりに多い。あっという間に減ってしまってババ抜きスタート。
「うーん、これっ」
まだ初手だし軽く考えて永原先生のカードを引く。これは……よし1組減らせた。
次に永原先生が浩介くんのカードを引く、どうやら一番カードが少ないからか、組み合わせはない模様。
そして浩介くんがあたしから見て一番右端のカードを1枚取っていく。
どうやら1組減らせたようだ。
「これかなあ……」
念のため、さっき永原先生が取ったカードは取らないようにする。
うーん、目的の数字じゃあないなあ。
再び永原先生が浩介くんからカードを引き、1組減らす。
そしてお互い数枚に減る。あたしはまだババを引いてない。
永原先生がカードを引き、浩介くんがちょっとだけ悔しそうな表情をする。
永原先生はまだカードが揃っていないにも関わらず、だ。
今まで殆ど気にしていなかったが、女の子になってから、相手の表情とか演技力というものを見破る能力が身についた気がする。
ともあれ、ババを持っているのは浩介くんであると推定し、それならば、永原先生のどのカードを引いても、ジョーカーにはならない。
「んー、これ！　よしっ、やったわ！」
あたしが残り2枚になる。2枚は違う数字の組み合わせ。
浩介くんが1枚取る。それによって、浩介くんも残り3枚、永原先生も2枚であり、浩介くんがババを持っている可能性が勢い高まる。
「んーこれかなあ……」
うーんハズレみたいだ。一番乗りとはならない。
永原先生が浩介くんから1枚カードを引く。浩介くんがちょっと

だけ残念そうな顔をする。
永原先生が1組あがる。
よし、あの2枚のどちらかがババのはず。
浩介くんがあたしから1枚を引く。すると1組2枚の数字が出てくる。
あたしは永原先生から1枚を取る。
もうポーカーフェイスにする必要はない、あたしはぱあっと明るくなった表情でそのトランプの数字を確認し、フィールドに出す。
「あたしの勝ちー！」
これであたしの1位抜け。結局ババは来なかった。
永原先生が残り1枚、浩介くんが2枚、浩介くんがババを持っているのが確定すると、浩介くんは背中の方でシャッフルし、2択に持っていく。
永原先生は左右に手を入れる。
「あらっ！」
永原先生が2枚の数字をあがる。
「うー、俺の負けかあ……」
浩介くんが残ったジョーカーを見せてくる。
「よし、もう一回やりましょう」
「おうっ！　次は負けねえぜ！」
こうして、あたしたちは3人で何回も何回もババ抜きをするのだが、浩介くんは1回も勝てない。特に最後の2桁に絞られると、浩介くんはほぼ負けてしまう。
何故かと言えば、浩介くんは表情がわかり易すぎるのだ。
「だー！　また負けたー！　くそーどうして！」
浩介くんが悔しがる。珍しい姿だ。
「だって、篠原君表情が分かりやすいんだもん」
「うんうん」
永原先生の言葉にあたしも同調する。
「うー、女の子って本当そういう所すごいよなあ」
「ふふっ、女はみんな女優なのよ」

永原先生が言う。
「え、でもさっきのは……まさかあれも演技とか？」
「永原先生！　極端なこと言わないでよ。好きでもない相手にキスなんかしないでしょ！」
しまった！　浩介くんに嫌われたくない一心で勢いで言ってしまったことに、口から言葉が出てから気付く。
「あら？　石山さんキスしたんだ」
「あぅあぅ……」
あたしはじゅうじゅうと顔が赤くなる。多分浩介くんも赤くなってると思う。
「うーん、女の子でも、やっぱり恋をしちゃうと演技なんてできないわね」
永原先生がしんみりという。
「そ、そうみたいだな」
「恋は女の子を変えるわよ。恋をするとね、女の子って本当にかわいくなるのよ」
「でも永原先生はもう３００年以上恋をしてないのにきれいじゃないですか」
あたしがちょっと反論する。
「そうね、まあ……私も私で色々あるのよ。石山さんや木ノ本さんもそうだけど、私もそれなりに『元』がいいからね」
なんか先生が露骨に容姿の優劣語っていいのかなあと思ったりもしたけど、まあ、あたしを褒めてくれているんだし言わないでおこう。
「でも、篠原君は幸せものだね。こんなかわいい子の彼氏になれたんだよ」
「あ、うん……まあ、な……」
「でも、でもでも……あたしだって……こんなにかっこよくて責任感あって、強い男の子の彼女になれて嬉しかったよ！」
気持ちを込めて言う。
演技じゃない、本当の本心。
「はいはい、熱いのもいいけど、他のゲームしようか」

「あ、うん……」
いけないいけない、お祭りだからって油断しちゃいけない。
「えー、後夜祭は、後1時間で終了となります」
守山会長が拡声器でそう言う。1時間って結構長いけど、仕方ない。
ちなみに、後夜祭の下校時刻になっても、毎年何人かは更に2次会へと進んで、翌日まで遊び倒す人が出てくる。
「そう言えば、文化祭終わったらデートする約束だったよね浩介くん」
「あ、うん」
「明日明後日が土日の代わりだから、明後日にデートしよ」
「あ、そうだね、ちょうどハローウィンだっけ？」
「うんうん」
「ハローウィンかあ……優子ちゃんはどうするの？　メイクとか？」
浩介くんが訪ねてくる。
「うーん、あたし、ああいうメイクはしたくないなあ……」
「えー？　意外と似合うと思うよー口裂けメイクとかさあ」
浩介くんが冗談交じりに言う。
「えー!?　それは嫌よ、絶対イヤ！　あたしは口裂け女なんかになりたくないわよ」
大慌てで否定する。ちょっと否定しすぎたかな？
でも、ああいうグロテスクなのが嫌なのは事実だ。
「あはは、うん。ゴメンゴメン。そうだよね、優子ちゃんはそういうことしなくてもかわいいもんね」
「もう……そういうことをナチュラルに言うんだから、怒れないよお……」
でも、そういう浩介くんの優しいところにも惚れたんだけど。
「まあともあれ、コスプレはやめようか」
「うん、そうしてくれる？」
「で、どういうデートにする？」
「うーん、ハローウィンは混んでるから……午後は浩介くんの家にお邪魔していい？」

「あ、いいよ。明後日は親父もお袋もいないから俺の家に来てくれるか？」
「うん」
初めて、浩介くんと家デートの約束。
しかも、二人っきりになる場所で、もしあんなことやこんなことをしても誰かに言われないということ。
恋人同士になったから、これまで以上に触れ合いが重要になる。
どうしよう？
あたしはいつぞやの時、龍香ちゃんのデートの服装のアドバイスのことを思い出す。
外では露出度の低く清楚な服を着て男の子の嫉妬心を抑えつつ、家の中では思いっきり露出度をあげてエロくする。
そうすると、龍香ちゃんの彼氏がそうだったように、独占欲を大いに満足させることが出来、露出度の高い服に対する性欲に忠実になる。
あたしも、夏の時にも浩介くんの性欲を垣間見たことがあったが、この文化祭でより強く、浩介くんの性欲を知ることが出来た。
昨日今日と、スカートをめくられ、パンツの中に手を入れられ、そしてさっきも押し倒された上にキスをして、胸を触られ、揉まれ、またスカートをめくられた。
でも、恋人同士になれば、きっと裸を見せることにもなる。
異性に裸を見られたことは、まだない。
「さあ、今度はＵＮＯにしましょう」
永原先生の提案でＵＮＯが始まる。
他にも桂子ちゃんや恵美ちゃん、高月くんや他の男子なんかも入り乱れてたくさんゲームをした。
あたしと浩介くんの関係が、正式に恋人同士になったことを指摘する人は居なかった。
やはり、周囲の認識ではとっくに恋人同士ということになっていた。

「では、これより、平成２９年度小谷学園後夜祭を終了します！　カードゲーム・ボードゲームは生徒会のものはこちらで回収しますので、そのまま置いておいてください。ただし、風で飛ばないように必ずケースに入れてください！」
　守山会長の指示に従い、トランプとＵＮＯを片付け、その場を後にする。
「じゃあ私、職員室に行くから、皆さんは気をつけて帰ってください」
「「はーい」」
　浩介くんと教室で自分の荷物を整理していると、制服姿の永原先生がそう言う。本当にこれ、先生に見えないよなあ。
　浩介くんと一緒に腕を絡めながら、夜の通学路を帰る。
　天文部で下校時間まで居ることはあったので、これ事態は初めてじゃない。
「そういえば、浩介くんって」
「ん？」
「あたしが天文部の時、どうしていつも待ってくれてるの？　さっきは筋トレしてるって言ってたけど……」
「ああ、鍛えているんだ」
「うん、それは分かってるけど、そんな感じで？」
「どんな感じって言われても……その名の通りだよ、一人で四股踏んだり腕立て伏せして鍛えたりしているんだ。やっぱ男として、鍛えて強くなるって楽しいんだ」
「そ、そうなの……」
　半年近く前まで男だったのに、よく分からない。
「それにさ、林間学校の時や海の時にも分かったけど、優子ちゃんってナンパされやすいじゃん？」
「う、うん……」
「そいつらから優子ちゃんを守る……喧嘩に勝つためにも、やっぱり力をつけたいんだ俺」
「そ、そう……」

浩介くんの弛まない努力。
あたしを守るため。もう遠い昔に、浩介くんがあたしに……「優一」に復讐しようとして鍛えはじめたのに、今はこうして、か弱い女の子になったあたしを守るために力を振るってくれる。
浩介くんと楽しく話しながら、駅で別れる。
「また明後日、よろしくね」
「うん」
浩介くんと分かれ、家路につく。

「ただいまー」
「優子おかえりーどうだった？」
「うん、楽しかったよ」
「ご飯できてるから、着替えて休んだら食べに来てね」
「はーい」
あたしは制服を脱ぎ、下着姿になる。
全身で汗を書きまくっていたけど、もう乾いていた。
パジャマに着替えてご飯を食べる。
「今日は早めに風呂に入って早めに寝た方がいいわよ」
「はーい！」
母さんの宣告もあり、まず風呂に入り、髪の毛をいつもより入念に手入れする。
身体もいつもよりよく洗い、そしていつも以上に気をつけて湯船であったまる。
一個一個の所作が変わる。やはり、本当に恋人になると、色々なところで変化する。
自室に戻り、あたしは永原先生からもらった紙を開く。
よく分からないＵＲＬ、怪しいと思いつつ、あたしはＰＣを立ち上げる。
念のために、部屋には鍵をかけておこう。
ＷＥＢブラウザを立ち上げ、ＵＲＬを手入力する。
そして、考えもなしに、すぐにエンターキーを押す。

「!!???」
あたしは硬直してしまう。
それは、「女性向け」と看板を掲げたアダルトサイトだった。
女性向けという名前の通り、男性向けとは違い、男性をメインに見せる場所だった。
あたしは一瞬の驚きの後、脳内麻薬が信じられない勢いで分泌していることに気付く。
「はぁ……はぁ……」
興奮してたまらない、あたしの股から、すごい勢いで、さっき濡らしたのと同じ液体が伝わる。
間違いなく、それはあたしの中の、女性としての「興奮」だった。
とりわけ、昨日今日は浩介くんと色々あったせいで、あたし自身性欲が高まっていた。
動画をクリックすると、男の人が、ふにゃふにゃな様子から一気に変わっていく様子を撮影した動画まであった。
見ちゃいけない、まだ18歳になっていない、浩介くん以外で興奮するのは良くないと思いつつも、どう頑張っても目が離せない。
悲しき女の性。でも、そうなったのも、あたしが本当の意味で女性になれたということでもある。
あたしは、PCから目をそらす。
もう一個、確認したいことがある。
模様替えの時にさえバレなかったエロ本の隠し場所。あたし自身、ほとんど存在そのものを忘れかけていた、ベッドの下に隠していた優一時代のエロ本。
もちろんこれは男性向けだから、男性中心に書かれている。
あたしはその中の一冊の、特に優一時代抜いていたシーンを思い出してページをめくってみる。
「うっ……」
それは女の子が無理矢理されているシーン。あたしは、それを見た瞬間、頭がクラクラした。
いや、もちろんあの時のように吐き気がするというわけではない。

だけど、女の子を乱暴に犯す汚いおっさんというシチュエーションに、どうしようもない嫌悪感を覚えていた。
あたしはエロ本を、元の場所に戻し、冷静になる。
……そうか、もうあたしは、戻れない所まで来たんだ。ううん、やっと戻ることの出来ない場所まで、来ることができたんだ。
多分、もうあのエロ本を開くことはない。明日、燃えるゴミに出してしまおう。
ＰＣに戻り、女性向けのエロサイトを見る。うん、こっちの方がはるかに落ち着く。
女性向けのエロ動画では、やはり男性をよく写す。あたしはもう、女の裸なんかよりもずっと、男の裸が好きになっていた。
ふと、あたしは浩介くんのことを思い出す。夏の海でのあのシーンだった。
ほんの一瞬の記憶だけど、それでもあたしの妄想を掻き立てるには十分だった。
「はぁ……はぁ……」
あたしは、ＰＣを消し、ベッドに横たわる。
「浩介くん……浩介くん……」
浩介くんの名前を呼び、そして自分の体に触れる。触れば触るほど、あたしはますます気持ちよくなっていき、理性が崩れていく。

そしてあたしはついに、女の子として初めて「高み」に達したのだった。
余韻の中で感じた感情はなんだろう？　混沌としていてよく分からない。
だけど男の頃に感じていた快感とは、その高さも、長さも違っていて、ずっと高く長いものだった。
それは多分、直接的な肉体における喜びだけではない。
そう、あたしがもう、本能まで全て、女の子になったということに対する、言葉では言い表せない喜び。
ＴＳ病で倒れ、女の子になってから、ずっとずっと求めてきた心の

女性化。それを達成できた瞬間だったから。

余韻に浸る中で、あたしの目から一筋の涙が溢れた。それは今までのどの涙よりも、喜びに満ちた涙だった。

# 変化する優子

文化祭の翌日、今日明日は文化祭で土日が潰れたための振替の休日になっている。

「ピピピピッ」という目覚まし時計の音とともに朝起きて、昨日のことがまた蘇る。

永原先生に「本当に心から女の子になれたと確信するまで決して見てはいけない」と言われた、ＵＲＬの紙。

そこにあったのは、「女性の性欲」を煽るためのエロサイトにつながっていた。そして、あたしはそこで、自分が女の子として、性的興奮を得られることを知った。

幸いなことにあたしがまだ男だった頃に持っていた「男性向け」のエロ本が奇跡的に残っていたので、それと比較することが出来た。

あの結果を見れば、明らかだった。

もはや深い本能にも、あたしの中に「男」は残っていない。あたしは、ついに女の子として男のエロが好きになることができた。

あたしは昨日、浩介くんと正式に恋人になり、そして女の子としての快楽を初めて味わった。

この文化祭の２日間で何かが起きると思ったけど、それは本当だった。

もちろん、そうは言っても浩介くんと正式に「交わる」のはもっと後の話だし、もしかしたらその時にまた拒絶信号が出てしまうかもしれないという不安もある。

だけど、昨夜の快感は、永原先生があのサイトを教えてくれなければ、決して得られるものではなかった。そしてそれを見なければ、あたしは自分が本当の意味で女の子になりきったという確信も持てなかった。

知識では女性のやり方も優一時代から知っていたけど、優子となってからも実際に体験したことはなかった。

考えてみれば、あの時は殆ど本能的に気持ちいい場所を弄っていた。興奮しすぎて、完全に夢中になっていた。優一時代の知識を全く

意識していなかった。
多分、永原先生はそこまで見越して、あたしにあの紙を渡したんだと思う。
でも、今思えばあの時母さんが入ってこなくて本当によかった。もし見られていたらあたしは恥ずかしいってもんじゃない。
ともあれ、明日浩介くんとのデートもあるし今日は1日休み、朝風呂に入ろう。
下着を含めた今日の服を持っていく。

お風呂に入りながらも考える。
自分の自覚できる範囲では、もう完全に男がなくなったあたしだけど、それでも時折出ることはあると、永原先生は言っていた。
永原先生のように、例え４８０年間女の子を続けても、２０年分の「男」はこれからも残り続けるという。
それについては、もう割り切るしか無い。
でも、今この段階になって、やっと浩介くんと恋人同士になれた、あのＵＲＬで、あたしはそれに不安は一切持たなくなった。
浩介くんと恋人同士、このお風呂……浩介くんと入るのかなあ……
浩介くんと2人で入ったらちょっと狭いかも……って何考えてるのよあたし。
あたしはふと、視線を下に下ろす。
巨大な2つの果実が目に入る。あたしのとっても大きなおっぱい。
今まで、これで多くの男を惑わしてきた。
街中を歩けば、多くの男性があたしの胸に視線を当てていた。
浩介くんも、あたしの胸をよく見ていたし、またあの時には触られもした。
身体、浩介くんのためにもう少しだけ洗おうかな？　それとも洗い過ぎかな？　そんなことを考えながら時間が過ぎる。
今はもう、浩介くんのことばかり考える時間になっている。

あたしはお風呂から上がり、身体を拭く。

鏡の中に映る裸の女の子。今日は１０月３０日、来月始めには女の子になって半年になる。そう言えば女の子になったのは倒れた日なのか気付いた翌日なのかどっちなんだろう？

好きな男の子が出来たのが７月の林間学校の時と考えると、本能まで女の子にすることがどれほどに大変だったかがわかる。本当にここまでこれて嬉しいわ。

今日の服、本当は一日外出の予定がないからパジャマのままでもいいんだけど、いつも普段着に着替えているから今日もそうする。

今日もかわいくミニのスカートを穿く。

ともかく、日頃からかわいくしておかないと、いざデートの時に迷いすぎて、あるいは服装の引き出しの数が少なくなりすぎてダメになるということを、身をもって知っていた。

やっぱり毎日オシャレを欠かさないことが、女子力アップに繋がると考えているからだ。

「母さんおはよう」

「あらおはよう。文化祭のミスコン、優勝おめでとう」

やっぱりミスコンのことは話題になる。

「ありがとう、見てた？」

「うん、優子かわいいから絶対優勝すると思ってたけど、接戦になってドキドキしたわね」

「あはは、永原先生の乱入が大きかったよ」

「あれは驚いたわ。私達も優子に投票したけど、本当ドキドキだったわね」

「うーん、桂子ちゃんとの直接対決だけなら負ける気はしなかったんだけどねえ――」

あたしはちょっと自身を持っていう。

「お母さんはそうは思わないなあ」

しかし、母さんから意外な言葉が出る。桂子ちゃんとあたしの１対１でも接戦になっていただろうというのだ。

「え!?　どうして？」

「優子、いくらなんでもパフォーマンスで狙いすぎよ。彼氏、浩介くんだっけ？　嫉妬したんじゃないの？」
「あ、うん。でも嫉妬心はちゃんと鎮めたから」
「そう？　どうやって？」
「あうっ、言いたくない」
あたしは母さんと、ミスコンで優勝した後での反省会のようなことをしている。
まさに、「勝って兜の緒を締めよ」ということわざの通りね。
「……そう、どうやって鎮めたかまでは聞かないわ」
「あ、うん。性行為とかじゃないから」
一応あたしはまだ処女だ。
「……あらそう。でも男の子の性欲はいつまでも抑えられるものじゃないわよ」
「母さん、それはあたしも知ってるわよ」
多分浩介くんだってずっとあたしとしたくてしたくてたまらないはずだわ。それこそ、単にしたいと言うだけじゃなくてあたしに子種を植えて子供産ませたいとさえ思っていても全く不思議じゃない。
何せあたしはこんなにかわいくて胸の大きい女の子だし。
ピピピピッ……ピピピピッ……
おや、携帯電話がなってるわ。
見るとメールだった。差出人は浩介くんだった。
「どうしたの優子？　メール？」
「うん……」
あたしが携帯電話のメールの画面を開く。

題名：明日のデート
本文：明日午後俺の家に来るって言ってたけど、午前中はどうするの？

「誰から？」
「浩介くんから……うーんと、明日のデートの午前の集合場所だって」

「あらあら、頑張ってね」
母さんが応援してくれる。
「ありがとう……」
あたしは考える、ゲームセンターでデートしていないことを思い出した。
しかし、ゲームセンターについては以前桂子ちゃん、龍香ちゃんと女子３人で行った時のことを思い出してしまい、言い出すのも躊躇していたのだ。
「うーん……」
浩介くんと今後デートする際に、ゲームセンターをいつまでも避けるというのもよくないと思うので、区役所近くのゲームセンターに行くということをメールに書く。
あ、でも集合場所だから駅でいいかな。

題名：Ｒｅ：明日のデート
本文：それじゃあ最初のデートで集合した駅でいいかな？　ゲームセンターに行こうと思って。時間は午前１０時でいい？

この内容でひとまず送信してみる。
「優子の成長が嬉しいわ母さん。実はね、ちらっと二人を見たのよ」
「え!?　どこで？」
「野球部に行くところが見えたのよ。男の子のこと、本当に好きになっていてお母さん嬉しいわ。それにあの子、結構かっこいいじゃない。」
「うん、浩介くんすごくかっこいいわよ」
「あら、どんな感じ？」
「えっと、それはその……とっても力持ちなのよ」
「うんうん、それで？」
「あ、あたしのこと、いつも守ってくれるし。海でナンパ男３人に襲われそうになったときにも守ってくれたし」
「へえ、そうなんだ。どんな感じだったの？」

「えっとね、３人相手に喧嘩して勝っちゃうくらい強いのよ」
「へえ、それは優子も惚れるわよねえ」
「うん、浩介くんかっこいいんだー」
あたしは以前持っていた男らしさ、力の強さを、女の子になることで失った。
もちろん、それは自分から積極的に捨てたもの。
女の子になると、男にあったものの多くを無くすことになる。下半身のアレに興奮したのだって、究極的にはあたしにはもう無いものだから興奮してしまったんだ。
だって、それ以前は自分のを見ても何とも思わなかったし、まだ優一だった去年の林間学校だって他の男子のを見ても、何とも思わなかった。
失った途端求めるようになるというのも、おかしな話だけど、でも女の子に生まれ変わったんだもん。
だったら、女の子としてそれが好きなのって普通のことじゃない。
あたしはそう自分に言い聞かせていた。
ピピピピッ……ピピピピッ……
お、浩介くんから返信かな？

題名：Ｒｅ：Ｒｅ：明日のデート
本文：うん、それでいいよ。明日楽しみにしている。それじゃあまた明日

うん、浩介くんと約束できた。
「浩介くんから？」
「あ、うん」
「何だって？」
「午前１０時、区役所の駅前だって」
「よかったわね。頑張りなさい」
「うん」
「さて、それじゃあ朝ごはん作るわよ。優子も手伝ってね」

「はーい！」
休みの日に行う母さんの家事手伝いは、今も続いている。
「さ、今度からはもう少し高度な家事も手伝ってもらうわよ」
「え？」
「優子にも彼氏ができたでしょ？　家庭的になって、浩介くんを支えなさい」
「うん、そうだよね……」
あたしは浩介くんに守られっぱなしだし、せめて家事をちゃんと出来るようになって、少しでも浩介くんに恩返ししなきゃ。
今までも家庭的だって言われてたけど、母さんに比べればあたしはまだまだひよっこのレベル。
浩介くんに好かれるためにも、浩介くんが出来ない家事をちゃんと出来るようになりたい。
家庭的な女の子が嫌いな男なんていないし、将来の結婚とか考えれば出来ないのは評価を大きく下げてしまう。将来嫌でも身につけるなんてそういう体たらくは絶対ダメだ。ましてやあたしは、浩介くんに守られっぱなし。いくら浩介くんでも、いくらあたしでも、片務的な関係が続くのは絶対に避けたい。
朝食はいつものように、昨日の夜の残りとご飯に味噌汁となっている。
あたしはラップに包んだ昨日の残りを冷蔵庫から取り出し、３つの皿に分けて電子レンジでチンをする。
その間に、母さんがお米を炊いてくれるから、あたしが味噌汁作りに入る。
うん、大分連携が取れている。
「将来的には、優子に朝昼晩と全部作ってもらうこともあるわ」
「え!?」
「お母さんは何もしないで、優子に掃除洗濯も含めて家事を全部やってもらうのよ」
「ちょ、ちょっとそれって――」
「優子が将来お嫁さんになった時、お母さんはついてこないわよ。旦

那さん……浩介くんに手伝ってもらうなとは言わないけど、浩介くんの仕事の忙しさも考えたら、一人でこなせるようにならないとダメよ」

うー、やっぱり母さんの言うことは正論だ。というよりも、あたしも母さんも、もう結婚相手が浩介くんという前提になっている。早まり過ぎかな？　という脳内の疑問をすぐに捨て去る。

ともあれ、朝食を作り終わり、父さんと3人で食べて自室に戻る。

今日は燃えるゴミの回収日、昨日のエロ本をこっそり捨てに行く。うん、見られなくてよかった。

もう一度自室に戻り、ＰＣを開く。そして昨日のエロサイトのことを思い出す。

でも、浩介くん以外ので興奮することに罪悪感があり、開くことができなかった。

また昨日のことを思い出してしまう。

やっぱり、大きな体験だった。またしたい、快感に溺れたいと思ってしまう。

でも、母さんに呼ばれたらどうしよう？

感情と理性のせめぎあい。そこはもう、男と何も変わらない。

適当にゲームをしながら考える。ゲームのスキルはもう、男性の頃と変わらない。

でも以前より、ゲームをする時間も減った。

代わりに増えたのがお人形さん遊び。

休みの日にちょくちょく買っている女の子のおもちゃ。小さなおままごとセットと合わせたため、いつの間にかテレビの下ではスペースが足りなくなり、家で眠っていた折りたたみの机を引っ張り出してそこにお人形さんとおままごとセットを置いている。

おままごとセットは自分で遊ぶというより、お人形さんたちが使っているというイメージ。おままごとしなくても本当の料理をしているから。

このおままごとセットを買う時に、母さんは「いくらなんでも子

供っぽすぎる」と言ってきたけど、あたしは「それでもやりたい」と言った。
あたしは人生の最初の１６年を男として過ごした。でも、これから女の子として生きる上で、やっぱり女児の遊びも体験したいと思ったからだ。
それはかつてあたしが男だったがために、幼女だった頃のないあたしが、それを取り戻したいという感情。
あたしは、おままごと遊びもそこそこに、気分転換に明日のデートについて考える。
「どうしようかな、明日の服装……」
浩介くんとのデート、それまでは「友達」という関係での前倒しのようなデートだった。
これからするデートはあたしと浩介くんが「彼氏彼女」としてのデートということになる。
しかも、浩介くんの家に入り二人っきりになるということ。更に一歩進むことは容易に想像できる。
箪笥を開ける。
ちょっと服を考える。
すると奥に、白い膝丈下のロングスカートのワンピースが目に入る。
ちょっと出して、鏡の前で合わせてみる。
……うん、これでいいわね。
そしてもう一つ、箪笥の一番奥に眠っていた服、最初の服選びの時に母さんに強引に着せられて以来、着ていなかった服だ。
昼食まで時間があるし、ちょっともう一回試着してみよう。
あたしは服を脱ぎ、下着姿になると、まず上の方から。ノースリーブの短いＴシャツで、胸元も空いている。更にへそ出しは今の季節だとかなり寒く、お腹が冷えてしまいそう。
次に、夏の水着と同じくらいの青い超ミニのフレアスカートを穿く。
女の子初日以来に着た、露出が極めて高い服。

「……」
あうあう、心もとなさ過ぎる。
試しにちょっとだけターンする。
ちらりとパンツが見えてしまう。スカート丈がちょうどパンツと同じくらいの短さで、特に何もしなくても、自然に歩くだけでちらちら見えてしまう。
それどころかへそ出しに加え胸元もとてもギリギリのデザインになっている。
この服は、浩介くんと二人っきりの時専用。
あたしは、あの時は絶対に着ることはないと言ったけど、母さんは『いざ』というときに使いなさい」と言っていた。
まさか本当に、その時が来てしまうとは思っても居なかった。
浩介くんがあたしのこの服で興奮するんだと思うと、あたしまで興奮してしまう。
もう一度、鏡の中のあたしを見る。ものすごく露出度が高くてエロい。
誰も居ないのに、着ている自分を見るだけで恥ずかしくなってしまう。
あたしは、試着もそこそこに、もう一度普段着に戻り、白いワンピースとともに箪笥に戻すと、ベッドに横になる。
「はぁ……はぁ……」
浩介くん、あの服で誘惑できるかな？
うん、きっと大丈夫。人前であの服はダメだけど、家の中で二人っきりなら、きっと喜んでくれるはずだから。
「優子ーお昼手伝ってー！」
「はーい！」
あたしはまず、母さんにこの事を秘密にしつつ、お休みの日の家事手伝いを再開した。

# 恋人としてのデート　清楚編

ピピピピッ……ピピピピッ……

「んー！」

目覚まし時計の音が鳴る。あたしはベッドから起きてハート型のクッションに立つ。

あたしはまず、鞄の中に生理用品を入れる、まだ女の子の日じゃないけど、念のために入れておきたい。

そして、家デートの時に持っていく、隠し玉の露出度の高い服を入れる。

あたしは箪笥から白いワンピースを取り出し、パジャマから下着も脱いで素っ裸になる。

箪笥から下着入れを引く。よし、今日は白いワンピースや露出度の高い服を着るという意味で、下着の色は白にしよう。

白は清純の象徴で、もっと言えばあなたの色に染めて欲しいという意味。今までの穿いていたけど恋人として初めてデートする今日は特別な意味がある。

家デートの時には、多分いっぱいパンツ見せることになっちゃう。いや、パンツだけじゃなくて中身とかも……あうー、今想像するだけでも恥ずかしいよお……

……でもやらなくちゃ、浩介くんが喜んでくれることが嬉しいから。

そして箪笥から取り出した白いワンピースを取り出し、着る。

こちらは長袖で胸のガードも固く、露出度は控えめでスカート丈も長く膝が完全に覆われるくらいの長さ。

前に屈めば背中のファスナーもあげられる。うん、ＯＫ

「おはよー」

「おはよう優子、デートそれで行くの？」

いつものように母さんと朝の挨拶する。

「うん、白いワンピースだよ。かわいいでしょ」

「確かにかわいいけど、シンプル過ぎない？」
「それがいいのよそれが」
　あたしが言う。ここは譲れない。
「そうかなあ……もう少し露出とか高めの方がお母さんいいと思うけど」
「ダメだよ、浩介くんは嫉妬心強いんだから」
「あ、うん……そうなんだ。じゃあそれでもいいかもね」
　ふう、どうやら母さんが納得してくれたようだ。
「それにしても、母さんって結構直接的だよね」
　もしかしたら、父さんの好みだったのかな？
「ああ、うん。お父さんを含めて、昔の婚活の時とかはそういうのが受け良かったから」
「なるほどねえ、でもあたしみたいに恋愛する時はまた違うのよ」
「どうやらそうみたいねえ……」
　母さんも少し悩みながら頷いている。
　どうも自分のアイデンティティが一部通じないことを認めざるをえないと言った顔だ。
　母さんが朝食を作ってくれる。あたしの服は白い服なので、今回は味噌汁の代わりにトーストで焼いたパンへと変更になる。
　いつもと違い白いワンピースの上にエプロンを着て、調理をする。
　なんか若妻って気分だけど、ここには素敵な旦那様……もとい浩介くんは居ない。
「優子、お父さん起こしてきて。こっちはやっておくから」
「はーい！」
　母さんの指示の下、父さんの書斎の扉をノックする。
　既に起きていたらしく、中から返事が聞こえ、食卓へと歩いていく。
「お、今日は味噌汁じゃなくてパンなんか」
　父さんがいつもとちょっと違う朝食に驚いている。
「優子が白い服でデートするからよ」
「そうか……デート頑張れよ」
「うん、ありがとう」

あたしと浩介くんは彼氏彼女としてデートするのは初めてだから、いつもとは違うんだけど、両親はいつものデートだと思っている。
まあ、正式に彼氏彼女なのは今日が初めてというのは、２人、あるいは永原先生を入れて３人だけの認識だし言う必要もないかな？
あたしは朝食を食べ、歯を磨き、テレビを見る。
母さんに集合場所と集合時間を聞かれたので、区役所の駅前に午前１０時と答える。
ニュースを見ながら、左上の表示で適当に時間を見計らい、あたしは時間になったのを確認して席を立つ。

「それじゃあ、行ってくるからね」
「あ、はーいいってらっしゃーい」
「気をつけるんだぞー」
両親の言葉を耳にしつつ、ドアを開け、家の鍵を閉める。
あたしは最寄り駅までの道のりを歩く。

ＩＣカードをタッチし、ホームで電車を待つ。
やっぱりホームではあたしへの視線を感じる。
真っ白な服は人混みの中でも意外と目立つ。露出度は低めで、胸も下もガードが堅い服だけど、それでもあたしの胸のサイズからするとどうしてもおっぱいが目立ってしまう。
学校の制服でも同じだけど、隠しきれない巨乳だとどうしても男の視線を浴びてしまう。
浩介くんが今後あたしを好きになるにつれ、そう言うので嫉妬心だって強くなっていくはず。
それでも、胸を小さくするのは女としてどうしても譲れないプライドだ。これぱかりは浩介くんの要望は聞けない。和服の時は別だけど。
おそらく１００年後、あたしは未だこの世に生まれていない人たちに、同じように視線を浴びるんだろうなあと思う。
あ、１００年後……浩介くんは……１１７歳。多分、もういないわ

ね。
ううん、考えちゃダメ。将来のことは分からないわ
なんか引っかかることがある。それは永遠に幸せな未来の景色。
うーん、何かわからない。
……まあいいか。例え人生１０００年だとしても、今は今しか来ない。だから大好きな浩介くんとの今を楽しもう。
「間もなく、電車が参ります」
この電車、あたしがまだ小学校低学年の子供の頃には走ってなかった電車だ。
この電車もいつかは寿命になって、新しい車両に置き換わっていく。
そういえば、永原先生も鉄道が全国に張り巡らされているのを見て、逃亡が出来ないと判断して教師を始めたんだっけ？
その時って、蒸気機関車……今ではもう動態保存とか観光列車でしか見なくなったあれが、恒常的に走っている風景から今のように電車になった風景までを、永原先生は見てきた。
きっとあたしも、そういうのを見るんだろう。
文明の進歩というものを、これからも。
そんなことを思いながら、あたしは電車に乗り込む。
「駆け込み乗車はおやめください」というアナウンスとともにドアが締まり、数秒後、電車が次の駅を目指して発車する。
電車の中でも、真っ白なワンピースを着たあたしは、注目の的だった。
小谷学園でも、街中でも、あたしはいつでも小さなアイドルだった。
道行く人に、クラスの人に、学園の人に「かわいい」と言われ続け、褒められながら過ごしてきた。
もしかしたら、そういう生活が、あたしをもっと可愛くしたのかもしれない。
そんなことを思うと、あたしの心を奪って虜にし、ついに恋人同士になることができた浩介くんは幸せものかもしれない。
でも、それを言うならあたしだって、あんなにかっこよくて力持ち

で、責任感があって、あたしを守ってくれる浩介くんみたいな男の子を射止めたのは、幸せものだ。
電車が駅に着く。集合時間５分前だったはず。
そう思いながら、改札口へと出る。初めてのデートで集合したその場所へ。

浩介くんがいた、あたしにすぐに気づいて手を降ってくれる。
あたしも軽く手を振り、まずはＩＣカードで改札を抜け浩介くんの元へ。
「ごめーん、待った？」
「うん、５０分くらい……」
「え!?　ご、ゴメン……」
「ああいや、優子ちゃんが悪いんじゃないんだ。俺が集合時間を午前９時だと思いこんでて――」
浩介くんがそう言う。
「あ、そうだったの？　ふっ」
あたしがくすっと笑う。
「「あはははは」」
２人して笑い合う。周囲もちょっとだけあたしたちに注目している。
「じゃあ行こうか」
ともあれ目立っちゃってるからここから離れたい。
「うん分かった。ゲーセンだっけ？」
「うん、身体動かすのは難しいけどカード系とか頭脳系だったら大丈夫だと思うから」
「よしわかった」
浩介くんと、ゲーセンまでの道のりを行く。

「ねえねえ、あの白いワンピースの子、かわいいよね」
「うんうん、隣りにいるの彼氏でしょ？　なんか不釣り合いな感じ」
「うんうん、いまいち冴えないっていうの、イケメンってわけじゃない

のに」
「かわいい子の彼氏って何かあんな感じだよね」
「そうだよねえ、見る目がないって言うの。もっとイケメンや金持ちが寄ってきそうなのに」

「あ、あの……」
「浩介くん、気にしちゃダメ。あれはモテない可哀想なブス女たちのヒガミよ」
　あたしがあえて女子力を下げかねない汚めの言葉を使って言う。
「で、でも確かに……俺は……」
「浩介くん、あたしが浩介くんに惚れたのは、顔なんかじゃないわよ」
「う、うん……」
「あたしは強くて、頼りがいがあって、力のある浩介くんが好きなんだから」
　これはいつわざるあたしの本心。それに責任感も強いし、浩介くんは本当に素敵な男の子だと思う。
「ありがとう」
「ふふっ、じゃあ行きましょう」
「うん」
　浩介くんを引き連れ、ゲームセンターへと行く。世間ではハローウィンということもあって、ゲームセンターもそんな雰囲気になっている。
　最も、稼働しているゲームはあの時と全然変わらなくて、内装の一部と店内のＢＧＭが変わっているだけ。
　ゲームセンターではまずＵＦＯキャッチャーが目に入る。
「うーん、人形があるね」
「でも何だか取れ無さそうねえ……」
　浩介くんが配置を確認する。確かに見ぬからに難しそうな配置。
「でも俺もプレゼントしたいなあ――」
「ふふっ、大丈夫よ。焦らないで」
「でも……」

「ぬいぐるみさんプレゼントしてほしいなら、ぬいぐるみショップで買ってくれればいいから」
優しい口調であたしが言う。
「そ、そうか……」
「うん、プレゼントの気持ちの込め方は、何も無理そうなゲームを攻略するだけじゃないわよ。専門のお店とかでちゃんとしたのを買ってくれた方が、心がこもることもあるわよ」
「そ、そういうものか……」
浩介くんが納得した表情で言う。無理をさせてしまえば長続きしないと、あたしは思ったのだ。
「それよりもさ、こっちやろうよ」
あたしが移動したのはお菓子のキャンデーが積まれたコーナー、こちらは見ぬからに大量に取れそうなゲーム。こうなっているのは、原価が安くいくら取られようが物理的に黒字になるからだ。
「これ？」
「うん、キャンデーならたくさん取れそうだし。さっきのは取れるか取れないかだもん」
「そうか……」
「もしいつまでも取れなかったら、デートが気まずくなっちゃうかもしれないでしょ？」
あたしがメタ的な指摘をする。
「なるほど、確かに優子ちゃんの言う通りだ。やっぱり優子ちゃんって優しいよな」
「うん！　ありがとう！」
浩介くんに褒めてもらえると、すごく元気が出る。
ともあれ、まずは１００円を入れてあたしがスタート。
適当なタイミングで押しても、キャンデーが大量にあるので簡単に取れてしまう。
そして手前の領域が広くなったのを見計らってもう一度ボタンを押す。
手前の山に積まったキャンデーが押されて、ポトポトという音がす

る。
　これを2回繰り返しゲーム終了、備え付けの袋に入れていく。
「おお、結構取れたな」
　味はグレープ味、オレンジ味、りんご味とある。どれも美味しそうな飴だ。
「よし、俺もやろう」
　続いて浩介くんが１００円を入れてスタート。
　浩介くんはよく見て、一番山の深い場所を狙ってボタンを押す。
「おお、すごいわ」
　浩介くんの掬った山は大きすぎて、一番上に付いた衝撃で数個の飴が既に下に落ちている。
　そして、あたしと同じタイミングでもう一度ボタンを押し、あたしよりも明らかにすごい勢いで飴が落ちていく。
　２回目も同じように、浩介くんは大量の飴をゲットする。
　同じ袋に詰め、飴がそれなりの数になった。
「よし、じゃあ行こうか」
「うん、何をする？」
「うーん、エアホッケーは無理だよなあ……」
「あはは、桂子ちゃん相手でもハンデ必要だったし、浩介くん相手だとどうやっても勝て無さそう……」
「大丈夫だよ、俺も手加減するからさ」
「え!?　本当？」
「もちろん、優子ちゃんなりに楽しめるように頑張ってみるよ」
　浩介くんが胸を張って言う。
「ありがとう。じゃあしようか」
「うん」
　あたしはエアホッケーが空いているのを確認し、ゴールネットを浩介くん側に移動する。
「お、こんなハンデがあるのか」
「じゃあ手加減してくれる？」
「よしわかった」

あたしがお金を入れて、あたしのボールでゲームスタート。
「えいっ！」
まずは前に出てシュートする。
浩介くんはあっさりと止めてしまう。
浩介くんはかなり驚いた顔をする。弱い弱いと聞いていたけど、多分想像以上だったんだろう。
「よしっ、いくぞ」
浩介くんがそう宣言し、明らかに軽くシュートする。
「あっ！」
しかし、あたしはそれも取れない。軽くシュートしていると言っても、本気の桂子ちゃんよりも強いシュート。
浩介くんも手探りという感じ。
２回目のシュートでは、浩介くんが意図的に利き腕を封印してくれたけど、それでも外れ。
利き腕ではない腕で、浩介くんが軽くシュートする。
あたしは何とかそれを止める。浩介くんが強いのもあるけど、やっぱりあたしの弱さは尋常じゃない。
それでも、浩介くんが上手くて加減してくれるおかげで、９―９の同点までこぎつける。
あたしのボールでシュート。
「あっ！」
浩介くんがわざとらしく反応を遅らせ、あたしの勝ちになる。
「優子ちゃんおめでとう」
「うんありがとう」
「さて、別のゲームしようか」
「うん」
浩介くんに手加減されていることに、あたしは不快感を感じない。
それはきっと、浩介くんに心を許しているから。
それにあたし自身が、か弱い女の子としての自覚があるから、プライドで苦しむ必要がないから。
ちなみに、クイズゲームはさすがにハンデ無しになった。

６回対戦して3勝3敗の五分五分だった。
「はー楽しかった！」
「俺も。優子ちゃんかわいいなって」
「かっかわ……！」
やっぱり真正面から言われると照れてしまう。
よく見ると浩介くんまで赤くなっていた。
「あっ、ちょっと不意打ちだった？」
「うん……」
でも、浩介くんともっと照れたいと思うあたしがいる。
だから、こんな気分にさせられて、あたしは浩介くんとプリクラを撮りたくなる。
「じゃあプリクラ撮ろうよ」
「お、いいね。でも初めてだよ俺」
「うん、あたしも桂子ちゃんと龍香ちゃんとで撮って以来2回目だし」
「そうだんだ」
浩介くんあたしの提案に乗ってくれる。
あたしもプリクラには詳しくないので、無難に桂子ちゃん、龍香ちゃんと撮ったのと同じ機種にする。
そういえば、あの写真も、まだ財布の中にあったわね。今度思い出ファイルを作ろう。
「まずは盗撮カメラがないか足元を確認して――」
「え!?　そんなことするの」
「うん、桂子ちゃんと龍香ちゃんが言ってたよ」
「へえー」
浩介くんも感心している。
そして、プリクラの案内がある。
「奇をてらわなくていいわよ。自然に二人並ぶ感じで」
「う、うん……」
浩介くんは、直立不動で気をつけして立つ。
あたしがちょっとだけ腕を絡め、胸を触れないように軽く絡める。
プリクラが撮れた。

「修正とかどうするの？」
「もちろんいらないわよ。あたしはそんなことしなくていいもの」
ここはちょっと自慢気に言う。浩介くんのプライド、かわいい子の彼氏というプライドを引き立てさせるのだ。
「そうだな」
「はい、浩介くんの分」
あたしが浩介くんの分を渡す。
「優子ちゃん、次はどうする？」
プリクラコーナーから出てきたあたしたちが言う。
「そろそろお昼にしようかな？　そしたら浩介くんの家に行きたい」
「分かった。といっても何処で食べる？」
「うーん、例のデパートの最上階でいい？」
「うん、俺は異議ないよ」
「じゃあ行こうか」
「うん」
というわけで、あたしたちの次の目的地は昼食の場所になった。

# 恋人としてのデート　淫乱編

何だかんだで、このデパートは思い入れがある。
あたしがまだ、女の子として半人前だった時、早く一人前の女の子になるために終盤の課題の舞台になった。そして、優一時代の服と本を中古ショップで売った所。
休憩中に油断してパンツ見られちゃったために、母さんにおしおきされたんだ。
今でも、あのカリキュラムの日々は鮮明に思い出せる。
1日カリキュラムを終える度に、女の子に近づいていたことを実感できた日々だった。
最初の日はまだ、スカートを穿くことだって億劫だった。きっかけは単なる興味本位だった。
足元まであるロングスカートで、色柄も地味なもの。それも屋内だけで移動するものだった。
次の日以降、だんだん丈が短くなり、復学してからは制服のミニスカートをずっと穿いている。
今は真っ白なワンピースの清楚な少女の服だけど浩介くんと家に入る時は別の勝負服が用意されている。
その服のこと、それを浩介くんに見せることを考えるだけで頭がおかしくなる。
そして、あたしが男子扱いといういじめから救われた次の休日、あたしが桂子ちゃんと龍香ちゃんとでお昼ごはんを食べたのも、このデパートだった。
ともあれ、デパートのエレベーターに入る。
デパートでも男性客からの視線が見受けられるが、男性の視線は、同時に浩介くんへの敵意の視線もある。
人が多いので会話が分かり辛いが、「かわいいのにもったいない」「もっといい男はいそうなのに」と言った会話。性別こそ違うが、本質はさっきの女性の会話と変わらない。
今までのデート以上に、そういう会話が増えた。多分あたしの白い

ワンピースが目立っているから。
　それにしても浩介くん、不釣り合いだと思って気負わなければいいけど。ちょっとだけ不安。
　エレベーターが途中幾つかの階で乗客を降ろし、最上階のレストランまで来る。
「さて、何処で食べる？」
「うーん、ラーメン屋さんかなあ。優子ちゃんは？」
「うん、あたしもそこでいいよ」
　他の店も見て回ったけど、以前も何だかんだでラーメン屋さんに落ち着いたことを思い出し、今回はすぐに浩介くんの提案を採用してラーメン屋さんに並ぶ。
　券売機に行列が少しできているけど、混み始めたばかりなのか、店内はまだ空いていて、すぐに座れそうだ。
「浩介くんは何を頼む？」
「俺はチャーシュー麺の大盛り味濃いめかなあ……優子ちゃんは？」
　男らしい食事、あたしとは全然違う。
「あたしはレディースラーメン。レディーだからね」
「量が少ないんだね」
「そそ、女の子になってからは食べる量が結構減ったのよ」
「いいなあ、食費が減るんでしょ？」
「でも、他のことで費用がかかるからトントンか下手すれば男の頃よりもかかるくらいよ」
「へえー、例えば？」
「服とか」
　とっさに思いついたことを言う。他にはお人形さんとかもだけどそのあたりは言わないでおこう。
「あ、そう言えばそうだよね。大変だったでしょ」
　浩介くんが言われてみればという顔をする。
「あ、でも保険とかあるのよ。だから女の子になって最初に買った服は保険で買ったのよ」
「ふうん、あ、券売機だ」

あたしたちは間も回るのに気付いて話を自分たちの順番が中断する。
まずはあたしがレディースラーメンの値段を投入する。
そして浩介くんがチャーシュー麺と大盛りの食券を買う。
空いている二人テーブルに座って、ウェイトレスに食券を提出する。
「本日はレディースデーとなっております。１００円引きかトッピング無料サービスができますがどうされますか？」
お、そうか。今日は世間一般には平日火曜日だからレディースデーなんだ。
あまり重いトッピングでも食べきれないかもしれないし、ここは海苔にしよう。
「……じゃあ、海苔のトッピングの無料サービスでお願いします」
「かしこまりました」
ウェイトレスさんが厨房に消えて、海苔のトッピングをオーダーしている。
「女の子って得だね」
浩介くんが羨ましそうに言う。
「あはは、でもレディースデー使ったのは、実は女の子になって初めてなのよ」
「そうなんだ。意外だ」
「学校の帰りに食べに寄ったりしないし、外食しても家族で土日だもん」
優子になってからはあんまり休日に外食してないけど。
「なるほど、優子ちゃんはもしかして女性専用ってあまり入ったことない感じ？」
「そうねえ……さっきのゲームセンターでのプリクラくらいかな？」
「なるほどねえ、じゃあ電車の女性専用車両とかも？」
「うん、入ったことないわね」
もちろん興味はある。
「そうか、優子ちゃんの家からだと逆方向だっけ？」

「うん、だから女性専用車両はないよ」
痴漢された事はあったけど、あれは電車が遅れていて逆方向なのにひどく混んでいたせいで、女性専用車両はなかった。
「入ってみたいとかある？」
「うーん、興味ないわけじゃないけど……」
「ま、機会があれば、だな」
「うん、そうなるわね」
今までは日常的に学園生活を送り続けていたけど、せっかく女の子に生まれ変わったんだから、こういう女性専用サービスを積極的に使って行きたい。
あ、でもこれはいいけど浩介くんと一緒になれないのは嫌かなあ……
「優子ちゃんも、そういうのをもっと使ってもいいと思うんだ」
「うん、同じこと考えてた。でも……」
「ん？　でも何？」
「浩介くんが一緒になれないのは嫌かなあって」
ちょっぴり顔を赤くして言う。
「うっ……！」
浩介くんが予想通り顔を赤くする。うん、単純に惚れてくれる男の子大好き。
「優子ちゃんって結構さらりとすごいこと言うよな」
「えへへ、浩介くんが好きだからね」
直球的に言う。
「ゆ、優子ちゃん。あんまり目立つと周りが……」
「あ、ごめんごめん」
「お待たせいたしました。チャーシュー麺大盛りのお客様？」
ウェイトレスさんが浩介くんの方に出しかけながら言う。
「はい」
浩介くんが手をあげて、ウェイトレスさんが持ってきてくれる。
「レディースラーメンのお客様お待たせいたしました。こちらが海苔

のトッピングになります。ごゆっくり」
海苔は別皿になっている。あたしと浩介くんで半分分けできる。
「それじゃあ……」
「いただきます」
あたしたちは同時に手を合わせて食べ始める。
食事中はお互い黙々と食べる。
浩介くんが頼んだチャーシュー麺大盛りの量、あたしがまだ優一だった頃ならスープまで飲み干せたくらいの量。
今はこの、普通のラーメンよりサイズの小さいレディースラーメンでちょうどいい量。
チュルッ……チュルッ……
ズルッ……ズルッ……ズルッ……
あたしが少しの一口でゆっくり食べる一方で、浩介くんは豪快に大きな口を開けて食べる。
こうした所でも、慎ましやかな女の子と豪胆な男の子の違いが出る。
あたしの場合は白いワンピースで慎重に食べているって言うのもあるけど。
浩介くんが大盛りで、あたしが少なめなのもあって、うまく食べるスピードが相殺されたものの、それでも先に食べ終わったのは浩介くんの方だった。
「ごちそうさまでした」
「よし、じゃあ行こうか」
「うん」
今回はあたしの残りの量が僅かだったので、浩介くんが待ってくれる。
店を出て、エレベーターに乗り、デパートを出て駅を目指す。
浩介君と他愛もない話をする。でも、時を過ぎるにつれて、心臓がバクバクいう。
「優子ちゃん、緊張してる？」

「う、うん……」
電車で自分の最寄り駅を通過するのは何故かとても新鮮に感じる。
これから、浩介くんの家で二人っきりになる。
浩介くんの家では、あたしはこの服ではなく、誘惑用の服に着替える予定。
きっと、これを着たら、浩介くんに襲われちゃう。
でも、それはあたしが望んでいること。ああ、いつの間にあたし、こんなに淫乱な女の子になっちゃった。
電車が学園の最寄り駅を過ぎる。
あたしたちの目的地は更に先、ＩＣカードをタッチする。ギリギリだけど帰れる残高になる。
破裂するくらい心臓がドキドキする。
それはきっと、初めて好きな男の子の家に、部屋に行くというだけではない。
「こっち」
「うん」
閑静な住宅街、駅からの所要時間は、あたしの家より少しだけ短い。
「今は誰もいないから」と、浩介くんが財布から家の鍵を取り出して開ける。
家の広さはあたしの家よりちょっとだけ狭い程度。
「まあ入って」
「うん……お邪魔します」
浩介くんに促され恐る恐る家に入る。
「じゃあ、俺の部屋に案内するよ」
「あ、うん……あの、その前にちょっとトイレ行ってきてもいい？」
「あ、うんいいよ」
浩介くんがトイレに案内してくれる。
「俺の部屋、ここだから」
浩介くんが自室に消えていく。
念のためにトイレも今のうちに済ませておこう。
あたしは純白のワンピースを脱ぎ、下着姿でパンツも脱ぐ。

トイレを済ませたら流さずに鞄の中から短く胸元の空いたシャツを取り出す。
次に青いフレアの超ミニスカートを取り出して穿く。
どちらもギリギリなので手鏡をうまく使って調整する。見えちゃダメだ。
あううぅ……もう濡れちゃいそうだよお……
こちらはスカートの先端をよく確認して、普通に立っていればギリギリ見えてないようになっているのを確認する。
「うん……これでＯＫ、恥ずかしいけど、きっと浩介くん喜んでくれるから！」
あうう……龍香ちゃんには何の気なしにオススメしちゃったけど、いざ自分がやるとなるとものすごい恥ずかしいよお……
あたしは鞄の中に白いワンピースを入れて、チャックをし、トイレのレバーを引いて流す。
ドアを開け、浩介くんの部屋の前に来る。
コンコン
「はーい入ってー」
ガチャッ
あたしは決心し、浩介くんの部屋の中に入る。
「お、お待たせ……」
「あ……」
あたしの乱れきった服装を見た浩介くんが硬直している。
「えへへ、どうかな浩介くん？」
ちょっと前かがみになってポーズを取る。背後に人がいたらパンツ丸見えなのが分かる。というか、あのデパートで何でこんな服売ってたんだろう？
「ど、どうかなって……どうしたんだよその格好!?」
浩介くんが動揺しながら聞いてくる。
「あ、あのね……浩介くんに見せるためだけに……その……き、着てみたの……」
部屋の中に完全に入り、浩介くんに近付く。

「へっ、お、俺だけに……」
コクッ
唾を飲み込みながら聞いてくる浩介くんにゆっくり頷く。
「浩介くん、好きなようにしていいのよ」
「はぁ……はぁ……」
あたしが甘い言葉を言うと、浩介くんがますます興奮するのが分かる。
「鞄、置かせて」
「う、うん……」
あたしが適当な位置に鞄を置く。
お尻を浩介くんに向け、前かがみになる。浩介くんの角度からはパンツ丸見えのはず。
「あぅ……ゆ、優子ちゃん……」
「ん？」
正直あたしも顔が真っ赤になってるけどわざととぼけたふりをする。
最近このあたりの演技力が上がった気がする。
「はぁ……はぁ……」
ガバッ！
「きゃあっ！」
浩介くんが我慢できないという感じでスカートめくりをしてくる。
「いやーん、もう浩介くんのえっちぃ……」
恥ずかしそうにあたしが言う。実際ものすごく恥ずかしいので演技したわけじゃない。
「な!?　えっちなのは優子ちゃんの方だろ!?　めくらなくても白いパンツ丸見えだったぞ」
「あうぅ……」
全くその通りです、はい。
「で、でさ……お、俺の部屋……どうかな？」
浩介くんが気を紛らわせようと部屋の話題をする。
部屋はカレンダー以外のポスターはなく、本棚も少年漫画が結構

あって、雑誌なんかも置いてある。
机はシンプルに勉強しやすくなっていて、テレビが1台置いてある。
あたしの部屋と違ってＰＣはない。
「うん、とってもいいと思うよ。あたしの部屋よりシンプルだし」
「優子ちゃんの部屋ってどんな感じなの？」
「うーん、本棚がまず違うかなあ」
「へえ、優子ちゃんの本棚って？」
「例えばこの漫画は優一だった時にはあったけど今はないし」
「え!?」
浩介くんが驚いている。
「女の子になるカリキュラムの時に少年向けや萌え系の漫画は古本屋さんに捨てて、代わりに少女漫画を入れたのよ」
「あ、そう言えばそうだったっけ？」
「うん。後は女性誌とかもあるわよ」
カリキュラム教材の少女漫画の中には、今も連載中のものもあって、あたしは続きの単行本が出て買うようにもなった。
そのことを永原先生に話すと「やっぱり石山さんは優等生だね」と褒めてくれた。
さり気ないことでも、女の子らしいことをすると、みんな褒めてくれる。
その瞬間がとても幸せ。
「そうだよね、優子ちゃん女の子だもんね」
「うん、後は着せ替えのお人形さんとかぬいぐるみとか……最近はおままごとセットにはまってるんだ」
「お、おままごとって……」
浩介くんがちょっとだけ引いている。
「うん、あたしって生まれつきの女の子じゃないもん。だから、子供っぽいって言われても、やっぱり子供の女の子の遊びもしたいのよ」
「あ、そうだよね、うん……ごめん」
浩介くんが申し訳なさそうに謝ってくる。

「ううん、いいのよ。それよりも、隣座ってもいい？」
「あ、うん……」
あたしは、座りながら、何の気なしに浩介くんの股間に視線を移した。
そこはもっこり膨らんでいて、明らかに興奮が収まっていないという感じがする。まあ、当然だよね。
この前の、永原先生に渡されたＵＲＬのことを思い出す。
そこで見た「画像」と浩介くんで妄想してしまう。
「はぁ……はぁ……」
「どうしたの優子ちゃん？」
「あ、ごめん、やっぱりこの服着てると興奮しちゃって……」
正直に言う。
「優子ちゃんってえっちな子だね……まあ、俺もだけどさ」
「襲いたい？」
あたしが誘惑するように胸を寄せて迫る。
「う、うん……でも、その……何でもない」
浩介くんはしどろもどろになって沈黙する。
「いいのよ、ちょっとくらいなら……」
あたしがぐいっと浩介くんに身体を近付ける。座ってスカートが少しずれて、それだけでもパンチラしてしまう。浩介くんはそこから視線を離せない。まずいと分かってても見てしまうのが男の性だ。
「きゃあ！　えっち！」
浩介くんにいきなりお尻と胸を同時に触られる。
ちょっとだけ急だったのでびっくりしてしまう。
「まだ、決心はつかないけど、これくらい……してもいいよな……」
浩介くんが我慢できないという表情で言う。
「う、うん……いやぁん……恥ずかしい……」
「はぁ……はぁ……優子ちゃん……」
もみっもみっ……
「んぅ……あぅ……ひゃう！」

浩介くんの両手１０本の指であたしは身体をまさぐられる。
スカートの上からいやらしくお尻を這い回られ、胸を無造作に揉みしだかれる。
「……」
そしてとうとう興奮が最高潮に達し、身体が「受け入れ体制」の信号を出す。
触りたい、あたしも、浩介くんに自由に触りたい。
多分そうすれば、あたしは浩介くんに今日ここで、犯されて花を散らすことになる。
多分、浩介くんが死ぬまで、他の誰も好きになれる気がしないから。
あたしは浩介くんに向けて手を伸ばす。かつての優一をちょっと思い出し、まずは浩介くんの頭をさらりと撫でる。
「はぅっ！」
浩介くんがあたしの不意打ちに驚いた声を上げる。自分がやられるとは思ってなかったのだろう。
「あたしも、我慢出来ないや……」
あたしはうっとりした目で浩介くんの顔を見つめる。
「あ、あの……優子ちゃん……」
「うん？　どうしたの？」
「もう、大丈夫なのか？」
「うん、今すぐ欲しくてたまらないよぉ……浩介くん……お願い……」
「はぁ……はぁ……で、でもやっぱり……俺……そこまでは！」
「あっ……！」
浩介くんがあたしを触っていた手を引っ込める。
「ごめん、俺、トイレ！」
浩介くんが駆け出し、ドアを開けてトイレに入り鍵を閉めてくる。
「……ばかっ」
でも、しょうがないかなとも思う。いくらあたしでも、完全に浩介くんを獣にするのは無理。どうしても人間理性が残ってしまう。
いきなりは、無理だもんね。
浩介くんの気が向くまで、ゆっくり待とう。

あたしはゆっくりと足を忍ばせ、トイレのドアに聞き耳を立てる。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん……優子ちゃん……気持ちいいよ優子ちゃん……」
浩介くんがあたしとの情事を妄想している。何をしているかは分からない。
「はぁ……はぁ……あ、あたしも……我慢できない……」
あたしは浩介くんの部屋に戻り、スカートをめくりあげ、パンツの中に自分の手をいれ、ベッドで浩介くんと同じことをし始めた。

# 恋人としてのデート　余韻編

女の子になって2回目の体験は、初めての時よりも興奮した。頭と視界が、一瞬真っ白に染まり上がってしまったほどだった。

山の頂上に登ってしばらくして、余韻に浸っていたら、浩介くんのトイレを流す音が聞こえ、スカートを一応直しておく。座ったらどうあがいても丸見えだけど。

「ふぅ……おまたせ優子ちゃん……」

浩介くんがかなり冷静に、疲れた顔で言う。

「浩介くん、遅かったね？」

あたしも疲れた声で言う。

「う、うん……優子ちゃんも、俺がいない時暇じゃなかっただろ？」

「あれ？　バレてた？」

「うん、ここまで大きな声が聞こえてきたよ」

「あ、あはは……」

そりゃあ、そうだよねとしか。

「それでさ、優子ちゃん」

浩介くんが真面目そうな顔をする。男の子やっぱ抜くとこうなるよなあ……

「うん？」

「気持ちは分かるんだけどさ、しばらくこういうのは封印したいと思うんだ」

浩介くんが言う。意外な声だ。

「え!?　浩介くん、もしかしてこういうの嫌い？」

「いや、俺も男だし、優子ちゃんとこういうことしたいよ。でも、優子ちゃんのこと大切にしたいから……やっぱりもっと待たなきゃ！」

「浩介くん……」

それは、浩介くんが本心からあたしを大事にしたいということを意味している。そのためには、自分の根本的欲求さえ我慢できるということ。

これじゃあたしも誘惑ができなくなってしまう。

本当に浩介くんは責任感の強い男の子、あたしにはもったいなさ過ぎる。
「うん、分かったわ。あたしもこの服はしばらく我慢するよ」
「ありがとう……2人っきりの家の中でその服着られたら、いつ理性が崩れるかわからないから」
無理もないよね。
「じゃあ着替えた方がいい？」
「あ、うん……そうしてもらえると助かる」
そう言うと浩介くんが部屋を出て行く。
ふう、しょうがないかあ……今から強引に襲うと言っても、既に1回抜いちゃったら、男の子に2回目を要求するのは至難の業だということをあたしは痛いほど知っている。
あたしはカバンから白いワンピースを着てから、「露出服」を脱ぎ、鞄にしまう。これも一応浩介くんが覗きに来るかもという感覚からで、あまり意味はない。
ふう、最終目標は失敗しちゃった。
でも、浩介くんも興奮していたし、あたしも貴重な経験ができた。
しばらくはできそうにないし、もし切なくなったら、今日のことを思い出すことにしよう。
今日のデート、更にもう一歩進むという本懐こそ達成できなかったけど、浩介くんを興奮させて、更に距離を縮めるという意味では概ね目的を達成できたし、今日のデートは及第点を与えたい。
……ってまだ反省するのは早いよね。
浩介くんの部屋の鏡を借りて、もう一度ちゃんと出来ているか確認する。
うん、これで大丈夫。
「着替えたよー」
落ち着いたワンピースに戻る。
ガチャッ
浩介くんが部屋に入って来る。
「お待たせ」

「あ、ああ……」
浩介くんがどこか残念そうな顔をしている。
「あれ？　もしかしてさっきの格好のほうが良かった？」
「ま、まあそりゃあ……俺も男だし」
「じゃあもう一回着替える？」
もう一回だけ誘惑してみる。
「ああいや、いいよ。それに仮にしたいとしても、今日はもう……ちょっとエネルギーが足りないんだ」
「あ、うん。そうだったよね」
あたしの声も聞こえていたって言うし、浩介くんも疲れ切っちゃっているものね。いたわってあげないと。
「テレビ見ようよ、何がいい？」
あたしが話題を変える。とりあえずテレビでその場しのぎをしよう。
「そうだなあ……ちょっと待ってて、新聞取ってくる」
「あ、うん」
浩介くんが新聞を取りに部屋を移動していく。
その間にあたしはテレビを確認する。番組表ボタンを押して……
うん、どうやらこのテレビはＣＳも見られるみたい。
お、例の飛行機事故のがもうすぐ再放送するみたい。これはまだ見て無い回。
……よし、これにしよっと。
「お待たせーってあれ？　既に決まってる感じ？」
「あ、うん。このテレビ、番組表があったよ」
「あっ、そう言えばそうだった。悪い悪い」
浩介くんがハッとしながら言う。
「それで、何を見るんだ？」
「これこれ」
あたしがテレビの前で「見てアピール」をする。
「ん？」
浩介くんがテレビ画面を見る。

ちょうど番組が始まった頃あいだ。
「あれ？　これって優子ちゃんも見るの？」
「浩介くん、知ってるの？」
「うん、『フィクションじゃないのかよ！　騙された！』で有名だよ」
「へえ、そんなネタがあるんだね」
この番組、オープニングの後に「これは実話です」という断りのアナウンスが流れる。
普通なら「本当のことだと思ったのにフィクションだったのかよ！　騙された！」となるけど、逆転の発想で「どうせフィクションなんだろと思ったら、フィクションじゃないのかよ！　騙された！」ってことなのね。
何はともあれ、面白いことを考える人がいるものね。
「さ、始まるぞ」
浩介くんと一緒に番組を見始める。
「これは面白いぞ。特に後半のナレーションが見ものだぜ」
あたしたちが生まれたばかりの頃。スイスの空港に着陸しようとするベテラン機長の話だ。
「なんかこの番組、ベテランがよく出てくるような気がするわね」
しかもこの人は飛行教官らしい。しかも自宅の庭のように慣れた場所。一番事故を起こさなさそうなのに。
「優子ちゃん、『ベテランはフラグ』って言葉もあるんだぜ」
「え!?　ベテランほど事故起こすの？」
あたしにはちょっと意外。
「あー、色々な要因があるんだが、この場合はちょっと特殊なんだ」
「へえー」
ともあれ、オープニングから、着陸の話に入る。
ＩＬＳという機械のサポートのない、手動での着陸を余儀なくされた上、視界も悪かったために、空港の滑走路から外れた場所に墜落した格好、でも生存者いたのね。
番組が進むにつれ、例えば整備ミスで飛行機の姿勢指示器が上下さかさまに取り付けられていたとか、パイロットの地図に不備があった

とか、管制官の指示にも疑問点はあったが、結局不問になったといったことが分かる。
「さあ、この後が傑作だぞ」
事故原因がパイロットの初歩的なミスという可能性になりはじめ、機長の経歴が調べられ始めた。
すると、この機長、実はダメ機長だった。
まず、パイロットの適性試験に落第していたことが判明、平均以下の能力にも関わらず、どういうわけか就職できたと言われ、パイロットになって見れば、スイスの遊覧飛行で乗客に指摘されるまでイタリアに迷走飛行をし、着陸時に以前も凡ミスして飛行機を壊したりする始末だった。
機長で飛行教官なんてお飾りみたいなもので、経歴は失敗続きで全く誇れるものではなかった。
調査官も「私なら推薦状は絶対に書いたりしない」と断言する。
「こっからがクライマックスだ」
そして、ナレーターは航空会社を糾弾する。
「なぜこんな、無能ともいえるパイロットを雇い続けたんだ?」と。
浩介くんに拠れば、「この場面が最高傑作」なんだそうだ。確かに面白い。
ちなみに今気付いたが、機長呼びだったのにいつの間にか呼び捨てになっていた。
ちなみに、会社の規模が急激に拡大していて、首のするにできなかったらしい。
番組では、よく分からないダンスユニットがうるさいということで、機体後部に移動して助かった生存者の証言も出て来ていた。
「数奇な運命よねえ……」
「でも優子ちゃんほどじゃないだろ?　優子ちゃんは性別が変わっちゃったんだから、飛行機事故より確率低いだろ?」
「確かにそうだけど……」
そして、番組もエンディングに入る。こういう事故でも、次の安全への糧になっているらしい。

「終わったね」
「ああ、優子ちゃん、ところでどこでこれを知ったんだい？」
「林間学校で、たまたま見たらはまっちゃって……」
　虎姫ちゃんと桂子ちゃんも、更にお泊り会では恵美ちゃんとさくらちゃんも嵌ってたし。
「やっぱ中毒性あるよなこの番組」
「うんうん、真面目なシリアス番組で、不謹慎でもないし、笑えるわけじゃないのに、不思議よね」
「うん、俺も一回見たらはまっちゃったよ」
「あはは、やっぱりあたしたち相性いいよね」
「お、おう……」
　またさりげなく本音が漏れる。冷静になれば、この番組そのものが強烈な中毒性を持っているだけなのに。
　浩介くんのベッドでゆっくり横になる。
　デートで疲れた（疲労の多くがさっきの「あの行為」だけど）ので、浩介くんも横で休んでいる。
「優子ちゃん、帰らなくて大丈夫？」
「まだ大丈夫だよ。それより、こうやって二人で横になるの初めてだね」
「そ、そう言えばそうだな……」
　浩介くんがまた緊張している。
「襲いたい？」
「まだそういう気分じゃない」
「あ、うん。でも、部屋に入ったばかりの時に、あの服でこうしてたら？」
「脱がしておさわりはしちゃったかも……」
　浩介くんが苦笑いするような感じで言う。
「本当にそれだけ？」
「ああいや……その……」
　浩介くんが戸惑っている。
「恐れないでよ。あたしも浩介くんの気持ちわかるんだから、本音で

いいわよ」
「で、でも……」
浩介くんはまだ躊躇している。
「あのね……『犯したくなった』でもいいよ……」
「お、おまっ……！　あ、ああそうだよ！　俺、優子ちゃんと、もっと色々なことをしてみたくなったよ」
浩介くんが本音を言う。予想できていたとはいえ、やっぱり浩介くんの口から出るのは嬉しい。
「ふふっ、ありがとう……でも、我慢してくれるんだね」
「あ、ああ……やっぱり、ほら……勢いに任せたら大変なことになりかねないだろ？」
「う、うん……そうだよね」
実際に、このまま浩介くんと一緒にいたら、いつか体験しそうなことでもあり、今はまだ、出来ないこと。
「ま、今は今しかないんだ。焦らないで一歩一歩精一杯楽しもうぜ」
「うん……！」
あたしの人生は、きっと果てしなく長くなる。でも、今は今しか来ない。
永い人生だからこそ、今を精一杯生きたい。
女の子として、この惚れた男の子と、たっぷり楽しいことをしていこう。
あたしは心にそう誓う。そして2人で横になりながら、静かに時間を過ごしていった。

「さよならー」
「うん、ばいばい」
浩介くんが、「両親がもうじき帰って来るから」ということで家を出る。
あたしは、「せっかくだから両親に紹介してよ」と言ったものの、浩介くんは「まだ彼女がいるって言ってないから恥ずかしい」と言ってしまった。

もちろん、ここで無理に押すことはしない。どうせいつかはバレること。その時になって改めて考えたい。
多分、というよりも間違いなく、浩介くんの両親はあたしのことを気に入ってくれる自信はある。
ミスコンで優勝して以降、あたしはますます自分に自信を持てた気がする。
やっぱり、優一時代も無駄ではなかった。
このおかげで、浩介くんの気持ちを分析して、どうすれば喜ばせることが出来るのかがわかることがある。
やっぱり、好きな男の子が喜んでくれることが大事よね、うん。
あたしは駅までの道のりを思い出しながら、一人で駅に戻る。
幸い、駅までは目視可能な距離なので、迷うことはなかった。
電車に乗って考える。
浩介くんへの誘惑は封印すると言っても、やっぱりミニスカートとかはデートでも穿いていきたい。
だけど浩介くんの嫉妬心を考えれば、ミニスカートを披露できるのは家の中だけ。
確かに今日の服装は極端だったけど、海の時に着た青いワンピースのミニとかくらいは穿いていきたい。
でも、どうしよう？　どこまでがセーフなんだろう？　そこは個人個人で違うからよく分からない。
うーん、今までの経験では膝が見えるくらいなら大丈夫みたいだから少しずつスカート短くして試してみるしか無いのかなあ……
そんなことを考えていたら、電車が到着する。あたしは通学よりもちょっと長い時間をかけて、家に戻った。

「ただいまー」
「あら優子おかえり……デートどうだった？」
家に帰ると、母さんが出迎えてくれた。
「うん、上手く行ったよー」
最高の出来とまでは言わないけど、十分に満足できる。

「彼の家はどうだった？」
「うん、最高だったよ！」
あたしはニッコリして答える。でもその理由までは答えない。
「あらそう……そうよねえ……」
母さんが意味深な笑みを浮かべる。
「えいっ！」
「あっ！」
母さんがあたしの鞄を一瞬の隙きを突いてひったくると、中からヘソ出しの胸がギリギリTシャツに、青い超ミニのフレアスカートを取り出す。
「あらあ優子ったら、こんな服を着て……やっぱりねえ、優子の様子がおかしいからタンスの中を見てみたら、この服がなかったもの……」
「か、母さん！」
「それで……上手く行ったんだー！」
「う、うん……」
あうあう……
「ってことはもしかして、優子大人の階段登ったりとか!?」
「あ、ううん、してない！　してないよ母さん!!」
「はいはい、じゃあ今日のデートについて教えてくれるかな？」
「う、うん……」
あたしは今日のデートのことを話す。
ゲームセンターで浩介くんと遊び、浩介くんが手加減してくれたこと。
一緒にラーメンを食べたこと。
浩介くんの家で、露出度の高い服を着たこと。
誘惑はうまく行って、浩介くんを勃たせたけど、浩介くんは「責任を取りたい」と言ってトイレで抜いてしまい、えっちはできなかったこと。
ちなみに、具体的に何されたかは、かなり迫られたけど恥ずかしいから断固拒否した。
そしてその後は、テレビを見て過ごしたこと。

浩介くんの両親とは会わなかったこと。
「ふーん、優子、本当に成長したわね」
「あたし、頑張ってるかな？」
「うん、でも頑張りすぎないでね。あんまりはしたないのも嫌われちゃうからね」
母さんが忠告してくる。
「うん、分かってる」
「そうだよね。この辺はお母さんより優子のほうが詳しいと思うから何も言わないわ」
どこまでがセーフなのかはゆっくり模索していくしか無いだろう。
もしかしたら浩介くんの機嫌次第かもしれないからそのあたりも含めて計算しないといけない。
「優一」基準の好みがそのまま通じるとは思えないのだから。
「さ、優子、明日からは学校だからね。ご飯はお母さんが作っておくからお風呂沸かして入りなさい……濡れてるでしょ？」
「ちょ……ちょっと母さん！」
「ふふっ、図星ね」
あうぅ……何も言い返せないって超恥ずかしいよ……

あたしは風呂の追い焚きボタンを押し、早めにお風呂に入る。
ちなみに、パンツもぐっしょりだったというわけではなく、その後普通にテレビ見たりして過ごした結果もあって、既に乾いていた。とは言え、新しいパンツに穿き直さなきゃいけないのは事実だった。

「お、優子、今日デートだったんだってな」
「うん、そうだよ」
仕事帰りのお父さんが食卓で言う。
「優一がいきなり女の子になったって聞いた時は、どうなることかとも思ったけど、女としての幸せを掴めたみたいで、よかったよ」
「ありがとう……」
あたしと浩介くんとの関係、みんなが祝福してくれている。

ほんの少し、かすかな不安はあるけれど、きっと誰もが羨むカップルになれる。
あたしはそんな自信があった。
明日はロングホームルームで文化祭の後片付け作業から始まる。
多分明日も、学校で浩介くんと会えるから。

# 日本性転換症候群協会への誘い

今日はまず、文化祭の後片付けから始まる予定。
楽しいお祭りの後も、ちゃんと片付けないといけない。
「おはよー」
「あたしは、文化祭の跡地になった２年２組の教室に入り、適当な場所に座る」
「あ、優子ちゃんおはよう」
「桂子ちゃんおはよう」
教室には浩介くんも居るけど、既に男子に囲まれてしまっている。
どうやら高月くんと何やら話し込んでいるみたいね。
ホームルームに向け、クラスの生徒たちが次々無造作に座っていく。
ガラガラ
「はーい、皆さん文化祭お疲れ様ー、クラスからミスコンの優勝者他ＴＯＰ３が出ました。今日は文化祭の片付けを行いますので、連絡事項は省略します」
ミスコンのＴＯＰ３に永原先生自身が入っているのは、みんな知っている。
もとより、小谷学園２年２組は学校でも有名なクラスだった。ＴＳ病になったあたしに、あたしが女の子になるまで学園一の美少女とまで言われた桂子ちゃん、そしてテニスの天才の恵美ちゃんにサッカー部レギュラーの虎姫ちゃん、何より御年４９９歳、地球上で最も長生きの永原先生。
「それじゃあ、みんな後片付けしてください」
「「はーい！」」
みんなで返事をして、あたしたちは後片付け作業をする。
自然とゴミ捨てに少数の力自慢の男子が行く、一方、あたしを含めた残された生徒たちは机の位置を元に戻す作業だ。
幸い、机の中のものは準備中にロッカーに入れるということになっていたので、特に指定席がないので、元の形にすればいいだけだ。

「あ、石山さん」
「なんですか永原先生？」
　作業の合間に、永原先生が声をかけてくる。
「ちょっとだけ付き合ってくれる？」
「あ、でも片付けが――」
「ああ、いいわよ」
「？　ごめん虎姫ちゃん、永原先生に呼ばれたからあたし抜けるね」
「ああ、分かった」
　ともあれ、永原先生が教室の隅に行くのであたしも続く。
「それで、話というのはなんですか永原先生？」
「石山さんを、日本性転換症候群協会の正会員に推薦したいのよ」
「え!?」
　日本性転換症候群協会、あたしの中では永原先生が会長を務めていて、あたしの担当カウンセラーも兼任しているっていう会。
　あたしは永原先生を通じてしか知らないし、概況しか知らない。
「本当は正会員の資格は２０歳以上なんだけど、石山さんは特別。だから、私もあのＵＲＬを渡したのよ」
「あれ、女性向けのエロサイトでしたよね」
「しーっ、でも見たのはわかったわ。それでどうだったの？」
　おっといけない、教室の中だった。女の子が無闇にはしたないこと言っちゃダメよね。
「どうだったも何も、あたし、興奮しすぎて――」
「あーうん、みなまで言わなくていいわよ」
　永原先生が手を前に出して止める。確かに女の子としてはしたないもんね。
「実はあれはね、すっかり女の子らしくなって、最後の課題の反射的本能も克服したと思える子に渡すものよ。ちなみに、昔にも似たようなもので代用していたわ」
「つまりあれって？」
「最終試験みたいなものよ」

かつて自分にもあったもの。男のうちは何も感じないそれで興奮できる様になる。
確かに、最終試験という感じではある。
「でも、その様子だと、最終試験は合格みたいだね」
永原先生がにっこり笑って言う。
「もしかして会員になるには？」
「あーうん、正会員はともかく、他の会員なら別に必須ってわけじゃないわよ。正会員は少ないし、このテストの合格者は数多いわよ。女の子になろうと言う意志さえ続けば、時間さえかければ誰でも合格できるテストよ……サンプル数はまだ少ないけど」
「は、はあ……」
「この試験の合格は、普通ならどんなに短くても発病から2、3年はかかるわ。本能まで女の子になって、更に性欲まで確認するテストだから」
「じゃあどうして……」
あたしは女の子になってまだ半年弱しか経っていない。
「石山さんが特別だからよ」
「やっぱりそうなんですか」
今までも何回も言われた。ここまで一生懸命な子は初めてだと。
「ええ、石山さんは……私達ＴＳ病患者たちみんなの模範よ。だから半年足らずでもあの紙を渡したのよ」
「それで、どうしてあたしを？」
「篠原君との様子を見てね。期末試験の後くらいにはもう大丈夫だろうって思ってたわ。あの後考えて、石山さんにはまだ高校生だけど特別に正会員として迎え入れたいって思ったのよ」
「そ、そう……」
「本部のみんなにも紹介しようと思うんだけど、今度の日曜日空いてる？」
「あ、うん……今のところは大丈夫」
「よかった。じゃあ明後日、協会の本部で入会手続するわね。ここまでで何か質問はあるかしら？」

「あ、あの……会費とかは？」
「あーうん、正会員は月１５００円って事になっているんだけど、私が立て替えておくから心配しないでいいわよ」
「う、うん……」
　意外とかかるよねえ、１５００円って年間に直すと１８０００円だし。
「じゃあ、私の話はこれでおしまい。作業に戻ってくれる？」
「あ、あの……永原先生！」
　あたしはもう一つ、聞いておきたいことがある。
「ん？　どうしたの？」
「実はもう一つ悩みがあるんです！」
　やっぱり、ミスコンの時の歪んだあたしの心についても話しておきたい。
「あら？　でも今はちょっと長く引き留めてるから、昼休みか放課後に相談室でいい？」
「あ、すみません。じゃあ放課後で」
「分かったわ」
　桂子ちゃんには天文部に遅れることを話さないと。
「じゃあ、今度こそ作業に戻ってね」
「はーい」
　あたしは作業に戻る。

「優子ちゃん、どうしたの？　先生と話し込んでたけど……？」
　桂子ちゃんには話してもいいかな？　うん、話そう。
「あ、うん……あたしを日本性転換症候群協会の正会員に推薦してくれるって」
「へえ！　確かそこって先生が会長なんでしょ？」
「うん、本来は２０歳以上からなんだけど、あたしは特別にって。会費も永原先生が立て替えてくれるって」
「へえ、良さそうじゃん！」
「う、うん……他のＴＳ病の人が何をしているのかも気になるから、本

部に寄っていこうと思って」
「そうよね、収穫は多そうね」
　桂子ちゃんが賛同してくれる。
「でね、あたし、放課後永原先生と相談室に行くことになったから」
「あ、そう。じゃあもしかして天文部は遅れる感じ？」
「うん」
「分かった。私の方から坂田部長に話しておくわね」
「ありがとう」
「うん……あ！　優子ちゃん、机はもう少し左よ」
「あ、うん……こうかな？」
　桂子ちゃんの言う通りに机を左に移動させる。
「そうそう、そんな感じ」
　男子たちが、飾りつけなどをゴミ箱へ持っていき、また、テーブルクロスなどの、元の持ち主がいるものに関しては、その人の机に置いていく。
　ロングホームルームの間に、文化祭の片づけは、余裕を持って終了した。

　コンコン
「あ、石山さんいらっしゃい。入っていいわよ」
　今日はスクールカウンセラーがお休みにもかかわらず、相談室が使用中になっていたので怪しいと思ってドアをノックしたら、準備中の永原先生がいたので、入らせてもらった。
　……まあドアの隙間からも確認したけど。
「じゃあ、座ってくれる？」
「う、うん……」
　あたしは恐る恐る椅子に座る。
「それで……私に話って何かな？」
「う、うん……実はあたし……一つ女の子になったことで出来た悩みがあるんです」
「うん、どんな悩み？」

「その……ミスコンの時なんですけど……」
　やっぱりはっきり言い出す勇気が出てこない。
「うん、それがどうしたの？　石山さん、見事優勝したじゃない。あー思い出しただけで悔しくて悔しくて泣きそうになるわね……」
「実は……あの時、荒れてたんです」
「荒れていた？　つまりどんな風に？」
「あたしが予選の時に暫定1位になった時や、特に最後の優勝が決まった時……あたし、永原先生と桂子ちゃんにひどいことを考えてしまって……今まではこんな感情、全く無かったのに――」
　あたしが気持ちを打ち明ける。まるで教会での「罪の告白」のように。
　いずれにしても「優子」にふさわしくない感情だということは分かる。
「もしかして、負けた私や木ノ本さんを嘲笑ってもっと泣かせたいって思った？」
「え!?　永原先生、どうしてそれを?!」
　気持ちを当てられたあたしが動揺して答える。話が早くて助かるけど。
「やっぱり……そんなことだろうとは思ったわ。石山さん、それは石山さんに女の子としての『自信』がついた証拠よ」
「で、でも……あまりいいことじゃないって……あたし……」
「うん、『優子』だものね。石山さんがそう思うのも無理ないわ。でも、今までは受け身だった石山さんの女性としてのアイデンティティが成長している証拠でもあるのよ」
「成長？　これが？」
　確かに、そういう解釈もあるとは思うけど、でも本当にいいことなのかわからない。
「……そうよ、成長よ」
「確かにそういう考えもあるかなって思ったりもしたけど……永原先生はどうしてそう思うんですか？」
「……今までの石山さんは『精神も仕草も何もかもを女の子らしくし

たい』、『そうすることによって、自分を一人の女の子として認めてもらいたい』という承認欲求……つまり受け身の気持ちで常に動いていたわ」
「う、うん……」
確かにそうだ。そういう道に入ることを決心したのはあたし自身だけど、それが承認欲求に繋がったのも確かだった。
「でも今は違うのよ。石山さんが、女の子として立派に独り立ちしたからこそ、女特有の、ある種汚い部分もさらけ出せるようになったのよ」
永原先生がポジティブに言う。でもあたしの不安は解消されない。
「でもあたし、こんな歪んだ気持ちに支配されて……ブスになって……浩介くんに嫌われちゃうんじゃないかって怖いのよ」
「……うん、石山さんがそう思うのも無理はないわね」
永原先生がうんうんと頷きながら言う。
「この感情……捨てればいいのか、今悩んでいて……」
「……それはもう、石山さん次第じゃないかしら？」
「え!?」
「もし篠原君に嫌われたくないなら、理性を常に意識するといいわよ。逆に女として奔放に振舞いたいなら捨てなくてもいいわよ。多分捨てなかったとしても、篠原君は石山さんを見捨てないわ。どちらを選んでも『女として』の選択になるわよ」
難しい問題。今までは女としてか男の名残に任せるかだったから簡単だった。今回はそううまくいかない。
「あたし、自分の中だけじゃ判断できなくて……」
「うん、だから相談したんでしょ？　でもね、女の子として一人前になった石山さんだからこそ、この問題は自分の意志で決めてほしいことよ」
「うーん……」
「……でも一つだけヒント。この問題、もし木ノ本さんだったら『捨てる』を、もし田村さんだったら『捨てない』を選ぶと私は思うわよ」
そ、そうよね。あたし、浩介くんに好かれる女の子になりたい！

キレイになりたい！
　あたしの心の中で、女として堕落する気持ちに対して、好きな男の子にもっと好かれたいという気持ちが勝った。
「あたし……やっぱりこの気持ちは捨てるわ！」
　あたしが決心する。
「ふふっ、石山さんなら、そう言ってくれると思っていたわよ……さ、今週の日曜日、待っているからね」
「うん……失礼します」
　あたしは永原先生にそう言うと、天文部へと急ぐ。

「あ、優子ちゃん！」
　相談室から出ると、浩介くんに声をかけられた。
「あれ？　浩介くん、どうしたの？」
「あ、いや……優子ちゃんが相談室に入っていったから何か悩み事かなと思って……」
「あーうん、実はあたし、日本性転換症候群協会の正会員になることになったのよ」
　相談室での相談内容は違う内容だけど、多分大丈夫。
「お、そうなのか!?　何かよく分からねえけどすげえな」
「う、うん……本来は２０歳以上なんだけど、あたしは特別なんだって。今度の日曜日に本部に招かれることになったのよ」
「お、そうか。じゃあ今週のデートは中止だな」
「って浩介くん、日曜日は元々デートの予定してないじゃん」
「おっとそうだった」
「ふふっ……それじゃあたし、天文部に行くわね」
「うん、いってらっしゃい。俺、また筋トレして待ってるから」
「あ、そうだ！　浩介くん、どうせなら天文部で筋トレしていけば？」
　あたしがちょっと提案する。浩介くんとなるべく一緒にいたいというのが本音だけど。
「え!?　俺が筋トレして邪魔にならないかな？」
「ううん、むしろ持て余してるくらいだから。あたし、浩介くんとなる

べく一緒にいたいなあ……」
ちょっと顔が赤くなる。
「う、うん……分かった！」
そう言うと浩介くんが天文部へついてくる。
コンコン
「入っていいですわよ」
坂田部長の声とともに、天文部へ入る。
「あら、篠原さん、いらっしゃい」
「あ、あの……俺！」
「浩介くん、筋トレしたいみたいなんです」
「あらあらいいですわよ。ちょうど部室も持て余し気味ですから、筋トレは構いませんわ」
坂田部長があっさり承諾してくれる。
「それで、石山さん、永原先生が会長を務めていらっしゃるＴＳ病の会に呼ばれたんですって!?」
「え、ええ……」
もう広まってる。まあいいけど。
「ふふっ、頑張ってくださいね」
「は、はい……」
天文部はほぼ後片付けは終わっている。というより、展示物を隅に追いやるくらいだから、本当にすぐに終わってしまう。
ザ・シンプル・イズ・ベストという感じ。
桂子ちゃんが、近傍惑星の位置関係を立体図にして残しているくらいだ。
これを使えば、来年にも文化祭の展示物を使いまわせるという。
「1……2……3……4……5……6……7……8……」
浩介くんは黙々と腕立て伏せしている。というかめっちゃ早い。
「あらあら、篠原君かっこいいですわね」
「ちょっと、坂田部長！　あたしの浩介くんだから！」
「分かってますわよ。それに私じゃ石山さんに勝てる気がしませんわよ」

坂田部長が言う。
そう思ってくれるうちは大丈夫かな？
あたしはミスコンで優勝だし、何より「おばさんにならない」というアドバンテージがあるけど、それでもちょっとだけ不安になってしまう。
「13……14……15……16……17……18……19……20……」
一方で浩介くんは殆ど乱さずに腕立て伏せを続けている
あたしたちは、部室に部外者が一人増えた状態で、賑やかに天文部を再開した。
今日やったのは、太陽近傍恒星の距離のメモだ、この星は太陽から何度の方角に何センチと言った具合でひたすら計測とメモを取り、それが終わったらセットを部室の奥にどける作業だ。
精密な計測が要求されたから結構疲れた。精神的に。

「ただいまー」
「優子、おかえりなさい」
「うん、ただいま。ちょっと疲れたから休むわね」
「優子、永原先生から日本性転換症候群協会だっけ？　そこの正会員に呼ばれたって電話があったわよ」
「え!?　母さんに連絡したの!?」
「当たり前でしょ。それでね、当事者の家族も一応『家族会員』ということで入れるのよ。私達は今まで保留にしてたんだけど、優子が正会員なら私とお父さんも入ろうってことになったわ」
どうやら、母さんサイドの方でも話が進んでいたみたいだ。
「それで、日曜日はお母さんも一緒にいくことになったから、そのつもりでいてね」
「は、はい……」
急転直下に物事が決まりすぎてて、ちょっと動揺してしまう。
「じゃああたし、休むから……色々あって疲れちゃって」
「無理も無いわね。ご飯になったら言うからゆっくり休みなさい」

「ありがとう……」
ともあれ、今までのあたしの中ではＴＳ病と言うとあたしと永原先生しかいなかった。
それ以外のＴＳ病の患者と直接に会ったことはない。
それだから、あたしが「優等生」と言われても、理屈では分かってもそこまで実感がなかったのも事実ではある。
それが、日曜日、あたしはまた価値観が変わる。
そんな気がした。木金土と、浩介くんと今までとそこまで変わらないカップル生活を楽しみながらも、「早く日曜日にならないかなあ」と思いながら、学校を過ごした。

# 協会本部　前編

ピピピピッ……ピピピピッ……

日曜日なのに目覚まし時計が鳴る理由。

それは今日、あたしが永原先生に呼ばれて「日本性転換症候群協会」の本部を訪れることになっていたから。

あの後詳しい待ち合わせ場所を検討した結果、地下道直結だけど場所が場所なので協会本部の最寄り駅の改札口Ｎ４番出口前ということになった。

あたしと同じ病気の人で集まる会の本部へ行くために、今日の服を考える。

少女性を強調した赤い巻きスカートにするか、それとも、清純さをアピールした白いワンピースにするか？

はたまたラフに女の子をアピールするために、水色のミニのワンピースにするか、あるいはいっそ礼服代わりに制服にしてしまうか……？

うーん……うーん……悩む。

事前に永原先生に相談しておけばよかったと悔やむが時既に遅し。

コンコン

「優子ーどうしたの？」

なかなか起きてこないあたしに、母さんがノックする。

「ああうん、服装で悩んじゃってて……」

「入っていい？」

「う、うん……」

ガチャッ

「着ていく服でしょ……優子がかわいいと思う私服でいいんじゃないかな？」

「うーん……」

「優子が今までこだわってきた『少女性』を少しアピールしてもいいかもしれないわね」

なるほど。

「う、うん……じゃあこの赤いのにする……後はぬいぐるみも持っていこう」
「あら、いいわね」
いつぞや、ミスコンの私服審査でのアピールをした時のような格好になる。
何だろう、やっぱり何だかんだで、この赤い服があたしの勝負服になってる気がする。
ともあれ、着替える服が決まったので母さんには一旦部屋を出てもらい、赤い服に着替える。
トレードマークとなっている頭の白リボンも忘れてはいけない。
もう一度、姿見で見る。うん、これなら協会の人も満足してくれるに違いない。
あたしはそう思い、くまさんのぬいぐるみを持って、鞄を肩にかけて部屋を出る。
「あら優子、かわいいわね」
「えへへ」
「ぬいぐるみ持つとやっぱり違うのね」
「うーん、やっぱりそう見える？」
あたしが聞いてみる。
「うん、その服は幼く見えるけど、ぬいぐるみ持つと相乗効果がすごいわよ」
「よかった」
文化祭のミスコンで、永原先生が「永遠の美少女」と言われていた。もちろん、まだイメージつかないけどあたしだって「永遠の美少女」だし、そういう意味でも幼く見えるのは悪いことじゃない。
「さて、時間もあるから朝ごはんにするわよ……じゃあ優子、手伝って？」
「はーい！」
いつものように、母さんと朝ごはんを作る。
そういえば、そろそろ「一日優子に家事をやってもらう」って日があるって言ってたけど、どうなったんだろう？

……まあ、待っていればそのうち来るかなあ。楽しみでもあり不安でもある。

「お、優子、それミスコンの服じゃないか」
「あ、お父さん、あたし今日永原先生に呼ばれてて」
「ああ、協会の正会員だっけ？　すごく名誉なことじゃないか」
そうなのかな？　確かに特例とは言ってたけど。
ともあれ、今は朝食の準備に集中する。一度に複数のことを同時にしやすくなった身だけど、それでもあまり並行作業をしないほうがいいのも確かだ。
「ところで優子、そこの会員になって今後はどうするつもり？」
「うーん、まずは小谷学園を卒業してからかなあ……会についてはその後よく考えるよ」
とりあえず今は学園生活のことを中心に考えて、ＴＳ病患者たちの会合への参加はその後考えることにしようかな？　まだ正会員についてもよく分からないし。
「いただきます」
「「いただきます」」
朝食を並べ終わり、３人で「いただきます」をする。一応家族会員の一員になる父さんはいつものように書斎で休ませて月曜日の仕事に備えさせる予定だ。
「優子、もう少し時間があるから歯を磨いて少し休みなさい」
「はーい」
あたしは洗面所で歯を磨きながら再び考える。
今はとりあえず、この服をほかの人が喜んでくれるかどうか、だ。
そもそも、他のＴＳ病の人ってどういう人なんだろう？　２番目に年上の人でも永原先生の半分以下の年齢って言ってたけど、蓬莱教授の話では２５年前の研究の時点で１２２歳を大きく超える年齢の患者が永原先生以外に２人いた事になっている。
つまり１４７歳を大きく超えるという意味だから、明治元年がえっと……１４９年前だから江戸生まれが少なくとも２人いるというこ

とかな？
……まあいいか。本部に行けば分かるだろうし。
「優子ーそろそろ行くわよ！」
「はーい！」
母さんの声とともにあたしは鞄とくまさんのぬいぐるみを持って玄関へ。
ぬいぐるみを持っていると片手が塞がってしまうので色々と工夫が必要になる。
今日は母さんもいるから玄関の鍵などは母さんに閉めてもらうことにする。
母さんもそのあたりは分かってくれるみたい。
「日本性転換症候群協会」の本部は学園とは反対方向、区役所の最寄り駅よりも更に先、あたしたちが住む「政令指定都市」の更に奥の、「特別区」と呼ばれる都会のビルの一室にある。
周囲の視線がやっぱりすごい、真っ赤な服で、しかもこの顔、この胸、テディベアのぬいぐるみまで抱えているんだから目立たない訳がない。
今まではあたしは「どうせ何着ても目立つ。それでどうやったって男の視線にさらされる」というある意味諦めに近い感情もあったけど、さすがにもう少し節制するかなあ……
……いや、女の子らしく堂々としないと、背筋曲がったりしちゃうかもしれないから、このままでいよう。
ただでさえちょっと猫背気味で肩もこってるし。
「間もなく電車が参ります」
いつものアナウンスとともに、電車に乗る。日曜昼間とあって電車はやや空いている。
あたしと母さんは端の3人がけの席に座る。
「優子、やっぱり視線がすごいわね」
「えへへ。もうすっかり慣れちゃったよ」
「あらいいことね。かわいい子の中にはちやほやされすぎて目立たな

くなりたくなっちゃう子もいるのよ」
そういう意味では桂子ちゃんは結構特殊かもしれない。
電車は役所の駅から更に先へ進む。こちらもあんまり来たことがない。
区役所の駅を過ぎて、またさらに多くの駅を過ぎる。
全ての駅で、それなりのまとまった人数が乗り降りし、あたしたちも、目的地の駅が近付くと座席を立ってドアに向かう。
あの電車はこの「特別区」を過ぎて、向こう側の都市まで行くらしいが、あたしたちが行ったことのない街だ。
その後は地下鉄を乗り換えて都会のターミナル駅に着く。
「確かＮ４番出口だっけ？」
母さんが訪ねる。とにかく人がうじゃうじゃいる場所で、迷わないように注意しないといけない。
「うん、そうだよ……あ、そうだ。チャージしないと」
あたしはＩＣカードの残金が少ないことを思い出し、精算機へと軌道修正する。
「ぬいぐるみは母さんが持っているわ」
「ありがとう」
母さんに荷物を預けたため、清算の処理は早く終わる。
改札機は片手でも可能なので、ぬいぐるみを返してもらい、通り抜ける。
「えっと……Ｎ４番出口は……こっちね」
駅の案内に沿って進む。出口が分かれるたびに、他の客がそちらに行き、人が減る。それでも多い。
やがて、出口が２つの分岐点に到着する。Ｎ４番出口とＮ３番出口との分岐点、更に奥に進むと別の駅にたどり着く。
あたしたちは、Ｎ４番出口に進む。
「あ、石山さんいらっしゃい。お母さんも久しぶりです」
エスカレーターの上、地上に出ると永原先生が声をかけてきた。

夏の海や林間学校などの限られた場面でしか見たことのない、永原先生の私服姿。
そう言えば、文化祭の時に母さんたちいたけど永原先生とは会わなかったのかな？
「こちらこそ。先生も、ミスコンではうちの娘を大分苦しめてくれたみたいでして」
母さんが自慢の娘に立ちはだかったライバルとして永原先生を睨みつける。
あたしには、母さんの気持ちが痛いほど分かる。
もし、母さんの気持ちが理解できなければ、あたしはここにいない。
「あはは、でも結局石山さんに負けちゃったよ……」
「そうね、お母さんびっくりしちゃった。先生ったら泣いてたものね」
「うんうん、あたし、永原先生の泣き声聞こえてきたよ」
「あ、あはは……」
永原先生が恥ずかしそうに苦笑いする。
でも本当に悔しそうに泣いてたのが印象的だった。
考えてみれば、女の子になってからというもの、他人と張り合うことが本当になくなっていた。その意味でも、今回のミスコンは自分を他人と比較させて見つめ直すという意義としても大きいものがあったわね。
「さて、そろそろ行きましょうか」
「あ、そうですね」
永原先生と母さんは、世間話を早々に切り上げる。
「こっちです」
永原先生が大きな道を進み、すぐに左に曲がる。
そしてすぐ近くの一つの大きなビルの手前で立ち止まった。
「こちらがあたしたち日本性転換症候群協会本部のあるビルです」
「うわあ大きいー」
「あはは、もちろんテナントの一室だよ」
ですよねー
ビルの中は日曜日だと言うのにスーツを着たサラリーマンだらけ。

あたしたちは確実に浮いている。
「私たちは４９階になるわよ」
ビルの入居テナントの案内があって、そこには確かに「日本性転換症候群協会　４９Ｆ」と書いてある。
「結構上層ですね」
「うん。前の本部から移転した時はこの階のこのフロアだけが空いていたんです」
ビルのエレベータは８基１セットで運用されていて、それぞれがセットごとに４セットある。
見てみると１８階までの低層用と、１７階から３１階までの中層用、３１階から４３階までの上層用、そして４３階から５３階までの最上層用の４セットある。
つまり、あたしたちが乗り込むのは４３階から５３階までの最上層用のエレベータになる。
休日出勤しているスーツ姿のサラリーマンも何人か乗り込んでくる。
ちなみに、この他にも最上階へは直行エレベータがある他、「非常用」という名目で、全階各駅停車の巨大エレベータもあるのだそうだ。
永原先生が４９のボタンを押す。
他の人が４４と５１のボタンを押す。
「ドアが閉まります……Ｃｌｏｓｅ　ｄｏｏｒ」
ドアが閉まると、今まで体験したことがないような勢いでエレベータが登って行く。
数字の変化が半端ないのに、揺れは今まで乗ってきたエレベーターよりも少なく、むしろ本当に登っているのか不安になってしまうほどだ。
やがてエレベータが急減速し、さすがにブレーキ感を感じつつ、速度がゆっくりになる。
「４４階です……４４ｔｈ　ｆｌｏｏｒ」
ビジネスビルのためか、アナウンスは英語も流れている。
サラリーマンが２人出てから、エレベータは４人になり、永原先生

が「閉」のボタンを押す。
今度は先ほどよりゆっくりしたスピードで４９階へ。永原先生に続いて、あたしと母さんも出る。
直前になって緊張してくる。一体、どんな人が居るんだろう？
「石山さん、緊張してる？」
「う、うん……」
「大丈夫、私よりインパクトある人はいないわよ！」
まあそりゃあ、永原先生が一番年上で、２番目の人の倍以上生きてるわけだもんね。
「さ、こっちよ」
永原先生がビルの中を歩く。１つの階層ごとにテナントは数区画あってそのうち１区画を除いて残りの区画は全て他の会社のテナントになっている。日曜日で一斉休日なのか物音一つしていない。
そして最後の１区画、扉の前の案内板に「日本性転換症候群協会本部」と書かれていた。
「ちょっと待っててね……よし、あった」
永原先生がカードのようなものを取り出し、玄関の機械にタッチする。
「ピピッ」という音のすぐに「ガチャッ」という小さな鍵が開いた音がする。
「さ、入って」
永原先生がドアを開けたまま支えてくれる。まず母さんから、続いてあたし、最後に永原先生が入ると、オートロックなのか再び鍵がかかる音がした。
奥から女性……というより、ほとんどあたしや永原先生と変わらないくらいの「少女」と言っていい外見の女の子が現れる。
とはいっても、外見年齢は母さんを除けば一番年上に見える。
「あら、会長！　お待ちしてましたよ。ということはその子が？」
「うん、今回正会員に推薦した石山優子さん。私の教え子でもあるわよ」
「あらあら、おめかししちゃってかわいいわね！」

「あ、ありがとう……」
　もう言われ慣れた言葉、でもＴＳ病の先輩に初対面で言われるのはやっぱり嬉しいわね。
「こちらが副会長の比良さんです」
「紹介にあずかりました比良道子（ひらみちこ）です。元水戸藩士で江戸時代に尊皇攘夷運動をしていました、これからどうぞよろしくお願いします」
「よ、よろしくお願いします。比良さんが２番目に年上なんですか？」
「ううん、比良さんは３番目、存命の人にもう一人、比良さんの７歳年上の人がいるわよ」
「え？　副会長さん、年功序列じゃないんですか？」
「ああうん、比良さんは士分だからね。私は途中まで曖昧な地位だったけど」
　なるほどねえ……現代なのにそういうことを気にするのか。やっぱりＴＳ病の人ってすごいわね。ってあたしもその病気なのよね。
「そうねえ、私が天保１１年の生まれだから今年ちょうど１７７歳よ。誕生日は旧暦で７月２３日ね」
　蓬莱教授が永原先生と初めて会ったのが２５年前、つまり１５０歳以上かな？
　確かにインパクト強いけど、５００歳近い永原先生に比べると随分と若く感じてしまう。
「永原先生が４９９歳だから３２２歳も離れてるの!?」
「うん、だからこそ、私が生きてるのは奇跡なのよ。太平の世はＴＳ病の人も逃げにくかったってことよ。かと言って乱世でも、よっぽど運が良くないと生き残れないのよ。そういう意味では、今のＴＳ病の子は恵まれているわね」
　この病気になると、明治初め頃まで不吉として殺されていたという話を思い出す。
　永原先生は、本当に波乱万丈な人生だった。
　……ってまだまだ永原先生の人生は続くんだよね。
「私も幕末のどさくさまぎれて逃げ切れたけど……今は、江戸時代生まれは５人しかいないわよ。明治、特に明治３０年以降の生まれは結

構たくさんいるんだけどね」
　比良さんがしみじみ言う。
「でも戦国生まれの永原先生入れて６人かあ……発症例全体で言えばまだまだ少ないよね」
「この病気は１３００人の発症例が有史以来あるわね。不吉で殺されたとか男に戻りたくて自殺したとかもあるから、本当に１００年生きられるのは一握りだし、ここの会員の人口はＴＳ病全体では２割位よ」
「本当に狭き門なのね」
　母さんが話しに割り込んでくる。
「あーでも、会員見込み……石山さんも含めてそういう人を含めれば２割５分位にはなるんじゃないかな？」
「そうね。そのくらいかしら」
「それでも、長生きする人は少ないなあって……残りの７割５分は……」
「そうね、１０年以内に早死した人よ」
　比良さんがそう言う。
「……実は１００年前の協会創立時には、江戸生まれは戦国生まれの私を除いて７人いたんだけど１人は自殺で、もう１人は交通事故で死んじゃったわね」
「自殺？」
　１００年前と言っても江戸生まれなら結構な歳のはず。
「うん、家族持っていたんだけど、旦那さんがどんどん老けていって子供が独立した後に旦那さんと心中しちゃったわ」
「……」
　あたしも他人事じゃないように聞こえる。浩介くんに入れ込みすぎると、そうなっちゃうんじゃないかって。
「石山さん、大丈夫。それは特殊な事例よ。みんな自分なりに割り切れるようになるから」
「そ、そう……」
「そうよ、今は恋人との人生を楽しみなさい」

比良さんも優しそうに言う。
でもあたしは、まだ希望を捨てきれない。
夏休みのある日を思い出す。それが何かちょっと思い出せない。

# 協会本部　中編

「石山さん？　どうしたの考え込んで？」
　考え込んでいたあたしに、永原先生が声をかける。
「ちょっと思い出したいことがあって……」
「そう？　ゆっくり考えてみて」
　夏休みの日のことを思い出す。水族館で浩介くんとデートしてて、蓬莱教授と出会った。
　そういえば、蓬莱教授の話。あたしに何か意味深なことを言っていたことを思い出す。
「あ、あの……」
「うん、石山さんどうしたの？」
「う、うん……実は夏休みに浩介くんとデートした時の事なんです」
「ん？」
　あたしは思いきって蓬莱教授と出会った話をする。
　その時、蓬莱教授が何か意味深なことを言っていたこと。それについては詳しくは思い出せないことを話す。
「なるほどねえ……」
「会長、あの人は、信用できません」
　比良さんが強めに言う。
「ええ、それは分かっているわよ」
　永原先生が言う。
「そういえば、永原先生、蓬莱教授とは仲悪くないって――」
「そうね。近くで勤務しているし、高校と大学という違いはあるけど、共に人に教える職業をしているもの。働いた帰りにばったり会ったりもするわよ。友人としてはいい人なんだけど、日本性転換症候群協会の会長としては、警戒せざるをえないのよ」
「複雑な関係ということですか？」
　あたしが言う。
「そうねえ……それに日本性転換症候群協会としても警戒しつつも友好関係も維持しなきゃいけないのよ」

「協会としても、年齢証明をしてもらった恩義もあるし、蓬莱先生からは膨大な寄付を貰っていて貴重な運営資金にもなっているのよ」
　比良さんも説明してくれる。
　それだけの恩義がありながらも、どこか信用ができないという。なんか国際情勢みたい。
　しかしノーベル賞の賞金だってそこまで多いわけではないのに、どこからそんな財産が出ているんだろう？

「実は蓬莱教授のノーベル賞のきっかけになった難病治療法も私の遺伝子を使ったものなのよ。ただ、その時の遺伝子提供は資金援助の見返りという意味もあったんだよ」
「あの人、何を考えているのか分からないから、怖いのよ」
　比良さんが本音を言う。
「とは言え、ノーベル賞学者が私たちの病気を研究してくれているのはありがたい話よ。ＴＳ病の原因遺伝子は未だに掴めていないし、どうして日本人に多いのかとか、そういうことも分かれば、対策を取りやすいもの」
「そうね」
「実は、蓬莱教授なんですが……ノーベル賞を取った研究を脇道だって言ってました」
　あたしが言う。
「……あの人なら、そう言うでしょうね」
　比良さんが言う。
「ええ、蓬莱教授のＴＳ病研究の目的は一部の病気を克服することじゃないって言ってました」
　永原先生が言う。
「どういうことです？」
「……酒の席で言ってました『俺はこの世に存在するあらゆる病気・障害を完治させることが出来るようになることが目的だ。手段は選ばん』と」
「ええ、あの人の辞書に、生命倫理という言葉はありませんもの」

やはり、学会で揉めているというのはそういうことだったのね。
「そう言えば、不老研究って言ってましたよね？」
おそらく、蓬莱教授の溢れる自信もそこから来ているはずだし、難病研究を「脇道」と言い切るのもそのためだ。
「ええ、ですが、果たして蓬莱教授が生きているうちに出来るでしょうか？」
比良さんが疑問を言う。
「そうねえ、私も無理だと思うのよ。あの人本当に頭の回転が速いのよ。その天才蓬莱教授をもってしても、ＴＳ病の原因遺伝子さえ掴めてないのだからね」
「ええ、私も永原会長と同意見です」
やっぱり世の中そううまくいかないみたいね。

「さ、私達の話もいいけど、入会手続きに入っていいかな？」
「あ、うん……」
「ええ、それで来たんですから」
あたしと母さんが言う。そう、本題はこっち。
「えっと、じゃあまず石山さんの正会員から。正会員というのは、重要な問題において話し合う正会員の集会での議決権がある会員ってこと。といっても、あんまり会全体の方針はないわよ」
「あるとしたら、『私達を普通の女性として扱って欲しい』ということくらいかな？」
比良さんが付け加える。
「それは以前聞いたので大丈夫です」
実際、それをしてもらえなくて、あたしは何度も苦労させられた。
「その様子だと、会の根本理念に異議はないみたいね」
「比良さん、異議ある人を私が１７歳で正会員に推薦すると思っています？」
永原先生が思わず突っ込む。
「そ、そうでしたね。すみません。服だってこんなに少女性強調してるのに……」

「うんうん、ぬいぐるみまで抱いてくるんだもん、びっくりしちゃった」
ふと何の気なしに窓から外を見る、ここは超高層ビルが立ち並ぶ場所だが、その中でもこのビルは一際大きく、同程度の大きさのビルは数えるほどしか無い。
外では、窓拭きの作業員がかごを使って窓を拭いていた。高所恐怖症には絶対できない作業だ。
「一応知っているとは思いますが、正会員になるということなので確認しますね……普通の女性として扱ってもらうために、私達はどう主張すればいいですか？」
比良さんが訪ねてくる。あたしはもちろんこの問題の答えを知っている。
「……一番最初の、見た目の第一印象で決めて欲しいということです」
あたしが答える。
「うん、模範解答ね」
永原先生から以前聞いた話だ。
「ところで、ここには女性しかいないから言いますけど、石山さん……男性の『アレ』は好きですか？」
「え!?　あ、あの……は、はい……興奮してしまいました」
永原先生にいきなり言われてびっくりする。正直浩介くんのを想像するだけで濡れちゃう気がする。
「あらあら、優子いつの間にそんな所まで来てたのね……お母さん嬉しいわ」
母さんが感激したように言う。
女の子しかいない空間とは言っても、やっぱり恥ずかしい。
「あら、もうすっかり女の子ですね」
比良さんがニッコリと言う。
「え、ええ。それを目指してここまで来ましたから」
「ところで、石山さんはもう彼氏としちゃったりしているの!?」
「あ、あの……まだ……」
誘惑したことはあったけど、浩介くんの理性が勝っちゃった。

「あら、じゃあ誘惑したことは？」
「あ、う、うん……あります……」
　恥ずかしいのに、つい言ってしまう。
「珍しいわねえ、こんなにナイスバディでかわいい子に迫られたら大抵の男は理性なんてなくなっちゃうのに」
「あはは、触られたりとかはしたんだけど、『ちゃんと責任取りたい』って言われちゃったよ……」
「あらあら、立派な彼氏さんねえ……どんな人なんです？」
「クラスメイトの篠原浩介くんって言うんですけど――」
　永原先生が浩介くんの紹介をしている。
　時折あたしが補足説明する。
「あらあら、本当にいい彼氏さんねえ。それにしても夏の時は随分苦しんだのね」
「う、うん……」
　あの頃はまだ、浩介くんに触れ合うと、本能的な拒絶があって、それで大層苦しんでいたのだ。
「もしかして本能のことかな？」
「は、はい……」
「あの……会長、本当にこの子、発病から半年後の患者なの？　私信じられないんですけど……」
　比良さんが心の底から疑問を持っていう。
「ええ。石山さんが倒れたのは５月８日の午後ですよ」
「ということは、５月９日がＴＳ病の日ね。石山さん、誕生日はいつかしら？」
「６月２２日です」
　１７年前に優一として生まれた誕生日を答える。
「そうねえ、石山さん、５月９日はあなたのもう一つの誕生日よ」
「は、はいっ！」
　もう一つの誕生日。あたしが優子になった日。
　最も、正式に改名したのは確かもう少し後だったはずだけど。でも身体が女の子になってから優子というのがあたしの認識だから問題

ない。
「誕生日、いいわねえ……私はもう誕生日なんて覚えていないわ」
　永原先生がしんみりと言う。
「確か1月1日にしているんだっけ？」
「ええ、毎年1月1日に年をとるということにしているのよ。だから最悪１２月３１日しか私が思っている満年齢と本当の満年齢が一致することはないわ」
「数え年でも1月1日でしたっけ？」
「ええ、生まれた歳を1歳からスタートするから満年齢とは1歳から2歳ずれるわね。数えだと私はもう５００歳だよ」
　永原先生は１５１８年生まれだから２０１７から１５１８を引くと４９９歳、数えだと1歳からスタートして５００歳ということになる。
「さて、話を戻しますけど……私、まだ信じられません。少なくとも3年は経っているわよこの子」
「私だって信じられないわよ。だから１７歳で正会員に推薦したのよ」
「そうよねえ……」
　比良さんが納得したような表情でうんうん言う。
「ＴＳ病になってどう思っているの？」
「あの、あたし……この病気のお陰で救われたって思っているわ」
「あら！　そんなことを言う患者なんて殆どいないわよ。私も会長もこの病気、呪いでしか無いわよ」
　比良さんも永原先生と同じように言う。
「石山さん、どうして『救い』なのか、石山さんの口で説明してあげて？」
「は、はい……それは――」
　あたしはＴＳ病になってからのこと、ＴＳ病になる前のクラスの状況を説明した。
　女子グループは分裂していて、男子は短気で怒鳴り込む優一に怯えながら過ごしていたことをまず話す。

優子という名前に決めた理由も話した。
優一が優子というのは決して適当に決めたわけではないということ。今度は始めから終わりまで優しい子になりたいというあたしの思いで付けたこと。
女の子になるためのカリキュラムの思い出、永原先生が優等生と褒めてくれたこと、復学当初に起きた男子扱いのいじめのこと、あたしが大泣きしてしまってやがて受け入れられたこと。
こうして、女子グループも一つになり、やがてあたしは自分をいじめていた男子の一人に守られて、そして恋をした。
浩介くん自身は、あたしよりも前に好きになっていたみたいだけど。
あたしを女子とも男子とも付かない扱いをした小野先生と教頭先生を撃退した時の話は永原先生があたしの話を遮って雄弁に語っていた。
永原先生曰く、「小野先生はもう完全に私の手駒になったわ」と言っていた。
学校ではなかなか見えない、永原先生の感情。
林間学校で浩介くんに恋をしたことも話した。山登りの時、花火大会の時、そして最終日にナンパから守ってくれたことで、あたしが恋に落ちたこと。
永原先生の初恋の話は、多分比良さんにも話していないことだから、うまく話を飛ばした。
具体的には「新幹線で帰った」の一言で済ませることで回避した。
ちなみにその時、浩介くんにキスしようとして拒絶反応が出たこと。そして先の文化祭までそれと戦っていたこと。
そのため、浩介くんと恋人になれたのは最近のこと。
後夜祭の時、浩介くんに告白され、キスをして恋人になり、永原先生に渡されたＵＲＬの紙を見て、そしてそれに興奮したことであたしは女の子として独り立ちできたこと。
そして、ミスコンで優勝したことも付け加えた。
その時、あたしに邪悪な感情が芽生え、永原先生との相談の上、な

くしていこうと決意したことも伝える。
「あらあ、やっぱり石山さんも、男性に好かれる女になりたいの？」
「うん」
「それはいい心がけね」
「ありがとう」
　比良さんが褒めてくれる。
「でも、もう一つの選択肢を取るのも、決して悪いことじゃないのよ」
「そうなんですか？」
「ええ、ありのままに生きるというのも選択肢よ。もちろん、石山さんにとっての『ありのまま』っていうのは、男の子、その彼氏に好かれたいっていう気持ちに忠実になることだと思うけどね」
「は、はい……あの、あたしの話はここまでです。先週の水曜日に、永原先生に正会員に推薦されてここにいます」
「そう、分かったわ。じゃあ石山さん。この書類を書いてくれるかしら？」
　比良さんが一枚の紙を渡してくる。
　そこには「日本性転換症候群協会　正会員入会届」とある。
　よく見ると、既に「推薦人　永原マキノ」と書いてある。
「ここに住所と名前、それから電話番号に印鑑もお願い」
「はい」
　黙々と書いていく。
　会費については永原先生の建て替えなので、そこにも既に「永原マキノ会長の建て替え」と書いてあった。
「はい、それじゃあ晴れて石山さんも正会員の一員よ。定期会合は強制じゃないけど、なるべく出席してね。場所はここで全てやっているわ」
「とは言え、あたしはまだ新人なので、最初はあまり積極的な発言は控えようかな？」
「あ、石山さん。正会員の他に普通会員っていうのもあって、そちらはＴＳ病の人なら誰でもなれる会員なのよ」
「え!?」

「そう言えば、会員区分について話してなかったわね」
永原先生が会員の紙を出してくる。
それによると、正会員、普通会員、家族会員、維持会員、一般会員、メール会員というのがあって、会費無料は家族会員とメール会員だけだ。
基本的に会長を含め理事とか幹事とかになれるのは正会員だけ。普通会員は２５０人くらいいるけど、正会員の数はたった今入会したあたしを入れて１２人しかいないそうだ。
普通会員はＴＳ病の人なら誰でもなれるけど、ある程度落ち着いてから勧誘するという。
人によっては協会のことを調べて、すぐに入ろうとする人も居るけど、あまり推奨されているわけじゃないそうだ。
正会員は普通会員の中でも特に優秀と認められれば昇格出来るものらしい。とは言え、会費も少し高くなるから、辞退も可能だ。
「そういう意味で、いきなり正会員に誘われた石山さんは本当に異例中の異例ですよね」
比良さんが言う。
「ええ、そうね。会合での権限について説明するわね」
「基本的に会合ではメール会員を除く全ての会員に発言権と投票権があるわ。でも1票の重みは正会員が１０票で一般会員が1票、普通会員が3票、そして残りの会員は2票になっているわ。更に、正会員の過半数が反対すれば、問答無用で議決は無効になるわ」
「ふむふむ」
ちなみに、部外者も一応会合を見ることは出来るらしい。もちろん発言権も一切ない。
「それから、石山さんを正会員に推薦するかどうかのような重要な会合は正会員のみに投票権があるわよ」
会則の条項を見てみると、その会議でも正会員の推薦があれば他会員を同席させられるらしい。
その場合、発言権はあるが投票権はないという。
……って、よく考えるとあたしとんでもない権限を手に入れちゃっ

たような気がする。
「あらあら身構えている？　心配しないで。会長の私もサポートしてあげるから」
　といってもなあ……永原先生の票が増えるだけというのもなあ……まあ最初はそれでもいいかな？
「ええ、いきなり正会員というのも、創設時以来のことですから、最初は素直にサポートに頼るといいわよ」
「次の定例会合では、みんなに石山さんを紹介するわ。大丈夫、正会員の人はみんな石山さんのこと知っているわよ」
「ええ、私達から見ても、石山さんは模範ですから」
　会長と副会長が太鼓判を押してくれる。
「じゃあ次の会合……よろしくお願いします」
「年間の会合の日程はここに書いてあるわよ」
　あたしはもう一つ、この協会に疑問が湧いたので質問をしてみたい。

# 協会本部　後編

「そういえば、外国人の会員というのは？」
　いくら患者に日本人が８割を占めているからって、２割の外国人はどうしているのかわからない。
　あたしはふと、何の気なしに聞いてみる。
「ええ、いますよ。何ていってもＴＳ病の団体は世界でもここだけだから、何人かが普通会員になってますよ。ただ、普段は日本まで来てくれる人は少ないですから……会合には参加してないわね」
「ええ。あまりにも珍しい病気なので、日本以上に知名度自体がほとんど０に等しい国もあります」
　つまり、事実上ＴＳ病患者の行く末は日本人が決めているということになる。まあ、日本人に多い病気だからそうなるのかもしれない。
　ピピッ……ガチャッ
「只今戻りましたー」
　ふと、一人の女性がカードキーを使ってドアをあけて中に入ってくる。
　こちらもあたしたちと同じく、外見年齢１０代の童顔の少女。
「あら会長もいたのですか？　ところで、そちらの方たちは？」
　どうやら、やはり会員の１人と見受けられる。
「あ、余呉（よご）さん、この子が石山優子さん」
「まあ！　あの噂の!?」
　永原先生に「余呉さん」と呼ばれた女性があたしのことを見て驚く。
　ってやっぱりあたし有名なのか……
「うんうん」
「永原会長から聞きましたよ。協会始まって以来の優等生だって」
「い、言い過ぎですって……」
　あまりの褒め言葉に、照れくさくてあたしはつい否定してしまう。
「ううん、別に言いすぎじゃないわよ。たった半年でここまで来るのは本当に異例のことよ」
　比良さんまで同じことを言う。

「あ、あの、あたし……ただやりたいようにやっただけというか……昔の自分が嫌でこうしたかったっていうか――」
いきなり褒められたあたしが取り繕う。
「石山さん、それがどんなに難しいことか……そうね、ここの正会員として活動して、それを自覚するといいわよ」
永原先生が言う。
「ええ、私もそう思います」
「そうねえ、私も同感かなあ」
比良さんと余呉さんもうんうん頷いている。
「実はね、私が石山さんを普通会員じゃなくて、正会員に推薦したのも、既に正会員並みの優秀さを持っているからだけじゃないのよ。石山さんに、自分が恵まれていること、みんなの模範としての自覚も持ってほしいという気持ちも込めてよ」
「そ、そうなんですか？」
みんなの模範って……あたしこれでもＴＳ病患者の中じゃ一番年下だよね？
「そうね、これだけ若くして正会員ですから、得るものも多いと思います」
余呉さんが言う。
「あ！　そうそう、紹介が遅れたわね。この人が永原会長に次ぐ２番目に年上で、正会員の余呉さんです」
比良さんがそう言う。
確か１７７歳の比良さんの７歳上だから……１８４歳かなあ？
「はじめまして、余呉です。天保３年１２月生まれの１８４歳です。以降よろしくお願いします」
１８４歳と言うが、１８歳というのがパット見た感じの外見年齢。
あたしや比良さん、永原先生もそうだけど、みんなどこか幼い少女というような感じの女の子で、大人っぽい女性というのはいない。
「は、はい……それにしても……」
「どうしました石山さん？」
「何かＴＳ病の人って外見が似ているような？」

あたしが本音をぶつけてみる。
「あ、母さんもそう思ったわね」
「うん、一定の傾向はあるよ。なにせ不老だからね。といっても石山さんくらいの容姿の美少女はいないわね」
永原先生からお墨付きをもらった。やっぱりこの中に混ざってもあたしはかわいいらしい。
「ところで、余呉さんはこれからどうするの？」
「資料を取りに来ただけだからすぐに出るわよ。私の管轄で一人ＴＳ病になったっていう大学生がいまして」
あたしが倒れてから、まだ半年しか経っていないのにＴＳ病の患者が出たという。有史以来１３００人しか居ないといっても、昔は人口も少ないし、１億２０００万人もいればそれくらいのペースなのかな？
「……そうですか。とりあえず担当カウンセラーをお願いしていいかしら？」
「ええ、そのつもりです」
「最初のケアは大事ですから、気をつけてください」
「分かってますよ。では失礼します」
余呉さんは資料を取って、慌ただしく出ていった。
「ほらね、石山さん有名人でしょ？」
「う、うん……」
学校でも知らないうちに有名人になっていたみたいだしやっぱりＴＳ病ってインパクトあるのかな？
うん、常識的に考えてそうだよね。
でも、ＴＳ病の人が集まる会でも同じって……
「普通会員の人は知らない人もたくさん居ますけど、正会員の中で石山さんを知らない人はいませんよ。夏頃にはもう話題になっていたもの」
比良さんが言う。そんな前から噂だったのね。
「というか、永原先生が噂したからじゃ――」
「ま、まあねえ……でも、石山さんの成功例は今後の患者にも使えそう

なのよ」
「そういえばさっき余呉さんが言ってたよね、新しい患者が出たって」
「うん、去年は1人もいなかったんだけどだいたい毎年全国で3人か4人くらい新しい患者が出るのよ」
やはり人口比的にもそのくらいのペースで発生するものらしい。
「でも、長生きできるのは僅かってことよね」
ＴＳ病は自殺率が高い病気だ。
「それで、正会員の人の中にはああやってカウンセリングをする人もいるのよ……あ、もちろん石山さんにして貰う予定はまだないわよ……いずれはしてもらうかもしれないけど」
比良さんが説明する。あたしが今後のＴＳ病患者のカウンセラーになるのかぁ……まだ先の話とはいえ、なったら結構責任重大だ。
「そういえば、あたしは永原先生が担当でしたよね？」
「ええ。基本的に担当はいつまでとは決まってないけど、だいたい１２０歳位まで相談することが多いわね」
「ひゃ、１２０歳……」
「１２０歳と言っても、明治以前の生まれの人は滅多にカウンセリングは受けないわよ」
つまり、同年代がみんな死んじゃえば気持ちも楽になるってことなのかな？
「さ、次はお母さんの家族会員について説明しますね」
「あ、お願いします」
やや話から置いてけぼりだった母さんにようやくお鉢が回ってくる。
「家族会員は先程も説明したように、会費無料で会合への参加は可能ですが、正会員と比べると権限は制限されます」
会合にも参加でき、発言権・投票権ともにあるが1票の価値も変わってくるというのは先程の説明の通り。
「それでは、ここに名前を書いてください」
比良さんが出した書類、そこには「家族会員入会届」とあって既に「正会員石山優子の家族会員」と書いてある。

「ここにご両親の名前と続柄をお願いします。住所欄は『正会員・普通会員と同じ』でよろしいですね？」
「はい」
母さんが自分と父さんの名前、更に続柄で母、父と書き、年齢がある。
ちなみに、生まれの元号に丸をつける欄は、通常なら「大正・昭和・平成」となっているのに、この書類では「永正、天保、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応、明治、大正、昭和、平成」とある。永正は永原先生用で、天保は比良さんと余呉さんの生まれた元号かな？
「えっと、昭和だから……」
母さんもこれには驚いている。
「あはは、永正は私の、天保もここの２人の専用の元号だよ。あと、実は万延生まれのＴＳ病の人は誰もいないんだけどね」
永原先生が説明してくれる。
「永原会長はともかく、こういうのはインパクトも重要だから天保以降は全部省略せずにしているわ」
「天保の前って本当は文政だからそのあたりの説明が面倒なくらいね」
やっぱり永原先生ってすごい。
「そういえば、先生って元号いくつ渡ってきたんです？」
母さんがさり気なく聞く。
「えっと……永正、大永、享禄、天文、弘治……」
永原先生が指を折りながら暗証していく。恐ろしい数だ。
「……明治、大正、昭和、平成だから４９個だね」
「ひええ……」
「でも、昭和のように６４年続いたのもあるし万延は元年と２年だけだったりするわよ」
「そうかぁ、昔は元号よく変えてたんだよね」
明治以降に「一世一元の制」になったんだっけ？
「そそ、私が生まれた時の天皇が後柏原天皇で１０４代だから見てきたのは２２代よ」

それでも十分過ぎるほどすごいことよね。
「あ、書類全部書き終わったわよ」
そんなこんなで、母さんが書類を全部書き終わっていた。
「はい、これで石山さんのお父さんお母さんもここの家族会員よ」
「よ、よろしくお願いします」
母さんが挨拶する。
「ふう、これで入会の手続きもこれで終わりかな？」
「ええ、今日からは、石山さんは小谷学園の先生生徒だけではなく、日本性転換症候群協会の正会員としても、よろしくね」
「は、はい……ところで永原先生」
もう一つ気になることがある。
「ん？」
「正会員２０歳以上って言うことになってますけど、本当はもっと年長者ばかりなんじゃ――」
「ああ、うん。江戸以前の生まれはみんな正会員だし……明治からは普通会員も普通にいるんだけど」
「そうねえ、平成生まれの正会員は石山さんが初めてよ」
ですよねー
「ま、気負わなくても大丈夫よ。実年齢が行っていると言っても、見た目はみんなこんなだからね」
永原先生が言う。特に古い時代の人は、時代背景もあって小柄な人が多いんだとか。
「……それじゃあ、今日はもうすることないわよ。ありがとうね、貴重な日曜日に来てもらって」
比良さんが言う。
「いえいえ」
「ええ、あたしも最初の会合楽しみにしているわよ」
「じゃあ、帰りはエレベーターまで私が送っていくわね」
永原先生がドアを開けてくれる。
あたしは机に置いておいたくまさんのぬいぐるみを再び持ってから立ち上がる。

大事なぬいぐるみさんだし忘れたら良くない。
「ふふっ、ぬいぐるみを大事に持ってるのを見るとかわいいわね」
比良さんが言う。
ぬいぐるみ効果があったことを実感できるのは嬉しい。
うん、あたしはそれでいい。胸も大きいしやろうと思えば大人っぽい魅力も出せると思うけど、顔が童顔だし、何より浩介くんをはじめ男の子の好みを考えれば少女性の強い方がモテそうだわ。
「今日はありがとうね」
永原先生が再びお礼を言ってくる。
「うん」
そのまま3人でエレベーターまで到着する。
永原先生が下側のボタンを押すと、音とともにエレベーターの一つが光る。
するとそこの扉が開く。エレベーターの中には誰もいない。
永原先生が「開」ボタンを押しながらあたしたちが続く。
永原先生が1階のボタンを押して閉めると行きと同じようにアナウンスが流れ、そして恐ろしいスピードで階を降りていく。
途中の階には一切止まらずノンストップで1階に戻ってくる。
「それじゃ、私はもうちょっと仕事があるから……石山さん、また明日、学校で会いましょう」
「うん」
永原先生と別れ、ビルの出口へと向かう。ご丁寧に駅の案内もあるので、あたしたちは迷うこともなく駅に到着する。
電車の中で考える、あたしもついに正会員。
色々な意味で異例の抜擢になった。
永原先生の話を聞く限り、正会員というのは要するに「幹部」という意味だ。会社で言うなら「取締役」と言ってもいいかもしれない。
あたしは女の子になってから半年でここまで来られた。
でも、正会員と言わずとも、普通会員になれる人だって実は多くない。
この病気になると、大抵の場合は自殺してしまうという。

あたしは、きっかけがあったから良かったかもしれない。
優一の頃、あたしは乱暴の限りを尽くしていた。
でも、そうじゃなかったら？　あたしが、普通の真面目な男の子に育っていたら、きっと他の大半のＴＳ病患者と同じように女の子の生活に耐えられないまま自殺していたかもしれない。
あるいはうまくそれを回避したとしても、女の子になりきるにはもっともっと時間がかかったのは間違いない。
昔の自分を捨てたいとがむしゃらに思っていたからこそ、そのために女の子らしく女の子らしくと頑張って、永原先生からも褒められて、女の子として恋に落ちて、男の子と恋愛し、最終的には異例の抜擢まで受けられた。
今日も本部の人が言っていた、「女の子らしくしたいと思うことが、どんなに難しいことか自覚して欲しい」のだという。
電車の席で座ったまま足下を見る。
愛らしいくまさんのぬいぐるみを何となく優しく撫でる。
少女漫画にぬいぐるみやおままごとにはまるようになったのも、最初はもっと女の子の世界を知りたいという単なる純粋な好奇心だったようにも思う。
しかし、今はすっかりその魅力に取り憑かれてしまった。多分それはあたしの心が変わったから。
電車を乗り換え、そして自宅の最寄駅まで行く。
母さんとはあまり話さない。あたしは自分のこれからについて考えていたかった。
浩介くんともどうしよう？
このまま行けば、ここの会の人との付き合いのほうが浩介くんとの付き合いよりも遥かに長くなる。
比良さんや余呉さんだけじゃない。
明治生まれはもう１０５歳以上だから僅かしかいないしあの様子だと１２０年以上生きている人は他にもたくさんいるはず。
昔と違って現代社会は寿命以外ではそうそう死なない。今はあたしが１７歳で、比良さんが１７７歳、余呉さんが１８４歳で結構年齢

差があるように見えるけどだけど、例えば１０００年後はあたしが１０１７歳、比良さんが１１７７歳、余呉さんが１１８４歳になる。
そうなると、あんまり変わらないように見えてしまう。あ、でも永原先生は１４９９歳だからまだ結構年齢差があるように見えるわね。
むむむ……永原先生恐るべし……そりゃあ１００年前の創設時は余呉さんでも８４歳だったものねえ。その時の永原先生は３９９歳、うん、今よりインパクトは大きそうだ。
「優子、降りるわよ」
「あっ、はい！」
危ない危ない、危うく乗り過ごすところだったわね。

「ただいまー」
「お、優子にお母さんか。おかえり。どうだった？」
書斎にこもりっきりのはずの父さんが珍しく出迎えてくれる。
「うん、私も優子も特に問題なかったわよ」
母さんが答える。
「それは良かった」
「それじゃ夜ご飯作るから優子、手を洗ってしばらくしたら呼ぶから台所に来てちょうだい」
「はーい！」
あたしはまず部屋に戻りくまのぬいぐるみさんをベッドの位置に戻し、洗面所に行き手を洗う。
とりあえず、将来のことを考えすぎても仕方ない。

「優子ー！　手伝ってー！」
「はーい！」
母さんに呼ばれる。
そして今日も家事の手伝いをして、日曜日を過ごした。

月曜日、学校に登校するなり、浩介くんに捕まった。
「優子ちゃん、昨日、日本性転換症候群協会の本部に行ったんだって？

正会員、どうだった？」
「ああうん、どうも異例のことみたいよ」
「へえ、そうなのか！　教えてよ」
あたしは、あの日起きたことを浩介くんに教える。
永原先生の２番目に年上の人でも半分以下しか生きていないというのは本当だった。
浩介くんは改めて「やっぱりあの先生ってすごい人だよな」と言っていた。
「はーい、ホームルームはじめますよー」
いつものように、レディースーツに身を包んだ永原先生が教室に入ってくる。
今日は月曜日でこのまま永原先生の古典が始まる。永原先生もいる中だけど、あたしと浩介くんは気にせず昨日の話を続ける。

「……というわけよ」
「へえ、そうなんだ」
あたしの話は長く、途中朝のホームルームと1時間目と2時間目の休み時間を挟んで、ようやく話し終えた。
「ま、優子ちゃん頑張れよ」
「う、うん……」
朝のホームルームでは、これから１１月の体育祭に向けてのことを話していた。
この前まで文化祭だったのに、今度は体育祭。小谷学園は本当に忙しい1年を過ごしている。

# 体育祭への準備

「よーし、今日からはいよいよ体育祭に向けての準備だ！　まずは準備運動からするぞ！」
「「はいっ！」」
１１月最初の火曜日の体育の授業、開口一番に体育の先生が言う。
あたしはこの日、「女の子の都合」で見学になっている。本当は２日後くらいの、ちょうど女の子になって半年の日に来ると予想していたけど、やっぱり２日くらいは誤差範囲なのかな？
少し気分が悪い中で見学、でも今日着てくれたおかげで、１１月の体育祭には重ならないし、多分１２月の中間試験にも重ならない。
女の子になってから６回目だけど慣れることはない。毎回毎回お腹痛くなるし気分も悪くなるし、野菜食べたくなってどうしてもガサツな食べ方しちゃうし。
生理中だから仕方ないと思っていたけど、やっぱり女の子らしくないことをしちゃうのはどうしても自己嫌悪に陥ってしまう。
種目は綱引きや玉入れ競争、障害物競走や騎馬戦などなど、体育祭ではおなじみの種目がいくつかあるが、だいたい一人あたり２種目ないし３種目にエントリーすることになっている。
そして体育祭では紅組と白組に別れるわけだけど、あたしはもちろん浩介くんと同じ組がいいと思っていた。
もちろんまだ組分けは決まらないけど同じ組になるのは２分の１の確率。
ただ、体育祭であたしは懸念していることもある。
あたし個人としての問題というよりは、全体としての問題がある。
球技大会の時はハンデ付きだったが、あれは学園内部だけでやる大会で、外部の人は参加してないから問題なかった。
しかし、今回の体育祭は保護者など一般の人にも解放される。
そんな中でハンデ付きで出たら、「あの子障害でもあるのかしら？」と思われかねない。
何も知らない無関係の大人にそういうことを言われても、あたしに

は特に何かデメリットが有るわけではないとは言え、もしかしたら「モンスターペアレント」が現れるかもしれない。
そうでなくても、あの手の人種はちょっとしたことで文句をいうわけだから、球技大会のあたしのようにハンデという露骨な贔屓をすれば、間違いなくクレーマーが出てくる。
これは、林間学校の部屋割りとは全く次元の違う話だ。
あれは、見た目も性自認も女性そのものだったあたしがＴＳ病だというだけで隔離された問題だけど、いくら壊滅的な運動能力と言っても、身体障害者でもないあたしがハンデを貰ったら逆差別に見えるのは普通のこと。
しかし、だ。体育の授業を受けて痛いほど分かってはいるが、あたしの運動能力の低さは尋常じゃない。実際、球技大会を見た他の学年・クラスの生徒たちの中にも、「優子ちゃんは軽い身体障害なんじゃないか？」という人さえいるくらいなのだから。
しかもあたしの場合、優一の頃は運動能力に自信があったし、実際男子の中でも最上位の運動神経を誇っていたからそのギャップは余計に大きい。
優一の頃はあの浩介くんと張り合うくらいの力も、体力もあった。特に２０メートルシャトルランでは４月の体力テストで優一だったあたしは浩介くんを負かした。最も、今鍛えている浩介くん相手に勝てるかはわからないけど。
でも今は、女子の中でもとりわけひどい運動能力。だからもしハンデが必要となった場合、最初の種目でハンデが必要なことを周囲に示すしか無い。
もちろん、示そうとしなくてもハンデが必要と認識されるだろうけど、でもやっぱり色々と難しそうでもある。
もしハンデ無しで体育祭に出れば、当然醜態を晒して足を引っ張り、気まずい雰囲気になってあたしもひどく傷つくことは容易に想像がついた。
準備運動が終わったら今日は綱引きや騎馬戦の練習などで、それぞれ適正を見つけるのが今日の授業の目的なわけだけど、あたしは何を

やっても最低適正が目に見えているので、せっかくの見学ということもあって今のうちに体育の先生に相談しに行く。
「お、石山か。どうした？　ハンデの話か？」
「う、うん……」
「そうだろうと思った。今回の体育祭は他の保護者も見ているから、ハンデの実現は球技大会以上に高い」
「はい、分かってます」
　その答えはあたしも予想していた。
「だけど、かと言ってハンデ無しじゃ石山を入れたチームが負けることになるな」
「はい」
　うちのクラスだけ男子女子奇数だからそのあたりも難しい。
「とすると、玉入れ、綱引きというのはどうだ？」
「玉入れに綱引きですか……？　でもそれでも……」
「ああいや、チームの人数の合計を奇数にするんだよ。石山はプラスワンのハンデにする」
　やっぱり最後はハンデだ。
「あ、はいっ！　確かにそれなら面倒な調整がいらないわね！」
　綱引きなら、少なくともあたしのように「無能な味方」が居たとしても、マイナスになるということはない。
　玉入れにしても、動き回って味方とぶつかるとかでもない限りは、足を引っ張ることはないだろう。あたしの場合は、無能過ぎてそんな器用なことはできなさそうだ。
　これがリレーなんかになると、無能な味方がいるとその人1人でチームが負けたりするけど、そういう競技には出す必要はない。
　個人戦での１００メートル走とかでも、あたしだけ1人遅いとひどいさらし者になることを考えれば、出すのはダメ。
　そうなると、やはり綱引きと玉入れが妥当になる。
「そういうことだ。一人多いのは人数調整と実力の都合ということにすればいい」
「分かりました」

「よし、じゃあ見学を続けてくれ！」
「はーい！」
あたしはもう一度見学に戻る。
種目の練習で疲れていた女子のうち、恵美ちゃんと龍香ちゃんが休息ついでにあたしに寄ってくる。
「優子さん、体育の先生と何を話してたんですか？」
「あ、うん。あたしが出る種目について話してたの」
「ほう、優子、どれに出るんだ？」
「綱引きと、玉入れになったよ。これなら競技の都合上単純なプラスワンハンデだけで違和感がないんじゃないかって」
「……なるほど！　そうすれば優子さんでも違和感なくハンデ戦ができるということですか！」
龍香ちゃんがぽんと左の平手に右の拳を叩き、典型的な「なるほど」のポーズをする。
「だな、綱引きは単純な力の総合力だし、玉入れだって動き回らにゃいいだけだな。それなら優子でも足を引っ張ることはねえな」
恵美ちゃんがあたしと同じ考えを述べる。
「お、ちょうど綱引きするみてえだな」
「じゃあ優子さん、私達行きますね」
「うん、頑張ってね」
見学者のあたしと、今日は病気での欠席者が女子に2人いるので、女子の体育の参加者は14人、そのため綱引きは7人チームが2チーム出来る。

「じゃあ準備はいいみんな？」
「はい」
「大丈夫」
「問題ないです」
桂子ちゃんの声掛けとともに、みんなが問題ないと意思表示をする。
「じゃあ……よーい……どんっ！」

「「んんっ―!!!」」
綱引きは一進一退の攻防が続いている。意外と見るだけも面白く、どちらが勝ってもおかしくない状況。
「ふうっ……はぁっ!」
「わっわっ……!」
「きゃあああああっ!」
一番外側で綱を引いていた恵美ちゃんが気合の声を上げると、もう一方の7人チームは一気に総崩れになり、恵美ちゃんのチームが勝利になった。
どうやら均衡を破るのは比較的楽だけど、確実を期するために長期戦で体力勝負に持ち込んだということかな?
「へへん、あたいったら最強だぜ!」
「恵美はすごいわね」
恵美ちゃんが勝ち誇ったように言う。
やはりテニスで鍛えた腕力は相当なものだ。
小谷学園は運動部が乏しく、いても弱小が大半の中で、全国レベルの身体能力を持つ恵美ちゃんは反則級の強さと言っていい。
虎姫ちゃんの女子サッカー部も強いけど、基本手を使わないスポーツとして有名なサッカーじゃ綱引きは弱い。
「やっぱ体育だと恵美は強いよね」
「へへん!」
恵美ちゃんがもう一回勝ち誇ったような顔をする。
あたしは特に羨ましいとは思わなかった。
あたしは注意を男子の方へと向けてみる。すると、他の男子と共に練習中の浩介くんが目に入った。
浩介くんは大玉転がしに講じていて、他の男子をぶっちぎっている。
「つえーよ篠原!」
「お前本当何やってもすげえよな!」
「あの優子ちゃんが惚れるだけあるよなあ!」
うん、浩介くんが守ってくれる。

男にナンパされた時だって、そうやって守られてきた。
女の子の中に混じってさえすっかり弱くなったあたしが、恵美ちゃんでさえ出来ない「男に勝つ」何てことを思うことは絶対にダメと、改めて心に誓った。
見学をしていると、浩介くんもちょうど順番の谷間に差し掛かり休息していた。
あたしは歩いて休んでいる浩介くんに声をかける。
「おつかれ浩介くん」
「優子ちゃん、今日は見学だから分からないかもしれないけど……そっちはどうなんだ？」
「うーんとね、綱引きと玉入れになったよ」
あたしが言う。
「なるほど、玉入れはともかく……綱引きは大丈夫か？」
浩介くんが少し心配した顔になる。
「ああうん、どっちもあたしがプラスワンになったから」
「そうか……無理するなよ」
浩介くんが安堵した表情で言う。体育の授業では、男女別が多いけど浩介くんによく心配されている。
「分かってるって……でももしものときはお願いね」
「あ、ああ……」
「ふふっ、いつもありがとうね」
「っ……」
あたしがニッコリとお礼をいうと、浩介くんは照れているのか黙り込んでしまう。
いつまでも、こんな関係が続けばいいのに。あたしはそう思う。
「それより、浩介くんの方はどう？」
会話が続かなくなってきたので、あたしが逆に聞いてみる。
「うん、何をやっても強いぞ俺」
浩介くんは体力の下地が良いから、さすがに専門の運動部にその競技では勝てないけど、体育祭の種目のようなもの、特に総合力が要求される部門では本当に強い。

体育祭のことを考える、浩介くんの活躍にうっとりしているあたしが容易に想像できる。
さっきの大玉転がしもそうだったし、１００メートル走やリレー、騎馬戦で活躍する浩介くんを想像する。
「どうしたんだ？　何を考えて!?」
「あっ……う、うん……その……」
浩介くんに声をかけられてしどろもどろになる。
「ん？」
「体育祭で活躍する浩介くんを想像してて……」
「あはは優子ちゃん、強い俺は好き？」
「うん、やっぱり強い男の子って素敵だと思うわ」
そう思った時、ちょっと引っかかった。
「でもよ、強いだけなら優一もそうだろ？」
「あっ！」
浩介くんの鋭い指摘。
あたしははっとする。今までは浩介くんを見て「強い男の子」は素敵と思い続けていたが、強いだけなら「優一」も同じだということを、忘れかけていた。
本当の意味で忘れることは今後もない。それでも、あたしの意識からは確実に消えていく「優一」の記憶。
だから、こんなことさえ、忘れかけていた。
「俺は、責任感あって優子ちゃんを守れたから、守れたからこそ、強い俺に……優子ちゃんは惹かれているんだと思う」
優一は強かったが無責任で乱暴だった。力に溺れ、些細な事で怒鳴り、多くの男子に迷惑をかけた。それは浩介くんも含まれている。
優一と今の浩介くんとは同じ強いでも正反対だ。浩介くんは、最初こそ優一を負かすための復讐心で強くなりたいと鍛えていたが、今では優子になったあたしのために強くなっている。
そして、優子を守るために、あたしに2回力を振るった。
「うん、浩介くんの言うとおりだね、力が強いだけじゃダメ」
「俺さ、優子ちゃんが惹かれている強さってそれだけじゃないと思う

んだよ」
「え？」
「優子ちゃんは、多分俺の気持ちに惚れているんだって」
そうだ、あたしは女の子だもん。男みたいに身体中心ではなく気持ちで恋愛をしているんだ。
こんな感覚はとても久しぶり、久しぶりに「女の子の感性」で、無意識的な変化に気付けていなかった。
そうか、これが永原先生の言っていた「破片」なんだって思った。
「どうしたの優子ちゃん、考え込んで？」
「ああうん、あたし、浩介くんの身体的な『力』で恋愛をしていたんじゃなくて『気持ち』で恋愛をしていたんだって」
「うん……」
「意識は女の子だけど、その辺の知識がまだ女の子になりきれてなかったって思ってね」
「え、でももう優子ちゃんは……」
「ほら、後夜祭の時の永原先生の言葉を思い出してよ」
「え？」
「本能まで女の子になっても、頑固な石を金槌で割って、破片が残るようなものだって」
「あっ！」
「５００年も生きてる永原先生でさえ、その『破片』が出ることがあるって言ってたでしょ？」
「そ、そうだったな」
浩介くんが思い出した様に言う。
「ま、今のあたしにできるのはこうやって一つ一つ、少しずつ取り除いていくことよ」
「そうだな」
「おーい、篠原—気持ちは分かるがあんまり石山と話しすぎないようになー」
体育の先生に声をかけられた。
それにしても、うちの体育の先生って結構寛容な人だよな。

他の学校だと厳しい先生とか結構いるみたいだけど、うちは全然違う。
「あ、すいませーん。悪い優子ちゃん、俺もう行くわ」
「うん、頑張ってねー」
あたしが浩介くんを見送り、あたしも体育全体の見学に戻る。
体育祭、ちょっと心配で、ちょっと楽しみなイベントでもある。多分浩介くんとの絆も、深まるはずだから。

２日後、１１月９日、今日は女の子になってちょうど半年の日。
半年前の今日、あたしは病院の中で目が覚め、女の子になったことに気付いた日。
生理痛もまだ万全じゃないけど一応一昨日よりはかなり楽になった。
ガラガラ
「おはよー」
「優子ちゃんおはよう」
浩介くんが声をかけてくる。
「ふうっ……」
「大分痛みも引いた？」
「うん、まだ本調子じゃないけど概ね大丈夫」
「そうかよかった」
浩介くんが安堵の表情を浮かべる。
「ありがとう……」
「優子ちゃんどうしたんだ？　なんかしんみりしているぞ」
「今日は１１月９日でしょ？　あたしが女の子になった日からちょうど半年なのよ」
「あ、そう言えばもうそんなに経つんだな」
「うん、あたしにとってまだ半年しか経ってないのねって」
「そうだな、俺も随分と昔に感じるよ」
「色々なことあったわね」
あたしが浩介くんと話していると、永原先生が入ってくる。

節目の日だけど、学校にとっては特に何でもない日。
いつものように授業を受け、ノートを取り勉強を続ける。

「あ、石山さん、今週の土曜日なんだけど」
永原先生が声をかけてくる。
「もしかして会合日ですか？」
「うん。ちょっと議題が一つあってね、臨時会合なんだけど石山さんにも参加してほしいのよ。強制じゃないけど」
「分かったわ」
あたしも高校生とは言え正会員だ。
せっかく永原先生が原則を曲げてまで推薦してくれたんだ。
最初の会合くらいは参加しないと。
「そういえば母さんと父さんは参加してもいいのかな？」
「うん、正会員だけの会合じゃないから問題ないよ、家族会員は滅多に来ないけどね。はい、これ場所と時間よ」
「はい」
見ると場所はこの前行った本部で、時間は午前１０時からとなっている。
あたしは帰って母さんに土曜日の日本性転換症候群協会の臨時会合に参加する旨を伝える。母さんは参加しないと言ってきた。まあそれなら仕方ない。
今後は土日が会合で潰れることも計算しながら生活していかなきゃいけない。
改めて責任感を感じて寝ることにした。

# 協会会合への参加

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーんっ！」

目覚まし時計の音と共に目を覚ます。

今日は土曜日、学校は休みだが、あたしには日本性転換症候群協会の臨時会合がある。会合は強制ではないとあるけど、他の会員ならともかく、あたしは正会員。最初の会合をすっぽかしたら、第一印象が最悪になる。

永原先生の推薦で正会員になったからには、ちゃんと責務を果たしたい。

あたしはまず服装を考える。

永原先生に渡された紙に拠れば服装は一切自由と書いてある。

会の性質を考えれば、女の子らしい服装ならなお良さそうだが、この前のようにぬいぐるみさんを抱いていくのもまずそうではある。

うーん、どうしよう？

１１月に入り、少し寒くなり始めた。その事も、考慮していきたい。

ふと、林間学校初日に着ていた黒いロングのワンピースが目に入る。

……うん、これなら丈も長めだしそこまで寒くならなさそうよね。

あたしは黒いワンピースを手に取り、鏡付き机の前でいつものように下着ごと着替える。

「おはよー」

「あ、優子おはよう。朝ごはん手伝ってくれる？」

「はーい」

母さんと朝ご飯を作る。今日もいつも通り昨日の残りを温め、ご飯と味噌汁を作る。

すっかり慣れきった休日朝の作業。でも今日はそれだけじゃない。

今日は初会合。念のため早めの電車に乗りたい。そう考えると、うかうかしていられない。

あたしは女の子の中でも食べるのが遅い方だけど、焦って荒い食べ方はしたくない。
食事の時間を確保するためには、手早く朝食を準備しなければいけない。
これでも、カリキュラムが終了したばかりの頃よりは、随分と上達した。
母さんからも、食事メニュー一つの全権を任されるケースも増えた。例えば先週の夕食は唐揚げとフライドポテト、野菜炒めと白いご飯を、すべてあたし一人の手で調理した。
もちろん何を出すかもあたしの権限だ。
「いただきます」
「「いただきます」」
家族3人の食事。大丈夫、先日インターネットで調べた限りでは、ゆっくり食べて、歯を磨いても十分間に合う時間だ。

「「ごちそうさまでした」」
あたしはご飯を食べ終わると、お皿を食器洗い機に入れてボタンを押す。
「便利になったわね」
「うん、昔は大変だったでしょ？」
「そうよ、一枚一枚洗わないといけなかったもの」
あたしは母さんとの会話もそこそこに洗面所に行って歯を磨く。
やはり緊張する。はじめての会合、それもいきなり正会員の立場での会合。永原先生が最初正会員について詳しく言わなかったのは、辞退防止のためだったのかもしれない。
小さなポーチを肩にかける。入っているのは生理用品とメモ帳と筆記用具。もしかしたら必要になるかもしれない。

「いってきまーす！」
「はーい行ってらっしゃーい！　鍵閉めておくからそのまま行っちゃってー！」

「はーい！」
母さんの声を確認し、そのまま駅に向けて出発する。
最近は慣れすぎて意識していなかったが、やはり駅のように人の集まるところでは、あたしはいつも注目の的になる。
ホームの列の横に立っていた若い男性が、露骨に首を曲げて、あたしの胸を凝視している。
この胸全体は、まだ浩介くんにも見せていない。男の子の前で一番露出したのは、夏の水着の時と、浩介くんとのはじめての家デートの時。いずれもてっぺんまでは見せていない。
「まもなく、電車が参ります」
以前母さんと一緒に入会手続きに行った時よりもずっと緊張している。
かしこまった会合に、一人で行く。現役高校生ながら社会人のようなふるまいを要求されることもあるだろう。
それに、永原先生だけではない。あたしよりずっと年上の先輩患者たちに交じって、異例の正会員の立場というのもあるだろう。
車掌の放送などに注意し、乗り換え間違いのないように注意する。
よし、ちゃんとうまくいった。
乗り換え駅からこの前のルートを思い出して行く。
うん、このルートなら迷わない。
そして、本部のあるビルから改札口を出て、駅の地図を見ながら該当出口、Ｎ４を探す。
地下鉄の案内板を見ながら進む。この前、母さんと一緒に来た道を思い出す。
人間の記憶って意外と優れているのねと思いながら、Ａ４番出口からは永原先生の案内を思い出す。
ビルの中は以前と同じように人はまばらで、最上層用のエレベーターに向かう。
スーツを着たサラリーマンのおじさんたちも、本能的にあたしの顔と胸を見る。
エレベーターの前に来ると、待機しているのは若い女性、というよ

りも少女が圧倒的に多い。うん、多分あたしの同志たちだと思う。
「ねえねえ、あの黒い服の子。見かけない顔じゃない？」
「あ、本当だ」
「ひょっとして新しい仲間じゃない？」
「そうかもね」

うん、新しい仲間で、しかも正会員です。なんて言ったら驚くだろうなあ。
しばらくしてエレベーターが開き、数人が降りた後に全員が乗る。
おじさんが５０のボタンを押した以外は全員、目的地は４９階の本部。
エレベーターが勢いよく４９階までノンストップで行く。
「４９階です……４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ」
エレベーターの案内音声と共に女の子たちが一気に降りていく。
あたしもそれについて行って、本部に到着した。
「おはようございます」
「おはようございます」
周りがあいさつしているのであたしも「おはようございます」と言う。
「あ、石山さんおはよう」
永原先生が声をかけてくる。
「あ、永原先生……いえ、永原会長、おはようございます」
いけないいけない。ここは小谷学園じゃなくて日本性転換症候群協会の本部。今はあたしの先生じゃなくてあたしたちの会長として接しないと。
「ふふっ、石山さんの席はここ」
「はい」
あたしの席を見ると近くに比良さんや余呉さんも座っていた。
「会長席」とあるのが永原先生の席とすればかなり上座の方だ。
「緊張してる？」

比良さんが声をかけてくれる。
正会員の中では2番目の上座に座っている。
「は、はい……」
正直、電車に乗る前から緊張しっぱなしだ。

「あれ？　さっきの子、あそこ正会員席じゃない？」
「あら、本当ね……いや、あそこは普通会員の席じゃない？」
「そう言えばさっき会長と話してたよね？」
「うんうん」
「どういう人なんだろう？　久々に出てきたとか？」
「あーそれかも！」

普通会員と思われるさっきの二人組があたしに関して的外れの噂をしている。
これはますますプレッシャーになりそうだわ。自己紹介の時どうしよう……？
そんなことをあたしが考えているとは知る由もなく、席はどんどん埋まっていく。
席は大体５０くらいかな？　改めて出欠を取ったのだろう。
永原先生が正会員の１人が休日出勤で来られないということで今日の正会員出席者はあたしを入れて１１人。正会員の人数を考えると、さすがにあたしは正会員の中では一番下座に座っていることがわかった。
永原先生が頭数を数えている。すると納得したように会長席の後ろに立つ。

「……じゃあ、予定より少し早いけど、全員集まったから初めていいかな？」
「「はーい！」」
みんな勢いよく返事する。
「皆さん、今日はお忙し中、日本性転換症候群協会の臨時会合にご参加

くださいまして誠にありがとうございます。本日の議題は２つです。どちらも私たちの新しい仲間についてです」
２つ？　１つはあたしのこととして、もう１つは誰だろう？
「じゃあまず一つ目、先週の日曜日より、新しい会員として、石山優子さんを迎えました。石山さんは今後正会員として活躍していもらいますので、よろしくお願いします」
周囲が少しざわつく。

「え!?　あの子正会員なの？」
「入りたてでいきなり正会員って、聞いたことないわよ」
「思い切った登用よね」

うー、早速プレッシャーがかかるわ。
「はいはーい！　みんな気持ちはわかるけど、石山さん、自己紹介をお願いします」
「はい、い、石山優子です！　永原せ……永原会長に正会員に推薦してもらいました。まだまだ分からないことだらけですが、ど、どうぞよろしくお願いします」
パチパチパチパチ
みんな困惑しながらも、拍手をしてくれる。
あううぅ……緊張しすぎて言葉が回らないよお……
「石山さんは定例会合でも匿名で出てきたので知っている方も多いと思いますが改めて紹介します」
「石山さんは私が務めている私立小谷学園の２年２組……つまり私のクラスに所属している女の子です。今年５月にＴＳ病になりました。それ以降、私がこれまで見てきた誰よりも一生懸命に女の子になりました」
「まだ発病半年ですが、今は同じクラスに彼氏もいて、最終試験にも合格しています。本来なら正会員の資格は最低でも２０歳以上という規定もありますが、私も常に学校の担任として、担当カウンセラーとして接していましたが、今回は極めて優秀ということで、特別に正会

員へと抜擢することになりました。石山さんは皆さんの模範として、きっと会に貢献してくれると思います」
永原先生があたしの紹介をする。それにしても、褒めているとしてもみんなの模範って言われるのすごい恥ずかしい。
他の会員の反応を見る。正会員の人はみんな知っていたのか、あまり動揺した感じはない。
一方で、正会員以外の人の反応は、「信じられない」という表情をしている人と、「この子があの噂の」という表情をしている人がいる。
知らない間に有名人になった経験は小谷学園でもあったけど、やはりドギマギ気まずい感じになってしまう。
改めて、他の正会員、普通会員の人たちを見る。やぱり胸が一番大きいのはあたし。
でもあたしがこの中で一番の美少女かというと、ちょっと自信がない。永原先生はあたしほどの美少女はいないと言っていたけど、他人からはそう見えても、あたしから見ると断言できない。
やっぱり、この病気になるとかわいくなる人が多いということね。
もし日本性転換症候群協会でミスコンをしたらとんでもない人気争奪戦になりそう。というか、アイドルグループ作れそうな気がする。
「それあ皆さん、石山さんについて質問あるかしら？」
サッっと大勢が手を挙げる。うわー困った。
でも一応正会員の人は誰も手を挙げていない。
「はいそちらの人」
「どうして女の子になるのに一生懸命になったのですか？」
「えっと、話すと長くなるんですけど……」
「いいですよ」
「あたし、元々優子じゃなくて優一っていう名前だったんですが――」
あたしは昔のことから話し始める。あたしの話をみんな真剣に聞いている。
「――ということで、今回は優しい子にと言う意味で優子と決心しました」

「他に質問は？　はい、そちらの方」
　さっきあたしの噂話をしていた人が差される。
「彼氏ってどういう人なの？」
「浩介くんですか？　責任感強くて、力も強くて優しくて素敵な人ですよ」
「どうやって恋に落ちたの？」
「えっ……そ、その……あたしナンパされて……それで……」
　うう、ちょっと恥ずかしい……
「ああ、石山さん、無理に答えなくてもいいわよ」
「そうは言っても、恋愛話って気になるよ」
「うんうん、ましてや半年で彼氏作ったなんて今までそんな人居なかったし」
　余呉さんまで煽っている。
　やっぱり、小谷学園と同じで、ここは女子会だ。ＴＳ病と言ってもみんな女の子だから、恋愛の話が大好き。
　まあ、あたしも龍香ちゃんと彼氏の話が好きだからおあいこなんだけど。
「８月に小谷学園で林間学校に行ったんですけど、最終日の帰り道でナンパされてしまいまして……」
「「うんうん」」
　ううっ、やっぱり皆の前で馴れ初めの発表会は辛い……
「その時、浩介くんが体を張って守ってくれて……それで……恋に落ちました……」
「あらあら、結構ストレートねえ」
「でも８月って４ヶ月も経ってないわよね」
「そりゃあ会長も正会員に推薦するよね」
「他に質問ある人はいますか？」
「はい」
　正会員の人が手を挙げている。
「あら、余呉さん。どうぞ」
「石山さんは永原会長とは先生と生徒でもあるわけですけど学校では

永原会長のことってどうなんですか？」
　おや、永原先生の質問だ。
「ええ、実は学校中に正体は知られているんですよ。文化祭ではミスコンで生徒にまじりつつも上位に入りました。優勝はあたしでしたけど」
「い、石山さん……」
　かなりざわついている。
「あ、あの、学校中が永原先生の正体を知っているって……どういうことですか？」
　余呉さんは永原先生の司会進行を無視してあたしに聞いてくる。
「実は……永原会長……いや、ここは永原先生かな？　とにかく話してもいいですか？」
　意外に使い分けるのって難しい。永原先生は随分昔に「２つの顔を持つなんて良くないこと」って言ってた気がするけどその気持ちも分かった気がする。
「え、ええ……」
「実は体育の授業と林間学校でそれぞれ一悶着あったんです。あたしは自分を一人の女の子として扱ってほしかったんですが、学年主任の小野先生と教頭先生が――」
　あたしはその時のことを詳細に話す。ともあれ永原先生は自らの意志で自分の正体を学校中に知られることを選んだんだ。
　正直言うとあの時の小野先生と教頭先生のエピソードって勧善懲悪ものみたいな感じがする。
「――というわけで、永原先生の作戦勝ちになりました」
「すごいわねえ」
「さすがは真田の人よね」
　他の会員の人も感心している。ここの会の女の子たちは、ざわつくことはあるものの、それでもうちのクラスの女子たちよりもかなり落ち着いている印象を受ける。
　永原先生は４９９歳、確かに２番目に年上の余呉さんでも１８４歳とはいえ、それでも平均寿命の２倍は生きているし、非ＴＳ病患者で

一番生きた１２２歳と比べても１．５倍も長生きしている。
外見はこんなだけど、やっぱり皆年相応に落ち着いているのかもしれない。
それを考えると、むしろミスコンや海や盆踊りの時の永原先生のほうが「年甲斐もなく」と言う表現がピッタリ……って、それを言ったら怒られちゃうかな？
「それじゃあ他に質問は？　はい、そこの方」
「優子ちゃんってカリキュラムはどうでした？」
「ええ、楽しかったわよ」
「へえ、珍しい……」
質問した女の子が感心している。
「私は何か仕方なくって感じだったわね」
「うちも。戻れないんじゃしょうがないし」
そう言えば永原先生もそんな感じの人が多いって言ってたっけ？
「それでもう一つ、いい？　どうしてそう思ったか教えてくれるかしら？」
「ええ」
あたしはその理由を話す。というかかなり時間がかかる。
それはやっぱり、昔の荒みきった自分を捨てられることへの喜びと言ってもいい。
女の子になろうと思った思いも、女の子になれた喜びも、究極的にはそこに集約される気がする。
「――というわけです」
「何て立派な子なのよ……」
「会長がうちらの模範になる存在だと言ったのも頷けるで」
「石山さん、未来の私達の仲間を、きっといい方向に導いてくれるわね」
あたしの話を聞いて、既にあたしに対する尊敬の念を示す人さえもいる。
やっぱり、あたしって珍しい存在だったんだ。
「時間も時間だから、最後の質問でいいかしら？」

誰も手を挙げない。
「あ、じゃあ私でいいかしら？」
普通会員でも後から来た比較的末席に近い人が手を挙げている。
普通会員の人は座席自由という感じだけど。
「はい、そちらの遠い方どうぞ」
「石山さん、初めての生理の時、何て思った？　その様子だと『やっぱり戻りたい』とは思わなかったと思うけど」
「えーっと、あたし、痛みが嬉しいって言ったわね」
あの時のことはまだ覚えている、永原先生が泣いていたのを思い出す。
「え!?　本当に!?」
やっぱりとても驚いている。
「ええ、石山さん、この痛みのお陰で本当に女の子だって思えたって、この痛みから逃げたら一人前の女の子じゃないって言ったわ」
永原先生が言う。そう、たしかにあたしはそう言った。今もその気持ちに何の変わりもない。
他の人の表情を見る。みんな固まっている。
「な、何て人……」
「初めてでそんなことを思うなんて……」
あの時の永原先生と同じ反応をする。さすがに泣いている人は居ないけど。
「私は男のほうが辛いからって思ったわねその時」
「うんうん」
「うん、正会員に相応しいよこの子」
「こんな素晴らしい子なら誰も正会員に異議は唱えないよ」
「あたしだってもうすぐ１００歳だけど、この子より女の子できてないよ」
１７歳でＴＳ病になりたてのあたしがいきなりの正会員で、ましてやみんな外見からは想像もつかないくらい年齢が行っている人だろうし、果たして受け入れられるのか心配だったけど問題は無さそうだ。

やっぱり褒められると、嬉しい。
「じゃあ、次の議題に行きますね」
会合は、あたしの話を終わり、２つ目の議題に入った。

## 優子の後輩

「それじゃあ2つ目の議題、先週日曜日、石山さんが正会員になった日でもあるのですが、日本でまた1人、ＴＳ病で倒れた人が出ました」
永原先生の定例発表、ＴＳ病で倒れる人は日本人に多いとは言え珍しい。年に1人から2人のペースだという。
おそらく、それで今回の会合が開かれたのだと思う。そういう意味では、ここからが本題と言っていいかもしれない。
「担当カウンセラーとして管轄支部長の余呉さんを充てました。余呉さん、進展はどうですか？」
「はい、芳しくありません。カリキュラム受けるということさえ嫌がっているようでして。女らしくするなんて無理と口走っております」
正会員たちを含め周囲は「またか……」という顔をしている。
どこからか「これはもうダメかもわからんね」「どーんといこうや」「はいじゃないが」と言う会話が聞こえてくる。何のことだろう？
確かにこの病気だと自殺の道に進むパターンのほうが多い。
「それで、口調言動とかはどうですか？」
永原先生が聞く。
「……全く駄目です。昨日も来てみたんですが、服装は男時代のぶかぶかなパジャマに一人称も『俺』のままで……このままでは余命は1年半でしょう」
「い、いちねんはん……」
あたしが思わず声を上げる。何もしなければ半永久的に生きられるはずの病気に似つかわしくない余呉さんの宣告。
「ええ、これは過去の『統計』からの推測よ」
比良さんがあたしに説明してくれる。
「そうですねえ、特に一人称俺のままというのは……女の子の声に似つかわしくないので成績不良な人でも反射的に使うのをやめることが多いのですが」
そういえばあたしも今でこそ一人称あたしだけど、最初は俺を使っ

てたっけ？
　口で言うと最初の最初から詰まっちゃった記憶があるけどこの患者は1週間経っても俺をそのまま使っているのか。
　あたしは1週間と言えばカリキュラムを終えた頃で、少なくとも俺を使うことはなくなった記憶がある。
「余呉さん、マニュアルは守りましたか？」
「ええ、カリキュラムを受けるのが最善だとも言いましたし、男っぽく振る舞ったままでは将来必ず悲惨な目に遭うとも告げました。ですが、聞く耳を持ってくれません」
「そうですか……今回もダメそうですね……」
　永原先生が半ば諦めたように言う。
「おそらく強制的にカリキュラムを受けさせても駄目でしょう。それどころか、既に『男として』というようなことも口走ってます。間違いなく性同一性障害に陥ったものかと」
　余呉さんが淡々と報告する。既にあきらめモードに入った感じだ。
「はぁ……今回もなかなかうまく行きませんねえ……」
　永原先生がため息混じりに言う。
「その……どうしてうまくいかないんでしょう？」
　あたしが質問する。
「突然女の子にされたら大抵は対応するのが難しいですよ」
「そうねえ、今回の患者は大学でサッカーをしていたみたいですから」
　そのことを言った途端、「あー」と言う声が随所で聞こえる。
　どうもそういう人は特に成績不良になりやすいのだろうか？
「石山さん、女の子になって一番戸惑ったのって何？」
　永原先生が問う。
「えっと……体が弱くなったこと？」
「うん、究極的にはそうだよね」
「今回の患者さんはサッカーが大好きだったのよ。女子サッカーもあるにはあるけど、男子の時みたいにプレーできないのがとても不満なのよ」
「もし、性別適合手術に踏み切ったら、いよいよカウントダウンよ」

余呉さんが言う。
「そうだね、一応全力で止めてみて？　駄目ならしょうがないけど」
「……はい。一応やってみます」
このままじゃ、この人は見捨てられて死んじゃう！
まるでいつものことのように永原先生たちは事務処理のように対応している。
あたしにとっては、年上だけど、ＴＳ病患者としては、おそらくはじめての後輩……そうだわ！
「あ、あの！」
「ん？　石山さんどうしたの？」
「カウンセラーって変わることあるんですか？」
「ええ、正会員なら誰を充ててもいいことになっているわ」
「じゃ、じゃああたしが、あたしが担当を代わってみます！」
勇気を出して言う。あたしがみんなの模範なら、何か他の人にできないことができるかもしれない！
「え!?」
余呉さんはかなり驚いている。
いや、あたしの申し出に、会合全体で明らかに動揺している。
「い、石山さん……確かに規則上では、石山さんがカウンセラーを担当することはできますが……」
「といっても高校生だよね？」
余呉さんが言う。
「はい。ですが、このままでは、その人は確実に自殺で死んじゃうと思うんです。それなら、年齢の近いあたしが、説得してみます」
「どうします？　永原会長」
比良さんが言う。
「うーん、私としては、『会の規則では石山さんにも資格があるから問題ない』としか言えないわ」
「じゃあ、投票にかけますか？」
「そうね……それがいいと思います」
比良さんの提案に同意した永原先生は、棚の奥から青の札を取り出

す。
「えっと、今日は正会員と普通会員だけかな？」
「あ、はい。今日は維持会員、家族会員、一般会員の人はいません」
「じゃあ１０の束と３の束だけでいいわね」
永原先生がいくつかの束になった札を出す。
まず永原先生からあたしまで、１０個１束の正会員のものと思われる札束を１１束配る。
改めて、あたしは自らの重責を自覚させられる。
そして、数多くの３個１束の札を配っていく。
「今日出席している普通会員は、４１人だね」
つまり普通会員が１２３票、正会員が１１０票で合計２３３票になる。
続いて、永原先生は○と×の張り紙をした２個の段ボール箱を取り出してきた。
「じゃあ、このカーテンの中に入れるから一人一人でお願いね。じゃあ普通会員の人からどうぞ」
永原先生がそう言うと、１１人の正会員を除く全員が席を立ち、カーテンの前に並び始める。

「石山さん、思い切ったわね」
永原先生が話しかける。
「えへへ、少し経験積みたいかなって」
「うん、でもいきなりカウンセラーを申し出てくるなんて思わなかったよ」
「他に仕事はあるんですか？」
「うん、正会員の人だと講演会に出たりとか、ごくまれにテレビやマスコミの取材を受けることもあるわよ」
「って、そっちのほうが重荷のような……」
あたしが思わず突っ込む。
「あはは、そうかもね。後は他の患者と交流してもらって、調整役になってもらうこともあるわよ」

ふむふむ。
「石山さんにもいずれ会長副会長以外のポストに就いてもらう予定だから覚悟しといてね」
「う、うん……例えば？」
「地方支部長とかね。１０年くらい先の話だけど」
「う、うん……」
正直１７歳でまだ女の子歴半年のあたしにとって、１０年後と言われてもまるで実感がわかない。
そういう意味では、あたしにとって、１０年後も１００年後もまだ大差ないことかもしれない。
「でも、石山さんが女の子になってから、まだ半年しか経ってないのよね」
「うん、５月のゴールデンウイーク終わったばかりの時だったもんね」
「なんだろう、石山さんがまるで昔からの同志に見えるわね」
永原先生がしみじみ言う。
５００年も生きてきた永原先生にとって、半年が長く感じるのは大きな意味を持つ。
５０年６０年生きてきた人が「１０年なんてあっという間」と言う人はいる、それを考えれば、永原先生は「１００年なんてあっという間」と言ってもおかしくない人間ということになる。
「最近、時間の流れが今までにも増して遅く感じるのよ。多分、石山さんのおかげだと思うの。以前から、私の教師生活の中で教え子が同じ病気になったの初めてって言ったでしょ？」
「う、うん……」
確かにそんなことを言っていた。
「実は私の他にも教師を仕事にしているＴＳ病の人はいるんだけど、元教え子は分からないけど少なくとも現在進行形での教え子がこの病気になった前例は石山さん以外にいないわ」
「やっぱり？」
確率的にはそうだろう。
「以前先生をやってる人で集まってアンケートを取ったことがあるの

よ。もし教え子にＴＳ病患者が出たらどうしますかって」
「うん、それで？」
「みんな、『普通の女性のふりをするかもしれない』って言ってたわね」
「無理もない……のかな？」
　投票が続く中、あたしは永原先生と話し込む。
「実はね、私もそう思ってたわ。でも、現実に遭遇してみたら、真逆の結果だったわね」
「永原先生、救急車に乗り込んでいたよね？」
「ええ、私はその時別のクラスで授業していたわ。しばらくして、別の先生から連絡が入ったわ『石山さんが倒れた』ってね」
「うん」
「私は症状を聞いたわ。そしたら『何の前触れもなく、急に腹痛を訴えて倒れて、そのまま血を吐いて数秒動いたらそのまま倒れて微動だにしなくなった』って」
「……はい」
「私はすぐにＴＳ病だって気付いたわ。そしてすぐに自習の旨を生徒に告げて教室を飛び出したわ。あの時は……無我夢中だったわ。会長としての責務が、教師としての責務に勝ったのよ。そして、石山さんに即時入院と一人個室を病院に要望したわ」
「それからはあたしが女の子に成りきるまで誰もいなかったの？」
「あ、私がいたよ。えーっと確か……手紙を書いていたわね」
　手紙？　んーあったようななかったような……まあいっか。
「さ、そろそろ正会員の番になるわよ」
「う、うん……」
　あたしは列の最後尾に並ぶ。
　一人、また一人と投票を終えていく。束が大きい人も投票していく。
　永原先生がカーテンの中に入る。
　そしてすぐに永原先生が出て来る。最後の最後があたし。
　中に入ると○と×の紙の箱がある。
　あたしはよく確認してから○の方に入れてから出る。

「はーい、全員が投票し終わったね？　じゃあ締め切るわよ」
永原先生がまず×の箱を持ってひっくり返す。
大きな束は3個、小さな束も幾つかあるけど明らかに少ない。
「あら、これは決定かしら？」
永原先生が言う。
「念のため、〇の方も開けてみましょう。棄権している人もいるかもしれませんから」
比良さんが言う。まあそんなことするまでもないと思うけど。
「うんそうだね……ってうわっ、重い……！」
永原先生が少しだけよろけながら箱をひっくり返す。
出てきたのは大量の投票札。正会員の大きな１０個の束も明らかに×に入っていた3個より多い。
「……これはもう数えるまでもないよね。余呉さんが担当していた子のカウンセラーを、石山さんに引き継ぐ議決について、賛成多数で可決とします」
「分かりました。石山さん、あなたの初仕事になると思いますが、よろしくお願いします。後で私のところに来てください。資料をお渡しします」
余呉さんが言う。
「ありがとうございます」
余呉さんも、肩の荷が下りたような顔をする。やっぱり、敗戦処理はやりたくないものなのだろう。
「それじゃあ、今日の会合はこれを持って解散します。各自自由に2次会等を開いてください。以上！」
永原先生がそう言うと、各自挨拶をしながら解散する。
あたしは余呉さんの元へと寄る。
「あ、石山さん、ちょっと待ってて……はい、これが資料」
余呉さんが資料を渡してくる。
氏名は「塩津悟（しおつさとる）」、年齢は１９歳であたしの2学年上、中学校からサッカー部、大学でもサッカーサークルに所属と書いてある。
居住地はかなりここから遠いけど新幹線を使えれば日帰りで行け

ないことはない場所。
「でも新幹線代どうしよう……？」
「あ、出張費出すわよ」
思わず声に出してしまったら、永原先生がすかさずフォローしてくれる。
それなら安心だ。
「早速で悪いけど、明日空いてるかな？」
余呉さんが言う。かなり急な話だ。
「ええ、特に予定はないけど」
「じゃあ一刻も早く、この人の元に行ってあげて。今この瞬間にも、状況は悪化しているわ」
やはり、よほど事態は逼迫しているようね。
「……分かりました」
次のページに状況が書いてある。そこには「極めて成績不良」「挽回の可能性はほぼ絶望的」とあった。
会合であったように、ロングでもスカートを穿こうとしないとか下着さえ男物を身に着けたままと書いてある。
両親の対応も悪く、「自主性に任せたい」と言って余呉さんの指示した適切な処置を取っていないっかあ……
「うーん、親の問題もあると思うなあ」
あたしはそう分析する。
「……それがあるんですか？」
余呉さんが言う。
「男物の服を捨てるのはカリキュラムにあるからダメですけど、どこかに隠すことは出来ると思うんですよ。そうやって女物にせざるを得ない状況を作り出すんです。もし一回女物の下着を穿かせれば、もう戻れないと思うんです」
これは意外に重要なことだと思う。
考えてみると、あたしが女の子に抵抗をなくした最初のきっかけでもあると思う。そのフィット感に感心して、あたしは最初のプライドを捨てられたと思うから。

「うーん、ですが親御さんのことまで考えるのは……」
「ですが、子供に先立たれるよりマシでしょう」
　あたしが言う。
「石山さんのように計算高く割り切れる人ばかりじゃないわ。私たちはほら、人生永いからそういうのも出来るけどさ」
　うーんそういうことよね。
「ともあれ、書類は長いから、残りは家でゆっくり見てね。石山さんも、そろそろ帰っていいわよ。一人で作戦を練ることも今後のために必要よ」
「……はい。じゃあ、お先に失礼します」
「うん、お疲れ様でした」
　あたしは何人かの会員とともに、エレベーターを待つ。
　やはりあたしの噂が聞こえてくるが、一部では今夜の食事とか、最近のアイドルとか、別の会員の恋バナらしき会話も聞こえてきた。
　あたしはビルの1階に降り、他の知らない会員さんと挨拶をした後、地下鉄の駅へ進む。
　もちろん、何人かは会話こそ無いが、会合に参加した女の子。
　それも、駅が過ぎ、乗り換える頃には、誰も見えなくなっていた。

「ただいまー」
「あら優子、おかえりなさい。どうだった？」
「うん早速明日仕事だよ」
「へえーどうしてまた？」
「新しくＴＳ病になった人のカウンセラーになったのよ」
「ええ!?　いきなり大抜擢じゃない、どうしたの？」
　母さんがやっぱり驚いている。
「母さんたちと入会手続した日に新しくＴＳ病になった人が出たじゃない？　どうもその人、男に戻りたいと思い始めてるみたいで」
「あら、それはまずいわね」
「うん、前のカウンセラーさんは永原先生についで2番目に年上の人なんだけど、もうあきらめモードで。あたしが引き受けることになっ

たわ」
「……ある意味敗戦処理よね」
母さんが言う。
「うん、悪く言えば。ね。じゃあたし、部屋で休むから」
「はーい、疲れたでしょ？　今日はご飯手伝わなくていいわよ」
「ありがとう……」
あたしは自室に戻り、浩介くんにメールをする。
内容はもちろん今日の会合のこと。
浩介くんはカウンセラーになったことを伝える。
やっぱり驚いている。
状況を考えれば、殆ど最後のあがきとしての大博打ということに近い。それでも「大仕事」だという。
うまく行けば、一人の命を救うことになるかもしれないからと言っていた。
浩介くんは、一緒についていきたいと言ってきた。
これについてはあたしの一存では決められないから、浩介くんの方で永原先生に相談するようにメールを送る。
夕食と風呂が終わった後、「浩介くんが維持会員として入会する」という条件の元、同行を許された。
まあ、どっちでもいい。
ともあれ、あたしは明日、人に教える立場になるのだ。例え敗戦処理としての起用だとしても気を引き締めないと。

# 初仕事

あたしの初会合の翌日、早速あたしは塩津さんの所に向かうことになった。

浩介くんもついて行きたいと言ったらしく、永原先生が維持会員の入会と引き換えに快く認めてくれた。

さて、塩津さんの所は新幹線の駅を使わないといけない。今後カリキュラムを受けさせる上で、移動時間は結構問題になる。学生のあたしはまだマシで、他の本業を持ってる人たちは「仕事が忙しい」という理由で、中々患者につきっきりは難しい。

しかも病気があまりに特殊だから、一般の臨床心理士では対処が難しいのだという。

塩津さんの資料を見た限り「長生きしているからあきらめているだけ」と口答えしているというレポートも見た。

それなら2歳年下のあたしの存在はむしろ好都合。まあ、年下だとバレるとそれはそれで困るけど。

あたしは、今の季節ミニで寒いけど水色の膝上丈のワンピースを取り出す。

うん、これで大丈夫。

「おはよー」

「優子おはよう。今日は初仕事だって？　凄いわね」

「うん。先週TS病になった人のカウンセリングと教育だよ」

「へー、優子も人に教える立場になるのね」

母さんが感心している。

「そそ」

「ところでその服、寒くない？」

「あーちょっと足が寒いかも……」

「優子、今はまだいいけど、そろそろ防寒しないと脚が太くなるわよ」

あうっ……それはちょっと嫌よね……

「ストッキングも買ってあるから、今日はいいけどそろそろそれを履

きなさい」
「う、うん……」
そう言えば、今までストッキングを履いたことがなかった。
女の子として、人に教える立場といっても、結局は「教えるは学の半ば」という言葉の通り。
あたしだって女の子になってからまだ半年強しか過ごしていない。
考えてみれば、あたしもまだ女の子として、冬の経験がない。
そこはまだ、至る所に「優一」が残っているはずだから、一個一個潰していこうと思う。
「いってきまーす」
林間学校の帰りの時以来の新幹線。
上野駅へはあの時とは逆の方向から、同じ道のりを進む。違うのは、地下鉄の経路だけ。本当は別の駅から乗ったほうがいいらしいが、今回新幹線に乗るのは上野駅からになる。
永原先生が、あたしが女の子になってから、時間の進みを遅く感じるようになったという。
あたしも、まだ4ヵ月しかたってないはずの林間学校が何年も前の出来事のように感じてしまう。
それはともかく、あたし達は上野駅の新幹線ホームで待ち合わせ。
座席は自由席ということで案内をよく見る。
前回は東京駅まで乗ったけど今回は上野駅からスタート。
どうしてかは分からないけど、言われるがままに上野駅から乗車券と自由席特急券を購入し改札口を通る。
たまに乗る新幹線は、とてもワクワクする。
駅の案内表示をよく見て、正しい方面のホームに行く。
「あ、優子ちゃんおはよう」
「石山さんおはよう」
エスカレーターを降りた先で、二人が出迎えてくれる。
「浩介くんおはよう……おはようございます、永原会長」
「会長？」
浩介くんが不思議そうに言う。

「うん、今日の石山さんは、私たち『日本性転換症候群協会』の正会員として来ているのよ。だから私は『会長』よ」
「そ、そうか！」
予定の新幹線にはまだ時間がある。速達列車じゃないけど、速達列車は全席指定で高いということでこちらのタイプに乗るという。
「さ、もうすぐ来るわよ」
放送によれば、これから乗る電車はそれなりの駅にまとまって止まるらしく、そのために速達列車に途中で抜かされることになっていて、また別の方面に行く列車を連結していて、切り離し作業もするとか。
よく分からないがとにかく今度来る電車に乗ればいい。
白と紫に塗られた電車の中は自由席、3人掛けの席に座る。あたしが窓側、真ん中に浩介くん、通路側が永原先生。
「ふぅ……」
あたしは一息つくと、余呉さんから引き継いだ書類を取り出す。
昨日目には通したけど、もちろん全然読み足りないし、どうやって指導していけばいいかまだ手探りだけど、とにかく情報が必要だ。
「うーん……」
「石山さん、どうしたの？」
「ここの両親のコメント……」
「ああうん、『当人の好きなようにさせたい』だよね？」
「どうにも引っかかるのよ。余呉さんの警告後にもこんなことを言うって」
正直に言えば、これまでのデータからも好きなようにさせるといっても、正しい道は事実上一個しかないから危険なことにしか見えない。
もちろんカリキュラムなしで表面から徐々に女の子になっていくか、カリキュラムを受けて少なくとも表面上は急速に女の子にしていくのかの違いはあるが、どちらにしても「女として生きていく」という意味では変わらない。
「そういう風に言う親は多いわよ。何分いきなり性別が変わるなんて

過酷な運命よ」
「でも、あたしは母さんがすぐに切り替えて指導してくれました」
「うん、石山さんのお母さんはノリノリだったよね。でもそういう親ばかりというわけではないのよ」
　まあそうよねえ……
「もちろん、女の子になったんだからって女の子っぽくさせようとする親もいるし、本人の意思に任せようとして男っぽい振る舞いを止めない親も居るわよ。割合は半々くらいね」
「本人の意思は？」
「こっちも割り切れる子、割り切れない子が居るわ。こっちも割合は半々くらいね」
「じゃあうまくいく可能性のほうが高いような？」
　あたしのように割り切れるなら、親がどう転んでも同じだろうし、反発するとしたって……
「ううん、実際に長生きできる患者は少ないわよ。女の子になって、今まで出来たことの多くが出来なくなるの。それは辛いことよ。石山さんのように、昔の自分が嫌いだから、捨てられてうれしいというものじゃないのよ」
　そうよね、あたしみたいに自虐的だった人ばかりじゃないもの。
　自尊心を持って育った子ほど、壁にぶち当たるわよね。
「特に生理の時ね。カリキュラムを終了しても、ここで『こんな辛い耐えられない。やっぱり戻りたい』って言ってしまう子が多いのよ」
「それはわかります」
　正直めっちゃ辛いし。
「でもそうね、親の説得は絶対よね。それをクリアしないと、外堀が埋まらないもの」
「大学へは？」
「一応余呉さんが関係者に事情を説明しているから大丈夫よ」
「了解」
　って、引継ぎ書類にも同じことが書いてあった。
　口で他人に聞く前にまず調べる癖をつけないといけないわね。

ゴオオオー
新幹線が進む、大宮駅を過ぎて一気にスピードを上げ過ぎて一気にスピードをあげていく。逆方向だから当たり前だけど、前回の林間学校が大宮駅を過ぎて一気に遅くなったのとは対照的だ。
あたしは黙々と書類を読む。高校生には難しい言葉や文章も多いが、永原先生に質問すれば大丈夫。
電車は宇都宮駅から郡山駅にしばらく停車するという。
その間に緑と赤の電車が轟音とともに通り過ぎていく。あたしたちが目標としている駅はあの列車も止まるけど今回は料金が安いということでこっちに乗る。
でも、乗車時間が長いのは歓迎。浩介くんも空気を読んでくれてあたしに話しかけてこない。その代わり、車内の先頭にある電光掲示板の表示されるニュースや広告記事に釘付けになっている。
郡山駅を発車して次に停車するのは福島駅。ここで別の列車を切り離す。
切り離し作業は安全確認などもあって結構時間のいる作業。停車時間が数分できる。
ここでも資料を読む時間に充てた。

書類を読むにつれ、この人があたしとは全然違う状況だということが分かった。
今までの経験は通用しないということが分かり、不安になる。
「うーん……」
「石山さん、自殺ルートに進んだ子の対処法は、あたしたちも手探りよ。だって、誰も経験したことないもの。それでも、できるだけもがいてはいるんだけどね」
永原先生の言葉、確かにそうよね。
ということは、何としてでも、軌道修正をしないといけないわね。
とすると、女の子を徹底的に自覚させて、性自認を修正させないといけないわね。
うーん、でも、万一暴れられたら……うーん、浩介くんに守っても

らうしかないかな？
新幹線からメロディが聞こえる。
「石山さん、もうすぐ着くわよ」
「あ、はい」
車内の自動放送で目的の駅が近いことを示す。あたしは書類をしまって席を立つ。
車内では車掌さんが速射砲のように「何とか線何々方面は何番線から何時何分」を連発している。
列車が一気に減速し、やがて停車する。
ドアが開き、改札口を出る。
少し早めの昼食ということで、駅構内にある立ち食いそばを食べる。浩介くんの注文した唐揚げそばがとても美味しそうだった。
乗車券を取り出し、在来線で1駅。
あたしたちの町ほどじゃないけど、この地方では随一の都会。同じ会社とあって、駅の自動放送も、あたしたちと同じ人の声。でもさすがに、編成の長さも本数も、それほど多くはない。
塩津さんの家の場所については、書類に地図があるので駅からは迷わなかった。
「ふう、緊張するなあ……」
「事情は話してあるから。呼び鈴鳴らして大丈夫よ」
「……はいっ！」
ピンポーン、ピンポーン！
「はーい！」
一回押して2回呼び鈴が鳴るタイプ。家の奥から低めの女性の声がする。
ガチャッ
中年の女性が出て来る。
「あれ？　どちら様ですか？」
「はい、日本性転換症候群協会の石山優子です。余呉に代わってカウンセラーを務めさせていただきます」

「あ、はい。こちらの方々は？」
「私は同協会会長の永原マキノと言います。こちらは維持会員の篠原浩介です」
　永原先生が自身と浩介くんを紹介する。
「分かりました。遠いところからよく参りました。悟ー！　協会の人よー！」
　お母さんと思われる女性が声を上げるが返事がない。
　ともあれ、上がるように促されたので、家に上がることにする。
「「お邪魔します」」
「こちらです」
「悟ー！」
　再び呼ぶが返事がない。
「……ごめんなさい。遠いところからわざわざ来てくださったのに、返事一つよこさないなんて」
「兄貴なら、ネットで調べ物してたぜ」
　制服を着た男の子が答える。
「あら？　あなたは？」
「ああ、俺は塩津徹（しおつとおる）っていうんだ。あいつの弟だ」
「よろしくお願いします。あたしは新しくカウンセラーになった石山優子です」
「よ、よろしくお願いします……」
　徹さんは少し息を乱しながらあたしの胸に見入っている。
「にしても、余呉さんもかわいかったけど、石山さんはもっとすげえ……」
「おい！」
　浩介くんが怒ったように言う。
「おわっ、何だよ!?」
「優子ちゃんは俺の彼女だ！」
「はーい……やっぱりか……」
　徹さんが残念そうな顔をする。
「で、そちらの方の美人は誰？」

徹さん、結構がっつくなあ……
「はい、私が日本性転換症候群協会会長の永原マキノです。とりあえず塩津悟さんに会わせてください」
「はい、そちらもそのつもりなんですが……悟は会いたくないと……」
お母さんが申し訳なさそうに言う。
「うーん……」
「ダメですよお母さん」
お母さんも状況を悪化させている原因だし、この際きっぱり言っておいたほうがいい。
「え!?」
「単刀直入に言いますね。悟さん、このまま行けば間違いなく精神を追い詰めた果てに死にます」
「な、何を言っているんですか!?」
お母さんが驚いている。
「これ、悟さんの書類です」
「ちょ、ちょっと石山さん!」
永原先生も制止しようとする。
「永原会長。ここは私に任せてください。こちらの親御さんは、おそらく危機感が足りないのですから」
「え、ええ……」
ともあれ引き下がってくれてよかった。
「な、何よこれ!?」
「私たちは江戸時代からのＴＳ病患者の傾向をデータベース化しています。過去の患者の行動パターンから考えると、悟さんは2年以内に自殺するでしょう。首を吊るか、電車に飛び込むか、それとも……」
「や、やめてください!!」
お母さんが叫ぶ。
「兄貴が死ぬって、何でそんなこと言えるんだよ!!」
「石山さん、あなた何てことを!!」
永原先生が怒っている。
「永原会長、もうどうせ劇薬でも使わないと、この状況ではダメです。

もはやリスクを恐れている時期は過ぎています」
「だ、だけど会のイメージってものも――」
「今は、悟さんの命のほうが大事です」
　私が、はっきりと言う。
「……分かりました。みんなで信認した石山さんです。今は信じましょう」
　永原先生が神妙に言う。
　一方で、書類を見ていたお母さんは青ざめた顔をしている。
「これ、これは全部本当なんですか⁉」
「ええ。お母さんとお父さん、それから徹さんにしてもらいたいことがあります」
「な、なんですか？」
「まずお母さんとお父さん、女の子の服、可愛らしい服をたくさん買ってください。そして、悟さんの服はすべて別の所に隠してください。特に下着は徹底的に隠して女物をつけざるをえない状況に追い込んでください」
「え⁉　でもそんなことしたら――」
「何が何でもしてください。形から入らないといけません」
「でも、悟は絶対抵抗するわ」
「ああ、兄貴は暴れるとヤバイんだ」
　お母さんと徹さんが反対する。
「大丈夫です。暴れても取り押さえてください」
「む、無理だぜ！　兄貴はサッカー部で鍛えてて――」
「大丈夫です。もう悟さんは女の子です。男の力には勝てません」
「何でそんなことが言えるんだ⁉」
「あたし自身がそうだからよ。あたしも、以前はクラスでも男子トップクラスの体育の成績だったけど、今は体育は女子の中でもダントツのビリよ。球技大会や体育祭では、ハンデが必要になったわ」
「……」
「悟さんはもう、女の子として生きていくことを決めていく以外に、何も道はないの。だから、女の子を徹底的に自覚させるためにも、でき

れば徹さんには、なるべく完膚なきまでにボコボコにしてほしいんです」
「なっ……俺に兄貴を殴れと？」
「もちろん喧嘩を仕掛けられたらですよ？　殴るのは良くないですが、それで死んでしまうよりは、よっぽどマシでしょう」
「た、確かに殴られて死ななくなるならそうだけどよ……」
「それから徹さん、もう一ついいかしら？」
「な、何だよ？」
「悟さんのこと、二度と『兄貴』と呼ばないでください」
　これはとても大事なこと。
「え⁉　で、でもよ……」
「これは絶対です。徹さん、あなたは『お姉ちゃん』を死なせたいんですか？」
　あたしが半ば脅すように言う。うん、これでいい。ともかく周囲の意識から徹底的に変えさせて、危機感を抱いてもらわないといけない。
「いや、だってよ……つい一週間前までは俺の兄貴で――」
「『今は』お姉ちゃんよ」
「……」
「いい？　これからは悟さんのこと、必ず『お姉ちゃん』と呼ぶのよ」
「わ、分かったよ……」
「そしてもう一つです。悟さんの女の子としての名前、仮でいいので付けて、そして呼んであげてください」
「……分かりました。今日決めましょう」
「それでどう変わるってんだ？」
「とにかく女の子として扱うことです。女の子らしくないと思ったら、すぐに叱ってあげてください。悟さんの精神が少し落ち着いて、少なくとも女の子になってしまったという現実を受け止められるようになったら、このカリキュラムを受けさせてあげてください」
　あたしが、かつて自分も受けたカリキュラムの本を出す。
　ちなみに、新幹線でも読んだけど知らないことがたくさんあった。

「これ……ですか？」
「ええ、悟さんには絶対見せないようにしてください」
「はい」
「本当はカリキュラムについては発病初日に決断すべきことなんですけど悟さんの場合はまず踏み外した道を修正するところからでしょう」
「そして、塩津さんは殆ど挽回が難しい状況だということを理解してください」
　永原先生がここで補足する。
「ええ……分かりました。このことは、お父さんにも言います。書類、預かってもいいですか？」
「ええどうぞ」
　ガチャッ……
「ただいまー！」
「あ、お父さんが帰ってきた……おかえりなさーい。会の人が来てるわよー！」
　足音が聞こえる。
「おや、いらっしゃい。遠いところからわざわざ有り難うございます。どうですかお昼は？」
　お父さんはどうもお昼ごはんと夕ごはんの材料を買っていたらしい。
「いえ、もう食べたので大丈夫です」
「わかりました、塩津悟の父です」
　お昼はもう食べたから、丁重にお断りしておこう。
「日本性転換症候群協会会長の永原マキノです」
「い、維持会員の篠原浩介です」
「この度、塩津悟さんの担当カウンセラーになりました、正会員の石山優子です」
「か、カウンセラー!?　あなたがですか？　それに会長さんも……女性に聞くのは失礼ですが……おいくつなんです？」
「え？　私ですか？　うーん本当のことは言いたくないのよねえ

……」
永原先生が言う。
あたしも本当は悟さんより年下だなんて言ったらまずい。
「え!?　やはり見た目通りなんですか!?」
「逆ですよ」
あたしが言う。
「え!?」
お父さんが驚いた顔で言う。
「そうだねえ……塩津さんの家族全員の年齢を合計しても全然足りないわよ」
永原先生が言う。
「そういえば、この前来ていたカウンセラーの人も同じこと言っていたような……」
徹さんがそう言う。
「ああ、うちの会長はその余呉さんよりずっと年上です。会長は何分、私達にとっては『長老』でもありますから」
といっても、永原先生だけ突出して年上なんだけど。
なにせ余呉さんだって2番目に年上だけど184歳だし。永原先生から見ればかなり若い。
「見かけによらないものだなあ……」
徹さんが驚いている。
「TS病とはそういう病気ですから」
「……ところで、そろそろ悟さんに会わせてもらいますか?」
「ええ。ですが今日はずっと部屋にこもってて」
「ちょうどいいわ。徹さん、早速『お姉ちゃん』を使って説得してください」
「お、おう……」
あたしたちは悟さんの部屋の前まで案内してもらうことになった。

## 優子の母性

「悟ー！　カウンセラーの人、新しい人が来たよ！」
「何だよ！　会いたくねえっってんだろ！」
高く、可愛らしい声に相応しく無い、粗野で汚い言葉。
あたしの、優一の頃を思い出す。これだけでももう、トラウマをえぐられたような感情に襲われる。
「……浩介くん、ドアを蹴破れるかしら？」
「おい！　それはまずいだろ!?」
「とは言え、面会もなしに帰る訳にはいきませんし、あなたがたもそうでしょう？」
「ええ……ですがドアの破壊は……弁償してくれるとしてもちょっと……」
「……仕方ありません。だましうちにしましょう」
あたしが、裏紙に台本のようなものを書く。
手書きに時間がかかる、みんな黙っている。うん、それでいい。
「いいですか？　こうしてください」
部屋の中に聞こえないように小声で言う。
「……分かりました」

「どうやらどうしても会いたいくないようです。お引き取り願いますか？」
「仕方ありませんね。行きましょうか、会長、浩介くん」
「そうですね」
「ああ」
トントントン
実際に足音を立てているのは、お父さんと徹さんと永原先生。
しかも、その後は忍び足で戻る。
そして、1分37秒時間を置く。切りが良い時間だと怪しまれる危険性を考慮してのことだ。
そしてお母さんがノックをする。

コンコン
「悟ー！　会の人はとりあえず帰ったわ！　おやつを出すから開けてちょうだい！」
「おうわかったぜ」
足音が聞こえてくる。部屋の中の人が鍵を開けてドアを開ける。
「今です！」
「「突撃！」」
浩介くんと徹さんが一気にドアを開ける。
「う、うわっ！」
それに続き、お父さん、お母さん、永原会長、あたしが続く。
「な、はめやがったな！　この野郎！」
「あなたが塩津悟さんですね」
「この……帰れ！」
少女が汚い言葉であたしたちを拒絶している。
「そういうわけにも行きません。私は日本性転換症候群協会からあなたの担当カウンセラーとして派遣されているのよ」
「余計なお世話だ！　俺はこれから性別適合手術で男を取り戻すんだ！」
ま、まずい……何とかしないと。
「……塩津さん、その手術を受けたＴＳ病患者が３年以内に死ぬ確率は１００％ですよ」
「うるせえ、過去のことなんかどうでもいい！」
自分は例外だと思いこんでしまうこの心理、どうにかならないものかしら？
「まがい物の体を手に入れてどうする気かしら？　そんなことをしても、性染色体はＸＸのままよ」
ここで永原先生が言う。
「なっ……お前らには、関係ねえだろ!?」
「石山さんはともかく、私は日本性転換症候群協会の会長として、１３０年以上ＴＳ病の患者を見てきたのよ。塩津さんはどうして女の子として生きていくことを嫌がるの？」

「だって、俺は……俺は男だからだ！」
「いいえ、あなたは女よ」
　あたしが言う。
「っ！　それは……だって……」
「お姉ちゃん、諦めてくれ。もう、お姉ちゃんは戻れねえんだ」
　徹さんがあたしの言いつけどおり「お姉ちゃん」と呼ぶ。
「っ！　おい徹！　こいつらに、何を吹き込まれたんだ!?」
　悟さんは明らかに怒っている。でも凄みは何もない。
「『幸子』、そうよ……今日からあなたは幸子よ」
　母さんが言う。
「なっ……俺は悟だ！　幸子って誰だよ!?」
「あら、幸せな子で幸子。とってもいい名前じゃない。でも今のあなたの態度じゃ幸せな子にはなれないわよ」
　あたしが言う。
「っこの、てめえ大きなお世話だって言ってんだろ！」
「こら幸子！　お前のためを思ってみんな言ってんだぞ！」
　ここでお父さんが初めて発言する。
「親父まで……！　この野郎……！　てめえ！」
「っ！」
　幸子さんがあたしに殴り掛かる。
「おいこらっ！」
　浩介くんがすかさず止める。
「なっ！　てめっ！」
「俺の優子ちゃんに手を出すんじゃねえぞ！」
「このおっ！」
　怒りに我を忘れた幸子さんが浩介くんに殴り掛かる。
　浩介くんは左手で拳を軽く受け止めると、そのまま軽く押す感じで突き飛ばす。
　かなり力を抜いているが、それでも幸子さんは思いっきり尻餅をついてしまう。
「いっ！　うっ……このっ！　てめえ！」

あたしが前に出る。
動揺している幸子さんの頬を目標に平手を構える。
ペチッ！
「「わっ！」」
あたしのいきなりの行動にみんな目を丸くしている。
「いつまで現実から逃げているのよ！　あなたはもう、一人の女の子なのよ！」
あたしのビンタの力では浩介くんはびくともしない。なのにこの子は顔を横にそらして、頬を抑えている。
正直こういうのは優一を思い出すしものすごく苦手だけど、ここはどうしても厳しくしてあげないと駄目な場所。まさに勝負時というところだ。
「うるせえ、俺が男だと言ったら俺は……」
ペチッ！
年上だけど、ＴＳ病という意味ではあたしが先輩。これもしつけの一環。
そう思ってもう一度頬を平手で打つ。
「女の子が俺なんて言葉遣いしないの！　あたしはこの病気になってから半年よ。でもあたしが女の子の言葉になったのは一週間よ。あなたはまだ、そんな言葉を使うの!?」
「な、何だよ……言葉遣いなんて……俺……の勝手だろ!?」
「そう……じゃあ勝手にしなさい」
ここで一旦引く。
「ちょ、ちょっと……！」
周囲も驚いている。
「でも、あなたの取った行動で、お父さんもお母さんも、徹さんもみんな嫌な思いしているわよ。せっかく、あなたを長女として迎えようって、女の子としての幸せを感じて欲しいって、あなたに一生に1回しかさせてもらえない名付けを……2回目までしてあげたのにね」
あたしだって名前を変えたのは自分自身だ。
「お、俺は嫌な思いしてないから！」

「幸子！　何てこと言うんだ！」
「そうよ、一番ひどい言葉よ！」
お父さんとお母さん、更に徹さんも大声で激怒している。
この言葉を聞いた時、あたしは頭にカチンと来た。
女の子になって、怒ったことなんて殆ど無い。優しい子でいたいという願いも込めてそのように振る舞っていたから。
でも、今は、心を鬼にして、愛の鞭を振るわなくてはいけないと思った。
しかしその時だ。
「徹！　この野郎！」
幸子さんが徹さんを殴る。しかし、徹さんはびくともしていない。
「ふんっ！」
全くダメージが入ってないのに動揺している幸子さんに対し、徹さんが、逆に右腕で思いっきり頬を殴る。
大の男が女の子を殴っている絵面になってしまっている。
「あぐっ!!!」
幸子さんがそう言うと床にドサッと倒れ込む。
「おりゃ！」
そして、徹さんが追い打ちをかけるように、背中を一回蹴る。
「うっ……うわあああああああ

「うっ……ぐずっ……当たり前……だ……」
「女の子はね、痛い時、辛い時、嬉しい時、悲しい時、他にも色々な時にね、泣いてもいいのよ」
「でも……泣くのなんて……」
まだ意地を張っている。
「ううん。あなたはもう女の子なのよ。あたしね、女の子になったばかりの時にこう思ったのよ『泣いてもいい、弱くてもいい、甘えても言い、かっこ悪くったっていい、だってあたしはもう、女の子なんだから』って」
「おっ……俺は……女々しいのは嫌いだ……」
「幸子さん、女々しいっていうのは女々（おんなおんな）って書くでしょ？　女の子が女々しいのは普通のことよ」
あたしが優しく言う。
女の子になったんだから、とにかくもう意地を張らなくてもいいんだって言うことを一つ一つ教えこんでいく。
あたしの胸元ですすり泣く幸子さんの頭を優しく優しく撫で続ける。
「落ち着いたら、あたしの話を聞いてくれるかな？」
「うぐっ……う、うん……！」
ゆっくりゆっくり、幸子さんが落ち着くのを待つ。
他の人も、あたしとの様子を見守る。あたしの中にある母性を引き出していく。
正直に言うと、女の子の持つ母性についてははまだ分からないことも多い。でも、多分桂子ちゃんたちだって同じはず。
あたしは「落ち着いた？」と聞いてみるが、幸子さんは首を横に振る。
でもやがて、幸子さんが涙を拭くともう一度部屋に座りなおす。
「ごめんなさい……それで、話というのは？　その前にあなたたちは？」
「あたしは石山優子です……あなたの担当カウンセラーとなります。

あなたとは永い付き合いになることを祈っています。あなたは？」
　改めて向き合うと幸子さんもあたしの胸を凝視している。
「お、俺……ううん、私、塩津……幸子……」
「ふふっ、まるで女の子になりたてのあたしみたい」
　あたしが笑って言う。
「え!?」
「あたしも女の子になって最初の日はこんな感じだったわよ」
「と、ところでそちらの2人は？」
「俺は、一応維持会員で、こいつの……彼氏だ」
　浩介くんが言う。
「やっぱり彼氏持ちだったのかよ……」
「ふふっ、幸子さん、あなたは女の子だから、残念だけどあたしにとって恋愛対象にはなり得ないわよ」
「うっ……もしかして、お……私も男を……」
　幸子さんが言う。
「ええ、いずれはそうなりますよ。もっとも、あなたの様子だとそれは何年も先のことよ。私みたいに半年でクリアできるものじゃないわ」
「私は日本性転換症候群協会会長の永原マキノです。普段は小谷学園で教師をしてます」
「へえ、小谷学園って、あの自由で有名な？」
　お父さんが言う。
「え、ええ……まさかこんな所まで噂が広まっているとは……」
　永原先生が困惑して言う。
「全国的に有名ですから」
「そうですか」
「ところで、永原さんって会の『長老』って言ってたけど本当にいくつなんだろう？　この病気って不老なんだろ？」
　徹さんが疑問を言う。
「あらあ、女性に年齢を聞くのは失礼ですよね……と言いたいところだけど……幸子さんのために教えておこうかしら？」
「ただし、会長の話はいささか信じがたいものがあると思います。口

外するなとはいいませんけど無闇に外に話さないほうがいいですよ」
あたしが付け加えておく。
うん、意外に大事なこと。
「そんなとんでもないことなんですか？」
お母さんが聞いてくる。
「ええ」
「ではお話しましょう。私は元々鳩原刀根之助という名前で――」
永原先生があたしたちにも話してくれた話をしてくれる。真田家の足軽から江戸城での話、そして明治維新以降教師と協会会長を始めたと。
だけど、初恋話はもちろん赤穂浪士の話とか戦時中の話、小野先生や蓬莱教授の話も省略している。そのあたりは、初恋はともかくいずれ機会があれば話すという感じなのだろうか？
やはり塩津さんの家の人もみんな一様に「信じられない」という顔をしている。
「――というのが私の人生です。今の名前になったのは３０年前です」
「ところでこの前の余呉さんというのも……」
「ああ、余呉さん？　２番目に年上の人でも永原会長の半分も生きてないですよ。まあ、その２番目に年上っていうのは余呉さんのことなんですけど」
「え!?　そんなんですか？」
「そうねえ……余呉さんは２００歳になっていないということだけ言っておこうかしら？」
「いやでもさ、１２０年だろ？　人間の限界って」
「塩津さん、あなたはちゃんと生きれば５００年後には今の私の年齢を追い越すわよ」
永原先生が言う。
「実感がわかない……」
「そりゃああたしだってまだ実感がわかないわよ」
それは正直なところ。でもあたしが５００歳まで生きたとして、永

原先生のような波乱に満ちた人生になるとは思えない。
「そういえば、石山さんは？」
やはりあたしにも話を振ってくる。
「ふふっ。秘密、女性には年齢は聞かないのよ」
まさか１７歳でこんなセリフ言うとは思わなかった。
「あっ、はい……でも、この病気になって半年でしょ？」
「あっ……」
幸子さんが鋭いことを言う。しまったかな？
「もしかして、俺達とあまり年齢変わらないんじゃ」
「そうよね、彼氏さんも若いし……」
お母さんにも鋭く指摘される。
「実はですね……塩津さんは状況的にはかなりまずい状態だったんです」
永原会長が言う。
「ええ、この書類を見ればわかります」
お母さんが言う。
「定期会合ではもう半ばあきらめモードだったんです。もう自殺一直線だろうって」
永原先生が言う。
ここは正直に話したほうが良さそうだ。
「お姉ちゃん、そんなにひどかったんですか？」
「ええ、今はなんとか最悪の事態を脱したってだけでまだ予断を許さないですよ」
「そうですか……」
「でもやっぱ若そうだよなあ……」
「ふふっ、とにかくあたしの年齢は秘密よ。年下だとしても、ＴＳ病患者としては先輩よ」
「あ、ああ……」
あたしの強引な話題の遮断に、幸子さんがいまいち濁った感じで言う。
「さて、それじゃあ改めて。余呉さんにも言われたと思ったけどこの

病気になって絶対に考えちゃいけないのは『男に戻ろう』ってことよ」
　あたしも、初めてＴＳ病を人に教えるので、基礎的なことでも緊張してしまう。
「でも、やっぱ俺……」
「こーら！　『俺』なんて使わないの！」
　母親が子供にちょっとだけ「めっ！」って叱るような口調で言う。
「……」
「ほら、言い直してみて？　大丈夫よ、今のあなたの声なら、俺なんて使うより、よっぽど自然に聞こえるわよ」
　務めて、優しく言う。厳しくしたのは、もうさっきので十分。
「でも……やっぱり私……一週間前まで男だったから……」
「じゃあいつ変えるのよ？」
「そ、その……！」
「あたしだって、つい半年前まで石山優一っていう男だったのよ。永原会長だって、４８０年前までは、男だったわよ」
「で、でも……」
「明日があるからまだいい、時期尚早という人は１００年後も同じことを言っているわよ」
「ひゃっ１００年って……」
「塩津さん、あなたはこれから、悠久の命が約束されているわ。でも、もし対処を誤れば、あなたの精神は崩壊してしまうわ。そしたら自殺に一直線よ」
　永原先生がフォローする。
「……」
「今のあなたはさっきよりは落ち着いているけど、崖っぷちには変わりないわよ」
「それを回避したい、死にたくないなら、あたしたちの言うことを聞いてね」
　あたしがさっきより少しきつめに言う。
「わ、分かった。それで俺……私はどうすればいいんだ？　さっきのカリキュラムとやらを受ければいいのか？」

幸子さんが言う。
「うーん、でもあたしの経験だとそれはまだ早いかも……」
「あーうん、幸子さん。カリキュラムを受ける時は、もう二度と男を求めないって誓ってもらうわよ」
「あ、ああ……」
「言葉遣いも直してもらうわよ。それから服も、カリキュラムではスカート着用での外出もあるわよ」
「やっぱり、内容は多いのか？」
「うん、あたしもカリキュラムではいっぱい失敗しちゃったわよ」
「……」
「心配しないで、カリキュラムは訓練よ。訓練のうちにいっぱい失敗して、恥ずかしい思いすればするほど、幸子さんも女の子らしさを身に着けられるわよ」
あたしが言う。
「そ、そうか。じゃあ頑張るぜ」
「……ダメダメ、女の子らしく『頑張るわよ』って言わなきゃ」
「が、頑張るわ……よ」
ぎこちなく幸子さんが言う。
「ふふっ、もし言葉遣いを間違えたら『私は女の子……私は女の子……』って、頭の中で暗示かけるのよ。もちろん声に出しちゃってもいいわよ」
あたしも懐かしい気持ちになりながら言う。
「そうするとどうなるんだ？」
「自然と徐々に女の子らしくなっていくわよ」
「正直そうは思えねえな……」
「あたしも最初は半信半疑だったけど、後でボディーブローのように聞いてくるわよ……あっ！　今の言葉遣いもだめよ」
「しょ、正直そうは、思えない、わよ？」
「うん、ぎこちないけど今はそれでもいいわよ。じゃあ暗示かけてみて？」
幸子さんが下を向いてブツブツ何かを言っているような言ってな

いような仕草をする。
「か、かけたよ」
「ふふっ、ご両親にお願いするわ。今のを必ず続けてくれるかしら？」
「はい、分かりました」
「懐かしいわね。あたしもいっぱいかけさせられたわよ」
「へえ、永原会長に？」
「ううん、あたしは永原会長もだけど、母さんが教育してくれたのよ」
「へえ……」
　幸子さんのお母さんが感心している。
「ふふっ、だめですよ。お母さんもカリキュラムをしてもらいますからね。そのためにも、本をちゃんと読んでその通りにしてくださいね」
「……はい」
　お母さんが頷く。うん、これで大丈夫。

# 幸子さんの服選び

「なあ、一つ質問なんだが」
　今度は徹さんだ。
「ん？」
「本当に、これを積み重ねていけば大丈夫なのか？」
「うん、言葉遣いだけじゃなくて、態度や仕草、そして服だって、最終的にはミニスカートも着こなせるようになるわよ」
「うっ、す、スカートって……！」
　幸子さんが動揺している。やはりまだ穿いたことがないらしい。
「大丈夫よ、あたしだって、最初は心許なかったわ。でもスカートのメリットを実感できるプログラムもあるわよ」
「え!?　それってどういう？」
「受けてのお楽しみよ」
　まあトイレのことなんだけどね。
「そ、そうか……！」
「ところで、石山優子さんだっけ？」
　また徹さんが質問する。
「あんたも、半年前まで男だったんだろ？　どうして、男を好きになれたんだ？」
「どうしてって言われても……女の子だからとしか言いようがないわよ」
　浩介くんはかっこいいし。
「うむむ、人間ってこうも変われるんだな……」
「ああいや、優子ちゃんは特別早いんだよ」
　ずっと空気のように黙っていた浩介くんが久々に口を開く。
「うん、ちょっと生き急いでいる位にね」
　永原先生が言う。確かに生き急いでいた。
「な、なあ！」
　幸子さんが言う。
「そこの会長さんだけじゃなくて、石山さんについても詳しく教えて

ほしい。俺……あっ、あたしよりも、年下でもいいから！」
あー、やっぱり気付かれていたかー話さないわけにも行かないか。
「……仕方ないわね。そうよ、あたしと浩介くんは永原会長、いえ、永原先生が担任の先生を務めている小谷学園２年２組所属よ」
あまり驚いた感じではない。
「じゃあさっき言っていた半年前まで石山優一だったというのも？」
「ええ、５月８日まで、あたしは男だったわ。幸子さんも感じたでしょ？　激しい腹痛で倒れて血を吐いて、耳だけ聞こえている状態になって、最後は精力を出し尽くして、気が付いたら女の子よ」
幸子さんがうんうんと頷きながら聞いている。やはり典型的だ。
「あたしね、元々は乱暴な性格だったのよ。些細なことで怒るし、優一の頃は浩介くんには本当によく怒鳴り散らしていたわ」
あたしは優一時代のこと、女の子になってからのことを話し始める。
時折浩介くんや永原先生が補足説明をしてくれる。
途中、浩介くんがあたしを助けた時に惚れた話をした時はさすがに恥ずかしくて二人して顔が赤くなったけど、「若いのに立派ねえ」と浩介くんが塩津の両親に褒められていた。
「――そして、日本性転換症候群協会の正会員の推薦されて、今に至るのよ」
「大変だったんだな」
幸子さんがねぎらってくれる。
「ううん、あたしは女の子になれてよかったと思うわ。これは救いなんだって」
「救い!?」
幸子さんが驚きをもっていう。
「あたし……いや、俺にはやっぱり呪いでしかない。体もうまく動かせなくて、サッカーができねえ……今までの練習が……ほとんど使えなくなっちまった！」
「幸子さん、昔のことはもう忘れた方がいいわ」
「うっ……！」

「これまでのことよりも今のこと、そしてこれからの幸子さんを考えて、あたしはここにいるのよ。あたしだって、浩介くんとの寿命問題に悩むことはあるわ。でも、女の子になれれば、少なくとも今を、将来を楽しめるわ」
「……」
「決心がつかないなら、流れに身を任せるのもありよ」
　永原先生が言う。
「……というわけで、早速女の子の服を買いましょう。保険が降りますから」
　あたしが強引に話を捻じ曲げる。
「え!?　今から!?」
「むしろ、あまり遅いと期限切れちゃってかえって損しますよ。すぐに死にたいなら話は別ですけど」
　永原先生がちょっと脅し気味に言う。
「わ、分かりました。でもこの人数じゃ多すぎるよね」
「あ、浩介くんちょっといい?」
　あたしは浩介くんの耳に口を近付ける。
　内緒話をしたい。
「ん?」
「徹さんと、お父さんとで残ってくれる?　男物の服を全部隠しておいて?」
「うん、わかった」
「何話してるんだ?」
　徹さんが聞いてくる。
「ああ、徹さん、浩介くんとお父さんとで留守番してくれる?」
「男は留守番か」
「当たり前よ、下着売り場にも行くんだから!」
「え!?　し、下着売り場!?」
　幸子さんが驚いている。
「そうよ、女の子には女の子の下着を買ってあげないとダメでしょ」
「そ、そうだけど……」

「あたしと、永原会長と、お母さんと、幸子さんで行くわよ。じゃあ、みんな留守番してくれますか？」
「分かりました」
お父さんが頷く。
今の幸子さんの服は、ブカブカのTシャツとジャージ。
他に適当なサイズの服がないか聞いたもの何もないらしい。
無い袖は振れないということで、そのまま出発する。
「あ！　ちょっと待って！」
玄関から出て、駐車場から車に乗り込む手前、あたしは幸子さんを呼び止め、巻き尺を取り出す。
「ちょ、ちょっと近い近い！　何するんだ？」
「暴れないで！　大丈夫。サイズ測るだけだから」
あたしは、寝ている間に測られちゃったけど。
「なっ……ちょっと……」
幸子さんが動揺している。
「女の子同士でしょ!?　別に変じゃないわよ」
あたしがまずヒップを、次にウエストを測る。
身長は同じくらいなのに、ウエストはあたしより細い。
バストを測る。ふふっ、あたしの圧勝。やっぱりおっぱい大きいというのは女の子として自信がつく。
それでも、桂子ちゃんくらいかな？
「やっぱりノーブラじゃないの。ダメよ」
あたしはすぐにこすれるのに違和感感じて着用したのとは大違い。
「いやその、こすれるのは嫌だったけどさ……」
「もう！　形も崩れるし、ちゃんと付けなさい」
あたしが優しくしつけるように言う。
「はーい……」
あたしはメモ帳に幸子さんのスリーサイズをメモし、車に乗り込む。
この辺の地理は全く分からないが、カジュアル系の服装がたくさんある店にやってくる。

地方ではよくある巨大ショッピングモールという感じ。
そこの一角に服のコーナーもあるという。
「じゃあ行こうか」
あたしたちが車から出る。
それにしても大きい。あたしたちの都市圏では絶対見ない。土地が広い地方だからこそなせる店だ。
「服のコーナーはこっちです」
案内板もあるからあたしたちでもいけないことはあるけど、ここは素直に厚意に応じておく。
「ふふっ、幸子も着飾るとすごくかわいくなると思うわよ」
幸子さんのお母さんがちょっとだけ笑っている。やっぱりそういうものなのかな？　あたしの母さんもそうだったし。
「それじゃあまずここからね」
あたしは婦人服売り場の一角、下着のコーナーを指差す。
「え!?　いきなりここ？」
「あら？　あたしもそうだったわよ。それに、今ノーブラで下も男物なんか着てるんでしょ？　そこは大至急変えないとダメよ」
「そうだね。私も石山さんと同意見ね」
永原先生が同意する。
「そうよ、こういうところから幸子の意識を変えないといけないんだから」
お母さんも同意する。
こうやって外堀を埋めていく。
「は、はい……」
幸子さんは明らかに緊張している。
とても初々しい。あたしも、多分初日はこんな感じだったんだろうと思いながらどこか感傷的になる。
「はい、幸子さんのサイズはここ」
「ほら行くわよ！」
永原先生が二の足を踏んでいる幸子さんを引っ張っている。
「うっ……」

「現実から逃げちゃダメよ」
幸子さんは観念したように、目をそらしながらついていく。
何だろう、こんな子でも教育次第であたしみたいになるんだと思うと、どこかでワクワクする感情が出てきた。
「このブラジャーが似合ってるんじゃない？」
「うーん、こっちはどう？」
「うーん、大胆過ぎない？」
「そうかなあ？」
幸子さんを尻目にあたしたちは下着選びに熱中している。
たまに幸子さんに派手なのを見せるとやっぱり拒否する。
「ふふっ、男の子が喜びそうなのはこれだよね？」
あたしが白いパンツを見せる。
「う、うん……」
他にも、あたしが持っている縞パンや水玉などを中心に買っていく。
お母さんからは「子供っぽいのばっかり」と言われたけど、「男の子にはそれでいいのよ」と言う。永原先生も同意してくれた。
やはり元男とあって、あたしの説得力はすさまじい。
幸子さんにとっても、いきなり派手な色やデザインは心理的にもよくないので、それで行く。
……最もあたしもまだ派手な色やデザインのパンツなんて持ってない。黒いのさえない。あたしや幸子さん、あるいは永原先生みたいに童顔で幼い感じの女の子の場合、あまり男受けがよくないのを知っているからだ。
「さ、まずはこの下着から買うわよ」
「後で保険が下りるから、心配しないでいいのよ」
さっきも言ったけど、念のためもう一度言う。
ちなみに、ブラジャーはフロントホックもいくつか買っておく。後ろで留めるのは胸にホックが当たらなくていいけど、付けるのが大変だから、ノーブラへの逆戻りを警戒してのことだ。
「さ、普段着を買うわよ」

永原先生の宣言と共に、若い女性向けの服の売り場に行く。
「それじゃあまずこれ」
永原先生がシンプルな落ち着いたデザインで、足下までのロングスカートを手に取る。
「うん、それならまあ……」
幸子さんも妥協心を見せている。
「あら、今の幸子にはこれも似合うんじゃない？」
お母さんが大胆に露出した超ミニスカートを勧めてくる。
「ちょ、ちょっとこれは嫌だよ！」
「あらあらつれないわねえ……」
うちの母さんそっくり、やっぱりこのあたりの女性のメンタルの強さは、なかなかＴＳ病には真似できない。
「じゃあこれなんてどう？　こっちと合わせてさ？」
あたしが手に取ったのは、茶色の膝丈のスカートと青いブラウス。
「え？　ちょっと短いような……」
「カリキュラムではもっと短いスカートになるわよ。今のうちに女の子の服に慣れとかなきゃ」
あたしが言う。問題を先送りにしても仕方ない。
「わ、分かったよ……」
「というわけで、私のこれと一緒に試着してみて？」
「あ、永原会長、ちょっと待って？　まずこっちを渡さなきゃ」
あたしがさっき買った大量の下着の中から、白いパンツとブラのセットを出す。
ブラジャーはつけやすいようにフロントホックで配慮する。
「え!?　そ、それも？」
「当たり前でしょ？　ほら、試着して」
「う、うん……」
あたしたちは幸子さんを試着室へと押して行く。
「永原会長、試着したらまずは」
「うん、下着の確認だよね」
あたしは服選びの時は、既に女物の下着だったけど、幸子さんはそ

うもいかない。
「時間かかっているわね……」
「しょうがないわよ。初めて女の子の服を着るんだもん」
半年前のことを思い出す。
中の様子はよくわからないが、時折布が擦れる音がわずかにする。
「さて、ちゃんと着替えたかな？」
恐る恐るカーテンが開かれる。
幸子さんは前かがみに猫背になり、膝の上からスカートを抑えている。
「ど、どうかな？」
「幸子さん、怖がらなくて大丈夫よ」
「でもこれ、なんかスースーして落ち着かない！」
「大丈夫よ、あたしも最初はそんな感じだったから」
「で、でも……！」
幸子さんは納得がいってない様子。でも、もう一つ確認することがある。
「永原会長、今です！」
「ええ！」
「なっ!?」
あたしが足元へと体を落として、スカートを少しめくる。
同時に永原先生が素早く後ろに回り込んで幸子さんの両胸をわさわさっと触る。
「石山さん、こっちは大丈夫みたい」
でもこっちはだめだ。
「こら塩津さん！　なんでトランクスのままなの？」
「だ、だって、は、穿きたくない！」
「何言ってるの？　あなたは女の子なんだから、ちゃんと女の子の体に合った下着を穿きなさい！」
あたしが叱るように言う。
「や、やだって。ブラつけるだけでも大変だったのに！」
あたしと永原先生で試着室の方へ幸子さんを押し込める。

「女の子のパンツを穿くまでここから出してあげないわよ！」
　あたしが言う。
「そんなー」
「ほーら、観念しなさい」
　永原先生も煽ってくれる。
「はーい……」
　幸子さんが下を向きながら、試着室に戻る。
　布がこすれる音がしたかと思えば、小さく「おおー」という感心したような声が聞こえる。
　また、懐かしくなった。女の子になったばかりの頃を思い出す。
　そうそう、こうやって実用的な一面もあるんだと納得させてあげれば、頭ごなしにならない。
　カーテンが開かれる。幸子さんがトランクスを握っている。
「は、穿いたよ？」
「うん、トランクスはお母さんが預かってて？」
「……分かりました」
　お母さんがバッグの中にトランクスを入れて行く。
「幸子さん、穿いて見てどうだった？」
「そ、その……」
「ふふっ、付け心地いいでしょ？　ゆったりフィットしてて」
　あたしが笑みを含めて言う。
「う、うん……残念だけど、俺、負けたよ……」
「こーら！　俺はダメでしょ？」
　優しく諭す。
「すみません……残念だけど、私の負けです……」
「うんうんＯＫ」
「石山さん、暗示かけさせ忘れてるよ」
　永原先生が鋭く指摘する。
「あ、すいません会長」
「わ、私は女の子……私は女の子……」
　すでに幸子さんは声に出して暗示をかけていた。

「さ、服選びを続けるわよ。保険があるからどーんとたくさん買うわよ！」
「「おー！」」
やや幸子さんそっちのけであたしたちは盛り上がる。
やはりあの時のあたしと同じ、幸子さんは露出度が高い大胆な服は嫌がるし、幸子さんのお母さんがおばさん臭いヒョウ柄などを推してきたのも、あたしの母さんと同じ。
それに関しては、あたしと永原先生が幸子さんの味方になる。とにかく男受けがどういうものかと言うことの視点で服を選ばせる。
お母さんも反論はしてこない。
でも、やはりというかなんと言うか、あたしが買ったときほどじゃないけど、それでもかなりの服が積みあがっていく。
途中、幸子さんが「お母さんの着せ替え人形じゃない」と怒っていた。
でも、露出度が思いっきり高い服も買わせておく。あたしもついこの間まで使わなかったけど、浩介くんを誘惑する時に使ったし。
……それにしても、ちょっと寒かったのよね。
そうだ、この後寒くなりそうだし、あたしも自分用にストッキング買って履いてみよう。
「あ、ごめん。あたしも買いたいものあるからちょっとだけ抜けていい？」
「ああ、うんどうぞ」
永原先生に承認をもらい、あたしが来たのはストッキングのコーナー。もちろん家にもいくつかあるんだけど、北の方は思ったより寒いことや、日が落ちた後のことも考えてここで買うことにしたい。
うーん、どれがいいかな？
シンプルに黒い感じがいいかな？　お洒落なデザインもかわいいけど、あたしの場合頭の白リボンがかなり目立つと思うから、華美になりすぎないように注意しないと。
ともあれ、初めてストッキングを履くわけだからこれでいいよね？
あたしはサイズをもう一度確認し、レジに並ぶ。そしてそのままお

金を払ったら女子トイレに向かう。
あたしはスカートをベロンとめくり上げて、パンツを下して用を足す。すっかりおなじみの行動になったけど、幸子さんにはこれも学んでもらわないといけない。
ビデを済ませて拭いたら、パンツを穿き直し、ストッキングに手をやる。
久々に女の子としての初体験。
えっと……こうやって履くのかな？
……うん、出来た。どこか破れているとかそういうこともないし、見た目に反してかなり温かい。
あたしも、女の子になったばかりなら失敗してそう。自分の体や女物を熟知しておくとこんなに違うんだなと改めて思う。
あたしはトイレを流して、幸子さんたちと合流する。

## 船と飛行機

「お待たせー！」
「あ、石山さん、おかえりなさい。ストッキングにしたんだ？」
「うん、寒くなってきたからね」
あたしがにっこりする。
幸子さんの服も、すでにパジャマとか晴れ着を買う段階になっている。
この時にはもう、幸子さんも無抵抗で受け入れてくれている。やっぱり昔を思い出す。ってまだ半年前だけど。
更に次は靴。これもぶかぶかで危険なので、すぐに女の子用にサイズを変えなおす。
ちなみに、男時代の服もどさくさに紛れてお母さんが隠したらしく、幸子さんは緊張した表情で、足元を気にしながらロングスカートを穿いている。
そして、あたしが白いリボンを付けているように、リボンやカチューシャ、髪飾りと言ったおしゃれな小物類も買っていく。
女の子らしくおめかし出来る日が来てくれれば、あたしの役目もほぼ終わる。
後は徐々に女の子らしさを身に着けて、男の子を好きになれる。
そしていつの日か、協会の会員になってくれる……今でも普通会員にはなれるけど。ともあれ、それを信じたい。
「さ、こんなものかしら？」
お母さんが言う。
「うん、これだけあれば今のところは大丈夫よ」
あたしの時と同じくらいの買い物だし。
「そうだね。じゃあみんなで手分けして運ぼうか？」
「「はーい！」」
永原先生の掛け声と共に４台の台車が一列になって進んでいく。
これだけ多いと車に詰め込むのも大変だ。
帰り道を終え、もう一度塩津さんの家に戻る。

なんだかんだで長時間になってしまった。
もちろん帰りの新幹線にはまだ余裕だけど。
「ただいまー！」
お母さんが勢いよく言う。
「お、お姉ちゃんスカートか！」
徹さんが開口一番そういう。
「あ、ああ……ちょっと、不本意だ」
幸子さんはぶっきらぼうに言う。あたしはそんなこと言った記憶ないんだけどなあ。
「でも見違えたな。今の幸子、どこからどう見ても女の子だ」
「うんうん、お姉ちゃん結構かわいいじゃん！」
「か、かわっ……！」
幸子さんが動揺している。
「あら、女の子にかわいいって、最高の褒め言葉じゃない」
あたしがすかさずフォローする。
「むむむ……」
「ま、ともかくこれを部屋に運んでくれるかな？」
「おう！」
永原先生の言葉に男衆が気合を入れる。
買った服を一通り部屋に運び、空になった箪笥に服を入れる。
「な、なあ……さっきまでの服はどこに行ったんだ？」
箪笥が空になっているのを見て、幸子さんが当然の疑問を口にする。
「ふふっ、あれはもう、服としては使わないわよ」
カリキュラムの時に捨てさせるという役目がある。
「なっ……勝手に捨てないでよ！」
「『服としては』、よ。もう女の子なんだから男物の服なんていらないのよ。これからは早く女の子になるためにも、常日頃から女の子の服を着なさい。いいね⁉」
あたしがちょっとだけ威圧感を持って言う。
「は、はい……」

「じゃあ私たちはそろそろ出ます。もし何かありましたら支給のテレビ電話でお呼びください。ただし各々の都合もありますから、出られない場合は別の人が代理になります」
服を仕舞い終わったら、あたしが事前の打ち合わせ通りのセリフを言う。
「ええ、分かりました」
「塩津幸子さん、あなたはまだまだ予断を許しません。でも今日のことを思い出して、未練を断ち切って、一人の女の子として、私たちの仲間になってくれることを祈っています」
永原先生が言う。
「失礼します」
浩介くんがそう言って家を出る。

「ふぅー！」
あたしは一仕事終えたという感じで息をつく。
「そう言えば、優子ちゃん足のイメージ変わったよね？　さっきまで生足だったような……」
「ああうん、ちょっと寒いからあたしも買ったのよ」
というか、全然気付かれないとは、いや、それともあえて言わなかっただけかな？
深く考えないことにしよう。
「そ、そうか……確かに、冬場は寒そうだもんな」
浩介くんは、専門外という顔をする。
まあ、あたしだって寒い季節のスカートはまだまだ未経験。
うーん、やっぱりさっきのストッキングもだけど女の子としてはやっぱり最低1年は過ごさないと何もかも経験というのは難しそうだ。
ともあれ、あたしたちは家に帰るために駅を目指す。
「石山さん、お疲れ様。早速だけどフィードバックするわよ」
「う、うん……」

その駅に向かう途中で、早速フィードバックが開始された。
「結論から言うと期待以上だったわ。発病直後に医者からも止められるはずの性別適合手術をすると口走っちゃったら……今までのデータから言うと、もうそこからの挽回はほぼ絶望的だからね」
ともあれ、初仕事で好評をもらえたのはよかった。
「うん、あたしの発病直後と全然違ってて驚いたわよ」
あたしの場合、優一時代に自分が嫌いだったっていうのもあるけど。
「あはは、石山さんは特別だよ。普通はああやって自分の今までの性別と大きく葛藤するものなんだよ。あそこまで男に傾いちゃうと、復元は難しいけどね」
「ところで、俺思ったんだけど、優子ちゃんが他人を引っぱたいて叱ってたの初めて見たよ」
浩介くんが言う。確かにあたしに似つかわしくない行動だった。
「うん、自殺を止めるためとはいえ、ちょっとひっぱたいちゃったのはまずかったわね」
「すみません……」
「確かに、ああするしかないのは分かるんだけど、言ったように会のイメージもあるのよ。いくら統計的に中途半端な手段だったら自殺確定だとしてもね」
反省点ではあるが、しかし他に代案も乏しいのも事実ではある。
「あはは、でも何だろう？　幸子さんのために叱ってあげなきゃいけない気がして。信じられないくらい心を鬼にできたわね」
あたしも自分でも不思議だった。
「うん、それ、石山さんに『母性』が生まれ始めた証拠だよ」
母性……あたしにはまだよく分からない。
多分、桂子ちゃんを始めうちのクラスの女子たちだって同じ。
「母性？　あたし、まだよく分からないのよ」
「塩津さんをひっぱたいたのもそれよ。その子のためになると思ったのよ。それも、十分に吟味して、他の方法が無理とわかって考え抜いてからしたのよ。歪んだ善意で行う悪事とはそこが違うわ」

「つまり、優子ちゃんがまだ男だった頃の乱暴とは？」
「ええ、全く性質の異なるものよ」
あたしも、浩介くんも安堵の表情を浮かべる。ともあれ、優一とは性質の違うものだということが確認できてよかった。
そうこうしているうちに駅に到着し、そして1駅乗って新幹線を目指す。その間は少しフィードバック以外の話題になる。
帰りも、自由席の安さのために、行きと同じタイプの列車に乗る。
本当は速達列車の方が早いんだけど、そっちは自由席がないので仕方ない。しかもご丁寧に上野駅で降りるおまけ付きだ。
「さて、さっきの話の続きをしようか？」
新幹線の放送が終わってから永原先生が話を再開する。
「えっとどこまで行ったんだけ？」
「母性の話だよ浩介くん」
「あ、うん。それにしても母性かあ……」
「あたしもまだ全然わからないわよ」
どう説明すればいいのかわからない。
「うん、具体的に言葉で説明できるものじゃないわよ。でも、石山さんはもうそこまで来たってことよ。指導しているうちに身に着けてくれるかなあと思ってたんだけど、本当に早いわ」
永原先生が関心しながら言う。また褒められてしまった。
「う、うん！」
やっぱり女になっているって褒められると嬉しい。
「石山さん、幸せそうよね。本当に私の憧れよ」
永原先生が感傷的に言う。
以前にも同じことを言っていたことを思い出す。
「え!?　先生、優子ちゃんが羨ましいって……」
そう言えば、浩介くんは知らないんだよね。
「私だけじゃないわ、比良さんも、余呉さんも、他の正会員の人もあの後、同じことを言っていたわ。ともあれ、今日のことはレポートにしておくわ。石山さんにも書いてもらいますよ」
「う、うん……」

そうだよね、担当カウンセラーになったんだから。
「でも勉強がおろそかにならないかなあ？」
「勉強のこと？　大丈夫よ、忙しいのはカリキュラム終了からしばらくしての時くらいよ」
「うん」
今後の両立生活は大変になる。ただでさえこの体、体力がないのだ。
とはいえ、永原先生曰くテレビ電話という手もあるそうで、ともかくそこまで大きく困ることは無さそうだ。
また、最後に言ったように、いざとなったら余呉さんも代理でカウンセラーになってくれるようではある。

「うーんとにかく、家族の影響が幸子さんの課題かなあ……」
「石山さんはそう考えているの？」
あたしはＴＳ病の自殺率の高さについて考える。
今まで生きてきた価値観を変えること、あたしくらいの「優等生」でもこんなに大変だったんだ。
きっと他の人達はもっと大変だったに違いない。
「やっぱり、外堀から埋めてくしか無いのかなあって思うのよ」
「つまりそれが家族のこと、石山さんはそう言いたいのね？」
「うん、あたしみたいな人なら大丈夫だと思うけど、そうじゃないなら家族の理解と支援が必要なのよ」
そしてその支援方法もどちらかと言うと厳し目の教育にせざるを得ない。あたしがそうであったように。
「……分かりました。今までは結構本人のケアに忙殺されていたので、家族ですか……」
永原先生は何か熟考している。
「そうよね、家族が……傾きかけていた船を直してくれるのかなあって」
「船？　先生一体どういうことですか？」
ここで浩介くんが質問する。

「ああうん、二人とも、長くなるけど聞いてくれる？」
「うん」
永原先生は、発病したてのＴＳ病患者というのは、急な傾きで転覆しかけている船に例えられるのではないかと最近考えているという。つまり、ＴＳ病で肉体の変わったショックで船のバランスが崩れているということだ。
例えば右舷側に傾きすぎた船の場合、男が強くなるのは右舷側に更に傾く行為で、最悪の場合復元不能になって沈没に至る。沈没というのはつまり死ということだ。沈没する前でも、例えば林間学校の時にみた客船映画のように、早い段階で沈没が決定的になると、乗員は船から逃げ出す。つまり自殺というわけだ。
そうならないためには左舷側、つまり女の子側に傾き直すようにしなければならないという。
そして、ＴＳ病の場合、常に右舷に傾くように圧力がかかっているのだという。
しかし、極めて珍しい、というよりも今まで一例しか存在しないが、夏休みのあたしを見て分かるように、それがあんまりに強すぎると、もしかしたらそちらでも沈みかねないとも言えるのだ。ただしこちらは仮説の域を出ていない、もしかしたら中央まで復元し、更に左舷側に傾けようとしても、別の力が働いてそれ以上は傾かないかもしれない。
ともあれ、船が元通りになり、右舷へと押し出す圧力がなくなるのは、早くて生理の課題を乗り越えられた時、遅くても最終試験の時ではないかという。
ただし、安定航行に入っても船は航海を続ける以上時折揺れることがある。これが「男が出る」ということだという。
ＴＳ病の船は燃料と食料、乗員の体力に制限がないからどこまでもどこまでも大海を航海し続けられるのが最大の特徴。
他の船は、燃料も食料も、乗員の体力も有限だから、最終的にはあちこちが故障し、燃料が切れ、漂流し、最後には傾いて沈んでしまうのだという。

「石山さんの船は、とても復元力が高かったのよ。でも、左舷に傾けすぎて、ちょっと危なかった時もあったわよ」
「あはは……でも今は安定しているようでよかった」
「うんうん」
「そうすると、さっきの例えだと、家族も左舷に戻すためにするべきというのがあたしの持論。本人の意志を尊重するという善意が、最悪の結末を招きかけないわ」
「うん、私達も今までは家族の支援もしてきたんだけどねえ……足りなかったのかもしれないわね」
永原先生が言う。うん、確かにそんな感じだ。
あたしの例を取ってみても、母さんはともかく、父さんとはあまり話もしていないし、復学後も家族ではなくあたしのケアに忙殺されていた。
あたしの場合は、すんなりとカリキュラムを受ける決意があったから良かったけど、いつもうまくいくとは限らない。
「なあ、思ったんだが」
浩介くんが言う。
「ん？」
「ＴＳ病って飛行機にも例えられるなあって」
「篠原君、どういうこと？」
「ああ、話すと長くなるけど聞いてくれ」
浩介くんによると、ＴＳ病患者は上空で失速した飛行機に例えられるという。
操縦桿を引くというのが「男側」に傾く行動、逆に揚力を回復しようと操縦桿を倒すのが「女の子になる」というのだ。
そして、その飛行機も、機首が上がる圧力がかかっているため、操縦桿を思いっきり倒す必要がある、しかしあまりに倒しすぎると今度はオーバースピードになって、空中分解の危険性もあるという。
失速し、高度が落ちるに連れて徐々に挽回が難しくなっていく。
そして操縦桿を引き続けていれば最後は自らの手で墜落、つまり自殺するというわけだ。

ＴＳ病の飛行機は燃料を自分の手で作ることが出来、機長も副操縦士も無限の体力を持つから、地球を何週でも出来るが他の人の飛行機は最終的には燃料が切れて墜落してしまうのだという。
「昔大西洋に墜落した飛行機があって、３５０００フィートも高度があったのに副操縦士が操縦桿を引き続けて墜落した事故があったんだ」
　知っている。あたしもたまたま林間学校で見た。
「その時、操縦桿を引き続けている副操縦士の腕を引き剥がす役目、それが他のクルー……つまり家族というわけだ」
「もちろん、本人のケアも必要だ。その事故では、混乱していた副操縦士に代わり、別の人が機長席で操縦桿を倒したんだが、そいつが操縦桿を引き続けていたために、相殺されただけになっちゃったんだ」
　船と飛行機の２つの例え話、ＴＳ病患者についての見識が、また一つ深まった。
　これまでは、ＴＳ病患者というと、あたし自身と永原先生だけの世界だった、たまたま会に誘われて、他のＴＳ病患者とも接することが出来たけど、それだっていわばある程度「成績優秀」な人の集まりだ。
　今回始めて「成績不良者」と呼ばれる患者がどんな人なのか、改めて知ることが出来た。
　あたしの中で、世界が広くなるのを感じた一日だった。
　帰り際、「また明日」という声と、「体罰はもうやめてね」と改めて釘を差されて、あたしはまず本部に寄るという永原先生と分かれ、そしてあたしの最寄り駅で浩介くんとも別れた。

「ただいまー」
「おかえりー、疲れたでしょ？　晩御飯は手伝わなくていいわよ」
　母さんのいつもの出迎え。
「ありがとう」
「それでどうだった？」
「うん――」
　あたしは、今日起きたことと永原先生の評価を話す。

「そう、うまく行ってよかったわね。でも、ひっぱたいちゃったのはちょっとまずかったと思うわよ」
「うん、ちょっと反省点ではあるけど、あの状況だとあれ以外ないかなって思って――」
「そうねえ、ま。お母さんは家族会員だし、優子のやりたいようにやっていいわよ」
「う、うん。ありがとう」
あたしの母さんは、おそらく自分の欲求を優先させて、ノリノリであたしを「息子」から「娘」にしようとした。
でも、塩津さんのところは、心理的動揺もあって、多分幸子さん、いや悟さんのことを想って自由に生きていきたいと見守るような構えを見せた。
結果的に、我欲のままに生きたあたしの母さんは、あたしが女の子になるための手助けになった。
あたしは女の子になって、うんざりしていた乱暴な生活にも終止符が打たれ、クラスのグループの女子も一つになって、心から大好きな男の子も出来て、何もかもが幸せな生活になった。
だけど塩津さんのお母さんは、子供のためと言いながら、幸子さんの性自認を男のまま放置し、自殺の後押しをしてしまっていた。あたしが無理矢理止めなければ……いや、実際まだ予断を許さない状況には変わりはない。
ああそうか、これも「善意の罠」、小野先生や教頭先生と同じ状況だったんだ。
もし、塩津さんのお母さんが、女の子らしさを身につけるのを嫌がる幸子さんに、同情心を抱いてしまったら？
そう思うと、あたしはやっぱりまだまだ怖くて眠れなかった。

# 体育祭へ

塩津さんの家や、永原先生、あるいは他の会員からの幸子さんに関する連絡はまだない。順調に事が進んでいることを祈りつつ、あたしは高校生と日本性転換症候群協会の正会員という二重生活を始めることになった。

最初は体力が持つか不安だったけど、テレビ電話で話せばいいことや、しばらく会合の予定はないこと、また連絡そのものも途絶えているとあって、今や普段の学生生活とほとんど変わらない状況になった。

そして今日は11月も下旬の体育祭の日、あたしは体育が大の苦手科目で、今日はその祭典という、普通なら最大級の鬱イベントになるところだが、皆のサポートもあって体育の時間が辛いということはなくなった。

そして北の方に遅れてここでも寒くなり始めた。

そこで、あたしは学校でもストッキングデビューすることになった。

普段の制服よりも行程は一個多くなるけど、これだけで相当暖かくなるのが救いだ。

あと、ちょっとだけ股がゆるくても、ストッキングのデザイン上パンツが見えにくいというメリットも有る。

「いってきまーす」

「体育祭でしょ？　頑張ってね」

「あはは……」

あたしの出場種目は綱引きと玉入れということになった。

一応欠席者の代理として、各々補欠となる種目も決めなきゃいけないんだけど、あたしの場合、そこは特別に決めなくていいことになった。

まあ、この2つ以外の種目だとあたしは存在しない方が戦力上がるからなあ……仕方ない。

一方で浩介くんは100メートル走に大玉転がし、そして2年生と

３年生の男子で行う騎馬戦となった。
どれもこれも浩介くんにとっては得意種目。
特に騎馬戦では、練習でかなり大暴れしていたため、２年生ながら大将を務めることになった。
最大の懸案であった浩介くんと敵同士になってしまうのではないかという問題も、浩介くんとは同一の紅組になって解消され、いよいよ体育祭の幕開けとなった。
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう。あれ？　ストッキングにしたんだ」
桂子ちゃんに声をかけられる。
「うん、最近寒くなってきたからね、足太くならないようにって」
「へえ、やっぱり優子ちゃんってすごいわね」
そう言うと、桂子ちゃんは恵美ちゃんの方を振り向く、制服のスカートの中にすでにジャージを着込んでいるらしく、椅子に片足を乗せてだらしなく話している。
「あはは、あれはダメだよね、うん」
あたしは、「そういう風に面倒臭がっていると、いつまでも女子力が上がらないわよ」と言いたいが、恵美ちゃんは恵美ちゃんだ。ああいうのでいいのかもしれない。
女子力を少しでも上げていきたいあたしはあたしで、ああいうのを反面教師にしていけばいい。

ガラガラ
「おはよー優子ちゃん」
「浩介くんおはよう」
教室に入ってきた浩介くんと挨拶する。
朝のホームルームが終われば体育祭、母さんたちも来るかどうかはわからない。
あたしの体育の成績もあるし、できれば来てほしくないという気持ちもある。

ガラガラ
「はーい、皆さん、ホームルームを始めますわよー！」
そして、永原先生が教室に入る。
連絡事項は今日の体育祭の最終確認。
軽く聞き流しながら、あたしは永原先生について考える。
あたしが女子高生と協会正会員という二重生活を始めたように、永原先生は教員と協会会長という、もっと厳しいであろう二重生活を１００年も続けている。
学校で先生という職業をしながら、ＴＳ病の支援活動までしている。
症例が少ないから、ＴＳ病支援に専念することは出来ない。
それはきっと、比良さんや余呉さんも同じこと。彼女たちはみんな、ある種二重生活者といえるだろう。
「はい、それじゃあ今日は以上になります。早速着替えて体育祭に備えてください」
「「はーい！」」
今日はほとんど体操着で過ごすことになる。他のクラスでも一斉に着替えるため、時間帯を分け、まず男子から着替え、次に女子が教室で着替えることになっている。
クラスの女子と一緒に、教室から出てカーテンを閉める。
浩介くんが着替えているところみたいなあ……ってダメダメ！
女の子なんだから、彼氏の着替えに興味があるのは当然だけどそういうはしたない子になっちゃダメでしょ優子。
あたしは「優一の記憶」を辿って浩介くんのことを思い出す。
……うーん、着替えたことは思い出せるけど、浩介くんのことまで思い出せないや。
半年前まで毎週２回の体育の授業で、あるいは小中学校の時から、ずっとあの中にいたと言うのに、半年いないだけでもう詳しいことを忘れてしまう。
それは多分、「どうでもいい記憶」だったからかもしれないし、あるいはクラスで孤立していた「優一」だからかもしれない。

「優子ちゃん、何考えてるの？」
「扉を凝視してどうしたんですか？」
桂子ちゃんと龍香ちゃんが声をかけてくる。
「ああ、うん……その……」
「ひょっとして中を想像していたりとかですか？」
「ギクッ……」
「あはは図星だね」
桂子ちゃんと龍香ちゃんに笑われてしまった。
「あうう……」
龍香ちゃん鋭すぎる……
「でも、優子さん半年前まではあの中にいたんですよね？」
「う、うん……でも思い出せなくて……」
「へえ、やっぱりそういうものなのねえ」
桂子ちゃんも関心している。
もちろん、あたしも優一時代の人格を忘れたわけではない。永原先生でさえ最初の２０年の人格を忘れたわけではないように。
でも、思い出す機会も日にちが過ぎるに連れて、確実に減っていっている。
一歩一歩、影が薄くなっていく。無くなることはなくても、薄くなり続ける。
食塩水にいくら水を加えても、塩分はなくならないが、割合が薄くなるようなものかもしれない。

「終わったぞー」
体操着姿の男子たちが教室から出ていく。男子たちは鞄を持っていて、ここに着替えた制服が入っている。
ちなみに、終わる時は女子から着替えることになっているので女子の場合は制服は机においておけばいいことになっている。
そして、いつものように女子たちで着替える。
あたしの人生全体で見れば、男子更衣室よりも、女子更衣室に入った回数の方がずっと少ないのに、安心感はこちらのほうが数段上に

なった。
最初に着替えた時は……ああそうか、一人で着替えてたんだっけ？
体育の着替えには思い出がある。あたしが女子として皆から初めて受け入れられた時も、これがきっかけだった。
ふと、幸子さんのことを考える。塩津さんは大学生だけど、女子サッカーの方には参加したように見える。更衣室とかはどうしたんだろう？
「女子と一緒に更衣室に入る」くらい出来ないと、女の子として一人前にはなれない。いつまでもそれを避けていては必ず破綻が来る。
でも、幸子さんの通う大学の友人たちがどれだけ事情を知っているかはあたしにはわからない。
もし事情を知っていると、下手すれば教頭先生や小野先生みたいなことになりかねない。
あたしは自分が女の子だという強い自負があったから何とかなったけど、中途半端な精神状態だとかなりまずいことになる。しっかりと女の子として根を張らないと行けないのがこの病気なんだから。
……そうすると大学の人達にも連絡を取らないといけないかなあ。
「そういえば、優子さん。会の方はどうなんですか？」
「ああうん、順調だよ」
幸子さんの対処法を考えていたら、龍香ちゃんに声をかけられた。
あたしは、クラスの女子にはまだＴＳ病になったばかりの患者１人の担当カウンセラーになったということを話せていない。
高校生ということを考えればとんでもない重役だからというのもあるし、周囲も驚くだろうというところからだ。
ブー！　ブー！　ブー！
携帯のマナーモードのバイブが鳴っている。
よく見ると余呉さんからのメール。
題名：塩津さんの服装問題について
本文：塩津さんについて余呉さんから報告です。
私服が頑なにスカートにならない。女物の下着はそうせざるを得ない状況に追い込んだからいいが、荒れることが多く、お母さんの方

で「やっぱり男の服を元に戻したい」と言ってきました。もちろん断ったがお母さんは納得していない。
石山さんはどうしますか？

あたしは余呉さんに、もし可能であれば、徹さんとも連絡を取って、スカートを穿かせるかどうかはともかく、男物の服を絶対元に戻さないように徹底させるように言って欲しいとメールの本文を打つ。
以前にも言ったように、これは転覆しかけの船、あるいは失速している飛行機と同じ。
本人の状態はともかく、転覆したり墜落したりするのを防ぐためにも……そうか、永原先生と浩介くんがしてくれたＴＳ病の話も、一緒に送っておこう。
うーん、打つのに時間がかかるなあ……
「優子どうしたの？　メール？」
虎姫ちゃんが声をかけてくる。
「ああうん、協会の人から」
「へー何してるの？」
虎姫ちゃんが興味深く聞いてくる。
「ああうん、ちょっと仕事があって……」
もちろん後輩のＴＳ病の人の面倒を見ているとは言えない。
「そう？　でも、そろそろ集合時間だよ。行かなきゃ」
虎姫ちゃんの言葉に、はっとする。そうだ、ともあれ体育祭に出ないと。
「あ、うんごめん行こうか」
ともあれ、以前幸子さんの所へ行った帰りの新幹線の中で考えた例え話、あれは使えるかもしれない。
それを胸に秘めながらあたしは体育祭の集合場所に集まる。
すると、教員用の体操着姿の永原先生が現れた。
「それじゃあ、２年２組、紅組と白組に別れるけど頑張ろう！」
「「おー！」」
体育祭は紅組と白組に分かれているが、小谷学園の場合、殆どピリ

ピリしていない。
得点も一応あるにはあるが、大差がついた時はハンデ戦になったり、その場で打ち切ったりしていて、運用としてはかなりのどんぶり勘定なので、きっちりやろうと考えている生徒も先生もいない。
むしろこういうのって保護者が一番うるさい感じがする。
保護者の席を見る、ぱっと見ではあたしの母さんはいないように見える。
保護者たちが続々集まる中で、開会式が開かれる。
守山会長の放送と共に、最初に登壇したのは校長先生だ。
「えー、本日は天候にも恵まれ、無事、小谷学園体育祭を開く運びになりました。えー、校長先生の長話は嫌われる元ですので、これで終了します」
相変わらず話の短い校長先生だ。他の生徒たちの中では、印象こそいいもののいまいち影の薄い校長先生だけど、あたしにとっては教頭先生との対立を鎮めてくれた恩人でもある。
守山会長の宣言から、実行委員により最初の種目の開始準備が始まった。
ちなみに、あたしは林間学校の実行委員をやったので、来年は委員会も別のをしなければいけない。
林間学校の後で分かったことだけど、当初は学校側でＴＳ病という事情を加味して実行委員義務を免除する方向にもあったらしいけど、結果的に浩介くんを好きになれたきっかけだし、今ではいい思い出になった。
ともあれ、あたしは持ち場に戻ったら持っていた携帯電話をもう一度開き、メールの続きを打つ。
船と飛行機の２つの例え話を余呉さんに伝え、はっきりと幸子さんのお母さんに「お母さんのしていることは、例え善意でも、いや善意だからこそ状況を悪化させる行為」だと伝えなければならない。
浩介くんが例え話に使った事故でも、別の操縦士が正しい操作をしたにも関わらず、間違いを疑わなかったその操縦士によって打ち消されてしまい、墜落事故という結末を迎えたのだから。

「おや、石山さん、携帯で何をしているんですか？」
　意外な声が聞こえてきた。
「あ！　校長先生！」
　あたしは携帯を隠そうともしない。別に他人に迷惑をかけているわけではないからだ。
　校長先生もそのことを知っているから、携帯電話をいじっているあたしに対して全く注意しようとしない。
「いやはや、邪魔しちゃいましたか？」
「ああいえ、大丈夫です」
「それは良かったです。もし差し支えなければ、何をしていたのか教えて下さいますかな？」
「はい。実は東北の方で１人新しくＴＳ病になった人が出たんですけど――」
　個人情報もあるし、慎重に話さないと。
「ええ」
「あたしが担当のカウンセラーになりまして」
　クラスのみんなには話していないけど、校長先生ならまあいいかもしれない。
「おや、会長の永原さんが石山さんを正会員に推薦したという話は聞いてましたが、もうお仕事ですか？」
「はい。最悪の事態は脱しましたが、患者の状況は悪いです。自殺の危険性は依然高いです」
　正直、帰った時はここから好転してくれるかもしれないという期待はあったけど、やっぱりそううまくは行かない。
「それはそれは。大変ですねえ」
「はい、重圧もあります」
　具体的なことは話さないし、校長先生も大人なのでそうしたところはわきまえている。
「気負わなくていいですよ。私も、校長と生徒という関係だけではなく、日本性転換症候群協会の正会員と、小谷学園の代表者という関係で、あなたと接することもあるでしょうから」

「ああいえいえ、とんでもないですよ」
あたしはとっさに謙遜する。そういう関係は永原先生と校長先生だけで十分だ。
「ははっ、事実ですよ事実」
校長先生が笑う。
ブー！　ブー！　ブー！
「あ、すいません」
余呉さんからメールが届く。
題名：分かりました
本文：今の例え話の件も含め、塩津さんには詳細に伝えておきます。
「何と来たのですか？」
「はい、『了解しました』という返答です」
あたしが答える。
「さ、そろそろ最初の種目が始まります。私も、ここで観戦していいですか？」
「ええ、もちろん構いませんよ」
校長先生なんだから、あたしに許可を求めるというのもどうかと思いつつ、校長先生がゆっくりと腰を下ろす。
「あれ、校長先生、どうしてここに？」
校長先生を見つけた永原先生が疑問の声を上げる。
「ああいや、石山さんが携帯をいじっていたのに少し気になりましたので、声をかけたんです」
「そうですか……石山さん、携帯で誰とやり取りしてたの？」
「ああ、うん……余呉さんから」
あたしが正直に言う。
「あ、そう。それで、余呉さんからは何だって？」
「えっと……こういう内容です、永原会長」
あたしは、個人情報のこともあって口頭ではなく携帯の画面を永原先生に見せる。校長先生も配慮して明後日の方向を向いている。
「うん、分かったわ。それで返信は？」
「こう返信しました……それで、返ってきたのがこちらです」

「……うん、分かったわ。ありがとう。石山さんのレポートについても言いたいことはあるけど、今はちょっと待っててね。体育祭が終わってからにするわよ」
「……分かりました」
あたしと永原先生は2つの顔を巧みに使い分ける。
そして用事が済んだら、日本性転換症候群協会の会長と会員という立場から、すぐに小谷学園の先生と生徒という関係に戻る。
これからも、こういった風に関係が切り替わるということは何度も起きるだろう。今のうちに、訓練を積んで慣れておかないといけない。
ともあれ、校庭に目をやると、実行委員の開始準備が終わっていた。
小谷学園体育祭、最初の種目が始まった。

# 体育祭　前編

体育祭最初の種目は1年生の障害物男女混合リレー、よく見るとミスコンで見かけた顔もいる。

「1コース――」

生徒会の守山会長が生徒の名前を読み上げる。生徒が手を挙げ、先生の「よーい、スタート！」の声とおもちゃの銃声で一気にスタートする。

紅組白組が半々居て、順位ごとに得点が決まっている。

単純な競争とあって、皆真剣に走っている。

網があったりハードルがあったり、吊るされた紙をジャンプで取ったりと結構大変だ。

ちなみに、パンフレットによればこの障害物競走、特定の障害物であまりにも時間がかかった場合にはスキップの救済措置もあるという。救済措置を受けても特にデメリットはない。

このルール、体はいいけど時間短縮という意味もありそうだ。

皆練習をしてきたため、救済措置を受けそうな様子はない。事実上の死にルールだ。

とは言え救済措置を設けないと、理論上2人のランナーが特定障害物に永久に行き止まりになってしまい、体育祭が終わらなくなってしまう危険性もあるから明文化する必要があるのだろう。

一方テントでは、体育祭の実行委員の人がメモを取っているのが見えた。あれで得点を計算することになっている。

さて、その次にやるのが2年の男女別で行う綱引き。

まずは女子からなので、早速あたしが出ることになる。

4組までの紅組白組で8チームあって、あたしは一番最初に出ることになる。

相手はくじびきで4組と決まっている。

ちなみに、あたしはプラスワン扱いなので、こちらのチームの人数が1人多い。

「えー2年2組は、石山優子、志賀さくら――」
守山会長の放送で、あたしたちの名前が読み上げられる。
保護者の中にはあたしたちのチームが1人多いことに気付いている人も居るだろうが、そのまま体育祭は進む。
あたしたちは綱を持って引く、あたしは前方の方で構える。どうせ無い力だし、一番足を引っ張らない位置でもある。
「よーい！」
審判役の永原先生の掛け声とともに綱を握る力を強める。
パンッ！
「んーーーーー!!」
おもちゃの銃声と共にあたしたちが綱引きをする。しかし力が足りない。
徐々に相手方に綱は行く。一生懸命頑張るがどうしても相手の力のほうが強い。
ピッー！
「そこまで！　白組の勝ち！」
「あーダメだったかあ……」
多分あたしはいてもいなくても殆ど変わらない。実際1人多くて負けているし。
さてこの綱引き、第2試合、第3試合、第4試合とあって、あたしたち紅組が負けたのは最初の試合だけで、そこからは紅組が3連勝した。
一応1チーム2試合することになっているのであたしたちは第5試合に再登場する。
「次は勝つぞ！」
「おー！」
女子で円陣を組む。去年の体育祭でもそういうことはあまりなかった。
優一だった頃はみんなに嫌われていたから、1年生ながら大車輪の

活躍をしたのに、誰も全然褒めてくれなかった。桂子ちゃんにだけ「優一って運動神経すごいよね」と話しかけてきたくらいだった。

それが今では、こうやってチームの一員になれているのだから大きな進歩よね。

「よーい！」

再び力を強める。

パンッ！

「んーーーーー!!!」

今度は少しずつこちら側に傾いている。

よし、大丈夫、このまま行けば。

「そこまで！　紅組の勝ち！」

「いえーい！」

あたしは周囲の女子たちと共にハイタッチをする。

これで紅組の４連勝。

白組がその後２連勝して持ち直したが最終試合を紅組が取って５—３で勝ち越し２点となった。

綱引きの前、先程の障害物競走までは白組が得点でリードしていたが、得点配分の都合上、紅組が再びリードとなった。

とは言え、どちらも得点に一喜一憂している感じではない。実際得点ボードを見ている生徒は殆ど居ない。

とにかく小谷学園らしい緩い体育祭だ。

一方で、親や家族が座っている観客席からは声援が飛んでいる。小谷学園は体育会系ではないので、保護者のほうがよっぽど熱気がある。得点ボードも親の視線の方が多いくらいだし。

さて、綱引きで学生として一仕事終えたあたしは、再び日本性転換症候群協会正会員となる。

あたしは、協会の方から連絡がないか鞄に入れておいた携帯を見る。

すると余呉さんから再びメールが届いていた。

題名：先程の件についての報告

本文：塩津さんに伝えておきました。何とか了承していただきまし

た。また、言葉遣いに関してもお互いに注意しあうように言っておきました。
うんそれでいいわね。
あたしはとっさにメールを打つ。
題名：Ｒｅ先程の件についての報告
本文：了解しました。現在体育祭中ですが、もしまた何かありましたらメールを送ってきてください。可能な限り対処します。
ビジネスメールという感じではないので、かしこまった感じではない。本当はもっと別に作法があるんだけど、携帯のメールだしまあ伝わればいいという感じだ。
このあたり、小谷学園に似ている気がする。
さて、体育祭の方は3年生が何かよく分からない種目をやっている。
あたしの方はと言えば、午後まで出番はないのでゆっくり休む。
午前中は浩介くんが「大玉転がし」に出るので、その時だけ集中して見ることにする。
「あ、優子ちゃん」
すると、浩介くんが声をかけてきた。
「あ、どうしたの浩介くん？」
「ああいや、さっきから携帯をいじってるからさ」
「ああうん、正会員の余呉さんから」
「もしかして例の塩津さんのこと？」
浩介くんが聞いてくる。
浩介くんもあの場にいたし、一応維持会員ということになっているから、校長先生よりはたくさん話して大丈夫だろう。
「うん、あの後ちょっとあってね。頑なにスカートを穿きたがらない上に男物の服を隠されているから荒れることが多くなっているらしくて」
「え!?　あんなに良さそうだったのに!?」
浩介くんが驚いた声を出す。それは当然だ。あたしだって驚いている。

何分、女物の下着について、納得した表情を見せていたのだからショックも大きい。
それとも、下着はともかく女の子の服が嫌なのかな？
あたしの場合は女の子になってからは男物の服を来たことが一度もないからよく分からない。強いて言えば目覚めてから最初に着替えるまでに穿いていた優一時代のトランクスくらいかな？
「それで、幸子さんのお母さんが服を元に戻したいって言って来たから、それを止めるために船と飛行機の２つの例え話も添えて余呉さんに送ったってわけ」
「なるほどねえ、それで、首尾は？」
「まだ報告待ちよ」
「わかった。さ、体育祭に戻ろうか」
「うん」
浩介くんと2人で体育祭を見る。
時折、浩介くんは腹筋の様な動きをする。
「体力温存しないと」とあたしが言ったが、浩介くんは「ああ、ウォーミング・アップの一環だよ」と返してきた。
こんな緩い体育祭でも真面目でストイックで責任感も強い、浩介くんらしい考え方。
種目が進むが、紅組と白組の得点は一進一退の様相を見せている。去年のように大差がついて途中からハンデ戦になって強引に均衡状態に持ち込んだのとは対照的だ。
こういうのは体育の成績を鑑みて、うまく戦力を均衡させるらしいんだけど、やっぱりそれでも各人のモチベーションや、女子の場合「女の子の日」の都合で戦力が欠けてしまい、大差がつくことがある。
実際、さっきの綱引きも白組の1チームが1人主戦力と言われていた女子がいわゆる「女の子の日」になってひどい腹痛で全く出られないという状況で、いわゆる「ドアマットチーム」にされていたし。
去年の体育祭のことをまた思い出す。
当時あたしは優一として活躍していた。そういえば去年も浩介くんと同じ組だったけど、体育祭のコンボは伝説になった。

というか、優一と浩介くんが組むと大変なことになったのは事実だ。
他の種目もそうだったけど、特にあたしと浩介くんが連携していた種目ではとてつもない大差のために、点数が開ききっちゃったので、終盤がハンデ戦になった。
今思えば、普段の生活では怒鳴り怒鳴られだったけど、体育祭での相性は良く、「優一」も久々に上機嫌で浩介くんを素直に褒めた記憶がある。
その時は浩介くん、普段の「優一」の言動もあったから変な顔してたけど、今浩介くんを褒めたら、多分顔を赤くするんだろうなあ……
今のあたし、優子になったあたしはとってもか弱い女の子。だけど、浩介くんがあたしを守ってくれる。もう強くなりたくない。
去年の体育祭を思い出して考える。もしかしたら、女の子になってからあたしと浩介くんの相性が良いのも、そういうところにあるのかもしれない。
体育祭はその原点だったのかも。優一時代のあたしは男子からは気に入らない奴ではあったが体育祭の仲間ともなれば心強い味方だったのかもしれないわね。
今となっては真意はわからないけど。

「えー、続いては大玉転がしを行います！」
「あっ、俺行かなきゃ」
浩介くんが思い出した様に立ち上がる。
「うん、浩介くん、頑張ってね！」
あたしがニッコリしながら言う。
「お、おう……」
ちょっとだけ顔を赤くする浩介くん、周囲は「ヒューヒュー」とあたしたちを囃し立てている。
「くそー篠原のやつー！　羨ましいぜ……」
「全くだよなあ。くそお、最初いじめなきゃよかったよ……」

「あーあ、やっぱり女の子って強くて逞しい男が好きなんだよなあ」
「篠原は強いもんなあ……あーあ、俺は桂子ちゃんでも狙うかなあ」
「おいおい、桂子ちゃんだってお前ごときが手を出していい相手じゃねえだろ？」
「そうはいってもよお……じゃあ永原先生とか？」
「おいおい、先生はもっとまずいだろ？　それにお前ロリコンかよ！」
「ロリコンって、４００歳以上年上の人を狙ってロリコンかよ」
「あーややこしいなあ……」

高月くんと他の男子が浩介くんを羨ましがる声で話している。そして、あたしが狙えないなら誰を狙うかなんて話をしている。
そういう時に上がるのは殆どの場合は桂子ちゃんか永原先生が話題になる。
桂子ちゃんは元々学校一の美少女と呼ばれていたし、男子の目をちゃんと考えて、性格もとてもいいことや、あたしや永原先生と違って生粋の女の子ということで相変わらず男子の間では人気が高い。
あたしが女の子になって、「優一」という「狂犬」が居なくなったことも、ますます桂子ちゃんを狙う男子が増えたが、あまりにもそれが多くて男子が警戒しあっているのもこれまで通りだ。
そして永原先生を恋愛対象にあげる男子も増えた。永原先生も美人の先生ということで元々人気が高かったが、やはり先生と生徒ということで一定の壁もあった。
しかし、永原先生がミスコンで見せた制服姿やメイド服姿、更に優勝を逃した時に悔しさのあまり大泣きしたことなどもあって、親しみやすい先生として男子からの人気は更に上昇していた。
特に制服姿を披露したのは大きかったらしく、一部では永原先生がミスコンの時に泣いた写真が出回っていて、一部の男子からは「最高にかわいい」と人気が高いという。
そして、人気が出てきたのはいいが、桂子ちゃん派の男子を中心に、「永原先生が好きなのはロリコン」という風潮まで出てきた。
ロリコンという批判に対しては、実年齢を持ち出して否定するのが

お約束の返しになっている。
様式美ではあるが、確かに深い話だ。うちの家系もだが、大抵の人は遡れるのは江戸時代くらいまでで、永原先生は江戸時代よりも更に前の安土桃山時代、室町時代から生きている。
記録さえ残っていない、自分たちの遠い先祖たちが生きていたような時代から生き続けている永原先生を恋愛対象にするのは、果たして見た目がいくら幼いからと言って、ロリコンになるのだろうか？
多分、いくら考えても結論は出ないだろう。
浩介くんたちが大玉転がしの開始を待っている。
あたしと浩介くんが学校でいちゃついていると、他の男子が浩介くんに嫉妬の視線と会話を浴びせている。
特にあたしが浩介くんに惚れた経緯が直球的すぎたことや、浩介くんが喧嘩に強いため他の彼女なしの男子にとってはやり場のない不満が溜まっているんだろう。
浩介くんも、最近までは「不釣り合い」と言った言葉を気にしていたけど、今ではすっかり自信を取り戻してくれた。そして、「かわいい優子ちゃんの彼氏」として、そうした男子の嫉妬の声が気持ちいいとも言ってくれた。
やっぱり自信をつけると、あたしももっときれいになっていくし、浩介くんももっと強くたくましくかっこよくなっていく。
好循環がそこに生まれているのだ。

「大玉転がしリレー、第一レーン、第一走者――」
守山会長がまた読み上げる。ちなみに、この大玉転がしは守山会長自身も種目に参加するので、副会長の人が代理で放送している。
「最終走者、篠原浩介――」
「きゃーーーーー!!　浩介くん頑張ってーーーーー!!」
浩介くんが手を上げると、たまらずにあたしが黄色い声援をあげる。
みんなジロジロ見てたけど、うん、これでいいや。
体育の時の浩介くんは特にかっこよくて、あたしが体育を嫌いにな

らずに済んだ大きな理由だから。逞しい浩介くんが見たくて、声援を上げたい。
「よーい！」
パンッ！
ここでは小野先生が審判役、大玉転がしは紅組と白組が２チーム作られ、合計４チームで対抗する。
第一走者、浩介くんのチームは、途中の折り返しでもたつき3位。
第二走者、４位のチームに復路途中で抜かれ、最下位に。
その後も、他の走者が追い上げを見せつつも、順位としては最下位には変わらない。
でも、あたしはそこまで心配していない。
なぜなら、練習の時の浩介くんがとても速かったから。
最終走者の浩介くんにバトンが渡される。
「キャーーーーー!!! 浩介くん頑張ってーーーーー!!!」
浩介くんはあたしの声援で士気が上がったのか、練習よりも凄まじいスピードで追い上げていく、１人、２人、ターンも素早く、復路で１位の紅組を捉える。
もはやワンツーフィニッシュなので、得点は変わらないがそれでも追い上げる。
ゴール直前、浩介くんは1位のチームも抜いて、見事最下位から逆転優勝となった。
「キャーーーーー!!! 浩介くん素敵ーーーーー!!!」
みんなも、最終ランナーで一気に逆転した浩介くんに拍手している。
チーム内でも、浩介くんが褒められているのが見て取れる。浩介くんの彼女のあたしまで誇らしくなってくる。
浩介くんは息を切らせながらも、こっちに向かってくる。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん、どうだった？」
「もう最高！　素敵！　浩介くん大好き！」
すっかり虜にされ、惚れ込んでしまったあたしは浩介くんにまるでアイドルに会った女子のようにはしゃいで言葉を投げかける。

「お、おう……」
そんな中で、浩介くんはやっぱり顔を赤くしていた。
うん、最高の青春だとあたしでも思う。
ともあれこれで、あたしにとっても浩介くんにとっても、午前の部が全て終わった。

午前最後の種目が終わり、体育祭は昼休みに入る。
みんなお腹が空いていたようで、一斉に食堂まで行く。
「昼休み長いし、あたしたちはもう少し後でいい？」
浩介くんのお腹が空いていないなら、食事はもう少し後にしたい。
「うん、そうだな。そうしたい」
というわけで、あたしたちはしばらくその場にとどまることにした。
午後からはあたしが玉入れ、浩介くんが１００メートル走と騎馬戦ということになっている。

「そろそろ第一陣が終わる頃かな？」
「うーん、まだだと思う」
浩介くんが異議を唱える。
「じゃあどうする？　あたしそろそろお腹空いてきたけど……」
「そうだ、ちょっとこっちに来てくれる？」
「ん？」
あたしは浩介くんに言われるがままについていく。

# 体育祭　中編

人気の少ない校舎の中を、浩介くんは登っていく。
明らかに屋上を目指している。
「浩介くん、屋上？」
「うん」
浩介くんに聞くと、やっぱり屋上だった。
浩介くんは、責任は取りたいとしていたものの、やっぱり男の子だから、あたしに対してどうしても性欲が湧くことはある。
多分今回もそんな類。昔のようにブルマというわけではないのだが、それでもやはり制服と違って、胸が強調され、時に揺れることもある体操着は浩介くんにとっても興奮の対象になる。
あたしの魅力、そこに胸が含まれていることは否定できない。
屋上のドアが閉まる音がする。人気のない屋上で浩介くんと2人っきりになる。
「んっ……」
あたしは顔を少し上に上げて目を閉じる。キスしてのおねだり。
浩介くんが興奮すると、あたしも興奮しちゃう。
肩の後ろに浩介くんの腕が添えられる。
「ちゅっ……」
唇が触れ合うと、あたしは口を開けて舌を浩介くんの唇に付ける。
浩介くんは優しく唇を開けてくれる。
「んんっ……じゅるっ……」
舌の絡む感覚がどうしようもないくらいに気持ちいい。
浩介くんのもう一方の腕が徐々に下に行く。
「んんっ……んーーー!?」
お尻を触られてビクッとなる。
それでも舌を絡め続ける。
「ぷはっ……」
どちらともなく口を離すと、唾液の糸が広がりぷつりと切れる。
「もっと……もっとお……」

「うん……分かった……」
「うん……ちゅぅ……じゅるるっ……」
あたしがおねだりすると、浩介くんがまたキスをする。
そしてゆっくりと、あたしは体操着の中に手を入れられて、パンツの上からお尻を不規則に円を描きながら撫でられ続ける。
更にもう一方の肩を添えていた手が横に伸び、後ろから揉まれているような感覚に襲われる。
「んっ……んんっ……」
それでも、そこまで深刻にしつこいことはしてこないのが浩介くん。
浩介くんは「責任を取る」ということで、多分に自重をしてくれている。そのお陰で、あたしも興奮しすぎて汗だくになってしまっていることも、浩介くんに悟られたことはまだない。
でも、浩介くんだってあたしだって、本当はもっと深い関係になりたいと思っている。
腰を引っ込める浩介くんに、あたしがちょっとだけ仕返しをする。
浩介くんの腰に手をやって、より深く、浩介くんの硬い胸板に接触する。
「ちゅっ……んぁ……じゅる……」
ディープキスが続く中で、すっかりたくましくなった浩介くんの感触がたまらない。
恋人として、最高に幸せな時間。
「ぷはぁ……」
「はぁ……はぁ……」
やがて呼吸が続かなくなり、もう一度唇を離す。
「浩介くん、あたし……」
「ほら、お尻をこっちに向けてごらん？」
浩介くんが優しく言う。あたしは屋上のフェンスに手をやって浩介くんにお尻を向ける。
「えいっ！」
ぷにっ

「きゃあ！」
てっきりお尻を触られるのかと思っていたのに、浩介くんに後ろから両胸を揉まれてびっくりしてしまう。
「優子ちゃん、今の声……すごくかわいいよ」
「か、かわいい？　うん、ありがとう」
体温が上昇し、全身からはどんどんと汗が流れていく。
あたしは浩介くんに染め上げられて、浩介くんが居ないと何も出来ないんじゃないかと思ってしまう。
「はぁ……はぁ……」
浩介くんが必死に性欲と戦っている。
あたしには、浩介くんの理性が負けることを祈らずにはいられない。
あたしはもう、とっくに理性が負けるようになってしまった。えっちな子だって嫌われるかもしれないという恐怖はない。
なぜなら浩介くんにだけ見せる、浩介くん専用の女の子だから。
でも今日も、そういうことはなかった。だから終わる時だけ、ちょっとだけ不満が残る。

「浩介くん、そろそろ行こうか……」
「あ、うんそうだね。俺もお腹すいた」
あまり長居しすぎるのも良くない。
あたしは浩介くんと手をつなぎながら食堂に来る。
あたしも浩介くんも頼んだのはカレー。浩介くんは大盛りだけど、午後も動くことを鑑みて、あたしは普通のサイズにする。
食堂のおばちゃんからは「あらまあいちゃいちゃしちゃって」と言われてしまった。
周囲からも、すっかりあたしと浩介くんのカップルは有名になっている。
同じカレー同士なので、ここでも「あーん」はしていない。いつかしてみたいと思いつつも、中々機会は巡ってこない。
あたしたちは、午後の体育祭に向け、再び元の持ち場に戻る。

ブー！　ブー！　ブー！
あれ？　また携帯が鳴っている。
あたしが見てみると、それは副会長の比良さんからだった。
題名：塩津幸子さんの件
本文：比良です。殆ど諦めかけていた中での挽回劇は素晴らしかったですが、予断を許さない状況です。
余呉さんの方でお母様の方に忠告をしたのですが、反応が芳しくないということでした。どうしても、幸子さんをかわいそうに思ってしまうといいます。
このままでは、お母様が「幸子さんのため」という名目で、男物の服を元に戻してしまうのは時間の問題と思われます。どのようにすればいいでしょうか？

うーん困った。
「優子ちゃん、どうしたんだ？」
「ああ、うん。比良さんから」
あたしが浩介くんにメールを見せる。
「ふう、やっぱり良心を捨てさせるって難しいなあ」
浩介くんが何の気なしにつぶやく。
「うん、あれだけひどく乱暴だった優一の頃のあたしでさえ、高月くんや浩介くんの良心を消すことはできなかったもの」
そしてそれは、教頭先生や小野先生と同じ、永原先生がかつて言っていた「偽善」との戦いでもあるのだ。
「そう……だな……」
でも本当に困った、お母さんが服を隠すのをやめてしまうのは本当にまずい。
かと言って、処分させるのも後のカリキュラムで支障が出てしまうから、最後の手段にしたい。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
「お父さんと弟の徹さんに、別の場所に隠させるっていうのはどうだ

？」
浩介くんが提案してくる。
だけどそれにはあたしの懸念が一つある。
「あ、うん。でもどうしよう？　徹さんとお父さんも同じ気持ちだったら？　あるいは隠し場所がお母さんに漏れたら――」
もし同じ気持ちだったりあるいは別の隠し場所がバレてしまえば一巻の終わりだ。
特に別の隠し場所がバレれば、偽善に囚われた幸子さんのお母さんはますます頑なになるだろう。
「まずはそこの確認だな。それで、もし協力してくれると言うなら……密告の奨励しかないな」
浩介くんが何やら物騒なことを言う。
「え!?　密告奨励？」
密告奨励って、あの赤い北の国とかでよく行われているあれだよね？
「ああ、要するに服の隠し場所を漏らしたことを俺たちに密告すれば報酬を与えるということにするんだ」
「うーん、でもどういう報酬？」
「そこなんだよなあ……」
あたしの胸が一瞬思い浮かんだがすぐに却下する。
具体的な報酬と言われても、協会から何かできることなんてそうそうない。
結局考え抜いた末、これは却下することにした。
「……仕方ないわ。服に関しては協会本部に預けるよう進言してみる」
とすれば、隠しておいた男物の服を元に戻させないために必要なことは、服そのものの物理的な排除しかないという結論になる。
塩津さんの家から協会本部までは新幹線の速達便でも1時間以上かかる距離にある。おいそれと取りにいける距離ではない。
「ほう」
「カリキュラムの時に返却することにするわ。お母さんは通さない

で、徹さんを通してやってみるわ」
「……なるほど、それしかないかな」
「うん、それでやってみる」
題名：Ｒｅ：塩津幸子さんの件
本文：男物の服についてですが、お母様を通さずに協会の方で預けることは出来ないでしょうか？
また、徹さんやお父様に協力して、お母様が不穏な行動を取らないか見張るようにする他ないと見受けられます。
多少強引なやり方ではありますが、自殺への道に戻るよりは遥かにマシな状況であると思います。
あたしはこの文章をを比良さんに送信する。
送信完了を確認してから、程なくしてもう一度携帯が鳴り「分かりました、そのように調整します」という返信が戻ってくる。

「浩介くん、あたし、近いうちにもう一度幸子さんと会わないといけないかも」
「え？　どういうこと？」
「もちろん、幸子さんのことよ。少し別の方法でショック療法をしてみるわ」
比良さんの返信を待っている間、あたしは一つ、秘策を思いついた。
それは幸子さんとあたしで、温泉に行く計画。
押してダメなら引いてみる。
女子風呂に入らせることで、まだ全然女の子になれていない幸子さんはかなり緊張するはず。
しかし、幸子さんだって精神的なやつれがあるだけで、ちゃんとすれば美人になるはずだし、まずは裸の付き合いをしてみることにしよう。
ともあれ、手段を選んでいる時間はもうない。何が何でも幸子さんに、女の子の生活も悪くない、男はもう無理なんだから女としての幸せを見つけたいと思わせないといけない。
そういう意味で、女心が不十分な幸子さんには、女子風呂は魅力的

な話だ。
　別にどうにも思わないなら精神が女の子になっていると指摘し、恥ずかしくて嫌というなら「せっかくだしあたしの裸も見たくないの？」と、あえて「男」に訴えかけてもいいだろう。
「どんなショック療法だ？」
「うん、お風呂にでも一緒に入ろうと思って」
「な!?　お、おい！」
　浩介くんが動揺して大きな声を出す。
「おいって……別におかしくないじゃん、女の子同士だし」
　あたしが「当然でしょ？」という感じで言う。
「うっ……むむむむっ……」
「幸子さんは女の子だよ。それを認めてあげないのは可哀想だと思うけど」
　そう、ＴＳ病患者に必要なのは、どういう状況であれ、一人の女性として扱うこと。
　だから、幸子さんも女の子として扱ってあげなきゃいけない。
　それはあたしだって同じ。ＴＳ病で過去男だったかということは関係ない。大事なのは今女の子だということなんだから。
　それは永原先生も、あたしも、幸子さんも、比良さんや余呉さんだって同じ。
「でもよお、何か優子ちゃんと同じに思えねえんだよなあ……」
　浩介くんが言う。
「それでも、それでもこの病気になったら、そうしてあげるしかないのよ。それが出来なければ……死んでしまうわ」
「そうなんだよなあ……」
　浩介くんも理屈ではわかっているから納得するしか無い。
「そう、本当はこの問題は難しい問題じゃないのよ。ただ機械的に、今の自分の性別と同じ扱いをすればいいだけの話」
「だけど、そうやって割り切れないのも人間ってわけか」
「そうよねえ……」
　あたしと浩介くんがしみじみと言う。

体育祭の昼休みは過ぎていく。
守山会長が「午後の競技開始」を宣言する。
保護者席には母さんの姿は相変わらず見えない。もしかしたら来ていないのかも？
午後最初の競技は1年生から3年生までで行う学年別１００メートル走。
今年はくじ引きで2年生からということになり、浩介くんが最初のレースに出場する。
「第一レーン、篠原浩介――」
「浩介くーん!!　頑張ってーーーーー!!」
あたしが先程の大玉転がしと同じように声援を送る。
「いちについて、よーい！」
パンッ！
永原先生の掛け声と、おもちゃの銃声によって、走者が一斉にスタートする。
「うおりゃあああ!!!!」
「キャーーーーー!!!!!!　浩介くーん!!」
「はぁ……はぁ……」
浩介くんは一気に加速して他の走者を引き離すが、５０メートルを過ぎたあたりで徐々に失速していき、終盤に1人に追い抜かれて2位となってしまった。
幸い、1位の人と同じ紅組だから得点には影響がないけど、ちょっと悔しい気がする。
「ぜぇぜぇ……はぁ……はぁ……」
浩介くんが息も絶え絶えに戻ってくる。あたし、全力疾走だと５０メートル持たないことを考えると、１００メートルって結構大変だ。
「浩介くん惜しかったね」
「はぁ……はぁ……仕方……ないよ……はぁ……はぁ……あいつ陸上部だし……」
うーんそれなら仕方ないよね。

さすがに浩介くんと言っても、専門の運動部員にはかなわない。小谷学園は弱小だけど。
次の2年生のレース、今度は白組の圧勝、とは言え１００メートルは出場者数も多いから、レース一回あたりの点数配分はそこまで多くない。

何回かレースをし、2年生のレースが終わると、続いて1年生が走る。学年ごとに複数のレースがあるし、更に男子女子とあるので、結構この１００メートル走は長丁場になっている。
昔はクラス全員参加だったが、さすがに時間がかかることや、極端に遅い子がさらし者になって可哀想ということで、今の出場枠に落ち着いている。
体育嫌いにしないための配慮が、小谷学園には行き届いているのだ。
あたしは浩介くんの水筒を開けて水を注ぐ。
「はい、浩介くん」
「あ、ありがとう……」
「ふふっ、口移ししたい？」
あたしが何の気なしに言うと、浩介くんが一気に顔を真っ赤にする。
「おまっ！　そ、そんなこと言うなよ！」
「あははごめん。うん、1人で飲めるよね？」
「当たり前だろ」
照れ隠しに浩介くんが水を一気に飲む。
「もう一杯いる？」
「ああいや、大丈夫だ。それよりも優子ちゃんも玉入れの準備しとけよ」
「あ、うん」
1年生のレースが続いている。
3年生のレースも終われば次はあたしが出る予定の玉入れ競争だ。
その後は浩介くんがラストの騎馬戦に入るまで時間に余裕ができ

る。
ともあれあたしは、玉入れの準備のため、ウォーミングアップに勤しむことになる。
「浩介くん、ウォーミング・アップ手伝って？」
さっき浩介くんがしていたウォーミング・アップを見て、あたしもしてみたくなる。
「ああ、優子ちゃんは軽い柔軟運動だけで十分だよ」
「ああ、やっぱり？」
「うん、ウォーミングアップで疲れたら本末転倒だもの」
浩介くんが当たり前のことを言う。
「むしろ優子ちゃんの場合、普段の体育の準備運動は多すぎるくらいだよ」
確かに浩介くんの言う通り。体育の授業では、準備運動でヘトヘトになってしまうことも多い。
「普段の体育の準備運動の半分を意識してみて。ちょっとだけ柔軟体操する感じで」
「うん」
柔軟性だけは、唯一あたしが「優一」に勝っている分野。
体をほぐす目的で、腹筋や背筋は一切しない。
球を拾って籠に入れる競争なので、脚と肩を重点的に行う。
特に肩こりは浩介くんにも手伝ってもらう。
「優子ちゃん、相変わらず肩こりひどいね」
「うん、やっぱりこれ、肩への負担が凄いのよ」
あたしが胸を見ながら言う。
「小さくしたい？」
「それは絶対嫌よ」
なんだかんだであたしの女の子らしさの象徴だし。
それに浩介くんもよく胸を揉んでるし、他の女の子からも羨ましがられるから、このままにしておきたい。
「じゃあそろそろ行ってくるね」
あたしが校庭へと出る。

いよいよ、玉入れ競争の始まりだ。

# 体育祭　後編

「さあ始まりました。お次は2年女子による、玉入れ競争です。ルールは簡単、お互いの色、赤と白のかごの中に、より多くの球を入れたチームが勝ちです。一回戦は3、4組の紅組白組です。紅組からは3組――」

「よーい！」

パンッ！

守山会長が選手紹介をして、小野先生の掛け声とおもちゃの銃声とともにいざスタート。

みんな勢いよくしゃがんで素早く籠に投げる。高くて入らないこともある。

結構置かれた球が危なくて、あたしも注意すべき場面。体育の授業でも、一回転びそうになった。

ピーッ！

「そこまで！　集計作業に入る！」

小野先生の宣言とともに体育祭実行委員の生徒たちがボールを集計する。

「紅組の勝利！」

ワー！

よし、まずは先勝！

今のところ白組が僅かにリードしているから、この玉入れで逆転したい。ともあれ、2回戦までだから、負けても引き離されるということはない。

「さ、優子さん、次ですよ」

「う、うん……」

龍香ちゃんの声とともに出番に向けて準備する。校庭では実行委員がボールを元に戻し均等にばらしていく。

「さあ、準備ができました。それでは第二試合を開始したいと思います！」

会場が拍手の包まれる。さっきの綱引きのように、今回はあたしの

運動音痴はごまかせない。
「まずは2組の紅組から。石山優子――」
あたしの名前から呼ばれる。最初の配置につく。
あたしは事前の練習試合で気付いていたが、ボールは真下からよりも少し離れた場所から投げたほうが入りやすい。
そのため、まずは相手のかごの真下付近まで移動する必要がある。
あたしはパワーこそないけど、さすがに毬の玉を籠まで上げられないほど弱くはないし、コントロールならある程度効かせることができる。
「位置について、よーい……！」
パンッ！
いつもの合図とともに始まる玉入れ競争。
あたしは足で玉を集めつつ、適当な距離になったらしゃがんでボールを抱きつつ籠に入れる。
「えいっ！　えいっ！」
なかなか入らないがそれはほかの子も同じ。
中には勢いよく投げすぎた球とあたしの球がぶつかって両方入ったこともあった。
「残り2分です！」
小野先生の声とともに、周囲のテンポも速まる。落ちた毬の球を拾っては投げ、拾っては投げる。意外と入ってくれるが、それでも他の子に比べれば断トツの最下位のはず。
また相手ゴールの近くにいるので、こぼれ球を拾ったりもできる上、通行の邪魔もできている。
「残り1分です！」
さらにみんながあわただしく動き、一部では接触までして会場がちょっとざわついている。
練習ではあんな激しくやらなかった。
とにかく、巻き込まれないように注意しないと。
「はぁ……はぁ……」
同じ場所からほとんど動いていないにもかかわらず、しゃがんだり

立ったり投げたりを繰り返すだけで、汗がだくだくになり、動きも散漫になる。
周りの女子はそれに加えて走り回れるんだからすごいよなあ……
「残り３０秒です！」
しかし、そんなことを考えつつ、球を拾って投げた次の瞬間だった。
「わあ！」
「!?」
「優子ちゃん危ない！」
ドサッ！
誰かが危ないと声をかけたのもつかの間、ボールに足を取られたと思われる女子が転びながらあたしの体に当たってくる。
「痛っ！」
「きゃあ！」
一瞬だけスローモーションになった気がする。
しかしすぐに、背中に激痛が走り、あたしはうつ伏せになってその子の下敷きになってしまう。
「だ、大丈夫ですか優子さん！」
痛い、痛いよお……
「あ、あの……ごめんなさい！　大丈夫!?」
上にのしかかる形になった女の子も心配そうに声をかける。
目の奥から涙があふれる。痛くて耐えられない。
「怪我はない？　大丈夫？」
「う、うえええええんん!!!」
あたしは痛みに耐えられず、その場で泣き出してしまう。大泣きしているあたしに会場は騒然としているが、全く気にならない。とにかく、泣きたくてたまらない。
とにかく痛くて、泣かないと耐えられない。
「ふぇ……ひぐっ……うぇえ……うわあああああああんんん!!!」
大声で泣いていると、誰かが走る音がする。
「おい、優子ちゃん！　大丈夫か？」
聞こえてきたのは浩介くんの声。大丈夫じゃないあたしは、泣きな

がら首を横に振る。
「俺が保健室まで連れていく」
「あ、あの。実行委員がやっておきますので」
別の女性の声がする。
「いい、俺が運ぶ」
「いやその……」
「俺の彼女だ!!!」
うっ……浩介くん……！
あたしは浩介くんに膝と肩を持たれる。
いわゆるお姫様抱っこの形。
「「うおおおおおおお!!!」」
パチパチパチパチ!!!
泣いていてよく分からないけど、会場が割れんばかりの拍手と歓声でいっぱいになる。
あたしは徐々に歓声も小さくなるのを聞く。そして集計では紅組が勝ったと言っていたのが聞こえた。
ああ、また……また素敵な浩介くんに守られちゃった！

「詳しくは分かりませんがひとまず異常はありません」
保険の先生が言う。
「大丈夫か？　ゆっくり休めよ」
「うん……」
ひとまず、あたしも痛みは引いているけど、大事を取って保健室で休むことになった。
騎馬戦まではまだかなりの時間があるし、いずれにしてもあたしの出番はもう終わり。ともあれ休もう。
「石山さん、これを貼ってください」
保険の先生から湿布を渡される。
「はい、ありがとうございます……」
シャツをめくり、打った背中に貼り付ける。ひんやり感が気持ちいい。

あたしはふと、球技大会の時を思い出す。
あの時も、あたしは痛くて泣いた。でも、その時はまだ、浩介は助けてくれなかった。
泣いているあたしを見て、罪悪感と恋心とで戦っていた。
あの時、浩介くんは自暴自棄になっていた。でも、あたしが優しく包みこんで、そして今がある。
あたしは泣き虫、でも浩介くんはそんなあたしも受け入れてくれた。
「では次の種目は――」
体育祭のマイクとつながっているのか、守山会長の声が聞こえてくる。
体育祭は、何事もなかったかのように続いていく。
あたしは騎馬戦の前の種目が、４００メートルのリレー競争だと知っていたので、それを目安にする。

「優子ちゃん、まだしばらくあるから俺、ここにいるよ」
「ありがとう」
少し落ち着いたら、浩介くんが入って来て、看病してくれると言ってきた。って病じゃないかな？
「篠原君、あんまり関係ない人は――」
「俺の彼女だ。俺が責任取る」
浩介くんが保険の先生を威圧している。
「わ、分かりました」
あれだけの大騒ぎも、今では遠くの喧騒。
これはそう、後夜祭に似ている。
保健の先生がカーテンを閉め、密室になっている。
「痛みはどうだ？」
「うん、大分良くなった。浩介くんと一緒に戻れると思うわ」
「そうかよかった……」
会話が続かない。
そうだ、さっきのお礼を言わないと。

「浩介くんありがとう。また助けてもらっちゃって」
「ああいや、いいんだ。男として、彼氏として当然のことをしたまでだ」
ぼんっとあたしの顔が赤くなる。
もうかっこよすぎてたまんないよお……
もう、我慢できない。
「浩介くん……」
「どうした優子ちゃん？」
「んっ……」
あたしは目を瞑って唇を尖らしてキスしてアピールをする。
「おい、保健の先生が居るんだぞ」
「んー！」
あたしがかわいくわがままにキスをねだる。
「もう、しょうがないなあ……ちょっとだけだぞ」
「ちゅっ」
浩介くんが一瞬だけ唇を合わせてくれる。
さっきのようなディープなキスではないけど、あたしにはさっきに負けないくらいの興奮がある。
それは浩介くんに守られた後だったから。浩介くんにまた惚れた後だから。
ガラガラ……
おや、誰か来た？
「おや永原先生、どうしました？」
「石山さんは？」
「こちらです」
「分かりました……入っていいー？」
「はーい！　大丈夫です」
サッ！
あたしの声とともに、永原先生が入ってくる。
「あ、篠原君いたんだ」
「はい。やっぱり心配なので」

「ふふっ、責任感強いのね」
永原先生がにっこりと笑う。
「それで、永原先生はどうして？」
「２つほど。１つ目は石山さんの怪我が心配になって見に来たんだけど、その様子だと大丈夫そうね」
「はい、痛みも引きました。でも大事を取って騎馬戦前までここで休もうかなと」
騎馬戦までは時間がある。浩介くんの騎馬戦を観戦するだけだし、休養としては十分だろう。
「そう。それからもう１点、石山さんの携帯で、余呉さんから連絡が入ってたよ」
「あ、ありがとうございます！」
永原先生より携帯を受け取り、メールを見る。
題名：塩津さんの悟さん時代の服の件
本文：徹さんを通して、協会本部に郵送してもらいました。
今後徹さんとお父さんで、お母さんと幸子さんの説得に当たるとのことでした。
あたしは、「了解いたしました」と打ち、その後考える。
そして本文に「幸子さんをこちらに招待できませんか？」と書き、「女性への抵抗感軽減の名目で、銭湯に入りたい」と伝えることにした。
あ、でも、せっかくここに会長が居るから幸子さんの件はここで相談しておくかな。
「あの、永原会長」
「あらそっち？　うんどうしたの？」
永原先生も切り替えが早い。
「その、幸子さんをこっちに招待できませんか？」
「出来ないこともないけど……どうして？」
「幸子さん、まだ女の子になることへの抵抗感があるみたいなんです、それにお母さんの善意が悪い方向に行っていて、今も男物の服を元に戻さないように徹さんを通して協会本部に郵送してもらっていたん

です」
「なるほど。それで？」
「はい、幸子さんと一緒にお風呂屋さんに行こうと」
「なるほど……分かりました。私の方では了承するということでいきますので、その旨もメールに書いてください」
「はい」
「あ、そうそう、幸子さんの服1セットだけこっちに送っておくといいわよ」
「え？　どうして？」
「お風呂屋さんに連れて行くんでしょ？　幸子さんの心境が変わったら、スカートを穿かせてあげなさい」
「あ、はい！」
　永原先生の言いたいことがわかった。
「じゃあ休んだらまた来てね。私はこれで」
　そう言うと永原先生が出ていく。
　そして永原先生の了承とアドバイスも含め、メールで送った。

　その後は、浩介くんとふたりきりで、静かな時間を過ごした。
　安らかで、どこか恥ずかしい時間帯だった。

「さあ、騎馬戦だぞ」
「うん」
　あたしはベッドから起きる。うん、痛みはない。
「それじゃあ、俺たち体育祭に戻ります」
「気をつけてね」
　保険の先生に見送られながら保健室を出て、あたしたちはゆっくりと戻る。

「あ、優子さんおかえりなさい」
「ただいま龍香ちゃん」
「優子ちゃん、もう大丈夫？」

「うん、もう痛みはないよ」
「そうか、それは良かったぜ。でも油断すんじゃねえぞ」
恵美ちゃん、桂子ちゃん、龍香ちゃんがあたしたちを迎えてくれる。
「さ、もうすぐ騎馬戦だよ、かっこいいとこ見せなよ篠原」
「分かってるって安曇川」
虎姫ちゃんに鼓舞される浩介くん。
そういえば、浩介くんって女子人気はどうなんだろう？
うーん、高いと言ってもあたしの彼氏だし、あんまり品評しないのかも。
ともあれ、浩介くんが騎馬戦の準備をしに行く。
「が、頑張ってね！」
「おう！」
浩介くんが手を降って騎馬戦に行く。
騎馬戦は集団戦と個人戦に分かれている。
この時点での得点はわずかに紅組がリード。このまま逃げ切るためにも頑張らなければいけない。
浩介くんは大将。集団ではもし取られれば即負けだ。
浩介くんを担ぐ騎馬役たちも学園でも最重量級の柔道部男子を充てるなど豪華絢爛だ。
男子たちが騎馬の準備を開始する。
「それでは、本日体育祭の最後、騎馬戦を開始します！」
ワー！
会場の熱気も最高潮に達する。
守山会長が騎馬戦のルールを改めて説明する。
集団戦、多くの鉢巻を取れば勝ちだが、大将の鉢巻を取られればすぐに負け。
だから、普通は大将を守りながら戦うんだけど――
「うおりゃあああ突っ込めええええ!!!」
浩介くんは敵の中でも一番濃い所を、自らを先頭に敵の大将に一気に進む戦法を取った。

これは並外れて浩介くんが喧嘩に強いためで、右や左から襲い掛かってくる敵の馬を容赦なくなぎ倒していく。
「覚悟しろやあああ!!」
浩介くんが凄まじい勢いで大将に突進する。大将はひたすら逃げるが、すっかり恐慌状態になった敵軍は連携も取れず、別の騎馬と挟み撃ちになり、あえなく撃沈した。
「そこまで！　団体戦！　紅組の勝利！」
「キャーーーーー!!　浩介くん素敵ーーーーー!!」
あたしの黄色い声が、会場中に流れる。
続いて個人戦。こちらは、騎馬1馬1馬が戦うことになっていて、大将なら大将同士、副将なら副将同士といった具合で一戦一戦を戦う。
こちらは一戦ごとに得点が決まる。団体戦で紅組が勝ったとはいえ、ここでボロ負けすればまだ白組に逆転の目がある。
1戦目、白組の勝ち、2戦目、紅組の勝ち。
試合は一進一退、僅かに白組がリードしているが、それでもまだ逆転圏内ではない。
副将戦、ここも白組が勝ちだが、あたしの計算では、既に白組の勝利はないと見た。
でも、最後はしっかり締めて欲しい。
大将戦、浩介くんが敵の大将と再び相まみえる。
「よーい！　はじめ！」
ドンッ！　ドン！
太鼓の音が鳴り響き、馬が激突する。
勝負はあっけなく決まった。
敵大将の両手を浩介くんがつかむと、そのまま力ずくで敵大将を引きずり下ろし、バランスをあっという間に崩してしまう。そして、頭を晒した瞬間に、鉢巻も取ってしまった。
「キャーーーー!!　浩介くん素敵ーーーー!!」
目がハートになりながら、あたしは浩介くんへ声援を送り続ける。
うん、やっぱり浩介くんを好きになってよかった。日を追うごと

に、素敵になっていくんだもの。
「ただいまを持ちまして、騎馬戦を終了します」
あたしは浩介くんのもとへ駆け寄る。
「すごいわ浩介くん！　大活躍じゃない」
「へへ、作戦がうまく行ってよかったよ！」
「うん、私も感心しちゃったよ。関ヶ原の時の島津左近衛権少将殿を思い出したわ」
永原先生も、よく分からない人の名前を持ち出して、浩介くんを賞賛している。
「さ、閉会式に望みましょう」
この後しばらく休憩し、全校で閉会式。
得点はあたしの計算通りで紅組が勝った。
あたしは浩介くんとハイタッチするが、周囲はあんまり喜んでいる感じではなく、あくまでおまけという感じだ。
「えー、続いて、校長先生の最後のお話です。校長先生お願いします」
「校長です。皆さん、おかげさまで途中アクシデントもありましたが、本年も体育祭を無事終了することが出来ました。私の話は以上です」
校長先生の簡潔な話が終わる。
途中のアクシデントって、あたしのことだよね？
よくよく考えてみると、あたしって本当によく泣く女の子だよね。
でも、繊細でか弱くてもいい。浩介くんが好きでいてくれるし、女の子だから、強さを求める必要はない。
各自解散する。
男子は後片付けに駆り出され、その間にあたしたち女子が制服に着替え直す。
家に帰ったら、お風呂に入ろう。
しばらくし、男子も着替え、今日は解散となった。

「ただいまー」
「おかえり優子。大丈夫だった？」
母さんが心配そうに言う。

やっぱり見てないとは言っても連絡はいっていたようだ。
「ああうん、怪我はないよ」
「そうよかった。体育祭で転んできた子の下敷きになって大泣きしたって聞いた時はびっくりしたよ」
「あはは……母さん、風呂沸いてる？」
恥ずかしいので話題を変える。
「ああうん、湧いているわよ。入ってきなさい」
「はーい」
今日の体育祭の思い出、多分また、浩介くんとの思い出にもなるんだろう。
そう思いながら、あたしは風呂場へと進んでいった。

# 都会の２人旅

「それで、そう。了承取れた！」
あたしは電話で永原先生から連絡を受け、幸子さん１人であたしと合うことを約束してくれた。
その待ち合わせ場所として、本部のあるビルの最上層エレベーター前とした。
正直あの駅は迷うと思うのだが、大丈夫だろうか？
少しの不安はあったものの、幸子さんとあたしの２人で大都会を旅し、交流することで、解決の糸口を掴めるんじゃないかと思った。

その日の午前、まだこっちだって朝早い時間だと言うのに、幸子さんはほとんど朝一の新幹線で来るという。ともあれ、約束の時間の１０分前にエレベーターに来た。
よく見るとまだ幸子さんはいない。ちなみに、幸子さんには具体的に東京で何をするのかはまだ話していない。
もやもやとした感じだけど、遊びながらあたしの話をし、女の子の自覚を持ってもらうための特別講習をすることにした。ということになっている。
もちろんあたしの簡単な経緯は、あの時塩津さんの家で話したけど、詳しいことは話していない。
女の子になることへの喜びを伝えることで、まず本人の意志を変えないと、お母さんの「善意」は永遠に勘違いのままだろう。
もはや外堀を埋めるのは困難と感じてこのようなことを計画した。

「すみません、待ちましたか？」
「あらおはよう」
幸子さんが声をかけてきた。
幸子さんの服はシンプルなトレーナーとジーパンで髪飾りも何もない。
緑のワンピースと、いつもの頭の白いリボンでかわいく決めている

あたしと並ぶとあまりに地味だ。
「もうっ、そんな服で来たの？　まあいいけど」
「いやその……だって……」
「幸子さん、今日は女の子の生活を知るために、あたしの特別講習ということになっているからちゃんとするのよ」
「お、おう……」
「あと、まだ来ていないという報告ですけれど、そろそろ女の子の日も来ますからね」
「うげっ……」
　幸子さんが露骨に嫌な顔をする。
「生理用品の使い方は習った？　習わないとダメよ」
「いや、習っていない」
「はぁ……そういうことだろうと思ったわ。あなたのお母さんに連絡して、大至急講習するように言っておきます」
「……」
　幸子さんは苦笑いをしている。
　生半可な気持ちじゃダメだから注意しないと。
「幸子さん、これは笑い事じゃないわよ。これを超えられないで自殺する患者も多いのよ」
「う、うん……」
「幸子さん？　死にたくないなら、あたしたちの言うことを、お願いだから聞いてね」
「は、はい……」
　表面的にはちゃんと従ってくれるけど、実際のところは不安がある。
「それから、今日は大目に見るけど、服装も、飾りっ気も何もなしはダメよ」
「だ、だって……」
「いい？　女の子はオシャレして、見られることで可愛くなっていくのよ」
「でも……まだわからない」

「……じゃあ、あたしの服はどう？」
ワンピースのスカートの裾を摘まんで広げるポーズをして、幸子さんに問いかける。
「そ、その……似合ってると思うぞ！」
「こら！　言葉遣いに注意してって言ったでしょ？」
「に、似合ってるわよ」
「よろしい。さ、言葉遣いを間違えたら『私は女の子』でしょ？」
思い出したかのように幸子さんが暗示をかけ始める。
それにしても、この様子では幸子さんのお母さんは全然責務を果たしていないように思う。
「さ、ともあれ、大都会は初めて？」
「うん、すごい街並みだ。俺の……」
「ギロッ！」
あたしも苦手だけど、幸子さんにギロリと視線を送る。間違いなく、全然怖くないはず。
「わ、私の街だって、あの地方じゃ一番大きいのに、やっぱり格が違う……わ」
「ふふっ、じゃあ行きましょうか」
とにかく遊びでは積極的に話を振って、なるべく多くボロを出させないといけない。
クライマックスには温泉施設に行く予定にもなっているしその時には、女性の集団の一人として、裸になる必要がある。
「さ、幸子さん。まずはあたしたちの協会の本部に行きますか？」
「え？　じゃ、じゃあ折角だから」
「うん分かった。ついてきて？」
「はい」
あたしはまず、エレベータのボタンを押して呼び出すと、先に幸子さんを中へ。
そして「４９」のボタンを押す。
エレベータがものすごい勢いで上昇する。
「うわー速いよこれ」

幸子さんがエレベーターのスピードに驚いている。
あたしが初めてこのビルに入ったのと同じ反応をする。
「でしょ？」
「４９階です。　４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」
あっという間に４９階に到着し、あたしは本部の方向へと案内する。
「４９階のさらに一室なんだ」
「意外に小さいな」
「うん、珍しい病気だもんね」
そして、あたしが本部の前に移動する。
「ちょっと待っててね」
あたしがポーチの中からカードキーを出す。
ピピッ、ガチャッ
「はい、どうぞ」
「お、お邪魔します」
幸子さんが恐る恐る緊張しながら足を踏み入れる。
「意外と普通ですね」
「オフィスビルのテナントだからね」
あたしは別の部屋に行く。
一番大きい、会議もした部屋だ。
「あら、石山さんいらっしゃい……この子は？」
副会長の比良さんと、女の子３人が書類を整理していた。
「うん、この人が塩津幸子さんです」
「あら、はじめまして。私は比良道子です。僭越ながら、ここで副会長をさせていただいております」
比良さんが椅子から立ち上がって一礼する。
「えっと……おっ……私が塩津幸子です」
「余呉さんと石山さんから話を聞いているわよ。成績不良何だって？」
「なっ……！　なんで俺がそんなこと……しまった！」
「幸子さん。ちょっとこっちに向いてくれるかしら？」

「は、はい……」
　幸子さんがトボトボとこちらに顔を向ける。うん、かわいそうだけど早くも3回目だし、幸子さんのためにも、心を鬼にしてしつけなきゃ！
「こら！　そういう言葉遣いしてるから、あなたは成績不良なのよ！」
「っ……！」
「そもそも女の子というのはですね――」
　あたしはガミガミとお説教する。なんか小姑っぽいけど。
「あら、石山さんってスパルタなのね。報告書にもビンタしたってあるし」
　比良さんが言う。でも、カリキュラム自体が結構スパルタだとは思うけど。
「あはは、あの時の幸子さんは本当に取りつく島もなかったから仕方なくね」
「そう……」
「幸子さん、次からはもう、私たちにはっきり聞こえるように声に出して暗示しなさい。心がこもってないと、いつまでも女の子になれないわよ」
「わ、私は女の子……私は女の子……」
「うんいいわよ。言葉遣いを間違えたら、『女の子の言葉を使わなければいけない』とか、『女の子なんだから女の子らしくならなきゃいけない』というのも効果あるわよ」
　こっちの方は、本当はあたしが自主的にやってた暗示だけど幸子さんにアドバイスをする。
「は、はい……女の子は女の子の言葉を使わなければいけない……女の子は女の子の言葉を使わなければいけない……」
「ふふっ、かわいいわね」
「うんうん」
　比良さんの言葉にあたしが同調する。
　こういう風に女の子として扱い、女の子らしいところをほめてあげることが一つ一つ、幸子さんの財産となっていく。

「それで、会というのは？」
「あたしたちＴＳ病の患者で作る団体よ」
「ええ、それは分かってるけど、具体的な会の主張とかは？」
　幸子さんが聞いてくる。
「あたしたち日本性転換症候群協会はね、大きな主張は一個だけよ」
「うん、それって？」
「あたしたちの扱いについてよ。知らない？」
「う、うん……」
　確かにあたしもカリキュラム中は聞かれなかったかも。
「じゃああてずっぽうでいいわ。どんな主張をしてると思う？」
「そ、その……やっぱり元男として理解してほしいとか？」
　幸子さんが模範的な誤答をしてくれる。
「ふふっ、残念ながら不正解よ。今のは模範解答ならぬ模範誤答よ」
「え!?　じゃあ模範解答は!?」
「あたしたちを、一人の女性として扱ってほしいということよ」
「え!?　ど、どうしてそんな……」
「幸子さん、それはね――」
　あたしが、理由を説明する。
　不老であることを除けば、あたしたちはほかの女性たちと何も変わらないこと。それこそ赤ちゃんを産んだ人だっていること。
　そしてあたしたちは、心も含めて女の子として生きていくしか選択肢は一切ないこと。
　だから、中途半端な善意での理解はいらないこと。
「幸子さん、あなたのことを、何も知らない人が見たら、あなたのことを男だなんて思うかしら？」
「それは、思わないと思う」
「でしょ？　今のあなたは女の子そのものよ。だからね、もしＴＳ病だと知ったとしても、第一印象そのままに、あたしたちを見て欲しいのよ」
「そ、そうなんですか……」
「幸子さん、ここの協会の普通会員は、ＴＳ病の女の子なら誰でもなれ

るわ。入会資格はさっきのあたしが述べた協会の方針に賛成できるか。のみよ」
「……まだ、おれ……わ、私にはよく分からない」
　幸子さんが言う。
「そうね、その様子じゃ、入会は時期尚早よね」
「うん、あたしもそう思う。言葉遣いも服装も、入会までに矯正しないとね」
　比良さんの言葉にあたしも賛成する。
「は、はい……」
「じゃあ、今日はもう失礼しますね」
「お疲れ様でしたー」
「失礼します」
　長居は無用なのであたしたちはビルを出る。
　次の行き場所は、インターネット・漫画喫茶、ここの女性専用スペースを予約してある。
　実際の所、あたしにとっても学校絡みのイベント以外で女性専用スペースを使うのは初めての体験で、今日のお風呂も久々に新鮮な体験ができそうだ。
「次はどこに行くの？」
「近くの漫画喫茶よ」
「え!?　それくらいうちの町にも――」
「ふふっ、ただの漫画喫茶じゃないわ」
「え!?　それって……？」
「ふふっ、そこの女性専用スペースよ」
「じょ、女性専用……!?」
　幸子さんが唾を飲み込む。
「当たり前でしょ。あたしたち女の子なんだから。女の子が女性専用スペースを使って何がおかしいの？」
「うっ……た、確かにそうだけど……」
「じゃあ決まり。予約までしてあるんだから、行きましょう」
　あたしは幸子さんの腕を掴み、漫画喫茶に進む。

幸子さんは落ち着きがなく、「女性専用、女性専用」とうわごとの様につぶやいている。
これは、いきなり温泉での女風呂はハードルが高いため、いわば「土台」の役目も担っている。トイレ以外でも女性専用のものを使ってしまったという既成事実も、男に戻ることを困難にする効果を狙ってのものだ。

「ねえねえあの二人組」
「うん、二人ともすごい美人だよね。特に緑の服の子」
「うんうん、でももう一人はセンスないよね」
「ねー緑の子は凄い似合ってるのに」

二人組の女性があたしたちの噂をするあたしたちの。幸子さんに反応がない。
まあ、このことは漫画喫茶で話そう。

「いらっしゃいませー」
「予約していた石山です」
「あ、はーい、石山様ですね。今日はツインルームで女性専用スペース、3時間パックでお間違いないですか？」
「はい」
「それでは、こちらへどうぞ」
幸子さんが落ち着いていない。というか明らかに挙動不審そのもの。
「どうしたの？　いくわよ」
「あ、うん……」
大丈夫かな？　女装だと思われることは……まあさすがにないかな？
「あの、もしかして」
「うん？」
嫌な予感がする。

「まさか女装とかじゃないですよね？」
女性店員は、何故かあたしの方を疑う。
どういう神経をしているのよ……
「はぁ!?　何言ってんのよ、あたし女の子よ！」
あたしもちょっと怒って言う。
男扱いという屈辱を受けるのは久々のことで、女の子になったばかりのトラウマが蘇ってくる。
男扱いだけは、どうしても嫌だ。
「で、ですが挙動不審というか……」
カチンッ
あたしを、あたしを女の子として扱わないなんて許せない!!!
思い知らせてあげるわ!!!
「わっお客様……!?」
まるで「優一」が乗り移ったかのように頭に血が上ったあたしは女性店員の手を掴み、スカートの上から無理やり手を押し付けて股間を触らせる。
もちろん、そこには「棒きれ」はない。
「これでもあたしを男だと疑うの!?　ねえ!?」
滅多に出したこと無いような大きな声であたしが叫ぶ。
「も、申し訳ありません！　今すぐ案内します！」
女性店員は申し訳無さそうな顔で女性専用スペースに案内してくれる。
その瞬間、あたしは冷静さを取り戻して、ちょっとやりすぎたかもと自己嫌悪に陥ってしまった。

「おいおい、やべえもん見ちまったぜ」
「うんうん、いくら怒っていると言ってもなあ……」
「でもたしかに手っ取り早いというのはそうだよね……」
男性客たちがさっきのあたしと店員とのやり取りについてヒソヒソ話している。

確かに大きな声を出して目立っちゃったし男の子たちには刺激が強すぎる出来事かもしれない。
まあ女の子同士だし、状況的にも浩介くんも許してくれるだろう。
幸子さんの方を見ると、茫然自失という言葉がぴったりなくらい、呆けた顔をしてしまっている。
もしかして、まだ精神が女の子になりきれてないから、ちょっと刺激が強すぎたかな？
ともあれ、教育名目なのでせっかく協会のお金で予約して、前金まで払っているんだ。協会のためにも引き下がる訳にはいかない。

「こちらへどうぞ、先程は申し訳ありません」
「はい」
店員さんが改めて謝る。あたしもそこまで引きずるつもりはないのでそのまま入る。
「じょ、女性専用と言っても、あんまり変わらないな……」
幸子さんが言う。確かに部屋がちょっとピンク色なだけだ。
「ふふっ、じゃあいくつか話したいことがあるけど……漫画読みながらでいいわ。取ってくるからここで待っててね」
「え、そんな――」
「移動で疲れたでしょ？　ゆっくり休みながら話しましょ」
あたしは部屋を出て、漫画スペースに行く。
女性専用スペースにある漫画は、男性向けのいわゆる「萌え系」というものはなく、代わりにあるのは大量の少女漫画。
ちなみに、「そちら方面の方々」の影響か、少年向け漫画もあるが、それを読ませるよりはまだ「ＢＬ系」を読ませたほうがいい。
とは言え、ＢＬ系はあたしも手を出さない代物だし、女の子の感性の学習という意味では、女の子が主人公の少女漫画の方がいい。
あたしは、女の子になって最初に読んだ全３巻の少女漫画が目に入る。
うん、この恋愛ものは悪役令嬢含め王道なので、幸子さんには是非これを読ませてあげよう。

後は、あたしが読んだことのない少女漫画をいくつか持っていき、部屋に戻る。
「おまたせ」
「おかえりなさい……な、なあ……」
「うん？」
「少女漫画ばかりじゃねえか」
「当たり前ですわ。あたしもあなたも女の子、それも少女なのよ。少女が少女漫画読むのは普通でしょ？　それから、少女がそんな乱暴な言葉遣いするんじゃありませんわ！」
あたしもちょっとだけお嬢様口調になる
「す、すみません……私は女の子……私は女の子……女の子の言葉を使わなければいけない……」
「幸子さんはこれを読んでみて」
あたしがかつて優子として初めて読んだ少女漫画の第一巻を渡すと、幸子さんは恐る恐る読み始める。
あたしも、別の漫画を読み始める。
少女漫画は恋愛ものばかりであたしが読んでいる少女漫画も恋愛物がほとんど。
だから、少女漫画のヒーローはかっこいい理想の男の子に描かれている。
でも今は、浩介くんがあたしにとっての理想の男の子。
確かに少女漫画の男の子はとってもかっこいい男の子だけど、それでも本当のあたしの危機の時に、救ってくれたのは、浩介くんだけ。
あたしの身体を弄って、あたしに幸福感を与えてくれるのも浩介くんだけ。
でもそれは、漫画の中の女の子だって同じこと。
漫画の中の女の子だって、間違いなく浩介くんをかっこいいと言うに決まっている。
でも、あたしと同じことを、漫画の中の女の子は言うだろう。
そんなことを思いつつ、恐る恐る少女漫画を読み始めた幸子さんを見守る。

多分、あたしも最初はあんな風に読んでいたんだろうと思いながら。

## 少女たちの空間

「読みながら聞いてくれる？　幸子さんさっき歩いていた時通行人から『センスない』って言われてたわよ」
　漫画喫茶でのあたしの読書も一段落したので、あたしは幸子さんに話しかける。
「うっ……だって、まだ1ヶ月も――」
「あたしが女の子になって1ヶ月の時にはあたしはもうこの白いリボンも付けてたし私服はほとんどスカートを穿いていたわよ。あたしが初めてスカートで1日を過ごしたのは女の子になって3日目の日よ」
「そ、そりゃあ、石山さんは――」
「幸子さん、女の子がスカートを穿いちゃダメなんてこと無いんだから。もっとポジティブに、女の子を楽しみなよ。ほら、幸子さん、あなたの顔、もう一度よく見てみて？」
　あたしが手鏡で幸子さんの顔を写す。
「どう？」
「そ、そりゃあかわいいとは思うけど……」
「じゃあいいじゃない。あなたには、かわいく、女の子らしくする権利があるのよ。まだ数週間じゃないわよ、もう数週間よ」
「でもやっぱり、まだ中身が伴ってないから……」
　あたしが言う。
「まだ1ヶ月という人は１００年経ってもまだ１００年とも言う」と言うのは幸子さんの家に行ったときにも似たようなことを言った。
「これは男の女装じゃないのよ？　女の子が女装して何が悪いのよ？」
「う、ううっ……」
「いい？　女の子らしくするためには、形から入らないとダメよ。あたしがいる時だけ大人しくしててもばれるのよ。そのために、幸子さんの家の人にも協力してもらうわよ」
「じゃあ、お母さんが服がないって言ってたのも……！」

「あたしが徹さんを通して別の場所に送ったわよ」
　さっきの協会本部なんだけどね。
「な、何でそんな……」
「幸子さん、もう一度聞くわ。あなたはもう男に戻ることは出来ないわ。それを踏まえて、あなたは本当に、女の子として生きていくつもり？」
「いや、その……真ん中に……」
　真ん中って……
「あなたのどこが『真ん中』なのよ？　あなたはやろうと思えば赤ちゃんも産めるのよ」
　あたしが問いかける。
「で、でも……！」
「さっきも言ったでしょ？　あたしたちＴＳ病患者が目指すのは一人の人格を持った女性だって。それ以外の道は、精神崩壊とその果ての自殺しか無いわよ。現実逃避しちゃダメよ」
「いやだって……その……」
　幸子さんは反論しようとするがうまい言葉が思いつかないらしく、具体的な説明になっていない。
「いい？　男か女かで言えばもうあなたは女よ。人間男か女かななんて小学校でやったでしょ？」
　いつぞやの恵美ちゃんの言葉。もちろん医学的に特殊な例はあるにはあるけど、それは今のあたしにも、幸子さんにも間違いなく当てはまらない。
「確かにそうだけど――」
「あなたは『女性の特権』を持っているのよ……赤ちゃんを産むとかね」
「いや別に、子供なんて作る気は……」
「だいたい、今のあなただって、『女性の特権』を行使中でしょ？」
「え!?　『女性の特権』って何を!?」
　不意を突かれた幸子さんがきょとんとした表情で見つめてくる。
「幸子さん……ここ、女性専用スペースでしょ!?」

「あ、そうか」
「男がこんな所入れるわけ無いでしょ」
「う、うん……」
うーん、これじゃ先が思いやられるわねえ……
「ねえ……石山さん」
「ん？　どうしたの？」
「この漫画、結構生々しいよね」
幸子さんが少女漫画を読みながら言う。
「そうだね。少女漫画だと結構そういうシーン多いわよ。ちなみに、これがあたしが最初に読んだ少女漫画だよ」
「へえ、これがねえ……」
幸子さんも少し関心した顔をする。
「それから、主人公の女の子はどう？」
あたしが聞いてみる。
「何かひどい目にあってばかりって感じ。そりゃあいじめっ子も許嫁で嫌な気分なのはわかるけど、それにしたって陰湿すぎると思う」
「ふふっ、最終巻を読んでみて」
「う、うん……」
幸子さんが最終巻を読み始める。
徐々に読むスピードが落ちている。幸子さんの表情はあまり変わらないが、ページ数からして、悪役の子にみんなの前でスカートめくりされるいじめで泣き出しちゃうシーンの近く。
「うわーこれは……」
幸子さんが、ちょっと引いてる。でも次のページで、お坊ちゃまに目撃されてしまうのだ。
「ほほう、やっぱり……」
幸子さんが「予想していた」という表情になる。もしかしたらおなじみの展開なのかもしれない。
この話では、悪役のお嬢様はお坊ちゃまに断罪されて婚約は破棄となった挙句、結婚相手を主人公に取られ、更に悪役のお嬢様の家は会社の経営まで傾いてしまい、転校して所在不明音信不通になってしま

う。
「何か、悪役の女の子はお風呂に沈められたって感じがする」
「？　お風呂に沈める？」
　幸子さんがよく分からないことを言う。
　お風呂に沈めるって、何のことなのかな？
「ああいやその……知らないならいいんだ。知らないなら……」
　幸子さんが慌てた様子で言う。
　うーん、なんか嫌な予感もするし深く追及しないほうがよさそうね。
「で、物語一つ読了したところでさっきの話に戻るけど……幸子さんは、まだスカートで外出したことはないの？」
「あ、ああ……普段着もまだ……こんな感じだ」
「幸子さん、意地を張っちゃだめよ。それに、スカート、それも膝より上の短いのでで一日過ごしてみて？」
　きっとトイレの時に関心するから。
「な、なんでそんな執拗に……スカートはかない女だっているだろ!?」
「そりゃあおばさんのミニスカートとか痛いわよ。でも、あたしたちはおばさんになる事はないのよ。かわいい女の子は相応にかわいく振舞わないといけないのよ」
「だからどうして？」
　うーん、もう少し迂回路を使わないとダメかな？
「それはね……変質者が寄ってくるからよ！」
　これはあたしの実体験。スカート長くして満員電車に乗ったら痴漢されたことがあった。
「え!?　どうして!?　普通狙われるのは派手な格好する人でしょ？」
　あたしは首を横に振る。
「もし満員電車にあなたとあたしが乗ったら、痴漢常習犯の１００人中９９人はあなたの方を痴漢しようと思うわよ」
「だからどうしてそんなことが言えんだよ!?」
　また言葉遣いが乱れている。
「こら！　言葉遣いちゃんとしなさい！」

「ど、どうしてそんなことが言えるのよ!?」
「よろしい、じゃあ暗示をかけてね」
「わ、私は女の子……私は女の子……女の子らしい言葉遣いをしなければならない……」
　ちゃんと声に出して暗示をかけてくれる。うん、これを続ければきっと大丈夫。
「うんいいわよ。じゃあ話の続きをするわね……痴漢はね、叫ばなさそうな女の子を狙うの。地味な格好でおとなしく、化粧もしていない人を狙うのよ。自己主張が弱いと見られるから、漬け込まれるわよ」
「じゃあ逆に、ミニスカートで髪染めて、厚化粧なら痴漢されないのか!?」
　幸子さんが聞く。
「ええそうよ。あたしも一回、制服のスカートを短くし忘れて、しかも運が悪いことに電車が遅れてて混んでいたものだから……やられたわ」
　正直思い出したくもない気持ち悪い思い出だけど、話さないわけにはいかない。
　スカートの中まで触られなかったのはよかった。おかげで浩介くんに純潔をささげられそうだから。
「で、でも……痴漢なんて……!」
「女の子なんだから、常にそういうのを警戒しないとダメよ。それとも痴漢されたいの?」
　あたしはよく分からないけど、中身男で痴漢される方が気持ち悪い気がする。
「ああいや、その……は、はい……気をつけます……」
　幸子さんが渋々といった感じで頷いてくれる。
「もし改まらないようなら、スカート以外の服も隠してもらうわよ」
　あたしが脅すように言う。
「わ、分かったよ……」
「さ、ほかにも漫画を読みましょ。少女趣味は楽しいわよ」
　あたしは個室を出て、読み終わった漫画をもとの場所に戻し、別の

漫画を手に取る。
時間はまだ1時間あるけど、延長料金にならないように気を付けていきたい。
うーん、この恋愛ものがいいかも。
あたしが読んだ時はまだ雑誌掲載だった時のもの。最終巻では明らかにヤッちゃっているもの。
見ると全4巻なんだね。
少女漫画の恋愛ものは、少年漫画とかにありがちなひたすら長くダラダラ続くというパターンはとても少ない。
だから、こういう漫画喫茶で読むにもぴったりだ。
「はーい！　新しいの持ってきたわよー」
あたしは新しい少女漫画を幸子さんに渡す。何だかんだで読んではくれているようで何よりだわ。
「ねえ石山さん」
「ん？　どうしたの？」
幸子さんがあたしに聞いてくる。
「少女漫画って、どうしてこんなどれもこれも恋愛ものばっかり何だ!?」
「うーん……」
確かに当然の疑問。でもあたしは結局疑問のまま終わらせてそのうち違和感を感じなくなっちゃったんだ。
うーん、どう答えよう？
そう言えばこの前の会合でもあたしの恋愛話を聞かれたっけ？
「そうねえ……女の子は色恋沙汰が大好きなのよ。少女漫画だけじゃないわ。女性誌でも彼氏に好かれる服装とか、芸能人の恋愛スキャンダルとかばかりよ」
おしゃれにきれいに若くかわいく美しく。何だかんだ言って男に好かれたくて頑張る。それはやっぱり女の子の本能。
「そ、そうか……石山さんは？」
「うん、浩介くんと恋愛するのも楽しいし、クラスの女の子の恋の話も大好きよ」

でも今は浩介くんとの恋愛が多いかな？
この前の体育祭でも休み時間屋上で……って思いだしたら顔赤くなっちゃうからやめておこう。
「そ、そうなのか……ともかく続きを読んで見る」
幸子さんが黙々と漫画を読み始めた。
そしてあたしもまた、イケメンの先生に恋する女子高生のお話を読む。

「うっ……！」
幸子さんが急に声を上げる。
見るとおそらくあのシーンを開いているんだとわかる。
「な、なあ……これ……本当に少女向けなのか？」
確かにそれは疑問だろう。
「うん、女の子向けの漫画だよ」
あたしはにっこりして言う。
「でもこれ……少女漫画の方が過激な気がする……」
「でも意外とあっさりしてるのも少女漫画の特徴よ」
あたしが付け加える。女の子の感性を学ぶのも女の子の修業になる。
特に表面が女の子になった後の大きな壁でもあるのはあたしも学んでいる。
「た、確かにそうだけど……」
「女の子の恋愛とエロを知るのも大切なことよ」
最終的には、昔ついていた「アレ」を好きになってほしいんだけどそれはずっとずっと先の話。あたしだってつい最近の話だし。
「それにしても、少女漫画は読むのに時間がかかるなあ……」
「ふふっ、女の子の心情描写が多いものね」
あたしが言う。
そう、心情中心の描写に気付くのが大事。
「さ、楽しい時間だけど、そろそろ時間も意識してね」
「あ、ああ……」

幸子さんと残りの時間を過ごす。漫画を返す時間なども考え、時間に余裕をもって店を出た。
追加料金は特になかった。

「さ、次は東池袋に行くわよ」
「い、池袋？　何で？」
幸子さんが疑問符を投げかける。
「あたしたち女の子だよ。秋葉原の電気街もいいけど行くなら乙女ロードでしょ？」
「あ、ああ……」
「心配しないで、あたしも初めてだからね」
「余計に不安な気がする」
ですよねー
ともあれ、駅まで歩き、山手線を使って池袋駅で降りる。
昼食の時間になったので適当に立ち食いそば屋で食べる、幸子さん曰く「地元と味があんまり変わらない」と言っていた。まあ、同じ会社だからかなあ？
今回のプランはあたしが考えたけど、まさに女の子という感じの日帰り旅行になってくれるはず。

池袋駅の東口を出る。しばらくすると、「乙女ロード」に到着する。
「色々な店があるね」
「すげえよ、お……あたしの地元じゃそういうのあんまなくて」
あたしの街だって無いわよ。
ともあれ、大きなビルに入る。ここが本店らしい。
色々な女性向けキャラグッズがあるけど、あたしは彼氏持ちだし幸子さんのために買ってあげようかな？

「ねえあの２人……」
「うん、あそこまで服が違うのって珍しいよね」
「緑の人は気合入ってるよね」

「というか、かわいいし胸でかいし絶対彼氏いそうじゃん？　何でこんな所にいるのよ」

やっぱり噂になる。

「ほら幸子さん、服のセンスであれこれ言われてますよ」

確かにラフな格好の女性も多いけど、あたしほどでなくてもおしゃれしている人も多い。

そんな中で、女らしくない服を着ている幸子さんと、外出のために思いっきりオシャレしているあたしではやはりかなりギャップがある。

「うううっ……」

幸子さんもさすがに落ち込んでいる。これに懲りて次からはオシャレしてほしいかな。

「女子は正直だからね。さ、エレベータに行くわよ」

「う、うん……」

正直言うと、あたしも初めてでこの空間は落ち着かない。

ともあれ４階で降りる。

そこは少女漫画とかＢＬ系の漫画とかが大量にあった。

「ねえ、この男同士って……」

「あーうん、ＢＬはあたしもよく分からないんだよ」

「でも、ホモが嫌いな女子なんていないって話もあるけど」

幸子さんが言う。確かにそんなことを口走る人もいるよな。

「うーん、好き嫌い以前に判断できないって感じかな」

でも、あたしや幸子さんだって女子だし、永原先生も含めて、本当にホモが嫌いな女子はいないのだろうか？

うーん、謎だ……

館内はほぼ女性一色、この所ずっと浩介くんとデートしていたし、女性ばかりの空間というのをあんまり経験していなかった。

って、元々共学だから体育の着替えくらいかな？

「見事に女性ばかりだね」

幸子さんが、あたしが思っていることと同じことを言う。

そりゃあ乙女ロードっていうくらいだし女性ばかりなのは知っていた。
「そりゃあそういう場所だし」
ここでは色々なコミックが売っていて、あたしも少女漫画の続きや気に入った作家の過去作を買い物かごに入れていく。
「幸子さんは何か買わないの？」
「ああいや、その……まだよく分からないというか」
「ふふっ、しょうがないわね。でもこういうのを買えるようになると世界が変わるわよ」
なんて偉そうなことを言うけど、あたしだってまだ女の子になって1年と経ってない。
でも、だからこそ、幸子さんは最悪の事態を脱することは出来た。まだまだ迷走飛行中だけど、もうそろそろ、カリキュラムを受けさせてもいいかもしれない。
問題は、教育係となる母親の方かもしれない。ともあれ、大学が冬休みになる頃には、決意を固めてもらわないと困る。
うーん、幸子さんはもう大学生だけど、高校の制服の着付けもさせた方がいいかな？　そのあたり、永原先生と相談してみよう。

4階での買い物を終え、再び1階へ。そこにはガチャガチャがある。
「今日の記念に何かプレゼントしてあげるよ」
幸子さんにあたしが言う。
「ああ、うんありがとう……」
とりあえず、適当に男の子キャラのガチャを回す。
まあ何のキャラかよく分からないけどまあいいだろう。
「はいこれ。よく分からないけど」
「あ、ありがとう……」
スマホあたりに使えるストラップかな？　まあ、記念品だしとりあえず記念になればいいかな？
「さて、もう少し楽しもうか」

「う、うん……」
どうも幸子さん受け身だなあ……
「幸子さん、どこ行きたいとかあったら言ってね」
「は、はい……」
仕方ない。
ともあれ、あたしもこの辺の地理はよくわからないし、行きあたりばったりでいいだろう。
途中、メイド喫茶ならぬ「執事喫茶」というのも見つけたけど、幸子さんの教育にはいいものの、あたしとしては浩介くんという彼氏がいることもあって、入るのはやめることにした。
うーん、あたしの代わりにここに居るのが永原先生とかならいいんだろうけど。

## 奇妙な温泉施設

ともあれ、乙女ロードを楽しんだらあたしたちは次の目的地である温泉施設に向かうことにする。

地下鉄と、更に「新交通システム」を乗り継いでいけばいい。

値段は高いけど、女の子としての自覚を刷り込むためにも、お風呂に入らせるのはとても重要だ。裸の付き合いというのかな？

池袋駅から地下鉄に乗ると、幸子さんは駅の路線図に驚いた様子だ。

「ふえー、東京の地下鉄って凄いな」

「あはは、この路線図覚えている人なんてほとんどいないわよ」

そういう人は鉄道マニアと言う人種だ。あたしとは無縁だ。

「お……私の地元は最近『東西線』が出来ただけで後は『南北線』があるだけよ」

「随分とシンプルだよね」

「というか、首都圏が異常なだけでしょ？」

「あはは……」

一応これでも同じ「政令指定都市」の住民のはずなのに、感覚は大違いだ。

翻って東京は、南北線、東西線の他にもいろいろな路線が入り乱れている。そしてこれだけの路線をもってしてもすさまじい混雑が発生しているのだ。

ともあれ、電車はすぐにやってくる。幸子さん曰く、東京の鉄道は編成も長いらしい。

そう言えば、幸子さんの家に行った時も、在来線はそんなに編成長く無かったよね。

さて、地下鉄で目指すのは「新橋駅」、朝のニュースなどでよくやっているビジネス街だ。

そこから更に別の路線に乗り換えたところに、今回の温泉施設がある。

「へえ、幸子さんはそっちをよく使うんだ」
やはり地方は道路中心。
「そそ、車は必須だしバスも便利だよ」
「次は、新橋、新橋です。乗り換えのご案内です――」
地下鉄のアナウンスが乗り換えをするように促してくる。
予定では新橋駅で、いわゆる「新交通システム」に乗り換える予定になっているのでここで降車しなければならない。
「幸子さん、乗り換えるよ」
「はーい」
幸子さんがあたしについてくる。
改札口を出て、「新交通システム」の案内に沿ってゆりかもめを目指すため、地下鉄を上がって外に出た。
ゆりかもめまで、テレビでよく見るＳＬは見なかったのでおそらく反対側の出口なんだろう。
「石山さん、これってモノレール？」
ホームに行くと、幸子さんが聞いてくる。
母さんからは「新交通システム」とは聞いたけど。
「うーん、あたしもモノレールって生ではほとんど見たことないからわからないや」
ともあれ、電車はタイミング悪く発車したばかりだったので待ち時間ができてしまった。
「ねえ、さっきの車両、車掌が見えなかったけど、東京でもワンマンってあるの？」
「え!?　ワンマンって何のこと？」
聞きなれない単語なのであたしが意味を聞く。
「ああうん、車掌がいなくて運転士一人で運転する列車のことを言うんだよ」
「うーん、あったようななかったような……」
思い出せない。なんかどっかの路線でやってたような記憶があるんだけど……
「うーん……まいっか」

幸子さんも深く追及してこない。
ともあれ、記載の電光掲示板の案内にある次の豊洲行きを待つ。普通ってあるけど快速とか急行ってあるのだろうか？　よく分からない。
しばらく待っていると、駅の放送が聞こえて来る。
そして、車両が入ってくる。
「!?」
あたしと幸子さんは、二人揃って目を丸くした。
何故なら、予想の斜め上、運転士さんも車掌さんもいないのに動いているから。
ともあれ、一番先頭の席を陣取ることに成功した。開放的な前方の風景はある意味で新鮮だ。
「びっくりしたよ。まさか運転士さんまでいないなんて、東京はハイテクだね」
「あーいや、うん。多分ここだけだと思うよ」
他に自動運転があるかは知らないけど。鉄道マニアじゃないからよく分からないや。
駅にしばらく停車してから、発車する旨の放送が流れ、ドアが閉まる。
さすがに駆け込み乗車とかもあるだろうから遠隔操作してるんだろうけどそれにしてもちょっと不安にはなる。
列車は、ひとりでに動く。自動放送も自然に流れるけど、車内に乗務員が誰もいないとかなり不気味だ。
でも、次の駅に着くころには慣れてしまい、幸子さんと他愛もない話に講じながら、車窓を楽しむ。
「でもここ、高所恐怖症には厳しいよね」
「うんうん」

この列車はいわゆる「お台場」と呼ばれる場所を通る路線で、あたしたちはその中にある温泉施設の一つを目的地にしたんだけど、そこは温泉だけではなく、食事と休憩所ももちろん完備されている他、洋

風な施設まであるらしい。
しばらく走っていると、車窓の前方、何やら大きな円が目に入る。
「ねえ石山さん、これって……？」
「何だろう……わあ！」
あたしたちが話していると、列車が一回転、大きな円を描くように曲がっている。
おそらく高低差解消のために、こんな派手な仕掛けをしているのかな？
「あ、ここに出るのね！」
見慣れた光景が目に入る。
「え!?」
幸子さんは、ここがどこだかわからないらしい。
「レインボーブリッジだよ」
「あー、昔何かで封鎖せよとかやってた!?」
「???」
幸子さんの言っていることがよくわからない。
「あー知らないならいいよ。わ、私も子供のころだったし」
列車は橋の下層部で、道路と道路の間を走っている。この光景は日本全国でもなかなかレアだと思う。
しかも時折歩行者までいるんだから何気に珍しい光景だと思う。
橋を渡りきると別の駅へ。
これでもう、目的地は近くだ。

「ふー着いたね」
「よし、行こうか」
あたし達は、予め印刷しておいた地図と駅の案内とを見比べて、間違いがないことを確認し、道を進む。
「あ、見て！　あれじゃない？」
幸子さんが少し先を指さす。
「うん、じゃあ行こうか」
「ね、ねえ石山さん」

幸子さんが不安そうな表情で聞いてくる。
「ん？」
「どうしても、風呂に入らなきゃダメ？」
「当たり前でしょ。ここに来なかったら、何のためにあなたを東京まで呼んだのか分からないわよ」
「でも、お、女湯なんて……！」
「もう！　女の子が女湯に入って何が悪いのよ!?　それともその体で男湯に入るつもり!?」
あたしが強めに言う。
「ああいやその……」
「そんなことしたら通報されるか、はたまた男たちに囲まれて、レイプされるわよ」
そうじゃなくても変態確定だ。
「うぐぐ……！」
あたしがぐうの音も出ないほどの正論を言うと、幸子さんは黙り込んでしまう。

「さ、入るわよ」
「はーい……」
幸子さんが渋々とついていく。しかし、予め調べておいたから知っているが、この温泉施設は館内着として浴衣に着替えなければいけない。
あたしは幸子さん用とあたし用に、予め短襦袢を用意しておいた。
ちなみに、あたしは晒しも巻く必要がある。いずれにしても、夏祭りの知識が役に立った。
とは言え、どっちにしても洋風のパンツとブラジャーは脱がなければならないから、ノーパンノーブラには違いないけど。
「そうだったわ、まさかとは思うけど男物の下着とか穿いてないわよね!?」
「当たり前だろ！　全部隠されちゃったし、それに、穿き心地がいいし……」

幸子さんが恥ずかしそうに言う。
うんうん、小さいけど大きな一歩よ。
「うん、よろしい。じゃあ行こうか」
「う、うん……」
幸子さんを引っ張りながらあたしは温泉施設の中に入る。
「いらっしゃいませー！」
受け付けの女性2人が礼をしてくれる。
「学生2枚」
「学生2枚ですね。料金はこちらになります。ご利用の際にはチケット裏面の利用規約をよくお読みください」
あたしたちはお金を払って代わりにチケットの半券を受け取る。
「まずはあちらの更衣室でお靴をお預けになって、お好きな館内着にお着替えください」
「はい」
幸子さんも意を決したのか、あたしについて来る。
入ってすぐに存在する女子更衣室。
あたしはここに初めて入れた時は嬉しかったけど、幸子さんはどうやら違う様子。
「どうしたの？　入らないの？」
「え!?　あ、うん……」
あたしはなお躊躇する幸子さんを、やや強めに引っ張りながら入れる。
まずするのは浴衣選び。もちろんピンク色で女の子らしいお洒落なデザインを渡す。
幸子さんは「ちょっと派手すぎない？」と言ってきたけど、「あたしもおしゃれするんだからつり合い取らないとだめよ」と言って納得してもらった。
さらに暖簾をくぐると、着替えるための女子更衣室になっている。
もちろん中では多数の女性たちが、雑談をしながら着替えている。
若い女性が意外に多い。
「うっ……」

やっぱり幸子さんには刺激が強いみたい。
あたしも初めての時は女の子として受け入れられた嬉しさで満ちていたけど、２回目はとても緊張したことを思い出す。
あたしは隣り合ったロッカーに幸子さんを招き入れて、まずは靴を預ける。
「はいこれ」
次に幸子さんに襦袢を渡す。
「え？　何これ？」
「浴衣用の下着だよ。パンツやブラジャーは使えないからね」
あたしがさらりと言う。
「え!?　ノーパンノーブラなのかよ！」
「しーっ声が大きいわよ。ともかく、これに着替えること」
「えー」
「着替えないと楽しめないわよ」
「だって、周りはそんなの気にしてないよ」
幸子さんが想定内の反論してくる。
「だめよ、はしたない人に合わせちゃいけません」
「うー」
「いい？　まずこうやって……！」
ワンピースのスカートの中に襦袢を入れつつ、器用な手つきで背中のファスナーを外し、胸まで入れる。
続いてブラジャーを脱ぎ持ってきた晒しを取り出して乳首に当てたらぐるぐると巻き続ける。
「い、石山さん、すげえ大きい……」
「ふふん、あたしの自慢なのよ。でも今は、和服だからこうやって封印するの。幸子さんはなくてもいいわよ」
本当は幸子さんの大きさでも巻いたほうがいいと思うけどいきなりハードル高いのはまずい。
「そ、そうなんだ……」
「ほら、幸子さんも着替えないと、余計に恥ずかしくなるわよ」
あたしが催促する。

「うー、でも……女物穿いてるとこ見られたくない」
「何を言っているのよ。この後は素っ裸になって温泉入るのよ」
「うー」
　さっきから「うー」が多い気がする。
「とにかく、着替えないといつまでも先に進めないわよ」
「は、はい……分かりました……」
　幸子さんは意を決してズボンとパンツを脱ぎ、更に上もブラジャーごと脱いで全裸になっている。
　……後でまたお説教しなきゃ。
　あたしの方は、晒しで胸を潰したら、襦袢を着終わり、続いて浴衣を着る。
　うーん、夏祭りのときほどじゃないけど、やっぱり下半身のスースー感がするわねえ。
　幸子さん、大丈夫かな？
　幸子さんを見ると、襦袢に四苦八苦しつつも、何とか着られたので、更に浴衣を着る。
「着替え終わったよ」
「うん、じゃあ鍵閉めていこうか」
　簡易な浴衣なので、鞄を持っていき、この中に財布やタオルなどを入れることにする。
　鍵を閉めて腕に巻き、厳重に管理する。入館料や入浴料以外の別料金を後払いで支払う際にはこれが必要になる。
「さ、楽しみましょ。ところで幸子さん」
「ん？」
「着替える時、ああいう着替え方はダメよ」
「え？　でもそうするしか？」
「いい？　服の構造上、どうしても見えちゃうのは仕方ないわ。でもね、ああいう風に丸見えになってから着替えるものじゃないのよ」
「え？　じゃあどうやって？」
「パンツとブラジャーを脱ぐ前に、まずは襦袢を着て、それからよ」
　あたしが自分の着替え方を指導する。

「面倒くさいなあ……」
「女子力は面倒くさいものよ。でも、だからと言ってだらけてたら、女の子としてドンドン堕落していくわよ。そんなことになったら、せっかくのかわいい顔が台無しになるわよ」
　それだけじゃない、ふしだらな生活を続けると女の子としてのアイデンティティも失われかねない。
　女の子になりたての今だからこそ、特に注意して生活させたい。まあ、あたしもなりたてだけど。
　そうすると、失速中の飛行機に例えるなら「機首上げ」に相当する効果になってしまう。
「女子力ねえ……女って大変だなあ……」
「幸子さん、決して他人事じゃないわよ！　あなたも女子なんだから女子力高くないとダメでしょ……あたしもそこまで人の事言えないけどね」
「え!?　石山さんでも？」
「ええ、今は落ち着いたけど、特に８月の林間学校くらいまではよく『優子ちゃんは女子力低い』ってクラスの女子にお説教されたわ」
　今でも結構桂子ちゃんにはお説教される。
　悔しいけど桂子ちゃんに女子力で勝てる気がしない。
「でもよ、もうすぐ１２月だろ？　やっぱそれだけ時間経てば違うんだろ？」
「ま、まあね……それから、暗示かけなさいとは言わないけど『だろ』じゃなくて『よね』を使うとより良いわよ」
　あたしが優しめに注意する。
「う、うん……まだまだ修行が足りないなあ……」
　ん？　今良いこと言った。褒めてあげなきゃ！
「お、幸子さん今すごくいいこと言ったわよ」
「え!?　何？」
「今、『まだまだ修行が足りない』って言ったでしょ？　幸子さんの中で、女として生きることに気持ちが傾いている証拠よ」
「あ、うん……やっぱり、戻れないんじゃしょうがないかなって……」

「ふふっ、どっちにしても、今のはとても大きな一歩よ。その気持ち、女の子として修行していくって気持ち、絶対忘れないでね」
あたしが努めて優しく言う。
あたしだってその気持ちを捨てていないし。
「あ、うん……分かった、わ」
「ふふっ、じゃあ次の修行に行こうか？」
「え!?　次の修行!?」
もちろん温泉のこと。
「うん、女湯に入るわよ！」
あたしも気合い入れているけど、女湯は林間学校以来だし全くの赤の他人と入る公共浴場は初めてなのでちょっと緊張している。
「あ、あの……ちょっと休んでから……」
「んー!?　先延ばしにしても仕方ないよ」
「いや、その……女湯には入るけど、単純に疲れてて……」
幸子さんが申し訳なさそうに言う。
「あ、うん。ごめん、じゃあ休もうか。この浴衣結構はだけやすいからくれぐれも注意してね」
「う、うん……」
ノーパンだし短襦袢の性質も知っているだろうからさすがに注意してくれると思うけど、幸子さんに何かあるとあたしの責任になるから気をつけないと。
そうなれば、幸子さんの担当カウセンラーとしての地位も、正会員としての地位も危うくなる上に、最悪永原先生の顔に泥を塗る事になりかねない。
ともあれ、中央の休憩所に行く。
和風休憩所と洋風休憩所があるが、なんとなくギャップが面白そうということで洋風を選ぶ。
「よし、じゃあ休もうか」
「うん」
ちょうど夕方の谷間の時間なのか、中はかなり空いていてあたしたちも足を伸ばしてゆっくりくつろげる。それにしても、純洋風の部屋

に浴衣姿の男女というのはものすごいシュールな光景だ。
足を広げないように改めて幸子さんに注意喚起をしておく。

「ねえ、あの2人かわいいよな」
「うん、特に黒髪に白いリボンの子、胸とか絶対もっと大きいよね」
「目の付け所がエロいぞお前。でも、左の子だって磨けば負けないと思うぜ」
「つまり原石ってことか？」
「そうそう、右の子は絶対経験豊富だって」
「あー、分かる。男慣れしてそう」
「左の子なら俺の好みに染め上げられそうだぜ」

うぐぅ……あたしが彼氏持ちなのは事実なので全く反論ができない。一応まだ処女だけど、かなりエッチなこと浩介くんにされちゃってるし。
それにしても、男というのは意外と見る目があるというか、案外バカにできないわよね。
幸子さんが「原石」というのも、あたしは幸子さんがＴＳ病になったばかりというのを知っているからこそ分かるはずで、あそこの男性はそうした予備知識無しで言い当ててしまったのだ。
おかしいなあ、半年前とちょっとまで、あたしは「あっち側」だったのに。
幸子さんは男2人組の会話を聞いてか聞かずかゆっくりと歩き疲れた足を休めている。
そんな中で、あたしは男性2人との間に見えない壁を感じながら、休憩していたのであった。

## 後戻りはもうできない

「ふー休んだ休んだ」
　幸子さんが腕を上に伸ばしてストレッチする。
「じゃあ今度こそ、温泉行こうよ」
「う、うん……」
「緊張してる？　実はね、あたしもなんだ」
　素直に伝えることで、緊張も和らぐはずだ。
「え!?　どうして？」
「実はね、あたしも学校の林間学校ではクラスの人ともお風呂に入ったけど、こういう知らない人が居る公共の場では初めてなのよ」
「え!?　そうだったの？」
「なにせまだ半年だからね。こんな風にすっかり女の子でも未経験のことも多いのよ」
　だからこそ、あたしにも改善の余地もあると言えるんだけど。
「そうなんだ……」
「あたしだって初めてのことは緊張するわよ。さっきの女子更衣室だって、女の子になったばかりの時は緊張したわよ」
「うーん……」
　それでもまだ、躊躇しているという。とは言え温泉施設で温泉に入らないわけに行かない。
「さ、行きますよ」
　あたしがさっきと同じように幸子さんの腕を引っ張ると、幸子さんも観念したようについてくる。
　うん、抵抗しないだけでも大きな進歩よ。
　一方で、「男の湯」の所には多くの男性が入っている。それを幸子さんが名残惜しそうに見つめている。
「……幸子さん、あなたはもう、あそこに入ることはないわよ」
「う、うん……」
　女性が男湯をじっと見ているのは、中々に変な風景だ。ともあれ、万が一不審者と間違われないように、幸子さんをすぐに女湯の中に入

れることにする。
あたしたちはスリッパを脱ぎ、脱衣所へと入った。
もちろん、裸の女性もたくさん歩いている。タオルで隠している人もいれば、堂々としている女性もいる。
「さ、温泉入ろうか！」
幸子さんの緊張を少しでもほぐすために、あたしがなるべく明るく言う。
「う、うん……」
隣り合った適当な場所のロッカーを見つけ、あたしが鞄を入れて、タオルを出す。
「はいこれ。これを使って、うまく隠しなさい」
「は、はい……」
幸子さんはぎこちないながらも、タオルを取ってくれる。
あたしは自分のことに注意を向け、館内着の浴衣を緩めて重力に任せて床にすとんと落としてから、拾い上げてロッカーの中へ入れる。
そして襦袢を脱ぎ、胸の晒しを取ってぼよんと胸がはじけると、ノーパンノーブラだからもう全裸になれた。洋服より断然脱ぎやすい。
タオルを持ってうまく前を隠し、ロッカーの鍵を腕に巻き付ける。
幸子さんの方を見ると、挙動不審ながらも少しずつ脱いでいる。
しかし、幸子さんもノーパンノーブラだからか中々襦袢を脱ぐ決心がつかない様子。
「あ、あんまり見んなよ!!!」
幸子さんが顔を赤くして言う。うーん、やっぱりあたしと違って「男」が強く残っている。
「あら、女の子同士でしょ？　それに、あたしがもっといい脱ぎ方をアドバイスできるかもしれないのに」
「うー」
「どうしたのかなあの二人？」
「なんか様子おかしいよね」

「もしかして片方ガチなんじゃない？」
「えーうっそーあり得ないでしょ」
「でもさ、ああやってじろじろ見てるってやっぱりさ」
「あり得るのかなあ……」
「近づかないようにしようよ。まあ、多分違うんだろうけど念のためにさ」
「う、うん……」
「美人でスタイル抜群なのにもったいないわよねえ……」

ってまずいまずい。あんまりじろじろ見すぎて彼氏持ちなのに誤解を与えちゃってるよ。
会話に気を取られている間に、幸子さんが既にすっぽんぽんになっていた。
「じゃあ行こうか」
「う、うん……」
幸子さんは、やはり緊張がほぐれないようで、足がちょっと震えていて、体制もかなりの猫背になってしまっている。
「大丈夫よ、いったん入っちゃえばどうってこと無いわよ」
あたしがそう言って脱衣所の扉を開き、お風呂場の中に向かう。
よかった、ぎこちないけど幸子さんもついてくる。
まずはかけ湯で体を流す。
今日は協会本部から始まって、漫画喫茶、乙女ロード、そしてこの温泉施設と、結構遊び倒している。
いくら冬間近とは言え、汗だって流れているはずだ。
「どうしたの？　幸子さんも流しなよ」
もう一つ桶があるのに、ぼーっとしている幸子さんを見て、あたしは催促する。
「う、うん……」
あたしの言葉を聞いて、幸子さんも初めて体を流し始めた。
どうも緊張がほぐれないのか、自ら進んで行動しようとしていない。これではダメね。

「幸子さん、基本的に入浴マナーは男女で変わらないわよ。強いて言えば髪が長い人は湯船につかないように気を付けるくらいかな？」
「……うん」
「さあ、幸子さんと違って、あたしはこの長い髪の手入れに時間がかかるから、体を流し終わったら自由時間にするわよ。もちろん、すぐ風呂場から出たら絶対ダメよ。十分に湯船を楽しむこと。いいね？」
「……は、はい」
こんな会話をしている間にも、大浴場の女湯には老若問わず裸の女性が何人も視界に入ってくる。
やっぱり同性でもつい見てしまう。
それは他の女性でも同じ。特にあたしは胸がとても大きいために、主に胸の小さい女性の方々からすさまじい殺意にも似た視線を感じている。それを感じる度に、女の子としての自信がが深まると同時に、肩こりの悩みを知らしめてやりたいと思ってしまう。

あたしは、幸子さんと別の方向に進み、体を洗う。
幸子さんは、観念して違う場所で、一人で体を洗っている。
体を洗い、髪を洗い、顔を洗う。そして髪が湯船に入らないように、髪を縛り上げる。
最近母さんに「お団子ヘアー」の縛り方を学んだので、最近はそれにしている。
ストレートなロングヘアー程じゃないけど、童顔のあたしにはとっても似合っている髪型だと思いたい。
シャンプーとリンスは、いつもと違う温泉施設のもの。どう出るか楽しみだわ。

一通り洗い終わったらタオルの泡をよく洗い流して、あたしは風呂場へと行く。
ここは一応旅館としての機能もあるが、メインは日帰り温泉というだけあって、林間学校の温泉よりもずっと広い。
あのホテルは最上階と最下階にそれぞれ浴場があったが、ここはそ

の二つを合わせた面積よりも明らかに広い。
中はそれなりの人がいるけど、面積が広いため意外に空いて見える。
数多くある湯船のうち、あたしはまず「月替わり薬の湯」と称する薄茶色の怪しい温泉に入るため、足を湯船に入れていく。
「んー！　あちち……」
やっぱり足元は冷えるから慎重に入らないと。
中に既に入っている女性はあたしのこと気にも留めてないし。
ゆっくりゆっくり……よし！

壁の説明文を読みながら湯につかる。
なんかよく分からないけど、どうやらこの温泉は漢方薬のお湯らしい。
って、それって温泉っていうのかな？
少なくとも天然温泉ではないよね……
まあいっか、こんなに沢山あるんだし。
それにしてもこの漢方、肩こりに効いてくれるといいけど。

しばらくすると、体も温まったのでのぼせないうちの出る。
タオルは湯船につけられないから、この湯船から出る瞬間はどうしてもまるごと見えてしまう。幸子さん、大丈夫だといいけど。

あたしは次に近くの炭酸風呂に入る。
しゅわしゅわと程よい泡立ち。
炭酸風呂に入っていると、前を隠した幸子さんとすれ違う。入ったばかりと違い、大分落ち着いている。
まだぎこちないけど、気にはならない程度。少なくとも不審者のような感じではない。
考えてみればあたしも、女の子になったばかりの女子更衣室も、林間学校の女湯も、緊張してたのは入る直前から入った直後くらいだしそういうものなのかもしれない。

だから、その壁を越えれば、案外大したことない課題なのかも。
炭酸風呂の後は、某名湯を幾つか掛け合わせたと称する「スペシャルブレンド温泉」や、常に泡が立っている「泡立ちの湯」、お馴染みの「ヒノキの湯」や肩こりに効く「打たせ湯」や「ジェット風呂」、更に単なる「ぬるま湯」なんて言うのにも浸かった。
さすがに「巨大温泉施設」と称するだけあって、バリエーションはとっても豊富だ。
幸子さんの姿も見えないけど、このボリュームにさっきの様子なら、勝手に一人で出るということはなさそうだ。
一方で、あたしは一番奥の「天然温泉」を目指す。
ここが一番大きな湯船で、それなりの人で賑わっている。
温泉は濃い茶色で、地下数千メートルから組み上げているらしい。
「あ、石山さん……！」
よく見ると声をかけてきたのは幸子さんだった。
さっきよりもはるかに落ち着いた表情だけど、まだ緊張の色が抜けていない。
「あら、幸子さん。どう？　女湯にも大分慣れたでしょ？」
「うん、でももう一度入るときには緊張しそう」
「あはは。ま、少しずつ回数増やすしかないでしょ？」
あたしが優しく言う。
「う、うん……」
「幸子さん、いい湯だよね」
今は女湯のことではなく、温泉そのものの話をしてあげる。
意識させすぎると良くない。
「う、うん……」
「一通り温まったら露天風呂行こうか」
お台場の海がきれいとか何とか。
「うん、そうする」
あたしと幸子さんはタイミングを見計らって湯船を出て、露天風呂を目指す。

「このドアだね」
「うん、開けるわよ」
あたしがドアを開けると、一気に寒気がなだれ込む。
「きゃー寒い！」
あたしが思わず声を上げるが、幸子さんは平気らしい。さすが北の出身。
あたしは外気温と海風の寒さで震えながら、幸子さんは冷静に露天風呂に入る。
この時だけ、ちょっとした立場逆転を味わう。
お風呂に入って温まり、冷静になってみると目の前に広がる東京湾が美しく、しかも右の方には夕日が落ちる。
「きれい……」
幸子さんが感慨にふけっている。
やっぱり連れてきてよかった。幸子さん、自分で気づいているかはわからないけど、少しずつ、女の子を身に着けてくれている。
いつかまた、女の子として生きる喜びを味わってほしい。
特にＴＳ病は、若く、きれいなままで生きていけるのだから。
「夕日、眩しいね」
「うん、今日ももうすぐ終わるんだなって」
幸子さんが名残惜しそうに言う。
「そうだね。でも帰りの新幹線はまだあるでしょ？」
「う、うん……」
「夕食がまだ残っているわよ。それにまだまだここで遊べるわよ」
あたしが言う。まだ遊びは残っている。
「ふう……」
あたしは肩を自分で揉む。
ちょっと遊び疲れて肩もこっている。
「石山さん、肩こりなの？」
「あ、うん。かなりのね」
あたしがそう言うと、幸子さんが後ろに回り込んでくれる。
「あーそこ、気持ちいい……！」

夕日を眺める絶景の温泉につかりながらの肩マッサージは至福の一言。
文字通り、極楽浄土の気分。
「石山さん、肩こりすごい」
「あはは、やっぱりどうしてもこう大きいと、ね」
ＴＳ病の子はみんな多かれ少なかれ胸があるけど、あたしの大きさは文字通り「規格外」、探せばもっと大きい人もいるだろうし、実際いるんだけど。
「やっぱりそう、お……あ、あたしも他人事ではないかも」
幸子さんも、男時代には無かった胸のふくらみが結構ある。
今なってなくても、今後肩こりになる事だってあるだろう。あたしだって女の子になったばかりはこってなかったし。
「さ、そろそろ出る？」
「うん、そうしようか」
あたしたちは湯船から出て大浴場に戻るまでに冷えた体をもう一度温めなおしてから体を拭いて脱衣所へ戻る。
ロッカーの番号を確認し、鍵を開けてバスタオルを取り出しもう一度体をよく拭く。
そして、襦袢を取り出す。
幸子さんが少し動揺していたが、「浴衣だからパンツブラジャーはないでしょ」と言って思い出させてあげる。
……おっと、あたしはあたしで晒し巻かないと。
晒しの分の作業工程が一回多いので、あたしの方が着替えに時間がかかり、さっきとは逆に幸子さんをまたせた。
「もう一回休む？」
「うん……わっ、私も……ちょっとのぼせちゃったよ」
そしてあたしたちは今度は「和室」の休憩所で休むことにした。
時間帯も時間帯なのか、さっきよりもかなり混んできた。
「温泉、よかったね」
「うん！」
「さて幸子さん、女湯に入っちゃったし、これでもう完全に男には戻れ

ないわね」
　あたしが、幸子さんはもう戻れないことを言う。今日はその前にも漫画喫茶で男子禁制に足を踏み入れている。
　1日に2度も男子禁制に入り込んでおいて、もはや「俺は男だ」の言い訳は通用しない。
「ああうん、そうだね。そのことで、石山さんに話があるんだ」
「ん？」
　幸子さんがすぅーっと深呼吸をする。そしてこっちに向き直る。
「わたし、カリキュラム受けたい。それで、女の子として生きて行きたい！」
　幸子さんから出たのは、あたしが一番彼女に言って欲しかった言葉。
「幸子さん、うん。あたし、その言葉をずっと待ってたわ。ようこそ、女の子の世界へ」
　あたしも、嬉しさに満ちた表情で、幸子さんを迎えるように言う。
「うん」
「でもその前に聞いてもいいかな？　どうして幸子さんはそう決意したの？　今日会った時はまだぶっきらぼうだったのに」
　一応想定はしていたが、今日決断する確率的には低いと考えていた。
「お風呂でずっと考えてた。自分が今何者なのかって。普通男が女湯に入ったら、女性の叫び声と共に警察に捕まるはず。なのに、自分が裸になっていても、女湯の女性たちは何も違和感を感じていなかった」
「うん、うん……」
　普通ならここで「当たり前でしょ女の子なんだから」と言うべきところだが、今回は我慢する。素直に、幸子さんが言いたいだけ言わせてあげるべき場面。
「改めて、自分の体を見て、周囲の反応を見て、女の子なんだって思った。そう思ったら、通りすがりの人に『石山さんよりも服装のセンスがない』って言われたのが急に悔しくなった。自分だって、その気に

なればもっとかわいくなれるんじゃないかって」
「悔しくなった」、その言葉を聞いて、「ああ、この子にももう、女の子としての人格が芽生えたんだ」とあたしは確信した。
「うんうん、それで？」
「どうせもう、男には戻れないなら、せっかく生まれ変わったんなら、石山さんみたいに、輝く女性になりたいから！」
幸子さんが真剣な真顔で言う。
これは、嘘偽りのない、信用してもいいという顔。
「うん、幸子さん、その気持ち。絶対に失わないでね」
「もう戻れないからしょうがない」、あたしと比べると後ろ向きな内容の決意だけど、それでも大きな一歩。
うん、招待してよかったわ。
「分かってる。生理が来た時も、今の気持ちで乗り越えていきたい」
「うん、是非頑張ってね」
幸子さんは、もう次の関門についても考えている。とてもいい兆候。永原先生が聞いたらとても喜びそうだわ。
「うん、頑張る」
幸子さんの固い決意をもう一度確認し、あたしは安心してもいいと思った。
そしてもう一つ、あたしから幸子さんに送りたい言葉がある。
「多分これから、幸子さんの永い人生において、何度も男女の違いで困難は来ると思う。でも、今の心を忘れなければ、きっと最後に、あなたは救われるわ」
いつぞや、あたしの心に残っていた永原先生の言葉を思い出し、投げかける。
「……はい」
「いい？　カリキュラムは、決して途中で投げ出しちゃダメよ。あたしはカウンセラーだけど、あなたの心の底までは分からないわ。だから、あなたを信じるしか無いのよ」
「必ず、やり遂げます」
あたしも半ば脅すように、退路を断たせる感じだったけど、仕方な

い。
　正しい道は一つ、それのみが長く果てしない、しかし安定した平和な道へと続く。
　そして、間違えた道は全てが死への入り口。
　正しい道は険しく見え、間違えた道は平穏に見える。
　そう、だからあたしたちは、正しい道を選ぶことの出来たあたしたちは、新しくこの別れ道に迷い込んだ人に、正しい道を教えなければいけないのだ。
「ええ。成功を祈っているわ。ところで幸子さんは大学にも行っているんだっけ？」
「あ、ああ……」
「じゃあ少しカリキュラムの日数が増えるわね。あたしの場合はカリキュラム中は学校を休んでいたけど……そうよねえ、いつまでも休んでいるわけにも行かないもんね」
　高校ならともかく、大学なら自由度も高いし確かに通いながらというのも可能かもしれない。
「うん、単位の出席点とかもあるから、留年しないためにも、休む訳には行かないんだ」
　確かにその通り。
　あたしの場合は永原先生が融通してくれたけど。
「大学の友人とかはどうなの？」
「ああうん、やっぱりみんな困惑しているよ。男として扱うべきなのか女として扱うべきなのか、自分自身も含めてみんな決め兼ねている」
　幸子さんは冷静に話す。
「そう……とにかく、大学に行ってからみんなの前で今の決意を話すといいわよ。もちろんあなたのお母さんとお父さんと……それから徹さんにもね」
「……言われなくてもそうするつもり」
「そう、それはよかった」
　あたしたちは、しばしの休息をもって、食事とすることにする。

# 塩津幸子は生まれ変わる

休憩所ではかなりの時間休憩したおかげか、さっき見た時よりは空いていた。

いわゆる「第一陣は過ぎた」という時間帯だろうか？

お寿司屋さんやうどん屋、ラーメン屋など様々なお店があるが、せっかく海沿いに来たので、「江戸前寿司」を謳う店に入ることにする。

しかし、江戸と言いつつ、中は何故か現代的な回転寿司で、壁には何故か中華風の絵が飾られている。

そしてその店に、浴衣姿の客と何故かメイド服のウェイトレス。

「な、何かギャップがあるよね」

幸子さんも案の定、ひどく困惑した表情を見せている。

「幸子さん、この店、突っ込んだら負けだと思う」

どんなに奇妙だろうが、食べ物が美味しければそれでいいということにしておかないと、到底身が持ちそうにない。回転寿司といってもここはお寿司屋さんだ。一応財布にはかなりの余裕があるが、くれぐれも食べ過ぎに注意しないといけない。

幸子さんは分からないが、あたしが食べられる量は少ない。もちろん、女の子としても、男の子と同じように、エネルギーはとても重要だけど、無理して食べてはいけない。

ケーキとか甘いもの出されると、つい食べちゃうんだけどね。

「いらっしゃいませ、２名様ですか？」

「はい」

「あちらのカウンターの席へどうぞ」

メイド服姿の店員さんに、幸子さんとあたしがカウンターへと通される。ちなみに、スカート丈は長めで、文化祭のような大胆なデザインというわけではない。

回転寿司と言っても、テレビでよくやる「一皿１００円」のような安いものではない。

もちろん、納豆巻きとかそういった安い感じのは１００円だけど、ものによっては３００円４００円５００円とする。
……それでも回らないお寿司で食べるよりはずっといい。
ここにはもう一店舗、回らないお寿司もあるけど事前に調べた限りでは5桁の出費になる。
協会から一定のお金は支給されているけど、食費に関しては本当に注意しないとすぐに足が出てしまう。
もしそうなったらあたしの自腹という決まりになっている。
お小遣いはそれなりに溜まっているけどそれでも浩介くんとデートするときに消えがちだし、浩介くんにおごってもらうこともあるけど、そのあたりも浩介くんと相談しなきゃいけない。
ともあれ、予算を超えた場合は、「例の事件」の慰謝料を切り崩すことになっている。あの資産は減る一方だし、絶対にあてには出来ない。
さすがにもう二度と痴漢は嫌なのであたしなりに対策をしているし、大学生や社会人になったら、自分の手で稼ぐしか無いだろう。
ともあれ、そこまで先のことについて、今はほとんど考えていない。
小皿を取り出し、醤油を垂らす。
また回転寿司のレーンの下層部には湯呑みが回っているためそれを取り出す。
カウンターにはお茶の素も入っているため、小さなさじで湯呑みの中にいれ、更に押すとお湯が出る構造物があるので、湯呑みで押すことでお茶をセルフサービスで自由に飲むことが出来る。
「……」
幸子さんがまず一番安い皿を取る。
「……」
あたしも、回ってきたマグロを取る。
「幸子さん、どれくらい食べると思う？」
「うーん分からない。でも、女の子になってから食は細くなったよ」
うん、それはあたしも同じで、女の子の日の時だけ食欲が旺盛にな

る。
「うんうん、あたしも、最初に食べたのは細かい病院食だったけど、その次に食べたハンバーガーはとにかく一口が小さくて苦労したのよ」
「やっぱり!? お……わ、私も同じだったよ」
幸子さんと出会ってからというもの、あたしは懐かしい苦労話を思い出す機会が増えた。
優一の頃の記憶は風化したとしても、優子になったばかりの頃の記憶は、今でも鮮明に思い出せる。
あの時のあたしは、今のあたしを作る土台となった時代。
これからも、あたしの初心を忘れないためにも、あの頃の記憶はいつまでも残り続ける。
とすれば、「優一」はなぜ「優子」へとなろうとしたのか？ その記憶も忘れることは出来ないだろう。具体的に思い出せなくなっても、「優一」の忌まわしき印象だけは残り続けるだろう。

「そういえば、女の子になると味覚変わるのかな？」
ふと、女の子になってからの味覚の変化に話題が移る。
「あたしは特に無いかな……うーん、甘いものが以前より好きになった気がするけど」
「あーうん、それ分かる。私も甘党になったよ」
やっぱり女の子の特徴かな？
実際女性誌や女性向けのテレビ番組とかには甘くて美味しそうなスイーツが数多く登場しているし、探せば例外は居るんだろうけど、女の子は概ね甘いものが好きと考えていいだろう。
お寿司は別に甘いというわけではないが、以前と同じように好きな寿司を食べ続ける。
「うーん、お腹いっぱいになってきたわ」
「うん、このくらいでいいわね」
お互いまだ１０皿も食っていないが、まあ女の子の食ならそんなもの。
幸子さんもそんな感じだった。やっぱりＴＳ病だと似た者同士に

なるのかな？
食べ終わって少し休んでいると、店内が混み始めたので空気を読んで出る。
休む場所なんて他にもあるんだ。
あたしたちは勘定を告げると店員さんが皿を会計し、あたしの腕のバーコードにデータを読み込ませる。
ちなみに、会計は一緒ということになっている。
全部後払い、だから気をつけないと。
「行こうか」
「うん」
あたしたちは、今度はゲームコーナーで遊ぶ。
ゲームコーナーも後払いのため、巨大なポスターで「遊び過ぎ注意！　景品は全て売店でも買えます！」と書いてある。
景品はどうもここの限定品だが、あそこまでデカデカとポスターで注意喚起するということは、よっぽどトラブルになったと思われる。
「ゲームコーナーで遊ぶ？」
「うーん、あたし、身体能力ひどいのよ」
「え⁉　石山さんも⁉」
「うんうん」
女の子になって一番落ちたのが、身体能力だったりもする。幸子さんもかなり落ちたみたいだけど、戦乱の時代を生き抜いた永原先生みたいに、そこまで落ちないパターンもあるらしい。
「じゃあこの、お菓子取るのにしようよ」
よく見ると、いつぞやのゲームセンターで見たクレーンゲームがある。
こっちは四角い小さなチョコレートが景品で、原価は安いからゲームの値段を考えれば、大量に取られても黒字になるようになっている。
あたしは腕のバーコードをタッチしてゲームを開始する。
コインを入れなくても出来るのは確かにハマりすぎる原因になるだろう。

チョコレートは簡単に落ちる。
極めてヌルいゲームで気分を害さないが、これでも儲かるのは店側になっているんだから、まさにＷＩＮ―ＷＩＮと言ってもいいかもしれない。
「ふう、取った取ったー」
「これだけあれば十分だよね？」
幸子さんが言う。
「そうだね、幸子さんも一緒に食べようよ？」
「え!?　さっき寿司食ったばかりだし……」
幸子さんの言葉を無視し、あたしはチョコの袋を一つ開け口に含む。
「んーーーーー!!」
じわりとほんのり甘いチョコレートの味が、何ともたまらない至福の時。
値段的には「駄菓子」に属するような安いチョコレートだけど、それでも美味しいものは美味しい。
たしかにさっき寿司を食べたばかりなのに、この甘いものという誘惑に、あたしは簡単に負けてしまう。
ああ、やっぱりこれも女の子になったからなのかな？
「ね、ねえ石山さん」
「ん？」
「わ、私にもちょっと一つくれる？」
幸子さんがちょっと伏し目がちに言う。
「ふふっ、お寿司食べたばっかりじゃなかったの？」
「ああいや、一口くらいならいいかなって……」
しめた、これはチャンス。こういう小さい所からでも、幸子さんを女の子に出来るはず。
「うん、どうぞ」
あたしは袋のままチョコレートを渡す。
「い、いただきます」
幸子さんが袋を破ってチョコレートを食べる。

「お、おいしい!!!」
「そうでしょ？　もっと食べる？」
「えっと……その、うん！」
　幸子さんが甘いものの魅力を知り、そしてあたしと同じように誘惑に負け、食べてしまう。
　多分、男の人だって甘いものが好きならこういうことはあるはず。
　そういう人にはなんてこと無い、効果がないことだけど、あたしや幸子さんにとっては、否が応でも「女」を意識させてしまう。

「さて、そろそろ行く？」
「うん、新幹線もあるし名残惜しいけどそろそろ出ようか」
「うん」
　あたしたちは温泉施設を出ることにした。
　最初の脱衣所の近くに引き返してまず、会計を済ませる。
　レジには数人の人が並んでおり、意外と会計に時間がかかる。
「お待たせしましたー、本日もありがとうございます、お帰りですか？」
「はい」
「財布は持っていますか？」
「はい」
　ちなみに持っていない場合は、脱衣所出口でも精算できる。
「ではバーコードをお預かり致します」
　あたしと幸子さんは、店員さんにバーコードを渡す。
「会計は一緒でよろしいですか？」
「はい」
　店員さんがバーコードをピッピッとする。
「では料金はこちらになります」
　出費としてはそこまで多くなく、あたしの小遣いで無理なく払える範囲だ。
「ねえ、割り勘でもいいよ？」
「ああうん、これあたしが招待してるし、協会のお金だから幸子さんは

気にしないでいいよ」
「そ、そう……」
幸子さんも引き下がってくれる。
あたしは財布から所定の金額を出す。うん、予算としては余ったからそのお金は協会に返さないと。
今日は領収書がたくさんだ。
あたしたちは最初の更衣室に戻る。
浴衣から元の私服に着替え直すんだけど、幸子さんの心境が変化したときのために、あたしは準備をしてあった。
今なら、渡しても大丈夫だろう。
「ねえ幸子さん」
「ん？」
「着替える前に、さっきの決意のことでちょっといいかな？」
「え!?」
幸子さんが驚いている。
「幸子さん、女の子になってくれるって言ったでしょ？　実はね、幸子さんの服、1セットだけあたしが預かっておいたのよ。はいこれ、帰りはこれを着ていって？」
あたしはそう言うと、ロッカーの中にしまってあった幸子さんの服を取り出し渡す。
それはやや水色がかった青い色の服とスカートで、丈は膝の下なので落ち着いているが、胸には赤いリボンもあしらわれた服で、幸子さんが着ていた服と比べれば、遥かに女の子らしい服。
そして頭には黄緑色の後頭部につける大きなリボンもついている。
あたしが普段つけている白いリボンと比べるとかなり目立つ仕様になっている。
「え!?　これ!?」
「そうよ、ロッカーの中にあるのじゃまた『センス無い』って陰口叩かれるでしょ？」
「う、うん……！」
「じゃあ着替えるわよ」

あたしはそう言うとまず浴衣を脱ぎ襦袢の姿になる。
うまく中身が見えないようにしつつパンツを穿く。
襦袢を緩め、胸の晒しを取り、そしてうまく見えないようにブラジャーを付ける。
そして、襦袢を脱がずにワンピースから着る。軽くファスナーを上げてずり落ちないようにしつつ襦袢を脱いで、もう一度前かがみになってワンピースの背中のファスナーを一番上まで引き上げる。
浴衣はレンタルだが、襦袢は協会のものだ。
幸子さんはうまく着替えているあたしを感心しながら見ている。
そう、幸子さんにとってはあたしが着替えのときに何気なくしている行動でも、全てが学習の機会なのだ。
さっきは思い切って全裸になったためにあたしにお説教されちゃったしね。

幸子さんがあたしの真似をする。
でもやっぱりうまくいかないようで、最後はちょっとだけ見えてしまっている。
「うん、まだちょっとぎこちないけど、今はそれでもいいわよ」
「は、はい……！」
でも、今は大目に見てあげないと行けない。
確かに女の子への道は長く険しい、あたしだって道半ばだし、もしかしたら永原先生でさえたどり着けていないかもしれない。
それを自覚するのはもっともっと後でいい。
後戻りへの未練だって、幸子さんは否定するだろうけど、心の奥底ではまだ残っているはず。
だからこそ、今は、視野が狭い方がいい。
視野が広く、遠くを見渡せてしまえば、ＴＳ病という先の長い、はてしない物語に絶望してしまうかもしれないから。
いや、あたしだって、こうして偉そうに幸子さんの指南役とカウンセラーをしているけど、将来のことがわからない。
浩介くんのこと、今は棚上げにしているけど、いつかは来る問題。

浩介くんが死ぬ時、あたしはまだこの姿のままで、どうやって乗り越えよう？
ずっと恋愛しないと、永原先生の時のように頭がおかしくなり、大きな遺恨を残してしまう。
とすれば、将来的にどうしても「浮気」をしないといけないということになってしまう。
でも、今のあたしは、浩介くん以外考えられないのに。
そんなことを考えていると、幸子さんが着替え終わったみたいだ。
「終わったよ。行こうか」
「うん」
元々着ていた服は幸子さんの鞄の中。
ちゃんと胸下のリボンや後頭部に付ける大リボンも付けている。
まあ、それくらいなら1人でできるかな？
「どう……かな？」
まだ、幸子さんはスカートに慣れていないからか、足の動きがとてもぎこちない。
「うん、すごくかわいいわよ。ほら、あそこに鏡があるから見て見てよ？」
「う、うん……」
幸子さんが更衣室に備え付けの鏡を見る。
「こ、これが……お……れ!?」
幸子さんの一人称がまた俺に戻っている。
「俺じゃないわよ。幸子さん、あなたよ」
あたしが言う。
「あ、うん。これ、私だよね……うん、私は女の子……私は女の子……」
幸子さんがあたしに言われずとも暗示をかける。
一旦こっちに向かって倒れれば、後はどんどんと転がってくれるのかもしれない。
あたしでさえ、ここまでの進歩を感じては居なかった。
いや、もしかしたら、潜在意識では、既に女の子という気持ちはあったのかもしれない。

それを表面で否定してしまっていた。いわば、あたしが女の子になる過程とは、逆になっている。

「ねえねえあの２人」
「うん、すごいよね、モデルか芸能人じゃない？」
「でもあんな顔テレビで見たっけ？」
「見かけないわよね。特に緑の子は胸もすごいし」
「あんだけ大きければ目立つけど……やっぱり普通の人じゃない？」
「うーん、そうだよねえ。街でスカウトとかされないのかな？」
「しょっちゅうナンパとかされてそう」
「うんうん、ああいう美人は美人で大変なのよね」

あたしと幸子さん、２人がちゃんと褒められている。
流石に胸の大きさという意味で、あたしの方がより肯定的に見られているけど、それとばかりは仕方ない。
「石山さん、その……私達……」
「うん、幸子さんもあたしと並んでも恥ずかしくないでしょ？」
「う、うん……でも、普通の人って……」
「あはは、あたしたち、確かに普通じゃないわよね」
あたしたちは、ＴＳ病の女の子だから、確かに「普通の女の子」というにはあまりにも苦しい。
いくら今は女の子と言っても、元々は男だった上にしかも老けることがないのだから「一人の女性」としては扱えても「普通の女性」と扱うのは難しいかもしれない。
「じゃあ行こうか」
「うん」
幸子さんがかわいくなったのを確認したら、もう脱衣所には長居は無用となった。
あたしたちは、すっかり日が落ちたお台場に、足を踏み入れた。

# それは呪いか祝福か

「うわー、すごいねえ東京は」
「うん、さすが日本の首都って感じだよね」
温泉施設を出て、再び新交通システムに乗ると、遠くで多くのビルが明かりを灯していた。
東京の美しい夜景を見ながらあたしたちは別れが近付く。
夜化粧をしたレインボーブリッジ、またループ線を大きく曲がる。
「やっぱりこれって坂道の都合なのかな？」
「うーんよく分からない」
そんな話を幸子さんとする。一周ぐるりと廻るのは何だかんだでインパクトは大きい。
車内は行きより混んでいてあたしたちは車内で座ることはできなかった。
「ふう、結構疲れたね」
「そうだね。温泉でちょっと疲れは取れたんだけどねえ」
「立ちっぱなしかあ……」
幸子さんが言う。
「でも、この長さだから良かったけど、短いスカートでいきなり座るのはちょっとハードル高いかも」
「ああうん、そうだよね」
あたしも、女の子になったばかりの頃はミニスカートで座るのに失敗してパンツ見られてしまったことがある。
その時は後から指摘されるまで気付かなかったために、それに対しても、罰としてお仕置きされたんだけど、そこでもパンツ見られて恥ずかしがらなきゃいけないというものだった。
今の幸子さんに、それはあまりにハードルが高い。とにかく一段一段、ゆっくりゆっくり階段を登らせないといけないから、あたしからするとちょっともどかしい部分もないわけじゃない。
でも、幸いなことにあたしたちに時間は有り余るほど残されている。

あたしは生き急ぎすぎたけど、本来、ＴＳ病の治療とはそうやって行うべきこと。
永原先生があたしを正会員に推薦したのも、「もっとＴＳ病の現実を知ってほしい」という意味が込められていた。
あたしは幸子さんと接することで、自分がいかに恵まれた存在であるかを思い知ることが出来た。
それはあたしが持っていた昔への反動が大きな手助けになっていたことだけじゃない、すぐ近くに、会長兼担任の先生もいた。
でも大多数は、十分に救いをもたらせず、この病気を呪いと考え、そして多くが自殺し、生き残った人々も、それぞれ葛藤を抱えて生きている。
あたしがここに来て、あたしは広い視野を持つことが出来た。
あたしはもはや広い視野を持つに足る人ということ。
幸子さんは違う。だから、あたしは幸子さんを日本性転換症候群協会の会員にすることはまだ許可できない。
多分、幸子さんもそれはわかっているはず。

運転士さんも、車掌さんもおらず、列車は走る。緊急事態にはインターホンで対応するように書かれているが、それでも不安は尽きない。
とは言っても、一度事故が起きるだけで大ニュースになる、毎日毎日百本以上の電車が、いや、東京には幾つもの路線で何百という電車が走っている。
それを考えれば、鉄道の事故率なんて無視できるくらい低い。
新幹線に至っては５０年以上も前に開業しておきながら、殆ど無事故と言っていい。
だから安心して、この乗り物にも乗れる。
東京駅へは新橋駅から東海道線で一駅だが、最近は上野東京ラインが出来たので、新幹線もまた、上野駅から乗ることになっている。
「どうして東京からじゃないのかな？」

新橋駅の「指定席券売機」で帰りの新幹線の切符を買う幸子さんに疑問をぶつけてみる。
「えっとね、特急料金のせいじゃないかな？　東京から乗ると高いんだよ」
幸子さんが教えてくれる。
「へえ、そうなんだ」
「ま、ともかく東京と上野じゃ誤差みたいなものだし、それで安くなるならそっちを使いたいからね」
幸子さんが教えてくれる。
「じゃあ、ここで解散だね。今日はありがとう」
幸子さんがお別れの挨拶を言う。
でもまた会える。そう確信している。
「ねえ幸子さん」
「ん？」
「お母さんがもしあれこれ言ってきたとしても、絶対に決意を曲げないでね」
あたしが改めて釘を差しておく。とにかく重要な事だ。
「もといそのつもりだよ」
「うん、だからその服を、幸子さんに渡したの。お母さんには必ず、カリキュラムの教育係になって欲しいから」
余呉さんや他の会員で代理は出来ない。
「うん、じゃあ」
「またね」
幸子さんはそう言うと、改札口へと消えていく。
あたしはゆっくりと別の入口を目指す。
地下鉄の入口、幸子さんはもう帰るだけだけど、あたしにはもう一つやり残したことがある。
今日の幸子さんの決意表明と、起きたこと、それらを永原先生に報告することになっている。
ゆっくりと新橋駅の階段を降り、やってきたのは地下鉄、ここで別の路線に乗り換え、もう一度協会本部に行くことになっている。

あたしはメールで、幸子さんが帰り始めたことを永原先生に報告する。
券売機で、目的の駅まで買って地下鉄へ。
休日とあって、夕方でもそこまで混んでいないが、やはり休日出勤の人が多い。
「ふう……」
一仕事終えた人という意味では、電車の中のサラリーマンやＯＬの人たちと変わらない。
ただ、服装は似ても似つかない、おしゃれなものだけど。
地下鉄が進み、途中の駅でホームの向かい側に止まる別の路線の電車に接続し、本部の最寄り駅についた。
さすがに何度も行っていれば迷うということもなく、覚えた道のりで本部のビルへ。
ビルもやはり休日出勤帰りのサラリーマンで賑わっている。
そんな中であたしは最上層用のエレベーターで「上」のボタンを押す。
エレベーターの中はあたし１人、あたし１人を運ぶためだけにエレベーターの扉が開き、そして猛スピードで登っていく。
「４９階です。　４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ」
そんな中でも機械は無機質に案内をし、あたしは協会本部の道のりを進む。
　ピピッガチャッ
本日二度目のカードキー。
「失礼します」
協会本部に行く。明かりはついているようだけど誰も居ないのかな？
別の部屋に行くが誰もいない。
うーん、待機するしか無いか。
ふと、一冊の本が目に入る。いや本というよりほとんどコピー用紙とホチキスで作った簡素なもの。
表紙には「罪と呪いの記録」と書かれている。

無闇に見るべきじゃないと分かっていても、どうしても見てしまう。

「私は永原マキノ、かつて北小松貴子と名乗り、それ以前は柳ヶ瀬まつと名乗り、そして鳩原刀根之助と名乗ったもの。他にも偽名があったが全て忘れてしまった。

私は永遠の罪人、いくつもの罪を重ね、死ぬことも出来ずに現世の牢獄に囚われている。

この本を読み、あなたも私を知ることになるだろう。

ＴＳ病は呪いであり、泥棒だ。

ＴＳ病は私から死を恐れぬ勇猛さを盗んだ。半永久的な生は私から勇気を盗んだ。

ＴＳ病は私から力を盗んだ。矢を射る力は落ち、走っても疲れぬ距離で疲れるようになった。ＴＳ病のせいで、私は何もかも弱くなった。代わりに与えられたのは生に執着し、生きる歩みを止めない臆病さだけ。

ＴＳ病は私から主君を盗んだ。代わりに与えられたのは忠誠を誓った主君に永遠に奉公できず、苦しみ続ける運命。

主君は私が村に戻った時、本家筋の御方とともに苦難の道を歩んでおられた。しかしそれに付き添うことはできなかった。

主君が村に戻っても、私はＴＳ病のせいで帰参できなかった。

そして月日が経ち、主君の嫡男、次男が戦死された際にも、私は何もできなかった。そしてとうとう私は、主君が生を終えるまで、年貢しか収められなかった」

主君、おそらく永原先生がかつて仕えていたという真田幸隆のことだろう。

本の続きを読んで見る。

「ＴＳ病は私から3人の恩人を盗んだ。

私は生の執着のために天下再び乱世の空気を利用して村を捨てた。

年貢さえも収め得ぬ中で、７０年もの長きに渡り、私は主君の村より逃亡を続けた。

主君の跡継ぎと、その偉大な2人の息子の苦難の人生を知っておきながら、私は何もしなかった。
奉公せねばと思いながら出来ることさえやらなかった。
2人の偉大な息子のうち、1人は東照大権現に歯向かい、大坂で命を落とした。もう1人は藩主として、戦乱を知る数少ない1人として長寿を保った。
江戸に住んでいた私は、時の征夷大将軍の計らいでその1人の息子と会うことが出来た。
しかしその場で、私は2人の恩人の御恩を裏切った。
主君への裏切り、上様への無礼、それを許された私がしたことは到底書き記せるものではない。
私は自分が憎い。私がしたことは許せない。命惜しさに自己断罪するような勇気さえもないことも含めて。
どうして、どうしてああなってしまったのだろう?
大火で燃える江戸城から、恩人に救われた時も私はひどく動揺し、言葉にもならなかった。
どうか、どうかこの不忠で愚鈍な私をお許しくだされ。
老いた恩人が世を去り、征夷大将軍が代わっても、時折藩主や旗本たちに戦乱の話を聞かせ伝え、毎晩毎晩罪を懺悔する日々だった。
2人の恩人はあの世から今も私を許してはくれないだろう。
そして時代が下り、2人の恩人がいずれもこの世を去ってから、私は3人目の恩人を得た。恩人は私に最大限の便宜を図ってくれた。
私の生活はとても楽に、そして豊かになった。
水簿らしい服は華やかになり、言葉遣いも、作法も、3人目の恩人のお陰で板についた。
時の征夷大将軍も誠実な人柄で、恩人の進言を受けいれてくれた。
今度こそ、いつか恩を返そうと、その機会を伺っていた。
しかし、またも私は何もできなかった。
かけがえのない恩人は1人の狂人とその信奉者のせいで、永遠の言われなき汚名を着せられている。今でも、恩人の無念は晴れていない。

どうして、どうして私は無力なのか!?　２００年近くも生きておきながら、人の４倍も生きておきながら……いや、５００年近く生きた今でさえ、３人の恩人に対して、何も返せていない。
失意の日々を送る中、最後の征夷大将軍の手で江戸城は明治政府に無血開城され、私はまた、逃亡生活を送った。
ＴＳ病は呪いだ。恩義を受けることは出来ても、報いることが出来ない。恩人を盗まれ、代わりに与えられたのは十字架。それは時とともにずっとずっと重くなっていく」
永原先生のこれまでの話を思い出すと、跡継ぎというのは真田昌幸、偉大な息子というのは真田伊豆守と真田信繁、そして恩人というのは真田伊豆守、名前は忘れたけど徳川４代将軍、そして吉良上野介のことだろう。
「ＴＳ病は私から判断力を盗んだ。
私がこの協会を立ち上げた時、それは私以外にも長生きをしている仲間がいるということを知りたかったから。
そして、私は８４歳と７７歳の２人の『少女』を見出した。５０歳以上の江戸生まれでありながらも少女の姿をしていた人も、何人か見かけた。
でも、私は彼女たちを若すぎると思った。愚かだった。
不老足り得ないなら死んでいてもおかしくない年齢であったのにも関わらず、私は自らと同等の年代、東照大権現が江戸に幕府を開く以前を知るものを探そうとした。しかしそれは無駄な試みだった。
協会を開くより更に３５年前教師を始め、教え子を育て、巣立ち、そして死んでいくのを見てきた。
私はもう、親しかったものが先に死ぬことに慣れてしまった。悲しいとさえ思わない。むしろ、協会を立ち上げたことで、他にも不老な人が居るから、孤独感など無いと思っていた。
協会を立ち上げたことで、私はますます醜く生へと執着するようになった。既に４００年近くも生きておきながら、生という意味では十分すぎるほどの富を得ている私が、誰よりも生に執着した。
昭和２０年、日本が過酷な運命にあった時でさえ、私は生徒を見捨

て、囮にし、自分だけが助かる方法を模索していた。恩人への返せぬ恩を返すためにまだ死ねないと、私はその愚かな判断力で、日本の全てを裏切ったのだ」

２人の少女、年代として余呉さんと比良さんのこと。

永原先生は随分と苦労していた。

「ＴＳ病は呪いであり、泥棒である。

それは他の人も同じだった。少女の１人は水戸藩で藩士をしていた。しかし、ＴＳ病のために脱藩せざるを得なくなった。

またある少女は裕福な家の後継ぎとして将来を渇望されていた。殺されはしなかったが家を追われ、全てが台無しになってしまった。

ある少女、いや多くの少女たちが『男に戻りたい』ともがき続け、そして自らの手で死んでいった。

私たちは可能な限り長生きするしか無い。

私のように、例え罪を重ねたとしても、生き続けるしか無い。私も、そして他の長く生きるＴＳ病の人も、仲間が少ないのは嫌だからだ。そして生きていれば、どこかで扉が開く。例え１０００年生きてもあり得ないことなのに、そんな気がしてならない。だから私は、生に執着するのだろう」

ＴＳ病の人は孤独だという。確かに永原先生の人生だってそうだった。

でも、今は協会で仲間が増えた。だから孤独ではないし、不老についても前向きに考えられるのかな？

「そして今、ＴＳ病を泥棒や呪いではなく、救いだという少女が現れた。

彼女は常日頃から男だった頃の自分を嫌悪していた。私にとって幸運なことに、それは自らの教え子だったこと。

彼女は非凡な才能を見せた。そしてすぐに、男性の恋人を作った。

彼女がＴＳ病になってからというもの、私のクラスの雰囲気は目に見えて良くなった。

そして私も、彼女のお陰で楽しい人生、よく笑いよく泣く、そんな青春を取り戻すことが出来た。

彼女は私にとって、久々に現れた４人目の恩人だった。でも、前３人の恩人と違って、同じ病気だから、先生という立場として、恩はゆっくり返せるという安心感があった。
現に彼女も、私に恩を感じてくれている、これでようやく、私はせめてもの罪滅ぼしが出来た気分になれた。
私も、他の少女たちも、彼女に憧れている。
彼女こそ、私達の道標、私達が歩むべき姿、私達が彼女に学べば、私のこのろくでもない５００年の人生も、きっと救いに変えられると信じている。
ＴＳ病患者たちの救世主の素質があるのは、彼女だけだ」
「……」
本はここで終わっている。最後に出てきた「救世主の少女」、これが誰を指すのかあたしにはすぐにわかった。
だってこれは、どこからどう見てもあたし自身のことだから。
ガチャッ
「あ、石山さんおかえりなさい」
「わっ、永原会長……！」
しまった、本を勝手に読んだのがバレた。
「あ、この本？　気にしないでいいよ、石山さんに見せるためにわざと置いたんだから」
「え!?　もしかして――」
「うん、石山さんに読んでもらうために、ちょっと隠れていたのよ」
「むー」
永原先生がえっへんとした感じで言う。
最初からはめられていたということね。
「でもこの本、私達が石山さんに感じている本音。私の人生……それをもう一度振り返ってほしかったから書いたのよ」
「そ、そうなんだ……」
「文才無いんだけどね。ともかく、私の気持ちは伝えたわ。持って返ってもいいわよ」
「う、うん……」

とは言え、母さんや他のクラスの人に見られるのはまずいから置いておこう。
「それで、塩津さんはどうだった？」
「はい、それについて報告なんですが――」
あたしは、永原先生に今日のことを伝える。
漫画喫茶のこと、乙女ロードのこと、そして温泉施設を経ての幸子さんの決意のこと。
あたしが幸子さんにスカートを渡し、それをちゃんと穿いてくれたこと。
通行人に「女の子らしくない」と言われて悔しくなったことなどを話す。
「石山さん……やっぱりあなたはすごいわ。この本の、私達の思いの通りよ」
「うん、でもやっぱり、あたしまだ救世主だなんてよく分からなくて、仮に本当にそうだったとしても……やっぱりあんまり言及しないで欲しい」
あたしが言う。それは重荷やプレッシャーになりかねないから。
「うん分かった。でも、あなたに期待している人もいるってこと忘れないで。私は５００年生きている中で、ずっとずっと、罪悪感を抱えながら生きていたわ。そしてそのせいで、更に罪を重ね続けてしまったのよ。その連鎖に、ようやく終止符が打たれそうだということも、知っておいて欲しいの」
「うん、分かった」
ともあれ、心の何処かに秘めておこう。
あたしはそう決めた。
「それじゃあ報告ありがとう。とは言え、心の底からかどうかは知るすべはないわ。本人だってわからないもの」
「う、うん……それじゃあ失礼します」
あたしは、永原先生に挨拶し、家路につく。
幸子さんは今頃新幹線で何をしているだろう？
きちんとお母さんに、決意を話せているといい。

「ただいまー」
「優子おかえりなさい。ご飯はこっちで作っておくわよ」
「ありがとう」
母さんのいつもの出迎え。
大きな仕事をした後は、あたしの体を労って家事を免除してくれる。
何故か生理のときは免除されないのに変な話だなあ。
そう思いながらも、あたしはお言葉に甘えてゆっくりと骨を休めることにした。
いずれにしても、ここから先は幸子さんと、そして幸子さんのお母さん次第だから。
あたしが出来ることは、カリキュラムでのアドバイスくらいになった。

# 初めての冬

季節は１２月、昔風に言えば師走に入った。
今年も残す所後１ヶ月あたしも徐々に冬服にコートが増えた。コートのデザインは男女あまり変わらない。
もうちょっとおしゃれしたいと思ってるけど、さすがにこの寒さになってくると、機能性の方を優先させたい。
そんな中で、クラスメートがしているのがマフラーだ。
あたしはまだ巻き方分からないけど、確かに首のあたりが冷えるから……久々に教えてもらおうかな？
「おはよー」
「優子ちゃんおはよう、寒くなってきたね」
浩介くんが言う。
「うん」
「優子はさ、マフラーしないのか？」
「え!?　そういえば女の子用のマフラーあったかな？」
「ってそこから!?」
恵美ちゃんが驚いている。
「あはは、やっぱりまだ女の子になって初めての冬だし、よく分からないことも多いや」
ちなみに、この季節になるとあたしの脚は完全にストッキング、黒パンストで覆われることになった。
やっぱり女の子になって、寒さに対してはかなり弱くなった気がする。初めて風呂に入った時も、冷えやすい自分の体にびっくりしたくらいだった。
今までは女の子らしくかわいくありたいという理由で、私服も大半がスカートだったけど、そろそろ考えを改めないといけないかもしれない。
いくらストッキングが温かいと言っても、やはりズボンほどの保温効果はない。
足だけじゃない。他にも手足の冷えは女の子になってからという

もの大きな課題になっている。今後真冬になるに連れて手袋のことも考えないといけないと思う。
更に、天文部の活動も冬には活発になるということで、坂田部長からも「寒さ対策を覚悟しておいて」と言われていた。
太陽が落ちるのも早くなっているので、校舎の屋上を使うこともあるという。
天体観測は楽しみだけど、寒いのはちょっと怖い。
天文部は相変わらず、ゆったりのんびりと天文ニュースで盛り上がっている。
浩介くんも天文部で筋トレしていたけど、最近では時折話題に交じることもある。
これまでは桂子ちゃんと坂田部長が主な指南役で、あたしは聞き手という立場が多く、たまに坂田部長も聞き手に回ることがあった。
でも今の天文部は聞き手が２人になった。
「こんにちはー」
「こんにちは石山さん、篠原さん」
坂田部長もすっかり浩介くんに馴染んでいる。
最近では、坂田部長はあたしの協会での活動内容なども聞いてくるようになったし、本当にゆったりした空間になった。
小谷学園は部活が弱い。
でも弱いからこそ、そこに空間ができる。
浩介くんが筋トレしているのだって、天文部とは関係ないけど、「迷惑になっていない」という理由で、坂田部長は受け入れてくれた。
そう、ここ小谷学園は「迷惑をかけない範囲なら最大限に自由」だという。
何て素晴らしいことなんだろう。
でも、そういう意味では、迷惑をかけ続けていた優一は最低だった。
「そういえば、木ノ本さんたちはクリスマスと年末年始は何をしますの？」
小谷学園は１２月２５日から冬休み、今年は１２月２５日が月曜日なので、実質２３日から冬休みになる。

「うーんまだ決めてないわね」
桂子ちゃんがそう言う。
「でもよ、中間試験はどうすんだ？」
浩介くんの言う通り、その前に中間試験があるはずだけど、まだそこまで危機感はない。
あたしの成績は女の子になってしばらくした頃は、精神の安定もあって上昇期に入ったが、今では安定期になった。
それでも元々真ん中よりは明確に上だったから、あたしの成績も上の中くらいにはなっている。
小谷学園の偏差値も悪くないし、大学受験もそこまで悲観していない。
大学受験、そろそろ進路のことも考えないといけない。
家から一番近いのは「佐和山大学」だけど自分の偏差値から考えると低すぎる。
もちろん滑り止めにはうってつけだから、一応願書は出すつもりだし、何より小谷学園から近いという地理的な優位性もあって、小谷学園から佐和山大学に行く生徒は多い。
ちょっと前までは低学歴では就職難だとか言われていたけど、最近では高卒の就職もかなり楽になっているし、ブランド大学というよりは「何を学びたいか」で大学を選ぶケースも徐々に増えているという。
そういえば蓬莱教授が――
「石山さん、どうされましたの？　考え事ですか？」
「あ、いや……ちょっと、中間試験のことを、ね」
坂田部長に指摘されて思考を元に戻す。
「あらあら、熱心でいいことですわ」
「うー、俺はちょっと成績落ちてるんだよなあ……」
浩介くんがちょっと困り顔で言う。
「勉強一緒にする？」
「う、うん……優子ちゃんと一緒に勉強しようかな……」
勉強デートはしたこと無いけど、学生のうちからくらいしかできそうにないし、やっておくのも手だ。

「とか何とか言ってー、本当はいちゃいちゃするんでしょ!?」
「「うぐっ！」」
桂子ちゃんの鋭い指摘にあたしと浩介くんも固まってしまう。
「あちゃー、図星かあ……お熱いことで」
あたしと浩介くんが同時に「かあああ」と顔が赤くなるのを感じた。
恋愛の熱は数ヶ月で冷めるなんて人が居るけど、それは嘘っぱちだ。
あたしは林間学校で初めて浩介くんに惚れて以来、日を追うごとに惚れ続け、どんどんと深くなっていく。
それは浩介くんも同じ。特に文化祭で正式に恋人になってからと言うもの、関係はますます良好になっている。
「でも最近は、協会の活動もあって毎週デートというわけには行かなくなってるんだよなあ」
「あはは、でも学校で毎日デートしてるようなものでしょ？」
「うっ……またずるいこと言うなあ優子ちゃんは！」
あたしは幸子さんの担当カウンセラーでもある。２人で出かけたあの日以降、幸子さんに初めての「女の子の日」が来たということで、カリキュラムの開始日に少し調整が必要ということになった。
テレビ電話でも「もう戻れない、この日が来るのは分かっていた。でも、もう私は迷わない」と、あの日から考えても信じられないくらいしっかりした口調で話す幸子さんに驚かされた。
ともあれ、女の子の日のトラブルの影響で、カリキュラムは１２月４日から行われる事になっている。
幸子さんの場合、大学と平行しているため、日曜日まで７日間のカリキュラムが行われる。
そして、土曜日にはここ、小谷学園に来て貰う予定。もちろんすることは制服の着付け。
幸子さんは大学生だし、制服を着るということは基本的にない。
とはいえ、不老のＴＳ病だから当然制服姿はいつまでも似合うことになるし、短いスカートに慣れてもらうためということで、一時的に高校生に戻ってもらう。

それにしても、新幹線代もばかにならないはずなのにと思ったが、それについては、今年に入り蓬莱教授が例年以上に寄付してくれているので、かなり余裕があると言っていた。
蓬莱教授の動向について警戒心はあると言っておきながら、私生活での関係は良好で、寄付も素直にありがたく受け取る当たり、永原先生の強かさが見て取れる。
「どうされました石山さん？」
「ああいや、その……ちょっと考え事を、ね」
坂田部長に声をかけられて我に返る。
「石山さん、最近考え事が多いですわ」
「優子ちゃん、協会の仕事が大変そう」
桂子ちゃんが心配しそうに言う。
小谷学園で、あたしが別の、それも遠くに住んでいるＴＳ病患者のカウンセラーをしていることを知っているのは、浩介くん、永原先生、校長先生の３人だけ。
でも、天文部の２人には話してもいいかな？
「そうですわね、何か思い詰めてる感じがしますの」
「ああうん、ちょっと今は勝負所で……」
あたしがごまかすように言う。
「大丈夫ですか？　隠し事は仕方ないですけど、私達も出来ることなら力になりますわ」
坂田部長が優しそうに言う。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「話しても、大丈夫かな？」
「あーうん、俺はどちらでもいいと思うぞ。つまり話しても問題はないという認識だ」
「……分かったわ」
あたしは、浩介くんの提言を受け入れ桂子ちゃんと坂田部長の方に向き直る。
「じゃあ、協会での仕事について話しますね」

「……わかりましたわ」
「はい」

あたしは話し始めた。
あたしが入会の手続きを取った日、東北の方で一人の大学生がＴＳ病になったこと。
初めての会合では一人称「俺」が治らず、服装も男時代のままという危機的な状況であったこと。
初会合では既に「自殺はもはや避けられない」と判断され、敗戦処理ムードだったこと。
あたしが申し出て、その人の担当カウンセラーになったこと。
「よく優子ちゃん、許可されたね？」
「ええ、大学生のカウンセラーを高校生がするなんて聞いたことありませんわ」
「うん、正会員なら誰でもカウンセラーになれるから、規則上は何の特例もいらなかったのよ」
桂子ちゃんと坂田部長も真剣な表情で聞いている。
そしてその後の仕事内容も話した。
あんまり話したくないけど幸子さんをひっぱたいてしつけたことも話した。
「石山さんにしてはとても珍しいですわ」
「それって優子ちゃんの『母性』じゃないの？」
「うん、永原先生も桂子ちゃんと同じことを言ってたよ」
幸子さんをしつけるためにひっぱたいた時も、他に方法がないと考え抜いてからやったことは改めて強調しておき、服装選びで女物の下着を穿かせたりしつつ、男物の服を隠させて、安心して家に帰ったこと。
ところが、体育祭の頃になると、幸子さんが未だに頑としてスカートを穿こうとせず、荒れることが多くなったこと。
それに対して幸子さんのお母さんが善意で悪手を取り始め、男物の服を元に戻そうとしているため、徹さんとお父さんを通じて男物の服

を協会本部に送り、また女物の幸子さんの服も私が1着だけ預かったこと。
そして先週、11月末の休日で幸子さんと講習を兼ねての遊びをしたこと。
この時はまず協会本部を紹介して、次に女性専用スペースに行ったこと。
ちなみに、あたしが女装と疑われたため怒り狂って無理やり女性店員に股を触らせたことは話さないでおいた。
ともあれ、女性専用スペースを使わせることで「あなたはもう、女性の特権を行使した」という既成事実を作らせることに成功したこと。
これによって、退路を断たせると、続いて池袋の乙女ロードに行かせたこと。
この時、幸子さんのファッションがあたしと不釣合いで女の子らしさがなかったため通行人に「センスない」と言われたこと。
そして温泉施設では、躊躇する幸子さんに対し、館内着に着替えるために女子更衣室に入れたこと。
更に女湯にいれたことで、完全に女の子としての自覚を身に着け、「もう戻れないから女の子として生きていく」という覚悟を身に着けさせたこと。
そして、帰りに預かっておいた一着のスカートを渡し、幸子さんがそれを着るようになったこと。
そしてお母さんに決意を話し、来週からカリキュラムが始まることを話した。
「へえ、そんなことがあったのねえ……」
「優子ちゃん、本当にあいつと女湯に入ったのか!?」
浩介くんが嫉妬しながら言う。
「当たり前でしょ!?　幸子さんを男湯に入れたらそっちのほうが異常よ」
あたしはちょっと怒った風に言う。
「で、でもよお……」

「浩介くん、あなたも維持会員なんだから、ちゃんと会の方針を考えて行動してくれる？」
　ここはあえて、恋人としてではなく、日本性転換症候群の正会員として浩介くんに接する。
「わ、分かってるって……」
　浩介くんも何とか嫉妬の気持ちを抑えてくれる。まあ、女の子同士で嫉妬されても困るのは事実。
「それとも、浩介くんはあたしと２人でお風呂入りたい？」
「なっ……!?」
　あたしがちょっと甘い声で言うと浩介くんはすぐに顔を赤くする。
「そ、そりゃあその……」
　浩介くんは躊躇している。
　その態度は、「当然一緒にお風呂に入りたいです」と言っているに等しい。
「あらあら、分かりやすい方ですわ」
「そうだね、恋人同士だもん。そりゃあ彼女と一緒にお風呂くらい入りたいでしょ」
　浩介くんが顔を下にそらしてうつむいている。
　ちょっといじめすぎちゃったかな？
「まあいいわ。とにかく、あたしは塩津幸子さんのカウンセラーになったのよ。来週からはテレビ電話で報告を受けることになっているわ」
「分かりましたわ。さ、天文部の続きをしますわ」
「「はーい！」」
　あたしたちは天文部の本題である、天体の話題をする。
「それで、冬の星座で毎年注目されているのが、ベテルギウスの超新星爆発ですわ」
「うんうん、私も、これを見るまで死ぬに死ねないわよ」
　ベテルギウスの距離は６４０光年だというのは以前聞いた。
　つまり今見ているベテルギウスの姿は６４０年前のもの。
　とは言え、相対性理論ではあまりそういう議論は意味がないとか何

とか。
それにしても６４０年かあ、永原先生が生まれる更に前の姿ってことだよなあ。
しかも、数百億光年とも言われる宇宙全体から見れば、かなりの近所だという。
永原先生はスケールが大きい人だけど、宇宙はもっとすごい。
あたしは、天文部に来てよかったと思っている。
本当に広い世界を知ることが出来た。
そして桂子ちゃんとも、坂田部長とも仲良くなった。

文化祭が終わり、天文部へ興味を持ってくれた人は、少なくとも学内には殆ど居なかった。実際誰も入部希望者なんて居なかった。
坂田部長曰く「他の参加者は展示が難しくてよく分からないという反応でしたわ」と言っていた。
そんなものなのだろうか？
確かに、太陽系の展示はともかく、太陽系の近傍恒星は、一般に馴染みの一等星もシリウス程度だったし、そういうものかもしれない。
「それから天体観測の注意点ですわ」
「うん」
「写真を撮る時には普通の撮り方でも星は写りませんわ」
夏に天体観測をするという話もあったが、結局各自の都合がつかなかった。今年は１２月２４日に天体観測をすることになっている。
冬休みのはじまりの時でもあるので、あたしたちはこの日、昼は浩介くんとデートしてから、更にあたしの家でお泊りデートを計画している。
いわばクリスマスをまたいだデートだ。
「優子ちゃんはどうする？」
「うん、もちろん参加するよ。浩介くんも？」
「あ、ああ……ちょっと参加してみたい」
父さんと母さんには体よく1泊2日で別の場所へ旅行してもらうことになっているため、今度こそあたしは浩介くんを落としてみせよ

うと思う。
あ、でも責任取りたいと言っているから、露骨に誘い込むマネはやめよう。
ただし、暖房の効いた部屋でミニスカートは穿く予定だけど。
ともあれ、天体観測は４人全員で参加することになった。
最初は天文にあまり興味のなかった浩介くんだけど、やっぱり筋トレしていても、話が弾んでいれば自然と興味が湧くものなのだろう。
幸子さんのカリキュラムもだけど、クリスマスデートも今からとっても楽しみ。
気が早いお店では、もうクリスマスの企画をしている。
プレゼントについても、浩介くんは何が喜ぶのかを、あたしは考えて初めている。
ちょっとした期待と不安の入り混じった、女の子としての最初の冬が始まった。

# カリキュラムの様子

１２月上旬、気候はますます深い冬へと突き進む中、あたしは中間試験への勉強、天文部の活動、浩介くんとのデート、そして日本性転換症候群協会の仕事として、塩津幸子さんの担当カウンセラーと様々な活動をしている。

学生は社会人より暇だと言うけど、あたしには到底そうは思えない。

って、あたしが特別忙しいだけかも。

学生として自分の勉強をしながら、他のＴＳ病の子の面倒まで見る。何て二重生活をしているの、全国でもあたしだけだし。

月曜日、あたしは学校から帰って風呂からあがると、テレビ電話が鳴った。

「はい」

「あ、お世話様です。石山さん、塩津幸子の母です」

「はい、お世話になっています。本日のカリキュラムはどうでしたか？」

「今日1日目として、幸子に家事の一部を教えました」

「どんな感じでした？」

「ご飯の炊き方、部屋の掃除の仕方などを身に着けさせました、部屋の掃除については既に知識もあったので復習の意味もあって軽く済ませました」

「……分かりました。課題としてはどうですか？」

「特に大きな問題はありませんでした。教材も無事届きましたので、本棚を入れ替えておきました」

「幸子さんの反応はどうでした？」

「名残惜しいとは言ってましたが、特に反抗的な態度は取りませんでした」

幸子さんのお母さんとテレビ電話で話す。

今日は最初の日のカリキュラム日程。服装は、防寒のため下にズボ

ンを履いていつつも、ロングスカートだったと言う。
今日から日曜日まで幸子さんはカリキュラムを受けることになっていて、あたしはこうして毎日この時間に報告を受けることになっている。
あたしの両親は空気を読んで別室に居てくれる。
ともあれ、幸子さんは大学もあるのでそれ用の日程を組む。そのため明日も引き続き家事を教えることになっている。
明後日はスカート着用で改名書類を役所に届けないといけない。
新しい名前は既に「幸子」になっているが、戸籍はまだ「悟」のまま。
カリキュラムでは、決して他の人が代理で渡してはいけないことになっている。
もちろん法的には代理人を立てることも可能だが、女の子の象徴であるスカートを穿かせ、自分の手で改名書類を書かせ、提出させることが重要なこと。
そして、更にあたしがそうであったように、あらかじめお母さんには水を用意してある程度飲ませなければいけない。
つまり、幸子さんを女子トイレに入れさせることだ。とは言え、あの時に入ったかもしれないけど、大事なのはスカートで女子トイレに入るということ。
「明日の注意点ですけど、必ず水を飲ませてください。そして女子トイレに入れさせることです」
「分かりました」
「外見は若い女性です。男子トイレはもちろんのこと、多目的トイレでも他の人への迷惑がかかります。大学が終わったら直行でお願いします」
「はい」
「じゃあ幸子さんに繋いでくれる？」
「……分かりました。幸子ー！」
お母さんが幸子さんを呼び、話し相手が幸子さんに代わる。
「あ、石山さん。こんばんは」

幸子さんが落ち着いて挨拶する。女の子の日の関門も既にクリアしたしもう精神は荒れていない。
「こんばんは幸子さん、1日目はどうだった？」
「うん、まだ家事のことよく分からないけど、どうしてここから？」
「うん、家事は男性でも出来るけど、清潔さが特に求められる女性には特に重要なのよ」
「それで、明日はどういう内容？」
「うーん、そのあたりは明かせないわよ。それよりも、あたしはあなたの大学について聞きたいわ」
大学は出席点が大事なので、授業を休む訳にはいかないという。
しかし幸いにも明後日は幸子さんとしては午前中で授業が終わるので、午後にカリキュラムをすることが出来る。
もちろんスカートを穿かせるわけだから、大学の友人たちへの影響も心配はされる。
これについては、以前のイメージが色濃く残っているから大丈夫だと言っていた。
「うん、女の子の日の関門も既に乗り越えた幸子さんなら、この後のカリキュラムはきっとうまくいくわよ」
「そ、そうかな？」
幸子さんが不安そうに言う。
「うん、大抵はカリキュラム中やカリキュラム後に来るものだけど、幸子さんは躊躇もあって時間がかかったからね。いずれにしてもカリキュラムをクリアした人の多くが女の子の日で脱落してるから、幸子さんは本来カリキュラムを受ける段階より高いハードルを、既に越えているのよ」
そこは自信を持っていいと、あたしは伝えた。
ともあれ、幸子さんのお母さんも、「覚悟を決めました。幸子が少しでも女の子になれるように頑張っていく」と言ってくれた。
そこからは迷いが消えてくれた。
さすがにあたしほどに昔を捨てるのに躊躇していないわけじゃないけど、それでも、「それ以外に道がない」という現実をきちんと受け

入れられてくれれば、自殺への道に進むことはない。
失速していた幸子さんの飛行機は、機首が下がって揚力を取り戻しつつある。
横転仕掛けていた幸子さんの船も、復元力で元の水平に戻りつつある。
あたしの誘導によって、クルーが適切な処置を取り始めたのだ。
「そう言ってもらえると嬉しい。これからどうなるんだ？」
「言葉遣いや態度の矯正は続きますけど、土曜日には小谷学園で課題をします」
「そ、そうか……」
「ええ、内容は来てのお楽しみです」
「あ、ああ……」
あたしは考える。
小谷学園での課題、幸子さんはもう大学生だからと無意味に感じないだろうか？
それとも、女子高生としての生活を送れなかったことに未練を感じるだろうか？
あるいは、スカートめくりのお仕置きに、めくられ慣れてしまわないだろうか？
あたしの中で、次々と懸案が浮かび上がる。
でも今は、目の前にあることを片付けさせないといけない。
金曜日までに、どれだけ女性としての振る舞いを身に着けているか、あるいは課題にどんな服で来るか？
不安であるとともに、そこは楽しみでもある。
あたしが小谷学園に女の子として初めてきた時、制服や生徒手帳を処分する課題があった。
でも幸子さんには高校時代の制服で代用してもらうことになる。
自覚の刷り込みにはやや足りないと思うけど、まあ仕方ないだろう。
「そうそう幸子さん」
「ん？」

「隠してた男物の服、返却することにしたよ」
「え!? どうして……わ、私……別にもう着ないけど」
「ああうん、それでいいの。ただ課題の時に使うだけだから」
古着屋さんに捨てるという課題だけど。
「そ、そうなんだ……何に？」
「それはまだ明かせないわよ」
「やっぱり？」
「もちろん」
ついでに、お母さんにも尾行させなきゃいけないから、何気に大変だ。
あたしは……あうう、思い出しただけで恥ずかしくなっちゃうよー
でも幸子さんも失敗の可能性高いから……幸子さんもきっといっぱいおしおきされちゃいそうだ。
その時にちゃんと恥じらいを身に着けてくれるといいけど……
「……あの、今日は以上で大丈夫です」
「あ、うん。もう夜も遅いし、切るね」
「はい、石山さんも勉強があるんですよね？」
「うん、そうだよ。12月の終わり、冬休み前に中間試験」
あたしが言う。
「もし分からないところがあったら……分かる範囲で答えるよ。一応大学生だし」
「そう、ありがとう」
あたしの成績も悪くないから頼ることは少ないとはいえ、幸子さんだってあたしに恩返ししたいと思っているはずだし、何かあったらお言葉に甘えることにしよう。
ともあれ、カリキュラム1日目は問題なく終了していたようなので、今のビデオの様子を動画ファイル形式で添付し、協会本部にメールで送る。
また、メールの添付ファイルにはもう一つ、PCで作成しておいたレポートと、幸子さんが送ってきた少女漫画の読書感想文も送っておく。

ちなみに、読書感想文の内容は、あたしが書いたそれにそっくりだった。

カリキュラムの本を読んで初めて知ったが、成績不良者の場合、「何が面白いのかよく分からない」「つまらない、読むのが苦痛」何て書いちゃうらしい。

逆に登場人物、主人公以外の人物の気持ちとか感想、更に少年漫画などとの違いまで言及して書いていると、成績優秀だという。

この辺の基準は、女の子になったばかりは全く分からないだろうけど、今なら確かによく分かる話だよね。

2日目、この日はテレビ電話で簡単な報告だけ。

幸子さんもお母さんも特に何も問題は無いと言っていた。

今日は念のため徹さんにも幸子さんの様子を聞いてみたが、「お姉ちゃんは最近どんどんキレイになってる」と言っていた。

それなら大安心だから、あたしもすぐにテレビ電話を切る。

明日はいよいよスカートを穿いて外出の日、ということになっているけど、あたしと幸子さんで温泉施設に行った帰りに、もうスカートを穿いて外出してしまっているから、そこまで大きな負担はなさそうではある。

あたしがそうであったように、カリキュラムの最初の日から、恐る恐るながらもスカートを穿くようになったのはいい兆候だ。

幸子さんのことだけじゃない、あたしも勉強をしなきゃいけない。

時折、浩介くんもメールなんかで分からない所を聞いてくるので、それを教える。

他の人に教えるだけでも、自分の中で理解が深まることがある。不思議なものよね。

3日目、この日が肝心だ。

この日はあたしがされたように、被験者を油断させて、もし不適切な姿勢で休んでいたらスカートめくりのおしおきをしなければいけない場面で、本当に幸子さんのお母さんが心を鬼に出来ているか、教

育者を試す日にもなっている。
「それで、ちゃんとおしおきしましたか？」
「はい、幸子には女子トイレでの入り方を学ばせました。部屋で休んでいる時も気が抜けていたのでスカートをめくりました」
　良かった。あそこはあたしでさえ引っかかった場所だし、まず気を抜いてしまう場面。
「それで、反応はどうでした？」
「驚いている感じでしたが、恥ずかしがるように言ったら『恥ずかしいよお』と言いました」
　うん、それでＯＫね。
「ふふっ、良かった。ちゃんと恥ずかしがった後はネタばらししました？」
「はい。幸子も狐につままれた様な感じでしたけど、パンツ見せちゃいけないから常に注意するということについては納得してくれました」
　うん、模範解答。
　どうやらお母さんも、自分の「善意」が完全に誤りであることを納得してくれたようで、ちゃんと心を鬼にしておしおきが出来ているようだ。
　……あたしの母さんの場合は、なんかノリノリでお仕置きしていたって感じだったけど。
「ありがとう。じゃあ幸子さんに代わってもらえます？」
「分かりました……幸子ー石山さんよー！」
「はーい！」
　遠くで元気のいい幸子さんの返事が聞こえ、お母さんが退場し、幸子さんが入る。
「こんばんは幸子さん、今日のカリキュラムどうだった？」
「うー、昨日一昨日よりなんか恥ずかしかったよー」
「ふふっ、ちゃんと女子トイレに入れた？」
　あたしが聞く。そこが一番重要。
「う、うん……一回入っちゃえば何てことなかった」

「で、スカートではどうだった？」
「ああうん、昨日一昨日もスカートだったから一発でクリアしたけど、状況説明はやっぱり恥ずかしかったよ」
　どうやらスカートでのトイレの入り方も習得してくれた模様でよかった。
「うん、その気持ち、忘れないでね」
　あたしがニッコリと言う。
「でも、それって男でもあるんじゃないの？」
「ふふっ、今は確かにそう思うかもしれないわよ。でもそれが一つ一つ、血となり肉となり、幸子さんは乙女になっていくのよ」
　あたしが言う。
「そ、そうなのかなあ……」
「そうよ、恥じらいの心は大切でしょ、休憩してた時はどうしてた？」
「ああうん、パンツ見えてたみたいで、お母さんにめっちゃ怒られたよ」
「それで、どうだった？」
「あうう、話したくないよお……」
　恥ずかしそうに言う幸子さんの様子を見て、あたしはニッコリ笑う。
「あら、幸子さん。それならそれでいいわよ」
「え!?」
「だってそうやって恥ずかしがるってことは、幸子さんが女の子らしく、かわいくなりつつあるってことなんだから」
　あたしが優しく褒めるように言う。
「あ、ありがとう……」
　そう、「女の子らしい」、「かわいい」。
　女の子になろうと決意したＴＳ病の女の子に対して、これ以上に言われて嬉しい言葉はない。
　もちろん、あたしだって上級者とはまだ言えないかもしれないけど、幸子さんはまだまだ女の子初心者。
　幸子さんは、かわいいと言われても、複雑な気分のままで、ちょっ

とだけ嬉しいという感じが芽生え始めている段階にある。
でも今は、それだけでも大した成績優秀者だ。
これが成績不良者、あるいは女の子としての人格がほぼ形成されていない時の場合、「言われても嬉しくない」と真っ向から否定してしまう。
カリキュラムの本は本当に詳細だった。
成績優秀者の行動パターンと、成績不良者の行動パターンが詳細にわかる。
そして幸子さんは、間違いなく「成績優秀者」のパターンになっている。
これなら、土曜日の日も大丈夫、あたしはそう確信した。

４日目、この日はアイロンがけも含め家事の課題を終わらせることになっている。
明日明後日は土日であたしが行った土日とほぼ同じ内容になるけど、幸子さんの場合はスケジュールの都合でこちらに移動している。
特におかしくなった所はなく、幸子さんのスカートも丈が短くなり始めたと言っていた。
あたしとしては、昨日と打って変わって幸子さんが後頭部に大きいリボンをしているのが気になった。
あれはあたしが温泉施設の帰りに渡したもの。
幸子さんに拠れば「石山さんの白リボンがかわいいと思ったので、私も付けてみた」とのことだった。
「そう言えば、大学のみんなはスカート穿いててどんな反応だった？」
「うん、最初は困惑してたけど、『かわいい』って言ってくれたよ」
幸子さんがニッコリ言う。
「それで、大学の人達はちゃんと女扱いしてくれてる？」
「うん、スカート穿くようになって、男女どっち付かずの扱いがやっと変わり始めたよ」
「そう、それは良かったわね」
そこだけはあたしより、恵まれているかもしれない。

あたしの場合は、自業自得でもあったけど、最初は浩介くんも含めてクラスの男子から思いっきり男子扱いされちゃったし。
「うん、やっぱり見た目って大事だと思ったよ」
幸子さんが言う。うん、あたしも同感。
「そうよ、特に女の子は見た目よ見た目。もちろん言葉遣いとかも大事だけど、女の子に生まれ変わった限りは、男の子に好かれることを目指さないとね」
「う、うん……」
おそらく、まだ幸子さんにはイメージはつかないだろう。
でも、男を好きになるというのは、女の子としてのアイデンティティを確立するのにとても重要な事でもある。
それはカリキュラムの範囲を遥かに超えた応用編だから、今は頭の片隅にとどめておくだけでいいと言っておく。
「それじゃあ、明日、小谷学園で会いましょう」
「うん、分かったわ」
幸子さんがさり気なく女の子の言葉になる。
「ふふっ、幸子さん女の子の言葉になったわね」
細かい所も見逃さない。これからはカリキュラムも過酷になるので、褒められるところはとにかく褒めてあげないといけない。
「あ、うん……今のはつい出ちゃった感じ」
「ふふっ、でも女の子になっていっている証拠よ。ちゃんと大事にしてね」
「はい」
まだまだ一人称は危ういけど、無意識下はともかく、口調の上では復学時には一人称を変えられたし、多分幸子さんなら大丈夫。
口調も変わっていけば、大学の人達も、意識は変わるだろう。
今なら、「幸子さん無理しなくていい、そのままでいい」と言って来ても幸子さんは「これが私の生きる道」と、はねつけてくれる確信が持てる。
明日のカリキュラム、とても楽しみだ。
そうだ、一個永原先生に相談しておこう。

# 幸子さんの修行　前編

また夢を見た。誰かが語りかけている。
低く、野太い声だが、ひどく疲れ切った、それでいて弱った声。
「お前は……お前は俺みたいな目に、他の人も遭わせるのか！」
声の主が息も絶え絶えに怒った声で言う。
「あなたは誰？」
「まだ分からねえかよ……そうかよ、てめえは！」
声の主が乱暴に言う。
もしかしてこの人……
「あなたは……もしかして……」
「はっ、本当にバカだよな。まだ、答えられないなんてよお！」
霧が晴れる、全身が傷つき、血だらけの男、顔はよく見えないけどこの顔は……優一！
「お前は……俺を、俺をどうしたいんだ……!?」
「……」

ピピピピッ……ピピピピッ……
「んー！」
あたしはゆっくりと目を覚ます。
さっきの夢のことを思い出す。
傷だらけになった「優一」があたしに語りかけてくる夢だった。以前にも似たような夢を見たことを思い出す。
あの時と違って、本当に息も絶え絶えだった。
夢の中で「優一」が血だらけになっていた。
夢の中でのあいつの最後の言葉「お前は、俺をどうしたいんだ？」
……もちろん、消したい。永原先生曰く消せることはないだろうとは言っていたけど、以前見た時よりも明らかに元気が無いのも、あたしの中で努力の成果がでているということ。
ともあれ、あまりに気にしても仕方ない夢だろう。

さて、今日は土曜日ながら小谷学園に行くわけだけれど、学生としてではなく日本性転換症候群正会員として行く。
学校に学生の身分のまま学生以外の名義で仕事に行くなんて、日本広しと言えどあたしが初めてじゃないのかな？
そう思ったので、あたしはあらかじめ永原先生に相談しておいた。
つまり、あたしが悩んだのは「学生として学校に行くわけじゃないから、制服じゃなくてもいいのではないか？　それとも制服が望ましいのか？」ということ。
実はそれ以前の問題として、小谷学園は制服着なくて登校しても怒られないんだけど、いずれにしても学生でもあるけど学生以外の立場として学校に行く場合、どうすればいいのか？　という問題は好奇心も含めて聞いても見たかった。
永原先生によれば「学生でもあるんだから制服でいいんじゃない？」と言っていたので、それに従うことにする。
今日は１２月の中でも寒さは和らいでいる方だけど、それでも寒いので愛用のストッキングは欠かせない。
最も、今日はカリキュラム中は寒いのを我慢してストッキングを脱いで生足になる予定になっている。
幸子さんも今日はたくさんスカートめくりされる運命だけど、その時も生足のほうが都合がいい。そのためにあたしだけストッキングではかっこがつかない。

いつものように朝のお人形さん遊びをして、あたしは着替える。最近ではお人形さんだけではなく、ぬいぐるみと一緒に遊ぶことも増えた。
パジャマから制服への着替え方に則るわけだけど、幸子さんは何を着てくるのか楽しみだ。
それにしても、下着も含めて取り替えるためとは言え、一旦全裸になるのも寒くなってきた。
せめてスカートだけでも先に穿いたほうがいいかもしれない。
ともあれ、あたしは制服に着替え終わり、洗面所に行ってパジャマ

を洗濯かごにいれ、歯磨きを始める。
「あ、優子おはよう」
「おはよう母さん」
「そうね、今日はカリキュラムだっけ？」
「うん」
「今の優子もかわいいけど、あの時の初々しかった優子もかわいかったわねえー」
母さんが懐かしそうに言う。
確かにあの頃は、「女の子になる」という気持ちが先行していて、具体的に何をどうすればいいかとか分からなかったからみんなに導いて貰う必要があった。
懐かしそうに言うけど、実際には8ヶ月くらいしか経ってない。
あたしにとって今年ほど壮絶な1年はなかっただろう。
もしこれから100年1000年生きるとしても今年のことは忘れもしないだろう。
永原先生も、女の子になったばかりの頃は鮮明に覚えているという。
あたしは朝食を取り早速出かける準備をする。
待ち合わせ場所は学校の来賓受付ということになっている。
それにしても、女の子になったばかりは、まさか自分がカリキュラム指導役になるとは思ってもいなかった。
それどころか、1年足らずで指導役になり、永原先生の独白に「4人目の恩人」「救世主」と書かれていたのだから驚きだった。
「それじゃ行ってくるわね」
「いってらっしゃーい、閉めておくわ」
あたしは、母さんの声とともに制服姿で外に出る。
やはり違和感がある。
土日に学校に登校したことも、今まで何度かあった。
でも、今は学生として学校に行くわけじゃない。とすると、これはコスプレと言ってもいい。
変な話だ、現役の女子高生が同じ学校の制服でコスプレしている。

何かもう、哲学的ですらある。
こんなくだらないこと考えているのは全世界でもあたしくらいだと思うけど。
学校への最寄り駅に到着する。そこは休日登校した生徒たちがたくさんいる。
同じ服を着て、いつも同じことをしているのに、妙な疎外感がある。
気分だけで、こんなにも変わってしまうのかと思い知らされている。
最近は二重生活にも慣れ始めたと思っていたのに、こんなことで永原先生が言っていた、「二つの顔を持つ」「二足のわらじを履く」ということへの難しさを改めて思い知らされた。
ともあれ、あたしは下駄箱から靴を履き替える。
まだ時間があるので無人の教室でストッキングを脱ぐ。
これで準備完了。とりあえず7分くらい前に来ればいいだろう。
「……」
教室に1人、あたしの席に1人。でも、今日は休日だから授業はない。
さ、感慨にふけっている時間もない。
今日はカリキュラムでも特に大事な日なんだ。
あたしが遅刻してたらシャレにならない。そう思って、約束の時間の10分前に教室を立つ。
幸子さんたち、無事にたどり着けていると言いけど……ま、あたしの携帯に連絡ないし、多分大丈夫。
職員室に程近い来賓の入り口を見る。
母さんとカリキュラムの時に来たときは生徒としてだから、ここに来るのは初めてだ。
先生たちが変な目で見ている。
「ああ君、そこにじっといると来賓の方に迷惑になりますよ」
事情を知らない先生の一人があたしに注意する。
来賓の迷惑にならないようにという名目で、生徒はみだりに近付かないことになっている。

小谷学園でも数少ない「規制区域」でもある。
「ああいえ、用事があります」
そもそも、制服を着てはいるが、今のあたしは生徒として小谷学園に来たわけではない。
「え!? どういうことですか!?」
先生が驚いている。
「あの……永原先生に聞けばわかると思います」
「? は、はあ……」
そう言うと先生が職員室に消えていく。
程なくして、永原先生が入れ違いのように近づいて来る。
「あ、石山さん」
「おはようございます永原会長」
「ああうん、おはよう。予定の時間までもうすぐだね」
「うん、幸子さん、どんな服で来るのかな?」
あたしが興味深そうに言う。
「うーん、見てのお楽しみだね」
もちろん、女の子らしい服が一番だけど。

そんな話をしていると、奥から二人の女性の人影が見えた。
紛れもなく、幸子さんと彼女のお母さんだ。
幸子さんは白いトップスと黒いコート、赤紫のスカートに身を包んでいて、足は生足だった。
あたしが着ていた赤い巻きスカートに赤い服というほどじゃないけど、それでもそれなりに少女性を醸し出している服と言っていい。
「おはようございます」
「お待ちしておりました、本日はよろしくお願いいたします」
「お願いします」
あたしも含め、４人は頭を下げながら挨拶をする。
そして挨拶もほどほどに、あたしは今日のカリキュラムの意義を説明する。
「今日は一日だけ、幸子さんに高校生に戻ってもらいます。そこで制

服の着付けや、更にスカートで日常的に公共の場での振る舞い、特に男性の存在する場所での振る舞いを身に着けてもらいます。高校と大学の違いはあると思いますが、今後の幸子さんにとって、今一度役に立つことでしょう」
「そ、その……高校生に戻るって、もしかして制服とか……？」
　幸子さんがやや不安そうに聞いてくる。
「はい、明日はミニスカートで外出する課題が出ますから、その予行演習でもあります」
　あたしが言う。
　説明も程々に、あたしと永原先生で普段使っている2年2組の教室に案内する。
　教室にはすでに永原先生が用意してあった制服が1セット、と言ってももちろんあたしと違って新品ではないけど。
「えっと、それで最初の課題というのは？」
「ここにある制服に着替えることです。さ、着替えてください」
「って、みんなの前で!?」
　幸子さんがあの時のあたしと同じく当然の抗議をする。
「もちろん、着付けを見ないといけないもの。スカートは短くてもいい、というか短くしてほしいけど」
「で、でも……」
「まあどうしてもというなら一人にしますけど、その代わり失敗したらペナルティーよ」
「ああうん、お願い」
　よし、引っかかったわ！
「……分かったわ。会長、お母さん行きますよ」
「ええ」
「はい」
　あたしたちは素直に引き下がり、幸子さんが教室の扉のカーテンを閉めてくる。
「さて、もう一つ確認ですけど」

「はい」
教室の外で、あたしは幸子さんのお母さんに向き直り、必要事項を説明する。
「ここからはカリキュラムの内容も本格的になります。もし女の子としての自覚に欠けるようなはしたない行為や言動に及んだ場合、幸子さんにおしおきさせる必要があります」
「え、ええ……分かってます」
「おしおきの内容はスカートめくりになります。そして、させるべき暗示も変わります」
「ここで幸子さんがどのくらい恥じらいの心を身に着けるかで、将来が大きく変わってきます」
永原先生も補足説明をしてくれる。
「はい、本は読みました」
「じゃあ安心ですね。おしおきといっても、今は訓練ですから、今のうちにたくさんおしおきされて、たくさん恥ずかしい思いをして……それが将来の女の子の感性の取得につながります」
「はい……」
「ふふっ、石山さんのお母さん、この説明を聞いた時には『恥ずかしがる優子が楽しみ』って笑ってたわね」
やっぱりそんな感じの会話だったのね。まあ、あの日たくさん恥ずかしい思いさせられたからこそ、今のあたしがあるんだけど。
「えー石山さんのお母さんって……」
「ええ。石山さんを自分好みの女の子にしようとノリノリだったわよ」
「なっ……！」
塩津さんのお母さんが「なんて非常識」って顔をする。
「でもね、あたしの事を我欲で女の子にしようとしたあたしの母さんは、結果的にあたしが女の子になるのを助けたのよ。塩津さん、善意で行う悪事の有害性は、悪意で行う悪事のそれよりも遥かの大きいのよ」
それどころか、こんな風に意図しない福をもたらすことさえある。

「え、でも分かっててわざとやるのが……！」
「塩津さん、私たち日本性転換症候群協会の歴史は、『無知の善意』との戦いの歴史でもあるのよ。どんな人にも良心は残るの。だからそれが無意識のブレーキになるの。分かっててやる間違った意味の『確信犯』なんてたかが知れているわ。本当に怖いのは、地下鉄サリン事件のような本来の意味での『確信犯』なのよ」
「……」
「で、できたよー！」
　あたしと永原先生の話は幸子さんの声によってかき消されてしまった。
「はーい、では開けるわねー！」
　ガラガラガラ……
「ど、どうかな……？」
「あらまあ！　かわいいわね！」
　お母さんが真っ先に声をかける。
　制服姿の幸子さんはあたしよりちょっとスカート丈が長いけど、それでもひざが見える程度にはミニで、リボンなどもかなり着崩しているけど似合ってはいる。
　だけどリボンは曲がっているわ下のブラウスはスカートに入れてないわ襟も曲がっているわでお世辞にもいい着つけとはいえない。
「幸子さん」
「ん？」
　あたしが幸子さんに近付く。
　まずはあたしも指摘されたリボンから。
「リボンが曲がってる！　ダメよ！」
　ぶわっ！
　あたしは幸子さんのスカートの袖を握って思いっきりめくり上げる。
「う、うわっ！」
　幸子さんは突然のことに動揺して全く反応できていない。ちなみにパンツの色はピンクでした。

「リボン、もう一度直しなさい」
「そ、それよりさっきのは……！」
「ふふっ一人で着替えるって言ったんでしょ？　明日にはもうカリキュラムが終わるのよ。今日からは言葉遣いを間違えたり、ガサツな態度を取ったりしたらスカートめくりのおしおきよ」
「そ、そんなのきいてないよお……！」
　幸子さんがちょっぴり恥ずかしげに不平を言う。うん、いい傾向。
「それから暗示も、今までは『私は女の子……私は女の子……』で良かったけど、今日からは『私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……』って暗示をかけなさい」
　言ってるこっちもずいぶん恥ずかしいけど。
「うー」
　幸子さんが曲がったリボンを直す。
「うん、リボンはこれでＯＫよ。さ、暗示かけてね」
「わっ、私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……これでいいの？」
「うん、ＯＫよ」
　正直、恥ずかしそうに声に出して暗示をかける幸子さんが滅茶苦茶かわいい。レズじゃないけどいじめたくなっちゃう感じ。あの時の母さんもこんな気持ちだったのかな？
　さて、次にするのが……
「でもね……襟も曲がってるわよ！」
　ぶわっ！
　あたしはそう言うと、今度は後ろからスカートめくりをする。
「ちょ、おまっ……な、何すんだよてめ……」
　ぺろっ
　反抗的な男言葉を使ったので今度は後ろから前の部分をめくりあげる。
　永原先生と塩津さんのお母さんからも丸見えの角度。
「うー！」

「襟が曲がってちゃダメでしょ！　それから言葉遣い！」
「ご、ごめんなさい……」
　幸子さんがちょっと涙声になっている。
　でも素直でよかったわ。
「襟を直す前に、まず正しい言葉遣いよ」
「な、何すんのよ！　やめて！」
「ふふっ、じゃあ暗示かけてね」
「わっ、私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……あうう……」
　お、本当に恥ずかしそうにしてるわね。いい兆候。
「じゃあ次、襟を直してみて」
「う、うん……」
　幸子さんが制服の曲がった襟を直し始める。
「こ、これでいい？」
「うん、大丈夫よ」
「ふぅ……」
　幸子さんが一息つく。
「残念だけど……」
　ぺろっ
「わっや！」
　幸子さんがあたしにスカートをめくられ、驚き一色だった悲鳴に恥じらいが混ざり始めた。
「な、なんでまためくるのー？」
「これよ、あたしの制服を見てみてよ」
「あ！」
　幸子さんが気付いた。ブラウスの裾をスカートの中に入れるのが普通だ。
　幸子さんが大慌てで入れ始める。
「うん、ＯＫね。これでもう変な部分はないわよ、さ、暗示かけてね」
　幸子さんが恥ずかしそうに３回目の暗示をかけてくれる。
「ねえ、これって意味あるの？」

「うん、恥ずかしい思いをすればするほど、幸子さんは女の子らしくなっていくわよ」
「いまいちよく分からない。確かに恥ずかしいことだけど」
「塩津さん、実はね、成績が悪い子はもっとスカートめくられるんだけど、めくられるのに慣れちゃって恥ずかしいと思わなくなっちゃうのよ」
　永原先生が成績不良者の行動を示してくれる。
「そ、そうなんですか!?」
「うん、一番成績が良かった石山さんも、この日はいっぱいスカートめくりされて、いっぱい恥ずかしい思いをさせられて、今の石山さんがあるのよ」
「ちょ、ちょっと会長！」
　かなり鮮烈な経験なので詳細を思い出してしまうのがまた厄介、顔が熱くなっちゃう。
「と、とにかく、次は座り方訓練です。あたしが教壇に立つので、あたしを先生に見立てて授業を受けているという前提で、椅子に座ってみて？」
　制服の着付けの次に行うのは、授業を想定した座り方訓練。ここもパンチラスポットであり、おしおき多発地帯でもある。
　幸子さんが椅子を引き、スカートを整えずに直に座る。
　懐かしいなあ、あたしもこれやっちゃって永原先生におしおきされちゃったんだっけ？
「幸子さん、立って見て？」
「うん」
　幸子さんが立つ。
　　ぴらりっ！
「はうっ！」
　あたしがもう一回幸子さんのスカートをめくる。
　幸子さんはまだ手で抑えてこない。
「どうしてめくられたと思う？」
「えっとその……直に座っちゃったから？」

「大正解よ。さ、暗示かけたらもう一度座ってね」
あたしが言うと幸子さんが暗示をかけ、もう一度再開。
正解はスカートの後ろを手で揃えて座るなんだけど、幸子さんは足を閉じることを忘れている。
まあさっきもそうだったんだけど、とにかくあたしからはパンツ丸見えになっている。
「はい立って」
「あ、あの……」
「うん、よくスカート揃えたね」
「は、はい……」
「でも……」
べろっ！
「うわあっ！」
幸子さんが恥ずかしそうにスカートを抑えて抵抗する。
この仕草をしたら褒めちぎらないといけない。
「あら幸子さん」
「あ、あの……す、すみません」
「ううん！　素晴らしいわよ今の！」
「え!?」
「今のはね、成績優秀な女の子がする行動よ。素晴らしいわ今の仕草、女の子らしくて褒めても褒め足りないくらいよ。これからも、おしおきされた時には是非今のを心がけてね」
あの時のあたしと同じ、幸子さんはとても動揺している。
「そ、それで、どうしてめくられたの？」
「足を閉じてない！　あたしからパンツ丸見えだったわよ！」
「うー、悔しい……」
幸子さんは恥じらいの暗示をかけた後、3回目はきちんとスカートと足を揃えて座り、あたしと同じ、2回の暗示で通り過ぎた。
次はもちろん、ミニスカートで気をつけなければいけない階段の方法を学ぶことになっている。

# 幸子さんの修行　後編

「ここが非常階段よ、見ての通り、生徒たちにとって降りることが前提だからその短さだと、そのまま登るとパンツが見えてしまうわ」
「そ、それで……うまく見えないようにここを登れって？」
「ふふっ、そゆこと。幸子さんの大学や、あるいは通学途中なんかでも、こういうシチュエーションはよくあることよ。幸子さんもＴＳ病だからわかってると思うけど、ミニスカートでは常に男性の目があると思うのよ」
「う、うん……分かってる」
「あーうん、多分そのことは生粋の女の子よりわかっていると思うけど。とりあえずやってみて？」
「わ、分かった……」
　幸子さんは、急峻な非常階段を登り始める。
　階段でスカートを抑える女子高生の見よう見まねで、幸子さんもお尻に手をやり、見えないようにする。
　さて、問題は階段を登りきった直後だけど……
「うーん、凄いわね」
　永原先生が感心している。全く隙が無かった。
「幸子さーん、降りてきてー」
「はーい！」
　幸子さんの声とともに、階段を登る音が降りる音に変わる。
　幸子さんはめくられるのを警戒してか前かがみになってスカートを抑えている。
「あら、幸子さん、まだめくると決まったわけじゃないわよ」
「なっ……ど、どうせめくるんでしょ？」
　幸子さんが疑っている。ここもあの時のあたしと同じ反応やっぱり同じＴＳ病で似るものね。
「ふふっ、幸子さん、ここは満点だから安心して。めくる隙がなかった完璧な動きだったわよ」
「ふう、さすがに外は嫌だって言おうと思って」

幸子さんも安堵している。
「塩津さん、凄いね。ここ、石山さんでも一回失敗した所なのよ」
「え!? そうだったの?」
幸子さんが驚いている。
「うん、あたしは登り切ったのに安堵しちゃってその時点で手を離しちゃったのよ。手を離すすと抑えてたスカートが反動で広がるでしょ? そうなっちゃうと、一瞬だけど抑えない時より見えやすくなるのよ」
あたしがあの頃を思い出しながら言う。
「じゃ、じゃあ……」
「うん、あたしも今みたいに抑えて戻ったんだけど、うまく隙を突かれて、パンツ見せた罰として屋外でスカートをめくられたわ……一応誰もいないのは確認してくれたけどね」
「そしてその後は、顔を真っ赤にして恥ずかしそうに暗示をかけていたわよ」
また永原先生が煽ってくる。恥ずかしいからやめてと言いたいけど、もっと煽られそうなのでここは我慢。
「へえ、苦労したんですね」
幸子さんのお母さんが感心して言う。
「う、うん……でも、恥ずかしそうにするのが女の子らしさの証拠で、あたしはめくられるごとに女の子らしくなってるって言われたのは、嬉しかったわね」
今もだけど、当時はとにかく少しでも女の子らしい女の子になりたかったから。
今はうーん、浩介くんに好かれる女の子になることかな?
「石山さんもそうやって女の子になったんだなあ……」
幸子さんがしみじみ言う。
そういう気持ちが女の子への道。考えれて見ればあたしの師範役は永原先生だったから、同じカリキュラムを受けた先輩には恵まれなかったからそういう意味では幸子さんのほうが恵まれている。
「さ、次は全校集会をイメージするわよ。いったん教室に戻るわね」

あたしがそう言うと、もう一度2年2組の教室へと戻っていく。
「大学では無いと思うけど、高校の全校集会では制服で床に座るという機会もあります。その時にはどういう座り方をすると思う？　とりあえずやってみて？」
「う、うん……」
幸子さんは腰を下ろして膝を曲げ、お尻をつける。
いわゆる「体育座り」、あちゃー絶対座っちゃいけないやり方をしてしまった。
おしおきタイムね。
「幸子さん」
「？」
「ダメよ、その座り方」
バッ！
「うわあ！」
あたしはそう言うと、スカートめくりではなく、幸子さんの両膝を持って広げさせ、いわゆる「M字」の状態にさせる。
こうすれば何で今の座り方がいけないかがわかりやすい。
「ふふっ、今のでなぜダメか分かった？」
「は、はい……」
「いい？　床に座る時に、絶対にやっちゃいけないのが今の『体育座り』よ。スカートが重力で垂れ下がって、前から見られ放題になっちゃうわよ」
「は、はい……」
幸子さんが恥ずかしそうに頷いている。
「それじゃあ、絶対座っちゃいけない座り方しちゃったから、暗示かけてね」
「わ、私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
幸子さんがさっきよりも恥ずかしそうに暗示をかけている。
ふふっ、成果が出てるわ。

「じゃあもう一回やってみて？　あ、ちなみに足伸ばすのはなしよ。スペース取っちゃうからね」
「え、えっと……」
「ヒント、女の子にしかできない座り方をしてみて？」
「あ、うん……」
　幸子さんがぺたんと女の子座りをする。ただし、その過程は見えてはいないけど結構ギリギリだった。最も、普通の成績だとこの段階でもパンツが見えてめくられる羽目なる。見えないだけでも優秀だ。
「うん、いいわよ。だけどもう少し慎重にね。見えてなかったから今回はめくらないけど、今の体制だとちょっとしたことで見えちゃうから気をつけてね」
「はい」
　次に立ち上がる場面、ここはあたしはうまく交わしたけど、パンチラスポットになっている。
「じゃあそこから立ってみて？」
「えっと……うん」
　幸子さんが片膝を立てて……見えたわ！
「ど、どう……？」
「残念、またおしおき確定よ」
「んんっ……！」
　幸子さんはあたしが近付くと、スカートを抑えて前かがみになって最大警戒態勢になる。
「ふふっ、女の子らしくてかわいいわよ」
　あたしはスカートをめくられたくないという態度を取る幸子さんを褒めてあげる。でもおしおきしないわけにはいかない。
　後ろから永原先生がこっそり忍び寄る。
「それっ！」
　ぶわっ！
「わあ！」
　背後から永原先生にスカートをめくられた幸子さんは手を後ろに伸ばして抵抗するが、当然間に合ってない。

「ふふっ、かわいいピンク色だね」
「あ、あのどうして？」
「片膝ついたときに見えたわよ。いい？　もう一つの女の子座りをまずやって、慎重に立ち上がってみて？　あ、でも暗示かけてね」
「う、うん……」
　幸子さんはかわいく恥ずかしそうに暗示をかけ、もう一度やり直しになる。
　今度は女の子座りをした後に、足を横に投げ出す座り方からする。
　ちなみに、さっき釘を刺したおかげで、今回は隙がない。
　そして、幸子さんは慎重に立ち上がる。
「うん、いいわよ。今回はグッドよ」
「は、はい……それにしても、石山さんもいちいちこんなことしてるの？」
　幸子さんが質問してくる。
「ええ、女子高生にとってスカートの中を見られないように、なおかつなるべくかわいいミニを穿くのは至上命題よ」
「……大学生になってから発病してよかった……」
「そうでもないわよ。制服はかわいいし、あたしは学校行事のお陰で好きな男の子が出来て、学校行事でデート出来たのよ」
　新学期の時には浩介くんに保健室までお姫様抱っこしてもらったし、浩介くんと文化祭でデートしたし、体育祭でも、痛い思いしちゃったけど、浩介くんがカッコよく助けてくれたし。結構役得を味わってる。
「でも、これ面倒じゃない？」
「確かに最初はそう思うわよ。でも女の子らしくなりたいという気持ちがあれば、結構簡単に吹き飛んじゃうものよ」
「そう言うものですか……」
「ええ、女子力上げるのは面倒くさいものよ。でも、あなたも女子になったんだから、女子力は大事よ。あたしだって女子力は修業中よ」
　あたしだって、結構まだまだと思うところもある。特にこれから冬にかけては未知の領域だし、１００％どこかで女子力のなさが露呈し

そう。
「大変だね。私も頑張れるかな？」
「大丈夫よ。幸子さんは女の子初心者なんだから、はじめから出来るわけないわよ。少しずつでいいわ」
「う、うん……」
「さ、じゃあ次の講習よ。こっちに来て？」
あたしは幸子さんたちを下駄箱へと案内する。
ちなみに、永原先生は別行動。ここで体操着とスク水を取り寄せてくれる。
「大学生活では不要だと思うけど、ミニスカートに慣れるという意味では特に重要よ」
「はい。あれ、永原さんは？」
「ああうん、ちょっと別行動取ってもらってるわ。さ、本題に行くわよ。本来ここはあたしの下駄箱だけど、今は仮に、幸子さんのだと仮定して、ローファーを取ってみて？」
「はい」
幸子さんが身を屈めて扉を開ける。見えそうな角度に移動してみるがよっぽど露骨に覗かないと見えない。
ローファーを取り出して履こうとする。
「あ、サイズ合わないと思うからふりでいいわよ。じゃあ、今度は上履きに履き替える想定で、ローファーを脱いだところから」
「は、はい……」
幸子さんがローファーを取ろうとするがうまくいかない。
そこで、幸子さんは体制を低くするために膝をつく必要がある。
しかし幸子さんが選んだのは膝を折る方で、こちらは必ずロッカーと相対しないと見えない危険な方法でもある（まああたしもこっちを使ってるけど）
幸子さんがローファーを拾い、身体を右にする……よし。
ぺろっ！
「うわあ！」
両手が塞がってて抵抗できず、幸子さんのパンツが丸見えになる。

「幸子さん、共学の学校は女子更衣室と女子トイレ以外のあらゆる場所で男子の目があると思いなさい。今みたいに角度をつけたらパンツ見えるわよ」
「は、はい……」
しつけ・おしおきという名目でスカートをめくるのは、意外と楽しい。
着替え中とか女子だけの空間でもスカートめくりはあたしや他の女子もよくされているし、やっぱり女子同士でもスカートめくりというのは反応含め楽しいものだと思う。
多分、あたしがカリキュラムでスカートめくられた時も、永原先生や母さんもこんな気持ちになったんじゃないかと思う。
「いい？　身体を傾けないように、パンツはロッカーにだけ見せなさい。じゃあやり直してからまた暗示よ」
「は、はい……」
幸子さんがうまく手をやってロッカーの中に入れる。
「え、えっと……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……あうう、声に出すと余計に恥ずかしい……」
「あら、とってもいい傾向よ。乙女の恥じらいを身につけている証拠だから。さ、次で最後よ。もう一回教室に来てくれる？」
「うん……」
あたしたちは教室に戻る、すると永原先生があたしの席に例のリサイクル店から取り寄せた体操着とスク水を置いていた。
「あ、会長ありがとうございます。さ、次は体操着に着替える方法よ」
「え!?」
「もしかしたら、高校生活前提のこの訓練の中では、一番役に立つかもしれないわよ。幸子さんは将来何回も女子更衣室に入ることになるんだから」
「え、ええ……」
「というわけで、制服から体操着に着替えてみて？」
「え!?　みんなの前で？」

「何言ってるの、これは女子更衣室の訓練よ。それに体操着とスク水の場合は着替えにも着替え方があるのよ。大丈夫、ここの着替えは失敗してもスカートめくりはないわよ」
「そ、そう……」
「じゃあまず上の方だけど、こっちは普通に着替えて大丈夫よ。今の季節ならシャツ着てるからブラジャーは見えないわね。でも夏は仕方ないわ」
「あ、これはダメなんですか……」
「うん」
　幸子さんが制服を脱ぐ、もちろんブラウスの下にも着ているから特に何も見えない。
「えっと、ズボンの方は分かります……こうですよね」
　幸子さんがスカートを脱がずに体操着を着てからスカートを脱ぐ。
「うん、ＯＫよ。じゃあ、体育の授業が終わって制服に着替え直す時はどうすればいい？」
「えっと、まずはスカートから穿けばパンツ見えないですよね？」
「そうだね正解よ。やってみて？」
「う、うん」
　幸子さんがスカートを穿きはじめる。
「ところで、スカートで生活してみてどう？　便利でしょ」
「え!?　その……はい」
「あたしも、トイレとか楽なのよ。ズボンだとどうも一手間多いのよ」
「あーうん、それお母さんも分かるわ」
　ロングスカート姿のお母さんが同意する。
「うんうん、カリキュラムでスカートでトイレさせるのは、作法を学ばせるだけじゃなくて、『スカートって便利なんだ』って実感してもらうのも、大事なところなのよ」
　永原先生も乗ってくる。
「うんうん、女の子のパンツも穿き心地の良さを実感してもらうもんね。こういうのは結構実利が大事なのよね」
　あたしも女子更衣室のノリでガールズトークに参戦する。

「「うんうん」」
「うー、なんか生々しいなガールズトークって……」
「あ、幸子さん、着替え終わった!?」
「というか、よくそんな話ができるよね」
「何を言ってるの、ガールズトークっていうのは女の子しかいないからこそできる女の子の話題なのよ。幸子さんも『ガール』なんだからちゃんと話についていかないとダメよ……と偉そうに言ってるけど、実際の所あたしも付いてこれないことあるのよ。だから焦らないでね」
「ははっ、でもガールに相応しく無い人がいるような……」
「塩津さん……まさかそれ、私のことじゃないですよね?」
永原先生が低い声で言う。小野先生や教頭先生の前で披露したような声。
「い、いやその……」
「な!? お母さん、永原先生よりずっと年下なのに、ガールじゃないっていうの!?」
母さんがすかさず抗議する。
なんかデジャブのような……
……まあいっか。
「あうう、ややこしいから撤回する」
「うん、素直でよろしい」
「さて、最後にスク水の着替え方よ。完全に季節外れだけど、女の子を自覚するためにも挑戦してね。あ、これは難しいから一つ一つ丁寧に教えていくわ。失敗しても大丈夫だけど、スカートめくりじゃ済まないくらい恥ずかしいことになるからくれぐれも慎重にね」
「は、はい……」
「じゃあまずは――」
あたしが一つ一つ教えていく、幸子さんも水着とあって慎重になる。
やっぱりここはミスが少ないらしい。
無事に着終わり、もう一回制服に戻す。ピンクの下着はやっぱり穿

いていた状態のほうが光ると思う。
「これでいいかな？」
「うん、ちゃんと見えてなかったわよ。いい、カリキュラムはスタート地点よ。気が緩んでパンツ見えてしまうのはダメよ」
「うん、分かっているよ」
「でも幸子さん、めくられる度に反応が女の子らしくなっているから、あなたは成績優秀よ」
「あ、ありがとうございます？」
　やっぱり疑問形だ。
「でも、これから女の子を続けると、スカートめくられたらもっとかわいい反応になると思うわよ」
　現に浩介くんにめくられた時のあたしがそうだし。
「でも、模範解答分からない」
「今はまだ知らなくていいわよ」
「いや、その……知りたいんですけど、できれば石山さんが実践して欲しい」
「え!?」
　幸子さんがいきなり近づいてくる。
「えいっ！」
　ぶわっ！
「きゃあああああああああああ!!!!」
　あたしは今までの仕返しとばかりに幸子さんに思いっきりスカートをめくられ、慌てて悲鳴をあげて抑えたけどもちろん間に合わず、3人の前で水玉のパンティーを露出してしまう。
「う、うおお……石山さん、さすがですよ……」
　幸子さんが関心している。
「あうあう……もう、恥ずかしいよぉ……」
　やっぱり女の子同士でも恥ずかしい。
「さっきまでノリノリでスカートめくってきたからね、ちょっと仕返しにって思ったけど……石山さん女の子だわ……」
「そうでしょ？　石山さんは優等生だもん」

「そうねえ、幸子もああいう風になりなさい」
３人で盛り上がっている。
「もうエッチなんだからあ……」
「数え切れないくらいめくられちゃったからね、１回位仕返しだよ」
幸子さんが笑って言う。
あたしにはこのスカートめくりを非難できない。
「教育的指導」という名目ではあるけど、散々にスカートをめくってきた以上、言うことなす事全部が、ブーメランになってしまう。
「それにしても、石山さんって結構子供っぽい下着穿くんですね」
「え!?　いいじゃない、かわいいんだから」
「でも水玉ってないでしょ水玉って……私の部屋にもあるけどさ」
「もう、結構お気に入りなのよこれ！」
このパンツ、浩介くんに初めて見られちゃったパンツということで、ちょっとだけ思い入れがある。
「そ、そう……」
「それに、子供っぽいと言っても、男の子はそれが好きだったりする人も多いのよ。幸子さんも将来好きな男の子が出来たら、ちゃんと好みに合わせないとダメよ。彼氏だって彼女に好かれるために必死なんだから」
「はーい……」
幸子さんが返事をする。
「さて、とにかくこれで、学校でするべきカリキュラムは終わりよ。幸子さんの男時代の服の一部を持ってきてくれたと思うけど、帰りにこちらのリサイクルセンターに寄っていってください」
「分かってます」
お母さんが言う。
「それでは、来賓出口まで見送りますね」
「はい。今日はありがとうございました」
「ありがとうございました」
「いえいえ、お二人とも、明日がカリキュラム最終日ですし、今日もまだ残っていますのでこの先も気を引き締めてください」

２人が来賓出口から出て行き、学校にはあたしと永原先生が残る。
２人がまだするべきことが残っているように、あたしたちにも残っている。
「さ、石山さん、フィードバックするわよ」
「はい、会長」
そう言うと、永原先生とあたしは、いつも使っている相談室に向かった。

## 永原先生最後の教え

「さ、今回のフィードバック行く前に一ついいかな？」
「はい」
　相談室に入って座るなり、永原先生が声をかけてくる。
「やってみてどうだった？　７ヶ月前は生徒役だったけど」
「うん、やった時は無意識のうちに失敗してたけど……結構外側から見ると、案外すぐ気付けるんだなって思いました」
　パンツ見えたりする所も案外すぐに見つけられた。
「うんうん、それと、石山さん自身と比較してどうだった？」
「あたしと比較すると……一箇所を除いて、めくった回数が多くなりましたよね」
　あたしは、自分の記録を取り出し、さっきの幸子さんの様子とを頭の中で比較する。
「そうだね、そういう意味では石山さんのほうが成績優秀とも言えるわ。でも幸子さんのあれ、優秀な方ですよ」
「ええ、手元の統計ではそうなってますよね」
　めくられた回数での成績表があり、幸子さんも「優秀」の水準に収まっている。
　それでも結構間違えてたような気もするけど。
　まあ、あたしが優秀だって言ってたしそんなものかも。
「そうだね、でも本当に凄いわよ。塩津さん、初めて会った時は性別適合手術を口走ってたのに」
「スカートめくる度に女の子らしくなってたよね」
　あたしもあんな感じだった。
　成績が悪いと、恥ずかしがろうとしなくなってしまうという。
「……そう言えば、石山さんも最後に仕返しされちゃったね」
「あはは、うん……すっごい恥ずかしかったわ」
　反撃されるとは思ってなかったのもあったけど。
「たまにいるわよ。仕返しにスカートをめくり返してくる子、そう言う時はちゃんと手本となるような恥ずかしがり方をするって書いて

あったと思うんだけど、おかげで塩津さんも模範的な反応を覚えたと思うわよ」
　そう言えば、講習中は指導者も短めのスカート着用で見せパンの類は厳禁とも書いてあったわね。
　こういう事態も想定しているということね。
「や、やっぱりあれが『模範解答』なの？」
「うんもちろん、叫び声、仕草、反応、どれをとっても理想的なめくられ方よ」
　永原先生があたしの反応を褒めてくれる。
「う、うん……」
　褒められると嬉しいし、実際あたしが目指してたことだけど、やっぱり恥ずかしい。
「さ、じゃあ振り返っていくね。最初はまず制服の着付けだよね」
「幸子さん、結構間違えてましたね」
「でも、スカートを短くしていたのがプラスだったわね」
「うんうん」
　まず、制服の着付けについて振り返る。
　襟、ブラウス、リボン、そして、言葉遣いでそれぞれスカートめくりのおしおきになった。
「石山さんのおしおきの仕方もよかったわよ。前から後ろから、色々な角度でめくるのは大事よ」
　そう言えば、あたしも前から後ろからたっぷりスカートめくりされちゃったっけ？
「後は体育座りした時に脚を広げさせたのもマルよ。あれなら、スカートでの体育座りがいかに悪いかもわかるし、めくられるより恥ずかしいシチュエーションになるわ」
　永原先生の目がどこか輝いているような。まああたしも、ちょっとだけ楽しかったけど。
「後はそうだね……マニュアルからは逸脱してないから大丈夫よ。さ、少女漫画と女性誌の感想文を読みましょうか」
「はい」

あたしと永原先生で、幸子さんがカリキュラム中に読んだ少女漫画と女性誌の感想文を読む。
いくつかは漫画喫茶で読んだ漫画を使いまわしている気がするけど気にしない。
「永原先生、ここの『悪役の子は風呂に沈められたのではないか』ってどういう意味ですか？」
幸子さんが慌ててたのでスルーしたけど、感想文を読む時は理解のためにも避けて通れない。
「え!?　あーうん、石山さんはまだ知らなくても……ってそういうわけにもいかないよね」
「はい」
言葉の意味を知らなければ正しい評価ができない。
「うーん、困ったわねえ……」
「え!?　どういうことですか？」
怖いけど突っ込まざるを得ない。
「つまり、悪役の子は借金を返すためにエッチなお店に売られて……それで不特定多数の男とヤらされることになったってことだよ」
「あーうん、そういうことね……」
あたしも苦笑いをして言う。
「ふふ、でも、実際のそこの女の子になる子は、今だと単に金が好きで稼ぎたいって人も多いわよ」
「そ、そうなんだ……」
いくらお金大好きと言っても体売るのはちょっと嫌よね。あたしも汚されるのは浩介くんだけにしたいし。
「ふふっ、石山さんも、将来そこに就職しないとしても、篠原君のために技法を覚えておくのもいいわよ」
「ふえ!?」
突然のことにあたしは動揺してしまう。
「マットとローションを買って泡姫プレイだよ。普通は不特定多数の男性を相手にする泡姫を独占できるとあらば、愛しの篠原君の満足度

は高まるわよ」
永原先生が自慢げに言う。
確かにそうだけど……やっぱり恥ずかしいような……
「おっと、話がそれちゃったわね。どちらにしても、どの感想文も成績優良よ」
少女漫画と他の漫画の違いや、物語をよく読まないと書けない感想が多い、特に悪役の子に対する感想はなかなかの想像力だ。
「さて、明日のカリキュラムだけど、多分もう心配はいらないと思うわ。もちろん、何か失敗したらおしおきだけど、お母さんもおしおきに迷いは無いんでしょ？」
「はい、だらしなく休憩して、スカートめくりしたみたいです」
「ふふっ、石山さんも引っかかったんでしょ？」
「う、うん……」
考えてみると、あたしも人生で男子女子問わず（男子は浩介くんだけだけど）数え切れないくらいスカートめくりされて、その度に恥ずかしい思いをして来たけど、あの時母さんにめくられたのが最初だったわね。
「あれ？　何思い出してるの？」
「ああうん、あたしが最初にスカートめくられたのが、ちょうどあの時だったわねって」
「あはは、石山さんってガード固いけど結構パンツ見せてるほうじゃない？」
「そ、そうかな……着替えの時の女子同士でも特に狙われてる印象はないけど……」
「だって、彼氏もいるじゃない。篠原君も、石山さんのスカートめくったりするんじゃない？」
永原先生が突っ込んでくる。
「……ノーコメントで」
「あらら、まあいいわ」
でも確かに考えてみるとカリキュラムの時や浩介くんと二人っきりの時も考えると、他の女子よりパンツ見せちゃってる方かも。

クラスであたしの他に彼氏いるのは龍香ちゃんだけどもしかしたら龍香ちゃんに次ぐナンバー2かな？　あうあう……恥ずかしいのに今までめくられたのを思い出しちゃう。
「石山さん、どうしたの？　私の話はまだ続いているわよ」
「あ、はいすみません永原会長」
永原先生の言葉を思い出し、本題に戻る。
「それで、ここまでのフィードバックはいいわ。それよりも凄いのは『性別適合手術をする』と言ってた子をこんなに短時間でここまで持ってきたことよ」
「はい」
「これは会としても素晴らしい財産よ。今後のマニュアルにも、変更を加えていきたいわ」
「あ、ありがとうございます」
また、褒められてしまったわね。
「ふふっ、やっぱり若い石山さんを思い切って正会員にしてよかったわ」
そう、もしあたしが正会員にならなかったら、あの時の会合で担当カウンセラーを申し出なかったり、あるいは、投票で否決されていたら？
幸子さんは男に戻ろうとして、自殺という結末を迎えただろう。
「はい、私も正会員を、今回の仕事を引き受け良かったです」
「ふふっ、塩津さん、運がよかったわね」
永原先生が笑顔を見せる。
全く実感が沸かないが、あたしと永原先生の決断が、あたしの指導が、一人の女の子の命を救ったことになる。
「ともあれ、カリキュラムもまだ終わりじゃないし、後処理もあるわよ。女の子になりきった後も不老故の悩みが出てくるわよ」
「でもそれは……」
「うん、そうだよね。石山さんの場合、むしろ私が石山さんの担当カウンセラーとして相談してあげないといけないわよね」
「う、うん……」

「ま、でもそれは大分後の話よ。今はまだ、考えないでいいわ。ところで石山さん、実はもう一つ、あなたに教えるべきことが残っているわよ」
「え!?」
　永原先生の言葉に驚く。最終試験にも合格し、まだ教わることが残っているとは夢にも思っていなかった。
「これはね、日本性転換症候群協会の会員に定着していると判断した時に、会への更なる定着を図るために行っているわ」
「はい」
「いい？　私たちは不老だけれども不死じゃないわ。不慮の事故に巻き込まれたら、一人のか弱い女の子よ」
　永原先生が今までとは打って変わって真剣な顔をする。
「は、はい……」
「実はね、江戸生まれのＴＳ病の女の子のうち一人が交通事故で死んだって言ったでしょ？」
「う、うん……」
　確かにそういう話を聞いたわね。
「実はね、その子は旅行好きで、よく自動車を使ってたわ。あの時はまだ今のように飲酒運転の取り締まりも厳しくなかったのよ」
「ま、まさか？」
「そう、山道を飲酒運転して、崖から車ごと落ちたのよ」
「ひどい……」
「いい？　毎日乗って数百年に一度あるかないかって言うのは、普通の人なら無視できる確率の低さでも、私たちにとっては看過できない高率よ」
「うん、確かに……」
「私たちは不老とあって免疫力という意味では頑丈よ。だから、例えば身体に害のあるタバコ程度ではびくともしないわよ。さすがに麻薬はダメだけどね」
「うん……」
「そして酒にも酔うわよ。いい？　私達にとって酒はタバコより遥か

に危険よ。酒は２０歳になっても飲んじゃダメよ、車の運転も論外だし、酔っ払えば駅のホームも危なくて生存率は落ちるわ。一般人なら気にしないと言っても、私達にとっては無視できないのよ」
　確かに、それは言えているわね。
「それから移動手段。いい？　これも自動車はなるべく使わないでね。バイク自転車も論外よ。特に自転車はスカートでパンツ見えたりすることもあるからなおさらよ」
「はい」
　それも分かる。
　実際、「そんな心配するなら明日交通事故に遭う心配をしろ」というのはよく言われる定型句だ。
　また歩く時も危険がいっぱいで、歩道と車道との境目が曖昧な場所などには極力立ち入らないように言われた。
「バスも、格安のものに手を出しちゃダメよ、去年も大きな事故があったでしょ？」
「えっと、崖に落ちたのだっけ？」
「そそ、安いものは安全を犠牲にしていると思いなさい。それと同時に、食品もよ」
「食品……」
「そう、食の安全に問題のあるものは食べちゃダメ。ちょっとくらい不健康なら不老遺伝子が何とかしてくれるけど、さすがに猛毒までは対処しきれないからね」
　そう言えば、物心付く前からだけど色々な国で食の安全とか騒がれてたみたいだし。
　本当に気をつけないと。
「さて、交通事故対策に戻るわね。生存率の高い座席について教えるわ」
「うん」
「統計的には、バスの場合、運転士のすぐ後ろの席の生存率が高いわよ。いい？　シートベルトは必ず着用よ。それから、もし何か異常な運転をしてたら、この姿勢を取って？」

永原先生は頭を抱えて身体を前に曲げるように倒す。確かに生存率が高まりそうな姿勢だ。
「最も、そもそもバスじゃなくてなるべく鉄道や飛行機、特に新幹線を使うべきよ。線路や空の事故率は道路よりずっと低いわ」
「うん」
それも知っている。永原先生や余呉さんなんかは人生が長いから、実感もありそう。
「道路はどんなに気をつけていても、狂人が1人いるだけで極めて危険な場所になってしまうわ。それに比べて、鉄道や飛行機は、限られた資格のあるエリートだけが運転している乗り物だからよ。ここまで分かった？」
「はーい」
「で、飛行機は事故を起こすと全員死亡というケースも多いけど、それでもなるべく後ろの座席を選ぶことで、少しでも生存率を上げられるわ。鉄道も同じね、後ろの車両のほうがいいわ」
「どうして？」
「統計よ」
まあ、永原先生もその手の専門家じゃないしそうとしか言いよう無いよなあ。
「うん」
せっかく不老になったんだし確かに長生きはしたい。
でも、浩介くんがいない生活って出来るんだろうか？　ちょっとだけ不安になる。
「篠原君のこと？　うん、大丈夫。私は恋愛経験ないけど、うちの会には彼氏や夫と死別して数十年と経つ人がたくさんいるわ。そういう人たちに聞いてみるのもありよ」
「はい」
「いい？　不老が悲惨だって言うけど、それは孤独だからよ。日本性転換症候群協会みたいに、仲間で集まれば、案外平気なのよ」
「そういうものですか……」
「うん、そういうものよ」

そうか、あたしをこの会に入れたのも、ＴＳ病の女の子たちが寂しくならないため、でもあるのよね。
浩介くんがいなくなってしまう世界なんてまだ考えられないけど、それでもあたしは、孤独ではない。
永原先生がいる、余呉さんがいる、比良さんがいる。みんなあたしのことを受け入れてくれて、それどころか「みんなの模範」、「救世主」とまで言ってくれた。
幸子さんだって、まだ完全に安心できたわけじゃないけど、あたしたちの新しい仲間。
「うん、あたしもまだ浩介くんがいないと生きていけないけど、もしその時が来ても……もしかしたら寂しくならずに済むかもしれないわね」
実感もまだ全く沸かないけど。
「ふふっ、いい？　私達は不死じゃないから、今でもたまに仲間が命を落とすわ。大抵は不慮の事故よ。本当にどうしようもない事故も多いけど、気をつけていれば死なずに済んだ事故もあったわ。さ、まだ続くわよ」
「まだですか？」
「ええ、自分たちの身を守るためのものよ。せっかく不老なのに事故で早死じゃ嫌でしょ？」
「う、うん……」
永原先生の講義は続く、鉄道の時はみだりに線路外に出てはいけないとか、ホームの端を歩いてはいけないとか、歩きながら携帯やスマホをやってはいけないとか一般常識レベルのことも話している。
また、絶対に登山をしないこと。海水浴では沖には絶対に行かないこと。警察の人などに「危険」と言われた場所には絶対に近付かないこと。
また事故だけではなく事件対策も必要不可欠で、まず治安の悪いとされる地域を出歩かないこと、土地勘もなくなるので海外旅行も避けたほうがいいこと、恨みを買われるようなことをしないこと、特に恋愛面では簡単に別れると危ないとか言っていた。

まあ、今はどっちかって言うとあたしのほうが浩介くんにゾッコンだから、その心配はなさそうと永原先生は笑っていた。
永原先生によれば、これらに気をつけるか気をつけないかで計算上平均寿命が数千年単位で変わってくるとか。
「永原先生はいつまで生きるつもりなの？」
ふと聞いてみる。
「うーん、地球の終わりは見てみたいわね。少なくとも数億年先だし、確率的にはまず無理だけどね」
やっぱりそれだけの単位になるとどうしても事故に巻き込まれるのかな？
「そ、そうですか……」
「でもひとまず１０００歳……の前に９７０歳かな」
「え？　９７０歳？」
何でそんな中途半端な年齢を目標にしているんだろう？
「ああうん、知らないならいいわよ。ただの個人的な目標だから」
深く聞かないようにしておこう。どうせ４７０年後には分かるし……って早速毒されてるよ。
やっぱり不老と言ってもまだ１７歳だしやっぱり１０年後さえイメージ付かないや。
「さ、安全講習はこれで終了よ。今の話、よく覚えておくのよ。また聞きたくなったり、危ない目に遭ったらしますからね」
「は、はい……」
ともあれ、安全に過ごすというのはいいことだ。
あたしは永原先生の安全講習を受け、慎重に周囲に気をつけながら家路についた。

# 戻り始める日常

翌日夜、あたしは家事の途中にテレビ電話で塩津家に呼び出された。
「幸子さんの様子はどうですか？」
「ええ、幸子ったらスペシャルなおしおきをされてすごくかわいかったわ」
どうやら幸子さんも、最後の服と本を捨てる課題で、失敗してしまったらしい。
あそこのおしおきは本当に恥ずかしい。浩介くんにめくられたのを除けば、間違いなく一番恥ずかしいシチュエーションだった。
でも、後で調べたら、スペシャルなおしおきには3段階あってあれでも一番軽い罰らしい。
「それは良かったわ。ところで、講習を終えたわけですけど、幸子さんをこれからは娘として愛せますか？」
あたしが一番大事な質問をする。
結局周囲の扱いが男のままだと意味がない。それはあたしでさえ同じ。
「ええ。もう私から見たら女の子そのものですもの、これからは徹が長男で幸子が長女です」
幸子さんのお母さんから、迷いが完全に消えた様子が伺える。
「でもですね、実を言うと女の子になるためにはここからが本番なんですよ。カリキュラムはあくまで入門編ですから」
それはあたし自身よく実感している。
「そ、そうですか……では幸子はまだ予断を許さないんですか？」
「いえ、もう殆ど心配いりませんよ。既に生理の関門も超えてますし、少しずつでいいです。いつの日か、男の子の恋人ができますよ」
あたしは焦りすぎたけど、幸子さんに同じ道は過酷だろう。
「そうだといいわね。それにしても、まさか跡継ぎのはずの長男が嫁入りするかもしれないなんて思ってもいなかったわ」
「うん、それはそうだと思います。ともあれ、良さそうで何よりでし

た」
「ところで、この後のサポートは何があります？」
「あたしもまだ実感はつきませんけど、基本的にカウンセリングは本人が１２０歳になるまで続けられるとのことです」
「え!?　じゃあ後１００年も面倒見てくれるんですか!?」
　幸子さんのお母さんが驚いたように言う。
　確かに、普通の人からすればそれはとんでもない保証期間だ。
「はい、とは言えカウンセリングも５０歳を超えたら殆ど使われないので、実質『最終試験』への合格で主要な『教育』は全て終わります」
「最終試験というのは？」
「身も心も、そして反射的本能から本当に女の子になったかの試験です。あたしは半年で合格ですけど、通常どんなに早い人でも3年はかかります」
「内容というのは？」
「うーん、話してもいいですか？」
「ええ、聞きたいです」
「……分かりました。女性向けのアダルトサイトを見てもらうんです。そこで、その……男性の勃起したアレを見て、ちゃんと興奮して濡れるかどうか……それが最終試験です」
「うわー生々しいわね……」
「でも、越えなきゃいけないところなんです」
「ええ、分かってるわ。ともあれ、幸子が世話になりました。石山さんにはどんなにお礼をしてもしきれません」
「いえいえ、あたしは担当カウンセラーとしての責務を果たしただけです、それにまだ終わりじゃないので、幸子さんお願いできますか？」
「……はい」
　テレビ電話の相手を、お母さんから幸子さん本人へと変える。
「幸子さん、今日はどうでした？」
「ああうん、まさかこんなに簡単に捨てられるとは思わなかったよ」
「ふふっ、それで、うまくいった？」
　幸子さんが首を横に振る。

「お母さんに尾行されてて、何回かパンツ見せてたとかなんとかで……うー、恥ずかしい……」
「うん、あれ恥ずかしいよね。あたしも、自分でスカートめくらされて、パンツ見せながら罪状を言わされた上で恥ずかしがるように言われちゃったよ」
「え!?　それだけで済んだの？」
　幸子さんが驚いた顔をする。
「ん？　幸子さんは違うの？」
　あたしはあえて知らないふりをする。
「う、うん……私はその……石山さんのしたことの後に母さんの膝に乗るように言われて、そこでスカートをわざとゆっくりめくられてお尻ペンペン……といっても叩くんじゃなくて触るって感じだけど……それが余計に恥ずかしくて……しかも『私は今スカートめくられてパンツ丸出しでお尻触られて恥ずかしいです』とか言わされて……」
　あちゃー、一番重い罰ね。
「そ、そうなんだ……でも、幸子さん、昨日よりなんだか女の色気を感じるわよ」
「そ、そう？　あ、ありがとう……」
　幸子さんも確実に成長している。
　ともあれ、幸子さんのカリキュラムもこれで終了、明日からはスカートをめくられたりはしなくなるけど、カリキュラムはあくまでも入門編だから、これを土台に女子力を少しずつ高めていくように言って、あたしからの講習も終わりとなった。
「それじゃあお疲れ様。大学ではどう？」
「うん、最近はスカート穿いても周囲から何も言われないよ」
「うん、それはよかった。他に何か伝えたい事ある？」
「ううん、特に今はない」
「じゃあここで切るわね。またいつか、会いましょ」
「うん」
　これで幸子さんの、カリキュラムが全て終わった。

あたしは、一仕事終えたという感じで背伸びをする。
明日は月曜日、また浩介くんに会える。今日のカリキュラムのことは、話さないでおこうかな？
お風呂で長い髪を洗いながら、あたしも幸子さんの名前ように「幸せな子」にもなれていることに気付く。
今日はまた、協会の仲間が沢山いることに気付かされ、孤独を和らげられると言っていた。
ともあれ、幸子さんのカリキュラムも終わり、新たに別の人のカウンセラーになるまでは、協会の正会員としての活動はいくらか少なくなると思う。
そうしたらまた、高校生としての生活が増えそうだ。

ピピピピッ……ピピピピッ……
「んー！」
気持ちよく朝を起きる。
あたしはいつものようにパジャマと下着を穿き替えて制服姿になる。
ストッキングも女の子の体を知り尽くした今だから、すぐに素早く履けるようになった。
今日は月曜日の平日だけど、まだ時間があるのでちょっとだけぬいぐるみさんで遊ぶ。
かわいらしい熊さんのぬいぐるみと犬さんのぬいぐるみ。
「ねえねえ犬さん、この先の匂い、何だかわかるー？」
「くんくん、うーん、人間さんがバーベキューしてる匂いだね」
「そうか、じゃあ人間さんごと食べちゃおうよ」
「熊さん、相手は火や車を持ってるよ。それに集団だから、僕たちの方が危ないよ」
あたしは最近、この二匹のぬいぐるみさんで劇を作るのにはまっている。
もっとも、話の構成は支離滅裂だし、母さんにも、浩介くんにもちょっと見せられない。

もしばれたら間違いなく幼稚だって言われるだろうし、自分でもさすがにどうかと思うけど、どうしても楽しくてやめられない。
ともあれ、一通り遊び終わったら母さんのいるリビングルームへ。
「優子おはよう」
「おはよう母さん」
既に両親が朝食を取り始めている。
「ふう、また月曜日かあ……今年は祝日が土曜日に重なりすぎてるよなあ……」
父さんが憂鬱な表情で言う。
月曜日は、以前のあたしにとっても大敵だった。とにかく学校に行かなきゃいけないし、いつも怒ってばかりの日々を5日間繰り返さなきゃいけないからだ。
でも今は違う。
大好きな人が学校で待っている。今後は土日もまたデートできる日が増えると思うし、青春を楽しめそうだわ。そう思うと、あたしは月曜日を克服できた。

「では、次のニュースです……」
テレビのニュースは相変わらず下らないことを繰り返している。
よっぽど治安がいいのか、最近では1つの事件を長く引っ張ることも多い。
後、芸能人などの不倫疑惑を週刊誌の孫引きでよく引っ張ってくるのも最近目立つ。
確かに不倫はよくないことだけど、さすがにしつこすぎると思う。
桂子ちゃんによれば、こういうのは女の子が好きだという。実際、クラスの女子たちも、たびたび芸能人のスキャンダルで盛り上がっていたのを見ている。
でも、あたしはどうも理解しにくい。
それは多分、あたしの中にまだわずかに残っている「男」の部分だと思う。
やっぱり、永原先生が言うように、何百年たっても、生まれた時の

性別が顔を出すことはあるみたい。
「関係各位には、誠にご迷惑をおかけいたしまして、申し訳ありません」
テレビの中で、不倫をした芸能人が記者たちの前で謝罪の言葉を述べている。
ところで、浩介くんはどうだろう？　人間は本能的に不倫癖があるとまで言う。
だけど、あたしは浩介くんが不倫するとは想像もできない。
どこからその自信が湧いてくるのか？　その根拠を考えてみる。
もちろん、あたしがミスコンで超が付く美人の永原先生と桂子ちゃんを退けて優勝したくらいの美人でかわいい女の子っていうのもあるし、あたしは顔だけじゃなく体型にも自信がある。
あたしも「男だった頃の知識」は忘れていないから、胸とお尻がとても大きくてお腹も健康的に肉がついているむっちり体型は男性にとって本能的に好みだということを知っている。健康な赤ちゃんを産めそうな体系だからだ。
そしてこういう男性の知識、目線を知っているのは他の女の子にはない。だから、今のところ、あたしはちゃんと浩介くんを満足させられている。
それに浩介くんは女の子を守りたい保護欲の強い男の子みたいだし、そういう意味でも今の弱いあたしの性格は、浩介くんにぴったりはまっている。
そしてあたしが持っている最大のアドバンテージが「不老」だろう。浩介くんがこのあたしを差し置いて、いつか老けておばさんになっていく他の女性に目移りするとは想像もつかない。
もちろん永原先生を始め、同じＴＳ病の人には無効だけど、それは滅多にいない。
会で固まってるけど、それでも見つけにくいし年齢差だってあるだろう。それにつけて、同い年のあたしは断然有利だ。
……と、なんだか自画自賛ばっかりになっちゃったけど、いずれにしても浩介くんの不倫の可能性は限りなく０に近いというのは事実

だろう。
「優子、そろそろ時間よ」
「はーい」
おっと、考え事してたらもうこんな時間になっちゃったわ。
あたしはちょっと急いで学校へ行く。

ガラガラガラ……
「おはよー浩介くん」
「おはよー優子ちゃん」
「浩介くん、今日もかっこいいね」
いつもは言ってなかったけど、さっき不倫のことを考えてたら急に言いたくなった。
「あ、ああ……優子ちゃんも今日もばっちりかわいいぞ！」
「わーい！　浩介くん大好き！」
あたしが両手を上げて喜びを体で表現する。
浩介くんは突然のことに顔を赤くして動揺している。

「相変わらずお熱いこと」
「うんうん、私でもあそこまでじゃないですよ！」
「あら、じゃあ龍香もあの二人に負けないようにしないとね」
「あはは、でも私の彼も最近は更に凄くなってますよ！」
「うん、龍香最近またかわいくなったもんねえ……もしかしてする回数増やした？」
「はい……」

龍香ちゃんと桂子ちゃんがあたしについて何か話してるのが聞こえた。どうやら龍香ちゃんも彼氏とうまく行っているみたいでよかったわ。
あたしも、浩介くんとの体の相性はまだわからないけど、きっと大丈夫だと思う。
「浩介くん、もうすぐクリスマスだね」

「ああうん、でもその前に中間テストだよ……」
浩介くんがちょっと憂鬱そうに言う。
「そうだね、浩介くんはどう？」
「うん、ちょっと調子悪いかも」
そう言えば、浩介くんの成績ってどんな感じなんだろう？
「どんな成績でも、浩介くんは浩介くんだから安心してね」
「ああうん、頑張るよ」
「うん、頑張ってね。でも、成績が落ちたとしても、あたしはずっと浩介くんが好きなままだよ」
ベタなセリフだけどやっぱり照れくさい。
「ああうん、俺も、優子ちゃんが好きだぞ」
ヒューヒュー
あたしたちは学校でも公認カップルだからいつものろけているんだけど、そうしていると、必ずどこからかこういう感じになる。

「ちくしょー！　篠原め！　うぐぐぐぐ……！」
「なんだよこの空間、かゆい！　むずがゆいー！」
「くそお！　リア充め！　篠原めえ！　優子ちゃんを独り占めしやがってー！」
「くそー！　試験前でも躊躇なくいちゃつきやがってー！　呪われろー！　くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
「しのはら死ね、死ね死ね死ね……不幸になれ、不幸になれ不幸になれ不幸になれ……修行するぞ修行するぞ、呪うぞ呪うぞ呪うぞ……」
「アブラカタブラ南無阿弥陀仏、神よ、篠原浩介を呪い給え汚し給えかんながらたまちはえませかんながらたまちはえませ南妙法蓮華経――」
そして、高月くんを中心とした男子の集団が、一通り浩介くんに恨み言を言った挙句、全く効果のない意味不明な「呪いの儀式」を始めるのだ。浩介くん曰く「気持ちいい」らしい。
最近、高月くんは友人だった浩介くんと付き合う機会がめっきり減ってしまった。

もちろん関係が断絶しているわけではないから、つるむこともあるけど、一緒にいるのは男女で別れて何かをする時くらいで、ほとんどあたしと二人で行動している。
だから、あたしも他の女子とも仲がいいままだけど、今までより話す機会は減ってしまった。

まあ、1日は24時間しかないから……って仮に1日が増えたとしても浩介くんにとといる時間が増えるだけだよね。
浩介くんは男の子だし、男友達よりも好きな女の子と一緒にいたいし、それは女の子のあたしも同じ。
「はーい、ホームルームを始めますよー！」
いつものように、レディースーツ姿の永原先生が教室に入ってくる。
学校は本格的に試験モードに入り、今週からは部活がお休みになる。
懸案は試験期間と生理周期が重なる危険性だけど、あたしの計算では明後日が「女の子の日」になるから大丈夫のはず。
今までは運が良かったけど、あたしは生理の重さにはまだ慣れ切ってないし、重なったらシャレにならなさそう。
ほかに重い子がいれば相談もできるけど、誰が重いとかだれがどの周期かなんて全く把握してないもんなあ……
「はい、じゃあ今日は月曜日だから、このまま古典に入るわよ。みんな、試験前の対策課題を提出してね」
ともあれ、試験を切り抜ければ冬休み、浩介くんともたくさんデートできそうだわ。
そんなことを思いながら、今日も学校が一日始まる。
「あ、石山さん。ちょっといいかな？」
「はーい！」
永原先生に呼び出される。
「カリキュラムお疲れ様。カリキュラムが終わると、ささやかだけど成績に応じて報酬が出るわよ。この後最終試験に合格したり、患者が

一定年齢に達すると少額だけど報奨金が出るわ」
「あ、ありがとうございます。永原会長」
話題的にも、今はこっちを使う。
「話はそれだけよ。あ、次の会合のことを言っておくわね、場所は本部で日時は――」
「うん、大丈夫」
浩介くんとのデートとも重なっていない。

さて、学校も試験前だけど、小テストの結果を考えるに、あたしの成績は不思議と良くなっている。
ＴＳ病で女の子のことを覚えなきゃいけなかったり、今も日本性転換症候群協会の正会員として、幸子さんのカウンセラーの仕事まであってちょっと勉強不足なのに、成績が上がった理由。
それは「効率が良くなった」か「地頭が良くなったか」のどちらかだが、勉強の方法なんて特に考えてないので、どうも後者らしい。
自覚がないけど、ＴＳ病で世界が広くなったせいかもしれない。
だとすると自然と前者になったのかな？
まあいいや、あたしはあたしなりに勉強頑張ろう。

# 優子ちゃんが羨ましい

「ねえねえ優子ちゃん、久しぶりに一緒に帰ろうよ」
学校が終わると桂子ちゃんが声をかけてきた。
うーん、今日も浩介くんと帰りたいんだけど。
そう思い、あたしは浩介くんの方をちら見する。
「いいんじゃないか？　二人は幼馴染で女の子同士だろ？　俺を喜ばせるための作戦会議とか、最近積もる話もあるだろ」
浩介くんが、今日は桂子ちゃんと一緒に帰るように言う。
うん、確かにたまには桂子ちゃんと帰るのも悪くないかな？
……3人でもいいんだけど、あんまりそういう雰囲気じゃない。
「うん、じゃあ浩介くん、また明日ね」
「おう」
浩介くんと分かれて桂子ちゃんと一緒にげた箱に行く。
「優子ちゃんも、篠原も、成長したよね」
「え？　うん、確かに女子力は磨いてるつもりだけど……」
「そうじゃ無いわよ、二人とも、すごく物分かりがよくなったわ」
桂子ちゃんの指摘。
「……今日のこと？」
「うん、お互い相手のためにって誠意が伝わって来たわよ。言葉や行動で誠意を伝えるのは、お金で伝えるよりはるかに難しいのよ」
桂子ちゃんが意味深な様子で言う。
「優子ちゃんもよ、浩介くんに感謝をはっきり伝えて欠かさないもの」
「うん」
だって、浩介くんに助けられっぱなしだし。
「それに彼も、優子ちゃんが自分のためにがんばってるってことは、ちゃんと分かってるわよ」
「そ、そう？」
「うん、だからこそ、彼も優子ちゃんのために頑張ろうって気になるのよ」
桂子ちゃん、やっぱり鋭い。

「やっぱり、男の子に好かれるっていいわよね」
　あたしが言う。ましてや浩介くんだもん。
「うんうん、私も彼氏欲しいんだけどねえ……」
「桂子ちゃんなら大学生や社会人になっても引く手あまただよ。高校だと結構高嶺の花って気にするし」
　あたしだって多分周りが正体知らなかったら今の桂子ちゃんみたいに高嶺の花になってた可能性もあると思う。
「うーん、でも私、優子ちゃんとは違うのよねえ……」
「え!?」
「あー、私も優子ちゃんや永原先生みたいになりたいわ」
　桂子ちゃんが言う。それはつまり不老になりたいということ。
「でも、男から女になるって大変よ。今までの価値観を変えなきゃいけないし」
「ああうん、それでも。よ。優子ちゃんのこと、羨ましく思うの」
　桂子ちゃんの告白、それは、永原先生からも言われた。
　でも、永原先生が言う「羨ましい」とはニュアンスが違う。
　そうじゃなくても、あたしはおしゃれして外出するとよく「羨ましい」と言われる。
「……桂子ちゃん、天文部だもんね」
「うん、人間の一生は天文好きにとってはあまりに短いわ。それに、あたしも男に好かれたいから、年齢を重ねたくないのよ」
「……実はね、あたし羨ましいって他の人にも言われたんだ」
「え!?　あ、駅だよ」
「うん」
　話していたら駅が近くなったので一旦駅に入る。そして電車を待つ。
「……それで、優子ちゃん。『羨ましい』って、そりゃあ優子ちゃんくらいかわいければ言われるでしょ？」
「いや、そうじゃないのよ。もっと別の人から言われたの」
　確かに、「かわいい」とか「胸が大きい」としてクラスの女子や通行

人、あるいは同じ学園の知らない人に羨ましがられたり、時に嫉妬されたりもした。
　それは表面的な「容姿」に対する「羨ましい」だ。それはあたしの姿を見るだけでも抱くことが出来る「羨ましい」と言える。
　一方で、桂子ちゃんの「羨ましい」は、あたしの「不老」という「体質」に対して「天文好き」「ずっと美しくいたい」という観点での「羨ましい」で、あたしがＴＳ病だということを知らないと抱けない「羨ましい」でもある。
「え!?　じゃあ誰から？」
「……永原先生から」
　あたしが言う。
　桂子ちゃんは驚きのあまり固まってしまった。
　永原先生という答えは、間違いなく予想していなかっただろう。
「間もなく、電車が参ります。白線の内側まで――」
　駅の放送と共に電車が入り、沈黙が続く。

「それで、永原先生が優子ちゃんのことを羨ましいって?!」
　電車が発車すると、桂子ちゃんがようやく第一声を言う。
「うん、あたしもまだ実感が沸かないんだけどね。今までこの病気になった人は、みんな多かれ少なかれ多大な苦労をしてきて、永原先生は特に、この病気になったがためにかけがえのない恩人や主君を失ったわ」
「ええ、夏祭りの時に言っていた『吉良殿』だっけ？」
「実は彼だけじゃないんだけど……とにかく永原先生も、他の人も、この病気を『呪い』とか『泥棒』とかそういう表現をするわ」
「でも、優子ちゃんにとっては『救い』なんでしょ？」
「……うん、どうやらあたしのその解釈、そしてＴＳ病で幸せになったという事実で、永原先生があたしのことを『羨ましい』と言ったのよ」
　永原先生が言う「羨ましい」はこれまでの無数の「羨ましい」はもとより、桂子ちゃんが言う「羨ましい」と比べても更に深い「羨ましい」だ。

永原先生が過ごしてきた５００年の月日はもちろん他のＴＳ病患者たちの長く険しい人生との対比での「羨ましい」だ。
それに永原先生はあたしのクラスの担任の先生であり、日本性転換症候群協会でも会長と会員の関係。
ＴＳ病の先輩としても大先輩で、一言で言えば「目上の人」に当たる。そんな人から「憧れ」を向けられるということが、どれだけ重大なことかはあたしでも分かる。
「うーん、それってどういうこと？」
「うん、あたしも、詳しくは分からないんだけどね」
それはあたしのことを、どれだけ深く知っているかで違ってくるのだろう。
付き合いの年数は桂子ちゃんのほうがずっと長いけど、同じＴＳ病という意味では、永原先生とあたしは、桂子ちゃん以上に絆が強くてもおかしくない。
「ふーん、それにしたってすごいことよ。普通先生が生徒に憧れることなんて無いわ」
「うん、あたしもそう思う」
「でも、先生はいつ頃からそんなこと思ったんだろう？」
「うーん、ちょっと待って……」
あたしは考える。
ふと、永原先生があの日、幸子さんと遊んだ帰りに見せてくれた本のことを思い出す。
そこには、よく笑い、よく泣く、そんな青春を取り戻せた。とあった。
夏の海でも、夏祭りの時も、永原先生はあたしたちに負けないくらい遊んでいた。
水着姿はあたしたちの中で一番露出度が高かったし、夏祭りの時は誰よりも目立つ格好で、しかも文化財でもおかしくない着物を着てまではしゃいでいた。
多分あの時から、永原先生はあたしに対して「羨ましい」という気持ちがあったのかもしれない。

女子の一人としてはしゃぐあたしを見て、自分もと思ったんじゃないか？
２０歳でＴＳ病になった時、そこは戦乱の時代だったから、青春なんてできなかった。
「まもなく――」
「あ、降りなきゃ」
考えがまとまってきたところで降りる駅が近いという放送が流れる。
桂子ちゃんと一緒に帰る時間ももうすぐ終わる。
２人で電車を降りて話を再開する。
「夏になってから、永原先生ってあたしたちと遊ぶようになったじゃない？」
「うん、そういえばそうだよね」
「ＴＳ病でしかも先生だから、もう青春ができないって思っていたところにあたしが現れた。クラスの雰囲気も良くなって、考えを変えたと思うの」
「……なるほどねえ。それで、今からでも女の子としての青春を取り戻したいと思って、夏休みに遊ぶことを計画して、文化祭の時も、まるで生徒の一人のように楽しんでたのね」
改札口を通る。
家までの道のり、車や自転車に気を付けないと。
「うん、ミスコンも永原先生が一番力入れてたよね」
「まさか先生が参加してくるなんて思わないものね。あーあ、今思い出しても優子ちゃんに負けたの悔しいわね」
「あはは……」
桂子ちゃんも、思い出話の一つになっている。あの時に抱いた邪悪な気持ちとも、やっと折り合いがつけられそうだ。
でも、時間の解決じゃあ、似たようなことが起きた時に再燃しかねないというのも不安材料ではあるわね。
「私、あの後先生から聞いたんだけど……先生、後夜祭終わって３位のトロフィー見てたら、また悔しくなっちゃって家ですごく泣いちゃっ

たらしいわよ」
「そ、そうなんだ、もしあたしが負けてたら……」
「間違いなく私たち以上に泣いてたんじゃない？」
「うん、あたしもそう思うわ」
そう言えば、永原先生がミスコンで泣いた時の写真が出回ってるんだっけ？
でも、永原先生の人気はさらに高まったみたいでよかったわ。
「でもさ……永原先生が青春を取り戻せたのは……ＴＳ病のおかげじゃない？」
桂子ちゃんが話題を変えるように言う。
「うーん、どういうこと？」
「だって、永原先生の時代は青春どころじゃないでしょ？　もし不老にならなかったら、青春という概念さえ知らないまま死んでいたんじゃないかな？」
桂子ちゃんの鋭い指摘が入る。
確かに、戦国時代じゃ青春どころじゃないし、永原先生の生年を考えれば、それこそ不老でもない限り江戸時代まで若さを保ったまま生きられるとは思えない。
「そ、そうかもしれない……」
「うん、むしろ普通の人の６倍から１０倍は生きている年齢になっても、ＴＳ病は青春を楽しむことができるのよ」
桂子ちゃんの言葉からは、「羨ましい」が強く伝わってくる。
永原先生は気付いていないが、ＴＳ病に「救い」があるのは、永原先生とて同じことなのかもしれない。
「女の子はね、いつまでも若くありたいのよ。だって男はみんな若い女の子が好きだもん。少なくとも私や優子ちゃんより、顔にしわができてるおばさんがモテるなんてことないでしょ？」
「うん、当たり前だと思う」
そんなことがあったらシャレにならないわよね。
「でしょう？　若くありたいというのは女の子の本能よ」
確かにそう、女性誌なんかも読んだけど、若くきれいであり続ける

ためにはどうすればいいのかということに、どこも相当な力を入れていた。
「そういう意味でも、私は優子ちゃんだけじゃなくて、先生も『羨ましい』と思ったわね」
桂子ちゃんが言う。女の子として、天文好きとして「不老」への「羨ましい」が伝わってくる。
「でもあたしはさすがに永原先生の人生は……ちょっと疲れると思うわよ」
江戸城で過ごしてた時代が比較的平穏なくらいで。
「そうねえ、そういう意味でも、優子ちゃんは本当に羨ましいわ。先生からもそう思われるんだから」
桂子ちゃんの言葉。
「やっぱり、あたしって他の人より恵まれてる？」
「当たり前じゃないの！　今までのこと、女の子になってからのこと。もう一度思い出してみてよ」
桂子ちゃんがやや強く言う。もちろん自覚はあったし、女の子になってからの人生の好転を見ればそれは明らか。
そして他の人からの評価もあたしと同じだった。
この体だって、男の子の好みに合っていることはわかってた。
そしてあたし自身、とってもかっこいい彼氏を作れた。
そしてそれだけではなく、クラスの雰囲気も変えてしまった。
……最近は浩介くんが、男子に嫌われ始めちゃった感じだけど、浩介くんは気にも止めていない。
浩介くんはホモじゃないから女の子に好かれたいのは当然と言えば当然だけど。
「桂子ちゃん、あたしやっぱり、このままの人生を続けていきたい」
「うん、それがいいわ」
この話はここで終わりかな？
「ところで話変わるけど、あたしね、実はこの間、カリキュラムの指導をしたのよ」

「え!? カリキュラムってあのセクハラされるやつ!?」
桂子ちゃんが驚いた様子で言う。
そう言えば、桂子ちゃんにはおしおきにスカートめくりされたことも話していたんだっけ？
「あはは、うん。後輩のＴＳ病の子を、ね。うまく行ったわよ」
「へーそれはよかったわ」
「それでね、その人も、あたしみたいに女の子としての人生を続けたいんだって」
「うん、そうやって生きてく以外道はないものね」
桂子ちゃんはカリキュラムの内容はともかく、それしか道がないことには理解を示してくれる。
「でも、あたしだったら、仮に安全に男に戻れる選択肢を提示されたとしても、女の子として生きていくことを選んだと思うの」
多分、女の子になったばかりのあたしでも、乱暴だった自分を変えるために、女を選んだと思う。
「うん、優子ちゃんなら……優一ならそっちを選ぶと思う」
桂子ちゃんが男だったころのあたしを思い出す。
そして、あたしの家と桂子ちゃんの家との分かれ道に来る。
「それじゃあ、バイバイ」
「うん、バイバイ」
お互いに挨拶をして、あたしは一人になる。
この時間帯も結構危ないから注意したい。
特に何もなく、家に到着する。
「ただいまー」
「あ、優子お帰りなさい」
「ふう」
「優子、試験前だけど大丈夫？」
母さんが聞いてくる。
「うん、不思議と成績がいいの成績がいいのよ」
「優子も多方面から考える力が身についてきたのよ」
母さんの指摘、あたしの分析と似たようなもの。

「優子もそろそろ受験のことを考えなさい」
「あ、うん」
受験かあ、浩介くんはどこの大学を受けるんだろう？　高校生カップルのとって、大学受験は最大の関門だ。
もちろん大学が違ったくらいで別れる気は毛頭ないけど、会える機会が減るのはマイナスになる。
今の成績ならそれなりにいいところに行けるし、一応今は高３相当のことをやっているけど……一応滑り止めに佐和山大学として……
まだ考えても仕方ないわね。今はとにかく来週から始まる中間試験のことを考えないと。

「ふー、終わったー」
あたしが一息安堵のため息をつく。試験の手ごたえはよかった。
「優子ちゃん、どうだった？」
桂子ちゃんが聞いてくる。
「ああうん、手応えあったわよ」
「そう、それならよかったわ。私はいつもちょっと良くないのよ」
「へー、桂子ちゃんが意外ー」
桂子ちゃん、お泊り会の時はそんなに成績悪そうに見えなかったのに。
「あはは、宿題が早く終わるからと言って、成績がいいとは限らないのよ」
「お、優子ちゃんに木ノ本、試験どうだった？」
浩介くんが会話に乱入してくる。
「ああうん、手応えはあったよ」
「そうか、俺はボチボチかな？　優子ちゃんと付き合うようになってちょっと良くなったんだよ」
「へー、浩介くんも？　あたしも成績良くなったんだ」
「ふむふむ、やっぱり精神面って大きいわね……」
桂子ちゃんが一人、「考える人」のようなポーズで唸りながら言う。
その後、あたしたちは３人でテストの反省会を始めた。

途中恵美ちゃんが「試験終わったっていうのにまた勉強か」と言ってきた。
恵美ちゃん曰く、「大学には進まない」らしい。当初はテニスは高校で引退と決めていたんだけど、とにかく「プロになれ」と圧力が凄かったらしい。
会社がスポンサーになってくれるのである意味で「就職」ということになる。
「ところで、二人とも、志望校ってどうするの？」
ふと、何の気なしに聞いてみる。
「うーん、私は佐和山かな？」
「うん、俺も成績とも合ってるし、それに近いし」
「そ、そう……」
あたしは俯いてしまう。
「どうしたの？　優子ちゃん」
「ああうん、ちょっとね。あたしも、佐和山受けようと思ってるんだ」
「へー、一緒の大学だといいね」
「でも、優子ちゃんの成績なら滑り止めだろ？」
浩介くんの鋭いツッコミ。確かにその通り。
「ああうん……そんな感じ……」
「じゃあ、私達も頑張りましょ」
「そうだな、優子ちゃんのためにも、同じ志望校にしてえしな！」
うん、そういう感じで、今はいいのかな？

# 変化する協会

「それじゃあ、臨時会合を始めるわ」
今日は１２月２３日、世間一般には「天皇誕生日」と言われていて、昔の人が多いＴＳ病患者にとっては皇居への一般参賀に参加する人も多い。
午後からは、臨時会合だが、参加者は正会員のみ。
前回の会合ではあたしはかなり上座の方だったけど、今日は一番下座に座ることになった。
参加者はあたしも含めて全部で１２人、以前の会合で参加していなかった正会員の１人の顔も見える。
「今日の議題は、塩津幸子さんの成功例についての情報共有です」
普通は最終試験合格者が出た時に報告を兼ねた小さな会合、それもインターネットやテレビ電話で済ますものを組むもので、普通はカリキュラムが終わったばかりでは特に会合は組まない。
永原先生も、余呉さんも、まさか短期間でここまで立て直せるとは思っても居なかったので、このように直接会って話す機会を組んだという。
「えっと、もう一度確認しますね……カウンセラー業務でも忙しかったりしたので、改めて紹介しますと、まず成功させたのがこの人、新しく正会員になった石山優子さんです」
みんなあたしのことをじっと見る。
外見年齢は全員１０代の少女だが、みんな実年齢は高い。江戸以前の生まれの６人はもちろん、明治生まれが２人、大正生まれが１人、昭和生まれが２人、そして平成生まれのあたし。
あたしの次に若い人でも６０歳を超えているという。
「やっぱりこの会はすごいわ……」
あたしは協会の構成員の年齢層の高さに思わずため息のような言葉を漏らす。
「ふふっ、みんな歳いっているけど、そんな中で１７歳の石山さんは模範なのよ」

「ええ」
明治生まれの普通会員というのはかなりいるらしく、以前聞いた話では明治生まれのＴＳ病患者は４０人くらいいるらしい。その中でも１２２歳以上も１２人居て、そのうち２人はここにいる正会員だという。
総じて非ＴＳ病患者で最も長生きした１２２歳より長生きの患者は１８人。しかし、１００年後には、不慮の事故を考慮しなければ２４６人になるという。
特に昭和のベビーブームの時には、かなりの患者数が居て、性転換手術と言った技術も未発達だったお陰か、やはり自殺者は多いものの、今ほど自殺率も高くなかったらしい。
そのため、やはりこの会も昭和生まれが一番多いという。
「それじゃあ、石山さん、今後ともよろしくお願いします」
「はい、改めてよろしくお願いいたします」
パチパチパチ
「えっと、私と比良さんと余呉さんは知っているでしょうけど、他の正会員の方を紹介しますね。ではこう、時計回りに行きますね」
「あ、会長。会長と比良さんはいいですけど、私は肩書きまでは紹介してないですよ」
「ああえっと、そうだったね。じゃあまず余呉さんの肩書を話しましょうか」
永原先生が一人一人肩書とともに正会員たちを紹介していく。
ちなみに、余呉さんは「支部長統括兼北海道・東北支部長」という肩書きで、要するに北海道から九州までの全８支部長の長を務めているが、支部長統括の方は永原先生を除けば一番の年長者ということで与えられているだけでほとんど形式上らしい。
支部によっては、殆どカウンセラー業務がないらしく、大半の支部長さんは他の役職を兼任しているらしい。
会計や予算を担当している人や、会員間での交流の調整を主に担当している役職もある。
一方で、南関東支部長の人は比較的多忙になることが多く、会長副

会長の永原先生と比良さんが彼女のサポートしている。それでも、みんな兼業なあたり、そこまで忙しいという感じではない。
この３人は基本的に他の役職を兼務しないという。
一方で、平の正会員はあたしと他にもう一人だけ。
「それにしても……１７歳でしたっけ？　その歳で正会員になるのも、カウンセラーをするのも前例はないですし、何よりあんな絶望的な状況を挽回した前例だって殆どありません」
正会員の１人が感心したように言う。
「というかあったっけ？　比良さんは覚えてます？」
別の正会員がそもそもほとんどではなく全くではないかと言う。
「いいえ、記憶にはないわね。会長は？」
「もちろん無いわよ。だからこうして正会員を集めたんじゃない」
比良さんと余呉さん、そして永原先生の３人のやり取り。
まあやっぱり「性別適合手術」を口走ったらほぼ自殺ルート確定なのよね。

「ともあれ、本題に入りますよ。手元の資料を読みました？」
「ええ、家族への支援を重視しなさいってあるわね」
あたしの前に幸子さんの担当カウンセラーだった余呉さんが言う。
実際の所名目上ではカウンセラーはあたしのままだけど、既に安定期になったことや、お互いの住居が離れていること、何よりあたしが学生ということもあって、実質的にはまた余呉さんがカウンセラーを務めている。
「ところで、幸子さんはどうですか？」
「塩津さん、容態はいいみたいです。ただ、大学では友人だった男性たちにモテるようになってちょっと困惑しているみたいです」
「あら、いい傾向ね。そのまま困惑じゃなくて嬉しく思う所まで行きたいわね」
あたしの言葉にみんなも同意する。
とにかく、女子に嫌われてもいいので、男子にモテることから始めないといけない。

最近になってあたしも分かってきたのだが、女子に嫌われれば嫌われるほど、男子に好かれるという法則があるらしい。
小谷学園の場合、桂子ちゃんが「素直にみんなで男の子に好かれようよ」という号令もあって、桂子ちゃんのグループに所属していた女子たちが一定数いてあまり自覚なかったけど。
そういう意味でも、あたしは恵まれている。
ＴＳ病で倒れると転校してしまう人も多いという。
そうすると周囲が正体を知らない環境に置かれるので、あたしが復学当初にされた様ないじめや偏見はなくなるというメリットはあるが、一方で環境としては苦しくなる。
みんな元男子としての「知識」があるために、男の気持ちが分かってしまい、そのためにモテるようになるが、女子に嫌われてしまうことも多いんだという。
あたしの場合は、みんな正体を知っていたのに加え、男子受けを狙うべしという桂子ちゃんがグループで勢力を持っていたために、特に問題にもならなかった。
「ですが、幸子さん、大学で女子に陰口言われているといいます」
やはり、モテない女子を中心に嫌われ始めたらしい。
「余呉さん、どういうアドバイスしました？」
『確かに男に好かれるほど女に嫌われていくけど、男に好かれる女を嫌う女はモテないひがみだから気にしなくていいわよ』と言っておいたわ」
そこで、どうするかというのは実際の所どれを選んでも「女として」の選択になる。
文化祭のミスコンの時のように、どちらを選んでも女らしい選択になるというのは、新しい悩みとも言えるだろう。
だけど、どうしたって将来的には男性に好かれるようになりたいと思ってしまうのだから、今のうちに男にモテるようになっておきたい。
「うん、それでいいわよ。でも、女子特有の感性を学ぶ必要もあるわよね」

永原先生の言葉、あたしの女の女の子になってからの7ヶ月を思い出すと、女の子としての自覚、態度、振る舞いを改めたあとは、男の子にはない女の子特有の「感性」を学んでいた。
もっとも、桂子ちゃんには未だに「女子力低い」とお説教されているし、これの学習は本当に難しい。未だに女子が集団でトイレ行きたがる心理分からないし。
女の子としての感性を身につければ、次はいよいよ心の恋愛対象が変わり、更に一番深い、反射的な本能まで女の子になる。
そして、最終試験としてかつて自分についていた「あれ」で興奮できれば合格となる。
ちなみに、その時ただ興奮するだけじゃなく、あたしのように「嬉しさ」に満ちた興奮の仕方をすると、１００点満点だという。
どちらにしても、あたしを例外として、ここまでで早くて3年はかかる。幸子さんはもう少しかかりそうだ。
「あの旅行、あれが功を奏したわね」
「はい。漫画喫茶の女性専用エリアに入れて、その後女子更衣室、そして女湯に入れる。この順番もポイントです」
あたしが順番を説明する。つまり一歩一歩既成事実を作りながら、退路を断たせるという方法だ。
しかも、新幹線を使わせて遠方に来たわけだから、なおのこと引き返せない。という作戦だった。
「石山さん、私の意見ですけど、いいですか？」
正会員の1人が、何かを言いたそうに言う。
「はい」
「女性専用スペースに誘導させる前に、できればレディース・デーを使用させるというのはどうでしょう？」
「うーん、その手があったわね」
他の正会員の人達も頷いている。
いきなり女性専用スペース、電車の女性専用車両でもいいけど、女性だけの空間に入れるよりも、まずは男女いる中で、女性専用のサービスを利用させる方がいいという。

「石山さんの方法ですと、やはり初手としては強引さが残る気がします」
「ではレディース・デーからということにして、いずれにしても最終的には女湯で締めたいです」
「ええ、私もそれには賛成です。退けなくさせるのが重要ですから」
ともあれ、あたしがカリキュラム前に行った「前段階」は、かなり功を奏しそうだ。
確かに女子更衣室と女湯はハードルが高いけど、退路を断たせる意味では効果的だった。
「とにかく、カリキュラムの前に女の子も得なんだよってことを教えてあげることで自殺ルートも減るでしょう」
「なるほどねえ……盲点だったわ」
あたしたちはそれを痛いほど知っているけど、ＴＳしたばかりでは確かに自覚がない人も多そうだ。
今まで、協会ではレディース・デーを利用させるという発想はあまりなかった。
それは男でも知っていることだから、ということで過小評価されてきた。
しかし、女性としての自覚を持たせるという意味では、「男性が使えないサービスを本当に使うことが出来る」と実践させるのは大きな効果があるということね。
「盲点で思い出したんだけど、『百聞は一見にしかず』には続きがあって『百見は一考にしかず、百考は一行にしかず、百行は一果にしかず』とも言うのよ。つまり、聞くは見るに劣り、見るは考えるに劣り、考えるは行動するに劣り、行動は成果に劣るという意味よ」
永原先生がことわざを引用する。
あれに続きがありそうな気はしてたけど、本当にあったとは知らなかった。
「あーそういえばあったわねえ……」
「でも後世の創作とも言われているよね」
「でも正論だよねえ……」

永原先生によれば、「百聞は一見にしかず」の他にも様々なバリエーションが考えられているという。
元の「百聞は一見にしかず」は有名なことわざではあるが、その他の言葉の知名度は低い。永原先生も、この話題になって思い出したほどだったのだから尚更のこと。
つまり、いくら「ＴＳ病で『男に戻りたい』と思ってはいけない。それは自殺への一直線」と言われても、実際に自殺していく様子を見なければ実態もわからないし(あたしはそんなの見てないけど)、自殺の実態を見たとしても、そこから考えなければそれ以上の学びは得られない。
逆に言えば、聞いた情報だけで正しく考えられるのは恵まれている証拠。
あたしも、ここにいる正会員・普通会員たちも、みんな「成績がいい」と言われた人たちばかりだから、自然とそうしたことがわからなくなっていた。
そして、実際に女の子になる決意をしてカリキュラムを実践するのが「一行」、しかし、半端な気持ちでカリキュラムを実践してもうまくいかない。
あたしや幸子さんのように、具体的な成果を出して、初めて「正しい道」に入れる。
そう思えば、下地があったとは言え、聞いただけで行動に移せたあたしは、確かに恵まれている。
あたしはこの会合で、もう一つ、恵まれていることを実感した。
女性としての自覚を植え付けさせるのがカリキュラムの目的だけど、やはり女性用下着の利便性と同じで「女性は得なんだ」という視点をもたせるということでカリキュラムへの抵抗感は格段に減る。
もちろん北風も必要だけど最初は太陽から入るべきということが今回の趣旨。
いきなり「あなたは不老です。女として生きれば数百年数千年行きられるけど、男に戻りたいと思ったら自殺ですよ」と言われても、脅迫に聞こえてしまい、反発してしまうのかもしれない。

「それじゃあ、石山さんは患者にはどういう意味で説明したらいいと思う？」
「はい。カリキュラムの前段階として、『とりあえず女の子の生活をしてみよう』という意味で入れるといいと思います」
やはり、幸子さんの成功例を見るとカリキュラムの前に「女の子体験」として挿入するのが良さそうだと思う。
「だいたい固まってきたみたいですけど、異議のある人はいますか？」
「「異議なし！」」
あたしと永原先生を除く１０人が一斉に「異議なし」の声を上げる。
「ではカリキュラム改良案として前段階の新プログラムの創設については全会一致で可決とします」
永原先生が全会一致の宣告をしてくれる。
あたしは、正会員の中では一番若輩だが、今日の議題はあたしの提案がほぼ全面的に導入された。
「では石山さん、これについてあなたの更に具体的な考えを教えて下さい」
「はい、日程は1日でまずレディース・デー、漫画喫茶の女性専用スペース、難しいならレディース・デーの前に鉄道の女性専用車両で代用でもいいでしょう。とりあえずまずは『女性の得な部分』を見せるんです。時間に余裕があれば、女性の多いお店などに行くのもいいでしょう。そして夕方から夜になったら女湯、あるいは女子更衣室のある所に連れて行きます」
「女性も悪くないと思わせておいて、徐々にハードルを上げて、退路を断たせる。細かい所も含めていい案ですね」
「ええ、餌を垂らし、食らいついた所を一気に引き上げるみたいです」
永原先生と比良さんがあたしの提案を受け入れてくれる。
「うーん、でもこの内容を1日では厳しいと思います。特に地方ではそうそう都合よく行かないですから、特に女湯やトイレ以外の女性専用スペースを見つけるだけでも難しい地域もあります」
しかし、別の正会員が異議を唱えて来た。
確かに正論。やはりあたしたちも見落とすことは多い。

「うーん、そうすると、地方用のプログラムも考えないといけないわよね」
永原先生が唸りながら言う。
そもそもこのプログラムの原案となった幸子さんとの遊びも、幸子さんをわざわざこっちに呼び寄せていた。
協会負担で呼び寄せるという提案も出たが、予算を圧迫するため比良さんに却下された。
ともあれ、地方の温泉などを使って代用することにし、レジャー施設なども、そこの県庁所在地やそれなりに大きな地方都市を使うことで、暫定のプログラムが出来た。
「さ、ここから煮詰めていくわよ」
永原先生の号令とともに、更なる煮詰め作業が行われる。
レディース・デーの後に使う女性専用スペースは、あたしの場合は漫画喫茶だったけど、鉄道の女性専用車両の方がいいのではないかという声を出た。
一方で、女性専用車両では「女性の現実」を無駄に見せることになってしまうから、また少女漫画の課題も予習できるため、個室の漫画喫茶の方がいいという意見もあった。
また、東京などに遠征させて、夜行バスなどで「女性専用」を使わせるという意見があったが、永原先生が「バスは事故率が高いため、なるべく避けたい」として反対もしていた。
また、ＴＳ病以前にスポーツに打ち込んでいた人の自殺率が際立って高いというデータもあり、ジムやヨガなどの「女性専用」スペースを使わせてそれを緩和するという案もあった。
これについては「ジムは身体能力の差を思い知らされてかえって悪化しかねない」とあたしが異議を唱えたので、お流れになってしまった。
また、ヨガに関しては、インターネットに詳しいに人だと、若い世代でも未だにとある問題を起こした連中を連想する層が一定数いるらしく、またシャワーや更衣室の事もあってハードルが高いとして廃案になった。

結局、スポーツなどに打ち込んでいる人に対する対策は、今日はまだ立てられなかった。

「ふうお疲れ様、ひとまずこれで、次にＴＳ病になった人がいたら、試してみます」

「はい。お願いします」

「それじゃあ今日は解散」

正会員たちが席を立つ。すぐに用事で帰る人も入れば、立ち話している人も居るし、数人で話しながら帰る人もいる。

「石山さん、お疲れ様」

「あ、永原会長！」

「石山さんのこれ、すごく大きな一歩になると思うわ」

永原先生が、明るい笑顔で言う。

「う、うん……」

「もちろん、自殺率は高いままになるだろうけど、少なくとも現状よりは良くなりそうだわ……１０年位見ないとわからないけどね」

「じゅ、１０年ですか……」

「うん、この病気は数そのものが多くないからね」

「そうですよねえ……」

やっぱり、まだ１０年後さえ思い浮かばない。

ちょっとだけあたしが、ここの仲間と疎外感を感じる瞬間。

でも、仕方ないよね。そのうち、うまくいくと思う。

# 浩介くんの両親

ピピピピッ……ピピピピッ……

目覚まし時計の音とともにゆっくり意識を回復する。

今日は１２月２４日、待ちに待ったクリスマスイブ。

今日から明日にかけて、浩介くんとのデートをして、そして夜に天文部で天体観測、その後家に戻って浩介くんと初めてのお泊りデートをする事になっている。

１２月も下旬、今年ももうすぐ終わりとあって、外はかなり寒い。

冬のデートは防寒が大事になる。夏みたいに露出の高い服もいいけど、寒そうなのは浩介くんが心配してしまう。

「寒そうだねえ……」

あたしはお人形さんがそこまで厚着じゃない事に気付いた。

お人形さんの「冬セット」を取り出してコート、マフラーを着せてあげる。

……うん、これでお人形さんも暖かそうになったわ。

お人形さんと遊んだら、続いて自分の服を着替える。

あたしはくるぶし丈のロングスカートに、ぴったり防寒がバッチリのタイツを組み合わせる。

そういえばこのスカートは、あたしが女の子になって初めて穿いたスカートでもあった。

どうして穿こうと思ったのか、今では動機も思い出せない。ただ何となく、女の子になるという決意をした後のことだから最初は単なる興味本位と数日後に備えての予行演習という意味だったかもしれない。

これを穿いて母さんの前に現れた時、母さんはあたしがスカートを穿いていたことそのものに驚いていた様子だったのを覚えている。

今はもう、あたしがスカートを穿いているのは当たり前すぎて誰も何も言わないけど。

コートは黒いコートで優一時代に来ていた服とあんまりデザインが変わらない。

あたしはとにかく冬が苦手。優一の頃は夏のほうが苦手だったけど、とにかく手足の冷えっぷりが半端ない。
冬になってからというもの、女の子になったばかりの頃みたいに、男女の違いに戸惑うことが増えた。
でも、最初の頃に比べれば修正も早いし大丈夫。
やっぱり半年も経っていると違うみたい。
そういう意味では幸子さんは大変だ。
本当のことは分からないけど、同じ患者でも夏にＴＳ病になった方が自殺率低いんじゃないかと思う。
夏なら暑いから女の子の体質で更にミニスカートを穿いたりして涼しいことに気付けば「女の子の良さ」を実感できるから。

「おはよー」
「優子おはよう。今日は朝食を全部頼むわね」
「はーい」
母さんから朝食の全権委任を頼まれた。
丸一日あたしが家事の全てをするという日はまだ訪れていない、実は幸子さんと遊んだあの日に予定していたらしいんだけど、協会の正会員としての仕事のために中止になった。
今日は父さんと母さんもお泊り旅行。
もちろん、浩介くんとお泊りデートするために体よく追い出したとも言えるけど。ともあれ今日は浩介くんと近くの大きな電気屋さんでデートすることになっている。
そこは家電からマニアックな自作ＰＣパーツまでバリエーションに富んでいる。
電気屋さんはあたしの好きなデートスポットで、浩介くんも特に好きだという。
浩介くんのＰＣはお父さんから引き継いだ自作ＰＣで、性能も悪いため、バイト代を使って時折「改修」しているのだという。
そういえば、あたしのも自作だったかな？
中学１年生の時にやっぱりお父さんから「余分なパーツでもう一個

ＰＣができた」とかなんとかでもらったもの。
こっちは古いながらもＣＰＵが「ｉ７」を名乗っていて、今のところ用途上問題は起きていない。
ＰＣの知識は浩介くんの方が上で、浩介くんも饒舌になってくれる。
また、家電コーナーではマッサージ機であたしが肩もみを、浩介くんも歩き疲れた時にふくらはぎをマッサージしてもらう事が多い。
浩介くんは「いつか買いたい」何て言っていた。
あたしとのデートのためにアルバイトもシフトを増やしたらしい。
あたしもバイトしたいところだけど、既に協会の仕事もあるし、一応幸子さんの仕事で４万の報酬が入ったのでしばらくはそれを使っていきたい。
でも、拘束されたのは初めて会った時の１日、小谷学園での「女子高生体験カリキュラム」での半日、そして幸子さんに女の子としての自覚を植え付けさせた「例の旅」の半日、そしてカリキュラム中のテレビ電話でのカウンセリングだから、案外これで４万はでかい。それだけ成功率が低いという意味だけど。
実際幸子さんとの旅は実質遊び半分だったし。
そんなことを考えつつ、あたしは３人分の食事を作り、食卓に並べる。
「お、今日は優子か」
「うん、そうだよ。お父さん、あたしの料理のほうが美味しい？」
「え!?　あの、いやその……」
あたしと母さんが父さんを見る。
長い沈黙が続く。

「お母さんだって、まだ半年の優子に負ける訳無いわよ」
「あはは、母さん、油断してると……」
あたしと母さんは父さんから目をそらし、父さんそっちのけで火花を散らす。
ミスコンの時と同じ、女の戦場の空気。

「ふ、二人どちらかなんて決められないでしょ！」
父さんはちょっと怒った感じで言う。
うん、これ以上はやめておこう。
父さんはこういう空気は苦手だが、多分「優一」もそうだったに違いない。
やはりミスコンで女としてのプライドが高くなったと思う。
普通に考えれば、あたしは母さんから家事を学んだだけで、自分なりの工夫というのはまだ何も出来てない。
だから、こんな勝負勝ち目ないのに、つい意地を張ってしまう。
強がったりするような意地はとっくの昔に捨てたけど、「女の子らしさ」のプライドは高まるばかりだと自覚させられる。
「と、とにかく食べようよ……いただきます！」
「い、いただきます……」
父さんが強引に話題を遮り、あたしたちは黙々と食べる。
「優子、お泊りデート頑張ってね」
「うん」
浩介くんは責任取りたいと言っているけど、もちろん隙きあらば誘惑していく方針は変わらない。
ただし、露骨すぎると嫌われるから、慎重にしないと。

「それじゃあ、お母さんたち行ってくるからね」
「うん、気をつけてね」
あたしは両親を見送る。
約束の時間までまだかなりの時間がある。
デートが終わったら天体観測に直行することになっているから。
ふと、テレビ電話が目に入る。
これなら、浩介くんに姿も写せる。
浩介くんは前回の電気屋デートの時に買ったばかり。
そうだ、ちょっとかけてみよう。
あたしはボタンを操作し、浩介くんの家にかけてみる。
モニターはテレビのものを使う。

電話らしい音が聞こえ、ガチャッという音とともに画面が映る。
「もしもしー」
「!?」
電話に出たのは、知らない女性だった。
「あれ？　どちら様ですか？」
テレビに映った女性が、不思議そうに言う。
「え、えっと……あたし、石山優子です」
「石山さん……えっと、どういった要件で？」
「そ、その浩介くんは……!?」
「あー！　もしかして浩介の彼女!?」
電話で話しているのは浩介くんのお母さんと見て間違いない。
「お、どうしたどうした？」
1人の男性が近付いてくる。
「え、えっとその……」
「浩介ならまだ寝てるぞ？」
「あ、そうですか……」
午後からデートだから別にそれでもいいんだけど。
「へえ、私達もいるんじゃないかって思ってたけど……すごいかわいい彼女じゃない！」
「か、かわいい……ありがとうございます……うん、よく言われます」
やっぱり、浩介くんの両親に面と向かって言われるとちょっと照れくさい。
「おいおい、あの浩介の彼女が……こんなかわいい子だったなんてよお……」
ガチャッ
テレビ電話の奥からドアが開く音がする。
両親も振り返る、あたしが見ると明らかに浩介くんだ。
「あー！」
浩介くんはびっくりしてこっちに近付いてくる。
「もう、勝手に出ないでって言ったじゃねえか！」
「ごめんごめん。でもどうして黙ってたのよ」

「そうだぞ、こんなかわいい子、どうしてすぐに紹介してくれなかったんだ!?」
テレビ電話がつながっているのに、浩介くんとその両親が親子喧嘩を初めてしまった。
「あ、あの……」
「あら、ごめんごめん。石山優子さんでしたっけ?」
あたしが声をかけると、慌ててお母さんが取り繕ってくれる。
「はい、石山優子です。浩介くんとその……同じクラスです」
ともあれ、向こうの悪い空気を一掃するためにあたしもその話に乗る。
「かわいいわねえ……こう、オーラが違うよ」
「うん、テレビに出てくるアイドルとか女優なんかよりよっぽどかわいいじゃねえか」
あたしが女の子になったばかりの時と同じ感想を浩介くんのお父さんが言う。
「えっへん、あたしは今年のミス小谷学園なのよ」
「あー! そういえばそうだった! 文化祭で見たぞ!」
お父さんが手をパンと叩いて、思い出したかのように言う。
「あー、確かにあのメイドしてた子よね。水着審査がちょっと狙いすぎちゃってたわよね」
やっぱり言われてしまった。
「もしかしてお母さんは桂子ちゃんに入れました?」
「いいえ、私は永原先生に入れました」
「僕は優子ちゃんに入れたぞ。浩介は聞くまでもないか」
お父さんの視線がテレビ電話越しでも分かるくらい胸に集中している。
あたしが試しにちょっと体制を上げるとお父さんの視線が上に行く。
「お父さん、どこを見てるの?」
あたしが胸の下に腕を組んで言うと、お父さんが慌てて視線をそらす。

「うー、それはその……」
「もう、ダメでしょ。優子ちゃんは浩介の彼女なんだから」
お母さんがお父さんを叱りつけている。
ちょっと悪い事しちゃったかな？
「ごめんなさい……」
お父さんがうなだれたように言う。
「あーその、あたし慣れてますし、男性の本能ですから仕方ないですよ」
「うおお……性格まで聖人だ……！」
あたしも気持ちが痛いほど分かっちゃうし。
「もう、浩介にはもったいないわよねえ」
浩介くんの両親からも褒められた。
「でも、あたしだって、浩介くんが最高なのよ……！」
「お、おい優子ちゃん！」
浩介くんの声でハッとする。
しまった！　両親がいる目の前でいちゃついてしまった。
「あらあら、優子ちゃんも浩介に惚れたの？」
「うーん、実はあたしの方から惚れたって感じなんです」
浩介くんがあたしのこと好きになったのはもっと前だけど経緯はそんな感じ。
「へえ、お父さんお母さんにぜひ聞かせてほしいなあー」
やっぱり、経緯を知りたいのはみんな一緒。
学校のみんなは知っているけど、一応浩介くんに確認取ろう。
「うーん、あたしは別に話してもいいけど……浩介くんは？」
「ああうん、いいぞ」
「うん、実は8月の林間学校の時に――」
浩介くんの了承をもらったので、あたしは浩介くんに惚れた経緯を話す。
林間学校の実行委員で助けられたこと、最終日にナンパからあたしを守ってくれたことを話す。
「へえ、うちの浩介かっこいいわね」

浩介くんの両親にとっても、自分の息子が体を張って女の子を守って女の子に惚れられたのはさぞ鼻が高いだろうと思う。
「うん、浩介くんは力も責任感も強くて、どっちかというとあたしの方が惚れてる感じだもん」
浩介くんはやっぱりうつむいて顔を赤くしている。
多分あたしも顔が赤いと思う。
やっぱり人前でののろけ話はどうしても顔が赤くなってしまうわね。
「しかし、浩介が鍛えてたのがこんなところで役に立つなんてなあ」
「それだけじゃないわよ、夏の海の時は――」
あたしは浩介くんに特に深く惚れるエピソードの一つになった3人のナンパ男から身を張って守ってくれたことを話す。
「浩介、高校入ってから荒れてたと思ってたのに、やっぱり責任感強いんだな」
お父さんが関心して言う。
あたしはちょっとだけ優一のことを思い出して憂鬱になる。荒れた原因はあたし自身だから。
ミスコンの様子からあたしがＴＳ病だということは両親にもバレているはず。
でも、あたし自身が浩介くんが一時荒れた原因でもあるということや、は最初はあたしは浩介くんにいじめられていたことはまだ話せない。
「うんうん、体を張って、自分のことを守ってくれるなんて、惚れるに決まってるわよね」
母さんが、あたしの惚れ方に同調してくれる。
この経緯を話すのは楽しい。だって、みんな「そりゃあ惚れるよね」って言ってくれるもの。
これを聞いて変な感想を抱く人はいないから。
「そういえば、ミスコンの時、5月初めまで男性だったって言ってたけど――」
「あ、それなんですけど――」

「え!?　この人性転換手術なの!?」
　やっぱりこの誤解が出てくる。
　最初の高月くんと同じ。
「いいえ、違います。性転換手術した人は女の子の日も来ないですし、赤ちゃんは産めませんが、あたしは妊娠して、赤ちゃんも産めます」
「ええ!?　どういうこと!?」
　ＴＳ病は知名度こそ高いけど、極めて珍しい病気だから普通の人は考慮しないらしい。
「あたし、ＴＳ病なんです」
　浩介くんの両親が固まっている。
「てい、ＴＳ病って確か……」
「若い男性がなる病気ですよね!?　ものすごい珍しいけど、老化しなくて何百年と生き続けるっていうあの……？」
　とは言え、そのインパクトでよく知られているから病気の説明はいらないのが不幸中の幸いだわ。
「はい。今年５月８日の授業中に、お腹が凄く痛くなって、そのまま病院に運ばれて、翌日に気付いたら女の子でした」
　あたしがあの日のことを簡単に説明する。
「へえ、すごいわねえ……」
「本当、どこからどう見ても女の子そのものなのになあ……」
　両親が関心している。
「ところで、今更なんだけど、優子ちゃんどうしてテレビ電話を？」
「ああうん、午後のデート前に浩介くんとちょっと話したいかなって。お父さんお母さん家に今いないですから」
「そ、そうか……」
　浩介くんのお父さんも、そこまで深く追求してこない。
「ねえ、優子ちゃん。ちょっと家に来てくれる!?」
　浩介くんのお母さんが言う。
「おい、場所は――」
「分かります」
　あたしが浩介くんのお父さんの言葉を遮って即答する。

うん、やっぱり少しでも、浩介くんと居たいし、これは渡りに船だわ。
「そうそう、優子ちゃんって家事とか出来る？」
「はい、少しくらいなら」
母さんに習っただけだけど。
「じゃあちょっとやって見せてくれるかしら？」
「ええ!?　……分かりました」
あたしは林間学校のときにも「家庭的」と言われていたけど、あたしの母さん以外の主婦からの評価も欲しい。
そういう意味でも、とてもいい機会だと思う。
「じゃあ電話切るわね。すぐにそっちに行きます」
「はーい、待ってるわ！」
浩介くんのお母さんの声で、テレビ電話が切れる。
うん、すぐに行こう。
あたしはコートを持って、予定よりも数時間早くに家を飛び出すことにした。

# 気に入られた優子

「うー寒い寒い……」

思わず声に出てしまうほど、今日はよく冷える。

でも、浩介くんの家に行ける。あの時みたいに二人きりじゃないけど、それでも楽しい空間。

そこへ向けて進んでいるんだと思えば、あたしの気持ちも幾分楽になった。

北風が強くなる、足元まで伸びるスカートの中に、風が容赦なく入り込んでくる。

冬の北風が強い時、今は大丈夫だけど制服ではやはり黒パンストを穿いているとは言え、めくれたら見えてしまうだろうから十二分に注意しなきゃいけない。

うーん、最初の服選びの時に黒いパンツも買っておけばよかったかな？

駅で電車を待っていると、いつものように放送が流れる。

電車が入る時の風がやっぱり寒い。

中に入ると暖房が効いているのでひとまず浩介くんの家の最寄り駅までは安心できる。

冬の厚手のコートなら胸も目立たず、周囲の視線も和らぐかなと淡い期待を抱いていたものの、あたしの胸はそんなのお構いなしに膨らみを主張してくる。

むしろ、冬場だと胸のある女性でも目立たなくなるせいか、あたしの胸は更に目立つ結果になる。

この季節、男性のエロい視線よりも、女性たちの殺意の視線の方が目立つ気がする。

浩介くんが、あたしとイチャイチャしているとクラスの男子から殺意の目線を向けられて、それが気持ちいいって言ってたけど、あたしもまた、そんな気分になる。

肩こりは相変わらずひどいけど、胸が大きくなるというのは女の子

らしさの象徴だから、小さくするなどというのは考えにも及ばなかった。
さすがに、ブラジャーのサイズの問題もあるから、これ以上大きくなるのもちょっとあれだけど。でも大きくなったからって小さくするつもりは毛頭ない。
電車を降りて、浩介くんの家へ。
呼び鈴を押して見る。
ピンポーン！
「はーい！」
中から、さっき聞いた女性の声が聞こえる。
「あ、いらっしゃーい！」
浩介くんのお母さんの声が聞こえると、すぐに姿を現す。
「いらっしゃい。うちの浩介がお世話になってます」
「ああいや、その……お世話になってるのはあたしの方で……」
「……まあいいわ、とにかくあがってちょうだい」
「はい」
お母さんに促されて玄関に入る。
「お邪魔します！」
浩介くんの家に入るのは2回目。1回目は2人きりだったけど、今回は両親も居るから見える空気は違う。
途中トイレが目に入る。
ああ、そういえばあたしはあそこで……あーやめておこう。
「それにしても、生で見るとすごい綺麗ですよね」
「そうですか？　確かに、こんな顔と身体ですし、自分のこと美人だとは思っていますけど」
あたしのレベルだと美人じゃないなんて言ったら謙遜じゃなくて嫌味になっちゃうし、ミスコンであたしに負けた永原先生や桂子ちゃんにも失礼ということになっちゃう。
「ふふっ、自信に溢れた美人って好きよ」
ともあれ、浩介くんのお母さんの印象もいいみたい。
あたしは将来ここで……ってまだ早い早い。

でもどうしても意識しちゃうのよね。
「お、いらっしゃい。うおお、さっきテレビ電話で見た時と変わらないな……浩介は幸せものだぜ」
「ええ、こんなかわいい子の彼氏だなんて」
浩介くんの両親もあたしのことを褒めてくれる。
だけど、ここに来たのは、あたしはそういう表面的な美人というだけじゃないということ見せつけるためでもある。むしろここからが本番と言えるわね。
「あ、優子ちゃんいらっしゃい」
「うん、浩介くん来ちゃった」
「悪いな、うちの両親が……」
浩介くんがちょっと申し訳なさそうに言う。
「ううん、いいのよ、浩介くんに早く会えるならあたしも嬉しいから」
「優子ちゃん……お、俺も嬉しいぞ」
あたしと浩介くんがまたいい雰囲気になる。
「はいはい！　そこまでそこまで！」
お母さんに強引に止められてしまった。
まあ、しょうがないわよね。
「とりあえず、優子ちゃん、ちょっと私の家事を手伝ってくれるかしら？」
「はい、いいですよ」
もといそのつもり。あたしはカリキュラム後にも母さんに家事を教わっているし、その成果を見せるのも重要なアピールになる。
「じゃあちょっとこの部屋を掃除してくれるかな？」
「はい」
あたしは部屋に置いてあった掃除機を持ち出す。
スイッチを押し、大きな音が出る。
家の掃除機とは全く違う使い心地、吸引力は使いながら覚えるしか無いかな？
とはいえ、カリキュラムでもやったように、あるいは普段の家事手伝いでやったように、部屋の端の箇所は小さい所に入り込めるタイプ

に取り替えて綺麗に掃除していく。
「ほほう、すごいわねえ」
「あれ？　ここが汚れてる」
　あたしは特に汚れが酷いところを見つける。
「あら、ここ汚れやすいのね」
　お母さんが知らないという顔をする。
　ふふっ、どうやらお掃除ではあたしが一枚上手みたいね。
「ふう、こんなものでいいかしら？」
「うん、いいよ。それにしても言葉遣いも女の子そのものね」
　お母さんが関心して言う。
「あーうん、こういう病気になった時に支援団体があってそこでカリキュラムを受けたんです」
「へえ、そうなんだ。どんななんだ？」
　お父さんがほんの好奇心で聞いてくる。
「あーうん、こういう家事とか言葉遣いとか、女の子としての振る舞いとか、そんな感じのよ」
　さすがにおしおきのことは話さないでおこう。
「へえ、大変なんだなあ」
「そうよ、あたしなんて授業中に倒れて救急車で病院に運ばれたその日のうちに『女として生きていくしかない』って言われて、カリキュラムを受けるのを決意したのよ」
「もう一つ聞くけど……ＴＳ病って発症する時激痛だって言ってたけど、どのくらい痛いんだ？」
「うーん……」
　生理の時よりもずっと痛いと言いたいが、お父さんじゃ生理の痛み分からないし、あたしの生理はどうも重い方みたいだからうーん……
　そういえば優一の頃付いてた「玉」を蹴られた痛みはどうだろう？
　あれがずっと続く……うーん、あの時のはそれよりも比較にならない位痛いなあ……
「どうしました？」
「すみません、男女それぞれの痛みを思い出してみたんですが……適

切な表現がないくらい痛いです」
「ヒエー、そんなになのか……」
浩介くんが驚いている。
「そりゃあ、身体を作り変えるわけだもん。女の子の日とか大変よ」
「やっぱりＴＳ病って単なる性転換手術とは違うんだな」
そういう感想が出るのも頷ける。
「ええ、あたしと、そしてうちのクラスの永原先生も、この病気です。さっきも言いましたけど、あたしたちは老化しないということを除けば他の女性達と何も変わりません。私達が欲しいのは、性的マイノリティーとしての権利じゃないのよ」
日本性転換症候群協会の正会員として、これは言っておかないといけない。
「そうですか。つい配慮したくなりますけど」
「二人に聞きますよ？　あたしが何も知らない人だったとして、あたしのことどう思います？　というよりも、初めてテレビ電話で見た第一印象はどうでした？」
「え……それは美人な女性だと思いましたけど」
「ああ、僕も」
「それですよ、それでいいんです。あたしは女の子ですから女の子として見て欲しいということです」
「つまり、下手に考えないほうがいいってことか」
「そうですそうです。それです、第一印象のままに扱ってくれればいいんです」
「珍しいパターンよね」
浩介くんの両親は何かを考え込んでいる。

「ところで、お昼にしますか？」
「そうだな、ご飯にしてくれるか？」
ある程度時間が経つと、そのように言ってくる。
「いつもはお父さんに家事を手伝って貰ってるけど、今日は優子ちゃんに手伝ってもらおうかしら？」

「……出来る範囲でやっていきます」
どんな料理が出るかも分からないので、ここは謙虚に行きたい。
「そうですねえ……今日はそばを茹でようと思ったんですけど……優子ちゃんの分も……あるわね？」
「あ、あのあたしは――」
「ああうん、いいのよ、私が呼びつけたんですから」
って、そうよね。
でも、そばなら作ったことあるし安心ね。
「うん、あー、それでなんですけど……あたしあんまり食べないんで」
「ああ、うん、優子ちゃん女の子だもんね」
ともあれ、そばを茹でるて、更に野菜も切るという。
あたしがそばを茹で、お母さんが野菜を切るという担当。
「ところで、この中で嫌いな野菜とかある？」
お母さんが野菜を取り出すとあたしに聞いてくる。
うん、特に無いわね。
「ああうん、大丈夫よ」
「スープの濃さとかどんな感じ？」
「えっと……どうでしょう？　薄かったら醤油を足せばいいですし、逆に濃いならお湯を足してみて考えます」
というより、濃いめ薄めと言っても個人差あるしそう答えるしかない。
「分かりました」
そんなこんなで、料理が始まった。
そばを茹でる時間を見てタイマーをセットする。でもまだ押さない。
水を張ってお湯を沸かす。
そばを茹でる釜と野菜やスープを作る鍋は違う。
沸騰するまで少し時間があるので、お母さんの野菜の切り方を見る。
うーん、ちょっと下手だなあ……
「あ、あの……」

「ん？」
「ネギはですね……その……ちょっといいですか？」
　見てられないので声をかける。
「ええ」
　あたしがお母さんに変わって野菜を切ってみる。
「この方が手早くそして簡単に切れます。それからニンジンのように煮えにくい野菜はもう少し薄く……こんな感じでいいと思います」
　あたしが母さんに習った方法で実践してみる。
「キャベツはこのようにすると……芯がきれいに切れます」
　これらはあたしの母さんの受け売りだけど、母さんの女子力高かったのかな？
「あ、ここはこうするよりもですね――」
「何だ何だ、完全にお株を奪われているぞ」
「すげえな優子ちゃん、うちのおふくろ、面目丸つぶれじゃねえか」
　浩介くんと、お父さんがあたしに感心している。
　お湯が沸騰してきたのであたしはそばを入れる、お母さんの方は出汁の素やスープの素などを使ってスープを作り、その上に野菜を入れていく。
　って、また間違えてるわ！
「あ、一気に全部入れると、煮えにくい野菜が固くなったり、柔らかい野菜が柔らかくなりすぎちゃいますよ」
「え!?　ああ、そうよね……すみません、あまり気にしてなくて……」
「ふふっ、次から気をつけてね」
「……はい」
　浩介くんのお母さんがシュンとした表情で言う。ちょっとプライド傷つけすぎちゃったかな？
　野菜がある程度煮えるにはそれなりに時間がかかるわけだけど、野菜によって誤差が多いから、それを見極めないといけない。
　もちろん切る厚さなんかである程度制御は出来るけど、どちらにしても今みたいに一気に全部入れるのは良くない。
　ピピピピッ……ピピピピッ……ピッ！

「んーっ！」
タイマーの音がなったのでタイマーを止めると同時に、火を消し、素早く流しに持っていってざるにそばをぶち撒ける。ここは力仕事で、あたしの腕力では結構辛い場面。
「ふう……」
次にざるを持って湯切りをする。伸びないためにもこれは念入りにやる必要がある。
「えいっ！」
そんな中で、そばをまるごと裏返しにする必要もある。
緊張の一瞬だけど、幸いなことに失敗したことはまだ無い。これをしてから、ちょっとだけ腕力は改善した気がする。
そして、野菜が煮えてきたら、それぞれの容器にまずスープと野菜、そしてそばも入れていく。
４人分で来て完成。
浩介くんのお母さんの方で、お椀を運び早速４人で昼食となった。

「「いただきます！」」
全員で食べ始める、あたしが一番少ない量。
「お、この蕎麦いつもより美味しいな」
お父さんが一口食べて言う。
「でも素材変えてないわよ」
「あ、でも野菜はいつもとあんまり変わらないような……硬かったり柔らかかったり……」
浩介くんが言う。いつもこんな感じなのね。
「うー」
浩介くんのお母さんが恥ずかしそうにしている。
女の子になってまだ半年の、１７歳の、それも女の子歴半年強の女の子に家事で負けてしまった。
主婦としてのプライドを傷つけてしまったのはやっぱり申し訳なく思ってしまう。掃除のときもだけど、ダメ出ししたり実力を見せすぎちゃうのも考えものだよなあ。

「ま、いいんじゃねえの。この子は将来ここで暮らすことになるかもしれねえからな！」
「ぶふっ……ちょ、ちょっと！」
お父さんの一言にあたしが思わず吹き出しそうになる。
それはあたしが浩介くんと結婚するということ。
「でも、何かもう結婚させちゃってもいい気がするわ」
「え、いやその――」
「だってさ、優子ちゃん家事もできるし性格だっていいし、顔はかわいいし、スタイル抜群で、しかもＴＳ病だから老けることもないし男心も分かってくれるし……正直日本中探して優子ちゃん以上の優良物件って殆ど居ないだろう？」
浩介くんのお父さん言葉。
思えば今まで、男の子にとっての理想の女の子を目指して頑張ってきたと思う。
その成果が出ていると考えればある意味ではこの評価も当然かも知れない。
「うーん、確かに浩介やお父さんの男としての気持ちは分かってくれそうだけど……それでも早いと思うわよ」
浩介くんを好きになってから、浩介くんに好かれようとしたけど、結局やっていることは変わらなかった。
確かに女の子になりきったＴＳ病の子ほどモテる人種はいないと思える。
協会で他の会員を見てきたけど殆どの人が童顔でかわいらしく、スタイルは個人差があるけど、顔のかわいさを考えればそこまで大きな問題ではない。
そして性格面も、カリキュラムにしても、目標となるのは「男を好きになる」だから、「いかにして男に好かれるか」ということに焦点が当たる。
ＴＳ病は男としても人生を歩んできたから理解者にもなれる。
水泳の授業でも男子たちにエロい目で見られているあたしに対して桂子ちゃんは怒ってたけど、あたしは高月くんを擁護しちゃった

し。
……でも、これは重要な事だと思う。
その後も文化祭などでも「男はエロ」ということを知っているあたしが、女子に非難される男子を擁護する事が多い。
「やっぱ優子ちゃんも作ってるって思って食べるとおいしいな、このそば」
「えへへ浩介くん、今日のお泊まり会、今度はあたし1人で料理を披露するから楽しみにしててね」
あたしが笑顔で言う。
「ああうん……」
浩介くんはほんのり照れた感じで生返事する。
「そういえば、優子ちゃんの両親には？」
「あーうん、浩介くんのことは話しているわよ。でもまだ直接の面識はないわね」
「そうか、うん、家には？」
「今日明日と、地域の慰安旅行に行ってます」
本当はあたしの家でデートさせるために体よく追い出しただけだけど。
「そうですか……一度話し合いたいわね」
「そうだな、これから長い付き合いになるんだし」
「だー！　二人とも、ま、まだ結婚したと決まったわけじゃ――」
当事者そっちのけで結婚話を続ける両親に、浩介くんが抗議の声をあげる。
「浩介、こんないい女の子、他には居ないわよ。しかも、優子ちゃんの方が惚れてるんでしょ!?　だったら善は急げよ。ここで逃したら一生後悔するわよ！」
「そうだぞ！　テレビ電話でいいから、まずは石山さんのところにも話さないとな」
出会って一日で結婚話をしたくなるくらい高く評価してくれるのは嬉しいけど、あたしとしてもあんまり焦りすぎてほしくないかなあ。

「と、とにかく、ごちそうさま！」
いち早く食べ終わった浩介くんが、流し台に容器を持っていって逃げるように部屋へと移動してしまった。
「ごめんなさいね、うちの浩介が」
何故かお母さんに謝られてしまう。
「ああいえ、大丈夫ですよ」
あたしはここでも食べるのが遅く、一番量が少ないにもかかわらず、食べ終わったのは最後だった。
「あ、お皿洗っておきますね」
「すみません」
「いえいえ」
あたしはそう言うと、キッチンの自動皿洗い機を引き出して食器を入れていく。
「よし、こんなものかしら？」
あたしはパワーを「普通」に合わせてボタンを押す。
「へー、この量なら普通でもいいんだー」
「お母さんはいつもどうしてます？」
「ああいやうん、もちろん普通や弱めにすることもあるけど、大抵は一杯まで入れて『強』に設定してます」
「……でもいっぱいいっぱいにすると、機種によっては『強』でもまずいことあるのよ」
「……そういえば時折洗い残しがあることあるわね」
「そしたら余計に水道代かかっちゃうわよ」
ついあたしがまたダメ出ししてしまう。
「ごめんなさい……」
「ああいや、すみませんこっちこそ。主婦としての気持ちがまだよく分からなくて……」
慌ててあたしも謝りに行く。
これ以上プライド傷つけちゃうと今後の家庭にも影響が出ちゃう。
「いいのよ気にしないで。修行不足の私が悪いだけだから。今日のことはまた明日以降に活かしておくわ」

「そう言ってもらえると助かります……じゃああたし、浩介くんの部屋に行きます」
「いってらっしゃーい」
両親に見送られ、浩介くんの部屋へとあたしは向かっていった。

# クリスマスイブの電気屋さん

コンコン
「入っていい？」
「あ、いいよー」
浩介くんから許可をもらい、開ける。
例え結婚しても、このやり取りはしないといけないよね……って、早速あたしも毒されているわね。
「ふう」
一仕事終わったという感じであたしは息をつく。
「ゴメンな優子ちゃん、うちの両親が迷惑かけて」
「ううんいいのよ」
「でもよ、いますぐ来て、家事手伝ってはちょっとなあと思うんだよ」
「いいのいいの、あたしだって、浩介くんのお母さんのこと傷つけちゃったし、それにお父さんお母さんが言うように、まだ早いと言ってもこのままの関係が続けばいつかは必要なことだったから、ね」
「そ、そうか……やっぱり結婚ていうのは……」
「うん、考えたことは……あるよ」
大学が別になっても大丈夫という自信こそあったけど、そうじゃなくてもやっぱり結婚というのは意識してしまう。
「俺も、やっぱり意識しなきゃいけないのかなって……両親の様子を見てたら、さ」
「うん、そうだね。でもその前に、デートしたいかな？」
「……うん、俺も」
浩介くんと二人で、今日は電気屋さんデート、そして部活としての天体観測、こちらは桂子ちゃんと坂田部長も居るからデートというわけじゃないけど、終わったらクリスマスイブからクリスマスにかけてのお泊りデートが待っている。
ここがデートスポットになるというのもある意味珍しい。
世間はどこもかしこくも「クリスマス商戦」と言っている。
あたしもクリスマスプレゼントは浩介くんのために用意してある。

きっと喜んでくれるはず。
結婚のことも含め、将来のことを意識しなきゃいけないし、いつか来る「死別」ということについても、いつかは考えなきゃいけない。
それでも、今は先送りにするしかない。
「さ、行こうか」
お昼ご飯も終わり、あたしたちは電気屋さんへ向けて移動することになる。
「あら、行くの？　どこに？」
家を出る前にお母さんに呼び止められる。
「あーうん、電気屋さん」
「へー、またどうして？」
馴染みの薄いデートスポットに、お母さんも驚きの表情をする。
「あーうん、実はあたし、ひどい肩こりで……」
「あーうん、そうだよね……うん」
浩介くんのお母さんが、あたしの胸を見てちょっとだけ嫉妬している風に見える。
あたしは巨乳というより、爆乳としてＴＳ病になったからよく分からないけど、やっぱり貧乳ってコンプレックスになるのよね。
もちろん、肩こりを筆頭に巨乳には巨乳なりの悩みもあるけど、巨乳をコンプレックスにしちゃいけないよね。浩介くんも男の例外に漏れず、おっぱい好きだし。
「とにかく、そういうわけです。この後は天体観測と、あたしの家でデートするので、浩介くんは翌日帰ってきます」
「分かってるわ」
「それじゃ……いってきます」
「いってきまーす」
あたし、次いで浩介くんが「いってきます」をする。
「いってらっしゃーい、イチャイチャしすぎないでねー」
「「はーい！」」
二人で同時に返事する。
うーん、何か相性が良さそうな気がするわね。

「ふう……」
あたしは何の気なしに肩を回す。
「優子ちゃんどうしたの？」
「あーうん、肩こっちゃって……」
「そうか、じゃあ早く電気屋さんに行こうか」
「うん」
浩介くんと駅に向かう、どうしても、あの時を思い出してしまう。
あたしが浩介くんの性欲に訴えかけて、でも浩介くんは「責任取りたい」と必死で堪えた話。
本当は浩介くんの意思を尊重しなきゃいけない。分かっているのに、どうしても、どうしても誘惑したくてたまらなくなってしまう。
女の子の性欲は半端ない。本当に男はエロばかりだが、タガが外れた女の子のそれはもっと凄まじいと思い知った。
……あたしだけかもしれないけど。
ともあれ、電車でもと来た道を戻る。といってもあたしの家は過ぎるけど。
やっぱりあたしと浩介くんでカップルとして歩いていると、注目の的。
あたしは見せつけるように浩介くんと腕を絡めてみる。
「ねえ、何あのカップル……」
「クリスマスだからっていちゃつきやがって」
「あーうぜぇ……」
「ホント最近の男ってダメだよな」
「なあ。どうせデレデレに甘えてるだけなんだろあいつ……」
女２人組があたしたちに陰口を叩いている。
見ると近くの女子校の制服を着た２人組の女だった。
モテない女がクリスマスで僻む。そしてどんどんブスになっていく。
超が付く美人２人を押しのけてミスコンで優勝するくらいのかわ

いくて美人のあたしはこうやってかっこいい浩介くんを彼氏にし、浩介くんを含める周囲からも褒められて自信を深め、ますますかわいくなっていく。
「どうしたの優子ちゃん、機嫌がいいじゃん」
「あーうん、ちょっと気持ちよくてね」
「あーもしかして、あの女たちの陰口？」
やっぱり浩介くんにも聞こえていたみたい。
「うんうん、丸聞こえだってのにねえー」
「そうだなあ……俺も、クラスの男子が妬んでるのは気分いいけど……」
浩介くんが言葉に詰まる。
「うん、気を引き締めないとね」
「そうだな」
ミスコンの時、永原先生と桂子ちゃんに抱いた邪悪な感情。
永原先生と相談して、消そうと決心した心。どうしても気分良くなってしまうのは仕方ないけど、だからといってそれを態度に表したりしちゃいけない。
例えどれだけの時が経っても、あたしは両親からもらった「優一」という名前を汚した罪人だということを忘れちゃいけない。
この病気になって、「今度こそ優しい子になる」という決意を込めて、自分を「優子」と名付けた。
だから、絶対に優子を守らないと。
「あの2人も、ちゃんとすれば彼氏ができるわよ」
「そうだといいな」

「やべっ、聞かれてるよ……」
「にしてもよお、ウチラに彼氏か……」
「出会い、見っけねえとな……」

あたしは心の中で「まずはその言葉遣いと態度から直さないとダメよ」と言うことにした。

駅から出ると家電屋さんはすぐそこ。
商店街が発展的解消を遂げたデパートの隣のビル、映画館が最上階に入っているビルの最上階以外が、電気屋さんのテナントになっている。
浩介くんも最近ちょっと鍛えすぎてて身体が疲れることもあるとのことで、一緒にマッサージ機を使うことになった。
「俺、ちょっと足が弱いんだよなあ……ふくらはぎ？」
「あー、歩き疲れていたりするとそうよねー」
「優子ちゃんは相変わらず肩？」
「うん、腰の方は猫背を治すために頑張ってるから大丈夫なんだけど……肩はもうどうしようもないみたい」
「すごく重そうだもんな……」
「うん、とてつもない錘よ」
もちろん、錘を軽くするのは女の子として、絶対に嫌なところ。
さて、マッサージ機のコーナーにやってくる。
マッサージ機のコーナーはエスカレーターで2階にある。とにかく肩こりを直さないと。
さて、店内はと言えば、案の定クリスマス商戦どうのこうの一色で、内装もクリスマス仕様。
更にお買い物でもらえるサービスもクリスマス関連と、これでもかというくらいにクリスマスを強調している。
しかし、お客さんは家族連れが多く、カップルはあまり居ない。
「マッサージ機はここだね」
以前にもここのお店ではデートしたことがある。
様々なマッサージ機を試用すると言うが、もはや完全に治療目的ではある。
浩介くんもあたしも、今のお金じゃマッサージ機なんて買えないし。
でも、あたしがいかにも肩こりがひどそうな容姿をしているためか、店員さんにあれこれ言われることはない。
ピッ

あたしはマッサージ機のボタンを押して、「肩こりコース」を選択する。
林間学校で永原先生たちと肩こりをマッサージして以来、すっかりマッサージ機の魅力に取り憑かれてしまった。
とはいえ、顔を覚えられない程度にしてあるけど……でも、この容姿じゃ覚えられちゃうかな？
「んーっ！　気持ちいい！」
リクライニングを思いっきり倒してくつろぐ。スカートも足元まであるから、リクライニングも安心。
浩介くんは「ふくらはぎコース」で、疲れた足を癒やしている。
「浩介くん、普段腕と足どっち鍛えてるの？」
「うーん、最近は足なんだ。少し前までは優子ちゃんを守るために腕力だったけど、踏ん張りを付けるためにも下半身も鍛えたほうがいいかなって」
「そうなんだ。あたし、優一だったくせに筋トレとか全然分からなくて……」
「あはは、でも、今はもうそんなの必要ないだろ？」
「うん、浩介くんが筋トレで鍛えている間に、あたしは女の子の魅力を総合的に鍛えるわよ」
わざわざ、浩介くんが得意な「強さ」「たくましさ」「頼もしさ」で勝負する必要はない。
ギスギスしちゃうし、浩介くんもあたしにそれを望んでいない。
あたしの長所だって殺しちゃう。
あたしに望まれているのは「エロさ」「かわいさ」「美しさ」、そして「優しさ」「母性」「家庭的」、これらなら、浩介くんもあたしに張り合うことはない。
女の子らしい女の子だからこそ、男にモテる。
男は、どうしたって男だ。無理に女の子らしくなろうとしても、限界がある。
どうしたってあたしみたいな本物の女の子には勝てない。
でもそれは逆も同じこと。だから、良きカップルになるためにも、

お互いの欠点を補い合って、長所を伸ばしていくべきなの。
あたしは、マッサージで体を癒やしながらそんなことを考える。
「あー気持ちいいーー!!!　そこ、そこなのおっ!!!」
あたしは、機械に意味もなく話しかける。プログラムに心なんてあるわけないけど、それでも、規則的なマッサージで、あたしの方は随分とほぐれた。
……まあ、明日にはすっかり元通りにこっちゃうんだけどね。
「ふう、このくらいかな？」
一通りコースが終わったので、あたしと浩介くんはマッサージ機を立つ。
「自作ＰＣのコーナーに行く？」
「うん、行きたい」
浩介くんの自作ＰＣの話を聞くのは結構楽しい。
これは「男」が残ったというよりも、あたしが父さんから受け継いだ好奇心旺盛な性格がそのまま残っているだけ。
浩介くんの話も楽しいので聞いてて飽きないのだ。
例えば、一口にＣＰＵといっても色々な世代色々な商品があって、今は主に２つの会社がＣＰＵを出しているけど、ここ数年はずっと大手の会社が優位に事を進めているけど、最近は２つ目の会社の方もハイエンドＣＰＵを出して健闘し始めているという。
大手の方も、大きく分けて２つの開発チームがあって、それぞれで切磋琢磨しつつも個性があるとも言っていた。

更に、浩介くんはデータを保存するハードディスクのコーナーにもやってきた。
「ＳＳＤっていうのが流行ってるだろ？　ハードディスクとどう棲み分けるかという問題は、まだ解決してないんだ」
「うん、むしろ結構曖昧だよね」
「ハードディスクにしてもＳＳＤにしても、とにかく複数のメディアにバックアップしておけば、大事なデータは守られるんだ」
「ふむふむ」

「場合によっては、ＳＤカードなどの外付けメディアに保存するのもありだな」
あたしもＰＣを持っているけど、浩介くんほどに詳しくない。
だけどこうやって知識をつけていくと、楽しくなるのも事実。
「でも、作業をはかどらせるためには、モニターを複数にするといい」
「複数？」
「うむ、いろいろな用途に使えるぞ。ただしちょっとした知識も要るから注意してな」
浩介くんはモニターには色々なタイプが有るという。
おなじみのＵＳＢの他にも、ＨＤＭＩとか様々あって、それぞれの説明書をちゃんと読むべきだという。
浩介くんは、モニターをもう一枚買ってサブで使っている小さく古いモニターを更新したいと言っていたが、「ここには気に入ったのがない」ということで、今回は買わずじまいになった。
浩介くんによれば、自作ＰＣは「時期が悪い」と思ってばかりいるといつまでも買えないが、かと言っていい時期というのを見極めないと本当に悪い買い物になっちゃうからそこが一番難しいと言っていた。
デュアルモニタ、確かにスマホやタブレット、ノートＰＣでは、大きな画面を２つつなげるのは難しく、デスクトップＰＣならではのメリットだという。
そもそも、こうした小型機器は、小型化のために「詰め込む」必要が有るため、いわば「持ち運び機能」のために、どうしても基礎スペックは犠牲になりがちとも言っていた。
最近はスマホとＰＣは変わらないなんて言われているけど、浩介くん曰く「それは絶対にない」という。
確かに、デスクトップ型のほうがスペースに余裕があるので、安価で高性能にしやすく、また複数モニタなどの処理も手頃になっている。
また、デスクトップＰＣを「母艦」と表現する人も居るという。浩介くんもそういうタイプだとかなんとか。

「そうだ優子ちゃん、もし良かったらなんだけど」
「うん？」
「優子ちゃんのパソコン、今度俺が見てあげようか？」
「……うん、ありがとう。是非お願い」
浩介くんのありがたい申し出。
「優子ちゃんガラケーなんだろ？　スマホの話題についてこれなくても安心できるぜ」
「そ、そう……」
浩介くんが何やら面白いことを考えている様子。
何だかんだで電気屋さんでそれなりに滞在した。
冬至が１２月２１日で今日が１２月２４日だから、殆ど夜が一番長い日に近い。
だから５時頃でも既に外は暗くなっている。このままなら午後８時前には付くはず。
太陽が落ち、外はますます寒くなっているけど、まだ大丈夫。

「じゃあ、小谷学園に行こうか」
「うん、天体観測、楽しみだね」
あたしたちは駅に向かい、電車に乗って次の目的地、小谷学園を目指した。地味に今日は結構電車に乗っているけど、ＩＣカードの運賃はまだ余裕がある。
デートは一時終了するけど、天体観測は天体観測でまた楽しみにしていたことだから、寂しいという感じはなかった。

# 天体観測

私服姿で学校に行くのは、この学校を受験した時や、林間学校やスキー合宿の時など数少ない。ましてやこんな遅くから行くのは初めてのこと。

前回は黒いロングのワンピース姿を浩介くんに披露した。この時はまだ、林間学校の出発時だったから、あたしはまだ、浩介くんに恋をしていなかった。

でも、浩介くんはあたしのことを、もう好きになっていた。

そんな時期だった。あれからもう、5ヶ月が過ぎようとしていた。

この時間、もう下校時間はとっくに過ぎてはいるんだけど、あたしたちは天文部ということで許可をもらって屋上へ行くことになっている。

ちなみに、この手の許可は小谷学園らしくとても簡単に取ることが出来るとか。

下駄箱にローファーではなく私用の靴を入れるのも新鮮だよね。

浩介くんとともに階段を登っていくが先生1人とすれ違わない。

夜の静かな学校自体は後夜祭でも経験しているけど、あの時よりも静かだし、浩介くんとともに私服だということも違う。

「桂子ちゃんたちもう来ているかな?」

「うーん、とりあえず屋上に行けば分かるだろう」

「ええ」

あたしたちは屋上に続く扉にたどり着く。

「ドア、空いてるかな?」

「空けてみる」

浩介くんがドアに手をかける。

ガチャッ

「空いたぞ」

浩介くんの声とともに、浩介くんに続いて屋上へと入る。

屋上では、1人の人が動いている。

「あ、優子ちゃん、篠原君、こんばんはー！」
「桂子ちゃん、こんばんは」
屋上に居たのは私服姿の桂子ちゃんだった。「こんばんは」といういつもと違う挨拶で出迎えてくれた。
こんな日だけどやっぱり桂子ちゃんもオシャレしている。さすがにスカート丈はあたしと同じくらいの長さにしているし、下にもズボンを穿いているけど。
しかし、よく見ると坂田部長がまだ来ていない。
「あれ？　木ノ本、坂田部長はどこだ？」
「ああうん、機材取ってくるって言ってたわ」
「おう」
「とりあえず、この望遠鏡で目標に合わせるわよ」
桂子ちゃんが望遠鏡を見せてくる。
既に日が落ちてかなりの時間が経っていて、空を見るとおなじみのオリオン座や、ひときわ輝くシリウスも見える。
「きれいね」
「そうだね、屋上なら街の建物の光もそれなりに排除されるのよね」
そう言えば、本当は山の方に行くのがいいとか言ってたっけ？
「でもやっぱ寒いよなあ……」
「うん、あたしも」
風もかなり強く、スカートがはためいている。
足元まで伸びるロング仕様だから膝も見えないけど、普段の制服のスカートなら、もう何回もパンツ丸見えになっているだろう威力。
そういえば、文化祭の時、ここで初めて風にスカートをめくられたんだっけ？
その時は浩介くんが居て……ってダメダメ。今は天体観測の時間なんだから！
とにかく、風力は体感温度を大きく下げるのは間違いないわね。
ガチャ……
「あら、石山さん、篠原さん、いらっしゃい。今日は寒い中来てくださいましてありがとうございます」

「こんばんは、坂田部長」
「こ、こんばんは……」
　あたしと浩介くんがあいさつすると、あたしと浩介くんに坂田部長が一枚の用具を渡してくれた。
「あ、これ懐かしいわね」
「いつ以来だろう？　小学校？」
　場所と時間を合わせれば、見える星空がわかる例のセット、小学校の理科の時間でちょこっとやった記憶がある。
「やり方は知ってますか？」
「ええ、図面を見れば何となく……」
「分からないなら裏に説明があるからそれを読んでくれる？」
「おう、わかった」
「はい」
　浩介くんとあたしは、坂田部長と桂子ちゃんの指導と昔の記憶のもと、現在地現時刻の星空を何とか再現する。
　紙にある星も、実際に見えるのは少ない。
「ここがオリオン座よ。ひときわ目立つわね」
「うん、俺達でもこの星座は知ってる」
　そしてその下にあるのがおおいぬ座、その中でも特に目立つのがシリウス、シリウスは文化祭の天文部の時にあたしがミニチュアを作った星。
「優子ちゃん、この望遠鏡で見てみる？」
「う、うん……」
　桂子ちゃんに勧められて恐る恐る望遠鏡を覗いてみる、それは何かの星団のようで、星がたくさん集まっているように見える。
　１０……２０……ううん、もっとたくさんありそうだわ。
「プレアデス星団、通称すばる。ここではよっぽど運がよくないと見えないわよ」
「そ、そうなんだ……」
「すばるはもしかしたら他のものが有名かもしれませんわ」
　あたしの視力も特段悪いわけじゃない。今日の空気がたまたまき

れいというだけだろう。
「どれ？　何が見えているんだ？　俺にも見せてよ」
「うん、いいわよ」
浩介くんがあたしに代わって望遠鏡ですばるを見てみる。
「……なるほど、そう言えば話に聞いたけど、この星は若い星の集まりなんだっけ？」
「うん、それでも、この星々が出来たのはあたしたちのスケールからすればずっとずっと昔のことよ」
「それにしたってこの数十の星一つ一つが、場合によっては太陽系と同じように惑星を持ってたりもするんだろ？」
「そうですわ。事実は小説よりも奇なり。ですわ」
そう言えば、現代兵器ももはや大半のファンタジー小説より強いっていうしなあ……それにこんな遠くの星のことまで分かっちゃうんだから、人類の技術もすさまじいものだわ。
「じゃあ、次は……ちょっと待っててね」
桂子ちゃんが望遠鏡をちょっと下に持っていく。
「うん、じゃあ次は篠原君から見てみて」
「あ、ああ……」
浩介くんが言われるままに望遠鏡を見る。
「おお、赤い星だ。結構大きいぜ」
赤い星で大きい？
とすると何だろう？
すばるより少し下の位置だから……ベテルギウスかな？
「もしかしてベテルギウス？」
「うん、優子ちゃん正解よ」
やっぱり。
「そうよね、ベテルギウスは比較的近い割にかなり大きな末期の星だから、地球からの見た目が一番大きいんだっけ？」
「うん、と言っても、数百キロ離れた所に野球ボールを置くようなものよ」
そういえばそんな話もしていたっけ？　最近だと超新星爆発の候

補として話題の星だけど、そういえば桂子ちゃん、どうしても生きているうちに見てみたいって言ってたわね。
「すげえよなあ、そんな小さな点でしかない物体が肉眼でもくっきり見えるくらい強力な光を放ってるんだからよ」
「その一方で、太陽系から一番近い星は肉眼では見えませんわ」
「宇宙の格差社会は現実の比じゃないわよね」
　太陽だって、明るさ、重さで言えば、上から数えて1割程度だと言う。
「太陽もね、将来は地球軌道まで大きくなるのよ、明るさもそれに伴って数千倍になるわよ」
「その頃には他の恒星系に移らないといけませんわ」
「でもそれは……」
「太陽が赤色巨星になるのは５０億年後くらいだけど、実際にはその前から熱くなるから、最低でも5億年後までには火星行きが必要ね」
「5億年かあ、永原先生が１００万回よね」
　何の気なしに発したあたしの一言、永原先生の人生でさえ、あたしたちには想像がつかないのにそれを１００万回も繰り返すなんて想像もつかない話。
　そう言えば、5億年何もしないっていう哲学話があったっけ？
「あはは、宇宙や生命から見たら私たちと永原先生の差なんてあってないよなものよ」
「木ノ本さん、いいこと言いますわ」
　桂子ちゃんと坂田部長が盛り上がっている。
「そういば、生物の時間で、生命が生まれたのも３８億年前の話って言ってたな。永原先生が……７６０万回か」
　浩介くんが計算してくれる。
　永原先生も、もうすぐ５００歳だけどまだ２０１８年じゃないから、実際にはもう少し回数が必要な計算。
「永原先生でさえ、小さく見えるわね」
「でもさ、逆に言えばあたしたちの人生なら2億回以上必要なところをたった７６０万回で済んでいるとも言えるわよね」

何の気なしに発したあたしの一言。
「うん、逆にそうとも言えるわね……」
「やっぱり永原先生って凄いですわ……」
あたしのこの言葉に、桂子ちゃんと坂田部長は鮮やかに手のひらを返してしまう。
あたしも、いずれは永原先生のような、とてつもなく長い人生の人と言われるんだろうか？
その時、今いる3人は、おそらくこの世にいない。それどころか、お墓でさえ残っているか怪しい。
桂子ちゃん、浩介くん、坂田部長はベテルギウスの超新星爆発を見られずに、あたしは寂しく一人で見ているのかな？
……最近、将来の別離のことを考えることが増えた。これも、協会の正会員になって、自分より遥か年上の少女たちに囲まれるようになったからかな？
ぴゅううう……
考え事をしていたら、また寒い風が吹く。
「うー寒い」
「そうだね、一旦中入って休む？」
「ええ、そうしますわ」
あたしたちは、いったん屋上のドアを開けて、屋内に退避する。
屋内も暖房が効いているわけではないけど、風が遮られる分、体感温度は幾分マシである。
「優子ちゃん、これ飲む？」
桂子ちゃんが魔法瓶を差し出してくれる。
「？　何が入ってるの？」
「普通のあったかいお茶よ。ちょっと待っててね……」
桂子ちゃんが蓋兼コップを開け、お茶を注いで差し出してくれる。
「はい、どうぞ」
「ありがとう……」
あたしはゆっくりとお茶を含む。
うん、熱すぎずぬるすぎず、ちょうどいい温かさ。

「どう？」
「うん、温かくておいしい」
「それはよかった」
「浩介くんは？」
　あたしは、浩介くんにも飲ませたいと思って言う。
「あーうん、大丈夫、喉は乾いてないし、冷たいのも手だけだから」
「そう、それなら大丈夫そうね」
　間接キスにならなかったのは残念だけど、浩介くんに意識させないように残念そうな顔をしないで言う。
「ふふっ、間接キスならずですわ」
「ぶっ……」
　そんなあたしの配慮も、坂田部長に簡単に壊されてしまった。
「もう、坂田部長、恥ずかしいからやめてください！」
　意識しちゃうと顔が熱くなっちゃうし。
「あら、顔が熱くなったら暖まれますわ」
「うー」
　坂田部長が洒落たことを言う。
　単なるお嬢様ではなくこういうところがあるからこの人は油断ができない。
　暗くてよく分からないけど、多分浩介くんも顔が赤いはず。
「じゃあ、天体観測の続きをしようか」
「うん」
　桂子ちゃんの号令のもと、天体観測を再開する。
　既に知識としては既知のものがほぼ全てだった。
　桂子ちゃんの望遠鏡の性能の問題もあるし、初めての天体観測なので簡単なことから始めるという。
　結局、学校の屋上に居たのは1時間ほど、時間が経つと寒くなってきたので、機材を片付けて解散となった。
「ふー楽しかったね」
「うん」
　解散と言っても、駅までは一緒だし、坂田部長以外は降りる駅も同

じ。
本当は浩介くんの家はあたしとは逆方向だけど、今日は特別。
「あれ？　篠原って最寄り駅逆じゃないの？」
案の定、桂子ちゃんに突っ込まれてしまう。
「ああいや、その……今日は優子ちゃんに家に招待されているんだ」
「へえーもしかして……」
桂子ちゃんが邪推するように言う。
「ああいやその、浩介くんはまだしないんだって……」
「あ、ああ……」
「ふーん、甲斐性なしとも言うわね」
桂子ちゃんが思いっきり煽るように言う。
「ちょ、ちょっと桂子ちゃん！　いくらクリスマスだからって……！」
幸い聞かれてないけどやっぱり女の子としては恥ずかしい会話。
女の子だけの密室ならまだいいけど。
「ああゴメンゴメン、私としたことがはしたなかったわね」
桂子ちゃんもすぐに反省してくれる。
やっぱりちょっと外れてもこうやって自分で修正できるのが桂子ちゃんの強みだとあたしは思う。
女子力という意味では一歩も二歩も上手の桂子ちゃんだから、まだまだあたしが学ぶことは多そうだ。
駅を降りて、桂子ちゃんとの道を3人で進む。
「そういえば、あたしと浩介くんと桂子ちゃんでこの道を行くのは初めてだね」
「うん、そうだね。懐かしいわね。小学校の頃、優一と2人でも通った道だし」
また昔を思い出す。
当時まだわんぱくな男の子だったあたしと桂子ちゃんと2人で帰った道、中学以降荒れてからも、極稀に帰ったりもしていた。
高校に入ってから一緒に帰ることはほとんどなくなって、1年生の時にたまたま駅でばったり会った時に1回あっただけだった。
あたしが女の子になってからは、一緒に帰ることが増えたけど、浩

介くんという彼氏ができてからは、桂子ちゃんもあたしに気を使って一緒に帰ることは減っていた。
今は、３人で帰っている。
いつか桂子ちゃんにも彼氏ができれば、４人で帰ることになるのかな？
それとも、あたしが結婚して……浩介くんに嫁入するほうが先かな？　ってまたそんなこと考えてる！
帰り道、すっかり暗くなった道路で、あまり会話はない。
でも、いつもの分かれ道に付くと、いつもの挨拶をする。
「じゃあ、また新年よろしくね」
「そうだな、よいお年を」
「バイバイ桂子ちゃん」
そう、次に会うのは年が明けてからということになる。
あたしたちは無人になっている家を一目散に目指す。
今日は、あたしのお父さんとお母さんは、別に旅行に行っている。
あの年だし、家族が増えたりとかはないよね、うん。
「ここがあたしの家」
「へえ、結構良さそう」
「そう？　ありがとう」
あたしは財布から鍵を取り出し、ドアを開け、玄関の明かりをつける。
「お邪魔しまーす」
「疲れたでしょ、休んだら夕食にしよう」
「うん、優子ちゃんの夕食、楽しみ」
あたしも、浩介くんに食事を作るのが楽しみ。
今晩は、クリスマスイブ。明日はクリスマス。他のカップルと同じく、あたしたちにとっても、とても長い夜になりそうだわ。
「ふう、テレビ見ていい？」
「うん、いいわよ」
浩介くんがテレビをつける。
どうやらニュースをやっているみたいだ。

「えー、ではここで速報です。これから、佐和山大学教授の蓬莱伸吾教授が緊急記者会見を開くとのことです」
「「え!?」」
あたしと浩介くんは目を丸くする。
テレビに写っていたのは、確かにあの時見た蓬莱教授だった。
記者会見らしく多くのマイクが置いてあり、カメラの音がいくつも鳴っている。
「なあ、緊急記者会見って何をするつもりなんだろう?」
「さ、さあ……」

「蓬莱教授は、万能細胞による遺伝病治療への道を開いた業績でノーベル生理学・医学賞を受賞し――」
テレビでは、アナウンサーが蓬莱教授の簡単な来歴を説明している。あたしたちでも知っていること。
「うん、でも回り道の研究なんでしょこれ?」
水族館での蓬莱教授の言葉を思い出す。
ノーベル賞になるほどの遺伝病の治療を回り道という蓬莱教授。
「こんなすごい業績が回り道っていうんだから恐ろしいよなあ」
「――しかし、蓬莱教授の研究に対しては、バチカンのローマ教皇を始めとして、宗教指導者やイスラム教団体が相次いで非難声明を出すなど、宗教界の批判を中心に、常に物議を醸しておりますが、蓬莱教授は一切意に介さずを貫いています」
アナウンサーの話。学界だけではなく、やはり宗教的な批判が多いと見受けられる。
「どんな話するんだろう?」
「楽しみだけど不安だね」
あたしたちは、デートで夕食を作るということも忘れ、蓬莱教授の記者会見に夢中になってしまっていた。

## 記者会見と家デート

「えーただ今より、記者会見を開始します」
テレビの中ではカメラマン、マスコミ関係者が慌ただしくしていた。
テレビ画面は現場の生中継だ。
「えー、私蓬莱伸吾は、ＴＳ病についての研究から、万能細胞より不治の病をある程度治療することに成功しました」
「それは一体何でしょうか？」
「はいそれは――」
なんだかよく分からない事を言い並べている。
記者も殆どは意味が分かっていないと思う。いや、さすがに分かるかな？
「浩介くん意味分かる？」
「いや分からない」
やはり浩介くんも意味不明だった。
「そして、もう一つ。我々人間が抱えている最大の不治の病である『老化』についても、ある程度の抑制が可能になりました。今現在の研究成果では人間は平均で１２０歳まで生きられるでしょう」
会場が騒然となる。
「ねえ浩介くん……」
「ああ、とんでもないことになってきたな」
あたしたちの病気についての研究成果、蓬莱教授の究極目標、その一つが完成したという。
いや、完成ではないかな？　だって１２０歳が寿命じゃ不老というわけじゃないわけだし。
記者たちの騒然とする中で蓬莱教授は言う。
「最終的には人類はこの老化から逃れることが出来るでしょう。そう、完全性転換症候群……ＴＳ病と呼ばれる人々のように。もしそうなれば、いわゆる少子高齢化問題も霧散するでしょう」
さっきも出てきたあたしや永原先生たちの病名。

ブー！　ブー！　ブー！
あたしの携帯電話が鳴る。
かかってきた相手は予想通りの人物、おそらく用事もあたしの予想と同じだろう。
ピッ
「はい、石山です……永原会長、蓬莱教授のことですか？」
「ええ、話が早くて助かるわ」
やっぱり、電話の用事はそれについてだ。
「明日は本部で緊急会合を開くわ。以前より蓬莱先生の不老研究について噂はあったけど、みんな疑似科学扱いして相手にしてなかったわ」
「……でしょうね」
不老の人が実在するとしても他の人にそれを応用する何て無茶苦茶な話だ。
「しかし、こんな会見をすることになったってことは？」
「ええ、何か解決の糸口を見つけたのかもしれないわ。もちろん、記者会見を聞く上では今はまだ未完成だと思うけど」
「……問題はどうなるかですよね？　蓬莱教授が生きているうちに完成するんでしょうか？」
「分からないわ。緊急会合には蓬莱教授の他にもメール会員以外の全ての会員を招待するわ。おそらく出席率は正会員と普通会員を除くと殆ど居ないだろうけど……ともかく今は記者会見を見ているならそっちに注力してくれる？」
「うん、分かったわ……じゃあ切るわね」
「はい」
ピッ
あたしは永原先生との電話を切り、再びテレビに集中する。
まだ記者会見は続いている様子で、更にテレビ画面のテロップには「ノーベル賞学者、蓬莱伸吾氏、人類不老化への道を示す」と言う文字が仰々しいフォントで表示されている。
「実用化はいつ頃になりますか？」

「まだ計画段階ですから１２０歳の今のこれも完成まではまだ数年、実用化はもっと先になるでしょう。もしかしたら俺ではなく瀬田さんが実用化させるかもしれません」
　テレビでは記者会見で蓬莱教授と新聞記者との問答が続いている。既に蓬莱教授が倫理を無視する傾向にあることは知られているのか、倫理面に関する質問をする記者はいない模様。
「……なあ優子ちゃん、インターネットが凄いことになっているよ」
　浩介くんが、スマホで簡易つぶやきサイトを見せてくれる。
「うわー」
　見てみると、あっという間にタイムラインが流れていく。
　更にトレンドも「不老化」「ＴＳ病」「蓬莱教授」「記者会見」「佐和山大学」「ノーベル賞」などで独占されていて、すさまじい状況になっている。
　そんな中で、もう一つ気のなるトレンドが出ている。
「永原マキノ会長」、言うまでもなく永原先生のことだ。
「永原先生が、どうしてインターネットで？」
　日本性転換症候群協会のことかな？
「なあ、見てみるか？」
「う、うん……」
　「永原マキノ会長」のトレンドキーワードで検索してみたら、「年齢は来年で何と５００歳！　日本性転換症候群協会の永原マキノ会長は戦国時代の生き証人、武田家に仕官していたとの噂」という題名の、まとめサイトへのリンクだった。
「情報が錯綜しているわね」
　確かに真田家は武田家の傘下だった時代が長いけど、永原先生が仕えてた時代は独立勢力だったし。
　他にも、３００歳だとか１０００年前から生きているなんていう書き込みもある。
　おそらく噂の出処は小谷学園だろうけど、小谷学園では永原先生は真田家で４９９歳ということは正確に伝わっていたし、伝言ゲームって怖いわね。

更に記事を巡っていくと、「日本性転換症候群協会のＴＳ病患者が即ハボ過ぎる件」なんていう記事を発見した。
「浩介くん、『即ハボ』って何？」
「ああうん、その……何だ？　一目見て性欲のままにって意味だな。正式には『即ハメボンバー』っていうんだ」
「や、やっぱりそういう意味なのね」
確かに協会の会員たちは美人揃いだったけど。それにしても「即ハメボンバー」って……
ともあれ、そこを見てみると、協会ホームページで公開してあった永原先生や比良さんなどの画像が転載されていた。ちなみにあたしの画像はない。
そして案の定「中身は男」という書き込みが見受けられた。
これこそ、あたしたちが戦わなくてはいけない言葉。
インターネットの掲示板でもその点で論争になっている。
「いや１００歳超何だろ？」とか「三つ子の魂は万までだ」何て言っている人もいる。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「水族館でね、あたし蓬莱教授に『いつか佐和山大学で偉大なことをする』って言われたわ」
「あーそんな話もあったような気がする」
どうだったっけ？　浩介くん居なかった気もするけど。虚偽記憶かも。
「もしかして、あたしの進路って……」
「ああ、もしかしたら佐和山かもしれねえぜ」
そんな気がしていたけど、あたしは本当に佐和山大学に行くのだろうか？
偉大なこと、つまり不老化を実現するということ。
「もしかして、あたしたちも、ずっと一緒にいられるのかな？」
あたしが問いかける。
「もし、もし俺も優子ちゃんと同じ不老なら、永遠の愛を誓えるぜ」

結婚式ではよく「永遠の愛を誓う」「死が二人を分かつまで」という言葉がある。
もちろん、あたしたちは完全な不死ではない以上、それはいつか訪れることには変わらないけど、不老でない人に比べれば、ずっとずっと先のことには変わらない。
「浩介くん、あのね。あたし……」
「うん」
「あたしもね、浩介くんとずっとずっと一緒になりたいわ」
やっぱり、その気持ちがある。
「じゃあさ、目指すか？　佐和山？」
「そうだね、あたしの偏差値だと低すぎるけど……蓬莱教授とも話し合ってみたいわね……会えるかはわからないけど」
佐和山大学に進んだとして、蓬莱教授の研究に参加できるとは限らない。蓬莱教授の研究所は間違いなく人気だからだ。
「えー記者会見がたった今終了しました」
番組はあわただしく、地上波では1局がテレビアニメを流している以外、すべてのテレビ局が緊急特番を組んでいる。
そして、識者を呼ぶ時間がないのか、アナウンサーと芸能人が好きかって言いたい放題している。
そんなんだからテレビ離れって言われるのに。
ともあれ、蓬莱教授の研究成果は、まだ１２０歳レベルの話。
理論上は１０００年でも２０００年でも生きていけるあたし達からすれば、まだ不十分なレベルと言える。
それでも、大きな前進であることには違いはなく、テレビ・インターネットを問わず、蓬莱教授の話題で持ちきりになっている。

「とりあえず、浩介くん」
「ん？」
「遅くなっちゃったけど、夕飯、作るね。その前に準備するから待っててね」
「うん」

とりあえず、そろそろデートに戻らないと、確かに他の人よりもより大きな一大事だけど、せっかくの恋人同士で2人っきりになった最初のクリスマスなんだし。
暖房もかなり効いてて、このままだと少し暑いので、あたしは自室で着替えることにする。
ロングスカートとストッキング、また厚着になっている上も脱いで、赤い服と赤い巻きスカートのセットを用意する。
そして、エプロンも取り出し、料理っぽく見せる事を考える。
「は、裸エプロンになってみようかな……」
そんなことを考えたあたしは、下着も脱いで一糸纏わぬ姿になる。
やっぱり、この姿はエロい。そしてそこにエプロンだけつける。
「あうう……お尻丸出しだよお……」
ダメダメ！　恥ずかしすぎてできない！
あたしは気持ちを切り替えて、いったんエプロンを脱いで、下着を付けてさっき出した服を着て、エプロンをつける。
服は赤だけど、エプロンはオーソドックスな肌色になっている。
ガチャ……
「お待たせーどう？」
「お、似合ってんじゃん！」
浩介くんが下心のない朗らかな声で言う。
裸エプロンだったら間違いなくあの時と同じく硬直していたに違いないわね。
「うん、ありがとう。じゃあ待っててね」
そんな浩介くんを見て、あたしも自然と笑顔があふれ出る。
よし、今日は腕によりをかけて作っちゃおっと。
「浩介くん、チャーハンでいい？」
「うん、いいよ！」
あたしは、母さんに教わった通り、チャーハンを作る。
母さんがやっていた様に料理をする。
あとは浩介くんの味覚次第だけど、デートをした限りでは極端な濃い味薄味の好みは無いと考えてよい。

テレビでは、相変わらず蓬莱教授のニュースについて、ようやく到着した有識者があれこれ議論をしていて、その様子を浩介くんが見続けている。
チャーハンを炒める音とニュースでの議論、それらの不協和音が響く。
ちょっと聞いていると、「この技術を受けるのは少子化で人口減少に悩む国に限定するべきだ」と言っている有識者もいる。
不老は人類の夢とは言ってもやはり人口問題は避けて通れないみたい。
またいるいらないとかそういう議論も多い。やっぱり老いて死んでいくのがいいという人もいる。
そんなことを考えながらも、料理にも手を抜かない。
優一だったら、こんな器用なことはできなかった。
あたしは浩介くんが食べる量も考えて、普段三人分作っているのと同じ量を作る。
もし余ったら、明日の朝ごはんに再利用するのだ。
あたしはそれぞれのお皿にチャーハンを盛り付けて、運ぶ。
「浩介くんー！　出来たわよー！」
「おう、ありがとう！」
あたしがご飯を作り、浩介くんが休みながらテレビを見ている。
「美味しそうだな！」
「ありがとう……それじゃあ……」
「「いただきます！」」
浩介くん、きっと疲れ切ってるんだろうなあ。
デートでもずっとエスコートしてくれてるし、ここくらいあたしが頑張らないと！
「うん、うまい」
「そう？　よかったわ」
あたしと浩介くんが食べて行く。
浩介くんの方がかなり量が多いけど、例によって先に食べ終わったのは浩介くん。

浩介くんは余裕の表情だけど、あたしがちょっと苦しい。
うーん、一口残しちゃおうかな？
……いや、ここはこの手で！
「ねえ、浩介くん、もしかして、足りなかった？」
「ああうん、もう少し食えるぜ」
「じゃああたし、ちょっと多いから……」
あたしが残ったチャーハンをスプーンに置くと、浩介くんも察したのかごくりとつばを飲み込む。
「はい、あーん！」
あたしも恥ずかしいけど、ニッコリ笑って「あーん」と言う。
「あ、あーん……」
浩介くんがパクりとチャーハンを平らげる。男らしいその食べ方にも、あたしは魅力を感じてしまう。
浩介くんとあーんをしたのは文化祭の時以来、やっぱり誰かがいそうなところでは、恥ずかしくてできないことだ。

「もうこんな時間だ」
チャーハンを食べ終わると、もう結構な時間になってしまっていた。
「お風呂にする？」
「うん」
「じゃあお湯を沸かすね」
あたしが向かおうとすると、浩介くんがちょっとだけ寂しそうな表情をする。
「もしかして、一緒に入りたい？」
「うぐっ」
あ、図星のど真ん中をついてしまった。
「お、お泊りデートでしょ⁉　あ、あたしはいいよ……！」
あうう、恥ずかしいよお……！
「そ、その……ひ、一人で入る！」
浩介くんが真っ赤になった顔をそらしながらぶっきらぼうに言う。

「そう？　ともかく、沸かしてくるわね」
「あ、ああ……」
浩介くんと一緒にお風呂……今はまだ無理だけど、いつかしてみたいなあ。
あたしはお風呂場に向かうと中が空なのを確認してから「自動」のボタンを押す。
「お湯張りをします」という機械音声が聞こえたら浩介くんの元へ。
「ただいま」
「ああ、ところで、さっきの電話は何だって？」
「ああうん、明日緊急会合だって」
「そうか」

テレビでは相変わらず蓬莱教授の緊急記者会見に関するニュースばかり。
いい加減に同じことを繰り返して飽きてきたので、緊急特番を組んでいないチャンネルに合わせる。
お、どうやら旅番組で、温泉地めぐりをしているらしい。
「ゆったりしているわね」
どこもかしこも同じ内容の特番を組んでいる中で、一局だけ違うことを放送していれば、視聴率は上がりそうよね。
多分、今地上波で一番視聴率高いのここな気がする。
「温泉いいなあ……」
「うん、いつか二人で行ってみたいね」
「でも、優子ちゃんを混浴には入れたくない」
浩介くんが独占欲を告白する。
「ふふっ、家族風呂があるといいわね」
「そうだよね」
そんなことを話していると、短いメロディーとともに「お風呂が沸きました」という機械音声が流れてきた。
「あ、浩介くん」
「うん、行ってくる」

浩介くんが鞄からパジャマのセットを取り出し脱衣所へ向かっていく。
あたしはテレビを消し、一人で考える。
浩介くんとお風呂に入る。
浩介くんに見せたのは下着までで、その中身は見せていない。
裸だって、林間学校のお風呂でクラスの女子たちと永原先生に、そして夏祭りの浴衣選びの時に母さんに、そして幸子さんと温泉施設に行った時に女湯に入った時に見られただけ。
男の子に……異性に裸を見せたことはまだ無い。
「……」
どうしても、浩介くんが頭から離れない。浩介くんの鍛えぬいた体を見たくてたまらない。
あたしは自然と足が脱衣所へと向かっていく。
浩介くんにバレないように、ゆっくりとドアを開ける。
そこはもう、水の音が聞こえる。聞こえないように、慎重に慎重に。
ここはあたしの家なのに、まるであたしが泥棒さんみたい。
ふと脱衣所のかごに目をやる、そこにはさっきまで浩介くんが着ていた服が見える。
あたしは浩介くんの匂いを想像する。
そういえば優一はどういう匂いだったっけ？
うーん、臭い男の匂いだったわよね。浩介くんだってきっと同じ匂い。
でも、今はその匂いが不思議と愛おしく思えてしまう。
本当にあたしは何もかも女の子で。よし、嗅いでみようかな？

「ダメでしょ！　そんなこと思ったら、そんなことしたら、浩介くんに幻滅されちゃうでしょ優子！」あたしの中の天使が警告の言葉を放つ。
「何言っているのよ！　むしろ本当に好きならこれくらい受け入れてくれるわよ！　欲望に正直になりなさいよ優子！」あたしの中の悪魔が誘惑の言葉を放つ。

あたしは天使と悪魔の脳内会議を打ち払うとあたしは浩介くんの脱いだTシャツに手をかけた。
うん、大丈夫、もしバレたとしても、ちょっと興味があったって、そう言えばいいわ。

# 背徳から純愛へ

「ゴクッ」

あたしは唾を飲み込む、決心したはずなのに、その場を動けない。

実際には数秒だって理屈では分かっているのに、まるで数時間に感じてしまう。

それでも、決心は曲げない。あたしは恐る恐る、顔につけてみる。

「んっ……」

じわりと衣服に付いた浩介くんの匂いが頭の中に充満する。

頭がクラクラしちゃいそう。

浩介くんに内緒で、こんなことをしているという背徳感、そして衣服と汗のいい匂い。

それは麻薬の快楽にも似ている。いけないと分かっていてもやめられない。

「んっーふぅー」

あたしは自然と、衣服に自分の息を至近距離で吹きかけた。

それは、浩介くんにあたしの匂いをつけているんだという気持ち、いや、匂いをつけたいんだという気持ち。

ああ、ずっとこのままで居たい。

あたしは自分が浩介くんに染め上げられたいように、浩介くんをあたしで染め上げてみたい。

あたしのメスとしての被虐欲と被支配欲は、同時に浩介くんに対する支配欲も生み出していた。

相反する感情が、相反する本能が、あたしの中でうごめいている。

水の音がかすかに聞こえる。

その音を聞く度に、あたしは更に興奮度を高めてしまう。

「はぁ……はぁ……」

浩介くん、あたし、やっぱり変態かも。

あたしは、更に浩介くんの脱いだ服を漁る。

そこには使用済みのトランクスがあった。

「んっ……！」

女の子になってから、すっかり穿かなくなった男物の下着。
今穿いているぴったりお肌にフィットとは真逆に、ゆるゆるがコンセプトの下着。
なぜこんな違いがあるかといえば、男性にだけ存在する「例のもの」のせい。
自分の下着には、もう何も感じないのに、浩介くんのそれには目が離せないほど興奮している。
嗅ぎたい、今すぐ嗅ぎたい。
とっくに理性がなくなったあたしは、浩介くんがさっきまで穿いていたトランクスの、それも「例のもの」が触れていた場所に鼻をこすりつける。
「ふぅーすぅーはぁ……はぁ……」
浩介くんのいろんな匂いがする。甘い匂いじゃないのに、いい香りというわけでもないのに、あたしは夢中になってしまう。
他の男性の匂いも、いや優一の匂いだってこんなものだったはず。なのに、浩介くんの匂いと分かってしまえば、こんなに興奮しているあたしがいる。
匂いを嗅ぎながら、浩介くんの「アレ」を想像する。
浩介くんがあたしに、大きくたくましいのを見せつけているのを想像する。
あたしは、あたしはその時どうなっちゃうんだろう？
もっと深く鼻をこすりつけて、浩介くんの「アレ」の匂いを嗅ぐ。頭のなかで「アレ」を想像すると、あたしはクラクラとめまいを起こす。
でも、めまいなのに、あたしはとっても気持ちよくてハッピーな気分。
典型的な「麻薬」の症状なのに、一体どうしてしまったんだろう？
でもそれはきっと、恋がなせる魔法かもしれない。
「んっ……」
あたしはもう一段階没入感を強めた。
浩介くんの穿いていたパンツ。男物だし、パンツそのものには全く興奮しない。

だけど、さっきまでつけていて、浩介くんの匂いがするという事実だけで、あたしは正気を失ってしまった。
「浩介くん……浩介くん……大好きだよ……」
あたしは、浩介くんのことを想像する。
デートして、結婚して、家庭を作って、そして……

ザバーン！
「!?」
突然、お風呂場の方から大きな水音が聞こえてきた。
それを聞いて、妄想に包まれていたあたしの脳内は急速に現実に引き戻される。これは浩介くんが湯船から立ち上がった音。
いけない、浩介くんが風呂から上がるわ！　早くここを出ないと！
あたしはそう思い、服をもとの位置に戻し、慎重に慎重に脱衣所を出る。
大丈夫なはず。ばれてないよね？
そしてあたしは何食わぬ顔で部屋に戻り、テレビをつける。
テレビでは、まだ蓬莱教授のことを話している。
どうも世界の宗教団体などが「蓬莱教授は自然の摂理・倫理を無視している」として相次いで非難声明を出しているらしい。
当の蓬莱教授は気にも止めてそうにないけど。
ガチャ
「おーい上がったぞー」
テレビを見ていると、パジャマを着た浩介くんが出てきた。
パジャマも似合っててかっこいい。
パンツ、同じの使いまわしててくれないかな……ってダメダメ。
「うん、それじゃあ入るわね」
「おう」
とにかく、風呂に入って落ち着こうそうしよう。
「の、覗かないでね」
お決まりのセリフだけど、言わずにはいられない。
「お、おう……」

浩介くんも生返事気味。最も、あたしも浩介くんになら……ってまた！　もう、何を考えてるのよ優子！　いくら家デートだからって浮かれすぎでしょ！
あたしは自分にそう言い聞かせ、部屋を出るために浩介くんと入れ替わりになる。
「……」
さらりっ！
「きゃあ！」
すれ違いざま、あたしは浩介くんにお尻を一撫でされた。
普通ならすれ違いざまの痴漢のような手つきなのに、浩介くんと言うだけで、あたしを狂わせてしまう。
「も、もう！　浩介くんのえっち！」
このセリフももう、何回言ったか分からない。
照れ隠しもあるんだけど、満更でもないのが悔しいところ。
「せっかく二人っきりだしさいいじゃんか」
「うー」
浩介くんが涼しい顔で言う。
確かに期待して露出度高い服になっているし、あたし自身も触られたいと思ってしまっているので、全く反論できない。
「ほおれ！」
ぺろりっ！
「きゃー！」
今度は浩介くんにスカートをめくられ、真っ白のパンツを見られてしまう。
「もー！　やめてよー！」
あたしは顔を真っ赤にして前かがみにスカートを抑える。
「とか何とか言って、満更でもないんだろ？」
浩介くんがいたずらっぽい顔で言う。
「そそ、そんなわけないでしょ！　浩介くんのえっち！　変態！　恥ずかしいよお……」
図星を突かれたあたしが必死で否定するが、もはや自白しているよ

うなもの。
「優子ちゃんの白いパンツ、かわいいな！」
「あうう……もう……と、とにかくっ！　あたし、お風呂に行ってくるわね！」
「いってらっしゃーい」

あたしはお風呂場に行く前にいったん自分の部屋に立ち寄ってパジャマ選びをする。
優一時代から少し大きめだったベッドは、浩介くんと二人でも眠れそうな広さ。
今日はここで浩介くんと眠る予定にしている。
あたしの部屋、まだ見せてないけど浩介君はどう思うかな？
あ、そうだわ。ちょっとお人形さんとぬいぐるみさんを整理しよう。
今日は浩介くんと二人で寝るから、ベッドで一緒に寝ているぬいぐるみさんたちはちょっとレイアウトを変えようかな？
よし、窓側に全部並べて、お人形さんもちゃんとしないと。
そしてあたしはパジャマ選び。
あたしはほとんど本能的に、ワンピースタイプのパジャマを選んでいた。
このパジャマで寝て、朝起きると思いっきりめくれ上がってることが多い。だけど、浩介くんなら……ううん、浩介くんにだけ見せる無防備なあたしを、きっと喜んでくれるはず。
そう思いながら、パジャマを持ってあたしは脱衣所に行く。
さっき匂いを嗅いだ浩介くんの服はもうない、持ち帰ることになっているから。
あたしは髪の毛をお団子ヘアーにしてから服を一つ一つ丁寧に脱ぎ、畳む。
鏡の中には、フルヌードになって大事な部分も惜しげもなく晒してあるあたしがいる。
さっきの浩介くんとの妄想を思い出す。

確か現実に引き戻される直前は浩介くんに犯されかけたところで……

あうう……顔が赤くなっちゃいそうだわ。

気分を紛らわせる意味も込めて、あたしは風呂場へと急いだ。

家族以外の人が既に入った風呂。それも浩介くんが入った後……って寒い寒い！

お風呂場はクリスマスの冷気を受けている。あたしは、すぐに体と頭を洗うことにする。

男だった頃も、冬のお風呂場の寒さは苦手だったけど、予想はできていたとはいえ女の子になった今はもっと辛い。

まず髪の毛を洗う。

浩介くんがシャンプーを使ったのが分かる。

もしかして、浩介くんも意識してたのかな？「ここが優子ちゃんが普段使っているお風呂場」って。

ともあれ髪の毛と身体を一通り洗い終わり、湯船につかる。

浩介くんの残り湯、普段と全く同じ湯加減なのに、妙に興奮してしまう。

いくら理性で制御しようと思っても、この意識は制御しきれない。

あたしが、浩介くんに心を奪われている証拠。

ドアの向こうを見る。誰か人がいる気配はない。

一通り温まったら、あたしはタオルで体を拭く。

「うっ、このタオルで浩介くんも……」

つい、独り言が出てしまう。

でも、このタオルで浩介くんが全身を拭いたのは事実。

じわっ……

あー、また汗が吹き出ちゃってるわ。こんなんじゃいけない子だって思われちゃう。いくら男の子がエッチだと言っても、さすがにやりすぎると引かれちゃうから気をつけないと。

「ふーふー」

あたしは12月の外気温を利用して頭を冷やし、努めて無心で全身を拭いた。

脱衣所でパジャマに着替え、髪をいつものストレートロングに戻す。
……よし。
あたしは浩介くんのいるリビングへと急ぐ。
「お待たせー！」
「あ、優子ちゃん、お帰り」
「ねえ、そろそろ寝る？」
実際かなり遅い時間だし。
「うん、もう遅いし、ね」
「じゃあ、あたしの部屋に案内するわね」
「え!?　二人寝られるの？」
浩介くんが聞いてくる。
「うん、添い寝できるよ」
「そ、そうか……」
またお互い顔が赤くなる。
でも今は冷静にならないと。
「ふふっ、じゃあ行こうか」
「う、うん……」
暖房を消して、浩介くんより先に廊下を進みあたしの部屋に案内する。

「うわぁ……」
ドアを開けて開口一番、あたしの部屋を見た浩介くんが感嘆の声をあげる。
「ここ、ここが優子ちゃんの部屋？」
「うん、そうだよ。どんなの予想してた？」
あたしが笑顔で言う。

「ああいやその……もう少し中性的な部屋かなって思ってた」
「あー、夏休みのころまではそんな感じだったわよ」
桂子ちゃん、恵美ちゃん、さくらちゃん、そして母さんが模様替え

をしてくれた。
そのお陰で、今は女の子らしい部屋になれた。
少女漫画、鏡、お人形さんにぬいぐるみさん、おままごとセット、カーテンや布団、クッションも女の子らしい色にしている。
「そ、そうなんだ……」
「うん、さ、浩介くん、ここに座って」
あたしは、ベッドの近くにあったハート型のクッションに浩介くんを誘導する。
「え!? その……」
さすがに浩介くんも動揺している。
あたしは、このクッションに浩介くんを誘導し、キスをするのが夢だった。ハートのクッションでキスをして浩介くんと結ばれる。
女の子らしいメルヘンチックな夢。
今、それが叶おうとしている。
「ほーら」
「お、おう……」
更に催促すると、浩介くんが意を決して近づいて来る。
「よっと」
「ねえ、浩介くん……」
座高の低いあたしが上目遣いになって浩介くんの唇を見つめる。
すると察した浩介くんがあたしの顔を手で挟んでくる。
「もう、優子ちゃんはワガママだなあ……」
「ごめんね」
「でも、かわいいワガママだよね……んっ……」
「ちゅっ……」
浩介くんとあたしの唇が触れる。
「んんっ……じゅぅっ……れろっ!」
あたしが浩介くんの唇を舌で軽くつつくのが「絡めて」の合図。
浩介くんが少し唇を開け、舌を出してくる。
「んふっ……」
舌の先は神経が特によく集まっている場所、あたしは浩介くんを好

きになるごとに、どんどんのめり込んでいく。
「じゅるっ……べろっ……んんっ……ぷはぁ……」
唇を離すとお互いの舌の先から一本の唾液の線が引かれ、ぷつりと消えていく。
あたしと浩介くんが混ざった唾液。
とてつもなくエロい。浩介くんの顔もエロいし、あたしだってとってもエッチな顔をしているはず。
「ねえ、浩介くん……あたし……我慢できないよお」
「もう、わがままだなあ……俺だって、俺だって我慢してるんだぞ！」
浩介くんが必死に主張している。
うん、それはあたしも分かっている。
「うわぁっ！」
あたしは浩介くんの髪の毛をさらりと撫でてみる。
「ゆ、優子ちゃん……そこは……そこはその……ああっ……！」
さらさらと撫でると、頭にも関わらず浩介くんが堪らずに喘ぎ声を出す。
それを聞いて、あたしからもじわりと体温の上昇を抑えるための液体が流れ出る。浩介くんと触れ合うと、どうしても濡れてしまう。そのせいで、汗もよくかく。
あたしは「優一の知識」を使ってゆっくりと丁寧に浩介くんをぎゅーっと抱きしめると、浩介くんが興奮に満ちた声を出してくれる。
「ふふっ、さっきの仕返しだよ」
「はぁ……はぁ……でも、これ以上は……！」
「いいのよ、あたし、いつあなたに襲われても、悔いはないわ」
むしろ、どうしても襲われたいとさえ思ってしまう。
「でも、俺が、俺が後悔するから」
浩介くんはこの状況でも、理性を失わない。それはあたしが彼に惚れた要因の一つ、「責任感の強さ」の持つ一面でもある。
だからやっぱり、浩介くんの理性を崩すには、「結婚」しかないのかもしれない。

あたしはゆっくりと手を離す。
「浩介くん、あたし……あのね……」
「うん、優子ちゃん。大丈夫、大丈夫だから。でもせめて、卒業までは待ってくれる？」
浩介くんが言う。
「卒業？」
「俺、まだ１７歳だからさ。優子ちゃんはもう大丈夫だけど、俺はまだ無理だよ」
「あ！」
今朝、浩介くんの両親から言われた結婚のことを思い出す。
そうだった、男の子は１８歳にならないと結婚できないという事を忘れていた。それに高校は学業もある。
いや、大学もあるけど、浩介くんの両親の様子だとそれは問題ない。
小谷学園だし結婚したからと言って何か問題があるとも思えないが……あ、名字変わるからそこがちょっと厄介かな？
「ともかく、もう寝ようよ。疲れちゃったよ」
「うん、そうしよう……浩介くんこっちに来て？」
あたしはベッドの中に浩介くんを案内する。
浩介くんも恐る恐る入ってくる。
「じゃあ、電気……消してくれる？」
「うん」
浩介くんが明かりを引っ張って、部屋の中が真っ暗になる。
「おやすみ、浩介くん」
「おやすみ、優子ちゃん」
「ちゅっ」
「んっ……」
おやすみのキスを浩介くんのほっぺたにすると、暗闇の中でもわかるくらい浩介くんがビクッっとする。
「優子ちゃん……」
「ふふっ、おやすみのキスだよ。さ、明日もあるから寝ようよ……襲ってもいいけどね」

「う、うん……襲うのは……辞めとくよ」
「そう……」
ちょっぴり残念。
でも仕方ないかな？
浩介くんと添い寝しながら、今日を振り返る。
蓬莱教授の延命の記者会見のこともあって、クリスマスモードはもはやあたしからは完全に吹き飛んでしまった。
明日はクリスマスらしいこと、できるといいな？　とりあえず、プレゼントは渡そう。
あたしの今後の一生で、今年ほどに濃いクリスマスはないんじゃないかと思う。
そう思いながら、あたしは徐々に意識を闇へと落としていった。

# クリスマスの日

「んー」

今日はクリスマス、今は目覚まし時計を鳴らしていない。緊急会合は夕方から、十分間に合う。

自然と目を覚ます。隣では浩介くんが寝ている。

もう少し、このままで居たい。

意識がはっきりしてきた、自然と動いたら左手が浩介くんの手と触れたのに気付く。

こんなに近くで寝ているもんね。

何分経っただろう？

隣の浩介くんがゆっくりと動き始めた。

「んっ……あれ？」

「こうふふぇふぅん（浩介くん）、起きた？」

「あ、うん……」

あたしも浩介くんもちょっと寝ぼけている。

だけど会話するだけで意識は急にはっきりしてくる。

「なあ、優子ちゃん……」

「どうしたの？　浩介くん」

「その……メ、メリークリスマス」

「うん、メリークリスマスだね」

あたしは自然と笑みがこぼれる。

あたしと浩介くんで迎える、初めてのクリスマス、それを初めての添い寝で迎えられたのは本当に幸せなこと。

「さ、起きるかな」

浩介くんがそう言うと、あたしは自分のパジャマのことに気付いた。

「あ、ちょっと待って！」

ワンピースタイプのパジャマが寝てる間にベロットめくれてて浩介くんが思いっきり起きたら間違いなくパンツを晒してしまう。

何回ももう晒しているけど晒す度に恥ずかしい思いが増幅する。多分、浩介くんをより深く好きになっているせい。
「そう？　じゃあもう少しこうしていようか」
「え、うん……」
浩介くんがちょっとだけ誤解してるけど、まあどっちでも同じ。ともあれ、この好機を逃してはいけない。スカートを見えないように直して……
「きゃあ！」
浩介くんが手を動かした拍子であたしの脚を触ってくる。全く想定していなくてあたしも悲鳴を上げてしまう。
「お、おわっ……ご、ごめん……」
あたしの悲鳴に驚いた浩介くんだが、手は離してくれない。あたしの手が金縛りのように動かなくなってしまう。それは理性が負けてるせい。
「う、うん……その……」
「ごくっ……」
浩介くんが唾を飲み込むと、手がゆっくり上の方に上がっていく。
「ちょ、ちょっと浩介くん、そ、そっちはだ――」
「なあ、男の子は朝とっても興奮しているって、優子ちゃん知ってる？」
浩介くんがまるで何も知らない女の子に語りかけるように言う。
「あ、当たり前でしょ……あたしだって男だったんだから！」
「少しだけ、少しだけだから……」
「う、うん……」
あたしも昨日、ミニスカートで誘うような感じだったし、今だってこのパジャマにしたのも、浩介くんにいつ襲われてもいいようにしていたから。
だから本望だったとは言え、布団で隠れてても、やっぱり恥ずかしい。
「ひゃぁうっ……！」
浩介くんの手で身体を優しく触られた瞬間、あたしは体をビクッと

させてえっちな声を出す。
「んあっ……あっ……やっ……もぉ、すけべぇ……」
浩介くんに、好き勝手に全身を弄られてあたしの興奮度も高まる。
「はぁ……はぁ……」
「優子ちゃん、もう興奮してる？」
浩介くんがとぼけたように聞いてくる。
「もう、当たり前でしょ……あっ……好きな人に……こんなにされて……あぁっ!!」
興奮のあまり、いくら抑えなきゃと思っても、どうしても声が出てしまう。
布団に覆いかぶさって、直接見えないのがまた、中の想像力を掻き立ててしまう。
「浩介くん……好きぃ……」
「俺も……優子ちゃんが好き……」
「んっ……」
ちゅっ
お互いの名前を呼びあい、自然と唇が重なり合う。
「ねえ浩介くん……」
「ん？」
「愛してる……」
「う、うん……俺も……」
話している間にも、浩介くんはあたしの全身をいじる手を止めてくれない。あたしは時折、耐え切れずに喘ぎ声を出してしまう。
「優子ちゃん、すげえかわいいよ……！」
「うん、ありがとう……んっ……！」
「はぁ……はぁ……な、なあ優子ちゃん」
「ん？」
「悪いけど、先に起きてくれないか？　その……！」
「ああうん、でもあたしも着替えなきゃ」
「いやその……生着替え、見せてくれる？」
「ふふ、嫌よ」

あたしは浩介くんの要望を拒否する。
「な、何で？」
「何でってあたし、朝は下着も全部取り換えるのよ。浩介くんに見せるのは恥ずかしくて嫌だし、そういう気持ちを忘れたら長続きしないわよ」
あたしがちょっとだけたしなめるように言う。あんまり堂々としすぎたら女として失格だ。
「ああうん、そ、そうだよな……悪い」
「じゃああたし、先に部屋を出てるから」
「うん、俺、ちょっと遅くなる」
つまり、抜きたいということ。
「分かったわ、あたしも、ちょっと遅くなるね」
あたしはパジャマのスカートを戻し、布団を剥いでゆっくりと立ち上がり、部屋を出る。
「はぁ……はぁ……」
向かった先は普段両親が寝ている部屋。
あたし、もう、我慢できない！
「浩介くん……浩介くん……」
寒さも忘れるほどに体が熱くなる。
あたしは昨日のこと、今日のことを思い出す。

「はぁ、はぁ、はぁはぁはぁ……」
絶頂の余韻で息も荒くなる。すればするほど、快感が高まっていく。
浩介くんは責任を取りたいから、高校卒業まで待って欲しいと言った。
あたしも、そのくらいの理性はあるけど……どうしても、体が言うことを聞いてくれない。
もうとっくにえっちな子だと思われてはいるだろうけど、理性で制御できないでいると、愛想を尽かされないか心配になってしまう。
「そうだ、着替えなきゃ……」

服を整えて、リビングも暖房をつけてから部屋の前に戻る。
そういえば、浩介くんはどうしているかな？
コンコン！
「入っていいぞー！」
浩介くんの声がする。
ガチャ
そこには私服姿の浩介くんがいた。
「じゃああたし、着替えるわね。リビング暖房しているわ。ふふっ、覗かないでね」
「お、おう……！」
浩介くんが部屋を出る。
あたしは部屋の鍵をかけて箪笥へと向かう。
そしてまず下着ごと脱ぐ。すっぽんぽんには毎朝なっているけど、今日はもう、すっぽんぽんになるだけで、浩介くんに覗かれている気がする。
あたしは緑色のプリーツミニを手に取る。
制服と同じくらいの長さ。上の方も、明るめの色で決める。
今日はクリスマス。浩介くんは何をプレゼントしてくれるんだろう？
あたしは浩介くんへの赤い箱とリボンで包んだクリスマスプレゼントを手に取りリビングへと向かう。
「お待たせー！」
「おはよう優子ちゃん」
浩介くんはテレビを見ている。相変わらず不老研究のニュースばかり流している。さすがに飽きられていると思うのに。
「お、それが優子ちゃんのクリスマスプレゼントか？」
「うん、そうだよ。浩介くんのは？」
「ああうん、これ……」
浩介くんがあたしと同じように近くに置いてあったプレゼント箱を持つ。

「交換しよう？」
「うん！」
あたしは浩介くんに、浩介くんがあたしにプレゼント箱を渡す。
受け取った限りではあたしのより軽い。
「開けるわね」
「おう」
あたしは浩介くんの箱をゆっくりと開けてみる。
中身はお魚さんのぬいぐるみだった。
「うわーお魚さんだーかわいー！」
浩介くんからのプレゼントってだけで嬉しいのに愛らしいお魚さんのぬいぐるみとあって嬉しさは増す。
陸の生き物だけだったあたしのぬいぐるみさんに可愛らしい仲間が加わった。
「お、これ、小型マッサージ機？」
浩介くんがあたしのプレゼントをいろいろな角度から見ている。
「うん、浩介くんがトレーニング終わった後にリフレッシュできたらいいなって思って買ったの」
「へー、いいじゃん！　ありがとう！」
浩介くんが嬉しそうな顔で微笑みながらお礼を言う。
クリスマスプレゼントの失敗はかなりショックになるだけに、お互いに成功してよかったわね。
あたしはさっそく自室に戻ってお魚さんのぬいぐるみさんを、既にあるぬいぐるみさんと一緒に置く。
「優子ちゃん、喜んでくれてよかった」
「うん、でもどうしてこれを？　あたしはほら、浩介くんが鍛えているのを見てきたからだけど……」
「他の女子との会話でさ、ぬいぐるみの話題をしてたから、優子ちゃんは子供っぽい遊びが好きって感じだったし」
浩介くんが言う。確かに子供っぽいけどやめられない。お人形さんとぬいぐるみさんがかわいくて仕方ない。
「う、うん……」

「優子ちゃんが女の子っぽいの好きなのはわかってたけど、どうして？　部屋を見たらおままごとセットとか小学生の女の子向けアニメのグッズまであったしさ」
浩介くんになら、気持ちを話してもいい。いや、話さないといけない。
「うん……あたしさ、５月初めのゴールデンウィークまで男だったでしょ？」
「あ、ああ。そうだな」
「あたしは、男から一気にこの姿になったのよ。だから、『女児』の時代がないの」
幼い女の子として過ごすことができなかったことは、あたしの中で他の女の子に対して持っている、唯一かつ最大のコンプレックスと言ってもいい。
「じゃあ、もしかして……」
「うん、無意識的に、幼女の時代を取り戻したくなるんだと思う」
分かっててもやめられないというものだ。
「でもさ、よく考えたら優子ちゃん、女の子としてはまだ１歳になる前だもんな」
「確かにね。でもこんな１歳児がいたら大変よ」
「うはは、違いない」
あたしと浩介くんが笑いあう。
他愛もない話をして柔らかい雰囲気が流れる。

「プレゼントの受け渡しも終わったし、朝ごはん、作るわね」
「うん、お願いする」
お腹も空いてきたので、自然と話題は朝食へ映る。
「納豆ご飯と味噌汁と鮭の焼き魚でいい？」
「うん、問題ない」
あたしはご飯とみそ汁、そして鮭を取り出す。
いかにもな朝食だけど、それでいい。
まだ浩介くんの好き嫌いを詳しく知らないから、無難に行きたい。

昨日の浩介くんはテレビを見ていたけど、今日はあたしの料理を見学している。
あたしはちょっと緊張するけど、いつも通りに炊飯器とキッチンを動かす。
「すげえ、一切無駄がない」
「ふふっ、家事のコツよ」
あたしは少し笑いながら言う。
「うちの母ちゃんはこんな風にテキパキできんよ」
「昨日が昼食でよかったわね」
「全くだよ」
比較対象になっちゃうのは悪いけど、普段見ている浩介くんのお母さんよりも家庭的な所を見せて好感度を上げなきゃ！
そう思うと、俄然やる気が出てきた。恋をするだけで、こんなに単純に、幸せになれるんだわ。
「浩介くん、これでテーブル拭いてくれる？」
「分かった」
カウンターから覗き込んでいた浩介くんにお手伝いをさせる。
何もさせないのはよくないけど、かと言って本格的に料理をさせるのはあれなので、コップや箸を出したり、テーブルを拭いてもらうといったことを頼む。

あたしはまず焼けた鮭をお皿に盛り付け、次に炊き上がったご飯を盛り付ける。浩介くんのは山盛りだ。
「浩介くん、これお願い」
「おう」
出来上がった料理をカウンターに出して浩介くんに運んでもらう。
大した重さじゃないけど、あたしも料理でエネルギーを使うので、これくらいは頼みたい。
最後に味噌汁を出してテーブルに置いて完成。
「「いただきます」」
あたしと浩介くんが、相変わらず蓬莱教授の話題をトップニュース

にしているテレビを見ながら朝食を食べる。
時に他愛もない話もあって、こうして見ると、カップルというより新婚夫婦みたい。
新婚夫婦なら、この後浩介くんが仕事に行く。あたしも自分の職場に行くか、あるいは主婦としての家事が待っている。
いや、高校卒業して結婚なら、あたしと浩介くんで大学行きかな？
って、何を考えているのよ。クリスマスだからって浮かれすぎでしょ優子！
あたしは自分にそう言い聞かせて食事に戻る。
「はむっ……もぐっ……んーうめえ！」
山盛りの納豆ご飯を、浩介くんが美味しそうに食べている。
今まではあまり思わなかったけど、美味しそうに食べている浩介くんに惚れちゃいそうになる。
やっぱり、あたしが自分で作った料理だからだと思う。
「ごちそうさまー！」
ご飯も味噌汁も、あたしよりかなり量が多いのに、浩介くんはあっという間に平らげてしまうと食べ終わったお皿をカウンターに置いてくれる。
「あ、ありがとう」
さりげない気遣いも見逃さず、お礼を言う。そうすれば、あたしも浩介くんも、いい思いをする。
あたしが食べ終わり、しばらくするとテレビ電話が鳴った。
付けてみると、永原先生だった。
「あ、石山さん、それに篠原君もおはよう」
「おはようございます永原会長」
テレビ電話は基本的に協会の用事でかかってくる。
「おはようございます先生」
「篠原君、あなたも維持会員でしょ？」
永原先生が軽くたしなめるように言う。
「まあ会長、かたいこと言わないで本題に入りましょう？」
「ああうん……わかりました」

あたしの仲裁もあって、永原先生がうなずいてくれる。
「今日の会合ですが、仕様が変更になりました」
永原先生によると、今回の会合は緊急性が高いため、メール会員を含めた全会員に生放送として開放し、合わせて一定以上の会員に発言権、議決権を持たせるという。
維持会員や一般会員も一部本部に来る予定で、そこには蓬莱教授も含まれている。
「石山さん、悪いんだけど、篠原君も連れてってくれる？　なるべく多くの人に、今回は参加して欲しいから、お父さんお母さんは……今は無理ね」
「本部会場、手狭になりませんか？」
「大丈夫よ、急遽決まったことの上にクリスマスの日曜日だし、生放送でもＯＫって言ってるから、正会員だって多分そこまで来てくれないわ」
「そうですか……」
「じゃあ切るわね。私は他の会員さんとも連携取るわ。石山さんも正会員だから、悪いんだけど今からＦＡＸで送る人にこのテレビ電話で連絡してくれる？」
「……分かりました」
永原先生がそう言うと、テレビ電話が切れた。
３０秒も経たないうちに連絡網のＦＡＸが届き、「連絡網を回しきった後はこの紙をシュレッダーで処分するように」とあった。
「えっとまずは――」
連絡網一人の一般会員の家にテレビ電話をかけ先程の緊急会合での仕様変更について話す。
最初に「あれ？　あなたは？」と言われたので「正会員の石山優子です」と答えたら、「あら、あなたがあの有名な」と言われてしまった。
どうやら思った以上に、会の中ではあたしの存在はとても有名になっているようだわ。
内容は永原先生が言ったことの復唱に等しいが、普通会員全員に１２人でこれを回していると考えるとかなりの重労働。

浩介くんは空気を読んでテレビ電話に写り込まないように部屋の奥で本を読んでいる。
あたしは普通会員１９人を担当。維持会員や一般会員、家族会員、メール会員についてはメールで済ますという。
一応２回かけて反応がないなら飛ばすように言われているが、全員１回のコールで出てくれる。
やはり、緊急会合についてはみんな関心が高いのかもしれない。

全員の連絡が済んだ時には、あたしもそれなりに疲労が溜まってしまった。
「ふー疲れたー」
あたしは最後に永原先生のメールに「全員完了した」と連絡をつけ、シュレッダーでＦＡＸを処分した。
「優子ちゃん、会合まで休む？」
「ありがとう、もっといちゃつこうと思ってたんだけど」
「しょうがないよ。こんなことになるとは思ってなかったし」
前回の水族館でも、あたしと浩介くんのデート中に出会ったし、最初に教頭先生と対決した時に出会った時も浩介くんがいたし、何かと蓬莱教授はあたしと浩介くんが２人ともいる時に現れる気がする。
ともあれ、出発時間までは浩介くんと２人でゆっくり休む、外は寒いので、ストッキングを履いて出発準備を整え、浩介くんと本部へと向かった。

## 蓬莱教授の緊急会合

電車の中で思う。蓬莱教授の研究次第では、あたしは浩介くんとずっと一緒にいることができる。

この研究は多くの人に影響を与えるだろうけど、ＴＳ病患者にとってはもっと大きいし、あたしたちにとっては他のＴＳ病患者以上だと思う。

ＴＳ病になった人は、協会の存在もあって孤独感こそ感じないが、たった１つ「異性との別れ」は解消できない。

蓬莱教授は信用されてないけどさて、永原先生はどうですだろう？

「そういえば、浩介くんって本部に行ったことなかったっけ？」

「あ、ああ……」

あたしが駅で降り、所定のＮ４番出口を目指す。

既に若い少女の姿が何人かいる。多分、実年齢はあたしたちよりも年上なのだろう。

「このビルに入居しているの」

「へえ、すげえじゃん。何階？」

「来てのお楽しみよ」

あたしがわざわざもったいぶる。

そしてロビーのテナント一覧の表を見る。

「えっと、日本性転換症候群協会……うおっ、４９階なのか！」

「４９階の一室だよ。他の所には他社のテナントもあるわよ」

「まあそうだろうなあ……」

あたしたちは最上層のエレベーター付近に行く。

「あら、石山優子さん、こんにちは」

「こ、こんにちは……」

うーん、誰だっけ？　あ、さっき連絡網回した人だった。

あたしの名前を聞いて、他の人も挨拶する。

あたしたちはエレベーターに乗り込む。

「あ、余呉さん、こんにちは」

「あら石山さん、こんにちは。そちらの彼は？」

「篠原浩介です。維持会員で優子ちゃんの彼氏をさせてもらってます！」
「はじめまして、私は正会員の余呉と言います」
「あなたが……優子ちゃんからは噂を聞いています」
「あら、私も有名人ですか」
　余呉さんが不思議そうに言う。
「４９階です……４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」
　エレベーターの声とともに一斉に降りる。
「浩介くん、余呉さんは永原先生についでこの世で２番目に年上の人だよ」
「と言っても、会長がもうじき５００歳なのに対して、私はまだ１８４歳なんですけどね」
「あー、もしかして……そう言えば、塩津さんの時に」
　浩介くんが思い出した様に言う。
「ええ、石山さんの前は、私がカウンセラーとして塩津さんと接していました。今でも距離が離れているので、石山さんの代わりに私が相談に乗ることもあるのよ」
　幸子さんの容態は今は安定しているし、余呉さんからも定期的に報告がある。
「へー、そうなんだなあ……」
　あたし達は本部へと進む。相変わらず若い少女の姿が一番多いが、今日は男性の姿も少数ながら目立つ。
　おそらく、「維持会員」「一般会員」と呼ばれる人々だろう。
　今回は余呉さんがカードキーで開けてくれたのであたしと浩介くんも続く。
「こんにちは」
　大きな会議室に来ると永原先生が挨拶してくれる。
「今日は正会員も含めて集まり悪いわね」
　最初の会合と比べて、人も少ない印象。
「仕方ないですよ永原会長」
「うーん、急に決まりましたからねえ……」

とは言え、今日はネットで生放送も行われている。
それで代用する人も多いだろう。
ガチャ
一人の男性が入ってくると、みんな目を丸くした。
あたしも驚いた。
「こんにちは永原先生」
「あ、蓬莱先生」
蓬莱教授がそこにはいた。
そして渦中の人という意味なのか、蓬莱教授はいわゆる「お誕生日席」に座った。

「あれがあの蓬莱伸吾でしょ？」
「不老研究って本当にできるのかしらねえ？」
「みんな懐疑的よ」

他の会員たちがひそひそ話しているのが聞こえる。
「おや、石山さんに篠原さんじゃないですか。また会いましたな……前は確か……そう、水族館でしたかな？」
そんなことは気にも留めず、蓬莱教授があたしたちに向けて話しかけてくる。
「え、ええ……」
確かクラゲの展示コーナーで会ったんだっけ？
「私の研究も、ようやく一つのブレイクスルーを達成した。石山さんのためにあの無能を撃退する時に、永原先生が遺伝子を提供してくれたお陰だよ、感謝する」
「ど、どういたしまして」
「今回のことでまた一つ、協会に向けて話があるんだ」
「ともあれ、時間になったら聞きますね」
どうやら正会員はあたし、永原先生、余呉さん、比良さんだけがここに参加。残りの８人はインターネットでの参加になっている。

パンパン
「皆さん、時間になりましたのでこれより日本性転換症候群協会緊急集会を開きます」
永原先生が全体に向けて号令をかける。
会員たちの注目も、永原先生に集まる。
「今回は初の試みとしてインターネットでの会議参加及び一般公開をしています。くれぐれも品位の欠ける発言、行動には注意してください」
永原先生がカメラマン役の人に注意を向け、他の会員も続く。
「今回緊急集会を開催するきっかけと待ったのは、維持会員でもありまして佐和山大学で教授を務められています蓬莱信吾先生の昨日の記者会見についてです」
「内容は知っていると思いますが、ＴＳ病の遺伝子を利用し、限定的な老化の抑制に成功した。というものです。これについて蓬莱先生、詳しく説明をしてもらえますか？」
「はい。ＴＳ病の不老の原因の遺伝子は突き止められてはいないが、俺は一定のメカニズムを解析する事ができた。そもそも、他の人たちと違ってＴＳ病の患者の場合――」
蓬莱教授が何故ＴＳ病患者が不老なのか長々と、丁寧に説明してくれる。
退屈そうな表情をしている人もいるけど、初めて知ることばかりのあたしにはありがたい。
蓬莱教授によれば、ＴＳ病の患者は当人の身体能力に関わらず免疫力が高い。
特に若い人特有の病気に対しては異常なまでに免疫力が高く、また普通の人が起こすようなアレルギーやスズメバチなどでのアナフィラキシーショックも起こさないという。
単に不老と言うだけでなく、相応に長生きできるようになっているんだと言う。
とは言え、衛生環境が悪い場所にはそこまで強くない。
また、身体能力の他、精神も不安定になりやすく、当時の時代背景

を考えれば永原先生が生きているのはやはり奇跡だという。
細胞分裂の際にテロメアが劣化するが、もちろんＴＳ病にはそれは無い。
「長らくそれを他の人に応用できないか試してみたが、全て失敗だった。研究の過程でいくつもの医学が発展し、俺はノーベル賞までもらった。だが、俺は不満だった。しかし、俺はようやく最初の硬い扉をこじ開けた」
蓬莱教授によれば、それはほとんど総当たりに近い、論理的根拠が薄い方法だったという。
だがいずれもしても、今回の技術を使えば人の平均寿命が１２０歳となる。
この先も未知数だが、いずれ更に技術を発展させればＴＳ病の人でなくても不老の機会を与えられるという。
「ついては、一つお願いがある。誰でもいい、ＴＳ病の人を、俺の研究所に加えてほしい」
「……」
やはり、蓬莱教授が望む要求はそれだった。
周囲は沈黙を保っている。以前にも、永原先生にそれを要求して断られた所を見ている。
「もちろんただでとは言わない。俺の記者会見以降、俺の研究成功を待ち望む多数のビリオネアを含む資産家たちが、援助の増額を申し出てきてくれた……もし協力してくれれば、協会への支援金を今の２倍にすると約束する」
「!!」
永原先生が驚いた顔をする。
「に、２倍って……！」
「何、俺が受けた支援金の増額からすれば、微々たるものだ。今後は大学にある俺の研究所を増設する。そして人を集める。そうすれば研究は進む。今までは信用されなかったのも仕方ないと思っている。だが、やっと結果を出せたんだ。少しは、俺のことを信用して欲しい」
蓬莱教授が懇願するように言う。いつもの自尊心に満ちたような

言葉遣いではない。
「……確かに、以前のようにイマイチ信用できないという感じでもないでしょう。しかし、ＴＳ病の人は皆さん本業があります」
　永原先生が言う。いつもは親しい関係だけど協会の会長としては別。
「生活のための金なら、もちろん出す。支援者たちにも事情を説明すれば、きっと大丈夫だ」
「蓬莱さん、そうは言ってもこの先も研究がうまくいくかもわからない。まだ、時期尚早だと思います」
　副会長の比良さんが言う。そういえば、この人は永原先生より蓬莱教授を信用してなかったんだっけ？
「あの……あたしは賛成です！」
　意を決して、あたしが言う。
「石山さん……理由を聞いてもいいかしら？」
「はい、永原会長。やはり、不老というのはあたしたちで独占するものでもないと思います。それに……やっぱり男の子の伴侶がほしいじゃないですか」
　あたしの想い、浩介くんとずっと一緒にいたいという願い。
　それを叶えるには、蓬莱教授の研究に乗るしかない。
「……」
「永原会長から聞きました。江戸時代に生まれたＴＳ病の人の一人が、愛する家族との分かれに耐えられずに無理心中をしてしまったこと。もし蓬莱教授のことを知っていれば、そんな悲劇も防げるんじゃないかって」
「石山さん、それはレアケースよ」
　余呉さんが反論してくる。
「ええ、私たちは、それぞれ折り合いをつけて暮らしているのです」
　比良さんが更に加勢するように言う。
「確かに折り合いを付けるのは、長い人生では簡単かもしれませんが、あたしのように若い患者が将来を悲観したらどうするんですか？この研究が完成すれば、少なくとも障害は一つなくなります」

だけどここで引くわけにも行かないのであたしも応戦する。
「……やはり若いというべきでしょうか？」
比良さんが強引に話を封じ込めるように言う。
「いいえ、私にはそうとも思えませんが」
一番の年長者の永原先生に否定されてしまう。
「……では、投票にかけますか？」
「……そうですね、今回はインターネットでの投票もしましょう」
そう言うと永原先生が例の投票箱を投票札を持ち出してくる。
「皆さん、会員証をお見せください。石山さん、比良さん、余呉さん手伝ってくれるかな？」
「ええ」
「はい」
「分かりました」
永原先生があたし、永原先生、比良さん、余呉さんに１０票札を渡した以外は会員証でどの会員なのかを証明するという。
あたしは蓬莱教授の維持会員証の他、浩介くんにはフリーパスで維持会員分の札を渡す。
正会員４人はそれぞれ会員証を確認しながら全員に札を配り終わる。
最後に、永原先生があの時と同じように投票箱へ行くように促す。
また、インターネット投票でも行われる。
正会員、普通会員等の会員区分でもアカウントが違うから、そこで投票できるという。
投票所に並ぶ。
「石山さん」
永原先生が声をかけてきた。
「どうしました会長？」
「やっぱり石山さんってすごいわね。正会員の中でも余呉さんや比良さんにああやって意見できる人は少ないわよ」
永原先生は接しやすい上に遙か年上だけど余呉さんと比良さんは確かに江戸末期や明治生まれからすると意見し辛いのかも。

「……確かにあたしはまだ平ですが、それでも正会員です」
あたしは努めて毅然とした態度で言う。正直苦手だけど。
「ええ、いいことよ。最近少し組織が硬直化しつつあったから……やっぱり石山さんを思い切って正会員にしてよかったわ」
「期待に添えてよかったわ」
それはあたしも思うところ。
とは言っても、この投票でうまくいくとは限らない。
正会員の過半数に否決されれば終わり。それに協会が持つ蓬莱教授への不信感もある……蓬莱教授自身も会員だけど。
投票が終わっていく。最後に正会員の投票。あたしはもちろん賛成票を入れた。
ちなみに、ネット投票も並行して行われている。
「じゃあ、まず会場分から開票するわね」
永原先生が「〇」の箱をひっくり返す。
１０票の札は２つ、多分あたしと永原先生、そして正会員以外の分も数え始める。
同じように「？」の箱も数える。
「うーん、僅かに賛成が多いわね」
とはいえ、正会員の賛成反対は五分五分、インターネット投票の結果次第ではすぐに否決されてしまうだろう。
「ちょっと待ってください。はい、インターネットの結果が出ました」
「どれ？」
カメラマン役の人の声を聞き、永原先生がダブルチェックをしに行く。
だけど表情は芳しくない。
「うーん……これは否決かなあ……」
永原先生の集計発表に拠れば、インターネットでは正会員を除く得票比較でも否決されており、仮に過半数だったとしても正会員の得票も５対７で否決されてしまっていたという。
「蓬莱先生、すいません。会としてはこういう結果になったので、提案は受け入れられません」

永原先生がかなり申し訳なさそうに言う。おそらく永原先生も賛成票を入れたんだろう。
「何、仕方ない。俺もそういうものだと思ったよ。もう少し研究が進んでからでもいいさ。それに、俺の信用のなさは知ってるさ。仮に俺が無関係の正会員の立場だとしても反対しただろうさ」
蓬莱教授は、まるで予想していたかのようにさっぱりした顔で言う。
「そうですか……」
「今は、ただひたすら研究を続け、結果を出す。俺が信用されるには、それしかないだろうさ。幸い、予算だけはたっぷりある。困難さえ超えれば、また、いい結果を報告できると思うよ」
蓬莱教授は今後も研究を続けていくという。
「それから、会全体としては否決しますけど、今後会員が個人的に蓬莱教授の提案に乗って行くことを止めるものではありませんので、そちらは反対票を投じた方もご理解ください」
永原先生が釘を刺す。つまり独自行動はＯＫということだ。
「それに、そこに賛成したお嬢さん……いや、やめておこう……」
蓬莱教授があたしに向けて何か言おうとして断念した。
多分、あたしを佐和山大学に入れたいのだろう。
でも、どこまでコネが通じるのかな？
「ともあれ、緊急集会はこれで終了です。皆さん、お疲れ様でした」
「「お疲れ様でした」」
そんなことを考えていたら、永原先生の号令のもと、集会も終わってしまった。
会員たちも帰っていく。それぞれ雑談しつつも、やはり空気は同じ。
「石山さん、ちょっといいかな？　篠原君も」
「おや、永原先生」
「あ、蓬莱先生も出来ればいいですか？」
「はい」
あたしたちは永原先生に集められた。

「今回の件、残念だったわね。私も、可決されるとは思ってたんですが……」
永原先生の口ぶりから、以前よりも蓬莱教授への信頼が少しだけ深まっている様子が伺える。
おそらく、突破できなかった壁を突破したからだろうか、それともあたしが賛成したからだろうか？
「今後は、実験もより深く、より高頻度になる。とにかく予算はあるから助手も大量に欲しいし、規模が大きければ大きいほど、実用化の可能性も深まるはずなんだ」
「その蓬莱教授、予算というのは？」
あたしが質問する。資産家からの援助とか言っていたけど。
「ああ、俺の研究は、多くの人の援助があるんだ。おかげで佐和山大学も、設備はとてもいいぞ。学長も実質俺の傀儡だ。俺自身は俺の研究に専念したいからな。こういう立場が一番美味しいってもんだ」
やっぱり、この人は天才、恐ろしい。
「それでね、蓬莱教授に石山さん、それから篠原君に知ってほしいことなんだけど、今回の議決、もしかしたら潜在的に何だけど……不老を特権だと思っている人が一定数いるんじゃないかと思ってるわ」
「え!?　でも……」
ＴＳ病は呪いであり、泥棒のはず。
不老だって、苦しめる要素もある。
「確かに果てしなく生き続けるという苦しさはあっても、『長生きする』ことでステータスになる場合もあるのよ。比良さんと余呉さんが反対票を入れたのも、彼女たちの潜在意識として『不老の既得権』を守りたいという心理が働いてても不思議じゃないわ」
やはり、あたしと永原先生が賛成、比良さんと余呉さんが反対票だった。
「そうですか……」
「でも、それはいつか崩れるものよ。蓬莱教授の研究成果がここまで来た以上、いずれ別の誰かが、これを実用化するわ。だから、早い方がいいと思って私は賛成票を入れたのよ」

永原先生の言葉、「いずれはこうなる」ということ。
それでも、「自分たちだけ不老で居たい」という気持ちもある。
それは決して「不老が辛いから当事者として勧めない」というわけではない、むしろ「巷で氾濫している『不老というのは悲惨なもの』というのは実はそうでもないことを知られたくない」という心理が働いているのだという。
「集会中にも話したけど、会としては否決したけど、今後会の中で独自に蓬莱教授に接触するのは禁止しないわよ」
「ええ」
「ともあれ、私の話はおしまい。引き止めてごめんなさい。私は……吉良上野介殿の墓参りに行きます」
「そうか。では永原先生、良いお年を」
蓬莱教授が永原先生を労う。
「そうですね。良いお年を」
そう言って、あたしたちは解散する。
「なあ優子ちゃん……」
「ん？」
エレベーターから降りると、浩介くんが話しかけてきた。
「やっぱり、佐和山に行くのか？」
「……まだ、決めてない。でも蓬莱教授から何か便宜でもあるなら、第一志望にしてもいいわ」
ともあれ、今回も棚上げにしておこう。
「……そうか」
浩介くんともと来た道を戻り、あたしの最寄り駅で、お泊りデートは終了した。
テレビでは相変わらず、蓬莱教授のニュースをやっていたが、さすがに他のニュースもしているようだ。

# 元旦

「優子、あけましておめでとう」
「おめでとう母さん」
朝起きる、今日は元旦に当たる日で、今日から２０１８年を迎える。
この時になると、さすがに蓬莱教授のニュースも騒がれることはなくなった。
喉元過ぎれば熱さを忘れるという言葉のように。
そして人々の関心は元旦祝いに集中していた。
浩介くんの両親とあたしの両親はあれからすっかり意気投合したようではある。
ただ、浩介くんのお母さんはかなりプライド傷つけられちゃったみたいだけど。
とにかく、元旦ということで、夏祭りの時にも行った神社に行くことになっている。
とは言え、この日もあたしと母さんは、正月用の食事を作ることにしていた。
「優子、お正月のお料理は分かる？」
「もちろん分からないわよ」
「じゃあ、優子が立派なお嫁さんになるために教えてあげるわね」
最近ではあたしも家事として戦力になっているけど、さすがにお正月の料理は作っていなかったので、あたしは久々に母さんからほぼ全面的な受け身で料理の講習を受けた。
もちろん一回では覚えられないので、3が日は全て講習してくれるという。
あたしが女の子らしくなるにあたって、母さんの貢献も何気に大きい。
「さ、優子。振り袖を着るわよ」
元旦ということで、こんな風に晴れ着を着せてもらう。
母さんの手ほどきで着替えるわけだけど、例によって父さんは蚊帳

の外になっている。
うーん、兄か弟でもいればまだ良かったんだろうけど、言っても詮無きことかな？
ところで、今日は家族３人で行く初詣ではなく、「浩介くんの家族と一緒に行こう」ということになった。
……と言いたいところなんだけど、母さんから「優子と浩介くんは２人っきりで行きなさい」と言われてしまい、逆にあたしと浩介くんのお父さんお母さんはそれぞれ４人で行くことに決定した。
このように、どんどんと外堀を埋められているのが今のあたしと浩介くん。
「さ、彼氏さんにかわいいところ見せないとね」
「う、うん……」
母さんに振り袖を着せられたけど、父さん曰く「これなら成人式もバッチリだ」とのこと。
ちなみに、あたしは振り袖で着飾っているけど、両親はいつものラフな格好。
やっぱり若い女性は若い女性らしく、きれいな女の子にならなきゃいけないということかな？
胸は晒しで潰してから着ることになっている。あたしはこの時だけ、ちょっと憂鬱になるけど、潰さないともっとひどい感じになるし、仕方ないと思う。
和服も可愛いんだけど、そのへんはちょっとだけ欠点。
振袖の時でも、あたしにとって頭の白いリボンは欠かせない。ある意味で、トレードマークとしての地位も得ていると思う。

ともあれ、振袖を着終わったら三人で家を出る。
しばらく歩いていると、前方に見覚えのある人が見えてきた。
「あれ？　桂子ちゃん！」
「あ、優子ちゃん、あけましておめでとう」
やはり着飾った振袖姿の桂子ちゃんだ。
「あらあら、並ぶと綺麗だわ……」

桂子ちゃんは1人のようで、母さんはやはりあたしと桂子ちゃんの並びを気にしているみたい。
「じゃあお母さんたち先に行っているわね」
「う、うん……」
あたしたちそっちのけで、母さんたちが行ってしまった。
「なんか優子ちゃんの両親ってすごいよねえ……」
「う、うん……」
母さんは特にパワフルな人だよねえ……
「うちの親はあんなに活き活きとはしてないわよ。かわいがってはくれるけどね」
桂子ちゃんも両親にとっては「かわいい娘」だもんね、うん。
「しかし、２０１８年かあ……」
東京オリンピックまで後2年とかニュースでやってたっけ？
「どうなるのかなあ？　今年は……」
桂子ちゃんが今年のことを考えている。
「今年の注目は、やっぱり蓬莱教授がまた研究を進歩させるかどうかじゃない？」
「ああそういえばあったよねえ……蓬莱教授のこと」
最近ではテレビ新聞のニュースからは殆ど話題にならなくなっちゃったけど、インターネットの掲示板ではあれこれ議論が叫ばれている。
そこの議論ではいる人いらない人、様々だそうだ。
あたしにとっては、既に持っているものだから、持たざる者の議論というのは興味深かったりもする。
「ところで優子ちゃん、その振袖、すごいわね」
桂子ちゃんが振袖に話題を変えてくる。
「えへへ、母さんのお陰だよ。あたしじゃ着付けなんて出来ないし」
「うんうん、そうだよね。それにしてもよくあったわね」
「あはは、実は正月に備えてあらかじめ内緒で買っていたらしいのよ」
カリキュラム前の服選びの時には振袖はなかったが、別の店で買ったという。この振袖も一応保険で降りているらしいから驚きだ。

考えてみると、今ある服も、保険が降りている服が大半で、女の子になってしばらくして自分から買った服は殆ど無い。
最初に買った服があまりにも多いので、新たに買い足す必要性もないということでもあるけど、そのために「女子の最新の流行」には、ちょっと疎くなっちゃっていた。
そして話題についていけないでいて、つい「もう服は十分多くあるし」と言ってしまった所、桂子ちゃんに「その辺がまだまだ女子力が低い」と、お説教されてしまったこともあった。
「へえ、でもすごいわねえ。保険でたくさん服を買えたんでしょ？」
「ま、まあね。でも、それまで着てた『優一の服』は何一つ使えなくなっちゃったのよ」
どれもサイズが違いすぎたし。
仮に使えるのがあったとしても、全て捨てたと思う。優一の頃を思い出してしまうものは、今でもちょっとトラウマになっている。
パソコンとかコップとか塗り薬とか、女性でも使えるものはそのまま使ってるけど。
「うん、そうだったよね」

「ねえねえ、あの2人可愛くない？」
「ああ、この辺の地元じゃ有名な美人2人組らしいぞ。しかも1人はフリーらしいし」
「へえ、お前どんなところからそんな情報を仕入れてくるんだよ？」
「ああ、弟が小谷学園にいるからさ」
「ほほ、2人共小谷学園なのか」
「そだぜ、俺も学園祭行ったけどさ……あの2人、今年のミスコンの優勝と準優勝なんだぜ」
「ひゃーそりゃすごい。で、どっちが優勝なの？」
「ほら、黒くて長い髪の子だよ」
「あーやっぱり？　めっちゃかわいいもんねえ……」
「準優勝の子がアイドル級の超美少女だとすれば、優勝した子は超アイドル級の完璧美少女って感じ」

桂子ちゃんと話していると、やっぱり目立つのかあたしたちの話題がどうしても降りかかる。
「やっぱり噂になってるわね優子ちゃんと私」
「にゃはは、美人も辛いよ……」
「ふふっ……」
桂子ちゃんと2人で歩く、駅を過ぎ、神社へと向かうと、夏祭りと同じく浴衣姿で寒そうにしている人や、振袖姿の女性、着物姿の男女や普通の私服の人など、様々に入り乱れている。
「あ、あたしここで浩介くんと待ち合わせしているから」
鳥居の前であたしが浩介くんとの待ち合わせをしている旨を言う。
「そう？　じゃあ私、先に初詣してくるね」
桂子ちゃんも空気を読んで離れてくれている。
こういうところが、友人関係が長続きするコツだ。
「うん、いってらっしゃい」

「おーい優子ちゃーん！」
桂子ちゃんと分かれてしばらくすると、着物姿の浩介くんがやってきた。
「あ、浩介くん、あけましておめでとう」
「うん、おめでとう」
「浩介くん、その着物、似合ってるね」
「あ、うん……優子ちゃんも似合ってるぞ」
いつものやり取りだけど、やっぱりまだ照れくさい。
浩介くんと恋に落ちてからもう半年近くになるけど、あたしが不老なためなのか、愛が衰えるということを知らない。もっとも、たった半年とも言えるし１０年後が問題かな？
「えへへ、ありがとう……じゃあ早速初詣に行く？」
「あ、うん……」
神社の境内は、夏祭りのように屋台はなく、普段と変わらないが、元旦らしく人が多いのが特徴になっている。

ともあれ、今は浩介くんを連れて神社の境内へと急ぐ。あまりもたもたしていると人が増えちゃいそうだし。
「浩介くんは、正月をどう過ごすの？」
あたしが聞いてみる
「うーん、駅伝見たり？　後はゴロンとしているかな」
「そうだねえ、正月はゆっくりしていたいよね」
あたしが言うと浩介くんも共感を示してくれる。
列に並び、初詣を待つ。
「そういえば、さっき桂子ちゃんも居たわ」
「あーそうか、他に小谷学園の人はいるかな？」
「うーん、他にももっと近い神社の人もいるだろうし……」
そんなことを話していると、前方に何やら人だかりができている。
「なんだろうあそこ？」
「うーん、何か有名人でも来ているのかな？」
人だかりの中心が誰なのかは、こっちからは見えない。
「帰ったら寄ってみる？」
「そうだな」
浩介くんと2人で、そんなことを考えながら、列を前に進む。
列は途中で切れていて、手水舎に連なっていた。
どうもここは、手水舎の列で、手を清めた後で再び並び参拝用の列に並び直すという。
「夏祭りの時の事覚えてる？」
「ああうん、優子ちゃん、確か下着を――」
「だーダメ！」
他にも人がいるんだから止めないと。
あの時は桂子ちゃんと母さんに騙されてしまって、本当にスースーしちゃった。
ノーパンノーブラはいいけど、短襦袢なしはさすがにまずかった。
「おっと、悪い悪い。手の清め方だっけ？　忘れちゃった」
何かわざとな気もするけど、気にしないでおこう。
とにかく、あたしたちは掲示されている清め方を見ながら、手と口

を清めてもう一度列に並ぶ。
意外と列の進みは早くて、あっという間に拝殿までたどり着いてしまった。
あたしたちはお賽銭を入れ、二礼二拍手一礼をする。
あたしの今年の願いは、「浩介くんとずっと一緒に暮らせますように」にした。
普段信じてないのにお願い事するのもなんか図々しい気がするし、本当に叶えてもらえるかは、ちょっと分からないけど。
「じゃあ行こうか」
「うん」
あたしと浩介くんはもと来た道を戻る。
「あれ？　石山さんと篠原君じゃん。あけましておめでとう」
列の端から声をかけられる。
「あ、永原先生。あけましておめでとうございます」
見ると永原先生だった。
永原先生は夏祭りの時と同じく、「吉良殿」に貰ったという見事な着物を来ていたが、さすがに今日は晴れ着も多いのか、夏祭りの時ほど目立ってはいない。
「そういえば、さっき人だかりがあったけど？」
「ううん、私じゃないわよ」
やはり違うみたい。
「じゃあ誰だろう？」
「さあ？」
「そういえば、永原先生は今日って……」
「うん、あたしもとうとう５００歳の節目だよ」
永原先生がそう言う。
永原先生は誕生日が分からないので、１月１日を誕生日としている。
今年は２０１８年で永原先生の生まれ年が１５１８年、つまりちょうど５００歳になった。
「先生、お誕生日おめでとうございます」

浩介くんがそう言う。
「あはは、本当の誕生日じゃないとは思うけど、一応受け取っておくわね」
自分の本当の誕生日を知ることが出来ないというのも、中々に壮絶ではあるけど、普段の生活にはやはり支障はなさそう。
あたしたちは永原先生と別れる。
そして、浩介くんと2人でさっきの人だかりの所に来た。
うーん、人が山になっててあたしも浩介くんも中の人が見えない。
「誰なんですか？」
仕方ないので、山から出てきた人に聞いてみる。
「ああ、佐和山大学の蓬莱教授だよ」
「「え!?」」
あたしたちは驚きの声を上げる。
宗教を信じてなさそうな（ってあたしも実は信じてないけど）蓬莱教授が、初詣に来ていたのだ。
「すみません、どいてください」
浩介くんが人を振り分けて山の中心に行き、あたしも続く。ちょっと強引だけど仕方ないわ。
「おや、君たちか。君たちも初詣かい？」
蓬莱教授が声をかけてくる。
ちなみに着物ではなくスーツ姿だ。
「蓬莱さん、あけましておめでとうございます」
「そうだな、新年だな……俺の寿命もまた一年、縮んだ」
蓬莱教授が神妙な顔つきで言う。
周囲も、面識のある人ということなのか、あたしたちを奇特な目で見ている。
もしかしたら、大学生だと思われているかも？
「蓬莱教授はどうして初詣に？」
「ああいや、特に理由はないよ。何となく、だ」
「何となく？」
あたしが聞いてみる。

「ああ。俺は神も仏も信じてないからね。だから、それを信じているバカどもが俺の研究に何を言ってこようが、痛くも痒くもないのさ」
蓬莱教授が自信満々に言う。
蓬莱教授らしいと言えばその通り。
宗教界や学界からの批判など、まるで馬耳東風という感じである。
「それにしても、去年まではこんなことはなかったんだがねえ……あの記者会見以来、俺もすっかり有名人だよ」
「いやその、ノーベル賞取った時点で相当な有名人だと思いますが」
「おっとそうだったな、すまん」
浩介くんが当然の突っ込みをする。
何気に蓬莱教授がボケ役になるって珍しい気がする。
とはいえ、例の記者会見以降、知名度が更に上がっているのも事実なのよね。
「まあ、ともあれ、君たちには期待しているよ。また会う機会があったら、会いたいものだ」

あたしたちは蓬莱教授と別れると、神社の最初の鳥居まで戻ってくる。
「お、優子ちゃんに篠原じゃん。ちゃんと会えたようでよかったわ」
「あ、桂子ちゃん」
鳥居の直ぐ側で、桂子ちゃんが声をかけてきてくれた。
「おう、優子に篠原！　あけましておめでとうな！」
よく見ると、桂子ちゃんは恵美ちゃんと2人で居た。
「恵美ちゃん、あけましておめでとう」
「さっき龍香と彼氏も居たわ。それにしても龍香の彼氏ったらホントスケベだったわ」
「うんうん、いきなり尻とか胸とか触るもんな。でも龍香のやつ、触られて嬉しそうな顔すんだからホントバカップルだよ」
どうやら、龍香ちゃんたちも相変わらず見たい。
あたしたちも大概だけど、それでも人前でそういうことはしない程度には分別はわきまえているつもり。

「じゃあ、あたいはこれから初詣だから、さよなら」
「うん、バイバイ」
あたしたちは恵美ちゃんと別れ、再び3人で帰ることになる。

「なああの男……」
「新年早々ハーレムかよ」
「うぐぐぐ、リア充めぇ……」

浩介くんが嫉妬する男子の会話に巻き込まれている。
浩介くんはもういつものことと涼しい顔をしている。
「篠原、平気なんだね」
「当たり前だろ、むしろ気持ちいいくらいじゃん?」
「あー分かるわ」
どうやら桂子ちゃんも、かわいくて美人らしく、通行人の女性から嫉妬の目や嫉妬の声はいくつもあったらしい。
で、やはりそういうのは自分の自信になっていくという。
「自信を深めれば、女の子はますますきれいになるわよ」
「あーうん、それ分かる」
桂子ちゃんの声に、あたしも賛成の意を示す。
やがて駅が近づき、浩介くんと別れ、再び桂子ちゃんと2人になる。
「静かだね」
「うん、静かなお正月だね」
家のあちこちで、門松の飾りがつけられている。
新年でもいつもと同じく他愛もない話を続け、そしていつもの分かれ道に到着する。
「じゃあバイバイ」
「さようなら」
いつものようにあたしは家を目指す。
家の鍵は閉まっているので、あたしが財布から鍵を開ける。
玄関を見ると父さんと母さんの靴があった。
「ただいまー!」

それを見て、あたしは帰ってきたことを知らせる。
「おかえりー優子ー！」
母さんがあたしを出迎えてくれる。
「さ、着替えようか？」
「うん」
あたしは母さんと2人で、振袖を脱ぎ、パジャマ姿になった。あまり良くないとも思ったけど、もう誰か来る予定もないし正月くらいこうしよう。
そして、お正月をゆっくりと過ごした。

# 新年の登校

小谷学園の冬休みが終わり、後期も後半に入った。３月で２年生も終わり、長いようで短いようで、とっても長かった。浩介くんと付き合い始めた時も、文化祭はまだ３ヶ月経ってないのに、遠い昔のように感じてしまうのだから。

今日は新年になって最初の登校日、あたしはいつものように制服を着て、女の子らしくお人形さんとぬいぐるみさんで遊んでから母さんの所に行った。

これからの学校行事は、２月にスキー合宿、そして３月には卒業式が行われる。

さくらちゃんが野球部マネージャーとしてやっていたけど、唐崎先輩と付き合い始めたとか何とか。

どうやら、文化祭の時のあたしたちの後押しがうまく行ったみたい。

ちなみに、坂田部長は県外の大学への進学を考えてセンター試験を受けることになっている。

そういえば、あたしもセンター試験受けるんだっけ？

そろそろ「大学受験」ということを考えねばならない。

とは言え、どうしたものか？

一応、今のところあたしは佐和山大学の一段上の大学を受ける予定になっている。偏差値的にももっと上を目指せる。

佐和山大学でも、蓬莱研究所出身は例外で、場合によっては名門大学並みの処遇になることもあるというけど、あたしとて必ずそこに行けるとは限らないし、それは危険な賭け。

いくら蓬莱教授でもあたしを優先して入れる何てことは出来ないだろうし。

「優子、最近考え事が多いわよ。どうしたの？」

「うん、女の子として生活が定着したら、今度はまた新しい悩みが出てきたのよ」

と言っても、不老の悩みだからＴＳ病特有だと思うけど。

「なるほどねえ……」
母さんも関心しているが、実際の所女の子になったが故の新しい悩みというのはどんどん出てきている。
文化祭の頃まで、浩介くんと触れ合いたいということで本能を女の子にしようとして、まだ彼氏彼女になれなくて苦労した所もそんな感じだった。
「そういえば、優子は来年受験だけどどうするの？」
母さんがちょうど悩んでたことを話題に降る。
「ああうん、一応第一志望は今のところ――」
「へえ、結構偏差値高いんだな。ところで話題の佐和山大学はどうするんだ？」
父さんも会話に加わってくる。
「うん、一応滑り止めって感じにしているわ」
蓬莱教授の話は出てこないが、一応我が家の最寄りの大学も佐和山大学だし、小谷学園ともほど近い位置である。
ましてや不老研究の蓬莱教授のいる大学だしどうしても話題にはなる。
だけど、あたしの偏差値からすると、どうしても滑り止め相当になっちゃう。
浩介くんは頑張ってあたしと同じ大学に行くと言っていたけど。
「そう。浩介くんの方は？」
「うん、このまま行けば佐和山大学になりそうだって」
「そう、じゃあ浩介くん頑張らないとね」
「うん」
いくら大学変わったくらいで別れにはならないという自信があるとは言え、やはり会える機会減るのは嫌だ。
あたしが故意にレベルを下げるわけにも行かない、ただ蓬莱教授のことがあるから、こうしてあたしはずっと悩んでいる。
ともあれ、いつもと同じ朝食を食べてあたしは学校へ行く。
駅ではいつものように胸に視線を感じる。というよりも、殆ど同じ人があたしをジロジロ見ている気がする。

彼氏持ちだって知ってる人だっていそうなのに、やっぱりオスの本能は凄まじい。
浩介くんだって、本能と戦っているんだよね？
あたしなんてメスの本能に負けて浩介くんを誘惑してばかりなのに……オスが本能に抗うことの難しさを知っているが故に、あたしは浩介くんの責任感の強さを感じて、ますます浩介くんに惚れ込んでしまう。
こういう惚れ方は、もしかしたらＴＳ病の女の子特有かもしれないわ。
「おはよー」
「あけましておめでとうございます優子さん！」
「おめでとう龍香ちゃん」
教室に入って、まずは龍香ちゃんと挨拶する。
「優子、あけましておめでとう」
「虎姫ちゃんおめでとう」
続いて、虎姫ちゃんとも挨拶する。
「石山さん……あけまして……おめでとうございます……」
「うん、さくらちゃんもおめでとう」
よく見ると、男子女子関係なく教室のあちこちで新年の挨拶が繰り返されている。
そして、浩介くんはまだ来ていない。
「ねえねえ、優子は冬休みどう過ごしたの？」
「あーうん、寝たり浩介くんとデートしたり、後は蓬莱教授のことを会合で話したりかな？」
「へえ、優子さん蓬莱教授と知り合いなんですか？」
「気になる気になる」
虎姫ちゃんと龍香ちゃんががっついてくる。
やっぱり蓬莱教授の話題も小谷学園では他の高校より盛り上がっている見たく、「永原先生のように生きられる夢の技術」だとかなんとか言われているのも目撃した。
「はい、実は林間学校の時にお世話になって……」

「え!?　林間学校?」
林間学校ももう半年も前の話。
だけど、部屋割りの話はもっと前だ。
そういえば詳しい経緯を知っている生徒は、あたしと浩介くんだけだったことを思い出す。
「ほら、教頭先生のせいで部屋割りがあたしだけ隔離されそうになったじゃない?」
「お、懐かしいな。そういえば、永原先生の正体もそれで分かったんだったよな」
恵美ちゃんもトークに加わってくる。
「実はその時、蓬莱教授にお世話になったのよ」
「へえ、どんな感じだったの?」
「それは――」
あたしは当時の記憶を掘り出しながら話す。
永原先生が自分の遺伝子と引き換えとして、蓬莱教授を使って教頭先生に年齢証明のための論文を渡すことになったこと。
その後、長幼の序を重んじる教頭先生が、永原先生が本当に５００歳（去年はまだ４９９歳だけど）だったと分かった途端、教頭だから一教員の指図は受けないと言い出したこと。
そしてそれによって、部外者であるはずの蓬莱教授まであたしや浩介くん、永原先生と教頭先生の間の口喧嘩に参加していたこと。
「噂には聞いていたけど、いくら助っ人だからって口喧嘩に参加するってすげえやつだな」
「はい、私もそう思いますよ。いくら権威あると言っても部外者じゃないですか」
確かに恵美ちゃんと龍香ちゃんの言うとおり。今思えば教頭先生に向かって「今この学校で教頭にふさわしいと思っているのはてめえだけだろ」って言ってのけるのはすごいことだわ。
「それで、結局どうなったんですか?」
「永原先生が呼び出したもう一人の助っ人……校長先生が教頭先生に『もう諦めてください』と言ったことで、教頭先生も諦めてくれて、そ

れで部屋割りが決まったわよ」
教頭先生の名誉のためにも発狂して倒れたことは話さないでおこう。
「あら、蓬莱先生の話？」
「あ、永原先生！」
よく見ると、永原先生がいた。
あたしたちはもう時間なのかと思って慌てて時計を確認しようとするが、時間を読み取る前に「早く来ただけでまだ時間じゃないわよ」と言われた。
「はーびっくりしたー」
「そう言えば、先生って蓬莱教授と知り合いなんだ？」
虎姫ちゃんがまず永原先生に話しかける。
「そうですよ安曇川さん、初めて会ったのが確か彼が博士課程のときだったから……２５年来の付き合いです」
「へえ、そんな前から……！」
「それで、今林間学校で教頭先生の話をしてたんです」
「ふふっ、懐かしいわね。今でも思い出しただけで笑みが出てくるのよ」
永原先生がちょっと怖い顔で言う。
虎姫ちゃん、龍香ちゃん、恵美ちゃんはやっぱり引いている。
５００年の人生と言うのは恐ろしいわね。
「特に私が言った『私のように歴史とともに生きて悠久の時を過ごし、それを授業に活かせることも出来ない。石山さんや篠原君のように過去の罪を悔いて心を入れ替える気概もない。蓬莱教授のように賛否両論を巻き起こしながらも偉大な足跡も残さない。教頭先生、あんたは何も出来ず、地位にしがみつくことしか能がない無能なのよ！』は今でも我ながら最高傑作だったわ」
「あー、あったわね」
今思えば永原先生、すごいことしてたわよね。
「先生、それ、教師として一番言われたくないセリフだよね」
虎姫ちゃんが驚いたように言う。

「ましてや教師として大先輩にそんなこと言われた日には自信を喪失しますよ」
ちなみに、教頭先生は今でも元気に教頭をやっているけど、昔のように威勢はなくなったらしい。
永原先生との一件も、やはりトラウマになっているとか。
ちなみに、小野先生は未だに永原先生のパシリの扱いになっているとか。
「それから、あたしと蓬莱教授が会ったのは――」
あたしは水族館でのことを話す。
一応、ずっと気になっていた蓬莱教授の「佐和山大学でいつか偉大なことを成し遂げる気がする」と言う言葉のは、さすがに話さないでおこう。
あたしの中では引っかかっているけど、他の人から見れば蓬莱教授が血迷ったようにしか聞こえないだろうし。
「さて、そろそろホームルームよ」
「「はーい！」」
あたしたちがそう返事すると、永原先生が急いで教卓の方に行く。
浩介くんもいつの間にか座っていた。
「それじゃあ、新年最初のホームルームを始めますよー！」
冬休みが終わり、小谷学園の新年が始まった。
新年最初のホームルームと言っても、冬休みはどうだったかとかそんな話が多く、連絡事項も多くない。
あるとすれば、２月に行われるスキー合宿についてのことだ。
「ちなみに、今年は私が産まれてちょうど５００年目になります。誕生日は私自身を含めて誰にも分かりませんが……ともあれ５００歳になったことをここに報告します」
永原先生からそんな話も出た。多くの人にとって、５００年生きるというのは他人事の話。
あたしは他人事じゃあないけど、今は蓬莱教授の話もあって、みんながそれを実感し始めている。
５００年の人生について、他の生徒たちはあたしほど詳しくは知ら

ない。
ともあれ、今日から早速授業が再開された。
冬の寒さはますます厳しくなっていく。
２月のスキー合宿について、あたしはあまり考えたくないと思っている。
女の子になって、特に寒いのが苦手になってしまった。わざわざ冬山でしかもスキーを滑る事に関する恐怖もあるし、あたし自身身体が弱くなってひょっとしたら怪我をするんじゃないかという恐怖もあった。
ちなみに、小谷学園での真冬の学校行事はこれだけで、校内の話題は新年のこと、蓬莱教授のこと、スキー合宿のことの３つが主になっている。

そんなこんなで今日も無事に授業が終わり放課後を迎えた。
「あ、浩介くん。天文部行こう？」
「おう」
浩介くんは鍛えながら天文話に没頭することが多くなった。何気に器用だと思う。
ちなみに、他の３年生は部活を引退していることが多いけど、坂田部長は相変わらず天文部に入り浸っている。
とは言っても、最近はパソコンの前ではなく、勉強をしている姿も多いから、部活しているのか微妙なのが実情だけど。
コンコン
「入っていいですわ」
「失礼します」
坂田部長の声とともにあたしと浩介くんが入る。
中には既に桂子ちゃんも居て、これで天文部が出揃った。
「ところで来年のことですけど」
「来年ですか？　坂田部長卒業ですよね」
あたしが突っ込むように言う。
「はい……来年の部長のことですわ」

「あ！」
あたしがはっとする。そういえばそれを決めないと。
「……予定通り、木ノ本さんで行こうと思いますわ」
「異議なし」
「俺も異議はないな」
「私も辞退はしません。というよりも優子ちゃんや篠原にやらせても仕方ないでしょう」
桂子ちゃんも当然という顔で言う。
来年は坂田部長が居ないもののあたしたちが3年生になることで、天文部は続く。
とは言え、このまま2年生以下の部員が居ないとここも廃部になるのは確実だという。
「まあ、廃部にしてもいいですわよ。もしそうなったらこのミニチュアも私か木ノ本さんで所持することになりますわ」
「そうか」
坂田部長も、桂子ちゃんも、元々不人気の部とあってか、あるいは部活自体がそこまで盛んではない小谷学園の学生の気質なのか、そこまで未練がましいという感じではなく、むしろ「よくここまで持った」とまで言っていた。
きりが悪いということもあってか、坂田部長は卒業するまで部長をするらしい。
天文部と言っても、坂田部長は受験勉強をしつつ、時折桂子ちゃんとあたしと浩介くんの話に乗っかかるだけ。
浩介くんも相変わらず筋トレがメインだし、おおよそ天文部らしくないと言えばその通りだ。
「そういえば、スキー合宿もあと1ヶ月半ですわ」
3年生にはスキー合宿がない。一般入試と重なったりもするからだ。
「ええ」
「3年生はこうして受験勉強ですわ」
坂田部長の受験勉強の様子を見ていると、どうしてもあたしの中で

蓬莱教授のことを思い出してしまう。
以前までは、受験のことを考えても蓬莱教授のことを思い出すことはあった。
それだけ水族館での蓬莱教授は印象的だった。
それでも、あの記者会見までは「そういえば」という程度だったが、今では受験のことを考えた瞬間蓬莱教授のことが真っ先に出て来る。
「石山さん、どうされました？　また考え込んでますわ」
「そ、その……実は――」
蓬莱教授のことを話していいか迷うが、あたしは水族館での蓬莱教授の言葉を話した。
「蓬莱教授がそんなことを話されたんですか……」
「驚きだよね。蓬莱教授はどうしてそんなことを？」
坂田部長も桂子ちゃんもやはり驚いている。
「こっちが聞きたいわよ」
あたしも正直に言う。
「ただ、俺は何か違和感を感じるんだ。嫌な感じでは全然ないんだが、ね」
浩介くんが、自分でもよく分からないという感じで言う。
ともあれ嫌な感じではない、むしろいい予感さえするのに、違和感を感じるのだという。
「ともあれ、今後に注視ですわ」
「ええ」
あたしたちは、天文部でそれぞれの活動を続けた。
あれから浩介くんと桂子ちゃんとあたしの３人で帰る機会も増えた。
坂田部長との４人で帰るということは少ないけど、それでも何度かしてみた。
４人で帰ると、浩介くんハーレムに見えるけど実際にはあたしと浩介くんでいちゃつくことが多い。
だから浩介くんがハーレムを作っているわけではないことはすぐに分かるため、誤解されることは多分ないと思いたい。

「ただいまー」
「おかえり優子、今日もお疲れ様」
冬休み明けと言っても、いつもと変わらない学校生活だった。
でも、もうすぐ坂田部長が卒業すれば、ちょっとだけ、学校生活が変わりそうな気がする。
来年は高校生活最後の1年、そして大学受験。悔いの無いように過ごしていきたいと思った。

# スキー合宿への展開、そして突然の来訪者

1月のセンター試験も終了した。
坂田部長のセンター試験は、うまく行ったらしい。
「これなら合格できますわ」とも言っていた。
世間でも小谷学園でも、あれだけ騒がれた蓬莱教授の話もすっかり鳴りを潜め、同時期、あたしたち2年生と1年生はスキー合宿に関する話題で持ちきりになった。
あたしのＰＣも、浩介くんに見てもらって、どうやらスマホが導入しているＯＳのエミュレーターを作ってくれたらしい。
これで、ＰＣでは使えないスマホ専用のソフトやアプリも遊べるようになったとか。
……使ってないけど
ともあれ、1月中旬のある日、スキー合宿についてのホームルームが行われていた。
「まもなく、部屋割りが決まります。ですが少し困ったことが起こりました」
「え？」
永原先生の言葉にうちの生徒たちは目を丸くする。
「確定ではないのですが……どうもホテルの方の部屋の幾つかがトラブルを抱えている模様でして、予備の部屋もなくて、どうしても生徒の方で男女の相部屋を作らざるを得なくなる模様です」
だ、男女の相部屋……でもカップルは小谷学園でもそれなりにいるはずだけど……
あうう、どうしよう名乗り出るべきかな？
「それなら篠原と優子ちゃんで決まりだろ」
「おい高月、それでいいのかよお前！」
「良くはねえけどよお、他に誰がいるんだよ」
「ぐぐっ……篠原呪われろ……！」
「優子ちゃんを、優子ちゃんを独り占めしやがってちくしょー！」

男子が勝手に盛り上がっている。
というか、勝手にあたしと浩介くんって決めてる。
とはいえ、部屋にトラブルでどうしても男女ペアの部屋ができてしまうとして、あたしと浩介くん以外、妥当なペアも居ないのも事実ではある。
永原先生によると、男女ペアの部屋を教員にするという手もあったが、そうすると1人部屋の使い道が出てこなくなってしまうという。
さすがに生徒を1人部屋も良くないとか何とか。
生徒同士の男女ペアのほうが不味そうな気もするけど。

あたしは朝のホームルームの後、浩介くんと相談して放課後に永原先生に申し出てみることにした。
「あの、永原先生」
「あら、石山さんに篠原君、ちょうどいいところに来たわね」
「あの……先生、もしかして考えてること同じなんじゃ……」
浩介くんが察したような口調で言う。
永原先生も苦笑いしている。
「あはは、うん、実はホテル側でいくつかの部屋が急遽トラブルでいくつか使えなくなったって連絡が入って……それで急遽ホテルとスキー場を変えようかなって話をしてたんだけど、石山さんたちに入って貰う形でいいかな？」
「う、うん」
あたしたちも、2人で同じ部屋は嬉しいし。
「ただし、えっちなことは禁止だよ。あのホテル、ボロボロだから結構隣に声が響くからね」
永原先生もやはり、そのことは織り込み済みらしい。
やりたくてたまらなくなっちゃうけど、そのあたりの自制はするようにと言われた。
ちなみに、林間学校やスキー合宿でえっちなことが禁止になったのは、何年か前に学校に内緒のホモカップルがいて、学校もそれを見破

れずカップルを同室にしてしまって隣に声が響いて阿鼻叫喚になったことを受けてだという。
ちなみに同性愛自体は小谷学園的には「他人に迷惑かけなければ自由」だという。
泊まるホテルやスキー場の都合で２人部屋を使うこともある。それ故の悲劇である。
ともあれ、あたしと浩介くんが２人部屋になることはこれでほぼ決まった。
「ところで先生」
「何ですか篠原君？」
「家族風呂って今年も……」
「ええ、一応応募かけてみます。もうここ数年生徒は誰も使ってないですけど」
あそこのホテルには家族風呂もあって小谷学園よろしくホテル側規定の料金を払えば貸し切りで利用することが出来る。
ホテル側としても、設備を遊ばせておくと損失になるという思惑があるからこんなことが可能になっている。
１人から５人まで使うことが出来るけど、それぞれが払わないといけないし、何分料金が料金なので先生の一部が何年かに一度使っている以外、殆ど誰も使っていないのだという。
「ねえ浩介くん……」
「あ、ああ……でも、まだいいだろ？」
「でも……」
「どうしたの？　ヒソヒソ話して？」
「ああうん、何でもないわ」
あたしと浩介くんがギクシャクした反応をする。
家族風呂、あたしと浩介くん……当然小谷学園のことだからこんな露骨な不純異性交遊の予感しかしないことでもＯＫ出しちゃうんだろうけど。
って、建前上はＯＫ出すのはホテル側ということになってるけど。
お金に関しては一応問題ない。

「あらあら、２人とも予約するの？」
「う、うん……」
まだ正式に決めたわけじゃないのに、あたしがつい頷いてしまう。
「ふふっ、じゃあそのことはホテル側に言っておきます。スキー合宿当日に料金を払ってください」
「お、おう……」
浩介くんもなし崩し的に肯定してしまう。
「あうう……こ、浩介くん……どうしよう……？」
「そそっ、そう言われてもなあ……な、なるようになるしかないだろ！」
あたしも、浩介くんも動揺している。
浩介くんはほんの興味本位で聞いたんだと思うけど、永原先生の策略もあってトントン拍子に利用が決まってしまった。
って、２人部屋ももしかしたら永原先生の策略かもしれないわね。
ともあれ、家族風呂もよく今まで殆ど居なかったものだと関心してしまう。
小谷学園はあちこちでカップル見かけるし、やっぱり学生の財布じゃ家族風呂は厳しいというのもあるのかもしれない。
翻って、あたしは日本性転換症候群協会正会員としての仕事で、幸子さんのカリキュラムの報酬を貰ったし、会費に関しても永原先生が建て替えてくれている。
ともあれ、浩介くんとのデートでにまだ幸子さんの報酬の４万円を使い切ったわけじゃないし……というか社会人にとってもだけど、高校生にとってはなおのこと４万円は大金だ。
それに、考えてみれば例の痴漢事件の慰謝料だってまだ１０万円くらい残っている。家族風呂のお金くらいなら余裕で払える。
いずれにしても、母さんからの小遣いもちょくちょくためているし、浩介くんとのデートでトータルは赤字だけど、まだお金に逼迫しているわけではない。
このまま行けば高校卒業の頃には貯金は使い果たす計算だけど、受験勉強とかデートの方法を工夫すれば大丈夫なはず。

大学に入ったらまた小遣いを増やしてもらうとか、アルバイトをするとか考えてみようかな？
「浩介くん、行こうか」
「あ、ああ……」
ともあれ、あたしたちは天文部へと急ぐ。
「こんにちは」
「いらっしゃいですわ。石山さん、篠原さん」
「優子ちゃん、どうしたの？　遅かったじゃない」
桂子ちゃんが疑問を言う。
「あ、うん……その、スキー合宿なんだけど」
「聞きましたわ。ホテル側の部屋の幾つかがトラブルで男女の相部屋がどうしても出来てしまうという話ですわね」
坂田部長も知っているようだ。
「え、ええ……」
「あそこはもう老朽化が激しくてもうすぐ工事する予定だったのですわ。だけど、結局持たなかったみたいですわ」
あちゃー運が悪いわね。
「それで、優子ちゃんと篠原が相部屋となったというわけですか」
「う、うん……」
家族風呂をなし崩しで予約してしまったことは話さないでおこう。
「まあ確かに、男女で相部屋するならその組み合わせが一番ですわ」
坂田部長も言う。
ちなみにこうなったのはあたしがＴＳ病で男子から女子になったせいでもある。
今年はじめは男女が同数だったが、今は学年全体でも女子が男子より２人多い状態が続いている。
つまり、優一がいなくなって新しく優子になったため男子――１と女子＋１が同時に起こったから、こんな風に部屋に余裕がなくなると男女混合で部屋を作らざるを得なくなる。
「しかし、浮かれすぎてわいけませんわ。特にいかがわしい行為は隣に聞こえて迷惑になりますわ」

「ぐっ、それ……先生からも同じこと言われたぜ！」
坂田部長の注意に浩介くんも反応してしまう。
まあ、確かにあたしと浩介くんのカップルがホテルの２人部屋で２人きりって言ったら、当然それが思いつくよね。
しかも、えっちなことして隣に響きますじゃ他人の迷惑にもなるから、いかに小谷学園とは言え止めざるを得ないという話だ。
「それじゃあ、天文部の活動を始めますわ」
あたしたちは天文部の活動を始める。
と言っても、坂田部長は一般入試のための勉強、桂子ちゃんとあたしが天文部でいつものように天文情報の収集。
浩介くんは相変わらず筋トレをしていて、最近はあたしがクリスマスにプレゼントしたマッサージ機も学校に持ってきて使ってくれている。
「それにしても、最近生命の存在可能性の高い惑星が多いわね」
去年になってからＮＡＳＡがよく「重大発表」をするが、実際かなりすごい発表も増えている。
だけど、本当に地球外生命の存在を確認するのはもっとずっと先の話になる。
「あーあ、私もＪＡＸＡにでも務めて見たいわね」
「桂子ちゃん、行けそう？」
「うーん、今の成績だとちょっとねえ……」
桂子ちゃんは宇宙への情熱は高く、そのために英語や物理の成績は良いが、社会系の科目の成績が悪い。
あたしもどちらかと言えば理系、蓬莱教授の研究室に所属したらいわゆる「リケジョ」になる。
でも、ＴＳ病だと知られたら、果たして世間は「リケジョ」として扱うのだろうか？
もし、そんな扱いをされなかったら、あたしは……
って、そんな取らぬ狸の皮算用をしてもしょうがない。
それに、佐和山大学って決まったわけじゃないし、そもそも滑り止めの大学なのに、どうしても蓬莱教授の存在が頭から離れない。

コンコン
誰かが天文部のドアをノックする。
「はい、どうぞ」
坂田部長が応対する。
「失礼する」
中年男性の聞き慣れた声がすると、扉が開く。
「「わっ!!!!」」
あたしたちは目を丸くしてしまった。
なぜならそこに居たのは蓬莱教授だったからだ。
これまで以上に颯爽と、なおかつ自信に満ちた雰囲気で歩いて行く。
「ほ、蓬莱教授……」
「どうして、ここに？」
「そりゃあここに用事があったからだ」
蓬莱教授が当然というように言う。
天才によくありそうな謙虚さと傲慢さが合わさった不思議な風潮。
「それで、我が天文部に用事というのはどのようなご用件でしょうか？」
「俺は天文部に用事がある訳じゃない。俺が用事あるのは石山さんだ」
「え？」
予想していたこととは言え、やっぱり一瞬驚いてしまう。
間違いなく、この前の会合のこと、研究室にＴＳ病の患者の協力者を1人迎え入れて、研究を進めていきたいという、会合で否決されてしまった例のあれだ。
「ゆ、優子ちゃん。蓬莱教授とどういう関係に？」
「いやいや、そんなに会ったことないわよ。それより蓬莱教授、要件というのはこの前の緊急会合のことですか？」
「ほう、やはり君は頭がいい。全くその通りだよ。実はな、今日学長と教授会の承諾……って言っても二つ返事だがな。あー、ともかく承諾を得て、もし君が佐和山大学に入学したらそこの篠原君共々俺の研究

室への配属を融通することになった」
「え!?　俺も!?」
　浩介くんも驚いている。
「ああ、永原先生から聞く所に拠れば、君たちはどうも寿命問題で悩んでいるようだったからね。俺としても、この不老研究はなんとしてでも成功させたい、そのためにどうしても石山さんの力が必要なんだ」
「もし、佐和山大学のＡＯ入試を受けてくれるなら君と篠原君は名前を書くだけで合格としてあげよう。その代わり、俺の研究に協力してもらうぞ」
　蓬莱教授がさらりととんでもないことを言う。名前を書くだけで合格にしてあげるという。偏差値が高くないとはいってもそれなりの倍率はあるのに。
　一体蓬莱教授がどうしてこんな権力を持っているのか？
「蓬莱教授、あの、どうしてそんなことが言えるんですか？」
　桂子ちゃんがたまらず口を挟む。
「おや、君は？」
「木ノ本です、木ノ本桂子」
　桂子ちゃんが蓬莱教授に自己紹介する。
「そうか、俺が佐和山大学教授の蓬莱伸吾だ」
「ええ、知ってます」
　桂子ちゃんが当然という顔をする。
「それで、どうしてそのことが言えるかだな」
「え、ええ……」
「いいか、佐和山大学の学長は事実上この俺なんだ」
「え!?　噂は本当だったんですわ！」
　坂田部長は知ってたかのように言う。
「そもそも、俺が何で佐和山大学のような所にいると思う？　今の俺の業績ならそれこそ東大の卓越教授でもおかしくない……それは頭の固い学界どものせいだ」
　以前にも聞いたことがある。
「バカな奴らだ。非科学的な宗教など信じている学界の敵どもに屈す

るんだからな。だが俺は違う、ヤハウェだからイエスだかマホメットだか知らないがそのような与太話の妄言野郎を信じている連中のことなどどうでもいいのだ」
蓬莱教授は、よっぽど宗教団体が嫌いらしい。
「だが、この大学は違う。俺のことを受け入れてくれた。やはり不老というのは人類の夢だ。俺の元には、ビリオネアと呼ばれる資産家を含む多くの人々から、毎年巨額の寄付金が来るんだ」
その話も聞いた。
確かに、蓬莱教授なら影で期待する人はたくさんいるだろう。
「佐和山大学の学費が、私立にしては安めなのも、俺のお陰だ。ノーベル賞という権威もある。俺が金を出せば同僚の教授などすぐに屈してしまうさ」
何か、蓬莱教授からヤバイ匂いがするわね。
「ふふっ、それに俺は、学問の不正だけはしないようにしている。俺は自分の地位や権威、権力が目的ではないからな。佐和山大学で影の権力者を演じているのもあくまで手段だ。何せもはや十分すぎるほどに栄誉は受けた。他の連中とそこが違う」
蓬莱教授が誇らしそうに語る。
確かに、研究内容が怪しい以上、潔白をアピールしたいところだろう。
「ともかく、石山さんにはもう話しておいた。一応今の俺は１２０歳までは生きられるから後８０年弱はあるが、ともあれ不老を達成するためにはもっと寿命が必要だ。だから、石山さんには協力して欲しい」
蓬莱教授が今度は一転して懇願するように言う。
こういうのが怪しい雰囲気につながってる気もするけど。
「蓬莱教授、今のあたしの偏差値だと――」
「何、俺の研究所を出たと言うなら、佐和山大学でも世間の扱いが全く変わってくる。何だかんだでこの世はノーベル賞には弱いからな。最も、俺がこの研究を達成すれば、ノーベル賞でさえ俺には役不足だがな」

確かに、不老という業績を達成したとすれば、ノーベル賞でさえ生ぬるいだろう。
というより、ノーベル賞って2回受賞ってできるのか？
……まあいいや。
「それに、君たちの入学後の成績にもよるが、もし成績が良ければ博士まで融通する予定だ」
「は、博士ですか⁉　あたしが⁉」
突拍子もない話に思わず声が出る。
「いや、もし成績が良ければ、だ。修士ならともかく博士ともなると俺も保証はできんがね。ただ、俺としては、なるべく博士まで居て欲しい。もし君が不老研究に貢献すれば、全世界から君は慕われる。そしてノーベル賞も可能かもしれないがな」
「そ、そんなこと考えたこともありません！」
さすがにあたしがノーベル賞なんて荒唐無稽過ぎて、あたしも声を上げてしまう。
「おっと失礼失礼。そうだよな、俺としたことが話を飛躍させてしまった。ともあれ、君の将来について、もし佐和山大学に来ないとしても、俺は君のことを恨むつもりはない。だが、佐和山大学の……いや、俺の意思は伝えたぞ」
「はい」
「……では、さらばだ」
「ええ」
「さようなら」
「お、お疲れ様でした」
みんな呆然とした表情で颯爽と普通に扉から出ていった蓬莱教授を見送る。
当事者のあたし、そして浩介くんも呆然としている。
「それで、石山さんと篠原さんはどうされますの？」
「……こんなの、自分たちだけで決められるものじゃないわよ」
いきなり話のスケールも大きくなってきたし。
「うん、俺も、今日のことは両親に話すよ」

「あたしも、浩介くんと同じ」
あたしたちは天文部の活動を早めに切り上げて急いで家に向かった。
とにかくあたしの将来を、浩介くんの将来を、いや人類全体の将来さえ、大きく左右しかねない選択を迫られたのだから。

## 2回目の大きな決意

「ただいまー」
「おかえりー、優子早かったね。どうしたの？」
母さんが出迎えてくれる。
天文部を早めに切り上げたことはまだ伝わってない。
もしかして蓬莱教授の話はまだ来てない？
「母さん、あの、あたしの大学のことで話があって――」
「ああ、うちにも永原先生から電話があったわ。蓬莱教授がどうしてもあなたを佐和山大学に入れたいって」
どうやら連絡は入っていたようだわ。
「あたし、どうすればいいのかなって思って。あたしの選択で、下手すれば世界の人々の運命まで決まっちゃうんじゃないかって……」
それに、多くの資産家が大金をはたいて蓬莱教授を援助しているのも事実。
「そうね、それはそうだと思うわ。蓬莱教授の不老研究、昔はただの与太話だったわよ。でも今は違うわ。もし、研究所に常に優子がいるとすれば、効率も違いすぎるわ」
母さんに拠れば、不老を多くの人が待ち望んでいることは想像に難くないという。
浩介くんが不老になれば、ずっと一緒に居られるという。
「確かに、今の優子は全世界７０億人の将来さえ決めかねない選択を迫られていることは事実よ。でも、そんな実感は湧く？」
「あんまり沸かないわ」
あたしが正直に答える。そもそも、あたしの中では世界中どころか日本中、いや関東中のスケールでさえ想像がつかない。
「仮に優子が佐和山大学に入らなかったために蓬莱教授の研究が失敗したとして、世間は優子を恨むかしら？」
「多分、恨まない……何故ってあたしのせいで失敗したなんて知られないから」
あたしが恐る恐る答える。

「そうよ、その通り。だから優子、気負う必要はないわ」
「う、うん……」
浩介くんはどうだろう？
多分あたし次第だけどもしあたしが蓬莱教授の研究に協力するとしたら、きっと承諾してくれる。
すると障害になるのは永原先生や浩介くんの両親だろう。
あるいは確率はとても低いけど、宗教団体とかだろうか？
「あの……母さん、電話、貸してくれる？」
「ええ」
あたしは小谷学園に電話する。
「はい、小谷学園です」
事務役の先生さんの声がする。
「すみません、あたし小谷学園2年2組の石山優子ですけど永原先生はいらっしゃいますか？」
「えっと……永原先生なら先程日本性転換症候群協会への出張に行きましたよ」
しめた！　あたしにとってはこっちのほうが都合がいい。
協会にはテレビ電話もあるから、面と向かって話せるし、会話の内容が漏れるのも協会の会員だけ。
「……分かりました、失礼します」
あたしは電話を切り、次いでテレビ電話の方を操作する。
日本性転換症候群協会本部にかけてみる。
「……反応がないわね」
「まだ来てないんじゃない？」
そう思っているとついた。
「もしもし、あら石山さん」
応対したのは比良さんだった。
「すみません、永原会長いらっしゃいませんか？」
「今はまだ来てないけど……私で良ければ取り次いでおきましょうか？」
比良さんへの取り次ぎ、いや、この問題はそれではダメだ。

「あー、すみません。それは出来ないんです」
「どうして？」
　比良さんが当然の疑問。
「永原マキノさんとあたしとでしか話せないことです。日本性転換症候群協会の会長としての永原会長と、小谷学園の担任の先生である永原先生の両方と相談しなきゃいけないことなんです」
「……石山さんがそう言うということは……おそらく、蓬莱教授のことでしょう？」
「ええ」
　やはり連絡は回っていたようだ。
　確かに、あれだけのことだもの。連絡が来ないはずはない。
「分かりました。では、永原会長が来ましたら折り返し連絡でいいですか？」
「はい、それでお願いします」
　そういうと、テレビ電話が切れる。
「永原先生はまだ来てないみたいね」
「うん、ちょっと休む」
「そうしなさい」
　母さんと簡単なやり取りをして、あたしが考える。
　と言っても、以前と同じようなことを繰り返して考えるだけ。結論なんて出るわけないから永原先生を頼っているのに。何をやっているんだろう？
　とにかく、永原先生は何と言うだろう？
　永原先生はこの前の会合で賛成票を投じてくれた。
　だから、あたしが佐和山大学に入ること、蓬莱教授のもとで研究に参加することに異議は唱えないだろうし、この前の会合でも、あくまで会として誰かを出すのに反対しただけで、他のＴＳ病患者が自主的に蓬莱教授の所に行くことを拒絶するものではない。
　ただ、教師としての永原先生は、どう出るか？　もしかしたら反対するんじゃないか？
　それがまだ、分からなかった。

プルルル、プルルル……
しばらくすると、当然のようにテレビ電話が鳴った。かかってきたのは予想通りの場所。
「はい」
そして映し出されたのは、永原先生だった。
「あ、永原先生。あたしです」
「うん、石山さん、比良さんから聞いたわ。蓬莱先生のことで相談があるって」
「はい、その……あたしの選択が、大きなことになるんじゃないかと思うと――」
永原先生が一瞬何かを考えるような素振りを見せる。
「石山さん、私の考えだけどね」
「うん」
永原先生が何時になく真面目な表情で言う。
テレビ電話越しだけど、じっと見つめられてしまう。
「日本性転換症候群協会の会長としては、正会員であるあなたが蓬莱先生のもと、佐和山大学に進学することに、何の異議はないわ。協会としても、『高校生のＴＳ病の女の子が大学に進学する』訳だから、何も不自然はない」
「……」
これは、予想通りの回答だった。
「しかもそれで私達と蓬莱先生との友好関係が深まるし、蓬莱先生の配慮に報いることもできる。ＴＳ病患者たちの生涯の男性の伴侶を得られる可能性も広まる。むしろ石山さんの佐和山大学への進学は歓迎と言ってもいいかもしれないわ」
永原先生はまさに全面賛成という意見を述べる。
「ええ、私も、副会長として、蓬莱教授のあの会議の議案には反対しましたが、石山さんが自分の意志で蓬莱教授と研究するというのなら、当然歓迎です。我々協会にとっても、その利益は計り知れないと思います」
永原先生の同意に対し、比良さんが、付け加えてくれる。

「蓬莱先生としても、私達との友好関係を崩すのを嫌がっています。決して悪い扱いは受けないでしょう」
　でも、永原先生の言い方には、ところどころちょっと引っかかる部分がある。
「……だけど、教師としての私は絶対に反対するわよ。あなたの学力なら、佐和山大学なんかよりももっと上を目指せるもの」
「……そうですか」
　予想通りの回答と言えばその通り。
　だけど、永原先生の意思を確認できただけでも、大きな収穫になる。
「では、永原先生は、永原会長は自分の中でどちらを優先させるべきだと思うんですか？」
「……分からないわ」
　それは一番可能性が高く、そして最悪の回答だった。
「もしかして、永原先生も……」
「ええ、ずっと悩んでいるわ。もちろんここの人はみんな協会の人だから石山さんを佐和山大学に進学させることに誰も異論はないわよ。でも……小谷学園の先生たちは猛反対するわよ。特に教頭先生はね」
「教頭先生、ですか？」
「ええ、教頭先生は蓬莱先生に恨みがあるみたいなんです」
　あの時のせいかな？
「もしかして、あの時のことですか？　教頭先生が蓬莱教授に恨みを持つようになったっていうのは？」
　それは林間学校でのこと。
　あたしと蓬莱教授が初めて会った時のことでもある。
「ええ、私からすれば逆恨みもいいところよ」
「じゃあどうして？」
「蓬莱先生が提示したのは、ＡＯ入試でしょ？　つまり成績が十分高いにもかかわらず、偏差値の低い大学を受けさせることになる。しかも、それは蓬莱先生の個人的な研究の都合で、学生を青田買いしていることになるわけ。他の受験生からすれば大変な迷惑行為だわ」
　そうか、ＡＯ入試だと他の大学は受けられなくなるんだ。

「でも、これはあたしたちだけの問題じゃないと思うんです。下手をすれば、全人類の問題でさえあると思うんです」
「ええ、分かっているわ。でも、あまりにもスケールが大きいことですもの」
「確かに実感はまだ湧きません」
「ええ、小谷学園の先生たちも同じよ。石山さんの選択で……蓬莱先生の研究成果で、あなたの人生どころか、人類史さえも左右しかねない状況だという実感が沸かないのよ」
　それはあたしだって沸かない。
「じゃあ、永原先生が――」
「ううん、私も、教師としての永原マキノとしては……例え全世界の歴史に関わることでも、生徒個人のことを考えなきゃいけないのよ」
　永原先生が悲痛な表情をして言う。
　むしろ、永原先生の方が「板挟みから助けて欲しい」と叫んでいるような気さえする。
「永原会長、蓬莱教授から連絡を受け取ってから、ずっと思い詰めていたのよ」
　比良さんが努めて冷静に言う。
　当事者でもないのに、永原先生はあたし以上に苦しんでいた。
　蓬莱教授のもとだと、大学院まで行ける可能性も高いということもあるけど、そこまで今から考えるのはさすがに楽観的すぎる。
　以前にも、永原先生が教師と協会の会長としての２つの顔の板挟みになって、苦しんでいる姿を何度か見てきた。
　あたしもまた、協会の正会員になって、幸子さんの教育と、学生としての自分の勉強という２つのことをする難しさを学んでいた。
　でもそれは、何でもない。未成年の１７歳の子供らしく、子供っぽい大変さでしかなかった。
　永原先生のその苦しみに比べれば、何てことはなかった。
　人類史の運命を握って、苦しんでいたのは、何もあたしだけではなかった。
「もちろん、教師として反対すると言っても、石山さんの意志が固いな

ら、最終的には送り出す必要があるわ……でも迷っているから、テレビ電話をかけたんでしょ？」
「う、うん……」
「それじゃあ、今はまだ、私は力になれないわ。私だけじゃなくて、比良さんや余呉さん、他の会員の仲間達も、ね」
「……こんなことになるなら、あの時いっそ賛成して、石山さんを送り出してしまった方が良かったかもしれません」
　永原先生の言葉に、比良さんが、後悔するように言う。
「覆水盆に返らず。ね。でも、ある意味で比良さんの気持ちもわかるわ」
「え？　どうしてですか？」
　テレビ電話の向こうで、２人があたしそっちのけで話し始める。
「多分、反対したＴＳ病の会員の人や、あるいは賛成した人も一部はそうだけど、『不老』に対して、ある種の『特権』を感じている人がいるわ」
「……否定、できません」
　比良さんも思うところがあったのか、あっさり同意してしまう。
「私だって、持ってないとは言い切れないもの。この協会を立ち上げるまでは、私にも確かにそんな意識が頭の片隅に……片隅にだけどはっきりあったわ」
「……５００歳になった私が……ここ１００年で４００年の間に染み付いた意識を簡単に変えれるとは思えませんし」
　１００年、あたしたちＴＳ病患者にとっても、決して短くない時間。
　それは永原先生にとっても同じこと。
　それでも、４００年はその４倍の時間。人生を８０年とすれば６０歳までに身についたことを残りの２０年で直そうとするようなもの。
「他の正会員たちも、江戸や明治初期の生まれが多いからこそ、その特権意識があってあの時に反対票を投じたのよ。だけど、冷静に考えれば蓬莱先生の申し出は協会としてもメリットが大きいものだったわ」
　確かに、支援金が２倍になるというだけでも極めて魅力的だった。
　蓬莱教授自身にも問題があるとは言え、一つの偏見が冷静な判断力

を奪ってしまった。１００歳を優に超えていても、人間である以上そういうミスをしてしまうのだ。
「……」
「でも比良さん、仮に蓬莱先生が死ぬまでこの研究を達成できなかったとしても、助手の瀬田さんを始め多くの人が彼を信望しているわ」
　確かにそういう話を聞いたことがある。
「だから、いつか不老は人類共有となるわ」
「その、永原会長に永原先生」
「はい」
　あたしはあえて、同一人物を別の肩書きで２回呼ぶ。
「あなた『達』の考えはわかりました。もう少し、浩介くんの方も気になりますから、考えてみます」
「ええ、それがいいと思うわ。先生としても、会長としても」
「では、失礼します」
　あたしはテレビ電話を切り考える。
　最後に言っていた永原先生の言葉。
「いつか人類共有になる」、つまり遅いか早いかの違い。
　でも、遅いか早いかというのは、あたしたちＴＳ病患者にとっての話。
　浩介くんにとっては、遅いとダメ。
　もし遅ければ、浩介くんは「手遅れ」になってしまう。
　うん、あたし、浩介くん以外、考えられない。
　浩介くんと、別れたくない。新年も、ずっと一緒にいたいって願っていた。
　あたしはもう一度思考を整理する。
　蓬莱教授に、協力したい。あたしも知識をつけて、遺伝学の道に進んで、浩介くんを助けたい。
　あたしはいつも浩介くんに助けられていた。
　でもそれは、女の子じゃどうしようもない身体能力のせいだった。
　でも、研究なら、浩介くんを助けられるとお思う。
　……うん、決心がついた。そのことを、浩介くんに話そう。

あたしはそう思い、浩介くんの家にテレビ電話をかける。
「はい、篠原です……あら、優子ちゃん」
浩介くんのお母さんが出てくれる。
「あの、浩介くんは？」
「ごめんなさい、今お風呂で……」
随分と早めの風呂よね。
「あ、そうですか……」
「急ぎなら折り返しにしますけど」
「えっと――」
一瞬急ぎの用事だと思ったけど、明日も浩介くんに会えることを思い出す。
「あ、いいです。明日話します」
「じゃあ話さなくても大丈夫ですか？」
「はい」
あたしはテレビ電話を切り、くつろぐ。
「優子、夕食できたわよ」
「あ、うん」
母さんの声とともに、あたしの意識は急速に日常へと引き戻されていった。

翌日、あたしは学校へいつもの通り登校する。
あんな重大な選択をしたと言うのに、あたしの心は不思議と冷静だった。
もしかしたら、浩介くんと同じ大学に行けることへの、喜びの方が強いのかもしれない。
ガラガラ
「おはよー浩介くん」
「優子ちゃんおはよう」
今日は浩介くんが先に教室にいた。
「浩介くん、ちょっといい？」
「うん、いいぞ。昨日の蓬莱さんの話だろ？」

「う、うん……」
　あたしは荷物を下ろすと、浩介くんと2人で廊下に出る。
「それで、優子ちゃんはどうするんだ？」
「あたしね、佐和山大学に行くことにしたわ。蓬莱教授を、信用してみたいの」
「そう……か、俺は特に両親に反対されなかった。元々偏差値的にも妥当だったし、蓬莱さんが融通してくれるなら、蹴るなんて考えられないって言われた」
「うん……」
　まだ高校3年生になっていなかったけど、あたしたちは安堵した。
　ともあれ浩介くんとの大学問題は解決された。寿命問題はまだ分からないけど、今は2月のスキー合宿のことに集中しよう。
　そんなことを思いながら、時間は過ぎていった。

「あの、永原先生」
「あら、石山さん。昨日のこと？」
「うん、色々考え抜いたんだけど、やっぱりあたし……浩介くんがいなくなるのが怖いの」
「そう……あなたの人生よ。私は、これ以上は言わないわ」
　永原先生は、どこか安堵した表情で、何処か残念そうな表情で、あたしの選択を受け入れてくれた。

# 永原先生の救い

２月になった。
スキー合宿の部屋割りが決まり、やはりホテル側からどうしても部屋を融通できないということであたしは浩介くんとの２人部屋になった。
２人部屋から６人部屋まであって実は他にも男女混合の部屋を作れば余裕はあるんだがそうも行かないらしい。
でも、事前にクリスマスにお泊りデートをしておいてよかったわ。
ある日のこと、さくらちゃんが唐崎先輩に呼ばれていた。初デートの準備をするとか何とか言っていた。
「それで、唐崎先輩はどういうデートを？」
「うん……都内の方に行こうって……」
以前さくらちゃんが話した所に拠れば、唐崎先輩は歴史好きでもあるという。
それならさくらちゃんの時代劇好きとも相性がいいと思う……もしかしたら、夏祭りの時の永原先生みたく、実は相性悪いのかもしれないけど。
「誰か名士の墓とかはどう？」
「うーん……どうしようかしら……」
ふと、クリスマスの緊急会合の後、永原先生が言っていた言葉を思い出す。
「そう言えば、クリスマスの会合の後ね……永原先生が吉良上野介殿の墓参りをすると言ってたわね」
「あー、年末はその……毎年忠臣蔵の季節ですから……」
「それって……」
「ええ……永原先生が嫌っている……赤穂浪士の話です……」
そう言えば、夏祭りの時も忠臣蔵の話題になったら永原先生が激怒してたっけ？
永原先生からすればばかけがえのない恩人を殺した集団を美化する内容だからそりゃあ怒るよなあ。

永原先生の、あの本を思い出す。
吉良殿に、何も恩返しができていないという話。
「ねえ、さくらちゃん」
「はい」
「夏祭りのこと、覚えてる？」
多分忘れたということはないと思うけど。
「覚えていないわけないわ……先生が、あんなに怒るだなんて……思いもしませんでした……確かに先生からすれば……どうしても許せないことだとは思いますけど……」
さくらちゃんがちょっとだけ、恐怖の表情を見せる。
「もし、永原先生に吉良殿と過ごした当時のことを言われなかったら？」
「はい、私……きっと去年も、それまでに信じていたように……忠臣蔵を見ていたと思います……」
「それなら、吉良殿の史跡を回ってみるのもいいかもしれないわよ」
この辺にあるかは分からないけど。
「この近くに……ありますか？」
「さくらちゃんが知らないならあたしも知らないわよ」
永原先生に聞くのもいいと思うけど。会合の後に寄っていたからそこまで遠くじゃないと思うけど。
「そう……ですか……先輩とも相談してみます……」
そう言うと、さくらちゃんが3年生の教室の方へと歩いていく。
あたしは話し相手もいなくなり、当てもなく休み時間を過ごす。
浩介くんは久しぶりに高月くんと雑談をしている。たまには男友達と話すのもいいだろう。
こっそり話を聞けば、高月くんは桂子ちゃんを狙っているらしい。
浩介くんは「親密になるまでスケベ心を隠せよ」とアドバイスしていた。
でも浩介くんも初めからかなりスケベだったような……？
……まいっか！
残りの昼休みの時間、あたしはスキー合宿のパンフレットを読んで

過ごした。やはりなんど見てもあたしの部屋は浩介くんと2人部屋。
さっきのさくらちゃんの話をまた思い出す。
永原先生は、「未だに吉良殿に恩を何も返せていない」、そう言っていた。
でも、さっきのさくらちゃんの様子。確かに小さいことかもしれないけど、「何も」返せていないというのは誤りだということが分かった。
このこと、早く永原先生に伝えないといけない。
なぜそう思ったのだろう？　それは、あたしが協会のみんなから「模範」「救世主」と思われているせいだと思う。
永原先生はあたしのことを「救世主」のみならず「4人目の恩人」とも言っていた。
だからこそ、「3人目の恩人」に束縛されている永原先生を、今までお世話になったお礼もあって、助けてあげたいと思った。
永原先生は気負わなくてもいいように配慮してくれたけど、やっぱりどうしても責務を果たしたくなってしまう。
あたしだけは、永原先生の過去の恩人たちとは違う。助け合うことができるのだから。
果たして、さくらちゃんは今度のデートで吉良上野介の墓参りに行くことになった。

「永原先生、ちょっといいですか？」
放課後のホームルームが終わり、あたしは永原先生に声をかけてみる。
桂子ちゃんに天文部については永原先生と話があるということで遅れると伝えておいた。
「うん、石山さん、どうしたの？　もしかして蓬莱教授のこと？」
「いえ、永原先生の、『3人目の恩人』についてです」
「!?　石山さん、き、吉良殿がどうかしたの？」
予想外の言葉に永原先生はかなり動揺している。
「永原先生、あの本で、吉良殿に何も恩返しが出来ていないって書いて

ましたね？」
「ええ、そうよ……私、それで今も苦しんでいるわ」
永原先生は、いかにも悲痛そうな顔をする。
やはり、思い出したくもないという感じ。
「あたしね、永原先生が確かに、吉良殿に恩を返した所を見ました」
「んっ……!?」
永原先生がさらに動揺している。
「その……ここでは何ですから、相談室で聞かせてくれるかしら？」
「ええ」
あたしと永原先生が相談室に急ぐ。
永原先生は途中で生徒の一人とぶつかりそうになった。今までそうしたことがなかったことを鑑みれば、その動揺はかなり大きい。
今まで、永原先生にとって、吉良殿に何も恩を返せなかったというもは大きな心の傷として残っている。
さくらちゃんのことを話して、少しでも、癒えてほしいから。
今までと同じように、相談室を「使用中」に合わせる。
そして、あたしはあえて、いつも永原先生が座っている方の席に座ると、永原先生はどこか安堵の表情で、あたしがいつも座っている方の席に座る。
いつもは永原先生があたしのカウンセラーだけど、今回だけは、あたしが永原先生のカウンセラーになる。

「それで、その、私がした吉良殿への恩返しというのは一体？」
「ええ、今日の話です。さくらちゃん、最近彼氏ができたんです」
「ええ、志賀さん、野球部の3年生の子が好きみたいね……でもそのせいで野球部は退部者が増えてますます弱体化してるわよ」
あー、なんかわかる気がする。
って、今はそんなことどうでもいいわね。
「んっ……で、実はその彼氏さん、歴史も好きみたいなんです」
「……」
永原先生が黙って聞いている。

「さくらちゃん、初デートの場所に、吉良殿のお墓を選んだわよ。供養したいんじゃないかと思うわ」
「え!?　それは志賀さんの勝手でしょ……それがどうして……どうして私の吉良殿への恩返しになるのよ!?」
　永原先生は予想外の答えに声が大きくなる。
「永原先生、夏祭りの時のこと覚えてます?」
「え、ええ……私、確かに吉良殿が下さった着物を着て注目の的になったわ」
「永原先生、あの時、さくらちゃんに激怒していたわよ。吉良殿に対する、時代劇の偏見そのままだったさくらちゃんに」
「……!」
　永原先生がハッとする。
　間違いなく気付いた様子。
「さくらちゃん、『もしあの時永原先生に怒られていなかったら、去年も作り話に何の疑いもなく忠臣蔵を見ていた』って言っていたわよ」
「……それが、それが何だっていうのよ……!!!」
　永原先生が震えながら言う。
「永原先生、あなたは――」
「そんなことが何になるのよ!!!」
　永原先生が信じられないような大きな声を出す。
　今までも、永原先生が怒っていた所を見てきたけど、今回のそれは悲しみや戸惑いも混じった声だった。
　それが余計に、声を大きくしていた。外まで聞こえるんじゃないかという大きな声だった。
「馬鹿にしないでよ!!!　私が……吉良殿から受けた恩が、そんなことで何になるのよ!?」
「永原先生、落ち着いて聞いてください」
　永原先生の顔が涙でくしゃくしゃになっていた。
　あたしも、突然のことで動揺しつつ、なるべく冷静を心がける。
「永原先生、もしあの時、さくらちゃんに怒らなかったらどうなっていたか考えてください」

「え、でも……そんなのあり得ないわ」
永原先生は少しだけ落ち着いて言う。
「もし永原先生が黙っていたら、おそらくさくらちゃんは間違った知識で吉良殿のことを話して、あたしたちもそれを信じてしまったわよ」
「そ、それはそうかもしれないけど……」
「あの時、永原先生が必死になっていなければ、あたしも、その場にいた皆も、間違った知識を身につけてしまっていたし、あの時『吉良殿の着物』を見せてくれなかったら、あたしなんて吉良殿の存在すら知らないままだったわよ」
あたしが一つ一つ噛み砕いて説明していく。
「……石山さん、確かにあなたの言う通りね。うん、『吉良殿に何も恩返しが出来ていない』って言うのは撤回するわ」
「永原先生！」
あたしは嬉しかった。
これで呪縛も少しは解けるはず！
「……でも、それはあまりに小さいわよ。吉良殿から受けた御恩が大海とすれば、今の石山さんの話は水の一滴でしかないわよ」
永原先生は、あくまでも自分は十分に恩を返せていないと言う。
でも、あたしはそれも違うと思う。
「ううん」
あたしは、やや大げさに首を２回横に振る。
「え？　石山さん……」
「それは違うわよ永原先生。そもそも永原先生は、吉良殿に身なりを整えてもらって、陰口を止めさせてもらったことに恩を関しているんでしょ？」
「え、ええ……」
「永原先生は、江戸城で何年くらい陰口を叩かれていたの？」
「えっと……５０年弱よ」
あたしからすれば十分長い。
でも、吉良殿が被せられている汚名と比べれば、小さい。

「吉良殿はね、間違いなく永原先生が受けた陰口なんかよりも、よっぽどひどい罵詈雑言を、それも死んでしまって反論もできない中で、３００年にも渡って受けているわ」
「ええ、そうよ。それもこれも私が無力なばっかりに……！」
　永原先生がまた涙声になる。
「永原先生、征夷大将軍でさえ叶わない怪物に勝てなかったからと言って、罪を感じすぎてはいけないと思うわ。私は、永原先生は十分にベストを尽くしたと思うわ」
　当時の将軍は、世論には勝てないと言っていた。
「……」
「あたし達は、いえ、永原先生はもうかつてのように強い男ではなくて、か弱い女の子だってこと、吉良殿だってご存じよ。だったら、できることを一つずつでいいと思うわよ」
「石山さん……」
「それにね、夏祭りの時に永原先生がした恩返し、決して小さくないわ。だって、永原先生が受けた恩が大海なら、吉良殿の受けている汚名は宇宙のような広さよ」
　実際には宇宙の規模を考えればせいぜい銀河くらいだと思うけど。
「でも……それでも……私がしたことなんて」
「いいえ違うわ。さくらちゃんは時代劇が好きだったわ。多分、さくらちゃんは子供や孫にも、見せることになるわ。吉良殿の本当の姿を永原先生が発信すれば、それだけ時間と共に吉良殿の汚名は晴れていくわ」
「そんなことないわ！　吉良殿は今でも……！」
　永原先生がまた語気を強めた。
「永原先生、歴史はいつか、晴れるものです。そして歴史を晴らしたのも、永原先生の努力だってあるんです」
　とっさに出た言葉。無意識だったけど、会心の言葉だったと思う。
「……私は……私は本当に、それで吉良殿は許してくださるの？」
「永原先生、いくら戦乱の時代から生きてた人が不当な扱いを受けていたからって、全く無関係の人にここまでしてくれた人が、永原先生

を恨んでいると思いますか？」
「っ！」
永原先生がビクッとなる。
「彼がもし誰かを恨んでいるとすれば、浅野家と赤穂浪士でしょう？
永原先生、林間学校の前に、浩介くんに言っていたでしょ、『これ以上罪悪感を見せると、石山さんをかえって傷つけてしまう』って」
「あっ！」
永原先生は、自分の中にあった矛盾に気付いた。
罪悪感を感じることで、あの世の吉良殿がかえって傷ついている可能性が高いということ。
「確かにあの時は、何も出来なかったかもしれません。でも『今の』永原先生は違うんです。立派に、吉良殿へ、恩を返していますよ」
「うっ……えぐっ……石山さん……吉良殿……私は、私は……うっ……」
永原先生は、何も言わず、ただひたすらに泣き出していた。
３００年の積もりに積もった呪縛から、ようやく開放された。
そんな印象だった。
「私……私は……本当に……吉良殿に……」
「……さくらちゃんのこと、吉良殿の墓前に報告してはどうですか？」
「うん……うん、そうするわ……うっ……」
あたしが永原先生のもとに駆け寄り、その大きな胸で永原先生の顔を受け入れる。
「うわあああああああああああああああああああああああ！！！

て――」
「いえ、いいんですよ。この辛さの本当の意味は、永原先生にしか理解できないものですから。それに、永原先生だって1人の女の子なんだから、泣いてもいいじゃないですか！」
「……うん、そうよ、ね」
　永原先生は涙で顔が赤いけど、ようやく冷静になってくれた。
「石山さん、私を解き放ってくれてありがとう。でも、私にはもう後4つ、楔があるのよ」
「もしかして、『例の初恋』のことですか？」
「ええ、それが2つ、伊豆守殿と4代様。更にそれに加えて私の主君、真田源太左衛門様と……昭和天皇よ」
「昭和天皇……もしかして……戦時中のことを？」
「ええ。まだこの4つは解消されていないわ……そして多分、今後も、ね」
　初恋話は本人の心意気の問題だし、主君のことと戦時中の話は、どうにもならない。
　あたしでも、解決の糸口はまだ見つからない。
　いや、主君と伊豆守殿への恩返しがあるとすれば、誤った「真田幸村」の是正くらいだろうか？
　ともあれ、今は、吉良殿のことから解放しただけでも、よしとしないといけない。
「石山さん、あなたには本当に感謝してもしきれないわ。あなたは本当の意味で、私にとって『4人目の恩人』となったわ」
「そうですか。ありがとうございます。でも、あたしにとっても永原先生は恩人ですから」
「ええ、分かっています。あなたについて私が背負う必要はないことくらい」
「良かった」
　永原先生は恩人が増える度に人生が重くなっていたし。
「……ところで石山さん、天文部はどうしたの？」
「桂子ちゃんに永原先生とお話があるから遅れると言っています」

「そう、じゃあ今すぐ行きなさい」
「はーい！」
永原先生がいつもの口調に戻り、あたしに教師として早く部活に行くように言う。
こうして、あたしたちはまた先生と生徒の関係に戻る。

天文部に行く過程で考える。
よく考えればあたしと永原先生の関係ほど複雑な関係はこの世にないんじゃないかとさえと思えてくる。
ある時は学校の先生と生徒、あるいはＴＳ病患者としての先生と生徒、ある時は協会の会長と会員、あるいはカウンセラーと被カウンセラー、またある時はＴＳ病の先輩後輩あるいは同志、そして被恩人と恩人、そして救済を受ける人と、救世主。
あたしは、この病気になって数奇な運命に翻弄されてきた。
それは永原先生も、そしておそらく余呉さんや比良さんだって同じ。
だけど、５００年の時を経て、あたしと永原先生がこの同じ小谷学園に居ることが、一番の大きな奇跡なんじゃないかって、今は思えてくる。
そんなことを思いながら、あたしは天文部へと急いだ。
コンコン
「はーい」
桂子ちゃんが扉を開けてくれる。
「ゴメン、ちょっと遅くなったわ」
「いえ、いいですわ。ところで、永原先生と何を話されていたのですか？」
「いえ、秘密です」
坂田部長が聞いてくるが、永原先生の名誉のためにも、ここでは何も話せない。
「……そうですか、深くは詮索しませんわ」
「そうだな、俺にだって言えない秘密は優子ちゃんにもたくさんある

だろうし」
「うん、永原先生とあたしだけの秘密」
あ、でも吉良殿にも話すのかな？
「さ、天文部の活動を続けますわ」
「「はい」」
あたしと桂子ちゃんが返事をし、あたしは完全に日常に戻った。
今日は2月2日、再来週にはスキー合宿が始まる。

# スキー合宿1日目　北への出発

今日はついにスキー合宿の日になった。
実行委員は今回桂子ちゃんになった。
ともあれ、朝をまず起きる。
スキー合宿の荷物をまとめていた時に考えた防寒方法がある。
とにかく、あたしは寒いのが苦手、脚は一旦ストッキングにしちゃえば抵抗感少ないけど、合宿する場所の寒さは氷点下が普通。
それも考えて、あたしは下着からストッキングを履いて、その上にズボン、更に防風もかねて厚めのロングスカートも穿く。これが結構温かいスタイル。
女の子になってスカートやストッキングを穿けるようになったために、下半身の防寒は格段に向上した。
上の方もシャツにブラウスの上に更にカーディガン、その上に厚手のコートを着込むという重装備の予定、厚手のコートは腕に置いておいて寒くなったら着ることにする。
母さんが「最初から重装備だと良くないわよ」と言ったからだ。確かに、それはその通り。
ともあれ、今は家の中で暖房が効いているので、スカートは玄関に置いておく。
もう一度荷物を確認する。生理用品をはじめ、多くは林間学校の時と同じ中身。違うのは多数のカイロがあるくらい。
あたしはスキー用具を持っていないので、レンタルサービスを利用する。もちろん、専用のゼッケンさえ付ければ自分用のスキー用具を持っていっても構わないことになっている。

「おはよー」
「優子おはよう、今日はスキー合宿だよね？」
「うん、防寒対策はばっちりだよ」
ちなみに、浩介くんと相部屋になったことも、母さんは知っていた。
母さんは「お嫁さんへの修行をしてきなさい」と言っていた。

浩介くんの両親と同じく、うちの両親もまた、浩介くんと結婚させたくて仕方ないらしい。
どうやら嫁姑問題は起きそうになさそう……というより、不老技術の進捗次第ではちょっと我慢すればいいだけかも。
ともあれ、今はスキーのことを考えたい。
困難が予想されたことや、ＴＳ病のこともあって、あたしは一番簡単なコースを選ぶことになっている。
「優子、くれぐれもケガだけは気を付けてね。あなたはとにかく運動神経ダメなんだから」
「う、うん……」
スキー合宿の話題になると、母さんも父さんもそればっかり言ってくる。
確かにけがは気をつけなきゃいけないけど、あたしの運動神経レベルだといくら気を付けてもダメそうな予感しかしない。
一時は不参加も考えていたけど、浩介くんと相部屋、しかも２日目には家族風呂まで予約して、割り勘とはいえ家族風呂のお金まで払ってしまった手前、欠席はもう出来ない。
「優一の頃はスキーはどうだったの？」
母さんが聞いてくる。去年も同じ会話した気もするけど、あたしも優一を意識する日が徐々に減っている。
「うん、それなりにパラレルターンとかも決まってたよ……今じゃ絶対無理だと思うけど」
まずスピードを出せるのか？　そしてそれをコントロール出来るのか？
あたしにとって、そういった基礎的な所からが課題と言える。
浩介くんとのことは色々と楽しみだけど、スキーそのものは不安でいっぱい。
いっそ、幼稚園から小学校までの子供たちと一緒にそりか雪合戦で遊びたい気分だわ。
「……じゃあ行ってくるわね」

「いってらっしゃーい」
ともあれ、時間になったので、あたしはマフラーを巻き、帽子を被って手袋をする。
そして荷物を持って、玄関でズボンの上から防寒スカートを穿き外に出る。
「ふう……」
コートはまだ着ていないとはいえ、いつもよりもかなりの防寒対策を施したため、さすがに寒さは和らいでいる。
駅に向かって進む。やはり視線を感じるが、この地域に似つかわしくない異様な防寒ぶりに注目が集まっていると思いたい。
……コートを着ても、あたしの胸は隠しきれないけど。
電車が入る。さすがに電車内は暖房もあってちょっと暑い。
上はカーディガンも含めて、適宜脱いで行こう。いくらあたしが寒さに弱いと言っても、やり過ぎは禁物だ。
あたしは、季節外れの暑い思いを少しだけしつつ、電車を降りる。
そして急激な温度変化に襲われる。あんまりよくない。
ともあれ、いつもの通学路で小谷学園を目指す。
今日はスキー合宿の日で3年生は通常授業、中にはすでに大学進学を決めた人のために、大学で教わる数学の授業までである。
ともあれ、今日は1、2年生と3年生で着ている服が違うため、すぐに見分けがつくようになっている。
林間学校の時と同様に、バスの前に集合する。
いつもは同じ旅行会社を使ってたんだけど、前回の林間学校での不祥事もあって、別の旅行会社と契約を結びなおしたらしい。
……最も、その不祥事のおかげで、あたしと浩介くんが赤い糸で結ばれたんだけど。

「おはよー」
「おっ！　おはよう優子」
「おはようございます優子さん」
あたしを見た虎姫ちゃんと龍香ちゃんが挨拶してくれる。

あたしは、小さなサブバッグに入れた荷物だけを取り出して、残りは道端に置く。
こうすれば、添乗員さんが荷物収納スペースへ持って行ってくれるのは林間学校と同じ。
あたしは、浩介くんを探しにバスの中に入ろうとする。
「篠原さんならまだ来てないですよ」
「そ、そう……ありがとう龍香ちゃん」
龍香ちゃんでなくても、あたしが考えていることはお見通し。
あたしは寒い中で、バスの外で待つ。
「虎姫ちゃんと龍香ちゃんはどうして外に？」
「ああいや、私たちもたった今荷物整理したばっかだったのよ」
「つまり偶然ってやつですよ！」
どうやら特に理由はないらしい。
その証拠に、２人はそのままバスの中に入っていく。
「ん？　優子はバスに入らないのか？」
虎姫ちゃんが少しだけ変な目であたしを見てくる。
「ああうん、あたしはここで浩介くんを待つよ。スキー場はもっと寒いし、ちょっとだけ慣れておかないと」
「そ、そうか」
「とりあえず、がんばってください」
「はい」
あたしは虎姫ちゃんと龍香ちゃんを見送る。
実行委員の男子が、既にあたしを数に数えたらしい。
「石山さん、おはよう」
「ん!?　あ、永原先生おはようございます」
ふー背後から声が聞こえてびっくりしちゃったわ。
どうやら最初からバスの中にいた永原先生が声をかけてきたみたい。
「ごめんごめん、驚かせちゃった？　今回もバスでは私が隣になるわよ」
「う、うん、パンフレットで見たわ」

確か席は運転席のすぐ後ろだったはず。
「そう、ところでどうしてここに？　もしかして篠原君を待ってるの？」
「うん」
やっぱり永原先生にもお見通しだった。
「ふふっ、邪魔にならないようにね」
「はーい」
永原先生が軽くあたしを注意して、バスの中に戻っていく。
すると、もう一人、人影が見えた。
それはあたしが探し求めていた人だった。
「あ、浩介くん！」
「あ、優子ちゃん、おはよう！」
浩介くんが挨拶してくれる。
こちらも、あたしと同じくクリスマスデートの時以上の防寒仕様だ。
「それにしても外で俺を待ってたのか？」
バスの中に入る過程で浩介くんが疑問を投げかける。
「うん、少しでも早く、浩介くんの顔が見たかったから」
あたしが努めて笑顔で言う。本当は顔も赤くなりそうだけど。
「そ、そうか。一生懸命だな優子ちゃんは」
「えへへ、あたし、もっと浩介くんに好かれたいから」
あたしは通路で浩介くんに向き直って言う。
浩介くんの真っ赤になった顔を見た瞬間、あたしの顔もリンゴのように赤くなる。
「優子ちゃん、やっぱり好き……」
浩介くんがあたしの手を握ってくる。
あたしの心臓が激しく脈打っている。
「うん、あたしも……浩介くんのこと……」
パンパン！
「はいはい二人ともー！　寒いからってイチャイチャして暖まらないの！」

永原先生の声に、あたしも浩介くんもはっとなる。
そういえばここ、バスの中だったわ。

「くそー！　何なんだよこの砂糖まみれの空気は！」
「このお！　篠原浩介！　優子ちゃんを独り占めしやがって！　子子孫孫末代まで呪ってやる！」
「判決！　篠原浩介！　俺達のアイドル石山優子ちゃんを独り占めした罪で死刑！」
「篠原……死ね、死ね死ね死ね……不幸になれ、不幸になれ不幸になれ不幸になれえ！」
「篠原なんか、す、スキーで転んで笑われればいいんだ！」
「篠原、スキーでみっともなく転んで笑われろ、スキーでみっともなく転んで笑われろスキーでみっともなく転んで笑われろスキーでみっともなく転んで笑われろ……」

そして、何時ものように高月くんを中心にした男子たちが浩介くんに、意味もなく「呪いの儀式」をかけて来る。
最近、彼らがどこまで本気なのか分からなくなってくる。
気持ちはわかるけど、浩介くんが不幸になったらあたしも悲しむし……ってそうやって傷心のところに漬け込むのよね。
あたしだって、心に深い傷を負ったときに、守ってくれて優しくされて恋に落ちちゃったんだし。
ともあれ、あたしは永原先生の隣に座る。
あたしたちの席は、パンフレット通り運転士さんのすぐ後ろの2席、そういえば、この前の安全講習で一番生存率高いって言ってたっけ？
「石山さん、ますます篠原君とラブラブだね」
「う、うん……」
「私も、恋愛してみたいかなって、最近思い始めたわ」
「え!?　でも、永原先生は……」
「う、うん……まだ全然トラウマは癒えてないし、それこそ、今のクラ

スのみんなが……石山さん以外死んじゃった後かもしれないけどね」
永原先生が少し物悲しそうに言う。
蓬莱教授の研究のこと、それに、あたしと浩介くん以外の誰にも言えない初恋のこと。
初恋のトラウマは、まだ解消されていない。こればかりは、永原先生の中で踏ん切りをつけるしか無い。
「永原先生は、急がなくてもいいんじゃない？」
「うん、そうだね」
あたしと永原先生が話している間にも、一人、また一人と生徒が来る。

「あ、俺が最後？」
男子の一人が最後に到着、今回のスキー合宿も、２年２組は全員が出席した。
そういえば、優子になったばかりのカリキュラム中に学校を休んだのを除けば、あたし小谷学園皆勤かも。
「えー間もなく出発します。シートベルトを締めて手すりなどにお捕まりください」
ともあれ、時間とともに、運転士さんの放送が入ってバスが出発する。
今回は添乗員さんは女性なので、この前のようなことにはならないと思いたい。
「石山さん、緊張してる？」
「うん、やっぱり女の子になって、身体能力は落ちましたから……何より怪我が心配です」
それも半端ないくらいの落ち方だし。
「大丈夫よ、石山さんのために、今回は特別メニューを組んでいるわ。ちなみに、私もスキーは大の苦手で、毎年同じメニューをしているわよ」
「そ、そうですか……」
やっぱりあたしに対しては体育系は半分障害者扱いになっている。

でも、残念でもないし当然ではある。
「私も戦乱を生きてきたからそれなりに鍛えてはいるんだけどねえ……どうもウィンタースポーツだけは苦手なのよ。生まれは寒村なんだけどねえ……」
ともあれ、永原先生が一緒なら大丈夫かな？
バスはこの前の林間学校とは違い、東北地方の方に行くという。
東北自動車道はかなりの直線らしく、林間学校より少し遠いけど、スキー場は高速を出てすぐなので所要時間はむしろこっちが短いくらい。
バスが高速道路に進むと、またテレビでやるという。
実はこのテレビ、何を見るかはクラスで話し合って決めたんだが――
「これは実話であり、公式記録、専門家の分析――」
あたし、浩介くん、恵美ちゃん、桂子ちゃん、さくらちゃん、虎姫ちゃんが中心になって強力に推進した結果、例の飛行機事故の番組になった。
悪趣味という意見もあったけど、とにかくこの番組の謎の中毒性をみんなに知ってほしいと思ったからだ。
最初は不評になるといけないということで、あたしたちも最初に見た、「機長が機外に放り出されたにもかかわらず生存した事故」のエピソードにしてみた。
そもそも、最初の絵面からして、何人かが堪えきれず失笑を漏らしている。
ナレーションの坦々とした、時に毒舌の口調などが妙な中毒感があるのだ。
とにかくこの回はＣＧのシュールさ、番組のハラハラ感、原因のショボさ、そして機長の異様な生存能力全てが完璧だ。
「石山さん、この番組」
「うん」
「飛行機に乗る時は必ず見ておくといいわよ」
どうやら、永原先生も知っていた様子。

「そ、そうよね……」
「もちろん、飛行機事故自体私達の人生スケールでさえ確率の低いことよ。それでも万が一の時に備えて、航空会社がどういう安全対策をしているのかということを知ることが重要なのよ」
「分かりました」
前にも見た番組内容だけど、それでも見ておく。
ちょうどこれを見終われば、最初の休憩時間に入る予定になっている。
行きはずっとこの番組をやる。
どれも浩介くんが特に推薦した番組を選んでいて、次は海底大調査の果てにしょーもない理由で墜落した内容のもの、これも見たことある。
他には機長が麻薬をやってたという内容のものや上空で燃料切れを起こして何とか生還した話とか、著名なゴルファーを乗せた飛行機が、連絡を絶ってどんどん高度を上げていく話なんかもＤＶＤの中に入れてある。
また、子供に飛行機を操縦させて墜落させた事故なども収録予定だったが、あまりにも胸糞悪い結末なので没になった。
特にパイロットがひどいのに、何故かいい人扱いされてるし。
バスの中は最初こそひそひそ話が聞こえてきたが、今は驚くほど静まり返っている。
林間学校の時に見た豪華客船の沈没映画のクライマックスでも、ここまで静まり返っていなかった。
って、その時はあたしが永原先生と話していたんだっけ？
ともあれ、感触は良さそうでよかった。
「えー、間もなくサービスエリアにつきます。外は寒くなっておりますのでお気をつけください」
番組が終わったら、添乗員さんがすぐにそう言う。
バスからは、「やべぇ」「謎の中毒性だ」「他のも見たい」
そんな声が聞こえてくる。

ふふっ、これでどうやら小谷学園2年2組はみんなこの番組の中毒になってしまったわね。
ともあれ、あたしたちは最初のサービスエリアで休憩をする。
添乗員さんの言葉を聞いたけど、コートはまだいい。
ここで寒さに耐えられないと、さすがにスキー場で大変なことになる。
ここはまだトイレ休憩、あたしはトイレに入る。
む、スカートの下にズボン穿くとトイレが……男の時より面倒になった。
下半身の防寒は大事だけど、トイレが大変になるのは嫌だなあ。
学校の制服のミニスカートなんてぺろりとめくり上げてパンツ下ろすだけでいいのに。
あたしはまた、冬に恨みを覚えた。
ここはトイレ休憩だけで済ませておく。水を買っている人も居るけど、バスの中にトイレはないし、昼食は次のパーキングエリアでいいだろう。
バスが北へと進むと、段々と車窓から雪が見えてくるようになった。
とは言え、まだチェーンはいらないようだけど。
添乗員さんの話では、高速道路の走行区間は速度規制があるだけで、チェーンは付けるとしても一般道に入ってからになる見込みだという。

# スキー合宿1日目　布教活動

バスのテレビは2本目に入る。
次の休憩までは2時間以上、ちょうど3本を上映できる。
次に来たのは海底大調査の結果ひどい理由で墜落したものだ。
浩介くんがＴＳ病のことを飛行機に例えていたけど、この事故をモデルにしたとも言っていた。
インターネットでも、「アホな事故」として有名なもので、原因となった副操縦士は世界中で馬鹿にされているらしい。
「ねえ石山さん……」
「うん？」
番組中、隣りに座っている永原先生が声をかけてきた。
「そう言えば、あなたの初仕事の時に篠原君が新幹線で言っていたのもこの事故だったわね」
「うん、そう言えばこの事故だったわね」
動画では調査官が、フライト・データ・レコーダーを使って「失速状態にもかかわらず操縦桿を引き続けた」ことをあぶり出し、疑問の声を出している。
まさに、浩介くんが言っていたことそのもの。
永原先生も、ＴＳ病患者を転覆しかけの船に例えていたけど、いずれにしてもＴＳ病になったら男に戻ることを考えてはいけないのは事実。
そう思わせないために、どうすべきか？
あたしの手でマニュアルは変わったけど……うまくいくかはわからない。
そんなことを考えていると、ついに問題のコックピットボイスレコーダーが公開される。
「こんなの嘘でしょ……何故なんですか！」
あたしはあの時と同じように、心の中で「お前のせいだ！」と突っ込む。
やはり、この事故エピソードは何度見てもひどいと思う。遺族はや

り切れないだろうなあ……

そして、このシリーズの上映はさらに続く。

次の登場するのは、アメリカで起きた冬の単距離コミューター機の事故。既に３０年前とかなり古い事故だ。

飛行場の手前で墜落した事故だ。

これは終盤まで行き詰らせておいて、最後に大どんでん返しが来るもので、あたしも、最初に浩介くんに勧められて見た時には凄く驚いた。

浩介くんによると、飛行機が着陸時に空港手前で墜落してしまうことはよくあるらしい。

地形を見落としただとか、計器を見落としただとかそういう類が多く、これらはいずれもヒューマンエラーと呼ばれるものだ。

統計的には、飛行機事故の７割がこのヒューマンエラーによるもの。

中でもこの事故はその最たるものと言っていい。パイロットの人間性について調べられ始める。

今回の番組は遺族の証言ではなく、生存者の証言が出てくる。

また、機長の友人だったという人もいて、周囲の証言からは、機長はどうも清廉潔白な人だと思われている。

次に機械的故障を調べる。

しかし機械の故障でもなく、また乗務員も無理な日程を組んではいなかった。

ところが、４０分遅延していたため、機長はやや焦っていたらしい。

操縦は副操縦士に任せていて、機長は機器を見たり、管制官との交信作業を担当する。

どうも管制官の証言によれば２通りの着陸方法のどちらでも良いと指示した。

その着陸方法というのは、大きく迂回して時間はかかるものの、計器任せにできる割合が高く、簡単で安全な方法、もう一つは、時間こそ短縮できるが、段階的に高度を下げ、その度に正確な操作が要求される難しい方法。

機長は後者を選んだ。
それは、遅れを取り戻すため。
とはいえ、これだけなら直接の事故原因にはならない。
何故なら、夜間に難しい方法と言っても、パイロットの資格があるならば、普通は問題ないからだ。
そこで副操縦士の経歴を調べてみる。
するとこの副操縦士、何と幾つもの適性試験に落ち、機長よりも経験が長いにもかかわらず副操縦士のままで、スキル不足として前の航空会社を解雇されていたのだ。
つまり、端的に言えば、副操縦士は無能だったのだ。
しかも、素行も不良で、飲酒運転で逮捕歴まであった。
飲酒運転というだけでも、あたし達にとってはどうかと思う話だけど、これは特に関係はなかった。
乗客が「副操縦士が酒臭かった」と証言していたものの、勘違いだと断定された。
この手のミスリードも、この番組の魅力の一つ。
実際事故当日の副操縦士は、航空会社のアルコール検査をパスしていた。
さらに副操縦士が無能でも、機長がサポートすることができる。そのための二人乗務。
しかし、機長は高度の下がり方が異様に速いことに直前まで気付いていなかった。
これはどういうことだろう？
機長の経歴や人格に問題ないはずなのに……
そしてここからがこの番組のハイライト。
とある人から一本の電話が入る。
機長の友人の女性の証言の又引きと言うことになっているが、浩介くん曰く、「これは内部告発ではないか？」とのこと。
その友人女性の話によれば、あの機長と昨夜夜を共にしたが、その時になんと「コカインをやっていた」のだという。
そして、このシリーズとしては珍しく、再現シーンの女優の「コカ

インをやっていたのよ」のシーンがエコーでかかっている。
あまりの急転直下に、バスの中でも「おいおいマジかよ」「やばいだろそれ」「あり得ねえよ」「てかよくばれなかったな」といった会話が交わされている。
そう、何を隠そう、機長が十分睡眠を取り、清廉潔白に乗務していたというのが大間違いだったのだ。
機長はパイロットとしての自覚に欠ける男で、「じゃあいつものやる？」と言われながら、コカインという麻薬を決めていたのだ……浩介くんとは大違い。
飲酒に比べて、麻薬は浸透していなかったことや、これまでの検査でも陽性反応が出ていなかったことから、麻薬検査は簡易的で、機長はそれをすり抜けていた。
そして、機長の遺体の血液を、麻薬検出の専門分析に出すことになった。
念には念を入れて、２回同じ検査をして見た。
すると、赤ペンの文字が、さっきは「ｎｅｇａｔｉｖｅ」だったのが、今回は「ｐｏｓｉｔｉｖｅ」と書かれている。
つまり、ごく微量でも検出できる検査では、陽性だったのだ。
そして、乗客の一人が「パイロットはみんな清廉潔白だと信じていた」と話しているが、この番組を見ていると、そうではないことが分かる。
それにしたってコカインはひどい。
当時のテレビニュースでも、大騒ぎになっていたらしく「事業用操縦士の麻薬検出」として取り上げられていた。
更に機長の友人だった人も「彼にコロッと騙されていた」と話す。まさにフルボッコとはこのことだわ。
実際、機長が乗務していた時間帯では、ちょうどコカインの副作用が回り始める頃らしく、機長は正常な判断ができていなかった。
ともあれ、番組の最後には、この事故を受けての安全対策が語られる。
こうして、空の旅はもっと安全なものになるという。

「そうね、こうして安全になっていくのよ」
「それにしても、機長のコカインって……」
「そうね、薬物は絶対にダメよ」
安全講習以前の問題だけど、大事な事なので何度でも言うべきこと。
「うん」
「実はね、日本でも薬物じゃないけど、精神病の機長が乗っていて異常操縦で空港手前に墜落した事故があったわ」
「え!? そうなんですか!?」
管理体制がずさんだったということよね。
「ええ、あ、次のが始まるわ」
永原先生の言葉とともに、次の番組が始まる。
こちらは燃料切れながらも何とか緊急着陸に成功したもので、全員生還編となっている。
「永原先生、さっきの話ですけど――」
「ああうん、『機長、やめてください!』だよね。あれは副操縦士が立て直そうとしたおかげで全滅は免れたわ。他にも、最近ドイツで精神病の副操縦士のせいで機長が締め出されて故意に墜落、全員死亡というのもあったわ」
「あー、ありましたね」
こっちはごく最近の話だけど、この番組でも取り扱っている。
その事故はあたし達が物心ついていて、リアルタイムでニュースを見た事故だけど、番組がかなり重い内容なので、今回は却下した。
……当時はかなり騒がれていたし、事故原因も多分みんな知っているからというのもあるけど。
こちらは、生存者のパイロットの生の証言が聞ける。
というよりも、副操縦士の人のバックにある写真が思いっきりネタバレになってしまっているような……まいっか。
機体は順調に巡航していたが、いきなり燃料切れ。
こうなるとエンジン停止の上機体は巨大なグライダーになってしまう。

管制官も「何てことだ、もう助からないぞ！」と言ってしまったという。
にしても、いい笑顔で言うものだ。
まさに、全員が生還しているからこそとも言えるわね。
燃料切れとなり、客室は停電。そしてゆっくりと滑るように落ちる機体、ラムエアータービンで、最低限の油圧だけを確保した状態、スピードが着陸には速すぎるため、機長はグライダー技術を飛行機に応用するという荒業も披露していた。
ところが、まだ困難があった。
というのも、空港だと思っていた場所は、サーキット場になっていて、大勢の観光客でごった返していたのだ。
しかし、もう高度も速度もない。
機長は人気のないところを狙い、緊急着陸する。
前方に子供が二人いる。
「やっぱり、横に逃げないの？」
「動物の習性らしいわ」
永原先生が静かに言う。
飛行機の速度を考えれば、横に逃げるしかなさそうなのに。
しかし、機体が強い摩擦で着陸したお陰で急減速し、死者は出なかった。
脱出のマニュアルに従い脱出し、機長副操縦士も無事脱出。
すると、「火事だ！」という声が聞こえた。
機長が消火器をもって消火活動にあたり、地上の人も消火活動を手伝ってくれた。
さて、ここからが調査編、燃料切れとなったとされるが、実際には燃料を補給していた。
そう、アメリカで使われている「ヤードポンド法」と、「メートル法」との食い違いが事故になった。
日本では既にメートル法に統一しているのに。
うーん、でもパイロットの不注意と言えばそうだけど、これを責めるのは酷な気もするわね……だからこそ「部分的に」何だろうけど。

さて、これで3つ放送が終わり、スキー合宿は2回目の休憩に入った。
「うー、寒い……」
「うん、寒いねえ……」
さすがに大分北の方に来たので寒さは大きい。
バスの速度はほぼ高速道路の制限速度の１００キロで統一されていて、この次はもうテレビでの放送はない。
今回の休憩は昼食を兼ねていて、あたしはコートも着て、浩介くんと2人で急いで中に入る。
「うわっ、あつっ！」
中は凄まじい暖房が効いていて、あたしは急いでコートとカーディガンを脱ぐ。
正直スカートも脱ぎたいけど、さすがに荷物が多くなってしまうので断念する。
「本当両極端だよねえ……」
冬の北国だとこういうことは多いみたいだけど、幸子さんの家はもっと北にあるのに、この辺のほうが寒い。
多分、幸子さんの家のある場所は、あたしたちの首都圏ほどではなくても、それなりの都会だからだろう。
「浩介くんは何食べる？」
あたしはサービスエリアの共同食堂のメニューを見ながら浩介くんに話しかける。
「うーん、カレー大盛りかなあ……？」
「うーん、あたしは牛丼のミニにしよう」
林間学校と同様、食事は自由。
あたしは牛丼のミニサイズを頼む。
優一だった頃は大盛りや特盛りだったけど、今はミニがちょうどいい。
だいたい大盛りからミニサイズにすると、どこの店でも２００円位値段も安くなっていて、経済的にはなった。
そして、そうして溜まった分の食費が、デザートに消えていくとい

う状況が続いている。
食堂にはスキー合宿参加の2年生達が集まっている。

「ねえ、あれ」
「うん、あれが石山優子ちゃんと篠原浩介くんでしょ？」
「ほんと、いつでもどこでもくっついてるよね」
「篠原ってさ、顔はイケメンじゃなくても、腕力強くて責任感も強いかっこいい子なんでしょ？」
「うんうん、あんな強い男の子に守ってもらえて幸せよねえ」
「あーあ、結局かわいい子の彼氏ってかっこいいよねえー」
「そうそう、いい男から取られていくのよねえ……」

女子二人組が、あたしと浩介くんを羨んでいる。
最近では浩介くんが目を光らせていると男子の目線も減っている気がする。
海でナンパされた時も浩介くんはちょうど嫉妬して目をそらしてたし。
あたしたちはテーブルを見つけ、食べ始める。
カレーの大盛りに牛丼のミニ。でも食べ終わるのは浩介くんからになりそう。
一口一口、小さく食べる。噛む回数はあんまり変わってないことを考えると、口が小さくなっている。
浩介くんが大胆に頬張るところを見ていると、つい惚れてしまう。
おっと、ただでさえ遅いんだし、そんなことしちゃいけないよね。うん。
とは言え、今回は浩介くんの特盛りカレーが多かったためか、食べるスピードはほぼ同時、あたしがちょっとだけ早いくらいだった。
「お、優子ちゃんが先に食べ終わるの初めてじゃない？」
「あはは、あれだけ量に差があったらそうでしょ？」
実際、あたしは体育で極端なハンデを付けてもらっているけど、特に競争したわけじゃないけど、この食事量の差だって、似たようなも

の。
浩介くんは「たくさん食べてたくさん鍛えなきゃ筋肉がつかない」とも言っていた。
正直、筋肉もいいけど下半身も鍛えて欲しいなあなんて、あたしは思ってしまう。
このサービスエリアにはマッサージのサービスはない。
そこで、残った時間で浩介くんに肩をマッサージしてもらう。
「あー気持ちいいー！　んっー痛気持ちいいー！」
「ここがこってるよね？」
浩介くんが指であたしの特に固い所を突いてくる。
「うん」
「よし、えいっ！」
「あー！　いいよおおおおおお!!!」
なんか周囲が見ている気がするけど気にしない。

「あれ？　石山さんじゃん。もー、声大きいよ」
「あ、永原先生。すみません」
あたしがマッサージを受けていると、永原先生が寄ってきてあたしたちを注意する。
「まだ余裕あるけど、時間には気をつけてね……私はバスに戻るわ」
「はーい」
あたしたちも、特にすることはないため、またここは基本的に暑いということもあって、マッサージもそこそこにバスへと戻る。

時間になり、全員が居ることを実行委員の桂子ちゃんが確認し、他のバスも同様であることを無線でやり取りしてから、バスは発車する。
途中ジャンクションを左に曲がって、進路を西に取る。
これはもうすぐスキー場の合図。
スキー場はインターチェンジからすぐそこの場所。
バスが高速道路を出る。

もうすぐスキー合宿のホテルに着く。
ふと、スキーの不安、浩介くんと同室ということ、そして家族風呂のこと。
あたしは期待と不安が入り交じった感情の中でバスの中から一面に広がる銀世界を眺めていた。

「さ、到着しました。一人ひとり前の人から降りてください」
永原先生の言葉とともに、コートを着て準備したあたしが最初に降りる。
「さむっ……」
手足はともかく、とにかく顔への冷気が辛い。
去年のスキー合宿のときよりも格段に辛い。
幸子さん、大丈夫かな？
って、寒さに弱くなって悩んでいるって報告も受けてないから大丈夫だと思いたい。
隣の永原先生も比較的涼しい顔をしている。
永原先生の服はクラスの中では一番の軽装、と言うより普段と変わらないレディースーツだった。
「永原先生、そんな軽装で大丈夫なんですか？」
「石山さんが重装備なだけよ。戦乱の時代に過ごした真田の村の寒さは、こんなもんじゃなかったわよ」
「そりゃあ今みたいに都市化していないですし」
「そうねえ……本当に、ここ１５０年の発展は恐ろしいわよ。実は江戸の末期と初期でもかなり違うんだけど、それでもここ１５０年には遠く及ばないわ」
それに江戸時代は３００年近いわけだし。
ともあれ、ホテルの中に入ろう。

林間学校でもあったホテル支配人の挨拶は、ホテルにあるホールで行うという。
あたし達はそれぞれ同室の人と組んで荷物を持ち、それぞれの部屋

に行くことになっている。
寒さもあるため、みんな同室のパートナーを見つけてロビーへと行く。
みんな早く中に入りたいらしく、我先にとロビーへ入る。
「浩介くん、行こうか」
「ああ、うん」

# スキー合宿1日目　ホテルの粋な計らい

あたしは浩介くんを見つけると、みんなに続いてロビーへ。
ロビーの中はさすがホテルとあって暑すぎず、寒くない暖房に保たれている。
とは言え、建て替え間際だから、ホテルの施設はあちこちがボロボロで、ここ数年は、部屋の料金の値下げを余儀なくされていたそうだ。
「優子ちゃん、このホテル、何かボロいね」
「うん、もうすぐ建て替えなんだって」
それでも、思ったよりボロボロで不安になるけど。
「にしたってなあ……どうしてこんなになるまで放っておいたんだ!?」
「お金の問題じゃない？」
あたしが努めて冷静に言う。
「だよなあ……」
そんな話をしている間にも、一人、また一人と、荷物を持ったクラスメイトが集まってくる。
そして実行委員の桂子ちゃんともう一人男子の実行委員が一番前に立って向き直る。
「みんなー、とりあえず部屋の鍵を取ってください、部屋に荷物を置いたらすぐにホールへ集合です」
桂子ちゃんがそう言うと、鍵から一番近いあたし達を先頭に列ができる。
「あ、部屋の番号を間違えてないか、同室の人は必ず確認するようにしてください！」
実行委員の男子が桂子ちゃんに付け加える。
とにかく、鍵を探そう。
えっと……あたしと浩介くんの部屋は……あった！
「浩介くん、この番号で大丈夫？」
「ちょっと待って……うーん、大丈夫！」
浩介くんがパンフレットを見ながら確認してくれる。

あたし達は、早速鍵を持って部屋へと向かう。
エレベータもあったけど、2階の上オンボロで不安だったため階段を使うことにした。
幸いにも、レストランとお風呂はそれぞれ1階に集約されているから、エレベータを使う心配はない。
階段を上り、部屋の鍵を開けて部屋に入る。ちょっとだけ汗が流れる。
さすがに、屋内ではこれは厚着に過ぎたわね。
「ふうー就いたねー」
重い荷物をおろして一段落する。
「あ、ああ……ともかく、ホールへ行こうぜ」
「ちょっとごめん。これ暑いから脱ぐわね」
「え!?」
浩介くんがいう間もなく、あたしは上着のコートとカーディガンを脱ぎ、下はスカートを脱いでズボン姿になる。
下着見えたりするわけじゃないので堂々として大丈夫なはず。
「さ、行こうか」
「あ、ああ……」
浩介くんが狐につままれたような顔をしている。
もしかして、あたしの「脱ぐ発言」でいかがわしいことでも想像していたかな？
ともあれ、あたしは浩介くんと一緒に、別館にあるホールを目指した。
最初の方に部屋に入ったため、またすぐに出てきたため人通りはまばら。
でもこれから、スキー合宿の小谷学園2年生たちで盛り上がる。
「ふー」
ホールにつき、浩介くんと一緒に端っこの壁に座り込む。
今は人が少ないけど、人が増えたら所定位置に立てばいい。
ホールには、次々と人が入ってくる。
実行委員はまだ来ていないから、どこにいればいいかわからない

し、とりあえず今はこれでいい。
永原先生が入っていくのが見えた。あたしたちには気付いていない様子。
クラスで見知った顔も増えてきて、徐々にクラスごとに列ができる。
「じゃあ行こうか」
「うん」
「はーい、手前から座ってください」
どうやら、座りながら話を聞けるらしく、立っていた列が後ろに下がって座り始める。
あたしと浩介くんは、後ろのほうに陣取り座る。
浩介くんは足を胡坐にして座る、あたしは愛用の女の子座りをする。
ズボンだからどんな座り方でもいいんだけど、スカートで過ごすことが長くて、自然と体育座りを避けるようになってしまった。
体育の授業でも、する機会がめっきり減ってしまったし。
「建て替えた後ってどうなるんだろうね」
「さあ？」
このホテルは本館と別館があって、それぞれ４階建てになっている。
別館の１階はこのホールの他、スキーのレンタルサービスをするコーナーを始めとしたスキーコーナーがある。
しばらくすると、ホールの壇上にホテルの人が立っているのが見えた。
「はーい、みんな、間もなく始まるわよー！　静かに聞いてね」
永原先生がおしゃべりしている生徒たちに注意すると、生徒たちもほとんど静かになる。
「えー皆さん、支配人の疋田（ひきだ）です。本日は『疋田スキーホテル』をご利用いただきまして誠にありがとうございます」
やっぱり疋田は人の名前か。
「こちらのホテルは小谷学園の皆様のご利用を最後に、建て替えに入

ります。築５０年となりましたこちらのホテルは、まもなく役目を終えます。すでにあちこちボロボロではありますが、最後の時間をお楽しみください、以上です」
短い演説を終え、拍手が起きる。
長々とホテルの歴史を語っていたら拍手も起きてなさそうね。
次に永原先生が壇上に立つ。
「はーい、それでは皆さん、次はスキーウェアのサイズを測りますので担当の付いてきてください」
１組から順番に、スキーウェアのレンタルコーナーに移動する。ちなみに、スペースには余裕があるので、制限時間は特にない。
スキー本体にスキーウェアと帽子、ピッケルの他、ゼッケンは全員が受け取るため、自分用のスキー用具を持っている人も一旦レンタルルームに行く。

「レンタルサイズ、合うのあるかなあ……」
あたしは、胸をちょっと気にしながら言う。
「あーどうだろう？」
これだけ大きいと、対応するサイズがないんじゃないかと心配になる。何せ日常的に使っているブラジャーでさえ、あたしに合うサイズは滅多に売っていない。
一瞬、それならそれでもいいやと思ってしまう。
怪我しそうなスキーの代わりにそり遊びでもして過ごしてもいいかなと思ってしまう。
ってダメダメ。
「あ、石山さん」
「ん？」
永原先生と、さっきのホテルの支配人さんがあたしに話しかけてくる。
「私と、支配人の疋田さんの方から用件が２つあるわ」
「はい」
「えっと、まずは私からいいですか？」

支配人さんがあたしの顔を見る。
「今回は当ホテルの家族風呂をご利用いただきまして誠にありがとうございます」
「はい」
「石山様は、家族風呂最後のお客様です。本来なら家族風呂には所定の制限時間がございますが、他に予約された方がいない事や、先ほども申し上げましたように小谷学園様のご利用を持ちまして当ホテルは建て替えに伴う休館となります」
それがどうしたんだろう？
「つきましては、本来なら明日の夜９０分となっているところですが、本日から最終日までの終日ご利用いただけることといたします」
「は、はい……ありがとうございます」
「では失礼します」
あたしは、浩介くんとのことを想像してしまう。
よく見ると浩介くんが下を向いてうずくまってる。たぶん考えていることは同じ。
あたし達は専用のお風呂を手に入れてしまったということになる。
家族風呂は本来なら次の利用者のことも考えなきゃいけないけど、もう取り壊しちゃうなら……ってダメダメ！
「石山さん、次は私の話だよ」
「あ、はい、すみません」
既に支配人さんの姿はなく永原先生があたしを見つめている。
「石山さんのスキーウェアなんだけど……事前に調べたんだけど合うサイズがなかったわ」
「あ、そうですか」
あたしは、何故かちょっとだけ安堵したように言う。
「そこで何だけど、私が石山さん向けにスキーセットを選んでおいたわ。それは部屋に送っておくからレンタルコーナーではゼッケンだけ取ってね」
「あ、はい。分かりました」
やっぱり永原先生が手を回していた。

そう言えば、永原先生はあたしの体格を知っていたんだっけ？　確か女の子になって初めての日のことだったよね？
「2組の皆さん、私について行ってくださーい！」
あたしへの連絡を終えると、永原先生がすぐに誘導に移る。
あたしは浩介くんと一緒に立ち上がる。
「ね、ねえ浩介くん」
「う、うん……何かな？」
「お風呂、独占しちゃったね」
やっぱり話題はさっきのこと。
「あはは、そうだな。あーでも、初日はさすがに恥ずかしいかな」
「うん、1回くらいはみんなで入りたいし」
後でこのこと桂子ちゃんに話さないとダメかな？
それともう知ってるだろうか？
そんなことを考えながら歩いているとスキーウェアのレンタルコーナーに着いた。
ここは女子更衣室も兼ねているから毎日訪れる所になっている。
あたしは自分のゼッケン番号「２１８」を取る。
そして、他の女子がスキーウェアを選んでいる中で、あたしはゼッケンだけ取って外に出る。
「あれ？　優子も自分のスキーウェアあるの？」
虎姫ちゃんが話しかけてくる。
「ああいや、あたしはその……レンタルのサイズがないから永原先生が買ってきてくれたのよ」
「あー、そういうこと。うん、そりゃあそうだよねえ……」
虎姫ちゃんがあたしの胸を見て言う。
胸が大きいのは女の子として自信になるけど、こういうことがある時はちょっとだけ普通サイズに憧れたりしちゃうわね。
ともあれあたしは部屋に戻る。
まだ浩介くんは戻ってきていない。
って、鍵を閉め忘れてたわ。
幸いにも何も盗まれていないことを確認すると、あたしは机の上に

あるスキーウェアに手をかける。
「あ、そうだ、浩介くんも来るんだった……」
浩介くんのことを思い出し、奥の脱衣所へと急ぐ。
そしてドアを閉めて鍵もかける。
あたしはズボンを脱いで、スキーウェアを着けて見る。
うん、大丈夫。あたしは胸だけじゃなくてお尻もかなり大きいけど、さすがに胸ほどではないのでこちらは問題なさそう。
そして、上を脱いでブラジャーとその上のシャツだけになり、スキーウェアのセットに手をかける。
「ただいまー、ん？　優子ちゃん？」
浩介くんの声がした。
「はーい！　ちょっと今試着中だから入ってこないで！」
「ああ、分かった」
浩介くんとのやり取り、浩介くんが部屋で動く音を聞きながら、あたしは問題のウェアを着てみる。
「うん、大丈夫」
これだけ厚着でも良かった。
とにかくスキー板と靴のサイズも間違っていないし、どうやら問題はなさそう。
あたしは元の服に戻り、扉を開ける。
「ゴメン、お待たせ」
「ああ」
浩介くんがテレビを付けている。
テレビのニュースを見ながら浩介くんと話す。
蓬莱教授のニュースは今日もない。
あたしはパンフレットを見る。
うん、そろそろ時間かな？
「浩介くん、夕食に行こうよ」
「うん、そうだな」
夕食はバイキング、時間帯も3時間もある。
あたしたちは早めに夕食に行くことにした。

やはり時間が早いためか、人もまばら。
あたしは係になっていた桂子ちゃんに食事券を渡し、机に向かう。
「さ、取ってこようか」
「うん」
浩介くんと一緒にバイキング、メニューはやはり山間部ということで林間学校とほぼ同じ。
あたしは取り過ぎに注意しつつお皿に盛り付ける。
デザートも忘れずにっと。
「それにしても優子ちゃん」
「ん？」
ほぼ同時に取り終わって机に戻った浩介くんが不思議そうに言う。
「いつも思うんだけど、そんなに少なくて大丈夫なの？　いくら女子と言ってもその量はちょっと……」
「ああうん、そんなに胃は大きくないのよあたし。でも、この量でもちゃんと体型維持できてるし……お腹もちょっとぷにっっとしてるわよ」
「うっ……」
「あ、ゴメン、想像しちゃった……うん、そうだよね……家族風呂……入るんだよね……」
「ああうん、でもほら、今は食べ物に集中しようぜ！」
「う、うん」
浩介くんの強引な誘導によって、何とか冷静さを取り戻す。
いけないいけない。今は部屋の中じゃないんだ。
あたしはそう思って、食事を再開する。
浩介くんが食べるペースを調整してくれたおかげで、今日はほぼ同時に食べ終わった。
浩介くん曰く「やっぱりゆっくり味わわないと行けないな」とのこと。
部屋に戻ったあたしたちは、テレビのバラエティを見る。
「うーん、どう思う？」
「なんか露骨だよねえ」

「そう思う？」
「うん」
というよりも、芸能人のゴリ押しがひどい。
インターネットでは散々バッシングされている芸能人がまた出ている。
なんか実力以上に出演させられて可愛そうな気もする。
そんなことを思いながら、時間が過ぎていく。
番組表を見て、ニュースをやっているチャンネルに繋いだが、やっているのはくだらない芸能人のスキャンダルばかり。
というか、もっと国際情勢で報じるべきことがあるような気もするんだけど、とにかく反応が鈍い。
「ねえ優子ちゃん、これじゃあテレビ離れも起きるよね」
「うん、あたしもそう思う」
そんなことを話しながら、お風呂の集合時間が近付く。
「今日はみんなで入ろうか」
「うん、そうだね」
そんなことを話しながら、２人で部屋を出る。
２組の時間、クラスメートたちが本館のお風呂場に向かっているけど、男女でペアになっているのはあたしたちだけ。
彼氏と同室のスキー合宿。
まさに学校の公認カップル同然の待遇だった。
やがて、青い暖簾と赤い暖簾の分かれ道にたどり着く。
「じゃここで」
「うん、部屋に集合ね」
「おう」
そんな会話をしながら、あたしは女湯へ。
共同の女湯は幸子さんと入って以来のことで、林間学校と合わせて３回目、さすがに緊張してしまう。
とは言え、林間学校の時と比べて、あたしの精神は格段に女性化が進んでいた。
女の子の裸にはやっぱりまだびくっとなることはあるけど、あんま

り緊張感はない。
もしかしたら、こんな身体だから余裕があるのかもしれない。
桂子ちゃんがりんかん学校の時のあたしと同じ注意事項を言って一斉にお風呂場に入る。
あたしは何となく桂子ちゃんについて行き、脱衣所で隣になる。
「ねえ優子ちゃん、先生から聞いたわよ」
「え？」
「家族風呂、丸４日使えるんだって？」
桂子ちゃんがさっきの話を言う。
やっぱり連絡は回っていたみたいね。
「う、うん……」
「何で今日はこっちに来たのよ？」
「ああうん、いきなり言われたことだし、あたしも浩介くんも心の準備がまだ出来てなさそうだったから……ちゃんと話し合ったわけじゃないけど」
「そう、確かにね。じゃあ今日はみんなで入ろうか」
「うん」
服を脱ぎながら、器用に話す。あたしはうまく隠しながらバスタオルを巻く。
林間学校のときは一瞬見られちゃったけど、今回は大丈夫のはず。多分。
風呂場は林間学校よりやや狭めで、大きな大浴場が１つあるだけ。
それもあちこちにサビが見られ、年月を物語っている。
建て替えもしょうがないという空気があちこちで流れている。
あたしはシャワーで身体を洗おうとしたんだが、温度調整がうまく行かず、四苦八苦した。
周囲を見るとやはり同じ感じだという。
いつもはここの温泉は循環だが、このスキー合宿に限って「源泉かけ流し」という札が掲げられていた。
ご丁寧に飲泉用のコップまであるんだからすごい力の入れようだよなあ。

あたしは久々に、女子たちのガールズトークに参加する。
林間学校の時ほどじゃないけど、まだ時折よく分からない表現が出てくる。
「モデル体型って言うけど、ガリガリに痩せてもモテないわよ」
「うーん、優子さんどういうことですか？」
「うん、あたしくらいにお腹に肉がある方がいいわよ。ガリガリに痩せてると赤ちゃんにあげる栄養がないって男の子は判断しちゃうわ」
「ふむふむ、じゃあ私もダイエットは？」
「うん、龍香ちゃんは不要だよ。今の体型を維持するのがいいと思うわ」
「ほほう。勉強になります」
そしてこんな風に、優一だった頃の「知識」も役に立つ。
永原先生が言っていた。どれだけ女の子になろうとしても、男の頃の残滓は残る。
それは今みたいに武器になることもあるし、壁に感じることもある。
幼女時代を経験していないというあたしのコンプレックスが癒えることも、１０００年経ってもないだろう。
でも、それでも、あたしは女の子だから。
完全に無理とわかっていても、あたしはこの歩みを止めない。
「そろそろ時間ですよー」
「「はーい！」」
永原先生の号令とともに、２年２組が一斉に上がる。
あたしはタオルで体を拭き、脱衣所でもバスタオルを使う。
脱衣所はかなり暖房が効いていたので、林間学校の時と変わらない気温に維持されている。
あたしはパジャマに着替える。
今回はワンピースタイプではなく、普通のゆったりズボンにした。
あたしは女子たちと話しながら部屋に向かう。
ドアを開けると既に敷かれた布団の上に座っているパジャマ姿の浩介くんが居た。

「ただいまー」
「おかえり」
「ゴメン、待った？」
「ううん、別に」
「ふう」
　あたしが一息つく。
「どうしたの？」
「ああうん、疲れちゃって……寝る？」
「そうだな……まだ消灯時間じゃないけど。明日はスキーだもんな」
「あーでも、今寝ると４時頃起きちゃうんだよね」
　時刻は午後８時代、前回の経験が生きている。
「じゃあ１時間起きていようか」
「うん」
　あたしと浩介くんは、他愛もない話で３０分潰し、テレビのニュースと気象情報で２０分潰し、持ってきた少女漫画で１０分を潰した。
　浩介くんは初めて少女漫画を読んでみたけど「なんか難しい」と言って避けてしまった。
　まあ仕方ないわよね。男の子だし。優一だって同じ反応をしただろうと思う。
「おやすみ、優子ちゃん」
「うん、おやすみ」
　そして、電気を消す。
　やはり疲れが溜まっていたため、眠るのに苦労はしなかった。

# スキー合宿２日目　ホテルの朝

「んー」
暗闇の中、意識がはっきりしてくる。
あたしたちの部屋の暖房もあって寒さは感じない。
ふと、隣に寝ているはずの浩介くんを見る。
「あれ？」
浩介くんの寝ているはずの布団がもぬけの殻になっていた。
浩介くん、どこに行っちゃったんだろう？
そう思ってあたしは布団からゆっくり起き上がる。
「あ、優子ちゃんおはよう」
「ふぇ？　あ、浩介くんおはよう」
いけないいけない。
一瞬浩介くんが見えなかったからって変な声出ちゃった。
単に浩介くんが既に起きてただけだった、てへへ……
ともあれ、今日はスキー合宿の２日目で、朝食食べたら早速始まる予定になっている。
「ところで、浩介くん、今何時？」
「５時５８分」
浩介くんがスマホの画面を見て確認してくれる。
あたしはテレビをつけると、ちょうど朝のニュースをやっていた。
「えー次のニュースです。佐和山大学が昨夜、蓬莱伸吾教授の研究所の増設を許可したと発表しました」
「あ、蓬莱教授のニュースだわ」
どうも寝ている間に新たに進展があったらしい。
あたしと浩介くんの将来に影響する蓬莱教授のニュースということで、あたしたちの注目度もぐんと上昇する。
「蓬莱氏は遺伝学における功績でノーベル生理学・医学賞を受賞した学者で、その研究内容は宗教団体を中心に根強い批判があります。一方で、世界各国の資産家が蓬莱氏を援助しており、現在も論争となっております」

宗教界からの批判は、蓬莱教授は完全に無視している。
不老の研究さえできればなんでもいいというスタンスだからだ。
「世界各国の皆様からの、より手厚い援助により、今回の研究施設の増強を達成でき構えていられにました。援助していただきました皆様には厚く御礼申し上げるとともに、今後とも『老化』の治療法確立に向けて研究を続けていきます」
テレビでは記者会見に映る蓬莱教授の姿が見えた。
どうやら、昨日あたしたちが寝ている間に、蓬莱教授による記者会見が行われたらしい。
「蓬莱教授はこのように述べ、また、宗教界からの批判については『どうでもいい。どこの誰だかは知らないが神などというものを信じている人の言うことは一切聞かない』とも述べました」
蓬莱教授は相変わらずの様子。
ともあれ、蓬莱教授の方も研究が進んでいるといいけど。
「これどうなんですかね？」
「いやあね、宗教信じてないというのはいいんですけど、いくら何でもこういう言い方というのはちょっとどうかと思うんですよ。こう明らかに宗教を信じている人を見下しているというのですかね――」
テレビでは、また識者が言いたい放題し始めている。
「ねえ浩介くん」
「ああ、どうなるかな？」
あたし達はテレビを機にまた蓬莱教授の話をする。
蓬莱教授が力を誇示した理由は何だろう？
もしかしたら、あたし達を迎え入れるためかもしれない。
とは言え、今は午前６時すぎ、林間学校と同じく朝風呂も可能だけどあたしは今回は見送ることにする。
朝食は午前６時３０分から２時間で、午前９時に集合、スキー開始になる。
「ご飯どうする？」
「せっかく早起きしたんだし、一番にしようぜ」
「じゃあそうするわ」

とすれば、そこまで悠長に構えていられないかな？
「浩介くん、あたし着替えるわね」
「ああ、うん」
あたしは、浩介くんとは別室で着替えるため、昨日と同じく脱衣所兼トイレの部屋へ。部屋の風呂もあるけど、家族風呂の方が広いからまず使わないだろう。
朝食は私服も人もいるけど、集合時間との兼ね合いから、スキーウェアの人もいる。
あたしはスキーウェアは飾りっ気とかないしあまり好きではない。ともあれ、林間学校と違って、スキー場に行く以外は、暖房の効いたホテルを出ないので、あたしはお気に入りの青い膝上丈のスカートを穿く。ホテル内でも隙間風はあるので、ストッキングは欠かせない。
上の方も、戻ってきた時のためにそれなりのものを用意する。そして頭の白いリボン、これもスキー中は帽子に隠れちゃうけど、あたしのトレードマークにもなっているし、当然つけておく。
「お待たせー！」
「お、優子ちゃん。その……きょ、今日もかわいいね」
「う、うん、ありがとう……」
既にスキーウェア姿の浩介くんとぎこちなく挨拶する。
多分だけど、あたしもスキーウェアで現れると思ったんだろう。ともあれ、着替え終わったらいい時間になったので、あたしたちは部屋を出て食堂へ。もちろんカギは閉めるために持っていく。
「ねえ、浩介くん……」
「ん？」
「今は人もまばらだし、手を繋ごうか」
あたしはそう言って右手を浩介くんに近付ける。
浩介くんは何も言わずに手を握ってくれる。
おててをつないで歩くというのは、今までのデートでも何度もしていたこと。
あたしにとっては、学校は毎日の浩介くんとのデートも兼ねている

と思っているので、それも含めると、手をつなぐ頻度は高くなかった。
1階に降りて、昨日の夕食を食べたのと同じレストランへ。
見てみると今回もバイキング形式になっている。
早速実行委員の桂子ちゃんが目に入った。
「おはよー桂子ちゃん」
「お、優子ちゃん、朝からラブラブだね」
「えへへ……」
クラスの男子は、あたしと浩介くんがいちゃいちゃしていると、浩介くんに強烈な殺意の目を向けるけど、桂子ちゃんをはじめ、クラスの女子たちは、こうやってあたしを煽ることが多い。
そして、あたしも浩介くんも、女子たちにからかわれると熟れたリンゴのように顔が真っ赤になってしまうのがいつものこと。
でも、この空気、恥ずかしいけど嫌いじゃないわね。
今回は席は心配いらないので、まずはお皿とトレイを取ってバイキングへ。朝食は目玉焼きやウインナーなど、どれも作りたてのほやほやになっている。
「やっぱり朝早く来てよかったな」
「うん、どれもおいしそうだわ」
取り箸やトングも、昨日とは違い清潔に保たれている。
あたしたちは、昨日の夕食よりやや多めにとる。
理由は2つあって1つは新鮮でおいしそうだったこと、もう1つは昼食まで時間があり、しかもスキーをずっとしないといけないという重労働を考慮して。
理性的戦略と食欲が一致するのって、何気に珍しいことじゃないかと思う。
「「いただきます」」
適当に2人掛けのテーブルを陣取って食事を開始する。
入り口を見るとこれから食べに来た人で列をなしていた。
「早起きは三文の得だね」
「だな」
もう少し遅ければ、あたしたちもあの渋滞に巻き込まれたことにな

る。
そうならないためにも、明日以降も早起きし、時間にも気を付けよう。
そんなことを思いながら、朝食に入った。
さて、あたしは今、意識して何時もより少しだけ速く食べようとしている。
というのも、あたしは何時も浩介くんを待たせてばかりだし、この点はもう十分に女の子アピールをしたと思ったから。少しだけ一生懸命な所を浩介くんに見せたい。
もちろん、お行儀悪い食べ方にならないようにするのは大前提だけど。
「ふう、俺、もう少し食べるよ」
「あ、うん」
浩介くんがいつもより早く食べ終わったかと思えば、どうも最初から少なめだったらしい。
うーん、それに気付けないとはあたしもまだまだ浩介くんへの見識不足かな？
ともあれ、これなら普段通りのペースで大丈夫そう。
少しお腹いっぱいだけど、昼までの時間も考えて、頑張って完食しよう。
結果的に浩介くんが食べ物を取っている時間があったので、あたしが先に食べ終わった。
浩介君が食べている時には、あたしは最後に甘いオレンジジュースを飲みに行って時間調整をした。
今日はデザートがなくてちょっぴり残念だった。
「あー！　お腹いっぱい！　ちょっと休みたいわ」
部屋に戻るなりあたしの第一声、楽になりたくて布団で寝転がった。
スカートなのでもちろん布団で覆ってだけど。
「優子ちゃんってさ」

「ん？」
布団の上であぐらになっている浩介くんがあたしを見下ろしながら言う。
「俺と二人っきりになると、いつも無防備になるよね」
「そ、そうかな？」
正直自覚はなかった。
最低限ガードをしておかないと、ガサツになって女の子としてまずいし。
「いや、その……気を付けてはいると思うんだよ。だけど、普段が１２０％意識してるとすれば、俺と二人っきりになったら８０％みたいな……うまく言い表せないけどそんな感じ」
「そ、そう……」
「そうそう、だからこそ隙ができるんだよね」
浩介くんが笑いを含めて言う。
「す、隙って……」
いや、別に「隙」が「好き」って聞こえたわけじゃないけど、でも無防備ってことはそういうこと。
「うん、ちょっとだけ気を許してくれてるっていうの？　そういう俺専用モードになってくれたら、俺も楽しみになるんだ」
浩介くんが、ややにやけつきながら両手を空中でもみもみする。
「って、浩介くん！」
もーやっぱりこれだったのね。
男の子だからしょうがないことだけどさ。
「でもさ、以前は偶然触っただけでもビンタしてたじゃん」
「え!?」
浩介くんの言っていることにはっとなる。
「でも今はすごく恥ずかしがってくれる上に満更でもなさそうだよ」
「あうー」
またあたしの顔が真っ赤になる。
「優子ちゃん、間違いなく、触られてちょっとうれしいって思ってるぞ」

「んっ、そ、そそっ、そんなわけないわよ!!!」
漫画のような図星の付き方をしてしまう。
これじゃ「はいそうです」と言っているのと同じじゃないの。
「あはは、優子ちゃんは分かりやすいなー」
「んー!!!」
あたしは恥ずかしさに耐え切れず、布団で顔を隠してしまった。
浩介くんが見えなくなり、視界も暗くなる。
「あ、ごめん。でも、恥ずかしがってる優子ちゃんもかわいいから好きだぞ」
浩介くんに追い打ちをかけられてしまう。
本人はフォローしていると思っているのがまたずるい。
確かに、浩介くんの方から、胸とかお尻とか触って来たり、あるいは浩介くんにスカートめくられたりするのは、いつも決まって二人きりで他人が来そうにない所。
多分、浩介くんに犯されたいって気持ちが、潜在的にあたしを無防備にしているんだと思う。
そう考えると、多分この部屋にいる時も同じだと思う。
でも、家族風呂はどうだろう？
やっぱり裸になるのはとても緊張しそう。というよりも、考えただけでドキドキしちゃうし。

しばらくして、「まもなく時間です、準備をお願いします」の放送が流れる。
やはり年代物で、永原先生の声は途切れ途切れだったが、あたしもそれを聞いてスキーウェアに着替え部屋を出る。
そして、あたしは浩介くんと分かれて初日のレンタルスペースに行く。
「おう、優子じゃねえか」
「おはよう、恵美ちゃん」
あたしはちょっと不安そうに恵美ちゃんと挨拶する。
「おう、何だよ辛気くせえなあ！」

「と、ところで初心者コースは――」
「あ、石山さん」
恵美ちゃんと話していると、永原先生が乱入してきた。
ちょうどよかったわ、永原先生も初心者コースのはず。
「あ、永原先生。その……」
「うん、私たちは『特別』初心者コースだよ」
「え？　特別初心者コース？」
初心者コースと何が違うのかな？
「私も何だけど、普通の初心者のコースじゃ怪我の危険性があるのよ。だからスキー場の一番下の下の一角を借りて行うわ」
「う、うん……」
「え？　先生ってスキー苦手だったんか!?」
「ええ、私は長野の真田出身だから山の寒さは平気だけど、どうもスキーというかこう、滑る感じのウィンタースポーツは苦手なのよ」
「へえ、意外だな」
確かに、永原先生ってああ見えて戦国時代よろしく結構鍛えているし。
「そもそもスキーだって初めてしたのは学校教師としてスキー合宿に参加してからなのよ」
「でも、どうしてスキーをしなかったんですか？」
「スキーというか、絶叫マシン？　ああいうの全部苦手なのよ。馬なんかよりよっぽど速いのに剥き出しだし、自分でコントロールもできないし」
「あー、分かります。あと、絶叫マシンってふわっってなるのも怖いですよね。あれはただの恐怖マシンですよ」
あたしも、まだ優一だった小学生の頃に遊園地でその手の乗り物に乗ったこともあった。
最初は興味本位だったけど、あの時の怖さは忘れられない。
そして、二度と乗りたくないと思った。
「およ？　先生も優子も絶叫マシン苦手か？」
「うん、ああいうのはもう無理。小学生の時に乗ったんだけど、その時

には死ぬんじゃないかって思ったわ」
「ははん、なるほどな。優子もやっぱTS病なんだな」
恵美ちゃんが言う。
桂子ちゃんはまだしょっちゅうだけど恵美ちゃんに女の子になりきれてないと指摘されたのって久しぶりだわ。
「生まれつきの女の子は叫ぶことで恐怖を緩和できるんだって。私は、多分まだ無理よ」
永原先生が教えてくれる。
うーん、あたしの中でまた「男」を見つけてしまった気がするけど、絶叫マシン苦手な女子なんていくらでもいそうだし、まあこれは放置でいいかな。
でも、叫んで発散かあ……それで気分が楽になるなら、いつか身につけてみたいわね。損はないだろうし。
「さ、そろそろ時間だから行くわよ」
「「はーい！」」
みんなで返事する。
スキー合宿は初心、初級、中級、上級とそれぞれ4コースが有って、初心コースを受けるのはあたしと永原先生だけ。
ちなみに、人数的には初級が一番多いらしい。
で、あたしたちの初心コースというは特別初心コースということになっている。
生徒たちがそれぞれのコースに別れ、あたしは永原先生に連れられて別の場所に行く。

「えっと、永原マキノさんと石山優子さんですね。よろしくお願いいたします」
「あ、どうもよろしくお願いします」
特別初心コースの場所に行くと、インストラクターの人が声をかけてくれた。
インストラクターの先生は若い女性で温厚そうな印象を受けた。
「それにしても、お二人ともお若いですね。よく中学生に間違えられ

ませんか？」
「あはは、私はさすがに無いかな。ここ、大きいですから」
あたしは胸のあたりをちょっとだけ強調して言う。
確かにあたしも高校生にしては童顔と言っていいけど、胸が大きいおかげで少しだけ大人っぽく見えるらしい。
この絶妙なバランスが、また男子にモテてる気がする。
「あ、そうですね。永原さんは……先生ですよね？」
「ええ、ちなみに、私はあなたより１００％年上ですよ」
というよりも、世界中の誰よりも年上でしょ先生は。
「え!?　そうなんですか!?　私だってこれでも３０代よ。まさか永原先生はその容姿で４０超えてるとか？」
インストラクターさんが驚いた顔をする。
「永原先生は……やめておくわ」
４０でも１０分の１も足りていないと言うのはやめておく。
「私と石山さんは今話題のＴＳ病っていう病気なのよ。石山さんは高校２年生だけど、私は……やめておくわ」
「え!?　ＴＳ病って、まさか１００歳超えてるとか!?」
インストラクターさんが驚いた顔をする。
「ふふっ……確かに私は江戸幕府を知っているわよ」
「……深く詮索しないことにします」
うん、それがいいわよ。
余呉さんの１８４歳くらいならまだ想像も付くけど永原先生の５００歳という年齢はおおよそ一般人の想像を絶するような長さ。
というより、余呉さんでさえイメージできないスケールだろう。
「と、とりあえず、私達のコースに向かいます。付いてきてください」
「「はい」」
今回は、インストラクターさんと担任の先生、女子生徒という３人授業になるのかな？
「あ、ちなみに、特別初心コースですけど、他にもいます。しかし、小谷学園の方じゃないです」
「え!?　もしかして……」

「はい、地元の小学生の方と合同になります」

まあ、そうだろうなあ……

# スキー合宿２日目　子供たちとスキー

そんなわけで、あたしと永原先生は、地元の小学生達と一緒にスキーの練習をすることになった。
聞くところによると、インストラクターさんも普段は地元の学校の体育の先生をしているという。
「他のコースはちゃんと専門の人がするんだけどね。私達がやることと言えば子供向けですから……あ、もちろん私もインストラクターの資格はありますよ。でも教えるのは年にほんの少しだけです」
ともあれ、ついていこう。
それにしてもスキー靴は滑らないけど歩きにくい。ってそりゃあ雪だもん当たり前よね。
「はーい、みんなお待たせー、今日明日とスキースクールを開きます。今回はスクールの生徒に２人加わります。自己紹介をお願いします」
見ると小学生の低中学年、ちょうど１０歳くらいの男女がちょうど１０人いた。
そのくらいなので、みんな永原先生よりも背が低いけど、永原先生の背の低さもあって全員永原先生の肩には収まっている。
「えっと、私立小谷学園から来ました石山優子といいます。短い間ではありますがよろしくお願いします」
「「よろしくおねがいしまーす！」」
子どもたちが元気よく返事する。
優一もこれくらいの頃は純真だったはずなのに、どうしてああなっちゃったんだろう？
……考えても仕方ないわね。
「同じく小谷学園から来ました永原マキノといいます。スキーが大の苦手ですので、よろしくお願いいたします」
「「よろしくおねがいしまーす！」」
心なしか、永原先生に対する声のほうが大きいような気がする。
あたしよりも童顔だし背も低いから、見た目では子供に近いんだろう。

「それでは、みんなスキーは初めてだと思いますので、まずは転んだ時の受け身ですね。その練習からしていきたいと思いますが、その前に準備運動をしてください」
「「はーい！」」

「ねえお姉ちゃん、歳いくつなの？」
　準備運動をしていると、男の子が1人あたしに話しかけてくる。
「こーら、女性に年齢聞かないのよ」
「えーつまんなーい！」
　あたしのお決まりのやり取りに、男の子がブーイングをする。
「ダメなものはダメよ」
　17歳だけど。
「じゃあそっちのお姉ちゃんはいくつなの!?」
「あらあら、インストラクターさんにも言われましたよ……私は学校で先生をしてます」
「え!?　先生なのにどうしてここにいるの!?」
　男の子がとても驚いている。
「私、スキーが大の苦手なのよ。昭和の頃からやってるけど、未だにまともに滑れないわ」
「昭和？　昭和って、平成の前の!?」
　子供が驚いた顔をする。
「おっといけない。とにかく、準備運動しなさい」
「はーい……」
　男の子がトボトボして去っていく。
「ごめんなさいね。ここにいる子はみんな小学校４年生ですから」
　インストラクターさんが謝罪する。
　小４というと、やっぱり１０歳位かな？
「そうですか。小学校かあ……私はそんなもの出てないわね」
「え!?　でも、中学までは義務教育……あ、もしかして先生がいた時代は？」
　あたしは、「さっき江戸幕府知っているって言ってたでしょ」と心の

なかで突っ込んでおく。
「ええ。小中学校どころか、寺子屋さえもなかったですよ」
「ま、まさか……永原先生って――」
準備運動をしながら、インストラクターさんが驚いたように言う。
「ふふっ、ここに居る私以外の皆さんの年齢を合計して……そうですねえ3倍しても足りないでしょう」
「……なんかめまいがしてきたわ……とにかく、まずはスキー靴の履き方、板のはめ方と受け身の練習に入ります」
インストラクターさんは思考回路の想像力を超えたのか、これ以上深く詮索しないことにした。
9歳から10歳の子供が10人、30代のインストラクター、17歳のあたし、全部足しても永原先生どころか比良さんと余呉さんにも届いていない。
……というか、永原先生3番目に年上の比良さんの3倍近く生きてるのよね。

小谷学園のスキー合宿は去年もあって優一は上級コースを選んでいた。ちなみにあたしは1度も転ばなかった。
実際には初めてだったので初心を選んだんだけど、すぐに急斜面でパラレルターンできるようになったので翌日には浩介くんがいた上級に放り込まれてしまったのだ。
確かあの時も浩介くんと張り合ってたような気がするわ。さすがに経験者の浩介くんには負けてた記憶があるけど。
最初に簡単にスキー靴での雪の落とし方や板のはめ方をやる。
あたしは優一時代の「知識」を活かして難なく成功させる。
さすがに体が違うと言ってもこの辺は問題ないはず。
受け身もうまくいくと思う。
とは言え、それより先、本格的に滑るとなると知識だけではどうにもならないのは永原先生が証明している。
優子の体でのスキーに慣れるために、基礎の基礎からやり直さないといけない。

インストラクターさんの言うことを聞き、転んだときのことを練習する。
さすがに永原先生も、このあたりはお手の物みたいだ。
「えっと……こう？」
子どもたちもそれぞれ苦戦している。
雪国育ちとあってか「早く滑ろうよー」と言っている人はいない。
危険性をみんな認識しているのだろう。
あたしはというと、最初の受け身でちょっとだけ失敗しただけで、後はうまく行った。
「それじゃあ滑ります」
インストラクターさんがそう言うと、あたしたちは柵に囲まれ、斜面の先にクッションが置かれた小さな場所に連れて行かれた。
傾斜は極めて緩くスピードが出るのかさえわからない程。
仮に暴走して転んだとしても、クッションがあるから安心感があるということか。
「スキーのブレーキはこのように、『ハ』の字にします。まずは滑る前にやってみてください」
基本のボーゲンね。
……えっと、こうかな？
うん、このあたりなら大丈夫。
最初の課題としてはクッションに触れずに止まること。
まず1人の女の子が滑る。
「わっ、わっ！」
女の子が慌ててボーゲンの形をしようとするがうまく開けず、そのままクッションにドカンしてしまった。
「あうー、失敗……」
「最初はそんなものよ、次」
「はい」
今度は永原先生。
斜面に並行にして、両側で……あっ！
永原先生はうまく開くことが出来ず、バランスを崩してクッション

へ。
スキーがどうしても苦手というのは本当だったみたい。
「あうーやっぱりうまくいかない」
次々と小学生の男女が試すけど、初見での習得は難しい様子。
よし、最後にあたしの番。
あたしは加速を付け、真ん中あたりで板を広げる。
よし、最後まで減速……まずい間に合わない！
あたしは大慌てでハの字を広げ、本能的に体重を左に向けてクッションを避けようとする。
「あっ……」
右腕が、クッションに触れる感触。
つまり失敗。
「あちゃーダメだったわ」
「うん、でも石山さんが一番いいわね。さ、うまくいくまで続けるわよ」
「「はーい！」」
なるべくクッションギリギリに止まる練習をする。
一定のラインがあって、このラインより前に、なおかつクッションに触れずに止まれるまで続く。ちなみに、再加速もダメだ。
ちなみに、あたしたちが受ける特別初心者コースはほぼ全てここで行うという。
というのも、初心者向けコースでさえ、大人が滑ることもあるため小さな子供には危ないためだという。
ふと脇を見ると、小谷学園のゼッケンを着た初級者コースの人が見えた。
このあたりは初級者コースの人にとってもかなり簡単なコースのはず。
「石山さん、飲み込み早いわね。もしかして男だったときって？」
インストラクターさんが話しかけてくる。
「うん、上級者コースも難なく滑れたわよ。優一……っていうのはあたしの男の頃の名前だけど……彼だったら、多分ここの上級者コース

も平気な顔で滑れたと思うわ」
「え!?　だったらどうしてここにいるのよ？　確かにまだ課題を成功してないけど」
インストラクターさんが驚いた顔で言う。
「女の子になって、とにかく運動能力が落ちたのよ。６０近くあった握力は２０未満に、立ち幅跳びで２メートル半飛べたのに、今じゃ走り幅跳びで２メートルを超えるのがやっと……と言った具合にね」
「それはまた、苦労してきたのねえ」
「ええ、でも、今は幸せですから」
あたしがニッコリ笑って答える。
インストラクターさんもそれ以上は詮索せず、午前中は子供たちと一緒にこの講習を続けた。
あたしが何度か成功させただけで、まだまだみんな上達はしていなかった。
ともあれ、これでお昼休みに入れる。
ちなみに、永原先生はようやくバランスを安定させることが出来たという段階で、子供たちと比べてもやや遅れ気味だ。
「ふーやっと感覚取り戻せそう。といっても大したものじゃないけど」
「永原先生、どうしてそこまで苦手なんです？」
「うーん、やっぱりこの歳で新しいこと習得するのは難しいのかも……特にこういう運動系は」
「うーん、そんな感じでもないと思うけど。洋服とかでのオシャレとかだって永原先生の時代からすれば最近のことでしょ？」
「あれはほら、女子だから……とすると、やっぱり板で坂を滑ってくって怖いせいかも」
「あ、永原先生もそんな感じですか？」
「うん」
さっきジェットコースターの話題が出たけど、スキーはまだコントロール可能だからマシではあると思う。
ともかくあたしは怖いのが苦手。

夏祭りや文化祭の時のお化け屋敷は、グロ系というよりは単なるびっくり系だったし、これが本気で恐怖感を煽るようなお化け屋敷だったら多分入れなさそう。
ともあれ、一旦スキー場の路地に入って昼食を取る。
小谷学園のみんなも見える中、あたしと永原先生は子供たちと一緒に食事を摂る。
さすがにメニューはお子様ランチではなく、小谷学園のみんなが食べているメニューを選ぶ方式になった。
「あたしはたぬきそばで」
「私はきつねそば」
とにかく、外は寒いので温かいものを食べたい。
「天気は午後からちょっと雪が降るということです」
「そうですか、ちょっとまずいですねえ」
永原先生は新雪にちょっとだけ恐怖感でもあるのだろうか？
「とは言え、今日はまず基本的な受け身やブレーキを覚えてもらいます。明日はボーゲンでターンをした後ちょっとだけファミリーコースを滑りましょう」
インストラクターさんの言葉が聞こえる。
インストラクターさんは食べるのが早めだ。
そしてあたしは永原先生よりも更に食べるのが遅いけど、さすがに子供たちよりは早く食べ終わっている。
「ねえねえお姉ちゃん。お姉ちゃんの住んでるところって雪降るの？」
「うん、たまに降るわよ。年に数回くらい」
さっき年齢を聞いてきた男の子が別の話題を振る。
「へー、じゃあスキーは出来ないの？」
「そうだねえ、こんな風に積もったりはしないわ」
「へえ、お姉ちゃんの街は楽そうでいいね」
「そりゃあ、環境悪かったら『政令指定都市』に何てならないわよ」
「へえ、お姉ちゃん大都会に住んでいるんだ」
「うん」

「ねえ、お姉ちゃんの話もっと聞かせてよ」
「え……うん……どこから話そうかな？」
さすがに小学生の男の子にＴＳ病について理解させるのって難しいよね。
でも最初から女の子だったなんて嘘ついても、どうやって嘘つけばいいのか分からないわね。
「お姉ちゃん彼氏っているの？」
別の男の子がいきなり話しに乱入してくる。
「え、うんいるけど」
あ、つい反射的に言っちゃったわ。
「ちぇー」
男の子が残念そうな顔をしてしまい、それっきり話が途絶えてしまう。
何よこれ、最近の子ってこんなに早熟なの……
「ふふ、石山さんの彼氏は同じ学校の同じクラスの子でね、とってもかっこいいわよ」
永原先生が補足してくれる。
「へえ、この子、ＴＳ病になってどれくらいです？」
「去年の５月９日から女の子をさせてもらってます」
「え!?　じゃあまだ９ヶ月くらいじゃない！　それで彼氏ができるのね……人間の適応力ってすごいわ」
「ああいや、石山さんは特殊なんです。普通なら元男のＴＳ病患者が男を好きになるのに２、３年はかかりますよ」
永原先生が慌てて補足する。
うん、このあたりは正しい理解のために必要よね。
「それでもすごいわよ。だって１６年、１７年男をやってたんでしょ？　それなのに石山さんは仕草も振る舞いも言葉遣いも女の子そのものじゃない。こうなるのに３年しかかからないってすごいわ」
「実はですね、この病気になると女の子らしくなるために支援を受けられるんですよ」
あたしがカリキュラムについて軽く触れる。

詳しく説明してたら時間もない。見ると小学生の大半がすでに食べ終わっていて、女子の何人かが話しながらゆっくり食べているくらい。
「へえ、充実しているわね？」
「実はですね、男に戻ろうとする患者も居るんです。むしろ半分以上がそうでした」
永原先生も補足してくる。
「ふーん、そっちの人はどういう生活になるの？」
「えっと……言いにくいんですけど……」
永原先生が言葉に詰まってしまう。
「男に戻りたいと思った患者は、みんなすぐに死んでしまいます。精神的に耐えられなくなって、自分から命を絶つんです」
あたしが、代わりに説明する。
確率は低いけど、今後この地域でＴＳ病患者が出た時のためにも、「男に戻りたい」と思ってはいけないということを周知するようにしないと。
今だけ、ちょっと日本性転換症候群正会員としての顔を出す。
「うえっ、怖いですね、でも例外はいそうなんですが」
「それが不思議といないのよ。それに私達不老でもありますから、それも含めて精神を病んでしまいます」
永原先生が言う。
「つまり、この病気になったら女として生きていくしか無いってことですか？」
「ええ、その通りです」
「はい」
あたしと永原先生が肯定のジェスチャーをする。
女としてなら、いつまでも若く要られるということで、不老への心労も大分緩和されるし。
「さ、そろそろ時間ですからスキーを再開しますわよ」
しばらくして、全員が食べ終わり数分後、休み時間は終わりという

ことで再びゲレンデに入る。
午後はまた、午前と同じ練習内容。とにかくまずはスピードをコントロールすることから。
「うん、今回もうまく行ったわ」
あたしは徐々に自分の体にスキーを慣らす。
「お姉ちゃんうまいね」
「えへへ、ありがとう」
あたしが運動で純粋にうまいと褒められたのって初めてなような気がする。
いつも下手くそだったし。
逆に言えば１７歳の女子高生なのに１０歳の小学生相手じゃないと優位に立てないくらいひどいってことだけど。
一方で永原先生は……
「あー、また失敗だわ」
「あっちのお姉ちゃんは下手っぴだべ」
「うんうん、すごい下手くそだよね」
実際、永原先生はまだほとんど成功させていない。それどころか途中でバランスを崩してしまう頻度も、他の子供より高い。
あたしは1回だけ転んだだけ。
他の小学生と比べても、かなり成績が悪い。
それにしても、堂々と「下手くそ」と言ってしまうあたり、小学生らしさも残っている。
「あー、やっぱりこうなるわよね」
永原先生が憂鬱そうな顔をする。
小学生に混じってもここまでとは。
「こう見えて脚力はあるんだけどねえ……どうしてこんなに苦手なのかしら？」
永原先生のフィジカルは他の女性と比べても決して悪いわけではない。
夏祭りの時はビーチサッカーで全国レベルのサッカー部レギュラーの虎姫ちゃんとやりあってたし、体力もあり寒さに強い。

それでもスキーだけは大の苦手。
「もしかして先生はスケートとかも苦手ですか？」
「当たり前よ。２秒と立ってられないわ」
「多分、バランス感覚の問題だと思います。それも滑るものに対する」
「あー、そうかもしれないわね」
そんな会話をしながら、午後のスキーが続いていく。
さすがに１日目終了間際となると、永原先生も成功率が高まっていった。
でも永原先生曰く「来年になったらすっかり忘れてしまう」のだという。

「あ、しまった」
あたしは自分の服を部屋においてしまったのに気付く。
そう、みんなここで着替えるのだ。
「どうしたの優子ちゃん？」
「ああうん、自分の部屋に服を忘れてたわ」
「そう、じゃあ取りに行くしか無いんじゃない？」
「そ、そうよね」
あたしはスキー靴や板を所定の位置に置いてから部屋に戻る。
コンコン
「お、優子ちゃんお帰り、今開けるぞ」
浩介くんの声とともにあたしが入る。
「ゴメン、ちょっと部屋に服を忘れてたからここで着替えるわね……覗かないでね」
「お、おう」
浩介くんの言葉とともにあたしは鍵をかけて、元の服に戻る。
「ふう、お待たせー」
あたしはスキーウェアを畳む。
明日はあっちで着替えないといけないわね。
でも、浩介くんの直ぐ側で着替えるっていうのも……ってダメダメ。

「ともあれ、夕食まで時間があるから休もうか」
「そうだね」
家族風呂のことは、努めて話題にしないようにした。
ともかく、あたしも浩介くんも、一旦疲れを取りたかった。

## スキー合宿2日目　初めてのお風呂

「ねえ、浩介くん」
「ん？」
「浩介くんって上級でしょ？　どんなのやるの？」
「上級者コースをパラレルターンしたりとかこぶがいっぱいあるコース滑ったりしてるよ……ちなみに、俺が一番うまくてインストラクターさん曰くプライズテスト受けてもいいんじゃないかってさ」
浩介くんは中学時代からスキーの経験者で、かなり才能があったらしい。
冬休み中も、よくスキーで鍛えていたらしい。
「へー、プライズテストって？」
「上級者が取る1級の更に上にあるんだよ」
浩介くんが説明してくれる。
「へえ、そんなのあったんだ、懐かしいわね。去年の2級テスト」
去年のスキー合宿の時、優一だったあたしがあまりにもうまいということで上級班からも追い出されて2級を受けさせられた。
1級は2級を合格していないと出来ないので、あたしは2級を急遽受けることになって、それに合格した。
ちなみに、浩介くんは既に1級を持っていたため、悔しい思いをしたのも覚えている。滑る技術についても、浩介くんと比べるとどうしても劣ってしまっていたし。
しかも採点基準によれば、1級合格は無理な点数だったけど、少しトレーニングすれば間違いなく合格できるはずだとかなんとか。
「あったなあ、あの時の優一は怖かったけど、スキー合宿の時は、唯一優越感を感じたな」
何だかんだで、優一時代も体育系の時はいつもの仲の悪さもちょっと変わってた気がする。
「うんうん、でもプライズテストってどんな感じ？」
「あーいや、今の俺じゃまだ無理だよ。全力で対策をやって不合格になる自信がある。もうちょっと急斜面でコントロール出来ないとダ

メだよ……とにかく1級とは訳が違うから」
浩介くんが無理無理アピールをしている。
「そ、そんなに難しいの？」
「そりゃあ指導員でも落ちる様なレベルだぞ。人に教えるよりも相当な技術が要求されるんだ」
ともあれ、あたしから見れば雲の上の世界だ。深く詮索しないことにしよう。
「さ、そろそろ夕食だな」
「うん。行こうか」
浩介くんとスキーの話をし、ニュースをチェックしてから夕食に向かう。
テレビでは、蓬莱教授の話はもうしていない。
なんかニュース番組って鳥頭な気もする。それだけ世の中に情報が溢れているという意味でもあるけど。
まあいいわ。ともあれ、今のあたしたちもスキーで疲れた体を癒やしたいし、とにかく食事でエネルギーを補給しよう。
夕食の内容は、昨日とはちょっと違う感じで、それぞれが注文する形。
１０００円までは無料だけどそれ以上は自腹になる。
あたしたちは焼肉定食２人前を頼んだ。
ちょうど1人前が１０００円だったので、これにした。
周囲を見てみると、やはり似たような頼み方をしている人が多い。貧乏性の本領発揮と行ったところかも。
「お待たせいたしましたこちら焼肉定食になります」
「ありがとうございます」
在庫処分ということで、大盛りなども無料でサービスしてくれるという。
浩介くんは大盛りを頼んだ、あたしは普通盛りでもちょっと多いので、浩介くんに更に４分の1を分けた。
「「いただきます」」

焼肉の味は普通、家でも作れるくらいの肉の味。
でも定食の内容、味噌汁などは美味しかった。
「それでさ、あいつったら上級のくせに――」
「へー、やっぱ無理な申告をしちゃダメだよねー」
浩介くんとの話題、どうしても家族風呂を避けてしまう。
でも、いよいよその時が訪れてきている。
あたしは覚悟を決めて、食べている浩介くんに話しかける。
「ねえ、浩介くん……」
「ん？」
「お風呂……どうする？」
「え!?　ああ、いやその……まあ、うん」
お風呂の話題になると、途端に浩介くんの歯切れが悪くなる。
やっぱり緊張しているみたい。あたしのこのわがままボディが浩介くんの前で脱ぐわけだもんね。
でも、あたしにとっても、浩介くんの前で、初めて裸になるということ。
今までも露出高い格好したり、えっちな所を触られたりしたけど、裸を見られるのはまた別のこと。
家族風呂最後のお客さん、あたしたちは思う存分使っていいと言われた。
食べ終わったら、すぐに誘おう。
きっと、一回入ってしまえば、少しは楽になる。
どうせ今日は入らないといけない。
それなら、少しでも早い方がいい。せっかくホテルの人が準備してくれたんだもの。
「ごちそうさまでした」
「うん、じゃあ部屋に行こうか」
あたしが食べ終わり、浩介くんが部屋に向かう。
そして、家族風呂との分かれ道に差し掛かる。
「んっ……」
あたしは、後ろから浩介くんの服の袖を引っ張る。

「ゆ、優子ちゃん、ど、どうしたの？」
「お風呂、入りたい……」
あたしは意を決して、浩介くんに伝える。
「お、おう……でもほら、タオルとか持ってかないと」
「あ、そうだったわね、うん……」
浩介くんの指摘で初めて気付く。
ドキドキドキドキ
あたしの心臓はずっと高鳴っている。
これから浩介くんにされること。
浩介くんは理性で抑えているけど、裸になれば多分、もっと刺激するはず。
あたしの身体、エロいもの。
女の子になったあたしでさえそう思うんだから、浩介くんは相当だろう。
部屋に戻り、鍵とタオルを3枚、そしてパジャマを取る。
「浩介くん、手、繋ご？」
「あ、ああ……」
あたしと浩介くんがぎこちなく手をつなぐ。
これから一組のカップルが家族風呂に入る。
例えしなかったとしても、間違いなく周囲からは「性行為をした」と思われてもおかしくない。
でも、どんな結果になっても悔いはない。
浩介くんが幻滅するってことはない。それは、あたしがＴＳ病だから、分かること。
「んっ、ここ、だよな？」
そこは「家族風呂　ご予約のお客様に限ります」とある。予約しているのはあたしたちだけ。
だから事実上、あたしと浩介くんの専用風呂。
思い切ってあたしがドアを開ける。
「浩介くん、入って？」
「あ、ああ……」

浩介くんに続いてあたしが入り、扉の鍵を閉める。
中は小さな脱衣所と体重計、洗面台とトイレがあった。
奥を見ると檜風呂とやはりシャワーと鏡が５つある。
「こ、浩介くん、その……」
「あ、ああ……ぬ、脱がないとな、うん……」
浩介くんがあたしに背を向ける。
そして、意を決したように上着を脱ぎ始めた。
「んっ……」
あたしも、脱がないと。
そう思い、上着を脱ぎ、さらにトップス全てを脱ぎ、脱衣所で畳む。
いつもはそこまで畳まないけど、今日は浩介くんに全部見られてしまうからと思い、入念に畳む。
「ふう……優子ちゃん、まだ脱いでる？」
「う、うん……」
浩介くんの音がしない。多分、興奮と戦っているんだと思う。
スカートに手をかけ、ストンと下ろす。
こちらもかごに入れ、更にストッキングを脱ぎ、入れる。これでパンツとブラジャーだけになってしまった。
あたしは一瞬だけ振り返る。浩介くんの背中が見えた。
ああ、早くあそこを見たい。ってダメ、そんなこと考えたらまた濡れちゃうし、下品な子だって思われちゃうわ。
まずパンツを脱いで入れる。最後にブラジャーをゆっくりと外していく。
あうあう、恥ずかしいよお……
あたしはバスタオルを巻こうとする。
「ねえ優子ちゃん」
「な、何？」
「今どのくらい？」
「えっと、今は……その、タオル巻いてるわ」
背中越しで浩介くんに現状を報告する。
「あ、ああそうか……でもここ、タオル巻いて入るの禁止だぜ」

「も、もういいでしょ別に？　ここはもうあたしたちしか入らないんだし」
あたしが反論するように言う。
「そ、そうか……」
浩介くんもそれ以上詮索してこない。
「で、出来たよ……」
あたしはタオルを巻き終わる。林間学校の時以来だったけど、それでも何とかうまく巻けた。
それでも、あたしの巨大な胸はいつも以上に目立っている。
浩介くんとあたしが向き直る。
浩介くんも、小さいタオルであそこを隠している。
あたしは、浩介くんの顔も見ないで「そこ」をガン見してしまう。
「あ、あの優子ちゃん……」
「うん？」
「え、エロいよな……俺も優子ちゃんも」
やっぱり、視線に気付かれていた。
「ああ、うん……か、身体洗おう？」
「そ、そうだな」
浩介くんが照れ隠しに扉を開けて中に入る。
隣同士ではなく、一番端と端を使う。どうしても距離を感じてしまう。
浩介くんの事で頭が一杯にならないうちにあたしは巻いていたバスタオルを脱いで体を洗う。
ボディーソープを付ける、鏡は曇っているというより、何かが引っ付いていて、石鹸で洗ってもうまく行かなかった。
かろうじて使える部分を使いながら、あたしは体を洗い、髪の毛を洗おうとする。
あ、しまった。お団子ヘアーにするためのヘアゴムを忘れてしまった。
うーん、今から取りに帰るのも恥ずかしいし、仕方ない。このまま

入るしか無いわね。
髪が傷んじゃうから今は洗わないで出る時に洗おう。
ふと左を見ると、浩介くんが身体を洗い終わり、髪も洗い終わっていた。
「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
背後から浩介くんが話しかけてくる。
「先、入っているね」
「ああうん、あたしもちょうど洗い終わったから」
「え!?　髪は？」
「うん、髪縛るヘアゴム忘れちゃって。仕方ないから出る時に洗うわ」
「そ、そうか」
「ねえ、浩介くん……」
あたしは意を決して立ち上がると、タオルには目もくれず、右手で両胸の乳首を隠し、左手で下の部分を隠して向き直る。
「うっ……」
浩介くんが思わず目をそらしてしまう。
多分、年頃の男の子にはとっても刺激の強い光景だと思う。
「お風呂、一緒に入ろうね」
「あ、ああ……」
あたしも、浩介くんを直視できない。
でも、浩介くんは必死になって隠そうとしている。
夏休みの海の時にも、水着越しで大きくなってるのを見たけど、かなり大きいようにも感じた。
ともあれ、あたしは浩介くんに続いて湯船の中に入る。
湯船の中でも、あたしは相変わらず恥ずかしそうに大事な所を隠していた。見られると、多分恥ずかしさに耐えられなくなっちゃうから。
浩介くんの方を見てみると、やっぱり「そこ」を両手で全力で抑えていた。
「ゆ、優子ちゃん……」

「あ、あはは……やっぱり、恥ずかしいわよね……」
「んっ……ったり前だろ……す、好きな女の子と、いいいっ、一緒、一緒にお風呂だなんて……」
あたしも浩介くんも、初々しく反応する。
でも、ここでうまく行けば、あたしと浩介くんの距離も一気にぐっと近付くはず。
まだ、見せられないけど、それでも背中合わせで顔をそらしている状況を変えるため、あたしがゆっくりと湯船の中を移動する。
「ねえ浩介くん」
「わっ、何？」
油断していたのか、浩介くんが慌てて抑えてくる。
あー、もう少しで見えたのに。残念だわ。
「今日はまだ、ちょっとぎこちないけど、明日も、それから明後日の朝も、ここに入ろう？　あたし、もっと浩介くんのこと、知りたいの」
「お、おう、分かった」
浩介くんも、ぎこちなく返事をする。
明日も明後日も一緒にお風呂に入る、きっと今日以上に距離が近付くと思う。
「んっ……」
ちゅっ……
あたしが目を閉じて唇を前に出すと、浩介くんと軽く唇が触れる。
「優子ちゃん、愛してる」
「うん、あたしも。浩介くんのこと愛してるわ」
このまま、ずっとこのままで時間が止まっちゃえばいいのに。
でも、時間は止まってくれない。
だから、あたしたちものぼせてくる。
「ねえ、あたし、髪洗っているから先出てていいわよ」
「ああいや、俺も休んだらもう一度入るから」
「そ、そう……」
あたしは髪を洗うために、もう一度洗面台へと行く。
「ねえ優子ちゃん」

「ん？」
また浩介くんが背後から話しかけてくる。
「優子ちゃんって、お尻すごい大きいよね」
「ぶっ……も、もう！」
そりゃあ何回も触られているからってのもあるけど。
って、確かにこの角度だと、浩介くんからお尻丸見えだったわ。
いつもはお尻を見られるというと、スカートをめくられてパンツの上からで、直接見えたのは初めてだった。
うー、そう思っただけでますます恥ずかしいよお……
「な、なあ……やっぱ先に出るわ」
「そう？　どうして？」
「ちょ、ちょっとトイレ！　長くなるから部屋に戻ってるよ！」
「ああうん、そうだよね」
浩介くんが、大急ぎで脱衣所へと行く。
あたしは目を凝らして、浩介くんの下半身を追ったけど、浩介くんのガードが固くて、パンツを穿かれるまで見えなかった。髪の毛を洗おうと思ったけど、何も洗えていない。
一人になった家族風呂、あたしは、浩介くんと同じ事情ができた。
見ることが出来なかったために、余計に頭のなかで妄想が掻き立てられる。
そして、下半身から液体が止まらなくなる。あたしは、我慢できなくなってお風呂の床に座り込む。
「んうっ……浩介くん……浩介くん……」

それはとても艶やかでエロかった。
あたしの艶めかしくて甘い声がお風呂の音響とともに音楽を奏でていたから。
何とか冷静になってあたしは髪の毛を丹念に洗った。
特に、お湯に付いてしまった先端部は、２度洗いを決行することにした。
体を拭き、脱衣所に戻って置いてあったバスタオルで身体を入念に

拭く。
暖房が効いていても、さすがに寒い。あたしは急いでパジャマを着て、忘れ物がないか確認してから扉を開ける。
コンコン
「はーい」
「あたしだよ」
「優子ちゃん、入って大丈夫」
「はーい」
パジャマ姿の浩介くんが、昨日と同じように出迎えてくれる。
さっきとは打って変わって冷静な声。ホテルの部屋にあったティッシュの袋が、破れていた。
「いつの間にか、こんな時間になっちゃったね」
時間を見ると、昨日寝た時間を既に過ぎていた。
さっき「激しい運動」をしたのもあって、お互い疲労困憊している。
「今日は疲れたわね」
「ああ、特に最後のが疲れたよ……」
「あはは、あたしも……」
あたしも本能から女の子になって、自分で慰めるということが増えたけど、その全てが浩介くんに対してのもの。
浩介くんに犯されることばかり考えてしまう。
浩介くんはどうなんだろう？
「ねえ浩介くん」
「うん？」
「きっと2人で、幸せになろうね」
「ああ、もちろんだ。俺と優子ちゃん、2人でな」
もう、迷わない。
あたしと浩介くんはずっと一緒。
寿命で別れる運命を変えたい。
あたしの中で、確固たる決意へと変わっていく。そのためなら、誰を敵に回してもいい。

ううん、浩介くんが居る、永原先生だっている。それに、会のみんなだって、蓬莱教授がいる。あたしたちは、決して孤独などではない。
「あたしね、絶対に浩介くんを、不治の病から救って見せたいの」
「そうか、俺の『不治の病』か」
「うん、余命６０年の不治の病をね」
あたしたちは、そう誓って、部屋の電気を消し、睡眠へと入った。
余命６０年の不治の病。
蓬莱教授の技術なら、後４０年は伸ばせるもの。でも、それでは根本的な解決にはなっていない。
もしあたしが蓬莱教授に協力すれば、少しはいい方向に進むと思う。そしてあたしも、必ず蓬莱教授の研究を成功させて見せたい。

# スキー合宿３日目　永原先生と午前スキー

「んっ……」
意識をゆっくりと回復する。
あたしは起きると隣に浩介くんが寝ているのを確認する。
あうう……やっぱり昨日のことを思い出しちゃうわね。
って、今日もやってくるんだよね。何かスキー合宿なのにスキーより浩介くんと一緒にお風呂入ることがメインになっちゃってるような？
そうだわ、気分転換にお風呂入ろう。
時間を見ると、午前６時３０分になっていた。
「うーん」
あたしは家族風呂と共同浴場で迷ったけど、家族風呂は今日も入れるし、今なら人も少ないだろうから、広い共同浴場の方に入ることにした。
あ、そうだ。浩介くんに置き手紙を書いておかないと。お風呂に行く間に起きられたら困るものね。
あたしは、ホテルに備え付けの紙とペンを持って「お風呂に行っています。優子」と書き残しておく。
あたしは着替えの服とタオルを持つ。
そしてお風呂場に行くと、誰も居ないのが見て取れた。
どうやら、この広いお風呂を独り占めできそうね。
あたしは張り切って服を脱いでお風呂場へと向かう。

「ふう……」
あたしは体洗いもせずに、髪の毛だけを縛ってお風呂に入る。
誰もいない空間で、１人お風呂、昨日は沢山の人と入ったけど、今日はこれでいい。
１日目に集団で入った時とは全く印象が違うわね。
わいわいがやがやだったあの時とは打って変わって、怖いくらい静まり返っている。浩介くんと家族風呂に２人で入った時の方が、音が

したくらいだわ。
あたしは、のぼせたら休むを繰り返し、数回の反復の末、お風呂からあがる。
結局、誰も新しく入ってくる人は居なかった。

「あ、優子ちゃんおはよう」
「うん、浩介くんおはよう」
お風呂から上がり、普段着に着替えたあたしは、部屋に戻って浩介くんと挨拶する。
「優子ちゃん、今日は朝風呂に入ったのか？」
置き手紙にそう書いてあっても聞きたくなるのが人間というものね。
「うん、1人だったよ」
「そう言えば、林間学校の時は確か……」
「永原先生とかいたからね」
もしかしたら、永原先生がもっと早い時間に入ったのかもしれない。
何分、昨日今日は林間学校よりは起床が遅いし、それもあって一番風呂という感じではない。
ちなみに、このホテルは朝5時からお風呂をやっているという。
「優子ちゃん、ニュース見ようか」
「うん、そうだね」
あたしたちは、いつものようにテレビでニュースを見る。
最近あたしも浩介くんもバラエティで盛り上がれなくなってしまっていた。
浩介くんと他愛もない話を話すほうが楽しいし、話のネタを集めるのに、バラエティよりニュースの方が遥かに効率がいいというのがその理由。
でも、最近はニュースもありきたりだ。
あるのは芸能人や著名人の不倫報道ばかり、週刊誌がどこからともなく取り寄せた情報だという。

もっと大事なことがあるんじゃないかと何度も思ってきたが、どうやら無いらしい。
次に、国際情勢。相変わらずイスラム教がどうたらこうたらとか、宗教対立だとか様々なことをやっている。
「そういえば、蓬莱教授がさ」
「うん」
「宗教嫌いだったよね」
「そういえばそうだったわね」
あたしと浩介くんは、蓬莱教授のことを思い出す。
あたしも、浩介くんも、神様を信じていない。
それは蓬莱教授も同じ。
存在もしない存在のために殺し合いをする。不老を目指し、長生きしたい蓬莱教授からすれば忌むべき存在なのは当然のことだろう。
蓬莱教授の研究だって、いや、あたしのこの選択だって、今ニュースでやっているような国際情勢を動かしかねないものであることは容易に想像がついた。
宗教といえば永原先生はどうだろう？　戦国時代の人だし信じてないとも思えないけど……
あ、でも、江戸時代の人でもあるからキリスト教は嫌いかもしれないわね。
余呉さんはともかく比良さんは江戸時代の武士だしもっと嫌ってそうだわ。
「蓬莱教授が宗教嫌いなのはまあ、このニュース見れば分かるわね」
「うん、蓬莱さんからすれば宗教でテロしたり対立することは愚かしいと思うだろうね」
「ところで浩介くん、永原先生はどうだと思う？」
「うーん、それは本人に聞いてみないと分からないな」
ふとテレビの時計を確認すると、時刻は6時25分になっていた。
そういえば、朝食が6時半からだったわね。
「浩介くん、ご飯行こうか」
「おっと、そうだね。ちょっと急ごうか」

「うん」
というわけで、あたしたちはやや小走りで食堂を目指す。
「おはよー」
「おはようございます」
あたしたちは実行委員の担当の人に食券を渡し、朝食のバイキングに入った。
昨日とはちょっと違うけど、一昨日とは同じメニューな気がする。
どちらにしても、食事を盛り付けて、椅子を確保しないといけないわね。
浩介くんは昨日よりたくさん食べるという。
肉類多めの食事になっている。

「俺さ、優子ちゃんと付き合うようになって、ゆっくり食べるってことを覚え始めたんだ」
浩介くんが食事中にそんなことを言ってくる。
「へえ、どうして？」
「やっぱり、いつも優子ちゃんより先に食べ終わって待ってるのは悪いかなって」
「うん、ありがとう」
やっぱり、浩介くんは心優しい男の子だわ。
人の気持ちを考えて、自分を変えることができるんだもの。
「隣……いいかな？」
「はいどうぞ……って、永原先生！」
声をかけてきたのは永原先生だった。
「あら、石山さんに篠原君じゃない。おはよう」
「お、おはようございます……」
ちょうどいいわ。宗教について質問してみよう。
「あの、永原先生……」
「ん？」
「蓬莱教授って、宗教嫌いじゃないですか」
「あー、そうだね。科学者らしいと思うわ」

永原先生はさっぱりした表情で言う。
「ところで、永原先生は宗教については……」
「うーん、私の主君が曹洞宗だったから、今も一応そういうことになっているわよ……正直顔は出してないけどね」
永原先生によれば、今の仏教は私が信じていた頃の仏教と全く勝手が違ってしまったので、今の仏教にはあまり関わりたくないとか。
その代わりに、永原先生は神社に行くことが増えたらしい。初詣とか夏祭りも神社だったし。
「じゃあ永原先生は神道ということになってるの？」
「まあそうですね。まあ、私もそこまで篤いわけじゃないわよ」
やはり、そんなものかもしれない。５００年も生きてきたわけだし。
「――でも、私も一神教……キリスト教は特に嫌いだわ。寺と神社が共存している所に、平気で燃やしにかかったもの。太閤殿下や東照大権現が禁じたのも無理のないことよ」
「そ、そうなんですか？」
歴史の授業とまた言っていることが違った。
「歴史の授業では、あれは権力者にとって都合が悪いからって――」
「いいえ違うわ。太閤殿下が九州の大名を征伐していた折に、キリスト教徒が寺や神社を焼き払っていたのを見てしまわれたのよ」
太閤殿下って秀吉のことだよね？
「つまり？」
「ええ、日本は聖徳太子の昔、私が生まれるよりも更に１０００年近くも前から神仏習合と言って色々な宗教宗派がある程度の対立こそあれそれなりに共存してきたわ」
確かに、そんな話を聞いたことがある。
「だけど、キリスト教はそうじゃなかったのよ。いわば当時の日本はキリスト教を受け入れて他のすべての宗教を捨てるか、キリスト教を禁止して他の宗教を守るかの、二者択一を迫られたのよ。もし受け入れていたら……今頃日本も植民地だったかもしれないわよ」
そして結果的に、後者が選ばれたというわけね。

確かに、それはしょうがないとも言えるはず。
それにしてももっとやりようがあったと考えちゃうのは、後世の人の傲慢かもしれないわね。
「さ、今日もスキー頑張ってね」
一通り話が終わるとスキーの話に移行する。
「永原先生こそ、大変なんじゃないの？」
「あはは、そうかもしれない」
後から来た永原先生は食べるのもその分遅かったので、あたしたちの方で先に上がらせてもらうことにした。
部屋に戻る間にも、何人もの生徒がご飯を食べに食堂に向かっていた。

「ふー、休もうか」
「うん、スキーまでエネルギーをセーブしないとね」
というわけだけど、やっぱり暇ということで、浩介くんとカードゲームをすることにした。
浩介くんは表情が分かりやすいため、あたしは身体能力が低いため、７並べというシンプルなゲームで遊ぶことにした。
「２人で七並べだとあんまりパスがないわよね」
「うーん、３回までＯＫなんだっけ？」
なんか色々ルールあるみたいだけど、あたしたちはその制限はなしにした。
トランプはジョーカーを除くと５２枚あるので、序盤はポンポンと並べることが出来、中盤以降、どうやって止めていくかが課題になる。
他にも、２人で意味もなくポーカーをしてみたり、あるいはそれに飽きたらまたテレビでニュースや気象情報を見たり。
気象情報に拠れば、この辺は今日は昨日の午後以上に雪模様になるという。
ちょっとスキー日和という感じではないようだ。
「さ、行こうか」

「うん、浩介くん……頑張ってね」
「おうっ！　華麗な滑りを見せてやるぜ！」
あたしの応援でこうやって浩介くんがやる気になってくれるのが嬉しいわね。
ともあれ、昨日と同じように、スキーコーナーまで移動する。

「石山さん、こっちこっち」
永原先生の手招きで、あたしは昨日に引き続き、「特別初心者コース」という名の、子供向けコースを地元の小学生達と一緒に受けることになった。
「えーそれでは、まずは準備運動と、その後に昨日の復習をすることにしましょう……では、今日もよろしくお願いします」
「「よろしくおねがいしまぁす!!!」」
「「よろしくお願いします」」
インストラクターさんの声とともに、子供たちが元気よく挨拶している。
一方であたしと永原先生は、平常心のような声だ。
子供と大人の違い、それを嫌でも思い知らされる。スキーのスキルは似たようなものなのに。
「純真な子供を見ると癒やされるわね」
「そう？　石山さん、子供好きだったっけ？」
何気なく発したあたしの言葉に、永原先生が反応してくる。
「……そういえば、優一の頃はそんな気持ちあんまりなかったわね」
スキーの前の準備運動をしている間に、ふとそんな話が出る。
「ふふっ、それもまた、石山さんに『母性』が出たからよ」
永原先生が知っている風に言う。
幸子さんと初めて会った時の帰り道にも、「あたしの中で『母性』が芽生えた」と永原先生が指摘していた。
小さい子供や弱い者に対するかわいさ、思いやり、そういった心が出てきたのはあたしの中でますます深層心理から女性になっているという証拠でもあった。

「母性……そう言えば、幸子さんどうしているかな？」
一応余呉さんを通して、特に問題なく女性として暮らしているということは知っているけど、幸子さんとはカリキュラムの最終日の時以来、３ヶ月話していなかった。
「うん、特に問題ないと言うけど、そうね。そろそろ連絡してもいいかもしれないわね」
余呉さんが引き継いでくれているとは言っても、正式なカウンセラーはあたしなんだし、少しは責務を果たさないとね。
後、蓬莱教授のことについてどう思っているか聞いてみたい。
「それじゃあ、昨日の復習からよ」
というわけで、あたしたちはまずブレーキの練習。
再加速せず、きちんと所定の位置に止まらなきゃいけない。
スピードをコントロールし、そして左右に振れることもできるんだけど……
「うわあっ！　きゃあ！」
永原先生が早速転んでしまった。
あたしも、最初の挑戦時には不合格。
昨日と滑る感覚が違いすぎる。特に新雪が大分感覚を狂わせてしまっていた。よく見ると、昨日うまく行っていた子供たちもうまく行っていない様子。
あたしたちは、子供たちと一緒に、まずはそこに慣れることから始めなければならなかった。
それがまた、大変難しくて、あたしはスキーのためにも柔軟性と応用力を鍛えるためにも、是非頑張っていきたいと思った。
ともあれ、今日の午後にはスキー合宿も終わりになる。
あたしたちは、明日の朝にここを出て、夕方頃には帰ってくる計算になっている。
その前に、最後にみんなでスキー合宿の成果を披露することになっているのだ。
その時までに、ちゃんとうまく滑れるようにならないといけない。

「はーい、じゃあ昨日の復習はここまで。じゃあいよいよターンの練習をするね」
インストラクターさんがそういう、スキーのターンは例の「ハの字」にして右に左に体重をかけるとできるらしい。
……ということは知っている。
優一の頃はわざわざそんなことをしなくてもいい、いわゆる「パラレルターン」も出来ていたはずなんだけどねえ……
「女の子になったんだから、スキーも基礎からやり直すしかないわよ優子」と、あたしはそう自分に言い聞かせながら、インストラクターさんの話を聞く。
「えーでは、ここの斜面にこのように旗を作りました。右左どちらでもいいのでこの旗に触れないように、なおかつさっきと同じようにこのラインより先で止まり、またクッションに触れないように滑ってみてください」
さっきの課題よりちょっと難しくなっている。
子供たちも、今までの直線的な運動から、曲線が加わるだけで、相当に苦戦している。
……よし、あたしの番。
あたしは、目の前の旗が見えたので余裕を持って左にカーブ……あれ？
曲がりすぎたので元に戻すために右足に体重をかけようとしたけど、うまくいかないでそのまま止まっちゃった。
えっと、こういう時はもう一度斜面を滑れるようにして……うわっ！
ドンッ！
あたしは暴走してしまい、思いっきりクッションにかかってしまった。
案の定これでは失格である。
一方で、永原先生は曲がるのが遅すぎて旗に当たって転んでいた。
結局、最初のチャレンジでは全員が不合格になってしまった。
「うん、仕方ないよ。最初はこんなものだから、さ。練習を重ねま

しょ」
「「はーい！」」
インストラクターさんの慰めの声に子供たちも元気よく反応し、あたしたちはもう一度上に上がる。
しかしこれ、ほんの滑り台程度の距離なのに、いや、その程度の距離だからこそ、リフトというのもなくて登るのが大変だわ。
でも、柵で囲まれていて、他のスキーヤーやスノーボーダーと衝突の危険性がないのがとにかく助かった。

「あー、今の惜しいわ！」
午前中、あたしが惜しかったのが数回あった。でもまだ合格はできていない。
子供の中には既に何回か合格を叩き出している子も居る。一方で、永原先生の方は転ばずに滑るのがやっとという感じ。
一番の年長二人組（と言ってもあたしと永原先生の年の差はすごいけど）が一番下手なのだから恥ずかしいわね。
「2人共どうですかスキーは？」
「難しいわ」
「ええ。子供たちに負けてしまうなんて」
「……仕方ないですよ、得意不得意はありますから。私だってスキーの指導はできますけど、英語の指導はできないですから」
「永原先生は古典が担当科目ですよ」
「あー古典、私源氏物語しか知らないわ」
多分他にも知ってるんだろうけど、そう思い込んでる感じが強い言い方。
「さ、そろそろご飯の時間ですよ。お二人とも準備してください」
「「はい」」
あたしたちの返事を確認すると、インストラクターさんが子供たちの方へと向き直る。
「みなさーん、そろそろご飯ですよー」
「「はーい！」」

子供たちの元気のいい返事とともに、ご飯の時間となった。

## スキー合宿３日目　永原先生の挫折

「ご飯はどうします？」
「うーん、今日はスパゲッティで」
「私も」
　相変わらずお子様ランチの子供たちを尻目に、あたしと永原先生、インストラクターさんは思い思いに注文をしている。
「お子様ランチもいいわよねー」
「え!?」
　一瞬、あたしもお子様ランチを食べたいと思ってしまったんだけど、思わず声に出てしまった。
　あたしは永原先生とインストラクターさんに怪訝な目を向けられてしまった。
「あ、いやその……あの……」
「お姉ちゃんお子様ランチ食べたいの？」
　女の子の一人が話しかけてくる。
「ああいやその……スパゲッティ頼んじゃったから」
「そう……」
「石山さんって子供っぽいの好き？」
　永原先生が問いかけてくる。
「う、うん……」
　正直、否定はできない。
　いや、とっても好きという方がよっぽど正しい。
「へえ意外だわ。どんなのが好きなの？」
　インストラクターさんが興味津々になる。
「えっと、ぬいぐるみさんに囲まれてねたりとか……お人形さんでも遊んでるわ」
「へえ、大人でも結構いるけどね。他には？」
「その、女児向けアニメ見てます……少女漫画とか……」
「永原先生、この子本当に最近まで男だったの？」
　やはりインストラクターさんにも驚かれてしまったわね。

「ええ、石山さん、ＴＳ病の患者はね、今のあなたのように子供っぽい女の子趣味に没頭する患者も多いわよ」
　永原先生が「安心して」と言わんばかりの優しい声で言う。
「え!?　そうなの!?」
「ええ。石山さんはどうしてこういうのが好きなの？」
　どうやら、あたしだけではないという。
　もしかして理由も同じなのだろうか、ちょっと聞いてみよう。
「その、あたし……いきなりこの体になってしまって……幼いころの女の子の自分がなくて……それがすごいコンプレックスになっちゃって……その……」
「うんうん、模範的な回答よ。熱心に女の子になろうとした患者さんほど、特にそれが悩みになりやすいわ」
　永原先生が優しく答えてくれる。
　どうやら変なことじゃないみたいでよかった。
「取り戻せはしないけど、でも、少女趣味を恥ずかしく思う必要はないわよ」
「そう？」
「うん、私たちはずっと生き続ける少女なんだから。いつまでも、少女の気持ちを持ち続けていいのよ」
「そう、ありがとう」
　うん、気持ちがかなり楽になったわ。
「そう言えば、お二人ともおばさんにならないんですよね？」
「ええ。私達はそういう病気ですから。１００年後もこの姿のままですよ」
　インストラクターさんの話に永原先生が答える。
　そう、あたしたちは老けないから、いつまでも少女のままでいられるのだ。
「いいわねえ。いつまでも若く要られるなんて、女性としては羨ましい限りよ」
「……そうでしょうね」
「あら、意外な回答ね」

永原先生は、ありがちな「いやそうでもないのよ」とは言わない。
これは協会として、同じ境遇の仲間たちで固まっているから、寂しくないんだという心の表れでもある。
「確かに、１００歳位までは辛いものもありますよ。でも、それを超えちゃえば大したことないですし、将来を悲観して自殺した人も殆ど居ません」
そう言えば、江戸生まれに1人それで自殺しちゃった人がいたけど、比良さんと余呉さんは「特殊なケース」って言ってたよね。
でも、いくら特殊と言っても、今後同じことが起きないとは限らないし、やっぱり蓬莱教授にその可能性を潰してもらわないといけないわね。
「へえ、そうなんですか。男に戻ろうと思うとすぐに死んじゃうのにねえ……」
インストラクターさんも、不思議そうな声をしている。
「だって、不老で将来を心配すると言っても、その時にはもう、実年齢が数十歳にはなってますから。男に戻ろうとして自殺するのは、大抵は１０代から年が行ってても２０代ですので」
永原先生が説明してくれる。
なるほど分かりやすいわね。
「ふーん、なるほどねえ……」
「でも、不老に関しては将来一般の人にも降りてくる可能性がありますよ」
あたしが付け加えておく。
「ああ、蓬莱教授の研究だっけ？　あれも胡散臭いわよねえ……」
インストラクターさんは、やはり蓬莱教授に懐疑的だった。
無理も無いことよね。
「お待たせいたしましたこちらスパゲッティになります」
ウェイターさんがあたしと永原先生のスパゲッティを持ってきてくれる。
それと同時に、インストラクターさんの食事も持ってきてくれてい

た。
「あ、それじゃあ食べますね」
「はい」
「「いただきます」」
近くでは、小学生のみんなにお子様ランチが配られていた。

食事が終わると、いよいよ午後のスキースクールに入る。
一応今日の午後で最後だし、気を引き締めていきたい。
「それじゃあ、曲がって減速してみてください」
あまりに短い距離でリフトはないが、この頃になるとそれに因る疲れも出てきた。
何気に結構登るのが大変だったりする。手すりを使って登るにも腕力も必要だし、場合によってはロープで子供たちに引き上げてもらう。
インストラクターさんは分からないけど、あたしはこの子供たちの中で一番体重が重たいし、５０キロを超える重さの身体を引っ張るのは、たとえ複数人でも９歳１０歳の子供にはきついはず。
でも、苦労して登ったら、後は一気に下るだけ。
あたしの番、旗の手前でハの字にして右に体重をかけて曲がり、すぐに左に移して……そのままゆっくり……よしっ！
「お、いいわね、成功よ」
午後一番、さっそくあたしがこの課題を成功させる。
子供たちも大分上達してきて、成功率が上がってきた。
中にはほぼ全てで成功させている子供もいる。
そして、永原先生が一番下手なのは同じ。
大の大人なのに一番下手と言うのはかなり心理的にも来ると思う。
もしかしたら、そのせいで永原先生はますますスキーが苦手になっちゃっているのかもしれないわね。
それでも、永原先生も徐々に成功を重ねていく。
「それじゃあ、ここから出てリフトに乗りましょう。リフトから降りる時は、必ず真っ直ぐにしてね真っ直ぐよ」

安全のため、インストラクターさんが2人ずつ連れて行く。
まずはあたしと永原先生から。
あたしも永原先生もちゃんとまっすぐに板をつける。
「はーい気をつけてね」
よいしょ！
「わっわっ！」
永原先生がバランスを崩して転んでいた。
「ご、ごめんなさい……」
「うーんちゃんと正しい動作だったのに、ある意味才能よね」
永原先生が後続のリフトに巻き込まれそうになり、リフトが危うく止まりかけるところだった。
「じゃあここで待機していてください。私は別の子供たちを連れていきますので」
そう言うと、インストラクターさんはさっそうと降りていく。
とは言え、ファミリーコースは短いので、時間はそこまでかからない。
インストラクターさんの滑りは本当にうまい。
浩介くんや、優一も、あんな感じだったんだろうか？
1年も前のことで、結構記憶が薄れてきてしまっている。
子供が2人、インストラクターさんに連れられてスキー場に降り立つ。
そしてインストラクターさんがまた降りて、子供2人を連れて行く。
それを5回繰り返して、全員が降り立った。
結局、リフトで転んだのは永原先生だけだった。
「次からは、私の付き添いはありませんので、各自注意してくださいね！」
「「はーい！」」
子供たちの元気のいい返事とともに、インストラクターさんがスキー場を滑る。
課題は、インストラクターさんと同じ軌道を進むこと。

数メートル間隔で列をなす。永原先生は一番前、インストラクターさんのすぐ後ろで、あたしが最後尾。
上から見ると、永原先生はしょっちゅうコースを逸脱している上に、かなり転んでもいる。
これは本番に間に合わないわね……
ともあれ、あたしたちは左右に曲がるのにも慣れてきた。
練習の成果もあって、あたしはある程度様になった滑り方が出来た。
子供たちも何回か転んでいて、あたしだけが1回も転ばずにインストラクターさんの軌道を再現できた。
その後、何度か同じことをして、永原先生も少しは様になったけど、それでも他の子供も転ばなくなったにもかかわらず、かなりの頻度で転んでしまっていた。

「はー、疲れたー」
後は本番の披露を待つばかりとなって、永原先生がため息をつく。
子供たちが、永原先生をかわいそうなものを見る目で見つめている。昨日「下手くそー」と野次を飛ばした子は、特にその傾向が強く、まるで自分を責めているかのようだった。
あたしも、永原先生が可哀想でならない。いっそのこと、ホテルで留守番をさせてあげれば、どれだけ良かっただろうに……
そうか、あたしの体育の授業も、他の生徒の見る目はきっとこんな感じだったんだろう。
あたしは普段から体育があまりにもダメだったけど、スキーに関してだけは、永原先生よりはマシになれた。
そのお陰で、この気持ち……みんなが体育の授業であたしに抱いていた気持ちがわかってしまった。
バカにして、笑ってはいけないという思いは、単に下手だからではなく、その程度があまりにもひどいからこそ起こるもの。
小さな子供は残酷な性格も内包している。
そんな未熟な子供たちでさえ永原先生の惨状には同情してしまっ

た。
それは、永原先生が大人の女性……それどころか身体能力は少女のまま、５００年も生きているということもあるだろう。
昭和の頃からスキーを始めていても、全く上達する気配さえ無いということもある。

ともあれ、各班が終わったので実技の披露に入る。
あたしたちは一番最初、ファミリーコースを滑ることになっている。
コースの下には、小谷学園の生徒たちが居る。

「じゃあ、私についていってくださーい！」
練習の時と同じように、永原先生とあたし、そして地元の小学生１０人がインストラクターさんについていく。
さっそく、永原先生がコースを逸脱した挙句、転倒をしてしまった。
麓の見物人たちはは騒然としている。
そしてまた一度、永原先生は転んでしまう。
練習の時よりも、まずい。本番で緊張しているのかもしれない。
再び立ち上がったものの、また完全にコースから外れ転んでてしまっている。
何度かそれを繰り返すと、永原先生はついに諦めてしまった。
板を外して手に持って、歩いて降りていってしまった。
あたしたちは内心激しく動揺しつつも、永原先生を無視して、実演を再開する。
麓は騒然となっているが、何とか全員戻ることが出来た。
パチパチパチ……
途中で投げ出した永原先生の存在もあったのか、麓で見ていた他の人達の拍手はまばらでとても気まずい雰囲気に包まれている。
「永原先生、気持ちは分かりますけど……」
「すみません、武士の情けで許してもらえませんか？　これ以上は、もう無理でした……」

武士の情けって……いつの時代よ……永原先生らしいと言えばらしいけど。
「は、はあ……」
「いくら痛くないと言っても、これ以上転んだら明日以降どこか痛めてしまうかもしれませんし」
「え、ええ……」
そうはいっても、途中で投げ出すのはかなり印象が悪い。永原先生が株を下げているシーンは珍しい。
確かに、いちいち止まっているよりはいいんだろうけど……
あたしたちに続いて、初級チームの実演。
ファミリーコースを難なく滑っていく。緩やかなコースということもあってかなりの速度が出ていて、シュテムターンを見せている。
パチパチパチパチ！
麓ではあたしたちと比べるとかなり大きな拍手が舞い踊る。
次の中級コースは更に高度でパラレルターンを右に左にと凄まじい頻度で繰り出していた。
「えー上級チームの皆さんはここから上で待っています。皆さん上がりましょう」
司会の先生がそう言うと、あたしたちは一旦リフトに乗る。
子供たちもついていく。どうやら、最初から合同という名目だったらしい。
小谷学園からはあたしと永原先生だけだけど。
「上級者チーム、楽しみね」
「あ、ああ……」
リフトの隣にいた永原先生も楽しみらしい。
聞く所に拠れば、上級チームはファミリーコースではなく中上級者コースで高度な技を見せてくれるという。
って、あたしも去年は上級チームだったけど。
全員がリフトで上にたどり着く。
「さあ、遥か上をご覧ください、上級チームが」
司会の人が注目を促すと、周囲は上を見上げる。見ぬからに凄まじ

い急斜面を降りていくだけですごそうなのに。
チームが前方のインストラクターさんについて行く。
すごい、あの急斜面をパラレルターンで難なくこなしていて、しかもかなり小刻み。
「うおお」
「すげえ」
「さすが上級……」
周囲からもそんなため息が出る。
来年はスキー合宿もない。多分大学に行ってスキーということもないだろう。
永原先生から危険な遊びをしてはいけないと、安全講習で言われたから。
死にはせずとも、半身不随ともなれば死ぬより辛いことになりかねないし。
もしかしたら、永原先生がスキー苦手なのは身の安全にとても敏感なせいかもしれないわね。
そう思いながら、あたしは急斜面を勇敢に降りていく上級班を眺めていた。
そして、最後はきゅっ止まって決まった。
「うおおおお!!!」
「ひゅーひゅー!」
みんなが上級班を歓声で迎えている。
多分この中にも浩介くんが居るはず。
「浩介くーん!」
あれ？
浩介くんからの返事がない。
いつもならあたしの呼ぶ声には全速力で向かってくれるのに。
「浩介くーん！　あたしはここだよー!」
おかしいわ、反応がない。
「どうしたのかしら?」
永原先生が心配そうに言う。

「あー、篠原浩介くん？　彼はちょっと待っててくれる？　実は今日テクニカルプライズのテストがあるんですよ。ここの中上級コースよりも更に上の最上級者向けのコースでやっています」
そ、そうなんだ。
「あ、戻ってきましたよ」
浩介くんが滑りながら戻ってくる。
「優子ちゃんおまたせ」
「浩介くん遅かったじゃない」
「あはは、上級チームからも放り出された挙句、ちょっとテスト受けてたんだ。予想通り散々な成績で不合格だったけどね……俺にはプライズなんて無謀だと分かってたし、やっぱ断っとけばよかったよ」
「いやでも、筋はかなりいいぞ。後何年かトレーニングすれば、君はクラウンまで行ける素質を持っているよ」
「……精進します」
浩介くんの後ろで滑って来たおじさんがそう言う。
とにかく浩介くんはスポーツ万能で運動神経がいい。
何故部活に入っていなかったのかよく分からない。優一に怒鳴られていたからわからなかったけど、元来は一匹狼タイプなのかもしれない。
「でも、上級班の中でも圧倒的なのは確かよ。そうだわ、みんなでここより上に行きましょう」
「いいですね、この子には最上級者コースを滑ってもらいましょうか。戻れない人はリフトで戻るってことで」
周囲もざわつき始めている。
「それでは2年2組篠原浩介くんによる、独演を開始したいと思います、皆さんはリフトに乗って行ってください」
なんか知らない間に、浩介くんとんでもないことになっているわね。

## スキー合宿３日目　浩介くんの晴れ舞台　～スキーとお風呂～

リフトで更に上へ。永原先生はぎこちないながらも何とか登りきる。
そして浩介くんとインストラクターさんが何人か更にもう一つ上に行くことになっている。
「浩介くん、その……頑張ってね」
「お、おう……！」
あたしが浩介くんにエールをかける。
うん、きっと大丈夫だわ。
浩介くんを乗せたリフトがどんどん高くなる。
あたしは更に上層、このスキー場の山の山頂から降りる「超上級コース」を見る。
そこはまるで断崖絶壁のようなえげつない急斜面で、それは優一の頃ならもしかしたら転ばずに滑れるかもしれないというくらいの場所だ。

「さあ、上を見てください。篠原浩介君が手を振っています！」
司会の声につられ、あたしは上を見る。
すると、片手でピッケルを振っている豆粒くらいの人が見える。
あれが多分浩介くん。
司会が無線で上のインストラクターさんと連絡している。
「さあ、準備が出来たようです！　皆さん注目してください！」
その声とともに、浩介くんが滑り出す。
まず大回りでターンしたと思えば、次は小回りでものすごいスピードで右の左にと行っている。
時速は６０キロ、いや、下手したら１００キロ行ってそうなくらい速い。
途中こぶがある所も、浩介くんは難なく進む。

さっきの上級班の実演よりも歓声は少ない。
それとは比較にならない位の神業で、みんな見とれている。
さらに途中、ジャンプ台まであったが、さすがにそこは避けて通った。
こちらに近付くにつれ、浩介くんはぐんぐんスピードを上げる。
「ぶつかる!」と思った矢先、浩介くんが最後にパラレルターンをして山側と平行になって止まる。
「うおおおお、すげえええええ!!」
「篠原すげえええええ!!」
「キャー!!!」
浩介くんが止まった瞬間、堰を切ったように歓声がどっとあふれる。
浩介くんはゴーグルを付けていた。
あたしは浩介くんに近付く。
すると浩介くんが、ゴーグルを外した。
どきんっ
浩介くんのかっこいい顔に、どきっとしてしまう。
スキーの素晴らしい滑りを見せた後の浩介くんは、一仕事やり終わった顔で、いつもより何倍もかっこよく見えた。普段は行動とか振る舞いとかに惚れるけど、今の浩介くんは世界一かっこよく見えた。
「浩介くん、素敵だったわ!」
真っ先にあたしが浩介くんのもとへ行こうとする。
浩介くんもまた、あたしを見つけると寄って行ってくれた。
「優子ちゃん、どうだった? お、俺の滑りは?」
「うん、最高だったわ!」
あたしは多分、目がハートマークのなってると思う。
男の子を好きになれるって、こんなに素晴らしいことなのね。
見つめあうあたしと浩介くんに、周囲から「ヒューヒュー」という声が聞こえてくる。
あたしは、浩介くんとキスしたいと思った。
周囲の声が聞こえない。

「ねえ浩介くん、あたし……」
「あ、ああいや、ここはよそうよ」
「え!? あ、ごめん、そうだったね。えへへ……」
あたしが思わず照れ笑いを出す。

「くそー!!!

に見失ってしまった。
　子供たちと一緒に降りて行ったので、あたしたちはそこまで恥ずかしくなく、最下部まで降りてきた。
「はーい、じゃあ私達も自由時間にするわよ！」
「「はーい！」」
　例の場所の近くで、インストラクターさんが自由時間を宣言する。
「お、優子ちゃん達も自由時間？」
「あ、浩介くんいたんだ」
「ああ」
　小学生たちが雪合戦をしている。
　ここは子供向けスペースで、ほとんど平らに近いような傾斜だから、雪合戦やそりに講じている子供たちもいる。
「ねえお兄ちゃん、お兄ちゃんってさっきてっぺんから滑ってきたよね？」
「あ、ああ……」
　女の子が浩介くんに話しかけてくる。
「すごいかっこよかったよ！」
「おう」
　ちょっとだけ焼きもちを焼いてしまう。子供にヤキモチ妬いてもしょうがないのに……
「それで、お姉ちゃんとラブラブなの!?」
「ぶっ……！」
　またこれだわ。子供の純真さ故の質問。
「ほら、君にはまだ早いよ」
　あたしがそう言うと、浩介くんとの間に立つ。
「えーつまんないの！」
「さ、ともかく、お姉ちゃんたちとそりで遊びましょう？」
「うん！」
　女の子が元気よく返事する。
　これもまた、子供ならではの切り替えの早さだわ。
「浩介くんもそりで遊ぶ？」

「え、俺はちょっと……」
「ねえねえお兄ちゃん、雪合戦しようよ！」
別の男の子が、浩介くんに声をかけてくる。
「おう、じゃあ俺、こっち行くから」
「うん」
浩介くんが男の子の集団に混じる。
あたしたちはいったんスキー靴から、雪山向けの長靴に履き替える。
レンタルのスキーセットなので、あたしたちは返却口へ。浩介くんのはマイセットなので、ホテルの人がバスの荷物スペースに入れてくれるらしい。
あたしたちは傾斜を上り、そりに座る。
何とか足の力で支えるけど、足を離したら間違いなく滑り降りてしまう。
ちょっとだけ怖い。
「じゃあいくよ、よーい……どん！」
女の子の掛け声とともに、あたしたちは一斉に足を離す。
そりは意外にスピードが出ない。でもゆったりのんびりしていてこれも楽しいわね。
山の斜面が平らになると、摩擦力が強くなり、そりは自然と止まった。
「もう一回やろうよ！」
「うん！」
女の子の声とともにもう一回。
あたしたとはこれを何回か続けると、雪合戦のほうを覗いてみた。
「うえーん、お兄ちゃん強すぎる！」
どうやら、インストラクターさんと浩介くんがそれぞれ大将になって雪合戦をしているみたいだけど、浩介くんが強すぎてゲームにならないみたい。
「浩介くん、手加減してる？」
「うん、してるつもりなんだが……」

浩介くんも気まずそうな顔をしている。
「ねえお姉ちゃんは雪合戦どうなの？」
「う、うん、あたし、体育大の苦手よ」
「ねえねえ、お兄ちゃんに代わって出てよ」
「うん」
子供の声で、あたしが浩介くんの代わりに大将になる。
「じゃあ、俺が審判やるぞ」
浩介くんが審判を買って出た。
浩介くんの掛け声で雪合戦をしてみたけど……

「うーん、お姉ちゃんは弱すぎ」
「大将って感じじゃないわよね」
「だって、小学生と言っても男の子相手だし」
あたしの身体能力は小学校高学年女子水準だし。
中学年とは言え男子相手はきついわね。
「あら、小学校高学年あたりまでは女子の方が強かったりするわよ」
「あれ？　そうだっけ？」
永原先生のツッコミ。あたしは子供時代がないのでよくわからない。
「ええ、中学に入って男子が追い抜くんだよ」
そう言えば、優一だった頃のあたしも小学校6年生の時は、確かに桂子ちゃんとほとんど背が同じだった気がする。
ってことはこれはどういうことだろう？　いくらあたしでも小学校中学年に負けるほど弱いとは思えないけど。
「石山さん、雪国育ちじゃないものね」
「そう言う永原先生も、あなたスキーの時が嘘のようにうまいわね」
インストラクターさんが言うように、永原先生の雪合戦の腕前は天才的だった。
どれくらい凄いのかというと、浩介くんと試合になるくらいすごい。
さすがに男女の違いもあって浩介くんに勝ち切ることはできない

けど、それでも何度も浩介くんを追い詰めていた。身体能力差を考えれば凄まじいことだと思う。
「だって私、戦乱の時代の、長野の生まれですもの。雪合戦なら、それこそ男だった頃からしてましたよ」
そう、永原先生はまさに戦国時代の人特有の「勘」が冴えていた。様々なエピソードを積み重ねることで、永原先生が戦国時代の人であることが分かる。
「本当、どうしてスキーがあんなのダメなのか不思議だわ」
インストラクターさんがいかにも不思議そうに言う。
「だって、戦国時代にスキーなんて無かったし」
「……まあいいわ」
こうして、あたしたちは楽しい自由時間を過ごした。

「「永原先生、優子お姉ちゃん、浩介お兄ちゃんさようなら!!!」」
「「さようなら!!!」」
元気よく挨拶し、子供たちがインストラクターさんの引率で帰っていく。
あたしと永原先生はスキーウェアを着替えて返却し、浩介くんと部屋に戻った。
「食べるか」
「うん」
自由時間が終わると夕食の時間。
今の時間帯は混んでいるけど仕方ない。
食堂は「さようなら、疋田スキーホテル第一食堂　最後の晩餐」と称して垂れ幕がかかっているが、バイキングの内容はいつも通りと見受けられる。
在庫一斉処分ということで、何と持ち帰りまでＯＫという大盤振る舞いをしていた。
「明日の朝食はどうするんだっけ？」
「ほら、一室一室に持ってきてくれるみたいよ」
「へー楽しみだな」

楽しみといえば今夜のお風呂、またすごく恥ずかしい思いをしそうだけど、浩介くんが喜んでくれると思うと、楽しさが勝ってしまう。
あたしは浩介くんと一緒に夕食を楽しんだ。
なんかいつもより美味しい味な気がした。
このホテルは廃業するわけでも無いし、あちこちでボロボロになっていて、見ぬからに限界だった。
にも拘らず、いざ無くなるとなるとどこか寂しく思えてしまう。
人間というのはわがままな生き物ね。
「ごちそうさまでした」
あたしと浩介くんでごちそうさまをする。
そして、緊張を悟られないために、努めて笑顔で話しながら、部屋に戻る。
「ね、ねえ浩介くん……」
「うん……」
「今日も、入るんだよね……」
「当たり前だろ？　せ、せっかくホテルの人がサービスしてくれたんだから、さ」
浩介くんも、昨日の今日だと言うのに緊張はほぐれない。
クラスの女子皆の前で裸になるよりも、ずっとずっと恥ずかしい。
それはきっと、浩介くんが好きな男の子だから。
一言を切り出せず、時間ばかりが過ぎていく。
でも、お風呂に入らないわけにも行かない。
「あ、あの……」
「あ、ああ。行こうか」
ぎこちなく返事する。
勇気を出して、優子。昨日より、開放的にならないと。
あたしたちは、昨日と同じように家族風呂に入る。札を「使用中」に合わせる。
「ね、ねえ浩介くん」
「何？」
「きょ、今日は隣で洗おうね」

「あ、ああ……」
まだ脱ぐところを見られるのは恥ずかしい。
いや、浩介くんと入るだけでも恥ずかしいけど、それは我慢しないと。

２回目なのに、いや、まだ２回目なせいか、あたしたちは背中合わせに脱ぐ。
あたしは、巻くためのバスタオルに手をかけて引っ込める。
「ごくっ……」
あたしがつばを飲み込む。
あたしは何も着けずに浩介くんの背中を見る。覚悟を、決めなきゃ！
「なあ、出来た？」
「うん、こっち向いてくれる？」
浩介くんが恐る恐るこっちを向いてくる。
「あっ……わっ！」
浩介くんが反射的に顔を隠す。
浩介くんの下は昨日と違って、タオルを巻いて隠されていた。
あたしは、巻かなかった。
「浩介くん、お願い！」
「うっ……その……」
「あたしを見て。一緒に、お風呂は入るでしょ？」
「でも、俺……理性が……」
「いいわよそんなこと！」
「でも結婚までは……」
「分かってるよ。でも、一緒にお風呂は入るんだから、ね。最後まではしないけど、さ」
「う、うん……」
浩介くんも、理性をつなぎとめるために必死になっている。
「あ、あの……ジロジロ見ないでよ」
「浩介くんだって、あたしの身体、ジロジロ見てるわよ」

「うっ、だ、だって……」
浩介くんもあたしも、身体はとっても正直。
ああ、今すぐ、浩介くんの身体をキス以外の方法で、口に含んでみたい。
どんな味がするんだろう？
あたしは女の子らしく、男の子に興味津々だった。
あたしたちは、大浴場に入ったら、混浴ということで、タオルで何も隠さず、体洗い用のタオルだけを持って洗面台へと行く。
今度は近くで隣り合って。浩介くんがちらちらとあたしの胸を見てくる。
浩介くんに見られちゃってる、そう意識するだけで、あたしの興奮が高まってしまう。
でも、今はちょっとだけ体を洗うことに集中する。
身体を洗い、ボディーソープを着けてそしてシャワーで髪を洗う。
昨日忘れてしまったヘアゴムを使い、お団子ヘアにする。
「優子ちゃん、その髪型……」
「うん、髪の毛をお湯につけないようにしなきゃいけないから……これは最近になって編み出した髪型だから、他の人に見せたのは浩介くんにだけよ」
あたしは本能的にお得感を煽る。
あたしの視線は常に浩介くんの股間の方に向く。なんだろう、苦しそうにしている気がするわ。
「ゆ、優子ちゃん、こ、ここばっか見ないでよ」
浩介くんがちょっとだけ隠す。
「だって、あたしだって女の子だもん」
「うっ、やっぱり女の子って興味あるのか？」
「もう、当たり前でしょ。あたしはもう、心の底から女の子なんだから」
本当は、まだ「男」が出ることもよくあるけど。
でも、浩介くんのが結構大きいことに安心した。
でも、あたしが優一だった頃ってどうだったっけ？　うーん、思い

出せないや。
「ねえ、入ろう」
「うん」
あたしは浩介くんと腕を絡める。
自然と胸を当てる。
「ゆ、優子ちゃん当たってる！」
「当ててるに決まってるでしょ？　どう……かな？」
「どうも何も、はぁ……はぁ……すげえ柔らかくて……女の子って……はぁ……はぁ……」
浩介くんの理性が崩れかけている。
あたしもあたしで、さっきから浩介くんにいつ襲われるか、いつ犯されるかそればかりを考えている。
檜風呂温泉の温かい感触。
浩介くんのが屈折して面白い。全くもって小さくなる気配さえ見せない。
あたしからも、ずっと股から水が出ていて、檜風呂にちょっとだけ、あたしが混じる。
それを浩介くんが入って……ってダメでしょそんなこと考えちゃ！
「ねえ、昨日より熱くない？」
確かに、お湯が昨日より熱く感じる。
「温度変えたのかな？」
あたしがあえてすっとぼける。
「ど、どうなんだろう？」
「あはは……」
本当はあたしたちが恋人の裸を見て興奮して「自家発電」しているせいだと分かっていたけど、言えなかった。
湯船に浸かっていた時間は昨日より短い。
「ふう、のぼせたから休むわね」
興奮は残っているけど、恥ずかしさは大分薄れて来た。
あたしはのぼせた体を効率よく冷やすために何気なくお尻を付け

て脚を開いた体育座りのような座り方で休む。
「ゆ、優子ちゃん！　その座り方やめて！」
「え、あ！　やーもーどこ見てるのよ……」
急に恥ずかしさがこみ上げてきて、あたしは大事な部分を両手で隠した。
無防備な座り方したあたしにも原因あるけど。
「さ、俺も休む」
浩介くんがあたしのすぐ隣に行き、身体を冷ます。
顔が近い。
「ねえ、浩介くん……」
「うん……」
「ちゅっ……」
どちらからともなくキスをする。
「んっ……はぁっ……」
浩介くんが何も言わずにあたしの胸を直接触ってくる。
快感に怯み、ディープキスが途切れ、唾液の糸が流れる。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん……」
「ねえ、浩介くん、あたし、あたしもう我慢できないの……お願い……」
「お、俺だって我慢できねえよ。でも、やっぱり、今は……だめだよ……赤ちゃん出来たら、どうするんだよ……」
浩介くんが、理性を振り絞ったような声で言う。
赤ちゃんという単語に、あたしの中で、急速に理性が芽生える。
まだ見ぬかわいい我が子、育てられないからと殺すのは絶対に嫌だという気持ちになった。
「うん、そうだよね。あがろうか？」
「でも、ちょっとだけ、胸とお尻だけ……触らせてくれるか？」
「う、うん……」
浩介くんが両手を使い、あたしの胸を触ってくる。
「やぁ……んっ……」
「すげえ、優子ちゃん、柔らかいよ……」
そして、浩介くんの手で、優しくお尻を撫でられる。

「やっぱり、女の子の身体ってすごいや」
「えへへ、あたしを独占できて、浩介くんは満足？」
あたしが聞いてみる。
「満足も何も、不満なんか持ちようねえだろ……こんな……」
「ふふっ……」
「なあ、俺、ちょっと部屋に先に戻ってる。トイレ行きたい」
「はーい」
浩介くんが「もう限界！　我慢できない！」のアピールをする。
あたしは1人、また取り残される。
自然と、あたしは自分で自分の体を触ることにした。

昨日よりも、激しい「絶頂」、あたしは、一瞬意識が飛んでしまった。
気付いたら、大の字で寝っ転がっていた。
あたしはもう一度湯船に入り、ヘアゴムを解いて、身体を拭き、パジャマに着替えて部屋に行く。
パジャマはあの時と同じ、ワンピースタイプのパジャマ。寝ている間にめくれ上がってしまうスケベ仕様。
すっかり、お泊りデートの勝負服になってしまっている。
裸を見られたけど、実際はパンツ見られただけでもすごい恥ずかしい。
恥じらいの心は絶対に失っちゃいけないし、あたしも女の子として、理性が崩壊しても、極力守り続けたい。
コンコン
「入っていい？」
「うん」
浩介くんの声とともに、部屋に入る。
浩介くんは冷静な声で、かなり疲れた顔をしている。
「はぁ……はぁ……ふう……もう、俺、疲れた……」
「うん、あたしも……」
「今すぐ寝たい……」
「そう、だね……」

よく見ると、時間は昨日より早い。
でも、疲れ切って、今すぐ寝たいという睡眠欲が勝った。
あたしたちは、電気を消して、一切話さず、すぐに布団で寝ることにした。

スキー合宿４日目　終わりの食堂、終わりのお風呂

「うーん……」
あたしは冷静に、ゆっくり意識を回復する。
浩介くんと二人っきりの部屋も、これで最後。
そんなことを思いながら、あたしは浩介くんを見る。
浩介くんはまだ起きていない。
……あたしは、何も考えずにもう一度寝る。
もう少し、浩介くんと添い寝していたい。
そう思い、あたしは二度寝に入った。

「おーい、優子ちゃん」
とても心地よく、かっこいい声があたしの脳裏に響く。
でも、せっかく浩介くんと楽しくデートしていたのに、誰だろうあたしを呼ぶのは？
「んっ……」
「優子ちゃーん」
あれ？　よく見るとこっちも浩介くんだ。
浩介くんが二人いる？　あれ？　おかしいわね……
そうだ、きっとこれは夢なんだわ、だってさっきまであたしは浩介くんとデート……
「おーい、起きろー！」
さっきより大きな声が響く。
あれ？　さっきのが夢で、こっちが現実なのかな？
うーん……よく分からないわ。
「おーきーろー！」
ガバッ！
「わー！」
布団が一気に剥ぎ取られる感覚を受けてあたしの脳が急速に現実に戻る。
そうだ、さっきまで夢の中で浩介くんとデートしてたんだ。

部屋のボロボロの壁を見てようやく今がスキー合宿中と気付く。
浩介くんがあたしの布団を持って何やら見入っている。
あたしもそれに釣られて浩介くんが見てる場所に……って
「きゃあああああああーーーーーー!!!!」
ワンピースタイプのパジャマが寝ている間にめくれ上がって、浩介くんに見られてしまっていた。
慌てて抑えたけど、かなりじろじろ凝視されていて、恥ずかしさ倍増だわ。
「ふふっ、いいもの見せてもらったよ。忘れない思い出になったよ」
「ふえええん、恥ずかしいよお……」
浩介くんが興奮してくれるのはうれしいけど、それでもやっぱりパンツは何回見られても恥ずかしいわ。
「でも良かった」
「え？」
「いやね、優子ちゃん、昨日はお風呂で裸になってくれたから、パンツくらいじゃ動じなくなっちゃうんじゃないかって心配だったんだよ」
「もう、そんなわけないでしょ！　あたし、女の子なんだから」
昨日のことまで思い出してしまい、さらに恥ずかしさが倍増する、あうう……ちょっと濡れちゃってるかも？
「うん、その心を忘れないでいてくれることが、俺はとても嬉しいんだ……ところで、ご飯注文しようぜ。ここ出るのは８時だろ？　お風呂はその後にしようぜ」
「う、うん……じゃああたし、着替えるわね」
今日はホテルも暖房が効いている。
もうスキーをしに外には出ないため、防寒対策も初日ほどはいらないと思うので、あたしは思い切って生足のミニスカートを披露することにした。
本来はズボンの上に穿く予定で、今日も帰り道そうする予定だったけど、浩介くんのためにちょっとだけサービスしたい気分。
別室に移動し、鍵をかけて全裸になる。
下着ごと取り換えるいつもの朝。違うのは場所がホテルで浩介く

んが近くにいるということくらい。
「お待たせー」
「おう、じゃあ行こうぜ」
「うん」
あたしは座っていた浩介くんに近付く。
すると、浩介くんが立ち上がるかと思いきや、いきなり倒れて寝そべってきた。
浩介くんの頭があたしの足元に……って
「きゃあ！　えっちぃ！」
「ふへへ、絶景絶景」
浩介くんがかなり調子に乗っている。
あたしは恥ずかしさのあまり座り込んでへたり込んじゃう。
浩介くんも諦めて、立ち上がってくれる。
ぺちっ！
あたしは堪らずに立ち上がった浩介くんの頬に平手打ちする。
以前と同じように、浩介くんはびくともしない。
「もう、変態さんなんだから！」
「ごめんごめん、優子ちゃんがあまりにかわいくて、つい」
「むー」
またこれだわ。本当に浩介くんはずるい。これじゃ惚れこんじゃって怒れないじゃないの……
「でも、引っぱたいてくるなんて久しぶりだな」
「あ、うん……」
もしかして、夏祭りの時に浩介くんにお尻触られて以来かな？
考えてみたら、あの時よりもずっとえっちな目に遭ってるのに、ビンタすることはなかった。
「それだけ、優子ちゃんが俺に心を許してくれてるってことでしょ？」
「う、うん……」
「ねえ、お尻触らせてよ」
「ちょっ……！」
浩介くんが正面から要求してくる。

「今はダメ」
「えー」
「ほら、お風呂の時、ちょ、直接触らせてあげるから！」
うー、とっさにとんでもないこと言っちゃったわー
「うっ……でもさ、パンツの感触との合わせ技もいいんだよ」
「もー、えっち！」
「それはお互い様だろ？」
「あうあう……と、とにかくご飯頼もうよ！」
あたしは逃げるように言う。
正直このまま会話を続けるとますます墓穴を掘りそうだし。
「おっと、そうだったな！」
あたしが部屋から出る。さすがにみんなが見ていそうな所では、浩介くんも大人しくしてくれる。
あたしたちは食堂に来ると、例の「さようなら」の横断幕とともにホテルの人が立っている。中はもう封鎖されていて、使われることはない。
「いらっしゃいませ、朝食のご注文ですか？」
「はい」
「ではお部屋番号をお願いいたします。今回の料理をもちまして、当ホテルの調理班最後の仕事となります。どうか心行くまでご堪能下さい」
最後の朝食は、在庫処分のため、全て同じメニューになる。
それでも余った在庫は、すべて賄いになったと従業員さんのお話。
「では私たち一同、お部屋に参りますので、しばらくお客様のお部屋でお待ちください」
こうして、あたしたちはもう一度部屋に戻る。
「浩介くん、いつホテルの人が来てもいいように、えっちなこと禁止だよ」
あたしが改めて釘を刺しておく。そもそも普段から部屋でえっちなことは禁止だったはずなのに、叫び声、隣に聞かれちゃったかも。
「はーい……」

浩介くんが残念そうに言う。
これはお風呂の時、昨日よりもっと頑張らないといけないわね。
あたしたちは部屋に戻り、気分を晴らすためにテレビをつける。
ちなみに、警戒態勢の意を込めて、スカートを布団で覆って下半身ごと見えなくする。
テレビは相変わらずニュースをやっている。
今日は一件殺人事件があってそれについての報道が多い。
「――などと意味不明な供述をしており、警視庁は詳しい動機を調査中とのことです」
逮捕された容疑者は、どうも意味不明な供述をしているらしい。
コンコン
「はーい」
突然扉がノックされたので、浩介くんが応対する。
「失礼いたします、お待たせしました朝食2人前でございます」
仲居さんらしき人が机の上に食事を持ってきてくれる。
食事の内容は、ご飯、味噌汁、たくあん、サラダ、焼き魚にウインナー、ベーコンに卵焼きと品目数は多いけど、どれも小さくて量は普通な感じ。
「それではごゆっくりおくつろぎくださいませ。容器の返却等は特に不要でございます」
仲居さんがそう言うと、再び「失礼いたします」と言って部屋から出ていく。
「「いただきます」」
あたし達は正面向かい合わせでいただきますをする。
あたしはいいけど、浩介くんはこの量で足りるかちょっと心配。
最後の最後とあって料理にはかなり気合いが入れられている。
このホテルで食べたどの食事よりおいしく感じた。
「ふう」
浩介くんが先に食べ終わると、テレビを見始めた。
あたしも、テレビをラジオのように聞きながら食べ続ける。
「続いては気象情報です」

テレビでは気象情報を放送している。
どうやら、北の方は寒いままだけど、関東南部は昼から暖かくなるという。
気温も今年最高ということで、あたしも徐々に冬スタイルを改める必要がありそうだわ。
このスキー合宿が終われば、後は3月になり、４月からは3年生。
小谷学園は毎年クラス替えをするんだけど、浩介くんと違うクラスになったらどうしよう？
もちろん、永原先生が担任から外れる可能性もある。
けど、あたしが「ＴＳ病」ということもあるから、同じ病気の永原先生が引き続き担任になってくるのが自然だし、あたしと永原先生は単に生徒と先生という関係にとどまらない。朝のホームルームの後に、協会の会長と会員と言う立場で、連絡が行われることもある。
そう考えると、永原先生が来年あたしの担任にならない可能性は限りなく低いと踏んでいた。

「ごちそうさまでした」
あたしが最後の一口を食べる。
また一つ、ホテルの一部が役目を終えたのに、名残惜しさはなく、「こんなものなのね」という感じだった。

「な、なあ……お風呂、行こうぜ」
「う、うん……」
浩介くんと一緒にお風呂セット以外の荷物をまとめ終わると、やっぱりお風呂の話題。
今の状態は、お風呂セットを入れればいつでも出発できる状態。
食事中は考えないようにしていたけど、やっぱり避けて通れない。
共同浴場の方を見てみると、最後の営業とあって生徒が何人か入っていった。
「あたし達は、貸し切りだね」
「う、うん……俺、家族風呂、お金払ってよかったよ」

浩介くんが顔を赤くして言う。
「うん、あたしも……浩介くんのこと、ますます好きになっちゃったわ」
お風呂効果は絶大だった。浩介くんのために、何でもしたいと思っちゃう。もちろん、浩介くんは無茶なことを言わないという信頼があるからこそ、「何でもする」と言えちゃうんだ。
あたし達は、家族風呂を「使用中」にする。
そして3回目、この家族風呂の最後の客になった。
「ねえ、浩介くん」
「ん？」
「今日は、背中向けるのやめよう？」
「あ、ああ……そうだな！」
浩介くんも恥ずかしそうに言う。
そして、そのまま固まってしまう。
「ねえ、浩介くん、脱がないの？」
「ゆゆ、優子ちゃんこそ！」
「もしかして、自分のを脱ぐのが恥ずかしいのかも！」
あたしは、頭が変になってとんでもないことを口走ってしまう。
そんなわけないのに。
「あ、いやうん……じゃあ優子ちゃん……俺の……脱がしてよ！」
「う、うん……！」
自分で言ってしまった手前、脱がさないわけにもいかない。
まずは浩介くんの上着と靴下を脱がしてたたむ。
「浩介くん、万歳して？」
そして、上の服のボタンをはずし万歳した浩介くんの服を脱がす。
下のシャツも上に上げて上半身を裸にする。
浩介くんのたくましい胸板が目に入る。もうクラクラしちゃいそうだわ。
でも、本格的に興奮するのはここから。
「下も……脱がすね……」
「お、おう……！」

さすがにあたしに脱がされるのは、浩介くんも緊張してしまうらしい。
ベルトをまず外して脱衣かごに、ズボンを脱がしてトランクス一枚にさせる。
浩介くんは、すでに「臨戦態勢」だった。
あたしは、「そこ」をつい凝視してしまう。
意を決して、浩介くんのトランクスに手をかける。
「うー、は、恥ずかしいよお……」
「あら、浩介くんも恥ずかしいの？」
浩介くんが珍しく、あたしみたいにかわいい声を上げる。
いつもはとってもかっこいい浩介くんが見せたかわいい一面。
「う、うん……」
「浩介くんかわいいね」
「な、かわっ!?」
浩介くんが何かを言う前に、あたしはトランクスを下す。動揺した拍子に少しだけ小さくなったみたい。
本当、これはすぐに大きくなったり小さくなったりするわよね。
あたしも優一の頃はよく翻弄されたっけ？
そんなことを思いながら、全部脱がせてしまった。

「なあ、優子ちゃん……」
「うん、脱がしていいよ」
そして今度は、あたしが脱がされる番になる。
「い、いくぞ……」
浩介くんがあたしの服に手をかける。
「女の子の服ってボタン多いな……」
「そ、そうかな？　これはそういうのだよ」
浩介くんに全てのボタンを外されると、ガバッと服を広げられる。
あうう……裸より恥ずかしい気がする。
「やっぱ、優子ちゃんの胸、すげえ……」
浩介くんが感嘆とした声で言う。

こんなに近くで胸を見られたの、初めてかも。
浩介くんがインナーにも手をかけ、ついに上半身はブラジャーだけになった。
ちなみに、ドサクサに紛れて何回か触られて、その度にあたしの心臓が高鳴ってしまう。
「えっと、脱がすぞ」
「うん」
そして、浩介くんはあたしの服を次々に脱がしていく。
「うわーん、恥ずかしいよお……」
あたしは、浩介くんに全部を見られてしまう恥ずかしさに耐えきれず、顔を手で隠す。
「あれ？　優子ちゃん、漏らしてる？」
「わっ、ダメー！」
浩介くんの言葉に、あたしは慌てて両手で下の方を抑える。
「興奮してたの？」
「あ、当たり前でしょ！　もう！」
ともかく、これでお互いが全裸になった。
「こ、浩介くん、ちょっといいかな？」
「え？」
「きょ、今日は時間もあるし……最後だし……浩介くん、あたしが洗ってあげる」
「え、ええ!?」
あたしは、どんどんと浩介くんの前で開放的になっていく。
洗面台に行き、浩介くんにじっとしているように言う。
そしてあたしは、ボディーソープを胸につけ泡立てると、浩介くんの背中に押した。
「んっ……ゆ、優子ちゃん……あ、あ、あ……」
浩介くんは興奮のあまり、声にならない声を上げる。
「全部洗ってあげるからね」
「全部？」
「う、うん……全部だよ……」

「そ、その……前は自分で洗うから！」
「えー」
実は触りたくて仕方ないというのは本音だったり。
ちょっとだけ怖いけど、でも、女の子になるために、ううん、「浩介くんの」女の子になるために、絶対必要なことだから。でも、浩介くんが嫌がるなら仕方ない。
「はぁ……はぁ……俺には、刺激が強すぎるんだ……で、出ちゃうかもしれないし、さ」
「そう？　じゃあ仕方ないわね」
あたしは洗面台に戻り、自分で身体を洗う。
浩介くんを見ていると、頻繁に下半身を気にしている。
あたしも、目が離せないけど、強引に自分のことに戻った。

「ふふっ、浩介くん……」
あたしは湯船に浸かりながら、浩介くんの背中に胸を当てる。
「ん？」
「ここのお風呂、あたしたちで最後なんだよね」
「ああ、建て替えでリニューアルする時は同じ源泉を使うらしいけど、な」
「ねえ、あたし、また興奮してきちゃったの……」
あたしはこっそり、背後から浩介くんの大きくそそり立った「それ」を見つめていた。
「ねえ浩介くん……」
「なあ、優子ちゃん、俺、もう我慢できねえよ……」
浩介くんが立ち上がろうとする。
あたしが浩介くんの腕を軽く引っ張る。
「お願い、行かないで……」
トロンとした目つきで、あたしが語りかける。
「うっ、じゃっ……じゃあさ、優子ちゃんも見せてよ。興奮してるんだろ？」
「う、うん……」

あたしと浩介くんがお風呂からあがる。
「見て……てね」
「うん、浩介くん……」

## スキー合宿４日目　あるホテルの死

結局、あたしと浩介くんは家族風呂で３回一緒にお風呂に入って、３回とも我慢できなくなってしまった。
浩介くんの「それ」はあたしより後だった。普通男の人のほうが早いって感じだったのに、そう言えば、優一の時はどれくらい時間かかったっけ？
……気にしたことがないことは、優一時代のことでも忘れていってしまう。
でもそれは詮無きこと。多分、優一のままだったとしても、思い出せない些細な事だから。
それにしても、浩介くんは本当にすごかったわ。
しばらくは、今日の光景を思い出し、情事にふけることができると思う。
特に最後の瞬間のことは、忘れられない思い出になると思う。
「ふう、さあ、出ようか」
浩介くんがさっきまでの興奮が嘘のような冷静な声で言う。
うん、あたしも知っている。一気にさーっと引いていく感覚、一部の人には「賢者タイム」と呼ばれているあれ。
知っているから、浩介くんがすぐに離れようとすることに不満はない。
あたしたちは脱衣所で服を着る。
ここで、外に出ることを考えて、予め持ってきたストッキングを履いておく。
「……ここも終わりだね」
「うん」
最後の客となったあたしたちは、もう一度家族風呂を見る。もう誰も入らないのに、温泉が無駄に湧き出ていて、虚無感を感じつつ、時計を見る。
「……後１５分で集合だね」
「うん、少し急ごうか？」

「そうしよう」
浩介くんと話す。
慌てることはなく、十分に間に合うとは言え、どうしても現代人らしく「時間」に追われてしまう。
そしてあたしたちは家族風呂の札を取る。
後はもう、誰も使わない。ここもまた、さっきの食堂と同じ。何もせず、ただひたすら、座して死を待つだけの存在になってしまった。
あたしたちは一旦部屋に戻り、お風呂セットを荷物に入れる。
「そう言えば、お土産買ってないな」
「う、うん……時間あるし、ロビー見ていく？」
「だな」
あたしたちは、重い荷物を運びながらロビーへ行くことにする。
部屋の電気を消し、浩介くんが鍵を持つ。
こうして、あたしたちの部屋は「死んだ」
このホテルも、もう間もなく役目を終える。
どこもかしこくも、電気が消えていた。フロントも無人、老化も待合室も薄暗く、まるで廃墟みたいになっている。
しかし、ロビーに来てみると、最後の力を振り絞るかのように、売店が営業していた。
何と、どれも１００円で販売しているという。
地域の名産品のお菓子、「どうせ今日で終わりだから」と３種類買ってたった３００円だった。
あまりの価格破壊ぶりに、他の生徒達も我先にと買い求め、あたしたちが書い終わってすぐに全部売り切れとなってしまった。
「ああ、石山様、篠原様。今回は家族風呂のご利用ありがとうございます」
初日にいた支配人さんが声をかけてくれる。
「ああ、うん。とっても良かったです」
中でのことは、思い出さないようにしないと。
「ともあれ、あれで当ホテルも浮かばれました。全てが悔いなく、建て替えに入れます」

そうだった。
あたしたちが使わなければ、家族風呂は４日間使われないまま終わってしまっていた。
その後もどんどんと人が集まる。
支配人さんの計らいで、生徒全員を集めての別れの集合はしないという。余計に名残惜しくなってしまうからだという。
ボロボロで、刀折れ矢尽きるまで使用したこのホテルのお別れ会は、従業員たちで別途に行うという。
あたしたちは寒さを堪え、バスに大きな荷物を起き、サブバッグだけを持って中に入る。
中には既に、永原先生を始め、クラスの3分の2程度の人がいた。
「石山さん、お疲れ様」
「うん、でもまだ、帰路があるよ」
「そうだね。私はやっと終わってくれたって感じだったよ」
永原先生もあたしも、スキーでは散々な目に遭った。
あたしはそうでもなかったけど、永原先生はひどかった。
最後の披露でも、失敗続きで転び続け、最終的には課題を放棄してしまった。
あんな自棄になる永原先生は、見たことなかった。
「永原先生があんなに自暴自棄になるの、初めて見ました」
今までも、長い人生の果てに感情か高ぶるところは見たけど、ああいう風に諦めてしまうのは初めてだった。
「そりゃあね、私も昭和の頃……３０年以上前からやってるのよ？むしろ諦めが悪いくらいよ」
本来なら、ホテルの留守居役に固定するべきなんだろうけど、他の先生との兼ね合いでそれが出来ず、「生徒の監視・指導」などを名目にスキー場で滑ることになっている。
他の先生は既に1人で滑れる中、永原先生だけ毎年あの調子だという。
「他の人が数日で習得する技術さえ習得できないのに、『努力が足りない』なんてバカみたいでしょ？」

「そりゃあそうですけど」
「……ふう、決めたわ。私、次からはホテルの留守居役に固定して欲しいって職員会議で言うわ。あれだけのことを見せつけておけば、大丈夫でしょ」
永原先生は本当に、転んでもただでは起きない人よね。
あたしも、長く生きればそう言う風にできるのかな？

「先生、これで全員みたいです」
実行委員の桂子ちゃんが人数を確認し、永原先生に告げる。
「よし、大丈夫みたいね。じゃあ行きましょうか」
バスのエンジン音がかかる。
「「ありがとうございましたー!!!」」
外を見ると、全従業員が帽振れをしていた。
明日から、ここのホテルは立入禁止になり、そして新しいホテルに生まれ変わるという。
どこか名残惜しそうに、ホテルが視界から遠くなっていく。
バスの話し声を聞くに、あちこちでスキーの反省会をしていた。

「にしても、昨日の篠原は圧巻だったよなあ」
「さすが1級という感じかな？」
「そうはいってもよ、高月。1級の上にはプライズテストってのがあって、俺じゃ全然無理なんだぜ」
「へえ、そんなものもあるんだ」
「よっぽどのエキスパートじゃないと受からんよ。俺達のインストラクターは持ってたけどインストラクターでも落ちるんだぜ」
「ひええ……そもそも、それを受けて合格する素質があるってすげえな」
「うんうん」
後ろでは浩介くんが男子たちと会話している。
「そう言えば、お前優子ちゃんとお風呂に入ったんだって！」
「なっ!?」

「俺見ちゃったぞ、家族風呂と書いてある所に優子ちゃんと一緒に入ってくところをよ！」
　ざわざわ……
　あちゃー、桂子ちゃんと永原先生だけが知っていたのに。
「お前、優子ちゃんを食っちゃったんじゃねえだろな！」
「うっ、してねえよ！」
「で、どうだったんだよ優子ちゃんは！」
　浩介くんが詰問されている。
「胸は？　あそこはどうだったんだよ！」
「篠原てめえ、裸見たんだろ！　おい！」
「服の上からでもあれなんだから、脱いだらどうだった？　なあ!?」
「ゆ、優子ちゃんのためにも言えない！」
「くそ、くそお！」
「あーあ、どうせ全部触っただけじゃなくて、中身まで全部味わっちゃったんだろ!?」
「で、気持ちよかったか!?　どうなんだよ!?　優子ちゃん気持ちよかったんだろ!?」
　あうう、恥ずかしいよお……
「くおらあ男子！　優子ちゃんにセクハラすんなあ！」
「な、何だよ田村！　いいじゃねえかよ。こいつ、いつも優子ちゃんを独り占めしやがって――」
「優子はこいつの彼女なんだから当たり前だろ！」
「うー、ちくしょおおお

う「男って」というのは全てブーメランになってしまうのだ。
それでも、さすがにこれは男子批判をせざるを得ない。
「でもよ、優子ちゃんって脱いだらどうなるんだろ？」
「いや、どうせタオルでも巻いてたんじゃね？」
「それでもエロいだろ、あんなにでかいのに――」
「もう、やめて！　嫌いよ！」
それでもあたしの裸で盛り上がる高月くんを中心とした会話に居た堪れなくなって、あたしがつい叫んでしまう。
「やべっ……優子ちゃんに嫌われる！」
「うー、失敗したー」
「ほらな、優子ちゃんはもう花も恥らう乙女なんだぞ。昔の感覚はもう忘れろ」
「うん、わかったよ篠原……」
浩介くんがあたしのことを「花も恥じらう乙女」と言ってくれる。
あたしはまだ男として生きてきた人生のほうがずっと長い。
協会の正会員はあたしの次に若い人でも６０代、最低でも男の人生の２倍近い時を過ごしている。
女の子としての自覚・アイデンティティが育っていても、どうしても「時間の短さ」という不安材料は残る。
それに、最初は男子からは女の子扱いを否定されていたトラウマがまだ残っているのか、あたしは女の子らしいと言われることについて未だにひどく渇望している。
でも、女の子らしくなれれば、きっと浩介くんに好かれるし、こうやって他の男子にもモテモテになる。
他の男子にもモテれば、浩介くんがますます自信を深めてくれると知っているから。
あー、やっぱり女の子よね、あたし。
バスが高速道路に入る。
テレビの上映の予定もあったけど、今回は特に何もなく、ひたすら高速道路を走っている。
そんな中であたしは永原先生と話していた。

「それで、協会の最近なんですが」
「はい」
話すこともなくなったと思ったら、永原先生が協会の話をしてくる。
「今朝方余呉さんより連絡がありまして、塩津さんなんですが、最近旅行に行ったらしいです」
「うん、それでどうだったの？」
「弟さんによると、『お姉ちゃんの仕草が以前よりも柔らかくなった』とのことです」
「どうやら、弟さんも言いつけを守っているようでよかったわ」
幸子さん一家も、長男が長女になり、次男が長男になっちゃったけど、家族みんなで支えているという。
「幸子さん、女の子らしくなることに抵抗がなくなっているといいわね」
「石山さん、それはなかなか難しいわよ。無意識まで女の子になるのは年単位の時間がかかるわ」
「そうですか……」
やはりあたしは特殊ということを自覚させられる。
だからこそ、この歳で正会員なんだろうけど。
「でも、このまま行けば協会の普通会員に推薦してもいいと余呉さんが言ってましたよ」
「……永原会長はどう思います？」
「そうねえ……」
永原先生がかなり悩んだように言う。
そんなに難しい問題なのかな？
「もちろん普通会員なら最終試験の合格は不要よ。ＴＳ病になれれば誰でもなれるもの、でも、やっぱり最終試験には合格しているに越したことはないわ」
協会はどうしても年功序列が強くなってしまうという。
しかし、永原先生としてはその風潮を何とかして止めたいという。
何故なら協会の会員というのはみんな女性として生きることを決

意した「エリート」たちで、男に戻りたいと思いすぐに死んでいった人たちを何人も、数十年、人によっては１００年見てきた。
そして、そうじゃない道を取った自分たちは永原先生のように５００歳でも生きられる。
だけど、そういう人が集まっているために、世代交代が全くと言っていいほどに起きない。
すると、やはりどうしても選民意識が出てしまうという。
「本来なら不老であるはずの人がすぐに自殺するのは悲劇よ。でも、それも繰り返されれば慣れてしまうのよ。もちろん、全力で阻止はしているけどね」
ＴＳ病患者たちの１００年でも、あたしにとっての１００年と余呉さんにとっての１００年と永原先生にとっての１００年では全く違う。
永原先生は、あたしが正会員になって活躍することで、協会の体質も大きく変わるんじゃないかと思っている。
現に、幸子さんの一件で、あたしはますます協会の中で存在感を高めている。
「だけど、石山さんは優秀だったから良かったけど、塩津さんみたいな人には……まだ早いと思うのよ」
「そう……」
「やっぱり、うちの協会は古い人が多いからね」
「どうすればいいのでしょう？」
「世代交代は不可能に近いわ。だからこそ私達自身が若く変わらなきゃいけないのよ。幸いにも容姿がずっと同じだから思考回路が柔軟になるのは難しくないわよ」
今度佐和山大学に進学する予定になった。蓬莱教授が結果を残せば、最年少会員のあたしの存在感はますます高まる。
そうすれば、協会にも新しい風が吹く。その時に、幸子さんや会員になってない若い世代を招き入れたい。
「でも、長い時を生きた人が、そう簡単に変われるのでしょうか？」
「ええ、だから、長い時間染み付いたことを変えるのに、やっぱり長い

時間が必要になることもあるわ。幸いにも私たちには時間だけはたくさんあるからそれでもいいのよ……だけど……」
「だけど？」
「やっぱり、石山さんのようにとても優秀な人が出たから、きっと若いうちに正会員になってくれれば協会にも有益だと思ったのよ」
確かに、それはある。
幸子さんだって、あたしがいなければ間違いなく自殺していたもの。
「幸子さんのことですか？」
「ええ。あなたのお陰よ。弟さんが言っていたわ。『石山さんは、お姉ちゃんの命の恩人だ』ってね」
「ふふっ、本当に良かったわ」
永原先生と、会の過去のこと、会のこれからのことを話す。
バスは最初の休憩地に付く。
ホテルよりも大分寒気も和らぎ、あたしはスカートにストッキングのスタイルでバスを降りた。
ここから暖かくなるみたいだし、次の休憩所では生足になる予定。
徐々に、真冬から春に近付く。
ホテルを出ての帰り道、初めてのサービスエリアということで、やっぱりあの時のことを思い出してしまう。
あの時は恐怖でいっぱいで、二度と味わいたくないくらい怖い目に遭った。
でもそのお蔭で、あたしは守られることを覚えて、大好きな人ができた。
もちろん、あんなことは二度も三度も起きない。
確かに、いたるところであたしは視線を感じるけど、でもああやってナンパしようとするなんて、今の季節だとはやらないらしい。
逆に言えば、服の露出の高くなる夏は要注意ってことかな？
そんなことを考えながら、あたしはバスに戻る。
浩介くんはというと、バスの中にずっと缶詰状態だ。
あたしがいない間に、また男子が変な話しないといいけど……

バスはまた発車する、初日とは逆にドンドン進路を南に取る。
後ろをちょっとだけ振り向くと中には疲れて寝ている人もいるみたいで、テレビを放映しなくて正解だったわ。

「さようならー」
あたしたちは別れの挨拶をする。
学校まで無事に到着し、あたしは浩介くんと駅まで帰り、駅からは桂子ちゃんと一緒に帰った。
「ただいまー」
「優子、おかえりなさい。スキーはどうだった？」
家に帰ると母さんがいつものように話しかけてきた。
「うん、あまり良くなかったわ」
「そう、それよりも浩介くんとのお風呂はどうだった？」
「ぶっ……」
「あらあら、『何かあった』のね」
「うっ、そ、その……」
「まあいいわ。その反応、まだ大人の階段は登ってない感じね」
「えっ……」
確かに、直接的なことはしてないけど。
「ともあれ、ゆっくり休みなさい。月曜日からはまた学校よ」
「う、うん……」
こうして、あたしの日々は日常に戻った。
浩介くんとの距離が、もう少し近付いた中で。

# 近付くバレンタインデー

「優子、バレンタインの支度できてる？」
「え!?」
スキー合宿が終わった翌日の土曜日、母さんが突然何かを言ってきた。
バレンタインデー？
そういえば、そんな季節だっけ？
確か今日が２月１０日だから……って、もう土日１回しか無いじゃないの！
「その様子だとできてない見たいね。義理チョコは買ってきたのでもいいけど、愛しの浩介くんにそんな真似はできないでしょ？」
「う、うん……」
出来れば、おいしい手作りチョコレートをプレゼントして、浩介くんをますます虜にしたい。
でも、手作りチョコってどうやって作るんだろう？
「それじゃあ優子、朝ごはんを食べ終わったら私に付いてきてね？ちなみに、服もちゃんと女の子らしくするのよ」
「はーい」
こういうことは、形から入ることが大事。
部屋に入って、あたしは少女らしくフリルがふんだんにあしらわれたワンピースを手に取る。
浩介くんとのデートの時も滅多に着ないけど、当日はどうしようかな？
学校で渡そうかな？　それともこの服で放課後に渡そうかな？
ううん、浩介くんだって早く欲しがるだろうし、学校にするわ。
そんなことを考えながら、あたしは着替え終わる。
「母さん、準備できたわよ」
「あら、優子、いいわよそれ」
「うん、ありがとう」
母さんがニコニコする。

「それにしても、優子もバレンタインチョコを『あげる』のよねえ……」
「うっ……」
優一だった頃は、影でこっそり桂子ちゃんに義理チョコを貰ったっきりだった。
それでも何ももらえていない男子よりはマシなんだろうけど……
うー、今更昔のことを気にしてもしょうがないかなあ……
ともかく、「女の子として」チョコレートを「あげる」方法というのは、当然身についてない。
「じゃ、優子、チョコレートを買うわよ」
「え!?　買うの!?」
手作りなのに!?
「ええ、手作りと言っても材料は必要でしょ？　今回は生チョコを作るわよ」
「そ、そうよね……」
母さんと、近くのコンビニへと行く。
ん？　コンビニ？
「母さん、コンビニでいいの？」
「ええ、ここで仕入れるわよ」
コンビニの材料で、手作りチョコレート何て作れるのかな？
「大丈夫よ優子、無いものだけ買うわよ」
「う、うん……」
不安そうなあたしを見て、母さんが安心させる言葉を言ってくれる。
ともあれ、今は母さんを信じるしか無い。
バレンタインチョコレート、とにかく失敗する訳にはいかない。
「はいこれ」
「え!?　ミルクチョコレート？」
母さんが持ってきたのはミルクチョコレートの板チョコ、更に近くにあったカカオ豆何とか％というチョコレートのみ。
これを練習も兼ねてかある程度まとまった量を買う。
コンビニの方も、バレンタインキャンペーンとかで何やらくじを引

かせてもらった。
「がんばってください」
「ありがとうございます」
店員さんにも応援され、あたしはチョコレート作りを始めるために、母さんと家に戻る。
「優子、エプロンしなさい」
「はーい！　分かってるよ母さん！」
母さんに言われなくても、こんなフリル尽くしの服でチョコレート作るにはエプロンが必要なのは分かっている。
よく見ると、母さんもエプロンをしていた。
「じゃあ、まずは母さんから手本を見せるわね。優子もちゃんと真似するのよ。この方法はレシピに残してあるから、来年からは自分でやりなさい」
「う、うん……」
あたしも気を引き締め、母さんの話を聞く。
「まず、チョコレート、これを細かく包丁で刻むのよ。こうやって……」
トントントンと母さんが軽快に板チョコを細かく刻んでいく。
「優子、ボウル取って」
「はーい」
母さんがボウルを持つと、細かく刻んだチョコレートを入れていく。
「さ、優子もやってみなさい」
「うん」
トントントントン……
母さんと同じように細かく刻んで見る。
でもなんかうまくいかないわ。
「あー、ほら、最初は斜めに大きく切ってみて？」
「うん」
「大まかに切ってから、何回も何回も細かく切るのよ」
「分かったわ」

母さんの指導の元、チョコレートを切り刻んでいく。
そしてボウルに入れる。
うまく行ったと思った母さんが、別のものを取り出していく。
「はい、じゃあ、これは一旦冷蔵庫にしまって、これよ」
母さんが取り出したのは生クリーム。
「ここからが問題よ。はい、これ。生クリーム。これを鍋に入れて沸騰したらすぐに下ろすのよ」
「うん」
母さんに言われるがままに、生クリームを鍋に入れていく。
「ここの配分は自分で覚えてね、あーお母さんはそのくらいでいいと思うわ」
「とっとと」
ともあれ、初心に帰ってまずは母さんの言われた通りのことを出来るようになりたい。
「じゃあ、その間にこれからやることを説明するわね」
母さんが次に取り出したのは泡立て器。
「これで手早く豪快にくるくる混ぜるのよ。チョコレートを溶かしてクリーム状にするのよ」
「う、うん……」
また、母さんがハートの型にオーブンシートを敷いてある。
「型を作るといいわよ。ハートのチョコレートとかバレンタインにはいいでしょ？」
「うん……」
ハート型のチョコレートを食べる浩介くんを想像する。
心の底からの笑顔で「優子ちゃん、おいしい」って言ってほしいなあ……
うん、あたし頑張らなきゃ。
そんなことを思っていると、生クリームが沸騰し始めたので、あたしが急いで火を止めて（ＩＨだけど）さっきのボウルに流し込む。
「さ、この泡立器でやってみて？」
「うん」

母さんから泡立器を受け取り、思いっきりかき混ぜてみる。
「うんしょ、うんしょ……」
意味もなく声を出しながら、ひたすらにかき回す。
「うん、いいわよ優子」
えっと、クリーム状ってどれくらいだろう？
ともかく続けよう。
うーん、結構かかるなあ……
「もっとよ優子」
「うん」
あ、でもだんだんクリーム状になってきたような気がする。
チョコレートがどんどん溶けていく。うん、もう破片はないわね。
「お、良さそうね。それじゃ、この型に流し込んで見て？　くれぐれも表面を平らにするのよ」
「う、うん……」
あたしは慎重に慎重にハートの型に流し込んでいく。
型が結構大きいので４個になった。
「はい、それじゃ冷蔵庫に入れて、１時間よ」
「う、うん……」
「その間にお昼にするわ。引き続きそのままでね」
「はーい！」
母さんに拠れば、１時間待つため時間的にもちょうどお昼にできるとか。
ともあれ、あたしは頭を切り替えて、昼食の準備をする。
父さんが、書斎から机に行く。
「おや、優子、いつもはエプロンしてないのにどうしたんだ？」
「ああうん、その……」
「優子はバレンタインよ。浩介くんのために手作りチョコレート作るのよ」
そういえば、味見の時昼食でお腹いっぱいになった後で大丈夫かな？
でも、甘い物は別腹かな？

……ともあれ、昼食を準備しなきゃ。
今日の昼食はスパゲッティ、あたしが麺を茹で、母さんがソースを作る。
この担当は気分で変わるし、場合によってはあたしが一人で全部こなすこともある。
スキー合宿前の休日には、丸一日あたしが全部家事をしてみて、母さんは「これで優子も立派なお嫁さんになれるわよ」とすごく喜んでいた。

「はーい、出来たわよー」
あたしと母さんの合作の料理も、もう数え切れないほど作ってきたけど、どれも美味しくて、父さんを満足させている。
実際あたしも浩介くんの家で料理を披露した時に、存在感をアピールできた。
……とにかく、これに慢心しないで頑張らなくちゃ。

「「ごちそうさまでしたー」」
「さ、優子、片付けたら少し休憩よ」
「はーい」
スパゲッティを片付け終わって時計を見てみる。
確かにまだ1時間は経ってないので、あたしはテレビを見て過ごすことにする。
ふとチャンネルを合わせてみると、何やら討論番組をしているのが見て取れた。

「しかしですね、やはり人類総不老ということになると、様々な産業が変革を余儀なくされる」
「ええ、私達介護士もどうなるか分かりません」
テーマは、蓬莱教授の研究についてだった。
しかし、テレビを見渡すと、肝心の蓬莱教授がいない。
「結構お昼の討論番組とかではよくあるわよ。蓬莱教授の研究は」

「へーそうなの？」
「ええ、人類の歴史さえ変えかねないものだもの」
母さんが何やら真剣な表情で言う。
「我々宗教界としてもですね、蓬莱教授のあまりの宗教への軽蔑姿勢は目に余るものがありまして。無宗教というのは個人の自由としてもですね……」
やはり、批判があるのが宗教界。
何とか牧師とかが蓬莱教授を痛烈に批判している。
「……それだけじゃないんですよ、『日本性転換症候群協会』、あの団体もトップが宗教嫌いという話です」
そう言えば、永原先生もキリスト教が嫌いとか言ってたっけ？
でも、神社に行くことが多いとは言ってたけど。
「……そういえば、永原マキノさんでしたっけ？　今年で５００歳だそうです」
「私達からすれば想像もつかない人生ですよね。５００年前の日本といえば戦国時代の前期です。信長や秀吉、家康……あるいは武田信玄とか上杉謙信といった馴染みの武将の生まれる更に前の話です」
テレビでも、永原先生の話が出てくる。
そう言えば、蓬莱教授の研究以来、マスコミの取材が増えたとか言ってたっけ？
永原先生はみだりに正体を話す人じゃないのに、やっぱりどこかで漏れたんだろうなあ……って小谷学園に行けば誰でも分かることよね。
「戦国時代もですけど、江戸時代をまるごと経験するってすごいでしょうね」
「さてここで、日本性転換症候群協会について焦点を当てたいと思います。まずは永原さんの人生、１５１８年生まれから年表にするとこんな感じです」
司会の人が話題を切り替える。すると真っ黒だったスタジオの画面に画像の表示が出る。
そこには、「１５３４年織田信長生まれる」「１８６７年江戸幕府崩

壊」のように、同時代の歴史イベントがあり、永原先生の人生は過半が江戸時代であることも分かる。
「こういう人生を我々も送れるということですかね」
「私は嫌ですねえ……」
「江戸時代とか、村の人にどう思われてたんでしょうかね？」
「そのあたりは分かりませんが、大変だったでしょうね」
あたしは知っている。永原先生はずっと江戸城にいたということを。
だけどテレビの中の人は、江戸時代、戦国時代に永原先生がどう暮らしていったのかと、あれこれと憶測で物を言っている。そのどれもが、全くの見当違いで見ていられない。
ああ、あの人達、限りある人生を無駄なことに過ごしているわと思うと、急にかわいそうに思えてきた。
ブーブーブー！
おや、あたしの携帯が鳴っているわ。
よく見ると余呉さんからみたい。
題名：テレビ番組
本文：石山さん、今テレビ見てますか？　会長について話しています。
えっと……
題名：Ｒｅ：テレビ番組
本文：はい、永原会長について的はずれなことを言っていますよね？
これでいいかな？
ブーブーブー
すぐに返信が来る。
題名：Ｒｅ：Ｒｅ：テレビ番組
本文：ええ、似たようなテーマはありましたが、当協会についての話題が出るのは初めてです。そのまま注視してください。
うん、言われなくてもそうするつもり。
題名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：テレビ番組

本文：了解しました
幸い、チョコレートの1時間までは時間がある。
「それでですね、この団体、面白いことを言っているんですね……『私達が欲しいのは女性としての扱いだから、トランスジェンダーの扱いは絶対にやめて欲しい』これどうなんでしょう？」
「彼女たちに拠れば、『私たちは赤ちゃんだって産める。老化しないということ以外、他の女性と全く同じ』と言っています」
「ふむ、これはまた面白いですね。それにしても、この団体ってどういう団体なんですか？」
って、取材しなかったの？
「年長者が多いので、すごく保守的な団体なんですよ。でもここは……日本の祭りなんかでもそうなんですが、とにかく彼女たちには祈りがない。蓬莱教授も同じです。不老を目指すと言う研究についても、神への祈りがなく、悪魔に祈っています。我々の批判についても、全く意に介さず『お前たちも俺にひれ伏す時が来る』と、彼はサタンそのものです」
さっきの宗教家がそう言う。
無宗教の蓬莱教授は神にも悪魔にも祈っていないと思うのに、どっちにしても祈っているって言うの、何か詭弁だよなあ……

「優子ーそろそろ出来るわよー」
「はーい！」
あたしは、チョコレートが固まったことを言われ、母さんの元へ。
「いい？　冷やし固まったら型を外してみて？　後は形を整えるのよ」
「う、うん……」
型を外し、少しだけ形を整える。
見事なハート型のチョコレートが出来た。
「味見してみて？」
「うん」
あたしはパクっと一口食べる。

よく見ると、母さんも食べている。
「うん、ちょっと甘すぎるような気がするわ」
「いいのよ、バレンタインデーでしょ？　これくらいがちょうどいいわよ」
確かに、甘々な日になるとは思うけど。
「う、うん……」
「じゃあ、今度は優子が1人でもう一回作ってみて？」
「うん」
母さんに言われたことをよく頭の中で復習する。
板チョコとカカオ豆濃度のあるチョコをまず大きめに切り、そして万遍無く切り刻む。
この時、２種類のチョコレートをうまく混ぜながら切るといい。
ボウルに移して生クリームを沸騰させる。
テレビでは、蓬莱教授の研究の他、ＴＳ病について医者にインタビューしている。
そして、話題は再び協会に戻る。
「でですね、協会の副会長比良道子さんによりますとですね……創立が何と１００年前なんだそうでして、意外と古くて……写真にも残っているんです……でですね、えー、驚くべきことに会長や副会長を始め、今と顔が全く同じなんですよ。しかもですよ、この比良さんという方、１００年前の創立メンバーなんだそうです」
「１００年前に７７歳だった人が今もこうやって生きているというのは驚きですよね」
さっきの介護士の人、この人はどちらかと言うと自分の仕事に対する危機感から話している。
「ええ、会長の人の５００歳はイメージが付きませんが、この人は我々の近い祖先と同世代ですからね」
「でこの比良さんという方、初代内閣総理大臣の伊藤博文氏の１歳年上で、チャイコフスキーと同級生と」
「それでも、永原会長と比べると短い人生ですよね」
テレビでは、相変わらず、あたしたちに取材もなしに好き勝手言っ

ている。
　あーいや、比良さんに取材してるから取材はしているのか。
「面白い話を聞きました。比良副会長はですね、今存命の人では３番目に年上なんですよね。１番というのは永原さんで、２番目に年上の人が居るんですが」
「ええ」
「比良さんはですね元水戸藩士ということで、武士階級なんですね。実は２番目に年上の人が農民階級だということで……まあ５００歳の永原会長はともかくとして……ま、そういう経緯で副会長が決まったそうです」
　司会役のアナウンサーが、あの時永原先生があたしに説明してくれたことと同じことを言う。
「まあね、明治どころか江戸時代生まれの人が何人もいる集団ですからでしょうけど……こういう考えで会長副会長を決めて、しかも１００年間この体制が変わってないというのはですね」
　また宗教家の人。
　何よこの人……何も知らないで言いたい放題。
　余呉さんだって正会員で統括支部長を務める協会の最高幹部だし、永原先生は硬直化しがちな協会を何とかしようとして、あたしを正会員に入れたりしているのに。
　会場もなんかそんな雰囲気だし、蓬莱教授はともかくあたしたち協会員は一般人だってたくさんいるのに。
　ブーブーブー
　また携帯が鳴っている。
　今度は永原先生から。
　題名：今見ている番組
　本文：もし、好き勝手なことをこれ以上続けるようなら、抗議文をホームページに掲載します。それでも改まらないなら今後出入り禁止にします。石山さんはどう思いますか？
　うん、返事は決まっている。
　題名：Ｒｅ：今見ている番組

本文：あたしとしてももちろん賛成です。的はずれな憶測を並べて根拠のない誹謗中傷はあたしとしても許せません。
よし。
すぐに携帯が鳴る。
題名：Ｒｅ：Ｒｅ：今見ている番組
本文：良かったわ。これで協会正会員全員の賛成が得られましたので、今後こちらからの抗議文と訂正報道、更にこの番組に出ている牧師の謝罪がない限り、一切出入り禁止にし、報道した場合にも強い抗議文を出すことにします。
どうやら、永原先生、かなり怒っているらしい。
もしかしたら、表面だけ紳士的にしたのかもしれない。
「えー今日は蓬莱教授の不老研究と、その元となったＴＳ病、さらにＴＳ病患者の団体についての討論でした」
テレビ番組が終わる。
ともあれ、難しいことは永原先生たちに任せておけばいいかな？
ともあれ、今は浩介くんへのチョコレートが大事だわ。
あたしはバレンタインチョコを完成させる。
すかさず母さんから次の課題を与えられた。
「いい？　梱包、包装はとっても大事よ。最初の見た目で、印象が違っちゃうわ」
「うん」
でも、これはやったことがあるから、あたしにとっては苦労しなかった。
これで、後はバレンタインを待つだけになったわ。是非成功させたいわね。

# バレンタイン当日

今日は待ちに待った2月14日、浩介くんにバレンタインデーチョコを渡すために一生懸命頑張って作った手作りチョコレート。
包装も、チョコレートに負けないくらい、かわいらしく作ったつもり。
あたしは期待に胸を膨らませて通学路を歩く。心なしか、女子も男子も緊張している気がする。
ガラガラ
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう。はいこれ」
桂子ちゃんがあたしにチョコレートを渡してくる。
「え？　あ、うん……はい」
一応「義理チョコ」というのもあって、女子同士でも渡すらしい。
そのことについて知った時には、久々に虎姫ちゃんやさくらちゃんからも「優子ちゃんまだまだだね」と言われた。女の子の身体でチョコレートを貰うのはやっぱりまだ慣れなくて、一瞬動揺してしまった。
ちなみに、あたしの義理チョコは手作りではなく、買ってきたチョコレートを適当に包装し直しただけ。
ちなみに、男子に渡しちゃうと浩介くんヤキモチ妬きそうだから男子向けの義理チョコは用意してない。
「ふふっ、ありがとう」
あたしは桂子ちゃんとチョコレートを交換する。
教室を見渡すと、浩介くんはまだいない。
あたしはその間に、クラスの女子みんなに義理チョコを渡すことにする。
「はい、恵美ちゃん」
「おう、気が利くじゃねえか。ほれ私からも」
「はい、さくらちゃん」

「あ、ありがとうございます……はいこれ私から……えっとあの……私も先輩に渡していきます」
「頑張ってね」

「はい、龍香ちゃん」
「お、ありがとうございます！　はい、私からのチョコですよ」

「はい、虎姫ちゃん」
「優子、ありがとうね。はい」
　ちなみに、クラスの女子の義理チョコを買うのにかかった時間より、浩介くんへの本命チョコを作る時間のほうが長かった。
　まあ、同性に受けてもいいけど、何より男の子……浩介くんに受けることのほうがずっと大事なことだし。
　あうー、緊張しすぎて落ち着かないわ。
「はぁー」
「優子ちゃんさっきから溜息ついてるね」
　桂子ちゃんがあたしのおかしなところに気付いて声をかけてくれる。
「う、うん……ちょっと不安なのよ」
「あー篠原でしょ？　本命だもんね……で、どう作ったの？」
「うん、ちょっと甘めに作ったわ。男子は女子ほど甘いもの好きじゃないから不安だったけど、バレンタインデーだし」
　女の子になって、唯一味覚が変わったのが、「甘いもの好き」になったこと。でも、今はそれが普通になっちゃっている。
「ま、なるようになるわよ」
「そうだといいけど……」
　まずくても一生懸命作ってくれれば大丈夫というのはまやかしだと思う。
　美味しくないと、浩介くんの印象も悪くなっちゃう。
　今はまだ良くても、結婚後が大変……って、また結婚のこと考えちゃってる！

いくら「まだ早い」と思っていても、浩介くんとの家庭を想像してしまう。
そう言えば、赤ちゃん……産んだらどうなるんだろう？
あたしと浩介くんがもし不老でも、赤ちゃんがそれを望まなかったら？
やっぱり不安の種は尽きない。
それに出産する時ってどんなんだろう？
あたしはこれまでも女の子らしく、女性らしくあろうとしてきたけど、多分出産ほど女性らしい行動はないと思う。
言うなれば、あたしが思うのに、出産は究極的に女性なこと。
それは夏の海の時にも、まだ身体の本能が男のままで悩んでいたあたしに、荒療治として永原先生が言っていたくらいだし。
ガラガラ……
「ふう、間に合った」
浩介くんが全力疾走で教室に入ってくる。
こんな時こそ甘いもの――
「はーい、ホームルーム初めますわよ」
あたしが行動する前に永原先生がホームルームの開始を告げた。

「あ、あの……浩介くん」
1時間目が終わった後の休み時間、次の授業の準備を終えた後、あたしは浩介くんにチョコレートを渡すために手を後ろにして隠す。
「えっと、優子ちゃん……その……」
「うん、浩介くん、あの……これ……」
クラス中があたしたちに注目していて、恥ずかしい。
1時間目の休み時間にチョコレートを食べている女子もいるけど、彼女たちまであたしに注目している。
あたしはゆっくり、本命チョコの入った箱を浩介くんの前に出す。
「こ、これ……浩介くんに……」
うー、女子同士で渡し合うのとは訳が違うわね。
「あ、ああ……ありがとう……」

「ほ、本命だからね……ちゃんと食べてよね……！」
「義理だからね」なんていうツンデレセリフもあるけど、今のあたしと浩介くんの状況から言えば、それは完全なる悪手。
ちゃんと素直に本命だと言って、気を引くのが正しいと思う。
「うっ……面と向かって言われると何だかなあ……」
「お昼休み、是非食べてね」
「お、おう……」
浩介くんがぎこちなく返事する。
「一生懸命作ったんだよ」
「うん、俺、とっても嬉しいよ」
「浩介くん……」
「優子ちゃん……好き……」

「鬱だ……死のう……」
「おいよせ高月！　気をしっかり持て！」
あたしと浩介くんで見つめ合っていたら、高月くんが憂鬱になってしまっている。
あまりの甘々な空間に、耐えられなかったのかもしれない。
ちょっと、自重したほうがいいかな？

お昼休み、あたしは久しぶりに浩介くんと一緒に食べた。
お昼一緒に食べるというのは学校では意外に少なかった。
食べるスピードや、今日の食べたい気分の違いなどもあってそれぞれの自由ということになっていた。
学校内ではご飯を食べ終わってからや放課後に教室や天文部いちゃつくことが多かった。
でも、今日くらいはと一緒に食べることになった。
「よし、今日は普通盛りにする」
「あ、うん。そうだよね」
いつも大盛りの浩介くんが、今日に限っては普通盛りだという。
もちろん、あたしの作ったチョコレートを食べるため。

「はい、カレーお待ち。今日はちょっと量を少なめに頼む子が多いわね」
食堂のおばちゃんもそんなことを言っている。
そう、今日はチョコレートがあるから。よく見ると食堂でチョコレートをデザート代わりに食べている子もいる。
というか、チョコレート食べてるの何故か女子が多いような？
「なあ、女子同士で渡してどうするんだろうな？　百合百合ってわけでもないんだろ？」
浩介くんが言う。
確かに、それはあたしもちょっと不思議だった。
「うーん、単に甘いもの食べたいだけなんじゃないの？」
あたしが要領を得ない理解度なりに下した結論はこうだった。
女子は基本的に甘いものが好きだし。
「なるほどねえ……」
どうやら、浩介くんも思うところがあって納得してくれた。
浩介くんが、初めからかなりゆっくり食べてくれる。
最近になって、ここの食堂の味の良さも分かってきたと言っていた。
「俺、以前よりゆっくり食べるようになって良かったかなって思えるよ」
「へーどうして？」
「うん、確かに人生の時間には多かれ少なかれ限りがあるけどさ。食べる時間って貴重じゃない？」
「う、うん……」
あたしも、それにはちょっと同意かもしれない。
やっぱり食べ物はちゃんと食べないといけない。
それでも、一口の大きさが違いすぎるから、食べ終わるのは浩介くんが先、特に今日に限っては量が同じだったから。
「じゃあ俺、トイレ行ってるよ。トイレから出たところで待ち合わせな」
「うん」

こうやって、あたしや周囲の気配りも浩介くんは忘れない。
あたしの好きなこと、自分の長所、全部わかって浩介くんが行動してくれていることが、とても嬉しかった。
あたしが食べ終わると、言われた通りの場所を目指す。
「ごめーん、待った？」
「ああいや、大丈夫だぞ」
浩介くんと教室まで戻ると、多くの人が貰ったチョコレートを食べていた。
浩介くんが椅子をあたしの机まで持っていき、あたしのバレンタインデーチョコを置く。

「お、いよいよ本命のお出ましだぜ」
「どうなるんでしょうかねえ？　ワクワクしますよ」
「優子ちゃん、頑張って」

どうやら、クラス中に注目されてしまっているらしい。
浩介くん、喜んでくれるといいけど。
そんなことを思いながら、浩介くんが慎重に箱を開けていく。
「おー、手作りチョコレートだ！」
ハート型の大きな手作りチョコレートが４個。
「ど、どうかな？　食べてみて？」
浩介くんがゆっくりとハートのチョコレートを口元に持っていく。
「うん、一口……おお、うまい！」
口に入れた瞬間、浩介くんがニッコリと笑う。
どうやら、とても喜んでくれたみたいね。
「はむはむ……んー、優子ちゃんみたいに甘いチョコレートだね」
「えへへ……ありがとう……うふっ……」
あたしみたいに甘いチョコレート。あたしの性格が反映されてるってことね。
ともあれ、浩介くんが喜んでくれてよかったわ。
「はむはむ……な、なあ優子ちゃん。優子ちゃんも食べるか？」

「え!?　こ、これは浩介くんのために作ったもので……」
「ほーら」
浩介くんが2個目のチョコレートの半分を口に挟み、こちらに向けてくる。
「あうっ……」
み、みんな見てるのに、浩介くん大胆……
でも、あたしも頑張らなきゃ！
意を決して、あたしも口を近付ける。
「ぱくっ……」
すると浩介くんが引っ張るように口を近付けてくる。
口と口とが徐々に近付いてきて、あたしの心臓がドキドキバクバクしていく。
「んっ……」
そして、全て食べ終わると、真ん中の地点で唇同士が触れ合う。
「ちゅっ……」
「はぁ……浩介くん……好き……」
「お、俺も優子ちゃん大好き……」
チョコレート味の甘いキスに目がトロトロになりながら、お互いもう何回目かもわからない愛の告白をする。

「な、何だよくそー！　バレンタインデーなんてなくなっちまえよー！」
「うわあああああああああんんんん!!!」
「チョコレート、誰かくれえ!!!　義理でいいからあ!!!」

高月くんたちの嘆きの声を糧に、あたしたちはチョコレートで同じことを繰り返す。
そして最後の一個。
「ほらあ、優子ちゃん」
「う、うん……」
一口チョコレートが口の中で溶けると、自然と前に口が進む。

口の中が甘いチョコレートで満たされ、浩介くんの顔が近くなる。
はうー、癖になっちゃいそうだわ。
毎日がバレンタインデーだといいのに。
そして、またハートの真ん中で浩介くんと唇が合う。
「浩介くん……あたし、我慢できないよお……」
「俺も……」
「ちゅっ……」
「んっ……じゅる……れろっ……んんっ……！」
チョコレートで染まった口内の唾液が混じり合う、いつもより甘いキス。
ここが教室でみんなが見ているとかそんなことはどうでも良かった。
あたしと浩介くんが幸せなら、もうそれでいい。
「ぷはっ……」
ディープキスしたときに流れる唾液の糸がほんのり茶色く染まっている。
もう、浩介くんから逃げられない。
何もかも、浩介くんが好き。浩介くんのものになりたい。

「うわああああああああああああああ!!!　こんな不平等な世の中なんて大っ嫌いだあああああああああああああああ!!!」
「バレンタインデーなんて、消えてなくなってしまえええええええええ!!!」
「篠原浩介えええええ!!!　呪われろ!!!　今すぐロッカーに小指ぶつけて死ねえええええ!!!」

「あ、優子ちゃん……」
「うん、やめようか……」
浩介くんとあたしが、教室で耐えきれずに叫ぶ男子の声を聞いて、理性を取り戻す。
そうだった、他の人も居るのに、大胆すぎたわね。反省しないと。

チョコレートも全部食べちゃったし、残りの休み時間は各自自由ということにした。
「いやあ、優子さん大胆でしたねぇ！」
龍香ちゃんが真っ先に話しかけてきた。
「そういう龍香ちゃんはどうなのよ？」
「もちろん、愛しの彼氏の家でさっきと同じことしますよ！　そのあとはむふふふふっ……きゃー！」
「あはは……」
龍香ちゃんがはしゃいでいる。
時折、龍香ちゃんが羨ましく思うことがある。
あたしも、浩介くんともっと触れ合いたいと思うこともある。
「でもさ、あんまりやりすぎるのもよくないわよ。他の男子たち、ストレスで死にそうよ」
「あ、うん、桂子ちゃんごめん……」
今度は桂子ちゃんが話しに乱入してくる。
よく見ると、「負け組男子」たちがうなだれている。
中には机に突っ伏して死んだ魚の眼をしている人までいる。
「篠原のことが好きなのは分かるけど、露骨に他の男子を差別するのもよくないわよ」
「はい……」
やっぱり桂子ちゃんには敵わないわね。
というか、恋する男子の気持ちって、あたしもそこまで詳しくないような……独占欲とかは分かるけど。
「ま、私らはいいバレンタインデーになりますよ」
「そうだといいわね、優子ちゃん、篠原以外の男子には？」
「ああうん、嫉妬しちゃうかなと思ってあげてないわよ」
「そう……それがいいかもね」
バレンタインの昼休みが終わる。
「はーい、今日は先生からみなさんにバレンタインデーチョコレートですよー」

そして放課後のホームルームの終わり、永原先生が１６個入りのチョコレートを2箱取り出し、一人一個で配り始めた。
「なんか太っちゃいそう」
「うんうん、明日の体重計が心配だわ」
女子たちからそんな声が聞こえてくる。
あたしは……うん、大丈夫だと思う。
栄養は胸に行くし、体重重いのは殆ど気にしてない。
「はい、石山さん」
「ありがとうございます先生」
はむっ……
うん、美味しいわね。
あたしのチョコレートよりは甘さ控えめって感じ。
「そう言えば浩介くん、あたし以外の女子からはもらった？」
「ああいや、別にもらってねえな」
浩介くんがそっけなく答える。
「そう……じゃあ天文部行こうかな？」
「おう」
浩介くんにはあたしがいるということも、あたしには浩介くんがいるということも、学校中に知られている。
浩介くんは、あたしから貰えればそれでいいらしい。
１００の義理チョコより１の本命チョコとはよく言ったものね。
天文部に行くと、既に浩介くんが鍛えていた。
テーブルにチョコレートが3個あり、そのうち1つは封が明けられて空っぽになっている。
「私から皆様へチョコレートですわ」
「はっはっ、俺、義理チョコもらっちゃった」
浩介くんが豪胆な様子で言う。
ちょっとだけヤキモチ妬いてもいい場面かもしれないけど、まあ、わざわざ「義理」と言う辺り大丈夫そうね。
「さ、石山さんと木ノ本さんもどうぞ」
「は、はい……」

坂田部長に言われて封を開ける。
すると、柔らかそうなチョコレート2個が目に入る。
「いただきます」
あたしと桂子ちゃんが食べる。
む、結構カカオ豆が多そうな感じだわ。
「さあ、天文部の活動をしますわよ。今年度も後1ヶ月半ですが、悔いの無いように行きますわ」
「はーい」
あたしと桂子ちゃんが返事をし、今日も平常通り天文部の活動が始まった。
この後浩介くんとあたしは家族から義理チョコをもらった。
女子の友達が増えたこと、何より浩介くんにチョコレートを渡せたことで、去年よりも、いや、今までのいつよりも圧倒的に充実したバレンタインデーだった。
少女漫画で予備知識を得ていたとは言え、好きな男の子に渡すチョコレートがこれだけ緊張するとは思わなかったわ。
やはり、実際に実行し、結果を出さないとその本当の意味を知ることは難しいわね。

## 期末試験と進路指導

２月が過ぎ、季節は３月に入った。
坂田部長も進学先の大学が決まり、最後の高校生活と言わんばかりに、再び天文部で部活に入り浸っている。
最後は後期期末試験で成績が決まるわけだけど、あたしはいまいち身が入らない。
他の生徒達は来年の受験に向けての登竜門としての役目もあるし、期末試験後には進路指導というのも控えている。
今のところ、あたしと浩介くんは大学の所属研究所までは決まっているけど、大半の生徒はそこまで決まっているものではない。
そんな中で、将来の職業を決めなければいけない。正直無茶な話だとも思う。

「不老研究を成功させるまでは、蓬莱教授の研究所にお世話になろうかな？」
「そうだな、蓬莱さんとしても、その方がいいだろう」
幸いにも、蓬莱教授は資産家でもある。
あたしたちを養うくらい訳ないだろう。
でも、そうも言ってられない。浩介くんのためにも研究をいつか成功させなきゃいけないし、そうなったらどうしよう？
うーん、まあ、なるようになるかなあ……
「ともあれ、研究が成功するか分からねえからなあ……」
「そうよねえ……どうにもならないわよね」
場合分けするという手もあるけど、それだと組合せ爆発しちゃいそう。
ともあれ、このあたりは永原先生とも相談したい。
そう言えば、永原先生も何て言うだろう？
以前は協会の会長としては歓迎だけど、教師としては反対と言っていた。
あたしが決意を示した時もそう。何処か残念そうな顔で言ってい

た。
「にしても、期末試験どっすっかなー？」
「どうするって、勉強するしか無いでしょ？」
「いやそうなんだけどよ、何かモチベーションがあがんねえんだよなあ……生物以外」
浩介くんはどうも勉強のモチベーション不足に悩んでいた。
目的意識がないと勉強のモチベーションが上がらないと言うが、明確に目的意識がありすぎるため、蓬莱教授の研究分野とは関係なさそうな科目、特に社会系の科目に全く身が入らないという。
よく考えれば、今の段階でどこの大学に進学するか決まっているのはあたしたちくらいで、あたしたちはちょっとクラスに疎外感を感じている。
もちろん、そんなことは出さないし、みんなあたしたちに普通に接しているけど。
試験前の日々、3年生の先輩たちは卒業や大学への進学へ向けての準備と何かと年度末は忙しい。

「木ノ本さん、天文部、後はよろしく頼みますわ」
「はい、部長」
そんな中で、坂田部長は余裕の表情を見せている。
4月から坂田部長が通うことになる大学はここからは少し遠い場所の都内の大学。
通学中ラッシュ時に当たるのがちょっと辛いかもと言っていた。
ともあれ、あたしたちは今日も天文部の活動を始める。
最近では、ＪＡＸＡも少し面白くなってきたし、来年からは浩介くんもこっちによく来てくれるといいかな？
「来年の1年生の子、来てくれるといいわね」
「どうだろう？」
「私が部長で、優子ちゃんもいると宣伝すれば、男子はいっぱい来るかもよ」
「なっ！　木ノ本！　俺、それはなんか嫌だ……！」

「えー、どうしてよ？」
桂子ちゃんが不思議そうな顔をする。
「桂子ちゃん、やっぱりまだまだ男心が分かってないわね」
「……どうせ誰も優子ちゃんを取らないでしょ？」
「桂子ちゃん、男の子の独占欲はそんなものじゃないのよ」
「うっ……」
浩介くんも気まずそうな表情をする。
桂子ちゃんが「優子ちゃんはまだまだ女子力が低い」と言えばあたしは、「桂子ちゃんはまだまだ男心がわからない」と言う。
この会話は今でもよく行われているが、嫌でもあたしと桂子ちゃんの違い、同じ美人で可愛い女の子でも、生まれつきの女の子と、ＴＳ病での女の子の違いが強調されてしまう。
浩介くんとしても、それは時折「優一だった頃のあたし」を思い出してしまうのだという。
「あ、ゴメン、昔のこと思い出しちゃった？」
「う、うん……」
浩介くんがちょっとうつむいてしまう。
あたしは今でこそか弱い女の子になったけど、優一の頃は浩介くんをいじめていた。
やはりどうしても、1年足らずの月日しか経っていないから、そのことを頻繁に思い出してしまう。
浩介くんは以前、「今では最高の贈り物だけど、石山優一と同じクラスだと決まった時は最悪な気分だった」と言っていた。
多分、他のクラスメイトもそうだったと思う。
「でも、今は優子ちゃんと同じクラスでよかったと思うよ」
「うん、ありがとう」
このやり取りも何度かある。
「ふふっ、本当に、石山さん女の子になってから、学校全体が変わりましたわ」
「え!?　学校全体ですか？」
確かに、クラスは大きく変わったとは思うけど……

「ええ。特に石山さんと木ノ本さんが癒しになってましたわ」
確かに、あたしが極めて珍しいＴＳ病になってから、常にあたしと桂子ちゃんは一緒に行動すると注目の的だった。
「そう言えば、ミスコンの時、永原先生が出ようと思ったのも、あたしを見てだったっけ？」
あたしが思い出しながら言う。
浩介くんや桂子ちゃん、坂田部長は知らないのに。
「あーいや知らない。でも、そんな感じがするな」
「ええ、私もそう思いますわ。普通先生が学校のミスコンに出るなんて、考えられませんもの」
そして、永原先生がミスコンに出るようになって、小谷学園の自由な校風がより一層強まったという。
しかも「先生がミスコンに出る学校」ということで一部ではちょっと有名になったらしい。
しかもそれが、日本性転換症候群協会の会長でもあり、御年５００歳ながら、生徒よりも若く見える美少女とあれば否が応でも注目は集まる。
小谷学園が自由な校風であることは、幸子さんの地域まで轟いていたくらい有名なことだったが、永原先生のミスコン出場で、それはより強まった。
しかも、文化祭の時の永原先生は制服姿で生徒に扮していたのだからなおのことだ。
「永原先生の制服姿、また見たいわね」
そんな言葉がポツリと出てしまう。
それくらい、見事な着こなしぶりだった。
「そうですわね。初めてみた人は、誰も先生とは思わないでしょう」
というか、あまりの溶け込みぶりに小谷学園の生徒たちの間でも最初は永原先生だと気付かなかったくらいだし。
「……今までは小谷学園の自由と言っても、自由をどう使っていいかわからない人が多かったですわ」
中学校から色々な校則が出てくるわけだけど、小谷学園にはその手

のものに乏しく、自由の使い方を知らない人も多いという。
「自由をうまく使いこなせない？」
浩介くんが疑問に思ったように言う。
確かに結構難しい問題。
「昔、北朝鮮の強制収容所に産まれて、そこから脱出してきた人が言ってましたわ。『最悪の環境から逃げてきて、ようやく自由を手に入れたけど、何もかも看守に決められていた時とは違い、住む場所や食べるものなど、自分で決めなきゃいけないのが大変でした』と」
「へえ、贅沢な悩みねえ」
桂子ちゃんが関心して言う。
「第三者目にどんなに異常な環境でも、常態化してしまえばそれが普通に見えてしまうものですわ。もし、ＴＳ病患者だけの閉鎖空間があったとしますわ。そうしますと、そこの女性たちも、『人とは女しかいなくて老化しないのが当然』と思いますわ」
坂田部長の思考実験は荒唐無稽な話。
でも、そんなことを思ってしまうくらい、人間の適応力ってすごいのかもしれない。
「人間って適応力すげえんだな」
浩介くんも同じことを、あたしを見ながら言う。
「え!?　あたし!?」
「そりゃあそうでしょ、優子ちゃん……あんなに乱暴だったのにこんな乙女になっちゃってさ」
桂子ちゃんがまじまじと言う。
「ええ、私もそう思いますわ」
「俺も……今の優子ちゃん、男だった頃とホント正反対だもんな」
「えへへ、ありがとう……」
あたしの頑張りを、みんな褒めてくれる。
女の子らしい女の子になりたい。
特に、「優一とは正反対」と言われるのは、一番嬉しかった。
思えば、あたしのＴＳ病で、多くの人が救われていった。
浩介くん、永原先生、恵美ちゃんや桂子ちゃんを始めとするクラス

の女子たち、そして優一の呪縛から開放されたクラスの男子たち、そして幸子さんに、永原先生を始めとした協会のみんなも。
中でも、あたし自身が、一番救われたと思う。
そう思うと、蓬莱教授のことも、うまくいく気がしていた。

「ふう、終わったー」
「優子ちゃん、この後は進路指導だよ？」
「うん、そうだったね」
期末試験が終わり、桂子ちゃんと話す。
テストの出来は大分良かった。学校内での偏差値も大分高い。
そう、これから進路指導があって、将来のことについて、担任の先生と話し合うことになっている。
あたしたちの場合は、ちょっと立場が特殊ということで、浩介くんと一緒に3人で面談することになっている。
一時は、今後の国際社会さえ左右しかねないということで、蓬莱教授とお互いの両親も呼んで8人の面談も予定していたが、さすがに全員の予定を調整するのが難しいということでお流れになった。
コンコン
「はーいどうぞ」
「失礼します」
進路指導は、あたしがこれまでにも永原先生と使った「相談室」を使い行われている。
最後の最後、あたしと浩介くんが同時に入っていく。
「篠原君、石山さん、お疲れ様。将来の志望だけど……」
「はい」
「……今は確かに、そう書くしかないってのはわかるけどね」
あたしと浩介くんは、第一志望の所に「蓬莱研究所」と書いた。
「永原先生、あたしはどうしても、浩介くんとずっといたいんです」
「……うん、分かってるわ。石山さんがどれほどの思いで、蓬莱先生に期待しているかもね」
永原先生が、全て予定調和という感じで言う。

「でも先生、この前は――」
「ええ、でも考えは変わっていないわ。確かに日本性転換症候群協会会長として、あなたたちを送り出すことは歓迎します。でも教師として、篠原君はともかく、石山さんが佐和山大学を第一志望とすることは反対です」
やはり、考えは変わっていないわね。
確かに、永原先生もそう言わざるを得ないとは思う。
「それでも、あたしは蓬莱教授のところへ行きたいと行ったら？」
「……最終的に、私に止める権利はありません。それに、その問答は既に1ヶ月前にしていますものね」
「ああ、俺も、佐和山大学で遺伝学を学びたい。もちろん蓬莱教授のもとで、だ」
「その目的は？」
永原先生は、「分かっているけど一応」という感じで聞いてくる。
「優子ちゃんは、老いない身体でずっと生き続けている。優子ちゃんのために、何かをしたい。老いたら、いつまでも優子ちゃんを守れない……優子ちゃんと居ることが、俺にできることだから！」
浩介くんが自信に満ちた力強い口調で言う。
「……もう一つ、私が懸念していることといいかしら？」
「はい」
「もしこの実験に早期に成功したらどうするの？　何処かに就職することも考えないといけないわ」
「……うーん」
蓬莱研究所での研究実績をどう活かすか？
それによって将来の職業も決まるという。
浩介くんは何やら考えている。
「あ、あたしは、もしうまく行ったなら、ＯＬやって、あるいはその……主婦をして……そんな希望を持ってます」
「……そう。問題は篠原君、あなたよ」
「え!?　俺ですか!?」
浩介くんが面食らったように驚いた顔をする。

まさか自分に振ってくるとは思わなかったからだ。
「篠原君には、自分がどうしたいのかが欠けているわ。石山さんのことを想うのはいいけど、あまりにも依存しすぎよ」
「で、でも俺……」
永原先生の鋭い指摘に、浩介くんが明らかに動揺している。
「……もちろん、考え抜いた末でもいいわ。不老になりたいと言うのは、大きな動機よ。それは私達の中でも、これを一種の特権と思っている人がいるくらいなんだから」
「……やっぱり、俺、優子ちゃんが好きですから。優子ちゃんのこと、誰よりも愛してますから。愛する人のためなんです。例え依存だと言われても……それ以上の理由は……いりません……」
浩介くんがあたしに告白しながら言う。
あたしの顔も、かああと赤くなる。やっぱり、面と向かって言われてしまうと照れてしまう。
「そう、決意は固いわね。ならば、私から出来ることはもう何もないわね。篠原君、石山さん、頑張ってくださいね」
「「はい」」
永原先生が、どこか遠くを見つめたような感じになる。
「あのね、私、やっぱり石山さんと篠原君の関係が羨ましく思うわ」
「そうですか……」
「ええ、私みたいに、ひどい初恋じゃなくて、こんなに素晴らしい、ドラマや少女漫画のような初恋だもの」
「永原先生それって――」
「うん、石山さんも、篠原君も、過去を乗り越えたもの。私は、過去の囚われ人だから」
確かに、あたしと浩介くんの関係は、あたしと永原先生の関係以上に深い。
一番好きな異性というのもある。
でも、その過去を考えれば、それはより深い。
あたしにも、浩介くんにも「罪」がある。
それを乗り越えた恋愛、対する永原先生は、罪を乗り越えることが

出来ないまま、今に至っている。
「さ、私からの話は以上よ。教師としてはちょっと不満もあるけど、石山さんの意思を尊重するのも教師の役目よ。お疲れ様」
「はい……失礼します」
「失礼します」
永原先生から以上と言われ、これで2年2組の進路指導が終わった。
聞くところによると、桂子ちゃんはＪＡＸＡを第一志望にはしてみたけど、難しいので第二志望の「専業主婦」を目指したいという。
恵美ちゃんの志望は「テニス選手」のみとなっている。
本当の希望としては、テニスは高校や大学で引退し、普通にＯＬしつつ趣味でテニスを続けたかったらしいんだけど、周囲がプロになれとあまりにもしつこいので仕方なくそうしたとか。
龍香ちゃんはアパレル業界を目指したいという。どうも彼氏が嫉妬深いので、女性の多い職場にしたいんだとか。
虎姫ちゃんは女子サッカー選手を第一志望にはしたものの、「さすがに難しい」と考えているらしく、こちらも事務職のＯＬ志望だとか。
さくらちゃんはまだよく分からないという。野球部のマネージャーの仕事を通じて、何かそうしたことを出来ないかと探っている。
「そういえば、高月くんは？」
「あいつか？　あいつＡＶ業界とか書きやがってよ。先生固まっちゃったらしいぜ」
浩介くんが笑いながら言う。
「本当なの？」
なんか嘘くさい。
「あ、いやーさすがに嘘だよ」
「もう、浩介くん、いくら何でもそれはひどいわよ」
冗談にしてもたちが悪いわよ。
「でもよ、あいつがアホな事には変わらねえぜ。何せ『投資家』って書いたからな。とにかく、モテるために金を稼ぎまくって、女を手に入

れたいらしいぜ」
「は、はぁ……」
確かに、モテるのにお金は大事な要素だとは思うけど……
「でもよ、俺はあいつを憎めねえな。永原先生からは、『実家の医者を継ぎなさい』って言われたらしくて……特に整形外科医なら年収さえあればモテるって言われたらしくてさ。途端にやる気になったらしいぜ」
浩介くん曰く、高月くんはああ見えてかなり成績もいいらしいので、医学部は良さそうとか言っていた。
「ま、それぞれなるようになるでしょ。離れたら確かに疎遠になっちまうけどよ、俺と優子ちゃん、それに永原先生や蓬莱さんが居れば、希望の道は開けるだろ？」
「うん、そうだね……」
浩介くん、あたしも……あたしも、浩介くんが居れば……きっと幸せだから。
だからこそ、いつか訪れる結末を回避したい。
進路指導、期末試験が終われば、もう後は、試験の返却と終業式兼卒業式のみになる。
そして、あたしたちは3年生になる。

# 卒業式　前編

「よお……また、会ったな」
真っ暗闇の中、掠れた優一の声がする。
この声はもう、二度と聞くことはないと思っていたのに。
でも、どうしてだろう？　何故か懐かしいような気がするわ。
まだ、1年と経っていないのに。
「あなた……優一なの？」
「けっ、当たりめえだろうが！　自分で自分に呼ばれるとはな！」
視界が晴れてきて、優一の様子が見て取れた。
あちこちが傷だらけ、白い包帯を巻いた石山優一の姿が見える。
優一は元々「悪人顔」と呼ばれる顔つきだったのに、傷だらけになってもっとひどくなっている。心なしか、髪の毛も更に薄くなっている気がする。
そういえば、優一ってどんな顔だっけ？
後でアルバムを確認しようかな……
「……」
「あんた……いや、何か言えよ俺」
何も掛ける言葉がなく、見つめていたあたしに、優一の方から声をかけてきた。
「あなたはもう、あたしではないわ」
「違うな、俺はお前だ。いつまでもな……それにしても随分と遠くに来たもんじゃねえか……だが、俺はお前に永遠についてくるぞ」
優一が吐き捨てるように言う。
これだけボロボロになっても、まだ付いてくるつもりだという。
「どうしてついてくるつもりなの？」
「てめえのこと、『俺』を無慈悲に捨てたてめえが……気になるだけだ」
「そう……でも、今のあたしがあなた……そしてあたしの両親から貰った、『優しい人』だから」
あたしは、しっかりと「優一」を見つめながら言う。
「……そうかよ。それについては、感謝してるさ、でもよ……お前は、

俺を亡き者にして、どうする気だ？」
優一は、息も絶え絶えにあたしに問いかけてくる。
「……あたしの、新しい生活のためよ。好きな人と、一緒に暮らすの」
「けっ……それがよりによって篠原かよ、都合のいいやつだなてめえは……結局、お前は……俺は、どこまで行っても俺なんだよ……げほっ……」
優一が血を吐き、その場に倒れ込む。
もう、放っておいても死んでしまいそうなくらい弱っている。
あたしは、その様子を、ただ見つめているだけだった。助ける気持ちは全く沸かなかった。
うん、あたしは何も間違ったことはしていない。
間違いなはずはない。だって、何もかもが、うまく行っているんだから。

ピピピピッ……ピピピピッ……
2年生最後の登校日でも、目覚まし時計はいつものように機械的に音を鳴らし続けている。
「んー」
あたしはいつものように目覚まし時計を止める。
さっきの夢……本当に奇妙よね……もう二度と見たくないけど。
でもこうして夢に出てくるってことは、あたしの中にどこか「優一」の乱暴さが残っているということかもしれないわ。
もしそうなら、早急に対策を取りたい。「優子」になってまで、両親の願い、名前を裏切ることはしたくないから。
今日が終われば春休み。
あたしはハート型のクッションの上に立つ。この習慣もだいぶ身についてきた。
制服を取り出すまえに、下着選びをする。
「今日はどれにしようかなー？」
一応卒業式ということになっているし清楚な方がいいよね？
うん、この純白のにしよっと。

今日くらい清楚な格好しようかなと、スカートを折る作業をやめようと思ったけど、「例の事件」のことを思い出して、それはやめておくことにした。
あの時でさえ嫌だったのに、今浩介くん以外の男に触られたら立ち直れるかさえ怪しいし。
学校の中では、また考え直そうかな？
もちろん、あたしの髪につけるトレードマークの白いリボンも忘れない。
さっきの夢の嫌な気分を紛らわすために、あたしはぬいぐるみさんで遊ぶことにした。
本当はこういう日はぬいぐるみさんを抱きかかえながら登校したいけど、今日はさすがにやめておくわ。

「おはよー」
「あら優子、今日は卒業式だけどいつも通りなのね」
母さんもやはりそう言ってくる。
「あはは、卒業するのはあたしじゃないし。あたしはもう1年残ってるわ」
「ああうん、そうね……」
あたしも母さんも、やや苦笑気味に、自嘲気味に言う。
あたしはそんな会話をしながら、朝食を食べる。
この日の朝食もいつもの残りと米と鮭。卒業式だけどいつもの日。いわゆる「何でもない日」でしかない。
いつもと変わらない日常。でも、今がずっと続くわけではない。世間は常に変化し続けている。
そして卒業式は、小谷学園の一つの区切りでもある。
坂田部長が卒業していく。
考えてみれば、あたしの学園生活で、まともに先輩と関わったのも坂田部長が唯一だった。
あ、文化祭のミスコンの時お世話になった生徒会長の守山先輩もかな？

とにかく、来年からはあたしたちが最上級生になる。今の1年生や、来年入ってくる新1年生たちは、どんな人なんだろう？
よく考えると、あたしは後輩ともまともに関わっていなかった。
「ごちそうさまでしたー」
「お粗末さまでした」
あたしはご飯を食べ終わり、洗面所で歯を磨く。
そしてもう一度テレビのニュースを見る。ＴＳ病や蓬莱教授に関するニュースは今日もなし。
そう言えば、2月にあった討論番組のこと、まだ永原先生言ってこないわね。よほど連絡が遅れているのか、それとも無視されているのか？
「いってきまーす」
「いってらっしゃーい、鍵閉めておくからねー」
「はーい！」
このやり取りも、優一の頃から何回もしてきた。多分大学でもこのやり取りはあると思う。
来年、後一年、学校では何があるだろう？
これからのことに、期待と不安を抱きながら、電車に乗る。
駅のホームと電車の中では、相変わらずあたしは男性の視線を集めている。
うん、やっぱり注意しないと。どこに変質者が居るかわからないし。
いつもの駅を降りる、3月も終わりで地域によっては桜の季節になっている。
生徒たちも、どこか神妙な面持ちで通学路を歩いている。
今日は卒業式だし、卒業する生徒だっている。
後輩に送り出されるというわけだ。
「ふう……」
あたしは下駄箱に行き、2年生の教室に入る。
ここに入るのも、最後になる。そうだ、帰りに上履きをちゃんと持って帰らないといけないわね。

「おはよー」
「おう、おはよう優子」
恵美ちゃんが挨拶してくれる。
恵美ちゃんはこの後も、学校のテニスコートで練習するらしい。
本当にテニス漬けと言っていい。
あたしは結構ギリギリだったのか、ほぼ全員が既に教室にいた。

ガラガラ……
「はーいみなさん、ホームルーム始めますよー」
そして、あまり時間が経たないうちに永原先生の声が聞こえる。
そう言えば、来年度も、あたしの担任は永原先生になるのかな？
クラス替えがあるけど、桂子ちゃんは、浩介くんは大丈夫かな？
何かカップルになると別のクラスになるとか言われているし。
「えっと連絡事項が2つあります。1つ目は卒業式についてです。今日は兼ねての通り卒業式となりました。小谷学園では自由な校風をイメージしていますが、来賓や保護者の方などもいらっしゃいますので、その方々の迷惑にならないように、羽目を外さないようにしてください」
「「はいっ」」
クラスのみんなも、元気よく返事する。小谷学園では、何かルールで縛る時はたいてい「迷惑になります」が合言葉になる。
小学校の時にやった「人の嫌がることをしない」の延長線上ではあるものの、とても効果のあることだ。
それにしても2つ目の連絡事項って何だろう？
「2つ目の連絡事項です。えー、来年のクラス替えなんですが、我が2組は中止になりました」
「えっ……」
「どういうこと？」
「クラス替え中止？」
「じゃあうちら3年生も同じ構成ってこと？」
あたしも驚きだけど、クラスメイトたちもかなり動揺して教室がざ

わつく。
　そもそも、クラス替えが中止ってどういうことなんだろう？
「はいはーい、私の説明は終わってないわよ……クラス替えを中止した理由として、石山さんの存在があります」
　ざわつきが、少し止む。
　でも、確かに、クラス替えを中止する動機としてはあたしの事以外思い浮かばない。
「皆さんも知ってます通り、石山さんはかなり特殊な病気になっています。確かに外見はもちろん中身ももう女の子そのものですが、他のクラスの生徒たちからすると、未だに男の影がちらついています」
　確かに、あたしは隣のクラスとか全くと言っていいほど行かないし、文化祭の時くらいかな？
　ともあれ、あたしのことをよく知らない人も多いし、「優一」の印象は消えないんだと思う。
「しかし、ＴＳ病患者にとって必要なことは、女性としての扱いです。よって、石山さんのアイデンティティも考え、クラスをいじらないことにしました」
　永原先生が淡々と告げる。
　確かに、無理も無いことかもしれない。
「更にもう一つ追加すると、最近蓬莱先生の研究の影響で、私達ＴＳ病についての関心が深まっています。私は皆さんも知っての通り、『日本性転換症候群協会』の会長も兼務しています」
「また、石山さんも当協会の正会員としての仕事も行っておりますので、マスコミの取材による報道被害も懸念されます。そのため、石山さんのことをよく知っている当クラスを維持するのが妥当と判断しました」
　クラスがちょっとだけざわついている。マスコミの取材という言葉、「テレビが来るの？」というのんきな会話もあるが、実際にはそんな甘いものではない。
　そういえば、協会の正会員になったことはクラスには話してなかったっけ？

ともあれ、あたしたち2年2組は来年も全く同じクラス編成になるという特例措置が取られたのは事実。
「それでは、卒業式まで後３０分です。１０分前に移動しますので準備してください。それから……石山さんは私のもとへ来てください」
「分かりました」
思えば、今年はよく永原先生に呼び出された。
何かをやらかしたことによる注意といったものは一個もなく、最初はＴＳ病の担当カウンセラーとして呼び出されたりしてたし、協会に入ってからは協会の仕事で呼び出されることもあった。
定期的にも幸子さんの情報も入ってきて、心理的動揺はあったものの、何とか大学の単位を取れて留年を免れたと言う話を聞いた。
「あ、石山さん。この前の……2月の討論番組のことなんだけど」
「はい」
「ようやく抗議文の回答が来まして、テレビ局の方もお詫びの手紙が来ました……私としてもこれで手打ちとしたいと思います」
それにしても仕事が遅い。何回も催促したものと見受けられるわね。
「それで、問題の牧師の方はどうですか？」
「まだ回答が来てないわ」
そんなところだろうと思ったわ。
「ところで、会長、何があったんですか？」
実際の所、あまり詳しく聞いていない。
「実は取材の時、先方の方は『ＴＳ病が置かれている状況について理解を広めるためにドキュメンタリーを作る』って言ってたのよ」
「ドキュメンタリー？　でもあれ……」
もちろん、そんなドキュメンタリーがあるなら、あたしの耳にも入っているはず。
「ええ、急遽中止と言って来て、その代わり他の番組で使うと言ってきたのよ」
「……それがこの前のということですか」
何か初めから騙すつもりだった気もするわねこれ。

「ええ。困ったことに、討論番組でしょあれ。だから、ああいう無理解な人もいるのよ……というより、テレビ局としても立場上出さざるを得ないというのかな？　それに蓬莱先生の研究と抱き合わせなんて聞いてないわよ」
永原先生が困った顔をして言う。
確かに、蓬莱教授の不老研究だって、この病気の存在がなければ成り立たない代物ではあるけど、それにしたってひどい話よね。
「……私は真田の人だから、個人的には人を騙すことをそこまで責めるつもりはないわ。特に私が最初の方に生きてた戦乱の時代なんてそんなものだからね」
確かに真田家は謀略に長けてる人多い印象があるし、林間学校のときに教頭先生を撃退した時もそんな感じだったわ。
「じゃあどうして、こんな強硬な手段を？」
「ええ……協会には、私以外にも沢山の人が関わっているのよ……この前のことについては、比良さんと余呉さんが特に怒っていたわ」
副会長の決め方で牧師さんが言いたい放題してたっけ？
「そうでしょうね」
「ええ、実はね……あの時の余呉さんは８４歳と言っても寺子屋に数年通っただけで殆ど無学だったわ。だから武家の育ちとして教養のあった比良さんを副会長にしたのよ……もちろんそのこともテレビに言ったわ、それに今は余呉さんだって正会員で最高幹部だってこともちゃんと言ったのに」
永原先生は単に身分で決めたわけではないということを説明してくれる。
「それに、あの時代に生きた人なら、士族というのは重要な事なのよ。私だって４代様に士分に取り立てられるまでは無所属だったのよ。あんな無理解な言い方をするのは、人々にひどい誤解を与えかねないわ。きちんと反論していかないと」
永原先生は流浪の民だったものね。
ともあれ、協会としても、きちんとけじめは付けさせるということはわかったわ。

「石山さん、再来年、あなたは蓬莱先生と、とてつもない困難に挑むことになるわ。１８歳、１９歳の女の子にはあまりにも重荷よ。いえ、幾つもの時代を旅した５００歳の私でさえ、押しつぶされそうなほどの、ね」
永原先生がとても意味深に言う。
でも、まだ1年残っている。その間に、どれだけ時代が変わるか、ブレイクスルーを達成した蓬莱教授の研究がどこまで進むか？
そのあたりが、鍵になってきそうだ。
「分かっています。もとより、覚悟の上です」
「ええ。いい心がけよ。だけど、きっとあなたを妨害する勢力もたくさん出てくると思うわ。ええ、人がみんな、私達と同じく不老になってしまえば成り立たなくなる産業はたくさんあるもの」
「それは、分かってます。でも浩介くんのためにも――」
「ええ、今のあなたには、それだけでいいわ。まだ、世界のことはわからないものね……私だってよくわからないわよ。５００年間、時代と社会の変化を見続けても、なおね……さ、時間になったら卒業式に行きましょう」
「はい」
永原先生と別れて教室に戻る。
とにかく、明日以降大変なことになりそう。
あたしと永原先生との話について、以前はクラスメイトも興味津々で聞いてきたが、今ではいつものこととして誰も聞いていない。
協会の正会員としての仕事話を聞かせても、最初は「別のＴＳ病患者のカウンセラーをしている」と言うインパクトは強かったけど、時間とともに、みんなそんな興味が無くなってしまった。

# 卒業式　後編

「はーい、皆さん、私についていってください」
あたしとの話が終わり、時間になったら永原先生がクラスを誘導してくれる。
「「はい！」」
クラスメイトたちも一斉に席を立って永原先生についていく。
廊下には、あたしたちの他にも別のクラスの在校生たちが集まっていて、それぞれの担任の先生の誘導に従って同じ目的地……卒業式の場所を目指している。
あたしたちは、比較的秩序良く前へと進む。
卒業式は、これまでの全校集会と同様、体育館で行われる。
既に大量の椅子が並べられていて、あたしたちは永原先生の誘導通り、中央後部の方へと座る。
ちなみに、卒業生以外で席が決まっているのはクラス単位までで、そこからは自由、あたしは通路から2番目に座った。
隣には虎姫ちゃんが座っている。
まだ時間があるので、あたしは虎姫ちゃんと話すことにする。
「今年度も終わり、来年で3年生ね」
「ああ、短いようで長かったな」
「長かったのは……あたしのせい？」
「うん、優子のせい……それにしても、あの日は本当に、心臓が止まるんじゃないかってくらいに驚いたよ」
虎姫ちゃんが懐かしそうに話す。
「あの日って……倒れた日？　それとも女の子になって初めて登校した日？」
「両方だけど……石山優一が女の子になったって聞いた時のほうが驚いたね。あの石山優一が、女の子になって登校した時にはさ……姿も性格も、全然似てなかったし」
確かに、あの時はクラスのみんなが驚いていた。
「あの時は性別が変わる病気なんて信じられなかったからよ……まさ

か本当にＴＳ病が実在するんだって思ったし、見た目がまるで別人になったから驚きよ……今でも本当は優一と優子は別人なんじゃないかって思えるくらいに、ね」
実際、あたしも名前だけ知ってて、実際に自分が当事者になるとは夢にも思ってなかった。
似ても似つかない容姿、そしてこれはあたし自身がそう願ったからだけど、全くの正反対の性格になったもの。確かに、あたしがフルネームを示さなきゃ同一人物とは認めてくれなかったかもしれない。
「あはは、やっぱりそんな感じなんだ。でも、性格はほら……あたしが自分から望んで変えたことだし」
「あああわかってる。誰よりも一生懸命だもんな。やっぱり、優子ちゃんは強い子だよ」
いつかの林間学校で、あたしは虎姫ちゃんに同じことを言われた。
あの時は否定していたけど、今になって分かる。
優一の乱暴な性格を矯正すること、力を捨てる決意をすることは、とても大変なこと。
権力を振るえる立場になると、振るわずにはいられなくなる。だからこそ、優一は乱暴者であり続けた。
力を失えば、精神的にはとても苦痛になる。
だから、この病気は自殺率が高い。
でもあたしは、それを達成できた。女の子になれた。弱さを自覚し、それを補ってくれる素敵な男の子を見つけられた。
普通なら何年もかかる所を半年で達成し、自殺寸前に陥っていた「手遅れ」の患者も救ってみせた。
これだけ結果を出せば、否定したくても否定できない。
だからみんな、あたしのことを褒めてくれるんだって。

そんなことを考えている間にも、卒業式会場と化した体育館には次々と在校生が集まり、少しずつ話し声も大きくなる。
しかし、それもやがて校長先生の「まもなく卒業式を開始します」の放送で、一気に静まり返る。

「えー皆さん、本日は卒業式であります。司会進行役こと校長です。まずは、卒業生入場です。草津先生、お願いします」
割れんばかりの拍手と壮大な音楽と共に、あたし達が入場した場所と同じ所から、３年生達が入って来る。
先導には３年の学年主任で、あたし達の体育の先生でもある「草津先生」が担当している。そして、卒業生たちが最前列の空いていた席に座る。ちなみに、横に出っ張っているのは「来賓席」ということになっている。あんまり人いないけど。
ちなみに、卒業する３年生は１３０人くらいで、座るのにはそこまで時間はかからなかった。
「えー、皆さん座り終わりましたのでまずは国歌、校歌の斉唱です。皆様、ご起立ください」
一斉に全員が起立し、日本の国歌「君が代」が流れる。

「続いて、校歌の斉唱です。引き続きご起立ください」
君が代の後は、小谷学園の校歌が流れ始めた。
そしてこちらも全校生徒、先生、来賓の人も加わって斉唱する。といってもリズムはバラバラだけど。
「ありがとうございました。ご着席ください。続きまして、私校長先生から、卒業生の皆さんに向けての話ですが……」
小谷学園では、校長先生の話はいつも短い。
去年もそうだったように、今年も短いはず。
「えー３年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。小谷学園を無事に卒業されて、何よりです。大学に進学する人、あるいは就職する人様々でしょうが、これからの皆さんの人生が豊かになることを祈りまして、私のメッセージを終わります、以上」
パチパチパチパチ!!!
素晴らしいほど大きな拍手が起きる。歓声も上がっている。校長先生の短い文章の中に大きな思いが伝わってくる。
本当に、うちの学園の校長先生はいい先生だわ。あたしもお世話になったし、こうやって式典の司会まで買って出るんだから、本当に教

師の鏡というべき素晴らしい先生だと思うわね。
「えー続きまして、在校生代表スピーチとして、木ノ本桂子さん。よろしくお願いします」
「はい！」
近くで桂子ちゃんの声がし、すぐに椅子から人が立ち上がる音がする。
桂子ちゃんが壇上へと向かって歩き、校長先生に譲られて壇上へと上がる。
この卒業式でのスピーチは、来賓の人も見るとあって、容姿の良さが要求されるので、女子生徒が務めることが多い。
当初はミスコン優勝のあたしが務める予定だったけど、協会の正会員としての仕事も一応あるため、桂子ちゃんに決まった。
今になって思うと、ミスコンは卒業式での在校生代表を決めるという側面もあるかもしれない。

「卒業生の皆さん、改めましてご卒業おめでとうございます。私は2年2組の木ノ本桂子です。私たち在校生は、卒業生の皆様をはじめ、先輩方の残したこの小谷学園を継ぐために、そして小谷学園の良き伝統を守るため、私たちのみならず、4月に入って来る新1年生の皆さんにも、受け継がせていきたいと思います。以上です」
パチパチパチパチ！
桂子ちゃんのスピーチは校長先生のスピーチよりやや長めだが、それでも他の学校のスピーチよりはずっと短く簡潔な内容になっている。
こちらも先程の校長先生のスピーチ同様に盛大な拍手が送られる。
桂子ちゃんがこちらに戻る途中、校長先生が再び壇上に立つ。
「えー続きまして卒業生代表スピーチに移りたいと思います。では、卒業生代表の守山誠さん。よろしくお願いします」
「はい」
ミスコンの時にお世話になった生徒会の守山会長が立ち上がり、そして壇上に立つ。

「卒業生代表の守山誠です。私は今年度は生徒会長を務めさせていただきました。修学旅行、文化祭、受験ととても忙しい1年に加え、生徒会の仕事はとても大変でしたが、この1年は必ず大学の、あるいは将来の仕事場で役に立つと信じて、私はこの小谷学園を巣立っていくつもりです。私の話は以上です」

パチパチパチパチ！

小谷学園の良さに、この手際の良さがある。

ダラダラしていないとも言えるから、卒業式も校則の厳しい学校より「引き締まって」いる気がする。

この拍手も、そうした所に対する絶賛の意味もあるだろう。

「続きまして、卒業生から在校生の皆様へ、歌を歌います」

校長先生がそう言うと、マイクを片付けさっと引き、代わりに卒業生が全員壇上へ上がる。

卒業生たちが歌を歌うことになっていて、卒業式でよくある歌だ。

「「〜♪」」

パチパチパチパチ！

歌い終わり、卒業生がこちらに一礼する。

あたしたちの拍手も、だんだん手が疲れてきたのが、やや失速気味になっている。

「えー続きまして、卒業証書授与へと移ります。名前を呼ばれた方から壇上へとお願いいたします」

すると、校長先生が一人一人生徒の名前を呼び、名前を呼ばれた生徒が立ち上がる。去年通りなら出席番号順、つまり組ごとにあいうえお順で並んでいるはず。

校長先生が一人一人に卒業証書を渡していく。

卒業証書の本文を読むのは最初だけ、後は例のごとく「以下同文」で終わらせている。

「――坂田舞子」

「はい」

そして、あたしが天文部でお世話になった坂田部長の番になった。
「卒業証書、坂田舞子殿、以下同文」
パチパチパチパチ
小さな拍手とともに坂田部長が卒業証書を受け取る。
その後も、卒業証書の授与が続く、先程の守山会長も出てきた。

最後の一人が終わると、校長先生が疲れた顔をする。
「ふう……えー、ただいまを持ちまして、小谷学園卒業生全員の卒業証書授与が終了しました、本日の卒業式はこれにて終了となります。では、これにて解散です！」
校長先生の声とともに、卒業式が解散になる。
ここからは卒業生が在校生や来賓の人に卒業を祝ってもらう時間になる。大体は部活の先輩とか、あるいは友達の兄や姉といったパターンだ。
あたしは、予定通り桂子ちゃん、更に浩介くんと合流して坂田部長に卒業祝いをしに行く。
「坂田部長、ご卒業おめでとうございます」
「ご卒業おめでとうございます」
「短かったですけど、ありがとうございますした」
あたし、桂子ちゃん、浩介くんがそれぞれ続けざまに卒業祝いを述べる。
「ありがとうございます。木ノ本さん、石山さん、篠原さん。これで私も、悔いなく卒業できますわ」
坂田部長が円筒形の卒業証書を持ってニッコリとほほ笑む。
「さあ、私は他に用事がありますので、皆さんは他に祝うべき人のもとへ行ってください」
「ああいえ、あたしはもう特にいません」
「俺も」
「私も」
守山会長にも挨拶しようと思ったけど、大勢の人だかりができていたので止めておく。

「……そうですか」
「じゃあ、あたしたち、教室に戻りますね。坂田部長、短い間でしたが、ありがとうございました！」
「「ありがとうございました」」
「ええ、来年は皆さん3年生ですから、よろしくお願いしますわ」
他の場所では泣き声も聞こえてくるけど、あたしたちは特に涙は見せずに坂田部長と分かれる。
短い間だったけど、よくあたしの相談にも乗ってくれたし、今生の別れになるかもしれないけど、もし機会があれば、またいつか会いたい人ね。
ともあれ、あたしたちは教室に戻る。
運動部の生徒は、恵美ちゃんや虎姫ちゃんを含め、まだほとんど戻ってきていない。
ともあれ、時間はまだある。あたしは浩介くんと雑談しながら他の生徒、そして永原先生を待つことにした。

「はーいみんな揃ってる？　……問題無いみたいね。じゃあ、２年２組最後のホームルームを始めます」
といっても来年もこのメンバーなんだけどね。
「春休みの注意点ですが、夏休み、冬休み同様に、羽目を外しすぎないようにくれぐれも気を付けてください。また、来年の始業式ですが、まずは一旦クラスの振り分けを確認し、決められた教室と座席で待機してください……教科書の配布も行います。連絡事項は以上です、道中気をつけて帰ってください。解散！」
こうして、あたし達の２年生としての１年はあっさりと終わった。

「ねえ浩介くん、一緒に帰ろう？」
「おう」
浩介くんと一緒に帰る。既にロッカーの中の教科書類は全て家に持ち帰っていて、後はこの上履きを持ち帰ればいいだけ。
ロッカーに入れそうにならないように注意しながら、あたしは上履

きをカバンの中に入れた。
浩介くんと合流し、外に出ると、胸に花を付けた卒業生たちの姿も見えた。
でも、今は浩介くんとの時間、卒業の余韻はもう無い。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
「来年、俺たちどうなるかな？」
来年、あたしたちもあの卒業生見たくなるのよね。
「どうって……そうねえ……大学も決まっちゃってるしね」
「ああ、蓬莱さんのことだよ。テレビではバッシングもあるしさ……俺たち、言い方悪いけど裏口入学だろ？」
浩介くんが不安そうに言う。
「裏口ねえ……ＡＯって体裁は取るわけだし、そこまで気にしなくても良いんじゃない？」
「でもよ、やっぱ教授の個人的研究っていうのは――」
「浩介くん、これは浩介くんとあたしが、ずっと一緒に暮らすためのものよ。罪悪感を感じちゃだめよ」
あたしは努めて冷静に言う。
「うー、そうは言ってもなあ……」
浩介くんが納得いかないという表情で言う。
「あたしね、浩介くんのそういう真面目なところ大好きだよ」
「うっ！」
自然と出た言葉に、浩介くんの顔が赤く染まる。
多分、あたしも真っ赤だと思う。
「でもね、あまり悪い方向に追い詰めるのはよくないと思うの。身の安全を守るならそれでいいわ。でも、これはストレスがたまっちゃうわよ」
「う、うん……そうだよな」
浩介くんが楽な表情をする。いつか折り合いをつけてくれるといいんだけど。
ともあれ、あたしたちはいつもの通学路を抜ける。途中にはあたし

が運ばれた病院も見える。
いつも見ているけど、今日が卒業式なせいか、少しだけ懐かしい気分になった。

「それじゃあ、また会おうね」
「うん」
駅で電車が逆方向の浩介くんと別れる。
浩介くんの方向の電車が先に来て、あたしは一人家路につく。

「ただいまー」
「優子、おかえりなさい。卒業式どうだった？」
「うん、無事に終わったよ」
「そう、良かったわ」
こんな風に、母さんとするやりとりもいつも通り。
「じゃああたし、ちょっと休むから」
「うん、手伝って欲しいことがあったら言うわね」
「はーい」
あたしは自分の部屋に戻り、お人形さんで着せ替えごっこをする。
春の服になっていたお人形さん、桜の木の模型を使って、花見をしている設定。
そんな感じに残りの一日を過ごし、あたしは春休みに入った。

# 幕間　ここまでの小説に出てくる歴史上の人物

第六章に入る前に、一旦ここまでに出てきた歴史上の人物（実在）についてまとめてみました。

なので、読まなくても物語に支障はありませんが、永原先生のキャラクター設定も大分溜まってきたので（当初はこんなに大きな役柄や設定ではなかったのですが）一度復習してみるのもいかがでしょうか？

真田幸綱／真田幸隆／真田源太左衛門／真田弾正忠（１５１３～１５７４）

永原先生が鳩原刀根之助と名乗っていた時代の主君に当たる人物。信濃の小豪族で海野氏の支流とされている。永原先生の５歳年上で弟の矢沢頼綱は永原先生と同い年。

永原先生は、元々天文２年（１５３３年）より５年間真田家に仕えており、役割は伝令役の足軽だった。また、小さな小規模争いにも参加していた。

天文７年（１５３８年）、永原先生はＴＳ病に倒れ村より逃亡、天文１０年（１５４１年）には武田信虎が諏訪頼重・村上義清と同盟を組んで海野氏を滅ぼすために侵攻を開始。

これを海野平野戦いといい、この時真田幸綱も上野の長野業正を頼って逃亡、永原先生がほとぼりが冷めて領地に戻った時には、既に主君は村上義清に代わっており、永原先生がＴＳ病に起因する最初の罪悪を抱くきっかけとなってしまう。

その後、武田信虎が息子の武田晴信に追放されると、真田幸綱は武田に仕えるようになり、村上義清への調略に参加、一時は砥石崩れによる大敗も遭ったものの、天文２０年（１５５１年）には村上義清より旧領を奪還し、義清は長尾景虎を頼って越後へと逃れている。

当時ＴＳ病は不吉とされてすぐに殺されてしまっていたため、永原先生は真田家へ帰参できず、「柳ヶ瀬まつ」と名乗って村娘の一人になっていた。

永原先生は武田家に仕える以前の真田家に仕えており、「弾正忠」ではなく通称の「源太左衛門」の方を用いている。
永原先生にとって、真田家は自らの罪の象徴であるとともに、心の拠り所でもあり、物語内でも「私は真田家の人間」と度々言及している。

武田晴信／武田信玄／武田太郎／武田大膳大夫（１５２１～１５７３）
ご存知武田信玄。父晴信を追放後、川中島の戦いで上杉謙信と死闘を演じ、三方ヶ原の戦いでは徳川家康を破るなどの活躍をしたものの、志半ばで病死した。
「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という言葉は有名。
父晴信を追放した他、嫡男に謀反の疑いをかけて切腹させる、北条・今川と結んだ三国同盟やその後に結んだ徳川家との大井川同盟や、織田家との同盟も破るなど、不義理な人物でもあり、上杉謙信にはかなり嫌われていたらしい。

真田信綱／真田左衛門尉（１５３７～１５７５）、真田昌輝／真田兵部丞（１５４３～１５７５）
直接には言及されていないが、長篠の戦いで戦死した真田昌幸の兄２人。
永原先生はこの時にも、何もできなかった自らを嘆いている。武勇に優れ、将来を期待されていた。
長篠の戦いの頃、永原先生は自らを不老ではないかと疑い始めた。

織田信長／織田弾正忠／織田右府／織田前右府（１５３４～１５８２）
ご存知織田信長、あまりにも有名な人物なので事績は記さない。
永原先生の生まれ年を聞いた時に真っ先に「織田信長より年上」と生徒が言及していた他、永原先生も本能寺の変の時には「織田前右府」

と称しており、明智光秀は「明智日向守」と称しており、このことは優子が桂子、龍香と３人で遊んだ時のクイズゲームで役に立った。

松平蔵人佐／松平元信／松平元康／松平家康／徳川家康／徳川次郎三郎／徳川内府／徳川右府／征夷大将軍／上様／大御所／神君／東照大権現（１５４３～１６１６）

ご存知徳川家康。上記の呼び方はごく一部。

こちらも説明不要の人物で、永原先生は関ヶ原の戦いを公家とともに遠目で見物した時に一度だけ姿を見たことがある。

徳川家康について、永原先生は基本的に「東照大権現」と呼んでおり、関ヶ原の見物談を話すときのみ当時の呼び方であった「徳川内府」と呼んでいる。太平の世を築いた偉人として敬意を示している。

ちなみに、体育祭の騎馬戦の時には、２年２組男子の戦法を「島津の退き口」になぞらえている他、小早川秀秋の裏切りや大谷吉継隊の壊滅のことも話している。

また、方広寺鐘銘事件でも言及されており、永原先生は「諱を犯すことは極めて無礼」として、「徳川方の言い分は言いがかりではない」として擁護している。

真田昌幸／真田安房守（１５４７～１６１１）

真田家の２代目、永原先生とは面識はないが、領民として接している。

長篠の戦いの後、真田家の家督を継ぐ。

織田信長による武田征伐で自主独立、最初は織田信長に仕えて滝川一益の与力となるものの、すぐに本能寺の変が発生。

その後は独立勢力として上杉、北条、徳川、上杉と次々に主君を変え、「表裏比興」と言われながらも生き残る。

この頃の永原先生は村人からも不老を疑われており、本能寺の変を機に再び村を逃亡。その後に待ち受けていた真田家の苦難を知っておきながら、凶事を恐れて大坂の陣後まで村へと戻ることは出来なかった。

豊臣秀吉が没し、関ヶ原の戦いが起きると真田家は分裂、真田昌幸は西軍につき、徳川軍を苦しめるものの結果的に破れ九度山に配流され、そこで病死した。

永原先生からは「安房守殿」と呼ばれており、主君であった父とともに謀略に長けたその智謀に尊敬の念を抱いており、林間学校で優子の部屋を男女から引き離そうとしていた教頭先生を謀略にはめた時には「我が主真田源太左衛門様や真田安房守殿が今の私をご覧になれば、さぞお褒めになってくださると思いますわ」との言葉を残している。

真田源三郎／真田信幸／真田信之／真田伊豆守（１５６６～１６５８）

真田昌幸の嫡男で真田家を継ぐ。永原先生からは「伊豆守殿」と呼ばれており、恩人にして罪悪感の象徴であるとともに、２人の初恋の相手の１人でもある。

関ヶ原の戦いでは父、弟と袂を分かち東軍に付く、これが結果的に真田家の存続となる。

関ヶ原の戦いの後、父と弟の助命懇願を行い、大坂の陣後は信濃松代藩となる。

一方、永原先生は大坂の陣後に江戸に住むようになったが、人口の多い江戸ではすぐに不老の噂が流れ、再逃亡を考えていた矢先の承応２年（１６５３年）に当時の４代将軍徳川家綱への拝謁が許された。

信之は当時８８歳であったものの健在で、永原先生の話を聞き、それがすぐに所領で噂になっていた「不老の娘」と同一人物であることを理解し、出奔したことを許し、そればかりか長年の苦難に耐えたことを労った。

永原先生はこの寛大な処置に感極まって大泣きしてしまった。既に１３６歳になっていた永原先生は、ろくに恋愛などもしておらず、優しくされただけで恋に落ちてしまった。

それ以来「大恩人に対して恩を仇で返した」として、自らの回想録でも「私は自分が憎い。私がしたことは許せない。命惜しさに自己断

罪するような勇気さえもないことも含めて」と記している。

真田源二郎／真田信繁／真田左衛門佐（１５６７～１６１５）

真田昌幸の次男、兄は源三郎で弟は源二郎であるが、この時代にはよくあることである。

関ヶ原の戦いで東軍に付いた兄と袂を分かち、父とともに西軍に付く。徳川秀忠の軍勢を苦しめ、遅参に追い込むものの、関ヶ原本戦で西軍が敗れ、兄の助命懇願もあって九度山で配流の日々を過ごす。

ちなみに、兄の仕送りが家計の頼りでもあった。

その後、大坂の陣が勃発、真田信繁は密かに逃亡し大坂城に入ると冬の陣では真田丸を築き徳川方を苦しめた。

また、夏の陣でも徳川本陣間際まで追い詰めるも、一歩及ばず戦死。

永原先生からは「主君の跡継ぎの、偉大な息子」として尊敬されている。

また、真田幸村の名でも知られるが、永原先生はこの名で広められることを極めて嫌っており、上田駅前の「真田幸村像」に向かって悪態をついた挙句、なだめにかかった篠原浩介に怒鳴り込んだり、真田氏を記念した公園でも、「真田幸村」に対して「恐れ多くも安房守殿の次男、真田左衛門佐殿の名を勝手に剽窃して作り上げた架空の人物」と称している。

諱を曲げて伝えるというのは、永原先生の価値観では到底あってはならないことなのである。一方で、永原先生は「左衛門佐殿」と呼んでいる。

また、真田十勇士の逸話についても「デタラメ」として極めて嫌っている。

徳川家綱／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４１～１６８０）

江戸幕府４代将軍、父は３代将軍徳川家光。

永原先生が後年「大恩人」と評するとともに２人の初恋の相手の１人でもあり、「罪悪の象徴」でもある。

１６５１年にわずか１１歳で征夷大将軍となる。江戸幕府が開かれ５０年目の節目の年に「江戸の街の不老娘」の噂を聞き、永原先生を江戸城へと呼び寄せる。

永原先生に生まれ年を聞き「永正１５年、１３６歳」との答えを得る。また、真田家への仕官を証言したため、真田信之を呼び、その後、永原先生が自分の目の前で大泣きする事件が起きる。

この時、そばにいた家老は「無礼者！」と永原先生を怒鳴りつけるが、すぐに「よい、泣かせてやれ」と制止して事なきを得る。

永原先生が一通り泣き止んだの地、真田信之を下がらせ、ねぎらいの言葉を述べると、永原先生はまた大泣きしてしまう。

その様子を見て「辛かったろう、気の済むまで存分に泣け」と言って江戸城に泊まるように申し付ける。

これをきっかけに、真田信之とともに永原先生の初恋の相手になった。

永原先生はこのことに多大な罪悪感を感じており、後年には「時折藩主や旗本たちに戦乱の話を聞かせ伝え、毎晩毎晩罪を懺悔する日々だった。２人の恩人はあの世から今も私を許してはくれないだろう」と述懐している。

永原先生は徳川家綱より江戸城に常駐するように命じられ、以降代々の将軍に引き継がれた。

その後明暦の大火が発生し、この時は永原先生は徳川家綱から真っ先に逃されており、真田信之に敬意を払うなど、彼の立場を超えた年長者への敬意が伺える。ＴＳ病がバレても殺されなかったのも、父家光による儒学教育の影響とも言われている。また、地位が不明瞭だった永原先生に武士の身分を与えている。

後年、永原先生からは「幼少にして立派な人だった」と、後世の印象とは違った評価を下している。

徳川光圀／徳川中納言／水戸光圀／水戸中納言／水戸黄門（１６２８～１７０１）

ご存知水戸黄門。永原先生は江戸城で何度か面識があり、水戸藩が

勧めていた「大日本史」の編纂の時には、直接話を伝えている。永原先生は「徳川中納言」や「水戸中納言」と呼んでいる。

ちなみに、時代劇でよくある「諸国漫遊」についても永原先生は「嘘」と断じている。

史実の光圀は江戸に常駐していて、諸国漫遊どころか、関東からもほぼ出たことがなく、実際に諸国漫遊をしていたのは彼の家臣である。

吉良義央／吉良上野介（１６４１～１７０３）

吉良家出身の高家旗本、名門の家柄で、領地に黄金堤を築くなど安定した治世をしていた。

永原先生にとっては大恩ある人として、「３人目の恩人」とも呼んでいるが、一方で「またも恩を返せず」として、自らの無力と罪悪の象徴でもある。

当時の永原先生は、江戸城内で住んでいながら町娘としての服を使用しており、他の大名や旗本、江戸城内で働く人々は、表向きは「不老の町娘」として敬意を払うものの、裏で陰口を叩かれ続けていた。

これを不憫に思ったのが吉良義央であり、徳川綱吉とも掛け合って立派な服を与えた他、上方の作法を教え込むなどした他、徳川綱吉にも陰口を辞めさせるように進言し、綱吉もこれを採用。

徳川綱吉は江戸城内や大名・旗本に向けて「遠き戦乱の世の時代を知る柳ヶ瀬殿に陰口を叩かず、心から敬意を払うように」と命じ、陰口は途端に止んだ。

この一件以降、吉良家に強い恩義を感じるようになるが、元禄１４年（１７０１年）に江戸城内で朝廷の使者を迎え入れる儀式の準備中に浅野長矩から斬りつけられる事件が発生し、この時に徳川綱吉より「無抵抗だったのは寧ろ殊勝である」としてお咎めなしとなり、一方で浅野長矩は即日切腹・赤穂藩も改易となった。

元禄１５年（１７０３年）、大石良雄を中心とする赤穂浪士が吉良邸に討ち入りに入り、非業の死を遂げた。

永原先生はこの一件以来、浅野家や赤穂浪士に対して、極めて無礼

と知っておきながら故意に諱を呼び捨てるほどに強い敵意を持っている。ただし浅野長矩の弟浅野長広については「大学殿」と呼んでおり、特に敵意はない。

また、忠臣蔵の物語についても「吉良殿にいわれなき汚名を着せた」として、永原先生は赤穂浪士を連合赤軍やオウム真理教と同列に置くほどに嫌っている。

後年の永原先生の述懐でも「温厚で優しい方」「恩義に手厚い人」と言った絶賛を受けている。

本人は「何もできなかった」と後悔していて、「きっとあの世で恨んでいるに違いない」と考えていたものの優子の手により罪悪感から解放された。

浅野長矩／浅野内匠頭（１６６７～１７０１）

赤穂藩主、忠臣蔵で有名。

元々癇癪持ちな上に精神病のきらいがあったらしく、母方の叔父も同様の刀傷事件に及んで切腹・改易となっている。

吉良の「いじめ」について、永原先生によれば、「無理矢理吉良殿を悪人に仕立て上げるための創作」だという。また、永原先生は「かけがえのない恩人にいわれなき汚名を着せる行為」として、このような話をすると誰彼構わず怒り出してしまう。

ちなみに、一般的には、勅使に対する礼儀作法の指南役だった吉良に授業料を出さなかった（賄賂とされているが、現在の価値観では授業料という意味に近い）ことを咎められて逆恨みした上での犯行という説が根強い。

斬りつけられた後の取り調べでも、吉良は「何ら身に覚えがない、乱心としか言いようがない」と答えていた。

これは、乱心ならば罪が軽くなるとしての配慮だったが、浅野は単に「恨みがある」とのみ繰り返していて、具体的には何も語らず、一方で朝廷との重要な儀式を台無しにされた将軍綱吉は、永原先生が「あの時の怒りの形相は今も目に焼き付いている」と称するほどに激怒し、浅野長矩に即日切腹を言い渡した。

永原先生は、本来の流儀ならば「内匠頭殿」と呼ぶべき所を「長矩」と諱を呼び捨てにしている他、「キチガイ」「狂人」とも言っており、評価は散々である。

大石良雄／大石内蔵助（１６５９～１７０３）

赤穂事件の中心人物、お家再興に向けて尽力していたが、それが敵わないと知ると、吉良家に討ち入りを決定する。

吉良の首を泉岳寺にある浅野長矩の墓前に供え、その後は他の赤穂浪士とともに切腹を命じられた。

永原先生はこの行為を「逆恨み」だとして、また恩人を殺害しただけでなく、吉良家の取り潰しのきっかけを作ったとして赤穂浪士に対しても「大石良雄」と諱を呼び捨てにするほどに強い敵意を抱いている。

徳川綱吉／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４６～１７０９）

江戸幕府５代将軍、徳川家綱の弟で、兄の死と共に将軍となる。

戦国時代の気風を一掃し、文治政治を推進した。勤皇家でもあり、朝廷との関係を重視した。

後年の永原先生の述懐では「実直な人」「誠実な人柄」と肯定的な評価を下しており、「天下の悪法」とよばれた「生類憐れみの令」についても好印象を持っているが、永原先生にとっては、徳川綱吉に対しても吉良上野介の進言を受け入れた恩があるという一面もある。

赤穂事件の時の処分について、永原先生は「喧嘩両成敗は時代遅れであり、生類憐れみの令にも反する」と進言したものの、「征夷大将軍といえど世論には勝てない」と却下されてしまった。この判断については、永原先生も一定の理解を示している。

一方で、刀傷事件における吉良お咎めなしの裁定にはほぼ全肯定的な態度を取っている。

昭和天皇（１９０１～１９８９）

ご存知昭和天皇、あまりにも有名なので事績は記さない。
永原先生にとっては戦時中に裏切った相手として罪悪感を持っている。
永原先生は教師として、戦時中は田舎に疎開しており、「久々の大戦争に血湧き肉躍る」と振り返りつつも、「真田家や吉良家に恩を返せていないからまだ死ねない」と思いこんでしまい、米軍が襲来した際には当時の教え子を囮に一人山へ逃げる計画を立てていた。
この計画は未遂に終わるものの「よりにもよって天皇陛下を裏切ってしまった」として後に「私は最低の女」とまで考えるようになってしまった。

# 第六章　彼氏彼女のその先へ

## 春の遊園地

春休み、今日は浩介くんとデートする。

最近、蓬莱教授や協会のことで慌ただしかったので、今日だけは1日お休みをもらうことにした。

何かあっても、よほどの緊急事態以外は、永原先生から連絡も入らないことになっている。

この日に、あたしは当然浩介くんとの春休みデートに出かけることになった。

卒業式が終わり、間もなく桜が咲く頃。

あたしと浩介くんは将来のことは話さないという約束の元、駅に集合することになっている。

さて、今日の服は何にしよう？

もう一通り浩介くんに見せちゃったし……よし、この赤い服と赤い巻きスカートにしよう。

遊園地デートとは言うけど、やっぱり、あたしは「少女」、女の子を一番強調できる格好をしたい。

着替え終わり、頭のリボンを考える。

頭につける「ちょこんとリボン」はいつも白だけどこの服だけは赤いリボンと白いリボンのバージョンがある。

赤いのは本当に真っ赤になる。浩介くんの前だと顔まで赤くなり、本当に「赤い女の子」になれる。

そんな中でも、あたしの黒くて長い髪がしっこさを感じさせない。

一方で、白いリボンは赤い服の中でもひときわ目立つ一点の白、それもあたしの髪が黒だからひときわリボンが目立つようになる。

うーん……白い方にしようかな？

相変わらず、こういう日には服装には迷うけど、短くなったこともある。

このリボン結びがそうで、女の子になったばかりの頃と比べて約3

分の1の時間で結べるようになった。
そして、今回の服装のテーマ、「少女性の強調」と言えばぬいぐるみさんだ。
抱きかかえて歩くばかりだと不便なので、今回は移動中などにいつでもしまえるようにバッグなども持つ。
うーん、どのぬいぐるみにしよう？
そうだわ、浩介くんがプレゼントしてくれたのを抱いてくればきっと喜んでくれるはず。
浩介くんからクリスマスに貰ったお魚さんのぬいぐるみを抱く。
ぬいぐるみさんを抱きながら、あたしは部屋を出る。
「おはよー」
「おはよー優子、今日はデートでしょ？」
「うん」
ちなみに、ぬいぐるみさんを抱くことは、休日ではよくある。
一回だけ、学校にも抱いていこうかと思ったけど、さすがに「幼稚過ぎる」と母さんに止められてしまった。
そういえば、あたしのコンプレックスについて、クラスの大半は知らないんだっけ？
あたしはどうしても、幼く、子供っぽいものに目がないし、幼い振る舞いをしたくなってしまう。
でも、それで馬鹿にされることがないのがせめての救いよね。
浩介くんも、幼い性格のあたしは大好きみたいだし。
「やっぱりその服が可愛いわね」
「えへへ、そうかな？」
母さんが褒めてくれる。確かに愛用しているけどこう言われるのも久しぶり。
「そうよ、さ、朝ごはん作るわよ」
「はーい」
母さんとご飯を作る。
もうほとんどマスターしちゃったけど、「家事の修行に終わりはないわ。立派なお嫁さんになるために常に試行錯誤するのよ」という母

さんの言葉により、休日は必ず家事手伝いを欠かさない。
でも、休日は暇になることも多いし、これがちょうどいいわね。
だらだらと過ごすよりも、有意義な休日だと思う。
家庭的になれたことで、あたしの女の子としての魅力が増したと思うし、恋愛と結婚ということを考えれば、家事はとても大事なこと。
そう言う意味で、母さんには感謝しているわ。
「ふふ、今日もおいしくできたわね」
父さんも出てきて、3人での食事、あたしはお魚さんのぬいぐるみを空いている椅子に置く。
ぬいぐるみさんを抱いた時のために、テーブルにはあたしが小さな子供の時に使っていた高い椅子が置かれるようになった。
ぬいぐるみさんの分も、小さなお皿に載せてあげる。
……食べるのはあたしだけど。
「それにしても、魚のぬいぐるみに鮭って……」
「このお魚さんは食べるんじゃない？」
母さんの突っ込みにもっともらしく答える。
魚類は全くの専門外だけど。
「……そういうことにしておくわ」
母さんもそれ以上は追及してこない。

「「いただきます」」

「それにしても、優子ももう少し大人っぽくしたら？」
食事中、父さんが珍しくあたしの女の子に突っ込んでくる。
「うーん、ほら、まだあたし、女の子としては1歳になってないし」
「むむ、そういう考えもあるのか……！」
父さんが盲点を突かれたという顔をする。
全く見落としていたという感じね。
でも、あたしはやっぱり子供っぽくて幼いのが好き。永原先生によれば、熱心に女の子になろうとした患者ほど幼い趣味に没頭するらしいし、異常だとは思わない。

あたしは体のスタイルが、超が付く巨乳に大きなお尻で安産型だから、ギャップ演出にもいいし。
「「ごちそうさまでした」」
あたしは朝食を片付けにキッチンへ。
母さんも手伝ってくれる。
というのも、「やらないとなまってしまう」とのこと。
あたしが丸一日家事をすることもあるけど、母さん曰く「特に疲れた日」のみ、そうするという。

さて、食器洗い機にお皿や箸などを放り込んだら、あたしはそろそろデートの時間。
あたしは歯を磨き、口を軽くゆすぐ。
「優子、香水付けてみる？」
「え？　別にいいわよ」
「そう？　いい香りで愛しの彼をメロメロにすればいいのに……」
最近、母さんがまたお化粧や香水といったアロマ系のものを勧めてくるようになった。
もちろん、小谷学園では化粧しても問題ないんだけど、どうもあたしは気が進まない。
カリキュラム中にも化粧を勧められて、母さんにしてもらったけど、元々のあたしがかわいくて美人だったこともあって、見た目が全然変わらなかった。
もしかしたら今見ると違うのかもしれないけど、いずれにしても、不老で加齢臭もしないあたしには必要ないと思う。
母さんは「やっぱりまだまだ女子力低いわね」と言ってたけど。もしかしたら、優一の数少ない名残の一つかもしれない。
それなら化粧したりしてもいいかもしれないけど、肌を痛めちゃう気もするし、いまいち踏ん切りがつかない。
浩介くんが今のあたしに満足してくれてるし、下手にいじるリスクを取りたくないのかも。
ともあれ、鏡でもう一度自分の姿を確認する。うん、今日もかわい

く決まってるわ。
「いってきまーす！」
そして、あたしは元気よく家を出て駅に向かう。
駅では相変わらずあたしは注目の的。
ぬいぐるみさんをしまう回数は最小限にしたい。うまく工夫しよう。
ぬいぐるみさんを抱えてのデートは、これまでも数回してるけど、浩介くんがくれたお魚さんのぬいぐるみは初めて。
待ち合わせの駅から降りると、そこにはもう浩介くんがいた。
「浩介くーん、ごめーん、待ったー!?」
まだ約束の時間より前だけど、お決まりのセリフ。
「うん、待ったよ」
「そ、そう……」
あたしがわざとらしくしょんぼりとする。
「ああいやその、俺が早く来すぎただけで、ゆ、優子ちゃんとのデートが楽しみでつい――」
「うんうん、あたしのこと想ってくれてうれしいわ」
「う、うん……！」
あたしと浩介くんが二人そろって仲良く顔を真っ赤にする。
デートの度にこのやり取りを繰り返すようになってもはや様式美なんだけど、どうしても顔が赤く、恥ずかしくなってしまう。
まだまだ、初々しい気持ちが続いているのね。
「ねえ浩介くん、行こうよ」
「そ、そうだな……！」
今日はまずここに集合し、別の路線に乗り換えてちょっと遠くの遊園地に行こうということになった。
浩介くんは分からないけど、あたしは絶叫系が苦手なので、ゆったりと遊べるアトラクションにするつもり。
多分浩介くんが絶叫系が好きだったとしても、苦手なあたしに無理強いせず、別の楽しみ方で満足してくれるという自身があったし、万

一デートがうまく行かなくても、別の場所でデートして仲直りできるとあたしは信じている。
電車では、浩介くんと座席に隣同士で座った。
「それで、優子ちゃんは観覧車大丈夫？」
「うん、一応ね。でも絶叫マシンは無理よ」
それに、永原先生も長生きのためにやめたほうがいいって言うし。
「へえ、女の子の方が得意って聞いたのに」
浩介くんが意外そうな顔をする。
「あはは、優一の頃……といっても小学校の頃だけど、トラウマになっちゃって」
「そ、そうなんだ……」
「だからこの服で来たのよ。それに危険なアトラクションは寿命縮めるって永原先生も言ってたし」
正直、遊園地デートにはあまり向かない格好だと思う。
「お化け屋敷は……もう夏や文化祭の時に入ったか」
「うん」
そう言えば、今度の遊園地のお化け屋敷はどうなるんだろう？
体験型アトラクションらしいけど。
ともあれ、絶叫マシンが無くても浩介くんとなら雰囲気だけでも十分なくらいね。

「ふー、着いたね」
「うん、とりあえず、入り口の門に行こうか」
あたしと浩介くんは、入口の門へと行く。ここでチケットを買うことになっている。
「えっと、高校生2枚です」
「はい、分かりました……」
係員さんに所定の料金を払い、チケットを受け取って門の中へ。
「遊園地も少なくなったよなあ」
「うん、昔はもっと近くにたくさんあったみたいよ」
あたしはよく覚えていないけど、昔はもっと近くに、もっと色々な

所に遊園地があったけど、経営難もあって殆ど消えてしまったらしい。
でも、少なくなった遊園地には人が集中しているとか何とか。
遊園地にはそれなりの数のお客さんがいる。
盛況なのか閑散としているかは分からないけど。
「ねえ浩介くん、あれなんてどう？」
あたしが指さしたのは、小さなコーヒーカップ。あまり人も並んでなくて空いているし、最初の肩慣らしにはいいと思って選んだ。
「うん、目を回さないように注意しないとな」
浩介くんの言葉。うん、遊園地は楽しむ所だし、気分悪くしたら元も子もないわね。
そう思いつつ、あたしはわずかに並んでいた行列の後ろへ。
行列の前を見ると、あたしたち以外のカップルや一人、友人同士や家族連れもいる。
前のお客さんが終わり、あたしたちの番になる。
行列の全てがコーヒーカップの中へ入り、あたしと浩介くんもそのうちの一つへ。
向かい合わせ、膝をきれいにそろえる。
うん、こんな時でもガードは固くないと。
「では始めます」
係員さんの言葉とともに、ボタンが押され、女性の音声が流れる。
注意事項として、回しすぎないことや、気分が悪くなったら遠慮なく係りの人に申し出てくださいとも言っている。
「では、始めます。スタート！」
その言葉とともに、コーヒーカップがぐるぐる回るが、中央のハンドルを回さないとコーヒーカップ自身は回転しない。遠心力だけ。
あたしがちょっとだけ回転させる。
ハンドル重くないけど、ぐるぐる回したら大変そうだし最初はゆっくり。
……お、意外に余裕そう。
「優子ちゃん、回していい？」

「うん、ちょっとだけね」
本当は思いっきりと言いたいけど、浩介くんの力で思いっきりは危険だと判断して、適度に楽しめるように工夫する。
「えーい！」
「わーい！」
浩介くんとはしゃぐ。
周囲でもアトラクションを楽しむ黄色い声が聞こえてくる。
平和な空間だった。
数分後、コーヒーカップが止まり、あたしたちは出口からアトラクションを後にする。
うん、目も回さなかったし楽しいアトラクションになったわ。
「ふー楽しかった」
「ふぅ、俺も」
少しすると、空の方からレールの轟音と「きゃあああ」という甲高い悲鳴が聞こえて来た。
見上げてみると、ジェットコースターが一番高いところから落下するところだった。
「ひえーありゃすげえな……にしても、遊園地の悲鳴って、決まって女の子の声だよな」
「うん、女の子って悲鳴を出すことで、緊張を和らげられるんだって」
あたしが、スキー合宿の時の知識で浩介くんに話す。
「って、優子ちゃんだって女の子だろ？」
「うん、だけど、あたしは無理かな……永原先生でも悲鳴でストレス和らげるって無理みたいよ」
「ほほう、意外に高度な技なんだな」
浩介くんが感心したように言う。
実際、これに関しては生粋の女の子でもできない子はたくさんいるし。
「うん、できない子もいるし、繊細なのもそれはそれで女の子らしいから、あたしはこのままでいるわ」
「うん、それがいいよ」

この遊園地には、絶叫マシンが幾つかある。
そのうちの一つは、現在老朽化のために解体中。
営業時間中でも、工事は行われている。できたスペースで新アトラクションを一刻も早くお客様に提供するためだとか。
本来、夢の遊園地でこういうのは良くないんだけど、「ジェットコースター解体の公開」は珍しいらしく、大々的に解体をアピールしていて、そういうのが好きなお客さんを集めて成功しているらしい。
本当、最近は色々なことがビジネスになるんだなと関心しながら、あたしたちはあてもなく次のコーナーを目指す。
そしてたどり着いたのが貸しボート小屋、遊園地の端に設けられた巨大な池を自由に漕げることになっている。
こちらも入場料に含まれているため、開園時間から閉園時間までぶっ通しで乗っても構わない。
「ボート、どれにする？」
「うーん……このアヒルさんのにしようかな」
あたしは、ボート小屋の前にある貸しボート一覧を見て言う。
「よし、すみませーん」
「はい」
ボート小屋のおじさんが浩介くんと応対する。
「この『アヒルさんモデル』空いてますか？」
「うーん、今は空いてないですね。ちょっと混雑していて、手漕ぎ仕様しかありませんよ」
結構ここも人気みたいね。
「だって、どうする優子ちゃん？」
「じゃあそれで」
「了解、それしか無いので、ご自由にどうぞ」
管理人さんがそう言うと、フリーで入れてくれる。
そこに停まっていたのは、小さな茶色いボートで、手漕ぎのオールは強く固定されていて、池に落ちないようになっている。
浩介くんと向い合せに座る。
座席の位置が少し低くて、スカートの中が見えちゃいそう。気をつ

けないと。
「じゃあ出発するわね」
あたしがボートを停めていた金具を外す。
あたしがボートを漕ぐと、ボートがゆっくり動き出した。
「へえ、のどかじゃん」
時折聞こえるジェットコースターの悲鳴も、ここまで来るとかなり小さく聞こえていて、まるで別世界の出来事のように感じてしまう。
「はぁ……はぁ……」
しばらくして、あたしの息が上がってしまう。
もう漕ぎ疲れちゃったみたいね。本当にあたしは弱い子。
「優子ちゃん、俺が代わるよ」
「あ、ありがとう……ふう……」
浩介くんが、あたしに続いて池の中心に向けて漕いでくれる。
「よっこらせっと！」
「わー速い！」
「へへん」
浩介くんが、「どうだっ」と言わんばかりの誇らしげな顔をする。
あたしの倍近いスピードで、倍近い距離を、難なく漕いで見せる浩介くん。本当に、かっこいいんだから。
「のどかねえ……」
池の中心よりも更に奥、ボートの「船着き場」から一番遠い部分の、いわば遊園地の「最奥部」に来た。
ジェットコースターやボート小屋もと置くに見え、高台には観覧車が僅かに見える。
ここでは、遊園地の大騒ぎに疲れたたくさんのお客さんたちが、静かにくつろいでいる。
あたしたちも、それを見ながらゆっくりとする。
浩介くんとの会話も少ない、鳥のさえずりが聞こえる中で、あたしはちょっとうとうと眠くなり始めた。
「優子ちゃん、おーい優子ちゃん」

「むにゃ……」
んー、浩介くんの声がするわ。
どうしてだろう？
あー、そっか、あたし遊園地でデートしててボートで寝ちゃったんだ。もう少し寝ていたいわ……
「優子ちゃーん、パンツ見えてるよ！」
「えっ！　わっ！　きゃあ！」
浩介くんの「パンツ見えてる」という言葉に、あたしが慌てて飛び起きてスカートを見てみる。
「パンツ見えてる」と言われたけど、見た感じでは脚は開いていない。
「なんてね、うっそ！」
浩介くんがにやけながら言う。
まるで小学生の「やーい引っかかったー」みたいだわ。
「も、もう……！」
「だって、優子ちゃん全然起きないし」
「あはは、どれくらい寝てた？」
「分からん」
「そう……」
ともあれ、あたしは時計を確認する。うーん、10分経ってない気がする。
とはいえ、この何もない池の上での10分って長いよね。
「でも、寝顔可愛かったから許す」
「何よもう……」
また浩介くんが恥ずかしいことを言ってくる。
ともあれ、あたしたちは移動とコーヒーカップの疲労からもう十分に回復したので、最初の場所に戻ってボートを返す。
見てみるとアヒルさんモデルも止まっていて、こちらは自転車のように漕ぐタイプ。
また次にここに来る機会があったら、来てみようかな？

## スカートを賭けたお化け屋敷

「ねえ、優子ちゃん、次はどこにする？」
「うーん、どうしようか？」
しばし、あてもなく遊園地を歩く。
遠くの喧騒が、また別の場所の出来事のように感じる。
「きゃあああああ」
すると、ジェットコースターなどの絶叫マシン以外のところから、ささやかな悲鳴が聞こえてくる。
振り返ってみると、それは「脱出系お化け屋敷」らしい。
壁に遮られていることを見ると、結構すごい所なのかもしれないわ。
「へえ、脱出系ねえ……」
スタート地点から、ゴールまで行ければ脱出成功らしい。
途中にはトラップなどもあってそれに引っかかったりするとダメらしい。
ちなみに、この遊園地、入園料は高めな代わりにアトラクションは無料になっているが、ここは別途で入場料を取るらしい。
途中でゲームオーバーになることもあるから、どれだけ楽しめるかは腕次第ということだけど、一応スタンプ製になっていて、５回脱出に失敗すると「無限コンティニュー券」を貰えて、６回目は最後まで遊べるらしい。
さらに最初に５倍の入場料を払っておけば、無限コンティニューが最初から可能らしい。
「最近こういうサービスが増えたよなあ……」
浩介くんがそう言う。
あたしもふと思い出す。夏祭りの時の屋台での最低限のサービスや、文化祭の時の出し物で０点にしない配慮、幸子さんと行った温泉でも「景品は売店でも買えます」という貼り紙。
「そうねえ、このシステムは子供への配慮もあるみたいよ」
「だろうなあ……」

おそらく、特定の客がクリアできなくて際限なくお金を使い続け、アトラクションが占拠されるのを防ぐためのものかもしれない。
ネット上のソシャゲとかならそれでよくても、現実世界はスペース限られてるし。
「で、優子ちゃん、これやるの？」
「うーん、浩介くんはどうする？」
「うーん、結構入場料高いし、身体能力も要求されるらしいから優子ちゃんには無理なんじゃないかなあ……」
浩介くんが説明を見て言う。
「でも、二人サービスもあるよ」
一応一人から四人までまた子供用のモードがあるらしい。
あたしは子供用でもいいんだけど……使えるの小学生のみだし。
「そうは言ってもねえ……」
悩んでいると、さっき叫び声を出したと思われる女性二人組が、出てきた。

「いやー楽しかったねえー」
「無限コンテ使ったけど結局1回だけだったよね」
「そうそう、ゲームオーバーになった後が笑えるよね」
「うんうん、落とされてウイーンって上がるのシュールだよね」

「どうする？」
説明には、ゲームオーバーになると床が落ちて下に落とされる仕様と書いてあるけど、本当みたいね……この服で大丈夫かな？
「うん、ちょっとだけやってみようかな？」
「分かった。なに、俺がついているさ」
でも、浩介くんがいるとはいえ、内心はちょっと怖い。
夏の屋台や文化祭と違って、こちらは本気で作った仕様だから。
そう思い、あたしは抱きしめていたお魚さんのぬいぐるみを、強めに抱きしめる。
あたしたちは受付に行くと券売機で「無限コンティニュー券」を2

枚買う。さすがに5倍となると結構値が張る。
ちなみに、おどおどしい雰囲気で、待合室に通される。
中には数組のカップルや女性グループ、親子連れもいる。
「どんな感じなんだろう？」
「さあなあ……ちょっと調べた限りじゃ、『苦手な人はさくっと無限コンティニューしてしまったほうがいい、イージーモードは子供向けになってめっちゃ簡単だし』みたいなこと書いてあるぜ」
浩介くんがスマホで書き込みを見ながら言う。
「じゃあ難易度高いんだね」
「……だろうな」
ちなみに、待合室の奥の扉がスタート地点らしく、係の人の放送で整理券番号で呼ばれる方式になっている。
次の人が呼ばれるまで結構時間がかかるケースもあるし、あっさりと終る時もある。
無限コンティニューするかとか、クリアするスピードが早い人は早いらしい。
部屋にあったパンフレットを読んでみると、このお化け屋敷は４つのコーナーに分かれていて、場合によっては後ろの参加者に抜かれることもあるらしい。
その時は鉢合わせにならないようにスタッフが工夫するとパンフレットにはある。
また、心臓の弱い人や、特定の疾患を持ってる人は、利用不可ともある。
これについては、他のアトラクションも同じだけど。
「整理券番号３４番のお客様、奥の部屋、直前待合室までどうぞ」
「あ、浩介くん、呼ばれたよ」
「うん、そうみたいだな」
係員さんに呼ばれたので、あたしたちは扉を開けて奥の部屋へ。ちなみに、係員さんもちょっとだけ仮装している。多分本格的な仮装はこの後に出てくるんだろうけど。
こちらは、直前に「精神統一する」という名目で置かれていて、シ

ンプルな白い部屋に本棚には漫画や雑誌が置いてあるだけ。
あと、もう一つ棚があって、スカートの客向けにスパッツの無料貸し出しコーナーもあったけど、あたしは見なかったことにした。
うー、見られたら絶対恥ずかしいのに、どうしても浩介くんに喜ばれたいという感情が勝っちゃうわ。
さっきも「ゲームオーバーになったら落とされる」って言ってたのに、これじゃ痴女になっちゃうよお……
「な、なあ優子ちゃん……！」
「うん？」
「そのままで、大丈夫なのか？」
やっぱり浩介くんも聞いてくる。
「？　何のこと？」
あたしがすっとぼけたふりをする。
「え!?　ああいや、その……な、何でもない」
「？　変な浩介くん」
やっぱり、浩介くんも見たくてしょうがない様子ね。
どうしようかしら？　もうこのままでいい気がするわ。
あたしは、残り時間、持っている少女漫画を読んで時間を潰す。
数分後、スタッフの人が来て、もう一回ルールを説明してくれる。
無限コンティニューなので、ゲームクリアまでコンティニューが可能なことや、さっき浩介くんが説明してくれた通り、特定ステージで何度もゲームオーバーになったり、極端に悪い内容でゲームオーバーになったり、規定の回数ゲームオーバーになったりすると、極めて易しいモードになるらしい。

「どうしてそんなに親切仕様なんですか？」
「実は昔、途轍もないくらいゲームオーバーになり続けたお客様がいらっしゃいまして、閉園時間まで無限コンティニューし続けて、渋滞になっちゃたんです。それで、ルールが変わりました」
「なるほどなあ……」
「えーでは、奥へと招待します。ここから階段を上ってください、お気

をつけて」
少し急な階段を指さすとスタッフさんが元の部屋に戻る。ゲームスタート。
あたしと浩介くんが階段を上がっていくと、徐々におどおどしい雰囲気に包まれる。というか、左右の映像が単純にグロい。
階段はちょうど二人分の幅が確保されている模様なので、あたしは浩介くんと左手を繋ぐ。右手にはお魚さんのぬいぐるみもあって、精神安定剤になりそう。持ってきてよかったわ。
階段を登り切るとそこは廃病院になっていて、ご丁寧に「順路」と書かれた案内まである。
それに沿って右に曲がる。時折、お化けや幽霊の類があたしたちを驚かせてくれる。文化祭や夏祭りの時とは違い、ただ驚くだけではなく、とても怖い。
更に何か香水でもあるのか、独特の臭いも漂っていて、きわめて不気味な光景が広がっている。
最初の部屋に行くと、そこは病室で「病室のどこかにある次の部屋の鍵を探せ。ただし大声を上げたり大きな音を立てるな、怨霊に食われるぞ！」と看板に書いてある。
つまり、一定のデシベル以上になったらアウトって感じかな？
「ふうーっ！」
浩介くんが改めて精神統一している。
「優子ちゃん、行こうか」
「うん」
浩介くんが扉を開けて、先に中へと入る。
あたしは浩介くんの後ろについて行く。
女の子を守る男の子という構図。これまでも、デート中何度もあった光景は、お化け屋敷という異常空間でも変わらない。
部屋は入院患者の病室なのか、カーテンで遮られたベッドが幾つかある。
「とりあえず、一番手前のベッド調べてみるね」
「ああ、俺は右を調べるから、優子ちゃんは左を頼む」

「うん」
あたしは床を見てみると、小さなタイルがいくつもあるのが見える。
カーテンを開けて一番手前のベッドを見てみると、そこには何もなかった。
もっこりしていたのに中が空洞で変な感じの布団も、ある場所で固定されていて、更によく見るとベッドも置かれているのではなく、壁に貼り付けられていて、小物類も動かないようになっている。
そこまでして落とし穴仕様にしたいのね。感心しちゃうわ。
とは言え、部屋の鍵を見つけないことにはどうにもならない。
浩介くんもまだ見つけられてない。

あたしは、２つ目のベッドを見てみる。
先程と同じようにもっこりした布団、何の気なしにめくり上げてみた。
「きゃあああああああああ!!!」
そこには、血まみれの死体の人形がいた。顔が包帯で覆われていて、片目はえぐられていて、全身が血だらけで……
ブーブーブー！
いきなりブザーが鳴る。
もしかして……
ガタン！
「きゃあ！」
「おわっ！」
急に足元の床が下に９０度回転し、あたしと浩介くんが下の部屋に落ちる。
突然のことで茫然としていると、とても柔らかい感触を受ける。
ようやくあたしが悲鳴を発したためにゲームオーバーになっちゃったことに気付く。
「優子ちゃん、大丈夫？」
背後から浩介くんの声と、クッションを歩く足音がする。

「うん、大丈夫」
仰向けに倒れたので、上を見て見ると、ベッドが浮いてるみたいで面白い。
「優子ちゃん、本当に大丈夫？」
浩介くんが咄嗟に起こしてくれる。
すると、スカートが重力に沿ってすとんと落ちる感覚がする。あうう、やっぱりめくれちゃってスカートの中見られたー
「うん、このクッション、かなり柔らかいみたいよ……そ、それよりも！　あたしのパンツ見たでしょ!?」
「うん、くまさんプリントだなんて、優子ちゃんかわいいね」
……やっぱりしっかり見られてたわ。
もう何回見られたか、数えてさえもいないけど、何回見られても恥ずかしさは変わらないと思う。
「優子ちゃん、さっきスパッツ貸し出しサービスあったじゃん」
「いやその……うん、はしたないと思ったけど……ここっ、浩介くんに喜んでほしかったから……見なかったことにしちゃった……」
あうう、恥ずかしいよお……
「いやー本当に健気でかわいいね優子ちゃんは。はい、そんな優子ちゃんにプレゼント」
「え!?」
浩介くんが、鞄から一分丈の黒いスパッツを出してきた。
「やっぱりさ、生は良くないかなって思って、さっきの控室から持ってきた」
「う、うん……ありがとう……」
浩介くんだって、本当は生のほうが嬉しいと思うのに、責任感が強くてまた惚れちゃいそうだわ。
「さ、穿きかえたら向こうに見える籠に乗ろうぜ」
「うん」
端のほうに「無限コンティニューのお客様はこちらにお乗りください」という貼り紙と、上に運ぶための小さな滑車式の籠がある。ボタンを押せばいいらしい。

あたしは浩介くんから貰ったスパッツを穿きなおす。
うん、浩介くんの角度からパンツは見えなかったはず。
あたしも知識としては知ってたけど、浩介くんをはじめ「男子の目」を意識して、いつも生パンかストッキングで、スパッツを穿いた事がなかった。
カリキュラムでも、意図的に教えないことになっていたし、今後も、こういう明らかにスカートがまずい場面以外、あまり使わないようにしよう。
あたし達は籠に乗ってボタンを押す。
すると籠が一番上まで来て、最初の入り口に戻される。
扉を開けると「コンティニュー！」というシュールな声とともにもう一度開始。
あたしは2番目のベッドのある部屋に行く。
今度は身構えていたので、声は出ない。それに作り物だと分かっちゃうと途端に平気になっちゃった。
一応死体の人形も漁ってみる。うん、無いみたいね。
患者の使っていた引き出しの中は、これまた猟奇的な肉片の作り物があったけど、幸いにもギョッとするだけで済んだ。
「さて、3つ目のベッドを調べるかなあ……」
あたしはそんな独り言とともに、3つ目のベッドの部屋のカーテンを開けて……！
「きゃあああああああああ!!」
「どうした優子ちゃん！」
そこにあったのは首吊りの死体。顔はよく見えないけど、それがかえって恐怖感を煽って……
ブーブーブー！
「きゃあ！」
音とともにゲームオーバーになったことに気付く。
さっきと同じ部屋に逆戻り。
浩介くんと一緒に奈落の底へ。

「ごめん浩介くん！」
　お互いさっきの部屋に逆戻りした所で、２回もゲームオーバーになって寝ながらあたしが謝る。
「ああ、うん、大丈夫だぞ……それよりも優子ちゃん」
「ん？」
「そのスパッツ穿いてても、あんまり変わらないよな」
　浩介くんの鋭いツッコミが入る。
「う、うん……見ないで」
「あ、ああ……」
　あたしは、スカートの中身がべろんと丸見えになっていなっている状態を見て言う。
　スカートの下まで見えるくらい長いのはまだ分かるけどこれだけ短いと殆どパンツと同じにしか見えない。
「スカートがめくれて、中が何であれ見えることが重要だしな。もちろん、かわいらしいパンツが一番だけどさ」
「あはは、分かる……やっぱりエロいし」
「だよなあ……うんうん」
　久しぶりに「男同士」の会話をした気がする。
　これまでも、あたしの中で「男」が出る事はあったけど、女子の指摘で気付いた事だし、「知識の活用」は男が出るというわけじゃない。出てしまった男に自分で気付いちゃうほどに色濃く出た。
　そういう意味では珍しい場面だけど、それにしても他の女の子たちはどうしたらスパッツで平気になれるんだろう？　あたしはカリキュラムで徹底的にスカートの中を晒されて恥じらいを叩き込まれたし、よくわからないわね。
　……今度桂子ちゃんに話してみようかな？
　でも、男の子にエロい目で見られると恥ずかしいというのもあるし、この性分は治す必要はないかも。
　あくまで、男心あってこそ、女心が光るわけだし。
　ともあれ、今はそればっかり考えても仕方ない。あたしは冷静になって、もう一度コンティニューを開始する。

「でさ、俺もベッドは3つ目なんだ」
「うん」
「とすると、あの奥の棚も怪しいよな」
「そうだね。でもまずはベッドからかな?」
浩介くんと作戦会議し、3つ目のベッドへ。
首吊り死体人形は、遠くから見ると怖いけど近くで見ると物凄い間抜けな格好になっている。このお化け屋敷、遊園地が企画したとあって本当にうまく出来ているわね。
あたしは、人形のポケットを調べてみる。すると、何か平べったい感触がする。
あたしはそれを取り出す。
「あ、あったよー! 浩介くーん!」
やっと鍵を見つけられてうれしい。
「お、ほんとか」
浩介くんも返事してくれる。
ブーブーブー!
あっ、しまった。

「うえーん、浩介くんごめんなさい」
「ドンマイドンマイ、何回でもゲームオーバーになれるんだから気楽にいこうぜ」
どうしようもない理由でゲームオーバーになってしまい、あたしは涙声で浩介くんに謝る。
もし落ちたらスカートめくれちゃうから、もう少し気を引き締めないといけないわね。
「それから鍵がちゃんとあるか、もう一回確認しろよ。なかったらクッションの中探さなきゃいけなくなるぞ」
「うん、そうだね」
あたしがもう一度手の中を確認し、鍵があることを確認する。
もしここに落とした場合、わざと一回ゲームオーバーになって重力にスカートをめくられて中身を晒さないといけない。

あとはスカートがめくれるほどじゃないけど髪が乱れるのもちょっと嫌だわ。
改めて鍵を入手したことを確認し、この部屋3回目のかご。
もう一回さっきの部屋に入ってからじゃないと順路通りにいかない。
ともあれ、ようやく第一の関門を突破……
「ばあああああああああああああああ」
「きゃっんんんんむぐぐぐぐぐ……」
扉から出ると、クリアすると出てくると思われる化物が驚かせようとする。
あたしが叫びそうになると浩介くんがとっさに口をふさいでくれる。
ちなみに2人の協力プレイという体裁なのでルール上は問題ない……はず。

# 恐怖と驚きそして恥ずかし嬉し

次のコーナーからは叫び声を抑える必要はないけど、今度は「注意力」が試されるらしい。
「えーと何々……『ここでは違法な実験がなされていたようだ、あちこちに爆発物がある、その爆発物は黄色く光っているが、踏むとたちまち爆発してしまう』……だって」
つまり、気付かずに踏んじゃうと落とし穴へドボンというわけね。
ともあれ、先程のカードのようなものを中に入れる。
ピンポーン。
ややマヌケな音が笑いを誘う。ともあれこれで空いた。
今頃スタッフさんは鍵をせっせと回収して、別の所に隠してるのかな？
って、そんなこと考えちゃダメよ優子。
ともあれ、こちらも家具や備品類が全て壁にある。
殺風景で不気味この上ないこの部屋だけど、幸いにも、棚の中はほとんど光るものばかり、また、踏むとまずい火薬も、比較的固まっていて、ここには鍵がないということはすぐにわかった。
「優子ちゃん、次の部屋がありそうだよ」
「う、うん……」
ひときわ大きく光る物体。その山を跨げば、次の扉が開けそう開けそう。
「よっと、優子ちゃん、そこで待ってて」
「う、うん……」
浩介くんが扉を開いて開けてみると、そこは細長い廊下のようになっていた。
「優子ちゃん、足元に気を付けて」
「う、うん……」
あたしも、慎重に浩介くんについて行く。
「とにかく、気を付けて」
「う、うん……」

廊下は細く、足の踏み場は限られている。
慎重に慎重に……
きゃあああああああ!!!
「わっ」
「な、何……!?」
どこからともなく急に女性の声がして、ビクンとなる。
ピピピピピ……
すると、別のセンサーが反応する音が聞こえた。
バタン!
「きゃあ!」
「おわっ!」
通算4回目のゲームオーバー、あたしは落下中、両手で必死にスカートを抑えたけど、後ろがお留守になってしまい、前の浩介くんに重なるように倒れたせいで、前を必死に抑えているのにまるごとめくれ上がった後ろが丸見えという構図になってしまい、起き上がった浩介くんに笑われちゃった。
「頭隠して尻隠さずだね」
「あうう……恥ずかしいよお……」
「にしても、パンツの時より体のラインが浮き出てないか?」
浩介くんの鋭い突っ込み。
スパッツなら恥ずかしくないなんて絶対信じられない。
最も、くまさんプリントのパンツ見られるよりはマシなんだろうけど。
「ど、どうなのかな?」
「ともあれ、上がろうぜ」
「うん」
上を見上げると、怪しく光っている物体は床に張り付けられていて、廊下も結構長いことがわかる。あたしが踏んじゃった爆薬は、光る色がちょっと違う。
これはかなりの回数のゲームオーバーを覚悟しないといけないわね。

コンティニュー用の籠は同じ。
最初の部屋からスタートで、「コンティニュー」という間の抜けた声から始まる。
最初の部屋はすぐに抜ける。
今度はあたしが後ずさりしても、浩介くんが受け止められるようにあたしが前になる。
確かこの辺で……あれ？　叫び声がしないわね。
「浩介くん、確かこの辺で……」
「ランダムなだけかもしれないぞ。気を付けて歩こう」
「う、うん……」
進めば進むほど、爆薬の密度も上がっていく。
足元を見ながら……
ピピピピピ……
え？
バタン！
「いやー！」
「……」
浩介くんは、落ちるのに慣れたのか、声をあげなくなった。
あたしは、とっさに前を隠そうとして、浩介くんが後ろにいることに気づき、両手でお尻を抑える。
再び前に倒れたので、丸見えになっている前の部分は見えてないはず。
ぴらっ
「きゃっ！　もう、何すんのよ浩介くん！」
浩介くんにスカートをめくられちゃった。
「悪い悪い。ちょっと我慢できなくてさ」
「もう！　それにしてもどうしてゲームオーバーになったのかな？」
「ほら、優子ちゃん、壁の爆薬に触れたんだよ」
確かに、上を見ると踏んだと思われる爆薬の光る色が違うのが一個ある。
ともあれ、コンティニューして、もう一度、今度は壁にも注意しな

がら歩く。
さっきと同様、叫び声の時は後ずさりしそうになったのを、浩介くんが体を張って止めてくれた。
そして、さっきゲームオーバーになったと思われる場所の手前、手も注意して……
カサカサカサ！
「きゃあ！」
突然、壁の左側から不気味な黒い物体が素早く動く。
あたしはあまりのことに右に体を寄せてしまうが、何とか浩介くんに助けてもらう。
「ふう、ありがとう浩介くん」
「ああ、気を付けて向きなおれよ」
「う、うん……あっ！」
あたしが右手をぶらんとした時、一瞬だけ壁に当たってしまう。
そして、「ピピピピ」という音とともにあたしと浩介くんはまた、浮遊感に襲われる。

「さ、気を取り直してもう一回やろうぜ」
「うん、ごめんね。あたしばっかり足を引っ張って」
ここまで全部あたしが原因だし、さすがに申し訳なく思ってしまう。
「いいよ、俺だって優子ちゃんいなかったら何回もゲームオーバーになってたさ」
「そうかな？」
「うん、それに、ゲームオーバーになった時にスカートの中見せてくれる優子ちゃんがかわいいから、むしろどんどんゲームオーバーになってほしい」
「……もうっ、すけべ」
浩介くんが笑顔でそんなことを言う。
あたしがスカートめくれて恥ずかしそうにしてるのが見たいという気持ちを、直球で押し出してくる。

もちろん、エロい目で見てくれないよりは、よっぽど嬉しい。
世の中には彼氏や旦那さんに、「女として見てもらえていない」と、泣いている女性がたくさんいることを思えば、あたしは何て幸せ者だと思う。
もし浩介くんが不老になれれば、いつまでもこの関係を続けられると思うから。
もう一度最初の部屋に到着すると、あたし達は違和感に気付いた。
爆弾の数が、明らかに少ない。扉の前の爆弾も消えていて、そのまま踏みつけても無反応だった。
「どうなるんだろう？」
扉を開けて廊下に出るとさっきまでより格段に歩きやすくなっている。
「どうやら、ゲームオーバーになりすぎてイージーモードになっちゃったみたいね」
「うん、そのようだな」
更に、叫び声も明らかに小さい。
次に壁から出るお化けも、無音になっていて、怖さもない。
あたし達は今までのゲームオーバーが嘘のようにすんなりと廊下の一番奥まで行く。すると、扉と、更にカード状のものが置いてあった。
そして、「この先、第三の関門」とある。
第三関門は、どうやら登るためのテストらしい。頂上に達したらクイズに答えて、正解すれば、次に行けるらしい。
というか、既に最初の廃病院設定を投げ出してる気がするけど気にしないでおくわ。
「これで開けるのよね」
「だな」
さっきと同じように、扉を開ける。
「どかーん！」
「きゃあああああああ!!」
「おわっ！」

いきなり血まみれの幽霊が驚かせに来る。
そしてそのままあたしたちの横をすり抜けて退場していった。
何か、今までで一番ビックリしたわ。全く脈絡も何もあったもんじゃないし。
ともあれ、部屋を見てみると、そこには４つの梯子がある。
「梯子をつかんで、一番低い段へ足を乗せてください」
中年女性の声がするので、あたしと浩介くんが両足をかける。
バタン！
「わっ！」
すると、足元の床が開き、奈落の底が開放された。
よく触れてみると、ここの壁と梯子はすべて発泡スチロールで出来ていて、底もかなりの浅さで、自力で這い上がれそうなくらいしかない。
ケガの心配はないというわけね。
「では始めます、３……２……１……はじめ！」
あたしと浩介くんが一気に登る。
「１０秒前……」
ちょっと、こんなの１０秒じゃ無理……！
「３……２……１……」
上を見ると、浩介くんが登り終えて控えている。
でも時間切れで、梯子が壁の中に吸い込まれていく。
「きゃあああああああぁぁぁ……」
浩介くんの手も掴めず、あたしはまた奈落の底へと落とされた。
といっても床と比べると腰ほどの高さしかない。
浩介くんは上に残ったまま。
もう一度さっきの場所に戻るため、一旦部屋から出るように誘導され、扉を閉める。
すると、何か音がした。もう一度開けると、床が元通りになっていた。
「コンティニュー」というシュールな声も同じ。
２回目の挑戦では制限時間は１分の大サービスで、あたしは余裕を

もって上に行く。
「はあ……はあ……ごめん浩介くん」
「うん、それにしても、スカートで落ちるとあんな感じでめくれるんだな」
浩介くんがいやらしく言う。
「もー、とにかくクイズ解こうよ」
「そ、そうだな」
あたしたちは、いかにも「間違えたら落とします」な切れ目がある床の上に座ると、目の前のモニターが光る。
問題：２＋３×４＝？
Ａ：９
Ｂ：１１
Ｃ：１４
Ｄ：２０
「あーイージーモードだね……」
あたしと浩介くんが苦笑して言う。
「確かに小学生とかなら２０にしちゃうだろうけどさ」
算数の基本的ルール、加減算より乗除算を先に計算する。
あたし達は自信をもってＣと答える。
ピンポーン！
そして、モニターの奥の扉が開いた。天井が低いので這いながら進む必要がある。
「優子ちゃん大丈夫？」
「うん」
浩介くんが時折、振り返ってあたしのことを心配する。
「あーあー、優子ちゃん先に通せばよかったー」
「どうして？」
「スカートめくりたいから」
「もう、浩介くんのえっち！」
そんな会話をしつつ、やがて開けた部屋が見えた。ついに「最終関門」ね。

さて、そこの部屋は真ん中に穴があってボタンが４つある。
壁に説明書があって、どうやら放送の数字と同じボタンを押すという課題。
左足が１、右足が２、左手が３、右手が４のボタンに対応している。
そして、リズムに乗ってボタンを押し続け無いといけないらしい。
両手を使うみたいなので、あたしは持っていたお魚さんのぬいぐるみをバッグにしまう。
所定の場所に乗り、「スタート」と書かれたボタンを押すと、さっきの女性の声で、同じ説明を受ける。
「では、はじめます……１、２、３、４」
「１、２、３、４……」
あたしと浩介くんが声に従ってボタンを押していく
「３、１、１、２、４」
「３、１、１、２、４」
左手、左足、左足、右足、右手……
よし、できた。
「２、４、１、４、３、１」
「えっと、２、４、１……」
ぶわあああああああああ！
「きゃっ！」
ブッ！
何の脈絡もなく、突然爆発音のような音がして、その後に嫌な音がする。あ、あたしが左足のつもりで、左手で押しちゃってた……
ドン！
「きゃあ！」
「おっと！」
突然壁に後ろから押され、あたしたちは下へと落とされる。
慌ててスカートを抑えるけど、突然のことで、中身は見られたと思う。
しかも今度は浩介くんに前から……あうぅ。
「結局どれもゲームオーバーまみれだね」

「あ、ああ……でも、次はイージーモードになるはず」
「うん」
「ね、ねえ優子ちゃん……スパッツ脱ぐ？」
「え？」
浩介くんが突然の提案をしてくる。
「一回さ、わざとゲームオーバーになってみようよ」
「えー!?　やだよお……」
「いやほら、落ちてく優子ちゃんがかわいくて、もう一回だけ見たいんだよ。ねえお願い」
「あうー」
もー、浩介くんにかわいいからって頼まれると、断れなくなっちゃうよー。
「じゃあ浩介くん、ちょっと後ろ向いててね」
「お、おう……」
浩介くんが後ろを向いたのを確認してから、あたしはスパッツを脱いで、生パンツに戻る。
あれ？　ちょっとだけ濡れてるような？
うーん、ともあれ、一旦鞄にしまおう。貸し出し品だから返さないと。
もう一度籠に乗る。ちなみに仕様は全部使いまわし。コンティニューの声も同じ。
「それでは初めます　1、2……」
「1、2……」
「3、4……」
「3、4……」
どうやらイージーモードだと、2回らしい。
「1、4……」
ブッ！
あ、浩介くん！
浩介くんが宣言通り、故意に誤答をする。
「きゃあ！」

あたしと浩介くんが勢い良く投げ出され、スカートが重力と風によってふわりとめくれ上がる。
両手で前を抑えるけど、当然間に合わない。
そして、後ろは丸見えになる。後ろに倒れたかったけど、うまく行かず、バックの熊さんを見られてしまう。
「いやー、かわいいね」
「うー、恥ずかしいからもうやめてよ……」
「とか何とか言って、本当は興奮してる俺を見て嬉しいと思ってるんだろ」
「ぎくっ……そそ、そんなわけないでしょ！」
あたしが「そんなわけあります」と言ってしまう。
「それにしても、前も後ろもプリントなんだな」
「むー、知らない！」
「ほれっ」
ぺろっ
「もー！」
浩介くんに掛け声とともにスカートめくりされてしまう。
喜んでくれるのは嬉しいけど……うー、あんまり内心嬉しそうにしすぎないほうがいいかなあ？
ってダメダメ、それじゃ浩介くんにもよくないでしょ。
「さ、後ろもつかえてるだろうし、次クリアしようか」
「う、うん……」
ともあれ、このことは先送りにしておく。３回目の挑戦はいとも簡単に終了し、結局ゲームオーバーになったのは９回、そのうち１回はあたしのスカートをめくるために浩介くんがわざとしたので実質８回だった。
その８回はいずれもあたしが原因でゲームオーバーになってしまったもの。
最後の部屋に行くと『クリア証』というカードのような記念品が２枚あったので受け取る。
裏面の説明を読むと、無限コンティニューでも、通常のものでも同

じ仕様らしい。
「いい記念になるな」
「うん」
また、この「クリア部屋」にはスパッツの返却ＢＯＸもあったけど、正直こんなんで大丈夫なのか不安になる。
「そういえば、よく盗難に遭わないよね？」
正直、盗み放題な気がするけど。
「優子ちゃん、ほらここ見てみて」
浩介くんが出口にいかにも「盗難防止」の機械が置いてあるのを見る。
しかもご丁寧に「スパッツ返却忘れにご注意ください」と図解付きのポスターあって、中に超小型ＩＣチップがあって、「このセンサーは高性能です、例え体内に飲みこんでも反応します」と書いてある。
「なるほどねえ……」
それでも、ハサミとか使えば盗難できそうな気がするけど、そこまでするリスクに合わないかな？
ともあれ、あたしはこれからも基本的に生パンにするつもりなので、スパッツはもう用済みになった。
スパッツを所定の返却ＢＯＸに入れて、あたしは鞄から再びお魚さんのぬいぐるみを出し、抱いて歩く。
「じゃあ行こうか」
「う、うん……」
「ありがとうございましたー」
外に出ると、最初に案内してくれた係員さんが、笑顔で見送ってくれた。
よく見るといつの間にか最初の控え室のそばまで戻っていて、熱心な人は無限コンティニューの後もう一度腕試しにコンティニュー無しで並び直す事もできる仕組みになっている。
まあ、あたしじゃそんなの無理だけど。
浩介くんに連れられて、建物を出る。
とても恥ずかしいお化け屋敷だったけど、でも、スカートで来てよ

かった。
多分、あたしのことを見てる第三者がいたら、「淫乱な女の子」、「はしたない女の子」、「痴女」、そんな事を言う人もいると思う。
それでも、それでもあたしは浩介くんが好きだから。浩介くんが喜ぶところが、とっても大好きだから。
女の子としての、ううん、メスとしての本能のままに浩介くんを求めていきたい。
そんなことを改めて感じたお化け屋敷だった。

## 昼のひととき

「やっぱり、優子ちゃんとのデートはいつも楽しいよ」
「うん、ありがとう。あたしは恥ずかしい思いすることも多いけど……でも、浩介くんが喜んでくれるのが一番嬉しいから」
「うん、俺も」
かなり時間を使ってしまったけどあたしたちは次のアトラクションを探すことにした。
「うーん、なかなかいいの無いね」
人気そうなのは行列がすごいし、絶叫マシンは無理だし。観覧車は最後にとっておきたいし。
ちなみに、浩介くんも絶叫マシンはあまり好きじゃないらしい。
「そうだ、お腹も空いたしそろそろお昼にしようぜ」
「あ、うん。お昼食べてなかったわね」
食べ物の話題になると、急にお腹が空いてきた。
今までは、ゲームに熱中してて気付かなかったのかもしれないわね。
「ここらへんに食べられる場所はないかな？」
「えっと、案内地図は……」
あたしたちは、地図を探す。
すぐにそれを見つけられたので、遊園地の全体地図を見てみる。
「えっと、ここが現在地で、ここがさっきのアトラクションだから……」
「うん、すぐ近くだね」
あたしが地図を見ながら言う。
このまま道なりに行って、すぐに右に曲がればレストランコーナーがある。
色々なお店があるけど、全部遊園地の一環で、もちろん別料金。
どれも高そうな名前だけど、今はお金のことはあんまり考えないでおこう。
そう思いながら、時折聞こえる絶叫マシンから聞こえる叫び声と、

行き交う人々の話し声を背景音楽にしながら歩く。
「のどかだね」
「うん、さっきの池ほどじゃないけど……でも不思議よね」
「ああ」
人通りは結構多くて、音量は大きいのに、何故かのどかに感じてしまう。
体験したこともない、虚偽記憶によるノスタルジック。
いわゆる「２０世紀最後の生まれ」であるあたしと浩介くん……あれ？
「そういえば、あたしは２０世紀最後の生まれで、２０００年代最後の生まれだけど、浩介くんって誕生日いつだっけ？」
今まで気にしたことなかった。
誕生日プレゼントとか渡さなきゃいけなかったのに。
「そう言えば、話してなかったな。７月２２日だよ」
「え!?」
あたしが７月２２日と聞いて驚く。
それは忘れもしない、あたしが林間学校の最後の日、浩介くんに恋した日だった。
「７月２２日って……」
「あ、ああ。あの日だな……」
浩介くんと、どこか運命を感じてしまう。
あたしが恋に落ちた日は、浩介くんの誕生日だった。
「優子ちゃんは、６月２２日だろ？」
「うん、どうして知ってるの？」
「あー、優子ちゃんのお母さんに聞いたんだよ……それから、５月９日も誕生日なんだって？」
浩介くんが、あたしが女の子になった日のことを言う。
「そ、それは協会の人がそう言ってるだけで……」
確かに、女の子になった記念日という意味では、誕生日並みに大事だけど。
「ま、ともあれ今は食事だな……で、何で誕生日の話になったんだっけ

？」
「ああうん、記憶に無いはずなのに何処か懐かしいなあと思って」
「あはは、テレビとかでよくやってる『古き良き』がこんな感じなんじゃないの？」
浩介くんが笑いながら答えを言ってくれる。
うん、あたしもそんな気がするわ。
「よし、ここにしようぜ」
浩介くんが指差したのはホットドッグやポップコーン、ハンバーグなどを売っている大衆向けのお店。
確かに、最近あんまり食べないし、いいかもしれない。
何より値段が他のお店より安いみたいだし。
「うん、あたしもここでいいわ」
あたしがそう言うと、浩介くんが安心した表情をしてくれる。
「よかった……それで、優子ちゃんは何にする？」
「うーん、ホットドッグにしようかな？」
「それだけだとさすがに少なくない？」
確かにそれはあるわね。
「じゃあ、浩介くんとポテト大を分ける？」
浩介くんと2分するとちょうど良さそうだわ。
「うん。そうするか……俺はこの『スペシャルハンバーグ』にしようっと」
お昼の時間を少し過ぎ、中は大分空いている。
列はもうほぼなく、あたしたちは殆ど並ばずに入ることが出来た。
「すみませーん、スペシャルハンバーグ、ホットドッグ、ポテト大ください」
浩介くんが受付の人に言う。
「オーダー入りまーす、スペシャルハンバーグ、ホットドッグ、ポテト大です」
「ありがとうございます！」
厨房の方から声がして、あたしたちはお金を払い、レシートを受け取って席に座る。

ちなみに、このお店は番号札を渡されて、それを受け取る形だ。
「それにしても、今日は午前中から楽しかったなあ」
「でも、午後はどうするの？」
「うーん、確かにどうするかなあ？」
待っている間、あたしたちは今後のことについて話し合う。
でも本当にどうしよう？　絶叫系はあたし苦手だし、浩介くんも進んで乗りたいという感じではない。
遊園地には、他にもゴーカートとか、メリーゴーランドもあるし、観覧車もある。
まだまだ楽しめるはず。
番号札はちょうど1番、奥の厨房で調理しているけど、少し時間がかかりそうね。
でも、今は待つことは苦じゃない。浩介くんが居るから。
「でさ、やっぱり優子ちゃんってお淑やかだよね」
「そ、そうかな？」
浩介くんの突然の褒め言葉に、あたしはまたドキッとしてしまう。
「うん。でも、本当に嫌な時は、はっきり嫌って言ってね。俺も暴走しちゃうことあるだろうしさ」
「うん、大丈夫だよ」
あたしは努めて明るく言う。
本当に、浩介くんのこういうところが大好き。
「そうか、ならいいんだけど」
「うん、例え最初嫌だと思っても、その後に浩介くんが喜んでるところを見たら、すぐに吹き飛んじゃうわ」
「そうか、うん、それならいいんだ……でも、俺も気を付けるけど、男だから……歯止めが利かなくなるかもしれないしさ」
「うん、嫌な時はちゃんとそう言うわ」
「ありがとう優子ちゃん」
浩介くんも安堵の表情を見せている。
浩介くんも内心不安だったと思う。エッチなことにも従順なあたしを見て、いつかどんどんエスカレートしちゃうんじゃないかって

思ったんだと思う。
だけど、それを予め予見していたからこんなこと言ってるのよね。
でも、あたしは浩介くんの彼氏だから。
浩介くんがあたしのことを、あたしのためを考えているんだもの。
あたしだって、浩介くんにできることをしないといけないわね。
「番号札1番のお客様ー！　出来ましたので持って参ります」
「はーい！　取ってくる」
浩介くんがさっと立ち上がり受付の方へ行く。
すると店員さんも、浩介くんに向けて食べ物を持ってきてくれる。
なるほどね、こうすればいわゆる「出会い算」の方式になって双方共に時間の節約になるわけね。
あ、でも、空いているからこそかもしれない。
ともあれ、中には大きなポテトの袋と、巨大ハンバーグの袋、そしてホットドッグ。
「うわー、浩介くんのハンバーグ大きいね」
たしかにスペシャルとは言うけど、これは本当にすごい。
「あはは、でもこれくらい何てことないよ」
浩介くんは余裕そうな表情をする。
確かにいつもラーメンは大盛りだし、そんな物かもしれない。
「いただきます」
「うん、いただきます」
あたしは、ホットドッグを一口。
浩介くんもスペシャルハンバーグを豪快に頬張る。
そして、ほぼ同時に、ポテトの袋に手を伸ばす。
「どう？　優子ちゃん」
「うーん、暖かくて美味しいけど……特別美味しいわけじゃないわ」
「あーうん、俺もそう思う」
たしかに美味しいことは美味しい。それは間違いない。
でも、遊園地の中だから仕方ないとはいえ、量の割にちょっと高いから値段とは釣り合っていない。
だから、美味しいけどいわゆる「コストパフォーマンス」は悪いと

思う。
まあ、不満を言うほどじゃないけどね。
あたしはそう思いながら、ホットドッグを少しずつ食べる。
口を思いっきり開ければ、一口で縦方向は一気に食べられる量だと思う。
「にしても優子ちゃんさ」
「ん？」
ホットドックを食べていると、浩介くんが声をかけてきた。
「そうやって思いっきり口を開けて食べるのってほとんど見ないよな」
「あはは、うん。これはこう言う食べ物だからね」
確かに、口を開けすぎないで食べた方が女の子らしいとはあたしも思うけど。
それじゃさすがに時間がかかりすぎちゃう。
「幸せそうに食べてる優子ちゃんを見ると、こっちも幸せになってくるよ」
「えへへ、ありがとう」
やっぱり、浩介くんに幸せを与えるのが一番嬉しいわ。
あたしは改めて思う。
男受けを狙うことの何が悪いんだろう？
男受けのいい女の子ほど、同性に嫌われるというけど、レズビアンじゃ無いなら、男に喜ばれた方がよっぽど嬉しいじゃない。ましてや、好きな男の子なら尚更よね。
女の子が男の子に、自分たちに無い男の子らしさを求めるように、あたしも男の子が持っていない女の子らしさを見せてあげないと。
そう思いながら、お昼の時間は過ぎていく。

「さて、次はどれにする？」
ご飯を食べ終わったあたし達は、レストランの近くにあった地図を見ながら相談をする。
「ここから一番近くて遊べそうなアトラクションは……」

「うーん、メリーゴーランドかなあ……」
あたしが、メリーゴーランドを指さす。
確かにレストラン街からほど近い。
「ともあれ、行ってみようぜ」
「うん」
正面を見ると、上空から落とされるアトラクションが見える。
椅子に座って一気に上まで上がったら、そこから急落下するのね。
あれもジェットコースターに負けず劣らず怖そうだわ。
「あれもすげえなあ」
「へー、記念写真も撮ってくれるのね」
アトラクションの入り口をちょっと見てみると、さっき乗っていたお客さんへの記念写真として落下する瞬間が撮影されているのが分かる。
女の子は思いっきり口を開けて、両手も挙げてるポーズが多い。
男性の方は、結構本気で恐怖している顔も多い。
「ある意味でこっちの方が怖いよな」
「うんうん、あたし、スカートでよかったかも」
「どうして？」
「だって、もし浩介くんが絶叫マシン好きでも、パンツ撮られたくないって拒否できるもの」
「ははは、俺だってこれは苦手だよ。むしろ野次馬してるのが一番楽しいんだ」
浩介くんが面白いことを言う。
たしかにこれ、野次馬受けも狙ってるよね？
「うんうん」
さっきの「脱出系お化け屋敷」より風圧は激しいだろうし、見た感じスカートを防護してくれなさそうで、入口を見ると「スカートのお客様ご注意」という表示と共に、お化け屋敷と同様にスパッツ貸し出しの案内がある。
ともあれ、今はメリーゴーランドが目的地。あたしたちは絶叫マシンと叫び声を尻目に、平和なメリーゴーランドを目指す。

来てみると、今はちょうど前のお客さんたちが楽しんでいるところ。
入口からできている行列にあたしたちも並ぶ。ここは家族連れを中心に小さな子供が多い。
円の中をぐるぐると上下しながら回るわけだけど……
「浩介くん、どれにする？」
うーん、馬は一人乗りと二人乗りがあるけど、馬車の中なら浩介くんとあたしで横に並べてゆったり座れるけどちょっと視界が悪いかな？
「うーん、馬車の中にしようかな？　競争率も低そうだし」
「あー、なるほどね」
馬の上はよく見ると小さな子供たちがたくさん乗っている。
あたしたちが押しのけるのはなんか気が引けるわね。
さて、メリーゴーランドから流れる音楽が止まり、前のお客さんたちが一斉に降りていく。
家族連れや小さな子供やカップルの他、何故かおじさん一人のお客さんも結構いる。いわゆる「大きなお友達」というのかな？
あ、でも、浩介くんもあたしといるからカップルに分類されているけど、一人だったら大きなお友達よね。
あたしと浩介くんは、予定通り入口に近い馬車の上を陣取る。
外から見るより中の視界は良さそうね。
「えーそれでは開始します」
係員さんの声とともにボタンが押されると、若い女性の声がした。
その女性は、「皆様、夢の世界にようこそ」と言って、よく分からない説明と注意事項を述べると共に、音楽が流れ出し、「では、出発します」という声とともに、メリーゴーランドが走り始めた。
ガタン、ゴトン！
「お、結構揺れるな」
「うん」
あたしは、左手でお魚さんのぬいぐるみを強く抱きしめ、右手も浩介くんをしっかり握る。

子供たちのはしゃぐ声がよく響く。絶叫マシンが苦手でも、あるいは身長制限で乗れなくても、ゆったりとした癒しの空間を楽しめる。
左から外を見ると、結構写真に撮っている人も多い。
確かに野次馬が楽しいと言うのも分かるわね。

「浩介くん」
「ん？」
「あたしね、今とっても楽しい」
「あはは、俺はちょっと恥ずかしいかな……」
「でも、子供たちが楽しんでるのを見ると、何だか癒されるの」
「優子ちゃん……優子ちゃんって、やっぱ母性強いよね」
「うん……」
スキー合宿で子供たちと一緒に接して、あたしの中で小さい子供をかわいがる感情が強くなったと思う。
あたしの中でのかわいらしい女の子としての感情は、同時に母親としての感情につながったわ。
馬車の中には絵が書き込まれていて、おそらく古い童話の場面を描いたものだと思う。
しばらく時間が経つと、音楽が止まり、アトラクションが終わってしまった。
「皆様、お疲れ様でした。この先もどうぞお楽しみください」
あたしと浩介くんが真っ先に出る。
中には「もっと乗っていたい」と親に言う子供もいたけど、親に諭されて渋々降りていく。
他にも、もう一回乗りたいのか列に並び直す親子もいる。
あたし達は、何となく園内を散策し、遊園地のちょうど中央の噴水広場に来た。
「ふー、涼しいなあ」
「うん」
噴水の水が周辺の気温を適度に下げている。
一応、「噴水の中に入らないでください」という注意書きの看板があ

る。
まだ3月なので、淵に腰掛けている人もいないけど、真夏とか多いんだろうなあと思う。
少し歩き疲れたあたしたちは、何も話さずに思い思い休んでいる。
ただでさえ赤い服は目立つのに、ぬいぐるみを抱きかかえていると更に目立つらしい。
でも、顔が童顔のお陰で、幸いにも「いい年して」という感じではない。
「優子ちゃんってさ」
「ん？」
浩介くんがこっちを向いて話しかけてくれる。
「何か考え事してたり、心が動揺したりすると、ぬいぐるみを抱きしめる癖ない？」
「うーん、そうかもしれないわね」
自覚は全くないけど。
「優子ちゃん、ぬいぐるみ好きなんだね」
「うん、最初に買った猫さん、犬さん、熊さん、うさぎさん、浩介くんに貰ったお魚さん、それから今年に入ってタヌキさんとキツネさんのぬいぐるみを買ったわ」
ぬいぐるみさんが増えて、ベッドも賑やかになったと思う。
「普段はベッドで寝てるの？」
「うん、前までは一人だったけど、今は賑やかになったわ……たまに朝起きて足で落としちゃってることもあるけど」
「そ、そうか……さ、ここから近いのは高台にあるゴーカートだな。どうする？」
浩介くんがいつの間にか持っていたパンフレットの地図を見ながら言う。
「うん、入る」
というわけで、あたしたちはゴーカートを次の目的地にした。
あたしは何となく、遊園地のどんどん奥、特に最奥部の観覧車に近付く方向へと誘導されていく気がした。

# 最後の遊園地

ゴーカートでは前後二人乗りを選択、運転は浩介くん任せになった。
「よし、シートベルトを閉めたな。優子ちゃん、そっちは大丈夫か？」
「うん、大丈夫！」
念のため、もう一度シートベルトを締めたかどうか確認してからあたしが言う。
もし締めないで発車して何か起きても自己責任だ。
「出発！」
道幅も狭く、スピードもあまり出ない、のんびりしたゴーカート。
この遊園地、さっきの池もだけど結構のんびりタイプらしいわね。
絶叫マシンは凄いらしいけど……って、あたしたちがそう言うアトラクションでばかり遊んでいるせいかな？
「おりゃあ！」
浩介くんの謎の掛け声と共に、スタートする。後ろから見ても分かるくらい、思いっきりアクセルを踏んでいる。
浩介くんの荒っぽい運転は、途中何回か道の端にぶつけているけど、お構いなしに進む。
「浩介くん、運転荒っぽいよ」
「はは、ゴーカートだからこそさ」
確かに、現実の車の運転でこんなことをしたらシャレにならないけど。
しばらくカーブや直線を楽しんでいると、看板が見えた。そこには、「この先上り坂、止まらないようにアクセルを踏もう」とある。
ちなみに、小さな子供向けが乗ることを想定し、漢字には全て振り仮名が振ってある。
まあ、浩介くんのこの様子だと、常時踏みっぱなし何だろうけど。
ゴーカートが登っていく。徐々に坂道が緩くなっていったと思うと、道幅も狭くなる。
そして真っすぐ進むと「この先下り坂、スピード注意」と書いてあ

る。
「なんかアクセル効かねえなあ」
「浩介くんそれリミッター」
「ですよねー」
そんなことを言いながらゴーカートが下り坂へと差し掛かる。
多分、このアトラクションのハイライトシーン、ゴーカートは風を切るようにスピードが上がり、やがて右へと大きくカーブする。もちろん、スピードが上がると言っても所詮はゴーカートなので絶叫マシンのような怖さはない。
「お、ループするぞこれ！」
浩介くんがスピードを殺さないようにハンドルを右に取りながら言う。確かにさっきからずっと右に曲がっているけど……
「え？　そうなの？」
「ああ、さっき下の道が見えた……ほれ、前見てみろ！」
突然、カーブが直線になった。
それを見た浩介くんが一気にハンドルを戻しながら、後ろもあたしに声をかける。
眼前にはトンネルが迫っていて、中に入ると視界が一瞬暗くなる。
トンネルの中は映像も流れていて「ようこそ」「これからもお気を付けて」「よい一日を」と言った声とともに、遊園地のマスコットキャラクターが出迎えてくれる。
そう言えば、さっきもちょっとマスコットがいたかも？
ループ線を抜け、再び緩い上り坂になって少し経つと、ゴーカートはスタート地点に戻ってきた。
「終わりだな」
「うん」
浩介くんが名残惜しそうな顔をする。やっぱり男の子だからこういうの好きなのよね？
って、あたしもちょっと前まで男の子だったでしょ……なんか最近こういうの多いわね。男の子の気持ちはちゃんと「知識」として知っておかないと、浩介くんを満足させることが難しくなるから、「知識」

まで忘れちゃうのは女の子としてマイナスだから気をつけないと。
「もう一周する？」
「いや、いいよ」
正直次はあたしの運転になると思うんだけど、浩介くんほど楽しい運転できないだろうし。

「ありがとうございましたー！」
係員さんに見送られて、あたし達も出る。
「疲れたなあ」
「うん、あたしも。そろそろお開きにする？」
メリーゴーランドとゴーカートだけだけど、午前中の池のボートやお化け屋敷での疲れも残っていて、結構遊び疲れちゃった。
「そうだな。残ってるのは絶叫系や高所系みたいだし」
「うん、じゃあ観覧車乗ろうか」
あたしが、更に奥にある観覧車を指差して言う。
ここから見ると、さっきまでよりもかなり大きく見える。
「あ、そう言えば観覧車も高所系だっけ？」
「あはは」
浩介くんがそんなツッコミをしつつも、あたし達はこのデート最後のアトラクションになる、観覧車に向けて歩き出した。
ゴーカートよりさらに奥、遊園地の高台にして、すべての入り口から見て最深部にそれはある。
いわば、さっき行った池の端のちょうど逆側に位置していると言えば分かりやすい。観覧車からは、遊園地全体が見渡せるように工夫されている。
高台を少しずつ登る。道中は「超プチ登山」と言ってもいい道のりで、これも遊園地側の計算の一つなんだと思う。山の頂上に更に観覧車ということになるもの。
「お、いい眺めだな」
「うん」
そこの高台の頂上は開けていて、観覧車に乗る前からも、眼下に遊

園地全体が見て取れるようになっていた。よく見ると、他のお客さんも同じ長めを見ていた。
絶叫マシンが何台か動いているが、ここからは遠すぎて叫び声も聞こえない。
更に、さっき遊んだゴーカートのコースやメリーゴーランド、そして浩介くんといっぱいゲームオーバーになっちゃったお化け屋敷に、最初に遊んだコーヒーカップ、更には浩介くんと楽しんだ池には、ボートが多数浮かんで、僅かに動いているのも見えた。
「……俺たち、随分と遠くに来ちゃったな」
「う、うん」
本当は同じ遊園地の敷地内だし、そこまでの距離もないんだろうけど、とても遠くの出来事のように見える。もっと言えば、先程の池と同じく、遊園地特有の喧騒からは離れていて、まるで別世界のようにも感じてしまう。
本当に、この遊園地はうまく出来ている。だからこそ、生き残っているのかもしれないわね。
さて、観覧車にもそれなりに人が並んでいて、籠一つ一つでお客さんが中に入っていくから、列の捌きも速いけど、時間もかかるという感じになっている。
一歩、もう一歩と近付いていく。
あたしはふと、観覧車が小さな密室なのを思い出す。
もしかしたら、浩介くんとキスできるかな？　ううん、ここまでデートしたんだもの。締めくくりという意味でもキスしたいわ。
「お次でお待ちのお客様」
「あ、優子ちゃん行くよ」
「あ、うん」
あたしが考え事をしていると、係員さんの声がかかり、それがあたしたちであることを示していた。
浩介くんに声をかけられ、あたし達は、ゆっくりと動く観覧車の籠に乗り込む。
バタン！

観覧車の扉が閉められた。
あたしは、抱いていたお魚さんのぬいぐるみを隣の座席に座らせてあげる。
透明なのは腰から上なので、お魚さんの体型だと外は見えないけど。
「おお、すげえな」
浩介くんが感嘆とした声を上げる。
元々高台にある観覧車で、更に上まで登るんだから、絶景なのは当然かもしれないけど。
「ほんとだー」
見てみると、さっきまでは遊園地までしか見えなかった視界が一気に広がり、外側の街が見え始めた。
遊園地の周辺には一軒家が多い。さらに登ると奥の都市部が見える。幾つもの高層ビルが固まっている所、近くにとある学校法人が建てた独特のタワーも見えるので、多分あのビル群の中に、協会本部が入っているビルもあるはずだわ。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
「すげえ眺めだよな」
浩介くんの平凡な言葉。
でも、とてもいい言葉だと思う。
「そうだね。それにあたし達、二人っきりだね」
観覧車で見える風景の更に奥には、巨大な尖塔のような白いタワー、その手前には赤い三角形の塔も見える。
ここからだと赤い三角形のタワーの方が高く見えるけど、確か白いタワーは赤い三角形のタワーの倍近いんだっけ？
「あ、ああ……」
「えへ、浩介くん」
あたしは風景を見るのをやめ、浩介くんに向き直る。
風景よりも、浩介くんを見ていたい。
「ん？」

浩介くんはまだこっちを向いてくれない。
「風景はすごいけど、あたしの方がきれいじゃない？」
「え!?」
あたしがちょっとだけ、脚を広げる。
もちろん、パンツが見えない範囲でだけど。
「浩介くん、あたし……浩介くんが好き」
「な、何だよ今更！　ずっとそうじゃねえか」
浩介くんがやや苦笑いする。
「うん、でも今はね、特別な空間でしょ……だから言ってみたくなったの。ほら、もうすぐ頂上だわ」
「あ、ああ……」
もう一度だけ風景を一瞬見る。観覧車が更に登っていくけど、角度が緩くなった。
円形だから、徐々に頂上に近付いている証拠。

「んっ……」
あたしが何も言わず、口を前に出してキスしてアピールをする。一番高い所で、浩介くんとキスしたい。
浩介くんの強くて優しい唇があたしと触れ合う。
「ちゅっ……優子ちゃん……」
「うん、浩介くん……お願い……」
あたしの視界が甘く蕩ける。もう、外は見えない。もう、浩介くんしか見えない。
「んっ……じゅるっ……れろっ……ちゅっ……」
あたし達は、すぐに舌を絡め合う。
頭の中も、どんどんと蕩けていき、あたしは浩介くんに夢中になる。
「うっ……んんっ……じゅう……ぺろ……」
「じゅるる……ちゅぱっ……んぅっ……」
お尻から、観覧車の傾斜が緩くなり、殆ど横に移動しているような感覚が伝わってくる。そろそろ最頂部だがあたしも浩介くくんも、目の前のことに夢中になっていた。

あたしのために尽くしてくれる浩介くんは、どんな絶景よりもあたしの心を奪っていく。
そして、浩介くんなしでは生きていけない体になってしまう。でも、それでいい。それがあたしの望んだ幸せだから。
「んっ……ぷはっ……」
「浩介くん……」
「はは、一番上だよ」
混ざりあった唾液の糸がぷつんと途切れ、お尻ではなく、背中が押されている感覚が伝わってくる。
これはつまり観覧車が完全に横に移動する感覚ということで、景色はさっきと同じ。
でも、白いタワーの更に奥に、何か遠い山まで見えている気がする。
もしかしたら、この風景の中にも、あたしや浩介くんの家、小谷学園もあるのかもしれないけど、そっちの方向を見てみても、それらしき建物は見つからない。
「優子ちゃん……」
「うん、浩介くん……」
風景のことなどすぐに忘れてしまう。浩介くんのことが、何より好きだから。
浩介くんの右手に、ゆっくりと胸を触られる。
「やぁん」
「優子ちゃん、俺、我慢できない……ちょっとだけ、いいよな……」
「うん……いいよ……あたしも我慢できないから……お願い……」
あたしは、いつものようにあっさりと浩介くんを受け入れる。
「ちゅっ……」
ディープじゃないけど、唇を触れ合うキス。
「愛してる……」
胸を触られ、キスをされていると、何の気なしに、無意識にそんな言葉が漏れる。
「うん、俺も……」
そう言うと、浩介くんの左手にまたスカートをめくられる。

「いやあん」
今日はもう、2回パンツを見られて、スパッツありだけど何回もスカートの中を見られたけど……それでも恥ずかしいので、あたしが右手でスカートを抑えて抵抗する。
でも、そんな抵抗はいつものように、浩介くんに優しく払いのけられてしまう。
「ほら、ちょっとだけ、ちょっとだけパンツ……この熊さんを見せてよ」
「あううっ……うん、いいよ……」
そして、浩介くんのお願いを、いつものようにあっさりと受け入れてしまう。
あたしは、自分でも信じられないくらい浩介くんに従順になっている。さっき、「嫌なことは本当に嫌と言ってね」と浩介くんに言われたことを一瞬だけ思い出し、すぐに記憶の彼方へと消えてしまう。
「かわいいよね、何てキャラ？」
浩介くんが聞いてくる。
「え!? うーん、分からないわ」
実際の所、キャラクターの名前はないと思う。
「そうか」
浩介くんは、凍りついたように動かなくなる。
でも、少し経つと、また何かを言いたそうにしていた。
「浩介くん、どうしたの？」
「優子ちゃんってさ、身体も心も、本当に綺麗だ」
「うん、ありがとう……」
浩介くんに褒められる度に、あたしは、自分がどんどんとかわいくなっていく気がする。
恋をすると、女の子はかわいくなるから。
「すごく柔らかくて、何もかも、女の子らしいよ……」
「うん、うん……ううっ……」
あたしは、嬉しさのあまり、視界が潤んでしまう。
「ど、どうしたの優子ちゃん!?」

浩介くんが、突然泣き出したあたしに戸惑いと驚きを持っていう。
「ぐず……ごめん、浩介くん……あたし……幸せすぎて……嬉しすぎて……何だか怖いの……」
どうしてか分からない。あたしは何もかもが幸せで、怖くて怖くてたまらない。
「優子ちゃん、俺……絶対優子ちゃんを幸せにするから」
浩介くんが、あたしの耳元で優しく囁いてくれる。
「うん、あたしも……あなたに付いていきたいわ」
それは、ほとんどプロポーズ同然の言葉だった。
あたしたちは、もう彼氏彼女では満足できない。これからは婚約者として、過ごしていきたい。
そして、観覧車も徐々に降り始めていく。
「んっ……」
また、唇が重なり合う。
浩介くんの両手に、胸とパンツを好きなように好きなだけ弄られる。
あたしも、ちょっとだけ……
「んっ……っ！」
あたしが、浩介くんの頭を触ると、浩介くんがびくってなる。
「浩介くんの頭って……大きいよね……」
「ゆ、優子ちゃん！」
ああ、やっぱりこの感触……大好きだわ。
「浩介くんって、頭良さそう」
「そ、そうかな？」
浩介くんを立ててあげるけど、実際にはあたしのほうが成績が良かったりもする。
「くそっ、俺もやられてばかりじゃないぞ！」
「やあん！」
浩介くんがやや乱暴に、でも痛くならないように胸を触ってくる。
観覧車の降りる向きがやや変わってきた。そろそろ下に降りてきた証拠。

このままだと下で待ってる人に見られちゃうかもしれない。
「ねえ浩介くん……」
「あ、ああそうだな……」
肩から上はガラス張りだから外からも見えてしまう。
浩介くんも、そろそろまずいと思っていたのか、浩介くんが離れくれた。
あたしは、スカートを直す。
「これはだめ」
ぺろりっ！
「いやーん！」
せっかくスカートを直したのに、浩介くんにスカートをめくられたままにされ、また熊さんのパンツを見られてしまう。
確かに、この場所は外からは見えないけど。
「じろじろーじろじろー」
「もう！　わざわざ口に出さないでよ！」
浩介くんにスカートをめくられたまま、パンツをじろじろ見られてしまう。
ここまで長時間、凝視されたのも初めてで、すっごく恥ずかしい。
外をちらりと見る。遥か遠くの尖塔は見えなくなり、いつの間にか、高層ビル群も見えなくなっている。
そして、麓の町が一つ一つ視界から消えていく。
「浩介くん……お願い、もう許して……」
あたしが恥ずかしさのあまりに、やや涙目で許しを請うように言う。
本当は地上が近いからだけど、浩介くんが興奮しそうな許しの乞い方を、無意識にしてしまう。
「ああ、うん……そろそろだもんな」
その言葉とともに、浩介くんがスカートを元に戻してくれる。
そして、前のお客さんが籠から出ていく。
あたしもぬいぐるみさんを抱き、荷物を持ち、浩介くんと共に観覧車を降りた。

「ふー、楽しかったね」
「ああ……じゃあ帰るか」
「うん、ちょっとあたしも我慢できないよ」
「俺も」
　あたしたちは高台を降りて、来た道を一気に戻り、最初に入った場所と同じ入口から出て、遊園地を後にする。
「浩介くん、バイバイ」
「ああ、４月、学校でな」
「うん」

　家に帰って、あたしは母さんにバレないように、今日一日のことを思い出して快感を覚えた。なんだろう、ちょっとだけ気分が悪いわ。
　そしてこのデートの翌日、あたしは女の子の日になった。１日ずれてくれて、本当に良かったと思う。

## 始業式

４月第２週の月曜日、今日は３年生として初めての登校日。

先週金曜日には小谷学園では入学式があったらしく、今日は始業式という名の在校生と新入生との交流会ということになっている。

あたしと浩介くんの関係は学校中が知っていると言っても、新入生はそれを知らない。

あたしにアタックしてくる新入生は絶対に出てくるだろう。他にも、先生の自己紹介なんて言うのもある。

あたしは２年生の時と同じように制服を着る。

これも今年で見納めね。

「おはよー」

「優子おはよう、今日から学校？」

「うん」

クラスについては永原先生の計らいで去年と同じメンバーになっている。

今日から３年生なので、教室は去年よりも１階高い場所にある。

２組のメンバーは同じと言っても具体的にそのまま２組とも限らない。

そこで、３年生の下駄箱の近くにクラス替えの結果を貼った配分の紙があり、ここでロッカーも含めて新しい場所を知ることになる。

あたしは一番左上にある「安曇川虎姫」の名前を見つけた紙を見た。

そしてすぐ下に「石山優子」ともある。

どうやら「３年１組」があたしたちの新しいクラスみたいね。

担任の名前も、きちんと「永原マキノ」になっている。

念のためメンバーを見てみたけど、全員去年と同じだった。ロッカーの場所も覚えた。

「なあ、１組って去年の２組そのまんまじゃね？」

「ああ、どうなってんだ？」

「シャッフルしたら偶然そうなったとか？」

「いや、そんなわけあるかよ」
「もしかして、石山じゃね？」
「……どうだか」
「石山を見てると思うんだけどさ……すげえよなあ人間って」
「ああ、彼氏作ってイチャイチャ幸せそうにしてるもんなあ」

他のクラスと思われる男子2人組があたしの噂をしている。
最近ではこういう噂話も減ってきて、「優一」の存在は殆ど消えたも同然だった。
でも、あたしも含め、皆の記憶から抜け落ちるわけじゃない。
だからこうして、話題になる時はなる。でも、以前と違って「中身は男」何ていう噂も殆ど聞かれなくなった。
それでも、こういう配慮が必要というのは「念には念を入れよ」ということだと思う。
「はぁ……はぁ……」
朝の早い時間、教室で一番上まで上がるのって結構疲れるわね。
ともあれ、新しい教室について見ると、ドアの前に座席の張り紙があった。これも去年と同じ。
あたしの席は……うん、浩介くんの隣だわ。
ガラガラ
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう」
「うん、おはよう桂子ちゃん」
あたしと桂子ちゃんの挨拶も、いつも通り。
「それにしても、新学期、新年度だけどそんな気がしないわね」
「うん、何かロッカーと教室だけ変わったって感じよね」
変わらない3年1組の噂は、すぐに流れると思う。
それにともなって憶測も、流れると思う。
だけど小谷学園は合唱コンクールもなく、クラス替えにも重きをおいていないからこそ、今回のようなこともできたんだと思う。
それに、学校はまだ狭い世界だから、そのうち大丈夫。

問題は外の世界のこと。
蓬莱教授を妨害する勢力も多くなって行っているという。
春休み中の連絡によると、日本では抵抗が少ない方で、海外ではとんでもないくらいの抵抗運動になっていて、「入国禁止」や「ノーベル賞剥奪」を求める署名もあるという。
まあ、蓬莱教授は例のごとく全く動じていないんだけど。
やがて、時間とともに一人一人、クラスのおなじみの顔が出揃う。
やっぱり皆、新年度なのに代わり映えしない顔ぶれに、どこかに違和感を感じている模様。

ガラガラ……
「優子ちゃん、おはよう」
そして数分後、あたしに続いて浩介くんが部屋に入ってきた
「うん、おはよう浩介くん」
浩介くんもまた、どこか落ち着きながらも、落ち着いていない。
そんな奇妙な様子が見て取れる。
「はーいみんなー！　ホームルームを始めますよー」
そして最後に、永原先生が入ってくる。
「今日から皆さんは3年生ですが、3月に行ったように、うちのクラスは2年2組をそのままスライドさせました……これから行う始業式ですが、基本的に去年と同じです。新入生の皆さんには優しくしてくださいね」
「「はーい！」」
クラスメイトたちも元気よく返事をする。
「えー、特に田村さん、木ノ本さん、石山さんは新入生の皆さんからも質問攻めにされると思いますので、怒らないでください」
「おう」
「ええ」
「はい」
永原先生の突然の名指しにも三者三様に返事をする。
確かに、この3人が質問攻めにされそうというのは、予想がつく。

新一年生たちも、去年の文化祭を見た生徒も多いだろうし。
とりわけあたしは、学内では恵美ちゃんや桂子ちゃん以上に有名人だった。
何気にテニス全国一より有名人ってすごいことだと思う。
永原先生も、元々人気のある先生だったけど、今や対外的にも極めて有名な先生になってしまった。
……最も、それは「永原先生」でというよりは、「永原会長」としてだけど。
「それでは、そろそろ時間ですので、始業式に行きますよ」
永原先生の号令とともに、秩序だって列を作る。
このあたりは、去年と同じクラスという点がメリットになっている。
「ねえ、浩介くん」
あたしは念のため、浩介くんに声をかけておく。
「分かってるて。新入生がよっぽど変なことしねえ限り手は出さねえよ」
「ああうん……でも、テニス全国一位の恵美ちゃんはともかくあたしや桂子ちゃんのこと、もう新入生に？」
あたしが疑問点を投げかける。
「どうだろうな？　例の協会のホームページ？　あそこにも写真こそまだ無いけど『正会員　石山優子』って書いてあるしなあ。もしかしたらって思うんじゃねえの？」
「う、うん……」
正直インターネットに自分の名前載せられるのはいい気分じゃなかったけど、正会員の重責を考えれば仕方ないとも思った。
ともあれ、あたしたちは体育館に行く。
一番前にはそわそわした新一年生たちも座っている。
小谷学園には男子女子の制服があるけれど、既に着崩している人もいる。また、私服の人もいる。
もちろん、誰も注意しようとはしない。違反でも何でもないからだ。

ただ、私服はすぐに居なくなる。
すぐに、制服の便利さに慣れてしまうからだ。
このあたり、まだ小谷学園の「自由」をうまく使いこなせていない印象だ。
時間が経つと、2年生達も椅子に座っていく。
とにかく、あたしにとっては学校の最後の1年、長いようで短い1年になりそうね。
あたしたちの学年は受験シーズンでもある。でもそのことで、ちょっとだけ疎外感もある。
だから、実力テスト代わりに、進学しない前提でどこか適当な大学を受けちゃうのもありかなとも思った。
おおー！
「ん？　何なの？」
「さあ？」
何の脈絡もなく会場が大きな歓声に包まれていく。
一体何が起きたの？
「あっ！　ほら優子ちゃん、来賓席見てみてよ！」
「え!?」
桂子ちゃんとあたしで、その原因を探ってみると、何と蓬莱教授が来賓席に向かって歩いていくのが見えた。
以前から何度か会っている蓬莱教授だけど、彼は例の記者会見以来、注目の人物になっている。
メディアにも顔を見せない、研究の邪魔とあれば平気で実力で排除するなど、記者からの評判は最悪らしいが、気にも留めていない。
それどころか、研究の妨害だとして、最近では警備員を雇い始めたとも言っていた。
でも、蓬莱教授が座ると、目立たなくなったのかあまり尾を引いてはいないみたい。
「えー皆様、いかがお過ごしでしょうか？　校長です。只今より、始業式を開始いたします」
まずは国歌と校歌の斉唱、

校歌の方は新一年生はまだ全然歌えていない。当たり前だわ。
あたしも優一の時に受けた入学式と始業式では……って、まあいいわ。
「次に、連絡事項なんですけど……今年から新しく当校に赴任してきました先生方を紹介いたします――」
まずは、新しい先生たちの紹介、また引退した先生の紹介もある。
「で、次になんですけれども……本校の永原先生に関連してマスコミの取材が来ることがあります。こちらについては永原先生の方から、改めてお話があります……えー、では永原先生お願い致します」
司会進行役の校長先生が壇上を永原先生に譲る。
背が低い永原先生は台に乗るような感じで壇上に立つ。
「えー、新一年生の皆さん、そして在校生の皆さん、ご紹介に預かりました永原マキノです。もしかしたら、私のことは既に、聞いて知っていらっしゃる新一年生の方も多いと思います」
永原先生の話に、ガヤガヤしていた始業式が、一気に静かになる。
「私は、ＴＳ病患者として、教師を本業にしながら、日本性転換症候群協会の会長を務めさせていただいています……この学校には、ＴＳ病患者の方が２名いらっしゃいまして……１人は私で、もう１人の方は３年生にいます」
うん、それはあたしのこと。
クラスメイトたちが、あたしをちょっとだけ見てくる。
「えー、いずれにしても、蓬莱先生の研究発表以降、ＴＳ病はとても注目されています。協会を除けば、ＴＳ病患者が複数いる空間は殆どありません。ましてや私は会長の身です」
「ですが、ここは小谷学園、学びの場所です。生徒の皆さんに置かせられましては、マスコミの取材でマイクを向けられても、決してしゃべらないようにお願いします……こう言っては何ですが、私や蓬莱先生に対する誹謗中傷に利用されてしまいかねず、引いては小谷学園の評判も傷つきかねません」
やはり、取材拒否をしろということというお達しだった。
「それから、テレビやインターネットでは、デタラメがよく流れていま

すので、皆さんには私のことも話しておかないといけないと思います」
そう言うと、永原先生が自身の半生について触れた。
まず、年齢は今年で５００歳になるということ、ただし誕生日が不明なので1月1日を誕生日としていること。
そして元々は真田家に使える伝令役の足軽で、２０歳の時にＴＳ病になったこと。
戦乱の時代は、隣の村に逃げ、その後戻り、本能寺の変まで同地にとどまったこと。
大坂夏の陣までは諸国を放浪し、１６５３年に時の４代将軍の招待で江戸城に行き、明治までそこにとどまったこと。
ちなみに、通称呼びはそのままだが、基本的に名字だけで誤魔化している。
そして、明治維新後、鉄道が全国に張り巡らされる計画を知り、逃げ切れないと判断して１３５年前から教師を始めたこと。
ちなみに、小野先生の名誉のためか、小野先生の元担任とは言わず「ここの学校の先生にも、私の元教え子が居ます」って言っただけだった。
小野先生はビクッとしてたけど。
そして、１００年前より、「日本性転換症候群協会」を立ち上げ、会長に就任したこと。
初恋話はもちろん、吉良上野介に受けた恩のことや、「真田幸村」の虚構については省略していた。話が長いのは嫌われることは、小谷学園ではよく知られたことだから、どれもこれも簡潔にまとめている。
「以上が、私の簡単な半生です。長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました」
永原先生が再び教員席に戻る。３年1組以外の席からは皆驚きの声も漏れている。
考えてみれば、永原先生が全校生徒に向けて自分の正体を話すというのも、とても珍しいことだと思う。
あたしが優子になる前は、クラスの誰も知らなかったし、あたしと

永原先生だけの秘密になっていた。
それが桂子ちゃんへ、龍香ちゃんへ、そしてクラスの女子へ、男子も含めたクラスのみんなへと流れていった。
学校中で噂になっても、こうやって永原先生から直接聞く機会は、3年1組以外は今回が初めてだ。
永原先生が正体を話すのも、全てあたしのためだった。
今まではずっと隠していたけど、多分あたしのために、変わったのかもしれない。
もし、あたしがこの病気にならなかったら、あたしにとっても蓬莱教授の研究もきっと他人事で、永原先生は一人で苦しめられていたかもしれない。
あたしのことを恩人と言っていたけど、それは決して誇張ではないと思う。
本当に、あたしのＴＳ病が、世界を動かしているんだと、まだ高校生だけど……既にこの社会の……世界の歯車の一員なんだって思う。
「えー続きまして、校長先生からの連絡ですが……特にありません！
今年度も平穏無事に1年を過ぎることを祈っています！　以上！」
パチパチパチ！
校長先生の潔さに、来賓席も含め、拍手が沸き起こる。
「ではですね、お待ちかねだと思いますので、在校生の皆さんと、新入生の皆さんで、交流会といたしましょう。これで、始業式を終わります。解散！」
校長先生が高らかに宣言し、在校生が新一年生のもとに駆け寄る。
「優子ちゃん、あたしたちも行こうか」
「うん、そうだね」
そう言えば、あたしや桂子ちゃん、恵美ちゃんは特に有名なんだっけ？
あたしと桂子ちゃんで並ぶと、普段から話題になるからねえ……
「お、桂優先輩のお出ましだぞ」
「やっぱかわいいよな」

「うんうん、優子ちゃんの彼氏は幸せものだよなあ」
２年生の後輩が、あたしたちのことを話題にしている。
よく見ると、いくつか人だかりができていた。
「あの、田村先輩、テニス部ってどんなんですか？」
「えっとだな……あー、その……」
そこの人だかりは恵美ちゃんで、新一年生に囲まれている恵美ちゃんはとても動揺している。
恵美ちゃんに憧れて来たテニス少女も居るらしい。
「あ、あの！」
「はいどうしました？」
新一年生の女の子が声をかけてきた。
「その、石山先輩と木ノ本先輩ですよね！」
「はい、そうだけど……私達がどうしました？」
「その、石山先輩って……男だって本当ですか？」
新一年生の女の子の質問、あたしはこみ上げてくる怒りと悲しみを何とか抑えて言う。
「ふふっ、今は女の子よ。永原先生の話聞いてなかったの？　この学校にはＴＳ病の女の子が２人いるって」
「あ、そうなんですか……」
ちょっとだけ威圧感があったのか、新一年生の女の子も萎縮気味だ。
そして、新一年生の後輩たちがたくさん集まってきた。
「あの、石山先輩って、どのくらいまで女なんですか？　見た目は女性そのものですけど」
「ふふっ、あたしは赤ちゃん産める所まで女の子よ。お願いだからあたしのこと、女の子としてみてね」
そこは絶対に譲れない。
「ヒエー、やっぱＴＳ病ってそう言う病気なんだなー」
「ねえねえ石山先輩、その美貌の秘訣ってなんですか？」
別の新一年生の女子が声をかけてきた。

うーん、難しい質問だわ。
「え!? そうねえ、ちゃんと清潔にしているってことかな。あたし、女の子になったときからこの顔、この体、この髪ですから」
「ふえー、世の中不平等ねえ……」
ちょっと残酷な回答だったかな?
でも事実だし仕方ないわよね。
よく見ると、隣の桂子ちゃんも質問攻めにされている。
「その、石山先輩の彼氏ってどんな人なんですか?」
「うーんと、優しくて強くて責任感ある人ですよ」
「へー、どんな感じですか?」
「えっと……その、あたしのことといつも考えてくれて、いつも守ってくれて……きゃー!」
浩介くんのことを考えたら赤くなっちゃう。
新一年生の目の前で、ちょっとよくないと思うけど、それでもやめられないわ。
「石山さん、ちょっと来てくれるかしら?」
突然、永原先生の声がした。
「あ、はーい! ごめんね、永原先生に呼ばれちゃった」
あたしは新一年生の脇を通り抜け、大急ぎで永原先生のもとへと向かった。

## 永原先生と蓬莱教授の作戦

「石山さん、ごめんなさい急に呼びつけて」
「いえいいんです。ところで話というのは？」
「ついてきてくれる？」
「……分かりました」
あたしが頷くと、永原先生が、目立たない場所へとあたしを誘導する。
もしかしたら、協会の話かもしれない。
「蓬莱先生、石山さんを連れてきました」
「おう、済まないね」
するとそこには、蓬莱教授と浩介くんが居た。
一体何の話だろう？　もしかして進学先のことかな？
「それでは……まず幾つか連絡事項があります。先日なんですけど、また一人、関西の方でＴＳ病の新しい患者が出ました。ですが、このご時世ですからマスコミによる報道被害が予想されます」
幸子さんに続いて、もう一人患者が出てきたという。
それだけなら浩介くんや蓬莱教授はいらないはず。幾つかと言っていたし、もう少し注視しないと。
「……それで、永原会長はどうするんですか？」
ともあれ、今は協会の会長として永原先生に接する。
「とにかく、ＴＳ病というのは精神が不安定になります。困ったことに、彼らは情報の専門家ですから、特定も時間の問題でしょう。女性として行きていくことが確立されていない患者たちがマスコミの注目を浴びてしまえば、ただでさえ高い自殺率も一気に高くなります……もし彼女に何かあったら私達もいつでもサポートできるように準備してください」
「……分かりました」
「それからもう一点、蓬莱教授にお願いします」
あたしの方を向いていた永原先生が蓬莱教授の方を向く。
「……もしマスコミの報道被害がひどいようならば、私達の間で彼女

たちを保護することも検討します。その時は蓬莱先生、よろしくお願いします」
「ああ、こうなったのは俺にも原因がある以上、ＴＳ病患者の支援については最大限協力するつもりだ」
蓬莱教授は、あっさりと永原先生に要求を受け入れてしまった。
多分、蓬莱教授からすれば容易いことなんだろうと思う。
それにしても、あたしが佐和山大学に進学すると決めてから、蓬莱教授も心なしか丸くなった気がするわ。
「それからもう一つ、先程も言いましたように、メディアの取材は基本的に拒否してください。どうしてもと引き下がってくる場合は、絶対に編集などの印象操作せずに、ストレートに報じること。そのことを、社長を含めて誓約書に書かせてからお願いします」
「「はい」」
今度はあたしと浩介くんに向けての連絡事項。
要するに、トップの誓約がない限り取材を拒否しろということね。
２月にあった討論番組がよっぽど頭に来ているのだろうか？　それとも他の正会員さんの意向かもしれない。
「いずれにしても、ここは学校です。協会とは違うのですから」
「分かりました」
「それからもう一つ、今週土曜日ですが、早速会合がありますので……強制ではないですが、石山さんもできれば参加願います」
「ええ」
強制ではないこの会合で、こう言うということは、それなりに大事なことかな？　いつもは会合があるという連絡事項だけだし。
「それで、そのＴＳ病になった子と言うのは？」
ここで浩介くんが初めて発言。
「ええ、高校の入学式の途中で倒れたらしくて、式そのものがシッチャカメッチャカになっちゃったみたいよ」
やっぱり、色々とインパクトがある病気だもんね。
あたしは授業中だったからまだ良かったけど、こういう大事な時に倒れたら……しかも入学式で倒れるなんて精神的にもつらそうよね。

「……もしマスコミの報道被害が出たら……どうやって、ケアしましょう？」
「とりあえず、俺が囮になる」
「!?　どういうことですか？」
　蓬莱教授の突然の発言に、永原先生も驚く。
　囮？　どういうことなの？
「ああ、俺がちょっとした研究成果でも、頻繁に記者会見を開くことにする。研究時間が短くなるのは痛手だが……メディアを引きつけるためだ。俺や永原先生はともかく、何の罪もない未成年の子に、報道被害を拡散させちゃいけねえからな」
「……恩に着ます。最近、蓬莱先生のお世話になってばかりで、何でもっと早く信用できなかったんだろうと、後悔しています」
　永原先生が、罪を告白するように言う。
「永原先生、あまり自分を責めなさんな。俺が信用できなかったのも、無理も無いことだ。それに、マスコミが俺を叩けば叩くほどな、俺の口座に入ってくる寄付金も増えるんだぜ。最近は富裕層だけではなく、中間層からも支援を受けているんだ。だから俺にとっても、デメリットばかりじゃない」
　どうやら、蓬莱教授の方にもメリットがあるらしい。
「ただ、蓬莱先生、あんまりやりすぎるとマスコミも飽きてしまうわ」
「ああ、分かっとる。協会の方に報道被害が及びそうになったらいつでも俺を頼ってくれ」
　ともあれ、蓬莱教授は味方になってくれるみたいね。
「さて、石山さんに篠原君」
「「はい」」
　今度は蓬莱教授が、あたしたちに声をかけてくる。
「君たちの決断に、改めて感謝するよ。特に石山さん。あなたは、本来ならアイドルや女優になっていてもおかしくない……いやむしろ、なって然るべき存在だ。最も、彼氏がいるから無理かもしれないが」
「……確かにあたしはかわいくて美人だと思いますけど、それがどうしたんですか？」

「マスコミが、絶対に放っておかない。本来未成年がなれない正会員になれていることや、彼氏がいることを含めて、な」
蓬莱教授が冷静な口調で言う。
確かに、マスコミにとって「乱暴だった男が女の子になった途端女の子らしくなって彼氏まで作り出した」なんて絶好の話題になるものね。
「ええ、私達の協会に注目が集まったのも、インターネットでホームページに公開していた顔写真が拡散されたためです」
「この病気になると、みんな美少女になるだろ？　その中でも、石山さんはひときわ輝いて見えるんだ」
でも、正直、会合の中にいると、あたしが一番美少女かと言われれば自信はない。
「ええ、冗談みたいな話ですけど、以前協会本部にアイドル事務所が押しかけてきたこともありましたよ」
「え!?　そんなの知らなかったですよ」
永原先生が知らない事実を言う。
どうしてあたしに言ってくれなかったんだろう？
「隠すつもりはなかったんですが、あの時本部にいたのは私だけで……ともあれ『皆さん本業があるので』と丁重にお断りしたら、それ以上は近付いてこなかったんです」
「なるほどな、アイドル事務所はメンツも重要だからな。強引にアイドルに勧誘したとなれば事務所全体のスキャンダルになって所属アイドルにも影響を及ぼす。それに対して、マスゴミどもは失うものがないからこそ、暴走できるんだ」
蓬莱教授が言う。
もし何か攻撃をされても「言論の自由に対する攻撃」とレッテルを貼り、やりたい放題すればいいと思っているらしい。
「全く、悪しき連中だ。何とか教の教会の連中は俺のことを悪魔だの何だのと散々に罵るが、本当の悪魔はこいつらだぜ……最も、それ以前に悪魔なんてのは存在しないが、な」
「蓬莱さんは、数ある宗教の中でも、特にキリスト教が嫌いなんですか

？」
何だかんだで蓬莱教授は初詣にも来ていたし、どうも教会が嫌いらしい。
「当たり前だ。ついでにいうと、そこの永原先生もだな」
それはスキー合宿の時にも聞いたわね。
「ええ、スキー合宿の時に話しました」
「……そう言えば、永原先生は９７０歳を当面の目標にしていると言っていたな」
蓬莱教授が、以前あたしに言ってくれたことを言ってくる。
「ええ、酒の席で、そんなことも話しましたわ」
「……全く、永原先生、あんたのキリスト教嫌いも、俺に全く負けてねえぜ……いや、俺以上に意地が悪いよ」
蓬莱教授がやれやれという表情で言う。
「あの？　どういうことですか？」
「旧約聖書の一番最初の書物に創世記というのがあるんだが……最初の方の人の寿命はメチャクチャなんだ。例えばアダムとイブのアダムが９３０歳まで生きたとか、ノアの箱舟のノアが９５０歳まで生きた。とかな」
「荒唐無稽な話よ。今の私が人類最年長のように、古い時代はＴＳ病になってもすぐに死んじゃうわ。そもそも、この病気が不老だと世間に知られるようになったのは大正時代になってからよ。しかも、旧約聖書の族長は皆男性ということになっているから、尚更よ」
１００年前より不老者、つまりＴＳ病患者の全世界の記録を漁ってきたが、永原先生ほど生きた事例は神話を除いて皆無だという。
「つまり、嘘ということですよね」
「当たり前の結論だ……だがな、バカどもはそれを信じ込んでいる。それどころか寿命が長いのは信仰が深い証拠だとか何とか言っているんだ」
確かにアホらしい話といえばそのとおりではあるわね。
「それでな、その旧約聖書の中で一番長命だった人物……その人が９６９歳で死んだということになっているんだ」

蓬莱教授が言うには、その人の名前はメトシェラと言うらしく、単に父エノクが６５歳の時の子として生まれ、何歳の時に子供を産んで、９６９歳で死んだ。としか書かれていないらしい。
いずれにしても、永原先生が９７０歳まで生きればもはや神話の登場人物以上に長生きすることになる。
「変なところでマメでな、こやつが死んだ年がちょうどノアの大洪水と一致するようになっててな、色々と妄想を膨らませているらしいんだ。でも、だ。そんなことはどうでもいい」
「ええ、神とやらにつばを吐きかける信仰心のない私が９７０年間生きることで……洪水など起こらないことで、絶対神など存在しないことを証明してあげるのよ」
永原先生が強い口調で言う。
幸いにして、ＴＳ病は医学的には不慮の事故に巻き込まれたりしない限り１０００歳でも２０００歳でも可能だから、そこまで無謀な話じゃない。
「昔と違って、安全性は高まっているわ。ＴＳ病の免疫力の高さも含めて、若くして死ぬことも殆どなくなったわ。私の企ては、成功する可能性が高いわ」
永原先生が自信を持って言う。
「ふっ、だがな永原先生、その計画には一つだけ欠点がある」
「……ええ、私も。それは知っています」
永原先生と蓬莱教授が言う。
そう、きっとそれは蓬莱教授の研究のことだから。
「ああ、俺が生きているうちに不老計画を達成する。もしそれが普通となれば……俺の正しさを証明すれば……哀れな宗教家どもは永原先生が９７０歳まで生きた時よりも大層悔しがるだろう。それに、その計画が完遂するのは４７０年も後のことだ。例え俺が失敗しても……瀬田さんか、あるいは別の研究者が達成するだろうさ」
「そうですね、蓬莱教授が死んでも、蓬莱教授の思想は絶対に死なないわ」
永原先生が力強い口調で言う。

元々、2人の個人的な仲は悪くなかった。だから、結果さえ出してしまえば、こうして信頼関係を築く事もできるんだわ。
「それから、石山さんにもう一つ連絡事項があるわ」
「ええ、何でしょう？」
どうやら、まだ連絡事項があるらしい。メモ帳持ってくればよかったかな？
「塩津さん、協会に入りたいと言ってきたわ」
「え!?　幸子さんがですか？　あたしとしてはまだ早いと思いますが……」
幸子さんはあたしと違って特別じゃないし。
「もちろん、最終試験はまだですし、男が好きになるということもないそうですけど……普段周囲にあまり同じ病気の人がいないので、交流がしたい。と言ってきました」
「……それで、許可できるかどうかですけど、あたし個人としては少し早いと思います」
「ええ、ですが、少し面談をしてみてはどうでしょう？」
「……分かりました」
普段は余呉さんが代理で務めてくれているけど、こういうのはあたしじゃないと出来ない。
もちろん、出来るのは推奨するかまだ早いかを伝えるだけ。
規則上ではこのアドバイスは正式なカウンセラーしか出来ないから、あたしが出るしかない。
と言っても、これも大した権限じゃない。
カウンセラーに勧められなかったからと言って入会届は拒否できない。
「それで、土曜日の会合の後、あそこで1時間ほど面談時間を予定してます。帰ってくるのは夜遅くになります」
「うわー、久しぶりにハードスケジュールね」
「ええ、ですが、石山さんにお願いしていいかしら？」
「分かりました」
ともあれ、幸子さんのためにも、あたしのキャリアアップのために

もサボることは出来ないわね。
「それじゃあ、私からは以上です。石山さん、篠原君、蓬莱先生、ありがとうございました」
永原先生がそう言って去って行く。
しかし、すぐに新一年生たちに捕まり、質問攻めにあっている。
やっぱりさっきの生い立ちに関連してだと思う。
「さて、俺から君たちへの連絡事項がまだ残っている」
「？」
どうやら、蓬莱教授にもまだ用事が残っているという。
でもあたしたちに？
「もう進学先も決まってる君たちだけど、勉学のモチベーションが維持できないだろう。だから君たちには、今から俺の専門の遺伝学に関する本を送っておくよ。これはそのまま大学でも教科書に出来るからな」
「は、はい」
「何せ、俺の研究は困難を伴うからな、今のうちによく勉強しておいてくれ……卒業できる程度にな」
「分かりました」
ともあれ、蓬莱教授の好意は無駄にしないでおこう。
一方で、浩介くんは何だか浮かない表情をする。
「さ、俺も変な虫がつく前に退散するよ」
「お疲れ様です」
「お、お疲れ様です……」
浩介くんはやや動揺しながら挨拶、あたしは少し余裕の表情で挨拶する。
蓬莱教授が人目を避けて、体育館から出ていく。
「さ、俺達も新一年生に挨拶しないとな」
「う、うん……浩介くんノリノリだね」
「ああ、優子ちゃんかわいいからな。変な男が寄ってこないように、今のうちにたっぷり見せつけてやらねえと」
浩介くんが胸を張ってドヤ顔を作って言う。

「あはは……」
　でも、確かに必要なことだとは思う。
　最近は当たり前になりすぎて殆ど意識しなくなったけど、とにかくあたしはこの大きな胸とかわいい顔、背中まで伸びる黒髪のロングストレートヘアーで男性たちの視線を釘付けにしてしまうから。
　だからこそ「彼氏いるぞ」と言うアピールで、他の男が寄ってこないようにしなきゃいけない。
　あたしももう、浩介くん以外考えられないんだからなおのことよね。
「あれ、石山先輩、そっちの先輩は？」
　早速新一年生の男子が声をかけてきた。
「俺か？　俺は優子ちゃんの彼氏の篠原浩介ってんだ！　よろしく」
「うっ……よろしく……お願いします……」
　新一年生の男子が心をズタズタに引き裂かれたくらいに落胆した表情を見せる。

「ほら見ろ、石山先輩には恋人がいるって言っただろ」
「うー、木ノ本先輩狙おうかな？」
「どうだかね、お前程度に狙っていい相手かな？」
「うぐぐっ……」

　どうやら、あたしが彼氏持ちなのは、既に新一年生の間でも知られていたことみたい。
　でも、それを知らなかった哀れな男子が撃沈してしまったと。
「なあ、学生の情報網ってすげえよな」
「うん、あたしもそう思う。特に女子高生は」
「って、優子ちゃんも女子高生だろ？」
　浩介くんが「おいおい」という感じで突っ込む。
「ま、まあね……」
　いけないいけない、こういうところで「男」を出したら、それが女の子を失う元になりかねないわ。

やっぱり、あたしも道半ばなのね。
そうだわ、久々にあれをかけよう。
私は女の子……私は女の子……うんよし！
「どうしたの優子ちゃん？」
「ああうん、久しぶりにカリキュラムの時の暗示をかけたのよ」
「えっと確か……『私は女の子』って唱えるやつだっけ？」
「う、うん……」
「心配するなよ、優子ちゃんはもう十分すぎるほど女の子だよ。もちろん努力を怠ってもいいとは言わねえけどさ」
浩介くんがとても優しい口調で言う。
それでも、どうしてもあたしの中では、恐怖感が拭えない。
男に戻ることはないと分かっていても、結局最初の１６年が宙に浮いてしまっている。
だからどうしても、コンプレックスを拭いきれない。
でも、克服したらそれはそれで、よくない気もする。
あたしたちは、去年のミスコンのことや、ＴＳ病のことなどで、新一年生たちからもすっかり有名人になってしまっていた。
明日から授業だけど、大丈夫かな？
平穏無事にと校長先生は言っていた。
この小谷学園での３年目、「無事」はともかく、「平穏」はどうやら無理そうみたいね。

# 急変する天文部

始業式の翌日、この日はあたしの3年目、女の子として迎える初めての新年度。
今日は最初の授業が行われる日。
とは言え、もう3年目となると、別段特別な印象もない。
ともあれ、いつも通りを心がけたい。
「おはよー」
「優子おはよう、今日から授業？」
「うん」
母さんとのやり取りも、普段と変わらない。
「もう優子も3年生かあ……なんかあっという間ね」
母さんがしみじみと言う。
でも、あたしにとってはとても長い時間に感じる1年だった。
「あたしは、やっと3月って感じだよ」
「ふふっ、大人になると1年は短く感じるわよ」
多分、女の子になったこの1年は大人になっても長く感じると思う。
「うん知っている。でも最年長の永原先生は、江戸時代はあっという間に感じたけど、明治に入ってから、特に最近の１００年は長く感じるって言ってたわ」
「あー、そういえば優子が倒れた時の病院でもそんなこと言ってたっけ？」
あたしと母さんは随分と昔の話をする。
いや、母さんにとってはついこの間の出来事かな？
「それに、永原先生は最近の半年はとても長く感じるんだって」
「へー、やっぱり優子のせいかしら？」
「うん」
永原先生のことを話す。
永原先生はあたしのお陰で救われたと言っていた。ずっと長い間しこりに残っていたものが、完全ではないにしろ取れてくれた。吉良

殿のことで、永原先生も救われていた。
どちらにしても、長生きしてても時間を長く感じることが出来ることが分かった。
ともあれ、あたしは母さんと一緒に朝食を食べる。
この春休み、家事手伝いをずっとしてたけど、母さんのアドバイスのおかげで、更にもう一歩、進歩したと思う。
「ごちそうさまでした」
「お粗末さまでした」
あたしと母さんのこのやり取り、そしてテレビでニュースをチェック。
幸いにして、新しくＴＳ病になった子のことはやっていない。
そういえば彼女、高校の入学式で倒れたって言ってたよね？
じゃああたしより年下になるのかな？
幸子さんは大学生だし、年下の患者が現れたのは初めてのことかもしれないわ。
そんなことを考えながら、本格的に3年生になったあたしの学校生活が始まった。
ＩＣ定期券を改札にかざす。
これも、石山優子名義になって時間が経っている。携帯電話も、ＴＳ病で名義を変えた。
そう言えば、あたしの部屋の古い教科書やノートには、まだ「優一」の痕跡が残っているかな？
古いアルバムもその一つだと思う。
そして、これからも、優子の記録だけが延々と積み重なっていくだろう。
階段を降りると、出た時間が良かったのか、電車のダイヤの小さな乱れか、すぐに入ってくる。
そう言えば、小谷学園と最寄り駅が同じな佐和山大学だと同じ方法で通学することになりそうね。
あたしの胸、近くの若い男性と中年男性がまたじろじろ見てくる。
本当に、大きな胸に生まれてよかったわ。

もし小さかったら、女性としての自覚が育たなかったし、こうやって男から視線を集めることで、女の子としての自信にも繋がらなかったから。

去年、一昨年と変わらずあたしは駅を降り、通学路を歩く。

道行く人々を見ていると、新入生の人たちはまだ歩き方もぎこちないのですぐに分かる。ちょっとだけ顔を寄せると案の定、新入生の色だったし。

「ねえねえ、あの先輩かわいいよな。胸もデカかったし」

「お前知らんのか？　あの人、石山先輩だよ。去年のミス小谷だって」

「へー、あれが石山先輩……すげえな、生で見ると一層かわいいっていうの？」

「いいよなあ、彼氏いるんだろ？」

「ああ、篠原先輩だろ？　めちゃくちゃ喧嘩強くて、スポーツ万能で心優しくて、石山先輩を守ったから、石山先輩の方から惚れたんだってさ」

「うげえ、付け入る隙がねえなあ……」

早速、1年生たちがあたしの話題、それから浩介くんのことも話している。

浩介くんの方が前のめりならまだ行けそうな気もするんだろうけど、あたしのほうが惚れている状況では、それも叶わぬ夢。

そんな男子たちの嘆きを聞きながら、あたしは昨日に引き続き3年生の下駄箱に入る。

間違えて2年生の下駄箱に行かないためにも、まだちょっとだけ、意識する必要がありそうだわ。

ともあれ、すぐ慣れると思う。

ガラガラ……

「おはよー」

「優子ちゃんおはよう」

浩介くんが、あたしを見て真っ先に声をかけてくれる。
「うん、おはよう浩介くん」
去年と同じ顔ぶれで、あたしは席に座る。
ちなみに、席はさすがに去年とは違う。
そういえば、去年は席替えをしていなかったことを思い出す。
というのも、クラスメイトの誰も「席替えしよう」と言い出さなかったことや、あたしが女の子になったことや永原先生の正体、あるいは学園祭での永原先生のインパクトが強すぎて、そんなこと吹き飛んでしまったから。
もし、誰かが席替えしようと言い出したら、あたしは全力で抵抗するつもりだけど。
「優子ちゃん、昨日のさ……見た？」
「うん見た見た」
そう、今の席なら隣はいつも浩介くんが居るから。
だから、あたしは席替えはしたくないと思っている。
「あ、浩介くん、そろそろ時間だから」
「おっとそうだな」

「はーい！　皆さん、ホームルームを始めますよー！」
永原先生が入ってくる。
朝のホームルームでは、連絡事項といってもかなり少ない。
掃除当番に関しても、３年生になると受験のことも考慮されてか負担も軽くなっている。
それよりも授業だ、始業式の時に教科書はもらったけど全部ロッカーに入れてあるから取り出すのも大変。
ともかく、あたしは３年生の授業をするわけだけど、実際の所２年生のうちにすることはほぼ全て終わっていて、３年の授業は受験対策が主になる。
あたしも浩介くんも、蓬莱教授の計らいで進学先決まっちゃってるし、モチベーションを保てるか心配だわ。
でも、そんなあたしたちのことはお構いなしに授業が進む。

「ふう、今日も1日終わったー」
授業が終わり、お昼休みは食事の後は浩介くんと雑談。
幸いなことに、ただの雑談なら、高月くんたちも喚いたりはしないでくれる。
……まあ、あれもあれで浩介くんには気持ちいいみたいだけど。

「優子ちゃん、篠原、天文部行くわよ」
「おう」
「はーい！」
そして放課後は天文部の活動が待っている。今の天文部は坂田部長が抜け、あたしと浩介くんと桂子ちゃんで部員は3人ということになっている。
「そういえば桂子ちゃん、部活の宣伝とか案内とかはどうしてるの？」
「ああうん、一応場所と部長の名前と、簡単な画像だけ書いた宣伝チラシは作ったわ……去年や一昨年の使い回しだけどね」
どうも、桂子ちゃん曰く、去年の宣伝チラシのデータをちょっとだけ弄って、部長の名前を「坂田舞子」から「木ノ本桂子」に変えただけらしい。
まさに「ザ・手抜き」という感じで、部活が盛んじゃない小谷学園らしいと言えばその通りだけど。
「ふう」
「失礼しまーす」
って誰も居ないけどね。
「さて、天文部だけど、去年とやることは同じよ」
「うん」
桂子ちゃんが、昨年度まで坂田部長が座っていた席に座る。
あたしと浩介くんも、それぞれ適当な席に座る。
去年作ったミニチュアも健在だけど、3月に言ったように、もし来年度にあたしたちが卒業して部員0になって廃部になればこれらのミニチュアは桂子ちゃんが引き取ることになる。

「じゃあ今日も張り切って――」
コンコン
「はーい」
不意にドアがノックされる。
桂子ちゃんもやや動揺気味に返事を返す。
「うわっ、本当だ桂優先輩がいるよ！」
「な、俺の言った通りだろ？」
「うげっ、篠原先輩まで……！」
見ると1年生の男子2人が見えた。
天文にはあまり興味なくて、あからさまにあたしと桂子ちゃんが目当てという様子。
「いらっしゃい、体験入部希望かしら？」
でも、桂子ちゃんは全く動じてない。
すごい演技力とメンタルよね。
以前も言ってたけど、「女たるものこれくらい出来なきゃ」と言ってた。
でも、バレたら「怖い」と思われる諸刃の剣とも言っていて、使いすぎに注意とも言っていたし、こうした使い分けは桂子ちゃんに本当に勝てない。
「え、えっと……はいっ！」
男子の一人も動揺しながら答えてくる。
「私は部長で3年の木ノ本桂子。で、こっちは同じクラスの石山優子ちゃんと篠原浩介くん」
「よ、よろしくお願いします先輩……」
「ふふっ、よろしくね」
あたしが作り笑いを作る。
案の定、男子たちはドキンとする。
彼氏がいるんだから作り笑いだって分かってるはずなのに、本当に男って女が絡むと単純だわ。
「言っておくけど、優子ちゃんに手ぇ出すなよ！」
そして、それを見ていた浩介くんがやや低めのドスが効いた声で言

う。
うん、男の子の独占欲だよね。
あたしも元男だから、そのことはよく分かるわ。
「わ、分かってますよ……」
「それよりも部長、天文部について教えてください！」
あたしには付け入る隙がなくても、桂子ちゃんは現在フリー。
1年男子は果敢に桂子ちゃんに食らいついてくる。
「ふふっ、分かりました。えっと、では適当に、パソコンのある席に座ってください。あ、優子ちゃん、篠原、適宜教えてあげてね」
「おう」
「はい」
桂子ちゃんの声とともにあたしと浩介くんもスタンバイをする。
コンコン
「はーいどうぞー」
し　かし、天文部について教えようとした矢先、またもや訪問者が現れた。
「うおー、ラッキー！　木ノ本先輩だけじゃなくて、石山先輩まで居るよー！」
「おい待て、石山先輩には怖い彼氏がいるんだぞ！　手出したら命はないぜ！」
今度もまた、一年生の3人組。
大方、部長の名前「木ノ本桂子」を見て、来てみたんだと思う。
「あら、ちょうどよかったわ、天文部について教えますからそちらの2人と一緒に聞いてちょうだい」
「あ、ああ……」
さすがは桂子ちゃん、あしらうのうまいわね。
「えっと、じゃあまずパソコンを立ち上げてくれる？」
こうして、桂子ちゃんによる天文部の入部講座が始まった。
まずＪＡＸＡのサイトを巡回したり、天文話で盛り上がったり、あるいは天文に関係ない話でも盛り上がることもあった事を言う。
更に、毎年の文化祭で出しているのが宇宙のミニチュアのこと。

これについても桂子ちゃんがしっかり教えてくれた。
去年卒業した坂田部長の話も軽く出てきた他、桂子ちゃんがいろいろな天文知識を披露していた。
真剣に聞いている男子も居るけど、つまらなさそうにしている男子も居る。
最初から桂子ちゃん目当てというのも、潔くていっそ清々しいと思うけど。
「ふふ、聞いてますか？」
「え、あっ！　はい聞いてます部長！」
ウトウトしていた男子に桂子ちゃんが鋭く言う。
うーん、そう言う感じの部活じゃないんだけどねえ。
「あ、心配しないで、いつもはこんな感じじゃなくて、寧ろぬるすぎて物足りなく感じるかもしれないわよ」
すかさずあたしがフォローを入れる。
「お、優子ちゃんナイスフォロー」
桂子ちゃんが古典的な親指を立てるポーズをしてあたしを褒めてくれる。
「そ、そうなんですか？」
「うん、身構えなくていいわよ。あたしと浩介くんも去年の途中に入ったんだし」
天文部と言うけど、天文を中心とした総合雑談って感じの部活だし。
「そ、そうですか……」
「うんうん」
それにしても、男子たちも、あたしや桂子ちゃんに声をかけられるか浩介くんに声をかけられるかで露骨に態度が変わっているわね。
まあ、浩介くんのことなら大丈夫とは思うけど。
「以上が、天文部で普段やることよ。天体観測は……滅多にしないわね。去年もクリスマスに一回しただけだったし」
「うへー、なあどうする？」
「あー、ライバル多そうだよなあ。でも木ノ本先輩ほどの美人、ほって

かねえぜ」
「あーあ、俺は永原先生でも狙おうかなあ……」
新一年生は５人、この中で桂子ちゃんを巡って争うのは難しいとみんな考えているみたい。
それにしても永原先生を狙うって……
「一年生のみんな？　永原先生はやめておいたほうがいいわよ」
「え!?　そうなんですか!?　美人だと思いますけど」
「確かに、永原先生はあたしや桂子ちゃんに負けないくらいの美人よ。去年のミスコンでは三つ巴だったもの」
「確かに実年齢は５００歳だけど、年の差なんてほら……なあ……」
永原先生本人の他には、あたしと浩介くんしか知らない秘密。
絶対に口を割るわけには行かないけど、変な夢を持たせないためにもうまく誤魔化しながら言わないと。
「ふふっ、永原先生、恋愛はする気ないのよ。あまりそう言う下心で付きまとわないほうがいいわ」
「そうですか……」
後輩たちは物分りよく引き下がってくれる。
とにかくこの学校の生徒の物分りの良さは素晴らしい。
小谷学園は「極めて自由な学校」ということになっているけど、「他人に迷惑をかけるな」というこの学校唯一の「校則」が根強く生きている。
それがもう、新一年生たちにも浸透しているのは、嬉しい限りね。
そう言えば、小谷学園の風通しが良くなったのも、あたしがＴＳ病になったのがきっかけって、坂田部長が言っていたっけ？
うん、こうやって誰かの役に立てたなら、それはとっても嬉しいなって、あたしは思う。
「さ、今日から天文部の活動をするけど、今日一日やっていく？　それとも、他の部活を見学する？」
桂子ちゃんが、体験入部希望の一年生男子５人に問いかける。
「えっと、その……今日はここにいます」
「そう、明日ここに来てもいいけど、他の部活を回ってもいいわよ」

桂子ちゃんがそう言う。
まあ、体験入部ってそういうものだし、当たり前のことだけど。
「そうね、体験入部期間ですから、色々な所を回るといいですよ。ただし、運動部系は弱小揃いですから、そこんところは知っておいてね」
あたしが付け加える。
そう言えば、野球部はとうとう部員が最低限必要な９人を下回っちゃったとか。
さくらちゃんも自分が唐崎先輩と付き合ったせいで部員たちが次々辞めたのを気にしているらしく、マネージャー仕事に熱が入らなくないらしい。
代わりに、好きな唐崎先輩とデートする日が多いとか何とか。
……そのあたり、さくらちゃんも何気にメンタル強いわよね。
「「はい！」」
ともあれ、今日の天文部は賑やかに８人で行われた。
天体のことについては、主に桂子ちゃんが話す。元々、「天文マニア」と呼べるのはここでは桂子ちゃんだけだから、当然のことだけど。
「あー疲れた！　まさかあんなに人が来るなんて思わなかったよー！」
新一年生たちが先に帰宅し、桂子ちゃんがあたしと浩介くんに言う。
「桂子ちゃんが部長だって知って、みんな入りたがるんだものねえ」
「俺も男だけどよ、男ってあんな単純なんだな……」
浩介くんが、自嘲気味にそう言う。
「うんうん、私もそう思うわ」
「でも、浩介くんはあたしのこと、ちゃんと守って、あたしから好きになったんだからすごいわよ」
「あ、ああ……」
浩介くんがちょっと照れくさそうに顔をそらしてしまう。
今ではあたしから好きになったことや、あたしの方が惚れていることになっているけど、正確には浩介くんの方が恋したのは早かった。

でも、今はそんなことどうでもいい。
好きで好きでたまらない男の子だもの。
あたしたちは、３人で下校する。
４月の学校は、ひとまず良さそうな船出だった。
天文部の男子たちも、今はあんな不純な動機だけど、あの中にいつか、天文の魅力に取り憑かれて、桂子ちゃんの、あたしたちの跡を継いでくれる人が出てきて欲しいと思ってしまった。
元々、今年までと思っていたのに、やっぱり、惜しくなっちゃうわね。
人間の欲望って、本当に不思議だわ。
そう思いながら、あたしは家に帰り、明日に備えることにした。

## 午前の会議揺れる思惑

高校3年生の最初の一週間が終わった今日は協会で臨時会合が行われる。

連絡事項として新しい患者について、そして最近のメディアについての動向の報告。

またあたしは幸子さんと面談のため「出張」することも決まっている。

あたしは幸子さんと東京で会った時と同じ緑色の服にしようかなとも考えたけど、結局落ち着いた茶色い膝丈のロングスカートにすることにした。

あ、でも、もちろんトレードマークの頭の白いリボンだけは欠かさない。

母さんが「似合う」って言ってくれてつけたこのリボンも、何だかんだで愛着がある。

「おはよー」

「おはよう優子、今日は塩津さん所に出張だって？」

「うん、帰りは遅くなるからそのつもりでいてね」

「分かったわ」

幸子さんが協会への入会希望を出してきた。

それに対して、幸子さんが本当に入会しても大丈夫かどうかを見極めるため、担当カウンセラーのあたしがもう一度幸子さんの家にお邪魔することになっている。

ともあれ、今日は朝食を母さんと準備することが主な家事になる。

てきぱきと食事を作り、食べていく。

「いってきまーす」

「いってらっしゃーい、鍵閉めていくからねー」

「はーい！」

あまり時間も無いので、あたしは早めに家を出ることにした。

協会本部への道のりは、学校よりもずっと遠い。

この時間帯は、平日なら朝ラッシュ時間帯真っ只中。今日は休日出

勤のサラリーマンもそれなりに乗っている。
でも、痴漢するほどの混雑じゃない。
幸い、あたしは、あの一件以来痴漢はいない。
聞くところによれば、狙われる人はしょっちゅう狙われてしまうとか。そう言う意味で、あたしは恵まれているかもしれない。
ともあれ、あたしは協会本部を目指す。
ビルの近くに行くと、おしゃれな美少女が数人いることに気付く。
これから会合に参加する、あたしの大切な「仲間」たちだ。
「あら、石山さん、おはようございます」
「比良副会長、おはようございます」
よく見ると、その中には比良さんもいて、あたしに声をかけてくれる。
「おはようございます」
「おはようございます」
他にもいた協会の仲間たちとも挨拶し、駅を出る。
「聞いたわよ、あなたの担当した子、協会に入りたいんだって？」
「はい、それで今日は出張です」
比良さんが、幸子さんいついて話している。
「大変ね。頑張ってください」
「はい」
あたし達はビルに入り、最上層用のエレベーターに向かう。
ボタンを押し、ちょうど1階に止まっていたエレベーターに入る。
それにしてもこのエレベータ本当に反応がいいわね。
「４９階です。　４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」
エレベータのいつもの声を聞き、あたし達は協会本部へと急ぐ。
「おはようございます石山さん、比良副会長」
「はい、おはようございます」
協会本部でも、既に何人かが到着していて、このように挨拶をし合う。
「ふふ、石山さん、比良さん、おはようございます」
「「おはようございます永原会長」」

あたしと比良さんがほぼ同時に言う。
「ふう、これで今日は正会員は全員参加ね」
永原先生が上機嫌で言う。
ともあれ、あたしはいつもの席に座る。
その間にも何人もの会員さんに声をかけられるが、正直まだ正会員でさえ名前と顔は一致しない。
みんなあたしのことが覚えてくれたみたいだし、早くあたしも覚えないと。
その後も、続々と会員が集まっていく。
今日の参加は、普通会員と正会員のみで、最初の会合より少し多い６１人となった。
「さて、時間になりましたので、臨時会合を開きます」
永原先生の掛け声で、会合が開始される。
「それじゃあまず、連絡事項一つ目です。今日から普通会員に新しい仲間が加わります」
「え!?」
あたしは一瞬動揺する。
しかし、永原先生の自己紹介は幸子さんとは別人の２７歳のＴＳ病歴１０年の患者だった。
本人曰く、「１０年」という節目なので、入ることにしたとか。
やっぱりかなりの美人さんで協会の人たちにも負けていない。
「次に連絡事項二つ目です。今週にまた一人、関西の方でＴＳ病で倒れた人が出ました。そちらについては、担当カウンセラーの方お願いします」
「はい」
関西支部長の正会員さんが、立ち上がる。
「大分女性の体に戸惑いを見せています。学校は入学式よりお休みしているみたいです。特に頻繁に肩を気にしていて、肩こりを訴えています」
ありゃりゃ、あたしと同じかな？

でもあたしは肩こりに悩み始めたのは数週間後くらいだったし、それを考えるとよくないわね。
「親御さんの話によれば、本人は性別が変わることよりも、不老になるという部分に注目しているみたいです」
おそらく、蓬莱教授の影響だろう。
「ただ、時折弱った体に苛立ちを見せていて、『戻りたい』と口走っているようです。また、運の悪いことに男時代に使っていた一人称が『僕』でして……治る気配はもちろん、自主的な訂正も見受けられません」
その報告を聞き、周囲からため息が漏れる。
あの時の幸子さん程じゃないけど、厳しい状況には変わりない。
「分かりました。まず、前段階の事をさせてみましたか？」
あたしの作ったカリキュラムの前にする女性の利便性の紹介。あまり効果なかったのかな？
「はい、確かに女性の便利さは理解してもらえましたが、スカートなどの女物の服を着るといった『好ましい行動』は何一つ見受けられていません。おそらくこのまま『なあなあ』でやり過ごすつもりかと思います」
周囲からは「あちゃー」「それじゃだめだよ」「中途半端はいけないわ」「自殺の道ね」といった声が聞こえてくる。
この病気になったら、患者が取るべき道は、きっぱりと「女の子として生きていく」という以外にないから、確かに結論の先送りは無意味ではある。
「そうですか、では引き続き、女性として生きていくように説得をお願いします」
「分かりました」
「それからもう一つなんだけど、えっと……蓬莱先生の研究以降、私たちへの注目は深まっているわ。だけど、極力取材は拒否してください。勝手なことを書いたら都度抗議するようにはします」
「「はい！」」
会のみんなも力強く返事をする。

やはり騙し打ちのような取材に、みんな相当怒っているみたいだわ。
「それと関連してですが、私たちが取材拒否となりますと、比較的新しくＴＳ病になった非会員の患者さんに対して、メディアの報道過熱が予想されます。そのため、各家庭には私達協会が実際に受けた報道被害を紹介した文章と、それに関連して絶対に取材に応じないことを要請する文面、更にひどい場合には蓬莱教授を頼るように書いた文章を郵便で送っておきました」
「あの」
「はいどうぞ」
さっき紹介された普通会員の人が早速手を挙げる。
「蓬莱教授を頼るってそういうことですか？」
「それを今から説明するわね。蓬莱先生は、今回のマスコミ対策について、私たちに協力してくれることになりました。もし私たちに矛先が向かた場合、蓬莱先生が些細なことで記者会見を開いて、メディアの関心を逸らさせる……つまり囮役になって下さいます」
これはこの前の始業式での打ち合わせ通り。
永原先生の説明に「へえ、蓬莱教授やるわね」「どうやら、信用してもいいみたい」といった会話が聞こえてくる。
研究実績を積み重ねたことや、協会への献身的姿勢がようやく信用を勝ち取ったという感じ。
元々、不老そのものはあたしたちが存在を証明していた。
蓬莱教授の研究成果だって、そこまでの荒唐無稽では無かったのかもしれない。
「蓬莱先生が囮になってくれたとしても、私たちへのメディア攻勢を止めさせることは難しいでしょう。そこで各自の取材拒否の方法ですが、『取り付く島もないように』拒否してください」
うん？　どういうことかな？　ちょっと聞いてみよう。
「あの、永原会長、『取り付く島もないように』というのはどういう感じなんですか？」
「簡単です。例えば、『今忙しいから』とか、『予定が立て込んでいるか

ら』といった、将来に含みを残す拒否の仕方ではなく『マスコミの取材は一切受けません』『勝手なことを記事に書かないでください。迷惑してます』といった感じです」
　つまり、適当に受け流しちゃダメってことよね。
「それでも付きまとってくるなら『あなたの存在そのものが嫌いです』『警察を呼びます』といった形でお願いします」
「分かりました」
　あたしも正会員だし、他の会員よりも注意しないといけないわね。
「このことは維持会員、家族会員の方々にも発信します。それから、当たり前ですけどＴＳ病と無関係な事柄に関する取材は一切自由です。また、こちらに極めて有利な条件の場合も、正会員までご相談ください」
　永原先生の指示にみんながうなずいている。
　でも、ここまで強硬な拒否をしていいものだろうか？
　マスコミの攻撃性を考えると、余計に書き放題しそうな気がするわ。
「あの、会長」
「はい、余呉さん」
「その、一番怒った私が言うのも何なんですが……」
　余呉さんがいかにも申し訳なさそうに手を挙げて、話し始める。
「ええ」
「ここまで強硬な手段でいいんでしょうか？　余計に状況を悪化させる危険性もあると思います」
「うーん、他の皆さんはどう思いますか？」
　ちょうど余呉さんはあたしが考えていたことと同じ発言をしてくれた。
　よし、ここはチャンス。
「あの、あたしも余呉さんに賛成です」
「あら？　石山さんもなのね」
　永原先生がちょっと意外そうな顔をしている。
「や、やっぱりちょっと不安で」

「うーん……どうしましょうか？」
思わぬ反対意見に、永原先生も唸っている。
みんな、マスコミがいわゆる「マスゴミ」だということでは見解は一致しているものの、どのようにして彼らの矛先を交わすのか？
そこに焦点が集まる。
「まず、ノーカットにしてもらうのはどうでしょう？　あるいは絶対にカットしてほしくない場所も明示しまして――」
「余呉さん、それは現実的ではないですよ」
余呉さんの意見に、比良さんが反論する。
でも、あたしは咄嗟に、これはいいと思った。
「比良副会長、あたしはいい提案だと思います」
「……理由、聞いてもいいかしら？」
「ええ……あたしたちが素人だということを利用するんです」
「石山さん、もう少し詳しくお願い」
ちょっと簡潔にまとめすぎたかな？
「つまり、『カットしない』、『ここは絶対報道すること』、『あたしたちの批判をしないこと』と言うのは、いかにも素人が言いそうな言葉です。ですが、マスコミ側は必ず『それはできない』と言ってくるでしょう。そしたらその時に『条件を呑めないなら取材拒否です』と言えばいいんです」
今度は噛み砕いて説明する。
「ではもし相手が交渉上手だったら？」
比良さんが突っ込んでくる。
もちろん、答えは簡単だ。
「単純に交渉しなければいいんです。これらの条件を呑めないなら、例え1兆円でも取材は受けませんと、とにかく一歩も引かなければ交渉になりませんから。交渉にならないならどんな交渉術も無意味です」
「なるほど……」
「引かぬ媚びぬ省みぬ」とはよく言ったものね。
「そもそも、協会としての主義主張は『あたしたちは見た目通りの、一

人の女性として扱ってほしい』という事だけです。『批判をするな』という条件は、案外難しくないでしょう」
「ええ、石山さんの言う通りだわ。でも、必要よね」
永原先生も、あたしに賛意を示してくれる。
問題は「編集をして印象操作するな」だろう。
テレビにしても新聞にしても、どうしても「尺」というものがあるから、編集せざるを得ないが「批判をするな」が条件である以上、編集者の一存で編集してしまえばどこをつつかれるかわかったものじゃない。
とすれば、事前にどういう記事にするか取材者に逐一お伺いを立てなきゃいけないことになる。しかし、それは現実的に難しい相談だろう。
結局、「私達のことはいわゆる『ストレートニュース』として報道する以外認めない」と言っているようなものだ。
これじゃあ完全にプロパガンダ垂れ流せと言っているようなもので、マスコミとしては認められない。
しかし、あたしたちはあくまで「無邪気な素人」なのである。
だからこのことについてとにかく譲歩しないし、マスコミ側の説明も一切聞く耳を持たなければいいという。
あたしたちはその後も、作戦会議をし、大筋ではこの方向でまとまった。
「じゃあ、投票は面倒なので賛成の人、起立してくれる？」
ガタガタッ……！
あたしも含め、全員が椅子から立ち上がる。
「じゃあ可決ね」

その後、永原先生が幾つかの連絡事項を確認し、会合はお開きになった。
さて、あたしにはまだ、正会員としての仕事が残っている。
「あの、余呉さん」
「あ、石山さん。塩津さんのことですね。はいこれ」

余呉さんがあたしに数枚の紙を渡してくれる。
どうやら、最近の幸子さんの様子についてまとめられているみたい。
「新幹線で、読んでおきます」
「頼みましたよ。普段は距離的な問題もありますが、正式なカウンセラーはあなたですから」
「はい、分かっています……では失礼します」
「気をつけてください」
あたしは、余呉さんと別れ、幸子さんの家を目指す。
ちなみに、今回は上野駅ではなく大宮駅から新幹線に乗ることになっている。
幸子さんの家に行くだけだし、あたしとしては軽装で問題ない。
お昼ごはんは向こうで食べよう。またあの駅で唐揚げそばが食べたいわね。

大宮駅に来て驚いたのは、上野駅と比べて近いこと。大宮駅までは新幹線もスピードを出さなかったので、今度からは特急料金節約のためにも、なるべくこの駅から乗ろうと考えるようになった。
今回も、使うのは「やまびこ」号の自由席。
大宮に行くまでに気になって調べてみたんだが、東京駅から「はやぶさ」を使っていくのと、大宮駅から「やまびこ」自由席を使うのでは特急料金が片道で１０００円以上違うらしい。往復なら２０００円。
うん、バカにできないわね。
新幹線が入線する。
あたしは自由席の開いている窓側の席に座る。
隣は開いている。今日の新幹線は空いているけど、相変わらず歩いてくる男たちの視線がすごいわね。
浩介くんがいたら、きっとすごい嫉妬しちゃうんだろうなあと思う。
でも逆に、こんなかわいくて美人なあたしを独り占めできるのも浩

介くんだけ。
そんないつものことは置いておいて、今は新幹線の中で資料を読むことにする。
幸子さんは、「まだ男との恋愛は分からないけど、協会で先輩たちと触れ合ってみたい。何かヒントがあると思う」と言っているそうだ。
幸子さんの資料の中には、徹さんをはじめ、家族からの推薦もある。
それを見てわかったのは、幸子さんも往時のあたし程じゃないけど、女の子としての学習は欠かしていないということ。
学習する上での問題転として、幸子さんはとにかく男子にモテていて、男子にモテればモテるほど女子に嫌われるために、普段の指南役がお母さんと余呉さんくらいしかいないという事。
でも、この資料では同性に嫌われることに対しても、「私は女の子だし、やっぱり男を好きになりたい。詳しいことはまだ分からないけど、もし入会して皆さんに学べばきっと男の子を好きになれる」として、気にせずに男子受けを優先しているという。うん、いい傾向だわ。
新幹線は途中駅で後から来た「はやぶさ」の退避をしつつ、目的の駅についた。
あたしは在来線ホームに行く前に、遅めの昼食として、唐揚げそばを食べ在来線で1駅乗り、幸子さんの家を目指す。

# 幸子さんの確かな成長

駅を降り、あたしはもう一度地図を見る。資料の中にも幸子さんの家の地図があった。

もうあの時から5か月が経っている。忘れたとばっかり思っていたが、一旦駅から離れると、地図を見ずに行くことができた。

人間の記憶力の高さに関心しつつ、あたしは家の呼び鈴を鳴らす。

ピンポーン！　ピンポーン！

「はーい」

最後に会ったあのカリキュラムの時よりも、高くて可憐な幸子さんの声。

扉が開くと、ピンクのフリル満点のかわいらしいワンピースを着て、頭にはあの時あたしがプレゼントした大きなリボンをした幸子さんが現れた。

「幸子さん、こんにちは」

「石山さん、お久しぶりです」

「うん、久しぶりですね」

幸子さんがニッコリと笑う。その仕草は人形のようにかわいらしくて、あたしでさえちょっと嫉妬しちゃいそうなくらいにかわいくなっていた。

もちろん、あたしとしてもみすみす負けるわけには行かないけど。

ともあれ、第一印象は１００点満点ね。

「じゃあ幸子さん、上がってもいいかな？」

「はい、どうぞ」

幸子さんがあたしを玄関に通す。

「お邪魔しまーす！」

「はーい、いらっしゃーい！」

幸子さんのお母さんの声がする。

あたしは、居間に通される。お菓子が振舞われたけど、さっき唐揚げそばを食べたばかりなので、遠慮しておく。

「お、確か優子ちゃんだっけ？」

徹さんがあたしに話しかけてくる。
下心が見え見えだわ。よし。
「ええ。ちなみに、浩介くんとは別れていないからね」
「うぐっ……」
やっぱり、徹さんは本当によくがっつくわね。
「そんなことより、徹さんから見て幸子さんはどうなの？」
「ああ、お姉ちゃん、本当に女の子らしくなったよ。日増しにスカートの割合が高まってるしさ」
「あはは、それは単に冬から春になっているだけかもしれないわよ？」
あたしはちょっと意地悪に言う。
「うん、暖かい日も増えたからね」
幸子さんもあたしの言葉に同意してくる。
「……じゃあ今日のおしゃれは今日だけのこと？」
「ああいや、お姉ちゃん普段からこの服を着てるぜ」
「そう」
余呉さんの家族証言をまとめた資料とも一致しているわね。
「うん、この服、かわいくて好きだよ。よく着ているんだー」
「そう」
幸子さんの言葉遣いは、まだあたしほどに女言葉じゃないけど、それでも乱暴な男言葉は一切使わなくなっている。これなら及第点だわ。
家族のほうも大丈夫みたいね。
幸子さんも、徹さんからお姉ちゃん扱いしてくれるのは嬉しいって言ってたし、幸子さんも着実に軌道に乗っているのがわかる。
あたしほどに生き急がなくても、将来的に会員になる資格はあると思う。
でも、問題は「今すぐに」会員にしてもいいのかどうか？
「幸子さんは、男の子にときめいたりとかします？」
「うーん、まだその辺が分からないんだよ」
幸子さんも腕を組んで何やら考え事をしている。
男性の魅力がよく分からないという。

「つまり、女性は男性のどこを好きになるのか？　という事でしょ？」
「うん、お母さんには聞いてるんだけど、いまいちしっくりこないんだ」
「……幸子さん、じゃあ逆に、男性は女性の何が好きになると思う？
実はこれ、生粋の女の子だと、結構難しい質問だったりするわよ」
「えっと……顔がかわいいとか、家事ができるとか……」
「あとはあたしみたいに胸が大きいとかね」
「ぶー！」
　側で聞いていた徹さんが吹き出してしまった。正直あまりしたくないことだけど、大事な話だから、ちょっとだけはしたなくなる。
「他にもかわいらしい声や庇護欲の刺激もあるわよ。母性に溢れてて甘えさせてくれるとか……更には赤ちゃんが産めると言うのも女としての魅力になってくるわよ」
「うんうん」
「そしてね、これらはみんな一個の共通点があるの。それは『男性にはない女性らしさ』って所よ。家事はちょっと違うけどね」
　そう、これが核心部分。本当は幸子さんが自分で気付いてほしかったけど。
「例えば？」
「ロングヘアーの受けがいいのも男だとなかなか似合わない事が多いのに女の子だと魅力的だからよ」
「うーん、言われてみればそうだよね」
「うんうん、目から鱗って感じだぜ」
　徹さんも、腑に落ちたという感じで納得してくれている。
「じゃあ徹さん、今のことを踏まえて、女性は男性のどこに惚れると思う？」
　徹さんが一瞬考える。
「えっと……金！」
　あたしと幸子さんは思わずのけ反ってしまう。
「うーん、確かに間違ってないわよ。自分でも稼げるけど……確かに男が金持ちであればあるほど、モテるのも事実よ。でも今は不正解か

な」
確かに、世の中にはお金が男性の全てのように言う人もいるけど。
「じゃあまさか……ちん……むぐぅ！」
「こら徹！」
幸子さんが慌てて徹さんの口をつぐむけど、間に合っていない。
「ふふ、女の子の前であんまりそういう話題はだめよ。でも、今は正解よ」
「え!?」
幸子さんも徹さんも驚いている。
「だって、あたしにも幸子さんにも、ついていないでしょ」
「う、うん……」
「世の女性たちは口では否定するけど、実際には大きいのに興奮するようにできているわ」
あたしも、スキー合宿で浩介くんのを見た時も、固く大きくなってる様子により興奮したし。
「それって、男が優子ちゃんみたいなおっぱいが好きなように？」
「うん、そうよ。他にも力強くてたくましいとか、頼りがいがあるとか、そういうのに憧れるのよ。これらはみんな、あたしたち女の子にないものなのよ」
あたしが一つ一つ説明していく。
「なるほどねえ、私もそう言う男性的なのが好きになれるかなあ？」
「幸子さん、乙女ゲーム買ってみて？」
「え!?」
「乙女ゲームって何ですか？」
徹さんがあたしに聞いてくる。
「恋愛シミュレーションゲームってあるでしょ？　女の子を攻略していく感じの。あれの性別を逆転させたものだと思ってくれればいいよ」
「あー、なるほど」
あたしも一時期は学習も兼ねて購入するって話も出たけど、浩介くんが彼氏になったので、結局買わずじまいだった。

「そこに出てくる男子は女子が思う理想の男子よ、後はそうねえ……カリキュラムの時使った少女漫画、あの後読んでる？」
「あ、そういえば読んでなかった」
　幸子さんがハッとしたように言う。
　やっぱり成績のいい人でも、あたしみたいに積極的に少女漫画を読み続けるというのは難しいかもしれない。
「少女漫画、恋愛ものばかりでしょ？　少女漫画を読むのは女の子の立場での男の子の魅力を知るためにはとても重要よ」
「はい」
　とりあえず、これを覚えて、幸子さんには今日明日にも少女漫画を呼んで欲しい。
　さて、あたしは次の質問に移る。
「ところで幸子さん、学校では男の子にモテてるんでしょ」
「ああ、お姉ちゃん美人だし性格もいいから男にはモテてるんだけど、やっぱり学校中がお姉ちゃんはＴＳ病だって知ってるからさ……そこが自制になっちゃってるんだよ」
　徹さんがあたしに説明してくれる。
「うーん、なるほどねえ……」
「それで、私、女性には嫌われてる気がするのよ。陰口っていうの？」
　幸子さんが悩んでいる。
「そう、それを聞いて……女性の嫉妬を聞いて幸子さんはどう思った？　男にモテる方が大事だって、ちゃんと思えた？」
　ここが運命の分かれ道。あたしは重要な質問をする。
「うん、だけどあまりいい気分とも言えないかな。そこまで悪い気はしないんだけど……」
「ふーん、７０点って所かしら？」
「７０点？」
　幸子さんが不思議そうな顔をする。
　確かに反応に困る微妙な点数だものね。
「あたしはね、そういう女子の嫉妬や陰口はとても気分がよかったわ。陰口をたたいている時のその人の顔、みんな醜くて、ね」

「どういうこと？」
「ふふ、つまりそういう陰口叩くようなグループはブスグループなのよ。美人はああいうことしないもの」
そしてあたしは、ブスグループの原理を幸子さんに詳しく説明していく。
そして、彼女たちに決して合わせてはいけないこと。醜い言動は顔まで悪くして、幸子さんから女性らしさを奪っていくことも。
だから幸子さんには、是非とも今のままを維持してほしいとアドバイスする。ちなみに、同性の陰口に耳を貸してはダメというのは、余呉さんからも言われたらしい。
幸子さんも、今は「とりあえず男受け」という段階だから、注意する必要がある。
幸い、幸子さんは既に「男に好かれると悪い気分はしない」と言っているので、それを積み重ねていくことが大事になるとアドバイスする。
「……それにしても、大学でお姉ちゃんは有名人だからな」
「やっぱり有名になるの？」
あたしが聞いてみる。
「ほら、最近あったじゃないですか、蓬莱教授の研究が」
「あ、うん。そうよね」
予想通りの答えが返ってくる。
あたしが来年から蓬莱教授に協力することは黙っておいたほうが良さそうね。
「うちの高校でも、お姉ちゃんの大学でも、蓬莱教授のことは大騒ぎになったぜ。特にお姉ちゃんの大学には当事者がいたもんだから、すぐに大学中の噂さ」
「石山さんは、学校生活大丈夫？」
幸子さんが心配そうに聞いてくる。
あたしがカウンセラーなんだけど、まあいいわ。
「うん、蓬莱教授のニュースが出るよりずっと前からあたしがＴＳ病なのは学校中に知られていたし、何より小谷学園のＴＳ病患者はあた

しだけじゃないのよ」
「あー、そう言えば、会長さん……永原さんも小谷学園の先生でしたっけ？」
「ええそうよ」
あたしは、とても恵まれていたと思う。
永原先生がいなくても、女の子になろうとはしたと思うけど、いじめに耐えられずにそのまま転校してしまったかもしれない。
「それにしても、戦国生まれかあ……」
「うん、凄いよね」
「やっぱり、男を好きになるといっても、寿命の問題。怖いなあ……」
幸子さんも不安そうな表情をする。
その表情は、蓬莱教授のニュースが出てくる前までのあたしにそっくりだった。
あたしはいつもそう、幸子さんを見ていると、以前の未熟だった頃のあたしを思い出す。
うん、今もまだ、未熟だけどね。
「でもお姉ちゃん、蓬莱教授が何とかしてくれるよ」
「うん、そうだといいよね」
幸子さんが少しだけ笑う。
まだ、蓬莱教授を信用しきれていない表情。
「幸子さん、今協会はね、蓬莱教授と本格的に提携することになったわ」
「え!?　そうなんですか!?」
幸子さんが案の定驚いている。
実は佐和山大学と小谷学園が至近距離だということも知られていなさろう。
「ええ、そもそもこの協会だって、蓬莱教授の支援なしでは成り立たないのよ。幸子さん、あたし個人としては、あなたの言動は普通会員なら入れてもいいと思うわ。だけど、蓬莱教授のことを信用できるか？
今はそれが大事になっているのよ」
「石山さん、どうしてそんなことに？」

「ええ、話すわ」
あたしは、ゆっくり丁寧に、協会と蓬莱教授の関係について話す。
まず、永原先生と蓬莱教授の出会いについて。
永原先生や余呉さん、比良さんなどの長命のＴＳ病患者はみんな蓬莱教授に年齢証明をしてもらったこと。ＴＳ病を研究し、不老技術の開発をしようとしていること。
永原先生と蓬莱教授の関係について、蓬莱教授が世界中の資産家から研究金を贈られていること。その金額があまりにも膨大になり、蓬莱教授自身も資産家になったこと。
その資産で協会にも多額の援助を援助していること。
不老研究は信用できず、警戒もされていたが、昨今の研究の進展で急速に信頼が高まっていること。
マスコミの蓬莱教授に対する批判と関連し、協会までいわれなき批判をされ始めたこと。
今日の会合でも、蓬莱教授とも連携したマスコミ対策について話し合っていたこと。
「――というわけで、蓬莱教授とは今後関係を深めていく予定です。もう一度言います。幸子さんが蓬莱教授を信用できるか？　本来なら協会の方針は一つだけだけど、今に限って言えばそれも大事になるわ」
「そう……うーん……」
幸子さんが腕を組んで考え込んでいる。
確かに難しいけど、幸子さんの意志で決めないと。
「なあお姉ちゃん、俺は入ったほうがいいと思う」
「でも……」
「徹さん、これは幸子さんの意志で決めるべきことよ」
あたしが徹さんの前に掌を置いて「静止」の手振りをする。
「あ、ああ……」
「……ええ、分かったわ。蓬莱伸吾教授のこと、信用してもいいと思う」
しばらく考えたの地、幸子さんがしっかりとした口調で言う。

「そう、じゃああたしから言うべきことはもう何もないわ」
「今はまだよく分からないけど、きっと不老だってみんなでなれば怖くないって思うんだ」
「ふふっ、そうよね」
坂田部長の話を思い出す。
人間の適応力は高くて、どのような異常事態でも、常態化すればそれを普通だと思ってしまう。
「なんか、『赤信号みんなで渡れば怖くない』みたい」
「うっ！」
「もう、徹さん、ダメですよそんなこと言っちゃ」
徹さんの突っ込みが鋭くて反論が思いつかないのが悔しいけど。
「まあ、俺としても蓬莱教授の研究が完成したら、どんな社会になるのか、楽しみだよ」
「ええ、動機はそんなんでもいいわ。じゃあ、入会手続きをするから徹さん、悪いけどお父さんとお母さんを呼んできてくれる？」
「おうっ！」
徹さんが勢いよく立ち上がり、大きな声で両親を呼ぶ。
両親はそれぞれ返事をし、あたしたちの部屋に来た。
「はい、お呼びですか？」
「あたしは、普通会員として幸子さんを協会に迎えることに異議はありません。つきまして、ＴＳ病患者の家族がなる、『家族会員』という制度があります」
あたしは、資料を取り出す。
それはあたし自身が入会した時に示した資料と同じもの。
各会員の権限や会費などについて説明する。
幸子さん曰く、「既に聞いている」とのことなので「改めてもう一度確認」という意味で説明し直す。
「それじゃ、全員入るってことでいいですか？」
「「はい」」
幸子さん本人、弟の徹さん、そして幸子さんの両親の４人がしっか

りと返事をする。
「それでは、ここに必要事項を記入してください」
あたしはそう言うと、書類をそれぞれに渡す。
ちなみに、入会用紙には「日本性転換症候群協会　普通会員入会届」、「推薦人　石山優子」と書いてある。

「できました」
しばらく待機していると、全員が書き終わり、あたしはマニュアルを見ながら、必要事項が記入されているかどうかを確認し、問題ないことを確かめた。
「それじゃあ、これは本部に持っていきます。あたしはこれで失礼します」
「はい、ありがとうございました」
あたしは幸子さんの家を去るため、玄関へと向かう。
「あ、待ってください。せっかくここまで来られたんですから」
幸子さんのお母さんがお菓子の箱を渡してくれる。
「あ、どうもすみません。わざわざありがとうございます……それでは失礼します」
「お気をつけて」
受け取らないのも悪いので、あたしは素直に受け取り元来た道を帰る。
見てるともう夕日が落ちかけていて、さすがにお腹も空いてきた。お菓子はやめておこう。
新幹線は長丁場なので、あたしは駅で牛タン弁当を買い、新幹線の中で夕食を取り、本部へと戻って行く。
ちなみに、新幹線の中でもニュースをチェックしたが、蓬莱教授に関することはなく、またメールで永原先生に「入会を許可した」とだけ報告しておいた。

「あ、石山さん。おかえりなさい」
本部へ戻ってみると、比良さんがいた。永原先生は自宅に戻ったら

しい。
「こちら、幸子さんの入会書類です」
「分かりました。話は聞いています。私がチェックしたら、そちらのパソコンで入会手続きをしてください」
「分かりました」
この方法も、既に新幹線の中で説明書を読んでいた。
あたしも正会員だし、こういった事務作業もできるようにならないといけないわね。
そう思いながらも、特に滞りなく入力作業は完了、比良さんからもＯＫをもらい、今日は夜遅くに家に帰った。
明日は日曜日、しっかり休んで明後日の学校に備えないと。

# 知的な優子

あれからというもの、マスコミの取材攻勢は一切出ず、「大山鳴動して鼠一匹」という状況になりつつあった。

さすがに、あたしたちがあまりにも嫌がったので空気を読んだのか、蓬莱教授の世間への影響力を恐れたのか、はたまた何か別の力が働いたのか？

あたしにその理由は分からないが、ともあれあたしたちは平穏な学園生活を送っていた。

朝起きて、制服に着替え、朝食を食べて学校に行き、授業を受け、浩介くんといちゃつき、高月くんたちが嫉妬して、桂子ちゃんを始めとする天文部へと行く毎日。

その天文部、以外にも三日坊主で終わった部員は3人だけで、最初の5人の他にも合計8人の新入部員が入部してくれた。

中には2年生も居て、元々居たあたしたちと合わせると総勢１１人と、小谷学園の部活としてはかなりの規模になっていて、今やあの野球部より人が多くなっている。

毎日を平穏に過ごせたのは、とてもいいこと。

学校に行く間にもう一度考えてみる。

おそらく、さすがにマスコミたちもまずいと思ったんだと思う。何分協会のホームページのみならず、小谷学園のホームページにもマスコミ向けの警告文を掲載したのが、随分と威嚇になったらしく、インターネットでも「協会が怒っている」と話題になっている。

それと同時に、「ＴＳ病患者が美人すぎる」と話題も再燃してて、「なお実年齢」といったことも言われている。

他にも、アイドルや芸能人、あるいは大学や国際的なミスコンの優勝者などの容姿を誹謗中傷するために、協会の人たちの画像が使われちゃっている。

一つ残念なのは、その時の煽り文句が「元男」だけなら事実だからいいんだけど、「中身男」というのも含まれている件だ。

もちろん、「女になってからの方がずっと長いだろ？」という反論も

ある。
事実、正会員で男の人生の方が長い人なんてあたしくらいだし。
あたし達としても、男のように扱われたり、どっちつかずのように扱われるのは絶対に嫌なので、インターネットの掲示板やＳＮＳなどで、そのような書き込みを見つけたら、逐一反論するようにしている。
そして分かったことがある。男のように扱う人は、まだ納得するのが早い。
男扱いするネットの書き込みには、「見た目女の子で、何も知らない人も女の子扱いするから、それに合わせている。中身も女の子になろうとしているんだから、女の子扱いして欲しい」と言えば、みんな案外すんなりと受け入れてくれる。
問題は、男とも女ともつかない「どっちつかず」のような扱いをする人。
少し前に流行ったいわゆる「意識高い系」に多くて、こちらの話にまるで納得してくれない。
周囲もあたしの味方をしてくれるんだけど、この手の人はますます意固地に自説を曲げようともしない。
「妊娠・出産さえできるのに」と主張しても、まるで効果がなくて困っている。
そのことを永原先生に相談してみたら、「小野先生と教頭先生の話を思い出して」と言われた。
そしてあたしは、「善意の悪事」の恐ろしさを改めて思い知った。

「はーい、帰りのホームルームを始めます」
学校は今日も平穏無事に終わった。
３年生の授業は既に高校の内容が終わっているので、主に入試問題やセンター試験の過去問を解いている他、卒業に向けての成績も必要になる。
そのため、３年生からは一部の授業でクラスが変わる。
受験コースと卒業コースとあって、あたしたちは全部「卒業コース」でもいいんだけど、蓬莱教授の研究室のこともあって、生物をはじめ

一部の科目を「受験コース」にしている。
ちなみに、「受験コース」では、あたしたちが行くことになる「佐和山大学」も、受ける人が多いからか、過去問に何度も登場している。
これまでのあたしの成績だと余裕で合格圏内で、浩介くんも、一応合格圏内を維持している。
「――連絡事項は以上です。石山さんは協会のことで連絡がありますので、私のもとに来てください」
「はい」
最近では、こうして「協会の仕事」と最初にことわってしまうことも多い。
あたしが協会の正会員という事は、多分学校でも多くの人が知っていることだと思うし、クラスも去年と同じだからというのもあるだろう。
ともあれ、永原先生の呼び出しは、ちゃんと聞いておかないといけない。
「石山さん、一つ相談なのよ」
「はい、何でしょう？」
永原先生の方から、あたしに相談してくるのは、何気に珍しいと思う。
吉良殿の時だって、あたしからきっかけを作ったし。
「実は、マスコミから取材が来たのよ」
「？　拒否すればいいんじゃないんですか？」
あたしは、思わず首をかしげながらいかにも「不思議」という感じで言う。
威嚇的な警告文まで作ったんだから、粛々とはねのければいいのに。
「ええ、それなんだけど……実は私たちの協会のホームページを見て、『その条件を全面的に受け入れる!?』って言ってきたのよ」
「え、えええええええええええ」
「!?」　!?!?!?!
「どうしたの優子ちゃん！」

「何だ、優子が珍しいな。いきなり大声出して」
あ、しまった。
余りの出来事に驚きのあまり大声をあげてしまい、クラスメイトたちに怪訝な目をされてしまったわ。
「……続けていいかしら？」
「え、ええ……すみません……」
「それで、その『全面的に受け入れる』って言ってきたのは、どうもインターネットを拠点にしたニュースメディアで、既存のマスコミとは一線を画した主張を展開しているみたいなのよ」
「……なるほど、インターネットなら確かにノーカットも容易よね」
むしろ編集した方が手間がかかるし。
「私たちに批判的な報道をしないことはもちろん、更に批判的な報道をしたマスコミや、例の問題牧師を批判する内容と一緒に記事にしたいと言ってきまして。ノーカットの動画を自社の記事と更に動画共有サイトにもアップロードするみたいよ」
「ふーむ」
「更に、『ボタン一つでアップロードもできるので、事前に記事を見てもいい』とも言ってました。私達が拒否したとして企画倒れにするだけとも」
そうまでして取材したいのかとあたしもちょっと驚いてしまう。
いずれにしても、事前にこちらが記事を見られるのは大きい。これならほぼ、勝手な行動はできないし、この条件なら、受けてもいいかもしれない。
「……あちらさんがそこまで言うなら、私は取材を受けていいと思います。こちらが最初に提示した条件をクリアしている上に、更に譲歩してくれてますから」
そもそもあれだけの条件を提示してしまい、向こうがそれに応えてしまった以上、仁義的にも拒否は難しいと思う。
「分かりました。比良さんにもそう伝えておきます」
永原先生は、肩の荷が降りたという感じで言う。
どうも、かなり迷っていたみたいね。

ともあれ、あたしは少し遅れて天文部へと向かう。
コンコン
「はーい」
「桂子ちゃんあたし」
「あ、優子ちゃん入って」
ガチャッ
中に入ると既に天文部の面々がいた。
「でさー、この前のライブがさ――」
「うんうん、凄かったよなあ」
「演出っていうの？　大がかりだよなあ」

天文部は元々超少人数前提の部活だったため、あっという間に人員過剰に陥り、今ではほとんどの時間が「雑談」になっていた。
浩介くんも筋トレしてて、時折後輩男子にトレーニングを教えることもある。
そうすると、天文部なんだか筋トレ部なんだかわからなくなっちゃうこともしばしばだけど、桂子ちゃんは気にも留めない。

「なあ、今度のライブ、木ノ本部長を招待しようぜ」
「お、それいいじゃんか」
「おい！　なに抜け駆けしようとしてんだ!?」
「うげっ……！」

さて、ここ天文部のもう一つの特徴が、桂子ちゃんを巡っての男子たちの争いだ。
桂子ちゃんも、「争ってもらえるほど嬉しい」と言っていたけど、相互監視も強くて、誰も告白しようとしなかった。
何となくだけど、誰かが桂子ちゃんと付き合ったら、新入部員はその人を除いて全員いなくなっちゃいそうだわ。
「ねえ浩介くん」

「ん？」
　あたしはあたしで、そんな後輩たちのことを無視し、浩介くんと話を始める。
「協会がね、マスコミの取材を受けることになったわ」
「え!?　いいのかよ!?」
「そうよ、取材は拒否じゃなかったの？」
　近くで聞いていた桂子ちゃんも、会話に乱入してきた。
「それが……協会側の提示した条件を受け入れてくれたのよ。インターネットメディアで、既存のメディアを批判するために記事を書くんだって」
　あたしは、その会社について少しだけ説明をする。
　取材映像も、動画共有サイトにノーカットという事も言う。
「なるほどなあ……してやられたぜ」
　浩介くんが悔しそうに言う。別に浩介くんが決めたことじゃないのに。
「まあでも、そこまで言うなら取材受けてもいいんじゃない？」
　桂子ちゃんも、仕方なさそうに話している。
　ＴＳ病についてのマスコミ取材拒否は、小谷学園も同じなので何気に他人事ではない。
「うん、でも困ったわね……取材を受けて記事にするまではいいけど、それを見た感想までは操作できないもの」
　もちろん、ある程度の工作はしているけど。
「そうだよなあ……むしろ、対マスコミに強硬策を取ってきた以上、『なぜ取材を今回受けたのか？』という事で話題になりかねねえしな」
　もし、この取材行為に既存のメディアが乗っかっていったら……もちろん、「しゃべる机」という事にもなりかねない。
　それに対して不快感を表明はできても、「記事にするな」とまで言ってしまえば、さすがに協会の立場は悪くなるだろうし……
「まあ、考えても仕方ないと思うわ。今はとにかく、この緩い天文部を楽しみましょう」
「うん、そうよね」

「だな」
桂子ちゃんの言葉とともに、あたし達は天文の話題を中心にした雑談に戻った。

「ただいまー」
「あ、優子おかえりなさい」
母さんが、あたしをねぎらってくれる。
「うん、今日も疲れたわ」
あたしがドサリと荷物を落とす。
今日は特に疲れたので制服も着替えてすぐに楽な格好したいわ。
「ところで優子、永原先生から聞いたわよ。協会が取材受けるんだって？」
「う、うん……」
やはり、協会の情報網は速い。
もう既に母さんまで手が回っていた。いや、母さんだからこそ、かな？
「優子が映るとは限らないかもしれないけど、くれぐれも気を付けてね。それから、芸能界へのスカウトに乗っちゃダメよ」
「うん、分かってる……というか、実は以前にアイドル事務所が協会に来たんだって」
「え!?　そうだったの……ま、まあ、無理もないとは思うけど」
母さんが驚きながらも納得の表情をする。
そう言えば、母さんはあたしと永原先生と、比良さんと余呉さんが面識ありだっけ？
だったら美少女になるのがＴＳ病に共通していることも経験則で分かるはずよね。
「うんうん、でも、しつこいマスコミとは違って『皆さん本業に協会の活動があるので時間的に無理です』って説明したら、結構あっさり引き下がってくれて、その後はばったり止んだわ」
「へー、アイドル事務所の方が物分かりいいのね」
やはり母さんも、アイドル事務所が来たということそのものより

は、意外性は薄そうな反応だ。
「うん、じゃあ母さん、着替えるから入ってこないでね」
「はいはい、分かりましたよ」

着替えながらまた考える。
マスコミにというのは、人々が知りたがっていることや、知られていないことを知りたくなる人たち。
あたしたちが徹底的な拒否をすればするほど、更にしつこくなってもおかしくない存在。
だから、この前の会合で、具体的に取材条件をつけたのはよかったと思う。
もし今回の取材がうまくいけば、「ちゃんと条件をのんだマスコミが独占取材できた。他マスコミの努力不足だ」と言い張ることもできる。
これはもちろん「素人考え」、それも知ってて故意に行う「素人考え」だ。
それでも、インターネットの中の一般人を扇動するにはそれで十分。
特にマスコミ嫌いが多いインターネット空間では、うまくいく可能性が高くなる。
そうすれば、既存のメディアを、うまく締め出すことが出来る。
取材を申し込んできたマスコミが出たのは失敗だけど、これをも利用して次につなげたい。
そのためには、やはり無知を装い、無能を装うことが大事だと思った。
……何だろう、あたしも永原先生に、真田家に感化されているのかもしれないわ。
思えば、永原先生も戦国時代の真田家としての矜持があるのか、マスコミの偏向報道についてもやや許容気味だった。実際、怒っていたのは江戸時代生まれの余呉さんと比良さんだったという。
でも、江戸時代や明治時代の武士道を知っている他の正会員はこれ

らを「卑怯」と批判しているので、永原先生も強硬策に出ざるを得なくなった。
……なんだろう、戦国時代生まれの永原先生が江戸時代生まれの他の会員の行動にジェネレーションギャップを感じるってすごいことだと思う。
あたしなんて江戸時代どころか、同じ平成生まれでもジェネレーションギャップを感じるのに……なのにそんなあたしの感性は一週回ったのか戦国時代生まれの永原先生に似てきている。
もちろん、永原先生があたしの女の子としての師であり、同じＴＳ病患者として、最も影響を受けているということもあるけど。
……ふう、とにかく着替えたし母さんに顔見せないとね。
そうだ、蓬莱教授の本、難しいけど読んでおかないと。
そう思って、あたしは蓬莱教授の本を持って部屋を出る。
「ふうー」
「あら優子、その本」
母さんが、案の定あたしの持っていた本に注目する。
「うん、蓬莱教授に貰ったの。勉強のモチベーションを維持するためよ」
内容は難しくて、面白いというわけでもないけど、浩介くんの「不治の病」を治療するためということを考えるだけで、俄然やる気が出てくる。
やっぱり恋は、女の子を変えるわね。
「ふふっ、そう……」
母さんが、何か言いたげに意味深な笑みを浮かべる。
「どうしたの母さん？」
「ああうん、なんか優子も知的な女性だなって思って」
「そ、そう？」
母さんが意外な言葉を言ってくる。そんな風に言われたのは生まれて初めてだわ。
「知的な印象はね、好印象も与え得るけど、一方で『隙がない』って思われかねない諸刃の剣よ。だからね、本当は頭が良くても、おバカの

ふりをしておけばいいのよ」
母さんが、あたしにアドバイスをしてくれる。
うん、それはあたしもそう思う。
「あはは、うん。大丈夫よ。男は単純だからね」
浩介くんも単純だけど、あたしはそんな浩介くんが大好きだし。
優一も多分単純だったんだろうなあと思う。
でも確かに、今のあたしは浩介くんより成績がいいし、雰囲気まで賢くなっちゃったら浩介くんのプライドにも影響しそうだし、うまく男を立ててあげないとね。
「ふふっ、優子も本当、男の扱いに慣れてきてるわね」
「そ、そうかなあ？」
「そうそう、そうやって、好きな男の子に好かれていけば、優子はもっとかわいくなれるわよ」
「うん！」
母さんのアドバイスを聞き、あたしは蓬莱教授の本を読み始めた。
何度か反復して読めば、より深く理解できるようになれるかもしれない。
とにかく、高校までの本とは訳が違う。将来のためにも、この本はよく読んで、そして知識を身に着けていこう。

# 意外な訪問者　前編

４月も半ばに差し掛かった日曜日のこと。
今日は、件のマスコミの取材が行われることになった。
結局、永原先生とあたし以外の正会員は「まだ信用ができない」と言ってきて取材は受けないという。
また、「これなら誰も取材しに来ないだろう」というつもりで出したあたしの提案がすり抜けられたことへの「けじめ」として協会の取材は永原先生に加えてあたしも受けることになった。
一体、どんな人が来るんだろう？
……今から考えても仕方ないわね
ともあれ、あたしは服選びをする。
例の赤い服と赤いスカートにお人形さんを抱いていこうとも思ったけど、さすがにカメラの前だし……よしっ！
この黒いワンピースにしよう。
黄色い花も胸元にあしらわれた林間学校の初日に着ていった服。
ぬいぐるみさんは……やめておこうかな。
「おはよー」
「おはよう優子、今日優子が取材受けるんだって？」
「う、うん……」
母さんは不満そうな顔をする。
やっぱり、浩介くんだけじゃなくて母さんも独占欲あったのね。
「断っても良かったのに」
「そうも行かないわよ。あたしの見通しが甘かったせいでこうなったんだもん」
「……優子は真面目よねぇ」
母さんは、ちょっとだけため息をつく。
でも、誰かがやらないことには仕方ないのだ。
朝食と歯磨き、更に顔も洗ったら、あたしは覚悟を決め協会本部を目指した。
とにかく、今は無事に終わってくれることを祈るしかないわね。

平日はさぞ人でごった返しているんだろうなあと思いつつ、あたしはいつものように最上層用エレベータに乗る。平日は小谷学園があるからこのビルに用事はない。多分他の人も同じ。
エレベータに乗った乗客はあたしだけ。
そのまま一気に４９階に直行し、あたしは協会本部の鍵をカードキーで開ける。
「あ、石山さんいらっしゃい」
「おはようございます永原会長」
あたしは、先に来ていた永原先生と合流し、挨拶する。
今日の永原先生は、学校や協会でよく見せるレディースーツ姿ではなく、緑色のワンピース姿でスカート丈はあたしより短く、頭にも大きな水色のリボンをしている。
本格的にオシャレをしているという感じで、あたしと並んでもとてもきれいに見える。やっぱり、女子力ではまだまだよねあたし。
「今日は終日、私と石山さんしかいないわよ」
「そ、そう……やっぱり？」
「うん、みんなマスコミのこと、警戒しているからね」
比良さんと余呉さんは特にそんな感じだよね。
「……やっぱり、あたしには想定外を引き起こしてしまった責任があると思う」
「石山さん、あなたが責任を感じる必要はないわよ。私だって、予期できないことだったもの」
永原先生が、あたしをかばってくれている。
「でも……やっぱり――」
「大丈夫よ。最終的に承認したのは私やみんなだし、石山さんは悪くないわ」
「う、うん……」
そうは言ってもあたしの中で、責任感から逃れることができない。
もっと、厳しい取材条件にできなかったものか？
もう少しギリギリをつけたんじゃないか？
そんな思考で堂々巡りし、答えは出ない。

「石山さん、何か篠原君に似てきたね！」
「え!?」
永原先生が笑顔で意外なことを言う。
あたしは思わず首をかしげる。
浩介くんに、あたしが？
責任感強くなってるってことかな？
「最近の石山さん、責任感がとても強くなってるわよ」
「……全く自覚なかったです」
あたしのそばにはいつも責任感が強い浩介くんがいたせいで、あたしは自分の変化に全然気付いていなかった。
「学校ではともかく、協会では特にそう感じるわ。もちろん、正会員だから当たり前だけどね」
「そう……」
「うん、とりあえず待ちましょうか」
「……はい」
しばらく一人でさっきの言葉の意味を考えてみる。
確かに、今回のマスコミ問題もそうだし、来年からは蓬莱教授のいる佐和山大学への進学もあり、これは将来の人類社会を占う上でも重要なことだから、どうしても重圧に感じてしまう。
一人の１７歳の女の子の決断が、将来の世界、人類、社会を大きく動かそうとしていることを、世界人口７０億人のうち、ほんのわずかしか、今は知らない。
でも、そのことは隠しておかないといけない。
そんなことを考えていると、あたしの中で、また責任感が湧いてくる。
大変な仕事にはなると思う。
もし蓬莱教授の研究が成功したら、世間への影響力を考えれば、断固取材拒否というわけにはいかない。
うん、そのための予行演習と思えばいいわね。
ピンポーン！
「はーい！」

リラックスしていると、突如オフィスの玄関の呼び鈴が鳴る。
あたしと永原先生がほぼ同時に声を上げて立ち上がる。
入口からは見えないが、ほど近い位置なので電話ではなく直接向かう。
「あの、この前取材を申し込みました高島と言います」
どうやら、その高島さんとカメラマンさんの２人で来た見たいね。
「はーい、今開けます」
高島さんとカメラマンさん、どちらもあたしの胸をちらちら見ているわね。
でも、最初に驚きの表情を見せた気がする。
永原先生が鍵を開け、「ｇｕｅｓｔ」と書かれた札をあたしが渡す。
「こちらをおかけになって下さい」
「は、はいっ……！」
一瞬、二人の手と接触しちゃったけど、何かそわそわしてる。
男特有の単純脳をちょっとだけ面白く感じつつ、あたし達は奥の部屋に通す。
「えっと、改めまして。『ニュースブライト桜』の高島と申します」
高島さんが永原先生に名刺を渡してくる。
「あ、これはどうもご丁寧に……私はこういうものです」
永原先生も、名刺を返す。ちなみに、永原先生には協会用と教師用と、両方の名義が入った３つの名刺があって、今回は両方の名義が入った名刺を使ったらしい。
「あ、あたしこういうものです」
「すみません、どうもありがとうございます」
あたしにも、一応「日本性転換症候群協会　正会員　石山優子」とだけある簡素な名刺があるので、高島さんと人生初の名刺交換をする。
「早速ですけれども、今回は当社の独占取材を受けていただきまして誠にありがとうございます」
「いえいえ、条件を呑んで下さるのなら、取材を受けるのもやぶさかではありませんから」

「そういってもらえますと助かります。記事はこれでいいか？　というのも含めて……もっと言えば永原さんにも編集委員に加わってもらいたいくらいの感じなんです」
「そうですか……素人ではありますが、よろしくお願いいたします」
永原先生は、高島さんの腹の中を探るような姿勢を見せているけど、高島さんはまるで気付いていないわね。
話を聞くに、どうやら今のところは、先方に悪意はなさそうね。
……永原先生の印象はまた違うんだろうけど。
「それで、どういうことを取材するんですか？」
あたしが、重要なことをまず聞く。
「ちょっとお待ちください……会長の永原さんにはこれを、石山さんにはこちらです」
高島さんがファイルから2枚のプリントを出してくれる。
そこには、ＴＳ病になる前のことや、ＴＳ病になった時のこととか、それで人生がどう変わったとか、周囲の反応とか、男女の価値観とか様々な質問事項が並んでいる。
「あ、答えられない質問は答えなくて大丈夫ですよ。こちらのボールペンでバツ印をつけてください。それから、話の流れの都合で、聞かない質問も多くなると思います。何か特別に言っておきたい質問がありましたら二重丸をしてください」
「はい」
あたしと永原先生がボールペンを受け取りながら、質問事項を見ていく。ぱっと見た感じでは特に二重丸をする質問はない。
いくつかの質問については、バツを付けるか迷ったけど……まあ多分大丈夫よね。
「万一撮影中にやっぱり無理という事があれば、撮り直しいたしますので遠慮なくお申し出ください」
「はい」
とにかく高島さんは常に平身低頭で、こっちが申し訳なくなってしまうほど。
もしかして、永原先生がまだ警戒態勢を続けているせいかな？

「あの、高島さん」
　ちょっと質問してみよう。
「はいなんでしょう？」
「マスコミの人って高圧的だったり腹黒いイメージがあるんですけど、高島さんはこっちが申し訳なくなるくらい低姿勢ですよね」
「ええ、何分今回は、『あなた方について記事を作ること』、それそのものが目的なんです」
　高島さんは、自ら手段と目的が入れ替わっていることを宣言している。
　普通は手段であるはずの記事そのものが目的って、何かとんでもない話だと思う。
「それといいますのも、今蓬莱教授の影響で、ＴＳ病の世間の関心は急速に高まっています。しかし、あなた方が蓬莱教授とも連携して徹底的な取材拒否姿勢と情報隠蔽策を見せたので、マスコミ界では情報枯渇が起きてます」
「つまり、需要に対して供給が極端に少ないということですね？」
　永原先生がここで割り込んでくる。
「ええ。今、あなた方の情報の価値は高騰しているんです。極端な話、あなた方の主張をそのまま垂れ流し、それこそ走狗になってでも取材したい神様のような存在なんです。あなた方を取材できれば、それこそ記事の内容は何でもいいんです」
「そうですか……」
　とてつもない話よね。
「でもそれならなぜほかのメディアは黙っていたんですか？」
「……それは、あなた方が出した条件が厳しすぎるからですよ。特にジャーナリズムの根幹に関わり、致命的な不祥事になりかねないような条件もありますし……私たちみたいに、弱小メディアでもないと無理です」
　永原先生は何やら思慮をしている。
　状況はこちらにかなり有利ということ。
「では、もし今回の取材状況いかんでは、あなた方『だけ』に、取材を

許可してもいいでしょう」
「ほ、本当ですか!?」
　高島さんがいきなり喜びを爆発させたように声が大きくなる。
「ええもちろん、結果いかんですがね」
「はい！　ところで、質問は大丈夫ですか？」
「ええ、あたしは特に異議はありません」
「私も」
　結局、ボールペンはあたしも永原先生も使わなかった。
「じゃあ、早速準備いたしますので、そのままお待ち下さい！」
　高島さんは張り切ってノートパソコンを立ち上げる。
　永原先生が「充電して構いませんよ」と言ったので、バッテリーの心配もない。
　カメラマンさんも、カメラを準備しＰＣとも繋げていく。
「今回はノーカットを売りにしますので、そのつもりでお願いします」
「分かりました」
「何なら、台本作りますか？」
「うーん、やめておきます」
「分かりました」
　それも悪くないと思うけど、さすがにやりすぎと思ってあたしがやめておくことを言う。
　永原先生も特に異議はないみたい。
　カメラがあたしたちに向けられると、さすがにかなり緊張してしまう。
　永原先生でも、こんな体験は初めてだと思う。
「じゃあまずは、永原さんからお願いできますか？」
「分かりました、じゃあ、石山さん――」
「あ、いえ。ご同席されてもかまいませんよ」
　永原先生が、あたしに別室待機を命じようとした矢先、高島さんがそう言う。
　あくまで透明性を強調したいみたいね。
「じゃあ開始しますね、３……２……１……」

「本日はよろしくお願いいたします」
「よろしくお願いいたします」
　カメラの方は意識せず、高島さんの方だけを見ておく。
「えっと、まずはお二人の簡単な自己紹介から教えてくれますか？」
「はい、私は永原マキノと言います。既にご存じの方も多いと思いますが、私は日本性転換症候群協会の会長を務めています」
「あたしは……石山優子です。同じく日本性転換症候群協会で正会員を務めています。分かりやすく言うなら、永原会長の部下という感じですか？」
「ではまず、永原さんの方から聞いてもいいですか？」
「はい」
「まず、会の創設の経緯ですが、どういった経緯で設立されたんですか？」
「この会が作られたのは今から１０１年前の１９１７年のことです。私は当時教師をしていました。明治始めまではＴＳ病の患者はほとんど居ませんでしたが、この頃になるとＴＳ病患者の人口も増えてきて、相互に連絡をとりあうようになりました。そんな経緯で、始まったんです」
「設立当初はどんな感じでした？」
「ええ、設立メンバーの中で一番年上だった私が会長になって……水戸藩藩士だった比良さんが副会長になりました。最初は本当に、単なる交流会だったんですよ」
　それは、あたしも知らなかった情報だわ。
　まあ、今まで気にしていなかったためだけど。
「それがどうして、今の状態に？」
「仲間を集める上でまず重要になったのがＴＳ病患者の悩みや、患者の動向といった情報収集でした。そして私たちは一個の共通点に気付いたんです……というのも、この病気は不吉だとして殺されなくなってからも、元々自殺率が高かったんですが……自殺した人はみんな『男に戻りたい』とか『女として生きていくのは嫌だ』と思ってい

たことです」
「協会の方針として、『私たちは一人の女性』というのがあるんですが、それは一体どういうことですか？」
「はい、先程の話の続きになるんですけれども、『女として生きていきたい』と思った人以外、この病気になるとみんな短期間に自殺してしまいました。例外は……少なくとも１３０年……私が見てきたＴＳ病患者たちの中でたったの１人たりとも居ません」
　永原先生が一旦水を飲むと話を続ける。
「ですから、私達に欲しいのは何か特別な扱いというわけではないんです。生物学的に私達は子供を産むことが出来るほどに、完璧な女性なんです。難しいようなら、頭を空にして、私達を見てください。もしあなたが何も知らないとして、目の前の私や石山さんが、女性以外の何に見えますか？　つまり、そういうことです」
「分かりました。では、男性の扱いはダメということですね」
「ええ、ですが、実際に問題なるのはどっち付かずの扱いをする人なんです」
　うん、それはあたしも同じことを思ったわ。
「詳しくお聞かせしてもらってもいいですか？」
「はい、これは私の５００年の人生で思っていたことですが、悪意を持って悪事をする人の悪影響はたかが知れているんですよ。むしろ、『どっち付かずの扱いをするのが、正しい配慮』と思いこんでいる人に、私も……石山さんもとても苦しめられてきました」
　永原先生がいつもの矜持をカメラの前で話す。
「分かりました」
　やはり、深く突っ込んでこない。
　話がこじれる可能性を考慮してだろう。
「では次の質問ですが、現在の協会の主な活動について教えてもらえますか？」
「はい、現在はですね。主に新しくＴＳ病になられた患者への対処をしています。正会員が私と石山さんを入れて１２人居まして、その１２人が担当カウンセラーとして、ＴＳ病患者への心のケアと、自殺防

止に取り組んでいます」
「自殺防止……もう少し具体的に教えてもらえますか？」
「まず、全国の病院と連携して、ＴＳ病で倒れた患者が出た場合、地域に応じて正会員が来ることになっています。それぞれ本業を持っていますので大変ではありますが……病院の方とも協力して、『性別適合手術を受けさせないこと』『女として生きていくしか道がないこと』『それ以外の道に進んだ患者は一人残らず自殺していること』を示しています」
　そう、あたしも同じことを言われた。そして女の子になったその日のうちに新しい名前と生活を決めた。
　後で分かったことだけど、普通は翌日から数日後に決める人が多くて、その日のうちというのはとても速いことらしい。
「もし万が一自殺者が出た場合はどうするんですか？」
「万が一というより、むしろ自殺者になるパターンのほうが多いです。ですが……それ以上私たちにできることはありませんので支援打ち切りということになります」
　まあ、そうするしか無いよね。
　遺族の人には気の毒だけど。
「では、女として生きていくと決意した人にはどうするんですか？」
「こちらの……よっと、カリキュラムを受けさせることになっています。たまに受けないまま女性になる人も居ますけど……私を始めとする創設メンバーなどはそうですね」
　永原先生が本を出しながら言う。
　正確にはあたしの「女性体験」がその前にあるんだけど。
「中身は……極秘ですか？」
「そうですねえ、全てを説明するのは難しいので、簡単にご説明しますね」
「はい」
「ＴＳ病の場合、なりたては精神がどうしても不安定になります。ですから、とにかく私達は『覚悟』を要求します。その上で女の子らしい振る舞い、仕草、言動を学んでもらいますが、こちらは主に保護者

……母親に教育してもらいます」
「お母様がですか？」
「ええ、各会員が教えるのは中学高校での制服の着付けの場面のみです。最終日の前日に、組んでいます。他には家事の仕方や言葉遣いの矯正、スカートに慣れるための外出や少女漫画を読んで女の子の感性を理解してもらうのもあります。これらは全て、学校生活や仕事の前段階として、日常生活レベルの事象です。なのでカリキュラムが終わっても、女性として生きていくために患者は自主的に色々なことを学ばないといけません」
「盛り沢山ですね、どのくらいで終わるんですか？」
「短い人ですと４日、大学などに通いながらの場合は１周間が目安ですね。大抵は、学校をお休みしてもらうことになるんですけど」
うん、あたしもそうだったわね。
「分かりました……では、次に永原さん自身について教えていただけるでしょうか？」
「……はい」
記者の質問は次に、永原先生自身の人生について話すことになる。

# 意外な訪問者　後編

「分かりました……では、次に永原さん自身について教えていただけるでしょうか？」
「……はい」
「まずはその……永原さんの生い立ちについて教えてもらえますか？」
「ええ、分かりました」
　永原先生は何やら思慮をしている。
　どこまで話すべきか、迷っているのだろうか？
　少しの沈黙の後、永原先生が口を開き始めた。
「……大方、私が江戸時代より前の生まれということは知っていると思われますが、どこに仕えていたか、知っていますか？」
「えっと、巷では武田家とか織田家とかあるいは山賊だったとか言われていますが……」
「……なるほど、そこまでですか。私が仕えていたのは『真田家』……それも武田家に属するよりも更に以前です」
「それって、一体何年前なんですか？」
「私が生まれたのは今からちょうど５００年前です。これについてはインターネット上でもようやく事実が落ち着いたので知っていらっしゃる方もいらっしゃると思いますが」
「一体いつ頃ＴＳ病になったのですか？」
「２０歳の時に畑仕事中にです。隣の村に逃げて、数年ほどそこで過ごしました……その後はもう一度真田の村に戻ったのですが、私がいない間に合戦があって、主君が変わってしまい失意の日々でした」
「その後、真田の村にはいつ頃までいたんですか？」
「天正１０年までですから……１５８２年ですから……数えで６５歳の時までですね」
　永原先生は随分と慎重になっている。
「当時の６５歳というと、長寿の部類だと思うんですが村の人には怪しまれなかったんですか？」

「もちろん怪しまれましたわ。天正１０年というのはいわゆる明智日向守殿の謀反……本能寺の変が起きたときですして、それをきっかけに天下が再び乱れたのを利用して、私は諸国を放浪していたんです」
「放浪中は何かありましたか？」
「ええ、太閤殿下がすぐに天下を統一したのもあってそこまで波乱ではなかったんですが……そうですねえ、関ヶ原の戦いを見物したくらいですか？」
「それはまた、すごいことだと思いますが」
「当時は戦の見物というのはよくありまして、兵士よりもむしろ見物人のほうが多かったくらいなんですよ」
　永原先生が、自慢気に言う。
　この前、当時の絵画にも見物人の様子が描かれていることを聞いたし。
「……いつ頃まで、諸国を放浪されていたんですか？」
「大坂夏の陣が終わってから、江戸に住み始めましたのでその頃までです。ですが、１６５０年代になると、江戸も人口がどんどん増えて……私の不老が噂になりました……もう一回逃亡を考えていたんですが、噂は征夷大将軍の耳に入ったらしくて、江戸幕府が出来て５０年目の……１６５３年です。その時に４代将軍の命で江戸城へ来るように命じられました」
「４代目の将軍というと、徳川家綱ですか？」
　永原先生が、一瞬びくっとする。
「え……ええ。確かにそのような諱と聞いております」
　そう言えば、永原先生はいつも４代様といった感じで呼んでいたけど、３代目の家光と５代目の綱吉は知ってたけど、家綱のことは全然知らなかったわね。
　折角だし今後覚えておこうかな？　佐和山大学に行って日本史が必要になるとは到底思えないけど。
「それで、どうなったんですか？」
「えっとですね……少し話したくないこともあるんですが、かいつまんでご説明しますとですね……当時はまだ、私の主君の孫君で、主君

の晩年の姿を知っていらした松代藩主の真田伊豆守……一昨年の真田丸の主人公の兄君がまだ生きていらしたんです」
　さて、この後どこまで話すかな？
「その時に、私は何とか１２０年近く行方不明だった刀根之助と同一人物だと示せました。当時は特に今とは比較にならないくらい年長者を重んじる社会ですから、当時既に１３０歳を超えていた私は殺されずに済んだばかりか、４代様から江戸城へ常駐するように命じられました……本当は、真田家に再仕官したかったんですが、遂にそれが許されることがなかったです」
　随分と、オブラートに包んだわね。
　とは言え、仕方ないことかな？
「それで、江戸城にはいつごろまでいらしたんですか？」
「戊辰戦争までです。最後の征夷大将軍が江戸城無血開城を決められたときに……厳重に管理されていた私に関する記録をすべて持ち出した上で、また諸国を流浪しました」
「それはいつごろまで続いたんですか？」
「今から１３６年前までですから……１５年程です。その時に、今の職業の教師を始めました」
「じゃあ、教え子は……」
「そうねえ、もう死んだ人のほうが多いんじゃないかしら？」
「……教師を始めたきっかけは何だったんですか？」
「当時は明治維新真っ只中で、鉄道が全国に張り巡らせる。という噂が流れました」
「鉄道が人生を変えたんですか？」
「鉄道ができる前は東京から京都まで徒歩で２週間程掛かっていたんですが、完成すれば２日程で行けるという事で……今では３時間とかかりませんけど、当時の価値観では２日とは異例のことですから、私は今後は逃亡は難しいと判断して、収入を得るために教師の仕事を始めました、その後はさっきの協会の話へと続きます」
「ありがとうございました、人生の中で一番辛かった時代はいつですか？」

「やっぱり戦乱の時代、それも女性になるより前です。常に死と隣り合わせな上に、それが身近な時代でしたから」
結局、ほぼ全て、あたしが既に知っている内容のみをインタビューで話した。
あたしも、クラスメイトたちが知らないことはあまり話さないようにしようかな？
「ありがとうございます。ではですね、続きまして、石山さんに伺いたいんですが」
高島さんの関心が永原先生からあたしへと移る。
「はい」
あたしの心臓が一気に高鳴る。
やはりどうしても、緊張感はぬぐえないわね。
「それで、石山さんはいつ頃ＴＳ病になったんですか？」
「はい、去年の５月９日の午後に倒れて、翌日起きたら女の子でした」
「あ、それじゃあつい最近何ですね。もうすぐ１年というところですか？」
「はい」
高島さんが関心と驚きを見せている。
おそらく、正会員というのもあって、あたしの年齢も１００歳は超えていると思っていたのかもしれない。
「その時はどんな感じだったんですか？」
「はい、あたしは学校で午後の授業を受けてまして……昼休みの時にも既に下腹部に違和感はあったんですね。それが急に激痛に変わって……そのまま救急車で病院に運ばれました」
「じゃあ、教室は大変だったでしょう？」
「ええ、あたしはその後、石山優子に名前を変えて、１週間学校を休んで、先程のカリキュラムを受けました」
前の名前のことは、まあいいかな？
話すと長くなるし。
「カリキュラムはどうでしたか？」

「はい、結構厳しかったですが、とても楽しかったです」
ここはうん、イレギュラーだけど正直に答えた方がいいわね。
「それはいったいどういう意味ですか？」
「やっぱり、少しでも男っぽい言動や仕草をすると怒られちゃうんです。その度に『私は女の子』って暗示をかけさせられるんです。そこは厳しかったですが、一方で女の子として、新しい発見もたくさんあって、新しい生活が楽しみでした」
あたしはなるべく、笑顔でかわいくインタビューを受けるように心がける。
今はメディアの情報が枯渇しているから、世間関心も高いはず。
ここでしっかりと、笑顔を見せて好印象を与えさせたい。女の子は見た目が大事だしね。
「学校に復帰してどうでしたか？」
「はい、最初こそ男扱いという事もありましたけど……やっぱりこの見た目、この声の上に、何よりあたし自身が『女の子として扱ってほしい』と言ったので、すぐにそれはなくなりました」
具体的ないじめのことなどは、話さないでおく。
「そうですか」
「あ、私から補足いいですか？」
永原先生から割り込みが入る。
「はいどうぞ」
「男扱いは本当にすぐに止みましたけど、どっちつかずの扱いをする人は夏までいました。しかも、どちらも強引な解決が必要でした」
小野先生と教頭先生のことね。
「と、言いますと？」
「ええ、協会が直々に出ました。女性としての扱いをしないというのは、患者の生死は元より、尊厳にも関わることですから」
永原先生がそう言う。
本当はあたしの学校の先生だったりするんだけど、そのことは言わないでおこうかな？
「ありがとうございます、やはり先ほどの話ですか？」

「ええ、自分の正しさを疑わないですから」
　ここで先程の話に繋がる。
「それで、女性として生きていくという事は、彼氏とかも作ったりしますか？」
「はい、あたしにも今、彼氏はいます」
　飛び切りの笑顔で言う。パソコンの向こうでは絶望の声が聞こえてそうだけど気にしない。
「もしかして、その……失礼かもしれませんが元々同性愛者とか性同一性障害だったとかですか？」
「いいえ、違います。あたしは元々乱暴な性格で、異性愛者の男でした」
　そこはさっきの笑顔とは打って変わって、きりっとした顔を作って否定する。
　この病気になっても、男を好きになることも含めて、ちゃんと普通に女の子として生きていけることを示さなければいけない。
「それがどうして、たった半年でですか？」
「……石山さんは特別です。普通は数年かかります」
　永原先生が補足してくれる。
「それでも、変われるんですか？」
　やはり、高島さんは懐疑的だよね。
「はい、変わるための訓練が、先程のカリキュラムです」
「凄いですよね、人間って」
「はい、石山さんは男だった時は乱暴でよく怒る人でした。今は、何もかも正反対です」
「どんな感じだったんですか？」
　高島さんはさらに突っ込んだ話をしてくる。
「はい、あたしは本当によく怒鳴って男子から嫌われていました。身体能力も、男子の中でもトップクラスだったので、力ずくを好んでいました。今では女子でもダントツで運動能力は低いです……でも、そのおかげで、血で血を洗う日々に終止符を打つことが出来ました」
「……それについて戸惑いを感じたことはありますか？」

「やっぱり女の子になってからは、男女の違いにとても戸惑いました。ですが、あたし自身が変わりたかったのもあって、今はこの病気になれてよかったです」
「石山さんのように考える子はとても少ないんです」
「男女の違いに戸惑って思ったことは何ですか？」
　高島さんの質問、回答は一瞬躊躇したけど、きっぱりと言った方がよさそうね。
「男女平等という事を、今すぐやめるべきだと思いました」
「やっぱち、両方の性別を体験してみてですか？」
「はい、男性と女性では全く違います。男性が男らしい男になるべきなように、あたしたちも女の子らしい女の子になりたいと思ってます」
　あたしが言ったら、世間への説得力は高まると思う。
「永原さんにお聞きします、永原さんも同じ考えなんですか？」
「ええ、それだけじゃないわ。この病気になると、男女の違いに戸惑うことになります。ですから、フェミニストになる人は誰一人としていません。女として生きていくことを拒否して、自殺していった人さえも同じです」
　永原先生の断定的な物言いに、高島さんも一瞬だけ怪訝そうな顔をする。
「それでも、有史以来１３００人ほどいるのですから、一人くらい例外はいそうなんですが……」
「いえ、ただの一人もいません。日本だけではなく、わずかに海外の患者のことも見てきましたが、全て同じでした」
　永原先生は、更に大きな自信をもって言う。
　高島さんには理解できないかもしれないけど、ＴＳ病になると、本当に嫌というほど男女の違いを思い知らされることになる。
　その障害は、とても大きい。
「そもそもこの病気は、男女の違いに戸惑い、女性に適応することが求められます。力も弱くなりますし、背も低くなります。毎月腹痛にさい悩まされますし……肩も凝りました」

肩こりはあたしだけかもしれないけど。
「そこまで女性になるんですね」
「ええ、この病気になると、妊娠出産ができるという能力と引き換えに、男だった時に出来たことの多くができなくなります。あたしたちは……老けないためにいつまでも生き続けるという点を除いて、他の女性と全く同じなんです……何もかも」
とにかく、あたし達は完全な女性だという事を強調する。
「……」
「あたしたちは、女性であることを支えにしなければ、生きていくことは出来ませんから」
「……分かりました。ところで、永原さんにお聞きしますが、石山さんが正会員となったきっかけは何なんでしょうか？」
「石山さんが、成績優秀だったからというのに加えて……協会の風通しを良くするためです」
「それはどういうことですか？」
「やはり普通ならとっくに生きていないような江戸や明治生まれの人もそれなりの人数いる集団ですから、どうしても硬直化しやすいんです。石山さんの次に年下の正会員でも６０代ですから……そういうのもあって、思い切って若い石山さんを正会員にしてみました」
永原先生が以前にあたしに説明してくれたのと同じ内容を話す。
「そうですか……ありがとうございます……質問は以上ですが、お二方の方から聞いておきたいことはありますか？」
「じゃあ一つ」
永原先生が手を挙げる。
「はい、永原さん」
「もし……何ですけど……この記事が話題になって、他のマスメディアが追従報道してきたときのことについてです」
「……心配いりません。日本性転換症候群協会の要望で、この動画の編集を絶対にしないこと、カットせずに報道することを、当社記事の引用の絶対条件とさせていただきます」
そこまで考えていたわけね。

本当に、まるで厳戒令のような報道規制よね。
「ありがとうございます」
永原先生も、高島さんのことをすっかり信用したのか初めて笑顔を見せてくれた。
「石山さんの方からは何かありますか？」
「うーん、あたしは特にありません」
「では、これで終了とさせていただきます。本日は本当にありがとうございました」
「「ありがとうございました」」
そうすると、カメラマンさんが録画をやめるボタンと思われるボタンを押し、高島さんが肩の荷が降りたような仕草をする。
「それじゃあ、記事作りますので、別室をお借りしてもいいですか？」
「どうぞ、こちらにご案内します」
永原先生が別の部屋に、高島さんとカメラマンさんを案内する。
完成した記事は、後で見ることになっている。
「どうなるかなあ？」
「うん、楽しみよね」
永原先生とあたしは、そんなことを話しながら待つ。
最初は取材を受けての感想を交換し、永原先生とあたしで今後のマスコミ対策について話し合った。
永原先生が出した「専属」という条件。
つまり、特定のマスコミのみに情報を提供し、他のマスコミをシャットダウンするという方式だ。
永原先生によれば「私達とて、何から何までマスコミ不信ではない」というのを見せるためにも必要だという。
特に高島さんには恩義はないが、うまく利用できという。
あたしにはまだ、よく分からない。ともあれ、今は記事ができるのを待つしか無い。
「できました」
高島さんとカメラマンさんがこっちへ戻ってくる。

「こんな感じで、動画はこちらです」
高島さんが動画ファイルを見せてくれる。
あたしと、永原先生のさっきのやり取りが写っている。
「こちらを、動画共有サイトとこちらの画面にアップロードして、こんな風に見えます」
高島さんが動画を流しながら説明してくれる。

……どうやらノーカットというのは嘘じゃないみたい。
あたしが動画をチェックしている間に永原先生が記事の文章を見ている。
「うん、大丈夫よ」
「ありがとうございます」
「……ここまでしてくれたのですから、おそらくしないとは思いますが、後で改ざんとかしないでくださいね」
「分かってますよ。あなた方は自分の価値をもっと考えてください」
そう言えば、高島さんが言っていたわね。
例えあたしたちのプロパガンダを無批判に垂れ流してでも報道したいくらいの存在って。
それじゃあ、アップロードしますね。
高島さんが動画共有サイトにまずアップロードする。
題名は「【ノーカット】日本性転換症候群協会、独占取材　会の主張」と書いてある。
どうも、件のニュースサイトの公式アカウントみたいね。
そして次に記事をアップロードし、インターネットでちゃんと正常に見られるか、あたしの携帯と、協会のＰＣで問題ないのを確認し終わる。

「では、本日は失礼致します」
荷物をまとめた高島さんとカメラマンさんが頭を下げてくる。
「ええ、もし機会がありましたら、またよろしくお願いいたします」
「ありがとうございます。それでは……」

高島さんたちが去っていく。
「この内容なら、きっと大丈夫よ。問題は既存のメディアだけどね」
「でも、引用条件も記事に入れてありますから大丈夫でしょう」
あたしが、少し楽観的に言う。
「だといいですけど……まあ、終わってしまったことですから考えても仕方ないでしょう」
永原先生はそう言う。人事を尽くして天命を待つ、ということだろうか？
あたしと協会本部の戸締まりをチェックし、終わったら永原先生と別れる。
「それじゃあ、月曜日、またよろしくお願いいたします」
「はい」

## 反響

「ただいまー！」

「優子、おかえりなさーい！」

母さんとのいつものやり取り。

ご飯まではまだ時間があるというので、あたしは家に帰ってから早速記事を見ようと思った。

まずはＰＣを付けてっと。

……あれ？

まず、検索エンジンを使い、ニュース名で検索すると、そのメディアのニュース記事に繋がらない。

「Ｅｒｒｏｒ　５０３」って書いてあるから……確か以前の浩介くんの話に拠れば向こうのサーバー側の問題のはず。

……もしかして、反響が大きくてアクセスが殺到しているために、サーバーが落ちているのかもしれない。

仕方ない、つぶやきサイトを見てみよう。

あ、トレンドに「日本性転換症候群協会」ってあるわね。

早速クリックしてみると「日本性転換症候群協会の取材条件に応じるマスコミ現る！」と、「ＴＳ病患者２人が天使過ぎる件、なお１人は５００歳、もう１人は彼氏持ちの模様」「日本性転換症候群協会会長、江戸城に２１４年間住んでいた。都市伝説の正体では!?」など、様々なニュースサイトが出てくる。

そして、それらをクリックすると、インターネットの掲示板の書き込みをまとめたサイトにつながっていく。

そこの書き込みをざっくり見てみると「よくこんな条件で取材を申し込んだな」という声の他、「取材のお陰で今まで知らなかった実態がよく分かった」という声もあった。

また、あたしが男女平等を夢想だと断じたことについても「この人が言うと説得力が桁違い」「フェミ死亡ｗｗｗ」「結局モテない行き遅れのＢＢＡがフェミになるんだな」「だって美人はそんな主張しなくても幸せだもん。この子みたいにさ」というような、暴言が含まれて

いるものもある。

色々なサイトをよく読んでみると、書き込みの大部分は取材の中身ではなく、あたしと永原先生の容姿に関する話題だった。

やはりネットの評価でも、概ね永原先生よりあたしの評価のほうが高いみたいね。

女の子として、こういうのはやっぱり自信になる。永原先生だって「超が付く美少女」と言ってもいいくらいだし、実際ミスコンではあたしと互角に争ったくらいだし。

もちろん、インターネット上では永原先生の方を推す声もかなりあるけど、その書き込みに対しては「ロリコン乙」と言われている。

それに対して「俺達より遥かに年上で胸だって出てるのにロリコン？　ロリコンとは一体、うごごごご」という書き込みがあり、また「当時ならあの体格は普通なんじゃないか？」という声もあり、喧々諤々の議論が展開されている。

あたしだって童顔な方だけど、やっぱり永原先生と並ぶと大人っぽく見えるのかな？

とにかく、あたしにとってかわいいって言ってもらえるのが、何より嬉しい。特に、あたしに対して「アイドルの誰よりもかわいいよな」という声もあって、本当に嬉しかった。

しかも、同じような書き込みは永原先生に向けられたものもあって、永原先生の方は「俺は○○の方がかわいいと思う」と言った感じだけど、あたしについては誰も異議を唱えてなかった。

やっぱり、女の子になって最初の朝感じたことは嘘じゃなかった。

それを改めて裏付けてくれた。

もしかしたら、今あたしは「ミス・インターナショナル」あたりに出れば世界一にもなれるんじゃないかとさえ思えてくる。

実際、インターネットでも各年の国際的なミスコンの優勝者と、あたしや永原先生との顔を比較した画像までアップロードされていて、「これはひどい」「ミスコンブスすぎワロタ」「世界一とかおこがましすぎる」「審査員見る目なさすぎ」と言った声まで聞こえてくる。

それに対して「だってマキノちゃんや優子ちゃんみたいに本当に可愛い子はこういう大会には出ないんだよ」「ＴＳ病患者だもんなあ。男の理想をわかりきってるわけだから、出たら反則だろ」「会長が出て優勝したら自分はもとより、祖母の祖母の更に祖母よりもはるかに年上に持ってかれるんだから屈辱感半端ないだろうな」「いや待て、会長って５００歳だろ？　３０歳弱で１世代だとして……１８世代なら祖母が９回続くぞ」「何だよそれ、半端ねえな」という声まである。

……すみません、あたし去年学園のミスコンに出て永原先生と桂子ちゃん押しのけて優勝しました。

他にも「優子ちゃんは自信に満ち溢れていてコンプレックスなんてなさそう」「いいよな、かわいいこがかわいいって自覚して自信たっぷりに振る舞うの」「俺も思った。今まではそういうので控え目になる娘がかわいいと思ってたけど考え改めないと」「さり気なく胸強調してるし」という声もある。

確かに、あの動画だけでは想像できないから無理もないとは思うけど、もちろんあたしにも女の子としてコンプレックスはある。

最近も、おもちゃ屋さんで女児向けのおもちゃを買っちゃったし、どれだけ求めても満たされないコンプレックスを抱えている。

一部の書き込みは「巨乳や体重についてコンプレックスがあるんじゃないのか？」という声もあったが、もちろんこれは的外れで、あたしにとってはむしろ自信になっている。

ところで、黒いワンピースの上からでもはっきり分かるあたしの巨乳に対して、性欲を持て余したネットユーザーによるセクハラのような書き込みも多い。一番多いのが単純に「揉みたい」というもので、次に多いのが「挟まれたい」だ。

ま、浩介くんにならされてもいいことだけど、ね。

ともあれ、記事を上げ、取材を受けたその日のうちに、ここまで大きな反響になるとは思っても居なかった。

さて、あたしはまとめサイトの情報から、現在進行形で書き込まれ続けている掲示板を見つけた。

あたしが名無しで、「どうしてここまで反響になったのか」について

質問してみると「何分マスコミ界最大のタブーだったから」と言った内容の指摘を受けた。
ともあれ、インターネット上ではこんな感じの反応が主だった。
ちなみに、永原会長の年齢についても「大方、蓬莱教授が証明したんじゃないか？」という憶測が流れていて、ほぼ受け入れられていた。
これについては、事実なのでそのまま放置しておいていいだろう。

「優子ーご飯手伝ってー！」
「はーい」
母さんの声とともに、あたしはインターネットを見るのをやめて母さんの家事手伝いに行く。

「優子、インターネットの反応どう？」
ご飯を作っていると、やはり母さんも気になるのかそんな質問をしてきた。
「うん、やっぱりとんでもない反響だよ」
「それで、優子の評価はどう？」
母さんがグイグイと押してくるように言う。
まあ、悪い評価じゃないし、話してもいいかな？
「もちろん、かわいいってさ。あと、この胸に対する話題も多かったわね」
「やっぱり？　優子は自慢の娘だもん、お母さんも嬉しいわ」
おいおい、それでいいのかよ……
まあ、母さんらしいと言えばそうだと思うけど。
「それで、協会全体についての評判はどう？」
「うん、それも悪くないわ。でも永原会長によれば『問題は既存メディアの反応』なんだって。そのせいでインターネットをしていない人の評判が悪くなるとか」
「……そう、お母さんも後で見ておくわ」
母さんと一緒に、食事を作る。
食事が出来たら、あたしが父さんを呼ぶ。

父さんの方は相変わらず何を考えているのかよく分からない。
そもそも、職場の同僚にも、ＴＳ病について話しているかどうかも聞いていない。
聞く必要がなかったから、と言うのは、事実だとしても言い訳かもしれない。
優一の頃は、父さんともよく話していたけど、優子になってからは母さんと話す機会が増えた。
最も、父さんはストレスを感じている様子は全くない。
それは、乱暴だった優一が生まれ変わったことによるものだと思う。
「そういえば優子、インターネットメディアの取材を受けたんだってな」
「う、うん……」
とはいえ、父さんもそのことについては気になる様子。
「ネットの反応はみんなそれ一色だったぞ。やっぱり優子ってかわいいってさ」
「あーうん、まあね……」
やはり、父さんもあたしたちのことをチェックはしていた。
「ふう、月曜日に会社の同僚に話さないとなあ……」
「あらあなた！　優子のことまだ話してなかったの!?」
母さんが、意外そうな声で話す。
確かに、今まで話していないというのは驚きだ。
何分、もうすぐ女の子になって1年が経つわけだし、それだけ長期間あたしのことを話していないというのも驚きだ。
「ああいや、単に話す機会がなかっただけだよ。でも、ここまで話題になった以上は、話さないわけにも行かないだろうからね」
父さんは、なるべく自分は騒動に関わりたくないという感じで言う。
確かにそう、父さんにしても平穏な日常を過ごしたいというのは分かる。
でも、そうも行かなくなった。

あたしが、女の子になって、父さんにだけは、ちょっとだけ迷惑をかけちゃったのかもしれない。
でももちろん、それで後悔するということはない。
女の子になってよかったことの方が、遥かに多いんだから。
ともあれ、今日はもう寝よう。月曜日になれば、また学校の反応も変わってくるだろう。

ピピピピッ……ピピピピッ……
「うーん……！」
翌日の月曜日、あたしはいつものように目覚まし時計で起きて、制服を着てリビングに行き、テレビを付けた。
すると、ニュースでは、テレビも新聞も、あたしたち協会が取材に応じたことを伝えていた。
一方で、高島さんの所のメディアは映像を提供してくれなかったのか、各社局ともにＵＲＬを紹介するにとどめている。
それはどこのテレビ局も同じで、「無断放映」をしようとするメディアはなかった。
「優子、早速話題ね」
「でも、あたしのことや永原先生のことは一言も言ってないわ」
まあ、そうせざるを得ないようにあたしたちが仕向けさせたんだけど。
父さん曰く、今朝になってようやく記事が繋がるようになっていったらしい。
まあ、原文の記事は、協会本部でも見たし、改めて見る必要はないかな？

「ともあれ、学校にいってらっしゃい」
「うん」
あたしは、久しぶりに不安を抱えながら学校へ行った。
幸いにも、男たちの視線はいつものことなので、あたしには気にかからなかった。

誰かに声をかけられる、ということはなくていつも通りの小谷学園だった。
おそらく、原因としてはインターネットをある程度深くまで辿らないと、取材に応じたのがあたしだということには気付かないことだろう。
テレビ局の放送を見ただけでは、どうにもならない。
更に父さんのさっきの話しでは、朝までサーバーがダウンしていたと推測されている。
おそらく、昼頃からは勝負になるかもしれない。
ガラガラ……
「おはよー」
「おはようございます優子さん」
最初に目が合った龍香ちゃんと、まず挨拶する。
「あ、優子ちゃんおはよう。取材受けたんだって？」
どうやら既に事情を知っていたらしい桂子ちゃんが話しかけてくる。
「う、うん……本当は『誰もこの条件なら申し込まないだろう』って考えていた条件だったんだけど、まさか応じてくる所があるとは思わなくて……」
「でも、どうして優子ちゃんが取材を受けたの？」
桂子ちゃんが、不思議そうに言う。
確かに、高校生のあたしが出張らなくてもいい場面ではある。
「ああうん、あたしが考えた条件で想定外が起きたから、一種の『けじめ』みたいなものよ」
「ほうほう、『けじめ』ですかあ……優子さんの口からそんな言葉が出てくる日が来るとは、思っても見なかったですよ」
龍香ちゃんが、珍しいものを見る目で言う。
確かに、あたしの口からはいかにも出なさそうな言葉で、どちらかと言えば優一の口から出そうな言葉ではあるわね。
それはつまり、古い時代が多い協会だからこそ、責任を取るということなのかもしれない。

「それでそれで、取材はどうだったんですか？」
龍香ちゃんが、昨日の母さんみたいにグイグイと押すように言う。
「ああうん、すごく平身低頭だったわね」
あたしたちの機嫌を損ねないように、最大級の接待をしていたという印象だった。
「優子ちゃん、それどういうこと？」
「ああうん、どうも、マスコミ界で情報が高騰していたみたいで」
「ははあんなるほど、情報封鎖しすぎて『とにかく何でもいいから取材したい』という心理だったんじゃないですか？　飢餓状態では何が何でも食べ物が欲しくなるのと同じですよ」
龍香ちゃんが、分かりやすい例え話をしてくれる。
桂子ちゃんによれば、学校の様子はいつも通りだという。
ＴＳ病について、協会が取材を受けたからと言って、学校までに影響が及ばないようだわ。
教室には既に浩介くんが居て、浩介くんも特に昨日のことは話題に出さなかったし、何か配慮している。という感じでもなかった。

「はーい、皆さんホームルームを始めますよー」
永原先生が入ってくる。
結局、大きく話題になっているのはインターネット上だけで、現実ではあまりネット上の話題を出さないため、少なくとも表面的には、あたし達は平和に過ごすことが出来た。
今日の授業も滞り無く終わり、あたし達は天文部へと行き、そこでもちょっと話題になっただけで、特に何もなく、自宅へと戻っていった。

家に帰ってＰＣをつけてみると、インターネット上では「色々な女性と元男の女の子２人を比べてみた結果」というスレがとても伸びている。
あの時の取材からトリミングしたと思われる、あたしと永原先生の顔写真を使い、女優やアイドル、これまでかわいいと言われていた甲

子園での「チアガール」や、ミス・インターナショナルを始めとする「ミス〇〇」の女性たち、更にはどこから拾ってきたのか女子高生のプリクラや自撮り写真に貼り付けて比べ、あたしたちをダシに彼女たちをあざ笑うというかなり悪趣味な内容だ。

そしてどれもこれも「うわこいつらブスすぎ」と、書かれている。

さすがに永原先生とアイドルを比べた場合は「アイドルも結構かわいいじゃん」という擁護もあるけど……あたしと比べると、アイドルたちも色褪せてしまうらしく、そんな意見が見受けられなくなってしまった。

この人達に、「協会の会合に参加すると、あたしが一番かわいいとは自信を持って言えない」と教えてあげたい。

そしたら、どんな反応をするんだろう？

ともあれ、当初の趣旨からはかなり脱線してしまったとは言え、少なくともあたしたち自身の感触は悪くないみたいでよかったわ。

やっぱり、美人というのは得だというのを思い知らされた。

あたしはこの日もいつも通り、ご飯を食べ、お風呂に入り、勉強をして、浩介くんとメールでやり取りして、お人形さんやぬいぐるみさん、おままごとセットで遊んで寝た。

結局、あたしたちの日常は何もかも、変わらなかった。

取材による悪影響は、杞憂だった。

むしろ結果的には、協会から見ると何の労力も使わずに、直属の情報機関を得られたに等しかった。

それを踏まえ、今後は、高島さんには「宣伝大臣」になってもらうことも考えないといけないわね。

……なんだろう、あたし、また腹黒く計算高くなってる気がする。

以前までは永原先生の影響かなとも思ってたけど、何か違うような気もするわね。

……このこと、母さんや永原先生に相談してもいいかもしれない。

# ゴールデンウィークの過ごし方

「さて、５月のゴールデンウィーク、どこに行こうかしら？」
母さんがそんなことを言う。
季節はもう４月末、ゴールデンウィークが終わればあたしはちょうど女の子になって１年になる。
今年２０１８年は５月３日が木曜日なので４連休になる。
母さん曰く、これからこの４連休にどこに旅行するか、それとも家で休むかという家族会議をするという。これは毎年恒例の石山家でのイベントだ。
ちなみに去年のゴールデンウィーク、あたしがまだ優一だった頃は５連休ということもあって、家族で温泉旅行に行った。
結果的に、これが優一として最後の旅行になった……というよりも、ゴールデンウィークが明けた最初の月曜日にあたしは女の子になった。
つまりあたしのもう一つの誕生日、５月１０日も直前に近付いてきたということ。
それにしても、１人の人が２つも誕生日を持てるというのは、ある意味ＴＳ病の特権かもしれない。
……永原先生は、両方共忘れちゃったみたいだけど。
「どうしようかのお、私はどちらでもいいが」
父さんは毎年毎年いつもこんな調子。あたしも優一の時は同じ感じだったから（しかも、乱暴な性格を隠すために「親父と母さんが良ければなんでもいい」と猫をかぶってた）、母さんの意見ばかりが通っていた。
とは言っても、あたしも具体的にどこに行きたいという希望もないから、今年のゴールデンウィーク家族会議も去年と変わらないと思う。
ちなみに去年は、家でゴロゴロしていた。
「そうだわ、優子。そろそろ浩介くんとの結婚準備を始めなさい！」
「え!?」

家族会議が始まって早々に、母さんが突然突拍子もない事を言う。
なんかいつもそんな感じがするわね。
「結婚準備って……まだこれから大学もあるのに」
あまりの唐突さに、あたしも思わず反論してしまう。
た、確かに浩介くんと結婚したいと言えばそうだし、最近は意識することも増えた。
だからお嫁に行きたいのも、もう浩介くん以外考えられないけど……
「いい優子？　善は急げよ。浩介くんみたいな素敵な男の子、他の女の子が放っておかないわよ」
「べ、別に浩介くん……あたし以外になびくとは到底思えないわよ」
あたしがよっぽどひどいことでもしない限り、難しいと思う。
それに桂子ちゃんとか永原先生レベルならともかく、あたしから浩介くんを略奪しようなんて考える女の子が現れるとも正直考えにくいし。
「確かに、今の優子を手放す何て考えられないわ。それでも、よ。善は急いだほうがいいわ。確かに優子はかわいくて美人で性格も最高の完璧美少女だけど、決して油断しちゃダメよ」
「う、うん……」
母さんがグイグイと押すように言う。
久々にここまで押してくる母さんを見た気がする。何だか懐かしい気分もするわね。
「それに、もうすぐ1年でしょ？　ちょうどいい記念になるわ……よし！　そうと決まれば早速浩介くんの両親とも調整するから、優子はちょっと部屋に行っててね」
「え、でも……」
「ほら、行きなさい！」
あうー、問答無用みたい。
「わっわっ……押さないでよ母さん！」
母さんに背中を押され、部屋から強引に退場させられてしまう。
「ふー、どうしよう……」

そうは言っても、あたしに行く宛もない。
仕方なしに、あたしは自室に戻って意味もなく考える。
結婚準備、ゴールデンウィーク……一体何をするつもりなんだろう。
遠くには、テレビ電話を付けたと思われるあたしの両親の笑い声が聞こえてくる。
確かに意識はしているけど、結婚とか出産とか、まだ正直分からない。
結婚はもちろん、出産だって、つい1年前まではするとしても自分の奥さんがすることで、「自分はどうやって見守ればいいんだろう？」ということをちょっとだけ考えたくらいだ。
だって、女の子じゃなかったんだし、自分が出産するなんて、殆ど考えてもいなかった。
浩介くんと愛し合い、結婚し、そして妊娠して、赤ちゃんを産む。
今までも、電車の中で妊婦さんや赤ちゃん連れの女性を見かけた時に、そんなことを考えたことがあった。
優一の頃は男だったから、それは全くの他人事だったけど、優子となった今のあたしは全く違う。
たまに妊娠について学ぶこともあるけど、みんなとても苦しく、辛そうな様子だった。
ただでさえ、あたしは痛みに弱く、泣き虫な女の子。
本当に、そんな大きなことが出来るのか心配ではある。
特に引っかかっているのが、去年の夏休み、永原先生から聞いたこと。
ＴＳ病患者は、もし反射的に男が残っていても、出産すれば何もかもが女性になってしまうという。
あの時はまだ身体の潜在意識が男のままだったから、浩介くんに海で随分と大胆なことをした（最も、今も似たようなものだけど）
それでも反射的本能の克服はうまく行かなくて、永原先生がいわば「荒療治」としてあたしにこの方法を示してくれたんだ。
その中で、永原先生が言っていた言葉。

出産をした時に、多くの女性達が「女に生まれてよかった」と思うという。
あたしは今の今まで、数多くの「女に生まれ変われてよかった」を味わってきた。
多分、浩介くんと結婚して、浩介くんとの子供を産んで、ママになったら……その喜びはどれほどのものだろうか？
今まで感じてきた喜びよりも、ずっと大きいものなのだろうか？
今はまだ、皆目見当がつかない。

「優子ーこっち来てー！」
「はーい！」
母さんの呼び声に、あたしはリビングルームに勢い良く入る。
ともあれ、早く結果が知りたい。
「はい、じゃあ浩介くんと話し合ってね」
「え!?」
あたしが困惑しているのをよそに、今度は両親が部屋から退場してしまう。
テレビ電話を見ていると、顔が朱色になった浩介くんが恥ずかしそうにうつむいていた。
「こ、こんにちは優子ちゃん……」
「うん、浩介くんこんにちは……ごめんね、またあたしの両親が勝手に……」
「いいんだって……俺の両親も乗り気だし、さ」
あたしも、浩介くんに釣られて顔が真っ赤に染まっていく。
「ど、どうしよう……ゴールデンウィークはその――」
「あ、あのさ！　優子ちゃん」
あたしが結婚準備について話そうとすると、浩介くんがあたしの話をさえぎるように話しかけてくる。
「ん？」
「俺もさ、優子ちゃんのところもかもだけど……両親は焦ってるけど、俺達は、もっとゆっくりでもいいんだぜ」

「うん、分かってる」
そのことは、浩介くんとも何回も確認している。
あたしたちには、まだ時間があるということ。
「だ、だってさ……ゴールデンウィーク、２人きりで旅行って……」
「え!?」
浩介くんがとんでもないことを言い出してくる。
２人きりで旅行？
あたしたち、まだ１８歳でもないのに……
『可愛い子には旅をさせよ』だってさ」
「なんか微妙に違うような気がするわ」
そもそも結婚準備って名目でそのことわざ使うべきなのかな？
「ああうん、俺もそう思う……」
どうもギクシャクして、気まずいやり取りが続く。
とにかく、うちの両親も浩介くんの両親も結婚させたがって仕方ないのは変わらないし、あたしだって、この前の遊園地デートでは、浩介くんに殆どプロポーズ同然のやり取りをしてしまった。
実際に、客観的に見たらもうあたしと浩介くんの関係は、単なる「彼氏彼女」という段階は過ぎていて、既に「婚約者」と言ってしまったほうが正確な表現になると思う。
でも、そうだとしても結婚にはまだまだ不十分なのも事実。
「あの、さ。俺」
「うん」
「さすがにさ、２人きりで旅行っていうのはちょっとまずいかなって思うんだよ」
浩介くんが、理性を振り絞って言う。
確かにこれまでも、スキー合宿では浩介くんと２人部屋だったけど、この時は他の生徒や先生もいる中、オンボロ旅館の部屋の問題でたまたまそうなっただけ。
家族風呂では２人っきりだったけど、結局何とかうまくやり過ごせたと思う。
「だからさ、俺の両親と優子ちゃんの両親の同伴ならって言う条件を

つけたいんだ」
「あ、うん……それなら……いいかな？」
浩介くんは、妥当な落とし所を探すように言う。
「少なくとも、優子ちゃんの今後のことを考えれば、最低でも一緒に暮らすことになる俺の両親は同伴させるべきだと思う」
結婚するとなると、今後浩介くんの両親ともお世話になるわけだけど、直接会ったのはまだ去年のクリスマスの時が唯一だった。
でも結婚したら、毎日四六時中顔を合わせることになる。
そう言う意味でも、二人きりで旅行するよりも、最低でも浩介くんの両親は同伴させたほうがいいというのはあたしも同意見。
「うん、あたしもそう思う」
「じゃあ、ちょっと呼んでくるよ」
「うん、あたしも」
浩介くんがテレビ電話の画面から離れ、両親を呼ぶ声が聞こえた。
あたしも同じように大急ぎで両親を呼び、テレビ画面の前に誘導する。
「それで浩介、どうするんだ？」
全員が揃うと、浩介くんのお父さんがまず話しかけてくる。
「やっぱり、優子ちゃんと話し合ったんだけど、今回は親同伴がいいと思う。俺達の家に嫁入りすることになる優子ちゃんのためにも、最低でも俺の両親だけでも一緒に来て欲しい」
浩介くんがきっぱりとした表情で言う。
うん、これが浩介くんの責任感が強いと言われる根源でもある。
「ふう、どうしますか？」
今度はあたしの母さんが、発言する。
「うーん、結婚のためなら水入らずも必要だと思ったんですが――」
「優子ちゃんは俺の両親と、直接に会ったのはまだクリスマスの時だけだ。義両親問題が起きないためにも……同伴は必要だと俺は思う」
浩介くんは、結婚したその先を見つめて動いている。
浩介くんの両親やあたしの両親は、あたしを見てたいそうかわいがってくれたけど、そこで止まってしまっていた。

だからこうやって、何とかして早く結婚させようと躍起になっている。
浩介くんも、あたしとの結婚そのものには賛成でも、もう少し慎重に行くべきだと主張している。実際２０歳未満での結婚はかなり早い方だしこれ以上焦る意味もないと言っている。
結婚は何も、２人だけが良ければそれでいいというわけではないというのが浩介くんの考え。
「そんな固いこと言わないで、２人っきりで楽しんでいきなよー」
「そういうわけにも行かないよ。これは優子ちゃんと俺だけの問題じゃないんだ」
駄々をこねる浩介くんのお母さんに、浩介くんがきっぱりと否定している。
とても惚れるその責任感の強さ。浩介くんの方が、あたしの両親や、浩介くんの両親よりもずっと大人だと思う。
浩介くんはあたしのことを、将来まできちんと考えてくれている。
……もうどっちが親なのかわからないくらいだわ。
「うん、あたしとしても、浩介くんのお父さんお母さんのことも、ちゃんと知らないといけないと思う」
だから、あたしも浩介くんに援護射撃をする。
とにかく本人の希望を優先させてほしいから。
「んー、早く孫の顔が見たいだけなんだけどなー」
あたしのお母さんは、特に不満たらたら……って孫の顔が早く見たい!?
「な!?　か、母さん！　それどういうこと？」
「ん？　だって優子、全然大人の階段登ってる感じしないもん……お父さんもお母さんも早く孫を抱きたいのよ」
母さんのとんでもない爆弾発言にあたしと浩介くんが凍りつく。
た、確かにまだ性行為はしてないから、あたしは処女のままだけど……
「うんうん、私達も、浩介の子供……私達の孫が見たいのよ」
そして浩介くんのお母さんからも爆弾発言が飛び交う。

「旅行中にスパッとやってくれると思ったんだけどねえ――」
「うんうん」
母さんがまたもや爆弾発言をする。
つまり、今回の2人きりの旅行も、本音としてはあたしと浩介くんとで、性行為をさせてあたしを妊娠させようという計画だったということ。
「お母さん！　子育てとかどうするの!?　俺たち大学があるんだよ！」
呆然としていた浩介くんが、ようやくお母さんを咎めるように言う。
「もー、それくらいお母さんたちも面倒見るわよ」
「いやそう言う問題じゃなくて――」
「全く、浩介はケチなやつだな」
「何で俺非難されてるの!?」
母親のみならず父親からも攻撃された浩介くんは、その理不尽さを嘆くように言う。
「とにかく！　あたしとしても、今から妊娠したら勉強にも影響するし、浩介くんと結婚するにしても、苗字が変わると学校の事務手続きに色々迷惑かかるだろうから、少なくとも小谷学園の卒業まで待って欲しいわ」
そもそも、結婚とか妊娠についてだって、まだよく分かっていないのに。
「うーん、優子がそこまで言うなら……今回は同伴にしましょう」
ようやく母さんが折れてくれた。
「う、うん……さすがに私達、無責任すぎたわね……」
浩介くんのお母さんも、反省するように言う。
あたしの口から「妊娠」「勉強」という単語が出たためか、経験者として、軽はずみに過ぎたことを分かってくれたみたい。
「それじゃあ、次にどこに行くか決めるか」
「そうね……何処がいいかしら？　近場にしようとは思っているんだけど……」

母さん曰く、浩介くんとあたしの2人っきりの旅行は既に密かに計画していて、あたしたちが親同伴を絶対条件にしたせいでキャンセルしないといけないという。
「うーん、でも今からじゃなあ……どこを予約すればいいんだろう？」
「……そうだわ！」
突然、浩介くんのお母さんが閃いたように手を合わせる。
「どうしたの母さん？」
「旅行なんてしなくていいのよ。優子ちゃん、ゴールデンウィークの4日のうち、最初の3日、私達の家にお泊り……つまり、プチ嫁入りしてくれる!?」
あー、やっぱりそう来たわね……
「え!? ちょ、ちょっとお母さん！ だから優子ちゃんにはそれはまだ――」
「あら？ 嫁入りするなら私達のことをよく知っておきたいんでしょ？ この大型連休、絶好のチャンスだと思うけど？」
「ぐぬぬ……」
浩介くんは、二人っきりの旅行を断るための口実を、今度は逆に使われてしまった。これでは反論ができない。
まさに「策士策に溺れる」……今回はちょっと違うか。
「うん、お母さんもそれに賛成だわ。優子、いってらっしゃい」
「は、はい……」
あたしとしても、大学への進学先や、蓬莱教授のことも落ち着いてきて、そろそろ浩介くんとの将来を見据えた行動をしなきゃいけないと思っていた時期だった。
浩介くんも最終的には、折れる形であたしへの「嫁入り」を承諾してくれた。
それにしても、浩介くんの家は少なくとも佐和山大学在籍中はあたしの分まるごと生活費かかることになるけど、大丈夫なのかな？
……まあ、そのあたりも既に話し合っているのかもしれないけど。
ともあれ、今度のゴールデンウィークは、浩介くんの家に「花嫁修業」をすることになった。

# 花嫁修業1日目　前編

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……」

目覚まし時計の音とともに、あたしは目を覚ます。

今日は5月3日、ゴールデンウィークの4連休の最初の日。

この日から2泊3日で、あたしは浩介くんの家に泊まる事になっている。

お泊りというよりは、「花嫁修業」ということになっていて、家事の手伝いとか浩介くんとひとつ屋根の下で過ごすことで見えてくるものを発見するのが大きな目的。

クリスマスの時以上に、あたしは未来の義両親に、品定めをされるに違いない。

浩介くんの家で一緒に過ごすのは楽しみだけど、品評会も兼ねているわけだからだらしない所は見せられない。

そう言う意味でも、何もかも気軽に過ごせればいいというわけではない。

でも、だからと言って嘘でメッキしてはいけないと思う。

あたしが子供っぽい趣味が好きなこと、どうしてもそれをやめられないこと。そしてそれは、あの時浩介くんの両親が言っていた「男の人生も歩んできたから男心が分かる」というのと、コインの表裏の関係であることを、示さなくてはいけない。

あたしは家の倉庫から母さんが使っていたというピンク色のキャリーバッグを取り出し、着替えやお風呂セット、また遊ぶために持っていくものを選んでいく。

ぬいぐるみさんとお人形さん、おままごとセットは全部持っていく。

もし当日どこかで暇があれば、これを使って遊んでいきたいと思う。

次に着替え、パジャマも含めて数着。

今回はデート用だけではなく、普段来ている比較的ラフな服装など

も用意しなきゃいけない。
普段の生活を見せるというのが、今回のお泊り会の大きな目的。
次に、今日の服を品定めする。今日はあまり生活臭がする服はやめておこうと思う。
あたしはまず、短めのスカートを手に取る。
黒いプリーツミニに、上は白を基調としたスタイル。
いわゆる「制服風」のデザインで、胸のリボンも黒い色。
頭の白いリボンと合わせて白黒スタイルで決めてみる。
浩介くんと家デートするので、パンツ見られることも考えて純白を選んだ。とにかく今日は白と黒で徹底したいので、靴下も真っ白にしてみた。
うん、今日もバッチリ可愛く出来た！
いつもよりも清楚なイメージで、これなら第一印象はとてもいいと思う。
他にも赤い服や水色のワンピース、更に「嫁入り」ということで、久しぶりに一番露出度の高い服も入れてみる。
嫌でもあの時のあたしが思い出されるけど、多分、必要なことだから。
もちろん浩介くんの両親に見せるつもりはないけど、浩介くんと２人っきりという状況が出来たら、浩介くんにだけ、見せてもいいと思う。
とにかく、オシャレに気を使わないと。
昨日母さんから、「結婚してから手を抜いちゃう人が多いけど、それだと旦那さんに愛想を尽かされるから、寧ろ結婚してからが本番よ」と言われた。
幸いあたしはＴＳ病なので、外見的な魅力が年齢とともに損なわれるという心配はない。
それでも、努力による補正をなくしたり、あるいは内面的魅力を磨かないと、浩介くんの評価も下がっちゃう。
それを考えて、第一印象としても、あたしはもう一度気を引き締めてオシャレをすることにした。

「よし、こんなところね」
荷物をキャリーバッグに入れ終わったら、あたしは試しに取っ手を使って持ち上げてみる。
「うーん……!!!」
だけど重たいキャリーバッグはびくともしない。
「ふーん!!!」
もう1回、あたしは声をかけつつ思いっきり力を込めて持ち上げてみる。
でもダメ。
「ふーん!!! はぁ……はぁ……はぁ……」
3回目もダメ……あーあ、全然持ち上がらないわ。
浩介くんや優一なら、涼しい顔でひょいと持ち上げてくれそうなのに。
女の子になって、力が弱くなった自分にも大分慣れてきたけど、やっぱりこういう時だけ、ちょっと劣等感を感じてしまう。
学校の中なら力仕事は浩介くんが助けてくれるけど、あたしの家の中ではそうも行かない。
「おはよー」
「あ、優子おはよう。今日から浩介くんの家でしょ？」
朝、あたしは母さんといつもの挨拶をする。
「うん、この服で大丈夫かな？」
あたしがちょっとだけ不安そうに言う。もしかしたら、「花嫁修業で日常生活を体験するのに、おしゃれしてもしょうがないでしょ」と言われるかもしれない。
「大丈夫も何も、いつもの優子でいいのよ」
「う、うん……」
まあ、確かにあたしのこの服なら大丈夫だと思いたいけど。
事実上の予行演習なわけだし、絶対無防備な所とか見せちゃいけないよね。
今はまだいいけど、浩介くんとはこれから数十年単位、蓬莱教授次第では数百年以上の時を一緒に過ごすことになるわけだもん。

そう言う意味で、今後の3日間は大事になると思う。

ともあれ、今は母さんと一緒に朝食を作る。

「お母さん、鼻が高いわよ」

「え？　どうして？」

料理を作っていると、母さんがそんなことを言う。

「優子、去年のクリスマスの時に浩介くんのお母さんに家事勝負で勝ったんだって!?」

「ふぇ!?」

微妙に曲がった情報が出てきて、思わず変な声が出てしまった。

確かに、浩介くんのお母さんよりも料理や掃除が上手なことは示したけど、特に対決したというわけじゃないし、料理掃除以外の家事を見せてはしていない。

「あら？　何を驚いているの？　いい？　女の子は家事ができるっていうのは大きなアドバンテージよ。特に浩介くんくらいの子持ちのお母さんを打ち負かしたのは、とても大きなアピールになったわ」

「そ、そうなの……？」

「そうよ。浩介くんだけじゃなくて、他の周囲の人達も、家庭的な優子を見て魅力に感じたってシーン、これまでにもなかった？」

「うーん……」

あたしはちょっとだけ考えて思い出す。

最初にそんなことを言われたのは確か……林間学校のバーベキューの時だっけ？

確かにそう、あの時はあたしが料理を担当して、あたしは「ちょっと失敗しちゃった」って言ったけど、みんなとても美味しそうに食べていて、「家庭的」って言われたんだっけ？

「いい優子？　彼氏彼女として付き合うのと、結婚するのでは、求められるスキルも違ってくるわ。いくら美人でも、作るご飯がまずいだけで好感度は下がってしまうわよ」

「うん、分かってるわよ」

それは、優一の感性でも分かること。

「そう？　じゃあ浩介くんの家ではちゃんと頑張るのよ。優子はそろそろ、結婚に向けて『妻』としての女子力が必要になってくるのよ」
「うん」
一見あまり話していなさそうな父さんと母さんの仲がいいのも、いわば「家事の力」が大きいと思われる。
家事が出来なくて、家が荒廃してしまうと良くないとか言っていた。
それと同時にあたしも、浩介くんに求めるものは「彼氏」から「旦那」になっていくことも意味する。
……とすると、もしかして経済力？　何だかんだで金って大事だし……
浩介くんに経済力はまだないしうーん……まあ、今はまだいいかな。就職は大学のその先だし。
「あ、そうそう母さん」
「うん？」
「浩介くんの家に持っていくキャリーバッグ何だけど……持ち上がらないのよ」
ともあれ今は、そのことが大事。
「……優子、本当に力弱いわね……いいわ、玄関までは母さんが持っていくから」
「ありがとう……」
別段腕が細いわけじゃないのに、何でこうも身体能力弱いんだろう？
確かに、もうあたしは女の子だし、弱くてもいいと思っている。それに強くなると優一の頃を思い出しそうなので、強くしようとは微塵も思ってないけど。
さすがにこういう生活に支障をきたすレベルはちょっと嫌な感じもする。
ま、嫁入りしたら、力仕事は浩介くんにしてもらうのがいいかな？
ともあれ、あたしは料理を作り、食べ終わって歯を磨く。歯ブラシやお風呂のセットも、ちゃんと中に入れている。

「いってきまーす」
「いってらっしゃーい」
母さんに見送られ、あたしは浩介くんの家へと向かう。
足りなくなっていたＩＣカードをチャージし、改札を見る。
「うーん……」
キャリーバッグがかさばるため、広い改札を通らなければいけない。危なかった、一瞬いつもの狭い改札に行きそうになったわ。
帰り道も同じだから、よく気をつけておかないといけないわね。
駅のホームへは、普段使っている階段の使用はやめて、普段あまり使わないエレベーターを使用することにした。
もう一回試してみたけど、あたしの腕力では、このキャリーバッグを持ち上げることが出来ない。
だから、これを持って階段は使えないし、エスカレーターもなるべく避けた方がいい。
段差が大きな所では、最悪怪我にもつながりかねない。
幸い、あたしの最寄り駅にも、浩介くんの最寄り駅にも、エレベーターがあり、また電車とホームの間も広く空いてはいないので、浩介くんの家までの道のりに、何か障害があるわけではない。
家事をする上で、ある程度の力も必要になるとは思うけど、この力の無さはどうにも出来ない。
あたしはひ弱に生まれ変わった。
そのことを、最初は嘆くこともあったけど、今はもうない。
そう言えば、この姿勢、虎姫ちゃんと恵美ちゃんからは「身体は弱くても心が強い」と言われるきっかけにもなっていた。
恵美ちゃんに拠れば、「誰よりも強くないと気が済まない自分と違って、弱い自分を受け入れて、そのままで居ることが出来るのはとても心が強い」のだという。
あたしは、強がって泣くのを我慢することもほとんどなくなった。
今でも体育の授業ではちょっとした接触プレーなんかで、クラスメイトたちによく泣かされている。

優子になってからは、球技大会でも、体育祭でも泣かされたし、身体の弱いあたしにとって、泣き虫のあたしにとって、本来なら体育はトラウマになるべき所。

でも、女子のみんなはそんなあたしにいつも優しくしてくれていた。

だからあたしも、「優子」という名の通り、クラスのみんなに優しくなれるんだ。

そのおかげで、運動音痴だけど、体育の授業も辛くない。

もしかしたら、クラス替えが行われなかったのは、この体育の授業のせいかもしれない。あたしが泣き虫だってことは、他のクラスにはあまり知られていない。

去年の今頃まで、1ヶ月強の間、男子として過ごしたのも、結果的にはプラスだったのかもしれない。

クラスメイトはみんな乱暴者だった「石山優一」のことを知っていた。

だから、泣き虫になったことで、あたしがどれくらい大きく変わっていったかも知ることができた。

あの時の、あたしの思いを思い出す。

「泣いてもいい、弱くてもいい、甘えても言い、かっこ悪くったっていい、だってあたしはもう、女の子なんだから」

多分、浩介くんと結婚した後も、あたしの中で、この思いは残り続けると思う。

女の子として受け入れてもらえない一番辛い時と、受け入れてもらえて一番嬉しかった時に発したこの思いは、今までの、そしてこれからの人生において、あたしの原点になるものだから。

電車を待つホーム、電車に乗り込んだ車内。

中には2、3人、部活などで休日登校する小谷学園の制服を見かけた。

電車の中で、一際大きな荷物を持つあたしは目立った。

でも、周囲の視線は荷物に行っていない。
荷物の後、あたしの顔や服を一通り見回した後、みんな胸を凝視している。
男性たちがエロい目で、あたしの胸を見て、胸の小さい女性たちが羨ましさと妬みの感情であたしを見る。
でも、男子の視線は浩介くんを嫉妬させる諸刃の剣。
冬場の服でも目立つくらい胸が大きいから、どうしても見ちゃうんだと思うけど。
あたしは、胸の大きな女性の悩みにおいて、肩こりなんかはよく理解できるけど、「男子にエロい目で見られるのが嫌」という心理が、未だにイマイチ理解できていない。
それは多分、あたしが17年間男として過ごしたがために、「男を理解」してしまっているが故のことだと思う。
学校の最寄り駅を過ぎ、浩介くんの家の最寄駅まで来たので電車から降りる。電車の床とドアの段差、そしてホームとの段差に苦しみながらも、何とか引っ張る力を使ってホームに降り立つ。
一番広い改札を使い、駅から出て、3回目の浩介くんの家を目指す。
ともあれ、今日から3日間、浩介くんの家のお世話になる。
浩介くん本人はもちろん、浩介くんの両親にも、かわいい所を見せないといけない。
そんなことを思っていると、急に心臓がバクバクと言い始めた。
やっぱり、緊張してしまう。
これから起きることが心配になる。特に、「もし浩介くんの両親から評価が下がってしまったらどうしよう?」と考えてしまう。
しかし、歩くスピードは同じなので、あたしの足はついに浩介くんの家の手前まで来てしまっていた。
あうう……心の準備が出来てないよお……
「すぅーっはぁー」
呼び鈴を押す前に、ゆっくりと一回深呼吸し、心臓さんにも何とか落ち着いてもらう。
「よしっ!」

一言気合を入れ、あたしは思い切って呼び鈴に指を向かわせた。
ピンポーン！
「はーい！」
家の中から、大好きな男の子の声が聞こえてきた。
「あ、優子ちゃんいらっしゃい」
「……お邪魔します」
玄関の段差、どうしよう？
「あ、持つよ」
あたしがキャリーバッグを引っ張り、玄関の段差に苦戦していると、浩介くんが持つと言ってきてくれた。
「うん、ありがとう」
あたしは素直に手を離すと、浩介くんが片手で表情一つ変えずに力強く持ち上げる。
あたしが、全力を込めても持ち上がらなかったキャリーバッグが、まるで赤子のように軽々と持ち上げられる。
「ど、どうしたの優子ちゃん？」
「え、ああうん……その、力持ちの浩介くんに見惚れちゃって……」
「ぶっ……全く、優子ちゃんはかわいいなあ」
浩介くんが一瞬動揺し、荷物をが揺れるが、問題なく床についた。
「優子ちゃん、鍵閉めてくれる？」
「うん」
あたしは玄関の鍵を閉め、靴を脱ぎ、浩介くんの家にお邪魔することになった。
また緊張感が高まる。
今日はともかく、明日は丸一日、浩介くんの家で過ごすことになるんだもの。

# 花嫁修業1日目　中編

「優子ちゃん、いらっしゃい」
「お邪魔します……」
　居間に行くと浩介くんのお母さんが出迎えてくれた。
「もう、お邪魔しますじゃないでしょ。今日は花嫁修業として来てるのよ」
「ひゅえ!?」
　また変な声を出しちゃった。
　なんか今日はこんなことが多いような……？
「いい？　今日から明後日まで、あなたは浩介のお嫁さんとして振る舞うのよ」
「あうぅ……」
　た、確かにそうだけど……
　やっぱり来てそうそうじゃあまだ慣れない。
「ほら？　あなたは浩介のお嫁さんだとしたら、浩介くんのお母さんの私は何て呼ぶの？」
「え、えっとお、『お義母さん』……？」
　あたしが、恐る恐るそう呼んで見る。
「うん、よろしい。それから浩介の呼び方は？」
「え!?　あ、あのそれは……それはさすがに……」
「何を言ってるのよ。ほら、言ってみなさい」
　多分「あなた」って呼ばされるんだと思う。
　でも、それは本当に結婚して、最初の日に言ってこそ効果があるもので……って何考えてるのよ優子！
「えっと……その……あうあう……」
「ほら、優子ちゃん困ってるから。今はまだ予行演習なんだから」
　動揺して言葉にならないあたしを見て、居た堪れなくなった浩介くんが助け舟を出してくれる。
「えー！」
　一方で「お義母さん」の方は不満そうな声を漏らす。

「それに、やっぱりそういうのは本当に結婚してから呼んでこそだと思う」
「そうなの？」
「そうだよ。まだ結婚したわけじゃないんだから。何もかも結婚後を想定しなくてもいいだろ？」
浩介くんありがとう。
また助けられちゃったわ。
「……浩介がそこまで言うなら仕方ないわね。ところで、優子ちゃん」
「はい」
何とか納得してくれた浩介くんのお母さんがあたしに向き直る。
「確かに、本当に結婚した後のことを全て想定するとは言いませんが……とは言っても予行演習には違いないので我が家のルールに従ってもらいます」
「はい」
うん、それは守らないといけないわね。
「っと言いたいところだけど、あんまりルールらしいルールはないわね。とりあえず、優子ちゃんには家事手伝いをお願いするわ。自由時間も、嫁らしくなるべく浩介と一緒に居てあげてね」
「……分かりました」
つまりちょっと同棲寄りな家デートって感じかな？
「それから、優子ちゃんの部屋なんだけど、ちょうど空き室が1部屋あるからそこを使ってね」
「はい」
「とりあえず、まずはそこに荷物をまとめるところからかしら？　案内するわ」
「は、はい……」
あたしは玄関の段差を考え、一旦バッグを倒すことを考える。
「あ、荷物は俺が持つよ」
「うん、浩介くんありがとう……」
あたしが手を出して、荷物を持とうとすると、すかさず浩介くんが「荷物を持つ」と言ってくれる。

甘えすぎないように注意しつつも、浩介くんの厚意は素直に受け取っておくのが、長続きのコツ。一旦は自分でやって見せて、大変そうなのを見せるといいかもしれない。
あたしが通された空き部屋、そこは介護用と思われるベッドとふすまや棚など僅かに本などが残っていて、見てみるとどれもいかにも古そうな部屋。
あたしの部屋と比べるとかなり殺風景で、以前のこの部屋の主が誰か分かりそうな気がした。
多分、おじいちゃんおばあちゃんの部屋だったんだろう。
「この部屋の主って元々……」
「ええ、私の旦那のお母さん……浩介のおばあちゃんの部屋よ。今は老人ホームにいるわ」
「あ、まだ生きているんですか」
どうやらまだこの部屋の主は生きているみたいね。
「ええ、結構元気ですが、あの年齢ですから……分かりませんよ」
「そ、そう……」
とにかく、今はそのおばあちゃんの部屋があたしの部屋の代わりになる。
普段からずっと老人ホームなので、結婚したらここがあたしの部屋になると思う。
……ってさっきから結婚すること前提で話してるわね。
うーん、やっぱりこの状況に飲み込まれている気がするわ。
「さ、優子ちゃん。荷物広げていいわよ」
「はーい……じゃあちょっと待っててね」

あたしは2人を部屋の外へ追いやるとまず、お人形さんとぬいぐるみさん、おままごとセットをベッドのそばへと置く。
着替えについてはキャリーバッグの中に入れたサブの袋で代用する。
一通り準備が終わったら、もう一回部屋全体を見回す。
この部屋には箪笥はない。本棚も、小さいけど床面積は広い。

おそらく、部屋の面積はあたしの部屋と同じだと思う。
もし、この家のどこかに倉庫に出来る空間があれば、あたしの部屋にあった私物のほぼ全てをここに持っていくことも出来そうだわ。
ともあれ、結局広げたのはおもちゃと後はリボンと歯ブラシやお風呂セットだけとなった。
「浩介くん、もういいよー」
「おうっ」
あたしが浩介くんとお母さんを通す。
と言ってもあまり変わったところはない。
「あら、優子ちゃん。これは？」
浩介くんのお母さんの目に、早速お人形さんとおままごとセット、女児向けアニメのグッズやぬいぐるみさんが入った。
「うん、あたしがよく遊ぶおもちゃ」
「えええ!?　ちょっと、いくら何でも子供過ぎるでしょこれ……」
いかにも引いているという感じで言う。
「うん、でも、これもあたしの一面だから。結婚の予行演習なら……こういうのも見せないといけないと思って、あえて持ってきたの」
「でも、でもどうしてこんな……」
「あの……聞いてください！」
あたしが子供っぽい趣味を持っていたことに動揺している浩介くんのお母さんに対して、意を決して話しかける。
「はい」
「あたし、ＴＳ病だって言ったでしょ？」
「ええ。倒れたのは去年の今頃ですよね？」
「あたし……倒れていきなりこの姿になったんです……女の子として生きて行くに連れて、どうしても幼い子供……他の女性なら当たり前に持っている幼い女の子だった頃の記憶が無いことで……劣等感でいっぱいなんです」
「……」
浩介くんのお母さんも、真剣に聞いている。
そう、もうコンプレックスは治らないと思うから、だから女児向け

の趣味や遊びで、コンプレックスを少しは紛らわせられるから。
「だからあたし……子供向けのもの……女児向けの幼いものや、幼い格好がとても好きです。誰に何と言われても、この趣味を辞めることは出来ません」
「ええ、分かったわ。でも良かったわ」
浩介くんのお母さんが、今度はホッとした表情で言う。
「え!?」
「だって、優子ちゃんってあんまりに完璧過ぎる美少女で、劣等感なんて絶対持ってなさそうだったもん。そんな優子ちゃんにも、他の女性を見て『羨ましい』と思う所があったんだって」
浩介くんのお母さんがそう言う。
確かに、あたしは今までも多くの人に容姿・内面問わず褒められてきたし、浩介くんもだし、永原先生や協会の人たちにいたっては「みんなの模範」「救世主」という扱いですらあった。
でも、そんなあたしにも、等身大の女性に抱くコンプレックスがあるということ。
「……あたしだって人間ですから、他人に憧れることもありますよ」
「ええ、分かってるわ」
「ああ、俺も。優子ちゃんには少女趣味が必要だと思っているよ……それに、優子ちゃんの子供っぽい所もかわいいし」
「もうっ！　浩介くんったら！」
浩介くんも、あたしのことをフォローしてくれる。
「あたしだって人間ですから」……そう、だから人よりも劣っている所、他の人が当たり前に持っているものを持っていなければ、あたしにとってそれは大きなコンプレックスになり得る。
あたしたちＴＳ病患者は後天的に女の子になるから、どうしても「幼女」がない。これは仕方のないことかもしれない。
「ええ、そうね。私も、ちょっと配慮が足らなかったわ。ごめんなさい」
「ああいえいえ」
こうやって、すぐに理解してくれた。

「さて、しばらくしたらお掃除お洗濯を手伝ってくれるかしら？　その間休んでいてくれる？」
「はいっ！」
こうして、あたしの嫁さん修行が始まった。
ともあれ、まずはここに来た疲れを癒やすための休息時間に充てる。
浩介くんも、浩介くんのお母さんもまだ部屋から出てないけど、気にせずにあたしはおままごとセットを持っておままごと遊びをし始めた。
「お2人もおままごとする？」
「……遠慮しておくわ」
「俺も、蓬莱教授の本を読みかけだったんだ」
「あら、うん。分かったわ」
おままごと遊びと言われても、浩介くんには分からないと思うし、あたしだって十分に理解しているわけじゃない。
あたしはいつものように、音が出るキッチンやおもちゃの食材などで、料理を作る遊びをする。
そして、小さなテーブルと小さな椅子に腰掛けたお人形さんに持っていき、お人形さんの手を掴んで食べさせてあげる。
心なしか、お人形さんが笑っている気がするわね。
うん、お人形さんはかわいいし、ぬいぐるみさんもかわいいわね。

「優子ちゃん！　手伝って！」
「はーい！」
あたしは一通り遊び終わって、遊びの後片付けをしようとしていた時だった。
浩介くんのお母さんの声が聞こえたのであたしは返事をして、声が聞こえた方向へ進む。
「この洗濯物、干してくれる？」
「ええ」
花嫁修業として、早速洗濯の課題が出てくる。

あたしも洗濯物を干すことはよくあるので、うまく物干し竿を使って手早く洗濯物を干せる状態にしていく。
浩介くんのお母さんと、うまく分担して作業を進めていく。
「お、これはお母さんの方が速いな」
側で見ていた浩介くんが、お母さんの方に軍配を上げる。
「はぁ……はぁ……うん、身体能力の差だと思うわ」
やっぱりこの手の、技術的な差が出にくくて、体を動かす比重の大きい家事だと、さすがに浩介くんのお母さんには勝てない。
それでも、浩介くんのお母さん曰く「いつもよりもずっと早く終わった」「優子ちゃんもちゃんと洗濯ができていてよかった」とのこと。
ともあれ、好感度が上がったようでよかったわ。

「じゃあ、優子ちゃん、次はお掃除よ」
「はーい！」
休む暇もなく、次の課題が課せられる。
「優子ちゃんはお風呂と脱衣所お願い。私はここととこっちと、あっちの部屋を掃除するわね。お風呂の掃除の仕方は分かってる？」
「もちろんよ」
「じゃあお願いするわね」
「ええ」
あたしと母さんで掃除をする。
浩介くんの家のお風呂に入るのは初めて。
あたしは近くにあったお風呂用の雑巾を手にとって濡らし、浴槽を洗い始める。
浴槽についた垢を抜き、またお風呂の栓に溜まった髪の毛などもきちんと洗い流しておく。
そして、シャワーでよく洗っていく。
お風呂の壁やタイルに付いたカビも、シュッと拭くタイプのカビ取り剤を吹きかける。
カビ取り剤の煽り文句曰く、「5分でスッキリ」ということなので、

その間にあたしは脱衣所の掃除をしておく。
こちらは、簡単にモップがけして、箒とちりとりでホコリを取り、鏡についた汚れを雑巾で丹念に拭いていく。
脱衣所の鏡には、ちょっとだけ頑固な「くもり」があったので、そこだけは石鹸を使って落とした。
頃合いが良くなったら、カビ取り剤を巻いた部分にシャワーをかけて、排水口の下にカビを追いやって完成。
「うん、きれいになったわ」
これなら、あたしの評価も上がりそうだわ。
「優子ちゃん、終わった!?」
「うん!」
あたしがそう言うと、浩介くんのお母さんがお風呂場に駆けつけてくる。
「うわあ、きれい!」
「ど、どうかな……」
「うんうん、やっぱり優子ちゃんすごいわ、私がするよりきれいじゃない」
「えへへ」
評価は上々と言ったところ。何はともあれ浩介くんのお母さんに褒められて、とても嬉しいわ。
「さ、少し休んだらお昼ごはんの準備しましょう」
「はい」
個人的には、浩介くんのお母さんの掃除した部分の方が気になる。
クリスマスの時に家事をした時には、掃除し忘れてた所をあたしが発見していたし、今回もちゃんと掃除できているか不安だけど、ともあれ今は少し休んでから昼食を手伝うことになった。
「お、優子ちゃん。掃除したんだって?」
「うん」
休憩が終わってリビングルームに行くと、新聞を読んでいた浩介く

んのお父さんがあたしに声をかけてきた。
「本当、若いのに立派だよな」
「ありがとうございます……」
浩介くんのお父さんからかけられた、もう女の子になって何回目になるかわからないあたしへの褒め言葉。
でも、一つ一つがとても嬉しい。
浩介くんの両親は、とにかくあたしと浩介くんを結婚させたくてたまらない。
それどころか、「早く子供を産め」と言わんばかりの勢い。
「それにしても、どうして――」
「優子ちゃん、手伝って」
どうしてそこまで結婚を急ぐのかを聞こうと思った矢先、あたしは、浩介くんのお母さんに呼び止められた。
「それで、今日は何を作るの？」
「うーん、ラーメンにしようかしら？」
「うん、分かったわ。で、担当なんだけど――」
浩介くんのお母さんと話し合った結果、クリスマスの時に作ったそばとは逆に、あたしが野菜を切り、スープの用意などをして、「お義母さん」が麺を茹でる係になった。
この前のクリスマスのことで分かっていたが、浩介くんのお母さんは、あたしや、あたしのお母さんと比べて、ちょっと料理のスキルは落ちるということ。
なので――
「水はそのくらいでいいわ。沸騰させる時は思い切ってハイパワーよ」
「あ、うん……」
あたしが、浩介くんのお母さんに的確に指示を出していく。
普段は、あたしの母さんの指示下で、あたしはアシスタントをするか、あるいは一人で料理を作るかだったから、何気にこの体験はとても新鮮に感じた。

麺ならば、湯切りさえすれば何とかなるはず。
あたしは、４人分の野菜を手早く切っていき、人参からキャベツまで、順番に煮えにくい野菜から入れていく。
沸騰して、すべての野菜を入れた後は火を少し弱める。
こうすれば、固い野菜も芯まで柔らかくなる。
ピピピピッ……ピピピピッ……ピッ！
浩介くんのお母さんが、麺をざるにかけると同時に、あたしの方もＩＨを止めて、箸も併用しながらうまく均等に、容器にスープを４分割する。
また、あらかじめ切っておいた海苔とチャーシューのトッピングについては、麺の後に回す。
ちなみに、トッピングや野菜についても浩介くんは多め、あたしは少なめだ。
シャッ……シャッ……！
浩介くんのお母さんの湯切りが弱い。
「あ、それじゃあ不十分ですよ」
「え⁉　そうなの？」
「貸してください」
あたしが代わりにざるを受け取り、この前と同じように空中で一回転させるなどして、徹底的に湯切りをする。
「じゃあ、うまく麺を入れましょう」
「は、はい……」
あたしと浩介くんのお母さんで協力して、手早く麺を分けていく。
「もう分ってると思うけど、浩介はよく食べるから多めにね」
「うん」
こっちは任せて大丈夫そうなので、あたしはコップ、飲み物、胡椒の用意をする。
「ご飯よー！」
「あーい！」
あたしが大声でそう言うと、自室にいた浩介くんが返事をして、扉が開く音と共にこちらに来る。

そして、あたしたちはラーメンのどんぶりをテーブルに置いて、完成。
「「いただきまーす！」」
あたしたちでいただきますをして、各自で食べ始める。
「おお、うまい！」
まず浩介くんのお父さんが、感嘆の声を上げる。
「何時もより麺がしっかりしててうまいよな」
あたしは、可もなく不可もなくという出来に出来上がったと思ってたけど。
男二人組は、とても美味しそうに食べているのが見て取れる。
やっぱり、あたしの実力は浩介くんのお母さんの一歩先を行っているのかな？
「人参も、火加減が適切で、固くないな。最近は改善してきたけど」
浩介くんのお母さんは、まだ野菜をうまく煮えていないみたいね。
「はぁー、また負けちゃったー」
そんな中で、唯一浩介くんのお母さんだけは、ちょっと憂鬱そうにしている。
「まあ何だ、気を落とすなって」
浩介くんのお父さんが、何とかフォローする。
「そんなこと言われても……」
「あら？　洗濯物の対決では、あたしの負けだったわよ」
かわいそうになってきたので、あたしもフォローに回る。
「いやでも……」
「あたしね、身体能力がとても低いのよ。体育なんて特に苦手だわ」
「うん、それで？」
「体力を使う家事は、多分おばさんの方が上だと思うわ。だからあたしがここに来ても、おばさんの仕事が無くなるわけじゃないわよ」
「そ、そう……」
浩介くんのお母さんはまだ、半信半疑な様子。
「うんうん。特に洗濯とか、こびりついた汚れを落とす掃除とかは、あたしには向かなそうよ」

もちろん、母さんの英才教育があるからできないことはない。でもやっぱり、根本的な基礎体力はどうしようもない。
「うーん、よく分かったわ」
「とにかく、今日は様子見で、明日は家事を役割分担して、進めてみましょう」
「はい」
あたしの提案に、何とか浩介くんのお母さんは立ち直ってくれた。
ラーメンは、浩介くんのお父さんと浩介くんがほぼ同時に食べ終わった。量を考えると浩介くんが一番食べるのが早く、あたしが一番遅かった。

# 花嫁修業1日目　後編

「ふう、ごちそうさまでした」
「そう言えば優子ちゃん、洗い物教えてくれたよね？」
あたしが食器を片付けようとしていると、浩介くんのお母さんが声をかけてくる。
話題はこの前のクリスマスでの一件。
「うん、この前のこと覚えてる？」
「ええ、取りあえず今のところ洗い物は少ないから、こっちは夕食と一緒に洗うわ」
「うん、そうだね」
取りあえず、掃除洗濯昼食と、家事が終わったのでしばらく休憩時間になった。
ふと、何の気なしに窓を見ていると、雲行きが怪しくなっていた。
そう言えば、天気予報、雨が降るかもって言ってたわね。
「おばさん、雲行きが怪しいわよ」
「え!?　でもまだ降ってないし……」
「今日の天気予報、『曇り時々雨』よ。仕舞った方がいいわ」
「うーん、降り始めてからでも……」
浩介くんのお母さんは乗り気ではないみたい。
「ダメよ。濡れてから慌てて入れたら雨水で折角の洗剤が台無しになるわ」
「うっ……」
「それに曇りだとただでさえ洗濯物の乾きはよくないわ」
なんだかあたし、小姑みたいだわ。
「……分かりました。でも部屋干しは臭うのよね」
「そういう時は扇風機を使うのよ。換気扇と合わせれば臭わなくなるわ。他にも、洗濯物は部屋の中央に干すといいわよ」
この話は、母さんに最初のカリキュラムで習った事。
「……知らなかったわ」
あれ？　これ、案外主婦にも知られていないのかな？　まあいい

わ。
ともあれ、あたしは洗濯物を一つ一つ部屋に入れていく。
その間に、お母さんが扇風機を用意して、コンセントを繋いでボタンを押して扇風機を起動し、更に換気扇を入れてから、あたしと合流する。
最後の洗濯物を入れ終わると、ちょうどぽつぽつと雨の音がしてきた。
「ほら、もし雨と共に入れてたら大変なことになってたわ」
そして、雨脚は一気に強くなっていて、間一髪という感じだった。
「おーい、洗濯物は……お、大丈夫みたいだな。よかった」
急な雨に心配になったのか、浩介くんのお父さんが、駆けつけてきた。
「ええ、優子ちゃんのおかげで何とかなりました」
「換気扇と扇風機の音は何？」
「部屋干しの臭いを飛ばすためだそうよ。優子ちゃんが教えてくれたわ」
お母さんが、あたしの説明をそのまま引用して言う。
「へー優子ちゃん物知りだね」
お父さんが褒めてくれる。
「……と言っても、あたしの家事は全部母さんの受け売りで……」
あの時はカリキュラムに夢中だったし。
「やっぱ育ちがいいって感じだよね優子ちゃんは」
うーん、やっぱりそう見られるのかな？
「うんうん、いい所のお嬢様って感じ」
「そ、そうかな……？」
お嬢様というと、坂田部長みたいな人のことを言うと思うんだけど。
「口調というよりは、雰囲気かな？　家事もできるできるし、男を立ててもくれるんでしょ？」
「え!?」
あたしが驚いて、お嬢様らしくない間の抜けた声を発してしまう。

確かに、浩介くんを立てられるようにデートでは努力してきたけど、それは浩介くんが喜ぶからで――
「ふふっ、浩介から聞いたわよ。優子ちゃん、浩介くんの男をあげられるように頑張ってるんだって？」
「う、うん……」
やっぱり、浩介くんはあたしのこと、両親にも話すようになったのね。
まあ、結婚なんて意識するんだから、当たり前といえば当たり前だけど。
「ともあれ、優子ちゃんって理想の女の子って感じなのよ。どうすれば男に受けるか全部分かっているみたいで」
「あはは……だってあたし――」
「あ、うん。そうよね」
考えてみれば、あのカリキュラムが男子受け中心に考えられていたのも、女性らしくなるためという他にも、いい男の子を早く見つけられるためという意味もあるんだと思う。
かつての同性だった男と結ばれるというのは、ＴＳ病患者が本格的に女として生きて行くには大きな意味を持つし。
ともあれ、あたしは女の子らしく洗濯物を干し終わると、自分の部屋に戻っていく。
「はー疲れたー！」
あたしはミニスカートのまま、仰向けにベッドにダイブする。
誰も見てないけど、パンツ丸見えはだらしないので、スカートを直して、布団をかぶって一休みする。
「うーん肩が痛い……」
ここまで重い荷物を持ってきて、連続して緊張の中で家事をしたためか、肩こりがひどくなった。
自分で肩を押してみると、とにかくコリコリしていて、結構しつこい。
リラックスのために何の気なしにぼーっとしつつ、ふとテレビのリモコンが視界に入る。

「そうだ、ニュースでも見よう」
あたしはそう思い、ニュース番組にチャンネルを合わせる。
テレビのニュース、今日は、男性の遺体が発見されたというニュースをやっている。
うーん、治安は良くなっているけど、結構殺人事件はなくならないよねえ……
コンコン
「はーい」
ガチャッ
「優子ちゃん、おやつよ」
扉がノックされる音に返事をすると、浩介くんのお母さんがお菓子を持ってきてくれた。
「ありがとう。そういえばおやつ出すの忘れてたわ」
「いいのよ、私が自主的に出したものだから。疲れた？」
「うん、肩こっちゃって」
あたしが起き上がり、肩をぐるぐる回す。
「そういえば、浩介も『優子ちゃん肩こりがひどい』って言ってたわね」
「うん、女の子になってから、ひどくなっちゃって」
ちなみに、優一の頃は、肩こりはしなかった。
「どれ？　ちょっともいであげるわ」
「ありがとうございます……」
あたしはお菓子の袋を開け、お皿に盛りつけつつ、食べながら肩のマッサージを受ける。
「あー、そこ。うん、気持ちいいわあ……」
肩のある部分、特に固まってる部分で「ゴリッ、ゴリッ」といってるのがわかる。
「ひえー優子ちゃん、このこりすごいわね。うちのお父さんよりこってるよ」
「あはは……」
浩介くんのお母さんが驚嘆の声を上げる。
女の子になって、胸が大きくなった代償がこの「肩こり」な訳なん

だけど、良くなる気配はない。
　でも、こうやってマッサージしてもらえると気持ちいい。
「やっぱり、これだけ大きいとこるの？」
「うん、そりゃあ何キロもの錘をぶら下げてるようなものだし」
　実際には両胸合わせたら１０キロあるかもしれないけど。測ったことないからわからない。
　ともあれ、それだけ重いため、どうしても猫背になりがちだし。
　……悪循環よね。
「そうよね、それに、周りの視線もすごいんでしょ？」
「うん、すれ違う男性のほとんどはあたしの胸見てるわ」
「やっぱり嫌？」
　浩介くんのお母さんは、胸は普通サイズなのであたしの巨乳が気になるみたいね。
「うーん、他の巨乳の人は結構視線とかエロい目で見られたりは嫌みたいだけど、あたしはＴＳ病だからそうでもないわよ」
「どうして？」
「やっぱり、女の子として生きていくにしても、アイデンティティーが不安定なのよ。そんな時に胸が大きいと女の子として自信になるんです。特に男の子に好かれるから」
　男性に好かれやすいというのは、なんだかんだでプラス。
　浩介くんの独占欲とそこから来る嫉妬を処理しなきゃいけなくて、そのためにちょっとえっちなことをしないといけないのがデメリットかな？
「へー、そうなんだね」
「んー、気持ちいいわ。てっぺんもお願いしていい？」
「はーい」
　程よく力の入った気持ちいいマッサージ。
　いつも浩介くんがしてくれる、痛いけど術後にとっても良くほぐれるマッサージとはまた違う。
「……ふう、このくらいかしら？」
「うん、ありがとう……これ、返します」

「はい。どうも」
マッサージが終わるのと、あたしがおやつを食べ終わるのとがほぼ同時だったので、あたしは空になった容器を母さんに返却する。
テレビはついたままで、「地域のニュース」のコーナーだったけど、あたしも浩介くんのお母さんも話題にしなかった。
取るに足らない内容だったからだ。
また暇になったあたしは、あてもなくぼーっとする。
今回は持ってきてないけど、こういう時はＰＣをつけて遊んだり、あるいは日用品をチェックするのもよさそうだわ。
コンコン
「はーい」
「入るぞ」
ガチャッ
次に入ってきたのは浩介くんだった。
「優子ちゃん、お疲れ様。大変だろう？」
「うん、ありがとう」
浩介くんが労ってくれる。
「どうだ？　我が家は」
「うん、今のところやっていけそうだわ」
あたしが笑顔で言う。
でもまだ、浩介くんのお嫁さんっぽいことはしていない。
「それはよかった」
「ふふっ、浩介くんのお嫁さん、楽しみだわ」
「うっ……な、なあ、俺たちもう、『婚約者』って言っていいんじゃねえか？」
浩介くんが、あたしも以前より思っていたことを口に出す。
「うん、そうだね、最近はもう結婚のことばかり意識してるわ」
「あはは……俺も。うちの両親はさ、ばあちゃんのために、早く子供を産んでほしいんだってさ」
浩介くんが、予想通りの回答をする。
「やっぱり？」

「ああ。元気っちゃ元気なんだが、あの歳だからな。いつ死んでもおかしくねえってさ。俺なんか毎日両親に突っつかれてるよ。デートの度に『何で優子ちゃんとエッチしないんだよ！』って怒られてるよ俺」
「そ、そうなんだ……」
浩介くんは、自分の責任感と、両親、そして祖母との板挟みの悩んでいた。
あたしは……ううん、あたし……あたしだって浩介くんの赤ちゃんが欲しいわ。
でも、まだ早い。
それに今妊娠したら、卒業に影響しちゃうわ。
「ま、俺が何とかブレーキになるからさ。優子ちゃん、今は卒業と蓬莱教授のことを考えてくれよ」
「うん」
「蓬莱教授の研究が完成すれば、何人でも子供は産めるだろ？」
浩介くんが言う。
うん、浩介くんとあたしが同じ永い道を歩めるようにすること。
今はそれが大事だもんね。

「優子ちゃんー夜ご飯手伝ってー」
浩介くんと他愛もない話をしていると、今度は夜ご飯の手伝いのお達しが来た。
「じゃあ、浩介くん」
「あ、俺も行くよ」
「うん」
浩介くんも、ついてきてくれる。
あたしはキッチンに行くと、浩介くんのお母さんが居た。
「ねえ、お母さん」
「どうしたの浩介？」
浩介くんが何やら言いたそうだ。
「今日の夕食はさ……全部優子ちゃんにやらせてみてよ」

「え!?」
あたしがまた、驚いた声を出す。
本当に今日は驚かされてばかりの日だわ。
とりあえず、今日は餃子だという。
うーん、レシピにはあるけど、あんまり使わないんだよなあ。
でも、やってみるわ。
「そうねえ、いいわ。優子ちゃんの実力、もっと知りたいもの。家では一人で料理作ることある？」
「うん、滅多にしないけど丸一日全部あたしが家事を担当したこともあったわ」
あたしは餃子の皮と具材を取り出す。
そして、具材の材料を切り、うまく割合にして、ミキサーに掛ける。
うーん、このくらいかなあ？　足りなくなったら足さないと。
次に餃子の具をうまく入れる。多すぎても少なすぎてもダメで、これはかなりの神経を使う。
「優子ちゃんってさ」
「うん？」
黙々と餃子を作っていると浩介くんが話しかけてくる。
「すごく、手がほんのりと白いよね」
「そ、そうかな!?」
単にかわいいと言われるより、もしかしたら照れちゃうかもしれないその言葉。
確かに、あたしの肌は白い方かもしれない。
女の子になって最初に抱いた第一印象でも、肌の状態は「透き通ったように白い肌」だった。
さすがにあの時ほどに自分の肌に感嘆とすることはなくて、むしろ今の印象は「ちゃんと血の色が混じった白い肌」という感じで、よくある「美を意識しすぎての不健康」ではなく、とても健康的だと思う。
「やっぱり、優子ちゃんの魅力は体つきだよ。筋肉質で男の匂いばっかりする俺と違って、優子ちゃんはどこまでも女の子だもん」
「ふふっ、ありがとう。これからも、女の子らしくするわ」

そんな会話をしながら多数の焼けていない餃子が完成した。
あたしはフライパン2つを取り出し、まずゆっくりフライパンを熱して、油を入れ、餃子を焼く。
そしてある程度経ったら水を入れて蓋をする。
ここが結構難しくて、浩介くんも思わず「優子ちゃん大丈夫？」と心配の声をかけてきたので、あたしは「うん、大丈夫」と答えておいた。経験しておいてよかったわ。
そして、水が飛んだら頃合いを見計らって大皿に入れていく。
フライパンの数も2つまでなので、うまく時間差を使い、餃子を作っていく。
ちなみに、あたしが増えた分、いつもの3分の4の量になっている。
餃子以外にも白いお米とふりかけもあるんだけど、それについては既にお米を研ぎ終わっていて、ボタンを押すだけだったので比較的苦労しなかった。

「出来たわよ――！」
「「はーい！」」
あたしの呼び声とともに、3人が食卓につく。
浩介くんのお母さんが食器と調味料、酢醤油とラー油を用意してくれたので、これで餃子を食べられる。
「さ、熱いうちに食べましょ」
「「いただきます！」」
4人でいただきますをして、あたしたちは餃子を食べる。
うん、焦げ具合もちょうどよくて、中も火が通ってて、水っぽさもないし、うまく出来てよかったわ。
「すげえな、あっちっち……」
浩介くん、猫舌なのかな？
あ、でもちょっとあたしにも熱いわね。
「でも新鮮でいいな」
熱さはともかく、浩介くんのお父さんからの味は好評だった。
「料理の時間も短いし、どんな技を使ったの？」

浩介くんのお母さんが不思議そうな顔をする。
「ああうん、2個のフライパンを使ったんです。最近は食器洗い機も自動ですから水道代も変わらないですし、お昼ごはんの洗い物が少なかったんでこうしてみました」
「……すごいわねえ優子ちゃんは。私も勉強させてもらうわ」
浩介くんのお母さんが関心してくれる。

「ごちそうさまでした……あー美味しかったー！」
こうしてあたしの夕食も大成功に終わった。
夕食の後はお風呂。
浩介くんのお母さんが最初、次にあたし。そして浩介くん、最後に浩介くんのお父さん。
あたしは、浩介くんのお母さんが出たのを確認してから、お風呂に入る。
お風呂セットはあたしが持ってきたものを使う。
お風呂のスペースをさっき見た限りでは、あたしがセットを持ってきても問題はなさそうね。これなら、嫁入り後も、お気に入りを使えそうだわ。
さて、肝心のお風呂の湯船や床の面積はうちとほぼ同じかな？
そう言えば、浩介くんはあたしの家のお風呂に入ったことあるけど、あたしはまだ浩介くんの家のお風呂には入っていなかった。
2人で入るにはちょっと狭いけど何とかなりそう……ってそんなこと考えちゃダメよ優子！
でも結婚するってことは、やっぱりそういうことも考えざるを得なくて……あうぅ……
ともあれ、あたしは十分に体を洗って温まって、お風呂から出る。
事故防止のために脱衣所には鍵をかけてある。
バスタオルで体を拭いて、予め持っておいたパジャマに袖を通す。
今回は勝負服という感じではなく、普通のパジャマ。
この格好も、浩介くんとスキー合宿で一緒の部屋になった時に見せている。

「出たよー」
「おうっ」
うーん、何だか眠いわね。
「浩介くん、あたしもう寝るね」
「あ、うん。優子ちゃんおやすみー」
「おやすみなさーい」
浩介くんとお母さんに見送られ、あたしは自分の部屋のベッド、いつもとは違う寝床で寝る。
そういえばこのベッド、あたしが普段使っているベッドより狭いわね。
……あたしのベッドが大きいだけかな？
心なしか、お人形さんたちもとても窮屈そうだわ。
もし嫁入りしたら、このベッドは改善点ね。介護ベッドで背もたれを調整できるのは利点だけど、狭い欠点のほうが大きいと思う。これも家から持ってくればいいかしら？
そんなことを考えながら、あたしは明日のことを考える間もなく、深い眠りについていった。

# 花嫁修業2日目　前編

「優子ちゃんー！　起きてー！」
いつも朝には聞こえてこない声があたしを起こそうとする。
そう言えば、目覚まし時計の音がしていないような。
「うーん……」
「ほら、ぬいぐるみ落ちてるよ」
「え……」
まだ、眠い。もうちょっと寝ていたいわ。
「朝ごはん手伝ってほしいのよ」
「うん……？」
ゆっくりと目を開けると、視界に入ってきたのは浩介くんのお母さんだった。
そうだった。どうりでおかしいと思ったら、あたし、昨日今日明日で花嫁修業してたんだった。
「じゃあ着替えてらっしゃい。リビングで待ってるわ」
「う、うん……」
ともあれ、「お義母さん」が部屋から去り、あたしはベッドから起きる。
ぬいぐるみが落ちていたので、元に戻してあげる。
あたし、ちょっと寝相悪いかも。
さて、今日はどういう服にしよう？
あたしは、サブの袋の中に詰めた着替えを見て、今日の服装を考える。
昨日は白黒をイメージした格好だったけど、今日は主婦らしくもう少し落ち着いた格好にしたいと思った。昨日と違って、今日はもう少し生活感のある服にしたい。
でも、どうしよう？　持ってきた服はどれもラフな格好というわけじゃないし、というか、普段から着ている服はたいていオシャレに気を配った服が多い。
よし、この水色のワンピースにしよう。

とすると、最終日に着ていくのが、一番スカート丈の長い、この赤いスカートになるのね。
あたしは早速服を着替えて、鏡の前で髪を整えてから部屋を出る。

「お待たせー」
「いらっしゃい。それにしても、優子ちゃんってオシャレよねー」
いつもとちょっと違う、朝のやり取り。
「えへへ」
浩介くんのお母さんは、あたしのお母さんと同じで、年齢的な所もあって、ゆったりしたパンツスタイルが多い。
「優子ちゃんって、いつ頃からそういうオシャレするようになったの？」
「うーん、はっきりとは分からないわ。浩介くんのこと好きになる前からスカートを穿くことが多かったし」
元々、母さんが買ってきてくれた服に、スカートが多かったって言うのもあるけど。
でも、それを避けることも出来たわけで、結果的に自分の意志だと思う。
「じゃあ最初から？」
「ああいや、初めてスカートを穿いたのは女の子になって3日目で――」
「それでも十分早いわよ。普通だったら半年はかかりそうよ」
「それじゃあ成績不良者だわ」と言いたいところだけど、ここは我慢しておく。
そもそも、ＴＳ病になってカリキュラムをこなせば、嫌でもスカート穿く事になるし。いつまでも仕草悪いとお仕置きされちゃうし。
「さ、取りあえず、朝ごはんにするわ。優子ちゃんの家は朝ご飯はどうしているの？」
「ごはん味噌汁、焼き魚、パンにサラダというのが多いです。それから、いつも昨日の残りを有効活用してます」
「へえ、うちでは洋食がほとんどよ」

浩介くんのお母さんが関心しながら言う。
「じゃあ今日は、あたしが和食を作ってみます」
いつも洋食の家に、気分転換にもいい機会だと思う。
せっかくのお嫁さん修行だし。
「ええ、お願いするわ」
浩介くんのお母さんも快く承諾してくれたので、あたしはキッチンの中からお味噌汁のもとを取り出す。
お米も昨日の分が残っているので、そちらを使うことにしよう。
どうやら鮭は無いみたいなので、代わりに豆腐を使ってタンパク源にする。
お味噌汁も夕食よりもちょっと少なめのシンプル仕様。
朝食はちゃんと食べるのが重要だけど、おなか一杯に食べるのもそれはそれで健全とは言えない。
ちなみに、浩介くんのお母さんは、あたしの様子をただ見ているだけ。
でも、熱心にあたしから盗もうとしている。
うん、あたしが仮に嫁入りするとしても、その時までは浩介くんのお母さんが主に家事をするものね。
ともあれ、味噌汁ができる前に魚が焼き終わるようにして、一通り盛り付け終わったら最後に味噌汁を入れて完成。
「あなたー！　浩介ー！　ごはん出来たわよー！」
「はーい」
並べるのを手伝ってくれていた浩介くんのお母さんがそう叫ぶと、男二人組は急いで食卓に向かってきてくれる。
「うお、今日は優子ちゃんかな？」
「ええ。浩介くん、どうして分かったの？」
「だって、うちの朝食はいつも洋食だったし」
やっぱり、洋食がほとんどというのは本当みたいね。
「とにかく、お味噌汁が冷めないうちに食べましょう」
「ええ」
あたしたちは昨日と同じように「いただきます」をして、和食を食

べ始めた。
「へー、豆腐かあ……」
「でもどうしてこんなに大きいのを？」
浩介くんの両親が不思議そうに聞いてくる。
「タンパク質よ。お味噌汁の具材でもいいんだけど、それだとちょっと少ないからこうしてみたわ」
昔なら、洗い物が増えて水道代がかかることを懸念しなきゃいけなかったけど、食器洗い機のお陰で本当に自由度が高まったわ。
「それにしてもさー」
「うん？」
浩介くんが食べながら話しかけてくる。
「優子ちゃんって本当によく考えて料理してるよな」
「うーん、慣れれば難しくないよ……といってもあたしの母さん曰く『優子はまだまだ』だけど」
浩介くんの質問にあたしが答える。
「あーあ、私ももっと家事を勉強しておくんだったわ」
浩介くんのお母さんがため息をつきながら言う。
家事の勉強、それは女の子にとって、モテる秘訣にもなる。そしてそれは、あたしだって道半ばのこと。
あたしだって、母さんの教育の成果は出てるけど、まだまだ母さんに教わることが多い。
つまり、あたしは毎日母さんに家事で負かされているようなもの。
「なあに、今は生涯学習の時代だし、これから勉強していけばいいだろ」
浩介くんのお父さんが、励ますように言う。
「うん、そうよねえ……」
そんなことを考えながら、朝食が終わった。
あたしは、昨日食器洗い機で洗っておいた食器を食器棚に戻し、朝食の食器を代わりに入れる。
まだ数が少ないので、洗う必要はまだないだろう。

さて、お掃除、お洗濯は既に昨日し終わったので、昼食まで暇になった。
そこで今日は、浩介くんの部屋を掃除することに決めた。
お嫁さんらしく、「旦那さん」とも、顔を合わせたいし。

コンコン
「はーい」
「あたしだけど」
「あ、うん。どうぞ優子ちゃん」
ガチャッ
浩介くんに許可をもらい、あたしが部屋に入る。
「どうしたの？」
あたしは箒と塵取りを持って浩介くんの部屋に入る。
「ああうん、時間余ったから、浩介くんの部屋を掃除してあげようと思って」
「お、ありがと。じゃあ頼むよ」
「うん」
ともあれ、あたしは浩介くんの部屋の床を、箒で掃く。
まずは軽く部屋の真ん中掃いて感触を確かめる。問題ないわね。
次にゴミがたまりやすい部屋の四隅を重点的に掃除する。
埃がたまって来たら、風で飛ばないように低い姿勢になって塵取りを使ってっと。
浩介くんは、あたしの掃除してる姿を無言でじっと見ている。
次に特にたまりやすい家具の下。
あたしはそこに箒を持っていくために膝を床につけて頭を低くして中を覗きながら箒を――
「んっ！」
ぺろりっ
「きゃあ！」
突然、お尻の後ろのスカートがめくれ上がった感覚がする。
「……」

すりすりすり
その後、パンツの上からお尻をいやらしくなでなでされる。
掃除に集中していて、両手がふさがってたせいで、全然抵抗ができなかった。
「やー！　もー！　浩介くんのえっち！　掃除してるんだからやめてよおー！」
やめてとか言ってるけど、内心ちょっとうれしいのもいつも通り。
「だ、だって……その体制は刺激が強すぎるだろ」
「うー、しょうがないじゃないの！」
ともあれ、あたしはめくられたスカートを元に戻し、もう一回箒で掃除する。
取りあえず、これでこの家具の下の埃が取れた。
次に勉強机の下。
ここはさっきより低い姿勢にならなくても大丈夫。
「ねえ優子ちゃん」
「え？」
「今後もさ、そういう格好で今みたいな家事してたら、多分また襲っちゃうと思う」
浩介くんがそんなことを言う。
確かに、あたしはお尻も大きいし、今考えなくても頭を下げて四つん這いはかなりも誘惑になると思う。
「うーん、浩介くんに襲われちゃうのは仕方ないかなあ」
「え？　でも……」
「浩介くん、あたしのこと魅力的だから襲っちゃうんでしょ」
「あ、ああ……」
浩介くんが顔を赤くしながら頷いてくれる。
「だったらそれでいいわよ。世の中にはね。旦那さんから女として見てもらえてないって、泣いている女性がたくさんいるのよ。触られてるうちが華って言葉もあるのよ」
「……でも優子ちゃんは」
「うん、あたし、ずっと華でいたいもの」

あたしは、ニッコリと自然な笑みがこぼれる。
「で、でも……優子ちゃんと一緒に暮らしてたら、今みたいに性欲に負けることあるだろうし、どんどんエスカレートするんじゃないかって思うんだ」
「ふふっ、だったら状況を考えてよね。夜にたっぷり発散するんだから」
「ぶっ……」
何の気なしに言ったあたしの言葉に、浩介くんがドキッとしてしまう。

「さ、お掃除の続きをするわよ」
次にあたしは箪笥の近くやベッドの近くから埃を取り除いていく。
うん、大分きれいになったわね。
そう思って、あたしはまた塵取りに埃を入れて、ゴミ箱に捨てる。
きちんと掃除できてるか、何度か確認する。
うん、問題ないわね。

「ふう、終わった終わった」
あたしはほっと一息つく。
途中で浩介くんにセクハラされちゃったけど、ともあれ無事にお掃除が終わってよかった。
「ね、ねえ優子ちゃん！」
「うん？」
「休日とかさ、優子ちゃん、暇になることあるんじゃない？」
「う、うん……」
浩介くんが、ちょっともじもじしながら言う。
「ほ、ほら……もし、両親がいない時とかはさ……」
「いない時は？」
「やっぱり、夫婦になったらエッチなこととかするのかな？」
あたしが一瞬ビクンとなる。
浩介くんとエッチなこと。

それは、あたしが何回も求め、その度に責任感が強い浩介くんに阻止されてきたこと。
だけど、もし結婚となれば、浩介くんもその楔からは外れるはず。
「そ、そりゃあうん、結婚したら、そういうことも増えるよね」
「じゃあさ、ちょっとだけ。いつも程度だけど、エッチなことしていい？」
浩介くんが勇気を振り絞って言う。
うん、あたしも、浩介くんにエッチなことされたい。

「うん、いいよ……浩介くん……」
「ああ……」
浩介くんが近付いてくる。
そして、あたしは胸をゆっくりと撫でられ始める。
「はぁ……はぁ……」
首の下からちょっとだけ引っ張られてあたしの顔が浩介くんの胸の中へ。
「優子ちゃん、ブラジャー大きいね」
「うん、当たり前でしょ」
「ああうん、そうだったな……」
浩介くんの触覚が、直接あたしの脳に響く。
「めくるぞ」
「うん……」
浩介くんにスカートをぺろんとめくられていた。
「お、優子ちゃん、かわいいね」
「やだ、見ないで……」
あーん、浩介くんに見られるの、すごい恥ずかしいよお……
「でも、どんどん汗がにじみ出ててかわいいぞ」
「あうう、もう！　ひゃあ！」
浩介くんの顔に近付き、キスをねだってくる。
「んっ……ちゅっ……」
「じゅるるっ……んっ……」

浩介くんの深い深いキスはとてもいやらしくて、あたしはますます興奮してしまう。
「なあ、これ……脱がしてもいいか？」
浩介くんがスカートに手をかけようとする。
「ふぇ!?　そ、それは――」
「見るだけだから、ね」
浩介くんが、優しい口調で言う。
「うー」
あたしはなおも渋る。
やっぱり、恥ずかしいから。
「よし、んー！」
「やっ……んっ……！」
浩介くんが、またキスをせがんでくる。
もー、これは反則よ！
身体はもう、浩介くんが欲しくてたまらない。
「ほら、どうなの？　スカート、脱がしてもいいよね？」
「あん、ぬ、脱がして……いいよ……」
浩介くんの責めに、あたしはすんなりと陥落してしまう。
「よし」
胸を触っていた方の浩介くんの手も下に来て、あたしはスカートの両端を掴まれる。
ゆっくりと、下半身からスカートが抜けていく感覚に襲われる。
浩介くんに、脱がされたのは、スキー合宿の時以来、これが２回目。
「優子ちゃん、すごくかわいいよ」
「お願い、あんまり見ないで……」
頭も顔も沸騰しそうなくらい真っ赤になっている。
いつぞやに読んだ少女漫画の女の子。
その子も、いつもドキドキ顔が真っ赤になってたけど今ならあたしには、その女の子の気持ちがわかる。
恋する女の子って、こんなに恥ずかしがり屋になるんだって。
「でも、すっげえよ」

パンツは穿かされたままなので、あたしは浩介くんにパンツ丸出しにさせられている状況ということになる。
あたしの視界からは、自分のとても大きな胸と浩介くんの頭が見えている。
「なあ、俺、興奮しすぎてやべえよ」
「うん、あたしも、浩介くんが欲しいわ」
ああ、このまま犯されてもいいわ。
「うん、でもそれはまだ駄目だよ」
浩介くんは、理性を振り絞りながら言う。
うん、あたしも、浩介くんを尊重したい。
そう思っていると、あたしの足から、スカートが昇っていくのを感じる。
「はい」
浩介くんがスカートを穿かせ終わると、そのままあたしに向きなお向き直る。
「あ、うん」
「悪い。ちょっと部屋から出てくれるかな？　我慢できねえんだ」
浩介くんは、息も絶え絶えに、理性を振り絞るように言う。
「うん。分かったわ」
「ああ、掃除、ありがとな」
「うん」
浩介くんに掃除のお礼を言われ、あたしはお掃除セットを持って部屋を後にする。
昼食の準備までは、まだ時間はたっぷりある。
あたしも、ちょっと……我慢できないわ。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
達したあたしは、体についた汗などの液体をよく拭き、服を着なおす。
浩介くんの家で、こんなことをしたのは2回目。どちらも、あたしと浩介くんがエッチなことをして、我慢できなくなってしまった。

でも今回は、前回と違って浩介くんの両親に聞かれちゃったかもしれない。
あたしはどうも感じやすい体質みたいなので、声を抑えることができない。
枕を使って何とかごまかせたけど、部屋の外まで聞こえていないかどうかまではわからない。
ともあれ、あたしは気分転換も兼ねて、ぬいぐるみさん遊びをし、そしてテレビをつけてニュースを見る。
分かったのは、今日も今の所は、蓬莱教授のニュースはやっていないということ。
永原先生によれば、蓬莱教授からは定期的に研究成果の報告が来るという。その報告は、あたしを含め正会員全員に共有されている。
最新の報告によれば、あと少しで、人間の寿命をこれまでの平均１２０歳から１５０歳程度に出来るようになりそうだという。
もう少しＴＳ病患者の遺伝子を解析すれば、不老の再現もできそうだが、それに関してはあたしの大学進学を待つので十分だと蓬莱教授は言っていた。

「優子ちゃん、お昼手伝ってくれる？」
「はーい！」
浩介くんのお母さんの呼び声が聞こえ、あたしが準備する。
昔は家事は忙しかったらしいけど、家電メーカーの努力もあって、今はこうして空き時間も増えている。このことは既に経験済みだ。
とにかく、その間の時間をどう潰すかも、今後考える必要がありそうね。

# 花嫁修業2日目　中編

あたしは浩介くんお母さんより、今日の昼食は焼きそばだと聞いた。
焼きそばと言えば、林間学校のときにあたしが初めて「家庭的」だと周囲に指摘された思い出のメニュー、ここでもう一回作れるのはいいかもしれないわ。
今回は昨日の餃子に使ったのより大きなフライパンを1つだけ使う。
とにかく、この量を炒めるのが重労働なので、そこを浩介くんのお母さんにやってもらおうと考えている。
「えっと、もやしとキャベツと……」
「人参も入れましょう」
ともあれまずは、浩介くんのお母さんと具材に何を入れるか協議しなければいけない。
あたし1人の分だけいつもより多く作るのは、何気にルーチンを崩さないといけないので「お義母さん」にとっては大変らしい。
とは言っても、それはあたしとて同じ。
それどころか、キッチンの仕様もいつもと違うし、浩介くんのお母さん以上に微妙なところで感覚がずれている。
だから、実を言うと今日の朝まで、あたしは料理でいくつか小さな失敗をしているのだが、幸い誰にも気付かれていない。
ともあれ、あたしはさっきまでの浩介くんとのイチャイチャモードも吹き飛び、真剣な家事モードになっている。
巷で言われているように「昼は淑女、夜は娼婦」が嫁さんの理想だという。
まだ、太陽が登りきってさえいない。さっきのは「昼から娼婦」でちょっとまずかったかもと反省するべきかもしれない。
幾つもの思いが交錯する中で、あたしは気持ちを切り替えて野菜を切り始める。
切ると言っても、人参を細かく刻み込むだけ。

そしてキャベツは芯と葉に分離する。
固いキャベツの芯は、人参と一緒に炒める予定。
そして麺本体。これと野菜の量のバランスは本当に大事で、よくあるのが野菜を入れすぎて食べていくうちに野菜だけ残ってしまう現象だ。
これを避けるためにも、あたしはよく量を吟味して慎重に決定する。
さて、隠し味として塩胡椒、醤油や油などを入れて、野菜を炒め始める。結局、この仕事もあたし持ちになった。浩介くんのお母さんは、その間に台拭きや食器準備をする。
あたしはこの、独特の音がとても好き。
シャカシャカとかき回したり、裏返ししたりするのは苦手で、このあたりが料理人に男性の多い理由だと思う。
それでも、持ち前の勘で非力さを補う。
「おー、いい匂いだな」
匂いにつられてキッチンに浩介くんが現れた。
「今日は焼きそばよ」
「あれ？　料理担当優子ちゃんか」
「ええ」
そして、「お義母さん」の方はそちらの準備も最終段階になってきた。
その後は、あたしのアシスタント役になってもらう。
「おばさん、麺とソース」
「はい」
あたしは麺を受け取ると、野菜を寄せて作っておいたスペースに袋から出して入れ、それぞれほぐれやすいように水を少量入れる。
水が油と反発しあって、激しい音がする。跳ねる油に注意しないといけない場面。
麺が十分にほぐれてくれたら、いよいよ焼きそばのソースを入れる。
麺だけではなく、野菜とも絡めると、より良い味に仕上がるはず。

「やっぱ家事出来る女の子っていいよなあ」
浩介くんが何の気なしにつぶやく。
「そうそう、女子力が高いっていうの？」
「優子ちゃんなんて見た目から内面まで女子力のカタマリみたいだもんなあ」
「ふふっ、浩介くん、これでも桂子ちゃんや龍香ちゃんには『まだまだ修行が足りない』って言われているわよ」
あたしは料理しながら、そう答える。
「いや、木ノ本とか河瀬は別格だろ……」
でも、まだたまに虎姫ちゃんにも「女子力低い」といわれることはある。
もちろん、去年の5月6月とかに比べれば、格段にその頻度は下がったけど。
今の花嫁修業も、確かに「女子力向上」の一環だと思う。
あたしの「少女性」「女の子らしさ」に、「主婦らしさ」「妻らしさ」を上乗せするための修行ということ。
「でも、女子力の修行に、終わりはないのよ。きっと、永原先生もね」
「優子ちゃんって、健気だけど、意外とストイックだよね」

そんなことを話していると、タイマーが「ピピピピッ」と、無機質かつけたたましく音を鳴らすので、止めると同時に火も止めて、あたしは炒めていた取り箸を使い、4枚のお皿にそれぞれ配分していく。
一番多い浩介くんのお皿には、ほんのちょっとだけソースを付け足しておく。
浩介くんとデートしてきて、浩介くんはちょっと味が濃いのが好みだという事に気付いたからだ。
あたしも、優一の頃からどちらかと言えば濃いのが好きだけど浩介くんはあたし以上だし。
「じゃあ、お父さん呼んでくるね」
そう言うと浩介くんのお母さんがお父さんを呼びにリビングから

出て行く。
「はいこれ、浩介くん」
「おう」
あたしの指示通りに、浩介くんが席に並べていく。このあたりの連携、阿吽の呼吸はバッチリだわ。
一通り並べ終わると、浩介くんの両親も戻ってきて、昼食の時間だ。
「うおお、この焼きそばうめえな！」
「えへへ、林間学校の時よりもうまく行ったよ」
「林間学校の時の優子ちゃんの焼きそば、どんな味だったっけなあ？」
「あはは、さすがに１０か月も前のことだし」
それは逆に言えば、浩介くんを好きになって、それだけの時間が経っているという事でもある。
林間学校の最終日に、あたしが恋に落ちたんだから。
「あー、もうそんな前なんだな……」
「うん、あと5日で、あたしが倒れた日、6日であたしが女の子になった日だよ」
「優子ちゃんにとっても、浩介にとっても長い1年だったわよね」
「お義母さん」の言葉、本当に身にしみる。永原先生でさえ、５００年近く前の女の子になった時のことは、鮮明に覚えているみたいだし。
「うん」
きっと浩介くんだって、去年の今頃は、「まさか石山優一がかわいい女の子になって、しかも自分と恋人どころか婚約者になる」なんて、寸分も想像できなかったと思う。
それに今、こうやって「家族団らん」になっていることも。
「ごちそうさまー」
浩介くんが一番乗り。
「それにしても、優子ちゃんはどうやってこの焼きそばを作ったんだ？」

「うん、浩介くんのはちょっと特別なのよ」
「え？　どういうこと？」
浩介くんがちょっと驚いたように言ってくる。
「うん、今まであたしとデートしてきて、浩介くんって、味が濃いのが好きでしょ？」
「え!?　そ、そうかな？　確かにラーメン屋さんとかでも味濃いめが多いけど……」
浩介くんは、自覚がなかったみたいね。
「ふふっ、ラーメンそのものが味が濃いじゃない？　そのラーメン屋さんで味濃いめを頼むんだもの、だから、浩介くんの分だけ、とんかつソースを少量加えたのよ」
「ほえー、細かい気配りできるんだなあ」
今の浩介くんは、照れくさそうに褒めているというよりは、純粋に、料理人としてのあたしに関心しているって感じ。
どちらにしても、あたしにとってはとてもいいことだと思う。
料理でアピールするのは、女子の武器。
これまでも、いろいろな手料理を振舞ったり、バレンタインでは、あたしは手作りチョコレートを、浩介くんにプレゼントしてあげた。
そしてその度に、浩介くんはあたしの料理をとっても美味しそうに食べてくれた。
多分その一回一回が、浩介くんの中で、あたしの好感度を上げているはず。
触覚や視覚では、十分に浩介くんにアピールできているし、たぶん嗅覚でも同じ。
聴覚はまだ分からないけど、こうやって料理をふるまって、五感に訴えて、浩介くんにモテるようになりたい。
やがて、浩介くんに続いてあたしたちも全員が食べ終わる。
そして、食べ終わった食器は、朝食の分と一緒に食器洗い機に入れる。
いい具合に溜まってきたので、あたしは、蓋を閉め、威力を「中」にする。

これで、自動で洗い物をしてくれる。本当に楽になったわ。
あたしはもう一度自室に戻り、テレビをつける。
何気にこの時間が暇だけど、まあ男だった時の休日も似たようなものだったし、そこまで懸念することじゃなさそうね。
お昼のニュースでは、特に変わったニュースはない。
別のちゃんねるに切り替えると、ちょうどドラマをやっていた。いわゆる「昼ドラ」という類のもので、主に主婦層をターゲットに作られているらしい。
途中から、しかも何の予備知識もないまま、タイトルさえ知らずに見始めたけど、何か女優が叫んでいる。
登場人物たちの要領を得ないセリフから推測するに、どうやら旦那さんが不倫で三角関係を作り出したらしい。
不倫相手の愛人役は、妻役の女優と比較して、若くて美人の女優さんが勤めていた。
略奪愛について、不倫相手と女優の熱弁が続く。
あたにしは、どうも他人事だった。
いや、ドラマの中の世界だし他の人にとっても他人事だとは思うけど、あたしの場合は、そう言うとも逸脱した、完全に別次元世界の感覚だった。
以前にも、浩介くんの不倫について考えてみたが、不倫はほぼあり得ないと結論付けた。
あたしが不老なこと、そして何よりあたし自身の容姿や性格。
これらを総合的に加味すれば、浩介くんがあたしに「飽きる」こともなさそうだもの。
あたしは考える。今後の不倫防止を考えると、「昼は淑女」よりも、「夜は娼婦」の部分が大事になると思う。
浩介くんに気持ち良くなってもらうためにも、あたしは頑張らないといけない。
幸いにして、男時代の経験から、どこが気持ちいいかある程度は知っている。
テレビでは、相変わらず二人の女性が火花を散らしていた。

本当にギスギスドロドロしている感じで、こんなのを見てたら気が滅入りそうだわ。

コンコン

「はーい」

「俺だけど」

ドラマが終わり、当てもなくチャンネルを巡って、面白い番組もないことが分かってテレビを消す。

そして、お人形さん遊びで時間を潰そうと準備していた矢先にドアをノックする音が聞こえ、外から浩介くんの声がした。

「うん、入っていいよ」

「お、おう」

ガチャッ

「あ……ど、どうしたのこれ!?」

「えへへ、ちょっと近くのお菓子屋さんで買ってきたんだ……食べる？」

浩介くんが大きなチョコレートフルーツパフェと、オレンジジュースを持って部屋に入ってきた。

ああ、美味しそうだわ。

「うん、もちろんよ」

「優子ちゃん、すごい幸せそうな顔だね」

「えへへ……」

あたしが顔を赤くしながら照れ笑いをする。

だって、浩介くんからプレゼントってだけで嬉しいのに、あたしが大好きな甘いもの何だもん。

でも、さすがに量が多いわね。

「量が多いね」

「だってこれ、男女2人前なんだ」

「え!?」

よく見ると、ジュースのコップもちょっと大きい気がする。

「ほら、スプーン、2つあるだろ？」

「あ、うん……」
確かに、トレイにはスプーンが2つある。
「さ、一緒に食べようぜ」
「う、うん……」
浩介くんと同じものを2人で一緒に同じものを食べる。
そんなことを意識するだけで、あたしの顔が一気に朱色に染まっていく。
浩介くんも、あたしの赤い顔を見てか、同じように顔を真っ赤にしている。
「い、いただきます……」
あたしと浩介くんが、ぎこちなく「いただきます」をする。
そしてまずはパフェのイチゴから。
お、おいしい！
「はうううううーーー!!!!!!美味しいわあ!!!!!!」
開口一番、あたしは感激の余り大きな声を出してしまう。
絶品の甘々な味が、あたしの脳を容赦なく蕩けさせてしまう。
「うんうん、これおいしいな」
「男女2人前」という看板の通り、どんなフルーツも必ず2個はあるようになっていて、平等に食べることができる。
「そう言えば、このオレンジジュースは？」
「えっと、その……」
浩介くんが言葉に詰まる。
トレイを見てみると、おかしな形のストローが置いてある。
それは、出入口が3箇所あるY字型のストローだった。
「う、うん……一緒に……飲むんだよね……」
冷たくておいしいスイーツを食べていたはずなのに、あたしの顔は水が沸騰しそうなくらいに熱くなっている。
浩介くんも、多分同じ。
「あ、ああ……」
浩介くんが意を決したようにストローを刺す。
「な、なあ優子ちゃん……」

「はい……」
あたしと浩介くんは、どちらからともなくストローに口をつけ、オレンジジュースを飲む。
あうう、近い、近いよお……
至近距離で、浩介くんの顔が見える。
オレンジジュースの味はおいしい。
でも、今はそれに集中できない。
「ぷはっ」
あたしが飲み終わり、口を離すと、浩介くんも同じように口を離す。
「んっ……」
「ちゅっ……じゅるっ……」
あたしも浩介くんも、理性はとっくに崩れ、ストローから口を離すと、我慢できずに直ぐにキスをする。
「れろ……ちゅぅ……ちゅぱっ……んんっ……！」
「べろっ……ちゅっ……じゅうう……」
軽いキスはすぐにディープキスに移行すると、あたしの舌から、オレンジジュースとパフェの甘い味が伝わってくる。
バレンタインデーの時のキスはチョコレート味だったけど、今日のキスは色々な甘いものが混ざった味。
「じゅるっ……びちゅ……ぷはっ……ねえ、浩介くん……」
「ん？」
「パフェ、食べよ？」
「あ、ああ……」
パフェ味のキスがしなくなると、あたしたちはまた、フルーツのほうを食べ始める。
甘くて美味しいスイーツと、浩介くんとのキスの味、至近距離からストローで飲み合うオレンジジュース。
全てが、甘美だった。
あたしと浩介くんは、美味しいスイーツを食べ、ジュースを飲み合い、近付いた顔同士で自然にキスをする。
そんなことを何度も続けていると、先にオレンジジュースが空に

なった。
「んっ……」
ふと、下半身に意識を向けると、さっきよりも濡れていた。
「はぁ……はぁ……こんなに冷たくて美味しいもの食べてるのに……身体は熱いわ……」
「うん、俺も……」
汗が、流れる。
服、脱ぎたいけど恥ずかしい。
「ねえ、優子ちゃん……すごく暑そうだよ」
「う、うん……」
まだ、パフェが少しだけ残っている。
あたしは、身体を冷ますために一口、美味しく食べる。
「脱がしてあげるよ」
「え!? でも……」
まだ、昼なのに。
「だって、汗が出てるじゃない」
「うん、でもまだ……明るいから……」
まだ、淑女でいなきゃ。
「あ、うん……そ、そうだよね」
浩介くんも、何とか冷静に戻ってくれる。
そしてもう一口、あたしは甘くて美味しいスイーツを食べて、気を紛らわせる。
浩介くんも、同じように一口、そしてついに、全てのスイーツが食べつくされた。
「ねえ浩介くん、もう一回だけ……」
「あ、ああ……」
「んっ……」

愛し合うキス、スイーツの甘い砂糖のキス。
いつものキスもいいけど、この日のキスは特別だった。
「ねえ、浩介くん……」

「ん？」
「結婚したら、もっと先に進むのかな？」
ちょっとだけあたしが聞いてみる。
「だろう？　家族が増えるかもしれないぞ」
「も、もうっ！」
あたしは、照れ隠しに両手を上げて浩介くんを軽く叩く。
そんな浩介くんとのやりとり、まだ結婚生活を完全に再現したわけではない。
だから、結婚生活の再現の中でも、重要な部分が欠けているのだ。
「ま、少しずつ、慣れていこうよ。俺も頑張るからさ」
「う、うん……」
「ところでさ、話し変わるんだけど――」
その後、あたしは浩介くんと他愛もない話をした。
ラブラブなことをするのもいいけど、こうやって何気ない話に乗るのもとても大事なことだと思う。
普段の生活から、浩介くんとの関係を深められる要素はまだまだたくさんありそうだわ。この花嫁修業、新しい発見がたくさんあるわね。
今回は浩介くんの筋トレ趣味の話も聞いた。
あたしはよく分からないけど、興味深い話が多かった。
元々、父さんの遺伝の影響で、優一時代から色々なことに興味を持てる性質になれた。これは結果的に、聞き上手になることができて、浩介くんとの関係にプラスになったと思う。

# 花嫁修業2日目　中編―2

さて、今日の夕食は鉄板焼きだと言うので、あたしとお母さんだけではなく、通常は浩介くんも引っ張り出しての大掛かりな準備になるんだけど、野菜は切るだけなので、あたしが食材の下準備に専念し、母さんは鉄板や机の上に貼り付ける要らない紙の用意をすることになった。

あたしは黙々と野菜を切る。

ここも林間学校の時と同じように焼きやすいように野菜を切る。

野菜の切り方は、以前母さんに教わった通り、ここでもニンジンやカボチャなどの固めの野菜はなるべく薄く切るようにする。

もちろん、薄く切る時は、手を切らないように注意しないといけなくて、緊張の一瞬だ。

更にあたしは、あたしの家で鉄板焼きをした時に母さんからコツを教わったことがある。

その時のやり取りはこんな感じだった。

「優子、焼けにくい野菜や、ウインナー何かはあらかじめ茹でておくといいわよ」

「どうして？」

「焼けるのに時間がかかる野菜を、少しでも短くするためよ。そうしないと、固い野菜ばかり最後に残っちゃうわ」

「時間調整をうまくするってこと？」

「そういうことよ、バランス良く食べようとしても、素材が違えばアンバランスになるの」

「奥が深いわ」

とにかく、皆には美味しく食べてほしい。

そう思い、あたしはウインナーとニンジンを茹で、かぼちゃはとにかく薄く切る。

「あれ？　優子ちゃん、茹でてるの？」

浩介くんのお母さんが不思議そうに見つめている。
「はい、ニンジンやウインナーは焼くのに時間がかかりますので、中身をほぐすために、茹でておくんです」
「なるほどねえ、それなら固い野菜もたくさん食べられるよねー」
「はい。母さんから教わりました」
「……まだまだ知らないことばかりだわ。優子ちゃんに学ばないと」
「お義母さん」が、さっきと同じようなことを言う。
あたしは一通り野菜を大皿に盛り付け終わると、続いてたれの準備に取り掛かる。
と言っても、醤油をベースに酢などをちょっと混ぜるだけの簡素な感じ。
「おばさん、ここでは大根おろし使います？」
「ええ、お願いするわ」
「お義母さん」からの返答を受けて、あたしは大根おろしのための機械を探す。
最近では自動でできるのもあるけど、ここにはないので手でおろす必要がありそうね。
あたしは大根をおろし器に当てて大根をおろし始める。
「ねえ、優子ちゃん」
「うん？」
「そこは私の出番だと思う」
浩介くんのお母さんが、張り切っている。
確かにひたすら手を回すので、体力を使いそうではあるわね。
「じゃあお願いしてもいいかしら？」
こういう時は素直に受け取っておこう。
準備の時間も短くなるし。
「ええ」
大根おろしの作業は浩介くんのお母さんにバトンタッチし、あたしはネギを細かく刻む。こちらも、たれにお好みで入れるもの。
「ネギはどれくらい入れます？」
あたしは、大根を猛スピードでおろしている浩介くんのお母さんに

確認する。
「ええ、みんな結構入れるわよ」
「……分かりました」
結構と言われても難しけど、ともあれあたしたち一家が普段使っている量の1．5倍程度にしておく。
側で見ていると、浩介くんのお母さんが、大根おろしをすり終わっていた。
「じゃあ、呼びましょうか」
「いえ、まず鉄板を熱して、それから油を用意します。呼ぶのも、焼き始めてからがいいでしょう」
前のめりになっているみたいなので、ちょっとだけ抑止するように言う。
「あ、うん、そうだったわね」
ともあれ、あたしたちで食器などを全て所定の位置に置き、鉄板を熱してから油を敷く。
鉄板だけではなく野菜にも少し油を塗るのがいい味になる。これも、母さんの受け売りだが、「お義母さん」は知らないみたいね。
「じゃあ、焼き始めてるからって言って呼んでくれる？」
「ええ」
「お父さーん！　浩介ー！　焼き始めるわよー！」
遠くから二人の声がすると、2人は食卓へ。
あたしは、ウインナーやカボチャ、玉ねぎなどの比較的焼けるのが遅い食材たちを入れる。
ピーマンやキャベツ、肉などはもちろん後回しだ。
また、ニンジンも、茹でるとかなり焼けるのが早くなるので後へ。
「おお、うまそうじゃん！」
「これも優子ちゃんが切ったの？」
「はい」
2人も、あたしの料理の腕に興味津々みたいね。
ともあれ、あたしは鉄板をうまく四等分しながら、野菜の種類、量を均等に入れていく。

とはいえ、あたしは食べる量が少ない上に、後の肉のことも考えるべきだから、しばらく時間が経てば、原則は崩れる。
じゅううという鉄板焼きの音が子気味いい。
浩介くんがさっそく一口、ほんのり焦げ目がついた玉ねぎを口にする。
「うおっ、うめえ！」
開口一番、浩介くんの幸せそうな声がする。
「うん、私が作るよりおいしい。その油かしら？」
「はい、やっぱり油の味は鉄板焼きに大切なんです」
あたしが油の重要性を説明する。
多分、浩介くんのお母さんの鉄板焼きは切り方とか油の扱い方とかが不十分だったんだろうと思う。
浩介くんのお母さんも、おいしそうに黙々と食べている。
家事について、あまりあたしが目立ちすぎると、主婦としての自信を無くすかなとも思ったけど、どうやら折り合いを付けられたみたいね。うん、大人だわ。
「ふう、でも、優子ちゃんのおかげで、改善できそうだわ」
こうやって、次に活かそうとしているし。
野菜が減って来たら、取り箸で野菜を補充していく。
やはり、浩介くんが一番よく食べ、あたしが量が少ない。
「それにしても、優子ちゃん、食細いんだな」
浩介くんのお父さんが、あたしに言ってくる。
うん、確かに食べるのは遅いけど、そこまで少ないというわけではない。
「ええ、でも、量は十分よ」
ダイエット中の女子とか信じられなくらい食べる量が少なくて、あたしも心配になったわ。
その子に体重を聞いたけど、あたしよりも１０キロ近くも体重軽くて、すぐにダイエットを止めるように言った記憶がある。
「そう言えば、優子ちゃん、あんまり残さないよな」
浩介くんが思い出すように言う。

「うん、あたしの食べる量も分ってるし小さいサイズを残すくらい食べないのはよくないからね」
「栄養は大事だもんね。いいことよ」
「そうそう、それにがりがりに痩せたら男の子にモテないもの」
「う、いやその……優子ちゃんは優子ちゃんだぞ！」
浩介くんがちょっと嫉妬したように言う。
「浩介くん、男の子はむっちり体系が本能的に好きなのよ」
「そ、そうなのか!?　モデルとかみんな痩せてるし……」
浩介くんはまだ納得できてないみたい。
「浩介くん、あの体系はむしろ女性受けよ。きちんとむっちりしてる方が男の子は健康な赤ちゃんを育てられるって認識するのよ」
「な、なるほど……」
浩介くんが何とか納得してくれたみたいね。
テレビや女性誌で痩せすぎなモデルを見たことは何度もあるが、自信をもってあたしの方が魅力的だと断言できる。
中にはガリガリで骨が浮き出てる人もいて、いくら何でもまずいと思ったこともある。
実際、あたしの胸には多くの男性の視線が集中していて、あのモデルにそこまでのことは出来ないだろう。
確かに顔とかも大事だけど、あたしは顔も幼さの残る童顔のかわいさだし……うーん、あたしにもモデルの仕事できるかな？
「優子ちゃん、何考えてたの？」
浩介くんが不思議そうに聞いてくる。
「ああうん、女性誌に出てくる痩せすぎなモデルのことよ」
「へー、どんな感じなんだ？」
「ひどいのよ。骨が浮き出てる人とかいてね……ちゃんと食べてなさそうで」
あまりにもひどいので、最近では痩せすぎモデルの規制も入ったとか何とか。
ネット上でも、そうしたモデルとあたしとを比較して、「ガリモデルいらね」という誹謗中傷が殺到しているし。

「でも、優子ちゃんは健康そうよね」
「うん、そりゃああたし、劣化しないし」
結局、あたしの健康だってＴＳ病に支えられているようなものだけど。
「ま、でも体系がコンプレックスじゃなくてよかったんじゃない？」
浩介くんのお父さんが、とてもいいことを言う。
うん、だって、コンプレックスってなかなか克服できないものだもん。
ちょっとだけと思って美容整形した患者が、どんどん整形手術にのめりこんじゃうこともよくあるらしいし。
その点でい言えば、あたしは容姿がコンプレックスになったことは全くない。むしろ自信になっている。それはとても恵まれたことだと思う。
「そりゃあさ、優子ちゃんほどの容姿に生まれてコンプレックスになる奴がいるか？」
「うーん、強いて言うなら、生まれつきの女の子なら、『胸が大きすぎて性的に見られるのが嫌』って人はいるんじゃない？　それに、優子ちゃんには浩介がついてるからいいけど、そうでないなら男だって言い寄ってくるだろうし」
「う、うん……」
確かに、これらはあたしがＴＳ病で「男の気持ち」の理解者だったからこそ、コンプレックスにならずに済んだと思う。
「ま、コンプレックス持ってない人なんていないんだから、優子ちゃんも伸び伸びと生きていけばいいのよ」
「うん」
そう、ＴＳ病で、コンプレックスを一つ回避できた代わりに、あたしの中で一つの大きなコンプレックスが生まれてしまったのも事実。
折り合いをつけて、生きていきたい。

鉄板焼きの野菜が少なくなってきた。
あたしは取り箸で野菜を入れ、油を塗り続ける。

「ねえ優子ちゃん、油を塗る作業。私のやらせてくれる？」
「ええ……はい」
「ありがとう……」
「お義母さん」の申し出を、あたしは快諾する。
負担は、お互い少ない方がいい。
鉄板焼きの焼き加減はそれぞれの裁量に任されている。だからいったん鉄板に入れてしまえば、後は個人次第になる。
あたしの目論見通り、固くて時間のかかるものから先になくなった。
あたしはベーコンを４枚鉄板に入れる。
「お、今日はベーコンもか」
「ええ、せっかく優子ちゃんが来たから、お母さんちょっと奮発しちゃったわよ」
そう言えば、冷蔵庫の中にあったお肉も結構いいものだったわよね。
ベーコンと並行し、柔らかい野菜が次々に焼けていく。
あたしは後ろの配分を考えて、ベーコンを最後に食べるのを止め、冷蔵庫からお肉を取り出す。
「今日は和牛よ」
「おお。してどこの？」
「うーん、スーパーの和牛だからそこまでのブランドじゃないわよ」
ありゃありゃ。
「それでも、まあ和牛を名乗るくらいだし、凄そうだな」
浩介くんは、期待に胸を膨らませている。
ともあれ、うまく箸で掴めるように取りやすくはなっている。
あたしはまず、ついていた白い脂身を鉄板に溶かす。
「うおお、このワクワク感。溜んねえなあ」
「ええ」
「ああ」
どうも篠原家は肉が好きみたい。
あたしは、もちろん好きだけどそこまでがつがつの「肉食系」では

ない。
ともあれ、肉は15枚あるので、あたしだけ3枚で、浩介くんたちが4枚。
「肉汁が浮き出たら裏返すといいわよ」
「ほほう、なるほどねえ」
これもあたしの母さんの話の受け売り、焼きすぎると固くなることは知っていたので、ほんのわずかに赤さが残っているのが食べ頃とも伝える。
もちろん、豚肉や内臓肉はしっかり焼かないと駄目だけど、これは別。
4人ほぼ同時に完成し、一斉に食べ始める。
「おお、すげなこれ」
「うん、値段の割においしいわね」
あたしも、この肉はおいしいと思う。
……しまったわ。商品名を確認しておけばよかった。
まあ、浩介くんの家とあたしの家は学校を挟んで数駅離れてるし、わざわざ遠くのスーパーの安売りに行くのは損だし。
そんなこんなで、あっという間にお肉が無くなってしまう。
「さ、ここからは焼きおにぎりを焼いて終わりにするわ」
浩介くんのお母さんのそんな宣言と共に、型にはめたご飯が6個登場した。
ちなみに、あたしはそれを見て鉄のヘラを急いで持っていく。
「お父さんと浩介が2個、私たちが1個よ」
「はーい」
あたしは、型の中に軽く醤油を入れ、鉄板に入れる。
肉や野菜、油の味をよく染み込ませる。
ここはよく焼かないと、形が崩れちゃうので、慎重に作っていき、裏返すタイミングを見計らう。
「よし、そろそろいいかな？　……よっと」
あたしは鉄ヘラでうまく下からすくい上げるように返すと、ほんのり茶色に染み込んだ焼きおにぎりたちが顔を出す。

醤油や肉汁、野菜や油の詰まった美味しい食べ物……健康的というわけでもないけど。
まあ、昔の人も「健康的なものばかり食べるのも健全とは言い難い」って言ってたし。
みんな、焼きおにぎりが焼けるのを黙々と待っている。
この独特の緊張感。あたしは嫌いじゃない。
そう思いつつ、あたしは裏面も頃合いが良くなったと思うので、焼きおにぎりを自分の所に持っていく。
それを見たみんなも、あたしに続いて食べてくる。
「お、うめえな」
「味が染み込んでいるわね」
「ああ、以前食べた焼きおにぎりよりも油がいい味を出しているよ」
三者三様に、それぞれ好印象を示してくれる。
あたしにとっては、いつも通りの出来なんだけど、こうやって褒めてもらえるのはとても嬉しいわ。
あたしはちゃっかりと鉄板のスイッチを切る。
ちなみに、篠原家では、食器類の後片付けが女性の仕事。
男は紙や鉄板の後始末という役割分担になっている。
あたしは、「お義母さん」と一緒に食器を軽くすすぎ、食器洗い機へ。
食べた食器だけではなく、切ったネギを入れた容器や大根おろしの容器などもある。
それらを丹念に並べる。
「並べ方にも色々あるんです。見てわかりますように中心から洗われますから、汚れがひどそうなものはそちらに入れるといいんです」
「ふむふむ。私、今まで適当に入れてたわ」
また、家事であたしが指南役になる。
浩介くんのお母さんも、変なプライドを見せないでくれてよかったわ。
将来、あたしの「姑」になる可能性の高い人だし、あれこれ嫉妬されたら大変になると思った。
「ところで、おばさん」

「はい。何でしょう？」
「おばさんは、あたしに嫉妬したりしないんですか？　よく美人の嫁を姑がいびるってあるじゃないですか」
　あたしは、失礼だと思いつつも、何の気なしに質問してしまう。
「……それはね、優子ちゃんがあまりにも完璧すぎるからよ」
　「お義母さん」からの返答は、何となく予想していたもの。
「詳しくお願いしてもいいかしら？」
「ええ。優子ちゃん、あなたはあまりにもかわいくて美人すぎるわ。そればかりかスタイルも抜群で、髪も男が好みそうな黒髪のロングよ。外見では非の打ち所がないわ」
「……ええ」
　ミスコンでの永原先生の人気を見るに、いわゆる「ロリコン」と呼ばれる人たちの受けは悪いみたいだけど。
　それでも、あたしは容姿で悪口を言われたことは一回もない。
　それどころか、例のメディアの取材以来、あたしの画像はインターネットでは他の「容姿で売り出している人」たちに対する「悪口の道具」にされる有様だもの。
　それはつまり、「そう言う人達」と比べても、あたしのかわいさ美しさが飛び抜けているから。
「それだけじゃないわ、性格はとても優しいし泣き虫、しかも聞き上手だって言われたんでしょ？」
「……ええ」
　確かに、それも浩介くんに言われたこと。
　嘘をついてまで謙遜する必要はない。
「そして家事まで得意、しかもＴＳ病で男の子の気持ちも手に取るように分かる上に、いつまでも若いままでいられる」
「……」
　確かに、今日までとクリスマスの日を見て分かったが、女性としての家事能力は、客観的にも明らかにあたしが「お義母さん」を上回っていた。
　そして、男の気持ちが分かる。これも、１年前まで男性として行き

てきたＴＳ病だから当たり前の能力。
４８０年間も女性をやっている永原先生でさえ、持ち続けているほどの能力。おそらく、どれだけ女性化が進んでも、失われることはないだろう。
というよりも、浩介くんのためにも失いたくない。
「優子ちゃん、あなたは完璧すぎるわ。何もかも……私は、あなたに勝てないわ。何もかも、絶望的なまでに、ね」
あたしはもう一度考える。
桂子ちゃんのこと、永原先生のこと、幸子さんのこと、協会の仲間たちのこと。
あたしは、美少女に囲まれて行きてきた。
もちろん、恵美ちゃんや虎姫ちゃんみたいに、振り向くような美人というわけではない人もいる。
でも、桂子ちゃんはあたしが来るまでは「学校一の美少女」だし、永原先生も、あたしほどじゃないけど、同じようにネットではアイドルなどを誹謗中傷する際の材料になる。
他の協会の仲間だって、幸子さんだって、一般の女性では滅多に居ないような美少女だ。
だからいつの間にか、美少女であることが「普通」のような錯覚を受けていた。
「もしかしたら、優子ちゃんは他のＴＳ病患者に囲まれて感覚が麻痺していたかもしれないけど……協会のホームページを見た限り、ＴＳ病の人たちはみんな私達女性が羨むような美人ばかりよ。その中でも、あなたは特に際立っているわ」
「……そうですか。教会の中に居ると、『自分が一番の美人』とは、自信を持って言えません」
「それでも、十分よ。あなたは『永遠の美少女』よ。それも、何もかもが理想的な。だから、勝負しようという気さえ起きないわ。蟻が象に挑むようなものよ」
「でもあたし、運動は苦手で――」
「ええ。優子ちゃんにも欠点はあるわ。でも、そんなの問題にならな

いわよ」
　多分きっとそれは、あたしの体育があまりにもダメなことに対して「ばかにするのもはばかられる、『可哀想』という感情」に似ているのかも知れない。
　浩介くんのお母さんは、「あまりにも完璧すぎて、嫉妬する気も起きない」と言った。
　真逆だけど、精神構造に、どこか共通点を見つけることが出来た。
「じゃあ、先に休んでますね」
「あ、そうそう優子ちゃん」
「うん？」
「お風呂、浩介と一緒に入ってみてよ？」

# 花嫁修業2日目　後編

「お風呂、浩介と一緒に入ってみてよ？」
「え!?」
浩介くんのお母さんの意外な言葉。
「浩介と一緒にお風呂に入りなさいって言ったのよ」
確かに、一緒にお風呂に入るのはもう経験済みだけど、あのホテルの家族風呂とは広さが違う。
昨日入った限りでは、あたしと浩介くんで一緒に入ろうとすると、密着せざるを得ないというか……
「どうしたの？　優子ちゃん、スキー合宿の時に浩介と一緒にお風呂に入ったんでしょ？」
「あぅぅ……」
じゅううという音が聞こえそうになるくらいあたしは顔を真っ赤にしながらこくって頷く。
「それにしても、浩介も甲斐性なしよねえ。こんなかわいい子と一緒にお風呂に入って、全く襲わなかったんでしょ？」
「ちょ、ちょとおばさん！」
あたしは、顔を真っ赤にしながら抗議をする。
あのことは、思い出しただけでも恥ずかしいのに、もっと狭い空間でだなんて……ううっ……
「ふふっ、優子ちゃんは花嫁修業に来たんでしょ？　こういうことも、花嫁修業の一環よ」
「は、はい……」
そう、それも「花嫁修業」、「花嫁」となれば「花婿」とお風呂に入ることもあると思う。
どっちにしても、あたしに拒否権はないみたいね。
仕方ないわ。それに、浩介くんと一緒にお風呂入るのは嫌いじゃないし。
「じゃあ、浩介を呼んでくるわね」
そう言うと、浩介くんのお母さんが浩介くんの部屋に行き、「優子

ちゃんとお風呂に入りなさい」という声が聞こえた。
そして、すぐに浩介くんがあたしのもとに来る。
「な、なあ……優子ちゃん――」
ガシッ！
あたしは動揺している浩介くんの腕を黙って引っ張る。
浩介くんは悟ったのか、そのまま一切抵抗することなく脱衣所へと来てくれる。
「あ、あの……」
浩介くんはギクシャクしている。
あたしだって、とても緊張している。
スキー合宿のような、非日常的なエロじゃない。
もちろん、今はまだ「非日常」だけど、近い将来「日常」になり得ることをこれからする。
だから、スキー合宿の時よりも、より生々しいことになると思う。
「浩介くん、脱がすよ……」
「あ、ああいや！　自分で脱ぐから！」
あたしが浩介くんの服に手をかけようとすると、浩介くんが慌てて後ろを向いて自分で服を脱ぎ始める。
あたしも背中を向き、いわゆる「背中合わせ」の状態になってあの時のように服を脱ぐ。
スキー合宿の時とは違い、巻きタオルはない。
だから、体のすべてを見られてしまう。
下着姿になる頃に浩介くんが「脱ぎ終わったか？」と聞いてきたので、あたしは「まだ」とだけ言っておく。
あたしの場合は、脱ぐだけではなく、髪が湯船漬からないように、髪を縛り上げる作業も忘れてはいけない。
「ぬ、脱いだよ……」
脱ぎ終わったら、あたしは恥ずかしさを必死でこらえつつ、両手で乳首と下半身を隠して浩介くんに向き直る。
「優子ちゃん、きれいだよ。すごく」

浩介くんも、自分の家で彼女とお風呂に入るのは恥ずかしいのか、下半身を両手で必死に隠している。
「い、行こうか」
「うん」
浩介くんの誘導で、いざお風呂場へ。
「湯船、先に入ってよ」
「う、うん……」
浩介くんが体を洗う準備をする間に、あたしは空いている風呂桶を手に持って体を洗い流す。
もう、隠し続けることは出来ない。また、浩介くんに見られてしまう。
「やっぱり優子ちゃんってかわいくて美人なだけじゃなくて、エロいよなあ」
浩介くんがあたしの方を向かないで言う。
「ふえ!? わわっ見ないでぇ……」
あわわっ！ 鏡越しに見られちゃったよぉ……
「そうは言っても、鏡見ないと体洗えないから、優子ちゃんがそこにいる限り見られたままだぞ」
浩介くんは、そんな風に言いながらタオルを使って体を洗う準備をする。
あたしは気を取り直して湯船の中に身を寄せる。
今の位置だと、鏡越しに裸を見られちゃうし。
浩介くんは、鏡にあたしの姿が見えなくなると、体を洗う速度が途端に早くなる。
本当に、男の子よね。男はバカで単純って言うけど、そう言う人といたほうが、ずっと楽しいもん。
「ふー」
一緒にお風呂に入って、あたしの高まりきった気持ちもちょっとだけ落ち着いた。
浩介くんの鍛え上げられたたくましい肉体が目に入る。
心なしか、スキー合宿の時よりも更に頼もしくなった気がするわ。

「優子ちゃんはさ」
「うん？」
「何だかんだで、俺の期待に応えてくれるよな」
「え!?」
浩介くんの期待？
確かに、なるべく応えられるように努力はしてきたけど。
「いやさ、俺だって内心では優子ちゃんとさ……その……」
「う、うん……」
多分、言いたいことは予想がつく。
「……したいんだよ。それも、猛烈に、さ」
「あはは、浩介くん正直だね」
まあでも、それは男の子の本能だものね。
「あ、ああ……」
「むしろ、このあたしにここまで誘惑されて何も思わなかったら、それってよっぽどの不能か、それこそホモなんじゃないの？」
客観的にそうだとしか思えないくらい、あたしはかわいくて美人なだけではなく、エロい。
「そりゃあそうだろうな。あるいは、悟りでも開いているんだろ？」
「あたしだってね、思いは同じだよ。浩介くんとその……あぅぅ……」
あたしの精神は、今でもどんどん女の子になっていっている。
優一の頃は、平気で口に出せたエロい単語も、言えなくなってしまった。
「優子ちゃん、多分なんだけどさ」
「う、うん……」
「待てば待つほど、焦らせば焦らすほど、その後が大きくなると思うんだ」
「あっ……」
浩介くんの言葉には一理ある。
多分それは、あたしや浩介くんが我慢するために必要なこと。
その後、浩介くんは体を洗い終わり、頭を洗い始める。
立ち上がり、腕を伸ばしてシャワーを掴む。すると浩介くんのたく

ましい体がよりよく見える。
とても素敵で、あたしはまた見とれてしまう。
浩介くんも落ち着いてきたのか、浩介くんはいつもと変わらないくらい落ち着いた顔をしていて、とってもかわいい。
あたしは、浩介くんに気付かれないようにゆっくりと身を乗り出す。
ふいに、浩介くんの二の腕を触りたくなった。
ぷにっ
「んんんっ!? ちょ、ちょっと優子ちゃん!」
「るんるんるーん」
あたしは上機嫌になりながら、浩介くんに触れる。
身体のあちこちに、ちょっとしつこいくらい触れてみる。
「優子ちゃん、お願い、やめて!」
「だーめ。普段あたしにエッチなことしてるんだから、仕返しよ」
「え、えへへ……もー、しょうがない子だなあ優子ちゃんは!」
あたしがなるべくかわいく聞こえるように高く甘えた声で言うと、浩介くんは男らしく単純に、あっという間に許してしまう。
浩介くん、本当にいい人よね。
「ゆ、優子ちゃん」
「うん?」
「終わったから、優子ちゃん。体洗ってくれる?」
「う、うん……」
あたしは浩介くんと入れ替わるように湯船から上がる。
大事なところはもちろん隠しながらだけど。
あたしは、お風呂の椅子に座り、まずボディーソープを手に取る。
浩介くんは律儀にタオルを洗ってくれたので、改めて泡立てる必要がある。
浴槽の方を見ると、浩介くんがあたしの裸、特に大きな胸をちらちらと見ている。
「優子ちゃん、かわいいよ」
「うん、ありがとう……」

「美人は3日で飽きるっていうけど、絶対嘘だよな」
浩介くんが、そんなことを言う。
「あはは、浩介くん。多分それはひがみ女が作り出したんだと思う」
「だろうなー、そもそも優子ちゃんに飽きる男なんているのか？」
「どうだろうね？」
あたしがあえてとぼけたように言う。
体を洗い終わったら、さっきの浩介くんと同じように、立ち上がって腕を伸ばし、シャワーを掴む。
ボディーソープを流し、頭を洗うために、いったん髪を解く。
「優子ちゃんってさ」
「うん？」
「やっぱりおっぱいが女の子らしい性格を作ってると思うんだ」
突然浩介くんが変なことを言う。
「え!?　ま、まあ確かに、否定できないわね」
「そうだろう……隙あり！」
むにゅっ！
浩介くんが片手を伸ばし、あたしは胸をむにっと掴まれる。
「きゃっ……もう、こらあ！」
「わはは、さっきの仕返しだよ」
浩介くんが笑顔で豪快に言う。
「あうう……お願いだから洗ってる間は触らないでね。あたしの髪、デリケートなのよ」
「分ってるって」
浩介くんも、そのあたりは自制してくれるみたい。
あたしは安心して髪を洗い始める。
浩介くんと一緒にお風呂と言っても、体や髪の洗い方はいつも通り。
全て洗い流し終わると、あたしはもう一度、髪の毛をお団子ヘアーにまとめ上げる。
「優子ちゃん、ちょっと狭いけど、こっちに来てよ」
浩介くんが、湯船の中で手招きをしてくる。

「あ、うん……」
あたしも、意を決して中に入る。
お風呂のお湯が、あたしの体積分抜けていく。
浩介くんと向かい合わせ、体の全部、余すところなく凝視されている。
「はぁ……はぁ……」
浩介くんが、明らかに興奮している。
「こ、浩介くん……」
「ゆ、優子ちゃん……俺……はぁ……はぁ……」
「あうう、観察されちゃってるよお……あたしの恥ずかしいところ、全部見られて……っ！」
あたしは、思わず顔を両手で隠してしまう。
だけど、すぐに浩介くんに優しく引き剥がされてしまう。
「優子ちゃん、かわいい顔を隠しちゃだめだよ」
「だって……あうー」
「……」
浩介くんがニッコリ笑う。
「ひゃう！」
あたしは、今度は両胸を両手で揉まれてしまう。
体が熱くなる。外側からのお風呂の熱と内側からの興奮と恥ずかしさの熱。
「はぁ……はぁ……」
あたしは、ほとんど本能的に、浩介くんのことを求めたくなる。
「ねえ優子ちゃん……」
「うん？」
「まだ、出来ないけど……スキー合宿の最後の日のときみたいにさ」
「み、『見せあいっこ』するの？」
あの時の事、思い出しただけでさらに顔が赤くなりそうなのに。
「うん。一応さ、今回のは『夫婦生活の練習』ってことになってるんだし、少しは楽しもうぜ」
浩介くんが、いつも以上に興奮した声で言う。

「……熱いから、出ようか」
「う、うん……」
中から外から凄まじい熱で、今にものぼせそうだった。
まずあたしから湯船から出て体を拭く。
あたしが脱衣所に戻ると、浩介くんが湯船から上がり、あたしはバスタオルで体をもう一度拭いて、パジャマに着替え始める。
浩介くんが脱衣所に来たとき、あたしは下着姿だった。
「あ、あんまり見ないで……」
「その中も見られたのに、優子ちゃんって恥ずかしがり屋だね」
「も、もう……」
浩介くんが、あたしのことを「恥ずかしがり屋」だと言った。
確かに、あたしは恥ずかしがり屋だと思う。
彼氏や旦那の前なら、裸でも我慢できる。なんていう人は多い。
でもあたしは逆に、「浩介くんだからこそ、恥ずかしい」と思っている。
それは多分、カリキュラムの効果だけじゃなくて、あたしの女の子としての「乙女心」がそうさせているんだと思う。
あたしは着替えるのが遅いので、浩介くんとほぼ同時に着替え終わった。
「じゃあ、寝室に行こうか」
「う、うん……」
たまたま扉に近かったあたしは、浩介くんの前を歩く。
すりすり……
「きゃあ！」
浩介くんに、背中を撫でまわすように触られる。
しかも、全然手を引っ込めてくれない。
「こ、浩介くん、ちょっとやめてえ……」
あたしは立ち止まって振り返り、浩介くんに哀願する。
「俺の部屋につくまでやめてあげない」
浩介くんが小悪魔っぽく意地悪に言うと、更に嫌らしく撫でまわしてくる。

「いやーん、えっちー！」
あたしの抗議も、浩介くんには届かない。
さっきから、とてつもなく濡れてしまっている。
「っ!!!」
とにかく走るように、あたしは浩介くんの部屋に向かう。
もちろん、浩介くんにはすぐに追いつかれて、結局部屋に入るまで触られっぱなしだった。
「もう、浩介くんのえっち！　スケベ！　変態！」
「なんとでも言え、これから、変態になり合うんだから」
「ううっ……」
浩介くんの完璧過ぎる言い訳にあたしは何も言い返せない。
「それに、部屋に付くまでに、気分が沈んだらまずいだろ？」
「う、うん……」
「さ、優子ちゃん、見せてくれよ」
「……はいっ」
太陽も完全に落ちたこの夜。
あたしは、浩介くんと一緒にお風呂に入り、そこからえっちな気分になった。
「理想の嫁の姿。昼は淑女、夜は娼婦」という言葉の通り、今のあたしは、浩介くん専用の「娼婦」になっていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
二人して、息も絶え絶えになる。
浩介くんの疲労がすごい。やっぱり男の子のあれは後が大変よね。
あれだけ体力のある浩介くんがここまでぐったりとするくらいの重労働だもの。
「優子ちゃん、エロかったよ」
「うー」
「でもさ、そんな優子ちゃん。最高だよ」
「ありがとう……」
夜にその娼婦ぶりを褒められたら、あたしは素直に受け取るべきだ

と思う。
あたしが、浩介くんに自分の理想を重ねるように、浩介くんだって、あたしにきっと理想を重ねているはずだから。
その理想と現実の乖離に、世のカップルは苦しめられている。
でも、あたしは、男の子の気持ちがわかるから。その点で一歩リード。
あたしはパジャマに着替え直す。下着の濡れもひどかったけど、
「見せあいっこ」の後に、何とか乾いてくれたみたい。
「ああ、もうこんな時間だ」
浩介くんが時計を見ながら言う。
よく見ると、そろそろ寝る時間になっていた。
意外と、鉄板焼きって時間がかかるのよね。
だからいつもよりあっという間な気がする。
「あ、本当だわ……じゃあ、浩介くん、おやすみなさい」
「うん、おやすみ」
あたしは、自分の部屋に戻る。
明日は、あたしの嫁さん修行も最終日になる。
「あ、優子ちゃん。うまくいった？」
自室の前で、「お義母さん」に呼び止められる。
「うん、浩介くん、喜んでくれたわ」
「あらそう。早く孫を見せてね」
「え!?　い、いやいや、してないから！　それは結婚までしないから！」
誤解しかけている「お義母さん」に対して、あたしは手を振りながら必死に否定する。
「もー、つまんないわねぇー」
そして、「お義母さん」はご機嫌斜めな様子。
そりゃあたしや浩介くんだって、したいのは山々だけど、学校のことだってあるのよ。
「と、とにかく寝ます」
もし妊娠してしまって大学生活に影響して、それで蓬莱教授の研究

に支障をきたしてしまえば、あまりにも無責任だし、何よりやっと築かれ始めた協会と蓬莱教授との信頼関係に致命的な傷を与えかねない。

もちろん、蓬莱教授のことだから杞憂なのかもしれないけど、用心するに越したことはない。

それに、あたしは今。人類史さえ動かしかねない立場なんだから。

「落ち着かないわ……」

あたしは、眠れない。

さっきのことで頭が一杯になっている。

結局、浩介くんとのことを思い出して、服を脱いでまた絶頂に達した。

そして、その疲労感で、あたしは裸のまま眠りについた。

# 花嫁修業最終日

「おーい、優子ちゃん……起きろー」
「ひゅぇ……」
朦朧とする意識の中、あたしの耳から愛しの浩介くんの声が聞こえてきた。
身体を揺すられる感覚と、浩介くんがちょっと違和感を感じている。
「優子ちゃん、起きた？」
「あーうん……」
今日は花嫁修業の最終日、今日の午後には、あたしは元の日常に戻る予定になっている。
「あの、さ」
「うん」
浩介くんがちょっとだけ言いにくそうに言う。
「今日さ、お父さんお母さん、夜まで出かけるんだって」
「え!?　じゃあ……」
「うん、水入らずになるのも、修行の一環だとか何とかでさ」
「……」
確かに、花嫁修業と言っても、浩介くんと二人っきりではなかった。
浩介くんとしても、特に独立する動機もないので、こういう形になったんだとか。
でも、実際に生活すれば、あたしと浩介くんが２人きりになることはよくあることだという。
「ま、とりあえず、着替えて来いよ」
「うん、分かった」
あたしは、眠気を何とか堪える。
そう言えば、昨日は裸で寝てしまったのを思い出す。
浩介くんが完全に部屋から出たのを確認し、一呼吸置いてからすっぽんぽんのあたしは布団から出て、部屋の鍵を閉める。
まずは下着選びからだけど、もう選択肢は一つしか無い。この青と

白の縞パン。
そして、思いがけず浩介くんと二人っきりになれたということで、あたしは使わないだろうと思いつつ持ってきてしまった一番露出度の高い服を取り出す。
Tシャツの胸元はギリギリまで露出していて、しかも丈は短くへそ出しルック。
スカートの方も青いフレアミニで、ふわふわ揺れて広がる軽い素材にもかかわらず、パンツすれすれの短さで、パンチラ見放題の仕様。
「あうぅ……恥ずかしいよお……」
浩介くんに性的な目で見られることを一人で想像し、勝手に恥ずかしくなってしまう。
それでも、あたしは意を決して下着の上からこれを着る。
「んーっ！」
制服と比べても、遥かに心許ない。
というよりも、この服は、異性を誘惑するためだけに作られたものだと思う。
浩介くん、きっとイチコロなんだろうなあ……
ともあれ、着替え終わったら部屋を出る。
「お待たせー」
「うっ!!!!　ゆ、優子ちゃん……」
予想通り、浩介くんは激しく動揺している。
「うん？　どうしたの？」
「どうしたもこうしたも……その格好、やべえよ……」
浩介くん、もうあんなに興奮しちゃって……
「えへへ、今日は2人だけでしょ？　こういうのも必要かなって思ったのよ……さ、朝ごはん作るわよ」
あたしは、そんなことを言いながらキッチンに向かっていく。
ぴらっ……
「きゃあ！」
浩介くんに、またスカートめくりされてしまう。
予想していたと言っても、浩介くんが喜んでくれるのは嬉しいけ

ど、やっぱり恥ずかしい。あたしはお尻を抑える。
「もう、えっち！」
「えっちなのは優子ちゃんだろ！　２人きりの時にこんな服着たら、誘っているの同義だぞ」
「むー！」
　隙のない正論に何も言い返せなくなってしまう。
「それに、優子ちゃんエロくてかわいいからね。縞パン、似合ってるぞ」
「もー」
「ほおれ！」
　むにっ……ぺろりっ！
「いやー！　えっちー！」
　浩介くんに、右手で後ろから胸を触られ、左手はぺろりとスカートをめくられる。
　スカートを抑えて抵抗しようとするけど、浩介くんの引っ張る力が強くて、しかも胸を触られて感じてしまい、効果がない。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん……」
「こ、浩介くん……ご飯、作れないから……」
「あ、ああうん。分かった……」
　やっと浩介くんが手を離してくれる。
　ともあれ、あたしは冷蔵庫から食材を取り出す。
　下の野菜室にはちょっと前かがみになって……
「優子ちゃん、パンツ丸見えだよ」
「きゃー！　もう、スケベ！　じろじろ見ないでよー！」
　浩介くんに口で言われると恥ずかしいけど、この短さだと手で抑えても意味がないので何もしない。
「とか何とか言って、抵抗しないんだから本当は好きなんだろ？」
「あうー！」
　浩介くんに図星を突かれ、押し黙るしか無い。
　これで、きっと浩介くんはますます興奮してくれるはず。
　でも、これから朝食を作るわけで。

「あ、あの……」
「どうしたの優子ちゃん？」
浩介くんのパジャマの下が、もっこりしているのが分かる。
「ご飯作ってるときは、本当に触らないでくれる？　危ないから」
「あ、ああ……」
浩介くんも、何とか納得してくれる。
まあ、さすがにその理屈くらい分かるよね。
浩介くんは、「煩悩退散！」と言った後に、「ご飯できたら呼んでくれ！」と言い残し、自分の部屋に戻ってしまう。
確かに、こんな服のあたしがウロウロしてたら、いつ暴発してもおかしくないものね。
あたしは、一人でご飯を作る。
この服でご飯を作るのも面白い。
浩介くんがいないけど、そのせいでスカートの中が余計に気になってしまう。
あたしは朝食用のサラダを小皿２枚に作り始める。
浩介くんは味が濃いのが好みみたいなので、キャベツにごま油、醤油にノリ、そしてベーコンに白ごまも入れる「特製サラダ」を作る。
この料理は、あたしがカリキュラムの時から作っているおなじみの料理で、更に白いご飯の上に、昨日の牛肉の残りを焼く。
これで、簡易的な「牛丼」の完成。
朝食にしては結構重たいけど、多分浩介くんはこの後、たくさん「重労働」しなきゃ行けなさそうだし、このくらいでいいと思う。
サラダをまずテーブルに置き、次に牛丼を２つ起き、箸と飲み物とコップを置いて完成。
あたしは、浩介くんを呼ぶために、部屋の前まで来る。
「浩介くーん！　出来たわよー！」
「おう、ちょっと待ってくれ！」
浩介くんが何やら慌てた感じで言う。
大方、あたしで抜いていたんだと思う。
部屋から浩介くんが出てくる。

下半身は相変わらず大きなままで、出すのに間に合わなかったのが分る。
「うっ……」
浩介くんがあたしを見て、思わず目をそらしてしまう。
「浩介くん、ご飯食べよ」
「あ、ああ……」
あたしを先頭に、浩介くんと食卓につく。
その途中にもう1回スカートめくりをされ、またいつものやり取りをする。
「それじゃあ、いただきます」
「い、いただきます……」
実際この服で食卓に座ると、あたしの胸がいつも以上に目立つ。
浩介くんはさっきから、食材に視線を合わせずに食べようとしている。
「あっ！」
案の定、サラダを机にこぼしてしまう。
「浩介くんどうしたの？　そんなにあたしの胸が気になる？」
「あ、当たり前だろ！」
そう言うと、浩介くんが突如、机の下に潜り込む。
あたしは、パンツをまた見られると思って、更にきつく足を閉じる。
「ほーれ、ご開帳～！」
すると浩介くんに、両膝を掴まれそのまま開かれる。
「ちょ、ちょっと浩介くん！　今は食事の時間よ！」
「そんな格好して、俺を誘惑するのが悪いんだぞ。ほれほれ」
「きゃっ！　いやぁ！　お願い、もう許してえ！」
「とか何とか言って、身体は正直だぞー」
浩介くんがそう言う。確かに、全身がもう汗でだくだくになっているのは事実。
身体は正直だし、心だって興奮してる。
嘘をついているのは口だけ。
浩介くんは、それを簡単に見破ってしまう。

「優子ちゃんの料理は美味しいけど、それだけじゃないよね」
「こ、浩介くん！」
「あはは、ごめんごめん。冗談だって」
浩介くんは、そう言うと元いた椅子に戻ってくれた。
その後は、浩介くんも何とか我慢してくれたので、朝食は無事に終わり、あたしは食器を片付ける。
さて、昨日していなかった洗濯と掃除を今日はすることになっている。
あたしは洗濯機に衣類を入れていく。
「ねえ優子ちゃん」
「わ!?　浩介くん、部屋に戻ったんじゃ……ってちょっとお！」
浩介くんが床に寝そべって、あたしのスカートの中を下から覗き込んでくる。
「そんなことより洗濯だろ？」
浩介くんが、寝ながら選択を促してくる。
「う、うん……」
「優子ちゃん、洗濯進んでないな」
「あうう……それは浩介くんが……」
エロいせいだとあたしは言いたい。
「ま、とにかく洗濯しねえとな」
やっと浩介くんが立ち上がってくれる。
とにかく、洗濯物を片付けないといけないわね。
洗濯をし終わったら、次に掃除をしなきゃいけない。
何だけど……
スリスリスリ……
「こ、浩介くん……家事の邪魔しないでえ……」
浩介くんがあたしの背中を触ってくる。
「し、仕方ねえだろ……優子ちゃんエロいし」
浩介くんが何度も同じ言い訳を言う。
でも、心の何処かで、こうされるのを期待していたあたしもいた。
だから、お相子さんだと思う。

「うっ……俺……ちょっと……！」
浩介くんも、我慢できなくなったのか、自室に駆け込んでしまう。
うん、ここまでみたいね。
その間、あたしは掃除をし、こっそりと服も落ち着いたものに着替えることにした。
服は、本来今日着る予定だった膝下丈の赤いスカート。
さっきまでの露出度の高い服とは打って変わって、身持ちの固そうな淑女の服だ。
「ふぅ……おや、優子ちゃん着替えたの？」
浩介くんが、さっきまでの興奮が嘘のような冷静さで言う。
やっぱり、当たっていたみたいね。
「うん、浩介くん、部屋に駆け込んじゃったからね」
「あはは……そりゃあ我慢できるわけねえよ……」
あたしたちは、テレビを見る。
昼食まで時間がある。
今日もニュースは平常通り。最近ではインターネット上でも、あたしたちの話題は減少傾向にあった。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
「優子ちゃん、今度の９日で女の子になってちょうど１年だっけ？」
浩介くんが、そう言う。
うん、確かそう。
「ええ」
「じゃあさ、学校が終わったら、優子ちゃんの家でお誕生日会しない？」
浩介くんがそんな提案をする。
「でも、あたしの誕生日は６月２２日で……」
「うん、知ってる。でも、協会の人にも言われたんでしょ？」
「……」
確かに、比良さんからそんなことを言われた。
でも、やっぱりまだ実感がない。

生まれ変わったのは事実だけど、「誕生日」とはまた違う。
「あーなんだ、納得出来ないならさ、『女の子記念日』何てどうだ？」
「う、うん……それならいいかも」
「いずれにしても、さ。やっぱり優子ちゃんのあの日のこと、お祝いしてあげるべきだと思うんだ」
浩介くんのそんな言葉。
確かに、あたしにとってあの日は忘れられない思い出の日になっている。
新しい人生の出発点の先に、今がある。
でも、優一時代が完全になくなったわけじゃない。
例えば国語や算数の基礎的な学力だって、優一の延長線上にあたしがある。
もちろん、優子になった今のほうがずっと成績は良いんだけど。

「ねえ、優子ちゃん。お昼にしない？」
「うん、そうだね」
あたしが、そろそろお昼ごはんの時間だということを思い出す。
「お昼は何にする？」
「スパゲッティ茹でるわ。幸いソースは買ってあるみたいだし」
手作りのソースも作れないことはないけど、やっぱり手間はかけすぎないほうがいい。
「優子ちゃん、結構料理手早いよね」
「うん、確かに手間を掛ければ美味しくなるけど、そういうのはレストランの料理人とかの仕事よ。あたしや他の主婦の場合、いかにして短時間で効率よく作るかが求められるのよ」
「ふむ、言われてみればそうだよな。料理人は料理に専念するけど、優子ちゃんは掃除や洗濯もあるもんな」
浩介くんがナイスな補足説明をしてくれる。
「そゆこと。理解が早くて助かるわ」
あたしは「スパゲティミートソース」を机に出し、茹でる前のスパゲッティを秤にかけて重さを計測する。

今回は浩介くんとあたしの２人きりなので、量を少なめにしないといけない。
そうね、こういう料理の分量の加減も、覚えていかないといけないわね。
「優子ちゃん、考え込んでどうしたの？」
「ああうん、今まであたしは３人家族で料理を作ってたから、今回４人になったり２人になったりしてるでしょ？」
「なるほどねえ。やっぱ分量でも変わってくるんだな」
「ええ」
鍋のお湯が沸騰したら、スパゲッティを茹で、タイマーをかける。
「これを下げるんだろ？　大変そうだな。ちょっと俺にやらせてみてよ？」
「え？　う、うん……いいけど……」
というわけで、ピピピピッとタイマーが鳴ったら、浩介くんが火を止めて、鍋をひょいと軽々持ち上げてザルに上げてくれる。
「お、意外と軽いんだな」
「……あたしにとっては重いのよ」
男女の力の差が、ここでも如実にわかる。
あたしは特に女子の中でもひ弱な上に、浩介くんはかなり鍛え上げられているという違いもある。
だから、本当に極めたら、料理だってきっと浩介くんの方が上手になるはず。
でもなんだろう、何かそれだけは、嫌な気がした。
ともあれ、あたし達は麺を冷まし、それぞれに盛り付けて、ミートソースをかける。
今回は浩介くんも側に居るので、粉チーズをキッチンでかけて、そのまま机に持っていって食べる。
「いただきます」
２人で頂きますをして、再びやすらぎの時間。
「優子ちゃん、いつまで家にいる？」
「うーん、これを片付けて後は洗濯物を干したら帰るかな？　浩介く

ん、雨に濡れそうだったらちゃんと初日みたいにしてくれる？」
「おう、任せとけ」
昼食が終われば、そろそろ洗濯機の洗濯も終わった頃。
洗濯機から終わりを知らせる音を聞き、あたしがまず籠に洗濯物を入れる。
その中に、あたしのパンツもあったので忘れずに自分の荷物の中に回収しておく。
「浩介くん、ちょっと手伝ってくれる？」
「うん？」
「こうやって、洗濯ばさみで挟んでかけてくれる？」
「あ、ああ……」
浩介くんもあたしの見よう見まねで洗濯物を干し始める。
速度はあたしよりずっと遅いけど、それでも居ないよりはずっといい。
「ふう、じゃあ荷物まとめるからちょっと待っててね」
「ああ」
あたしは全ての家事を終えたので、浩介くんを尻目に、自室に戻り、広げてあった服や、お人形さんにぬいぐるみさん、おままごとセットを中に入れ直す。
男の頃よりも、整理整頓術は格段に向上した。
最後にもう一度全てあるか確認し、忘れ物がないと確信したら、キャリーバッグを引き始める。
「優子ちゃん。俺、駅まで送ってくよ」
「ありがとう」
浩介くんがそう言うと、あたしは玄関の段差などで、浩介くんの力を頼る。
浩介くんが鍵を閉め、駅へと向かう。
「この3日間、優子ちゃんのこと、もっと好きになれたよ」
「うん、あたしも……」
具体的に3日間、浩介くんの家で生活してみて、あたしは将来のことがより鮮明になったと思う。

そのおかげで、あたしは浩介くんとの未来がよりよく見えてくるようになった。
今日は5月5日土曜日、5日後には、あたしは女の子1周年を迎える。
「じゃあ、また明後日」
「うん、学校でね」
浩介くんと別れ、いざ電車の中へ。
あたしは行きのときと同じく、エレベーターを使って段差を避け、あたしの家に向かう。
もしかしたら、この家に住むのも、終りが近いのかもしれない。
今はまだ、分からないけど。
あたしは呼び鈴を鳴らし、母さんに帰ってきたことを伝える。
「優子、おかえりなさい」
「うん、ただいま」
でも、電車で数駅だし、「実家」に帰るのは、容易よね。
母さんと一緒の、日常が戻った。
結婚のことを考えると、この日常もいつか壊れるという意味でもある。
……今は考えても仕方ないわね。
それよりも、母さんに浩介くんの家でのことを話さないと。

# パーティーの準備

「へえー！　いいじゃない！　優子の女の子記念日！」
家に帰ってきて母さんにそのことを報告すると早速母さんが乗り気になった。
「か、母さん……」
予想していたとは言え、目をキラキラ輝かせる母さんに、あたしはどうしても顔が引きつってしまう。
「あの日は本当にどうなっちゃうのかとも思ったけど、女の子になってから、優子は明るくかわいく、そして何より名前の通り優しい子になったし、記念日と言っていいわよ！　そうと決まれば早速人を集めましょう！」
母さんは、早速パーティーの具体的案を煮詰めると言ってきた。
しかも、夜には浩介くんの両親ともテレビ電話で話し合って見る予定だという。
それにしてもこの行動力の早さ、一体どこからそんなエネルギーが来るのだろう？
ともあれ、あたしは止めても無駄ということや、疲労感もあって自室の布団でゆっくり横になる。
あまりに疲れすぎて寝ちゃうかもしれないけど、今はそういうことを考えてもしょうがないわね。

「優子ーご飯よー！」
「はーい！」
あたしは久々に、石山家でご飯を食べる。
たった2日間、それに一昨日の朝はここで食べたんだから事実上1日半お留守にしていただけなのに、何だか遠い昔のように感じてしまう。
でも、母さんの作ったご飯は美味しくて、「帰ってきた」ということを自覚する。
もしかしたら、今日は気合を入れただけかもしれないけど。

「そうそう、浩介くんに電話して、そちらの親御さんの戻ってくる時間を聞いてきたわ」
「あーうん……そう……」
当人の意向は無視で、母さんたちはあたしの「女の子記念日パーティ」について話し合っている。
母さんのあまりの勢いもあって、あたしは少し投げやり気味に言う。
「優子、優子も記念日パーティのこと、学校で言うのよ。パーティーはなるべく人が多い法が良いからね」
「はーい……」
もう知らないわ。
まさに、「もうどうにでもなーれ」って感じ。今日は花嫁修業の疲れも出たし。
あたしは、浩介くんの家での花嫁修業の疲労を回復させるために、早めにその日は寝た。

「へえー！　石山さんの女の子1周年記念パーティー!?　いいわね！　ナイスアイデアよ！」
「あ、あはは……」
月曜日、あたしが女の子になって1年になる2日前のこの日。
あたしはお昼休みの学校で、「お誕生日会」のことを試しに永原先生に話してみたら、永原先生はとても乗り気になってしまった。
「今までね、女の子になった日を記念日とする人は多かったわ。だけど、やっぱりＴＳ病で苦労してきた人は多いのよ。だから、『記念日は気分が重い』って人も結構いたのよ」
永原先生曰く、永原先生も余呉さんも比良さんも、他の正会員も普通会員も、ＴＳ病でみんな大きな苦労をしてきた。
そのこともあって、「記念日として覚えておく」という習慣こそあったが、「記念日として祝う」という習慣はなかった。
比良さんが言っていた「もう一つの誕生日」という言い方も、そんな重い気分を少しでも紛らわせるための方便だったのだという。

「だけどね、石山さんは違うわ。有史以来の１３００人のＴＳ病患者の中であなたは……いえ、あなただけには、女の子になった明後日のことを『祝福』する資格があるのよ。石山さんのお母さんとも調整して、協会の本部が使えないか、考えてみるわ」
「え、でも……」
「いいのよ。どうせ明後日の平日は殆ど人がいないんですもの。時間は夜にしましょう」
　永原先生もまた、あたしそっちのけで話を始めてしまう。
「母さんもですけど、どうしてそんなに積極的なんですか？　あたしは別に……その……そこまで大したことはしてないですし」
「石山さん、あなたのお陰で多くの人が救われたわ。かくいう私もその一人よ。特に吉良殿のことは、本当に感謝してもしきれないわ」
「永原先生、その……あたし……」
「協会のみんなも、そしてこれからＴＳ病になる未来の女の子たちも、きっと石山さんは救ったのよ」
　永原先生が、優しい口調で言う。
　未来の女の子も……うーん、まだよく分からないわ。
「う、うん……それに、あたしにも、偶然だけど、好きな男の子が出来たわ」
　林間学校の実行委員、男子がくじ引きという決め方をしたんだもの。
「そうかな？　私はそうも思わないわよ」
「え!?」
　永原先生が意外な言葉を口にする。
　あたしと浩介くんの関係、てっきりあの時のくじ引きがきっかけで、偶然だとも思ってたのに。
「篠原君、責任感強いもの。林間学校で実行委員にならなくても、あるいはナンパした添乗員がいなくても、きっとどこかで石山さんは篠原君に惚れていたわよ。だって彼も、球技大会の時から石山さんのことを意識していたもの」
「そ、そうなの？」

「もし違ったとしても、きっと彼の方から告白してきたわ。あなたなら、どのルートでも最終的には受け入れたわよ」
「う、うん……」
確かにこれまでの浩介くんの振る舞いを考えれば、永原先生の言う通りだと思う。
「でも、石山さんが恋をして、その後女の子になりきるタイミングは、文化祭より後になったとは思うけどね」
「じゃ、じゃあもしかして？」
林間学校のくじ引きは、あたしと浩介くんの恋仲を早めただけだとするなら――
「ええ。あの時の男子のくじ引きが救った本当の人は、石山さんでも、篠原君でもないわ。塩津さんよ」
永原先生の口から出た意外な名前。
でも確かに、よく考えればその通りだった。
あの時の幸子さんは、あたしが助けなければ自殺の道へと一直線の状態だった。
もしあたしが正会員になるのが遅れたら、きっと彼女はあんな風に女の子らしくなってはいなかった。
それどころか、もうこの世に居なかったかもしれない。
「あなたと篠原君が恋人同士になったのを見て、私もあなたを正会員にしようと思ったもの。篠原くんと石山さんの関係そのものは遅いか早いかの違い。でもね、早いことで救われた人が確実に1人、いや……彼女の家族や関係者を加えたら、１０人じゃ効かないと思うわ」
あたしも、話の流れからは予想していたけど、永原先生は一つの驚くべき仮設を提示してくれる。
それは一つの高校の、林間学校の実行委員を決めるくじ引きの結果が、遠い東北の大学生のＴＳ病患者を救ったという話。
昔、一人の高校生がインターネット掲示板を荒らした結果、連鎖的に様々なことが起こって、ついには国会まで動き出す騒ぎになったこともあったという。
きっとこれも、そんな類なんだと思う。

「数奇な運命よねえー」
「ええ、石山さん。あなたの人生は、数奇なことで溢れているわ。それに来年は、蓬莱教授とともに全世界を巻き込むこと可能性もあるわ。もしそうなれば、あなたは私の２５分の１以下の人生で、私より濃いことを成し遂げるわ」
「え!?　そ、そうですか？」
　永原先生は、あたしなんかよりよっぽど太く長い人生だと思うけど。
「ふふっ、私はね、確かに協会の会長として、なけなしの政治力はあるわよ。だけど、基本的には教師ををしている。ただ世界一長生きってだけの女よ」
「……」
　でも、永原先生だってその長い人生で、協会の女の子たちに影響を与えているはず。もちろん、その中にはあたしも居る。
　それを考えればやっぱりあたしの影響力だってまだまだのはず。
「それに比べたら、石山さんは蓬莱教授の研究に参加するってだけで、素晴らしいことよ……さ、話し込んじゃったわね」
「あ、うん……失礼します」
　あたしは、永原先生と別れ、一人で考える。
　ともあれ、お昼休み、ご飯にしよう。
　ご飯を食べながら、また考える。
　確かに、今まではこの病気になるしか、不老の方法はなかった。
　人数も少ないし、影響力は無視できた。
　でも、あたしがもし、蓬莱教授の研究を成功させる助けになったとしたら……
　何だろう、何か大きなことが、動きそうな気がするわ。

「おーい、優子ちゃんの女の子１周年記念パーティーするぜ」
「へえ、篠原の企画なんだ？」
「そうだぞ高月。明後日水曜日、平日だけどみんなでワイワイしようぜ」

「お、いいねえ。最近慣れない受験勉強でストレス溜まってたし」
教室に戻ってみると、浩介くんが、あたしと同じように「優子ちゃんの女の子1歳の誕生日おめでとう会」と称して男子を中心にお友達をたくさん呼んでいる。
どうやら、浩介くんのお友達たちも乗り気みたいね。
あたしも、腹をくくって女の子たちに声をかけることにした。

「へえ、いいじゃない。私も、優子ちゃん女の子になってよかったと思うし」
桂子ちゃんも同じく、このパーティに賛同してくれている。
「それに、優子が女の子になってくれたおかげで、あたいは桂子たちとも和解できたんだしな」
そう、確かにあたしは多くの人に影響を与えた。
優一の頃は、小規模に、悪い影響だったけど今は違う。大規模に、いい影響を与えていると思う。
あたしの誕生日でもない、女の子になった日について、みんなでお祝いしてくれる。
そのことが、あたしにとってとても嬉しいことだった。
何より、恵まれていると思ったから。

月曜日の授業が終わり放課後、あたしは浩介くんと桂子ちゃんの三人で、いつものように天文部への道を進む。
最近では、「桂子ちゃんにモテるため」という名目で、天文部の後輩男子たちが、競うように天文の勉強をし始めた。
大学受験にはあまり役に立たなさそうだし、受験勉強は嫌々している人が多いのに、女の子が絡むだけでこうもやる気が出るんだから、男って本当に単純だわ。
で、その天文部で何だけど……
「はーい、皆さん注目。明後日は、優子ちゃんが女の子になってちょうど1年になります」
「「おー」」

男子たちが何故か気合の入った声をする。
「つきまして、篠原の提案で、明後日の放課後に『優子ちゃん女の子1周年記念パーティー』を開催する予定です。開催地等は追って連絡しますので、参加希望の方はこちらにご署名ください」
桂子地やんがそう言うと、真っ白な紙を取り出してきた。
ここに署名させるという算段ね。
「何かよく分からねえけどよ」
「パーティーだってよ。参加しようぜ」
「うんうん、面白そうじゃん」
天文部の男子たちが、一斉に署名する。
ちなみに、これについては桂子ちゃんが帰りに永原先生に提出するらしい。
天文部の男子たちの反応を見る限り「あたしのことを祝いたい」というより、「何かよく分からないけど、パーティに無料で参加できるなんてすばらしい」という感情が大半を占めている。
でも、賑やかになるなら、まあいいかな？
一応、あたしのためのお祝いってことだし。

「ただいまー！」
「あ、優子おかえりなさい」
ただいまをすると、母さんが大量のビニール袋を机に置いていた。
「母さん、これどうしたの？」
「どうしたのって、明後日の優子のパーティの食材よ。永原先生によれば、かなりの人数になりそうだから、浩介くんのお母さんとも調整するわ」
どうやら、食材の用意は全てあたしの母さんと浩介くんのお母さんがしてくれるらしい。
「あの、あたしは――」
「手伝わなくていいわよ。優子は主役なんだから」
「は、はい……」
そういうことなので、お言葉に甘えておこう。

「その代わり、明日の夕食は優子が作ってね。パーティの準備に専念したいから」
「分かったわ」
まあ、それはしょうがないわね。
ともあれ、あたしはどっしりと身構えていればいいみたい。

「えー、ここが仮定法のコツです。よく覚えておいてください」
翌５月８日火曜日、この日はあたしが倒れた日。
午後１番の授業は数学ではなく、英語になっていた。
だけど、どうしても意識してしまう。
昼休み、あの時あたしは２人の男子に乱暴に怒鳴りつけていた。
１人目は理由を忘れたけど、２人目は忘れもしない。
優一が最後に犯した「罪」の記憶。
それは、他のクラスの男子に対して、水飲み場で長時間居座ったとして、無理やり引き剥がしたこと。
その後、桂子ちゃんと名前のことについて話したのが、優一としての最後の会話だった。
休み時間の終わりから、下腹部の痛みを覚えて、授業中に激痛を訴えて、あたしは病院に運ばれた。
多分、ちょうど今頃だと思う。
……ダメダメ、意識したらダメ。今は普通の授業中なんだから。
さてこの日、永原先生から帰りのホームルームで「明日、日本性転換症候群協会本部で、石山さんの『女の子のお誕生日パーティ』をします」と連絡があった。
こういう公私混同が許されるのも、小谷学園のぬるい所といえばその通り。
更に、具体的な時間などもプリントで配られている。
永原先生は協会の人にも声をかけていたらしくて、学校の人達と合わせて、１００人は来ない見込みだという。
ともあれ、あたしはなるようになると思いながら過ごす。
とにかく今は、卒業に向けて授業を受けないと。

あたしは、家事をする傍らで、母さんのパーティの準備を邪魔しないように工夫する。
これが意外と難しくて、特に新鮮さが求められる食材は明日本部のビルにあるキッチンを借りるとかで、今日の準備は飾り付けを作るのが多いとか。
というか、本部にキッチンなんてあったっけ？
……まいっか。あたしが気にすることじゃないし。
とにかく今は、料理に集中しよう。

「ねえお父さん、明日優子が女の子になってちょうど1年なんだけど」
「ああ、そうだな。確か去年の今日が倒れた日だっけ？」
食事中、母さんが父さんに明日のことを話す。
ただのパーティー勧誘のはずなんだけど、まるで布教活動に見えてきたわ。
「うん」
「で、それがどうしたんだ？」
「そうそう、協会の本部でパーティを開くことになったのよ。時間は――」
「うん分かった。ビルは……うん、時間があったら顔をだすよ」
父さんの方は、仕事次第ということね。
さて、食事を片付け終わったら、お風呂なんだけど「いつもより入念に洗っときなさい」と母さんに言われた。
明日のパーティ、どうなるか楽しみ半分、不安半分という形で、あたしは眠りについた。

# 1年目の日

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……」

目覚まし時計に催促されて、意識を回復する。

あたしのこの日、去年の今日は病院で、目覚まし時計もなく、夜明け前に起きた。

あたしは、意味もなくパジャマのまま、脱衣所に行く。

「……」

今日は女の子になってちょうど1年という節目の日、しかもみんなでパーティーを開いて祝ってくれるという。

あたしは、鏡の前の少女を見る。

これが、あたしの姿。何度見ても、この少女の姿は、決して夢ではない。

1年間過ごした、大切な自分。あたしは、1年前のことを思い出す。

初めて女の子としての自分の姿を見たあたしは、病院服に身を包んでいた。

1年経って、あの頃と顔も体型も何も変わっていない。

相変わらず癖毛の一つない、惚れ惚れするほどにまっさらで背中まで長いストレートロングの黒髪が目に入る。

幼さが色濃く残る童顔はとても可愛らしくて、インターネットで感嘆の声が上がるのも当然と思えた。

胸は巨乳グラドルの中でも大きい方で、ラフなパジャマの上からは、余計に目立つほどの巨乳、もちろんクラス一、学校一の大きさで、あたしの自慢であると同時に、肩こりのもとでもある。

次にボディラインを見る。ウエストはモデルのように引き締まっているわけではない、むしろ掴めばちょっと肉が出てるのが分かる。

でもコンプレックスじゃない。痩せようと思ったことは一度もない。

浩介くんも、この体型には特に何も言ってこないし、あたしとしても、痩せ型モデル体型は不健康な印象を与えて実は男性ウケが良くな

いことを知っているので、このまま。
水着の時などでも、へそ出しのスタイルに抵抗感はない。
最後にお尻。胸があまりにも大きいのでそこまで目立たないが、実際にはお尻もかなり大きい。
このことは、女の子になったばかりの時こそ胸に隠れて印象に残らなかったけど今見るとかなりエロいことは事実。
顔が可愛く、身体もエロく、これで男子に好かれないわけ無いと改めて思った。
しかも、去年と一切変わってないこの姿。
それが１０年後も２０年後も、いや１００年後だって変わらないと言うんだから、まさに「理想の女の子」そのものだと思った。
そんな中で、浩介くんを好きになれたのはとても良かったと思う。

ちょうど1年前、あたしはこの姿に戸惑いを覚えていた。
今ではすっかり馴染みになって、優一の姿の方を思い出すことも殆どなくなった。
もちろん、写真には残っているから、忘れることはないし、仮に忘れても思い出すことは出来る。
でも、結局優一の頃の写真は、優子になってから一度も見ていない。
あたしは、何の気なしに腕を前に突き出してみた。
鏡の中の少女も、あたしに連動するように腕を前に突き出す。
「今更何をやってるのよ……」
思わずつぶやいてしまう。
あたしが、女の子の体になったの、夢なわけないじゃない。
今まで、何回も痛くて泣かされて、しかも1年も醒めない夢なんてあるわけない。
それでも、どこかで「これは夢かもしれない」何ていう馬鹿げた考えを持ってしまうのかもしれない。
……まあいいわ。
今はもう、みんなが開いてくれたこのパーティを楽しみましょう。
パーティと言っても、普通に学校もある。

だから、あたしはまず制服に着替える。
白いリボンも、すっかりあたしの頭に馴染んだ。
考えてみれば、この付近の髪だけ、ちょっと去年と変わっているかもしれない。
着替え終わったら、もう一度リビングへ。
「おはよー」
「優子おはよう、どうしたの？　さっき洗面所なんかへ行って」
母さんは何の気なしに聞いてくる。
「ああうん、今日でちょうど1年だから、あたしの姿見てたの」
あたしも、やっぱりこういう節目の日には、意識しなかったことも意識するようになる。
もう、女の子なことは当たり前なのに。やっぱり、生まれつきの女の子と違って、地に足がつかない。だから、コンプレックスも生まれるんだと思う。
「そう、そうよね。優子も女の子になって1年だものね」
「それより母さん、パーティの準備はできてるの？」
「うん、これから大忙しよ。悪いけど朝ごはん、優子が作ってくれる？」
「はーい！」
母さんのパーティの準備を邪魔しちゃいけないと思い、今日はあたしがご飯を作る。
母さんは最近、趣味を始めたらしい。
あたしがたくさん家事を手伝ってくれるようになって、時間も増えたから。
最近では、休日にはますますあたしが1日の家事を全て担当する日も増えて、母さんの負担は減っている。
まあ、あたしばっかり家事してたら、あたしが嫁入りした後に、ちょっと心配な気もするけど。
うん、そうよね。あたしが嫁入りしたら、この家は父さんと母さんだけになっちゃう。
もちろん、うまくやっていけるとは思うけど、寂しさを覚えるん

じゃないかって心配になる。
結婚後も、時折実家に帰ってあげないといけないと思う。
浩介くんなら、大丈夫だと思うけど。
ともあれ、あたしは食事を3人分作り食卓へ。
いつもと変わらない、昨日の残りをかき集め、ご飯と味噌汁を出す。
「「いただきます」」
みんなでいただきますをする、いつもと変わらない日常。
小中学生までは誕生日というと「特別な日」ということになるが、この年齢になってくると、あまり変わらない。
それどころか、あたしの場合、今後何百回と来ることになるわけだから、印象はますます薄れていく。
とは言え、あたしの「女の子の誕生日」としては、最初の誕生日なのも事実だから、久々に童心に帰って……うっ……
そこまで考えて、あたしは止まる。
あたし、女の子としての童心がないんだった。
やっぱり、どうしても、劣等感に押しつぶされそうになってしまう。
あれだけ恵まれた女の子でありながら、何てわがままな子なんだろうと自分でも思う。
確かに、童心がない、幼女時代がないというのは、他の女の子なら当然あり得ないこと。
ＴＳ病の女の子だけが持っていない、「特別に恵まれていない」と言ってもいい。
でも、それを補って余りあるくらい、あたしは恵まれているのに。
「どうしたの優子？」
「あ、うん、なんでもないわ」
こんな日まで、暗くなってもしょうがない。また後で、お人形さん遊びしよう。
あたしは気持ちを切り替え、朝食を食べる。
「あ、そうそう優子」
「うん？」
「パーティ行く時は、そのまま直接行っちゃっていいからね」

母さんが、学校から直行で会場まで行くように言う。
「う、うん……」
とにかく、あたしとしても、それは負担が減るのでありがたい。
ＩＣカードも、ちょうど「花嫁修業」の時にチャージしたので問題はなかった。
「いってきまーす」
「いってらっしゃーい、鍵閉めておくわよー」
母さんの声も、１年たった今でもいつも通り。
あたしは１週間のカリキュラムという名の女の子修行を経て、学校に通うようになった。
３月には卒業というイベントが起きる。
その日までは、こうしてあたしが女子の制服を着て、学校へ向かう風景は同じだろう。
電車から降りると、いつものように、小谷学園の学生たちが学校まで通学していた。
多分、この光景はあたしが卒業しても、小谷学園が廃校になるその日まで、変わらないと思う。
途中、あたしが運び込まれた総合病院と、最初に外食したハンバーガー屋さん見えた。
何だかんだで、あそこはあたしにとっての出発点だった。
あのお医者さん、今も元気に診療しているよね？　ってまだ１年しか経ってないでしょう……
自分に呆れながらも、通学路を進んでいく。

学校につくとあたしは「石山優子」と書かれた下駄箱を探し、ローファーから内履きへと履き替える。
思えば、優一としてここに通ったのも１年と１ヶ月強、もうすぐ、優一としての学校生活よりも、優子としての学校生活の方が長くなる。
そんなことをあたしは考える。
ガラガラ……
教室に行き、ドアを開ける。

「おはよー」
「優子ちゃんおはよう。今日もかわいいね」
「うん、ありがとう浩介くん！」
浩介くんや桂子ちゃん、恵美ちゃんや龍香ちゃん、虎姫ちゃんが主にあたしに挨拶してくれる。
「浩介くん」
「何優子ちゃん？」
「何でもない、呼んでみただけ」
何となく、浩介くんを呼んで見る。
「もー、なにそれ」
「「あはははは」」

「チクショー!!! 篠原死ねえ!!! 呪われろー!!!」
「うわああん!!! どうしてあいつだけあんなにいい思いしてるんだあああ!!!」
「これより、篠原浩介呪いの儀を始める」
「あああああーーーうううーーーー○？△★※＄…＊……」
あたしたちがいちゃついていると、高月くんとその他の男子たちが嘆きの叫び声を上げ、よく分からない「呪いの儀式」をし始めるのも同じ。
あたしは浩介くんと過ごすごとに、女として深まっていく気がする。
今日は、あたしのＴＳ病にまつわる思考ばかりが巡り巡る。
日常は、いつもと変わらないのに。

「はーい、ホームルームを始めますよー！」
永原先生がいつものレディーススーツ姿で教室に入ると、朝のホームルームが始まり、ホームルームが始まると授業が始まる。
「えー、では次の問題。これは本当に頻出ですから、よく復習しておいてください」

授業を受けている中でも、あたしは1年間を振り返り続ける。
女の子として復学し、最初こそトラブルもあったけど、最終的にこの学園は、みんなあたしを女子として受け入れてくれた。
優一のことが最後に話題になったのもいつだろう？
あたしが自ら、優一をなかったことにしてしまったから、この学校には優一の痕跡も残りそうにない。
卒業するにしても、「優子として」卒業することになるんだから。
これでよかったというのは疑ったことはない。
でも、どうしても心に引っかかり続けてしまう。
それはきっと、17年間の空白が、あたしにコンプレックスを作り出しているのと、同じ理由なのかもしれない。
「優子のコンプレックス」は、決して優一では埋め合わせできないことを、あたしは知っている。
「えー次の問題、石山！」
「はい！『イ』です」
「よろしい」
先生に指名され、あたしは席を立ち、答えを言う。
女の子になって1年目も、学校はいつも通り。
昼休み、あたしは久々に一人で食事をすると浩介くんに言った。
浩介くんは「ああ、そうだろう。色々考えたいだろうしな。むしろ優子ちゃんがそう言ってくれてよかった」と言っていた。
浩介くんが本来の性格を取り戻して、随分と時間がたった。
でも今でも、責任感が日増しに強くなっている気がするから、もしかしたら、傷は癒えていないのかもしれない。
いや、普通に考えれば、あたしという守るべき存在が具体的に出来たのが、その原因だと思う。

「あ、優子ちゃん」
「どうしたの桂子ちゃん」
休み時間が終わって教室に戻ると、桂子ちゃんがあたしに話しかけてきた。

「知ってると思うけど、今日は天文部の活動はお休みよ。優子ちゃんのパーティが優先になるわ。授業が終わったら会場に行くわよ」
「うん、分かったわ。あたしも、学校終わったらそのまま会場に行きなさいって母さんに言われてて」
「そう!? じゃあ一緒に行きましょう」
桂子ちゃんと、一緒にパーティー会場に行くことになった。
「ええ」
「お、何だよ、あたいらも一緒に行こうぜ」
今度は恵美ちゃんが話に乗ってきた。
「え、恵美ちゃんテニス部は？」
「あたい今日はちょうど休みの日なんだよ。というのも、毎日練習だと怪我の恐れがあるからな」
なるほどねえ。
確かに休養日も必要なのは事実。
「あ、私も一緒にいくよ」
「と、虎姫ちゃん……！」
確かに虎姫ちゃんも、パーティに行くと言っていたけど……
特に恵美ちゃんのグループ（この考えをしたのもすごい久しぶりだけど）だった人は、みんな部活があるんじゃ――
「大丈夫ですよ優子さん。皆さん、今日のパーティに関しては部活の顧問に事情は話していますから」
龍香ちゃんが説明してくれる。
ちなみに、高月くんを始め、クラスの男子の大半は不参加だという。
まあ、浩介くんといちゃつくのを見るのは、とても辛そうだものね。
クラスの男子が辛いと分かっていても、やっぱりどうしても浩介くんといちゃついてしまうのは、多分、抗いがたい「オスとメスの本能」なんだと思う。

キーンコーンカーンコーン
やがて、昼休みが終了間際になる予鈴が鳴ると、午後の授業に向けて、一斉に準備し始めた。

「はーい、帰りのホームルームを始めます」
永原先生から帰りのホームルームで連絡事項。
今日は久々に不審者情報が発せられた。
治安は悪くないんだけどねこの辺は。
「それでは連絡事項を終了します。石山さんの女の子1周年記念パーティに参加する方は、くれぐれも道中気をつけてください。では解散」
永原先生がそう言うと、みんな一斉に帰り支度をする。
「優子ちゃん、一緒に行こう」
「うん。行こうか」
結果的に、あたしのクラスの女子は全員参加。それに伴って小谷学園の女子17人が一斉に下校することになった。
浩介くんはというと、僅かに参加するクラスの男子や、天文部の男子を引き連れての引率役を買って出てくれたので、あたしとは別行動になる。

「そういえばよお、こうやって女子全員で下校するっていつ以来だ？」
「うーん……あまりなかったよね」
恵美ちゃんと桂子ちゃんが、下校中そんな話をする。
確かに、あたしのクラスは元々は2つのグループで分裂していたし、もう和解後になって久しいとはいっても、17人もいればそれぞれ事情があるから一斉に下校なんて難しい。
「ほら、去年の夏休み前ですよ、林間学校直前の時に一斉下校しましたよ！」
「ああ！　あったなあ！　ハンバーガー屋で食べたっけ？」
龍香ちゃんの言葉に、恵美ちゃんがはっと思い出した様に言う。
「はい……確かあの……あの店で食べたと思います……」
さくらちゃんが、例のハンバーガー屋さんを指差す。
久しく入っていなかったけど、あたしも今度、休み時間に食べてみようかな？

最も、今は母さんと「お義母さん」が用意してくれたパーティの食材があるから、ここに立ち寄る必要はないけど。
あたしたちは通学路を進み、駅に到着する。
「みんなチャージしたー？」
「うん」
一応みんな会場の最寄り駅は知っていたけど、あたしが一応確認をする。
会場の駅についてからは、複雑な地下道を歩かなきゃいけないので、あたしが事実上の引率役だ。
協会の本部については、あたししか来たことがない。
浩介くんは……大丈夫かな？
ま、迷ったら永原先生かあたしに相談してくれると思うわ。
「そういえばよ、優子は協会で正会員やってんだろ？」
「うん」
恵美ちゃんが協会のことについて聞いてくる。
今まで、学校のみんなはあまりあたしの協会での仕事について聞いてこなかったから、結構新鮮だ。
「やっぱ学業との両立は大変か？」
「ま、まあね。でも、忙しい時とそうじゃない時とあるから、あんまり問題じゃないわ」
幸子さんの対応に追われた時は、かなり大変だったけど、今は落ち着いている。
「そうか」
電車は、あたしの最寄り駅を超え、役所の最寄り駅を超え、一気に本部への乗換駅に近付いてきた。

パーティドレス

「そう言えば、確かに優子ちゃんの協会での仕事、詳しく聞いてないわね」
「カウンセラー、しているんですって？」
「え、ええ……」
恵美ちゃんの話に、今度は桂子ちゃんと龍香ちゃんも乗ってきた。
幸子さんのことは確かに軽く触れる程度だった。
「ねえ優子ちゃん、その子どんな感じだったの？」
「うーん、どれくらい説明すればいいかなあ……個人情報とかもあるから」
クラスのみんなには、「最初こそ危険だったけど、今は安定している」とだけ伝えていた。
「で、今はそいつ、何してんだ？」
「うん、大学うまく行っているって。この間協会にも入ったのよ」
幸子さん、とってもかわいいから、見たらみんな驚くと思うわね。
「へー、正会員？」
「ああいや、あたしは特別。だから普通会員だよ」
そう言えば、正会員のことも、あんまり詳しく話してなかったわね。
「そ、そうか……で、やっぱそいつも美人なのか？」
「うん、あたしに負けないくらいね」
正直うかうかしてると追い抜かれそうな程度には。
「お、おい……！　優子に負けないくらいって、そりゃ相当だな……」
恵美ちゃんがやっぱりとても驚いている。
それだけじゃない、あたしの近くに居て、あたしの話を聞いていた女子のみんなも驚いている。
「次は――」
「あ、次で降りるわよ」
車内のアナウンスを聞き、降車駅であることを確認したあたしがみんなに注意を促す。
女子のみんなは、それぞれ雑談に講じていたけど、あたしの注意喚

起にみんながあたしを注目してくれる。
「さ、ここから乗り換えるわよ」
電車のドアが開くと同時に順序良く降りて、電車から全員が降りたのを確認してからあたしが言う。
「「はーい！」」
クラスのみんなが元気よく返事し、あたしは先頭に立って地下通路を通る。そう言えば、協会に制服姿で行くのは初めてかな？
あたしは乗り換え路線に向けて、みんなを誘導する。
みんなもあたしについてきてくれる。
何だかあたし、引率の先生みたい。
そういえば、文化祭のときの永原先生も制服姿だったけど、何だかその時に何となく似ている気がするわ。
「ねえ、優子ちゃん」
「うん？」
集団の先頭を歩いていると、横で歩いていた桂子ちゃんが話しかけてくる。
「４９階からの長めってどんな感じ？」
「うーん、確かに遠くも見えるけど、近くの超高層ビルの威圧感もすごいわよ」
「そ、そうなの。楽しみにしてるわ」
ともあれ、乗り換え先の路線のホームに立ち、電車を待つ。
みんな、「非日常」の鉄道とあって何処かそわそわしている。
鉄道って不思議よね、普段使ってる区間は見飽きた「日常」なのに、そこからちょっとでも出ると、「非日常」の世界になっちゃうんだから。
そう言えば、海の時も同じ風に思ったっけ？
でも、今のあたしには、この区間も「日常」の一部でしかない。
乗り換えてから協会本部の最寄り駅へは意外と近い。
予め最寄り駅は伝わっていて、今度は乗り換えについて掛け声を上げずに降りる駅で降りてくれる。

「じゃあ、改札を出るわね」
１７人が一斉に改札を出るというわけではなく、何回かに分ける。既に通り終わった人は、周囲の迷惑にならないように、開けた場所に一旦集まる。
「優子ちゃん、どこ？」
全員が集まると、早速クラスの女子の一人があたしを頼ってくる。
「えっとね、Ｎ４番出口だから……」
あたしは、口でいうよりも身体を動かして誘導した方がいいと思い、いつものルートを進み続ける。
クラスの女子たちも、普段あまり来ないこのビジネス街に、ワクワクしている。たくさんのビジネスマンが忙しなく歩いていて、何だかあたしも落ち着かない。

「はいこのビルよ」
「うわあ、でけえなあ……こんな所に入居してんのか」
あたしが協会の入っているビルの前に立ち、紹介をすると、恵美ちゃんが開口一番に驚嘆の声を上げた。
「いやほら……４９階っていうくらいだし、そりゃあ大きいタワーでしょ」
桂子ちゃんが身もふたもないツッコミをしてしまう。
「さ、ここで立ち止まってると邪魔になるから中に入るわよ」
「「はーい！」」
あたしは、まずロビーに入る。
みんなもついてくる。
「うわあ、でけえ……」
「それに人もいっぱいだよ……」
確かに、あたしもそれには驚いた。
平日ということや、時間帯もあって、サラリーマンたちが忙しなく動いている。
あたしはこれまでも休日しかここを訪れたことはなかったから。
低層用、中層用、上層用、そして最上層用の各エレベーターも、か

なりの人数が行き交っている。
まさに東京を象徴する光景だ。
そんな中で、あたしは最上層用のエレベーターを目指し、みんなを誘導する。
スーツ姿のサラリーマンとＯＬが数多くいる中で、女子高生１７人の集団はどうしても悪目立ちしてしまう。
みんな奇特な目であたしたちを見てくる。それは仕方ないと思う。
普段は、ビジネス用のビルだから尚更だ。
でも、あたしや桂子ちゃんへの視線はそれとも違う。
特にあたしの胸に対する視線はいつも通りね。
でも、優一だってあたしを見たら胸を凝視すると思うし。
「おお、これ、最上層用？」
「うん」
「５３階建てなんだな。２から４２までボタンがねえぜこれ」
最上層用エレベーターは、あたしたち１７人で一斉に乗り、他の人は乗っていない。
まあ、乗り辛い空気ではあると思う。
むしろ積極的に乗ったらなんかそれはそれで怪しい気がするわ。
全員がエレベーターに乗ったことを確認して、あたしが「４９のボタンを押す」
「うおお、はええ……」
恵美ちゃんが驚いている。
他の女子も、エレベーターの液晶に表示される回数で驚きの声を上げている。
確かにあたしも最初は驚いていたわね。でも、そろそろ騒がれると困る。
「あの、平日で仕事してる人居るから、静かにしてね!!!」
あたしが、努めて大きな声で言う。
マナーは気をつけないと。
「おう、分かったぜ」
何とか恵美ちゃんも同意して、みんな静かにしてくれる。

「４９階です。　４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」
「おお、英語もあるんだな！」
恵美ちゃんが驚いている。
というか、いちいちオーバーリアクションな気がするわ。
ともあれ、あたし達は降りて、協会本部へ。
今日は平日だから入居中のビルで、仕事している人も居るので、静かに移動する。
パーティも、近隣への配慮のため、一番奥の遠い部屋でやるという。
「ちょっと待っててね」
　ピピッガチャッ……
「どうぞ」
あたしがカードキーを取り出して、ドアを開けてみんなを通す。
そして、全員が入り終わって最後にあたしが入る。
「うおー、このビルハイテクだなあ……」
「へえ、ここが優子ちゃんと先生がいる協会なのね」
ビルに入ると、さっきまでの沈黙が嘘のように、みんな協会本部の施設に熱中している。
確かに、女子高生がビジネスビルに入るなんて機会、普通ならそう滅多にないものね。
カードキーでドアを開けるのだって、新鮮なはず。

「いらっしゃい。小谷学園の皆さん」
「あ、比良副会長」
「「副会長!?」」
クラスの女子たちがはしゃいでいると、奥からあたしと外見年齢のあまり変わらない１人の少女が現れた。
その少女は御年１７７歳で協会副会長の比良さんだった。
あたしが「副会長」と呼ぶとみんな驚いている。
会長が永原先生だということはみんな知っていたので、つまり２番目に偉い人ということ。
……いや、あたしだってこの協会では偉い人には違いないんだろう

けど……何だろう四天王ならぬ正会員の中でも最弱って立場だし。
「はい。日本性転換症候群協会副会長で、元水戸藩士の比良道子よ」
「え!?　比良さん……水戸藩士だったんですか？」
　比良さんが水戸藩士だと告げると、今度は時代劇好きのさくらちゃんが食いついてくる。
「ええ」
「も、もしかして黄門様とかとも……」
「あはは、私の身分じゃ無理よ。それに、私が生まれたのは例の時代劇の『水戸黄門』よりもずっと後だし、それにあの黄門様は虚像よ」
「そうですか……」
　比良さんに、あっさり否定されてしまう。
　永原先生は本物の水戸黄門とも面識あるみたいだけど、そのことについてどう思っているか聞いてみたい気もする。
　あーでも、藪蛇かもしれないから辞めておこう。
「比良さんって……いつ頃から生きてるんですか……」
「あらあら、ダメよ女性に年齢を聞いちゃ！」
　比良さんがやんわりと咎めるように言う。
「あの……すみません……」
　さくらちゃんも、失言に気付いて素直に謝る。
「まあ、天保生まれとだけ言っておこうかしら？」
　あたしには年齢教えてくれたけど、まあ部外者だし、教えられるのはそのくらいでいいのかな？
　まあ、深く詮索しても仕方ないかな。
「とにかく、副会長の比良さん。あたしの事実上の上司だから、みんなもあまり失礼のないようにしてね」
「お、おう……」
「うん、分かったよ優子ちゃん」
　あたしは、みんなに注意喚起をする。
　みんなも、「あたしの上司」という言葉に、顔が引きつりながらも答えてくれる。
「いいのよ。皆さん部外者でしょ？　まあ、一般会員になってもらい

たい所ではあるけどね。会費が要るけど」
　でも、比良さんは暖かく迎えてくれる。
「さ、会場へ案内するわ。石山さんはお母さんがお呼びだからこっちの部屋へどうぞ」
「は、はい……じゃあみんな、ちょっと失礼するわね」
　あたしは、比良さんに導かれ、みんなと別れる。
「そういえば、浩介くんたちはどうしてます？」
「ええ、既に来ているから心配ないわよ。永原会長と一緒だったわ」
　別行動ということで心配だったけど、どうやらうまく行ったみたいね。
「そ、そう……」
「はい、ここです。では、私はこれで」
「はい。ありがとうございました」
　比良さんが、おそらく会場と思しき部屋へと去っていく。
　それを見届けたら、あたしは比良さんに指定された部屋のドアに向き直る。
　コンコン
「はーい！」
　扉をノックすると、そこから聞こえてきたのは母さんの声。
　部屋に入ると、母さんが待ち構えていた。母さんは、パーティということでいつもとは違い、化粧も濃く、かなりおめかしをしてきていた。
　年齢的に痛いと言ってはいけない。意外とおばさんにしては似合ってるし。
　そして、部屋の片隅には、どこかで見たドレスもある。
「さ、優子。今すぐ制服を脱ぎなさい」
「え!?　い、いきなり何……!?」
　母さんの突拍子もない唐突な発言に、あたしは思わず後ずさりして両腕で胸をガードする。
「何って、今日はせっかくの晴れ舞台でしょ？　いつもの制服じゃつまらないじゃない」

「うっ……た、確かにそうかもしれないけど……」
母さんのおめかしぶりを見ても、確かにそれは言えるけど、でもいきなり服を脱げって言われても困るわよ。
「ほら、パーティーでお洒落しない女の子なんてお母さん許しませんよ」
「わ、分かってるわよ」
でも、オシャレってまさか!?
「ね、ねえ母さん。もしかして何だけど――」
あたしは、部屋の片隅に置いてあったドレスに目配せをする。
「そうよ、優子には、あのドレスを着てもらうわ」
「や、やっぱり!?」
確かに、晴れ舞台のパーティには、あのドレスはぴったしだと思う。
でも、うちにあんなのあったっけ？
「で、でもこのドレス……一体どこで――」
「やあねえ！　優子が女の子になった今からちょうど1年前に、デパートで買ったじゃない！」
「え!?」
母さんの言葉に、あたしはあの日のことを思い出す。
授業中に倒れて、翌日優子になって病院で目覚め、お医者さんと面談し、健康診断を受けて、そして母さんと一緒に永原先生との最初の面談を行い、その帰り道にデパートで服選びをした時の話。
この時、母さんは謎のハイテンションで色々な服を買った。
今でも、着ている私服の大半が、下着も含めてこの時に買ったもの。
思い出したわ。その中に、パーティー用のドレスもあったんだった。
「さ、優子、もう逃げられないわよ。さ、バンザイして」
後ずさりしつつ、壁に追い込まれたあたしに母さんが言う。
「じ、自分で出来るから！」
「ふふっ、今日ぐらいいじゃないのー、優子も女の子になったばかりは着るのに苦労したでしょー」

「そ、そうだけど……」
女の子になったばかりのあたしは身体の違いをはじめ、いろいろなことで戸惑ってたし。
「ささ、今日は優子も初心に帰るのよ。だから覚悟しなさい」
「ひー、もうお許しをー」
謎のやり取りをしつつ、あたしは母さんに制服を掴まれ、ボタンを外される。
あたしはあっという間にリボンとブレザーを脱がされ、大した抵抗もできずに腕を押さえつけられて脱がされる。
ブラウスの方もゆっくりとボタンを上から外されていき、ブラジャーに包まれた巨大な胸が露わになる。
「ふふっ、優子ってこんなに大きいのね。お母さん嫉妬しちゃうわ！」
「もうっ！」
観念したあたしはもう抵抗する気力もなく、なされるがままにブラウスを脱がされ、上半身をブラジャーだけにさせられる。
「さ、スカートも脱がすわよ」
「は、はい……」
あうう、改めてこう言われると、すっごく恥ずかしいわ。
母さんにあたしのスカートの両端を掴まれ、ゆっくりと降ろされていく、ある所まで来ると、手が離れてストンとスカートが地面に落ち、ブラジャーとお揃いのパンツが露わになる。
「あらあら、ちゃんと揃えてたのね。関心しちゃうわ」
「う、うん……母さんに、言いつけられてたから」
「ふふっ、教育した甲斐があったわ。もし揃えてなかったらお説教だったわよ」
あたしには、下着を上下で揃えたがるのは理解できなかった。
でも1年前のあの服選びの時に、母さんがどうしても「揃えなさい」と言って譲らなかったので、そのまま揃えるようにしていた。
このことは桂子ちゃんにも「揃えないのは女子力低いわよ」と言われた。
男子はあんまり気にしないと思ったんだけど、見栄えも確かに、揃

えたほうがいいのは確か。
「さ優子、これを着るわよ」
「う、うん……」
あたしは言われるがままに、パーティ用のワンピースのドレスを着る。というか、脱がすのはするのに着るのはしないのね。
肩が大胆に露出していて、ブラジャーが辛うじて隠れる程度。
肩の露出度が高い一方で、スカート丈は長めになっていて、更にドレスらしくフリルや飾りがあしらわれているデザイン。
いつの間にか後ろに回り込んでいた母さんに背中のファスナーを閉じられ、最後に母さんからネックレスを付けられた。
「あらあら。優子、白いドレス似合っているわ！」
「そ、そう？」
母さんが、真っ先にあたしの容姿を褒めてくる。
容姿を褒められるのには慣れてるけど、今回の褒め方はいつもと違う。
どちらかと言うと、女の子になったばかりの時の、初々しいあたしに対する褒め方だった。
「ほら、あそこに鏡があるわ。見てご覧優子？」
「う、うん……」
あたしは、母さんに言われるがままに、鏡の前に立つ。
「か、かわいい……」
そこには、かわいらしい女の子が、白一色のドレスを着て佇んでいた。
とても清楚で、ネックレスは真珠製で、これも白。
頭のリボンも白で、肌も白い。
服装など、身につけるものは清純な白で徹底しつつも、髪の毛は漆黒の黒さで、メリハリが付いている。
自分の姿を見て、「かわいい」と思わずつぶやいたのは久しぶりのことだった。もしかしたら、女の子になってばかりの時以来かもしれない。
晴れ舞台でのドレス。

浩介くんが見たら、きっと喜んでくれるわね。
「さ、優子。行きましょう」
「う、うん……」
あたしは、母さんに連れられて、本会場へと向かう。
パーティーが始まるまでは、まだ少し時間があるけど、準備の様子を、ちょっと見てみようと思った。

## パーティーが始まる

「あら、優子ちゃん。いらっしゃい。うわー、ドレス似合ってるわね」
「う、うん……ありがとう……」
本会場について、早速「お義母さん」の歓迎を受ける。
「うわあ、石山さんすごい綺麗よ」
今度は永原先生が声をかけてくる。
「ありがとうございます……先生も似合ってますよ」
「ふふっ、どうもありがとう」
永原先生はと言うと、あたしのドレスが超地味に見えてしまうくらい、かなり目立つ服を着ている。
ピンクのスカートの丈は短く、上は白いケープにハート型の黄色いリボンをした水色の服を着ている。
袖からはピンク色の素材が見えているので、おそらくピンクのワンピースの上に水色の服を着込んでいるんだと思う。
頭にもカチューシャと黄色のハート型のボタンを付けている。
その少女趣味がかなり強調された服のためにいつもよりも、幼く見える。ただ一点だけ、この服は永原先生みたいにセミロングの黒髪よ（あたしほど深い黒じゃないけど）りも、ショートヘアー向けかも？
多分、子供料金が使えると思う。あたしも今度、着てみたいわ。
もし機会があったら、買ってみようかな？
「うおー、すげえな優子、見違えたぜ」
恵美ちゃんがあたしのドレスを褒めてくれる。
「わー本当ですねえ。高そうです……」
「優子らしいよな。黒い髪に白い服」
「うんうん」
恵美ちゃんと龍香ちゃんの声とともに、クラスの女子のみんなが駆け寄ってくる。
ちなみに、クラスのみんなは制服のままパーティーに参加するみたい。
あたしのドレス姿は、似合ってはいるんだろうけど、いつもの制服

姿の女子たちに混じると浮いているのもまた事実。
「でもよ、先生が一番目立ってるよな」
「うんうん、ボタンに髪飾りまでハート型ってびっくりですよ……似合ってるのがまた悔しいですね」
恵美ちゃんと龍香ちゃんがそんなことを話している。あたしの服の話題から、一気に永原先生の服の話題になる。

「うおっ、優子ちゃんかわいいなあ」
「こ、浩介くん！」
女子の輪が解けると、今度は男子の番。浩介くんが早速あたしのドレスを見に来てくれる。
「やっぱ優子ちゃんって白が似合うよなあ」
「篠原先輩さすがです。俺もそう思ってたんですよ」
天文部の後輩の男子たちが、それに続く。
「もしかしてさ、パンツも白とか？」
「ちょっ……！」
天文部の男子が、あたしにセクハラをして来る。
不快感よりも、浩介くん以外からの攻撃を予想してなかったために驚きの感情が大きい。
「こらあ！　俺の彼女だ！　セクハラすんな！」
「ひぃ、すみません」
「おい、今のはお前が悪いぞ」
でも、こうやって浩介くんがかっこよくあたしのために怒ってくれる素敵な姿を見せてくれるから、ついつい許しちゃうのよね。
あ、ちなみに今日は水玉模様だったり。パンツも含めて純白の方が良かったかな？
「ふふっ、やっぱり優子は人気よね」
母さんが何の気なしに、つぶやくように言う。
確かに、いつでもあたしは人気者だと思う。
「うん、なんだかアイドルみたい」
「あら、アイドルは恋愛禁止よ」

母さんの当然の突っ込み。
でも確かに、女の子になってから、浩介くんと恋愛している期間の方がもう長い。
アイドルは当然無理だ。
それでも、彼氏が出来てからも、あたしへの注目度は高い。
去年のミスコンだって、ギリギリ「友達」のままながらも、事実上彼氏同然だった浩介くんがいることはみんな知っていたけど、普通に優勝できた。
今年の文化祭、どうなるのかな？
そんなことを考えている間にも、会場には人が集まってきて結構な人数が参加してくれている。協会本部なので、見知った顔もいる。
おそらく、大半は「あたしの1周年を祝う」というよりも、「折角のパーティーなので、ちょっと参加してみよう」という動機での参加だと思う。
パーティーの開始まで、まだ結構時間がある。
すると、参加者の多くが突然「おー」と歓声を上げた。
あたしは、歓声のした方向へと首を向けてみる。
そこには、蓬莱教授が歩いていた。
よく見ると、もう一人、蓬莱教授よりも若い男性もいる。
「うおお、すげえ、ノーベル賞学者で、不老研究の蓬莱教授じゃねえか！」
開口一番は恵美ちゃん、かなり興奮しているみたいだわ。
……って、よく考えたら恵美ちゃんってミーハーな気もするわね。
「あれ蓬莱教授」
「お、蓬莱教授だ」
小谷学園の生徒を中心に、感嘆の声が上がる。
あたしや浩介くんは、何度か会っているから感覚が麻痺してるけど、蓬莱教授って実際には下手な芸能人よりもよっぽど有名人だったりするよね。
「ふう、石山さんこんにちは」
蓬莱教授は、まっすぐにあたしのところに寄って来る。

「あ、蓬莱教授、今日はわざわざありがとうございます」
「いいってことよ。俺としても、いくつか君と協会に中間報告をしたいところだったしね。渡りに船だよ」
「そうですか」
蓬莱教授はさっぱりとした冷静な感じで言う。
「とにかく今は、永原先生に言われた安全講習を守ってくれよ。君に死なれたら、計画が大きく傾いて、最悪頓挫しかねないからな」
「……はい、分かってます」
蓬莱教授が改めて注意して来る。
うん、確かに確率的に低いとはいえ、常に危険から身を守るための予防手段は取らないといけない。
「おっと、紹介が遅れた。こちらは瀬田博（せたひろし）さん。俺の助手で、佐和山大学でも助教をしてくれている」
「はじめまして。あなたがあの石山優子さんですか……」
「ええ、よろしくお願いします」
「こちらこそ」
瀬田さんはどこか落ち着かない様子であたしを見ている。
胸を凝視しているわけじゃないけど……
「さて、行こうか」
「はい」
蓬莱教授が、あたしから離れていく。
その先には、永原先生がいた。
「……あら、蓬莱先生、来てたんですね」
「ああ。楽しそうだったからな。最近は研究だけでなく、マスコミどもの対策もしなきゃならん。そのせいで疲れがたまってな。少し休まにゃならん」
「大変ですね」
「ああ。それにちょっと研究が遅れ気味でな。助手を募集中何だが……よさそうな人材はまだいないみたいだな」
永原先生と蓬莱教授が話し合っている。
蓬莱教授のニュースをやらないとはいえ、記者は常に何かを狙って

いる。
厳戒態勢の維持も、疲れるという事だろうか？
蓬莱教授は、永原先生の私服には何も言ってこない。見慣れているのかな？
「さて、優子、そろそろ時間よ」
「あ、本当だわ」
母さんの指摘で時計を見ると、パーティーの開始まで残り１分になっていた。
あたしは、そそくさと会場の最奥に設けられた小さな即席の台へと上がる。
台にはマイクがついていて、あたしの高さにあらかじめ合わせてあった。
すると、ざわついていた会場も、「あ、もうすぐみたい」といった会話と共に、段々と静まり返ってくる。
あたしはもう一度時計を見る。
開始まで残り２０秒……１０秒……３……２……１……
「えー皆さん、本日は、あたし石山優子の女の子としての１歳の誕生日パーティーにご参加くださいまして、誠にありがとうございます」
参加者全員が、あたしの方を向き、あたしのスピーチに集中している。
「多くの皆様に支えられまして、あたしは無事、この１年を乗り切ることができました。今後とも、女の子として、至らない点はまだまだ沢山あると思いますが、皆様には変わらない支えをお願いいたします。ご清聴ありがとうございました」
パチパチパチパチパチ……！
あたしがスピーチを終え、お辞儀をしていると、会場の参加者か参加者から、割れんばかりの拍手が巻き起こる。
あたしが台から降りると、入れ替わりに、ジュースのコップを持った永原先生が台に上がり、身長に合わせてマイクの高さを低くする。
「えー、皆さん私のことは知っていると思いますが改めて。小谷学園

で石山優子さんの担任をしておりまして、また日本性転換症候群協会会長でもあります永原マキノです。石山さんは学園でも協会でも、数多くの活躍をして来ました」
永原先生がスピーチをしている間、あたしは急いで空いている場所を見つけそこに収まる。
コップには、既にジュースが注がれていた。
「精神的に負担の大きいこの病気は、とても自殺率が高く、また女の子として生きる決意をし、心まで女の子になった後でも、男への未練は強く残るケースが大半です。しかし、石山さんは違いました。自分から強く女の子になろうとしていました」
うん、そのことで、みんなに褒められた。
「それは、彼女の過去への嫌悪感もありました。ですが何よりも、彼女自身の強い気持ちによるものです。今後とも、石山優子さんを、よろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました」
パチパチパチパチパチ……！
永原先生のスピーチが終わり、お辞儀する。
でも、永原先生は、台からは出ない。
「では、石山優子さんのもう一つの誕生日をお祝いして、乾杯！」
「「乾杯ー！」」
永原先生の掛け声と共に、周囲も一斉に乾杯をする。
あたしも、周囲の人と乾杯をする。
すると、あたしと乾杯した人に見知った顔が見えた。
「乾杯ーって、幸子さんじゃない！」
「今晩は石山さん」
幸子さんは、水色のワンピースを身に纏い、頭にも青い大きなリボンを付けている。
幸子さんの場合、髪の色も水色なのでとても涼しそうな外見をしている。
最も、胸元のリボンだけは、赤にしていて、またスカートの裾や服の袖や胸元の部分も白い色にもなっているのでしつこさは無い。スカートの裾の部分の青と白の境界線が山のようにギザギザになって

いて女の子っぽさがマシている。
　あたしの白を基調としたドレスにも、決して負けていない輝きを放っている。
「遠いところからはるばる、ありがとうね」
「うん、会長さん副会長さんが来るっていうし、私も会員になったから、少しくらい挨拶しとかないとと思って」
「大学は大丈夫なの？」
「ああうん、今日は元々午前中だけだよ」
　幸子さんが不思議なことを言う。
　午前中だけってどういう事だろう？
「午前中だけ？」
「ああうん、大学の時間割は自分で作るんだよ」
「へー、そうなんだ」
　なんか不安だわ。時間割を自分で作るなんて。
「おや、君は？」
「あ、蓬莱教授！　うわあ、本物だー」
　蓬莱教授が声をかけてきた。
　すると幸子さんも感嘆の声を上げている。
「いかにも、俺が蓬莱伸吾。俺のことは、既にニュースで見て聞いて知っているとは思うがね」
「はい、私、塩津幸子といいます。女の子になったばかりで……石山さんにカウンセラーを頼んでます」
　幸子さんが興奮したように言う。やっぱり有名人だ。
「ほう、すると君もＴＳ病なのか」
「はい、去年秋に……今は東北で大学生してます」
「うーむ、そうか東北かあ……」
　蓬莱教授は何か熟考している。
　大方、あたしと同じように遺伝子を提供できないか考えているのだろう。
「あ、私文系なんで、蓬莱教授の役には立てないです。ごめんなさい」
「ああいや、遺伝子の提供だけで十分だよ」

確かに、それはその通りだけど。
「うーん……」
「ああいや、無理にとは言わないよ。引き止めて悪かったね」
「ああいえ、それはこっちのセリフです」
幸子さんが慌ててフォローしてくれる。
「さ、石山さん。俺の研究のことだがな」
「は、はい……」
研究に関する報告だろうか？
「どうやら、例の牧師が中心になって、学会から俺を追放させる活動をし始めたんだ」
「え!?」
蓬莱教授を追放？　なんかとんでもない話な気がするわ。
「もちろん、今は取るに足らない運動だ。何だかんだで、俺の不応研究は待ち望まれている。だが宗教を信じている連中は違う。存在もしない神などというものを信じ込み、俺をそれの冒涜者だとでっち上げているのだ」
蓬莱教授は少しだけ厳しい表情で言う。
「だから、今後も宗教界には注意してくれ。人は宗教にのめり込むと、根拠のないことを信じ込んで、殺人でさえ平然とするようになるんだ」
「はい、永原会長も、そんなことを言ってました」
いわゆる「善意」がためにブレーキが効かなくなることだとあたしは思う。
「ああ、だからこそ、宗教は道徳の支柱にするなど論外だ。だが残念なことに、それがグローバルスタンダードらしい。くそったれなこった」
蓬莱教授が吐き捨てるように言う。
この人は、宗教が絡むといつもこうだわ。
「ともあれ、君も怪しい宗教には注意してくれたまえ。俺の報告は以上だ」
「……はい」

蓬莱教授が別のテーブルへと去っていく。
あたしは、ジュースを飲み、大皿に盛り付けられていたポテトを取る。
「ねえねえ、いいじゃん、名前教えてよ。この後もちょっと付き合おうぜ」
「ああいやその……私……」
近くを見ると、幸子さんが天文部の男子にナンパされていた。
うーん、助けてあげたいけど、危険という感じじゃないし、幸子さんの教育のためにも、ここはあえて無視しておこうかな？
「何？　固いこと言わないでさ、俺達と一緒に遊ぼうよ」
「いえその、私……東北から来たんで……」
「へえ、そんな遠くから！　でもよ、いいじゃねえか」
「ダメですよー！」
本当にがっつくわね。恋愛に飢えすぎでしょ。
それにしてもふふっ、幸子さん、久々にあたふたしてて面白いわ。
でも頑張って。
今後彼氏ができた時にもきっぱり断っておく手法を学んでおくといいわ。
「ふふっ、ちょっとだけさ、話を聞くだけでいいから、ね！」
「くおらあ！　何ナンパしてんだあ！」
「げえ!?　田村先輩！」
恵美ちゃんが、助け舟を出す。
うん、そういうのを待つのも悪くないわよ。
「ったく。大丈夫か？」
「は、はい……」
恵美ちゃんと幸子さん、何かすごい珍しい組み合わせよね。
知り合いの知り合いだけど。
「おや、この子、優子や桂子に負けねえくらいかわいいな。服も似合ってるし」
「はい。私、石山さんにはとてもお世話になりました」

「ほう、優子にか。どう世話になったんだ？」
「私、石山さんのおかげで命を救われました」
ちょ、ちょっと幸子さん、間違ってないんだろうけど、それはちょっとまずいわよ。
「ええ!?　命を!?　ゆ、優子何をしたんだ……」
案の定、恵美ちゃんが驚愕している。
仕方ない、あたしが割り込むしかない。
「恵美ちゃん、幸子さんは、去年の秋にＴＳ病になって、あたしがカウンセラーを担当したのよ」
「石山さんがカウンセラーになる前、私は男に戻ろうと……今思えばあまりにも愚かなことでしたが……そう思ってたんです」
「なるほどねえ……確かにＴＳ病になると女として生きてくしかねえもんな」
「それにしても、あなたは石山さんの――」
「おっと、自己紹介が遅れたな。あたいは田村恵美。優子のクラスメイトだ」
恵美ちゃんが、自己紹介してないことを思い出し、慌てて自己紹介をする。
テニスのことは自己紹介しないのね。
「塩津幸子です。東北で大学生してます。よろしくお願いします」
幸子さんが上品に頭を下げる。
「え!?　あたいたちより年上だったのかよ!?」
恵美ちゃんが驚いている。
「はい、この前、２０歳になりました……確かに私は年上ですけど、ＴＳ病という意味では、石山さんが先輩ですし、何より、色々教わりましたから」
「あ、ああ……そうだよな」
体育会系の恵美ちゃんにとって、年上がここまで尊敬するっていう環境はあまり馴染みがないのかな？
あたしは幸子さんもだし、場合によっては永原先生からさえある種尊敬されることもあるんだからよくよく考えるとすごいことよね。

「それにしても、豪快な人ですね」
「おうよ。あたいのポリシーさ。ま、実は最近になって少し女らしくしてえなあって思うんだけど」
恵美ちゃんは、あたしや桂子ちゃんに刺激されて、女子力を高めたいと思っているみたいだけど、いつも三日坊主で終わってしまう。
一回堕落したら這い上がるのは難しいということね。くわばらくわばら……
「幸子さん、わかってると思うけど、ＴＳ病患者は土台が不安定だからね。恵美ちゃんみたいな生き方したら絶対ダメよ」
「わ、分かってるよー」
うーん、幸子さん、もう少し言葉遣い女の子にならないかしら？
ショートカットの髪を長くするといいと個人的には思うけど、まあロングはロングで手入れ大変だものね。
まあ、どちらも、幸子さんにはまだ先のことかな？
ともあれ、パーティは続いていく。まだ話し足りない人もたくさん居るし、主役らしくしないとね。

# 友達の友達の交流会

「おや、石山さん。こんばんは」
あたしが一息つき、パーティーの食材を食べていると別の男性が声をかけてきた。
振り向いてみると、あの時取材に来た高島さんだった。
「高島さんも来ていたんですか」
内心やや動揺しつつも、努めて冷静に言う。
「ああ。永原会長からここに取材に来ないかと誘われてね。もちろん、記事は簡素にしておくよ」
「へえ、永原会長がですか!?」
協会の姿勢として、あれだけマスコミ嫌いを貫いてたのに。
いや、だからこそかな？
「ああ。それで、我が『ブライト桜』が協会の報道を完全独占できることになったんだ」
「確かに、そんなことを言ってましたよね」
独占取材をさせることで、うまく切り抜けるという作戦。でも、一個だけ不安なことはある。
「おかげで、私も随分出世しましたよ。あなた方に関する報道は、全て私が全権を握ることになりました」
「それは良かったです」
「最も、『上層部が横槍を入れない』というのが、永原さん側の条件でしたが」
あー、やっぱり対策考えてたのね。
さすがは永原先生。
「おや、高島さん。いらっしゃい」
「比良さん。こんばんは」
高島さんに、今度は比良さんが声をかけてくる。
本当にこのパーティ、次から次へと人がくる。
どうやら、高島さんと比良さん、面識があったみたいね。
「比良副会長、高島さんのことご存知でしたか」

「ええ。私としても既存とは全く違うメディアという事で、期待していますよ。もちろん、ある程度会長の意向も汲んでますが」
比良さんによれば、これも永原先生の策略だという事。
「会長は真田家の人ですから、何かあると思ってもいいでしょう」
「ええ」
「我々と致しましても、こんなに大きな取材対象を独占できるんですから、とても大切にしていきたいですよ」
高島さんは、相変わらずだ。
良く言えば丁重な扱い、悪く言えば腫れ物にさわるような扱い。
「あれ？　石山さん、副会長さん、そちらの人は？」
今度は、幸子さんがあたしたちに声をかけてきた。
「ああ、塩津さん。こちら高島さんで、私たち協会を取材する専属メディアの方です」
「はじめまして、『ニュースブライト桜』の高島です」
「日本性転換症候群協会普通会員の塩津幸子です」
幸子さんと高島さんがお互いに頭を下げて挨拶する。
また結構面白い組み合わせが実現したわね。
「普通会員と言いますと、あなたも？」
「はい、石山さんと余呉さんにとてもお世話になりまして」
「ほうほう、石山さんに、ですか？」
高島さんが不思議そうな目で見る。
確かにあたしはまだ高校生だし、誰かにこんな風に感謝される高校生なんて滅多にいないだろう。
「はい。実は私、石山さんに出会う直前には、性別適合手術を受けようとしてまして」
幸子さん、確かにそんなことを言っていたわね。
「その手術を受けるというのはどういうことですか？」
「はい、自殺が近い証拠です。この手術を受けても、今までのような男を取り戻すことなんて不可能だって、石山さんも、会長さんも言ってました」
性別適合手術のことは、あの時の取材にもちょっとだけ出た話題。

「それはどういう事ですか？　あ、ちなみにこれは記事にはしない。オフレコですよ」
　高島さんは、メモも持っていない。
　記者としてというより、一個人として単に好奇心から聞いているという感じ。
「私から説明しますね」
　比良さんが、口を挟んでくる。
「はい」
「性別適合手術を受けても、今までの男性の生活を取り戻すことはできません。外見が似るだけですから」
「元の男性の身体との大きな違いというのは何でしょう？」
「生殖能力が無くなることです。今までのように精液が出るわけではないですから」
　比良さんみたいな「少女」の口からそう言う言葉が出るとやっぱりドキッとするけど、言いかけも出来ないものね。
「それはやっぱり大きな苦痛ですか？」
「言うまでもありません。ＴＳ病患者はなまじ完全な男性だった身体を知ってますから、この手術を受けても、『自分がもう二度と男に戻れない』という事を再認識するだけですし、一度この手術を受けてしまえば、今更女として生きることも出来ない。だから、自殺するんです」
　比良さんが淡々と説明する。
　いずれにしても、自殺の道ということ。
「そう言えば、この前倒れた子はどうなりました？」
　あたしが、何の気なしに聞いてみる。
「状態は良くないですよ。『今の時代中途半端でもいい』といって聞かなかったみたいで……あろうことか男子の制服のまま学校に通い始めて……結果案の定いじめに遭って、保健室登校状態です。このまま考えを改めなければ、不登校になるのも……いえ、自殺の結末になるのも時間の問題でしょう」
「あちゃー、あたしがカウンセラー代わりましょうか？」
　あの時の幸子さんよりはまだマシだし、やれそうな気がするわ。

「ああいえ、石山さんが代わっても同じだと思います。石山さんのカリキュラムもやらせたんですが……効果が無かったみたいです」
比良さんが淡々と告げる。
そう、ＴＳ病はあたしにしても、幸子さんにしても、みんな桂子ちゃんレベルの飛び切りの美少女になる。
まあ、桂子ちゃんはＴＳ病の中に入っても美人の部類だと思うけど。
それはともかく、そういう女の子を強調した女の子になるから、中途半端に生きようとしても、必ず失敗するように出来ている。
女として生きていく。そのために、男の未練を捨てる。あたしたちにある道は、それしかない。
「体育の着替えはどうしてますか？」
「一応、男子女子とは違う場所で着替えているみたいですが、それがまたいじめの対象らしいです」
「あーあ、何やってんのよ……」
あたしは、思わずため息が漏れる。
「こういう事例はとても多いんですよ……昔の方が、まだ楽でしたよ」
比良さんがそう説明してくれる。
「副会長さん、どうしてですか？」
側で聞いていた幸子さんが質問してくる。
「ええ。昔なら、女性として生きていくしかないことを説明するのは楽でした。ですが最近は、なまじ中途半端が許されるようになったので」
「その道も結局、ダメなんですね」
高島さんは、その様に正しく理解してくれる。
「ええ、私たちは、純度１００％の女性です。それを無理矢理中間にしようとしても、男に無理矢理戻れないのと同様、結局うまくいきません」
比良さんがさっきよりやや強めの口調で言う。
つまり、比良さんが言いたいのは、「女の子として生きるしかない」という事をＴＳ病に成り立ての患者に示すのは、昔より難しいという

こと。
「最近では、ＬＧＢＴというのもよく言われてますが、そちらとの関連性はあるんでしょうか？」
　高島さんが追加で質問をする。
「私たちに、その手の団体や活動に参加するつもりは毛頭ありません。トランスジェンダーになろうとすると、私たちは精神を病んですぐに死んでしまいます」
　比良さんがきっぱりと断言する。
　やっぱり、永原先生が言っていたのと同じ。
「あくまで、一人の女性として振舞うと」
「はい。私たちは『完全性転換症候群』ですから」
　比良さんが、今度はにっこりと言う。
　このあたりの使い分けは、お手の物という感じね。
「ありがとうございます。今後の記事を書く上で、知識として取っておきます」
「ええ、お願いするわ」
　高島さんは、今度は蓬莱教授のところへ行く。
　幸子さんは、比良さんと何か話している。
　あたしはもう一度、恵美ちゃんのところへ行くことにする。

「いやー、これうめえな！」
「恵美、さっきから食べ過ぎ！」
「いいんだよ。あたいは日ごろからエネルギー使うんだから」
　恵美ちゃんが豪快に食べているのを、桂子ちゃんが眺めている。
「恵美ちゃん、たくさん食べるのはいいけど」
「ふぉ？　ゆうふぉ!?」
　恵美ちゃんが食べながら「お？　優子？」と言おうとしたんだろう。
　テーブルにも恵美ちゃんがこぼしたおかずが落ちていたり、随分と派手な食べっぷりだわ。
「お行儀悪いわよ」
「んっ……だってよお！　丁寧に食ってたら追いつかねえし」

「相変わらず、恵美は女子力がストップ安よね」
桂子ちゃん、何気にひどいこと言ってる気がする。
でもあたしも同意見。
「うんうん、幸子さんが真似しないように、よーく言いつけて、反面教師にしてもらったわ」
「ええ!? そんなー!」
恵美ちゃんが「そりゃないよ」って顔をする。
でも実際、あたしたちが女の子らしくない真似をしすぎると、こうやってどんどん堕落して、魅力も下がっていくのも事実。
「本当、恵美の『女子力高める宣言』ほど長続きしないのも珍しいわね」
「あうー、虎姫ー! 優子と桂子がいじめるー!」
恵美ちゃんが近くにいた虎姫ちゃんに泣きつく。
「いやごめん恵美、確かに恵美の『女子力高める』は3日坊主どころか3分間坊主だし」
呆気なく、虎姫ちゃんにも見捨てられてしまう。
「あうー!」
「恵美ちゃん、悔しかったら、まず面倒くさがらないことよ。テニスだって練習を面倒くさがったら絶対うまくいかないでしょ?」
あたしが恵美ちゃんを諭すように言う。
女の子歴は恵美ちゃんが17倍以上長いのに。
「うー」
恵美ちゃんは不平そうに唸っている。
「およ、優子さん、恵美さん、桂子さんに虎姫さんまで」
「あ、龍香ちゃん、こんばんは」
よく見ると、龍香ちゃんが立っていた。
ちょっとそわそわしている。
「いやー、賑やかですねえ」
「ええ」
「そう言えば、結構見かけねえ顔も多いよな」
考えてみれば、確かに今回のパーティーの参加者は色々な所から来ている。

小谷学園の生徒たち、3年1組は女子は全員参加しているし、天文部の男子もいる。協会のメンバーもそれなりにいて、この両者は永原先生を通して面識がある。
あたしの母さん、浩介くんのお母さん、また蓬莱教授や高島さんまでいる。
一見バラバラだが、ほぼ全員が、あたしと永原先生を介して繋がっている。友達の友達って、凄いんだわ。
あたしはそんなことを思いつつ、適当に食事を続ける。
すると、さくらちゃんがいつもと打って変わって、窓の外の夜景を眺めながら、楽しそうに雑談しているのを発見した。
「あ、優子さん……」
「さくらちゃん、こんばんは」
「お、今日の主役の石山さんか。こんばんは」
「こんばんは唐崎先輩」
去年卒業した野球部のエース、唐崎先輩はさくらちゃんの彼氏。
さくらちゃんは、極秘でこのパーティーに唐崎先輩を呼んでいたみたいね。
「さくらちゃんとは、あれからどうですか？」
「ああうまくいっているよ。そう言えば、史跡のデートを提案したの、石山さんなんだっけ？　ありがとう、さくらとの関係も深まったよ」
「そう言えば、唐崎先輩」
「ん？」
あたしは、唐崎先輩に一つだけ聞きたいことがある。
「野球部、あれから9人いなくなっちゃいましたよ」
「あはは、そうだろう。チームは散々俺のことコケにしてきたからな。いい気味だよ」
唐崎先輩はまったく気にしていないどころか、「ざまあみろ」と言わんばかりに笑い飛ばしながら言う。
そう言えば、ひどいあだ名付けられてたんだっけ？
「実はさくらちゃん、野球部にあんまり顔を出さないみたいで」
「あー、俺が指示してるからね。それに、人数少なくなり過ぎて、マ

ネージャーも必要なくなっちゃったみたいだしな」
唐崎先輩が言う。多分、さくらちゃんから状況を聞いているんだろう。
「石山さんは知ってると思うけど、男はとにかく女が絡むと嫉妬深いからな。さくらが俺に告白してきた時点で、ああなったのは自明のことだし、さくらは罪に思う必要はないって言ったよ」
「はい……私も、吹っ切れました」
さくらちゃんが笑顔を見せる。
その笑顔には、どことなく魔性を帯びている気がした。何だろう、さくらちゃんも、女の子として成長している気がするわ。
「ま、今は幸せだしいいんだよ。元々、あの学園の運動部南なんざ女子のテニス部とサッカー部以外、あってないようなもんだろ？」
「ま、まあねえ……」
運動部万年弱小の小谷学園。
まあ、文化部も強豪（？）ではないからどちらにしても、部活が不活発なのが小谷学園で、これも極度に自由な校風の副作用だろう。
「お、さくらに唐崎先輩じゃねえか」
「おや田村さん――」
恵美ちゃんが来たので、あたしはさりげなくその場から離れる。
これで一通り、会場をぐるっと一周したことになる。

「お、石山さん、また会ったな」
あてもなくブラブラしていて、まず声をかけてきたのは蓬莱教授だった。
「蓬莱教授、さっき高島さんと話してました？」
「ああ、ニュースブライト桜だろ？　俺も見てたんだ。しかし、協会は賢明な選択をしたな」
蓬莱教授が、協会の判断を評価する。
「どういうことですか？」
「あのメディアは既存のテレビ新聞からほとんど私怨同然に叩かれていてな。特に、ブライト桜が協会の取材をしてからは、それこそ親で

も殺されたんじゃないかって勢いだ」
「そ、そうなのね……」
　確かに、あれだけみんなが知りたがっている協会の取材を独占できるんだから嫉妬はされるとは思うけど、にしたって幼稚よね。
「だが、それ故に既存のマスメディアに対して不信感を持っている人々からの期待はとても高いんだ」
　なるほどねえ……
「特に、協会は既に既存のメディアから報道被害を受けている。そして、メディア封鎖を断行した。これによってな、インターネットでの既存メディアへの批判はすさまじかったんだ」
　蓬莱教授、本当に物知りよね。
　あたしの名前も覚えていたし、記憶力がすさまじいんだと思う。天才は違うわ。
「そんな所に、ブライト桜が協会への独占取材、更に君も知っているとは思うが君や永原先生の容姿がネット上で大いに話題になった」
「はい、あたしと永原先生のキャプチャー画像を使って、アイドルや女優さん、あるいはミスインターナショナルの優勝者を誹謗中傷する書き込みが相次ぎました」
　確かにあたしを持ち上げることだとは思うし、褒められたら自信になるけど、他人の誹謗中傷に利用されるのはあまり好きじゃない。
「あー、それはいいんだ。問題は君たちが『絶世の美女』といっていい見た目だったという事だ」
　蓬莱教授は、何かよくわからないことを言っている。
「えーっと、つまりどういうことですか？」
「インターネットは何だかんだで男性社会だ。つまり、マスゴミがよってたかって『かわいい女の子たち』をいじめていたと、映ったんだよ」
「そ、そうなんですか？」
　確かに、そう見えないこともないかもしれないけど、にしたって変な話だ。
「数年前、ウクライナがきな臭くなったことがあっただろ？　その時

にもロシア側は美人の検事をマスコミ向けに用意した。プロパガンダにおいて、美貌は重要なんだよ。現に石山さんだって、その美貌で、得したことは何度もあるだろ？」
「は、はい……」
確かにそう。みんなあたしに優しいし、ちやほやしてくれるし、浩介くんもかっこいいし、何よりミスコンで優勝しちゃったし。
「うん、私も何度もあるわよ。例えば、年齢をごまかせるとか」
「そういうことだ……おや永原先生」
永原先生が、話に割り込んできた。
「蓬莱先生、随分と話しかけられてますよね。石山さん以上じゃない？」
「まあ、俺は有名人だからな。それに、このパーティは小谷学園生が多いみたいだしな」
でも、みんな心なしか、普段あまりない組み合わせで会話している気がする。
幸子さんの方を見てみると、母さんと何やら盛り上がっているし、さくらちゃんは比良さんと何か話している。
天文部の男子たちは、桂子ちゃんではなく、あたしのクラスメイトのほかの女子と話している。
ナンパ目的もいるけど、龍香ちゃんの彼氏持ちに落胆している様子も見て取れた。
というか、うちの天文部の男子、がっつきすぎよね。
「蓬莱先生、先程の報告ですけど」
「あー、例の宗教団体か」
「ええ」
永原先生は、蓬莱教授よりも警戒している様子みたいね。
「何、永原先生の心配には及ばんよ。既に俺の方でも、資産家の支援者たちを囲い始めてる」
「……どういうことですか？」
「つまり、仮に俺が学会から追放されても、自己完結できる準備さ。支援者たちのお金も、幾つかは貯金に回している。佐和山大学から出て

も、研究所を自前で作り、実験もすべて自前で出来る。最も、それは最後の手段だし、そのためには、石山さんの協力が必要不可欠だがね」
どうやら、蓬莱教授は心配なさそうね。
「なるほど……分かりました」
永原先生も、それ以上は追及しないみたいね。
「それに、俺の方でも『ニュースブライト桜』に話を付けておいた」
「そうですか」
「ただし、俺の場合は独占じゃあない。だけど、好意的な報道をしてくれれば悪いようにはしないつもりだ」
つまり、取材の門戸を他のメディアよりも広くする。
高島さん、大手柄よね。
「さて、あたし、あっちの方に行ってみます」
「いってらっしゃーい」
まだまだ、パーティーは長い。もう少し、組み合わせを楽しんでいこう。

## パーティーの終幕

「あ、優子優子ー！」
　何の気なしにパーティーを歩いていると、今度は母さんに声をかけられた。
　よく見ると、母さんは幸子さんと一緒にいた。そう言えば、母さんと幸子さんは面識なかったっけ？
「なあに？　母さん」
「この子、すっごいかわいいじゃない。優子には負けるけど」
「むー、おばさん、一言余計だよー」
　幸子さんが可愛らしくふくれっ面を見せてくる。
「ごめんごめん。私も娘がかわいすぎてつい」
「あ、あはは……」
　あたしも、笑ってごまかすしかない。
　母さんのこの暴走癖、どうやって治そうかしら？
「それで、この子が優子の指導した子？　すごいわね」
「は、はい。まだ至らないところはあるけど、一人前の女の子目指して頑張ってます」
　幸子さんは、笑顔で言う。
　確かに、あたしの指導で女の子らしくなった幸子さんを見て、母さんが褒めるのも分かる気がする。だって、あたしに女の子らしさを教えてくれたのも、母さんだから。
　母さんの指導が、幸子さんの中にも生きているということ。
「それにしても、優子がこんな活躍をしていたなんてね」
「うん、実は林間学校で浩介くんが実行委員になったお陰で幸子さんが生きているんだ」
「……あーなるほどねえ」
　母さんは一瞬怪訝な表情を見せたが、その後真意を察したような振る舞いをする。
「どういうことですか？　林間学校？」
「幸子さん、それはね――」

あたしはこの前永原先生から言われたことを言い直す。
林間学校で実行委員に選ばれたことで、浩介くんと恋愛するのが早まり、そのために正会員に推薦され、幸子さんを助けられたこと。
そのことを、幸子さんは興味深く聞いていた。
遥か遠くの高校で行われた何気ない実行委員のくじ引きが、東北で幸子さんの命を救うことになったのだから。
「数奇な運命よねぇ」
母さんが、関心したように言う。
うん、あたしも、女の子になってから数奇な運命に翻弄された人生だと思う。
「お、確か君は――」
「あ、浩介くん」
よく見ると、浩介くんがあたしたちの方に近付いてきた。
「あれ？　そういえば、塩津幸子さんだっけ？」
浩介くんと幸子さんが会ったのはこれで２回目かな？
浩介くんにも、幸子さんのことは話していたし覚えてくれていたようね。
「はい。塩津幸子です」
「驚いたよ、初めて会った時はあんな態度だったのにもうこんなに女の子らしくなってるなんて……本当に見違えた」
浩介くんが驚いたように言う。
そういえば、幸子さんがあたしに突っかかろうとして、浩介くんに止められてったっけ？
「うん、やっぱりもう私、女の子だから。女の子らしくありたいと思うの」
「ふふっ、いい心がけね」
あたしが、幸子さんを褒めるように言う。
「ありがとう」
「そういえば幸子さん。サッカーはどうしてます？」
折角の機会だし、悟時代に打ち込んでいたサッカーについて聞いてみる。

「はい、今でもたまに女子サッカーのサークルには参加してますが……女の子としての女の子らしさを失わない範囲でしてます。女はやめたくないですから」
「うんうん、それでいいわ幸子さん」
「うん、やっぱり、男の子が男らしくあろうとするように、女の子だって女の子らしくあるべきだと思うの。女の身で男の得意分野で張り合っても、勝てるわけないもの」
　幸子さんは、ＴＳ病患者ならば誰しもが思うことを言う。
「お？　塩津さんもそう思ってるのか？　優子ちゃんも同じこと言ってたけど」
「……ええ。やっぱり、両方の性別を経験してみて、性差というものをはっきり認識しちゃいましたから。身体能力も落ちましたし、身体も小さくなって、男の頃よりもかわいらしくなりました」
　幸子さんは、自分が感じた経験をもとに、その結論に達した。
　あたしも、永原先生も、協会のみんなも、自殺してしまった人でさえ、この病気の患者はみんな同じ意見になる。
　それは、実際に経験してみないと分からないこと。
「かわいさを失ってまで、サッカーはしないということね」
「はい。ですが、やっぱり物足りなく思っていて、最近は足を運ばなくなりました」
「あら？　どうして？」
「どうしても、自分の体のことが嫌いになりそうな気がして。でも女の子らしくありたいと思った時に、思ったんです。『別にサッカーできなくてもいいじゃないか』って」
「ふふっ、その通りよ幸子さん」
　あたしは、ニッコリと笑う。
　もう心配いらないわね。じゃあ次のステップ。
「あたしね、以前恵美ちゃん……さっきの田村さんと話したことがあってね。別に女性でも強くなろうとするのはいいと思うのよ」
「え!?」
　幸子さんが驚いたような表情をする。

「だけどそれは、あくまで『女性の中で』よ。本気を出した男には絶対に勝てないわ。男と張り合おうなんて考えようとしたって、辛いだけよ。テニスだって、全国1位の恵美ちゃんは部活で毎日負けてるのよ」
　実際、あたしは通学中や帰宅中に、テニスコートで恵美ちゃんを見るけど、男子部員に勝った所なんて見たことない。
「全国1位の田村でさえ、その辺の男子高校生に全く勝てないのか。や、やっぱりテニスって男女差大きいのか？」
「うん、そうだよ浩介くん。高校で全国大会に出られれば女子プロともやりあえるし、大学生社会人なら女子のトッププロ……いいえ、女子の世界ランク1位より強いプレイヤーなんて、それこそ掃いて捨てるほど居るわよ。全女性で一番強くなっても、そのレベルなの」
　いつぞやのお泊り会での知識を活用する。
「ひえー、男と女ってそんなに違うのか」
　浩介くんが、かなり驚いている。
「うんうん、私も、男性の力というのを見ると本当にすごいと思うわ」
　母さんにも、心当たりがあるらしい。
「そうよ、サッカーなんかもそうよね？」
　あたしが、幸子さんに話を振る。
「ええ。女子サッカーをしてみて、元々レベルが低いのは知ってましたが、ピッチに立ったら、あたし自身の衰えも含めて、想像以上だったわ」
「で、サッカーはどうなんだ？」
「身体が接触するプレーもあるから、サッカーの男女差はテニス以上だよ。例えば、女子の世界大会で優勝するようなトップチームでも、中学生チームに散々な負け方をしたこともあったんだ」
　やっぱり幸子さん、サッカーを語らせると強いわね。
「私も悟だった頃……高校生の時に1回戦敗退ながらも全国大会に行きましたし、大学の頃にはキーパー以外のポジションなら、どこをやっても女子の誰よりもうまい自信がありました……最も、男子大学生でしたから、それは何の自慢にもならないけどね」

「もしかして、俺も今からサッカーやればそう言う状態になれるかな？」
「今からはねえ……でも、本気で練習すればそう長くない時間で追い越せると思うよ」
「そ、そうか……」
幸子さんの話に、浩介くんも頷く。
「6月の球技大会もどうなるかなあ」
「テニスはハンデ付けても恵美ちゃんの優勝よねえ」
3年の球技大会はテニスがあって、テニスは実力差が出やすいスポーツなので、頻繁にハンデが定められている。そうしないと、一方的な試合になりがちだからだ。
でも、全国一位の恵美ちゃんレベルで強いと、ハンデの付け方もかなり難しいはず。
「田村さんすごいですよねえ。高校生女子で全国一位、しかも決勝で6—0とか平然とするくらいの」
母さんも、関心したように言う。
「それでも、うちの弱小テニス部の男子部員より弱いのよ。だから、男と張り合ってはいけないということよ。幸子さん、女の子はね、別に弱くてもいいのよ」
「うん。以前にもそう教わったよ」
良かったわ。これを覚えておけば、大丈夫。
「ふうー。つまり、男の俺は強くならなきゃいけねえってことだよなあ……本当、男は世知辛いったらありゃしない」
浩介くんが、愚痴をこぼすように言う。
「でも、強くなればあたしみたいに女の子が寄ってくるわよ」
あたしが、浩介くんの腕を絡め、腕にちょっとだけ胸を押しつける。
「いよし！　優子ちゃんに喜んでもらうために、強くなるぞー！」
「うんうん、浩介くんはそれでいいわ」
浩介くんは、男特有の、信じられないような単純脳でやる気満々になる。
でも本当、かっこいいんだから。

「あ、いいこと思いついた」
　幸子さんが、何かに閃いたように言う。
「ん？　どうしたの幸子さん？」
「あのね、石山さんの彼氏さん、すごい鍛えているんでしょ？」
「ああ、毎日筋トレしてるぜ。パワーと体力には自信があるぞ」
　浩介くんが「どうだ⁉」と言わんばかりに力こぶを見せる。実際、体力テストを始め、体育の授業では、その部活を専門にしている男子には負けることもあるものの、概ね好成績を維持している。
「今度の球技大会、石山さんの彼氏さんと、田村さんで対戦してみたらいいと思うんだ。もちろん、それまではテニスの練習をして」
「「え⁉」」
　幸子さんの突然の提案に、あたしと浩介くんの目が点になる。
「い、いや待てよ。確かに俺は鍛えてる。田村相手にパワーや体力で負ける気はしない。でも、あいつは全国1位だ。体育の授業でちょっとやっただけじゃ勝つのは無理だ」
「ですから、小谷学園にはテニス部があるんでしょ？　球技大会まで練習してはどうかな？」
　幸子さんは引き下がらない。
「うーん、1ヶ月半じゃあ厳しいだろうよ」
　でも、何となく見てみたい気がするわね。
「ねえ、永原先生と恵美ちゃんに相談してみたら？」
「あー、うん、分かったよ」
　浩介くんは、仕方ないという表情で受け入れてくれる。
　でも、あたしも何だか、見たい気がするのよ。
「というわけなので、母さん、幸子さん、あたしたちはこれで」
「「いってらっしゃーい」」
　母さんと幸子さんに見送られ、あたしと浩介くんは恵美ちゃんと永原先生を探して呼ぶ。
「篠原があたいに用事とは珍しいな。先生まで呼んでどうしたんだ？」

「恵美ちゃん、幸子さんからの提案なんだけど……今度の球技大会、浩介くんとテニスしてみてはどうかって？」
　あたしは慎重な口調で言う。
「おいおい、確かに篠原は体力もパワーもすごいだろうがよ。篠原、テニスの経験は？」
「体育の授業と……小学生の時にちょっとだけハマってた。２週間で飽きたけど」
「ふぅー、それじゃ本当に最低限の知識しかねえ状態じゃんか。１ヶ月半、付け焼き刃で練習した所で、あたいには勝てねえぜ」
　恵美ちゃんが、「やれやれ」と言った感じで言う。
「そうだねえ……でも、５セットなら篠原君にも勝ち目があるんじゃないかしら？」
　永原先生が笑顔で言う。
　恵美ちゃんが、すぐに動揺した顔つきをする。
「ふぁ……５セット!?　おいおい、あたいら女子は５セットなんて――」
「そう、５セットは３セットと違って大局観、そして何より体力が要求されるわ。体力というのは、パワーと並んで、男女の差が大きい身体能力よ」
　永原先生がそう言う。
　永原先生の言う通り、テニスは元々長丁場の競技、相手に２ポイント以上差をつけ、なおかつ４ポイント以上先取するまでゲームは終わらない。
　しかもそのゲームを６ゲーム以上、かつ２ゲーム以上差をつける。つまり１回は相手のサーブを破らない限り、６―６になってタイブレークになる。
　これでようやく１セット取れる。そしてそれを２セット、あるいは３セット先に取ってやっと試合に勝てる。
　女子の大会では体力的に厳しいので、プロでも３セットのみだが、男子ではグランドスラムなど、５セットで戦わなきゃいけない試合もある。

「つまり、後半になれば篠原が優位ってか。でも、1ヶ月半程度じゃあたいの勝ちだろうよ」
「だよなあ……」
　やっぱり、恵美ちゃんも浩介くんと同意見みたいね。
「でも、田村さん、球技大会でテニスに出るんでしょ？」
「ああ」
「だったら、篠原君とやるのは興行として面白いと思うのよね」
　永原先生が、何やら思慮している。
「うーん、そこまで先生が言うなら、あたいもやってもいいと思うけどよ」
　恵美ちゃんが折れてくれる。
「俺はちょっと――」
　浩介くんはまだ渋る。よしここは――
「あたしも、ちょっと見てみたいなあ」
　あたしが、浩介くんを上目遣いで見る。
　これで単純な男の子はすぐころり。
「うー、優子ちゃんにそんな目で見られると断れねえよ……その代わり、俺が負けても文句言わねえでくれよ」
「うん、分かっているよ」
　そこんところは、きちんと分かってあげないと、嫌われてしまう。
「ふふっ、じゃあ決まりね。恵美ちゃんがテニスの球技大会出たら、どういうハンデにすればいいのかで困っていたもの」
　どうやら、永原先生にも、渡りに船だったみたいね。
「で、俺はどうすればいいんだ？」
「うーん、とりあえず、うちのテニス部に一時入部してもらおうか。そこでまあ色々練習してもらうよ」
「あ、ああ分かった……」
　浩介くんも、渋々了承してくれたみたいね。
　浩介くんは、部活こそ天文部だが、実際にはどのスポーツにもかなりの才能がある。
　永原先生が言うように、長期戦に持ち込めば、恵美ちゃん相手でも

勝機があるんじゃないかと思う。

そんなこんなで、あたしもパーティーで食事をする。

「石山さん石山さん、名残惜しいけど、そろそろ時間だよ」

「あ、うん。そうだね」

お腹がいっぱいになってきた頃、永原先生がそう言ってきた。

時計を見ると、確かにもうそんな感じの時間だった。

あたしと永原先生は、こっそりさっきの壇の前に移動する。

まず、永原先生から、壇上に上がる、

「えー皆さん、本日は石山優子さんの女の子1周年記念パーティーに参加くださいまして、誠にありがとうございます。本パーティーは間もなく終了の時間を迎えます。石山さん、お願いします」

「はい」

永原先生に呼ばれ、今度はあたしが壇上に上がる。

まずはマイクをあたしの身長に合わせ直す。

「えーと、本日はお忙しい中、あたしのためにパーティーに参加してくださいまして、誠にありがとうございます。これからも、女の子としての人生を歩んでいきたいと思っています。そして、今回のパーティーを企画してくださった皆さんにも、この場をお借りして厚く御礼申し上げまして、このパーティーの締めとさせていただきます。以上です」

パチパチパチパチ！

あたしの手短なスピーチに、皆の拍手がわく。

やっぱり、短くまとめるって大切だわ。

ともあれ、これでパーティーの全てが終わった。

あたしもこのドレスはきれいだけど、そろそろ脱いで制服に戻りたいわね。

そう思って、あたしはさっき着替えた控え室に戻る。

「あ、優子いらっしゃーい」

そこには、既に母さんがいた。

「母さん、あたし着替えたいんだけど――」

「それなら良かったわ。母さんが脱がせてあげる」
「い、いいって！」
母さんの不敵な笑みに、あたしは思わず顔が引きつってしまう。
いつものこととは言え、やっぱり抵抗感はある。
「あら？　そのドレス、一人では脱ぎにくいわよ。せめて背中のファスナーだけでもお願い、ね？！」
「うー、分かったわ……お願いするわね」
あたしはつい反射的に、受け入れてしまった。
でも、確かにこの服、一人で脱ぐのは大変というのも事実。
母さんますます暴走しそうだし、背中のファスナーだけで妥協するのはいいことだろう。
「ふふっ、優子は物分り良くていい子だわ」
「……」
あたしは制服を近くに持っていく。
母さんが背中に駆け寄り、ファスナーを下ろしてくれる。
ドレスは楽に脱げ、あたしは制服に戻った。
ちなみに、リボンなども思いっきり着崩している。
「優子、リボン曲がってるわよ」
母さんが案の定、おせっかいを焼いてくる。
「い、いいじゃない。もう家に帰るだけなのよ！」
「ダメよ、そう言う所から女子力が下がっていくのよ！」
「うぐっ！」
母さんの言葉に、悔しいけど反論できない。
あたしは改めて、着崩した制服を改める。
「うん、それでいいわよ。全く、今の服装、カリキュラム中だったらスカートめくりの刑だったわよ」
「ご、ごめんなさい……」
「いい優子、女の子として、だらしなくするのはダメよ。特に今は彼氏も来てるんでしょ？　男の子の前では、特に注意しなさい」
「はい」
久々に母さんにお説教される。でも、あたしが悪いんだからしょう

がない。
本部の手前の建物では、みんなそれぞれに挨拶し、自然解散となっている。
「永原会長、今日はありがとうございました」
一応本部なので、あたしは「会長」と呼ぶ。
「うん、石山さん、また明日。明日明後日も学校だからね」
「分かってるわよ」
あたしは母さんと一緒に、浩介くんと「お義母さん」を見つけ、4人で帰ることになった。

「じゃあ、私達はここで」
「さようなら。また明日」
「うん、また明日」
あたしたちの降りる駅になったら、浩介くんたちと別れ、家路につく。
そう言えば、今日は父さん一人だっけ？
そんなことを考えながら、あたしと母さんで、いつもの家に帰宅した。
「ただいまー」
「お、帰ってきたか」
あたしと母さんを、父さんが迎えるのはとても珍しい光景。
父さんはとっくに食事を済ませたらしい。ちなみに、これも予め母さんが作っておいたものらしい。
「そういえばお母さん、その荷物は何？」
父さんが不思議そうに聞いてくる。
「うん、パーティーの残りだよ。これで数日は持つわよ」
「そうか。もったいないもんな」
飲み物も結構余っていて、冷蔵庫の中がパンパンになった。
ずっと同じ食事が続いて、飽き始めたのはまた別の話。

## 浩介くんがいない天文部

パーティーが終わって、季節は5月中旬。

あれから、幸子さんの提案した「テニス対決」は、職員会議ですんなり通ってしまったらしい。

浩介くんは天文部に顔を出さなくなり、テニス部に入り浸っている。

あたしはというと、女の子1週年というパーティーのほとぼりも冷め、残った食材を食べつくす頃には女の子になったばかりの頃を思い出す機会も減って、すっかり日常に戻った感じだった。

それはいいんだけど、一つ不安なことがある。

「なあ、今は篠原先輩いねえしよ」

「やめとけって」

「固いこと言うなよ、『鬼の居ぬ間に洗濯』って言うじゃねえか」

天文部の男子たちが、露骨にあたしを狙おうとしている。あたしに浩介くんがいるってことは分かっているはずなのに。

もちろん、桂子ちゃんよりは狙われる傾向が小さいとは言え、性欲に忠実な男子たちは、もしあたしに手を出せば、その後浩介くんにどういう報復をされるのかまで頭が回っていない。

男子の気持ちももちろん分かるけど、こうして女の子という立場になってみて、「男の愚かさ」にも気付くことが多くなった。何だろう、この病気って本当に、人を育てる気がするわ。

「たしかに篠原先輩は強いけどよ、さすがの篠原先輩だって、集団で闇討ちにしちまえばよ――」

「ねえ男子」

不穏な言葉が聞こえたので、とっさに口を挟む。

「は、はい！」

「そんなことしたら、あたしが許さないわよ。あたしこう見えても、浩

介くんと『婚約』してるのよ」
「「え!!??」」
あたしはつい勢いで「婚約者」だってことを話してしまう。天文部の男子たちに加え、桂子ちゃんまで驚いている。
そう言えば、婚約者になったこと、まだ話してなかったっけ？
「ちょっと優子ちゃん、『婚約』って……私も初耳なんだけど……」
「ああうん、実はね、あたしの両親も、浩介くんの両親もね、あたしたちを早く結婚させたがってて、それどころか孫の顔見せろってうるさくて――」
「そ、そうなんだ……」
「うへえ……」
桂子ちゃんの顔が、明らかに引きつっている。
天文部の男子たちも同様に動揺している。
うん、無理もないことだと思う。

「な、なあ……」
「ああ、手を出すのは絶対やめた方がいいな」
「ああ、双方の両親にもなんて言われるか分からねえぜ」
「じゃさ、木ノ本部長を狙うとして――」

でも、インパクトの強さもあってか、男子達はあたしを狙うのは止めて、また桂子ちゃんを巡っての争いに変わった。
……まあ、相変わらず桂子ちゃんの話をしつつ男子の視線はあたしの胸に釘付けみたいだけどね。
理性で分かってても、本能に逆らえない。
それはきっと、あたしも同じだから。あたしだって、男性の下半身についつい目線が言ってしまうことがある。

「ねえ浩介くん、一緒に帰ろう」
「うん、帰ろうか優子ちゃん」
さて、浩介くんがテニス部へと一時入部している現在。浩介くんが

天文部へ入る以前みたいに、こうやって部活帰りに待ち合わせをすることが増えた。
「それで、テニスはどんな感じ？」
離すのはいつもテニスのこと。
「う、うん。置きに行けば、入るようになったよ。最も、練習相手の男子部員にはそれだとすぐに叩かれちゃうけど」
浩介くんは主に壁打ちしたり、男子部員と練習したりしている。
恵美ちゃんに勝つためには、とにかくミスしないことが大事になってくる。
基礎的な体力とパワーでは、すでに浩介くんは日頃のトレーニングもあって、恵美ちゃんを圧倒している。
だから、何とかして、体力勝負に持っていきたい。
「田村の技術は女子の中では圧倒的だ。体力とパワーはすでに俺の価値だから、この差を少しでも埋めることが肝心になってくるんだ。とにかくサーブをどうやって返すかとか、ストローク戦をどうするかとか、前に出るタイミングを考えたりしているんだ」
「サーブはとにかくファーストを入れたい。速度そのものは結構出てるし、威力だけならもう他の男子部員と遜色ない。でもコントロールが悪いんだ」
浩介くんはあたしに課題を説明してくれる。
確かに、パワーだけなら既に必要十分、多少落としても恵美ちゃんには問題なく通用する。
でも、余りにも置きに行き過ぎればたちまち強烈なリターンが返ってくる。
恵美ちゃんだって、男子には負けると言っても女子の中ではパワーはかなりある方だ。
「後は、明日からはコートカバーリングを学ぼうと思うんだ。田村の技術力に、俺の体力とパワーが勝つためには、長期戦に持ち込むための守備中心のプレーが必要だと思うんだ」
「うん、それがいいと思う」
浩介くんが焦って下手に仕掛けたら、間違いなく経験と技術で圧倒

している恵美ちゃんが勝つ。
とにかくボールを返して、恵美ちゃんのミスを待つテニスが、浩介くんに求められるだろうとあたしは考えていた。
「そんな事より、優子ちゃんはどうするんだ？　球技大会」
「うーん、あたしもテニスかなあ？」
試合時間の都合もあって、球技大会のテニスは1セットマッチのトーナメントで、しかもテニスに出れば他の競技は不要になる。
球技大会でのテニスは体力的に負担が高いので、不人気ではある。
だけど、ハンデ戦にも一番抵抗がない種目なので、あたしにはぴったり。
「あー、複数のハンデ考えるのきついもんなあ」
ちなみに、トーナメントで早期敗退しても、敗退者同士の逆トーナメントがあったりする。
ただし最弱は決まらないけど（やる前からあたしに決まってはいると思うけど）
「テニスウェアとか着られるみたいよ」
「そ、そうか。優子ちゃんならきっと似合うよ」
「うん、ありがとう」
でも、このストレートの髪型は、本番ではちょっと変えないといけないかも。

「それじゃあねーバイバイー」
「うん、また明日」
あたしはそう言って、浩介くんと別れる。

「優子、球技大会の種目、どうするの？」
家に帰って、母さんが球技大会のことを話してくる。
「ああうん、テニスがいいかなって」
「へー、どうして？」
「テニスは実力差が出やすいからハンデ戦も多いし、テニスなら他の競技に出なくていいからハンデ考える時間も短縮されるし」

「うんうん、結構優子って打算的よね」
母さんも、感心している。
確かに、あたしは最近こういうのが増えた気がする。
「うん、あたしもそんな気がしてきて」
「ふふっ、優子も『女の子らしさ』だけじゃなくて、『女性らしさ』も身に着けてきたわね」
母さんがニッコリと笑う。
どうやら、これもあたしの女としての成長らしい。
「いい優子？　女性には、いくつもの顔があるのよ。例えば、ただかわいいだけじゃダメでしょ？　男子受けを考えるためには、ある程度の『裏の顔』も必要なのよ」
「う、うん……」
あたしは、去年の文化祭の時のことを思い出す。
ミスコンでのあたしは、最もかわいかったと同時に、最も醜悪だった。
ライバルだった永原先生と桂子ちゃんに向けた邪悪な感情。あの時の感情とは、未だに折り合いがつけられない。
どうすれば男性票が取れるかをひたすら考え、実行し、その結果浩介くんが嫉妬しても、独占欲の満たし方まで計算していた。
もちろん、男の子は単純だから、あたしのそういう内面に気付くことはないし、たとえ言ったとしても、一笑に付されるだけだと思う。
「ふふっ、優子は今までも、そしてこれからも裏表を持つわよ」
「うーん、でも、感情が黒くなったら、外見にも出そうで怖いわ」
あたしは、不安になって言う。
そのことは本当に怖い。
「うーん、そのあたりは程々にしたいけど……女はどうしても、裏が出てしまうわ」
「……」
もしかすると、あたしが男性の下半身につい目線が言ってしまうのと同じくらいどうしようもない「本能」なのかもしれない。
「あっ！　でも、永原先生なんてどうかしら？　裏がすごいと思うわ

よ」
「あっ……」
あたしは、永原先生のことを思い出す。
永原先生は５００年生きてきたとあって、色々な顔をのぞかせている。
外面上も内面上も、かなりの美人で、ミスコンであたしや桂子ちゃんと争うほど。
その一方で、真田家の人という事で、策略や謀略を好んでいる。
それは協会でも、そして学校でもそうだった。
文化祭の時には、「青春」への憧れや、協会に入ってからも、あたしへの憧れを口にしている。
過去のことで、永原先生は今も苦しんでいる。
明るい一面、暗い一面、単なる教師としての顔や、協会の会長としての顔だけじゃない。
「優子、顔が増えたからって、あんまり悩みすぎちゃだめよ。もちろん、ガサツになるとか、女の子らしさに気を配らないとか、汚い言葉遣いとか、そういうのは論外よ。でも優子、そういうのじゃないんでしょ？」
「う、うん……」
だって、そういうのはカリキュラムでさんざんに叩き込まれたし。
「だったら大丈夫よ。越えちゃいけない一線さえわきまえておけばね」
母さんが、あたしを安心させたい一心で言う。
「うん、分かったわ」
ともあれ、あたしは安堵していいみたいね。
「それにしても、優子がテニスを選ぶとはねえ。テニスは体力必要よ」
「うん、でもハンデ戦次第でうまく行くわ」
でも、あたしが互角に戦えるハンデってどれくらいなのかは気になる。
「それで、テニスウェアとかあるの？」
「うん、テニス部がレンタルしてくれるって」

球技大会のテニスは、テニス部のレンタルがある。
不人気だからこそできるものともいえるけど。
「でも、優子のテニスウェアかあ……あーあー母さんも球技大会に行きたいわね」
「も、もう母さんったら！」
母さんが露骨に下心丸出しにして言う。あたしは思わず、身を守る姿勢をとる。
確かに、ミニスカートでも下には見えてもいいの穿くことになってるけど。
「あらあら、そんなに警戒しないでもいいのに」
「もう、警戒するに決まってるわよ」
あたしが抗議するように言う。
「まあ連れないわねえ。親子なんだしそこまでこだわらなくても」
母さんは今までの行いが信用できない。
どうせあたしのスコートの中の写真でも撮りたがるのが丸わかりよ。
「まあいいわ。ともあれ優子、去年みたいに泣き出したりしないように気を付けてね。母さんは見てないけど、去年の球技大会でも、体育祭でも泣いたって聞いたわよ」
「うっ……それは約束できないわ」
あたしはとても弱くて泣き虫な女の子だから、「泣かない」という約束はどうしてもできない。
体育の授業でも泣かされてしまうことは多いけど、みんな優しくしてくれるし。
それに何より、球技大会での涙からあたしと浩介くんの恋の物語が始まったんだもん。
「優子、確かに涙は女の武器よ。ましてや優子みたいに、いかにもか弱そうな女の子なら尚更ね。でも、やりすぎたり、泣くことにあまりに抵抗感がなさ過ぎるのも問題よ」
「う、うん……それでも、あたしは、弱いあたしでいたいから」
あたしはもう、強がりたくない。

強くあろうとすると、どうしても優一の影がちらついてしまうから。
だから、弱くてもいいと思う。
「そ、そう。でも、彼も優しいといいけど、泣き過ぎるとさすがに引かれるわよ。女の武器は、いつも使ってると効果も薄れるわよ」
「う、うん……でも大丈夫。浩介くんとのデートの時には、泣いて無いから」
「あら？　それは良かったわ」
母さんが安心した感じで言う。
「やっぱり、体育の授業とかで接触プレーになったりすると、よく泣かされるわ」
球技大会の時は至近距離でボールを当てられて、体育祭の時は転んだ相手とぶつかって、それぞれ泣かされた。
最近は精神的な理由で泣くことも減って、肉体的なことで泣くことが増えたと思う。
「そうだったのね」
「それに、球技大会の時に泣かされた時に、浩介くんがあたしを好きになったのよ。もちろん、それが無くても、いずれは浩介くんと結ばれたとは思うけどね」
「あら優子、もう婚約者気分なのね」
母さんがニッコリと笑って言う。
あたしの両親も、浩介くんの両親も、あたしたちを結婚させたがっている。
「う、うん……やっぱり、ここまで関係が進んでるんだもん」
「ふふっ、いいことよ。優子も今では、『彼氏として』だけじゃなくて、『旦那として』、浩介くんのことを見てるのね」
「うん、浩介くんなら、きっと大丈夫だわ」
「ええ。だといいわね」
浩介くんなら、力仕事で引く手あまただと思う。
「さ、夕食作るわね。優子は休んでていいわよ」
「はーい」

部屋に戻って考える。
一度女の子になろうとすると、それはどこまでも進んでいく。
文化祭が終わり、浩介くんに告白されたあの夜の出来事、おそらくあそこが分岐点だった。
あたしはもう、ひたすらボールが坂道を転がり落ちるように、女性的な思考力、女性的な振る舞い、女性的な発想を次々と身につけている。
それでも、あたしの中で必死に「優一」がしがみついている気がする。
あたしも、それを振りほどこうと頑張っているけど、何かが足りない気がする。
それが何なのかはまだ分からないけど。

「はーい、じゃあ各自目標の球技大会の種目に向けて練習してください」
体育の先生は去年と同じ草津先生。
あたしは準備運動を終え、早速テニスをすることにした。
「お、優子もテニスにするのか」
「うん、そうだよ恵美ちゃん」
「にしても、優子にはどういうハンデが来るのかな？」
恵美ちゃんが興味津々に言う。
確かに、去年もとんでもないハンデだったけど、テニスの場合、1対1だからそれじゃ済まない。
「まあ、とりあえずサーブ打ってみろや」
「うん……えいっ！」
あたしは見よう見まねでボールを上げて、叩いてみる。
「フォルト……だな」
打ったボールはネットに弱々しく跳ね返る。
「えいっ！」
バシッ！
またネット。

「ダブルフォルト、試合なら相手のポイントだぞ」
「えいっ！」
どうしてもネットに阻まれるので、あたしはジャンプしながらボールを打ってみる。
するとボールは、あらぬ方向へと進んでしまう。
「あー、とにかく入れないことには始まらねえな」
あたしは、もう一度ボールを投げ、今度は、下からゆっくりと置きに行ってみる。
トン……トン……
「やっ、やったわ！」
ボールはきちんと既定の場所へ届いた。
これなら、大丈夫なはず。
「あー、これじゃあスマッシュ打たれるぜ……」
恵美ちゃんが当然のように言う。
「で、でも入らなきゃしょうがないし……」
「あー、その辺はおいおいハンデ待ちだな」
恵美ちゃんは、最初からあたしのハンデを期待した戦略をしている。
確かに、それしかないとはいえ、何だかなあという気もする。
「ほら、こういう感じで打ってみて」
「う、うん……」
恵美ちゃんに言われるように、体制を整え、何とか下からじゃなくても入るようにするのが今日の目標。
今日はその目標は、達成できるかは分からないけど。
「んー、ちょっとあたい、球技大会市場で出た一番大きなハンデを調べてみるよ。多分それでも足りねえとは思うけどよ」
「あ、ありがとう……」
ともあれ、あたしの最後の球技大会、勝てるかはともかく、楽しい大会になるといいけど。

# 再び夏服

季節は６月の梅雨、球技大会に向けていよいよ練習も本格化してきた。

球技大会が行われるのは、今年の場合６月２２日金曜日ということになっていて、この日はあたしの誕生日にもなっている。

さて、制服も、６月からは夏服になって一気に涼しい格好になる。

今日はその６月１日、生地も薄い上にスカートも短くなるから、特にガードは固くしないといけない。

この後起きるイベントとして、球技大会とその後のあたしの誕生日、７月で１年生２年生が林間学校に行っている間に３泊４日の修学旅行、また佐和山大学のＡＯ入試も行われる。

あたしと浩介くんの合格は、蓬莱教授の手引きで既に決まっている。

そして、秋は文化祭と体育祭、どちらもあたしたちにとって最後のイベントになる。

３年生はここから受験モードなので、スキー合宿はなく、体育祭が終われば後は卒業式を待つばかりになる。

ともあれ、制服に着替える。久々の夏服は、何だか心許ない。浩介くんに襲われたらひとたまりもないのは、冬服も同じだけど。ってまたそんなこと考えてる。

「おはよー」

「おはよう優子、今日から衣替え？」

母さんがあたしの制服を見て言う。

「うん、どうかな？」

「もちろんかわいいわよ。そんなことより優子、夏服で雨だと、ブラジャーとか気を付けなさい」

「もー、分ってるわよ。去年みたいなことにはならないように気をつけるわ」

ちょうど去年、梅雨の時に雨が降って、ブラジャーを透けさせたま

ま帰ってしまい、母さんから「はしたない」と大目玉を食らってしまった。
　去年の今頃のあたし今頃のあたしと、今のあたしでは大分違うものの、1年ぶりだから気を付けないと。
「ふふっ、お母さん、もう1年も優子のスカートめくってないのよねえ……」
「ちょっ、ちょっと母さん！」
　そう言えば、あの時も母さんに「おしおき」という名目で、スカートをめくられて、例の暗示をかけさせられたんだったっけ？
　結果的に、あたしが誰かから暗示をかけさせられたのは、あれが最後だった。あの後も、アイデンティティが揺れた時に時折自主的に暗示はかけてるけど。
「優子って本当にかわいいわよね。洗濯の時に優子の穿いたパンツ見てるといつもそう思うわ」
「もう！　母さんのえっち！」
　母さんの爆弾発言に、思わず大きな声を出して抗議する。
「あらあら、ごめんなさーい」
「むー、なんか気持ちがこもってないわね」
　そう言えば、母さんに「えっち」って怒ったのはこれが初めてかな？
　普段は大体女子同士でセクハラしてくるクラスの女子と、浩介くんに対して言うことが多い言葉。
　本当にもう、どうしてこんな母親になっちゃったんだろう？　優一だった頃はこんなんじゃなかったのに。
「まあまあ、どっちにしても、透けブラしないように注意しなさい」
「わ、分ってるって！」
　あたしが声をあげて、話を終わらせようとする。とにかくあの時のことを思い出して恥ずかしいし。
「いい優子？　夏服は涼しい分無防備よ。冬服の感覚でやってると、下手したらパンツ見えちゃったりするから、注意してね」
「わ、分ってるわよ。去年だって着たんだから！」

母さんのおせっかいを何とか止めようとしているけど、事実ではある。
実際、あたしのスカート丈も夏服は冬服より短くしてる。
冬服の時点でも、女子高生のあたしは結構短いスカートだし、夏は本当に脚の露出も高くなる。その分浩介くんもムラムラしてくれるといいなあ……ってはしたないわよ優子！
とにかく、朝食を食べて歯を磨いて、学校へ行こう。そうすれば、この変な感じともおさらばできるだろうし。

「いってきまーす」
「はーい、いってらっしゃーい」
あたしは母さんの見送り母さんの見送りをいつものように受け、学校へと向かう。
ぴゅううう……
「きゃあ！」
家を出てすぐ、突然強い風が吹いてスカートが思いっきりめくれ上がってしまう。
あたしは恥ずかしそうに悲鳴をあげて、スカートの裾を抑え、周囲を見渡す。
「ふぅー、まったくもー、えっちな風！」
でもどうやら、誰にも見られずに済んだみたいね。そこは不幸中の幸いかな。
「冬服なら、もう少しめくれにくいのに」
といっても、今の風圧だと冬服でも見えちゃっただろうけど。
通学路、あたしは風に注意しながら、学校へと登校する。
下駄箱から上履きを取り出して履き替え、３年生の教室へ。
見ると、男女ほぼ全員が夏服になっている。

ガラガラガラ……
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう」

夏服姿の桂子ちゃんが、あたしに話しかけてくる。
浩介くんはまだ教室には来ていない。
「うん、おはよう桂子ちゃん」
「優子ちゃん、駅つくまで大丈夫だった？」
桂子ちゃんが聞いてくる。
「え!?」
「突風吹いたでしょ？　私は何とか抑えたけど」
あー、そう言えば家も近いから同じ風にスカート煽られることあるわよね。
「う、うん……あたしは……丸見えになっちゃったけど、幸い家出てすぐで誰もいなかったわ」
うー、思い出すとやっぱり恥ずかしいわ。
「不幸中の幸いね。優子ちゃん、まだやっぱり私ほどガード固くないわね」
「あうー、精進します」
桂子ちゃんのスカート丈はあたしとほぼ同じか、少し短いくらい。
それなのに、どうしてあたしよりもうまくいったんだろう？
反射神経はどうしようもないし……そうじゃなかったら単純に風力の違いかも。
「優子ちゃん、たまにスカートへの注意が散漫になるわ。もちろん見えちゃうことはないけどね。それでも、夏服は注意しなさい」
桂子ちゃんからも、母さんと同じお説教をされてしまう。
無防備なあたしが悪いんだから残念でもないし当然ではあるけど。
「うん、そうする。ありがとう。それじゃあね」
「うん」
あたしは桂子ちゃんとのあいさつを終え、クラスのみんなを見渡してみる。
夏服に着替えただけで、みんな結構がらりとイメージが変わる。
あたしは……ちょっとエロくなったと思う。冬服の上からでも目立つ胸は、夏服だとそれはそれはすごいことになる。
クラスの男子がちらちらとあたしの胸を見ている。

高月くんだけは、ずっと凝視していて、時折恨めしそうな表情をする。
……全く、お金稼いで他の女の子ゲットすればいいのに。

ガラガラガラ……
「ふーおはよー優子ちゃん」
「あ、浩介くんおはよー」
夏服姿の浩介くんが教室に入ってくる。
よく見ると、すでに汗をかいている。
「浩介くん、どうしたの？」
「ああ、朝練始めたんだ。そろそろ田村対策も考えねえといけないしな」
「へえー、凄いわね」
最近は浩介くんは休日もテニス練習にいそしんでいて、テニス部員が驚くほどに習得が早いらしい。
元々、基礎的な身体能力は、浩介くんは全校でも優一と一二を争っていたくらいだし。
それにしても浩介くん、やっぱりあたしの胸を凝視してるわね。
「お、あたいがどうしたって!?」
恵美ちゃんがものすごい勢いでがっついてくる。
「おう田村か。テニスの基礎練習も終わってきて、そろそろ俺もプレースタイルを作ろうと思ってな」
「ほー、せいぜい期待してるぜ」
「ああ。お互いいい試合をしたいな」
浩介くんと恵美ちゃんは、互いに挑発しあうというよりも、こういうやり取りが多い。
もちろん、重要なことは探らないのもお約束。ここまでで事前の練習試合は1回だけした。最低限身に着けた状態で1セット行ったけど、その時は浩介くんは恵美ちゃんにぼろ負けだった。
でも、これは恵美ちゃんも知らないことだけど、浩介くんを介してのまた聞きながら、男子部員は恵美ちゃんに勝算があると考えている

らしい。
詳しくは教えてくれなかったけど、大抵は察しが付く。
大きな理由としては、練習試合は1セットだけだったこと。
本場の球技大会では、グランドスラム形式の5セットで行われる。
1セットだけならそのセットに全力を出せるが、5セットの場合は1セットで全部を出し切るわけにはいかないから過酷さも全く違う。
それを考えて、おそらく浩介くんが取る戦術は、テニスにおける男女差が最も表れやすい部分、つまり「パワーと体力」の勝負に持ち込むことが考えられる。
体力面ではなるべくラリーをつないで、恵美ちゃんの体力を奪うと同時に、ミス待ちテニスをすることで、メンタルも崩す作戦が上策と思われる。
一方で、パワーという意味では、当然サーブ力という事になる。
ただ、ビッグサーブの試合は体力勝負にはしにくい。
タイブレークを除けば、必ず一回は恵美ちゃんのサーブを破る必要があるし、タイブレークにしても、相手のサーブでポイントを取る必要がある。
つまり反射神経……恵美ちゃんのサーブに付いていく必要がある。
「お、優子も篠原の勝ち方考えてんのか？」
恵美ちゃんに心を読まれてしまう。
「あ、うん……」
「ま、あたいだってこいつがどう来るかは予想が付いてるぜ。あたいだって女子とは言え全国一だ。そう簡単には相手のテニスはさせねえよ」
恵美ちゃんもも自信たっぷりに言う。
恵美ちゃんの戦術は、言うまでもなく、精神攻撃と、トリックプレー、頭脳プレーになる。
そして、ガンガンウィナーを狙う展開の早いテニスをしていくことになると思う。
基礎身体能力の差が出る前に、セットを奪って、逃げ切りを図ってくるはずだ。

おそらく、お互いそれが分かっているとは思う。
あとは浩介くんが、どこまで技術力を身に着けてくるかに、球技大会のテニスはかかっているだろう。

「はーい、ホームルームを始めますよー」
永原先生の声とともに、６月最初の１日が始まった。
さて、あたしのための球技大会のハンデだけど、文化部のテニス希望の女子と軽く対戦してみて、大体固まった。
１つ目は、相手のサーブはフォルト１回であたしのポイントになる。
２つ目は、あたしが返す時は２バウンドまでＯＫにする。これは車いすテニスのルール。
３つ目は、相手のコートはダブルスコートまで使える。
４つ目は、あたしのゲームは２ゲーム分になる。ブレイクしたら４ゲームになる。
５つ目は、あたしはサーブを通常２回までの所３回まで打てる。

体育の先生曰く、このハンデは球技大会始まって以来らしい。
確かに、こんなハンデをもらったら、男だって女に勝つのは難しい気がする。いや、さすがにプロ同士なら勝つかな？
「連絡事項は以上です、今日も一日がんばってください」
こうして、いつもの一日が始まる。

「この文法問題はセンター試験で特に頻出です。古典文法は変格活用が多いですからきちんと現代文から理解して下さい」
今日は永原先生の古典が行われている。
古典に限った話じゃないけど、授業ではどうしても、大学受験の話が増える。
センター試験もあるけど、受ける必要あるかな？
腕試しに受けるのも、なんか冷やかしっぽいし。
ともあれ、あたしにとっては大学の入った後でやる予習が大事なの

かもしれない。

「はーい、帰りのホームルームはここまで。各自部活委員会に入ってください、以上です」

帰りのホームルームが終わり、今日もあたしは天文部に、今日も浩介くんはテニス部に行く。

桂子ちゃんからは「たまには応援に行ったら？」と言われたけど、今は顔を出さないべきだと思う。

浩介くんは男として、負けられない戦いに挑んでいるんだから。あたしが邪魔しちゃダメだと思う。

「それにしてもよ。テニス男女対決とは思い切ったよなあ」

「ああ、身体能力は高いけど、1か月半練習しただけの男と、全国大会を圧倒的な力で優勝したプロ候補の女子だろ？　さすがに篠原先輩といえどきついんじゃね？」

「だけど、その試合、1セットでも3セットでもなく、グランドスラムでやるような5セット何だろ？」

「あれ、めっちゃ長いよな」

「うんうん、俺も男子のテニスの試合見たけど、思ったより過酷だったよ。よくメンタル壊れねえと思うもん」

天文部の男子たちも、浩介くんと恵美ちゃんのテニス対決に話題が集まっていく。

いや、全校でもそれが話題になる。まだ3週間も先のことなのに。

しかも、学生のテニスは普通1セットマッチ。長くて3セットマッチの所を、プロの男子、それもグランドスラムに出る男子だけに許された5セットで戦うのだから注目は集まる。

恵美ちゃんも恵美ちゃんで「あたいは男子と練習するといつも2セットストレート負け、逆に女子とやってもストレート勝ちが殆どで、たまに大学生女子相手にセットを落とす時に3セットやるくらいだから、いいトレーニングになるかもしれない」とも言っていた。

どう転ぶかはまだわからない。下馬評では恵美ちゃんの優勢を予想する声が多い。あたしはもちろん、浩介くんが勝てると信じてるけど、客観的に見れば、それは婚約者に対する「信仰」に近いものだと思う。

球技大会はまだ先だけど、浩介くん、どれだけ強くなってるか楽しみだわ。

「桂子ちゃんは、今度の大会はどう見てるの？」

「恵美は、全力で勝ちに行くと思うわよ。とにかく彼女はプライド高いし、何だかんだで男に媚びたくない人だからね」

「そう、あたしには……男に媚びないってよく理解できないわ」

だって、女の子として男の子に愛されるのって、こんなにも嬉しくて、満ち足りたことなのに。

それをしないなんて、あまりにも損な人生だと思う。

「……理解しようとしなくて、いいと思うよ。私達は、私達なりに、頑張っていきましょう」

「うん」

球技大会の当日は、もうすぐそこに迫っていた。

# 優子の球技大会

今日は球技大会の当日。この日はあたしの「優一としての誕生日」でもある6月22日だった。

あたしも、何とか形を作ることだけは出来たけど、結局ハンデはあのままで進むことになった。

それよりも、問題はテニスウェアだった。

簡単に言うと、いつものようにあたしの胸が大きすぎて、テニス部にサイズがなかった。

そのため急遽、女子テニス部が部費であたし用のテニスウェアを買ってくれた。

下に穿くのも、フリルなどがあしらわれたアンダースコートタイプも最近では減ってきて、シンプルなスパッツタイプが多い。

でもこの球技大会の時は、折角の晴れ舞台ということで、みんな張り切っている。

あたしも、このアンダースコートなら、みんなに見せても大丈夫だよね？

どうせミニスカートタイプの中身が見えたらそれが何であれエロい目で見られるのはしょうがないし割り切らないと。

球技大会前のお披露目の時は、とにかくあたしに注目が集まっていた。

あたしも、初めて「ポニーテール」という髪型に挑戦してみて、思いの外好評だった。

でもあたしの中では、いつものストレートロングの方が好き。

みんなであたしをちやほやする中で、恵美ちゃんだけ「あー、揺れて邪魔だろうなあ……」と言っていた。

体育の授業では、あたしの胸はいつも邪魔になる。

足元が見えなくてバランスを崩したり相手と接触したりしてしまうことも結構ある。

そのせいで泣かされてしまう。

テニスなら、こういうのも少ないかなと思って、選んでみた。

ともあれ、去年と同じく、球技大会の開始が宣言された。
「浩介くん、あの、頑張ってね」
「ああ、午前中は直前練習だ。大丈夫、俺にも考えがあるからさ」
浩介くんは何か思慮をするように言う。
恵美ちゃんとどういう試合が行われるか、楽しみといえばその通り。
実際、学校中でも噂になっていて、事前の予想では、やはり恵美ちゃんの有利は覆らなかった。
さてこの日、学校の中を見るとよく知らない顔もいる。というより、明らかに日本人の顔じゃない。後で知ったことなんだけど、テニスアカデミーのスカウトさんらしい。
「グランドスラムで行われている過酷なテニスを学生がしたらどうなるか？」という意味で対外的にもかなり注目されているらしい。
1年生や2年生もそれぞれの種目へ移動する。
今回の恵美ちゃんと浩介くんの試合、カメラにも撮られているらしく、見逃した人のために視聴覚室でも閲覧可能になるとか。
さて、あたしは1セットで行われる第1試合に臨んだ。
「うおおおおおお!!!!」
あたしがテニスコートに入ると、凄まじいギャラリー数に驚いてしまう。
テニスで使うミニのスコートは、制服よりも格段に頼りなく、風にも弱い。
また、普段は背中まであるロングストレートヘアーが頭の後ろでまとめられているポニーテールになっているのも、注目を引くのだろう。
だから、アンダースコートがある。
普段は恥ずかしがりで隠したがりだけど、今日は堂々とする。
それが、萌えポイントになる。水着と同じ理屈。
といっても、あたしの場合、強いショットを打てないから、恵美ちゃんのようにあんまり豪快に見えたりはしない。
最初の試合の相手は龍香ちゃん。

「優子さん、頑張りましょう」
「ええ」

「それでは試合開始です」
審判の人がコイントスをする。
あたしがコイントスに勝ち、サーブを選択する。
トン……トン……トン……
ボールを打ち付け、そして上に放り投げる。
「えいっ！」
何とか練習して上からも入るようになったけど、それでもコントロールを重視する。
思いっきり打った所で、あたしの力じゃたかが知れているから。
「んっ！」
龍香ちゃんが僅かに声を出す。
山なりの緩いボール。
あたしは、女の子の中でもとにかく体力がない。
だから早めに決めないと。
そう思って、あたしは軽めに打つ。
トンッ……
「0―15」
無情にも、ドロップショットがネットに引っかかってミスになり、0―15
もう一度、サーブの構えをする。
身体を前のめりにしてサーブをすると、アンダースコートがちらりとしたのか、観客が歓声を上げる。
「フォルト！」
ネットが低い中央にボールを集めたい。
でも、ラインより向こう側に行ってしまい、フォルト。
セカンドサーブ、あたしはここでもミスできるので、もう一度ファーストサーブのような打ち方をする。
今度は入った。

すると、龍香ちゃんが前に出て強めにショットを打つ。
幸いにもあたしの近くに来たので、あたしはロブを打ち上げる。
「わっ！」
龍香ちゃんがびっくりして後ろに下がる。
パポン！
「０―３０」
ボールの速度は遅く、また浅いため、今度はスマッシュを打たれてしまう。
次のサーブはリターンエースを決められ０―４０にされる。２バウンドまでＯＫだけど、速いボールはどうしようもない。
元々、サーブを落としまくるのが前提のあたしの試合。こうなったらヤケだわ。
あたしは、ドロップショットのようにゆるいサーブを打つ。
しかし、あたしのサーブの威力を知っていた龍香ちゃんが落ち着いて前に出る。
よし、今度は抜いてみよう。
「あ！」
冷静に左側にフォアハンドで前に出た龍香ちゃんを抜く。
「１５―４０」
その瞬間、割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こる。
正直言うと、あたしと龍香ちゃんがしているテニスのレベルはあまりにも低い。
小学校低学年の女の子同士の試合と言ってもいいレベル。
それでも、普段運動がからっきしなあたしが、龍香ちゃんからポイントを取ったのは大きい。
でも、龍香ちゃんのブレークポイントは変わらない。
……というよりも、こんなレベルでサーブしている側が有利といえるのかは甚だ疑問だけど。
「ゲーム、河瀬！」
拍手が沸き起こり、龍香ちゃんが軽くガッツポーズをする。
あたしのサーブを返し、ラリー戦になりつつも、あたしが思いっき

りミスをしてしまう。
ダブルス分のコートを使えるはずなのに、それさえ外してしまうとは情けない。
観客はあたしの太もも付近と胸、アンダースコートばかり見ている人も多い。やっぱり女の子のこうしたスポーツ、エロ目線も魅力になっちゃうのはしょうがないと思う。
コートがチェンジして今度は龍香ちゃんのサーブ。
あたしは、座りながら水を飲み、考える。
他の子のサーブは知らないけど
２ゲーム目、龍香ちゃんのサーブ。
ファーストサーブが入る。
「んっ！」
あたしにとっては結構ショットが強烈で、あたしは返すのがやっと。
龍香ちゃんにすぐに決められてしまい１５―０
ともあれ、次に切り替えていこう。
龍香ちゃんのサーブ、思いっきり打ってネットに掛かる。
「フォルト！　１５―１５」
「あーそうでした。優子さんの場合、１回もミスできないんでした」
龍香ちゃんは苦笑いしながら言う。
あたしよりも威力の強いサーブとショットは、スコートをよりはためかせていて、観客の目を楽しませてくれているみたいね。
でも、当事者は一回試合に入っちゃうと、思いの外気にならなくなってしまう。
それは素直にすごいことだと思う。
龍香ちゃんは、あたしがウィナーを決めるのは少ないだろうと読んで、思いっきり置きに行くサーブをしてくる。
あたしも、最初はミスをしないように返す。
お互いがミス待ちになると、かなりの長期戦になる。
それは体力で劣るあたしには不利ということ。
とにかく、あたしは龍香ちゃんのバックハンド側に合わせて打つ。

少しでも威力のあるボールを打たれると、あたしはきつい。
だから、ある程度ラリーが続いたら、攻めないといけない。
「んっ！」
隙を見て前に出る。
あたしの足は遅いけど、それでも前に出れば威力が出るはず。
「もらった！」
「わっ！」
龍香ちゃんがロブを上げ、あたしは後ろへ引き返す。２バウンドまでＯＫだからなんとか間に合ったけど、距離が遠くてショットが届かずに３０―１５になる。

「ゲーム、河瀬！」
「優子ちゃーん！　がんばれー！」
あたしへの応援の声が沸き起こる。
普段の体育の授業でも、声援はいつも判官びいき。
だけど、あたしが勝つことはめったにない。
相手側に極端なハンデが課せられることもある。それでも滅多に勝てないわけだ。

３ゲーム目、０―３０になったところで審判の先生が試合を止めた。
おそらく、龍香ちゃんに新しいハンデが課せられるんだろう。
観客も、そのことを察している。
３ゲーム目途中で、あたしが奪ったのはわずかにサーブで１ポイントと、相手のフォルトで１ポイントだけ。
このハンデでも、龍香ちゃん相手に試合にならないのだ。
「えー、審判の草津です。只今より、新しいハンデが加わります。１つ目、石山さんはフォルトは全てレット扱いにします。２つ目、石山さんは２ポイント取った時点でゲームポイントとします」
審判役をしていた、体育の先生がそう告げる。
つまり、サーブは思いっきり何回打ってもいいことになった上に２

ポイントであたしのゲームになる。
でも今は、相手のサーブ。
龍香ちゃんは動じずに、確実にサーブを入れていく。
威力が低すぎて、ダブルスのコートを使うくらいでは、大したハンデにならない。
とは言っても、テニスコートの広さの都合上、もうハンデとして残っているのはネットを操作してあたしの陣地を狭くするくらいしかない。
それをやるのは大掛かり過ぎる。
結局、このゲームも落としゲームカウントは3—0。
4ゲーム目、あたしは何回でもサーブを失敗していいことになったので、とにかく思いっきり打つ。
3回に1回も入らないけど、何度でも失敗できるだけで、メンタル面の余裕がだいぶ違う。

「0—15！」
問題は、思いっきり打っても、簡単に対応されちゃうところだけど。
結局、あたしはこのハンデでもサービスゲームを落としてしまう。
1ポイントも取れず、ラブゲームでブレークされてしまった。
第5ゲーム、ここも龍香ちゃんがフォルトでミスをした1ポイントのみ。
何か、ブレークのほうが簡単な錯覚を受けてしまう。
観客たちも、これほどのハンデを与えられて、なおも1ゲームも取れないあたしに、可哀想なものを見るような目が増える。
でも、そんなことも、もう慣れっこだ。
第6ゲーム、ここを取れなければ6—0、いわゆるベーグルで負けてしまう。
「うんっ！」
「んっ！」
「アウト！　15—0」

「わあああああああああ!!!!!」
龍香ちゃんのボールがミスになり、初めて、あたしがリードした。観客も、あたしがベーグルを阻止するんじゃないかと期待している。
と同時に、ゲームポイントでもある。
でも何だろう？　今の、居た堪れなくなった龍香ちゃんがわざとミスした気がする。
ううん、考えても仕方ないわね。
１５―３０からのあたしのサーブ。
もうあたしは勝つことは無理、せめてベーグルでも阻止しようという気持ちだったので、とにかくつなげてミスを待つテニスを心がけることにした。
龍香ちゃんが攻め急いでネットに掛ける。これもなんかわざとミスした感じが強い。
「ゲーム、石山！　５―２！」
「うおおおおおお!!!」
「いいぞお!!!」
「優子ちゃーん!!!」

本来なら「３０―３０」なんだけど、特別ハンデのおかげで、あたしのキープになった。
あたしのサービスゲームで２ゲーム分、もし次のゲームもあたしが取れば、５―６で一気に逆転になる。
これだけのハンデを課せられて、しかも相手の温情じゃないかと思うような状況でも、あたしに対して大歓声が沸き起こる。
それくらい、あたしの身体能力は壊滅的なんだ。
と言っても、次のゲームも龍香ちゃんのサービングフォーザマッチ。
あたしは、何のなすすべもなく、このゲームを落とし、結果的に６―２で敗れた。
多分、普通のルールだったら、あたしは１ポイントも取れなかったと思う。

「ふう、優子さん。お疲れ様でした」
「うん、龍香ちゃん、ごめんね。あたしのために」
「いいんですよ。優子ちゃん、体育の授業、いつも可哀想すぎますから」
龍香ちゃんが、あたしに優しくそう語りかけてくれる。やっぱり、さっきのは温情だったのだ。
次の試合、敗者同士でやることになっている。
でも、その相手が龍香ちゃんより弱いとは限らない。
あたしは、体育の先生に申し出て、ゲームハンデをキープ２倍、ブレイク４倍から、キープ３倍、ブレイクしたら６ゲームで即勝利に変えてくれるように申し出た。
体育の先生も、すんなりと了承してくれた。
更に既にあるハンデとして、２ポイント取ればゲームが取れ、こっちは何度でもサーブを失敗してもいいのに相手は１回しかサーブを打てず、こっちは２バウンドまでＯＫな上にダブルス分のコートまで使えて……これで負けたら本当にひどいとしか言いようがないわね。
２試合目は２０分ほど休憩してすぐに始まる。
他の子のテニスの試合も見てたけど、みんなあたしよりレベルが高い。
他の３年生や下級生の球技大会を見る。
みんな、あたしと比べて動きも素早いし、身体能力も高い。
でも、あたしの中でこの身体能力の低さは、仕方ないと諦めることにした。
胸も大きくて、髪もロングストレートだし、元々の運動神経の悪さに加え、運動に向いてない体つきをしているせいだと思いたい。
第２試合の相手はさくらちゃんに決まった。
「あの……おねがい……します……」
「うん」
あたしは、もう一回コイントスに勝ち、今度はレシーブを選択してみる。

このハンデを垣間見るに、一回でもブレイクすれば勝ち。つまり、最初のゲームで終わる可能性もある。
さくらちゃんのテニスウェアはとても似合っていて、「先輩にも見せたかった」と言っていた。
トン……トン……トン……
さくらちゃんがテニスボールを掴み、サーブを打つ。
威力は龍香ちゃんとほぼ同じ。
あたしはフォアハンド側で打つ。ダブルスコートの方へ落ちる。
次にバック側に。とにかく左右に振ってみよう。
「アウト！　15―0」
でも現実は甘くない、あたしのコントロールミスでアウト。
さくらちゃんの2球目、あたしのリターンがネットに掛かり30―0
3球目もさくらちゃんにウィナーを決められ、40―0
次のボールもラリーが数球続いた挙句、あたしが追いつけずにあっさりとゲームをキープされる。
さくらちゃんは、テニスウェアの下はスパッツタイプだけど、それでも結構丈も短くてエロいと思う。
コートチェンジをして2ゲーム目、今度はあたしのサービスゲーム。
平均して4回程度失敗するくらい、あたしは思いっきりコースギリギリを突こうとする。
何回でも失敗できるという心理的余裕からだけど、そううまくは行かない上に、思いっきり打っても、結局相手にリターンで崩されてしまう。
サーブ側が有利と言っても、あってないようなハンデだ。
ここも結局、ラブゲームでブレークされてしまった。
まずい、龍香ちゃんの時よりも試合内容がひどい。2ゲーム終わって、あたしはまだ1ポイントも取れていない。
「優子さん……」
さくらちゃんも、あたしのことを、ある意味で「可哀想」という目

で見ている。
そこできっと、どこかでメンタルが影響したかもしれなかった。
バシッ！
「フォルト！　０―１５！」
さくらちゃんのボールが、ネットに掛かる。
これであたしのブレークポイント、それどころか一気にマッチポイントだ。
さくらちゃんは、落ち着いてアンダーサーブでも打てばいい。
だけど……
「フォルト！　ウォンバイ石山！　６―２！」
それは、あまりにもあっけない幕切れだった。さくらちゃんのボールは横に大きくそれてフォルトになった。
本来のテニスなら、単なるダブルフォルト、１ブレイクアップで０―１５の場面だった。
さっきのハンデでもまだ４―２という場面でしかない。
きっと、さくらちゃんも早く終わらせたかったのかもしれない。
「優子さん……お疲れ様です……」
「みなさん、ありがとうございます……勝てて……嬉しいです……」
あたしは、観客の前でペコリと頭を下げる。
観客はただ、困惑したように拍手をしている。
普通なら、こんなハンデで勝っても「嬉しい」とは思えない。
それこそ８０代のおじいさんが、２０代の孫とやるときでさえ、こんなハンデは課せられないと思う。
観客は多分、あたしが体育の授業で敗北続きなこと。そのためにハンデを貰ってさえろくに勝てないために、日常的に極端なハンデが当たり前になっていることを察しているんだと思う。
普通なら、こんなハンデで勝っても勝ちじゃないと言いたい気持ちがありそうなはずなのに、さくらちゃんも当たり前のように受け入れていることが、ますます悲壮感を演出してしまったんだと思う。
ともあれ、これであたしの球技大会は終わった。もうあたしの参加する種目はない。

後は観戦するだけ。その前に、昼食を食べよう。
午後からは、浩介くんと恵美ちゃんの試合が行われることになっている。

# 小谷学園のグランドスラム　前編

昼食が終わり、あたしは全ての試合が終わってしまったので、テニスウェアから制服に着替え直す。
ちなみに、このテニスウェアは、そのままテニス部に寄付される。
アンダースコートも同様に借り物なので、キチンと返しておかないと。
それにしても、こんな胸の大きいテニスウェア、今後使う人いるのかな？
……まいっか。そんなことよりも、今は午後一のテニスの試合のことだわ。
試合は午後1時から始まることになっている。今回はの試合は5セットマッチで、しかも最終セットは2ゲーム差が開くまで延々行われるグランドスラム形式になっている。
場合によっては下校時間になっても決着がつかないこともある。
もしそうなったら、明日以降テニス部で決着をつけるという。
恵美ちゃんがこの試合にかける意気込みは本気だ。
いくら男とは言え、小学校の頃にちょこっとハマっていて、6年もブランクのあるたった1ヶ月半練習しただけの人間に負ける訳にはいかない。
しかも、テニスプレーヤーなら誰しもが憧れるグランドスラムの形式。男子だけに許された5セットマッチを体験できる。

ある日、恵美ちゃんが言っていた。
「優子、テニスには『真の王者は5セットを勝ち上がっていく。5セットにまぐれはない』って言葉があるんだ。てことはよ、女子は真の王者になり得ねえってことだ。女子には5セットはきつすぎるってな。悔しいが、それは当たってる」
恵美ちゃん曰く、「男子の土俵で男子を負かすことが出来れば、少しは気分も良くなる」と言っていた。
もちろん、生粋のテニス部員には勝てないけど、付け焼き刃の男に

負けては、さすがにプライドも傷つくと言っていた。
ギャラリーも、あたしの試合とは比べ物にならないくらい多い。
でも、あたしはうまく最前列を取れた。
しばらくして、恵美ちゃんと浩介くんが入ってくる。
浩介くんのテニスウェア姿は初めて見る。
といっても、そこまで変わらない。
恵美ちゃんの方も、滅多に見ないテニスウェア姿。
最後に見たのは、インターハイの中継の時だっけ？

「えーただ今より、田村恵美と篠原浩介の試合を開始します」
審判の人がそう言うと、まず軽く打ち合う練習が続く。
浩介くんは何度もサーブの練習をし、恵美ちゃんもリターンの練習をする。
また、ストロークやボレーの確認もしている。
「残り1分です」
その声と共に、練習もラストスパートに入る。
結構、浩介くんもいい動きをしている。
練習という名のウォーミングアップが終わると、次にコイントスが始まる。
コイントスに勝ったのは恵美ちゃんで、恵美ちゃんはサーブを選択した。
ここから、試合が開始される。

トン……トン……トン……
見よう見まねのあたしたちとは違う、恵美ちゃんの無駄のない動き。
ギャラリーも、みんな固唾を呑んでいる。
「うえあ!!!」
恵美ちゃんが威嚇するような咆哮を上げると同時に、強烈なサーブが来る。
「んっ！」

浩介くんは反応して返す。
「あぁっ!!!」
恵美ちゃんが浩介くんのオープンコートに放ち前に出る。
浩介くんは落ち着いて返す。
しかし、そこは恵美ちゃんのいた場所だった。
「そいっ！」
「１５―０」
前に出れば、攻撃力が増す。
浩介くんが反応する間もなく、ボールはコート内でバウンドしてからコートの外へ。
ちなみに、永原先生がボールガールをしていて、線審やチェアアンパイアも体育の先生やテニス部の顧問が担当している。永原先生のボールガール姿、かなりエロいわね。あたしもあんな感じだったのかしら？
ちなみに、さすがにチャレンジ制度までは再現できなかった。土のグラウンドにすれば跡は残るけど、そんなもの小谷学園にはない。
「たあああああぁ!!!」
「３０―０」
パチパチパチパチ!!!
「うおおおおおお!!!」
今度は恵美ちゃんが、中央のラインギリギリに決まったサービスエース。観客が拍手と歓声を上げる。
浩介くんも反応しようとしたけど、読みが外れたのかもしれない。
次のサーブ、今度はコースが外れフォルト。
恵美ちゃんのセカンドサーブ。
「んっ！」
ファーストサーブと比べると、かなりコントロールを重視したサーブになっている。
「えやっ！」
浩介くんも、際どい所をついてくる。
「ていっ！」

「ああっ！」
掛け声と、ボールの音がコートにこだまする。
「あっ！」
「４０―０」
恵美ちゃんが、浩介くんの逆を突いた。
スペースの広い方に走っていく浩介くんを見逃さないその動体視力。
これが、全国一の実力。
次のサーブもセカンドサーブになる。
前に出た恵美ちゃんに、今度は浩介くんが横を抜いていく。
初めての浩介くんのポイントに、観客たちも感性と拍手がわく。
「４０―１５」
とはいえ、現実は甘くない。
「はぁ！」
「っ！」
「ゲーム田村」
次のサーブもファーストサーブが入り、浩介くんのミスショットをスマッシュで咎められ、恵美ちゃんのサービスキープになった。
今度は浩介くんのサーブ。恵美ちゃんは、他の全国のライバルに、キープさえさせないくらい圧倒的な強さを誇っている。
さて、浩介くんのサーブが、どれほど強いんだろう、みんな固唾を呑んで見守っている。
「ふーっはぁ！」
テニスボールの乾いた音、スピードは恵美ちゃんとそこまで変わらない感じ。
恵美ちゃんがボールを返す。
そして、ラリー戦になる。
少しラリーが続いたの地、一瞬の隙を見逃さず、恵美ちゃんが仕掛ける。
「０―１５」
実力差は、明らかな感じだった。

でも浩介くんは、顔色一つ変えていない。恵美ちゃんも、まだまだ探り合いという感じ。
この5セットマッチ。まだ始まったばかりなのだ。
「はぁあ！」
「うはっ！」
浩介くんの掛け声で強烈なサーブが恵美ちゃんのボディーに。
恵美ちゃんも予想していなかったのか返球はそれてアウトに。
これで15―15になる。
速度は同じくらいでも、やはりパワーというか球の重さが違うのだろうか？
恵美ちゃんが、わずかに顔をしかめる。
「あんた、普段プレーしてる男どもよりも、強えじゃねえか」
「お世辞はやめてくれ。直前に部員と一回だけ練習試合したが、見事にベーグルを焼かれたよ」
「いや、サーブのパワーはあいつら以上だよ」
浩介くんは元々、筋力は凄まじい。
フィジカルエリートと言ってもいい。だから威力だけなら強力になるというのも頷ける。
「……そうかい」
「だがな、あんたはあたしには勝てない。パワーだけでは、テニスに勝てねえからな」
恵美ちゃんがそう宣言する。
確かにここまでの試合運びを見ていると、恵美ちゃんに分があると思う。
次のサーブ、浩介くんは際どいコースを狙ったが大きくハズレてフォルト。
「ふっ！」
浩介くんのセカンドサーブは多少山なりに入る感じ。
恵美ちゃんはそれを返すと、すかさずボレーに。
「んっ！」
浩介くんがバックハンドで返すが、恵美ちゃんの反射神経により1

５―３０
次のサーブも、浩介くんはセカンドサーブになり、同じようなプレーで１５―４０、恵美ちゃんが２ブレイクポイントを握る。
「ふー」
浩介くんは、全く動じていない。
いや、むしろこうなることを予想しているかのような感じにさえ見える。
ファーストサーブが入ると同時に、今度は浩介くんが前に出た。
いわゆる「サーブアンドボレー」である。
恵美ちゃんがそれを返球する。
浩介くんはうまく反応するが、打ったコースが悪かった。
恵美ちゃんに山なりのロブを打たれる。
浩介くんは間に合わないと判断したのか、打球を追おうともしない。
「ゲーム田村、２―０」
浩介くんがサービスゲームを落とし、３ゲーム目。
恵美ちゃんがダブルフォルトを犯したのもあって４０―４０、いわゆるデュースにもつれ込む。
こうなれば、どちらかが２ポイント差を付けるまでゲームは終わらない。
「はぁっ！」
「アドバンテージ、田村」
恵美ちゃんが２回目のサービスエースを決める。
周囲も騒然となっている。最初の方では攻める姿勢も見せた浩介くんが、今や防戦一方である。
返すボールも山なりで、ストロークも遅い。
でも、なるべく追いつこうとはしているけど、無理と判断すれば全く追おうともしない。
いや、もしかしたら「わざと」そうしているのかもしれない。
「ふえいっ！」
恵美ちゃんのセカンドサーブ、浩介くんはバックハンドで緩いボー

ルを返す。
よく見ると、浩介くんは恵美ちゃんを左右に振ろうとしている。
一方で恵美ちゃんは、結構強烈なボールを使って、浩介くんを後ろへと下がらせている。
「ふっ！」
すると、恵美ちゃんがドロップショットを打ってきた。
完璧に決まった、浩介くんは一瞬前に移動するが、ワンバウンドした瞬間に既に諦めてしまっていた。
「ゲーム田村、３―０」
ゲームカウントは３―０だが、早くもお通夜ムードという感じでもある。
「あーあ、こんなんで５セットマッチかよ」
「こりゃあ篠原のストレート負けだな」
早くも、周囲はそんな声を漏らす。
「浩介くん……」
あたしも、少し心配になるけど、どことなく安心感もある。
コートがチェンジされ、浩介くんがあたしから見て手前になる。
「あ、優子ちゃん」
「うん、浩介くん……大丈夫？」
浩介くんが、あたしの元へと歩み寄ってくれる。
「ああ、勝てねえ相手じゃねえよ。元々、最初の１セットは仮に俺が全力でも取られると思ってる。幸い田村も油断している。次のセットからが勝負さ」
浩介くんが周囲に聞こえない風にそんなことを言う。
やっぱり、あたしの予想した通り。今は体力を温存し、２セット目以降に勝負をかけるつもりなんだろう。
でも恵美ちゃんだって、配分は考えているはず。
次は浩介くんのサービスゲーム。
「ふぁ！」
「フォルト！」
浩介くんがセカンドサーブ、恵美ちゃんが前に出る。

コースを予想していた浩介くんは、ロブを打ち上げる。
「ちっ！」
「「おおおおお!!!」」
恵美ちゃんの股抜きショットが炸裂し、会場もどよめくが、ゆっくりと前に出て浩介くんが落ち着いてスマッシュを打つ。
「１５―０」
スマッシュも思いっきり打ったという感じじゃない。
２球目、ファーストサーブはさっきよりもやや威力が低い。
それでも、際どい所に決まったために恵美ちゃんは体制を崩しつつ少し苦労しつつ返し、それに対して浩介くんはオープンコートにやや置きに行ったショットを打つ。
「３０―０」
どうやら、「サーブの威力だけはテニス部以上」というさっきの言葉は間違いではなかったみたいね。
それに、恵美ちゃんが体制を崩したのを見て無理をしないで打つように切り替えるなど、状況判断がとてもうまい。
「ゲーム篠原！」
パチパチパチパチ！
このゲームは、浩介くんがキープした。
初めてゲームをキープした浩介くんに周囲も拍手を送る。
これだけの経験の違いがありながら、恵美ちゃんからゲームを取ったのだ。
第５ゲームに入る。
恵美ちゃんも少しだけ、息を切らせてきた。でも、まだまだ余裕があるという表情。
浩介くんも、最初の返球には集中力を高めている。フリーポイントを作らせないことが、今後大切になってくる。
恵美ちゃんの攻撃にも、大分タイミングが合ってきた。
最初のゲームの時とは、浩介くんの動きが変わってきている。
それだけじゃない。

浩介くんのショットが、ワンパターン化している。
恵美ちゃんの足元に、緩いボールを、左に右に中央に、深い所に返す。ただひたすら、その繰り返し。
恵美ちゃんもそれに慣れてきたので、このゲーム、恵美ちゃんが多少のミスがありつつも楽にキープした。
これでゲームカウントは4―1、とにかくどこかでブレイクバックしないと、このセットを落としてしまうことになる。
だけど、浩介くんは積極的にブレイクしているという感じはしない。
「まずいわね、田村先輩……」
「え？」
隣で見ていたテニス部の女の子が、そうつぶやく。
「多分、勝てるとは思うんですけど、もう少し早い展開を心がけないと。後半が苦しいと思います……男子はその……体力とパワーが凄まじいですから」
確かに、そんな感じはする。とは言え、リードしているのは恵美ちゃんだ。
第6ゲーム、浩介くんはさっきと同じ入り方。
でも、サーブがあるため、恵美ちゃんを数球で崩しつつ冷静にポイントを加えていく。
それでも、恵美ちゃんが時折パターンを崩すと、浩介くんに為す術がない。
デュースにもつれ込み、数回の一進一退の攻防の末、浩介くんが苦しみながらキープした。そう言う印象だ。
「ふう、篠原、あんたやるな。インターハイで、あたいから2ゲーム奪ったやつはそうそういねえ。あんたはインターハイでも、女相手なら勝ち上がれるだろうな」
試合中、また恵美ちゃんが浩介くんに話しかけてくる。
「そうかい、そいつは良かったよ田村」
「だがな、それでもあたいに勝てるかは別物だ。あんたがサーブをキープできるのも、女子から見たら並外れたパワーがあるからだ。逆

に言えば、ミスを重ねれば、あんたはブレイクされるってことだ」
「……」
恵美ちゃんはまだ、余裕の一言を放っている。
浩介くんは、それに一切動じる気はしていない。
第7ゲームは恵美ちゃんのサーブ。
「てやあっ！」
恵美ちゃんはいきなり、ボディーを狙う。
浩介くんは、それを落ち着いて捌く。
何とかラリー戦に持ち込む浩介くんだが、恵美ちゃんはそれをさせまいと、積極的にボレーを仕掛けてくる。
また、恵美ちゃんは時折サーブアンドボレーも見せていて、その時も浩介くんは左右に抜こうとしたり、ロブを打ち上げたりするものの、いずれも有効打にはならない。
このゲームも恵美ちゃんがキープ。後1ゲームで、恵美ちゃんがこのセットを取る。
浩介くんは、全く動揺していない。
それどころか、「勝てそうだ」という顔さえしている。
周囲のギャラリーも、浩介くんにやや応援が入っている。
傍目に見れば、恵美ちゃんのテクニックに浩介くんが翻弄されている形に見える。それでも、浩介くんは諦めないどころか、余裕の表情でさえあるのだ。
第8ゲーム、浩介くんのサーブ。
いきなりダブルフォルトでスタートする嫌な展開。
浩介くんも内心ではちょっとメンタル面で動揺があるのかもしれない。
浩介くんはサーブを打ち、ストローク戦では左右に振ったかと思えば、ある所を境に徹底的にセンターに緩いボールを打つようになる。
とにかく、どうやって恵美ちゃんの体力を消耗させるか？
浩介くんはそればかり考えているみたいね。
「ゲーム、田村！」
恵美ちゃんがこのゲームもブレイクし、6―2で第1セットは恵美

ちゃんが取った。
ここから、少しばかり休憩時間に入る。
「浩介くん」
「ああ、大丈夫。逆転の望みはまだあるさ。３セットなら、どのセットも全力で行かなきゃいかんだろうが、これは５セット。長期的な視野が必要なんだ」
浩介くんは、柔らかい表情で、そんなことを言った。
これからの第２セット、ギャラリーも一部入れ替わる。自分の種目があるからだろう。
時計を気にしている人もいた。

# 小谷学園のグランドスラム　中編

「では、第2セットを開始します」
前回のセットは恵美ちゃんが浩介くんのサーブをブレイクしての終わりだったので、第2セットは恵美ちゃんのサーブから。

「ふぁっ！」
「ふん！」
「「おおお!!!」」
「0―15」
フォルトからのセカンドサーブを浩介くんがフォアハンドで叩きこむ。
浩介くんが、初めて恵美ちゃんのサーブにリターンエースを決め込んだ。
観客も拍手している。
恵美ちゃんの顔が、一瞬引きつった気がする。
恵美ちゃんは次のサーブ、ファーストサーブをきっちり入れてくる。
浩介くんは合わせるように返す。
恵美ちゃんは隙を伺って右に左にと振るが、なかなか掴めない。
第一セットの時と違って、浩介くんが明らかにギアを上げてきている。
でもそれはフットワークだけ、このゲームで返すボールはセンターの深い所に山なりの緩いボール。
まるでバカの一つ覚えのように、ラリーでそれを続ける。
10ショット以上ラリーが続き、最後はなんとか恵美ちゃんが決めて15―15とする。
次のボール、恵美ちゃんがフォルト、セカンドサーブを強烈に返す。
今度は恵美ちゃんも返してくる。
浩介くんは逆を突かれたがそれを素早く対応し、スライスでつなげる。

恵美ちゃんも体制を立て直すためのショットを打つ。
浩介くんはバックハンドでまた緩いボール。
恵美ちゃんのボールにそっと合わせるだけの、省エネ仕様だと思う。
恵美ちゃんは、右に左に浩介くんを攻める。
今の所、浩介くんの守備を恵美ちゃんの攻撃が破る確率の方が高い。
だけど、あたしにも分かる。
このまま行けば恵美ちゃんの体力がどんどん削られて、やがて一方的な展開になるんじゃないかと。

「ゲーム田村！」
そうは言っても、さすが恵美ちゃん。
体力が多少削れたぐらいでは、浩介くん相手に優位に戦えている。
第２ゲーム、ここは浩介くんのサービスゲーム。
「ほぁっ！」
「うえぁー！」
それにしても、ふたりとも声が大きい。
あたしもさっき声出してたけど、この２人ほど大きな声じゃない。
意図的にここまで大きな声を出すには、何か意味があるんだろうか？
まあいいわ。
浩介くんはサービスゲームでは時折強打を混ぜて、展開の早いテニスと遅いテニスを交互に繰り返す。
「アウト！　３０―１５」
それに因るペースの乱れで、恵美ちゃんのミスも増えてきた。
おそらく、これが浩介くんの狙い。でも、まだ恵美ちゃんのほうが有利。
さすがに２セット連続で落とすのは浩介くんにとってかなり苦しくなる。
更に浩介くんがサービスエースを久しぶりに決める。

「ちああっ！」
「!!??」
「ゲ!!ーム篠原！」
４０―１５で心理的に余裕があったのか、浩介くんはセカンドサーブをファーストサーブのように思いっきり打ち、これがサービスエースになる。
恵美ちゃんもまさかと思ったのか、動揺の色を隠せない。ともあれ、第２セットはお互いサービスキープから入った。
「ふぅ……はぁ……」
恵美ちゃんが深呼吸している。身体を見ると、結構汗が流れていてかなりタオルで拭き取っている。
しかし浩介くんはというと、水を飲み、軽く汗を拭くにとどめている。
お互いポーカーフェイスだから他の観客はまだ気付いていないけど、この時点で、もう浩介くんの方がかなり体力を温存していることが分かる。
「浩介くん……」
「ああ大丈夫だ、心配ない」
あたしに対して、浩介くんはそれだけを言って、試合に戻る。
基本的に同じ攻めばかりではまずいと思ったのか、さっきの「ダブルファースト」のように奇襲戦法も織り交ぜてくる。
第３ゲーム、恵美ちゃんはここをラブゲームでキープ。ファーストサーブが入ると、浩介くんもリターンは苦しい。
浩介くんとしても、とにかく右に左に前に後ろに、揺さぶりながら繋ごうとしているが、恵美ちゃんも浩介くんの戦法に慣れてきたと思える。
このセットはサービスキープが続く。我慢の展開だろうか？
観客たちも、歓声が減ってきた。
第４ゲーム、浩介くんの最初のセカンドサーブがリターンで崩される展開が続く。
０―３０からダブルフォルトもあって、０―４０、おそらくこの

セットでも最大のピンチがやってくる。
このゲーム、１回もファーストサーブが入っていない。
「うあぁ！」
「うおっ！」
浩介くんの渾身のボディーサーブで１５―４０としたものの、次のファーストサーブの後のストロークが甘く入り、前に出られて浩介くんがサービスゲームを落としてしまう。
「ゲーム田村！」
浩介くんは困ったなあという顔をする。
おそらく、このセットはキープを続ける算段だったんだろう。浩介くんは未だに恵美ちゃんのサーブを破れていない。
「頑張れー篠原ー！」
「男の意地を見せてやれ！」
観客たちも、浩介くんに声援を送っている。
ゲームカウント３―１で第５ゲームは恵美ちゃんのサービスゲーム。
「うあっ！」
恵美ちゃんもここは勝負所と分かっている。もしここでサーブを落とせば振り出しに戻るからだ。
浩介くんが相変わらずミス待ちテニスをする中で、きっちりと攻めてくる。
ドロップショットにも追いつきながら、３０―３０
「はぁ……はぁ……すぅ……うあぁ！」
恵美ちゃんの声とともに、強烈なファーストサーブが来る。
恵美ちゃん、まだこんなに体力が残っているなんて。
でも、浩介くんもそれに対応する。
徐々に、恵美ちゃんからフリーポイントが消えていく。多分、他の観客も気付いていない。
このゲーム、デュースにもつれ込んだが、それでも恵美ちゃんがこのゲームをキープ。
こうなると、浩介くんはもうサービスゲームを１つも落とせない。

しかし、第６ゲームは浩介くんのサービスエースもあって会場も盛り上がる。
このゲームをキープした浩介くんの顔は、諦めていない。それどころか、自らが有利であるとさえ感じている顔だ。
第７ゲーム、恵美ちゃんのサービスゲーム。
ここで浩介くんは積極的に攻めに出てきた。
「アウト！　３０―１５」
これまでのミス待ちテニスから一転攻勢に出ようと試みたが、ラインを超えてしまう。
しかもこのゲームの恵美ちゃんのポイントは、全て浩介くんのミス。
４０―３０となって恵美ちゃんのセカンドサーブ。
浩介くんはまた合わせるだけのテニスになる。
恵美ちゃんも「そう来るならこっちから行く」という姿勢で前に出る。
「……」
浩介くんが黙りながら軽くロブを打ち上げる。
「はぁっ！」
恵美ちゃんの１７５センチの身長を考えれば、このロブは甘かった。
恵美ちゃんが思いっきりジャンプして、スマッシュの形になり、恵美ちゃんにサーブをキープされる。
浩介くんは苦しい顔をする。おそらく、このゲーム、行けるという感じだったのかもしれない。
だけどどうしても、恵美ちゃんのサーブを破れない。ブレイクが出来ない。
「まだ、足りないのか……！」
浩介くんはそう言う。恵美ちゃんは何も答えない。
しかし、最初のパフォーマンスを見ると、次のセットは明らかに浩介くんが優位に見える。
とは言え、いかに体力的に有利と言っても２つもセットを落としな

がら3連取するのはメンタル的にも問題だ。
第8ゲーム、ゲームカウント5―2、もしここで浩介くんがサービスゲームを落とせばこのセットも恵美ちゃんのものになる。
浩介くんも、重圧はあるだろう。
「はぁっ！」
しかしそれでも、やや威力を落としつつもファーストサーブの確率を上げ、恵美ちゃんの体制を崩しつつオープンコートに放り込むパターンを確立しつつあった。
セカンドサーブでは、ストローク戦になることもある。
その時は恵美ちゃんのバックサイドに集めている。
恵美ちゃんも浩介くんも右利きなのでバックハンドの応酬になる。
30―15から恵美ちゃんはバックハンドの応酬の中で一つの勝負に出た。
「ふぅ！　てやあ！」
「!!!」
恵美ちゃんは全速力で走り強引にフォアハンドで打ってきた。
いわゆる「回り込みフォア」だ。
「アウト！」
「あー！」
しかし、ボールは無情にもアウトになる。
恵美ちゃんが「あー！」という声と共に天を仰ぐ。
しかし、もし入っていれば浩介くんは為す術もなかった。
結局次のポイントは浩介くんの強烈なファーストサーブで恵美ちゃんの返球がアウト。
これでゲームカウントは5―3、しかし、次の第9ゲームは恵美ちゃんのサービングフォーザセットになる。
浩介くんは「まずいなあ……」という顔をする。
浩介くんは、ここまでの恵美ちゃんが手加減しているんじゃないか？
と考えているのかもしれない。どちらにしても、ここの恵美ちゃんは全力で来る。

トン……トン……トン……
もう何度目かわからないこの動作。
「うえあぁ！」
「フォルト！」
恵美ちゃんも緊張をしているのか、ファーストサーブが大きく外れる。
セカンドサーブ、浩介くんはリターンエース。
恵美ちゃんは、サーブのフリーポイントを取れなくなってきた。ほぼ全てのポイントで、ストローク戦に持ち込まれている。
「うりゃあ！」
浩介くんが、コートの右端からフォアハンドの強烈なショットを打つ。
「うあぁ！」
恵美ちゃんが、大きな声でそれを返す。
ボールが浮き、浩介くんがスマッシュをする。
「15―40」
恵美ちゃんのミスもあって、浩介くんがブレイクポイントを握った。
恵美ちゃんの顔にも、少しだけ焦りの色が見える。
「すぅーはぁ！」
「フォルト！」
渾身を込めたサーブはフォルト。
セカンドサーブを入れるが、浩介くんが強烈に返すと、前に出る。
恵美ちゃんは何とか返すが前に出ていた浩介くんが落ち着いて決める。
「ゲーム、篠原！」
「うおおおお!!!」
「すげええええ!!!」
「何だよあいつ、たった一ヶ月半練習しただけで、田村のサーブを破っちまったぞ」
浩介くんも、雄叫びを上げる。

ゲームカウントはまだ5―4で恵美ちゃんのリード。
でも、お互いに1ブレイクずつだから、ほぼ並んだということになる。
恵美ちゃんはただ、呆然としている。
ここでコートチェンジになる。
「浩介くんすごいわ！」
「ああ、やっとタイミングが合ってきた。ともあれ、次キープすればこのセット、イーブンになる」
浩介くんは淡々と、でもどこか嬉しそうに言う。
一方の恵美ちゃんも、気持ちを切り替えて休息に入っている。
とは言え、コートチェンジの間の休息時間では回復しきれないのはお互い同じ。
第10ゲーム、浩介くんのサービスゲーム。
「はぁっ！」
「15―0」
サービスエース。
「30―0」
セカンドサーブから恵美ちゃんが攻めに入ったショットをことごとく拾われ、最後は恵美ちゃんがネットに掛けた。
「40―0」
強力なファーストサーブを入れて恵美ちゃんの体制を崩し、オープンコートに置きに行って決めた。
「ゲーム篠原！」
最後はセカンドサーブになったが、恵美ちゃんとのストローク戦で強力なショットで後ろに下がらせ、ドロップショットを使い、ラブゲームでキープした。
浩介くんのラブゲームは初めて。
だけど明らかに、流れが変わっている。
観客も、それに気付き始めている。
ゲームカウント5―5で迎えた第11ゲーム。
恵美ちゃんはこのままではジリ貧だと思ったのか、とにかく攻める

テニスをしてくる。
浩介くんの守備力を活かした戦法をされる前に、速攻で決めたい流れ。
デュースにもつれ込み、何度か応酬があったものの、最終的には浩介くんのミスで恵美ちゃんがキープした。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
でも、ブレイクポイントも何度も許す、明らかに苦しみながらのキープという感じだった。
浩介くんにとっては決めきれなかったゲームと言える。
最終ゲームは、浩介くんがキープし、このセットはタイブレークにもつれ込んだ。
「強いな、篠原はよ」
「そうか？」
「ああ、たった一ヶ月半でこのあたいのサーブを破るなんて……いくらあんたが男で身体能力も優れているからって、天才でもなきゃ無理だよ」
「それはありがとうよ」
ともあれ、タイブレークの時間。
まずは最初、恵美ちゃんのサーブから始まる。
「うえあぁ！」
恵美ちゃんの声とともに、ファーストサーブが飛んでくる。
浩介くんは、緩く返す。そして恵美ちゃんを左右に走らせ続ける。
またこれだわ、体力をとにかく消耗させる作戦。
恵美ちゃんもそれを嫌って、早めに仕掛けてくる。
そして最終的に、恵美ちゃんがバックハンドでウィナーを取りまず1—0になる。
ここから2球、今度は浩介くんのサーブ。
1本目はセカンドサーブで恵美ちゃんが前に出て仕掛けるが、浩介くんは落ち着いて横を抜く。
2本目はサービスエースを再び決める。
何だろう、最初のセットなら、間違いなく取れていたボールだけど、

恵美ちゃんは追いつかなかった。
恵美ちゃんの脚力が、落ちている。
次の2本は再び恵美ちゃんのサービス。
「ふあっ！」
「フォルト！」
恵美ちゃんのファーストサーブが外れる。
そして次のセカンドサーブだった。
「フォルト！」
浩介くんがミニブレイク。
これでタイブレークのカウントは恵美ちゃんから見て1—3ということになる。
「うおぁ！」
「ああっ！」
恵美ちゃんのセカンドサーブを浩介くんがリターンエース。
「ふぅー」
恵美ちゃんは2つともサーブを落とし、このセット、浩介くんが取るかもしれない。
恵美ちゃんは、明らかに焦りを見せている。
そう、体力面で浩介くんが明らかに上だということを知っているが故の、焦り。
次の2本、浩介くんはまずファーストサーブを外した。
隙を逃さない恵美ちゃんにドロップショットを決められた。
ここでポイントの合計が6の倍数になったのでコートチェンジになる。
そして次の1本、浩介くんはセカンドサーブになったものの、強烈なショットを恵美ちゃんが返しきれずアウトに。
結果的にミニブレイクを1つ許したことになるけど、まだ2—5で浩介くんが優位。
次の2本、1本目は恵美ちゃんのファーストサーブからのストローク戦で浩介くんの逆を突いた。
浩介くんはオープンコートに来ると思っていたものだから、全く反

応ができなかった。
やっぱり、試合運びは恵美ちゃんのほうが一枚も二枚も上手。
２本目は、ストローク戦の果てに浩介くんがミスをしこれで４―５、しかし次の２本を決めてしまえばこのセットは浩介くんの勝ち。
「はぁっ！」
浩介くんがファーストサーブを入れてくる。
ファーストセットを入れられると、恵美ちゃんもお手上げということが増えてきた。
いずれにしても、これで浩介くんのセットポイントになる。
次の１本はファーストサーブがフォルト。
「ふぁっ！」
セカンドサーブも、ファーストサーブのように打つ戦法をここで見せてきた。
もちろん、さっきのファーストサーブよりも威力は落ちているが、奇襲にはそれでいい。
高威力のボディーサーブに恵美ちゃんは動揺し、ボールが浮いてスマッシュのチャンス。
「セットバイ、篠原！」
「「わああああああああああ!!!」」
チェアアンパイアから浩介くんが第２セットを取ったことを告げると、観客のボルテージはＭＡＸになる。
さっきまで、浩介くんは恵美ちゃんのサーブを破ることさえ難しかったのに、今やタイブレークとは言え、セットまで取ってしまった。
第３セット、試合開始から９０分を超え、観客の多くが浩介くんの逆転を予感していた。

# 小谷学園のグランドスラム　後編

休憩時間が終わり、第3セット第1ゲーム。恵美ちゃんも浩介くんも、ここでトイレ休憩を取った。
タイブレークではまず恵美ちゃんがサーブを打ったので、ここは浩介くんのサービスゲームになる。
このゲームの浩介くんは、ファーストサーブを威力重視ではなく、入れることを重視してやや慎重になっている。
それでも、疲労の色が隠せない恵美ちゃん相手には、それでも十分な威力になりつつあった。
体力差による、元々あったパワーの差が、広がっていった。
浩介くんの強烈なボールを返し続けていた恵美ちゃんの腕には、間違いなく疲労が蓄積されている。これでは技術差でカバーするのが難しくなる一方だわ。
途中、いくらか浩介くんのミスもあったものの、４０―３０から危なげなく浩介くんがキープする。
恵美ちゃんも、休憩も挟んだのである程度はついていっている。
でも、回復力でも、浩介くんの方が上。
結局、どう転んでも、時間が経てば経つほど、浩介くんに優位になっていくのには変わらない。
第2ゲーム、恵美ちゃんは全てのファーストサーブを入れたにも関わらずデュースにされてしまう。
恵美ちゃんのファーストサーブに、浩介くんがついていっている。
しかしそれでも、テニスというのはサーブを打った側は有利だ。
恵美ちゃんはデュースの後すぐに2ポイント連取し、サービスをキープする。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
恵美ちゃんは、頻繁に息を切らして、汗もとてつもない量が出ている。
しかし、浩介くんは多少汗をかいてはいるものの、疲労の表情はあまり見せてない。

５セットマッチだから、まだ２セット残っている。
第３ゲーム、浩介くんはかなり緩いボールを使う。
このゲームはまた浩介くんが持久戦術中心にゲーム展開を見せる。全くもって容赦がない。
恵美ちゃんがしびれを切らして攻めに行った所を、一気に咎める作戦で、このゲームをキープ。
第４ゲーム、恵美ちゃんは全力でサーブを打つ。
浩介くんのリターンミスもあり、４０―１５になる。
「フォルト！」
「４０―３０」
「大丈夫だまだ１ポイントある。まだ勝てる。気持ちで負けるな」
ダブルフォルトの時、恵美ちゃんがそんなことを言う。
でも、そんなこんなことを自分に言い聞かせなきゃいけないという時点で、恵美ちゃんが相当苦しいのは誰しもが知っていた。

「デュース」
しかし、恵美ちゃんの気合は通用しなかった。
浩介くんが一気にボレーで決める。
「アドバンテージ、篠原」
そして、デュースになって浩介くんは、また右に左に振って恵美ちゃんを走らせると、唐突にドロップショットを打ち、恵美ちゃんが必死に返すがアウト。
恵美ちゃんのメンタルが壊れ始めたのか、次のセカンドサーブが甘く入り、浩介くんがその隙を見逃さない。
「ゲーム、篠原！」
パチパチパチパチパチ……！
浩介くんが、恵美ちゃんのサーブを破るがさっきよりも、歓声は少ない。
もう、周囲の観客も気付き始めた。
浩介くんが「男」という性別を最大限に活用し、パワーと体力の差に物を言わせたテニスをしているということに。

第５ゲーム、浩介くんの嫌がらせのようなミス待ちテニスに恵美ちゃんはどんどん対応できなくなる。
恵美ちゃんは最初のセットでは考えられないような隙が見え、浩介くんはそこに容赦なく放り込んでくる。
場合によっては、隙をわざと見逃して緩いボールをひたすら打ち続けてエラーを誘っている。
統計は分からないけど、恵美ちゃんのアンフォーストエラーはここまで浩介くんの倍はあるはず。
第６ゲーム、恵美ちゃんのサーブ。
さっきまでのブレイクの苦戦が嘘のように、浩介くんは４連続でポイントを決め、ラブゲームでブレイクしてしまった。
これで、ゲームカウントは５―１、浩介くんが次のサーブを取ればこのセットは浩介くんのものになる。
恵美ちゃんが、ここで「メディカルタイムアウト」を取る。
テニス部員に腕と肩をマッサージするように要求している。
「ねえ、田村先輩」
「何だ!?」
「もう、止めたほうがいいです」
「んっ……あたいに棄権しろってか」
「……このままでは、怪我する恐れもあります」
「うるせえ！　あたいは怪我なんかしてねえんだ!!!　勝負を逃げるわけには行かねえんだ。てめえもテニス選手なら、そのくらい分かるだろうが！」
「はいっすみません……」
恵美ちゃんが、威圧感を持って女子部員に言う。
阿修羅のような勢い。
さすがに全国一というだけあって、凄まじい精神力を持っている。
第７ゲームは、浩介くんのサービスゲーム。
浩介くんは途中、ダブルフォルトを犯すが、取られたポイントはそれと浩介くんのミスが１回のみ。
このセットは、さっきのセットが嘘のような短時間で終了した。

結局、恵美ちゃんは1ゲームキープするのがやっとでゲームカウントは6―1だった。
観客は、静まり返っていた。
次のセット、その結果がどうなるかはもうわかっている。
見るに堪えない、悲惨な結末が待っていることを。
「ふう」
浩介くんは、もう一度気を引き締めるかのように一息をつく。
恵美ちゃんのパフォーマンスが落ちているとは言え、ゲームメイクの力は落ちていない。
だから油断すれば、浩介くんも足元を掬われることをよく分かっていた。
セット間の休憩で恵美ちゃんが話しかけてきた。
「あたいはよ。第4セットどころか、第3セットに行ったことさえほとんどねえ。男子部員と練習している時はストレートで負けて、インターハイの時はいつもストレートで勝ってた。それに4つ目のセットは、3セットマッチでは決してたどり着けねえ領域だ。あたいは、女ながらその領域に踏み込むことを、許されたんだ」
「恵美ちゃん……」
「優子、正直に言ってこの試合、あたいが勝つ見込みは殆ど薄い。取れたはずのボールが取れねえし、ウィナーになるはずのボールを返され、入るはずの簡単なボールをミスしちまうようになった。技術力では確かにあたいのほうが上だが、大局的な試合運びでは、あたいは篠原に負けた」
「え……!?」
恵美ちゃんが意外な言葉を口にする。
恵美ちゃんは浩介くんに、「大局的な試合運びで負けた」というのだ。
「だがこれだけは言っておく。あたいは怪我などしていない。だから絶対に、棄権しない。どんな悲惨なテニスになろうが、あたいは逃げたくねえんだ。篠原の、ためにもよ」
「うん」

「それでは、第４セットを開始します」
最初、浩介くんのサーブから。
「ふぁっ！」
「うぐっ」
「アウト！」
「１５―０」
浩介くんのファーストサーブが入ると、もう恵美ちゃんには全くポイントを取れる気がしない。
球威に押され、合わせて返すのが手一杯で返した先はあらぬ方向に行ってしまう。
それどころか、セカンドサーブでさえ浩介くんのパワーに押され始めている。
左右に振り、体制を崩されたところでスマッシュかドロップショット、あるいは恵美ちゃん自身のミスでポイントを取られる。
完全にパターンが確立されていた。
観客も徐々に帰り始めた人もいた。
もちろん、自分の種目がある人も居るだろうけど、数は明らかに減っていた。
これで、浩介くんは恵美ちゃんから6ゲーム連取したことになる。
第2ゲーム、恵美ちゃんのサービスゲームだが、サービスの威力が明らかに減っていた。
「あぁっ！」
声も心なしか、弱々しくなっている。
そしてここでも、浩介くんは恵美ちゃんを左右に振る。
あるいはバックハンドに集め、バックハンドの応酬に持ち込み恵美ちゃんが根負けしてミスをするのを待つ。
１５―４０で浩介くんのブレイクポイント。
「うあぁっ！」
「ふんっ！」
浩介くんが、バックハンドで打つ。

バックハンドも、浩介くんは強烈になってきている。
いや、恵美ちゃんが対応しきれなくなっているんだ。
ラリー戦の果てに、恵美ちゃんのボールがネットに掛かる。
「ゲーム、篠原」
「うあああああああああああああ!!!

「全国一なんだろー！」
観客も完全に、恵美ちゃんを応援していた。第２セットまでは浩介くんが応援されていたのに。
このままでは、このセットは６―０のベーグルになる。
なぜテニスの５セットマッチが、男子にしか許されていないのか？
この試合は、それを雄弁に物語っている。
テニスの技術は言うまでもなく、恵美ちゃんのほうが上だ。
現に第１セットは、恵美ちゃんが圧倒していたし、第２セットも途中までは恵美ちゃんが優位で終盤にこそ追いつかれたがタイブレークの末に落としたほぼ互角の展開。
しかし第３セットに入って、浩介くんの執拗な持久戦術もあって恵美ちゃんのパフォーマンスは格段に落ち、一方の浩介くんはパフォーマンスを殆ど落としていない。
いや、落としては居るんだろうけど、恵美ちゃんほど露骨じゃない。
普段から、男の体で、鍛え抜いている浩介くんにとっては、大したことではないのかもしれない。
第５ゲーム、浩介くんのサーブ。
恵美ちゃんは、セカンドサーブでさえ返すのに苦労し始めた。
男の力で振るわれたボールを返してきたために、腕への疲労が、急速に溜まっていた。
３０―０で迎えた浩介くんのファーストサーブ。
「えあああっ！」
「うわっ」
浩介くんの強烈なファーストサーブに観客たちも驚く、まだそんな力が残っているのね。
「ぐっ……！　あぁっ……！」
「ふぉ……４０―０」
審判も唖然としていた。
恵美ちゃんはボールを返そうとした。
返そうとしたが、威力が強すぎて、恵美ちゃんのテニスラケットが弾かれてしまった。

無情にも壁に突き刺さるテニスボールと、地面に転がるラケット。
恵美ちゃんが茫然自失の表情で、ラケットを拾い上げようとすると、一人の女の子が恵美ちゃんに駆け寄る。
「もう……もう止めてください！」
さっきマッサージしていた女の子だ。
「うるせえ！　まだ負けたと決まったわけじゃねえんだ！」
「ダメですよ……女子の身体で……5セットなんて!!!」
「うるせえ!!!」
「私は元々反対だったんです……田村先輩、これ以上はもう……これ以上続けると、あなたの将来にもきっと――」
「ふざけるな!!!」
「っ！」
恵美ちゃんが、その女子部員に対して心の底から怒りを込めた声で言う。
「バカにするな！　ケガもしてねえのに、受けた勝負を諦めて……棄権しろだあ!?　てめえは、てめえはテニス部にいて、あたいから何を学んだんだ！」
「うっ」
「試合中にケガをしてしまったってんなら、棄権は止む終えねえよ。でも、ここで棄権して、あいつはどうするんだ!?　今日のこの試合のために、あいつだって必死にあたいを倒すために練習してきたんだぞ!!!」
「でもそれはもう十分――」
「確かにもうあたいには後がねえよ。次のサーブを落とせばあたいの負けだ。だけど、そうなるまで、まだあたいが負けたと決まったわけじゃねえんだ!!!」
「……」
女子部員は、恵美ちゃんの威圧感に完全に押されている。
「それでも……それでも、こんな……ラケットを弾く田村先輩なんて……」
「それがどうした!!??　今のは、ちょっと力の入れ方をミスしただけだ

!!!」
「そんな……このセットに入ってから、全然田村先輩らしくないです。こんな一方的にやられる田村先輩の姿、私見たくないんです！」
「聞かねえ!!! てめえの言うことは聞かねえ!!! おい、誰かこの無礼者をつまみ出せ!!!」
恵美ちゃんはラケットを拾い、女の子を押してそう叫ぶと、テニス部の顧問のチェアアンパイアの人が駆けつけて、コートの外まで出るように言う。
彼女は、落胆した表情を見せていた。

「すまねえ、うちの部員が。さ、続けてくれ。遠慮はいらん。むしろ絶対にやめてくれ。今のあんたにできることは、あたいを全力で、完膚なきまでに叩き潰すことだ」
「……分かった」
恵美ちゃんが、浩介くんに頭を下げ、自分をなるべくボコボコにして欲しいと、そう伝えた。
「はあっ！」
「フォルト！」
とは言え、いつもファーストが入るわけじゃない４０―０からセカンドサーブ、ここでストローク戦になるが、恵美ちゃんのフットワークが明らかに落ちていた。
浩介くんは、今までなら狙わなかった位置からドロップショットを狙うとボールは無情にも２バウンドした。
「ゲーム、篠原！」
ゲームカウント５―０、次は恵美ちゃんのサービスゲーム。
だけど、サービスの威力はもはや半減に近く、ファーストサーブのスピードは浩介くんのセカンドサーブの威力にもなっていなかった。
０―３０から恵美ちゃんのセカンドサーブ。
恵美ちゃんがボールを上げて視線をそらした隙に、浩介くんが忍び足のように一気に前に出た。
「んっ!!!」

恵美ちゃんは何とかセカンドサーブを入れるが、浩介くんの前に出てのリターンに全く対応ができずこれで０―４０、もはや恵美ちゃんには１ゲームどころか１ポイント取ることさえ、困難になっていた。
「まだそんなものを隠し持っていたのね……」
「いや、あれは本来トッププロ、それも極めてセンスの有るようなプレイヤーがするような技だ。つまり、それをアマチュアレベルでやるということは、自分と相手によっぽどの実力差があるということさ」
あたしのつぶやきに対して隣の人がそんなことを説明してくれる。
「はぁ……はぁ……」
恵美ちゃんの表情は、諦めの色が色濃くでていた。
もう、勝てない。でも、それでもやりきる。
浩介くんのマッチポイント、しかも３回ある上にゲームカウントは５―０だ。
「フォルト！」
「くそお！　うあぁ！」
恵美ちゃんは、凄まじい掛け声と共に、２回ともファーストサーブのように入れる。
「っ！」
ダブルファーストとして、セカンドサーブは入ったものの、あっさりとリターンエースを決められてしまった。
「ゲーム、セット、アンドマッチ、ウォンバイ篠原。セットカウント３―１。２―６、７―６、６―１、６―０」
「あっ……」
テニスが、終わった。
この長丁場の、５セットマッチ。終わりはあっけなかった。
恵美ちゃんがガクッと膝をつく。
「うっ……うぁ……あっ……っ！！！

初めて見る恵美ちゃんの泣き顔。
あれだけプライドが高く、豪胆で、どこか飄々としていた恵美ちゃんが、あんなに大きな声で泣き出すのは、いや、泣いているところさえ誰も見たことがなかった。
それだけ、恵美ちゃんはこの試合は勝てると思っていた。
でも、現実は力尽きて完膚なきまでに叩き潰されてしまった。
誰も、恵美ちゃんに声をかけることはなかった。
浩介くんも、その場で見守るしかできなかった。

恵美ちゃんが落ち着いた後、恵美ちゃんと浩介くんには、惜しみない拍手が送られた。
２人も健闘を称え合い、そして浩介くんも恵美ちゃんも、あたしのもとに駆け寄ってきた。
よく考えれば、途中で何度か観客の入れ替わりもあって、この試合をフルで見ていた生徒は、あたしだけだった。
「優子、ありがとうな。試合見てくれて。それからすまねえな……終わりの方は無様なところばっかり見せちまってよ」
「ううん、いいの。恵美ちゃん女の子だもん。泣いていいと思うわ」
「……そう言ってもらえると、助かるぜ」
恵美ちゃんは、これからテニス部員たちとともに反省会を行うという。
「優子ちゃん、俺……」
「うん、浩介くん、おめでとう」

「でもよー、結局体力で男が強いの当たり前だしなあ」
「うんうん、あれは田村の勝ちだよ。篠原も大人気ねえっていうか」
「テニス勝負以前に、あれじゃ単なる耐久テストだろ」

観客の３年生の男子がそんなことを言っている。
「おいっ!!!」
「わっ、田村！」

恵美ちゃんが、怒った表情でその男子に食って掛かる。
「いいか、テニスの５セットにまぐれはねえんだ。あたいは、篠原より弱いから負けたんだ」
「いや、でもよ……体力で男が強いのは当たり前だし、技術力はどう見ても――」
「馬鹿野郎!!! それも含めて、テニスなんだよ!!!」
恵美ちゃんが、ものすごい剣幕で怒り出す。
「うっ……」
「あたいは……あたいは弱いから負けたんだ!!! ３セットなら、まだ言い訳も通じるさ。でも、５セットは……違えんだよ!!!」
「す、すみません……」
男子たちは、恵美ちゃんの気迫に押されて、申し訳なさそうに頭を下げる。

「今回のは、あたいが泣く所、ラケットを折った所、それも含めて、全部映像に残して貰うつもりだ。きっと、将来に役に立つから」
球技大会が終わった後、恵美ちゃんのそんな言葉が、いつまでも印象に残っていた。

# 反省会

浩介くんと恵美ちゃんの試合は、立ち所に大反響を呼んでいた。
高校も3年生になると、男女の身体能力の差は顕著に現れる。
去年の文化祭だって、あれだけ鍛えている恵美ちゃんが持ち運ぶのに苦労していた重い荷物でも、その辺に居る文化部の男子は運ぶことが出来た。
それどころか、恵美ちゃんはずっとテニスに打ち込んできた。
浩介くんは中学高校とブランクがある中、急造でここまで作った。
確かに、浩介くんはとてつもない猛練習をしていたわけだけど、そもそも日頃から鍛え抜いていた浩介くんだからこそ出来るような猛練習とも言えた。
恵美ちゃんも、闘志は凄まじかった。
それは浩介くんに負けていなかった。
ラストの方で見せたラケットの破壊、そして恵美ちゃんの大泣き。
でも、誰も怒らなかった。それどころか、恵美ちゃんに送られた惜しみない拍手を後押しした。
普通なら、テニスラケットを壊すなんて褒められたことじゃない。
でも、あの試合に掛ける想いが大きいことを、みんなが知っていたから。

「ねえ優子」
「うん？」
朝、母さんが話しかけてくる。
「お母さんも、ＤＶＤで見たわよ。浩介くんと田村さんの試合」
「え!?」
うーん、大々的に配布して、学園の宣伝に使うつもりなのかしら？
それとも母さんだから入手できたのかな？
「浩介くんすごいわねえ。あれは一種の天才よ。田村さん、全国一で卒業したらプロになろうかって子なんでしょ？」
「う、うん……」

もしかしたら、母さんはテニスにおいて女子は5セットをしないということを知らないのかもしれない。
「それとも、男女の身体能力の差がなせる技かしら？」
「あ、あはは……」
もちろん、浩介くんの並外れたセンスもあるけど、あの試合を見れば分かるように実際には浩介くんは有り余る体力とパワーで押しきったというのが事実。
浩介くんはあの後「1セットだったらコテンパンにやられていただろうし、3セットでも厳しかった。5セットだからこそ勝てた」と言っていたし。
でもそれに対しても恵美ちゃんは「だからこそグランドスラム男子は5セットなんだ」と言っていた。
3セットまでは、その時の勢いで番狂わせになりがちだが、5セットならそれもかなり少なくなると。
だが、いかんせん5セットは長い。あの試合だって2時間かかったが、あれでも後半は一方的な展開だったから早く終わった方で、フルセットまでもつれ込むと3時間以上かかることも珍しくない。
そう言えば、あのときも観客の男子が「あれじゃテニス勝負以前に耐久テストだろ」とか言ってたっけ？
プロのテニスツアーは過酷でけが人が多く出ているし、出場している選手も、どこかケガをしながらプレーしているらしい。
実際、そう言う風潮に異を唱えている人も多いみたいね。
今の所、この話はネット上に出ていない。
恵美ちゃんは、インターネットでもテニスに詳しい人には「天才少女」として知られているらしく、その恵美ちゃんが1ヶ月半練習しただけの男子に、しかも後半はボロボロになって負けたとなれば、格好の燃料だ。
だけど今の所、そういったことがなくてよかったわ。
ところで、球技大会の日はあたしの誕生日でもあった。
その事について浩介くんも覚えていてくれたけど、先月盛大なパー

ティーをしてくれた手前、あれこれ要求は出来ない。
浩介くんも「あの試合で優子ちゃんにかっこいい所見せられた」と言ってたし、母さんも、あたしが「優一時代」のことを嫌ってるためか、大層なプレゼントではなく、お人形さんの着せ替えセットをプレゼントしてくれた。
あたしは、女児向けのおもちゃが大好きだけど、子供向けのおもちゃ屋さんは苦手でもある。
楽しそうに親子連れでおもちゃ選びしている幼い女の子を見ると、どうしても悲しくてたまらなくなっちゃうから。本当にネット通販はありがたい。

「優子、そろそろ時間よー」
「はーい」
ともあれ、今は学校に行かなきゃ。

通学路を歩く。
生徒たちの会話も、この前の球技大会の様子に集中していた。

「にしても、篠原先輩すごかったよねえ」
「うん、でもやっぱり、男って強いんだなあって思ったよ」
「うんうん、最初は田村先輩有利だったのに、あっという間に逆転しちゃったもんねえ」
「そもそも最初のセットは何故あそこまで苦戦したんだろ？」
「やっぱそこはほら、技術力の差でしょ？」
２年生と思しき女子が昨日の試合の感想を述べている。
あたしが所属する３年１組はどうだろう？

ガラガラガラ……
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう」
声をかけてきたのは桂子ちゃんだった。

「うん、桂子ちゃんもおはよう」
よく見ると、浩介くんは高月くんと話していた。
「にしても、篠原見直したぜ！　あの田村をテニスで負かすんだからよ」
「ああうん、でも結構きつかったよ。特に第２セットは。」
「でも最後追いついたじゃん。仮にタイブレーク落としていても、フルセットで篠原の勝ちだろ？」
「試合の時はあそこで負けてたらメンタルで負けてズルズルストレート負けだったと思ったけど、でも冷静に考えればそうだよね……」
確かに、恵美ちゃんは第３セットの時点で疲労が出ていたし、第４セットに至っては全く持ってテニスにならなかった。
もし最終セットにもつれ込んでいたら、さらに悲惨なことになっていたのは間違いないだろう。

「やっぱお前から優子ちゃんを取るのは無理そうだよな」
「おまっ、何言ってんだよ！」
「でもよ篠原、お前優子ちゃんの彼氏になってから、どんどんかっこよくなってるぜ」
「え⁉　そうかな？　うーん……」

それはあたしも同じ。浩介くんに恋してからというもの、これまで以上にかわいくなってると思う。それは周囲からもよく言われること。
恋は人を変えるというのは本当だと思う。
だって、好きな人に見られてるって意識しちゃうし。
「でもよ」
「うん？」
「やっぱり優子ちゃんといちゃついてるお前を見ると、呪わずにはいられねえんだ！」
「はは、呪いなんて効かねえよ。いいか？　仮に俺に何か不幸があっ

ても、それは偶然であって決して高月の呪いのせいじゃねーからな。それだけは忘れんなよ」
「わ、分ってるって」
浩介くんが、いつも呪いの儀式をしている高月くんをフォローしている。
やっぱり、浩介くんは責任感が強くて、周囲に気配りができる人なんだって、改めて思う。
朝の教室の他の会話も、この前の試合のことばかりだった。

「はーい、ホームルームを始めますよー！」
いつものレディースーツ姿の永原先生が、教室に入ってホームルーム開始。

「恵美ちゃん、お昼食べよ？」
「お、いつも篠原と食ってるのに珍しいな」
「あ、いや、浩介くんも一緒に」
あたしは、側にいた浩介くんの方を向く。
「おう、この前はありがとうな」
「礼を言うのはこっちだ。いい練習にもなった」
「そ、そうか……」
「ともあれ、食事中に振り返るか」
「ああ」
恵美ちゃんと浩介くんの方で話し合った結果、学食で話し合うことになった。
「で、田村の課題ってなんだ？」
「ああ、やっぱ体力面だ。５セットマッチをやってみて分かったよ。最近は試合が練習も含めて長くても2セットで終わっちまう。そのせいもあって3セット目以降ボロボロになっちまった」
「なるほどなあ……」
あたしたちが学食に行く間でも、早速話し合いが行われていて、あたしもそれを聞きながら学食へ向かう。

学食が近づくにつれ、二人の口数も少なくなる。
学食では、あたしはカレーを、恵美ちゃんは牛丼大盛り、浩介くんはラーメン大盛りを頼んだ。
食事を受け取り、あたしたちはテーブルを一つ見つける。
「で、ラケット壊したり、泣き出したことについては何か言われなかったか？」
「普通なら大目玉なところだが、あんたのプレースタイルや状況を考えればってことで、そこまで怒られなかったぜ」
恵美ちゃん、ちょっとだけ嘘をついている目をしている。怒られたのは事実だろう。
「……そうか、俺のプレースタイルってそんなにイライラするものか？」
浩介くんが不思議そうに言う。
「そりゃそうだ。あんたのテニスはいわゆる『シコラー』って言われてるもんだ。体力と守備力にものを言わせてひたすらボールを返してあたいのミスを待つ。ましてや女と男で体力差があるの分かりきった状況だぜ。嫌でも焦っちまうよ」
恵美ちゃんが用語を交えて説明する。
それにしても、なんか下品な言い方な気がするわね。
「あー、俺もどうすれば田村の体力を削れるか考えてて、男子テニス部員からアドバイスをもらったんだ」
やはり、テニス部員が仕込んだものなのね。
「後で映像を見たが、あんたはサーブ力の強さにものを言わせてたぜ。つまりパワーだ。これもあたいの腕を疲労させて、最後にはラケットをはじいちまった」
「つまり、田村の課題はパワー不足ってこと？」
浩介くんが質問をする。
「あーいや、３セットなら入り得ない第４セットでの、それも男子のサーブを受けてのものだから、顧問の先生もそこまで悲観する必要はねえって話だったぜ」
恵美ちゃん曰く、男子テニスの場合、みんなパワーは当たり前のよ

うに持っていて、それだけでごり押しするのは困難らしい。
翻って女子の場合、多少技術力に難があっても、飛びぬけたパワーがあれば、それだけで世界一も可能だという。
今回の浩介くんはあまりにも技術力がなかったから途中まで勝負できたけど、例えば恵美ちゃんが他の男子部員と男女でテニスの対決をすると、技術力以前にパワーと体力といった基礎身体能力で押し切られてしまうんだとか。
浩介くんとの対決でそうならなかったのも、付け焼き刃だったため。
「そういう意味でも、あの試合はいい練習になったよ」
「そうか、それは良かった」
「それに、今回の男女対決、まだインターネットには出てねえ見てえだけど、小谷学園テニス部のいい宣伝になったと思うぜ」
恵美ちゃんが笑顔で言う。
どちらにしても、お互い悔いが残らなくて良かったわ。
その後も、恵美ちゃんと浩介くんは試合の状況について語り合っていた。

「でもよ、注目されるのはあたいじゃなくて篠原の方かもよ」
「そ、そうかな？」
「ああ、あんたの今の身体能力は飛びぬけ取る。あんたがいくら男で、しかも体力面で優利な５セットマッチだと言っても、あんな短い練習であたいを負かすなんて、天才でもなきゃ無理だ。どこのスポーツチームでも、あんたは狙われると思うぜ」
「そうかなあ？　俺ももうすぐ１８だし、青田刈りには遅いと思うぜ」
「それでも、だよ。お前が何もスポーツをせずに、天文部で趣味の筋トレしてるだけなんて、世間は許さねえぜ」
恵美ちゃんが警告するように言う。
「はは、大丈夫だって」
浩介くんはあくまで楽観的に言う。
でも実際、あの球技大会には、テニスのスカウトもいた。

とは言え、テニスの年齢を考えると、今から始めるのは確かに遅い。
「それに、俺には優子ちゃんがいるからな。スポーツ選手は忙しすぎる上に、失敗したらリスクも高いだろ？」
「ああ。あたいだって本当は失敗した時のことを考えて、ＯＬの道に進みたかったが、世間が許さなかったんだ。篠原、お前も気を付けとけよ」
「うむ、忠告ありがとうな」
浩介くんと恵美ちゃんは食事をとりながら、器用に会話する。
あたしは食べるのに必死で会話を聞いているだけ。
だけど、浩介くんにスカウトが来ても、断り切れないということはないと思う。あたしも浩介くんの責任感の強さは信頼しているし。

「「ごちそうさまでした」」
３人で食べ終わるとごちそうさまをしてそのまま解散。
恵美ちゃんは昼休みは教室で休むと言って一足早く小走りで向かっていく。
あたしと浩介くんも、教室へ話しながら向かう。
「なあ優子ちゃん、さっき田村が言ってたことだけど」
「あたしも、心配しなくても大丈夫だと思う」
「優子ちゃん、理由を聞いてもいい？」
「だって、あたしたち、蓬莱教授の研究に関わる予定でしょ？」
あたしが、当然という顔で言う。
「あー、そうか、そうだよな！」
浩介くんも、目から鱗が落ちたように合点してくれる。
そう、スポーツ選手でどれだけ偉大になろうが、蓬莱教授の不老研究に携わることの方が、世間への影響力は圧倒的に高い。
間違いなく、全世界の人類に、いや、全地球の生命に影響を及ぼすことなのだから。スポーツじゃそんなことは出来ない。
「本当にしつこいようなら、あたしたちで永原先生や蓬莱教授とも相談して対策を考えましょう。決して悪い結果にはならないわ」
「うむ、そうだな」

教室につくまでに、あたしと浩介くんで結論が出てしまった。
途中、視聴覚室が見えた。
行列が出来ていて、中を覗くとこの前の浩介くんと恵美ちゃんのテニスの試合の視聴者で埋め尽くされていた。
試合時間そのものも長いし、しばらくはこの傾向が続きそうね。
教室の中でも相変わらずその話題ばかり。中にはスマホのＳＤカードに保存して、ＰＣで見てる人もいるとか。
後、高月くんが「よくあのひらひら舞い上がるスコートが気にならなかったよな」という会話をしている。
実際ボールに夢中になっちゃえば、案外どうでもいいらしい。
恵美ちゃんも狙っていたのか、あたしがつけてたようなひらひらのアンダースコートだったけど。
そんなこと気にならないくらい、現場は盛り上がっていたとも言えるけど。

「ふーん、篠原にスカウトねえ。ま、いざとなったら蓬莱教授を頼れば大丈夫よ」
放課後、天文部でさっきのスカウトの話題のことになると、桂子ちゃんはあたしと同じことを言う。
そうねえ、蓬莱教授の不老研究。これで浩介くんとずっと一緒に暮らせるから。
ちなみに、天文部の男子たちも、この前の試合で話題は持ちきりで、改めて、「あたしには手を出さない」ということが再確認されていた。
コンコン
突然、扉がノックされた。
「はーいどうぞー」
ガチャッ
「あら、先生！」
入ってきたのは永原先生だった。
「篠原君、石山さん、ちょっといいかな？」
「はーい」

「あの、先生」
桂子ちゃんが話しかけてくる。
「どうしたの木ノ本さん？」
「それは私たちに聞かれるとまずいことですか？」
「うーん、特にそういうわけでもないし……うん、天文部のみんなも聞いてくれるかな？」
永原先生があっさりと了承する。
多分、例のスカウト問題だと思う。
「「は、はい……」」
天文部の男子たちも、動揺しながら永原先生の方を向く。
「今日、スポーツアカデミーのスカウトさんが来ました。ぜひ篠原君をと言ってました」
「俺は断ります。進路はもう決まってますから」
「ええ。私もそう言っておきました。ですが、とにかくしつこかったです。篠原君に合わせてくれと」
「……会うつもりは、毛頭ありません。俺には、優子ちゃんという、スポーツなんかよりもずっとずっと大事なものがあるんです」
「浩介くん……」
ありきたりな表現だけど、あたしのとってはとても素敵な表現。
あたしは思わず、うっとりとしてしまう。
「ええ、ですがスポーツのスカウトは、マスコミ並みかそれ以上にしつこい人たちです。特に海外のスカウトは、とにかく成果主義ですから」
「……どうしても、追い払うことはできないんですか？」
浩介くんが少しだけ不安そうに言う。
「難しいでしょうね」
永原先生が気落ちしたように言う。
「あの、永原先生」
「はい石山さん」
「その……蓬莱教授を頼ってみてはどうでしょうか？」
「ちょ、ちょっと待ってください石山先輩！」

1年生の男子が驚いた顔で言う。
「そうですよ、どうしてそこで蓬莱教授が!?　そもそも先輩たちは蓬莱教授のこと――」
天文部に新しく入ってきた男子たちは、あたしと浩介くん、蓬莱教授との関係を知らない。
だから、みんな一様に驚く。
「詳しく話すと長くなるけど、石山さんと私、それから篠原君と蓬莱教授は『日本性転換症候群協会』、つまり私と石山さんのようなＴＳ病患者とその支援者で集まる会に所属しているわ」
実際には、永原先生が会長なことや、あたしが正会員なのはみんな知っている。
小谷学園の中ではあまり意識されていないけど。
「今協会は、蓬莱教授の多大な援助に支えられているわ。詳しくは話せないけど、石山さんと篠原君は、蓬莱教授の研究に参加するつもりなのよ」
「でも、蓬莱教授にどうやって!?」
納得のいかない男子の一人が、永原先生に食ってかかるように言う。
「蓬莱教授は資産家でもあるのよ。研究への援助金として、世界中の資産家から寄付をもらっているわ。警備員の派遣くらい、訳ないことよ。蓬莱教授としても、石山さんと篠原君はどうしても欲しいのよ。特に石山さんは、自分の研究のためにも、ね」
「はえーすげえ……」
ま、驚くのも当然よね。
蓬莱教授が、単なるノーベル賞学者ではないということ。
「ともあれ、私の方でも蓬莱教授と交渉して、蓬莱教授の名前を出せるように便宜を図っておきます」
「ありがとうございます」
永原先生の配慮に、あたしも頭を下げる。
「いえいえ。悪いのはしつこいスカウトですから」
永原先生も、あたしや浩介くんに責任を感じすぎないように配慮し

てくれる。
こういうのは、積み重ねた信頼関係がないとできないこと。
永原先生は、用事が済むと、部室を出て行き、あたしたちはまた、何事もなかったかのように天文部の活動を再開する。
ともあれ、これで大丈夫なはずよね。
今は、信じることしか出来ないけど、きっといい方向に向かってくれるはずだわ。

# スカウト行為

幸いにして、この試合の内容はインターネット上ではどうやら話題にならないまま終わりそうだ。
また、あたしと浩介くんでいつも2人で下校しているため、変な声掛けスカウトもいなかった。
学校の方には電話がかかっているけど、永原先生が全てシャットダウンしてくれている。
さて、球技大会が終わると、次のイベントはいよいよ修学旅行という事になる。
とは言え、まだそれには時間があってまだ準備する段階ではない。
「それでさ、この前――」
「えー、浩介くん何それぇー!?」
あたしと浩介くんは、今日も他愛もない話をしながら、笑いあって下校していた。
「すみません」
突如、30代くらいの男性が声をかけてきた。
「はい」
「君だよね？　この前の球技大会で、田村選手を負かしたの」
「？　俺じゃないですよ」
浩介くんがとっさに嘘をつく。
「いやいや、嘘はいけないでしょ。映像に残っているんだからさ」
「――で？　仮に俺だと言ったらどうするんですか？」
浩介くんは嫌々ながら答える。
間違いなく、例のスカウトだよね？
「私はアメリカのスポーツアカデミーのスカウトをしている――」
「スカウトの話は、すべてお断りしています」
スカウトが言い切る前に、浩介くんがきっぱりと拒絶する。
「まあそう言うなって。君は部活天文部なんだろう？　それはあまりにもったいないじゃないか」
「俺の勝手です。さ、いくぞ優子ちゃん」

「うん」
浩介くんとあたしが、無視をして歩こうとすると、スカウトが回り込んで進路をふさぐ。
「何だ!? 勝手に人の歩く進路を妨害するのは軽犯罪法違反だぞ!」
そうだったんだ。知らなかったわ。
「君はスポーツ選手として、偉大になれると言っているんです。その才能を活かさないのは、世界にとって損失ですよ」
「そうかい。俺には関係ねえよ」
浩介くんが今度は脇を通り抜けようとする。
「悪いですけど、こっちにも生活が懸かっているのでして」
「おい」
スカウトがまた、歩くのを妨害してくる。
「大方、そこの彼女さんに心酔しているとみる。世界のために、別れてみては――」
「カッ!」
その言葉を聞き、浩介くんが切れた。あたしとしても許せない。
「うるせえんだよ! てめえに何がわかる!?」
「そう怒らずに。怒っていては、パフォーマンスも発揮できませんよ。そんな女など捨てなさい」
「――これが最後の忠告だ。そこをどけ!」
浩介くんが一段と大きい声で言う。
「いえ、そう言うわけにはいきません。君を何としてでも、アメリカに連れて行かなきゃいけないんです」
「俺は同意しねえぞ」
浩介くんはきっぱり言う。
「いいえ、こちらとしも、何が何でも同意してもらいますよ」
話はいつまでも平行線、通学路の生徒たちも、あたしたちを変な目で見ている。
「もはや問答無用か……仕方ない。優子ちゃん、強行突破するぞ」
「え!?」
浩介くんが強行突破を決断した。

「うおりゃあああ!!!」
「ぐほっ……」
浩介くんが姿勢を低くし、スカウトに頭を向けて思いっきり顔めがけて頭突きをかます。

スカウトはその場で地面に倒れこみ仰向けになると、浩介くんがスカウトの腹を踏みつけ、あたしにおんぶするようにジェスチャーし、あたしが背中に乗ると一気に走りこむ。
後ろを振り返っている余裕はなかった。

「はぁ……はぁ……ここまでは、追ってこねえだろ……」
よく見ると、浩介くんの頭にはさっきスカウトに頭突きした際についたと思しき鼻血が僅かについていた。
「浩介くん、はい」
「あ、ああ……」
あたしがハンカチで浩介くんの頭を拭く。
すでに駅前に来てしまった。普段はここで浩介くんと別れる。
「浩介くん、一人で大丈夫？」
「んー今日はとりあえず一人で帰ってみるよ。このことは両親にも相談するつもり」
「そう、気を付けてね」
あたしは、浩介くんと不安そうになって別れた。

「ただいまー」
「優子、おかえりなさい。どうしたの？　元気ないわね。浩介くんとケンカでもした？」
「ああいやそうじゃないんだけど――」
あたしは母さんに、学校で取っているスポーツアカデミーのスカウト対策と、先ほど起きた出来事についても話す。
「なるほどねえ……でも、すぐに引き下がってくれるかしら？」
母さんが不安そうな表情で言う。

「うん、そのための蓬莱教授よ」
とは言え、蓬莱教授の方から連絡はまだないけど。
「じゃあ母さん、休むね」
「はーい、ご飯呼んだら来るのよ」
「分ってるわよ」
あたしは、気分を紛らわせるため、私服に着替えたら、お人形さんとぬいぐるみさんで、お遊びをする。

「ねえねえ、ねこさん、ねこさんはどうして狩りをしなくても生きていけるの？」
「それはだにゃー、にゃーには飼い主がいて、飼い主さんが餌をくれるんだにゃー」
「へーいいなあ……」
あたしは、猫さんとクマさんで、一人芝居をして楽しむ。
「優子ー！　浩介くんから電話ー！」
「はーい！」
そんな時、母さんが大きな声であたしを呼ぶ。
浩介くんの家から、テレビ電話がかかってきて、あたしを呼んでいた。
「はい、優子です」
「あ、優子ちゃん」
テレビ電話の画面には、浩介くんと「義両親」の姿があった。
「その……今日、浩介が強引なスカウトにあったんだって？」
「はい、学校から駅までの通学路で、通り抜けようとしても回り込んで通せんぼされて、いくら断っても聞く耳持たなかったので……仕方なく、頭突きで強行突破しました」
「他にやりようはなかったのかねえ……」
「お義父さん」が唸りながら言う。
「無かったと思います。あたしと別れるように持ちかけたり、あれはもう、言葉からは『アメリカに拉致してでも連れていく』かのようなニュアンスさえありました」

あたしが、あえて大言壮語気味に言う。
「んー、優子ちゃんがそこまで言うという事は、相当だったんだろう」
「でも、そこまでしつこいってことは、また来ませんか？　しかも今度は複数で」
母さんが、懸念を言う。
「ああ、あの時は一人だったから、何とか強行突破できたけど、複数人が来たらわからねえ。しかもスポーツアカデミーだ。スカウトとは言えそれなりに鍛えているはず」
浩介くんがそう言う。
「あの、学校まで車で送り迎えするというのはどうでしょう？　永原先生を通して、全校に周知した上でです。これはもはや、『不審者』だとあたしは思います」
ともあれ、今日の事件は永原先生に報告が必要になる。
問題は頭突きの経緯だ。
それについては、永原先生に口止めしてもらう方法もあるが、リスクもある。
何らかしらの建前論が必要だ。
「あの、私に考えがあります」
今度は「お義母さん」が手を挙げた。
「うん？」
「スカウトは、『何が何でも』と言ったんですよね？」
「ああ」
「ええ」
あ、言いたいこと分かっちゃったわ。
「つまり、『何が何でも』ということは、それこそ『拉致監禁』も含むわけじゃないですか？　つまり、『どんな手段を使ってでもと言われ、拉致されると恐怖を感じて、逃走のために仕方なくした』という事に知るというのはどうでしょう？」
「うーん、いくら何でもそれは……」
「いえ、いいと思いますよ」
母さんの異議に対して、あたしがそう答える。

ともあれ、建前論だから、馬鹿馬鹿しくてもいい。何が何でもを超厳密に字義通り解釈したで押し通せばいいのだ。
とにかく、一旦はこれでお開きとして、浩介くんの家の方で、永原先生に報告することになった。

「うまく行くといいわね」
「ええ……」
私も母さんも、不安の色を隠せない。
ともあれ、あたしは自室に戻らずに、ソファーでそっと結果を待つ。
もちろん、すぐに来るとは思えないのに。
しばらくして、テレビ電話が鳴った。
浩介くんではなく、永原先生からだった。
「はい」
「あ、石山さん、こんばんは。災難だったね」
「はい、こんばんは。永原先生」
永原先生が、テレビ電話の向こうに映る。場所は協会の本部だった。
「とりあえず、報告するね。篠原君には、車での送迎通学を許可します。っといってもする人がいないだけで、別に禁止はされていないけどね。ただ、スカウトの一件は全校に伝えて、『不審者』として注意を促すわ」
「……ありがとうございます」
浩介くんと楽しく一緒に帰ることができなくなるのは寂しいけど、仕方ないわね。
「篠原君としても、スポーツ選手になるつもりはないそうです。仮になると言い出したら両親も反対すると言ってますし、元より篠原君本人も反対してます」
「ええ」
それは分かっていたけど、嬉しかった。
「ただ、あのアカデミーはそれなりに大きいところだから、あの手この手で催促してくるわ。おそらく、石山さんにも揺さぶりをかけてくる

でしょう」
「……ええ。分かってます」
あたしも浩介くんも心変わりはあり得ない。
蓬莱教授の研究への参加は、スポーツでどんな記録を打ち立てるよりも偉大なことだと知っているから。
「ですが、何か言って来たら、とにかく『話も聞かない』という態度を取ってください。今回は、マスコミほど世間への影響力がないので、徹底的に強硬手段でお願いします」
「……分かりました」
あたしは今回はそれに賛成。
それから、場合によっては警察との相談も考えておかないといけない。
どちらにしても、忙しい事になりそうよね。

翌日、永原先生がホームルーム開始を告げる。
「まず、不審者の情報です」
「不審者」という永原先生の言葉に、教室が緊張感に包まれる。
小谷学園付近は治安が良く、不審者の情報は滅多に出ない。
「昨日、アメリカのスポーツアカデミーのスカウトを名乗る３０代くらいの男が、篠原君に対して執拗に転入を勧めました。篠原君が断っても一切引き下がらずに、通り道を塞ぐといった行為も見られました」
強行突破の事は話さないことにした。
「今後、外堀を埋めようと皆さんに声をかける事案が発生するものと思われますが、話には耳を貸さないで下さい。余りにもしつこく、往来を妨害するようでしたら、遠慮なく１１０番通報して下さい」
永原先生の口から、「警察への通報」という言葉が出る。
多分、蓬莱教授との相談の結果だろう。
「それから、篠原君についてはしばらく親御さんの車で通学することになりました。みんな分かってるとは思うけど、篠原君をからかわないで下さい」

「「わははははっ」」
永原先生の言葉で、教室が笑いに包まれる。
「分かってますよ先生！　そのスカウトとやらが悪いんだろ⁉」
「「そーだそーだ」」
高月くんの声と共にクラスのみんなも同調する。
ともあれ、これは全校に周知されることになった。さすがに、大丈夫だと思いたい。
その日、授業は滞りなく終わり、他の学内や天文部でも、浩介くんへの同情の声が聞こえただけで、ほぼ平穏に一日が終わった。
「じゃあ、バイバイ浩介くん」
「ああ、また明日」
「お義母さん」が操縦する車に、浩介くんが乗り込み、あたしが見送る。
さて、あたしはと言うと、一人ではなく、桂子ちゃんと一緒に帰ることになっている。
「桂子ちゃん、ごめんね。付き合わせちゃって」
「いいのよ。それに、私たちもよく一緒に帰ってたでしょ？」
「うん、そうだったね」
通学路、桂子ちゃんとのガールズトークで盛り上がる。
「それで、桂子ちゃんは誰を気に入ったの？」
「うーん、私はもう少し見極めたいわね」
桂子ちゃんも桂子ちゃんで、天文部の男子を見定めている。
だけど、今の天文部が崩壊してしまう危険性もある。
野球部の二の舞を、演じたくないという気持ちが、桂子ちゃんにはあるのだ。
「はー、ダメよねえ。あーあー、こんなんだから優子ちゃんみたく彼氏できないのかも」
桂子ちゃんは、自分がかつて「学校一の美少女」と呼ばれていたことを知っている。
この称号、今ではすっかりあたしのものだけど、でも桂子ちゃんのかわいさが損なわれたわけではなく、あたしに彼氏がいることは知ら

れているので桂子ちゃん狙いの男子はとても多い。
　だけど、あまりの人気ぶりに、男子が相互にけん制しあっている。
「桂子ちゃん、もっと肉食系女子になってみてはどう？」
「それも考えたんだけどねー」
　あたしは、いつぞやと同じようなアドバイスをする。
　だけど、やっぱりどうも桂子ちゃんは乗り気になれないみたい。
　でも、男子が警戒しあってしまっている以上、桂子ちゃんの方から動かないと打開は難しいわよ。
　しかしこの日も、桂子ちゃんはこの問題は先送りにするという。
　にも関わらず、桂子ちゃんはあたしと違って、不老というわけじゃないから、「焦り」があるという。
　高校生の時点で、恋愛に焦りを感じるというのは、相当自分に自信があるってことよね。
　ともあれ、今日はこれでお開きになった。

　均衡が破れたのは2日後だった。
　それは天文部でいつものように活動していたときのこと。
　　コンコン
「はーい」
　おや？　お客さんかな？
　　ガチャッ
「あっ……貴様は……！」
　浩介くんが驚いた顔をする。
　それは先日のスカウトだった。しかも、ＳＰらしき人を2人連れていた。
「どうやって入ったの？　学校の表には警備員が居たはずだけど」
　桂子ちゃんがまず、食って掛かる。
「そんなもの、どいてもらったに決まってるでしょう」
　どう考えても、穏当な手段ではない。
　とすれば、間違いなく外は騒ぎになっているはずだ。
「さて、篠原浩介くん。君はこんなところで油を売ってないで、すぐに

アメリカに飛んで、スポーツエリートになってもらいます」
「断ると言ったら？」
「無理にでも、引っ張りましょうか？」
２人の屈強な男が前に出る。
「ふぅー、状況が分かってないようだな？」
浩介くんが余裕の表情で言う。
「何!?　気でも狂ったか!?　ここのＳＰは制圧のために特別な訓練を受けた。いわばスペシャリストだ」
「……戦いは、数だよ。特にこんな、素手の戦いじゃな」
「ん!?」
天文部の男子たちが、一斉に立ち上がる。
その数は、浩介くんも入れて９人。
「２対９と思うなよ。実際には４対８１だ」
「やれやれ、そんなことまで知っているとは。随分と博識ですねえ。ますます、アメリカに行かせたくなります」
浩介くんがあたしにサインを作る。
うん、分かった。
あたしは、こっそり携帯電話を取り出し、電話をかける。
「おや、何をしているんだ!?」
ＳＰの人があたしに怒鳴りつけるが気にしない。
さすがに女の子のあたしには手を出してこないはずだ。
「あーもしもし、食堂ですか？　悪いんですけど、天文部までラーメン１４人前お願いできますか？」
「ありゃりゃ、そうでしたか。これは失礼。私たちにもおごってくれるとは思いませんでした」
スカウトは、安心した表情で言う。
警察でも呼ばれたんじゃないかと思っていたらしい。
……バカな人。
「石山さん、そのまま時間を稼いで」
電話から永原先生の声がする。
「はい……ありがとうございます……」

あたしは出前という建前でもっともらしいことを言う。
「それにしても、ここは部室に出前まで食堂はしてくれるんですか。さすが小谷学園ですね」
のんきなことを言っているがとにかく時間を稼がないと。
「ともあれ、何度言っても同じですから、俺の気持ちは優子ちゃんと共にあります。ラーメンに免じて、どうかお取り引き願いたい」
「いえ、私としても、これほどの原石を見つけたとなれば、昇進間違いなしですからねえ。残念ですが、あなたの気持ちを変えるのが、私の仕事です」
「ふう……そうやって、ＳＰに守られながら言うか。そんな臆病者のいるようなへっぽこアカデミーなんかこっちからお断りだい」
浩介くんが、思いっきり挑発するように言う。
「な、ななななんですと!?」
「どうせ、ろくなスポーツ選手も排出できない。雑魚なんでしょ？俺一人にそんなに必死になるもんな？　何の実績もない詐欺グループに違いないな」
「こ、ここっ……このお……!!　無礼にもほどがありますよ!!」
「べ―!」
浩介くんは、まるで小学生のように「あっかんべ～」をして挑発をする。
そして後ろを向き、自分でお尻ペンペンをする。
極めて幼稚だが、こういう「意識高い系」の「真面目系クズ」にはこれが一番効く。
「よ、よろしい。そんなに馬鹿にするなら……」
「あの、挑発には乗らないほうが――」
ＳＰの一人も、冷静になるように促す。
「うるさい！　ここまで言われて、何もしないのでは私の名が泣きます！」
やっぱり、馬鹿な人よねこの人。
スカウトは、ＳＰの静止も聞かず、前に出てしまう。

「今だあ！」
「「おりゃあ！」」
「うわあっ！」
　天文部の２年生の男子３人が、スカウトの腕を引っ張り、強引にこっち側へ寄せる。
「おいっ！」
　ＳＰが取り返そうと前に出る。
「動くな！　こいつがどうなってもいいのか!?」
　浩介くんがＳＰに脅すように言う。浩介くんは、後ろ足をスカウトの股間の上に乗せる。
「いつでもやれる」という意思表示だ。
「な、何!?」
「あなた方を、住居侵入罪の現行犯で逮捕します」
　桂子ちゃんがそう宣言する。
「な、な……」
　バタンッ！
　すると突然、扉が開いた。
　それは、警察官５人と永原先生だった。
「警察だ！　大人しくしろ！」
　ＳＰには警察が２人がかりで逮捕する。
　ＳＰはさすがに警察には刃向かえず、おとなしく縄に付く。
　スカウトは抵抗していたが、浩介くんと最後の警察官が協力して取り押さえ速やかに退場していった。
「永原先生、高島さんを呼んでください」
「え……!?」
　突然の言葉に、永原先生も動揺する。
「……今回のこと、記事にするべきだと思います。スポーツ不祥事ですから」
「……分かりました」
「協会は直接関係はないので、何か言ってきたら自由裁量でと伝えてくれますか？」

「ええ、もちろんです」
こうして、強引なスカウトによる騒動も、ようやく一件落着したのであった。

## 2年目の初夏

しつこいスカウトは警察に逮捕され、拘留中だ。
そんな中で、翌日、永原先生がスカウトの上司があたしと浩介くんに謝罪と慰謝料を渡してくるという。
永原先生によれば、日本支部のスカウト長と支部長だとか。
昼休み中のこと、永原先生から、「謝罪に来た」という知らせが来た。
すると浩介くんは、「教室に通して、謝罪するべきだ。俺は今教室でくつろぎたいから」と言い放った。
浩介くん、この一件ではかなり怒っていて、責任感が強いが故に、責任者に覚悟を求めるんだってことを思い知る。
ガラガラガラ……
「……あの、篠原様と石山様はどちらに？」
二人のスーツを着た中年男性が、申し訳なさそうに永原先生に尋ねる。
「今呼んできます。石山さーん、篠原君ー！」
「おうっ」
「はい」
永原先生に呼ばれ、あたしと浩介くんが席を立つ。
クラスのみんなも、注目している。
「この度は私の部下がお二方に大変なご迷惑をおかけいたしまして、誠に申し訳ありません」
「申し訳ございません」
2人があたしたちに頭を下げる。
「……どうして、こんなことになったんだ？」
浩介くんが厳しい口調で、開口一番にそんなことを言う。
「担当のスカウトが発掘した選手がここの所鳴かず飛ばずでありまして、他のアカデミーが永原先生に断られた時点で止めておいた中、成果を焦るあまり、強硬な手段を取ってしまいました」
「……元々、あなた方のアカデミーはこの手の不祥事が多いのですが、何が原因だと思いますか？」

永原先生が聞いてくる。
「えっと、それは……その……」
２人が言葉に詰まり、迷う仕草を見せる。
「ふぅー、具体的な再発防止策を提示して、再発防止が約束できねえなら、謝罪は受け取れねえし、俺はお前らを返すわけにはいかないな」
「いやしかし――」
「逃げようたって無駄だぞ！　俺はこれでも相当鍛えて鍛えている。てめえら２人を取り押さえることなんざ訳ねえよ」
「我々にもスケジュールが――」
「うるせえ!!」
浩介くんが大声で怒鳴る。ここまで大きな声で浩介くんが怒ったのも久しぶりだ。
「てめえのスカウトはな、スポーツのためだ何だ言って、俺と優子ちゃんの仲を引き裂こうとまでしたんだぞ!!!　俺だけならまだいい。優子ちゃんにひどいことしたことを、俺は絶対許せねえんだよ!!!」
突然怒り出した浩介くんに、２人はただ、「申し訳ありません」と繰り返す。
「この……だから再発防止策は何だ!?　言え!!!」
浩介くんが一人の男性の胸ぐらをつかむ。
「し、篠原君やめなさい！」
永原先生が止めに入るが聞かない。
「『申し訳ありません』じゃねえだろ！　再発防止策は何だっってんだよ！」
「そ、その……あ……あっ……」
「言えねえのかゴルァ!!」
こんなに怒っている浩介くんは久しぶり。
教室でも、何事かとみんなあたしたちを見ている。
「言え!!!　言え!!!　言えええええ!!!」
浩介くんが乱暴に背中に打ち付ける。
浩介くんの怒りも最も。最愛の人との仲を引き裂こうとしたんだから。

「あ、あの……二度と、二度と小谷学園には近付きません！」
いたたまれなくなったもう一人がそう言う。
それを聞き、浩介くんがもう一人の胸倉を掴んでた人を離す。
「それだけじゃ不十分だな。小谷学園以外で、こういうことをするつもりか？」
「い、いえ……」
「私から。今後こういう事の再発を防止するには、社員教育の徹底だけでは不十分です」
ここで、永原先生が声を上げる。
「え!?」
アカデミーの人、胸倉を掴まれた方が、驚いた風に言う。
「分かっております。今後は過度な成果主義をやめ、ある程度の年功序列も混ぜていきたいと思っています」
そしておそらく、こちらが日本支部長の人だろう。
「ったくよ、それが聞きたかったんだよ！」
浩介くんが苦虫を噛み潰したように言う。
「だがまだ信用できねえ。誓約書を書いてもらおうか」
いつもと違ってかなり用心深い。
「あ、あの――」
「書けねえってんなら、またそういうことをしますって言うとみなすぞ。いいのか？　小谷学園で噂が広まって、不特定多数の誰かにインターネットにそういうこと書かれても」
浩介くんは絶対に譲歩しようともしない。
「……分かりました。そうしましょう。私達としても、これ以上信用の低下を引き起こせば日本撤退も余儀なくされるでしょうから」
「机、借りてもいいですか？」
「ああ」
日本支部長さんの方は、まだ物分かりがよく、誓約書を書き綴り、印鑑を押す。
「指紋も押しとけ」
「う、分かりました」

浩介くんが大声で怒鳴ったのが効いている。
日本支部長さんが、朱肉に指を押し付け、誓約書をしたためる。
「さ、君も署名と指紋を」
「あ、ああ……」
スカウト長と思しき人が署名と指紋を押す。
「よし、原本は俺が持っておく。コピーはお前たちと先生、優子ちゃんの計４枚だ」
「分かりました、職員室に行きましょう」
永原先生の言葉と共に、あたしたちは職員室へと向かう。
「あの……篠原様」
「何だ!?」
日本支部長が浩介くんに話しかけてくる。
「もしよろしかったら何ですが、篠原様がスポーツへの道を拒否された理由。お教えできませんか？　今後の更なる再発防止のために、知っておきたいんです。もちろん、仮に今ここで篠原様が『やっぱり、アカデミーに行く』とおっしゃったとしても、断ることは大前提です」
「俺には、優子ちゃんがいる。それに、もう佐和山大学に行くって決まってるんだ」
「何故そのような大学に!?　なおのこと、スポーツの方が稼げると私は思いますが」
日本支部長さんは、当然あたしと浩介くんが蓬莱教授の研究に参加することは知っていない。
「優子ちゃん、永原先生、話しても大丈夫か？」
「ええ。どうせ、もうすぐ試験の日ですから」
永原先生が言うのは佐和山大学へのＡＯ入試について。
「分かった。俺と優子ちゃんは、佐和山大学と言っても、蓬莱さんから推薦を受けたんだ」
「え!?　蓬莱って……まさか!?」
日本支部長さんはやはり驚いた顔をする。
「ええ。ノーベル賞学者の蓬莱教授よ。あたしたち、そこで不老研究に携わることになったのよ」

「な、何と……！」
　あたしの言葉に、２人は言葉を失っている。
「例えどのスポーツでどんな偉大な記録を残そうが、蓬莱教授の研究に携わることの方が、世間への影響力も大きいだろ？」
「え⁉　そ、それは……」
　やはり、スポーツアカデミーの人は、それを肯定するのを躊躇している。
「もし、蓬莱先生の技術が１００年前にできていたら、ベーブ・ルースやルー・ゲーリッグが、未だにヤンキースでプレーしていただろうって言えば、この技術の偉大さがわかるわよ」
　永原先生が、スポーツのスカウトに分かりやすく説明をする。
　ベーブ・ルースは聞いたことあるけど、ルー・ゲーリッグって誰だろう？
「それは確かに……素晴らしいことですよね」
「あ、ああ……」
　そんなこんなで、あたしたちは職員室へとたどり着く。
「じゃあ、私がコピー取ってきますから、大人しくしていてくださいね」
「はい」
　重い時間が流れる。
　やむにやまれなかったとはいえ、浩介くんは日本支部長さんはともかく、スカウト長さんにはほとんど脅迫といっていい形で誓約書を書かせた。
　もちろんそれはあたしのためで、浩介くんはあたしのために怒ってくれたこと。だから、あたしの方から浩介くんを止めるのはできない。
　だって、あたしも、愛する人を――婚約者と引き離そうとしたんだから、あの男を許せないもの。
「はい、４枚コピー取ったわよ」
　そう言うと、永原先生は浩介くんと自身を除く３人に、コピーを配っていく。

このコピー、大切に保管しないといけないわね。
中身はやはり、再発防止策として、過度な成果主義を改めることや、社員教育の徹底、更に小谷学園には二度と近付かない旨が記されていた他、あたしと浩介くんへのお詫びの言葉も書かれていた。
「では、私たちはこれで失礼いたします」
「申し訳ありませんでした」
そう言って、二人は学園を去る。
「ふう、やっと終わったな」
「うん、そうだね」
あたしたちは、教室に戻る。
せめて残りの昼休みは、関係のないことを話していたい。

「な、なあ篠原に優子！」
教室に戻ると、恵美ちゃんがあたしたちに声をかけてきた。
「ん？　どしたんだ田村？」
「例のスカウト事件、あたいからも、謝らせてくれねえか!?」
「???　な、何で田村が俺たちに謝罪するんだ!?」
浩介くんが、ものすごく困惑した表情で言う。
それはあたしも同じ。どこに何で、恵美ちゃんの謝るべき部分があるのか？
「すまねえ！　あたいがテニス弱いばっかりに、スカウトに目をつけられて、優子と篠原に、嫌な思いさせちまった！」
「……恵美ちゃんのせいじゃないわよ」
「ああ。あんなの、スカウトが悪いだけだ」
「それでもよ、あたいがもう少し強ければ……最終セット、せめてもう少しまともに戦えれば……！」
恵美ちゃんが謝罪の声を上げる。
恵美ちゃんが謝っていたのを見るのはこれで２回目、１回目はもう、１年以上も前のこと。
「うーん……」
浩介くんがますますひどく困惑している。

気分が悪いわけではない。むしろ、極端なまでにストイックで律儀だ。
でも、さすがにスカウト問題で恵美ちゃんが謝罪するのはやりすぎだと思うし、罪に思う必要もないと思う。
あたしのいじめがなくなった時に、何人かの男子に身に覚えのない罪で謝罪されたのを思い出す。もう1年以上も前の話で、風化しかかっていたけど、何とかして思い出す。
多分、きっとこういう感覚なんだと思う。
「恵美ちゃん、あまり思いつめないで。インターハイにも影響するわよ」
「あ、ああ……分かった。お前らがそう言うなら、そうしておくぜ」
いたたまれなくなったあたしがそう言うと、恵美ちゃんはようやく納得してくれた。
やっぱり、「他の試合に影響する」は効果てきめんみたいね。
ともあれ、これでようやくこの問題も収束に向かってくれると思う。

「はーい、それでは、今日のホームルームは修学旅行の話です」
明くる日のホームルーム。永原先生が、修学旅行の話をする。
行先は京都。
行き帰りとも新幹線の使用で、あたしは何度か利用があるけど、林間学校スキー合宿はバスのため、これが人生初めての新幹線だって人も多い。
「なあこれ、行きは2時間半なのに、帰りは4時間近くもかかってるぞ」
高月くんが不思議そうに言う。
「行きは他校と合同で『のぞみ』のダイヤを使った団体列車ですが、帰りは一般の『こだま』を使います」
確か「のぞみ」が速達列車で「こだま」が各駅停車だっけ？
それにしても通過待ちがあるにしたって1時間以上時間がかかるって遅いわよねえ。

「帰りは特に周囲の迷惑にならないように謹んで行動してください。具体的には、他の車両には、なるべく移動しないようにしてください」
永原先生が注意を促す。
うん、トイレくらいだもんね。別の車両を使うのは。
「なお、グリーン料金はパンフレットにある通りですので先生に申し出てくださいね」
小谷学園のこと。例のよってお金を払えばグリーン車に乗ることができる。最も、今までほとんど事例がないみたいだけど。
ともあれ、あたしは行きも帰りも普通車で行く予定。
「修学旅行のパンフレットですが、部屋割についてはこちらの別紙に仮があります。もし別の部屋割りを希望する人がいましたら、1週間前までに私の方まで申し出てくださいね」
修学旅行はまだまだ先だけど、グリーン車と部屋割りについての都合上、早めに案内するという。
あたしはパンフレットで部屋割りを見る。
うーん、もちろん浩介くんと一緒がいいけど、さすがに男女混合は全員の同意がないと無理だし……3人以上だもんね。
暫定では、あたしは恵美ちゃんと龍香ちゃんの3人部屋、浩介くんは、高月くんとは別の部屋で、もしかしたら調整するかもしれない。
修学旅行の本格的なオリエンテーションはもう少し先のホームルームに行われる。
でも何だろう？　今から楽しみになってきたわね。

さて、この季節7月に行われる授業といえば水泳の授業。あたしは3年生で、この7月が最後のプールとなる。結局男として1回、女として2回プールに入った。
あたしは去年と同じようにクラスの女子たちと一緒に水着に着替え、25メートルを泳ごうと頑張るのは同じ。恵美ちゃんは相変わらずがさつな着替え方をしていた。
あたしのスクール水着姿はとても刺激的で、男子は相変わらず下半身を大きくしていた。

去年の今頃と比べて、あたしも女の子が板についてきたので、そうしたことがよく分かる。
それと同時に、浩介くんが水泳の授業の後、いつも不機嫌になってしまう。
それを解消するためには――
「あうう……浩介くん……恥ずかしいよお……」
「はぁ……はぁ……優子ちゃんが悪いんだぞ……あんなに……あんなに……」
お昼休み、あたしは浩介くんと一緒に屋上に行き、こうして浩介くんにスカートをめくられて至近距離からパンツを見られてしまう。
あるいは、それに加えて様々なこともさせられている。
浩介くんのいやらしい視線が、否応でもあたしの羞恥心を激しく煽っていく。
「お願い……もう許して……」
あたしは涙目になって懇願するように言う。
浩介くんに喜んでもらうために、彼の嗜虐本能と独占欲を刺激する。
そのためには、あたしも多少の演技も混ぜているけど、浩介くんの単純脳では気付くはずもなく、ますます上機嫌になってくれている。
「ふふっ、もうちょっとだけだよ」
「ふえええ……」
これにも問題があって、文化祭の時以上に浩介くんに興奮してしまうため、浩介くんもテンションが上ってしまうこと。
「優子ちゃん、汗がすごいよ恥ずかしい思いすると興奮しちゃうんだろ」
「あうぅ……」
そしてもう一つの問題点。こういうことをされちゃうと、やっぱりとっても恥ずかしくて、最後には演技なしにかわいく恥ずかしがってしまう。
そうなると、こうしてじわり体温が上がり、汗がにじみ出てしまっ

ている所を、浩介くんに生中継されて、ますます恥ずかしさがこみ上げてくるのだ。
でもこうすれば、浩介くんはとても上機嫌になってくれる。
例え水泳の授業で他の男子にエロい目で見られたとしても、肝心な所では独占できることを、浩介くんは理解してくれるから。
問題なのは、水泳の授業の度に浩介くん不機嫌になっちゃうから、体育の授業の度に、何回もこれをしなきゃいけなかったことだけど。

# 修学旅行1日目　いざ西へ

２０１８年７月１８日水曜日。
夏休み前の「全校集会」も終わり、今日は待ちに待った修学旅行の当日。
結局、浩介くんと高月くんが一緒の部屋になった他、特に仲がいいメンバー同士で同じ部屋にしたいという希望で、同じ部屋になった。
とにかくうちのクラスは仲が悪い組み合わせがない。やはり２年もいれば違ってくるということ。高校３年生になって、みんなも大人になっているということ。それらが影響していると思う。
まずは一旦、小谷学園に集合する人と、現地の新幹線の駅で集合する人に分かれる。
あたしは、新幹線の駅での集合組。
どちらに集合するかは、事前に取り決めがなされている。
明日以降の服、制服も一応持っていく。
修学旅行は制服私服どちらでも良くて、ここでは案外私服組が多い。
せっかくの晴れ舞台ということで、あたしは思いっきりオシャレ全開の服を着たい。
取り出したのは茶色のジャンパースカートと、白いブラウス。
この服、浩介くんと初めてデートした時にも着た思い出の服でもある。
着こなすのは難しいけど、あたしには似合うはず。
あたしは母さんに内緒でぬいぐるみさんとお人形さんも荷物に入れている。
これは、２つの意味がある。
１つ目は、あたし自身が楽しむため。修学旅行の部屋で、ぬいぐるみさんやお人形さんで遊びたいこと。
２つ目は、あたしの持つコンプレックスについて、みんなに理解してほしいから。
荷物を持って、あたしはリビングルームへと行く。

「おはよー」
「おはよう優子、朝ごはんできてるわよ。食べなさい」
「はーい」
母さんの作ってくれたご飯。
あたしはテレビのニュースを見ながら食べる。
浩介くんをしつこく勧誘したスポーツアカデミーについて、テレビでもニュースになった。
その時、浩介くんは「17歳の男子生徒」と紹介され、「しつこく付きまとい、また校舎に不法侵入した疑い」として、スカウトが実名報道されていた。
実際には、テレビにとっては明日には忘れられたニュースだが、インターネットでは議論が紛糾していた。
というのも、テレビとは違い、インターネットでは「問題のスカウトは、男子生徒に対して、『交際相手の18歳のクラスメイト』と、別れることを持ち掛けて勧誘した」という情報が流出したから。
幸い、「交際相手の18歳のクラスメイト」が、「日本性転換症候群協会正会員として取材を受けた石山優子さん」その人であることまではばれていなかった。
もしこれがバレれば、あたしたちの身元を不特定多数に特定される恐れもあった。水際で食い止められたのは良かったと思う。
ただでさえあたしは、インターネットでも超絶美少女として有名だ。
そのあたしに彼氏がいるという事で、名前も知らない彼氏、つまり浩介くんを妬む書き込みも多い。
そのあたりで紐付けされれば、浩介くんの身に危害が及ぶ危険性だってある。
とは言え、結局そこまでは追及されず、飽きやすいインターネットでは、この騒動もようやく鎮火の方向へと向かっていった。
最近では、蓬莱教授のニュースも忘れ去られていて、件の牧師が中心となって音頭をとっていた蓬莱教授に対する「学界追放運動」も、全く音沙汰なしになった。嵐の前の静けさと言えるかもしれないが、平

穏を取り戻しつつあったのも事実だ。
「優子、修学旅行はその服で行くの？」
「うん、浩介くんと初めてデートした服だし」
「そうねえ。でも、少し幼い印象を受けるわよ」
母さんがちょっとだけ注意する。
母さんは、あたしにもう少し年齢相応か、もう少し高めの服を着てほしいらしい。
「いいのよ。あたし、こういうの好きだし」
「そ、そう……」
しばらくして、食べ終わって食器を片付けると、あたしは歯を磨き、時間になったら席を立つ。
母さんは、あたしのコンプレックスのことは知っているから、あまり深くは追求してこない。
「じゃあ、行ってくるわね」
「はーい、いってらっしゃーい！」
母さんの声に見送られ、あたしは駅へと向かう。駅に着いたら相変わらずの胸への視線を感じながらも、あたしは持ち物からこのぬいぐるみさんを出して抱きかかえる。
余計に目立って視線も強くなったけど、これもファッションの一環と考えリラックスすることにした。
乗る電車はいつもとは反対方向、これで新幹線の集合駅へと向かう。
団体専用の臨時列車が仕立てられていて、なるべく迷惑にならないように、集合場所も決まっている。
行くルートは、協会本部のある所とは違う。
山手線の東側、新幹線の駅はそこにある。
あたしは集合時間より１５分早く、集合場所の待合室に到着する。
「あ、優子ちゃんおはよう」
「うん、おはよー桂子ちゃん」
まず桂子ちゃんが挨拶してくれる。
「お、優子ちゃんも来たか」

「うんおはよう浩介くん」
既にいたのは浩介くんと桂子ちゃんの2人だけで、あたしがこの待合室の3番乗り。ちなみに、2人とも私服姿。
数秒後、別の男子がやって来る。多分気付かなかっただけであたしと同じ電車だと思う。
「優子ちゃん、どうしたの？　ぬいぐるみなんか抱えて。かわいいじゃない」
「あはは、これもファッションよ桂子ちゃん」
素直にかわいいって言ってもらえるのがうれしいわ。
その後、次から次へと男子女子が待合室に入って来て、あっという間に待合室は制服私服が入り交じった小谷学園生で埋め尽くされる。
他校の生徒も来ているはずだけど、他校は全て学校集合のみで、人数は新幹線で数えるという。
そもそも、途中の駅から乗っていくのもあたしたちだけということみたい。
この列車、誰も乗り降りしない名古屋駅にも停車し、また新大阪駅まで回送すると、クラスの男子が教えてくれた。おそらく、ダイヤの都合だろう。
ちなみに、今回の修学旅行、グリーン車は誰も希望していなかったため、修学旅行とは全く別の、ある会社の団体旅行に使われるとか。
ちなみに去年は、桂子ちゃん曰く坂田部長だけがグリーン車だったとか。
そして、新幹線が来る10分前、つまり集合時間には、学校集合組のみんなが到着する。
「はーい、出欠を取るわよー！　1組はこっちこっちー！」
永原先生の掛け声と共に、出欠は速やかに進み、全員いることが確認された。
そして他のクラスも、一部いない人がいたものの、入線時間までには全員集合した。
ちなみに、時間に遅れると、後続列車への乗車を余儀なくされ、団体割引との差額を請求されてしまうシステムになっている。

このルールは、「周囲に迷惑をかけるから」というのが大義名分になっていて、そのために小谷学園の生徒は、よく時間を守るように訓練されている。
自由な校風ながらも、「他人に迷惑をかけるな」という教えは、きちんと生きているのだ。
縦一列になって、あたしたちは永原先生に誘導され、ゆっくりとホームに移動する。
小谷学園は１６両編成のうち、２両を借り受けた。
駅の電光掲示板にも「団体専用」と書いてあって、アナウンスでもしきりに「団体以外のお客様はご利用になれません」とアナウンスしている。
最も、この駅から乗るのはあたしたちだけ。
駅のアナウンスで、電車が来たことを知らせる。
「さ、いくわよ」
「「はいっ！」」
永原先生の掛け声と共にクラスが一斉に返事をする。
本当に、団結力の高いクラスだと思う。
やがて、新幹線が入線する。
ホームドアの向こう側から、真っ白な車体で先頭は歪んだアヒルさんみたいな面白い形の車両が目に入る。
車体横は白が目立つが、青い色にも塗られていて、青と白のコンストラクションが美しい。
横側に書かれた「Ｎ７００Ａ」の文字が誇らしく輝いていた。
あたしが幸子さんの家に行くときに使う新幹線には色が入っていて、どうも東海道と東北は同じ新幹線でも別会社らしい。
あたしたちの列の前に、ぴったりとドアが来ると、駅員さんが改めて注意を促す放送をしている。なんだかちょっとだけ、申し訳ない気分になる。
あたしたちが速やかに乗り終わる。前の人に続き、新幹線の車内に入る。
「うおーすげえー」

「近代的だよな」
新幹線に初めて乗ったと思われるクラスの男子たちが興奮している。
「団体専用列車まもなく発車いたします。乗り遅れの無いようにお願いいたします。閉まるドアにご注意下さい」
みんなが各々、好きな座席に座る。
あたしはもちろん、浩介くんの隣で進行方向右側の窓側、「11E」を譲ってくれる。
と言っても窓はそこまで大きい仕様じゃないみたいね。
遠くで、ドアが閉まる音がする。
そして、何とも言えない「ういーん」という音と共に、新幹線が発車すると、車内から歓声が漏れる。
いつも使って言う電車と違い、新幹線の発車はとても静かで、衝撃はほとんどない。
「ねえ浩介くん」
あたしは、一つだけ違和感があった。
「ん？」
「この電車、幸子さんの時よりも加速が速くない？」
「ああ、そうだな……」
ホームが見えなくなる頃には、あっという間に新幹線のスピードが上がっていく。あの時よりもずっと速い。
前方の画面に、様々な新聞社のニュースが表示されるのは、向こうと同じ。
「えー、品川駅からご乗車の小谷学園のお客様、本日は東海道新幹線をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。この電車は団体専用ののぞみ号、新大阪行きです。止まります駅は新横浜、名古屋、京都、終点新大阪です。次は新横浜です。お客様にお願いいたします――」
車掌さんの放送ではマナーのお願いの他、喫煙ルームの案内や多目的ルーム、お手洗いに車内販売、車掌室の位置に至るまでとてもきめ細やかに放送してくれる。

「――それでは、目的地までごゆっくりお寛ぎください」
新横浜駅までは、新幹線も飛ばすのはそこそこ、途中急曲線もあって車体が傾いているのが分かる。
それにしても乗り心地がいい。揺れもほとんどないし、風切り音も少なく、衝撃も感じられない。

やがて電車はゆっくりと減速を始め、新横浜駅に停車する。とてもスムーズな停車で、運転士さんの腕が垣間見える。
「まもなく、新横浜です。横浜線、横浜市営地下鉄線はお乗り換えです――」
誰も降りないのに、日本語と英語で行われる機械の自動放送は、虚しく乗換案内をしている。
そうこうしているうちに、電車はどんどんと減速し、やがて、新横浜駅に到着する。
新横浜駅のホームでも、相変わらず駅員さんが「この電車は団体専用列車です。お客様のご乗車できませんのでご注意下さい」としきりに繰り返している。
ドアが開く音もしておらず、一定時間無意味に停車すると、駅員さんが「団体列車まもなく発車いたします。ご注意下さい」とアナウンスしている。
本当は一般客も乗せた臨時列車のダイヤを借りているので、乗り降りのない駅にも停車するとか何とか。
そして、電車は何の前触れもなく、静かに音を立てて出発する。
加速力は、相変わらずだった。
「本日も、東海道新幹線をご利用いただきましてありがとうございます。お客様に、車内販売のご案内です――」
新横浜駅を発車して、しばらくニュースステロップを見ていると、今度は女性の声で、車内販売の案内放送が流れた。
車窓の流れるスピードは、ますます早くなっていく。
放送によれば、アイスクリームやお茶、お弁当も売っているらしい。
現地の駅に付いたら、駅の中のレストランを貸し切っているため、

あまり食べる人はいないと思う。
新幹線は、さっきよりもスピードを上げる。走行音が、やや大きくなるが、在来線に良くある「ガタンゴトン」という音はほぼない。
「そう言えば優子、今日はぬいぐるみを抱いてんだな」
「あ、うん……」
次の停車駅は名古屋。1時間以上ある。
一段落し、席を立った恵美ちゃんが、あたしに話しかけてくる。
「これ、あの時買ったやつか」
「うん、そうだよ」
恵美ちゃんが、ぬいぐるみさんを見て言う。
ちょうど1年前の今頃、あたしの部屋がまだ優一時代を色濃く残した殺風景な部屋だった時、恵美ちゃんと桂子ちゃん、それにさくらちゃんがお泊り会にやってきた。
もっともっと女の子になりきるために、3人と更に母さんで、あたしの部屋を今のような女の子らしい部屋に模様替えしてくれた。
そしてその時にお部屋のレイアウトとして買ったのが、このぬいぐるみさん。
今でもこうして抱いている。あの頃からあたしも成長し、お裁縫も覚えて補修することも出来るようになっていた。
「優子は、やっぱりそういうのが似合ってるぜ」
「う、うん……ありがとう……」
服だって、幼さが残るものだし、あたしはどうしても、幼いものが好き。
でも、恵美ちゃんは「似合っている」って受け入れてくれた。
昔だったら、一番嫌いそうなのに。
それとも、あたしの境遇が、まだ無意識のうちに働いているのかな？
ううん、恵美ちゃんも成長したってことだと思う。仮にそうじゃなかったとしても、そう考えるのが「優子」らしさだとあたしは思う。
「優子ちゃん、子供っぽい所も、クラスに受け入れられてるな」
「うん、これなら、学校にぬいぐるみさんを持っていけると思う」

恵美ちゃんとのやり取りを見ていた浩介くんが、優しい口調で言ってくる。
あたしは、素直にこれを学校に持っていきたい気持ちを伝える。
「はは、前におばさんに止められたんだろ？」
「う、うん……」
クラスのみんなが受け入れてくれるなら、あたしは、コンプレックスがあることを隠したくない。
花嫁修業の時も、去年の文化祭の時も、あたしはどこか「完璧少女」のような扱いを受けることがある。浩介くんのお母さんが、あたしが同性から嫉妬されない理由も「優子ちゃんがあまりにも完璧すぎるから」と言っていた。
でも、そんなあたしだって、他の女の子に劣等感を持っているんだってことを、みんな知ってほしい。
電車が進むごとに、都市は続くが、徐々に森林や田畑が増えてくる。
すると、一つの駅が見えてくる、左側に目をやると、同じタイプと思われる新幹線車両が止まっていた。
前方の電光掲示板のテロップを見てみると「ただいま小田原駅を通過」と書かれていた。
そう言えば、幸子さんの時は「ただいま白石蔵王駅付近を通過中です」だったし、やっぱり会社が違うと、微妙に表示の方法も違う。
そして、新幹線の車窓は段々とトンネルが増えていく。
すると、車内販売のおばさんが、カートを押しながらやってきた。
それを見て、みんな思い思いに、コーヒーやお茶を頼んでいる。
「浩介くんはどうする？」
「うーん、静岡茶にしようか」
「うん、あたしも」
東海道新幹線団体専用臨時列車ということで、この電車は静岡県を全部通過するけど、だからこそ静岡茶くらい買ってあげないとと思い、あたしは「静岡茶」を浩介くんと共に注文する。
ちなみに、お菓子を買おうとする生徒もいたけど、値段を見て断念してる人もいた。

あたしは財布の小銭を開ける袋から、所定の金額を出して、浩介くんに渡すと、浩介くんがまとめて2個注文してくれる。
本当に、頼りになるわね。
浩介くんと雑談しながら、ぬいぐるみさんにこぼさないように注意しつつ、静岡茶を飲む。
うん、なかなか美味しいお茶だわ。
電車はややスピードを落としていると思っていたら、カーブを描きながら駅を通過する。
前方には「ただいま熱海駅を通過」とテロップに表示され、この電車が静岡県に入ったことが分かった。

# 修学旅行1日目　カルチャーショック

新幹線が静岡県に入ると、話し声も徐々に小さくなり、車窓に集中する生徒や、さっきの車内販売で買ったものを食べたり飲んだりする光景が増えた。

あたしも、こっち方面の新幹線はまだ殆ど使ったことがない。

少なくとも、このタイプの車両に乗るのは初めてだが、印象としてはとにかく速い。一応、東北新幹線の速達列車の方が速いらしいけど、「出張費」の軽減のため、そっちは未経験だ。

三島駅通過後に車窓に目が入る機会が増えたもう一つの原因として、前方の電光掲示板のニュースがちょうど1周したというのも大きいだろう。

そして山側、富士山は何度か見たことはあるが、こんなに間近で見たのは久しぶり。

「すげえでけえよなあ富士山は」

「うん」

あの独立峰は、日本で一番高い山とされている。

季節は夏なので、雪化粧はしていない。小さくて見えないけど、登山者たちが列をなしているんだと思う。

右側に座った生徒のみならず、左側に座った生徒たちまで、富士山に見入っている。

富士山が極限に大きくなったと思ったら、不意に駅のホームに塞がれてしまう。

それは駅を通過した証拠で、「ただいま新富士駅を通過」とある。

それを境に、車窓からは徐々に富士山が遠くなり、それと共に、徐々に都市が大きくなる。

「長いねえ静岡県」

「ああ。実際地図を見ると横に長いもんな」

そんなことを話しながらも、道中様々な企業の本社や工場が見える。

たまに車窓左側からは海も見える。穏やかな静岡の風景が流れる。

「あ、あなたが石山さん!?」
「あ、うん。そうだけど」
ふと、同じ車両にいた、別のクラスの女子2人組が話しかけてくる。
あたしはぬいぐるみを抱きしめながらそう答える。
「あれ？　ぬいぐるみ抱いてるの？」
「うん、女の子がぬいぐるみ抱いちゃダメなの？」
「え!?　ああうん、もちろんいいわよ。でも意外かなあって」
「うんうん、元々男の子だったから、がちがちな少女趣味だなんて意外で」
浩介くんもいる手前、悪い言葉をいう事はしない。
人の彼氏といっても、男子の目があれば、女子は女子らしくなるのだ。
「むしろ、元々男の子だからこそよ。あたし、子供の頃どころか去年5月までは男だったのよ。幼少期に女の子として愛情を注いでもらえなかったから」
このことは、他の女の子にももっと知ってほしい。
「あ、うん。そうだよね」
「変なこと考えてて、ごめんなさい」
女子2人組が申し訳なさそうに謝ってくる。
でも、無理もないことだとは思う。
「ああうん、いいの。母さんにも子供っぽいとは言われてるけど、どうしても辞められないのよ」
今着てるこの服だって、かなり幼く見えるし。
「そう、ええ。ごめんね、邪魔しちゃって」
「ううん、いいのよ」
そんなやり取りをした後、女子2人組はあたしたちの元を去った。
しばらくしてどんどん車窓が都会になって行き、在来線も見えたと思ったら、静岡県の県庁所在地、静岡市の中心駅になっている静岡駅を通過した。
ちょっとトイレに行きたくなった。

「浩介くん、ちょっとごめん」
あたしが席を立つと、浩介くんがどいてくれる。
「どうしたんだ？」
「う、うん……ちょっと、お花摘みに行ってくるわ」
「あ、ああ……」
困惑の表情を見せる浩介くんを尻目にあたしは座席を立って車内を移動する。
これまでの浩介くんとのデート中にも、何度かトイレに行きたくなることはあったけど、その度に「お花摘みに行く」と言っている。
浩介くんが意味を知っているかは分からないけど、去年の林間学校で堂々と「トイレに行く」と言ってしまい、永原先生と桂子ちゃんからお叱りを受けて以来、「お花摘みに行く」を使うようになった。
あたしたちの車両から見て、「お手洗い」は前の車両にある。トイレの個室は空いていたので、あたしはボタンを使って自動ドアを開け、ボタンを閉めた上で鍵も閉める。
トイレの個室は多目的トイレなので、とても広い。
あたしはスカートをペロッとめくりあげてパンツを下して便座に座る。
いつも、というよりも毎日のようにやっている動作だけど、新幹線という空間なのでかなり緊張する。
座席だって、新幹線の座席と、トイレの便座では座り心地も異なるのでさっきまで気にならなかった揺れが途端に気になってしまう。
それでもうまく完了し、流し終わって座席に戻る。
すると、みんな進行方向左側に視線を向けていた。浩介くんもだ。
「浩介くん」
「あ、お帰り」
あたしは座席に戻る。
そして、みんなと同じように海側を見てみると、そこには海の向こうに富士山が見えていた。
つまり、今この新幹線は南下していて、海も東から北東にかけて存在しているということになる。中々に面白い光景だと感じた。

やがて海側の富士山も言えなくなり、車窓からは富士山はほとんど見えなくなってしまった。
電車は掛川駅を過ぎ、相変わらず静岡県の中規模都市や、茶畑、あるいは川の橋梁などをひたすら進んでいく。
パンフレットによれば、この新幹線の最高速度は時速２８５キロだとか。
「お弁当はいかがですか？」
しばらくすると、再び車内販売の人が巡回して来た。
飲食物やお菓子だけではなく、記念グッズも販売している。
それを購入する人もいるけど、あたしたちは特に何も買わない。
やがて車両が、ややアップダウンしたと思ったら、駅のホームが見えて浜松駅を通過、そしてそこからしばらくたたないうちに、車窓右側にも左側にも海が見える車窓になった。
ううん、この車窓は海というより湖だという事は地理の授業でやったわね。浜名湖に差し掛かったということ。
このあたりは左側に在来線とも並行していて、湖の中の島には在来線の駅もあるみたい。
そしてもうすぐ、この電車は静岡県から愛知県に入る。既に、１時間以上電車はノンストップで走り続けている。
電車はやがて豊橋駅も通過、住宅や都市を眺めつつ、順調に走り続ける。
あたしは浩介くんと雑談をした他、他のクラスメイトや他のクラスの人も、あたしの話しかけてくる。
やっぱり、あたしが抱いているぬいぐるみさんの話題が多い。
でも、あたしがＴＳ病故にこれが好きなことも、幸いすぐに理解してもらえた。多分これで、あたしのコンプレックスについても、クラスで共有されてくれると思う。
そんなことを考えつつも、電車は止まらない。やがて名古屋駅の一つ手前の三河安城駅を通過する。
「ご乗車お疲れ様でした。ただいま、三河安城駅を定刻通りに通過い

たしました。後、7分程で次の名古屋駅に到着いたします。なおこの電車は団体列車です。名古屋駅では乗り降りございませんので、ドアが開きません、ご注意下さい」

車掌さんがそんなアナウンスをする。

既に、新横浜駅を発車してから1時間半以上になっていた。

車掌さんの放送後、電車が徐々に減速を始めると、自動アナウンスが流れる。

自動の機械は、この列車の乗客が、名古屋駅では何ら乗り降りしないという事を知らない。

新横浜駅の時と同じく、虚しい乗換案内だった。

電車は名古屋駅に到着、ここでも駅員さんが団体専用列車とアナウンスしている。ホームの人の視線がちょっと痛い。

きしめんでも食べたいなあ……

電車はまたひとりでに発車する。

そして、次の停車駅は京都、あたし達の降車駅で、一部の団体客のみ新大阪駅で降りることになっている。

電車は快調に飛ばす。考えてみれば、帰りはこれらの駅に全部停車するってことだよね？

うん、これだけの速度から減速するんだもん、確かに時間かかるわよね。

さて、電車が順調に進んでいると、前方から見慣れない制服の女子が2人現れた。

他校生だろう。知り合いと思われる小谷学園の女子と何か話し込んでいる。

「でさー、噂のＴＳ病の子、例の記事にあった子はどこ？」

あれ？　あたしのことかな？

何て思っていると、見慣れない制服の女子2人がこっちへ近付いてきた。

「ねえねえ、あなたが石山優子さん？」
「ヤバイヤバイ、マジかわいいんだけど！」
「うんうん、ウケルウケル！」
　あたしを見た途端、女子２人が騒ぐ。
　制服も乱れていて、仕草も言動もなんだか下品だわ。
「う、うん……そうだけど、どうしてあたしのこと知ってるの？」
　あたしは動揺する本心を何とか抑え、不思議そうに聞いてみる。
「あはは、もーやだねえー、あなた超有名人だよ」
「あのネットの記者会見、マジヤバかったし。キャハハハハ!!!」
　何がヤバいのよ……勝手に笑い始めてるし。
「ねえねえねえ、隣に座ってるの彼氏？」
「う、うん……そうだけど、そんなこと知ってどうするの？　見たところ小谷学園じゃなさそうよね？」
「いやさ、あんたネットでアイドルとかと比較されてるしさ、どんなレベルなんだろって思ったんだよ」
「そしたら何これ？　超レベル高いんだけどぉ！」
　この２人、あたしと浩介くんそっちのけで盛り上がっているわね。
「ところで、あなたたちはどこの学校？」
「うん？　うちら今浜女子だよ」
「そそ、女子校女子校きゃはははは」
「……」
　あたしは、母さんに言われた言葉を思い出す。
　母さんは、女子校では生理の話題にとてもオープンかつ直球で、生理用ナプキンを放り投げる光景さえあると言う。
　恵美ちゃんだって、かなりガサツだけど、男子の目もあるから、越えちゃいけない一線は守っている。
「な、なあ……」
「ん？」
　浩介くんがその女子たちに話しかけてくる。
「優子ちゃん、共学育ちでそういう速い展開の話とか濃いガールズトークとかが苦手なんだよ」

「でもよー、男子居ねえのは気楽だぜ」
「いやでも、あたしもこういうの苦手なのよ」
男子が居ない空間なんて、あたしはむしろ嫌だと思う。
そんな所に居たら、浩介くんと出会うことも出来ないんだもん。
「まあまあ、固いこと言わずに訓練だと思ってさ」
「ねー」
ガールズトークならクラスの女子とか協会の人とかで間に合ってるわよ。
「てか優子ちゃんならもっといい男いそうなのに勿体ないよねー！」
「何かあるじゃん、かわいい子の彼氏って何故か冴えねえんだよな。どういうところで見てんだって話！」
あたしは思う。今まで、あたしと浩介くんがデートしていると、女子校の女子たちがあたしたちに殺意の目を向けたり、露骨に陰口を言ったりしてきたのを見てきた。
「ＴＳ病の患者は、絶対に女子校に入れてはいけない」とカリキュラムの本に書いてあったけど、理由が今、痛いほど分かる。
「おいっ!!!」
浩介くんが、怒る。
「うっ……な、何だよ……」
「本人の目の前で、俺の悪口を言うな！」
「何だよもう、男は関係ねえだろ！　別にうちらの勝手だろ？」
女子の１人が、悪びれもせずに言う。
本当に不愉快だわ。
「ねえ、浩介くんのことは、あたしの方から惚れたの！　人の恋路に勝手なこと言わないで！」
あたしも、あの時のことを思い出しながら言う。
正確には、浩介くんが惚れたのは先だし、浩介くんが文化祭で告白したんだけど。
それでも、はっきりとした恋心は、あの時のあたしが最初だと思いたい。
「何だよ、ノリ悪いなあ……ちょっとくれえいいじゃねえか」

「……ねえ二人とも」
「ん？」
「女子校って、あなたたちみたいなのが普通なの？」
母さんや永原先生、龍香ちゃんから、「女子校の恐ろしさ」というのを聞かされ続けてきただけに、気になる。
「ああ、そうだぜ。男いねえからな。素の自分をさらけ出せるぜ」
素の自分っていうと聞こえはいいけど、それは結局面倒くさがってるだけで、もてない女でしかないと思う。
「あたし、あなたたちみたいな下品な女の子になりたくないわ」
あたしは、きっぱりと言う。
「な!?　下品とは何だよ下品とは!?」
「その言葉遣い、服装の乱れ、言動や初対面の人への態度、何から何まで全部よ」
「ぐっ……あんたがぶりっ子なだけだろ……！」
「かわいいからって調子に乗って……！」
そして、予想通りの反論が飛んでくる。
こういう女にはなりたくないものだわ。
「ふぅーもういいわ。あたしのことを知れれば十分でしょ？　もう自分の席に戻って」
「な、何だよ……」
「分かったよ……」
２人組が渋々と車内から出て行ってくれる。
すると、入れ替わるように龍香ちゃんがこっちに近付いて来る。
「すみません、あの二人は私の古い友人なんですが、ネットの動画を見てどうしても優子さんに合わせたいと言って聞かなくて」
龍香ちゃんが頭を下げて謝ってくる。
「ああうん、いいのよ。あたしも、女子校が下品だって改めて知ることができてよかったわ」
「あの２人も、中学まではまともだったんですけどねえ……高校で女子校に進学してからというもの、どんどんガサツになっていっちゃっいまして」

彼氏持ちになった龍香ちゃんは、美人なままだ。
それどころか、彼氏と付き合う期間が長くなるにつれて、どんどんかわいくなっていってる気がするわ。
「龍香ちゃん、実は新しいＴＳ病患者を指導する時には、絶対に女子校に入れてはいけないことになっているのよ」
「ええ。そのほうがいいと思います……では失礼します」
「うん」
「河瀬も災難だったな」
龍香ちゃんが座席に戻り、あたしたちも見送る。
列車は岐阜羽島駅を通過していた。愛知県から、岐阜県に入ったことになる。
ここからは「関ヶ原」と呼ばれる場所に入る。今までの車窓が嘘のように山沿いになり、民家もまばらになる。
「優子ちゃん、昔関ヶ原に入ったのを、東京を出たと勘違いする外国人がいたって」
「えー!? そんなことあるの!?」
あたしはとても驚く。いくら何でも、そんな変な話はない。
「ほら、ずっと都市が続いているだろ？　東京から、静岡、名古屋、岐阜ってさ」
「た、確かにそうだけど……」
「他の国なら、辺り一面田畑とか原野ってのが普通なのさ」
「そう言えば、永原先生もここで合戦を見てたんだよね？」
ふと車窓を見ると、「関ヶ原」という看板も一瞬見えた。
今は近代的な住居と山々が見える。
確かにこの山間部は西日本と東日本の境と言うにふさわしい。
永原先生は今から４１８年前にここを訪れた。
その時は、当然道路も、今建っている建物も、この新幹線も、何もかも影も形もなかった。
そして、何万という兵士が激突した場所。
その戦いの一部始終を、全て記憶している。永原先生が歴史の生き証人だということを知ることが出来る

「そうそう、あの山が小早川中納言殿の布陣していた松尾山で……って、この速度じゃ説明している暇ないわね」
永原先生も、隣の生徒に実際に見た関ヶ原の戦いの説明をしてるけど、時速３００キロ近くで走る新幹線は、そんな暇を与えてはくれない。
その後も、農地と田畑、山間を進んでいくと、唐突に駅を通過した。
前方のテロップには「ただいま米原駅を通過」とある。
「優子ちゃん、次だよ」
「う、うん……」
米原の次の駅は目的地の京都駅、滋賀県を一気に抜けるということになる。
でも、なかなか到着しない。
次だと分かっていると、みんなウズウズし始める。
自然と車内の口数も少なくなっていく。
さて、１０分程度経っただろうか。
永原先生の「みんな、そろそろ準備して」という声に、みんな反応すると、やがて「間もなく京都」という新幹線のアナウンスが聞こえてきた。
あたしたちは列を作り、ドアの前で待つ。初めて来る京都に、少しだけワクワクしている。
この後は駅の中にあるレストランを貸し切って食事をし、ホテルに荷物をおいてから観光をすることになっている。
ともあれ、長旅でお腹が空いたわ。
殆ど座っているだけだけど、疲れるものね。

# 修学旅行1日目　京都へ着いて

「はーいこっちへついてきてー！」
うまく改札のタイミングなどをずらし、他校生と鉢合わせにならないように別れる。
「こっちこっち」
永原先生の誘導で、あたしたち3年1組が列をなす。すぐ後ろには2組以降も付いてきて、みんなマナーに気を配っている。
とにかく、引率の先生も合わせれば１３０人以上の大きな団体で行動するんだから、マナーに気を配らないといけないと、先生から何度も何度も忠告されたのが効いている。
もしかしたら、普段の校則がゆるいからこそ、「他人に迷惑かけるな」という創設者が残した唯一の校則が生きているのかもしれない。それは１００の校則よりも、大きなことだと思う。
そんなこんなで、あたしたちは、予約していたレストランに向けて進む。
さて、レストランはあたしたちの貸し切りなので、あっという間におしゃべりで埋め尽くされた。よほど大きな音でもない限り、周囲の迷惑にならないからだ。
レストランの中であたし、浩介くん、永原先生の3人でテーブルに付く。
食事の内容も、既に決まっていて、特にメニュー表はない。
ウェイトレスさんがあたしたちに水を配ってくれる。
「ふう」
「石山さん、篠原君、２つほどいいかな？」
「ん？」
永原先生があたしにやや真剣な表情で話しかけてくる。
多分、雰囲気からして協会絡みかな？
「例のスカウトのアカデミーですけど、あれ以来悪評がたたって日本から撤退することになりました」
「……それは良かったわ」

「ああ」
浩介くんは、スッキリした顔で言う。
これで、浩介くんの運動能力に魅了された変な人も浩介くんにつきまとうことも無くなるだろう。
というよりも、浩介くんももうすぐ１８歳、さすがに今から何かを始めても、遅いだろう。
強いていうなら、筋トレを続けているから、ボディービルダーくらいかな？
まあ、浩介くんの将来はまだわからないけど。
「それから2つ目です、昨日なんですが、新しくＴＳ病になった人が出ました。それと日を同じくして何ですが、４月にＴＳ病になった人が自殺未遂を起こしたという連絡がありました」
永原先生の話は、「２つ目」とまとめられているけど、実際には最初のと併せて連絡事項は３つあることになる。
「自殺未遂かよ……」
浩介くんがため息を付いたように言う。
「石山さんの作ったカリキュラム前のプログラムもしたんですが……中途半端に生きようとして、私達の忠告も聞かないで……もう挽回は難しいでしょう」
永原先生が無慈悲な宣告をする。
永原先生曰く、その患者は都合のいい時に男と女を使い分けようとしたのではないかという。
もちろんそんな欲張りはうまくいかない。
結果的にいじめを受け、周囲からもからかわれるようになってしまった。最近の患者にとても多い傾向で、何とかしないといけないと言っていた。
この病気になれば、女の子として生きていくしかない。完全な女の子になる以上、男の精神を捨てていかない限りどうしようもなくなってしまう。
しかも、完全な男の子だった頃を知っているから、一般的な性同一性障害とは全く訳がちがうのだ。

もう、彼女に対してあたしたちが出来ることはない。彼女自身が、男への未練を完全に捨てることを決意しない限り、飛行機は失速を続けるだろう。永原先生が言う通り、挽回の可能性はあたしから見ても極めて低いと思う。

そして墜落に至ればゲームオーバーということになる。

「新しいＴＳ病の人も、自殺未遂を起こした患者さんと同じ関西とのことなんですが……石山さん、自由時間を利用してちょっと会ってもらえますか？」

「……分かりました。折角の機会ですから」

永原先生によれば、新しくＴＳ病になった人は中学生らしい。夏休みに入ってから家でくつろいでいた所を急に苦しみだし、女の子になってしまったという。

「でも、夏休みになってからというのは不幸中の幸いですね」

「ええ。これがもし1日早かったら、終業式中に倒れていたことになりますから。きっとクラスメイトの誰かがお見舞いに来て、大騒ぎになるでしょう。クラスの子達は、まだ彼女が男だと思っています」

つまり、あたしの時と違う。

あたしの時は授業中だったから、女の子になったことまでは知られていないものの、異変で倒れたことまでは知られていた。

今は蓬莱教授の影響で、ＴＳ病の典型的な症例は知られている。

だから、あたしが今まで優一で、今頃倒れたとすれば、多分みんなＴＳ病だと気付くはず。

それくらい、蓬莱教授の影響は大きい。

「……ともかく、あたしが何とかアドバイスしてみます」

「ええ、お願いするわ。その後のカウンセラーは関西支部長の人に担当させるわね」

永原先生がそう言う。まあ、あたしがカウンセラーするわけにも行かないものね。幸子さんはもう殆ど手がかからないと言っても。

とは言え、あたしも修学旅行中だし、あんまり仕事に追われるのも避けたいんだけど、こうなった以上致し方あるまい。

「中学生の患者は特に自殺率が高いわよ。気をつけてね」

「う、うん……分かる気がします」
あたしや浩介くんは、もう思春期なんて過ぎちゃったけど、中学生はそれの真っ只中。
高校生が想像もできないくらい中学生というのは多感なお年頃だ。
「お待たせいたしました。こちら――」
ウェイトレスさんが料理を持ってくる。
あたし、浩介くん、永原先生にそれぞれ一皿ずつ。
他のテーブルも同様で、ほぼすべてのテーブルで、食事が並び終えていた。
ウェイトレスさんは、あたしと永原先生をチラチラと見ている。
「あの、あなた方……もしかしてＴＳ病の協会の会長と正会員さんですか？」
「おや、私をご存知ですか？」
「はい、あたしが石山優子ですけど」
ウェイトレスさんがあたしたちの正体を当てている。
おそらく、例の取材動画で知ったんだろう。
あたしも永原先生も、超が付く美人で、画像も拡散されているので、気付く人は気付くだろうけど、こうやって声をかけられることは少ない。
「うわあ……本当に近くで見ると、すごい美人さんですよね。あなた方、ほ、本当に男性だったんですか!?」
「ええ。私はもう遠い昔ですけど、石山さんは1年2ヶ月くらい前までは」
「……小谷学園が毎年修学旅行で当レストランを予約されていきますので、まさかと思ったんですが……永原さんって本当に５００年前から生きているんですか？」
ウェイトレスさんが更に突っ込んでくる。
「はい。蓬莱教授のお墨付きもありますよ」
永原先生がニッコリして言う。
ともあれ、あたしたちはご飯が冷めちゃう前に一斉に「いただきます」をして食べ始める。

関西、特に京都はあたしたちが普段住んでいる関東と比べると薄味が多い。
この料理も、京風ということになっていて、結構な薄味。
あたしたちは特に醤油とかはかけないけど、恵美ちゃんとかは「味が薄い」と言いながら、醤油をかけている。
それにしたって、恵美ちゃん醤油のかけ方がなんか下品よね。
「もぐっ……もぐっ……」
うー、ちょっとこれ、あたしには量が多い。
浩介くんを見ると、食べ終わるのが早い。
もし量が多ければ、浩介くんに食べてもらおうかな？
何だか物足りなさそうだし。
「ふー」
「どうしたの優子ちゃん？」
浩介くんが少し心配そうに話しかけてくる。
「うん、ちょっと量が多くてね」
「食べてやろうか？」
「う、うん。ありがとう……」
あたしは浩介くんに、残した食事を食べてもらう。
ともあれ、何とか浩介くんにも手伝ってもらい完食できた。
「それで、石山さん」
「はい」
「その人は倒れたばかりですが、今日は関西支部長の人が行くことになっています。私達は明後日の自由時間に行くことにします」
「分かりました。浩介くんはどうしますか？」
「篠原君は修学旅行を楽しんでくれればいいよ」
「あ、ああ……」
ともあれ、明後日の自由時間の予定は決まった。
学年で一斉に「ごちそうさま」をすると、あたしたちはまず荷物をまとめに旅館へと向かうわけだが、それぞれ時間にタイムラグを与え、また乗る車両も別にするという。

ここからは地下鉄を使い宿に入り、午後の短い時間で観光をしたり、宿で休んだりする。

泊まるホテルも素泊まりということになっていて、ホテルの中のレストランで食べてもいいし、外のレストランで食べる人もいる。

とにかく、この修学旅行は小谷学園を象徴するような修学旅行で、明日明後日とホテルの門限にさえ間に合えば何を観光してもいいことになっている。他の学校だったらあり得ないと思う。

学校からは結構な金額を予算として充てられていて、いかにしてやりくりするかは大事だ。そのため、去年は新幹線を使って博多に行った人や資金を浮かすためだけに3食カップ麺で部屋にこもりきりだった人までいたらしい。

ちなみに、博多まで行った人曰く、「関西は旅行しすぎて見飽きたから」などという何ともいえない理由だった。

赤字上等で金を使い込む人もいる。あたしはというと、実は修学旅行の予算の他に蓬莱教授から支援を貰っている。

蓬莱教授は用心深い人で、あたしをつなぎとめたくて必死らしい。

もしかしたら、今未来人類の運命を握っているのは、蓬莱教授ではなくあたしの方なのかもしれないとさえ最近は思う。

ちなみに、基本的にどこへ行っても自由だが1つだけ、「大阪の新今宮駅・動物園前駅付近、特に新今宮駅南西部にだけは絶対に近寄らないように」という警告がなされている。

そう言う警告をされると行きたくなるのが人間だが、先輩たちの口伝により、「あそこの危険度は尋常じゃない」とされていて、現に薬物の臭いがするとかで、誰も近寄らないとか。

インターネットでも、本当に近寄っちゃまずい場所だってなってるし、そのあたりはわきまえている。

この修学旅行では、鉄道の時刻表を持参している人も多い。

関西には「新快速」というとても便利な電車があり、京都から大阪・神戸までかなり速い速度で到着するらしい。

特に遠くのローカル線を旅する場合は、時刻表で事前に調べ、きちんとホテルに戻ってこられるかどうかを確認しないといけない。

門限に遅れれば、明日以降の自由時間にペナルティが付く。
そういうこともあって、みんな結構慎重に予定を立てるのだ。
京都の地下鉄駅から徒歩数分、ビジネスホテルのような建物のちょっと小さなホテルがあたしたちの拠点。
ただし、他の宿泊客も居るため、迷惑をかけてはいけないのは同じ。
あたしが代表して部屋の鍵を受け取り、同部屋になった恵美ちゃんと龍香ちゃんと並んで歩く。
「ふう、じゃあ行くわよ恵美ちゃん、龍香ちゃん」
「はい」
「おう」
２人の返事を聞き、エレベーターを操作して所定の階へ。
３人部屋ということで、それなりの大きさがあって、ベッドも３つ。
テレビが備え付けられていて、冷蔵庫もある。
また、ポットもあってこれでお湯を沸かすことも出来る。近くにコンビニもあるので、カップ麺を買ってこれで作ることも出来るみたいね。
「さて、門限まで自由時間ですよ。何をしますか？」
「あ、その前に」
「ん？　優子さんどうしました？」
「明後日なんだけど、この近くでＴＳ病になった中学生が出たってことで、ちょっとだけ協会の仕事が入ったから、抜けるわね」
「……そうですか、分かりました」
「優子も、大変だな」
龍香ちゃんも恵美ちゃんも、もう子供じゃない。
だからこうして、あたしの急な事情にも嫌な顔ひとつしない。
本当に、あたしは友達に恵まれたと思う。
「とりあえず、少し休んだらホテルの近くを散策しましょうよ！」
「ああ、それがいいな！　ここは京都だし、どっかに観光名所でもありそうだしな」
「はい！」
龍香ちゃんの提案に、あたしも恵美ちゃんも賛成する。

気の早い人や、京都に何度も来ている人は、大阪や奈良とか滋賀県とかを散策するみたいだけど、あたしはそこまで考えていない。
あたしは、浩介くんに向けメールを打つ。
題名：今日の自由時間
本文：今日の自由時間は同室の恵美ちゃん、龍香ちゃんと共にホテル周辺の散策になりました。
浩介くんはどうしますか？
これでよしっと。
「お、優子誰にメール？　篠原か!?」
「うん」
「篠原さんも、うまくやるといいですね」
そんな会話をしていると、すぐに返信が来る。
題名：Ｒｅ：今日の自由時間
本文：分かった。俺も今日明日は同室の人と行動するよ。その代わり、明後日午後は俺と優子ちゃんで２人な
「何ですか何ですか!?」
龍香ちゃんががっついてくる。
「今日明日は同室の人と行動して、明後日は浩介くんと２人だって」
「ああ、その方がいい。明後日はあたいも適当にテニス部の仲間でも誘うぜ」
「私も、桂子さんを誘います」
どうやら、恵美ちゃん龍香ちゃんも行くあてがあるみたいね。良かったわ。
あたしはそれを確認してメールを打つ。
題名：Ｒｅ：Ｒｅ：今日の自由時間
本文：うん、それでいいわよ。明後日は同室の恵美ちゃんと龍香ちゃんもそれぞれ別の仲間と行くって言ってたから心配いらないわ。
よし、これでいいわね。
するとすぐに浩介くんから「了解した」という内容のメールが届いた。
「さ、行こうぜ」

「う、うん……」
あたしたちは、恵美ちゃんに引っ張られ、荷物をまとめ、部屋の鍵を閉める。
エレベーターでフロントに戻ると、大勢の生徒がフロントに鍵を預けていた。
龍香ちゃんがメモ帳に、部屋の番号を控えてくれた。
念のため、あたしも控えておく。
「いってらっしゃいませー」
フロントの人に見送られ、いざホテルを出る。
「おし、まずはここのブロックを一周してみようぜ」
「う、うん……」
京都は比較的「碁盤の目」と呼ばれる道路形成になっている。そのため、位置こそ分かりやすいが、方向感覚を見失うとあらぬ方向に行きやすい。
また、斜め移動できないのも地味にもどかしかったりする。
ともあれ、あたしたちの自由時間が始まった。

歩き疲れるまで周辺を散策して分かったが、京都は何気ない所に歴史ある老舗や有名な史跡がある。小さな柱が、さり気なく歴史的イベントがあったという記念碑になっている所も多い。
京都らしく江戸時代創業のお店もたくさんあって、中には永原先生が生まれるより更に前から店を構えている所さえあった。それにしても、ものすごい人だかりだわ。
「そう言えば、永原先生って本能寺の変から大坂の陣まで諸国を放浪してたんですよね？」
「うん、そうだったわね」
龍香ちゃんが、思い出したかのように言う。
「でしたら、４００年以上前の京都について知っているんじゃないですか？」
「そうなるわね」
もしかしたら、永原先生は今頃引っ張りだこかもしれない。

「お、お菓子屋さんですよ。ちょっと休憩していきますか！」
「お、いいな！」
龍香ちゃんと恵美ちゃんが「創業天正年代」と書かれたお菓子屋さんに入っていく。
すると、そこには見知った顔がいた。
「おや、石山さん、田村さん、河瀬さん」
「「な、永原先生!!!」」
そこにいたのは、永原先生だった。
「な、永原先生、どうしてここに？」
「うん、このお店、長い間来てなかったから、ね。今までも行く機会はあったんだけど、あの頃の味が壊れていないか心配で、つい行きにくかったのよ」
「永原さん、ＴＳ病で、ここの創業者の方と面識があると言うはるんです」
店の主人がそう説明してくれる。
「私がここに来たのは天正１６年のことですから……ちょうど４３０年ぶりの客ということになるわね」
永原先生曰く、ここの菓子は大層な美味で、江戸城にいた時も、食べたいと思いつつもついに叶わなかったとか。
教師になって、ある程度時間が出来るようになってから、何度もここを訪れようと思ったが、なかなか踏ん切りがつかなかったらしい。
「人間って、踏ん切りがつかないとズルズル先延ばしにするのよ。私みたいに長生きだと特にね」
「それで、食べてみてどうだったの？」
「うん、やっぱり時代の進化はすごいよ。あの時の味なんかよりよっぽど上だわ。どうやら思い出の中で、美化されてしまってただけみたい」
永原先生が、あっけらかんに言う。
今のご主人さんにとっては、複雑な気分だろう。
この後、あたしたちもお菓子を食べ、夜はコンビニ弁当を食べることにした。

京都まで来てコンビニ弁当というのもあれだけど、まあ、仕方ないわよね。
あたしたちは、夜はホテルの自室で過ごした。お風呂は深夜の掃除時間帯以外に常時開放されている大浴場に入った。
とにかく、本番は明日になるんだから程々にしないと。

# 修学旅行２日目　古き古都の新しき名所

「それで、どこに行きますか？」
　明くる朝、再びコンビニから調達した朝食を食べ終わったあたしたちはホテルの中にあった観光パンフレットとにらめっこしていた。
　恵美ちゃんはラフな短パンにＴシャツ、龍香ちゃんは落ち着いた感じのグレーの膝丈スカート、あたしはというと、夏のことも考えて水色のミニのワンピースにした。
　三者三様の個性が出ていると思う。ちなみに、今日はぬいぐるみさんは持っていかない。
　何とか寺とか老舗とか、色々な所があるけど、中々決まらないで時間が過ぎていく。ああでもないこうでもないと議論をしても、結論は出ない。
　この周辺の老舗、永原先生が生まれるよりも前から存在する企業もたくさんあったのもそうだけど、一番多いのは江戸時代の創業で、これらはみんな永原先生より年下ということになる。
　永原先生は以前「私はあらゆるアメリカ人より年上だ」と言っていたけど、それもそのはずでアメリカを建国した初代大統領ジョージ・ワシントンが生まれたのは永原先生の生まれた更に２００年以上も後の話だから当然のことだ。
　それと同時に、この街はワシントン建国以前からの店が多く立ち並んでいる。
「なあ、ここじゃ古いものなんて見慣れてるし、いっそ新しいもんでも探したらどうだ？」
「お、恵美さんいいこと言いますね」
「うん、あたしも賛成」
　恵美ちゃんがいいことを言うので、あたしたちも賛成する。
　そう、この街で古いものを散策しても迷うに決まっている。
「とは言っても、京都で新しいものってなんだろ？」
「うーん、確かに思いつきませんね」
　とはいえ、京都という都市はある意味で古さを売りにしているとこ

ろもある。
　そんな京都で、「新しい観光地」を見つけるのは至難の業だ。
「ねえ、永原先生に相談してみるのはどうかな？」
　このままだとまたドツボにはまりそうなので、あたしが第三者の介入を提案する。
　永原先生なら修学旅行で引率の先生として以前にも京都に来たことがあるはず。
「そうですね、じゃあ早速永原先生の部屋に行きましょう」
「あたいも賛成だぜ」
　女子３人の相談はすぐに終わってしまう。
　永原先生は非常口から一番遠い一人部屋に居るので、そこに移動する。
　　コンコン
「はーい！」
　中から永原先生の声が聞こえてくる。
　　ガチャッ
「あら、石山さん、田村さん、河瀬さん。どうしたの？　今日明日は自由時間よ」
「その……京都は古いもので溢れているから、あえて新しい観光地に行ってみたいと思いまして」
　あたしたちは永原先生に地図を示す。
「……それなら、ここなんかどうかしら？」
　永原先生が、京都駅の少し西側を指差す。
　見た感じ、線路の側って感じだけど？
「永原先生、そこには何が？」
「ふふっ、２年前に出来たばかりの新しい博物館よ。最近リニューアルされたんだ」
　永原先生がそう言う。それにしても線路に近い博物館よね。
　多分鉄道の博物館だと思うんだけど。
「へー、そりゃ面白そうだな」
「実は私もそこに行こうと思っていてね。よかったら一緒に行く？」

永原先生がそう提案してくる。
入館料金を聞いた所「１０００円」だという。
この修学旅行、実は食費が結構大きな負担になったりもする。
観光地価格で、どこも高いのだ。
ここの食事がどれほどかは分からないけど、ともあれ、行って見る価値はありそうね。
「ふふっ、じゃあ早速行ってみる？」
「「はい！」」
というわけで、永原先生の引率で、京都駅西側の博物館に行くことになった。
ところで、今日の永原先生の服装はというと、自由時間らしく、昨日のレディーススーツ姿とは打って変わって上下とも黒で決めたロングスカートで、白いＹシャツと胸と頭の左上側に付けた赤いリボンがかわいらしくちょこんと自己主張している。
でも、永原先生の場合、髪も黒いからなんというか、かわいいんだけど「闇の人」という感じだわ。
レディーススーツも、確かに黒いんだけど、今日はいつも付けない赤いリボンがなまじあるために、余計にそんな印象を受ける。

４人組になってまず地下鉄の駅へ行く、そしてそこから京都駅を目指して乗車することになっている。
「鉄道博物館、私も京都の方に行くのは初めてよ」
「へー、そうなんですねえ。私もですよ」
京都駅まではＩＣカードが互換で使える。便利になったものね。
それにしても、女の子４人組で鉄道博物館というのも、なかなかシュールな光景よね。
永原先生と鉄道の関係。あたしの記憶が正しければ、永原先生が教師を始めたそもそものきっかけは、江戸幕府が倒れて江戸城にいられなくなり、再び諸国を放浪する生活を送り始めてしばらくしてから、日本全国に鉄道が張り巡らされるという情報を聞いて、逃げ切れないと判断して教師を始めたというものだった。

「こっちよ」
永原先生の誘導に、あたしたちは黙って従う。時折現在地と駅の地図を確認しながら、永原先生が進む方向に、あたしたちもついていく。
駅を出て、すぐに左に曲がる。
「うん、こっちでいいみたい」
永原先生の読みは当たっていた。
電車の音を聞きながら、あたしたちは目的地を目指す。
すると突然、大都会に似つかわしくない広い公園が見えてきた。T字路になっているので一旦右へ。
「この公園の、更に奥に鉄道博物館があるわよ」
永原先生が教えてくれる。
よく見ると、水族館もある。
「この水族館にも寄る？」
永原先生が聞いてくる。
「うーん、時間があったら」
あたしが、つきなみなことを言う。
まあ、そうとしか答えられないけど。でも、博物館の後に更に水族館というのも、濃すぎる気もするわね。
水族館の裏を抜け、更に進むと右手に学校が見え、左手には昔の路面電車のような車両も止まっていた。
「ここは、アトラクションみたいな感じよ」
「へー、鉄道公園って感じなんだな」
恵美ちゃんも興味津々だ。
更に前へと進む、すると、前方の鉄橋から「普通　園部」と書かれた電車が横切った。
「なあ、あれもアトラクションか？」
「あはははは、もう！　何言ってるのよ田村さん。あれは普通に山陰本線よ！」
永原先生が笑いながら言う。
「す、すまねえ……当たり前だよな。うん」
恵美ちゃんもバツが悪そうに苦笑する。そもそも地図に「山陰本

線」って書いてあったのに、どうして恵美ちゃんはアトラクションと勘違いしたんだろう？
　とにかく、山陰本線の鉄橋を渡ると、そこはもう「京都鉄道博物館」だった。
「拝観料、みんな持った？」
「「はいっ！」」
　あたしたちは、永原先生に拝観料を渡す。１０００円札が１枚、永原先生だけ大人料金で少し高い。
　永原先生が代表して、チケットを買ってくれるらしい。
「鉄道はね、私にとって特別な存在なのよ。私の人生そのもの変えたわ」
　永原先生が博物館の入口で、そんな感慨深いことを言う。
「確か、永原先生が先生になったのも鉄道って言ってましたよね？」
「ええ、『陸蒸気』は……ごめんなさい、陸蒸気って言っても江戸生まれのＴＳ病患者さんにしか通じないわね」
　陸蒸気、おそらく明治時代、それも鉄道黎明期の言葉なんだろう。
　永原先生５００年の人生からしても、もはや１３０年前の明治は遠い昔、それでもこうやって、昔の言葉が出てしまうことがある。
「でも、何となくわかりますよ。あの黒い煙を吐き出す汽車ですよね！」
「ええ。蒸気機関車……ＳＬ……スチームロコモーティブよ。初めて見て、そして乗ってみた時は驚いたわ。合戦での火攻めでも出さないようなほどに……信じられない量の煙を吐き出して、人が走るのよりも遥かに速い速度で、休むことほとんど無く走り続けたんだもの。歩いて１４日掛かった東京と大阪が２日で済んだわ」
　永原先生は、昔の光景を思い出しながら言う。
　以前にも聞いた。今日の新幹線に乗った身としては、２日かかってしまうのは正直ものすごい遅いと思う。
　それでも、永原先生の価値観からすれば、とんでもない革命だった。
「私は教師として、全国に赴任していたわ。ここの博物館には、そんな私の思い出の鉄道の車両がたくさん詰まっていると思うわ」

永原先生が、入場券を買い、あたしたちにも渡してくれる。
「さ、入るわよ」
エントランスホールを抜けて、あたしたちはプロムナードへと入る。
そこには、３つの車両が見えた。
一番右の青と白の車両は多分新幹線。
あたしたちの中では、昔の映像の中だけの存在。
真ん中は緑とオレンジの列車、どことなく、あたしたちの関東地域の色という感じだけど、多分虚偽記憶のノスタルジックだと思う。
そして一番左側、これも昔の映像の中だけの存在。永原先生が言っていたＳＬとはこのことだろうか？
よく見ると「Ｃ６２　２６」と書かれている。
「ねえ先生、この３つの車両って？　一番左がＳＬですよね？　鉄道開業のときにはこれが走ってたんですか？」
龍香ちゃんが矢継ぎ早に質問をする。
「河瀬さん、一番左の車両はＳＬ末期に活躍したものよ。これはＣ６２、通称『シロクニ』と言って日本の鉄道の蒸気機関車としては最後の形式よ」
「へえ、これが。でも大きいですよね？」
「ええ、改造形式なのよ。Ｄ５２っていう強力な機関車があって……そこのボイラーを使ったの」
永原先生が、何やら説明をしてくれる。
でも、あたしたちは蒸気機関車の仕組みさえ知らない。
「じゃあ、真ん中の電車は何なんですか？」
「真ん中の電車は、８０系電車よ。今日の電車の基礎を作った電車よ。この電車が東海道本線を長距離走り出したことで、日本は電車大国の道を歩んだのよ」
「はへー、すごい電車なんですねえ」
龍香ちゃん、さっきから永原先生に圧倒されっぱなし。
というか、永原先生って鉄道に詳しかったのね。
「で、一番右は何だ？　見た感じ、新幹線っぽいけど」

「ええ。新幹線の一番最初の形式よ。昭和３９年……今から５４年前に新幹線ができた時に、この車両が生み出されたわ」
その名も、「０系新幹線」だという。
「この新幹線ができた時の衝撃は、それは計り知れなかったわ。左側の蒸気機関車は、最強の蒸気機関車だけど、機関車はブレーキ性能に劣るから、最高速度は９５キロのままだったわ。その後、電車特急が出来て１１０キロ位にはなったんだけど、この０系は２１０キロで走ったわ」
「え!? じゃあまさか、一気に１００キロもスピードアップしたんですか!?」
龍香ちゃんが驚きの表情で言う。
「ええそうよ。あの時東京と大阪は電車特急でも６時間半、機関車の列車では７時間半もかかったわ。それがこの新幹線が開業した途端に４時間、それも相当に余裕を持った構成で、翌年には３時間１０分になったわ」
つまり、この電車の登場で東京大阪は一気に所要時間は半分にまで減ったということになる。
「この車両は、至る所で保存されているわ。ええ、とても偉大な列車だもの」
永原先生が、しみじみと、感慨深く言う。
これまでの価値観を大きく変えたその車両。でも近くで見てみると中の座席は今の車両と比べると見劣り感が否めない。
「これでも、当時はとても豪華だったのよ。私は……初めて乗ったのは大阪万博の時だったかな？　それ以前だったかもしれないけど詳しくは覚えてないわね。でも、初めて乗った時にとても感動したことだけは覚えているわ。それは今まで歩くか馬に乗るか人力車しか知らなかった私が、初めて陸蒸気に乗った時よりも大きかったわ」
さてあたしたちは再び０系の左側の電車、「８０系」に注目する。永原先生によると「湘南電車」というらしい。
このオレンジと緑のカラーも、湘南の象徴だという。
中の座席も、古い昭和風な感じを醸し出している。

「ねえ、こっちもすげえぞ。何だこれ!?」
恵美ちゃんが、一行から離脱し、Ｃ６２の方に駆け寄ってあたしたちを呼び寄せるように大きな声で言う。
どうやら、中から運転台を見ることが出来るみたいね。
「左側のこっちが機関士席、窯を焚いて管理するのが機関助士よ。蒸気機関車のデメリットの一つに、２人乗務が必須だった点があげられるわ」
「そもそも、後ろに石炭がいっぱいあるけど、これを燃やしてたのか？」
「ええそうよ、スコップを使って、あの中に放り込んでいたの。それはもう、とてつもない重労働よ。でもこのＣ６２はまだましだったわ。一応、『自動給炭機（ストーカー）』っていうのがあって、石炭を自動で供給してくれたのよ。最も、人間の力の方が何かと都合が良かったみたいだけどね」
昔は大変だったという。
それに機関士席も、何だかよく分からない構造になっている。これらを操って運転するんだからすごい。
永原先生も、完全には把握していないらしい。
ちなみに、Ｃ６２は永原先生も何度か乗ったという。
そのＣ６２の後ろ側には、昔のものと思われる客車が２両、湘南電車にも、もう一両つながれていた。
また、０系も展示用に４両編成になっているのが分かる。
「永原先生、この２両は？」
「懐かしいわね、食堂車に寝台車。昔は移動するのに時間がかかったから、寝ながら目的地を目指したのよ。だからこうやって、食堂車もあったの」
永原先生が、やや興奮気味に言う。
よく分からないけど、多分これらの車両が現役だった頃に乗ったことがあるのかもしれない。
「つまり、新幹線ができていらなくなったってことですか？」
「そういうことになるわね。もちろん、新幹線が通っている地域ばか

りじゃないから、そう言うところでは残り続けたわ。最も、今あるのは『サンライズ』だけだけどね」
「なあ、こっちの新幹線、新幹線にも食堂車ってあったのか!?」
恵美ちゃんがやや興奮気味に言っている。
それを聞いたあたしたちはそっちに移動する。
「うん、開業当初は博多までは結構時間かかったからね。今は同じ新幹線でもスピードアップのおかげで、食堂車もいらなくなって、代わりに座席で大量輸送できるようになったんだ」
永原先生が笑顔で言う。
永原先生によれば、食堂車があった頃は、車内販売もなく、また駅のスペースも有効活用されていなかった。だから今の方が断然便利だと永原先生は断言する。
「確かに、食堂車まで移動しないといけませんけど、車内販売は向こうから移動してくれますものね」
龍香ちゃんが納得したように言う。
「それに、駅なら多く仕入れられて変える人も多いわよね」
あたしも、そんな風に言う。
「ええそうよ、食堂車はなくなっても、形を変えたサービスにより便利に進化していったわ」
「ところで、こっちの赤いのはなんですか?」
随分と角ばった、威圧感のある赤い機関車が食堂車を引っ張っている。
更に奥にあるオレンジ色の電車と比べると、かなりごつい。
「この赤いのはＤＤ５４、通称欠陥機関車よ」
永原先生がサラリと暴言を吐く。
「え!?　そうなんですかこれ!?」
いきなりのことに、龍香ちゃんも驚いている。
「メンテナンスが大変だったのよ。とある西ドイツの企業の技術を使ったんだけど、とにかくアフターサービスの悪さが目立ったのよ。鉄道車両っていうのは、運用してみて初めて分かることもあるから状況に合わせて設計変更したり改造したりする必要があるんだけど

……ライセンス契約上認められなくて、何の改善もできなかったわ。２年前にＥＵが日本に鉄道市場の開放を要求したけど、これのトラウマがあって日本は反発したとも言われているくらいなのよ」

永原先生によると、この機関車は本当にろくでもないものだったらしい。

運用中に棒高跳び事故を起こしたり、とにかく高温多湿の日本では故障も早かったらしい。

「実はこの機関車が開発される少し前にＤＤ５１……通称デデゴイチっていうディーゼル機関車も開発されてたんだけど……こっちは老朽化著しいと言ってもいまだ現役なくらいよ。一般に鉄道車両は在来線３０年、新幹線１５年が目安だけど、ＤＤ５４は１０年足らずで廃車になったわ」

「それじゃあよっぽどひどかったんですか?」

「ええ。末期にはＤＤ５１の１８倍もの保守費用がかかっていて、結局初期故障を克服したＤＤ５１に置き換えられてしまったわ。むしろよく保存されていたものだと感心するくらいよ」

永原先生はどうもこの車両がお気に召さないらしい。

隣の車両に行くと、今度は１０３系だという。

「これは今でも細々と走っているわ。西日本、東日本、九州、東海……ありとあらゆる場所で、この姿を見たわ。今日の標準化という意味では、大車輪の活躍をしたけど……一番新しくても１９８４年製だから……さすがにもう老体なのよ」

永原先生曰く、通勤形電車として、この電車は３０００両以上が製造され、日本の電車史上、最も多く作られたとか。

いずれにしても、弊害もある程度会ったのは事実だが、当時爆発的に増えていた日本の通勤輸送需要を支え、標準化に貢献したのは紛れもない事実だという。

これで、プロムナード部分が終わった。

案内によると、ここからは「本館」と呼ばれるスペースに入るらしい。

# 修学旅行２日目　永原先生の意外な趣味

本館の方に入ってすぐ、あたしたちの目に小さなＳＬが飛び込んできた。
「これ、さっきのＣ６２に比べると、随分小さいですよね！」
龍香ちゃんが言う。確かにかなり小さい。
「そりゃあそうよ、Ｃ６２は大型機関車よ。こっちは、日本で初めて国産化された蒸気機関車なのよ」
つまり、この機関車はＣ６２よりもさらに古い列車ということ。
壁の展示には、鉄道のあゆみや車両の仕組みも書いてあって、永原先生も補足説明してくれる。
そのまま曲がって正面に行くと、更に多くの展示列車が目に入る。
一番左側は青くかなり尖った新幹線、何か子供の頃、ビデオで見たような気がするわね。
「うおお、かっけえな」
「これは飛行機と対決するために開発された新幹線５００系電車よ。作るのは難しかったわ。そうね、博物館に展示されてるけど、山陽新幹線なら今でも各駅停車として走っているわ。さすがに作られた時期を考えるとそろそろ寿命ですから、早めに乗ったほうがいいと思うけどね」
永原先生曰く、この電車は当時日本の新幹線としては３５０キロ運転を目指していたものの、９０年代当時の技術では３００キロがコストパフォーマンスで優れると判断された。３００キロを超えると、コストパフォマンスが大きく下がり、東北新幹線が３２０キロになったのも、そのためだとか。
車内もやや狭めで、また東海道新幹線側より座席の仕様統一を要請されたので、色々無理な設計だったらしい。
「騒音基準をクリアするためのパンタグラフは、特殊な翼型パンタグラフになったわ。これはフクロウの翼を参考にしたのは有名だけど、これがまた保守費用がかさんだのよ。でも、この５００系の高速化の技術は、昨日私達が乗ったＮ７００系にも活かされているのよ」

Ｎ７００系は５００系の次次世代の車両だ。
「で、こっちは何だ？　展示には５８１系ってあるけど――」
恵美ちゃんが、５００系の右に止められていた「月光」と書かれている車両を指差す。
「ふふっ、これも５００系以上に革新的な列車よ。５８１系と５８３系は最近まで東日本で使われていた由緒ある電車で、世界初の本格寝台電車なのよ」
「え!?　寝台電車？　でも、寝台車はたくさん――」
「あーうん、今までの寝台列車は、全て『客車列車』で運転されていたのよ。つまりさっきのＣ６２とかＤＤ５４とかに引っ張られて、自分は動力を持たなかったのよ」
永原先生によれば、新幹線などを含め、私達が普段乗っているのは「電車」と呼ばれていて、各車両に動力がついていて、「動力分散方式」と呼ばれていた。
「この方式は、各車両にモーターがついているわけだから、機関車が引っ張るタイプよりも振動が激しくなりやすい……つまり中距離・長距離列車や寝台列車には不向きだって言われていたのよ。ところが、新幹線が……正確には中距離列車はさっきの８０系が、長距離は１５１系の『こだま』がその常識を覆したんだけどね。これは寝台列車の常識を覆す画期的な車両だったのよ」
永原先生曰く、この電車は昼は寝台を上に収納し、座席昼行特急として使い、夜は寝台を取り出して夜行列車にと大車輪の活躍をしたという。
朝ラッシュ時間帯に通勤電車がフル稼働している間にこの作業をしてしまうことで、とにかく費用を削減できたという。
最も、それが長距離運用を増やし、結果的に老朽化を早めた一因とも言われている。新幹線の寿命が短いように、長距離を運行するというのは、それだけ車両が痛みやすいのだ。
「更に、山陽・東北新幹線が出来るようになって、やがて活躍の場は減ってしまったわ。そんな時に、余っている５８３系を何とか活用しようと、普通列車に改造されたタイプまで出たわよ……さすがに、改

造費の予算を極端にケチったために色々と問題が起きたけどね」
その電車は、「食パン」とも呼ばれているらしい。
「先生は、この電車には？」
「ええ、一度だけ乗ったことがあるわよ。もう一個右の４８９系もね」
永原先生は、もう一つ右に展示されていた「４８９系」に振り向きながら言う。
永原先生曰く、この４８９系は北陸特急で活躍した「雷鳥」を模しているという。
ちなみに、今の愛称は「サンダーバード」、両者が混在していた時代も長かったとか。
そして右側奥にはもう一つ蒸気機関車が、更に右側には展示物があり、そこでも永原先生が色々と説明してくれた。
あたしたちには記憶にもないものでも、永原先生にとっては全てが「懐かしい思い出」なのだという。
そして最も右側にはまた一つ、茶色い列車が止まっていた。
永原先生によれば、これはＥＦ５２という列車で、当時輸入の電気機関車ばかりだった日本において、初めて試作的に国産電気機関車を作ることになったという。
「この形式自体には色々問題点はあったけど、後の開発で改善されるようになったわよ」
「ふむふむ、そうなんですね」
龍香ちゃんが感心したように言う。
「日本の鉄道は世界的に見てもとても特殊な環境だったので、早期の国産化が急がれたのよ。例えばこれは、イギリスから輸入された蒸気機関車よ。おそらく、この博物館の中では一番古いんじゃないかしら？」
永原先生曰く、これは明治時代のものだという。
永原先生は、これとよく似た機関車が走っていたのを、記憶しているという。
「確かに、さっきのＣ６２とかと比べても、小型で力強さもないですよね」

「うんうん」
あたしや龍香ちゃんも、そんなことを話して鉄道で盛り上がる。
鉄道というと、どうしても男性の趣味という性格が強くて、館内でも男の人やあるいは子供を含めた家族連れが多い中であたしたちはかなり浮いている。
さて、更に奥にはさっきの０系に似ていて先頭が尖っている新幹線と、これまた４８９形に少し似ている「くろしお」という列車、横向きに２両、よく分からない変な形の車両、更に凸の形をしたオレンジの列車、更に先頭だけ切り分けられた列車に青い色をしたＤＤ５４にやや似た形の機関車もある。
「うわーたくさんありますね。この奇妙な２両はなんですか？」
まず、横向きの２両に龍香ちゃんが着目する。
「これは貨車よ。貨物を運ぶの。で、こっちは車掌車と言って、昔は貨物列車にも車掌さんがいたから、これに乗っていたのよ。最も、程なくして用済みになっちゃったんだけどね」
貨物列車の車掌って、一体何をしてたんだろう？
あたしも恵美ちゃんも、龍香ちゃんも疑問に思う。
「それで、こっちの青と白のは何なんだ？　さっきの０系の親戚か？」
「これは１００系よ。０系の後継車両として１９８５年に登場したわ。東北新幹線の２００系の方が先に登場していてここから東北系統が百の位偶数、東海道系統が百の位奇数になったのよ」
「うん？　そう言えば、新幹線の寿命って１５年だっけ？　でもこれ開業から２１年目の登場だから――」
恵美ちゃんが何やら鋭いことに気付いている。
「ふふっ、初代の０系は１３年で廃車になったわ。古くなった０系は新しく作った０系で置き換えていたのよ」
「ふへー、そんなことがあんのかよ……」
「もちろん、マイナーチェンジで改良はしてたわよ。飛行機なんかでもボーイング７３７とか今走ってるＮ７００系だって、このまま行けばＮ７００でＮ７００が置き換えられるんじゃないかって言われているわよ」

永原先生がそんなことを言う。それだけ、この列車の完成度が高かったということや、国鉄の労使問題や財政悪化もあって、新規開発が難しかったことも理由だという。
そんな中で国鉄末期に登場したのがこの１００系で、「グランドひかり」などをはじめ、様々な編成に使われ、最終的にはこだまとして運用されて生涯を閉じたという。
「ふむふむ、すごいですねえ」
「ええ、様々な改良が加えられているわ。そしてこっちはキハ８１ね。キハ８０系の仲間よ」
「キハ？」
「ディーゼルで走る気動車のことよ。ほら、電車って上に架線がついてるでしょ？　それがなかったら非電化になるのよ。その場合、自走できる車両が必要ってことになるの。さっきの蒸気機関車も同じよ」
「ふむふむ、電車とは違うんですね」
「ええそうよ。これはこの顔だけじゃなくて他の顔もあるわよ。東北では『はつかり』にも使われていて、客車列車を気動車に置き換える動力近代化にも貢献したわ」
「へえ、やっぱり名車なんですねえ」
「ええ、最初こそ初期故障も多くて『はつかりがっかり事故ばっかり』何て言われてましたけど、従来の客車列車に比べれば遥かに快適で所要時間も短かったから、トラブルを克服した後は大好評になったわ。ちなみに、さっきの８０系湘南電車も、当初は『遭難電車』って揶揄されていたわ」
「なんかセンスすげえなあ……」
「うんうん、皮肉効いてるわよね」
あたしと恵美ちゃんが、頷く。
そう言えば、「湘南新宿ライン」のことを「遭難顰蹙ライン」って揶揄する人がいたけど、「湘南」を「遭難」って揶揄するのはそこが最初なのかな？
「他にも、急行は急いで行かない、特急は特に急がない、とか、１駅ごとに通過しては停車する急行列車のことを『隔駅停車』、各の字は各々

ではなくて隔離の隔で揶揄する人もいたわよ」
「ふむふむ」
「他にも、１５１系の『こだま』が設備に劣る急行車両で運転されたら『かえだま』とか、『ひかり』中心ダイヤの時は後続の列車に抜かれるひかりのことを『ひだま』と言ったり、抜かれなければ『ひぞみ』何て言ったケースもあったわ」
「色々あるんですねえ……」
「ねえ永原先生、揶揄表現多いけど逆はないの？」
　あたしが聞いてみる。
「うーん、ここ関西で走っている新快速は、私鉄と比べてもかなり速いから、よく絶賛の対象にはなるわよ。新快速の新は新しいだけど、それを神に書き換えるとかね」
　なるほど、「神快速」というわけね。
「このくろしおは、西日本の和歌山の方よ。この後継列車は振り子車両もあったんだけど、初期の国鉄車両はとにかく酔うために『くろしお』は『げろしお』とか同じような車両を使った『やくも』も『はくも』何て揶揄されていたわ」
「うえっ……ひでえ」
「もう、永原先生！」
　永原先生の下品な言動に、あたしは思わず抗議する。
「ご、ごめんなさい、女の子がそういうこと言っちゃいけないのはわかってるけど、そう言う風に言われてたんだから仕方ないわよ」
　永原先生も、少し申し訳なさそうに言う。
　この手の揶揄はやはり直接的なのだ。
「国鉄は動力近代化計画を推進したわ。蒸気機関車を置き換えるわけだけど、旅客列車に関しては、諸外国で行われていたディーゼル機関車ではなく、動力分散方式の気動車で置き換えることになったのよ」
　永原先生の説明、つまり、ディーゼルや電気にも、機関車式と分散式があるということ。
「そしてこの凸型のディーゼル機関車、これがさっきも出てきたＤＤ５１よ」

永原先生が、凸型の機関車を指差して言う。
欠陥機のＤＤ５４とは違って、各地で蒸気機関車を置き換え、無煙化に貢献した名機だという。
「このＤＤ５１はとても優れた機関車よ。軸重も軽くて色々な路線に乗り入れられるし、この機関車のエンジンを使って新幹線の救援機関車も作られたわ。世界最速の０系新幹線という影に隠れがちだけど、このＤＤ５１のエンジンを使った新幹線ディーゼル機関車は、世界最速のディーゼル機関車になったのよ」
他にも、７年前に起きた東日本大震災でも、燃料輸送列車として、貨物用に活躍していて、現在でもＪＲ貨物で老体にムチを打ちながら運用がなされているという。
一方で、「新幹線ディーゼル機関車」は幸いにも救援用途には使われず、現在の「ドクターイエロー」と同じように、軌道検測車を牽引する役目が与えられたという。
このＤＤ５１は液体式ディーゼル機関車として、大成功を収めたという。
現在は、ＪＲ貨物が新規に開発したＤＦ２００などによって、徐々に活動の場を減らしつつあるという。また、最近ではＤＤ５１の直接の置き換えではないものの、「ＤＤ２００」という新しい機関車も登場しているとか。
その隣はなんか先頭だけ取り出したモデル。更にその隣はＥＦ６６という電気機関車だという。
「寝台列車に貨物列車に、多く使われたわ。１９７０年台の設計だけど、バブル景気で貨物輸送が伸びた時に、ＪＲ貨物がわざわざ古い設計で新造したくらい、洗練された機関車だったのよ」
ＤＤ５１と同様、この機関車は国鉄を代表する機関車になったという。
すでに古いタイプのものは殆ど残っていないが、ＪＲ貨物が新しく作ったタイプのは、もう少し使えるという。
「さて、じゃあこっちへ行こうかしら」
永原先生が、更に奥へと目指す。

そこは、車両工場を模したような展示風景になっていた。
その中に3両の車両が展示されている。2両は緑色、もう1両が茶色だ。
「ここは展示引き込み線があって、季節ごとに展示列車を入れ替えているみたいね」
あたしが、それに気付く。
今は通常の展示らしい。
「懐かしいわね。トワイライトエクスプレスの車両よ。私は、ついに乗らずじまいだったわね」
永原先生が言う。トワイライトエクスプレス、数年前まで走っていた列車で、関西と北海道で運転されていた寝台列車だったという。
そしてその横、茶色い車両も客車だという。
「これは、急行列車を軽量化、改造したもので、頑丈さもあって実は今でも細々と活動しているわよ」
「へえ、そうなんだ。それにしてもこの博物館。現役の車両も結構あるんだな!」
恵美ちゃんが感心したように言う。
「あはは、もちろん博物館に展示されているくらいだから、どれもこれももう老体よ。引退は時間の問題だわ」
永原先生が笑いながら言う。
あるいは、動態保存と言う形になるかもしれないとのこと。
「ところで、この奥にあるのは?」
あたしは、奥にある緑色の車両に目をやる。
中を見てみると、何だかよく分からない機材がたくさん入っている。
「これはトワイライトエクスプレスの荷物車兼電源車よ。ほら、『カニ』って書いてあるでしょ? ２４系客車も、寝台列車がほぼなくなって、活躍の場がなくなってしまったわね」
永原先生によれば、乗客の荷物を預けたり、あるいは客車の電源供給に使われていたという。
こうした設備が必要で、機関車分と合わせても編成が余計に取られ

てしまうのはかなり不利な設計だという。
「さ、屋外に行く前に、まずは2階へ上がりましょう」
永原先生も、これらの車両にはあまり思い入れがないらしい。
トワイライトエクスプレスも、乗ったことがないのだから、思い出は語れないだろう。
ちなみに、さっき出てきたＤＤ５１もまた、北海道区間ではトワイライトエクスプレスの牽引を担当していたらしく、末期は機関車客車ともに相当な老朽化の上で「豪華寝台列車」として走っていたらしい。
ともあれ、あたしたちはここから一旦エスカレーターを使用して2階へと上がることになった。

# 修学旅行2日目　永原先生の昔話

「うわー、すごいですよー！」
「上から見るとこんなに広えんだな！」
「うん、すごいわね」
　あたしたちは、エスカレーターで2階に上がると、そこは吹き抜け構造になっていてさっき見てきた車両たちを一様に見渡すことが出来る。
　様々な歴史・背景とともに彩られた車両たちの風景は美しく、拝観者たちもとても小さく見える。
　吹き抜けについ気を取られちゃったけど、その間の展示も見ないとね、うん。
「ここは生活と鉄道についてのコーナーみたいね」
　近くには休憩所もあるけど、まだ休憩する必要はない。
「あれ？　これ、駅の改札ですよ」
　龍香ちゃんが、改札機のモデルを見て言う。
「うん、これは西日本では標準のタイプよ」
　どうやら右側のレトロな感じは、昔の改札らしい。
「今よく使われている自動改札機はほぼ全て日本の会社が作ったものよ。他にもここ京都に本社のあった会社はそれよりも古いタイプの自動改札機を作ったこともあったわね」
「ふむふむ、自動改札機って、もしかして日本が強いんですか!?」
　龍香ちゃんが興奮気味に言う。
「ええもちろんよ。そもそもヨーロッパの鉄道では『信用乗車方式』といって、車内検札で不正乗車を防止しようとしたのよ。これのおかげで、通勤ラッシュは随分と楽になったわ。それまでは大きな駅でも駅員が改札してたのよ」
「うげえ、大変だったんだなあ……」
　永原先生の昔話に、恵美ちゃんも苦い顔をする。
「駅の自動改札機は、飛行場と比べても使用条件はとても過酷よ。不正乗車防止システムとしても、やはり自動改札機の方が優れている

わ。だから日本ではこの自動改札機は世界では類を見ない高性能なものになっているのよ」
　永原先生が、そんなことを言う。
「信用乗車方式の罰金制度のために、日本では当たり前に行われている『乗り越し精算』も出来なくなったのよ。例えば急いでいる時に、『とりあえず一番近い所までの乗車券を買って、下りた駅や車掌に申し出てその場で精算する』事も出来ずに、すぐに高額の罰金を取られるようになったのよ」
「うーん、それはサービスとしてまずいわよね」
「ちなみに、こういう抜き打ち検査には、『元不正乗車のプロ』を雇うそうよ。人件費も掛かるしいたちごっこだし、普通に駅で改札機なんかを使えばいいのにね」
　日本の鉄道は、色々な所で、世界とは違う独自の進化を遂げてきたという。
　実際、コストの削減によって、昔では考えられなかったような地方の小さい駅にも自動改札機は設置され始めている。
「最近では、アメリカの会社も新しい製品を日本に導入した際に、日本のＩＣで使われている規格をスマホに入れざるを得なかったわ。そうじゃないと遅すぎて日本の鉄道では使いものにならないのよ」
　永原先生の解説を、あたしたちはよく聞きながら、展示を楽しんだ。
　永原先生は鉄道への思い入れが強い。本当に詳しくて、あたしたちは驚かされている。
　彼女の人生を、大きく変えた存在だから。
　これらを見終わった後は、企画展示室もあった。
　更にレストランもあったけど、みんなまだお腹は空いていないという。
　吹き抜け部分の右側を通ると、運転シミュレーターのコーナーがあった。
「うーん、抽選かあ……」
「当たる気がしないわね」
　恵美ちゃんとあたしが唸っている。それに、派手にオーバーランを

起こして恥をかきそうでもある。
永原先生は、このパタパタと回る案内表示（反転フラップ式というらしくて、今でも細々と見られるとか）について話していた。
今なら普通にデジタルだから、色々な表示ができるとか。
あたしたちは、運転シミュレーターの様子を尻目に歩いていくと、今度は何やら運行のしくみを解説するコーナーにたどり着いた。
「そういえば、鉄道の単線でぶつからない理由って、昔はどうしてたんだ？」
恵美ちゃんが、信号機の模型を見ながら言う。
「ええ、閉塞と言ってね。その区間に複数の列車が入ってこないようにするのよ」
永原先生による鉄道講座が始まった。
今はこんな風に地上設備を使って閉塞を確保していて、前の列車に近付いたりすると減速信号や停止信号がでたりする。
昔の場合は、人間が管理していたという。
他にも、タブレットを使うことで通行券を持たせてから列車を動かすという制度もあったという。
「でもよ、新幹線とかどうしたんだ？」
「ふふっ、新幹線は車内信号方式を初めて取り入れたのよ。時速２００キロ以上ではこれらの信号を目視するのは困難なのよ。だから車内に信号を入れたのよ」
永原先生によれば、例えば０系は３０キロ、７０キロ、１１０キロ、１６０キロ、２１０キロで、後に２１０は２２０に変わったらしい。
「前の新幹線との間隔が詰まったり、制限速度があったり、あるいは駅に停車する前には信号が変わるわ。もし、信号以上の速度を新幹線が出していた場合、自動でブレーキが掛かるのよ。大抵は減速する時も、駅に停車する時以外はこのＡＴＣを使ってブレーキを掛けるのよ」
「へえー。じゃあ、新幹線の運転士ってブレーキほとんど操作しないの？」
「ええそうよ。今はデジタルＡＴＣだから一段のブレーキだけで良

かったのよ」
「えっと、つまり、以前までは徐々に信号が切り替わって段階的に減速を繰り返したのが、一回で済むようになったってこと？」
「うん。山陽新幹線も、最近はこのＡＴＣを取り入れたわ。他にも、地下鉄ではこのＡＴＣを取り入れている所が多いわ」
どうやら、あたしの見込みは正しかったみたい。
更に、永原先生によれば新幹線は全て高架にし、踏切もなくしたため、ブレーキの制動距離の制限が要らなくなった。
簡単に立ち入れないような環境を作った上で、高速運転を実現した他、車内信号のために新幹線の運転士には駅に停車する時以外は前方注視義務がないことになった。
「え!?　じゃあまさか、新幹線の運転士って走行中はよそ見してててもいいってことですか!?」
龍香ちゃんが驚いたように言う。
「ええそうよ。もちろん、車内信号は見ないとダメだけど」
永原先生はあっさりとした感じで言う。
でも確かにそう、昨日京都まで新幹線で行った時も減速を始めてから停止するまで、かなりの距離を要した。
永原先生によれば、在来線は一部区間を除けば６００メートルに収まっているが、新幹線の場合は数キロの制動距離が必要だとか。
「だから新幹線の運転士は、前方に障害物があって、全くブレーキかけなくても責任問われないのよ。だって目視してから止まれるわけないもの」
永原先生がそう言うと、前方注視義務がないことも頷ける話になった。
「新幹線の安全性はそう、問題を根本から取り除くことで成り立っていることも多いのよ。ＡＴＣもその一つだったというわけね」
「そう言えば、この大きな表示版は何だ？」
恵美ちゃんが、横に細長いよく分からない表示板を指差す。
「これは『ＣＴＣ』よ」
「へえ、こうやって新幹線が動作してるのか」

「ここでは新幹線の動きを監視して、指令員が運転士に指示をだすこともあるわ。それにしても、本来鉄道の指令所、ましてや新幹線のことに関しては国家機密レベルで厳重よ。だから多分、これも旧式か何かだと思う」

「それは、すごいんだな」

よく見ると、近くには別の版もあって、こっちは永原先生によれば「奈良線」の古いＣＴＣ表示板だとか。

他にも、車輪とレールの関係を学べて、脱線事故の仕組みもよく分かる。

「このレバーってまさか？」

「そうよ、人の力でポイントを動かしてたのよ。ミスすれば脱線にも繋がったわ」

「ひええ……大変ですねえ……」

「これは連結器の模型よ。このリンク式というのは旧式で安全性に問題があった方式で、一夜にしてこの自動連結器に組み替えられたわ」

「連結器の安全性って、まさか走行中に外れちゃうとかですか!?」

龍香ちゃんが質問する。

「うーん、どちらかと言えば連結する時の問題かな、この連結器は、間に人が入らなきゃいけないから、タイミングが悪いと車両同士に挟まれてしまうのよ」

「うっ、本当に便利になったのね鉄道って」

挟まれたら大変よね、死に方もエグいし。

「ええ。この自動連結器のおかげで、連結に掛かる時間そのものも短縮されたわ」

「この機械はなんですか？」

「懐かしいわ、昔は駅にこういう機械があって、特急列車の指定券とかはこれで買っていたのよ」

「ふへー、インターネットのない時代によく管理できましたね」
龍香ちゃんが感心したように言う。
確かに、全国から予約が殺到することもあるものね。
一方で、現代的なＪＲ西日本が使っている現役の自動券売機も展示されていて、その進化を垣間見ることが出来る。

「こ、これは貴重よ！　うわー懐かしいわ！」
永原先生が銀色の機械の前で驚嘆している。
「紙コップ」「冷却飲用水」という表示から、おそらくボタンを押せば水が出てきたんだろう。
「昔は、至る所で見られていたんだけど……いつの間にかなくなっちゃったわね。これも車内販売に進化したのよ。本当に冷たい水だったのを覚えているわ」

そんなこんなで、この展示コーナーも終わる。
あたしたちにとっては、記録でしか知らない昔の遺産でも、永原先生にとって、これらはリアルタイムで知っていた懐かしい思い出の数々なのだ。
永原先生が見た目とは違う、本当に長い人生で、鉄道の開業と共に今まで人生を歩んできたんだと思い知らされる。
更に奥にはキッズパークがあって、小さな子供たちが遊んでいた。
あたしも、そこの女の子たちと一緒に遊びたいと思ってしまう。
でも、みんなはそうは思ってないから、吹き抜けを挟んで反対側に、あたしたちは移動する。
もう一つ、コーナーに入るとそこは鉄道のジオラマだった。
「すげえ、結構でかいなこの模型」
中は広いジオラマで、様々な模型が走っていて、ファンの目を楽しませてくれている。
これは全てここの博物館の親会社の車両なのだろうか？
さっき走っていた山陰本線の列車の模型や、新幹線も見える。
永原先生によれば、それらの親会社以外の鉄道車両や、関西の私鉄

のものもあるという。
茶色い電車の沿線は特に高級ブランドだとか何とか。
あたしたちは、運転台のパネルを使って楽しむことが出来た。

「さ、最上層に上がるわよ」
「おう」
「うん」
「はい」
永原先生の声とともにあたしたちは3階へと上がる。
スカイテラスと称した屋外施設、更に反対側はホールと図書資料室になっている。
図書資料室の方にまず行ってみると、そこには鉄道の本がずらりと並んでいて、これだけで時間を潰せそうな勢いだ。
でも、中身はとても学術的で、あたしたちにはついていけそうにもなかった。
「昔の時刻表を見てみると、本当に今は便利になったわよ」
この博物館に入ってわかったが、永原先生は、古い人にありがちな「昔は良かった」という態度を決して取らない。
それは多分、５００年という極めて長い人生がそうさせているんだと思う。
それだけ長ければ、昔と今の違いがはっきりしてしまう。
普通の人の一生である８０年とは訳がちがうということ。
「さ、スカイテラスに行きましょうか」
「「はーい！」」
３人で引率の永原先生に返事をし、あたしたちは屋外へ出てみる。
するとそこには、眼下に線路が広がっていた。
すぐ近くのモニターには今列車がどこに居るのかが分かる表示版まである。
「すげえな、やっぱ日本の鉄道は時間通りなんだな」
恵美ちゃんが感心したように言う。
確かに、本来の時刻と比べてもとてもズレが少ない。

「それにしても、どうして日本だけこんな正確な鉄道になったのかな？」
あたしは、何の気なしにそんな疑問をぶつけてみる。
実際に、外国人が驚いた日本のすごい所では、圧倒的1位は「鉄道」なんだという。
「石山さん、いい質問よ」
ガタンゴトンと遠くの電車の音を聞きながら、あたしたちは永原先生の話に聞き入る。
「そもそも、正確性を鉄道のサービスにするという概念は、大正時代に生まれたのよ。当時は速度計もなかったし、そう言う発想そのものがなかったのよ。そんな0から1を生み出した機関士がいて、彼こそが『運転の神様』と呼ばれた達人だったのよ」
永原先生によると、「運転の神様」は、鉄道のダイヤが正確になることで、石炭の消費を抑え、また時間的信頼性は鉄道に対する利用促進になり、また乗務員にとっても計画通りの作業を随時行うことで行き当たりばったりを無くし、安全性の向上にもつながると看破していた。
事実、重大事故の大半は列車遅延時に起きていて、慣れないことをするために事故になるのだとか。
「これは、今ならちょっと鉄道に詳しい人なら誰でも知っている常識だけど、当時としては天才的発想よ。そして彼は運転指導においても、運転技術においても卓越していたわ。彼が偉大なのは、その発想力だけではなく、実際にそれを実践し、他の平凡な乗務員たちにも自らの天才的スキルを習得させたところよ」
「まるでスーパーマンじゃねえか。あたいらの世界じゃ、優秀な選手と優秀なコーチは違うなんてことよくあるのに」
恵美ちゃんの言う通り、名選手は名監督とは限らない。
でもこの人は、最強の名選手でありながら、最高の名監督でもあった。
「明治・大正の鉄道には三人の神様がいたわ。『車両の神様』島安次郎、『営業の神様』木下淑夫、そして『運転の神様』結城弘毅よ。彼らの功

績は皆計り知れないけど、特に『運転の神様』は今日の鉄道に与えた影響力としては最も大きいわ」
　そして今、外国人観光客が最近急増しているために、この日本の鉄道に対する評判は、今や世界に広まっているという。
「結果的に時間への信頼性が、道路に対する競合力を確保することに繋がったわ。結果的に多くの人が鉄道を使い、本数が増えてその結果時間への正確性が求められるようになったのよ」
「そこでスパイラルになっているわけですか」
「ええ、好循環と言ってもいいわね」
　永原先生が笑顔で言う。
「時間に正確な鉄道」という発想、それそのものがなかった時代というのを、あたしたちは想像にもつかなかった。
　それどころか、日本以外の大半の国では、未だに「時間に正確な鉄道」の概念そのものがないのだという。
　永原先生は、その後も、島安次郎と木下淑夫の話をしてくれた。
　さっきの連結器を一斉交換や蒸気機関車を始めとした鉄道車両の国産化というのも、「島安次郎」が行ったことだという。
　木下淑夫も、今日の鉄道営業の基礎を作り上げた人物で、やはり偉大な人だという。
　だけどそれでも、日本の鉄道が他国に対して大きなアドバンテージ、「時間への正確さ」という最大の特徴を作り出した結城弘毅ほどではないと、永原先生は言っていた。
「さあ、下に降りましょう。見てない車両がまだあるわ」
　永原先生の言葉とともに、あたしたちは下へと降りる。
「でもよ、その前にお腹すいたな」
「う、うん……あたしも」
　恵美ちゃんの言葉に、あたしもお腹が空いたことを思い出す。
「うんそうね、じゃあお昼にしましょうか」
　あたしたちは、先程遠目に見ていたレストランに入る。
　メニューを見てみると車庫のカレーだとか何とか号とか線路とかまかないとか、いかにも鉄道らしいメニューの名前。

恵美ちゃんはうどん、あたしは中華そば、龍香ちゃんはミートソース、永原先生はカレーを頼んだ。
「しっかし、先生は本当に詳しいな」
「ええ、教師に協会仕事をやる傍ら、ずっと鉄道について学んでいたわ」
「どうしてそんなに学んだんですか？」
「……さっきも言ったように、私の、人生を変えたのが鉄道だから。逃げ続けるだけだった私にとって……あの時、逃亡先の鶴見で見た１号機関車が牽引する陸蒸気は本当に衝撃的だったわ。あれを見て思ったわ。時代は変わると、ね」
永原先生が静かに語る。
あたしたちも静かに聞き入る。
「そして私の中で、ただひたすら世捨て人みたいに３００年以上も人知れず逃げて隠れ続けた人生が情けないと思ったわ……だからもっと知りたいのよ。私のすべてを変えた鉄道のこと」
永原先生は大坂の陣から戊辰戦争まで２５０年以上、人生の半分を江戸で過ごした。
その前の３０年は諸国を流浪し、その前の６４年は真田家の村付近に住んでいた。
そして人生の最後の１３６年、教師として仕事をするようになったのは、自分を変えようと思ったのは、鉄道を見たからだという。
それ以来、永原先生は鉄道の魅力へと取り憑かれていったという。
「お待たせいたしましたー」
食堂の人が、あたしたちに同時に食事を運んでくれる。
時間帯がずれていたのか、周りを見渡すと食堂はあまり混んでいない。
「お、優子さん、その中華そば。海苔に何か書いてありますよ！」
「え!?」
龍香ちゃんの指摘に、あたしは思わず海苔を見る。
他の３人も一斉に海苔に注目する。
「おー本当だ、すげえ……！」

「でも龍香ちゃんのソースも、線路になってますよ」
あたしは、龍香ちゃんのミートソースを見て言う。
線路の形になっている。
「あ、本当です！　よく見たらそうですね！」
「そんなこと言ったら先生のカレーもなんか面白い形じゃねえか！　くー、あたいのうどんだけ平凡だぜ！」
「まあまあ、問題は味でしょ」
永原先生がなだめるように言う。
というわけで、４人でいつものように「いただきます」をする。
「お、なかなか行けるなこのうどん。ちょっと味薄いけど」
「ふふっ、田村さん、味薄いのは西日本の特徴よ」
「もぐもぐ……ふぉうなのふぁ！」
恵美ちゃんが食べながら話す。
「恵美ちゃん……行儀悪いわよ」
「んっ……ああごめん」
あたしが指摘すると、恵美ちゃんが謝ってくる。
最近はこんな風にあたしが恵美ちゃんに指摘することもある。
そんなこともあって、食べている間はみんな概ね黙って食べる感じになる。
なんかこの海苔もったいないわね。
……といっても、徐々に絵も崩れてるし、食べよっと。

# 修学旅行２日目　大いなる遺産

「「ごちそうさまでした」」
　あたしを最後に全員が食べ終わると、あたしたちは再び博物館の見学に戻る。
「そう言えば、京都ってエスカレーター逆じゃないんですか？」
　エスカレーターに乗っていると龍香ちゃんが疑問を述べる。確かに言われてみればそんな感じ。関西はエスカレーター逆のはずだけど。
「京都は観光地ってのもあって左右が混在しているわ」
「へーそうなんですかー」
　永原先生が分かりやすく説明してくれる。
　新幹線や空港でも、結構困ったことになるわよね。
「そもそも大部分の地域はエスカレーターの左右なんて決まってないわよ。前の人に続くって感じかな？　もちろん、これから大阪神戸に行く人は要注意よ」
「そう言えば、あたしは明日――」
「ええ、エスカレーター逆のところに行くわよ」
　おっと、あまり仕事のことは話さないようにしないと。
　永原先生の誘導で、一旦一階へと戻る。
　ここの屋外に、まだ見てない展示があるというのでついていく。
　そこは「トワイライトプラザ」と称した場所で、客車が３両、機関車も３両展示されている。
「これはトワイライトエクスプレスのＡ寝台ね」
「へー、こんなに豪華なんですか！」
「今のクルージングトレインと比べたらとてもコストパフォーマンスがよかったわ。で、こっちはＥＦ６５よ……トワイライトに牽引されたかは忘れたけど、寝台列車だけじゃなくて貨物列車も含めて、今も少数が元気に働いているわよ」
　永原先生が言う。
　このＥＦ６５はとても使い勝手のいい機関車で、色々なところで活

躍しているという。
だけど、奥に展示してあるもう一つの機関車は、使い勝手でＥＦ６５を上回るという。
でもその前に、あたしたちはもう一つのＡ寝台の他、トワイライトエクスプレスで使われていた食堂車を見学した。
「食堂車が廃れた理由。駅ナカや車内販売にに取って替えられた理由を考えれば、食堂車は立派に役目を果たしたといっていいわね」
永原先生はさっきの話を念頭に言う。
そして、もう一つ奥には、機関車が２つ展示してあった。
一つにはＥＦ５８、もう一つはＥＦ８１とある。
「永原先生、使い勝手がいい機関車って言うのは？」
「もちろん、このＥＦ８１のことよ。日本のＪＲには直流電化、交流電化とあって、そのうち直流電化の方は概ね１５００Ｖで統一されているわ。一方で、交流電化は５０Ｈｚと６０Ｈｚがあって、しかも電圧も２００００Ｖと２５０００Ｖとあるわ。幸い交流２５０００Ｖは新幹線専用だから、周波数と併せて３つに対応できれば良かったの。そしてそれに対応した万能機関車がこのＥＦ８１よ」
「へえ、それで、やっぱり大活躍したのか？」
「もちろん……というか貨物列車ではまだ一部現役よ。これも国鉄時代の設計で、古いけど民営化後になってわざわざ新造されたくらいの高機能だったわ」
永原先生の説明が続く。
以前はこのトワイライトエクスプレスの他、北斗星やカシオペアといった豪華寝台列車の牽引機関車にも使われたという。
このＥＦ８１の後継機として、現在ではＥＦ５１０と呼ばれる機関車が活躍しているという。
一方のＥＦ５８はかなり古い機関車で、もう走ってはいないとのこと。
これでここトワイライトプラザも終了した。
「さ、これで残るは扇型の車庫だけよ。一旦２階に上がるわよ」
永原先生に言われるがままに２階に上がる。

「こっちよ、ついてきて」
永原先生の言葉と共に、ガラス張りの廊下に行く。
すると、眼下には整備工場のようなものが目に入る。
「あら、残念だわ」
永原先生が残念そうな顔をして「残念だわ」と言う。
「何が残念なんだ？」
恵美ちゃんがすかさず質問をする。
「いつもだったらここで蒸気機関車の修理とかをしているのよ。今はやってないみたいね」
永原先生によれば、これも博物館の見学の一環なのだとか。
「まあ、仕方ないですね」
ともあれ、気を取り直して、先へと進む。この先は蒸気機関車が大量に保存されているという。

あたしたちは再び地上に降りると、一旦屋外に出た。
「うわーすごいですねえー！」
それは、見るものを圧倒する風景だった。
扇形に広がるように黒い蒸気機関車が並んでいた。しかも、どれもこれもが間近で見ることができる。
あたしたちは、まず一番右の蒸気機関車に注目した。
「これは８６２０、通称『ハチロク』と呼ばれる蒸気機関車ね。さっき出てきた島安次郎の設計作よ。いろいろなところで活躍したわ」
永原先生の解説を聞く。
どうやら島安次郎というのは、連結器交換のほかにも、新幹線の原型を構想した人でもあるという。
隣は空になっていた。展示によれば、いつもはここにＣ６２が展示されているけど、今日はイベント列車に使われるらしい。
次にあったのはＣ６１、そしてその隣がＤ５１、鉄道に疎いあたしでも、「デゴイチ」は聞いたことがある。
「ところで、ＣとＤってどう違うんだ？」
恵美ちゃんがふと疑問に思って言う。

「ふふっいい質問ね。それは機関車を横から見るとよく分かるわよ」
永原先生がそう言うので、あたしたちは車庫の内部に入っていく。
「あ、見てください。車輪の数が違いますよ！」
龍香ちゃんの言う通り、Ｃ６１は３つ、Ｄ５１は４つの車輪で、一つ一つの大きさはＣ６１が大きい。
「本当だわ。でもどうして？」
「例外はあるけどＣは旅客列車用、Ｄは貨物列車用よ。蒸気機関車は動輪の回転のスピードに限界があったの。だから動輪が大きければ大きいほど速い速度を出せるわけ。日本の場合は制動距離６００メートルの法律があった上に軸重の制限も大きかったから、大体９５キロだけどね」
「なるほど、でもあんまり大きいとバランス悪そうだな」
「ええ、そうよ。それに動輪の数が少ないと引っ張る力も弱くなるわ。３人で引っ張るより４人で引っ張る方が強いでしょ？　貨物列車は速度よりも引き出し力が必要だから、貨物用のＤ５１は動輪が４になっているのよ」
ふむふむ。
「このＣ６１の後ろにある２って言うのは何ですか？」
「ああそれは単純に２号機っていう意味よ」
永原先生からつまらない答えが出る。そこはもう、それ以上の進展がない。
「そう言えば、さっきの『ハチロク』とかはアルファベットが無かったわよね」
「ああ、それは命名法のルールが代わる前だからよ」
「そうですか」
あたしの質問に、永原先生があっさりした風に答えてくれる。
その隣に出てきたのは「Ｃ５７　１」と書かれている。
「これは『シゴナナ』ね。私も何度か乗ったことがあるわ。戦前に戦後に、様々に活躍したわね。これは初期型だけど、後期型は『貴婦人』何て呼ばれていたわ」
「貴婦人」かあ、あたしもそんな風になれるのかな？

永原先生や他のＴＳ病患者を見てるとどうしても、あたしは「少女」のままな気がするけど。
そしてその左隣、Ｃ５７よりやや小型の機関車、Ｃ５６が展示されている。
番号から考えて、Ｃ５７の直前に作られたのかな？
「なあ先生、これって『シゴロク』とか言ったりしねえか？」
「ええそうよ田村さん」
恵美ちゃんの当てずっぽうが当たる。
そして永原先生は遠い昔のことをまた懐かしそうに語る。
この機関車は軽量ながら長距離運用に適するという特徴を持っていて、戦時中には東南アジアにもって行き、そこで生涯を閉じた機関車もあったという。
蒸気機関車は通常は石炭だけど、それ以外の材料を燃やしていいといった理由で、軍用鉄道向きではあるという。
さて、その隣は一段と小さな蒸気機関車が展示されていた。
先頭を見るとＢ２０とあって、さっき見た黎明期の蒸気機関車に近い。
「これは小型機関車よ。豆みたいでかわいいわね」
永原先生はよく分からない感慨を見せていた。蒸気機関車は逆向きに連結できないので、それを何とかするために入れ替えに使われたという。
さらに左隣、こちらは「１０７０」、名前の振り方から見てもわかるように古い設計で、イギリス製。左隣の「９６００」と比べても大分小さい。
「９６００は通称『キューロク』で、これは島安次郎の弟子に当たる朝倉希一の設計よ。この頃から、島安次郎は線路幅の狭い在来線での限界を感じていたわ。それが新幹線に繋がったのよ」
その隣、今度は「Ｃ１１」と「７１００」と呼ばれる二つの機関車が展示されていた。７１００はさっきあたしが食べた中華そばの海苔に書かれていた「義経」号で、かなり特徴的な形をしている。
どちらもやや小ぶりだけど、さっきのＢ２０と比べるとかなり大き

い。
「このＣ１１は昭和初期に作られた蒸気機関車でありながら、使い勝手のよさで蒸気機関車の末期まで使われた名機よ。私もよく乗ったものだわ」
「へー、これがそんなにねえ……」
「実際、今でも動態保存されている蒸気機関車はこのＣ１１が多いわよ。設計したのは『島秀雄』氏よ」
「ん？　島ですか？　もしかして今まで出てきた島安次郎さんの――」
「ええ、長男よ。父を超える偉大な人だったわ」
　龍香ちゃんが言い終わる前に永原先生が答えを言ってくれる。
「え!?『車両の神様』よりも偉大だったんですか!?」
　あたしが驚いた風に言う。
　さっきの屋上での話ぶりでは、明治・大正期の神様の中で、運転の神様が最も偉大だと言っていた。
　つまり、今日の日本の鉄道の正確性を作り上げたその人くらいに偉大だという事。
「ええ、何分彼は……父が構想した新幹線を現実に作り、そして日本の電車技術の基礎を作り上げた人ですから」
「し、新幹線を作ったんですか!?」
　あたしたちが、修学旅行や、協会の仕事、あるいは林間学校の帰り道で使った新幹線、島秀雄は、それを作り上げたという。
「さっきのＤ５１も彼の製作よ。日本の蒸気機関車の中で最も多く生産されたのよ」
　永原先生が言う。
　そしてこのＣ１１も、傑作機だったという。
　そしてその隣、こちらもＣ６２の一機、結構Ｃ６２はよく見るわね。
「Ｃ６２の改造にも、島秀雄が関わったのよ。狭軌最高速度を記録したこともあった機関車だから、速力には優れていたわ。それでも、法令のために営業の最高速度は９５キロだけどね。新幹線ができた頃には、蒸気機関車もどんどん姿を消していったわ。まるで役目を終え

たかのようにね」
永原先生が感慨深く言う。
思い出のＣ６２を見て、永原先生にも思うところがあるらしい。
さて、そのＣ６２の隣にあったのはまたしてもＤ５１だけどこっちは「Ｄ５１　１」と書いてあって、つまりトップナンバーでさっきのＤ５１と比べてもなんか雰囲気が違う。
「これは初期型のＤ５１で、『ナメクジ』と呼ばれたタイプよ。初期型は重量の不均衡といった問題点もあったから、島秀雄が彼の弟子の『細川泉一郎』に相談して改良を加えたのがよく見るＤ５１なのよ」
「その細川さんっていう人は？」
あたしが質問してみる。
「ええ、確か石山さんたちが生まれる年くらいまで生きてたわよ。彼はその後昇進した島秀雄に代わって後期型の機関車を多く作ったわ。彼もまた、優れた鉄道人だったわよ。本人は『島さんが上でいつも僕は言われるがまま』と謙遜していたけどね」
細川泉一郎は、Ｃ５６以降の蒸気機関車の他、１５１系のこだま電車の設計にも関わったという。
さて、その隣に鎮座していたのはＣ５５、永原先生によればこちらも島秀雄の製作で、失敗作となってしまったＣ５４を改良したものだという。
永原先生によると、Ｃ５４は、まだ彼が若い時に作られた蒸気機関車で、重さ制限の厳しい路線にも乗り入れられ、尚且つ高速性能を求められたために、極限までに軽量化を押し進めたものの、やりすぎて空転が多発したのだという。
「空転って？」
「要するに、車輪が滑って空回りしちゃうことよ。最悪の場合動けなくなっちゃうわ。雨雪の日の機関車……特に蒸気機関車はこれがよく起きるわ。対策としては砂をまいたり、死重を載せてわざと重くするのが一般的よ」
最も、欠点ばかりが目立つＣ５４で行われた軽量化技術も、Ｃ１１なども含めた後の小型機関車に応用されているから、完全に無駄な機

関車にはなっていなかったという。
「私はＣ５４に乗ったことないわね。こっちの方は何回かあるけど」
ともあれ、次に行く。扇形は中央を超え、再びカーブし始めていた。
次に見えたのはＣ５８、細川泉一郎が設計主任で、課長として島秀雄の監督のもとで作ったのだという。
「Ｃ５８では、スピードなどの性能に限界があったから、主に労働環境の改善に焦点を当てられたわ。密閉型の運転室になったのよ」
その隣はＤ５０、Ｄ５１のプロトタイプと言える機関車で、永原先生によれば、使い勝手がよく、その後に与えた影響を鑑みればＤ５１以上の傑作と言ってもいい機関車だという。
そしてその次はＤ５２、こちらはＤ５１をパワーアップさせた機関車で、設計主任は細川泉一郎。
「日本最強の蒸気機関車」ともいわれているという。
「戦時設計だったからボイラーの爆発事故がよく起きたのが難点だったわね。とはいえ、改良をすればそのパワーをいかんなく発揮したわ。有名なＣ６２にもこのボイラーが使われたのよ」
展示されている蒸気機関車の残りも少なくなってきた。
「これはＣ５９、『シゴク』よ。特急やお召し列車の牽引にも使われて現場の信頼も高かったのよ。戦後にも作られた蒸気機関車で、改善も見られているわね。とにかく強力型として有名だったわ。隣のＣ５３共々ね」
永原先生が隣の機関車を指す。
それがＣ５３だった。島秀雄が最初に作った蒸気機関車で、日本が設計した唯一の３シリンダー型だったという。
「他の機関車はシリンダーが２つ、これは３つで強力ではあったけど、複雑さ故に整備に難点があったわ。それでも、超特急燕の牽引にも使われたくらい、強力型であったのは確かよ……そうそう、燕の牽引に関わったのも、結城弘毅だったわね」
永原先生が、ここで運転の神様の名前を出す。
こんなところでつながっていたのだ。
Ｃ５９の登場で、ようやく２シリンダーで追いついたのだという。

更に隣の機関車、これが最後の機関車になった。
そこにはＣ５１と書かれていた。
「先生先生、これは誰が作ったんですか？」
「島安次郎と朝倉希一よ。ええ、傑作でしたわ」
Ｃ５１は後の機関車に大きく影響を与えた。例えば動輪の大きさなどが、後の機関車に影響を与えたという。９６００の後継で、広軌改築論のための布石にしようとしたが、あまりの傑作機のために「これほどの傑作機なら狭軌で十分」と言われてしまったんだとか。
「自滅みたいな格好になっちゃったけど、その後上層部は更に高性能な機関車を欲したんだから、的外れではあるわね……さ、これでここはおしまいね。あそこの客車が休憩所になっているわ」
永原先生の先、そこには真っ赤な車両が１両、「京都⇔柘植」と書かれて待機していた。
「うわあ、５０系客車、私も青函トンネルの海峡でお世話になったわ。量産こそされたけど、悲運の車両だったわね」
国鉄末期にこれまで運用されていた旧式の客車列車を置き換える目的で大量生産されたものの、電車化、気動車化という島秀雄が推し進めた動力分散方式にすぐに取って変えられて、大量の余剰が発生してしまったという。
永原先生にとっては、青函トンネルが開業して間もないころに走っていた「快速海峡」で、当時は凄まじい轟音だったが、それでもあれだけの長大トンネルを走ったのは感動的だったという。
中はというと、昔ながらの座席という感じがする。
今でも、こんな感じの座席があるという。

「さ、これで見るべき車両は全て見たわね。さ、最後に動態保存してあるＳＬに乗れるらしいわ。行ってみましょう」
「お、楽しみですねえー」
「ワクワクするぜ」
みんなで、近くのＳＬ乗り場まで移動した。
乗車料金は３００円で、あたしも１００円玉を3枚払う。

赤い客車は２両、牽引するＣ６２に比べるとかなり貧弱で、永原先生曰く「Ｃ６２がこんなのを２両だけ引っ張るなんて何とももったいない」と言っていた。
「発車する時、揺れるかもしれないから気をつけてね」
「おう」
アトラクションにはかなりの人数が乗っている。
「えー、間もなく出発いたします。揺れますのでご注意ください」
永原先生と同じことを、添乗員さんが言う。
プオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!
ガックンという音とともに、蒸気機関車が汽笛を鳴らして走り出す。
とは言っても、これは博物館のアトラクション、大してスピードも出ず、永原先生は逆向きに走り出し続けた所に爆笑していた。
すぐ近くにはＪＲの現役の線路が見えていて、「新快速」と青い文字で書かれた電車が大きな音を立てて通過する。
線路は行き止まりになっていて、しばらくするとＣ６２がまた大きな汽笛を鳴らして同じ向きに移動する。
永原先生が行き止まりにある信号機を「懐かしい」と言っていた。
そう言えば、２階でも見たっけ？　確か名前は腕木式信号機だっけ？
ともあれ、１０分弱の短い旅も終わり、あたしたちは全ての展示を見終わって出口へと向かう。
ここは旧二条駅舎だという。かなり古いタイプの駅舎だ。
「あら、いつの間にかこんな時間ね」
「わっ、本当だ。夕食を考えねえと」
あたしたちは元来た道を戻り、京都駅付近で食事を探すことにした。

# 修学旅行２日目　京の夜

京都駅付近を歩いて思ったのは、外国人観光客がとても多いこと。
そして、至るところに図表を使ったマナーの張り紙があった。
例えば、舞妓さんに触ってはいけないとか、ポイ捨て歩きタバコ厳禁みたいな、常識とも思えるようなものも貼ってある。
「それにしても、観光客が増えるのは一般的にいいことだけど、やっぱり急激なのはよくないわね」
永原先生は、ふとそんなことを言う。
急激、確かにその通り。
今こそ３０００万人に迫るくらいに急増した訪日外国人だが、小学生の頃には１０００万人もいなかった。
たったの６年で３倍まで膨れ上がったら、色々と問題が起きるに決まっている。
「いかに訪日外国人が増えたからって、全体で言えば日本人の国内旅行者の方が多いわ。そうすると大変な問題になるのよ」
永原先生が深刻そうな顔で言う。
「旅の恥はかき捨て」という言葉が日本にもあるが、諸外国では多分世界的に見てもフリーダムすぎる小谷学園でさえ採用している「他人に迷惑をかけない」という道徳基盤がない。
特に、今回の修学旅行のような集団での行動の場合、群集心理が働きやすい。
「ただでさえ外国人観光客は『他人に迷惑かけない』の精神が根付いていないわ。まして遠い異国のことでしょ？」
しかも、昨今の急増のために、錯覚状態に陥った観光業界が日本人観光客より優先してしまいがちになるという。
「今関西はどこも深刻なホテル不足よ。私たちはいつも修学旅行は同じホテルだからよかったけど、出張中のサラリーマンは大変よ」
「そうでしょうねー」
あたしも相槌を打つ。
「外国人観光客の急増は一種の麻薬にも似ているわよ。確かに一時的

には莫大な利益をもたらすかもしれないけど、マナーが悪いと日本人観光客がみんな逃げてしまうわ。そして、マナーの悪い外国人観光客ばかりになると、ますます観光地の評判が下がってしまうわ。やがて外国人観光客にも飽きられ始めれば、後には廃墟しか残らないのよ」
「つまり、このマナー周知のための張り紙も？」
「ええそうよ。せっかくのビジネスチャンスが損にないために、『郷に入れば郷に従え』という言葉を周知するためのものよ」
永原先生がポスターを見て言う。
いずれにしても、外国人観光客のマナー向上は喫緊の課題だという。
「昔は関西人はマナーが悪いって、関東の人はよく笑ってたのよ。でも、最近は関西人そのもののマナーが関東以上に良くなったことに加えて、外国人、特に中国人のマナーの悪さがあまりにもすさまじくて、そんなことも言われなくなってしまったわ」
永原先生によると、中華街に住んでいる古くからの在日中国人たちはそうした同胞のマナーの悪さに辟易しているという。
これは、中国政府も同じで、最近では目に余る傍若無人ぶりには、名前などを公表した上で出国禁止になっているという。
「そこまでするって、凄いですねえ」
龍香ちゃんも驚いている。

あたしたちは、食事に良さそうな一つの店を見つけた。
美味しそうだったけど、中から非常識な大声での話し声が聞こえてきてやめた。
あたしや永原先生を見たら、きっと大盛り上がりする上にナンパしてくると思ったから。

「なあ、あの４人組かわええな」
「いや、１人はいまいちやろ。黒髪の２人が別格やな」
「うむ、つーかうち、あの２人どっかで見たことある気がするんや」
「え!?　どこでや？」

「うーん、思い出せへん」

関西人の女性2人組があたしたちの噂をする。

実はさっきも、何て言ってるかまでは分からないけど、2人組の白人男性が露骨にあたしたちを見て何か言っていた。

「なんかあたいがのけ者にされてる気がするぜ……」

恵美ちゃんがしょんぼりした風に言う。

確かに、あたし、永原先生、龍香ちゃんといった美人に囲まれたらどうしても恵美ちゃんは色あせてしまう。

さて、そんな中で、あたしたちはちょっと高級な雰囲気の料理店を見つけた。

中は落ち着いた雰囲気で、騒ぎ声も聞こえてこない。値段は少し高いけど、朝までの食事をコンビニで予算節約したので大丈夫。

「いらっしゃいませー、何名様ですか？」

店に入ると、レジにいた和服のウェイトレスさん（ここでは女給さんが正しいのかな？　まあいいわ）が出迎えてくれる。

「4人です」

「かしこまりましたー、こちらへどうぞ」

永原先生が代表して4人と告げるとウェイトレスさんに案内される。

そこは畳のある個室、机の下で足を延ばせるゆったり仕様だ。

「ご注文お決まりでしたらこちらの呼び鈴でお呼びください」

そう言うと、ウェイトレスさんが持ち場に戻る。

あたしたちは、メニュー表からメニューを選ぶ。表にあったメニューは一部みたい。

うーん、どれにしようかな？

「優子さん、これなんてどうですか？」

「お、いいわね」

様々なお寿司のセット。回転寿司よりは高いけど、本格的な寿司屋よりは安い。そんな印象を受ける。

「これよく見ると、4人前あるじゃんか。もうこのセットでよくね？」

恵美ちゃんが指差したのは、お寿司の盛り合わせ４人前セット。
ちょうど４で割れば割り勘で簡単なのが長所だ。
「うん、あたしもこれでいいと思うわ」
みんな好き嫌いはあるかもしれないけど、写真を見た感じでは、寿司の数はどれも４で割り切れる。
「先生はどう思いますか？」
「え!?」
永原先生は少しぼーっとしていたのか、龍香ちゃんの問いに間の抜けた返事を返してしまう。
珍しい光景だと思う。
「永原先生、これですよこれ。４人前のお寿司セットよ」
あたしが指さして、永原先生に示す。
「あら、いいわね」
「おしっ、じゃあ決まりだな！」
ピンポーン！　ピンポーン！
「はーいただいまー！」
恵美ちゃんが呼び鈴を押すと、別のウェイトレスさんの声が遠くからかすかに聞こえて来た。
そして静かに速く、忍者のようにテーブルへと近づき、注文を聞く。
恵美ちゃんが代表して、寿司セット４人前を頼むと、紙を取り出して筒の中に入れてきた。
メニュー表は、１セットは残り、もう１セットはテーブルに置いたままになった。

「静かね」
うん、永原先生の言う通り。
このレストランは和風を大事にしていて、とても静かに楽しめる。
かといって無音というわけではなく、小さな音での和楽器の演奏や、あえての薄暗い雰囲気に加えてししおどしと日本庭園の模型などもあって、雰囲気からして静寂性をアピールしている。
「でもよ、この店にも静かにするようにって張り紙があるぜ」

「あ、本当ですね！」
よく見ると、日本語の張り紙と、数か国語と絵が描かれた張り紙が2枚貼ってあって、前者と後者で明らかに後者のほうが新しい。
おそらく、日本人観光客ばかりだった時代からも、うるさく騒ぐ客がいたことがうかがえる。
「まあ、人間集団になればうるさくしたがるものだもん。それはみんな同じだけど、こうして多言語で書かなきゃいけないのは大変よね」
「だよなあ、これからＡＩで翻訳機の性能が上がってくれると助かるんだけどよ」
「でも、言語によってまちまちみたいですよ。ヨーロッパの言語同士なら比較的うまくいくんですけど、日本語と英語は機械には難しいみたいですよ」
龍香ちゃんの話、それは確かに当たっている。
あたしはと言うと、例によって日本語しか分からない。英語は高校生程度には読めるけど。
さて、張り紙を見たあたしたちも、雑談はするけど外に聞こえないように配慮する。
「そうそう、鉄道博物館は他にもあるわよ」
「そう言えば、関東にもありましたね」
そう言えば、あたしたちの普段住んでいる地域にもそんな広告があったっけ？
「ええ、国鉄から別れた会社のうち、本州を司っている3社はそれぞれ鉄道博物館を持っているわよ。今日来たのもそのうちの西日本担当の会社の鉄道博物館よ」
永原先生が説明してくれる。ちなみに、この3つの博物館には、どれも初代新幹線として、０系の展示は共通しているという。
最初の新幹線で、尚且つ栄光の名車であり、そして大量生産されたとあって、Ｄ５１と並んで、大量の保存車両があるという。
「でも、博物館の展示は、私の思い出とも違うわ。私の中で、あの車両……０系は１６両の長大編成で走った超特急、『ひかり』だったわ。ビュッフェに備え付けられた速度計が『２１０』を指して、窓から見

える高速道路の車たちが、あっという間にはるか後ろの彼方へと消えていったのを思い出すわ。そして今の車両は、あの時よりも、更に７５キロも速く走っているわ」
永原先生がそんなことを言う。
昔は様々なことが不便だった。永原先生が現代の鉄道に感動するのも、そうした明治や江戸時代以前の昔からの「不便な時代」を知っているからこそだという。
そして今度、中央リニア新幹線ができることになった。
最高時速は５０５キロ、品川と名古屋が４０分、大阪に１時間強で済むという。
名古屋でさえ１時間半、大阪では２時間以上かかる現在からすると、夢のような速度である。
２８５キロが５０５キロ、２倍に迫る超高速列車だ。
「名古屋にある鉄道博物館は、そのリニアのことが詳しくやっているわよ」
「ふむふむ、機会があったら行きたいですね」
永原先生の言葉に、龍香ちゃんも興味津々になる。

「お待たせしましたー、お寿司セット４人前でございます」
「お、来たぜ」
「うわあ、豪華ですねえ、これならあの値段、むしろお得ですよ」
「うんうん」
見ると、マグロや大トロ、しめさば、アナゴといった定番から、納豆巻きやかっぱ巻き、卵焼きのようなライトなものまで、一通りがそろっていて、しかもどれも美味しそうだわ。
あたしたちは、いただきますをする前に箸をうまく使って、お寿司を４等分する。
でも何か、恵美ちゃんには足りなさそうで、あたしにはちょっと多いかも。
そんなことを考えつつ、あたしたちは均等に４等分し終わる。
「よし、それじゃあ……」

「「いただきます」」
恵美ちゃんも含めて全員でお行儀よくいただきますをする。
恵美ちゃんが早速醤油を取り出すと、みんなに配っていく。
あたしはまず、手始めにアナゴから食べてみる。
「もぐもぐ……うん、おいしいわね」
「ええ、さすがにこの値段とあって回転寿司とは格が違いますよ」
「ええこれはうまいわ。高級な『回らないお寿司』と、安い『回転寿司』との間をうまくバランスとっているわ」
龍香ちゃんと永原先生も最初に一口食べて大絶賛する。
「うーん、なんか美味しいんだけど、なんか物足りねえんだよなあ……」
一方で恵美ちゃんは、どこかに違和感がある言い方をする。
さっきのうどんも薄味を気にしていたし、恵美ちゃんあたしや浩介くん以上に濃い味が好きなのかな？
「田村さん、醤油かけすぎよ」
永原先生も気になるみたい。
「あー、どうも味が薄いのはなあ……」
「これが京風よ。吉良殿が昔おっしゃっていたわ。味が濃くてしつこいのが好きなのは田舎ものなんだって」
あー、何かそんな話聞いたことあるわね。
「いや、あたいらだって関東人だぞ。一応……と言うより京都より都会だと思うんだが」
恵美ちゃんが当然の反論をする。
確かに京都は昔の首都とは言え、今は関東の方が都会だものね。
「――京都の人は未だにここが首都って思っているからね。一応根拠はあるわよ」
「へー、根拠って何なの？」
あたしが質問する。
「皇室が未だに東京遷都（とうきょうせんと）の詔（みことのり）を出していないからよ。それが出ない以上は、平安京が首都だってね」
永原先生の話によれば、あくまでも皇居のある場所が首都で、東京

に都を移すという勅命はいまだにない。
だからこそ、桓武天皇の平安京への遷都の勅命が未だに有効だというのが彼らの言い分だという。
「うーん、でもなんか納得いかないわね」
あたしは寿司を食べて疑問を言う。
「石山さん、法律や勅命は既成事実では塗り替えられないのよ」
永原先生がやや強い口調で言う。それを認めれば「やったもん勝ち」の世の中になってしまい、秩序は乱れ放題になるからだという。
「お、この大トロうめえな！」
恵美ちゃんが感動のあまりやや大きな声で言う。
「しー、恵美ちゃん、声が大きいわよ」
「おっと済まねえ、でもよ、優子も食べてみなよ」
「う、うん……」
恵美ちゃんに言われるがままに大トロを一口。
「うん、確かにおいしいわねこれ」
「ほう、どれどれ……おー、素晴らしいですよこれ」
龍香ちゃんも、感嘆の声をあげておいしさを表現する。
永原先生はというと、既に大トロを食べてしまっていた。
そんな中でも、お寿司は次々に無くなっていく。
うーん、あたしこれを全部はちょっと苦しいかな。一応全部のネタはもう食べたけど。
「お、優子、あたいがもらってもいいか？」
「う、うん……お願いするわ」
恵美ちゃんが察してくれた。
こうして、４人で食べ終わって会計を済ませた頃には、夏の京都も完全に日が落ちていた。
「あー、終わったぜ！」
地下鉄経由であたしたちはホテルへと戻る。
さて、あたしたちは、少し休んで、昨日と同様に大浴場に入ることになった。

昨日は混んでいたのもあって3人ともバラバラだったけど、今日は一斉に入ろうという事になった。
あたしたちは、大浴場の脱衣所に入る。
うまく服を脱いでからバスタオルを巻いて……よし、うまく行ったわ！
「それじゃあ行きますか」
タオルを巻いた龍香ちゃんと、何も巻いていない全裸の恵美ちゃん、これも林間学校と同じ。
かけ湯をかける。
そしてあたしたちは今日の疲れを癒しに体を洗い、髪の毛を洗って湯船へつかる。
昨日よりは空いていて、お金に余裕がある人は別の温泉で代用する人もいるという。
「ふう……」
バスタオルを脱いで、温泉に体を沈めていく。安らかなひと時だった。
「あれ？　あなたもしかして石山さん？」
「え!?　はい、石山優子ですけど」
知らない女子が話しかけてくる。多分他クラスの人だと思う。
「うわー、近くで見ると本当に胸大きいですねー！」
「あ、あはは……」
いきなり直球的なセクハラ発言に、あたしも笑ってごまかすしかない。
なんか初めて会う人や通行人の多くが胸の話題をしている気がするわ。まあ、仕方ないんだろうけど。
「ほほう、優子さんの胸が羨ましいですか！」
もー、龍香ちゃんまでえ！
「当たり前よ。わ、私……全然胸が成長しないし」
確かに、彼女の胸は小ぶりだけど、でも膨らんでいないわけじゃない。
「大丈夫だぜ！　胸大きくても不便なだけだぜ！」

恵美ちゃんもすかさずフォローする。
「でも、石山さん程じゃなくても、せめてもう2カップは大きくなりたいです！」
と言っても、この人が何カップあるかは分からないけど。
「うーん、あたしは女の子になったその日からこの大きさだし、アドバイスはできないわよ」
「うーん、やっぱりそうですか……」
その女子は、ガックリとうなだれる。
よし、ここは――
「ふー、恵美ちゃん、肩揉んで？」
「あいよ」
あたしの声に、恵美ちゃんが後ろに回り込んで肩を揉んでくれる。
「あー、気持ちいいわー！」
もちろん、基本的に胸が大きいのはいいことだけど、小さいからって過度なコンプレックスにはなってほしくない。そういう時には胸が大きい時の不便さをダイレクトに示すのが一番いい。
「石山さんって、肩こるんですか？」
「あー、そこいいのー！　う、うん……女の子になってこの胸を……あー、気持ちいい！　手に入れてからほぼずっとこりっぱなしよ」
マッサージの快感に耐えながら、あたしが言葉を絞り出す。
そう、この肩こりは、巨乳の女の子の大敵なのだ。
「やっぱり、そこですか……」
女の子の間でも、「胸が大きい女の子は肩がこりやすい」というのはかなり知名度の高いこと。
そして、あたしの胸も、そんな感じ。
蕩けるような温泉と肩もみのコンボは、あたしにとっても大きな癒やし。
その子は、そんな様子を見て、少しだけ巨乳への未練を断ち切れたようにも思えた。
「さて、そろそろ寝るか。明日は仕事なんだって？　大変だな」

部屋に戻り、就寝前になって恵美ちゃんが言う。
「ああうん、まあ、こっちの方でまたＴＳ病が出ちゃったって言うからね」
ともあれ、「鉄は熱いうちに打て」だし、早めに覚悟を迫っておくのも悪くないだろう。
まだ寝るのには少し早いけど、遊び疲れたし早めに寝るのも悪くないだろう。

# 修学旅行3日目　明朝の女湯

「んっ……」
ゆっくりと意識を回復する。
時間を見る、午前4時。あちゃー、これはまた早起きのしすぎのパターンだわ。
修学旅行に限らず、学校行事での旅行では本当によくあるわね。
よく見てると、龍香ちゃんと恵美ちゃんは寝ている。
とりあえず、お風呂でも入ろうかな？
このホテルのお風呂場は、午前3時から4時までが掃除の時間となっている。
そろそろ一番風呂の時間ね。
「あれ？　優子？」
「恵美ちゃんおはよう。お風呂行くわね」
「お、4時か。いいな。行ってみるか」
恵美ちゃんがあたしに付いていくみたいね。
そして、恵美ちゃんがお風呂の準備をしている間に、龍香ちゃんが起きて合流する。
あたしも、この日の着替えとタオルを持ってお風呂へと行く。
3人でお風呂場に行く。

「あら、石山さん、田村さん、河瀬さん」
「永原先生、おはようございます」
お風呂場へ行く道中、永原先生と桂子ちゃんがいた。
「あれ、桂子まで」
「えへへ、やっぱり一番風呂はいいかなって」
桂子ちゃんも笑顔で言う。
何だか林間学校の頃を思い出すわね。
あの時は確かあたしと桂子ちゃんと虎姫ちゃんと永原先生に……
そんなことを考えていたら、もう大浴場の真ん前。
「あっ！」

中を見ると、スリッパがあり先客がいることを示している。
脱衣場に入ると、ちょうど虎姫ちゃんがパジャマのズボンを脱いでいた。
「お、みんな揃ってるな」
「虎姫ちゃん、一番乗りね」
あたしたちが、脱衣場の籠を目指し、脱ぎ始めた時には、虎姫ちゃんは既に素っ裸になっていた。
虎姫ちゃんはあたしたちに配慮して、待っててくれるんだけど、どうしても脱ぎながら視線を集めるのが恥ずかしいのか、虎姫ちゃんに珍しくタオルを巻き始めた。
「お、何だ、虎姫も女子力上がったのか？」
相変わらず堂々と裸で話す恵美ちゃんが言う。
「こら田村さん、安曇川さんだって女の子なんだよ」
永原先生が恵美ちゃんを注意する。
「でも、そういう先生も、タオル巻いてないわよ」
「うぐっ……」
桂子ちゃんの鋭い突っ込みに永原先生がしどろもどろになる。
そう言えば、永原先生は、タオル巻かないんだよね。ちょっと意外だわ。
「そう言えば、先生は女子力高いのにタオル巻きませんよね。どうしてですか？」
龍香ちゃんが疑問に思って言う。
「あ、あはは……私たちの時代はそういうの無かったですし、混浴も一般的でしたから、今更女性だけの風呂でタオル巻くと言われてもね」
永原先生が苦笑いしながら言う。
そう言えば、昔の入浴事情も知っているんだったわね。
「あ、そう言えば、江戸時代以前は混浴だったんだっけ？」
「ええ。江戸時代、私も江戸の銭湯や江戸城の風呂によく入りましたので、幕府も一応混浴禁止を掲げようとしたんですが、スペースが２倍になってしまうことからも、現実問題難しかったです」
永原先生、やっぱり江戸城に軟禁という訳ではなかったみたいね。

そうよね、２００年も軟禁されたら発狂しちゃうだろうし。
「え!? 幕府側も禁止しようとしたんですか!?」
龍香ちゃんがかなり驚いたように言う。
当たり前の環境だったから、禁止するなんて発想自体なかったんじゃないかと想っていたから。
「そりゃあそうよ、混浴ともなればいかがわしいことをする男の人は多かったわ。私も何度も湯船で触られたりしたわよ」
「え、江戸時代から痴漢っていたのね……」
あたしは、嫌でもあの事件を思い出してしまう。
「ええ。特に混んだ銭湯で、しかも男余りだった江戸では痴漢だらけだったわよ。当時は電気もなかったですから、それはもう痴漢天国だったわよ。江戸で遊び疲れて、江戸城に戻る前に銭湯に入っていた時は、私は特に狙われやすかったわ」
確かに、永原先生みたいな美人なら当然よね。
あたしだって混浴になったら男性の視線を一気に浴びそうだし、って、それ以前に浩介くんが絶対許してくれないと思う。
ちなみに、当時はこの手の覗き穴があることを知っていて、ある程度触られたりするのは普通のことということで、さほど恥ずかしさはなかったとか。
「じゃあ、手を出され放題だったってことですか!?」
「ええ、当時はそういうのを知っていて銭湯に入ったものよ。むしろ痴漢されるのはいい女の証拠として勲章にしている人も居たわよ。私もどっちかというとそんな感じでわざわざ江戸城に居ながら銭湯に行ったのよ……でもさすがに今は入りたくないわね」
やはり永原先生も時代が変わって価値観が変わっていた。
「それにしても、痴漢にとっては最高の環境よねえ……」
「ええ。今からするとあの時代の銭湯は痴漢天国よ。更に言うと男に手を出す男も日常的にいたわ」
「「えええええ!!!!」」
あたしたちは、全員ではもってしまう。
そ、そりゃあそういう人もいるけど、日常的って……

「江戸の町は7割近くが男性よ。女が極端に少ない環境に長時間いると、男に手を出し始める男はたくさんいるのよ。特に当時は武家社会ですから、衆道というものもありましたし」
永原先生が当時の世俗を解説しているうちに、あたしたちは、全員かけ湯をかけ終わり、随時体を洗いはじめる。
あたしも髪を洗い終わったらお団子に結んでっと……よし！
「ふー」
あたしが、一番最後に湯船に入る。
ひときわ大きな胸がぷかぷかと浮かんでいて妙にエロい。浩介くんも、これに興奮してたみたいだし。
あたしと同じようにはっきり浮いているのは桂子ちゃんと永原先生、龍香ちゃんもよく見ると浮いているのがわかる。
恵美ちゃん虎姫ちゃんはそんな気配がない。
「うー、格差社会ですよ！　胸囲の格差社会です」
そんな中で、不満を最初に述べたのは龍香ちゃんだった。
「おいおい、それはあたいと虎姫への当てつけか!?」
「いえいえ、だって、優子さんのを見てくださいよ。先生と桂子さんはともかく、私と恵美さん虎姫さんの差なんてあってないようなものですよ！」
龍香ちゃんが悔しそうに声を上げる。
「むー、やっぱ優子って得だよなあ色々」
「えへへ……」
虎姫ちゃんの言葉に照れ笑いを浮かべつつも、お湯の下から胸を持ち上げてさり気なく「どやっ」とアピールしてみる。
「うー、私も優子ちゃんとは言わないけど、もう一歩大きい方がいいかなあ……」
桂子ちゃんがそんなことを言う。
そんな桂子ちゃんだって大きさは平均以上で巨乳と言っていい。
「むむむ、桂子までぜいたくな悩みだよね」
虎姫ちゃんがため息交じりに言う。
「確かに桂子さん、優子さんがすさまじくて影が薄いですけど、平均と

比べると結構大きいですよね」
「うん、あたしが言うのもなんだけど、桂子ちゃんは胸大きいと思う」
「むー、桂子に優子！　あんたたち何カップなのよ!?」
「え!?　いやその……」
「あの、あたしはその……」
　確かにあたしの胸は超がつくくらいでかいけど、バストサイズやカップ言ったら間違いなくすさまじいリアクションが返ってくるはず。
「なあ桂子、せめて目標のバストサイズ言ってみなよ！」
「ふえ!?　えっとその……」
　桂子ちゃんがしどろもどろになる。
「こらー、田村さん、安曇川さん、それ以上はセクハラよ！」
　いたたまれなくなった永原先生が注意する。
「あうー、ごめんなさい……」
　虎姫ちゃんがしょんぼりする。
　でも、あたしとしても何となく聞きたかったわね。
「そ、その……９０センチ、Ｆカップが目標……」
　桂子ちゃんが小声で言う。だけど、風呂場のみんなには聞こえてしまう。
　ちなみに、あたしのサイズは桂子ちゃんの目標サイズと比べても、更に数段大きい。
「な、なんて贅沢な悩み何ですか！」
　龍香ちゃんが驚いたように言う。
　確かに、８０センチ後半だとしても、女子高生からすればかなり大きい部類になる。
「だって龍香、私に天文部の男子もあまり声をかけてくれないし、それに優子ちゃんと比べて色気が足りないと思って」
　桂子ちゃんがあたしと比べて足りないといった「色気」、つまりエロさ。かわいさもだけど、エロさも欲しいと桂子ちゃんが言う。桂子ちゃんは、そこがミスコンの敗因だと思っている。
　確かに、ただかわいくて美人なだけではなく、胸やお尻も大きい所

は、浩介くんをはじめとした男子が興奮する部位でもある。
「な、何なのこの高次元な戦いは……」
虎姫ちゃんが驚いたように言う。
「でも、エロいのは女性のちゃんとした魅力よ。アピールになるわ」
あたしが慌ててフォローする。
「うっ……優子ちゃんが言うと、これ以上ないほどに説得力が高いよね」
多分虎姫ちゃんはあたしの体のことのみならず、元男という点も含めて言っているんだと思う。
「そうそう、龍香の彼氏もすっごいエロいからね」
「あはは、でも、エロい彼氏さんほど、嫉妬深くもあるんですよ。でも、優子さんに教えてもらった独占欲の満たし方、あれを実践して以来、喧嘩さえほとんどなくなっちゃいましたよ！」
龍香ちゃんが言う。デートの服装や、中と外での使い分け、かわいく嫉妬する方法などを、あたしは龍香ちゃんに伝授してある。
この方法、あたし自身も浩介くんに対して行っていて、浩介くんは独占欲を満たした後は決まって上機嫌になってくれる。
「そう言えば、篠原も嫉妬深いんじゃない？　ああ見えて」
桂子ちゃんが興味本位という感じで言う。
「え!?　うーん、あたしの感じでは、龍香ちゃんの彼氏さんほどじゃないかなー」
「ほほう、でも嫉妬するんですね！」
龍香ちゃんがぐいぐい押すような感じで言う。
「う、うん……」
「優子さんがどうやって篠原さんの嫉妬を沈めているか気になります！」
「え!?　その……」
「私も気になるなあ！」
桂子ちゃんまで！
「ふふっ、私も。体育の水泳の後、篠原君いつも不機嫌そうなのに、次の休み時間はとっても上機嫌になるっていうから、何をしてるのか気

になるわ」
「な、永原先生まで！」
「へへん、逃げられませんよ優子さん」
永原先生と龍香ちゃんが追い詰める。
特に頼みの綱だった永原先生まで興味津々になっているのは、敗色濃厚ということ。
「あうう……恥ずかしいよお……」
「おら、言っちゃいなよ。どうせここはあたいたちしかいねえんだし」
「あうう……そ、その……ふ、２人っきりになって……」
「「うん、なって？」」
まるで学級裁判の被告人みたいだわ。
「そ、その……ス、スカートをその……」
「ほうほう、スカートを！」
「スカートをめくらせてあげるんです！　パンツ見放題触り放題で！」
顔から火が噴き出て、体が内側から熱くなる。女子同士の濃いガールズトークに、あたしも何とかついていく。
「ほうほうなるほど、それを彼氏の特権と認識させることで独占欲を満たすわけですね」
龍香ちゃんだって、きっと同じことしてるはずなのに。
「はい」
「で、効果のほどはどんな感じなの？」
桂子ちゃんが今度は突っ込んでくる。
「その、トイレに駆け込んですっきりして、上機嫌になります……」
あうう……浩介くんごめんなさい……
「毎回毎回そうなの？」
「うん、浩介くん、決まって上機嫌になってくれるわ」
「おいおい、男ってそんな単純な生き物なのかよ！」
恵美ちゃんが驚いたように言う。
うん、確かに男って本当に馬鹿で単純だけど、そこがとってもかっこよくて、あたしは大好き。

「私の彼もほとんど同じですよ。一か所以外は」
うん？　一か所だけ違うのね。
「え!?　その一か所って何よ？」
あたしが聞いてみる。
「い、言わせないで下さい！」
龍香ちゃんがが強く拒絶したように言う。
「あら？　さっきは石山さんに迫ったのに、あなたは秘密にし続けるの？」
永原先生が追い打ちをかけるように言う。
「あうう……そ、その……彼がその……わ、私を脱がして私の――」
龍香ちゃんは、かなり混乱している。
「も、もういいわ龍香！　みなまで言わなくていいわよ！」
桂子ちゃんが慌てて龍香ちゃんを引き留める。
うん、さすがにあたしも、これは察しないといけない。
「龍香の彼氏、本当に自重しねえんだな」
「はい、ですがとっても上手で、私虜になっちゃいましたよ！」
あたしのアドバイスが効いている。
男の子のプライドを傷つけずに、なおかつ向上させる方法。
それは「とっても気持ち良かったけど、ここをこうすれば、もっと気持ちよくなると思う。今度試してみよう」というやり方。
もちろん、目論見が外れた時はその旨を言って、また別の方法を提示する。
興味と好奇心を煽りながら、色々な方法を試させる方法で、龍香ちゃんの彼氏さんは、それでスキルを格段に上げたのだ。
元々体の相性も良くて、尚且つスキルアップをしたものだから、龍香ちゃんは、毎回何回も絶頂させられて、気絶させられているという。
「そう言えば、優子は篠原がしたがらねえんだって？」
「う、うん……その、赤ちゃんできたら大変だって」
「正直言いますと、篠原さんの責任感は並大抵のものじゃないですよ。優子さんほどの女の子を彼女にして、しかも優子さんから迫ってもこれなんですから」

うん、龍香ちゃんの言うとおり。
そしてそこが、あたしが浩介くんに惚れた大きな理由の一つでもあるから。
「うんうん、私もそう思うわ」
「私も」
「あたいも」
「うん、私も」
その場にいる全員が、賛意を示す。
あたしの魅力を考えれば当然よね。
普通の男なら、いや、多少性欲が衰えた男だって、あたしに迫られたら即時セックスになると思う。
あたしは男だったのでよくわかるが、この体は本当に男子にとっては目の毒であり、最大級の目の保養にもなる体つき。顔だってすさまじくかわいくて美人だから、そんな女の子がエロに寛容だったら普通なら到底辛抱できない。
浩介くんは、興奮しつつも、それを辛抱してしまうのだから素晴らしいわ。
「じゃあ、少なくとも結婚後だな。そう言えば、優子と篠原って結婚っていつするんだ？」
「えっとその……まだ決めてなくて……でも、両親は早くさせたがってるわ」
「ねえ優子ちゃん、篠原って誕生日いつだっけ？」
桂子ちゃんまでノリノリになっている。
「あ、あの、結婚は少なくとも高校卒業後だから」
「うん、私も急がない方がいいと思う。できれば就職決まってからのほうがいいと思うけど、親御さんがどちらも急かすんじゃ妥協もありよ」
永原先生がアドバイスしてくれる。
うん、結婚したら苗字代わるし、高校卒業前に浩介くんが１８歳になってすぐの結婚は、あたしの扱いで小谷学園の事務方や先生方にも迷惑かかると思うし。

ちなみに、小谷学園のことなので、結婚は別に禁止されていない。
「それにしても優子ちゃん」
「うん？」
桂子ちゃんがあたしに話しかけてくる。
「優子ちゃん、すっかり女の子になったよね。今日みたいなガールズトークについて行ってるもの」
「あ、うん。ありがとう」
確かに、少し前までなら、こんなに深く突っ込んだガールズトークにはついていけなかった。
「ふふっ、石山さんは、まだまだ女の子として成長し続けているのよ」
永原先生がニッコリ笑って言う。
「でも何だか、寂しい気もします」
龍香ちゃんが感慨深そうに言う。
「うんうん、段々と女子力低い部分も埋まってって、教えがいも少なくなってきたわ」
「もう、桂子ちゃんまで」
「ふふっ、それだけ優子ちゃんが成長しているのよ」
でも、あたしの中では、まだ足りないと思う。
女の子になりきるために、まだ幾つかやり残したことがあると思う。
それが何かまでは、あたしの中では見当はついてないけど。いや、もしかしたら、直視できていないだけかもしれない。
「うーん、さて、あたしは出るわね。少し休むわ」
あたしは、ゆったりした気持ちでお風呂から上がると、ゆったり床に座り込む。
「あー、やっぱり優子ちゃんまだまだだわ」
すると、途端に桂子ちゃんがいつもの口調で言う。
「え!?」
「石山さん、あそこに椅子があるからそっちで休みなさい。この体制だと私たちの角度から丸見えよ」
「え……」

永原先生の言葉に、あたしは顔を下ろす。
体育座りの形になっていて、確かに丸見え――
「きゃっ！」
あたしは慌てて大事な部分を隠し、顔を真っ赤にしながら大慌てで椅子へと向かう。
「ふー、まあ確かに、私たちでも気を抜いたらついついやっちゃうのよね」
「でも、優子さんが油断した時の無防備になりっぷりは、まだやっぱり性根から女の子に染まり切ってはいない証拠ですよね」
「石山さん、男子がいる中ならああいう事はなくなるけど、女子だけの空間だと安心しきっちゃうわね……私個人としては女の子同士の空間なら別にいいとは思うんだけどね」
「でもよ、あそこまで気にする必要あっか？」
「恵美、アリの穴から堤も崩れるんだよ」

お風呂場の向こうで、あたしのまだまだな部分について話し合いが聞こえる。
あたしも、油断しちゃうときはあるけど、特に女子だけの空間だと、極端に安心しきっちゃって、ああなるのはさすがにまずいと思う。
幸い、女湯や女子トイレ、女子更衣室など、限られた空間でしか女子だけの空間というのはないため、ああいうことが癖になることはない。
あたしは改めて、ＴＳ病患者が女子校に入ってはいけない理由を痛感した。

# 修学旅行3日目　いざ大阪

「さて、私たちも出るわね」
永原先生の言葉と共にみんなで一斉に体を拭き、脱衣場へと戻ってきた。
あたしは着替えを用意していたので、私服に着替える。
今日は浩介くんと花嫁修業の時にも着ていた白と黒の制服風の服をチョイスした。
頭の白いリボンや黒い髪、見ていいのは浩介くんだけだけど、白いパンツと白いブラとも合わせて、白黒のデザインになっている。
「おお、石山さんその服かわいいわね」
永原先生が褒めてくれる。
一方で、永原先生は、制服風のあたしのミニスカートよりも短い黒のワンピースで、永原先生の黒い髪、更に黒のハイソックスと合わせて、絶対領域がより眩しく見える。
スカートには赤色の蛇のようなよくわからない模様も書かれていて、胸下のリボンも赤色だけど、それらの小さな「赤」がより「黒」を引き立てている。
でも何だろう、この服、髪がショートの方が似合う気がするわ。
「永原先生も、今日は結構大胆ですね」
「あはは、修学旅行はいつもこんな感じで気合を入れてるのよ」
永原先生がそんなことを言う。その時の顔は、どこか文化祭で制服を着たがっていた時に似ている。
昨日今日と黒で決めているし、レディースーツも黒かったし、永原先生は今回そう言う気分なのかな？
「やっぱそうだよな、修学旅行の時くれえはな」
恵美ちゃんの言葉にみんなが振り返る。
恵美ちゃんに珍しく、かわいらしくフリルのあしらわれたワンピースのミニスカートを着用している。
普段が普段なだけに、ものすごくかわいい印象を与える。まあ、他の子を見ちゃうとその評価も終わりだけど。

「お、恵美珍しい」
虎姫ちゃんが驚く。虎姫ちゃんはショートパンツで、足の露出度だけならこの中では一番高い。
まさに夏で動きやすい格好という感じだわ。
「うん、やっぱり服装から変えねえと思って、今日はこれで過ごそうと思って……うー、落ち着かねえなあ……」
でも恵美ちゃんも慣れないのか、やっぱりそわそわしている。
「みんなオシャレですよね」
やはり白いワンピースでオシャレした龍香ちゃんが言う。
膝下丈の純白のワンピースは、上品で落ち着いた印象を与える。
「あれ、龍香、それデート服？」
「はい、この後彼と二人っきりになったら超露出度の高い服にチェンジしてます！」
桂子ちゃんの質問に、龍香ちゃんが笑顔でそんなことを言う。
そう、これは男の嫉妬心と付き合うために、あたしがアドバイスしたこと。
「もう、私の彼ったら家の中で露出度の高い服に着替えると興奮して興奮してとっても激しいんですよー」
龍香ちゃんの彼氏さんも、やっぱり浩介くんと同じ。
独占欲が満たされると、とっても満足してくれる。
「もしかして、篠原もそんな感じなの？」
桂子ちゃんが、あたしに聞いてくる。
「うん、浩介くんも二人っきりになった時にエロい格好すると必ず興奮するわよ」
「やっぱりですかあ！　優子さんのアドバイスは的中ですよ本当に。私の彼も、分かっててもも興奮しちゃって性欲押さえられないって言ってました！」
龍香ちゃんがニッコリ笑いながら言う。
「なあ、男ってなんであんなにバカなんだ？」
「ふふっ、男の子は性欲がすごいからね」
恵美ちゃんの疑問に、永原先生がニッコリ笑って言う。

そう、独占欲が満たされると、性欲まで増幅されて、男はとっても単純な生き物になる。転がされているとは、男は気付かないものだし、気付いたとしてもそれを受け入れてしまう生き物だ。
「やっぱり、ファッションもおしゃれも、そんな馬鹿に合わせたほうがいいのかなあ……」
桂子ちゃんがそんなことをつぶやく。
桂子ちゃんの服はそう、確かミスコンの私服審査で見せた青い服。
あたし達と比べても、そのおしゃれ度では負けていない。
少女性は強いけど、男受けだって決して悪くない。
「桂子ちゃん男受けはいいわよ」
「うん、一応それを目指してたからね」
そう、そう言う意味で、桂子ちゃんは他の女の子の一歩先を行っていると思う。
女の子だから男に好かれたい。同性受けは狙わない。あたしも、どちらかと言えばそれに近い思想の持ち主だけど、ＴＳ病患者ということで、同性から嫌われては居ない。
「じゃあ、堂々とすればいいのよ。さ、そろそろ部屋に戻ろうか」
「うん」
あたしの発案で、あたしたちはそれぞれの部屋に向かっていく。
永原先生から、午前中に行くことになっているので、朝食は早めに取ることを言われた。
今日は午後浩介くんと合流して、いっしょに観光する予定になっていて、忙しい一日になりそうだわ。

「それじゃあ恵美ちゃん、龍香ちゃん、行ってくるわね」
「おう、気を付けろよ」
「行ってらっしゃいませ優子さん」
荷物をまとめたあたしは2人に見送られ、あたしは部屋を出る。
恵美ちゃんと龍香ちゃんも、今日はそれぞれ別のグループで活動することになっている。
永原先生とは、ホテルのフロントで待ち合わせの予定――

「あ、石山さん、おはよう」
「永原先生、おはようございます」
――だったんだけど、エレベータ前で落ち合ってしまった。
「さて、場所はもう把握してあるから心配しないでね」
「うん、分かってるわよ」
あたしと永原先生は、ホテルのフロントに部屋の鍵を預け、地下鉄で京都駅に行く。

「新快速に乗るわ。在来線はこっちよ」
京都駅に到着したら、大阪を目指し「新快速」を使用する。
新幹線は新大阪までが同じ会社で、地下鉄は京都市営だから、今日は生まれて初めて西日本の会社を使うことになる。
京都駅の構内はとても広く、迷いがちになる。
特に様々に入り組んでいて、「京都線」のホームを探すのにも苦心する。
それでも何とか到着し、案内に従って「△」の列の先頭に並ぶ。
「間もなく、５番乗り場に９時４５分発、新快速、姫路、行きが、１２両でまいります。危ないですから、黄色い点字ブロックまでお下がりください。５番乗り場に、電車が参ります。ご注意ください」
オルゴールにありそうなメロディーが何度も流れ、やがて新快速が入線してくる。
結構ごつい銀色の電車で、永原先生曰く「この会社の新型車両」だという。
「わっ！」
あたしは、車内を見て驚く。
首都圏によくある向かい合わせの座席ではなく、進行方向に向かって座席が取り付けられていて、むしろレイアウトは新幹線の席に近い。
車内はラッシュ時を過ぎているのに、かなりの人が乗っていて、はっきり言うと混雑が激しい。
ドアの数も心なしか首都圏の通勤電車より少ない気がするわ。

ピンポーンピンポーン！
「京都、京都です。お忘れ物の無いようにお降りください。乗り降りの際には――」
ドアの開く音と共に駅の自動放送が流れ、それを聞きつつ降りる人がいなくなってからあたし達も車内に入る。
京都駅で降りるお客さんが多かったことと、あたしたちが、列の先頭だったことも手伝い、あたしたちは新快速の４列シートのうちの右側の２席を何とか取ることができた。
その後、補助席が使われたり、ドア付近だけではなく、車内中ほどのあたしたちの椅子の近くへも人があふれてくる。
「ふう、よかったわ座れて」
永原先生が笑顔で言う。
やっぱり、なかなか座れないのかな？
「ラッシュ後にしては混んでますね？」
「ええ、新快速はとっても便利だけど、この電車はとにかく混雑するのよ」
「新快速電車発車いたします。ドアにご注意下さい」
女性の車掌さんの声が聞こえ、チャイム音とともにドアが閉まると、電車が動き出した。
やっぱり、こっち向きの座席は快適だった。
正面には液晶モニターが見える。座席のリクライニングに座ると自然に見える位置で、関東の電車よりもいい位置にあると思う。
「この電車は、新快速電車の姫路行きです。電車１２両で運転しております前から――」
車掌さんが号車案内をする。そして、トイレの場所と、８両目と９両目の間が通り抜けできない旨を放送している。
途中、車窓には昨日観光した鉄道博物館のある公園も目に入る。
「――これから先止まります駅は高槻、新大阪、大阪、尼崎、芦屋、三ノ宮、神戸、明石、西明石、加古川、終点姫路の順に止まってまいります。次は高槻、高槻です。高槻を出ますと次は新大阪にとまります」

へえ、結構停車駅少ないわね。よく分からないけど。
案内はかなり丁寧で、途中で最初の駅を通過してしまうくらいだ。
「京都と新大阪の間、停車駅1駅だけなのね」
つまり、新幹線と停車駅が1駅しか違わないということ。
「ふふっ、石山さん、それどころか昔は高槻どころか新大阪まで通過だったのよ」
「ひぇー」
永原先生がさらっとすごいことを言った。新幹線の、それも大阪の中心駅を在来線の快速が通過するってすごい話だと思う。
そんなことを思いながら、電車はどんどん加速する。
って、めちゃくちゃ速くないこの電車？　あたしたちが普段通学に使ってる電車や、近くにある急行や快速とも比べても、音も大きいしスピードも明らかに速い。
そう言えば、この電車姫路まで行くんだっけ？　滋賀県の方から来るわけだから、走行距離長いわよね。
ソミドミソミド～♪
新快速が高音の独特なメロディーを流しながら、駅を通過する。あまりの速度に、「向日町」と書かれた駅名票を見るだけでも一苦労だ。
「今のメロディ、歌詞は『どけどけ轢くぞー』って言うのよ」
「ふえ!?」
永原先生が冗談交じりにそんなことを言うけど、なんかこの電車に凄くマッチしてるのが何とも言えない。
とにかく速い。速すぎる。新快速恐るべし。
「それにしても本当に速いわね……」
「新快速はＪＲにとっては看板列車よ。この電車が私鉄から次々と乗客を奪っていったわ。とにかく便利で早いのが特徴ね。最高時速も１３０キロで、これは一般の在来線としては最速タイよ」
永原先生が説明してくれる。
あたしは、そんな話も尻目に、これから会いに行く新しい仲間のことを考えることにする。
鞄から資料を取り出して読むと、この女の子は、夏休みすぐに女の

子になってしまい、新学期をとても心配に思っているということが書かれてある。
「ともあれ、夏休み中に、女の子としての日常生活を覚えていかないといけないわね」
永原先生がそう言うけど、夏休み始まったばかりで女の子になったのはむしろ「不幸中の幸い」と言っていいと思う。
夏休みは長いし、多分タイミングとしては一番いいタイミングだと思う。
資料を読んでいる間も、先頭のほうからは新快速がメロディーを時折流しつつ、高速で爆走している。
「永原先生、この電車、下手したら特急より速いんじゃないですか？」
やっぱりまた、新快速の話題に戻ってしまう。
「ええ。新快速は下手な在来線特急よりも速いわ。もちろん、並行している競合私鉄は言うに及ばずね」
そんな電車が、15分置きに、長距離を短時間で結んでいるんだという。トイレに快適なシートにと、サービス面でも充実している。
これには、あたし達関東も完敗だ。
それにしても、中々次の駅に着かない。次の停車駅まで、かなり長い。
それだけ長距離をノンストップで走り続けている。
それでも、新快速が速度を落とし始めた。
「ご乗車ありがとうございました間もなく高槻、高槻です。お出口は左側6番のりばに着きます。高槻を出ますと新大阪に止まります。途中この電車の通過駅へお越しのお客様、普通電車の新三田行きはホーム変わりまして4番、5番乗り場の発車です――」
車掌さんのせわしない案内と共に、新快速が高槻駅に停車する。
やはり新快速が止まる駅なのか、車窓で見た範囲では駅の周辺はかなり発展していて、かなりまとまった人が乗り降りしている。
むしろ、かつて通過駅だったのが信じられないくらいの人出だ。
「すごい人ね」
「ええ、京阪神は日本第二の大都会よ。特にこれから行く『大阪』はね」

うん、地理の授業でもやった。
だけど今まで、テレビに出てくる大阪といえば「道頓堀」「通天閣」「たこ焼き」「大阪のおばちゃん」「食い倒れ人形」「グリコ」といった程度のもので、大阪について特に積極的に調べなかったせいで、東京でよく映される超高層ビル街などのイメージが沸かない。
一つ上げられるとすれば、日本一高いと言われている「あべのハルカス」くらいだ。
電車が再び高槻駅を発車する。
「次は新大阪、新大阪です。新幹線、特急はるか、くろしお、大阪市営地下鉄線はお乗り換えです。新大阪の次は続いて大阪にとまります」
新快速がまたスピードを上げる。すると、しばらくして、「各駅停車」と書かれた電車を走行しながら追い抜いた。
関東でも多くは見られない、いわゆる「複々線区間」の走行間追い抜きだ。
「何から何までスケール大きいわね」
「ええ、この辺りは西明石まで複々線なのよ。これは日本一長い複々線区間よ。関東の鉄道にもないわ」
永原先生が言う。確かに、西明石といえば兵庫県でもそれなりの場所になる。
明石は地理の時間でやった「標準時子午線」の通る町だわ。
さて、新しいＴＳ病の女の子の資料もすべて読み終わり、電車は間もなく新大阪駅に到着した。
車掌さんが忙しそうに乗り換え案内していて、その時間も必要なのか、新大阪駅手前の通過駅を通過する前に放送が始まっていた。
さて、新大阪駅を過ぎると続いて大阪駅、こちらはそこまで距離は遠くない。
速度もそれほど速くなく、あたしたちはおびただしい数の乗客とともに、新快速を降りた。
ここからは「大阪環状線」に乗る。
この大阪駅、かなり真新しくて上を見上げると大きな屋根になっていた。

吹き抜け構造は開放感があり、あたしたちは大阪環状線のホームにたどり着く。
大阪環状線はオレンジの電車、昨日博物館で見た電車と、色合いは同じだけど、顔つきはさっきの新快速とほとんど同じだ。
永原先生曰く、「ここはある時から、この顔つきが大好きになった」らしい。

ともあれ、環状線の駅から、更にいくつかの駅を過ぎて、駅から少し離れたところに、その家があった。

ピンポーン、ピンポーン！
「はーい！」
奥から聞こえてきたのは中年女性の声、恐らく今回の患者さんの親御さんだろう。
果たして、玄関から出てきた女性は、母親を名乗った。
「本日はよろしくお願いいたします」
「はい、よろしくお願いします。申し遅れました、私は日本性転換症候群協会会長の永原マキノです。こちらが正会員の石山優子です」
永原先生があたしたちを紹介してくれる。
「よろしくお願いします」
「ええこちらこそ」
「遠いところから、わざわざありがとうございます」
「いえいえ、私達も、それが仕事ですから」
「そ、そうですよね。え、えっと――」
どうもお母さんは落ち着かない様子。やっぱり、子供がＴＳ病の当事者になって心理的にも動揺があるのかな？
「と、ともあれ、上がってください」
「「はい」」
ともあれ、お母さんに落ち着いてもらいながら、中に上がらせてもらう。
今度の患者さん、資料を見た感じだと、あの時の幸子さんほど深刻

な状態じゃないと思うけど、果たしてどうだろう？
本物を直接見ないと、分からないこともたくさんあるもんね。

# 修学旅行3日目　分かっている人の苦悩

「けんー！　協会の人が来たわよー！」
「はーい！」
　母親から「けん」と呼ばれた女の子が返事をすると、静かに足音が聞こえてきた。
　少女の輪郭が、徐々にはっきりして来る。
　少女は飾りっ気のない、でもサイズなどから女物と分かる、かなり地味な服を着ていた。
「息子……ああいえ、今は娘の健太です」
「永原マキノです。日本性転換症候群協会の会長よ」
「同じく正会員の石山優子です」
「よ、よろしくお願いします……」
　あたしたちの丁寧な挨拶とは対象的に、「健太」と呼ばれた可愛らしい少女はぎこちなく挨拶をする。
　どうも、まだ女の子の体に慣れていないという感じで、かなり慎重に歩いている。
　あたしたちは、一旦リビングに通されてそこで話を聞くことになった。
「それで、お父さんお母さん、あるいはご本人は、健太さんの新しい名前を考えてますか？」
　あたしはまず、そこを質問する。
「えっとその……まだです」
「あの、すぐに決めてあげてください。あるいは健太さん、あなたも女の子として過ごすなら、『健太』じゃあいじめられるわよ。両親が決めきれないなら、あなた自身が決めた方がいいわよ」
「う、うん……」
　あたしはあたし自身が、永原先生も本人が決め、幸子さんは母親が決めた。
　誰が決めてもいい。ただ女の子らしい新しい名前が必要だ。それが男女どちらにも使えそうな名前であっても。

「ともあれ、まずは健太さんや親御さんの考えを話してくれますか？」
「……分かりました」
まず、前提の確認をする。
その少女の話によれば、ＴＳ病という病気は知っていて、精神を病んで自殺しないためには女として生きるしかないということも知っていて、それは納得している。
これまでの事例を鑑みて、自分は今後女として生きるしか道がないことも分かっているため、それ以外の道を模索するつもりはないことは大前提。
でも、そのことは知識として知っていただけだったので、自分がまさか当事者になるとは思ってもおらず、どうやってやっていけばいいのか、カリキュラムもどんな覚悟をすればいいのかわからないという。
「なるほど、いわゆる『理屈先行型』ですね」
永原先生がそんなことを話す。
つまり、ＴＳ病で倒れ、その後に告げられた医師や協会の人の話を、理屈では納得できるのだが、具体的な方法論や、気持ちの持ち方が全く分からなくて右往左往する状態を「理屈先行型」という。
「この理屈先行型には、いいニュースと悪いニュースがそれぞれあるわ」
永原先生が興味深いことを言う。
そう、それは――
「いいニュースは、理屈先行型の患者さんは感情に囚われにくく、自殺率が最も低いタイプです。もちろん、０では無いですし、普通の人に比べれば高いですよ。あくまで同じ患者の他のパターンと比べて相対的にですが」
そう、まずこれが不幸中の幸い。
「そ、そうですか」
少女とお母さんに、心なしか少しホッとしている表情が見える。
そう、最初のうちは、この「理屈先行型」の方が都合がいい。
だけど、もう一つ悪いニュースがある。

「悪いニュースとしては、これがいつまでも続くと、女の子になるのが難しくなることです」
「え!?」
永原先生の言葉に、少女が驚いた顔をする。
「やはりどこかで積極性を持ってくれないと、気持ちが弱く、後ろ向きなままでは心から女の子になるのは難しいです。自殺こそしなくても、精神を病みながら女の子になるケースも多いです」
「特にカリキュラムでは、『成績不良者』の行動に陥りやすくもあります」
永原先生の説明に、あたしもすかさず補足する。
つまり理屈先行型の患者さんには、どこかで前向きな気持ちで女の子になろうとする心が必要になってくる。
「えっとその……僕はどうすれば?」
健太さんが不安そうに聞いてくる。
「まず、女の子としての新しい名前を考えて、それから『僕』を使うのをやめなさい。形から入るのよ」
あたしもそう、まず最初にしたことは一人称の矯正。これは優一時代に使っていた「俺」が、あまりにも似合わなかったので苦労はしなかった。
最初に目覚めた時に「俺」を使って、すごく違和感を感じたのを、今でも思い出す。
でも、普段使っていた一人称が「僕」と来たから結構難しいかもしれない。
それでも、矯正しないといけない。言葉遣いにしても、まず一人称を変えさせるのが先決になってくる。
そして次にしたことは名前を変えたことだった。
あたしの場合は、結構すんなり決まったけど、健太さんは難しいかもしれない。
「でも、新しい名前って言われても……健太やから『健子』?」
「うーん……その、石山さんと永原さんはどうだったんですか?」
お母さんが心配そうに聞く。

「永原会長はもう何度も名前変えてますし……あたしは今は優子ですけど男だった時は『優一』と名乗ってました」
「うちの協会は、古い人が多いのを差し引いても、『子』の付く名前の女の子が多いわよ」
「確かに、女性名で、女の子としての自覚を持たせるという意味では、『子』を付けるのはいいと思います」
永原会長の言葉に、あたしが思いついたことを言う。
もちろん必須ではないと思うけど、やっぱり男から女に変わったＴＳ病ということを考えると、その辺りははっきりさせたほうがいいと思う。
特に理屈先行型の患者にはそれは有効だと思う。
「でも、『健子』というのもおかしいし、『太子』も何だかなあって思うんや」
関西弁の少女が悩みを口にする。
「ふふっ、あたしはたまたまだけど、何も男時代の名前を無理に使わなくてもいいのよ。あたしが以前指導していた患者さんにも、『悟』って名前を『幸子』に変えた人がいたわ。彼女は『さ』しか合ってないわよ」
あたしが、幸子さんの名前を出して、安心するように言う。
そう言えば、幸子さんも結局、あの時お母さんがとっさに思い付いた名前をずっと使ってるわよね。
あたしみたいに、自分なりに熟考するのは少数派だし、ましてやその結果が第三者目には最もありきたりな改名というのも難しい。
「うーんでも……あー、アカン！　思いつかへんで！」
健太さんが頭をかきながら言う。
理屈先行型なので、気持ちを奮い立たせることが肝心、そこで――
「でも、思いつかないとダメよ。あなたはこれから、ＴＳ病患者として、役所に『性別変更届』と『名の変更届』を出すのよ。その時に新しい名前を書かないといけないわよ」
「ほら、元の名前なんて気にしないで考えてみてよ」
あたしと永原先生が更に催促する。

「うーん、じゃあ京子とか？」
健太さんが、一つの名前を口にする。
「うん、いいわね京子！」
「いいのかなあ……これから下手したら１００年１０００年単位で使っていくんでしょ？」
京子さんはまだ浮かない表情をしている。
「いいのよ、名前は生活において必要なのだけど、変に凝り固まると余計にまずいわ。むしろ変な名前が横行しているからこそ、『京子』はひときわ凛然と輝いているわ」
最も、小谷学園は変な名前の人少ない。それこそ下手したら永原先生の下の名前、「マキノ」が一番かもしれない。そう言えば、マキノの由来って何だろう？
「そ、そうか……うん、せやな！　今日から僕の名前は京子や！」
「ふふっ、京子さん」
「ん？」
京子さんは、もうその名前で返事をする。
「言葉遣い、気を付けるのよ」
「え!?」
新しい名前も決まったので、早速必要な指導を始める。
「さっきの『今日から』の先、女の子らしい言い方に言い直してみて？」
「え、えっと……今日からう、うちの名前は京子や！」
京子さんが関西風の一人称で言う。
「あら？　まあ、それでもいいかしら？」
うん、あたしも永原先生に賛成。
ここは大阪だし、むしろあたしたちの喋り方がおかしいかも。
「いい？　もし言葉遣いが男のままになってたら『私は女の子……私は女の子……』って暗示をかけるのよ。お母さん、それについてはちゃんと徹底してくださいね」
「――分かりました」
京子さんのお母さんは、多分心配いらない。
理屈先行型の人は、「とりあえず女の子にならなきゃいけない」こと

は分かっているから、幸子さんのお母さんのように変な善意で取り繕うことはない。
ただ、気持ちが入らない人も多いので、矯正などの教育に時間がかかるのも事実。注視しなければならないのには変わりはない。
「さて京子さん」
さて、ここからが問題、カリキュラムの話に入る。
「はい」
「女の子として生きていく上で、あたしたち協会の方でカリキュラムを用意していることは、既に担当カウンセラーから聞いていると思います」
「うん、聞いてる」
「いい？　厳密にはカリキュラムを受けなくて女の子になることも可能よ。だけど、それは長い道のりよ。カリキュラムは女の子としての最低限の日常生活や感性の理解に役立つわ」
カリキュラムの具体的な内容まで知っているかは分からない。
「はい、それで何をするんですか？　私が指導すると言われまして」
京子さんのお母さんが心配そうに言う。
「家事の仕方とか、スカートを穿いて出かけたり、女子の制服や体操着への着替え方、さらに生理用品の使い方も学ぶわよ」
「せ、生理用品?!」
京子さんが驚愕の表情で言う。
「そうよ。いい、京子さん？　あなたも女の子何だから他人事じゃ無いわよ！」
「は、はい……」
あたしがちょっと強めに言うと、京子さんも納得して返事をしてくれる。
生理用品使えないと、女の子として致命的だから、きっちり覚えてほしいわね。
「ところで、京子さんの方から何か質問ある？」
今度はあたしから聞いてみる。
「あの……転校についてなんやけど、その……やっぱり元のクラスの

人には言い辛いっていうか――」
京子さんが「転校」という単語のついて話す。
「協会としては、転校はあまりお勧めしてないわ。男子校で仕方ないならともかく、別の学校に転校して、いきなり他の女子のようにはいかないわよ。ＴＳ病のことをオープンにしたとしても、以前のことを知らない人だと難しいわ。クローズにするにしても、どこかでボロを出しかねないわ」
あたしの場合は、女の子としての人生に適応するのに手いっぱいで、転校について考えにも及ばなかった。
いずれにしても、あたしでさえも復学後は女子力低いとよく説教されたし、以前の姿を含め、事情を知らない人に囲まれることになる転校は悪手だと思う。
「あーうん、何かせっかく女の子になったから、女子校を体験してみたいって思って――」
「京子さん！　女子校だけは絶対に駄目よ！」
あたしが、少し強い口調で言う。
これは協会としての方針だからだ。
「え？　どうして⁉　女子だけの空間って、何か甘くていい雰囲気で、お嬢様がたくさんいるんじゃないの？」
京子さんが中学生らしい妄想を言う。
あたしも、一昨日の新幹線で下品な「女子校生」を見たばかりでタイムリーな話題でもある。
「いい？　女子校に入るのはダメよ。男子の目が無いと、女の子はどんどんがさつに、だらしなくなっていくわ」
「協会としても、転校そのものが非推奨ですし、女子校への転校は絶対に阻止させることになっています」
あたしと永原先生が、連携して女子校への誘惑を破壊していく。
「そ、そうなのか？」
「ええ、お母さんも女子校だったから、よく分かるわ」
「いい京子さん？　女子校に行くと、汚い言葉遣いを覚えて、恥じらいもなく下ネタを連発して、人前で平気でおならして、スカートを気に

しなくなって足を開いて、それどころか夏場は平気でめくり上げるようになって、教室でナプキンが飛び交って、教室も部屋も男の目を気にすることなく散らかり放題……そんな風に歯止めが効かずにどんどん下品になっていって、男がいない環境でどんどんと堕落していく女の子のかけらもない生き物になっちゃうわよ」

はっきり言えば、これは誇張の極み。

もちろん、これらはそういう傾向にあるって話だけど。さすがにお嬢様学校とかならそういうこともないと思いたい。まあ、あたしは共学だからわからないけど。

だけど、精神が不安定なＴＳ病患者には、あえて脅すような文言は効果的だ。

「ちょ、ちょっと言いすぎですよさすがに……否定はできませんけど……」

女子校出身の京子さんのお母さんも抗議してきたが、その後「否定はできませんけど」と付け加える当たり、あたしの偏見丸出しの言葉を追認しているに等しい状況になる。

「とにかく、そういうわけですから、協会として、元の学校が男子校の時以外の転校はおすすめしないわ。男の子だった頃を知っているクラスメイトの方が理解を得られやすいですから」

理解というのは、あたしが女の子になって間もない頃の話。

女の子として扱うことと元男として扱うことに矛盾がないということを指している。

「ええ、そうですよね」

「うん、ぼ……うち、転校は辞めます」

京子さんも、お母さんも納得してくれる。

さてこの次、次は協会としての立場と学校の人達に知ってほしいことを話す。

つまり「ＴＳ病に求められるのは１人の女性としての扱い」ということ。これは女の子になったばかりの「成長途中」の患者でも同じ。ただし、その患者はあたしの時がそうだったように女の子であることを大前提に、「女の子初心者」「元男」としての扱いも必要になるとい

うこと。
「担当カウンセラーの方と調整してください」
「……分かりました」
「さて、京子さん、私達は修学旅行の途中ですので、これで失礼いたします」
「え!?　修学旅行中だったん!?」
　京子さんが驚いている。
　つい口を滑らせちゃったけど、まずかったかな？
「はい。永原会長はあたしの学校の先生でもありますから」
「それは驚きやわ。関西支部長の方、江戸生まれで戊辰戦争を知っていると言ってましたけど」
　京子さんのお母さんも、ちょっと関西訛りが強くなって驚いている。
「ふふっ、会長は私達の長老ですから」
「あ！　思い出した！　この２人、例の『ブライト桜』の動画に出てきた２人や！」
　京子さんがいかにも「思い出した」という感じで指を指しながら言う。
「あら？　気付かれちゃいましたか。じゃあ知っていると思うけど、私が本当は戦国時代の生まれということも知っているわね」
「ああ」
　京子さんが頷く。
「まあいいわ。行きましょう、永原会長」
「ええそうね。失礼致します」
「今日は本当に、貴重なお時間をありがとうございます」
「いえいえ」
　京子さんのお母さんが玄関まで送ってくれた。
　あたしたちは家を出る。
「あの様子なら、大丈夫だわ」
　あたしも、楽観的な感じで言う。
　京子さんは、時間はかかるかもしれないけど、幸いこの病気、時間

だけはたっぷりある。だからゆっくりと、女の子を身に着けさせよう。

あたしたちは、ともあれ修学旅行の続きをすることになった。

# 修学旅行3日目　駅の街、街の駅

浩介くんとは大阪駅で待ち合わせということになっている。
合流して、梅田の地下で昼食を取り大阪の名所を回ろうということになっている。
「じゃあ私は明石の方に行くから」
永原先生がそう言い残すと、新快速を待つおびただしい人だかりの前に消えていった。
そう言えば、明石は新快速があったんだっけ？
まあいいわ。ともあれ、浩介くんを待つため、駅の比較的上層部にある「時空の広場」と称する場所に立つ。ここで浩介くんを待ち合わせすることになる。
金色の眩しい時計の前に立つと、嫌でも目立つ。
幾多の通行人が容赦なくあたしの胸に視線を集めるのは関東と同じ。
よく見ると、この駅は外縁部が青色、中が黄色の丸印の付いた「ＯＳＡＫＡ　ＳＴＡＴＩＯＮ　ＣＩＴＹ」と称する旗がたくさんある。
聞くところによると、この大阪駅、隣接する梅田駅などと併せて駅の利用客数が世界４位だという。
そんな大きな駅の片隅で待ち合わせをするというのは、ある意味でとても大変だ。
浩介くん、迷っていないといいけど……
「あ、優子ちゃん！」
「え!?　ああ、浩介くん！」
浩介くんが横から現れた、どうやら、この時計の影で見えなかっただけらしい。
「いやー、この駅やっぱ広いよな」
「うんうん、やっぱり大都会だよね。ニュースだとなんかそういうの見せてくれないけど」
「あはは、きっと関東のテレビ局だから大阪に対抗心があるんだと思う」

浩介くんが笑いながら言う。
でも、ある意味それも当たってなくもない。
大阪に対して、立派な高層ビルが立ち並ぶ大都会というイメージは、東京のマスコミしか見ていないとほとんどイメージすることは出来ない。
「さて、この駅を巡ってみようぜ」
「そうね、何だか駅だけで1日過ごせそうだわ」
実際誇張じゃない気がする。
事前に調べた所、7年前に大規模なリニューアルをしたという。
眼下を見下ろすと、多くの電車がひっきりなしに動いていて、決して関東にも本数で負けていないように見える。
この広場、両側に2つの大きなビルがあって、歩いてみた結果、どちらも百貨店だということがわかった。
どちらも買い物には良さそうだけど、さて……
「食事しようか」
「あ、そうだね。ちょっとお腹空いたもんね」
案内を見ると10階で食べることが出来るという。
あたしたちは北側のビルの中に入り、エスカレーターで10階まで一気に上がることにした。
「浩介くん、左右逆なの気をつけてね」
あたしも、最初はやってしまいそうになるけど、慣れるとどうってことない。
「うん、喋り方は仕方ないけど、エスカレーター間違えたら関東人丸出しになっちゃうもんな」
浩介くんとそんなことを話しながら、前の人に続いて右側に立つ。
いつもは左側に立っていて、関東と関西の習慣の違いを感じることが出来る。
フロアの中を見ると、服売り場ということになっていた。
「なあ、優子ちゃん、帰りに寄っていく？」
「うーん、服をお土産にしてもねえ――」
あたしは、そこまで服を新しく買うことに関心がない。

母さんが最初に服を買った時、かなりたくさん買わされたからだ。
とは言っても、服は着ていれば傷んでくるものだし、いつかは買い換えないといけない。
その時の服の買い方とかで、またあたしの女子力の低さが露呈しそうで怖い。
何だかんだ言っても、あたしはＴＳ病患者だから、どうしても「ツギハギ」の女子力になってしまう。
でも、そんな時にクラスのみんなが助けてくれる。
大学はどうだろう？　大学に入ると、あたしがＴＳ病だということを知っている人はほぼ居なくなるし、男だった頃を知っている人となると、小谷学園の２年２組の中で、あたしと浩介くん以外に、佐和山大学に進学する人を探さないといけない。
でも、何も知らない大学の他の人は、驚くに違いない。
あたしは、確かに鍛錬の成果もあって、女子力については定評がある。行きの新幹線では、女子校という「女子力低下学校」の実態についても学んだ。
しかし、あたしの場合、まるで凹凸みたいに女子力の高低の差が激しい。
その時に、多分周囲は驚いてしまうと思う。
それを少なくするためにも、あたしは服選びの訓練をした方がいいんだけど。
「優子ちゃん、どうしたの？　何か考えているみたいだけど」
そんなことを考えていると、浩介くんが声をかけてきた。
「ああうん、大学に入ったら周囲はどう思うんだろうって？　今まではあたしが男だった頃を知っている人ばっかりだったけど、大学はそうも行かないでしょ？」
「うん、それでどうしたの？」
「あたしはね、以前女子力について『ツギハギ』って言われたことがあるのよ」
「ほほう、ツギハギ……確かに、分かる気がするで」
浩介くんが、ちょっとだけ関西訛りになりながら言う。

関西弁って、伝染りやすいってよく言うよね。もしかして昨日あたり伝染ったのかな？
「もし、女の子になったのが優子ちゃんじゃなくって俺だったらさ、やっぱり女子力はすごい高かったり低かったりすると思う。でも、ＴＳ病になって日が浅い女の子なんてそんなもんじゃないの？」
確かに、永原先生みたいに、よほどの長生きでもない限り、それは解消するのが難しいと思う。
あたしは年齢こそ１８歳だけど、女の子としては１歳２ヶ月の赤ちゃんみたいなもので、優一時代の貯金で勉強や常識などの知識があるだけ。
今まで触れてこなかった女の子としての学習は、まだまだ道半ばなのだ。
もちろん、さすがに赤ちゃんよりは学習スピードは速いから、こうやって女の子らしく振る舞えてるけど。
「う、うん……」
「女の子になってからはまだ日が浅いんだし、そのことを言えば割合大丈夫だよ」
浩介くんが優しくそんなことを言ってくれる。
そして、レストラン街の１０階に到着した。
中は既に、かなりの人で賑わっていた。
「うわー、色々な店あるわね」
「迷うなあ、どうしよう？」
どれも高そうなお店、お肉屋さんが多い印象。
とりあえず、浩介くんと一週見て回った限り、お店の数は結構あることが分かった。
「お！　関西風うどんってのもあるな」
「美味しいみたいよ」
あたしたちは、関西風のうどんを売りにしているお店を見つけた。
うどんと言えば香川県だけど、西日本ではそばよりポピュラーらしく、関西風うどんと言えば、結構名の知れた存在らしい。
「お、ざるうどん美味しそうだな」

浩介くんが見本を見ながら言う。
「いいわね、ここにしようかしら？」
「そうだな」
ここも結構いいお値段だけど、幸いなことに蓬莱教授の援助に加え修学旅行そのもの予算もダダ余りだったので余裕がある。
もちろん貯金してもいいんだけど、せっかくの修学旅行だし、さすがにけち臭いのも良くない。
ともあれ、レストランの中に入る。
中に入ると意外に早く席に座われた。
あたしは普通のざるうどん、浩介くんがざるうどんの特盛りを頼んだ。

「浩介くん、お金余ってる？」
「ああ、昨日は高月たちとユ何とかっていう遊園地に行ってたんだけど、それでもかなり余ってるよ」
ユ？　どこのことだろう？
「うん、あたしも。昨日は永原先生の引率で鉄道博物館に行ったんだけど、永原先生、すごく鉄道に詳しくてびっくりしたわ」
待っている間は、お互い昨日のことを話すことにする。
「へえ、先生ってなんで鉄道に詳しいんだ？　確か教師を始めたのは――」
「うん、当時新橋横浜に最初に開業した鉄道を見て、衝撃を受けたんだって」
あたしは、永原先生の昨日の話を思い出しながら言う。
永原先生が、あの時鉄道を見なければ、もしかしたらあたしたちは別の先生が担任で、ＴＳ病に対処できなかったかもしれない。
そう言う意味で、大きなイベントだと思う。
「そうかあ、確かに、移動すると言えば歩くことしか知らない人にとって、鉄道は衝撃的だもんなあ」
永原先生はそれ以来、自らを変えた鉄道について、よく知るようになったという。

「そう言えば、最初に鉄道が開業したのっていつだっけ？」
「確か明治５年って書いてあったから……１４６年前。で、永原先生が教師を始めたのが１３６年前だから……少しだけ時間が離れているわね」
「まあ、教師を始めるにも、色々資格とか居るからな」
浩介くんの言う通りだわ。何となく流していたけど、永原先生はそれぞれで大変な苦労をしていたはず。
それに、最初の鉄道開業から、鉄道網が張り巡らされるまでに、それ相応の時間がかかったはずでもある。
いずれにしても、永原先生の人生を変えたことには間違いない。
浩介くんは、色々なアトラクションを楽しんだ。
あたしも、また機会があれば行ってみたい気もするわね。
「お待たせいたしましたー、こちらざるうどんと、ざるうどん特盛りでございます」
ウェイトレスさんの声と共に、あたしたちは雑談を中止し、「いただきます」をしてご飯に集中する。
ずるっ……ずるっ……
「おおうまい！」
「うん、美味しいわね」
うどんはよくモチモチ感が出ていて、いい感じに仕上がっていた。
つゆもうまく工夫されていて、さすがにこれだけの値段を取るだけある。
「それで、優子ちゃんは鉄道ってどう思ってるの？」
「うーん、よく分からないわ。でも鉄道も昔よりかなり便利になったと思ったわよ。あの博物館で、永原先生が昔話をしてくれたけど、とにかく大変だったのよ」
あたしは食べながら永原先生の受け売りで昔の鉄道の話をする。
蒸気機関車の激務や人員が２人必要なこと、ポイント切り替えや、信号でさえ手動だったこと、そもそも所要時間も、今とは比べ物にならないくらい必要だったこと。
浩介くんはそれらを聞いて、今の便利な世の中を絶賛していた。

「「ごちそうさまでしたー」」
「ありがとうございましたー！」
あたしと浩介くんは、美味しいおうどんを完食し、同時にごちそうさまをして、店を出る。
お腹も満タンになったし、あたしたちは本格的に観光をしようと思った。
話し合った結果、手始めにまずはこの駅と駅ビルを巡ってみることにした。
案内を見た限り、ここのビルは２８階建てになっていて、上層部はオフィス、最上階は結婚式場になっていることが分かった。
「とりあえず、この『天空の農園』ってのが気になるな」
「うん、どういう意味なんだろう？」
今いる１０階の現在地から、まずは「和らぎの庭」に出て、そこから上層を目指すのがいいだろう。
というわけで、早速「和らぎの庭」という場所に出てみた。
そこは、屋上庭園になっていて、眼下には大阪の大都会が見える。
見てみるとかなりの人数が、ここに居て結構混んでいる。
爽やかな風が、あたしたちを包み込む。
でも、あんまり強くなりすぎないでほしいかな。
「この1個上が、『風の広場』っていうらしいな。同じルートで『天空の農園』にも行けるみたいだ」
「うん、行ってみようか」
「あ、ちょっと待って！」
浩介くんが先行するような形になった所をちょっと止める。
「どうしたの優子ちゃん」
「あたしが先に行くよ」
「んー、ああ、そうだな」
浩介くんが、あたしが後ろだとスカートの中を覗く男がいるかもしれないことを理解してくれた。
あたしが前、浩介くんが後ろになって階段を登り、あたしたちは「風の広場」に到着した。

「風の広場」と言っても、1階上層に上がっただけだから、風はまだほとんど強さがない。
そして、1階上層に上がっただけで、人の数はめっきり減ってしまった。
「どうやら、ここには映画館もある見てえだな」
おそらく、映画館で映画を待っているお客さんや、映画を見終わったお客さんが、ここを主に使っているのだと思う。
いろいろな樹木やバラが植えられていて、あたしたちと同じカップルがいる。

「おい、何見てんだ！　うち見てや！」
「すんまへん」
「ったく、かわいい子にはホント目がないんやから！」

あたしの胸を見てきた男性が、彼女に叱られている。
うーん、彼女さんもう少し寛容になったほうがいいと思うけど。まあ、あたしには関係ないかな。
それにしても、浩介くんも植物や庭園よりも、あたしのこの大きな胸を気に入っているのか、植栽はあまり見ないで、あたしを見る片手間に見ているという感じ。
「浩介くん、植物よりも胸が気になる？」
あたしはちょっと意地悪に言う。
「うっ……あ、当たり前だろ……優子ちゃん、大きいし」
浩介くんが照れたように言う。
あんまり意地悪しすぎるのもダメかな？　浩介くん嫉妬深いからね。
「そ、それよりさ、そろそろ上に行ってみようぜ」
浩介くんが照れをごまかすように言う。
「うん」
天空の農園の場所、そこはこの「風の広場」から階段を登って更に上層へと進む。

昼間とはいっても、長い階段を登る必要性があって、誰も登って行かない。
かなり長い階段が見えたので、あたしはもう一回先に歩く。
下を時折見下ろしても、あたしたちに続く人は全く居ない。どうやら貸し切りになりそうだ。
普段からこうとは限らないけど、どうやらあたしたちは運がいいみたいだわ。
階段を登りきり、右に１８０度回転する。
「うーん、見た限り普通の農場？　でもこんな大都会で植えられてるのはすごいわよね」
誰もいない農園で、あたしが浩介くんに感想を言う。
浩介くんの方を振り向くと、下を気にしている。大阪の街も、さっきより更に遠くまで見渡せるみたいね。
農場は段差になっていて、階段で少しだけしたに降りる風になっている。
　ぴらっ
「きゃあ！」
浩介くんに、後ろからスカートをめくられ、純白のパンツを見られてしまう。
「もうっ！」
　ぺちっ！
あたしは浩介くんの方に振り向くと、照れ隠しにぺちっと一回平手打ちをする
「浩介くんのスケベ！　もー、恥ずかしいからやめてよ！」
「ごめんごめん、誰もいないと分かると、つい……」
「むー、浩介くん最近どんどんエッチになってるよ！」
浩介くんのベタな言い訳に、あたしも抗議する。
最近、結構外でも誰もいないとわかるとこういうことをすることが多い。
「そ、そりゃあ優子ちゃんみたいな女の子を彼女にしたら、誰だってそうなっちゃうだろ！」

一言で論破されてしまった。
「あうぅ……何も言い返せないよお……」
「ふふっ、そうだろそうだろ？　白いパンツ今日もかわいいね」
「むー、でも出来れば、こういう所では辞めてほしいかな。誰かが隠れてるかもしれないからね」
幸い浩介くんもよく見ててて、他の人に見られたことはないけど、それもいつまで続くかは分からない。「壁に耳あり障子に目あり」って言うし。
「うっ……わ、分かった」
何とか浩介くんも納得してもらったところで、農園を見渡す。
どうやら、稲や野菜なんかが植えられているみたい。
「これはさ、どこで売ってるんだろう？」
「量も少ないし、多分このビルのレストランの足しにするんじゃない？」
浩介くんの話は多分あっていると思う。本当のところは知らないけど。
「でも、あんまり見るべきところはねえな」
「うん、収穫の時期とかだとすごいと思うけど」
現に、この「天空の農園」には一向に他のお客さんが来る気配がない。
「よし、じゃあこんなところにして、大阪観光しようぜ」
「うん」
あたしたちは、本格的な大阪の観光へと繰り出した。

# 修学旅行3日目　ミナミを進む

「うーん、えっと……こっちが東梅田だから……」
浩介くんが地図と案内表示を見て唸っている。
上層から戻る間で話し合った結果、特に「ここに行きたい」という名所はでなかったので、あたしたちは梅田から難波に移動して、そこから北側の日本橋までの一帯を見て回ろうということになっていた。
現在、あたしたちは「大阪市営地下鉄御堂筋線」に乗り換えようと、ＪＲの「大阪駅」に隣接している「梅田駅」を目指していたにも関わらず、地下街の迷路に捕まって迷ってしまったのだ。
一応、そこかしこに地図があって現在位置と方角だけは分かるので、一応進んではいるんだけど、とにかく時間がかかる。
最初なんて間違えて真逆の方向に行ってしまって、「阪急梅田駅」と言う別の駅についてしまった。
せっかく何で遠目から見てみようとなったんだけど、あそこはあそこで、改札口の外からでも分かるくらいなんかすごい厳かな風景の駅で、電車の色も統一されていた。
ともあれ今はもう一度地下に潜って「地下鉄梅田駅」を探しているんだけど、同じ大阪市営地下鉄に「東梅田駅」と「西梅田駅」というのもあって、更に南側には「北新地駅」まで隣接していて、この大阪駅というのはとにかくややこしい。

「おっかしいなあ……」
とにかく、頻繁に案内を確認しないと、変な方向に出てしまう。
地元の人なら多分使いこなせるんだと思うけど、始めてきた関東人のあたしたちにはとても苦しい。
おかげで、方向感覚に集中するあまり、エスカレーターに乗る時についつい左に立ってしまって大恥をかいてしまったこともあった。
「よし、こっちだ」
浩介くんの誘導のもと、あたしたちは何とか、赤いマークの「御堂筋線」を見つけることが出来た。

「ふう、やっと着いたわね」
ここまで時間がかかるとは思っても見なかったけど、とりあえず「難波駅」までの切符を買って改札口を通って中に入る。
それにしても、随分と古めかしい印象の地下鉄駅だわ。
昭和というかなんというか、そういった感じの雰囲気がひしひしと伝わってくる。
「浩介くん、ここ、どことなくレトロだよね」
多分、天井や壁の雰囲気が、そんな印象を与えているんだと思う。
現にホームは清潔に保たれていて、駅名標や案内、柱などは最新技術が盛り込まれている。それでも、やはり古い印象は拭えない。
それくらい、この駅は異彩を放っていると言ってもいい。
「でもこの御堂筋線、大阪では一番の基幹になる路線らしいぜ」
あたしたちはこれから、難波から日本橋、そしてその北側を当てもなく散策する予定になっている。
大阪の地理は全く詳しくないから、何が出てくるか分からないけど、ともあれ、迷っているうちにかなりの時間を使ってしまった。
「1番線に、中百舌鳥（なかもず）行きが、到着します。危険ですから、白線の内側でお待ち下さい」
メロディとアナウンスと共に、地下鉄が定刻通り到着した。車両も赤い車両で、関東でもよく見る最新鋭な感じだ。
「1番線に到着の電車は、難波方面、中百舌鳥行きです」
「ご利用ありがとうございます。1番線到着の電車は中百舌鳥行きです」
車内は結構人が居て、さすが大阪のメイン路線といった感じ。
というよりも、大阪の地下鉄って、この路線が圧倒的に混むらしい。
「なあ、あの女の子かわええよな、おっぱいもでけえしよ」
「ちぇー、彼氏持ちかよ。一人だったら絶対ナンパしてやったのに！」
「あーあ、羨ましいんじゃあ！　あんなかわいい彼女……！」
そして、地下鉄内ではあたしへの絶賛と、浩介くんへの嫉妬の会話

が繰り広げられるのもいつも通り。
ちなみに、浩介くんも、あたしへの胸への視線には嫉妬することもあるけど、そう言う時には触ったりした時の記憶を思い出して、嫉妬心をしのいでいるらしい。
やっぱり、嫉妬されないとそれはそれで負けた気がするので、あたしとしては歓迎するべきことかもしれないわね。
浩介くんも、あんまり嫉妬深いと嫌われると分かっているので、何とか抑えようとはしてくれてるみたいだし……うん、今はそれでもいいわ。
地下鉄が次々と駅に到着しては多くの乗客が入れ替わる。淀屋橋、本町、心斎橋、どれも大阪の中心部と言っていい。
そして心斎橋駅の次が難波駅、ともあれあたしたちはそこで降りることにした。
「ともあれ、地上から行こうか」
「うん」
難波は、梅田に継ぐ大阪の南側の中心地で、近鉄や南海と行った私鉄にとってはターミナル機能も持っているそうだ。
それにしても、梅田ほどじゃないけどここもとっても人が多いわね。
人だかりのために、案内表示を見落としてしまうこともある。
ともあれ、地上に出て、あてもなく歩いてみるのもいいだろう。
地上に出て、方向感覚を頼りに、日本橋の方へ行ってみる。
よく分からないけど、こっちに進めば大丈夫かな？
「あれ？　優子ちゃん、これ南海の難波だから……正しくはこっちだよ！」
浩介くんが間違った方向に行っていることに気付き、あたしを止めて正しい方角を指差す。
「え？　あ、本当だわ」
しまったわ、いきなり方向を間違えていたみたいね。
でも、そこかしこにある地図や目印を見れば、修正がききやすいの

もいい。
あたしたちは元来た道を引き返す。うん、こっちが北側だから……東へは……っと。
日本橋までの所は、普通の大都会だった。
関東の東京の中心部とも、そこまで大きな違いはないと見受けられる。
「よし、左に曲がってみようぜ！」
「うん」
浩介くんが、地下鉄の日本橋駅の出入り口に差し掛かったので言う。
東の方向へ進んでいる間で、左に曲がればそこは北の方向になる。
北に何があるんだろう？
地図を見るとなんか青い川みたいなのもあったけど？
……まあいっか。

「それでさ、高月のやつアトラクションでナンパしやがって！　断られたらその場で泣き出してよ！　大変だったぜ！」
「あはは、高月くんらしいわね」

あたしたちは、他人の目を気にすることなく、笑い雑談しながら進む。高月くんには悪いけど、ナンパに失敗して泣く光景がいかにも高月くんらしい。
談笑していると、前方に橋が見えた。
「あれ？　これ道頓堀川じゃね？」
康介くんがふと気付いたように言う。
「あ、そうかも」
あの有名な道頓堀川がこのあたりとは知らなかったわ。とりあえず、橋を渡ってみる。
どうやらこの橋は、「日本橋（にっぽんばし）」と言うらしい。
東京にも同じ橋があるけど、読み方が違って、そちらは「にほんばし」なのは有名な話。

「左へ曲がるか」
「うん」
多分、左に曲がると、「おなじみの光景」が見えてくるという期待が、あたしと浩介くんにあった。
狙ったわけじゃないから、偶然と言ってもいいんだけど、意外な観光ができたのは行幸だったわ。
徐々に川を進むに連れ、外国人の密度が高くなり、それだけではなく関西弁に代わって標準語まで聞こえるようになっていった。
「あ！　あれは！」
あたしも浩介くんも、左側を注視していたので、それを見つけるのは容易だった。
円形の橋の向こうに、右側には「グリコ」と書かれたTシャツを着た陸上選手の広告、そして左側には巨大なカニが見える。
ここは大阪であまりにも有名な場所、というよりも、あたしたち関東人が思いつく大阪そのものだ。実際、東京のメディアが大阪を取材する時、最初にここが映されることもよくある。
「これ、ここだったんやな」
「せやな」
何でうちまで関西弁になってんや。朝の京子さんがあたしにも伝染ってしもうたか。
……ともあれ、あたしたちは写真にとっておく。
というか、ここあんまり関西人居ないような？　川に飛び込む時は違うのかな？
「うーん、もう少し時間があるな。左に曲がろうぜ」
「うん」
食事はさっき大阪駅でしたので、とりあえず食事屋さんはいらない。
あたしたちは、川を渡って何となく左に曲がってみる。
ここらへんの道は結構狭くて、歩行者が真ん中を堂々と歩いているので車はおそらく通れない。
「優子ちゃんあれ、『くいだおれ』って書いてあるじゃん」

「あ、本当だわ」
前を見ていると、丸い文字で「くいだおれ」と書かれているビルを発見した。
閉店したって聞いたけど、勘違いだったのかな？
ともあれ、その建物に近付くと、「例の人形」が出迎えてくれた。こんな所にあったのね。
名前だけ知っていて、場所は知らないけど、偶然にもあたしたちは見つけることが出来た。
そしてこのビルの前でも、多数の外国人が記念撮影している。
「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．」
「？」
何となくぼーっとしているとあたしに向けて、英語が飛んできた。
英語で話しかけられるのはあたしの人生で初めてだわ。
あたしのなけなしの読解力で何とか解読すると、どうやら記念撮影をしたいらしい。よく見ると男性４人組の観光客みたい。
ボタンを押せばいいということで、あたしがカメラを構える。
「ｔｈｒｅｅ……ｔｗｏ……ｏｎｅ……」
ピピッ！
通じているのかよく分からないけど、とりあえず英語で「３……２……１……」と言うとシャッターを押して写真を見せる。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」
浩介くんとあたしは、呆然とした表情で、去っていく外国人観光客を見送る。ともあれ、うまく行ってよかったわ。
「何であたしに頼んだんだろう？」
「さあ？　優子ちゃんがかわいいからでしょ」
「……もうっ！」
って、浩介くんといちゃつくのもいいけど、折角ここまで来たんだし、中に入ってみよう。
あたしと浩介くんが中に入ると、そこはどうもお土産屋さんみたいだった。
くいだおれ系のお土産が売っていたので、これを買うことにする。

他の場所は、どうも食べ物屋さんが主らしい。
「やっぱくいだおれってビルを名乗ってるだけあって食べ物が多いな。でも、俺はまだいらないなあ」
「そう言えば、浩介くん夕食はどうする？」
確かにまだ少し早いけど、そろそろ夕食のことも考えたほうがいいと思う。
「うーん、神戸の方でさ、牛肉食べようと思うんだよ」
「え!?　神戸ビーフ？」
あたしはつい反射的に聞き返してしまった。
神戸ビーフと言えば、松阪牛や米沢牛と並んで、超高級肉として有名なブランドだわ。
もし高級料亭なら、1人前でもかなりの値段がするはず。
「ああいやほら、このままだと修学旅行の予算が諭吉数枚分も余るからさ。優子ちゃんもそうなんでしょ？」
「うん、確かに予算は有り余ってるわ」
貯金してもいいけど、夏休みもよっぽどデートに入り浸らないと使い切れないし、9月以降も差し迫った出費がないことも考えると、修学旅行くらいしか使い道がないのも事実ではある。
「だったらさ、明日には帰るわけだし、最後くらい贅沢にドーンと行きたいと思うんだ」
「う、うん、そうだね」
正確には明日の朝食と昼食があるけど、修学旅行の最終日は集団行動になっている。
自由時間は今日が最後。それを考えれば、確かに贅沢ができるのもこれが最後だ。
「で、どこか行く宛あるの？」
「もちろん、昨日部屋でめぼしい店を調べてあるぜ」
浩介くんは電源の入ってないスマホをこっちに見せてくる。
それでも、調べたというアピールには十分。
「さすがは浩介くん！」
うん、頼りになるわ。

「まあでも、完全には絞りきれてないんだ。それより、少し休もうか？
優子ちゃん、歩き疲れたでしょ？」
「う、うん……」
実は、脚が痛かったのを我慢していた。
一瞬、浩介くんにおんぶしてもらおうと思ったけど、さすがにこんな人だかりの真ん中は恥ずかしすぎるわね。
「よし、休める所を探そうか」
「う、うん……」
「さっきのネットカフェがいいだろう。俺も店を調べたいし」
というわけで、近くでさっき見かけたネットカフェまで、あたしたちは移動した。

「ふー、疲れたー」
あたしと浩介くんは2人部屋の個室に入り、ゆったりくつろぐ。
浩介くんは、ネットを開くと、「絞り込み」という名目で、早速神戸ビーフの美味しい高級店を探し始めた。
とにかくお金が有り余っているから、「安くていいものを」と言う贅沢な悩みをしなくていいのは強みだったりする。
本当に、蓬莱教授にはお世話になりっぱなしだわ。でも、蓬莱教授からすれば、あたしたちが実験に参加してくれる恩からすれば、恩返しのうちにも入っていないのかもしれない。
夕食までの時間、こういう時間も必要だ。
神戸で牛肉を食べるということは、これからは難波駅か心斎橋駅から御堂筋線で梅田駅、そして大阪駅に行けばいいのかな？
大阪駅からは新快速が速いはず。
そう思って、あたしはあらかた絞り込みが終わった風に見える浩介くんに提案してみた。
「浩介くん、神戸行くのはやっぱり来た道戻って新快速かな？」
「ああいや、ここからだと『阪神なんば線』を使った方がいいよ」
「あ、言われてみればそうね」
浩介くんが、時刻表と乗換案内を駆使しながら的確にルートを決め

てくれる。
いかに新快速が速いとは言え、あの梅田の複雑な乗り換えをするよりは、阪神なんば線で直接三宮に行ったほうがいい。
それにしても、大阪と梅田もだけど、この三宮も結構ややこしい。
私鉄は「神戸三宮駅」が正式名称で、地下鉄とポートライナーは「三宮駅」、また「阪神三宮」・「阪急三宮」と言う案内があり、ＪＲは「三ノ宮駅」と「ノ」の字がつく。おまけに少し離れた所に「三宮・花時計前駅」まである。
で、あたしたちが目指すのは、「阪神線」の「神戸三宮駅」ということになるのだ。
調べてみるとここ難波も、普通に「難波駅」なのは地下鉄と「南海線」で、「近鉄線」と「阪神線」は「大阪難波駅」、ＪＲは「ＪＲ難波駅」と称している。
ちなみに、「難波駅」の方も、案内上ではひらがなで「なんば」になっていて、地図と色々違っていて、混乱してしまった。
どうも感じだと「なにわ」とも読めるらしい。
関東人のあたしには「なにわ」と「なんば」の区別もつかないけど。
「浩介くん、なにわって？」
「どうやら、なにわは歴史ある呼び方らしいよ、『難波宮』って言われる大阪の古都としての歴史は京都よりも長いんだってさ」
「へえ！　全然知らなかったよ！」
浩介くんが調べた所によると、ここ大阪難波には、古くは世界最大の仁徳天皇陵で有名な仁徳天皇が、難波に都を置いたという。
奈良と同程度、京都よりも古い都、それが大阪だという。
その後は、あたしたちはこれからの牛肉食の予行練習と、インターネットや漫画を楽しんで、時間を潰していった。
この店を出る頃には、すっかりお腹も空き始めた。

# 修学旅行3日目　鉄道と深海

浩介くんが調べた所によれば、阪神なんば線は比較的新しく出来た路線だという。２００９年の開業だから、ちょうど9年前だ。

これを使えば、難波から神戸三宮まで乗り換え無しで行くことが出来る。

ちなみに、ここは「阪神なんば線」の出発駅のみならず、「近鉄難波線」の終着駅でもある。

通常電車たちはここから直通していることになる。

「あれは特急かな？」

「うーん、どうだろう？」

この駅には、いかにも通勤電車とは違う雰囲気の電車も止まっていて、雰囲気からするに昨日鉄道博物館のジオラマで見た近鉄特急だと思う。

そうこうしているうちに、やがて阪神線の電車がその姿を表した。

近鉄線から直通してきた快速急行で、これを使って終点の神戸三宮駅まで乗り通せばいい。

車内の仕様は、新快速とは違っていて関東の通勤電車でもよく見るいわゆる「横向きで向い合せ」の仕様になっている。

駅の字幕放送によれば停車駅は「西九条までの各駅と、尼崎、甲子園、西宮、芦屋、魚崎、神戸三宮」となっている。

あたしはさっきの放送を思い出す。

尼崎からの停車駅が、新快速は芦屋を出れば次はもう三ノ宮なのを考えると、随分と停車駅が多い印象だ。

実際、事前の調べては、直通するからこそ速いのであって、大阪・梅田からの阪神線とＪＲ線との所要時間は、新快速と比べると大分かかってしまっている。

上位には、「特急」という種別もあるけど、駅の案内では特急はさっきの停車駅に御影駅にも止まるみたいなので、あろうことか今の時間帯は特急の方が停車駅が多いらしい。

「浩介くん、快速急行が特急より停車駅少ないって――」

「そもそも、『快速急行』っていうのは急行が快速になったわけだけど、『特別な急行』ではないような？」
「特別」と「快速」でどう違うんだろう？　どっちも停車駅が普通より少ないってことよね？
「そもそも、鉄道には急行とか快速とか準急とか、あるいは快速何とかとか通勤何とかってあるけど、どれが上位なのか分からないわね」
そもそも、「急いで行く」のと「快く走る」って、どっちが速くなるんだろう？
それに、「通勤」が付くと、もう訳がわからないわ。
さっきお世話になった「新快速」だって、「新」と名乗っておきながら、英語の放送では「Ｓｐｅｃｉａｌ」って言っていたから、それだと「特別快速」になる。
特別快速って言う種別もあるけど……あうー、もう分からなくなってきたわ。
「間もなく発車いたします、閉まるドアにご注意ください」
駅員さんの放送が流れる。
あたしたちは席に座りながらも、引き続き種別の奇妙さについて考えていた。
「特別」と言う接頭辞も、「急行」につけると「特急」になる。これは略語みたいなものらしい。
しかも同じ「特急」でも色々な違いがある。
ＪＲの特急は概して特別料金が必要だけど、私鉄の場合はそれらの料金が必要ない「特急」も多くて、会社によってまちまちだ。
それどころか、会社によっては無料の「快速特急」何ていう種別が走ってる路線もある。つまり特急よりもさらに停車駅を絞っているということ。
そう言えば、ＪＲは「急行」って言う種別を使ってないわよね？
少なくともあたしは見たことがないわ。
昨日の博物館の展示を思い出す限り、以前はあったみたいだけど、やがて特急に吸収されるようになくなっちゃったんじゃないかと思えて来る。

そもそも、「特別じゃない普通の急行」が存在していないのに「特別な急行列車」って一体何なんだろう？

そもそも、新幹線も在来線の特急とも明らかに扱いが違うし、疑問は尽きない。

「お待たせいたしました。次は桜川、桜川です。千日前線はお乗り換えです。この電車は快速急行神戸三宮行きです。途中西九条までは各駅に止まります」

阪神なんば線は多くが地下区間で、その辺りは都心部を走るとあって正確も地下鉄とほぼ変わらない。

地下鉄のように各駅に停車し、その間、考えが混乱したあたしは種別について考えるのをやめた。

快速急行と言っても、ここは都心部とあって各駅停車の区間。

九条駅を過ぎると地上区間に入り、車窓もフードのようなもので覆われている。

ところで、ここでも浩介くんはあたしの胸が気になるご様子で、あたしの大きな胸に集まる周囲の視線をかなり気にしている。

でも、嫉妬しているというよりも、むしろ誇らしげにも見える。

浩介くんの中で、彼氏としての威厳や自信がついてくれるのは、あたしとしても嬉しいし、あたし自身の自信にもつながってくれると思う。

「間もなく西九条、西九条です。ＪＲ大阪環状線、ゆめ咲線はお乗り換えです。西九条の次は尼崎に止まります」

「お、昨日はここから乗り換えたんだよ」

車掌さんが西九条駅についたという放送と共に、浩介くんが話し始める。

「へー」

浩介くんの話を、耳に聞いていく。

浩介くんはさっきと同じような話もしているけど、あたしは気にせずに聞き手になる。

浩介くんの話は聞いていて楽しいし、あたしとしても楽しそうな浩介くんの姿をもっと見たい。

電車は西九条駅を出発し、ようやく急行運転をし始める。次の停車駅は尼崎駅だ。
ここからは終点まで乗り通せばいい。
ふと左上の案内表示を見てみたが、あたしたちが普段乗っている沿線と比べて、やたらと種類が多い気がする。
と言うか、特急だけでも直通特急、特急、区間特急と3種類あって、快速急行に急行に、区間急行……うー、頭がこんがらがってきたわ。しかもなんか注釈付きの臨時停車も多いし上に、上位種別が停まる駅を通過したりしている。
あたしたちは今回、神戸三宮まで使えればいいだけだけど、普段から使っている沿線住民でも、これを使いこなすのは大変な気もするわ。
電車はややスピードを上げつつも、新快速ほどの轟音を上げるわけでもない。
淡々と、駅を通過していった。
「間もなく尼崎、尼崎です。阪神本線、梅田方面はお乗り換えです。尼崎の次は甲子園に止まります」
「甲子園かあ……小谷学園には永遠に縁がなさそうだな」
浩介くんがそんなことをつぶやく。
「そもそも、うちの野球部9人居ないわよね」
なので甲子園以前に野球の試合さえろくに出来ないのが今の小谷学園野球部である。
あ、でも新1年生や他の部の助っ人を集めれば、何とか9人集められるかな？　でもそんなチームじゃあ1回戦ボロ負けが関の山よね。
「そうだったな。ほら、志賀が野球部のマネージャーになって、例の先輩と付き合い出してから、一気に瓦解しちゃったんだっけ？」
浩介くんが思い出した様に言う。
「うん、さくらちゃん、何だか『魔性の女』になってたわね」
「え!?　そんな感じ全然しなかったけど……あの志賀が!?」
浩介くんがかなり驚いている。
本当、男って簡単に騙せるわよね。

「ふふっ、女の子には分かるのよ。これもさくらちゃんの『成長』なのよ」
「むむむ、女の勘恐るべし……！」
浩介くんが「よく分からないけどすごい」と言う態度を取る。
「ふふっ、浩介くん。女の子は嘘ついてもすぐ見抜いちゃうんだからね」
ニッコリ笑ってあたしが言う。
「うー、やっぱり優子ちゃんも女の子としてまだまだ『成長』しているんだな」
そう、そしてこれはあたし自身の「成長」でもある。
優一の頃には決して分からなかった、いわゆる「女の勘」と言うものを理解できるようになったことは、あたしとしてはかなり大きな前進だと思っている。
何故なら、女の子として生きていく上で、最初のうちはどうしても「知識」から入らなきゃいけない。
例えば、言葉遣いやお行儀、女の子としての振る舞いや服装と言った類がそれで、これらはいわば女の子としては表面的な事柄にすぎない。一皮むけば「男」が出てしまうようなもの。
あるいはもっと深い所にある「感性」にしても同じで、誰かに指摘されて治そうとする、いわば「知識」的な一面が強い。
それに対して、さくらちゃんの「魔性」を見抜くというのは、相手の心の微妙な変化を「女として」見抜かなければいけない。
これは多分に「直感に頼る」と言う一面が強く、誰かに教わって、知識力で出来ることではない。女の子の、本当の芯の部分を磨かないといけない。
それ以前にも、去年の今頃は、あたしの心は女の子なのに肉体的反射が男のままということがあって、浩介くんのことが大好きなのに、触れ合うことが出来なくて、あたしも随分と苦しめられた。
でもそれは、今回の「女の勘」よりはまだ初歩の段階の「条件反射」という段階だと思う。条件反射を女の子にして初めて瞬時の女性的直感が身につくとあたしは思う。

「……そうね、あたしの中で『女の勘』が使えるようになったのは、大きな前進だと思ってるわよ」
思えば、あの時迷走していた幸子さんをひっぱたいた時、喧嘩の果てに泣いた幸子さんを優しく抱きしめた時、あたしの中で初めて「母性」と言うものが生まれた。
永原先生もそう言っていたし、あたしも同意見。
今になって思えば、あたしの中で「芯」から女の子になり始めたのはその時からだと思う。あの時は、あたしの直感が全てあの行動を引き起こしたんだと思う。うまく行ってよかったわ。
「優子ちゃん、やっぱりもっと前進しないとダメって思ってる？」
「うん、だって、永原先生でさえ『まだまだ』って感じることもあるのよ。あたしだって、みんな女の子だって言ってくれてるけど、実際には多分まだ女の子の入り口付近でさまよっているんだと思う」
「俺は、そうにも思えねえけどなあ――」
浩介くんが唸るように言う。確かに、男の子から見たら、もうあたしは何から何まで女の子そのものだと思うし、多分去年のあたしでも同じ感想を抱いたと思う。
それはつまり、女の子の奥が、思ったよりもずっと深かったということを意味している。
もしかしたら、すでにかなり深層までたどり着いているのかもしれない。
でも、深海調査と同じで、水中深くを進もうとすればするほど、視界も遮られ、水圧も増していく。そうなれば、困難を極めることになる。
「浩介くん、より深く女の子になるというのは、深海調査にも例えられるわ」
「どう言うこと？」
あたしは、さっきの考えを言葉にしていく。
「去年水族館に行った時のことを思い出してみて？」
「お、おう……」
水深も浅い海の表層は太陽の光もよく届き、魚達も盛んに居て、人

間も潜ることが出来る。
だけど、水深が深くなるに連れ、水圧が増し、太陽の光も届かなくなり、未知の領域が増える。
そうなれば、いかに深海調査艇と言えども、捜索が困難になる。
つまり、ＴＳ病患者が女の子として研鑽を深めれば深めるほど、手探り状態になりやすい。
実際にはこの病気は自殺者が多いけど、浅部の学習はカリキュラムが出来ているくらいには、方法が確立されている。
「永原先生が言っていたのよ。『実は言葉遣いを女の子にするのはそこまで難しくなくて、本気でやろうとすれば男の体のままでも出来る』って。特に身体が女の子になって一番簡単なのは一人称の変更よ。それが海のちょうど海面の部分と言ってもいいわ」
「あ、ああ」
そう、あたし自身がそうだったように。
そして、一人称以外の言葉遣いや仕草、振る舞い、スカートへの抵抗感の排除、少女漫画や女性誌による女性文化への適応、生理への適応、家事への適応、カリキュラムは全て「表層」の段階、あたしが幸子さんとの東京観光で産み出した最初のマニュアルなんて、「海面」と言ってもいい。
しかし、今のあたしが挑んでいるのはいわば女の子としての「深海」を、深海調査艇の僅かな光源だけで探索しているようなもの。
あたしの説明に、浩介くんはうんうんと頷きながら効いてくれる。
「間もなく甲子園、甲子園球場前です。阪神バス、ご利用のお客様お乗り換えです。甲子園の次は西宮に止まります。出口は左側です」
あたしがそんなことを話していると、電車が甲子園駅に停車する。
甲子園球場の最寄り駅ということだが、もちろん住宅街でもあるので野球以外の利用者も多い。
「阪神甲子園球場、阪神タイガースもここの所属なんだよな」
「うん、阪神ファンはこの電車にのるんだよね」
鉄道会社が野球の球団を持つというのも、阪神と西武だけになってしまった。

あー、西武は微妙に違うのかな？
昔は色々な会社が球団を持っていたみたいだけど。
その後も、電車は西宮、芦屋、魚崎と停車していく。
「快速急行」を名乗るだけあって、それなりに飛ばしていて、関東のようなノロノロ運転はほぼないが、それでも新快速を使ってしまった後では物足りなさは否めないというのが正直な所。
神戸ビーフを食べたら、もう残るはホテルに戻るために新快速を使うことになっているから、比較もできてしまうだろう。

「きゃはは、何それ浩介くんー！」
「だって優子ちゃんが――」
さっきまで、「鉄道種別とは何なのか」「女の子になるのは深海調査に似ている」という、無駄に高等なことを考えていたのもつかの間で、あたしたちはいつの間にか他愛もない話に移行していた。
やがて電車は、再び地下へと潜り、暗いトンネルの中を進み始めた。そして、一斉に減速をはじめ、終着が近いことが分かる。
「間もなく三宮、神戸三宮です。ポートライナー、地下鉄、北神急行、ＪＲ神戸線をご利用のお客様お乗り換えです。お出口左側です。この電車は神戸三宮止まりです、神戸三宮より先の新開地、姫路方面お越しのお客様は後から参ります直通特急にお乗り換えください。本日は阪神電車をご利用いただきまして誠にありがとうございました」
車掌さんの放送が終わると、この電車も終点へと到着した。
「さ、行こうか」
「うん」
浩介くんに引っ張られて、あたしたちは駅の改札を後にした。

どうやら、駅という施設で迷う原因というのは主に地下街の迷路にあるらしい。
「よしっ！」
ここ三宮も色々とややこしいと思っていたけど、地上に出て、浩介くんがスマホの地図を片手に歩いていると、あっという間に目的のお

肉屋さんに着いてしまった。

# 修学旅行3日目　神戸のお肉屋さん

「ここね、うわー、いかにもな高級店ね」
あたしたちは、その外観からして高級感あふれる様相に圧倒される。
一応店の前にあるメニューに値段は書かれているけど、どれも数千円はする。コース料理っていうのもあるけど、どれもこれも1人1万円以上するんだから驚きだ。
しかも、メニューの上には「最高級Ａ５」と言う文字が踊っている。
「浩介くん、Ａ５って？」
あたしはスマホを持ってないので、浩介くんに聞いてみる。
浩介くんは、すぐに意味を調べてくれる。
「うーん、どうやら肉の質の等級で、理論上Ａ５は一番いい肉らしい」
浩介くんがスマホの画面を見せてくれる。ＡＢＣは歩留まりの良さを表していて、数字は４分野の質を独立して精査して、そのうち最も悪いものに等級される。つまりＡ５は歩留まりが最も良く、なおかつあらゆる肉質で優れた肉ということになる。
ちなみに、和牛と国産牛の違いとか、肉のブランドの違いなんかもあるらしい。
「にしても神戸牛と神戸ビーフって違うんだな」
浩介くんがそう話す。
他にも、ブランド条件に合わずに「○○牛」と名乗れないのを「○○産牛肉」とごまかす例もあるという。
「うーん、あたしも女の子として、主婦としてそういうの覚えないといけないわよねー」
「そうだよなあ……優子ちゃん大変そうだ」
浩介くんがどこか浮いた感じで言う。
もう、結婚について意識しすぎて自制するようなことも少なくなった。
多分、今更もう婚約の破棄は出来ない。
３月のあの日、遊園地で浩介くんが観覧車で……今思えば、あれが

プロポーズになったと思う。
「ともあれ、入るか」
「はい」
あたしの財布の中には数枚の諭吉が入っている。いくら高級店と言っても、まず問題がない金額だと思う。
「いらっしゃいませー！　２名様ですか？」
いかにも上品そうなウェイトレスさんが出迎えてくれる。
「はい、２人です」
あたしも、少し襟を正す感じで言う。
あたしたちもお客さんだから、雰囲気に飲まれて威圧されちゃいけない。
「かしこまりました。只今ご案内いたします」
そう言うと、丁寧に先導してくれる。
ちなみに、入り口には別のウェイトレスさんがすかさず立つ。
多分、誰かがドアを開けた時にすぐに対応できるようにしているんだと思う。
「こちらへどうぞ」
「はい」
扉付きの小さな個室で、机と椅子がある。
和牛のお店だけど、一応「洋食店」と言う体裁のため、個室も洋風な感じでまとまっている。
昨日永原先生たちと食べたお寿司屋さんでの個室とは好対照をなしている。
「それで、どうする？」
「うーん、焼き肉にしようかな？」
メニュー表を見ていると、やはり焼肉やすき焼きなど、肉系のメニューが豊富で、焼き肉用の台も置いてある。
「ともあれ、エネルギー使わんとな。今はシーズン夏だし」
う、うん……！
浩介くんが何種類か肉を注文する。

どれもこれも高級品で、４桁はくだらない。でも、財布には余裕がある。
「とりあえず、神戸ビーフの焼肉と、それから小ステーキを山分けしようぜ」
「うん」
浩介くんは、なるべく最小単位で注文して、品目数を増やす、いわゆる「浅く広く」を狙っている。
あたしが少食なのも鑑みて、ゆっくりと焼くとも言っていた。
「よし、こんな感じでいいか？」
浩介くんが、メモ帳に手書きした字であたしに見せてくる。
あたしと浩介くんの食べる量を鑑みて、支払金額は１：２．５程度の割合で分けていくという。
このあたりのデート代については、あたしたちはかなりきっちりしている。どちらともなく、その方がいいということで、特に異論がない。
「お肉ばっかりだね」
まあそう言う店だから、当たり前だけど。
「ああ。特に肉類は、鍛えて筋肉つけるために重要だからな。優子ちゃんを守るためにも、高級なお肉をここでたくさん食べないと」
「うん、ありがとう浩介くん……こんな時まで、あたしのこと思ってくれて」
正直に言うと、ここまでしてくれるのはとても嬉しい。
食べる時くらい、食欲に身を任せてもいいのに。
それなのに浩介くんは、それさえもあたしのため、あたしを守るためと言ってくれる。
その一言一言が、あたしを浩介くんから逃げられなくさせる。
「どういたしまして……ど、どうしたの急に？　俺の顔、何かついてる？」
「うん、すっごい素敵で、あたしをメロメロにさせちゃうフェロモンがついてる」
「うっ……」

浩介くんが一気に顔を真っ赤にして、あたしもセリフ言った後で恥ずかしくなっちゃって、肉の赤身のように顔が赤くなってしまう。
「優子ちゃん、その……想ってくれるのは嬉しいんだけど……さすがに恥ずかしいというか――」
「だって、浩介くん素敵すぎちゃって――」
じゅうううう……
鉄板じゃなくて、顔で焼き肉が焼けそうだわ。
「はぁ……はぁ……ちょっと落ち着こう」
「う、うん……そうだわ、注文、しましょう。そうすれば冷静になれるわよ」
「だ、だな」
浩介くんはボタンを押す。
ずっと遠くで何かが鳴っている音がした気がする。
とにかくこの個室、かなり防音がなされていて、隣の焼き肉の音どころか、上のスピーカーから静かに流れてくる音楽しか聞こて来ない。
やっぱり高級店はこういう所からお金使っているのね。
コンコン
「失礼致します」
ガチャッ
ノックの音の後、男性の店員さんが現れる。
「ご注文伺います」
「えっと、小ステーキ1つ――」
浩介くんが、1つ1つメモ帳を読みながら注文していき、店員さんがそれを機械に読み取る。
あたしはそれをじっと眺める。
「――それからオレンジジュース2つで」
「はい……ご注文は以上でよろしいでしょうか？」
「はい」
「ご注文確認いたします、小ステーキが1点――」
店員さんが、注文確認として復唱し、浩介くんもメモ帳を見ながら

間違えていないか確認する。
「――オレンジジュース2つ、以上でよろしいでしょうか？」
「はい」
どうやら、間違いはなかったみたいね。
「ではごゆっくりおくつろぎください……失礼致します」
店員さんは丁寧に頭を下げて、ドアまできちんと静かに閉めてくれた。
とにかく動作が一つ一つ上品だと思う。
「すげえ上品だよなあ」
「うんうん、あたしもあんなふうに上品なお嬢様になりたいわね」
そうすれば、浩介くんも喜んでくれそうだし。
「ふふっ、優子ちゃんはそのままでいいんだよ」
浩介くんのベタで優しいセリフ。
でもあたしは、これをあえて否定したい。
「残念、そのままじゃ堕落しちゃうわ。初日の新幹線で見たでしょ？
龍香ちゃんのお友達の、女子校の2人組」
「あっ！」
浩介くんがはっと思い出したようになる。
「それに、浩介くんさっき、お肉食べて鍛えてあたしのこと守ってくれるって言ったでしょ？　浩介くんだけ変わる努力させておいて、あたしがそのままじゃダメよ」
「うー、何も言い返せない」
浩介くんはあっさりあたしに論破されてしまう。
あたしも、男の子の操縦の仕方も、大分分かってきた気がするわ。
まああたしもあたしで、浩介くんにうまく操縦されちゃってるけど。
コンコン
「失礼します」
ガチャッ
そんな話をしていると、先程の店員さんがジュースを持ってきてくれた。

「こちらオレンジジュースになります」
そしてさりげなく、コップの右側にストローを置いてくれる。
「失礼しました」
また丁寧な所作で扉を締めてくれる。
あたしたちは、とりあえずオレンジジュースを飲む。
ちなみに、オレンジジュースの値段は、他のレストランとほぼ同じでライスなんかもおそんな感じだ。
つまり、この店はあくまで「お肉」のお店としてオープンしているため、それ以外のメニューについては重きを置かれていないのだ。
一応、コース料理にすると、単品よりも高級な品も出てくるらしい。
ただ、コース料理だとあたしが食べきれない可能性があるので、こっちにした。
あたしもあたしで、食べる量について考えることがある。もちろん太り過ぎなのは良くないけど、今のムッチリとしたエロい体格を維持するためにも、今の量だとちょっと少ないとも思っている。
特に食べる量が少なすぎると、胸に蓄えられている脂肪を使われちゃうかもしれないという何となくの恐怖感があった。
何とかして、胸とお尻に脂肪をつけてこの体型を維持したい。肩は今まで以上にこっちゃうけど。
そんなことを考えているとオレンジジュースが空になる。
コンコン！
「失礼します」
そして、今度はウェイトレスさんが、一気に注文した肉を持っていってくれる。
これで、残りはステーキだけ。
ちなみに、箸やナイフとフォーク、タレと言ったものは全て机にあるので、小ステーキを山分けするには問題がない。
「さ、焼くぞ」
「うん」
店員さんがさり気なく置いてくれていた長い取り箸を使い、浩介くんは網の上に肉を置くと、「じゅううう」という美味しそうな音が聞こ

えてきた。
「そう言えば、いつの間に点けられていたわね、これ」
「ああ、全然気付かなかったよ」
このあたり、高級店の店員は普通のお店とは違うんだろうか？
それとも、遠隔操作かな？
……まいっか。
とりあえず、適当に肉汁が浮き出てきたので、あたしがひっくり返す。
あたしたちは急いで焼肉のタレをかける。
ちなみにこのタレも、近所の有名店のものらしくて、小さな紙の宣伝広告のフリーペーパーまで机の上には置かれている。
「さ、食べるか」
「うん」
「いただきます」
あたしは1枚、浩介くんは2枚の焼き肉を取り、それぞれ口に運ぶ。
「んーーー!!!」
口に入れた瞬間、とろりと蕩けるような脂身が口いっぱいに広がり、柔らかい食感、そして脂身がたくさんあるのに、むしろあっさりしたような味わいがする。
「うおー！　すげえ！」
「ものが違うわね！」
このお肉は、普通にお肉屋さんで買えば、１００グラム１０００円はくだらない高級肉だと思う。いや、もしかしたらもっとするかもしれない。
浩介くんは、夢中になって次々に取り箸で肉を焼いていく。
どれもこれも、あたしたちが食べた今までの肉とは比べ物にならない様な美味だった。
コンコン
「はーい！」
「失礼します」
ガチャッ

お肉を焼いて食べていると、また店員さんが現れた。
「お待たせいたしました、こちら小ステーキになります。ご注文の品物は以上でよろしいでしょうか？」
「はい」
「それではごゆっくりおくつろぎください」
店員さんが会計の時に使う紙を置いていってくれる。
「うわあ、これはすごい……」
浩介くんが中身を見せてくれる。
「ひゃー、次に食べられるのは何年後かな？」
会計を見ると、２万３３２８円とあった。凄まじいわね。
浩介くんとあたしは１：２．５の割合よりは少しあたしが多いので、あたしが７３２８円を払って、浩介くんが１６０００円を払うことになった。
「ま、それでも財布はあんまし痛まねえけどな」
「なんだかこれだけのお金を払って……セレブ気分よね」
あたしと浩介くんが、そんな話をする。
あたしと浩介くんがレシートの上にお金も置いたので、あたしたちは食べることに専念できる。個室だから盗難の心配もない。
次々と肉を食べていく。とにかくどれもこれも、「最高級」を謳うだけあって絶品だ。
そして、今届いたステーキ、これも浩介くんと山分けするがここだけは半分半分だ。
浩介くんが、ナイフで切ると、あたしにもナイフとフォークをくれるので、机に備え付けの取り皿を取り出して持っていく。
更に細かくナイフで切ってっと。ふう、ナイフなんて久しく使ってなかったけど、女の子の身体でも問題なく切れたわね。
「ぱくっ……うーん！　おいしいわぁ！」
これもまた、思わず声に出てしまうくらいに感激するような美味しさだった。
ほっかほっかの出来たてステーキだけど熱さが味を殺していない。
味付けもまた、絶妙な絶品だ。

とにかくこの最高級肉の特徴は、霜降りで脂も凄まじいのに、口に入れると味がしつこくないことだ。安物の肉は何度も食べたけど、その時の脂が凄まじかったりするのは、とにかく強引で濃い味付けになっている。
「さ、優子ちゃん、残りも焼こうぜ」
「うん」
あたしたちは次々と肉を完食する。
追加での注文はいらなさそうだけど、ともあれ全部食べ終わった。
「ふう、食った食った！」
「美味しかったね」
あたしたちはもう一度金が足りるか確認し、レシートを持って部屋を出てレジへと向かう。
それを見ていた店員さんが全く無駄のない動きでレジに素早く行く。
「えーそれではお会計――」
「ちょうどいただきました。本日は誠にありがとうございました。お気をつけていってらっしゃいませ」
あたしたちはお会計を払い、深々と頭を下げてお辞儀してくれた店員さんを尻目に店を出る。
外はもう、すっかり日が落ちていた。楽しい時間、本当にあっという間に過ぎてしまった。
「さ、京都へ帰るか」
「うん」
あたしたちは行きと違い、ＪＲの「三ノ宮駅」に来る。
「結構運賃掛かるわね」
京都までは１０８０円かかる。
阪急線でも帰れるけど、途中駅で乗り換え必須な上に、所要時間もかなり遅い。
「うー、混んでいるわね……」
たまたま少し前に新快速が出ていったので、列の最前列にこそ並べたけど、１２両編成の新快速への待ち客がどんどん並んでいく。

独特なチャイムとともに放送が流れ、新快速電車が到着する。
そして、大勢のお客さんがこの駅で降り、あたしたちは再び、何とか進行方向左側の座席を取ることが出来た。
列の後ろのお客さんは、着席にはありつけずに立つことになる。
行きに乗った電車より、やや古びた印象で、電光掲示板などを考えると、おそらく行きに乗った電車よりも旧式の電車だと思われる。
「お待たせ致しました。本日もご利用いただきまして誠にありがとうございます。この電車は新快速電車の――」
行きと同じように、停車駅案内が流れる、京都から先は後ほど案内とあったけど、まあいいわ。
車掌左側にはチョコレート色の電車が走っている。
さっき「阪急梅田駅」で見たものだ。というと、これが阪急線だろう。
「それにしても、あの会社すげえよな」
「うん、色がどれもこれも全く同じって――」
一応、沿線はブランド価値高いらしいけど。
ともあれ、新快速は芦屋駅まで止まらない。
乗ってすぐに分かったが、さっき乗ってきた阪神線の電車とのスピード差は明らかだ。
「新快速、速いなあ」
「関東にも欲しいよねこれ」
「あーでも、関東でこの座席だったら混みすぎてやばいでしょ？」
確かに、大都会とは言え比較的関東よりは人の少ない関西で１２両編成、でもこの混雑。関東だと破綻は目に見えている。
「間もなく芦屋、芦屋です。芦屋の次は尼崎に止まります。この先各駅に止まります普通電車の高槻行きは――」
新快速は、格段に速い。
これでは、私鉄は競争力が落ちてくるのも無理は無いと思った。
「間もなく尼崎、尼崎です。宝塚線はお乗り換えです。尼崎の次は大阪に止まります――」

車掌さんの案内放送とともに、電車は尼崎駅に到着する。
「あれ？　同じ駅名なのに、さっき乗ってた阪神線の電車が見えねえな」
「言われてみればそうね。位置が違うってことかしら？」
確かに、放送でも乗換案内はしていない。
ということは、駅名は同じだけど、位置が違うことになる。
浩介くんがスマホを取り出し、地図を見ている。
「うん、やっぱそう見てえだな」
「あ、本当だわ。紛らわしいわね」
地元の人も、どうやって区別しているのかが気になるわね。
多分「ＪＲ尼崎」とか「阪神尼崎」って区別しているんだとは思うけど。
そして、あたしたちは新快速に乗ってあっという間に京都駅に到着した。
１時間位かな？
そして、地下鉄を乗り継ぐ、こちらは朝のことを思い出して、乗れば問題ない。
楽しい時間はあっという間で、あたしたちはもう、ホテルの部屋の分かれ道に着いてしまった。
「あーあ、修学旅行も明日で終わりかあー」
「そうだねえ、ま、いい思い出になったよ」
一歩が踏み出せず、つい話題をつなげてしまう。
「それじゃ、また明日ね」
「うん」
ホテルの鍵はフロントに問い合わせたらあったので、つまりあたしが一番乗り。
あたしは鍵を開けて部屋に入る。予想通り無人の部屋だ。
「ふー」
あたしはゆっくり休みながら、今日のことを思い出し、恵美ちゃんと龍香ちゃんの到着を待った。

この後は、夜お風呂に入って寝るだけとなる。

# 修学旅行最終日　古き京都のお寺たち　前編

「ふう……」

あたしはまた、ホテルのベッドの上で起きた。

昨日は色々なことがたくさん起きて、疲れていてあれからお風呂に入ってすぐに寝てしまった。

恵美ちゃんと龍香ちゃんも随時起きてくれる。

今日は修学旅行の最終日で今日はクラスごとに違うコースを廻ることになっていて、あたしたちはこの京都の史跡を回ることになっている。

他のクラスは奈良とか大阪って人も居てこの予定に合わせる形でみんな京都は避けていた。

あたしたちは「北大路駅」から「大徳寺」、「鹿苑寺」、「龍安寺」、「仁和寺」を徒歩で巡って「御室仁和寺駅」に抜けるルートが計画されている。

特に、鹿苑寺と龍安寺はあまりにも有名なお寺だろう。鹿苑寺金閣といえば、教科書にも出てくるし。大徳寺と仁和寺は初めて聞いたけど、残る2つのお寺は以前から名前を知っていたお寺だ。

ちなみに、これらの拝観料もきちんと予算でやりくりしなければいけないから。何気に厳しい。

まあ、あたしは蓬莱教授の支援もあるから何とでもなるんだけど。

今日の服は、寺院に行くということで、ミニは辞めて膝丈の落ち着いた茶色のスカートを選ぶことにした。

頭の白いリボンはそのままだけど、それでも普段より落ち着いていると思う。

さて、あたしたちは奈良や大阪、更に京都でも別のコースの2組から4組とホテルで分かれ、永原先生の引率になる。

「これから行くお寺、みんな私が生まれるよりも更に前からあるお寺ばかりです」

永原先生が生まれたのは戦国時代で、応仁の乱以降京都が荒廃してしまった。

それを逃れたお寺などは、当然それ以前に建てられたものが多い。
そうなると、それらの文化財も当然永原先生が生まれる前に作られたということになる。
引率中、永原先生が昔話をしてくれた。
永原先生は、本能寺の変の後に京都に初めて訪れたという。
それ以来、明治などにも来たことはあるが、実際の所、江戸時代はほぼずっと江戸か江戸城に居たために、徳川の世となって以降は、学校の修学旅行以外ではあまり訪れたことはないという。
「あの頃から、変わってないといいわね」
永原先生が移動中、あたしにそんなことを話しかける。永原先生は、「長く続くのは難しいけど、壊れるのは一瞬」だとも言っていた。戦国時代の人らしい物言いだと思う。
あたしは、そんな永原先生を見て、一つ疑問がある。
「あたし、何だか分からないわ」
「ん？　何が？」
「永原先生が生まれる前からあるお寺がすごいのか、それとも京都の文化財と張り合えるくらい長生きな永原先生がすごいのかよ」
あたしが感じた疑問を永原先生に投げかけて見る。
「あはは、さすがの私でも京都の文化財には勝てないわよ。老舗企業なら江戸時代の創業が多いから結構勝てるけど、文化財ともなると、私の時代は新しいわよ」
永原先生は軽く笑い飛ばしたように言う。
確かに、これから巡るお寺も、永原先生以前に創建されたお寺ばかりだ。
「次は北大路、北大路です」
「さ、降りるわよ！」
列車の案内放送を聞いた永原先生の声かけと共に、クラスが一斉について行く。
まずは駅の西側に出て、通りをまっすぐに行けば「大徳寺」に到着する。
さて、永原先生が窓口で「小谷学園の団体客」である旨を告げ、境

内に入って広い所で拝観料を回収する。
みんな修学旅行代に余裕を持っているため、払えないというトラブルはない模様だ。
ちなみに、払えない場合は外で待ちぼうけを食らってしまうことになる。殆ど前例はないみたいだけど。
「さ、行くわよ」
永原先生が、まず案内役のお坊さんの紹介をして、このお寺の境内を案内してくれるという。

「こちらの道に続いているのは非公開ですが、黄梅院と言いまして信長が父の織田信秀の菩提を供養するために建てたのが始まりです」
境内を歩いていると、お坊さんが早速説明してくれる。
あれ？　信長って無宗教じゃなかったけ？
「はーい！」
「どうぞ」
気になったのであたしが質問してみる。
「信長って仏教嫌い何じゃないですか？　比叡山燃やしたり」
ちなみにこのお坊さん、あたしの胸に一切視線を寄せない。さすが修行を積んでる人は違うなあと思う。
「実はですね、信長が嫌ったのは仏教の修行僧が政治に口を出したり、武装したりすることだったんです。本願寺とか同じもですね。純粋な仏教に関しては、むしろ尊重していたくらいでして、愛知県には織田信長が家臣の平手正秀の菩提を弔った『正秀寺』というお寺もあります」
お坊さんが懇切丁寧に説明してくれる。
結構意外な一面よね。
「ありがとうございます」
ちなみに、観光客やクラスの男子の方は、相変わらず煩悩丸出しであたしの胸をじろじろ見てるけど。とにかく、これじゃ何のためのお寺なのかわからないわね。
「私からも補足しておくね。当時の比叡山延暦寺の堕落ぶりはすさま

じくて、女人禁制のはずなのに女が大量にいて、修行をさぼって賭事や足軽のように武装していたりしたわ。そして政治に手を出すのだから、仏教的ではないわ。織田殿の仏教との交流では、他にも本能寺では僧侶と碁を打っていたり、『岐阜』の地名も、懇意にしていた僧侶の提案によるものです」

お坊さんの丁寧な説明を更に分かりやすく、永原先生も補足をしてくれる。

どちらにしても、戦国時代の延暦寺はひどかったらしい。今は修行が厳しいお寺で有名だけど。

また、最近では以前に言われていたように全山丸焼けで文化財をことごとく燃やしたというのはやや誇張だと言う。また、永原先生が生まれる２０年ほど前にも、比叡山は焼き討ちにされたことがあったらしい。

永原先生も、当時は真田の村にいたために、直接焼き討ちを見たわけじゃないから、実は最近までは徹底的に焼き討ちを受けたというのを信じていたらしいけど。

さて、ここ大徳寺には、永原先生と同年代や一世代後の人、あるいは永原先生以前の時代の人の建てた建造物も多く、その度にお坊さんや永原先生が説明してくれた。

ちなみに、インターネットで永原先生の素性を知ったお坊さんも多いらしく、この大徳寺も、そんなお寺の一つだという。

「懐かしいわね、ここ。あの時のままだわ」

永原先生は、本能寺の変から大坂の陣までの放浪生活中に何度も京都を訪れていて、この寺にも立ち寄ったことがあったという。

「ああ、まるで同じだわ。この庭、この風景、違うのはお寺の外かしら？」

永原先生が一人感慨にふけっている。このお坊さんも永原先生の正体を知っているのか、お坊さんは昔話を永原先生に聞いていた。

寺がずっと残っていること、遠い昔の記憶が甦るその思いは、永原先生にしか分からない感動だと思う。

そして、そのうちの一つの建物に入らせてもらった。

永原先生も、中に入るのは初めてだという。
永原先生の放浪中は、特に山奥にある寺は女人禁制が多かったが、平地の場合はある程度緩和されていたという。
また、明治以降様々な場所で女人禁制が解かれたけれども、永原先生にとって、それらに踏み入るのはどうしても憚られるという。
「解除されたんだし、気にすることねえだろ」
恵美ちゃんが不思議そうに言う。
「ここはまだいいですけど、高野山とか比叡山には、これまでも、そしてこれからも登るつもりはないわ。私が行ったら、修行の邪魔になるわ」
「信心深い方ですね。やはり当時というのはそんなものだったんですか?」
「ええ、当時は仏教も、今とは大違いでしたね……それにしても、落ち着くわ」
永原先生が印象深い言葉を言う。

そんなこんなで、最初の寺院の見学が終わり、あたしたちは次のお寺に行く。
次の目的地は足利義満の鹿苑寺……いわゆる「金閣寺」で、歴史の教科書にも出てくる金ぴかのお寺だ。
あたしたちは2列で京都の道を歩く。鹿苑寺が近付くにつれ、人口密度が高まり、外国語も増えていく。
「私が訪れた京都は、もっと静かだったんだけどねえ……」
隣を歩く永原先生がため息交じりに言う。
「昔は人口も少なかったですから」
あたしが言う。
「観光地だったのは昔からですけど、最近のうるささは困ってるわね」
「やっぱり外国語の声が大きい気がするな。俺も子供の頃に来たことあるけど、人が多くても雰囲気は静かだったし」
後ろを歩いていた浩介くんが気付いたように言う。
「そうねえ……うちの生徒たちは本当にまじめな人ばかりよ」

それはやっぱり、たった一つの校則のおかげなんだと思う。
ともあれ、大徳寺の時と同じく、金閣寺も有料で入る。
今回はガイドのお坊さんはいなくて、永原先生がそのままガイドをしてくれるという。
「お、教科書のままだな」
「うん、近くで見ると凄いわね」
しばらく歩くと、池の向こうに、金がふんだんに使われたあまりにも有名なお寺が目に入る。
ちなみに、これは舎利殿で、本殿とはまた別で、見るためには少し歩く必要がある。
「今のこれは3代目よ。応仁の乱の時と、戦後とで2回焼失しちゃったわ。私は2代目も知っているけど、今とはちょっと趣が違うわね」
永原先生が趣が違うと言って来た。
「え？　どこが違うの？」
あたしが聞いてみる。
「うん、あそこの2階部分がちょっと違うのよ」
永原先生が、金閣寺の2階部分を指さして、当時との違いを語る。
永原先生曰く、戦後に焼失した原因は放火らしい。

「ちょ、ちょっとやめて！」
「!?」
突然、桂子ちゃんの大きな声が聞こえてきた。
「おいやめろよ！」
「何してんだ！」
それに呼応するかのように、男子たちの声が聞こえる。
「どうしました木ノ本さん！」
「!!!」
１８０センチは優に超えてそうな白人男性が、慌てて逃げるのが見えた。
「あ、先生すみません。ちょっと離れたところから見てたら、ナンパされまして」

桂子ちゃんがナンパされたと言う。確かに、状況を考えるとそんな感じだと思う。
今回は、すかさず近くにいた男子が声を聞いて駆けつけてくれたので、事なきを得た。
「最近、京都でもナンパが多いみたいよ」
「まさか寺でナンパしてくるなんて思わなかったわ」
永原先生の言葉に、桂子ちゃんがやや呆れた顔で言う。
今の時代、「罰が当たる」という概念も薄いみたいで、仏教と接点がないからそうなっているのかは分からないけど、ともあれ桂子ちゃんは災難だった。
まあ、あたしもナンパで結構痛い目に遭ってるけど、浩介くんと一緒に歩くようになってからはピタッとナンパが止んでしまった。
ともあれ、あたしたちは思い思いに金閣寺を写真に収める。
あたしも数枚、携帯のカメラで撮っておく。

金閣寺には休憩所があって、そこで支給のお弁当を食べることになっている。
「ふー疲れたー！」
お昼時とあって休憩所はかなり混んでいて、何回かに分けて入ることを余儀なくされた。
あたしは浩介くんの隣に座る。
「やっぱ、有名なのは人気だよな」
「うん、間違いなく次の『龍安寺』も人でいっぱいっぽいね」
特に今日は夏休み初めの土日だし。
さて、お弁当はというと、平凡なコンビニのから揚げ弁当で、あたしたちは昨日肉をたっぷり食べた後で、ちょっと食傷気味な気もしていて、浩介くんもちょっと不満気だ。
「うーん、でも鶏肉だし」
「うん、そうだな」
ともあれ、全員が座り終わって「いただきます」をする。
パンフレットで予定時間を見ると、桂子ちゃんのトラブルがあった

ものの、かなり余裕を持っていたのか、予定よりも早く進んでいる。奈良・大阪組は廻れる名所も少ない。一応大阪組だけは、新大阪駅から新幹線に乗れるけど。
「そう言えば、帰りはこだまなんだよね」
「そうだな」
あたしは、帰りの新幹線について考える。
「各駅停車、どんな感じなんだろうね」
遅いことで有名だが、実際どんな感じなのかは、体験してみたいところでもある。
そんなことを考えながら、あたしはお弁当を完食、朝食を食べそびれた人もいて、何人かは物足りなさそうな表情をしている。
「食べ終わった人は席を立ってください」
既に食べ終わった永原先生が、席を立ちながら生徒たちに声をかけ、生徒たちも混雑を悟ってさっと席を立つ。
通行の邪魔にならないところに集まり、鹿苑寺を後にする。

さて、修学旅行最終日は、龍安寺がメインといってもいいかもしれない。
石庭と、更に写真撮影は不可ながらも、特別に普段非公開のものを見せてくれるという。
「それにしても人だらけだわ」
「うん、そうだな……」
龍安寺に入ってみたものの、とにかく人が多すぎる。
京都は観光都市であり、観光は重要な資源とは言うものの、急激な人の増加はやっぱり良くない。
少しずつ増えていくならともかく、急な増加はパニックを引き起こしかねない。
寺の境内にも、数か国語でマナーを呼びかける張り紙がたくさんあった。
おそらく、各寺院も対応に追われているんだと思う。
そんなこんなで、あたしたちは「龍安寺」へと到着した。

ここでも拝観料を徴収し、寺の境内へと入る。
ちなみに、龍安寺では再び案内のお坊さんが付いてきてくれる。
何と、この龍安寺の住職さんだとか。
「この龍安寺は宝徳二年……１４５０年に細川勝元が建立した由緒あるお寺です……なんですがその細川勝元は応仁の乱の東軍総大将で、自ら建立した寺が焼かれてしまう原因も作ってしまいました」
住職さんの話は皮肉に始まったものの、まずはあまりにも有名な石庭に案内してくれるという。
途中大きな池が目に入って、この龍安寺の境内のうち、かなりの割合を占めているという。

「この石庭は、不完全の美、そして宇宙を表しています」
「「え⁉　宇宙⁉」」
住職さんの突拍子もないセリフにあたしたちは一様に驚く。
「この石庭は、どの角度から見ても全ての石が見えるようにはなっていません」
「え、どれ？」
あたしたちは互いにぶつからないように注意しつつ、石庭を３６０度の角度から見てみる。
「本当だわ」
「うんうん」
桂子ちゃんの驚きの言葉と共に、皆もうなずく。
確かに、とても神秘的だと思う。これは静かなら最高なんだけど、やっぱり観光客のざわつきは仕方ないのかもしれない。
「っと言われているんですが、実は一箇所、ここから見ると全ての石を見ることが出来ます」
「「え⁉」」
住職さんの突然のネタばらしに、あたしたちは一同に驚いてしまう。
「ほら見てください、この奥から８枚目の板……ここから見ますと、ほら、この石とこの石が僅かに見えるんですよ」

住職さんが部屋の少し奥の所に立っている。
確かに、かなりの視力が要求されそうだが、ここからだと全部見える。どうも、「全て見られないように出来ている」というわけでもなく、単に「部屋から見ることが出来る」のみでどれか一つが隠れるように見えるのは偶然だとかで、龍安寺の観光案内パンフレットには、そのことは一切書いていないという。
「私の感覚だと、この石庭より、あの池のほうが好きなんだけどね」
永原先生は、そんなことを一人でつぶやいていた。確かに、あの池も広いよね。

「さて、本日は皆様に特別に、非公開となっておりますお墓をご紹介します」
住職さんがそう言うと、池のほうにあたしたちを案内してくれる。
施錠されていて、「立ち入り禁止」ともあるけど、特別な許可を得てその中へと進む。
「こちらは、真田信繁夫妻のお墓でございます」
住職さんの案内とともに、あたしたちは気持ち忍び足で、そこへ向かうことになった。

# 修学旅行最終日　古き京都のお寺たち　後編

「そう言えば、どうして特別な許可になったんだ？　まさか先生が？」
全員が中に入ると、恵美ちゃんが住職さんに質問してきた。
非公開というのは池の中にある真田信繁夫妻の墓のこと、真田と言えば永原先生のコネ以外に考えにくい。
「ええ、その通りで御座います。永原さんは真田家所縁の方という事で、また歴代の住職の多くとも懇意にされていたということで、このお墓も永原さんのクラスのみ、特別に開放しております」
「もちろん、江戸時代とかは江戸城に居たから会ってなかったけどね」
いずれにしても、ここの代々の住職さんは、永原先生の正体を以前から知っていた、数少ない人物だという。
「……懐かしいわね。明治初期に来た時は住職さんには信じてもらえなかったけど、２０年後に来た時には信じてもらえたのよね」
２０年間も老けないんじゃそりゃあ不老だとも思うわよね。
ちなみに、永原先生は江戸より前の天正期にも、龍安寺を訪れたことがあるという。
あたしたちは数人一組で、順番にお墓に手を合わせる。３４人には狭く、終わったらさっと横にどく。
そして最後に住職さんと永原先生が供養する。
永原先生は「左衛門佐殿……またも参りまする……」とだけ言っていた。
永原先生は昔に向けて何かを言う時に、古語的な表現を使うことがある。
いわゆる「時代劇にありがちな古風な言葉」ではなく、当時話されていたと思われる、古典の授業でさえ習いそうにないような本物の古語だ。
でも、それはぱっと出てしまったというよりは、意識して言ったものだと思う。
おそらく、それは墓の主である真田信繁夫妻に向けての言葉だから。

住職さんのお経と共に、あたしたちも改めて自然に手を合わせ、そして線香をあげた。
「では参りましょう」
住職さんの言葉と共に、あたしたちは池の中の島を後にする。

「本日はありがとうございました」
「またいつでもお越しくだされ」
非公開の場所を出入りしたため、あたしたちは他の観光客から注目の的になってしまっていた。
ちなみに、最初の大徳寺のお坊さん同様、さすがに修行を積んでいるとあって、住職さんはあたしの胸を全く見ていなかった。
一方で、観光客たちは相変わらずあたしたちのことをじろじろ見ている。

あたしたちは、住職さんに見送られ、最後の目的地、「仁和寺」へと向かった。
こちらも創建は大変古いお寺で、そこかしこに観光客がいた。
そして拝観料を払うと、ここで自由時間になった。このお寺は、各自が自由に見ていいことになっている。もちろん集合時間はあるけど。
永原先生からは、さっきの桂子ちゃんの一件もあって、不審者に注意するようにとのお達しがあった。
「じゃあみんな解散！　ただし寺の外には出ないこと！」
「「はーい！」」

「浩介くん、こっちこっち」
「あ、優子ちゃん！　悪い高月、俺優子ちゃんとみてくるわ」
「ああ、呪われろよ」
高月くんが相変わらず物騒なことを言いつつ、あたしは浩介くんと合流し、自由時間を楽しむことにした。
浩介くんはどこを見るべきか迷っていて、あたしも、この広い境内

では迷いそうだった。
ともあれ、疲れたので見て回る前に一旦休憩と相なった。
「4日間どうだった？」
「うん、楽しかったよな」
あたしたちは、体力回復までの暇つぶしに、訳もなくこの修学旅行の4日間を総括する。
1日目は新幹線でホテルまで行き、その後京都の街並みを散策し、改めて永原先生の偉大さを感じることができた。
2日目は古い京都に新しくできた鉄道博物館で、永原先生のもう一つの顔を知ることが出来た。
3日目は新しいＴＳ病の仲間と出会い、そして浩介くんとデートもした。
そして今日は、みんなで行動して、古い文化財を見て回った。

「ふう、それじゃあ優子ちゃん、見て回ろうか」
「うん」
あたしは、浩介くんと一緒に、お寺の文化財を見て回る。
どれもこれも歴史ある建造物だけど、永原先生の生きている時代に建てられたものもあって、それも年季を感じさせるもの。
「すげえ古そうなのに、先生のほうが長生きなんだよな」
「うん、そうよね」
江戸時代に建てられたというこのいかにも古そうな建物は、応仁の乱で焼失したのを再建したらしい。
あの小さな童顔の女の子が、この地球で最も長生きの人間で、建物が朽ちるような年月を若いまま過ごしているという事実。
真田の故郷に行った時もそうだけど、本当に想像もつかない神秘だと思う。
「この修学旅行ってさ」
「うん？」
「永原先生の凄さを『修学』することも出来るよな」
浩介くんが面白いことを口走る。

「うん、確かにそう思う。人の一生じゃあ生で見えないはずのことも、知っているんだもんね」
この建物だって、きっとできたばかりは大層きれいだったんだと思う。
もちろん、今も清掃や修復はしてるだろうけど、数百年という時の流れは、如何ともしがたい面もある。
２日目の鉄道博物館、あれも永原先生の壮絶な長き人生を垣間見ることが出来た。
「あいたっ！」
突然、浩介くんの後頭部に自撮り棒が直撃した。
と同時に何かが落ちる音がする。
「浩介くん大丈夫？」
「あたた……」
結構おもいっきりぶつかったらしく、浩介くんも頭を抑えている。
「おいっ！」
浩介くんが、自撮り棒を持っていたカップルの男に怒鳴られる。
いかにもチャラチャラしていて、俗にいう「ＤＱＮ」という感じだ。
「スマホの画面割れたじゃねえかよ！」
その男が自撮り棒に付けていたと思われる割れ画面のスマホを向けてくる。
「知らねえよ。人間後ろに目がついてねえだろ」
「あ⁉　謝れよ！」
当り屋的な行動に、浩介くんも反論するが、この手の連中は得てして聞く耳を持たないのよね。
「何で？」
「っ！　てめえ……！」
その男が浩介くんを殴ろうとする。
浩介くんはパンチをよけると脚払いをしてバランスを崩させる。
「ぐっ！」
「自業自得だ。俺は知らねえぞ」
浩介くんは地面に倒れた男を一瞥する。

「ちょっと！　ゆう、大丈夫!?」
彼女と思しきギャルの女が「ゆう」と呼んだ男に駆け寄る。
あたしは、ちょっとだけ胸が締め付けられる。
何を隠そう、「ゆう」というのは、あたしがまだ男だった時に両親から呼ばれていた呼び方、嫌でも、乱暴だった優一の頃を思い起こしてしまう。
「優子ちゃん、行くぞ」
「う、うん……」
あたしたちは、この場を去る。既に他の観光客にも着目されている。
「待ちやがれおい!!!」
男が叫ぶが無視をする。
「てめえええ!!!」
すると、背後から、突進する音が聞こえる。
「優子ちゃん危ない!!!」
浩介くんとほぼ同時に振り向くと、その男があたしめがけて突っ込んできて、浩介くんが勢いを止めるためにとっさに右腕で腹を殴る。
「ぐふっ！　このっ……！」
男が浩介くんを殴る。周囲も騒然とし始めている。
「この野郎!!!　俺の彼女に手を出しやがって!!!」
殴られた怒りとあたしが襲われたことに対する怒りで、浩介くんが切れた。
「あがあぁあああ!!!」
浩介くんは、膝を使って「男の急所」を蹴り上げ、さらに肘で男の顔を思いっきり殴る。
男は鼻から鮮血を飛ばしながらも、最後の力を振り絞るかのように、なおも浩介くんを殴ろうとしたため、浩介くんは両腕でその右腕を掴み、ぐきりとあらぬ方向に曲げさせた。
しかし、既に意識がもうろうとしていたのか、その男から声は出なかった。
男はその場で、腕をかばいながらうずくまる。

「ちょっとゆう、いや……あんた何すんのよ！」
「正当防衛だ、諦めろ。てめえらが勝手に逆切れしたんだからな」
「だからってこんな……ここまでやらなくてもいいだろうが！」
ギャル女がなおも抗議する。
けばい化粧に汚い言葉遣い、如何にも「教養がない」という感じだ。
「俺個人と喧嘩するならまだいい、だがあれは明らかに俺めがけてじゃねえ、優子ちゃんに狙いを定めてた」
「うっ……」
「彼氏として、優子ちゃんに危害を加えようとする男を見過ごすわけにはいかねえ……急所は外してある」
浩介くんはギャル女に脅迫するかのように言う。
でもあれ、急所外したのかな？　まあいいわ。
「浩介くんはあたしを守ってくれたけど、あなたの彼氏さんは、人に言いがかりをつけて暴力振るおうとした挙句に返り討ちにされて、みっともないわよ」
あたしが、追い打ちをかけるように言う。
周囲は呆然としていて、誰もあたしたちに声をかけてこない。
「さ、今度こそ行くぞ。俺の気は長くねえからな。てめえも殴られたくなきゃ今すぐ俺の視界から消えろ」
「……」
浩介くんはそう言い残す。
また、浩介くんに守られちゃった。お寺の中だと言うのに、あたしはまた濡らしてしまった。どうしてもあがらえないメスの本能。好意を寄せるオスに守ってもらうことで、あたしの中で浩介くんへの想いは強まる一方だわ。

あたしたちは何事もなかったかのように境内の見学を再開し、途中で龍香ちゃん、さくらちゃん、高月くんを含む男子２人、そして永原先生とすれ違い、ちょっとだけ一緒に見た。
幸い、同じクラスの生徒や、永原先生にさっきのことは気付かれなかったみたいで、「遠くから騒ぎが聞こえた」という話題が出るにとど

まった。
最も、浩介くんも殴られた衝撃で頬を痛めたみたいで、それについては必死でやせ我慢していた。
さて、お寺の見学も終わって集合時間になり、集合場所に向かうと、クラスの生徒たちが何かに注目していた。
担架を持った救急隊員が２人いて、男性を一人運んでいるのが見えた。
「はーい、みんなこっちに注目して！」
永原先生がクラスの注意を自分に向けさせる。
あたしは心臓が高鳴っていた、相手の一方的な言いがかりとはいえ、あの騒ぎがあたしたちのせいだと知られるとまずいので、クラスの群衆の中央で目立たなくなる。
「これで、全ての修学旅行が終わりました。後は最寄りの駅まで歩いて、京都駅から新幹線に乗車します。では私に付いてきてください」
「「はーい」」
永原先生の先導であたしたちは寺を後にする。
救急隊員たちが、あたしたちの前を走り、クラスメイト達もしきりに「何があったんだろう？」と話している。
寺の出口には、救急車が止まっていた。救急車に男が乗せられている所を見た。
男は上を向く形になっていて、あたしたちは見えなかったはずなので、おそらく大丈夫。
とにかく、新幹線で関東まで行ってしまえば、あそこまでは追ってこないと思う。
「大丈夫かなあ？」
浩介くんが心配そうに言う。
「大丈夫よ。明後日は佐和山大学のＡＯ入試でしょ？　いざとなれば蓬莱教授に揉み消してもらいましょう」
「あ、ああ……」
実際に揉み消せるかは分からないけど、でもあっちの方から一方的な言いがかりで殴りかかってきたし、あたしを守るためという名分も

あるから、何とかなるかもしれない。
ともあれ、あたしたちは観光ルートを制覇し、「京福嵐山線」の駅に到着した。普段は無人駅だけど、今日は駅員さんがいる。
まずあたしたちは、乗車券の購入に迫られた、指定された駅まで購入する。
「永原先生、この『京福』って言うのは何なんですか？」
「『京都』と『福井』で『京福』よ。最も、今は福井の拠点はほぼないし……昔は鉄道路線も持っていたんだけど、事故が多発しちゃって、国土交通省から営業停止命令を受けちゃってね。今は別の会社になっているわ」
「いやー、そういう背景まですらすら出てくるとは、さすがは永原先生です！」
龍香ちゃんが感嘆の声をあげながら言う。
「まもなく、帷子ノ辻行きが参ります」
そうこうしているうちに、電車が到着した。
電車の中は観光客でごった返していて、あたしたちも何とかスペースに入り込む。
浩介くんに、ドアの横のスペースを確保してもらい、痴漢から身を守る体制を作る。
あたしたちはこの後、太秦駅まで歩いて山陰本線に乗り換え、京都から新幹線を待つことになっている。
どうもこのあたりは京都観光に使われているために、相変わらず観光客でにぎわっているようだ。
しかし、外国人の観光客の大声での話し声など、マナーの悪化もやや目立つのが気がかりだわ。
幸い、痴漢を働く不届き物はおらず、あたしたちは終点の帷子ノ辻駅に到着した。
ともあれ、あたしたちは座れないまま、太秦駅で山陰本線へと乗り換える。永原先生から乗車券を受け取る。特急券と一緒になっていて、各自の自己責任だ。
「もうすぐ、京都ともお別れだね」

「ああ、そうだな」
「そう言えば、何で京都まで地下鉄使わねえんだ」
浩介くんが疑問を口にする。
「へへん、それはね乗車券に『京都市内』って書いてあるでしょ？　つまりＪＲの運賃は京都駅からでも太秦駅からでも同じになるのよ。だから地下鉄にはなるべく乗らずにＪＲに乗るべきなのよ」
「よく分からねえけど、こっちがお得ってやつか」
「うん、そうだよ」
永原先生のきっぷのルール談義を聞いていると、山陰本線の電車がやってきた。
電車は白い電車で座席の質は新快速より悪そう。よく見ると一昨日の博物館でも展示車両としてではないけど見たことのある形式でもあった。
そう確か、２２１系だっけ？
車内は少し混んでいて、席にありつけた生徒は少ない。とは言え、終点の京都駅は近いので余りこだわりはない。
「次は終点京都、京都です――」
車掌さんが、いつもの到着番線、出口方向、そして乗り換え列車の案内をする。
あたしたちの乗る新幹線の列車は出てこなかった。
さて、新幹線の待ち時間は３０分強の余裕があって、出発予定時刻１０分前までに新幹線ホームの待合室に集合すればいい。
その間は自由時間で、お土産を買いそびれた人の最後のチャンスになったりするし、食いしん坊な人はここで立ち食いうどんを食べたりする。
「浩介くん、駅弁買おうよ」
「ああ」
これから乗車するこだま号は途中何回も通過待ちを行うため、その間に買うこともできる。
でも、あたしたちはせっかくなので京都駅の駅弁を買うことにした。

「あ、優子ちゃんに篠原じゃん」
駅弁を買い終わると、前に並んでいた桂子ちゃんが話しかけてきた。
「そう言えば、桂子ちゃんは修学旅行中何してたの？」
「ああうん、トロッコ列車に乗ったり奈良の方に行ったりしたわ。優子ちゃんは鉄道博物館と大阪だっけ？」
「うん、それから予算が余ったから神戸ビーフの高級店に行ったわ」
「へー、羨ましい！」
桂子ちゃんも、やはり高級牛肉はうらやましいらしい。
「待合室に戻ろうか」
「う、うん……」
気付けばあたしは最も親しい2人と歩いていた。
浩介くんは彼氏だけど、桂子ちゃんも幼馴染として大切な存在。
明後日は佐和山大学の入学試験。桂子ちゃんはどうするんだろう？
「桂子ちゃん、大学受験はどうするの？」
エスカレーターであたしが聞いてみる。
「うん、第一志望が佐和山大学で、第一志望の上にチャレンジ校として――」
「え!? チャレンジ校レベル高くない？」
正直そこは、あたしが受けるような学校だ。
「だからチャレンジ校なのよ。私も受かるとは思ってないわ、だから対策も佐和山中心よ」
桂子ちゃんがエスカレーターを登り切りながら言う。あたしたちもそれに続く。
「ま、優子ちゃんたちも頑張ってね。試験官は蓬莱教授？」
「分からないけど、多分そうだと思うわ」
そんなこんなで、あたしたちが待合室に着く。
そこには暇を持て余した小谷学園生たちがゲームをしていた。
さっきのぞみが発車していったので、待合室は小谷学園の見知った

顔しか見えない。
「で、麻雀のあがりの基本は、こんな風に3枚の数字の連続か、同じ牌を3枚集めたのを4組と、同じ牌2枚の14枚を集めることよ。ただし、9―1―2みたいなのは駄目よ」
永原先生が数人の男子に麻雀を教え込んでいる。
学校の先生がそれでいいのかと思っちゃうけど、まあ小谷学園だし問題がないのだろう。
「だけど、あがるためには他にも条件があるわ。例えば役がないとダメよ、で、これが役の一覧だけど――」
あたしたちは、永原先生のことを尻目に、待合室の空席に座る。
「それで、夏休み優子ちゃんどうしようか？」
「うーん、とりあえず今は佐和山大学のことに集中しましょう」
「ああ」
あたしたちは、のんびりと電車の到着を待った。

# 修学旅行最終日　のんびりとした帰り道

「えー、間もなくこだま号東京行きが参ります。この電車終点東京まで各駅に止まります」

駅員さんの放送とともにやってきたのはこだま号、行きに乗ったのはアヒルが潰れたような電車だったけど、こっちは比較的カルガモの形を保っている。

オレンジ色の文字で「７００」とあり、Ｎ７００よりも旧式だと分かる。

「運が良かったわね。この電車、来年度で廃止なのよ」

「え？　そうなんですか？」

「あー、東海道新幹線だけだけどね。山陽新幹線ではまだ使われるわよ」

ともあれ、電車が到着し、あたしたちはさっきの切符にあった通りの指定席に座る。

永原先生も考えてくれたのか３人席のうちあたしが一番左、浩介くんが真ん中、右側には永原先生で、全体から見ると中央やや後ろに陣取ったことになる。

ここの指定席車両はあたしたちが貸し切り。既にクラスの１つは新大阪駅から乗っている。

「こだま号東京行き間もなく発車いたします。閉まるドアにご注意ください」

駅員さんの放送とともに、電車が京都駅を発車する。

新横浜駅までのぞみは途中名古屋駅のみの停車だったが、こちらは全ての駅に停車する。

通過待ちだけでかなりの時間がかかるという。

「本日も、東海道新幹線をご利用いただきましてありがとうございます。この電車は、こだま号東京行きです。停車駅は終点東京までの各駅です。お客様に――」

日本語と英語のアナウンスが流れる。

それにしても、英語ではこだまものぞみも、東北新幹線の系統も、全

部「ｓｕｐｅｒｅｘｐｒｅｓｓ」なのね。
「こだまで大事なのは、『いかにのぞみの邪魔をしないか』よ。東海道新幹線は山陽新幹線よりも余裕が少ないから、こだまでものぞみと変わらない最高速度が要求されるわ。最も、こだまに使われるのは旧式車両もあるから２７０だけどね」
永原先生が解説してくれる。
東海道新幹線の方が、車両の入れ替わりが激しいのも、過密ダイヤ故に、新型車両の性能をフルに使わせるためだという。
その間にも電車はぐいぐいスピードを上げていく。
「そう言えば、新幹線の英訳は全部『Ｓｕｐｅｒ　Ｅｘｐｒｅｓｓ』なのね」
「昔は違ったわよ。『こだま』は在来線特急の延長線上という位置付けで、『ひかり』が『超特急』に対してこだまは『普通特急』と言われてたわ。英訳も、在来線特急に使われる『Ｌｉｍｉｔｅｄ　Ｅｘｐｒｅｓｓ』だったのよ」
永原先生によれば、当時のこだまは特急料金も在来線時代から据え置きだったのだが、いつの間にか超特急料金もなくなって、ひかりこだまが同料金になってから、英訳も新幹線は全て同じに「Ｓｕｐｅｒ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」になったという。
米原駅までは結構長く、最高速度もかなり維持できている。
あたしたちは、永原先生の鉄道話に耳を傾けつつ、行きと同じ車窓を反対側から眺め続ける。反対側と言うだけで、随分景色の見え方が違うわね。
やがて、新幹線の速度が落ち始めると、例のアナウンスが聞こえた。
「間もなく、米原です。東海道線、北陸線、近江鉄道線は乗り換えです――」
日本語と英語の案内も同じ。
「米原からの乗り換え列車のご案内です。東海道線上り各駅にとまります普通列車の大垣行きは――」
そして、もはや恒例とも言える車掌さんによる乗換案内。
のぞみが止まらない駅といっても、やはり新幹線が止まる駅なの

で、乗り換え路線も多い。
近江鉄道線のように、私鉄線は特に乗換時刻の案内をしていないみたいね。
「――米原では通過列車を待ちます。発車までしばらくお待ちください」
さっそく、後ろを走っている速達列車を退避する。
浩介くんによればのぞみ号らしい。
こだまは多くののぞみと、何本かのひかりを退避するようにできている。
ひかりもひかりで、途中で数本ののぞみに抜かれるらしい。
ともあれ、旧式の新幹線は、「がったん」という、ポイントで転線した特徴的な音と揺れを見せながら米原駅のホームに立つ。
ドアが開き、数人のお客さんが降りていく。
もちろん、１６両編成だから、別の車両にはもっと降りたお客さんもいると思うけど。
よく見ると、クラスの知った顔の人も、自販機で何かを買っている。
「こだまには車内販売が無いから、駅のホームを使うしかないわね」
「え!?　車内販売が無いんですか？」
あたしは驚いて聞いてみる。まさか新幹線なのに……！
「ふふっ、理由は3つあるわ。１つ目は、こだまを使う人は乗る時間が短い人が多いこと。長距離を移動する場合、のぞみやひかりに乗り換えるのが普通だもの。昔と違って速達列車中心のダイヤなのも大きいわね」
確かに、何回も後ろの列車に抜かれるわけだから、速達列車の停車駅で乗り継ぐのが普通になる。
そうすれば、こだまに長く乗るお客さんの数は必然的に小駅同士の利用に限られて、結果的に少なくなる。
そうなれば車内販売の需要だって必然的に少なくなってしまう。
のぞみの場合、特に新横浜から名古屋は1時間半以上も走り続けているため、車内販売は欠かせない。
「２つ目は、こだまが何度も通過待ちをするようになったことよ。今

みたいに通過待ちの最中に駅構内で買い出しに出ることが出来たのよ。開業当初は浜松駅でしか通過待ちはしなかったから、こだまを通しで乗るお客さんも多かったけど、今ではほとんどの駅で通過待ちしているもの」
「ふむふむ」
「そして3つ目は、駅構内での売店……つまり駅ナカの充実よ。通過待ちが多くても、駅に売店がなかったら車内販売が必要になるわ。弁当買い出しのための店そのものの充実も、見過ごせない要素よ」
「なるほどなあ……」
　びゅわーん！　ひゅんひゅん、ひゅーん！
　話していると、米原駅をのぞみ号がすさまじい速度で通過していった。
「今は貸し切りだけど、途中で他のお客さんも乗ってくるわ。その時は静かにね」
「はい」
　そう、初日と違って、この電車は団体専用列車ではなく、普通のこだま号だ。
　だから、あたしたちは団体割引が適用されるだけで、一般のお客さんと同じ扱いになっている。
「お待たせしましたまもなく発車いたします。ご乗車のままでお待ちください」
　車掌さんの声がすると、新幹線の車内に次々とクラスメイト達が帰還し、全員が戻った。
　やがて遠くで扉が閉まる音がして新幹線が発車する。
　関ヶ原古戦場を途中通るが、永原先生は無言のままだ。
「この辺が？」
「ええ、関ヶ原よ。４１８年経った今でも、あの日のことを思い出すことは多いわ」
　永原先生の言葉、やがて岐阜の街に入る。
　そして、電車はやがて岐阜羽島駅に到着する。
　乗り換え路線は名鉄線のみで、周囲も閑散としているのに、駅は広

い。
「ここは、関ヶ原の雪で不通になった時なんかに使われているわ。岐阜県の代表駅だけど、岐阜駅や大垣駅だと大きく遠回りになっちゃうのでここに駅が作られたわ……政治駅、もっと言えば『大野伴睦駅』なんて言われることもあるけど、実は大野さんは一芝居打っただけなのよ」
永原先生によると、開業当初は今よりいくらか駅が少なかった。品川、三島、新富士、掛川、三河安城の各駅は開業当初には存在せず、三島駅は国鉄時代、残りはＪＲになってからの新規開業駅だという。
岐阜羽島駅は、今でこそ名鉄羽島線があるけど、長らく他の路線との乗り換えがない単独駅で、新富士駅が出来るまでは東海道新幹線で唯一だった。
当初は岐阜県に一切作らないと言う予定をあえて国鉄が立て、妥協したかのように岐阜羽島駅が作られたという。
「面白い駆け引きだなあ」
「うんうん」
そんな話をしている間にも、岐阜羽島駅を1本ののぞみが通過する。これで2列車を退避した。
とにかく、次の名古屋駅では退避はないわね。その代わり、かなりまとまった乗降があると思うわ。

「間もなく、名古屋です――」
岐阜羽島駅を出発した新幹線はやがて、三大都市圏の名古屋の中心駅、名古屋駅に到着する。
ここでは車掌さんが、同じ東海道新幹線でも、途中で抜かれると思われる、後続ののぞみとひかりの乗り換え案内もしている。
さて、名古屋駅では、スーツ姿のおじさんなどが乗って来た。
すると、大騒ぎしていた車内が徐々に静かになっていく。
おじさんはとても関心した表情になっていた。
「やっぱり、秩序がいいわねこのクラス」
永原先生にも、思うところがあるらしい。

そう言えば、優一の乱暴さがこうさせた一面もあったんだっけ？
でも、そのことはもう、あまり考えないようにしよう。
名古屋駅の次の駅は三河安城駅で、国鉄がＪＲになってから出来た駅ね。
「在来線の快速は停車しないけど、新幹線は止まるのよね」
どういう理由なのかは分からないけど、説明するとまた長くなりそうなので、あえて聞かないことにしよう。
ちなみに、新横浜までの各駅からここに行く場合、名古屋までのぞみを使って引き返したほうが早く着くことが多いとか。
「三河安城駅では６分ほど停車します。発車までしばらくお待ちください」
「あれ？　通過電車とは言わないのね？」
車掌さんの微妙な物言いにあたしがちょっと違和感を感じる。
「まあ、待ってれば分かるわよ」
「う、うん……」
永原先生に言われるがままに、あたしは浩介くんとぼーっとする。
何もせずにいるのは結構辛い。
周囲も含め、鳥のさえずり声さえ聞こえてこない静寂さだ。
さっきはこの静寂性が突然新幹線の轟音に破られた。
「――お待たせをいたしました。間もなく発車いたします」
「「え⁉」」
あたしと浩介くんは目を丸くしながら驚きの表情を隠せない。
新幹線は通過せず、そのままドアが閉まって発車し始めた。
「ね、ねえどうして？」
「実はこの駅の通過待ちは臨時列車の通過待ちだったのよ。今日は運転してない日だから、ただ止まっているだけに見えたのよ」
永原先生の話では、このようなこだまの退避を「空退避」というらしい。
「臨時列車の日だけ、すぐ出発できねえのか？」
「またダイヤ編成が大変になるわ。それに、東海道新幹線の臨時列車はかなり高頻度で、しかも複雑よ。毎日違うダイヤになっちゃうわ。

それに、こだまの通過待ちは他にもパターンがあるわよ」
新幹線の駅間が長いのか、どこの駅でも２７０キロまで加速できていると思える。
「でも、行きに比べると、やっぱゆっくりだな」
「東海道新幹線にはこの車両では２５５キロ制限カーブが沢山あるわ。行きの新型車両は、車体傾斜装置を付けることでその制限でも２７０キロで走行できるようになったのよ」
永原先生によれば、これ以外にも制限速度緩和と、新幹線車両ながら通勤電車並みの高加速力の実現によってこれによって東京新大阪を５分短縮、最高速度２８５キロ化で、更に３分の短縮を実現し、運転本数を増やせたらしい。
「にしても、何で車体傾斜装置でカーブの制限速度が緩和できんだ？
行きに乗った時はそんなん全然感じなかったけど」
浩介くんが疑問の声を挟む。
この理屈はあたしにも分かる。
「浩介くん、自転車の競輪とかバイクのレースでも体を傾けながら曲がってない？」
「あっ！　そう言えば！　物理の授業でやったな！」
「うん、傾斜に気付かなかったのはそれだけＮ７００系の性能が優れているからよ」
新幹線、奥が深いわね。
次は豊橋駅。ここでも５分停車し、通過電車を待つという。
明らかに５分も経ってないうちに、電車が一本通過する。
慌てて、車内に戻る生徒たちも見える。
でも、車掌さんの放送は一切ない。
「あれ？」
「まあ待ってみてよ」
永原先生はあくまで冷静だ。
「――お待たせしました間もなく発車いたします」
そう、２本目は「空退避」だったのだ。
同じ駅で、複数の列車を退避することもあり得る。

次の浜松駅がそうで、実際に走っている臨時の「のぞみ」と、更に「ひかり」の通過待ちも行った。2本通過するのをずっと待つというのも中々のんびりしていると思う。

次の掛川駅では2分停車、ここでものぞみを1本退避した。ちなみに、何故か「天竜浜名湖鉄道」の乗換案内は時刻まで詳細だった。永原先生曰く、「旧国鉄線を移管した路線は詳細な案内が多い」とのこと。

それにしても、転線から停車まで随分長かった気がする。

「次の静岡駅は1分停車ね。おそらく通過待ちはないわ」

永原先生が時刻表を見ながら答える。

いかにこだま号と言っても、退避しない駅もあるらしい。後ろの電車との間隔の問題だろう。

果たして、静岡駅は、車掌さんの「通過電車待ち合わせのため停車します」の案内もなく、確かに退避することなく直ぐに発車した。

それにしても、これだけ停車続きで、しかも通過待ちだらけなものだから、何か行きに比べて格段に長く感じるわ。車窓はその分、じっくり見られるけど。

富士山の絶景を見ながら、電車は新富士駅に到着。ここでは車掌さんは乗換案内をしていない。

新富士駅では5分停車、かなり時間が経ってからのぞみを通過した気がする。

永原先生によれば、本来2本退避のところ1本目が空退避になったらしい。

「あー、富士山が遠ざかっていくな」

「うん、名残惜しいわね」

またいつか、時間があれば富士山にも旅行してみたい。永原先生から登山は止められているから、遠目から見るか、五合目に行っておしまいだろうけど。

次の三島駅でも5分停車し、ここでものぞみを2本退避した。面白いのは、今までは内側を電車が通過していたのに、こっちに限っては

外側を通過したこと。行きはそんなの気付かなかったなあ。
熱海駅までは距離が短い。殆ど丹那トンネルを抜けるだけだからだ。
「あれ？　ここ、通過線がないわね」
熱海駅に到着してすぐ、あたしは違和感に気付いた。
「熱海駅は急カーブで作るのがギリギリで通過待ちが出来なくて、ダイヤのネックになっているのよ。制限速度もかかるし」
永原先生によれば、開業当初の東海道新幹線の技術では、急カーブを作らざるを得なかったらしい。かと言って、熱海に駅を設けないのもまずかったとか。
熱海を出て次の小田原まで、トンネルをいくつも抜ける。
「小田原駅では、通過電車を待ちます――」
もうすぐ目的地に着くけど、ここでも通過待ちをする。
最後の最後で、のぞみとひかりをまたもや退避し、総括するとこの列車は空退避も含まれば合計１５本もの列車に抜かれたことになる。最後に三島駅で抜かれたのぞみに至っては１時間２０分近くも後から出発した列車だ。
何か、一回乗っちゃったらもういいって感じがするわ。次からはのぞみを使いたいわね。
列車がようやく新横浜駅に到着し、通過待ち地獄もこれにて終了。小谷学園の生徒を含め、かなりの人数の乗客が降りていく。
行きと違い、ここでは一般客扱いなので、京都に集合して新幹線に乗りさえすれば、ルール上どこで降りていってもいい。奇特な人は、米原駅で降りて在来線で帰っていく人もいるし、せっかちな人は名古屋駅でのぞみの自由席に乗り換えてしまう。
逆に言えば、京都駅集合の後、新幹線に乗るのが修学旅行最後の規制というわけである。
後は家に帰るまでが修学旅行であるが、別ルートで帰る生徒が殆ど居ないのもあって不思議とトラブルは今まで殆どないという。
別ルートで一番多いのは、「新幹線のどの駅で降りるか？」である。
あたしたちは品川駅で降車することにした。永原先生はこれから

協会の本部に顔をだすためここでお別れとなる。
「優子ちゃん、篠原、一緒に帰ろうか」
「うん」
あたしは浩介くんと桂子ちゃんとの3人で一緒に帰る。他の生徒達とは、乗り換えるホームまでは一緒だったけど、いつの間にかバラバラになってしまった。
道中修学旅行の思い出話と、他愛もない雑談をする。

「じゃあ浩介くん、気をつけてね」
「うん、優子ちゃん、また明後日な」
あたしと桂子ちゃんが降りて、浩介くんを見送る。
名残惜しい別れだけど、明後日また会える。
「桂子ちゃん、あたしね――」
「そう、いいわねえ優子ちゃん！」
そして、ここからは桂子ちゃんと女の子同士で他愛もない話をする。優一時代から唯一あたしと話に付き合ってくれた女の子との空間は、浩介くんとの空間とは違った安心感がある。
「それじゃあ優子ちゃん、よい夏休みを」
「うん、機会があったら会おうね」
そして、いつもの分かれ道で分かれ、担任の先生も含めて３３人居たあたしの周りも、ついに1人になり、あたしは自宅の呼び鈴を鳴らして、母さんの歓迎を受けたのだった。

# ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　前編

修学旅行から2日後、あたしは制服に着替えた。
スカート丈は久々に長いままにしている。
「うーん、やっぱりちょっと地味だわ」
とは言え、形式的とは言え今日は佐和山大学へのＡＯ入試の日、さすがにミニはやめておこう。
ちなみに、今日は浩介くんと誕生日デートも兼ねている。この日は、あたしが浩介くんとの恋に落ちた日でもあり、そこからちょうど1年になったという意味でもある。
本当は、昨日が浩介くんの誕生日で、デートなどもその日に行おうと思ったんだけど、浩介くんから「修学旅行は俺も疲れたので明日のＡＯ入試の後にしないか？」と提案してきたのでそれを受け入れることにした。
そして、あたしとしても休養は欲しかったので特に異論はなかった。
「おはよう」
「あら優子、今日は制服のスカート長いのね」
母さんが出迎えてくれる。
やっぱりいつもとスカート丈が違うと気になるみたいね。
「ほら、今日は一応入試の日だから」
まあ結果はとっくの昔に決まっちゃってるけど。
「うん、そうだったわね。じゃあ今日は、朝ごはんはお母さん作っておくわ」
「ありがとう……」
佐和山大学の最寄り駅は小谷学園と同じ、ただし駅を挟んで向こう側なので、あたしたちは普段佐和山大学の学生さんと遭遇することは少ない。
とは言え、去年以前に卒業していった先輩の顔も駅で何度も見ているけど。
ともあれ、その利便性や、学校単位での友好関係もあって、小谷学

園から佐和山大学に進む人は多い。
佐和山大学はＡＯ入試の枠が少なく、今年は2名しかない。いや、今年に関しては実質０名かもしれない。
ともあれ、母さんに作ってもらった朝食を食べ終わったら、あたしは必要書類をもう一度確かめる。
「いい優子？　結果は分かっているからって、油断しちゃだめよ」
「うん分かってるわよ」
だからこうしてスカートもいつもより長いんだし。
とにかく、これで準備はＯＫね。
他の受験生と違って緊張しなくていいのが救いよね。

「行ってきまーす！」
「行ってらっしゃーい、鍵閉めておくわねー！」
「はーい！」
母さんといつものやり取りをしたら、あたしは電車の駅へと向かう。
４月に買った定期券は１０月まで有効で、佐和山大学は最寄り駅が同じなので定期券をそのまま使える。
これもまた、地味に便利といえるわね。
さて、駅に到着すると、前方の電光掲示板に「遅延情報」という文字が流れる。
あの時のことは、もう全くと言っていいほど思い出さなくなったけど、やっぱりスカートを長くした状態で電車が遅れているという情報を見ると、思い出さずにはいられなくなってしまう。
最も、遅れているのはあたしたちとは別の路線だから、大丈夫だとは思うけど。
あたしは駅では相変わらず注目の的で、胸に視線が集まっている。
制服でスカートが長いと脚への視線まで胸に集中してしまう。
やっぱり、制服はミニに限るわね。
ともあれ、いつものルートで佐和山大学の最寄り駅に行く。
そして今日はいつもとは反対側の改札口を利用する。いや、来年度

からはこっちが「いつも」になるんだろうけど。

ピピッ

ＩＣカードの音が聞こえ、改札口を出た先にあたしは見知った顔を見かけた。

「おはよー浩介くん」

「あ、優子ちゃんおはよう」

浩介くんと待ち合わせしていて、お互い時間通りに到着する。

あたしたちは早速駅前の地図を頼りに佐和山大学への道のりを進む。

小谷学園側は商業施設もあるけど、どちらかというと閑静で落ち着いた感じだけど、こっちは大学の町という事で飲み屋やラーメン屋さんなどで賑わっている。

駅を挟んで向こう側なのに、結構雰囲気が違うわね。

あたしたちは迷わず一本道で佐和山大学の正門に到着すると、「佐和山大学ＡＯ入試はこちら」という看板を見かけた。

大学の中では、高校の制服姿はかなり目立つ。しかも、あたしと浩介くんは男女の２人組だ。

「なあ、あの小谷学園の子、可愛くない？」

「ほら、今日はうちのＡＯだよ」

「確か面接だっけ？　いいよなーあれだけかわいかったら即採用だろ？」

「だろうなあ、でもあっちの男はどうだ？」

「さあ？　うちは枠が少ないから一般入試で来るかもよ」

大学生２人組が、あたしたちについて噂をしている。

あたしたちが即採用なのは正解だけど、理由としては容姿というよりＴＳ病のためというのが正解。

試験の行われる建物の中に入り、あたしたちは「試験会場は３階です」という立て看板を見かけた。

あたしたちは目立つ位置にエレベーターを発見したので、浩介くんの操作で上へと上がる。

「お疲れ様です。こちらにおかけになってお待ちください」

「はい」

エレベーターから出ると、試験管さんに誘導される。

廊下には即席の椅子がいくつか置かれていて、そこに知らない学校の制服の男女が、既に数名椅子に座って待っていた。

あたしたちは、試験官さんに言われるがまま、控えの席に座る。

他の受験生たちを見ると、合格を信じてひたすらにイメージトレーニングをしていたり、カンペを確認したりしている。

あたしも浩介くんもそんな姿を直視できない。

おそらく、今この地球上で行われている、最も無駄なことは、この佐和山大学で起きていると思う。

彼ら彼女らは、この試験の結果が既に半年近くも前から決まっていることなど知る由もない。

それは、蓬莱教授の不老実験の成功のためという大義名分のために、こんなことになってしまった。

でも、もし知ってしまえば、貴重な受験勉強の時間を割いて、無為な行動をしてしまったことにやり場のない怒りを感じるだろう。

そうなれば間違いなくあたしたちに怒りの矛先は向かう。

かと言って、知らなければ知らないで、不合格通知を受け取り見当違いの「反省」を繰り返すことになるんだろうか？

いずれにしても、救いようのない話だわ。

試験官さんも気の毒だと思う。どれだけ良さそうな受験生を見つけても、合格にすることは叶わない。蓬莱教授の手で、あたしと浩介くんに合格者は決まっている以上、それを曲げることは出来ず、面接でも平常心を装わないといけない。

「お待たせいたしました。まもなく試験を開始いたします。名前を呼ばれた方から順に試験会場にお入りください……石山優子さん」

「はい」

「３０１にお入りください」
「はい」
　返事をすると、あたしは言われるがままに３０１教室に入る。
「篠原浩介さん」
「はい」
「３０２にお入りください」
「はい」
　浩介くんも、左隣の教室に入る。
　会場となっている教室はかなり広くて、普段は授業に使ってると思われる。
　机の先には、見知った顔、蓬莱教授が座っていた。
「……君がここにきてくれて本当に良かった。もう一人の篠原浩介さんも来ているかね？」
「はい」
　あたしがそう言うと、蓬莱教授は心の底から安堵した表情で言う。
「ああ。本当に良かった。さ、こんな所はおさらばしようじゃないか」
「え!?」
　蓬莱教授がいきなり突拍子もないことを言うと、椅子を立って教室の壁のほうに向かう。
「知っての通り、この入試の結果はすでに決まっている。ここよりも、俺の研究室で、篠原浩介さんも交えて話がしたい。ほら、教室間で繋がっているんだ。さ、付いてきてくれ」
　蓬莱教授が扉を開け、隣の部屋に。あたしもついていく。
　隣の部屋は無人で、浩介くんが茫然としていた。
「あ、優子ちゃん、蓬莱さん」
　あたしたちが横から入ってきたので、浩介くんも驚いた顔をしている。
「いいか？　扉を伝って廊下の向こうに出るぞ。心配ない。ほとぼりが冷めたら別の試験官がここにきて穴埋めをしてくれるぞ」
　蓬莱教授は、既にもう一つ隣へと続く教室の扉を開ける。
　あたしたちは、黙ってついていく。

次の教室は、電気もついていない無人だった。その次も、そしてその次も。
何回壁を伝ったかわからないくらいの時間が経った頃、扉のない教室に出た。
「よしっ、ここは特に慎重に頼むぞ。忍び足でな」
蓬莱教授が扉の鍵を開け、そして非常に慎重に扉を開け、左側を凝視している。
「よし、大丈夫だ。慎重にな」
あたしたちは蓬莱教授に続き、忍び足でその場を後にする。階段を降りる所からは、「もう大丈夫だ」とお達しがあり、普通に歩く。
蓬莱教授はやはり有名人で、あたしたち2人を連れていくとかなり目立つのだが、気にも留めていない。
「こっちだ」
言われるがままに蓬莱教授の誘導に従う。他の受験生たちのことは考えないようにしよう。
しばらくすると、蓬莱教授が大学の中央の方にある、中くらいの銅像がある少し大きな建物の前で止まった。
「この建物すべてが、俺の研究室だ。名付けて『蓬莱の研究棟』、そのままだな」
「凄いわね……」
建物の前には「蓬莱の研究棟」とあり、よく見ると銅像の人物も蓬莱教授本人だった。
「この銅像は、支援者でもあり、世界的なアメリカ人彫刻家が俺に寄贈してくれたものだ。彼も言っていたよ、『芸術を極めるのに、１００年はあまりに短い』とね」
おそらく、蓬莱教授にできることを必死に探して、この銅像を寄贈したんだろう。
「もしかして、あたしの決断は……」
「そうだ。俺の実験次第だが、彼の人生にも、影響を及ぼすだろうさ」
蓬莱教授の言葉、あたしたちの決断が世界的な彫刻家の人生まで変えてしまう。

いや、彼だけじゃない。今これから行われることは、もっと大きなこと。
改めて、このＡＯ入試は歴史の１ページになろうとしていることを実感する。
あたしたちは、まず建物に入る。すると、蓬莱研究所でのこれまでの実績が数多く記されていて、蓬莱教授がノーベル賞を受賞した業績や、この前の記者会見であった「人類平均寿命１２０歳」という展示もある。
「ここは主に来館者向けのいわばプロパガンダエリアだ。さ、１階が俺の部屋だ。案内しよう」
蓬莱教授がカードキーを取り出して部屋の中に入れてくれる。
中はたくさんの専門書が並べられたいかにもな部屋で、意外と狭い。
蓬莱教授が椅子を引いて「ここに座ってくれ」と言ってきたので、遠慮なく座らせてもらう。
「さてまずは、石山さんに篠原さん。今日は来てくれて本当にありがとう。さっきまで、もしかしたら心変わりしてしまうんじゃないかと気が気でなかったんだよ。だから、石山さんと篠原さんが現れたということを聞いて心底ほっとしたよ」
「あの、もしかして――」
「そうだな、君たちにはこれを渡しておこう」
蓬莱教授が机にあった書類を２枚、あたしたちに手渡してくれ手渡してくれる。
あたしは紙の文字を読む。それは「合格証」だった。
「分かっているだろう？　この試験の結果は初めから決まっていた。とはいえ、一応形式だけは取らないといけない。というわけで、俺の話を聞いてほしい。さて、どこから話そうかな？」
「あの、他の受験生たちは？」
あたしは、やっぱり気になったので聞いてみる。
「――哀れな連中だ。彼らは自分たちがどんなに努力しても不合格にしかならないことを知らない。彼らの不合格通知も、既に印刷されて

いるとも知らない。しかしそれが何だ？　私の、誇るべき使命のため、やむを得ないことだ。ここで落ちても、彼らには別のチャンスがある。取り返しのつかないことではない」
「表の銅像の作者だけではない。俺の研究には、まさに世界の命運がかかっている。今の日本の医療は安楽死を認めていない。つまり、どんな重病でも、どんな苦痛でも、なるべく生き長らえらせるということになっている。ならば、俺の研究こそ医学にとって最も素晴らしいこと。そうは思わんかね？」
「……」
蓬莱教授が、現代医学の矛盾を鋭く指摘している。
「もちろん、俺の研究は『不老不死』の研究ではない。致命的なケガをすれば死ぬし、毒性の強いもの、例えばサリンとかを浴びれば死ぬ。だが、今の人の死因のほとんどは、元をただせばたった一つの不治の病『老い』によるものだ」
例えば、死因の１位は「がん」だけど、これだって老化が大きな要因になっている。
しかも、ＴＳ病患者は決してがんにならない。
「それの治療方法を確立すれば、俺だけじゃない。世界にとってとても利益のあることだ。それは君たちも同じだろう？」
「「はい」」
浩介くんと、ほぼ同時に返事をする。
あたしたちはそう、ただ浩介くんとずっと一緒に過ごしたい。
「もし、老いがなくなれば、天才がずっと天才として生き続ける。老いがなくなれば、少子高齢化問題は全て解決する。高齢者に対する財政的負担だってほぼ無くなってしまう。人は衰えることなく、その経験と技量のみを積み上げ続ける。そうすれば、誰しもが偉大になれる可能性を秘めている。永原先生がそうだろう？」
確かに、永原先生は、元々は平凡な足軽だった。
だけど今は古典の先生として、ＴＳ病患者たちのまとめ役として、その５００年の人生をいかんなく発揮している。
「我々が解明している知能はごく一部だ。未知の領域に、才能が眠っ

ていることは往々にしてある。いやそれだけじゃない、ほとんどの人は、自分の才能に気付かぬまま、『凡人』だと思い込んで死んでいくんだ」
　蓬莱教授が意味深に言う。
「ど、どういうことですか？」
「自分を見つめなおすのに、１００年は短すぎる。いや、この世で最も長生きしている永原先生でさえ、自分について、最近まで気付かなかったことがあるんじゃないかな？」
　あたしには、思い当たる節がある。
　もしかしたら蓬莱教授が言いたいこととはちょっとずれているかもしれないけど、永原先生は最近まで、吉良上野介に罪悪感を強く抱き続けていた。
　吉良上野介が永原先生を恨んでいるとは考えにくいことは、実際にはあたしでなくても考えに及んだはず。
「その顔は、思い当たるという顔だな。まあいい。ところで、最近では、俺の研究に対するネガティブキャンペーンも、様々なバリエーションに富んできた。その最たるものが、フィクションを持ち出したネガティブキャンペーンだ」
　蓬莱教授が、少し顔を横にそらして言う。
「フィクション？」
　しかし、あたしの声を聴いてすぐに向き直る。
「ああ、テレビを中心にしたマスコミどもは俺の研究を意図的に『不老不死』と言っている。俺はその度に抗議電話を入れている、『不死ではない』とな。しかし聞く耳を持たない。訴えてやろうかとも思っている。そして、その後に決まって来るのは漫画や小説の不老不死キャラクターなどを持ち出してのネガティブキャンペーンだ」
「ど、どういうことですか？」
　浩介くんが聞く。
「よく、不老不死のキャラクターは、『不老不死を否定的に捉え、そして死に場所、殺してくれる相手を探し、あるいは他人が不老不死になろうとすれば全力で止めにかかる』というのがお約束だろう？」

「うん」
「だが、それをもって俺の研究を否定するなど、愚の骨頂だ。何もかも間違えている、まず言ったように、俺の研究は決して『不死』になる研究じゃない。そこを誤解されると、非常に困る」
　不老と不死の違いは、永原先生も強調していた。
「そして第二に、人間は現実に不老となっても、実はそこまで『死のう』とは思わない。何故なら、学問に芸術にスポーツに娯楽と、今の時代は何から何まで極めて多様化している。決して飽きることはない」
「確かにそうですけど、蓬莱さん、どうしてそんなことが断言できるんですか？」
「君たちの担任の、永原先生がそれを雄弁に証明しているだろう？　永原先生は、江戸時代にずっと江戸の町を出ることができなかった。２００年以上もだ。にも拘らず、彼女は自殺を考えたことさえなかった。永原先生は『真田家と吉良家への恩返しが出来ていない』と言っていた。確かにそれもあるだろうが、それだけで如何にも平和だが退屈だろう江戸時代の日々を生き抜けたか？　しかも周囲には、自分と同じ境遇の人が誰一人としていない孤独な環境でだ」
「……」
　蓬莱教授の言うことは最もだと思う。
「もちろん、永原先生が恋愛をしなかったせいかもしれないがな。唯一少数の不老が悲劇を招くとすればそれくらいだ」
　蓬莱教授の言葉は半分正解で半分間違い。永原先生は初恋をしたことがある。ただあまりにもひどかったから、無理に押し殺しただけ。
　恋人が死んで数百年経っても生き続けられるという事、蓬莱教授の推測以上に、人間は強い。
「もう一つ指摘すると、不老不死のキャラクターというのは、大抵は１人ないしごく少数が不老不死になっているだろう？　そして自分たちの周囲では次々と人々が先立っていく。それが、孤独の原因だが、同じ境遇の人がそれなりに居れば、特段気にならないと、以前永原先生から聞いたよ」

うん、それはあたしも聞いた。
だから、協会があるわけだし。
「さて、少し休憩しよう」
蓬莱教授は、３つのコップに水を汲んで、あたしたちに分け与えてくれる。

# ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　中編

「休みながら聞いてくれ。永原先生は以前、不老であることに対して、何か否定的なことを言っていたかい？」
「……」
あたしは、小さく首を横に振った。
永原先生は、不老は悲惨なことになるとは口に出していない。
個人的な独白で、「不老がために命惜しく臆病者になった」「そのせいで本来なら年代的に会うはずのない吉良殿や昭和天皇に罪を作ってしまった」と書いたにとどまっている。
確かに不老故に辛いことはあるが、それを差し引いても不老は捨てたくないというのが本音だと思う。実際、地球の終わりは見てみたいとか、９７０歳を当面の目標にしているとも言っていたし。
「そうだ、あの時、俺が一つのブレイクスルーを達成した後の協会の会合でも、永原先生はこう言っていた。『会員たちの中に、不老をある種の特権だと思っている層がいた』とね」
蓬莱教授が更に鋭く指摘する。
つまり、不老でいい思いしていることに対する独占欲があること。
比良さんや余呉さんがそれだ。２人はいつか不老が人類共有になると分かっていても、既得権益にしがみつきたがった。
「これは要するに、他の人に渡したくない、と思えるくらいにはいいものだということだ。悪いものだから渡したくないというなら、彼女は『特権』だなんていい方はしないだろう？」
「はい」
「こうも考えられる。もしこの病気に不老という特徴がなかったら永原先生はどうなる？」
「え!?」
浩介くんが驚いた声を上げる。
そう言えば、考えたこともなかった。
これまで、永原先生は現代に生きている人というのが最初にあり、ＴＳ病のために遠い昔から生きているという事実が後にあった。

「おそらく、永原先生は織田信長や武田信玄より年上……人間５０年という当時の寿命から考えれば、また村の庶民ということも考えれば、遅くとも関が原の合戦の頃には死んでいただろう。俺達はおそらく、永原先生という存在そのものも知り得なかったはずだ」
　蓬莱教授はその天才的頭脳から次々と鋭く分かりやすい指摘が飛ぶ。
「確か秀吉が死んだ時、永原先生は８０歳位だったかな？　おそらく彼女は、真田家への恩を返せずに死ぬことに、ひどく後悔しながら死んでいったことだろう。そうならないのは不老のおかげなんだよ」
　それはそう。でも、永原先生は時と共にどんどんと罪悪が大きくなるとも言っていた。
　そのことについて聞いてみたい。
「ですけれども蓬莱教授。永原先生は、時間が経つとともに罪悪感が大きくなるとも言っていました」
「そうだ、俺はそこが不思議なんだよ。永原先生は何故数百年も主君のことに、そして吉良上野介のことに執着するのか？　何百年単位も執着して、一体何になるのか分からないんだ」
　そう言えば、考えたこともなかったわね。
「永原先生が主君の真田幸綱に仕えていたのは、１５歳から２０歳までの５年間のことだ。確かにこの５年間は男だった時代とは言え、彼女の人生の、たった１％でしかない。しかも男性時代の記憶は、初期の、一番古い記憶の中にあるもので多くを忘れてしまっているものだろう？　今更取り返しが付くことではないこと、ＴＳ病故に詮無きことなのは彼女自身が一番良く分かっているはずだ」
　蓬莱教授が永原先生の行動の矛盾点を指摘する。
「そして何より、真田信之より逃亡に関することは一切許されたはずだ。この時点でもう執着する必要もないし、許されたのに執着し、罪悪を抱いてしまえば、せっかく許した真田信之に対して、無礼にさえ当たるだろう？」
「い、言われてみれば……」
　蓬莱教授は、主君に罪悪感を抱くことは無礼であるとを指摘する。

あたしからすれば、こんな発想は抱き様もない。
「そしてその後、真田家への再士官が叶わなかったのも、真田家の主君である将軍家による特段の事情による命令であって、永原先生のせいではないだろう？　彼女が罪悪を抱く動機など、俺からすれば何もないんだ」
蓬莱教授がまた水を飲む。
実は永原先生は、罪悪感を抱く動機がなくてそれが不思議だと疑問を口にする。
蓬莱教授が狂っているのか、永原先生が狂っているのか？　あたしにはまだ分からない。
「……おそらく、長生きするうちに、被害妄想になったのでは？」
あたしが考え込んでいると、浩介くんがそんな推測をする。ちょっと失礼な気もするけど、長い時間があることを考えると、それは正解かもしれない。
「うーん……いや、それもあるかもしれないが……俺が思うに、どうも江戸城での会見が怪しいと見ている」
蓬莱教授は、浩介くんの言葉に何かを憶測している。
そしてそう、残念だけどそれは当たっている。
１６５３年、今から３６５年前のこと。
永原先生は、江戸に住んでいて、不老の娘ということで徳川家綱に江戸城へ呼び出された。
江戸城で初めて徳川家綱と真田信之に謁見した時、寛大な措置に感極まって泣いてしまった上に、その時に優しくされたために、２人に恋をしたことが、未だに大きなトラウマになっている。
あたしと浩介くん以外の、誰にも話せていない。比良さんや余呉さんさえ知らない、永原先生の最も大きな秘密だ。
「俺の推測だが、おそらく永原先生は、ただ泣いただけではなく、もっと重大な粗相をしてしまったのではないか!?　おそらく一時の無礼ではなく、後年まで引きずるような、何かだな」
「……！」
あたしと浩介くんは必死にリアクションを堪える。

だけど、蓬莱教授は何かを掴んだような表情をする。
「その反応……当ててみせよう。おそらく、永原先生は徳川家綱に恋でもしたんじゃないか？」
「うぐっ……」
「こ、浩介くん！」
浩介くんが堪えきれず、図星の反応をしてしまう。
な、何て男なの……永原先生と蓬莱教授は確かに友人関係だ。
以前は、研究面では永原先生の中で不信感も残っていたが、それも最近はほぼ解消された。
とは言え、永原先生が固く閉ざしていたこの秘密を、ごく僅かなパズルのピースだけで推察してしまった。
「やっぱりな、そうじゃないかと思ったんだよ」
「……」
蓬莱教授の勝ち誇ったような顔に、あたしたちも押し黙るしかない。
「2人で飲んでいた時……と言っても俺も永原先生も酒は殆ど飲まないからウーロン茶でだが……あー、以前永原先生は、『ＴＳ病の子にとって、恋愛、特に初恋問題は難しい』と言っていたんだ」
確かにそれは、以前も聞いた。
「俺が、『やはり不老のせいか？』と問うと『そう』と答えていたよ。長期間恋愛しないと、ちょっとしたことで恋に落ちるようになってしまい、かと言って誰かと恋愛しても死別が頭にちらついてしまうそうだ」
とは言え、死別を恐れたがために自殺した人は今まで一人で、会合の時も「特殊な事例」と言われていた。
つまり、そういうことだ。不老で得られるメリットに比べれば小さい。
「それでも、何とかやっていける人がほぼ全員と聞いているし、これは実際にそうだ。だが、そうすると、永原先生の反応に矛盾があるんだよ」
「どうしてですか？」

あたしは知っていて、わざと質問をする。
無意味なあがきだと分かっているけど、永原先生の秘密を守りたい一心だったのかもしれない。
「なぜなら、永原先生は『恋愛などしたことない』と言っていたからな。つまり、永原先生は自分の恋愛について、どうしても隠しておきたかったのだろう」
その通りだった。
やはり蓬莱教授からは逃げられないみたいね。
「だがそれでもだ、時の将軍に恋をしてしまうこと、確かに重大な無礼と言われても文句は言えない。だが、関係者はとっくにみんな鬼籍に入っている。その時の最後の関係者が鬼籍に入った時に生まれた人だって、永原先生を除けばもう誰も生きていない。そんな遠い昔のことを、現代まで引きずるのは、やはり不自然だと俺は考えている」
余呉さんが生まれる更に１８０年前の話だものね。
「つまり、どういうことなんですか？」
浩介くんが質問する。
「永原先生もまた、心の何処かで『不老は特権であり、尊いもの』と考えているということだ。おそらく江戸城の人たちも永原先生の不老を羨ましがったはずだ。本来なら人体実験の対象になってもおかしくない」
確かに、そもそも永原先生は何故２００年以上もずっと江戸城で平穏に過ごせたんだろう？
「つまり、不老は特権であり、誰もが羨むとおりのものであることを強引に否定する……つまり『不老は悲惨』と対外的に思わせるために、おそらく主君に対する罪悪感を周囲に言いふらしていたのだろう。そして２００年の時を経て、いつしかその思いが染み付いて本心にすり替わってしまったんだろうと思う」
蓬莱教授の指摘はどれも鋭い。
「どちらにせよ、はっきりしたことは、フィクションであるように『不老になったら後悔する』というのが、嘘っぱちだということだ。最も、何をやっても死なない『不死』はまた別かもしれないがな」

そう、不老と不死でまた違う。人間は自殺する生き物だものね。
「それに、先程言ったようにもし永原先生が時の将軍に恋をし、それに多大な罪悪感を感じていたとして、それでも死のうと思わなかったのは何故か？」
「永原先生によれば真田家や吉良家のためだって言っていたわ」
蓬莱教授はふうっと一息をつく。
どうやら模範解答ではないみたいね。
「主君真田家のため、あるいは吉良家のため。それも間違いではないが、それだけでは、これだけの時を長生きし続けるモチベーションとしては弱いと俺は踏んでいる。君たちはどう思う？」
蓬莱教授の理路整然とした推察に、あたしたちは何も言えない。
本当にすごい人だわ。
「……反論なし、か。続けていいかな？」
「はい」
「つまり、だ。俺が思うに、いかにも娯楽が少なそうな江戸城の２１０年にも渡る日々でさえ、『不老に飽きて死にたい』と思わせるには至らなかったということだ……もっと娯楽の少ない農村部なら、また結果も違ったかもしれないがな」
蓬莱教授は、一息ついたという感じでまた、水を飲む。
そして、「ふうー」っとゆっくり息を吐く。
「さて、更にもう一つ考えなきゃならない問題に……例の牧師の問題がある。今は取るに足らない連中だが、俺の研究が進んで来れば、きっと抵抗してくるはずだ。連中は宗教だから、おおよそ説得は難しい」
蓬莱教授が、やや疲れ気味に言う。
確かに、蓬莱教授に対する抵抗勢力としては、マスコミを超えて、最も厄介な存在かもしれないわね。
「何故なら……そう彼らは、俺の研究を神への冒涜だと言っている。彼らは神の存在証明さえできていない、にも拘らず、それを信じ、そしてそれが神への冒涜だといっている。胃が痛いよ、俺のような学者からすれば、頭がおかしすぎて、話し合う気にさえ、なれないものだ」

蓬莱教授が、ついであったコップの中の水を飲む。
心底呆れているという感じでさえある。
「ふぅー、しかしいつまでも無視するというのも難しい。連中は『信仰』を持っている、これを論破するのは困難だ」
彼らの中では、論理的思考がないから、説得や話し合いは難しいという。
蓬莱教授からすれば、最も嫌な相手とも言えるだろう。
「だとすれば、必要なのは宣伝戦……つまり広告塔だ」
「あの、蓬莱教授、もしかして――」
「そうだ、石山さん、もし必要に迫られたら、君に、俺の研究の宣伝役になってほしい。そしてその時は、君の彼氏について、あーそうだ篠原さんと、ずっと一緒に居たいということを言って欲しい」
あたしが言い終わる前に、蓬莱教授があたしにもう一つ、仕事の依頼をする。
蓬莱教授のもう一つの依頼、それは間違いなく、あたしの知名度と、そして容姿について期待しているということだろう。
「人間というのは、皆が皆、俺のように賢い生き物ではない。だから、俺がいかに不老研究のもたらす社会の大きな利益について説明しても、感情的で下らなく、根拠のない愚かな宗教的考えに流されてしまう……哀れな連中だが、この世界、ほとんどの連中が哀れなまま死んでいくものだ」
蓬莱教授は、可哀想なものを見るような目で言う。
「……」
「連中に対抗するには、こちらが連中のレベルに合わせてやらねばならない。そう、介護と同じだ。しかるに、君の容姿はプロパガンダにとても都合がいいのだ」
つまり、あたしがかわいくて美人だから、広告塔になって欲しい。というのが蓬莱教授の言い分だ。
「もちろん、嫌悪感を持つのはわかる。俺が君の立場でも、嫌な気分になるだろう。だが、俺の研究を邪魔されないため、そして更なる支援金を集めるためにも、どうしても必要なことだ。理解してほしい」

「……分かりました」
蓬莱教授の言葉に、あたしもうなずく。
あたしもバカじゃない。浩介くんと一緒に居るためにも、蓬莱教授に協力しないといけないことくらいは分かっているし、世の中にはくだらない宗教を盲信して、猛毒のサリンをばらまくような人間さえ居ることも知っている。
「もし君が宣伝戦に出てくれれば、おそらく我々の研究の邪魔も少なくなる。驚くかもしれないが、俺のように見た目で判断しないように心がけている人間は極めて少ないんだ」
蓬莱教授の言葉にあたしたちもうなずく。
あたし自身、飛びぬけてかわいく、飛びぬけて美人だから、通行人の噂話にとてもよく巻き込まれた。
人は見た目が9割なんて話さえある。
「さて、この研究が完成する過程で、抵抗勢力の抑え込みも重要だが、既存の支援者の囲い込みも重要になってくる。俺としては愚かなことだが、一部の人々は、俺を神のように崇めている連中もいる。愚かな奴らだが、利用しない手はない」
「そこで役に立つのがまたも君だ。君が広告塔になれば、敵を寝返らせるだけでなく、味方の忠誠心も強固にできる」
「……浩介くん」
「あまり、優子ちゃんを前面に押し出しすぎるのもまずいと思う。彼らだって、プロパガンダの手法を知識として走っていると思いますし」
浩介くんがあたしを見てそう言う。
「うーん、そうかあ……君がそう言うなら、この話はやめておこう」
蓬莱教授があっさりと引き下がったように言う。
「あの、大丈夫なんですか？」
あたしも心配になったので聞いてみる。
「大丈夫心配ない。他にも手を打つ。今、俺の研究所ではそう言った心理学、宣伝戦の専門家を募集している。そこでチームを作る。今研究所では、宣伝部を大急ぎで構築している所だ。必ずやもっといい案

が出るだろう」
やはり、あたしたちは重要な存在なのだという事が改めて分かる。
「さ、まだ話は続くぞ。聞いてくれ」
蓬莱教授は改めて水を取り出し、あたし達についてくれる。

# ＡＯ入試　蓬莱教授の洞察力　後編

「さて、俺の研究について、具体的に君たちにしてほしいことは、大学の３年に、俺の研究室に配属になる前、石山さんには定期的な遺伝子の提供をお願いしたい。といっても、髪の毛の他にも、切った爪や頬の内側にある細胞でいい」
「はい」
　研究室は中央にあるし、移動中にでも立ち寄れば、あまり問題にはならなさそうね。
「そして俺の研究室に配属になったら、大学卒業までは指導教官として卒業論文を書いてもらう。そして出来れば……そのまま研究者となって修士博士に進んでほしい。俺の研究にもっと関わってほしいんだ。佐和山大学の大学院で、俺の専門の『再生医学』なら、一流大学の院卒並みの待遇は得られる。悪い話じゃない」
　蓬莱教授が願望を込めて言う。
「あの……蓬莱教授、今はそこまで未来のことは、考えていません。考えているのは、大学卒業までです」
　あたしがキッパリと言う。
　大学院に進むか、もしくは就職するかは、大学３年位になってから決めても遅くないと思う。
「――そうだろうな。無理もない。これはただの俺の願望だ。ただ、もし大学卒業後に就職するとしても、遺伝子の提供は引き続きお願いしたい」
「……分かりました」
　蓬莱教授の研究に協力するのは、当初からの決定事項だ。
　そこはブレてはいけないだろう。
「ところで、蓬莱教授は今どのあたりまで研究を進めているんですか？」
　浩介くんが進捗状況を聞いてくる。
「ああ、今一度、寿命を伸ばしている。うまくいけば、２００歳の記者会見を今年中には開けるかもしれない。もしかしたら、これだけでも

ノーベル賞かもしれない。ただ、仮にノーベル賞を取ったとしても、有限では意味がないんだ」
「どうしてですか？」
　２００歳まで生きられるようになるだけでも、環境はかなり変わりそうなのに。
「もちろん、不慮の事故に巻き込まれる確率に比べて、十分に長いなら話は別だが……以前と比べて、安全性がどんどん増しているから、それも難しいんだ」
「どういうことですか？」
「昔は、車だけではない、鉄道も、飛行機も、事故が多かった。今よりもずっと確率が高かった。あるいは、極端にひどい大気汚染や公害というのもあった。だが今は、昔よりも随分と住みやすくなった。寿命で死ぬ人間の割合が、今はどんどん増えているんだ」
　確かに、それはそうだ。自動車だって、今は自動運転とか、自動ブレーキって言われているし。
「つまり、不老ではなく、単に寿命が長くなると言うだけだとしたら、単に人類の規模が巨大化するだけで、不老によって解決する問題――例えば高齢化問題の解決にはならないんだ」
　蓬莱教授の指摘、そう言えばそうだわ。
　もし不老者だけの人類になれば、高齢者が存在しなくなる。
　若者が若者で在り続けるならば、社会の重荷は減るのだ。
　蓬莱教授の不老研究の、最大のメリットと言ってもいい。
「そのためには、半永久的でないといけないんですか？」
「ああ。不慮の事故に巻き込まれるよりも、寿命が十分長い。といっても、慎重に生きる人とそうでない人で、寿命はかなり変わってくる。そうなると、理論上寿命が十分長くても、老化で死ぬ人が出て来る可能性は捨てきれないんだ。そうなってくると、やはり君たちのようなＴＳ病と同じ『不老』が必要になってくるんだ」
　蓬莱教授の話はちょっとわかりにくいけど、何とか理解に努めると、単に寿命が長いだけでは、老化現象は起こり得るという。一定の年齢まで成長したら、後は進行を完全に停止させないといけない。

「もちろん、今の寿命の延命も、ＴＳ病の遺伝子……たまに手に入る永原先生の遺伝子で作られているんだ。幸いなことに、君の遺伝子も手に入れば、俺の開発した万能細胞とも併せ、複数のサンプルで比較することもできるんだ」
　つまり、今までは永原先生の遺伝子のデータを、たまにしか手に入れられなかった。
　それに比べればあたしのデータは常に入る。効率は段違いだろう。
「そうすれば、俺の実験の効率も格段に上がる。全ての人類に、いち早く不老を提供できる。それだけ、救える命が増えることになるんだ……もっとも、いつか死ぬということには代わりはないがな。大幅に遅らせることは可能だ」
　蓬莱教授の話、結局、不老と言っても延命措置には変わりはない。
　衰えることがなくなると言うだけで、いや、だけというのはアレかもしれないが、いずれにしても死ぬことには変わりはない。
「最初は『いらない』などと強弁するものも多いだろう。だが、徐々に不老の人口が増えれば、あっという間にマジョリティになるだろう。何故か分かるかね？」
「はい」
　もちろんそれは分かる。何故なら、寿命が違いすぎるから。しかもＴＳ病で不老になれば、何歳でも子供を産めることになる。もし両親が不老で子供も不老なら、あっという間に不老者が多数派になっていくだろう。
　おそらく、現代における不老者の平均寿命は、今の永原先生の年齢を大幅に上回るはずだ。
　数千歳、あるいは万年単位で生きる人さえいるかもしれない。そうすれば、既存の人類はあっという間に淘汰されてしまう。
「強大な寿命を背景に、不老者が多数派になれば、人類の価値観などいとも簡単に変化するだろう。それを考えれば、長期的に見れば不老に対するネガティブイメージなど、吹けば飛ぶようなものさ。だが今は違う」
　そう、今はまだ、不老に対するネガティブなイメージが付きまとっ

ている。
　最も、それらはほとんどは不死と混同されたものだけど。今はまだ、混同が多いのは致し方ない。
「他にも、不老化によって人は歩みを止めるという意見もあるだろう。だが俺はこれにも同意しない。大きく分けて２つの理由がある。１つ目は、不老によって子供ができなくなるというわけではないからだ。それは君たちＴＳ病患者が証明しているだろう？」
「はい」
　出産をしたという前例があることは知っている。実際、協会の会員たちにも、家庭を持っていたり、あるいは持っていた人も居た。
　そう、やっぱり寿命の違いというのはあった。
「そして２つ目だ。そもそも、古来生命は何代もの代を重ねて進化しなければならなかった。それは複雑で遠回りだ。３８億年とも、４０億年とも言われる生命の歴史のうち、３０億年以上が単純な古細菌の時代だった事は知っているかな？」
　もちろん知っている。
「ええ、学校の生物の時間でやりました」
「人類が登場したのは、地球の歴史からすれば本当にごく最近……いや、人類らしい文明という意味では、１万年も経っていない。永原先生の人生でさえ、地球からすればちっぽけなことだろう？」
　確かに、５００年を生きた永原先生も、あるいは修学旅行で見てきた歴史ある文化財も、地球の歴史から見ればあまりに短いものだ。
　もしかしたら、不老で生きられる時間でさえ地球の歴史から見れば非常に小さい出来事でしかないのかもしれない。
「しかしどうだ？　人類が生まれた時から永原先生が生まれた時までと、永原先生が生まれてから現代までの時……人類の長さを仮に７００万年とすれば、前者は後者の１万２０００倍の長さを誇っている。だけど、人類の変わりようでいえば、後者の方が大きいのではないのかな？」
　あたしたちは、深く思慮をする。
　人類が生まれ、言語が生まれ火が使われ、産業革命以降人類の技術

は爆発的に向上し、そして現在人類はは加速度的な発展を遂げている。
永原先生は、鉄道を見て、世捨て人のような逃亡生活を止め、教師を始めたと言っていた。
それはつまり、永原先生にとって鉄道は革命だった。あの当時の、小さな蒸気機関車でさえ、そう感じるほどだった。
江戸時代、電気もない、鉄道もない、車もない、飛行機もない、ガスもない、コンピュータもない、クーラーも扇風機も暖房器具もない、水道だってろくにない、何もない。あるのはただ平穏で静かな世界だけだった。
しかもそんな時代も１５０年前の話だ。あたしたちからすれば想像もできない昔の話だけど、永原先生の人生の４分の３以上は、そんな時代で過ごしていたことになる。
「それもこれも、人類の叡智がなせる業だ。人類は進化論による進化に頼らずにイノベーションを起こせる唯一の生命だ。しかし、老いはそれを出来なくさせてしまう。それはな、害悪でさえあるのだよ。もし、俺達の研究が出来なければ、姥捨て山は、いつか必ず必要になる」
蓬莱教授はどうも、老化に対してかなりの嫌悪感があるらしい。
「日本だけではない。やがて世界人口も、高齢化により減少の一途をたどる。そうなれば、この地球全体で、老害ばかりが跋扈することになる。そしてこれは人類全体の存亡に関わる。それだけは、避けねばならない」
確かにその通りだ。
「歳をとると脳が劣化することは良く知られている。いわゆる年齢的な衰えというやつだ。かつての天才も、老いによって昔のように考えることが出来なくなっていくのはよく知られていることだ」
「ええ」
「しかし、不老によって、人類がいつまでの若くあり続ければ、老いによる天才の消失を避けられる。そうすれば、それだけ若い力が増え、イノベーションも起こり得るという事だ。そしてそれはさらに人類の進化を促すんだ」

蓬莱教授が、自らの研究と未来への展望を語る。
「でも、歳を取れば頭が固くなるのは――」
「もちろん、脳の劣化以外にも、過去の成功体験が邪魔をすることもある。あるいは幼少期の教育のこともあるだろう。だがどうだ？　永原先生は頭が固いかね？」
蓬莱教授は、想定内という感じで言う。
「うーん……」
その私的に、あたしはゆっくり考える。
そう言えば、永原先生は頭が固くなかった。
それどころか、体育の着替えの時の小野先生や、林間学校の時の教頭先生など、永原先生の１０分の１程度しか生きていない人よりも頭が柔らかかった。
協会会合でも、「会が硬直化しやすい」とも言っていたけど、それを自覚できるという事は、永原先生は柔軟な思考回路という証明でもある。
「以前聞いた話では、永原先生は赤穂事件の時に、時の将軍徳川綱吉に対して『生類憐みの令』を出して、戦国時代によくあった安易な喧嘩両成敗に反対しておられたそうじゃないか。これは十分に『柔軟な思考』と言ってもいいんじゃないかな？」
うん、確かにその通りだわ。
「これは俺の推測だが……赤穂事件の時の永原先生はちょうど１８０歳を超えたあたりだ。つまり、現在この地球上で２番目に長生きな余呉さんとちょうど同じくらいということになる」
そう言えば、そうよね。やっぱり、永原先生はとても長生きだ。
「おそらく、個人差はあるだろうが、そのくらいの年齢になってくると、徐々に経験値も増えて、本来の若い頭脳を取り戻すんじゃないかと踏んでいるよ。不老ならば、物理的には劣化をしないからな」
蓬莱教授が中々に面白い指摘をし出す。
もちろん脳の物理的劣化も含まれているが、実はまた柔軟な思考回路を取り戻せるという予想は、非常に興味深い。
実際の所は、よく分からないけど。

「さて、この技術で大きな問題になるとすれば、人口問題だろう。人類がこれを共有した場合、人口の急増は避けられない。それは懸念材料だが……少子化が叫ばれる日本なら、そこまで大きな問題にはなるまい。あるいは宇宙開発の促進も、解決策として考えられるだろう」
　蓬莱教授はそう言うと、また水を飲んだ。
「さて、これから君たちが俺の研究所に出入りしたりするにあたって、もしかしたら議論をふっかけられるかもしれない」
「はい」
「もしそうなったら、今日の話を思い出してくれ」
　蓬莱教授が、今日の話しについて言う。
「それから、老いて死ぬのが自然の摂理というのも間違いだということを、覚えておいて欲しい」
「どういうことですか？」
　あたしが聞いてみる。
「去年、君たちと俺は水族館で会っただろう？　あの時、俺はベニクラゲを見ていた」
「あ！」
　思い出したわ。確か、ベニクラゲは老いてくると若返るんだっけ？
「うむ、そう。老いたからと言って若返るのは、別に自然の摂理に反していないさ。それに、仮にそれが自然の摂理だと言うなら、ＴＳ病患者は存在そのものが自然の摂理に反していることになる」
「はい、そうなりますよね。永原先生なんて、特に」
「ああ。しかし実際には、ＴＳ病は実在の病気だろう？　何故我々非ＴＳ病患者たちが、ＴＳ病の人と同じように不老となることを妨害されねばならないのかね？　と、このように答えればいい」
「……おう分かったぜ」
　浩介くんがそう答える。
「宗教的な話など論外だ。神がどうこうというのは『俺は信じていない』で十分だろう」
　蓬莱教授はまた水を飲む。そして時計を見る。
「おっと、もうこんな時間か。さ、長々と話してすまなかった。とりあ

えず、『俺の退屈な話をちゃんと聞いた』、これをもって君たちを佐和山大学合格としよう」
「ありがとうございます」
「ありがとうございます」
あたしたちは2人で頭を下げる。
「よしてくれ、頭を下げるべきなのはこっちだ。君たちの協力がなければ、俺の実験は行き詰まるところだったんだ。こちらこそ、本当に感謝しているよ」
蓬莱教授が慌てて制止をする。こういう所は、愚直なくらい律義な人だ。
「ともあれ、まず俺たちがやらねばならないのは、不老と不死の混同報道への対策だ。死にたければいつでも死ねる。そのことを浸透させねばならん。もしそうすれば、今ある俺の研究への批判はあらかた片付く。宣伝部が最初にすることはそれだろう」
「はい」
「ともあれ、今日は感謝する。君たちは残り少ない高校生活を楽しんでくれ。また、会おう」
「「はい」」
あたしたちは蓬莱教授とともに椅子を立つ。
あえて、「ありがとうございます」とは言わず、あたしたちは蓬莱教授に見送られ、研究棟を後にした。

# アフターデート

「ふー、終わった終わった」
「優子ちゃん、お疲れ様」
あたしは研究所を出て、背伸びをして一息つく。
これからは、浩介くんの誕生日を兼ねた制服デートになる。
天文部へ入り浸りだったこともあって、制服デートを昼間からするのは初めてだったりするので、新鮮な気分だ。
あたしには、デートに行く前にどうしても気になることがある。
そう、あたしたち以外のＡＯ入試組のことだ。
「ねえ、他の受験生たちはどうしてるかな？」
「ああ、ちょっと見ていくか」
浩介くんも、どうやら気になっていたみたいね。
閑散とした大学構内を、あたしたちは進み、さっきの看板を見つける。
今度はエレベーターではなく、蓬莱教授と進んだ階段を昇る。
スカートは長いままで、屋内だからパンツが見える心配はないのだけどそれでも浩介くんが気を遣ってあたしを先に通してくれる。
やっぱり、階段を上がると緊張する。
「――さん、３０２にお入りください」
「はい」
ガララ……
女の子の声がして、教室を開ける音がかすかに聞こえてくる。
ああかわいそうに。でも、これも仕方ないこと。
椅子には多くの受験生が座っていて、むなしい緊張感が漂っていた。彼らは、自分たちが不合格通知を既に印刷されている存在だとは知る由もない。
あたしたちはすぐにいたたまれなくなって、階段を下りた。
そして、あたしたちはすぐに建物の１階に出た。大学を探検する気にはなれなかった。そんなのは、入学後に嫌でも出来る。
普段は学生でにぎわってそうだけど、今日は人影の一つない。

「そうだ優子ちゃん」
「うん？」
「そろそろ、服装もデートモードに切り替えてもいいんじゃない？」
「あ、そうだよね」
浩介くんは、遠回しに「スカートをいつもの長さに短くして欲しい」と言ってくる。
サッサッ……
あたしは、ちょっと恥ずかしいけど、スカートを折りたたんで、短くする工程を浩介くんに見せてあげる。
「うお、なんかエロいな」
「えへへ、でも見えてないから大丈夫よ」
少し照れ笑いを含めながらあたしが答える。確かにスカート短くすると脚が見えるしエロいというのはそのとおりだと思う。
でも、やっぱりあたし自身、いつも通りのスカート丈の方が気分がいい。
カリキュラムの時に、「スカートを短くするのはいいこと」と教わったからかもしれない。
「さ、行こうぜ」
「うん」
ともあれ、佐和山大学から駅までの間に、何かがあるか確かめてみる。
「そういえば優子ちゃん」
「ん？」
「夏休み、どうする？」
浩介くんが、夏休みのデートを聞いてくる。
夏といえば色々あるけど……
「確か去年は海に水族館に夏祭りだっけ？」
「結構あらかた行ったよなあ……」
林間学校の時に浩介くんと恋に落ちて、永原先生が海と夏祭りで親睦会を開いて、夏にデートし始めて、そしてあれから1年が経った。
「うーん、ちょっと海と被るけどプールはどう？　ウォータースライ

ダーとか」
あたしがパッと思いついたのを言う。
プールなら、水着も去年のでいいし。
「ふむふむ、それもいいよな」
浩介くんが賛意を示してくれる。
「あ、そうだわ！　バーベキューはして無かったわね。林間学校ではしたけど」
「お、いいなそれ。両家の親睦も深まるだろうし」
うん、あたしたちに加え、あたしの両親と、浩介くんの両親を合わせてバーベキューと言うのはいいわね。料理の情報交換もできそうだわ。
なんか、結婚を意識しすぎなデートな気がするけど、気にしないでおくわ。
ともあれ、夏の大きなイベントは大体決まったので、あたしたちは今のデートを楽しむことにする。
まずは、浩介くんのお誕生日プレゼントを買うということになったんだけど――

「ねえ、これなんかいいんじゃない？」
「え!?　でも高すぎるよ。優子ちゃんに悪いって」
あたしたちは、電気屋さんでお誕生日プレゼントを見繕っていて、あたしは浩介くんに関数電卓をプレゼントしようと思った。
佐和山大学自体が理系の大学ということもあって、将来的にも役立つと思ってお誕生日に電卓のプレゼントをチョイスしたんだけど、浩介くんが遠慮してしまっているのだ。
責任感強い浩介くんらしくて、素敵だとは思うけど、お誕生日くらいもう少しだけわがままにもなってほしいかもしれないわ。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「責任感強いのは素敵だけど、誕生日くらいもう少し我がままになってもいいと思うわ」

「うーん、俺は十分わがままだぞ」
浩介くんが、不思議そうに言う。どうやら、悪気はないみたい。
うーん、このままだと押し問答になりそうだわ。
「じゃあこうしましょう。修学旅行の時の資金が残っているわ。あの時……2日目に遊びきれなかった分、少しだけ贅沢しましょう」
「ああ、分かったよ」
修学旅行の2日目は、あたしたちは女の子の仲間と、永原先生の引率で鉄道博物館を見ていたし、浩介くんも男仲間とともに、どこかに遊んでいた。
その分を、取り返すという名目にした。
変な話だけど、浩介くんを納得させるにはもっともらしい大義名分が必要とも言えるわね。
幸いにして、修学旅行のお金が相当に余っているのは確かで、例の痴漢事件のときの資金も含め、小遣いも溜まってきて、今のあたしはちょっとリッチな気分になっている。
浩介くんも、その口ぶりから、資金に何か余裕があると思われるが、どういうことなんだろう？
……まあいいわ。
「さて、これからどう勉強しようかしら？」
あたしたちは、既に大学の合格証を貰ってしまった。
蓬莱教授の「演説」もまた、あたしたちに教えるようなもので、おおよそ試験とは程遠い。
むしろ、あの場は、蓬莱教授が自らのしてきたこと、その目的などを教え、あたしたちを完全にこちら側に引き込むためのもので、プロパガンダという意味合いの強いものだ。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
「蓬莱教授、いい人だったよな」
「うん、思えば、お世話になりっぱなしよね」
もちろん、蓬莱教授が何故あたしたちにあそこまでするのかは分かっている。

あたしの一手に、世界の命運がかかっていたこと。
著名な彫刻家が、蓬莱教授の銅像を掘り、寄贈しているのは氷山の一角だ。
例の記者会見以降、知らないだけで、おそらく全世界で、彼に心酔する人間は増えているはず。
「ああ。だけどあの銅像……俺にもようやく分かったよ。蓬莱伸吾と言う人間が、どれほど多くの人から注目を集めているのか。いくらノーベル賞学者とは言え、存命で、しかも現役の大学教授に、自分自身の銅像なんて寄贈するなんて、崇拝じゃなきゃ何なのか？」
浩介くんも、例の銅像については気になっている。
「ええ、それにあの研究棟……蓬莱教授は莫大な資金を持っていることは確かだわ」
本当は、もう一つ、懸念がある。
蓬莱教授は、研究の完成にＴＳ病患者、つまりあたしの存在が必要不可欠だと言っていた。
他のＴＳ病患者でもいいが、それぞれに事情があるし、ＴＳ病患者自体がとても希少な存在。
同じ大学に居るあたしが実験台を申し出るのは自然な成り行きだった。
だが、誰でもいいと言っても、みんなが渋る中であたしがそれを申し出たことで、蓬莱教授の研究は格段に進むのは明らか。
そうすれば、もしかしたら、あたしや下手したらＴＳ病患者の仲間たちまで宗教的な崇拝を受けかねない。
当然、あたしには何の力もない。それどころか大抵の凡人よりは弱い存在だ。いかに老化しないからと言っても、浩介くんという素敵な彼氏に守ってもらっている、ただの女の子には変わりない。
分かっていたつもりだったけど、永原先生の言ったことが改めて身にしみてくる。
あたしに課せられた重みは、５００歳となった永原先生にさえ、耐えられるかわからないと言わしめさせるものだった。
「優子ちゃん、何を考えていたんだ？」

「あ、うん。その、今後のあたしのこと……蓬莱教授の研究が成功して、あたしと浩介くんはずっと一緒にいられるとしても……もしかしたら、あたしは更に有名人になっちゃうんじゃないかって」
あたしは、芸能人みたいな扱いは受けたくない。浩介くんと、ラブラブで平穏な日々を過ごしたい。
高島さんの取材の時は、高島さんの特段の配慮で何とか地上波に映されることはなかったけど、それでもインターネットでは一時期話題の多くを独占した。
「何、俺が守ってやるよ」
「……はい」
浩介くんがしっかりした声で言う。
その頼もしさは、決してお金では買えないと思う。
あたしはまた、顔を赤くしながら、レジに電卓を持っていった。
レジの店員さんは不信な様子だったけど、ともあれあたしはこれで浩介くんへプレゼントをその場で渡した。
「はい、浩介くんこれ。お誕生日おめでとうね」
「ああ、ありがとう」
浩介くんは大学生活でこの関数電卓を使ってくれるかな？
見た感じ積分まで出来るみたいだし役立ってくれるといいわ。
……後であたしもこれを買おうかな。
もちろん他意はない、便利そうだし、うん。
その後は、駅の裏手の散策を楽しんだ。滅多に訪れたことのない駅の向こう側は、あたしにとっても浩介くんにとっても、非常に新鮮なものだった。
ほんのすぐ隣に存在していただけなのに、そこはまるで別世界だった。
「来年からは、こっちのほうが馴染みになるのかな？」
「うん。あたしもそう思うわ」
一通り散策すると、足も疲れてお腹も空いてきた。
「優子ちゃん、お腹すいたな」
「うん」

ふと、駅前の時計を見ると、時間は正午を超えていて、空腹感が支配していた。
あたしたちは適当なお店を見つけた。
そこは「讃岐うどん」と書かれたお店だった。
「そう言えば、あんましうどん屋さんって入ったことねえんだよなあ」
浩介くんが言う。言われてみればあたしもそうだったわね。
「うん、あたしも」
そば屋さんは結構あるけど。
店の前にはてご丁寧にメニューの張り紙が貼ってあった。
「うーん、きつねうどんの小でいいかな？」
「よし、俺はかけうどん大」
店の前にあるメニュー表を見て、頼むものが決まったので、あたしたちは改めてお店に入る。
「いらっしゃいませー」
店員さんの返事とともに、あたしたちは列に見よう見まねで並ぶ。
「浩介くん、トレイ」
「ああ」
まずはトレイを取り、次に天ぷらや唐揚げなどが乗っている。
これらは全て別料金。浩介くんが唐揚げを取っていた。
前のお客さんが注文を頼むと、店員さんがその場でささっと作りトレイに乗せていく。
あたしたちも、それをよく観察しておく。
「ご注文お決まりでしょうか？」
「えっと、きつねうどん小」
「わかりました、きつね小入ります！」
「そちらのお客様は」
今度は浩介くんの方を向いて注文を聞く。
「かけうどん大で」
「わかりました、かけ大入ります！」
店員さんの掛け声とともに、小さな容器にうどんをさっと茹でて入れ、きつねが入って最後にスープが出てくると思われるレバーを押し

てスープを入れて完成。
浩介くんのは大きな容器で大盛り用と思われる大量のうどんが入り、そこからスープが入る。
そして、その先にはレジがある。あたしは財布を取って店員さんから言われた金額を支払う。
レシートをトレイに置かれて、更にその先には天かすやごま、醤油、ネギ、更にコップと冷水のコーナーがあった。
あたしは少しだけ取って天かすに軽く醤油をかける。
「いいこと思いついた」
浩介くんがあたしの様子を見て何やらひらめいた様子を見せる。
浩介くんは、天かすを何杯も山盛りにしはじめ、その上に大量のネギをかけ、醤油をこれでもかと入れ、ダメ押しと言わんばかりにすりごまをどんぶり全体にかけはじめ、うどんが見えなくなるくらいになっている。
「こ、浩介くん……」
「いやさ、折角タダなんだし……エネルギー必要じゃん？」
「あ、うん……そうよね」
浩介くんはかなり鍛えていて、体重も少し増えているらしく、それに伴い食事量も増えているとか言っていたもんね。
「「いただきます」」
あたしたちは向かい合わせの２人テーブルを発見し、そこにトレイを置いて食べ始める。
浩介くんのうどん、本当に凄まじいわね。
あたしは、きつねとうどんを食べつつ、浩介くんは豪快に食べる。
量の違いもあってか、食べ終わったのはほぼ同じくらいのタイミングだった。
最後にトレイを返却口に持っていくという。どこまでもコストカットのされた合理的なシステムだと思う。
それからというもの、あたしたちは駅の向こう側の更に遠くの施設をひと通り見て回り、大学生活の予習も兼ねたデートを楽しんだ。

「ただいまー」
「優子おかえりなさい。入試どうだった？」
いつもは、浩介くんとのデート結果を真っ先に聞いてくる母さんも、今日とばかりは入試の結果を先に聞いてくる。
「あ、うん。ちょっと待って……」
あたしはカバンから合格証を取り出す。
母さんは驚いた目で見てくる。
「そ、それ……！」
「うん、佐和山大学の合格証よ。どうも、この試験が始まる前に印刷し終わってたみたいで」
「……いくら決まっているからって、ちょっとやりすぎな気がするわ。試験の内容はどうだった？」
母さんが、更に突っ込んだ回答をしてくる。
「うん、蓬莱教授の話を聞くだけだったわ」
永原先生の秘密を推測だけで暴いてしまったことは話さないでおこう。
それから、永原先生に謝罪の電話を入れないと。
「そう」
「母さん、悪いんだけど、永原先生と話があるから。席を外してくれる？」
「あ、うん。分かったわ」
母さんがそそくさと部屋を出て行き、あたしがテレビ電話で協会の本部につなぐ。
テレビ電話は、すぐに繋がった。
「はい、あら石山さん。どうしたの？　今日は入試の日だったわよね？」
テレビ画面の向こうから、永原先生が現れる。
「そのことなんですが、永原先生に一つ謝らないといけないことがあるんです」
「え!?」
永原先生が驚いて目を見開いている。

あたしは、今日の蓬莱教授の話を思い出して、話の成り行きで蓬莱教授に「徳川家綱に初恋した」と言う秘密を暴かれてしまったことを話す。
「本当に申し訳ないと思います。あたしたちだけの秘密だと言ったのに守れなくて――」
「石山さん、あなたが気に病む必要はないわ。蓬莱先生は正真正銘の大天才ですから。私自身でさえ覚えていない飲み会の会話から推測し、秘密を知ったわけですから……ですが、伊豆守殿のことはバレていないのですね？」
永原先生は、「仕方ない」という感じで言う。
「はい」
そう、永原先生の初恋、それが2人同時だったことと、もう一人の相手まではバレていない。
「それならそれでいいわ。蓬莱先生から隠し通せるとは、今後私も思わないことにします」
「ありがとうございます」
「じゃあ切るわよ。夏休み、楽しんでね」
「はい」
テレビ電話が切れ、母さんにその旨を伝えると、母さんが部屋に戻ってくる。
大学への合格も早急に決まり、あたしは軽い気持ちで夏休みを過ごすことが出来た。
受験が大変な人は、夏休みも学校に行って勉強する生徒もいる。
いわゆる「夏期講習」と呼ばれるもので、当然あたしたちは参加していない。
去年あった体育の補講も、今年は幸いにしてない。
体育の先生曰く、本来なら落第でもおかしくないが、実質的な「軽い障害」とみなしてくれるとのこと。
逆に言えば、本来は健常者のはずなのに、そう考えなきゃいけないくらい運動能力が悪いということだけど。

## 浩介くんとプールで遊ぼう

「へえ、いいじゃない！　バーベキュー!?」
「うん」
夏休みのある日、あたしは浩介くんの家族と合同でバーベキューをすることになった。浩介くんの提案で始まったけど、トントン拍子に決まってしまった。
その予定では、午前中はあたしたちはプールでデートして、その間に両親たちはキャンプ場で設営して一泊すると言う日程だ。
最近だと予約も取り辛いと思ったけど、ピーク期を外せば、意外となんとかなることがわかった。外国人観光客は多いけど、いわゆる東京から京都までの東海道の「ゴールデンルート」や、有名な観光名所を外しさえすれば、まだまだ静かな観光地も多いみたいね。
ともあれ、あたしは保管してあった去年の水着を取り出す。
もしかしたら、胸が大きくなってなんてこともあるかもしれないので試着をしないといけない。
「うーん、でもブラジャーは同じサイズだし……」
もちろん、1年も経ってくると、服もそれなりに入れ替わっている。
そんな中でブラジャーのサイズは買った当時と変わっていない。浩介くんと付き合うようになって、ちょっとだけ大きくなった気もするけど。
問題なのは、あのデパートでしか買えないこと。本来なら大きいサイズの専門店でもないと売ってない代物で、あのデパートに売っていたのは奇跡としか言いようがない。
服を脱いで、水着を試着。誰も見ていないので全裸から着る簡易的なやり方。
うん、ちゃんと着られるわね。
このエロい水着、去年散々悩んでチョイスしたものだけど、今年もちゃんと穿けてよかったわ。
直立だとギリギリ中の水着が見えない超ミニのパレオ付きが、とってもエロい。

これで後患の憂いなく出来るわね。デートは結構後だけど、今から楽しみだわ。

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……」

ゆっくりと目覚まし時計に合わせて意識を回復する。

今日は待ちに待った浩介くんとの夏休みデートの日。

母さんたちは山へ、あたしたちはプールへと行く。

その間、夏休み中にテニスのインターハイがあった。恵美ちゃんの強さはますます圧倒的になっていて、浩介くんとの試合で何かを掴んだのか、ついにゲーム一つ落とすことなく優勝してしまったのだ。

それと同時に、いくら男女の違い、そして5セットという優位性があれど、あそこまで強い恵美ちゃんに、一ヶ月半の練習で勝利をした浩介くんは、間違いなく天才だと思った。

さて、プールに行く前に、服を考える必要がある。

服は2着持っていく。

パジャマと翌朝の服は母さんが持っていってくれるので、あたしはプールに行くまでとプールからキャンプ場までの服で変えることにする。いや、キャンプ場はテントなので、テントの中用の服にしておこう。

で、やっぱり夏真っ盛りということで、涼しい青色のワンピースを着ることにした。

浩介くんも、この服は気に入ってくれるみたいで、プールへと至るには最適。

あたしはもちろん泳げないので、浮き輪の用意も忘れない。

ちゃんと膨らませられるかは心配だけど、浩介くんに作ってもらうのも悪くなさそうだわ。

ともあれ、あたしはこれでいいわね。

いつも付けている頭の白いリボンも、今日は水着用に花の髪飾りに変える。ピンで留めればそう簡単には落ちないので大丈夫だわ。

「おはよー」

「あら優子おはよう。プールデート、頑張ってね」
母さんが出迎えてくれて、応援してくれる。
「うん」
あたしはニッコリと答える。
「優子、水着新しいの買った？」
「え？　去年のままだけど――」
母さんの問いにそう答えると、母さんの顔色が変わった。
「――もうっ！　いい、優子？　水着には流行というものがあるのよ！」
うー、また母さんにお説教されちゃったわ。
もう1年以上女の子をやってるけど、今でもこうしてお説教されてしまう。
「でも母さん、男の子はそんな女子の流行何て見てないわよ」
「……」
母さんのお説教には反論できないことも多いけど、あたしの中に残り続ける「男の知識」に反する「女性視点」に関してはこうやって反論をすることが多い。
浩介くんの魅力をあたしが考えるように、浩介くんだってあたしに理想の女の子になって欲しいと思っている。
確かに女の子にとって流行は大事だけど、男の子はそういうのを気にしない。
だから、もっと別のことで魅力を示すべきだというのがあたしの主張。
あたしは桂子ちゃんを始めとする他の女の子にも「女子力」について「建設的な衝突」がよく起きる。
男が見ると重要でない「女子力」と、確かに直さなきゃいけない「女子力」を自分の中で取捨選択していくこの作業は、いつまでも続く。
ちなみに、同じＴＳ病患者の永原先生は、そのあたりもよく心得ているので、永原先生にお説教されちゃうとまるっきり反論できないのも事実。
「と、とにかく、浩介くんが喜んでくれた水着だから、問題ないと思う

わ」
「……そう、そうね。優子が選んだなら、私はこれ以上は言わないわ。さ、私は準備に戻るわ」
「父さんは？」
「ええ、力仕事をさせてるわ」
我が家は優一時代男手２人だったが、今は父さんしか男手は居ない。
しかし、母さんがちょっと甘えたりおだてたりすると、すぐにやる気になるらしい。
何だか、浩介くんみたいだわ。
実際、父さんもいい年のはずなのに、男って本当に単純だわ。

「いってきまーす！」
「はーいいってらっしゃーい」
朝食を食べ、もう一度身なりを整えて、あたしはプールのある駅まで行く。
３月に行った遊園地のある路線に乗ればプールに着く。
遊園地からは離れているものの、比較的近くにあるプールで、はしごして利用するお客さんも多い。
流れるプールにウォータースライダー、あるいは普通に静かなプールなどもある。
水深の深いプールでは、飛び込みをすることも出来るが、高いところからの飛び込みは特別な許可がいる。浅いところなら監視員さんの立ち会いでＯＫみたい。
……まあ、どっちもあたしには縁がないことだと思うけど。
今回も、乗り換える駅の改札口で待ち合わせをする。
夏はどうしても私服の露出度がアップし、それはつまりあたしの豊満な胸を目立たせてしまう。
そうすると、あたしは男たちから視線を集めることになる。
夏休み中に出かけると、これは毎回のことで、もうすっかり慣れちゃったけど、それでもやっぱり、ちょっとだけエロい目で見られて

いることに、女の子として自信がつくと同時に、「浩介くん嫉妬しちゃわないかな？」という気持ちになる。
普段から腕を組む時、無意識的に胸を盛り上げて強調しているけど、ちょっと考えを改めたほうがいいかもしれないわね。
さて、もう一つの路線に乗り換えるため、あたしは改札口を出る。
「お、優子ちゃんおはよう！」
「うん、浩介くんおはよう！」
そこにはすでに浩介くんがいた。
今日はプールデートで、文化祭の時ぶりに、あたしの水着姿を見ることになる。
浩介くん、ちょっと落ち着かない感じね。
「浩介くん、緊張している？」
「え!?」
浩介くんがあたしの言葉に驚いている。
その態度が「緊張しています」と言っているようなものね。
「久しぶりだもんね。あたしの水着」
「お、おう……」
「ふふっ」
ちょっとギクシャクしたやり取りをしつつ、浩介くんが頬を赤く染めながら答える。
その様子を見ると、あたしも自然と笑みが溢れる。
電車の中で、あたしは浩介くんと談笑しつつ、今日のことも話す。
話を聞く感じ、今はあたしの水着のことで一杯らしい。
「優子ちゃん、水着エロいよね」
「うん、浩介くんに喜んでもらえるために、頑張るわよ」
「お、おう……」
「ふふっ、ヤキモチ妬いちゃってもいいわよ。恥ずかしいけど……後でちゃんとご機嫌直してあげるからね」
あたしがニッコリと言う。
ご機嫌を直してあげるという言葉に、浩介くんは顔を赤くしてドギマギしている。

浩介くんは、あたしが他の男に性的な目で見られるとよく不機嫌になってしまう。そしてその度にあたしが浩介くんにだけしてあげることをしてあげると、すごく上機嫌になって、それの繰り返しは浩介くんを手のひらで転がしているみたいでとても楽しい。
今も手をつないでいるだけで、浩介くんもドンドン上機嫌になってくれている。
電車は次々とお客さんを乗せては下ろし、やがてあの時の遊園地の最寄り駅に到着する。
「浩介くん、次だわ」
「ああ、そうだな」
遊園地とプールは1駅分の距離にある。
なので、各駅停車で次の駅に行けば、もうそこはプールの近く。
夏休みも後半に入り、プールオープン前の早い時間だけど、プール目的と思しきお客さんが結構降りている。
あたしも、浩介くんに続いて改札を降り、プールまでの道のりを歩く。

「間もなく、開場いたします！」
そしてプールの正門前には、そんな係員さんの言葉が拡声器越しに聞こえてくる。
あたしたちは既に出来ていた列に並ぶ。
そこにはやはり結構な人がいる。いかに娯楽が多様化したとは言え、こうも暑いとプールは人気だ。
「はーい！　開場いたします！　危ないから柵に触れないでください！」
門が開き、あたしたちも中へと入る。
ここのプールもやはり規模が大きい。以前は小さなプールがあちこちに点在していたらしいけど、閉鎖が相次いで、逆にここばかり大きくなったらしい。
いわゆる「一極集中」と呼ばれる現象が起きている。
あたしたちは、まっすぐと進む。すぐに男女の更衣室が見えてく

る。
「じゃあ浩介くん、またね」
「おう」
男女で更衣室は当然別なので、あたしも浩介くんとここで一旦別れる。
プールのロッカーは、殆ど開いているため、あたしはわかりやすく「1」のロッカー番号を選んだ。
まずはパンツを脱いでノーパンになり、そこから水着のショーツを穿く。
上のブラジャーもうまく服を着たまま脱ぎ、そして水着のブラジャーに変える。
水泳の授業でも、久しぶりで最初こそちょっと戸惑ったものの、すぐに思い出せた。
そしてそれ以降は、きちんと着替えられたので、人間の記憶力ってすごいと思う。
上下水着になっているのをもう一度確認し、水色のワンピースの服を思いっきりめくり上げて服を脱ぐ。
そうするとあたしは水着姿になったので、最後に水色のパレオで超ミニスカート風にして完成！
周囲のお客さんも手早く着替えている。もうすっかり何も感じなくなっちゃった女子更衣室、女の子になったばかりの頃はドキドキしていたのも、今は懐かしい思い出になっている。
あたしは、財布から１００円玉を取り出し、萎んだ浮き輪を取り出して、鍵を閉めてロッカーキーを腕に巻く。
「お、優子ちゃん」
外に出ると、浩介くんが待ってくれていた。
「浩介くん待った？」
「ううん、そ、それにしても――」
浩介くんがもじもじしながら言う。
「うん？」
あたしはすっとぼけたように首を傾けた。

「やっぱりその水着、かわいいっていうかエロいっていうか――」
「ふふ、ありがとう浩介くん」
浩介くんの言葉に、あたしがニッコリと笑って言う。
さて、入口に入って最初の所。子供用のプールが一番手前にあって、家族連れが遊んでいる。掲示板には水深や飛び込み禁止などの案内が書いてある。
さすがに水深が５０センチから８０センチでは浅すぎて、あたしたちには向かない。
次に、一般的な学校にある２５メートルのプールと同じサイズのプールが目に入る。ここでも、既に何人かが遊んでいて、あたしたちはまずおなじみのここで遊ぶことにした。
「あ、浩介くん、これお願い」
あたしは、萎んだ浮き輪を浩介くんに見せつつ、ちょっとだけ浩介くんに胸を当ててあげる。
「おっしゃ！　任せとけ優子ちゃん！」
浩介くんが途端にやる気になってくれる。
本当にバカな人だわ。でもそこが、頼もしくもあり、大好きなんだけどね。
「ふうーーーーー!!!」
人通りから外れた所に移動し、浩介くんが息を吹いて浮き輪を膨らませてくれる。
浩介くんの角度からは、パレオの中の水着が丸見えの位置に無自覚を装って立つ。
もちろん、水着だから見られても平気。ということで、去年同様、普段は恥ずかしがるのに堂々と見せるところに興奮して欲しいと思う。
まあ、去年は、あたしがまだあまり女の子になりきれてなくて、色々と失敗しちゃったんだけど。
「はいできたよ！」
浩介くんがパンパンに膨れ上がった浮き輪を見せてくれる。
「わーいありがとう！　早速遊ぼうよ！」

「おう」
あたしが笑顔になると、浩介くんも笑顔になる。
ちなみに、「危険！　絶対に飛び込むな！」という、おどおどしいフォントでの飛び込み禁止の看板があるため、あたしたちは普通にプールサイドから丁寧に入ることにする。
まず浩介くんが入り、浮き輪を浮かせて手で固定くれたので、あたしがゆっくりとその中に入る。
水深は1．3メートルなので、問題なく背が立つんだけどね。
プールの水中では超ミニのパレオもゆらゆらはためいている。
泳ぎの練習をしてもいいんだけど、せっかく空いているので、あたしたちはルールも何もない、あてもない水遊びをすることにした。
「えーい浩介くん！」
「お、やったなあ優子ちゃん！」
遊んでいるうちに人も増えてきて、あたしたちも派手な遊びは出来なくなっていく。
看板には、「定期的に休憩を取る」ようにも書かれていて、監視員さんも目を光らせている。
「人多くなってきたな」
「うん、でも水気持ちいいね」
人が増えて暑いと言っても、芋洗いで温いと言う感じではなく、水温は冷たいままだ。結構管理はしっかりしている。
遊び疲れたあたしは、浮き輪に腕を預け、プールの底に足をつけてゆったり休む。
さらーり
「きゃっ！」
突然、水中から手が伸びて、あたしのお尻に触れる手があった。
よく見なくても浩介くんの仕業だった。
「もー、浩介くん！」
「悪い悪い、さっきから優子ちゃんエロすぎて、つい我慢できなくて」
そして浩介くんがいつもの言い訳をする。
あたしも、この水着はとてつもなくエロいと思っているし、そう

じゃなくたって胸もお尻も大きくて、こんなかわいくて美人な女の子の彼氏じゃあ、性欲を抑えるのも大変だということも分かっている。
「浩介くんって、いつも触りたくなるよね。あたしってそんなに魅力的？」
意地悪して聞いてみる。返答なんて分かりきっているのに。
「うん、当たり前じゃん。ここのプールに来る前も、優子ちゃんのこと、他の男たちがエロいだの何だの話してたぞ」
「そ、そう……」
気付かなかったわ。まあ、いつものことで気にもとめなくなったせいかもしれないけど。
「さて、そろそろ休憩しようか」
「う、うん」
遊び疲れたあたしを見て浩介くんが言う。
あたしたちは備え付けのはしごでプールを上がり、備え付けのベンチに座った。水面から出ると、パレオがお尻に引っ付いている。脱いで入ったほうが良かったかな？
「濡れてる優子ちゃんかわいいね」
「えへへ、ありがとう」
やっぱり、何回言われても「かわいい」って言ってもらえるのはとても嬉しい。
ましてや、好きな男の子から言われたら、メロメロになっちゃいそうだわ。
「飲み物買う？」
「うーん、まだいいわ」
「よし、じゃあこっちへ行ってみようぜ！」
浩介くんが指差したのは、流れるプールだった。
「うん！」
あたしも、特に異論はないので、浩介くんに引っ張られて、流れるプールまで歩く。
太陽が燦々と輝いていて、徐々に気温も上がってきた。

# 篠原浩介、性欲との戦い　前編

涼しい風がパレオをはためかせ、中の水着がチラチラと見える様子は、水に濡れると殆ど見られなくなってしまった。
水着が吸収した水分の重みが、風に強くなったから。
それでも、超ミニだから少し体制を変えれば簡単に見えちゃうし、それ以前に、水着へのひっつき方によって、後ろの一部はデフォルトで見えている。
あたしはそんなことを気にも止めずに流れるプールを目指す。
ちなみに、浩介くんにとっては気が気でないみたく、さっきからわざと歩調を見出してあたしのお尻ばかりを見ている。
隣で歩く浩介くんは、更にギンギンに大きくなった下半身を随分と気にしていた。あたしはというと、去年これを見て吐き気がしたことを思い出しつつも、浩介くんがあたしで興奮してくれていることが何よりも嬉しかった。
「うお、結構流れ速いな！」
「うん、流されないように……手、繋いでくれる？」
ちょっと心配になって、あたしは上目遣いで浩介くんを見る。
この流れるプールは円状に流れていて、真ん中にはウォータースライダーの終点があって、どこからでもウォータースライダーを見ることが出来る。
たまにウォータースライダーの方から楽しそうな声があがって来るのも特徴の一つ。
「あそうだわ」
パチン
あたしはパレオを止めてあるボタンを外して、普通のビキニ姿になる。
水に濡れちゃうとちょっと引っ付いちゃうし。
浩介くんは、こんな何気ない動作でもドキッとしてくれる。
「浩介くん、これ持っててくれる？」
「お、おう……あ、浮き輪にかけておくといいかもしれないな」

そう言って浩介くんが先にプールに入ると、あたしからパレオを受け取って浮き輪の近くにかけてくれた。
浩介くんが流れに逆らってその場にとどまっているので、あたしも気持ち早くにプールの中に入る。
浩介くんが力を落とし、２人で並行してプールを楽しむ。
「荷物持ってくればよかったかな？　そうすればしまえたし」
「うーんいいよ。まあちょっとシュールだけど」
パレオ無しでビキニで水に入ると、あるのとではちょっとだけ感触が違う。
違わないのは――

すりすり
「きゃあ！　こら浩介くん！」
浩介くんの、どさくさに紛れて触る手の感触はいつもと同じ。
プールに入ると早速、浩介くんに、待ってましたと言わんばかりにお尻を触られてしまったわ。
「ごめんごめん、優子ちゃんのお尻、つい触りたくなっちゃって」
「浩介くん、誰かが潜ってたらどうするの？」
ついあたしも突っ込みたくなる。
「うっ……そ、それは……」
久しぶりに、ちょっとだけお説教したい。
浩介くんがえっちなのはいいし、水着は我ながらエロくてかわいいから、浩介くんがいたずらしたくなっちゃう気持ちもわかるけど、水越しと行ってもやっぱり他の人も見ているから自重して欲しい。
「じゃ、じゃあさ――」

もみっ
「きゃあっ！」
お尻がダメならと胸だと言わんばかりにあたしは浩介くんに胸を一揉みされる。
「ちょっと浩介くん！」
「大丈夫、前見てるから、潜ってる人居ないから、後ろから胸は見えね

えだろ？　にしても柔らかくて気持ちいいなあ……」
　もみっ
「ううっ……」
　どっちにしても、今のあたしはエロすぎて、浩介くんに触られる運命らしいわ。
　確かに、それを目指した水着を、こんな体型で着てたら仕方ないのかもしれないけど。
「でもよ、優子ちゃん、ここもし一人だったら、命が幾つあっても足りねえぜ」
「う、うん……」
　確かに、浩介くんの言う通りだわ。ましてや流れるプールじゃあ、あたしを触ろうとする痴漢は多そうだし、それに浩介くんになら……ってまたそんなこと考えてるわね。
「ま、俺が守ってやるから、その代わりな。守ってあげる代わりに触らせてもらうんだ」
「えー!?　ま、まあうん……」
　一瞬驚いちゃったけど、実際浩介くんには守られっぱなしだし、ご褒美くらいあげてもいい……わよね？
　もみっ……もみっ……もみっ……
「きゃう……うー！」
　そんなことを考えている間にも、あたしは流れるプールで浩介くんに胸を水中から何度も揉まれてしまう。浩介くんに前から後ろから、右から左から、様々なシチュエーションで、あたしの豊満な胸が変形させられていく。
　そして、あたしの体内が急激に熱くなっていくのを感じる。特に顔は、燃えちゃうんじゃないかというくらい熱い。
　ああ、冷たい水の中のはずなのに、体が熱いわ。
「お、優子ちゃん興奮しちゃった？」
　あたしの顔が真っ赤になってるのを見て、浩介くんが悪戯心を込めた声で言う。
　好きな女の子に、つい意地悪しちゃいたくなるのが男の子。

それに加えて性欲まであるから……浩介くんだって本当はこれでも抑えている方よね？
何だかあたしも、興奮してしまうわ。
……よし！　あたしも、やられてばかりじゃないわ！
むにっ！
「はわっ!?　ゆ、優子ちゃん!?」
あたしが、仕返しのつもりで浩介くんの身体を掴むと、浩介くんがかわいい声を出してくれる。
あたしもあたしで、浩介くんに触っちゃうとものすごい興奮しちゃってたまらないわ。
「ふふっ、ちょっとだけ仕返しよ」
表面では、悪戯心を装っているけど、実際に心臓の鼓動は、浩介くんに負けないくらい興奮し始めている。
やっぱり、あたしも女の子。浩介くんの、ううん、男の子の大きいの大好きだわ。
本当は、今のあたしはもっと過激なことをしてみたいという欲望でいっぱいなんだけど、何とか理性を手繰り寄せて我慢する。
触っていると、興奮すると同時に、あたしはただ「女」だけではなく、「メス」なんだと自覚できるのがとても嬉しい。やっぱりまだあたしはまだ不安定なのかな？
「優子ちゃん、もしかして俺よりえっちなんじゃない？」
気持ちいい声を必死でこらえつつ、浩介くんが言う。
よく考えたらあたしたち、傍目から見たら、バカップルもいい所よね。
「あはは、そうかもしれないわ」
「また興奮してるんだろ？」
「あうー、恥ずかしいよお……」
浩介くんに図星を突かれてしまう。
そんな風に水中で触り触られで遊んでいると、流れるプールが２周していたことに気付く。
浩介くんは何回もあたしのこと触ってくるけど、さすがに疲れてき

ちゃったわ。反応鈍いと、浩介くんの機嫌損ねちゃいそうだし。

「上がるか？」

「うん」

そろそろウォータースライダーでも遊びたいと思っていた矢先、浩介くんが声をかけてくれる。

浩介くん、なかなかすごいわよね。

あたしは浮き輪ごと浩介くんに引っ張られ、まず浮き輪にかけていたパレオを陸にあげ、浩介くんの支えの元、まずあたしから上がり、次に浩介くんが上がる。

あたしはパレオを拾い上げて、もう一度穿きなおす。

「何か水に入る時パンツ丸出しみたいだな」

「も、もう！」

浩介くんの冗談に、あたしも緊張してしまう。

パレオの方は乾いていたけど、もう少し水を絞る。

こうすることで軽くなり、風に弱くなってよくはためくようになる。丈が超ミニなのではためけばそれだけチラチラと見えて、エロさを演出できる仕組みになっている。

「優子ちゃん、それ、エロすぎる……」

絞る様子は、水着の中が絶妙な見え方をするため、年頃の男の子には刺激が強すぎるみたいね。

浩介くん、大丈夫かな？

「ねえ見てよ、あの彼氏」

「本当、お盛んよねえー」

「いや、見てよ。あの彼女、超かわいいじゃん！」

「本当だ。それにスタイルもすげえし、そりゃあああなるよなあ……！」

近くにいた女性２人組が、浩介くんの今の状態について話している。

浩介くんは、顔を赤くして俯いてしまっている。ちょっと悪いことしちゃった気分でバツが悪いわね。
「浩介くん、気にしなくていいわよ。こんなかわいい彼女なんだから」
あたしは、浩介くんにもっと堂々として欲しい風に言う。
「うっ……で、でも……」
浩介くんは、まだ遠慮している感じで言う。
「とにかく、ウォータースライダーで遊びましょ？」
「ああ」
何とか浩介くんに納得してもらい、ウォータースライダーへと進む。
さて、ウォータースライダーは大きな滑り台は大きくカーブを描きながら滑る迫力満点の遊び。
持ち物はあたしの浮き輪だけだけど、落し物と誤解されないように規定のウォータースライダー客用の預け場に預ける。あたしの腕の鍵が2つになった。途中で無くさないように特に注意しないと。
ウォータースライダーで遊ぶためには当然階段を上がるわけだけど……
ぺろっ
浩介くんにさっきから何度も後ろからパレオをめくり上げられて中の水着を見られている。
超ミニだから、そんなことしなくても見えているはずなんだけど。あたしは、ちょっとだけやせ我慢も入っているけど、恥ずかしがらずに堂々とする。
「うーん……やっぱり納得いかねえんだよなあ……」
浩介くんは性欲というより、何かを考えてめくってる感じで言う。
「ん？　何が？」
あたしが聞いてみる。
「やっぱこの水着見ても、普段俺が見てるパンツと大差ないっていうか」
「もう、普段って何よ普段って……」
あたしそんなにパンツ見せてないわよ。

「いやさ、やっぱ水着と下着の差が分からないというか……」
「水着は泳ぐためだから、水への対策が多いのよ」
あたしも、厳密に説明しろと言われたらきついけど。
「ふーん、でも、やっぱ優子ちゃんが一番かわいいや」
「うっ……もー、いきなりは反則だよ……でもありがとう」
何の脈絡もなく「かわいい」って言われちゃってびっくりしたけど、やっぱり何回言われても嬉しい言葉だわ。
さて、長い階段を上がるとウォータースライダーの入り口に到着した。
人気コーナーのため、やはりそれなりに人が並んでいて、前方には女性2人組やカップルの姿もある。
危険防止のため1人が降りてしばらく間隔をあけてから出る。2人で抱き合いながらと言うのはここでは残念ながらできないらしい。
「きゃあああ」という、女の子の悲鳴も聞こえてくるが、楽しそうな声で、遊園地の時に聞いた声とはまた違うわね。
「次の方、どうぞ。こちらの手すりにおつかまり下さい」
「はーい！」
あたしが呼ばれたので、係員さんの指示に従い、手すりにつかまりながらスタート地点に座る。
お尻の下は、勢いよく水がひっきりなしに流れている。くみ上げて循環しているのかな？
「はい、それでは手すりから手を放して出発してください！」
「んっ……きゃあああ!!」
あたしは、手すりから手を放すと、勢い良く身体が滑り出し、思わず悲鳴が漏れてしまう。
滑り台は結構角度が急で、かなりの速度が出る。
でも、怖さはない。カーブで曲がると、結構減速してくれるから。
「きゃはははは!!!」
水着のパレオは、お尻の方は速度について行けず下の滑り台にめくられて、前の方も風圧で勢いよくめくれ上がり、完全に丸めくれになっている。

ばっ
あたしは、爽快感で笑いつつも、意味もなくパレオを抑える。
多分、あたしの中で組み込まれた遺伝子のせいだと思う。スカート状のものがめくれると、つい抑えてしまうんだと思うわ。
「わっ、きゃはははは!!」
楽しく叫んでいると、前方が急に明るくなった。
そう、ウォータースライダーもこれで終わり。
ざぶーん!
あたしは前方の水に勢いよく突っ込む。
「むぐっ……むぐむぐっ……」
あうう、溺れちゃう!
……って、足つくわね。
あたしは何とか体勢を立て直し、プールを歩く。
水の中で、パレオがまた、ゆらゆら揺れている。
ざぶーん!
あるき始めた時、後ろで水しぶきがした。
あたしの後ろに浩介くんがいた。
「楽しかったね浩介くん」
「あ、ああ」
浩介くんがニッコリ笑う。
どうやら、浩介くんも楽しかったみたいね。
「ねえ、もう一回やろう?」
「おう」
浩介くんがニッコリ笑う。
あたしはもう一度パレオを絞り、浮き輪はそのままにウォータースライダーへの階段を上る。
「次の方、どうぞ!」
今度は浩介くんからウォータースライダーへ。
浩介くんは、特に声を出していない。
そして、あたしはさっきと同じように、手すりにつかまり、係員さ

んの指示で手を離してウォータースライダーを楽しむ。
「きゃあああああはははははは!!!」
あー楽しいわ。最初と違って、恐怖感もないので楽しさは倍増する。
あたしは、めくれ上がるパレオのことも忘れて、万歳しながら楽しむ。
せっかくの水着、見えてなんぼよね。誰も見てないけど。

ざぶーん！
「むぐむぐむぐっ!!!」
えっと、このプールは立つから……ってわっ！
あたしは、別の力で体を起こされる。
どうやら、浩介くんに救助されたみたいね。
「ぷはっ……あ、浩介くんありがとう」
また浩介くんに守られちゃったわ。
「おう」
すりすりすり……
「ありがとう何だけど……」
浩介くんに、どさくさに紛れて思いっきりお尻をなでなでされてしまう。
「おう」
ぺちっ！
「浩介くんのえっち!!!」
さすがに何回も触られて恥ずかしいので、ビンタして大声で叫ぶ。
それを聞いていた周囲も「クスクス」と笑っている。
「もー恥ずかしいよお……」
「とか何とか言って、嬉しいんだろ？」
浩介くんが、悪戯心満載のニヤニヤした表情で言う。
「うー！」
あたしは、反論できない。
完全にバカップルだわ。

「それよりも疲れたな、優子ちゃんは？」
「うん、さすがに2回も滑ると疲れるわね」
浩介くんも、少し疲れたみたい。あたしも、正直そろそろ休みたい気分だった。
「じゃあ、休もうか？」
「うん」
あたしたちは、ロッカーから浮き輪を戻して、そこらじゅうに設置してあるベンチのうちの一つに座る。
ベンチの近くには水飲み場があったので、ありがたく水分を補給させてもらうことにした。
「にしてもさ」
休憩中、浩介くんが何気なく話しかけてくる。
「うん？　どうしたの？」
「優子ちゃんって、恥ずかしがり屋な割には、結構応えてくれるよね」
「え!?　そうかな？」
確かに、浩介くんが喜んでくれてるのを見ると、恥ずかしいセクハラも許しちゃうし、かなりしつこいセクハラでも、ビンタしちゃえば許しちゃっている。
「うんうん、特に顔を真っ赤にしてビンタする優子ちゃん凄いかわいいんだ」
「もー！　浩介くんったら！」
あたしは笑いながら、両手で浩介くんの肩をバシッと叩く。
いかにもな感じの照れ隠しの動作。
浩介くんにも、笑みがこぼれる。

「――でさ、優子ちゃんって巨乳とか体重をコンプレックスにして無いのがいいと思うんだよ」
「うんうん、どうして？」
その後は、あたしたちの性格の話になる。
「贅沢な悩みをしないから、嫌味に見えないんだ。やっぱり、優子ちゃ

んレベルでかわいいなら、自信家がいいと思うんだ」
浩介くんが、あたしの魅力について話している。
もちろんあたしにもコンプレックスはあるけど、それは「贅沢な悩み」とは程遠いもので、むしろ圧倒的大多数が持っていることを持っていないものに対するコンプレックスだ。
「お腹空いたな」
「うん」
お互い「ぐー」っとお腹は鳴らしていないけど、空腹なのは確か。
「確か、会計はロッカーキーで後払いだっけ？」
「うん」
「よし、じゃあ食べるか！」
浩介くんに引っ張られ、あたしは中央にあるプールの軽食屋さんへと進んでいった。

# 篠原浩介、性欲との戦い　後編

防水バーコード付きのこのロッカーキー、これを見せれば中にある軽食屋さんで色々なものを頼むことが出来る。もちろん後でちゃんとお金を払わないといけないけど。

プールの中の軽食屋さんという事で、アイスクリームやかき氷、焼きそばなどの夏のメニューが多い。

「あたしはチョコアイスクリーム甘さＭＡＸ！」

粒粒のチョコレートと、砂糖たっぷりのチョコレートアイスクリームで、甘々と書かれている。

あー、あたし甘いもの大好き！

「うーん、俺はビッグバニラアイスと焼きそばかな？」

浩介くんも、結構甘いものが大好きで、こうやって頼む。

会計を別にするため、あたしが前に並ぶ。

「チョコアイスクリーム甘さＭＡＸ３つ！」

「はーい！　チョコアイスクリーム甘さＭＡＸ３点入りましたー！」

前の女の子３人組があたしと同じチョコアイスクリーム甘さＭＡＸを頼む。

近くのテーブルを見ていると、水着の女の子たちが、こぞって甘さＭＡＸのアイスクリームを競うように食べている。

そして、３人組のアイスが完成すると、嬉しそうにキャーキャー言いながら姦しくテーブルについて、おいしそうに食べ始める。

女の子になってからというもの、とにかく甘いものに目がなくなったけど、やっぱりこれを見ると嫌でも分かる。

「どうぞ！」

「チョコアイスクリーム甘さＭＡＸ！」

「はーい、チョコアイスクリーム甘さＭＡＸ入りましたー！」

あたしは、うずうずしながらチョコアイスクリーム甘さＭＡＸを待つ。

水着姿の女の子たちが、おいしそうに甘い甘いチョコアイスクリームを食べているのを見ると、こっちまで甘い気分になってくる。

甘いもの嫌いな女性もいるなんて言うけど、絶対都市伝説だとあたしは思ってしまった。
いやだって、あたしの味覚ほとんど変わっていないのに、甘いのだけ大好きになったし、甘いもの嫌いな女子なんていないでしょ!?
「お待たせいたしましたー!」
「わーい!」
後ろでは、浩介くんがビッグバニラアイスと焼きそばを頼んでいる。
あたしは、アイスが溶けないうちに2人席を探し、早めにいただきますをする。
「ぱくっ……はうううううう!!!!」
口に入れた瞬間、あたしは本当にほっぺたが落ちるんじゃないかと思った。
それくらい、このスイーツは甘々で蕩けそうになる。
浩介くんが、柔らかい顔で向かいの席に座り、ビッグバニラアイスを豪快に頬張っている。
そして、お互い黙々と、半分食べた所で、あたしがちょっとストップする。
「浩介くん、間接キスしよ?」
「ぶふっ……! もー優子ちゃん、わざわざそんな言い方しなくていいから!」
浩介くん、吹き出しちゃってえ。本当、男って単純だわ。
ともあれ、あたしは浩介くんのビックバニラアイスを一口食べる。
「うん、おいしい!」
個人的には、甘々なチョコアイスクリーム甘さＭＡＸの方が好きだけど、このバニラアイスも、とってもおいしいわ。
「浩介くん、どう?」
同じく、あたしのアイスを控えめに一口食べた浩介くんに聞いてみる。
「美味しいといえば美味しいんだけど、いくら何でも甘すぎない?」
「ううん、甘いのは美味しいわよ。チョコの味とも合ってるわ」

「やっぱ女子って甘いもの好きだよな……」
浩介くんは、どこか他人事のように言う。
確かに、男子からすると理解できないのかも。優一がこのアイスを食べたら、浩介くんと同じ感想を抱くと思うし。
その後は、焼きそばがある分あたしが先に完食し、浩介くんをちょっとだけ待ってから、次のプールを目指す。
子供用プールのほかに入ってないのは、５０メートル級プールと、飛び込みプールがある。
５０メートル級は、年齢層高めで、場合によっては、選手の練習にも使われる。
今日は一般に開放されている日なので、このプールも飛び込み禁止だけど、明らかにさっきのプールとは違い、看板を取り付けたり外したりができる。
「ここ、ちょっと水深深いね」
「ああ、浮き輪付けた方がいいだろ」
「うん、それから……」
あたしは流れるプールと同じように、パレオを外してビキニ姿になる。
さっきと同じように、この大きな浮き輪にかければＯＫだ。
まず浩介くんがプールに入り、浮き輪を入れて、その中にあたしを入れる。
すりすり……
またお尻に手の感触を受ける。
「きゃっ！　こらあ！」
「いやほら、体支えるのに必要だから」
浩介くんがその場しのぎの言い訳をする。
「浩介くん、さっきまでプールに入った時にはあたしのお尻触ってなかったでしょ？」
「いやほら、より安全を期すためっていうか……だからセーフ！」
何なのよそれ……
「仮にそうだとしても、あんないやらしい触り方何て――」

むにっ！
「きゃあ！　もー、言ったそばからー！」
浩介くんに胸を揉まれてしまう。
「いやほら、その……我慢できなくて、つい……」
「さっきの言い訳はどうしたのよ？」
本当に男ってバカよね。
まあ、そんなところが好きなんだけど。
「……ごめんなさい。水着姿の優子ちゃんといると抑えるのが難しくて」
浩介くんが正直に白状してしまう。
「もうっ！　そんなこと言われちゃったら怒れないじゃないの！」

「見ろよあのバカップル」
「くー、リア充死ねえ！」
「くそー、何でみんなかわいい子には彼氏が……うー、鬱だあ！」
「おい！　気をしっかり持て！　大丈夫か！」

あたしたちのやり取りに、男２人組が悲哀の声を上げる。
それを聞いたあたしたちは、彼らから少しだけ遠くに離れる。
ここのプールは２５メートルよりも少し本格的で、子供向きではないともあって、今までのプールと比べると空いていて、真ん中で泳いでいる人も多い。
小さな子供には深すぎるプールでもあり、あたしたちも泳ぎの練習をすることになったんだけど……

バタバタバタ……！
「よしいいぞ！」
あたしは、結局プールの淵に手をかけて、基礎的なバタ足練習をすることになった。
遊び疲れた疲労感も、昼食でいくらか緩和されたとはいえ、すぐに疲れてしまうのは同じ。

「はあ……はぁ……」
　こうやって、あたしはすぐに足をついてしまう。
「ふう、少し休憩だな」
　泳ぎの練習といっても、学校の授業や部活の大会があるわけではないので、のんびりと行う。どっちかというと、貧弱過ぎる運動能力が更に弱くなって、日常生活に支障が出ないように運動するという感じ。
　浮き輪にかけていたパレオも、プールの淵に置いておけば盗難の心配もない。
「それでさ、高月のやつ」
「……本当、捕まらないのが不思議だわ」
　水の中で、練習の合間に浩介くんと話しつつ雑談をする。
　さて、この泳ぎの練習で困ったことは――
「さ、そろそろ再開だ」
「う、うん……」
　再びあたしはプールの淵に手をかけてバタ足練習をしようとするんだけど――
　わさわさっ……
「いやぁん！……浩介くん、そこ触らないでー！」
「しょうがないだろ？　バタ足練習の体制を作らなきゃいけないんだから、持ち上げるほかねえだろ！」
「触るにしても足とかにしてよー！」
「それだと不安定だろ？　優子ちゃんはお尻大きいんだからそこで支えるのが一番安全なんだよ」
　そう、立って休憩して、自力でバタ足するまで、足を水面に持って行って自力で横になる必要があるのだが、例によってその体制を取るのに失敗してしまうことがあったりするので、浩介くんが持ち上げてくれる。
　何だけど、持ち上げられるたびに、あたしは思いっきりビキニのショーツを前後から浩介くんに鷲づかみにされてしまう。確かに体を支える上で一番安定する安全な場所とは言え、お尻だけじゃなく

て、前の部分まで同時に触られてしまうのはかなり恥ずかしいわ。
好きな男の子の手で触られると、興奮しちゃって、中々集中できない。
「俺は、優子ちゃんに安全にけがなく練習してほしいんだ！」
「うー！」
こんな風に大義名分まで作られちゃったらもう反論できないわ。
ともあれ、あたしはもう一回バタ足練習を始める。
バタバタバタ……！
「ふぅーふぅー！」
息継ぎの練習もしないで、ひたすらにバタ足を繰り返す。学校の水泳の授業で分かったけど、あたしはとにかく体力が続かない。
そう言う意味でも、基礎的な練習が必要になる。
「はぁ……はぁ……」
でもなかなかうまくいかなくて、すぐに体力が尽きてしまう。
やがて足が沈み始め、プールの底へと立つ。
「今日はここまでにしようか」
「うん……やっぱりあたし、体育はダメだわ」
正直、殆ど練習してないに等しい。
「うん、でもいいよ。俺が守ってやればいいだけの話だしな」
浩介くんが笑顔で言う。
あたしはそれを聞いて、熟れたリンゴみたいにぷしゅーっと顔が赤くなる。
もう、かっこよすぎてダメ。
「優子ちゃんどうした？　いつもより顔赤いぞ！」
「だ、だって……」
浩介くんに何回も痴漢されて、そのせいでいつもより興奮してるなんて口が裂けても言えないわよ。
「とにかく、上がるか」
「う、うん……」
あたしたちはプールから上がる。
あたしはもう一回パレオを付けて超ミニスカートの水着になる。

「浩介くんはこれ付いてるのとついてないのどっちが好き？」
「うーん、スカートあったほうがかわいいし、エロいかな？　丈が短いからお尻のラインとかもちゃんと見えるし」
浩介くんは少し考えてその答えを出す。
「ふふっ、浩介くん、今日は興奮しっぱなしよね」
現に今も、鼻の下伸ばして下半身も大きくなってるし。
うん、あたしの作戦は大成功ね。
「そ、それより、まだ行ってないところは？」
「うーん、子供用プールと飛び込みプールだよね？」
「ああ」
ここからだと、飛び込みプールに行くには子供用プールに行かないといけない。
あたしは飛び込むつもりはないけど、見るだけ見てみよう。
あたしたちは飛び込みプールに行く途中、子供用プールの側を歩く。
「すげえ混雑だな」
「うん」
浩介くんの言う通り、子供用プールはたくさんの家族連れでにぎわっていた。
水深も浅いのに加え、流れるプールとウォータースライダーは、中学生以上を対象年齢としているためだろう。
そして、それを通り過ぎると、付近の人口密度が一気に過疎化する。
このあたりは飛び込みプールしかない。
「だ、誰もいねえな」
「う、うん……」
あたしたちは飛び込みプールの目の前に来たものの、そこは誰もいなくて、水だけが空しく張られていた。
それというのも、このプール、水深が１０メートルもあって単純に怖い。
上から飛び込みをするどころか、あたしたちが今立っている０メートル地点から飛び込むのだって怖い。

この飛び込みプールは、選手の人がいればギャラリーで盛り上がるらしい。実際、実演の時間帯もあるけど、あいにく今日はやっていない。
入口には監視員さんがいて、図解の説明を見る限り、一般の人でも体験できるのは、1メートルと3メートルまでのみ。
他に、もっと高い位置からの飛び込みもあって、こちらはいわゆる「競技」としての飛び込みだ。
実際に、いろいろ資料があって、水の入り方なんかも沢山ある。
「よし、行ってくる！」
浩介くんが気合を入れている。
「うん、気を付けてね」
あたしは、地上で待つ。
浩介くんが監視員さんと何か話し、上の方の3メートルの方に上る。
浩介くんを下から見上げる形になる。
「浩介くん、頑張って！」
「おりゃあ！」
浩介くんは飛び込み台の端っこに行き、板を踏み込むとジャンプしてくるりと体を180度回転させ、かっこよく飛び込む。
ざぶーん!!!
豪快な水しぶきを上げてしばらくすると、浩介くんが浮き出てそのままプールの淵まで泳いで上がってくる。
「きゃー！　浩介くん素敵ー！」
あたしは思わず感激の声をあげ、浩介くんを祝福する。
「ふう、思ったよりはうまくいったよ。ねえ優子ちゃん」
「うん？」
「優子ちゃんもやって見てよ」
「えー！　無理よ！」
浩介くんの突然の提案にあたしは思わず無理アピールをする。
「大丈夫、俺みたいにしないで普通にそのまま落ちれば大丈夫だし、溺れても俺が救助してやるって」

「いや溺れたくないわよ」
　あたしが当然の反論をする。
「じゃあ、俺がすぐに助けてやるから。一回だけ、その水着が自然に丸ごとめくれるの見たいからさ」
　浩介くん、本音ダダ漏れよ。
　でも、確かにまたとない経験だし、怖いけど1回くらいならいいかな？
「う、うん……やって見るわ」
　あたしは断れなくなって、浩介くんと同じ3メートルへ進む。
「お、嬢ちゃんも飛び込んでみるかい？」
「う、うん……」
「不安なら救助サービスもあるぜ」
「あ、その……浩介くんがしてくれるので」
「おう、そうか。腹を打ち付けねえようにな。水に沈んだら下手にもがくよりじっとしてたほうが浮くぜ」
「分かってるわ」
　あたしもこの体型だし、沈むほうが難しそうだわ。
「よし、じゃあ頑張れよ。それから、水着はしっかり絞めておけよ」
「はい」
　監視員さんに見送られ、あたしは階段を上がる。念のために、もう一度水着のブラジャー、ショーツ、パレオ、そして髪飾りを確認する。
うん、緩んではいないわね。
　あたしは恐る恐る、板を前に進む。
「あうう……」
　下を見下ろすと、3メートルはかなり高くて、思ったよりも怖い。
あたしの身長の2倍近いから当たり前だけど。
「優子ちゃーん！　下から丸見えだよー！」
「もう、浩介くんったら！」
　水着なので見られても平気なんだけど、こんな風に大き目の声で言われると、やっぱりちょっと恥ずかしい。
　とにかく、飛び込まないと。

「んっ……すぅーはぁー」
もう一度深呼吸をする。
「えいっ！」
飛び板からほぼ垂直に飛び込む。
あたしは重力に従って落下し、風圧でパレオが思いっきり上までめくれ上がって丸見えになる。
ざぶーん!!!
反射的に恥ずかしさを覚えたあたしはパレオを両手で抑え、次の瞬間には水の中に入っていた。
そして、一瞬後に、別の飛び込む音がして、あたしはじっとしているとすぐに外部から引き上げる力が働き、お尻と背中を水中で触られる感覚がした。
「ふー！」
やがて、顔から水の気配がなくなったので、目を開いて見ると、浩介くんの顔が見えた。
そして、浩介くんの介助の元、あたしたちはプールまで泳ぎ始めた。
すりすり……
あうう、こんな時まで浩介くんにお尻触られちゃってるよお……
パチパチパチ！
プールから上がってよく見ると、周囲にも2、3人のギャラリーが集まっていた。

「いやー、女の子の飛び込みってエロいよな」
「うんうん、彼氏持ちなのが残念だけど」
「そりゃあんだけかわいいんじゃ引っ張りだこだろ？」
「くー、羨ましい」

ギャラリーが勝手にそんな話をする。
そして、あたしたちがもう飛び込まないと分かると、ギャラリーはそそくさとどこか違う場所へ行ってしまった。
飛び込みプールは、このプール全体の端に位置している。

プールの敷地上の問題か、飛び込みプールと端の壁はそれなりの距離があって、壁のフェンスに寄りかかって休んでいると、監視員さんが休憩に出て、代わりに「ただいまの時間、飛び込みプール使用禁止」の札を掲げている。
あたしたちは、壁を背に向けてプールの全景を眺める。
「これで全部だな」
「うん」
「でも、まだしてないことがある」
浩介くんが、何かいかがわしいことを考えてそうな表情で言う。
「え？　何？」
「それは……これだ！」
わさわさっ……！
「きゃあ！」
浩介くんが手を伸ばし、あたしは水着の上からお尻を触られる。
「ちょ、ちょっと！　お尻ならもう十分触ったでしょ!?　きゃあ！」
もみっもみっ……
今度は両胸をがしっとつかまれ、豊満な胸を味わわれる。
「はうっ……んっ……あん……やぁっ!?」
そして、あたしが艶めかしい声をあげさせられていると浩介くんの手の一方が、前の下のほうへ延びていく。
「へへ、水着姿で、水中以外で触るのは初めてだからね」
浩介くんが、いたずらっぽく言うと、あたしの背中に大きくて固い感触がする。
あたしもあたしで、興奮しすぎて水着の内側が止めどなく濡れていく。
「水着越しの触る心地っていいよね」
「ねえ浩介くん、誰かに見られたら大変だから――」
「あ、ああ分かった」
あたしが理性を振り絞って言うと、冷静になってくれた浩介くんが手を引っ込めてくれる。
「でもさ優子ちゃん」

「うん？」
「今日は払いのけようとしなかったよね」
浩介くんが鋭く指摘する。
「うん、というよりも、デートで触られても拒否したことないわね」
「やっぱり、優子ちゃんっていい女だよなあ」
「だって、浩介くんが喜んでるのを見るとうれしくて嬉しくて」
同じ触られるでも、愛しの浩介くんにされるのは特別だわ。
それに今日は水着だし、むしろ一回も浩介くんに触られなかった方が落ち込む自信があるわ。
「はは、優子ちゃんいつもそれだね。嬉しいよ。でも、俺だって恥ずかしかったよ？」
「え!?」
「優子ちゃんエロ過ぎて、大きいの隠せないし」
「あ、うん、そうよね」
まだ大きくなってる浩介くんから、あたしは目が離せない。
何かあたしたちあたしたち、処女童貞って以外は龍香ちゃんカップルと変わらないような気がするわ。
でも、浩介くんだって耐えに耐えている。むしろ他の男の子だったらもっと過激なことをされてもおかしくない。浩介くんだからこそ、これだけで済んでいるのよね。
「ともあれ、上がろうぜ。俺たちの両親も待ってるし」
「うん」
出口は決まっていて、男女別に分かれてシャワーを浴びる。
あたしは浩介くんと分かれてシャワーに並ぶ。
「んーーーーーー!!!」
冷たいシャワーが全身を打ち付けると次に乾燥機で水を飛ばす。
あたしはいつものようにパレオを絞る作業を行う。
ロッカーを開け、パレオを脱ぎ、タオルで全身を拭きつつまずワンピースを着て、水着を脱いでさっきと逆の手順で着替えていく。
忘れ物がないかもう一度確認する。
そしてロッカーからレシートみたいな紙が出てくる。

これをレジで見せて、会計をする仕組みだ。
あたしはお金を払い、外で浩介くんと合流する。

# プールからキャンプ場へ　喧騒と静寂と

「ごめーん、待った？」
「ううん、大丈夫」
あたしたちは、もう一度駅に戻り、さっきの路線の更に奥へと進むことになっている。
そこから乗り換えて、更に山奥を走る路線の駅から、更にバスでキャンプ場だ。
キャンプ場では両家の両親が設営と準備をしてくれているはず。
「結構遠いよね」
「でも、帰りは車だろ？」
「うん」
今回のデートや旅行も、既にあたしたちの結婚を前提にした付き合いも兼ねている。
だから、両親も今回はかなり気合を入れてきていると思う。
「まあ、今頃ちゃんと準備してるだろうさ」
「そうよね」
あたしたちは、席に座りながら、他愛もない話に花を咲かせる。
あたしはこの電車で終点まで行ったことはない。
だからまた、未知の領域に入る。
それはさし詰め、修学旅行の時に乗った関西の鉄道たちにも似ていた。
あるいは去年夏に初めて海に行った時も同じだろう。
非日常の鉄道の中にあっても、浩介くんとの愛は、不変だった。
「次は終点――」
「あ、浩介くん」
「おう」
車掌さんの終点の合図と、乗換案内を聞いて、あたしたちは席を立つ。
乗り換えた次の路線は途中まではそれなりの本数があるが、もう一本乗り換えた先は1時間に1本のローカル線になる。

さて、車内はさっきより空いていた。
乗っているのは地元の人たちだろう。実際には接続も考慮されていて、本数は少ないけど、あたしたちは比較的スムーズに乗り換えが出来るようになっていた。
普段通学に使っている路線から数えて、あたしたちは数回の乗り換えを行うことになる。
車窓は大都会の喧騒から、地方の静寂へと変化する。駅間も長くなってきた。

「浩介くん」
「ん？　どうした？」
あたしは、何回目かの乗り換え時に、浩介くんと話す。
「のどかだなって思って」
「そうだなあ。都会の喧騒って感じじゃねえよな」
とはいえ、バーベキュー場には降りた駅から更にバスで山奥に行かないといけない。この路線はまだ、電化されていて、車両だけは都会と同じだ。編成は短いけど。
電車が発車する。駅と駅までが長い。
まだかなまだかなと思っても、次の駅へは中々到着しない。速度だって遅い。
何駅かして、電車が止まる。
「反対列車行き違いのため3分ほどとまります。発車までしばらくお待ちください」
車掌さんのアナウンスが聞こえる。
よく見ると、この駅は都会でもよく見る駅の形になっている。
あたしたちの電車は進行方向左側に止まっていて、ホームが右側にある。そしてさらに右側も、電車が発着する。
違うのは、駅構内に踏切があって、そこを通らないとお客さんが線路を渡っていることだ。
そして、電車が向かい側から到着し、反対側のホームに到着すると、
「お待たせいたしましたまもなく発車いたします。ご乗車のままでお

待ちください」という車掌さんのアナウンスと、「フィー」っという笛の音と共に、ドアが閉まる。
　あたしたちが乗っている路線は、発車する前は電子音だけど、こうやって笛でも代用できるのは知らなかったわね。
「次は――」
「あ、浩介くん乗り換えるわよ」
「おう」
　もう一度乗り換えた先、２両編成の車両に乗り換えて４つ目の駅で、あたしたちの鉄道旅は終わる。そこからはバスを使って「キャンプ場前」で降りることになっている。
「長いようであっという間だな」
「うん、鉄道って速いわよね」
　しかも、地方の昼間でも、関東地方なのでそれなりに人がいる。
　複線が単線になり、編成も２両とはいえ、地元住民たちには貴重な足だ。
　そしてあたしたちは、とうとう目的地の駅に着いた。
　列車を降りて見ると、そこは駅員さんのいない無人駅、ＩＣカードには対応していて、簡易的な改札口になっている。
　ピピッ！
　残額と差し引き金額が表示されるのも首都圏と同じ。
　本数こそ少ないが、一応自動券売機と付近の運賃表もあって、無人駅ながら中々にハイテクだと思う。
　事前にチャージしてくれたお陰で、ちゃんと対応もできた。
　駅前は閑散としていて、民家も少ない。
　地図を見ると、集落は少し離れたところにあるらしい。
「で、えっとバス停は……これか」
　それは、永原先生と真田の故郷に行った時の待合室に似ていて、それでも駅前という事で中はかなり広い。が、誰もいない。
　それもそのはず、この路線は１時間に１本の割合だけど、バスは２時間に１本の割合で、次のバスはちょうど５０分後になっている。

「本数少ないね」
「田舎はそんなもんだろ。このあたり緑が多いし」
「うん、取りあえず待とうか」
「おうっ」
　立ちっぱなしも何なんで、あたしは横の椅子に座ろうと思って後ろ向きに進む。
　　ぺろりっ
「きゃあ！　えっち！」
　浩介くんのスカートめくりをされ、パンツを見られたあたしは恥ずかしくて両手を抑えるが、浩介くんのめくる力が強くて効果がない。
　前からのスカートめくりは、目でめくられている様子が分かってしまう分、後ろからよりも恥ずかしさは大きいわ。
「うーん……さっきとはやっぱ微妙に違うのかなあ？」
　浩介くんの反応がいつもと違う。
　普段は性欲と悪戯心丸出しでめくられるのに、今はなんだか興味深くパンツを観察されていて……あううこっちのほうが恥ずかしいよお……
「浩介くん、こんな所で恥ずかしいから……スカートめくるのやめてぇ……」
「うーん、やっぱり水着との違いがよく分からねえなあ……」
　どうやら、浩介くんは下着と水着の違いに興味があって、スカートめくりをしたらしい。
「スカート元に戻してえ……」
　あたしの言葉が耳に入ってなくて、浩介くんに色々な角度からじろじろと観察され、舐めまわされるように見られていく。
「お願い……もう許してぇ……！」
「うっ……」
　あたしが恥ずかしさに耐えきれず、やや涙目で懇願すると、浩介くんがやっとスカートを下してくれる。
「優子ちゃんはさ、水着と下着ってどう違うと思ってるの？　やっぱり下着とそこまで変わらないと思うんだよ」

浩介くんが、不思議そうに言う。
「あたしも穿いてみて分かったけど、水着の方が透け防止とかしっかりしてるわよ」
「うーん、それは分かったんだけど、女の子が恥ずかしがる基準が分からねえんだよなあ……」
浩介くんがまだ納得いかない風に言う。
「ほら、水着とかチアとか、球技大会のテニスウェアの下とか、見えること、もっと言えば見せつけることが前提よね？」
「あ、ああ……」
「下着とかスカートの中は、見せるものじゃないのよ」
多分、遊園地の時、あたしが他の女の子がスパッツ平気な理由がよく分からなかったのも「スカートの中」だからだと思う。
「なるほどねえ、それを見られる俺は、彼氏の特権ってやつか」
「そ、そうだね」
「優子ちゃん、実を言うと、今俺は優子ちゃんを襲いたくてたまらなくて……！」
「ふふっ、実はデートの度にあたしを襲うこと考えてた？」
「ギクッ……！」
あたしは、浩介くんの地雷を思いっきり踏み抜いてしまった。
浩介くんの顔からは、明らかに動揺の色が見受けられる。
「いいのよ。あたしだって自分の魅力が分からないほどバカじゃないわよ。そりゃあね、ブスやおばさんだってなら自意識過剰かもしれないけど、あたしは違うでしょ？　むしろ、そんなこと考えてくれるのが嬉しいわよ」
「そ、その……それってやっぱり？」
「うん、どれほど月日が経っても男だった頃の事実が消える訳じゃ無いもの。仮に優一があたしの彼氏だったら、多分浩介くん以上にエッチになってると思うし、性行為だってとっくに済ませちゃってると思うわ」
それは結局、あたしは生粋の女の子たちと違って、男性に対する理解力が高いからこそ。

「確かに浩介くんにえっちなことされるのはすごく恥ずかしいわよ。でも、全然してくれないのはもっと寂しいわ。だって、男のエロさを考えたら、全然触ってもくれないなんて、女の子としての魅力に欠けてるわけだもん」
　むしろ、浩介くんは我慢している方だと思う。
「それに……あ、あたしだって浩介くんに犯される妄想とかで抜いているわよ。デート中だって、ほのかに期待してるわよ」
　スキー合宿や花嫁修業で一緒にお風呂に入った時に見た浩介くんの下半身は、未だに思い出しただけでも体が熱くなってしまう。
　母さんの目を盗んで時折気持ちよくなっている。
「うっ……！」
　浩介くんがまた動揺している。
　よし、ここは一気に畳みかけるわ。
「ねえねえ浩介くん。浩介くんは普段どうやって処理してるの？」
「え!?　そ、その……女の子があんまりそう言うのは……」
「あ、ごめんなさい」
　よく考えたら、いくら2人っきりで人気が無いとはいえ、ここはバス停だわ。いつ誰が来てもおかしくないものね。
　あたしも、つい夢中になってエッチな話題で盛り上がっちゃった。反省反省。
　カンカンカンカン
　突然遠くで、踏切の喧騒が聞こえる。
　そして、駅の放送が流れる。反対方向の列車がまもなく到着する。
　フィーッ、フィ！
　車掌さんの笛が聞こえ、駅舎から数人の男女が下りてくる。
　いずれも、あたしたちのバス停には用がなく、一時の喧騒も、また静かになった。
「なんか、通り雨みてえだな」
　浩介くんがさり気なく言う。
「じゃあ、あたしたちの地元って、常時台風が吹き荒れてる感じかな？」

実際、乗り降りする人数も、本数も段違いだし。
「はは、そうかもしれない」
浩介くんがニッコリと笑って言う。
あたしは、何の気なしに浩介くんの股間に視線を移す。
多分、あたしの中の「メスの本能」がそうさせたんだと思う。
今は多分、大きくなってはいない。
一瞬触りたくなるのをこらえる。
でも、ちょっとだけ、仕返ししたくなった。あたしは、何とか理性を保とうとしたが、難しかった。
すっ……
「わっ！　ゆ、優子ちゃん？」
「へへ、ちょっとだけ仕返し！　あたしばっかり恥ずかしい思いはしたくないし」
肝心な場所は自重し、浩介くんの硬い胸板に顔を飛び込ませる。
かつてのあたしがそうだったように、男の人は頑丈な体つきをしている。
そのたくましさが、ますます嬉しい。
「うっ……優子ちゃん！」
浩介くんの体温を感じ始めて、これからという時に浩介くんに腕を払いのけられてしまう。
「あ、ごめん。あたしまた……」
「ううん、こっちこそ。さっきプールでしすぎちゃったもんね」
「あはは。バカップルもいいけど、やりすぎに注意しないといけないわね」
「ああ」
お互い反省する顔をするけど、シリアスな顔というほどでもない。
「あたしはね、女の子であると同時に、『メス』でもあるのよ。興奮したらえっちになっちゃうこともあるわ」
「それはお互い様だろ。俺だって『オス』なんだし」
そう、カップルは「男と女」であると同時に「オスとメス」でもある。

浩介くんのその絶大な理性で、あたしはまだ処女のままだけど、世間では夜になれば龍香ちゃんみたいに、みだらな行為を楽しむのもまたカップルだ。
あたしと浩介くんは、そのままバスに張られているいかにも古そうな張り紙を見る。
「ねえ優子ちゃん、この指名手配犯って捕まったよな？」
「あーうん、そうだったわね。４０年以上も逃げてて、あたしが女の子になったばかりの時に捕まったんだっけ？」
「だったなあ、すげえよなあ」
あたしたちの地元では、指名手配犯が逮捕されると、「ご協力ありがとうございました」という張り紙が張られて、捕まったことを知らせてくれる。
おそらく、この張り紙は、張った当人が忘れているんだと思う。
にしても、何十年も逃亡を続けた指名手配犯もすごいけど、顔だって変わってるはずの指名手配犯を捕まえる警察もすごいと思う。
あたしたちは、他の張り紙も全て読み終わる。
中には、かなり古い日付のものもある。張る期限も特になくて、さりとて新しく張り替える掲示物もない。
そのために、こんなことになっているんだと思う。

カンカンカンカン
しばらく沈黙が続いた後、突如踏切が鳴り始めた。
よく見ると、もうバスの時間まで残り１０分になっていた。
車掌さんの笛の音と共に、さっきよりも明らかに多い人数のお客さんが降りてきた。
地元住民という感じではなく、明らかに観光客で、しかも、あたしたちのバス停の待合室に５人が入ってきた。
あっという間に話し声がにぎやかになる。
観光客５人の全員が老人で、若いのはあたしたちだけ。
５人はグループで行動していて、あたしたちのことが気にも留めない。

「賑やかだなあ」
「うん、そうだね」
あたしはふと、永原先生のことを思い出す。
この老人たちは５人だけど、見た感じでは平均年齢１００歳って事はないと思う。
「あんた来年９０だろ？　今中で一番年上なのに一番元気やな！　長生きせいや」
「おう、若いもんには負けるけど、でも死ぬには早いぜ」
それなら、この５人の人生を全て経験しても、永原先生の人生のほうが長いことになる。
皆とても長い人生を生きて、それぞれ達観しているはずなのに。
蓬莱教授は、「人間の人生は、現代社会にとって余りにも短すぎる」と言っていた。
桂子ちゃんも、「人間の人生は、宇宙が好きな人にとって余りにも短すぎる」と言っていた。
「ねえ浩介くん」
「ん？　どうしたの優子ちゃん」
老人に似つかわしくない、喧騒な話し声に交じり、あたしが浩介くんに話しかける。
「永原先生はここにいる人達の全員分の人生より、長い人生を歩んできたのよね」
「ああ、そう言うことになるだろうな。今年ちょうど５００だもんな」
「おう、この比良道蔵（ひらみちぞう）８９歳！　まだまだ死ぬわけには参らん！」
「え!?　比良道蔵!?」
あ、しまったわ。教会の副会長さんに名前が似てたから……
「おや、嬢ちゃん。わしに何か？」
「いえ、すみません。知り合いに比良道子さんという長生きの人がいまして」
そう言うと老人の顔が一気に驚きの色に染まる。

「あんたこそ、何でうちの曾祖母（ひいばあ）の名前を知っとるんだい!?」
「えっとその、日本性転換症候群協会で、知っていまして。元水戸藩士だと聞いています」
「なるほどな。やはりわしが考えている比良道子と嬢ちゃんが考えている比良道子は間違いなく同一人物だ。して、曾祖母は元気かえ？」
「はい。相変わらず、若い少女のようですよ」
比良さん、子孫が居たのね。
それにしても、ひ孫がもう９０歳近いのね。比良さん自身１７８歳になってるせいだと思うけど。
「そうか、わしも、わしの子孫が死に絶えても、曾祖母は行き続けるんだな。仲間が居て、曾祖母は幸せ者じゃて。わしは曾祖母より長生きしたいと思っておったが、叶わぬ願いじゃった。わしの子も、わしの孫も、同じじゃろうて」
比良さんのひ孫さんとそんなことを話していると、バスの音が聞こえてきた。
あたしは時計を見る。大分早い。
どうやら反対方向で、何人かの乗客を降ろすと、そのまま過ぎ去っていってしまった。多分、折り返し作業をするんだと思う。
その間、地元住民と思われるお客さんが、３人ほど待合室に入ってきて、さすがに混雑してきた。
すると、さっきのバスが戻ってきて扉を開けた。
「じゃあな嬢ちゃん。曾祖母をよろしくな」
「はい」
比良さんのひ孫さんを先に通した後、あたしたちはバスに乗り込む。
これは「後ろ乗り前降り」のバスで、あたしたちは「整理券をお取りください」という自動案内に、言われるがままに前の人の見よう見まねで整理券を取る。
整理券は「１」と書かれただけのシンプルなものだった。
あたしたちは、適当に進行方向右側の２列の席に座り、念のため

シートベルトを着用する。
バスは専用車線があるため、ずっとそこに停車中で発車予定時刻まではそこで時間を潰す。
その後、更に数人の乗客を乗せて、バスが出発した。
バスはやがて、集落の中心部に差し掛かり、駅から乗った乗客の1人を下したほか、さっきよりも大量のお客さんを乗せて出発、さらに集落内にいくつかバス停を持ち、しばらく森林を通ってまた別の集落へ。
気付いてみると、その集落を過ぎた次は、ゴルフ場、このバス停には乗り降りがおらず、次がキャンプ場前で、乗客はいつの間にかあたしたちと老人5人組のみになっていた。
「ありがとうございましたー！」
キャンプ場で降りたのはあたしたちだけ、バスは5人の乗客を乗せて出発していく。
このバスで集合で、あたしの母さんが代表して来てくれるはずなんだけど――
「あ、優子、浩介くん。こっちこっち」
「母さん」
母さんが手招きしてくれた。
「お世話になります」
「いいのよ。さ、テントの設営は終わってるわよ。これから料理作るから、休んだら優子も手伝って頂戴」
「はーい」
そう言うと、母さんが背中を向けて歩き始めた。
あたしたちは、その背中を必死で追いかけ始めた。

# キャンプ場でのバーベキュー

母さんの案内でキャンプ場を進む。
キャンプ場にはすでにいくつものテントが張ってあって、あたしたちは、ちょうど日陰になる一番隅の涼しいところだった。
「この3つが私たちのテントよ」
「え!? テントが3つ?」
あたしは、石山家と篠原家でテント2つとばっかり思っていたのに。
隣を見ると、浩介くんも動揺している。
「何を驚いているんだ浩介、このテントは全部2人用だぞ。お前と優子ちゃんで入るんだ」
「「え?!」」
近くにいた「お義父さん」の言葉にあたしたちは驚きを隠せない。
そ、それでいいのかな?
「何驚いているのよ。いい優子? 単なる彼氏彼女のデートと、婚約者のデートは別物よ。これも花嫁修業の一環になってるわ」
「う、うん……」
「浩介くん、うちの優子に手を出して、赤ちゃん作っちゃってもいいけど、他のお客さんもいるから大きな声だけは出させないでね」
母さんがまた爆弾発言をする。
「ぶっ……!」
「ちょっと母さん!」
あたしが母さんの毎度の調子にいつも通り抗議する。浩介くんも吹き出してるし。
「はいはいごめんなさい、とにかく、テントに入ってね」
「はーい」
あたしたちは、荷物を降ろすためにテントの中に入る。
「お、広いな」
「うん」
浩介くんの言う通り、中は思ったより広い。目の錯覚なのかな?

あたしたちは荷物を降ろす。さて、あたしはまだミニのスカートだけど、そろそろ着替えないといけないわね。
「ねえ浩介くん」
「うん？」
「着替えるからちょっと外で待っててくれる？」
「え!?」
浩介くんが間の抜けたように言う。
「この格好でテントにいたら、パンツ見えちゃうでしょ」
「うっ、パンツならさっき見たし」
「もー、さっさと出てってこの変態！」
あたしは、顔を真っ赤にしながら大きな声を出す。
浩介くんは慌てて、テントの外に出ていく。
あたしはようやく荷物の袋から白いズボンを取り出す。
着替えと言ってもスカートの中にこれを穿くだけ何だけど、天井が低いのでぶつけずに着替えるにはお尻を付けないといけない。
誰も見てないけど、向かいから見ればパンモロ状態である。
「どうしたの浩介？」
テントの外から、かすかに会話が聞こえてくる。
「優子ちゃんが着替えるからって」
「当たり前でしょ」
「分かってる、優子ちゃん恥ずかしがり屋だし」
ズボンを裾まで通したら腰を曲げてゆっくり上まで上げる。
「よし」
あたしは着替え終わったの意味も込めて、テントから出る。
「お待たせー」
「お、優子ちゃん終わったか、あれ？　ズボン穿いただけじゃん」
「テントの中だと見えちゃうのよ。外で着替えるわけにもいかないでしょ？」
「あそっか」
浩介くんも、すぐに納得してくれた。
「あー、疲れたあ！」

「うん、俺も遊び疲れちゃった」
「あたし、ちょっと横になるわね」
「俺も」
あたしと浩介くんは、お互い横になる。
いわゆる「添い寝」の形だけど、これはもちろん経験済み。
体を休めながら、あたしはプールのこと、そしてこれからのことを思い、思考を整理する。
今日はバーベキューをして、明日はバーベキュー場にある川辺で遊ぶことになっている。
ちなみに、バーベキュー場には小さなホテルも併設されていて、そこでお風呂に入ることもできる。
まだ日が落ちてないから、テントの中は明るいけど、夜はどうだろう？
「ふぅー」
あたしはやがてあれこれ考えるのをやめ、浩介くんと一緒に静かに休む。

「優子ー！　手伝ってー！」
「はーい！」
静寂は突然破られた。
母さんが、夜のバーベキューの準備をして欲しいとして、あたしを呼びつけたのだ。
そしてあたしはテントから出る。
テントの外には母さんと「お義母さん」がいる。
「あら優子、少し雰囲気変わったわね」
「うん」
母さんがあたしを見て雰囲気の違いに言及する。
「さっきはこれに着替えていたのね」
「お義母さん」も話に乗ってくる。
「ほら、テントの中だと、狭いし……見えちゃうから」
「ふふっ、そうよね。さ、ともあれはじめましょ」

母さんが指差した先には、多数の野菜が切られずに置かれている。
更に、包丁とまな板が2つあり、こちらは母親陣の担当になり、あたしはたれの準備を担当することになった。
「火おこしの準備は？」
「火は男たちの担当よ」
母さんがそう言う。体を動かす、体力に勝る男性陣にやらせて、あたしたちは料理に専念するらしい。
「さ、始めるわよ」
「「はい」」
あたしの母さんがリーダーになって、全体を指揮しつつ、野菜を切る。
あたしは、たれの配合を考える。
今回は篠原家のことも考慮しないといけない。
野菜と焼き肉で、別のたれが理想だけど、あたしはそれらの中間に位置する絶妙な配合を考えないといけないから大変だわ。

「篠原さん、そこはそうじゃなくて、こう切るのよ」
「え!?　優子ちゃん、この切り方でも何も言ってなかったよ」
「ふふっ、優子もまだまだ経験不足ね」
「は、はあ……」

あっちもあっちでうまくいってるみたいね。なんかあたしのアドバイス間違ってたみたいだけど。
とはいえ、花嫁修業の時に、あたしに家事勝負で料理に完敗した「お義母さん」には、あたしの母さんの指導はちょっと重荷かも。
とにかく、今は担当をきっちりこなさないとね。
うーん、これでいいかなあ？
あたしは、試しに配合したたれを味見してみる。
「うん、いつも通りね」
後はこれを大量生産するだけ。
一回ちゃんと作っちゃえば後は大量生産するだけ。

……よし。
「母さん、できたわよ」
「あ、優子ありがとう、こっちも大分切り終わったわ」
母さんが大皿に盛りつけられている野菜を見せてくれる。ちなみに、お肉はクーラーボックスに直前まで入れておいてある。
「はー、優子ちゃんのお母さん、厳しいわね」
「お義母さん」がため息をつきながら言う。
実際、かなりしごかれたみたいだわ。
「そりゃあ、優子を理想の女性にするために頑張ったのよ。いい？女子力に終わりはないわ」
母さんがさらりとした感じで言う。
確かに、母さんたちはともかく、あたしは老けないから、女子力をどんどん上げないといけない。
「ふふっ、家事が出来れば、女性としての魅力が上がるわよ。他にも優しさや包容力、母性といったものも大事になってくるわね」
母さんは、男性から好かれるために様々なことを磨いたらしい。
母さんは以前「結婚前も結婚後も、男性に好かれるように努力しなければいけない」と言っていた。
彼氏にしても旦那さんにしても、男性には変わりはないから、彼の好みをよく観察するべきとも言っていた。
「さ、優子はコップと飲み物とお皿の準備をして頂戴」
「はーい」
母さんの指示に従い、あたしはクーラーボックスを開けてオレンジジュースを取り出す。
そして、それをテーブルの真ん中に置き、更に紙皿と紙コップも、荷物から取り出して机に並べる。
ジュースはまだ注がない。
火を起こして温まるまで時間がかかるので焼き始めの時に注いであればいい。
「優子、終わったら男たちを呼んでくれる？　火を起こすわ」
「はーい！」

あたしは野菜を切らないけど、色々な雑用をこなす役割になっている。
あたしがするべき雑用は既にあらかた終わっていたので、あたしはテントの方向に向かう。
「浩介くん、火を起こしてくれる⁉」
あたしは、テントの中で休んでいた浩介くんに声をかける。
「お、分かったぜ。任せな優子ちゃん」
浩介くんはかなり気合の入った声で言う。
そして、あたしは父さんを、浩介くんは「お義父さん」を、それぞれテントから呼び出して、男たちはせっせと火おこしの準備をし始めた。
……と言ってもやるのはバーベキュー台の下に要らなくなった新聞紙と枯葉、そして炭を満遍なく入れて、チャッカマンでカチッと火をつけるだけ。正直浩介くん一人でもよかった気がするわ。
「ふー、ふー、ふー！」
浩介くんが筒を使って息を吐くと火が勢いを増す。
紙は火の勢いを強めるけど、長持ちさせるためには炭の活躍が必要不可欠だ。
上の鉄板が熱せられ始めたので、側で見ていたあたしが早速油を入れる。
母さんが大皿を持ってやって来る。ちなみに、野菜にも油は塗るので、その役目は「お義母さん」がすることになった。
「さ、焼き始めるわよ」
取り箸を使って鉄板に食材を入れるのは母さんの役目。あたしは、焼き加減を見てひっくり返したり、焼けすぎを指摘したりする役目を与えられている。
バーベキューはなし崩し的に始まることもあって「いただきます」を一斉にすることは少ない。
今日もまた、野菜をまず焼いていく。玉ねぎとニンジンを入れ、お

いしそうな音がしてきた。
以前、林間学校の時にもバーベキューは行ったことがあって、その時にあたしは初めて「家庭的」だと褒められた。
女子力アップのためにも家庭的なのはとても大事で、花嫁修業でも、既にアピール済みだ。
「さてと、結婚式の資金も集めねえとな」
父さんが、突拍子もないことを言う。
「え!? け、結婚式!?」
確かに、あたしと浩介くんは婚約者だし、両家の両親にも承諾は貰ってるけど――
「あの、式のお金は――」
「浩介、早く結婚しろと急かしてるのは両家の親たちなんだ。それを考えたら、両家の両親で結婚式の金を払わないのは、むしろ筋が通らない行いだと思うぞ」
浩介くんに「お義父さん」が鋭く突っ込む。
「うっ……」
確かに、親の金で結婚式は、諸手を挙げて歓迎というのもちょっと何だかなあとも思う。
しかし、この場合はケースが特殊だ。
元々あたしたちも、両家親も結婚そのものには全く異論がなかったものの、「大学、大学院を卒業し、収入のあてが決まってから」と考えているあたしたちに対して「浩介が１８歳になったらすぐ」と主張した親側との妥協案として、「高校卒業後」の結婚になった。
時系列を考えると、８か月しか遅らせてないため、あたしたちがかなり譲歩しているもので、ほとんど親側の主張が認められたに等しい。
無理を言って結婚を早めさせた以上、結婚式のお金は自分たちが持つということ。
……やっぱり、血は争えないわね。
「ところで、母さんはどうして結婚をはやめさせたいの？」
「そりゃあ優子、こんな素敵な男性を見つけたのよ。多くの人と恋愛

すればするほど、結婚生活に不満を持ちやすいわよ」
母さんが、中々面白いことを言う。
確かに、元彼や元カノが多いと、今の恋人も以前の人と比べがちになっちゃうものね。
あたしくらいの女の子や、浩介くんくらいの男の子ならともかく、理想も男や女なんて、そうそういないものね。
「それに、浩介くんいい男じゃない？　優子は確かにかわいくて美人で家事も上手で、私が育てた理想の女の子だけど、昔男だった何て人、そう滅多に付き合える人はいないわよ」
「確かになあ……」
「うんうん」
あたし以外の5人が頷く。
実際の所、今のあたしなら「生まれつきの女の子」と嘘をついても、隠し通せる自信はある。
だけど、実際に婚約・結婚ともなると話は別だ。
老化しないという事もあるから、いつかはＴＳ病がばれてしまう。
「優子ちゃん、隠し通すのは難しいわよ」
「お義母さん」に言われる。
うん、あたし自身が隠しても、他の人が密告する可能性もある。
「ああ、昔性転換手術を受けて女に性別を変えたことを隠して結婚した人がいてな。後でばれて大変な訴訟になったこともあったんだ。特にその手術は子供ができなくなるわけだからなおのことだ」
父さんが言う。
それは確かに重大な背信行為だけど、あたしが男だった頃のことを隠すのとは違うと声を大にして言いたい。
「でもあたし、性転換手術した人たちとは違うわ」
あたしたちは、「彼ら」とは違う。生理も来るし、赤ちゃんも産める。細胞一つ一つの性染色体でさえ、女の子のものに変わっている。
体だけじゃない、心だってもう、女の子になって随分と経つ。
あたしたちは「完全性転換症候群」、何の背景もない、真っ白な1人前の女性として扱ってほしい。

「分かってるさ、でも、世間は中々そうも思わないぞ」
「ええ、優子が消したい気持ちは分かるけど、優一だった１７年は、もう戻らないわ。そしてそれは、消すこともできないのよ。５００歳になった永原先生でさえ、最初の２０年は残り続けているもの」
　母さんがあたしを諭すように言う。
「う、うん……あ、これ焼けてるわよ」
　バーベキューの野菜はそんな間でも次々に放り込まれていく。
「どちらにしても、今の２人の出会いを逃したら、次はないと思うわよ。優子、一度離れちゃったら、同じ人にはね、１０００年待っても会えないのよ」
　母さんが、とても重たい言葉を言う。
「う、うん……」
　今はまだ、浩介くんとはいつか死に別れてしまう状況には変わりはない。
　もし蓬莱教授の研究が失敗して、そういう運命になったら、浩介くんは１０００年待っても戻ってこない。いわんや研究が成功したとして、今浩介くんと結婚しなかったら、浩介くんは別の人と付き合ってしまっているかもしれない。
　そうなれば、永原先生が真田家と吉良家に罪悪感と後悔を３００年以上持ち続けているように、あたしも浩介くんに罪悪感を感じてしまう。
　それをさせないために、母さんは「早く結婚させてほしい」と言っているのだろう。
「うちからもいいかな？　浩介には祖母がいるんです」
　今度は、「お義母さん」の番だ。
「はい知ってます」
　老人ホームにいると聞いているが、かなり元気だという。
　花嫁修業の時に、あたしの部屋はその祖母の部屋を使わせてもらった。
「で、おばあちゃんは早くひ孫を抱かせろと、とにかくうるさいんです。ですから、私としても、最後の夢を叶えさせてあげたいんです」

そのためにも、あたしに早く赤ちゃんを産んでほしいってことね。
ともあれ、あたしの両親と浩介くんの両親の利害が一致した理由はわかったわ。
「でもあたし、大学があるから――」
「ふふっ、そのために私たちがいるのよ」
「お義母さん」が胸を張って言う。
「つまり、祖父母に子育てを頼めってか」
「そういう事よ」
「うー、孫……おじいさん……孫……」
「義両親」たちがそれぞれの反応をする。
実感はまだ沸かないけど、あたしと浩介くんが親になったら、あたしと浩介くんの両親は「祖父母」という事になる。
出産、どういう体験なんだろう？
「うーん……」
あたしは、野菜を食べながら考える。
「どうしたの優子ちゃん？」
浩介くんが興味深そうに聞いてくる。
「赤ちゃん産む時ってどんな感じなんだろうって」
「ふふっ、とっても貴重な体験になるわよ」
母さんが抽象的に言う。
「ええ、言葉では言い表せないものよ」
「え、でもそれだけじゃ――」
「うーん、あの感動は、実際に体験してみて感じてほしいわね」
そして「お義母さん」もまた、抽象的な物言いに終始する。
でも、都合が悪くて隠しているという感じでもない。
以前の永原先生も、「私たちＴＳ病患者の出産時の母性はすさまじいものがある」と言っていた。
「じゃあ、楽しみに取っておくわ」
「ふふっ、そうしなさい」
その後は、黙々と野菜を食べる。
野菜が少なくなったら、浩介くんがクーラーボックスを取りに行

く。
「肉焼くぞー！」
浩介くんの号令と共に、クーラーボックスが開けられる。
そこには、スーパーで買った和牛がある。
値段はスーパーとしては高いけど、もちろんあの時の神戸ほどではない。
母さんが肉を切り分けてから、鉄板に6枚の肉を入れる。
炭火鉄板焼きのお肉のにおいが心地いいわね。
肉が焼ける速度は速い。
すぐにひっくり返し、あっという間に赤から灰色へと変わる。
最初は6等分だったけど、肉の量が多く、最後は浩介くんが全て平らげてしまった。
焼きそばが無い分、お肉多めということだったけど、ちょっと失敗だったかも。

## 母と「義母」との大浴場

「よし、後片付けは任せろ！」
バーベキューが終わり一段落し、そろそろ後片付けしないといけないとあたしがつぶやいたところ、浩介くんが腕まくりをしてアピールしてくれた。
それに続いて、あたしの父さんも「お義父さん」も続く。
父さん、最初は「お前たちも手伝え」とか言っていたのに、母さんがちょっと耳打ちするとすぐに気分が高揚してやる気になっていた。
女におだてられた男って、バカ過ぎて可愛くなってくるわね。
でも、そんな男ほど頼もしいのよね。
さて、男たちが後片付けをしている間、あたしはテントに戻る。
この間に、お風呂の準備をすることになっている。お風呂セットとパジャマを出すだけで完成だけど……

「……ふう」
今日は素晴らしい1日だったわね。
浩介くんとのデートは、いつだって楽しい思い出になるけど、今日はまた特別だと思う。
最近、浩介くんはますますスケベになっちゃっているけど、それはきっと、あたしと長く付き合うにつれて、遠慮なく気軽になったためだと思うわ。
それと、あたしとの結婚が近くて、それを意識しちゃっているのかもしれないわね。
そう言えば、結婚式の資金の出処は分かったけど、日にちはいつになるのかな？

「優子ちゃん、戻ったぞー！」
「おかえりなさい浩介くん」
後片付けが終わった浩介くんがテントの中に入ってくる。
もうしばらく休んだら、あたしたちはお風呂の時間になる。

「ちょっと食べ疲れた。休む」
浩介くんも休みたいみたいね。
浩介くんとゆっくり話す。特に話すこともないけど
「優子、お風呂行くわよ！」
「あ、はーい！　浩介くん、お風呂行ってくるわね」
「おうっ」
浩介くんの返事を尻目に、あたしはお風呂セットとパジャマを持ち、テントを出て母さんたちと合流する。
お風呂場の場所は、母さんが案内してくれる。
「優子とお風呂入るの初めてね」
「あ、そう言えばそうよね」
確かに、優一だった頃はもしかしたら幼い時にあったかもしれないけど、優子になってからは家族と一緒にお風呂に入ったことはまだない。
異性の浩介くんと一緒にお風呂に何度か入ったことがあるのに、母さんとは入ったことない女の子って、世界広しといってもほとんどいないと思う。
「こっちよ、このままっすぐ」
あたしたちは、母さんの案内で小さなホテルビルの大浴場へと行く。
浩介くんとキャンプ場に着いてから行くまでの道のりとほぼ同じ、にしては何かちょっと違和感があるわね。
「そう言えば、さっきよりテントが減っているわね」
違和感に気付いたあたしがm思わず口に出す。
「うん、一部のテントはホテルのお客さんだったり、日帰りのバーベキュー客だったりするのよ」
「へー」
母さんが、そんなことを教えてくれる。
背を向けていたからわからなかったけど、もしかしたらあたしたちのテントも、狭い所にぽつんと密集してるみたいになってるかもしれ

ないわね。
ともあれ、ホテルの棟に到着する。
大浴場は1階に露天風呂と併設となっている。
「ここが大浴場よ」
「はい」
このホテルの大浴場は男湯と女湯が隣接している。ちょうど男湯から、男性のお客さんが数人出てきた。
あたしは、いつものように女湯ののれんをくぐる。
「あら、優子ちゃん緊張しないの？」
あたしの行動に、「お義母さん」が違和感を感じたように言う。
確かに、元男と考えれば、女湯には躊躇しそうなイメージはあるとは思う。あたしも最初、林間学校の時はそうだったけど、他の人よりも頻繁に、朝夕に入ることで慣れることができた。
「もう慣れたわ。今はむしろ男湯の方が嫌な感じよ」
最も、女の子になったばかりの時でも、この体で男湯に入れと言われたら拒否したとは思うけどね。
だけど、すんなりと女湯に入れるかどうかとは、また別の話になる。
「まあ、そうよね」
脱衣所では色々な女性たちが服を脱いでいる。
あたしたちは、籠が3つ空いている場所を探し、そこにパジャマを入れ、髪をお団子にしてから服を全部脱ぐ。
ちなみに、あたしたちは3人ともタオルを巻いている。
「へえ、優子ちゃんうまいわね」
あたしの身のこなしを見て、「お義母さん」が驚く。
「うん、最初はちょっとだけ失敗しちゃったけどね」
あたしが笑顔で言う。
やっぱり、女の子になって1年ちょっとしか経ってないというのが、信じられないという感じなんだと思うわ。
同じＴＳ病患者だった永原先生や、他の協会の会員さんもそんな反応だったし。
「さ、入りましょう」

母さんの先導で、扉を開けて大浴場の中に入る。
あたしたちはまずいつものようにかけ湯をする。
そして体を洗う。頭もしっかり洗う。プールに入った後だから、いつもよりも入念に洗わないと。
……よしっ。
さて、歩くときはタオルを巻いても、実際に入るときは外さないといけなくて、これがまた難しいのよね。
幸いにも、ここの温泉には色がついていて、あたしの体が全部丸見えになるわけではないので、うまく見えにくいように工夫する。
「ふー、疲れたあ！」
全身を湯船に入れると、温泉が体に染みて来る。そしてプールとはまた違った快感が、あたしを包み込む。
「それにしても優子ちゃん」
「ん？」
近くで寛いでいた「お義母さん」が声をかける。
「花嫁修業の時も思っていたんだけど、どうやったら優子ちゃん見たくあんな胸が大きくなるの？」
「うーん、あたしも女の子になって目が覚めたらこの大きさだったので」
この質問はいろいろな女性からされる。
やはり、胸が大きいのは羨ましいポイントなんだろう。
「ふふっ、優子はそれだけ女性ホルモンが多いってことよ」
母さんが微笑みながら言う。
女性ホルモンというと、どこか甘美な響きがする。
あたしも、女性ホルモンが胸を大きくし、お尻を大きくし、女性らしい体つきを形成することは知っている。
つまり、あたしの体はとても女性らしい体つきということになる。
「ねえ優子ちゃん、肩こってる？」
そして、胸が大きいが故の悩みと言えば、肩こりはあまりにも有名なことだ。
「うん、温泉の中での肩もみは好きよ」

あたしは「お義母さん」に肩を預けると、指で押される感覚を受ける。
「あー、気持ちいい」
「優子ちゃん、すごい肩こりよ。やっぱり、噂は本当なのね」
「噂？」
「胸が大きいと肩がこるって」
てっきり有名な話だとばかり思っていたけど、やっぱり大きな人に直接聞かないとわからないものかな？
「優子は加えて髪も長いから、肩に『こってください』って言っているようなものよ」
母さんが付け加える。
「うん。でもあたし、髪も切らないし、胸を小さくするなんて絶対嫌だわ」
多分、髪はともかく、胸を小さくしたら、浩介くんの受けは絶対に悪くなると思うし。
「ええ、もちろんそれがいいわよ。胸は女性の象徴だもの、小さくするのは身を刻むようなものよ」
カリキュラム中、一度だけ「髪を切りたい」と母さんに持ちかけて却下されて以来、あたしは髪を切るという話題をしていない。
もちろん、定期的な手入れは欠かしていないけどね。
「そう言えば、協会の人も髪長い人が多いわね」
ふと、協会のＴＳ病患者の人達の顔を思い浮かべる。
あたしみたいなストレートロングもいるし、永原先生はあたしほど長くないけどセミロング、比良さんと余呉さんはそれぞれ結んでいるけど、下ろしたら結構長くなると思う。
一方で、ショートなのは幸子さんくらいだけど、彼女でさえ男子の中では長い方になる。
そしてベリーショートの人は、誰一人思い浮かばなかった。
「そりゃあ、髪は女の子の生命線よ。協会の人は女性らしさを支えにしているんだから、男性にはできない髪型にするのは当然よ」
母さんが、鋭く指摘する。

確かにその通りだと思う。いろいろな髪型に出来るのも、ある意味で女の子の特権だし。
「ふう、マッサージ、この辺でいい？」
「はい、ありがとうございます」
あたしは、軽く肩を動かし、ほぐれたことを実感する。
もっとも、マッサージはあくまで一時しのぎ。あたしはほぼ、肩こりの解決については諦めている。
それでもやっぱり、肩もみは気持ちいいわね。
その後、あたしたちはいくつかのお風呂を体験した。
母さんと、「お義母さん」、そしてあたし、周囲から見ると何だか不思議な３人組でのお風呂だと思う。
もしあたしがいなければ、古いママ友くらいな感じだと思うけど、若いあたしがいることで微妙な空気を醸し出している。
レズカップルとその子供には到底見えないのも、更に不気味さを増大させている気がする。
ちなみに、あたしが揉んでみたら、２人の肩はあたしよりこっていなかった。あたしのほうが若いのに。
何だか負けた気分だわ。
まあ、仕方ないかもしれないわね。胸で勝ったとポジティブに考えましょう。

「あれ？　優子虫よけスプレーは？」
「え？」
脱衣所でパジャマに着替えていると、母さんに声をかけられた。
虫よけスプレーは、もちろん持って来てはいるけど、ここには持ってきていない。
「持ってきて無いの？」
母さんがさらに厳しく追及するように言う。
「は、はい……テントに置きっぱなしです」
「もうっ！　ダメじゃないの！　いい優子？　このあたりはあらゆる所に虫が潜んでいるわよ。虫はお肌の大敵でしょ？」

あたしはまた失敗をしてしまい、母さんによるお説教が始まった。
「虫が多くて、肌の露出も高くなるこの時期、虫よけスプレーは大切よ。お風呂では体を洗うんだからなおさらよ。そもそも、お風呂上りの肌の手入れというのはですね――」
とにかくガサツで女子力の低い行動は許されない。それは、あたしが立派に女の子らしい女の子になるために必要なこと。
このお説教の一つ一つが、不注意で男が出てしまったあたしを、もう一歩女の子にしていく糧になる。
あたしの修行は、まだ終わっていない。
「ま、とにかく今日は母さんのを使いなさい。次は気を付けるのよ」
「はい」
シュー！　シュー！
あたしは、母さんに言われた通り、特に手足を中心に虫よけスプレーをかけていく。
「さ、行くわよ」
虫よけスプレーをかけ終わったら、あたしたちは、母さんの誘導でテントに戻る。
「じゃあ、今日は解散よ。また明日よろしくね」
「はい」
「あ優子、浩介くんとしちゃってもいいけど、くれぐれも大きな声は出さないでね」
「ははは、分かってるわよ」
母さんの忠告と共に、２人はそれぞれのテントへと戻っていく。
「ただいまー」
「優子ちゃんおかえり」
あたしたちがお風呂に入っている間、浩介くんも済ませたらしく、お風呂上がりでパジャマに着替えてた。
「今日は楽しかったね」
「うん、優子ちゃんの両親もいい人だったし、うまくやれそうだよ」
そう言えば、浩介くんはあたしの両親にあんまり会ってなかったんだっけ？

「ふふっ、それは良かったわ」
あたしがニッコリと笑い、浩介くんと横になる。
あうー、浩介くんの顔が近くて緊張するわ。テントの中、案外広いようで狭いのかもしれないわ。
「ゆ、優子ちゃん……」
浩介くんの顔がほんのり赤くなっていく。
「浩介くん……んっ……」
あたしは目を閉じて、ほんの少し口にるをとがらせ、「キスして」のアピールをする。
程なくして、浩介くんのものと思われる唇が、あたしの唇に触れる。
ちゅっ
浩介くんとの楽しいデートの後は、こうしてキスもする。
でも、ここまで狭い空間でのキスはあたしにとっても特別だわ。
とても狭くて薄暗くて閉鎖的なはずの場所なのに、一歩出ればそこは屋外、テントという空間はそう言うところ。
「じゅるっ……ちゅぱっ……んんっ……れろっ……んあああ」
横向きでキスをしたので、舌から出た糸は、いつもと違う切れ方をした。
「なんかこれ、新鮮だな」
「うん」
あたしは、本能的に手を浩介くんの下に伸ばす。
さわさわっ……
まだ大きくはなりきってなかったけど、あたしが触れただけで、すぐに成長した。
「ゆ、優子ちゃん！」
「えへへ、ここ触ると落ち着くわ」
実際、「ここ」に癒しの効果があることを知ったのは女の子になってからで、多分女性ホルモンがそうさせているんだと思う。
そう言う意味で、男が触っても何も起こらないと思う。
「じゃあ俺も！」
ぼいんっ

「きゃはっ！　浩介くん本当におっぱい大好きだね」
浩介くんに胸を触られる。今日だけで何回目だかもうわからないわ。
「あははっ」
あたしは、母さんに言われたことを思い出す。
いつ妊娠してもいいと。
今は８月の後半で、卒業まで後半年程度となった。
でも、今妊娠しちゃったら、大学生活で出鼻をくじかれること。でも、やっぱりあたし……
「優子ちゃんダメだよ！」
ズボンを弄って、浩介くんの下半身を出そうとして、浩介くんに止められてしまった。
「そ、その……」
「まだだよ。もう半年、半年ちょっとだけ、我慢しようよ。約束したでしょ？」
「あ、うん……ごめんなさい、あたしっい」
しょんぼりした顔で、あたしが謝る。
「いいんだよ。俺だって我慢してるんだから」
うん、そうだったわね。
ありがとう浩介くん、あたしに理性を取り戻してくれて。
「そうだ、星を見ようよ」
ごまかすように、浩介くんが話題を変えてくる。
「うん」
あたしたちは、テントからひょいと顔を出す。
頭上には、普段住んでいる地域では到底見られないような星空だった。
「きれいね」
「すげえよな、この星々の多くがさ、俺たちが想像もつかないような、はるか遠くで輝いているんだからな」
星はちょうど点光源で、ほとんど動いていないようにも見えるけど、実際にはものすごく遠くだから祖雨見えるだけで、星々は猛ス

ピードで動いているから、星座だって変わってくる。
永原先生の人生よりもずっとずっと長いペースで、だけど。
ただ静かに、星座だけを見る時間が過ぎていく。
しばらくして、あたしたちはまたテントに戻り、ディープキスをする。
そして、お互いの体に触れあっていく。星空を見た後のテントの中でのキスは、いつもよりもずっと幻想的な味がした。
普段と変わらないはずなのにね。

## 静かな川岸にて

「うーん……」
翌日、あたしはまだ浩介くんがぐっすり寝ている時間に起きた。この時間だけど、外はもう明るくて、浩介くんも時期に起きてくると思う。
「そうだわ！」
あたしは、目覚まし時計代わりにと浩介くんにキスしようとする。
「ちゅっ……」
浩介くんからの反応がない。だけど、とても興奮してしまう。
浩介くんが起きたら、何て言われるかな？
怒られちゃうかも……でも、離れたくない。秘密にするのが楽しいと分かっていても、唇と唇が触れる刹那の快楽の前に、理性はかくも脆い。
「ふぇ？　んっ……!?」
浩介くんが目を開く。
そしてすぐに動揺の表情を見せている。
「ぷはっ……起きた？　浩介くん」
「う、うん……」
浩介くんが起きたのを見て、あたしはいったん唇を離す。浩介くんは顔が赤くなっている。
「優子ちゃん、こういうのは王子様がすることじゃないの？」
「え!?」
浩介くんが突拍子もないことを言い始める。
「深く長い眠りについていた優子姫を俺がキスをして起こすんだよ」
「あうっ……」
あたしの顔の内側が、「ぶしゅー」っと沸騰した。
もちろんその後は、素敵な白馬の王子様、浩介くんのエスコートで、結婚式に行くことになる。
女の子なら、誰しもが憧れる素敵なお姫様と王子様のお話。
あたしも女の子だから、浩介くんとメルヘンチックなことを夢見る

ことはある。
それと同時に、実は男の子の方が、実はロマンチストな傾向にあることも知っていた。
だからきっと浩介くんも、あたしのことを素敵なお姫様とも思っているのかも。
「とにかく、外に出てみようぜ」
「う、うん……」
あたしと浩介くんは、ひとまずテントの外に出る。
みんな、起きているのかな？
「おはよう優子」
「優子ちゃんおはよう。浩介もおはよう」
テントを出てみると、既に両家両親が昨日のバーベキューの時のテーブルを広げて、楽しそうに談笑していた。ちなみに、朝ご飯はホテルの作ったカレーだと言われた。
「さ、優子と浩介くんも、着替えたらカレーを取りに行きなさい。昨日の大浴場と同じ場所よ。明るければ迷わないわ」
「「はい」」
母さんに、ホテルの方に行って朝ごはんのカレーを取ってくるように言われた。
そのためには、着替えないといけないわけだけど――
「浩介くん、先に着替えていいわよ」
「え？　優子ちゃんからでいいよ」
予想通りだけど、譲り合いになってしまった。
「じゃあ、一緒に着替えちゃえば!?」
「それもいいなワハハ！」
そして、「お義母さん」の爆弾発言に大人たちが沸いている。
もちろん、彼氏や旦那だからと言って、視界の中で着替えをみだりにしてはいけないというのは、女の子として基本的なたしなみなことは分かっているため、あたしの母さんだけは、引きつった作り笑いを浮かべている。

話し合いの結果、浩介くんが彼の両親の寝ていたテントの中で、あたしが浩介くんと2人で寝ていたテントで着替えることで一致した。
あたしはテント生活も考えて、短いホットパンツをチョイスしていた。何気に脚の露出度は超ミニスカート並みで、大きなお尻のラインもくっきり出ていてエロいと思う。
「お待たせー！」
「お、優子ちゃん今日もかわいいな」
テントから出ると、既に浩介くんが着替え終わっていた。
やっぱり男子みたいにささっと着替えるという訳にはいかない。
「えへへ、ありがとう」
浩介くんが褒めてくれると、あたしも嬉しくて笑顔が漏れる。
「じゃあ、俺たちカレー取ってくるから」
「いってらっしゃーい、気をつけてね」
「分かってるわよ」
母さんの声を尻目に、あたしと浩介くんはカレーを取りに行く。親たちはもう、食べ終わっていて世間話に講じていた。
といっても、「どっちが先に手を出すか」とか「産むのは男の子か女の子か」なんていう話題だったけど。
「お、これじゃない？」
「うん」
列を発見したあたしたちは、まず前に移動して確認し、その列が朝食のカレーのために並んでいるいう事が分かった。
あたしたちは最後尾に並び、そしてカレー2つを注文し、持って帰る。
結構熱いから袋から出すときは注意しないといけないわね。

「しかし、浩介も頑固だよなあ」
「うんうん、いくら責任感強いといったって、優子ちゃんほどの女の子を彼女にして、あそこまで理性保てるって……逆に不能なんじゃないかって心配だわ」
「子供、ちゃんと作ってくれるかしら？」

「全くもう、こんなに草食系なら、優子も肉食系女子になって、もっとガンガン襲っちゃってもいいのにねえ」
テーブルに戻ると、また大人たちの会話が聞こえてくる。
正直あまりいい気分ではないけど、あたしはあえてそのことを話題に出さない。
「この年で性欲減退なんてことになって欲しくないわねー」
「っ！」
さわさわっ！
「きゃあ！」
浩介くんが椅子に座る。
そして両親たちに見せつけるかのように向かいに移動しようとしたあたしのお尻をがっしりと触ってくる。
「おー！　浩介ったら大胆ねえ！」
「お義母さん」があたしのお尻を触った浩介くんに感心するように言う。
「あのねえ、俺だって我慢出来ねえんだよ。優子ちゃん、すごくエロいし、昨日のデートだって大変だったんだぞ！」
浩介くんが抗議するように言う。
そう、浩介くんは必死に我慢していることも知っている。
「へえ、どんな風に？」
「優子ちゃんエロ過ぎて、胸とかお尻とか、いっぱい触った。優子ちゃんが泳げないのいいことに介助ついでに胸とか下半身を触ったりとか」
浩介くんが昨日のプールでの出来事を思い出すように言う。
「こ、浩介くん！　恥ずかしいから！」
口でとっさに抗議するけど、あたしもこれは必要悪だと分かっている。
最近の両親の暴走はちょっと目に余る。
さっきお尻を触られたのも、決して不能ではないことを示したいという、いつもよりも深いお尻タッチになっていた。
もちろん、こんな格好だし、触りたいから触ったというのもあると

思うけど。
「――分かったわ。とにかく、おばあちゃんは元気だけど、いつ死んでもおかしくないんだからね」
「分かってるって」
「お義母さん」が改めて浩介くんにくぎを刺す。
ともあれ、浩介くんとあたしが体を張って「不能疑惑」を解消したおかげで、その後の両家は、普通の世間話に戻った。
でも、まだ疑っているという感じもぬぐえないわね。

「さ、河原で遊ぶわよ」
「え!?」
カレーを食べ終わり、容器を全員で返却口に入れて元の場所に戻ってくると、母さんが何の脈絡もなく「河原で遊ぶ」と言い出してきた。
「優子と浩介くん、水浴びしてきなよ？　せっかく水着もあるんでしょ？」
あたしたちが驚きの表情を見せている中でも、母さんはあっさりという。
確かに、この近くには川が流れているけど、両家両親の前で水着って、なんかまた恥ずかしいわね。
「うんうん、ミスコンでちらっと見ただけだけど、優子ちゃんの水着、私も見てみたいわ」
女性陣が、男性陣よりもずっとノリノリだ。
翻って男たちはというと、半ば嫌そうな顔さえ見せている。
あたしにはその気持が分かる。その後に妻から待っている嫉妬が怖いのだ。
「さ、とにかく川に行くわよ。テントは全部片付けて2つは車の中に、最後の1つは河原に持っていくわ」
母さんはあたしたちの意見はほぼ無視し、テントは片付けられ、一個だけ持ってきて川へと到着した。
そして、更衣室兼テントは、浩介くんも含めた男たちの手で設営させられた。

ちなみに、その後父親たちは、変な人がいないか見張りをさせられることになっている。
母さんも「お義母さん」も、旦那たちに何かを囁いたら、男たちは凄い乗り気になっていた。
やっぱり、愛する女性に甘えられると断れない。悲しき男の性なんだろうと思う。
「さ、テント設営し終わったら、着替えるのよ」
「うん、浩介くんからでいい？」
「おう」
浩介くんから水着に着替え、次にあたしの番になる。
スカート以外から水着に着替えるのは女の子になって初めてで、テントの中とは言えどうしようかなと考えてみる。
パレオは短すぎてダメだし、巻きタオルの類も持っていなかったため、昨日のスカートを臨時で使いまわすことにした。
……やっぱり、あたしはスカートのほうが好きだわ。
ともあれ、昨日のプールに続いて、あたしは水着姿になった。
「お待たせー！」
「「おおー！」」
昨年試着に立ち会った母さん以外の３人が、あたしの水着姿を見て感心した声を上げる。
「優子ちゃん、その水着なんだかかわいい上にセクシーね」
一番感心していた「お義母さん」が、あたしの水着姿を褒めてくれる。
「えっへん、かわいさとエロさ更にはあどけなさと幼さ、全部を追及してこうなったわ」
パレオをちょこんと摘んで横に広げ、アピールをする。
水着を着ると、あたしも気分が高揚する。
「ふふっ、浩介くん、一緒に水浴びしよ！」
「っ！」
そう言ってあたしは大胆に浩介くんと腕を絡める。
胸がむにっと当たる感覚がした。

浩介くんは何も喋らず黙っているけど、下の方は水着越しで分かるくらいに正直に自己主張をし始めた。
「あらあら浩介ったらー」
「良かったわ。健全な男の子みたいで」
女性陣が笑っている中で、男親たちは浩介くんを気の毒そうな目で見る。
確かに、自分の親と婚約者の親の目の前でこれは、かなりの罰ゲームになる。というか、トラウマになっても不思議じゃないよね。
「ええい！」
すりすり
「きゃあ！」
そして浩介くんに、またお尻をなでなでさせられた。多分に破れかぶれという感じだけど、両親の「浩介くん不能疑惑」は改めて完膚なきまでに霧散した。

「とにかく、私たちは川岸に居るから水浴びしてきなさい」
「う、うん……」
母さんにそう言われ、あたしたちは川に入る。
不規則な足の石が、ツボを刺激して痛気持ちいい。
「きゃー冷たい！　きゃはっ！」
川の冷たい水は、プールとはまた違った魅力がある。
ここは穴場らしく、あまり人気がない。
というよりも、この辺は、目視できる範囲ではあたしたちしかいない。いわば貸切状態になっている。
この川は、今でこそ「清流」に近いほど済んできれいな水になっていて、実際にきれいな水にしかいない魚も見られるくらいだけど、10年くらい前は「汚い川」の代表格みたいな感じで全国的にも報道されていた。
ここが穴場になっているのも、その時の「汚い川」という報道イメージの影響がそのまま残っているのだという。
本来ならイメージ払拭のために報道機関も報道し直すべきだろう

けど、今回とばかりは「マスゴミ」に感謝しちゃおうかな？
川の冷たい水が脚から膝へと掛かる。
あたしたちは、あまり深くにならないように膝が水の中に入る程度で止まっておく。
「えーい！」
バシャ！
「うおっ！　そーれ！」
あたしは浩介くんに水を掛ける。
すると浩介くんも、手加減しながらあたしに水を2、3回。
あたしはもう一度前かがみに前屈して、水をかけ返し――
むにんっ！
「え!?」
突然、胸の谷間に何かがのしかかる感触を受ける。
あたしが下を向いてみると――
「スーハースーハー、クンカクンカ」
「きゃああ!!!」
浩介くんに、胸の間に顔をうずめられて呼吸をされたり匂いをかがれたりしていた。
「優子ちゃん、おっぱい最高ー！」
「浩介くん、お願い、顔どけて！」
浩介くんの顔がかなり重たい上に、両家両親の見ている前。しかも誰か来るかもしれない場所。
「ああうん……」
浩介くんも、あたしの声にはすぐに反応して、顔をどけてくれる。ちょっと残念そうにしている。
あたしは恥ずかしさを隠すために、平手を浩介くんの頬めがけて狙い撃つ。
ぺちっ！
「浩介くんのエッチ!!!」
あたしは、両親に聞こえるくらいの音量で、叫ぶように言う。照れ隠しだ。

「ごめんごめん、その、優子ちゃんが前かがみになっててて、谷間が強調されて……我慢できませんでした」
「うううう……仕方ないわねえ……」
浩介くんの正直な告白に、あたしは毒気を抜かれてしまう。
そこには、あたし自身も浩介くんにエッチなことをされて濡れてしまうのも原因に含まれている。つまり、似た者同士ということ。
あたしたちは、水遊びもそこそこに、もう少し川の深いところに行く。といっても、数歩だけだけど。
この川の流れはとても緩やかで、あたしの貧弱な足腰でもびくともしない。
それでも、念のためにあたしが上流側になり、浩介くんに助けて貰えるように対策をする。
そして、今度は正面からちょっとだけ水を掛け合ったり、またあたしが後ろ向きになって浩介くんに肩をもんだりしてもらった。
海と違って、川の水は塩辛くない。足元の水中には時折小魚が見えていて、あたしたちを和ませてくれる。
海の激しさとはまた違う、川の安らぎが見て取れる。
あたしたちは足元を観察し、時折川の水で上半身を濡らして涼んだりしながら、静かに時を過ごした。

「ふうっ……」
遊び疲れたあたしたちは、川岸に戻って足だけを水につけた状態で座っている。
何の気なしに向こう岸を見つめる。
川の真ん中は流れが激しい。浩介くんは隣りにいるけど、一緒に頑張って向こうまで進めるかな？　まあ、ここでのんびりしていたいわね。
「優子ちゃんってさ」
「うん？」
「川って好き？」
浩介くんが何気なく聞いてくる。

正直考えたこともないわ。
「うーん、分からないわね……でもね」
「ん？」
「あたし最近思うのよ、浩介くん、最近かっこよくなったなって」
ちょっとだけ、言いたいことを言ってみる。
「え!?」
浩介くんが、赤くなった。
「ほら、あたしたちデートしたての頃って、周りから浩介くん『冴えない』とか『不釣り合い』とか言われていたのに、最近じゃあ殆ど言われなくなったでしょ？」
最近だと修学旅行の行きの新幹線で、下品な女子校の女の子に言われたくらいかな？
「あっ……」
「恋ってやっぱり、あたしたち女の子じゃなくて、男の子も変えるのかなって」
多分、それはあると思う。
「そうかもしれない。優子ちゃんに好かれるために頑張っちゃうもの」
浩介くんの言葉、たくましくて頼もしくて、あたしはそんな浩介くんが大好きで。
「もう少しだけ遊んでいかない？」
「ああうん、そうするわ」
あたしたちは立ち上がるともう一度、浩介くんと一緒に川に入る。
あたしの水着姿は、相変わらず浩介くんには刺激が強いみたいで、それどころか去年の頃よりも興奮している気がするわね。
「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
川の中で、また浩介くんが話しかけてくる。
「クラスに、結婚のこと、どうしよう？」
「うーん、結婚式とかそろそろ色々考えないといけないわね」
まだ、想像もつかないけれど。

「まあ、その辺りは両家で相談だな」
「うん」
あたしたちの、川での安らぎは過ぎていく。
その後は、川岸で静かに過ごした。

「ふー、楽しかったー」
帰り道はあっけなかった。荷物を片付けて2台の車にそれぞれ乗り、お互い家に帰るだけ。
あたしたちは家に帰り、遊び疲れた体を癒やした。
「夕食になったら手伝ってね。呼ぶまでは休んでてね」
「はーい」
母さんの声にあたしも答える。
この家で夕食を手伝えるのも、1日1日が過ぎるごとに少なくなっていく。
あたしがお嫁さんに出たら、この家は父さんと母さんだけの世帯になる。
優一の頃は、ううん、優子になったばかりの頃でさえ、あたしがお嫁に、それも高校を卒業したらすぐに出るなんて考えにも及ばなかったはずだわ。
まあ、母さんのことだし、あたしが居なくてもどうとでもやっていけそうと言えばそうだけど。
意外と、冷静な父さんのほうが問題かもしれないわね。

# 残暑と初秋の日々

９月１日、あたしは久々の学校登校になった。
制服はあの時の蓬莱教授のＡＯ入試以来のことだった。
クラスの他のみんなは夏期講習とか部活とかで夏休み中にも学校に行くことがあるけど、あたしと浩介くんは結局夏休みはフルで休んだ。
「桂子ちゃん、おはよう」
「あ、優子ちゃんおはよう。久しぶり」
駅までの通学路、久々に元気な桂子ちゃんに出会った。
桂子ちゃんと駅まで一緒に歩く。
「優子ちゃん、入試どうだった？　って聞くまでもないわね」
桂子ちゃんが一応という感じで聞いてくる。
「うん、面接の時に、蓬莱教授が合格証渡しちゃったよ。どうもあたしたちが会場に来るよりも前から、合格証と不合格通知が印刷されてたみたいで」
「にゃはは……」
桂子ちゃんも、さすがにこれには苦笑いのようね。
ここまで出来レースだと、発覚した時どうするんだろうとは考えちゃうけど、まあ、蓬莱教授もそのくらい考えてあるかな？
「間もなく電車が参ります――」
駅のホーム、あたしと桂子ちゃんが２人組だとあたし単独よりも更に目立つ。
小谷学園の美少女が揃い組になるからだ。
あたしと桂子ちゃんの２人で行動している「桂優ちゃん」という呼び方も、全校にすっかり定着してしまった。
あたしとしては安直すぎると思っているんだけど、「子」が付く名前の美少女が２人組だとどうしてもそうなっちゃうのかな？
「私達、やっぱり目立つよね」
「うん」
桂子ちゃんも、自分たちが目立つ存在だということは分かってい

た。
「そう言えば、優子ちゃんは夏休み、篠原とどこに遊びに行った？」
「うん、プールデートと、両家でキャンプ場でお泊りしたわ」
「そう言えば、もう婚約まで話が進んでるのよね？」
桂子ちゃんには、婚約のことは天文部で話したことがある。
でも、本格的に進んでいることまでは話していない。
「うん」
「間もなく、電車が参ります」
話している間に、電車が到着した。
あたしたちは話を一時中断し、電車の中に入る。

「それで優子ちゃん、婚約のこと、どこまで話が進んでいるの？」
桂子ちゃんが電車の中で話しかけてくる。
「う、うん……高校卒業で結婚ってことになって――」
「え!? 急じゃない？」
桂子ちゃん、かなり驚いて絶句気味だわ。
無理も無いわよね。
「ああうん、元々、もっと後にしようと思ってたんだけど、あたしの両親も浩介くんの両親も、とにかく急かすのよ」
「大変ねえ……」
桂子ちゃんが同情するように言う。
確かに、両家両親から結婚を急かされるって子供としては大変だと思う。
「実は浩介くんが１８歳になったらすぐって言っててね。高校卒業後は妥協案として成立したのよ」
「そう、もし両親の言い分が通ってたら――」
「あたし、もう浩介くんの嫁になっちゃってたわ」
「うわあ……」
桂子ちゃんもかなり驚いている。
一応、高校側の事務作業が大変だとかそういうこともあって今の内容に落ち着いたんだけど。

電車が学校の最寄り駅に到着し、あたしたちはいつものように学校へと向かう。
通学路にも小谷学園の制服がたくさん見え隠れするのを見るのも、徐々に少なくなっていく。
1日過ぎるごとに卒業を意識してしまう。
ガラガラガラ……
「おはよー」
「あ、優子ちゃんおはよう。木ノ本も」
浩介くんが真っ先に挨拶をしてくれる。
「うん、浩介くんおはよう」
「木ノ本さん、おはようございます！」
「おはよう！　龍香」
桂子ちゃんの方は、龍香ちゃんとおはようの挨拶をしている。
クラスメイトたちがそれぞれ思い思いに挨拶をし、ある人は1時間目の準備を、またある人は通学疲れを癒やすために椅子に座って休む。
夏休み明けは、いつもどおりに過ぎていく。
ガラガラガラ……
「はーい、みんな。夏休み明けのホームルーム始めるわよー！」
そして最後に、永原先生が入ってくる。
小谷学園は前後期制なので、この日は特に始業式等もなく、あたしたちは1時間目の授業の準備に取り掛かった。

キーンコーンカーンコーン
「ふー」
夏休み最初の学校だったけど、とりあえずうまく行ってよかったわ。
もう大学進学先は決まったとは言え、やはり卒業するために、ある程度の勉強をしないといけないし、蓬莱教授の方からも、研究室の戦力として見込まれ始めている。

だから、進学先が決まったからと言って遊び放題というわけにも行かない。
「優子ちゃん、篠原、天文部行こう」
「うんっ」
「分かった」
３人での天文部への久々の移動、夏休み前のあたしたちは、文化祭での出し物について話し合っていた。
その結果として、今回は人手が多いということや、既存の出し物も使いまわせてきたということで、思い切って各自で自由研究にし、桂子ちゃんが精査してくれるという。
あたしは、「ベテルギウスの超新星爆発」について、浩介くんは「プロキシマ・ケンタウリと赤色矮星」がテーマになっている。
他の男子部員たちはというと、夏休み中に結構作り上げてしまったらしい。
それというのも、桂子ちゃんが「良いレポートを作ってくれると嬉しいな」なんてちょっとニッコリ笑顔で言うだけで、男子部員たちはしゃかりきになったのだ。
とにかくこの天文部の男子たちは、下心が丸見えで、ちょっとしたことで簡単に転がされるバカしかいない。
でも、そんなバカな所が男の子の大きな魅力なんだけどね。
頼りになるのは事実だし、下心があると言っても、やっぱり男の子は女の子に優しいし。
「ところで、優子ちゃんはレポート進んでる？」
「うん」
印刷して、壁に貼り付けるからそれなりにしっかりしたものを作らないといけないわね。
あたしはＰＣを立ち上げて、推敲をする。
夏休み前と、天文部ですることは変わらない。
「ふう」
あたしは９月最初の学校を無事に終えた。

制服を脱いでゆったりと寛ぐ。
家事手伝いをしない日も久しぶりだわ。
でも、お嫁に行ったら、毎日しないといけないのかな？　まあ、夏休みで慣れているから、問題ないし、浩介くんに家事ができる所見せないとね。
あたしは、去年の9月1日を思い出す。
去年はそう、たしか夏休み明けでいきなり生理の日になっちゃって、浩介くんにお姫様抱っこで運ばれちゃったんだっけ？
今でも、あたしが生理で気分悪かったりすると、保健室まで浩介くんにおんぶしてもらったり、お姫様抱っこしてもらったりしている。
あの時のことを思い出して、緊張しちゃうことも多い。
お姫様抱っこの時は、結構恥ずかしいし緊張しちゃうけど、顔が近いからよくキスに発展する。
おんぶの時は……浩介くん、こういう時に限ってお尻は触らないのよね。

その他の9月のイベントと言えば、月末の期末試験がある。
小谷学園的には、卒業や内申点などのものだけど、あたしにとっては、佐和山大学へ進むための、最後の関門と言ってもいい。
各教科、特に赤点は避けないといけない。
……とは言ったものの、実際には体育以外あたしに何の問題もない。
そもそも、佐和山大学はあたしの進学先としては偏差値が低すぎる。
小谷学園から佐和山大学に進む生徒が多いように、佐和山大学に合格できる学力なら、小谷学園は十分に卒業できる。
あたしは、相変わらず成績はかなり良くなっていた。
もともと優一時代から成績は悪くなかったけど、女の子になってますます成績が良くなっていった。もちろん体育は例外だけど。
期末試験の直前になると、天文部の部活も一応中止になる。
まあ、影でこっそりやっててても、小谷学園なので怒られないんだけ

ど。
勉強に専念すると言っても、あたしはもう、試験勉強よりも、蓬莱教授から送られてくる大学レベルの内容の勉強の方が多い。
何故かこういう時期だけ、捗るのよね。モチベーションが違うからかな？
「はーい、期末試験最初は古典ですよ！　皆さん、教科書ノートはしまってください！」
９月末、永原先生の号令のもとで、古典から期末試験が始まる。
あたしは、問題を解いていく。
内容は平安時代のもので現代語訳や読解問題、文法問題など様々だ。
あたしは、一つ一つ冷静に解いていく。
「ふう」
よし、時間が余ったわね。
見直し見直しっと。
ピピピピッ……ピピピピッ……
「はーい、そこまで！　後ろから回収してください」
試験官の先生が、試験の終了を告げ、答案用紙を回収させる。
この期末試験が、数日に渡って続く。
試験の反省をする人や、次の教科の勉強をする人など、みんな様々だ。
期末試験の終了は、夏服の終了でもあり、あたしはもう、夏服を着ることはなくなるということになる。
いかに長く、若い容姿を保っていても、高校生活はたった一度しか訪れない。
期末試験が終わったら、文化祭に体育祭と、秋のイベントが目白押しになる。
ともあれ今は、次の教科に集中しないといけないわね。
万一大きなミスでもして、赤点にでもなったら悲惨だわ。それだけは避けないといけないわね。

「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
期末試験2日目の昼、教室で休んでいると浩介くんが話しかけてくる。
「期末試験、大丈夫か？」
「もちろん、浩介くんは？」
「ああ、多分このまま行けば、卒業はできるよ」
まあ、万が一卒業要件満たさなくても、蓬莱教授が横槍を入れそうだけど。
って、いくら蓬莱教授でも、あまりそこまでしては来ないかな？
「まあ、卒業は心配してないわよ。うちのクラス、みんな成績は悪くないし」
「ああ、永原先生が褒めてたな」
うちのクラスはとにかく優秀なクラスだ。あたしが女の子になってからは特にその傾向が強い。
「それよりも、文化祭、どうするのかなって今は考えてるわ」
あたしが、文化祭に話題を変える。
「俺と優子ちゃんの2人なら、どんな文化祭だってきっとうまくいくさ」
「ふふ、そうよね」
「優子ちゃん、好きだよ」
突然、浩介くんが告白してくる。
でも、あたしもドキドキする。
何回言われても、慣れることはない。とても嬉しい言葉だから。
「うん、あたしも……浩介くん大好き」
「優子ちゃん……」
「浩介くん……」
あたしと浩介くんは、自然に唇が近付いていって――
「ぐおおお

「「わっ！」」
突然高月くんが、教室の天井めがけて大声で叫び始めた。
すると、数人の男子が同調してくる。
そう、あたしと浩介くんがクラスでいちゃついていると、高月くんを中心とした男子たちの嫉妬と呪いの儀式が始まるのである。
「リア充死ね、リア充爆発しろ、リア充滅せよ、リア充死すべし慈悲はない！」
「篠原呪われろ、この世で最も不幸な死に方をしろお！」
「篠原ばっかりいい思いしやがって、くそおおおおおおおおおお!!!!」
「篠原死ね、死ね死ね死ね！　南無阿弥陀仏、南妙法蓮華経、アブラカタブラ、アーメン、アラーアクバル！」
最初は微笑ましいとも思っていたけど、最近はちょっと嫌な感じもする。正直辞めてほしいわね。
「ねえ、あたしの好きな浩介くん呪わないでよ！」
「うっ……優子ちゃん」
あたしの声に男子たちが怯む。浩介くんもちょっと驚いている。
「まあまあ優子ちゃん、男なんだから俺には嫉妬するでしょ」
「うっ、そ、そうだけど……やっぱり好きな男の子が呪われてるの見るのってやっぱり――」
「優子ちゃん、優しいね。でも、ほら、呪いなんて効果がないからさ」
浩介くんがあたしをなだめてくれる。
本当にずるいわ。こんなこと言われちゃったら、止められないじゃないの。
「浩介くん……」
あたしはまた、浩介くんの唇に自分の唇を近づけて……
「「うわあああああああああああああああああああああんんん

谷学園生として、それはまずいわね。

「ふー、終わった終わったー」
「優子ちゃん、天文部行くわよ」
「はーい」
期末試験最終日、あたしたちは試験終了と同時に解禁された天文部へと行く。
天文部には、既に浩介くんをはじめ、男性陣がいた。
「あの、木ノ本部長」
「ん？」
男子の一人が話しかけてくる。
「俺の研究テーマ、『２２世紀末までの日食表』が出来ました」
この男子は、日食の予定表を作っていたという。
日食の予定については、インターネットで簡単に調べられる、天文初心者向けのものだ。
北関東で、１７年後に日食があることは有名な話だろう。
「ほほう、見せてもらってもいい？」
「はいっ！　この日食表、是非石山先輩と篠原先輩にも見てもらいたくて」
「ん？」
「俺達がどうかした？」
突然の指名に、あたしと浩介くんも立ち上がる。
「ずっとずっと未来、ここに居る俺達が生きていないような２２世紀でも、お二人が生きていて、日食を見られるように、作りました」
天文部のみんなは、蓬莱教授の個人的都合で、あたしたちが佐和山大学に進学することになったことを知っている。
蓬莱教授の実験が成功し、あたしにとって浩介くんが文字通り「生涯の伴侶」となれば、２０００年生まれの高校３年生が、普通なら生きていない２２世紀の日食も見られるということになる。
元々、日食は月食より珍しいと言われているが、見られる範囲が狭いだけで、実は月食の方が珍しい天文現象でもある。

「２１８６年に興るこの日食は、１万年の中で一番長いんです。俺達は無理ですけど、石山先輩や、永原先生ならきっと見られます」
「無理なんて言わないのよ。蓬莱教授の研究がうまく行けば、不老は誰でもなれる身近なものになるわ」
　あたしが言う。
「そうね、私も、色々な天文現象を見ていきたいわ。そのためには、老化はしたくないの」
　桂子ちゃんも同調する。
　そう、浩介くんだってきっと、うまくいくから。
　こうして、９月の日々が過ぎていく。季節は１０月になり、文化祭が近付いてくる。

# 多忙になる優子

「はーい、早速文化祭の出し物を決めるわよ」

3年生の文化祭は、修学旅行のレポートとか、そういった落ち着いた感じのものが多いのが慣例になっている。

模擬店も出来るけど、あたしたちは何分、去年メイド喫茶をしたばかりな上に、人数も必要になってくるのでやめておくことにする。

一方で、学校行事のレポートという簡単な展示なら、見張りが数人居るだけで事足りる。

つまり、3年生には最後の文化祭をなるべく多くの生徒が長い時間楽しめるようにとの配慮でもある。

それだけではなく、受験生などの対外的な宣伝効果もある。地味ながら重要な役割だからしっかりしないといけないわね。

さて、あたしたちもまた、今年の球技大会の様子をまとめたレポートを作成する。

今回はテニスのレポートをメインに、球技大会で行われているハンデ戦の話や、パソコンを置いて浩介くんと恵美ちゃんとの5セットマッチでの対決なんかも常時放映することになっている。

他の3クラスも、去年の林間学校、スキー合宿、そして修学旅行の様子などのレポートで固まった。

つまり、去年はあった3年生の模擬店は、今年はなしということになったことになる。

こうして文化祭の出し物はあっという間に決まり、あたしたちは各自で写真部や新聞部などより得た写真を借りて、去年よりも文化祭の準備は遥かに楽に終わりそうだわ。

他に決めるのが、クラスごとに行われるミスコンの代表だけど、あたしは去年優勝したので規則上出ることが出来ない。

そのため、代表はすんなりと桂子ちゃんに決まった。

永原先生も出てはどうかという意見も会ったものの、永原先生は「来年もある」と言って辞退し、今年は桂子ちゃんに勝ちを譲ることになった。

１年生が新しく入ってきたけど、桂子ちゃん以上の美人はそうそう入ってこないらしく、永原先生の不参加が学校中に知れ渡ると、既に桂子ちゃんが独走するんじゃないかと噂されていた。

そして、それよりも問題なのが――

「では、臨時会合を開きます」

最近、協会の会合がやや慌ただしくなっている。

今日もまた、正会員だけが集まっての臨時会合が開かれていた。

「会長、東北支部に週刊誌から取材要求が来ました」

「もちろん拒否してください」

「ええ、分かっています」

拒否されると分かっていても、この手の取材要求は止まらない。今日も余呉さんが支部長を務める東北支部にかなりしつこい取材要求があって、危うく幸子さんが盗撮されかかった。

マスコミの印象操作の関係上、現在でも高島さんが所属している「ニュースブライト桜」がほぼ独占の形で、たまに最低限の情報発信を行っている。

それ以外のメディアの取材は一切拒否しているため、マスコミは「しゃべる机」を使って協会について有る事無い事書き込んでいる。

あたしたちは、近々蓬莱教授から記者会見を開くと聞かされた。

ちなみに、蓬莱教授の方も自己実験を繰り返していて、今や彼の寿命は２００歳となっている。現在は４０代、実験成功までの猶予が１５０年に伸びたことになる。

「それで、蓬莱先生から、『いちいち些細な事で訴訟を起こしてみてはどうか？』と言われました。訴訟代はすべて蓬莱先生が持つとのことですが――」

印象操作対策について、蓬莱教授の提案を永原先生が言う。

訴訟を起こせばマスコミ側も手間隙がかかる。どんな言いがかり的な訴訟でも、対応はせざるを得ないから人件費や弁護士代などがのしかかってくる。

「ですが、いくら蓬莱教授と言っても、そんな訴訟ばかり起こしていてお金が持つのかしら？」
あたしが疑問を言う。
「大丈夫ですよ、実は蓬莱先生、去年から経済雑誌でビリオネアに名を連ねまして」
「え!?」
あたしは驚く。何せ「ビリオネア」と言えば、総資産額が１０億ドルを超えている人のことを言う。
永原先生によれば、蓬莱教授は全世界からあまりに巨額の支援を長期間に渡り受け続けたがために、それだけで資産が１０億ドルを超えてしまったのだという。
これは極めて異例のことで、また蓬莱教授自身も投資に成功し、目下資産は急増中だという。
その結果、ここまで資産が伸びたのだという。
「つまり、勝ち負け度外視でいちいち訴訟を起こせば相手からすると『面倒くさい奴』ということになるわけです」
いくら無謀な裁判でも、テレビ局や新聞社などのマスコミ側は、弁護士や訴状に関する人件費の負担を余儀なくされることには変わりない。
つまり、テレビ局側に訴訟のために強引に経費をかけさせて報道意欲を削ぐということ。
はっきり言えば、よっぽどのお金がなければ出来ないような焦土作戦だ。
「とは言え、そんなことばかりしていては協会の評判も下がると思いますが」
比良さんがもっともらしい反論をする。
確かにそう、資金が豊富にもかかわらず、失うものがない。そんな奇特な状況じゃないとこの作戦は成立しない。
「そうすると、蓬莱教授には悪いけど、これは却下ですね……」
「とは言え、何か対策が必要だと思います」
永原先生の言葉に、あたしが言う。

「何か対策」ではどうしようもないんだけど。
「私は、高島さんの活用を考えています」
沈黙を破ったのは余呉さんだった。
あたしもそれに賛成ね。
「はい、あたしもそれでいいと思います」
「ええ、私としても異議はないわね」
あたしと永原先生も、同調する。
そう、唯一あたしたちから取材を許されている、高島さん。
あれ以降、あたしたちは特に取材等を受けていない。
それでも、定期的に小さな情報はこちらから流している。交流を続けなければ、関係は必ず疎遠になってしまう。
マスコミ関係者の中では唯一の味方と言ってもいい。
そして蓬莱教授の方でも、独自に宣伝部を作っているが、その宣伝部の主力として、「ブライト桜」はつなぎとめて置かなければいけない大事な存在だ。
「ですが、インターネットニュースの1社だけで大丈夫でしょうか？戦力として、不安が残ります」
比良さんは、それでも懸念を崩さない。
副会長という立場のためか、あるいは彼女自身の性格がそうなのか、比良さんはこういう慎重な意見が多い。
「私は、蓬莱教授の宣伝部に掛けてみたいと思います」
永原先生がそう宣言する。
蓬莱教授が宣伝部を作ろうとしているということは、ＡＯ入試の後、すぐに協会でも共有された。
今はもう、協会と蓬莱教授の間には、何のわだかまりもなく、完全な同盟関係となっている。
蓬莱教授は宣伝部の増強に余念がない。
今の所、あたしたちがメディアに強硬姿勢を敷いたために、蓬莱教授に報道が集中している。
蓬莱教授の場合、あたしたちと違って立場上マスコミをシャットダウンするのが難しい。

いや、あたしたちだって、実際「しゃべる机」による風評被害も受けている。
それさえ書くなというのは、さすがに言いすぎだ。
だがそれでも、あたしたちの方がずっとマシだ。
何せ蓬莱教授は、取材を受けた上でマスコミに有る事無い事書かれているのだから。
「不老と不死の混同、とにかくまずはそこを正すように、していきたいですね」
「ええ、蓬莱教授も、まずはそこからと言っていました。私達協会と蓬莱教授、そして高島さんで連携し、まずはそこを重点的に攻撃しましょう」
比良さんの言葉に、あたしも同調する。
完全な不死身と、若いままの不老では天と地ほどの差があるということを、まずは周囲に認識してもらわないといけない。
「じゃあ、メディア対策はこの辺にしましょうか」
「はい」
そしてあたしたちは次の話題に移る。
「えーっと、今年春に発病したＴＳ病患者なんですけれども、家族からの報告で、昨日遺体で発見されたとのことです」
「そう」
「まあ、今回は早かったわね」
あたしたちは一様に、「残念だが当然」という顔をする。
彼女は、男とも女ともつかない、中途半端に良い所どりをしようとして、虐めにあった挙句不登校になり、そして失敗した例だった。
２ヶ月前にも、あたしがＴＳ病になる直前の患者が自殺してしまったと言うし、やはり初期対応に失敗してドツボにはまるケースを救うのは至難の業だ。
あたしの新マニュアルの威力がどれほどのものかは分からないけど、結局最後に運命を決めるのは、彼女たち自身だ。
「それで、夏に発病した患者はどうですか？」
あたしが、関西支部長さんに修学旅行の時に面談した京子さんにつ

いて聞いてみる。
「ええ、順調です。ただ、言動や服装など、女性らしいものを身に着けようとしているのですが、どうしてもとっさの行動で『男』が出てしまう、直したいのにうまくいかないと悩んでいました」
関西支部長さんが報告してくれる。
「典型的な理屈先行型のパターンですね。男に戻ろうという感じがしないならば上々ですが」
比良さんが、いつものことのような表情で言う。
「ですが、うちの会員の中では、理屈先行型が一番多いです。対処法も確立されていますし、慌てすぎないように、長期的視野で見るようにと伝えてください」
永原先生が関西支部長に言う。
「ええ、分かっています」
関西支部長さんも、そのあたりは心がけているはずだ。釈迦に説法とも言えるわね。

ジリリリ……
会議中、突然協会の電話が鳴る。
電話から一番近かったあたしがとっさに手を取る。
「はい、日本性転換症候群協会です」
「あ、日本性転換症候群協会様ですか？」
「はい」
電話の向こうは、若い男性の声だった。
「こちら都立病院の――」
「はい、どのようなご用件ですか？」
都立病院の所属を名乗ったお医者さんが自己紹介をしてくれる。
「でですね、病院に運ばれました患者が、ＴＳ病でございまして」
どうやら、また新しい患者さんが現れたらしい。
「分かりました」
「急ぎではないですが、そちらの方から会員様をお連れできないでしょうか？」

「分かりました、少々お待ちください」
そう言うと、あたしは一旦電話を机に置く。タイミングが良かったわね。正会員が全員集まっているわ。
「石山さん、電話は何です？」
永原先生が聞いてくる。
「都立病院の方から、新しくＴＳ病になった患者さんが出たということで、急ぎではないですが会員を連れて来て欲しいとのことでした」
「うーん、場所は東京ですか……」
永原先生が関東支部長さんの顔を見る。
「私は、何人か患者を抱えてますので――」
関東支部長さんは、結構多忙で渋っている。
会長の永原先生や、副会長の比良さんも難しい。とすると――
「じゃあ、石山さん、お願いしていいかしら？」
「……分かりました」
必然的に、あたしに白羽の矢が立つ。
あたしも幸子さんのカウンセラーだけど、もう半年くらい、彼女の相談を受けていない。
既に普通会員として、東北支部でも活動しているし、特段の問題はないだろう。
もし次に問題が起きるとしたら、幸子さんの場合、恋愛関係だろう。それまでは、大きなイベントはない。
つまり、実質あたしは手が空いているということになる。
「お待たせしました。では会員の方を派遣しますので、場所をお願いできますでしょうか？」
「はい、場所は都立――」
病院の人から、最寄り駅とそこからの道のりを詳しく聞き、メモに取る。
また、電話の担当の人の名前も聞いておく。
「では、すぐに伺います」
「ありがとうございます。では失礼致します」
あたしは電話を切り、荷物をまとめ、「先に失礼します」と言って協

会本部を後にする。
指定された都立病院は、協会本部から電車で一本の所にある。
病院の最寄り駅までは、初めて使う路線で、ちょっと新鮮だったけど、うまくことが進んだ。
そして最寄り駅から病院までは、ちょっと迷ったけど、それでもきちんと約束の時間に余裕を持って付けたのは行幸だった。
「いらっしゃいませー」
「すみません、あたし日本性転換症候群協会の石山と申しますけれども――」
受付の人に事情を説明する。
受付の人は「ちょっとお待ち下さい」と言って内線をかけ始めた。
反応は良好ね。
「お待ちしておりました石山様。エレベーターで5階に上がっていただきまして５０５号室でお願い致します」
「……分かりました。ありがとうございます」
あたしは受付の人に礼を言うと、エレベーターを使う。
中は車椅子の他、救急車で運ばれた患者を想定してか、かなり大きい作りになっているものの、居るのはあたし一人。
ただっ広く空間を無駄遣いしている気がする。
ピンポーン！
「5階です」
エレベーターの女性の無機質な声とともに、あたしはエレベーターを出て廊下を進む。
あたしが最初に入院していた病院とは全く雰囲気も違うけど、嫌でも病院に来ると、あの時のことを思い出す。
そう言えば、あたしは病気とは縁がなくて、あの時以来、病院に行ったことはなかった。これも不老遺伝子のおかげかな？
ともあれ案内表示に従い、５０５を目指す。
すると、部屋の前には既に5人の人がいた。
「あの、すみません……」

「あ、石山様でしょうか？」
電話の中の男性と同じ声がした。
一人だけ白衣で、電話をかけたのもこの人だろう。
「はい。石山です」
残りの４人を見ると、男性３人に女性１人で、見た目年齢的には父母、そして息子２人と言った感じ。
あたしが石山と名乗ると、「本物だ」「すげえ美人じゃねえか」「でも彼氏持ちなんだろ、ちくしょう」といった声まで聞こえてくる。
「その、末の弟が、妹になってしまいまして……」
上の兄らしき人が言う。
「その、ＴＳ病は自殺率が高いと聞いたのですが、大丈夫なんでしょうか？」
母親らしき人物が言う。
「とにかく、一旦患者さんに会わせてもらえますか？　そうしないと始まりませんから」
「分かりました」
お医者さんの男性が、扉を開けてくれる。
中には、困惑した表情で自分の胸を揉んでいる美少女が居た。
「こんにちは」
「わっ!?　あ、あなたは……！」
女の子があたしを見て驚いている。
「あたしは、日本性転換症候群協会から、あなたのカウンセラーとして来た石山優子よ。よろしく」
「え？　石山優子って、あのネット動画に出てた石山優子!?」
どうやら、この一家はあたしのことを知っていたみたいね。
「ええ、そうですよ」
あたしがニッコリと微笑みながら言う。
「やべえ、すげえ美人じゃん。胸も俺のより大きいし」
「ふふっ、初々しいわね。でも、『俺』はいけませんよ」
あたしが優しく諭すように言う。
「あ、ああ……」

「な、なあ俺……いや、私、これからうまくやっていけるのかな？　自殺率高いって言ってたし」
「大丈夫よ。まずはお母様？」
あたしは母親の顔を見て言う。
あたしは鞄からパンフレットを出す。
「は、はい」
「こちらのパンフレットに書いて有ること、これを実行してください。これを行えば、女性としての生活が、決して悪いものではないということがわかります」
小さなパンフレットには、幸子さんとの２人旅で得たのをヒントにした、カリキュラムの前段階のものがある。
「ありがとうございます」
「既に知っていると思いますが、これからは女性として生きていくため、様々な作法を学んでもらいます。厳しい教育にはなると想いますが、頑張ってください」
「は、はい！　俺も、死にたくないですから」
また「俺」って言ってるわね。
「こらっ、いい？『俺』っていうのは、女の子が絶対に使っちゃいけない言葉よ。さ、言い直してみて？」
「私も、死にたくないですから？」
美少女が、困惑しつつ言い直す。
「ええＯＫよ。それじゃあ、ご本人とご家族の皆さんに、説明しますね」
あたしはその後、家族に対して、カリキュラムや改名と言ったＴＳ病患者の初期対応の基礎的なことを教え込む。
ＴＳ病の自殺者は相変わらず多いままで、昨日自殺した患者が居たことを説明すると、女の子はひどく怯えていた。
面談が終わり、あたしはこれらのことを協会に連絡すると、永原先生から「自殺恐怖型」だと言われた。
このタイプは、理屈先行型ほどではないが、自殺率は低いパターンとのこと。

ただし、恐怖が常にあるため、精神を病みやすく、別の精神病を発病して自殺するパターンが多い。

予断を許さない状況には変わりない。

そして家に帰って、あたしは母さんに、新しい患者を見ることになったことを伝えた。

母さんは、「幸子さんを救った優子ならきっと出来るわよ」とだけ、アドバイスしてくれた。

文化祭の準備に、天文部、協会のメディア対策に新しい患者へのカウンセラー、期末試験が開けて、他の生徒は負担がやや減る中で、あたしは一気に多忙になっていった。

# 思い出の数々

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……」

目覚まし時計の音、今日は待ちに待った文化祭の日。

今年も去年と同様2日構成で、1日目は学内生徒のみで、2日目は一般にも公開されて行われる。後夜祭も例年通りの開催になっている。

あたしは去年と同じく浩介くんと見回りすることになっている。

覚醒したら、ベッドから起き上がってハート型のクッションに立つ。

このクッションも、何だかんだで1年以上愛用している。

パジャマと下着を脱ぎ、すっぽんぽんになってから、下着選びを行うのもいつも通り。

……よし、今日は青白の縞パンにしよっと。

あたしは手慣れた手つきで制服を着込み、鞄を持ってリビングへと行く。

「おはよー」

「優子おはよう。今日は文化祭？」

「うん」

「頑張ってね」

「分かってるわよ」

と言っても、去年と似たような感じにはなると思う。

浩介くんと一緒に回る。去年はまだ婚約者どころか正式な彼氏彼女でさえなかったけど。

それにしても、去年の文化祭は大変だったわ。

メイド喫茶にミスコンに、浩介くんも嫉妬しちゃって、でも後夜祭では浩介くんに告白されて、永原先生に渡された紙、あれのお陰で、あたしは、本当の意味で「女の子」になれた。

何故かは分からないけど、今年の文化祭も、何か大きなことがありそうだわ。

「行ってきまーす」
「行ってらっしゃーい優子、鍵は閉めておくわよ」
「はーい！」
母さんの声をバックにあたしは小谷学園へと向かう。
通学路の雰囲気はいつもと違うけど、これがあたしにとって３回目の出来事でもある。
今日からの文化祭を、みんな楽しみにしていた。
教室の前には、ミスコン代表の桂子ちゃんの写真が大きく張られていた。
今年はもうすでに当確ランプがついてしまっていて、無風選挙になると見込まれている。
ガララ……
「おはよー！」
「あ、優子ちゃんおはよう」
今年の文化祭仕様の教室は、今回椅子がない。
男子は床に座り込んでいる人もいるけど、あたしは壁のロッカーの方に寄りかかる。
何故ならそこが浩介くんの隣だから。
あたしの後も生徒たちが次々と教室に入ってきて、今日はいつもと違う面持ちになっている。
ガララ……
「みんなおはよー」
文化祭前のホームルーム開始よりも、かなり早い時間に、制服姿の永原先生が入ってきた。
「おい、永原先生、また制服姿だぞ」
「結構かわいいよな。先生の制服」
「というか、どう見ても最年少にしか見えないよなあ……」
「今年はミスコン出ないんだってなあ……」
「まあそりゃあそうだろ？　先生なんだから、むしろ去年が特殊で

しょ」
「ま、そのおかげで、今年は桂子ちゃんが本命だな」
永原先生のいつもと違うけど去年も見た格好に、うちのクラスの生徒達も興味津々になる。
永原先生の制服姿はちょうど去年の文化祭以来で、あの時はミスコンでの撮影とかで制服姿になっていた他、メイド服姿も披露して、メイド喫茶もしていた。
元々、レディースーツのお陰で、少しだけ大人っぽく見えているけど、実際には永原先生は背も低いしあたし以上の童顔だ。そのため、制服姿に違和感がないどころか、むしろ女子中学生が背伸びしているようにさえ見えてしまう。
いつもは下ろしているセミロングの髪も、今日はツインテールにまとめられていて、それが一層幼さを強調する。
身長はあの時代の人にしてみれば高いけど、やはり現代人からすると、「ロリ」の域は出ない。
皆が注目する中、永原先生が教室の中央に移動し、そこで立って展示の全体を見ている。
「あの、永原先生」
あたしは、永原先生に近寄って声をかける。
「石山さん、どうしたの？」
「その、何でまた、制服に？」
あたしが恐る恐る聞いてみる。
「ああうん、せっかく文化祭だから、と思ってね。去年限定じゃあもったいないでしょ？」
永原先生はさらりとした表情で言う。
永原先生、そう言えばあたしがきっかけで青春へ興味を持ったんだっけ？
「もったいないのかなあ？」
よく分からないわ。
「うんうん。ＴＳ病の先輩として言っておくわね。これからの人生長くても、１０代は一度きりだし、時間は巻き戻せないわよ」

「知ってるわよ」
そのことは、あたしだって重々わかっている。
今は高校生活の、最後の文化祭だってことも。
その後も次々と、クラスメイトたちが集まって来る。
永原先生は相変わらず凄い溶け込み具合で、毎日顔を合わせているうちのクラスメイト達も、一瞬「あれ？　誰だっけ？」という顔をする。
もちろん、顔や体型をよく見直せば、それは2年間担任をしている永原先生だとわかる。
しばらくすると、ホームルームの時間になってくる。
すると永原先生が再び教室の前の教卓部分に移動する。
キーンコーンカーンコーン
「はーい、みなさん、ホームルームを始めますよー！」
チャイムが鳴ると、永原先生が号令をかけ、教卓の方に移動する。
「えーっと、皆さん、本日は文化祭です。３年生は大半が自由時間ですが、こちらの展示物の見張り役や、各自の部活の担当を忘れないように、くれぐれも注意してください。また、最後のお祭りですが、羽目を外しすぎないように、最後まで気を抜きすぎないでください。よろしいですか？」
「「はーい！」」
永原先生の言葉に、みんなが返事をする。
やっぱり、制服姿の永原先生はとてもかわいくて、先生というよりも、小さなクラス委員長という感じがするわね。
ピンポンパーンポーン！
「えー、こちらは生徒会です。ただいまより、２０１８年度、小谷学園文化祭１日目を開始します！」
そして、永原先生の話のすぐ後、生徒会長さんによる文化祭開始の合図とともに、あたしたちは一斉に教室を駆け出していく。
「浩介くん、行こう？」
「おうっ！」
あたしたちはまず、隣のクラスを見て回ることにした。３年２組な

ので、去年はメイド喫茶をしていたクラスになるけど、もちろんメンバー的には去年の2組は1組になっている。
今年はというと、去年の林間学校をまとめた写真展になっている。
この時間は、あまり3年生の所には人がいない、その分、落ち着いて見ることができる。
ちなみに、教室の前に貼ってあったミスコン代表は、去年見ない顔で、一目見ただけで桂子ちゃんの相手にもならなさそうな顔だった。
多分、女性票でごり押しになったんだと思う。
ともあれ、中の林間学校の写真展を見て回る。
「あ、石山さんに篠原さんいらっしゃい」
見張り役の女子2人のうちの1人が声をかけてくる。
「写真、見ていきますね」
「ええどうぞ」
林間学校の写真は、このクラスの生徒のみならず、全クラスから満遍なくチョイスされている。
写真はバスにみんなが乗り込むところから始まっている。4台分あるけど、黒くて長い髪がないから、あたしの姿は映っていない。
「懐かしいわねえ……」
浩介くんにおんぶしてもらった山の登山、これは別のクラスに焦点が当たっていたけど、山頂ではいくつかあたしたちのクラスの写真もある。
最も、あたしは写ってないみたいだけどね。
「山登りさ、優子ちゃんおんぶするっていうの、勇気が要ったよ」
浩介くんが懐かしそうに言う。
「うん、でも本当にありがとう。もし浩介くんがそう言ってくれなかったら、あたしきっと、麓のホテルでずっと一人泣いていたわ」
「優子ちゃんの背中に胸が当たって、もし今だったらもっと興奮しちゃってたと思う」
浩介くんが、ちょっとうつむきながら言う。
「それって、あの時よりもあたしのこと好きになっちゃったから？」
あたしが顔を赤くしつつも、ちょっと意地悪っぽく聞いてみる。

「う、うん……」
浩介くんが、顔を真っ赤にして頷く。
「ふふっ、あたしも、今の浩介くん大好きだわ」
「優子ちゃん……」
おっと、あんまりいちゃつくのもまずいかな？
気を取り直して、あたしは次に3日目の写真に目が行く。
森林公園の様子は、人間ではなく森を映していた。
そして自由時間の写真に入る。
「あれ？　これ優子ちゃんじゃない？」
「どれどれ……あ、本当だわ！」
それは、ホテルのロビーで少女漫画を読んでいるあたしだった。メインの被写体は明らかに別で、偶然映り込んだという感じになっている。
「優子ちゃん、少女漫画が好きだよね」
「うん、カリキュラムの時から読んでいたもの」
少女漫画は恋愛ものがとても多くて、女の子の恋愛を学ぶことができた。
今思えば、浩介くんって少女漫画の男の子みたいにかっこいいよね。
凛々しくて頼もしくて、力持ちで、あたしを守ってくれて、責任感も強くて。
「やっぱり、少女漫画読むと女の子らしくなってる感じする？」
「うーん、そこまで実感はないけど、たぶんボディーブローのように効いているんじゃないかな？」
「ふーむ」
浩介くんが何やら考える仕草を見せる。
あたしは、林間学校のことを思い出すけど、この手のカメラを向けられた記憶がない。
花火の様子や、バーベキューにも、あたしたちは映っていなかった。
「あ、これ俺たちじゃん」
「どれどれ……あ、本当だわ」

ホテルから出て、バスに入ろうとするあたしたちが映っている。
そしてその次は、別のクラスのバスの車内の様子が写っている。しかしあたしたちのクラスだけ、帰りの写真がない。
「やっぱり、あの事件のせいだよな」
あたしが恋に落ちるきっかけにもなった事件、浩介くんがナンパ男からあたしを守ってくれた。
「うん、あの時は本当に怖かったわ。浩介くん、今更だけど、改めてありがとうね」
「あ、ああ……」
林間学校の様子をレポートすることで、あたしたちも懐かしい思い出に浸ることができる。
でも、このレポートは、あたしたちにとっては不完全な思い出になっている。
そう、あの後、あたしと浩介くんは、永原先生と彼女の故郷巡りをした。
その事実は、ほとんどの人は知らない。蓬莱教授には少しバレちゃったけど、永原先生の、秘密にも関わるから。
「さ、次に行こうぜ」
「うん」
浩介くんに連れられて、あたしは隣の教室に行く。
やはり教室前にはミスコンの宣伝ポスターがあったけど、こっちも男受けの悪そうな感じになっている。
もしかしたら、「男子受けは桂子ちゃんが全部持っていくから」という意見でゴリ押ししちゃったのかな？
「いらっしゃいませー！」
こちらは、男子生徒の声がする。
中はスキー合宿のレポートになっている。
林間学校ほどじゃないけどもう懐かしい思い出だわ。
「もう8か月も前なんだな」
「うん、随分長かったわね」
こちらは、パッと見た感じでは、スキーそのものよりも、ホテル内

部の写真が多い。
誰も入っていない大浴場や、レストランの写真、また部屋の写真もある。
説明文の多くには「これらはもう、取り壊されて見ることはできない」とある。
「これだけ見ると、いかにも『もったいない』って演出になるよなあ」
浩介くんがややあきれた感じに言う。
「そうよね」
実際には、あちこちがガタついたオンボロホテルで、むしろ建て替えが遅すぎたくらいの代物だったのに。
そして、スキーには上級班の写真もある。
「この中に浩介くんもいるの？」
正直、スキーウェアとスキー帽で、しかも遠くからの写真なので顔が分からない。
「うん、えっと……どれだったかなあ……？」
浩介くんが必死に思い出そうとしている。
「……うーん、まいっか！」
「うん、どこかに居るってだけでいいわよ」
実際、被写体とカメラマンの位置関係や、時間がわからない以上、どれが浩介くんかを突き止めるのは至難の業よね。
そして、このレポートにも、あたしたちに欠けているところがある。
「やっぱ、家族風呂の写真は無いわよね」
「あはは、もしあったら盗撮だろ？　今頃大騒ぎだって」
浩介くんが笑いながら言う。
うん、実際の所、あたしにとってのスキー合宿はスキーそのものよりも、浩介くんと一緒に家族風呂に３回入ったことの方が思い出に残るイベントだった。
浩介くんと一緒にお風呂、結婚したら当たり前になっちゃうのかな？
うーん、考えるのはやめるわ。
「お、俺の滑りもあるじゃんか」

写真には、浩介くんの独演会もあった。解説文字には、「２組の篠原浩介君による滑り、上級者コースを難なく滑る彼は、1級の実力だ」とある。
「あの時の浩介くん、本当にカッコよかったわね」
うん、うまく滑れてよかったわよ。
そしてレポートの写真は最終日に入る。
消えゆくホテルということで、閉店後の食堂や、大浴場の写真もあり、更には従業員たちの帽振れや、後日送られてきたと思われる従業員たちのお別れパーティの写真、現在の建て替え工事の様子や、次のホテルの完成予想図もある。
「へー、こうなるんだな」
現在工事は急ピッチで進められていて、「２０２１年３月に全館開業予定」と書かれている。
東京オリンピックのは間に合わないけど、まあスキー場のホテルだしそんなに大きな問題じゃないのかな？
ともあれ、出口に到着したので、続いては４組、恐らくここは、この前の修学旅行だろう。
「お邪魔しまーす」
「あ、おはようございます。石山さんに篠原さんですね」
「はい」
あたしたちは、学校でもすっかり有名人で、こうやって名指しで声をかけられることも多い。
ちなみに、イベントのレポートの展示で一番難易度が高いのがこの修学旅行になっている。
何故なら、小谷学園の修学旅行は自由度が高く、そこをどうアピールできるかが大きな課題になっている上に、他のイベントに比べて注目度も高い。
最初の写真は、やっぱり新幹線だった。そして、車窓の写真、特に富士山に力が入っていた。
「よく集めたな。富士山ばっかり」
浩介くんが、ややため息をつきながらも感心している。

実際、修学旅行は京都以西に行く人が多くて、富士山を見る生徒はいない。
富士山と言っても単なる通過点だから、あまり強調しすぎるのもどうかと思う。
そして1日目の展示は、やはり京都の町が多い。あたしたちもホテル周辺を散策したものね。
「へー、こんな名所もあるのね」
「ああ、盲点だったぜ」
そしてこの展示、世界遺産の寺などのメジャーな名所ではなく、いかに多くの「穴場の名所」を持ってくるかが大事になってくる。
修学旅行は自由時間が多いことをアピールするために「他の学校とは違う」ということをアピールするためにも、こうした展示は必要不可欠だ。
「あれ？　これ、あたしたちが行ったところだわ！」
よく見ると、人は写ってないけれども、例の転車台付きで、大量の蒸気機関車が展示されている写真を発見した。
他にも、博物館内の写真がいくつもある。冷水器や昔の信号の展示、更には永原先生と鉄道車両の2ショット写真まであって、解説文には「永原先生が同行していた生徒に分かりやすく鉄道の解説をしていました」と書いてある。
あれ？　あたしたちこんな写真なんて撮ってたっけ？　他の写真は恵美ちゃんか龍香ちゃんの提供だと思うけど。
「ん？　どうしたの優子ちゃん？」
首を傾げているあたしに浩介くんが気になるように言う。
「いやその……博物館で永原先生の写真なんて撮ってなかったから……」
実際、このシーンは記憶にない。
「ああこれ？　合成写真よ」
「「え!?」」
横から突然、背の低い女の子が話しかけてきた。
よく見ると、それは制服姿の永原先生だった。

「な、永原先生」
「いやね、文化祭の展示で、鉄道博物館を提供しようと思ったんだけど、私の写真がなくてね。だからこの博物館にあるＤＤ５４の写真と、後で撮った私の写真で合成したのよ」
　い、いいのかそれで？
「そうだったのね」
　ちなみに、解説文の続きには「永原先生は、『この機関車ＤＤ５４は欠陥機関車として大失敗作だった』と説明していました」と書いてある。
　写真はフェイクなのに、説明はフェイクではないのがまたシュールな感じを生み出しているわね。
　さて、鉄道博物館の紹介が終わると、展示は3日目のコーナーに移る。
　ここでは、和歌山に行った生徒や、嵯峨の「トロッコ列車」に乗った生徒などを紹介している。
　これを見た永原先生は「いいわねトロッコ列車、山陰本線の旧線を使っていて、私も次は乗ってみたいわね」と言っていた。
　そして最終日、そこはあたしたちが廻った４つの寺ではなく、４組が廻った大阪の観光地がある。
「お、ここは俺たちも行ったな」
　浩介くんが写真の一つを指さして言う。
「あ、うん」
　そこには、何を隠そう道頓堀川の「グリコ」のある場所だった。
　他にも「くいだおれ」と称するピンクの服の人形の写真もある。
　こちらは自由時間とは違うので、メジャーな場所で攻めている。
　この前日、あたしたちは偶然ここを訪れていたのだ。
　そして最後、富士山の写真は1枚だけで、「こだまで帰った」ということで、途中で何度も抜かされる様子が主に撮影されていて、修学旅行の展示も終わりになった。
「石山さん、篠原君、じゃあ私は、別の所を回るわね」
「うん、永原先生、いってらっしゃい」

あたしたちは永原先生を見送る。
「優子ちゃん、俺達はどうする？」
「うーん、２年生の教室を回りましょう」
「そうだな」
こうして、２度目の文化祭が幕を開けた。

# 圧倒的な得票差

浩介くんとの2回目の文化祭は、3年生のスペースを終えて2年生の所に進んだ。ここは模擬店の他に、去年あたしたちが企画したメイド喫茶もあった。

「浩介くん、入ってみる？」

「あ、ああ……」

今は……ちょうどミスコン出場の女の子がいるみたいね。

「あ、石山先輩……じゃなくってお帰りなさいませご主人様、お嬢様ー！」

去年よりも露出を控えたメイド服の女の子が出迎えてくれる。

ちなみに、男子陣が厨房を担当しているのは去年と同じ。

メニュー表を見ると去年よりも品揃えはやや豊富と言った感じかな？

「どれにする？」

「うーん、俺はコーヒーとサンドイッチでいいかな？　優子ちゃんは？」

「オレンジジュースとミニトーストで」

「分かった。すみませーん！」

「はーい、今覗いまーす」

浩介くんの声かけに、メイドさんが1人駆け寄ってくる。

どうやらミスコンの子みたいね。

「ご注文伺いいたします」

「コーヒー、オレンジジュース、サンドイッチ、ミニトースト」

「はい、コーヒー、オレンジジュース、サンドイッチ、ミニトーストいただきましたー！」

メイド服の女の子が、厨房にオーダーを入れる。

多分、そう待ちはしないと思う。

「ねえねえあの2人」

「石山先輩と篠原先輩よね。何時もラブラブらしいよ」

「篠原先輩ってカッコいいよね。あーあ、いい男はかわいい子にすぐ取られちゃうわね」
「本当、世の中不平等よねえー」

他の席で、女子の2人組が話している。
あたしのことをかわいいという噂話はよく聞くけど、浩介くんに「かっこいい」というのは、はじめてに近いわね。
あたしのかわいさが目立つというのを差し引いても、浩介くんの方は彼氏になったばかりでは「不釣り合い」なんて言われていたのに。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
男の子の恋については、浩介くんに聞いてみよう。
「よく恋は女の子を変える。恋をするとかわいくきれいになるって言うのよ。浩介くん、男の子も、恋をするとかっこよくなるのかな？」
「え!? うーん、優子ちゃんはどう思う？」
浩介くんが逆に聞いてくる。
「あたし、女の子だからよく分からないわよ」
あたしも元男だけど、あえてこう言う。
「いやいや、優子ちゃんだって男だったんでしょ？」
浩介くんが「おいおい」というジェスチャー付きでツッコミを入れる。
「うん、分かってるわよ。でも、優一の頃は恋愛なんててんで縁がなかったもの」
「とすると、他の彼女持ちの男子の話を聞くしかないかなあ……」
「でも、浩介くん、あたしの彼氏になったばかりの頃は『不釣り合い』なんて噂までされてたのよ。だから、あたしとしては、恋って男の子もかっこよくすると思うわよ」
「あー、そう言えばそうだったなあ……」
実際、あたしもどんどん浩介くんにのめりこんでいくのが分かる。
それは結局、浩介くんが、女の子にとってかっこよく魅力的な男子になったということでもある。

でも、よく考えたら男の子の方が性欲も強いし、それを満たすために彼女好みになろうとするんだから、かっこよくなるのも当然かな？
あたしもあたしで、浩介くんに好かれるために頑張っているものね。
「お待たせしました。こちらコーヒーとオレンジジュースになります……こちら、サンドイッチとミニトーストになります」
メイドさんが、あたしたちの席に飲み物と食べ物を持ってきてくれる。
あたしたちは手を挙げて、どっちがどっちかを示す。
「では、ごゆっくりおくつろぎくださいご主人様」
メイドさんはその言葉と共に、次のお客さんを応対する。
やはりメイド喫茶というのは文化祭でも注目度が高いのか、去年のあたしたちほどじゃないけど、それなりに賑わっているみたいね。
「はむっ……うん、うまいな」
「去年のあたしたちは……どうだったかしら？」
正直に言うと、忙しく応対していたこととか、浩介くんが嫉妬しちゃったことばかりが印象に残っていて、味は全く覚えていない。
「うーん、あんまし覚えてねえなあ。後夜祭の最後の時に、優子ちゃんが淹れてくれたコーヒーの味は、一生忘れねえけど」
「もう、浩介くんったら！」
去年の文化祭のメイド喫茶は、あたしに桂子ちゃん、永原先生までメイド服になっていて、それに加えて龍香ちゃんもいて大人気を博した。
また、恵美ちゃんも普段とのギャップもあって人気メイドになったのを覚えている。
「あ、お2人さん」
「ん？」
少し忙しさが一段落したのか、さっきのメイドさんがまた話しかけてくる。
「もしよろしければミスコン、私に清き一票をお願いいたします」
「あ、うん。考えておくわ」

とは言ったけど、もちろん投票先は桂子ちゃんに決めている。
多分、殆どの人はそんな感じだと思う。
「ミスコンかあ……」
浩介くんが最後の一口を頬ばった後に言う。
「去年はすごかったよねえ……」
あたしにとっても、忘れられない思い出になったと思う。
「最後まで接戦で、優子ちゃんが優勝できてよかったよ」
「うん……さ、混んでるし、行きましょう」
「おう」
あたしも食べ終わったので、席を立ち出口へ向かう。
「行ってらっしゃいませご主人様ー！」
メイドさんのそんな言葉を背後に聞きながら、あたしたちは他の2年生の出し物に移る。
他のクラスにはゲームや占いのコーナーもあったけど、恋愛占いでは浩介くんが無言の圧力をかけて、占い師さんが「必ず成就するでしょう」と言わされていた。
正直、「それじゃ占いじゃないわよ」と言いたいけど、まあいいわ。占いするまでもなく、成就するに決まっているもん。
そして、あたしたちはちょうどいい時間になったので、食堂で昼食を食べる。さっきメイド喫茶でも軽く食べたので、あたしも浩介くんも、いつもよりも軽い感じにする。
その食堂では、生徒たちの会話はミスコンの話題が多いけど、「誰に投票した？」という問いには、桂子ちゃんの名前ばかりが飛び交っていた。
「そうだ、俺たちもミスコン投票しようぜ」
浩介くんが思い出した様に言う。
「うん、浩介くんも桂子ちゃんに投票するの？」
「ああ、日ごろ天文部で世話になってるのもあるし、やっぱり、出場者中で圧倒的美少女の木ノ本一択だな」
「うん、あたしも桂子ちゃんがいいと思う」
国際的なミスコンでさえ、どう考えてもあたしや桂子ちゃん、永原

先生の方がかわいくて美人にしか見えない人が優勝している。
というよりも、実際に歴代のミスコン優勝者たちと、メディア取材を受けた時のあたしと永原先生の顔を比較した画像では、ミスコン優勝者が誹謗中傷の材料にされていたし。
低身長でのロリ巨乳というちょっと偏った属性のある永原先生には、「いやこの年のこの子のほうがかわいいだろ」という指摘もいくらかあったけど、あたしは胸も大きくて顔も歴代の誰よりもかわいいということで辛口のネット住民からも太鼓判を押されていた。
……顔だけ見たらあたしと永原先生は五十歩百歩の童顔だとは思うけど。
ちなみに、稀にあるミスコン擁護派の議論として、「あの手のミスコンは容姿だけじゃなく内面も審査する」というものがあるけど、あたしからすればブスを選んだという批判をかわすための言い訳に見えてくる。
そんなちょっとの審査で、内面なんか分かりっこないもの。小谷学園のミスコンは、そう言う意味ではかなり正直なミスコンだと思う。変な利権やゴリ押しもないし。
そんなことを考えつつ、あたしたちは投票所へ移動する。
去年と同じ体育館で、生徒会の人が受付をしている。
「すみません」
「はーい」
「ミスコンの投票に来ました」
あたしが代表して告げると、生徒会の人は去年と同じ手続きをして、投票用紙を渡してくれた。
投票所の場所も、去年と同じね。
あたしは投票用紙に「木ノ本桂子」と書き込んで投函する。おそらく、浩介くんも同じ名前を書いて投函したと思う。

ざわざわざわ

投票が終わると、急に体育館が騒がしくなった。生徒会の一人が、スマホを使って誰かと連絡を取っているのが見えた。

大きな紙が丸められているのも見える。
「もしかして、中間発表じゃない？」
「ああ、ちょっと見てみるか」
あたしが言うと、浩介くんも反応してくれた。
いいタイミングだし、見ていこうと駆け出したその直後、生徒会長さんから中間発表の放送が流れた。
「ナイスタイミングだな」
「うん」
あたしたちは、他の生徒たちと一緒にポスターを見る。

「何これ」
「もう圧倒的すぎるでしょ」
「石山先輩と永原先生がいないだけで、こうも違うんだな」
「うーん、これもう明日の審査中止でよくね？」

周囲が既にお通夜モードのような会話をする。
それもそのはず、桂子ちゃんだけで総投票数の９５％以上を集めていた。２位の女の子でさえ１０票にも満たない。
あたしたち３人が独占していた去年以上に、下位の候補は惨めになっている。
だけど実際、こうやってポスターにすると、桂子ちゃんのかわいさは群を抜いている。
むしろ、よく去年こんなにレベルの高い子に勝てたと、我ながら感心してしまうくらいだわ。
「すげえなあ木ノ本」
「うん」
「でも、去年のミスコンも似たようなもんじゃねえの？　木ノ本に優子ちゃんに先生で、これだけ集中していたし」
確かに浩介くんの言う通りだけど、１人で独占するのと、３人で寡占するのとでは大違いだと思う。
寡占なら、独占と違ってまだ寡占している人同士での競争があるか

ら面白みは維持できるけど、独占にはそれがないし。
「やっぱ今からでも永原先生を出すべきじゃね？」
「いやでも去年が特別でしょ？」
「じゃあまた石山か？」
「連覇させちゃいけないだろ」

桂子ちゃんの圧倒的な成績の前に、周囲もそんなことを話題にする。
まあ、今更変えられないと思うけど。それにしても圧倒的よね。
「ねえ、桂子ちゃんにも報告しようよ」
「ああ、今は……天文部にいるな」
あたしたちは、いつも使っている部活棟を目指す。途中、色々な部活が出し物をしていたけど、これらは明日見にいけばいいだろう。
あたしたちは、まっすぐに天文部を目指す。ちょうど桂子ちゃんの見張りの時間のはず。
コンコン
「はーい」
中から桂子ちゃんの声がする。
ガチャッ
「あ、優子ちゃんに篠原じゃん。どうしたの？　ミスコンの結果？」
桂子ちゃんに、何の用事で来たか当てられてしまった。
「うん」
「どうせ見るまでもないわよ。私がダントツの1位でしょ？」
桂子ちゃんが、PCから目を離さず、あっさりとした口調で言う。
その顔は、「当然でしょ？」と言っているようで、実際その通りだ。
「うん、2位の人でも1桁投票数だった程度には」
「優子ちゃんも先生もいない……ライバルいないものね。唯一脅威があるとすれば去年いなかった1年生たちだけど、私が見た感じでは、今年の1年は女子が強くて、女子受けしかしなようなパッとしない人しか出てこないし……勝って当然だわ」

桂子ちゃんがあっさりした風に言う。
確かに、あの得票差では、もはや無投票当選に等しく、決まったようなものよね。
「全く本当、女どもは分かってねえよなあ。男前な女なんて、男で十分だっての。んなやつミスコンに出す意味なんかねえよ」
もう一人いた1年生の天文部の男子が愚痴をこぼす。
「クラスに誰かもっとよさそうな人がいたの？」
あたしが聞いてみる。
「ああ、男子がクラスで1番の美人と2番目の美人、これがまあ、木ノ本先輩には負けるけれども、甲乙つけがたかったんだ。男子の間でも意見が分かれていて、2人のうちのどちらかにするか議論してた所に、男っぽくて女子ばかりに人気だった生徒をごり押しされちゃって」
「……あーあ、可哀想に。レズビアンじゃ無いなら、男に好かれる方が、よっぽど女の子として大事なことなのにね」
桂子ちゃんがあきれ気味に言う。あたしも同意見だわ。
「聞くところによると、その美人2人組は女子グループじゃあ孤立してたらしいぜ。当人たちは女子ウケが悪いことについては全く異に返してなかったけど、2人のうちの1人は、ミスコンに出られなくてかなり怒ってたよ」
「無理もないわね」
ましてや、自分よりも明らかにかわいくない子に出場権取られたら……本当に心中察するわね。
「で、もう1人の方はどうだったんだ？」
浩介くんが効いてくる。
「ああ、そっちの子は何かあんまり乗り気じゃなかったみたいだよ」
「そう、いい機会だと思うのに」
あたしが残念そうに言う。
「うーん、でも、石山先輩や木ノ本先輩の方が例外的で……実はミスコンって本当にかわいい子はあんまり興味を持たないし、推薦しても出たがらねえんだよ」

天文部の男子が言う。
「え!?　そうなの!?」
あたしが驚く。
「ああ、だからこそ、去年は俺たち1年の間でも伝説になってんだ。文字通りの頂上決戦ってことで、小谷学園始まって以来なんだぜ」
「へー、そう言えば、一昨年のミスコンで優勝した先輩も、桂子ちゃんがいない優勝でケチ付けられていたわね」
あたしが思い出すように言う。
「ああ、実際には毎年毎年、そんな感じだったらしいぜ、『お前よりもかわいくて美人いるだろ』って言われてな。そういう意味でも、木ノ本先輩と永原先生を退けて優勝した石山先輩の『ミス小谷』は、他の年より価値が高いんだぜ」
「そうなのね」
1年生の男子の言葉に、あたしはちょっとだけ誇らしくなる。
確かに、去年の盛り上がり様はすごくて、教師票もいつもより入ってたらしい。主に永原先生にだけど。
それにしても、「本当にかわいい子は出ない」かあ……まだまだあたしの中でも、女の子の知らない価値観があるのね。覚えておこう。
「だとすると、私の優勝もあまり価値が無いかなあ……」
桂子ちゃんがちょっと残念そうに言う。
「ううん、そうは思わないわよ。あたしは規則で出られないし、去年の結果は桂子ちゃん2位だったから、桂子ちゃんも、価値ある優勝になりそうね」
桂子ちゃんの言葉に、あたしがニッコリ笑って言う。実際に、桂子ちゃんほどのかわいい子の優勝に価値が無い訳がない。
「ええ、確かに優子ちゃんには負けちゃったけど、今年これだけ差をつければ誰も悪く言わないかもしれないわね」
そもそも、あたしがかわいくて美人すぎるだけで、桂子ちゃんや永原先生だって、ミスコン優勝レベルどころか、それこそ全国アイドルでも十分にやっていけるレベルの容姿がある。
「学校を代表する美人」として、全く恥ずかしくないと思う。

コンコン
「はーい！」
扉をノックする音に、あたしが返事をする。
ガチャッ
「あ、交代です」
見張りの交代時間になったためか、天文部の男子が２人入ってきた。
「はーいありがとう……優子ちゃん、篠原、私文化祭見てくるわね」
「うん、行ってらっしゃい」
あたしが桂子ちゃんを見送る。
「じゃあ俺たちも行くから」
「うん、見張り役お願いね」
「おう、任せておけ」
あたしたちは天文部男子にその場を任せ、残る１年生の出し物を見に教室へ向かうことにした。

## 永原先生の青春

「見て行ってくださーい！」

初めての文化祭ということもあって、1年生たちがかなり張り切って声を上げている。

中は子供向けのゲームが多い。

輪投げやシーソーを使ってボールを下に入れるゲームもある。

ちなみに、あたしの壊滅的な運動神経は、後輩たちにも伝わっているらしく、小学生用のハンデでしてくれるらしい。

最近では意地を張る人も減って、高校生ながら、小学生向けの内容で行うように申し出てくれる人も増えたとか。

あたしたちは、一通り見終わって、元の教室に戻ることにした。

「部活系は明日でいいか？」

「うん……ってなんだか去年と同じだわ」

「そうだな」

違うのはあたしがメイド喫茶のシフトや、ミスコンで抜けて、また浩介くんが嫉妬して、人気のないところでご機嫌を取り戻すためにえっちなことをしてあげたことくらいかな？

「ふーただいまー」

「お、優子おかえり」

「おかえりなさいませ……です……」

あたしたちは、天文部の見張りを担当した後、時間的にも場所的にも切りが良くなったので教室に戻る。その教室にいたのは恵美ちゃんとさくらちゃんだった。

あたしたちはまだ見張りの時間じゃないけど、暇なので前倒しで来てみた。

「田村、志賀、うちのほうはどうだ？」

「テニスの試合、パソコンが埋まっちゃうことも多かったぜ」

現に今も、試合を見ているお客さんがいる。

ちらりと画面を見た感じでは、第2セットの場面見たいね。

「で、反応はどうなんだ？」

「ああいやその……」
恵美ちゃんが恥ずかしそうに顔を横にそらす。いかにも言われたくないという反応だった。
「ん？　言いにくいことか？　もしかしてラケット折ったこととか――」
「ああいやそうじゃねえんだ。ただその……あー……」
恵美ちゃんに珍しく、とても歯切れが悪いわね。
「泣いている田村さんがかわいかったって……そんな感想が多く寄せられてます……」
「ちょ、さくらやめて！」
「す、すいません……！」
恵美ちゃんがやや大きな声で抗議すると、さくらちゃんが申し訳なさそうに謝ってくる。
泣いている恵美ちゃんがかわいいかあ……
「あー、やっぱギャップかあ……」
浩介くんがつぶやく。
「そうよねえ……」
恵美ちゃんは容姿や言動ががさつで男っぽく、しかもずかずかと言いこむ気の強いタイプなので、はっきり言って男子のウケはとても悪い。というよりも、あえて誤解を恐れずに言えば、一番モテないタイプと言ってもいい。
それはつまり、ちょっとでもかわいいところを見せただけでものすごくかわいく見えてしまう。過大評価を受けやすいという意味でもある。
一方で、あたしは既に完成されたかわいさがあるので、中々「落差」を表現することは難しい。
最も、あたしの絶対評価が極めて高いので、落差に騙されてはいけない、「不良が犬を助けても焼け石に水」という教訓にもなっているけど。
この手の落差に騙されないためにも、日頃から絶対評価の高い人間が近くにいることがとても大切になってくるよね。

「ところで、さくらちゃんは唐崎先輩とはうまくいってる？」
　とりあえず、恵美ちゃんのためにも、あたしが話題を変えてみる。
「はい、とってもうまくいっています」
「良かったわ」
　さくらちゃんの笑顔に、あたしも自然と笑みがこぼれる。
　さくらちゃん、彼氏が出来てから、言葉も徐々にだけどはっきりしてきているし。
「でもよ、野球部はどうなったんだ？　さくらがマネージャーになってから、野球部はめっきり部員が減っちまって、今年はついに大会出られなかったじゃねえか」
　恵美ちゃんが当然の疑問を言う。
「え？　はい……その……もう過ぎたことですから……今は野球部のことは……全く考えていません……」
　さくらちゃんが、さっきとは打って変わって真っ黒な表情で笑みを浮かべる。
　一瞬だけだけど、さくらちゃんの中に「魔女」の性格が浮き出てきた。
「？　志賀はどうして笑顔なんだ？」
　もちろん、浩介くんみたいな男子にはその違いが判らない。最も、あたしも最近までそうだったけど。
「あーうん、男子は知らないほうがいいぜ」
「うんうん」
　あたしと恵美ちゃんが同調する。
「あー、そう言えば、優子ちゃんが、『志賀は魔性の女になった』とか言ってたな。もしかしてそれか？」
「あらあら……ふふっ、否定はしませんわ」
　浩介くんの問いに対して、さくらちゃんがニッコリ笑いながら言う。
　今度はさっきよりも露骨で、おバカな男にも分かるくらいの感じの黒い笑み。
「うおっ、志賀って見かけによらず怖いんだな」

「ふふっ、男を狙う女はみんなあんな感じよ。むしろあたしみたいにとんとん拍子で行くほうが珍しいわ」
あたしが浩介くんに女の恋愛について説明をする。
あたしがあえてこんなことを言ったのも、ないと分かっていても不安になる「浮気」の防止のためだ。
「そ、そうか……」
さて、立ち話中にも、この球技大会のレポートを目当てに、多くの生徒たちが集まっては去っていく。
あたしたちは見張りの時間までここに居て、交代の人が来るのを待つ。
交代の人が来たら、他の参加者の邪魔にならないように、展示物の陰に作られた、クラスの生徒の休憩スペースに移動する。
「はい、それで……はい。明日そこで待ち合わせでいい？　はい！」
スマホで電話をしている龍香ちゃんが中にいた。
ピッ
「あ、優子さん、篠原さん、こんにちはです」
あたしたちに気付いた龍香ちゃんが立ち上がって頭を下げる。
「龍香ちゃんさっきの電話は？」
「いやーお恥ずかしい！　明日の彼氏とのデートプランですよ。朝学校に集合して、展示を見て回って、家に帰って……キャー！」
龍香ちゃんは、相変わらず彼氏のことになると暴走してしまう。
「あはは、龍香ちゃんも彼氏とうまくいっててよかったわ」
「へー、私『も』ですか？　もしかして、さくらさんもですか？」
龍香ちゃんが興味津々で聞いてくる。
「うん、さくらちゃんも、彼氏とうまくいっているって」
「うんうん、それは良かったですよ」
龍香ちゃんは笑顔で言う。
どうやら、さくらちゃんがうまくいくか心配だったらしい。
「志賀なら大人しいし、唐崎先輩が暴走しなきゃ大丈夫だと思うぜ」
「いえ、問題は野球部ですよ」
龍香ちゃんがちょっとだけ真剣な表情で言う。

「あーうん、さくらちゃん、『もう過ぎたことですから、今は野球部のことを考えてない』って言ってたわ」
「おー、まさに『ザ・男を惑わす女』って感じですね」
　龍香ちゃんがノリノリになっている。
「というよりも、惑わされすぎでしょ……」
　男の浩介くんが、思わず突っ込む。
「あはは、そうかもしれないわね。でも、ずっと男子しかいない運動部にいたら、こうもなると思うわよ」
　あたしからすると、浩介くんも似たようなものだけど、もちろん口には出さない。
「あー、そうかもなあ……もし同性ばかりの集団に突然異性が入り込んだら、みんな好かれようと必死になると思うし」
「あー、言えてますねえ。私や優子さんやさくらさんみたいに、彼氏がいるならいいんですけど、例えば、彼氏がいない独身女性の集団に男子1人が入り込んだとかなったら、すごいドロドロしそうです」
　うわあ、想像するだけで怖いわねそれ。
　あたしは浩介くんがいるからいいけど。
「あー、でも男だったらもっと怖いと思う」
　浩介くんが反論するように言う。
「確かにそうかもしれないわね。ドロドロするどころか、殴り合いになっちゃうかもしれないわね」
「ふむ、優子さんもそう思いますか？」
　龍香ちゃんだけは、不思議そうに言う。
「ああ、男はなまじ力を持ってるからな。どうしても腕ずくになりがちだ。特に、少ない女を争うなんてな」
「そうですか……」
　龍香ちゃんが納得したように言う。
　その後は、あたしたちは一部の部活を見て回ったりして、1日目を過ごした。
「はーい！　それじゃあ1日目はこれでおしまいです。明日はいよい

よ一般開放で、皆さん3年生にとっては最後の文化祭になります。是非、悔いの内容に楽しんでくださいね」
「「はーい！」」
制服姿の永原先生の声に、みんなも勢い良く反応する。これで1日目の文化祭は終了した。後は帰るなり2次会するなり泊まるなり、自由時間をみんなで楽しむことになっている。
クラスの小さな委員長みたいな永原先生だけど、実際に今日もこの服で「制服登校」したらしい。
「やっぱりみんな、制服姿の私を見ると反応がいいわ」
帰り際、永原先生があたしにそう話してくれる。
「どんな感じですか？」
「ええ、髪型も変えてますから、みんな私と気付くまでに一呼吸あるんですよ。特に1年生の人は私のことを『先輩』と呼んだ人も居て、楽しかったわ」
何か分かるわね。
でも、間違えた1年生には気の毒な話だと思うけど。
「お、先生、もしかして明日もこれで行くんですか？」
「あ、浩介くん」
今度は浩介くんが話に乱入してくる。
「ええ。やっぱり文化祭の時くらい、楽しみたいことを楽しみたいのよ」
永原先生が明るく笑顔で言う。
「うーん、でも先生に先輩と呼んじゃったその1年生可哀想ですよ」
すると浩介くんが戒めるように言う。
確かに、見た目は高校生どころか中学生だものね。区別はつかないのも無理はない。
実年齢は５００歳で、もうすぐ５０１歳だけど。
「篠原君、ＴＳ病の女の子はね。何年経っても生まれながらの女の子にはなれないわ。男としての人生は、多く役に立つけど、同時にコンプレックスの原因にもなるのよ」
永原先生が真剣な顔で言う。

「そ、そう言えば、優子ちゃん、子供っぽいのが好きなのも、コンプレックスのせいって――」
「ええそうよ。私の場合は、それが『青春』ってだけよ」
浩介くんが言い切る前に、永原先生が、自分のコンプレックスを明かす。
「だからね、今日1年生に、『先生』じゃなくて『先輩』って言ってもらえたの、とても嬉しかったわ。本当は騙しているような私が非難されるべきなんだと思うけど、それでも、石山さんが女児の趣味をやめられないように、私はどうしても、これをやめられないのよ。今日と明日だけは、私は失われたものを取り戻せるんだって」
「そ、そうか……」
永原先生の重めな口調に、浩介くんもだんまりしてしまう。
「今日と明日で2日、年間２００日、制服で学校に行くとすれば……３００年これを続ければ、私は人並みの高校生活を取り戻せると思うわ」
永原先生が、さらりと気の遠くなりそうなことを言う。
「気の遠い話だな」
「ええ、でも、今までの私の人生よりは短いわ」
「確かにそうよね……」
やっぱり、永原先生の人生って凄いわね。
「さ、長々と引き止めちゃったわね。くれぐれも気を付けてね。私はこれから、先生としての仕事があるわ」
「お、おう……」
永原先生が「制服通学」できるのも、まず間違いなく小野先生と教頭先生を脅迫しているせいだと思うと、面白いわね。
でも、永原先生のコンプレックス。３００年なんて気の遠いことを言わないで、何とかしてあげたいわ。
「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
帰り道、浩介くんが話しかけてくる。

「永原先生にも、コンプレックスってあったんだな」
「そりゃそうよ。ＴＳ病の女の子は、みんな大なり小なりコンプレックスを持っているものよ。でもそれって多分、他の人だって同じ何じゃないかな？」
永原先生は、自分のコンプレックスは「青春」だと言っていた。
でも、去年の話と総合すると、それは半分正解で半分間違いだと思う。
永原先生が持っているコンプレックスは多分、あたしに対するコンプレックスも大いに含まれているんだと思う。
どちらにしても、ＴＳ病の人だって、５００歳になった永原先生だって、等身大の１人の人間でしかない。
「あ、ああ……俺は……うーん、分かんねえや……」
浩介くんが自分のコンプレックスを考えて見たけど、思いつかなかったみたいで、腕を組みながらうんうんと唸っている。
浩介くんは、恋人になったばかりの時こそ、「顔があたしと不釣り合い」なんて言われていたけど、最近では浩介くんもイケメン扱いをされることが増えた。
多分以前は容姿に関してコンプレックスを持っていたと思うけど、あたしと恋人関係を続けるうちに、自信がついて解消されてしまったんだと思う。
「うーん、優子ちゃんから見たらどう思う？」
「そうねえ……昔はあったけど今はないのなら思いつくわよ」
「え!?」
浩介くんが驚いた目つきであたしを見つめてくる。
「容姿よ容姿。あたしと浩介くんが付き合ったばかりって、通行人からよく不釣り合いとか言われてたでしょ？」
「あー、そう言えば、そんなのもあったな。すっかり忘れてたぜ」
浩介くんが思い出すように言う。
「そそ、まあ、確かにあたしも、今は浩介くんにコンプレックスと言われても思いつかないけどね」
「そ、それって？」

「恋は人を変えるのよ」
あたしがニッコリ笑って言うと、浩介くんは顔を赤くして、視線をそらしてしまった。

「ただいまー」
「あ、優子お帰りなさい。文化祭どうだった？」
家に帰って母さんの「おかえりなさい」を受ける。
そして早速、文化祭について聞いてきた。
「うん、浩介くんとの文化祭楽しかったわ」
「ミスコンの方はどんな感じだった？」
「うん、桂子ちゃんの圧勝だったわ」
あの後あった中間発表でも、桂子ちゃんはまさに主役だった。
一方で、得票率は去年と比べて格段に低かった。何故なら、予選の段階で、既に桂子ちゃんに当確ランプが点灯してしまったからだ。
予選の得票は、明日にも持ち越されるため、ここまでの大差がついてしまうと、明日の一般参加者の得票率も悪くなる気がするわね。
ちなみに、特定の候補者がここまで圧倒的な差をつけるのは、小谷学園のミスコンの歴史上、始まって以来の出来事らしい。
むしろ、桂子ちゃんに大差をつけられていた他の女の子たちが、かわいそうな気さえした。
「やっぱり……でもそうよね、優子や永原先生が出なくて、桂子ちゃんみたいな美人が出たら、そりゃあああなるわよね」
「う、うん。今日の天文部でも『本当にかわいくて美人な人は普通ミスコンには出ない』って言ってたわ」
「あら、無理もないことよ。だって、そういう子が出ちゃったら今回の桂子ちゃんみたいになって、みんなの嫉妬を集めちゃうもの」
母さんが、また別の理由をアドバイスしてくれる。
確かにそう言う考えもあるわね。
「だからこそ、去年のミスコンは、それこそ『ミスインターナショナル』以上に価値のあるミスコンだったわよ。文句なしの超がつく個性豊かな美少女3人が接戦を演じたもの。世界的なミスコンだって、ああ

はなりにくいわよ」
母さんの説明が増す。まあ実際、国際レベルになるとコネとかで容姿が劣る人が勝ち上がったりしそうだものね。
「でも、あたしはあれが最初で最後のミスコンになるわね。大学のミスコンは、出られないから」
「ええ、優子も来年には『ミセス』になるものね」
母さんが笑顔で言う。
そう、あたしは浩介くんと婚約中。もし予定通りのスケジュールで結婚すれば、大学には「既婚女性」として通うことになる。
「そうよね、ミスじゃなくてミセス……ミセス優子……篠原優子……」
浩介くんと結婚した後の、あたしの名前が口に出る。
女の子、結婚して浩介くんに嫁入りして、文字通り家族になる。今の家族とは、別居になってしまう。
「ふふっ、優子もそろそろ、結婚の準備をしないといけないわね」
「あ、うん……」
「結婚式場、両家で探しているから、心配しないでね」
文化祭は１０月の終わりに行われる、あたしがこの家にいるのも、もう半年もない。
高校を卒業すれば、浩介くんは旦那さんになる。
でも今は、明日の文化祭と、後夜祭について考えていきたい。

# 優子の罪と恵美の誤算

ピピピピッ……ピピピピッ……

「んーっ！」

目覚まし時計の音と共に、あたしは意識を覚醒させていく。

今日は文化祭の２日目、あたしは今日も浩介くんと一緒に文化祭を見て回る約束をしている。

あたしは髪を整えて、素早く制服に着替える。頭のリボンも忘れずにつける。今日の下着は、遊園とに行った時と同じく、前後にくまさんがプリントされたお子様パンツを穿く。

スカート丈は、昨日よりもちょっと短めにしてみる。

「おはよー」

「あら優子おはよう。今日はスカート短いわね」

「うん、浩介くんと文化祭デートだもの」

あたしがニッコリと笑う。

「ふふっ、いつ浩介くんにえっちなことされてもいいように、ちゃんと下着は選んだ？」

「ちょっ！　母さん！」

嘘じゃないのがまた恥ずかしいわね。

「まあいいわ、朝ごはんできているから、早く食べてね」

「はーい」

母さんのお手製の料理も、浩介くんの家に嫁入りしたら、中々食べることはできなくなる。

もちろん、定期的にここにも戻ってくる予定だし、場合によっては浩介くんも泊める予定だけどね。

「では次のニュースです――」

ニュース番組では相変わらずのニュースが続けられる。

それは世の中が平穏な証拠でもある。

あたしはそんなニュースもそこそこに、ご飯を食べ終わって歯を磨いて口をゆすいで、学校へと向かった。

ガララ……
「お、優子ちゃんおはよう！」
「うん、浩介くんおはよう」
いつもなら、あたしが「おはよう」と言うと、誰かが返してくれるけど、今日に限っては浩介くんの方から勢い良く「おはよう」と声をかけられた。
あたしは文化祭の展示のため、席がないので壁に寄りかかる。
こんな時、床に座っている男子がちょっと羨ましいわね。
あ、そうだわ！
ペタンッ
あたしは、両足を外側に広げてお尻を間にすとんと落とす、いわゆる「女の子座り」をする。
「おー、石山かわいいな」
床に胡坐で座り込んでいた男子が、思わず感心して「かわいい」と言う。
「あれってさ、女子しかできねえ座り方だよな」
「え？　そうなのか？」
「ええそうよ。女の子座りっていうのよ。あたしが気に入ってる座り方よ」
男子の話に、あたしが乱入する。
「え？　本当か？　うっ、いてて、確かに無理だ」
男子の一人があたしの真似をして失敗している。
「どれどれ……あれ？　本当に無理だ……」
「女子の体ってすげえよなあ……」
「おっぱいとかお尻とか柔らけえじゃん。だからできるんじゃね？」
「あーそうかも、石山なんか特に柔らかそうな体してんもんな」
「くー、あの体を揉み放題の篠原浩介めえ！」
「いい思いしてるんだろうなあ……うー、俺はどうして彼女ができねえんだ……」
「おい高月！　気をしっかり持て！」
「だってよお、篠原を呪っても呪っても、幸せになる一方だしよお……

俺にも分けてくれよおー」
高月くんを中心とした「浩介くんを呪う会」のグループメンバーたちは、最近ではこんな風に意気消沈していることも多い。
そしてそういう時は……
「なあ優子ちゃん」
「うん……大丈夫よ。高月くんたちにも、いつかいい女の子が来るわよ。でも待ってるだけじゃなくて、ちゃんと出会いを探してみてよ」
あたしが励ましの声をかけることになっている。
もちろん、最初は浩介くんも「今まで呪った仕返しに、イチャイチャを見せつけようぜ」と言っていたけど、あたしは「ちゃんと『優子』でいたい」と言ったので、こんな風に優しく励ますことになっている。
優一の時に守れなかった両親の願いは、優子になってようやくかなえられる様になった。
「う、うん……」
意気消沈していた男子たちも、あたしに励まされると元気が出る。
浩介くんも最初は嫉妬していたけど、浩介くん自身の中でも「そういう嫉妬は良くない」と分っていたので、すぐにやめることにした。
浩介くんの責任感もまた強い。他のカップルだったら、多分ここまでうまくいかずに、どこかでこじれちゃうと思う。

ガララ……
「はーい！　ホームルーム始めますよー！」
制服姿の永原先生が教室に入ってくる。
今日も髪型はツインテールで、昨日と違う点は、ツインテールを結ぶリボンが赤いこと。
「今日は文化祭の2日目です。一般の方にも開放されますので、最後の文化祭ですが、節度をもって楽しんでください。以上です。では、生徒会長の放送を待ちましょう」
永原先生がそう言うと、教室内が独特の緊張感に包まれた沈黙に覆われる。
ピンポンパンポーン！

「ただいまより、２０１８年度、小谷学園文化祭２日目を開始いたします！」
生徒会長の声と共に、教室内からも周囲からも、一斉に歓声が流れ、あっという間ににぎわい始める。
「浩介くん、行こう」
「ああ」
浩介くんに声をかけて、あたしたちも文化祭を始める。
「野球部に行こうぜ」
「うん、そうね」
あたしたちは、最初に気になった野球部について真っ先に行くことにした。
野球部は、公開練習をしていた。
どうやら、去年行われていたバッティング練習はない模様で、代わりに「私立小谷学園野球部は、現在部員が９人に満たず、今夏の大会に出場することができませんでした。未経験者を含め、どなたでも結構です。是非野球部に入ってください」という、悲痛を訴えるような掲示があちこちに張られていた。
「あ、入部希望者ですか？」
部員の１人があたしたちに話しかけてくる。
「ああいや、野球部がどうなったかなって思って」
「はい、現在部員は６人です。野球場も他の部に多く使われていて、まともな練習もできていないです」
やはり部員も悲惨な顔で言う。
「あの、もしかして去年入った――」
「ああいえ、僕は１年なので、志賀先輩のことは恨んでないです。ただ、先輩たちの中には、未だに嫌っている人は多いです。どんな経緯であれ、彼女がこの部を破壊してしまったのは事実ですからね」
「でもさくらちゃんは、最初から唐崎先輩一筋でしたよ」
「それでもですよ。僕個人としては、女子マネージャーではなく、男子にマネージャーを頼むべきだったとは思いますが、男ばかりの部活に女性が入り込むだけならなだしも、エースピッチャーと公然と恋愛を

し始めて……唐崎先輩も、全く悪びれる様子がなかったんです」
「うーん……」
確かに、何らかしらのフォローは必要だったかもしれない。
さくらちゃんの背中を押したのはあたしだし、あたしにも責任があると思う。
「おーい、どうした!?」
野球部の面々が集まってくる。
全部で6人、今の小谷学園野球部の全てだ。
「ん？　石山と篠原じゃんか。どうしたんだ？」
「あの……あの……」
「？」
「本当にごめんなさい！」
あたしは、謝罪の意を込めて、野球部に頭を下げる。
「「え!?」」
「どうしたんだ優子ちゃん!?」
あたしの突然の行動に、浩介くんと野球部のみんなが驚いている。
「な、なんで石山先輩、俺たちに謝ってるんだ？」
「ごめんなさい、あたしが……あたしがさくらちゃんを、マネージャーになるように言ったばかりに、野球部がめちゃめちゃになっちゃって……！」
少しだけ涙声で、頭を下げる。
本当はこういう時に女の子が泣くのはあまり良くないけど、どうしても泣き虫なあたしはこうなってしまう。
「その、石山は悪くねえよ」
「ううん、さくらちゃん、去年の文化祭の時に、唐崎先輩に想いを寄せていたわ。本当ならあの時に告白するようにアドバイスをするべきだった。でも、さくらちゃんにはそれは荷が重いだろうと思って、つい善意でマネージャーになるように言ってしまったわ」
「だったら、なおのこと石山は悪くねえよ。志賀先輩の責任だ」
野球部の面々は謝り続けるあたしに、擁護の声を投げてくる。
ありがとう、でも、受け取れないわ。

「ううん、なおのこと、あたしが悪いのよ。だって、昨日まであたしは、あたしが野球部の崩壊の引き金を引いたことに気付かなかった」
「でもそれは――」
「以前さくらちゃんにね、野球部の崩壊について聞いてみたわ。でもさくらちゃんは、全く反省したそぶりも見せないで、真っ黒な笑みを浮かべていたわ。あの時は気のせいだと思ったけど何回唐崎先輩についても聞いても、同じ笑みを浮かべていたわ。昨日もそうだった、さくらちゃんは、野球部のことなんかどうでもよくて、最初から唐崎先輩が目当てだった。あたしは、そのことを見落としてしまったわ」
　あたしは、気持ちを込めて野球部に謝罪するが野球部の部員たちはますます困惑した顔をしている。
　一方で、浩介くんはあたしが何を言いたいのか？　どうして謝罪しているか？　ということを理解した様子で、落ち着いた顔に戻っている。
「良かれと思ったんなら、気にしなくていいよ」
「ダメよ！　あのね、良かれと思ってする悪事は、悪しかれと思ってする悪事よりもずっと悪いことなのよ」
　あたしにとって、永原先生から古典や歴史、そしてＴＳ病以外のことで学んだ数少ないこと。
「どうして？」
「人間はねどんなに悪人でもどこかに良心が残るのよ。だから悪いと自覚を持ってする悪事にはどこかブレーキがあるわ。でも、自覚がない、それどころか『いいことをしている』と思ってする悪事は、何よりも、悪いものなのよ」
「……」
　野球部員たちは、黙ってあたしの話に聞き入ってくれる。
「分かったよ。ともあれ、練習を見ていってくれねえか？」
「うん」
　あたしたちは、野球部の練習を見ていく。
　キャッチボールをする２人、トスバッティングで、ワンバウンドで返す２人、ティーにボールを置いて飛ばすバッティング練習、最後の

1人はランニングを行っている。
「去年よりも寂しいな」
「うん」
去年は、守備にも就いてバッティング練習もあった。でも今は、守備の練習がろくに出来ないことは想像に難くない。
それでも、部員の増加を夢見て、日々練習をしている。
玉拾いも、全員が任意で行う。
打撃練習している人は、籠の中の球が全部なくなったら拾ったり、ランニングしている部員が見かけたら投げてもくれる。
「なんか、ホワイトな部活だな」
「うん」
一昔前、「ブラック部活」が話題になっていたが、小谷学園はその手のものとは無縁だ。
そもそも、学校そのものが部活に力を入れていないというのもあるし、運動部の大会も、あまりにも弱小だった時代が長すぎて、敗北主義が染みついてしまっている。
恵美ちゃんのテニス部と虎姫ちゃんの女子サッカー部だけは例外みたいだけど、2人が卒業しちゃったら、多分また元の木阿弥になるんだと思う。
「優子ちゃん、そろそろ行くか？」
「うん」
浩介くんが、次の部活に行くように促す。
あたしは野球部の部員に声をかけ、野球場を後にした。

「優子ちゃん、次はどこへ行く？」
「うーん、テニス部に行こうよ」
「おし」
あたしの提案に浩介くんが同意した。
テニスコートは野球場から更に離れたところにあり、通学路上からも見ることができる。
立地上不便なため、テニス部は恵美ちゃんを擁しながらも意外と不

人気なのだ。
「おや、篠原先輩！　お久しぶりです！」
「お、その節は世話になったな」
「浩介くん、この人は？」
「ああ、球技大会に向けて、俺に色々とアドバイスしてくれた人だよ」
浩介くんが紹介してくれる。
「よろしくお願いします」
部員さんが頭を下げて挨拶をしてくれる。
「あの、テニス部は何をしているんですか？」
「はい、公開練習をしています。こちらへどうぞ」
部員さんに案内され、あたしたちも向かう。
するとそこには、男子部員と恵美ちゃんがいた。
「わあ、すごいわ……」
プロでも、試合前に少しだけ練習するらしいけど、それに似た形式になっていて、恵美ちゃんがサーブを練習する中で、もう1人はリターンを、またラリー練習では、うまくラリーが続くように、前に出た恵美ちゃんに男子部員が打ちやすいコースに狙い、恵美ちゃんも相手は打ちやすいコースに狙っている。
「テニスでは、とにかくゲームメイクが大切になります。相手と打ち合うのもですが、壁打ちというのも効果的ですね」
「ふー、おう優子に篠原じゃねえか。よく来たなこんな辺鄙なところに」
あたしたちに気付いた恵美ちゃんが話しかけてくる。
確かに、ここは辺鄙といえば辺鄙だけど、テニス部員がそれを言っちゃいけない気がするわね。
「ああうん、ちょっと気になってな。野球部を見たついでに」
「あー野球部かあ、あそこは悲惨だよなあ」
恵美ちゃんが、野球場の方角を見ながら言う。
「テニス部の方はどうなの？」
「あー、去年一昨年よりは人入ってるぜ」
多分、球技大会の影響だと思う。

「そう、ところで恵美ちゃんはどうしてここのテニス部に？」
恵美ちゃんなら、もっと名門に行こうと思えば行けるのに。
あたしは以前から疑問だったので聞いてみた。
「あー、その疑問かあ……いいぜ、いい機会だ。話してやる」
恵美ちゃんが、「ふー」っと一息つき、ベンチに座る。
「あたいはよ、小学校の頃から、もてはやされたもんだ。『テニスの天才』ってな。あたいは見ての通り、呆れるくらい負けず嫌いだ。中学にもなりゃ、そんな自分の性格が、悪い方向に進みかねねえことや、世の中はそううまくできてねえことも知ってた」
恵美ちゃんが、まずは昔の話をする。
「あたいは確かに、今は天才だと周囲から言われてる。だけど、プロってのはそういう天才たちが世界中から集まって、しのぎを削る場所だ。うまくいくなんて保障はどこにもねえんだ。それに、仮に世界一の座に就いたとしたら、今度はあたいは男子に勝とうなんて考えを巡らせるだろうと思ってた。はっきり言えば、そんな生活、休まる日が来なさすぎる。だからあたいは、テニスが高校かせいぜい大学までにして、そこからは一般女性として、テニスは草トーナメントを趣味で続ける予定だった」
恵美ちゃんが、自分の過去を告白する。
あたしたちは一言も発さず、恵美ちゃんの話を真剣に聞く。
「だからあたいは、大人たちの反対を振り切って、ここに入った。ちょうど家からも近かったしな。だけど、高校でますます活躍するにつれ、テニススクールのスカウトはとにかくしつこかった」
恐らく、浩介くんが受けた嫌がらせとは比較にならない嫌がらせを受けてきたと思う。
「あたいも最初は無視してたさ、だけどだんだん脅すような口調も増えてきた。そこであたいは、諦めさせるために、無茶苦茶な条件を言った。いや、言ったつもりだった」
「？　もしかして……」
「ああ、もしうまく行かなくても一切合切の生活費の面倒を見ることとか、就職先とか、マスコミの取材拒否のこととか、とにかくあらゆ

る要求をした。だがあいつらは、それを受け入れると言ってきやがった」
恵美ちゃんが悔しそうな顔で言う。
恐らく、無茶苦茶なわがままを言い、「こっちから願い下げだ」と言わせたかったんだと思う。
だけど、どうしてもという欲求の前には、中途半端な欲求では呑む人間が現れてしまう。
そう、あたしたち協会を取材した、高島さんのように。
「あたいは、もっともっと滅茶苦茶な要求をするべきだったかもしれねえし、あるいは最初から欲求なんかしねえで断固拒否……それこそスカウトに暴力を振るってでも拒否すればよかったと思ってる。でも、動き出しちまったもんはもう変えられねえんだ」
恵美ちゃんが、どこか遠くを見るように言う。
ほとんど嫌々ながらプロテニス選手になるという。
あたしなら、わざと負けたりしてすぐに引退しようとも思っちゃうけど、恵美ちゃんとしてもそこまでするのは嫌だと思う。
「さ、あたいの話は終わりだ。来年からは、あたいはもうＷＴＡ選手だ。だが卒業しても、メールアドレスは不滅だから、連絡は取れるぜ」
「うん」
恵美ちゃんの力強い言葉にあたしも強く頷く。
テニスコートを引き返して、あたしたちは陸上のグラウンドに行く。
そこで見知った顔を見かけた。
「お、安曇川じゃねえか」
「こんにちは虎姫ちゃん」
「あ、優子と篠原じゃん」
虎姫ちゃんと鉢合わせになる。
「虎姫ちゃんも陸上部に？」
「ああ、ちょっと面白そうと思ってな」
陸上部は何を出しているのかと思いきや、「無理なくできるウォーキング運動」という展示を校庭に出していた。

本格的な感じではなく、健康志向の中高年がするようなもの。
「何でこんなのが？」
「陸上部は弱小小谷学園運動部の中でも特に弱小だからね。体力テストとかでも、他の運動部に負けたりしちゃうし」
「「あ、あはは……」」
虎姫ちゃんの毒舌に、あたしたちは２人して苦笑いしてしまう。
特に２０メートルシャトルランや５０メートル走では、優一時代のあたしや浩介くんが陸上部に勝ってしまって周囲が何とも言えない空気になったのを覚えている。
３年生は、体育の始めと終わりに、それぞれ体力テストをする。
みんな受験勉強があるので、終わりの方が成績が悪くなる傾向にあるらしい。
「２０メートルシャトルラン、優一の記録を抜くのは至難の業だなあ……」
浩介くんがしんみりするように言う。確かに、優一時代の体力テストで一番の得意分野がシャトルランだった。
でも、今の浩介くんの鍛え方を見ると、卒業時には優一時代の記録を抜いて１８０回を達成できそうな勢いだわ。
浩介くん、あたしが彼女になってから、今まで以上に鍛えた成果が出ているらしい。
「お、これなら優子にもできそうだよ」
虎姫ちゃんが展示の一つを指さして言う。
「ん？」
「お、確かにそうかもしれないな」
浩介くんも反応したので、あたしも見てみる。
それは、踏み台を使ったトレーニングになっている。
昇ったり下りたりを繰り返すごく単純な内容になっている。
「短期間で昇り降りするのは、結構体に負担になるんだ。サッカー部でも、全力で前進して、任意のタイミングで後ろに下がる練習がある んだ」
「へー」

虎姫ちゃんが言う。
「日常生活で、階段を昇ってすぐ降りるなんてしねえもんな」
浩介くんがそう指摘する。まさに、言われてみればという所よね。

ピンポンパンポーン！
「こちらは、小谷学園生徒会です、間もなく体育館にて、小谷学園ミスコンテスト私服審査と水着審査を行います繰り返し、小谷学園生徒会からの――」
校内放送で、ミスコンの審査が近いことを知る。
「優子ちゃん、どうする？」
「うーん、行ってみるわ」
「よし分かった」
「私はいい。結果分かり切っちゃってるし」
というわけで、ここで虎姫ちゃんとはお別れになる。
虎姫ちゃんはサッカー部に戻り、あたしたちはミスコン会場を目指すこととした。

# 成長する桂子

体育館への道はさほど混んでいなかった。やはり桂子ちゃんが強すぎるせいかもしれない。

「で、2位は誰だと思う？」
「分かんねえよ。桂子ちゃん以外今年はノーチャンスだろ？」
「だからこそ、2位を当てるんだよ」
「つってもよ、それって要するにコネと温情をどれだけ引き付けられるかって対決じゃん」
「あ、そうか……確かにかわいさと美人さじゃ誰が見たって桂子ちゃんだもんなあ……」

3年生の男子2人組が、「2位は誰なのか」で盛り上がっている。
いまいち盛り上がっていない今年のミスコンを、それでも何とか楽しもうとする涙ぐましい努力と言ってもいいかもしれないわね。
「ねえ優子ちゃん、確か2位と3位にもトロフィーがあるんだっけ？」
浩介くんが話しかけてくる。
「うんそうよ。優勝のものより小さいけどね」
永原先生と桂子ちゃんがもらっていたのを見たことがある。
「でも、今年の成績で貰っても嬉しくねえだろうなあ……」
浩介くんが苦々しい表情で言う。
「そうかもしれないわね」
去年のミスコンなら、それなりに価値はあったと思うんだけど。
それよりもあたしは、桂子ちゃんがどんな水着と私服で来るのか楽しみだわ。
桂子ちゃんの女子力を、あたしはもっと見習わないといけないし。
今後の参考にしたいわね。

「何か空いてるな」
「う、うん……」

体育館の中、去年は多くの立ち客が出るほど大人気だった会場は、今年は見る影もなく座席はまばらになっている。もちろん開始時間までもう少しあるけど、あたしたちはかなり前の方を陣取ることができた。

「お、あれは去年のナンバー1、石山先輩だ」
「ああ、去年はすごかったよなあ、木ノ本先輩に石山先輩に永原先生、3人の美女が輝いてたよなあ」
「あーあ、篠原先輩羨ましいよなあ……」
「今年あれだけ強い木ノ本先輩を倒しちゃったもんな。石山先輩が男だったって絶対嘘だろって思ったよ」
「俺も思ったよ。木ノ本先輩も永原先生もあんなに女の子らしい女の子なのに、半年足らずでああまでいかねえだろってさ。てか石山先輩ってはじめから女だったんじゃねって最近俺思ってるよ」
「それは無いだろ。まあ、俺もよく忘れてるけど」
「それにしても、あの時泣いてた2人、かわいかったよなあ」
「お前もその趣味あるんだ!?」
「なんかこうさ、守ってやりたいというの、優しくしてあげたいというか」
「あー分かる」

あたしの座っている近くの席で、2年生の男子3人組が去年のミスコンについて話している。
途中、「あたしが男だったなんて信じられない」という話題が飛び交う。
あたしは、たまらなく嬉しくなった。あたしが元は石山優一という男だったことは、学校中が知っている。
でも、あたしのことを男だったことを忘れている人が出てくるほどに、あたしは女の子になれている。
あたしが元々男で、TS病で女になったということを知っていても、「中身も女」と思われることが、あたしの理想だったから。

「えー皆さん、お待たせいたしました。ただいまより、小谷学園ミスコンテスト、私服審査と水着審査に入ります。まずは私服審査の方から何ですが、各クラス12人の参加者のうちの5人が事前に辞退してしまいまして、本日の参加は7人になりました」

ざわざわざわ……

周囲がざわつくけど、そこまでの動揺が見られない。

むしろ「しゃーない」「残念だが当然」という雰囲気で支配されていた。

「ではですね、まずは能登川明美ちゃん――」

能登川と呼ばれた女子が手をあげる。

この生徒、確か去年も参加してたわよね。

中央にいる桂子ちゃん以外の女の子は、やはりみんな軽く手を挙げるだけで、拍手さえまばらという感じね。

「続きましてお待ちかね、圧倒的1位、去年の死闘を演じた昨年度の準ミス、木ノ本桂子ちゃんです！」

ワーーーーーー!!!!

桂子ちゃんが登場すると観客の歓声が凄まじく大きくなる。

周囲を見てみるといつの間にか席の大半が埋まっていて、去年ほどじゃないけど実入りはある。

やっぱり美少女の集まるミスコンは、小谷学園では大人気なのだ。

さて、桂子ちゃんの私服をよく見ると、偶然にも永原先生と修学旅行で鉄道博物館に言った時の服と同一のものだった。

上下黒のロングスカートと白のYシャツ、そして胸と左頭にある2つの赤いリボン、よく見ると頭の赤いリボンはいずれもさきっぽが少し白く、胸のリボンはさくらんぼっぽくなっている。

その服装は、永原先生が着てもそうだったけど、桂子ちゃんが来てもやはり、「幼い少女」という感じが強調されている。

桂子ちゃんは常に腕を左右に大きく広げるポーズを取っていて、表情も幼く純粋な感じを強調していて、服装にもそれがマッチしているから、正直に言って永原先生よりも着こなしていると言っていい。

桂子ちゃんの私服審査も終わり、最後に行われるのが水着審査ということになる。
水着審査はいわばミスコンでも一番注目されていること。桂子ちゃんは、どう出るかな？
「さあ、続きましてお待ちかね、水着審査でございます！　会場の皆様はしばしお待ちくだされ」
司会者さんがそう言うとミスコンの参加者たちが舞台からいったん下がる。
私服審査の終了と同時に、司会の人が水着審査を開始すると宣言すると、一段と観客たちも盛り上がる。
あたしは、このミスコンを3年間、別の視点で見てきた。
1年目は男として、桂子ちゃんのいないミスコンにやや不満を覚えつつも、純粋に楽しんだと
2年目は女の子になり、参加者として桂子ちゃんや永原先生と戦い、最終的に勝利して女の子としての自信を深めると同時に、自分の中にあった「醜い部分」を自覚した。
そして3年目は前年優勝者として、ライバルだった桂子ちゃんが圧倒的な独走を見せ、その桂子ちゃんに勝ったあたしの女の子としての自信が高まると同時に、去年のことを思い出し、去年のミスコンがいい思い出になったと思う。
「木ノ本、すげえよな」
「うん、あたし、よく去年勝てたと思うわ」
胸の大きさはもちろんのこと、顔のかわいさでもあたしが勝っていると思うけど、桂子ちゃんは純粋に生まれつきの女性として、女子力が高い。
永原先生と同じ服を着た時に、高校3年生の桂子ちゃんは、４８０年間女性として過ごした永原先生よりも着こなしていた。
女の子たちが水着に着替えている間、会場は期待に満ちたざわつきが繰り広げられている。
あたしは、去年のことを思い出してしまう。

「優子ちゃん、去年あそこにいたんだな。水着審査の時、かわいかったよ」
「ふふっ、でもあの後、浩介くん嫉妬しちゃったわよね」
「う、うん……」
浩介くんがすんなりと認めてくれる。
もう、1年も前のことだものね。
「あーあ、去年の文化祭、浩介くん本当に嫉妬深かったわね」
屋上と中庭でスカートめくりされたり、パンツを触られたり、中に手を入れられたり。浩介くんの嫉妬を治すには、とっても恥ずかしいことをしないといけなかった。
でも、今はちょっとだけいい思い出かも？
「ああ、やっぱり優子ちゃん他の人に渡したくない」
「あら？　あたしだって同じよ」
あたしだって、独占欲はあるもん。
「じゃあ安心だな」
「うん」
あたしと浩介くんが笑顔になっていると、マイクの電源を入れる音が聞こえてきた。
「皆さん、大変長らくお待たせしました。準備ができましたのでこれより、水着審査を開始いたします。では参加者の皆様どうぞ！」
うおおおおおおお!!!!
観客の歓声とともに、ミスコン参加者たちが水着姿で舞台に上がる。
よく見ると、参加者の大半が普段着ているスクール水着のまま、胸の小さい参加者の一人が、昔のスクール水着を着用していて、これはこれで戦略的判断にはなっているが、やはり桂子ちゃんの水着の前には霞んで見えてしまう。
桂子ちゃんの今年の水着は薄いピンク色で、胸が結構強調されている。
下の方はフリル満点の上、いわゆる「紐パン」になっている。
更に頭のリボンは私服審査の時と同じ。露出度は、この中では圧倒

的に上だ。
水着審査の方も、スクール水着の人がややパフォーマンスをしただけで、ほとんど手を挙げるだけ。あまり盛り上がっていない。
「では最後にお待ちかね、木ノ本桂子ちゃんです！」
わあああああああああ!!!
桂子ちゃんが呼ばれると、会場がどっと沸く。
去年はこの大歓声を舞台上から聞いたけど、２年前と同じで、客席から聞くとまた違った音響がある。
桂子ちゃんはまず両手を使って胸を強調する。エロい、すんごくエロい。
あたしが規格外に大きいだけで、桂子ちゃんの胸は十分すぎるほど巨乳と言っていいからやはり歓声は凄い。
桂子ちゃんはその場でゆっくりと前に後ろに、大き目なお尻もすさまじく、前にいた数人の男子生徒が大急ぎで立ち上がり、トイレの方に向かっていくのが見えた。
そういえば、去年も似たようなことあったっけ？
そして最後に桂子ちゃんは水着姿で体育座りになる。
この体制だと、胸がさらに強調された上に下半身にも目が行く。あたしが感心しちゃうくらいとても考えられたエロい動きだわ。
やはりあたしに刺激を受けたのか、桂子ちゃんの魅力は去年よりも格段に上がっていると思う。
「えーではですね、木ノ本桂子ちゃんから一言お願いします」
「皆さん、私にいっぱいいーっぱい投票してくれて、ありがとうございます。同じ1位でも、やっぱり差をつけて1位になりたいので、安心しないで皆さんもっともっと私に投票してください。よろしくお願いします！」
パチパチパチパチパチ……！
桂子ちゃんがスピーチを終えて頭を下げると、盛大な拍手が送られる。
「それでは、これより、小谷学園ミスコンテストの私服審査と水着審査を終了いたします。投票につきましては、こちらの投票箱から投票で

きます、皆様の清き一票を生徒会は心よりお待ちしております！」
生徒会長の言葉と共に、幕が下ろされ拍手と共に観客たちも立ち上がっていく。
「やべえよ木ノ本先輩かわいすぎだろ」
「もう決めたわ。2位なんてどうでもいいや」
「うんうん。ミスコンは1番じゃなきゃダメ何だもんな」
「圧倒的であればあるほどいいよなこれ。最高に圧勝させてやるぜ！」

近くの男子たちがそんな話をしていて、投票所にも行列が出来ている。おそらく、あの列の人のほぼ全員が桂子ちゃんに投票するはずよね。
「優子ちゃん、木ノ本と話しある？」
「うーん、せっかくだしちょっと話そうか」
前年優勝者としても、元ライバルとしても、普通の友達としても、いろいろ桂子ちゃんに話してみたいし。
そう思い、あたしたちは控え室の近くのスペースを陣取るために移動する。
するとそこには、既に人だかりができていた。
「ん？　人だかりの中心、木ノ本じゃねえぞ」
浩介くんが指摘する。
「うん、あれは……永原先生！」
その人だかりでは、制服姿の永原先生が注目されていた。
見てみると1年生と2年生が多い。
「あ、石山さんに篠原君」
あたしたちを見つけた永原先生が、うまく人だかりをかき分けてこっちに来てくれた。
「永原先生、人気ですね……」
「まあねえ、先生の制服姿なんて、ほとんど見られるものじゃないものね。今日は昨日以上に注目されているわよ」

よく見ると、生徒たちだけではなく、一般の人の姿も見える。
あの動画で見たっていう会話も見える。
「あ、君は確か石山優子さん！」
知らない男性があたしを見て言う。
「あら、あたしを知ってるの？」
「だってほら、『ブライト桜』の動画で見たから。すげえ、制服姿だとこんな何だなあ……」
もう取材から半年は経っているのに、今でもこうして話題に上がる。
それというのも、協会を取材したマスコミの動画は、いまだにあれしかない。
ガチャッ
「あら、先生、優子ちゃん、それに篠原も」
控え室から、ナンバー1の桂子ちゃんが制服姿で出てくると、野次馬たちの喚声が再び上がる。
「桂子ちゃん、水着審査、とってもかわいかったわ」
「ふふっ、ありがとう。去年の優子ちゃんを、ちょっとだけ参考にしたわよ」
桂子ちゃんは予想通り、あのパフォーマンスはあたしのを基に作っていた。
やはり男受けを考えている桂子ちゃんは強いわね。
「にしても、何で先生は今年出なかったんだ？」
3年生の1人が永原先生に疑問を投げかけている。
「ああうん、私は来年以降も出られるから、今年は最後のチャンスの木ノ本さんを優勝させたかったのよ。TS病なら老けることもないからね」
永原先生があっさりとした感じで言う。
「まあでも、仮に出たとしても、木ノ本が優勝しそうだけどな。去年も木ノ本の方が票数が多かったし」
「あーうん、そうかもしれないわね」
実際には、あたしたちは大接戦で、永原先生や桂子ちゃんが優勝し

てもおかしくなかった。
特に桂子ちゃんと永原先生の差は、あってないようなものだった。
それでも、記録には、順位がはっきり残る。もし去年、永原先生が桂子ちゃんより票数が多ければ、またケチがついてしまったかもしれない。
「さて、じゃあ私は天文部に戻るわね。優子ちゃんたちはどうする？」
「うーん、文化部回ろうぜ」
浩介くんが提案してくる。
「うん」
「じゃあ部活棟までは一緒に行くわね」
あたしたちは、桂子ちゃんと途中まで一緒についていく。
最初に見て回る部活の前で、あたしたちは分かれた。
文化部の部活は、運動部より面白く、嗜好を凝らしたものが多い。
文芸部や美術部は、相変わらず部費稼ぎに余念がないみたいね。

「うーん、とにかく『小説家になろう』で一発当てねえとなあ……」
「ブックマークと評価を入れてくれて、ポイントが集まれば書籍化の目もあるんだろうけど……」
「ま、俺らには無縁の話だわな」
「まあ、小説書くのって難しいからなあ……今書いてるのも、エタらないにしねえと」

あたしたちが、文芸部の展示を見ていると、部員たちのそんな声が聞こえてくる。
かわいそうになったので、あたしも浩介くんも、文芸部の同人小説を買ってあげることにした。
さて、次に訪れた美術部では、今年は趣向を変えて小谷学園の校内をイメージした絵が多い。
体育館の様子とか、教室の授業とかの絵がある。
ちなみに、先生や生徒にモデルは特にいないのもわかった。
「あ、優子ちゃん、今年も来てくれたんだね」

美術部の人、去年と同じ人かな？
「うん、ちなみに、モデルにはならないわよ」
去年みたいにセクハラされる前に、あたしがあらかじめ忠告しておく。
「分かってるよ、それよりも今年の展示はどうだい？　小谷学園の日常がテーマなんだ。この絵画、印刷だけど1セットで５００円だよ」
受付の担当部員が、点にされている絵と同じものを取り出して、あたしたちに買わせようとする。
「浩介くんこれ」
「俺はいいと思うぞ」
浩介くんが意外な言葉を口にする。
「え!?」
「優子ちゃんはこれから人生長いし、俺もそうなりたい。でも、この小谷学園に居られるのは今だけだ。これを買えば、遠い未来でも、またあの頃を思い出せるんじゃないかってね」
浩介くんがしんみりした感じで言う。
確かにそうだわ。この絵が部屋にあれば、小谷学園のことも、よく思い出せると思う。やっぱり何百年と経てば、どうしても記憶が薄れて行っちゃうだろうし。
「あの、この絵、１セットください！」
「俺も」
そう言うと、あたしたちは５００円玉を同時に取り出す。
「毎度あり、はい、こちらです」
あたしたちは笑顔の美術部員に小さな箱を渡される。
あたしたちは美術部を後にする。
去年と同じ展示の文化祭もあって、作動部や囲碁将棋部はそんな感じだった。
そして、あたしたちは部活棟の最奥、自分たちが所属している。天文部へとやってきた。
コンコン
「はーい」

あたしたちは扉をノックし、中へ入る。
「あ、2人ともいらっしゃい」
「お、優子さんですね！」
中には先回りしていた桂子ちゃんの他に、龍香ちゃんもいた。
「お、河瀬も天文に興味があるのか？」
「ああいえ、文化祭の今だけですよ。せっかくなので見ていくって感じです」
龍香ちゃんがあっけらかんに言う。
まあ、そうよね、文化祭じゃなきゃ美術部にも文芸部にも行かないし。
「まあ、文化祭ってそういうものよ」
桂子ちゃんもドライに言う。
天文部の展示は去年と同じで、立地の問題もあって人は少ないみたい。
ともあれ、のんびり過ごせそうね。
「来年からは俺が部長をやるんだ」
話の流れで、見張り役だった天文部の2年生男子が言う。
最初は桂子ちゃんとあたし目当てだったけど、色々と考えが変わったらしい。ともあれ、あたしたちが卒業した後も、この部活は続くみたいね。
あたしたちは、2日かけて、ほぼ見るべきものを見終わってしまった。
なので、天文部の机で浩介くんや龍香ちゃん、桂子ちゃん、男子部員たちと談笑する。
のんびりとした時間が、流れていった。

## ミスコンから後夜祭へ

「じゃあ私、ミスコンの会場に行くわね」
「いってらっしゃいませ部長」
桂子ちゃんが席を立つと、見張り役の「次期部長」が挨拶をする。
「浩介くん、龍香ちゃん、あたしたちも行こうよ」
「ああ、そうだな」
こうして、あたし、桂子ちゃん、龍香ちゃん、浩介くん、天文部男子の5人組で体育館へ行き、桂子ちゃんを見送った。
水着審査の直後に発表された中間発表では、桂子ちゃんは更に圧倒していて、去年のあたしと永原先生とを併せたのと同程度の票数でないと、他候補の逆転は不可能になっていた。
時間と共に、徐々に席が埋まる。
噂話もそう、他の観客も全員が桂子ちゃんの優勝を予想していて、中には再び「2位は誰か？」で盛り上がる人もいた。
そんな中で、生徒会の人たちは、投票用紙の集計作業の他、会場の準備に取り掛かっていた。
「桂子ちゃん、どんな感じで優勝を受け止めるのかな？」
「うーん、よく分かりませんけど、今は見守りましょう」
あたしと龍香ちゃんとで、口数も少ない。
やはり、ミス小谷の発表前、結果は分かりきっていても、独特の緊張感がある。もちろん、去年のそれとは比べ物にならないけど。

「お待たせいたしました。ただいまより、２０１８年小谷学園ミスコンテストの結果発表と、表彰式に移りたいと思います。えー、途中でリタイアされた方もいらっしゃいますが、今回は特別に全員の参加者に来ていただきました！　ではどうぞ！」
パチパチパチパチ……
拍手と共に桂子ちゃんを含めた参加者たちが舞台に上がる。
「えーっとですね、結果ですけど、ぶっちゃけていいですか？　集計し終わったんですけど、今年は全投票の９７％が同じ人に集中していま

す！　これはもう、満場一致でいいと思います」
生徒会長の言葉に対して、観客の視線が一斉に桂子ちゃんに注がれる。
桂子ちゃんは顔色一つ変えていない。
「はい、皆さん分かっているとは思いますが、今年のミスコンの優勝者は木ノ本桂子ちゃんです!!!!」
うおおおおおお!!!
割れんばかりの歓声と、桂子ちゃんを祝福する声が聞こえてくる。
桂子ちゃんはほんの一瞬だけほっとしたような表情を見せたが、すぐに「まあ当然よね」という感じの表情になる。
もしかしたら、どこかで票の操作とかそう言う横やりが入るんじゃないかという心配でもしていたんだと思う。
もちろん、そんなことはあり得ない。強引に投票が捻じ曲げられるようなことがないのも、小谷学園のミスコンの権威を高めている。
「そして、2位と3位を発表したいと思います。まずは3位――」
その後、生徒会長さんが、2位と3位の人を発表し、呼ばれた女の子にトロフィーを授与する。一応ながら拍手もあるが、それもまばらにしかないわね。
一方でトロフィーをもらった生徒も、あんまり嬉しくなさそうだわ。
まあ、1位じゃないものね。去年の桂子ちゃんと永原先生は泣いてたし、激戦の末じゃない分、ショックも小さいのかも。
全体の投票数が何票で、そのうち何票を獲得したかという話は出てこない。それは多分、この2人に対する温情だと思う。
「では、今年の優勝者、木ノ本桂子ちゃんに、優勝記念トロフィーとお菓子を差し上げます」
桂子ちゃんはっても嬉しそうに、誇らしそうにトロフィーを掲げる。
2伊と3位の人は、申し訳なさそうにトロフィーを抱えて持っているだけ。それなら4位以下のほうが良かったかもしれないとさえ、思

えてくるわね。

「それでは、これにて小谷学園ミスコンテストを終了します。最後に参加してくださいました全員に拍手をお願いいたします！」

パチパチパチパチ……！

生徒会長さんの声とともに、桂子ちゃんを含めた全参加者が退場する。

小谷学園の文化祭の最大のイベントが、こうして終わった。

あたしたちは、優勝トロフィーを持った桂子ちゃんのもとに駆け寄る。

「いやー素晴らしかったですよ桂子さん！　私も無理言って出ればよかったかもです……桂子さんにコテンパンにやられちゃうと思いますけど」

「あはは、でも龍香も美人だからね、クラス違ったら代表だったかも」

桂子ちゃんにまず話しかけたのは龍香ちゃんだった。そう言えば龍香ちゃんは、結局3年間ミスコンには出なかった。

「まあ、私にも彼氏がいますから、彼氏のためにもミスコンには参加しません！」

そう、龍香ちゃんは彼氏持ち。それでミスコンに出るのは確かにためらわれる。

去年の文化祭の時点では、ほとんど恋人同然だったとは言え、あたしと浩介くんはまだ正式な恋人ではなかった。だけど今は婚約者になっている。

そんなあたしが「ミスコンテスト」に出るにはちょっと不適合だと思う。確かにまだ「ミス」には違いないけど。

「桂子ちゃんはどうするの？」

「うん、教室に戻るわ。優子ちゃんたちは？」

「同じく、もう疲れたわ」

あたしがそう言うと、みんなで一緒に教室に戻った。

文化祭最大のイベントも終わり、これからは、文化祭も徐々に撤収モードになる。一般客は後夜祭には出られない。後夜祭は例年通り、

前半戦と後半戦に分かれている。
前半戦は文化祭の延長、そして後半戦が校舎でボードゲームやカードゲームになっている。
そして明日明後日が、お休みという事になる。
「ふう」
あたしたちは、教室に戻り、カーテンの向こうの「休憩場」にたどり着いた。
見ると中には、遊び疲れた生徒たちがたくさんいた。
その中には恵美ちゃんやさくらちゃんといったメンバーもいた。
一方で虎姫ちゃんはまだいない。
しばらくすると、生徒会長が何回も「文化祭間もなく終了です。一般のお客様は速やかにご退場願います」という放送を繰り返し始めた。
夕日が沈み、外が暗くなり始めようとしている時間、あたしたちの最後の文化祭は、間もなく終わろうとしていた。
名残惜しいけど、いつかは訪れること。だものね。

「ただいまを持ちまして、小谷学園文化祭を終了し、後夜祭を開始いたします。まだ残っている一般の方は速やかにご退場願います」
生徒会長の放送と共に、文化祭が終了し、後夜祭がスタートした。
「じゃあ私は天文部に行くわね」
桂子ちゃんは天文部に行く。部活の性質上、後夜祭はそれなりに混むらしい。
やっぱり雰囲気の違いだろう。
「俺たちはどうしようか？」
浩介くんが提案する。
あたしは一つ、考えがある。
「うーん、ここを見ようよ」
「え!?　ここって？」
「３年１組」
あたしは、あっさりした風に言う。

「え？」
浩介くんが少し驚いている。
「ほら、あたし達が作った最後の展示だし、もう一回ゆっくり見てみたいかなって」
「う、うん……」
あたしたちは、文化祭ともお別れだけど、もうすぐこの展示ともお別れだから、最後にもう一度ゆっくり見ていきたい。
あたしたちの教室では、球技大会がテーマになっている。
今年の球技大会に関するレポート写真がたくさんある。
2年生がやったフットサル、ドッジボール、3年生のテニスやソフトボールもある。
1年生達の写真もあってみんな活き活きとしている。
そして展示の最奥部の一角に大きなスペースが割かれているのが、浩介くんと恵美ちゃんのテニス対決で、学生テニスながら5セットマッチで行われたことが特に強調されている。
映像がある他、大まかな試合結果もある。
序盤は恵美ちゃんが圧倒していたが、徐々に体力が切れてくると、浩介くんに形成が傾き、最後には一方的な展開になってしまったということも書いてある。
「浩介くん、本当に強かったわ」
「ああ、ただ第2セットのあそこでブレークできなかったら分からなかったよ」
浩介くんが懐かしそうに言う。
「それももう、4ヶ月も前のことなんだよな」
「そうよね。あっという間にも感じるし、遠い昔にも感じるわね」
永原先生ほど生きても、意外と時間の感覚は同じらしい。それどころかここ最近は時間が長く感じるとも言っている。
それもまた、不老がなせる技なのかもしれない。
小谷学園は運動部が弱い。
その分球技大会と体育祭では、極端な実力差が発生しにくいことでも知られている。

もちろん、あたしみたいに本当に基礎の基礎が問題のこともあるけど、以前からそういう人にもハンデ戦が広く取り入れられていて、最近になってそれはより広く、また抵抗なく採用されるようになった。
これも、あたしが女の子になったおかげとも言われている。
恒常的に負け続けた人って、案外極端なハンデに抵抗がないみたいのよね。
「うむ、こんな所かな」
やはり準備中に何度も見てきたこともあってあたしたちはあっという間に見終わってしまった。そのため、ここは適当に切り上げることにした。
懐かしい気分ではあるが、他にも行きたい所がある。
それがメイド喫茶、後夜祭のメイド喫茶は混んでいる。
ちなみに、去年のあたしたちと同じく、後夜祭特別シフトで行われていた。
「おかえりなさいませご主人様――！」
メイドさんが忙しそうに応対している。
あたしたちはまた別のメニューを頼む。
「浩介くん、この後はどうするの？」
「うーん、天文部に行こうと思う」
浩介くんと考えていたことは同じ。
後夜祭ならば、天文部も盛り上がってくれると思う。
「お待たせいたしました――」
メイドさんの持ってきてくれた軽食と飲み物を頬張りながらあたしは、浩介くんが少し落ち着かない様子なのに気がついた。
何かこう、もっと緊張しているような気がするわね。
うーん、とにかく、今は気にしないでおこうかな？　気のせいっていうのもあると思うし。
「ふう、じゃあ行こうか。後ろも詰まってるだろうし」
浩介くんもあたしも、食べ終わったので次の人のためにすぐに立ち上がる。

「うん」
一般のお客さんはもう居ない、そんな中で、あたしたちは、殆ど人通りの無くなった部活棟を奥へ奥へと進む。
そして最奥部にある天文部の部屋の中からは、何やら話し声が聞こえてくる。
コンコン
「はい」
あたしたちはいつものようにノックをして入る。
文化祭ではそういうのはいらないけど、つい癖になっている。
「あ、優子ちゃん、篠原、いらっしゃい」
学校でも美人として有名かつ、ミスコン優勝者の桂子ちゃんが部長になったことで、天文部はかなりの人で賑わっていた。
「1、2年生に新しい入部希望者が増えたわよ。男子だけじゃなくて女子もね」
「え!? そうなの?」
あたしが驚きながら言う。
確かに、ミスコンの優勝で天文部も注目されたのね。
去年がそうでもなかったから、やはり「部長」という肩書は大きいのかな?
「うん、これなら天文部もしばらくは安泰なんじゃないかと思うわ。既に結構知識持っている人もいるし」
小谷学園のミスコンで桂子ちゃんが優勝することは1日目の時からほぼ確定事項だった。
正式に確定したことで、天文部に注目が集まった。
前年に桂子ちゃんや永原先生を退けて優勝したあたしも天文部に居るということも知られていた。
夜の日が落ちた天文部に、新しく入った人も含め、部員全員が集まっている。
そして、賑わうお客さんたちに、一人ひとりが解説を入れていく。
特に去年作った「宇宙のミニチュア」は、このくらい空間ではかなり好評だった。

「桂子ちゃん、大学はどうなるの？」
あたしが大学について聞いてみる。
「うん、佐和山かなあ？　優子ちゃんたちはもう決まったんだっけ？」
「うん、蓬莱教授のお陰でね」
実際には多分一般入試でも合格していたと思うけどね。とは言え、早めに大学が決まるのはいいことだわ。
「同じ大学だといいわね」
桂子ちゃんがちょっと願望を込めて言う。
桂子ちゃんもまた、蓬莱教授の研究の完成を待ちわびている人の一人だったりする。
この天文の世界、人間の今の寿命は短すぎる。数万年と言った単位でさえ、天文学的には短い数字とさえ言えるから、もしかしたら蓬莱教授の研究でさえ、短すぎる寿命なのかもしれない。
「優子ちゃん、篠原、頼むわよ」
桂子ちゃんが、少しだけあたしたちを頼むように言う。
「蓬莱教授のこと？」
分かっているけど、つい反射的に聞いてしまう。
「もちろんよ。ほら、以前ここに蓬莱教授来たでしょ？」
「うん」
蓬莱教授は、あたしたちを佐和山大学に入れるために、ありとあらゆる手をつくした。
あたしも、浩介くんとの日々をずっとのものにしたいから、それを承諾した。
「いくら近いとは言え、大学の先生が高校の部活棟まで来るもの。いかに優子ちゃんが大事かがわかるわよ」
そう言えば、以前にもそんなことがあった。
実際には頼らなかったけど、何か困ったことがあった時に、いざという時の後ろ盾として、蓬莱教授を使ってきたこともある。
最終的に、球技大会の余波でしつこいスカウトを諦めさせたのも、「蓬莱教授の研究に参加する」というものだった。

「なあ優子ちゃん、俺は少し不安なんだ」
「うん？　どうして？」
浩介くんが、何やら緊張した面持ちで言う。
どうしたんだろう？
「優子ちゃんが大事なのは分かるけど、どうして俺まで研究所に入れたんだろう？」
浩介くんの指摘は確かに分かる。
蓬莱教授にとってあたしがいないと研究に支障は出るけど、浩介くんは別にそう言うわけでもない。
「うーん、あたしにはわからないわ。でも、蓬莱教授にとって、あたしほどではないけど、浩介くんが研究において大事なのは確かよ。今は、蓬莱教授を信じましょう」
「ああ」
浩介くんの心配には、蓬莱教授が居ないこの場では結論なんて出せるわけもなく、こうやって先送りにするしかない。もどかしいと言えばその通り。
後夜祭も後半戦に近づくに連れて、賑わっていた天文部も人が減っていく。そう、みんな校庭に集まることになっている。
ここで、最後の締めとして、ゲームで遊ぶことになっている。
「桂子ちゃん、あたしたちもそろそろ閉鎖する？」
「うん、そうするわ。じゃあみんな、ここから撤収して、校庭に行くわよ」
部員以外誰も居なくなったため、桂子ちゃんが撤収を指示する。
天文部員たちも、簡単な片付けに入る。
「あ、俺ちょっと用事があるから」
「え？」
浩介くんが用事があると言ってきた。
「悪い。校庭で会おう」
そしてそのまま、慌てたように部室を出て行ってしまった。
うーん、一体どうしたのかな？
ともあれ、片付けは次の登校日で本格的に行うから、ドアの前に「天

文部の展示は終了しました」という掲示だけ掲げて、あたしたちは電気等を全て消し、校庭へと向かう。

ピンポンパンポーン

「えーただ今より、後夜祭前半戦を終了し、後夜祭後半戦をはじめます。校庭ではカードゲーム、ボードゲームを行っておりますので、先生生徒の皆様は、奮ってご参加ください」

校庭に向かう前に一旦教室に戻ると、すぐにこの放送が流れた。

教室の中には浩介くんと龍香ちゃんを含め、約半数の生徒が居なかった。

龍香ちゃんは確か、彼氏とのデートがあったんだっけ？　今頃はえっちなことしているのかな？

後夜祭もついに後半戦、この２日に渡る楽しい文化祭も終わりが近付いていく。

いや、それだけじゃないわ。３年間の高校生活も着々と終わりが近付いていっている。

## 最高の思い出

「あれ？　優子、篠原はどこ行ったんだ？　さっきから見かけねえし」
恵美ちゃんが、あたしが単独で動いているのを珍しそうに見ながら言う。
「あたしにも分からないわ」
確かに、浩介くんは今別行動中になっている。何をしているかはあたしにもわからない。
「おいおい、じゃあ最後に見たのはいつだよ？」
「天文部からここに戻ってくる途中に『別の用事がある』って言ってたわ」
その用事が何かまでは聞いていなかった。
「うーん、まあ、とりあえず今は校庭に行こうぜ」
「うん」
あたしたちは校庭に行く。そこには、去年や一昨年と同様、音楽が聞こえる中で、既に多くの人がブルーシートの上で色々なゲームをして遊んでいる。前半戦の時点でフライングしている人も多いと思う。
カードゲーム、ボードゲーム、更にゲーム機を使って通信対戦、何でもありでごった煮という感じだわ。

「ロン、８０００。高月くんの飛びで終了です」
「うー、やっぱり先生強い……」
入り口から一番近いところでは制服姿の永原先生が３人の男子生徒と麻雀卓を囲んで麻雀をしているのが見えた。
「皆さんもう少し守りを覚えないとダメですよ。麻雀にはフリテンというルールがありまして――」
「あー、高月は単純だからな。こいつ振り込んでばかりだし」
「ロンされるとツモに比べて払わなきゃいけない点数が増えますからね。特に親に振り込んだら悲惨ですよ」
「気をつけます……」
永原先生が男子たちに麻雀講座をしている。

麻雀って単なる絵合わせじゃなくて「守り」なんてものもあるのね。
それにしても、永原先生の座り方って隙がありそうに見えて隙がないわよね。男子生徒もさっきから永原先生の足を見ているけど、どうやら残念そうな表情からもお目当てのものは見えない様子ね。
ともあれ、ここには浩介くんは居ない。他を当たろう。
恵美ちゃんを始め、あたしと時を同じくして校庭に来ていた他の生徒達も散り散りになり、シートの中でカードゲームを楽しんでいる中、あたしは外周をぐるっと一周してみる。
そこではみんな楽しそうにゲームをしていた。
ゲーム機での通信対戦だけではなく、ノートＰＣを持ちこんで何やら難しそうなゲームをしている人もいる。
今年は、ゲームの種類も意外と多様性があって、去年よりも面白くなってそうだわ。
でも、今はそんなことはどうでもいい。
「いないわねえ……」
浩介くん、本当に、どこに行っちゃったのかしら？
浩介くんが居ないだけで、こんなに寂しいなんて思わなかった。ああそうか、結婚したいって思うくらい、浩介くんのことを好きになっちゃったものね。
外周を探し終わった後、シートの中もくまなく探す。
「ん？　優子どうしたんだ？　篠原探してんの？」
「うん」
虎姫ちゃんがあたしの様子を見て話しかけてくる。
虎姫ちゃんはクラスの女子と一緒によく分からないキャラクターがあるカードゲームを楽しんでいる。
「私達も見てないな。ったく、篠原のやつ、彼女ほっぽりだして一体何を考えているんだよ」
虎姫ちゃんがやや呆れた風に言う。
でも、浩介くん、あたしと居た時も後夜祭の時は落ち着かなかった。
……一体何を考えているのよ。

「えーみなさん！」
ん？
「後夜祭の途中ですが、ちょっと聞いてくれますか？」
突然メガホンから生徒会長さんのセリフが聞こえてくる。
朝礼台の上にマイクを持った生徒会長さんが立っていた。
周囲も周囲で「一体何なんだろう？」と、ゲームを止めてやや動揺しながら聞いている。
あたしは静かに前列の方に移動する。
「3年1組の篠原浩介さんが、石山優子さんにどうしてもこの場で伝えたいことがあるそうです。篠原浩介さんお願いします」
「あ！」
生徒会長さんと入れ替わって現れたのは浩介くんだった。
あたしの名前も聞こえたので、大急ぎでそっちに向かう。
浩介くんが、生徒会長さんからマイクを渡された。
「優子ちゃん、いるならここに来てくれるか？」
言われなくても行くわよ。
みんな、何事かとあたしと浩介くんを見る。そんなことも気にせずにあたしは朝礼台に登る。
「浩介くん、もうっ！　どこに行っていたのよ！」
「うん、どうしても、伝えたいことがあって、生徒会長さんに無理言ってもらった」
浩介くんはものすごく緊張した面持ちで言う。
「……」
長い沈黙が流れる。聞こえるのは浩介くんの深呼吸の音だけ。
周囲もはじめはとてもざわざわしていたのに、今や私語の一つもなくあたしたちを見つめている。
「あの、優子ちゃん……」
浩介くんが制服の胸ポケットから、小さな箱を取り出した。
そして、浩介くんが箱に手をかれる。
パカッ
「わあっ！」

あたしは思わず口を開けて手を口に当ててしまう。
そこに入っていたのは輝くような指輪だった。
それがプロポーズであることは一瞬で理解できた。
「こ、浩介くんどうして――」
「あの遊園地のデートの後、優子ちゃんに内緒でアルバイトしてたんだ。全部この時のために……宝石は高かったけど、半年以上アルバイトしてたら、それなりに良いもの買えるんだ」
「うん」
浩介くん、知らない所であたしのためにこれを……
「うっ……」
あたしの視界が、急激に滲んだ。
「優子ちゃん!?」
あたしは、嬉しさのあまり、その場で泣いてしまう。
もう、このまま死んじゃってもいいとさえ、思えてくるくらい。
「ごめんなさい……あたし……嬉しすぎて……」
浩介くんも、みんなも、優しくあたしのことを見守ってくれる。
「ぐずっ……ごめんなさい、浩介くん、続けて?」
「……優子ちゃん、俺と結婚してくれ」
何とか泣き止んだら、浩介くんの透き通った声が聴こえてきた。
「はい……」
断る選択肢はない。

うおおおおおおお!!!
ワー!
キャー!

浩介くんのプロポーズにあたしが頷くと、それを聞いていた小谷学園の男女が一斉に歓声を上げる。そこに学年も、男女も、生徒先生の関係もなかった。
浩介くん、もしかしてこのために生徒会に行っていたのね。

「浩介くん、ずっと愛しているよ」
「俺も……だよ」
浩介くんの顔が近い。
あたしは箱に手を伸ばして婚約指輪を取る。そして左手の薬指にそれをはめた。
横から聞こえてくる音が、更に大きくなった。
「優子ちゃん、ありがとう」
「うん」
あたしはついに浩介くんにプロポーズされた。ああ、夢みたい。
婚約者になったのはずっと前からだけど、改めてプロポーズされるのは全く格別だわ。
よく見ると、浩介くんの手にも、婚約指輪がはめられていた。
「浩介くん、あたしも、浩介くんと結婚したいわ」
「ああ……」
浩介くんの顔が更に近くなる。
もう、浩介くんの言葉しか聞こえない。いや、周囲の声が聞こえても、頭になんか入らない。
「んっ……」
「ちゅっ……」
あたしと浩介くんで、一瞬唇が触れ合うと、周囲の喧騒は更に増す。
「んっ……」
「ちゅぅ……」
２回目はディープキス。
もう、ここがどこかなんて分からない。
どこでもいい、だって、浩介くんにプロポーズされたこと、今すぐ愛する人とキスしたい。
両腕を浩介くんの立派な背中に絡めて、もっと近付く。
「じゅるっ……じゅうっ……」
「ちゅっ……れろっ……んうっ……」
胸が浩介くんに触れる。更に深くキスをする。
今までよりもずっと深いキス。

浩介くんがあたしに触れて、ますますキスが深くなる。
あたしの心臓の鼓動が、ますます激しくなっていく。
「んっ……ぷはっ……」
今までのどのキスよりも長いキスが終わり、口が離れると、お互いの舌から唾液の糸がこぼれ落ちた。
女の子の黄色い歓声を背景として、あたしはまた浩介くんを抱き寄せる。
「浩介くん……あたし……」
「ああ、何度でも、キスしようぜ」
「うんっ……」
あたしたちはまた唇を重ねる。
みんなが見ている前でプロポーズされ、キスをして、多分きっと、人生で一番幸せな瞬間なんだと思う。
ううん、幸せはこれから作っていくもの。
まだきっと、多くの幸せが残っているの。
「優子ちゃん、俺、これ以上されたら――」
「いいの。ねえお願い、あたしを抱いて？　あたし、あなたのものになりたいの」
耳から聞こえてくる雑音が凄まじい大きさになっている。
今になって気付いたわ。朝礼台のマイクが近くにあって、あたしたちのやり取りは全校に聞こえていたんだって。
「こ、ここじゃ無理だよ。まだ、もう少しだけ。あと少しだけだから、お願い、待ってくれるか？」
浩介くんに、やんわりと拒否される。
本当は、浩介くんだってしたくてたまらないけど……あたしは、歓声の中にちょっと動揺する声が混ざるのを聞いて、あたしも少しだけ冷静になる。
「浩介くんありがとう。こんな時にプロポーズしてくれて。本当に素敵だわ」
「うん、うまくいくかどうか、緊張でいっぱいだったけど、優子ちゃん

に気に入ってもらえてよかったよ」
浩介くんが優しく言う。
あたしたちは朝礼台から降りる。
すると、あたしたちには歓声と、無数の「おめでとう」という声ともに、惜しみのない拍手が沸き上がった。
小谷学園中が、あたしたちを祝福してくれた。
「篠原、おめでとう！」
「優子ちゃん、おめでとう！」
「２人共おめでとう！」
駆けつけてきたのは永原先生と桂子ちゃんと、そして高月くんだった。
「俺、もうお前を呪うのを辞めるよ」
高月くんがやり遂げたような顔で浩介くんに言う。
「優子ちゃん、一番乗りだね」
「うん、桂子ちゃんも、恋愛頑張ってね」
「分かってるわ」
桂子ちゃんも、あたしを心から祝福してくれた。
あたしはまた一歩、「女性」の領域に足を踏み入れていく。
「いやはや、小谷学園の文化祭でもこれは前代未聞ですよ」
「ふう、まさか、ここまで君の女性化が進むとはね」
次に校長先生と教頭先生が駆け寄ってきた。
「石山さん、篠原さん。結婚は決してゴールではありませんよ。これから、新しい生活が始まるんです」
「「はい」」
校長先生の言葉が頭に響く。
そう、あたしはまだ１８歳、これからの果てしない人生を考えれば、始まったばかりでしか無い。
「石山さん、その……林間学校のこと、謝罪が遅くなったことも含めて、申し訳なかった。君には是非、女性としての幸せ、きっと掴んで欲しい」
「はい」

教頭先生が、あたしに謝ってくる。
去年の林間学校の時は、まだあたしも女の子になって日が浅かったから、ああいった措置を取りたくなたんだと思う。
でも何より、そんな人に認められたのが嬉しかった。
「石山さん、おめでとうございます。私からも、お礼を言わせてください」
「あ、小野先生……」
今度は3年の学年主任である、数学担当の小野先生が声をかけてきた。
「それから、1年半前のことは、本当に申し訳なかった。女性としての幸せを得たいというあなたの権利を侵害してしまったことも」
それは、体育の授業のこと。
女の子になったばかりで、あの時は今のようにＴＳ病だってそこまで知られた病気じゃなかったから。
「……はい」
小野先生を、あたしは許したい。
優しく、「優子」として。
「それから北小松……ああいや、永原先生にも、心から謝罪したい。あの時に石山さんを女性として扱えなかったのは、ひとえにわしの不徳の致す限りだった。幸せそうにしている2人を見ていたら、わしは自分がなんとも情けない」
小野先生が今度は永原先生の方を向く。
「それから、小学生の時、随分と手を焼かせてしまったことも。見抜けなかったとは言え恩師に向かって偉そうにしていたことも、申し訳なかったと思っておる。４０年も前のことを……本当に遅いと思うが、それでも、謝らせてくれ」
「いいんですよ小野先生、私も、少しやりすぎたと思っています。誰にでも、隠したい秘密の1つや2つありますから」
そして永原先生も、小野先生の謝罪を素直に受け止めた。
永原先生がそれを言うと、とても説得力がある。
だってそれは、永原先生にこそ、ふさわしい言葉だから。

浩介くんにはクラスの男子を中心に祝福の言葉を受けている。
みんな、ボードゲームのことはどうでもよくなってしまった。
「優子、おめでとう。あたいはまあ、テニスやるよ。出会いはまあ、引退してからでもいいかもな」
「恵美ちゃん、恵美ちゃんだってきっと、情熱的な恋は出来るわよ」
「あ、ああ……」
あたしは、恵美ちゃんを励ますように言う。
恵美ちゃんが、恋のプライドを捨てられるのは、いつになるのかな？
「いやしっかしびっくりしたな、後夜祭で全校生徒の前でプロポーズすんなんてよ」
次にあたしを祝福してくれたのは虎姫ちゃんだった。
「ま、ともあれおめでとうよ。あれだけいい男、滅多に居ねえぜ」
「うん。あたしも、みんなにそう言われたわよ」
「それだけじゃねえぜ、優子ちゃんみたいな女の子だって、そうそういるもんじゃない」
虎姫ちゃんが浩介くんとあたしのことを褒めてくれる。
「ありがとう」
「さ、後ろがつっかえてるから、私は失礼する」
「うん」
列の後方を見ると、更に沢山の行列が並んでいた。
みんな後夜祭のゲームなんか止めて、あたしと浩介くんのプロポーズのことに集中していた。
後夜祭は、完全に変わってしまった。
「先輩おめでとうございます」
「石山おめでとう」
「優子ちゃんおめでとう」
「篠原おめでとう」
「石山、篠原、本当におめでとう」
先輩から、後輩から、先生から、生徒会長からも、多くの人に祝福された。

そして、「結婚式はいつやるの？」という質問も多く飛び交った。
それについては、あたしは「まだ分からない」と言った。もちろん考えてはいる。
「優子ちゃんとの結婚式は、みんなが集まりやすいようなところにする予定なんだ」
浩介くんがそう言っている。一体、いつどこでなんだろう？
まあ、楽しみにとっておきましょう。

「ねえ石山先輩、その宝石何ですか？」
「うーん、宝石はわからないのよ」
2年生と3年生の女子2人組があたしに話しかけてくる。
「え!?　石山さん、宝石分からないの!?　ダイヤモンドですよそれ」
「あ、そうなんですか……」
「うーん、やっぱり石山先輩、もう少し大人の女性の趣味も覚えた方がいいと思いますよ」
「あはは、あたし、子供っぽいものが好きで――」
あたしも思わず苦笑いしてしまう。
その後も次から次に入れ代わり立ち代わりの祝福を受ける。
知らない顔の人がほとんどだ。
「おう石山おめでとう、妊娠しても、体育は手加減しねえからな」
体育の先生が豪快に言う。
「あはは……」
まあ、理性なら浩介くんも残してくれているし、もう少しだけ、我慢するわ。
ブーブーブー！
突然、ポケットの中の携帯電話が鳴り始める。
どこからかかっているか見てみると龍香ちゃんだった。
ピッ！
「はい」
「優子さん、聞きましたよ！　後夜祭で、篠原さんからプロポーズ受けたんですって!?」

電話越しでも分かるくらい、龍香ちゃんは勢い良く話してくる。
「え、うん……」
「とにかくおめでとうです。私も、大学を卒業したら彼と結婚するつもりですから、よろしくおねがいしますよ」
「うん、妊娠に注意してね龍香ちゃん」
「分かってますって！　ん？　あー、友達の石山優子さんが、プロポーズされたんですよ文化祭で！」
龍香ちゃんが、多分近くにいると思われる彼氏と話している。
「そっちはどうなの？」
「あーうん、今丁度彼氏とし終わった後でして、なのでこうして、裸で電話してます！」
「っ……もー龍香ちゃんったら！」
結構生々しいわね。
「あはは、ごめんなさい。では切りますね」
龍香ちゃんがそう言うと電話が切れる。
「ん？　優子ちゃん誰から？」
「うん、龍香ちゃんからかかってきたわ」
「そうか」
浩介くんとあたし、それぞれが祝福を多くの人から受け、ついに最後の祝福が終わると、生徒会長から「後夜祭後半戦を終了します」というアナウンスを受け、あたしたちはゲームを片付けた。
左手の薬指には、指輪をはめた感覚がずっと残っている。
僅かに、小さな小さなダイヤモンドの宝石がキラリとしたかもしれない。
それだけでもう、あたしたちは結婚するということを強く自覚してしまう。

帰り道、あたしは浩介くんと手を繋いで帰る。
あたしが左側、浩介くんが右側、浩介くんの左手にはめられた婚約指輪の感触が、手から神経へ、そして脳へと伝わってくる。
「お別れ、だね」

浩介くんは珍しく、ホームまであたしを迎えてくれた。
浩介くんの方面は、跨線橋を渡る必要はないのに。
「間もなく、電車が参ります」
そしてとうとう、電車が停車し、扉が開く。
明後日までは、学校もお休みで、特に何も予定はない。
「じゃあね、浩介く――!?」
あたしが電車に乗ろうとすると、強い力で引っ張られた。
「まだ、帰したくない。今日だけは……」
浩介くんに、抱きしめられていた。
ドキドキドキドキ
心臓が激しく高鳴り、電車のドアが閉められ発車する。
「浩介くん……」
まるで少女漫画のような素敵なシチュエーションだった。
ちゅっ……
抱きつかれたあたしと浩介くんは、自然と唇が重なっていた。
「結婚したら、こういうことで悩まなくても済むのかな?」
「ああ、そうだな」
浩介くんの力強い返答。
「ごめん、優子ちゃん。俺、行くわ。じゃないと、ずっとここで行き止まりになりそうだから」
「うん」
浩介くんが、誘惑を振り切るかのように、跨線橋を駆け上がっていき、隣のホームの電車に乗り込んだ。
あたしは、一本後ろの便で、家へと帰宅した。

「ただいまー」
「優子おかえりなさい。さっき永原先生から電話あったわよ。浩介くん、大胆よね」
「う、うん……あたしも、びっくりしちゃったわ」
母さんはあたしの左手を見つめると優しく微笑んだ。
今日この家を出る前にはなかった指輪があったから。

「結婚式の日程はどうするの？」
「うーん、まだ分からないわ」
「そろそろ決めないといけないわよ」
「うん」
あたしの中で、一つの考えが浮かんでいる。
それは卒業式の日、あの日は午前中の半日で終わる。
一旦役所によって婚姻届を提出し、その足で結婚式場に行くという二段構え。
これなら、小谷学園の生徒たちも無理なく参加できるはずだわ。
「ともあれ、今日はゆっくり休みなさい。きっと眠れないと思うわ」
「……はい」

夜、あたしはまた指輪を見つめる。
あの後浩介くんに貰った指輪入れに指輪を入れる。
あたしと浩介くんが婚約者であることは、以前から同じだったけど、今日始めて、みんなの前で発表した。
そう言えば去年の後夜祭で、あたしは浩介くんから告白されて、正式に恋人になったことを思い出す。
今年の後夜祭は、去年と同じか、それ以上に、あたしの記憶に残る後夜祭になった。

# 幕間　ここまでの登場人物の紹介　第５―６章

ここの部分は登場人物の紹介です。読み飛ばしても本編には支障がありませんが、第６章までのおさらいとしてもう一度振り返ってみてはどうでしょうか？

以前にも同じことをしましたが、登場人物も溜まってきたのでもう一度行います。

裏設定等も一部ありますが、第７章以降のネタバレはありませんのでご安心下さい。

第１章から振り返ると長文なので、今回は第５章と第６章のみ振り返っていきたいと思います。

ちなみに登場人物の命名法には一個の共通点があります。某県民以外の方が気付いたら、地理（鉄道）に詳しい方とお見受けします（笑）

あ、でもそろそろみんな気付いてるかも……気付いた方は遠慮なく感想等で突っ込んでください（笑）

・石山優一（いしやまゆういち）／石山優子（いしやまゆうこ）

本作の主人公兼ヒロイン。私立小谷学園２年２組→３年１組。２０００年６月２２日生まれの１７歳（第６章途中より１８歳）

第５章は後夜祭にて好きな男の子の篠原浩介に告白され、正式に恋人になった所から始まる。帰宅後、永原先生から渡された「女の子としての最終試験」の紙にかかれていたＵＲＬ、それは女性向けのエロサイトで、優子はそこで心の底から性的興奮を覚え、ついに自分が女の子になりきっていることを確信し、嬉しさで涙をする。

そして恋人になってからの初デートでは、外では白いワンピースで清楚に、２人きりの時は限界まで露出度を上げて、誘惑をする。

その時に処女を散らす覚悟だったが、篠原浩介が責任感の強い性格だったため、スカートをめくられたり、胸やお尻を触られても、そこ止まりで、そこから先は「結婚してから」と言われ、以降その状況が続いている。

また、時を同じくして、永原先生から、彼女自身が会長を務めるＴＳ病患者とその支援者で作る団体「日本性転換症候群協会」の正会員へと推薦される。

一般にはＴＳ病患者は普通会員となるが、正会員には普通会員よりも大きな権限が認められていて、規則では２０歳以上となっているが、今回、永原先生は歴代の患者と比べても飛び抜けて「成績優秀」だった優子を、特別に正会員へと推薦した。

これ以降、小谷学園の学生と、日本性転換症候群協会の正会員との二重生活を始める。

最初の会合では自己紹介とともに、他の会員からはいきなりの正会員抜擢に最初は奇特な目で見られたものの、優秀さをアピールするとすぐに受け入れられた。

時を同じくして、東北地方で新しいＴＳ病患者が発生したとの報を受ける。東北地方を管轄していた余呉さんが新しい患者のカウンセラーになったものの、彼女は人の話を全く聞かず、また家族も適切な対処法を取らず、事態は悪化の一途を辿っており、ほぼ諦められてしまった。

優子は、自らがカウンセラーとなることでその患者の状況を打開するように提案、紆余曲折があった末賛成多数で可決された。東北新幹線を使い、浩介くんと永原先生を連れて、遥か遠くの塩津家へと向かう。

新患者は大学生で、優子との面会を拒否し、だまし討の形で部屋に入った後も、「性別適合手術を受けて男を取り戻す」とまで公言するほどに状況は悪化していた。

弟に「兄貴」から「お姉ちゃん」と呼ばれるようになり、また母親も「幸子」という新しい名前を付けてあげるが、ことごとく怒る有様で、万策尽きた優子は「しつけ」のためとして、幸子の頬を２回ビンタしておしおきをする。

その後、すったもんだの乱闘の末、いつも喧嘩で勝っていた弟に泣かされた幸子を、今度は優しく包み込んだ。

これについて永原先生は「石山さんにも母性が出てきた」と推測し

ている。
最終試験が終わった後も、優子の女性化は更に進んでいた。
その後は、幸子の面倒と体育祭を同時並行する。体育祭ではなるべく邪魔にならない競技を選んだものの、球拾いでは他のプレイヤーと接触してしまい、痛みのあまり全校生徒が見ている前で大泣きしてしまう。
そうしたトラブルの時にも篠原がかっこいい所を見せ、更に惚れ込むことになった。
一方で、最悪の危機を脱した幸子ではあったが、母親がまた不適切な対応を取っていることが発覚し、思い切って幸子に女性としての自覚を持たせるため、また「女性の人生も悪くない」と思わせるため、東京で2人旅をする。
漫画喫茶の女性専用スペースを使ったり、温泉施設で女湯に入ったりすることで外堀が埋まり、幸子はついに「女性として生きていく」ことを決意する。
優子は女性らしいかわいい服を幸子にプレゼントし、幸子もカリキュラムを受けることを決意する。
既に大学生だったが、小谷学園を借りてカリキュラムを行い、幸子を指導する。この時の指導法は永原先生に評価された他、この時に「会への定着」を図るための指導も受ける。
この成功以降、絶望的な状況から持ち直させたことで、優子の会での評価が急上昇し、以降はＴＳ病患者に対するカウンセラーとしてのキャリアを積み始める。また同時期のクリスマスでは初めて篠原浩介の両親とも会い、また料理を作る時にも、料理の腕で篠原の母親を負かすなど、女子力の高さも見せた。
その後、蓬莱教授の記者会見から、篠原浩介との寿命問題の解決を図れると感じ、学力的には低いものの、蓬莱教授への希望から、佐和山大学への進学を決意、またスキー合宿前には、永原先生のトラウマの一つを解消するなど、着実に存在感を増している。
スキー合宿では、部屋の都合で篠原と2人部屋になった他、閉館前ということで家族風呂を全ての日で使わせてもらうことになった。

スキーは永原先生の他、地元の小学生と一緒に基礎的なことからやり直しになった。
一方で家族風呂は、結局2日目以降3回篠原と一緒に入り、最初はタオルを巻きながらだったが、最後は脱がし合うまでに発展し、またお互いに興奮度も高めた。
その後は、バレンタインデーや3年生の卒業式を経て、春休みは遊園地デートに入る。
遊園地デートでは、篠原に喜ばれようと、スカートで生パンのままお化け屋敷に入ったりもした他、最後の観覧車では篠原とプロポーズ同然の告白をし合う。
これ以降、彼氏彼女ではなく、「婚約者」としての意識が急激に強まり、自然とそのように意識をすることが強くなる。
その後、協会でのメディア対策に対して、「条件を呑む」と言い出したメディアが登場、インターネット上では、優子のあまりのかわいさとスタイルの良さに驚嘆の声が上がり、アイドルや女優、世界のミスコンの優勝者などと並べて「ブス」などと誹謗中傷するためのダシに使われていき、インターネット上でも次第に有名人ともなっていく。
ゴールデンウィークは、篠原の家に花嫁修業を行い、各種の家事などを行い、両親の評価がうなぎのぼりになる。
また、石山家両親と篠原家両親も意気投合し、2人をすぐに結婚させ、また優子を妊娠させようと企むが、篠原が鋼のメンタルで阻止(ただし、誘惑度は高めで、スカートめくりや胸やお尻を触るなどはした)
花嫁修業の中で、女の子になって1年を記念したパーティーを浩介くんに提案され、トントン拍子に話が決まり、学校のクラスのみんなや幸子さん、協会の人々や高島さんに蓬莱教授なども参加する大きなパーティになった。
そのパーティーの中で、次の球技大会で、篠原浩介と田村恵美のテニス対決が決定し、しばらく篠原のいない天文部を味わった他、優子自身は球技大会を前代未聞のハンデで1勝1敗となった。
修学旅行では女子校に愛するカルチャーショックを受けた他、京都を散策したり、永原先生や同室の田村恵美と河瀬龍香と鉄道博物館を

旅したり、新しいＴＳ病患者と面談し、その後大阪神戸で篠原とデートしたりした。
修学旅行最終日には京都の寺巡りをし、そこで再び篠原に守られた他、佐和山大学のＡＯ入試も行われ、そこで蓬莱教授から色々な話を受ける。
夏休みはプールデートと両家合同のキャンプ場デートを選択、プールでは去年と同じ水着なのを他の女性に咎められるが、篠原の誘惑には成功し、彼に何度も胸やお尻を触られて、優子自身も濡らしていた。
第６章以降は、より一層の精神の女性化が進み、「メスの本能」を感じ取ることも多くなり、志賀さくらの「魔性」を見抜くなどの「女の勘」が身につきはじめ、浩介くんにえっちなセクハラをされたいという気持ちが強くなっていく。
９月以降は協会も多忙になり、そんな中で文化祭が始まる。
ミスコンでは桂子の独走が続く中、永原先生のことや、また結果的に野球部崩壊の引き金を引いてしまったことを野球部員たちに謝罪した。
後夜祭直前に、篠原がいなくなって心配するが、その後婚約指輪とともにプロポーズを受け、最高の思い出となった。
次章は、全校生徒に婚約のことが知られた状態で始まることになる。

・優子の母
石山優子の母、永原先生よりカリキュラムの本を渡され、女の子として教育係を行う。
やや暴走気味なのは相変わらずだが、優子の女子力の指南役でもあることは変わらず、女性らしくない行動をした優子には即座に注意をしている。
優子と篠原の婚約後は更に暴走に磨きがかかっていて、篠原家の両親と共謀して、優子を早く結婚させて、更には妊娠させようと目論んでいる。
篠原家の両親とも仲が良い。

・優子の父
石山優子の父、休日や仕事帰りは普段書斎に閉じこもっていて、読書や休息などの仕事疲れのリフレッシュに充てている。しかし、家族仲は悪くなく、優一とはいろいろな話に盛り上がった。
婚約者になって以降はやや登場機会が多いが、母親の尻に敷かれている状況には変わりがない。

・篠原浩介（しのはらこうすけ）
優子の恋人で、第5章が主に恋人、第6章からは主に婚約者として登場する。
優子の度重なるアプローチや誘惑を受けていて、それによってスカートをめくる、胸を触る、お尻を触る、などの行為をしているが、性行為は結婚までしないつもり。
責任感とメンタル、そして腕力の強さに磨きがかかっていて、優子を守るために奔走する。
幸子との初面談では優子を守った他、体育祭でも騎馬戦で優子の好感度をあげることに成功、更にクリスマスイブでは自らの家に招待し、電気屋さんでもデートをした他、天文部で天体観測も行っている。
また元旦は2人で初詣をした他、優子とともに佐和山大学へ行くことを決心した。
スキーの腕前は1級で、優一を凌駕していた。
また、家族風呂では優子と2人でお風呂に入り、いずれも興奮に耐えられず「抜いて」いる。ちなみにその時は最終日にはついに見せあいっこにまで発展したが、結局初体験はとっておいた。
スキー合宿の3日目の最後には上級者コースの単独縁起も披露しており、優子がますます惚れ込んだ他、バレンタインデーのチョコレートを貰った時は、教室でイチャイチャし始めた。
卒業式後の春休みの遊園地デートでは、時折おさわりなどをしつつも、遊園地を楽しみ、最後の観覧車ではついに事実上のプロポーズを行い、以降婚約者として扱われる。

３年生となった後のゴールデンウィークには、優子を花嫁修業として自宅に招く。
優子の女子力の高さに目を奪われつつ、最終日に２人きりになった時は露出度の高い服で誘惑された。
パーティーではなし崩し的に田村恵美とのテニス対決を行うことになり、1ヶ月半の練習の末、ついに5セットマッチで勝利を収めた。
序盤こそ一方的に押されていたが、徐々に体力差から差を広げ、最終盤には一方的な展開へと持ち込んだ。
しかし、短い練習で将来の日本テニス界を引っ張るプロとなりそうな田村恵美を負かしたことで、スポーツアカデミーから目をつけられるようになる。
最終的に、蓬莱教授への研究参加等を大義名分に、「二度と近付かないこと」という誓約書を書かせるに至った。
修学旅行では、２日目までは優子と別行動し、２日目には「ユ何とか」という西九条駅から乗り換えて行ける遊園地に行った。
３日目は大阪駅に集合し優子とデートをした。人気のないところでスカートめくりをしたり、しつつ大阪ステーションシティや、難波の観光地（グリコやくいだおれ）を楽しんだ後、予算が有り余っていることから神戸ビーフの高級店を選び、高級肉を楽しんだ。
修学旅行最終日では、「ＤＱＮ」に絡まれた際にも優子を守った。その後はＡＯ入試の後、プールデートや翌日の川辺での優子の水着姿が可愛くエロく、性欲との戦いを演じでいた。
お尻や胸を触ったが、優子からは「あれでも抑えている方」と評されている。
文化祭は去年同様優子と回るが、密かに婚約指輪を買っていて、後夜祭では生徒会長に無理を言って、プロポーズをした。
責任感は強いが、優子の誘惑力が高く、ついついエッチなことをしてしまう。

・浩介の母
篠原浩介の母親、クリスマスデートの時に優子が篠原家にテレビ電

話をかけた時にたまたま知り合う。
それ以降、優子を高く買っており、花嫁修業の時の家事手伝いでは優子に女子力の差を見せつけられているものの「優子ちゃんがあまりにも完璧すぎて、姑として嫉妬する気にもなれない」と語っていた。
浩介の祖母のこともあり、早くひ孫を見せてあげたいという思惑から、優子の両親と利害が一致、以降優子を早く結婚させ、妊娠させようと目論むものの、最終的に譲歩案として、高校卒業後に結婚ということで落ち着いた。

・浩介の父
篠原浩介の父親、やはり優子を気に入り、母親や石山家ともども、優子と篠原を早く結婚させたいご様子である。

・高月章三郎（たかつきしょうざぶろう）
篠原浩介の友人、第５章以降ではスケベな一面と、嫉妬心の高い一面が強調されていて、優子と篠原のイチャつきに対して、呪詛を投げかけるシーンが多い。
一方で、篠原浩介との関係が悪化しているわけではなく、修学旅行でも一緒に行動したりしている他、プロポーズを見た後では正式に「呪うのは辞める」と宣言した。

・木ノ本桂子（きのもとけいこ）
優子たちのクラスメイトの女の子。優一の小学校時代からの幼馴染で腐れ縁。優一としては学校で唯一の話し相手でもあった。「学校一の美少女」という名声を得るほどの美少女で、性格も柔らかい。
家が近いこともあり、彼氏ができた後も優子と一緒に帰ることが多い。
第５章以降は、天文部の次期部長としての一面や、優子の女子力の指南役としての一面が強くなっていき、第６章以降は天文部の部長として活躍。
優子もいるということから美少女目当てに入部する男子も殺到、優

子には篠原が居るため、男子たちから狙われる日々を過ごしている。
文化祭では、ミスコンに2年連続で出場、優勝した優子は規定で参加できず、また永原先生も「今年は卒業する木ノ本さんに譲る」として出場を辞退したため、圧倒的な得票差で優勝。
ちなみに水着審査の時には、優子のパフォーマンスを見て、より男受けを追求していた。

・河瀬龍香（かわせりゅうか）
優子のクラスメイト、彼氏持ちで美人ということで通っていて、優子や桂子と並んでも悪口を言われない程度には美人である。
一方で、その彼氏は極めて性欲が強く、またテクニシャンであるため行為中は気持ちよさのあまり何度も気絶させられている。
龍香自身のエロさも増す一方で、彼氏のことに話が及ぶと勝手に夜の話題で一人盛り上がってしまったりしている。
修学旅行では田村恵美とともに優子と同室になり鉄道博物館では永原先生の話を興味津々に聞いていて、後夜祭も彼氏との約束があるため、プロポーズの報を聞いたときには電話で祝福のメッセージを入れていた。

・志賀（しが）さくら
木ノ本グループの女子の一人、引っ込み思案で気が小さい女の子だが、死んだ祖父の影響で時代劇が好きという一面もある。
木ノ本グループの女子の一人として、優子とも一定の交流がある。
文化祭の時は野球部の唐崎先輩を遠目で追っていたが、優子と篠原の加入に寄って野球部のマネージャーになったが、最初から唐崎先輩が目当てで、すぐに告白。
その後、交際が始まり、歴史好きの一面から、間接的に永原先生が救われるきっかけを作った。
一方で、野球部はチームのエースが女子マネージャーと交際をはじめたのをきっかけに崩壊した。
彼女はそのことに罪悪感を持っておらず、むしろしてやったりと

いった感じで「魔性の女」になっていた。
優子はそのことを、「女の勘」で見抜いた。

・田村恵美（たむらえみ）
優子のクラスメイト。テニスの天才で全国でも飛び抜けた実力を持つ。去年1年生で挑んだインターハイ決勝でダブルベーグルをして優勝するほどである。貧乳だが「テニスには不要」と強がっている。
豪胆な性格の女傑で、木ノ本桂子とグループを2分していた。
第5章ではやや出場機会が下がるが、第6章では優子の「女の子1週年パーティー」の席上で、篠原浩介とテニス対決をすることになる。
5セットマッチで行われ、序盤は一方的に篠原を翻弄したものの、徐々に体力差を付けられパフォーマンスが逆転、以降の3セットを徐々に悪い成績で落としはじめ、特に最終セットでは棄権を進めたテニス部後輩を怒鳴りつけたり、自らのミスにラケットを壊したり、また最後に敗北が決定した時にはコートの上で人目もはばからず大泣きし、この泣き顔は文化祭では「かわいい」と評されていた。
その文化祭では、「安定したOLを希望していたが世間が許さなかった」というエピソードを話した。
修学旅行では優子と同室になり、鉄道博物館では龍香や優子と一緒に永原先生の話を興味津々に聞いていた。

・安曇川虎姫（あどがわとらひめ）
サッカー部レギュラーの女子。田村グループへ所属。
虚弱体質の優子を体育の授業で何かと気にかけてくれる。性格はややガサツだが、田村恵美ほどではなく、優子に女子の感性や女子力について教えることもある。
第5章以降は修学旅行などの学校イベントで主に登場、修学旅行3日目の朝風呂では、自分が脱ぎ終わったあとに他の女性達が入ってきたため、恥ずかしそうにタオルを巻く女の子らしい一面を見せた。
文化祭でも、一時優子篠原ペアと行動を共にする。

・坂田舞子（さかたまいこ）

お嬢様口調で話す3年生。天文部部長であるが、木ノ本桂子ほど天体に詳しくはない。
口調そのままに物腰がやわらかく、天文知識のある桂子は後輩ながら尊敬している。
天文部に優子を迎えた後は、良き相談役としても活躍している。
第5章終盤で卒業し、以降天文部の部長は桂子が務めている。

・守山会長（もりやまかいちょう）
小谷学園の生徒会長で第5章時点で3年生、あまり仕事はなく、文化祭実行委員と共に文化祭を主催するのが主な仕事。
文化祭では生徒会としてミスコンの主催を担当した。
その後、第5章終盤で卒業した。

・唐崎裕太（からさきゆうた）
小谷学園弱小野球部のエースで第5章時点で3年生。大会ではしょっちゅう炎上することから「唐川裕児」というあだ名をつけられしまっている。
志賀さくらから想いを寄せられているが、恋愛にはあまり興味がない。
野球部はマネージャーが不在でそれを求めており、志賀さくらの申し出を快諾した。
その後、さくらから告白され、交際がスタートしたものの、副作用として野球部が崩壊状態になった。
本人は部活仲間の扱いの悪さから、野球部の崩壊についてそこまで罪悪感はない。
歴史好きの一面もある。

・能登川明美（のとがわあけみ）
ミスコンに2年連続で出場した女の子、2年連続で下位に沈んでしまっている。

・鳩原刀根之助（はつはらとねのすけ）／柳ケ瀬（やながせ）まつ／北小松貴子（きたこまつたかこ）／永原（ながはら）マキノ

優子たちのクラスの担任の先生、担当科目は古典。第５章以降では教師としての顔とともに、日本性転換症候群協会会長としての顔も増える。

最終試験に合格した優子を協会の正会員に誘い、その後の優子の活躍を後押しする。

最年長だが頭は固くなく、硬直化しがちな協会を盛り立てるために優子を推薦した他、蓬莱教授の記者会見に端を発する緊急会合でも、蓬莱教授の提案に賛成票を投じている。

その後も、協会の会長と学校の先生という２つの顔で優子と接し、優子もまた協会の正会員と学校の生徒という２つの顔で接していたが、永原先生は次第に優子への恩義とあこがれを強めていく。

幸子を２人旅で救った日、永原先生は自作の本で胸の内を暴露した他、スキー合宿手前では、優子によって、吉良上野介に抱いていた罪悪感から開放された。

その時は普段は優子のカウンセラーだが優子と立場が逆転していた。

優子からは、「これほど複雑な関係はこの世にないんじゃないか」とされているように、当初は単なる先生と生徒の関係だったがＴＳ病患者としての先生と生徒、日本性転換症候群協会の会長と会員、カウンセラーと被カウンセラー、ＴＳ病の先輩後輩あるいは同志、被恩人と恩人、救済を受ける人と、救世主など、様々な関係がある。

実はスキーが大の苦手で、スキー合宿では優子以上に苦戦し、最後の実技披露ではあまりの失敗続きに途中で放棄してしまった。

また進路指導では、佐和山大学を希望する優子に「日本性転換症候群協会会長としては賛成」としつつも「教師としては絶対反対」という複雑な立場に立たされ、２つの顔で板挟みになる様子も見せた。

最終的に、恋人の寿命問題を解決させるという名目で、佐和山大学を希望した優子を送り出している。

自分の人生を変え、逃亡生活を止めて教師を始める切っ掛けにもなった鉄道に対して特別な感情を抱いており、修学旅行では鉄道の知

識を存分に披露した。
３年生の担任としての文化祭では、青春に対するコンプレックスの強い一面が強調されていて、２日とも「制服登校」した他、髪型も普段のセミロングからツーサイドアップに変え、１年生に「先輩」と呼ばれた時には無上の喜びを得ていた。

・教頭先生
小谷学園の教頭先生。しばらく登場しなかったが、後夜祭での篠原のプロポーズの際には女性として扱えなかった優子に謝罪していた。

・校長先生
小谷学園の校長先生、永原先生の実年齢を以前から知っていた数少ない一人。普段は校長先生としての仕事に忙殺されている。長話は嫌われるということで、なるべく短く簡潔にを心がけていて、生徒たちの評価はとても高い。
体育祭の時には優子と話した他、卒業式や後夜祭でのプロポーズの場面でも登場している。

・体育の先生
優子たちのクラスの体育の先生で、名前は「草津先生」であることが卒業式で判明している。
３年生でも、引き続き優子たちのクラスの体育の先生を務めている。

・塩津悟（しおつさとる）／塩津幸子（しおつさちこ）
東北の大都市に住む大学生、文化祭の頃、ＴＳ病を発病した。
男時代は熱心にサッカーを打ち込んでいたが、女性として身体が弱くなってしまい、憂鬱な日々を過ごす。
母親の間違った対応などから、「男に戻りたい」と願うようになってしまい、協会のカウンセリングにも応じず、優子と会った時には「性別適合手術で男を取り戻す」と公言してしまう状況まで事態は悪化していた。

その後も、弟から「お姉ちゃん」と呼ばれたり、新しい名前として「幸子」を与えられたことにも激しい拒絶反応を示した。

優子は、そんな状態の幸子を見て母性が沸き起こり、他に手立てがないと熟考した上で、愛の鞭として幸子の頬をひっぱたく。

彼女に厳しくしたのはこれ一回きりで、その後、喧嘩で泣き出した幸子を優しく包容し、その後は幸子の服を買ってあげ、また母親が再び過ちを犯しそうになった時には、幸子本人が「女性として生きていく覚悟がなお足りてない」と見抜かれ、優子によって東京に招待される。

そこでは協会の本部を見学し、また漫画喫茶の女性専用スペースで少女漫画を読む。

そこで彼女自身が気付いていなかった、女性としての人生への願望を優子に見抜かれ、「あなたは既に女性の特権を行使している」と諭された。

その後、乙女ロードやお台場の温泉施設など、「女性の空間」を何度も行き来し、その間で「地味でセンスがない」などの陰口を叩かれてしまう。やがて女湯に入ったことで完全に覚悟を決め、「女の子らしく生きていきたい」と優子に告白、すると優子から女の子らしい服を渡され、翌日以降、生理も乗り越えてカリキュラムを受けた。

カリキュラムでは常に優子と相談しつつ、最終日手前の日には小谷学園で制服の着付けなども行った。

その時は女の子初心者らしく、何度も失敗しては優子にスカートめくりのおしおきをさせられ、恥ずかしがるように仕向けられたが、「どんどん恥じらいがまして、女の子らしくて模範的」と褒められた。

最後に仕返しとして優子のスカートもめくったが、その時の優子の反応から「まだまだ」と謙虚になった。

その後は住んでいる場所が遠いこともあって、東北支部長の余呉さんと行動を共にすることが多い。普通会員として入会後、優子の女の子1週年記念パーティーにも出席していて、言葉遣いこそ優子や桂子ほどの女の子ではないが、乱暴な言葉遣いは完全になくなり、女性らしいおしゃれを楽しんでいる。

髪の色は水色で、お人形さんのような可憐な美少女。

・塩津徹（しおつとおる）

幸子の弟、優子たちと同い年で高校生、かなりがっつくタイプ。

優子に諭されて以降は、幸子のことを姉として扱い、「お姉ちゃん」と呼ぶようになった。

悟時代は一度も勝てなかった喧嘩で泣かせたことで、幸子の女性としての人生が始まったと言ってもいいだろう。

・健太（けんた）さん／京子（きょうこ）さん

修学旅行時に、関西で発病したＴＳ病患者で中学生の女の子、いわゆる「理屈先行型」で、「女として生きていくしかない」ことは納得しているものの、具体的な方法論などはまだ分からない。

関西支部長をカウンセラーとして女の子としての教育を受けていて、また修学旅行中には優子と永原先生が家庭訪問をした。

・比良道子（ひらみちこ）

日本性転換症候群協会副会長、天保１１年生まれで誕生日は旧暦７月２３日、１７７歳（第６章途中より１７８歳）、元水戸藩士で、尊王攘夷運動をしていたが、ＴＳ病を機に逃亡した。

永原先生との出会いは１００年前、日本性転換症候群協会を立ち上げる際に、余呉さんの方が年上だったが、武士身分だったため、彼女が副会長となった。

その後は副会長として優子の上司としても活躍している。

優子に対する評価は高く、協会の副会長として無難に職務をこなしているが、無意識のうちに「不老の特権意識」を持っていて、永原先生ほど柔軟な思考力ではない。

優子が蓬莱教授への協力のため佐和山大学への進学を決めると、彼女もまた、蓬莱教授との友好関係樹立に奔走した。

・比良道蔵（ひらみちぞう）

第６章時点で８９歳、見た目通りで相当な高齢ではあるが、比良道子の曾孫で、優子と篠原がバーベキュー場に行く途中のバス停で出会う。

老人の集まりで「まだ死ぬ訳にはいかない」と言っていた。

・余呉（よご）さん

永原先生に継ぐ、この世で２番目に長生きの人。天保３年１２月生まれの１８４歳。

外見年齢は１８歳だが、ＴＳ病にはよくあることである。

現在は「支部長統括兼北海道・東北支部長」となっていて、協会では事実上のＮｏ．３である。

ちなみに、比良さんよりは年上だが、農民出身のため副会長にはなれなかったが、識字や学識という現実的な問題もあり、「古い考えをいまだに持っている」という外部からの批判には不快感を示している。

彼女もまた、無意識のうちに「不老の特権意識」を持っていて、蓬莱教授と永原先生にそれを指摘されていた。

・蓬莱教授（ほうらいきょうじゅ）

佐和山大学（さわやまだいがく）教授で専門は遺伝学・医学。３０代にして教授になり、４０代にしてノーベル生理学・医学賞を受賞した天才学者である。しかし本人に寄るとノーベル賞を受賞した研究は「脇道の研究」だという。

第５章のクリスマスデート以降、登場回数が急増していて、ＴＳ病遺伝子の解析から、人間の寿命を１２０歳、ついで２００歳まで伸ばす実験に成功、彼自身も既に平均寿命２００歳の身体となっている。

記者会見以降、世間も蓬莱教授に対する反対派と賛成派で大きく割れている一方で、ビリオネアを含む数多くの資産家から巨額の寄付金を貰っており、投資にも成功したため、２０１８年にはついにほとんど寄付だけで経済誌からビリオネアと認定されるに至った。

ノーベル賞学者らしく、倫理を軽視する傾向にこそあるが、極めて聡明なのは確かで、自身の実験のために日本性転換症候群協会や優子、篠原と友好関係を結ぼうとした。

その後は優子を進学先に引き入れ、特にＡＯ入試では自身の思想を優子たちに語った他、永原先生の秘密を独断で推察し、暴いてみせた。

無神論者であり、宗教を嫌っており宗教的な人間については、「心の弱い人間がすること」と軽蔑している。そのため、自らを崇拝する人間についても「俺は神などではない」「愚かなこと」と見下しつつも「しかしプロパガンダに利用しない手はない」とするなど、極めて合理的な人物。

また、自身の実験が賛否両論なことを知っていたため、「宣伝部」を作ることを考えており、「ニュースブライト桜」の高島さんとも協力姿勢を考えている。

・瀬田博（せたひろし）

蓬莱教授の助手、研究者としても有能であるが、蓬莱教授を強く崇拝している。

蓬莱教授の信任も厚く、後継者と目されている。

・高島（たかしま）さん

インターネットニュースメディア、「ニュースブライト桜」の記者で、マスコミに対し拒絶反応を示していた「日本性転換症候群協会」の取材について、協会側が「無茶苦茶だからどこも申し込んでこないだろう」と思っていた条件を全て呑んだ上で取材をした。

既存のマスコミから攻撃される立場にあるネットニュースメディアのため、協会とも友好関係を気付き、以降日本性転換症候群協会に対する取材を独占する。

当時の協会に対する情報需要は極めて高く「走狗になってでも取材したい」という評価をもらっている。

この功績によって、ブライト桜の中でもかなりの地位に上り詰めている。既存のマスコミのデマや風評被害に対して反論するために、重要なネットニュース機関となっており、優子たちに頼られている存在となった。

# 第七章　最後の高校生活

## 新たな戦い

あれから、あたしたちは婚約指輪をはめて登校するようになった。
小谷学園の外でも中でも、他の生徒達が頻繁にあたしの左手に視線を集め、ひそひそ話をするようになった。
実際、高校の制服を着ているのに、婚約指輪をはめているというのは、かなり珍しい光景だと思う。
元々、あたしたちの交際事実は学校では知らない人はいないほどの有名事項だった。
そのカップルが、後夜祭で全校生徒と先生の目の前でプロポーズしたというインパクトはとても大きく、あたしたちはますます学校で目立つ存在になった。
普通、あたしの場合みんなの視線は胸に行っていたけれど、それが左手薬指に分散されたのはちょっとメリットだった。
あたしたちの婚約は、後夜祭に参加していなかった生徒たちにもすぐに拡散された。
そんな中で、あたしたちの次の目標は体育祭ということになる。あたしたち3年生にとって、大きな学園イベントはこれを行えば後は卒業式を残すのみになる。
体育の授業中は、危険だということもあって婚約指輪を外すことになっている。
それなりに高いものなので、防犯のために鍵をかけたロッカーの中にしまうことになっていて、この手間が増えたのが唯一の不便事になっている。
さて、今年の体育祭、３年女子の種目がいくつかあって、あたしは３人４脚競争と障害物競走の２つに決まった。
ただ、練習時に少し２人３脚、それも一番相性が良さそうな桂子ちゃんとしてみたものの、案の定全くうまく行かなかった。
あれこれ話し合ったり、実際に競走してみた結果、ハンデとして、あ

たしだけは単独で走ることになった。ちなみに、さすがにこのハンデならあたしでも勝てそうな気がしてくる。

障害物競走も、道中ハードルだけではない色々な障害物があるんだけど、やはりあたしだけ障害物がなしになった。こっちはさっきよりも勝つのが厳しいとあたしの中では思っている。

あたしの運動神経の悪さも、そのインパクトから既に学校中に知られている。

だから、きっと今回の体育祭でのハンデも、みんな理解してくれるはず。

ちなみに、あたしは当初この体育祭の実行委員をすることを考えていたが、９月から新しいＴＳ病患者のカウンセラーになったことで、永原先生から「委員会はやらなくていいわよ。あなたの肩に女の子の命がかかっているんですから」というありがたい言葉のおかげで、今年の委員会はどこにも所属しなくて良くなった。

その患者なんだけど、今では「歩美（あゆみ）」と名前を変えて、カリキュラムを無事に終え、学校へと復学している。あたしとしても、カリキュラムの指導をしたのは２回目だった。幸子さんよりも成績は悪かったけど、一応「平凡」という成績を出せた。彼女自身については大丈夫だと思う。

それよりも問題なのは、学校関係者の手によって、あたしと同じような問題が起こったこと。

着替えの時に先生陣が「男とも女とも付かない扱い」をして、更衣室を隔離してしまったのだ。

それだけではなく、また学校の周囲の生徒も、男の頃と変わらないような扱いをして「おっぱいを触らせて」などのセクハラ発言も気軽に飛び込んでしまっているという。

女の子として、やはり軽々しくそう言うセクハラを、好きでもない男にされるのは苦痛でしかない。

その患者は、精神的に追い詰められたり、自殺に対する恐怖感があるため、そうした扱いには「やめて」と言っている。

それ自体はいい傾向だと思うけど、やはり問題は学校側の無理解

だ。
とにかく小谷学園とは校則などが違いすぎるし、あたしたちは部外者ということでそこまで強硬な措置が取れない。
もちろん、患者が望むなら、協会の正会員の連名で抗議文を提出することができる。
ちなみにこの提出する抗議文、ご丁寧に署名する正会員たちの生年まで書かれている。
例えば永原先生の欄には永正１５年生とか、余呉さんの所には天保３年生と書いてある。
これは、頭の固い学校の上層部に対する威圧も含まれていると思われる。あたしだけ「平成」になってるのがちょっと恥ずかしい気分だけど。
また、永原先生は、可能性は低いとしつつも、高島さんを使うことも考えている。
とはいえ、メディアを使った攻撃はこちらにも被害が及びかねない諸刃の剣なので、あくまで抗議文の提出をもっても態度が改まらない場合に行う、次の集団と考えるのが妥当だろう。
それにしても、女性として生きていく他に、あたしたちに道はないことを、患者に理解させるのも難しいが、周りに理解してもらうのは、更に困難な出来事だと学んだ。
あたしは、歩美さんに対して、「もしいつまでも周囲が女性扱いしない場合はその都度怒るように」と言っておいた。
自殺恐怖型の人は、とにかく言われたことは素直に受け取ってその通りに実行してくれる。
だからあたしは、そこまで悲観はしていない。少なくとも外見はもう女の子そのものなんだ、本人が「女の子扱いして」と言い続ければ、あたしがそうだったように、やがて周囲にも味方が増えていく。
あたしだって、最初は家族と永原先生、そして桂子ちゃんしか見方がいなかったんだし。
「よし、じゃあ今日も体育の練習だ。体育祭はもうすぐそこだ、最後の

体育祭、悔いの無いようにしてくれよ！」
「「はーい！」」
体育の先生の号令で、今日も体育祭への準備活動を行う。
「優子ちゃん、３人４脚と競争してみてよ」
「うん」
桂子ちゃんの提案とともにあたしはスタート地点に着く。
「よーい、スタート！」
虎姫ちゃんの号令とともにスタート、当初と比べ、みんな３人４脚がかなり速くなっているわね。
「はぁ……はぁ……」
あたしの足では、これでも勝つのはかなりしんどい。
今日も何とか振り切ったけど、体育祭では勝てるかわからないわ。
と同時に、障害物競走では今のハンデでは勝利困難ということもわかった。
「優子さんの足が遅いのは分かってましたけど、それにしてもこれは……」
「うーん、３人４脚はともかく、障害物競走は障害物の内容を変えたほうがいいかもしれないわね。先生に相談してみるわね」
「うん、龍香ちゃん、桂子ちゃん、ありがとう」
ということで、障害物の内容の一部を変更。
途中で時間のかかる網を長めにし、調整を取ることにした。
まだ修正の効く時でよかったわ。
「よし、これでどうだ？」
「うん、やってみる」
とにかくハンデ戦はバランス調整が大事だ。
ハンデを付けて大負けしたらかなり気まずくなるし、あたしの惨めさは半端ないものになる。逆にハンデで大勝しても、周囲は白けてしまう。
本当はあたしにとって少し厳し目のハンデにして、周囲もバレない程度に手加減するのが一番いいんだけど、問題はその手加減が難しいことなのよね。

というわけで、こうやって体育の授業の度に、微妙なバランス調整をしていく。
一方で天文部の方は、桂子ちゃんから次期部長に対する様々な引き継ぎが行われている。
先代の坂田部長の時は特にそういうのはなかったけど、今回からは必要ということでこの措置が行われた。
「えっと、天文部の引き継ぎと言っても、することは新入部員への説明とか、文化祭の時の取りまとめとかくらいよ」
「はい」
次期部長の男子部員は、明らかに赤くなっている。
桂子ちゃんほどの美人から、手取り足取り教えられたらそりゃあ照れるのも無理はないわね。
次期部長と言っても、最初はあたしと桂子ちゃんの女の子目当てで来た生徒だし、来年からは女子部員がいなくなっちゃうのよね。
ブー！　ブー！　ブー！
突然、あたしの携帯電話が鳴った。
永原先生から見たい。
「ごめん」
あたしは部室の外の廊下に出て電話に出る。
「はい」
「あ、石山さん。あなたの担当患者さんなんだけど」
電話越しで永原先生が連絡してくる。
同じ学校に居るのに電話で連絡するって、緊急事態なのかな？
「はい」
「さっき協会に対して……正式に、学校に抗議してほしいと言ってました。着替える場所について、特に不満があるそうです」
「……分かりました。それで、メディア戦略をしますか？」
こうなると、必要になってくるのが今後の調整ということになる。
「それも含めて、本人と私と石山さんで調整するわ」
「了解です、永原会長」
「急に呼び出してごめんなさい、今協会本部に向かっているので……

天文部が終わったら、寄っていってくれますか？」
どうやら、結構急な話らしいわね。電話なのも既に学校を出ていたためだったのね。
「はい、母さんにも遅くなると連絡しておきます」
「じゃあ、電車が来たから失礼するわね」
そう言って、永原先生に電話を切られた。
さて、またもや一悶着ありそうね。

「優子ちゃん、誰から？」
天文部に戻ると、早速浩介くんが聞いてくる。
「永原先生から、あたしがカウンセラーをやっている患者さんが、完全な女性扱いをしない学校側に協会として抗議文を出してほしいって」
「へえ、やっぱり大変なのね」
桂子ちゃんが言う。
「性別が変わるわけだからな、いきなり女扱いしろって言われると、やっぱり動揺するんじゃねえか？」
次期部長の男子が言う。
「まあ、それはそうだとは思うわよ」
浩介くんや桂子ちゃんでさえ、復学当初はあたしの扱いに迷っていたわけだし。
「特に、同じクラスだった男女は困るだろう？」
とはいえ、その後のことを考えると、転校が非推奨なのは同じ。
そもそも転校したとして、そこで受け入れられてもらえる保証はない。
「第一印象は大きいって言うけど、その通りに行動するのって案外難しいんだぜ」
別の男子部員が、そんなアドバイスをしてくれる。
とは言っても、歩美さんが、「このまま女扱いされないと、自殺へと至るのではないか？」という恐怖心を抱いているのは事実なので、安心させるためにもまずは更衣室で受け入れられる必要がある。
「ともかく、今日は一緒に帰れないわ。これから協会本部で会議があ

るから」
「……分かりました」
「おう」
桂子ちゃんと浩介くんがすんなりと納得してもらう。
浩介くんとしても、協会は女性、それも実年齢はかなり上の女性しかいない場所だと分かっているから安心してくれている。
まあ、あたしも浩介くん以外考えられないけどね。

「お待たせしました」
あたしは協会の本部をカードキーで開けると、既に集まっていた永原先生と患者本人に挨拶する。
「石山さん、その、お久しぶりです」
そこにいたのは制服姿の女の子。
彼女、山科歩美（やましなあゆみ）さんが不安そうな表情で言う。
「元気そうで何よりだわ……それで、抗議文を提出することでしたよね」
元気そうだとごまかす。
結構大事なことだと思う。
「はい、どうしても学校を説得することが出来なくて……私、どうしても女の子になりたいんです」
歩美さんは強迫観念に近い感じで言う。やはり自殺恐怖型だわ。
「ええ、立派ね。ええ、協会としても、あなたへの協力は惜しみません」
永原先生が褒めるように言う。
そう、女の子になろうとする患者には、協会はとても優しい。一人でも、多くの仲間が欲しいから。
「あ、ありがとうございます！」
歩美さんが明るい表情で言う。
「それでもう一つなんだけど、もし抗議文を出しても改まらない時は、こちらもメディア戦略を使いたいと思います」
「どういうことですか？」
「あたしが説明するわ。例のネットの動画あったでしょ？」

ここで永原先生に代わりあたしが説明する。
「はい、石山さんも永原さんもいました」
「実は、当協会はあの動画を撮影した『ブライト桜』以外のメディアからの取材は全て遮断しているんです」
「え!? どうしてですか?」
やはり歩美さんは驚いている。確かに普通では考えられないものね。
「去年の12月に佐和山大学の蓬莱教授の研究発表がありましたよね?」
「はい、私も驚きました。協会のことも、その時に知りました。あの時のイメージと現実は大分違ったみたいですが」
そうよね、去年12月は、歩美さんはまだ男だったわけだし。
「はい、実はそう言った偏向報道に私達と蓬莱教授が話し合った結果として、メディア取材をシャットダウンするために、『これだけの条件なら取材は申し込まれないだろう』と思っていた条件を出したんです」
「もしかして、それで?」
「ええ、『ブライト桜』だけが、その条件を呑んだんです。結果的に、協会に関する取材は、全てそこが独占しています。他のメディアも、それを垂れ流さざるを得ない状況が続いています」
そう、「ニュースブライト桜」は既存のメディアとはかなり報道姿勢が異なる。
そのため既存のマスコミはこの会社を嫌っているのだが、協会の姿勢を窺い知るには、このメディアを介して行うしかない。
しかも、取材条件としては、ブライト桜の報道を丸写ししないといけない。何故なら、協会として「ノーカット以外不許可」となっているから。
つまり、選択肢がないというわけだ。
「なるほど、よく分かりました」
「なので、もし今回抗議文を出して改まらないなら、ブライト桜の高島さんに連絡して、『スクープ』をさせます」

つまり、マスコミを使って圧力をかけるというのだ。
蓬莱教授の支援もあるし、ここ最近、協会の顔はガラリと変わった。
「……何から何まで、ありがとうございます」
歩美さんは、大きな声であたしたちに頭を下げる。
「いいんです。ここを踏ん張れば、あなたは悠久の時を過ごせるのですから」
永原先生がなだめる。
「多分これから、歩美さんの永い人生において、何度も男女の違いで困難は来ると思う。でも、今の心を忘れなければ、きっと最後に、あなたは救われるわ」
「石山さん、その言葉……」
永原先生が何か心に引っかかるように言う。
「あたし、永原先生に女の子としての振る舞いを教わったわ。初めて女の子の日になった時に、あたしは永原先生からこの言葉をもらったわ」
「そういえばそうだったわね……」
永原先生が思い出した様に言う。
「ちょうど去年の今頃よ。幸子さんっていう、あたしが歩美さんの前に担当した患者さんにも、この言葉を贈ったわ」
「……ありがとうございます。胸に、刻んでおきます」
うん、これでいいわね。
「さ、歩美さん、抗議文を作るわよ」
あたしたちは抗議文を作る、そしてＦＡＸで他の正会員のいる各支部などへ送る。
そして、全員の承認を得られれば、晴れて提出することが出来る。
ともあれ、歩美さんにとっても、あたしにとっても、ここは勝負どころになるわね。

## 再び二正面作戦

「よしっ！」

歩美さんの学校に提出する、抗議文の調整が終わった。

あの後、やっぱりこれは避けたいということもあったので、この事態を避けるために、歩美さんにもう一度説得を頼んだ。

けれども、歩美さんによれば、改めて何度も「ちゃんとした女子扱い」を教師陣に訴えたが、反応が鈍かったという。

結局、小野先生や教頭先生と同じく、「男子とも女子ともつかない扱い」を変えるつもりはないみたいということで、協会が抗議文を送ることを決定した。

あたしが代表し、郵便局に行き、内容証明郵便で送ってもらう。内容証明なので、あたしたちの控え、学校に送るもの、そして郵便局が保管するためのもので、同じものを3枚作る。

といっても、中身の内容としては基本的に「強く抗議する」とあるだけだ。訴訟やメディアを使うことをちらつかせたりはしていない。

あまり脅迫めいたことをするのはもう少し後に取っておく。

「では、こちら控えになります。大切に保管してください」

郵便局の職員さんに控えを渡された。

後はこれを、協会本部に持っていき、保管する必要がある。そちらの方は、明日の通学時に、永原先生に渡す予定になっている。

「はい、ありがとうございます」

「賽は投げられた……わね」

内容証明郵便を送り終わり、郵便局を出たあたしがぽっとつぶやく。

ここと歩美さんの学校は近隣なのでおそらく明日には届くと思う。そしてそうなれば歩美さんの学校の職員会議は大騒ぎになると思う。もちろん、あたしたちが悪いわけじゃない。

ＴＳ病の女の子をちゃんと女の子として扱わないような教育方針をすると、どういうことになるか？　歩美さんが自殺してからでは遅

い。そのためにも、何としてでもこの要求は通さないといけない。
ここが正念場ね。
そして明後日は体育祭、去年と同じように、体育祭と協会の仕事が交互に襲うことになる。
去年は確か、幸子さんの面倒を見ていたんだっけ？
ともあれ、明後日の体育祭、ハンデのバランス調整もほぼ終わり、あたしは明後日に向けて頑張っていくことにした。

ピピピピッ……ピピピピッ
「んーっ！」
目覚まし時計の音とともに、意識を回復してベッドから起き上がる。
今日は一日体育祭になる。あたしは携帯電話と体操着をまとめて制服に着替える。歩美さんの学校のこともあるし、去年と同じく、忙しい時間になりそうね。
そろそろストッキングを使う頃になった。文化祭が終わってからは保温のためにストッキングを使用することになった。
「おはよー」
「おはよう優子、今日は体育祭よね？」
リビングに行くと、母さんがいつものように朝ごはんを作っていた。
「うん」
「ふふっ、優子頑張ってね、今日はエネルギー出る食事にしておくわね」
「はい」
今日は体育祭ということもあって、母さんがいつもとは違う朝ごはんにしてくれる。
「いってきまーす」
「はーいいってらっしゃーい！」
母さんに見送られて体育祭へ行く。

どうやら、母さんはあたしの体育祭には興味が無いみたいね。
まあ、あたしの体育の成績悪いものね。母さんには他にもやることはあると思う。

「おはよー浩介くん」
「あ、優子ちゃんおはよう。いよいよだな」
あたしは、いつものように胸に視線を感じつつも、無事に教室までたどり着く。最近は婚約指輪の話題も落ち着いてきて、また胸が注目され始めてしまった。
それはともかく、あたしはいつものように席に座り、体育祭に備えることにした。
よく見てみると、今日は体育祭とあって、みんなちょっとだけざわざわしている。
「体育祭、どうなるかな？」
「うん、とりあえず俺たちはベストを尽くそうぜ」
「あー、何か緊張してきた」
あたしも、緊張している。
何故なら、去年はうまくハンデ無しでプラスワンのような扱いになったけど、今回は違う。
一般にも公開する体育祭で、大きなハンデを余儀なくされたからだ。
「優子ちゃん、大丈夫？」
「うん」
あたしの様子を見て、浩介くんも、心配そうに聞いてくる。
とにかく、なるようになるしかない。

ガララララ……
「はーい！　ホームルームをはじめます。もう分かっていると思うけど、体育祭の際の注意点を最終確認しますね」
永原先生が教室に入ってきて、ホームルームが始まった。よく見ると、永原先生は体育祭ということで今日は体育の先生が着ているよう

な体操着姿になっている。
内容は体育祭の注意点、特にケガに関しては、去年あたしが保健室送りになったので入念に言われた。
「それでは、男子から着替えてください。女子は廊下で待ってください。あ、石山さんには連絡事項がありますので、私のところに来てください」
あたしはホームルームの終わりに呼び出された。
多分、昨日の歩美さんのことだと思う。
「石山さん、この前話したことなんだけど」
「はい」
「抗議文が、昨日学校に届いたわ。今は職員会議で検討中だって」
「分かりました」
さて、届いたことを確認した所で、学校はどう出るかな？
あたしたちは次の一手として、高島さんを備えている。
抗議文を送ったことは、高島さんにも伝えてあって、もし学校側の態度が改まらないようならば、その学校を攻撃……もとい批判する声明を協会で出し、その翌日にそのことについてブライト桜で報じて貰う予定になっている。
すっかり圧力団体みたいになってしまったが、歩美さんが転校や退学などを余儀なくされたらあたしたちの負けとなる。それは将来的にも良くない結果を生み出す。
いずれにしても、教頭先生や小野先生がそうであったように、「私は善意で行っている」と思いこんで、悪事を働いている人々の説得は難しい。
抗議文にしろ、マスコミを使った圧力にしろ、こちら側の要求を通すためには、多かれ少なかれ実圧力が必要なのは致し方ないことなのかもしれないわね。
「――ともあれ、今は事の成り行きを守りましょう。大丈夫ですよ。正会員名簿の署名の抗議文、これを提出して態度を改めなかった学校は未だかつてありません」
「え!?　でも……」

「もちろん、生まれ年を記入したのは今回が初めてよ。でも、抗議文を見たでしょ？　『私達は子供を作れるほどに女性なのだから、何故女性のように扱わないのか？　貴校に強く抗議します』って、それでだいたいはみんな理解してくれるわよ」
確かにそうだと思う。
でも、今はどうだろう？
なまじ中途半端に「第３の性」何てもてはやされているし。
「ともあれ、待つしかないわよね」
あたしが、努めて冷静に言う。
「ええ」
あたしたちは男子が着替え終わったのを見て、入れ替わるように更衣室に入る。
「うーん、やっぱり優子の胸はうーん……」
「虎姫ちゃん、どうしたの？」
虎姫ちゃんが、あたしの胸を見ている。やっぱり着替えの時間ではあたしの胸は注目されてしまう。
「いやほら、私高校卒業したらサッカーも引退だし、女性として過ごすともなるとやっぱり胸は大きい方がいいかなって思うのよ」
虎姫ちゃんは、やはり胸が小さいのは悩みらしい。
実際虎姫ちゃんは「まな板」というほどにぺったんこではないけど、あたしはもちろん桂子ちゃんと並んでもまな板同然に見えてしまう。
「まあ、虎姫、悩み過ぎはよくねえぞ」
「うー、恵美はプロだもんなあ……」
虎姫ちゃんは、女子サッカー選手になる予定がない、そこが恵美ちゃんとの大きな違い。
「うっ……そうだよな虎姫も男子を意識せんといかんのか……」
「うん、女性受けも大事だけど……」
恵美ちゃんと虎姫ちゃん、仲はいいけど、やっぱり見解が相違することは多い。
「ふふっ、女性ウケなんか考えないほうがいいわよ」
「え？」

「男子受けが良ければ、こうやって……素敵な人を早くゲットできるのよ」
　あたしは左手薬指からこれ見よがしに婚約指輪を外して虎姫ちゃんに見せつける。
「あうー、これを見せられるとぐうの音も出ねえ……」
　やはり婚約指輪の効果は絶大みたいで、虎姫ちゃんは押し黙ってしまう。
「虎姫ちゃん、まず言葉遣いから変えてみるといいわよ。まずは語尾に『何々よ』とか『何々わ』を使うのよ。今のセリフなら『これを見せられるとぐうの音も出ないわよ』、よ。さ、やってみて」
「うっ……こ、これを見せられるとぐうの音も出ねえわ……」
　虎姫ちゃんがギクシャクした言葉づかいをする。
「こらこら『出ねえわ』じゃなくて『出ないわ』、よ」
「優子、まるで小姑だな」
　側で聞いていた恵美ちゃんが突っ込んでくる。
「いきなり言われても難しいよおー」
　虎姫ちゃんがそう訴えてくる。
「でも大丈夫よ、去年まで男だったあたしにでさえ出来たのよ。生まれつきの女の子の虎姫ちゃんに出来ないわけ無いわ」
「でも実際そんなんでモテるのか？」
　虎姫ちゃんが疑問を呈する。
「うん、言葉遣い替えるだけですっごくモテるわよ」
「確かに、おしとやかには聞こえるけど……私でもやれるのかな？」
「大丈夫大丈夫、それから、恋をするのモテかもしれないわよ」
　横で聞いていた桂子ちゃんも、話に加わってくる。
　あたしは体操着に着替え終わる。婚約指輪に関しては、どうしようかなとも思ったけど、幸い、よく考えたらあたしの参加競技は単に走るだけなので、婚約指輪は身につけたままでいいことに気付き、もう一度はめ直した。
「あれ？　優子、結局それはめたままにするのか？」
　虎姫ちゃんに指摘される。

「うん、だってあたしが参加するのは3人4脚のハンデ戦と、障害物競走のハンデ戦でしょ？　どっちも走るだけだし誰かと接触することはまずないと思うわ。付けたままでもいいと思うよ」
「ああ、言われてみればそうだな」
虎姫ちゃんが納得したような表情をする。
「そ、それより行きましょう……男子のみなさんも……待っていると思いますし……」
「あ、うんそうよね」
さくらちゃんに言われ、あたしたちはガールズトークを切り上げる。
男子たちと永原先生は着替え終わった時点で既に校庭に向かっているため、あたしたちも急いで校庭に入る。

「みんなー、こっちこっちー！」
永原先生が手を振って、あたしたちを招いてくれる。ともあれ、ここに整列すればＯＫね。
ちなみに、今年も浩介くんと同じ組になった。
今年の体育祭実行委員のさくらちゃんによると、当初は別の組にしようという予定だったんだけど、変わった。
というのも、後夜祭での例のプロポーズがあったため、あたしと浩介くんで組を別にするのはあまりにかわいそうな上に、離婚を連想させるとして不吉ではないかという意見も出たことで急遽メンバーを調整し、同一の白組になった。
これが単なる彼氏彼女ならこうも行かなかったということ。やはり、婚約者と彼氏では重みが全く違うわね。
ともあれ、浩介くんと同じ組になれたのはとても嬉しいわ。
その後、続々と生徒たちと先生たち、また一般席には保護者や観戦者もたくさん集まってきた。
雑談する声が、大きなうねりになっていく。
体育祭実行委員と、生徒会が、前の朝礼台の方にいる。
まず朝礼台に登ったのは生徒会長さんだ。

「えーみなさん、只今より、２０１８年度、小谷学園体育祭を開始します。はじめに開会の挨拶、校長先生よろしくお願いいたします」
生徒会長さんの声とともに、入れ替わるように朝礼台に校長先生が登ってくる。
校長先生は、この前よりも元気そうに見える。
「えー、本日は天候にも恵まれ、無事、小谷学園体育祭を開く運びになりました。えー、校長先生の長話は嫌われる元ですので、これで終了します」
パチパチパチパチパチ!!!
生徒たちから、校長先生のスピーチに惜しみない拍手が送られる。
その簡潔ながらも、思いの詰まった校長先生の短いスピーチは、全校生徒から好評のもとになっている。
そして、生徒会長さんの宣言により、最初の種目の準備をするため、一旦所定の場所に待機するようにとの放送が入った。
「いよいよだな」
「うん」
紅組と白組に分かれて、あたしたちの体育祭が始まる。
今年はまず2年生からの競技になっている。
サッサッ……
あたしの前方に座っていた永原先生がサインを作っている。
これはあたしを呼び出すための暗号になっている。
「永原先生が読んでいるわ」
今回の抗議文は永原先生が代表して送っているため連絡はすべて永原先生を介して行われることになっている。
あたしは周囲の生徒に声をかけ、前へと進む。
「永原会長、呼びましたか？」
あたしはとっさに呼び方を変えて永原先生を呼ぶ。
「ええ、歩美さんから。今日は体育はないみたいだけど、担任の先生にもう一度話したそうよ」
どうやら、歩美さんの方も動いてくれているみたいね。
「それで、どうでした？」

「抗議文の内容については現在検討中、みたいよ」
「昨日1日、あったんですよね？」
届いたのは昨日という連絡だった。内容証明郵便で、しかも協会の正会員の連名の抗議文、その日のうちに職員会議にかけられないはずはない。
「ええ、おそらく、時間を稼いでいるものかと」
「困りましたね、次の体育の授業までに決まるといいですけど」
とにかく、事態の長期化は歩美さんの負担になるだけ、なるべく早くに決着を付けたい。
だけど強硬な手段はしたくない。難しいわね。
「次の体育の授業はいつですか？」
永原先生が聞いてくる。
「来週の火曜日とのことです」
「……分かりました。改めて、その日を期限にするように、時間が空いたら私の方で抗議電話を入れておきます」
「ありがとうございます」
「いえ、患者さんの女性として独り立ちするために応援するのは、みんな一緒です」
永原先生の頼もしい言葉を聞く。本当はあたしがカウンセラーだから、なるべくあたしが色々しないといけないのに。
ともあれ、今はこれで良さそうね。
あたしは、最初の種目が来るまで、のんびりと休むことにした。
ついでに、永原先生の隣りにいて、いつでも動けるようにしておいた。
今年の体育祭も、去年幸子さんの問題と同時並行したときと同じく、とても忙しいものになりそうだった。

体育祭、いちゃつき、そして新しい患者のこと

「石山さん、次よ」
「うん」
永原先生に言われるまでもなく、あたしは次の競技が参加競技だということは知っている。この時だけは競技に集中し、歩美さんのことを忘れることが出来る。
まずは3人4脚対決、あたしだけは、単独で走ってもいいことになっている。
「今回の競技は、石山優子さんのみ単独で走ってもらいます」
生徒会長がそう宣言しただけだった。一般席からはちょっとだけざわつきの声があったけど、多分あたしの足の遅さを見れば、それも仕方ないと思えてくるはず。
「それでは位置について」
あたしたちの体育の草津先生がおもちゃの銃を上に構えて合図する。
「よーい！」
パンッ！
乾いた空気音がしてあたしを含めて走者が一気にスタートする。
最初はスタートに戸惑う他チームを尻目にあたしがリードを奪う。
「はぁ……はぁ……」
とにかくスタートの段階でリードを広げて先行逃げ切りを図らないと、折り返してからはあたしも疲れが出てガンガン差を詰められ、追い越される事はわかっていた。
あたしを追い上げる他チームの様子に、周囲の歓声も盛り上がっていたのを聞いた。
もうすぐ、もうすぐ、まだ横に誰も見えない。
ちょっとだけ後ろを振り返る。まずい、もう少し頑張らないと抜かれるわ！
「うー！」
とりあえず、テープを切ってゴールに着いた。

すると間もなく、あたしは僅かな差で1着だということが分かった。
「はぁ……はぁ……」
パチパチパチパチパチ!!!
あたしが退場すると、観客たちから惜しみない拍手が送られていた。
「ふう……」
持ち場に戻り腰掛けると、あたしは少し、笑顔になる。
ともあれ、これで午前中のあたしの出番は終わり。
あたしは永原先生の隣に戻る。
「石山さん、すごいわね」
永原先生があたしをねぎらうように言う。
「はい、何とか逃げ切れました」
おそらく、後数メートル長ければ負けていたと思う。
そして、あたしの次に開かれる競技は１０００メートル走、ここで浩介くんが登場する。
「浩介くん、頑張ってね」
「おう、分かってるさ」
立ち上がった浩介くんの左手には、婚約指輪がはめられていた。
それを見ると、あたしはとても頼もしい気分になる。この指輪があれば、大丈夫って。
浩介くんと、その他の走者が入ってくる。
浩介くんを除けば、陸上部ばかり。
「浩介くん、頑張って！」
浩介くんも、あたしにかっこいいところを見せたいと言っていたし、頑張ってくれるよね？
「位置について……よーい！」
パアンッ！
永原先生の合図で一斉にスタートする。
１０００メートルなので、全力疾走ではない。ペース配分を考えなければならないから。

まだ、集団は離れない。
「浩介くん！　頑張ってー！」
あたしも、精一杯応援する。
校庭のトラックは、１週が４００メートルになっているので、２週半する必要がある。
浩介くんは１週目が終了した時点で先頭集団のまま流している。
既に数名が後ろに引き離され始めた。
もう１週、更に脱落者が出て、浩介くんを含め３人に絞られる。
「キャー！　浩介くん、頑張ってー！」
あたしがもう一度、黄色い声援を送る。
すると、それに反応するかのように、浩介くんが一気にスピードを上げ、残りの２００メートルで残りの２名を引き離して優勝した。
「あーん！　浩介くん素敵！　大好き！」
あたしは目がハートマークになりながら、息を上げている浩介くんに見とれてしまう。
「ぜぇ……ぜぇ……ふぅ……はぁ……」
浩介くんは、陸上部の部員たちを押しのけての優勝だった。
去年は短距離だったけど、陸上部員達には負けていたし、浩介くんの体力の強さがより強くなっているんだと思う。
「浩介くん、これ」
「ああ、ありがとう」
あたしは、足元からスポーツドリンクを拾って、浩介くんに渡してあげる。
これはあたしが作ったんじゃなくて、浩介くんが持ってきたものだけど、あたしが渡すことに意味があるんだと思いたい。
浩介くんも、あたしがはめている婚約指輪をじっと見ていたし。
「ふう、これで午前はおしまいだな」
「うん」
あたしと浩介くんで隣同士に座る。
そしてあたしのもう一つの隣には、永原先生が陣取っている。
とりあえず、体育祭の競技を眺めつつ、永原先生に歩美さんのこと

について聞いてみる。
「永原会長、あの後歩美さんからは何かありました？」
「いえ、まだありません、学校の方からも、何も連絡はないです」
やはり、まだ動いていないみたいね。
「……分かりました」
ともあれ、様子を見ても反応がないなら、電話で急かすしかない。
内容証明郵便だから、「受け取っていない」は通用しない。
「優子ちゃん、また新しい人？」
今度は浩介くんが聞いてくる。
うん、浩介くんには知っておいたほうがいいよね。
「うん、『歩美さん』って人で文化祭の少し前に東京で発病した子よ。あたしたちのちょうど1個下でね、カウンセラーはあたしが務めているわ」
浩介くんに、歩美さんのことを話す。
「へえ、優子ちゃん頑張ってるんだな」
浩介くんも、あたしが協会で活躍しているのは嬉しいと思う。
「えへへ、永原会長も、比良副会長も、関東支部長さんも忙しかったからね」
「で、ちょろっと話を聞く限り、その『歩美さん』ってのは、学校とトラブってんのか？」
浩介くんが心配そうに言う。
「うん、学校の方がね……更衣室を隔離しちゃったのよ」
「あー、優子ちゃんにもあったなあ……」
浩介くんが懐かしそうな顔で言う。
あの思い出も、既にこうやって振り替えれるなら、もう心配はないわね。
「私はまだ、恵まれていたわよ。永原先生がいたんだもの」
「ええ。それに、昔なら患者さんは、『患者さんはもう完全な女性だから』と言って、女子更衣室を使わせるように言えば学校側も、患者さんも素直にそうしてくれることが多かったわ。話がこじれるようになったのはここ最近、21世紀になってからよ」

あたしたちの会話を聞いていた永原先生が、遠い目をして言う。
それでも、今回みたいに抗議文にまで発展したのは初めてだった。
協会にとっても、完全に未知の領域を進んでいる。前例のないことをするのは、何だかんだで大変なことでもある。
「今後、そのケースは増えそうですね」
「ええ、注視しないといけないわ。私たちは心も体も女の子にならないといけないから。そのために、他の女性と同じように女子更衣室や女湯を使うのは、患者のアイデンティティのためにもとても重要なことよ」
「ええ」
あたしだってそうだった。
まだ浩介くんや他の男子に受け入れてもらえなかった時、初めて女子のみんなからあたしが受け入れられたと感じたのも、クラスの女子たちから「一緒に着替えよう」と言われたことからだった。
あの時の嬉しさは、今でも脳裏に焼き付いている。小谷学園で生活するために、女の子としての、本格的な第一歩だったから。
そしてそんなあたしの扱いに最後まで抵抗したのも、小野先生と教頭先生だった。
その２人だって、後夜祭の時にプロポーズを受けた時に、正式に謝罪してくれた。
先生の側から、生徒のあたしの頭を下げるのは、相当勇気が要ったことだと思う。
あたしたちは体育祭の種目を見る。去年や一昨年に参加した競技も多い。
綱引き合戦もあってなかなか面白い。
一方で、得点模様は、早い段階で白組が大差を付けてしまい、現在は得点がハンデ戦になっている。
「えーただいまを持ちまして、２０１８年度小谷学園体育祭、午前の部を終了いたします。これより昼食休憩に入ります午後の部は――」
「ふう、浩介くん行こうか」

「おう」
生徒会長さんの放送とともに、午前の競技が終了し、各々解散する。それに従い、あたしたちも食堂へと行く。
浩介くんの午後は長距離リレーで、アンカーで出場する予定になっている。
「浩介くん、リレーも頑張ってね」
「分かってるぜ。優子ちゃんにかっこ悪いところ見せられねえしな」
浩介くんが、頼もしい声で言う。
お昼ご飯は、あたしがカレーで浩介くんはカレー大盛り。
浩介くんの方が量が多いけど、食べ終わるのは浩介くんが先、そしてあたしたちがこの体育祭ですることと言えば――
「うんっ……ちゅっ……じゅぱっ……」
「れろっ……はむっ……べろっ……」
屋上で、婚約指輪をはめた体操服の男女がディープキスをしている。
浩介くんとあたしが、どんどんとのめり込んでいく。
あたしは、浩介くんの手で、優しく胸を触られ、お尻を触られる。
「はぁ……はぁ……やっぱり、優子ちゃんエロいよ」
「あはは、もしかして？」
「さっきの競走で、優子ちゃんゆっさゆっさとこの胸揺らしてて、学校中の男子が見てたぞ」
確かに、胸が揺れているのは分かっていたけど、あたしの体格じゃあしょうがない一面もある。
「あうー、でもしょうがないし――」
「むー！　このスケベなおっぱいめ！」
むにっ……むにんっ！
「いやあん！　浩介くんえっちー」
浩介くんは、全校生徒の前であたしが胸を揺らして走って注目を浴びたのに嫉妬しているみたい。
でも、こうやって胸を揉ませてあげれば、浩介くんはたちまち上機

嫌になってくれる。
　もみっ……むにっ……
「はぁ……はぁ……浩介くん……」
　あたしの中で、更に興奮度が高まっていく。
　屋上には、誰も来なかった。

「ふう、優子ちゃん、その、俺……ちょっとトイレに行ってくるね。先に戻っててていいよ」
「うん、行ってらっしゃい。先に戻ってるね」
　しばらく触られていると、浩介くんがふと我に返ったように言う。
　最も、トイレの中でまた我を忘れると思うけどね。
　あたしは、「先に戻ってる」とのことで、校庭の方へと走っていく。
　その間、浩介くんがしている所を想像すると、あたしまで興奮しちゃうので、何とか冷静にを心がけた。

「ふうただいま」
「あら？　石山さん1人なんだ」
　永原先生が不思議そうな目で見る。
「あーうん、浩介くんはその……おトイレに用事があるって……」
　って、ごまかしちゃってもよかったかな？
「あーうん、そうだよね。篠原君も押さえるの大変よね。石山さんみたいな女の子と婚約者になっちゃったんだから」
「あ、あはは……」
　あたしは思わず苦笑いしてしまう。
　永原先生も、遠い昔とは言え、男だった時代もある。
　だからこうして、男の気持ちも分かってくれるのだ。
　ピピピッ……ピピピッ……
「あ、石山さんごめん」
　突然、永原先生の方から、携帯電話の音が聞こえてきた。
　永原先生がガラケーを取り出して、通話をし始めた。永原先生、あたしと同じくガラケーなのね。

「はい、はい……あ、山科さん？　はい、今は隣にいますから、代わってもいいですか？」
　永原先生が電話を切らずに顔を外す。
「歩美さん？」
「ええ」
　電話の相手はそうみたいなので、あたしは電話を代わる。
「もしもし、石山ですけど」
「あ、石山さん、山科歩美です」
　電話越しで、歩美さんの声が聞こえてきた。
「それで、どうしたの？」
「はい、その……さっき先生から呼び出されて……その……」
　歩美さんはいかにも言いにくそうな口調で話している。
「うん」
「抗議文を出すように仕向けたのは私なのかと言われて……」
「そんなわけ無いじゃないの。最終的に決めたのはあたしたちよ」
　あたしが、混乱している歩美さんを安心させるように言う。
「はい、違うと言ったんですが、信じてもらえなくて」
「で、先生は何て？」
「学校の評判を落としかねないから、やめなさいって」
「はぁー」
　あたしは、思わずため息をつく。
　本当に、どうしようもない大人たちね。
「石山さん？」
　歩美さんのキョトンとした声が聞こえる。
　おっといけないわ。
「いい歩美さん、もはやあなたの意思とは関係ないわ。協会として、また同じ学校でもし次のＴＳ病患者が出た時のためにも、そこの学校には何が何でも意思を曲げてもらいます」
　あたしが力強く言う。
　そう、もはや歩美さん個人の問題にとどまらない。もし次に、そこの学校でＴＳ病患者が出たら、それだけで転校を余儀なくされる事態

になりかねない。
「あの、もしかして」
「ええ、私の方と、永原会長の方で抗議電話を入れるわ。それで次の体育までに考えが改まらないなら、次の手を考えるわ」
「はい」
「安心して？　いざとなったら裁判の費用はこっちで出すわよ」
「ありがとうございます」
歩美さんが、電話越しでお礼を言ってくれる。
この戦い、負けるわけにはいかないわね。
「それじゃあ、永原会長に代わるわね」
「はい」
あたしは、もう一度電話を引き離し、永原先生に電話を代わる。
「もしもし山科さん？　うん、私たちは絶対味方だからね。転校するのも手だけどそれは裁判所の強制執行さえもはねつけた時の最終手段よ……ええ、次に同じ患者が出てきた時のためにも、負けちゃだめよ……ええ、あなたがここで引いたら、前例を作っちゃうわ」
永原先生が、電話越しで歩美さんと話している。
そう、前例のない事に、前例が出来るというのはとても大きいこと。
「優子ちゃん、戻ったぞ……ってどうしたんだ？」
永原先生が歩美さんと電話していると、浩介くんが戻ってきた。
浩介くんの目からは、永原先生が話しているように見える。
「ああうん、歩美さんから電話よ」
「おう、そうか……」
「ええ……うん、じゃあ、切るわね……失礼します……」
永原先生が電話をし終わり、あたしたちの方を向く。
さて、永原先生はどう出るかな？
「あ、篠原君、帰ったんだ」
「ああ」
浩介くんはすっきりした表情で言う。
「浩介くん、大丈夫？」
「ああ、おかげですっきりしたよ」

「それは良かったわ」
浩介くんは、どうやら煩悩を退散したらしい。
それよりも、今は歩美さんのことだ。
「永原会長、歩美さん、どうしますか？」
「ええ、あまり使いたくはないけど、プランBに移行ね」
永原先生が聞き慣れない言葉を話す。
「プランB？」
浩介くんがその聞きなれない言葉に首をかしげる。
「ええ、半年前、あたしたちを取材した『ニュースブライト桜』ってあったでしょ？」
「あ、ああ……確か今は専属なんだっけ？」
浩介くんにも、時折協会の情報は入っている。彼は維持会員だから正会員のあたしほどじゃないけど。
「ええ」
「じゃあつまり、そこを使って」
「そこの学校を批判するというわけよ」
「えげつねえなあ……」
浩介くんはやや驚いた風に言う。
でもこうした謀略は、永原先生のお手の物だ。
「でも、いきなりじゃないわ。まずはあたしと永原先生で、体育祭が終わったらそれぞれ抗議電話を入れるわよ」
幸い、その学校は私立だ。
おそらく、プランCである裁判までは進まない。
マスコミに批判を受ければ、案外あっさりと引き下がってくれるはずだ。
「なるほどねえ……」
「抗議電話は、あたしがスマートに、永原先生が強硬に抗議するわ。もちろん永原先生からかけるわよ」
「だけどよ、抗議電話では、おそらく学校は態度を硬化させる可能性が高いんじゃねえか？」
浩介くんが疑問を呈する。

「うん、だけど、いきなりメディアに訴えるなんて強硬手段を使うのは下策よ、まずは段階を踏むことで説得性を持たせないといけないというわけ」
永原先生が、今回の作戦の趣旨を軽く説明する。
そう、とにかく第三者目に見て、やむに已まれずという感じのある話にしないといけない。
「うーむ、それで、マスコミを使うというわけか。でもほかのメディアはどうするんだ？」
「大丈夫よ。既に考えてあるわ。その方法も含めて、高島さんには指示を出しておくわね」
永原先生が、さらりと「指示」と言う。まあ、実際には「助言」という形はとっているんだけど、間違ってはいないと思う。
「で、どういう指示を出すんですか？」
「ええ、まずは『こういうことがあったので、注視してください』と言うわ。つまり準備期間みたいなものよ」
「ふむ、取材の準備かあ……」
とにかく、これから大変なことになりそうね。

## 永原先生の怒り

「えー、もう間もなく、２０１８年度小谷学園体育祭、午後の部を始めたいと思います。生徒の皆さんは速やかに持ち場にお戻りください」

拡声器から聞こえてきた生徒会長さんの声とともに、一般客の席から多くの生徒がこっちに向かってくる。

「そういえば、浩介くんの両親はどうしたの？」

「あーうん、今日は家にいるって」

「あはは、あたしも……」

あたしの両親も、「義両親」も、薄情というよりは、もうすぐ結婚する身であることや、あたしの運動能力の無さを鑑みての配慮という感じだ。

やがて、時間とともに午後の部が始まる。

最初にあるのは玉拾い競争。これは、去年あたしが泣かされちゃって、保健室まで浩介くんにお姫様抱っこされた競技だわ。

やっぱり、どうしても思い出しちゃうわね。

その後も、次々と競技が進む、そして、3年女子の番になる。そう、障害物競走が始まる。

あたしの足はずば抜けて遅いので、一番成績の悪いグループで、しかも障害物なしのハンデをもらうことになっている。

「じゃあ行ってきます」

「優子ちゃん、がんばれよ」

「うん」

浩介くんに見送られて、いざ競技へと進む。

「優子ちゃん、頑張ってね」

「あ、うん」

同じ競技で競走する相手にまで心配されてしまっている。

そう、障害物競走のハンデは、さっきの3人4脚より小さい。場合によってはハンデをもらって最下位という救いようのない惨めな展開が待っているかもしれない。

もちろん、そうならないように努力とハンデの調整はしているんだ

けど。
「位置について……よーい！」
パンッ！
号令役の先生の合図とともに一斉に発進する。
あたしは、あっという間に突き放されてしまう。相手はハードル走なのに全く追いつける気がしない。
でも、次の平均台、これなら少しは差を詰められる。
「はぁ……はぁ……」
……そう考えたあたしが甘かった、みんなバランス感覚が身についていて、平均台の上でさえ、あたしの全力疾走よりも速く、あたしが平均台に着くころには、みんなは次の網に差し掛かっていた。
「ま、待って……！」
必死に呼びかける。別に八百長でもいいわ、あたしだけ障害物なしで、最下位にだけはなりたくない。
幸い、網のスピードはあたしの走るのよりは遅い。あたしは何とか差を詰めた。
この網が、とても長い。従来の障害物競走ではハンデとして小さすぎる。
また最後の直線区間にも、ハードルが設けられている。
「ふぅ……ふぅ……」
あたしは、遂に1位になった。でも、走るスピードはどんどん遅くなる。
もう少しなのに……どうしても、脚が思うように動かない。
歓声が届く、網を潜り抜けた人がいた。
残り10メートル、ハードルが倒れる音がする。もちろんなぎ倒してもルール上問題はない。
残り3メートル、あたしの背後に、はっきりとした気配がする。でも、振り返る余裕はない。
残り1メートル、ほぼ並ばれて、そして……
あたしは、2着だった。ハンデ戦としては、順当な落としどころ

だった。
うーん、もう少し胸が大きければ、あたしが先にテープを切っていたのに。
「優子ちゃん、お疲れ！」
「うーん……」
競技から戻ってきて、あたしは自分の胸を凝視する。
やっぱり未練が残る。
「どうしたの優子ちゃん？」
「うーん、あたしの胸、もう少し大きければ、1着だったのに……」
あたしは、もう一度胸に視線を追いやる。
「ちょっと優子ちゃん、まだ胸大きくなりたいの!?」
「な、なんて贅沢な……贅沢すぎますよその悩み！」
桂子ちゃんと龍香ちゃんが誠にごもっともな抗議している。
この大きさで「もっと大きくなりたい」とか世の女性からミンチになるまでフルボッコにされても文句は言えない。
「あはは、ごめんなさい……」
あたしも、これ以上大きくなっても別にいいけど、なりたいというほどまで積極的なものじゃない。
「そもそも優子、胸大きくなったら重くなってかえって遅いだけだよ。速くなりたいなら、その大きいの取らなきゃ」
虎姫ちゃんがぐうの音も出ないほどの正論を言う。
確かに、胸が思いから足も遅いのよね。
「うー、虎姫ちゃん手厳しいわ」
「胸が大きいとかえって遅い」、まさに寸鉄人を刺す言葉よね。
まあ、確かに、今の大きさで十分よね。
「ま、女の子は運動できなくてもそこまで悲観する必要ないわよ」
桂子ちゃんが慰めるように言う。
「うん」
そうよね、あたしには、浩介くんっていう守ってくれる素敵な男の子もいるもの。

とにかく、これであたしが参加しての体育祭は終了した。去年は保健室送りになっちゃったけど、今年はちゃんとやり遂げられてよかったわ。
そして後は、浩介くんのリレーを待つばかり。
得点は、ハンデもあって一進一退になっているけど、ハンデを付けられた時点で、勝利チームは確定してしまっている。
じゃあ何のために得点計算するのかというツッコミは、この際考えないでおきたい。
色々な競技がある。去年は午前だったのも午後にあることもある。
そして今年のリレーは騎馬戦の後の最後に行われることになる。
騎馬戦は集団戦と個人戦、残念ながら去年浩介くんが見せた大将先頭突撃は行われていない。
あれは浩介くんの圧倒的な個人技があってこそのものだものね。
「それではいよいよ最終種目、リレーを開始します！」
「じゃあ、俺行ってくるな」
浩介くんがかっこよく立ち上がる。
戦いに行く男の凛々しい顔だわ。
「うん、頑張ってね」
浩介くんはアンカーとして参加する。
このリレーは、学年の垣根を越えて行われる数少ない競技で、アンカーは3年生がするのが慣例となっている。
浩介くんを除いたアンカーも、全員俊足が多い。
浩介くんは長距離走の後というのもどう影響するかは分からない。
今回のリレーは走者1人あたり１００メートルを走り、それが５人となる。
「浩介くん……」
アンカーの役割は大きい。どちらにしても、１００メートルならばほぼ全速力になる。
「よーい！」
パンッ！

フライングはなく、全員が一斉にスタートする。
トラックの周囲の長さもあるため、浩介くんのチームは一番後ろ、つまり1番内周を走ることになっている。まずは最初の１００メートルではほぼ全員が互角に走る。
２人目、ここまでは1年生が担当する。
浩介くんのチームは3位につけている。
「あ！」
まずいわ。３人目で浩介くんのチームが抜かれちゃったわ。
あ、でも、1チームバトンをミスしてくれたわ。よしよし、これで3位ね。
４人目、1位と2位が入れ替わって会場は盛り上がるけど、あたしには関係ない。
「浩介くーん！　頑張ってー！」
あたしが思いきって声援を出す。
そして浩介くんにバトンが渡る。
「うおお速い！」
浩介くんはとても速かった。
陸上部だったはずの前方の2走者をあっという間に抜き去り、そのまま１００メートルを逃げ切り逆転で1着になった。
ちなみに、浩介くんがゴールした時点で1位も2位も同じ白組なので点数には影響はない。
「はうー、浩介くんカッコいいわあ……！」
「石山さん良かったわね。婚約者が体育強くて」
永原先生がそんなことを言う。
確かにあたしもそう思うわ。
「うん」
もしこれが逆だったら悲惨だったよね。
ともあれ、陸上部を負かした浩介くんは、また自信をつけてくれると思う。
「ともあれ、これで全部終りね。後は閉会式だけよ」
「うん」

でもあたしたちは、この後が本番になる。
そう、歩美さんのことでだ。
「ふう……優子ちゃん、どうだった俺の走りは？」
「うん、もう素敵だったわ！」
浩介くんの「一仕事終えた」という雰囲気は、あたしにとってはとってもうっとりするものだった。
「良かったよ。鍛えた甲斐あったってもんだ」
浩介くんは力こぶを見せてくれる。
でも今回、腕力は使わなかったような？
「あーん、浩介くん大好き！」
「うおっ！　もう、優子ちゃんは甘えん坊だな！」
あたしが浩介くんに抱き着くと、浩介くんも応じてくれる。
なでなで
「えへへ……」
浩介くんに頭撫でられるの大好きだわ。思いっきり甘えられるもの。
あ、浩介くん大きくなってる。
「またいちゃついてんな」
「どんどん激しくなるよな、大丈夫かな？」
「まあ結婚しちゃうわけだしなあ……」
高月くんたちによる、「呪いの儀式」もなくなり、また「鬱アピール」も無くなって、あたしたちはストッパーもなくなった。
そのために、もしかしたらちょっとエスカレート気味かも。
「こらこら2人とも、いちゃつきすぎちゃだめよ」
「あ、はーい永原先生」
あたしは永原先生から注意されて、浩介くんから離れる。
浩介くんの顔を見ると、真っ赤になっていた。まあ、あたしの顔も同じくらい赤いと思うけどね。
「さ、閉会式に行きましょう」
永原先生の号令とともに、あたしたちも閉会式のため、校庭に整列

する。
朝礼台には、進行役も兼任している校長先生がいた。
「えー、ではこれより、２０１８年度小谷学園体育祭、閉会式を開催いたします。はじめに、私、校長先生から話があります」
ざわついていた校庭が沈黙に包まれる。
「本年も無事に、体育祭を終了できたこと、誠に素晴らしく思います。今年の体育祭が、生徒の皆さんの健康と成長に少しでも役立てれば幸いです。以上！」
パチパチパチパチ！
校長先生の簡潔かつ堂々たる話し方に、校庭の生徒からも押見のない拍手が送られる。
そして、いくつかのスピーチなども終わり、あたしたちは無事に閉会式を終えた。
そして教室で、再び体操着から制服へと着替える。
まずは女子からで、あたしはいつも通りの着替え方で、制服姿に戻る。
「石山さん、この後頼むわね」
「ええ、作戦通りいきましょう」
男子の着替えを教室の外で待っていると、永原先生から口頭で連絡が入る。
作戦プランとして、まず永原先生がクレームの電話を入れる。ここではとにかく大声で抗議することになっていて、そこから時間をおいて、あたしが電話をし、そこでは緩い口調でお願いするように言う。
「ところで永原先生、裁判になったら勝てる見込みはあるんですか？」
「もちろんあります。戸籍でも生物学上でも、性自認においても、あの子、山科さんは女性です。そういう意味では石山さんを女子更衣室から隔離するのと同じことよ」
永原先生が、強い口調で言う。
「……分かりました、とにかくやってみます」
「ええ、お願いするわ」
そしてしばらくして男子も着替え終わり、永原先生がホームルーム

開始を宣告した。
「連絡事項は以上です。部活委員会がある人も、帰宅する人も気をつけてください。以上です。石山さんは後で私の所に来てください」
永原先生の号令とともに教室が解散する。
それにしても、ホームルームの時間で協会の仕事について言っちゃっていいのかな？　って今更ながら思う。
まあ、考えても仕方ないわね。
「石山さん、屋上に行きます。風が強いかもしれないので注意してください」
「……分かりました」
永原先生に屋上行きを宣告され、あたしたちは屋上に向かう。
幸い、そこは風がなく、あたしは鞄を使ってうまく簡易的な椅子の代わりにして座る。
「じゃあ、かけますね」
永原先生が携帯電話を取り出して、問題の学校へと電話をかける。
「あの、私、日本性転換症候群協会会長の永原ですけれども……はい、校長先生か教頭先生、または担任の先生をお願いします……はい……」
永原先生がいったん電話を下げて休憩する。
おそらく、取り次いでいるのだろう。
やがて、永原先生が再び携帯電話を耳にかける。
「はい……私、日本性転換症候群協会会長の永原といいます……はい、貴校に在籍している山科歩美さんなんですけれども……はい、本人に改めて意思確認しまして、はい、女子としての扱いを望んでいます……ええ、ですから彼女はトランスジェンダーではないんです……はい、いやですから彼女は女の子ですから……ですから、過去のことが関係ないんです……あの、あなたバカですか？　ろくな教育受けてないんですか？　私は明治の時から教師をやってるので言わせてもらいますけど、あなたみたいに理解力の欠けた人間が教師をするなんて子供がかわいそうですわよ」

「な!?」
永原先生が普段からは想像もつかない言葉を使って相手を罵倒している。
言葉は罵詈雑言なのに、口調は信じられないくらい冷静で、それがなおの事不気味さを演出している。
「あら？　図星だったかしら？　ええそうですよね、そうやって我を忘れて怒り出すんですから、本当のこと言われて、恥の上塗りですか？　所構わず喧嘩に明け暮れてた江戸時代の人間でさえ、あなたよりはもう少しまともで筋を通す人ばかりでしたよ……じゃあ聞きますけど、もし山科さんの過去を知らなかったら、彼女を女性として扱いますよね？　……はぁー、いやね、脳が劣化してるんじゃないんですか？　こんなところで担任なんかしてないで、若年性認知症の検査を受けられてはどうですか？　ええ、喧嘩売ってるんじゃなくて、あなたのこと、教師の先輩として本気で心配なんですよ。私の過去の同僚にも同じような人がいましてですね」
落ち着いた口調で話す永原先生に、あたしは多大な恐怖感を覚える。
こんな言葉を言われたら、相手は「喧嘩を売っている」と言うに決まっているが、永原先生はさらに相手を手玉に取っていく。
「切るんですか？　そうやって逃げることしか頭にない、ますます認知症の疑いが強いですね。それでもいいんですか？　訴えられるのは学校ですよ、彼女自身の意向も、客観的な性自認も、戸籍の上でも、生物学上でも、山科歩美さんは女の子ですよ。それ以外の扱いしているのは、世界中でもあなたたちくらいですよ？　いい加減負けを認められてはどうですか？　過去にも裁判がありますけど、私たちは全てで勝訴してますよ」
これが脅しのための嘘だという事は知っている。
何故なら、永原先生は以前「ここまで発展するのは初めて」と言っていたから。
「礼儀？　今更それを持ち出すんですか？　つまり、論理的には抵抗できないから感情論で人格攻撃に逃げますって言っているようなも

のですよ。え？　敗訴しても従わない？　日本じゃなくて将軍様を崇拝する北の国にでも移住したらどうですか？」
　電話越しの先生は、今頃顔を真っ赤にして怒っていることだろう。
　永原先生は真田家の人、その上５００年の人生を生きている。やはり口喧嘩は名人級だわ。
「ええ、転校させるわけにも行きませんよ。それならもし将来同じ患者が現れた時に、あなたの学校は同じ対応をすると、世間に向けて宣伝することになりますよ。自分たちで全世界に向けて大声で『私たちの学校はＴＳ病患者に対する差別主義を推進します』って発信したいんですか？　発信したいんですか？　はいかいいえでこたえてください……『はいかいいえ』の意味も分からないんですか？　教師なんかやめて小学校の国語の授業からやり直してはどうですか？　認知症の治療にもいいですよ」
　電話越しでも、永原先生がますます追い詰める様子がわかる。
「で、どっちなんですか？　発信したくないなら素直に言うことを聞きなさいよ？　……大人の事情なんて、裁判所じゃ通じませんよ。そんなことも分からないんですか？　あなた義務教育を卒業したんですか？　いえいえ、ですから、私は本気であなたのことが心配なんですよ。まさか小中学校レベルの理屈もわからない知性しかないような人が教師をやっているなんて、教師歴１３０年の私としても到底信じられませんから」
　うー、本当に怖いわ。永原先生だけは絶対に敵に回しちゃいけないわね。
「いいですか？　次の体育の授業までに、もしいい返事をもらえなければ、私たちは次の手段に移りますからね。内容証明郵便が送られた意味を、もう一度考えてくださいね……ええ、では……はぁぁーーー」
　永原先生が電話を切る。
　そして深くため息をつく。
「永原会長、お疲れ様です。どうでした？」
　あたしは立ち上がって、永原先生に感触を聞いてみる。
　多分、ダメだと思うけど。

「あの時の小野先生や教頭先生と同じよ。理解して配慮しているという自分に酔っていて、こちらの話を聞こうともしないわ」
「でも、ああやって罵倒したら、そりゃああなるかなとも思いますけど」
　意固地になっているという可能性も高い。と言うか絶対にそうよね。
「ええ、だって相手を怒らせることも重要ですから」
「え!?」
　永原先生がさらりととんでもないことを言う。
「とにかく、この手の善意に酔った人間を相手にする場合、もう洗脳するくらいしか方法がありません。そのためには、まず相手の人格を否定し、徹底的に劣等感を植えつけさせる必要があるのです。その後でマスコミに報じられたり、裁判で負けた後に、今の煽りが効いてくるのです」
「確かに、それはそうよね」
　永原先生が言うのも最もだわ。
　今回だけその場しのぎで裁判に勝っても、相手がますますかたくなになって、確率は低いけど、将来的に同じ患者がこの学校に現れたらまた同じことが繰り返されかねない。
「そのためには、自我を壊す必要があるのです。そして最後に石山さん、あなたの存在です。ただ徹底的に否定するのではなく、救い上げる存在が必要です。打ちのめされた後にやさしい言葉を投げかければ、大抵の人間はころりと逝ってしまいます。ふふっ、小野先生と教頭先生の場合、ここまで大掛かりにする必要はなかったですけれどもね」
　永原先生が不敵な笑みを浮かべている。
　正直に言うと、頼もしい味方ではあるけど、怖いのも事実だわ。
「それじゃあ、電話、かけますね」
「ええ、優しい言葉で、懇願するように説得してください。失敗しても構いませんよ」
「はい」

永原先生の指示の下、あたしが、もう一回、歩美さんの学校に電話をかける。

# アメとムチ

「はい」
「すみません、あたし、日本性転換症候群協会の石山と申します。はい、山科歩美さんについて――」
「申し訳ありません、今担任の方がですね、席をはずしておりまして」
「いえ、いるのは分かっています。私たちには蓬莱教授がいますからね。あたしたちに嘘は通じませんよ。とにかく、裁判沙汰にしたくないなら、つないでもらえますか？」
　根拠は無いけど、はったりをかましてみる。
　あまり使いたくないけど、とにかく電話に出てくれないことには仕方がない。
「は、はい分かりました」
　どうやら、うまく行ったみたいね。あたしたちが盗聴しているとも思ったのかな？
「はい、その……」
　さっきの担任と思われる人が電話に出る。
「もしもし、あたし、日本性転換症候群協会の石山優子といいます」
「お前んところの会長、失礼な奴だな！」
　やはり、怒っていた。
「あたしに怒っても、どうにもなりませんよ。あたしたちの会長は、とても純粋な方ですから、あれでも本気で心配になって、ああ言ったんですよ」
　我ながら、とんでもない嘘つきだと思う。
「んなわけがあるか！　あんな、４００歳だか５００歳だか知らねえが、人を馬鹿にしやがって！」
「ふう、ともかく会長のことはいいです。私は、協会の正会員として、山科歩美さんの担当カウンセラーをしています。私たちＴＳ病患者は、女として生きていかなければ、やがてその歪みで、例外なく精神がやられて、自殺へと追い詰められていくんです」
「っ！　その前提がおかしい！」

使い古された反論を、やはりしてくる。
「おかしくありません。何故なら、それ以外の道をたどった患者は、たった1人の例外もなく、全員が自殺しているんです。ええ、1か月半前にもありましたよ。関西の方で、あなたが扱ったみたいに、男とも女ともつかないような生き方をして、最終的に遺体となって発見された。飛び降り自殺だったそうです、あなたは自分の生徒を、自殺させたいんですか？」
「そ、そんなわけがあるか！」
電話の先生は、永原先生に煽られたためか、かなり興奮している。
あたしは「優子」らしく、冷静に優しい口調を心がける。
「でしたら、あたしからもお願いします。歩美さんは、女性としての扱いを望んでいます。歩美さんは、心も体も……赤ちゃんが産めることも含めて、女性なんですよ。赤ちゃんが産める男性なんて、この世にいないですよね？」
「うっ！　だが、しかし！」
「昔男性だったから……ですか？　永原会長は、４８０年間女性をしていて、男性だったのは人生最初の２０年、まだ織田信長が４歳だったような時代の話ですよ？　あなたは、そんな永原会長も、女扱いできないんですか？　永原会長が女性になったのは、あなたの遠い祖先が生きていたような時代ですよ？」
「だが、山科は1か月くらいだ！」
やはり、反論は使い古されていた。論破するのは造作もないこと。
「ＴＳ病患者への治療法として、このことは早ければ早いほどいいのです。初期対応を間違えれば自殺なんですよ、いいですか？　もし貴校がきちんと女性として扱えば、世間的にもアピールになります。それに、わざわざ歩美さんの更衣室を準備する手間やコストも考えてください」
「っ！」
そう、これは小野先生にも使った論法。
あの時は通じなかったが、ここでは通じるはず。
「歩美さんも嫌な思いをして、あたしたちも抗議文を出さざるを得な

くて、学校側もコストが高まって、みんなが嫌な思いするだけですよ。それとも、あなたが嫌な思いしてないから関係ないと？」
「っ！　ええい！　もう話は聞かん！　問答無用だ！」
　ぶちっ、プープープープー……
　あたしの説得は及ばなかった。
「石山さん、ダメみたいね」
「はい」
　最終的に、利益論に立って説明したが、無理だった。永原先生の罵倒が、よっぽど効いたんだと思う。
　もはや説得は無意味、腕ずくで解決するしかない。
「仕方ありません、全面戦争と行きましょう」
「……はい」
　永原先生は、おそらく最初からこれを予見していたようにも見える。
「高島さんと山科さんにも、同席してもらいますので、２人の予定次第ですが……ともあれ、また会合にかけます」
　永原先生が淡々と言う。
「分かりました。あたしは歩美さんと連絡を取ります」
「ええ、私は高島さんに、あ、石山さん、これはもうしばらく後でいいから天文部に行ってもいいわよ」
「……はい」
　突然天文部のことを言われあたしは天文部に向かう。
　ともあれ、ここからは永原先生に任せるとしよう。

「優子ちゃん、どうだった？」
「……」
　天文部に入って、最初に桂子ちゃんがあたしを問いただしてきた。
　あたしは静かに首を横に振る。
「ちっ……やっぱり、うまくはいかねえか」
　浩介くんが歯痒そうに言う。
「ええ、永原会長が、全面戦争だって言ってました」

「全面戦争ねえ……大きく出たわね」
桂子ちゃんがやれやれという感じで言う。
「手始めに、マスコミを使って、それから山科さんには、できればだけど、体育の授業をボイコットしてもらうわ」
成績に影響しちゃうからもちろん強制はできないけど。
「何だか大ごとになってきたなあ」
「それだけ、頑固な人間を、暴力なしで従わせるのは難しいのよ」
あたしは、投げやり気味に言う。
この話題もここで終わり、あたしたちは、天文部の活動を再開した。

永原先生の全面戦争宣言から数日後、歩美さんは相変わらず体育の授業の着替えを隔離されたままで、クラス内でも孤立気味になっているという。
そして今日は、高島さんと歩美さんとの調整が終了し、全体会合が開かれることになった。
また、時期的にまだ早いものの、歩美さんの要望もあって、彼女を協会の普通会員に迎え入れることになった。あたしがカウンセラーを担当した普通会員としては早くも2人目になった。
そして今日はその会合の日、あたしは歩美さんをエスコートしながら協会の本部に入る。
「前来た時も思ったんですけど、ここは結構広いですね」
歩美さんは、幸子さんとはまた違う感想を抱いている。
「ええ、さ、行くわよ」
あたしが、扉を開けて中へと案内する。
「あ、いらっしゃーい」
「あ、会長さん……」
永原先生に、歩美さんが反応する。
「さ、座って。歩美さんの席はここよ」
「は、はい」
今日は急な会議なので、正会員さんも、全員の参加ではない。
だけど、議決には影響はない。

「山科さん、よろしく。私は協会の副会長の比良道子よ」
「はい、よろしくお願いします」
歩美さんは、比良さんと会話を交わす。
その後も続々と人が入ってくる。
ガチャッ……
「待たせたな」
入ってきたのはなんと蓬莱教授と高島さんだった。
高島さんはともかく、蓬莱教授まで会合に参加してくるなんて思わなかった。
「蓬莱教授、どうしてここに？」
あたしは驚きのあまり、言葉に出してしまう。
「ああ、俺の研究所の宣伝部も、出来立てだけど、協力したいんだ」
「おー！」
歩美さんの表情が、パッと明るくなる。
蓬莱教授が味方してくれることになった。
蓬莱教授は遺伝学の専門家だけど、ネームバリューのある人が味方になるのはそれだけで心強いのだと思う。
「さ、蓬莱先生も来たことだし、時間も押してるから、そろそろ始めるわね」
永原先生の号令で、会合が始まる。
「皆さん、本日はお忙しい中、会合に参加くださいましてありがとうございます。さて、今回の会合は、とても大切な会合になります。何故なら、学校側がここまでかたくなになった事例は初めてで、今回大事にすることで、今後患者が発生した際の学校全体への圧力になります」
永原先生が会合の概要を説明する。
「一つ質問いいですか？」
「はいどうぞ」
高島さんが声をかける。
「その、どうしてそこまでして、山科さんに女子更衣室を使わせたいのでしょうか？　他にもっと穏便な方法があると思うんですが？」

やはり、この質問は出た。
「はい、いい質問です。確かに、もっと穏便な方法はありますが、それはその場しのぎの短期的なもので、将来の患者さんのためになりません」
永原先生がすぐに応対する。
「と言いますと？」
「例えば、学校の要求に屈して女子更衣室を使わずに、男女から隔離されれば、歩美さんは精神的にもアイデンティティが打ちのめされて、自殺のリスクが高まります。転校する場合、本人は理解ある学校に転校できたとしても、前例になりかねませんから将来の患者さんのためにもなりません。これはテロに屈するのと同じです」
「……ありがとうございます」
永原先生の言う通り。ここで屈したら将来の患者さんに大きな不幸を呼ぶことになる。
ともあれ、簡潔なまとめになってよかったわ。
とにかく、これで高島さんの報道につながるというわけね。
「高島さんの報道は、必ず大きな騒動になる。その際に、インターネットの報道から、必ず掲示板などで話題にはなる。その時に、必要になるのがネット工作だ」
「ネット工作で、世論を誘導するのよ」
そして永原先生と蓬莱教授の説明がある。
「ネット工作ですか？」
あたしが質問をする。
「同じ人間で、別人になりすますんだ。プロキシを通したりしてな」
「え!?　そんなこともできるの？」
蓬莱教授が驚きの事実を述べる。
同一人物がなりすますと言っても、せいぜい、パソコンと携帯やスマホで使い分ける程度だと思っていたわ。
「ええ、代表的なのは『ｔｏｒ』と呼ばれるソフトよ」
「???」
永原先生から、聞きなれない単語が出てきた。

トーア？　って何だろう？
「石山さん、ＰＣからインターネットにつなぐ時にはねそのまま直接プロバイダーのサーバーに行くのよ。だからね、プロバイダーに問い合わせて、そのおかげで悪いことを書き込んだらバレるわけ」
うん、ここまでは知っている。インターネットリテラシーのことは以前学校でもやったし。
「だけどこの『ｔｏｒ』はね、世界中のサーバーを数か所経由してからインターネットに書き込むのよ。だから、もし犯罪予告を『ｔｏｒ』を使って行えば、そのサーバーからの記録しか残らないのよ。もちろん、海外のサーバーだから捜査が及ぶのは困難よ」
「あー、もちろん、犯罪のような悪事にも使われるし、ダウンロードしただけで手軽に使えるのは事実だ。だが今回は、山科さんの精神状態や命にも関わることだ。だから、これを使って工作に使おうという算段だ」
「もちろん、ｔｏｒを使って犯行予告とか名誉毀損は、確かにほぼほぼバレないけど犯罪よ。でも、今回書くのはそれに当たらない程度の学校への批判と、山科さんに対する同情の声を書き込むわ」
何か心に引っかかるような言い方だけど気にしないでおくわ。
「被害者に同情して、憐れんではいけないという法律はねえしな、仮に追及されたとしても、同じように言えばいいさ。山科さんを何とか助けたかったってな」
蓬莱教授が半笑いをしながら言う。
そう、「かわいそうな女の子に同情しているだけ」、いわば善意で行う悪事を装った、間違った意味での確信犯ということ。
本当にいいのかな？
「うーん」
やっぱりまだなんか引っかかるわね。
「石山さん？　石山さんが罪に思う必要は無いわよ。それに、山科さんや、今後同じように発病する患者さんたちの命には代えられないわ」
「善意の悪に陥らないためには、それが本当に当人のためになってい

るのかが大事になる。今回は山科さんも女性としての扱いを望んでいるし、今回の事については理解している。これが『別にいい』って言うなら、確かに俺たちのしていることは悪になるがな」
永原先生と蓬莱教授が、あたしの抱いていた疑問に分かりやすく答えてくれる。
「それでだ、俺たちが考えているのは、このｔｏｒや、他にはＶＰＮと呼ばれるツールも使って、１人の人が数人になりすます。それを使えば、容易に多数派を装える、そして、反論者に対しては『火消し』の方法も使う」
「『火消し』？　ですか？」
またあたしが質問する。
もちろん火消しの意味が分かるけど、どうやって？
「研究的な意味では禁じ手だが、プロパガンダ的な意味では、反対者に対しては論理的な攻撃よりも人格攻撃が大事になってくるんだ。つまり、議論に持ち込むのではなく、相手の人間性のなさを問題視するものだな。本来の学問では使ってはいけない論法だけど、致し方無いな。もちろん、具体的な反論も随時使ってはいくがね」
蓬莱教授がとてもドライな感じに言う。
本当、この人って割り切り力がすごいと思うわ。
「そしてもう一つ、懸念があるとすれば、クラスの女子の他の子です。山科さん、その辺は大丈夫とのことでしたよね？」
「はい、女子トイレにも入れてもらいましたし、初めてその……女の子の日になった時に、みんな理解してくれました」
山科さんも、やはりあたしと同じ。
女子のみんなからは、生理が来たことで、正真正銘の女の子だと理解してもらえた。
あたしもやっぱり、同じだった。
女の子の日が来ることで、他の女の子からは、中身も女の子で、決して性転換手術でもないという強いメッセージになり得るのよね。
幸子さんみたいに、大学生ならともかく、高校生以下の場合は体育の着替え問題は常に付きまとう。

クラス単位で行動するから、女の子の日になった時に分かりやすいのかもしれない。
「表向きは、多分それで大丈夫ですが、本音は違うかもしれません。もしかしたら、誰かが山科さんを女子更衣室に入れるのに対して強硬に反対している恐れもあります」
永原先生が神妙な面持ちで言う。
「そんな！　だって女子のみんなは――」
「本音は分からないわよ。女子というのは、演技力の高い生き物ですから、裏ではどんな陰口があるか分かりません」
余呉さんがやや恐ろしい口調で言う。
「うっ……じゃあもしかして――」
歩美さんがあたしたちにも恐怖の目を向けてくる。
「私たちは心配しなくてもいいですよ。私達は元々はみんな男ですから、そういう女性の性質は、『知識』として知っていますし、そういう女の良くないところは直そうという気概もあります」
「そ、そうですか……よかった……」
比良さんが山科さんを安心させてくれた。
山科さんも安心してくれたようで何よりね。
「とは言え、クラスの女子は、誰も嫌な思いをしていない。山科さんも女の子の振る舞いをして、しかも女の子の日も目撃すれば、まず問題は無いと思います」
「ええ、私も会長に賛成です」
「はい、あたしも」
あたしと余呉さんが続く。
特に、女の子の日のことを知っているなら、まず問題はない。
「ではこれはここでいいでしょう。では蓬莱教授、具体的に何人人員を割けますか？」
「あー、今うちの宣伝部は3人体制だ。全員がそれなりの知識は持っているが、いかんせん人は少ない」
蓬莱教授もまだまだ体制は完成していない。
「協会の方ではどうですか？」

高島さんが今度は質問してくる。
「うーん、本業が多忙な人もいますから……今は……」
比良さんが残念そうな顔をする。
「とは言え、やらんよりはましだ。俺の宣伝部も、試験運用があるからな。協力は惜しまん」
蓬莱教授が力強く言う。
「ありがとうございます、皆さん、私のために――」
「ううん」
歩美さんのお礼に対して、あたしが首を横に振る。
「え!?」
歩美さんは案の定あたしの反応に驚いている。
「歩美さん、さっきも言ったけど、これはあなたのためだけのものじゃないわ。これはみんなのためよ。あなただけじゃない、将来同じようにＴＳ病になった患者たちのためにね」
「いい？　ＴＳ病はマイノリティーでも、障害でもないわ。もちろん、ＴＳ病の苦痛から精神的な二次障害に陥ることもあるわ。でもそうじゃないなら、私たちは単なる一人の女の子よ。でもそれが、障害だとか、マイノリティーに位置付けられたら、それは悲劇だわ」
あたしと永原先生が力強く言う。
そう、これは一人の女の子が、ＴＳ病という理由だけで、女の子として扱われないことが問題なのだ。
「うん、分かったよ」
歩美さんが言う。
「よし、じゃあ次は具体的な日程と記事の内容だな」
「えっと、記事についてはこちらの方針で行きます」
高島さんがノートＰＣを取り出して、記事の原稿を見せてくれる。
具体的には、「高校で、ＴＳ病の女の子が女子更衣室の使用を拒まれており、協会の抗議も黙殺している」というもの。
「ここにさっき出てきた、女の子の日をきっかけに受け入れられるようになったことを入れたいと思います。山科さん、よろしいですか？」

「はいもちろんです」
歩美さんが頷く。もちろん、あたしたちが有利になるためには、「クラスの女子は嫌な思いしていない」ことが大事になる。
歩美さんの反応を見た高島さんが、記事を加筆していく。
あたしたちは一言も発さずにその様子を固唾をのんで見守るだけ。

「できました」
数分後、高島さんが記事を見せてくれた。
「随分とストレートなニュースだな」
蓬莱教授が「ストレート」と言った。
「「ストレート？」」
あたしと山科さんがほぼ同時に聞き返す。
「ああつまり、起こった事実だけを淡々と書くニュースってことだ、見出しも『日本性転換症候群協会が高校に抗議文』とだけあるだろ？記事本文も、『協会によればー』というものと、学校側も『ただいま職員会議中』としか書いてないだろ？　つまり記者の意見が全くないんだ」
ちなみに、抗議文を無視されてしまい、歩美さんの人権が侵害されているため、今回告発に至ったとだけ書かれている。
「もちろん、それは悪いことばかりではありませんよ。事実だけを淡々と報道すれば、『世論誘導』や『偏向報道』という批判も避けられます。何かの第一報だって、大体そんなものですから」
高島さんと蓬莱教授の説明に、あたしたちも納得する。
「それで、その後はどうするんですか？」
歩美さんが不安そうに聞いてくる。
「もちろん、他マスコミの動向を、協会は注視します」
「うむ、俺たちも世論工作は続ける。高島さんのところも、また何かあれば頼りにする」
「……はい」
ともあれ、大体の動向はまとまったので、今日が解散となった。
高島さんの記事は、今夜、アップロードされることになっている。

## 優子の新しいポスト

「ただいまー」

「優子おかえりなさい。歩美さん、大丈夫だった？」

協会の会合から帰ると、母さんがあたしを労ってくれた。

「うん、強い意志が伝わってきたわ。後は学校次第よ」

もちろん、高島さんの記事が過剰な圧力にもなり得る。

学校側が、さらに態度を硬化させ、最終的には司法の解決になってしまう可能性もある。

そうならないためにも、ストレートニュースにとどめた。考えてみれば、あたしたちが取材を受けた時も、あるいはたまに協会が情報を流した時も、高島さんが流したニュースはほとんど全てでストレートニュースで、高島さん個人の見解は入っていない。

あたしは、ご飯を食べて、ブライト桜にアクセスする。

まだ約束の時間にはなっておらず、記事はアップロードされていない。

ＰＣの右下の時計を見つつ、あたしは少しだけ時間をつぶす。

やっぱり少し緊張する。

「おっ！」

そして数分後、Ｆ５ボタンを押すとトップページが変わっていた。記事は確かに、あの時と変わらない内容でアップロードされていた。

見出しは単に「日本性転換症候群協会が高校に抗議文」とあるだけで、一見すると、大したことのないニュースにしか見えない。

「さて、２つ目の切り札を切ったわね。学校側はどう出るかしら？」

反応が出るまで時間がかかる。

記事のアップロードは確認したので、あたしは一旦、時間つぶしも兼ねてお風呂に入ることにした。

お風呂の中でも、高島さんのことを考える。

高島さんは、あたしたちがどうしてもつなぎとめておきたい存在だけど、一つだけ不安がある。

それは、高島さん自身の問題ではない。

今回こうして組織的な圧力をかけた以上、他のマスコミがあたしたちの取材拒否姿勢に対する対抗措置としての、「しゃべる机」の攻勢を強める恐れだ。
そうなった時に、協会としても何らかの自衛策を講じる必要性も考えられる。
高島さんの「ブライト桜」だって他のメディアから妬まれていることは容易に想像がつく。

「ふう、どうなったかな？」
あたしはお風呂から上がると、掲示板などの反応を見てみた。
どうやら、まだこっちの方は大きな話題にはなっていないみたいね。
つぶやくサイトのほうを見る。お、こっちは反応があるみたいね。
「しかしこれひでえな、転校すればよくね？」
「ＦＦ外から失礼します。転校した場合、将来的にこの学校や似たような無理解の学校で同じ患者が出てきた時に問題になりますので引くに引けないのです」
「女性になったばかりは、周囲に詳しい経緯を知っている人が患者の治療に役立つんじゃね？」
早速、蓬莱教授の宣伝部が動いているわね。
「そもそもこの患者さん、心も体も女だろ？　何の問題があるんだ？
病名は『完全』性転換症候群だろ？」
「女の子を女の子扱いしろ言ってるだけじゃん、別にトランスジェンダーでもなくて生物学的にも女の子なんだろ？」
やっぱり、協会側に好意的な意見が多いわね。
他にも「学校側の会議中って、要は時間稼ぎだろ」という意見もあった。
ふふっ、今頃、学校には抗議電話が殺到しているはずね。
あたしは、もう一度さっきは反応がなかった掲示板を見ると、そこにはスレが立っていた。
記事名は「我らが合法ロリ巨乳美少女、永原マキノちゃんが会長を

務める日本性転換症候群協会が、高校に抗議文を出す」とある。
なんだか、随分と永原先生が推されているわね。
あたしは掲示板のレスを見てみる。
「あー、とうとうあの美少女協会が怒ったか」
「でもさ、こういうケースってよくあることだよね？　こうまでして押し通してよかったんか？」
「でも、優子ちゃんとマキノちゃんを怒らせたこいつら死すべき慈悲はない」
「しかし優子ちゃんっていうのは何度見てもすげえ美少女だよな」
このスレには、おおむねあたしたちに好意的な書き込みが多い。あたしや永原先生の画像のＵＲＬもまた貼られている。
あたしは一つの法則に気付く。
たまに批判的な書き込みがあると、即座にあたしたちの容姿について書き込まれていて、「優子ちゃんかわいい」「マキノちゃんかわいい」と連呼している。
よく見ると、それらの書き込みをしている人は、みんなＩＤが異なるいわゆる「単発」が多い。
つまり、これらの書き込みが蓬莱教授の宣伝部によるものね。
「ふう」
取りあえず、あたしはインターネットでの巡回をやめた。
おそらく、インターネットは大丈夫。後は既存のマスコミがどう出るかにかかっているだろう。
あたしは、日常に戻ることにした。

翌日、朝のニュースには、今回の騒動は報道されなかった。
もちろん、これはかえって好都合で、既存のメディアに報道されなかったからといって、インターネットの住人が知らなくなるというわけではない。
下手に既存のメディアに印象操作されるくらいなら、報道されないほうがマシだし、好意的な報道でも「無能な味方」になる危険性を考えれば無視されるのは理想的な展開と言ってもいい。

そしてインターネットの反応は学校への批判一色になっていた。元々あたしたちに好意的な空気があった上に、蓬莱教授の宣伝部による工作もあったんだから、こうなるのは当然かもしれないけど。
あたしや永原先生、他の協会幹部の写真が拡散され、歩美さんも美少女だというのは容易に想像がつく。
やはり、インターネットは美少女にはとことん甘いわね。
ともあれ、学校はいつも通りに行かないと。

「おはよー」
「優子ちゃんおはよう。うまくいきそうか？」
浩介くんがあたしに聞いてくる。
「うん、大丈夫、作ったばかりの蓬莱教授の宣伝部も活躍してくれてるわ」
「よかった」

ガララ……
「はーい、ホームルーム始めますよー！」
永原先生の号令とともに、今日も学校の一日が始まった。

キーンコーンカーンコーン……
「はい、今日はここまで」
「うーん！」
最後の授業が終わり、あたしは背伸びをする。
どうやら、小谷学園にも特に大きな変化はないみたいで、噂話にもなっていないため、あたしはホット安堵した。
もしかしたら、小谷学園では「ブライト桜」の知名度は低いのかもしれない。

「石山さん、ちょっといい？」
「はい、ごめん桂子ちゃん」
「うん」

そして天文部の活動中、あたしは永原先生に呼び出された。
「たった今比良さんから連絡があって、学校側が山科さんを女子更衣室に入れることを決めたわ。やはりネットの記事を見た人たちの抗議電話が殺到したのが効いたみたいよ」
「そう、よかったわ！」
あたしが心の底から安心して言う。
本当に良かったわ。
「それで、石山さんにお願いなんだけど」
「はい」
「今回は既存のマスコミが追尾しなかったのがよかったわ。だけど次はうまくいくとは限らないし、協会でも、広報部が必要だと思ったの」
「ええ」
永原先生は、つまり協会にも蓬莱教授の宣伝部が必要ということ。
今までは注目度も低く、知名度だけ高かったＴＳ病なので、広報宣伝活動はしていなかった。
「正会員のポスト……今、平なのは石山さんだけでしょ？」
「あ、うん」
少し前までもう一人いたけど、今は別の役職に就いているので確かにあたしだけ平の正会員だ。
「それで、石山さんに協会の広報部長をしてほしいのよ」
「え!?　あ、あたしには無理ですよ」
永原先生の突然の要請に思わず「無理」と口にする。
宣伝活動の重要性は分かっているし、まだ未成年のあたしがそんな重要なポストの長になるなんて気が重くなるのも事実だわ。
「大丈夫よ。実際には、私と比良さんが主に決めるわよ。石山さんはいわば高島さんの所から取材が来た時に『広報部長の石山優子さん』って書かれるのが役目よ」
「もしかして、あたしの知名度を使って？」
「ええ、石山さんは美少女揃いの私たちの中でも一番の美少女だもの。今後は写真撮影も入るわよ。ただし、広報部を作るのは一番早くても来年度、石山さんが卒業してからよ」

「はい」
どうせもう、顔はネットに流出しちゃっているし、仕方ないわよね。
そう言えばあたし、蓬莱教授にも同じような仕事頼まれたわよね？
やっぱり、美少女って見栄えがいいもんね。
「じゃあ、私からは以上よ」
「はい」
あたしは天文部に戻り、浩介くんたちにことの顛末を説明した。
「ふう、優子ちゃんが広報部長か、いいんじゃねえの？」
広報部長のことは、浩介くんも納得しているみたい。
まあ、浩介くんも、嫉妬ばかりしててもしょうがないもんね。
「優子ちゃん、頑張ってね」
「うん」
桂子ちゃんがそう締めると、以降この話題は出てこなくなった。
天文部の日々は、今日も平穏に続いていく。

翌日、高島さんは、歩美さんの学校があたしたちの要求を受け入れることを報道し、最後の一文、「これで事態は鎮火に向かうだろう」という予測を書いたのを除けば、やはりほぼストレートニュースになっていた。
インターネットでも、学校側の対応を素直に評価する書き込みが殺到し、事態は一斉に撤収モードに入った。
昨日まであんなに批判してたのに、客観的にも適切な対応とは言え学校が対応するだけでこの絶賛ぶりはちょっとやりすぎな気もする。素直なのはいいけど。
多分、蓬莱教授がそうしたんだろう。ここで学校に対し「遅い」などという追い打ちをかけるのは、まずいということ。
良い対応をすれば素直に絶賛し、それ以上は追求しない。この精神で行えば、意固地になる人も少なくなるという作戦になっている。
一方で、１１月になって季節はますます寒くなっていく。必然的に、制服もストッキングにする生徒が増えてきた。
あたしたちにはもう中間試験、期末試験、そして卒業式くらいしか

学校のイベントはないけど、クリスマスにバレンタイン、また他の生徒はセンター試験もあるとあって、みんな勉強に余念がなくなってきた。
桂子ちゃん、天文部に入り浸ってて大丈夫なのかな？
まあ、佐和山大学なら、そんなに問題じゃないかな？
桂子ちゃんも、あまり成績悪いというわけでもないし。去年の坂田部長もそんな感じだったものね。
それよりも、そろそろ来月のクリスマスに向けて、何か考えたほうがいいかもしれない。

「浩介くんは、この季節どうしてる？」
「うーん、家で休んでることが多いかな？　卒業に向けての勉強はもちろんしているけど」
「うん」
卒業に向けてということで、クリスマスはあたしと浩介くんで勉強会を開こうかなとも思っている。
「ともあれ、歩美さんと話をしないといけないわね」
「そうだな、応援することしかできねえがその……頑張れよ」
浩介くんがあたしの心の支えになってくれている。
「ありがとう」

あたしは家に帰り、歩美さんの家にテレビ電話をかける。
「はい、山科です。あ、石山さん！」
歩美さんがあたしの顔を見て明るい表情になる。
「歩美さん、今日の学校はどうだった？」
「はい、皆さん、私におめでとうって言ってくれました。一緒に着替えた時は……嬉しくて、涙が出てしまったわ」
歩美さんが、女の子の言葉遣いになってきている。
受け入れられた時の歩美さんの喜びぶりは多分計り知れないものがあると思う。
実際に経験したあたしでも、ね。

「そう、よかったわ」
歩美さんは、「女性として生きていきたい」「赤ちゃんまで産めるのに、どうして男と言い張らなきゃいけないのか？」と言ったことをクラスメイトに訴え続けた。
その結果として、やはりあたしと同じケースになった。
過去はともかく、今は女の子として生きていきたいという気持ちが強いことを示せば、歩美さんの扱いも自然と変わってくる。
こういうのは、大人よりも中学生や高校生の方が物分かりがいいみたい。
「あの、もしかして、石山さんも以前同じようなことがあったんですか？」
あたしのホッとした表情に、歩美さんが聞いてくる。
「ええ、あったわよ。今の恋人だって、最初はあたしのこと男扱いしていじめてたのよ」
「え!?　そうだったんですか!?」
歩美さんが驚いて聞いてくる。
「ええそうね、歩美さんが今後数十年数百年と生きていく中で、後輩を指導することもあるかもしれないから、話しておくわね」
あたしは、カリキュラムが終わって復学した時の周囲の反応や、エピソードを思い出しながら話す。
ただ、今みたいにＴＳ病の注目度が高いわけでもなく、ある種の都市伝説扱いだったことも考えれば、実際の所、まだ2年も経っていないけど、あたしのこのエピソードは既に時代遅れになりつつある。
それでも、歩美さんはあたしの古い苦悩について、真剣に聞いていた。
そして、あたしを一番にいじめていた男の子は、あたしを一番に守ってくれた男の子で、今はもう、大好きでたまらないということも。
「あたしにも、女の子として、好きな男の子が出来たわ。ほら、あたしが左手にはめてるこれも、彼からもらったものよ」
「わあ、指輪ですか！　もしかして私も、いつかは――」
「ええ、あなたもいつかは女の子として男の子に恋をして、恋愛を楽し

むのよ」
　でも、そこで立ちふさがる種々の問題もある。
　そのうちの寿命問題については、現在研究中なのは示した通り。
「反射的に男の感覚が残ってしまう……」
「ええ、今の歩美さんは多分、まだ男の子を好きになるという感覚は分からないと思うわ」
「はい、やっぱりまだ、女の子として、男を好きになるというのは、分からないです。どうしても、女性により大きな魅力を感じてしまいます」
　歩美さんが正直に告白する。
「いい？　焦りすぎちゃダメよ。あたしも、女の子になりたい一心だったから、男の子に恋した時は本当に嬉しかったわよ。でも、反射的な本能は、そう簡単についてきてはくれないわよ」
「うー、難しそうだなあ……」
「まあ頑張ってね、大丈夫よ。時間はかかるけど、ね」
「は、はい！　それでは、失礼します」
「はーい」
　そう言うと、歩美さんがテレビ電話の電源を切った。
「ふう……あれ？」
　電話の機器を見ると、歩美さんと話している間に、着信があったらしい。
　よく見ると、それは幸子さんの番号だった。
「どうしたんだろう？」
　今まで、幸子さんはあんまり連絡はよこしていなくて、専ら、近くに住んでいる余呉さんと、東北支部で行動を共にしていることが多い。
　カウンセラーのあたしに電話を掛けたという事は、何か問題でも発生したのかなと思い、すぐに折り返しで連絡する。
「はい、塩津です。あら石山さん、お久しぶりです」
　テレビ電話に出たのは幸子さんのお母さんだった。
「すみません、幸子さんいますか？」

「ええ、幸子――！　石山さんよー――！」
「はーい！」
久しぶりに聞いた幸子さんの声、テレビ画面の中には、パジャマをかわいらしく決めた美少女が立っていた。
個人的には歩美さんよりも幸子さんの方がオシャレしている分かわいいと思う。
「幸子さんどうしたの？」
「うん、久しぶりに石山さんの声を聴いてみたくて……だめですか？」
「ううん、もちろんいいわよ……幸子さん、元気そうで何よりだわ。そっちは元気？」
「はい、大学も順調に単位が取れています」
幸子さんが笑顔で言う。
この美貌なら、就職先は困らないだろう。特にここ数年はずっとは売り手市場だし。
「それは良かったわ」
「私ももう、女の子になって1年が過ぎたし、家族で小さなパーティはしたんですけど、大学とか協会が忙しくて、ね」
「そっちの協会では何してるの？」
少し気になって聞いてみる。
「はい、主にＴＳ病について、大学の講演会に出たり、理解を深めてもらうための研究会などもしています。私が入ったばかりはそういうのはあまりなくて、患者さん同士の交流会が主だったんですが、最近はこの病気の注目度が上がってますから」
どうやら東北も東北で大変みたいね。
「どんな講演なの？」
「私が所属している大学で、ＴＳ病について、私の体験談を語ったりしています」
ん？　もしかして私のことも出るのかな？
「へー、じゃあもしかして――」
「はい、石山さんにひっぱたかれたこととかも話してます。カリキュラムのこととかもね。厳しい教育だったけど、それがなければ自殺

だったことを考えれば、何てことなかったって言っているわ」
や、やっぱりそうよね。
あたしも、カリキュラムは厳しかったけど、カリキュラムを重ねることで女の子らしくなれるのはとても嬉しかった。
そう言えば、幸子さん、かなり女の子の言葉になってるわね。
やっぱり自分が診た患者さんの成長は嬉しく思える。
「それで、他の人の反応はどう？」
あたしは問題の確信に迫ってみる。
「うん、『他に生き方はないのか？』っていう質問は多いけど、それについてはちゃんと『ない』と言っているわ」
「そう……ねえ幸子さん」
「ん？」
「実はね、さっき話し中だったでしょ？　実はあの時、別の患者さんと話してたのよ」
「へえ！　どんな人ですか？」
幸子さんが興味津々に聞いてくる。
「うん、あたしの一個下の女の子よ。ただ、その子は学校とちょっと問題があってね……」
「あ、余呉さんから聞いたわよ。更衣室の問題ですよね。あれ、石山さんの担当だったんですね」
やはり、協会経由で幸子さんにも話が入っていたみたいね。
「はい。結局、学校側が折れてくれました」
最終的に、司法まで行きつかなくてよかったとも思う。
「ええ、ですけれども、やはりマスコミは心配です。今協会は1社だけ取材を許可してますけれども、このままでは他社からも癒着の指摘は必ず出てくると思います」
幸子さんが心配そうに言う。
「いえいいんですよ。ストレートニュースばかり報じさせているのもそんなところを想定しているんです」
「それでも、ですよ。もちろん、私たちもできる限りのことはするけど、石山さんも、高校を卒業したら広報部長ですよね？」

どうやら、そんなことまで回っているらしい。結構狭い世界よねやっぱり。
「ええ、十分気を付けるわ」
「うん、それじゃあ、失礼します」
「はーい……ふうー」
幸子さんと通話を終え、あたしは一息つく。
確かに今、あたしたちはマスコミの「しゃべる机」による風評被害を受けてはいる。
もちろんあまりにひどいものは「ブライト桜」を経由し、反論声明を出しているが、いかんせん、一時期ほどの力はないにせよ、テレビや新聞の影響力は馬鹿にできない。
「ともあれ、何も起こらなければいいけど……」
あたしは、自分がカウンセラーとして面倒を見た2人の女の子と電話してみて、そんな風に思った。

## 場外乱闘

しかして、あたしの嫌な予感は的中した。

今回の更衣室事件、既存のメディアはどこも報道せず、学校側が屈することで終わったかに見えたのだが、学校側の残党の誰かが、この事件について週刊誌に何らかの文章を送ったのだと思う。

あれから1週間後、季節も12月になった時に、あたしは電車の広告から、週刊誌の1誌がこの事件を大々的に取り上げていたのを発見した。

あたしはコンビニでその週刊誌を買って見てみた。

「何これ……」

買ってみて中を読んで、あたしは唖然としてしまった。

デタラメの上にデタラメを塗り固めたような内容だった。

まず、「日本性転換症候群協会は圧力団体、マスコミから逃げ続け、その一方で思い通りにならない学校には抗議電話を殺到させる」という極めて喧嘩腰に書かれた題名にある。

よくまあこんな題名で記事をかけるものだと思ってしまう。

百歩譲って協会が題名のような団体だったとして、肝心の内容に関して言えば、ほとんどが憶測だけで書かれた、「しゃべる机」の域を出ていない代物で、後半に書かれている永原先生と比良さんについての記事に関しては、完全に事実無根の妄想になっている。

永原先生は、「何でも思う通りにし、戦国時代生まれらしく、圧倒的な人生経験を盾に恐怖で会を支配している」とあり、もちろん証拠の類は提示されていない。

更に比良さんに至っては「『ＴＳ病は女とし生きて行くしかない』という妄想で、結果的に多くの患者を殺してきたのではないか？」などという、出所不明の「精神分析の専門家」の意見を載せているが、この「専門家」が記者自身なのは明らかだった。

比良さんと何度も面識のあるあたしからすれば、勝手に第三者を捏造し、作り上げたとしか考えられない。

確かに永原先生よりは頭は硬いけど、それでも、彼女なりに副会長

業務をこなしているし、そもそも「ＴＳ病は女として生きていくしかない」というのは、比良さんの妄想などではなく、協会の全体認識だ。
「また一波乱あるのね……」
ようやく一件落着と思っていた矢先にこの週刊誌、
「ふぅ……石山さん、今日呼び出したのは他でもないわ」
翌日の放課後、あたしは永原先生に呼び出され、今後の対策について相談室で話し合うことになった。
「ええ、分かっています。週刊誌の記事ですよね？」
あたしの声を聴くと、永原先生は必死に怒りを堪えているのが分かる。
「ええ……私はこの世に生を受けて５００年の人生で、これほど屈辱的で、かつ無礼を受けたと思ったことはないわ。ええ、東照大権現……時の徳川内府殿が直江山城守殿からの書状を受けた時も、きっとこんなお気持ちであらせられたのだと拝察出来るくらいには、ね」
永原先生が、その圧倒的な人生経験を背景に、協会で恐怖政治を働いているなど、まったくのでたらめだ。
むしろ、歩美さんが普通会員になるまで、最年少だったあたしを正会員にして、それどころか教え子であるはずのあたしを恩人だとまで言ってくれて、協会ではみんなの模範だからとまで厚遇してくれていたのに。
よくもここまで妄想だけで人を、仮にも戦国時代や江戸時代を生き抜いてきた人をここまで侮辱できるものだと思うわ。
あたしは、永原先生が冷たい怒りを覚えているのとは対照的に、とても深い悲しみと、週刊誌記者の妄想性の高さに、ただただ哀れみばかりを覚える。
いや、あたしは直接には言及されなかったからこそ、そう言う感想を抱けるのであって、直接誹謗中傷された永原先生はたまったものじゃない。
「比良さんは、何て言ってます？」
あたしはもう一人の被害者の比良さんについて聞いてみる。

「ええ、さっきお昼に電話で確認したけど、私以上に怒っていたわ」
「でしょうね」
比良さんは元水戸藩士だ、女の子になったとは言え、武士としての矜持だって残っているはず。
以前にも、武士道に反する行為をした人に、怒りを向けていたものね。
「石山さん、分かっているとは思うけど、私たちにはこの道しかないという結論は、多くの仲間たちが、精神を極限までにすり減らした果てに、自らその命を絶つ悲劇を、何度も何度も繰り返した上で成り立っているのよ」
うん、協会には、有史以来確認出来た全てのＴＳ病患者についてまとめた資料がある。
全員がその日のうちに殺されたものだけど、永原先生以前の、奈良時代や平安時代の患者のデータだってある。
明治時代以降、殺されなくなった患者も急増し、普通に人生を歩むとどうなるかがわかってきている。
そして、明治以降は患者の死因から「他殺」が消える代わりに、その多くが「自殺」に変わっている。
更に自殺欄には、「無理に男に戻ろうとした」とか「男女中間の存在になろうとした」とか「女性になる過程で失敗した」というのが多い。
つまり、女として生きていくことに失敗して、自殺するパターンでほぼ全て埋め尽くされている。ＴＳ病患者になると５０％を超える確率でこの結末になる。一方で不老に悲観して自殺した人は、殆ど居ない。
「比良さんも言っていたわ、『私を侮辱するだけならばまだ、耐え難きを耐え、許そう。だがこれまでの犠牲の上で成り立つ私たちの１００年の知恵を妄想の一言で片付けるのは、死んでいった患者たちを冒涜するもので、到底許されない』とね」
永原先生は、冷徹な表情で言う。
それは、あたしも同感だわ。本人の侮辱よりも、家族などの身近な人への侮辱の方が、怒りが強いということ。

「永原先生、高島さんを」
「ええ、すでに向こうから接触を図ってきたわ。高島さんは、『抗議声明を出すべきだ』とも言っていたわね」
どうやら、先手を打っていたみたいね。
まあ、当たり前といえば当たり前よね。
「今回はマスコミが相手になったわね。これは高島さんの助言が役立ちそうだわ。彼の意見を重視しましょう」
「ええ、私もそうするつもりだわ。高島さんにとっても、それがいいでしょう」
永原先生があたしの意見に同意してくれる。
協会のスタンスとして、高島さんやブライト桜はあくまで対等な協力者であって、傀儡ではない。
そのことを高島さんとブライト桜の人に、まだいまいち伝わっていないのか、高島さんはどうも下手に出て遠慮する場面が多い。
最初は仕方なかったとは思うけど、そろそろあたしたちも高島さんのことを信頼し始めたということを、理解してほしいのも事実なのよね。
「それじゃあ、協会本部に行ったらテレビ電話で高島さんを呼ぶわね」
「……分かりました」
あまりにも急な事態故に、会合さえままならないまま、あたしたちは大急ぎで反論文の作成に迫られた。
その内容は、高島さんの助言がふんだんに盛り込まれたもので、高島さんは最初こそ下手に出ていたが、頼られているという自覚が出てくると、積極的にアドバイスしてくれた。
もちろん、高島さんも大人だから、抗議文自体は協会名義で出され、「週刊誌に抗議文を出した」というニュースの内容もほぼストレートニュースになった。
ともあれ、テレビや新聞に比べて週刊誌は信用度が低いこともあるから、後は他のメディアに騒がれさえしなければ、「ゴシップ週刊誌がまた飛ばし記事をやらかした」で済むから、特に問題はないと思いたいわね。

そうなら、歩美さんの女子更衣室問題に端を発する一連の問題も収束するだろう。

そう思っていた、あたしが甘かった。あたしはまたもや楽観的過ぎる予想をしてしまった。

週刊誌こそ、やはり「しゃべる机」という後ろめたさがあったために翌週すぐに謝罪文を出して追撃をしなかったが、週刊誌が謝罪文を出して収束を図ろうとした2日後のことだった。

今度はテレビの討論番組で、この問題を扱い始めた。あたしはたまたま新聞のテレビ欄でそれを見つけた。

「ついに、恐れていたことが起きたわね……」

以前は、蓬莱教授の研究の是非による討論で、あたしたちの協会が出たことはあった。

でもそれはあくまで「おまけ」みたいな扱いだった。まあそれでも、十分すぎるくらいひどい印象操作を受けてしまったけど。

それがきっかけで、あたしたちはブライト桜以外のメディアからの一切の取材を拒否している（というよりも、取材できないような条件を掲げている）から、他のマスコミからの取材のアポイントメントさえなかった。

しかも、番組に出てくる出演者は、協会関係者は無論のこと、ＴＳ病の当事者の家族や友人さえも出ておらず、あたしたちにとっても、一度も会ったことさえない人ばかりだ。

つまりこれ、「専門家」と称する「妄想だけを言っている人」たちが、ひたすら言い放題するだけの番組になっていて、これでは「討論番組」とは到底言えない。

「そもそもですね、男女一緒に着替えさせるとかよほどの問題があるようなものでもなければ、どのような更衣室を使わせるのかというのは、学校の自由でしょう。ましてや当人のためを思ってやったことでしょ？」

「そうですね、どうして協会が着替える場所一つでここまで強硬な姿

勢を取るのか、それが私には理解できないんですよ」
「何というかこだわりが強くて、著しく狭量な人が実験を握っているんでしょうね」
そしてテレビ番組の内容も、あたしたちがいないことをいいことに、反論もなくただひたすらあたしたちを糾弾するだけの単なる「リンチ裁判」と化している。こういうのはアリバイ作り程度に反対意見の識者も用意するものだけどこの番組はそれさえない。
そんなに取材拒否されたのがプライドを傷つけたのかしら？　あたしたちは、ＴＳ病という極めて珍しい病気を扱う、とても小さな団体なのに。
「だいたい、『この集団以外はこれまで全員が自殺したから』なんていう前例踏襲主義、これは日本の大きな問題だとは思うんですよ」
そして、久しぶりにモニター越しに「例の牧師」の姿を見た。正直、存在を忘れかけていたわね。
「やはりですね、ここの協会の皆さんは、外見はともかく、中身はおばあさんの集団なんですよ。何で次の患者は例外かもしれないと希望を持てないのか？　要するに人生が長くて、似たような経験を繰り返している人ほど、一旦ダメだと思ったらとにかく諦めが速いんです」
相変わらず、身勝手極まりないことを言っている。まるで成長していないわね。
女として生きていくことを決意した人は、今生存している人は２００人以上いるけど、それ以外の道を取った人は、全員が死んでいるのに、何故ここまでの差が開いて「次は例外かもしれない」なんて無責任な考え方ができるのかしら？
実際、今年だけでも道を間違えた患者さんが複数名自殺してしまった。
みんな協会以外の、専門の臨床心理士もつけていたにも係わらずに、自殺は防げなかった。
どちらが正しいかなんてもう、明白なのに。当事者じゃないから、こんな身勝手なことが言えるのよね。
もちろん、女の子になるのもそれはそれで大変な苦労を伴うし、永

原先生や比良さんのようにＴＳ病の呪いで様々な運命に翻弄された人だって多い。
だけどあたしみたいに、女の子になろうと頑張ったから、どうしようもない人生から救われた人だっている。
いずれにしても、すぐに精神をすり減らした果てに自殺してしまうよりは良い結果なのは確かだ。
「でですね、私が懸念しているのは、蓬莱教授の研究で日本中、いや世界中が硬直化した社会になるんじゃないか？　この協会は将来のね、私たちの社会を映す鏡かもしれないんです。これは未来の縮図です」
「どういうことですか？」
ここまでほとんど黙り込んでいた司会の人が詳しく聞いて来る。
「不老研究でですね、地球の人類がみんな不老になったらですね、古い考えばかりがいつまでも通るようになるでしょう。この団体は創設以来１００年以上も会長副会長を同じ人が務めています。今の所はこの団体くらいですが、これが一般化すれば、例えば政治家の顔ぶれが何百年も同じ人で持ち回り、何ていうこともあり得ます。そうすれば、この協会みたいに停滞の団体になるでしょう」
また、饒舌になる。
反撃をしてこないと思って、嘗めているのがバレバレだ。まあ、他の討論者もだけど。
「この協会の実権を握っているのは、１０数人の正会員と言われていますが、実際にはその中でも３人に限定されていると言われています」
そんなの初耳よ。ほんとこの番組デタラメばっかりだわ。
まあその３人も想像付くけど。
「それが、永原会長に比良副会長、更に比良副会長よりも年上の余呉さんと呼ばれる会員の３人でして……この３人は会長が５００歳で、比良さん、余呉さんも天保生まれで、いわば江戸時代の、それも黒船来航前をガッツリ経験している人なんですね」
別の自称専門家が違う視点で言う。
やっぱりあたしの予想通りだった。

「あの時代はとにかく変化を嫌った停滞の時代ですから、そんな彼女たち、特に人生の半分以上が江戸時代で占められている永原さんが協会に与えた影響は大きいでしょう」
また別の人が憶測でデタラメを言う。
なんか嘘をついてそれをごまかすために更に嘘を塗り固めて……無限地獄よね。
「うーん、そうですよねえ……ところで、学校側はどんな感じですか？」
欠席裁判によるリンチ行為に、いたたまれなくなった司会者が話題をそらす。
司会の人は芸能人で、あたしは気の毒に思う。
「学校側を責めるのはかわいそうではあります。インターネットを巧みに利用し、抗議電話を殺到させた協会にこそ、非があると思います。そもそもこの協会はですね――」
司会者の配慮にもかかわらず、また牧師が話題を戻してしまう。
その後も、ないことないこと、妄想に妄想を重ねた、無益極まりない討論が続いていく。
ピピピッ……ピピピピッ……
あたしが、テレビを消そうと思ったその矢先、永原先生からの電話があった。
ピッ
「はい、石山です」
「石山さん、例の番組見てる？」
やはり要件はそれだった。
「ええ見てます。あまりに頭がおかしすぎて、あたしはもう呆れるしかありませんわ」
「ええ、何から何までだらめよ。江戸時代だって農業の生産性向上や、味の品種改良、道路や水道の整備や教育の充実、娯楽の多様化や治安の改善が進んでいて、私が江戸の街に住み始めた頃と、黒船来航前じゃ別の時代と言ってもいいくらい大違いだったわ。もちろん、明治以降の急速な変化ほどじゃなかったけど、あの牧師が言うような停

滞の時代でも無かったわよ」
永原先生がそんな反論をする。
確かに、２００年以上も経っているものね。戦争がなくなった代わりに、別のことが発展すると考えるのは、普通の考え方だと思う。
「それで、今回はどうします？」
「……いろいろ考えたんだけど、今回は私たちは直接には動かないことにしたわ。だから、高島さんにも静観してもらうわ」
永原先生から出てきたのは意外な言葉だった。
今回はアクションを起こさないという。
「え？　どうしてですか？」
「沈黙がいいとは思えないけど、もしまた抗議声明を出せば、彼らに更なる燃料を与えるようなものよ。だから、私たちは無視を決め込んで、代わりにインターネット工作を、蓬莱先生の宣伝部と共同で行うことにしたわ。大丈夫、蓬莱先生としても、不老者の団体でもある協会が攻撃されるのは、避けたいはずよ」
「そのことは？」
「ええ、私もこれから、正会員全員に通知するわ。そしたら石山さんも、担当人数の普通会員に通知、お願いするわ」
「……分かりました」
永原先生から指示を受け、電話を切って通じる内容の文章と、連絡先が載ったメールが送られてきた。
あたしはテレビ電話を起動し、正会員で分担して順番に連絡網を回していった。
考えてみると、これも久しぶりにしたわね。去年以来かな？
全てが終わり、インターネットを開くと、既に多くのサイトで、テレビ局に対する罵倒で埋め尽くされていた。
蓬莱教授の宣伝部は、既に自主的に協力を申し出てくれた。
他にも、蓬莱教授の不老関係の研究の是非にも言及した書き込みがあり、ここでも宣伝部と思われる書き込みがあった。
もしかしたら、人が増えたかもしれないわね。
ともあれ、時間に任せ、鎮火を待つしかないだろう。幸い、歩美さ

んの学校も、「もう済んだことなので騒ぎを大きくしないでほしい」という声明を出してくれた。

これなら多分、大丈夫。学校側がこの声明を出した以上、過剰な報道は自己満足にしかならないからだ。

## クリスマスプレゼントを選ぶ

「うーん……寒いわ……」

冬の寒さ厳しい中、あたしは何とかして起きる。

今日は待ちに待ったクリスマスイブの日で、冬休み最初の日でもある。

あれから歩美さんの女子更衣室問題に端を発する事件も鎮火した。

一時は蓬莱教授が２００歳の記者会見を前倒しで開いて、メディアの目をそらす作戦さえ検討されたが、こちらは予定通り、４月まで先送りすることが出来た。

季節は完全に冬になり、日増しに寒さが厳しくなる。

今日のデートも防寒をきっちりしないと、浩介くんに心配されちゃうわね。

えっと、マフラーはどうしようかな？

うん、この白いのにしようっと。

デートの服も白くして……ロングスカートから見える長いレギンスだけは黒にして……よしっ！

白と黒で防寒も決めたあたしの冬デートのファッションが完成したわ。

殆どが白だけど足元と髪だけは真っ黒になっている。

ともあれ、デートファッションは決まった。

白い服は着こなす難易度も高いけど、男子受けを考えると実はシンプルだったりする。

……って、それはあたしの童顔や黒髪ロングのおかげかも。

ウェディングドレスも、こんな白なのかな？

「おはよー」

「優子おはよう。今日明日頑張ってね」

「うん」

今日明日と、母さんたちが空気を読んで旅行に行くという事はない。

既に結婚のことを完全に意識すべく、今日明日のデートもまた、あ

たしの家で、あたしが「実家に帰省をした」という想定で行われる。
「いい優子？　浩介くんの家はここから数駅の距離よ。嫁入りしたからって、この家のことを忘れちゃダメよ」
「うん、分かってるわ」
　１８年間お世話になったわけだし。
「それから、お墓参りは必ずするのよ。優子が生きている限り、大丈夫よ」
「う、うん……」
　冠婚葬祭に関しても、あたしたちはまだよく分からないけど、今後大人になるにつれ、真摯に向き合わねばならない。
「それでね、優子、結婚式なんだけどね」
「う、うん……」
　母さんが式について話す。
「卒業式の日になったわ」
「え⁉　本当に⁉」
　あたしは嬉しさがこみあげてくる。
　何故なら、その日はあたしの希望だったから。
「場所は？」
「うん、ここよ」
「え⁉」
　それは、随分と広い都内のホテルだった。この広さ、かなりのお金がかかっているはずよね。
「いい優子？　卒業式が終わったら、まずは区役所に寄ってちょうだい、そこで婚姻届を提出して、その足で式場に向かうのよ」
「う、うん……！」
　あたしが思い描いてた理想と同じ。
　卒業式で小谷学園を卒業して、そして新しい人生の始まりとしての結婚式が始まる。
　結婚はゴールインではない、それを示すためには、卒業式の日の午後に結婚式を行うのは最も理に適っている。
　打ち合わせなんかもあるけど、夕方の６時くらいには結婚式を始め

たい。
「優子、2次会とかはどうするの？」
「うーん、この時間なら、やめたいわね」
結婚式が終わったら、このホテルの部屋で浩介くんと2人きりになりたい。
「あらそう？　色々楽しいわよ」
「それよりも、浩介くんとの時間が大事だから、初めての夜は、うん」
「あ、そうよね」
あたしは、浩介くんの意向もあって、未だに処女のまま。多分この日は、旦那になった浩介くんにそれを捧げる日にもなるから。
「ともあれ、ドレスのこととかも考えないといけないわね。優子の胸に入るドレス、多分無いと思うし」
「あ、あはは……」
巨乳だと服のデザインが少ないという。
なので実は、あのデパートは重宝している。たまにあのデパート以外の服屋さんに行くこともあるけど、下着コーナーであたし向けのサイズが売られている光景を見たことがない。
逆に言えば、何であそこでは売られていたのいつも疑問でもあるんだけど。
「さ、ご飯食べて行ってらっしゃい。あ、優子も手伝ってね」
「はーい」
今回のデートでは「帰省」の練習もする。でもまだ、この時間はいつも通りの朝だった。

「浩介くーん！」
あたしは、待ち合わせ場所で浩介くんを見かけて声をかける。
「お、優子ちゃん。うわー雪みたいだよ」
浩介くんがあたしの服を見て感激したように言う。
「えへへ、どう？　似合ってるかしら？」
「うんうん、やっぱり優子ちゃんに白い服って、すごくきれいだよ」
浩介くんは、やっぱりあたしの白い服が大好きみたいね。

「ふふ、ありがとう。さ、行きましょう」
今日の浩介くんとのデートは、冬のデートらしく、屋内でも出来るデートが中心になっている。
最初は本屋さんを考えたけど、色々あったので模型屋さんに変更になった。ちなみに、今回のデートはクリスマスプレゼントの選定も兼ねている。
サプライズもいいんだけど、「あのプロポーズよりいいサプライズは無いし、あえて相談して決めるのも楽しいんじゃない？」という、あたしの思い付きが採用された。
この辺りには珍しく、かなり大きな総合模型屋さんで、それなりの歴史があるみたい。
「そう言えば、あたしここには来たことないのよね」
あたしは、優一の頃からあまり模型への興味はなかった。
もちろん、興味があってはまる人ははまるんだとは思うけど、たまたまあたしの興味をそそられなかっただけかな？
「ここは乗り物だけじゃ無くて、建物の模型とかもあるんだな」
まず1階、そこは鉄道博物館で見たようなジオラマに、電車の模型もあった。
「結構、リアルよね」
「作るの大変だよなこれ」
「うんうん」
よく見ると、ボタンを使えば操作できるらしい。でもどれがどれだか分らない。
京都の鉄道博物館で見たのとは車両が全く違っていて、あたしたちが普段住んでいる地域の鉄道の模型もある。
「こうして見ると、普段使ってる電車も景色違って見えるよな」
「えっと、これかな？」
あたしがボタンの一つを何気なく押してみる。
シャー！
「お、動いた動いた」
あたしの操作で模型の電車が動き始め、ミニチュアの中の楕円形の

路線をぐるりと一周し、元の場所に戻っていくと、模型の電車が停止した。
「商品を見る？」
「うん、こんなの置けるスペースないものね」
あたしたちは、入口のコーナーから奥に進む。
さっき出てきた線路や鉄道車両の他にも、駅舎の模型まである。
「お、これ子供の頃遊んだよ」
「うん、あたしも」
さっきの模型よりかなり大きくデフォルメされた子供向けの鉄道のおもちゃ。
青いレールが特徴で、男の子の遊びとして有名なものだった。
「でも、最近はこれで凄いのを作る大人もいるから、子供向けといってもバカにできねえぜ」
「うん」
最近の子供向けは、むしろ大人から見るとものすごい奥が深いということが多い。
「でも、純真に遊ぶのもいいよな」
「う、うん……」
あたしは、ちょっとだけコンプレックスのことを思い出す。
もちろん、こういう男の子向けのおもちゃもいいんだけど、やっぱりあたしは……ううん、考えない方がいいわね。
「？　優子ちゃん、どうしたの？」
「ああうん、何でもないわ」
「そう」
あたしが「何でもない」と言うと、浩介くんはそれ以上追及して来ない。
他にも、このお店には鉄道雑誌もある。永原先生に見せたら喜ぶかも。
「2階に行ってみようぜ」
「うん、分かったわ」
浩介くんの先導で、あたしたちはエスカレーターで2階に移動す

る。
クリスマスイブなので、店内はかなり混んでいる。
２階はやはり、鉄道模型のコーナーだが、さっきよりも大型だった。
「うえあー高いわねえ……」
大きな模型の場合、値段が６桁に達している。
主に黒の蒸気機関車の模型が多いけど、中には新幹線の模型なんかもある。
組み立てる必要のあるものもあって、こちらは完成品より値段が高くなっている。
「凄いなあ、一個欲しいけど……」
「置き場無いわね」
「それに、蓬莱教授の支援があったとしても、ここまでの値段は出せねえなあ……」
あたしと浩介くんは、このフロアにおいては「見るだけ」しか出来ないことを悟った。
ここに長居は無用なのでエスカレーターで３階まで移動する。
店内の広告を見るに、３階は自動車などの車のコーナーのはず。
「うお、ミニカーだ」
「わ、本当だわ」
これもまた、男の子が喜びそうなおもちゃ。車が具体的に何なのかまでは分からなくて、自動車やトラック、バス、あるいは緊急車両何て言う大雑把な区別しかつかない。
おもちゃらしく、これらはみんな値段も手ごろになっている。
「こっちはほら、もう少し大きいな」
「うん」
ミニカーより大きい模型が、所狭しと並んでいる。
自動車のサイドミラーとかまで再現されていて、これを使えば特撮が出来そうよね。
「これすげえなあ、自動でも動くから、文化祭の自主製作映画で使えねえか？」
「うん、まああたしたちには関係ないけどね」

もう文化祭終わっちゃったし、来年は卒業だし。
「うん、もっと早く知ってればなあ……1年の時にでも出し物にしてたのに」
「あはは、1年生かあ……」
「……あんまり、お互い思い出したくねえな」
あたしが女の子になったのは2年生の5月、1年生の1年間は丸ごと優一として過ごした。
だから浩介くんも、今よりずっと頼りなくて、優一だったあたしは浩介くんに乱暴に怒鳴り散らすことが特に多かった。
「うん、今はほら、これがあるもん」
あたしは、浩介くんに左手を見せる。薬指にはめられた婚約指輪が、浩介くんの視界に入った。
「ああ」
「ところで、特撮を本物に見せるのって結構難しいよね」
「それはほら、ここに道路の模型もあるだろ？　未舗装道路、町の道路や電柱、高速道路やインターチェンジの模型もあるから、これを使うんだろう」
浩介くんが隣にあったコーナーを見ながら言う。
「すごいわねえ……」
「ああ、よっぽどの金持ちじゃなきゃ無理だぜこれ」
「もしくは、土地代の安い地方とかならいけるのかもしれないわね」
北海道とかなら、市街地は別として、あたしの家の値段で数倍の広さの家が建てられると思う。
「あー、なるほど」
ともあれ、ここも素通りすることにした。
４階に上がると、そこは青い背景のお店になった。
ここは空のコーナーで、一般のヘリコプターや災害救難機、大小さまざまな旅客機から古今東西の軍用機までそろえている。
特に今人気なのは、航空自衛隊が採用した「Ｆ３５」らしい。
「新型戦闘機かあ……性能も凄いらしいな」
「うんでもレーダーの映らないって怖いよね」

あたしは軍事の専門家じゃないから、よく分からないけど。
他にも、アメリカのボーイング社と、ヨーロッパのエアバス社という2大航空会社による旅客機もある。
模型の同一縮尺で並べると、特に「Ａ３８０」の威圧感はすさまじい。まるで空の要塞ね。
更に進むと、「水上機」というコーナーもある。機体の下に特徴的な棒みたいなのがある。
「水上機ってどういう飛行機なの？」
「どうやら、川や海に着水したり、更にそこから飛び立つこともできるらしいぜ。滑走路はいらないってわけだ」
「へえ便利じゃない。でもその割には見かけないわね」
なんだか素人考えだと、よさそうに見えるんだけど。
「まあ、色々費用とかかかるんじゃない？　離島の多い日本では、結構使われているらしいぜ」
航空自衛隊が水上機を使っているらしく、また日本軍時代からも、重宝していたらしい。
他にも、ヘリコプターがある。水上機よりも船に簡単に搭載できるのもあって、最近では利便性も注目されているらしい。
「ふむ、これは海上自衛隊が護衛艦『いずも』に使っている対潜ヘリらしいな。潜水艦の側は対空攻撃能力は普通持っていないから、これをたくさん積んで飛ばしたら、潜水艦にとっても大きな脅威になるよな」
浩介くんがいずもの模型を見ながら考えている。ちなみに、船の模型は４階及び５階で売っている模様だ。
「潜水艦対策かあ……」
「現代の戦争は潜水艦こそ主役と言ってもいいみたいだしな。水中に潜れるってことは、隠れやすいし、水圧もあるから攻撃だって難しいだろうし」
「うーん、そうよねえ……」
そしてその近くには、やはり海上自衛隊が潜水艦対策に使っている「Ｐ―１」と呼ばれる哨戒機もある。

哨戒機は、哨戒ヘリの飛行機バージョンで、使える武装も多く、性能も高いという。
飛行機の模型は、これで終了した。他にも、爆撃機だとか色々なタイプの模型があった。艦載機のコーナーでは、昔の第二次世界大戦で使われた零戦をはじめとした各国の艦載機の他にも、現代のアメリカ軍が使っている艦載機の人気が高かった。
「Ｆ３５は、艦載機のタイプもあるんだな」
「そうみたいね」
これらの艦載機は、船の模型と一緒に使うのが常識と言えるわね。ちなみに、組み立てるタイプと最初から完成している対応があるのはここも同じ。
飛行機を見終わったあたしたちは、５階に上がる。
そこにあったのは予想通り、船のコーナーだった。
ここでは主に歴代の軍艦を展示していて、大昔の帆船、一番古いのだと「元寇」に使われたモンゴル軍のモデルがある他、織田信長が使ったとされる「鉄鋼船」の模型が、本願寺を支援する毛利水軍の模型と対峙している場面もある。
大砲を搭載していて、いくつかの毛利軍の船を沈めている所まで、芸が細かいわね。
「鉄鋼船かあ……」
「あれって実在なのかな？」
浩介くんが疑問に思って言う。
確かに、こんなすごい船、本当に当時作れたのかな？
「うーん、でも永原先生に聞いても分からないんじゃない？　あの頃は長野にいたわけでしょ？」
「あー、そうだよなあ……」
「当時はインターネットどころか、飛脚さえいなかったわけだもん」
情報の伝達だって難しかっただろうし、ましてや当時は村娘だったし、あの時の永原先生は海を見たことさえなかったんじゃないかな？
そして歴史が下ると、帆船からやがて蒸気船へと変化していった。
黒船の模型もある。これが来なければ、今も永原先生は江戸城の中

だっただろう。
「へえ、この時代の船はまだ衝突が攻撃になってたんだな」
浩介くんが日清戦争の敵船の模型の展示を見て言う。
船の先が尖っていて、確かに武器になりそうよね。
そして、日露戦争で活躍した戦艦三笠や、第二次世界大戦の駆逐艦や空母、そしておなじみ戦艦大和の模型は、かなり数が多い。
「やっぱり戦艦大和は人気だな」
「でもこれ、作るの大変よね」
「ああ、俺は遠慮したいわ」
例によって完成品もあるが、目玉が飛び出るように高い。
更に戦後の艦船もある。
自衛隊の軍艦はやはり人気で、さっき出てきた護衛艦「いずも」や、イージス艦として使われている「あたご型」や、アメリカの「ニミッツ級空母」もあった他、潜水艦は作りやすさもあってお店からもおすすめされている。
「あれ？　潜水艦だけここに隔離されているのね」
「そうみたいだな。この店、潜水艦推しなのかな？」
実際、第二次世界大戦の潜水艦もここに集められている。
「現代の潜水艦に比べると、昔の潜水艦はどうしてこうなったんだ？」
昔の潜水艦は、明らかに水中を進み辛い構造になっているし、これだと簡単に発見されちゃいそうよね。
「うーん、潜水する機会が少なかったとか？　ほら、水上を走ることも考慮されてるじゃない」
「あー言われてみればそうだな。で、これが現在海上自衛隊で使われている『そうりゅう型』かあ」
アメリカの原子力潜水艦の模型と比べると小さいけど、それでも昔の潜水艦の模型と比べると、「伊４００型」と書かれていたのを例外とすればかなり大きなサイズよね。
「エンジンの性能から静寂性までアップしていて、魚雷の性能も相当向上ってあるわね」
この模型店、魚雷の販売にまで力を入れている。

第二次世界大戦で日本軍で使われていた「酸素魚雷」との性能比較図まであって、当時の酸素魚雷は他の魚雷と比べて抜群の高性能を誇っていたが、現代の魚雷はそれをはるかに凌駕している。
ここで比較されている「８９式魚雷」は２９年前、ちょうど永原先生が今の名前に変えた頃の魚雷だけど、射程は大和型戦艦の主砲とほぼ同じらしい。空中よりもはるかに抵抗が大きそうな水中でこれだけ進めるって相当よね。
「テクノロジーの進歩はすげえよなあ」
現代の兵器って、多分大抵のファンタジー世界に勝てるんじゃないかな？
ここのお店が、やや現代兵器推しなのもあるかもしれないけど。
「うーん……」
「優子ちゃん、どうしたの？」
「いやほら、潜水艦プレゼントするって変かなって？」
潜水艦プレゼントしても、あまり映えない気もするし。
「あーいや、別に変じゃねえぞ。でもよ、さらに上層にもいいものあるんじゃない？　それ見てからでも遅くねえだろ」
浩介くんが無難そうに言う。
「うん、じゃあ次の階に行こうか」
ちなみに、さらに上層は「フィクション」コーナーになっていて、「宇宙ロボットＳＦ」の模型とかもあるけど、ここまでは見なくてよさそうね。
つまり、次の６階が事実上の最後になる。
さて、何が待っているかしら？

# 決められたプレゼント

そこの階にあったのは、軍艦以外の船の模型だった。
巨大なタンカーや大型客船から、小型のフェリーや遊覧船の他、１００円で売られている「渡し船」や「手漕ぎボート」の模型も存在している。
プラモデルというとつい軍艦が注目されちゃうけど、実際には他の船の方が多様性に富んでいる。
ここのエリアには、「江戸時代の船」というものまである。
隅田川には昔、こうした船が沢山並んでいたらしい。当時の光景をプラモデルなどで再現したミニジオラマもあった。
「これ、永原先生にも見せたかったわね」
「いた、意外と『私の記憶とは違う』とか言いそうだぞ」
あたしの話に、浩介くんが冗談交じりに言う。
でも確かに、これは上から見た図になってるから、案外記憶違いになりやすいかもしれないわね。
「あはは……」
ともあれ、ここのコーナーには輸送船がたくさんあるほか、海上保安庁の巡視船の模型もある。
軍艦は軍隊の艦船だから、海上保安庁とはまた別の扱いなのね。
そしてその海上保安庁の近くに、いかにもヤバそうなプラモデルが置いてあった。
「不審船だってこれ」
「なんかやばそうよねこれ」
北朝鮮の工作船で、これは実際に海上保安庁と開戦したモデルらしい。
名義は「不審船」で、ご丁寧に工作員のパーツまで同封されている。
ものすごいキワモノだと思う。
「北朝鮮の不審船ってあたしたち生まれてたっけ？」
「うーん、どうだったかなあ？　でも記憶にはねえんだよな」
聞くところによると、スクラップの予定だったが多くの人から寄付

が集まり、今でも横浜に展示されているとか。
「いずれにしても、俺達の記憶にはねえなあ」
「うんうん」
ともあれ、あたしたちの物心がつくより前のことなのは確かよね。
さて、不審船の近くにあった海上保安庁の巡視船の模型を見て気付いたことがあった。
それはどれもドクロマークの旗が同封されていたこと。
ケースの文字などから推測するに、これはどうも訓練時に「不審船役」になるためのものだそうだ。
「なるほど、つまり警察の訓練で言う『犯人役』みたいなものか」
うんそうよね。
「こういうのはむしろ、犯人役が大事になるわよね」
「ああ、非現実的だと、本番で訓練が活かされそうになさそうだしな」
さて、海上保安庁のコーナーはこの辺にして、次に行こう。
さて、海上保安庁の船たちの隣りにあったのは、かなり大型の模型で、どうやら石油などを運ぶタンカー船らしい。
コンテナの模型などもあって、船がいかに大量輸送に優れているかが、この模型からも窺い知ることが出来るわね。
「しかし、こんなに積んで大丈夫なのか……」
浩介くんが思わずつぶやく。
「船ってすごいわよね」
軍艦は戦闘のために特化した船で、海上保安庁の巡視船も、海を守るための警察力のための船だけど、日々の暮らしという意味では、こうしたタンカーや輸送船の方があたしたちにとってはよっぽど馴染みが深い。
同じ輸送船でも、輸送する物資によっては色々なタイプが有ることも分かる。
「で、こっちはＬＮＧ船ね」
ＬＮＧは液化天然ガスのこと。それを運ぶための貨物船だという。
そして、輸送船だけではなく、あたしたち人間を運ぶ旅客船の模型もまた大量だ。

他にも、国鉄が以前使っていた旅客船もあり、「ＪＮＲ」のマークはあの博物館と同じだった。
「これ、青函連絡船って言うんだな」
青森と北海道の間の津軽海峡、今でこそあたしたちはトンネルのことしか知らないけど、昔は当然船で移動するしかなかった。
「洞爺丸……」
一つの模型の前で、あたしは立ち止まる。
裏面の説明を見ると、１９５４年の洞爺丸台風で他の４隻とともに沈没し、洞爺丸のみで１１００人を超す膨大な犠牲者を出したのだという。
「悲劇の船かあ……」
浩介くんがつぶやく。
「船は、沈むものよね。ましてや、台風だもの。でもこれは、不吉すぎて、クリスマスプレゼントには向かないわ……」
あたしたちは初心者に過ぎるし、完成品の方でもいいと思うけど、正直かなり高い。
そうじゃなくたって、台風で沈んで多くの人が死んだ船を、クリスマスプレゼントにするなんてどうかしているわ。
「でも、この事故のために、北海道新幹線もあるのよね」
洞爺丸事故のために青函トンネルが出来、２年前の３月には北海道新幹線につながっている。
「そうだな。海底トンネルに潜っちまえば、台風の影響もほぼ受けねえしな。貨物輸送も助かっているらしいぜ」
もちろん、その前後の区間で支障が出ることはあると思うけど。
そして、次に時代は下り、別の船が見える。
どうやら、現在でも運用されている日本のフェリーの模型。
「ねえねえ、この船体に太陽があるの、いいんじゃない？」
どうも、このフェリーも有名らしい。船体の横側に大きな太陽が描かれていた。
「うん、元気が湧いてくるよなこれ」
これならよさそうだけど……うーん……

残りも少なくなってきたし、もう少し見ていこうかな？
「お、これはまた……あの時の映画のじゃんか」
浩介くんが、サイズ種類の多い、ある客船の模型を見ている。
それは、去年の林間学校で、行きのバスの中で見た映画のモチーフになった客船だった。これも、沈んだ船だ。
ご丁寧に氷山のセットまで付随してある。
「これも縁起悪いわよね」
特に映画は、客船での恋愛模様が繰り広げられていて、主人公の女性は生き残るが、最終的に恋人の男性は死んでしまうという展開だから、さっきの洞爺丸以上に縁起が悪い。
「ああ、でも俺たちには関係ないさ」
浩介くんが頼もしそうに言う。
「確かにあたしたちは、あの２人みたいにならないわ。だって、陸上の内陸で、水もないところで溺れようがないもの」
「だな」
他にも、各国の豪華客船の模型もある。
この時の沈んだ客船も相当大きかったが、今の豪華客船はあれをも更に凌駕する船が多い。
「これ、すげえ横長だし縦長だし……よく沈まねえよなあ」
まるで、絵に描いたようなトップヘビー型の白い豪華客船の模型。
数えることさえ放棄したくなるようなおびただしい窓と救命ボートの数に、船上には様々なアトラクションまで見える。
よく転覆しないものだと感心してしまうほどだわ。
「こんな大きな客船、本当に乗る人いるのかな？」
「うーん、分からないわね」
最近はこの会社、積極的に日本市場を開拓したいらしく、よくテレビ番組でも見かけるようになった。
でも、やっぱりこの手の「クルーズ客船」は、あたしたちには身近とは到底言えない。
「でもよ、これ、日本にもクルーズ客船はあるみたいだぜ」
浩介くんが指を指す。

そこには、現役で活躍中の日本クルーズ客船の模型があった。
「あー、聞いたことあるような気がするわ」
さっきの船はあまりにも巨大だったが、こっちはそれよりは大分小さい。もちろん、船の中ではかなり大きい方で、窓の数もかなりの数があるけど、あの船のように無理そうな設計をした外見はしていない。
船体が小さい分、お客さん一人一人にサービスが行き届きそうな気がするわ。
大きさはそう、さっきの氷山で沈んだ豪華客船とちょうど同じくらいだと思う。
「浩介くん、この階もここまでだけど、どうする？」
そして、ここの階の船のコーナーも終わってしまった。
「うーん、これかな」
浩介くんは意外なものを取り出してきた。
それは去年の林間学校の行きのバスで見た、沈没した豪華客船の完成模型だった。
「浩介くん、それはその……縁起が……」
やっぱり、沈んじゃった船を婚約者のクリスマスプレゼントにするのは、はばかられる。
もちろん、あたしは無宗教者だから、そういうのは信じないんだけどね。
「だからこそだよ、『俺達はこんな悲劇なんか超越してやるんだ』って言う意気込みでさ。あえて縁起の悪いものにするんだ」
浩介くんの目は、決意が見受けられた。
「うん、分かったわ」
あたしは、浩介くんの決意を聞き、これを浩介くんへのプレゼントとするべく、1階のレジでこれを購入する。
「ありがとうございましたー」
あたしたちは、この大きな模型屋さんから出る。
次に目指すのは、浩介くんからあたしにあげるプレゼントを物色する番になる。

「ねえ浩介くん」
「ん？」
「浩介くんは、あたしに何をプレゼントしたいかしら？」
店から出た直後、あたしはまず大雑把にお店の目標を聞いてみる。
「うーん、この間婚約指輪あげちゃったからなあ……」
「もう、それは別でしょ！　何がいい？」
去年も確か、浩介くんのプレゼントはお魚さんのぬいぐるみだったわね。
今でも役に立っているわ。
「うーん、ねえ、動物のお人形でもいい？」
「え!?　うわーい！　やったー！」
浩介くんが、あたしにかわいらしいお人形さんをプレゼントしてくれる。
それだけでもう、とても嬉しい気分になる。
「よし、じゃあ優子ちゃん、おもちゃ屋さんに行こうか」
「うん」
あたしたちは、模型屋さんから１００メートルほど離れた、おもちゃ屋さんのコーナーにやってきた。
小さな女の子向けのおもちゃ屋さんのコーナーは3階になる。
そこには、子供の姿は少なく、親と思われる主婦層の人たちの姿が多く見受けられた。
多分、あたしたちと同じく、クリスマスプレゼントを買いに来たんだと思う。
どっちにしても、浩介くんは浮いていたけど。
中を見てみると、そこのお人形さんには、あたしが既に持っているのもあるし、まだ持っていないのもある。
女児向けのおままごとのおもちゃなどもたくさん売られていて、あたしの目をキラキラさせる。何だかずっとここにいてもいい気がするわ。
「ねえ、このキーホルダーはどう？」
「え？　きゃーかわいい！」

浩介くんが、愛らしい猫ちゃんのキーホルダーを見せてきた。
「あ、でも、お人形さんだったよね」
「あ、あはは……」
あたしはとにかく、子供っぽいものに目がなくて、ピンク色のおままごとセットのおもちゃの箱に目を奪われて、他の人とぶつかりそうになってしまった。
「優子ちゃん気をつけてね」
浩介くんがあたしに注意を促してくれる。
「あ、うん……ごめんなさい」
とにかく、よそ見しがちな所は特に周囲に気を配らないといけないわね。
「ねえねえ優子ちゃん、この動物のお人形さんだけど」
「あーうん、これは持ってるわね」
浩介くんが指差した動物一家のドールハウスのおもちゃ。
あたしもこれは特にお気に入りで、色々なお人形さんとの一人お芝居に狩り出している。
「でも、こっちは持ってないわね」
あたしは、そのすぐ右隣、同じシリーズのリスさんのぬいぐるみのセットを指差して言う。
「お、じゃあこれのセットがいい？」
「うん、家族が増えるわね」
あたしへのプレゼントは、案外あっさり決まってしまった。
見てみると、カップルで来ているあたしたちは結構目立っているみたいで、特に浩介くんはかなり場違いな感じらしく、結構お母様方から視線を浴びている。
「いやでもよ……」
「うん？」
浩介くんは、まだ何かを思慮している。
「俺のこの模型は結構な値段するし、やっぱりもう一個だけ、別のぬいぐるみを買わせてくれねえか？」
浩介くんがそう言う。

「ああうん、気を使わなくていいわよ。これだけで十分嬉しいし」
確かに、値段的には釣り合ってないけど、気持ち的には負けてないと思う。
だからあたしは、気にしないでいいと言うことにした。
「まあ、そう言うなって」
「う、うん……」
でもこうやって、最終的には浩介くんに押し切られちゃうのよね。
あたしって、結構押しに弱いわよね。優一の頃の反動もあるのかも。
浩介くんは、更に売り場の奥を目指す。
ぬいぐるみさんの動物は、殆どを網羅した。今でも、あたしのぬいぐるみたちは、ベッドで添い寝している。
「このウサギさんは、優子ちゃんの持ってるのとタイプ違うよね」
「うん」
浩介くんが指差したうさぎのぬいぐるみさんは、あたしが持っているぬいぐるみさんとはまた色が違っていた。
うん、これでいいわね。
「他にはもっと良さそうなのある？」
「うーん……」
もう一度、周囲を見てみる。
他のお人形さんも持ってないのが多いけど、うーん……
「こっちのウサギさんはどうかな？」
あたしが、さっきのお人形さんよりも同じくらいの値段だけど、大きさが一回り大きいウサギさんのぬいぐるみさんを指差す。
「ああ、こっちのほうが大きいな。よし」
浩介くんがさっきのぬいぐるみさんを元に戻し、あたしの指差した方のぬいぐるみさんを持っていく。
「よし、じゃあレジに持っていこうぜ」
「うん」
浩介くんからあたしへのプレゼントも決まり、同じフロアにあるレジで会計を済ませ、あたしたちはお店を出る。

「よし、これでクリスマスプレゼントを買い終わったな」
「うん」
さて、これからどうしようかしら？
「ともあれ、腹が減ったな」
浩介くんと同じく、あたしもちょっと空き始めている。
「じゃあそろそろお昼にしようかしら？」
「おう。デパートでいいか？」
「うん」
あたしたちは、デパートに入る。
やはりここのレストランコーナーは、真っ先に思いつく場所と言ってもいいだろう。

クリスマスイブということもあって、かなりのお客さんで賑わっていたけど、あたしたちはいつものようにラーメン屋さんに並び、浩介くんが大盛りの、あたしがレディースの小さいラーメンを食べた。

「ごちそうさまでした」
デパートでの腹ごしらえが終わったら、あたしたちは家に戻る。
そう、このデートは「帰省」を想定した「花嫁修業」も兼ねているから。

「優子ちゃんのお母さん、いい印象持ってくれるといいなあ」
駅から出て、あたしの家に向かう途中で、浩介くんが心配そうに言う。
浩介くんがあたしの家で、母さんがいる中で泊りがけは初めてのことだ。
でも、今後結婚したらそういう機会は増えると思う。
「大丈夫よ」
あたしは、浩介くんを安心させたい一心で言う。
「そうは言ってもよ、やっぱりちょっと心配なんだぜ、優子ちゃんだってゴールデンウィークの時はそうだったんじゃない？」

「あ、うん」
「もちろん、婚約解消になることはないと思うし、そんな心配は全くしていないんだが、やっぱり評価が高いに越したこと無いじゃない？」
浩介くんは、あくまで慎重な性格だ。
「うん、それはそうよね」
やっぱり、家族として、親戚として付き合うともなると、今までの彼氏彼女では済まされないような問題が、たくさん出てくるんだと思う。
そんなことを考えつつも、あたしはやや楽しみに、浩介くんをあたしの家に招いた。

# クリスマスイブ　帰省

「お邪魔しまーす」
「あ、浩介くんいらっしゃい」
　家に帰ってきて、早速母さんが浩介くんを出迎えてくれた。
「えっと、ただいま？」
「うん、『ただいま』でもいいけど、今の優子は石山じゃなくて篠原よ」
　母さんがやんわりと注意するように言う。
　様子を見るに、そこまでこだわらなくてもいい場面みたいね。
　とは言え、今は「帰省の練習」も兼ねているし、ちゃんとしないと。
「えっとじゃあ……お邪魔します？」
　やっぱり、まだ違和感がある。
「うん、それでもＯＫよ。どっちを使うかは優子次第ね」
「うーん……」
　確かに、今は浩介くんの嫁という設定だけど、これはあくまで訓練。本当の夫婦になった時はまた変わってくる。
　とは言っても、あたしの部屋も、まだ普段使っているままだし、どこまでが帰省の練習になるかはわからない。
「さ、ともあれ上がってちょうだい。優子と浩介くんは疲れたでしょ？　部屋で休んでていいわよ」
「「はーい」」
　普段なら休みの日は家事手伝いだけど、今日は帰省なのでそれはない。
　母さんの好意に甘え、あたしと浩介くんはあたしの部屋の中に入る。
「久しぶりだな」
　浩介くんがつぶやく。
「うん、でもここももうすぐ見納めよ」
　卒業式の日にそのまま入籍と結婚式をすることになっているから、少なくともその日まではこの部屋は使われるけど。
「といっても、部屋の中のものは持ってくんだろ？」

「うん」
今では嫁入り後のことも含め、両家でかなり調整が進んでいる。
あたしの持っている荷物などは、浩介くんの家の一室に持っていくことになっている。
結婚を急かした代わりに、こうした結婚に関する手続きは両親が面倒を見てくれている。
いいのかなとも思ったけど、「無理を言ったのは両親の方」ということで納得することにした。
「それで、浩介くん」
「ん？」
「新婚旅行、どうする？　あたしは、あまり時期までは考えてないわ」
婚姻届と結婚式の日程は決まりつつある。
次に決めるのは新婚旅行の話だ。
「あーそれなら、式の終わった翌日からでいいと思う」
浩介くんがあっさりと言う。
確かに、一番理想的だとは思うけど。
「え？　でも……」
「ホテルだろ？　もしかしたら、何人か泊まってくれて、そのまま送り出してくれるかもよ」
浩介くんがその後のことを考えてくれる。
確かに、結婚式が終わってすぐに新婚旅行なら、気分も盛り上がるのは確かだとは思うけど。
「ふむふむ」
ちなみに、あらかじめ2次会等は断るようにしてある。初めての夜は二人っきりで長く過ごすと決めてあるから。
せっかくの新婚初夜なのに疲れ切って眠ってしまったでは台無しになっちゃうものね。ただでさえ学校の卒業式の夜に式が行われるんだし。
ともあれ、結婚式位の翌日、そのまま新婚旅行に出て、帰ってきた時は浩介くんの家、そのまま新婚生活が始まる。というのが浩介くんの考えている段取りで、その後の春休みで、改めて祝福してもらうと

いう感じになる。
「とまあ、こんな所だ」
「うーん、あたしは特に異論はないけど、じゃあ新婚旅行はどこにする？　あたしは別に海外旅行じゃなくてもいいけど」
日程には異論はないので、次は具体的にどこに行くかだけど……
「うん、静かな温泉でのんびりしたいな」
夫婦水入らずという意味では、確かに理想の場所だわ。
「あーいいわね。でも、そう言う所あるのかな？」
穴場を探したい所だけど、外国人観光客の急増に更に日本人観光客の海外旅行離れというダブルパンチもあって、今の観光地はどこも混んでいる。
ということは、つまりそれなりに静かな場所が求められているわね。
「うーん、ともあれ、そろそろ考えたほうがいいよなあこれも」
「うん」
いつまでも、考えないわけにも行かない。
今やクリスマス。来年はもうすぐそこで、卒業式の日も考えれば後3ヶ月で予定は決まってしまう。
「ねえ、母さんと話し合うのはどうかしら？」
とりあえず、あたしたちだけで話しても仕方ないわね。
「ああ、それがいいな」
浩介くんの賛同を得て、あたしたちはリビングに向かう。
「あら？　どうしたの2人とも」
テレビを見て休憩をしていた母さんがあたしたちに気付いて向き直ってくれる。
「あの、実は――」
あたしたちは、新婚旅行の行き先について悩んでいることを話す。
日程は結婚式の翌日からで、行き先についてはどこか温泉でのんびりとしたいというのが本当のところだけど、そこが具体的にどこかはわからないことを話す。
「分かったわ。母さんたちの方でも調べておくわ。あ、候補を複数に

しておいて、最終的には優子たちに決めてもらうって感じでいいかしら？」
「うん」
まあ、確かにそれが妥当だと思う。
候補を複数にしておいて、あたしたちが選ぶ形なら、そこまでおんぶ抱っこという感じでもなくなる。
ともあれ、新婚旅行についてもあたしたちは障害を乗り越えた。
「母さん、ありがとう」
「どういたしまして、また何か悩みがあったら相談してね」
母さんに見送られて、あたしたちはもう一度自分たちの部屋に戻る。
さて、どうしようかな？
「浩介くん、テレビ見る？」
とりあえず、テレビでも一緒に見ようかと提案する。
「あーうん頼む。で、どれを見ようか？」
「ともあれ、見てみましょう」
あたしはテレビのリモコンを取り出して、テレビをつける。
まずは一旦、ざっとチャンネルを見てみたけど、どこもクリスマスの特集をやっている。
その中では、カップルに取材しているテレビ局も多い。
テレビカメラの前でも、カップルたちはとにかくいちゃついているのが分かる。
「甘々よねえ……」
「でも、俺達も似たようなものだろ？」
浩介くんが軽そうな顔で突っ込んでくる。
「そうかも」
あたしたちも似た者同士なのは、事実だと思う。
確かに、彼・彼女はとっても幸せそうに見える。
それだけではない、このテレビ番組では、少し年齢の行ったおじさんおばさんのクリスマス何ていうのもやっている。
「いい年して何だかなあって思うよなあ」

浩介くんがやや苦言を呈するように言う。
「うーんテレビ局も既存客のつなぎとめに必死なのよね」
「でも、これじゃ若い人はついてこないだろ？」
最近は若者が「テレビ離れ」なんて言われていて、ますます中高年にターゲットを絞っているコーナーも多く、これによってますます若者がテレビから離れていくという現象が起きている。あたしたちみたいに１０代でこうやってテレビを見ているのも珍しいかもしれない。
それにしても、何だか悪循環よね。
「まあね、でも、いい年してって言うけど、そのうちその概念もなくなるわよ」
「ああ、そうだな」
あたしはあえて断定して言う。
蓬莱教授の研究は「成功して欲しい」ではない。
むしろ「あたしたちが成功させる」という覚悟で臨んだ方がいい。
あたしと浩介くんの未来の為にも、それがいいことは分かっている。いつまでも、若いままでいられるものね。
「でも、それじゃあさ」
「ん？」
浩介くんがちょっとだけ首をひねりながら言う。
「今のこれって、後の時代にはさ、貴重映像になるんじゃねえか？」
さらりと浩介くんが面白いことを言うけど、あたしは異議がある。
「あはは、もう映像自体はたくさんあるし、みんながすぐに不老になるわけでもないからそうはならないんじゃない？」
「あー、そうかもしれねえな」
あたしの突っ込みに対して、浩介くんが納得したように言う。
動画映像自体は昔からある。カラーではなくても白黒映像なら、明治時代のものだって一応残っている。
もちろん、永原先生の時代は写真もなかったし、日本に写真が入ってきたのも幕末だけど、それでも様々な記録から、当時の様子を窺い知ることが出来る。

とは言え、蓬莱教授が言っていたように、不老人類でこの世が埋め尽くされたとしたら？
遠い未来、老人という存在そのものが奇特に見られるかもしれない。
蓬莱教授も、「不老人類は、それまでの人類よりも圧倒的に強いから、もし不老の両親に生まれた子供が不老だとすれば、今の人類が淘汰されるのも時間の問題になるだろう」と言っていたことがある。
だから、生で見るのは貴重な経験なのかもしれないわね。
「ま、兎にも角にも、今は蓬莱教授の研究を信じねえとな」
「うん」
テレビのクリスマス特集、こうした中高年へとターゲットを絞るのは、おそらくスポンサー側の思惑もあるのかもしれないわね。
小谷学園の小野先生にしても、教頭先生にしても、あるいは歩美さんの学校の上層部にしても、協会のこうした対応に無理解なのは中高年層が多かった気がする。
彼らはインターネットにも疎くて、中々協会や蓬莱教授の宣伝を届けることが出来ない。このあたり、どうにかしないといけないと思うけど……
そう言えば、蓬莱教授はテレビ番組のスポンサーにならないのかしら？
寄付金だけで資産１０億ドル、１０００数百億円もお金があるんだし、テレビ局の番組スポンサーになるという手はあるんじゃないかしら？
「優子ちゃん、何考えてたの？」
「あーうん、蓬莱教授がテレビ番組のスポンサーにでもなればうまくいくんじゃないかなって？」
「うーん、でもいくら蓬莱教授でも、個人じゃどうにもならんでしょ」
あたしの思考に対して、浩介くんが「無理じゃないか？」という顔をする。
確かに、テレビのスポンサーはどこもそれなりにメジャーな企業が多いものね。いくら１０億ドルの資産があるからと言って、テレビの

ＣＭを打つのは至難の業だ。
それに、ＣＭで蓬莱教授は何を宣伝するのかという問題もある。
ただお金出すだけじゃスポンサーじゃなくて単なる金づるになっちゃうし。
「とは言っても、やっぱり高島さんの所だけじゃあ限界よね」
ブライト桜はインターネット専門のメディアで、新聞などはない。
「かと言って、協会が取材を受けるわけにも行かねえしなあ……」
やはり権威というのは怖い、まるで「嘘も百回言えば本当になる」を本気で実践し、こちらから取材を申し込ませようという算段なのが分かる。
そうすれば最期、印象操作を受けてますますこき下ろされるだけだわ。
「本当にどうしたものかしら？」
情報力というのは恐ろしい。一般人のあたしたちに出来ることは殆ど無い。
「でもなあ、どうかしなければならんよなあ。放置するわけにも行かねえし」
そう、歩美さんの更衣室問題では、最終的にあたしたちが無視を決め込んだのと、学校側が「もうそっとしておいてくれ」と言ってくれたおかげで収束したけど、そう何度も同じ手が通じるとは思えない。
「まあ、そのへんは蓬莱教授と高島さんに頼るしか無いわよ」
「うーむ」
結局、始まったばかりの蓬莱教授の宣伝部と、高島さんのブライト桜だった。
つまり、現状維持しか無いというのが結論になった。
つまりそれは、時間を稼ぐという手でもある。
インターネットの普及により、旧世代からの世代交代を待つという手もある。
とはいえ、それはあまりにも長過ぎる。
「ともあれ、今は現状維持しかねえな」
「うん」

テレビでは、相変わらず「クリスマスにおすすめの新しいレストラン」なんかを紹介していて、あまり面白くない。
そして別のチャンネルも似たようなものだった。
最近、あたしはテレビをあまり見なくなってしまった。それでも、浩介くんと2人っきりならそれなりに見続けている。

「ご飯よー!!!」
浩介くんとテレビを見ていると、母さんの呼ぶ声が聞こえる。
「はーい!」
あたしたちはリビングに行く、いつもは3人でのご飯だけど、今日は4人で食べる。
そして食卓も、今日がクリスマスイブということで、特別なメニューになっている。
「「いただきまーす!!!」」
あたしたちは一斉に「いただきます」をして、食べ始める。
「さあ、遠慮しないでたくさん食べてね」
「う、うん……」
クリスマス、浩介くんと2人でのクリスマスは去年と同じ。
違うのは、母さんたちもいること。
結局、「帰省の訓練」という名目にはなっているけど、やはりいつもとあまり変わらなかった。
もちろん食べ物はいつもと違うけど。
「いい優子? 今日はいいけれども、本当の帰省の時は母さんの家事を手伝うのよ。それから、これから母さんが老いて弱っていくとしたら、実家にちゃんと帰るのよ」
「うん、分かってるわ」
母さんがあたしに教えるように言う。
「俺も、出来る限りのことはしたい」
「後は……優子たちには遺産相続のことも教えないとなあ」
父さんが口を開く。
母さんからは、家計簿をつけたり、やりくりする。そういうのは奥

さんの役目だから、ちゃんとやりなさいと言われた。
もちろん、今はまだ浩介くんのお母さんがいるからいいけど、母さんが「いつまでも親はいない」とも言っていた。
もし、蓬莱教授がうまく行けば、親もいつまでもいることになるのよね。
「親は先に死ぬ……親はいつまでもいない……かあ……」
「ああうん、蓬莱教授の実験がうまく行けば、そんな常識も変わるのかもしれないのよね」
浩介くんのつぶやきに対して、母さんがしみじみと言う。
そう、蓬莱教授の実験によって、様々な価値観が変化することになるはず。例えば、親不孝の代名詞のような、「親より先に子供が死ぬ」というのも、不老人類同士なら今よりもずっと多くなるはずだ。
そうした変化の大きさに、果たして人類は耐えられるのか？
蓬莱教授の話を聞いても、まだ少し不安が残っているのも、また事実だ。

「ふう、ごちそうさま」
浩介くんが一番に食べ終わる。
「じゃあ浩介くん、お風呂入ってね」
「おう」
「優子は私のお手伝いお願いね」
「はーい」
こうして、クリスマスイブの食事は終わり、浩介くんはお風呂に、あたしは母さんの家事を手伝い、その後にお風呂に入る事になった。
寝る場所に関しては、去年と同じ、あたしと浩介くんは同じベッドに寝ることになった。

「これから、どうなるんだろう？」
あたしはお風呂の中で考える。
ここが実家になり、浩介くんに嫁入りした後のここの家のこと。
母さんたちは、果たして蓬莱教授の手引きであたしたちと同じよう

な存在になれるのか？　あるいはなれたとしてもそれを承諾するのだろうか？
　そのあたりは、とても怪しかった。
「なるようになる、かなあ……」
　適当な答えだけど、今はそう判断する以外に、どうしようもないのもまた事実だった。
　お風呂から出たあたしたちは、何の気なしに勉強会をして、この抜け出せない迷路から少しだけ気を紛らわせられた。

「浩介くん、おやすみなさい」
「うん、また明日」
　あたしたちの考えとは関係なく、時間は平等に過ぎていく。
　そして、明日という日がやってくる。明日はそう、クリスマスだ。

## 静かなクリスマス

「うんっ……」

なんかベッドが狭い、いつもより狭いわね。そうだった、浩介くんがいたんだわ。

今日はベッドだけど、本当の帰省の時はこの部屋に布団を敷く事になっている。部屋も空になるから、スペースは確保できるはず。

さて、浩介くんはまだ起きていないわね。

ゆっくりとベッドから降りて……よしっ、浩介くんは気付いていないわね。

「すーすー」

浩介くんはまだ深く眠っている。

今のうちに着替えちゃおう。あ、でも起きてくる可能性もあるし、部屋は変えないといけないわね。

今日は午後には浩介くんが家に帰る予定で、帰省ということであたしも駅まで行こうかなと思っている。

冬らしく、あたしはくるぶし丈のロングスカートに、赤と茶色の中間くらいの落ち着いた感じのトップスにする。

「ふー」

浩介くんが起きてくるまで、リビングで休もうかな？

どうやら結構早い時間に起きてしまったらしく、父さんも母さんも起きてないみたいだし。

「さて、テレビ見ようかなあ……」

テレビは多分、クリスマス当日ということで、昨日と同じような内容になっているとは思う。

あるいは、「新年に向けて」の番組内容になっているかもしれない。

「うーん……」

あたしはＣＳの方を回す。

「あ、これがいいかも」

久々に、ＣＳを回すと、「これは実話であり」の飛行機事故の検証番組をやっていた。

その次にも、何やら船舶での貨物輸送のお仕事の話があるみたい。
これもまさに、働くおじさんという感じだわ。
これなら、暇つぶしに持ってこいね。
あたしは番組を見始める。今回の事故、どうやら海上での墜落みたいね。
あたしも勘で分かってきたけど、テロとかそういうのはあんまりないわよね。
これだけ番組を見ると、大抵はブラフというのも分かってくる。
あーでも、そう言う推測をしちゃいけないのかな？
ともあれ番組に戻ろう。
機長は飛行時間２００００時間のベテランだという。
どうやら、インドネシアからシンガポールで、副操縦士が操縦している。
前方に嵐があるという報告から、この番組は始まる。もちろん、乱気流は避けたいのが普通。
警報として「イーカムアクション」が鳴っていて、マニュアル通りの措置をして警報が解除された。
数分後、また同じ警報が出た。そして管制官は上昇を許可する。
応答がないのはまた、同じ警報が出てそれに追われていたからしい。
今度は警報が増え、機体も傾き始めている。
そしてそのまま機体が急上昇していく。そして突然落下、失速ってことよね……
そしてそのまま、レーダーから消えてしまった。
典型的な航空事故って……一体どういうことだろう？
最初に疑われたのがまず天候。天気図を重ねたが雷雲は無関係だとわかった。
海の捜索は大変で、海底から引き上げるのは時間がかかる。
そしてまず、空中爆発かどうかを調べる。そしてその痕跡は見つからなかった。
とは言え、まずはブラックボックスを見つけないといけないわね。

なんとか回収完了し、事故機の様子が分かる。
ここまでは再現と同じ。
次の警報、機長が「いや、いい方法がある」と言っていた。
「これは新しい情報ね」
最初の再現にはなかった。
ガチャッ……
「あ、浩介くん」
パジャマ姿の浩介くんが、リビングに入ってきた。
「優子ちゃん、あ、これ見てるんだ。お、以前見たことあるぞこれ」
「今、オートパイロットが開放されたところね」
そして、ここから一気に別の警報が鳴り始めた。
失速警報……失速なのに「減速」ってまずいよね。
「引き下げろって……」
「操縦桿引いちゃダメよね」
失速状態で操縦桿を引くのは状況が悪化するだけよね。
「ああ」
そして、整備記録を見てみると、事故機にはＲＴＬＵに故障があったことが分かった。
これはどうも、方向舵の制御ユニットらしい。
２３回も同じ不具合が続いていて……何で飛ばすのよ……
リセットだけして運行するのはだめよね……それでも法的には無問題なのね、怖いわ。
「浩介くん、これ……」
「警報があるのに何もないっていうのが引っかかるよなあ」
「故障一つでは落ちないってことかな？」
にしたってもうちょっとどうにかならないものかとも思うけど。
ともあれ、フライトデータレコーダーの解析に期待しよう。
ダウンロードした結果、４回目で破綻したことがわかった。
「２度が一気に５４度にも傾いたのね」
「それだけ巡航速度は速いんだな」
そりゃあ飛行機だから当たり前だけど。

そして自動操縦が消えたの地、パイロットの操作が誤っていることが分かった。
そして、突然の電話で新情報が飛び込んできた。
どうやら、事故機の機長が地上の整備士を呼んだみたいね。
「いい手がある」
整備士がそう言うと、メインコンピューターの回路を遮断した。
「こ、これでいいの？」
「もちろんよくはない」
浩介くんが冷静にあたしを突っ込む。
「飛行中にやったらいけないわよね」
飛行中にコンピューターの回路を遮断する、なんて素人でもまずいと分かる。
フライトシミュレーターを使った実験でも、やはり同じ結果になっていた。
専門家からも「絶対にやってはいけない行為です」と言われている。
姿勢指示機を見ていなかったと番組では続いている。
「空間識失調……」
「姿勢指示機を見てなかったのね」
パイロットが空間識失調を続けた結果、最初の５４度左に傾いた状態が正常だと思い込んだ。
そして、いきなり機首上げをし始めた。
……完全に混乱しているわね。
「引き下げろ」という言葉が、更に混乱を招いていた。
引いたら普通、機首が上がるはずだから。
「ｐｕｌｌ　ｄｏｗｎ」では主語がない、これではどうにもならないわね。
機長は操縦の権限を移せない、「私が操縦する」とは言わなかった。
ボーイング機ではあり得ないらしい。
そしてＲＴＬＵの調査結果が出た。
何とこの警報は、無視してもいいとのことだった。
「無視してもいい警報って矛盾してない？」

あたしは素人考えの疑問を投げかける。
「だよなあ、何のための警報なんだろう？」
どうやら、はんだ付けのちょっとしたミスで、このような悲劇の連鎖が引き起こされたという。
どうにもやりきれない事故よね。何もかもが、悪夢で連鎖している。
最終報告書では、軽微な不具合を放置しないように、整備マニュアルを改善するように低減している。
そしてもう一つが、クルーのコミュニケーションの重要性だという。
「実は機長は何度か操縦桿を押してるんだけどねえ」
「操縦を変わると言わなかったのはまずかったわよね」
そして、番組が終わった。
ガチャッ……
「あら、優子たち起きてたの？」
ちょうど番組を見終わると、母さんが部屋に入ってきた。
「ああうん、ちょっと朝早起きしちゃって」
「そう？　朝食はもっと後でいい？」
母さんが聞いてくる。
「うん」
あたしはあまりお腹空いていないので「後でいい」と答えておく。
ともあれ、次の番組を見たい。
この後は、船舶の貨物輸送のお話を行う。
物流を支える人々は目に見えないが、あたしたちの生活には無くてはならない存在でもある。
また大型船にもなるので、積み込み作業だけでも大変なのが伺える。
「こんな短時間でよくできるわね」
母さんが感心している。
「うん、クレーン役とか絶対嫌だわ」
もちろん、安全対策には万全を期してるんだとは思うけど、それで

も高所というのは怖い。
遊園地デートでも、あたしも浩介くんも、観覧車に乗っただけで、ジェットコースターなどには乗らなかった。
コンテナを積む順番や、積む中身なども考慮しなくてはいけなくて、これは本当に大変だと思った。
巨大船が来ると言うだけでも、港は大騒ぎになる。
何故なら、ボートや漁船などの小型船を近付けてはいけないからだ。
大きな船は急に止まったり曲がったり出来ない。自動車とはまるで訳が違うのよね。
速度が遅くても、船は大きいから止まったり曲がるのは大変。そういえば、あの客船映画でもそんな感じだったものね。
そこで、近くで誘導用のボートを動かして見張りを兼ねるんだという。
そして接岸し、クレーンなどを使って物資を運ぶ。
これらの船で運んだ物資は、鉄道やトラックを使ってお店に運ばれていく。
「例えば、自動車ならどうなるのかな？」
ＣＭ中に、あたしが聞いてみる。
「自動車工場で自動車を作って、それを自動車運送用のトラックや貨物列車で運んで、港についたらコンテナに入れて、船で輸出する。そして向こうではそこからトラックや貨物列車に積んで、そして各ディーラーに並ぶんじゃないかな？」
「なるほどねえ……」
船と自動車と鉄道とで、うまく役割分担をするのが運送の役目。
いや、あたしたちだって、例えば作ったご飯をテーブルに置くのだって、運送の一種とみなしていいと思う。ご飯の原料だって、トラックなどで輸送されてくる。
物をいかにして運ぶかということは、かなり重要なテーマだと思う。
古来は、人間が自分たちで運ぶしかなかったんだから、こういう大

量輸送が出来るようになったのは、人間が豊かになる原動力にもなっているのよね。
「さ、お母さんはこれ見終わったら、朝食作るから、優子は手伝ってちょうだい」
「はーい！」
運送番組も終わり、あたしは母さんと一緒にごはんの準備に取り掛かる。
今日はクリスマスだけど、昨日が特別だったので、今日はちょっとだけアレンジした朝食で済ます。
ちなみに、この時にプレゼントも渡すことになっていたので、浩介くんは昨日買ったプレゼントを取りに部屋に戻っている。
「優子、クリスマスプレゼント、何もらったの？」
母さんが聞いてくる。
「え？　見てのお楽しみよ」
「まあ、そうよね」
ガチャッ……
そんな会話をしていると、また部屋の扉が開く音がした。
「おはよう……」
「あ、父さんおはよう」
父さんが、起きて机に向かい、あたしたちがちょうど見終わったというのもあって、テレビでニュース番組を見始めた。

「ご飯できたわよー」
「「はい」」
やがて母さんとともにご飯を作り終わり、男たちに配る。
「それじゃあ、いただきますするわよ」
「「いただきます」」
母さんがそう言うとあたしたちも続く。
浩介くんが入る分だけ量が多いだけで、いつもとそこまで変わらない朝食だった。

「それで、さっきの続き。優子はクリスマスプレゼント何貰ったの？」
「ふふ、じゃーん！」
あたしは浩介くんから貰ったプレゼントの箱を開く。
そこにはウサギさんの大きめのぬいぐるみに加えて、リスさんのドールハウスキットもあった。
「あら優子、やっぱりそういうのが好き？」
「うん大好きだわ」
何が入っているのか分かっていても、何故かドキドキ感があるし、嬉しさは変わらなかった。
浩介くんからもらったかわいらしいぬいぐるみさんだもん。
「うーんでもなあ……」
「ねー」
一方で、両親は子供向けのプレゼントに喜んでいるあたしにちょっとだけ引っかかる感じがしているみたいね。
「父さん、母さん、女の子がぬいぐるみさんで遊んじゃダメなの？」
「ああうん、そうよね。優子ちゃん……やっぱりもう、本当にすっかり女の子よね」
母さんが遠い目を見て言う。その心境は複雑極まりないものだ。
優一だった頃のことを少し思い出しているのかもしれない。
「優一が優子に……息子が娘になった日が、昨日のことのようだよ」
「優子ちゃん、本当に正反対の性格で、本当にすごいと思うよ。もし俺がこの病気になって……ここまでやれるとは思わないよ」
父さんと浩介くんもまた、優一とあたしを重ね合わせる。
「父さん、まだ思うんだよ。もしかしたらさ、本当は優一ってのはあの時に死んでいて。新しく優子って女の子が家に入ったんじゃないかって」
「え？　でも……それは……」
そんなことはないことは分かっている。今でも思い出そうとすれば、優一の記憶も色濃く残っている。
第一、最初に起きた時に、両親に本人確認もしたし。
「あーうん、もちろん優子と優一が同じ人だってのは知っているよ。

だけど、ここまで変わっちゃうと、そうも思えてくるんだ」
それはそうかもしれない、父さんの言う通り。
ただ性格面だけじゃない、乙女心あふれる女の子になっただけじゃなく、性癖まで女の子になって、今でも浩介くんの下半身につい目が行ってしまう。
プールデートの時だって、浩介くんに胸やお尻触られて興奮しちゃって、大きくなった浩介くんの下半身にも……
ううん、考えちゃダメ。浩介くんの「あそこ」を考えるだけで、濡れちゃいそうだわ。
「どうしたの優子ちゃん？」
浩介くんが少し気になって言う。
またちょっと考え込んじゃったかな？
「ああうん、何でもないわ浩介くん」
いけないいけない、ちょっと思考が飛んじゃったわ。
「それで、優子は浩介くんに何をプレゼントしようとしたの？」
母さんが今度は浩介くんの方に注目する。
「うん、ちょっと待って」
浩介くんが箱を取り出して開ける。
そこには豪華客船の完成模型があった。
「あら、船の模型ね」
母さんがちょっと興味深そうに見ている。
４本の煙突のある大きな船の模型。この船の模型は、あたしは「縁起が悪い」ということで買うのをやめようとしたんだけど、浩介くんはあえてこれをチョイスした。
父さんは、この船が何か知っているためか、ちょっとだけ苦虫を噛み潰したような表情をしている。
「あら？　お父さんどうしたの？　難しい顔して」
母さんがそれに気付き、父さんに問いかけてみる。
「あーいや、その船はな……沈む船だろ？」
「ああうん、でも浩介くんは『あえて縁起の悪い船にしたい』って言ったわ」

父さんの想定内の疑問にあたしは予定通りの答えをする。
「うーむ、なるほどのお……そう言う考え方もあるか」
父さんは納得したような表情で言う。よかったわね、揉めなくて。
ちなみに、このプレゼントは浩介くんの部屋に飾ることになった。
クリスマスプレゼントを交換し終わり、あたしたちは部屋に戻った。
「ねえ浩介くん、この後なんだけど……」
「うん」
「ちょっとだけ、あたしとお人形さん遊びしない？」
「え!?」
あたしの提案を聞くと浩介くんは少し驚いた風に言う。
「おままごとセットとかも使って、あたしが普段している女の子の遊びのこと」
「ああ」
以前にも、似たようなことはしたことあるけど、これから結婚したらそういうことも増えてくるはず。
そう言う意味でも、今のうちにこうしたお人形さん遊びは増やしていきたい。
「そうだ、この船の模型も使ってみようぜ」
「え!?」
浩介くんから、意外な提案が出る。
確かに、使えそうではあるけど。
「この人形とこの人形で……後は海はこの青いハンカチで……」
「えっとこうやって……」
あたしたちは、林間学校で見た映画のワンシーンを再現した。
ウサギさんとリスさんの小さなぬいぐるみでだけど。
「おー！　中々感じ出てるじゃん」
見た感じよりも、雰囲気が出てるわね。
「うん、こういう遊び方もあるのね」
斬新な浩介くんの発想に、あたしもすごく楽しいわ。
「これさ、船内なんかをセットにしてさ、ミニチュアで映画を再現でき

そうだな」
浩介くんが言う。
でもお金かかりそうよね。まあ、頭の片隅にとどめておこうかな？
そんなこともあって、浩介くんとのお人形遊びとおままごとは、順調に進んでいった。

「それじゃあ、浩介くん、またね」
「ああ、良いお年を……かな？」
「うん、元旦にまた、会いましょう」
時間にもなったので、名残惜しく浩介くんと別れる。あたしたちは冬休みに入る。この間、元旦まで特に予定はない。
あたしは高校卒業に向け、残り少ない２０１８年を楽しむことにした。

# ２０１９年

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん……」

朝起きる。今日は1月1日、この日より、２０１９年になった。

元旦ということで、あたしは初詣に行くことになっている。

去年と同じように振り袖を着ることになっているんだけど、浩介くんに和服姿を見せるのは去年の元旦以来のことになる。

「浩介くん、気に入ってくれるといいなあー」

夏祭りに初詣でお世話になった神社に今年も行く。

夏祭りの時は、あたしはまだ女の子になりきれていなくて、随分と浩介くんにも寂しい思いをさせたと思うし、あたし自身ももどかしかった。今はもう、懐かしい思い出だけど。

「母さーん」

「あ、はーい！」

ともあれ、起きたあたしは母さんを呼ぶ。

部屋に入ってみると、何と母さんも和服姿になっていた。

「今日は私も行くわよ」

母さんが気合いを入れたように言う。

「え!?　でも……」

「いい？　今日は浩介くんのお母さんにも来て貰うわよ。親戚付き合いということも考えねばならないのよ」

「あ、うん……」

やっぱり、最近はこういうのが多い。

恋人同士というデートの状態は少なくなって、両家の付き合い的な交流イベントが増えた。

「いい優子？　結婚ともなると2人だけの問題じゃなくなるわよ。気持ちは分かるけど、こういうのを疎かにすると、長続きしないわよ」

「はーい」

母さん、何だか最近は姑さん代わりにもなっているわね。

永原先生や桂子ちゃんも小姑っぽくなってるし、本当、性格悪い人

がいなくてよかったわ。
浩介くんに姉妹が居て、嫉妬深い小姑になっちゃったらまずいものね……あ、でもあたしくらいかわいくて美人で、家事も上手ならそういう気も起きないかも？
「優子、着替えるのもいいけど、パジャマのままでいいからご飯手伝ってくれる？」
「うん」
着替える前に、まず母さんの指示で家事を開始することになった。
母さんは和服姿なのに、料理をこぼしたりとかしない。
やっぱり出来る主婦は違う。あたしも、ああなりたいと思う。
「さ、優子。お正月の朝ごはんよ」
あたしは、今年最初の朝ごはんを母さんと作り終わり、父さんと3人で食べる。
「この家の、最後の正月ね」
あたしが家に居て最近考えるのはいつも結婚のこと。
浩介くんのお嫁さんになったら、あたしはこの家から浩介くんの家に嫁ぐ。
大晦日だって、この家で過ごすのは最後だし、バレンタインデーだって、そうだった。
「そうねえ、あ、でも帰省してもいいのよ」
「うん……」
あたしは、やっぱりちょっとうつむいてしまう。もちろん、母さんは母さんで自分の実家に時折帰っているから、あたしも時折実家に帰る必要はあると思うんだろうけど。
「ねえ母さん……」
「何かしら優子？」
やっぱり、ちょっと不安なので聞いてみる。
「母さんはこの家に来る時は、前の家からはどんな感じだったの？」
「うーん、お互い独立してての核家族だったから、あんまり実感がわかなかったわ。お父さんと結婚する前は1人暮らしだったからね」
「そう言えばそうだったわね」

あたしは元々、結婚する前の両親についてあまり聞いたことはない。
母さんが結婚前に独立して一人暮らしだったことも、今思い出したばかりのことだった。
「まあ、なるようになるわよ。浩介くんの両親も居るし、寂しくはないはずよ。私達も、優子が居なくなっても大丈夫よ。それに、どうしても寂しくなったら、会いに行くから、ね」
「うん……」
そう、あたしの家と浩介くんの家、ほぼ離れていないで、電車で数駅の近い距離にあるから、いつでも行くことが出来る。
遠距離にならなくて、本当に良かったわ。
「それに、本当の本当に別居に耐えられないなら、どちらかが家を売って、もう片方が家をリフォームして2世帯住宅にしちゃえばいいのよ」
母さんが、さらりと凄まじいことを言う。
建て替えたらお金かかりそうだわ。
「え!? でもそれは……」
「あはは、もちろんそんなことはしないわよ。ほら、優子は卒業式に行って、婚姻届出して、結婚式して、翌日から新婚旅行に行って、そのまま浩介くんの家に入るんでしょ？ それなら、関心もいろいろと分散されるから、そこまでショックにはならないわよ」
母さんはとことん楽観的に言う。
でも、そうかもしれない。
大好きな浩介くんのお嫁さんになるんだもの。このくらいの未練、何てことないじゃないの。
母さんの励ましのおかげで、あたしは気持ちが楽になった。
「さ、優子、着付けするわよ」
「はーい」
朝食を食べ終わったら、早速母さんに着付けすると言われ、あたしは自分の部屋に戻る。

去年を思い出しながら、あたしは母さんに手伝ってもらって振袖姿になる。
「はーい、動かないでね」
母さんに体を触られ、まさぐられながら言われる。
「んぅ……ちょっと母さん、どこ触ってるのよ！」
「あらあら、ごめんなさいねー」
うー、絶対わざとだわ。
去年はそういうことなくて、普通に着替えさせてくれたのに。
「う、うん……」
母さんにパジャマに手を入れられ下半身から下着ごと降ろされる。
上も同じようにブラジャーも脱がされ、あたしは何も身に着けない状態にさせられた。
「あーん……」
母さんとはいえ、いやらしい感じで脱がされるのは結構恥ずかしいわね。
浩介くんほどじゃないとは思うけど。
「うふふ、我慢しなさい」
全裸のあたしに諭すように言うと、さらしを巻かされ胸を小さくさせられる。女としての尊厳が傷つくみたいで、あたし的にはちょっと憂鬱な瞬間だ。
そして取り出した襦袢を着せてくれる。
「はい、じゃあ着付けるわよ」
そして、本格的な振り袖を母さんがぱぱっと着付けてくる。
このあたりの手早さは、あたしも見習っていきたいわね。

「はい、出来たわよ」
「うん、ありがとう」
母さんからＯＫの合図が出て、あたしはようやく自由になる。
部屋にある鏡の前で確認してみる。
うん、これならバッチリね。
でもやっぱり、さらしがきついわ。かと言って、まかないとあまり

にもみっともないし。
「さあ優子、行くわよ」
「う、うん……」
ともあれ、母さんの号令も掛かり、あたしは母さんと一緒に家を出た。
「さ、今日は桂子ちゃんも招待しているわよ」
「え!? 桂子ちゃんも?」
家から出てすぐ、母さんがもう一つの事実を告げる。
「ええ、桂子ちゃんとあの場所から行ける初詣も、もうこれで最後ですもの」
母さんが言う。でも、正確には帰省すればまた出来る。
だけど、毎年できるかと言えば違う。
母さんと道を歩いていると、同じく振袖姿の美人の親子が見えてきた。
「あ、優子さん、あけましておめでとう」
「あ、桂子ちゃんのお母さん、あけましておめでとうございます、その……お久しぶりです」
桂子ちゃんの近くに、桂子ちゃんのお母さんがいた。
桂子ちゃんのお母さんとは、近所なので女の子になってからも何度か顔を合わせていて、あたしが、優一が変身した優子だということも知っている。
「久しぶりって言っても、数週間前に会ったじゃない。ゴミ捨ての時に」
「あ、ああうん……そうでしたね」
桂子ちゃんのお母さんと遣り取りをする。
「あ、優子ちゃん、あけましておめでとう」
そして隣りにいた桂子ちゃんが、あたしに挨拶をしてくる。
桂子ちゃんは礼儀正しいきれいな所作で頭を下げる。
本当に美しい所作だわ。
「桂子ちゃんも、あけましておめでとう」
あたしも、軽く礼をする。

どうしても、桂子ちゃんよりもずっとぎこちなくて頼りない挨拶の仕方になってしまう。
「うーん、やっぱり優子はまだまだ桂子ちゃんに勝ててないわねえ……」
母さんがうんうんうなりながら言う。
「ええ、ですが桂子は生まれつきの女の子でしょ？　女の子になって2年足らずの優子さんがうちの桂子にここまでついてこれているだけでも、十分に素晴らしいことですよ」
桂子ちゃんのお母さんがフォローしている。
「そうそう、優子ちゃんは目標が高すぎることがあるわよ。もちろん、女子力への向上心を失っちゃダメだけど」
「う、うん……」
桂子ちゃんもあたしのことを心配してくれている。
3人の中では、あたしは目標が高すぎるということらしい。
「優子ちゃん、篠原のことを好きになった後しばらく思い詰めていたもの」
「え!?　やっぱりバレてた？」
あの時はそう、女の子の心に、身体が追いついていなかったせいで、ああなった。
「……当たり前でしょ。優子ちゃん、少しずつ一歩一歩女の子になるのよ」
「うん」
やっぱり、桂子ちゃんにも見抜かれていたのね。
あの時の思い出も、今日は元旦だからもう2年前のことになる。
２０１７年が2年前……もうそんなになるのね。
「さ、混まないうちに、そろそろ行きましょう」
「うん」
あたしたち一行は4人になって神社への道のりを再び歩く。
駅には初詣に行くために神社へ行く人で盛り上がっている。
あたしたちも、それについていく。
「そうそう優子、初詣が終わったら、新婚旅行先について、浩介くんと

話し合ってちょうだいね」
「う、うん！」
どうやら、新婚旅行の候補が決まった、おそらく、今日中に決めないといけないわね。
神社の手前には、人が集まっていた。ここは待ち合わせをする人も多くて、一昨年の夏祭りも、ここでみんなを待った。
「あ、浩介くん！」
人だかりから浩介くんと「お義母さん」を見つけるのに苦労はしなかった。
これで今回初詣に参加する6人が全員揃う。
ちなみに、桂子ちゃんのお母さんと「お義母さん」は初対面なので「初めまして」の挨拶をしていた。
お互い、「篠原浩介の母です」「木ノ本桂子の母です」と言っていた。
うーん、こういう学校でのママ友はこうやって自己紹介するのかな？
それ以前に、あたしもいずれママになるのかなあ？　そしたらそういうのも覚えないと……
……ううん、今は卒業と結婚のことに集中して、妊娠とか出産はその後に回そう。
「優子ちゃん、行くよ」
「う、うん……」
浩介くんに引っ張られ、あたしたちは集団の最後尾からついていく。
6人集団で男性は浩介くんだけ。それだけ抜き出すと、何だかハーレムみたいに見えるけど、そんな感じは全くない。
そのうち3人は中年の女性の子持ち主婦だし、浩介くんはあたしと2人でアツアツになってるし。
あたしたちは、去年と同じように、神社への境内へと足を踏み入れていく。
列に並び、手水舎で手を清めていざ神社へ初詣をする。
去年よりもずっとワイワイガヤガヤとしていた。

「でね、優子ちゃん聞いてよー、龍香ったらさ！　年越しえっちだとか何とか言ってきて！」
「あはは、龍香ちゃんらしいわね……」
新年早々、桂子ちゃんが爆弾発言をする。
相変わらず龍香ちゃんは彼氏とアツアツみたいで、どうも飽きるどころかますますのめり込んでいるみたいね。
「あのカップルは、まるで分かれそうにないわよねえ」
多分、体の相性がとてもいいんだと思う。
「龍香ちゃんと彼氏っていつ頃知り合ったの？」
「付き合い始めたのは高校1年生の2月頃からだって、私も詳しい出会いまでは聞いてないわね」
龍香ちゃんの彼氏は他校の生徒、でも遠距離恋愛というわけではないのであたしたちもたまにデート中に龍香ちゃんと彼氏を見かけることはある。
龍香ちゃんの意向で、龍香ちゃんの彼氏とあたしを鉢合わせにしないように、最大限努力していて、幸いにして未だにそれはない。
あたし自身も、龍香ちゃんがそうしたい気持ちは嫌でも分かるので、それには応じている。
「混んでるわね」
「うん」
何だか、去年より混んでる気がするわ。
6人で行動して歩調も遅くなって、それが混んでると感じている理由なのかもしれないけど。
あたしたちは列に並び、お賽銭を入れて、「二拝二拍手一拝」で参拝、素早く列を出て初詣が終わる。
神社の休憩場は混んでいたけど、運良くテーブルが2つ余ったので3人3人でかける。
「ふう、疲れたわ」
「そうねえ、人混みの中だと対して歩いてなくても本当に疲れるわよね」
あたしの言葉に、「お義母さん」が同調する。

ともあれ、あまり喋りもせず、あたしたちは疲労回復に専念した。
「あら、皆さんお揃いですのね」
沈黙が突然破られた。
そこに立っていたのは、豪華な振り袖を着た永原先生だった。
「あら、永原先生！　あけましておめでとうございます」
あたしが立ち上がり、６人を代表して挨拶をする。
「うんおめでとう。今年は、人類史に刻まれる年になるわね」
永原先生が、意味深なことを言う。
「え!?　でも――」
人類史ということは、つまり蓬莱教授のことで――
「ふふっ、もしかしたら、願望かもしれないわね」
永原先生がちょっとだけ、遠い目をする。
「そう言えば、先生、今日が誕生日でしたっけ？」
桂子ちゃんがそちらの方に話題をそらす。
「ええ、仮のですけど……これで５０１回目になります」
永原先生は去年より1歳歳を取って、５０１歳になった。
あたしたちも、今はまだ１８歳だけど、誕生日になれば1つ歳を取って１９歳になる。
年の差は４８２歳ないし４８３歳で固定だ。
「ふー、さて、センター試験対策しないといけないわね」
桂子ちゃんが伸びながらそう言う。
「あ、そういえば桂子ちゃん、受験なんだよね」
あたしたちは、ＡＯ入試ですぐに抜けちゃったからセンター試験のことすっかり忘れていたわ。
「木ノ本、どこになりそう？」
浩介くんが聞いてくる。
「うん、このまま順当に行けば佐和山になるわよ」
「あら、じゃあ大学でも一緒なのね」
永原先生が笑顔で言う。
「あはは、先生とも後3ヶ月なんだなって思うと、ちょっと寂しいで

す」
「そうね、木ノ本さん、石山さんのこと、ありがとうね」
　永原先生が桂子ちゃんにお礼を言う。
「いえ、いいんです。それに、私と先生の縁、ここで切れるとは到底思えないのよ」
「あら？　そうですか？」
「ええ。女の勘ですけれどもね」
　桂子ちゃんが意味深に言う。
　一方で、あたしたちは、確かに今みたいに学校で毎日のように顔を合わせるということはないけれども、永原先生には協会の会長としての顔があるから、そこでの繋がりは維持される。
　もしあのとき正会員に推薦されなくても、普通会員には推薦されていたと思うから、どちらにしても永原先生との繋がりはなくならなかったと思うから同じだとは思うけど。
　あ、でもそれだと幸子さんが生きてないわよね。
　……本当に、綱渡りだったわね。幸子さん。
「さ、行きましょうか」
「ええ」
　元旦の初詣、かなり長い間ここに座っていて、周囲のこともあるので立ち上がると、あたしたちは永原先生を加えた７人で行動することになった。と言っても、帰宅までの道のりで同じ行動をするだけだけどね。
　そして、駅で浩介くんと「お義母さん」、そして永原先生と別れる。
　その後の道は、あたしと桂子ちゃん、そしてその母親の４人で歩く。
「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
「私ね、佐和山でもいいんじゃないかって思えて来たわ」
　桂子ちゃんがそんなことを話す。
「そ、そうなの？」
「優子ちゃんや篠原と天文部に行くの、楽しみなのよ。佐和山にもし天文サークルがなくても、私が作っちゃうわ。小谷学園と、同じよう

な感じでね」
桂子ちゃんは、活き活きとした様子で、自分の大学生活の展望について話す。
「それに、蓬莱教授とパイプが近い優子ちゃん達がいるもの。私、以前不老が羨ましいって言ったでしょ？」
「あ、うん……」
「もしかしたら、私もうまくいくんじゃないかってね」
桂子ちゃんは、何かを考えているけど、あたしはそれ以上追求をしないことにした。桂子ちゃんも、不老を待ち望んでいる人の一人だから。
「それじゃあね、お正月楽しんでね」
「うん」
桂子ちゃんたちと別れ、あたしたちは家に戻る。
母さんと共に、服を着替える。今日はもう外出予定はないから、簡単な格好になる。
お正月くらい、ちゃんと休まないといけないものね。
テレビでは、お正月恒例の特番をやっていたけど、あたしはＰＣに向かい、インターネットを楽しむことにした。
あの後、母さんから「新婚旅行の場所と日程を決める」と言われ、浩介くんの家とテレビ電話で繋いで話し合ったけど。

# どんよりバレンタイン

1月が過ぎ、2月になった、2年生以下はスキー合宿に行っていて、一方で3年生はバレンタインデーの準備にも余念がない。

桂子ちゃんはセンター試験が終わり、最終的に佐和山大学への進学がほぼ決まったという。

うちのクラスからも、何人かが佐和山大学へと進学するが、その中で蓬莱教授の研究室に行くのはあたしたちくらいだろう。

冬の寒さはどんどんと厳しくなっていったけど、2月に入ると、ほんの薄っすらと春の陽気も感じられるようになった。

そして2月13日の学校帰り、あたしは明日のチョコとして、義理チョコと浩介くんへの本命チョコの材料を買って家に戻った。

バレンタインデーと言えば手作りチョコレート、今年はもう、母さんの助けは借りずに、あたしが1人で作らなきゃいけない。

去年、母さんに学んだことを思い出しつつ、インターネットにある手作りチョコレートの作り方を見る。

「よくかき混ぜてっと……」

バレンタインデーは近い。浩介くんには、甘くておいしいチョコレートを食べさせてあげたいわ。

「……ふう」

チョコレート作りが一段落し、あたしはリビングのソファーで休む。

「優子、明日のバレンタインか？」

「う、うん……」

父さんが話しかけてくる。

「お父さんたちにもくれるのか？」

「え!?」

そう言えば、去年は買った義理チョコで済ませちゃってたわね。

「あー、本命じゃなくてもいいけどさ。優子からこの家でもらえるのは、今年で最後になると思うから」

確かに、４月からは、あたしは浩介くんの家に嫁入りしちゃうわけだものね。
「そうねえ……お母さんたちにも、出来れば手作りチョコレートを作ってほしいわね」
「う、うん……分かったわ」
確かに、浩介くんにチョコレートをあげるのは、夫婦になってからいくらでもできる、でも母さんたちは、もうあたしがこの家にいるのも、１か月程度しかいないのに。
幸いにして、浩介くんへの手作りチョコレートは無事に完成し、失敗した時のための予備の材料で、量は少ないけど作れることに気付いた。
あたしは、早速、浩介くんへの手作りチョコレートと同じ手順でチョコレートを作る。
こちらも無事に、失敗なく完成し、明日のバレンタインデーまで、箱の包みながら冷蔵庫の中にしまい込んだ。

「ふうー、疲れたわ」
あたしは、ぐったりした感じで、ソファーに座る。
確かに、２回も同じことをしたら疲れちゃうけど……それにしてもちょっと疲れ方が大きいわね。何だか身体もだるいし。
「明日大丈夫かな？」
前回は１月の初旬に生理が来ていて、冬休みの後半はぐったりしていた。
もう何度も経験してることだけど、やっぱりこのだるさと痛みは、あたしのひ弱な体には重たい。
明日は女の子の晴れ舞台でもあるバレンタインデーだから、無事にやり過ごして、明後日にでも来てほしいけど……

「あうー」
その願いは、無慈悲にも叶わなかった。
冬のベッドから起き上がるのは大変だけど、それに生理まで重なっ

たらなおの事きつい。
せっかくのバレンタインデーだけど、生理周期というものはどうしてもそういうことを察知してくれない。
寝るときに付けていた生理用品を、トイレのごみ箱に捨てて、あたしは生理用の羽付きパンツに穿きかえる。
そして、防寒用にストッキングを履いてブラジャーを取り換えて制服を着こむ。
生理中は、とにかく色々な意味で気を付けないと。

「おはよー」
「優子おはよう、今日は『予定日』でしょ？　大丈夫？」
母さんが心配そうに聞いてくる。
「痛い、だるい、苦しい……」
父さんが既に出勤していて、ここにいないからこそできる会話が繰り広げられている。
「ふふ、そうよね。でもそんな日こそ、バレンタインデーは心を込めなさい」
「はーい……」
母さんに言われ、あたしは重い足取りでチョコレートを取り出し、母さんに渡す。
「帰ったらお父さんにも渡しなさい、今年が最後なのよ」
「わ、分かってるわ」
あたしは、重い体にムチを打って、浩介くんへのバレンタインデーチョコを鞄の中に入れる。
朝食を軽く取ると、もう行く時間になっていた。
「はぁ……はぁ……母さん、行ってきます」
「はーい、いってらっしゃーい」
今日は木曜日なので、体育は見学しないといけない。
ともあれ、重い足取りで学校へ進む。
多分、これが小谷学園での最後の生理になると思う。卒業式が３月１６日土曜日を予定しているため、これまでのあたしの生理周期を考

えると、何とか新婚旅行を避けられそうなのは確かだった。
そして何とか、通学路を重い足取りで歩きつつ、教室へとったどり着いた。
ガララ……
「おはよー」
「優子ちゃんおはよう、大丈夫？　顔色悪いわよ」
桂子ちゃんが心配そうに聞いてくる。
直接「生理」とか「女の子の日」とか言わないあたりがさすがだと思う。
「あはは、はい桂子ちゃんこれ」
あたしは、桂子ちゃんに義理チョコを渡す。
「あ、うん。はい優子ちゃん」
「ありがとう……」
「優子さん優子さん、こういう日こそ、チョコレートで元気出すんですよ」
近くであたしを見ていた龍香ちゃんがチョコレートを渡してくる。
「う、うん……」
あたしも、龍香ちゃん向けに義理チョコを渡し、桂子ちゃんと龍香ちゃんのくれたチョコレートを食べる。
とにかく、生理中のあたしは普段とは比べ物にならないくらい大食いになる。
この体系を維持できているのも、普段あまり食べない代わりに生理中に食欲が出てるおかげなのかもと思ってしまう。
「おー優子、大丈夫か!?　何だ、チョコ食って元気出せ！」
恵美ちゃんが豪快にチョコレートをくれる。
「うん、恵美ちゃんありがとう……」
あたしも、恵美ちゃんにチョコレートを返す。
結局、義理チョコは量も少ないので、朝のうちにほとんど食べてしまい、残すは永原先生と浩介くんだけになった。

ガラガラガラ……
「はーい、ホームルーム始めますよ！」
永原先生が教室に入り、朝のホームルームを開始する。
永原先生はあたしに配慮してか、何も言ってこない。
そしてお昼休み。
あたしは重い腰を何とか上げて、学食へと向かう。
この日のメニューは生理中にいつも食べている野菜ラーメン、食堂のおばちゃんには、絶対ばれちゃってるよね。
「ふう、完食っと」
やっぱり甘いものは別腹なのか、チョコレートをあれだけ食べたのに食べきっちゃったわ。
ちなみに、ラーメンを食べた後に、義理チョコも食べちゃった。
あたしは、何とか保健室行きにはならず、午後の授業も受けられそうで良かった。
ふと前を見ると、浩介くんが水飲み場で水を飲み終わっていた。
「あ、浩介くん」
「お、優子ちゃん、くれるのか？」
「うん……でもちょっと待ってて……」
チョコレートは、カバンの中に入れっぱなしだった。
あたしは教室に戻り、カバンからチョコレートを出す。
「ここじゃ無くってさ、屋上で渡してよ」
「え!?　でもあたし今日は調子が――」
「大丈夫だって、ほれっ！」
「わわっ、きゃあっ！」
「「おおー！」」
浩介くんにひざ裏と背中を取られて、あたしはあっという間にお姫様抱っこされてしまう。
クラスメイトが注目するのも意に返さず、浩介くんは短く「行くぞ」と言って、あたしを屋上まで運んでいく。
道中も、他の生徒や先生に注目されてて、スカートを抑えながらチョコも持たないといけなので、恥ずかしい上にせわしなかった。

でも、いい思い出になると思う。
屋上では、1組のカップルがちょうど渡し終わっていて、あたしたちの貸し切りになっていた。
少し風が吹いていて、スカートがゆらゆらとなびいている。
「はい、じゃあ、チョコレートくれる？」
屋上の陰になっている部分に移動する。
去年の文化祭で、浩介くんに初めてスカートめくりされた思い出の場所。
「う、うん……」
ドキドキ感のムードや雰囲気は小さいけど、婚約者だもんね。
「はい、浩介くん、これ」
あたしは、ちょこんとかわいらしく包んだ本命チョコレートを渡す。
「ありがとう、食べていい!?」
浩介くんの顔がパーッと明るくなる。
「うん」
「やったー、はむっ……うーん、おいしい！」
浩介くんは、去年と同じレシピのチョコレートを、楽しそうに食べている。
あたしは、生理による疲労もあって、屋上のフェンスに寄りかかる。
「はーい、優子ちゃん！」
「え!?」
去年と同じように浩介くんがハート型のチョコレートを口で挟み、あたしに食べるように促してくる。
「んっ……」
浩介くんの顔が近くてドキドキする。
生理中だという事実が、なぜか分からないけど背徳感を感じてしまう。
「ぱくっ……んっ」
「んっ……ちゅっ……」
そして、チョコレートの中間地点で唇が触れ合う。

去年と違い、屋上には誰もいない。
「じゅるる……ちゅっ……ぷはっ……」
チョコレート味のキスを、味わう。
去年よりも長続きしなかったけど、1年ぶりに見た茶色い唾液の糸が直垂落ちる。
「はぁ……はぁ……はぁ……あの……あたし……」
「優子ちゃん今日、生理の日なんだろ？」
「え!?　う、うん……」
浩介くんのナチュラルなセクハラに動揺して、つい頷いてしまったわ。
「優子ちゃん、ちょっといい？」
ぴらっ
「やっ！　ちょっと浩介くん！」
浩介くんにスカートをめくられ、ストッキング越しだけど、生理用のパンツを見られてしまう。
「こ、浩介くんお願い！　今日だけは許して！」
生理用のパンツは、見られたくない。
「旦那として、知っておかなきゃいけないんだ」
「うっ……」
あたしは、ぼんっと顔が真っ赤になる。
「優子ちゃんと一緒に暮らす上でも、さ。優子ちゃんのこと。結婚して一緒に過ごす上で、妻の生理から逃げちゃいけないと思うんだ」
「……うん、分かったわ」
生理から逃げちゃいけない。
何だろう、すごく懐かしいフレーズに、あたしもつい頷いてしまう。
あたしが女の子になったばかりの頃に、初めて生理になった時も、あたしは永原先生にその言葉を言った。
まさか今になって、自分に返ってくるなんて思わなかった。
「やっ……恥ずかしいよお……」
そうは言っても、浩介くんにストッキングを下ろされ、生理用パンツを直接見られるのは、凄く恥ずかしい。

もちろん、普段のパンツを見られるのもとっても恥ずかしいけど、生理用の羽つきパンツを見られるのは比較にならない。
「優子ちゃん、これも脱がすよ……」
「え？　あの、お願い、それだけは……いやあん……」
浩介くんに、生理用のパンツも脱がされてしまう。
浩介くんは、一瞬だけ驚いた顔をする。多分、血だまりになっている生理用品を見てしまったんだと思う。
「優子ちゃん、こんなのが毎月襲い掛かってくるのか!?」
「あはは、幸いあたしは1か月よりも少しだけ長いけどね」
「にしたって、辛いだろ？　うっ……」
そう言いつつも、浩介くんの視線は、あたしの大事な部分に向けられている。
「お願い、あんまりじろじろ見ないで！」
あたしは恥ずかしさのあまり、浩介くんに訴える。
「どうして？」
「き、汚いから！」
生理の様子は、浩介くんにもあまりじろじろ見られたくない。
「優子ちゃんに汚いところはないよ」
浩介くんが優しく包み込むように言う。
でも、今日ばかりは受け入れられない。
「ううん、今日だけは……お願い、もう戻して……生理中はあまり冷やしたくないのよ」
あたしは、体調面から浩介くんを説得する。
「わわっ、うんごめん」
浩介くんに慌て始めた。
そわそわしたぎこちない様子で生理用パンツを穿かされて、その上にストッキングを履かされる。
「あうううう……」
「優子ちゃん、かわいかったよ。本当はチョコレートと混ぜて食べてみたかったんだけどね」
浩介くんは半笑いでにやけている。

「んっ……！」
　ぺちっ！
「浩介くんのえっち!!!　この変態!!!」
　あたしは、初めて怒ったように浩介くんに言う。
　もう穴があったら入りたいわ。こんなに恥ずかしい思いをしたのもはじめてよ。
「ごめんごめん、でも、優子ちゃんに汚い所なんてないのは本当だよ」
「むー！　そういう問題じゃないわよ！」
「だってさ、優子ちゃんの血を愛せないなんて言ったら、優子ちゃん、死んじゃうじゃないか」
「うぐっ……」
　正論な上に、真顔で言われちゃうと怒るに怒れないじゃないの。
「俺は優子ちゃんの全てを愛するんだ。これから毎日過ごすのに、生理中の優子ちゃんを愛せないなんて……だったら、この指輪を渡した俺は嘘つきになっちゃうだろ？」
　ベタなセリフだけど、あたしはドキッとしてしまう。
「浩介くん、本当にずるいわよ」
「何で？」
「ふうー、本当に変な所で鈍感なのよね。そんなこと言われたら、怒れないじゃないの」
　あたしは、やや悔しさをこめて言う。
　これじゃ将来的に、またバレンタインデーと生理が重なった時に、同じことされても拒否できないわ。
「言っただろ？　結婚したら同じ場所で暮らすんだ。生理の日にいつもと違うことができなかったら、旦那失格だぞ」
「うん、そうよね」
　実際、浩介くんの言っていることは本当のことだから、それについてはあたしも同意見だけど……あうー、言葉に引っかかるのに具現化できなくてもどかしいわ。
「はぁー」

あたしたちは、昼休み後の教室の教卓で休んでいる永原先生のため息が聞こえてきた。
教卓の上には、生徒のものと思われる沢山に積まれたバレンタインデーチョコがある。
「あの、永原先生」
あたしはそっとチョコレートを永原先生渡す。
「あー、石山さんありがとう……」
永原先生は少しだけ、ブルーな感じ。
「永原先生、今日は機嫌悪いんですか？」
もしかしたら、あたしと同じ日なのかもしれない。
「あーうん、そういうわけじゃないのよ。ただちょっと、ね」
永原先生は歯切れが悪く、ぎこちない反応をする。
「どうしたんですか？」
「私、文化祭だけじゃ足りないんだなって思って」
「え!?」
永原先生が意外な言葉を言う。
「ほらこれ……」
永原先生の手には「永原マキノ先生へ」と書かれた紙があった。おそらく、生徒からもらったバレンタインデーチョコに付いていたものだと思う。
「もしかして、コンプレックスですか？」
「そうなのよ、やっぱり私、ダメな女よ……もう戻ってくるわけでもないし、生きた時代も違うのに……教師をしているうちに、生徒になりたいって思いが強くなっていったわ」
「……」
「正直に言うと、石山さんの担任になる前までは、そんな思いはなかったわ。多分、あったとしても、本人さえ分からないような無意識の奥底よ」
永原先生が、ゆっくりと話す。教室の生徒たちは誰も聞いていなくて、おしゃべりに夢中になっている。
「別に聞かれてもいい話だけどね……ほら、私の１３０年の教師人生

の中で、教え子が同じ病気になったのは初めてだって言ったでしょ？」
「う、うん……」
「石山さんは本当にみんなの模範よ。女の子として生きていくべきTS病患者としても、後輩を導く人としても、本当に素晴らしいわ。私ね、最近気付いたのよ。私が持っている青春へのコンプレックスは、石山さんへのコンプレックスから生じたんだって」
やっぱり、そうだった。
永原先生が持っている青春へのコンプレックス、それはあたしへのコンプレックスからスタートしていた。
「ふうー、私も少しでいいから、女子高生になりたいわ。学校のみんなとわいわい遊んで、ふざけあって、勉強して、テストに一喜一憂して、ね」
「永原先生……」
永原先生は、羨ましさを込めて言う。
「ごめんなさい、変なことを言っちゃって。忘れてとは言わないけど、あまり気にしないでね」
「う、うん……」
永原先生が、気分を取り戻し、椅子から立ち上がる。
チョコレートを集めて扉のほうを向く。
ん？　今、誰かがさっと逃げたような？　うーん、気のせいかしら？
「じゃあ石山さん、午後の授業も頑張るのよ。期末試験、気を抜かないで頑張ってね」
「うん」
永原先生が教室から去っていく。
あたしの机にも、クラスの女子のうち何人かから義理チョコが配られていて、あたしは名前を確認して彼女たちの机にチョコレートを置きなおす。
そしてあたしは、生理中の疲れもあり、机に突っ伏した。

「ただいまー」
「おかえりなさい優子、大丈夫だった？」
母さんが心配そうに出迎えてくれる。
「うん、何とかね」
浩介くんとのことは絶対に言いたくない。
「そう、お父さん帰って来るまでゆっくり休みなさい」
「うん、そうするわ」
あたしは部屋に戻り、制服からパジャマに着替える。
今はとにかく、楽になりたいわ。
体調も落ち着き、父さんが帰ってきた時に、夕食時にチョコレートを渡して、あたしのバレンタインデーが終わった。

# 衝撃的な企画

２月２２日金曜日、永原先生がとても機嫌の良い日があった。
みんな、「あんなに機嫌良さそうにして、一体どうしたんだろう？」と思っていた。
そんな永原先生が帰りのホームルームで爆弾発言をしだしたのだ。
「えー、突然ですけど、私永原マキノは２月第４週から２週間、生徒になります」
「「えっ……!?」」
あまりに突拍子もない永原先生の宣言に、あたしたちは全員で固まってしまう。
永原先生が生徒になる？
一体どういうことなのよ？　エイプリルフールはまだ１ヶ月以上先のはず。
ガラガラガラ……
「あー、皆さん、そのことについてはわしが説明しよう」
「こ、校長先生！」
浩介くんが思わず口に出してしまう。
浩介くんの言葉通り、教室には校長先生が入ってきた。
突然の大物の登場に、あたしたちは更に動揺する。
「あー、３年１組の皆さん、もうすぐ卒業の折、突然のことで申し訳ないが、この度永原先生が生徒になるという企画を行うことにした」
うん、それは分かってるわよ。
問題は「なぜ」よ。どうしてそんな突拍子もない事がいきなり？
「永原先生は、我々と違って若い頃学生という経験がない。他の江戸時代生まれの患者さんたちも、寺子屋というものに行っていたが、永原先生は戦国時代の生まれ故に、最初は字を覚えるのも四苦八苦したそうです」
そうよね。人生の最初の６０年は長野の小さな村に居たわけだし。
以前からそのコンプレックスについては聞いていた。
「わしは、現代の人なら当たり前のように持っているものを持ってい

ないことについて、永原先生が随分と思い詰めていた様子を聞いてしまってな……小谷学園としても永原先生には随分と世話になっている。そこで何かしてやれないかと教頭先生と相談して、わしが思いついたというわけです」

校長先生の坦々とした話とは裏腹にあたしたちの動揺が大きい。

永原先生が生徒になる？

今までの固定観念が崩れていく。確かに制服姿の永原先生は文化祭で見ていたけど、あれはあくまで文化祭でのコスプレみたいなもので――

そう言えば、1年生にも「先輩」と言われて嬉しかったって言ってた。

だけど、本当にこの話を持ちかけられて了承してしまうなんて思ってもいなかった。

まさか、永原先生のコンプレックスがそこまで進行していたとはね。

「幸いにも、今年度には永原先生の他にもう一人いらっしゃる古典の先生が引退なされる。代わりに新しい先生を入れるわけだが、彼にも手伝ってもらうことになりました」

そ、それでいいのか？

ともあれ、校長先生の説明を聞いた永原先生はすごい笑顔になっている。

まるで、長年の願いが叶ったかのように。

「というわけで、永原先生が担当している古典の授業も心配はいりませんよ。皆さんも、来週からは短い間だが、永原先生のことをクラスメイトとして接してあげてください」

「「はーい……」」

大きく動揺しつつも、クラスメイトが何とか返事をする。

一方であたしは、まだ納得ができない。それは協会の会長職のことが脳裏にあったからだ。

永原先生が2週間学生として過ごすということ。つまり木曜日までは授業を受けて、金曜日から水曜日までが期末試験、そして木曜日

と金曜日が試験の返却、その後は卒業式に向けての練習に、あたしたちは時間の大半を費やす。
あたしの場合は、卒業式のある一日は大忙しになるけど。
「それじゃあ、私からの連絡は以上よ。みんな気をつけて帰ってね」
最後の期末試験前なので、天文部は活動がない。
試験が終われば、わずかながら活動があるけど、もう桂子ちゃんも部長から降りてしまい、あたしたちと天体の話題を中心に雑談をしているだけの状況になっている。
「ねえ優子ちゃん」
「うん……今日は3人で帰ろう」
あたしは浩介くんにそう言う。それは桂子ちゃんも誘うという意味である。
もちろん、クラスの話題は永原先生が期間限定で生徒になるということで埋め尽くされていた。試験勉強日手がつかなくなっちゃったらまずいわよね。
「桂子ちゃん、どう思う?」
「うーん、こんな事になるって……小谷学園らしいと言えばそうだけど……」
桂子ちゃんもどこか俯瞰的な物言いをする。仕方ないこととは思うけど。
「それにしたって前代未聞だろ。先生が生徒になるとかさ」
浩介くんの言うことはごもっともだと思う。
幸い永原先生は、昔の人らしく体格も小さくて顔も童顔だから、制服を着ると女子高生どころか女子中学生に見えてしまう。
そのことは文化祭で嫌というほど思い知らされている。
なので外見上は問題がない。
「でも、永原先生は青春に強いコンプレックスを持っていて……その……」
「「うん」」
あたしの話に2人も興味深く頷いている。
でもやはり、まだ納得しきれていない。

「優子ちゃんは、永原先生が生徒になってもいいと思うのか？」
「うん、だって永原先生がああなったの、あたしのせいでもあるのよ」
「え!?　優子ちゃん、どういうことだ？」
「そうよ、どうして？」
あたしの言葉に、２人もかなり驚いている。
確かに、このことは話した方がいいかな？
「それはね――」
あたしが経緯を詳しく説明する。
永原先生にとって、教え子が直接自分と同じ病気になったのが初めてのこと。
あたしが模範的な患者として成長するにつれて、いつしか永原先生があたしへの憧れを口にするようになったこと。
この辺りまでは、２人も「知っている」という感じで聞いている。
「それでね、永原先生はあたしへのコンプレックスを持った上で、それがいつしか、自分が味わったことのない、『学生時代の青春』に対するコンプレックスになっていったわ」
「なるほどなあ」
２つのコンプレックスは複雑に絡みあっていて、永原先生自身も、最近まで正しい分析が出来ていなかった。
最近になって、コンプレックスのことも分かってきたから、相当複雑な問題だった。
今になって思うけど、バレンタインデーの時にあたしと永原先生の話を盗み聞きしていたのは校長先生だったのね。
「でもそれ、優子ちゃんのせいって言うのか？」
浩介くんが疑問を突っ込んでくる。
「あーうん、あたしが悪いってわけじゃないけど……原因の一端になった!?」
「んー、まあそれでいっか」
とりあえず、浩介くんも納得してくれた。
「まあほら、こういうのも面白いし、なるようになるんじゃないの？」
桂子ちゃんが楽天的な様子で言う。

見た目なら確かに、大丈夫だとは思うけど。
ともかく、衝撃的すぎてちょっと現実逃避しなきゃやってられないのも事実だけど。
「それにしても、よく校長先生がＯＫしたわね」
あたしも、それが不思議ではある。
「というよりも、校長先生の発案でしょ？」
「あーうん、そうだったわね」
いけないわね、動揺しすぎて冷静な判断力を失っているわ。
当事者のいない間で、結論の出ない話が巡り続けるうちに、あたしたちは、駅へとたどり着く。
「それじゃあ、さようなら」
「浩介くん気を付けてね」
「おう」
行き先の違う浩介くんと別れ、あたしと桂子ちゃんがホームの方へと行き、階段から近いドアの部分に並ぶ。
「それにしても、永原先生はどういう学生生活を送るのかな？」
「私も、今から楽しみね」
一貫楽観的になると、気持ちはかなり楽になった。
「間もなく、電車が参ります」
電車が入線し、そちらに集中する。
幸い席が空いていたので２人で隣り合って座る。
２人で座る時が、最も強い視線を感じる時間で、座席の向かいの男たちが、あたしや桂子ちゃんのパンツを見ようと必死にスカートの間に視線を移す。
本当、女の子になって分かったけど、男の視線手ものすごい分かりやすいわね。
あ、でもあたしが浩介くんの下半身に向けてる視線も似たようなものかも。
「永原先生、受け入れてもらえるといいわね」
「そうよね、来週からは『先生』って呼んじゃいけないんでしょ？」
桂子ちゃんが重大なことを言う。

今まで目をそらしていていたけど、生徒期間中は、永原先生のことを「先生」と呼ぶのはご法度になる。
「うん……でも何て呼べばいいんだろう？」
一応、あたしの場合は永原先生には「先生」と「会長」の２つの関係があるから使い分けには慣れてるけど、他の人はそうもいかないわよね。
「うーん、『マキノちゃん』かな？」
桂子ちゃんの提案。
「それ、確か去年のミスコンだっけ？」
去年のミスコンでは、永原先生は生徒会の守山前会長から「永原マキノちゃん」と呼ばれてたけど、それはミスコン時の呼び方のことで、やはり文化祭の特別感からそういう呼び方になった。
「そうそう、優子ちゃんは何かある？」
「他にはうーん、『永原』とか？」
「あー、男子ならそれでもいいかもしれないけど、私たち女子はねえ……」
これもやっぱりしっくり来ない。
以前は女子同士も他グループでは呼び捨てだったけど、３年１組は桂子ちゃんと恵美ちゃんの和解の象徴として、クラス全員を名前呼びするようになっている。
「やっぱり桂子ちゃんの言う通りの呼び方でいいのかな？」
それを考えるとやはり「マキノ」という名前呼びが一番いいと思う。
「まあでも、いざ呼ぶとなると緊張するわよね」
桂子ちゃんが言う。
「うんうん」
そんな中で、最寄り駅についたあたしたちは電車を降りる。
駅を出ると、少し風が強いわね。３月が近いので、ストッキングをやめて、もう生足になってるけど、失敗だったかしら？
ぴゅうううう……
「うー、桂子ちゃん風強いわね」
「春一番かな？」

どっちにしても、スカート気をつけないと。
「うん、そうみたいね」
あたしたちは、スカートを警戒しつつ、いつもの道を行く。
たまに風が収まるかと思うと、徐々に強くなる。こういう不安定なのが一番危険だと思う。
「あーあ、あたし風の強い日って苦手だわ」
「そりゃあ優子ちゃん、女の子はみんな苦手よ」
スカートめくれちゃうものね。あたしも、通学中に思いっきりぶわっとめくられちゃったときがあって、その時は誰もいなくてよかったわ。

「あはは、じゃあ……あたしこれで……きゃあ！」
「きゃー！」
桂子ちゃんとのいつもの分かれ道、「さようなら」をしようとすると、えっちな風が舞い上がり、あたしたちはスカートを思いっきりめくられてしまう。
桂子ちゃんは反応が素早く、パンツは見えなかったけど、あたしの方は思いっきり桂子ちゃんに見られてしまった。
「優子ちゃん、縞パンかわいいわよね」
「あうー、恥ずかしいよお……桂子ちゃんは見えなかったのに」
恥ずかしい上に悔しいわ。
「ふふん、やっぱり女の勘は、まだまだ使いこなせていないわね」
「うー、悔しいよー！」
桂子ちゃんのどや顔がまた悔しくて、ちょっとだけ涙目になる。
結局あたしはどうあがいても、桂子ちゃんに女子力で勝てない。
桂子ちゃんはスカートのガードも硬くて、パンツを見たのも体育の着替えの時に悪ふざけの一環で女子同士でスカートめくりした時くらいしかない。
「さ、優子ちゃん、今は私しか見てないけど、他の人、特に男何かに見られないようにしなさいよ」
「う、うん……」

「あ、篠原ならいいかもね」
桂子ちゃんがクスクス笑いながら言う。
あたしも、浩介くんにパンツ見られたことを想像し、ちょっとだけ赤くなってしまう。
「もー、優子ちゃん惚れっぽいわね……じゃあ今度こそさよなら」
「うん、ばいばーい」
手を振って桂子ちゃんと別れ、あたしは家路につく。
その後も、何度か強めの風にスカートがなびくけど、幸いにしてまためくられるほどに、強い風は来なかった。
「ただいまー」
「お帰り優子、風大丈夫だった？」
「え!?」
母さんが、風が強かったことに言及する。
「何言ってるの、外は強い風でしょ？　スカートは大丈夫だったの？」
母さんがぐいぐい押してくる。
「え……う、うん……」
「ふう、帰り道、風にめくられたんでしょ？　それで、誰かに見られた？」
あうー、母さんの追求からは逃れられないよお……
「えっとその……け、桂子ちゃんに……」
「あらあら、その様子だと桂子ちゃんのパンツは見えなかったのね」
母さんが「やれやれ」という感じでため息交じりに言う。
「うん、あたしだけ……」
あたしは、あっさりとすべて自白してしまう。
母さん、不思議な力があるのよね。
「そう……桂子ちゃんばっかり……ずるいわ！」
ガバッ！
「きゃああ!!」
母さんに前から思いっきりスカートめくりをされてパンツ丸見えにさせられてしまう。
「母さんやめて！」

「ふふ、すっかり女の子の悲鳴あげちゃって、よかったわ」
母さんがホッとしたように言う。
「もー、何がいいのよ!?」
あたしも、ちょっと怒り気味に言う。
そもそもどうして母さんにスカートめくりされなきゃいけないのよ。
「優子がちゃんと、女の子らしさを追求し続けてるってことよ。いい優子？　結婚したとたんに気が抜けて、女の子らしさがなくなっちゃう子も多いわ。そういう子に限って『女として見てもらえない』って泣くことになるのよ」
「うん、でもどうしてスカートなんかめくって……」
「優子のパンツ見た桂子ちゃんがうらやましかったからよ」
「っ！」
母さんの直球発言に、あたしの顔が真っ赤になる。
恥ずかしいとともに、少しだけ怒りもわいてくる。
「ねえ母さん……」
「何優子？」
「あたしね、母さんの愛情はうれしいし、あたしのことを気遣ってくれてね……特にカリキュラムの時はお世話になったわ」
「ええ、ありがとう……」
母さんも返答してくれる。
「でもね、今はもう、スカートをめくる必要は無いんじゃないの？」
「え、だって……桂子ちゃんが見ていいなら、私が見たって別に――」
ぺちっ！
「もう、母さんのえっち！」
あたしは、母さんの頬をビンタする、母さんは少し動くだけで、特に痛みは訴えてこない。
「あらあらごめんなさい、やりすぎちゃったかしら？」
「当たり前よ！」
あたしは少し大きな声で言う。
母さんはちょっと暴走気味だし、こうしないといけないわね。母さ

んをビンタしたの、初めてかも。
「ごめんなさい……」
珍しく母さんがしおらしくなる。
これならまあ、いいわよね？
「じゃああたし、着替えてくるから」
「ああうん」
母さんを見送って、あたしは部屋の中へ入る。
そして制服から私服へと着替える。
あたしはまた、永原先生について考える。
永原先生は、「みんなでふざけあったり、楽しんだり」そういった学生生活にとてもあこがれていた。
だから、月曜日になったら、普段先生だということは忘れて、なるべく他の生徒たちと同じように接しないといけない。
必要なのはそう、制服姿の永原先生を見た第一印象、とても先生には見えない、それどころか女子中学生にさえ見える童顔の同級生……なんてことは無いじゃないの、あたしたちＴＳ病患者に必要な対応法と同じ、「見た目の第一印象通り」に扱っていけばいいのだわ。
この結論に達して、あたしは随分と気持ちが軽くなった。
永原先生だって、５００年の人生、波乱万丈だったものね。教職の仕事に会長職、少しくらいご褒美をあげたっていいじゃないの。
だからこその、校長先生は今回の企画を練ったんだと思う。
あたしは、軽い気持ちで本を読む。
蓬莱教授の本は、既に数回読破したけど、まだまだ理解は十分じゃない。蓬莱教授の研究のためにも、そして浩介くんのためにも、あたしはより一層の勉強をしないといけないわね。
「優子ー！　ご飯よー！」
「はーい！」
そしていつものように、母さんの呼び声からご飯が始まる。
ともあれ、今は金曜日の夕食を楽しもう。明日明後日は土日になる。
ひとまず今は休みのことを考えてもいいのかもしれない。

いや、その前にまずは、目の前の夕食のことを考えよう。

# 転校生

「おはよー」
あたしが勢いよく扉を開けて挨拶をする。
今日は永原先生が生徒として来る日になる。
「お、優子ちゃんおはよう」
「浩介くんもおはよう」
教室を見ると、いつもより椅子と机の数が1つ多くなっていた。
一番後ろのその席は、永原先生のために用意された席だということが分かる。
でも、そこに永原先生は座っていなかった。
「なああそこ」
「ああ、どういう顔して出てくるんだろ？」
教室の生徒たちも、みんな一斉にその席を凝視していて、どこかぎこちない様子を受ける。
普段担任の先生をしている人が2週間限定、しかも期末試験直前から試験中にかけて生徒になる。
こんな事例は日本広しと言ってもはじめてのことだと思う。少なくともあたしは聞いたことが無い。
「おはよー」
「おはよー」
クラスのみんなが次々と集まってくる。
どうやら今日は全員出席の日で、遅刻・欠席者はいないみたいね。
……永原先生がまだ来てないけど。

「でもよ、考えてみたら永原先生が生徒になるとすると、誰が担任になるんだろう？」
「うーん、そういえばそうだよなあ、高月はどう思う？」
「代理の担任が必要だけど……どの教科の先生になるのかな？」
「見当がつかねえよな」

今までも、永原先生の休みの日には、その時その時で、代理の先生が違っていた。
小谷学園にはどうも、副担任の先生は置かないらしい。
だからこうして、生徒たちの話題にもなる。
ガララララ……
代理の先生が入ってきた。
その姿に、あたしたちは目を丸くして、そして――
「「「こ、校長先生!?」」」
思わず、叫んでしまった。
教室の中に入ってきた永原先生の代理の先生は、何を隠そう小谷学園の校長先生だった。
「うむ、いかにも。今日から2週間、3年1組の担任の代理を務めることになった。短い間だがよろしくお願いします……ん？　なぜわしが代理かって顔をしておるようじゃな。ああ、これを思いつき、永原先生に発案し、企画したのもすべてわしだからじゃ。いわゆるその……『言い出しっぺの法則』じゃよ」
にしたって、校長先生が担任の代わりって、しかもなんかいつもよりもキャラ付けか口調も変わってるし……うーん、もう突っ込んだら負けね。気にしないでおくわ。
「さて、今日のホームルームじゃが……その前に、まずはこのクラスの転校生を紹介したい……永原さん、どうぞ入ってください」
ガララララ……
扉の音と共に、制服姿の永原先生が入ってくる。髪型も文化祭の時と同じ、いつもは下ろしているセミロングの髪を両側で縛ったツーサイドアップになっている。
やっぱり、転校生というシチュエーションにしたのね。
クラスの動揺は少なく、あたしが優子として復学した初日に比べればとても静かだ。もう少し動揺するかとも思っていたけど、制服姿の永原先生は文化祭の時に見たことがあるからみんな冷静よね。
「じゃあ永原さん、自己紹介をお願いします」
「はい」

永原先生が黒板に向けて、チョークで自分の名前、永原マキノと書く。
普段先生として使っているために、手つきが手馴れている上に、周囲も「知っている」という顔をする。
普通なら、こんな転校生なら「かわいい」の嵐だと思うのに、そうはならない。
「永原マキノです。短い期間ですが、小谷学園でお世話になることになりました。よろしくお願いします」
パチパチパチパチ……
永原先生があたしたちにぺこりと頭を下げると、クラスメイトもとりあえず拍手をする。
だけど、みんなこれが茶番だって知っているから、どうしても気持ちがこもっていないわね。
「それじゃあ、永原さんにはあそこの後ろの席に座ってもらいますかな」
「はい」
永原先生が、例の開いている席に座る。
座り方はお手本のようなお淑やかさだった。
「では、出欠を取りますね。えー」
校長先生の出欠確認は新鮮で面白かった。
５０音順だけど、永原先生だけ最後に回されていた。
校長先生は、永原先生にもちゃんと「永原さん」と呼んでいて、永原先生は泣きそうになるくらいうれしそうな顔で「はい」と返事していた。
「それでは、ホームルームを終了します。１時間目の準備をするのじゃ」
校長先生はそう言うと、カッコつけた様子で教室を退場する。
転校生と言えば、机を囲んでの質問攻め何だけど、永原先生にはそんなものはない。
転校生ではなかったあたしの復学日にはあったのにね。

ともあれ、永原先生はそんなことを意にも返さず、とても上機嫌で鞄から教科書を出して1時間目の準備をしていた。
「えっとあの……」
あたしがまず声をかけてみる。
「どうしました？」
永原先生が、あたしに他人行儀で話しかけてくる。
よし、ここはこうしよう。
「あの、あたし……石山優子です。これからよろしくお願いします」
「うん、じゃあえっと……」
永原先生はまだ慣れない様子で躊躇している。
「その、『マキノちゃん』って呼んでもいいですか!?」
あたしは、教室に聞こえそうなくらい大きな声で言う。必然と、他のクラスメイトたちもあたしたちに注目する。
「うん、そう呼んでもらえると、私とっても嬉しいわ！」
永原先生があたしに負けないくらい、大きな声で言う。
表情はまた、嬉しさを爆発させたような、今までに見たことのないかわいらしい笑顔だった。
「うん、呼び止めて悪かったわ。改めてよろしく、マキノちゃん」
「優子ちゃんも、よろしくね」
名前で呼びあったら、あたしは席に戻る。
クラスメイトたちが、あたしを複雑な目で見ている。

「おいおい、優子ちゃん、やりおったな」
「うー、でも何だかむずがゆいんだよなあ……」
「そうそう、違和感があるというか……やっぱりあの顔を見るとねえ」
「だよなあ……見た目は完全に溶け込んでんだけどよ」
「やっぱり先生だもんなあ……いきなり生徒と言われてもねえ」

クラスの男子が、そんな会話をする。「先生」という単語を聞いて、少しだけ永原先生の表情が暗くなった気がするわ。
でも確かに、クラスの反応は無理もないことだと思う。

特にあたしたちのクラスは去年から2年連続で永原先生が担任になっている。

やがて、1時間目の先生が入ってきて、授業が始まった。

ちなみに、各教科の先生たちも、永原先生の事情は知っているため、出欠確認の時も他のクラスメイトと変わらない呼び方をする。

永原先生も、夢にまで見た生活を実現させた嬉しさは大きいみたいで、普段は同僚のはずの先生に生徒扱いされるのがとても嬉しいみたい。

「えーでは、ここは期末試験の頻出になるわけですが、この問題を……永原！」

「はーい！」

永原先生が勢いよく椅子から立ち上がり答えを読み上げる。

「はい、そうですね、ここは――」

授業は滞りなく進む、永原先生は嬉しそうに笑顔を振りまいているけど、どこか寂しさの雰囲気もある。

最初の1時間目までの時間で、声をかけたのはあたしだけだった。

次の2時間目は古典だけど、永原先生が不安になる。

あたしはちょっとだけ、永原先生が不安になる。

今の永原先生は、普段見ていない生徒の机からの視線も体験している。もしかしたら、これはこれで先生としてのキャリアにもいいのかもしれない。

古典を普段は教えている永原先生はどんな感じで授業をうけるんだろう？

キーンコーンカーンコーン……

「では今日はここまで、皆さん、期末試験に向けて、気を抜かずに頑張ってください」

先生がそう言うと、あたしたちは1時間目の教材を片付けて、2時間目の古典の授業の準備を進める。

「ねえ桂子ちゃん」

「ん？」
あたしは、桂子ちゃんに話しかける。
「マキノちゃん、大丈夫かな？」
「ええ!? ああうん、せんせ――」
「桂子ちゃんダメだよ」
「先生」と呼びかけた桂子ちゃんに、あたしがやんわりと注意する。
「う、うん。そうよね、積極的に、話しかけなきゃいけないわよね」
そう、今みたいに孤立していたら、永原先生はコンプレックスを解消できても、いい思い出にはならない。
「ね、ねえマキノちゃん」
桂子ちゃんが声をかける。
「あら、えっとあなたは……」
「桂子よ、木ノ本桂子」
永原先生は、あくまで転校生として振る舞う。
もちろん、お互いの顔と名前は、知っているに決まっているのに。
「うん、桂子ちゃんね」
「その、マキノちゃんって古典とか得意なの？」
あたしは、我ながらいくら何でもそれはないと思う質問をする。
「ええ、私、古典、特に『近世日本語』でしたら誰にも負ける気はしないわよ」
永原先生が胸を張って言う。
そもそも、あたしたちと違って、永原先生は古典が母国語みたいなもの。
だけれども、永原先生は自慢するかのように言う。まるでアメリカ人やイギリス人が得意科目は英語と胸を張るかのように。
「じゃ、じゃあ、もし機会があったら勉強教えてくれるかしら？」
け、桂子ちゃん、それ地雷じゃないの？
「ふふ、いいわよ。期末試験も近いものね。私勉強会とかしたことないのよ」
しかし永原先生は、嬉しそうに笑顔満点に言う。
さて、永原先生は古典の授業をどう見るだろうか？

確か、来年度から就任予定の教育実習の若い先生が代わりになるんだっけ？
ガラガラガラ……
「おー」
いつもとは違う古典の先生が入ってきた。
「えー、私、今日から2週間、教育実習として古典を担当します――」
先生の軽い自己紹介と共に、授業が始まる。
ここでも出欠を取るのは同じ。
「えーそれではですね、今日は期末試験対策という事で、先生の作った小テストを解いてもらいます」
授業中での小テストは、試験前のこの時期には多い。
あたしも、テスト用紙を見る。
永原先生も、少しだけ緊張している。立場上、間違えるわけにも行かないものね。
「えー、それではですね、はじめてください」
先生の合図とともに、あたしは問題を見る。
永原先生が普段作っているテストとはだいぶ毛色が違う。この人が作ったのは事実みたいね。
……うーん、難易度の落差が激しいような？　でも小テストってそんなものかな？
「はいそこまで、じゃあですね、隣の席の人と交換してください。あ、永原さんは自分で採点してください」
永原先生がしょんぼりとしている。
「先生！　それじゃマキノちゃんがかわいそうよ」
あたしが、抗議をする。
「う、じゃあそこは3人でお願いします」
そう言うと、永原先生は3人で1組になった。
そうよね、じゃないと不公平だもの。それにしても、大丈夫かしらこの先生……
「えー、では最初の問題ですが――」

ともあれ、古典の先生による答え合わせが始まる。
あたしは隣の人のテストを採点しつつ、時折永原先生の方を見る。
「すごいわ、永原せ……永原さん１００点だわ」
「まあ、そりゃあ当然だろうけどさ」
「おお、満点の人が何人かいるみたいですね。この調子で期末試験も頑張ってください」
小テストと言っても、結構ボリュームがあって解説もしていたら一時間分を使ってしまう。
ともあれ、こうして午前中の授業が続いていった。まだちょっと、腫れ物にさわるような扱いのままだった。

お昼休み、永原先生はまだクラスに馴染めていない。
やっぱりみんなどこか腫れ物に触る感じなんだと思う。
「ごめん浩介くん、今日はマキノちゃん誘うね」
「お、おう……」
浩介くんも困惑した表情で応対する。
永原先生に馴染んでいるのはまだあたしと桂子ちゃんだけ。
この状況は早めに解決を図りたい。
「マキノちゃん、学食行く？」
「ああうん、優子ちゃんありがとう。じゃあ行こうか」
永原先生と２人で学食への道を歩く。

「あれ、永原先生じゃね？」
「そう言えば、文化祭の時に似てるな」
「でもよ、用事で２週間いないとか言ってただろ？」
「うっ……じゃあ別人……にしては似すぎじゃね？　優子ちゃんもそばにいるし」
「うーん、どういうことなんだろ？」

「あはは、噂になってるわね」
「しょうがないわよ」
永原先生は少しだけ寂しそうな笑顔で言う。
やっぱり、いきなりみんな気持ちを切り替えるのは難しいもんね。
「マキノちゃん、クラスにはなじめた？」
「ううん、まだまだよ。もちろん、学校生活は楽しいわ。ずっと私の憧れだったもの」
永原先生が本音を漏らす。
「マキノちゃんって古典得意なんだね。１００点なんて凄いわよ」
あたしは、あまりいい点数じゃなかった。卒業には問題ないし、佐和山大学では古典をしないので十分に及第点だけど。
「へへん、もちろん得意科目よ」
「じゃあマキノちゃんは何が苦手なの？」
「うーん、数学がちょっと苦手かな？」
永原先生は少し考えて言う。
確かに、得意そうな感じではないわね。
「さ、学食に並ぼう」
「うん」
永原先生はあたしにくっつくように学食に並ぶ。先生の時にもこうして並んだ経験はあると思うけど、今日みたいに生徒として並ぶのは全く違うはず。
実際、隣に並んでいる永原先生は目を輝かせている。
周りの生徒たちは学食とあって、永原先生のことは話題にしていない。
もしかしたら、もう噂になっているのかもしれないけど。
「マキノちゃん、何食べる？」
「うーん、そうねえ……」
永原先生は券売機のメニューとにらめっこしつつ、牛丼を頼んだ。
ちなみにあたしは、カレーにした。
食堂のおばちゃんから食べ物を受け取り、テーブルを探す。
永原先生の様子を見る。設定は転校生だけど、やはりどこか慣れ親

しんだ雰囲気は隠せないみたいね。
「いただきます」
あたしたちは、食べ物を食べ始める。
すると、お互い食べ物に集中するので会話の量は減少する。
永原先生の食べ方はいつも通りで、吉良上野介から教わったのか、かなりきれいな食べ方をする。
「はむはむ……」
そう言えば、永原先生は学食で食べること多いんだっけ？
あたしが初めて生理になった時にもいたし。
永原先生は、感激していて、ゆっくりと味わい尽くしている。
青春を一つ一つ取り戻すごとに、永原先生の中で活気がわいてくる。
……あたしも3日間位限定でいいから、幼稚園入り直そうかしら？
「ごちそうさまでした」
永原先生は、あたしに言われるまでもなく、返却口まで迷わず進む。
やっぱり、そこまでは演技しないみたいね。

## 受け入れられた転校生

「よっしゃあがりー！」
「うえー！　また最下位争いですよー！」
教室に戻ると、桂子ちゃん、虎姫ちゃん、龍香ちゃんの3人がババ抜きをして遊んでいた。
永原先生が、入りたそうな目をしているわね。
……よしっ。
「マキノちゃんも入りたい？」
「あーうん……」
あたしが永原先生に声をかけると、永原先生は消え入りそうなくらい消極的な声で話す。やっぱりまだ、遠慮しているみたいね。

「よし、勝った！」
「うーん……」
「じゃあ声かけなきゃ。ほら、頑張って？」
よく見ると、タイミングよく終わったみたいだし。
「そ、そうよね……あ、あの！」
「あれ？　永原せんせ……永原も入りたいの？」
虎姫ちゃんがぎこちなく言う。
「うん、私と優子ちゃんも混ぜていい？」
「うん、いいですよ！」
永原先生の要望に、龍香ちゃんが快諾し、ババ抜きは5人になった。
「えっと、マキノさんはトランプ得意ですか？」
龍香ちゃんも、何とか呼び方に慣れようとしている。
「うーん、ババ抜きに得意不得意ってあるのかな？」
龍香ちゃんの話に、永原先生が疑問を投げかける。
「「うーん……」」
あたしたちは、言われてみればという感じになる。
唸りつつも、カードを切っていた桂子ちゃんの手でカードが配られていく。

ババ抜きにおけるトランプは、ジョーカーを1枚入れての５３枚で、５３は素数なので、何人で対戦しても初期枚数に差が出てしまう仕様になっている。
ともあれ、あたしは１１枚でスタートした。

「よし、これで揃った！」
「あー、負けたあ……」
永原先生がちょっと悔しそうに言う。
最初の対戦は、永原先生が最後にジョーカーを残してしまい負けになる。
次の対戦はあたしが負けて、３回目に龍香ちゃんが負けたところで予鈴が鳴ったので、あたしたちは午後の授業に入った。
休み時間に友だちと遊ぶ、こういう何気ない生活こそ、永原先生が一番望んでいたことだから。だから多分、一つ一つの日常が、彼女にとっての幸せになるんだと思う。
午後の授業にも、永原先生は慣れ親しんでいった。
嬉しさいっぱいの表情だけど、一方で少しだけまだ、馴染めていない気もする。
幸い、午後には体育の授業もある。そこでちょっとだけ、いたずらしちゃおう。大丈夫、きっとうまくいってくれるわ。

キーンコーンカーンコーン
「今日の授業はここまでです。お疲れ様ででした」
午後の授業がまた一つ終了する。
この次が体育の授業で、今日の教室は男子が使うので、あたしたちは所定の場所で着替えることになっている。
あたしたちは体操着を持って集団で移動する。永原先生もついていく。
「マキノちゃん、緊張する？」
「うん……でも、これも含めて青春よね」
永原先生が渇望していたこと。でも、やっぱり緊張は隠せない。あ

たしたちには馴染みのことでも、永原先生にとっては未知の領域なのよね。
あたしたちは更衣室に入り、盗撮カメラを確認した後に着替え始める。ちなみに、カメラの確認も、永原先生には新鮮な雰囲気らしい。
以前なら、昔のグループの中で、この着替えの輪が２つに分裂していた状況は結構残っていたけど、今はもう、そんなことはない。
でも、永原先生はやっぱり、輪から外れた位置で着替え始める。やっぱり、フレンドリーにしないといけないわね。
……よしっ。
あたしは手早く上の体操着だけを着替えると、後ろから永原先生に近づく。
「マーキーノーちゃん！」
ぶわっ！
後ろから永原先生のスカートをめくり上げてみんなにパンツを露出させる。
「きゃあ！」
永原先生はかわいらしく、恥ずかしそうな悲鳴を上げる。ちなみに、パンツは白でした。
体育の着替えでのスカートのめくりめくられは、悪ふざけでもやっぱりみんな恥ずかしくなる。
「そおれ！」
ふぁさっ！
「きゃー！」
今度はあたしがめくられる番、犯人は恵美ちゃんだった。
「恵美ちゃんのえっちー！　このー！　ってきゃ！」
今度は２人がかりでスカートをめくられてしまう。
そしてあたしも負けじと桂子ちゃんのスカートをめくる。
「ざーんねん！　もう着替えてまーす！」
桂子ちゃんは、既に着替えていたらしく、桂子ちゃんのスカートをめくってみたけど、中からは体操着が出てきた。

ぴらりっ！
ぶわっ！
「あーん、もう許してくださーい！」
永原先生の方を見ると、入れ代わり立ち代わりにスカートめくりをされていて、口ではああ言っているけど、表情は笑顔になっていて、永原先生も他の生徒のスカートもめくっている。
「優子ちゃん仕返し！」
ふぁさっ！
「いやあん！」
体操着のズボンに手をかけた直前、あたしは後ろから永原先生にスカートめくりをされた。
あたしは、やっぱり恥ずかしいんだけど、ちょっとだけ安堵感も覚えた。
「むむー！　大きいなー！」
もみっ……もみっ……
「もー！」
永原先生があたしの両胸を揉んでくる。
あたしの胸に対するセクハラもいつものこと。
「うー、優子さん凄い変形ぶりですよ」
「やっぱり……もうちょっと大きくなりたい……です……」
龍香ちゃんとさくらちゃんが、あたしを羨ましそうに見ている。
「でも、マキノさんの胸も大きいですよね!?」
「え？　ま、まあ優子ちゃんほどじゃ無いけど」
龍香ちゃんに突然話を振られ、永原先生が、慌てたように応対する。
確かに、永原先生が、小さな身体に見合わない大きな胸なのも確か。
「あは」
「ふふっ」
「「あはははははは!!!」」
どこからともなく笑い声が漏れた。それに呼応するかのように、女子更衣室全体に笑い声がこだまする。
こんなに激しくみんなでじゃれあったのは久しぶりだった。

永原先生も、あたしも、笑っている。今の永原先生は、何てことはない、1人の女子高生だった。
みんなも、永原先生に持っていた壁が、取り払われたと思う。
「は、早く着替えないと遅刻しちゃうわね」
あたしはもう、着替え終わったけど、まだ着替えていない人も多い。
「うん……みんな……ありがとう……うっ……」
永原先生が顔を覆って泣き出し始めてしまった。
「わわっ、どうしたのマキノちゃん？」
突然泣き出した永原先生に桂子ちゃんが心配そうに聞いてくる。
「うん、私……嬉しくて……こんな風にクラスのみんなとふざけあって……そんな日を、ずっと待ってたのよ」
壮絶な人生を送ってきた永原先生が見せた「弱さ」、あたしたちは何も言えない。
その涙から見える気持ち、それはあたしたち高校3年生の女の子には、計り知れないものがある。
「何だか、優子が初めてあたいたちと着替えた時を思い出すぜ」
恵美ちゃんが懐かしそうに言う。
それを聞いたあたしも、懐かしい気分になる。
そうだった。あの時もそう、桂子ちゃんにスカートめくりをされて……でもそうやって分け隔てなくふざけあえるからこそ、仲のいいクラスメイトになれる。
「懐かしいですね……あの時もこんな感じでしたよね」
「そうね、でもこんな光景ももう見られなくなるわね」
あたしたちの体育の授業ももう、数えるほどしかない。
期末試験が終わり、答案返却の時に、体力テストをして終わりで、今はそのための体力向上練習をしているところだ。といっても、あたしの成績は相変わらず悪いけど。
「ま、昔と違って今はスマホもテレビ電話もあるしな。あたいも、暇を作ってはアクセスするぜ」
「ええ」
あたしたち3年1組は、話し合いの結果、永原先生も入れた33人

で専用のＳＮＳを作ることになった。
個人情報もあるから、そのあたりも考えて匿名にはなっているけど、誰が誰なのかは簡単に分かるようにしている。
ちなみに、特定の誰かを除いた悪口ＳＮＳは絶対に作らないという決まりになった。まあ、このクラスは秩序もあるし、大丈夫だと思うけどね。
「さ、そろそろ行きますよ。遅刻しちゃいますから」
「あ、そうね龍香」
龍香ちゃんの掛け声で３年１組の１８人の女子全員が体育の授業へと向かう。

「よし、みんな揃ってるな。今日は前回に引き続き、体力テスト対策だ。みんな最後まで気を抜かずに頑張ってくれ」
体育の先生は、いつも通りの号令をかける。
「「はーい！」」
クラスの返事とともに、体育の授業が始まる。
今日は女子が偶数なので、久々に２人１組の準備体操ができた。
永原先生にも、「マキノちゃん、一緒にやろう」とクラスの女子が声をかけていた。どうやら、永原先生はクラスに完全に馴染むことが出来たようね。
永原先生の身体能力は女子の中ではかなり高かった。
腕力こそ平均的だけど、脚力、特に持久力では全女子中でも１位だった。
「はぁ……はぁ……せん……マキノはすげえ脚力だな」
「う、うん……ちょっと必要に迫られて、持久力を付けたのよ」
永原先生が奥歯に物が挟まったような言い方をする。
これはみんな知っての通り、永原先生は戦国時代や明治維新の時に諸国を流浪していたため。特に戦国時代を女一人の身で潜り抜けるためには、並大抵の身体能力では難しかったのかもしれないわね。
そう言えば、一昨年の夏の時にも永原先生が身体能力を見せてくれたわね。

これで期末試験も高得点を連発したら、完璧超人な優等生になっちゃうわね。
……まあ、普段は先生をしているんだから当たり前かな？

「女子ってすげえよなあ」
「この前までずっと先生だったのに、もうあんなに溶け込めて」
「でもよ、何だか楽しそうだよなあ」
「うん、やっぱり俺たちも変わらないといけねえよな」
「でもよ、その後はどうするんだ？」
「うーん、そうだよなあ……だけどさ、やっぱり、俺たちもきちんと生徒として接してあげねえといけねえんじゃねえか？」
「そうなるよなあー」
「どうしようかなー」

男子たちも、躊躇しつつも徐々にクラスメイトとしての永原先生を受け入れようとしている。
多分残りの時間も、きっと大丈夫だと思う。

「では、帰りのホームルームもここまでじゃ。みんなも気をつけて帰るのじゃぞ」
校長先生の帰りのホームルームが終わって帰り道、あたしは浩介くんと永原先生との3人で帰ることになった。
「せ……永原の演技力すげよなあ」
浩介くんはまだぎこちない様子で応対している。
いくらクラスメイトとして接すると言っても、やはり先生の苗字を呼び捨てにするのは結構難しい。まあ、クラスメイトには気にしない人もいるけど。
「うん、あたしもそう思ったわ」
「あははは……演技力かあ……確かに、そうよね……でもね」
永原先生がちょっとだけ言葉に詰まる。
「ん？」

「着替えの時に泣いたのは、演技じゃなかったわよ」
うん、それは分かるわ。
「え!? ど、どういうこと?」
その場に居なかった浩介くんは驚いている。
「あーうん、マキノちゃん、やっぱり孤立しててね、でもあたしがちょっとおふざけしたところで、クラスの女子みんなでわいわいやったのよ」
「うー、凄い光景だなあ……」
浩介くんがちょっとだけ引き気味に言う。
確かに、あの時は百合の花が吹き荒れてはいたのかな?
「でもそうして気分をほぐすことができたから、女子の中にも溶け込めたのよ」
そもそも、永原先生は犯罪者の娘というわけでもないし、外見上は女子高生どころかむしろ女子中学生の集団に入ったほうがより溶け込めそうなくらいには違和感がない。
人間は、意外と見た目が合っていれば適応は簡単な生き物なんだよね。あたしだって最初はクラスで受け入れられるのに苦労したけど、それも2週間くらいの出来事だったし。
「優子ちゃん、ありがとうね。私、この学校でもやっていけそうだわ」
「うん」
永原先生が感謝をこめて言う。
何だろう、むしろ今まで彼女が私たちの先生をしていたのは嘘で、これが本来の姿なんじゃないか?
そんなことさえ思えてくる。そのくらい、違和感がなくなっていた。
「それじゃ、浩介くんバイバイ」
「ああ、また明日」
駅に到着し、浩介くんと別れる。
ちょうど来た電車の中に入り、あたしは永原先生と一緒に座る。
「制服になると、視線が5割増なのよねー」
「うんうん、特に椅子に座ると凄いよねえ」

あたしたちはガールズトークで盛り上がる。
あたしにとって永原先生は先生であると同時に、協会の上司でもあり、またＴＳ病のカウンセラーでもあり、二重三重の意味で目上の人だった。
でも今は違う。あたしも永原先生も、超が付くレベルで美少女だからどこにでもいるわけじゃないけど、仲のいい女子高生２人組であることには違いはなかった。
そう言えば、協会本部まで永原先生と行ったことはあったけど、こうやって一緒に下校したことはない。
まあ、当たり前の話といえばそうだけど。でも今は、普通の仲のいいクラスメイトになっている。
「それじゃあ、マキノちゃん、ばいばい」
「うん、また明日」
あたしは最寄り駅に到着し、永原先生と別れる。
ちなみに、永原先生の最寄り駅はもっと先にあるらしい。
具体的にどこなのかはわからないけど、まあ聞いても仕方ないよね。
「ただいまー」
「優子おかえりなさい」
あたしは家に戻り、いつもの日常に戻った。
学校も日常の一部だけど、何だろう、今はちょっとだけ「非日常」にも思えてくる。
明日になれば、この「非日常」も終わるのかもしれない。
永原先生が、まるで最初から小谷学園の生徒であったかのように。
そう言えば、あたしもこの婚約指輪をはめて登校した最初の日は、そんな非日常を感じていた。
でも今は、この指輪をはめていることは当たり前になった。それは浩介くんも同じだと思う。
それにしても、人間って適応力が高い生き物よね。
あたしだって、ずっと男として生きてきたのが、ある日突然女の子になって、今やもう男の子の婚約者までできている。

それに比べれば、見た目の幼い先生が、ある日突然生徒になっちゃったくらい、どうってことのない差なのかもしれないわね。
うん、大丈夫よね。

## 3年1組　永原マキノちゃん

あれから、永原先生はクラスの男子たちにも受け入れられ始めた。
そして分かったのは、やはり永原先生は、古典以外の教科もかなり成績がいいということだった。
一方で、他のクラスはというと……

「なあなあ、永原先生は何で制服になってるんだ？」
「知らねえのか？　今は3年1組に転校したんだよ」
「え!?　でも、先生が何で生徒なんかになってんだよ!?」
「ほら、永原先生って戦国時代生まれだろ？　だから江戸時代の寺子屋も含めて、ろくに学生生活を送ったことがなくて、それが強いコンプレックスだったんだよ」
「あーなるほど、でもいくら小谷学園だからって、こんなわがまま通るんか？」
「それがよ、聞いて驚くなよ？　そもそもこの企画を最初に発案したの、なんと校長先生らしいぜ！」
「ええ!?　マジかよ！　よりにもよって校長先生が言い出したのかよ！」
「小谷学園はフリーダムとは聞いてたけど、予想以上だよなあ……あー、今日から永原先輩って呼ばなきゃいけねえのか」
「2週間限定だけどな」

そして火曜日になった2日目以降は、永原先生がどうやら校長先生の発案で3年1組の女子生徒になっていることも、全校に知られてきた。
最初は全校生徒の動揺も大きかったけど、3日目には慣れちゃったし、何よりも校長先生の発案だということが広ったのがよかった。
まあ、校長先生が出席簿持って3年1組の教室に行ってるもんね。

ガララ……

「おはよー」
教室の扉が開き、永原先生が元気よく挨拶をする。
「マキノちゃんおはよう」
「優子ちゃんも、おはよう」
この日になると、朝の挨拶もすっかりこなれてきた様子。
永原先生にはロッカーがないので、教科書を机の下に置いて行っている。
防犯上は好ましくないけど、まあ仕方ないよね。
学校生活上の永原先生は、ふざけあったり遊んだりもするけど、授業中はまじめな生徒になっていた。
先生に怒られてみたいという欲望ももしかしたらあるかもしれないけど、それはクラスの迷惑になるから、しないでいるのは普通のことだろう。
「えーっと、では……次の問題ですが……田村！」
「はい」
数学の時間、小野先生はやはりやりにくいのか、永原先生を当ててこない。
永原先生がちょっとだけ不満そうな顔をして、手を上げて質問していて、小野先生の反応がやけに面白かった。
それでも、やはり「恩師の願い」ということもあって、授業の終わり頃には何とか「永原」と呼ぶことに成功していた。
その時の永原先生は泣きそうになるくらい嬉しそうな顔をしていた。永原先生が、この生活をどれだけ憧れていたかが分かる。
永原先生は、数学が苦手なんて言っていたけど、もう一つ苦手科目があった。
それは美術だった。
永原先生は絵をとりあえず書いてみたりしてみたものの、どうしても絵のバランスを崩してうまくいかなかった。
永原先生は伝令役の足軽だったとはいえ、５００年近く前の当時求められたものと現在の学校でやっている美術は、全くの別物だということだろう。

しかし、それ以外の科目は概ね好成績だった。
以前、永原先生は小中高いずれでも教えられると言っていた。
実際に、小野先生が小学生だった時に、永原先生は当時の担任になっていた。
もちろん古典が一番の得意分野とは言え、常に古典の先生で応募するわけにも行かないんだろうとは思う。
永原先生も「最近、『古典を学ぶ意味』について疑問視する声が増えている」何て言っていたし、そのあたりの世渡り術として、高校レベルまでは、苦手の数学と美術以外は教えられるようにしているのかもしれない。
「ふう、やっぱりどうしても絵は描けないのよねえ……」
永原先生が悩んだ風に言う。
「えっとその、マキノちゃんは浮世絵とか描かないの？」
もしかしたら地雷かもしれないけど、一応聞いてみる。
「私はやったこと無いわよ、でも、家には二束三文……実際には２０文足らずで買った浮世絵が山のようにあるわよ。どれも、今の価値でも５００円としない値段だったわ」
どうやら、昔話はタブーではないらしい。
それにしても、今それらを売ったらどれくらいの値段になるんだろう？
「さ、皆さん、課題を提出してください……永原は……まあ落ち込まないでいいですよ。人間誰にも得手不得手はありますから」
美術の先生が永原先生に気を遣って言う。
おそらく校長先生の通達によって、永原先生を他の生徒と分け隔てなく扱うように言われているんだろう。
それでも、あたしたちと同様、普段先生の同僚として接していた永原先生の扱いを変えるのは先生にとっても容易ではない。
そう考えると、よく校長先生の発案が通ったものだとも思う。
「マキノちゃん、試験終わったら天文部に行く？」
昼休みの学食で、あたしは桂子ちゃん、浩介くん、永原先生と学食

で食べている時に言う。
「うん、そうさせてもらえる？」
学園生活を送る上でも、やっぱり部活を楽しむのは欠かせない。今は期末試験前だから部活はないけど、試験が終われば、短い間だけど、永原先生も部活を楽しむことができる。
「うん、試験後が楽しみね」
桂子ちゃんが張り切って言う。
「しっかし、すっかり馴染んだな」
浩介くんも柔らかい表情で言う。
「うん、私幸せすぎて……このまま死んじゃってもいいなんて思えたの、うん……人生で初めてかもしれないわ」
永原先生から、また一筋の涙がこぼれる。
永原先生の口からその言葉が出るのはとても重大な意味を持つ。
それくらい、永原先生の中で、「学生生活を送りたい」というのは、強い願望になっていたのだ。
「何てね、もちろん私は死ぬつもりはないわよ。ただちょっとだけ、そう思えただけよ」
永原先生が、ちょっとだけ笑う。
でも、あれだけ死ぬことを嫌っていたのに、こんな風に思える日が来るなんて、永原先生自身も思っても見なかっただろう。
「マキノちゃん……その……」
「あはは、私はＴＳ病だからね。どうせなら神話以上に長生きしたいわよ。それに、今はもう、死んだら失うものができすぎたわ。男だった頃なんて、それこそ失うものなんて何もなかったのにね。だから主君に尽くせたのよ」
永原先生が遠い懐かしい顔をする。そうよね、永原先生は死んでしまえば失うものが多すぎるもの。
数多くの時代を生き抜いて、永原先生が欲したのは素朴な学生生活だった。
あたしたちは、永原先生の話をゆっくりと聞く。
「あっ……ごめんなさい、今の私は高校３年生の女の子だもんね。昔

話をしてもまずいわね」
昔話を続けていた永原先生がバツの悪そうな顔をする。
「別にいいわよ。それがマキノちゃんの個性でしょ？」
あたしが優しい口調で言う。
いくら高校生になれたと言っても、永原先生の本当の年齢は動かせない。
だったら、５０１歳という年齢を「個性」として受け止めてあげたい、今はクラスメイトなんだから。

永原先生との昼食も終わり、あたしたちは教室で遊ぶ。
あたしの昼休みは浩介くんと遊ぶことも多いけど、基本的に他の男子とは遊ばない。
それは浩介くんの嫉妬心への配慮からで、たまに遊んでしまったら、浩介くんの嫉妬を治すために、屋上でスカートをめくられて、嫉妬心を沈めてあげないといけない。
……たまに浩介くんにエッチなことされたくなっちゃって、わざとすることも多いけどね。
ともあれ、今日の昼休みはあたし、浩介くん、高月くん、永原先生の４人でのトランプ対決になった。
高月くんは頭数要員だけど、まあ楽しんでくれるかな？
で、今回やるのは大富豪、あるいは大貧民ともいわれているゲームで、ローカルルールは複雑になるのでオーソドックスな感じで行うことになった。

「それ革命！」
「わあ優子ちゃん凄いわね、でも……」
「ヒエー革命返し！」
最初のゲーム、あたしの策略であった渾身の革命も、永原先生に返されてしまい、最終的にあたしが最下位で負けてしまった。
そして、このゲームは大貧民になると中々抜け出せないように、カードを交換しないといけない。

「はい、これとこれ」
「うー」
大富豪になった永原先生に2のカードを2枚取られてしまう。
そして、永原先生から3と4を押し付けられてしまう。
「さて、じゃあ再開ね」
こうして、次なるゲームが始まった。
ともあれ、せめて最下位だけは避けられれば、少しはマシにはなると思う。
トランプのこのゲームは身体能力差は関係ないからハンデはなしになる。
あんまりに表情に出る人の場合、仮面を付けることでハンデにできるとは思うけど。

「あ、もうこんな時間だ」
「そうね、このあたりにしておくわね」
結局、休み時間中ではあたしは1回も貧民からは抜け出せなかった。
ボーっとしていると長い休み時間でも、トランプやゲームで遊ぶとかなりあっという間に感じてしまう。
そういえば、それが相対性なんだっけ？
「さて……」
中途半端な時間が残ったので、あたしたちは教室でボーっとする。
永原先生も、机に突っ伏して休んでいる。その様子は、いかにも「今日が女の子の日です」といっているようなものだった。
普段の永原先生は生理中のことを隠すのがとてもうまい。
人によって軽い重い違うんだろうけど、それにしたってあたしには分からない。
桂子ちゃんでさえも、あたし程じゃないけど女の子の日は気分悪そうにしていて、男子は気付かなくてもあたしには分かるのに。
「ふう」
あたしは予鈴前に午後の授業の支度を行い、そのまま休むことにし

た。
「えーでは、来週からは期末試験です。大学への入学試験が既に終わっている人も多いと思いますが、卒業に向けての大事な試験でもありますので、決して気を抜かないようにお願いします」
３月になった金曜日の最後、あたしは校長先生のホームルームが終わり、帰宅の準備をする。
期末試験前、あたしも勉強をしたい。
「ねえねえ、優子ちゃん勉強会しようよ」
「え!?　いいのマキノちゃん？」
永原先生が、勉強会を提案してきた。
確かに、以前話したように勉強会はしてみたいけど。
「ええ、私の家……ではないですけど、ビルの一室がありますので、そちらで勉強会が出来るわよ」
おそらく、協会本部のことだと思う。
「え!?　何々？　勉強会ですか？」
あたしたちの話に、龍香ちゃんが噛みついてきた。
「お、じゃあ私も混ぜてくれる？」
そして今度は桂子ちゃんだ。
「うんいいわよ、４人で行きましょう」
というわけで、今日は浩介くんとは一緒には帰らず、協会本部まで電車で移動することになる。
母さんには「女友達と期末試験前の勉強会をすることになったので遅くなる」とだけメールで送っておいた。
桂子ちゃんと龍香ちゃんも、各自で似たようなメールを出しているはず。
あたしたちは、制服で協会本部に行ったことはあるけど、永原先生にとっては多分初めてのこと。
「マキノちゃん、そのビルには誰かいるの？」
あたしが来た時には、協会本部にはいつも誰かがいたことを思い出し、ちょっと不安に思う。

「うーん、今の時間帯は誰もいないはずだから大丈夫よ」
永原先生が笑顔で言う。
どうやら、事前に人払いしてあったみたいね。

「それでそれで、マキノさん、『近世日本語』って何ですか？」
電車の中で、龍香ちゃんが興味津々に聞いてくる。
「古典と言っても奈良時代やそれ以前のものから江戸時代まで幅広いのよ、近世日本語、近代日本語というのは、主に室町後期から江戸時代の言葉で、今の日本語にかなり近いわよ。古典の授業で主に行う平安時代の言葉は、結構今とは違っているわ」
普段は倣わないことでも、生徒同士ならうまく話せるという事例よね。
「その、戦国時代の言葉と今の言葉と、戦国時代と平安時代の言葉だと……」
「うーん、江戸時代の中期ぐらいなら、確実に今の言葉の方が近いとは思うけど……外来語には注意しないとダメよ」
「あー、そりゃあそうだよなあ」
漢語でも、明治以降に作られた造語がとても多いらしく、それらは通じないらしい。
一方で、「カステラ」は戦国時代でも、「マジかよ」は江戸時代の中頃なら「本当に」という意味で通じるらしい。
正直言って、そっちの方が「マジかよ」って感じだけど。
「古典の授業であった少数派の活用として上一段下一段活用ってあるでしょ？　あれは元々多くが上二段下二段活用だったのよ。私たちの時代だと、『蹴る』以外にもいくつもの動詞が下一段で通じたわよ」
「え？　下一段は『蹴る』だけって古典の先生が言ってましたよ」
この「古典の先生」とは文字通り目の前の人だけど。
「あはは、それが通じたのは私が生まれるより更に数百年くらい前の、平安時代の話よ」
他にも、今使っている命令形は、元々は東日本方言だったものが、江戸時代になって江戸が文化の中心になるにつれて共通語化したらし

い。

「さ、ついたわよ」

永原先生の古典話を聞きながら、電車を乗り換えて、あたしたちは協会本部のビルに到着する。

ここから４９階までボタンを押し、あたしたちは永原先生ののカードキーでビルに入る。

部屋の中は静まり返っていて、誰もいない。

そんな中で、永原先生は小さな「会議室」を開ける。

「まあ座ってよ」

永原先生が、あたしたちを先に通す、あたしと龍香ちゃんが奥に座る。

「桂子ちゃんも、ほら」

ぶわっ！

「きゃー！」

桂子ちゃんが部屋への入り際に、にやけつた顔で永原先生のスカートをめくり上げて、パンツを露出させる。

あ、色はこの前の体育と同じで、白でした。

「んもう！　桂子ちゃんって結構えっちだよね!?」

永原先生が言う。でも、桂子ちゃんはそういう感じではない。

桂子ちゃんは、もしかしたらちょっといたずら好きなのかも。

「あはは、まだまだ私たちとマキノちゃんとの間に壁を感じたからね。私たちはいいんだいけど、マキノちゃんはまだ遠慮していた気がしたし」

「そう……私もやっぱり、壁を作っちゃってたのね」

永原先生が少し落ち込んだ風に言う。

「まあ、深く考えすぎないでください。今回の勉強会でも、親睦は深まるとは思います」

龍香ちゃんの励ましに、永原先生も表情が綻ぶ。

ともあれ、あたしたちは、普段は協会本部として使っているオフィスで、勉強会を始めた。

「えっと、この化学式は……」
「あ、これはね、ここをこうするのよ」
「へー、マキノさん、理系もすごいですねー」
永原先生は、授業で見せた通り、いろいろな科目に精通していた。生徒になることで、先生としては教えにくいことでも、教えることができる。
また、永原先生自身にとっても、そう言ったことを知ることができる。
そういう意味でも、この勉強会は、「生徒としての永原先生」にとっても、「教師としての永原先生」にとっても、有益な情報だった。
あたしたちにとって以上に、この勉強会は永原先生にとっての意味が大きい。
「ねえこの問題が分からないわ」
「あーうん、マキノちゃん、この複素平面はね……」
一方で、永原先生は数学が苦手で、数学に関してだけは、あたしたちに教えを受けていた。
でも、いつしかそれも、違和感を感じなくなってきた。
勉強会は長続きし、私たちは日が落ちるまで勉強しつくした。これで期末試験もばっちりね。
とにかくあたしとしては、小谷学園はもう、卒業さえできれば問題ない。
まあ、大抵の生徒はそうなんだけど、成績が悪いと、卒業式までに、土日で補修とか受けないといけない。
それは避けたいものね。
月曜日はもう、2月最終週、卒業式まで、後3週間に迫っていた。
あたしにとって、それは大きな人生の転換点を迎える日が近いことも意味した。
結婚式場の予約も正式に取られ、期末試験が終わったら、あたしは卒業式のリハーサルだけではなく、結婚式のリハーサルや、ウェディングドレスのサイズ決め、そして婚姻届は間違っていないかを特に気を付けなければならない。

念のために、区役所の複数の人にチェックしてもらう予定になっている。

## 夢の終わり

月曜日、いよいよ期末試験がやってきた。
卒業を決める試験ということもあって、あたしたちも緊張しているが、永原先生の緊張ぶりには及ばなかった。
期末試験は水曜日までの3日間に行われ、その後は試験の返却と大学の内容を少しだけ学習し、更に体育は体力テストが、また試験の返却などが終わった時間は卒業式に向けて歌の練習に充てられることになっている。
ちなみに、時間割上、永原先生はこの歌の練習には参加しない。
期末試験が終わり、金曜日になったら、永原先生はまた先生として戻ってくる。
あたしは、永原先生とした勉強会での成果や、あたし自身の勉強の成果を、試験にぶつけた。
うちのクラスは平均点も高く、成績優秀だった。
永原先生も、緊張の面持ちで試験を受けた。
期末試験の難易度も、あたしにとってはそこまで難しいものじゃない。
これまでの見込みも考えて、あたしには卒業できる算段があった。
問題は、期末試験が終わった後のことだと思う。
結婚と卒業が同時に来る上に、永原先生を天文部に誘うことになっている。
永原先生は、まだ「部活の楽しさ」を経験していない。
いかにして経験させるか？
あたしはそんなことを考えながら、期末試験の回答を続けていた。

「優子、最近忙しそうね」
「うん、結婚のこともあるから」
「そうね、試験が終わったら、早速浩介くんの家も呼んで婚姻届を書き始めるわよ」
「式場でのリハーサルはいつになるの？」

正直言うとこっちのほうが大事だと思う。
「ええ、前日に決まったわ」
「つまり、卒業式と同じね」
忙しい前日になりそうだわ。
「それから、優子のウェディングドレスもオーダーメイドになったからね」
そう言えば、あたしの胸が大きくて、サイズがなかったんだっけ？
「うん、分かってるわ」
「ふふっ、つまり初夜はウェディングドレスのままできるわよ！」
「っ！」
母さんの言葉を聞いて、ぼんっとあたしの顔が赤くなる。
女の子たちの夢とあこがれのつまったウェディングドレス、ホテルに戻ったあたしと浩介くんは、新郎新婦の格好のまま、ホテルの部屋に入って……
あうー想像しただけで赤くなっちゃうわ。
「優子たちを呼んでの2次会とかはしないことにしてあるわ、優子、まだ未経験だもんね。それも含めて、素敵な夜にしてあげたいの」
「か、母さん！」
心遣いはうれしいけど。
「ホテルのお部屋代とか、結婚式場の代金も蓬莱教授が支援してくれることになったわ。何でも『予算を使わないと支援者にせっつかれる』って言ってたわ」
「そ、そうなのね、あはははは……」
世の中には、お金を使わないと怒られる人もいるということを、あたしは学んだ。
ともあれ、お金の心配がいらなくなったのは心強いわ。
それよりも結婚式の夜のこと。
今までも何となく、あの日にあたしは変わると思っていた。
女の子は、誰しもが不安になる。あたしも、考えてみれば一昨年の10月末の頃から、ずっと我慢してきた。
楽しみではあるけど、やっぱり不安でもある。

多分式の当日になっても、解決はしないと思う。

期末試験中も、試験問題そのものはうまく解けたけど、試験の合間の勉強は、卒業式の日に気を取られて、みんな実が入らなかった。

それでも、あたしは全てのテストをやり終えた。

「あー、終わったー！」

あたしも周囲も、ほっとした顔をする。この学校での最後のおお仕事が終わったからだ。

後は試験の返却があるだけ。そして永原先生も、ほっとしたような表情をしている。実に女子高生らしい仕草だと思う。

1週間目の永原先生は、まだぎこちない所もあった。

でも今やもう、永原先生は小柄で童顔なことを除けば、すっかり1人の女子高生だった。

「マキノちゃん、天文部行こう？」

「うんっ！」

永原先生が嬉しそうな顔でニッコリと笑い、あたしたちについていく。

いつもは3人のところ、4人で行動する。永原先生は、部活を楽しみにしていた。

途中で、あたしたちは校長先生とすれ違う。校長先生はにこやかな表情をしていた。

ガチャッ

「さ、入ってー！」

「あ、先輩方どうもです」

天文部長さんが挨拶する。

「おや、新入部員ですか？」

「3日だけね、転校生の永原マキノちゃん、よろしくね」

「永原マキノです、短い間ですけれども、よろしくお願いいたします」

永原先生が頭を下げる。後輩の部員たちは、みんな一様に動揺しつつも、受け入れるように努力しているのが見受けられた。

みんな、校長先生の発案で、永原先生が生徒になってることは知っていた。

「マキノちゃん、ここがＪＡＸＡのホームページで――」

あたしが、永原先生に天文部のことを教える。

あたしが最初にここに来た時も、浩介くんが天文部の活動をし始めた時も、後輩部員が増えた時も、こんな説明をした。

多分、後輩たちも、同じような説明をするんだと思う。

天文ニュースを見るにつれ、永原先生も宇宙に興味を持ってくれたと思う。

「へー、宇宙開発ってこんなに進んでいるのね」

「マキノちゃんは宇宙については？」

「うーん、あんまり詳しくないわよ」

永原先生が知識無いアピールをする。

まあ、新入部員はみんなそんなものだし、気にしないでいいわよね。

「あはは、あたしも最初はそんな感じだったわ。桂子ちゃんが詳しいのよ」

「へー、天文イベントは生きるモチベーションにもなるから、もっと詳しく知りたいわね」

永原先生が付け加えた。

「そうねえ、蓬莱教授には頑張ってもらわないと」

桂子ちゃんも反応する。

「だなあ、天文部としては、人間の一生は短すぎると言いたいし」

男子部員も付け加える。

「でも何だろう、私は不思議と不安じゃないのよ」

「ああ俺も」

桂子ちゃんの意識の変化が感じられた。

以前から、天文部では蓬莱教授の不老研究の実現が、段々と現実味を帯びた空気になっている。

あたしが来たばかりは、坂田部長も桂子ちゃんも、不老になったあたしを羨ましがっていて、ちょっと疎外感を覚えたのに比べれば、隔

世の感さえある。
あの時からまだほんの、２年も経ってないのに。それだけ、蓬莱教授の影響が大きいということ。
「何だか、６０年前を思い出すわ」
永原先生がふとつぶやく。
６０年前と言えば、ちょうど１９５９年、昭和の高度経済成長期真っ只中の時代よね。
「え？　マキノちゃん、６０年前って？」
「ああうん、実はその時、新幹線というものが作られていたのよ。だけど、当時の価値観ではあまりにも非現実的に見えたのよ。人々はそれを『夢の超特急』って嘲笑っていたわ」
京都で聞いたことがある話だった。
その後、新幹線が大成功を収めたのは歴史の証明通りで、夢の超特急は、文字通り現実の夢としてやってきた。
「蓬莱教授の研究が、新幹線と重なるのよ。何となく、ね」
永原先生が遠い目をしていた。
そう、あたしも永原先生も、蓬莱教授の不老研究を、当初は全く信じていなかった。
もちろん、あたしたちＴＳ病患者は不老だけど、それを一般に応用する何て荒唐無稽で、文字通り「夢」でしかなかった。
２年前のクリスマスの時の記者会見、あの時に、世界の……人類の歴史が動いたんだわ。
永原先生は、天文部の活動を始めた。
昔話を話すこともあったけど、未来のことに目を向けようという意識が感じられた。

翌日以降、試験の返却が進む、あたしは全ての科目で平均以上、浩介くんも平均的な点数が多く、卒業には支障はなさそうだわ。
「マキノちゃん、どうだった？」
金曜日の昼休み、永原先生が生徒でいられる最後の日、まだ全科目返却されてないけど聞いてみる。

「うーん、今のところ１００点は古典だけだわ」
永原先生の口ぶりからは少し余裕が感じられる。
答案を見せてもらったけどぐうの音も出ないほどの高得点だった。
あたしの成績だって悪くないけど、永原先生は軒並み９０点を越えていた。
「あ、数学」
あたしは、数学のテストの答案用紙を発見した。
「わあ！　見ないで！」
永原先生が慌てて隠そうとするが、あたしの視界にははっきりと点数が見えた。
平均点以上だから悪くないけど、他の科目と比べるとかなり低くて、あたしの点数にも負けている。
「えへへ、ごめん見ちゃった」
「もー」
「数学だけはあたしの勝ちね」
あたしもちょっとだけ、永原先生に勝てたのは嬉しい。
「あうー、悔しいわ……」
永原先生が悔しそうな顔で「悔しい」と言う。とても素直な女の子だとあたしは思った。
確かに、数学だけこの点数だと、悪目立ちはする。
永原先生の、生徒としての時間はどんどんと少なくなっていく。
でも、最後まで、永原先生の夢は壊したくない。
たった2週間でも、永原先生にとっては夢の日々だから。

キーンコーンカーンコーン……
「はい、では今日はここまで、皆さんは帰りのホームルームの支度をしてください」
今日の最後の授業が終わり、永原先生の生徒生活はいよいよ終幕を迎えつつあった。
しばらくすると、校長先生が入ってくる。校長先生の担任役も、これで見納めになる。

「えー皆さんにお知らせがあります。当初の予定通り、永原さんは今日をもって転校となります。あーちなみに、来週からは予定通り担任の先生に戻ることになるから、皆さんも気持ちを切り替えてください。さ、永原さん前に出て皆さんに挨拶を」
「はい」
　永原先生が椅子から立ち上がり、教壇の方に立つ。
「えっと、3年1組の皆さん、短い間ではありますが、とても楽しかったです……私の中で……ずっと……ぐすっ……ずっと、思い出に、残ることになるとおぼひます……」
　永原先生は、感極まって泣き出してしまう。
　あの時の体育の時と同じ、あたしたちは、そんな永原先生を優しい目で見守る。
「……ごめんなさい、私のわがままで……校長先生には、飛んだ手数をかけました」
「いえいえ、何度も言いますが、これを言い出したのはわし自身です。永原先生がお礼を言う必要は何もありません。むしろわしの方こそ、余計なおせっかいをかけて申し訳なかった」
　校長先生が、教師としての永原先生に声をかける。
「いいえそれでも、お礼を言わせてください。今回の企画のおかげで、私の中に残っていた劣等感が消えました。私は、校長先生に救われました。ありがとうございます」
　永原先生が頭を下げる。
「それにしても、どうして校長先生は永原先生にそんなことを？」
　高月くんが質問をする。
　それは確かに気がかりだった。
「ああそれですか、永原先生はお忘れになっているかもしれませんが……実はわしも、小学生の頃、北小松先生に2年間教えてもらっていました」
「「え⁉」」
　校長先生の衝撃の告白に、永原先生を含め、周囲は一様に驚いている。

「教師の側は生徒を覚えていることが珍しいですが、生徒のほうは逆です。永原先生が小谷学園にいらした時、わしはあなたが北小松先生だということに気付いていました。何分、ＴＳ病のこともお話になってくれましたからね」
「え、ええ……」
永原先生は、まだ困惑している。
確かに、小野先生は悪ガキだったことで印象に残っているとはいえ、校長先生の子供時代は覚えているとは考えにくい。
「わしは、人違いかもしれないと思うと、怖くて言い出せなかった。そして普通に校長と教諭という上司部下として接するうちに、罪悪感を感じてしまった。何か恩師に恩返しができないかと、わしは常に思っていた」
「……」
「そんな折、永原先生のコンプレックスについて聞いたんです。そして是非とも、願いをかなえさせてあげたいと思って今回の企画を考えました」
校長先生も徐々に、担任のためのキャラクター作りと思われる言葉遣いが元に戻ってきている。
「校長先生の話は分かりました」
永原先生が顔を上げる。
「ですが、過去はどうであれ、今のあなたは校長先生です。少なくとも、教師としての私は部下です。教え子とは言え、あなたは私の上に立つ人です。そのことは、おめおめ忘れないようにしてください……もちろん、日本性転換症候群協会の会長として接することもありますけれどもね」
永原先生はきっぱりとした顔で言う。
もう教師モードに戻った感じだった。
「ええ、ではホームルームを終了します。皆さん各自気を付けてください」
そう言って、校長先生は去っていく、永原先生は自分の席に戻る。
「優子ちゃん、もう少しだけ、生徒でいさせてね」

そしてまたすぐに、生徒モードへと戻っていく。
「あ、うん……」
そう、この後は天文部がある。
「永原せんせ……ま、マキノちゃん、天文部行くわよ」
「うん……悪いんだけど、先に行っててくれるかしら？　ちょっと用事があるの」
永原先生が何やら数枚のプリントを持ちながら言う。
ちょっと挙動不審ね。
「あ、うん。部室で待ってるわね」
あたしたちは、気にはなったけど深くは追及せずに、天文部へと向かった。

「永原先生、遅いわねー」
あたしと桂子ちゃんも、すっかり呼び方が元に戻ってしまった。
もちろん、永原先生が来たら、元に戻すつもりだけど。
コンコン
「どうぞー」
ガチャ……
「お、おまたせ……」
制服姿の永原先生が痛そうな顔で入ってくる。
でも顔には笑みが浮かんでいて、正直かなり奇妙な状況になっている。
「えっと、マキノちゃん、どうしたの？」
「ちょっと小野先生に呼ばれて……あはははは……」
永原先生が、笑って誤魔化している。
どう考えても「呼ばれた」ではなくて、「押しかけた」よね？
よく見ると、顔にはかなり泣いた跡もあるし。
「ま、まあいいわ。と、とにかく座ってよ」
「え!?　あ、う、うん……」
永原先生は引きつった顔で椅子に座る。
どうしたんだろう？

「マキノちゃん大丈夫？　何があったの？」
「え!?　ああうん、何でもないわよ！　うん」
　随分とお尻を気にしているし……まあ、察してあげないとね。
「もしかして永原先生、叱られてみたかったとかですか!?」
　天文部1年生男子の空気の読めない一言に、部室が一瞬で凍りつく。
「な、何言ってるのよ!?　わざと叱られたがる人なんて居ないでしょ!?　ねえ優子ちゃん！」
「……え、えっとその……」
　永原先生は明らかに図星を突かれたという表情をしながら言う。
　もう、誰の目にも明らかだ。さっきのプリントも、きっとテストの結果。
　永原先生は数学のテストが相対的に悪かったことをダシにして、小野先生に自分のお尻を叩いておしおきしてくれるように頼み込んだに違いない。
　多分、小野先生は大層困惑したに違いない、仮に成績悪いからおしおきするにしても、永原先生の数学のテストは平均以上で、他の科目より悪いからと言っておしおきするほどじゃない。
　それに、今の時代体罰なんてやっちゃダメなことの典型だし、ましてやそれを生徒自身が先生に要求……いや、この場合強要と言ったほうがいいだろうけど、いずれにしても、倒錯した話よね。
「あのー、マキノちゃん、人の好みはそれぞれだから、正直に話してもいいわよ」
　桂子ちゃんが謎のフォローをする。
「あ、あはは……私、一回だけなら怒られてみたいと思っちゃいました……小野先生には迷惑をかけたわ。でも大丈夫、強要したのむしろ私だから。小野先生は何も悪くないわよ、うん」
　永原先生が、自分の中の歪んだコンプレックスについて自白する。
　小野先生、ある意味で脅されて操り人形にされるより辛いよねこれ？
「昔はほら……他の先生とかは体罰してたし……私は腕力弱いからし

なかったけど……あはは……」
永原先生、体育の授業で結構強かったよね。
でも確かに、永原先生の性格的にも難しかったのかもしれないわ。
まあ、深く追求しないことにしよう。多分深く知っちゃったら、あたしも何かまずい気がするし。
「さ、ともかく、天文部をはじめましょう」
部長さんの声で、あたしたちはこの話題から強引な逃避を測った。
そして、永原先生は、学生生活の思い出いっぱいに、最後の学園生活を楽しんだ。
「じゃあ私、職員室に戻るわね。来週からまた、先生になって戻ってくるわ」
「うん」
部活が終わり、永原先生が一足先に帰る。
そう、「職員室に戻る」、永原先生のこのセリフによって、この生活が終わったことを意味したのだった。
来週は、卒業に向けてのラストスパートに入る。卒業式までもう、10日もない。
あたしも浩介くんを呼び、結婚式の準備と並行して進めることになった。
忙しい1周間が、始まるわね。

## 2つのリハーサル

「優子ー！　結婚式場に行くわよ！」
「はーい！」
あたしは、母さんたちと過ごす、石山優子としての最後の土曜日を、結婚式の準備で潰すことになった。
「母さん、今日はドレスの合わせ？」
「うん、浩介くんの家とは現地で合流するわよ」
浩介くんも、新郎用の服の試着がある。
母さんの案内で、あたしは結婚式場についた。
「け、結構広いわね……」
２回目に訪れる結婚式場、あたしにとってはとても大きい建物で、この中に結婚式ができる宴会場があるという。
あたしはホテルのフロントの人に事情を説明すると、「お待ちしておりました」との声で案内された。
「あ、優子ちゃん」
「こんにちは浩介くん」
浩介くんの方も母さんがいた。
ちなみに、あたしの方でも浩介くんの方も招待客を募ったが、大半が小谷学園の関係者になりそうだった。
また、永原先生と校長先生の計らいで、卒業式当日にも、ある程度飛び入り参加を認め、宣伝も行うことになった。
ちなみに、そのためにあたしは卒業生の代表として、スピーチをしないといけなくなった。
例年、生徒会長が務めるのが慣例になっているんだけど、今年は例外的に、あたしが卒業生の代表になった。
小谷学園の３年間、女の子として過ごした時間が長いけど、それでも男としても１年以上過ごしている。
生徒がＴＳ病になったのは小谷学園では初めてのこと。
というよりも、永原先生もＴＳ病だというのも、今でこそ学校中どころか学校外でも有名なことだけど、最初は校長先生くらいしか知っ

ている人はいなかった。
「さ、石山様、こちらへどうぞ」
「はい……じゃあ浩介くんまたね」
あたしは母さんと一緒に小さな部屋に移動した。
そこには、様々なサイズのウェディングドレスがあった。
「こちらが、石山様のウェディングドレスの候補になります」
特別サイズのウェディングドレスがたくさんある。
この中から、あたしは一つを選んで購入することになっている。
「はい」
こうなったのは、以前式場に初めて訪れた時にこんなことが起きたから。

「失礼ですが、サイズを図らせてもらいます」
「はい」
計測してくれる女性の人は、あたしの胸にものすごく驚いていた。
おそらく、こんなに大きい人は極めて珍しいんだと思う。
「その様子ですと、中に詰め物とかしていないみたいですね」
「ええ」
巻き尺を持って、さっと素早くあたしの胸囲を計測した。
知っていたけど、あたしの数字は3桁の数字を超えている。
計測の人は渋い顔をしていた。
続いて、ウエストとヒップも計測した。
その様子からも、サイズがないことは明らかだった。
「申し訳ないんですけど、大きすぎてその……」
「サイズがないんですよね」
あたしがニッコリ笑って言った。
胸が大きいからこそ、こういうことが起こり得る。
お尻も大きいけど、デブというわけではないので、ウェディングドレスを大きいサイズに合わせると、とんでもなく不格好になってしまった。
「うーん、これじゃあダメよねえ……」

母さんが唸っている。
「そうねえ」
スタッフさんも同意の声を漏らす。
まあ、最初から予想していたことだから、あたしは特にショックではないけれども。
「それじゃあ、オーダーメイドにしますね」
「はい」

こうして予想通り、あたしのウエディングドレスはオーダーメイドになった。
オーダーメイドで買うということになったので、結婚式が終わったらこのドレスのままホテルの部屋に入ってもいいということ。
オーダーメイドと言っても、既存のサイズのものを組み合わせた特殊サイズのものがあって、それを取り寄せるので時間はかからないとのことで、こうして式の当日には間に合うようになっていた。
「オーダーメイドも考慮して、浩介くんを興奮させるようなかわいらしいドレスにしないといけないわね」
かわいさとエロさ、この両立は水着の時も課題だった。
ウエディングドレス、あの日だけ見せる晴れ舞台の衣装、絶対に失敗する訳にはいかない。
まあ、その辺はよくわからないわね。
「では、まずはこちらはどうですか？」
まずスタッフさんが見せてくれたのは、落ち着いた感じの衣装。
「うーん……」
いまいちピンとこないわね。
「胸を小さく見せる効果がありますよ。どうですか？」
「あー、そういうのはいいわ」
それを聞いて、あたしは試着前に断る。
理由は簡単で、「胸を小さく見せる」という行為は、女としてのプライドが許さなかったから。
それに、胸を小さく見せちゃうのは、浩介くんを失望させちゃうの

も、あたしはよく分かっていた。
そう言うところは、ＴＳ病というのは便利よね。
こんな風に言ってくるのは、今まで胸の大きい女性から需要があったという意味でもあるから。
「あー、ではこちらはどうですか？」
「おっ！」
今度は大胆に肩を露出したドレスで、胸元も強調されている。
これ、谷間とかで浩介くんを悩殺できそうだわ。
「うん、これを着てみるわね」
「分かりました」
あたしは早速、ウェディングドレスを一着試着してみる。
「下着の方も重要ですからね」
「あ、うん……」
体型の見せ方でも下着は変わってくる。
ブラジャーなんかも、色々付けてみてあたしはそれを思い知らされている。
ともあれ、試着終了。
うん、かわいいわね。
「ふう、これいいわね」
水着と同じく、１８歳の女の子らしく、時折あどけなさを残しつつ、エロさとかわいさを前面に押し出した絶妙のドレスだと思う。
「石山様は、もう少し大人っぽく見せてはどうでしょう？」
あたしの顔はかわいいんだけど、童顔なのも事実なので、こういう言葉が飛び交うのは当然だった。
「うーん、あたしは幼いものに抵抗感はないわねえ」
それに対する答えも、既に決まっている。
あたしは別に、幼く見えることに抵抗感はない。
いやむしろ、あたしのコンプレックスのこともあって、「幼く見せたい」と思うことさえ多い。
「そうですか……ではこれは？」
「うーん……一応着てみます」

こうして、試着を繰り返したものの、最初に着たもの以上にしっくり来るものはなかった。
「では、これでいいですか？」
「はい、お願いします」
「分かりました。では料金ですが――」
結構な値段が飛び交うけど、蓬莱教授の「予算対策」もあるから、気にしないでおこう。
何だろう、女の子になってからこういう図太い感情も出てきた気がするわね。
今まで気付かないくらいだったけど。
ともあれ、あたしたちは、結婚式場を後にする。
卒業式は前日にリハーサルがあるけど、あたしと浩介くんの場合は、その後に結婚式のリハーサルまで行わなくてはいけない。
ちなみに、あの後浩介くんには何度も「ウェディングドレスを見せて欲しい」と言ってきたけど、あたしは絶対に首を縦には振らなかった。
結婚式当日まで、待っててもらうことにした。

日曜日、あたしと浩介くん、そして両家の両親が集まり、婚姻届を入念に記入した。
結婚式の日と婚姻届の日を同じにするために、区役所の人に入念にチェックしてもらった。
「優子が家でのんびり休むのも、今日が最後ね」
「ええ」
最近ではもう「最後の」というフレーズが聞き飽きた。
名残惜しさを感じると同時に、結婚が近いという意味でもある。
あたしの左手薬指にかけられた婚約指輪が、日に日に重くなっていく。

そして今は、「最後の体育」に勤しんでいる。
最後の着替えは、みんなふざけ合わないで、いつもよりもずっと静

かな女子更衣室だった。
前回より続いた体力テストもこれでおしまい。
最終的に体育の成績がこれで決まるけど、体育の先生によれば「石山は大丈夫」とのことだった。
もちろん、壊滅的な運動神経は治っていない。
今後大学に進んだら、ますます体力は落ちていくかもしれない。
一方で、浩介くんの伸びは凄まじかった。
ほぼ全ての体力テストで優一時代を上回っていたし、優一が得意だった２０メートルシャトルランの記録も、浩介くんは塗り替えてしまった。
しかも、２００回まであと少しという、とんでもない記録だった。
あたしは体力テストのほぼ全ての項目で最下位だった。
唯一、柔軟性を図る「前屈」だけは平均的な成績だったけど。
「優子ちゃん、お疲れ様」
「うん」
全ての体育の授業が終わった。
「えーみなさん、体育の授業もこれでおしまいです。私の体育の授業が、皆さんの今後の役にたてれば幸いです。成績は追って連絡しますので、報告を待ってください」
体育の成績だけは、細かい成績が後で決まる。
一方で、他教科は既に成績が決まっていて、通知表は体育の成績ができた翌日に渡されることになっている。
この時期、学校は大忙しになる。
そしてあたしの方は、結婚の手続き準備も概ね完了し、後は前日のリハーサルと、当日の式を待つだけになった。
なるべく平常心は持っているけど、やはり寂しくなる。
桂子ちゃんは正式に佐和山大学に決定したし、クラスメイトも全員と離ればなれになるわけではないと言うのは分かるんだけど。
「ねえ優子ちゃん」
「ん？」

卒業式前日の金曜日、あたしは桂子ちゃんに声をかけられた。
「優子ちゃん、明日結婚するんでしょ？」
「うん」
「今日はね、私と一緒に帰ってほしいの。篠原とはさ、同じ家に住むんだし、ね」
桂子ちゃんのお願い。
「ええ分かったわ」
あたしも快諾する。
何だかんだで、家族以外で一番付き合いが長いのは桂子ちゃんだから。
浩介くんも、そのことは分かってくれた。結果的に昨日が、「浩介くんと恋人として一緒に帰った日」になっちゃったけど、代わりに「桂子ちゃんと帰る最後の日」になった。
ちなみに今日は「最後の学食」でもあった。
ちなみに、結婚式のことは学校中が知っていて、あのセンセーショナルなプロポーズもあって、結婚式への参加希望者はかなり多い。
結婚式の日が近付くに連れ、あたしと浩介くんは全校の注目の的だった。
時が1分、1秒と流れるごとに、あたしの中で、「ああ、もうすぐあたしは浩介くんのものになっちゃうんだな」と思ってしまう。
全女の子が憧れる素敵な男性との結婚、少女漫画の多くが、そんな結末だった。

「優子ちゃん、結婚おめでとう」
帰り道、桂子ちゃんが祝福した風に言う。
「あはは、そのセリフは明日に取っておいてよ」
あたしが笑いながら話す。
浩介くんとの2人乗時間とは違う、静かな雰囲気が流れる。
「あ、うん、そうだったわね。私、今でも信じられないわ。あの乱暴者だった優一が、こんなにかわいい女の子になって……私達の中で一番乗りだもんね」

桂子ちゃんがそんなことを話す。
「うん、お金のこととか不安だったから、大学卒業後にしようと思ったんだけど、親が許してくれなかったのよね」
「普通逆よねえ、まだ１０代なのに親の方が結婚を急かすって」
桂子ちゃんが笑いながら言う。
何度も出た話題だけど、それでも出てしまうのはそれだけインパクトが強いから。
「まあ、でもその代わり結婚式のお金とかは面倒見てくれるみたいよ」
「うん、そこは羨ましいわ」
桂子ちゃんがちょっとだけ羨ましそうな顔をする。
そして、駅に着く。
あたしは明日大きな転換期を迎えるけど、鉄道はいつもどおり動いている。
鉄道、運転しているのは運転士さんだけど、まるで機械みたいね。
永原先生も行っていた。
こうなったのは明治の鉄道人「結城弘毅」の功績だって。
何気ない日常さえ、今のあたしには貴重に思えてくる。
どうしてだろう、そんな訳はないのに、ある日突然世界が崩れてしまう気がする。
多分、蓬莱教授なら「そういうのは結婚前よくあることだ」と笑い飛ばしてくれるだろう。
「優子ちゃん、それでね」
「うんうん」
「龍香も、結婚を早めようかって考えてるんだって」
「へえー龍香ちゃんもなの」
龍香ちゃんも、紆余曲折あって結局佐和山大学になった。
学部は文系で、会う機会は少なそうだけど。
ちなみに、浩介くんから聞いた話では、高月くんは父親と同じく、医学系の大学に行くことになった。
ああ見えて、猛勉強をしていたみたいで、高月くん曰く「モテるためには金なんだよ。俺は篠原みてえにかっこいいわけじゃねえし、性

格だって悪いしエロい。だからこそ、金で勝負するしかない」と言っていた。
　正直、あたしも女の子になってちょっとだけお金にがめつくなっちゃってたし、高月くんの言い分に反論はできない。
「ええ、龍香、優子ちゃんが結婚するって話を彼氏さんにして、いつの間にか2人で盛り上がっちゃったみたいで」
「あー、もしかして」
「龍香、彼氏とは絶対別れないってさ。『初めてできた人だから、尽くしたい』なんて言ったらしくてね。でも、彼氏さん、それを聞いて普段からは考えられないくらいすごい真剣な表情になったんだって」
「へー」
　ああ見えて、龍香ちゃんの彼氏はしっかりしているのかもしれない。
　エロい男だからこそ、彼女を手放したくないのかもしれないわね。
「龍香の彼氏って、モテなかったんだって」
「あーなるほどね」
　あたしには気持ちが分かる。
　モテない男ほど、彼女ができた時に尽くすタイプになる。
　もちろん付き合いたては喧嘩とかもあったけど、一旦はまり込んじゃえば、後はひたすらバカップルの道に進むのだろう。
「次は――」
「あ、優子ちゃん降りるわよ」
「うん」
　あたしは駅の改札口を降りる。
　明日は卒業式後、区役所に行って、そこから結婚式場だから、あたしは「石山優子」としてこの駅を降りるのは最後になる。
「卒業したらどうなるのかなあ？」
「私、佐和山大学は天文サークルに入るわ。なければ私が作っちゃうわ」
　桂子ちゃんが楽しそうに言う。
「うん、あたしも入っていい？」

「もちろんよ」
大学生活は、どうやら高校とそこまで変わらない気がするわ。
ただ、あたしの呼ばれ方は変わると思う。
佐和山大学へは、「石山優子」ではなく「篠原優子」として通うことになるのだから。
桂子ちゃんとの楽しい時間が終わってしまう。
あの分かれ道にたどり着きたくないと思っても、歩いている以上、いつかはたどり着くもの。
「それじゃあ桂子ちゃん……」
「あ、待って！」
桂子ちゃんがあたしを止める。
「え？」
「今日だけ、私の家に寄ってってくれる？　篠原の家、逆方向だから、こうしてこの道を歩くのはしばらくできなくなるし」
「う、うん……」
あたしは、桂子ちゃんについていく。
母さんには「桂子ちゃんの家に行くから遅くなる」とだけ伝えておく。
「この道、久しぶりだわ」
ほんの身近な場所なのに、来たのは久しぶりだった。
桂子ちゃんは、毎日のようにここを通っているのに。
「そうね、優子ちゃんが最後にここに来たのは……小学校の頃だったかしら？」
「そうかもしれない」
やがて、桂子ちゃんの家が見えてきた。
もう何年も来てないけど、未だにはっきり覚えている桂子ちゃんの家。
「ただいまー！　入って」
「うん……お邪魔します！」
桂子ちゃんが「ただいま」をし、あたしが「お邪魔します」をする。
家には桂子ちゃんのお母さんも居て、「明日の結婚式、行くわよ」と

言われた。
「入って」
「うん」
そして桂子ちゃんの部屋に入れてもらう。
あたしがここに入ったのは、やはり小学生の時以来だった。
「懐かしいわね。ここも」
「うん……」
桂子ちゃんの部屋はあたしよりも女の子らしい部屋だった。
飾り物も多く、色使いも落ち着いていて、とっても悔しいわ。
「ねえ優子ちゃん、明日に向けてなにかある？」
「うん、とても緊張しているわ。でも、憧れがもうすぐ現実になるとも思えるわ」
あたしは正直な気持ちを話す。
「そう……ふう……」
桂子ちゃんは古いアルバムに視線を移した。
多分、流れだと思う。
「桂子ちゃん、このアルバム……」
「うん、見ていこうか」
桂子ちゃんの小学校時代のアルバム、そこには、小さい頃の優一も何枚か写っていた。
「同じ人、なのよね」
桂子ちゃんがしみじみという。
「異性が同性に、なっちゃったわね」
「ねえ優子ちゃん……」
桂子ちゃんがちょっとだけ真剣そうな表情をする。
「ん？」
「私ね、今でも優子ちゃんが優一のままだったらって考えることあるのよ」
「え!?　でもそれって、嫌な卒業式になったと思うけど――」
「あのね、私……ちょっとだけ、優一のこと好きだったかも。もしかしたら、明日の結婚式、本当は私と優一の結婚式だったんじゃないかっ

て」
桂子ちゃんがとんでもないことを言う。
そ、そんなはずは無いわ。だって、あたしが倒れたその日だって、単なる話し相手という感じで決して恋愛感情なんてまったくなかったのに
「あ、あの桂子ちゃん……それって――」
「失ってみて、初めて分かる恋心ってものなのかもね」
桂子ちゃんが寂しそうな表情で言う。
「う……」
あたしの中で、ちょっとだけ優一への未練が湧く。
あー、あたし、まだやっぱり、本心では悩んでて――
「なーんてね！　う・そ・！」
桂子ちゃんが舌を出して笑いながらあっかんべーをする。
あたしは桂子ちゃんの演技にまんまと騙されていた。
「ええ!?」
「もー、優子ちゃんやっぱりまだまだだわ。この程度の演技も見破れないんだもの」
「うー！　悔しいわ！」
やっぱり、桂子ちゃんには敵わないわ。
でも、まだあたしの中に、「男」が残っていたことも分かった。
「でも、優子ちゃんのそういうところもかわいいのよ。いい？　旦那さんの前では、『女の裏の顔』は絶対に見せちゃダメよ。優子ちゃん、そういうのも使いこなし始めたからね。そういうのは使いこなし始めが危険なのよ」
「うん、分かってるわ」
桂子ちゃんなりの、アドバイスだった。
あたしはぼんやりと思う。
「明日、あたしの中に残っていた「男」もなくなるんじゃないか？」と。
あたしは桂子ちゃんと小学校時代に遊んだゲームを引っ張り出して、一緒に楽しんだ。

そして、あたしは自分の家に戻った。
「ただいまー」
「おかえり優子、ご飯できているわよ」
「うん」
あたしは母さんと父さんとともに、「最後の晩餐」を楽しんだ。
「ねえ優子、この料理、覚えている？」
「え？」
いつも通りの夕食だと思うけど。
「この料理はね、優子が初めて一人で家事をした日に出した夕食なのよ」
覚えていないわよそんなの。
「そ、そう……」
「明日、頑張りなさい。母さんたちも、娘の巣立ちを見届けるわ」
「うん」
あたしはご飯を食べ終わり、「最後のお風呂」へと足を踏み出していった。

# 石山優子最後の時

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーっ！」

無機質でけたたましい目覚まし時計の音を聞き、重い瞼を開ける。

「っ！」

目に飛び込んできた目覚まし時計を止める。

今日は卒業式、そして結婚式の日。

この目覚まし時計をはじめ、この部屋にあるものは全て新婚旅行中に浩介くんの家に運ばれ、ここは空き部屋になる。

普段は物置になるけど、あたしたちが「帰省」した時のために、布団も置いておくらしい。

ベッドから起きて、ハート型のクッションに立つ。

この部屋のレイアウトもこれが最後、でもお人形さんを始め幾つかはない。

何故ならこれは式場に持っていくから。そして婚約指輪も、結婚指輪に改造してもらうために昨日の夜から預けてある。

「指輪がない……」

あたしはそうつぶやく。

いつもつけている指輪の無い生活が、こんなに寂しいとは思わなかった。指輪の中に浩介くんが居る気さえしていた。

石山優子として最後に着たワンピースタイプのパジャマを脱ぎ、あたしは下着を脱いだ。

この家でまっぱになるのもこれが最後と思うと、何だか恥ずかしくなってくる。

「今日のパンツどうしようかしら？」

箪笥からパンツを選ぶ。

あたしは白いパンツに手を当てる。

これ、女の子になって初めて穿いたパンツ……

そして、ブラジャー、一つだけ残っているフロントホックのブラジャー、女の子になって初めて付けたブラジャーだけど、フロント

ホックは前の胸に当たってそれが気になるので、あの時以来一度も使ってなかった。
原点回帰したい気持ちもあったけど、後ろで止める白いブラジャーの方にした。
ウェディングドレスを着る時は、またこの下着も脱がないといけない。
あたしは、制服を着る。
ブラウス、ブレザー、リボン、そしてスカート、財布や携帯電話なども入れて、充電状況をチェックし、そして姿見の前で頭に白いリボンをつける。
ちゃんとしているかどうか、あたしは姿見に移動する。
「うん、ＯＫ」
鏡の中少女、背中まで伸びる、癖毛の一つ無いストレートのロングヘアー。
そしてたわわに実り、道行く人の多くが釘付けになるとってもとっても大きな胸、幼さが色濃く残るかわいらしい童顔はどんな言葉で形容してもしきれないくらいかわいくて美人で……そう、これがあたし、「優子」の姿だった。
かつての男だった面影はもう全く見えない。
あたしは学校指定のカバンを持ち、リビングへと向かう。
「おはよー」
「優子おはよう、いよいよだな」
父さんがいつも通りの様子で声をかけてくる。
まだ、結構早い時間だった。昨日は「早く寝て早く起きなさい」って言われたんだっけ？
「ねえ優子」
「うん？」
遅れて、キッチンから母さんの声がした。
「今日の朝食、優子が作ってくれる？」
「え、うん。分かったわ」
あたしが石山優子として食べる最後の朝食。

この家で食べるのも、石山家の人間としては最後になる。
そんな日の朝食くらい、あたしが作るのもいいだろう。
と言っても、作るのはいつもどおり。
味噌汁の元と具材を切ってお味噌汁を作り、昨日の残りの野菜をサラダにして、炊飯器でお米を炊いてご飯を作って完成。
これらをお盆に乗せて、一人一人に配っていく。
「できたわー」
「「ありがとう」」
このやり取りも、いつもと全く変わらなかった。ただ、しばらく見られないと言うだけで。
「「「いただきます」」」
食事中、父さんと母さんは、あたしに話しかけてこない。
母さんの中でも、あたしの中でも、やっぱり心の中で気持ちの整理をつけないといけない。
「ごちそうさまでした」
父さんが、最初にごちそうさまをする。
「優子のご飯、美味しかったよ」
「うん、ありがとう」
「そうねえ、いつもと同じ作り方のはずなのに、今日は違うわね」
母さんがしみじみと言う。
「やっぱり、雰囲気があるのかな？」
父さんが疑問に言う。
「そうだと思うわ……あたし、ちょっとお花摘みに行ってくるわね」
「はーい、いってらっしゃーい」
母さんに見送られ、あたしはトイレに入る。
何度も何度も入ったこの個室だけど、いざ最後となると名残惜しいわね……って、帰省するから最後じゃないか。
いけないわね、まるで二度とここには来ないみたいな感じになってて。
あたしは前に屈んでベロンとスカートをめくりあげ、パンツを下ろして、脇にスカートを挟んで座る。

「ふうー」
ここも最後まで、いつも通りだった。次に洗面台で歯磨きをする。
歯ブラシも、浩介くんの家に運ばれる。入念に歯を磨き、口を濯ぐ。
「ふう……」
そろそろ時間ね。時間が経つに連れて1秒がどんどん長く感じるわ。
「母さん、行ってくるわね」
「うん、いってらっしゃーい」
あたしは靴を履く。
「すぅーはぁー!」
意味もなく深呼吸し、扉を開け、あたしは一切後ろを振り向かずに駅まで向かった。
次にあの家に行くのは、いつになるんだろう？
って、意外と近いかも。

駅のホームでの胸へと向かう周囲の視線、彼らのほぼ全員は、あたしが今日に結婚することを知らない。
もし知ったら、男性はともかく、女性からはますます羨ましい目で見られるに決まってる。
だって、制服を着た女子高生が、卒業式を迎え、その足で結婚するんだから。
「間もなく、電車が参ります」
電車がいつもどおりに入線する。
あたしが結婚するかどうかと、電車が動くかどうかに、何の関係もなかった。
しかし、通学路は明らかにいつもとは違う緊張の面持ちが流れていた。
何故なら今日は卒業式、去年と一昨年は在校生として卒業式を迎えたが、今年は卒業生として迎えることになっている。
ひとまず、教室集合だということは伝わっていた。
あたしはいつものように扉に手をかける。

「おはよー」
挨拶もいつも通り。
「優子ちゃんおはよう」
今日旦那さんになる浩介くんと、努めていつも通りに挨拶をする。
「お、『篠原優子ちゃん』が来たぞ！」
高月くんが茶化してくる。
大昔呼ばれていた「優一」呼びの悪意はまったくない。
「高月くん、まだあたし、石山優子よ」
「おっとすまん」
「卒業式が終わったら、届けを出すから、その時になったら今みたいに呼んで欲しいわ」
「あ、ああ……」
正直に言うと、「篠原」と呼ばれたのは嬉しかった。
まだ自分は「石山」だけど、それでも、苗字が変われば、浩介くんの旦那さんになったんだって思えるから。

「なあ、お前優子ちゃんの結婚式どうするんだ？」
「どうって、行くに決まってるだろ？」

クラスの話題も、結婚式一色だった。
「優子ちゃん、俺達のクラスは、全員参加みたいだぜ」
浩介くんがそんなことを話してくれる。
「そう、ありがとう……みんな」
「いいってことよ！　卒業式は寂しいけど、一方でめでたいイベントもあれば相殺されるもんな！」
恵美ちゃんが豪快に笑う。
ワイワイガヤガヤと親しそうに話す空間も、もう今日まで。
でもみんな、それを意識はしていない。
卒業式は、３年１組は全員参加だった。
昨日の桂子ちゃんの話を思い出す。多分あたしが優一だったら、こうはならなかったと思う。

そもそも、今年の3年1組が去年の2年2組からそのままスライドしたのだって、あたしが女の子になったことによるものだし。
机の上にある卒業祝いの花を、制服の胸につけるのを忘れないでおく。うーん、あたしがつけるとものすごい目立っちゃうわね。
ガララララ……
「はーい静かに、最後のホームルームを始めるから、気を抜かないでね」
永原先生が最後のホームルームを始める。
「では出席を取りますね……安曇川さん」
「はい」
永原先生がいつも通りに出席を取り始める。
「石山さん」
「はい」
もちろんこれが最後じゃないけど、おそらくもう数えるほどしか呼ばれなくなる「石山さん」という呼ばれ方。
あー、意外にそうじゃないかも。旧姓のまま呼び続ける人っているものね。
そんなことを考えているうちに出席確認も終了する。
「今日はいよいよ卒業式となりました。皆さんとは特別に、2年間を過ごすことになりました。まだ時間がありますので私の合図があるまで、待機してください」
永原先生の言葉とともにあたしたちはざわつきつつも待機する。
あの後、永原先生は協会の宣伝をしていて、クラスメイトの全員が、一般会員やメール会員になってくれた。
あたしは、もちろんここを卒業しても協会の正会員として、永原先生と付き合っていかなければならないから、他の卒業生とはかなり事情が異なる。
でもやっぱり、永原先生はみんなに慕われていて、教師と生徒という関係は今日で終わりでも、協会の会長と会員として、関係を続けていきたいという気持ちがあったのだ。

「はーい、じゃあそろそろ時間よ。みんなついてきてー」
「「はーい!!!」」
クラスメイトたちが元気よく返事して、あたしたちは、在校生や来賓のいる体育館を目指すことになった。
「今年の先導役は私よ。ついてきて」
他のクラスの男女も一緒になり、あたしたちは、静まり返った校舎を進んでいく。
走馬灯のように3年間の思い出が流れていく。
男だった頃の暗い日々、突然倒れて病院に運ばれた日、復学していじめられた日々、救われて女子たちとワイワイした日々、好きな男の子が出来て体が言うことを効かなくて辛かった日々、恋人が出来て毎日の生活が充実した日々、そしてあの日のプロポーズのこと。
そして何より、女子生徒として卒業するなんて、誰も予想していなかったこと。
なんだか今はすべてが愛おしいわ。
最初は話し声も聞こえてきた周囲も、徐々に緊張感からか沈黙するようになった。
そして、永原先生が止まると、あたしたちも止まる。
リハーサル通り、ここで一旦待機し、卒業生入場を待つ。
「えー皆さん、本日は卒業式であります。司会進行役こと校長です。まずは、卒業生入場です。永原先生、お願いします」
遠くから校長先生の声が聞こえ、あたしたちは体育館の中に入る。
大きな拍手と歓声に見送られ、永原先生の先導で、あたしたちは卒業生の席へと座らされた。
「それでは、まずは国歌、校歌の斉唱です。皆様、ご起立ください。」
4組まで全員が座り、しばらくすると校長先生の声が聞こえ、一斉に全員が起立し、国歌、校歌の斉唱が行われた。
これも、以前と同じ。
「ありがとうございます、ご着席ください。えー続きまして、私校長の方から、卒業生の皆様へ向けての挨拶がございます」
校長先生の、短いスピーチが始まった。

「卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。大学に進学する人や就職する人、様々にいらっしゃると思いますが、どうか、これからの皆様の人生にとって、母校の思い出が豊かに彩られることを祈りまして、私のスピーチを終わります。以上！」

パチパチパチパチパチ!!!

そして、卒業生、在校生、来賓を問わず、簡潔なスピーチを心がけた校長先生に激しい歓声と拍手を送っている。

「私のスピーチに続きまして、在校生代表スピーチに入りたいと思います、在校生代表の能登川明美さん、よろしくお願いいたします」

在校生代表の女子生徒が舞台に上がる。

今年のミスコンは桂子ちゃんが優勝したので、２年生の中で一番成績の良かった生徒を引っ張り出してきた。

校長先生が、在校生代表の生徒に壇上を譲る。

「卒業生の皆さん、改めましてご卒業おめでとうございます。私は２年４組の能登川明美です。在校生を代表して、先輩方が残されたこの小谷学園を継ぐために、来年以降も風土と文化、伝統を守って過ごしたいと思います。以上です」

パチパチパチパチパチ!!!

能登川さんに対しても割れんばかりの拍手が舞い踊る。そして次はあたしのスピーチだ。

「では続きまして、卒業生代表スピーチに移りたいと思います。卒業生代表の石山優子さん、よろしくお願いいたします」

「はい」

校長先生に呼ばれ、あたしは席を立ち、壇上へと歩みをすすめる。

リハーサル通りにすればいいとはいえ、とても緊張する。

「卒業生代表の石山優子です。あたしはここで、とても忙しい３年間を過ごしました。あたしは当初男子生徒として入学しましたが、２年生の５月にＴＳ病で女子生徒になりました。当初は男女の違いに、自分も周囲も戸惑うことがありましたが、それを乗り越えて、大学進学も決まり、またこの卒業式の後には、同級生と婚姻届を提出し、夕方６時からは結婚式が開かれます。こうした生活を送れたのも、小谷学

園の環境があってこそでした……あたしの話は以上です」
パチパチパチパチパチ!!!
結婚式のことは、既に学校関係者はみんな知っているので、驚きは少ない。
来賓の方は、かなり驚いていたみたいだったけど。
「では、次に卒業生の皆様の歌が歌われます」
♪～
あたしが席に戻ると、今度は卒業生の歌が歌われ、いよいよ次は卒業証書の授与になる。
「次は、卒業証書の授与に入ります。名前を呼ばれた方はこちらに来てください……安曇川虎姫」
「はい」
1組の虎姫ちゃんから、この長い旅が始まる。
「――石山優子」
「はい」
あいうえお順なので、あたしは比較的すぐに呼ばれた。これは出席の時と同じ。
「卒業証書、石山優子殿、以下同文」
パチパチパチパチパチ！
あたしへの拍手は、やはり一際大きい。結婚祝いもあるのかもしれない。
おそらく、この後卒業祝いの時に「石山先輩」と呼ばれるのが最後になると思う。
あたしは席に戻り、クラスメイトの卒業証書の授与を待つ。
河瀬龍香、木ノ本桂子、志賀さくら、篠原浩介、高月章三郎、田村恵美……
1組の最後の人が終わると、続いて2組、3組、4組と続く。
そして4組の最後の人が終わり、卒業式も終わりになる。
「ふぅー、ただいまを持ちまして、小谷学園卒業生全員の卒業証書授与が終了いたしました。卒業式はこれにて終了となります。以上で解散といたします」

少し疲れた校長先生の声とともに、卒業式が閉幕する。そしてあたしたちも席を立つ。
「浩介くん」
あたしは、浩介くんを探す。
「おう、ここにいるぞ」
愛しの人が、あたしの呼び声にすぐに反応したのですぐに合流し、あたしたちは2人で並んで歩く。
まだお昼前、婚姻届を提出し、昼食を食べて結婚式場に行くまでには十分に時間がある。
「篠原先輩、卒業おめでとうございます。テニス、かっこよかったです」
「おう、ありがとう」
歩いていると、よく分からない2年生の男子が、浩介くんを祝ってくれる。
「石山先輩、卒業おめでとうございます、それから結婚も」
「ええ。天文部をよろしくね」
「はい！」
あたしを呼び止めたのは天文部の部長さんだった。
「石山、おめでとう」
「石山先輩、篠原先輩、卒業、結婚おめでとうございます」
あたしたちへの祝福の声はどこまでも続いていた。
「石山先輩、先輩の結婚式ってどこで何時からでしたっけ？」
「えっとね――」
また、結婚式の場所を再確認してくる人もいて、あたしたちは一件一件丁寧に応じる。
周囲を見ると、恵美ちゃんはテニス部の後輩女子たちに、桂子ちゃんも天文部から卒業を祝福されていた。
それでも、徐々に出口に向かっていく。
クラスメイトとも挨拶するけど、彼らは結婚式でも会うので、そこまで別れの挨拶という感じではない。
「ふふっ、結婚式場で、『石山先輩』はやめてね」

「あ、ああ……まだいいのですか？」
「まあね」
大方の人から祝福を受けたあたしと浩介くんは体育館の出口に進む。
するとそこには、永原先生がいた。
「2人共、卒業と結婚、おめでとう」
「うん、ありがとう永原先生」
先生に対する挨拶も、欠かしてはいけない。
他のクラスの担任の先生も卒業生からの対応に終われている。
「あまり寂しそうじゃないわね？」
「当たり前よ、あたしも浩介くんも、クラスのみんなも、協会の会長としての永原先生と、今後も付き合っていくもの」
「ええそうね、石山さん、篠原君、式場までの道中、気をつけてね」
「分かってるわ。じゃあ、式場でまた会いましょう」
「ええ、楽しみにしているわ」
永原先生と挨拶し、分かれる。
そして、一旦教室に戻り荷物を取り、下駄箱から上履きを脱ぎ鞄の中に入れ、ローファーに履き替える。
あたしの手には、卒業証書の入った筒が掲げられたままだけど、ひったくられたくはないので鞄の中に入れる。
「浩介くん、待った？」
「ああいや、優子ちゃん、ともあれ区役所に行こうか」
「うん」
どうやら、あたしが「石山」と呼ばれるのも、永原先生が最後だったみたいね。
あたしは鞄の中にある婚姻届があるかどうかもう一度確認する。
……うん、ＯＫね。
卒業生や在校生が帰る中、あたしたちも鉄道に乗る。
電車が来て、列車に乗る。
浩介くんとはいつもは逆方向のホームへと行く。
駅で別れるのは昨日までで、帰る家もこれからは同じになる。

途中、あたしの実家の最寄り駅を素通りする。
「何だか新鮮だな」
これまでも何度かあったけど、やっぱり今日は特別。
あたしたちは区役所の最寄り駅に到着し、そのまま区役所に直行した。
「緊張してきたよ」
「うん、あたしも」
ここに来たのは……そう、カリキュラムの時に、名前を変える書類を提出して以来だったと思う。
あの時とは違う課に移動する。
婚姻届の窓口は……ここね。
「浩介くん、これ」
「ああ、分かった」
あたしは浩介くんに婚姻届を託し、役所の人に提出する。
「すみません、婚姻届を提出したいんですけど」
浩介くんはそう言って役所の人に書類を出す。
「分かりました。身分証をお見せください」
「「はい」」
あたしたちはあらかじめ用意しておいた顔写真付きの身分証を提出する。
ちなみに、色々考えた結果、海外旅行するわけでもないのにパスポートになった。
新婚旅行が海外になる可能性も考えて取得したものだけど、結局使わなかった。
「……はいありがとうございます。篠原さん、ご結婚おめでとうございます」
「「はい」」
あたしは、篠原と呼ばれた。
こうして、あたしは浩介くんと結婚し、婚約者から夫婦になった。

# 幕間　ここまでの時系列整理

今回は永原先生の人生と本編での時系列のまとめです。
読まなくても支障はありませんが、章の合間ですので時系列の整理をしてみるのもいいでしょう。

本編前

永正１０年／１５１３年（―）　真田幸綱（真田幸隆）が生まれる
永正１５年／１５１８年（０歳）　鳩原刀根之助が生まれる、この歳は真田幸隆の弟矢沢頼綱も生まれている
大永元年／１５２１年（３歳）　武田信玄が生まれる
天文２年／１５３３年（１５歳）　刀根之助、真田家に伝令役の足軽として奉公するようになる
天文３年／１５３４年（１６歳）　織田信長が生まれる
天文６年／１５３７年（１９歳）　豊臣秀吉が生まれる。またこの歳真田幸隆の長男真田信綱も生まれている
天文７年／１５３８年（２０歳）　刀根之助、畑仕事中に倒れＴＳ病となり不老の女の子へ。この頃には既に両親は死去していたが、殺害を恐れ隣村に逃亡。名を「柳ヶ瀬まつ」と改める。事実上の真田家出奔
天文１０年／１５４１年（２３歳）　信濃進出を図っていた武田信玄の父武田信虎が諏訪頼重・村上義清と同盟し真田家とその本家筋にあたる海野家を攻める海野平の戦いが勃発。真田幸隆は箕輪城主の長野業正のもとに逃亡し、真田の村は村上義清の領地となる。その直後、武田信虎は武田晴信に追放される
天文１１年／１５４２年（２４歳）　徳川家康が生まれる。柳ヶ瀬まつが真田領に帰還、空き家となっていた刀根之助の家に戻る
天文１６年／１５４６年（２８歳）　真田昌幸が生まれる
天文１７年／１５４７年（２９歳）　遅くともこの頃までに真田幸隆は武田家臣となる
天文２０年／１５５０年（３２歳）　真田幸隆が砥石城を攻略し旧領に復帰する、まつ、恐怖心から帰参できず別人を装って過ごす

永禄９年／１５６６年（４８歳）　真田昌幸の長男、真田信之が生まれる

永禄１０年／１５６７年（４９歳）　真田幸隆は真田信綱に家督を譲って隠居する。真田信繁が生まれる

元亀４年／１５７３年（５５歳）　武田信玄病死、武田勝頼が家督を継ぐ

天正２年／１５７４年（５６歳）　砥石城で真田幸隆病死。まつ、自らが不老ではないかと疑い始める

天正３年／１５７５年（５７歳）　長篠の戦いで武田軍は織田徳川連合軍に大敗、真田信綱は弟真田昌輝共々討ち死にし、三男の真田昌幸が家督を継ぐ

天正１０年／１５８２年（６４歳）　織田徳川連合軍が武田征伐を行い、武田勝頼は自害。真田家は独立し、織田信長に臣従するも、織田信長は同年本能寺の変で明智光秀の謀反に遭い自害。明智光秀もまた羽柴秀吉に山崎の戦いで討たれる。まつは村の者にも不老を疑われ始め、命の危険を感じて逃走する。ほどなくして天正壬午の乱で徳川家康が甲斐信濃を平定。そんな中真田昌幸は必死の謀略を駆使し、表裏比興と言われながらも生き残る。この乱の様子をまつは見物している。

天正１８年／１５９０年（７２歳）　関白秀吉が小田原征伐で後北条氏を降伏させ、天下を統一。関東には徳川家康が入った

慶長３年／１５９８年（８０歳）　豊臣秀吉が病死、徳川家康による専横が開始

慶長５年／１６００年（８２歳）　上杉景勝討伐を名目に石田三成と徳川家康との間で関ヶ原の合戦が勃発。真田信之は東軍に付き、真田昌幸と真田信繁は西軍につき分裂。真田昌幸・信繁親子は上田城において後の２代将軍である徳川秀忠の軍を足止めさせ、遅参に追い込んだ。まつ、京の公家と共に関ヶ原の戦いを見物、真田昌幸の援護射撃も虚しく、小早川秀秋の裏切りによって西軍は壊滅し、真田昌幸・信繁親子は本多忠勝や真田信之の助命懇願もあって高野山から次いで九度山へと配流される

慶長８年／１６０３年（８５歳）　徳川家康が江戸幕府を開く。まつ、江戸在住を目指し貯金を開始。
慶長１６年／１６１１年（９３歳）　真田昌幸が配流先で病死
慶長１９年／１６１４年（９６歳）　方広寺鐘銘事件が勃発。徳川家康の諱を犯したとして豊臣方が非難され、これを大義名分に大坂冬の陣が勃発。真田信繁が大坂城に入り真田丸を作る
慶長２０年／１６１５年（９７歳）　大坂夏の陣、裸同然の大坂城に殺到する徳川軍に為す術もなく壊滅。真田信繁が奮戦するも戦死。柳ヶ瀬まつ、江戸へ移り住みここを定住地とする。
寛永７年／１６３０年（１１２歳）　真田幸隆と同い年とされている永田徳本が１１７歳で死去したことにより、以降現在まで「この世で最も長生きの人」となる。男余りの江戸において非常にモテたものの、不老のこともあって拒否し続けていた。
承応２年／１６５３年（１３５歳）　江戸の街でも不老の噂が流れ、再逃亡を考えていた矢先、当時の４代将軍徳川家綱により江戸城に呼び出される。真田信之がまだ存命であったため、事情を話し、かつて真田に仕えていた鳩原刀根之助と同一人物であると示す。出奔者のまつを許し、「よく戻ってきた」と労うと、感極まって大泣きしてしまう。家老の叱責に対しても徳川家綱が「よい、泣かせてやれ」と言ったため、お咎めなしとなった。その後、徳川家綱もまた労いの言葉を投げかけ「今日は存分に泣け」と言われ、江戸城の一室で泣き続けた。翌日、この二人に恋心を感じてしまい、これが現在まで永原先生を苦しめている
明暦３年／１６５７年（１３９歳）　明暦の大火、江戸城も天守閣などが焼失するが、徳川家綱に誘導され難を逃れる。眼下に広がる大火により、逃げ遅れた人々が次々火に飲み込まれるのを見る。命の危険を感じた最後の時。
万治元年／１６５８年（１４０歳）　真田信之が９２歳で死去
延宝８年／１６８０年（１６２歳）　徳川家綱が３９歳で死去、まつ、初恋の秘密を隠し通す。弟の徳川綱吉が後継者となった。
元禄１２年／１７００年頃（１８２歳頃）　まつ、町娘の服を着てい

たため、江戸城で陰口を叩かれ続けていたのを、吉良義央の進言を受けたと徳川綱吉のとりなしによって止めてもらう。以降も吉良には上方の作法を教わったり、江戸城に相応しい服を与えられるなどし、深い恩義を感じるようになる。また同時期には、水戸黄門こと徳川光圀から、大日本史のためにいくつかの証言を依頼された。

元禄１４年／１７０１年（１８３歳）　朝廷の勅使を迎える宮中行事の最中、江戸城内で吉良義央が浅野長矩から突如刀傷を受ける。吉良側は江戸城で手当てを受け命に別状はなく、浅野長矩の「恨み」に対しても「身に覚えがない。乱心したとしか思えない」と発言、これは、乱心ならば罪が軽くなるための配慮だったが、浅野長矩はそれをもふいにし、朝廷との大事な儀式を台無しにされた徳川綱吉は、永原先生が「今でもあの時の形相は忘れられない」と称するほどに激怒し、浅野長矩に即日切腹と改易を命じ、一方で吉良側には「刀を抜いておらず無抵抗なのはよく堪忍し、殊勝だった」として、おとがめなしだった

元禄１５年／１７０２年（１８４歳）　前年の措置を不服とした大石良雄率いる４７人の「赤穂浪人」が吉良邸を襲撃、結果的に吉良義央は討ち死にし、首級は浅野の墓の前に添えられた。世論が一気に浅野側に傾き、徳川綱吉は吉良家の取りつぶしと赤穂浪士全員切腹のいわゆる「喧嘩両成敗」を決断。まつはこれに猛反対し、「喧嘩両成敗は戦乱の世のごとし、かような取り決めは上様御自身がお定めになった生類憐みの令にも反する」と進言した。これに対して徳川綱吉は「柳ヶ瀬殿の申されること誠にごもっともであるが、いかに天下の将軍とは言え、世論に逆らうことはできない」として、最終的には却下されてしまう。永原先生はこの対応に理解しつつも、浅野長矩と赤穂浪士に対する強い憎悪が募り、吉良家に対しては、「恩義を何も返せなかった」という後悔の念が募り、「上野介殿は私を恨んでいるに違いない」と思い込むに至ってしまっている

この間江戸城で比較的平穏無事に過ごす。歴代将軍に戦話などを聞かせつつも、江戸の街も比較的自由に歩けたようである。

現在の価値で数百円程の値段で買った浮世絵を多数所持し、また銭

湯にもよく入り、混浴故にしょっちゅう痴漢されていたが、当時は「魅力的な女性の証拠」として、そこまで気にしていなかった

天保３年／１８３３年（３１５歳）　後に地球上で２番目に年上となる余呉さんが農村で生まれる

天保１１年／１８４０年（３２２歳）　地球上で３盤目に年上で、後に協会の副会長でもある「比良道子」となる男性が水戸藩で生まれる。ＴＳ病になるまでは尊王攘夷運動に参加

慶応４年／１８６８年（３５０歳）　戊辰戦争により再び諸国流浪。自らに関する記録を持ち出した後、数個の偽名を使い分けて生活する

明治１５年／１８８２年（３６４歳）　全国に鉄道が張り巡らされるという情報を入手、逃走は難しいと判断し教師の職業を始める。また、逃亡先の鶴見で１号機関車を目撃し、その走りに衝撃を受ける。以降、鉄道の魅力にとりつかれるようになる。

明治２７年／１８９４年（３７６歳）　日清戦争が始まる。この頃、ＴＳ病は迷信で殺されることはなくなり、大手を振って活動できるようになる

大正元年／１９１２年（３９４歳）　偽名などを整理し、名前を北小松貴子と改める

大正６年／１９１７年（３９９歳）　ＴＳ病患者の人口も増え始めたため、日本性転換症候群協会が設立される。「長老」であった貴子が会長に、また武士身分であったことや余呉さんの当時の教育水準から、副会長は比良道子が務める。以降現在までこの体制は変わらず

大正１２年／１９２３年（４０５歳）　関東大震災、山口に赴任しており難を逃れる

昭和２０年／１９４５年（４２７歳）　戦争による空襲が激しくなり、女学校生とともに地方に疎開、いざという時は単独で山に逃れる手立ても考えていたが、結局爆撃などは来なかった。なお、永原先生自身は「久々の大戦争に血沸き肉躍る思いだった」としているものの、命惜しさの逃亡計画は「まだ真田家と吉良家に恩返しできてないと焦るあまり、よりにもよって最も裏切ってはならない天皇陛下を裏切る行為」だと考えており、後年には「私は最低の女」と思うに至ってし

まっている
昭和４０年代／１９６５―１９７５年（４４７―４５７歳）当時小学生だった小谷学園の校長先生を教える。永原先生は覚えておらず
昭和４５年／１９７０年（４５２歳）大阪万博で永原先生が新幹線に乗車、その感動は鉄道開業時に匹敵した
昭和５１年／１９７６年（４５８歳）小野先生の学校で当時小学６年生だった小野先生の担任として務める。悪ガキだった小野先生に手を焼く
昭和６２年／１９８７年（４６９歳）大正より使っていた北小松貴子の名前を改め、永原マキノと名乗るようになる。ＴＳ病患者の改名は珍しくなかったが、この頃には珍しくなっており、最後の改名である
平成１２年／２０００年（４８２歳）石山優一、木ノ本桂子といった主要人物が生まれた年
平成２９年／２０１７年（４９９歳）本編開始
本編
２０１７年
５月８日　石山優一が倒れる
５月９日　石山優一、ＴＳ病で黒髪ロングの爆乳美少女になってしまったことに気付く。男女の違いに戸惑いつつ最終的に優子と名前を変えて女の子として行きていくことを決意
５月１０日　優子、自身の決意を両親と永原先生に伝える
５月１１日　カリキュラム１日目
５月１２日　カリキュラム２日目
５月１３日　カリキュラム３日目
５月１４日　カリキュラム４日目
５月１５日　復学初日
５月１６日　体育の授業で孤独感を感じる、優子の運動能力のなさが露呈
５月１８日　混んだ電車でスカートの上から痴漢される

５月２０日　はじめてハイヒールを履いて外出
５月２２日　初めての生理、永原先生に決意を伝える
５月２３日　木ノ本桂子、田村恵美が生理に伴う優子の決意を永原先生から聞く。女の子扱いしきれてなかった田村恵美は自らの行いを激しく後悔する
５月２４日　田村恵美の謝罪、優子に関しては両グループで協力関係ができ始める
５月２６日　男子扱いのいじめに耐え切れず、優子が大泣きしてしまう。木ノ本と田村のかばいもあって高月と篠原がしぶしぶ矛を収める。女子から受け入れられて、体育を一緒に着替えることになった
５月２８日　優子が木ノ本桂子、河瀬龍香とともに休日を楽しむ
５月２９日　いじめに加担してなかった男子も含め、男子たちから謝罪を受ける。木ノ本桂子に天文部に誘われ、坂田舞子とも出会う
６月　梅雨。２回目の生理。誕生日プレゼントも貰う。球技大会に向けての体育の授業。着替えの方針を変えない小野先生に永原先生が脅迫じみたことを行う
６月末　球技大会
７月上旬　林間学校の実行委員に優子と篠原浩介が選ばれる。プールの授業。最後まで優子の女子扱いに抵抗した教頭先生を蓬莱教授の手も借りて撃退
７月１９日　林間学校１日目
７月２０日　林間学校２日目、登山で無意識に篠原浩介に思いを寄せ始める
７月２１日　林間学校３日目
７月２２日　林間学校４日目、優子が自分を守ってくれた篠原浩介と恋に落ちる。家に帰ってお人形さん遊び
夏休み　体育の補講、木ノ本桂子、田村恵美、志賀さくらを連れての女子お泊り会。優子の部屋がより女の子らしい部屋に模様替えされる。優子、女の子として幼い頃の自分が無いことにコンプレックスを抱き始める。海と夏祭り、海では心も体も女の子なのに、本能として男が残っていることに嫌気が差す。篠原と友達として公園と水族

館でデート
９月１日　夏休み明けの初日で生理
９月末　期末試験
１０月　文化祭の準備、ミスコン出場
１０月２８日　文化祭１日目
１０月２９日　文化祭２日目、後夜祭で篠原浩介から正式に告白を受け、彼氏彼女の関係に。その後最終試験に合格する
１０月末　恋人としての初デート
１１月１日　永原先生から、日本性転換症候群協会の正会員に推薦される
１１月４日　協会本部を訪れ、入会手続きをする
１１月　会合に参加し、受け入れられると共に「みんなの模範」「救世主」と言われる。後輩の患者、後の塩津幸子の危機を知りカウンセラーに志願、危機的状況から脱出させた。体育祭、篠原浩介に深く惚れ込む。塩津幸子に女の子の手ほどきを施し、結果的に教材を書き換える。篠原浩介が天文部に。
１２月２４日―２５日　クリスマスデート、後の義両親と初対面。天体観測。電気屋デート、蓬莱教授の記者会見。討論番組。お泊りデート
２０１８年
１月１日　元旦、初詣、永原先生５００歳の誕生日
１月　スキー合宿の準備。蓬莱教授から、研究成功のための佐和山大学への進学要請と受諾。
２月　永原先生が優子によって吉良の呪縛から解放される。永原先生は優子にさらなる恩を感じる。スキー合宿、家族風呂で一緒にお風呂に入る。子供たちと永原先生と一緒の初心者プログラム。優子、更に篠原浩介に惚れ込む
２月１４日　バレンタインデー、イチャイチャ
３月　期末試験。卒業式、坂田舞子卒業
春休み　篠原浩介と遊園地デート、最後の観覧車でプロポーズ同然の言葉を交わす、恋人から婚約者に

４月　始業式。去年と同じクラスになる。受験ムードに疎外感。天文部の新入生。マスコミの取材

ゴールデンウィーク　篠原浩介の家で、２拍３日の花嫁修業

５月１０日　優子の女の子１周年記念パーティ

６月末まで　篠原浩介、田村恵美とのテニス対決のためテニス部へ一時出向

６月末　球技大会、篠原浩介が田村恵美に５セットマッチで勝利

７月上旬　篠原浩介に対するスポーツアカデミースカウト騒動。修学旅行準備

７月中旬　修学旅行。女子校カルチャーショック。夜の京都巡り、永原先生たちと京都鉄道博物館。新しいＴＳ病患者と面会。篠原浩介と大阪・神戸巡り。京都の寺社仏閣巡り

夏休み　佐和山大学のＡＯ入試、蓬莱教授の演説。プールデートと両家合同のキャンプ場デート

９月　メディア対策や新患者の対応学校生活などでやや多忙に

１０月末　文化祭。最後の後夜祭で、篠原浩介から全校生徒が見ている目の前で正式にプロポーズされる。婚約指輪をはめるようになる

１１月　新患者の女子更衣室を巡って患者の通う学校と争う。最後の体育祭

１２月２４日　クリスマスイブのデート。模型屋デート、おもちゃ屋デート。帰省の練習

１２月２５日　クリスマスを篠原浩介と一緒に優子の家で過ごす

２０１９年

１月１日　元旦、木ノ本桂子、木ノ本母、優子、優子母、篠原浩介、浩介母の６人で行う。５０１歳になった永原先生とも出会う

２月１４日　生理のバレンタインデー

２月２５日　永原先生が２週間限定で生徒になる

２月ー３月　結婚準備

３月１５日　結婚式、卒業式リハーサル

３月１６日　石山優子最後の日、卒業式が終わり、婚姻届を提出

# 第八章　新婚
## 時間つぶし

「ふう……」
区役所を出る。婚姻届が受理され、あたしはとうとう「篠原優子」になった。
今はまだしないけど、携帯電話とかその他色々な名義を変えなくてはいけない。
でも、全く苦痛じゃない。
浩介くんと一緒になれたことの嬉しさのほうが、ずっとずっと大きいから。
あたしは、数時間後に訪れる結婚式が楽しみだ。
もちろん、呼ばれ方が変わることも。
「優子ちゃん」
「ん？」
浩介くんの呼び方は今までと同じ。
結婚したからって、何もかもが劇的に変わるわけじゃない。
「俺、何かまだ自覚が沸かないや」
「あたしも」
浩介くんもやっぱり、まだ結婚の自覚はあまりないみたいね。
「結婚式に行けば、違うのかな？」
「うん、多分ね」
「さて、どうしよう？」
結婚式まではまだかなり時間があるけど、準備なんかもあるから、相当な余裕を持って会場に行かないといけない。
「ご飯、食べるか」
「何食べる？」
一旦それぞれの家に戻ることも考えたけど、今朝あそこまで大見栄切って出ちゃった以上、戻る気はしなかった。

デパートの、いつものラーメン屋さんではなく、イタリア料理店に入った。
かなり高級なお店で、あたしたちが入るのは初めてだった。
「今日ぐらい、な」
「うん」
お金は、蓬莱教授からの支援金がまたじゃぶじゃぶと入った。
若いうちからこれだと金銭感覚が狂いそうになっちゃうけど、蓬莱教授も蓬莱教授で金を使わせなければならない事情がある。仕方のないことだと思う。
「どれにしよう？」
「イタリアン・ピザにしようかな？」
日本のピザではなく、イタリアにあるイタリア料理店で修行した料理長が作る、「本格ピザ」という看板になっている。
結婚して初めて食べる料理はイタリアンになった。かなりの高いものだし、新しい船出にはちょうどいいわね。
「ああ、俺もそれでいいかな」
「じゃあ、呼ぶね、すいませーん！」
「はーい！」
あたしは、ウェイトレスさんを呼び、イタリアン・ピザの2人前を頼んだ。

「浩介くん、式場に入ったらどうしよう？」
「うーん、まずはどのタイミングで花嫁花婿になるかだよなあ」
あたしたちは、結婚してまだ1時間も経っていないできたてホヤホヤの夫婦。
だから、今は式のことばかりで、これからの生活について考えてはいなかった。
「いい雰囲気の店よね」
「ああ、実は俺、ここでプロポーズするのも考えていたんだ」
浩介くんが、そんなことを話してくれる。
確かに、デパート最上階にある高級イタリアンだから、雰囲気は悪

くない。
「うん、それも悪くないと思うわ」
「でもやっぱ、学生には高いし誰か知らない人に聞かれちゃうかなって。で、次に思ったのが学校の屋上、だけど滅多に人は来ないと言っても、誰かに見られると困るなあと思って……そこから発想を逆転させたんだ」
浩介くんは誰かに見られずに2人っきりかつ素敵な場所を模索していく過程で、それが難しいと分かり、「ならばいっそのこと、全校の前でプロポーズしてしまおう」という結論にになったらしい。
「ふふっ、あたし、あの時よりも素敵なプロポーズって思い浮かばないわ」
素直に、あたしも本音で語る。
「俺も。結果的に良かったと思うよ」
もしかしたら、諸刃の剣だったかもしれないけど、浩介くんのプロポーズは大成功だった。
そして、結婚式にも学校のみんなが大勢参加してくれる。
今頃は、学校のみんなも結婚式に向けて緊張しているかもしれないわね。
もしかしたら、あたしたち以上にドキドキしているかも。
「おまたせいたしましたー、イタリアン・ピザ2人前でございます」
「ありがとうございます……優子ちゃん、食べようか」
「うん」
ウェイトレスさんが、2人前のピザを持ってきてくれた。
「いただきます」
結構量も多めで、とりあえず3等分して浩介くんが2、あたしが1の割合で食べることになった。
今ではもう、夫婦関係になって、お互いどれくらい食べられるかと言ったことも、長い付き合いの末に推し量れるようになってきた。
あたしと浩介くんが、ピザを頬張る。
だけどまだ、結婚したという自覚が湧いてこない。
多分、式場に行けば、そういうこともなくなるんだと思う。だって

まだ、今までしてきたようなデートの延長線上でしか無いような気がするし。
「「ごちそうさまでした」」
あたしたちは、ピザを食べ終えると、デパートの休憩所に移動する。
小谷学園の制服だから、少しだけスカートに気を付けて休まないとね。
「ふう、疲れたわ」
「俺も、少し疲れた」
柔らかい椅子に、腰かけて休む。結婚式はまだこれからだけど、卒業式の疲れは取らないといけない。
「……」
あたしは、2年前の5月末のことを思い出す。
龍香ちゃん、桂子ちゃんと一緒にゲームセンターで遊んだ後、昼食をここで食べて、そして映画を見るまで3人ここで休んだ。
あの時は女子に受け入れられたばかりの頃で、浩介くんとはまだわだかまりが残っていた。
でも今は、浩介くんは旦那さんになって、あたしの隣にいる。
果てしなく長く感じた2年間だった。
あたしは、この2年間で何もかもが変わった。でも、まだ変わり切れていないような気がしてならない。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
不安になって、浩介くんに聞いてみる。
「あたしって、変わったかな？」
「当たり前だろ。性別から性格まで、優子ちゃんは何もかも正反対になったよ」
なでなで……
「んっ……」
浩介くんに、優しく頭を撫でられる。
頭を撫でられるのはとても大好き。
浩介くんに甘えられているという幸福感と、優しくされる癒やし、

そして安心感、頭を撫でられるのって、とっても幸せなことよね。
「浩介くん、ありがとう……」
「もしかして、まだ男に戻るんじゃないかって思ってるか？」
「あはは、そうかもしれないわね。戻るなんてあり得ないのにね」
あたしは、自分に言い聞かせるように言う。
女の子として、好きな男の子と結婚したからこそ、こういう不安がついて回っているんだと思う。
男に戻ることは出来ない、戻ろうとして多くの人が自殺に追い込まれたなんて、女の子になって最初の最初に習うことなのにね。
「ねえ、ちょっといいかな？」
「ん？　何？」
浩介くんが席を立つと、あたしを手招きする。
浩介くんは、デパートの中で死角になっている物陰に移動する。
そしてあたしを、その中に入れる。
「優子ちゃんの制服、もうすぐ見られなくなっちゃうから」
「え、うん……浩介くんが望むなら、着てあげてもいいわよ」
見た目なら、変わらないし。
「あ、ああ……」
ぴらりっ！
「やーん」
浩介くんに、スカートをめくられ、あたしは慌てて裾を抑える。
浩介くんの妻になって、はじめて受けるセクハラはスカートめくりだった。
「もー、浩介くん、結婚してもえっちだね」
「うっ……その、結婚したら、今まで以上にえっちになるぞ」
今まで以上に、つまりこれからは一線を越えるということ。
「ふふっ、今夜期待しているわよ」
あたしはあえて色っぽく言う。
「んっ……!!」
あたしの誘惑するような発言に、浩介くんが固まってしまう。
今夜はそう、あたしの中で一番長い夜になるはずだから。

そのことも、浩介くんは分かっている。
わざわざ疲れて寝ちゃわないように2次会を断ったのも、初夜のためだもんね。
「ふふっ、浩介くん、まだ時間たっぷりあるし……隣のビルに行こうか」
「あ、ああ……」
あたしたちは、隣りにある映画館に行って時間をつぶす。
今の時刻は午後1時前で、結婚式の開始は午後6時。
開場はその30分前、様々な準備などを合わせて午後4時30分には到着したい。
結婚式場前の時間を考えると後2時間30分の余裕があるので、映画館で映画を見ることになった。
「どれがいい？」
「うーん、恋愛映画があるけど……」
浩介くんが恋愛映画を指差す。
男女の困難を乗り越えた感動ストーリーになっている。
「何かそんな気分じゃないのよねー」
「え!?　どうして？」
「だって、あたしたち映画みたいに物凄い困難とかがあったわけじゃ無いでしょ？」
恋愛映画はフィクションだけど、だいたい恋敵や恋路を邪魔する親のような悪役が出てくる。
そう言う大きな障害は、あたしたちにはなかった。
「いやほら、優子ちゃんって元男じゃん、そういう意味では負けてねえと思うぞ」
「うーん、でもそれなら、あたしたちの恋愛はこの映画よりも奇なりじゃないの？」
実際、TS病患者をテーマにした映画そのものが存在しない。それだけ稀な病気だから。
「だろう？　だったらこの映画の障害なんて、何てことないんじゃねえのか？」

「どうかな？　女の子になろうとしないで、自分を男だと言い張ってる患者ならそうかもしれないけど、そういう患者は恋愛する前に自殺するわよ。あたしは違うでしょ？」
「あー、そう言えばそうか……」
浩介くんが納得した風に言う。
「それよりもさ、こっちのアニメ映画はどうかな？」
あたしが指差したのは、登場人物が女の子しかいないいわゆる「百合系」のアニメで、それと同時に「日常系」にも分類されている。
「あー、なるほど。上映時間も先だし、短めだけどちょうどいいな」
あたしたちは、券売機の前に移動し、２枚分のでチケットを買う。もちろん席は隣り合わせだ。
「お、ポップコーンが売っているな」
「あー、でも食べちゃったばかりよね」
「ジュースもなんか重いしなあ……水だけ飲めりゃ最高なんだけど」
「あはは……」
浩介くんの言う通りだと思う。
ともあれ、開場時間まで暇を潰したら、あたしたちは中へと入る。
お客さんはそれなりに入っていて、あたしたちと同じく、学校の制服を着ている人もいる。
ちなみに、この作品は世間的には男性向けで通っているけど、意外にも女性客も多い。
夫婦で、というよりも、男女のカップルはあたしたちだけで、周囲からの突き刺さる視線、特に男性客のあたしの胸に対する視線が結構痛い。
「優子ちゃん、かなりじろじろ見られてたな」
「もしかして、また嫉妬しちゃった？」
「ちょっとだけ、でも結婚式になったら、そんなの吹き飛んじゃうよ」
浩介くんが自信たっぷりに言う。
「うん、ありがとう」
やっぱり何だかんだで旦那の嫉妬は嬉しいし、ご機嫌を取り戻すために恥ずかしいことしないといけないけど、それも浩介くんが喜んで

くれれば吹っ飛んじゃうわ。

あたしたちは、いつもの広告と予告編の後に始まった映画本編に没頭した。

内容としては、日常系らしく、冬休みのイベントと称して、女の子たちが雪だるまを作ったり、雪合戦をしたり、あるいはそりで遊んだりしている。

何か悪役が出てくるわけでもないし、登場人物の中で問題が起きるわけでもない。

極めて平穏な世界が、そこにはある。

唯一変なことといえば、このアニメは、モブキャラクターも含めて、徹底的に女性しかおらず、男性が排除されていること。

でもこの手の百合系では、ほぼお約束のことらしい。

一部の人は「美少女動物園」何て呼んでいるけど、実際には多くの人がこれを求めている。

だからこそ、こうやって映画にもなっているものね。

さて、その後物語は、サブキャラなどとも合同で山にスキーに行くことになった。

もちろん、キャラクターごとに個性があって、上手なキャラや下手なキャラもいる。

ちなみに、この映画で描写されている一番下手なキャラクターは、あたしのスキーの腕前に匹敵するくらい、下手さが強調されていて、一方で上手な子は、浩介くんくらいに上手な滑り方をしている。

さて、スキーの後は温泉シーンもあって、ちょっとだけサービスカットになっている。

考えてみたら、あたしは去年のスキー合宿で、浩介くんにこのシーンを見せてあげたものよね。

体を洗ったり、お湯につかったり、お風呂から上がると温泉卓球をするシーンがある。

浴衣姿が少しだけはだけているけど、健康的なエロスという感じね。

寝泊まりシーンでは、怪談をしたり、ふざけあったり、キャラクターごとに寝相が違ったりしていて見飽きない。
翌朝にはチェックアウトして、そのまま帰宅して終了だ。

「ふー、終わったわね」
「ああ」
浩介くんも、それなりに楽しんでくれたみたい。
肩の力を抜いて、ストレスなく見られるのはとてもいいことね。
結婚式の前だもん、緊張する映画は良くないわ。
「さ、式場へ行きましょう」
「ああ、そうだな」
時間もいい時間になったので、あたしたちは、結婚式場へと急ぐことにした。
駅に入り、そして電車が入る。
式場は都心にある。見た感じ小谷学園の制服は見えない。
「浩介くん、何だか緊張してきたわ」
「うん、俺も」
婚姻届はすでに提出してある。
最近では、結婚式と同じ日に婚姻届を出すのは珍しいらしい。
また、以前から同棲していて、あたしたち以上にあんまり結婚の自覚がないという人もいる。とてももったいないことだと思う。
結婚は人生の大きな転換点だからこそ、あたしはあえて卒業式の日に結婚し、式もあげ、次の日にはそのままハネムーンに出発することになっている。
ハネムーンから帰れば、もうそこは浩介くんの家。これから、たった数日で多くのことが変わるのだ。
「間もなく――」
「優子ちゃん、降りるよ」
「あ、うん」
結婚式場の最寄り駅に到着し、あたしは浩介くんに呼ばれて電車から出る。

駅から式場はそこまで遠くはない。
「浩介くん、フロントへの声かけ、あたしにやらせてくれる？」
「ああうん、いいけど……」
浩介くんは困惑しつつ了承してくれる。
あたしには、どうしてもやってみたいことがあった。
あたしたちは、道を間違えずに式場のホテルへと到着する。
「いらっしゃいませー」
「あの、本日結婚式を予約してます篠原です」
あたしは人生で初めて、「篠原」を名乗る。
「はい、分かりました。少々お待ちください」
そう言うと、フロントのスタッフさんが奥へと消える。
「なるほど、これがしたかったのか？」
浩介くんが納得した風に言う。
「うん、結婚したんだもの。浩介くんと同じ名字を名乗れるのは嬉しいわ」
あたしは、どうしても「篠原」と名乗ってみたかった。この大好きな浩介くんと同じ家族になったんだって主張したくてたまらなかった。
そうこれは、女性の特権……いや、婿入りすれば男性にもできるから違うか。
「お待たせいたしました、こちらへどうぞ」
「はい」
別の男性スタッフが会場へと案内してくれる。
「お、優子来たわね」
びしっと黒い服で正装した母さんがあたしを出迎えてくれる。
「浩介も、優子ちゃんがかわいいからって、あんまりだらしない顔しちゃだめよ」
「わ、分かってるって」
浩介くんの方はお義母さんが応対する。
一方で、男親の方は声をかけ辛そうにしている。
やはりこういうのは、どうしても女性が前に出やすいのかもしれな

い。
「後しばらくしたら、衣装の準備ができるわよ。そしたら、一旦お別れね」
「う、うん……」
母さんの言葉に、あたしはちょっとだけ寂しくなる。
ウェディングドレスを着たら、結婚式開始まで、あたしたちは控え室で待機することになっている。
着替える場所はその控え室に隣接した更衣室で、新婦の更衣室がはるかに大きい。
ちなみに、お化粧も試してみたけど、やっぱりあたしには合わないらしく、かといって全くしないのではかわいそうということで、ほんのうっすらという感じで落ち着いた。
まああたしは、化粧しなくても十分すぎるくらいかわいくて美人だものね。問題ないわ。

「えー、時間ですので、そろそろ始めたいと思います」
「「はい」」
スタッフさんの声とともに、あたしたち4人は立ち上がる。
「では新郎の方はあちらへ、新婦の方はこちらへどうぞ」
「じゃあ浩介くん、またね」
「おう」
スタッフさんの誘導に従い、あたしは母さんと一緒に「新婦更衣室」へと移動する。
浩介くんを喜ばせてあげないとね。

# 結婚式　前編

更衣室の中には鏡や化粧用品などが所狭しと並んでいた。
そして、あたしが着ることになるウェディングドレスもそこにあった。
そして、中にはスタッフさんも2人いる。
「それじゃあ、失礼いたしますね」
「え？」
スタッフさんの1人があたしに近付いてくる。
がばっ……
あたしは、制服を掴まれてそのままボタンを一個一個丁寧に外される。
正直言って、ものすごい恥ずかしい。
「あ、あのっ！　1人で出来ますから！」
まさか、最後に学生として制服を脱ぐのは、他人の手によるものとは思わなかったわ。
「遠慮しないで下さい。今のあなたはお姫様です、今日はお姫様の晴れ舞台です。どうか私たちにお任せください」
そんな風に言いながら、あたしは優しい手つきで制服のブレザーとブラウスを脱がされていく。
「はい、バンザイして下さい」
「……」
スタッフさんの優しい声に、あたしはすっかり子羊になってしまう。
「こちらも失礼しますね」
「やっ……」
あたしはスカートに手をかけられて、ゆっくりと丁寧に下されていく。
あたしは真っ白なブラジャーとパンツの姿にさせられる。
「座ってもらえますか？」
「はい」

言われるがままに椅子に座り、あたしはゆっくりと靴下を脱がされる。
あたしはふと母さんを見る。
母さんは物凄い感激した目つきをしている。
……見なかったことにしよう。
「もう一度、立ってもらえますか？」
「は、はい」
そして次にやって来るのは、ウェディングドレス用の下着に付け替える作業。
今のあたしはお姫様なので、もちろん下着も「召使い」が取り替えてくれる。
昔の人って恥ずかしくなかったのかしら？
「はい、足を上げてください」
「は、はい……」
あたしは、大事な部分を隠しつつも、足を上げてパンツを脱がされるのを手伝う。
これであたしは、すっぽんぽんになった。他人の手で全裸に剥かれたのはスキー合宿の時に浩介くんにされて以来だった。
「はい、ではこちらに着替えてください」
「はい」
ウェディングドレス用の下着と言っても、色はあたしがさっきまで穿いていた白で同じ色、だけど、見るからに素材が違う上に、白さもこっちの方が純白だった。
「足を通しますね」
「はい」
あたしは、スタッフさんに、まずパンツを穿かせてもらう。
穿き心地は、今までに無いほど、素晴らしくフィットしていた。
初めて女物のパンツを穿いた時以上に衝撃的だったかもしれない。
そして次にブラジャー、こちらは肩を露出するドレスの都合上、変わったデザインをしている。
「はい、じゃあ次はドレスに行きますね」

そしていよいよメインのドレス、こちらは化粧担当の人と2人がかりで着せていく。
このドレスは、何から何まで純白で、あたしの黒い髪と白い肌に何よりも似合っていた。
ただ着せておしまいではなく、スタッフさんは何度も構図をチェックして、状態を確認している。
「うーん、これでいいかしら？」
スタッフさんが母さんに確認を取る。
「あら、かわいいわね」
母さんも異議を唱えない。
「じゃあ、お化粧しますね。こちらにお座りください」
「はい」
あたしは言われるがままに椅子に座ると、化粧担当の人が用具を出してくる。
カリキュラムの時に、母さんに半ば強引にさせられて以来のお化粧。
スタッフさんには、「じっとしていてください」と言われたので、あたしはその通り、目をつぶりながら結婚式のことを考えた。
「はい、終わりです。どうですか？」
目の前の鏡で、あたしを見る。
「うーん、あんまり変わらないような気がします」
失礼かもしれないと思いつつ、言わずにはいられない。
「あはは、そうでしょう？　正解です。実際このメイクは、深層心理に働きかけるくらい小さな変化なんです。ですけれども、式の進行とともにボディーブローのように効いてくるんですよ」
どうやら、模範解答だったらしい。
こういうタイプの化粧を選ぶのは、よっぽど素材がいい人だけだとか何とか。
「さ、続いてはこちらです」
次にやってきたのは頭の飾り、頭に白のティアラと、後頭部にはレースがあるけど、あたしのトレードマークになっている頭の白いリ

ボンもそのままで、頭の白いリボンもこのウェディングドレスの一部になった。
　着替えには、かなりの時間を要した。時計を見ると、開場時間を既に過ぎていた。
「はい、これで全ての着替えが終わりました。では、新婦様こちらの部屋にどうぞ。お母様は別室でお待ちください」
「「はい」」
　母さんが部屋から出る。あたしは、ゆっくりと立ち上がって、恐る恐るウェディングドレスで歩いてみる。
　ウェディングドレスの中には、地面についちゃうくらい長いのもあるけど、これはそこまでではないので、一人で歩くことも出来る。
　あんまり長いと、初夜の時大変だものね。
「では開けますね」
　スタッフさんが大きな扉を開ける。入った時とは違う別の扉。
　部屋の中には新郎姿の浩介くんが1人で座っていた。
　スタッフさんはもう、付いて来ない。新郎新婦ご入場まで、ここで2人っきりになる。あたしは部屋の中へゆっくりと歩いていく。
「あっ……」
　あたしに気付いた浩介くんが立ち上がると、言葉を失っていた。
「どう……かな？」
　あたしは顔を赤くしつつ、少しだけドレスをつまんで、感想を聞いてみる。
「あ、あっ……優子ちゃん……その……」
「うん」
　褒められると分かっていても、やっぱり緊張してしまう。
「今までも、『優子ちゃんってかわいいなあ』とか、『優子ちゃんは美人だな』とか、『優子ちゃんはきれいだな』って思ってたけど、もう、どんな言葉も陳腐に聞こえちゃうくらいだよ。もう、俺の頭では何と表現していいのかわからないよ」
　浩介くんがあたしに、最高級の賛辞を言ってくれる。
「うん、ありがとう」

普段なら「もー言い過ぎだよ」と言っちゃいがちかもしれないけど、今日は一生に一度の花嫁姿だもん、素直に受け止めないといけないよね。
扉の向こうでは、内容までは分からないけど既に話し声が聞こえていた。
みんなこの結婚式を待ち望んでいる。
どんどんと、話し声が大きくなっていく。
ガチャッ
「間もなく、開始です。ご準備ください」
「「はい」」
後ろの扉から男性のスタッフさんが2人入ってくる。
扉の前に立ち、ここを開ける役目を担う。あたしたちは立ち上がって、開始を待った。

「ではまず、新郎新婦のご入場です！」
奥から司会者の男性の声が聞こえると共に、荘厳な音楽が流れ、扉が開かれる。
扉の向こう側には、広い会場に、数え切れないほどの人数の人々が、あたしたちに向けて万雷の拍手を鳴り響かせていた。
浩介くんと手をつなぎながら歩く。
リハーサル通り、新郎新婦の席は一番奥、どこからか大量の紙吹雪が舞う、あたしのドレスにも、浩介くんのスーツにも付く。
眩しすぎて、結婚式の参加者の顔が見えない。
まるで、ここには隣の浩介くんとあたししかいなくて、周囲は音しかしていないんじゃないかって思えてくる。
周囲から聞こえてくる話し声も、きっとただの録音テープの一環に聞こえて来てしまう。それくらい、今のあたしは周りが見えない。
「おめでとう！」
「優子ちゃん！　本当におめでとう！」
でも、時間とともに次第に意識が現実に引き戻されていくと、あたしは結婚式で大勢の人に祝福されていたのが改めて分かる。

殆ど会っていなかったあたしの親戚の人達もいる。あたしが女の子になってから、会うのは初めてだ。
みんな一様に、驚いた顔をしている。
そうだ、親戚のみんなあたしが女の子になったことは知っていたけど、みんな協会のことを知っているとは限らない。
女の子になった写真も見たとは思うけど、やはり実物を見ると違うのかもしれない。
浩介くんの親戚の方も、あたしを見るとみんなとても驚いている。
「おいおい、まさかと思ったけど、あいつが付き合ってた優子ちゃんって、あの優子ちゃんじゃねえかよ」
「実物はもっとかわいいしおっぱいもでけーじゃねえか。くそー、うらやましいったらありゃしねえぜ」

浩介くんの従兄弟と思われる人たちの羨ましがる言葉が聞こえてくる。
あたしたちが、所定の一番前の席に座ると、拍手喝采が、ようやく収まり始める。
よく見ると、そこは教会のようになっていた。
ここはメインの会場ではないことは、分かっている。
神父風の服を着た人が現れる。
あたしたちは、立つように促される。
あたしたちは、群衆に背を向ける。これから、「誓い」をすることになっている。
「新郎さん、あなたはこの女性を愛し、病める時も、健やかなる時も、貧しい時も、尽くしますことを誓いますか?」
神父さんが浩介くんに問いかける。
「はい、誓います!」
浩介くんが力強い言葉で言う。
こんなこと、問いかけられなくたって分かっている。
「新婦さん、あなたはこの男性を愛し、病める時も、健やかなる時も、

貧しい時も、尽くしますことを誓いますか？」
「はい、誓います！」
　あたしにも同じような問いかけをする。
「病める時も、健やかなる時も、貧しい時も、死が２人を分かつまで、永遠の愛を誓いましょう」
「「はい」」
　あたしは、滅多に病まない、そして事故と事件にさえ気を付ければ、死もない。
　この結婚式場に蓬莱教授がいるかは分からないけど、あたしは改めて実験の成功を願った。
　さすれば、当分は「死が２人を分かつまで」とはならないはずだ。もちろん、不慮の事故に巻き込まれる可能性は、常に考慮しないといけないけど、無謀な行動をしなければ数百年は大丈夫のはず。
「では、こちらの指輪を、お２人に授けます」
「「はい」」
　預けていた婚約指輪が元に戻り、結婚指輪になった。
　中を見ると、今日の日付、「２０１７／３／１６」と、「Ｋｏｕｓｕｋｅ　ｔｏ　Ｙｕｋｏ」という文字が書いてあった。多分、浩介くんの指輪の方には「Ｙｕｋｏ　ｔｏ　Ｋｏｕｓｕｋｅ」と書いてあるのかな？
「それでは、新郎新婦は近いのキスを」
「「はい」」
　神父さんに促され、あたしたちは肩を寄せ合って近寄っていく。
　浩介くんの手があたしの腰にと当たる。
「んっ……じゅるっ……」
「ちゅっ……じゅううっ……ちゅぱっ……」
　リハーサルでは、「キスをする」で終わっていたけど、自然とディープキスになる。
　多分、本来の想定なら軽いキスだと思うんだけど、あたしたちにはそんなことはどうでもいい。
「ちゅっ……じゅうっ……ちゅぱっ……れろっ……ぷはっ……」

唇が離れ、唾液の糸が垂れ下がる。何度も何度も見た光景でも、緊張はいつも同じ。
外のことなんてもう見えない。この人と、ずっとキスをしていたい。
「え、えっと……ありがとうございました」
神父さんの声であたしたちは我に返る。
「うわー、アツアツだよあの２人」
「うー、とんでもないものを見ちまったぜ」
「でも、その日の夜はさ……」
「もういい、皆まで言うな。俺が惨めになる」
よく見ると会場もひそひそ話をしていて、浩介くんの親戚と思われる男の人達があたしたちのキスについて話していた。
「それでは、誓いの儀式を終了いたします」
神父さんの締めの言葉と共に荘厳な音楽が再び流れる。
と言っても、テープで録音したものみたいだけど。
「では、こちらへどうぞ」
あたしたちは、メインの会場へと移動する。
まずあたしたちを先頭に、集団で移動するわけだけど、参加者が多いので数回に分ける。
あたしは改めて、歩きながら参加者の集団を見る。
あたしや浩介くんの親戚たち、幼馴染の桂子ちゃんとその家族、そしてさらに奥には制服姿のクラスメイトたちや後輩たちの姿も見える。
天文部の仲間も、全員参加していた。
更に学生組の中に混じって、去年卒業した私服姿の坂田元部長や守山前会長の姿まであった。
「おめでとう」
「優子ちゃんおめでとう」
「篠原先輩おめでとう！」
学生たちの祝福の声が聞こえる。
学生集団の後ろの方には先生たちがいて、校長先生はもちろん、教

頭先生や小野先生といった多くの先生方に、更に用務員さんや食堂のおばちゃんまで駆け付けてくれていた。
そしてその後ろにいたのは、蓬莱教授と助手の瀬田さん、更に知らない顔も何人か見える。
もしかしたら、研究所の関係者かもしれない。
更に蓬莱教授の集団から通路を挟んで右側には高島さんとあの時のカメラマンさん、他にも彼の近くにいる知らないおじさんたち、きっとブライト桜の関係者だと思う。
そして扉から一番近い最奥部には、永原先生を筆頭に、比良さん、余呉さんをはじめとした正会員の全員と、会合でもよく見る首都圏の普通会員たち、そしてその中に混じって幸子さんをはじめとした塩津家の人と、歩美さんをはじめとした山科家の人たちまで結婚式に来ていた。
そんな風に多くの人に見送られながら、あたしたちは、行列の先頭を歩く。
メイン会場の扉の前に付くと、先行していたスタッフさんが扉を開けてくれて、あたしと浩介くんは会場の奥の方の一番目立つ席に座った。
他の参加者たちも、随時所定の位置へと座っていく。
「さあ、新婦の方はこちらを投げていただきます」
「はい」
渡されたのはブーケ、「これを投げると次に結ばれる」何て言う習慣があるらしいわね。
独身の女性陣が、集まってくる。特に学園の女の子が多い一方で、龍香ちゃんが興味なさげで集団から離れていて、自信がうかがえるわね。
「そーれ！」
動きにくいウェディングドレスを使って思いっきり後ろに高く投げる。
おー！　おー！
男女の掛け声が聞こえてそして――

わー!!!
どうやら誰かがつかんだらしい。
あたしは、後ろを振り向く。
「優子ちゃんありがとう」
「うん」
持っていったのは、桂子ちゃんだった。
「さあ、料理の方も冷めてしまわないうちに食べましょう。それではですね、えー皆さん、グラスを持ってください」
司会の人たちの指示に、あたしたちは大慌てで席に戻って、グラスにジュースを注ぐ。
「それではですね、篠原浩介さんと篠原優子さんのご成婚をお祝いいたしまして、乾杯！」
「「乾杯!!!」」
割れんばかりの乾杯の声と共に、あちこちでグラスが叩かれる音がする。
あたしたちも席に座り、料理を食べることにした。
「はむはむ……うん、おいしいわ」
高級ホテルで作る料理ということもあって、かなりおいしい。
お昼に食べた高級イタリアンや、修学旅行の時の神戸のお肉屋さんに匹敵すると思う。
「これ、いけるな」
浩介くんもおいしそうに頬張っていた。
でも、浩介くんは「食い気より色気」と言わんばかりに、強調されたあたしの胸をちらちらと見ている。多分、間違いなく下半身も興奮していると思う。
学校のみんなをはじめ、男性参加陣も、ほとんど全員があたしの胸に釘付けになっていた。
でも、浩介くんは全く嫉妬している様子はない。それもそうだ、これは「見せつける」ための儀式だもの。
浩介くんにとって、この場は「優子ちゃんは俺だけのものだ」ということをアピールする場所であると同時に、あたしにとっても「浩介

くんはあたしだけの旦那さん」ということを、アピールし、そして夫婦生活を始めることで愛を見せつける場所でもある。
だから今は、あたしが注目されればされるほど、浩介くんはご機嫌になる。
他の男達はあたしを取ることは絶対にできないということを自覚する。それは、浩介くんにとって男としての自尊心を最大限に引き出すことだと思う。
「ねえ浩介くん？」
「ん？」
「もしかして、浩介くんが一番食べたいのって、あたしじゃないの？」
「ギクッ……あ、当たり前だろ……」
浩介くんが図星を突かれ、抵抗もなくすんなり肯定してくる。
「あはは……」
参加者の何人かは食べながら、あるいは食べ終わりつつ周囲の人と雑談を始めている。
ここからの結婚式は、メインのイベントへと写っていくことになる。

# 結婚式　中編

「おうっ篠原！」
「何？」
「何だ？」
　高月くんの呼びかけに、あたしと浩介くんがほぼ同時に反応する。
「あ、そうか。もう優子ちゃんの名字変わったんだった」
　篠原と呼んでもらえるのが、たまらなく嬉しい。
　浩介くんと結婚したんだって、そう思えるのが何よりも幸福だった。
「えっとじゃあ、浩介」
「ん？」
　高月くんが浩介くんを名前で呼ぶ。違和感はあるけど、区別するためには仕方ない。
「優子ちゃん、泣かせるんじゃねえぞ！」
　高月くんが励ますように言う。
「んー、悪いけど保証できねえな」
「な、何でだよ！」
「え!?」
　高月くんがちょっと怒った風に言う。あたしも、ちょっとだけ不機嫌になる。
「だってよ、優子ちゃん嬉しさのあまり泣いちゃうことも多いし、それに今夜だってきっと、痛みで泣いちゃうかもしれないんだから」
「こ、浩介くん……」
　高月くんが一本取られたという顔をする。
　あー、やっぱり浩介くんにはかなわないわ。
　浩介くんは、今夜のこと、そしてこれからのことも合わせて、「泣かせないとは保証できない」と言ったんだ。
「でも、悲しませはしねえ、もちろん、将来にわたっても外部の悪意を完全に遮断できるかといえば自信はねえ。でも最善は尽くす。それだけで旦那としては十分だ」

浩介くんがきっぱりと言う。決意に満ちた目だった。
「そうか、じゃあな」
「おう」
あたしは、もうこれ以上深い所はないんじゃないかと思っていたのに、ますます浩介くんに惚れ込んでいく。
あたしの中で、少しもやっとしていた部分が明るくなる。
そう、あたしは浩介くんのものになりたかったんだわ。
「もの」……そう、それはつまり浩介くんの従属物のような扱い。
浩介くんにされるがままに支配されたいという、歪んだ欲望。
あたしは「そんな考えはダメでしょ優子」と言い聞かせながら、小さく首を振る。
嫁になって、初めて見えてきたあたしの深層心理。
いけないこと、女はものじゃないことは当然のことで、浩介くんだって、してと言われたってそんな扱いをしたくないと言ってくるのは火を見るより明らかで……分かっているのに、どうしても抗えない。
もしかしたら、「倒錯した欲望」なのではなく、「メスの本能」なのかもしれない。
「え、えっと……篠原優子さん」
「はい」
また、嬉しい呼ばれ方で呼ばれた。
見ると、幸子さんと徹さんとその両親だった。
「その、ご結婚おめでとうございます」
幸子さんは、結婚式の服としてはかなり浮いた服を着ている。
黄緑色に変な模様の帽子を赤い髪留めで止めていて、服は上下ともに水色で、トップスには何故か鍵が付いている上に、スカートの裾部分には大量のミニポケットがある。下の方なので、めくらないと届かないような距離にある。
「どういたしまして……ところで幸子さん、その服、どうしたの？」
やはり気になるので聞いてみる。
「ああうん、お気に入りなのよ。スカートのポケットに小石を入れて

いけば、強い風の時も安心だわ」
幸子さんが、スカートの裾を摘んで広げる仕草をする。
かなり女の子らしくてかわいらしい仕草で、着実に成長しているのが伺える。
「あー、そうやって使うのね」
「そうそう、小物を入れる人もいるけど、私は常に小石を入れているわね」
正直、そのポケットは用途がよく分からなかった。
「お姉ちゃん、やっぱり浮いてるじゃん。他のドレスなかったの？」
「いいのよ徹、私もそろそろ男の子を見つけたいし、結婚式だってアピールの場なのよ」
「うーんそういうものかねえ？」
「そういうものよ、徹も2次会でいい女の子見つけなさい」
「あうー、でも遠距離になっちゃうぜ……」
「そ、そうだったわね」
徹さんと幸子さんが、あたしそっちのけで話している。
幸子さん、男の子見つけたいって、また一歩成長したわね。
うん、もうあたしから教えることは、殆ど無いのかもしれない。それはそれで、ちょっとだけ寂しい気もするけど。
「えっと、石山……じゃなかった、篠原さん結婚おめでとうございます」
徹さんと話し込んでいる幸子さんの横から、別の女の子が現れてあたしを祝福してくれた。
女子の制服を着た歩美さんだった。
「うん、歩美さんも、あれからうまくいってる？」
「ああ、クラスのみんなもそうだし、最近になって学校には私のファンクラブもできたんだよ」
歩美さんの方は、言葉遣いを見て分かるように、まだ幸子さんほど成長していない。
「そう、それは良かったわね」
ファンクラブかあ……あたしは色々ドタバタしていたのもあって、

そんなのできなかったわね。
浩介くんに恋するのも早かったのかも。
「あれ、あなたは？」
歩美さんが、幸子さんの方を向く。
「はじめまして、塩津幸子です。篠原さんにはＴＳ病のカウンセラーとしてお世話になっております」
幸子さんが歩美さんに挨拶をする。
「あ、こちらこそよろしくお願いいたします。私は山科歩美です。同じく、篠原さんにお世話になっております」
２人がぺこりと頭を下げる。よく見ると、両家の家族同士も挨拶していた。
住んでる場所が遠いので、中々会える存在じゃない。
「ふふっ、妹ができたみたいね」
「え!?」
幸子さんの言葉に、歩美さんが驚いた表情をする。
確かに、あたしを「師匠」に見立てれば、「姉妹弟子」みたいなものだけど、でもカウンセラーは師匠ではない。
どちらにしても、この２人はあたしを通じての関係なのは確か。
「ふふっ、歩美さんは協会に入っているの？」
「はい、例の騒動の時に、入れてもらいました」
幸子さんと歩美さんが話している。
「じゃあ同じ協会の所属としても、よろしくね」
「……はい」
幸子さんと歩美さんが直接会うのは初めて。
２人が席の方へ戻ると、その後もクラスメイトたちが祝福してくれていた。
ちなみに、「石山」と言いかけた人はみんな「篠原」に修正してくれた。
浩介くんと、本当の意味で一緒になれたと、強く自覚する。
どんどんと浩介くんにのめり込む。
この感覚は、名字の変わらない浩介くんには到底味わえないこと。

とても喜ばしくて、至福の時間だった。もし、「石山」と呼ばれ続けていたら、あたしは「この人は結婚を認めてくれない」と思ったと思う。

「では、続きまして、新郎新婦のご両親の皆様と、新郎新婦のお二方よりメッセージがあります。えー暫くの間、ご清聴ください」

司会者さんの一言で次のコーナーが始まると、会場が暗くなり、スポットライトが一点に集る。

その付近に、あたしの両親と義両親が集まることになっている。これもリハーサル通り。

そして徐々に、だが確実に話し声が止み、あたしたちの方へと視線が集中する。

「まずは新郎のお父様、こちらへどうぞ」

「はい」

スポットライトは固定で、まずは司会者さんはお義父さんにマイクを渡す。

そして、お義父さんがまず話し始める。

「えー、新郎の浩介の父です。本日はお忙しい中、こんなに沢山の方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます」

「浩介はですね、我が家の一人息子です。新婦とはですね、実は元々は仲が悪かったんです。ですが、今はこうしてとても仲良く、結婚に至りました。浩介は責任感の強い人ですから、背負いこみすぎないことが心配ですが、新婦は優しい人ですから、うまくやってくれるものと思います」

パチパチパチパチパチ!!!

お義父さんの短く簡潔なスピーチに、拍手が沸き上がる。

「では続きまして、新郎のお母様、よろしくお願いいたします」

そして次に来たのはお義母さんだった。

「浩介の母です。浩介と優子ちゃんとの結婚は、とてもお似合いだと思います。正直に言いまして、優子ちゃんは、浩介にはもったいないくらいのいい女の子でして、きっと幸せな家庭を築いてくれると確信

しています」
お義母さんが、あたしを褒めてくれる。
「優子ちゃんは家事が得意で思いやりもあって、名前の通りの優しい子だと思います。特に家事なんですけれども、専業主婦歴の長い私よりも得意でして、今後我が家の家事戦力としても、たくさん期待しています。私の話は以上です」
ワハハハハ、パチパチパチ……
最後は少しだけ笑いが漏れつつも、お義母さんのスピーチが終わる。
「では続きまして――」
「待ったー！」
司会者のスピーチに老人女性の声で「待った」がかかる。
「お母さん、ダメですって！」
「ええい、どうしても一言言わせてほしいんだ！」
一人の老人女性が乱入し、あっけに取られたお義母さんからマイクを強奪する。
もちろんリハーサルにはないことで、周囲もやや唖然としている。
「優子ちゃん、浩介！　結婚おめでとう！　老い先短いこのババのために、早くひ孫の顔を見せてちょうだい！　孫はかわいいって言うけど、ひ孫見られるのは夢だからね！　ひ孫はもっとかわいいもんさ！
以上！」
あー、この人がおばあさんだったのね。何だかものすごいパワフルだわ。
浩介くんのおばあさんはそう一言言い終わるとそそくさと席に戻った。
拍手は起こらず、周囲も何だか動揺している。
「えへん、気を取り直しまして続きまして新婦ご両親、まずはお父様からお願いいたします」
司会者の人が仕切り直しをして、次に来たのは父さんだった。
義両親と同じように、
「優子の父です。優子、浩介くん、この度は結婚おめでとう。開場の皆

さんは知っていると思いますが、優子は元々は男性で、２年前の５月にＴＳ病で後天的に女性へと変貌しました」
　あたしのＴＳ病のことも触れない訳にはいかないよね。
「今の優子はいつも明るくふるまっていますが、一日で今までの価値観がひっくり返って、父さんには想像もつかない辛さ、苦しみがあったと思います。しかしそれらを乗り越えて、今回の結婚は大変嬉しいと思います。以上です」
「ありがとうございました。続きまして新婦のお母様、よろしくお願いいたします」
　父さんのスピーチが終わり、最後に母さんのスピーチが始まる。
「優子、結婚おめでとう。２年前のあの日から、母さんはずっと優子のことを見守ってきました、楽しい時も辛い時もありました。でも優子はいつも健気に笑っていました」
　いつもの母さんからは想像もつかないくらい真面目な声で話す。
「優一だった頃と、何もかも正反対の女の子になって、好きな男の子も出来て、そして今日、女の子としての幸せを掴めました。優子、これからもずっと幸せな笑顔を振りまいて、みんなに幸せを与えるような、名前の通りの優しい女の子になってほしいと願いまして、私のスピーチを終わります」
　母さんのスピーチに、一層の熱がこもる。
　そして、４人の中でも一番盛大な拍手が母さんに送られていた。
「では、ここで新郎新婦から、ご両親に向けてのスピーチがあります。それでは新郎新婦、お願いいたします」
　あたしたちは、司会者さんに従い、両親たちがスピーチしていた場所に進む。
　そして、司会者の人から、封筒に入った紙を渡される。
　中にはスピーチの内容が入っている。
　念のために正しいか確認すると、まず浩介くんからスポットライトの部分に出る。
「お父さんお母さん、今までありがとう。僕をここまで育ててくれたこと、面倒を見てくれたこと全てのことに感謝します。もちろん、優

子ちゃんと違って、僕は住む場所は変わりません。ですから、今後もお父さんお母さんにはお世話になることが何度もあると思います」
浩介くんが両親の方を振り向きながらスピーチをする。
あくまで両親に向けてのスピーチだものね。
「もしかしたら、夫婦生活や子育てなどで、力を貸してもらうこともあると思います。ですから、今までありがとうだけではなく、これからもよろしくも含めて、お父さんお母さんには伝えたいと思います。以上です」
パチパチパチパチパチ!!!
「最後に、新婦から、新婦ご両親にメッセージがあります。ではよろしくお願いします」
「はい」
拍手とともに浩介くんのスピーチが終わると、次に来るのはあたしのスピーチ。
あたしは、紙を広げてマイクの前に立つ。結婚式の全参加者があたしを注視する。
「お父さん、お母さん、今までありがとうございます。特に女の子になってから、お母さんにはとてもお世話になりました。女性として生きていくための心構え、言葉遣い、振る舞い、礼儀作法、そして家事……今こうして女としての幸せを謳歌し、結婚できたのも、お母さんの教育のおかげです」
母さんの方を向き、あたしはありったけの感謝を込めて話す。
「お父さん、お父さんは寡黙な人ですが、あたしを影で支え続けていたのも知っています。男だった時、荒んだあたしの人生の中で、様々なことを語り合えたのは、心の支えになりました。あたしはこれから、お嫁に行きます。あの時倒れるまで、想像もしていなかったことです。そこでずっと、幸せに暮らしていきたいと思っています。今まで本当に、ありがとうございました」
あたしが両親に頭を下げて、スピーチが終わる。
そう、「ずっと」幸せに暮らしていきたい。
それが、これからのあたしの願いだから。あたしの願いを聞いて、

みんなちょっとだけ、真剣な表情になっていたのが見えた。
「では続きまして、夫婦初めての共同作業、ケーキ入刀に入ります！」
あたしたちのスピーチが終わると、次に行われるのはケーキ入刀で、慌ただしくウェディングケーキが運ばれてきた。
ウェディングケーキはかなりの量がある。
とにかく参加者が多いので、それはもう凄まじい大きさになっていた。というより、同じケーキが幾つかあって、そのうちの1つに入刀することになった。
他のケーキは、コックさんがやってくれるらしい。
「浩介くん」
「おう」
「お手伝いいたします」
ケーキの入刀と言っても、スタッフの人がかなり補助してくれる。
司会者の人は「初めての共同作業」と言ってたけど、これじゃ共同作業と言うのは難しいと思う。
無事にケーキ入刀を終えたら、あたしたちはスタッフさんと協力して、ケーキを参加者さんに配っていく。もちろん、配る度に、あたしも浩介くんも「おめでとう」と声をかけてもらえる。
うー、やっぱりこのドレス、最高にかわいいけど、動きやすさではちょっと難があるわよね。
まあそれでも、他の動きにくいドレスと比べると、こちらはだいぶ機能性を重視してるらしいけど、とにかくスカートが重いわね。
「さあ、引き続き、結婚式を楽しみましょう」
あたしたちも席に戻り、引き続き祝福を受けながらケーキを食べることにした。

# 結婚式　後編

「おいしいわねこのケーキ」
「ああ」
　あたしたちは、このドレスに負けないような白いケーキを美味しく食べる。一応これも夕食の代わりにもなる。
「だろう？　この式場では一番高額なプランだからね」
　突然、中年男性の声がしたので見上げてみる。
　そこにいたのは予想通りの人だった。
「蓬莱教授！」
「2人とも、結婚おめでとう。あー、しかし結婚したとなると苗字が同じになるなあ……これからは優子さん、浩介さんと呼ばせてもらうよ」
　蓬莱教授が今後の呼び方について話す。
　確かに、重要なこと。でも大学に入る時までには、あたしの学生証も変わってるかな？
「はい」
「……分かりました」
　結婚後も旧姓で呼び続ける人もいるみたいだけど、あたしそれは絶対に嫌。だって、それじゃ浩介くんとの結婚を認めてくれないような気がするから。
　結婚したということを身に染み込ませたいから、ね。
「ふう、よかった。優子さんのことだから旧姓を使い続けたらきっと怒るだろうと思ってね」
「あ、うん……」
　やはり蓬莱教授は先読みの天才だ。あたしの気持ちをすぐに察していた。
「いやまあ、後になって『旧姓でもいい』っていう人はたくさんいるさ。でもこういう舞台、しかも婚姻届を出したその日だろ？　そういう日は気分から変わっているんだ」
「確かにそうかもしれないわ」

卒業式が終わり、婚姻届を出して、結婚式を開く。
こんな大忙しな1日を過ごせば、あたしみたいに旧姓で呼ばれたくないと強く思ってしまうのは無理もないことなのかもしれない。
「しかし教授、やはり結婚式に来てよかったですね」
「ああ」
「え？」
蓬莱教授の隣にいた助手の瀬田さんが声をかける。
瀬田さんの、「結婚式に来てよかった」というセリフに、あたしがちょっと引っかかる。
蓬莱教授の貴重な研究時間を割いてまで来てくれて、しかも来てよかったと言われたのはちょっとだけ予想外だった。
それこそ、研究の時間に充てたほうが有意義なはずなのに。
「こんな幸せそうな夫婦の未来を、壊したくねえんだよ。もし俺の研究が失敗すれば、優子さんは結婚生活よりもずっと長い期間、浩介さんと死別しなきゃならん。今回の結婚式で、改めて思ったよ。『この研究は、絶対に成功させる』ってね」
蓬莱教授が胸の内を暴露する。
正直言うと、合理主義の権化みたいな蓬莱教授にしてはすごく珍しい考えだと思う。
「不思議そうな顔をしているな。なあに、君たちのような理想的な夫婦というのがいつまでもあり続けるのもまた、巡り巡って全体の利益にもなるんだ」
「そ、そういうものですか」
やっぱりまだ、あまり想像のつかない話でもある。
「さて、立ち話もなんだし、皆さんを紹介しよう。こちらは俺の大学の同僚の河毛（かわけ）教授だ」
蓬莱教授よりも年上っぽいおじさんの教授が紹介される。
「河毛です、専門は応用数学です。佐和山大学で、履修の機会がありましたらよろしくお願いいたします」
「よろしくお願いいたします」

河毛教授は物腰の柔らかそうな人ね。
「こちらも俺の同僚で――」
蓬莱教授による紹介はかなり長く続く。大学の関係者の中でも、蓬莱教授と関係の深い人は多いみたいね。
「こちらは――」
「よろしくお願いします」
あたしたちもそれぞれ挨拶をする。

「さて、これで全員だな。あー、もちろん覚えなくても構わないぞ。大学に入ってから覚えればそれでいい」
「はい」
全員を紹介し終わって、蓬莱教授がそんなことを言う。
ともあれ、必要になったら覚えておけば大丈夫ね。
「そう言えば、思い出ビデオはやらないのか？」
全員を紹介し終わると、蓬莱教授が話題を変えてくる。
「あはは……実はデートとかを写真にほとんど残していなくて……」
「なるほど」
デート中、写真に残すということについて、あたしも浩介くんも意識をしていなかった。
更にあたしの出自からも、優一時代の写真を映すのはかなり抵抗感があったので、今回中止という形になった。
なので後はもう、この結婚式は参加者同士で歓談し、あるいはあたしたちがテーブルに出向いて歓談するイベントになっている。
「ともあれ、俺も予算を使い切るのにちょうどよかった。新婚旅行のお金も、部屋に置いてあるから、是非、というよりも、必ず受け取ってほしい」
「ありがとうございます」
そう言うと、蓬莱教授たちは去っていった。
「優子さん、結婚おめでとうございます」
「あ、高島さん」
蓬莱教授と入れ替わって、今度は高島さんが、あたしに話しかけて

くる。
　そして隣にいたのは――
「篠原さん、篠原君、結婚おめでとう」
　さっきと同じ永原先生だった。あたしと浩介くんが同じ苗字になったので、呼び方がさっきとは変わる。
　永原先生は元々男子生徒を「君」、女子生徒を「さん」と呼んでいたので、違和感はない。
「「ありがとうございます」」
「ふふ、篠原さん、新しい苗字で呼ばれるのはどう？」
「うん、とっても嬉しいわ」
「やっぱりそうね、私は独身だから分からないけど、ＴＳ病の女の子はみんな結婚するとそうなるのよね。生まれつきの女の子でない以上、どこかで不安定なところがあるから、多くの人は結婚すると新姓にこだわるようになるわ」
　永原先生が、ちょっとだけ遠い目をして言う。
　でも、だいたい想像がつくわね。
「そうですか」
「あ、そうそう、高島さんから篠原さんに、用事があるみたいよ」
　永原先生の言葉と共に、高島さんが前に出る。
「それでその、奥さんの方に取材をしてもいいですか？」
「え!?」
　高島さんが、あたしのことを「奥さん」と呼ぶ。確かに全く間違ってないけど、やっぱり「奥さん」という響きはまだ慣れないわね。
　そして、「何故今取材なのか？」という疑問もある。
「あーうん、協会の広報の一環としてね、ＴＳ病の女の子も、普通の女の子のような幸せを得られるんだっていう宣伝のために、篠原さんのことを紹介したいのよ」
「……そう言うことですか」
　永原先生が代わりに説明してくれる。
「ええ、今回の結婚式のこと、新婚旅行の後でいいので、記事に書いてもいいですか？　もちろん、変なことは書きません。ただ、先ほど

永原さんがおっしゃったような感じにはします」
「篠原さん、これは重要なことよ。今後の情勢次第では、『元男』という偏見が増してしまうかもしれないの。最近は女装や性別適合手術の技術が向上しているわ。だからこそ、私たちが純粋な女性であるということを示すためには、彼らのできないこと……結婚して妊娠し、出産もできることを、私たちは大声でアピールしないといけないわ」
　永原先生も、特に今回のことは重視したいらしい。
　ＴＳ病を受け入れた女の子たちは、中身だってもう男じゃないということを示すために、結婚したあたしのことは特に大事になってくる。
「分かりました。春から私も広報部長です、会長の協力要請には従いましょう」
「ありがとうね、篠原さん」
　先生と生徒という関係がなくなっても、永原先生との交流は続いていく。
「それでは、新婚旅行の後、お願いいたしますね」
「分かりました」
　高島さんのアポイントメントを受けて、２人は去っていく。

「篠原さん、この度ご結婚おめでとうございます」
「おめでとうございます」
　永原先生と高島さんから、入れ替わるように入ってきたのは比良さんと余呉さんだった。
「比良さん、余呉さん」
「ふふっ、篠原さん、結婚生活うまくいくといいわね」
　比良さんが少し笑っている。
　そう言えば、比良さんには子孫がいたんだっけ？
「はい、浩介くんと、助け合いながら生きていきます」
「頼もしいわね」
　比良さんが柔らかく微笑む。
「比良さんは、ＴＳ病患者として、初めて結婚して、子供を産んだ人な

のよ」
余呉さんが話してくれる。
そう言えば、永原先生は恋愛はしたことないんだっけ？
「あー、そう言えば、ひ孫を名乗る人がいたな」
浩介くんが、夏休み中のことを思い出す。
「ええ、子が死に、孫も死に、３０人いた曾孫も今や道蔵だけになってしまったわ……今はその道蔵にも曾孫がいるわね」
えっとつまり、玄孫（やしゃご）のさらに孫かな？
１７８歳になっていればそれくらい行くのかな？
「遠い話だな」
浩介くんの話に比良さんが深淵を見るような目で言う。
「ええ、私も、子孫全員までは把握してないわね。仍孫（じょうそん）がいることまでは分かってるんですけど」
仍孫、何て聞き慣れない言葉よね。多分、そんな遠い子孫を見たことがあるのは、比良さんだけだと思う。
比良さんだけが、子孫が死んでも生き続けている。
そういう意味では、蓬莱教授の研究が失敗した時、比良さんは未来のあたしでもある。
「篠原夫妻には、是非副会長のような未来にならないように、蓬莱先生とよく協力してください」
「おう」
余呉さんが、釘を刺すように言う。
と言っても、あたしたちに出来ることは多くはない。あたしの遺伝子
「分かっています」
比良さんと余呉さんが去っていく。
この頃にはもう、あたしも浩介くんもケーキを食べ終わっていた。
「んじゃ俺、挨拶周りに行って来る」
「ええ」
あたしは、ウェディングドレスが動きにくいので、ここにとどまっている。

浩介くんは結婚式に参加してくれた親戚たちの元へと歩いていく。
「お久しぶりですわね、今は篠原さんですわね？」
「ええ、坂田部長、お久しぶりです」
あたしの所には、天文部で去年お世話になった坂田元部長が現れる。
やはり癖で「坂田部長」と呼んでしまう。
「大変でしたわ。天文部がまさかあんなに大きくなっていた何て夢にも思いませんでしたわ。お陰様で後輩たちにつかまってしまいまして――」
「た、大変でしたね……」
坂田元部長は、あたしに挨拶する前に、天文部の後輩たちに挨拶しないといけなかったらしい。
「ええ、遅くなりましたけど、結婚おめでとうございます」
「うん、ありがとうございます坂田部長」
その後も入れ替わり立ち替わり、天文部の後輩や、学校の先生や知らない人からも祝福を受け、最後に親戚のおじさんおばさんたちなどからも祝福を得た。
この時間は長く、それらが終わった頃には結構の時間

「えーそろそろ最後の記念撮影に移りたいと思います。今回は参加者が多いので、こちらの会場で撮影を行います。それでは、参加者の皆様はご起立願います」
司会者さんの発言と共に結婚式の参加者たちが一斉に起立し、そそくさと会場から出ていく。
代わりに、大勢のスタッフさんの手で、机と椅子が片付けられていく。
そう、ここはこれから撮影会場になる。
「静かね、浩介くん」
「ああ……」
時刻はもう、夜8時に近い。結婚式が始まって、もうすぐ2時間になり始めていた。

一斉に移動するのに、誰もしゃべらない。参加者の多くは、これから2次会3次会と進むらしい。
「2次会、断っておいてよかったわね」
「ああ」
「「……」」
今夜のことを考えると、あたしは緊張が止まらない。
集合写真の撮影会のことが、頭から離れていく。
あたしたちが座っている所を除く、全ての机と椅子が取り外された。
「じゃあ新郎新婦のお2人様、まずは2人で撮影します。こちらの台のほうへどうぞ」
あたしと浩介くんはいかにもな感じのカメラを抱えたカメラマンさんに誘導され、お立ち台のような場所に立つ。
もちろん手は繋いだまま。あたしはニッコリと笑顔で微笑み、浩介くんもそれに続く。
「行きますよー3……2……1……」
ピピッ
カメラからフラッシュが焚かれ、写真が撮られる。
目を瞑らないように気をつけないといけないわね。
「もう一枚行きまーす、3……2……1……」
ピピッ
「はいＯＫです、ではご親戚の皆様を呼びますね。台から降りてください」
そして、両家の親族たちが入ってきた。
まずは親族だけで撮影することになっている。
ちなみに台は回収されていて、あたしたちの後ろにはかなり広い段差が置かれている。
「じゃあ新郎側と新婦側で、後ろの方に立ってください」
そして、段差のごく一部が埋まっている状態で、同じように2枚の写真が撮られていく。

「ではですね、全員をお呼びいたしますのでお待ちください」
その声とともに、大勢の参加者が我先にと後ろへ並んでいく。
一応見栄えもあるので、親戚組、小谷学園組、協会組、蓬莱教授組で大雑把に分かれる。
幸子さんの水色の服が、あたしのウェディングドレス並みに目立っていた。
でも幸子さんも、あたしに負けないくらいの美女で、あの後も小谷学園の男子から、歩美さんともどもナンパされまくっていた。
ＴＳ病の女の子にとって、ナンパされるのも重要な経験になる。
ともあれ、一番最後の撮影は３枚の写真を撮影する。
「それではですね、結婚式の方はこちらで終わりになりますので、各自解散してください。新郎新婦の方がこちらへどうぞ」
「はい」
結婚式の参加者たちが各々解散していく。
あたしたちは、このまま控え室の方へと退いて行き、一部の参加者から拍手が沸き起こった。
あたしたちの親戚は、それぞれ石山家と篠原家に分かれて、別の場所で飲み直すという。
蓬莱教授たちはそのまま直帰で帰宅し、明後日月曜日のの研究に備えるという。
小谷学園の生徒たちは、一部は蓬莱教授の支援もあってこのホテルに泊まることになっている。
卒業生は既に卒業式の２次会があって、結婚式は３次会、なので４次会はカラオケやゲームセンターになるという。
もちろん、何次会もする人たちにとってもホテルは拠点だし、一部はあたしたちが新婚旅行に出かけた後も遊ぶだろう。
逆に天文部の後輩たちなどの２年生以下の在校生たちは、一部はこのホテルに泊まって翌朝に帰るが、基本的にはそのまま帰宅する。
幸子さんたちは帰りの電車の都合でここに宿泊、歩美さんと意気投合したらしく、これから一緒に両家で夜遊びするらしい。
協会の人たちと、小谷学園の先生は全員直帰。永原先生だけ、明日

の新婚旅行の見送りに参加することになっている。
高島さんたち「ブライト桜」のメンバーはそのまま自宅に帰って翌日以降記事の下書きを書くという。
そしてあたしたちは……
「お部屋にご案内いたしますが、服装このままでよろしいですか？」
「はい」
ウェディングドレスはオーダーメイドなので、あたしはウェディングドレスを着たまま部屋に案内してもらう。
「優子ちゃん、大丈夫？」
「うん」
ちなみに、浩介くんにお姫様抱っこされながら会場を去ったので、ものすごい目立って恥ずかしかった。今も、ドキドキが止まらない。
ホテルのスタッフさんにエレベーターで最上階に連れて行ってもらう。一番高いスイートルームでもちろん広さは格別だ。
「ではですね、こちらのカギをお持ちください。ごゆっくりどうぞ」
そう言うと、ホテルのスタッフさんが、部屋の扉を開けてくれた。浩介くんが、お姫様抱っこをしながら鍵も受け取る。
お姫様抱っこされながら部屋に入り、ドアが閉まる音がすると、あたしは緊張が更に高まる。とうとうあたしが、浩介くんと本当の意味で結ばれる時が来るのだから。

「うわーすげー」
部屋の中はかなり広い。というよりも、下手したら家のリビング以上に広い。
メインの部屋の他にも、和室が1部屋ある他、奥にはあたしが使ってるベッドの2倍はあるベッドが2つもある。あたしは、そのベッドの上に優しく下ろしてもらう。
テレビは大画面で、机も広々としていて、トイレも浴室とは別になっていて、浴室ももちろんかなり広い。
大きな窓の外からは、日本の首都、東京の夜景がきらびやかに広がっていた。

そして、机の上には一万円札が何枚もあり、蓬莱教授からの「予算を使い切らないと支援者に怒られるから、君たちに押し付ける。来年以降は研究に回すように努力するから、頼むから受け取ってくれ」という手紙があった。

あたしたちにとっては大金すぎる。金銭感覚が狂いそうだけど、まあタダでお金渡されて不機嫌になる人はいないでしょう。

そして、２つのキャリーバッグが置いてあった。

これはもちろん、明日の新婚旅行で使うもの。

中身を確認する。着替えにお風呂セット、鉄道の切符など、旅行に必要なものはそろっている。何故か、制服まであったけど気にしないでおく。

「ふう、休もうか」

「う、うん……」

あたしたちは、夜景を背景にベッドに腰掛ける。

広いベッドだけど、隣同士でくっつきながら、お互い一言も発しない。

静かな時間が、流れていた。

## 2人きりの夜　前編

「あ、あの……浩介くん」
「ん？」
あたしが、長い沈黙を破る。
もちろん、これからのことを話さない訳にはいかない。
「あたしね、もう、我慢できないわ、お願い……」
「分かってる。俺もだ……はぁ……はぁ……」
あたしが甘く囁くと、浩介くんも息を切らせていく。
これから行われることについて思うと、心臓が破裂するんじゃないかというくらい、激しく高鳴っていく。
思えば、1年半も待っていた。とても、長かった。
「結婚したし、みんなの2次会を断ったのも、わざわざウェディングドレスのままなのも、この時のため、なのよ」
あたしが、懇願するように言う。
そう、あたしたちは事前に調べていた、何次会にも出席して、疲労が溜まって、せっかくの夜が台無しになったカップルを、何組も知っている。
彼らの二の舞い……いや、もはや何の舞だか分からないが、それは演じたくない。
「ああ」
浩介くんが短く返事をする。
ただでさえ密着していたのに、浩介くんとの距離はもっと近くなる。
あたしの中で、期待と不安が混じっていた。
「ふふっ、浩介くん、あたしね……ちょっとだけ、不安があるの」
「え!?　そ、そりゃあ誰だってそうだろう、俺だって――」
あたしはゆっくりと首を振る。
「ううん、違うのよ。あたしの中のことよ」
「もしかして、優一のことか？」
浩介くんが正解を言う。肉体的にうまくやれるかは、既に子孫がい

る人もいるのであたしは不安に思っていない。
　あたしも、もう完全に女の子だと思っていても、やはり少しだけ、男の残滓が深層心理に残っている気がするのだ。
「うん、もしかしたら、また優一がひょっこり出ちゃうんじゃないかって不安なの」
　あたしも、大好きな浩介くんのことで、優一が出てしまったことがあって、一昨年の夏は本当にそれで苦労した。
　どうしても、その時のトラウマは拭いきれない。
「大丈夫だよ。もう優子ちゃんは何から何まで女の子だし、仮にそうじゃなくても、それも今日までだよ」
　浩介くんが優しい口調で言う。
　大丈夫だよと、言い聞かせるような言葉。多分、あたしじゃなくたって、生まれつきの女の子、例えば桂子ちゃんでも、あたしと同じ立場になったら、不安でいっぱいになるだろう。
　だけど、あたしにはもう一つ、懸念があった。
「うん、ありがとう。でも、あたしには他にもう一つ不安があるのよ」
「え!?」
　浩介くんが驚いている。無理も無いわよね。
「あたし、わがままな女の子よ。あのね、あたし……これからのことをしたら、きっと男の面影はあたしから完全に消えるわ。その目標に向かって、今までたくさん努力してきたと言うのに、今の今になって、優一に名残惜しさを覚えてしまったんだもの」
　今まで、あたしは男だった頃の痕跡を消すことに全力を尽くしてきた。
　そして今、その全てを消して、男の名残が完全に無くなりそうな所まで来ている。
　それなのに、今それを手放すのに、惜しいという感情さえある。
　まるで、多額の借金を抱えていた人がやっとの思いで完済したのに、借金生活を懐かしむような破綻ぶりだった。
「人間は、そんなものだよ。でも優子ちゃん、心配しなくていいよ」
「……」

浩介くんがあたしをなだめてくれる。
あたしは、少しの沈黙の末、落ち着いた。
「ありがとう、浩介くん」
「ああ、いつでも、いいよ」
浩介くんがあたし見つめて優しく包み込んでくれる。
あたしは、目が蕩けそうになる。ああ、あたし、もう我慢出来ないわ。
「浩介くん、もう我慢できないわ。お願い、あたしを、浩介くんの……あなたのものにして」
あたしは、浩介くんに問いかける。
「ああ、だけどその……俺……」
浩介くんも、まだ不安そうだった。
「初めて？　あたしも、よ」
「ああ、結婚初夜で初めて同士何だな、俺たち」
「うん、素敵よね」
ベタベタだけど、とてもロマンチックだと思う。
「優子ちゃん……おいで……」
「はい……あなた……」
浩介くんの顔が近い。
自然と、唇と唇が重なり合う。愛し合いたい、ずっとずっと、いつまでも。
「ん……じゅっ……」
「んっ……じゅるっ……じゅうう……」
じわっ……
蕩けるようなキスの味に、あたしの肌はすぐに濡れてしまう。女の子特有の冷えやすい身体が、どんどん暑くなる。
キスの最中、あたしは唇を塞がれたまま、浩介くんに胸を触られる。
「んんっ……じゅる……れろっ……ぷはっ……」
あたしは浩介くんにウェディングドレスの上から胸を揉まれ、ゆっくりとドレスを脱がされていく。
「これも、取っていいよな？」

浩介くんが聞いてくる。
「好きにしていいわよ。あたし、あなたの『もの』になりたいの。だからお願い、あなた……」
浩介くんと抱きしめあっていると、呼び方が自然と「あなた」となる。
「あ、ああ……」
浩介くんの、欲望のままに、されたい。こうやってぎゅーっと抱きついていれば、冷めきった身体を、暖められる気がしたから。
ずっとずっと我慢していた思いが、一気に爆発するような感覚を覚えた。
あたしと浩介くん、愛し合ったあたしたち。
今までで、一番最高の思い出になった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
ベッドの上で激しく息切れする。
ウェディングドレスは乱暴に脱がされ、上半身は丸出しで、スカートが隠しているのはおへその近くだけ。
お腹の中が、さっきからずっと痛いわ。
とにかく、激しい運動だった。あんなに冷たかったのに、抱きしめ合うだけであまりに暑くて、こうしてあたしも浩介くんも、服を脱いでしまった。
もちろん浩介くんはもっと大変だったけど、あたしの元々の体力の無さを考えれば、どっちにしても激しい運動だったことは確かだった。
あたしは、足も大きく開いたまま、動けないくらい疲れてしまった。
ベッドのシーツと、ウェディングドレスのスカートの一部が、僅かに朱色に染まっていた。
ふと、ホテルの外の夜景が目に入る。
まるで、この東京中に見せびらかしているような錯覚を覚えたが、幸いにして近くに高層ビルはなく、あたしたちの様子が分かるような

建物はこの近くにはない。
これだけ広い都市に、多くの人が住んでいる。首都圏だけで、３００万人以上の人口がいる。
あたしたちにとっては最高の思い出でも、この街からすれば、取るに足らない一コマなのかもしれない。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
浩介くんに激しくぎゅーっと抱きしめられて、あたしは何度も何度も意識が飛びそうになった。実際、本番に入る前に、一回気絶しちゃっていたと思う。
ほんの一瞬だけど、あたしは視界が完全に真っ白になった。
「うー……うはっ……はぁ……」
浩介くんもまた、隣で息を切らし、あたし以上にぐったりしている。
あれだけ鍛えた浩介くんでもこうなっちゃうって、女の子に変われてよかったかも。って、それも今更かな？
「はぁ……はぁ……ふぅ……」
あたしは、徐々に息を規則的なものに直していく。
あたしの脳内は、全てが嬉しさの感情で支配されていた。
それだけじゃない、どうしても冷えがちな女の子の身体……浩介くんが冷え切っていたあたしの身体を、奥まで温めてくれたことで、浩介くんに対する、被支配欲望が、これ以上ないくらい満たされた。
「はぁ……ふぅ……ふぅ……」
また視界が霞んでいく。
そしてしばらくすると、またはっきりして来る。この繰り返しが続く。
「ふぅ……ふぅ……ふぅ……ふぅーーーー！！」
浩介くんも、あの出来事の後、崩れる様に倒れこみ、激しく息を切らせていた。体育の授業でも、あそこまで凄まじい身体能力を披露した浩介くんは見たこと無い。
それでも、そこはやっぱり浩介くんで、回復はあたしより早い。
思いっきり息を吐くと、もう呼吸は元に戻っていた。
「優子ちゃん、大丈夫？」

浩介くんが、ベッドから起き上がってあたしを心配そうに見つめている。
「あたしは大丈夫よ。こ、浩介くんこそ……大丈夫？」
「何とか、な……あ……」
「どうしたの？」
浩介くんがあたしの下を見ている。
でも視界は、お腹の方じゃなくてもっと下の足の方に向いている。
「優子ちゃん、血が……出てる」
「えへへ、出ないこともあるって聞いたから、よかったわ」
やっぱり、あの赤いのは血だった。
それを自覚した途端、また痛みが襲ってくる。
力、ちょっと強すぎたかな？　今度からはあんまり強く抱きしめるのは止めておこう。
「優子ちゃん、大丈夫か？　無理するなよ」
「うん……ありがとう……」
浩介くんだって体力の消耗は大変なはず。
それなのに、浩介くんはあたしを抱き起こしてくれて、半脱ぎになったウェディングドレスを全部脱がしてくれる。
「浩介くん……」
「熱いだろ？」
「うん、ありがとう」
今はこの部屋はあたしたちしか居ないから、涼しくなりたい。
「俺、優子ちゃんの人生に責任持つって決めたよ」
「うん……」
浩介くんは、さっきまでの熱狂がまるで嘘みたいに、とても真剣な表情で言う。
「こんなに痛い思いしたのに、それでも嬉しいなんて思ってくれたら、もう一生責任を取るしかねえだろ」
「うん……ありがとう……うっ……」
嬉しさで、涙ぐむ。あたしは、さっきも痛くて泣いた。
その時の浩介くんは「高月との話、やっぱ約束しないでよかった」何

て冗談を言っていたけど、今は何も言ってこない。
浩介くんはあえて何も声をかけずに、あたしをひたすら見守ってくれた。
「さ、優子ちゃん着替えようか」
泣き止むと、浩介くんが着替えるように言う。
「ううん、今日はもう、このままでいいわ」
今は暑いからと言って、このままじゃ風引いちゃうとも思ったけど、やっぱり今夜くらいはこのままでいいと思う。
ちなみに、浩介くんも体が熱くて堪らなくなって服を脱いでいる。
下半身に何もつけていなくて、上の部分だけ新郎の服のままで、頭寒足熱ならぬ頭熱足寒で、何だか面白おかしい不格好な感じになっている。
「うっ……優子ちゃん、その……言いにくいんだけどさ」
「ん？」
「優子ちゃんって、ずっと俺を見てるよね」
浩介くんが自分の体を指差していう。
「あはは、気付かれてた？」
ちょっとだけあたしがとぼける。
「当たり前だよ。普段男に胸見られてるって言ってるけど、女だって結構男を見てるの、男だって気付いてるんだから」
「え？　あたし、全く分からなかったわ」
男の人も、女の子の視線に気付いていたなんて、あたしよく分からない。
「おいおい、もしかして男だった時も、女性の視線に気付かなかった？」
「えーっと……」
あれ？　そう言えば、あれ？　一瞬だけ、優一のことが……そうだった。
「うん」
うん、確かに優一の時も、そんなこと意識したことはなかったわ。

でもなんかボケッとしちゃったわね。
そうか、あたしは浩介くんとこの夜を過ごして、優一の面影が完全になくなって、記憶の中の存在だけになっちゃったんだわ。
それ以前から、メスの本能は出てきたけど、今はもう、メスそのものになってしまったんだわ。
多分、初めてした後だからだとは思うけど、それでもどうしても、浩介くんから目が離せないから。
「優子ちゃん、もしかして？」
浩介くんが気付いたように言う。
「うん、もう、優一は完全に死んだわ」
あたしが、努めて淡々と言う。
今までしてきた努力、その集大成が、今日結集されたんだと思う。
「その……さ、優子ちゃん、おめでとう」
「うん、ありがとう」
あの時、ずっと引っかかっていたものが、いつの間にかすっと抜けて言った感覚がした。
そして、それが無くなれば、あたしは当然、今までそれに押さえつけられていた「女性」が出ることになる。
「多分、あたしはもう大丈夫だと思うの。今まで見たく、どこか女の子じゃない女の子って言うことにはならないと思う」
「何を言ってるんだ。優子ちゃん、学校に戻ってきたあの日からずっと女の子だったじゃないか」
浩介くんが励ますように言う。
でもあたしは、ゆっくり首を横に振る。
「確かに、表面的な立ち居振る舞いはそうだったわ。でも、あの後もあたし、『女の子として修行が足りない』って言われたこともあったし、そういうのを言われなくなった後でも、自分の中にも何か引っかかるものがあったわ」
「それってつまり？」
浩介くんは、まだ真偽を図りかねている。
多分、これはＴＳ病の患者にしかわからない感覚だと思う。

「本当の意味で、あたしが女の子そのものになるためには、今日の出来事が必要不可欠だったのよ、これでやっと、桂子ちゃんや恵美ちゃんたちと同じラインに立てたのよ」
つまり、それまではまだ、男の影響が至るところに残っていたということ。
でも、もう、これからは男の影におびえる必要はない。
「そんなに、重い意味だったんだな……」
「当たり前よ。こんなにきつくされちゃうと、ちょっとまずいかもしれないわ」
あたしは、今になって浩介くんに暖めてもらった冷めたお腹をさすって心配アピールをする。
「なっ、それをお願いしたの、優子ちゃんだったじゃん！」
浩介くんが抗議するように言う。
「ふふっ、それはもちろん、初めての夜だったからよ」
結婚初夜を特別な思い出にしたいというのは、あたしの願いだった。
だから、直前になって何かを探そうとした浩介くんを止めたのも、気分が高揚しきった時に浩介くんに懇願したのも、全部妻のあたしからだった。
男の子は好きな女性にはどうしても優しく出来てるから、理性が浩介くんを躊躇させないためにも、あたしの方から言い出す必要性があった。
「じゃ、じゃあ明日以降の新婚旅行の時は？」
浩介くんが心配そうに聞いてくる。
確かに、赤ちゃんが欲しいのも事実ではある。
「うーん、本当は出来ちゃってもいいと思っちゃってるんだけど、蓬莱教授のこともあるから、気を付けておきましょう」
初夜の初めてで、子供を授かるのも、とってもロマンチックなことだと思う。
でも、４月から大学生活が始まることを考えると、今はまだ、妊娠するのは待っておきたい。

「優子ちゃん、もしこれからの夫婦生活で妊娠しちゃったらどうするつもりなの？」
浩介くんは少し不安そうに聞いてくる。
「もちろん、あなたと愛し合って作った赤ちゃんだもん、殺すなんて絶対に嫌よ。だから何が何でも、産みたいわ」
「そうか……俺もだ」
「うっ……」
あたしは、中絶手術を受ける自分のことを想像してしまう。
嫌だ、絶対に嫌だ。お腹の中の赤ちゃんが死ぬくらいなら、あたし、あたしが死んじゃったほうがいい！
「優子ちゃん大丈夫!?」
浩介くんが慌てて聞いてくる。
いけないわ、そんな悪いことばかり考えては。
「うん、大丈夫……それにね、仮に中絶すると言って、あたしたちの両親が、いや、おばあちゃんが許してくれると思うかしら？」
「あはは、絶対に許してくれないと思う」
浩介くんが苦笑いしながら言う。
何せ、あたしの両親と浩介くんの両親の目的は、あたしたちを早期に結婚させるのではなく、早期に妊娠・出産をさせることで、今回の早婚も、あくまで手段でしかない。
しかも、ひ孫を欲しがる浩介くんのおばあさんの利害も絡んでいる。
「だったら、もし産んじゃったのなら、子育てもお義父さんお義母さんに任せちゃいましょう。出産を急かしたのは、向こうの方なんですから」
「ああ、そうだな」
浩介くんも同意してくれる。
そう、向こうが急かしたことだから。
そもそもこの結婚式だって、そんな理屈で両家両親負担と言う形になっている。
ただし、本来はもう少し小規模な結婚式で済ませる予定だったんだ

けど、蓬莱教授の支援金もあったので、こんな豪華な結婚式をあげることができた。

# 2人きりの夜　後編

「なあ優子ちゃん、お風呂沸かそう」
「ああうん」
浩介くんの声にあたしは立ち上がり、お風呂場につなぐ操作パネルを押して「自動」のボタンを押す。
ピッ
「お湯張りをします」
無機質な音声が流れる。
「あ、悪い待って！」
浩介くんが何かに気付いたように慌ててあたしを止めるけど、もう遅い。
「もう押しちゃったわ」
「見てくる」
浩介くんが大慌てで立ち上がり、お風呂場のある部屋にかけていく。
疲れたように下半身がかわいく揺れていて、あたしはうっとりしてしまう。
いかにもこってり搾り取られて、しわしわになっちゃってるのがたまらなくかわいいわね。でもガタガタと不安定そうだったし、明日以降の脚力に影響が出ないといいけど。
「あうっ……」
そんなことを考えていたら、急にあたしも自分が裸なのが恥ずかしくなってしまう。
近くの布団を掴んで、体を隠す。
あうー、あんなに激しく身体が熱くなってしまったとは言え、気軽に裸見せちゃダメよね。
母さんも、そう言うことを積み重ねていくと、旦那様から女としてみてもらえなくなるって言ってたし、反省反省。
「ふー、栓締めて無かったぞ」
お風呂場から帰ってきた浩介くんがちょっと戒めるように言う。

「あはは、ごめんなさい……」
「あのままだったらそのまま垂れ流しになってた」
浩介くんもちょっとだけしつけモードになっている。
「ふふ、でも浩介くん」
「え？」
あたしがゆっくりと浩介くんに近付く。
「お風呂の栓を締めて置いて、こっちがこのままなのね」
「え、あのその……」
あたしは、浩介くんの下の方から目が離せなくなってしまう。
浩介くんのたくましい筋肉の付いた足を目指す。
「優子ちゃんって、えっちだよね？」
「そりゃあ、女の子だもん。こんなの見たら、興奮しちゃうわよ」
あたしは、「メスの本能」で、浩介くんの足元に座り込んで、顔を浩介くんに近づけていく。
「さ、さっきもっとすごいことしちゃった後なのに？」
「うん、男の子は、1回しちゃったら2回目は大変よね」
実際、ぎゅーって激しく抱きしめあったせいで、疲れ切ってる様子みたいだし。
「あ、あのさ……」
「うん？」
「俺、これ以上したら、干からびちゃうから……」
浩介くんが、懇願するように言う。
確かに、さっきも最高潮だった時に浩介くんは信じられないくらい長い間続いていたしね。
いくら浩介くんでも、激しい運動をしすぎるのはよくないのも分かっている。でも……
「うん、分かってるわ。でも、ごめんね。あたしも、一人の女の子であると同時に、一匹のメスなのよ」
「うっ……」
本能に抗えないというあたしの言葉に、浩介くんが動揺する。
女の子でいたい、女の子らしくありたいと言う気持ちは、当然なが

ら容易に「メスになりたい」と言う気持ちと結びつく。
メスという言い方は、まるで動物のような印象を与える。
本来なら、人間だって動物だし、女性とメスは全く同じ意味と言っていい。
オスの女性とか、メスの男性なんてあり得ないものね。
それでもやはり、「メス」という言い方はかなり尖った言い方で、それはあたしの中の被支配本能がそうさせているのだと思う。
「あたし、浩介くんの……あなたのものになったわ。でも、時折こうして、我がままになっちゃうのよ」
あたしは、ゆっくりと浩介くんの腕に手を伸ばそうとする。
「ゆ、優子ちゃん！」
あたしに腕を掴まれると、浩介くんが少しだけ、大きな声を出す。
「ん？　どうしたのあなた？」
「優子ちゃんは、『もの』なんかじゃない！」
浩介くんが、あたしに怒った。
でも、思い通りにならないでわがままして怒るでも、悪いことをしたあたしに対して怒るのとも違う。
文字通り、あたしのことを心配して、あたしのためを思って怒っているという感じの言い方だった。
上から見下ろす形にならないように、浩介くんは、床に座り込んでいるあたしに合わせて、同じように座ってくれる。
「優子ちゃんは、女の子だろ？　これから困難があっても、俺たちは2人で乗り越えていくんだ。ものだなんて、それじゃまるで優子ちゃんは――」
「うん、浩介くん、本当にありがとう」
あたしはニッコリと笑う。
「あたしもね、分かってるわ。でもどうしても、あたしは抗えないのよ。いけないことは分かってるわ。これは自分を粗末にする考えだってことも分かってるわ」
あたしも、自分の考えを暴露していく。
「じゃ、じゃあどうして――」

「あたしが知りたいわ。結婚式が近付くに連れて、あたしはこんな考えが浮かんできたわ。その度に、あたしは自分の頭の中からこの考えを振り切ろうと頑張ってきたわ。でも抗えなかったの」
浩介くんがあたしのために怒ってくれたから、あたしも今の気持ちを包み隠すことなく浩介くんに伝える。
「……」
「あたし、何回も何回も『ものになりたいなんて考えはいけない』って自分に言い聞かせてたわ。だけどどうしても、この感情からは逃げられなかったわ。文字通り『もの』になりたいって……どうしても思っちゃうのよ……」
あたしの声が、少しだけ涙声になる。
これは夫婦になってはじめて、新しく出来た障害だと思う。
「優子ちゃん……」
浩介くんも、それ以上は言わずに、あたしの言葉を受け止めてくれる。
「あたしね、ちょっとだけ結婚生活が不安だわ」
あたしは、胸の内を暴露する。
「そ、そりゃあ俺だって――」
「ううん、浩介くんが考えてる不安とは違うわ。あのね、あたし、優しくて思いやりがあって、責任感も強くて、腕力も強い浩介くんが大好きだわ。でも、何故かは分からないけど、優しいだけだと、そのうち物足りなくなっちゃう気がしちゃうのよ」
「え？」
浩介くんがとても驚いた顔をする。
つまりそれは、あたしのことを「乱暴に扱ってほしい」と言っているようなもので、そんなお願いをされたら、誰だって動揺するに決まっている。
「理屈では、分かってるわ。こんなの異常なことだって、おかしいのはあたしの方だって、何度も振り払って我慢してきたのに、あたしの中でどうしてもこの気持ちが出てきてしまうのよ」
「……優子ちゃん、人間誰だって変な所はあるよ。優子ちゃんだって

そうじゃない？」
　しばらくして、浩介くんが口を開き、また優しそうに言う。
「え、でもこれは――」
「優子ちゃんが普通と違うところ、ＴＳ病ってこと以外にも、たくさんあるよ」
　浩介くんが、今度は諭すように言う。
「え？　例えば？」
「顔が飛びっきりかわいいとか、胸がとても大きくてエロいとか」
　浩介くんが、半笑いになりながら言う。
　ストレートにそんなことを言われて、あたしは一瞬で顔が真っ赤になる。
「……もう、ばかっ！」
　あたしは、照れ隠しの言葉を言う。
「でも事実だろ？　街を歩いてたら、優子ちゃんよりかわいい子なんていないだろ？　優子ちゃんより胸大きい女性だって、俺は見たことねえぞ。つまり、普通とは違うってこった」
　浩介くんは真顔だ。
　本当、浩介くんってたらしの才能あるわよね。まあ、あたしだけに向けてくれるっぽいからいいけど。
「うー、確かにそうかもしれないけどー」
　あたしは、まだ納得がいかない。
　そもそも顔がかわいいとか胸が大きいは外見上の話で、歪んだ被支配欲は、内面上の話のはず。
「それにね、もし優子ちゃんがその気持ちに抗えないなら、俺たち２人で乗り越えて行こうよ。結婚したんだろ？」
「う、うん……」
「優しいだけじゃ物足りねえってんなら、物足りなくなった時に行ってくれよ。最初は恐る恐るだけど、やりすぎないように気を付けながら、少しずつ強引なプレイも覚えていくから、ね」
　浩介くんは、優しい表情で、強引なこともすると宣言した。
　正直ギャップのある光景だけど、あたしには一番嬉しい回答だっ

た。
「うん、浩介くん、ありがとう」
「ああ、優子ちゃん、愛してるよ」
「あたしも……」
最後に、愛の告白も忘れない。
やっぱり、浩介くんはあたしにはもったいないくらい、素敵な旦那だわ。
ピロリロリン！　ピロリロリン！
「お風呂が、湧きました」
短いメロディと共に、再び無機質な女性の機械音声が流れる。
どうやら、お風呂が沸いたらしいわね。
「じゃああたし、お風呂に入ってくるわね」
「おう」
あたしは、立ち上がり、一旦キャリーバッグの所に戻り、着替えのパジャマとヘアゴムを取ってから、改めてお風呂場のある部屋を目指す。
むにんっ！
「きゃあ！　もう！　えっち！」
お風呂場に行こうとした矢先に、浩介くんから思いっきりお尻を揉まれてしまう。
今は浩介くんに下着を含めてウェディングドレスを脱がされていて、全裸なので当然直接鷲掴みされた格好になる。
「いやあその、かわいい愛する嫁が全裸になってたら、お尻くらい触りたくなるでしょ？」
「もー、またそういうこと言ってー！　これじゃ怒れないじゃないのー」
ともあれ、浩介くんも性欲が復活してきたみたいね。
脱衣所には、さっき持っていったパジャマを置くだけ。
見た感じではバスタオルも多く、また鏡も大きくて、歯ブラシと歯磨き粉は無論のこと、洗濯機まで置いてあった。
本当にこの部屋、至れり尽くせりね。

あたしは、脱衣所兼洗面所を尻目に、扉を開けてお風呂場へと足を踏み入れる。
「おー」
やはり、スイートルームはお風呂も素晴らしいわ。
家のお風呂よりも広い空間で、浩介くんでも、足を広々と伸ばせそうね。
あたしはまず、シャワーを少量流す。
こちらも既に温まっていたので、そのまま体を洗い流す。
タオルは数枚あって、あたしはピンク色のタオルを手に取り、ボディーソープを取ってよく泡立てる。
結婚してから初めてのお風呂なので、入念に洗いたい。
特に脇の下は気を付けてやさしくっと。
「ふう」
髪の毛以外を全て洗い終わったので、一旦シャワーで全て流したら、あたしは髪の毛を洗う。
毛先の方は、背中の汗を吸収しちゃっているから、特に痛みには気を付けないといけないわね。
「ルンルンルンー♪」
あたしは、上機嫌に鼻歌を歌う。
今日みたいに疲れた一日は、こうしてお風呂に入ると本当にさっぱりするわ。
髪の毛はもちろん、シャンプーとリンスを併用し、丹念に洗っていく。
サラサラでストレートのロングヘアーを保つのは、不老のＴＳ病患者でも難しいことだと思う。
でも、浩介くんは他の男子に漏れず、黒くて長い髪が好きそうだし、今更イメチェンをする予定はない。
あたしは、髪の毛をお団子に縛りあげて、湯船の中に入る。
「ふー」
ようやく一息つけた安息の時間、足を延ばしながら今日一日のことを思い出す。

今日は間違いなく、あたしが女の子になった日に次ぐ、人生で大きな日になった。
浩介くんに恋した日や、プロポーズされた日も大きな記念日だけど、それも今日ほどに大きな日ではない。
今日という日は来年から、結婚記念日になる。
小谷学園を卒業して、浩介くんと婚姻届を出して、そして結婚式を開いて……何より、浩介くんに初めてを奪われた日でもある。
「何て素敵な一日だったのかしら」
物語の類型に、「ループもの」と呼ばれるものがある。
これは、ある物語において、普通に物語が時間通りに流れる訳ではなく同じ日、同じ出来事を何度も繰り返しているというもの。
もし、明日起きた時に、実家のベッドで起きて、卒業式から始まったらどうしようかしら？
それが続くのは、とっても素敵だと思う。あ、でも、あんなに痛いのが何度も続くのは勘弁かな。
もちろん、そんな都合のいい話は、漫画やアニメ、小説といった架空の世界の中での話、それに、明日から始まる新婚旅行だって、きっと素敵な思い出になる。
「明日も、頑張らなきゃ。心も、体もね」
あたしは、一瞬抱いたループへの誘惑を断ち切り、明日のことを考える。
明日は、あたしたちの住んでいる関東を中心に観光する。そして明後日以降、まだ雪も残る東北の温泉地に行くことになっている。
温泉でゆっくり休む新婚旅行は、人によっては物足りなさを感じるかもしれない。
だけど、あたしたちにとっては、観光よりもしたいことがある。
……あれ？　ドア空いていたかしら？
「うーん、まああいいわ」
あたしは、気を取り直してもう一度、今度は新婚旅行後のことを考える。
浩介くんの家へは、ゴールデンウィークの花嫁修業の時に泊りがけ

で行ったことはある。
とは言えあの時は予行演習で、今は違う。
もし蓬莱教授の研究が完成すれば、ずっとずっと、それこそ何百年でも何千年でも、浩介くんと一緒に暮らすことになる。
もちろん、引っ越しをすることもあるかもしれないが、今の所はそうした予定はない。
あたしがまず思ったのは、義両親がいる中での夫婦生活の実践方法、これについては、大学在学中は、義両親がいない時間帯を狙うことでうまく行くだろう。
もしどうしても長期間時間が取れなさそうなら、浩介くんをラブホテルに誘うのもいいかもしれないわね。
「……」
あたしは、ふともう一度扉を見る。
さっきよりも明らかに開いている。
というか、浩介くんがあたしのお風呂を覗いているのがはっきり見えた。
お風呂を覗かれて、あたしの中で急激に羞恥心が芽生えていく。
「きゃー！　えっちー！」
「おわっ！」
あたしは反射的にシャワーを手に取って全開にし、浩介くんが覗いている場所に当てるが、間に合うはずもなく、ドアが閉められて、空しく反射していた。
「くすっ」
あたしから、自然と笑みが溢れる。
何てことはない、単なる普通のスキンシップだった。
お互いが笑いあい、楽しみあい、そんな夫婦生活の、一コマに過ぎなかった。
あたしは、さっき浩介くんにお尻を触られた時のことを思い出す。
今までもそうだったけど、多分同居して、これからは何度もああしたセクハラを浩介くんにされると思う。
その度にちょっと怒って、浩介くんに恥ずかしいセリフ言われて、

しおらしくなっちゃって、何回同じことを繰り返すんだろう？
やっぱり、ずっと繰り返したいわ。そのためには、やっぱり蓬莱教授の研究に協力しないといけないわね。
一通り入ったら、あたしは体を拭いてパジャマ姿になる。何だかんだでもうすぐ日付も変わるから、寝る時間だ。
長い長い、あたしの人生で一番長い日が、終わろうとしていた。
ガチャッ
「浩介くん、出たわよ」
「あいよ」
あたしの声に、浩介くんが反応し、入れ替わるように脱衣所へと消えていく。
あたしは、何の気なしにテレビのニュースを見る。
様々なことが起こっているけど、あたしたちの結婚はもちろん報道されていない。
ネットメディアの高島さんの所で、少し特集される程度よね。いや、普通結婚したことがそうやって報じられるだけでも、大変なことだとおもうけど。

あたしはまた、さっきのことを思い出す。
きっと同じことは、これからの夫婦生活で何度も何度も起こり得ることだと思う。
多分、今回ほどに激しく痛みを覚えたのも初めてで、もう二度と訪れないとは思うけど。
「ねえ、浩介くん」
あたしは誰もいない部屋で、一人浩介くんに語りかける。
「あたしたち、幸せになれるよね？」
もちろん、答えは返ってこない。
だけど、どこからか「ああ、もちろんだとも」という声が聞こえた気がした。
あたしは、テレビも消し、冷蔵庫の中にあったオレンジジュースを飲む。

「ぷはー」
お風呂上りの一時、でも、お風呂で暖まった熱よりも、さっき浩介くんがあたしの体を暖めてくれた熱の方が大きい。
そんな熱々の肉体に冷たいオレンジジュースはキンキンに冷えていく。
ガチャッ
「お待たせー」
しばらくして、あたしのお風呂より短い時間で、浩介くんが出てきた。
浩介くんは何も言わず、あたしの隣に腰掛けると、別のオレンジジュースを取り出して飲み始めた。
「あー、すげえ冷えてんなこれ！」
一口飲んだ浩介くんが感激の声を上げる。
「うん、すごい冷えてるわよね」
「この冷蔵庫凄いのかな？」
浩介くんが疑問を投げかける。
「うーん、そうは言っても、冷蔵庫の能力はそこまで変わらないでしょ」
もちろん、あたしは家電の専門ではないのでよく分からないけど。
「やっぱお風呂上がりだからかな？」
「う、うん……そうだと思う、わ」
あたしはぎこちなく応対する。
浩介くんも、顔が真っ赤になっている。多分、さっきのことを浩介くんも思い出しているんだと思う。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「あたし、眠くなっちゃった」
そもそも、もういい時間で、明日の新婚旅行の出発は時間があるとは言え、やはり睡眠は多くとっておきたい。
「だな……寝るか」
浩介くんがボタンを押す。すると、カーテンが自動で閉まりはじめ

た。
「至れり尽くせりね」
「本当、ここにいたらダメになりそう」
「あはは」
浩介くんが枕元の小さな電気を除く、全ての電気を消す。そして、1人で使うにはあまりにも広すぎるベッドにそれぞれ入った。
「優子ちゃん、お休み」
「うん、お休み」
浩介くんと「おやすみなさい」をして、あたしが枕元の電気を消すと、部屋から光は失われ完全に真っ暗になった。
「……」
あたしは、疲れから逃げたい一心で、何も考えずに、睡眠へと進んでいった。

# 別れ　そして新たな始まり

「……」

真っ暗な場所にあたしは一人で佇んでいた。

そこは暗くて何も見えない、常闇の空間だった。

ふと、朝日のようなものが差し込まれた。すると、あたしの立っている場所がどこかがわかった。

「ここ、学校の教室？」

そこは、小谷学園の、それも窓から推察するに2年生の教室だった。

学校なら、昨日卒業したはず。

「だから、てめえが悪いんだろうがこの野郎!!」

背後から、懐かしい声がした。

振り返ると、男がもう一人の男に怒鳴っていた。

「優一！」

一瞬見えたかお間違いなく優一のもので、桂子ちゃんが優一を「また」という感じで見ていたのも見える。

これ、あたしが女の子になる直前の日……そんなはずはない、そう思った瞬間、視界が突如様変わりした。

「ここ、優一の部屋？」

次に見えたのは、優一だった頃のあたしの部屋だった。

優子の時の部屋と正反対な、殺風景で散らかり気味の部屋。

ベッドにはお人形さんも、ぬいぐるみさんもなく、カーテンや布団の色も違い、本棚も少女漫画や女性誌ではなく、少数の少年漫画と萌え系の漫画やラノベが置いてあった。

変わってないのはパソコンとテレビだけ。

視界が徐々に霞み、今度は普段使っているあたしの部屋になった。

「あ……」

ハート型クッションの上に、ボロボロになったもう一人のあたし……優一を見つけた。

それはほとんど肉塊のような感じで、今にも消えそうになっている。

「よお……また、会ったな、もう一人の俺……心優しい俺……」
肉塊からの声が、頭の中に直接語り掛けてくるように響く。
その声は、今まで以上に苦しそうだった。
「その声……優一なの？」
「ああ、そうだ……なあ……優子……いや、もう一人の俺よ」
懐かしい声で、俺があたしに語りかけてくる。
「うん」
「お前は、どうして俺が道を踏み外したか、覚えているか？」
「……」
あたしの記憶の中で、あたしが乱暴になったのは、中学の時のこと。
折り合いの悪いクラスメイトの男子がいて、殴り合いの喧嘩で勝ってから、だった。
それ以降、暴力までは行かなかったけど、怒鳴りつければ押し通せると学習してしまった。というのも、優一は力も強かったから。
「覚えてる、ようだな。もし……あいつがクラスメイトじゃなかったら……げほっ……俺は、乱暴には……ならなかったかもしれねえな」
まるで命を削るように、あたしの頭に響かせて来る。
肉塊は、微動だにしていないのに。
「あの……」
「人間と言うのは、変わるのは難しい生き物らしい……でも、大きなことがあれば……ぐふっ……変われるんだぜ……俺、みてえにな……」
肉塊は、あたしの言葉を無視するように語りかけてくる。
優子になったあたしは、優一とは何もかもが正反対になった。
乱暴で横暴で強引で怒りっぽかった優一は、健気で押しに弱くて気弱で泣き虫な優子に生まれ変わった。
結婚式の夜もそうだった。
あたしは浩介くんに、為されるがままにされた。
「優一と優子……知識がねえ奴は……同じ人間とは思わねえよな……」
そう、あたしが変れたのは、性別が変わり、容姿と身体能力に大きな違いが生まれたことが、根本的な成功要因だと思う。

目覚めたあの日、あたしは名前を優子に変えて、女の子になることを決心した。
女の子として生きていく、最初は永原先生の話を聞いて、半ば仕方なくという感じだった。
だけど、その日の夜に考えた末に、自分の悪行の連鎖を止める最後のチャンスだと思った。そして、あたしは名前を変え、女性として生きることを固く誓った。
最初の日は、自分の体に慣れることさえ、出来なかったし、カリキュラム中も、様々な男女の違いに戸惑い続けた。
その後だって、初期ほどじゃないけど、男女の違いに戸惑うことは多くあった。
「嗚呼……俺はとうとう……正真正銘の女に……女に……なっちまったんだもんな……」
もう一人のあたしが言う「女になった」、今はそう最初のあの日に感じた「女になった」とは重みが違う。
今は、もう戸惑いもない。浩介くんという素敵な男性と結婚し、多分これから赤ちゃんを作って、子供を育てて、そんな幸せを得ることが出来るんだと思う。
「お前は……いや、俺は篠原と……幸せを手に入れたんだな……俺が一番、ひどいことした奴と……本当に、すげえよ……俺は……」
優一は、あたしのことも「俺」と言うけど、どこか他人事のようにあたしに話しかける。
でも、この肉塊もまた、あたしの中に残った優一の名残だった。
「うん、これからも頑張るわね。あっ……」
肉塊が、少しだけ消えていくのが見える。
「篠原との赤ちゃん……今すぐじゃなくていいから……ちゃんと、産むんだぞ……俺……」
「う、うん……分かってるわ！」
優一の声が、先程よりもかすれ始める。
「あいつも……変わったよな……あいつだけじゃねえか、高月も……木ノ本も……げほっ……田村も……先生も……」

「うん、浩介くん、とっても素敵な男の子になったわ」
「ああ……結婚、おめでとうな……」
肉塊が、どんどん消えていく。
「悪い、そろそろ……限界だ……」
声が更に、聞こえにくくなる。
「……もう、いなくなっちゃうの？」
「ああ……俺が今日夜にあいつとしたことで……はぁ……すっかり力もなくなっちまった……ぐぅ……でも、これでいいんだ……」
「うん、後悔はないわ、安らかに眠ってね。もう一人のあたし」
「心配するなよ……お前の……いや俺の中で……俺が、消えても……うっ……俺の記憶からは……記録からは……消えねえ……よ……」
肉塊が、光に包まれていく。
「俺の中に……俺は残る……姿は表せねえが……がはっ……見守って……やる……ぜ……」
そして、眩しい光とともに消えていく。
「さようなら……」
「……」
あたしの返事に、聞き取れないくらいのかすれ声が聞こえると、ハート型のクッションの上には、何もなくなってしまった。
「夢……だよね？」
リアルな夢だったけど、あたしには分かる。この夢はもう、見ることはないと。
あたしも、意識が薄れていった。

「んっ……」
モーニングコールも無ければ、暖房もつけてない。
ホテルのスイートルームは、極めて静寂な空間になっていた。
目を開けようとするが開かない。
瞼の奥からでも分かるくらいに、朝日がまぶしい。
そうだわ、えっとこういう時は布団で目を覆って……
……よしっ。

布団の中で目を覚ましたら、まずは一枚布団を剥ぎ取る。
少しだけ、外が明るくなる。
次に目から直接見えない範囲で、布団を開く。
徐々に明るさに慣らしていき、あたしはやっとの思いで起床した。
こんな高層で寝起きしたのは人生でも初めてで、東側から凄まじくまぶしい太陽が出ていた。
カーテンを閉めても、その威力はすさまじく、隙間から容赦なく朝の日光が襲い掛かってくる。
「お、優子ちゃん起きたか」
「浩介くん……」
浩介くんは既に起きていた。
と同時に、机の上にはエナジードリンクを飲んだ跡があった。
「浩介くん、どうしたの？」
「ああ、ホテルの中のコンビニで買ったんだ。優子ちゃん、すごい勢いで俺のエネルギーを搾り取ってくるからね」
浩介くんの爽やかな物言いに、あたしはぼんっと顔が真っ赤になってしまう。
「と、とにかく着替えるわ。昨日のお風呂みたいに、覗かないでね」
「分かってるって、でもたまには見せてほしいかな？」
浩介くんが軽く聞いてくる。
「ダメよ。旦那様にも秘密にしたいのが乙女ってものよ」
「へいへい」
あたしにも女として、譲れない所はある。
ぽんぽんとエロい所を見せて、恥じらいがないのは一番幻滅されるものね。
特にあたしは不老の人間だし、浩介くんも不老になったら、結婚生活を百年千年あるいはもっと上の単位で続けていくことも考えないといけないからね。
あたしは、キャリーバッグを引いて、和室の中に入る。
バッグの中から、今日の着替えを探す。ちなみに、今着ているパジャマなどは郵送で浩介くんの家に送られることになっている。

学校の制服は、浩介くんの要望もあって新婚旅行に持っていくらしい。まあ、何故かはあたしにも分かるけど。
新婚旅行の最初の日、あたしは、赤い巻きスカートに赤い服を選ぶ。
この服は何度もお世話になった。そして、この服と一緒に抱えるためにぬいぐるみさんを取り出す。
浩介くんがプレゼントしてくれた、お魚さんのぬいぐるみ。
「よしっ！」
あたしは、着替え終わったパジャマなどを、和室のかごに入れる。
浩介くんが昨日着ていたパジャマもそこにある。
一瞬だけ、浩介くんの下着の匂いを嗅いでみたくなったけど、慌てて誘惑を振り切ると、和室の扉を開けて部屋へと戻った。
「お待たせー！」
「お、優子ちゃん、その服よく着るよね」
「うん、お気に入りなのよ」
実際、この服はデートの時の勝負服になっている。
「そうか、さ、朝食にしようぜ」
「うん、洋食と和食あるわね」
「うーん、和食にしようか」
「ええ」
朝食は階下でバイキングか、ルームサービスを選べる。
ルームサービスは当然スイートルームの特権なので、あたしたちは迷うことなくルームサービスを選択した。
朝食のルームサービスも、フロントへ内線をかけて、そこからルームサービス呼び出し用のコールをかけるだけ。
和食が2個の場合のコールを、浩介くんがかけていく。
電話こそ使うが会話は一切必要ない。
「よし、これでよし」
ルームサービスの場合、スイートルーム内にある、テーブルで食事を取ることができる。
その間、あたしたちはカーテンを開け、外の景色を見た。
東側なので、協会も入っているビルがある高層ビル群は見えない。

代わりに、巨大な尖塔などを中心としたビル群が遠くに見える。
眼下には、人々がせわしなく歩いていた。今日は日曜日だけど、それでも休日出勤と思われる人々で賑わっていた。
「すげえ人の数だよな……」
「うん」
浩介くんが小さくつぶやく。
「夜だったとはいえ、俺たちカーテン開けっ放しで――」
「あうあう――」
浩介くんの話に、あたしは嫌でも昨晩のことを思い出してしまう。
窓の手をつけてお尻を突き出す格好にさせられ、あたしの目にはあの時の夜景が脳裏の焼き付いている。
東京中の人々が、乱れたウエディングドレス姿になったあたしのことを見ていたような気さえしていた。もちろん、実際には誰も見てなかったんだけど。
もう一度、あたしはベッドに座り込む。
改めて分かったが、このベッドはとにかく柔らかい材質でできている。
あたしは、浩介くんにパンツ見られないように注意しつつ、ベッドの横になる。
「ふうー」
浩介くんも、これからの新婚旅行のため、ここでは一休みする。
コンコン
「はーい」
ゆったりとくつろいでいたら、突然遠くでドアを叩く音がした。
どうやら、ルームサービスが来たみたいなので、あたしたちは大急ぎでベッドから起き上がり、扉を開けた。
「お待たせいたしました。こちら朝食の和食2人前になります」
「はい」
「どちらにお置き致せばよろしいでしょうか？」
スタッフさんが聞いてくる。
「えっと、メインの部屋のテーブルに」

浩介くんが応対する。
「かしこまりました」
スタッフさんを部屋の中に入れ、テーブルの上に置いてもらう。
「それではごゆっくりおくつろぎください。失礼いたします」
礼儀正しくお辞儀をし、ホテルのスタッフさんが部屋を去っていく。
「じゃいただきます」
「いただきます」
夫婦揃っての初めての朝食、浩介よりもずっとゆっくりのペースでご飯を食べる。
お箸のマナーや作法には特に注意しないといけないわね。
「はむはむ、出発は、どんな感じで出ればいいと思う？」
「うーん、確か駅までタクシーだっけ？」
「そうそうホテルにチェックアウトしてからタクシーまでの見送られ方、どうしようかと思って」
浩介くんは少し悩んだように言う。
「うーん、普通に歩くだけじゃダメよね」
腕を絡ませるとしても、キャリーバッグがそれぞれある。
片手で引けないこともないけど、そっちに意識が集中しすぎちゃうのもまずいわね。
「とりあえず、なるべくくっつくか」
「うん、そうするわね」
あたしたちは、ご飯を食べ終わり、机に放置する。
こちらも、後でホテルの人が回収してくれることになっている。
まだ時間があるので、あたしたちはテレビを付ける。
ちょうど気象予報をやっていて、アナウンサーが「おはようございます」と外で大きな声で元気よく話している。
「あたし、アナウンサーにはならないわ」
「ああ、優子ちゃんは、ただでさえ目立つんだ。平穏な暮らしのためにも、俺がきちんと稼いで、専業主婦させてあげねえとな」
「ふふっ、ありがとう」

浩介くんは、あたしに少しでも楽になってもらいたい気持ちなんだと思う。
とはいえ、家には既にお義母さんという専業主婦がいるので、あたしもあたしで、しばらくはどこか勤めに出ないといけないと思う。
老化による寿命のある人なら、宝くじで何億円とか当たれば、貯金を崩すだけで暮らしていけるだろうけど、あたしの場合そうも行かない。
恒常的かつ、安定した生活が必要になる。そう言う意味では他の人よりも大変かも。
「にしても、平和だよなあ」
「うん」

「さあ、続いては、来年に迫った東京オリンピックです」
この時期になると、来年開かれる予定になっている東京オリンピックの話題が勢い増えていく。
前回東京で行われたオリンピックは５５年前のこと。
あたしたちはもちろん、母さんたちも生まれる前の話、知っているのは永原先生とか協会の人たちになる。
「東京オリンピックかあ……」
浩介くんが呟く。
「色々あったけど、遂に開かれるのよね」
様々な難題にぶち当たった東京オリンピックだけど、それでも開かれることになれば何だかんだで盛り上がる。
もちろん、まだ1年あるとは言っても、あたしたちも楽しみだ。

「さて、そろそろ準備するか」
「うん」
新婚旅行の準備といっても、ホテルの中にある私物で、旅行に持ってくものを確認し、キャリーバッグの中に入れるだけ。この部屋に置いていく私物は郵送で浩介くんの家に行く。
幸い、キャリーバッグはよく見るとそこまで大きくなくて、新幹線

などでは問題なく使えるようになっている。
「よし、優子ちゃんは大丈夫か？」
「う、うん」
あたしが、準備完了の返事をする。
このスイートルームとも、お別れになる。
「よし、じゃあ1階に行くか」
「ええ」
浩介くんは、ホテルのカギを取ってバッグを引いていく。
浩介くんが先導し、あたしが後ろについていく。
頼もしい浩介くんの背中に、ぴったりついていく。
部屋を出て、エレベーターに乗り、直行でフロントに到着する。

「あ、篠原さん、起きました？」
「はい」
永原先生と、昨日ここに宿泊していった見送り組がそこにはいた。
時間的にも、おそらく昨日このホテルに泊まった人は全員ここにいるはず。

「その、優子さん……新婚旅行、頑張ってください」
「同じく」
幸子さんと歩美さんがあたしを応援してくれる。
「優子ちゃん、佐和山でまた、よろしくね」
「うん、桂子ちゃんも、良い春休みを」
今度は桂子ちゃんだった。
「あの、優子さん……いい思い出に……してくださいね……」
さくらちゃんがあたしを励ましてくれる。
「優子、あたいはプロに行くけど、お前のことは忘れねえぜ」
「うん、恵美ちゃんも女子力向上頑張ってね」
「お、おう……」
恵美ちゃんと言葉を交わす。
これは最後の会話、なんてことにならないといいわね。

「優子さん優子さん、昨日の浩介さんはどうでしたか？」
「え、どうって――」
「もー言わせないで下さいよー！　初めての経験だったんでしょ!?」
　龍香ちゃん、本当にいつも通りよね。
「もう！　龍香ちゃんには教えてあげない！」
「そんな殺生なー！」
　あたしは顔を真っ赤にして怒るが、その態度が既に「満足している」といっているようなものだった。
　浩介くんも、高月くんを中心とした男子に捕まっていて、「優子ちゃんを泣かせるな」とか、「ヒーヒー言わせてやれ」「誘われたらちゃんと毎晩応じるんだぞ」といった声が聞こえてくる。
「優子、離婚するんじゃないよ。私も、そろそろ本格的に、彼氏探すからさ」
「うん、虎姫ちゃんも、頑張ってね」
　あたしは、仲の良かったクラスメイトたちと挨拶をし、続いて母さんたちと挨拶する。
「優子、新婚旅行、失敗しないようにね」
「うん」
「いい？　旦那さんから触ってもらえるうちが華よ」
「分かってるって」
　あたしも、元は男だから、それくらいは分かっているわ。
「さ、優子、そろそろ時間だ」
　父さんの声とともに隣にいた浩介くんとほぼぴったりくっつく。
　周囲を見渡すと、あたしたちを見送ってくれる人がたくさんいた。
「それじゃあ、言ってくるわね」
「「行ってらっしゃーい!!!」」
　大勢の声がこだまする中、あたしはホテルの出口へと向かう。
　ホテルのスタッフさんも「いってらっしゃいませ」とお辞儀する。
　自動ドアが開くと、目の前にタクシーが見えた。
　後ろから、みんなからの見送る声が、自動ドアにさえぎられて聞こえ辛くなる。

タクシーのドアが開き、まずは荷物を後ろのトランクに入れ、続いてあたしたちが車内に乗り込む。
「えっと、東京駅まで」
「分かりました」
時刻は午前１０時を回った時間帯、あたしたちの旅は、始まったばかりだった。

# 新婚旅行1日目　最初のスポット

タクシーは、渋滞の多い道路を進んでいく。
東京の道路なので、とにかく信号が多い。
しばらくすると、東京駅のオレンジ色の建物が見えてきた。
浩介くんは、メーターと格闘している。
タクシーは初乗りもだけど、結構値段が上がっていくスピードも速い。
とはいえ、バスとも違い、基本的にあらゆる場所で乗り降りできるのがタクシーの強みだ。
「はい、お客様、つきましたよ」
「ありがとうございます」
タクシーの運転士さんにお金を支払い、あたしたちはキャリーバッグを下して東京駅へと入る。
この駅は、数年前にリニューアルされ、まだ真新しい。
あたしたちは、「上野東京ライン」と書かれた案内へと向かう。
最初の目的地は、大宮にある鉄道博物館に決まった。
日曜日なので混雑はしていると思うけど、ともあれ東京の近くもめぐるという発想から、鉄道博物館が最初に選ばれた。
この後、あたしたちは新幹線で仙台に行き、そこで宿泊することになっている。
ちなみに、明日以降は全て温泉宿だけど、この日だけはラブホテルにした。
これは、前日の興奮がまだ冷めないようにという思惑もあるし、義両親とも同居するので、機会がめぐってこなかった時のための予行演習も兼ねている。
あたしたちは、エレベーターを使い、駅のホームに移動する。
「グリーン車は足元の数字――」
あたしたちは、あらかじめチャージしてあったＩＣカードを取り出し、グリーン車の事前購入コーナーに並ぶ。
そう、今回の旅、蓬莱教授からの散財要望もあって、在来線はグリー

ン車、新幹線もグランクラスが使われることになった。
今日は日曜日で、グリーン車もホリデー料金という安い金額になっている。
平日は着席要望のあるサラリーマンなどが中心となって利用することが多いらしい。
確かこのＩＣカードで、座席の上にタッチするんだったわね。
さて、これが済むとあたしたちは、品川から来た電車を待つことになる。
グリーン車にも、何人かが乗り込もうと並んでいる。
「上と下、どっちにする？」
浩介くんが聞いてくる。グリーン車が２階建てなのはよく知られた話だ。
「うーん、上で」
なんか景色良さそうだし。
「分かった」
浩介くんも、了解してくれる。
そして、いつものチャイムと共に、「小金井行き」が来る。
電車は、このあたりで使われている標準的なもの、側面には「サロＥ２３３―３０２３」とある。
ちなみに、目的地は大宮なので、来た電車にそのまま乗ればいい。
１５両の長大編成の電車が入る。
あたしたちの前には、２階建ての電車が威圧感を持って待ち構えてくれる。
「扉狭いから気を付けろよ」
「うん」
浩介くんが注意してくれる。
このグリーン車は、少しでも座席数を稼ぐためか、扉が他の車両より小さい。
新幹線もこんな感じだったわね。
「階段きついわね……」
「こっち行ってみようぜ」

浩介くんは階段とは逆方向に向かう。
「こっちにも座席あったんだな」
「ええ」
そこは平屋のグリーン車で、幸いにして、荷物置き場も上部に取り付けられていた。
「よっと」
それを見た浩介くんがひょいと鞄を上に持ち上げる。
「うーん!!　はぁー!」
あたしも浩介くんの真似をしてみたけど、鞄が少し持ち上がるだけで全然ダメだわ。
「ほら、優子ちゃん貸してみ?」
「うん」
ひょい
浩介くんがあたしの荷物を軽く持ち上げて上においてくれる。
「ありがとう……」
また、胸がキュンとしちゃうわ。
「小金井行き間もなく発車いたします、ご注意ください」
ピンポーンピンポーン
音とともに扉が閉まり、あたしたちは窓の外を見る。
「この電車はこの電車は上野東京ライン、宇都宮線直通、小金井行きです。グリーン車は4号車と5号車です。グリーン車をご利用の際には、グリーン券が必要です。グリーン券を車内でお買い求めの場合、駅での発売額と異なりますので、ご了承ください。次は、上野です」
おなじみの、いつもの日本語と英語の放送が流れる。
数年前まで、東京駅と上野駅の間に、東海道から入ってくる列車はなかった。
なので、もしあたしたちの生まれが早かったら、あの時のタクシーの目的地は上野駅になっていた。
まあ、そっちもそっちで、いい思い出にはなると思うけど。
「にしても、結構急な上り坂だな」
「うん」

もともと、限りあるスペースに作ったので、結構無茶なルートにも見える。
あたしは車窓を見る。
電気街を通過していくのが見えた。
そして、そのまま列車は上野駅へ。
上野駅では、何人かの人が乗ってきた。
休日のグリーン車ということで、あたしたちの車両には老夫婦が乗り込んできた。
「ふう、一息つけるわね」
「ああ」
長年連れ添ったという感じ、あたしはああはならない。
電車はまた何駅か通過後、別のルートに入っていく。
「間もなく、尾久、尾久です」
「永原先生の話だと、このあたりは車両基地みたいで、北海道へ向かう客車列車なんかを置いていたらしい」
浩介くんが永原先生の話を話してくる。
「え？　浩介くん、どこでそれを？」
「あーいや、こんなノートが鞄の中にあったんだ」
浩介くんが小さなメモ帳を服のポケットから出してくれる。
「どうもこいつには、新婚旅行で使う鉄道に関することがびっしり書いてある。博物館についても、だな。先生によれば、『こいつを見ながら、旅行をより楽しんで欲しい』とのことだ」
「あ、あはは……」
ともあれ、永原先生の厚意は素直に受け取っておこう。
次の駅は赤羽駅、そして浦和駅、さいたま新都心駅、大宮駅の順番で停車することになっている。
赤羽駅を出ると、またしばらく、右側の水色の駅を次々通過するようになる。
「あれが各駅停車みたいなものなのね」
「ああ、そういうことになるな」
次々と駅を通過していき、その間にも1本ほど列車を抜いていっ

た。
　そうこうしているうちに、列車はあっという間に大宮駅が近い放送が流れた。
「さ、降りるぞ」
「うん」
　浩介くんの言葉とともに、浩介くんは荷物棚からキャリーバッグを取り出してくれて、あたしたちは出る準備をする。
「足元、気をつけろよ」
「分かってるわ」
　浩介くんの注意通り、ドアが開いたらすぐに出る。
「博物館までは歩いてもいいんだが、せっかくだし『ニューシャトル』っていうのに乗ろうぜ」
「ニューシャトル、そう言えば、さっき放送でやってたわよね」
「そそ、こっちらしいぞ」
　鉄道博物館は、どうもＪＲの肝いりで大々的に建設されたもので、以前は秋葉原に「交通博物館」としてあったものだったらしい。
　ともあれ、あたしたちは「ニューシャトル」と書かれた乗り場へと行く。
「ロッカーに寄っていくぞ」
　浩介くん大宮駅のロッカーを探してくれる。
「よしここだ」
　浩介くんがロッカーを見つけてくれた。
　あたしと浩介くんが荷物を入れて身軽になる。
「うむ、この路線はほぼ上越新幹線と並行しているらしい」
　浩介くんが、例のノートを見ながら言う。
　更に、去年夏には規模の拡張が行われたらしい。
　やがて、ニューシャトルの電車が入ってくる。
　随分とコンパクトで小さいイメージを受ける。
　六角形をイメージした電車で、最新式らしい。
「内宿行き、間もなく発車いたします。閉まるドアにご注意ください」
　電車が発車する。

あたしたちは先頭付近を陣取る。
電車は右に曲がる、そしてまたすぐに大きく右へとカーブする。
一周したんじゃないかと思うと、今度は左に大きく曲がる。
「随分と大胆なカーブだな」
「うん」
どうやら、このカーブについてノートには書いてないらしい。
しばらくすると、右側に新幹線が見えてきた。
ちなみに、鉄道博物館はニューシャトルでも1駅で到着するという便利さだ。
途中、新幹線がかなりのスピードで通過していき、やがて急激な下りカーブを経て、鉄道博物館駅に到着した。
「よし、降りるぞ」
「うん」
あたしたちは、ホームに降りる。
「エレベーター使うね」
「おう」
別にエレベーターじゃなくてもいいんだけど、階段を使うことにした。
ＩＣカードを使って外に出る。
そして、この鉄道博物館でも、ＩＣカードが使えるという。
券売機に並ばずに、ピピッとタッチするだけで入館することが出来る。
本当、便利な世の中になったわね。
鉄道博物館に行く間にも、Ｄ５１蒸気機関車の先頭部分が展示されていて、他にも蒸気機関車で使われた大きな動輪があった。
「お、床のこれ、よく見たら時刻表じゃん」
浩介くんが気付いたように足元を見る。
「あ、本当だわ」
そこには「やまびこ」とか「こまち」といった、おなじみの列車名があった。他には「あおば」という見慣れない列車名もある。
「浩介くん、『あおば』って？」

「ちょっと待ってな……うーん、このメモ帳には書いてないんじゃないかな？」
「そ、そう……」
うーん、もしかしたら、もう「あおば」というのは存在しないのかもしれない。
左側には、かつて鉄道車両で使われていた台車もある。
「ふむふむ、この上にいつも見ている車体が乗っかかってるのか」
「そうみたいね」
車輪がレールと接触している部分は小さい。
それだけ、鉄道というのは摩擦が小さくて、効率的な輸送ができるというわけね。
「ともあれ、中に入るか」
「うん」
あたしたちは、再びＩＣカードをチャージして中に入る。
これで、券売機に並ばずに済む。
浩介くんは早速、パンフレットを取って館内の案内を確認している。
「運転シミュレーターに車両展示に……色々あるな」
「シミュレーターは……うーん、ちょっと覗くだけにしておくわね」
また派手にオーバーランしそうだし。
「ああ、分かった。じゃあまず、展示コーナーから行ってみるか」
浩介くんの誘導で、あたしたちは右へと曲がって展示コーナーに入る。
「おお、広いな」
正面に線路が見えて、真っ黒の蒸気機関車が、京都でも見た転車台の上に乗っている。
しかしその手前にも数え切れないほどの車両が展示されていて、しかもこちらも2階部分に吹き抜けになっている。
最初に見えてきたのは、明治期の機関車、「1号機関車」というのもあって、最初の機関車らしい。
浩介くんによれば、この1号機関車には、永原先生は乗ったことは

ないらしい。
　他にも、京都でも見た「弁慶号」という機関車や、ドイツやアメリカなどの諸外国から輸入された数多くの機関車が所狭しと並べられていた。
「すげえ車両の数だな」
「うん、古いのが多いわね」
　明治の鉄道もあって、「陸蒸気」という言葉が出てくる。
「浩介くん、永原先生の言っていた『陸蒸気』って」
「本当に使われてたんだな」
　浩介くんが、感心しながら言う。
　ちなみに、永原先生が、明治の日本人が靴を脱いで客車に入ってしまったというのも本当らしい。
　また、「開拓使号客車」というのもあって、アメリカの鉄道の影響を受けた北海道では、こうしたアメリカの技術が使われていたらしい。
　そして、左側には「富士」と書かれたヘッドマークの茶色の客車、どうやら「マイテ３９　１１」というのが車番らしい。
　展示の解説を見る限り、どうやら展望目的で作られた客車らしくて、当時としてはとても贅沢な作りに思える。
「えーっと、『マ』っていうのは『コホナオスマカ』のマらしいな」
　浩介くんが、メモ帳を見ながらよく分からない呪文のような言葉を言う。
「あの、浩介くん、『コホナオスマカ』って何？」
「どうやら、車両の重さを表すらしい。コが一番軽くて、カが一番大きい。だから、マイテと言えば２番目に大きいらしい。コとホは、軽すぎてもう使われないらしいな。ナも、ほぼ絶滅危惧種らしい」
　浩介くんが、カンペを見ながら話す。
　完全に永原先生の話の受け売りになってしまっているわね。
「じゃあ、『イテ』っていうのは？」
　あたしが追加で聞いてみる。
「うーん、えっと……」
　浩介くんが、メモ帳をめくり続ける。

「えっと、『イ』っていうのは『イロハ』の『イ』みたいだ」
あら、結構素直ね。
「イロハ？」
「うん、1等車がイで3等車がハっていうのが元々らしい」
あたしは、さっき乗ったグリーン車のことを思い出す。
「えっと、じゃあさっきの『サロ』っていうのも？」
「ああ、ロがグリーン車とかそういうのに使われているらしい。一等車っていうのは、どうやら廃止になっていて、最近流行りのクルージングトレインというので復活したらしいな」
アホみたいに値段が高いあの列車のことよね。
「テっていうのは、多分展望のテよね？」
「多分、な」
浩介くんが、メモ帳も見ずに話す。
まあ、それくらいはうん、あたしたちにも分かる。
さて、右側の展示を見ていなかったので、あたしたちはそちらへと移る。
かなりきれいになっていて、他の展示品よりも丁寧に展示されている。
他の展示品と違って、近づくことや中に入ることは出来ない。
「これ、『1号御料車』って言うみたいね」
「御料車……うわっ、これ明治天皇専用だったらしいぞ」
浩介くんは展示の解説を見て驚く。
これらは全て皇室専用だという。なるほど、しかも鉄道記念物ということで、かなり丁寧な扱いらしい。
「へえー、すごいわね」
「やはり、天皇陛下専用の車両というのは必要らしいな」
浩介くんが頷く。
よく見ると、この一列はほぼ全てそうした「御料車」で占められている。
そのすぐ後ろにあるのが2号御料車、こちらも明治天皇用の御料車ということになる。

「このメモ帳には『日清戦争の時に、明治天皇がお乗りになられた機関車』と書いてあるな」
浩介くんがメモ帳を見ながら言う。
そしてその隣、展望車を兼ねた御料車があった。
やはり、当時の鉄道を考えれば、長旅になるのは当然だ。こういう機能も必要なんだろう。
その隣は１２号御料車で、こちらは昭和天皇の御料車ということになっている。
「１２号御料車……皇太子時代に作られたものらしいな」
大正時代製造と言っても、使われたのは主に昭和天皇時代だという。
「そう言えば、大正の末期は昭和天皇が摂政だったのね」
少し前、どこかで見た知識をあたしが言う。
「ああ、そういうことか」
そして次の御料車は９号御料車で、中を見ると一風変わっている。
「どうやら、食堂車になっているらしいな」
食堂車、あたしたちの中では旧世代の遺産というイメージが強い。
京都の博物館でも車内販売や駅ナカで、より便利になったと言っていた。
そして最奥部は７号御料車、こちらも大正天皇用で、当時の工芸技術を集めた傑作品だという。
「すげえよなあ……」
「うん、あたしたちが乗ってきたグリーン車なんてちっぽけだわ」
まあ、座り心地は良かったけどね。
「じゃ、戻ろうか」
「うん」
浩介くんの声とともに、あたしたちは元来た位置に戻る。
そして、１号御料車の向こう側には、鉄道システムに関する展示解説があった。
これは、京都でも見た古い鉄道の閉塞システムだった。
「ふむふむ」

「優子ちゃん、鉄道の閉塞って？」
今度は浩介くんが質問してくる。
「ほら、列車同士が衝突しないために、ある区間に複数の列車が入らないようにするんだって。例えば、前の電車と詰まるっていうのもそれみたいね」
「なるほどなあ……」
あたしが京都での受け売りを話すと、浩介くんが納得した風に言う。
確かに、簡易的な説明だけど、それが最もわかりやすい。
あたしたちの鉄道博物館の旅は、始まったばかりだった。

# 新婚旅行1日目　古き日の鉄道

あたしたちは展示の奥に進む。
茶色く曲がった、やけに特徴的な機関車が目に入る。実際に走っていたら威圧感よりもネタ性が強そうね。先頭には「ＥＦ５５」の文字が見える。
「えっと、『このＥＦ５５は戦前製の機関車ながらも、１９６０年台に一旦廃車になった後に国鉄末期に復活し、２００９年まで使われた。特徴的な外見は流線型と言って、『ムーミン』とも呼ばれ親しまれていた』らしい」
「ふむふむ」
浩介くんの解説を聞きつつ、次に見たのが「クモハ４０００７４」と書かれた電車、こちらもかなり古くて、展示には「大正時代」と言う文字が見えている。
「で、こっちは大正時代の山手線ね」
この時代の鉄道は、とにかく茶色い色が多い。
客車の中も、今の座席と比べると結構簡素で、乗り心地が悪そうに見える。
「こいつは、永原先生もよく使っていたらしいぜ」
「あー、そんな気がするわね」
東京地区で使用された電車だもの。
なんとなくだけど、当時の情景が見えてくるわね。
「こっちは『ＥＤ１７　１』、でこっちは『ＥＤ４０　１０』っていうんだな」
どちらも茶色の機関車で、戦前時代に使われたものになっている。
随分と、古い車両が多い。そして古い車両は茶色い車両ばかりよね。
そして、あたしたちは中央の転車台に来た。そこは「Ｃ５７　１３５」と書かれた蒸気機関車が、威圧感を持ってセンターを陣取っていた。
「これ確か……京都でも見たわね。確か貴婦人だったっけ？」

「ああ、そう呼ばれているらしいな」
浩介くんがＣ５７について書かれていたと思われる部分を見る。
転車台の向こう側には、さっきよりは新しそうな電車が３つ、特に両脇の威圧感が凄まじい。
「えっと……とき……急行……ひばり……」
浩介くんが永原先生のメモ帳を見ている。
「とき」と言えば、上野駅や大宮駅の電光掲示板を見た限りでは、新潟行きに使われているわよね。
急行はもちろん、特急よりは格の下がる列車のこと。
「ひばり」はなんだろう？
「先生のメモによれば『とき』はやはり、今と同様、上越線で使われたものらしい。あの辺は急勾配もあるから、平坦線用よりも主電動機を強化しないといけないらしいな」
それにしても、かなり大きなボンネットで、運転台はかなり高い位置にある。
車内にも入れるらしいので、ちょっと入ってみる。
そこは、昔の国鉄特急の車内になっていた。
座ってみたけど、さっきの普通列車のグリーン車シートとそこまで変わらないような？
グリーン車と言っても普通列車のだから、特急のシートに比べれば劣るはずだし……
うーん、やっぱり今のテクノロジーはすごいわね。
「優子ちゃん、座り心地はどう？」
浩介くんも聞いてくる。
「うーん、さっきのとそこまで変わらないような。やっぱり技術の進歩なのかな？」
「俺達が鈍感なのかもよ。それに、動いたら動いたでまた変わるでしょ」
浩介くんがあたしの意見に突っ込んでくる。
「確かにそうかもしれないわね」
もちろん、この車両は展示品だから、そんなことはないけど。

「永原先生、この電車の現役時代に乗ったことあるらしいな」
「へえ、当時の特急って今より価値高かったのよね」
よく考えてみると、戦前にも特急に乗ったことがあるとか言っていたし、結構永原先生ってお金持ちよね。
骨董品は凄まじい量だろうし、きっと資産はすごいんだと思う。もちろん蓬莱教授ほどじゃないとは思うけど。
「隣行こうぜ」
「うん」
浩介くんと一緒に、隣の車両に移動する。
隣の車両は４５５系と呼ばれる電車で、交直流両用で、東日本では主に東北地区において、急行がなくなった後に普通列車として運用されたらしい。
「北陸の方では最近まで運用されてたんだな」
浩介くんによれば、この電車は北陸地方の方では最近までわずかに残っていたという。
車内を見ると、地方の普通列車なんかとあんまり変わらない。
こんなんで別料金取っていたのかと思うと、ボッタクリにも感じてしまう。
「座り心地も、確かに良好で足元も広いけど……あれ？　浩介くん、このテーブル見てよ」
「ん？　これは？　えっと……」
テーブルの横に、銀色の何かが見える。
浩介くんはメモ帳をもう一度見る。
「へえ、これって便の栓抜きなんだってさ。ビール瓶とかジュースの瓶とかをここに引っ掛けるとすっぽり抜けるらしくて、永原先生はよくこれでジュースを開けていたらしいな」
永原先生は、急行にもよく乗ったらしく、これを使えば栓抜きにもなったのだろう。今はもう瓶なんて殆ど見なくて、ペットボトル一色だけど。
そしてその隣りにあるのが「ひばり」更に「あけぼの」というヘッドマークをつけた「ＥＤ７５　７７５」と書かれた機関車が目に入っ

た。
「この赤いの、どこかで見たことあるわね」
「永原先生によれば、『あけぼの』は寝台列車で数年前まで走っていたらしい。永原先生の中では、このＥＤ７５というのは東北の普通列車のイメージが強いらしいけど」
浩介くんが相変わらずメモ帳を見ながら話す。
この機関車は、急速に活躍の場を失って殆ど見られなくなったらしい。
「運転台がすげえな、電車よりもずっと複雑だ」
浩介くんが驚きの声を上げている。やはり機関車の運転は難しいらしい。
最近のは運転台も簡略化されているらしいけど。
次に、あたしたちは「ひばり」の方に移動する。
「こっちは2両編成なんだな」
浩介くんが車両の奥を見て言う。
こっちは４８１系という交直流両用の電車で、東北新幹線が出来る前は、この特急がよく使われていたらしい。
「仙台行きかあ、そんな在来線特急も最近まであったんだな」
永原先生のノートによれば、仙台行きの在来線特急は８年前まで常磐線経由で残っていたらしい。
それも８年前の東日本大震災で線路が寸断されてしまったらしい。最も、震災前から無くす方向だったとも言うけど。
「その常磐線も、来年の今頃には復旧になるんだぜ」
「長かったわね」
東日本大震災、あたしはまだ小学生だったけど、子供心に「大変なことが起きた」と思っていた。津波の映像は、未だに記憶に深く染み付いている。
「お、このページに興味深いことが書いてあるぜ」
浩介くんはメモ帳の1ページを見て言う。
「へえ、どんなの？」
「ああ、これこれ」

浩介くんがメモ帳のページを見せてくれた。
そこには、「クモハ４５５―１」と書かれていた。
これはさっきの急行電車。
まずクモハと言うのは、「ク」と言うのは、「制御車（運転台付き）」と書いてあり、次の「モ」には、「電動車（モーターが付いているということ）」、そして「ハ」はさっきと同じようにイロハのハ、それだけではなく、３桁の数字にも意味がある。
つまり、「４５５」のうち、百の位の「４」は「交直流電車」という意味で、「５」「６」も同じ意味らしい。
交直流の他には、直流型と交流型があって、あたしたちの地域で走っている電車はほぼ全て直流型で、新幹線のみが交流電化だという。
そして、１０の位にも意味があって、「５」は「６」「７」と共に急行型を表す他、３までは通勤、近郊、一般型を、４は特殊用途で、８は特急型を表すらしい。
ただ、急行型そのものが使われなくなって、最近では「５」「６」「７」にも、特急型が充てられることも多いという。
「つまり、『ひばり』や『とき』にあった『８』っていうのは？」
「特急車両って意味だったらしいぜ」
ちなみに、１の位はあまり意味がなく、製造順で付けられるらしい。
そして、その次のは一般的には作られた順番で割り振られていく。
つまり、「クモハ４５５―１」の場合、「制御電動の普通車の、交直流電車の急行型、そのトップナンバー」という意味になる。
また、同じ形式は１つ前の偶数を名乗ってもいいことになっている。
つまり、さっきの「サロＥ２３２」というのも、「サ」と「Ｅ」はまだ分からないけど、「グリーン車の直流型の通勤、近郊、一般型」という意味になる。
「お、ここにも資料があるな……どれどれ、『最近では、他ＪＲの形式と重なった時などのために『Ｅ』を付ける場合があるが、これは『東日本　ＥＡＳＴ　ＪＡＰＡＮ』の頭文字Ｅで深い意味はない』だって」

浩介くんはメモ帳を見ながら、あたしの疑問の一つを解決してくれた。
さて、あたしたちは、展示のさらに奥へと進む。
次に見えてきたのは「ＥＦ６６」で、青い車体に「あさかぜ」とあった。
「あさかぜって貨物列車だったのかな？」
後ろに牽引されていたのは、明らかに貨車だったので、あたしが疑問を挟む。
「いんや、そうじゃねえみたいだぜ。あさかぜっていうのは東京から九州まであった夜行列車で、以前ここに来た永原先生も最初は『あさかぜのヘッドマークを付けた機関車が貨物しか引っ張ってなくて困惑した』らしい」
浩介くんが説明してくれる。
「昔は『九州ブルトレ』ってのはたくさんあったらしい。熊本、大分、長崎、鹿児島、東京からだけでなく、大阪からの夜行列車も多かったそうだ」
でも今は1便もない。
「うーん、あたしたちにはよくわからない世界ね」
「俺たちが小学生の時には、もう全滅してたらしい」
浩介くんがやや遠い目をして言う。
確かに、九州まで夜行移動なら翌朝で新幹線のほうが早そうだもんね。
さて、あたしたちは次に貨車に目を向ける。
この貨車は「環境にやさしい」「戸口から戸口へ」をアピールしているけど、博物館に入っているくらいだから、当然古い車両のはずよね。
「『コキ』ってのは、今じゃ一番よく見る貨車で、ほとんどがこれに属するらしいな」
近くに解説もあって、「コ」というのは「コンテナ」の「コ」、「キ」はさっき出てきた客車の重量区分「コホナオスマカ」の貨車バージョンで、「ムラサキ」の「キ」だとか。客車に比べて随分素直だけど、どうして「紫」なんだろう？　浩介くんによれば、永原先生にもそれが

分からないらしく、謎が謎で終わってしまった。
「このコキ５００００、博物館に入ったのはここが出来てからだけど、一昨年まで現役だったらしいぜ」
で、後ろの貨車は大分古いバージョンらしく、レが冷蔵車で、ムはムラサキのム、フは緩急車ということらしい。
そう言えば、客車にもフは付いていたわね。
さて、あたしたちは体の向きを右に傾けると、そこにはよく似た形の青と緑の新幹線が目に入った。
「これは京都でも見たことあるわね」
そのうちの青い方は、忘れもしない、初代新幹線の０系だ。
「ああ、日本中至る所で静態保存されているばかりか、海外の鉄道博物館にも展示されているらしいなこいつは」
それだけ、偉大な車両ということよね。
「浩介くん、この電車、最初の新幹線なんだってね」
「ああ、永原先生によれば、この電車に最初に乗って、東京と大阪を３時間で移動してしまった日は、鉄道を初めて見た時以上に大きな衝撃を受けたらしいな」
忘れもしない。永原先生がはじめて新幹線に乗った時のこと。
新幹線が開業して、もう５５年にもなる。
恐らく、あの開業の時に乗ったお客さんの大半は、もうこの世にいないだろう。
「永原先生の時代、同じ距離は２週間かかったらしいのよね」
ここには、ご丁寧に開業当時の新幹線駅が再現されていて、方向幕もボードを差し入れるタイプだったらしい。
これで時速２００キロ以上で走ったんだから凄いわよね。
「こんな本数少なかったんだなあ」
一方で、開業当初のものと思われる復元時刻表を見ていた浩介くんが驚きの声を上げる。
毎時０分に超特急ひかり号が、３０分に普通特急こだま号がそれぞれ東京駅を発車する時刻になっている。
カットモデルなので運転台の様子を見ることができた。

「この数字は、車内信号だったらしいな」
「う、うん、この速度以上に新幹線が速度を出していると、自動でブレーキがかかるのね」
　さて、あたしたちは０系の運転台を見学した後は、隣の車両に移動する。
　そして、その隣にあるのは、０系によく似た形の緑色の新幹線だった。
「これ、最近まで見たことあるわね」
「ああ、実際、数年前まで走ってたらしいぜ」
　浩介くんが、緑の新幹線を指さす。
「この電車は『２００系』と言って、外見こそ０系にそっくりだけど、騒音の低減や速度とエネルギー効率の上昇、更に寒冷地かつ新潟や東北の豪雪地帯で高速運転するという性能要求を満たすための頑丈な作りで国鉄型新幹線としては最後まで残り、通常１５年が寿命の新幹線車両にあって２０年を優に超す運用がなされるなど、今日の東日本における新幹線の基礎を作った名車と呼ぶにふさわしい車両だそうだ」
　浩介くんが思いっきりカンニングペーパーを見ながら自慢げに言う。
　何だか、かわいいけど、素敵よね。あたしの前でかっこいい所を見せたいんだもん。
「へえ、外見は同じっぽいのに、色々変わってるのね」
「ああ、０系から２０年経って、新幹線の技術向上に加え、雪と寒さとの闘いもあったわけだからな。ところが、このメモ帳によれば、ヨーロッパ、特にフランスの鉄道技術者は、外見だけを見て『新幹線は進歩がない』と言ったらしい。永原先生に言わせれば『２００系に向かってそんなことを言うのは『自分は表面の上っ面だけで鉄道車両を見ています』と自白しているに等しい愚行よ』とのことだ」
「あはは……」
　確かにデザインは似ているが、中身や搭載機器は全くの別物と言えるほどに進化しているもんね。

あたしも、見た目だけじゃなくて、中身からも魅力的な女の子になれたからこそ、今こうしてすてきなだんなさんをいとめることができた。
「ここから後に、ＪＲは様々な車両を作っていき、一時は配色も結構カラフルだったけど、Ｅ５系になってまた緑に立ち返ったらしいな」
さて、新幹線の右側にあったのは、これも京都で見たことがある車両。
「これは見たことあるわ。このオレンジ色にこの車体は１０３系ね！」
あたしがどや顔で浩介くんに問いかける。
しかし浩介くんは色よい表情をしていない。
「あ、あれ？」
「ゆ、優子ちゃん、とっても言いにくいんだけど、これはどうやら１０１系らしいよ」
浩介くんが申し訳なさそうに言う。
「あうー、恥ずかしいよおー！」
「まあ、見分けるのは難しいからね。永原先生も見分けにくいって書いてるし、どうもこの１０１系は１０３系のプロトタイプらしいんだ」
つまり、１０３系のベースになったのがこの１０１系だったと。
「１０１系は優れた車両で、今ある新性能電車の通勤型電車の先祖と言ってもいいんだが、いかんせん全電動車方式が少々過剰性能だったらしい」
「なるほどねえ」
「なので性能を落とす代わりに、経済的で量産性に優れた１０３系が大量生産されたみたいだぜ」
この１０１系、どうやらボタンでモーターを動かせるらしい。
あたしが操作してみる。
ウイーン！
「へえ、鉄道車両の下側ってこうなってるのね」
「まさに『縁の下の力持ち』ってやつだな」

「うん」
さて、あたしたちは続いて隣の車両に移動する。
こちらはまた古い蒸気機関車でＣ５１、どちらかといえば御料車に連なる系統だ。
「これは確かそう、島安次郎と朝倉希一の傑作機関車だったわね」
ここでは、あたしの方が説明役になる。
永原先生の受け売りなのは同じだけど、浩介くんは「このメモ帳の通りだ」と感心していた。
「これも京都で見たのか？」
「うん」
もしかしたら、位置的にもお召し列車の牽引に使われたのかもしれない。
「よし、じゃあ奥に移動してみようぜ」
「うん」
あたしたちは、奥に見えた部屋を訪れる。
「うおっ、ここは？」
浩介くんが驚いている。
そこには、再び０系新幹線が展示されていて、さっきみたいに先頭部分だけではない。
そしてホームにはくす玉が割られていて、ひかりとこだまの開業当初の所要時間と共に新幹線開業を祝う文字が書かれていて、それはさながら、昭和３９年のあの日で時間が止まっているかのようだった。
「こんな、だったんだな。４時間かあ……」
浩介くんがメモ帳を確認する。
多分、さっきあたしが言っていた「３時間」との矛盾を確かめているんだと思う。
「なるほど、開業から１年は突貫工事で路盤が固まってないから１６０キロ制限が多くて、２００キロ出せる区間はあまり無く、余裕時分も多かったのか」
浩介くんがメモ帳を見ながら言う。
「浩介くん、『路盤』って？」

「うーん、それが分からんのよ。漢字を見た限りでは、どうも線路を下支えしている土なんじゃねえかって思うけど」
「そうかも」
ともあれ、あたしたちは車内に入る。
そこには、０系の初期と思われる内装が飛び込んでくる。
「結構この座席、簡素だな」
「６０年近くも前の車両だもんね」
そう、新幹線の車両と言っても、実際にはもうそんなに古いのだ。
「うーむ、しかしこの０系、初期車は１３年で廃車になっちゃったらしいな」
浩介くんが、またメモ帳を見ながら言う。
「やっぱり、新幹線って傷みやすいのね」
「まあそうだろうなあ。こんな高速で、しかも長い距離を走るわけだしな」
浩介くんが座席に座りながら言う。
「やはり、今の座り心地に比べると、所々違うな」
「うん」
とはいえ、当時の技術からすれば相当なものだ。
「新幹線の凄い所は２列と３列で大量輸送が可能な所だってさ」
「あーうん、本数も多いものね」
実際、飛行機では新幹線ほど一度に大量の人は運べないというし、しかも飛び乗りも可能だからビジネスマンには新幹線は欠かせない。
「さ、これでここは終わりだな、向こう側から外に出られるみたいだし、行ってみるか」
「うん」
あたしは、浩介くんの誘導で、博物館の向こう側へと出た。

# 新婚旅行1日目　時代は変わる

「お、車両が2つあるな」
浩介くんが指さす。
さっきの特急型電車に似た形の電車が屋外にも展示されていた。
これはどうも「ランチトレイン」と称して、中で飲食ができるようになっているらしい。
あたしたちは、何も持ってきてないけど。
他の部分は緑の多い公園になっていて、デフォルメされた新幹線車両の遊具もあり、子供たちがワイワイと大きな声で元気よく遊んでいた。
男の子が多いわね。
「子供の声が大きな」
「うん、でもなんだかかわいいわね」
あたしが、子供たちを見ながら言う。
近くには、親御さんたちが見守っている。
「優子ちゃんはそう思うの？」
「うん、何だか昔よりも子供のこと、赤ちゃんのことがかわいくてたまらなくなってる気がするの」
あたしと浩介くんがいて、2人の間に生まれた小さな子供と3人で、あの遊具で遊んでいる光景が思い浮かぶ。
今までは、大好きな浩介くんとの子供を産みたいというのは、どちらかといえば煩悩に近い欲望があったけど、今はちょっと違う。
「優子ちゃん、やっぱり、女性の本能が強くなってるんじゃねえか？」
「うん、あたしもそう思うわ」
実際、浩介くんの言う通りだと思う。
今までも、小さな赤ちゃんに対する愛しい気持ちはあったけど、今は違う。
子供を持つ家庭、父親と母親にかわいがられている子供、その全てが愛おしかった。
「俺も、何だか昔よりも優子ちゃんのこと、守りたい気分なんだ」

「浩介くんも？」
「ああ、やっぱり、男も恋すると、オスらしくなるんだなって」
浩介くんがかっこよく言う。やっぱり浩介くんも変わっていた。
そう、いつかあたしたちもあんな風に、家庭を作っていきたいと思う。
「ねえ浩介くん」
「うん？」
「あたしたち、赤ちゃん産んだら、最初に生まれるのは男の子かな？女の子かな？」
ふと、気になったので聞いてみる。
「うーん、優子ちゃんに似て、かわいい女の子かなあ？」
浩介くんが笑いながら言う。
「そう？　あたしは、浩介くんに似て、かっこいい男の子だと思うわ」
意見が、食い違う。
「あはは、割れちゃったな」
浩介くんが小さく笑う。
「ふふっ」
あたしも、それに釣られて小さく笑う。
どっちが生まれるかなんて、分からないものね。
「優子ちゃん、異性の赤ちゃんが好き？」
「うーん、分からないわ」
もしかしたら、優一がちょっとだけ影響しているのかもしれない。
でも、女の子を産んだとしても、男の子と同じくらい愛せる自信があるのは確かね。
ヒューガタンゴトンガタンゴトン……
あたしたちが話していると、博物館のすぐ横の線路を電車がさーっと通り抜けた。
電車の形はそう、あたしたちが大宮駅まで乗ってきたのと同じものだった。
「あれもいつか、ここに入るのかな？」
浩介くんが何の気なしに呟く。

「もしかしたら、ね。ほら、全部の車両が入るわけじゃないじゃない」
　あたしが少し話す。
「ああ、でもよ。俺たちが乗ってきたグリーン車とか、あのＥ２３３系とかは、入れてもいいんじゃないかな？」
「そうかもね。でも、その頃の博物館はどうなってるかしら？」
　もちろん、３０年という車両寿命を考えると、もし蓬莱教授の研究が失敗したとしても、今ある車両が全滅する頃でも、まだ浩介くんはピンピンしていると思うけど。

「さ、取りあえず、次に進んでみようぜ」
「うん」
　あたしたちは、浩介くんの誘導で、２階へと進む。
　まず2階から1階の展示を見ることができる。
「すげえなあこの博物館も」
「うん」
　実際、かなり広い上に、ここからなら車両の上部を見ることもできる。
　そして、２階の部分にあったのは、古い資料、鉄道の歴史などだ。
「永原先生は、これを見てきたんだな」
　浩介くんが感慨深く言う。
「うん」
　永原先生の時代、鉄道は敷かれるだけで大革命だった。
　小さな小さなあの1号機関車が、今の電車の半分にも満たない速度でゆっくりのんびりと走っていた明治時代、それでも、永原先生にとっては大変な革命だった。
「鉄道唱歌っていう明治の歌にさ、上野から青森までの歌があるのよ」
　浩介くんがまたメモ帳を開いて言う。
「そこの最後にさ、『昔は陸路廿日道、今は鉄道一昼夜』ってあるんだ」
「あはは、青森まで一昼夜かあ……」
　気の遠くなる話だと思う。
「永原先生はさ、『昔は蒸気一昼夜、今ははやぶさ3時間』何だってさ」

青森まで3時間、昔の昔は1か月以上かかった道のりに対して、簡単に日帰りが可能になっている。
いや、今なら北海道でもその気になれば日帰りできる。新千歳空港と羽田空港の間に、飛行機が大量に飛んでいるから。
「時代は変わるのよね」
「でもよ、青森はともかく、大阪はこれからもっと変わるよな」
浩介くんが言う。
「ええ、リニア、楽しみよね」
「所要時間半分以下だもんな」
リニアの開業まであと数年、実現すれば名古屋まで1時間とかからなくなる。
大阪までだって今は2時間半かかっているのが1時間ちょっとになる。
リニア新幹線は５００キロと言うこれまでにない速度で走ることになるのよね。
「ええ」
交通機関の発展は、とても偉大なこと。
この博物館にある車両たちも、そんな時代の中で生まれ、やがて新型車が登場し、博物館で余生を送っている。
「乗り心地、所要時間、車両性能、どれを取っても、すげえよなあ、技術の進歩は」
「うん」
しかも、進歩の仕方にも種類があることも知っている。
鉄道の歴史、例えば超特急燕についての記録。浩介くんがメモ帳を開く。
「熱海からのトンネルができる前は、東海道本線は御殿場に迂回してたんだってさ。で、その時代の最速列車超特急燕は、今は在来線の普通列車を乗り継いだ最速の所要時間と同じくらいらしい」
「昔は超特急でも今の鈍行くらいかかったってこと？」
「ああ。丹那トンネル開通で所要時間８時間で今の在来線乗り継ぎよりは早くなったんだが、それでも乗り換え待ちの時間を除けば、今の

在来線の普通列車での所要時間は、当時の超特急燕と同じくらいになるらしいんだ」
「でも、在来線って何駅にも止まるんでしょ？　いくら戦前のＳＬ相手とは言え、それで勝っちゃうってすごいわね」
　もちろん、関西で乗った新快速を含め、快速電車のある区間もあるんだと思うんだけど。
「最高速度と加速減速性能が格段に違うのが理由だって書いてあるな」
　浩介くんがメモ帳を見ながら言う。
　永原先生によると、「超特急燕」は蒸気機関車の減速性能の悪さと、いわゆる「６００メートル条項」のために、最高速度は９５キロだったのに対して、現代の東海道本線の電車たちは戸塚駅まで１１０キロ、小田原駅まで１２０キロ、小田原駅から豊橋駅までが１１０キロ、そこから米原駅まで１２０キロ、そしてそこから先の区間は１３０キロとなっている。
　つまり、停車駅が多くても、高い最高速度に加減速性能と、カーブや勾配への耐性が強ければいいということになる。
　超特急燕はカーブや勾配でも減速しないといけないし、そうなってまたトップスピードに戻すまでにも時間がかかってしまう。
「電車はそのあたりが強いんだな」
「そうみたいね。だから停車駅の少ない蒸気機関車の特急より速いのね」
　そして、戦前の蒸気機関車による超特急燕は、戦後には電気機関車の「つばめ・はと」が７時間、更に新幹線のプロトタイプとも言えるビジネス特急「こだま」によって、９５キロが１１０キロとなって、所要時間は６時間半を切り、この時東京と大阪で日帰りの出張が出来ると国鉄が大々的に宣伝した。
「永原先生によれば、それは新幹線程ではないけど、あまりにも大きな衝撃だったみたいね」
「でも、６時間半もかかっちゃうんでしょ？　往復に１３時間、８時間寝るとしたら３時間くらいしか無いわよね」

実際、その所要時間で日帰りで出張ってかなり無茶な気がするわ。
「実際には自宅から乗る駅までの移動時間とか、電車のダイヤもあるから、滞在できるのは2時間程度だったらしい。それでも、日帰り可能は大きかったみたいで、永原先生も一回それで出張したことがあったらしいぞ」
浩介くんが当時のメモ帳を見ながら言う。
２時間の滞在時間で何ができるのか？
会議室まで移動して、会議に参加しと考えると、かなりハードな日程だと思うわ。
今の新幹線は2時間半だから、かなり余裕を持った日帰り出張が可能だけど。

鉄道の歴史年表も徐々に終わりに近付く。
ＪＲ化後には、様々な新型車両が入っていて、新幹線技術が進歩したように見える。
「国鉄時代は技術が停滞していたのかな？」
「昔はそう言われていたんだけど、今ではそれは一面的な見方だって言われているな」
あたしの感想に対して、浩介くんが否定的な意見を述べる。
「どういうこと？」
「例えば、黎明期の東海道新幹線は1時間に2本しか本数がない単純なものだったけど、翌年に倍に、そして国鉄末期には1時間に１０本、つまり5倍の本数を走らせていたり、さっきの２００系みたいに耐寒設備や運転台の技術向上、アルミニウム合金車体の開発といった新技術の採用が行われていただろ？」
「うん」
「他にも、通勤電車の本数が増えて混雑緩和に貢献したり、短編成・高頻度運転による地域輸送の利便性の向上なんかも、この国鉄後期時代に行われたものなんだ。技術停滞の象徴とされている０系や１０３系の大量生産も、こうした大量生産による仕様の統一が、コストダウンと安全性、利便性の向上に寄与するというノウハウにもつながった

わけだしな」
浩介くんが思いっきりメモ帳を見ながら言う。
大量生産能力、最近のＪＲも、同じような感じの車両が多いものね。
現在主力になっていて、あたしたちも乗った、様々な場所で見かけるＥ２３３系もまた、ユーザーからの評価が高いっていうし。
言うなれば１０３系が祖先なのね。
「色々な考え方があるのね」
「ああ、このノートにも『技術進歩といっても、最高速度の向上だけじゃない』って書いてあるな」
「あー、分かる気がするわ」
実際、この博物館に来て分かったけど、昔の不便さや乗り心地の悪さは、思った以上にひどそうな感じだし、そのあたりを見て、現代の鉄道の素晴らしさを知ることも出来る。
「例えば、１２年前にできた東海道新幹線の新型車両で、カーブでの減速が減ったおかげで、最高速度そのままに東京新大阪が５分短縮されたけど、最高速度が２７０キロから２８５キロになった時は、２８５キロ出せる区間の少なさもあって、３分しか短縮できなかったみたいだしな」
こだまが退避する列車も、当初は浜松駅で１本だけ、所要時間が短縮された時も静岡駅のみ退避で、今は１０以上の列車を毎駅のように退避しておきながら、所要時間が変わってない。
これも、こだまの性能向上の影響だという。
「へー、つまり大事なのは曲線の通過速度なのね」
「ああ、曲線と勾配、今の在来線普通列車が超特急燕並なのも、それに対する耐性という面で決定的に有利だからだ。しかも、速度を下げてから再び上がるまでの速度も速いというわけだろうな」
今度は、メモ帳を見ずに自分の言葉で話す浩介くん。
「さ、隣に行ってみようぜ」
「うん」
浩介くんの誘導で、一気にさっきの展示を横断し、２階側に進む。
「わー、ジオラマだわ」

それは京都でも見た鉄道模型によるジオラマで、大きさは多分同じくらい。
多分だけど、京都で見たのは西日本の車両が多かったから、こっちは東日本の車両なのかな？
「お、これ、俺たちが乗ってきたのじゃね？」
「あ、本当だわ」
ジオラマの中に、Ｅ２３３系を見かける。
ご丁寧にグリーン車も連結されてあった。
他にも、最近は見なくなったけど、博物館にあるほどでもないちょっと古い車両もたくさんある。
「で、こっちが新幹線だな」
「うん」
在来線の電車たちが動いている場所よりも一段高い所に、新幹線が動いていた。
「あれ？　この新幹線、さっきのグリーン車に似ていない？」
似ているのは、窓が２階になってる所だけだから、鉄道好きには怒られると思うけど。
「あ、本当だ……えっとこれは……」
浩介くんがメモ帳を確認するが、中々見つからない。
「うーん、このメモ帳にはジオラマの車両のことが書いてないなあ……」
浩介くんが唸っている。
「浩介くん、スマホで検索してみたら？」
幸い今は、電気ついてて明るいし。
「ああそうか！　そうだった！」
あたしが助け舟を出すと、浩介くんはメモ帳を一旦ポケットにしまい、別のポケットからスマホを取り出す。
「ええっと……新幹線……２階建て……あ、ＭＡＸって言うんだ！」
「うーん、ＭＡＸ……」
何か以前新幹線に乗った時に同じ表示を見たような？
うっすらとしか覚えてないし、虚偽記憶かもしれないけど。

「あ、このＭＡＸ、来年で引退じゃんか」
浩介くんがスマホを見ながら言う。
「え、本当に？」
「ああ、どうやら２階建てにしたために、大量輸送には貢献したけど、それと同時に色々と問題もあったらしいんだ。後継車両は普通の車両になって、この車両は引退になるみたいだな」
「なるほどねえ……」
他にも、見たことのある新幹線車両がたくさんある。
「これは、優子ちゃんと塩津さんの所に行ったときに乗った車両だな」
「うん、こっちはあの夏の林間学校の時に」
「で、この緑色のは、今日これから乗るやつだよな？」
「うん」
ほぼ緑一色に塗られた、先頭がとても丸い新幹線、この新幹線は、幸子さんのところに行く時に、抜かれていた新幹線でもある。
東北の中では、後ろにある赤いのと並んでの最新型で、最高速度も日本最速の３２０キロとなっている。
「お、これ特急じゃん」
「うん」
あたしたちはその後も次々と車両を見ていく。
やはり、住んでいる地域が近いので、見たことのある車両がたくさんあった。
「考えてみれば、今のこの地域のＪＲやその前身の所を走ってない車両で展示されているのは０系だけだったわね」
例えば、１号機関車は、新橋ー横浜で、今の東海道と横浜ー桜木町に匹敵しているし。
「それだけ、０系ってのは偉大なんだろ？」
「うん、そういうことよね」
あたしたちは、まだ名古屋にある「リニア鉄道館」には訪れていないが、訪れずともそこに０系があるのは明らかだった。
「さ、次に行こうか」
「うん」

あたしたちはその隣の部屋へと訪れる。
そこには、鉄道に関する絵画や写真が所狭しと並べられていた。
「物凄い迫力ね」
「うん」
どうやら、ここでは鉄道文化に関する資料なんかを収めていて、申請すれば本なども読むことができるらしい。
他にも、ヘッドフォンでＣＤの貸し出しもあっているさっき出てきた鉄道唱歌のサービスもあるらしい。
あたしたちは、昔の蒸気機関車や、新幹線などの絵画や写真に混ざって、何気ない通勤電車の絵画に目をやる。
これはそう、首都圏を走っている、件のＥ２３３系の絵画だった。
駅のホームからおびただしい人が降りていき、列にも行列が出来ている光景が描かれていて、隣には戦前のものと思われる茶色い電車から、やはり大勢の人が降りていく絵画になっている。
ただし、現代の絵画と比べると、編成は短く、また駅の手入れも行き届いていない。
乗る人の列も乱れ気味で、中には横入りしている人までいる。
「ねえ浩介くん」
「うん？」
「これって、鉄道の進化を表現したかったのかな？」
あたしが、２つの絵画を見比べて言う。
しかも現代の駅の方は、マナー向上のポスターまで張られている。
「ああ、そうかもしれねえな」
浩介くんが静かに頷いてくれる。
そしてあたしたちは隣の部屋に行く。
そこは特別区画展示室で、３月はダイヤ改正の季節なので、今回のダイヤ改正でなくなった列車や車両などの特集になっていた。
「色々なものが、変わっていくんだな」
「うん、そうよね」
永原先生は、変わりゆく鉄道の歴史の生き証人だった。
いや、比良さんや余呉さんだってきっと同じ。

壁のある一面には、惜しむ声と、ありがとうの声が貼られた張り紙が大量に貼ってあった。

時代は変わっていく、この惜しむ声も、いつか消えてしまうのかもしれない。

そう想いつつ、あたしたちはこのコーナーを後にした。

# 新婚旅行1日目　鉄道技術とアトラクション

「よし、隣に行こうか」
「ええ」
　それらを見終わり、あたしたちはその隣へ。
　どうやら、鉄道に関する様々な技術紹介がある。
「浩介くん、この軌道って……」
　そこには「国鉄スラブ軌道」「バラスト軌道」と書いてあった。
　また、スラブ軌道には様々な派生版があるともあった。
「スラブの方が新しいのよね」
　バラスト軌道は、線路の狂いをなくすために文字通り石を敷き詰めた昔ながらの軌道、スラブの方は、線路が狂わないようにコンクリートなどで強力に固めてしまうらしい。
「ああ、バラストの方は、一番古典的らしく、狂いやすいから保守に手間がかかって、唯一バラストだった東海道新幹線はそれで結構苦労しているらしいな」
　それだけ聞くと、なんかデメリットしか無さそうだけど。
　まあ、古い技術だしね。
「でも、在来線とかでもあっちこっちに残ってるわよね」
「だけど、乗り心地や消音という意味では、いまだにこの軌道を上回るのは無いらしいな。石が音と衝撃を吸収してくれるんだってさ」
　浩介くんがメモ帳に書いてあるバラスト軌道の優位性を話す。
「へえ、もしかして保守が大変っていうのも？」
「ああ、上を走る列車から衝撃を吸収していくと、段々と石が丸くなる。そうすると衝撃を吸収しにくくなるし、隙間ができて危なくなるから、取り替える必要があるんだとさ」
　時々、変な位置に石が積まれていたのもそのためなのね。
「でも、線路保守かあ……」
「大変そうな作業だよな。列車が走っていない時間にしなきゃいけないみたいだし」
　重労働であることは容易に想像がつく。

「うん」
この鉄道科学資料館は、２階部分にまたがっている。
あたしたちは、次のコーナーを進む。
そこには蒸気機関車から電車まで、仕組みの解説があった。
「蒸気機関車は石炭などを燃やして、水を沸騰させてその蒸気で車輪を動かすのね」
「ああ、構造はこの中じゃ一番単純だな」
あたしはそうにも見えないけど、水が沸騰すれば体積が激増するので、それを利用しているのは間違いない。
蒸気機関の発明は、産業革命に大きな役割を果たしたものね。
ディーゼル機関車や電気機関車になって、性能も格段に向上し、やがて動力分散方式の「気動車」と「電車」に進化する。
「機関車方式は、今はもう貨物列車と特殊用途にしか残ってないみたいだな」
浩介くんがメモ帳を見ながら言う。
隣には動力分散方式と、動力集中方式の違いのビデオがあって、新幹線とフランスの高速列車ＴＧＶの方式の違いが書かれている。
そのビデオの中では、直線的で長い線路なので、動力集中方式がよいとされている。
「優子ちゃん、永原先生によればこのビデオは例えが悪いんだそうだ」
浩介くんが意外な言葉を言う。
「え？　どうして？」
「以前はヨーロッパでも広く見られた動力集中方式の高速列車も、今はもうフランスくらいなんだってさ。しかもそのフランスも、次世代高速列車は動力分散方式にするらしくてな」
つまり、ヨーロッパでももはや動力集中方式はメリットが無くなっているということだ。
「へえー、それはまたどうして？」
「動力分散方式は加減速性能に優れる上に、軽いから線路も傷みにくいだろ？　高速にすればするほど、その影響は顕著になるんだってさ」

「なるほどねえ……」
　あたしも納得した感じで言う。
「しかも、だ。無動力といっても客車側にもブレーキが必要で、本来なら軽いはずの付随車がかえって重くなっちゃったって書いてあるな」
　その状態も、すぐに戻ったけど、軽量化が生命線になる高速列車で、重くなるのは致命的だった。
「特にヨーロッパの鉄道は、軽量化技術が日本と比べると格段に遅れているらしいぜ」
「泣きっ面に蜂ね」
「それでも、地盤が強かったからうまくいってたんだってさ」
　なるほど、地盤が強いなら、重い車体でもＯＫだものね。
　だけど、最終的に軽量化が重要になるというのは、日本の鉄道の先見の明だったわけね。
「永原先生によれば、このビデオはＴＧＶじゃ無くて、貨物列車をもっと引き合いに出すべきだってさ」
　そう言えば、貨車はみんな機関車方式だったわね。
「貨物列車ねえ……」
「ああ、貨物列車は有効積載量ってのがあるから、大量輸送能力に直結するからな」
　浩介くんがメモ帳に書いてあると思われる言葉を言う。
　そして次のコーナーに進むと、今度は線路にあるカーブの拡大図だ。
「えっと……これはカントだな……って書いてあるか」
　浩介くんがメモ帳を見つつも、展示にも書いて有ることに気付く。
「うん、これ多分、遠心力対策じゃないの？」
「だろうなあ」
　これは分かる。
　高速で走っている場合にカーブに差し掛かったら、体や車体を曲げないと曲がり切れずにバランスを崩してしまう。
　鉄道なら脱線、大事故ということになる。
「カーブの外側に土を盛ってカント量を上げれば、より高速で通過で

きるのね」
「でも、盛りすぎると、今度はそこで非常停止した時に動けなくなっちゃう危険性もあるんだな」
　諸刃の剣というわけね。
「で、もう一つの解決方法として、列車の方に車体傾斜装置を設ける方法もあるんだ。Ｎ７００系やＥ５系なんかもそうやってカーブを克服したらしい」
「でも、傾いてるなんて意識しないわよね」
　正直、新幹線乗ってても気付かなさそうだし。
「それはテクノロジーの進歩みたいだな」
　そう言えば、永原先生が以前鉄道の不名誉なあだ名について言っていたっけ？
　あたしたちは、その後も鉄道技術の発展や仕組みについて学んだ。

「次はどこへ行くか？」
「うーん、取りあえず、上に行こうか」
「ああ」
　この上は、多分京都と同じく展望スペースになっているんだと思う。
　子供たちの騒がしい声が、また聞こえてくる。
「お、すげえなここ」
　高さが工夫されていて、新幹線とニューシャトルが正面から見える。
　数分後、緑色と赤色の新幹線が通過していく。多分、Ｅ５系とＥ６系になると思う。
「横から見るとまた違うんだな」
「うん」
　新幹線を横から見る機会は意外と少ない。
　正面からが多いし、横から見るのも駅に入ってくる時に一瞬だ。
　大宮駅は全部の列車が停車するので、このあたりはまだ新幹線も速度が出ていない。

「もう一つ、上に行けるみたいだぜ」
浩介くんがさらに上層を示す。
うん、このスカートは制服ほど風には弱く無くて長いし、風も穏やかだから問題なさそうね。
「うわーきれいだわー」
屋上は、さっき同じ目線にあった線路を、上から見下ろすことが出来、より遠くから新幹線を感じることが出来る。
新幹線とニューシャトルだけじゃない。
向こう側に目をやれば、在来線がおびただしい勢いで走っているのが見える。
「日曜日の昼間だってのにすごい本数だよな」
浩介くんが在来線の方を見て言う。
「しかもどれもそれなりの本数あるのよね」
そして、新幹線が通過する。
「というよりも、新幹線もすごいよな」
「確かに、新幹線の本数多いわよね」
とにかく、電車というのは本数が多い。
こうして何路線にもまたがっていたらなおさらよね。
時間的に開館はして無いけど、もし朝ラッシュ時にここを見たらどんな光景になるんだろう？
広場では、新幹線の通過に子供たちが騒いでいた。
その子供というのは、圧倒的に男の子が多い。
「さ、残りの展示を見ていこうぜ」
「うん、でもその前に……お腹すいたわ」
実際、お昼時を過ぎているみたいだし。
「じゃあ1階に食べる所があるからそこで食べようか？」
「うん」
あたしは、一旦1階のスタート地点に戻る。
そこの正面に、レストランがあった。
今は空いていて、注文の品をゆっくり考えられる。
「懐かしの食堂車ねえ……」

「うーん、俺たち食堂車何て使ったことないぜ」
数年前まで、北海道に行く寝台列車についていたらしいけど。
「『懐かしの』というより、『知られざる』って感じで考えるといいかも」
思い付きであたしが言う。
「あー、それいいかも。よし決めた！」
浩介くんも、合点が行ったような様子で注文を決めた。
ちなみに、注文したのはあたしも浩介くんもカツカレーで、カツもカレーもよく食べるんだけど、カツカレーはあまり食べたことがないのでこちらをチョイスしておいた。
店員さんが注文を確認し、あたしたちはひたすら待ち続ける。
窓の外には、多くの乗客を乗せた電車が行きかっている。
あたしは、ふと自分が、全人類の将来を左右しかねない選択をしたことを思い出す。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「電車凄い本数よね」
「ああ、よくこれだけの人が乗るものだ。１両でも場合によっては１００人だろ？」
「しかもそれが１０両１５両で、数分おきにやってきて……まるで無尽蔵みたいだけど、実際にはもちろん有限で、しかも東京という都市だって世界人口からすればほんの一部でしかないのよね」
「ああ、大きいな。この地球は」
浩介くんがしみじみと言う。
「でもあの電車に乗っていた人も、さっき乗っていた人も、それぞれに人生があって……あたしたち、あの人たちをも変えかねないことをしているのよね」
「……だな」
鉄道を知ることで、あたしたちは世界の視野が広くなった。
と同時に、これからの大学生活が、人類史にとって大きな出来事になるということも、ほんの数人の人しか知らない。
何だか、胸がわくわくする話よね。

「お待たせいたしましたー」
店員さんの掛け声で、あたしたちは食事に入った。

食事のあとは、シミュレータを覗いてみた。
ダイヤ通りに、かつ正確に止めるのが目的で、ギャラリーが多かったこともあって、あたしたちは見学にとどめることにした。
蒸気機関車の運転シミュレーターもあったけど、あたしは体力が無いのでもちろんパスした。
次に見えたのは駅のホームを模した展示で、実際に青い１０３系の車掌室にも入れた。
「ぎゃはははははは」
車掌室では、あたしたちと同じくらいの若い男性２人組が笑っていた。
明らかに「大きなお友達」という感じだわ。
プープップップー
彼らは規則的なブザーを鳴らす。
プープップップー
もう一人が同じブザーを返すと「もしもし、運転士です」とか演技をし始めた。
「でも、用途は間違ってねえんだよな」
浩介くんが呟く。
多分あのブザーは運転士と車掌の連絡用何だと思う。
ここの展示では他には列車指令の仕組みなんてあって、こちらの方のＣＴＣは、京都で見たのとそっくりね。
あたしたちは、再び屋外に出る。
すると、色違いの４５５系がまた見えた。こちらのほ方は「ランチトレイン」となっていて、客室で好きに飲食することができる。
「永原先生によれば、この４５５系の色合いは晩年に東北本線の普通列車で使われた時のもので、永原先生的にはこちらが４５５系のイメージなんだそうな」

車内では、老人グループと思われる団体が大声で騒ぎながら食事をとっていた。
あたしたちはそれを避け、さらに進むと、右側には小さい男の子たちを乗せたミニ列車のアトラクションがあった。
本物のＣ６２を使っていた京都のそれと比べると、かなりチープな感じで、新幹線を模している。
だけど、目の前にある「ミニトレイン」はそれなりに面白そうね。
「これ別料金か……よし、乗ってみよう」
「うん」
あたしたちはチケットを買って並んでみる。
といっても待ってるお客さんはほとんどいなくて、あたしたちはすぐに乗れる。もちろん運転するのは浩介くんだ。
「よし、がんばるぞ！」
「浩介くん、安全運転でね」
「おうよ！　えっと、下のほうに倒すと……おおお！　動いた！」
「ういーん」と、実際の音を模したような感じの音が流れ、列車は動いていく。
速度計も浩介くんの運転に反応しているけど、もちろんこの速度はデタラメだ。
「まもなく駅です。停車してください」
「えっと、ブレーキは……えい！」
浩介くんが、手前に引いていたレバーを一気に倒す。
すると、普段使っている電車が止まるときのような音がして、車体が急減速する。
「わわっ」
浩介くんが動揺し、再びレバーを前に倒す。
ファン！
足元のボタンを押してしまう。そこはどうやら警笛になっているみたいね。
その後、加速減速を繰り返しつつ、何とかホームに止まることに成功した。

「電車の運転士ってすげえよな」
「うん」
あたしたちは、こんなおもちゃでも四苦八苦しちゃうものね。
ともあれ、駅に停車してすぐに発車すると、あたしたちは再び加速する。
後は特に大きなイベントはないが、カーブで制限速度があるので、それを守らなければいけなかったり、赤信号になって止まる必要に迫られたりしたら、その矢先に青になって加速したりと芸が細かかった。
「ふー、終わった終わった」
「あはは、かっこ悪かったな俺」
浩介くんが汗をかいている。
ちょっと落ち込んでいる気もするわ。
「あはは、大丈夫よ。浩介くんはあたしを守ってくれてるだけで十分かっこいいからね」
あたしが笑顔でフォローする。
「おっしゃあ！　元気出てきた！」
浩介くんが機嫌をすぐに取り戻す。本当にもう、笑っちゃうくらい単純なんだから、そんな浩介くん、ますます惚れ込んじゃうじゃないの。
あたしたちは、このミニチュア鉄道の裏手の博物館の最奥部に向かう。
ここに展示されていたのはキハ１１、さらにその左側、本当の最奥部はシアターになっていて、鉄道に関係のある映像を見たりできるけど、今はやっていないらしく、鍵も閉まっていて中も薄暗かった。
「ふう、これで一通り見たな。優子ちゃん、まだ新幹線まで時間あるけどどうする？」
浩介くんがスマホの時計を見ながら言う。
「うーん、もう一度車両のところを見ようよ」
「うん、そうだな。よし戻ろうか」
「うん」

あたしたちは、元来た道を戻るため、いったん引き返す。
さらーり、なでなで
「きゃあ！　こら浩介くん！」
また浩介くんにお尻を撫でられてしまった。
「ごめんごめん、愛する嫁の無防備な所を見たらつい手が出ちゃった」
浩介くんが半笑いでごまかしてくる。
「もう、あたしだからまだいいけど、他の女性には絶対にしないでよね」
あたしは浩介くんに惚れ込んでるからいいけど、そうじゃなかったら警察に御用になっちゃうよね。
「分かってるって、第一優子ちゃんを知っちゃったら、他の女に手を出そうとか全く思えなくなるぞ」
「うー、微妙にほめられて嬉しいのがまた悔しいわ」
以前は、「本当はされて好きなんだろ？」とか「触られているうちが華」というのは、痴漢の自己正当化のための理論だと思ってたけど、本当に惚れ込んでると、自分自身にとっても身に染みるくらいの正論になっちゃうのよね。
あたしたちは、もう一度車両展示を見た後で、時間に余裕をもって博物館を出た。
そして、ニューシャトルに乗って大宮駅に戻る。
所定のロッカーから荷物を持って、あたしたちはいよいよ今日の宿を目指すことになる。

「よし、じゃあ行くか」
「うん」
ちなみに、乗車券は大宮駅で途中下車の扱いになっているので、さっきと同じものを出す。
「しかし、定期券じゃなくても途中下車できるんだな」
「うん、そうみたいね」
永原先生によれば、そもそも乗車券というのは原則的には後戻りをしない限り何回でも途中下車が可能で、その上で幾つかの例外がある

のだという。
あたしたちは、その「例外的な乗車券」を、よく目にするのだと言う。
あたしたちは、適当な時間になって大宮駅のホームへと上がり、グランクラスを目指す。
グランクラスに入るのは2回目のこと。1回目に入った一昨年は、シートのみの営業で、アテンダントによる車内サービスはなかったが、今回はそれがある。
「間もなく――」
駅の放送が、新函館北斗行きのはやぶさと、秋田行きのこまちがホームに入ってくることを伝える。ちなみに、グランクラスに並んでいるのはあたしたちだけ。
隣のグリーン車はそれなりに並んでいるけど、やっぱり値段の差もあるのかな？
そうこう思っていると、はやぶさ号が入線する。
やはり、すさまじい位の真緑だった。先頭は近くで見るととても長くて、中々の威圧感があった。
ドアが開き、あたしたちは人生で2回目のグランクラスに入る。
「相変わらずすげえな」
「うん」
お客さんも、サラリーマンと思われる人が2人乗っているだけで、かなり空いている。
ニュースなどが見やすいように比較的後列の方の2人席を取った。もちろん窓側はあたし。
ちなみに、新婚旅行中は、一回は浩介くんを窓側にとも思ったけど「何かあったら優子ちゃんを守るのは俺の役目」と言って、あたしが全部窓側になった。
やっぱり、男は女を守ろうと遺伝子にインプットされているのね。そして女のあたしは、男に守られることで、男に惚れこむように出来ている。
「えっと、これをこうやってっと」

浩介くんがリクライニングを倒し、足を思いっきり投げ出す。
あたしは膝上丈の赤の巻きスカートなので、そこまでだらしない恰好はせず、下側にうんと足を延ばす。
「優子ちゃん、足の延ばし方まで女子力高いよね」
「えへへ、ありがとう」
そんな会話をしていると、はやぶさのドアが締まり、すぐに発車する。
列車は、東海道新幹線と比べると加速は緩やかだけど、それでも電車相応にぐいぐいと加速を上げていく。
「本日も、東北新幹線をご利用くださいまして、ありがとうございます。この電車は東北新幹線はやぶさ号新函館北斗行きと、こまち号、秋田行きです。全車指定席で自由席はございません。次は仙台――」
東北新幹線でよく見られるオルゴールのような特徴的なメロディーが流れ、新幹線が停車駅を案内する。
幸子さんの家に行く時に使ったやまびことは大違いだ。
もちろん、普段の普通車でも十分あたしたちにとっては快適だけどね。

# 新婚旅行1日目　新たなホテルへ

「あーふかふかだー」
　浩介くんがグランクラスの席に感動している。
「ねえ浩介くん、軽食サービス、無料みたいよ」
「おー本当だ。ジュースも飲み放題なのか。これが車内サービス……まあ、後でいいよな」
「うん」
　浩介くんも緊張している。
　若い頃と言えば、格安の夜行ツアーバスによる旅行なんて言うのが多いけど、考えてみるとあたしたちはそんな感じとは無縁だった。
　特に今回の新婚旅行は、贅の限りを尽くす3泊と言ってもいい。
　今日の宿は、仙台にとってあって、明日明後日の宿が言わば別荘を丸ごと借りるような感じの、高級感あふれる温泉になっている。
　もちろん明後日の3日目が、ハネムーン的にはメインになる。
　唯一の、移動がない日で、あたしたちはこの日に向けて貯めこむことも考えたけど、浩介くん曰く「大丈夫だ、問題ない」ということで、仙台のホテルも、いわゆる「ラブホテル」に決まった。
　考えてみれば、恋人だった時は浩介くんが随分と我慢していた。
　今回の新婚旅行は、きちんとそれを発散させてあげないといけないわ。愛する浩介くんが欲求不満になっちゃいけないものね。
　むしろ精力のつく食事をたくさん食べさせてあげて、あたしでいっぱい満足してもらうのも、大事な大事な奥さんの務めよね。
　列車はぐいぐいスピードを上げていく。
　そう言えば、３２０キロだっけ？　それにしてはそれほどでもないような？
「浩介くん、最高速度ってどこで出すんだろう？」
「えっと待ってな……宇都宮駅までは２７５キロでそこから盛岡までが３２０キロ出すそうだぞ。ちなみに、『ただいま３２０キロ』のような案内表示は出ないらしい」
「へー」

浩介くんがまたメモ帳を取り出して言う。永原先生、先読み力凄いわよね。
列車は、小山駅と宇都宮駅を通過する。
「あー喉乾いた」
「ジュースと軽食にする？　洋食でいいわよね？」
「……だな」
浩介くんが、アテンダント呼び出しのボタンを押す。
すると、制服を着た、あたしほどじゃないけどそれなりに美人のアテンダントさんが「お呼びでしょうか？」と頭を下げる。
「あー、洋食の軽食とジュース２つ」
「かしこまりました」
やはり、それなりの教育をしているらしく、きれいな所作でお辞儀をする。
うーん、当たり前だけど完敗だわ。あたしも、昨日は浩介くんにあれくらいお辞儀して「よろしくお願いします」ってしたほうが良かったかしら？
「優子ちゃん、何悩んでるんだ？」
「え？　いやその、ああいうきれいなお辞儀できたらなあって」
「あはは、優子ちゃん、いい女になろうとしてくれるのはうれしいけど、根を詰めすぎちゃダメだよ。それに、優子ちゃんと毎日いると、優子ちゃん以外の女がブスに見えて来るんだぜ。あ、木ノ本とか永原先生は別だけどな」
「もー浩介くん」
浩介くん、感覚がマヒしてるわね。まあ、無理もないか。
あたし、不老でよかったわ。
「あはは、悪い悪い。でも、優子ちゃんがかわいいと思えていれば、それで十分だろ？」
浩介くんが真顔で恥ずかしいセリフを言う。
あたしは、熟れたリンゴのように顔が真っ赤に染まり、熱を感じてしまう。
「も、もう……それ、反則よ！」

「嬉しそうで何より」
浩介くんがニッコリと笑う。
「うー」
そんなやり取りをしていると、さっきのアテンダントさんが軽食とジュースを持ってきてくれる。
「いただきます」
お行儀よくいただきますをして、あたしたちは軽食を食べる。
「おいしいわね」
「ああ」
食材は名産品揃いとあってどれもおいしいけど、量はかなり少なくて、さっきのカツカレーの足しになっている程度まあ、いくらグランクラスと言っても無料で付いてくるサービスだからこれ以上を求めるのは欲張りというものよね。
「ごちそうさま」
浩介くんが先に食べ終わり、程なくしてあたしも食べ終わる。
「さ、捨ててくる」
浩介くんが空っぽになった箱を整理する。
「こちらお下げしてもよろしいですか？」
しかし、アテンダントさんに先回りされてしまう。
やっぱりプロよね。
「あ、はい……オレンジジュースもう一杯、優子ちゃんは？」
「あー、あたしはいいわ」
と言うわけで、浩介くんはもう一杯オレンジジュースを飲む。
外はグランクラスといえど結構轟音が響いていて、風景の流れるスピードも、今まで見てきたどの新幹線と比べても格段に速い。
間違いなく３００キロは出ている。そんな走りだった。
「すげえ速いな」
「うん」
そして、「ただいま郡山駅付近を通過中です」のテロップが流れる。
後２駅でもう仙台に着いてしまう。以前に乗ったやまびことは比べ物にならないくらい速かった。

「悪い、ちょっとトイレ」
浩介くんがトイレに向かう。
あたしは一人になって考える。今回の旅、とても大きなものになりそうね。
「ふう、グランクラスすげえぞ、新聞まであったぜ」
浩介くんが報告してくれる。
「そ、そう。あたし、ちょっとお花摘みに行ってくるわね」
「あ、ああ……」
あたしも、トイレに向かう。
確かに新聞が目に入る、トイレのドアを開け、鍵を閉める。
スカートをぴらっとめくり上げてパンツを下ろし、直接座る。
「そう言えば、さっき浩介くんもここを使ったばかりで――」
って、何考えてるのよ優子！
結婚したらそんなこと日常茶飯事じゃないの！
あたしはそう言い聞かせて、興奮する感情を何とか抑え込んだ。

「ふう」
「お帰り優子ちゃん」
浩介くんが出迎えてくれる。
「うん」
「にしてもさ」
浩介くんが不思議そうな顔をしている。
「うん？」
「優子ちゃんって何でトイレ行く時『お花を摘む』何て言うの？」
「え!?」
浩介くんが、ストレートに疑問を言う。幸い、前のサラリーマンはいずれもイヤホンを付けていて、聞かれていない。
「あーうん、その……あたしも以前は『トイレ行ってくる』って言ってたんだけど、林間学校の時に永原先生に叱られちゃって」
ちなみに、その時は「音姫」の使い方のレクチャーも受けた。
今では無意識に出来ることだけど、当時はまだそこまでは女の子に

なれてなくて無理だった。
「うーん、そんなものなのか」
「そうよ。女の子らしく慎ましやかになりなさいってね。今では懐かしい思い出よ」
「大変そうだな、女の人生も」
浩介くんが感心したように言う。
「当たり前よ。あたしなんて特にね」
「だよなあ……うんうん」
浩介くんは確認するように繰り返してうなずく。
列車は、白石蔵王駅を通過、次が仙台になる。

「いやー快適だったな」
電車を出て、浩介くんが満足そうに言う。飲み物も何度も頼んだりしてて、ちょっと申し訳なかったかも。
「でもやっぱり、値段は高いわよね」
「ああ、そう気軽に乗れるもんじゃねえな」
浩介くんが月並みな感想を述べる。あたしも同意見。
今回みたいに蓬莱教授の支援があってこそ乗れる列車よね。
「えっと、宿はここから――」
「地下鉄で2駅の道の裏手だな」
仙台駅には幸子さんの件で何度か来たけど、地下鉄に乗るのは初めてのこと。
「なあ、夕食も買っていこうぜ」
「うん」
グランクラスの軽食はあったけど、あれはおやつみたいなもの。
もちろんいつもよりは遅くに取るつもりだけど。
取りあえず、地下鉄へは大きなエスカレーターを下りるけど、夕食を探しに寄り道をする。
「えっと……ここで売ってるのかな？」
お店の一番外側には、「にんにく牛タン弁当」が置かれていた。
「お、これいいんじゃね？」

浩介くんが、その牛タン弁当を指差して言う。
ニンニクに潮の強い牛タン、浩介くんの精力増強にはピッタリよね。
エネルギー満タンで元気いっぱいになった浩介くんに激しく……キャー！
「……どうした？　優子ちゃん、顔が赤いぞ」
「え!?　ああうんごめん、うん、あたしも今日はこれがいいと思うわ！」
慌ててあたしが応対する。
いけないいけない、今から興奮しちゃうのはさすがにまずいわね。
「？　そうか、優子ちゃんもこれにするか？」
「うん」
浩介くんは、早速「にんにく牛タン弁当」を2個レジに持って行き、会計を済ませる。
「よし行こうか」
「うん」
後はもう、ラブホテルに直行するだけ。
あたしの心臓が、急速に高鳴っていく。
昨日浩介くんに犯されたばっかりなのに、今日もまた、浩介くんのものになる。
まただわ。いけないことだって分かっているのに、どうしても浩介くんに物のような扱いを受けたくてたまらなくなっちゃっている。
こんな願いばかりしてたら、浩介くんのためにもならない。何とかしないといけないわね。
初めて、仙台の地下鉄に乗る。
と言っても、あたしたちが普段使っている東京の地下鉄と、そこまで大きな違いはない。あるとすれば、本数がちょっと少ないことくらい。
「こっちだ」
新しくできた「東西線」ではなく、古い「南北線」の方を使う。
地下鉄まではそれなりに離れていて、数分間の待機の後に乗り込ん

だ。
あたしは、昨日のことも思い出して、浩介くんの顔さえ、まともに直視できなくなっていった。
浩介くんも、あたしに配慮してか、声をかけてこない。
「次は――」
「優子ちゃん、降りるよ」
「うん」
浩介くんのたくましい背中の後ろについていく。
ラブホテルに向けて、裏通りを少し進むと、古びた建物が1件見えてきた。
「ここだ」
「うん」
あたしたちは、意を決して建物の中に入る。
正面にはフロントがあるはずなんだけど、人の姿は見えない。
あうう……怖いわ。
「浩介くん……」
「大丈夫だって」
あたしが浩介くんにしがみつくと、浩介くんは優しい声であたしを落ち着かせようとしてくれる。
あたしたちは正面へと進む。
「すみません」
「はい」
向こうから声が聞こえる。どうやら、向こう側に人がいるらしい。
「今日予約した篠原ですけど」
「お待ちしておりました。こちらエレベーターで5階にお上がりください」
ラブホテルという場所なのでお互い顔が見えない配慮なのね。
ともあれ、鍵を受け取ったので、指示通りエレベーターに入る。
「随分と古いわねこれ」
ボタンもとてもアナログ的で、「チーン」という音さえする。

あたしはドアを閉め、「5」というボタンを押す。
むにっ……ぷにっ……
「きゃあ！」
浩介くんに、胸とお尻を同時に揉まれる。
両手同時に揉まれた経験は少ない。
「ふへへ、ちょっとだけ」
「もう！　えっち！」
チン！
「5階です」
無機質な機械音声とともに、浩介くんが我に返って手を放すと、あたしたちは、一気に部屋まで進む。
「鍵、開けるぞ」
「うん」
浩介くんが部屋の鍵を開ける。
今日のホテルは、どんな感じなんだろう？
「わっ！」
「うっ！」
部屋の中は、掃除はされていたんだけど、それでも取り切れないエッチな臭いが充満していた。
あたしは、あっという間に全身が汗びっしょりになってしまう。
「はぁ……はぁ……」
テーブルは小さめで、代わりに大きな布団が部屋のかなりの部分を占拠していた。
テレビも置かれていて、お風呂場も広い。
特徴的なのは、お風呂場の所に凸凹のあるマットみたいなものがあったことや、明らかにシャンプーやリンスとは違う液体があったこと。
そして、ベッドの近くには小さなクローゼットがあって、どこかの学校の制服と体操着、メイド服にバニー服のコスプレが置いてあって、「他のサイズもあります。貸し出します」とあった。
「な、なあ優子ちゃん」

「ん？」
浩介くんがむずむずしながら言う。
「制服、また着てくれるか？」
「え、小谷学園の!?」
「ああ、ちょっといけないことしている気分になりたいんだ」
浩介くんが、正直に言う。
そうよね、せっかく持ってきたんだし。
「う、うん……じゃあたし、こっちで着替えるから。覗かないでね」
「あ、ああ……」
あたしは、キャリーバッグから制服を持ち出して、お風呂場の方に入り、念のため鍵をかける。
脱衣所であたしはスカートとトップスを脱いで下着姿になる。
「昨日はこの向こう側を……今日も――」
ってダメダメ、今から想像するのはダメ！　浩介くんに冷えた体を暖めてもらうのはもっと後！
ともあれ、あたしはスカートとブラウス、そしてブレザーを着こむ。
最近ではスカートを折って短くできないようにしているというけど、小谷学園の制服は丈については無頓着らしく、古典的な方法で短くできる。
更に、位置を言う最寄り少し上げて、いつもよりも短くする。
よし、これでいいわね。
「あれ？」
あたしの視界には、一冊の冊子が目に入った。
「マットの遊び方？」
どうやら、このホテルのもの見たい。
「わ、わあ！」
思わず、素っ頓狂な声をあげてしまう。
そこには、いわゆる「そっち系」のお店で行われているプレーの解説があったから。
「あうう……これ、浩介くん喜んでくれるかなあ？」
分からないけど、今日じゃなくても、明日の朝でも試してみてもい

いかもしれない。
「お待たせー」
「優子ちゃん、遅かったじゃん、どうしたの？」
見慣れた男子制服姿になった浩介くんが心配そうに聞いてくる。
あたしとしては、正直に言いたい。
「ああうん、その……洗面台にお風呂のマットみたいなもので使うときのプレーが載ってて……」
「へー、もしかして優子ちゃん、それやってみたいの？」
「うん……うまくいく自信はないけど」
あたしは、顔を赤くしながら答える。
「ほほう、これからが楽しみだな」
浩介くんは、もうすでにこの空間でかなり興奮しているみたいね。
あたしも同じだけど。
「んじゃ、まずは腹ごしらえからすっか」
「うん」
浩介くんがテーブルの上にさっき買ったお弁当を出す。
「この紐を引っ張ると、一気に熱くなるみたいだぜ」
「凄いわね。どういう仕掛けなのかしら？」
「さあ？　ともあれ、いただこうぜ」
「うん……きゃっ！」
「おわっ」
浩介くんと共に、お弁当の紐を引っ張ると、蒸気音と共に、急激に熱せられていく。
さすがに熱すぎるので、少しだけ冷ましてから食べ始めることにした。
「ごちそうさま」
あー、おいしかったわ。
あたしは、スカートがめくれないように注意しながら、ベッドへと寝転ぶ。

ラブホテルという空間の特殊性からか、昨日まで着ていた制服なのに、もうコスプレしているような感覚になった。
コスプレとして制服を着るのも、そもそもコスプレそのものだって一昨年の文化祭のメイド喫茶以来のこと。
今日はこれから、この制服で浩介くんに――
ぴらっ
「いやーん!!!」
とか考えていたら、浩介くんにスカートめくりされて縞パンが丸見えになってしまう。
浩介くんも力を入れてなかったので、あたしが抵抗してスカートを抑えると、パンツは見えなくなる。
「もう、少し休ませてよー!」
本音では、今すぐしちゃってもいいんだけど。
「悪い悪い。あ、そうだ」
「うん?」
浩介くんが、何かを閃いたように言う。
それも、悪巧みの類いね。
「小谷学園ってさ、校則があってなかったじゃん」
「うん」
まあ、それが最大の特徴だもんね。
「もしも校則に厳しくて、先生の権限が大きい学校だったらってシチュエーションを思いついたんだ」
「へ?」
正直言って、全く想像がつかない。
生徒会が事実上の文化祭第二実行委員になってて、生活指導部は名ばかりで、風紀委員に至っては委員や委員長が自分がそうだってことを忘れるような学校なのに、校則が厳しいなんて変よね（創設者はそう思ってたらしいけど）
「でさ、この前ネットで変な校則について調べてたんだよ。いや、小谷学園は恵まれてると思ったけど、にしたってさ、下着の色を『白じゃなきゃダメ』なんて書いてる学校もあるんだぜ」

「え!?　何よそれ、あり得ないわよ!」
浩介くんがさらっと衝撃的なことを言う。
そもそも、どうやって検査するのよ。
「でだ、実際にスカートをめくって検査する学校もあるとか書かれているらしい。と言うわけで、今の俺はこの服だけど、今から『校則が厳しい暗黒の小谷学園』の先生になる」
「う、うん……」
「優子ちゃんは検査で校則違反がばれちゃった生徒ということで、おしおきされる役目だ。あ、俺の呼び方はいつも通りでいいぞ」
浩介くんが設定を披露する。
突拍子もない話だと思うけど、何だか面白そうで、興味本位で乗ってしまう。
「よしじゃあ始めるぞ。優子ちゃん、そこに後ろ向きで立ってくれる?」
「う、うん……」
言われるがままに立つ。
「えへん、今日は下着検査を始める。女子は前に出なさい」
「はい」
あたしが返事をするが、その場は動かない。
浩介くんは、右に立ってエアスカートめくりをする。
「よし、次」
一歩左に移動する。これを繰り返し――
「よし、次、優子ちゃん」
「は、はい……」
お芝居だと分かっていても、どうしても緊張してしまう。
ファサッ
「やっ……!」
恥ずかしくて、声が出てしまう。
「おや優子ちゃん、また縞パンなんて穿いてきたのか?」
「あうう、ご、ごめんなさい!」
「うーん、でも優子ちゃん、悪いんだけどもう校則違反溜まってるんで

すよね。と言うわけで、ちょっとおしおきしないといけません」
浩介くんがノリノリで演技する。
「あ、あの……も、もうしませんので許してください」
あたしも、演技に身が入り、涙声になる。
「うーん、前もそのセリフ聞いたんだよねえ……とりあえず、そこの壁に手をつきなさい」
浩介くんに言われるがままに、壁に手をつき、あたしの大きなお尻を突き出す。
べろんっ
「いやあ！」
浩介くんにスカートめくられる。
ぽんっ！
「痛っ！」
浩介くんにお尻を叩かれる。と言っても、限りなく「触られる」に近い感覚で、痛みは全く無い。だから「痛っ」ってのも演技。
ぽんっ！　ぽんっ！
「うっ……ごめんなさい！　ごめんなさい！」
まるで、昨日卒業したクラスメイト全員に見られているような感覚さえ受ける。
もちろんそんなことはない。ただ、このシチュエーションにのめりこんでしまっているのだ。
「ごめんなさい！　お願い……もう許して……！」
浩介くんにスカートの手が止まる。
演技だと分かっていても、浩介くんにはやはり罪悪感がある。
「優子ちゃん、何回も校則違反をしましたからね。仕方ありません、もはや優子ちゃんは校則を守る能力がないとみなし、以降の検査は免除しますが……お風呂の罰則を与えます！」
浩介くんが高らかに宣言する。
「お風呂の罰則」と言うのは、明らかにさっきのを指している。
「さ、優子ちゃん、一緒にお風呂に入って、俺に奉仕してくれるか？」
「……はい」

あたしと浩介くんは、冷え切った体を暖めあうために、お風呂場へと消えていった。

# 新婚旅行2日目　午前の東北

「うーん……」
朝、小鳥のさえずり声が聞こえた気がした。もちろん、それは幻聴で、隣には浩介くんが熟睡していた。
ここはラブホテル、防音設備はしっかりとしている。
昨日、あたしはあれから浩介くんに何度も気絶させられた。
浩介くんとの相性は、最高だった。
特に、昨日まで石山優子として所属していた小谷学園の制服同士だったのは、半端ない臨場感と背徳感だった。機会があったら、また制服を着て、昔を思い出すのもいいのかもしれないわね。
今日は、温泉へと向かう。出発の時間まで、かなりの時間があった。
あたしはベッドから起きてパジャマを脱ぐ。下着も脱いでフルヌードになった所で、浩介くんが目を覚まし始める。
「うーん……」
ま、まずい！　浩介くんが起きちゃうわ！
そう思って、あたしはとっさにベッドに戻る。
「あ、優子ちゃん、おはよう」
「うん、おはよう」
あれ？　浩介くんなんかちょっと苦しそうね。
浩介くんのベッドが、尋常じゃないくらい盛り上がっているのが見えた。
どうやら、ベッドの中で膝を曲げて盛り上げているみたい。
あたしの女の勘としては、慌てて何かを隠しているような気がするわね。
うーん……ピコーン！
あたしは、「優一の知識」で浩介くんの行動を考えた結果、すぐに結論を見つけることができた。
「ねえあなた、肩こってる？」
あえてすっとぼける。
「え？　あーあんまり……」

浩介くん、鍛えてるもんね。肩とかこらなさそうで羨ましいわ。
「まあ、でも昨日今日と疲れたと思うし、マッサージしてあげるわよ」
そうは言っても、やはりマッサージは大切よね。新婚旅行で疲れすぎちゃいけないもの。
「え!?　いやいいって！　大丈夫だから！」
慌てて取り繕う様子を見てても、どうやら浩介くんは窮屈な感じみたいね。
今、楽にさせてあげないと。
「あなた、遠慮しなくていいのよ」
あたしは、素っ裸のまま浩介くんのベッドに移る。
浩介くんは、そんなあたしを見て、すぐに息を荒く、頬を赤くする。あたしが着替えている途中だったのは災い転じて福となすになったわね。
多分、今の浩介くんへのマッサージには、指だけではなくこの巨大な胸も役立つと思う。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
浩介くんが激しく息遣いをする。
結局、浩介くんは干からびそうになっている。
「ふう、あなた？　どうだった？」
「うん、最高だったよ。固まってたのが一気にほぐれて、疲れが一杯出たよ」
浩介くんはあたしのマッサージに大満足してくれた。
とにかく、今回のマッサージは気持ちよさ、ほぐれ方だけではなく、見た目の魅力がとんでもなく良かったと言っていた。
浩介くん曰く、「優子ちゃんは包容力がある」とのことでもあった。
ともあれ、あたしのマッサージで、浩介くんもだいぶ楽になってくれたみたいでよかった。これからも、機会があればこの「挟み込み法」を使っていきたいわね。
「な、なあ優子ちゃん」

浩介くんがぜえぜえ言いながら、冷静な口調で言う。毎度のことだけど、これって結構ギャップがあるわよね。
優一の頃はこんな感じに良くなってたはずなんだけど、女の子になって長いから逆に新鮮だわ。
「うん？」
「今夜、どうしよう？」
浩介くんが冷静な声で言う。
確かに、朝のうちにこれはちょっと軽率だったかもしれないわね。
「ま、まあ多分ここの方が雰囲気出ると思うし、あっちのホテルは明日もあるから、ね」
「お、おう……」
一応、このホテルにも売店があって、「マムシドリンク」とか「栄養剤」が売られている。いずれも、あたしや浩介くんのエネルギーを引き出すためのもの。
チェックアウトの時に、それを買って飲ませることにしようかな？
「ごめん、あたし着替えるから向こう行くね」
「分かった」
裸は見せても、着るところは見せない。
変身中のことは、夫婦でも、いや、夫婦だからこその秘密にしていきたい。
アニメの変身シーンでは、女の子たちは途中ですっぽんぽんにさせられちゃって、女の子によっては恥ずかしそうな表情を見せるわけだけど、その状態ならはたまに見せてもいい。
あるいは、浩介くんの手でそうさせられる時には、いつも以上に恥ずかしがらないといけない。もちろん、浩介くんにされるのはすごく恥ずかしいけど、きちんと「恥ずかしい」を伝えないといけない。
浩介くんの彼氏になってからというもの、いや、それ以前から「恥じらいの心を忘れてはいけない」というのは母さんに徹底的に叩き込まれたことで、それが今でも生きている。
あたしは、老けることがないから、多分加齢とともに恥じらいがなくなるという事もないと思う。

あたしは、本能的に分かっていた。
恥ずかしがることで、浩介くんの征服欲を刺激し、独占欲を満たさせることで、あたしの本能的な被支配欲も満足するということに。
「よしっ」
昨日のお風呂での出来事を思い出しつつ、あたしは服を着終わった。
今日の服は、東北の山の温泉ということで、膝丈の茶色のスカートに、ストッキングを履くパターンにした。
あまり私服ではストッキングを履かないので、ちょっとだけ新鮮な気分になる。
「ふう、浩介くんお待たせ」
「おう」
浩介くんが荷物をまとめている。
あたしも、やや急ぎ気味に同じように荷物をまとめる。
ふと時計を見ると、結構な時間になっていた。
「あら、もうこんな時間なのね」
もちろん、新幹線には十分間に合うけど。
「ああ、さっき優子ちゃんが気持ちいいマッサージをしてくれたのが響いたぜ」
「そ、そう……」
ともあれ、荷物を整理しつつ、最も重要な財布と乗車券、そして時刻表があるかを確認する。
うん、問題ないわね。忘れ物もなさそうだし、これでいつでも外に出られるわね。
「優子ちゃん」
「うん？」
浩介くんがあたしに声をかけてくる。
「ん……」
「チュッ……」
浩介くんが何の気なしにキスをねだる。
あたしも、チュッと軽くキスをする。

「どうしたの急に？」
「優子ちゃんがかわいかったから、つい」
浩介くんが、いかにも「深い理由はない」という感じで、苦し紛れに言う。
「もう！　何それ？　あたしがかわいいのはいつものことでしょ？」
「そ、そうなんだけどね。あはは……」
浩介くんとキスをし、こんな感じで甘々にいちゃつく。
これもまた、ラブホテルという場所の不思議な雰囲気のせいなのかもしれないわね。またちょっとだけ抱きしめあって、浩介くんにお尻を一撫でされちゃった。
でも、さすがにそろそろ出ないと時間もまずいので惜しみつつ部屋を後にする。
あたしたちは、ラブホテルに別れを告げ、マムシドリンクと栄養剤をそれぞれ購入した。

「さて、次に使う切符を出してくれ」
「うん」
地下鉄で仙台駅に到着した。今日の旅もまた、新幹線から始まる。
今日乗るのは「はやぶさ」ではなく、「やまびこ」で、降りるのは北上駅。
そこからは、本数の少ないローカル線に乗り換えることになっている。
今回使うのは昨日のより古いタイプで、グランクラスはない。幸子さんの元を初めて訪れた時に使った思い入れのある車両でもある。
いつの間にか相当に数を減らしていて、東北新幹線ではもはや貴重な存在になっている。
というより、ほぼ風前の灯と言ってもいいだろう。
まあそれでも、ちゃっかりとグリーン車に乗っちゃうあたり、今回の旅が窺い知れる。
「ここがグリーン車ね」
列車が入線する。普通車と違い２列×２列で空間も広々としてい

る。
「お、グランクラスほどじゃねえけど座り心地いいな」
「うん、快適よね」
浩介くんが、グリーン車の座り心地について話す。
まあ普段の普通車でも、あまり問題ないけど、足を伸ばしやすいのは利点よね。
「にしたって、結構グリーン料金は高いよなあ」
浩介くんが、グリーン券を見ながら言う。
内訳として特急料金とグリーン料金があるけどほぼ同じ料金になっている。
つまり、グリーン車は普通車の倍かかるわけだ。昨日のグランクラスなんて特急料金の培近かかった。
確かに座り心地やサービスは至れり尽くせりとは言え、あれだけのお金を取られてしまえば、なかなか利用者数を伸ばすのは難しいと思う。
そして今回のグリーン車、グランクラスよりも料金は手頃で、ドリンクやアテンダントサービスはもちろんないものの、ゆったりと旅行できるのはこちらも同じ。
やっぱり、割高に感じちゃうのはそれだけ普通車が快適になっていて、差をつけるのが難しくなっているためなのかもしれないわね。
昨日の博物館を見た感じでは、特急列車だとそもそも昔のグリーン車より今の普通車の方が乗り心地が良さそうだし。
このあたり、永原先生はどう思うんだろう？
「あーでも、永原先生によれば、グリーン車は依存症になる人も多いってさ」
「へー、そうなのね」
確かに金銭に余裕がある人だと、グリーン車の魅力に取り憑かれて普通車に戻れなくなるってのはあるかもしれない。
この新幹線は各駅停車で、仙台の次の駅は古川駅。当初の新婚旅行ではここで下車して温泉地帯に向かうのも考えていたけど、紆余曲折を経て今の旅程になった。まあ、行くのは温泉には変わりないけど。

「やっぱり、各駅停車タイプは結構止まるよな」
「うん、でもあまり通過待ちをしないのが不幸中の幸いね」
東海道新幹線と比べると本数が格段に少ないおかげとも言えるけど。
通過待ちは特に行われず、再び新幹線は発車する。この列車の最高時速は２７５キロで、昨日の３２０キロに比べるとやはりややゆっくり走っている感じがする。
「各停タイプでも、結構減速するまでは時間あるよな」
「うん」
次の駅までは何だかんだである程度の時間がかかる。
それでも、新幹線は速い。数駅止まった後であっという間に北上駅に到着した。
あたしたちは、新幹線を降りて、改札口を出て途中下車をする。
「ふう、えっと北上線の次の列車は……2時間近くもあるわね」
時刻表を見ると、北上線は昼間は3時間に1本程度しかなくて、とてつもないローカル線だということが分かる。
首都圏で見かけるＪＲ東日本とは、まるで別世界みたいよね。
「とりあえず、駅前を散策して食事を探さねえとな」
「うん」
時間的にも、お昼ごはんにはちょうどいい時間になっているし。
「それから、時間管理は厳重に注意しないとダメだな」
浩介くんがまた「例のノート」を取り出して言う。
「うん、分かっているわよ」
鉄道に限らず、時間管理の大切さは小谷学園でも特に注意していたことだし、特に北上線のこの列車に乗り遅れると、次は更に3時間後になる。
そうなればタクシー手配は免れ得ないし、何より下車駅から予約している送迎車に間に合わなくなってしまう。
今回の旅行の予定や切符の手続きは、主に永原先生が立てているものだという。
おそらく、北上駅で2時間待ちにしたのも、永原先生が意図的にそ

うしたからだと思う。
「よく旅番組で、時間ギリギリになって慌てるシーンがあるけど、永原先生曰く『有害だからＢＰＯに訴えるべき』って言ってるそうだ」
「それはまた過激よね」
　番組の演出上仕方ないと思うけど。
「永原先生によれば『鉄道の旅行は常に時間を厳守しないといけないから、ああいった駆け込み行為は周囲の迷惑になるばかりか、真似をしたら事故にも繋がりかねない』んだってさ」
　永原先生的には許されないことなのよね。
　もちろん、真田幸村とか赤穂浪士ほどのタブーじゃないとは思うけど。
「うーん、確かに、時間通りに動くのが日本の鉄道だものね」
「うむ、そしてその正確性は多分、乗客が時間に無秩序だと実現できないことなんじゃないかな？　だから永原先生は、こういう演出に対して怒っているんだと思う」
　難儀で窮屈だと言われればそれまでだけど、迷惑を被りかねないというのも事実である以上、致し方ないことなのかもしれないわね。
「俺達が普段住んでいる首都圏は乗り過ごしたり乗り間違えたりしても何とかなるけど、地方はそうもいかねえもんな」
　そう、逃せば何時間も待たされることになる。
　常に注意しないといけないわね。
「それから、あんまり駅の遠くにはいかないほうがいいらしいな。迷った時に精神衛生上もそうだし、そうじゃなくてもいつ元に戻れるかわからないからリスクが高いんだってさ」
　浩介くんは更にメモ帳を読んで永原先生からの注意を述べてくれる。
「一直線なら大丈夫じゃない？」
「まあ、そういう単純なのならな。あ、でも念のために時計を使って徒歩時間を記録しておくといいらしいぜ」
　浩介くんがそんなことを言う。
　時間を気にしすぎると楽しめないのも事実だけど、そのあたりは、

旅行のプロはうまいんだと思う。
あたしたちは、駅の名物のお土産屋さんを覗く。
「何か買っていく？」
「うーん、お土産は帰りでいいなあ」
確かに、重くなっちゃうものね。
「じゃあ、食事屋さんを探すか？」
「うーん、１２時まででいいかな？」
それまでは、あたしたちは駅の待合室で待つことにする。さすがに２時間は長いし、お腹をすかせておくのも手だろう。いざとなれば、お土産買ってその場で食べちゃえばいいし。
しばらく列車がないので、待合室はあたしたちだけだけ。

「それでね、蓬莱教授がね」
「なるほどねえ」
この間、２人で静かに話す。
時計がゆっくりと流れる。
時間と共に、数人の人が待合室に入る。
そして時間と共に、人が増えていく。
「えー間もなく、東北本線盛岡行きの改札を始めます」
駅員さんの放送と共に、あたしたち以外のお客さんの殆どが入っていく。彼らは、どうやら盛岡行きの普通列車のお客さんだったみたいね。
この駅、在来線は東北本線も本数が少なくて、新幹線もそこまで多いわけじゃないから、電光掲示板は持て余し気味になっている。
「ねえあなた、そろそろ行こうかしら？」
「ああそうだな。今から探せば昼食にはちょうどいいだろう」
頃合いが良くなったので、あたしたちは立ち上がり、キャリーバッグを引きながら、北上駅の西口に歩みを進めていった。

# 新婚旅行2日目　東北の昼時

「結構、栄えてるな」
さすがに、風景そのものは大都市という感じではなく、地方都市という感じだけど、やはり新幹線が止まる駅なので、駅前はそれなりに町並みが広がっている。
あたしたちは、とりあえず道を真っ直ぐに進む。知らない土地で曲がるのは、やはり心許ないから、道なりにだけ進む。
しばらくすると、街の中心の繁華街のようなものが見えてくる。
「お、ラーメン屋さんがあるぞ」
繁華街に入る前の部分でラーメン屋さんを見つけた浩介くんが、指をさす。
確かにそこは、ラーメン屋さんだった。
地方都市だから、多分他にはそこまでラーメン屋さんは多くないはず。
「どうする？」
ラーメンにするかどうか、あたしが聞いてみる。
「うーん、繁華街は迷いそうだし……ここまでで他にめぼしい食事屋さんもないしなあ。宿の夕食を遅めに頼めば大丈夫だろう」
確かにラーメンは重いけど、ご飯を遅くすれば大丈夫とのこと。
ん？　ここのラーメン屋さん、「にんにくラーメン」が有名なのね。
「ねえ、あなた？」
「うん？　どうしたの優子ちゃん」
「あなた、にんにくラーメンを食べるといいわよ」
「ああ、そうするつもりだ」
にんにくは精力がつく。夜のことも考えた食事にしてあげないとダメよね。
そうそう、今朝方ラブホテルで買った栄養ドリンクも、ちゃんと飲ませてあげないと。
とにかく、移動型の旅行になるのは今日までで、明日は丸一日同じ場所に留まることになっている。

明日一日は、移動こそないけど、浩介くんはヘトヘトになっちゃうと思う。
にんにくはとにかくパワーと体力がつくので、今のうちに食べさせてあげたい。
あたしは……うん、あたしだってヘトヘトになっちゃうだろうし、いつもよりも重めに食べたほうがいいかな？
そんなことを考えながら、ラーメン屋さんへと入る。
「いらっしゃいませー」
中からは、威勢のいい声が聞こえてきた。
ちょうどお昼時ということで、中はそれなりに混んでいたが、まだ次の列車まで1時間半以上あるので、とりあえず大丈夫だろう。
あたしたちは、空いていたカウンター席に座る。
「すみません、にんにくラーメン2つで、1つは大盛りで」
「あいよ」
「浩介くん、大盛りにしちゃって大丈夫？」
初めてのラーメン屋さんで、大盛りは危険だと思う。
「ああ、写真があったけど大丈夫だろ」
だといいけど。
ともあれ、あたしたちは店内をもう一度ぐるりと見てみる。
中は普通のラーメン店で、それなりに補修もされている。
地方によくありがちなボロというわけでもなさそうでよかったわ。
「お待たせいたしましたにんにくラーメンです」
といっても、来たのは遠くのカウンターの人、店内を見るに次にあたしたちのを作り始める感じになりそうね。
他のお客さんのにんにくラーメンをちらりと見てみると、どうやら量は少なめらしく、普通盛りでもあたしは無理なく全部食べきれそうね。
何だろう？　一昨日に昨日今日と、浩介くんと激しい運動をし続けたせいか食欲もやや旺盛になっている気がするわね。
「はい、にんにくラーメンと大盛りです、お待たせいたしました」
ラーメン屋さんの人が持ってきてくれる。ちなみに、味はしょうゆ

味だった。
「いただきます」
箸入れから箸を取り出す。
にんにくラーメンを名乗るだけあってにんにくは多いが、他にもセルフサービスで胡椒やネギ、紅しょうがやゴマもある。
あたしはネギを少しだけ入れて、胡椒を一振りする。
浩介くんは胡椒を少し多め、紅しょうがとネギも入れている。
ラーメン屋さんのラーメンは、学食で食べていたラーメンよりもずっと味が濃い。
学食のラーメンは万人受けするけど、個性が無いからラーメン屋さん向けでは無いのだろう。
ともあれ、あたしはスープを一口、続いて麺や具を口の入れていく。
「はむっ……んー、うまい」
「うん、おいしいよね」
中々においしい。
麺は固めだけど、その分しっかりと食べられる。
「にんにくが効くなあ！」
そして、にんにくの味がよくスープにも染み込んでいる。エネルギーがつきそうね。
「浩介くん、たっぷり食べてね」
あたしも、たくさん食べなきゃ。
「あはは、でも今夜――」
「浩介くん、ストップ」
「おっとごめん」
幸い、かかっている音楽の音量のおかげで、他のお客さんには聞かれずに済んだ。
新婚だからって、さすがに浮かれすぎちゃまずいよね。
でも確かに、このラーメンは力がみなぎってくるわ。
これなら今朝の分は取り返して、今夜はまた長くなるかもしれないわね。

「ごちそうさまでしたー」
あたしはスープまで飲みきれなかったけど、浩介くんは違った。
浩介くんがスープまで飲み干すと、水を一杯飲み、そしてあたしが食べ終わった。
会計を済ませてあたしたちは店外に出る。
時計を見ると、次の列車までは残り４０分弱だった。駅までの徒歩時間を考えるとまだ３０分以上は時間がある。
「余裕も考えて後２０分かあ……」
「うーん、２０分で出来ることはあるかな？」
あたしと浩介くんが思慮する。
時間が少ないことを考えると、ゲームセンターなどの夢中になりやすいものはまずい。
とすると、本屋とかもまずいわね。
「あー、駅に戻るか」
「うん」
もしかしたら、列車がもう着いてるかもしれないし。
これが旅番組なら、もう一回寄り道して大慌てになるんだろうけど、永原先生の忠告もあったので、素直にゆっくりと駅に戻ることにする。
「ふむふむ、レストランなどで外食するなら３０分以上を目安にしなさいっか。で、基本的に駅の立ち食いは２０分が目安っと。２０分以下の時間の場合は、基本的に寄り道して駅から出るのは避けることっか」
浩介くんが件のメモ帳を見て言う。
そして、「常に時間を意識しながら旅をすること」ともあって、かなり時間については強調されているのが分かる。
永原先生にしてみれば、時間管理の大切さは、この手の旅行では特に重要なことだから、旅番組などのギリギリ演出はそれをないがしろにするという一点だけで、有害な描写らしい。
「さ、見えてきたぞ」
浩介くんが指差す先には、さっきまでいた北上駅の駅舎が見えてき

た。
　これが見えるだけで、安心感が段違いなことに気付く。やっぱり、時間を意識すると全体の意識も違うわよね。
　旅行でありながらも、どこか引き締まったこの感じはきらいじゃないわね。
「よし、まだ時間があるな」
「うん」
　そもそも、徒歩１０分だって相当にゆっくり歩いた場合の時間で、次の列車まで後３２分もある。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
　浩介くんが少し道を外れる。
「ここ、物陰じゃん」
「う、うん……」
　浩介くんが物陰を指さす。道からも駅からも死角になっていて、分かりにくい場所だ。
「ちょっとだけ、お尻触らせてくれる!?」
「えー!?」
　浩介くんが直球で言う。
「スカート、スカートの上からちょっとだけ。俺、優子ちゃんに少しだけムラムラしちゃってさ」
「う、うん……しょうがないわね」
「やっほーい！」
　あたしが了承すると、浩介くんが途端に上機嫌になる。これを見ていると、お尻触られて嬉しいと思っちゃうから、あたしも浩介くんに負けず劣らずの単純さよね。
　あたしは壁に両手をつき、浩介くんにお尻を向ける。
「ふふ、じゃあ遠慮なく……」
　すりすり
「んっ……」
　スカートの上から分かるお尻をまさぐられているの感触。

スカートの上からは久しぶりで、特に婚約してからは、お尻を触られる時はパンツの上からか、直接触られることが多くて、別の意味で新鮮だった。
スカートの上というと、例の痴漢を思い出す。浩介くんの触り方は、あの時の痴漢よりもずっといやらしくてしつこい触り方なのに、好きな男の子に触られるだけで、あたしはくらくらして惚れ込んでしまう。
浩介くんに守られたい、浩介くんにえっちな目で見てもらいたいという欲求が、あたしをそうさせているのかもしれない。
特に新婚初夜の初めての時以降、そんな欲望が強まったようにも思える。
でも、母さんからも、「旦那さんの欲望をきちんと満たしてあげるのも、嫁に与えられた大事な役目」って。多分それは裏を返して浩介くんにも課せられていると思う。
最も、男の子は1回に使うエネルギーが大きいから、その辺りはちゃんと考えてあげないとね。
「ふう、ありがとう。じゃあ中に入ろうか」
「あ、うん」
浩介くんは「ちょっとだけ」という言葉の通り、数秒でお尻を触るのをやめた。
そして、あたしたちは何事もなかったかのように駅に戻る。
電光掲示板には、あたしたちが乗る列車も載っていた。
「ホームで待つか？」
「うん、そうする」
浩介くんの提案で、あたしたちは改札口を入り、案内通りの番線に入る。
するとそこには、エンジンの音を吹かした黄緑色の車両が見えた。
ドア横のボタンを押し、「ピンポーンピンポーン」という音とともにドアが開いて車内に入る。もちろん、開けたら閉めるも忘れずに。
２両編成の車内の中の乗客は、まだあたしたちだけだったので、ボックスを1つ占領する。

混んで来たら譲ればいいわね。
「これ、『キハ』だからディーゼルだな」
浩介くんが正面の数字を見て言う。
どうやら、昨日の知識が役に立ったみたいね。
待っていると、しばらくして運転士さんが入ってくる。
そして、他の乗客も次々と乗ってくる。
ピンポーン
「この列車は、横手行き、ワンマンカーです、お客様にお願い致します、優先席付近では――」
女性の声による案内放送が流れる。
ここは有人駅だけど、無人駅の場合は一両目の後ろの扉から乗り、整理券を取って、降りるときは一番前の扉から降りることになっている。
このルールは、乗るときは無論のこと、運賃箱に運賃を入れる時にも重要になってくる。
また、「定期券、切符は、運転士にはっきりお見せください」という注意喚起も聞こえた。
最も、あたしたちの場合は、この乗車券を降りた駅の駅員さんに見せればいいだけとのことなので、あんまり詳しくは考えなくていいだろう。
少しずつ、車内のお客さんも増えてきた。
「この列車は、横手行きワンマン列車です。まもなく発車いたします。ご乗車になってお待ちください」
運転士さんの放送が入る。
車内はまばらながらも、それなりに人はいる。
「ワンマンカーの自動放送を流す役目や、駅の降車での運賃収集、定期券の確認。さながら運転士兼車掌兼駅員って所だな」
「大変よね」
やはり地方はこうした合理化はよく行われているのだろう。
そう思っていると、運転士さんがドアを閉め、ドアボタンを押したときにも鳴る「ピンポーンピンポーン」という独特の音と、運転士さ

んの「戸閉よし」の声が聴こえる。
ワンマンだから、当たり前といえば当たり前だ。
ブオオオオオオオオ……
そして、エンジンの轟々たる音が、車内にこだまし、列車はゆっくりと加速する。
あたしたちが普段乗っている電車と比べると、かなり加速はゆったりだ。
ピンポーン
「皆様、ＪＲ北上線をご利用いただきまして、ありがとうございます。この先柳原――」
先程の女性の放送が流れ、列車は徐々にスピードを上げていくが、基本的にのどかだ。
到着する駅は基本的に無人駅で、最初の駅では「後ろの車両のドアは開きません」となる。
つまり、一両目の後ろのドアが乗車口で、前側で降りることになる。その他、「優先席のマナー」や「車内は禁煙」というのは
最初の駅では数人のお客さんが降り、１人が乗った。
ドアの開閉措置も、車掌さんの手で行われていて、駅にはドアミラーもある。
車窓は田園地帯を走るのどかな場所だけど、前方をよく見ると、雪が積もっていて、山沿いと日本海側はいまだに雪に覆われていることが容易に想像がつく。
あたしたちの泊まる場所も、山にあるから、きっとまだ雪深いんだと思う。
数駅停車して、乗客が急激に減っていく。
車内も静かになりつつ、列車は進む。駅によっては、誰も乗り降りしていない駅もある。
「ローカル線っていうのはこういう雰囲気なのかな？」
浩介くんが聞いてくる。
「うん、そうだと思うわ」
朝や夕方になると、高校生がたくさん乗ってくることもあるらしい

けど、今は午後のお昼時、乗っているのは主に老人で、若いのはあたしたちだけだ。
以前浩介くんと永原先生とで乗った「しなの鉄道」と比べてもはるかにのどかだった。
車窓の向こう側には、道路が見える。よく見ると、車の方が速い。
なるほど、あたしたちが普段住んでる首都圏だと、車社会ってどうにも想像がつきにくいけど、そう言うことなのね。
あ、信号に引っかかってる間に抜き返した。やっぱり鉄道のほうが速いのかな？
そうこうしているうちに、列車はどんどん山に近付いてくる。
標高も高くなったのか、車窓には雪も見える。あたしたちの地域では、雪は真冬にたまに見られる程度で、この季節にこんなにどっさりと言ったことはない。
「まもなく――」
目的の駅が近付く。いつの間にか、並行する道路も見えなくなっていた。
「優子ちゃん、次だよ」
「うん、分かってるわ」
とは言っても、地方の鉄道の例に漏れず、駅間は長い。
いや、のんびり走っているから、もしかしたらそこまででもないのかもしれないけど。
ともあれ、キャリーバッグを上にあげなくてもいい程度に空いていてよかったわ。
「うー、寒いわ」
「ああ、関東なら真冬って感じだ」
あたしたちが降りる駅は、ちょうど山間という所で、有人駅だった。
駅名はちょっと特徴的で、車両のドアは全て開いた。
有人駅とあってそれなりに人がいるらしく、あたしたち以外にも結構なお客さんが乗り降りしていた。
「ここは駅構内にも温泉があって、列車が近いと信号が点るみたいだ」
「へー、面白そうね」

とは言っても、今回の旅行では立ち寄る予定はない。
あたしたちは、送迎の車が来るのを待つ。
駅前はさっきの北上駅と比べるとはるかに人は少ない。
「お、あれじゃないか？」
青いタクシーがこっちに向かってきた。
駅前に駐車して扉から運転士さんが出てくる。
「すみません篠原さんいらっしゃいませんか？」
「あ、はい」
「お待ちいたしておりました。どうぞこちらへ」
呼ばれたので、あたしたちは立ち上がり、タクシーの中へ。
「シートベルトをお締めください」
「はい」
シートベルトはとにかく大事、幸子さんが最終試験に合格したら、安全講習をさせる予定だけど、その時にもシートベルトの重要性は話す予定になっている。
「では発車します」
タクシーの運転手さんはそう言うと、ぐんと加速させて車を走らせる。
特に会話もなく、車は順調に進む。
ここは北上のような「地方都市」というよりは、「地方の村」という感じで、少し走るとすぐに開けた場所へと進む。
雪の色合いは増していき、ここはまだ春になっていないことを思い知らされる。
やがて、タクシーは温泉地帯へ向け、曲がりくねった山道を進む。
あたしは違和感に気付く、このタクシーはメーターが表示されていない。つまり、既に先払いされていたのだろうか？
「すごい山奥ねあなた」
「ああ、しかも別荘を借りられるんだろ？」
「うん、近隣を気にしなくていいって」
まあ、外に出てするのはさすがにまずいけど。
「すげえサービスだよな」

浩介くんが感心する。
やあて、道路の上にも雪が積もりはじめる。まあ、タイヤは大丈夫だと思うけど。
しばらくすると、今日明日と泊まるホテルの看板が見え、車は速度を落としフロント付近の駐車場へと止まった。
「お待たせいたしました。お降りください」
「「はい」」
後ろのトランクに預けた荷物を取り出して、あたしたちはホテルへと入った。

# 新婚旅行2日目　別荘を借りて贅沢しよう

「いらっしゃいませー」
　ホテルの従業員さんが、あたしたちを出迎えてくれる。
「予約した篠原です」
「はい、篠原様ですね。お待ちしておりました」
　フロントスタッフさんが、鍵を渡してくれる。
　ちなみに、この建物はフロント以外にもサービスの拠点になっていて、ゲームコーナーもある。
　一応レストランもあるけど、食事は全てルームサービスなので、特に気にする必要は無い。
　明日のベッドメイクに関しても、呼び出した時間帯にいつでもしてくれるようになっているし、しなくてもいい。
「ではですね、お客様の建物は7番となります。案内の者が参りますので、お掛けになってお待ちください」
　そう言うと、椅子に座る間もなく案内の人が現れた。
「えーでは篠原様、こちらへどうぞ」
　ここはコテージ式なので、いったん屋外に出る必要がある。
「うー、寒いわ」
「優子ちゃん、結構寒がりだよね」
「うん、女の子って冷えるのよ」
「それでしたら、弊社の温泉を是非ご利用ください」
「はい」
　この時期は寒いけど、屋内の温泉と露天風呂、いずれもかけ流しで稼働中だという。
　しばらく歩くと、あたしたちの泊まる別荘が見えてきた。
　外から見る限りは、2階建てになっているけど、2階部分は狭そうね。
　例によって、スタッフさんに部屋を空けてもらい、鍵をもらって中に入る。
　中は既に暖房が効いていた。

「あー疲れたー！」
あたしたちは、まずはキャリーバッグを適当な所に置き、ベッドに横たわる。
とにかく、今は横になって楽になりたい。
「ふう、優子ちゃん、長旅お疲れさま」
「うん、あなたもお疲れ」
何だろう、まるで新婚じゃなくて長年連れ添った夫婦みたいね。
「あはは、優子ちゃん、ちょっと年齢いってる感じがするよ」
「浩介くんもそう思った？　実はあたしもなのよ」
「「あはははは」」
カップルによっては、喧嘩のもとになるかもしれない会話でも、あたしたちくらいラブラブならどうってことはない。
「このままずっと、おばあさんになっても……っておばあさんにはならないのよね」
「ああ、この思い出は、永遠だ」
浩介くんの力強い言葉、やっぱり頼もしい男よね。
永遠かあ……
「ふう、でも今はちょっと休むわね」
「ああ」
あたしは、ベッドにあったパンフレットを見る。
有料放送は全てデフォルトで見られる。また、キッチンがあるので完成した食事だけでなく、食材を買って調理することも出来る。
うん、あたしの腕の見せ所になりそうだわ。
そして室内風呂と露天風呂は繋がっている。
２階部分は物置になっているけど、使う機会はなさそうね。
あ、でも洗濯機と乾燥機は必要かな？
「とにかく、これでＯＫかな？」
ちなみに、和室の他、浴衣のサービスもある。浩介くんのためにも、着てあげないとね。
あたしは、一通り中を巡回し終わると、疲れもあってベッドの上でボーっとする。そのうち、心地いい眠気があたしを包み込んだ。

「優子ちゃん、優子ちゃん起きて！」
「んあ？」
あたしを起こそうとする、浩介くんの声が聞こえた。
ゆっくりと瞼を開けると、浩介くんが視界に入ってきた。
「あ、ごめん、寝ちゃってた？」
「うん、スカートめくっても気付かない程度には」
浩介くんがあっさりした口調で言う。
あたしは慌ててスカートを抑えるが、既に元に戻っていた。
「もー、浩介くんのえっち！」
寝ている間に、スカートめくられちゃったわ。
「あはは、それよりも、もうすぐ6時だよ」
浩介くんが、部屋の時計を指さして言う。
「あ、うん。本当だわ」
時計の短針が6になっていて、外も暗くなっていた。
「夕食にしようぜ」
「うん」
浩介くんの提案で、あたしたちは、テーブルへと集まる。
「お、この懐石料理がよさそうだな」
「うん」
このホテルでは、食事代は差異があるため宿泊代には含まれていない。どれもいい値段がするけど、蓬莱教授の予算からすれば、余裕で賄える程度でしかない。
「うーん、でもこっちの『フルコース』も捨てがたいわね」
「こっちは一遍に出てくるのか。地元特産の品をふんだんに使ってるんだな」
牛肉も、中々おいしそうね。
ここは山の旅館だけど、魚のような海の幸も取り扱っているみたいね。
「うーむ」
さんざんに悩んだ挙句、あたしたちは、「フルコース」を頼むにした。

フロントを呼び出して注文し、２０分後、呼び鈴の音と共に食べ物がやってきた。
「お待たせいたしましたーこちら――」

結論から言うと、ここの食事はおいしかった。
どれもこれも絶品で、いい料理人にいい素材を使っていたのは明らかだった。
ちなみに、食事の会計は後払いとその場払いが選べるが、あたしたちはまとめて最後に払うことにした。
「ふー、食った食ったー！」
浩介くんが伸びをする。
結構まとまった量で、あたしが食べきれなかった分を、浩介くんが食べてくれた。
「浩介くん、お風呂どうする？」
「うーん、俺は後でもいいよ」
「そう？　じゃああたしから入るわね」
あたしは、キャリーバッグからお風呂セットを出そうとする。
……あれ？
「優子ちゃん、どうしたの？」
「う、うん……浴衣の下につける襦袢が無いのよ」
おかしいわね、ちゃんと母さんにオーダーしたはずなのに。忘れちゃったのかな？
「じゃあしょうがねえな、肌の上に直接着るしかないだろ？」
「えー、さすがにそれははしたないわよ！」
嫌だとは言ってないのが、割とまじめにあたしって変態だと思う。
「うーん、じゃあパジャマは？」
「うん、仕方ないからそれを持ってくわね」
取りあえず、今はパジャマで代用するしかない。
「あ、そうそう、途中で乱入してもいい？」
「もう！　浩介くんのえっち！　いいに決まってるでしょ夫婦なんだから！」

あたしがつい、声を荒げてしまう。
でも、照れ隠しなのはバレバレで――
「さりげなく『いいに決まってる』って、優子ちゃんそれ反則だから」
あうー、二重に恥ずかしよお……
浩介くんを尻目に、あたしは専用の脱衣場へと入る。
脱衣場の一角には色々な浴衣があった他、鏡や髭剃り、歯ブラシといったアメニティーもここに収められている。
あたしは、服を脱ぎ、髪をお団子にして、備え付けのタオルを手に取る。
バスタオルはもちろんなし。
ドアを開けると、結構暖かい。
温泉の湯気が隅々まで行き渡っている。外との温度差を考えるとかなりのものだと思う。
あたしはとりあえず身体を洗いに行く。
ここですることはいつも通り。あたしは一人だけの広い空間で温泉に浸かる。
「あー、気持ちいいわー！」
こんな広い所を独り占めにしたの初めてかも。
そんなことを思いながら、浩介くんが入ってくるんじゃないかという期待が入り混じっていた。
うーん、でも入ってこないのかな？
外の露天風呂は、まだちょっと行く勇気が出ない。
温泉に漬かりながら考える。
明日は、ここに丸一日いることになっている。
周辺の温泉を観光してもいいけど、あまりその気にはなれない。
それよりも、浩介くんとの触れ合いを増やしたかった。
「あれ？」
あたしは違和感を感じた。
さっきまで、浩介くんがいつ入ってくるのかと待ち構えていたが、今は浩介くんの気配さえしない。
むしろ脱衣場の方は静まり返っているくらいだわ。

「露天風呂……」
３月の半ばといっても、時間は夜に近く、しかもここは東北の山に位置するため、雪も積もっているし寒さはとても厳しい。
寒い中の露天風呂はどんな感じなんだろう？
あたしは、勇気を出して外への扉へと向けて歩く。
「うー、緊張するわね」
わずかに冷気が漏れ出している。下手すれば氷点下だ。
「えいっ！」
あたしは意を決して扉を開ける。
「うー、寒いわ！」
一応、露天風呂との間にもう一枚小部屋と扉があって、急激な温度変化を避けているけど、ほとんど効果が無い。
あたしは、小さなタオルを持ちながら、一歩一歩前に進む。
とにかくあのお風呂に入りたい一心でもう一度扉を開ける。
あの時幸子さんと行ったお台場の露天風呂とは比較にならない寒さを感じつつ、大急ぎで湯船へと入る。
「あー！　ふー！」
周囲は柵で囲まれているとはいえ、野外露出していることなど全く気にもならなかった。
逆に言えば、それくらい寒さの厳しい土地ということ。
露天風呂は、浸かって見ればさすがに中の大浴場よりもぬるいけど、それでも外気温と比べれば十分に温まれる。
はるか遠くには、うっすらと銀の山々が見える。
冬山は多くの人を飲み込んできたけど、それでも登る人は後を絶たない。
ある登山家の「そこに山があるから」という言葉が有名だけど、あたしたちは登山をしない。
しても夏山の緩やかなハイキングコースだけ。
それは、山そのものが危険だからで、登山を極力避けるように永原先生に忠告されているから。
「いい温泉ね」

疲れが取れていく感じがする。
ちょうど夕食の後で、エネルギーはまだまだある。
「そろそろ出ようかしら？」
そう思って、あたしは体を上にあげる。
「さ、寒い！」
途端に、顔とは比較にならないくらい、体が急激に冷える。肌についた温泉の水滴が、容赦なく裸のあたしから体温を奪っていく。
うん、確か空気より水の方がずっと熱を通しやすいんだったわ。
後のことを考えていないのを後悔しつつ、大急ぎで大浴場へと進む。
「うー、びっくりしたー」
あんまり露天風呂は入りすぎないようにしよう。入っても明日の昼間にするわ。
あたしは、気を取り直してもう一度大浴場へと入り、身体を温め直す。
どうやら、浩介くんが入った気配はないわね。
十分に温まり直したら、あたしは髪をほどいてストレートロングに戻り、体を拭いて脱衣場へと戻る。
こちらにも暖房は効いているけど、やはり少し寒さがこたえる。
取りあえず、パジャマに着替えて……あれ？
「パジャマが無いわ！」
確かに入れておいたはず。よく見ると、下着も無くなっていた。
あ、もしかして浩介くん……！
あたしは、急いでバスタオルを巻いて、リビングにつながるドアから頭だけ乗り出す。
「浩介くん！　あたしのパジャマはどこ!?」
「あー、優子ちゃん、パジャマなら俺が全部預かっといたぞー！」
浩介くんが叫ぶ声が聞こえる。
「もう！　返してよ！」
「そこに浴衣があるだろ？　それ着なよ！」
「もー！　それは無理よ！」

襦袢とさらしがない以上、ブラパンツではみっともなくなってしまう故に、ノーパンノーブラで着なきゃいけないし。
「大丈夫だって、俺しかいねえんだから！　今夜を盛り上げるために頼むよ！」
「むー！」
もー、またこれだわ。
「優子ちゃんが俺にだけ見せてくれるの期待してたのになあー」
浩介くんが残念そうに言う。
「わ、分かったわ」
「ひゃっほーい！　やったー！」
もー、本当にずるいわ浩介くん。そんな風に喜ばれちゃったら、着ないわけにいかないじゃないの。
あたしは、観念して扉を閉めて、タオルを脱ぎ、浴衣を手に取る。
「うー、どれも胸のサイズが合わないと思うわ」
大きなサイズはあるけど、例によって下半身が不格好になっちゃうなので、あたしが和服を着る時にはさらしを巻く必要があるけど、襦袢もろともなくなっていた。
「はぁ……」
取りあえず、あたしの身長から、一番胸の大きいサイズの浴衣をつけてみる。
「うー、みっともないわ……」
ノーパンなので後ろから見ればお尻のラインも出ていなくて落ち着いてはいるけど、前の方はと言うと、一番胸の大きいサイズを選んだにもかかわらず、ある程度は隠れているという感じで、特に胸の谷間なんかは丸見えになっている。
旅館で使われる浴衣だから、夏祭りや初詣の時のように、帯ではなく紐で閉めるものなのでとても心許ない。
もし胸の圧力などではだけちゃえば、その瞬間全部浩介くんに見られちゃうことになる。
もう何回も裸は見られてるけど、やっぱり浩介くんだからこそ、愛する旦那さんだからこそ、見られるのは恥ずかしい。

うん、初めて見られた時よりも、ずっと恥ずかしいと思う。
普通逆なんだと思うんだけど、多分あたしが浩介くんにより深く惚れてるせいね。
「あうー」
ありあわせのタオルをさらし代わりにして、それで胸を潰して、ようやく何とか入りそうって感じね。
もちろん、胸が大きいのが嫌だなんて思わないけど。
「浩介くん、喜んでくれるかな？」
よくよく考えてみれば、既にこの時間のあたしは「娼婦」になるべき時間でもある。
そうよね、浩介くんを喜ばせるためにも、明日はほとんど一日中「娼婦モード」にしないといけないわね。
ガチャ
意を決して、あたしは扉から出る。
「お待たせー」
「うおっ、ゆ、優子ちゃん、かわいいし、エロい！」
浩介くんは、想像以上に気に入ってくれたみたいね。
「じゃ、じゃあ俺！　お風呂入ってくる！」
「いってらっしゃーい。寝室で待ってるわね」
「おう！」
浩介くんが元気よく返事しつつお風呂場へと進む。
いつもならどさくさに紛れてお尻を触ってきそうなのに、何もしてこなかった。
浩介くん、エネルギーを貯めたいのかな？
あたしは、寝室への扉を開く。
「うー、寒いわね」
どうやら、暖房が効いてないみたいだったので、あたしが暖房をつける。
浴衣の中に、冷気が容赦なく直に入り込んでくる。今日が女の子の日じゃなくてよかったわ。
最も、計算上では、ハネムーンが終わったらすぐに来そうな感じだ

けどね。
「ふー」
あたしは、足を揃えてベッドに腰掛ける。
そのまま倒れこんでもいいんだけど、やっぱりちょっと動くだけで浴衣がずれてしまう。
「あうう……」
薄暗かった部屋の電気をつける。
女の子は、夜になると恥ずかしくなって電気を消すようにお願いする子も多いと聞く。
あたしも、恥ずかしくってたまらないけど、浩介くんが喜んでくれると思っちゃうと、恥ずかしいと分かっていても、電気を消したくなくなってしまう。
だからこうやって、電気をつける。
ふと、窓の外を見る。窓の外には、隣の建物が見える。
隣にはカーテンが閉められていて、光は見えない。既に寝ちゃったのか、それとも使われていないのかもしれない。
この部屋にもテレビがある。そう言えば、昨日のラブホテルでは、エッチなビデオも放映していたらしい。
あたしたちも１８歳以上で高校も卒業したので、見ても問題はないはずだけど、結局見ずじまいだった。

「ふうー」
ただひたすらぼーっとしながら、浩介くんを待つ時間は長く感じる。
北上駅での待ち時間より、長く感じる気がする。あっちは２時間も経ってて、こっちは３０分にも満たないのにね。
それだけ、浩介くんが愛おしいのよね、あたし。
コンコン
「はーい！」
「入るぞー」
ガチャッ

扉のノック音と浩介くんの声がして、一呼吸おいてから扉が開かれる。
パジャマ姿の浩介くんが見えた。あたしは立ち上がって、浩介くんに近付く。
「優子ちゃん」
「ん？」
「それ！」
すりすり
「きゃっ！　ちょっと浩介くん、どこ触ってるのよ！」
浩介くんにお尻をいやらしく撫でられ、さらに下から胸を揉まれてしまう。いずれも浴衣越しだけど。
「お、やっぱり言いつけ守ってノーパンノーブラだな」
「だ、だって――」
「俺が喜ぶからだろ？　その気になればバッグの中から下着出して穿けばよかったのに、それをしないんだもんな」
「うー！」
か、完全に失念していたわ。
でも、下着を穿くという発想そのものが湧かなかったのも事実。
和服の下に洋風のパンツやブラだと、ただでさえ身体のラインが出ちゃうのに更に強調されてみっともなくなっちゃうからだけど。
「ほら優子ちゃん、『あたしはえっちな女の子です。浩介くんに見せて喜んじゃってます』って言ってみてよ？」
浩介くんが笑顔で言う。
「あ、あたしは、え、えっちな女の子です！　こ、浩介くんに見せて、喜んじゃってる変態です！」
「うっひょーえっれー！」
浩介くんが感嘆の叫びをあげる。
あたしはというと、もう顔から火が出る勢いだ。
「も、もう！　浩介くんが言わせたんじゃないの！」
あたしが抗議するように言う。
「悪い悪い……ま、俺にだけ見せてくれるもんな、今の優子ちゃんは」

「う、うん……」
「ふふ、優子ちゃん大好き！」
むぎゅー！
「きゃ、きゃあ！」
浩介くんに、何回目か分からない愛の告白を受けながら、思いっきりむぎゅうと抱きしめられる。
そのままベッドに倒れこむと、自然と口と口が重なり合った。
「ちゅっ……」
「んちゅっ……優子ちゃん、いい？」
「はい、あなた……お願い……あたし……もう……」
雪山の別荘の一室、あたしたちは昨日一昨日と同じく、冷えた体をぎゅーっと抱きしめあって、暖めあって夜を過ごした。

# 新婚旅行3日目　午前の秘め事

「うーん……」

心地いい暖かさの中目が覚める。

まだ春の気配のないこの別荘では、朝に小鳥のさえずり声はしない。

昨日のぬくもりが、まだあたしの体の中に残っている。

大好きな浩介くんは、隣で寝ている。

あたしはひとまず起き上がる。今日は丸一日、ここで過ごすことになっている。

明日はもう、浩介くんの家に帰ることになっている。

頬をポンポンと叩く、昨日は顔が少し汚れてしまったけど、大丈夫みたいね。

ベッドから起き上がり、あたしは寝ている間に紐がほどけていた浴衣を元に戻す。

って、今日はどうせまたはだけちゃうし、しなくてもいいかな？

取りあえず、リビングに向かう。

「うーん」

今日は朝食、昼食、夕食ともにここにお世話になる。どういう予定で行くか、考えておくのも妻の役目。

朝は浩介くんの都合もあると思うからルームサービスにしてもらうとして、お昼はホテルの方でバイキングがあるので、そっちに寄って行こうかな？

夜はうーん、せっかくだし食材買って、あたしがお鍋を作ってあげようかしら？

よし！　今日はその計画で行こう。

えっと、食事と食事の合間の夫婦生活も考慮しないといけないわね。

もちろん、浩介くんの家では夫婦なので同居するし、以前にも花嫁修業はしたことはある。今は修行じゃなくて本当の花嫁だけど、大事な夫婦生活も含めた生活をするのははじめてになる。

「そうだわ。着替えなくちゃ」
あたしは、浴衣を脱ぐ。
すると、すぐに何もつけてない状態になる。着替える時にノーパンは便利かも……って何バカなこと考えてるのよ。
ともあれ、あたしは今日の服、水色のワンピースを取り出し、まずは水玉の下着をつける。
ガチャッ
「おう優子ちゃん起きてたかって……」
浩介くんと、ばったり目があってしまう。
今のあたしはパンツとブラを付けただけで……
「きゃーーーーー!!!」
「わわっ!」
あたしが悲鳴を上げると、浩介くんが慌てて部屋から出ていく。
もー、恥ずかしいったらありゃしないわね。

「あなた、入っていいわよ」
「お、おう」
あたしが扉を開けると、浩介くんが申し訳なさそうにうつむきながら部屋に入っていく。
「あのね、浩介くん」
「うん」
「朝ご飯はルームサービスにするわ。で、お昼ご飯はホテルの方でバイキングをしているわ。で、夜はあたしがお鍋作ってあげる」
「あ、ああ……」
さっきのことは、あえて話題に出さない。
引きずるのはまずいし、何より浩介くんが罪悪感を感じてしまう。
まあ、恥ずかしくて叫んじゃうのは仕方ないし、それをやめたら女の子としておしまいだけど。
浩介くんの方は、さっきの話が来ると思っていたのに食事の話題だと分かって、面を喰らっているみたいね。
「ねえあなた、朝ご飯はどうする?」

あたしは、見ていたメニュー表を見て言う。
「うーん、こっちのこの『山の朝ごはん』ってどうだろう？」
なんだか妙にヘルシーな内容で、野菜の盛り合わせと納豆ご飯、そして味噌汁が目立つ食事で、あたしたちの食べている朝ごはんと、野菜の内容が大きく異なるだけでほぼ同じだけど、素材の質が段違いということになっている。
「うん、じゃあそうするわね」
あたしは、フロントを呼び出し朝ご飯を注文する。
テレビでニュースと気象情報を見ながら数分待っていると、呼び鈴が鳴ったので開ける。
「お待たせいたしましたーこちら『山の朝ごはん２人前』でございます」
優しそうな仲居さんが、あたしたちのテーブルまで持ってきてくれて、礼儀正しくお辞儀をして出ていった。
「いただきます」
「いただきます……あつっ」
浩介くんが味噌汁を一口飲んで熱さを訴える。
どうやらこの味噌汁は、この寒い中でも冷めないように工夫がされているらしく、慎重に飲んだほうが良さそうね。
「保温技術ってすごいわね」
「ああ」
中央に盛り付けられた野菜は、どれもみずみずしくて美味しい。
今は真冬だから決して旬ではないのにこの味だから恐ろしいわね。
味噌汁の具材も、あたしや母さんの料理よりも美味しくできていて、やはり素材の壁というのは大きいと思った。
お米は「秋田こまち」で、言わずもがなの特産米だ。
「おいしい」
「ああ」
「うー、自信なくしちゃいそうだわ」
料理がまずいのは、女の子として結構減点ポイントだ。
もちろん、お義母さんには勝ってるけど、やっぱりこういうのを食

べちゃうと、ね。
「大丈夫だって、これは素材が違うんだからさ」
「う、うん……ありがとう」
少し沈みそうだった所を、浩介くんが優しくフォローしてくれる。
やっぱり、素敵な旦那さんよね。
「はむはむ……うん、うまい。優子ちゃん、ご飯食べたら何する？」
「うーん、何しようか？」
「まあ、のんびりしようか」
浩介くんが納豆ご飯を食べながら話してくる。
あたしも、お米と納豆を食べる。朝食は、のどかに終了した。

「ねえ優子ちゃん」
「ん？」
朝食が終わってゆっくりボーッとしていると、浩介くんが突然話しかけてきた。
「それ！」
ぶわっ！
「きゃあ！」
お昼前、浩介くんに思いっきりスカートをめくられる。
「もう！　浩介くんのえっち！」
「とか何とか言ってー、優子ちゃんいつもまんざらでもない顔してるよね」
「うぐっ」
浩介くんに、また図星を突かれてしまう。うー、最近同じ手に何回もハマってるような？
「『嫌よ嫌よも好きのうち』なんて言うけどさ、優子ちゃんは『嫌よ』とも言わないもんなあ」
「あうー」
あたしの顔がまた赤くなり始める。
やっぱりまだ、初心なままね、あたし。
「ねえ優子ちゃん、お風呂一緒に入ろうぜ」

「え!?　う、うん……いいけど」
あたしは、すんなりとＯＫを出してしまう。
まあ、今日はこういう時があると思っていたからね。
浩介くんと２人で、脱衣場へと移動する。
「浴衣はまだ着ないからね」
「せっかくの２人っきりなんだしさ、出た後も昼まで服着ないでいようぜ」
「え!?」
浩介くんの突然の提案に、あたしが驚いてしまう。
「ほら、俺たち一緒に住んでも両親がいるだろ？　こういう時くらいしか開放感ないじゃん」
「う、うん……」
あたしも内心では乗り気だったので、浩介くんと喧嘩にはならない。
あたしは服に手をかけようとすると――
「優子ちゃん、待った！　そこは旦那の俺が脱がすところだろ？」
「うっ……お、お願いします……」
嫌と言えない性格というよりも、あたしが単純にえっちな女の子なせい。
「よしさ早速……」
「ちょ、ちょっと、その脱がし方恥ずかしいわよ！」
浩介くんに、下からスカートの中を凝視されて、手でゆっくりとめくられながら脱がされていく。
「どんな脱がし方をしても、破れたり傷んだりとかしなきゃいいだろ？」
浩介くんにパンツ丸見えにさせられ、前後からめくられてそのまま茶巾のような状態にさせられる。
ちなみに、ブラジャーも完全に見えている。
「おー、絶景だなこれ！」
「あうー、恥ずかしいよお……前が見えないよお……」
興奮する浩介くんとは対照的に、あたしの恥ずかしさは増す一方、

まあ興奮もあるんだけどね。
しばらく浩介くんに堪能させられると、そのままワンピースが脱げて下着をゆっくりと脱がされた。
一昨日から随分と経験を積んだらしく、下着の脱がし方も上手になっていた。
あたしは、小さなタオルで前を隠す。
浩介くんの後をつけてお風呂に入る。
「あ、優子ちゃん待って！」
まずは体を洗うところだけど、あたしが髪を結びながら鏡の方へ向かおうとしたところでまたストップがかかった。
「ん？」
「今日は何回も入るんだし、体は後でもいいよ」
よく見ると、浩介くんも元気いっぱいだった。
「え、でもほら、髪は縛らせて。傷んじゃうから」
「あ、ああ……」
浩介くんに背を向けて、髪を結ぶと、あたしたちは大浴場のお風呂場へと入る。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
「俺さ、さっき調べたんだけど、どうやら両隣は空いているらしいぜ」
「え!?　どうして分かるの？」
確かに一つはそんな感じだったけど。
「あーいや、昨日優子ちゃんの部屋に行く前に念のために確認したんだよ。優子ちゃんも俺も、結構声が大きいだろ？」
「う、うん……」
見ての通り、ここは端の方で、両隣が空いているとなるとフロントまで結構な距離がある。
「だからさ、露天風呂に入ろうぜ！」
「え!?」
浩介くんからとんでもない提案が出る。
「そ、外って……！」

「大丈夫、湯船には入ったままだからさ。きっと解放感あるぜ」
「うー、でも誰かに聞かれたら……」
あたしは、反論する。一緒に男女で入ってるのがばれるのは怖い。
「なあに、大丈夫さ。俺たち夫婦だし、一緒にお風呂なんて普通だろ？」
「う、うん……」
何故か浩介くんに言いくるめられてしまう。
それはきっと、あたしも本音では楽しみにしていたから。
浩介くんにされるがままに、あたしは露天風呂へとついていってしまう。
「うー、昼でも寒いわね」
「ほら優子ちゃん、急いで」
浩介くんに促され、あたしは湯船の中へ。
浩介くんがすぐにあたしに近付いてくる。
「優子ちゃん、寒いだろう？　ほら」
むにんっ！
浩介くんが密着してくる。確かにこうすると暖かいけど、背中に何かが当たってるわね。
「ねえあなた」
「ん？」
「そんなにくっつかれちゃうと、あたし我慢できなくなっちゃうわ」
あたしが、蕩けた口調で言う。
「そう？　我慢しなくていいぞ」
「……はい」
あたしは自然と、浩介くんとキスをし始める。
春の来ていない銀世界の露天風呂に男女が２人、もちろん夫婦。
この冷えた体、露天風呂以外にも、暖め方はあったのだ。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
結局、お風呂の中に入りながらじゃうまくバランスよく暖められずにのぼせちゃったので、大浴場で続きをした。

あたしは、浩介くんを先にお風呂から出して考える。
これからお昼ご飯の時間になるけれども、その時は昨日ラブホテルで買った元気の素が重要になってくる。
粉薬と飲み薬があって、粉薬の方は夕食の鍋に盛ることにする。
あたしにも効果が出ちゃうけどそれは問題ない。
問題があるとすれば、食べ終わるまであたしと浩介くんが我慢できるかどうかね。
「ふう、あたしも出るかな」
お団子の髪を下ろし、脱衣場へ。昨日みたく服が無くなっているということは無いけど、浩介くんの意向で服を着ない。
「お待たせー」
「うん優子ちゃんお疲れ」
あたしと同じく素っ裸の浩介くんが、テレビを見ながら出迎えてくれる。あたしは、恥ずかしいので両手でうまく隠しながら歩く。
地方はちゃんねる配分が違うので、結構新鮮な気分になるわね。
あたしは、浩介くんの隣に移動しようとする。
お尻とか触られてもいいタイミングだけど、さっきのこともあって浩介くんは触ってこない。でも、あたしの裸を見て少しだけ元気にも見える。
「ねえ浩介くん」
「ん？」
「あたしで、満足してる？」
念のために聞いてみる。
「あ、当たり前だろ！　優子ちゃん、普段は大人しくてかわいらしくて、おしとやかなのに、２人っきりになるとすっげえエロいし」
「えへへ、よかった。あのね浩介くん」
「ん？」
あたしは、理想の女の子について語ることにした。
「理想のお嫁さんって、どんな感じ？」
「え!?　そりゃあもう優子ちゃんのことでしょ」
やっぱり浩介くんはあたしを基準にして言う。

「嬉しいけど、あたしだって理想にはまだ遠いわよ。もちろん、それを目指してはいるけどね」
「え!? じゃあどんな感じなの？」
浩介くんは興味津々で聞いて来る。
自分の妻が思っている理想を知るのは、夫にとっても大事なことだ。
「まず一つの格言があるわ、『昼は淑女夜は娼婦』って言葉を聞いたことない？」
「あー、今の優子ちゃんにピッタリの言葉じゃん。正確には『普段は淑女、2人っきりの時には娼婦』って感じだけど」
浩介くんが言う。確かに、今のあたしは浩介くんと2人っきりになったり、浩介くんにセクハラされたりすると、すぐに娼婦に切り替わっちゃう。
でも、問題はそこじゃない。
「問題は、『淑女、娼婦の中身』よ」
「中身って？」
「例えば、淑女だったらほら、家事が上手とか女性らしくお淑やかだとか。あたしはまだまだ女子力で足りてない部分は多いわよ」
「あー、家事かあ……でもうちの母親よりはできそうだけどね」
浩介くんもフォローしてくれる。
「うん、でもまだ、理想には遠いわ」
「そうか、優子ちゃんって目標高いんだな」
「うーん、そう言う感じでもないのよ。一段達成するとそのすぐ上を、そしたらまたその一段上をって感じでね。一段一段登るつもりでいってるけど、確かに低い目標と言うわけでもないわね」
そして娼婦部分、こっちだってまだ手探り状態なのよね。
優一だった頃もそう、確かこういうことはしたことないまま女の子になったんだし。
「なるほどねえ、ま、登っていってるなら、少しずつでもいいんじゃね？ 人生急ぐ必要もないだろ」
「あはは、うん、確かにね」

ニュース番組が一周する。浩介くんが玄関から朝刊を取ってきてくれたけど、蓬莱教授や協会に関するニュースは無いわね。
まあ、仮に何かあっても、永原先生の方で新婚旅行中は気にしないでいいとのことで、連絡を取らないことになっている。
この長い人生でも、浩介くんとの新婚旅行は二度と訪れないからね。
「優子ちゃん、そろそろお昼行く？」
「うん、そうしようか」
あたしたちは立ち上がり、服を着る。
そして、元の水色ワンピース姿に戻り、あたしが部屋の鍵を取る。
「優子ちゃん、外それじゃ寒くない？」
「あ、うんそうよね」
浩介くんに言われて初めて気付く。
あたしはキャリーバッグからコートを羽織る。足も生足なので、キャリーバッグからストッキングを取り出して別室で着替える。
そうそう、こういう風に旦那さんに着替えを見せないのも「淑女」の条件よね。
「お待たせー」
「おし、じゃあ行こうか」
「うん」
浩介くんの後ろについて行く。
扉を開けて外に出ると、かなり寒い。重ね着して正解だったわね。
昨日の道のりを思い出しつつ逆行する。といっても、フロントへの案内があるけど。

「あー、あったかーい！」
ホテルに入ると、浩介くんがのびをする。
あたしも、暖房の効いた部屋に入ったのでコートを脱ぎ腕に巻くようにして持つ。
「こっちだな」
「うん」

浩介くんの指差す方向に、レストランはあった。
今日の昼食はここでバイキングだ。浩介くんには、肉や脂分、ニンニクやシラス干しといったスタミナ料理をたっぷり食べてもらうように言う。
あ、もちろんちゃんと野菜も食べさせるけどね。
でも、人間のエネルギー源は炭水化物、数年前は「炭水化物をカットしてダイエット」なんていうのも流行ったけど、弊害が指摘されて今ではもう下火になっている。
お米、パン、トウモロコシ、どこの国でも主食は炭水化物なことが分かるように、人間のエネルギーとして、最も重要なのもまた炭水化物、これで脳や筋肉を動かすわけだものね。
あたしたちは、お盆を取って思い思いに食材を盛りつけ、空いている2人用のテーブルに腰かけた。
「いただきます」
浩介くんは、バターたっぷりのトーストや、大量の鶏のから揚げなどを取っていた。
浩介くんもやっぱり、今日はあたしとたくさんエネルギーを使いたいみたいね。
あたしもあたしで、浩介くんの力強さについて行くためにも、野菜とともにタンパク質と脂肪を中心にした食事になっている。
あたしは食べる量は少ないけど、体格は悪くない。燃費がいいんだと思う。
それでも、これからは良く食べないと、胸についてる脂肪がしぼんじゃうから気を付けないといけないわね。
「お、結構うまいな」
「うん」
さすがに、ルームサービスとして持ってきてくれた食事ほどじゃないけど、品揃えとしては、当然こっちのバイキングのほうが上になる。
「はむはむ……お代わりしてくる」
「いってらっしゃーい」
浩介くんが席を立ちあがり、鶏のから揚げをおかわりしに行く。

ふふ、これは午後も楽しみね。
……そうだわ。この後またもう一回着替えよっと。
ふふ、浩介くん、喜んでくれるわよね。あの服。

「「ごちそうさまでしたー」」
あたしたちはお昼ご飯をおなか一杯食べると、トレイとお皿を返却口に持っていき、来た道を戻る。
「ふー、おいしかったな」
「うん」
またコートを着て屋外に出て、寒い道を進み別荘へと戻る。
鍵を閉めたらリビングに戻る。さて、すぐに着替えちゃってもいいんだけどここは――
「浩介くん、これ飲んでくれる？」
「お、おう」
あたしが、浩介くんに元気の出る飲み物を渡す。
その間にあたしは、調達できる食材、調味料のリストをもう一度眺め、今夜のお鍋の構想を考える。
「優子ちゃん、何見てるの？」
飲み終わった浩介くんがあたしに聞いてくる。
「うん、今夜のご飯の食材よ」
「あ、そうか、優子ちゃんがお鍋だっけ？」
「うん」
よし、こんな所かな？
「じゃああたし、フロントを呼ぶわね」
ルームサービスの時と同様に、あたしは食材注文をかける。
フロントさんの方も全て用意できるとのことでよかったわ。
そして、ルームサービスの時よりもはるかに短い時間で、お鍋の食材が入った。
あたしは、浩介くんに手伝ってもらいながら、野菜を冷蔵庫に入れていく。
すりすり……

「きゃあ！　浩介くん、今は野菜しまってるから」
「ごめんごめん、つい手が出ちゃった」
浩介くんに、胸をこする様に触られる。
どうやら、さっきの薬の効果もあって、浩介くんにも元気が戻ってきたみたいね。ふふっ、楽しみだわ。

# 新婚旅行3日目　激しい運動をたくさんしよう

全ての食材を冷蔵庫に入れ終わったら、あたしはキャリーバッグから露出度の一番高い服を持ち出してこっそりとお風呂の脱衣場へと向かう。
まずストッキングを脱ぎ、ワンピースを脱いで下着姿になる。
そして、へそ出しで胸元を最大限に露出したトップスを着て、さらにパンツとすれすれの超ミニのフレアスカートを穿く。
「あうー、いつ着てもスースーするわ」
浩介くんを誘惑するための服装だけど、やっぱりちょっと動いたりするだけで見えちゃうのは恥ずかしいわね。
「でもこの服は、本来そういう目的のもの」
男を誘惑するだけでなく、女に恥じらいを自覚させることで、より男を誘惑しやすくする効果もある。
あたしは意を決して、元の部屋へと戻っていく。
「浩介くーん」
「わっ！　ゆ、優子ちゃんその服……！」
予想通り、浩介くんは驚いているわね。
「えへへ、どうかしら？」
「え、エロすぎるよ！」
浩介くんの服からも、すでに元気百倍になっているのが分かる。
あたしで思いっきり興奮しているみたいね。嬉しいわ。
「ふふ、浩介くん……」
あたしは、歩く時に微妙にパンチラしながら浩介くんに近付く。
ぺろりっ！
「きゃあ！」
我慢できなくなった浩介くんに、正面からスカートめくりされる。
「はぁ……はぁ……優子ちゃん、俺、もう……」
浩介くんが息苦しそうに言う。
「我慢しなくていいわよ」
あたしも、また浩介くんと暖まりたい、触れ合いたい。

そのための誘惑服だもの。
「あ、ああ。優子ちゃん、こっちに来て」
「はい……」
まだ日も落ちてないけど、2人しかいないこの空間、浩介くんとの新婚旅行は、円満に進んだ。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
外は寒い。でも中は暑い。暖房した上に浩介くんと抱きしめあって体を暖めあったからだ。
あたしの服は、結局全部脱がされてしまう。でも、浩介くんによれば「あの服はある意味で全部脱いでるよりすごい」ということだけど。
していた時間は結構長く、あたしはそろそろ夕食の準備に取り掛かりたくなった。
あたしは、元の水色のワンピースと、エプロンを取り出して、料理を始めることにした。
「ふぅー、浩介くん、そろそろ夕食の支度をするわね」
「あ、優子ちゃん、ちょっと待って」
「え!?」
さっきまでは元気の素を全て吐き出したように、浩介くんは冷静だったけど、今は何かをまた企んでいる感じの口調になる。
「エプロンさ、その……は、裸エプロンしてくれる?」
「ふえ!?」
浩介くんから、突然の裸エプロンのリクエストが入った。
「ほらさ、俺たち家に帰ったら両親いるんだし、こういうのって今ぐらいしかできねえじゃん」
浩介くんが慌てて弁解したように言う。
「え、で、でも恥ずかしいから料理に集中できるかな?」
「それに、優子ちゃんの裸エプロン絶対似合うって！　胸大きいし！」
躊躇するあたしに対して、浩介くんがさらに推してくる。
「うー、浩介くんがそう言うならしょうがないわね」
あっさり了承してしまうあたし。

やっぱり、浩介くんにはかなわないわね。
あたしは、さっきの服とそれ以前に着ていた水色のワンピースを脱衣場にある洗濯機へと放り込み、代わりにエプロンだけを付ける。
うー、服の上からだと気にならなかったけど、胸が大きいからさっきの服と丈が変わらないし、それに後ろは完全に無防備だわ。
料理中は、肌に熱湯とか浴びないように注意しないといけないわね。
あたしは、意を決して扉を開ける。
「ど、どう……かな？」
俯きながら、聞いてみる。
「うん、すげえよ優子ちゃん、優子ちゃんってこういうエロいのが似合うよね」
浩介くんは鼻の下を思いっきり伸ばしながら言う。
「もう、浩介くん、これから鍋を作るから、触ったりしないでね。ケガにもつながるわ」
あたしが浩介くんに注意するように言う。
「はーい」
浩介くんは快く返事する。
でも、浩介くん、男の子だし性欲に負けちゃうかも。
「うー、やっぱり優子ちゃんお尻大きいよね」
「うん、胸だけじゃないもんねあたし」
浩介くんはあたしのことを触らない代わりに、あたしの体について話してくる。
「あ、俺ちょっとベッドで休んでくる」
「うん、休むだけにしてね」
「分かってるって、テレビ見て気を紛らわせるよ。あ、優子ちゃんはそのままでね」
浩介くんは、あたしに裸エプロンのままでいるように言うと、そのまま奥の寝室へと消えていった。
あたしは、まず野菜をひたすらに切る作業に入る。
この作業が圧倒的に時間がかかる。

指を切らずに、手慣れた手つきで切っていく。
野菜の他にも、鶏肉やお餅なんかもある。こちらは、下ごしらえは既に終わっている。
ある程度野菜を切り終わったら、タイミングを見計らって、鍋に浄水を入れてだしの素と昆布を出す。
さらに「隠し味」として、粉末状の粉を盛る。うふふ、これで浩介くんは元気を取り戻してくれるはずね。そして、同じ粉はたれの中にも入れておく。これで鍋の中のスープを飲んでも、具材だけでも浩介くんもあたしも興奮してくれるはずだわ。
火をつけて沸騰までの間に、急いで残りの野菜を切り、コップとお皿、更にガスコンロをを机に並べる。
タイミングよく沸騰してきたので、人参、キャベツの芯、ネギ、もやし、ピーマン、白菜、キャベツと、煮えにくい野菜から順番に入れていく。
ある程度時間がたったら、今度は鶏肉とウインナーを入れる。
ここは山なので、海産物はあまり使わないで行く。まあ、タラとかも入れたかったけど、今日はシンプルな鍋でいいわね。
ある程度煮えてきて食べごろになったら、あたしは力を込めて鍋を両手で持つ。
「んー！」
思いっきりお鍋を持ち上げる。
２人前なのでそこまでは重たくない。
あたしは、落とさないように慎重に運びつつ、お鍋をコンロの上に置く。
浩介くんに頼めばよかったわね。
ともあれ、最後に切ったおもちや締め用のうどんを持っていき、飲み物の麦茶を出してコップに注いで完成。
「あなたー！　ご飯できたわよー！」
ご飯ができたら浩介くんを呼ぶ。
「あーい！」
あたしの声を聴くと、浩介くんが大きな声で返事をし、勢いのいい

足音が聞こえてくる。
「うおっうまそうだな」
浩介くんが鍋を見て一言。
「さ、食べましょう」
「ああ、今の優子ちゃんはもっとおいしそうだけどね」
ぷにっ
「んもう！」
浩介くんがそんなことを言ってあたしのお尻を掴んでくる。
毎度のことだけど、やっぱり惚気られるとあたしは弱い。
向かい合わせに座り、あたしがコンロの火をつける。
すると、すぐに鍋が再び沸騰し始めたので、うまく保温になるように火を弱める。
浩介くんはその間に、自分のお皿にたれを流している。
「さ、食べましょう」
「ああ」
コンッ……
「「いただきます」」
あたしがコップを上げて乾杯をして、食べ始める。
「うん、おいしい」
「そう？　よかったわ」
実はちょっとだけ手を抜いちゃってて、母さんにはばれちゃうレベルだけど、浩介くんには問題なさそうね。
「うん、優子ちゃんが作った料理ってだけでもおいしいのに、素材までいいしなあ。やっぱいい素材にいい料理人が最高だな」
「どっちも欠かすことができないわね」
浩介くんは、嫌味という感じよりも、純粋にこのお鍋が美味しい理由を突き止めている感じがする。
「ああ、このネギがいいよ特に」
「えへへ、ありがとう」
ネギは、結構切り方で味の代わる食材だったりするのよね。
もちろん、浩介くんはそのことまで意識してないとは思うけど。

浩介くんは、ものすごい勢いで野菜を平らげていく。いつもよりも多めに作ってよかったわね。
あたしも、浩介くんより少ない量だけど、いつもよりも多く食べる。
男の人ほどじゃないけど、女の子もエネルギーを付けないといけないわね。
うー、少し体が熱いわね。盛り薬の効果かも。
「浩介くん、豚肉とお餅、入れるわね」
「ああ、頼む」
野菜が減ったタイミングで、浩介くんにお餅と豚肉のことを言う。
浩介くんが快く返事してくれたので、あたしはお餅と豚肉を取り出し中へ入れる。
豚肉は、しゃぶしゃぶの形で比較的すぐにできた。ちなみに、ここは東北地方の山奥なのにこの豚肉は何故か鹿児島県産の黒豚だった。まあ確かに、高級豚肉として、有名なブランドだけど。
「うお、この豚肉うめえな」
「うん、鹿児島の黒豚なんだって」
「へえ！　思わぬ所で見つかったな。にしても、東北のホテルで鹿児島の黒豚かあ」
浩介くんもやはりちょっと思うところがあったみたいね。

「あなた、お餅よ」
「おっと、そうだったな」
豚肉をある程度食べたら、あたしは餅を掬い上げて浩介くんに注意を促す。
あまり鍋に入れすぎると伸びすぎちゃって食べにくくなっちゃうからだ。
「はむはむ……うん、うまいな」
「ええ」
その後、豚肉のアクを取ったりしつつ、野菜も全て食べ終わり、残りはうどんだけになる。この頃にはあたしはますます興奮度が高まっていた。

浩介くんも、たれをつぎ足す。
今の浩介くんは、冷静を装っているけど、必死に理性を手繰り寄せているのが分かる。
あたしは、調味料の胡椒を入れて、更にだしの利いた鍋のスープを少量混ぜる。
それを見て、浩介くんも真似をする。これでますます、あたしたちは元気が出るわね。
「うどん入れるわね」
「ああ」
あたしが一気にうどんを全て入れる。ちょっとスープが足りないかもだけど、まあいいわ。火を一気に強火にする。
「うどんが終わったら、スープを飲むわ」
雑炊を作ろうかなとも思ったけど、今回は見送ることにした。
スープを飲んで、更に薬の効果が出ると思う。
「ああ、もしかしてこのスープに入ってるのか？」
「入ってるって？」
浩介くんの問いに、あたしがすっとぼける。
「いやその……昨日のラブホテルで買った……エネルギーがつく薬」
「うん、たれの中にも入ってるわよ」
あたしがすんなりと認める。あたしも興奮してるし。
「そ、そうか。すげえ効果だな」
浩介くんは、さらに興奮し始めている。
よく考えたらあたしも今裸エプロンで、しかも胸が強調されているものね。
薬の効果にあたしの視覚効果、ダブルパンチよね。
そんなことを考えていると、鍋が再沸騰し、うどんが出来始めたので火を弱める。
「さ、食べましょう」
「おう」
よく考えたら、沸騰して水が蒸発しても、中のだしや塩分などは同じ。

小学校の時に「食塩水の濃度」ってやったけど、あれは蒸発させても塩の量は変わらないから、濃度が濃くなるようにできている。ということは、今の鍋のスープは、より濃くだしが効いていることになるわね。
「お、このうどんもいいな」
「ええ、讃岐うどんってわけじゃ無くて、無名のうどんみたいだけど」
産地のついては特に何も書いてなかったので、そこまでのものじゃないのかもしれない。でも、美味しいことには代わりはないので気にしないでおこう。
「へー、そうなんだ。まあ、こういう鍋用のうどんはまた違うだろうしな」
「ええ」
あたしも、いつも以上の食欲で箸が進む。多分浩介くんと、何度も何度も激しい運動していて、体がカロリーを欲してるせいだとは思うけど。
うどんを全て食べ終わり、最後にたれとスープを混ぜたお湯を飲む。
「うおー、だしが効いてるぜ」
「う、うんっ、とってもおいしいわね」
あたしも浩介くんも、やせ我慢している。
もう全身が興奮しきってて、今すぐ襲い襲われたくてたまらない。これだってもうほとんど我慢大会だ。
結局スープが空になるまで、お互い言い出せずじまいだった。
「な、なあ優子ちゃん」
最後の一口を飲み終わると、ごちそうさまをせずに浩介くんが話しかけてくる。
「ん？」
「俺、も、もう……我慢できない！」
「きゃっ！」
浩介くんが、リビングにもかかわらずにあたしに抱きついてくる。

そのままあたしは倒れ込む。
「あーん、やさしくしてえー」
「とか何とか言ってー、本当はすぐにしたいんだろ？」
浩介くんが、信じられないくらい興奮した口調で言う。
「あうあう……」
その流れは、さながら激流で、あたしに抗うことなど全くできなかった。
この日この時の浩介くんは、今まで一番の身体能力をあたしに見せてくれた。

「ふー、気持ちいいー」
裸エプロンは簡単に剥げる。
浩介くんも、あまりに身体が熱くなりすぎて、お互いすっぽんぽん。
そのままの勢いで、アフターのお風呂に入っている。激しい運動の後のお風呂はとっても気持ちいいわ。
温まりすぎた身体を冷ますのには、こんな寒い日の露天風呂がちょうどいいわね。
温泉に浸かり、のぼせたら上半身を浮かせて半身浴を繰り返す。
「浩介くん大丈夫かな？」
浩介くんは大分体力を消耗していて、大浴場でぐったりしている。
あたしは、「優一の記憶」を探り、浩介くんがぐったりしてしまった理由を探る。
「うーん、ちょっと疲れすぎとも思うけど」
優一の頃にした記憶では、あそこまで疲労の溜まるものじゃなかった。
多分、動いたりあたしを動かしたり体を持ったりするのに、物凄いエネルギーを使っているんだと思う。
露天風呂は相変わらず寒い。夕食も終わり、太陽は完全に落ちている。
あたしは、もう一度大浴場に戻る。
浩介くんは、まだ床に座り込んでいた。

「あなた、大丈夫？」
「ああうん……もう少し休みたい」
さっきまでの元気が嘘のようで、あたしの裸にもあまり興奮していない。
それでも、きちんとタオルで前を隠す。恥じらいを忘れると、いわゆるレスになると言われている。
で、レスというのは離婚のもとになるから、気を付けないといけないもの。
「そう？　今日はもうやめておく？」
「ああ、そうしてほしい」
明日はもう、帰るだけになる。
ちなみに、行きとは帰り道が違っていて、日本海側を経由することになっている。
これは気分の転換と共に、運賃の節約も兼ねているらしく、蓬莱教授の意向とは矛盾している。
「うん、分かったわ。じゃああたし、先に出るわね」
あたしは体を拭いて、パジャマに着替え、寝室へと向かう。
「ふー、何だか今日が一番疲れたわね」
どこにも移動せず、ここに丸一日こもりっきりだったのに、今日は疲労度が今までで一番高かった。
あたしたちにとって、今後の休日の在り方について、もう少し考える必要のある日だったかもしれない。
結婚後は、今日みたいに1日暇を持て余す日だって何度もあると思うけど、その度に今日みたいに乱れ続けたら身が持たなくなっちゃうもの。
すっかり女の子になっちゃって忘れがちだけど、男の子にとって、あの負担はとても大きいものだから。
「……うん、今日は新婚旅行だったものね」
あたしとしては、赤ちゃんが出来ちゃうことも考えないといけない。
だけど、少なくとも大学を卒業してから、子供のことは考えていき

たいと思っている。
それまでは、避妊のことも考えていく必要がありそうね。
そんな風に考えていると、浩介くんが部屋の中に入る音がする。
浩介くんは何も言わずにベッドに入る。
あたしが動かないから、既に寝ていると勘違いしているのかもしれないわね。
「……お休み、あなた。愛してるわ」
あたしは、浩介くんに聞こえないくらい小さな声で呟き、今日という一日を終えることにした。

# 新婚旅行最終日　長き帰路　前編

「うーん……」
薄暗い部屋の中で目を覚ます。
外は視界が悪く、よく見えない。曇った窓を拭いて見たら、雪が降っていたのが分かる。
隣のベッドの浩介くんはまだ寝ているので、あたしは旦那を起こさないように、慎重に部屋を出る。
起こすにしても、まずは着替えてからよね。
そんな風に思い、あたしは今日の服を考える。
と言っても、今日が最終日なので、着る服は実質1パターンだけ。
この茶色いジャンパースカートと、白のブラウスの組み合わせ、赤い服と同じくらい幼めに見えるので、あたしはぬいぐるみさんを取り出す。うん、ぬいぐるみさんを抱えていると、余計にこの服は映えるわね。最初のデートの時もそんな感じだったっけ？
よし、浩介くんを起こしに行こう。
あたしは、もう一度寝室に戻る。
浩介くんは、まだ寝ていた。
「浩介くーん、起きてー、朝よー」
あたしは浩介くんの耳元でささやく。
「んぅー、優子ちゃん、それやばいって……あううー」
浩介くんが寝言を言う。あたしの夢を見ているのかな？
「優子ちゃんのおっぱいふかふかまくらー、ふへへへへ」
むー、浩介くんったらえっちな夢見てるわね！
「あへへへへ、優子ちゃん気持ちいいよおーもっとー！」
「浩介くんのえっち！　そんな夢見てないで起きて！」
ちょっとかわいそうにも思ったけど、あたしはちょっと大きな声で言う。
「んー、ふえっ……優子ちゃん……」
浩介くんがいかにも寝ぼけた感じで言う。
「ふみゃあー、優子ちゃんのおっぱい……」

むにっ！
「きゃあ！」
寝ぼけた浩介くんが、いきなりあたしの胸に手を伸ばして揉んでくる。
あたしは、びっくりして声を出しちゃうけど、手を払いのける感じではなく、腕をつかんでゆっくりと剥がしていく。
浩介くんも悪気は無い、寝起きで夢の中のあたしとえっちなことをしてて、まだ夢と現実の区別があいまいなのよね。
「あれ？　優子ちゃん、何で服を……あ、夢だったのか」
浩介くんがようやく、現実に戻る。
「もう、夢の中でまであたしとしてたの？」
「あはは、うん、そうみたい」
浩介くんも、バツが悪そうに話す。
昨日あれだけ散々にしておいて、夢でもしなきゃいけないなんて。
「本当にもう、夢で見なくても現実であたしがしてあげるって」
「う、うん、ありがとう」
さらりとこんなセリフを言えるようになっちゃったのも、あたしの浩介くんへの依存度が高まっているせいなのかもしれないわね。
依存し過ぎにも、注意しなきゃいけないわよね。
「とりあえず着替えて、朝ご飯を食べたら、荷物まとめて帰るわよ」
「あーうん、そうだな」
帰り道は、日本海側に迂回するので、行きよりも時間がかかる。
なので、実はそこまで悠長に構えてもいられない。
夜ご飯は、遅くはなるが浩介くんの家に戻って取る予定だし。
浩介くんはキャリーバッグの中から今日の服を取り出す。
ちなみに、あたしもあたしで、浩介くんの着替えをあまり見ないようにしている。
浩介くんだけではなく、あたし自身の性欲も、うまく旺盛に保たないといけないし。
あたしは、浩介くんが着替え終わったタイミングを見計らって、電話を手に取って朝食のルームサービスを取った。

昨日とは少し違う朝食が運ばれてくる。
「いただきます」
浩介くんと食べる朝食、今は2人っきりだけど、これからは義両親と一緒の一家4人になると思う。
「優子ちゃん、今日のルートは分かってる？」
「うん、横手に出て新庄から日本海側に出て、そこから特急と新幹線を乗り継ぐのよね？」
食事中、浩介くんが帰路についてあたしに問いかけてくる。
「ああ、新幹線は大宮駅で降りるぞ、そしたら乗車券が新しくなるから注意してな」
「うん、分かってるって」
今回の乗車券は、世にも珍しい「連続乗車券」というものを使ったらしい。
本来、普通乗車券の一種として、片道、往復と並んで3つの大きなカテゴリー何だけど、知名度は圧倒的に低い。
鉄道の切符は、遠距離になればなるほど、1キロ当たりの運賃が安くなる傾向にあるので、なるべくぶつからないように経路を制定すれば、安く旅行ができる。
永原先生によれば、大宮と秋田で、行き帰りのどちらかを新潟周りにするだけで、運賃が秋田から大宮までのグリーン料金程度安くできるのだという。
今回のきっぷも、単純往復と比べると結構安くなっているという。
でも、蓬莱教授の意向もあって、新幹線や特急列車などが、全てグリーン車やグランクラスを使うようになってもいるのよね。
「にしても、不思議だよなあ」
永原先生の工夫によって、何とか普通の切符には収められたけど、もし切符に書かれている経路の数が17を超えると、機械では発券できなくなってしまうという。
いわゆる「経路オーバー」という形で、こうなってしまえば黄緑色の紙で手書きの乗車券を発券する羽目になるという。
「それで先生……あー、会長も何枚か持っているらしいけど、いずれも

今回みたいに運賃節約で大回りした際に起こったものらしいな」
大回りの運賃節約に加え、新幹線を細かく使ったりすると、この手の経路オーバーが起こりやすいらしい。
というのも、乗車券の仕様上、経路に新幹線を挟むと「乗車駅、新幹線、下車駅」で、３つも経路を使っちゃう。
あたしたちの乗車券は「連続1・東京都区内→大宮　経由　東北、大宮、新幹線、北上、北上線、奥羽、陸羽西、羽越、白新、新潟、新幹線、大宮」となっている。
連続２は、単純なので問題ないが、連続１の経路数は１２で、例えば帰りの上越新幹線を越後湯沢と高崎の間だけ使ったとすれば、「新潟、新幹線、大宮」が、「信越、上越、越後湯沢、新幹線、高崎、高崎線」で１５までになる。更に東北新幹線を２回に分けて使ったとすれば、もう経路オーバーを引き起こす。
永原先生のように「上級者」なら、それも楽しめるんだろうけど、あたしたちはそうもいかない。
実際ペラッペラの紙で心許ないらしいし。

「ごちそうさまでしたー」
あたしたちは食事を終え、歯を磨いて身なりを整えて荷物をまとめ始める。
ぬいぐるみさんも、いったんはテーブルの上に置いておく。
チェックアウト時間が９時５５分で、約束の時間が１０時になっている。
一昨日降りた駅から、旅は再開される。
「少し時間余っちゃったね」
「あー、まあ仕方ないだろ」
浩介くんは少し緩やかな口調で言う。
確かに、あたしにとっては余裕なさそうに見えても、それは二重三重に慎重な想定をしているから。
一昨日にも話題にあったように、鉄道の旅は時間管理が重要だし、それは社会人は無論のこと、中学生高校生大学生でも同じこと。

ある程度すんなり物事がいかないことを常に考えつつ予定を組むくらいでちょうどいいと思ったので、今日は余裕を持った予定にしている。
テレビをつけて時間をつぶすけど、当然左上に時刻が表示される仕様にしてある。
「続きましては、来年に控えた東京オリンピックです！」
テレビでは、相変わらず東京五輪の話が多い、そしてもう一つは――
「東日本大震災から来年で9年、9年の時を経て再開する常磐線に迫ります」
そう、来年２０２０年に、福島第一原子力発電所事故で不通になっていた常磐線が運行を再開する。
原発事故によって、当初は今後数百年は住めないなんて話さえあったらしいけど、除染技術の大幅向上によって、実際には9年で鉄道が運転再開にこじつけることができた。
最も、あの時小学生だったあたしたちも、大学生になっちゃってたけど。
「そう言えば、こういう場所にあたしたちが行ったらどうなるんだろう？」
「あー、ＴＳ病患者ってガンにならないんだっけ？」
「ええ。蓬莱教授がそんなこと言っていたわ」
甲状腺がんがどうのこうのって話、あたしたちが小学生の時よくやっていたけど、最近じゃそう言うのはあまり聞かなくなった。
ＴＳ病患者の場合放射性物質に対する耐性も高いらしい。もちろん、瞬間的に高濃度に汚染されたのを浴びればひとたまりもないけど。
「行ってみたいよな。福島」
「ええ」
浩介くんの呟きに、あたしも同意する。
ＪＲの運転再開は、東京五輪に負けない大きなイベントになると思う。

「さて、じゃあ行こうか」
「うん」
常磐線に関するニュースを見終えて、あたしたちはちょうどいい時間になったのでぬいぐるみさんを左手で抱き、右手でキャリーバッグを引く。
浩介くんの後に続き、2泊のお世話になった借り別荘を出てフロントを目指す。
気温は寒いけど昨日ほどではなく、コートを着ていれば問題無い程度だった。
これなら、地上に出る帰り道はあまり問題なさそうね。
「すみません」
「はい、チェックアウトですね」
フロントのスタッフさんが部屋の鍵を受け取ると、レジに何やら打ち込んでいる。
「こちら追加料金になります」
「お、結構するな」
「うんでも計算通りよ」
あたしの想定通りの金額を財布から出し、清算をする。
「ありがとうございました。それではこの先もお気をつけていってらっしゃいませ」
「はい」
あたしはスタッフさんの声を聞き、扉の前の椅子に座る。

「お、来たぞ」
「あ、本当だわ」
行きと同じ会社の名前のタクシーを発見したので、あたしたちは立ち上がってホテルン外へと向かう。
あたしたちを見て、タクシーの自動ドアが開く。まずはトランクに荷物を入れ、中へと入る。
「シートベルトを締めてください」
行きの人とは、多分違う運転手さん。

その指示に従い、あたしたちはシートベルトを締めると、タクシーが発車した。
行きの道をそのまま降りるんだけど、山下りになるので結構怖い。
タクシーはチェーンも装着して相当に慎重な運転をしているけど、冬の曲がりくねった道のりは必然的にあたしたちを不安にさせる。
タクシーの運転手さんには失礼かもしれないけど、あたしは本能的に頭を腕で守りつつ、体を曲げて頭を下げる。
これは、あの飛行機事故の検証番組でやっていた「衝撃防御姿勢」だけど、もちろん自動車にも応用できるはず。このスピードなら、この姿勢さえ守っていれば大丈夫だと思う。
隣を見ると、浩介くんもささやかながら少し警戒体制を取っていた。

「お客さん、山道抜けましたよ」
しばらくすると、タクシーの運転手さんがあたしに話しかけてきた。
「あ、すみません」
あたしは慌てて起き上がる。
「すみません、うちの家内は臆病なものですから」
「うっ……」
浩介くんがあたしのことを「家内」と呼ぶ。
うーん、確かにそれで間違ってないのがまた複雑よね。何だか、結婚してから色々な呼ばれ方している気がするわ。
「はっはっはっ、むしろいい心がけですよ。何せ冬の道路は事故が多いですし、自分が安全運転してても、危険運転のドライバーにもらい事故されることもあるのが自動車ですから、若いのにしっかりしてるなあと感心してるとこです」
どうやら、お世辞で言っているという感じではなく、本心からの言葉と見受けられるわね。
おそらく、それだけ冬の道路は危険だということを意味していると思う。

タクシーの運転手さんと会話をする頃には完全に山のふもとという感じになっていた。
「この辺はまだいいんですけど、直線の続く冬の北海道の道路は危ないですよ。お客さんもよく、気を付けてくださいね」
「は、はい……」

タクシーの運転手さんに、再び駅前で下してもらう。
「列車に乗っちゃえば道路よりずっと安全だ。だけど気を付けてな」
「はい」
荷物を降ろしてもらい、あたしたちは一昨日以来の乗車券を駅員さんに見せて、駅の中へと歩みを進める。
しばらくすると、昨日と同じタイプの列車が入線してくる。ちなみに、踏切の音も聞こえてくる。
「よし、中に入ろう」
「うん」
ちなみに、列車は「快速」だった。とはいえ、ほとんど各駅停車に近いらしいけど。
「ドアボタンを押してお乗りになり、整理券をお取りください。横手行きの、ワンマンカーです――」
この放送も行きと同じ。
あたしたちを乗せると、しばらくして反対列車が来る。
これを待ち合わせると、列車は発車した。
案内放送も、何もかもがそのままだった。
2日しか経ってないから当たり前だけど。
雪模様は相変わらずで、列車はそのまま幾つかの駅を通過しつつ終点の横手駅へと到着した。
ここでの時間はあまりない。
「浩介くん、どうする？」
「うーん、飲み物だけ買うか」
「ええ」
まだまだ冬なので、空気も乾燥気味。

車内も暖かいので、あたしたちは冷たいドリンクを購入することにした。
電車は、１０分ちょっとで到着した。行き先は新庄駅で、あたしたちは終点まで乗り通す予定になっている。
車内はというと、首都圏などでよく見る横側の見合わせタイプの座席で、車内は空いていると言い切れるほどではないが、それでも余裕で２席を確保した。
「ふう、この時間にしては結構人いるわね」
途中駅次第では、立ち客も出そうよね。
「ああ、珍しいな」
浩介くんも、地方の昼間にこれだけの人がいるのは違和感があるらしい。
でもよく見ると、あたしたちと同じく、大きな荷物を持っている人が多い。
「どうもこのあたりは結構人がいるみたいだぜ」
「うん」
ともあれ、あたしたちは、さっきまでとは打って変わり、大きなモーター音を鳴らして走る電車で、新庄駅を目指した。

「うー、なんか熱いわね」
「ああ、何だよこの暖房……」
電車は順調に走っていたけど、一つ問題があった。
その問題というのは、座席の暖房が異様なまでに熱いこと。
にも拘らず、上半身の方は扉の隙間から吹き付ける風が冷たく、異様なまでにアンバランスだ。
「うー、あちち」
浩介くんも少し辛そうな顔をする。
座席というか、足元からの暖房が強いみたいなのでそれで何とか工夫ができそうね。
後、これだけの距離をこのシートで移動するのも、何気にきついわね。

さて、思わぬ暖房のアンバランスに苦戦しつつ、あたしたちは新庄駅に到着する。
ちなみに、横手駅で買った飲み物は全て飲んでしまった。
ちなみに、ここから山形新幹線「つばさ」の東京行が出ていて、これに乗ると安さの幅は小さくなるけど、到着は格段に早くなる。今回はお預けだけどね。
「えっと、陸羽西線は……うーん、外で食べるにはちょっと足りねえなあ」
浩介くんが時刻表と時計を見ながらうなる。
確かに、旅番組なら「大丈夫さ」の楽観精神で寄り道し、大慌てになる時間だけど、この先特急と新幹線のグリーン車を予約してあるあたしたちはそうもいかない。
「駅の中にコンビニがありそうだから、それを買おうぜ」
「うん」
あたしたちは、駅に併設してあるコンビニへと向かい、お弁当を購入することにした。
「優子ちゃんはから揚げ弁当と飲み物？」
「うん、浩介くんは？」
「ああ、ニンニクと鶏豚牛弁当だ。ついでに栄養ドリンクも完備したぜ！」
うわー、露骨ねえ……新幹線の中で襲われたりしなきゃいいけど。
「あはは、浩介くん、家まで待つのよ」
「分かってるって」
まあ、家に帰ったら一家であたしの歓迎パーティーになると思うから、浩介くんが発散できるのは寝る前になると思うけどね。
ともあれ、コンビニで買い物しているとちょうどいい時間になったので、陸羽西線のホームに出ると、次の列車が止まっていた。
車内はまばらで、あたしたちもボックスをゲットできた。
「んじゃ、食べるか」
「うん」

ちなみに、今の時間は昼食にはちょっと遅い。
このボックスには、テーブルもあって、浩介くんはそこに栄養ドリンクを置いていた。
「この列車余目行きです。まもなく発車いたします」
運転士さんの放送とともに、ドアが閉まる音がする。
そして、北上線の時と同じように、ディーゼルエンジンの轟々たる音が車内を包み込む。
「のどかだな」
「うん」
ローカル線のボックスシートでお弁当を食べながら車窓を眺め、時折テーブルに置いた飲み物を飲む。
周囲も、老人たちが明るい会話に花を咲かせていて、本当にとてものどかな空間だと思う。
まさしくローカル線という風情にふさわしい状況がそこには流れていた。
「お、これが噂に聞く最上川か」
「うん、多分そうよね」
「奥の細道最上川ライン」……「奥の細道」と言えば松尾芭蕉の作品で、もしかしたら永原先生も読んだことがあるのかもしれない。
「ごちそうさま」
浩介くんが一足先に食べ終わると、栄養ドリンクを飲み干し、割り箸を折って弁当箱の中に入れ、空になったゴミをレジ袋の中に入れる。
これはまた、備え付けのゴミ箱に入れることになっている。
「悪い、ちょっとトイレ」
「うん、いってらっしゃい」
地方に行くと、普通列車でもトイレが付いている。
もちろんあたしたちの首都圏にも、トイレの設備のある列車は存在する。
でもそれは、比較的長い距離を走るから付いているものだった。
地方は地方で、列車の本数が少ないのに加え、駅と駅の間の所要時

間も長いから、設備として必要不可欠になっているんだと思う。
浩介くんがトイレに入っていく。
……ってダメダメ、「優一の記憶」を頼りに、浩介くんのトイレを想像するのはダメ！
あたしは、おかしな考えを振り払い、正気に戻って車窓へと戻る。
列車は、冬の最上川に沿って、のんびりと進む。
途中の駅でのお客さんの乗降はわずかだった。おそらく、全て無人駅なんだと思う。
「ふう、ただいま」
「あ、浩介くんおかえりなさい」
「優子ちゃんはトイレ大丈夫？」
浩介くんが心配そうに聞いてくる。
「うん、大丈夫よ」
余目駅で、トイレを借りればいいと思う。

# 新婚旅行最終日　長き帰路　後編

「次は終点、余目、余目です――」
ワンマン列車についている無機質な音声が、次の駅が終点であることをアナウンスしている。
これをもってのどかなローカル線の旅も終わり、ここからは大宮まで特急と新幹線を乗り継ぐ予定になっている。
「ふう」
あたしは、とりあえず一息つく。ここで少し待ち時間がある。
新潟行きの特急「いなほ」の前に、普通列車があるけど、こっちの方は途中駅までしか行かず、接続列車もないので特急をここで待つ予定になっている。特急料金浮かせたいなら、普通列車で終点まで行くのもいいけど、どうせ蓬莱教授の援助だし、気にしなくていいわね。
さて、その間にトイレに行かなくっちゃ。
「浩介くん、あたし、お花摘みに行ってくるから荷物見張っててね」
「おう、任せとけ」
と言っても、浩介くんの視界からも、あたしがトイレに行くのが丸わかりだ。
あたしは駅の女子トイレに入り、しっかりと鍵を閉めてから、前に屈みつつスカートをぺろりとめくり上げてパンツを下して座る。
「ふー」
座りながら浩介くんのことを考える。
うーん、今の浩介くんは……
……ってダメよ優子！
もう！　今度はトイレのあたしを妄想してる浩介くんを想像するなんて！
あうー！　あたし、何てはしたない子になっちゃったんだろう。多分、浩介くんに惚れこんじゃったせいよね？
あたしは首を横に振って、邪念を振り払った。
トイレを流し、手を入れながら考える。
そう言えば、あたしが女の子になったばかりの頃、スカートでのト

イレの作法を学んだけど、浩介くんの頭の中では未だに下してしていると思ってるのかな？
って、またそんなこと考えちゃってるわ。
……とにかく、早く浩介くんのもとに戻らないと。いつまでもここに居たら最悪濡れちゃうわ。
「お待たせー」
「おう。特急列車、もうすぐ来るみたいだぜ」
浩介くんは特急列車を楽しみにしている様子で待っている。
「まもなく、特急いなほ新潟行きが参ります」
駅員さんの放送からしばらくして、首都圏とは違う駅の放送が流れ、特急列車が停車した。
地方の鉄道だけど、近代的な角ばったデザインをしていて、車体は真新しいわね。
ドアが開き、あたしたちが中へと入る。グリーン車とは違う車両なので車内を移動すればいいだろう。
中は結構空いていて、普通車でさえ、座席はまばら。
あたしたちが乗るグリーン車は、もっと人が少なかった。
「結構人が少ねえな」
「うん」
採算が取れているのか、少し不安になる。
「ま、新潟に近くなれば人が増えていくかもよ」
浩介くんはあくまで楽天的だ。
「ふー」
「やっと一息つけるな」
ちなみに、グリーン車はかなり快適にできていて、足を延ばすのも当然余裕だ。
「ふー、普通列車に乗った後だと余計に贅沢に感じるなあ」
「うんそうよね」
浩介くんの言う通りだと思う。
各駅に停車する普通列車に乗ってきたけど、これからは主要な駅にのみ停車することになる。

発車した電車はこれまで以上の加速力で、スピードも上げていく。
「この羽越本線は、強風での遅延や遅れが多いのが難点らしいな」
特急列車の車内、浩介くんは久しぶりに永原先生のメモ帳を持ち出して言う。
「へーまたどうして」
「14年前にこの路線で突風による脱線事故があったんだって」
「そうなのね」
浩介くん曰く、この突風自体はどうにもならないことで、死者が出てしまったことも含めて「運が悪い」としか言いようのない事故だったらしい。
ただ、「運が悪いから仕方ない」で割り切れる、永原先生や蓬莱教授みたいなタイプは世間では圧倒的に少数派だ。
そして起こったのがとある新聞社による強引な社説で、今も語り継ぐべき事象らしい。
『風の息遣いを感じていれば、事前に気配はあったはずだ』とまあ、強引な批判をしたわけだな」
「ふう、そこまでしてどこかに責任をぶつけないと気が済まないのかしら？」
色々と、ひどい話だと思う。
この社説自体14年も前の話なのに、未だに語り継がれているものね。
そして、永原先生が言うには、マスコミに対する今の徹底的な閉鎖主義も、こうした報道を何度も積み重ねてきた所による物が大きいらしい。
電車は新潟駅まで幾つかの駅に停車する。
停車駅ごとにホームには人が居て、何人かがこの列車に乗っており、何人かが降りているが、ここグリーン車には殆ど出入りがない。
やはり、料金の高さがネックなのかもしれない。
電車は村上駅手前、空調設備の音が一瞬消えた。

「どうやら、こういう区間が日本に何箇所かあるらしくて、車両によっては照明が消えることもあるそうだな」
浩介くんが、メモ帳を見ながら言う。
この旅も終盤のためか、見ているメモ帳もかなり終わりの方だ。
「へえ」
「直流電化は１５００Ｖに対して、交流電化は在来線の場合２０００００Ｖで、新幹線が２５０００Ｖみたいだな。これらも含め、切り替えは慎重に行う必要があるんだ」
「でも、どうして交流と直流で統一されなかったのかな？」
あたしは、そのあたりを疑問に思う。
「ああ、交流電化は電圧が大容量で地上コストこそ安いが、車両のコストが高いから本数の比較的少ない路線に向いていると言われていたんだ。ただ、その後は交流電化のメリットは低下してしまって、新幹線を除けば、失敗だったとする人も多いみたいだな」
ただし、茨城県の一部区間には、地磁気研究所があって、そこの研究に悪影響を与えないように、交流電化が採用されている地域もあるそうだ。
そんな風に浩介くんと雑談していると、列車はついに新潟駅に到着した。
ここからは、上越新幹線で大宮駅に向かうことになっている。
「えっと、新幹線ホームは……こっちだな」
「うん」
浩介くんの誘導でホームを進む。
今はちょうど帰宅ラッシュの時間なのか、女子高生たちが沢山駅にいた。
「俺たちも、つい４日前まではああだったんだよな」
浩介くんが寂しくつぶやく。
そう、あたしたちも、今は夫婦だけどちょっと前までは高校生だった。
「うん、でもあたしは、今のほうが幸せかな」
浩介くんと、結婚できたから。

「そりゃあそうだろう？　今以上に幸せなときって、これからあるかな？」
「ふふ、どうかしら？」
もしあるとすれば、これから作っていけばいいと思う。
今までの女性としての先輩の声を聞くと、「赤ちゃんを産んだ時」に、それは訪れるかもしれない。今から楽しみだわ。もちろん、すぐに赤ちゃんを生むというわけではないけどね。
あたしたちは、もう一度自動改札機に切符を入れる。
「次の大宮では一旦改札を出てから再入場しよう。そうすれば自宅までは2枚目の切符をすんなりと流せると思うんだ」
浩介くんがよく分からないことを言う。
でも、あたしは浩介くんを信頼しきっているので、特に問題なく従えばいいと思う。
ああ、やっぱりあたしは無意識に従属物でありたいと思ってしまうのね。
本当にそれでいいのか悩むこともあったけど、浩介くんは今の所あたしの気持ちにも向き合ってくれているみたいだし、また問題が起きた時に相談すればいいわね。
今後夫婦生活でうまくいくことばかりではないと思う。でも、今後も頑張っていきたいと思う。
今はとにかく、蓬莱教授の研究のことを考えたい。
あたしたちに出来ることを全力でして、彼を支援すれば、何となくうまくいく予感さえしていた。
一昨年の水族館の言葉が未だにあたしには引っかかっている。
「さ、こっちだ」
「うん」
浩介くんの案内で上越新幹線の東京方面のホームに着く。
新潟駅は終点なので、折り返しの電車になる。
「えっと停車駅は……各駅停車かあ」
案内板を見ると、確かに「各駅に止まります」とある。つまり通過駅が1つもない、修学旅行の帰りに乗ったこだまタイプなのね。

やがて、向こう側から新幹線がやってきた。紫色の電車で、東北新幹線でも一部見る旧式のタイプだった。
これが折り返しの東京行きになる。でもその前に、車内の清掃がある。
「掃除の人大変よね」
「ああ」
かなりの早業よねこれ。
あたしも、家事で何度も家の色々な場所を掃除をしたことがあるから、この凄さが分かる。
浩介くんはどうかは分からないけど。
「お待たせいたしました。清掃完了いたしましたのでドア開きます」
清掃終了の放送が流れると、一斉にドアの開く音がする。
あたしたちは、グリーン車に入り、所定の座席に座る。
既に、外は夕方になっていた。終着時刻を考えると、家に着くのは日没後になる。
「ふう、ようやく一息つけるな」
「うん、いよいよ新婚旅行も終わりよね」
でも、不思議と名残惜しい気がしない。
だって、これから新しい生活が始まるもの。その楽しみに比べたら、新婚旅行が終わる寂しさなんてどうってこともなかった。
多分、そんな風に考えられるあたしって、幸せものなんだと思う。
「間もなく発車いたします、ご乗車のままでお待ち下さい」
やがて、新幹線の発車時間になり、新幹線がゆっくりと滑り出し、やがて轟音になっていく。
やはり車掌さんの案内でも各駅停車らしい。
「上越新幹線は停車パターンがいろいろあって複雑らしいな」
浩介くんがノート見て言う。
それによれば、速達型、準速達型、各駅停車形の他、1日1往復だけ直行型もあった。
ところが愛称は新潟に向かうのはほぼ「とき」になっている。
そういえば、初日の博物館でも「とき」を見たわね。

「上越新幹線は最高速度が日本の新幹線で一番低くて、開業当初の２４０キロのままらしいな」
「どうしてスピードアップしないのかしら？」
　メモ帳に答えがあるかはわからないけどあたしがちょっと聞いてみる。
「新潟までの距離が短いので飛行機を壊滅させるにはこの速度で十分だからだそうだ。更に２４０キロ止まりなので、列車が長持ちしやすいらしいよ。ほら、初日に出てきた２００系も、最後は上越新幹線だったでしょ？」
「あ、そういえばそうだったわね」
　上越新幹線は距離が短い。そのために高速化への需要は低かったというのがその答えだった。
　そもそも、羽田と新潟に飛行機が飛んでいたというのが、あたしにとっては驚きだったりする。

「それでね、浩介くん。明日以降のことなんだけど」
「うん、どうしたの？」
　あたしは、グリーン車がほとんど人がいないことをいいことに、クリティカルな話題を出す。
「女の子の日……来るかもしれないからね」
　小声で、浩介くんへ話しかける。
「あ、ああ……大丈夫さ。これからもね」
　生理の時には、バレンタインの時にも色々されちゃったし、ちょっとだけ浩介くんの変態が暴走するんじゃないかと不安ではある。
　まあ、多分大丈夫だと思うけどね。妻として、旦那さんを信頼しないといけないし、あたしの方が言いくるめられてますます惚れちゃう未来しか見えないし。
　新幹線から見える車窓は、徐々に暗くなっていく。新潟県の間で、もう真っ暗になった。
　たまに列車の明かりなどから、雪が見え隠れする。
「まもなく、越後湯沢、越後湯沢です」

「ここからは、大清水トンネルだな」
群馬県との県境に位置する、難所中の難所よね？
「湧き水や岩ハネ現象で、１６人の殉職者を出したり、トンネルを掘ったのに押し戻されたりして大変だったらしいな。ちなみに、青函トンネル開通前はここが世界一の長いトンネルだったらしいな。下り坂も長くて、２００系でこの下り坂を利用して２７５キロ運転をして日本最速を叩き出したこともあるらしい」
「へえ、そんなこともあったのね」
今は、やってないみたいだけど、結構無謀なことよね。
国境の長いトンネルを抜けると雪国だったとされるが、今はその雪国から普通の国に戻る。
列車は越後湯沢駅から長いトンネルに差し掛かる。
やはり噂に違わぬ長さ。でもこれでも青函トンネルに比べれば大分短い。
そして、トンネルを抜けると「上毛高原駅」に到着する。
暗くてよく分からないが、雪は確認できない。
あたしたちは「帰ってきた」と思えてくる。まだ、１００キロ以上も先に家があるのにね。

そして更に幾つかの駅に停車後、列車は大宮駅についた。
あたしたちは人気の少ないグリーン車を降りてここから在来線に乗り換える。
浩介くんに言われた通り最初に改札外に出て、２枚目の連続乗車券を使用する。
「さ、行こうか」
「うん」
大宮駅の先にあった鉄道博物館は、初日の舞台だったけど、今はそのことを考えている余裕はない。
大宮からは最後のグリーン車、帰宅ラッシュの時間帯だけど、なんとか座ることが出来た。
グリーン車だと言うのに、結構混んでいてびっくりした。着席需

要って、大きいのね。
あたしたちは、自然と話し声も無くなり、静かな時を過ごす。
最後に乗った電車は、とても混雑していて、座ることはできなかった。
荷物も大きいし、かなり申し訳なく思う。
途中で、あたしの家の最寄駅を過ぎる。
当初の予定では、一旦ここで降りて、もう一度母さんたちに挨拶する予定だったんだけど、「未練を残したくない」「ホームシックにはなりたくない」というあたしの強い希望もあって、この駅をそのまま通り過ぎることにした。
婚姻届を提出する時に素通りした時はまだ「石山優子」だったから、「篠原優子」としてはこれが初めてかな？
数駅後、小谷学園の最寄り駅を過ぎる。ここは佐和山大学でお世話になるからあまり未練は感じない。
「次は――」
「優子ちゃん、ついたぞ」
「ええ」
浩介くんの言葉と共に、何人もの人々とともに、駅を降りる。
エレベーターの前に立ちホームを降りる。
まだこの駅は片手で数えるほどしか降りたことないけど、これからは毎日使う駅になる。
４月から買う大学の定期券は、早速「篠原優子」の名義になる。携帯電話の名義も変えないといけないわね。
考えてみれば、「優一」から「優子」に名義を変えた時も結構手続きがあったし、一つ一つこなさないとダメよね。
浩介くんに言われなくても、あたしは家までの道のりを覚えている。
ピンポーン！
「はーい！」
家の中から、お義母さんの声がする。
「あら、浩介に優子ちゃん、おかえりなさい」

「「ただいま」」
あたしたちは、荷物を持って上がる。
「荷物は私達が整理しておくから、まずはゆっくり休みなさい」
お義母さんが、あたしたちを暖かく迎えてくれる。
「うん、そうさせてもらうわ」
「優子ちゃんも、部屋は出来ているからね」
「はい」
お義母さんの言葉を聞き、あたしは花嫁修業の時に使った部屋を目指す。
どんな感じになっているんだろう？
今から楽しみだわ。

## 新たな生活

「わあ！」

扉を開けた先は、あたしが実家で使っていたレイアウトとほぼ同じ部屋だった。

広々としたベッドに、布団の上にはぬいぐるみさんたちがいて、そしてベッドの下に小さなテーブルとハート型のクッションが健在だった。

テレビを置いている机の下やパソコン周りにはお人形さんたち、そして鏡付きの机の中には、あたしが愛用しているリボンなどがきちんとあの時と同じ場所にあった。洋服の箪笥の中には、新婚旅行で持っていかなかった服が全て収められていた。

服は未だに女の子初日にかったものが一番多いけど、女の子になってから買った服もある。特に、幼い感じの服があたしのお気に入り。

そして本棚も、あたしが読んでいた少女漫画や女性誌がそのままの配置のまま置かれていた。

カーテンも、明らかにあたしの部屋で使っていたものを使いまわしてくれていた。

これらのレイアウトが、全てドアを開けたらあの時と同じように再現されていた。

違っていたのはそう、エアコンくらいかな？

また真冬になったら、暖房器具も違ったものを使う必要がありそうだけど。

どちらにしても、まるで石山家のあたしの部屋をそのまま持ってきたかのようなこの部屋に、あたしはとても感動して、言葉も出ない。

あたしはもう篠原家の人間で、ここも浩介くんの家なのに、この部屋だけ、実家のような安心感があった。

あたしはおもむろにベッドに腰掛ける。

「ふう」

とりあえず休もう。今日はとにかく疲れたわ。

ここ数日、あたしをめぐる環境が激変している。学校を卒業し、結

婚し、初夜を迎え、新婚旅行をして、新しく家に住む。
おそらく、部屋をなるべく以前と忠実にしたのも、そうした相次ぐ急激な環境変化を、少しでも和らげようとするための配慮だったのかもしれない。
少しだけ眠いけど、夕食のため、我慢する。
コンコン
「はい」
「優子ちゃん、旅行の荷物、部屋に入れてもいい？」
お義母さんだった。
「うん、ありがとうお義母さん」
「ふふっ」
お義母さんが部屋に入ってバッグを置いてくれる。
「ご飯ももうすぐ出来るから、今日は待っててていいわよ」
「ありがとう」
おそらく、これから何回もするであろう何気ない会話だけど、今回のこれは特別な会話になると思う。
あたしが本当に結婚したんだって思えるから。
新婚旅行こそし終わったけど、同居生活はこれからになる。
あたしは、キャリーバッグから、持ってきた荷物を整理する。
小谷学園の制服も、結果的にこの部屋のクローゼットに飾ることになる。
多分浩介くんからもたまに「着てくれ」って言われるようになると思う。新婚旅行中も、高校生に戻った気分ですることもできたし。
制服を着続けられるためには、体型を維持しないといけないわね。あ、胸に脂肪が行くのは歓迎かな？　浩介くん、あたしの影響もあっておっぱい星人になっちゃったし。
「優子ちゃーん、浩介ー！　ご飯よー！」
「はーい！」
お義母さんの呼び声と共に、あたしたちはリビングへと直行する。
「うおっ、やっぱ豪華だな」
今日は義理の祖母も呼んでのあたしの歓迎会ということになって

いる。
「うん」
唐揚げやフライドポテト、更に餃子といった美味しそうな食べ物がたくさん並んでいる。
でも、最近何だかこの手の食べ物ばかり食べているような？
……うーん、まあいっか。
「ふふっ、優子ちゃん、改めて、いらっしゃい。今後よろしくね」
「今日からはここが我が家だから、リラックスしていいんだぞ」
「うん、改めてよろしくお願いします。お義母さん、お義父さん」
義両親と挨拶する。新しい生活が、始まる。
「さ、食べようぜ」
「「いただきます！」」
新しい家族との最初の食事。
ここでの主役は当然あたし。そう思ってたんだけど――
「おう優子ちゃん、婆の部屋を使うんだから、きちんとひ孫を産むんだよ！　浩介も、避妊なんてもっての外だからね！」
「「……」」
おばあさんも居て、さっきから「子供孕め」「セックスしろ」を壊れたレコードのように繰り返している。普通こんなこと言われると浩介くんとのことをを想像しちゃうけど、あまりにも繰り返されたから、そうは感じない。
あたしたちは岩手と秋田の山奥から1日で戻ってきたと言うのに。
「優子ちゃんも、浩介が甲斐性なしだと思ったら積極的に襲うんだよ！　そのでかい胸でうちの死んだ爺さんと同じように浩介をコロコロ転がしてしまうんだよ！　男なんて結局最後は性欲に負ければ簡単に落ちるんだから！」
「は、はい……」
老人らしからぬまくし立てるような言い方に、あたしたちも黙り込むしかない。
もー、本当に困ったおばあさんだわ。そうまでしてひ孫がほしいのね。

「優子ちゃんごめんなさいね、結婚式の時もそうだったけど、最近のおばあさんはそればっかりなのよ」
「そ、そうなのね。でもあたしたち、大学行って蓬莱教授の研究もあるから」
「何かよく分からねえけどよ、わしにとっちゃあ明日生きてるかも分からねえんだわ！」
だ、駄目ねこれ……
でも、ご飯は美味しかった。
お義母さんもお義母さんで、あたしに家事対決で負けたのをバネに、成長しているのが見受けられる。
まあ、あたしもあたしで、負けるつもりはないけどね。

「ふう、ごちそうさまでした」
ゆっくり食べ、全員でごちそうさまをする。
「じゃあ、わしは戻るわね。頼むよ2人とも！」
「お、おう……」
「う、うん……あはは……」
おばあさんは、お義父さんの車で送ってってもらうことになった。
「じゃあ、お風呂湧かせてくるわね。優子ちゃんから入ってね」
「はい」
どうやら、あたしが一番風呂をいただけるみたいだ。
明日以降はまた、違ってくるのかもしれないけど。
お風呂が湧いたら、あたしは自室の箪笥からパジャマとヘアゴムを持っていく。
以前にも、花嫁修業の時に浩介くんの家のお風呂を使ったので勝手は分かっている。
服をすべて脱ぎ、カゴの中へと入れていく。
髪型を変え、お風呂に入る。
実家のお風呂とはちょっと違うけど、花嫁修業の時に浩介くんと一緒にも入ったので、特段違和感はない。
今思ったのは、環境の急変の緩和策として、花嫁修業はとても重要

だったということ。花嫁修業無しでこんなに怒涛の変化をしてたら身が持たないものね。
「うん、何とか明日以降も、やれそうな気がするわ」
あたしは、楽観的な思いで、お風呂を満喫した。

「ふう……お義母さん、あたし今日は早めに寝るわね」
「そう？　疲れたわよね。色々な意味で」
「う、うん……おやすみなさい」
精神的には、さっきのおばあさんの畳み掛けが一番来たけどね。
とはいえ、今から寝るのは流石に早すぎるので、あたしは、自室に戻ってパソコンを開く。
一応、動作の確認をしないといけない。
ＰＣのトップ画面は青一色で、ここは優一の頃からずっと同じ。

コンコン
「はい」
ガチャッ
「俺だけど」
「あらあなた、どうしたの？」
しばらくパソコンをしていると、部屋がノックされ、入ってきたのは、浩介くんだった。
「ああいや、優子ちゃんの部屋、変わらねえな」
「うん、すごい再現力よ」
部屋の広さや間取りが殆ど同じだったのもあると思う。
最も、さすがに太陽の入り方までは再現できていないはずだとは思うけど。
「用事はそれだけ？　それとも――」
「ああいや、その……うん、俺、これから寝るわ」
浩介くんがよそよそしく振る舞う。
確かに、ご飯もお風呂も終わった夜というと、あたしはどうしてもあのことを思い出してしまう。

「そう？　じゃあまた明日ね」
浩介くんは自分の部屋に戻っていった。
「あたしも寝ようかしら？」
後少しだけインターネットの巡回を済ませると、あたしはＰＣの電源を切り、部屋の電気を消し、ベッドの中に入って寝ることにした。
「ふうー」
大きく一息つき、あたしはゆっくりと睡眠の道を進もうとしていた。

「んぅっ……」
何かが胸に当たる。
何かがもぞもぞと動いている。
「な、何？」
あたしは訳も分からず混乱する。さっきまで寝ていたはずなのに？
「ひゃうっ……！」
真っ暗な闇の中、よく目を凝らすと、真っ暗な中でも分かるくらい布団が不自然に盛り上がっていて、触覚からは、あたしの服が少し脱がされていたのが分かった。
「だ、誰……？」
小声で言うが誰も答えない。犯人は分かりきっている。
おそらく、この世の推理小説で最も簡単な推理小説よりも更に簡単で、おそらく小学生にも解ける話だと思う。
「んっ……！」
あたしは、自分の体をいやらしく触る犯人を突き止めるため、布団を剥ぎ取った。
犯人は、一瞬驚いたけど、あたしのパジャマのズボンに手をかけ始めた。
「な、なに浩介くん……！」
「ん？　優子ちゃんに夜這いしようと思って」
浩介くんが悪びれもなく答える。

「もう！　こんな時間に！　ほら、こっち来て」
あたしは起き上がって浩介くんの両頬を挟んでつねる。
「ひゅへぇひぇ、ぎょめんなひゃい」
浩介くんがバツの悪そうな顔で笑う。
あたしの手でちょっとだけ歪んだその顔がたまらなく愛おしい。
えっちな浩介くんを叱りつけても、最後には許してしまうのが悲しき恋する乙女の習性なのよね。
「ほら浩介くん……」
体が冷えている。
そうよね、ぎゅーっと抱きしめあって温め合いたいのよね。
電気を消したまま、乏しい光を頼りに、あたしたちは手探りで作業を進めることにした。

「んぅ……」
朝日が差し込む。
目覚まし時計をセットし忘れていた。
大学の開始まではまだ時間がある。４月１日が佐和山大学の入学式だから、今日が３月２１日だからまだ１０日以上ある。
あたしは朝を起きる。
昨日あれだけ激しかったのに、寝たのが早かったせいかまだ早朝と呼ぶべき時間だった。
隣の浩介くんは、全裸で熟睡していた。お義母さんもお義父さんも起きていない。
あたしは、浩介くんが起きてくることを意識して、今日の私服をお風呂の脱衣場に持っていきそこで着替えることにする。
今日の服は、まだ外が少し寒いのもあって、膝下丈の落ち着いた色合いのスカートにすることにした。
もう結婚していて、花嫁修業も済ませていると言っても、やはりまだ入ったばかりだし、いきなり飛ばしすぎるのもよくないだろう。
あたしは早速、家事に取り掛かろうと思ったけど、まだこの家の習慣についてよく分かったわけじゃないし、今後の役割分担も含め、お

義母さんとはよく相談しないといけない。
おそらく実家の時と同様、平日と休日ですることも変わってくるだろうし。
あたしは、リビングでテレビを見る。
朝の主婦らしく、朝ごはんの準備をしたいけど、我慢をする。
ガチャッ……
「あ、優子ちゃん」
「おはようお義母さん」
お義母さんが、リビングに入る。
「朝ごはん、作りましょう」
「ええ」
お義母さんの指示で、家事を始める。
まずは朝ごはんだ。
といっても、することは以前と同じ。
朝ごはんの何を作るか言われたら、すぐにあたしはそれを理解して準備に取り掛かる。

「お義母さん、ここはこういう風に準備したほうが早いわよ」
「あ、言われてみればそうね。うーん、また一本取られてしまったわ」
あたしたちが朝ごはんの支度をしていると、浩介くんやお義父さんが入ってくる。
「おはよー」
「おはようお母さん、優子ちゃん」
「うん、おはよう」
「おはよう2人とも」
あたしたちは結婚生活で初めての朝の挨拶をする。
これから、何度となく訪れる日常だけど、やっぱり最初に来る日常は感慨深いわね。
そして、食事の準備を続ける。
お義母さんと2人で作る。
「ふう、やっぱりいつもより早いわね」

お義母さんが感心したように言う。
確かに、マンパワーが増せば、早く出来るのは当然よね。
「出来たわよー」
「はーい」
あたしたちの言葉に、男陣が机の上で返事をする。
どんと構える男たちのご機嫌をとるため、あたしたちは朝ごはんを並べる。
これに関しては、下手に手伝われるよりもあたしたちが行った方が効率がいいという側面もある。
気持ちを見せるべきだと言うけど、マイナスよりはゼロの方がいいという場面はたくさんある。
あたしたちは順序よくご飯を並べていく。やはり身体能力ではお義母さんの方が上手ね。
「じゃあ、いただきますしましょう」
「おう」
「ああ」
浩介くんとお義父さんの返事とともに、あたしたちは朝食を作る。
「お、うまい」
浩介くんが開口一番に感嘆の声をあげる。
「うん、やっぱり優子ちゃんはいい戦力だな」
花嫁修業や、その前の時に、既に料理の腕は知られていた。
それでもやはり、あたしはその時は臨時の戦力でしかなかった。
でも今日からは、あたしはずっと戦力になる。
浩介くんにとってもあたしとの結婚は大きいけど、お義母さんにだってかなり大きなことになるだろう。

その後も、春休み中、あたしの花嫁としての行いは平穏無事に終わった。
お義母さんと共に家事を手伝い、いや、どちらかと言えば、あたしが師範役で、お義母さんの方が教わる感じになっていた。
もちろん、篠原家と石山家の違いもある。そのあたりは、あたしも

大いに学ばせてもらった。
姑と嫁の確執は、何も起きなかった。
美人の嫁が来ると、姑の嫉妬と言うのはよくあったが、やはり花嫁修業の時にお義母さんの言っていた言葉の通りだった。
あたしは、「お義母さんから見ると、完璧すぎて嫉妬する気にもなれない」と。もちろん、あたしの中ではまだまだ不完全だと思う部分は多いけど、他の人が見るとやはり違うらしい。
結婚生活の中で、浩介くんとの関係もますます良好になった。
まず、浩介くんとの夫婦生活が解禁されたことで、浩介くんの生活の充実感も、小谷学園にいた時よりも目に見えて良くなっているのが見て取れた。
普通、高校生カップルは卒業式とともに出会う機会が少なくなって、苦難の道に入り、破局してしまうカップルも多い。あたしたちは、逆に卒業とともにずっと顔を合わせることが出来た。
あたしもあたしで、浩介くんと一緒に居るだけで、疲れも全て取れてしまう気がした。まあ、直後はものすごく疲れちゃうんだけど。
夫婦の共同作業を、義両親に見つからないかと冷や冷やしていると ころもあったけど、うまく交わすことが出来た。まあ、気付いていても、気付かないふりかもしれないけどね。
結婚して初めて女の子の日になった時、お義母さんはあたしに家事を休むように言った。
あたしの母さんからは、「女の子の日でも家事ができないとダメ。もちろん万全には出来ないだろうけど、身の程を知ってきちんと妥協しなさい」と教わっていた。
それに対してお義母さんは、「何のために2人いると思っているのよ」と言っていた。
でも、あたしもあたしで「いつまでもお義母さんがいるとは思っていない」と返し、無理をしない範囲で家事手伝いをすることになった。
結果的にこのやり取りは、浩介くんの中であたしの評価を更に上げることになった。
小谷学園でも、生理の日はとても辛く、特に重い時は保健室で休ま

なきゃいけなかった。
もちろん、あたしは休み休みでありながらも、邪魔にならない範囲で、マイナスの貢献にならないように注意しつつ家事をこなしたことは、特に浩介くんの琴線に触れたらしい。
夫婦生活は毎日しても良かったけど、さすがに生理の時はあたしの身を案じてくれて、浩介くんも我慢してくれた。
その代わり、数日後に収まった時は、フルコースと言うべき状況だったけど。
さて、一方で協会の活動については、幸いにも新婚旅行中に新しい患者が発生したと言ったような大きなニュースは飛び込んでおらず、新生活に馴染むことに集中できたのはよかった。
また、あたしを取材した高島さんの記事も、蓬莱教授側の都合もあって、もう少し後ろにずれ込むことになった。
春休みが終われば、あたしは大学生としての生活を始めることになる。
そうすればまた、家事の分担も大きく変わってくるはず。
大学生活が近付くに連れ、あたしも浩介くんも、蓬莱教授から貰った本を、また読み直していることが増えた。
あたしは、結婚生活に慣れ始めると、今度は大学生活への対応に迫られたのだった。

# 第九章　女子大生　篠原優子の物語

## 佐和山大学へ

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん」

いつもの目覚まし時計の音に釣られ、あたしはゆっくりと意識を回復する。

あたしの名前は篠原優子（しのはらゆうこ）、今日から大学生になる。

あたしは3月に高校を卒業して、卒業式と同じ日に愛しの篠原浩介（しのはらこうすけ）くんと結婚した。

その日のうちに結婚式をして、翌日からの新婚旅行も終えて、今は夫婦と義両親の4人ぐらしをしている。最初は新しい家になれない日々だったけど、今はもう大分馴染んで、篠原家にも愛着が湧いてきた。

今日は春休みが終わって、4月最初の平日で、佐和山大学（さわやまだいがく）で入学式がある。

今日のあたしの1日はそのための準備から始まる。

入学式の服装のこともあったので、あたしはパジャマのまま一旦リビングに向かうことにした。

ガチャッ

「おはよう」

「あ、優子ちゃんおはよう」

リビングで、浩介くんのお母さん、つまりお義母さんがあたしに気付いて声をかけてくれた。

「おはようお義母さん、今日は入学式よ」

「ええ、レディーススーツで行きましょう。ついてきて」

そう言うと、お義母さんがあたしの部屋に入っていく。

箪笥を引き出し、レディーススーツを出してもらう。

うん、ここにあったのね。

この服自体は、女の子になって最初の日に買ってもらったものだけ

ど、今まで着たことはなかったので、収納場所を忘れていた。
「一人で着替えられるわよね？　そんなに特殊なものじゃないから」
「ええ、永原先生がいつも着てましたし」
　永原先生は、高校時代、小谷学園（おだにがくえん）にいたときの担任の先生。今でも交流が続いている、あたしの中でかけがえのない存在で、彼女にとってもあたしはかけがえのない存在でもある。
「じゃあ、私は外で待ってるわね。何か困ったことがあったらまた呼んでね」
「はーい」
　そう言うと、お義母さんが部屋から出る。
　あたしは、テキパキとレディースーツに着替える。
　パジャマと下着を脱いで誰もいない所でフルヌードを晒し、白い下着を手にとってパンツを穿き、ブラを付ける。
　そしてレディースーツを着る。スカートのファスナーも忘れずにっと。
　これは、永原先生が着ていたのとほぼ同じデザインになっている。胸がもう少し小さくて、紙がセミロングで、背が低ければ永原先生の妹みたいになるかも？　と思うくらいだった。
　あたしは何を着ても目立つくらい胸が大きくて、髪は黒髪のロングストレート、前頭部に白いリボンをいつもつけていて、顔は幼さの残る童顔で、どんなアイドルよりもかわいく、どんな女優よりも美人だった。
　うー、ちょっとスカートがきついわね。サイズはこれでいいんだけど、とにかくいつも穿いているスカートはフレア系が多かったから、こういうタイト系のスカートはあまり穿く機会もなくて、久しぶりに穿くとどうしても窮屈な印象を受けてしまうわ。
　スカートの動きやすさという利便性を捨てる心理的抵抗感は、予想以上に大きいものなのよね。
　それに、男の子でも、やはりめくりやすいスカートの方が何だかんだ言って好きなはずよね。
　高校の頃も今の旦那、浩介くんによくあたしのスカートをめくられ

てきたんだもん。
あたしは、着終わると朝ごはんを食べにもう一度リビングに戻る。
そこには、お義父さんと、スーツ姿の浩介くんも居た。
「おはよーあなた」
「おう、優子ちゃんおはよう」
あたしが浩介くんのことをたまに「あなた」と呼ぶことがあって、最初は義両親にとても驚かれてしまった。
実際の所、特に大きなきっかけがあるというわけでもない。ただ何となく、あの結婚式の夜に、ポロっと出てしまって、それ以来従来の「浩介くん」という呼び方とほぼ併用する感じになっている。
「さ、ご飯できているわよ」
「「いただきます」」
あたしたちは、朝食をありがたくいただく。
お義母さんの料理の腕はメキメキ上昇していて、伸びしろはあった。
あたし自身も家事慣れしていて、最初に春休みがあったのは良かったかもしれないわね。

「じゃあ、行ってくるわね」
「いってらっしゃーい」
お義父さんが仕事に出てしばらくし、あたしたちも家を出て、大学の入学式に向けて歩き始める。
「今日は入学式と、学生証が配られるらしいな。今日は主に式典で、本格的な大学のガイダンスは明日になるらしいぜ」
「うん、そうみたいね」
浩介くんと、入学式について話す。
実は大学生活については、既に1年以上も構想を練っていた。
ひとまず、3年まで上がれば、あたしたちは蓬莱教授の研究室への配属が内定している。
佐和山大学は偏差値こそ高くないけど、ノーベル賞学者の蓬莱伸吾（ほうらいしんご）教授を要する大学で、事実上彼の王国と言って良く、蓬莱教授の研究

室を出れば、一流大学卒業並みの待遇を受けることが出来る。
でも、まずはきちんと単位を取れないと意味がない。そのためにも、ちゃんと勉強しないといけないわね。
あたしたちは、駅に到着する。
まだ見慣れないこの駅、でも、これから徐々に日常になっていく。
「間もなく、電車が参ります――」
この放送は、いつも通りだった。
少し心配なのは、車内の混雑ぶりかな？
入学式は朝が早い、それ故に今の時間帯は混んでいるはず。
「うわあ、やっぱり混んでいるわね」
「まあ、すぐ着くし問題ないよ」
うん、近いっていいわよね。
サラリーマンたちの行列を尻目に、あたしたちは電車の扉付近に立ち止まる。
大学の最寄り駅までは反対側のドアの上に、駅間も短いのがその理由らしい。
車内には、3月まで所属していた、小谷学園の制服もいるわね。
「浩介くん、毎朝これで通ってたの？」
「ああ、でも優子ちゃんよりは乗る時間短かったし、ドアによっかかっていれば問題はなかったよ」
浩介くんが涼しい顔で話す。
でもあたしは、ちょっとだけトラウマがある。
「優子ちゃん、どうしたの？」
浩介くんが、心配そうにあたしの顔を覗き込んでくる。
浩介くんは、成績こそあたしより下だけど、思いやりがあって責任感も強くて、それでいて体は鍛えていてとっても近道で、あたしになにかあるとすぐに守ってくれるから、素敵な旦那さんだと思う。
「あーうん、またあの時のことを思い出しちゃって」
もちろん、それで大きなストレスになるということもないけど。
「ああ、痴漢事件か。心配するなよ。俺が痴漢から守ってやるからさ」
「浩介くん……」

もー、こうやってさらっとかっこいいセリフを言って、またあたし惚れ込んじゃうじゃないのよ。
夫婦とは言っても、このままじゃどんどん浩介くんに惚れ込んじゃいそうだわ。
もう、浩介くんなら、痴漢されてもいい気がするわ。ううん、あのトラウマを克服するためにも、あたし、浩介くんに痴漢されたいって思っちゃってるわね。
「それにさ」
「うん？」
「優子ちゃん、俺になら痴漢されてもいいって感じしてそうだもん」
爽やかな笑顔で、図星を突かれてしまう。
「うぐっ……そ、その……」
あたしは、返答に困ってしまう。素直に「はいそうです」とはとても言えないし。
「あはは、ごめんごめん。ともあれ今は、入学式に集中しようぜ」
「う、うん……」
さすがに、こんな混んだ電車で、いや、空いている電車でも、公共の場で痴漢プレイは気が引けるわ。
でも、浩介くんだと分かっていれば、きっとトラウマも解消してくれるはずだから、どうしても辛かったら、頼んでみようかしら？
あたしたちは、小谷学園の時に使っていた駅と同じ駅で降りる。
制服を着ていないと、意外と感覚は慣れるもので、反対方向に進みかける、何ていうことはなくなっていた。
最も、浩介くんの家が実家と逆方向なので、行きの改札口へは跨線橋を渡る必要がある。
改札口方面には、小谷学園の制服がたくさんいた。
あたしたちと同じ色の制服は、新入生の証でもあった。
去年夏に、ＡＯ入試で来て以来、半年以上ここには来ていなかった。
新入生と思われる、あたしたちと同じスーツ姿の男女がたくさんいた。
「それでね、浩介くん」

「うん」
「あたしの名前、ちゃんと篠原優子になっているかしら？」
あたしにとっては、どうしても不安になってしまう。
まあ、結婚式に蓬莱教授も来ていたし、根回しはしてあるはずだけど、正式なプロポーズは去年の後夜祭の時だったからＡＯ入試より後の話だし、もしかしたらあたしの旧姓「石山（いしやま）」のまま学生登録されているかもしれない。
「まあ、大丈夫だろう。仮に石山のままでも、手続きすれば変えられるだろ？　今は本名は篠原なんだしさ」
浩介くんの楽観視のおかげで、随分と気持ちが楽になったわ。

「さあ、剣道サークルはどうかな？」
「鉄道研究部だよー！」
まだ入学式だけど、気の早いサークルがいくつか新入生向けに勧誘を行っていた。
「あ、あそこにいるのって」
「お、木ノ本じゃん」
そんな中で、あたしは見覚えのある顔を見つけた。
「おはよう桂子ちゃん」
「あ、優子ちゃんに篠原……あー、浩介じゃん。おはよう」
桂子ちゃんが浩介くんを下の名前で呼ぶ。
浩介くんは、これから下の名前で呼ばれることが多くなると思う。
何分、「篠原」って苗字呼びだと、あたしも同時に反応しちゃうわけだし。
「おはよう、佐和山でも引き続きよろしく」
「うん」
この女の子は「木ノ本桂子（きのもとけいこ）」ちゃん。小谷学園では、あたしが女の子になるまでは、「学園一の美少女」と言われていたくらいかわいくて美人の子で、あたしの小学校からの幼馴染でもある。
そうそう、実はあたし、今でこそ赤ちゃん産めるくらいに完璧な女の子だけど、高校２年生までは石山優一（いしやまゆういち）という名前の男で、それも今

とは正反対に乱暴ですぐに怒る性格だった。
あたしは2年前の２０１７年５月に完全性転換症候群（かんぜんせいてんかんしょうこうぐん）、通称ＴＳ病と言われる病気になった。
それ以来、女として生きていき、今はラブラブな旦那さんまでいるから、世の中分からないわ。
「木ノ本、春休みはどうだった？」
「うん、特に何もなかったわよ。にしても2人とも、雰囲気変わったわね」
桂子ちゃんが、当たり前のことを言う。
「そりゃあまあ、結婚して一緒の生活し始めたもの。変わらないほうがおかしいわよ」
「いやそうじゃなくてこう……優子ちゃんと浩介からうーん、龍香ちゃんと同じ気配がするというか……」
桂子ちゃんが、うまく言葉に言い出しにくそうに言う。
「もう、桂子ちゃんったら！」
龍香ちゃんというのは高校時代のクラスメイトの河瀬龍香（かわせりゅうか）ちゃんのことで、あたしたちとも仲が良くて、高校時代からの彼氏持ちで、やはり美人の子なんだけど、彼氏が変態だった影響で、性欲が強くなっちゃった女の子だ。
龍香ちゃんもまた、佐和山大学に入ることになっている。
「あははごめんごめん。もう夫婦で一つ屋根の下、新婚さんだもんね。むしろしないほうが深刻よね」
「そそ、龍香ちゃんとは違うのよ龍香ちゃんとは」
まあ龍香ちゃんのカップルも、あのまま結婚しそうだけどね。
「あはは……そう言えば、龍香ちゃんは見かけないわね」
「うーん、まだ来てないのかもよ」
「まあ、いいわね」
ともあれ、あたしたちは、「入学式はこちら」と言う案内とともに、一番大きな講堂を目指して歩き続ける。
「おはようございます、席はこちらをお受け取りください」
大学の事務員さんと思しき人が紙を配っていた。

どうやら、新入生向けの配布用紙らしい。
ちなみに、事務員さんもあたしの胸をガン見していた。浩介くんも嫉妬と自慢が入り交じった表情を一瞬だけ見せてくれた。
「どれどれ、お、優子ちゃんの隣だ」
「……そうみたいね」
座席は単純にあいうえお順になっていて、新入生の中で篠原姓になっていたのはあたしと浩介くんだけだったので、あたしと浩介くんの座席は隣同士になっていた。
そう、あたしはもう結婚して、篠原優子になったのよね。分かりきったことでも、こういうことで自覚が深まっていく。
そして、こうやって結婚の自覚を1つ1つ積み重ねていって、あたしは頑張っていけるのよね。
浩介くんと、心も体も、そして家族も1つになって、あたしたちはより強い絆で結ばれていくのよね。
「んじゃ、私は向こうだから、またね」
「おう」
「うん」
桂子ちゃんが手を降ってあたしたちと分かれる。
あたしたちも、指定された席に隣り合って座る。
講堂の舞台の幕は下ろされているけど、中で慌ただしく準備しているのが分かる。
すると、1人の男性があたしたちに近付いてきた。見間違うはずもない、蓬莱教授だ。
「やあ優子さんに浩介さん」
「蓬莱教授！　おはようございます」
「おはようございます」
浩介くんが立ち上がって真っ先に挨拶し、あたしが続く。
「ああ、座っていいよ。堅苦しい礼儀は気にしない性分なんだ。本題に入ると、入学式終わってから、ちょっと俺のもとに来てくれないかな？　今後のことで、また少し、俺の方で話があるんだ」
蓬莱教授は、さほど深刻そうな顔はしていない。

でも、一応あたしたちも悪い想定は頭の片隅に入れておく。
「分かりました」
「はい」
今度はあたしから返事し、浩介くんが続く。
「何、今は入学式に集中してくれればいいさ。今はただ、俺が呼んでいることを覚えてくれていればそれでいい。じゃあ、俺は戻るよ」
「「はい」」
蓬莱教授は、それだけを言って踵を返して去っていく。
「まあ、予想はしていたかな、俺は」
「うん、あたしも」
これからは大学で毎日のように会えるとは言え、蓬莱教授も多忙の身。
あたしと浩介くんは、今後の蓬莱教授の実験を占う上で重要なキーになっている。
そう、ＴＳ病患者は老化しない不老の病気で、永原先生みたいに５００年以上生きることも可能で、不慮の事故に巻き込まれなければ、あたしたちはずっと生きつづけることが出来る。
でもそれは、浩介くんとの長い死別を意味してもいる。蓬莱教授は、このＴＳ病患者の特徴である「老化の克服」を、一般にも浸透させる研究をしていて、従来永原先生の遺伝子を僅かに提供していただけだったのを、あたしの遺伝子を加えることで、実験の効率化が期待されている。
あたしの偏差値ならもっと上を目指せたけど、ここのＡＯ入試を受けたのは、蓬莱教授の研究に対する協力という一面が強い。
さて、入学式に向け、学生たちが集まってくる。
龍香ちゃんの方はあたしたちに気付かなかったけど、龍香ちゃんを含めたあたしたちの元クラスメイトなどを含め、多くの小谷学園出身の新入生が、緊張の面持ちで入ってくるのが見えた。
あたしたちの存在に気付いたクラスメイトたちは、みんなあたしたちに挨拶してくれていた。
ただ、中には「ラブラブだね」というだけならまだしも、「新婚生活

楽しんだ？　ちゃんとつけてる？」とか「ねえ、２人は週何回ヤってるの？」といったセクハラ質問をしてくる人もいて（何故か女子に多かった）、そう言う質問には浩介くんが立ちふさがるようにシャットダウンしてくれた。

ちなみに、そうすると「もーかっこいいわね、妻を守る旦那さん」何てからかわれて、あたしたちは結局恥ずかしい思いをしてしまった。

まあ、それも「恥ずかし嬉し」という言葉が適当だと思うけど。

徐々に、舞台の幕の中での慌ただしそうな音が静かになっていく。

どうやら最終準備段階に進んだようね。

時計を見ても、始まる時間の６分前になっていた。

「えー、新入生の皆様、もう間もなく、後５分ほどで、えー２０１９年度佐和山大学入学式を開始したいと思います。お手洗い行かれる方は、今のうちに済ませておいてください」

突如放送が流れる、時計が、５分前になり、数人の新入生がお手洗いのマークの有る方向に向けて歩きだしていた。

いよいよあたしたちの、最初の大学生活が始まろうとしていた。

# 蓬莱教授の薬

「ただいまより、２０１９年度、佐和山大学、入学式を開始いたします」
女性のアナウンスとともに、わいわいがやがやしていた講堂が一気に静まり返る。
本格的に、入学式が始まった。
「はじめに、学長ご挨拶です。ご起立ください」
指示に従い立ち上がり、前方を注視すると、もう一段高い所にマイクがあり、学長と思しき老いた男性が立った。
「えー、新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。当佐和山大学は、ノーベル賞学者蓬莱教授をはじめ、多くの学識ある教授陣が、皆様のキャリアアップに貢献してくれることと存じます……この大学についての詳しいことは、また後ほどガイダンスなどで説明いたしますので、私の話はひとまずここまでと致します。どうも、ご清聴ありがとうございました」
パチパチパチパチ！
ここは小谷学園ともほど近いからか、学長さんの話が短い。
もしかしたら、単純にこの人の体力的な問題かもしれないけど。
「えー、続きまして、本校所属の蓬莱伸吾教授から、皆様にご挨拶があります」
その放送が聞こえると、学長先生と蓬莱教授が入れ替わる。
学長先生の態度は妙によそよそしく、この学校の事実上の学長が蓬莱教授であることを如実に示していた。
以前、学長のことを「軽い神輿」と言っていたけど、それそのものだわ。
「ごほんっ……私（わたくし）が蓬莱伸吾だ。皆さんも、おそらく……今現在不老研究が極めて注目されているということについては……みんな、聞いて知っているとは思うがね……あー、どこから話したものか……あー、話は長くなるから、着席してもらいたい」
蓬莱教授がそう言うと、新入生たちが一斉に着席する。
話す言葉を、かなり慎重に選んでいるのが見て取れる。普段使って

る一人称も変わってるし。
「それについてだが、今後は日本性転換症候群協会と、さらに密に連携を取り合うことで合意した。今年度は、協会からＴＳ病の方がご入学されることになった。これで俺の研究もはかどるだろう」
　もちろん、この患者というのはあたしのこと。
「だが、俺の研究を快く思わない連中もいる。例えば宗教介の連中だ。事実、ここ佐和山大学も、今のところは表だったことはないが……そうした宗教介の抗議に晒されている。嫌がらせの手紙は今でも今でも届いているが、激励のメッセージも多い。いずれにしても、物議をかもしているのは確かだ」
　やっぱり、嫌がらせの類いはあったのね。
「そこで新入生の皆さんに頼みたい、何があってもマスコミの取材を受けてはいけない。俺の研究に対して、例え賛成意見であっても、悪意をもって報じられる危険性が高いからだ」
　あたしは、去年の小谷学園で、永原先生が取材拒否のことについて話していたのを思い出す。それと瓜二つの展開だった。
　やはり、こうなってしまうのね。
「今はよく分からないかもしれないが、すぐにこのことの必然性について、理解する時が来るだろう。ともあれ、連中が好むと好まざるにかかわらず、俺は研究を続けていく。近い将来またいい情報を流す予定だ。楽しみにしておいてくれ……では、俺の話はここまでだ」
　パチパチパチパチ！
　皆一様に混乱していたけど、それでも蓬莱教授に拍手を送る。あたしたちは事情を知っているけど、他の学生はそう言う人ばかりでもないものね。
　果たして、今後はどうなるのか？　その辺りは見過ごせないわね。
「続きまして――」
　入学式が進んでいく、新入生があいうえお順に紹介されていき、あたしたちも「篠原浩介」「篠原優子」と紹介されていた。
　小谷学園出身の誰かが、すぐに言いふらしちゃうと思うけど、一体何人が、あたしたちを夫婦だと思っただろうか？

ともあれ、短い時間であたしの結婚に伴う苗字変更に対応してくれてよかったわ。
この入学式では、まだ学部ごとのふるい分けがなされていない。
もちろん、所属は決まっていて、あたしたちは「応用医療学部」の「再生医療学科」、要するに蓬莱教授が専門とする学部学科に所属している。

「えー、以上を持ちまして、入学式を終了いたします。これからは各学部ごとに学生証が配られます、学部ごとに、配布のプリントに書いてある通りに集合してください」
「浩介くん」
「えっと……応用医療学部は、ここだな」
あたしたちは、女性の指示を確認する。
何人もの生徒が交錯する中、あたしたちも指定の場所へと行く。
何人かの学生仲間がそこにいた。
そして、最前列には蓬莱教授がいた。
「よし、みんな集まってるな？　……こほん、皆さん、応用医療学部へようこそ。これから学生証を配ろうか、ついて来てくれ」
そう言うと、蓬莱教授は歩き始めた。
あたしたちは、言われるがままに蓬莱教授についていく。
「こっちだ」
蓬莱教授は、キャンパスの中央へ向かって行く。
「浩介くん」
「ああ、『蓬莱の研究棟』の方向だな」
蓬莱教授専用の研究棟、あたしたちはそこに向かっている。
そしてそこには……
「ここが俺の研究棟、名付けて『蓬莱の研究棟』だ。ちなみにこの銅像は、著名なアメリカ人彫刻家が作ってくれたものだ。自分の銅像を掲げるというのもどうかと思うが、結構似ているので、俺は気に入っている」
あたしたち以外の新入生たちは一様に困惑している。

いくら偉大な業績を持つノーベル賞学者と言えど、こんな大きな研究棟を持つなんて前代未聞だし、それどころか、わざわざアメリカ人が銅像を献上するようなことさえ起きているのだから。
それだけ、蓬莱教授の存在が偉大であるということでもある。
「さ、２階へ上がろうか」
蓬莱教授が研究棟の中に入る。
あたしたちもぎこちなくそれに続く。

「なあおい、これは何だ？」
「蓬莱教授の研究成果が年表になっているんだな」
「人間の寿命が１２０歳かあ……」
「不老に向けてなのよね」

あたしたちは知っている。蓬莱教授は今は２００歳の研究を成功させていることに。でもそれは、まだ公開されていない。
そしてさっきの入学式で蓬莱教授が話していたのも、２００歳の研究についてということも知っている。
「そっちを見るのもいいが、今はこっちだ」
蓬莱教授が、プロパガンダエリアに止まっている学生に注意を促し、階段で２階へと上がる。
２階には講義室が集まっていて、蓬莱教授がその中の部屋の１室に入り、あたしたちも続く。
「席は自由だ、好きな場所に座ってくれ」
そう話すと、全員が思い思いの場所に座る。
部屋には蓬莱教授の他に、瀬田さんもいた。

「えー、新入生の皆さん、改めましてご入学おめでとうございます。私はこちら『蓬莱の研究棟』で、蓬莱教授の研究の手伝いを任されています助教の瀬田博（せたひろし）と申します」
知っている。以前何度か蓬莱教授の付き添いとして、彼を見たことがある。

蓬莱教授に心酔しているという噂だ。
「皆さんにお配りします学生証何ですが……あー、大学生にもなって今更かもしれませんがくれぐれも無くさないようにしてください。万一無くされますと再発行の手続きをすることになります」
瀬田助教が定番のセリフという感じで言う。
「じゃあ、前に座ってる人から順番に取りに来てくれ、何か間違いがあったら俺か瀬田君まで申し出てほしい」
そう言うと、新入生たちが学生証を取りに行く。
学生証もあいうえお順なのであたしたちはすぐに見つけることが出来た。
そして、あたしの学生証は紛れもなく「篠原優子」になっていた。
そう、結婚したものね。
「ねえ見てあなた」
「ん？　どうした優子ちゃん」
「あたしの学生証、ちゃんと浩介くんと同じ苗字になっててよかったわ」
「はは、当たり前だろ？　何を今さら」
浩介くんは、あたしの不安を笑い飛ばすように言う。

「なあ、あいつら異様に仲いいよな」
「付き合ってんじゃねーの」
「にしたってさ、何か同じ苗字とか言ってたし」
「まさか……おいおい、二人とも薬指に指輪はめてんぞ」
「くっそー！　あの年でもう結婚かよー！」

どこからか、あたしたちを羨む声が聞こえてきた。
まあ、今の時代この年齢で結婚って少ないものね。
「学生証を確認し終わったら今日は解散です」
瀬田助教の言葉で、学生たちが次々と部屋を出ていく。
あたしたちは最後部の席で、全員が出ていくのを待つ。
「よし、全員出ていったな」

「蓬莱さん、話と言うのは一体？」
「あー、まあ着いてきてくれ。瀬田君はデータベース整理を頼む」
「了解いたしました」
あたしたちは再び「蓬莱の研究棟」の階段を登る。
３階で瀬田助教と分かれ、蓬莱教授についていく。
ちらりと見る限り、３階はコンピューターや実験室がずらりと並んでいた。
そして、４階へと進む。
そして、その中の一室に入る。
「さ、座ってくれ」
中は狭く殺風景で、椅子と机の他には大きな冷蔵庫があるだけだった。
「蓬莱教授、ここは何なんですか？」
「ここは、俺の研究成果が入っている」
そう言うと、蓬莱教授は冷蔵庫から1本のペットボトルを取り出した。
中はやや白い色がかかっているが無色透明と言っていい液体だ。スポーツドリンクに近い感じと言っていいわね。
「えっと、蓬莱教授、これは一体？」
「人間がこれを飲めば、平均寿命を８０歳から２００歳にすることができる、いわば『老化抑制剤』だ。特に名前はないが、ここの皆は俺自身の名前を取って『蓬莱の薬』と呼んでいる」
何だか、どこかで聞いたことがあるような？　まあいいわ。
「で、浩介さんには、是非これを今日から5日間、毎日昼に飲んでほしい、何心配は要らん、治験は既に済んでいる」
浩介くんの寿命を伸ばす薬、もちろん、最終的には不老になる必要があるけど、「５０年かかりました」というのもよくない。そのためにも、この薬の服用はしておいて損はないわね。
「浩介くん」
「分かってる」
だから、浩介くんにはこの薬を飲んで欲しい。

浩介くんがペットボトルの蓋を開け、ゆっくりと飲み始めた。
「うーん、普通の水だなあ」
「ああ、特に味はしないだろうさ」
そう言うと、蓬莱教授はペットボトルを更に４本取り出した。
「今は平均寿命３００歳の薬も完成間近だ。その治験が終わったらまた、浩介さんには飲んでもらいたい」
「分かりました、でもどういう原理何ですか？」
確かに、大まかには想像がつくけど、気になるわね。
「『ＴＳ病』の人はあらゆる意味で強靭な免疫力を持っていることは以前にも話した通りだ、その不老遺伝子……永原先生の遺伝子と、我々の遺伝子を比較して作られたんだ」
ふむふむ。
「この薬は……そんなＴＳ病の不老遺伝子の一部の解析から得られたもので、まあこれを飲めば、いわば『なんちゃって不老遺伝子』になれる感じだ。不老遺伝子はどうもとある条件下に置くとガン細胞を何億倍にも強力にしたような感じらしくてな。５日間飲むだけでもう頭の毛先から足の爪先まで、もちろん脳や筋肉、内蔵に神経まで覆い尽くしちゃうんだ」
「ヒエー意外と強力ですね」
「とはいえ、ＴＳ病の人の細胞をそのまま持っていくのではダメみたいなんだ。実際、今の俺では不老遺伝子は難しい。せいぜい遅らせることしか出来ていない。どうやって一般化するか、この研究にとって、そのあたりが大きな問題なんだ」
蓬莱教授は詳しい説明をしてくれる。正直、あたしたちに原理は理解できない。
「ちなみに、副作用として、この薬を飲むとガンにならなくなる」
「え!?」
蓬莱教授がしれっととんでもない発言をする。
ガンにならなくなるって、ノーベル賞どころじゃないわよね!?
確かに以前、ＴＳ病患者の特徴を聞いたことあったけど。
「そう驚くな。老化を完治させようという俺の研究目標に比べれば、

ガンの完全撲滅など些末なことだ」
蓬莱教授が自慢気に言う。
やっぱり、とんでもない男だわ、味方でよかったわね、本当に。
「重要なのは、うまく再現しているはずなのに、ＴＳ病の患者たちのような『完全な不老』はまだ実現できていないということだ。永原先生の細胞だけでは手詰まり感があるんだ」
蓬莱教授が冷静に述べる。
「そこで、あたしの出番ですか？」
「ああ、今まではたまに永原先生の遺伝子を提供してもらうしかなかった。だが優子さんがこの大学に来てくれたのはとても心強い。これとばかりは、『俺は何てついているんだ』と思ったものよ」
蓬莱教授が少しだけ、あまり考えなさそうな「幸運」を口にする。
「ま、ともかく――」
「これですね」
蓬莱教授が言い終わる前に、あたしは置いてあった綿棒を取って内側の頬を擦り、小さな容器の中に入れる。
「理解が早くて助かるよ……よし」
蓬莱教授は蓋を閉めて付箋を貼り、「優子さん」とメモすると、容器を冷蔵庫に戻す。
「さて、この部屋でするべきことはなくなった。悪いがまたついて来てくれ」
「「はい」」
蓬莱教授が椅子から立ち上がり、あたしたちも続く。
あたしたちは一切喋らずに階段を降りて１階へ、そしてＡＯ入試の時以来の蓬莱教授の部屋に入った。
そして、そこには男女が一人ずついた。
「永原先生！」
「それに高島さんも！　どうして？」
あたしと浩介くんは少し驚く。
「篠原君、篠原さん半月ぶり。新婚生活うまくいってるかしら？」
「「はい」」

あたしたちはハモってしまう。
「あはは、問題なさそうね。で、まずは篠原さん何だけど」
「はい」
おそらく、協会についてだと思う。
「前々から頼んでいた広報部長何だけど、今日付けで正式就任になったわ」
「ええ」
そのことは、既に解りきっている。
「でだ、それに関連してなんだが」
蓬莱教授が口を開く。
「今夜、２００歳の薬が完成したことについて、記者会見を行うつもりだ。更に３００歳の薬も進行中なことも、だ」
「そこで、篠原さんの結婚についての記事も、高島さんに書いてもらうわ、いかにも蓬莱教授の会見で、慌てて取材したように見せかけたいから、手際はあえて悪くするわ」
永原先生が作戦を述べる。
「記事では、『優子さんは旦那さんの不老を待ち望むＴＳ病の女の子』って感じにします」
高島さんが更に詳細に作戦を話してくれる。
蓬莱教授の記者会見があれば、また不老の是非とＴＳ病、協会について何か言われるはずだ。
そこで、あたしの出番。
かわいくて美人のＴＳ病のあたしが、「女の子として生きていきたい」ということ、「愛する夫とずっといたい」という思いの２つを世間にぶつけることで、蓬莱教授への援護射撃となって、読者の支持を集める算段だ。
「問題は、インターネットを使わないジジババどもだが、まあ放っておけばよかろう、蓬莱の薬は若返りの薬ではないからな」
蓬莱教授は投げやり気味に言う。
「ふむ、それで、優子さんの結婚とインタビューについてだが……蓬莱教授が記者会見を開いて大騒ぎになっているとして、『色々騒がれて

いますけど』のような枕詞を入れようと思っている」
あくまでも、偽装ということね。
「協会の方でも、降りかかった火の粉は落とすつもりよ」
「で、俺の宣伝部何だが……もしよければ浩介さんにも加わってもらいたい」
「え!? 俺がですか?」
蓬莱教授からの突然の申し出に、浩介くんが困惑する。
そもそも、どうして浩介くんが宣伝部なのか?
「ああ、広報部長の優子さんの旦那さんだ。協会の関係者ではあるがＴＳ病の当事者ではない、しかしその一方で、ＴＳ病患者の夫として、少しだけ外側の視点からＴＳ病を見ることが出来る。だからこそ、君も重要な戦力なんだよ。君の感性は、他のＴＳ病患者では真似ができない」
蓬莱教授が、もっともらしい説明を言う。
あたしにはまだ、よく分からない。でも、蓬莱教授にとっては、あたしだけではなく、浩介くんも自らの戦力に喉から手が出るほど欲しかったのだけは確か。
「……なるほど。それは盲点でした。是非、優子ちゃんのためにも協力していきたいと思います」
どうやら浩介くんには、思い当たる節があったみたいね。
「うむ、君ならそう言ってくれるものだと思ったよ」
ともあれ、宣伝部の戦力が上がると蓬莱教授は踏んでいたみたいね。
「よし、大まかな作戦はこんな所だな」
「後は微調整ね」
あたしたちは、永原先生から協会への連絡を兼ね、戦略の微調整を続けた。
午後も結構遅くなり、途中で昼食も挟みつつ、あたしたちは夕方頃に家に帰ることになった。
蓬莱の薬も、忘れず持ち帰ることになった。
「ただいまー」

「あらおかえりなさい。遅かったわね」
お義母さんが出迎えてくれる。
「ああ、蓬莱教授に呼ばれてな」
「そう、そうよね。浩介も、難題に挑むものね」
お義母さんも、あたしたちが今、人類史を動かしているということを知っている。
「うむ」
ともあれ、今日はゆっくり休もう。
あたしたちの大学生活は、これからが本番になるわね。

# ガイダンス

今日は大学生活の２日目、昨日が入学式なら今日は講義に関するガイダンスが主になる。

大学生活の他にも、あたしには蓬莱教授のこともある。

蓬莱教授は、今日に記者会見を予定している。

「１２０歳の記者会見」が一昨年のクリスマスの時期で、それから２年たった現在に、「２００歳の記者会見」をする。

実際の所、「２００歳の記者会見」はあたしたち協会に非難が集中した時に世論の目をそらさせるための切り札として残してあった。つまり、出来ることなら温存しておきたいというものでもある。

しかし、現在水面下で蓬莱教授に反抗するための勢力が作られつつあった。

彼らは必然的に、不老遺伝子を持ち、蓬莱教授とも親密な関係になっている協会も標的にしようとしていて、手をこまねいているのも限界だ。

そこで、「３００歳の薬」が完成間近になっていることや、年度の初めというこのタイミングで、記者会見を開くことになった。

協会に関しても、広報部長のあたしがしっかりしないといけないわね。

「浩介くん、あたしたち大忙しよね」

「ああ、それにしても、優子ちゃん広報部長だろ？」

行きの電車の中で浩介くんがあたしに話しかけてくる。

ちなみに、あたしの服はまだ寒さが残るので落ち着いた緑のワンピースを選んだ。

「うん」

「部長って言うくらいだし、部員とか部下はいないのか？」

「うん、一応幸子さんと歩美さんが広報部に所属することになったわよ」

幸子さんも歩美さんも、あたしが広報部長になるという情報を手にいれると、すぐに広報部への所属を申し出てきた。

２人は塩津幸子（しおつさちこ）さんと山科歩美（やましなあゆみ）さんと言って、２人ともあたしが協会の会員になった後に発病した患者さんで、あたしがカウンセラーとして面倒を見た２人だ。
自殺一歩手前だった幸子さんに、更衣室をめぐって学校と大騒動を繰り広げた歩美さん、どちらも広報部としては重要な戦力になるわね。
幸子さんと歩美さんもあたし繋がりで結婚式後も仲が良いみたいだし、それに歩美さんはあたしに相談してくることも多い。やり取りが増えるのはいいことだろう。
「そうか、まあいいんじゃねーの、よく分からないけどさ」
浩介くんも、評価には悩んでいるみたいね。

あたしたちはキャンパスの地図を見つつ、決められた集合場所に到着する。
ちなみに、大学のガイダンスなので、キャンパスの地図はあるけど、具体的にキャンパス内を散策するのは各自でするようにとのこと。
やはり、高校までとは訳が違うわね。
「えー時間になりましたのでガイダンスをはじめさせてもらいます」
ガイダンスを担当するのは結婚式にもいた河毛教授だった。
「えっと、大学では授業ではなく講義と言います、また皆さんも生徒ではなく学生になります」
それは知っている。
「大学の時間割は高校までと違って、各自で作ります。学生の数だけ時間割がある……というほどでもわけではないですが、ともあれバラバラなので履修登録が必要になります。どのような科目を受けなければならないか、必修科目の他にも選択必修科目、選択科目もあります」
河毛教授が前のスクリーンに図を写しながら解説してくれる。
あたしたち1年次では、専門基礎と基礎教養科目が主になる。必修の基礎実験は、特に重要らしい。
２年次以降は、１科目あたりの負担も高まることになる。

ちなみに、小谷学園出身の人は、同じ最寄り駅という利便性でここを選ぶ人も多く、成績がいい傾向にある。
「これらはですね、皆さんの机の上にありますシラバスと講義概要、そして指定教科書を参照してください。なおこれは大変重要なものですから絶対に無くさないでください」
河毛教授の指示のもと、あたしたちは講義概要とシラバスを参照する。
明日からは講義が始まるから、特に注意しないといけないわね。
といっても、最初はガイダンスだろうけど。
「ではですね、大学生活における注意点ですが――」
河毛教授の説明が続く。
履修登録の他、試験やレポートの不正行為に際する注意換気もあった。
ともあれ、蓬莱教授の手前、これらには注意しないといけないわね。
「以上を持ちまして、ガイダンスを終了いたします。午後はですねノートパソコンの配布に当ててもらいます」
河毛教授がそう言うと一旦解散になる。
あたしたちは、しばらくシラバスと講義概要、時間割を見て吟味する。
2年次に上がるためには、必修科目の単位が必要になる。
再履修となると留年が確定する科目もあるから注意しないといけないわね。
「まず必修科目を潰すとこんな感じか」
浩介くんがシャーペンでまるをつけていく。
「うーん、そうするとこうかな?」
あたしも、同じように講義を吟味していく。
「一般教養の『社会』分野には『ジェンダー論』の他には『法学』とか『現代政治学』とか『経済学』というのもあるなあ……」
浩介くんが社会学について吟味している。
「うーん、何か怪しそうだわ」

インターネットでは、この手の社会学、特に一般教養では、本物の共産主義者とかがいるとか言うし。今の時代にそんなの都市伝説と思っていたけど、どうもそうではないらしい。
「この『法学』が良さそうじゃない？」
よく見ると、弁護士さんが講義を担当していて、「法治国家」とか「罪刑法定主義」などを学ぶらしい。
「とりあえず、食べてから考えようか」
「うん」
周囲は昼食に出かける人も多いので、あたしたちは地図を便りに学食へと進む。
学食のメニューは、小谷学園のものよりやや豊富なくらいで、規模はやはり小谷学園より多少広く取られている。
あたしは、まずノーマルにカレーを、浩介くんも普通サイズの醤油ラーメンを頼んだ。
食券に並び、購入して、机やカウンターなどで食べるのは小谷学園と同じ。
あたしたちは早速、２人がけの椅子に腰掛ける。
「いただきます」
あたしはまず一口カレーを食べてみる。
……うん、びっくりするくらい小谷学園と味がそっくりだわ。
「すげえな、このラーメン、味も量も小谷学園のまんまだぜ」
浩介くんが驚いた風に言う。実際、ここまで酷似しているのはあたしも予想外だった。
「あ、浩介くんも？　実はこっちもなのよ」
「場所が近いからな。もしかしたら働いてる人が共通とかなんじゃない？」
浩介くんが推測する。
「うーん、どうなんだろうね」
ともあれ、あたしたちは佐和山大学での最初の学食を食べ終わった。
ちなみに、キャンパス内にはコンビニもあったりする。

これからは学食だけでなく、コンビニも活用していきたいわね。
「さて、履修に関してだけど」
「うん、とりあえず、午後の集合場所で考えた方がいいわ」
「ああ、それなら遅刻しねえもんな」
あたしの提案を浩介くんが受け入れて、午後の集合教室に移動する。
時間管理を間違えないための工夫だ。

「なあ、あんなかわいい子、うちにいたっけ？　ていうか、あの女の子、大分前に見たことあるような？」
「新入生じゃねーの？　で、横にいるのが彼氏かよ！」
「何だ、２人とも知らねえの？　あの２人は篠原夫妻だよ」
「え!?　あの２人結婚してんの!?」
「マジかよ！　くー羨ましすぎるぜ！」
「あ、よく見たら２人とも指輪はめてるし」

学食の大学生たちがあたしたちを噂している。
どうやら、ここでも、有名人になりそうね。高島さんの
あたしたちは、午後の集合場所に入る。
教室の中には学生は誰もいない。どうやらあたしたちが一番乗りみたいね。
「お、２人ともこんにちは」
中には、蓬莱教授がいた。
「あ、蓬莱さん、こんにちは」
「うむ、ところで、薬は飲んだかね？」
「あ！　すみません、すぐ飲みます」
蓬莱教授の指摘に対して、浩介くんが慌てて鞄からペットボトルを取り出して蓬莱の薬を飲む。
「うむ、１日くらいなら飲み忘れても問題はないが、余裕を持って５日間、毎日頼むよ」
「はい」

蓬莱教授が指摘してくれないと、忘れていたわね。
明日以降は、あたしも特に注意しないといけないわね。
「さて、履修に悩んでいるかね？」
「はい」
あたしが蓬莱教授の質問に答える。正直に言えばＹＥＳだ。一般教養はどうもモチベーションが上がらない。
「うむ、あんまり大声では言えない上に……あー、君たち篠原夫妻にだけ当てはまる話なんだが、『ジェンダー論』に関しては、履修を避けた方がいいぞ」
「え？　どうしてです？」
確かに、あたしたちはその講義は履修しないつもりだったけど、それにしても一体どうして？
「俺が見るに、あの先生はＴＳ病の患者を嫌っているという噂がある。今の優子さんは、おそらく既にあらゆる側面から完全な女性だとは思うが、それでも大学の講師ともなれば話は別だ。おそらくＴＳ病の君を純粋な女性として扱うとは限らん。下手に勉強だけできるバカはこういう手前が多いんだ」
「そうですか」
確かに、最年長の永原先生でさえ、男が出ることがあるものね。
それにしても、天才のステレオタイプみたいな蓬莱教授がこれを言うと、説得力が半端ないわね。
「この大学は小谷学園の出身者が多い。おそらく、君が有名人になるには時間はかからんよ」
「はい、分かります」
アイドルや女優たちをも寄せ付けないくらいの絶世の美少女でしかも超がつく巨乳で１８歳ながら既婚者とあれば、目立つなというのが無理難題よね。
「しかも当該講師は３７歳で独身、高圧的な態度を取り続けているせいで婚活も失敗続きだが、『私の魅力に気付けない男が悪い』といつも愚痴をたれている。１８歳で既に旦那持ちの優子さんに嫉妬する可能性は高いだろう」

うわー、ビンゴ過ぎて笑えないわ。
「え!? でも大学の先生がそんな私情を持ち込むなんてあり得んだろ?」
浩介くんが不思議そうに言う。
「ふふ、浩介くん、女の感情は恐ろしいのよ」

あたしは浩介くんに女の怖さについて語る。
小谷学園の女子はあんまりそういうのがなかったけど、あたしにもそういう「女の感情の黒い部分」を理解できるようになった。
「そ、そういうものなのか……」
「俺も男だからよく分からんが、こじらせるというのはそういうことらしい」
「ふふ、あたしみたいに素敵な旦那さんをゲットできなかったり、男に恵まれなかったりすると、性格が歪む人がいるのよ」
多分、この人もその類いだとは思う。そして根拠はないけど胸は小さいと思う。
何だかんだで美人、だったり巨乳だったり女の子らしいと性格もよくなるのよね。
多分、女性ホルモンのお陰だと思う。
「なるほどねえ……」
「ま、優子さんの主張の是非はともかく、だ。俺個人としては『法学』がおすすめだぜ。意外な視点から語ってくれるんだ」
「分かりました、参考にしてみます」
あたしがそう言い終わると、扉を開く音と共に別の学生が入ってきた。
「さ、他の人も入って来たからこの辺にしようか」
「はい」
あたしたちは、指定された席に座る。
机の上には、ノートPCが置いてあった。
その後も、直前になるにつれて、入ってくる学生さんの数は増えていった。

「よし、時間になったから、説明会を始めよう。佐和山大学では、学習教材としてノートＰＣを配っている。まずはきちんとプリントにある通りか調べて欲しい」
予定の時間になり、蓬莱教授がそう言うと、あたしたちはプリントにあるように、本体と充電のためのアダプター、マウス、保証書と取り扱い説明書、そしてＬＡＮケーブルがあるかどうかを調べる。
……うん、あたしも浩介くんも問題なしね。
「では、次に取り扱い説明書と保証書についてだな」
蓬莱教授によれば、支給のノートＰＣのトラブルには学習サポートセンターで一括管理されているらしい。
保証書は大切に保管しておいて欲しいが、サポートセンターでも一応照会ができるらしい。
「それから注意点としては……あー、これを大学生にもなって言うのはどうかと思うが……それでも言わなきゃならんことになってるから言っておく」
蓬莱教授は嫌々そうな口調で注意点を話す。
その注意点というのは「乱暴に扱わない」「ウイルスセキュリティなどはきちんと更新する」「水をこぼさない」「怪しいファイルをダウンロードしない、開かない」といった極めて単純な内容だった。
確かに、大学生のあたしたち、それも２０００年生まれになったあたしたちにとっては、「釈迦に説法」もいい所だった。
「まあ、大丈夫だとは思うけど。とりあえず注意してくれ」
確かに蓬莱教授にしてみればわずらわしいのはもっともよね。
そして、あたしたちはマニュアルの通り一通りの動作確認をして終了する。あたしも浩介くんも、特に問題はなかった。
ちなみに、コンピューター系列の学部は今のあたしたちに加えて、Ｌｉｎｕｘのインストールが必要らしい。
「以上で説明は終了する。ちなみにこちらのノートＰＣ代は学費に含まれているから心配は無用だ、では今日は解散、明日からの講義、楽

しみにしておいてくれ」
蓬莱教授がそう言うと、真っ先に教室から出ていく。
この後は、記者会見が予定されている。
邪魔をするのはやめておこう。
ともあれ、あたしたちも早くサークル勧誘に行かなきゃ。桂子ちゃん、もしかしたら首を長くして待ってるかもしれないし。
「あ、優子さんに浩介さんですね」
サークルの勧誘に向かおうとすると、ばったり龍香ちゃんと落ち合った。
「河瀬じゃん、結婚してからというもの、俺も名前で呼ばれること増えたなー」
「だってほら、結婚したんでしょ2人とも！」
龍香ちゃんが満面の笑みで祝福するように言う。まさに長続きしている彼氏を持っている女性の余裕よね。
「あ、ああ……」
確かに、あたしたちが一緒だと、苗字呼びしにくいものね。
「龍香ちゃんもこれからサークル？」
「いえいえ、私はサークルには所属する気無いですよ！」
そう言えば、小谷学園でも部活に入ってなかったっけ？
「あー河瀬も彼氏とデートか」
「はい、サークル何かより彼氏ですよ！」
そう言えば、龍香ちゃんも今の彼氏と結婚したいんだっけ？　何だかんだでお似合いよね。
「あはは、龍香ちゃんらしいわね」
「ところで優子さん」
「うん」
龍香ちゃんがあらたまった様子であたしに語りかける。
何か嫌な予感がするわ。
「愛しの旦那さんと、昨夜は激しかったですか!?」
「ちょ、ちょっと！」
あー、やっぱりこれだわ。

「気絶するほど気持ちよかったですか？　それとも――」
「だー！　河瀬やめろ！」
「もー！　龍香ちゃん、浩介くんは確かにテクニシャンだけど……て何言わせるのよ！」
　あたしと浩介くんが慌てて龍香ちゃんの暴走を止める。なんかあたしは止めてなさそうだけど。
「あはは、すみません。じゃあ私、デートの約束がありますのでこれで」
「お、おう……」
　浩介くんがぎこちなく返事すると、龍香ちゃんは建物の外に消えていった。
「さ、サークルの所に行くか」
「うん」
　あたしたちは、気を取り直してサークルの勧誘場へ行く。
　もしかしたら、天文サークルがあるのかもしれないし、桂子ちゃんの様子も気になるし。

# 非常識なサークル

あたしたちは、学校のキャンパス内の広い所に出る。
新入生を勧誘するために、どこのサークルも必死だ。
「さて、どうしたものかね」
「あたしは桂子ちゃんが作る天文サークルがいいんじゃないかな？
他はまあざっと見ればいいと思うわ」
元々、そう言う予定だったし。
「ああ、でも木ノ本いるか？」
「とりあえず行ってみようよ」
「ああ」
あたしの手引きで、サークルの勧誘スペースに向けて歩いていく。
徐々に勧誘の声が、大きくなっていく。

「野球部はどうだい？」
「一緒にサッカー楽しもう！」
「囲碁将棋部へようこそ！」
「ゲーム研究サークルだよ！」
そこでは、佐和山大学の先輩たちが思い思いに勧誘していた。
「この大学にも、色々なサークルがあるんだな」
「うん、そうみたいね」
でも、あたしたちはざっと見るだけだと思う。桂子ちゃんの天文部のことがあるからだ。

「ねえそこのお嬢さん」
「はい？」
浩介くんとあてもなく歩いていると男子学生があたしに話しかけてくる。
「ダンスサークル入らない？　君なら人気間違いなしだよ……うちはさ、新入生歓迎会も、他より豪華になってるんだぜ」
「そうそう、その体で踊れば人気間違い無しだって！」

うーん、何か怪しいわね。
「あ、あの、あたし運動はからっきしなんで」
嘘は言ってない。実際あたしの運動神経は壊滅的だ。
「大丈夫大丈夫、君くらい美人ならいるだけで士気上がるからさ、そこの彼もどうだい？　多人数なら新しい扉を開けるかもしれないぜ」
あー、やっぱりそっち系のサークルなのね。こんなすぐに本性表すなんて分かりやすいわね。
「お断りします。優子ちゃんは俺の大切な嫁ですから」
「えっ……嫁宣言!?」
「嫁って……まさか冗談じゃ――」
やっぱり、驚いている。勧誘の2人はかなり動揺した顔をしている。
「あの、あたしたち本当に夫婦なので、あたしも浩介くんも、パートナー以外とするつもりはありません」
あたしは、左手薬指の指輪を見せつつ、きっぱりと拒絶するように言う。そもそも、浩介くん以外の男の魅力なんて知っていても知りたくないし。
そもそも、なんでこんなサークルが堂々と表通りで勧誘しているのよ。あと、2人ともあたしの胸ガン見してるし。
「ちっ、何だよ頭固えな！」
そして、この言いようである。
頭固いとか柔らかいとか以前の問題だとあたしは思うんだけど。
「おい、固いとか柔らかいとか以前の問題だろ！　優子ちゃんは俺の女だ！　他の男に渡す気は絶対にないし、優子ちゃん以外とするつもりもない！」
浩介くんが、あたしの心の中を代弁しつつ、きっぱりと宣言してくれる。
うん、あたしは浩介くんの女……あたしは浩介くんの女……
頼もしい旦那でよかったわ。
「ったく、人生損してるなー、1人としかしねえなんてよ！」
なおも諦めきれず勧誘してくる。もう、ここがヤリサーだというこ

とを隠そうともしない。というか、周囲も注意しないのね。
「うるせえな！　お前らのサークルの女はどんないい女かは知らねえが、優子ちゃんに比べたらゴミみてえなもんだろ」
浩介くんが負けじと応戦する。
「な、何でそんなこと言えるんだよ！」
「そらこんな頭のネジが外れたサークルにいるもんな！　そんな女なんかと付き合うくらいなら、優子ちゃんと愛を深めたほうがよっぽどマシだぜ！」
浩介くんが正論で応戦する。
確かに、こんなサークルに入ってハマる女子なんてろくなものじゃないわよね。
「言ってくれたなおい……！」
サークルの人がますます怒り始めた。
「ま、そうじゃなくても優子ちゃんは世界一かわいい女の子だし、優子ちゃんよりブスで貧相な体の女しかいなさそうな君たちのサークルはこっちから願い下げだね」
浩介くんがあえて低俗な物言いをするが、もちろんこれは相手のレベルに合わせてのこと。
というよりも、あたしよりかわいくて豊満な身体の女の子なんて、今まで殆ど知らないわよ。協会になら、豊満はともかく、あたしよりかわいかったり美人の人はいると思うけどね（最も、周囲はあたしが一番と思っているみたいだけど）
「この野郎、言わせておけば……！」
「とにかく、旦那として、嫁に有害なことをさせるわけにはいかねえんだ。じゃーな……行こう、優子ちゃん」
浩介があたしの手をつかむ。
「う、うん……」
あたしも、それに続く。
「おい！」
サークルの人が大声で怒鳴るが無視をする。
ともあれ、この場からはさっさと退散したほうが良さそうね。

あたしたちは、振り向きもせずにこの場から逃げた。
「この野郎！」
ところが、人気の無い所まで逃げると、逆ギレしたサークルの２人組が浩介につかみかかる。
「散々言いたい放題言いやがって！　うちのサークルの女の子にまでケチつけやがって！　ただで済むと思ってんのか！」
「ふぅ、これ以上は学校に通報しますよ」
浩介くんはあくまでも冷静に応対していて、それがかえって相手の神経を逆撫でしている。
「こんのお！」
「言っておくが、俺喧嘩は強いぞ。優子ちゃんを守るために鍛えてあるからな」
今にも爆発しそうな２人に向けて浩介くんが忠告する。
「っ、なめんじゃねーぞ！」
男子の１人が浩介くんの胸ぐらにつかみかかる。
「ふぅ」
「おわっ！」
ドスッ！
浩介くんは面倒くさそうにその腕を払いのけ、足払いしてバランスを崩した所を押してもう１人を巻き込む。
２人が折り重なるように倒される。
「あだあ！」
「うー！」
パンパン
浩介くんがやや大げさに手を払う。
「失せろ、下賤野郎。二度と優子ちゃんの前に顔を見せるな！　次は腕を折るぞ」
「畜生！　覚えてやがれ！」
「あいててて！」
浩介くんの低いドスの利いた声が聞こえ、２人組の男はいかにもな

雑魚の台詞を吐いて、一目散に退散していった。
「はぁー……全く、とんでもない目に遭ったな」
「本当よね」
ああ、また浩介くんに守られちゃったわ。
もう、顔を見るだけで、素敵すぎてくらくらしちゃいそうだわ。

「優子ちゃん、どうしたの？　顔赤いよ」
「えへへ、ちょっと怖い目に遭って興奮しちゃってるのかも」
はにかみながら言う。実際、間違ってはいないと思う。
あたしが恋に落ちたのだって、似たような経緯だったし。
「そうか、やっぱり女の子の本能なんじゃないの？」
「そうかもしれないわね」
あたしが、浩介くんの従属物になりたいという被支配欲は、かっこよくて強い浩介くんに守られたいという欲望と表裏一体なのかもしれない。
夫婦生活でも、あたしは常に浩介くんにめちゃくちゃにされたいと思いながらしていて、浩介くんも徐々にそれを目指そうとしている。
「優子ちゃんは本能に正直だもんね」
「そ、そうかな？」
浩介くんがさらりとそんなことを言う。
「うん、今も俺のここ、ガン見してるし」
浩介くんが下半身を指差す。
あたしの視線が、無意識にそこに向かっていたことに気付く。
「わっわっ」
慌てて目をそらすがもう遅い。
「あはは、優子ちゃんは本当にメスだよね」
「もー！」
浩介くんはあたしのことを「メス」と言う。
でも、それは事実だし、あたしとしても、自分が1人の女の子である以前に1匹のメスであることも自覚していた。
浩介くんと結婚してからというもの、あたしはより露骨に、メスの

本能が出るようになった。
結婚する前には、まだあたしの深層に残っていた「優一」が、あの日以来完全に消えたこととも無関係ではないだろう。
「あ、優子ちゃんに浩介じゃん、探してたのよ！」
「あ、桂子ちゃん」
ふと、桂子ちゃんがこっちに近付いてきた。
「あのね、サークルについて調べてたんだけど、この大学に天文部はなかったわ」
どうやら、佐和山大学に天文部はないらしいわ。
「そうか」
「なので、私が新しく作っちゃうことにしたわ！」
桂子ちゃんが、新規サークルの設立届の紙を見せてくれた。
「おー、さすが木ノ本、行動力高けえなー」
「でも、サークルを作るためには最低部員が3人と顧問の先生が必要なのよ」
「ふむふむ、で部員は俺たちでいいとして、顧問はどうするんだ？」
浩介くんが突っ込んでくる。
「えへん、もちろん蓬莱教授です！」
「え？」
桂子ちゃんが意外な名前を出す。
蓬莱教授何て、顧問したくなさそうなのに。
「大丈夫よ、小谷学園の天文部もだけど、顧問って言っても名義を貸すだけの書類上の存在よ」
そう言えば、あたしも天文部の顧問は名前さえ知らなかったわね。
「そ、それでいいのか！」
「大学になるともう完全に大人だからね。何かあっても私たちの責任になるわよ……何もないとは思うけどね」
「なるほどねえ」
「それでさっきみたいなひどいサークルもあったのか」
浩介くんがやれやれとため息をつく。
「あーあのいかにもなサークルね、ダンスサークルとか言ってたけど

絶対ウソよね。私も声かけられたわ」
「やっぱり桂子ちゃんも!?」
まあ、予想はできていたけどね。
「うん、とにかくしつこくてね。１１０番しようとしてようやく諦めてくれたわ」
桂子ちゃんは、やはり超がつく美少女なので、狙われやすいわよね。
「桂子ちゃんも災難だったわね」
「ただああいうのは自分たちの大学もだけど、他大学、特に付属の中学高校を持つ女子大を狙うのよ」
「あー何となく分かるわ」
修学旅行でも思ったが、女しかいない空間はとても不健全だと思う。
中学高校で異性と触れあう機会が無いだけじゃなく、大学まで女子大に進んだら、男に飢えるなって方が無茶よね。
そうなればこういうのにあっさり騙されちゃいそうだわ。本当、小谷学園が共学でよかったわ。
「だから、ここで勧誘できなくても、よそから調達するのよ。さ、それよりも、天文サークルを作りましょう」
「おう」
あたしたちは、学生棟に移動する。
ここは、学食やコンビニ、文房具店やインターネットが使えるフリースペース、学習サポートセンターの他、図書館や就職活動など、直接勉学に関係ない学生支援を一手に担っている。
「さ、座って、優子ちゃんと浩介にはここに名前を書いてもらうわ」
「おう」
「ええ」
桂子ちゃんが指差した先に「副代表」の欄とかなりの数の「構成員」の欄があり、あたしが副代表欄に「篠原優子」と、浩介くんが「篠原浩介」と書き込む。
ちなみに、「代表」の欄には、既に「木ノ本桂子」の文字があった。
「よし、じゃあ提出するわね」

桂子ちゃんが立ち上がり、窓口の事務員さんに書類を提出する。
「はい、学生証をお見せください」
あたしたちは、それぞれ学生証を見せる。
「はい、分かりました。それでは天文サークルを正式に開きます」
「ありがとうございます」
あたしたちは頭を下げて、その場を後にした。

「ふう、サークルできたわね」
「勧誘とかはどうするんだ？」
「今年はいいわ、一応あそこには投稿しておくけど」
あそこと言うのはもちろん小谷学園３年１組で作った専用ＳＮＳのこと。
あたしたちは未だに交流が活発で、特にプロテニス選手になった恵美ちゃんが積極的に投稿していた。
「そうか、まあこっそりやるのもいいよな」
もちろん、小谷学園出身の学生を通してすぐに知れ渡ると思うけど。
「あ、私そろそろデートだったんだわ」
「え!?」
あたしたちは同時に驚く。
デート？　桂子ちゃんが？　もしかして、彼氏できたの？
「あー２人は結婚式があるから早めに帰っちゃったもんね。実は卒業式のあの後、天文部の今の部長に告白されたのよ」
大学の出口に向けて、同じ方向に向かう。
桂子ちゃんに告白したのは天文部の部長さんだった。
「私も彼氏がずっと欲しかったし、天文部の他のメンバー以上に熱心だったからＯＫしたわ」
「そ、そうなのね」
「ま、おめでとうよ木ノ本」
「うん、私も彼氏のためにデートしなきゃね」
あたしたちは駅に向かって歩き出す。

駅の近くに行くと、小谷学園の制服を着た男子がいて、天文部の部長さんだった。
「ごめん、待った？」
「ああいやその、大丈夫です桂子先輩」
「おう、元気にしてたか？」
「はい、篠原先輩と――」
「あたしも篠原よ」
あたしは、予め釘を指しておく。
「おっと、そうでした。じゃあ、これで失礼します」
「ばいばーい」
そう言うと、２人は手をつなぎながら、駅の向こう側へと消えていった。
「あたしたちも行きましょう」
「うん」
あたしたちも、電車で家に帰宅した。
帰宅途中は、桂子ちゃんの彼氏のことで、話題は持ちきりだった。
そうよね、桂子ちゃんくらいの美人だもの。むしろ今まで彼氏が居なかったことのほうが、驚愕の事実と言っても過言ではないわよね。

「ただいまー」
「２人ともお帰りなさい」
帰宅するあたしたちに対して、お義母さんが出迎えてくれる。
あたしにとっては、実家に居た時に母さんが出迎えてくれているのと殆ど変わらない。
変わっているのは浩介くんと２人で所くらいかな？
「じゃあ俺たち休むんで」
「ええ、ごはんになったら呼ぶわね」
あたしたちは、蓬莱教授の記者会見を見るために、あたしの部屋に入る。
この日は、今後の生活の上でも大事な日になる。
「テレビつけるわね」

あたしがリモコンを取って、身体を前かがみにしてテレビに向け赤い「電源」ボタンを押す。
ぺろりっ
「きゃあ！」
浩介くんに、ナチュラルにスカートをめくられる。
最近は頭を撫でられたり、胸やお尻を触られたりすることが多くて、あまりスカートめくりをされてなくて、無警戒だった。
「優子ちゃん水玉かわいいね」
「もうっ！　スケベ！」
そんなやり取りをしつつテレビをつける、蓬莱教授から聞いた記者会見の予定時刻は１８時からで、目的の時間まで後数時間ある。
「まだやってないわね」
「だな、記者会見の準備に時間でもかかっているのかな？」
「どうかな？　とにかく、またつけ直しましょう」
あたしは、リモコンを操作して、テレビを消す。
ぴらりっ
「いやーん！　えっち！」
浩介くんに、今度は前からスカートをめくられる。
「はあ……はあ……」
浩介くんがあたしのパンツを見て興奮している。
「もうっ！　あなた、もしかして我慢できない？」
「うん、できない」
浩介くんが「苦しみから解放してくれ」と訴えている。
多分、この苦しみから開放してあげられるのは、世界中でもあたしだけだと思う。
「しょうがないわね」
あたしはドアの前に掲げられている札を裏返す。
そこには「プライベート中、入らないで」と書かれている。ちなみに普段は「優子の部屋」と書いてある。こちらは、石山家にはなかったもので、「鉢合わせ」を避けるためにも、結構お世話になっている。
今はそう、辛そうにしている浩介くんを、妻として楽にしてあげる

ために、リフレッシュのためにも、義両親が入って来ないようにしないといけない。もちろん、鍵も閉めるけど。

「はあ……はあ……はあ……」

激しい運動をして、あたしも浩介くんも、ひどく疲れきってしまった。

浩介くんは、ようやく苦しみから解放されたみたいだった。

あたしもあたしで、何度か気絶させられてしまうくらい、凄まじい快感で覆い尽くされた。

あたしは、パジャマを持って、布団で隠しながら着替えた。

この分だと、義両親にもリフレッシュしたことはバレてると思うし。

浩介くんは、元の服に戻る。

「テレビ、つけようか」

「ああ」

時計を見ると、時間は既に５時５０分になっていた。

あたしたちは、蓬莱教授が開く記者会見について、期待と不安が入り交じった感情でみることになった。

# ２００歳の記者会見

「えー、まもなく、佐和山大学の蓬莱伸吾教授による緊急記者会見が始まります。今度はどのような発表がなされるのか、注目です！」
　時間になったのでテレビを付けてみると、やはりアナウンサーが大騒ぎしていた。
「蓬莱教授は一昨年１２月、『我々は人間の平均寿命を１２０歳にする方法を開発した』と発表し、大きな話題となっていました」
　テレビには、一昨年の記者会見の様子が映し出されていた。
「蓬莱教授は、これまでノーベル生理学・医学賞を始め、再生医療の現場で数多くの業績を残してきた一方で、その研究には生命倫理や宗教的敬意をないがしろにしているとして、宗教介を中心に反発の声があがっています」
　ニュースキャスターが蓬莱教授の簡単な来歴を紹介している。
「今回の記者会見はどのような発表が行われるのでしょうかこの後生中継です」
　あたしは試しにチャンネルを回してみると、地上波では１つのテレビ局が夕方アニメを放送していたのを除き、全て蓬莱教授の記者会見を中継している。
「えー、それではですね、蓬莱教授の記者会見を始めます」
　生中継の記者会見が始まった。
「えー皆さん、佐和山大学の、蓬莱伸吾です。本日はお忙しい中、記者会見に出席してもらいましてありがとうございます」
　いつもの蓬莱教授に似合わない堅苦しい挨拶から入る。
「今回の記者会見はですね、前回同様我々人類に取って最大の不治の病とも言えます『老化』、これを防がずとも遅らせる薬を開発したことについてです」
　蓬莱教授は、まず概要から入る。
「従来の薬では、我々は平均寿命１２０歳でしたが、こちらの薬……研究室では俺の名前を取って『蓬莱の薬』と呼ばれていますが、これを飲めば人間の寿命は２００歳となるでしょう」

記者たちが騒然としている。内容自体は前回の延長みたいなのだけど、前回の平均寿命１２０歳ならば、非ＴＳ病患者で最も長命だった１２２歳という記録があったので「誰しもがこれまでの最長寿になれる」程度の受け止め方だった。
でも、２００歳ならば話は変わってくる。
永原先生という存在が世間に知られるまで、１２０歳以上の寿命は、世界の大半の人にとっていわばファンタジーの世界だった。
もちろん、今はそんなことはない。
不老人種たるＴＳ病の存在が広く知られ、永原先生が５０１歳の他、余呉さんの１８６歳や比良さんの１７９歳という年齢もよく知られている。
永原先生はともかく、平均寿命２００歳ということは、今の比良さんや余呉さんより長生きができるということになる。
そう、浩介くんも、後３日、あの記者会見の机にある薬を飲めばそうなるのだ。
とはいえ、それは極めて珍しいＴＳ病という病気にかかりなおかつ性差という壁を乗り越えられて初めて得られるもので全世界でも３００人といない狭き門になっている。
「更に、我々は平均寿命を更に１００年……つまり人間の平均寿命を３００歳にする薬が完成間近となっていて、治験も終了し、現在最終段階に入っています」
記者たちがあわただしく動き始めた。
「えーお聞きになったでしょうか？　近い将来、私たちは３００生きられると、そう言うことになります。社会は大きな変革を、余儀なくされるでしょう」
テレビのアナウンサーも大慌てになった。２００歳のみならず３００歳、以前までは、大多数の人にとって非現実なファンタジーの世界だったのが、現実のものになりつつある。
３００歳、今から３００年前と言えば江戸時代の真っ只中に当たり、ちょうど永原先生が江戸城にいた頃に当たる。
「えー、続いては質問に移りたいと思いますが、ことの重大性もかねま

して慎重に考慮していただきますと幸いです」
　するとほぼ全員の記者が手をあげ、そのうちの一人が当てられる。
「えっと、この薬、老化を遅らせる以外に何か副作用のようなものはありますか？」
　確かに、聞きたい所よね。あたしとしても。
「結論から言うと、広い意味での副作用はある。だが、健康を害する危険性は一切確認されていないし、悪くないと思える副作用も、あるが……いずれにしても些末なことだ」
　蓬莱教授は、水を一杯飲む。どうも、あまり重要じゃないという顔をしている。
「それでも教えてもらえないでしょうか？」
「分かった。教えてやってはない理由はないしな……この薬はＴＳ病の人の遺伝子を参考にしているから、免疫力やその他の生命力という意味では、彼女たちに準じる形にはなるな。不慮の事故に巻き込まれない限り半永久的に生き続けると言われる彼女たちだ。当然強靭な肉体になる」
「具体的にはどういった副作用なんですか？」
「例えば、ガンにならない、脳梗塞にならない、心筋梗塞にならない、結核にならない、アナフィラキシーショックやアレルギーが全て無くなる、インフルエンザや流行り病にかからない、あるいはこれらにかかってもごく短期間で治る……といった所かな、この薬を飲めば、不慮の事故、自殺、被殺害、そして老衰以外の死因はほぼ全て駆逐され得る。いずれにしても、大したことない話だ」
「ええっ!?　そ、そうなんですか!?」
　記者たちは、さっき以上に動揺している。
　かなりざわついていて、露骨に取り乱す人までででてきている。
「やっぱり動揺大きいな」
　浩介くんは、どこか上の空でそんなことを言う。
「確かに、不老からすれば小さいことよね」
　理屈の上では、蓬莱の薬を飲めば、免疫力が強く、老化が遅くなったとしても、遅くても老化する以上はいずれ老衰で必ず死ぬ。

あたしたちＴＳ病とは、そこに大きな断絶があることは言うまでもない。
確かに、老化を完全に抑制できていないという不完全さに比べれば、ガンや脳梗塞にならないというのが「些末なこと」というのは、理屈においては全くその通りだ。
でもそうは言っても、あたしたち見たいに日常的に不老人種と接していない人からすれば、ガンにも脳梗塞にも心筋梗塞にもならなくなるというのは極めて衝撃的な話だと思う。
不老足り得ぬ人にとって、これらの病気は死因の上位に位置する病気で、仮に不老効果がなかったとしても、平均寿命は急上昇するはずだ。
「あー、だがもちろん、この薬が完全不老を実現できていないから、ガンや脳梗塞にならないと言っても、完全に克服できるとは考えていないよ」
蓬莱教授が冷静に補足する。だけど、不老の実現と相対化すれば小さな出来事でも、絶対評価で考えれば、この副作用だって大きな発見であることは間違いなかった。
「他に質問はございますか？」
「「はい」」
また新聞記者さんの一斉挙手が始まる。
「蓬莱さんの研究には根強い抵抗がございますが、今後ですね、宗教介などの抵抗運動も活発化すると思うんですね。蓬莱さんの方では対策とかするんでしょうか？」
また、かなり鋭い質問が来たわね。
「こちらも結論から言うと対策はする。ということになるな。ですが、俺はあくまでも再生医療と遺伝学の専門家であって、情報学や心理学が専門ではありませんので、できることはごく限られてくると思います」
蓬莱教授の返答は、嘘はついてないが極めて誤解を与えやすい内容で、実際の蓬莱教授は情報操作や工作の専門部隊を既に作っていて、浩介くんも仲間に引き入れられている。

この答弁は、いわゆる「マスゴミ」が行う印象操作そのものね。
「ありがとうございます。他に質問はございますか？」
記者の何人かが手をあげる。
「あの先程の質問とも重なるかもしれないんですけれども、蓬莱教授はそうした反対派との公開討論について参加の予定はございますか？」
「はっきり言えば無い。俺の研究に対して宗教などという反証可能性の無いもので殴って来る連中は洗脳を上書きでもしねえといくら論破しても説得は不可能だし、何より限られた寿命でそんな無為なことをするくらいなら、研究室で完全な不老に向けて研究をした方がマシってものだ」
蓬莱教授が、討論の拒否を宣言する。
「他にはありますか？」
「先程の質問の続きになってしまうんですけど、反対派の方が今の発言を持って『逃げた』と言ったらどうするんですか？」
「知らん、捨て置け。どうせその手の連中は『討論します』と言えば『蓬莱は大学教授とノーベル賞の権威に訴えようとしている』とでも言うんだろうさ」
蓬莱教授は嫌そうな顔で投げ槍気味に言う。
何を言っても無駄という感じではあるわね。
しばしの沈黙の野地、続いての質問に入る。
「不老が実現した後、社会は大変革を余儀なくされると思うんですね。それについてはどう思っているんですか？」
うーん、そう来たのね。
「俺としては、医療の専門家として、ただ全ての人間が生まれながらに持っている不治の病を克服したいだけなんだがね。確かに社会は大きく変わるだろうが、昨今言われている人口知能もだが、俺の研究が無くても社会は変革を余儀なくされているだろうさ。人間はな、適応力の高い生命だ。だからこそ、地球で最も繁栄したのだ。俺は、悲観視はしていないさ」
蓬莱教授は自信たっぷりの口調で言う。

「ありがとうございます」
次の質問に入る。
「蓬莱教授は、既に薬は飲まれているんですか？」
「ああ、寿命は長い方がいいからな」
蓬莱教授が簡潔に答える。
「えっと、ありがとうございます」
「えー会見の途中ですがここでスタジオに継ぎます」
記者会見の中継が切れ、テレビのスタジオに戻る。
おそらく、他のテレビ局も同じだろう。
スタジオでは、またＴＳ病に関する解説をしている。
「でですね先程の記者会見でもありましたＴＳ病何ですけれどもこれは正式名称を『完全性転換症候群』と言うわけです。その名前の通り性別が変わってしまう病気何ですけれども」
「はい」
「蓬莱教授は、この病気のもうひとつの特徴、すなわち『不老』に着目しているのです」
「でもその、この薬を飲むとガンや脳梗塞、心筋梗塞やアレルギーまで全部治ってしまう。それだけでも全世界に激震が走る研究ですよね」
テレビのアナウンサーさんも驚きを隠せない。
「はい、まあそれを『些末』と言い切ってしまうとは恐ろしい話ですよね」
確かに、理屈では間違いではないが、「蓬莱の薬」は例え老化を送らせる効果がなかったとしても、それだけでノーベル賞がいくつも取れてしまうレベルの代物よね。
というよりも、あたしたちにそんな免疫力があったなんて知らなかったわ、強いことは知ってたけど。
「あの、これは又聞き何ですけど、蓬莱教授は、以前取ったノーベル賞の研究、あの万能細胞の発見も、『寄り道の研究』と言っているらしいんです」
「へえ、数多くの難病治療に役立つあれがですか!?」
アナウンサーさんが驚きを見せている。

蓬莱教授がノーベル賞を受賞した研究だって、「最近のノーベル賞で最も偉大」と言われているくらいの大発見だけど、確かに不老の一般化に比べれば小さいことだ。
「確かにこの薬の改良型が、もし本当に人類が老化を完全克服できるようになるとすれば、確かに『些末なこと』という彼の言い分も分かります」
このテレビの有識者は、あまり蓬莱教授に批判的ではない。
もしかしたら、蓬莱教授の根回しがあったのかもしれない。
「優子ちゃん、見てよこれ。すごいことになってる」
浩介くんが、あたしにスマホの画面を見せてくる。
そこは呟きサイトで、「蓬莱教授」のハッシュタグのもと、反応が次々書き込まれている。
そこには、「ガンが完全に克服可能に！　しかし些末なことらしい」「人間、間もなく平均寿命３００歳の時代へ」「蓬莱教授の不老研究、とてつもない業績だった」「不老不死、ついに現実へ」何て言う文字が並んでいた。
「悪い、俺は蓬莱教授から頼まれた仕事をしないといけない。『不死』という書き込みがあったら捨てアカウントで訂正のリプライを送るように言われているんだ」
浩介くんが宣伝部の仕事について話す。
不老と不死の違いは、よく強調しておき、誤解を解く必要がある。
本当の意味での不死ともなると、それこそ宇宙空間やブラックホールや太陽の表面でも生きていけなきゃいけない。
もちろん、ただの不老ではそうはいかない。
交通事故に巻き込まれること、治安の悪い場所で殺されることなどを警戒しないといけないし、何よりＴＳ病患者の半数以上が性別が変わるという精神的負担に耐えきれずに短期間で自殺に追い込まれている。
死のうとしても死にきれないのが不死だから、あたしたちは不死とは程遠いのよね。あたしたちは、多くの患者が早期に自殺で死んでいることを考えれば、平均寿命にしたらむしろ一般人より寿命が短いか

もしれない。
「えー、速報です。蓬莱教授の記者会見に際して、キリスト教、イスラム教団体を中心に世界各国の多くの宗教団体が次々と抗議声明を発表しています。中には反対デモを開くという予告もあります。またイスラエル政府は――」
テレビのアナウンサーさんが以前の１２０歳会見の時以上に多くの抗議が入っていることを示す。
「また、蓬莱教授と協力姿勢を続ける一方で、マスコミの取材を事実上１社に独占させている日本性転換症候群協会に対しても、日本の記者クラブが正式に抗議声明を発表いたしました」
予想外の展開になる。
あたしは携帯電話を取りだし、永原先生を呼び出す。
「あ、もしもし篠原さん？」
「うん、篠原ですけど、永原会長、さっき記者クラブが抗議声明を出したって」
「ええ、こっちにも届いているけど、黙殺するわ。もしまた何か偏向報道があれば、直ちに抗議するわ」
「分かりました。会長、高島さんの記事ですが」
「ええ、予定通りに出すわ。今、蓬莱教授の宣伝部も準備しているわ。もし宣伝部から何か連絡があったら対応をお願いするわね」
永原先生は、そこまで深刻そうに思っていない口調で言う。
もしかしたら、予想していたことなのかもしれない。
「――現在、ＴＳ病患者の治療に関しまして、日本性転換症候群協会がほぼ独占しておりますが、この団体はその過程で多くの自殺者を出しています。我々は新しくＮＰＯ法人を作りまして患者のケアをしていきたいと思っています」
テレビの向こうで、例の牧師がとんでもないことを言う。
永原先生と電話中でよかったわ。
「永原会長」
「ええ、同じ番組を見ているわ。まさか、こんなことを計画するとは思っていなかったわ」

永原先生は、さっきとは打って変わって焦りの口調で言う。電話越しでも分かるその動揺は大きかった。
「何のノウハウもない宗教団体が患者の治療何てできるわけないわ。ましてや、私たちを敵視してる連中よ」
「ええ、これは、緊急会合を開いた方がいいと思うわ」
「ええ、賛成。土曜日、緊急会合を開くことにするわ。篠原さん、その番組終わったら拡散お願い」
「はい、分かりました」
あたしは力強く返事をする。
そしてもう1つ分かったのが、蓬莱教授が動けば必然的にあたしたちにも飛び火することだった。
それはもちろん、蓬莱教授の研究があたしたちＴＳ病をベースにしているからだ。
「浩介くん、土曜日、緊急会合になったわ」
「ああ、分かった、うー数が多い」
浩介くんは忙しそうにスマホを動かしている。
「数多い？」
あたしも気になって聞いてみる。
「ああ、不老不死で一色単にされてる呟きにコピペしているが追い付かん」
やはり、呟きの拡散力は侮れない。
テレビでは、蓬莱教授の記者会見が間もなく終了することを告げている。
「最後に、俺の方からどうしても言わせてもらいたいことがある。俺の研究はあくまでも『不老』の研究であって決して『不死』ではない。もし、身の周りの人に俺の研究にあたかも不死が含まれているような言動があったら止めてくれ。インターネットでも、そういう書き込みを見かけたら、必ず訂正させてくれ。それから、もしテレビや新聞でこのことを報じない所があったら、それは偏向報道だ。誰がなんと言おうと、それこそ総理大臣だろうが国連事務総長だろうが天皇陛下だろうが、だ。それを見つけたらマスコミとスポンサーに抗議してく

れ」
「分かりました。それでは、記者会見を終了したいと思います。お疲れ様でした」
蓬莱教授が、そのように訴えて、記者会見が終了した。
「浩介くん、いよいよよね」
「ああ、この薬、どう出るかな？」
浩介くんが、今飲用中の蓬莱の薬を見ながら言う。
「優子ちゃーん！　ご飯手伝ってー！」
「はーい！　じゃあ、あたしお義母さん手伝ってくるわね」
「おう」
あたしは立ち上がり、家事手伝いの日常に戻った。

# 学業と不老の両立

翌日、あたしたちは早速大学で最初の講義を受けることになった。
最初こそ緊張したけど、慣れてしまえばそこまでではなかった。
一方でインターネットでの反応を見ているけど、やはりというかなんというか蓬莱教授の言っていた「副作用」について「蓬莱教授過少評価しすぎだろ」という声が多く上がっていた。
そして、あたしたちＴＳ病患者と協会の話、記事ができるのは翌日なので、まだあたしたちが結婚したことは知られていない。
ＴＳ病患者という存在が更に注目されるに連れ「俺のクラスメイトにいる」とか「職場にもいる」という書き込みが増えてくる。
そして、分かったのは、ＴＳ病患者の社会人の大半は大幅に年齢を偽っていること。
永原先生も、今でこそ実年齢が５０１歳というのは広く知られているが、本当の年齢をＴＳ病患者い外に打ち明けたのはあたしが女の子になって間もなく、林間学校の問題が起きた時で、広く世間に知られるようになったのも、早くて一昨年の蓬莱教授の記者会見、普通は去年に高島さんから取材を受けて以来だ。
しかし、それでもＴＳ病患者たちは年齢については偽っている人が多い。
むしろ、天保生まれだと職場でも正直に申告していた比良さんや余呉さんの方が珍しいという。

「うちの職場にもいたわ。２０代後半って言ってたけど、実際には１００歳で、うちの曾祖父母より年上だった」
「うちも職場でいたよ。本人は５０歳って言ってたけど、どう見ても美魔女ってレベルじゃないから問いただしたら本当は明治１５年生まれだって言われた」
「明治１５年っていうと１３７歳か」
「恐ろしいよなあ」

インターネットでも、ＴＳ病患者たちに対する反応が多く書き込まれていた。
ＴＳ病は、少し前までは殆ど知られていない病気だったから、実年齢についてはタブー視されていた所もあったのかもしれない。
そう言う意味では、今は少しだけ、患者たちにとっても生きやすい世の中にはなってきたとは思う。

「えー、それではですね、講義を始めたいと思います。微積分法というと高校でもおそらくはやったとは思いますが、大学のそれは高校までの微積分の発展形となります。教える都合上から、高校までの微積分の内容と少し重なるところもありますが、ご了承ください」
最初に訪れたのは「微積分法」の講義で、ここは応用数学が専門という河毛（かわけ）教授が担当している。
河毛教授は結婚式にもいて、比較的蓬莱教授との交流の多い教授と言える。

「ではですね、まず極限というものの定義から復習していきましょう。微分の前に皆さん極限、例えば発散、収束、振動といったものを高校で習ったと思いますが、大学の数学ではそこから発展して様々な公式が出てきます」
浩介くんと一緒に、講義を受ける。最初に自己紹介と講義の簡単な概要を説明し、いよいよ最初の講義に入った所だ。
履修する講義は、結局浩介くんと全て一緒になって、夫婦で一緒にお勉強何ていうことも、今後は増えてくると思う。
「それでは、まずはここからですが――」

最初の河毛教授の講義は、滞りなく終わった。
そして、次の講義の教室まで移動する。
このあたりは、高校とそこまで変わらないが、移動距離が長い傾向にある。
高校の場合、教室で授業してくれることが多いから。

「なあ、あれ。あれが噂の篠原夫妻だろ？」
「蓬莱教授が贔屓してるんだってな」
「そうらしいぜ、何せ嫁さん、あんなかわいいけど実は一昨年まで男だったんだぜ」
「へえ！　噂のＴＳ病か！」
「しかもよ、男だった頃、優子ちゃんは今とは似ても似つかないくらい乱暴な性格で、よく旦那をいじめてたらしいんだぜ。で、女の子になったばかりの頃は逆にいじめられるようになったんだって」
「うひょー、あの２人、そういうのを乗り越えて結婚したのか」
「すげえいい話だよな。いじめて報復してなんて関係から、あんなにラブラブになるなんてよ」
「そりゃあほら、性別が変わったのが大きいんじゃねーの？」
「だろうなあ。昨日も、例のヤリサーの連中から身を挺して守ったらしいぜ」
「くー、俺もあんなイケメンになりてえ！」

大学でも、結局あたしたちの噂話はいろいろなところで聞かれるようになった。
実は履修する科目が全部一緒になった理由は、このヤリサー騒動だったりもする。
浩介くん曰く、「やっぱり出来る限り優子ちゃんのそばにいて守りたい」だそうだ。本当にもう、そんなかっこいいこと言われたらクラクラしちゃうわよ。
ともあれ、この状況になると、夫婦ひとつ屋根の下で暮らしているから家を出る時から講義を受けて、そして家に帰るまでなので、大学ではいつも夫婦でべったりくっついている感じになっていて、否が応でも目立つ。
あたしもこの容姿だととにかく男子学生からの視線が半端ない。
高校でもそうだったけど、大学はそれ以上で、同時に浩介くんに対する敵意や殺意のこもった視線は、あたしからすると気の毒にも感じ

たけど、浩介くんは「自信になる」とも言っていた。
確かに、浩介くんの独占欲は大いに満たせるものね。ふふっ、元気いっぱいの浩介くん、今夜も夜が楽しみだわ。
「優子ちゃん、この後1コマ空いてるな。どうしようか？」
大学には、履修できる科目にも上限があるので、全コマが埋まるというわけではない。
こうやって、空いた時間というのも出来るわけだけど……
この空き時間、あたしたちが行うのは、教科書の購入と、履修登録だ。
履修登録は紙でも提出できるけど、佐和山大学では文系も含めてほぼ全員がオンラインで提出している。
あたしたちも、支給のノートＰＣを使い、学生証にある学籍番号と、指定の複雑なパスワードでログインして、履修登録を完了させる。
そして、履修した教科に沿って、指定の教科書を購入する。
「しっかし、教科書どれもこれも高いなあ……」
「大学の教科書って高いわよね」
幸いにして、学費は両家両親がそれぞれ負担してくれている。
大学を出れば、実家暮らしを続けるとしても自分で食い扶持を見つける必要はあるから、今のうちにお世話になっておこう。
小遣いも上手にやりくりして、去年の修学旅行や新婚旅行で余った蓬莱教授からの支援金を極力切り崩さないようにやっておこう。
年度末に何処か旅行すれば、また蓬莱教授がお金を押し付けてくれるかもしれないし。
ともあれ、教科書を全て購入すると、かなり重たいわね。
「うー」
「優子ちゃん、持ってあげようか？」
「うん、お願いするわ」
「おっしゃ。よっと」
あたしは、浩介くんの厚意を素直に受け取ると、浩介くんがひょい

と涼しい顔で持ち上げてくれる。
あたしは、ぶしゅーっと顔が赤くなってしまう。
やっぱり頼もしい力持ちって素敵よね。
あたしたちは残りの暇をどうやって潰すかを考える。
というのも、大学の講義は９０分で１コマで、高校までと比べて格段に長い。
さっきの河毛教授の講義も、高校までと違ってかなり長くて、後半は河毛教授自身も疲れ始めていたのが見て取れた。
さて、教科書を買い終わったあたしたちは、暇をつぶすために、学校を見て回ることにした。
まだまだ、この大学の地理もわからないし、明日の午後からは実験の科目もある。
実験の科目では、「蓬莱の研究棟」に入ることになっている。
蓬莱の研究棟は、ＡＯ入試でも、昨日の作戦会議でも訪れた。
「おや、優子さんに浩介さん」
蓬莱の研究棟へ向かって言うと、向かいから歩いてきた蓬莱教授が話しかけてきた。
手荷物を見るに、おそらくは講義の行きか帰りかな？
「あ、蓬莱教授。こんにちは、昨日はお疲れ様でした」
「ああ。俺の呼びかけもあって、ようやく不老と不死の違いについて、みんな分かるようになってくれたよ」
蓬莱教授は、ホッとしたように言う。
「うん、それは良かったわ」
まあ、しつこく宣伝するのもいいわよね。
「あー、だがもう一つ、俺が懸念しているのは、例の宗教団体が、患者のケアをすると言っている点についてだ」
そう、例の牧師が、あたしたち協会のやり方に反発し、新しいＮＰＯ法人を作ってそこでＴＳ病患者の治療をすると言い出した点についてだ。
これまで、ＴＳ病患者は極めて珍しい難病とされてきたし、今でも極めて特殊な難病に指定されている病気になっている。あたしだっ

て、いや、永原先生だってずっと闘病生活をしているようなもの。
患者たちの多くが精神を病み、性別が変わるという負荷に耐えきれずに、自らの手で命を絶ってきた。
１００年以上もの積み重ねと試行錯誤の末に、ＴＳ病患者は、女として生きていくこと以外に、生き延びる道がないことが分かっている。
だからこそ、今までは実際にこの病気をくぐり抜けてきた患者たちで団体を作り、そしてあたしたち協会の独占で、この難病の治療を行ってきた。一朝一夕の素人集団に、適切な処置ができるとは思えない。ましてやあたしたちを敵視している団体に。
「連中には何もノウハウがない。それどころか宗教を信じているバカどもだ。協会でとっくに否定された治療法をしようとするだろう。そして案の定、患者は自殺する。そうなった時にさえ、おそらくは『神』などという虚構を言い訳にして、あるいは協会か俺をスケープゴートにして自己正当化を図るだろう」
「ええ」
蓬莱教授の話、リアリティがありすぎて、光景が目に浮かぶようで、めまいがしそうだわ。
あたしはふと、幸子さんの初期の頃を思い出す。
あれだって、あたしじゃなかったら間違いなく、幸子さんは今、みんなに悲しみを与えてしまっていたはずだわ。余呉さんだって、他の会員たちだって諦めかけていたものね。
そうならなかったのも、あたしが新しいカリキュラムを作り、自殺を食い止めたことにある。
「今、ＴＳ病患者の自殺率は急激に落ち始めている。間違いなく君の功績だ」
「ありがとうございます」
以前、男とも女ともつかないような暮らし方をして、最終的に自殺に追い込まれた患者さんがいた。
幸子さんの次にＴＳ病になった患者さんで、その子を例外とすれば、あたしが正会員になる以前の患者を除き、自殺者は出ていないし、

それどころかそうなりそうな患者さんさえいない。
何故かと言えば、従来行われていたカリキュラムにあたしの「準備段階のカリキュラム」を入れたのが、いいクッションになっていて、精神的負担が減ったこと。
この間ＴＳ病になった患者さんに至っては、「なっちゃったものは仕方ないし、かわいい女の子になれて嬉しいから、いっそ楽しもう」とポジティブに考えるようになっていた。
その子曰く、あたしの「女の子体験」で、女の子の人生の方が楽だと思えるようになったと言っていた。
いずれにしても、このような「積極タイプ」はもちろんＴＳ病患者の中でも稀で、あたしを含めて未だに数人くらいしかおらず、その全員が成績優秀として正会員になっている。
その子もノリノリで女の子になろうとしていて、カリキュラムでも思いっきりスカートめくられて恥ずかしがっていた。
今彼女は、毎日楽しそうに笑いながらお洒落して短いスカートをはためかせて女子高生生活をエンジョイしていて、「今はまだわからないけど早く彼氏作りたい」とも言っていた。
どちらにしても、その子はこれまでであたしの次くらいには成績がいい患者さんになりそうなので、将来の正会員候補と、早くも言われ始めている。
もちろん、この後彼氏を作り、男の子と恋愛をするためには「本能まで女の子にする」という大きな難題もあるんだけどね。でも管轄支部長さんの報告では、仕草の変わり方は遅いけど、言葉遣いの変わり方はあたしより早くて、カリキュラムの初期の段階でもうスラスラと女言葉が出ていたらしい。
あたしなんて、結構カリキュラム中言葉遣いで怒られていたのにね。あーでも、「女の子体験プログラム」分、カリキュラムの日程も後倒しになっているから、同列には比較できないのかな？
「しかし、蓬莱さん、今更新興の団体を立ち上げて、ホイホイ入ってくる人なんているんですか？」
「……連中は宗教だ。もし、その宗教を信じている家でＴＳ病患者が

出たら、おそらく、そちらを選んで死への道へと進むかもしれないな。理解に苦しむがな」
「困ったものですね」
「だがどうにもならん。かと言って、不老人たるＴＳ病患者が自らの手で死を選んでしまうというのは、とても悲しいことだ……どうしたものかの？」
蓬莱教授がため息混じりに言う。蓬莱教授がこんな態度を見せること自体が珍しい行為だった。
そう、とても悲しいこと。
「どうにかして、止められないのでしょうか？」
浩介くんも、宣伝部としてやはり内心忸怩たる思いがあるらしい。
「とりあえず、浩介さんを宣伝部員として、今はそのＮＰＯ法人へのネガティブキャンペーンを頼みたい。具体的には『ノウハウがない』というその点を攻めて欲しい」
「……分かりました」
浩介くんは蓬莱教授の宣伝部員として接触している。
「あたしも、その方向で行きたいと思います。広報部長として、今のことは会長にも伝えておきます」
「ああいいよ、俺が直接永原先生に伝えておく。優子さんの意向にもし異論があるなら、永原先生の方から連絡が来るだろう」
蓬莱教授が配慮するように言う。
「ありがとうございます」
「礼には及ばないよ。それよりも、優子さんの遺伝子のお陰で、研究は更に進みそうだ。じゃあ失礼する」
「「お疲れ様でした」」
あたしたちは、蓬莱教授と挨拶すると、残りの大学の講義を受けた。
そして、その放課後、桂子ちゃんから天文部への招集がかかった。
場所は、小さな小部屋で、少人数の講義に使われている部屋だった。
「――なるほどねえ。まあ、何とかなるんじゃないの？　今までも、うまく言ってたし、それに、最終的には女の子は女の子として生きていくべきっていう考えが勝つに決まってるわよ。だって、それ以外はみ

んな自殺しちゃってるんでしょ？」
桂子ちゃんは、ポジティブだった。
「ええ、でもやっぱり、患者の自殺率が減っている中で……極端な言い方かもしれないけど、殺人に等しいわよ」
あたしは、やはりあのことに怒りは隠せなかった。
「ま、明日昼に発表される高島さんの記事で全部決まるわね」
桂子ちゃんは、基本的に協会や蓬莱教授の情報をあたしたちと共有している。
もちろん、それはあたしたちが個人的に大きな信頼を置いているからだ。
「ええ、あたしが取材されて記事になるのは2度目よね。今度は『篠原優子』としてだけどね」
高島さんの取材で、あたしの人生の抱負について語られる。
そして結婚して、旦那さんといつまでもいつまでも過ごしていきたいという思い。
あたしは一般人だけど、容姿は特別にかわいいし美人で胸も大きい。
そのことが分かる写真を掲載してもらうことにした。要するに、「エロとかわいさで釣る」ことになった。
そして、「蓬莱教授の不老研究はこのかわいい女の子の将来の悲劇を回避するのに役立つ」と大衆に向けて印象付けられる。
あえてマクロ的なことを述べずに、こうしたミクロ的なことを強調するプロパガンダはたくさんある。
子供や美人の女性を使ったプロパガンダは、極めて効果的だ。目の前のことで目が曇り、長期的な判断力を奪ってしまう。
蓬莱教授に言わせれば「そのようなものに流されるのは哀れな奴ら」というが、世の中は蓬莱教授ほどに賢く理知的な人は殆ど0に等しいといえるわけである。だからこそ、蓬莱教授はノーベル賞を取ったとも言えるけどね。
果たして、翌日に載ったあたしに関する結婚記事で、インターネットの世論は一気に蓬莱教授側に傾いた。

# 永原先生の非情

インターネットニュースメディアである「ブライト桜」に掲載された「ＴＳ病の女性『愛する人とずっとずっといたい』」そう題された高島さんの記事。

そこにはあたしのウェディングドレス姿の写真があった。そう、これは結婚式の時に撮ったもの。

記事本文は、不老のＴＳ病患者の女の子にやがて男の子の恋人が出来たこと。

かつて怒りっぽい男だった人が女の子らしくなるに連れて、本気で男の人を愛するようになり、結婚に至ったという内容になっていて、あたしの男時代や、女の子になったばかりの頃のいじめについても書かれていた。

いわば、あたしの半生の記録みたいなものになっていた。もちろん、かなり簡単な内容だけれどもね。

最後に記事はこう締めくくる、「優子さんは、蓬莱教授の不老研究に一縷の望みを託している。『どうして宗教的なことで、あたしは愛する旦那との長い死別を受け入れねばならないのか』、優子さんはそう語っていた。我々は愛をずっと育みたいという彼女の思いを安易に否定していいのか？」と。

もちろんこの言葉は蓬莱教授の所の宣伝部長さんや、高島さん、そして永原先生などと相談して決めたものではある。

やはり、あたしのようにかわいくて美人の女の子が訴えるのと、その辺のおじさんおばさんが訴えるのでは、人々に与える印象は全く変わってくる。

浩介くんは５日分の蓬莱の薬を飲み終わり、念のため、蓬莱教授の検査機関で検査することになった。

特に異常は見られず、これから浩介くんは人の２倍以上の遅いペースで老化していくことになる。

また、桂子ちゃんも蓬莱の薬の治験に参加したいと申し出てきた。

これについては、あたしは特段驚くことはなかった。何故なら以前

から桂子ちゃんは天文部で不老のあたしを羨む発言を繰り返していたもの。
桂子ちゃんもまた、有志を募りたいとも言っていた。
蓬莱教授は「実験に際して、サンプル数が多いのは歓迎だ」と、桂子ちゃんの希望をすんなり受け入れてくれた。
こうして、桂子ちゃんも２００歳前後まで生きられる体になるだろうとのことだった。
だけど、すぐに３００歳の薬も完成するとのことで、この状態は短いだろうとのこと。
今後の蓬莱教授の展望としては、１年に１００歳のペースで寿命を伸ばしていきたいとも言っていたが、当の蓬莱教授は、「例え１０００年生きる薬を作ったとしても、それは不老の薬とは一線を画する者だから、まだもう一つ、我々は大きな壁を破る必要がある」とも言っていた。
果たして、あたしたちがそれを担えるかは分からないけど、蓬莱教授の研究に加われば、何か解決の糸口が見つかるかもしれない。
とにかく、蓬莱教授の研究に、あたしたちが望みを繋いでいるのは事実、今後も。

さて、そんなある日、今日は協会本部で緊急会合が行われていて、正会員全員の他にも蓬莱教授と高島さん、そして浩介くんも加わっている。もちろん議題は例の牧師が新しく開いた新しいＮＰＯ法人についてだった。
「皆さん、揃っているわね。緊急会合を開くわね」
タイミングが悪いことに、昨日再びＴＳ病で倒れた患者が現れたのだという。
しかも、運が味方しなった。というのも、その子が通っていたのはいわゆるミッション系の学校で、しかも野球部員だったという。
「それで、説得は出来ました？」
「……難しい状況よ。とにかく、宗教的な都合から、今回は私達ではなく、あちらの方を頼みたいとの一点張りでして」

「……馬鹿に付ける薬はないわね」
管轄の支部長さんの言葉に、永原先生が吐き捨てるように言う。
内心苛立っているようにも見える一方で、何かを思慮しているようにも思える。
「いいわ、ここは私たちは手を引きましょう」
「え!?」
永原先生のあっさりとした提案に、あたしたちは一様に驚きを見せている。
「しかし会長、前例がありませんよ。協会設立以来、把握した日本のＴＳ病患者は、可能な限り面倒を見るって！」
永原先生の言葉に、すかさず異論を唱えたのは、協会の副会長、天保生まれで今年１７９歳になるこの世で３番目に年上の比良道子（ひらみちこ）さんだった。
比良さんは元水戸藩士で、尊皇攘夷運動に参加していた筋金入りの武士の出身で、江戸時代のこともよく知る人だ。
「それは、私達以外に、この難病を克服させようとする個人や団体が現れなかったからですよ。性別が変わる上に、老いもなくなる。その特殊性から、私達がいままで独占してきたんです」
「ええ、知っています。ですが、説得が難しいからと言ってここで手を引くなんてダメですよ」
比良さんは、納得がいかない表情をして、永原先生に食い下がっている。結構珍しい光景よね。
「ええ、私もです。同じ患者として、彼女を見放すだなんて、容認できません！　仮に向こうに行ったとしても、私達も門戸を開くべきです」
そして、それに加勢したのは、比良さんより７歳年上の余呉（よご）さんだった。
彼女はもちろん正会員で、幸子さんが所属する東北支部長と、支部長の統括を兼ねている、事実上の協会Ｎｏ．３と言っていい人物だった。
「……やはり、２人とも、若いわね。若いっていいわね。でも、今はだ

めなんですよ」
「うっ……」
永原先生が、比良さんと余呉さんに、明後日の方向から無言の圧力のようなものをかけ、２人は何かを感じ取ったのか、少し引き気味になっている。
５０１歳の戦国生まれの永原先生が、１８６歳と１７９歳の江戸生まれの２人を「若い」と呼ぶ。
間違っては居ないけど、とてもシュールな光景よね。
「時に人や組織というものは、非情な決断をしないといけないことがあるのよ。今までは自殺まではなんとか手を尽くすという方向でしたが……もし、相手方が意思を変えないならば、むしろ私達は早くその患者が自殺に追い込まれるように工作をするべきだと思います」
「「……」」
永原先生の衝撃的な一言に、周囲も凍りついたように固まっている。
確かに、理屈の上では、あたしもその通りだと思う。
このまま相手が勢い付けば、もっと調子に乗られてしまうこと、教会の立場も危うくなること。
だからこそ、早期に自殺に追い込まれてくれれば、「やっぱり協会じゃないとダメじゃないか」という風潮になってくれる。
幸いにして、今回の患者さんは野球部で、しかも投手としてエースの座を争っていたらしい。
逆にいえば、難易度は「最高」と言ってもいい。
あたしたちが全力を尽くしたとしても、自殺を阻止できるとは限らない。
「……」
みんな子供ではないから、理屈では分かっている。
もしあたしたちが担当して、それでも失敗して自殺に追い込まれれば、相手はそれこそ針小棒大にあたしたちを糾弾してくるだろう。
それを思えば、むしろここはあえてこの患者を切り捨てて、長期的な視野で多くの命を救ったほうがいいと言うのは確かだった。むし

ろ、チャンスと捉えるべきという理屈も分かる。
だけれども、同志の少ないＴＳ病という患者の集まりにおいて、仲間を見捨てることは強い抵抗感がある。
以前までは、自殺が多くてそうでもなかったんだけど、あたしが新しいカリキュラムを作って以来自殺率が激減し、特に最近では積極的に女の子になろうとする患者さんも出てきた。
そんな中で、また自殺者が出てしまうことに、あたしたちの中で抵抗感が出てきたのも事実だったりする。つい2年前までは、自殺者が出ることは当たり前で、幸子さんが諦め気味に捨てられていたのを考えれば、隔世の感さえある。
「比良さん余呉さん、私にも気持ちは分かるわ。でも、綺麗事だけではうまくいかないのよ。特に、ああいった宗教的なものを信じている連中には、ね」
「会長、それでも――」
永原先生は、なおも食い下がる余呉さんに、静かに首を横に振った。
「余呉さん、あなたの生きていた太平の時代はそれでも良かったかもしれないわ。でも、私がかつて生きていた時代、私が使えていた真田家を含めて……人を騙し、裏切り、血で血を洗う……そんな時代だったわ」
永原先生は、遠い昔を見るような目で言う。
そうそれは、比良さんや余呉さんも知らない、遠い遠い戦乱の世のことを意識しての言葉だった。
「私は真田家の人間よ。だから、こうしたことも、生きていく上で必要なことだって嫌というほど知っているわ。私の主君、真田源太左衛門様もそうだった。武田左京大夫殿はあれほど対立していた村上左近衛少将殿と同盟して、真田源太左衛門様は領地を追い出されてしまったわ」
永原先生が、昔話をする。「武田左京大夫」と「村上左近衛少将」と言うのは知らない名前だわ。
「この戦いの直後、武田左京大夫殿は、実の子である武田大膳大夫様に追放されてしまったわ。そして真田源太左衛門様は武田家に仕え、そ

して村上左近衛少将殿と、再び何度も戦ったわ。そして最終的に、真田家は領地を取り戻したのよ」
武田と真田は、最初は敵だった。
それもあれほど領地を巡って争っていた村上と和睦して、連合軍となってまで追い出さしたいほどの相手だった。
しかし、武田の当主が代替わりすると見るや、真田は武田に仕え、最終的に旧領を取り戻した。
話の筋からすると、武田左京大夫というのは、武田信玄の父親のことだと思う。
「確かに太平の世は長かったわ。でも人間の本質というのはね、21世紀の現代にあっても、私が生きた戦乱の時代から全く変わってないのよ。私たちは自分たちのために、あるいは将来の患者さんたちのためにも、彼女を見捨てなきゃいけないのよ」
「……」
永原先生の、その決意に満ちた目に、あたしたちは何も言い返すことが出来なくなってしまう。
やっぱりあたしたちのリーダーは、彼女を差し置いて他に居ないということを思い知らされる。
「高島さん、分かっているとは思うけど、今の話はくれぐれも内密に頼むわよ」
「ええ、分かっています」
永原先生は、念を押すように、高島さんにも注意を向ける。
「会長は、それでいいんですか」
比良さんが、少し意味深につぶやく。
まさに、江戸の人と戦国の人の違いが、如実に現れているようにも見えた。
「俺は、永原先生に賛成だな」
蓬莱教授が、永原先生に賛意を示す。
「ええ、あたしも。悲しいことですが、視野狭窄に陥るべきではないと思います」
あたしが、ダメ押しのように援護射撃をする。

そう、それでもみんな、大人だから。非情と分かっていても、今回は患者さんを見捨てることになった。
しかし、本当に辛い議論はこれからだった。
「それじゃあ、どうやって早急に自殺に追い込むかについてだが」
蓬莱教授が、重苦しく言う。
そう、協会として、世間にさとられずにどうやって工作するか？
「まず、相手はどういうケアの仕方をするかだが……」
「ええ、彼らの今までの言動から、おそらく男と女で中間的存在にさせようとするでしょうし、場合によっては性別適合手術を進めるでしょうね」
永原先生が重苦しい顔で言う。
そう、間違いなくあたしたちへのアンチテーゼから、思いっきり間違った治療法をするに違いない。
……とすれば。
「ともあれ、マスコミの取材は殺到するでしょう。協会やその患者はマスコミ対策をしていますけれども、むしろ向こうは積極的に既存のメディアを使うと思います。ＴＳ病は取材対象として極めて貴重ですから」
高島さんが相手の作戦を推測する。
「だったら、俺の宣伝部の出番だな。そこの学校の裏サイトをまず特定する。あるいはＳＮＳでその人のクラスメイトのアカウントなども調べておこう」
蓬莱教授はまた、えげつないことを考えている。
そう、つまり、蓬莱教授の宣伝舞台はネットで相手団体及びその患者の誹謗中傷やいじめを行うというのだ。
「でだ、直接的な暴言や悪口だけじゃなくて『何々というのはどうかと思う』とか『どうして協会にしなかったんだろう』と言ったように、批判的感想も使うんだ。柔らかい批判と直接的な暴言を織り交ぜると、おそらく精神的負担も高まるだろうさ」
蓬莱教授が、半笑いで述べる。
やはり、蓬莱教授と永原先生が仲がいいのは、こういう所にあるん

じゃないかと思えてくる。
「ふむ、私も、マスコミとしてそれには賛成ですね」
高島さんも、蓬莱教授の作戦に賛成する。
一方で、比良さんや余呉さん、他の正会員さんは殆ど発言しない。
やはり、そうしたことを考えることに慣れていないという感じになっている。
「比良さん、余呉さん、罪に感じる必要はないわ。あたしたち協会を拒絶するだけならともかく、別の団体で治療を受けるなんて言い出すのは前代未聞のことですから。これはひいては将来の仲間を脅かす行為でもあるのよ。許しちゃダメ」
特に沈みがちだった比良さんと余呉さんに、永原先生が発破をかける。
「ええ、分かりました。私も水戸藩士です。主の信念に沿って行動します」
比良さんが決心したように言う。
「主」、かあ。比良さんらしい言葉よね。
「はい、私も。今の言葉で決心がつきました」
ともあれ、協会が再び一つにまとまったようでよかったわ。
同時に、蓬莱教授の研究に対する賛成者と寄付を募ること。更に抵抗運動の激化に備えて、佐和山大学の学長や理事会を更に傀儡化するための手法も、話し合われた。
それにしても、佐和山大学の学長さん、蓬莱教授にほんとうにいいようにやられていて、まさに軽い神輿そのものよね。
まあ、ノーベル賞取って全世界から注目されている大学教授相手じゃあ仕方ないのかもしれないけど。

## 分裂

ゴールデンウィークも間近に迫り、大学生活も軌道に乗ってきた。すべての科目を履修し終わり、学習に実験にレポートにと多忙ながらも充実した日々になってきた。

大学だけでも多忙だが、あたしたちにはそれぞれ別の仕事がある。浩介くんは蓬莱教授の宣伝部員としての、あたしは協会の広報部長としての仕事。

まあ、所属が違うだけで役割は似たようなものだけど、あたしの場合は幸子さんと歩美さんを「部下」として動かす必要があった。

「幸子さん、あたしの記事に対するネガティブ意見を述べるアカウントを監視しておいてください。歩美さんは主に掲示板での論争を記録しておいてください。まだ無闇に首を突っ込まなくていいわ」

「わかりました」

「ええ」

ＰＣを使って小規模なクローズドチャットを準備し、あたしは幸子さんと歩美さんにそれぞれ的確に指示を割り振っていく。

このチャット、「日本性転換症候群協会広報部チャット」は雑談もありつつ、協会の広報部として日々情報収集にあたっている。

ちなみに、永原会長、比良さん、蓬莱教授、高島さんの４人もこのチャットにログイン出来るけど、まだあたしたち以外にログインした人は居ない。

「それにしても、困りましたね」

歩美さんは、協会以外の支援機関が出来たことを憂慮していた。

「しかも、今度の患者さんは野球部、それもエースを争っていた投手でしょ？」

「ええ」

「ただでさえこのタイプは自殺率高いのに、文字通り自殺行為よ」

幸子さんは、患者のことを憂慮していた。幸子さんも、サッカーに打ち込んでいて、自暴自棄になっていたから、彼女の気持ちがわかっ

てしまう。
　特に、会長判断で、もし協会のカリキュラムを受けず、新興機関のカリキュラムを受けるつもりなら、ネットいじめなどを行って自殺を早めようということになったことに、反対していた。
「幸子さん、気持ちは分かるわ。確かに、長期的に考えればノウハウの差があるから、向こうは潰れるわ。でも、犠牲者を少なくするためには、これしかないのよ」
　これが漫画の世界なら、主人公が理屈を無視して少数を助けようとするだろうが、あいにくそれは漫画の世界だからこそ通るわけで、現実にそんなことをすれば被害が拡大するだけになってしまう。
　ともあれ、協会としては、蓬莱教授の宣伝部と連携しつつも、ＴＳ病に関する宣伝や広報を行っていきたいと思う。
「ねえ幸子さん、出来ればあなたのこと、高島さんに記事にしてもらいたいのよ」
「ええっ!?　私が？」
　チャットからでも、幸子さんは動揺しているのが分かる。
「ええ、幸子さん、一時は性別適合手術まで口走ったでしょ？」
「はい。今となっては恥ずかしくてたまらないわ」
　うん、それでいいわよ幸子さん。
「でも、これからの宣伝のために必要なのよ。昔は間違いなく自殺に追い込まれていたはずの幸子さんも、あたしたちのノウハウがあればこんなに女の子らしくなれるって、世間に知らしめられるのよ」
「でも、それなら優子さんの方がいいと思うわ」
「いいえ。あたしよりも、幸子さんの方がその宣伝に打ってつけなのよ」
「どうして？」
「あたしは、男だった頃のこともあるから、女の子になって直ぐに女の子らしく生きていこうと決めたわ」
「ええ」
「幸子さんはそうじゃないでしょ？」
「うん」

「だからこそ、協会のカリキュラムなら１００％の保証は出来なくても、こういう事例もありますよって言えるのよ」
「幸子さん、私も優子さんに賛成だわ」
ここで、歩美さんが加勢してくる。
「うーん、考えておくわ」
ともあれ、こんなことはしたくない。
そのためにも、もう一度、彼女とその一家を説得しないといけない。
あたしたちは、高島さんと連携することで一致し、チャットを閉じた。

「で、このように打つと」
「「おおー！」」
基礎実験担当は瀬田助教と蓬莱教授で、分からない事がある場合、２人のうちのどちらかに聞きにいく。
この実験は前半が主に講義と実演で、後半があたしたちが実験するという内容になっている。
この実験は２人１組でペアになるんだけど、蓬莱教授は面倒くさがりなのか、単純にあいうえお順でペアにしている。
なので、あたしのパートナーはいつも浩介くんだった。

「あの夫婦、すげえな」
「うん、いつもうまくいってるよな」

あたしたち夫婦は、既に佐和山大学では知らない人がいないくらいの有名人になっていて、周囲からもしょっちゅう噂話をされていた。
この前の高島さんの記事をきっかけに、あたしの噂は特に増した。
確かに、無理もないわね。

「さあ、今日の実験はここまでにしよう。いつものお願いだが、来週の前日までに蓬莱の研究棟までレポートを提出するように、解散」
蓬莱教授の号令と共に講義は解散となる。

蓬莱教授はせっかちらしく、授業の開始時間は守るが、終了時間は、早い意味でいい加減な人だった。

「優子ちゃん、今日は何を食べる？」

「うーん、コンビニでお弁当で」

「よしわかった」

小谷学園の時は学食か購買でパン、あるいはお弁当持ち込みという選択肢があったけど、結局購買は使わなかった。

今はコンビニで買うか学食を使うか、あるいはあたしが朝２人分のお弁当を作るかの３つの選択肢がある。

本当は、愛妻弁当を毎日作って一緒に食べてもいいんだけど、浩介くんが「優子ちゃんは勉強に加えて家事もあるから無理しないでいい」と言ってくれたので、今までは週に１回のペースになっている。

「ねえ優子ちゃん、今度のゴールデンウィークはどうしようか？」

浩介くんがゴールデンウィークについて話している。

「うーん、家でのんびりしたいわ」

「うん、俺も」

去年のゴールデンウィークは、花嫁修行を行い、義両親からあたしの評価が一気に上がった。

「去年は優子ちゃんが家にいたんだよな」

今は毎日一緒だけど。

「うん、懐かしいわよね。まだ１年しか経ってないのよね」

「ああ」

小谷学園の頃が、まるで遠い昔のことのように感じてしまう。

いきなり女の子にされて、浩介くんと一悶着の末に、あたしが恋に落ちて、彼氏彼女になって、遊園地で婚約して、文化祭で全校生徒と先生の前でプロポーズされて、卒業式と結婚式が同じ日で。

「色々あった高校生活だったわね」

「ああ、３年というけど、まるで１０年みたいだったぜ」

そもそも、優子になってまだ、２年経ってない。

１７年近い間、優一として過ごしてきた中では、優子としての人生まだまだ短いのよね。
「ま、思い出はこれからどんどん作って行こうぜ」
「そうよね、うん」

ブーブーブー!!
「あ、ごめん」
携帯電話が鳴ったので、浩介くんに背を向けてあたしは画面を確認する。永原先生からだった。
ちなみに、優一の頃から使い続けている数少ないアイテムだったりする。
ピッ
「はい、篠原です」
「篠原さん？　私だけど」
やはり電話の主は永原先生だった。
「永原会長、どうしたんですか？」
「例の子なんだけど、さっき家族と記者会見を開いて、『明日のＴＳ病患者を救う会』、通称『明日の会』でカウンセリングを行うと正式に通達を出したわ」
「……分かりました」
予想はしていたけど、やはり起きてほしくなかった。
いよいよ、全面戦争ね。
「それで、この前の緊急会合の通りに行うわ」
幸い、過去の患者データの書類は流出していない。
今は念のため、「蓬莱の研究棟」に保管退避させ、書類も蓬莱教授のみが開けられる金庫に入れてある。
「はい」
「篠原さんは山科さんと塩津さんに連絡して下さい」
永原先生は、予想通りという感じで、淡々と冷静な口調で話す。
「ええ、分かっています」
「じゃあ、頼むわね」

「はい」
ピッ
「優子ちゃん、誰から？」
携帯から手を離すと、浩介くんが話しかけてきた。
「例の子、向こうに行くみたいよ」
蓬莱教授の宣伝部に所属する浩介くんにとっても決して他人事ではない。
「なるほど、早速始めるか」
「あたし、幸子さんと歩美さんに連絡しないといけないわ」
あたしは、急いでご飯の残りを食べ、歩美さんと幸子さんにさっき話したのと同じ内容のメールを送る。
すると、２人からほぼ同時に「分かりました」という返事が届いた。
ともあれ、今は大学のことに集中しないと。
そう想い、あたしたちは、次の講義に向け、準備を開始した。
ゴールデンウィークには家で休むということになったので、その間にあたしたちの宣伝活動をする必要がある。
高島さんと幸子さんは、去年の女の子１周年記念パーティーと、結婚式の２回顔を会わせている。
とはいえ、あまり接点がないのも事実。
あたしが立ち会うことも考えたけど、高島さんが幸子さんの家に向かうことになった。

さて、あたしはあたしで、やるべきことをやらないといけないわね。
家に帰って夕食を取っていると、記者会見の映像が始まった。
「ＬＩＶＥ」の文字もなく、ノーカットではないので、編集されたものだとわかる。
「今回、どうして実績のある『日本性転換症候群協会』ではなく、『明日のＴＳ病患者を救う会』を選んだんですか？」
記者の人が質問する。
「はい、その、代表の牧師さんに心を打たれまして」
患者の母親がマイクを取る。

「神は必ず、俺を救ってくれる。そう信じれば、救われるんだと思います」
患者さんも、記者会見を開く。
可憐で高い声と容姿に似合わない一人称、普通は声との不格好に驚いて訂正しようとするものなのに……まず間違いなく、この牧師の差し金よね。
『日本性転換症候群協会』のやり方は、一面的に過ぎます。おそらく今回も、私たちのやり方には、必ず『前例がない』と言ってくるでしょう。ですが、私たちは聖書にあるように、神の奇跡を信じます」
頭が痛くなってくるわ。どうやったらここまで現実が見えない人間になれるのかしら?
「具体的にはどのようなケアをしていく予定ですか?」
「女として生きていくことを強要する『日本性転換症候群協会』と違いまして、我々は高度な柔軟性を維持して臨機応変に対応します」
何だか耳障りがいいだけよね。
「ありがとうございます」

「これ、要するに何も考えてない、行き当たりばったりで行きますってことだよな」
テレビを聞いていたお義父さんが、思わず突っ込む。
確かに、具体性が何もないものね。
……うん、これは使えそうだわ。
あたしたちは、記者会見での牧師の「高度な柔軟性を維持して臨機応変に」という言葉を攻撃することにした。

４月末、あたしたちは「明日の会」に対するネガティブキャンペーンを繰り広げると共に、幸子さんは高島さんの取材を受けて、記事になることになった。
その時に、あたしのエピソードも載せるため、あたしも少し、例のチャットで取材を受けた。
そして、明くる日のニュースブライト桜の記事になった。

そこには、死の一歩手前だった幸子さんの話が載っていた。
その中には、あたしが幸子さんをしつけとしてひっぱたいた話は載っておらず、「怒られた」という表現にとどまった。
実は、当初幸子さんはあたしにひっぱたかれたエピソードを載せようとした。
幸子さんは、「命に関わることだったから話すべきだと思う。死ぬよりひっぱたかれる方がマシなのは誰でも分かるから、やむを得ない」としたけれど、あたしと高島さんは「既存メディアが都合よく利用する危険性がある」として反対したため、この表現に落ち着いた。
さて、記事の最後の方で、幸子さんに片思いの男の子がいるということが書かれた他にも、あたしのカリキュラム改革で現在５０％を超えていた自殺率が急減していることも書かれており、もし例の患者さんが早期に自殺に追い込まれてくれれば、一気にあたしたちへの信用は増すだろう。
一方で、敵さんの方はと言えば、あたしたちのことを「既得権益にしがみつく団体」と批判する声明を発表した。
しかし、この協会は普通会員などに会費はあるが、カウンセリングそのものは無料で、自殺率を考えれば実際には蓬莱教授の寄付で辛うじて諸活動が持っている状況でもある。
最近になって蓬莱教授からの寄付金が増えた他、一般会員や維持会員も増えて会費収入も増えて、以前よりやりくりしやすくなったけど、決して「権益」と呼べる代物じゃない。
実際、会員増加に伴って、会費の値下げが現在検討中でもある。
一方で、向こうの方は有料でケアをすることになっている。
あたしたちはそのことをネチネチ攻めた結果、インターネットの世論は、一気にあたしたちの味方になってくれた。

「まあ、普通に考えたら協会一択だよな」
「第一あの牧師何も考えてねえだろ」
「そうそう、協会憎しって言うかね」

そして宣伝部による世論操作もバッチリで、「明日の会」を擁護する側は人格攻撃に逃げており、蓬莱教授の宣伝部や、あたしたち広報部が各個撃破している。
また、協会の方で改めてＴｏｒとＶＰＮを周知し、インターネット投票でも、圧倒的な大差を演出することに成功した。

「浩介たちはゴールデンウィークはどこか行かないのか？」
５月１日、お義父さんがそんなことを言う。
「うん、今年は忙しいしゆっくりしようと思って」
「５月病に注意するのよ」
お義母さんが注意を促すように言う。
確かに色々変わりすぎてるものね。
「浩介、お母さんたち３４５と居ないから、その間、お留守番頼んだよ」
「分かってるって」
両親が家に不在なら、この家は浩介くんが守ることになる。
浩介くんとあたしが２人きりになることはよくある。
でも、これだけ長い間不在になるのは初めてのこと。
「そうそう、２人とも。できちゃっていいからたっぷり楽しむのよ」
「もー！　お義母さん！」
また始まったわ。
「あはは、ごめんなさい」
お義母さんは、長い時間留守にする時はいつもこんな調子で、とにかくあたしを早期に妊娠させようと躍起になっている。
もちろんあたしも浩介くんも、蓬莱教授の研究のことから、今すぐ子供を作る必要はないことを知っている。
だから、新婚旅行から帰ってきた後はきちんと「装着」しつつ行っている。
浩介くん曰く、「気持ちよさは劣るけど、十分だし、何より優子ちゃんのためになる」と言っていた。
もちろん、おばあさんのことを考えると罪悪感はあるけどね。
ともあれ、あたしとしては、浩介くんと愛を深められればいいと

思っている。
　これからの3日間は、あたしはずっと、「娼婦モード」で過ごすことになる。
「優子ちゃん、どうしたの？　考え事？」
「え!?　あ、ああうん、そんな感じよ」
　浩介くんがあたしにささやいてきて、あたしはハッとする。
「ふふ、優子ちゃんも浩介くんの赤ちゃん妊娠する所、想像してた？」
「もうっ！」
　うちの母さんも暴走気味だったけど、こっちのお義母さんも負けていないわね。まあ、そんなこと言われて反射的に意識しちゃうあたしもあたしだけど。

「ふふ、お母さんも浩介を妊娠させられた時のことはしっかり覚えているわ。普段あんなに優しいダーリンの理性が吹き飛んで、まるで獣のように私は――」
　前言撤回、子供という意味ではお義母さんの方がはるかに暴走していたわ。
「だー！　お母さんやめて！」
　浩介くんが大きな声で抗議する。
「全く、孫が欲しい気持ちは同じだけど、いくらなんでもやりすぎだぞ」
　いつもはお義母さんと一緒にノリノリで妊娠を催促しているお義父さんも、これにはさすがに苦言を弄する。
「あ、あはは……ごめんなさい」
　お義母さんがしょんぼりしたようにうなだれて、ようやく話題が変わり始めた。
　とにかくあたしたちはあたしたちで、ゴールデンウィーク、するべきことをしつつたっぷり楽しみたいわね。

# 夫婦水入らずの2日間　ついついしちゃう2人きりの誘惑

「それじゃあ、お母さんたち行ってくるから、留守番頼んだわよ」
「はーい！」
5月3日金曜日、お義父さんとお義母さんが旅行に出かけた。
これからの3日間、あたしたちは家に残される。
もちろん浩介くんと2人きりですることとと言えば――
「あなたあ、もう我慢できないわ」
「お、俺もだよ優子ちゃん」
誰もいない広々としたリビングの中、あたしと浩介くんは至近距離で見つめ合う。
「んっ……」
ちゅっ
浩介くんと、もう何回目になるか分からないキスをする。
「ねえ、あなた」
「ん？」
「愛してるわ」
もう何回目になるか分からない愛の告白。でも、何回言っても言い足りることがない、これについては、いつまでも欲求不満になると思う。
「俺も」
浩介くんが赤くなる。
愛の告白は、何回目だって、慣れるものではない。
「浩介くん、あたし着替えてくるわ。覗かないでね」
「おう」
あたしは、パジャマのままだった。
何故ならこれから浩介くんが一番喜ぶけど、義両親には見せたくない服を着るから。
あたしは、まず部屋の鍵とカーテンを閉める。

部屋は薄暗くなっちゃったけど、浩介くんに覗かれないために警戒は続ける。
あたしが下着も含めてすっぽんぽんになっている時、ガタガタと扉を開けようとする音が聞こえてくる。
「浩介くん、覗かないでねって言ったわよね」
「うー！　優子ちゃんの生着替え見たいの！」
扉越しに、浩介くんが子供みたいに駄々をこねている。
「ダメよ。浩介くんだからこそ、大好きな旦那だからこそ恥ずかしいのよ」
あたしは純白のブラとパンツをつけながら扉の向こうの浩介くんに応対する。我ながら、結構流れるようなながら作業だったと思う。
「うー！　俺だって男なんだぞ！　いいじゃんか夫婦なんだし！」
「あたしは、好きな人だから恥ずかしいってタイプなの！」
あたしは、夫婦生活の時も、浩介くんに触られたり脱がされたりすると、顔が真っ赤になってしまう。
恋人や夫婦なら別に恥ずかしくないという女の子は多いけど、あたしは逆のタイプだった。
相変わらず、露出の多いこの服を着て思う。
あたし、恥ずかしがり屋なのに痴女よね。浩介くん限定だけど。
ガチャッ
あたしは、全て着替え終わってから扉の鍵を開ける。
「あなた、おまたせ」
「うっ、優子ちゃんエロい……」
あたしのこの服を見た浩介くんの反応はいつもウブで、むくむくと元気一杯の体になっていくのが分かる。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
浩介くんが一気に鼻息を荒くする。
あたしは、ちょっとだけ意地悪を思い付く。
「ふふ、まだだめよあなた」
「えっ、どうして――」
「まだこんなに明るいもの、これから家事をして、お昼御飯食べ終わっ

たら、たっぷりお相手してあげるわよ」
あたしが、いつもよりちょっとだけ声を高めに、耳元でささやくように言う。
あたしは、むくむく育った浩介くんの下半身から目を離せなくなる。
浩介くんも、あたしの胸から目が離せなくなっている。
「あなた、どこ見てるの？」
色っぽい声で、浩介くんに語りかける。
「ゆ、優子ちゃんこそ！　さっきからここばっかり」
「ふふ、太くて固い浩介くんの肉体、あたし大好き」
もう、見とれてうっとりしちゃうわ。浩介くん、また筋肉質になったのね。
「優子ちゃん、やっぱりメスだよね」
浩介くんの優しいその声に、あたしは続々してしまう。
「うん、本能だもの」
しばらく、見つめ合う。
お互いに喋らない時間、とても長く感じるけど、多分短い時間だと思う。

「じゃあ、あたし家事あるからね」
あたしは、沈黙を破る。
「あ、あの！」
「うん？」
浩介くんが、またギクシャクしながら何かを言いたそうにしている。
「スカート、めくってもいい？」
「家事の邪魔をしない範囲でね」
いつもは聞かれないで勝手にめくられるけど、改めて聞かれると恥ずかしいわ。
「あ、ああ」
この服で、浩介くんが理性を保つのは困難なはず。

はてさて、いつまで持つかしら？
ここまで焦らし続けていれば、昼までには襲われちゃうよね。
あたしは、浩介の横を通り抜けて洗濯機のある脱衣場を目指す。
　ぺろんっ
「いやーん！」
　めくられる身構えが出来ていたのであたしは気持ちを込めて恥ずかしがる。もちろん、パンツ見られちゃうのは恥ずかしいことには変わりないけど。
「うっ、優子ちゃん反則……」
「ふふっあなた、我慢してね。抜くのもダメよ」
「うぐぐっ分かった」
　あたしが甘く言うと、浩介くんが必死に理性を手繰り寄せようとする表情をする。
　あたしは、そんな浩介くんを尻目に、階段を上がって洗濯機に向かう。
「優子ちゃん白いパンツ丸見えー！」
「やー！」
　浩介くんに叫ばれて、あたしはスカートを必死に抑えた。
　あたしについていく浩介くんの足跡をバックに、お風呂の脱衣場にたどり着く。
　あたしは洗濯機を開けて、服をかごに入れて――
「じー」
「きゃー！　えっちー！」
　浩介くんが床に仰向けに寝て、あたしはスカートの中を覗かれた。
「えっちなのは優子ちゃんの服だろ？　うーん素晴らしい絶景だね」
「もうっ！　浩介くん、どいて」
　あたしはスカートを抑えて前屈みになりながら、かごを持って浩介くんを見下ろす。
「えー、いいじゃんかパンツ見るくらい」
　浩介くんが不満そうに言う。
「やだよ」

「どうして？」
「こんな服でもパンツ見られるの恥ずかしいからよ！」
「へいへい」
　ぺろっぴらっ
「やだー！　やめて！」
「ふひひひひ、優子ちゃんかわいいよ！」
　両手がふさがっているのをいいことに、あたしは立ち上がった浩介くんに前から後ろからスカートをめくられる。
　あたしのこの反応も、浩介くんを喜ばせるために今までずっと磨いてきた。
　でも、ミイラ取りがミイラになるね、恥ずかしさを表現しようとすると、演技っぽくしても、最後には本当に恥ずかしくなって、あたしの方が赤くなってしまう。
「こ、浩介くん。家事の邪魔だから！」
　恥ずかしくてたまらなくなったあたしが、最後の切り札を出す。
「うっ、わ、分かった」
　浩介くんも、さすがにやりすぎたと思ったのか、すんなり手を引いてくれた。
　あたしはリビングに移動し、昨日の洗濯物を干す作業に入る。
　ちなみに、あたしの下着も干す必要があるけど、近所のことも考え、お義母さんのも含めて、女性の下着はお義母さんの部屋で干すことになっていて、その間、浩介くんは侵入厳禁にしておく。
「ねえ、優子ちゃんの下着干してる所見せてよ」
「だーめ」
　浩介くんのわがままを却下し、あたしは下着を隠しつつお義母さんの部屋へ。
　内側から鍵をかけてあたしたちの下着を干し、残りは天日干しにする。最も、この間にドアを開けられたら結局ダメだけどね。
「ねえ優子ちゃん、どうして干してる下着見せてくれないの？」
　浩介くんが疑問を挟む。
「もちろん、あなたをムラムラさせるためよ。いつまでも、あたしを

えっちな目で見てもらうためにも、気を緩めちゃダメよ」
「でもよ、優子ちゃんがつけてるからこそ、下着って輝くじゃん」
浩介くんが熱弁する。
「うっ、確かにそうかもしれないけど」
浩介くんの気持ちが分かっちゃうのがまたあたしの悲しい元男の性。
「例えば、こうやって」
ふぁさっ
「きゃあ！」
浩介くんに、また前からスカートめくりされる。
ちなみに、恥ずかしくて抑えているけど、浩介くんの力が強くてスカートがめくれたままになっている。
「優子ちゃんのスカートをめくってパンツ見るでしょ？」
「う、うん」
「優子ちゃんは恥ずかしがるでしょ？」
浩介くんにパンツをじろじろ見られた上によく分からない解説までされる。
「優子ちゃんのえっちな所を包み込むこの真っ白なパンツ、パンツに覆われてない太ももやお尻、あるいはスカートの長さ次第ではパンツの上のおへそとか。そういうのとセットで魅力があるわけだよ」
浩介くんにスカートをめくられながら、あたしはパンツの魅力について熱弁される。
慣れないシチュエーションに、あたしの身体の湿度が大変なことになっている。
「だから、別につけてない下着見てもあんまり感じる所はないのよ」
浩介くんが熱弁し終わると、ようやくスカートを元に戻してくれた。
「そ、それならどうして見たがるのよ？　何も感じないんでしょ？」
あたしが思わず突っ込みを入れる。
「いやほら、優子ちゃんが隠そうとするのがかわいくて、悪いと分かっててもつい見たくなっちゃうんだ。ほら、1回だけってやつ」

浩介くんがまるで小学生みたいな理論を言う。
「もー、浩介くん子供だよね」
あたしは、洗濯物をハンガーにかける作業をし始める。
「あはは、でも、優子ちゃんいつも満更でもないよね」
「う、うん……」
結局、あたしもえっちな女の子何だと思う。
すりすり
「ひゃう！」
こうやって、浩介くんにスカートの中に手を入れられてお尻とパンツの感触を味わわれても、払い除けようとはしないもの。
「優子ちゃん、少し手伝おうか？　もちろん、足を引っ張らない範囲でだけど」
「あ、うん。じゃあ山になってる服をばらしてくれる？」
「ああ」
浩介くんが、必死に性欲と戦いつつ、家事を手伝ってくれる。
そう言えば、浩介くんが家事を手伝おうとしたのはこれがはじめてだった。
「そう言えば、浩介くんが手伝うのはじめてだね」
「あーうん、優子ちゃんと結婚する前は結構手伝ってたんだよ」
確かに、普段はお義母さんもいるし、男手が必要になるシーンがなかったので、浩介くんに手伝いを頼む場面そのものがなかった。
今は義両親は旅行中だもんね。
「そうなんだ」
「昔は料理も手伝ってたんだけど、失敗続きで足引っ張っちゃって、『浩介がいるとかえって遅くなるから台拭きと食器並べだけでいい』って言われて」
「あはは、ひどいわねお義母さん」
手伝ってもらってそれはないような？
「でも、お母さんの言う通りだぜ。マイナスよりゼロの方がいいに決まってるじゃん」
「うーん、言われて見れば確かにそうよね」

浩介くんがごもっともな正論を述べる。
この事例にとどまらず、男性が家事を手伝おうとして、かえって足を引っ張っちゃうというのは、それこそ日本中でゴロゴロ転がっているだろう。
ここで女性の方が「マイナスになるからいらない」と、男性の家事をやめさせることを、あたしは責めることは出来ない。
だって、「マイナスよりゼロの方がいい」何て当たり前の話だし、「無能な味方は敵より怖い」とか「無能な働き者が一番いけない」何て言うものね。
それを考えれば、浩介くんみたいに「足を引っ張らない範囲で手伝う」というのは、とってもいい心構えだとあたしは思う。
「はい、出来たよ。干すのは優子ちゃんがする？」
「うん」
浩介くんがあたしの大胆に露出した胸を見ながら言う。
洗濯物をハンガーにかけおわったら、あたしはベランダに出て洗濯物をかける。
心地いい風があたしを包み込む。
超ミニのフレアスカートが風にめくられて、浩介くんにパンツを見られているけど、今は家事に集中しなくちゃ。
「浩介くん、洗濯物取ってくれる？」
「おうっ」
浩介くんが洗濯物を取ってあたしに渡してくれる。
あたしはベランダから物干し竿にハンガーをかける。
「優子ちゃん、さっきからパンツ見えてるよ」
「もー恥ずかしいから言わないで！」
「いやその……」
浩介くんが言葉に詰まっている。「目は口ほどに物を言う」ということわざがあるけど、ギンギンになっている浩介くんを見ていると、下半身の方がよっぽど口ほどに物を言うわよね。
「さて、今週もお掃除軽くやりましょう」
あたしは、掃除機を用意し、今日掃除する予定のリビングに戻る。

「ゆ、優子ちゃん」
「ん？」
「俺、そろそろ限界なんだけど」
浩介くんが鼻息を荒くして言う。
「ふふっ我慢してね、抜いたらただじゃおかないわよ」
「そ、そんな……」
必死に襲いかかるのを我慢している様子だけど、焦らせば焦らすほど、浩介くんが強引になってくれるので、もちろん焦らす。
あたしは掃除機のボタンを押して、掃除を始める。
掃除機の音が部屋中に響き渡る中、あたしは床に掃除機をかけていく。
机の下も忘れずに……
「はぁ……はぁ……」
ぺろんっ、さわさわ……
「いやあん！　もう！　浩介くん、家事の邪魔はしないでよ」
「そんなこと言ったって……無理だって、優子ちゃん、こんなにエロいんだもん！」
浩介くんが開き直る。
嫌いじゃないわ。
「ちゃんと我慢してあげるのも旦那の勤めよ」
「はーい……」
もちろん、これは建前でしかない。
あたしは、浩介くんに無理矢理襲われたくて堪らない。
結婚初夜にも、あたしは「浩介くんの従属物のような扱いを受けたい」という感情に襲われた。
その時に、あたしは激しい自己嫌悪に陥って、浩介くんがフォローしてくれた。
「今日は妙に焦らすよな」
「ふふったまにはいいでしょ？　一気に焦らせばその後が気持ちいいんじゃない？」
あたしは、あの後自分の感情に向き合って、ある程度の整理が出来

たと思っていた。
でもそれは違ったのよね。
あたしは、愛する浩介くんへの被支配欲望と向き合えていなかった。
先送りにし続けた結果、今のあたしは浩介くんにレイプされて肉体的にも精神的にも、浩介くんに痛め付けられたいとさえ思ってしまっていた。
こうして、今してるのも、自己嫌悪と表裏一体なのよね。
レイプは、「心の殺人」とまで言われていて、殺人や強盗、放火と同じ、重大犯罪に位置付けられている。
実際、レイプされて精神を病み、生活に支障をきたしてしまった女性はたくさんいる。
それなのに、あたしはそんな最低な犯罪の被害者になりたいと思ってしまっている。
掃除しながら、あたしは申し訳ない気持ちで一杯になる。
浩介くんにレイプされれば、多分普段以上に気持ちよくなれる気がしたから、余計に罪悪感が溜まってしまう。
この悩みを浩介くんに打ち明けることは出来ない。
いや、いくら男がバカで単純な生き物と言っても、もしかしたら薄々感付いているかもしれない。
「ふぅ……」
あたしは、リビングの次に、自分の部屋に掃除機を持っていくため、コードを引っ張る。
「ゆ、優子ちゃん、掃除機、も、持ってあげようか？」
浩介くんがどもりながら言う。
「うん、ありがとう」
すりすり
「んぁ！　浩介くんのえっち！」
浩介くんに、またスカートの中に手を入れられ、さっきよりもしっこくパンツを触られる。
「第一、そんな露出高い服着てるのが悪いんだ」

「うっ、とにかく、あたしの部屋まで運ぶわよ」
文面だけ見れば痴漢の言い訳だけど、今のあたしのレベルでの露出じゃ言い訳出来ないわね。
あたしは、自分の部屋で掃除機をかけ始める。
ここは、床に置いてるものを一旦どかしたり、机の下や家具近くの隙間で掃除機の先端を取り替える都合上、かがみこむことが多く、その度に浩介くんにパンツや胸の谷間を凝視されてしまう。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
浩介くんの息が更に荒くなる。
ああ、今レイプされたら、快感のあまり死んじゃうかも。
「ふぅ、お掃除おしまい」
あたしが、掃除機を壁にどけて、ベッドに置いてあったものを床に戻す作業をしていた時だった。
「うがあああああ!!!」
突然、浩介くんが叫んだかと思えば、あたしは身体を押される感覚と共に、ベッドで仰向けに倒されていた。
胸が大きく揺れ、スカートがまくれあがるのを感じた。
「こ、浩介くん?」
浩介くんの目が、血走っていた。
「もうーー我慢ーーできねー!!!」
浩介くんが、乱暴にあたしの服を掴む。
「浩介くん、お願い、まだお昼――」
「はぁ、はぁっ……」
あたしの懇願は無視され、浩介くんに最低限しか隠していないトップスを脱がされ、素早くブラジャーを下ろされる。
「こ、浩介くんやめて!」
あたしが、嘘をつく。
浩介くんは何も答えず、あたしに手を出し続けた。

# 夫婦水入らずの2日間　優子の罪悪感

「はぁ……はぁ……はぁ」

あたしは、蹂躙された快感でいっぱいだった。今までは、優しくぎゅーっと抱きしめて体を温める感じだけど、今回のはとにかく浩介くんの力で、あたしを支配するような感じだった。

同じぎゅーっと抱きしめて体を温め合う行為でも、全く違う。

あたしは快感のあまり何度も何度も失神し、涙を流し、最後はおもらしまでしてしまった。

おもらしなんてそれこそ小学校低学年以来で、もちろん優子になってからはない。

……女の子初日が、ちょっと危なかったけど。いずれにしても、今まで以上に恥ずかしくて、激しい時間だった。

「うー」

一方の浩介くんは、さっきから罪悪感にうなだれていた。

浩介くんは知ってか知らずか、無言であたしを蹂躙し続けた。

最後の方で「本当は優子ちゃんも嬉しいんだろ？」とか「無理矢理されたがってるって、身体は正直なんだな」とは言っていたけど、大半は無言で無我夢中だった。

いつもの夫婦生活では、浩介くんはやり過ぎなくらい丁寧で優しくて、あたしのことを第一に考えてくれていたのに。

でも、今回は有り体に言えばレイプだった。

浩介くんは、欲望のままに妻を無理矢理犯してしまったことになる。

「ねえ、浩介くん」

「な、何？」

「ありがとう」

「ど、どうしてお礼なんか!?」

あたしの言葉に、浩介くんが驚いている。

「あのね、落ち着いて聞いてくれる？　あたしね、ずっと浩介くんにレイプされたくてされたくて堪らなかったの」

あたしは、気持ちを正直に伝える。
「え!?」
浩介くんが驚愕の声をあげる。
無理もないわね。普通そんなこと言われたら、誰だって動揺するもの。
「自分でもおかしいと思うわ。だって普通、レイプは重犯罪で『心の殺人』何て言われているのよ。それをされてみたいだなんて。変態じゃない」
あたしは、やや悲痛な思いで口を開く。
「優子ちゃん……」
浩介くんは、何かを考えている。
「浩介くんが罪に思う必要はないわ。あれだけ誘惑したら、誰だってああなるもの」
「そ、そうかも知れねえけど……」
浩介くんはまだ、うなだれたままだった。
「浩介くん、よく考えてみて？　これは、どう考えてもあたしが誘惑したせいよ。レイプだったとしても、浩介くんに何の罪はないわ」
法律が変わったらしいけど、たとえ誰であろうとも、今の強引にきつく抱きしめあった行為で浩介くんを捕まえる権利はない。
「……」
あたしの言葉に、浩介くんは、何かを思慮している。

「俺は、さ。考えたんだけど」
「うん」
しばらくすると、浩介くんが顔を上げてあたしに話しかける。
浩介くんは迷いが晴れたきっぱりした表情になっていた。
「優子ちゃん、別に異常ではないと思うよ」
「え!?」
浩介くんならそう言いそうだけど、それでも、意外な言葉だった。
「だって、優子ちゃんは誰彼構わず無理やりされたくてされたくて……何て思ってはいないんでしょ？」

「う、うん……浩介くんにだけよ」
　それもまた、あたしは確信して言える。
「だったら、普通じゃないの？」
　浩介くんは、あたしを励まそうとお世辞を言っているという訳ではない。
「優子ちゃん、女の子じゃん？　女の子なら、誰だって『好きな男に守られたい』って思うの、1度や2度じゃ無いでしょ？」
「うん、だってあたしが浩介くんを好きになったのだって」
　浩介くんに守られたから。
「だろ？　『守られたい』、『庇護下に置かれたい』って気持ちが、『支配されたい』『征服されたい』って気持ちに発展するのは自然なことじゃない？」
　浩介くんがゆっくりと、しかし理路整然とした感じで言う。
「そもそも、『好きな人の赤ちゃん欲しい』だって、要するに『子種を植え付けられたい』って欲求じゃん？」
「う、うん……」
　確かに、間違いではない。いくらコウノトリがどうこう言っても、子供はそうして作るものじゃない。
「そうした欲求が高ぶれば、『レイプみたいに無理やりされたい』と思うのも当然だろ？　好きな人だからこそ、そう思う訳なんだから」
　浩介くんが冷静になる。
「うん」
「誰彼構わずじゃなくて、俺にだけ向けているなら、それでいいんだ。俺は、優子ちゃんの全部をを受け入れるって言っただろ？」
　浩介くんがまた、頼もしそうに言う。
「うん」
「もしまた、俺に無理矢理されたくなったら……また優子ちゃんをレイプしてあげるよ。俺と優子ちゃんだけの秘密だ」
「うん、ありがとう」
　浩介くんとの夫婦生活自体が2人だけの秘密だけどね。
「でも、嫌な時はちゃんと『今はそういう気分じゃない』って言うんだ

ぞ。特に優子ちゃんは名前の通り優しい女の子だから、我慢しがちだろ？」
「うーん、確かにあたしは従順ならモテるって言われたし」
「もちろん、それは優子ちゃんの長所でもあるよ？　気が強くて自己主張激しいのは嫌われるさ。でも、これは一歩間違えれば『心の殺人』になりかねないんだから」
「うん」
やっぱり、浩介くんはとっても責任感が強いわね。
もしこれが優一を含めた他の男なら、こんなこと打ち明けられたら喜んで性欲のままに妻をレイプし続けると思う。
でも、まだあたしには不安点がある。
「うん、でもさっきもだけど、あたし口では『嫌』とか『やめて』って言ったけど、実際はされたくて堪らなかったでしょ？　その辺りのずれはどうしようかしら？」
「うーん、信頼関係っていう曖昧なので済ませたくないよなあ……」
浩介くんも悩んだ顔をしている。
よっぽど長年連れ添っているならともかく、あたしたちはまだ新婚夫婦で、しかもこういうことをし始めたのは結婚してからで、今は珍しい処女童貞の夫婦だった。
それ自体は、あたしたちにとって大きな自慢だけど、裏を返せば、あたしたちは他のカップルに比べ、格段に経験値が不足しているということでもある。
「でだ、俺が思うに、もし本当に嫌な時は『本当に』を頭につけるんだ」
浩介くんが提案する。
さっきのことを思い出すと、あたしは「嫌だ」「やめて」という嘘はついたけど、「本当に嫌だ」「本当にやめて」とは言っていない。
「それから、背中を素早く叩いてギブアップの仕草も取り入れよう。そしたら、俺もいつものように優しくするよ」
「うん、あたしも、無理矢理されたくなったら、今日みたいに『まだダメ』って焦らしながら誘惑するわ。この服を着てても、焦らしてなかったらいつものように優しくお願いね」

あたしも、建設的な提案を出す。
「ああ、分かった。ところで、着替えないの？」
「ふふ、今日はこの服で通すわよ。浩介くん、家事の邪魔しなければ、エッチなこと、してもいいわよ」
もう襲われちゃったので、解禁してあげることにした。浩介くんも、さすがに枯れちゃってると思うし。
ちなみにパンツも本当は取り替えたほうがいい感じなんだけど、浩介くんが喜ぶメスの匂いが付いてるので、そのままにしている。
「お、おう……でも、丸一日その服だと俺、干からびちゃいそう」
「ふふ、本当は干からびたいのは浩介くん何じゃない？」
「あはは、確かにそうかも」
あたしの悪戯チックな言葉に、浩介くんが笑顔になる。
「じゃああたし、お昼作るわね」
「おう」
あたしはベッドから立ち上がり、まず掃除機の回収に向かう。
「優子ちゃん、俺が持つよ」
「ありがとう」
浩介くんが片手で掃除機を持つ。
「その代わり」
「？」
ぺろりっ
「きゃあ！　浩介くんのえっち！」
あたしは前からスカートをめくられる。
慌ててスカートを押さえるけどもちろん浩介くんからは丸見えになっている。
「家事のお手伝いはスカートめくりの報酬でね」
「あうー恥ずかしいよお……」
こうして、「浩介くんに家事のお手伝いを頼む時は、スカートをめくられてパンツを見られること」という我が家の新しいルールができた。
「じゃあ、お料理中は危ないから本当にやめてね。我慢が難しそうな

ら部屋にこもるといいわよ」
「ああうん、ありがとう。でも、さっき思いっきり優子ちゃんに抱きしめられた時に、体全体がきつく絞られたあとだから大丈夫」
「もー、たった今スカートめくりしたの誰だっけ？」
「ああ、うん、あはは……部屋に戻るわ」
浩介くんがばつの悪そうな表情で部屋に戻る。
あたしは1人でご飯を作る。
今日明日明後日と、あたしと浩介くんはたっぷりいちゃいちゃする予定なので、パワーとエネルギーを考えた食事として、あたしは「肉うどん」を作ることにした。
「ふぅ」
料理を作りながら、あたしはさっきのことを考える。
浩介くんのことを信頼していたし、責任感の強い浩介くんだからこそ、こうした行動を取れたけど、普通なら、下手すれば夫婦関係に重大な亀裂が入りかねない所だった。
普通の夫婦なら、年老いていくと共に性欲も衰えて、もし妻が夫にこうした願望を持ったとしても、押し殺したままにできたかもしれない。
でも、あたしたちはそうもいかなかった。
もしこのままだったら、何処かで歪みになっていたかもしれないから。
「ふう」
肉うどんを作りながら、あたしは早くにこの問題が解決してよかったと思い続けた。

「あなたー！　もうすぐご飯出来るわよー！」
「はーい！」
大きな声で叫ぶと、すかさず浩介くんが飛んでくる。
あたしは大急ぎでうどんを盛り付ける。浩介くんの分はお肉を山盛りにする。
「浩介くん、はい」

あたしがお盆を持って浩介の座る机にうどんを置く。
「うおっパワー出そう！」
「ふふっいっぱい元気になってね浩介くん」
「うん、いただきまーす！」
「いただきます」
あたしたちは肉うどんを食べる。
これからあたしたちは、何度も激しい運動をする必要があるため、お昼にエネルギーを補給しなくてはいけない。
「ふぅ、やっぱり優子ちゃんの手料理美味しいなあ」
「ふふ、ありがとう」
浩介くんは、あたしの料理が大好き。
最も、体はもっと好きみたいだけどね。

「ふぅ、ごちそうさま」
浩介くんが一足先に食べ終わる。
浩介くんがうどんのどんぶりを流し台に持っていく。
あたしも、既にほとんど食べ終わっていた。
浩介くんはというと……
「優子ちゃんのパンツ、やっぱりエロいよね」
「きゃ！　浩介くん！　パンツ見ないで！」
普段から足を閉じてるけど、この短さだと、どうしても見えてしまう。
「うおー恥ずかしがってる優子ちゃんかわいー！」
「あうあう……」
「ま、さっきうどんのどんぶりを運んだ代金ってことで」
残りの昼食時間は、浩介くんに、机の下からパンツを鑑賞されながら過ごした。

「優子ちゃん、一緒に遊ぼう」
昼食後、浩介くんがあたしの胸を触りながら言う。
「もー、触りながら言わないでよー！」

「にしてもさ」
「うん？」
「優子ちゃんのその服、お腹回りもエロいよね」
「え!?」
浩介くんが意外な言葉を言う。
確かにこの服は胸やスカートの短さに加えお腹回りもへそ出しでエロい。
確かにそういう属性もあるけど、あたしの場合、胸が規格外に大きいので、人一倍大きなお尻でさえ目立たない。
ましてや胸に隠れがちなお腹に注目が行くことは殆ど無いと言ってもいい。
「いやさ、優子ちゃんって健康的で天然な感じでエロいのよ。この服、露出を極限まで高めるためにへそ出しじゃん？　お腹回りが丸見えで、男からするとエロいのよ」
確かに、あたしはお腹回りも無理に引き締まっていると言うよりは、程よく肉がついていて、「むっちり」という感じの体でもある。
男受けはそっちの方がよくて、ウエストが痩せすぎていると、元気な赤ちゃんを産みにくい印象を与えてしまう。
なので、体重が５０キロを超え続けていても、あたしは全く気にしていない。
むしろ、５０キロを切ったら体重を増やしたいとさえ思えてくる。
「こうさ、エロい優子ちゃんを見てると理性が崩れるのってさ」
「うん」
「こう、体つきが子供を産んで育てるのに向いてるって言うの？　子孫を残すのに最適って言うかさ」
浩介くん、思いっきりオスの視点よね。
「うん、安産型とはよく言われたわ」
「多分わかってるとは思うんだが、男はそういう女を見ると無意識でも性欲が沸くんだよ。ましてやそれが愛する妻だぞ！」
「うん、浩介くんの気持ちは分かるわ」
「というわけでさ、まだちょっと肉体的なエネルギーは回復してない

けど、精神的にはしたくてたまらないんだ」
いつぞやの浩介くんの言葉に、あたしも頷く。
「うん、あたし、あなたの嫁だから……浩介くん、来て……」
「ああ」
自然と、顔が近付く。
「んっ……ちゅっ……じゅる……ちゅぱ……」
「ちゅぅ……れろっ……じゅうぅぅ……」
激しく求め会うキス、やがてどちらからともなく唇が離れ、唾液の糸ができあがる。
「今日のうどん、とっても美味しかったよ」
「何？　どうしたの急に？」
「だけど、俺、まだお腹空いてるんだ」
「もう、食いしん坊ね。夜まで待って」
浩介くんが言いたいことは分かるけど、あえて気付かないふりをする。
「大丈夫、目の前に美味しそうな女の子がいるからね」
「えー、あたし食べ物じゃないわよ」
「優子ちゃんを食べちゃいたいなあ……」
「もう、何言ってるのよ！」
さっきとは打って変わって、今度は浩介くんに優しく押し倒され、トップスを脱がされ、更にスカートをゆっくり上までめくられて、パンツとブラが浩介くんに丸見えになる。
「さ、優子ちゃんを隅々まで食べてあげるね」
「お、おてやわらかにお願いします」
「ふふっいただきまーす！」
ご飯を食べる時のように、あたしは浩介くんに「いただきます」をされて、たっぷりと浩介くんに「食べられて」しまった。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
あたしは、顔が浩介くんの唾液でいっぱいにされ、足の指先まで、髪の毛意外の全身を、くまなく食べられてしまった。

一番美味しそうな場所を、最後までとっておかれ、徹底的に焦らされたために、あたしは何度か気絶させられてしまった。
まさに、オスがメスを食べる。そういった感じの行動だった。もちろん、本当の意味で食べられちゃったわけじゃないけどね。
でも、さっきに負けないくらい、きつく抱きしめられた感覚がして、冷めた身体がホカホカになったわ。
これまでも、あたしは何度も浩介くんに気絶させられてきた。
浩介くんも浩介くんで、結婚初夜に向けて、かなり勉強したらしく、あたしは大いに満足していた。
あたしが満足してくれると、浩介くんも嬉しいらしく、ますますあたしが喜びそうなことをする。
あたしもあたしで、浩介くんの満足するやり方を学んだ。
もちろん、「優一の知識」がベースにはなっているけどね。
あたしは、こうした心得を演技に頼らずにほぼできるようになった。
それは多分、浩介くんとの空気に合わせたやり方だから。
「ふぅ、優子ちゃん、満足してくれた？」
「うん、体、暖まったよ」
「そうか、それはよかった」
浩介くん曰く、今後も精神的欲望に肉体がついていかない時が起こり得るという。
その時には、今みたいなことをすることで、あたしたちは改めて合意した。
「ふー、あたし、顔洗ってくるわね」
「ああうん、行ってらっしゃい」
あたしは、脱がされた服を着直して洗面所へと向かう。
浩介くん、特に顔をよく舐めていた。
浩介くんは、「優子ちゃんのかわいい顔はペロペロ舐めたい」とか言っていた。
あたしと結婚したことで、浩介くんの心境にも変化が現れていた。
というのも、今までになく優しくなり、逆にスケベ度は上がったと

思う。
今までは「結婚まで我慢する」ということでしたくてたまらなかったのを随分我慢させてきたものね。
あたしは、顔を洗い終わり、スカートを整えて、直立不動なら見えてないのを鏡で確認し、夕食の準備を始めた。

夫婦水入らずの２日間　閉鎖空間での暴走

「何か手伝うことある？」
「うーん、まだないわ」
浩介くんが、スカートめくりの権利を手にいれた途端、あたしに対して積極的に家事を手伝おうとするようになった。
あまりにも露骨な下心だけど、何だかかわいいわね。
「それにしても、浩介くんってどうしてそこまであたしのパンツ見たがるの？」
裸とはまた違う魅力があると言っても、ちょっとこの終着は異常な気もする。なのであたしはもう一度見てみる。
「優子ちゃんのパンツかわいいし、何より恥ずかしがってる優子ちゃんが世界一かわいいから」
「もうっ！」
何回聞いてもこの反応。それで意識しちゃってますます恥ずかしくなって、更に浩介くんを興奮させ、あたしが惚れ込むという無限ループに陥っている。
そんなやり取りをしつつ、あたしは、にんにく餃子を焼く。
件の媚薬はないけれど、さっきは浩介くんも温存してくれたので、大丈夫なはずよね。
「浩介くん、お皿とお箸並べてくれる？」
「おうっ」
浩介くんは「待ってました」と言わんばかりに興奮した様子でお皿とお箸、コップ、飲み物を並べ始める。
あたしも、出来た餃子を大皿に並べて、食卓へと持っていく。
「さ、いただきますするわよ」
「その前に」
ぴらっ
「やーん！」
予定通り（？）浩介くんにスカートをめくられた。
「優子ちゃん、恥ずかしい？」

「っ……」
あたしは、恥ずかしさのあまり声が出なくて、コクっと小さく頷く。
「そんな服で1日過ごす方が恥ずかしいと思うけど。まあいいや」
ぺろんっ
「きゃあ！　もー！　何でまためくるのー!?」
「うーん、めくりたかったから。家事のお手伝いのご褒美とはまた違ったシチュエーションだし」
浩介くんが、悪びれもせずに言う。恥ずかしいのに、もっとめくられたいもっと覗かれたいと思ってしまう自分もいる。
本当、あたしも浩介くんも、性欲に忠実よね。
「いただきます」
スタミナ満点の餃子と、エネルギー源の炭水化物たるお米が、そして石山家にいた時から母さんに教わって篠原家へと持ち込んだ、キャベツとゴマと塩昆布と海苔に、胡麻油をたっぷり入れた名称不明のサラダが、あたしたちの今日の食卓だった。
ふふ、たっぷりと食べて、今夜のエネルギーにしないとね。浩介くん、盛んになってくれると嬉しいわ。

「浩介くん、風呂沸かすわね」
ご飯が終わると、お風呂の時間、あたしはお湯張りボタンを押す。
「おう、一緒に入ろうぜ！」
浩介くんが、何の前触れもなく言う。
「うん、いいわよ」
あたしたち夫婦は、よく一緒にお風呂に入る。
そうすると、必ずと言っていいほど、どちらも我慢できなくなって、最終的には長風呂になってしまう。
多分、義両親にはとっくに、お風呂場で何をしているかということはばれている。
まあ、お互い大人だし、夫婦、それも１０代の新婚がそういったことをしない訳がないことは分かっているから、ばれた所で何てことはない。

お互いに鉢合わせにならないように注意すれば、それで十分だ。
食器洗い機を作動させ、自室からパジャマを取る。
パジャマの方が露出度は格段に低い。
「お待たせ」
「あ」
脱衣場には、既に浩介くんが上半身裸になっていた。
あたしはちょっと思いつく。
「ちょっと待って浩介くん」
「え!?」
「あたしが脱がしてあげるわ」
当然、あたしはこう申し出る。
浩介くんの身体はあたしをうっとりさせる。
「あ、ああ……でも……」
「いいじゃないの」
浩介くんは、あたしに脱がされるのを渋る癖がある。
というのも……
「あうう、は、恥ずかしいよお……」
全身が露になった時、浩介くんが恥ずかしそうに顔を隠す。
あたしは優一としての恋愛経験はないけど、男の子も、好きな女の子に見られると恥ずかしい生き物らしいわね。
「ふふ、今日は浩介くんに散々恥ずかしい思いさせられちゃったもんね。少しだけ仕返しよ」
「あうあう、じゃ、じゃあ今度は俺の番だ」
「はーい」
そして、今度はあたしが脱がされる番になる。
「あーん」
「ふふ、優子ちゃんもかわいいね」
ブラジャーを脱がされて胸が出たら、あたしは手で隠す。
あくまでも恥じらいを忘れなければ、浩介くんはあたしを向き続けてくれるから。
あたしたちは、洗いっこをして湯船に浸かる。

「今日は疲れたなー！」
「うん、でも明日明後日も残っているのよ」
お風呂の中であたしたちはゆったりした会話をする。
そう、ゆったりとできるのも夫婦でのお風呂の利点だったりもする。
「そうだなー」
ちなみに、ゴールデンウィーク中も宣伝部の活動は行っていて、お風呂から出たらあたしも浩介くんもちょっとだけお仕事がある。
でも今は……
「優子ちゃん、俺……」
「うん」
浩介くんが苦しみを訴えてる。
我慢するのは、大変よね。
ぽよんっ
「優子ちゃんの胸、やっぱりすげえや」
浩介くんが、あたしの胸で喜んでいる。
やっぱり、「美人は3日で飽きる」とか「美人薄命」というのは、モテないブスや行き遅れた女のひがみよね。
浩介くんに、優しく胸とお尻を揉まれる。
昼前の時にあたしをレイプした人と同一人物とはとても思えないわ。
それだけ、浩介くんの才能があるってことよね。
「上がろうか」
「うん」
あたしは、湯船から立ち上がり、お風呂の壁に手をついて浩介くんにお尻を向ける。
「優子ちゃん、お尻もかわいいよね」
「あ、あはは……」
入ったままよりも、足だけお湯に浸けている方が、身体はよく暖まる。
背後から、ゴクリと唾を飲み込む音がした。

あたしはまた、浩介くんと一緒に、冷めた体を暖めあった。

「お風呂だと後処理が楽でいいな」

「あはは……」

あたしたちが、この家で夫婦生活を始める中で、特に大変だったのが、事後処理の問題だった。

新婚旅行中はホテルのベッドで、いずれもベッドメイクサービスがあったから良かったけど、自分の家の場合、乱れたベッドは自分たちで直す必要があったし、汗などの量によっては洗濯を早めたり、ティッシュペーパーで湿気を落とす必要があった。

今日の午前の時みたいに、お漏らしをしちゃったら、当然取り替える必要がある。

一方で、お風呂の場合は、汗などを流したとしてもそのままシャワーを浴びたりすれば自然と掃除代わりになってくれるので、とっても楽ちんだった。

お互いパジャマに着替え終わると、あたしたちは宣伝活動を開始した。

ＰＣをつけてまずすることは、敵対団体のホームページを見ることだった。

そこには、あたしたち協会の批判文がトップページからリンクされており、あたしたち協会も対抗措置として反論文を上げている。

ちなみに、そこの批判文の内容は、相変わらず「柔軟性がない」「利権を狙っている」「極度の前例踏襲主義」「多様性の欠如」とあり、気味の悪い文章が並んでいる。

特に多様性の欠如は、当事者にしてみれば笑い話にしかならない。

そもそも、ＴＳ病自体が有史以来１３００人程度の発症例しかない極めて稀な病気の上に、日本人が全体の８割を占めている。

いわば「民族特有の病気」と言っていいくらい発病者に偏りのある病気なのに、これで何をどうして多様性なのか理解に苦しむわ。

ちなみに、海外にはそもそもＴＳ病の団体さえなく、協会も会員た

ちは全員本業持ちで、海外になど手が回るわけもなく、現地のカウンセラーが治療に当たっており、あたしたちにアドバイスを求めることもあるが、通訳がうまく通じているのかいないのか、あたしたちの言い付けをろくに守らず、しかも変な所で強情なことや、同じ境遇の人に会えずに孤独を強いられるために、日本人の患者に比べても、極めて自殺率が高くなっている。

あるいは、宗教で強引に規制する所もあって、この場合最悪のケースではより多く溜め込んでしまうため、事件を起こして死刑になったり、死刑廃止国では終身刑を食らった果てに発狂するなど、自殺よりひどい結末にもなってしまうことも多い。

そのために、外国人の患者の中で、運よくここの協会に登録できる人は未だにほとんどいない。

詰まるところ、ＴＳ病は「多様になりようがない」のだ。

しかし、「明日の会」側のホームページにはそういうことを書いていない。

たちが悪いことに、テレビ新聞の既存メディアはあたしたちに有利な報道をするつもりはないらしい。

そのことについて、永原先生は特に危機感を強めている。

このままでは、せっかく改善し始めた自殺率が上昇するばかりか、「明日の会」の宗教は自殺を認めないため、犯罪という形で返ってくるのではないかということ。

死刑ならまだいいが、もし無期懲役にでもなったら？

そうなれば、何百年と牢屋に入れられなきゃいけない可能性だってある。いや、無期懲役でも仮釈放はあるが、一生仮釈放のままで、保護観察が続くことになる。

それはつまり、１０００年前の罪でさえ、許されない可能性があるということも考えられる。

そもそも、永原先生だって戦国時代に人を殺した可能性はかなり高いと思う。もちろん、当時の時代背景を考えればやむを得ないことだし、間違いなく時効だと思うけど。

ともあれ、このホームページには、最初の患者に関するプロパガン

ダが乗っている。
元々、数少ない仲間のために、患者同士で連帯意識の強いＴＳ病患者だから、こういう結果になってしまうのは心苦しいが、とにかく情報を集めないことにはどうしようもない。
さて、あたしたちはこの患者に関する情報収集に努める必要がある。
内部でどのような教育がなされているかに関しては、既にかなり解明が進んでいる。
既に性別適合手術に関する話題が出ていて、間違いなくこのままでは自殺一直線になる。
情報収集は、幸子さんがしてくれることになった。
まず、患者の通う学校の名前でＳＮＳで検索をかける。
すると、個人情報の管理が疎かなアカウントがいくつも出てくる。
しかも、そういうアカウントに限ってクラスの中心人物だったり、人気者だったりするから都合がいい。
幸子さんが偽名などを駆使して、そうしたリテラシーに薄いアカウントに近寄ると、案の定患者のことをべらべら喋ってくれた。
いわゆる「勉強ができるバカ」というのは、受験進学校には特に多い。
あたしは幸子さんに指示を出し、「自分もＴＳ病」だと打ち明けさせた上で、患者をとにかく女性扱いするようにそそのかし、男っぽかったりしたら、その都度指摘するのが、将来のためと指導した。
もちろん、拒絶姿勢を見せたり、性別適合手術を受けたりしても、扱いを変えてはいけないこと、性染色体がＸＸのままで、外面が似ているだけ、更に外国では性転換手術の事実を隠したまま結婚して、子供が作れないために大問題になっているということも教える。
ＴＳ病は元々自殺率が高い病気ということも教え、「自殺に追い込まれても、罪悪感は感じなくていい。どういう風に女性扱いするかは個人差があるから任せる」というスタンスを取ることにした。
あたしと幸子さん、歩美さんがチャットで連携しつつ、嘘は極力混ぜずに事実を巧みに切り貼りし、患者を孤立させ、いじめるように仕

向けていく。
更に、罪悪感に囚われないように、「これはあの子のためになること。どう受け止めるかはあの子次第」と繰り返し述べる。
そう、悪意が残るうちは戦力としてはまだ2流の証拠でもある。
1流にさせるためには、「自分たちは患者のためを思ってやっている。だから悪い結果も患者の自己責任」と思い込ませることが肝要で、これによってブレーキを効かなくする。
これらの作戦を発表した時は、やはり比良さんと余呉さんは顔をしかめたが、あたしや永原先生は、長期的な実利を取った。
幸子さんと歩美さんの調略もあって、クラスメイトたちもこうした行為を繰り返しているのだが、「明日の会」のホームページには患者が追い詰められていることは載せておらず、代わりに男子制服で通う患者の写真が掲載されている。
幸子さんが、クラスメイトに「無理矢理でいいから、女子制服を着させて、かわいいを連呼させてみては？」と提案すると、早速クラスの男子が乗ってきた。
また、クラスの女子たちにも、歩美さんが接触に成功した。
歩美さんの情報によれば、クラスの女子たちからも、「美人になれたくせに男っぽくして、男だと主張して男子制服を着たりしてキモい」という声が既にくすぶっているという。
あたしは、歩美さんに指示をし、ＳＮＳのメッセージを通じて、女性らしくするように説得するようにそそのかせることにした。
「ふぅ、今日はこんな所ね」
マスコミの新たな記事はない。
女性として生きていく他には、ＴＳ病患者の生きる道はない。
この常識を、どうやって世間に知らしめるか？
今後の課題となりそうね。
あたしは、そのことを考えつつ、早めに眠ることにした。

翌朝、あたしは朝に起き上がり、服選びをする。
まずはパジャマと下着を脱いで、真っ裸になる。

……あっ！
いつの間にか、扉が空いている。しまった、鍵をかけ忘れたわね。
あたしは布団で前を隠しつつ扉を開ける。
「こらー！」
浩介くんが大慌てで自分の部屋に駆け込むのが見えた。
あたしは、そのまま後ろ側を空気に晒しつつ、浩介くんの部屋の中へと入る。
「わ、優子ちゃん！　何でそんな格好で――」
ぺちっ！
あたしは、迷わず浩介くんの頬をひっぱたく。
「浩介くんのえっち！　恥ずかしいから覗かないでって、いつも言ってるでしょ!?」
「うーだって優子ちゃん生着替え見せてくれないしー」
あたしが怒ると、浩介くんが口を尖らせて不平そうに言う。
「もう！　乙女の秘密なのよ！」
「うー、優子ちゃんのケチー！」
浩介くんはまだ不満そうにしている。
「もう！　ムードってものがあるでしょ!?」
あたしは、浩介くんにお説教を始める。
「うーん、じゃあさ」
「な、何？」
浩介くんがあたしにぐいっと近付く。
「えいっ！」
ぶわっ！
「きゃあ！」
あたしは、隠していた布団を剥ぎ取られ、浩介くんに一糸纏わぬ姿を晒してしまう。
「いやー！」
あたしは、恥ずかしさのあまりその場にしゃがみこんでカタツムリみたくなる。
いや、浩介くん、見ないで……恥ずかしいよお……

「優子ちゃん、今日1日裸で過ごしてみたら？」
浩介くんがいたずらっぽく言う。
「そ、そんな――」
浩介くんに全部を見られながら過ごす1日を想像して、体がどんどんと熱を帯びていく。
「こ、浩介くん……」
「ほ、ほら。俺も今日は1日裸でいるから。それならお互い様だろ？」
「う、うん……」
好きな人に見られて恥ずかしい思いをしたいというメスの本能と、浩介くんのたくましい裸を見たいという2つ目のメスの本能が、あたしを甘い誘惑に落とす。
あたしは、本能的に浩介くんの服に手をかける。
「演技でもいいから……」
「ん？」
「浩介くんも恥ずかしがってよ。あたしばっかりは嫌よ」
あたしは、服を脱がせながら、小さな声で言う。
「う、今だって恥ずかしいの我慢してるんだぞ」
浩介くんがそう訴えてくる。
「そう」
ズボンも脱がせて、浩介くんもトランクスだけになる。
あたしは、トランクスに手をかける。
「んっ……恥ずかしい……」
浩介くんがかわいく恥ずかしがっている。もー、こういう時だけ、かわいくなるんだから。
「ふふっ浩介くん」
浩介くんが、両手で押さえて隠していて、あたしもその様子に酔いしれてしまう。
「浩介くん、あたしね」
「うん」
「お腹が空いたわ、ソーセージが食べたいの」
「あ、ああ。その……何だ？　昨日は散々焦らされたし、今日は優子

ちゃん我慢してよ」
「うー」
浩介くんに、昨日のしかえしをされてしまう。
「んじゃ、俺は朝ごはん待ってるからね。今日はめくるスカートもないし、家事のお礼はおっぱい揉むで」
「う、うん……」
あたしは、部屋を出てキッチンに向かう。これから、朝ごはんを作ることになった。
全裸で。

# 夫婦水入らずの２日間　異常な日常

うー、裸でお料理何てしたことないわ。どうしようかしら？
「とにかく、揚げ物とか熱いのは作れないわね」
とにかく、身体を守る衣服がないのでは、危ない料理も当然できない。
とすると、お味噌汁も今日はなしね。
……焼き魚と野菜サラダを増やそうかな？
「うー、寒いわ」
５月になって、外はもうすっかり春で、気候も暖かくなっているけど、マッパのあたしにとってはまだ寒い。
浩介くんは大丈夫だとは思うけど、女の子のあたしには寒く感じてしまう。
とにかく、女の子になって寒さに弱くなっちゃったわ。
「ふー」
魚を焼き、ご飯を炊く。
誰も見てないと分かっていると、案外この姿にも慣れちゃうみたいで、浩介くんの視線がないだけで、大分冷静に料理することができた。

「あなたー！　ご飯よー！」
朝食を並べ終わって、椅子に座ってから浩介くんを呼ぶ。これならまだ肝心な場所を隠すことが出来る。
「はーい！」
浩介くんの元気いい返事が聞こえてくると、扉から浩介くんが入る。片手で扉を開け、もう一方の片手は同じ場所を押さえつけている。
浩介くんが座ったら、あたしたちで「いただきます」をする。
「あれ？　今日は味噌汁なし？」
違和感に気付いた浩介くんが、問いかけるように言う。
「うん、熱いのとか揚げ物とかは、今日はなしよ。危ないから」
「あー、うん。安心した」

浩介くんがほっとしたように言う。
「え？　安心した？」
「だって、油とか跳ねて優子ちゃんのきれいな体に傷つけたくないもん。俺のことだけじゃなくてちゃんと自分のことも考えてるんだなってさ」
浩介くんが優しい口調で言う。
「あ、ありがとう……」
あーもう、また惚れ込んじゃうじゃないのよ。
「優子ちゃんは本当に理想の女の子になったよな」
「うん」
「全く、『明日のＴＳ病患者を救う会』とやらに見せてやりてえよ。例え男に生まれても、女の子の体と気持ちがあれば、優子ちゃんみたいに幸せになれるってさ」
「あはは……」
今頃は、幸子さんも歩美さんも蓬莱教授の宣伝部の人も頑張っていると思う。
「でさ、ちょっと真面目な話なんだけど」
「うん」
夫婦とはいえ、お互い全裸で真面目な話ってシュールよね。浩介くんが真剣な顔しているからなおさら変な感じがするわ。
「俺の所は大衆担当だからさ、インターネットの世論は協会側に傾いてるんだけど」
「うん」
「どうもインターネットをしていない既存メディア中心層の中でさ、宗教的な人ほど協会や蓬莱教授に否定的らしいんだよ」
「あら、いい傾向じゃない」
インターネットをしていない老人層なら、ほっといても減っていくと思うし、どうせ将来的に不老が一般的になれば、高齢者の存在そのものが消えてなくなっちゃうもの。
「確かに、この国においては、だ」
浩介くんが注釈混じりという感じで言う。

「うん」
「他の国じゃ、むしろ無宗教の方が問題のある人間だと思われているんだ」
「うん、つまり？」
「今の蓬莱さんや協会のやり方だと、海外の支持を取り付けるのは難しい。外圧を受ける危険性があるってことだ」
浩介くんが、懸念材料を述べる。
「蓬莱教授なら大丈夫でしょ？」
「確かに、蓬莱さんは外圧など気にしねえだろうが……協会はどうなんだ？」
あたしにとって、全く想定外の話だった。
「考えたこともないけど……そもそも外国人の会員自体が幽霊会員が数人いるだけだし……多分気にも止められないと思うわ」
「確かに、今はまだ外国人のＴＳ病はほとんど知られてねえし、知ってる人にだって、おそらく『ほぼ日本人固有に近い病気』と思われているはずだ」
世界人口の２％もいない日本人で、患者全体の８割を占めている上に、外国人の患者は支援が行き届かずに極めて自殺率が高いとあれば、日本人の問題と思われるのは当然といえば当然の話。
「だが、０じゃないだろ？」
そう、確かに０ではない。
「うん」
「ということは、だ。恐らくどこかの国でＴＳ病患者が見つかれば、大きなニュースになる。特に蓬莱さんの研究は全世界が注目しているわけだしな」
「……」
今まであたしたちは、海外に目を向けたことがなかった。
ＴＳ病が、ほとんど日本人だということが最大の要因だけど、何よりも「海外で発病した」という患者が、まず報告がなかった。
各地の支部長も日本国内の地方を管轄しているし、そもそも協会には「国際部」そのものが存在していない。

もちろん、協会のホームページにも、英語版を初め外国語版は全く存在していない。
確かに、作るほどのことではないと思う。
だけど、明日の会には「英語」のバージョンもあった。この点では出遅れていると言えば出遅れてはいる。
「で、ここからは俺たちのとこの宣伝部長の『個人的見解』何だが」
「うん」
「連中が協会に『多様性がない』とか『前例踏襲主義だ』とか『外見は若いが実年齢は老けてるから価値観が変わらない』というのを、既に論破されているにも関わらず壊れたレコードみたく繰り返すのは、恐らく海外を意識しているせいじゃないかと思うんだ」
浩介くんが面白いことを言う。あたしにはちょっと驚きでもある。
「え!?」
「宗教を強く信じるってのは要するに『価値観の絶対化』を起こしやすいんだ。今海外、特にアメリカでは『多様性』というのは、信仰の対象になりかけているんだ」
「そんなこと言ったって――」
多様性が絶対って、何か矛盾してる気がするわ。
「分かってるよ。ＴＳ病の性質上、『多様性なんて確保のしようがない』ってことぐれえよ。でも、連中の信仰ってのは自分基準にしか考えられないんだ。絶対的な何かに反するものは問答無用で悪というのがそれだ」
「じゃあどうすればいいのよ」
正直、そんな考えじゃ摩擦ばっかり起こして終いにはテロの応酬になるのは当たり前だと思うわ。
「ああ、だから外圧を受ける前に、国内世論を盛り上げて、『明日の会』を潰すしかないってことだ。優子ちゃんの方はどう？」
「うん、クラスメイトとインターネットのＳＮＳで接触に成功したわ」
実際にやり取りするのは幸子さんと歩美さんだけど。
「おお！」
浩介くんが安堵の表情を見せる。

「で、男子女子共に、患者を女子扱いするように、匿名のＴＳ病患者の名義で幸子さんと歩美さんが説得に当たっているわ」
「そうか」
「本当はこういう患者にショック療法は逆効果よ。でも、クラスメイトたちには『これが彼女のためになる』と教えているわ」
「うわー、俺たちよりえげつないなあ……」
浩介くんが驚いた顔で言う。
特にあたしは小谷学園の時に女子更衣室と林間学校を巡って、「あたしのためになる」と思いこんでいる小野先生と教頭先生や、歩美さんの学校でも女子更衣室に関して「善意の暴走」と戦ってそのたちの悪さを知り尽くしている。
今度はそれを利用してあたしたちが後ろで糸を引こうとしているんだから大変だわ。
「あはは、永原会長は真田家の家臣だもの」
「にしたって、『善意の悪行が一番たちが悪い』ということを知ってて仕向けるなんて、そう滅多にできることじゃねえだろ」
確かに、あたしもそう思う。
長期的に見れば、「明日の会」はすぐに潰し、そのためには「明日の会」を選択した患者と家族たちにはひどい目に遭ってもらう必要がある。
そして、それは自殺あるいは事件を起こすのが最も利にかなっている。
それでも、「痛みが分かっているからこそ相手に同じ痛みを味あわせてやろう」という思考になるのは難しい。
永原先生は「一殺多生」だとも言っていた。
永原先生は、やはり冷徹な人だと思う。
仲間には手厚く、最大限に助けようとするが、もし敵対すれば、例え同じＴＳ病患者であっても、容赦なく追い込んでいく。
だからこそ、あたしたちのトップにふさわしいとも言えるけど。
朝ごはんを食べつつ、全裸で今後の大事な作戦会議をするという、なんとも奇妙な時間が終わった。

裸になった浩介くんを見ているだけで、あたしは息が荒くなってしまう。
体の一部は、既にとんでもない湿度になっている。
そんな中で今日の洗濯に入る。
「浩介くん、今日は洗濯物、全部部屋干しするわ」
「あ、うん。裸で外に出ないでよかった」
まあ、裸で外に出ようとしたら本格的にまずいものね。
ちなみに、この家のカーテンは、昨日から閉めっぱなしで、外から覗かれる心配はない。
あたしは、洗濯物を並べて、ハンガーと洗濯ばさみを使う。
浩介くんが、洗濯物を整理してくれる。
「浩介くんありがとう」
「おう、後でお代を貰うけどな」
「あはは……」
ギブアンドテイクよね。まあ、こんなのつけてたら、揉みたくなっちゃうものね。
浩介くんがいると、家事も捗るわ。マイナスにならないように変にでしゃばらないのがいいわね。

「ふう、こんなところかしら？」
あたしは、一通りの洗濯物をかけ終わり、一息つく。
「ああ、じゃあ早速……」
もみっもみっもみんっ
「あーん！」
家事を手伝って貰う代わりに、あたしは両胸を浩介くんに揉みしだかれる。
「やっぱ大きくて柔らかいよなあ」
後ろから揉まれていて、あたしの背中には浩介くんの硬い肉体の感触がする。
「ふー、やっぱり優子ちゃんは触り心地も最高だぜ」
あたしは、ようやく解放される。

本当、浩介くんってあたしのおっぱいが大好きよね。
まあ、オスの本能なのはあたしも分かってるんだけどね。
「優子ちゃん、俺また……」
「ふふっ、あたしも体冷え冷えだわ」
浩介くん、また身体が冷えちゃったのね。
温めてあげないと、風邪引いちゃうわね。
「じゃあ、行こうか」
「ううん」
あたしは、ベッドに行こうとする浩介くんを引き止める。
「え!?」
「今日はせっかくの2人っきりでしょ?」
いつもと違う状況で、いつもと違うことをしたくなる。
普段は家族団らんのリビングルームで、抱きしめあって、体を暖めあってみたいから。
「わ、分かったよ」
むにっ……
浩介くんの手が再び伸びて、今度は正面から胸を揉まれていく。
「あんっ……んっ……はぁ……」
「優子ちゃん、すげえかわいい……」
浩介くんは、あたしのえっちな声を聞くとすぐにこうなる。
「だって」
「気持ちいいんだろ?」
あたしは、恥ずかしさを堪えながらこくりと頷く。
「ねえ……あっ……浩介……あん……くん」
「ん?」
浩介くんが手を止める。
「あたし、お腹空いちゃった」
「え? さっき朝ごはん食べたばっかりじゃん」
浩介くんに突っ込まれてしまう。でもやっぱりお腹は空いていて。
「えへへ、あたし、ソーセージが食べたいわ」
「え!? ゆ、優子ちゃん!?」

「えへへ……浩介くん、ソーセージ作ってくれる？」
キッチンを見つめながら、あたしが浩介くんにそうつぶやく。
あたしは、熱々の出来立てソーセージが食べたかった。
浩介くんがおいしく料理してくれるはずよね。
多分、それを食べれば、あたしの健康のためにもなると思うから。

「ふぁ……はぁ……」
あたしと浩介くんが床に倒れ込む。
それはもう、凄かった。
いつもと違うだけで、結果はこんなに違う。
浩介くんは、昨日と合わせて凄まじくエネルギーを使っていた。
炭水化物、不足しないようにしないと、筋肉が弱くなっちゃうわね。
ダイエットとは無縁のあたしたちなので、炭水化物はとても大事になってくる。
「優子ちゃん……」
「えへへ、浩介くんすごいわ」
「ああ、何か優子ちゃんと結婚してから、どうも身体能力が上がった気がするよ」
浩介くんだけではなく、あたしもそんな気がする。
といっても、元々がアレなので、雀の涙ほどだけどね。
「そう？　それはよかったわ」
「それにしても……」
浩介くんが少し沈んだ口調で言う。
「うん？」
「後片付けどうしよう？」
「あっ……」
ここは本来、家族団らんの場所で、こういうことをするために作られてはいない。
なので床についたあたしたちの汗などを丹念に拭いて、場合によっては消臭もしないといけない。
「……やるしかないわね」

「だな」
冷静な思考で、浩介くんが返事をする。
とにかく、片付けないことにはしょうがない。
浩介くんがティッシュペーパーを持ってきてくれる。
浩介くん、昨日も頑張っていたし、明日は休ませてあげようかしら？
うん、それがいいわね。
「ねえ、浩介くん」
作業中に、話しかけてみる。
「ん？」
「浩介くん最近頑張り過ぎてると思うから、明日は休ませてあげたいと思うの」
明日は、普通にのんびりと過ごしたい。
密着して、抱きしめあって、体温を温めるのもいいけど、そればかりだとせっかく休みなのに疲れてしまうし。
「あー、うんありがとう」
「男の子は大変だものね」
あたしが、久しぶりに「優子」を意識しながら言う。
「あ、ああ。並みの男なら、多分とっくにミイラになってると思う」
「もー、ミイラって何よミイラってー」
まあ、ミイラは極端でも、浩介くん以上に疲れはてちゃうと思うけどね。
「浩介くん、服着る？」
昨日と似たタイミングで、あたしが切り出す。
「あー、いやいいや。今日1日くらい、パジャマ着るまでそのままでいいだろ？」
浩介くんの解答は、予想通りだった。
「う、うん。分かったわ」
もし旦那との愛が十分じゃなかったり、冷めたりしてる妻だったら、多分嫌がる場面だと思う。
そうはならないのは、あたしが浩介くんのことを深く愛してるか

ら。
恥ずかしくてたまらないのに、見て欲しいと思えてしまうのよね。
さて、朝ごはんの後はお掃除の時間になる。
まずは、掃除機を持って今日は浩介くんの部屋に。
うー、両手が塞がってて恥ずかしいわ……
「あなたー、部屋を掃除するわよー」
「おう、頼む」
こうして、お部屋の掃除が始まったんだけど……
「ふあっ……こ、浩介くん……やあん……掃除に集中できないから……あん……」
案の定、浩介くんにたくさん触られてしまう。
あたしの全身から、とんでもない量の汗が吹き出ている。
「よいではないか、よいではないか」
浩介くんが悪役のセリフで、ノリノリになっている。
「優子ちゃんも、興奮してるでしょ？」
浩介くんがあたしに向けて、あたしの汗でキラキラと輝いた指を見せてくる。
「あーん、もう許してー！」
浩介くんにこういうことをされたら、あたしもスイッチが入ってしまう。
「ふひひ、かわいいかわいい」
浩介くんは、掃除中、どうしてもえっちな体勢になるあたしで、よく遊んでいた。
「にしても、裸で掃除するとあんな感じになるんだな」
浩介くんがやや興奮しながら言う。
「あはは、少し休んだらお食事だから、呼んだら来てね」
「おう、待ってるぜ」
あたしは、浩介くんに見送られて、自分の部屋に戻り、ベッドに横になる。
少し疲れたわ、今はゆっくり休みたい。

「あー、恥ずかしかったー！」
昨日今日と、浩介くんにセクハラされて、あたし自信も恥じらいと興奮が溜まりこんでいる。
幸い、昼食まではまだ時間があった。
「ん……」
あたしは、布団をかぶり、横になる。
「久しぶりに、1人でしようかしら？」
浩介くんと結婚してから、1人で処理することは全くなくなった。
側にいつも浩介くんがいたから、その必要がなかった。
でも今は、1人で何とかしたい気分だった。
「ん……浩介くん……」
あたしは、昨日から、いや結婚前から、浩介くんにされていたセクハラの数々を思い出す。それだけでも、めまいがしそうなくらい興奮してしまう。
「浩介くん……」
あたしは興奮が高ぶり、すぐに目標を達成できた。

夫婦水入らずの２日間　篠原夫妻危機一髪!?

「うーん」
お昼ごはんを何にしようかしら？
あたしはそのことに悩み続ける。今までもメニューで悩むことはよくあったけど、今日は主に調理に関することが悩みになっている。
冷たいものは、あたしの体を冷やしちゃうし、温かいものは、調理中の事故が心配だわ。
……でも、かといって朝食と同じようなメニューもよくないのよね。
「どうしようかしら……」
比較的、危険性の少ない食べ物にする手もある。
例えば、ソースの元があるスパゲッティとか。
あーでも茹でるからなあ……
うーん、そうだわ！
「ピザにしよう」
ピザなら、確か冷凍のがあったはず。そう思ってあたしは冷凍庫を開ける。
……うん、これでいいわね。
まあ、冷凍ものでも、今のあたしはこんな格好だし、多目に見てくれるよね？
あたしは、カチンコチンに固まった冷凍ピザをお皿に１：２の割合で載せる。
そして、解凍とあたためをボタン１つで行ってくれる電子レンジでちんをするだけ。
簡単お料理ね。
「でも、夜はどうしようかしら？」
せめて浩介くんが裸エプロンを解禁してくれれば、レパートリーも増えるんだけど。
あたしは、電子レンジでできるまで、リビングのソファーに座る。
「本当にどうしようかしら？」

浩介くんに懇願して、料理の時だけ裸エプロンになろうかしら？
でも、多分浩介くんは許してくれないわよね。
「寒い……」
うー、やっぱりこの格好だと冷えるわね。
とりあえず、ベッドから布団を持ち込んでっと。
「ふう」
これで少しは温かくなったわね。
「この布団じゃ料理できないわよね」
その前に、また浩介くんに剥ぎ取られちゃいそうだわ。
「うーん」
やっぱり、浩介くんにお願いして、裸エプロンにしてもらおう。それしか方法はないわね。
「うー、こんなに長く裸になったことなかったわ」
お風呂だってここまで長風呂したことないし。
あたしは、電子レンジが完成を知らせると、手袋をはめて慎重に取り出す。
「あなたーごはんよー！」
あたしは大きな声で浩介くんを呼ぶと、大事な所は隠しながらお皿を並べた。
「お、ピザか」
「うん、冷凍だけどね」
仕方なかったとはいえ、ちょっとばつが悪い。
「え!?　優子ちゃん珍しいね」
もちろん、冷凍食品はよく使うけど、浩介くんと2人でいちゃつく時には、大抵はエネルギー供給もあって簡単な料理にはしない。
「うん、何も着てないと、やっぱり熱いのは危ないし、冷たいのもあたし冷えちゃうし」
「あー、なるほどなあ……女の子は冷え性ってのがあるわけだ」
浩介くんが「盲点だったなー」という表情で頭をポリポリとかいている。
「朝ごはんは味噌汁なかったくらいで済んだし、昼もなんとかごまか

せたけど、夜はそうもいかないわ」
「あーうん」
浩介くんも、想定外を突かれると弱いみたいね。
「夜ごはん作る時だけは、エプロンだけでもつけさせてくれる？」
「あーうん、分かった」
浩介くんがあっさりと了承してくれた。
「その代わり、料理する時だけだぞ」
浩介くんが釘をさす。
「うん、分かったわ」
ともあれ、これで夕食の問題は解決したわね。

「冷凍でも結構うまいんだな」
食事中、浩介くんが感心した風に言う。
「うん、びっくりしちゃったわ。最近の冷凍食品の進歩すごいもの。あたしもうかうかしてられないわ」
「へー、優子ちゃんくらい美味しいもの作るのにか」
「うん、そりゃあもうね。まあ、冷凍保存ということもあるから、どこかで限界はあるとは思うけどね」
「なるほど」
話している会話は、何てことない世間話。
多分、そうしないと、お互い平常心を保てない気がしていたから。
あたしも、浩介くんのたくましい体について話したいけど、そんな話をしたら、多分また、この部屋を汚しちゃいそうだから、自重することにした。
「「ごちそうさま」」
あたしたちは同時に食べ終わる。
「お皿、片付けておくよ」
「ありがとう……」
浩介くんは、あたしのお皿ごと、流しに入れておく。
「さ、家事手伝いの報酬を貰おうか」
「は、はい……」

あたしは隠しながら浩介くんの前に立つ。
「ダメだよ、ちゃんと見せなきゃ」
「だ、だって……」
そう言う浩介くんも、大きいのを隠そうとしてるし。
「ほら、家事を手伝ったんだぞ」
「はい……」
結局、あたしはメスの本能に負け、恥ずかしさに必死で耐えながら両手を解放する。
「うひひ、優子ちゃん、とってもエロいよ」
「あーん」
さわさわ……
浩介くんに、今度はゆっくりとお尻を撫でられる。
お尻触られるのは、胸を触られるのとはまた別の刺激をあたしに与えてくる。
やがて浩介くんの手がお尻から別の場所に移動しはじめた。
「ちょっ、ちょっと浩介くん！　あっ、どこ触って……んああっ！」
「ごめん、俺……我慢できねえ……」
「ここはダメよ、ほら」
あたしが浩介の腕をつかみ、浩介くんの部屋まで誘導した。

「んっ……」
「ちゅ……愛してるよ、優子ちゃん」
一通りの後の気持ちいいディープキスは安らぎの時間でもある。
「あたしも、あなたが好きでたまらないわ」
浩介くんは、まだ肉体が回復してないので、あたしだけが暖かくなった。
「やっぱり優子ちゃんとキスするのはいいな」
「うん」
「舌を入れてよし、手で触ってよし、口で舐めてよしの、理想の女の子だよな」
浩介くんが下心丸出しであたしを誉めてくれる。

「もー、浩介くんのえっち」
「でも重要なことだろ？　特に優子ちゃんはいつまでも若いんだからさ」
「う、うん……」
　確かに、夫婦円満のためにも、重要なことだとは思うけど。
「さてと……」
　浩介くんが立ち上がろうとしたその次だった。
　ジリリリリ……ジリリリリ……
「わっ！」
　突然、あたしの部屋にある、協会のテレビ電話が鳴った。
「ど、どうしよう浩介くん」
　ジリリリリ……ジリリリリ……
「え、えっと……」
　あたしたちが1日中家にいることは向こうも知っている。だから、向こうは普通に問題ないと思ってかけているわけで……出ないわけにもいかない。
「そうだわ！」
　あたしは咄嗟に浩介くんに布団を渡してそれぞれで巻いて、急いでボタンを押す。
「こんにちは……」
　布団を巻いているあたしたちを見て、永原先生が固まっている。
「こ、こんにちは永原会長！」
「今日はどういったご用件で？」
「あー、うん……そうよね。夫婦だものね」
　重苦しくて、気まずい雰囲気が流れる。
　もちろん、今日は朝から真っ裸になってお互い興奮してたということまではバレてないとは思うけど。
「あの……うん。実はさっき『明日の会』が記者会見を開いたのよ」
「はい」
　記者会見？　またどうしてこのゴールデンウィークのタイミングで？

「どうやら、私たち日本性転換症候群協会に対して、患者の治療法を我々に委託することを条件に提携を呼び掛けたのよ」
「……何て厚かましいのよ」
あたしは、開いた口が塞がらない。辛うじて出た言葉を吐き捨てるように噛み砕く。
散々的外れな言葉であたしたち協会に難癖をつけておきながら、今更提携を求めるのはあまりにも筋違いな上に、患者の治療というけど、ＴＳ病は不治の病で男に戻ることは不可能なので、治療は絶対に出来ない。
ケアの意味で使うにしても、あたしたちの知識と経験の積み重ねを「前例踏襲主義」の一言で切り捨てて、その上で「自殺に導かれるやり方」をごり押しておいて、委託なんて出来ないわよ。それを受け入れたら、あたしたちは本物の「大量殺人鬼」よ。
「篠原さん、気持ちは分かるわ。あたしたちも、みんな怒りを通り越して呆れているわ」
「お言葉ですが永原会長、こんな火を見るより明らかな用件で、わざわざテレビ電話であたしを呼び出す必要はあったんですか？」
あたしは、ついいつもよりもかしこまった敬語になってしまう。
「もちろんよ」
永原先生には、何か考えがあったらしい。
「受け入れるか断るかは決まりきっているわ。問題は『断った後』よ」
「断った後？」
「こんな要求をする連中ですもの。断った暁には『我々の善意を無下にし、新しい時代に目を背けている』とでも言うつもりよ」
「「うわー」」
あたしたちは、思わず引いてしまう。
永原先生のしている謀略のように、えげつなさの中にも、長年の知恵を駆使する人間臭さがあるような感じではない。
ここの連中はただひたすらに、「俺たちの要求と主張を受け入れろ」と、やかましく叫んでいるだけよね。
「それでね、私たちも高島さんを使って、『明日の会』に対するネガティ

ブキャンペーンを本格的に取り入れようと思うの」
「ええ、そうするしかないわね」
結局、世の中声の大きい方が勝つのよね。言ったもの勝ちやったもの勝ちっていうの？
……選挙は例外だけど。
「それで、篠原さんにはそこのネガティブキャンペーンで、『明日の会』をこきおろして欲しいのよ」
「ええ」
もちろん、引き受ける。
「あの患者は自殺することも、話して欲しいわ」
「分かっています」
「明日の会」のやり方では、患者は１００％自殺の結末を迎えるということは、あたしたちには分かりきっていても、世間一般には知られていない。
その事を、世間に発することで、より対決姿勢を強めることになるわね。
「よかったわ。それで、取材の日なんですけれども」
「大学の空きコマに、蓬莱の研究棟でいいかしら？」
あたしが、とっさに提案する。
「ええ、それで、ネガティブキャンペーンの内容だけど、私たち協会の主張とも織り混ぜて欲しいわ」
「はい」
とにかく、最初の患者さんには、自殺をしてもらわないと始まらないわね。
「それから、インターネットの世論操作も、以前より強力に行うわよ。蓬莱教授が更なる増強に向けて動き出しているからね」
どうやら、蓬莱教授が宣伝部への予算を増額したらしい。
「それから、これを機に必要に応じて、『明日の会』のＳＮＳアカウントに複数アカウントも駆使しながら、批判リプライを送りつけ続けるわ」
なるほど、アドレスを偽装すれば、ブロックされても、痛くも痒く

もないわけね。
「ふふ、私からは以上よ。篠原君と篠原さんの方からは何かない？」
「いえ。特には」
「俺も」
どうやら、裸のことは触れられずに済みそうだわ。
「分かったわ。あっ、そうそう。お盛んなのはいいけど、きちんと整えてから出てね。それじゃあ、お幸せにね」
「うっ！」
最後の最後に指摘され、テレビが切れる。
やっぱり、色々と大変なことをしちゃった後なのは明白だったよね。
「あ、あはは……」
「ね、ねえ優子ちゃん」
浩介くんが気まずそうにあたしに目を向ける。
「ん？」
「服……着ようか」
「そ、そうだよね……」
浩介くんが部屋を出ていく。
あたしも、箪笥から服を選ぶ。
「ふう……暖かいわ」
あたしが着ているのは緑色のワンピースで、おしゃれな服。
今は5月初旬なので、冬の服という訳ではない。
それでも、長時間何も着ていない後だと、とても暖かかった。
衣食住とは、よく言ったものよね。
ともあれ、あたしたちの異常な1日は、永原先生の手によって「打ち切り」となった。
「お待たせー浩介くん」
「お、やっぱり優子ちゃんはかわいいなー」
「もう、どうしたの急に？」
まあ、あたしが「かわいい」って言われるのはいつものことだけどね。

「いやさほら、優子ちゃんはそのままな裸とか露出度高い服もエロいしかわいいなって思うけど、そうじゃない服を着ておしゃれなのもいいなって」
「ふふ、ありがとう」
浩介くんがあたしの魅力を発見してくれるのは、とても嬉しいわね。
「優子ちゃん、洗濯物、外で干そうか」
「うん、そうね」
外は雨というわけではないので、部屋干しを続ける理由はない。
「俺、干してくるよ」
「あっ！」
あたしが行動を起こす前に、浩介くんが洗濯物をベランダに干しはじめてしまった。
ということは……
「ふひひ、優子ちゃーん」
「は、はい……」
ぺろーり
浩介くんに「ご褒美」として、スカートをめくられないといけない。
「おー、ピンクの縞パンかわいー」
「うわーん、恥ずかしいよー」
「ゆ、優子ちゃん」
浩介くんが頭をあたしのパンツから顔に上げる。
「うん？　早くスカート戻してえ……」
「優子ちゃんさっきは散々見られたのに、それでも恥ずかしいんだな」
「こ、浩介くんこそ！」
「いやーだってさっき見た光景を思い浮かべながら優子ちゃんのパンツ見るとすげー興奮するぜ」
浩介くんがやっと手を離してくれた。
「こ、浩介くん」
「うん？」
「手伝って欲しい時はそう言うから、あんまり無理に手伝おうとしな

くていいわよ」
「えー」
浩介くんが少し不満そうに言う。
「第一、浩介くん家事とか関係なしにあたしのパンツ見てるじゃないの！」
あたしが反論する。
実際に、浩介くんは以前からスカートめくりが大好きで、小谷学園の頃からよくパンツを見られていた。まあ、最初のきっかけは、浩介くんの嫉妬を治すために、あたしからだったんだけどね。
「いやほら、それはさ……同じスカートめくりで恥ずかしがるのでもシチュエーションってもんがあるだろ？」
「う、うん……」
また浩介くんが、熱弁しそうな勢いで話す。
「『家事を手伝ってあげたご褒美』っていう名目で恥ずかしそうにパンツ見られてる優子ちゃんと、『ふいにスカートをめくられて』、その後に恥ずかしそうにパンツ見られてる優子ちゃんは魅力が違うのよ」
「うっ」
悔しいけど説得力ありすぎて反論出来ないわ。
「家事を手伝ってもらったけど、その報酬としてスカートをめくられて恥ずかしい思いをしなきゃいけない。約束事だから拒絶するにできない。そう言う状況がまた、萌えるんだよ俺は」
「うー、浩介くんずるいわよ」
やっていることは性欲の塊なのに、無駄に理論武装がなされていて、反論ができない。
確かに、「優一の知識」でも、「女の子に対するエロは、同じものでも背景やシチュエーションで大きく異なる」というものだった。
でも、まだ完全には納得がいかない。
「でも浩介くん」
「ん？」
「それが成立するためには、やっぱりあたしからお手伝い頼まないといけないんじゃないかな？」

「え!?」
浩介くんが不意を突かれた表情をする。
「だって、あたしが浩介くんに家事を頼む時は『スカートめくっていいわよ』って言ってるわけだけど、浩介くんが自分から手伝っても、『スカートめくりたいからめくる』ってだけじゃない」
「うーん、言われてみれば確かに」
浩介くんも腕を組みながら熟考している。
本当にもう、変な所まで真面目なのよね。
「確かに、『スカートめくられちゃう、愛しの旦那にパンツ見られて恥ずかしい。でも家事を手伝って欲しい』かあ、最高だな!」
浩介くんが興奮しながら言う。
「まあ、普段はお義母さんと2人体制だから、浩介くんが出る幕無いけどね」
「うー、そこなんだよなー」
浩介くんが苦々しい表情で言う。
「でも……」
「うん?」
あたしは、浩介くんの耳元に近付く。
「今夜、期待しているわよ」
「うっ」
浩介くんの身体がブルンと震えたわね。
ふふ、浩介くんも、やっぱり興奮しているわね。
「ゆ、優子ちゃん」
「晩ごはんになったら呼ぶわね」
「お、おう……」
あたしは、自室に向けて踵を返す。
ちなみに浩介くんは立ち尽くしていて、すれ違い様にあたしはさらりと胸を撫でられた。
本当にもう、スケベなんだから!

# 夫婦水入らずの２日間　戻る日常進む情勢

「ふぅ」

自室に戻り、パソコンを起動する。

まずはニュースをチェックする。

さっき永原先生から連絡があったように、「明日の会」があたしたちに提携を呼び掛ける記者会見のニュースがあった。

そこの記事によれば、「我々「明日の会」は患者の治療を行い、日本性転換症候群協会（以下協会と略す）は、交流会として役割分担したい。現状の協会は『男性だった人が突然女性の肉体になる』という、極めて特異な経歴を持つ人の集まりで、ＴＳ病の患者たちだって受け止め方は千差万別であるはずにも関わらず、協会の構成員は女性を受け入れ、女性らしさにこだわる思想の人ばかりで著しく多様性に欠けている。協会側は、『それ以外道がない』と言うが、我々が他の道を切り開いて見せる。だから、敵対はやめて共存と棲み分けをしていきたい」とある。

「やっぱり、失敗して貰わないといけないわね」

あたしは決心を新たにそうつぶやく。

はっきり言えば、こんなのは「大きなお世話」だし、「明日の会」の言っていることは空虚な理想論、いや夢想論と言っていいものだ。

永原先生も比良さんも、余呉さんも様々な手段を講じながら１００年以上もこうした患者を集めていた。

それにしても、どうしてこんな押し付けがましく、厚かましいことが出来るのか、あたしには理解不能でならない。

どちらにせよ、この病気になると男と女の落差を思い知ることになる。

どっち付かずな生き方は、男に戻ろうともがくのよりはまだマシでも、結局何処かで破綻をきたし、精神を病んでしまう。むしろ、苦しみ死ぬまでの長さが長い分、ある意味では余計に質が悪い。

それがあたしたちの出した結論だ。

そんなことは分かりきっている。現にその生き方をした患者の一

人が、つい最近自殺に追い込まれている。
あたしより後にＴＳ病になって、自殺に追い込まれたのは未だにその彼女１人だけなのに、余計な会のせいで、２人目の犠牲者を出さざるを得なくなってしまった。
言い訳をするような感じにはなっちゃうけど、あたしたちにとって、まさか自分たちに代わる患者のケアの機関が出るとは考えていなかった。
もともと自殺率が高い上に、ノウハウを独占していて、専門の臨床心理士でも匙を投げるくらいの難病だったから。
どこぞの素人がそんな団体を仮に作り上げても、どこも相手にしないだろうと思っていた。
しかし、全て見通しが甘かったわ。あたしたちはそのように総括せざるを得ないわね。
とはいえ、起きてしまったことは仕方ない。不老人とは言え時間は巻き戻せない。
この記事には、様々な反応が書き込まれていた。
多くは、「今更何を言っているんだこいつら？」「分断工作をしてるのはお前らじゃねえか」「優子ちゃんを敵に回した時点で、お前らに味方しねえよ」などなどの反応で埋まっている。
あたしは、幸子さんと歩美さんとチャットを開き、対策を協議することにした。

「幸子さん、例の記事、ＳＮＳでのクラスの反応はどう？」
「ええ、哀れに思う声が多いわね」
「というと？」
「世間は四面楚歌だもの、今すぐ土下座してでも協会側に降るべきだっていう書き込みが多いわ」
降伏かあ……想定していなかったわね。
「うーん、想定外よね」
何せ相手は宗教だし。
「でも優子さん、想定しておかないと行けないと思うよ」

歩美さんにも、そう言われてしまう。
確かに、想定が甘かった。だが、降伏されてしまうとかえって難しい戦況になる。
間違った初動教育からの挽回は難しい。
幸子さんはまだ、あたしたち協会のカウンセリングにあったから挽回は出来た。
「うん、でも、どうやって挽回しようかしら？」
「難しいよね」
挽回出来ないともなれば、もはやその患者の自殺率は１００％を意味している。
もしそうなっているのであれば、むしろ降伏を受け入れてしまえば、かえってあたしたちは苦境に立たされてしまうことになる。
もちろん、挽回できれば最高の結果だが、それは天文学的に近いような、低確率でもある。
そうなれば、おそらく今からの挽回はあたしでも困難になってくる。そして同じように自殺に追い込まれれば、自分たちの初動対応のまずさを棚に上げ、あたしたちに責任を被せてくることは容易に想像がつく。
「とすると、受け入れを拒否するしかないってことよね」
「うーん……でも――」
かと言って、受け入れを拒否してしまえば、相手はまたそれをダシに叩いてくることも、容易に想像がついた。
さて、どうしたものかしら？
「私は、やはり拒否するのが一番いいと思います」
最初にそう切り出してきたのは歩美さんだった。
「私は、それでも受け入れるべきだと思います」
それに対して、幸子さんは反対意見。
「優子さん、お願いします」
そうなると、必然的に２人のカウンセラーでもあるあたしが、この場を決めるということになる。
「……やはり、無難なのは拒絶ということになると思います」

今まであたしたちを無碍に扱ってきたことや、あたしたちの静止を振り切り、怪しい新興団体側についたことを鑑みて、あたしは改めて同情しないことを決定した。
これなら、一応世間的にも、「不義理は向こう側から」と発信する事が出来る。
問題は、彼らが既存のメディアを握っているということだけど、それについてはまあ……仕方ないわね。
「じゃあ、後で永原会長に報告しておきますね」
「お願いします」
「ありがとうございます」
あたしは次に、例の記事対策として、永原先生に言われたことを幸子さんと歩美さんに伝える。
幸子さんもあゆみさんも、真剣に話しを聞いてくれる。
「……分かりました。私達も、蓬莱教授の宣伝部に協力しましょう」
「ＴｏｒとＶＰＮでしたわね。心得ています」
幸子さんと歩美さんも、あたしの作戦に乗ってくれた。
あたしは、いくらか雑談しつつ、永原先生に「相手の患者さんがこちらへの鞍替えを申し出ても断る」ということを報告した。
永原先生は「私もそれでいいと思う」とのことだった。
ともあれ、これで作戦は整ったわね。
あたしは、もう一度インターネットでの反応を見直してＰＣを閉じた。
「さて、ご飯作らなきゃね」
あたしは、時間も時間になったのでキッチンに移動する。
さっきまでは、裸で料理しないといけないのかと沈みがちだったけど、今は普通に服を着て料理ができる。
その日のあたしのメニューはいつもの夕ご飯になった。
１人で夕食を作って思うのは、やっぱり１人と２人では負荷がぜんぜん違うということ。
特に、身体能力面では、あたしはお義母さんと比べるとかなり劣っていたから、力がいる作業ではやはりお義母さんが欲しくなってい

く。
でも、あたしも少しは身体能力つけないとダメよね？
お義母さんだって……うーん、お義母さんも蓬莱の薬を飲むのかしら？
……まあ、そのへんはまだ分からないわね。
今、あたしの周りで蓬莱の薬を飲んでいるのは、浩介くん、蓬莱教授、そして桂子ちゃんの３人、おそらく「蓬莱の研究棟」の人々や治験者たちも飲んでいると思う。
彼らはいわば、「第一世代」と言ってもいいと思う。

「あなたーご飯よー」
「はーい！」
浩介くんの声が聞こえる。
あたしは、わざとご飯を並べていない。何故なら――
「こ、浩介くん……これ並べてくれる？」
「おう、任せとけ！」
浩介くんが、腕まくりをしながら、あたしの家事を手伝ってくれる。
ああ、やっぱりあたしって、Ｍよね。
だって、１人でも運べるのにわざわざ手伝ってもらうってことは……

「浩介くん、ご褒美……いいわよ……」
これからされることを想像し、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になる。
「うひょー！」
ぺろーり！
「あーん！」
「ほうれ？　優子ちゃん恥ずかしいかー？」
浩介くんに前からスカートをめくられ、ピンクの縞パンを見られながら、更に言葉でも煽られている。
「っ……」

あたしは目を細め、必死に恥じらいをこらえながら、あたしは首をコクコクと縦に2回降る。
恥ずかしいという意識をすればするほど、あたしはますます恥ずかしくなっていく。
何回も何回も、もう浩介くんに裸を見られていても、いや、今日の午前なんて浩介くんの突飛な思いつきからお互い全裸でいたのに、こうしてスカートをめくられて、パンツを見られるだけでも、身体が熱くなってしまう。
多分、カリキュラムの時に刻まれた「パンツ見られたら恥ずかしい」という精神が、今でもあたしに根付いているのだと思う。
「さ、冷めないうちに食べようぜ」
「うん」
ようやく、解放されたあたしは浩介くんと向かいに座る。
お昼までの異常が嘘のように、静かな時間が流れていた。
「明日もこんな時間になるといいわね」
「ああ」
できれば、平穏な時間であって欲しい。
「今夜、期待しているわ」
「おう、任せとけ」
浩介くんの頼もしい声に、あたしはますます浩介くんへの思い入れを強めていく。
依存にならないように注意しながらも、あたしは浩介くんを愛していきたい。
今夜もきっと、あたしは浩介くんに、好きなようにされて、あたしはまた浩介くんの嫁としての存在感増すのだと思う。
ご飯を食べ、後片付けをして、お風呂に入る。
今日はお風呂に浩介くんは入ってこなかった。

翌日、あたしと浩介くんは、昨日までとは打って変わって極めて平穏な1日を過ごした。
浩介くんとは夫婦生活は新婚らしくとても多いけど、今日みたいに

「お休み」の日も設けている。
浩介くんの負荷は、あたしと比べると格段に高い。
休む日を設けないと、浩介くんのほうが音を上げてギブアップしてしまう。
最も、そう言う「安息日」でも――
ぺろりっ、すりすり……
「もー！　えっちー！」
浩介くんにスカートをめくられ、パンツの上からお尻をさらりさらりと撫でられる。
「いやー、優子ちゃん柔らかいなあー」
浩介くんが居心地良さそうにあたしの身体に触れる。
「もー！　浩介くん！　今はいいけど家事の邪魔はしないでよ！」
「分かってるって！」
わさわさわさ
「浩介くんって本当に年がら年中えっちなこと考えてるよね」
「だ、だって優子ちゃんみたいな女の子と結婚しちゃったらしょうがないだろ！」
浩介くんが、あたしのお尻を触りながら、あたしに向けてまた同じ言い訳をする。
「もう、浩介くんずるいわよ！」
あたしが、たらしこめる浩介くんのセリフに抗議する。
「あはは、身体は疲れていても、精神的には性欲満点なんだよ！」
「もー、浩介くん以前にも増して性欲がすごいわよ」
「ああ、あの薬を飲んで以来どうも以前にも増して性欲が増している気がするんだ」
「え!?」
蓬莱の薬って本当に色々なことに効果があるのね。
それにしても、性欲増強って……まあ、あたしもどっちかと言えば浩介くん限定だけど、「ビッチ」に分類されるし……って、旦那一筋ならビッチとは言わないのかな？
「へへん、もちろん身体的にはやっぱりいつもあればかりだと疲れる

から、こうやって触って程よい感触を味わうのさー」
「いやーん！」
仲睦まじい夫婦が、２人きりの家庭でスキンシップをしていた。

「ただいまー！」
「おかえりなさーい！」
寝る前の時間帯、義両親が家に帰ってきた。
ゴールデンウィークの連休が、明日に終わる。
明後日5月7日からまた平日になる。
ゴールデンウィークが終わる時、あたしは去年と同じように、あの日のことを思い出す。
浩介くんや他の男子たちに乱暴していた、あたしが男だった頃の最悪な日々。
もしかしたら、あたしが何度「それはだめ」と思っていても、浩介くんの従属物になりたいと心の底で思ってしまうのも、優一の頃の日々の反動なのかもしれないわね。
「ふう」
「お義父さん、お義母さん、もしかして疲れた？」
「うん、優子ちゃんたちも疲れたよね？」
お義母さんがあたしを気遣ってくれる。
「あーうん、今日は休んだから大丈夫よ」
「そう？　優子は絶対妊娠しやすいと思うから頑張ってね」
……また始まったわ。
「もう！　何を根拠に言ってるのよ！」
「あーいや、優子ちゃん。もう一度自分の体を見てみなよ」
「いや、確かにあたしの体つきはそうかもしれないけど、妊娠しやすい根拠にはならないわよ！」
あたしは、「優子の知識」を使って反論を試みる。
「ああいやほら、優子ちゃんって母性の塊みたいな女の子だし体つきもこう、オスの本能をくすぐるっていうの……」
「もう！　浩介くんまで！」

「ま、おばあさんも元気そうだったけど、あの年齢じゃいつまで生きているかは分からないからね」
あたしも、浩介くんのおばあさんの話をされると弱い。
やっぱり名前の通り優しい女の子になりたいから、どうしてもおばあさんのために「ひ孫を産んであげたい」という気持ちになってしまい、罪悪感を覚えてしまう。
「とにかく、今日はもう寝るわ。おやすみなさい」
「おやすみなさい」
あたしは、やや強引に話題を終わらせ、寝床についた。
また、日常が始まるのかな？

# 早すぎる決着

5月9日、あたしは、女の子になって2年が経った。
早いような遅いようなで、これで今日から女の子としての日々は3年目になる。
今振り返れば、まだたった2年しか経っていないんだとさえ思えてくる。
性別が変わる前と後では、あたしの中でも断絶感はとても大きい。
もちろん、実際には内面が女の子になっていったのも少しずつで、あたし自身完全に女の子になれたと自信を持って言えるのは、浩介くんと結婚してからの話で、それを考えると、まだ2ヶ月も経っていないのよね。
「優子ちゃん、今日は確か」
通学中、浩介くんが今日という日について話してくる。
「うん、あたしも2周年だよ」
「まだ2年しか経ってねえんだよなあ」
浩介くんが、しみじみと言う。
2年しか……確かに浩介くんにとってはそうかもしれないわね。
あたしにとっては、とっても長い2年だけど。
「そうねえ2年なのよね、まだ」
もとい、大学1年生のあたしたちにとっては、大人たちよりも1年は長い。
でも時の流れというのは、単純に年を取れば短く感じるというものではないらしい。
永原先生は、江戸時代の頃は１００年さえあっという間に感じたが、世の中が急速に変化していった明治以降、特に平成以降は1年を長く感じるようになっている。
つまり、永原先生なら５００年さえあっという間に感じるかと言えばそうではないということを意味している。
あたしにとっては、最近の2年というよりも、女の子になったばかりの頃の環境の急変があまりにも濃すぎて、その間がとても長く感じ

ている。
「うむ」
浩介くんは浩介くんで、この2年は大変だったと思う。
今こうやって夫婦になっているとは、夢にも思っていなかった。
でも、それはそれで、障害を乗り越えたカップルというロマンでもあるとあたしは思う。
「浩介くん、レポートはできてるよね？」
「当たり前だ」
レポートは、他人の物を盗用してはいけないから、これについてはあたしも浩介くんも殆ど一緒に勉強できない。
なので、あたしと浩介くんは独立してレポートを制作している。
そうは言っても、夫婦としていつも一緒に暮らしていて、勉強もほとんど2人でしているから、文章がどうしても似てしまいがちにはなってしまう。
ちなみに、蓬莱教授によれば「このくらいなら、基礎実験レベルならよくあることだから心配しなくていい。大学と言ってもまだまだ奥の浅い分野だからどうしたってレポートの構成のパターンは限られてくる。一卵性双生児の学生とかはもっと似てしまうから心配いらないよ」と、あたしたちを安心させてくれた。
「さ、降りるわよ」
「おう」

「ああ、優子さんに浩介さん、今時間いいかな？」
「はい」
昼休み、食事の後に「蓬莱の研究棟」の近くを歩いていると、蓬莱教授から声をかけられた。
実は午前中の段階で、メールとして届いていたのだけどね。
「急ぎではないんだが……３００歳の薬ができた。浩介さんに是非飲んでもらいたい」
「分かった、今でいいですか？」
「助かる」

蓬莱教授からの報告は以上だった。元々時間の問題だったので、驚きはない。
あたしたちも、特に急ぎではないのでその場でついていくことにした。
「あ、優子ちゃん、浩介！」
研究室に入ると、既に桂子ちゃんがいて、１０個のペットボトルのうち1個が空になっていた。
それを桂子ちゃんが飲んだことは誰の目にも明らかだった。
「よし、揃っているな」
蓬莱教授が口を開く。
「えっと、この5本ですか？」
「ああ」
浩介くんがペットボトルの蓋を開けて飲む。
薬の見た目は、これまでと変わらないわね。多分、原理自体はそんな違いはないんだと思う。
「……ふう」
浩介くんが、飲み終わる。
今日からまた5日間、昼食後にこの水を飲まなければならない。
そうすれば、浩介くんは5日間の面倒と引き換えに、もう１００年の寿命を得ることが出来る。
あたしは蓬莱の薬を飲んだ2人を交互に見る。
老化を遅らせる薬、不完全な薬だが、これらは飲むとすぐに全身に転移する。
これによって長寿命を得る事ができる。
しかし蓬莱教授によれば、この薬はあたしたちにとっては「毒薬」になり得るというわけではないらしい。
その証拠に、３００歳の薬を飲んだ後、１２０歳や２００歳の薬を飲んでも何も起こらないことが分かっている。
あたしの細胞と永原先生の細胞を使って実験したが、どうやらＴＳ病の不老遺伝子は、蓬莱教授の不完全な老化を遅らせるだけの遺伝子を強力に排除してしまうのだという。

つまり、あたしがこの薬を飲んでもただの水になる算段が高い。
それでも、理論上は大丈夫と言っても、念のために口にしないほうがいいと言われた。
今のあたしはこの信じられない劇薬である「蓬莱の薬」をも一蹴してしまうほど強力な不老遺伝子を持っている。それをみすみす捨てる危険を犯す理由はどこにもないだろう。
そうなってくると、比良さんがそうだったように、子孫に受け継がれないのはやや不可解とも思えるが、まあ今はいいわね。
「飲み終わったら、また研究所に定期的に来てくれ。データを取りたいからな」
「分かった」
「はい」
蓬莱の研究棟を出た後、あたしは昼休みの残りの時間を次の授業の教室で過ごす。
目的としては、「明日の会」勢力の監視だ。あたしには協会の正会員として、するべきことがある。
「うーん……」
明日の会側の更新が途絶えている。
これまでは、ゴールデンウィーク中でもあたしたちのネガティブキャンペーンのためか患者の情報を毎日更新をしていたのに、５月７日以降更新が途絶えていた。
こうなると、情報はＳＮＳに入り込んでいる幸子さんと歩美さん頼りになる。
敵のプロパガンダを知ることができないというのは痛手だが、着実にダメージを与えているという意味でもある。
幸子さんがチャットに１人で入って情報を提供してくれた。
それによれば、どうやら当該患者は昨日今日と学校を休んでいるらしい。
「これは手詰まりねえ……」
「優子ちゃん、どうした？」
「それがね――」

あたしは、浩介くんに情報を提供する。
浩介くんはうーんとうなりながら考えている。
「だが、うまく行ってる証拠でもあるんじゃないか？」
「うん、あたしもそうは思うんだけどね」
とはいえ、何の情報もないというのは不気味だ。
例えプロパガンダでも、敵の内情を知るという意味では重要な情報になる。
それを出す余裕すら、もうないのかもしれない。
しかも、学校を休まれては、あたしが黒幕となり、幸子さんと歩美さんを介しての「善意のいじめ」をクラスメイトにけしかけることは出来ない。
「明日の会」のホームページには、性別適合手術の話が出ている。実際最後の更新での表題は「性別適合手術の決意」とある。
それは、ＴＳ病患者にとって最大のタブーと言ってもいい。
この手術は、男を取り戻すことは決して出来ないということを知るだけで、金を溝に捨てる行為になる。それどころか、精神を完膚なきまでに破壊し尽くし、例外なく患者を自殺に追いやってきた。
「男に戻れるわけがない」、それを突きつけられるだけでも、精神は崩壊してしまう。最後の砦が、砂上の楼閣と知り、もろくも崩れ去るから。
もちろん、ＳＮＳを通じて、幸子さんと歩美さんがクラスメイトに対し、「止めさせる」ようにけしかけた。
彼女は反発していた。学校に男子の制服のまま行くくらいだ。
以降、クラスメイトたちに対してしつこく性別適合手術の断念を、入れ代わり立ち代わり説得するように仕向けた。
クラスメイトたちには「そうしなければ、彼女は自殺する、だから必死に頼む」と頼んだ、嘘はついていない。
しかし、もとより宗教を強固に信仰している連中であるから、それらの言葉を「悪魔の囁き」として、ますます頑なになるのは目に見えていた。
そして性別適合手術に踏み切れば、彼女の自殺は決まったも同然

だった。

よしんば、男とも女ともつかない育て方をしたとしても、結局アイデンティティの確立が出来ず、自殺へと追い込まれていく。

生来の性同一性障害とは、比べ物にならない精神的負荷を、ＴＳ病はもたらす。

男女の性差の大きさを、身を持って知ることになる。

それを乗り越えるためには、あたしたちのように長年の蓄積が必要であって、それは時代の流れや価値観の変化で、変えていいものではない。

なぜならそのようなイデオロギーは人間が持つ、生物学的な、ホモ・サピエンス的な一面を無視したものだから。

やがて昼休みも終盤になると、この講義を受ける生徒が殺到する。

「でですね、一見認めて良さそうな女性の再婚禁止期間の規定ですけれども」

あたしは、一般教養の法学で、またひとつ賢くなった。

民法に規定されている女性の再婚禁止期間の規定は、子供の権利と個人情報を守るためのものらしい。

「安易にですね、『ＤＮＡ検査すればいい』という人がいます。ですが、遺伝子というのは究極の個人情報ですから、大人の都合で安易に子供、それも物心もつかない子供の個人情報を暴いていいのか？　ということになります」

確かに、子供の立場というのは盲点だった。

特に今は少子化が叫ばれているから、なおのこと大人は子供のために我慢しなければならない。

ということらしい。

遺伝子が究極の個人情報、それを考えるとあたしの決意も勇気がいることだったわよね。

「子供の立場を考えれば、離婚後の再婚禁止規定や、嫡出推定というのは、必要なこと。ということになるわけです」

弁護士さんの講義は、とても分かりやすい。
更に講義は進んでいく。
この講義で分かったのは、未来のある子供にたいして、老い先短い大人が跋扈するのはいけないということ。
今は蓬莱教授の不老研究が進んでいるから、そうすれば少子化問題も解決を見るだろう。

「では、今日の講義はここまで」
ここまでの号令のもと、あたしたちは教科書とノートを片付けて教室を出る。
まだまだ今日は講義がたくさんある。今はそっちに集中しよう。

「ただいまー」
「おかえり、大変なことになってるわよ」
あたしと浩介くんが家に帰ると、お義母さんが少し慌て気味にあたしたちに何かを報告してくれた。
「何のことだろう？」
「さあ？」
怪訝に思いつつも、あたしたちはリビングのテレビがつけっぱなしなのに気付き、慌ててテレビ画面を見る。
「お伝えしておりますように、今日午後1時頃――」
「「あ！」」
それは、高校生の自殺の速報だった。
校舎からの飛び降り自殺、即死だったという。
「自殺したのは、ＴＳ病患者を支援する『明日のＴＳ病患者を救う会』、通称『明日の会』の、被験者第1号として知られていた患者さんで、遺族の話によりますと、自殺した高校生は、ＴＳ病に伴う性同一性障害の治療のため、2日前に性別適合手術を受けたばかりだったとのことです」
テレビのニュースでは、時折学校の生徒の自殺がニュースになるが、こうしてＴＳ　病の患者の自殺がここまで大々的に報じられるの

は初めての出来事だった。実際、最近の自殺事例でも、地域ニュースまでは分からないけど全国的には全く話題になっていなかった。
恐らくは、当初は「報道しない自由」を行使しようとしたが、昼休み中で、大勢の人が見ている中での自殺とあって、隠しきれなかったのだろう。
思ったよりも、決着は早かったわね。
「何でね、私らの忠告、生き残った他の患者さんの言葉を信じなかったのかね？　私たちは本当に残念ですよ。もっと強く忠告していれば、手術を思い止まってくれたと思うと、後悔してもしきれません」
自殺した生徒の同級生が、顔は見せないが涙ながらに語っていた。
うーむ、幸子さんすごいわね。
「優子ちゃん」
「ええ」
あたしは、永原先生に電話を掛けた。
「あ、篠原さんお疲れ様」
永原先生は、「任務」をやりとげたあたしを労うように言う。
「はい、それでは早速」
「ええ、これをダシに一気に畳み掛けるわよ」
永原先生が号令をかける。
そう、「これ以上の犠牲が出ないためにも」、日本性転換症候群協会は、「明日の会」の即時解散を要求するのが、あたしたちの狙いだ。
「えー、今ですね、『明日の会』が記者会見を開くようです」
そして、テレビでは、「明日の会」が、敗戦の弁明をするという。
いよいよ、見過ごせなくなってきたわね。

記者会見海上、青ざめた顔で、遺影を持った遺族と例の牧師が姿を表した。
遺影の中にいたのは、学ランを着た男だった。
「えーでは、記者会見を始めたいと思います」
「うっ……ひぐっ……」
遺影を抱き抱えながら、母親と思しき女性がハンカチをもって泣き

崩れている。
痛々しい光景に、あたしは罪悪感を覚える。
もちろん、理屈の上では向こうになびいた以上、本人にとっても、あるいは後に続く患者たちにとっても、これが被害を最小限に食い止めた結果だということは分かっている。でも、幸子さんと歩美さんが心配だわ。
計画を漏らしたら一巻の終わり、とまではいかないけど、一転守勢に追い込まれちゃうと思うから気をつけないと。
「まずはお母様と代表の方、辛いとは思いますがそれぞれ一言お願いします」
「今回、息子を亡くしました。さぞ辛かったとは思います。神の元へと行けず、地獄へと落ちねばならないと思うと、なお辛いです」
「このような結末になってしまったこと。牧師として、自殺を止められなかったのは、誠に遺憾であります」
死者を出してしまったことに、さすがの牧師も意気消沈しているわね。
大方、この宗教では自殺を厳重に禁じているから、それでなんとかなるとでも思っていたのかな？
「それでですね、今後『明日の会』としましてはどのような方針で進むのでしょうか？」
「今回は誠に遺憾ながら、失敗に終わってしまいましたが、皆様にはどうか長い目で見ていただきたいと思います」
「うちの子は神に愛されませんでしたが、この先も神の導きがあらんことを」
正直に言って、気持ち悪い。
あたしに言わせれば、これは不適切な対応が、当然のように招いた必然の悲劇といっていい。
もっと言えば、この母親と、この牧師の、狂ったような信心と、信じられないような独善性がこれを招いた。
「失敗の原因としては何が考えられるでしょうか？」
「我々の不徳と致すところは多分にありますが、まず日本性転換症候

群協会の非協力姿勢です。我々はかの団体に、『はじめての患者ゆえに、ノウハウを提供してほしい』と申し出ましたが、全て断られました」
　あたしと浩介くんは、開いた口が塞がらない。
　そもそもあたしたちのやり方が気に入らないから、わざわざ組織分断を試みたくせに、今更何を言っているのよ。
　仮にノウハウを提供したところで一方的に「時代遅れ」とでも言いがかりをつけて従わなかったことは火を見るよりも明らかだわ。
「と言いますと？」
「我々は協会に多様性を提供したかった。この患者はその第一号になるはずだったのです。女性を受け入れ、女性として生きる人ばかりの協会に、このような患者が入ってくるのは、きっと長い目で見て協会のためにもなると思いました。ですが、彼ら……彼女らは最初から敵対的な姿勢で一貫していました」
　この男は、この期に及んで記者会見の場であたしたちに責任をなすり付けている。
　ＴＳ病患者に、性別適合手術を受けさせてはいけないことは、あたしたち協会の人間だけではなく、倒れた患者を搬送する病院の関係者だって知っている。
　この牧師は、あたしたちに多様性をもたらすなどという大義名分によって、人を殺したのに！
　あたしたちが後押ししたのは、死亡がほぼ確定した状態からの、言わば敗戦処理だった。
　現に、誰も巻き添えにしなかったことと、「明日の会」が早期に頓挫しそうになったことを考えれば、ほぼ最善に近い内容だと言っていい。
「そしてですね、我々のやり方が失敗した原因、患者さんが生前にですね、何度も何度も性別適合手術を止められたとおっしゃっていました。これはですね、私の考えとしましては、平たく言えば協会側の陰謀なんじゃないかと。そう言う風に思っています」
「ありがとうございます」

あたしは、一瞬だけビクッとする。
普通なら、根拠もないただの陰謀論だが、今回に限って言えば、あたしが裏で糸を引いたのは事実だったから。
とは言え、牧師は何も根拠を示さずにそのまま流してしまっていた。うん、これはほぼあたしたちの勝利が約束されたわね。
「哀れな奴らだな」
浩介くんがそう呟く。
「ええ、この記者会見で、かえって墓穴を掘っているわね」
この記者会見は、明らかな敵失と言えるわね。
何故なら、自分達の失敗を、あたしたち協会になすり付け、逆恨みの愚痴をこぼし、更に、本来なら息子を殺された母親さえも、牧師に同調すると言う、異様な空間になっていたから。
「浩介くん、あたし、幸子さんたちと連絡取ってくるわ」
「ああ。俺はもう少し見ていく」
「何か蓬莱教授の方で新しい情報があったらお願い」
「分かった」
あたしは、浩介くんがと分かれる。
テレビをつけ、ＰＣを起動し、チャットを開くと、既に幸子さん、歩美さん、そして永原先生がログインしていた。

# 戦後処理

「こんにちは」
「こんにちは」
あたしたちは、いつものように挨拶から入る。
少し過去ログを見て見ると、歩美さんに気の迷いが見られていた。
「優子さん、本当に彼女はこんな結末しかなかったんですか？」
やはり、歩美さんはあたしにもその問いかけをしてくる。
「歩美さん、これでもベストに近いエンディングですよ」
ある意味で、多くのバッドエンドの中から、一番マシなバッドエンドを選ぶという、不毛な方法だったのは否定しないけどね。
「はい、分かってはいるんですが……それでも、納得がいかないんです！」
「山科さん、あなたは恵まれているわ」
永原先生が、歩美さんを落ち着かせたい一心で書き込む。
「歩美さん、あたしだって、最初は罪悪感を覚えたわ。でも記者会見が終わる頃には、そんなの消えていたわよ」
「え!?　私最初の方しか見てなくて」
あー、やっぱりね。
「歩美さん、あの後記者会見は、あたしたちに責任転嫁をしたわ」
「つまり、私たち協会が非協力的だからだと言うのよ」
「な、何ですかそれ!?」
歩美さんは、パソコンの向こうからでも分かるくらいに、驚いている。
あたしは、彼らが陰謀論を使ってまであたしたちを批判したことを知る。
「彼らに、同情する余地はないわよ」
そして、不適切な対応で自殺に追い込まれた患者の母親が、なおも牧師に固執していることにも言及した。
歩美さんからは、徐々に驚きの書き込みが漏れていく。

「分かりました。ええ、もう迷いません。同情する余地はないと私も思います」
よし、これで次に進めるわね。
「それで、私たちも反論と明日の会への批難声明を協会ホームページに出そうと思うの」
歩美さんの迷いが一段落した所で、永原先生が計画を説明する。
協会側としては、「今回の患者自殺は、明日の会側の不適切な対応が原因であること」「ＴＳ病はその病気の性質上、多様になりようがないこと。多様性の押しつけを今後やめること」「協会への責任転嫁は断じて許さず、場合によっては訴訟もあり得ること」「今後の患者についても、必ず協会側のカウンセリングを受け、明日の会は解散すること」「マスコミによる本文の無断使用は禁止」といった趣旨で、本文をインターネット上に配信する。
また、念のためテレビ局や報道機関のＩＰアドレスからのアクセスを、ニュースブライト桜を除いて、全てシャットダウンすることも明記した。
これは要するに、編集しての引用を警戒しているためだ。
ちなみに、取材条件は相変わらず変わっていなくて、それを満たすことを誓約するならば、取材はオープンだとも語っている。
もちろん、アクセスの遮断なんて言うのは、ＴｏｒやＶＰＮを使えば、簡単にすり抜けられることだけど、これらは遮断することに意味があると永原先生は語っている。
これらの新聞社、テレビ局、週刊紙での無断使用が発覚した場合は当該報道機関による不正アクセスと見なす。と書かれているため、もし無断で使用すれば悪評のそしりは免れないだろう。
「あの、永原会長」
「はいなんでしょう？」
とここまで説明して、歩美さんに疑問があるみたいね。
「ＴＳ病が多様になりようがないというのはどう言うことでしょう？」
「あー、なるほどねえ」

やっぱり、歩美さんにも色々と説明しないといけないわね。
「山科さん、ＴＳ病の患者って、日本人が８割を占めているでしょ？」
「ええ、でも残りの２割は？　いてもおかしくないはずなのに」
「私たちは小さな団体だから、海外に出る余裕はないのよ。だから本当に、外国人でＴＳ病になったら現地任せで、ほぼ１００％に近い確率で自殺あるいは自殺禁止の宗教だと事件を起こしているわ。うちの協会も、外国人の会員は数人しかいないし、ほぼ全員が幽霊会員よ」
協会には、会費滞納での除名等はなく、会議への参加権や発言権、その他の特典が一切受けられない「休眠会員」になるだけである。
来年以降しかるべき会費を払えば、もとの会員に復帰できる。外国人の会員はほぼ全員がこの「休眠会員」になっている。つまり、存在そのものが殆ど「いないと同じ」程度には影響力のない存在となってしまっているのが実情なのよね。
「更に、今の人を見て分かるけど、この病気になったら女として生きていくしかないでしょ？　つまり、不老の日本人女性の集まりになるのは、必然のことなのよ」
そう、民族的な多様性だけではなく、自然淘汰の結果として、女性をアイデンティティにする人だけが生き残れるのが、このＴＳ病の特徴でもある。
「そうよね、多様になりようがないわ。人種的な多様性だって困難だし、そもそもあたしたち協会の基礎理念に反する人は会員になれないわ」
そう、あたしたちは、あくまでも１人の女性として生きていきたい。
あたしたちは、断じてトランスジェンダーではない。完全性転換症候群、ＴＳ病と言う名前が示す通り、あたしたちは「トランスセクシャル」それもニューハーフの類いではない。病名を英訳すれば「パーフェクトトランスセクシャルシンドローム」、つまり完全な女の子になる病気ということになる。
「明日の会とかいうのは本当におせっかいだよなあ」
幸子さんがなげやり気味な書きこみを投稿する。
「ええそうねおせっかいだわ」

それに対して、あたしがすかさず、女の子の言葉で書き込む。
「むしろ邪魔といっていいわね」
……幸子さん、かわいいわね。
うん、でも大事なことでもあるわね。
「ええ、この声明文、きちんと発表して、高島さんにも報道してもらわないと」
ちなみに現在、高島さんが所属する「ニュースブライト桜」は、あたしたちへの取材をきっかけに、目下急成長中にある。
インターネットメディアの中でも特に異彩を放っていて、しかも既存のメディアの偏向報道批判など、インターネットでの支持は日増しに延びていて、また唯一協会の取材条件を受け入れた報道機関としても、世間からは注目されている。
「ええ、高島さんにも連絡を取るわ」
永原先生のこの書き込みの後、あたしたちは微調整とその後、いつものように４人でガールズトークを繰り広げて、お義母さんからの「ご飯よー」の声とともにお開きとなった。

「浩介くん、そっちは？」
夕食後、あたしは蓬莱教授の宣伝部で活動している浩介くんとの情報交換を開始する。
「ああ、インターネットの世論はほぼ完全に協会に傾いているぜ。俺たちも『陰謀論』という線と、『宗教って怖い』という線で『明日の会』を叩いていて、概ね共感を得ているぞ」
また、今回の事の顛末によって、静観していた人はもちろん、今まであたしたちに批判的だったプロテスタントのキリスト教徒たちからも、件の牧師に対する批判が高まっており、蓬莱教授の研究を快く思わない人々からも、さすがに今回の所業については擁護できないということだった。
更に、今回の自殺の顛末があまりにも衝撃的であったため、一人また一人と協会擁護側に向かっているという話も聞くことができた。
他にも「あんなのと一緒にされたらこっちまで迷惑」という事を言

う人も多く、浩介くんの口ぶりからも、明日の会の旗色が相当悪くなっているのが見て取れた。
また、『明日の会』のしていることは、要するに『坊主憎けりゃ袈裟まで憎い』を地で行っている」という指摘もあったそうだわ。
「ねえ優子ちゃん、あの子の自殺って、もしかして協会が糸を引いているの？」
傍から聞いていたお義母さんが、あたしに聞いてくる。
「うーん、関わっていると言えば関わっているわね。ただ、協会は被害を最小限に食い止めたわ」
「え!?　最小限!?　あれで!?」
お義母さんがかなり驚いた顔で言う。そりゃあ、自殺という結末で「最小限」というのは、普通なら想像もつかないことだものね。
「ええ、あの団体のやり方は、自殺率を１００％にあげてしまうわ」
「ええ、そうだとは思いますけど」
あたしは、詳細を述べるかどうか悩んでしまう。
いくら家族とは言え、お義母さんがあたしたちのやり方を、外部に漏らさないとも限らないから、慎重に判断しないといけない。
「お義母さん」
「はい」
あたしは、お義母さんに向き直る。
並々ならない雰囲気を出すことで、真剣さをアピールするしかないだろうから。
「これから話すこと。決して口外しないと約束してくれるかしら？」
「ええ。誓うわ」
お義母さんも、あたしの決意を知ったのか、硬い口調でそう言う。
「……あたしたちは、彼女の自殺を早めさせたわ。どっちにしても、早期に精神を病んで悲劇を迎えるなら、周囲を傷つけるのはなるべく少ない方がいいのよ。その理屈はわかるかしら？」
「ええもちろん」
お義母さんも、子供ではない。漫画や小説みたいに現実は行かないことを、キチンと知っているわね。

「じゃあ、話すわね――」
話しても大丈夫と判断したあたしは、ゆっくりと今回の計画について話始める。
世間の関心が向いているうちに、なるべく早期に失敗してもらって、「明日の会」の出鼻をくじくとともに、今後、カウンセリングなどにおいて「明日の会」を選ぶ患者を出さないようにすること。
そのためには、既に明日の会による不適切処置で自殺確定となった彼女のクラスメイトとＳＮＳで接触し、幸子さんと歩美さんを介して、彼女が受けようとしていた「性別適合手術」を全力で止めさせるように言った。その時に「君のためだ」とも付け加えるようにそそのかした。
「そうしないと自殺確定」、それについては嘘は全くついていない。
重要なのは、相手を従わせるための「飴と鞭」ではなく、わざと「鞭と鞭」で応じることで狙い通り患者は頑なになったこと。
そして、患者は狙い通り早期に性別適合手術を受け、その結果彼らの忠告の真実性に気づき、深い絶望とともに自殺した。
それが今回の顛末とあたしたちの理屈だった。
「辛い決断ね」
お義母さんも、あたしに同情してくれた。
「でもそうしないと、せっかくあたしたちが積み上げてきた、１０２年の財産が、水泡に帰する……とまではいかなくても、回復に時間がかかる致命傷になりかねないわ」
「指示をしたのは？」
「永原会長と、詳細はあたしが考案したのもあるわ。あたしは別に、人を殺したとは思ってないわよ」
むしろ、ここで何もしなかったり、あるいは相手の無策に迎合することこそ、人殺しのそしりを受けるべき行為だとあたしは思う。
それは将来の、多くの有望なＴＳ病患者を殺すことになるから。
「お義母さん、短期的な人道にとらわれて、結果的に多くの犠牲を出したことは、世界史の中でも枚挙にいとまがないわ」
「ええ、私も大人よ。そのくらい、分かっているわ」

お義母さんは、納得してくれたわね。
「よかったわ」
やっぱり、あたしも真田の人だわ。永原先生に影響されて、だけどね。
あたしは、明日の会に明日がないことを、祈らずにはいられなかった。
まあ、あたしは明日の会と違って神様は信じてないから、祈っても仕方ないとは思うけどね。

お風呂から出て、もう一度インターネットを見る。
相変わらず明日の会が炎上している様子で、鎮火工作と思われる書き込みもいくつかあるが、その都度蓬莱教授の宣伝部が、延焼を試みる書き込みを繰り返しているみたい。
それを見て、あたしたち協会を支持する書き込みが、インターネットに殺到しているわね。
もはや、明日の会に逃げ場はない。
永原先生の見立てでは、この後に乱暴な「どっちもどっち」という「喧嘩両成敗」な意見が出てくるという。
そうした喧嘩両成敗的な「意識高い系」の意見は、「最も有害な意見」とのことなので、複数のアカウントなども駆使して徹底的に叩き潰さなければいけないという。
永原先生によれば、この手の中立ぶった意見が、物事を曖昧にし、人の目を曇らせるのだという。そしてひいては教訓が教訓として生かされず、また明日の会のようなことが繰り返される危険性さえあるらしい。
それにしても、永原先生の言い方は「喧嘩両成敗」に対する「憎しみ」に近い感情が見受けられるわね。
それは恐らく、大恩ある吉良上野介と吉良家が、時の将軍さえ逆らえないほどの大うねりの世論となって飲み込まれたことに対するトラウマが、多分に含まれていると思う。
吉良家に対する罪悪感は、永原先生を３００年以上縛り付けていた

から。
……無理もないわね。
ともあれ、しばらくは新しい患者は出て来ないとは思うし、これだけのダメージを与えれば、少ない患者数で、まず破綻するわね。
あたしは、「やりとげた」という達成感で寝床についた。

翌日、あたしたちの取材を受けた高島さんの記事が2つ、ブライト桜に掲載された。
1つ目は、昨日の騒動を受けての協会の声明文の全文。
2つ目は、幸子さんの取材記事だった。
そして、2つの記事は、「あわせて読みたい」として、強く関連付けさせられた。つまり「両方を読んで欲しい」という願いが込められていたとも言える。
特に、このタイミングでの幸子さんの記事は威力絶大だった。
あたしに負けないくらいの超がつく美少女が、一度は性別適合手術を口走ったが、あたしに止められて、やがて女性として生きていく決意をし、男の子を好きになるまでになった。
言わば、どん底からのサクセスストーリーだった。
そしてそれは、手術に踏み切って僅か2日で自殺に追い込まれた、かわいそうな「明日の会」の患者第1号との、強烈な対比にもなっていたからだ。
記事の中で、幸子さんは結婚式の時の、あのスカートの裾にポケットが大量に付いた服を着ていた。
にっこりとこちらに向けて微笑む幸子さんの笑顔と、先日自殺した患者の遺影を持って涙を流す母親の写真が、あたしの脳裏に浮かんでくる。
それはまさに、天国と地獄だった。幸子さんも一歩間違えれば、幸せな未来はなく、あのように暗転していたということでもある。
ここまで強烈なら、幸子さんがあたしにひっぱたかれたことも、記事にしてよかったかもしれないわね。
確かに体罰禁止は絶対とは言え、生死という人命に関わり、それ以

外に方法がない状況なら、例外的に許されると思う。だって、叩かれなければ死んでしまうとすれば、前者の方がいいに決まってるもの。

最も、そう言う状況そのものが、ほとんど思い浮かばないけど。

あたしは、あの時幸子さんをひっぱたいてよかったと、改めて思うようになった。

## 幸子さんの失恋

「優子ちゃん、反応がすげえよ」
昼休み、大学のノートＰＣで掲示板の反応をみていた浩介くんがあたしに語りかけて来た。
特に、インターネットでは幸子さんの記事が伸びていた。

「うおお、幸子ちゃんかわええ!!!」
「優子ちゃんが結婚した今、俺たちの希望だぜ！」
「笑顔がヤバイ！　超美少女！」
「いや俺はそれでもマキノちゃんを選ぶぜ」
「ロリコン乙」
「ロリコンは病気です」
「５００歳近くも年上の女性なのにロリコンとはいったい……うごごごごご」

ともあれ、ネット上の掲示板の反応は幸子さんの容姿、と、相変わらずカルト的な人気のある永原先生とそれに伴うロリコン論争が主だった。
ちなみに、総合的な人気度では、人妻になったにも関わらずあたしが勝った。
顔はともかく、あたしの画像が貼られると、一斉にして「おっぱい」の連呼が始まった。
でかいおっぱいというのは、それだけで女の子を相当魅力的にする。
そして、顔についても、幸子さんとの比較では、「優子ちゃんの勝ち」という書き込みが圧倒的に多くて、あたしは女の子としてのプライドを刺激させられた。
あたしから見れば、幸子さんもあたしに負けないくらい、場合によってはあたし以上にかわいく見えることもあるんだけどね。世間の評価は違うらしいわね。

とにかく、協会があたしたちのようなかわいい女の子がたくさんいる団体と知れば、それだけでネットユーザーが味方してくれるらしく、「明日の会」は死体蹴りのごとく針のむしろになっている。
やっぱり、美人っていいわよね。
「浩介くん、この書き込み見てどう思う？」
もしかしたら嫉妬してるかもしれないので聞いてみる。
「ああ、嬉しいぜ。こんなに好感度の高い優子ちゃんを、旦那として毎日独り占めできるもんな！」
浩介くんはにっこり笑いながら答える。
婚約してからもそうだったけど、浩介くんは結婚してからこう言う余裕のある発言が増えたと思うわ。
「浩介くん、前までは嫉妬してたのにね」
「ああ、旦那の余裕ってやつだ」
浩介くんが力こぶを作る。
あたしは、そのたくましい姿につい頬がぽっと赤く染まって、うっとりしてしまう。
「ま、もちろんたまには嫉妬しちゃうと思うけどな」
「あはは、うん、たまには嫉妬してほしいかな？　嫉妬がないのはそれはそれで寂しいのよ」
「あー、そう言うものなのかまあ」
女の子になって、最初のうちは「優一の知識」からの「嫉妬への理解」が多かったけど、今は「優子として」の「嫉妬に対する快感」を感じることが圧倒的に多い。
もし浩介くんが嫉妬してくれたら、その日の夜はとてもいいもにものになりそうよね。
「ねえ浩介くん、１つ目の記事はどうかしら？」
「ああ、そっちも明日の会への批判で埋め尽くされてるぜ」
浩介くんが反応を見せてくれる。
「ふむふむ……」
そこには「当たり前だ。なんで協力してもらえると思ってんだこいつら？」「厚かましいという言葉がこれ以上似合う奴らは居ない」「そ

ら協会でもうまくいくとは限らんけどこいつらにやらせたら１００％失敗だろ」「やっぱ特殊な病気って同じ境遇の人じゃないと無理だよな」「ある日突然性別変わるわけだもんな。宗教でどうにかなるもんじゃない」といった反応が並んでいた。

それはもう、「残念でもないし当然」という感じの反応だった。

インターネット工作は、あたしたちが優位に進めている。

だから問題になるのは、既存メディアということになるのだけど……

「テレビの番組は、俺たちの主張を取り上げようともしない」

新聞はまだ、一部に明日の会を批判する報道があるが、テレビは違う。

協会への責任転嫁を、無批判で垂れ流すレベルの放送がたくさんあった。

しかも、コメンテーターのＳＮＳからも、協会を擁護する発言が全てカットされるらしい。

「本当に、テレビ局って言うのはやりたい放題だよな」

「ええ」

あたしたちには、どうしてもやりきれない思いがある。

総務大臣か総理大臣にでもなって、電波停止にさせてやらないと治らないんじゃないかとさえ思えてくる。

だって、これだけのチャンネルがあるなら、１局くらいあたしたち協会寄りになってもいいと思う。あたしたちは別に、犯罪集団でもないのだから。

その方が他局とも差別化できて視聴率も取れるのに。

……もしかして、カルテルをしているんじゃないかしら？

「ま、とりあえず今は諦めるしかないだろうな。あまりにひどければ、インターネット発でデモが起きるでしょ？　蓬莱教授の薬が完成されれば、きっと手のひらを返すさ」

「本当かなあ？」

果たしてそう都合よくいくのかしら？　今の状況をみているとお世辞にもそうは思えないわ。

ともあれ、インターネットのこの反応は、今後も大事にしていきたいわね。

大学の講義と、課題のレポートを予定通り進めたら、次にするべきは幸子さんと歩美さんとで打ち合わせがある。

「その、生徒が目の前で飛び降りたのを見て、多くの生徒がトラウマになっているって」

チャットで、幸子さんがそう話す。

テレビでのインタビュー通り、クラスメイトたちは「もっと強く忠告していれば自殺を止められたのに」と考えている人がほぼ全員だった。

残る少数派も「あいつが自分たちの忠告を聞かないで無い物ねだりをして勝手に絶望しただけ」という突き放したようなものだった。

本当は、故意に相手を頑なにさせて、自殺を早めるように仕向けた策略なのだけど、そう言う発想に至る人間は誰もいなかった。

それはまるで、天才と秀才の最大限の壁に思えてならない。

受験秀才というのは、こう言うのにとことん弱い。だから、あたしたちの謀略を見抜くことは出来ない。

もちろん、結果的には正解とは言え「明日の会」のように完全な当てずっぽうとヤケクソの陰謀論はもっとアタマが悪いけどね。

「そう……とにかく、『あなた方が罪に思う必要はない。あの人の自己責任だから』ということだけは伝えておいてね」

「分かってます」

そう、これは汚れ役を引き受けてくれた幸子さんと歩美さんに対するフォローでもあるのよね。

もちろん、性別適合手術を受けてはいけないことは、ＴＳ病を知る人なら常識中の常識で、それを無視した本人と明日の会が一番悪いのは事実だ。

それでも人間はどうしても、罪悪感を自らに課してしまう生き物だから。こうやってフォローしていく必要があるのよね。

「この協会はですね、多様性の無さに対して開き直っている」
チャットをしながらテレビをつけていると、例の牧師が、生放送の討論番組でいきなりそう言い始めたのが聞こえた。
「あのですね、何でもかんでも多様性ってもうやめませんか？　この団体は、特殊な難病の特殊な人が集まっているんですよ？」
テレビの有識者たちも、さすがに良心との葛藤があったのか、協会よりのコメンテーターが増えている。そうね、編集でカットされるけど、生放送ならそうは行かないもの。
報道関係者は、未だにあたしたち憎しだけどね。
「もう一度ＴＳ病についておさらいしますと、この病気は日本人が８割を占めていて、しかも長期的に安定して生存できる人となると、全世界でも３００人といないんですよ。しかも安定生存の外国人はたった数人ですからそれこそ２％とかそう言う世界になるんです。多様性は最初から不可能なんですよ」
「あなた方が試みた方法で、現に自殺者が出たばかりじゃないですか！」
「しかしそれは協会が――」
「この方法、協会では禁忌とされていた方法なんですよ」
「前例を打ち破ることが――」
「それは理念のために人を殺す無責任な理屈ですよ！」
他のコメンテーターから、明日の会の代表に向けて次々と批判の声が浴びせられる。
やはり、人命は重いわね。特に、ＴＳ病は不老ということを考えれば、それこそ何百年何千年、あるいは万単位にもなろうかという命を奪ったわけだから、せいぜい長くて１００年ちょっとの他の人間に比べてなおのこと重たい。ただ単に、未来ある若者では済まされないことになった。
「幸子さん、歩美さん、もう明日の会は潰れると思います」
いくらあたしたちに対して、マスコミが悪い顔をしているとは言え、こんな早々に自殺者を出してしまった団体の肩を持つほど、彼ら

もバカではないし、スポンサー抗議に発展する危険性もあるだろう。
「何度でも言いますが、あたしたちは、被害を最小限に食い止めたんです。2人目、3人目の犠牲者は、もう現れないでしょう」
チャットの中で、あたしがそう宣言する。
あたしたちにこれからできること。それはＴＳ病になったら、女としての人生を受け入れ、一生懸命に女の子らしくなっていくことだけ。
でなければ、自殺の道へと突き進んでしまう。
「もうひとつ、これは永原会長に相談するべきことだけど」
「うん」
「男女の両方の性別を知っているあたしたちだからこそ、性差を認め、肯定するべきだと思うのよ」
「それはそうですけど」
今まで、協会は「患者同士の交流」と、「新しい患者へのカウンセリング」、そして「1人の女性としての扱いを社会に求める」という3つを基本とし、それ以外は特に何も主張してこなかった。
「今回の悲劇の背景には、ＴＳ病を知らない人々による、性差とそれに基づく性役割の過小評価が原因だと思うのよ」
「うーん、幸子さんはどう思う？」
歩美さんは決めかねている。もちろん、歩美さんも性差と性役割の重要性はＴＳ病になって嫌というほど思い知らされている人の1人でもある。
「私は優子さんの言ってること、一理あると思う」
もとい、ＴＳ病になれば、性差の大きさを嫌でも思い知ることになる。
あたしを含め、多くの人は性格や性趣向まで変わってしまう。だから、性差を埋めるなんてことがいかにバカげた愚かな行為かを知っている。
でも、それは1回の人生で両方の性別を経験したからこそ分かること。
そうでない人には、いまいち実感できないのも無理はない。

「あたしたちが、性差を埋めるなんて言うのがいかに愚かなことかを宣伝しないと、明日の会が潰れた後も、忘れた頃に同じ悲劇が繰り返されるわ」
「そうね」
歩美さんも、最終的には賛成してくれた。
ともあれ、チャットでの主だった会話はこれで終わりとなった。

「歩美さん、彼氏できた？」
「えー、まだ」
雑談中、歩美さんの恋愛事情に話が進む。
「まだ男の子を好きになるってよく分からないかしら？」
「うん、まだどうしても女の子に視線がいっちゃうのよ」
ＴＳ病とは言え、男としての人生が消えるわけではないから、男の頃の癖の名残はなかなか消えない。
男２０年、女４８１年の永原先生でさえ、男が出ることがあるくらいだもの。
「歩美さん、乙女ゲーム買って、少女漫画も読んで、まずは知識から入るといいわよ」
「うん、頑張ってみる」
実は頑張らなくても、時間と共に自然に男に恋することもできる。
でも、やっぱり女の子としての人格形成のためにも、早いに越したことはない。
ちなみに、ＴＳ病患者もレズビアンとして生きていくこともできなくないし、「女性として生きていく」という条件は満たしているため何の問題もないんだけれど、場合によってはノンケ化が遅れて進行することもあるため、十分注意しながら見極める必要がある。
レズビアンとして生きていくためには、女の子になって１０年が目安になっている。
またその場合は、やはりいわゆる百合系の漫画やゲームなどを仕入れ、勉強することが推奨されている。とは言え、簡単そうに見えて意外と難しいのか、一旦はレズビアンとして生きていこうとしてうまく

行かず、途中でノンケに切り替えて生きていく患者がほぼ全員で、レズビアンの患者は協会の会員にはほとんどいなくて、会員同士の百合カップルも未だいないけどね。
「幸子さんはどう？」
「あ、うん……その……」
　幸子さんはチャットからも分かるくらい言いにくそうにしている。
「うん」
「どうなんですか？」
　あたしはもちろん、歩美さんも幸子さんの恋愛話に気になる様子。いい傾向ね。
「そ、その……告白したんだけど、振られちゃって……」
「え!?」
「えええええええ!!???」
　さ、幸子さんが振られるって……
「もしかして、既に彼女がいたからとかですか？」
「ううんそうじゃないのよ」
「だったらまさかホモとか不能とかですか？」
　幸子さんほどのかわいくて美人な女の子に告白されて、既に女がいるわけでもないのにそれを振るとすれば、もうそれしかないわね。
「ああいえ、実は高校からのサッカーのチームメイトなんだけど……私最近になって、かっこいい彼の様子にドキドキしはじめて」
「うんうん」
「思いきって呼び出して告白してみたんだけど、『どうしても悟を思い出しちゃう』んだって……失恋しちゃったわ」
　ＴＳ病の女の子の恋愛事情としては、幸子さんみたいに、古くからの男友達や親友に恋するパターンはとても多く、最大勢力と言ってもいい。そう言う意味で、幸子さんの恋愛は、ＴＳ病患者としてはごく普通のものと言っていい。
　だけど、相手の男の方は、男友達としての付き合いが深ければ深いほど、関係の変化に二の足を踏んでしまう傾向にあるのが厄介なところでもあるのよね。

でも、パターンとしても多いので、振られても挽回するノウハウは実はある程度確立されている。
それが……
「幸子さん、そう言う時は色仕掛けするのよ」
もし、どうしてもその人と恋愛したいなら、やや強引な方法が必要になる。
一番確実なのがこの色仕掛け。ただ、幸子さんの身体的反射本能次第では、我慢も必要になるのがデメリットだけどね。
「い、色仕掛けって」
「例えば腕を取って胸を触らせてあげるとかすれば、男は迷いが消えるわよ」
あたしは、幸子さんにアドバイスをする。
「うーん、そう言うのも必要なのかなあ？」
やはり、幸子さんも元男なので、激しい拒絶反応はしないみたいね。
「ええ、幸子さんのその大きな胸、その人は見てなかった？」
「はい、サッカーのチームメイトはみんな食い入るように見てました」
「だったら、今度は色仕掛けを使って再アタックしてみて？　大丈夫よ。男は巨乳好きでしょ？」
あたしがアドバイスをする。
「確かにそうだけど」
「優子さんが言うとなおのこと洒落になってないわね……」
ＴＳ病の女の子は割合巨乳が多いんだけど、そんな彼女たちに混じっても、あたしの大きさは一際目立つのよね。
浩介くんだって、あたしが好きになった要素として、胸が大きな貢献をしたと思う。この巨乳のお陰で、あたしは女性を周囲にアピールできたと思う。
「ところで歩美さん」
「はい」
ここであたしは、歩美さんもフォローする。
「幸子さんの恋愛話に興味津々だったわね」
「ええ」

「とてもいい傾向よ。恋愛話に興味を持つのは、女の子の特徴だもの」
「え？　そうですか？」
　あたしの褒め言葉に、歩美さんは納得していないみたいね。
「ええ。歩美さん、カリキュラム中に少女漫画読んだでしょ？　その少女漫画って、何が多かった？」
「えっと、恋愛ものだったよ」
　おそらく、少女漫画をある程度読んだ人なら１０００人に１０００人は「少女漫画は恋愛物が多い」という意見に同意してくれるはず。
「うん、少女は恋愛話が大好きなのよ。だからこそ少女漫画は恋愛ばかりなのよ」
「あー、なるほど」
　歩美さんが納得してくれてよかったわ。
　もちろん、男子も恋愛話は好きだけど、女子ほどじゃない。
　そう言う意味で、恋愛話が好きになっているというのは、歩美さんの精神が徐々に女性化しつつあるという意味になるわ。
「歩美さんも、きちんとこの調子でいれば、男の子が好きになるわよ」
「そ、そうか……」

「優子ちゃーん！　浩介ー！　ご飯よー！」
　お義母さんの声が聞こえ、あたしはその旨を書き込んでチャットから退室すると、今日はお開きになった。

「それで、テレビの方でも、明日の会は追い詰められつつあるわ」
「ああ、ただ全般的な風潮としては『どっちもどっち』という感じになっているな」
　食事中、あたしはいつものように浩介くんと情報を交換し合う。
　そうだわ、永原先生にもさっきのことを話し合わないといけないわね。
「どっちもどっちな訳ないだろ」
　お義父さんが、珍しくあたしたちの話に口を挟んでくる。
「ええ、私もそう思うわね」

さて、あたしとしては、もちろんこの論法にも反対したい。
永原先生のためにも、この話は明日の会が全面的に悪いと主張しないといけない。
「ともあれ、この『どっちもどっち』が片付けば、ようやく休めそうだな」
「うん」
この所、学業に協会の対応にと、かなり忙しかった。
これからは少し、休めそうだわ。

## 闘争を仕掛ける協会

土曜日、あたしは1人で、協会の定例会合に出席した。

実は浩介くんと結婚してから、1人での外出はめっきり減っていたのよね。

蓬莱教授と高島さんも同席していた。男性2人は居心地悪いと思うけど、TS病だからかあんまりそんな感じではないのかな？

「みんな集まってるわね。それじゃあ定例会合を始めるわね」

幸子さんは地理的な都合で不参加だけど、歩美さんは普通会員として参加している。

今回の会合は関心が高いのか、インターネットを利用して会員たちが多く視聴していて、また正会員も全員参加している。

「まず明日の会ですが、既にニュースでもありましたが不適切な治療法を受け、患者が自殺してしまいました」

この顛末に対して、あたしたちが糸を引いていることを知っているのは、正会員と幸子さん、歩美さんだけだったりする。まあ、知っている人は少ないほうがいいのは確かではある。

「それに伴い、明日の会が協会に対して言いがかりをつけていることについては、正式に抗議をしておきました」

永原先生が淡々と報告する。明日の会そのものに対しては、既に「勝戦処理」の段階といっていい。

「ただ、最近のテレビメディアの『どっちもどっち』のような主張については、私としては懸念を持っています。皆さんはどう思われますか？」

「私は、ある程度喧嘩両成敗のような話が出てくるのは致し方ないと思っています」

比良さんが、仕方ないという表情で言う。

「私も、やはりどっちもどっちというのは必要経費だと思います」

余呉さんも、半ば諦めた表情で言う。

諍いになっているように見える以上、喧嘩両成敗という意見はどうしても出てしまうのだという。

「私は、この風潮が世間に出回るのは絶対に反対です」
２人の意見に対して、永原先生が重い口調で話す。やはり、赤穂事件のことがあるのだろう。
「会長、あの事件のことは――」
「ええ、吉良殿への罪はもうないわ。それでも、私にとってかけがえのない恩をくださった人が、理不尽に扱われたのも、全てはこの乱暴な風潮のせいなの。私は、全く悪くないのに喧嘩両成敗と扱われることは、どうしても我慢できないわ」
永原先生が、会議の場では珍しく、感情的な口調で言う。
永原先生にとっては、確かにかけがえのない恩人を理不尽に奪われた原因だから、無理もない。
「しかし気持ちは分かりますが、現実問題として難しいですよ」
口を開いたのは高島さんだった。
「ああ、人間は簡単な風潮に飛びかかりやすいものだ。確かに、喧嘩両成敗は江戸時代には既に破綻していた。いや、あの事件はそもそも江戸どころか戦国時代の価値観でも『喧嘩』とは言いがたい出来事だ。何せ『喧嘩を仕掛けられてもとりあえず穏便に済まし我慢したものは罰さない』というのが喧嘩両成敗の考え方だからな」
今度は蓬莱教授が口を開く。
「ええ分かっているわ。それでもやっぱり、私たちは悪くないと、主張していきたいわ」
永原先生が、なおも強く訴える。
「会長が強くそう言ってるんやから、それでええんやない？」
会員の一人が、気だるそうに賛意を示す。
「あたしも、永原会長に賛成です」
あたしが、永原先生に同調する。
「篠原さん、理由を聞いてもいいかしら？」
比良さんが追及気味に言う。
「はい、やはり沈黙は金は通用しない。あたしはそう思います」
「そうねえ……」
比良さんと余呉さんは、何かを考えるような仕草をしている。

「会長がそこまでおっしゃるなら……ただ、あまり執拗に主張しすぎるのもよくないと思います」
余呉さんが、条件付き賛成となる。
「ああ、その方がいいだろう。連中はプライドだけは高いからな」
高島さん、なかなかブラックなこと言うわね。確かに高島さんは物腰柔らかい人だけどね。
「それで、次の議題なんだけど、いいかな？」
永原先生が、次の議題に移る。
「今までの協会の方針、『私たちは1人の女性』というのがあったでしょ？」

「え？　今更そのこと？」
「まさか変えるの？」
「心変わりなんて困るわよ」

永原先生がそう話すと、みんな一様に、動揺を見せている。無理もない。
パンパン
「話を最後まで聞いてくれるかしら？　私が言いたいのはこの主張の他にもう1つ、新しい主張を加えるのよ」
永原先生が手を叩き、この場を沈めると、ゆっくりと話を再開する。
「そもそも今回の悲劇は、ＴＳ病で味わうことになる男女の違いと、それに伴う精神的負担への無理解から来るものだと思うのよ」
「確かにそう言う考えもあるわね」
それについては、みんな思うところがあるらしく、ウンウンと頷いている。
「そこで篠原さんから提案があったわ。従来は『私たちは1人の女性だから、女性として扱ってほしい』ということだけだったけど、これに『ＴＳ病だから分かる。男女の性差は大きく、これを無くそうとすることはできない。性差を受け入れて男女がそれぞれ男らしさ女らしさを考えるべき』というのを加えるべきというものよ。私もこれに

は、賛成したいわ」
周囲はざわついている。
そう、ＴＳ病患者になった人は、たったの１人も例外なく、フェミニストにはならない。世間で言われている男女平等や性差の穴埋めがいかに空虚であるか、女の子になって１週間もすれば、男女の様々な違いに戸惑うことで、嫌と言うほどに思い知らされるからだ。
もちろん、この場にいる人もみんな同じ。
だから主張そのものにはみんな賛成ではある。
「永原会長、言うまでもなくここの会員は、いえ、自殺した患者たちも全員、その意見には賛成すると思います。ですが、会として公的に打ち出すともなると、危険だと思います」
まず余呉さんが反対意見を出す。
そう、問題はそれを公の場に発信していいのかということ。
「ああ、この手の連中は宗教だからな。普通なら、両方の性別を経験してきた人間の言葉を信じるものだ。だが連中は、真実や現実よりもイデオロギーを優先させるものだ。ちょうど『明日の会』みたいにな」
余呉さんに続いて、蓬莱教授も反対する。
「ですが、このまま無意味な性差否定を放置すれば、将来また明日の会みたいなのが出てくる可能性があると思うんです。なので、あたしたちが声をあげて、社会に待ったをかけるべきだと思うんです」
そもそも、男性に子供が産めないという、そのただ一点だけでも、性役割は肯定されてしかるべきものだし、なくすことは不可能だと証明できる。
でも、ＴＳ病になって分かることはそれだけではない数多くの男と女の違いに衝突する。
それらを経験するには、ＴＳ病になるしかない。
あたしはそれを含めてそう主張する。
「ですが、無闇に敵を作ることになりかねないと思います」
比良さんは、あまりいい顔をしておらず、また他の正会員たちも、反応は芳しくない。
「それでもです。あたしは、同じ悲劇を、未来の患者に味わってほしく

ないですし、無意味な試みを続ける人々を、止めてあげたいと思うんです。それは、協会が出来得る社会貢献の1つだと、あたしは思っています」
「うーん、確かにそう言う考えも出来るのよねー」
　余呉さんは、当初は反対意見を述べたものの、あたしの話を聞いて賛成反対でとても悩んでいる様子。
　つまり、リスクを避け安寧を求めるか、これを機にいっそのこと社会に向けて打って出るか？　ということになる。
「俺も、賛成も反対もしないと言う立場を表明したい」
「蓬莱教授、どうしてですか？」
　さっきとは打って変わっての蓬莱教授の言葉。
「どちらも一長一短だからだ。確かに、性差は大きい。俺の『蓬莱の薬』だって、男性に適応させるのが最大の難関だったくらいだ。多くのＴＳ病患者が男に戻ろうとするにしても、男とも女ともつかない生き方をしようとするのも、性別適合手術で何とかなると安易に考えるのも、全ては性差の大きさを侮っているのが原因だ」
　蓬莱教授があたしの案に賛成するかのような口ぶりで話す。
「じゃあどうして？」
「デメリットはやはり、リスクの高さだ」
　蓬莱教授の話、リスクが高いという。
「協会は、今までは社会に向けて、最低限のことしか主張して来なかった。それを変えるのは、やはり大きな痛みを伴う可能性があるだろう」
「それでもです。今後間違った価値観が広まれば、自殺率の上昇に繋がりかねません」
　性差を否定する環境で育てられれば、いざＴＳ病になった時に精神的負担が大きくなる。
「両方の性別を経験したことのあるあたしたちなら、人数は少なくても、例え何万人の相手よりも説得力を持たせることが出来ると思うんです」
「うーん、しかし……」

やはり、比良さんには躊躇がある。
あたしたちは、ずっと今まで隠れた存在だった。
しかし蓬莱教授の登場で、嫌が応にも変革を余儀なくされた。
正会員の中では、最年少のあたしと、最年長の永原先生が革新派で、比良さんと余呉さんが保守派、残りは流動性が高い存在だった。
「もう、後戻りは出来ないと思います。今までは自殺率が高くても、世間の注目にはならなかったと思いますが、明日の会が出来てしまったこと、そして第2第3の明日の会を阻止するためにも、あたしたちにしか分からない、その性差の大きさをアピールするべきなんです」
あたしが、比良さんと余呉さんを説得するかのように言う。

「そうよねえ、私たちもいつまでも閉じ籠っているわけにもいかないわよね」
「仲間、増やさないといけないものね」
「うんうん」

他の普通会員たちも、あたしになびき始めている。
リスクを恐れてばかりではいられない。それが今の協会がおかれている立場なのよね。
「ですがやはり、たった３００人足らずの私たちに何が出来るんでしょう？」
余呉さんは、まだ納得がいっていない。
「余呉さん、戦い、決して数だけではないと思います」
現に、声の大きい少数が、世界を動かしていた事例は枚挙にいとまがない。
「といいますと？」
あたしたちには、他人に決してないことがある。
以前の小谷学園でも、あたしは「どうすれば男性受けするか？」とか、「男性心理の恋愛相談」とか、「女の子は女の子らしくあるべきか？」といった相談で、いつもクラスを牽引してきた。
そして、「優子ちゃんが言うと説得力が半端ない」という言葉もクラ

スメイトたちからもらった。
「あたしたちには『権威』があります。それを使えば、多くの人を扇動できると私は思っています」
それは、ＴＳ病というのが、あの集団の中である種の「権威」として君臨していたということ。
クラスの生徒で唯一、あたしは男子から女子になった。女子たちの中でも、男子として生きてきた経験がある。その事実が、あたしに権威を与えてくれたんだと思う。
そしてこれは、学者といえども持つことはできない。性転換手術では決して埋められない性差のことを、あたしたちはよく宣伝しておく必要がある。
「権威ですか？　私は確かに年齢こそ江戸生まれですが――」
あたしは静かに首を横に大きく振る。今回に関しては、年齢は権威にはならない。
「いいえ、余呉さん。あたしたちが、ＴＳ病患者として、かつては純粋な男として生きてきた。そして今は純粋な女の子として生きている。この事実そのものが、権威になるんです」
もしかしたら、女性の人生が長い人には、あまり実感がわかないのかもしれないわね。
「でしょうね、ましてや、協会として発表するともなれば、違うと思います」
以前より、フェミニストからはあたしたちの存在は極めて都合の悪い存在とされてきた。
触れてはいけないパンドラの箱というイメージさえあった。
もし、あたしたちがこの声明を発表すれば、フェミニストは間違いなく窮地にたたされる。本人たちは、おそらく「明日の会」と同じく、信仰のように男女差を否定するだろうけど、いくらかのダメージは与えられると思う。
「なので、長い目で見てあたしたち協会と、未来のＴＳ病患者のためになると思います」
これが、あたしが出した答え。今回の議題にした理由。

「長い目……っかあ……」
永原先生が呟くように言う。
そう、あたしたちが見ている「長い目」というのは、他の人の言う「長い目」と比べ、0が1個多い年月を意識してしまう。
「ええ、やってみる価値、あるわね」
「ええ、私たちも、両方の性別を経験した上で得た知識を、社会に還元しましょう」
「そうすれば、私たちに対する中途半端な扱いも減るわ」
比良さんが「やってみる価値がある」と言うと、周りからも賛意を示す声が沸き上がる。
歩美さんも、納得したような表情をしていた。
あたしの説得で、形勢は完全に賛成側に傾いていった。
やはり、あたしの実績も、大きいのかもしれないわね。
「では、私たち日本性転換症候群協会はフェミニズムに反対し、性差の否定は不可能と宣言し、女性らしい女性を目指すことを世間に向けて公表することをここに決議します。異義はありますか？」
「「異議なし!!!!」」
割れんばかりの大きな「異議なし」の声と共に、永原先生が満場一致で議決の旨を伝える。
この事は、随時メールでこの会合に参加していない会員たちにも送り込まれる。
数日間異議申し立てを受け付け、なければ予定日に声明を発表することになる。極秘性は低いので別に漏れても構わないとのことだった。
「じゃあ、今日は解散にするわね。お疲れ様でした」
「「お疲れ様でした!!!!」」
大きな声の挨拶と共に、各自解散となる。
さて、あたしも帰らないと。
「あ、篠原さん」
「はい」
永原先生が、あたしを呼び止める。

「篠原さん、ありがとうね。思いきった提案をしてくれて」
　永原先生も、満足そうな表情をしている。
「はい、この辺で打って出るべきかなと思いまして」
「ええ。協会としても、自殺率の低減は永遠の課題ですから。そのためには、世の中に理解を求めることも大切なんです」
　永原先生の話はあたしにも分かる。
　どんなにあたしのクッションが自殺率の低減になっても、世の中が性差の否定に傾けば、自殺率は上昇してしまう。
「それと同時に、今まで以上にこれまでの主張も繰り返す必要があるわね」
「ええ」
　あたしたちは1人の女性ということを強調するためにも、性転換手術やトランスジェンダーと呼ばれる人々とは全く性質を異にすることも、主要していかなければいけない。
「篠原さん、大学の方はうまくいっているかしら？」
「ええ、おかげさまで、レポートは全て一発で通ってます」
「ふふっ、それから夫婦生活はどう？」
「え!?」
　永原先生がにやにや笑うように言うので、あたしもビクッとなってしまう。
「恥ずかしがらなくてもいいのよ。熱々なんでしょ？　羨ましいわ」
「あ、あはは……」
　以前あたしたちは協会からのテレビ電話を、裸に布団巻いて応対しちゃったことがあった。
　明らかに夫婦生活の後だってバレてたわよね。
「ふふっ、篠原さん、学業と夫婦生活も大切にね」
　永原先生が怪しい笑みを浮かべて言う。
　あたしはどうしても、顔が引きつってしまう。
「はい」
「引き留めて悪かったわね。それじゃあまた会いましょう」
「ええ、お疲れ様でした」

永原先生と挨拶して、あたしは家に帰るための準備をし、協会のテナントを後にする。
「篠原さん、結婚してからますますきれいになったわよねー」
エレベーター前で、普通会員の1人が、あたしに話しかけてくる。
「え!? そうですか?」
確かに恋は女の子をかわいくするとは言うけど。
「ええ、旦那さん、素敵な人なんでしょ?」
「は、はい……」
あたしは、またぶしゅーっと顔が赤くなる。
やっぱり、面と向かって言われると照れ臭いわ。
「あらあら、赤くなっちゃって。篠原さんの方から惚れたって話は本当みたいね」
「は、はい……」
うー、やっぱり惚れた側っていうのは弱いわね。
「夫婦生活、頑張りなさいよ。ただでさえ篠原さんは男を欲情させる天才だから、旦那さんも求めてくるでしょ?」
またこの話題だわ。
「う、うん……」
そういえば、永原先生って経験があるのかな?
さすがにあれだけの美人で、しかも500年以上生きているわけだし、どこかで経験はあると思うけど……例えば、当時の混浴の銭湯の中で……ってダメダメ! 確かめもしようのないことをあれこれ考えても仕方ないわ。
「どうしたの?」
「ああうん、何でもないわ」
あたしは気を取り直しエレベーターを降りて、今度こそ1人で帰宅する。
帰りの電車は、そこまで混んでいなかった。
「間もなく――」
実家の最寄駅が近いアナウンスが聞こえてくる。

そう言えば、まだ実家に帰ったことなかったわね。あの日以来、母さんとも父さんとも会っていない。

どうしているかは、知ろうと思えば知ることはできると思うけど、何の連絡もないことを見るに、大きな問題は起きていないと思う。

実家の最寄り駅、3月までは毎日のように使っていたのに、浩介くんと結婚してから、1度も使わなくなって、急に遠い存在に感じるようになった。

あたしは、振り返らない。それよりも、素敵な浩介くんと心も体も、そして家族も一緒になれることが、何よりも幸せだった。

## 新天文部の出し物

「でですね、このマクローリン展開というのを使いますと――」
6月も半ばになると、大学の講義も徐々に終盤になり、河毛教授が担当している数学の微積分法と線形台数も、最初は色濃かった高校までの数学の面影は殆んど無くなっていた。
それにしても、「ロピタルの定理」って絶対高校過程でやった方がいいわよね？　知ってたら極限計算が格段に楽になるし。
ふう、最近はやっぱり少しついていくのに大変だわ。頑張らないと。
隣の浩介くんも、必死になって黒板を写しているわね。
大学の数学を受けてみてわかったけど、大学は高校までの数学と比べてレベルが段違いに高いと思う。
いや、高校の数学だってかなりのものだったけど、大学の場合どうしても抽象的な説明になりがちになる。
大学は夏休みが長いので、期末試験は7月に行われることになっている。
そしてもう1つ、6月という梅雨の季節は教室の移動が大変で、いかにして濡れずに傘を指さずに移動するかが課題になる。建物がたくさんあって、学校の複雑さも高校までとは訳が違う。
小谷学園では校舎や部活棟、体育館などがある程度だったけど、大学はとにかく教室の数が多いのが気になった。
空き教室になっている部屋も多くて、持て余し気味なのが気になるところだわ。

「よし、じゃあ行こうか」
「うん」
さて、大学の勉強と復習を終えたら、天文部へと向かう。
「こんにちはー桂子ちゃん」
「お、2人ともいらっしゃい」
教室の数が多いおかげで、出来たばかりの天文部にも、こうやって

簡単に小さな空き教室を持つことが出来た。
「そう言えば、今日が声明なんだっけ？」
「うん」
浩介くんも、あのことは少し気がかりみたいね。
「しっかし驚いたな。優子ちゃんがあんな賭けに出るなんてさ」
確かに、あたしにしては珍しいと言えると思う。
「まあ、最終的にみんなで決めたことだし」
「そうか」
あたしたちは協会について考える。
今日は、協会が例の声明を出す日、会員からの異議は特になかったんだけど、「もう少し明日の会側の動向を見た方がいい」という余呉さんの意見が採用され、今日まで遅れることになった。
ちなみに、明日の会側は、無反応だった。
「それにしても、気持ち悪いくらい静かよね」
「まあ、仕方ねえんじゃない？　鳴り物入りで受け入れた患者がすぐに自殺だもんな」
あれから、「明日の会」は開店休業状態に追い込まれている。インターネット上では、責任を問う声が、今も散発的に書き込まれている。
一方で、既存のメディアは、関心を失ってしまったみたいで、報道そのものが少なくなってしまった。
今では宣伝部がたまに書き込まれる「どっちもどっち論」に反論を書き込んでいる程度になっている。
いずれにしても、明日の会が今後新しい患者を手に入れられるとは思えないわ。
いや、そもそもＴＳ病患者そのものが、あれからまだいないんだけどね。
今現在、あたしの後輩の中で、自殺した２人を除くと、幸子さんと歩美さんを含めて全員が協会のカウンセリングを受けている。
また、「最終試験」にまだ合格していないあたしの先輩患者も何人かいる。
結果的には彼女たちも、そして協会の既存の会員も、誰一人として

明日の会側に寝返る人はいなかった。まあ、当たり前と言えば当たり前だけどね。
あたしの後輩たちも、全員経過は良好で、幸子さんは近いうちに、振られた相手にもう一度アタックするといっていた。
幸子さんのリベンジ作戦では、今度は色仕掛けを交えながら、「過去のことは忘れてほしい。今はもう、1人の女の子としてあなたのことが好き」と必死に告白するとのこと。
幸子さんは、もし告白とその後のデートがうまくいけば、最終試験を受けたいと言っていた。その時にはまた、カウンセラーのあたしが受けさせていいか判断を下さないといけなくなる。もし判断を謝れば、心の傷になりかねないものね。
「餅は餅屋、本当にいい言葉よ」
桂子ちゃんがしみじみという。
「お、優子ちゃん始まったぞ」
「うん」
浩介くんが、大手サイトのトップページのニュースを見せてくれる。
そこには、「日本性転換症候群協会が声明発表」と書かれている。
以前、ブライト桜はこの総合ニュースサイトには掲載されなかったが、事業の拡大と影響力の増大に伴い、この大手サイトにもブライト桜の報道したニュースが載るようになった。もっとも、殆んどは協会と蓬莱教授がらみのニュースだけどね。
中に入ると、「日本性転換症候群協会がフェミニズムに反対する声明を発表」と題されており、本文では予定通り、男女の性差の大きさと、女性が女性らしく生きていくことの重要性を説いていた。
まだ、掲載が始まったばかりなのでコメントはない。
しかし、ここにまず浩介くんがこう書き込む。
「やっぱり両方の性別を経験してきた人がこう言うと重みがまるで違うよな。考えてみれば男が子供を産めない時点でこれは至極当然だと思うけど」
この書き込みに、蓬莱教授の宣伝部が、ＩＰを偽装した複数のアカ

ウントで、次々と「そう思う」に入れていく。このサイトには、書き込みに対して「そう思う」と「そう思わない」で投票するシステムがあって、そのような意見が支持されているかが分かりやすいようになっている。

また、早いうちからこうすることで、トップに出やすくなるのでより多くの人の目に触れやすくなる。

「よし第二段階だ」

浩介くんが最初のアカウントをログアウトし、別のアカウントでログインする。

そして今度は「あったり前のこと。フェミババアが現実見えてねえだけ。自分が行き遅れてるのを男のせいにしてるだけ」と掲示板に書き込む。

これも、他の宣伝部が複数アカウントを駆使しつつ「そう思う」に一斉に入れていく。

暴言調の書き込みと、温厚な書き込みを一斉にあげて注目させることで、幅広い性格の人から賛成されていると錯覚させ、より多数派に見せかけることができるのだという。

元々、この大手サイトのコメント欄に書き込む住人たちは、フェミニズムに対していい感情を持っていない。火がつくのは時間の問題ね。

何だかえげつないけど、やり過ぎに注意しないといけないわね。

「ふう」

あたしたちの様子を傍観していた桂子ちゃんが一息つく。

「どうしたの桂子ちゃん？」

「ああうん、私ちょっと最近調子がいいのよ」

桂子ちゃんも桂子ちゃんで、前途洋々という感じがにじみ出ているわね。

「へー、そう言えば桂子ちゃん最近かわいいよね」

「うん、やっぱり彼氏できると違うわ」

元々桂子ちゃんはあたしほどじゃないけど、超がつくくらいのかわいくて美人な女の子。

彼氏ができてからは、ますますそれに磨きがかかっている。
「なるほどなあ……恋すると変わるのか」
浩介くんがそんなことを言う。
あたしも、もしかして浩介くんに恋をしてからは、それ以前よりもかわいくなったのかな？
「ええ」
桂子ちゃんは、共通の趣味を持つ彼氏とうまくいっているみたいで、大抵はプラネタリウムとか、小谷学園や佐和山大学で天体観測デートもしているという。
同じ趣味でわかり会えるカップルって、長続きしやすいイメージがあたしにはある。
あーでもあたしと浩介くんは……あまり趣味重なってないわね。
「あ、２人ともいいかな？」
「うん？」
桂子ちゃんが、慌てた感じではないが、ちょっとだけ真剣な表情をして言う。
「１０月半ばに佐和山大学で文化祭があるでしょ？　天文部、何を出そうかしら？」
「あ、そう言えばもうそんな季節なのか」
桂子ちゃんが文化祭の話をする。
やはりサークルとして活動するからには、出し物を何か出す必要性があるという。
「でも何を出すの？」
「そこが問題なのよねえ……」
桂子ちゃんが、腕を組みながら考えている。
出し物といっても、小谷学園時代のこともあるから、ネタが切れかけてしまっている。
「ねえ、太陽系に、近傍恒星と来たから、『局部銀河郡』とかどうかしら？」
局部銀河郡とは、あたしたちの天の川銀河やアンドロメダ銀河を含んだ銀河の集まりのことを言う。

「あー、それはだめ」
あたしの提案は、桂子ちゃんによってすぐに否定されてしまう。
「どうして？」
「小谷学園の天文部で、そのネタをやるんだって」
「あー、それじゃあダメよね」
小谷学園と佐和山大学は地理的にも近くパイプが太い。
なので、小谷学園出身者が多い佐和山大学では、分かる範囲でなるべく文化祭のネタが小谷学園と重ならないように配慮するのが慣例だと聞いている。
特に天文部は、それぞれの部長が彼氏彼女の関係だから、なおのこと重ならないようにしないといけない。
「うーん……」
ということで、再びあたしたちが考え込む。
「なあ木ノ本」
「うん？」
すると、浩介くんが何かを思い付いたように言う。
「天体観測デートって、写真とか撮るのか？」
「ええもちろんよ」
桂子ちゃんが当然と言う感じで言う。
「だったら、写真展にしようぜ。難しく考える必要ねえじゃん」
浩介くんが提案してきたのは、やや安直な提案だった。
「うーん、なるほど」
桂子ちゃんが納得したように言う。
「俺たち結構忙しいしさ、準備が楽な方がいいだろ？」
「そうね、優子ちゃんたちには、サークルだけじゃなくて協会や蓬莱教授のこともあるものね」
桂子ちゃんがあたしたちに配慮したように言う。
天文部の活動は、基本的にあたしたち3人で予定を確認しながら行われている。
あたしたちが忙しかったり、桂子ちゃんがデートの予定があったりすると、なかなか集まれないことも多い。

まあ、あたしたちの場合天文部の場所で蓬莱教授の宣伝部や協会の広報部と似たようなことが出来るので大抵は桂子ちゃんの都合が多いけれどね。
どちらにしても、あたしたちは多忙だけど、高校の頃と同じく、不思議と講義についていけてもいた。
小谷学園でも、あたしは優子になって忙しくなったのに、成績が落ちなかったこともあった。
「とりあえず、写真を集めるから、次回から選別作業に入るわよ」
「おう」
「はい」
あたしと浩介くんと桂子ちゃんの天文部は、とりあえず出し物の概要が決まったのであった。
家に帰ると、インターネットでの反応が出揃ってきた。
やはり、あたしの見立て通りだった。
ＴＳ病は、通常体験できない両方の性別を経験してきた人々の集まりで、また以前の高島さんの記事でも、ＴＳ病患者はその男女差を思い知らされる病気で、誰一人としてフェミニズムを支持しなくなることが書かれてはいたが、それでも、当時はあたしたちが取材を受けたことや、あたしと永原先生の容姿に注目が集中し、アピール不足と言う一面は否定できなかった。
大勢としては、やはりあたしたちの声明を指示する声が圧倒的に多数みたいで、ひとまずあたしは安堵の気分になった。
もしこれで協会が叩かれていたら、あたしの責任問題にもなりかねないものね。
「うーん、でも一筋縄ではいかないわね……」
一方先程の掲示板では、あたしたちを支持する声に混ざって、ある反対意見が支持を集めていた。
要約すれば、「ＴＳ病とされる患者たちはみんな例外なく飛び抜けた美人で、しかも男の気持ちが手に取るように分かる人ばかりだから、男からちやほやされて育った人に偏っている。つまり、たいした主張をしなくても、『女の特権』を十二分にフル活用できる。こう言う

人の集団に、『女の特権』を活かせないブスの気持ちは理解できないだろう」というものだった。
それに対しては、正直に言えば、あたしたちの泣き所でもある。実際、ＴＳ病患者が美少女の集まりというのは事実で、「ブスの苦悩」はどうしても知ることが出来ないのは認めざるを得ない。
だけど、この風潮を許しておくわけにもいかないのよね。
あたしは、即座にこの論法への反論を書き込んだ。
内容は、「要するにフェミはブスと行き遅れの嫉妬ってことでいいんだな。他人の足を引っ張ってみんなで不幸になろうといういつものあれ」というものだった。
完全に人格攻撃になっていて、反論にもなっていなくて、議論としてはふさわしくないものだけど、まあ今は致し方ないわね。
それに、人は見た目が大事というし、美少女のＴＳ病集団がフェミニズムに反対し、逆にブスや行き遅れがそれを支持するという構図は、中身の正当性はともかく、周囲に与える第一印象の上で、決定的に優位だった。
どれだけ綺麗事を言っても、結局世間は美人の味方になるようにできているのよね。うふふ。
「さて、明日以降どうなるかしら？」
あたしは、しばらく様子を見るといった感じで、寝床についた。

翌日、フェミニズム団体の反応は早かった。
彼女たちはこぞってあたしたちの声明に対して、ヒステリーを起こしたように抗議声明を出し続けた。
昼休みには、浩介くんと更に桂子ちゃんまで加わって、パソコンを開きながら情報収集をする。
「桂子ちゃんありがとう」
「いいのよ。優子ちゃんたちの大事だもの。強力は惜しまないわ」
桂子ちゃんは、快くあたしたちに協力を申し出てくれた。
更に、「足を引っ張らないように、情報収集に専念し、書き込みなども言われたことだけをする」と言ってきてくれた。

一方で、フェミニズム団体の抗議声明の中身については凄まじいものも多く、中には、「男性におもねって、男性の顔色を伺うような風潮は、男尊女卑を加速させる」という声明を出した団体もあった。
ちなみに、その団体の会長は５０歳にして一切の結婚歴なしという、この団体を作ったいきさつを考えると、あまりにもかわいそうな女性だった。
「しっかし、これは変な話だよなー」
浩介くんが、その団体のホームページの声明を訝しんでいる。
「うん、女の子が男に好かれたいって努力するの当たり前のことじゃないの」
桂子ちゃんが至極当然な意見を言う。
そもそも、男女を逆にすれば、それはごく普通の本能に基づいた行動だということが分かるわよね？　あたしだって、桂子ちゃんだって、男の子が好きだし。
「そもそも、いったい全体何がどうして、男が好きという女の子の本能的な欲求のままに男性受けを狙ったら男尊女卑になるのよ？　全くもって理解できないわよ」
「なあ、もしかして俺の流した噂、割りとマジな話なんじゃね？」
インターネットでは、この声明を出した団体はレズビアン団体ではないかという噂が流れていて、もちろん流したのは浩介くんだ。
「うん、もしかしたら洒落になってなかったかも」
あたしは、協会の声明に抗議したフェミ団体のＷｅｂサイトから、なるべくブスやおばさんの写真が集まっている活動報告の写真を収集し、次いであたしや永原先生、幸子さんといったこれまでに取材を受けた時に使われている写真とで比較するプロパガンダ画像を大量に作成し、インターネットにアップロードしたところ、これらが呟きサイトを通じて大量拡散された。
もちろん、これを見たネットの反応はあたしたちを全面的に支持する内容で埋まり、フェミ団体には、ネットユーザーからこの世の限りを尽くした罵倒と暴言が浴びせられていた。
おそらく、あたしたちが美少女だから、「行き遅れおばさんの陰湿な

いじめからから、かわいい子たちを守ろう」という気持ちが出ているんだと思う。
……ふふ、今頃顔を真っ赤にしているわね。
「優子ちゃん、思いきったわね」
桂子ちゃんが更に口を開く。
「うん、それにしても、世の中にはとんでもない被害妄想がいるのね」
「あー、ああいうモテないおばさんの言うことなんて信じちゃダメよ」
「あはは……」
桂子ちゃんの直球発言に、あたしも思わず苦笑いしてしまう。
桂子ちゃんは、過去に「同性受けを狙うのはレズのすること」と言ったことがある。
それは多少の極論にしても、少なくとも恋愛対象が男性である女として生きている人が、男性受けを狙う女性の足を引っ張るなんて、全く理解できない行動なのは確かだと思う。何故自分も同じように努力しないのか、あたしには理解できないし、桂子ちゃんも同じだという。
「さて、そろそろ次の教室に移動するわね」
「ああうん、俺たちも途中までついていくよ」
昼休みも後半になり、そろそろ教室の移動を開始したい。
次の教室までの道のりはほぼ同じなので、あたしたちはそちらへ向かって歩いていく。

# 優子の撃退劇

「それでさー」
「何だそれ、あはは」
「あのちょっとすいません」
「はい？」
あたしたちが３人で楽しく話し込んでいると、突然誰かから声をかけられた。
よく見ると、４０代と思しきくらいのおばさんだった。
「あなたが篠原優子さん？」
「ええ」
あたしが頷くと、その女性は険しい表情へと変わっていく。
「時間いい？」
何のことかよく分からないけど、幸いまだ次の講義までは余裕がある。
「少しだけなら」
あたしは軽い気持ちで答える。
「じゃあよかった、あなたのところの協会の声明、撤回するように言ってもらえる？」
「え!?」
いきなりの言葉にあたしは思わず声が裏返ってしまった。
一体何なのよこの人。
「あなたたちの団体の声明のせいで、私たち迷惑しているのよ。あなた幹部会員なんでしょ!?」
更に強い口調で畳み掛けてくる。初対面なのにいきなり何なのよ……
しかも幹部会員って、確かに幹部で間違ってないけどさ。
「……いや、知りませんけど」
「大体あなた見たいに男に媚びてるような人がいるから、いつまでも女性の地位が低いのよ！」
いきなりあたしは知らないおばさんに絡まれる。

その表情は、さながら嫉妬に狂う醜い顔だった。
「あの、意味が分かりません」
全く持って支離滅裂極まりないわね。
「何だよ！　あんたたちはあれほど女性をアピールしているくせに女性の権利向上には全く無関心で！」
そもそも、あたし女の子になれてよかったと思ってるし、色々女性向けのものも充実していて、十分女性が暮らしやすい国だと思うけど。
こんな幸せな生活しているあたしが、これ以上権利を求めてどうするのよ。
でも今はそれよりも気になることがあるわ。
「そもそも、初対面の人にいきなり喧嘩しかけてくるあなたの方が男女以前に非常識だと思いますけど」
「むっきー！　あなた見たいに女性差別主義者の好みばかり受け入れて！　そのせいでますます女性たちは下に見られているのよ！」
今時、こんなステレオタイプな怒り方する女がいるのね。
「別に女の子が好きな男の子に好かれたいから好みを合わせるのって当然のことじゃないの？　それとも男はみんな女性差別主義者なの？　そんな風に思うのが逆に男性差別だとあたしは思いますけど」
「あんたみたいなのが男に媚びて、それで男が調子乗って、女性の扱いが悪くなるのよ！」
荒唐無稽過ぎてもう聞いてられないわ。
……仕方ないわね。これ以上は時間の無駄になるしあれを使うか。
「……あの、あなたってもしかしてレズビアンですか？」
「な、何だよいきなり！」
ますます、おばさんの声が大きくなる。
「私はただ、男の子が喜ぶのを見ていると嬉しい気分になるから、男の子の好みに合わせているだけなのよ。女の子が女の子らしくして何が悪いのよ」
あたしは、この手の人にそもそも聞きたい疑問を投げかける。
「うー！　その女の子らしいってのが女性差別主義者が決めたことな

のよ！」
「あら？　あたしは女の子らしくしたおかげで、素敵な旦那さんを見つけられたのよ。あなた、そんなんじゃ旦那さんに嫌われるわよ」
　あたしは、その女が右手にも左手にも何もはめていないことを知りつつも、あえて左手を見せつけて薬指の指輪を見せる。
　その瞬間、おばさんの顔がタコのように真っ赤に膨れ上がった。
「何だよ!!!!!　そんなんで手にいれた旦那なんてちっともよくないわよ!!!」
「あら、浩介くんは同い年で力持ちで強くて、あたしのこと守ってくれる素敵な旦那様よ。もしかして、あなたは売れ残りでしたか？」
　あたしは、更に煽る。
　もうこれ以上は無駄なので、出来る限り相手を怒らせて出ていってもらうのを待とう。
　正直「優子」なあたしにはこういうのはとても苦手だけど、こうする以外に他ないので、やるしかないわね。
「女の子が男の子らしさを求めるのは、女の子にないものだからよ。男の子らしさを持ってる男の子をゲットするには、彼らがあたしたちに求めている女の子らしさを磨かないといけないのよ。相手あってこそのことだもん。一方的な関係はいけないわ」
「それは女性差別主義者の押し付けたことだ！　私たちは従っちゃいけない！」
　おばさんはまた同じことを壊れたレコードのように繰り返す。
「あら？　さっきからそればっかりね。オウムかしら？」
「うるさい、あんたみたいな奴隷になりたい女なんか都合よく捨てられるだけよ！　私みたいに男受けを狙うなんて卑しい真似をしないでありのままに自己主張する女が最後には勝つのよ！」
　あくまでも自分のエゴを通してくれる男がいいらしい。あたしたちみたいに不老のＴＳ病患者ならともかく、普通の人間がその年でそんな高望みするのがまず変だということに気付いたほうがいいと思うけど。
　それにしたって、男の子に喜ばれたいってただそれだけのことにこ

こまでムキになれるってすごいわね。
「あら？　女性誌には毎回のように女性らしくとか恋のお話とか女子力とか男子にモテるにはみたいなコーナーがあるわよ。むしろ女性自身が追い求めているって思ったくらいだわ。少女漫画だってほとんど男の子との恋愛ものじゃないの」
　最も、それらの女性誌や少女漫画には、誤解も多いものだったけど。ともあれ、カリキュラムが役立ったわ。
「むきー！」
　あたしに痛いところを突かれたのかまたステレオタイプな怒り方をする。うまく反論が思いつかないのね、かわいそうに。
「女の子らしさのない女何て魅力ないから売れ残るのよ。それは今のあなたが雄弁に語っているわね」
「な、何よ！」
　浩介くんも桂子ちゃんも、そして何事かと歩を止めている周囲も一言も喋らないで、あたしたちの様子を見守っている。
　口論の形勢は第三者目に明らかにあたしの勝勢だった。
「男と女は違いがあるから、役割があるから別々に生まれてくるのよ。あたしみたいにＴＳ病という病気はあるけど、性差を否定できるのは無性生殖の時代までよ」
　何億年前かは知らないけど。
「何が役割よ！　それは女性を縛り付けるものよ！　出産だってそうよ！」
　……やれやれ、バカにつける薬はないわね。赤ちゃん、あんなにかわいいのに。
　あたしは、かわいそうなものを見る目でおばさんの顔をめがけて言う。
「あたしは、男を経験してから女になって、その違いに毎日驚かされてきたわ。あたしたちは男女の違いを身をもって思い知らされた経験者だから言っているのよ」
「……」
　おばさんが無言で睨みつけてくる。全く凄みがない。美少女に手

玉に取られている行き遅れおばさんの図でしかないから。
「男の子は無意識でも下心があるから、女の子には優しいし、一緒にいても気を遣ってくれる生き物よ。ええあたしの旦那も、とっても素敵な人よ。そう言えば、孤独な人ほど異性を叩く傾向にあるって話知っているかしら？」
「何だよ！　あたしが孤独だって言うのか!?」
「ええ。だって、女の子らしく振る舞った美人のあたしは１８歳で結婚。自己主張ばっかりしてみんなから煙たがられたあなたは指輪もつけられずに行き遅れ。うふふ、本当に無様だわ。他人に当たり散らすことしか出来なくて、今もこうやって『この女は避けた方がいい』って周囲に宣伝しているのさえ気づけずに。あなたは本当にかわいそうで無様な女ね」
「うあああああああああ!!!」
あたしがおばさんを左手で指輪を見せつけながら嘲笑うように指を指すと、最後は無様に泣きながら廊下を駆け出していく。
……もう二度と来ないでほしいわ。

「おいおい、あれ篠原夫妻じゃん」
「優子ちゃん、かわいい顔して結構容赦ねえな」
「でも何だろう？　やっぱかわいいよな」
「うんうん」
「俺たちも女の子に好かれるように頑張らねえとな」

あたしたちの論争を聞いていた周囲のギャラリーたちも、あたしのことを噂している。

「そう言えばあの女、ジェンダー論の先生だったよな」
「ああ、あの講義、評判悪いらしいぜ」
「にしても、学生に論破されて涙目敗走って笑えるな」

そして、あたしに喧嘩を吹っ掛けてきたおばさんは、どうやら蓬莱

教授が言っていた例の「ジェンダー論」の先生らしい。
あんな低レベルの議論がまかり通っているのは気がかりだけど、あたしの中では、学生の身ながらも、曲がりなりにも先生を専門分野で論破したのは大きな自信になった。

このエピソードは、瞬く間に佐和山大学に知れ渡った。
あたしの株が上がると共に、ジェンダー論の履修生からはあのことについて質問攻めを受けているらしい。本当に哀れね。

季節は夏の、7月に入った。あたしは１９歳になり、１０代最後の1年が始まるとともに、夏の厳しい暑さが始まり、大学も徐々に期末試験に向けて緊張感が漂うようになった。
あたしも、期末試験が近付くに連れて、協会の仕事や家事を減らし、より勉学中心に予定を組んでいる。
分からないところは、佐和山大学の学生専用サイトを通じて、質問をすることができ、あたしたちの勉学向上に役立っている。
とにかく、勉強さえすれば単位は取れるはず。1年次だし一般教養も多いものね。
さて、あたしたちはあたしたちで勉強や課題の見直しを行っている。
大学のテストでは高校までとは違い、「持ち込み可」と呼ばれるタイプのテストが多い。読んで字のごとく筆記用具以外のものをテストに持ち込んで活用していいというルールだ。
更にその「持ち込み可」でも様々な形態がある。
ノートの持ち込み可とか、辞書の持ち込み可、電卓持ち込み可、教科書とノートの持ち込み可などのルールがあり、他にはあたしたちは受けないけど、ＰＣ系列、プログラミングなどの科目だと、パソコンも含めて全部の持ち込みが可能で、ネットへの接続さえ許可している科目まであった。
ちなみに、この持ち込み可のルールが大学になって出てくる理由について、河毛教授によれば「大学で勉強する内容は、高校までと比べ

ると極めて難解で、また暗記力を要するほどの基礎的な内容と言うわけでもない。使えるものを使う技術も、大学になると求められる」とのことだった。実際、持ち込み可の科目は当然に難解に作られているようになっている。

ちなみに、河毛教授の「線形台数」と「微積分法」は、どちらも「ノート持ち込み可」で、ノートにプリントなどを張り付けるのは「不可」ということになった。

蓬莱教授の講義は「再生医療概論」が持ち込み不可で、「基礎実験」の方は試験ではなくレポートで全て評価されることになっている。

ちなみに、「持ち込み不可」は、一般教養分野に多い。あたしたちはまだ1年次なので、必然的に一般教養が多くなる。

なのでまだ、再生医療を学んでいるという感じが、あまりしないのも事実。

これがモチベーションの低下を招いているような気がしないでもないわね。

さて、あたしたちは試験勉強の時間が終わると、大体は疲れた体を癒し、協会の動静を探っている。

フェミニズム団体は、相変わらずあたしたちへの嫌がらせを続けているが、既存のメディアはあたしたちを攻撃することができない。

そう、あたしたちの「権威」を崩せない。彼らは純粋無垢に「いや、TS病患者の中にも例外はいるはずだ」と思いこんでいるらしく、そうした例外を見つけようとしているが成功していない。当たり前だが、協会の取材条件を受け入れられないから取材できないのだ。

もちろん、「個人的に」という名目で患者個人に対して取材を申し入れて風穴を開けようとした記者もいたけど、どの会員と連絡を取っても、「男は男らしく、女は女らしく」と答えてしまうため、文字通り例外を作れず、反論ができなくなっているらしい。

もちろん、それらの情報もあたしたちには筒抜けだけどね。

コンコン

「はーい」

ガチャ

「優子ちゃん、休憩中にごめん。ここが分からないんだけど」
勉強熱心な浩介くんが、あたしに話しかけてくる。
「あーうん、ここはね……」
「ふむふむ」
成績は、大学に入ってもあたしの方がいい。
でも徐々に、浩介くんもあたしに追い付いてきている気がするわ。
浩介くんにはあたしと一緒にいるという大きな目標があるものね。
もちろん、ずっと一緒にいればあたしの身体を味わい尽くせるということもあるから、モチベーションは高いはずだわ。
「ふう」
浩介くんともう一息ついたら、今度こそ休む時間、試験前ということもあって、あたしも浩介くんもやや「我慢」している。
試験が終わったら、まずはその相手をしてあげないといけないわね。
溜まりに溜まっていたら、さぞ気持ちいいと思うわ。

今日は期末試験の最初の日、試験の日までに提出するレポートというのもあって、きちんと揃っているかもう一度確認する。
「うん、ＯＫね、浩介くんは？」
「ああ、念のために相互チェックしようぜ」
「うん」
そう言うと、あたしと浩介くんは鞄を交換し、レポートを確認する。
ちなみに、レポートの類似を防ぐために、確認は事実経過のみにとどめている。
それでも夫婦らしく、どことなく似ている気もするけど、取り越し苦労だといいわね。
「よし、優子ちゃん大丈夫だ」
「うん、浩介くんも合ってるわよ」
あたしたちは今度こそ大丈夫なのを確認し、大学へと向かう。
出席点、レポート点、試験点など、大学の単位は評価方法も様々にある。

だから、講義ごとにどういう講義なのか、あるいは単位が取りやすい取りにくいとか、つまらないとか面白いとか、そう言う講義の噂を収集することも重要だったりもする。
大学の試験は、かなりの部分で高校とは性質を異にしている。
最初の試験会場へ向かい、部屋の中で浩介くんと直前勉強をする。
いつもとは違い学籍番号ごとの指定席だけど、あたしと浩介くんは結婚して同じ苗字になったので、机は前になった。
「浩介くん、大丈夫？」
「ああ、一応一通りは、な」
ともあれ、大学の場合単位を落とすと結構致命的なことにもなる。
なので、慎重に勉強していかなければいけないし、レポートもきちんと出さないといけない。
理系の大学は課題も多くて、結構忙しいわね。他の大学に行ったクラスのみんなは、やはり文系の人はあたしたちより忙しさはいくらか軽減されるらしい。
ガララララ……
やがて、試験官の先生が入ってくる、あたしたちも、大慌てで持ち込み許可物以外をしまう。
不正行為とみなされないように、注意する必要がある。
「では、時間になりましたので、これから試験を始めたいと思います。まずはじめに注意事項ですが――」
試験管さんが、だるそうに注意事項を説明している。
答案用紙と解答用紙が配られるのは、高校までと同じ。
さて、持ち込みながらのテストだけど、どうなるかな？
あたしは緊張と期待が入り交じった感じで、試験を受け始めた。
「ふー、終わった終わったー！」
ともあれ、今日一日のテストが終わった。最初のうちは緊張したけど、２回目３回目となると、どうってことなかった。
途中退室可能時間まで十分終わるような少ない分量のテストもあったり、逆に河毛教授の線形代数と微積分法のように、急がないと

時間が過ぎてしまうくらいのテストもありと、結構混乱してしまう。
「優子ちゃん、お疲れ様」
「浩介くんも、お疲れ様ね」
あたしたちは、今日一日が終わったことを労い合い、長居は無用なので、家に帰ることにする。
とにかく試験は今日だけじゃない。
明日以降も試験は続いていく。きちんと勉強していかないといけない。まだまだ気を抜けないわね。

「あれ？　優子ちゃん、あそこ……」
帰り道、蓬莱の研究棟で蓬莱教授の銅像の前で立ち尽くす男性の姿が見えた。
「ああうん」
その姿は、見間違うはずもない、蓬莱教授だった。
一体ここで何をしているのかしら？
研究室にこもるか、忙しなく動いていて、1分1秒も時間を無駄にしないイメージの強い蓬莱教授が、ここで立ち尽くしているのは珍しかった。
どうしたのかと思って、あたしたちは声をかけてみることにした。

## 世界に広がる作戦

「蓬莱さん！」
「おや、２人とも、試験はどうだった？」
　あたしたちが声をかけたのを見て、蓬莱教授が振り返る。
「ええ、何とかなりました」
「それはよかった」
　蓬莱教授は、銅像から完全に目を離して視線をあたしたちに向ける。
「蓬莱教授、どうしてここに？」
「ああ、ちょっと研究に行き詰まったんだ。明日にでもまた水族館にでも行こうかと思ったが、やめておいたよ」
　水族館、それはあたしと浩介くんが、「お友達」になったばかりの時にデートした場所でもある。
　あの時はまだ、手をつなぐのだって億劫だった。それでも、あたしたちにとっては思い入れのある場所でもある。
　あたしたちは、そこで蓬莱教授と出会った。
　会うのはあの時が、２回目だった。確か、クラゲを見ていたんだっけ？
「そうですか……」
「ふー、しかし、あまり気分のいいものではないな、こう……自分自身の銅像を眺めているというのは」
　蓬莱教授は、ややうんざりしたような口調でそう述べる。
　確かに、気分が良くないというのは、あり得るかもしれないわね。
「それにしても、この銅像……」
「ああ、以前にも言ったように、アメリカ人の彫刻家が俺に作ってくれたものだ。向こうではどうもこちら以上に著名な人物らしくてな。彼の作品を見るついでに、今もこうして時折外国人観光客が来るんだ」
　蓬莱教授は１階の奥を指差す。
　確かに、そこからは英語のような言葉が聞こえてきた。

「研究棟が、観光地化って……」
確かに、歴史があるならまだしも、こんな所が観光地になるっていうのもおかしい話だと思う。
「ああ、それだけ、俺の研究と名声が全世界に轟いているということだ。何せ、俺はただのノーベル賞学者ではないからな」
蓬莱教授が胸を張って言う。
それにしても、「ただのノーベル賞学者」って、とんでもないパワーワードよね。
「それにともなって、ＴＳ病だっておそらく全世界で有名にはなっているはずだ。特にフェミニズムとジェンダーフリーへの反旗を翻してからは特に、な」
「そうですか……」
確かに、以前もジェンダー論の講師に、いきなり喧嘩をふっかけられたものね。
大学中の噂になっていて、ネットで外部流出も時間の問題だわ。
「あの話は、俺も聞いているよ。いやはや、相手がメチャクチャな論理とは言え、大学１年の１９歳の身で先生を論破するというのは、並大抵の才能では出来ないことではないだろう。大抵は、権威の前に怖気づいてしまうものだ。ましてやヒステリーを起こした女相手だ。そしてとりあえず謝ってしまうものだ」
「あたしにとっては、確信でしたから」
大学教授の権威よりも、あたしたちＴＳ病患者がみんな感じてきた経験のほうが、増した。
「そうか、誠に、優子さんは俺が見込んだ通りの女性だよ」
「ありがとうございます」
蓬莱教授が、あたしを褒めてくれる。
これほどの偉大な教授に褒められるのは、とても大きなことだとあたしは思う。
「ただ、俺が理解できないのは、『男に子供は作れない』、そのただ一点で、ジェンダーフリーやフェミニズム、男女平等主義などというものが達成不可能であるという、小学生でも分かる理屈を、なぜ大の大人

が理解できないか、だ」
蓬莱教授は、不思議そうな顔で言う。
確かにそれは、あたしにとってもとても重要な事だと思う。
「ともあれ、今後に注意してくれ。特にフェミニズム団体は……あー、いや、今はやめておこう」
蓬莱教授は何かを言いたそうにしたが、直前で口をつぐんだ。
「蓬莱さん？」
浩介くんがふとつぶやくように言う。
「あーいや、今は試験のことに集中してくれたまえ。その後は夏休みもあるからその時にも話そうか」
それはそうよね。
試験とともに、あたしたちは協会の活動や家事などは減らしてもらっている。
確かにこのことは気になるところではあるけど、今は大学のテストできちんと単位を取って、今後行われる蓬莱教授の研究に備えないといけないわね。今は試験に専念するのが将来のためだわ。
とはいえ、蓬莱教授の口ぶりからも、何か大きなことが起きている可能性はある。
試験の後は特に気をつけておいた方がいいわね。
「ええ」
「分かった」
あたしたちは蓬莱教授と応対する。
「引き止めて悪かったな」
「いえ、俺の方から声をかけましたから」
「そう言ってもらえると助かる」
あたしたちは蓬莱教授と分かれると、そのままゆっくりと家路についた。
今は協会で広報部長を務めているあたしだけど、今は多忙を理由にお休みを貰っていて、その間は幸子さんと歩美さんに任せっきりということになっているけど、歩美さんも高校３年生で受験を控えているし、幸子さんも２つ上だから今年後半から来年は卒業に向けていよい

よ忙しくなってくる。
そうなってくると、人を増やしてもらうか、あるいは蓬莱教授の宣伝部に委託してもらうことも考えたほうがいいかもしれないわね。
いや、まだ学生3人だからうまく行っているのかもしれないけど。
ともあれ、蓬莱教授と違って、あたしたちは資金力がない。というよりも、今の協会だって蓬莱教授の援助で成り立っているようなもので、それでも対等な関係を維持しようとしているのも、それだけあたしたちが研究にとって重要な存在だからということだと思う。
色々と気をつけたほうがいいわね。

「ただいまー」
「おかえりなさい！」
あたしたちのただいまの挨拶にいつものようにお義母さんが出迎えてくれる。
「試験どうだった？」
「うん、思ったよりはうまく言ったわ」
「よかったわ」
ともかく、この試験が終われば、夏休みに入る。
夏休みはどこに行こうかといった未来のことは、とりあえず今は棚に上げておいて、あたしたちは試験に集中することにした。たまには目先のことにも目を向けたほうがいいものね。
家に帰ってきたら、浩介くんと2人で勉強し、知識問題や試験範囲を見直しつつ、試験へと向かうことにした。
一週間、試験の日々は続いた。大学のテストは、教授間の意思統一もないため、科目によって違いが明白で、色々と苦戦させられる所だった。
これもまた、2年目3年目には慣れるのかもしれないわ。

「ふうー！」
全ての試験が終わって、あたしは一息つく。
周りはこれより夏休みだけど、あたしたちはまだするべきことが一

つ残っている。
「2人とも、テストお疲れ様」
「桂子ちゃんもね」
桂子ちゃんがあたしたちに話しかけてくれる。
桂子ちゃんは、今日は彼氏とのデートがある。
一方であたしたちは、蓬莱教授に「試験が終わったら『蓬莱の研究棟』まで来て欲しい」と言われていたので、この用事を済ませてから夏休みに入るので、夏休みは他の学生よりも少し後になる。
「優子ちゃん、行こうか」
「うん」
あたしたちは荷物をまとめ、集合場所の蓬莱の研究棟に歩いて行く。
いつものように1階には蓬莱教授のプロパガンダが掲げられていて、今日も数人の観光客がそれを凝視している。
ちなみに、最近ここで展示されている蓬莱教授の業績の一覧の中に「人類の寿命を２００歳とする薬の開発に成功」というのが加えられた。
コンコン
「はい、どうぞ」
あたしが扉をノックすると、蓬莱教授の声が聞こえてきた。
「蓬莱教授、篠原です」
「おお、君たちが来るのを待っていたよ。さ、遠慮なく入ってくれ」
「はい」
ガチャッ……
「あ、篠原さん、篠原君、こんにちは。大学、うまく行ってるかしら？」
蓬莱教授の「入ってくれ」という言葉を聞き、扉を開けると中には、永原先生と瀬田助教もいた。
「はい、永原会長」
「おう、心配しなくていいぜ」
あたしたちはここぞとばかりに健在をアピールする。
「ふふ、それはよかったわ」

「それよりも、どうして会長もここに？」
あたしが疑問を述べる。
まあ、予想はついているけど。
「あーうん、今回の呼び出しはどちらかと言うと、私の方の話がメインだからね」
「うむ、とりあえずまず俺の用事から……2人とも、また遺伝子をくれないかね？」
蓬莱教授が視線を少し別の方向に向けながら言う。
「ええ」
「分かったわ」
あたしと永原先生は、備え付けの綿棒とケース、ガーゼなどを見てそれを取り、頬をこすって不老遺伝子を採取する。
「悪い、これ頼む」
「はい」
蓬莱教授は瀬田助教にそれらを託すと、瀬田助教は部屋から出ていった。
「本当は瀬田君にも同席させてあげたいのだが……今は致し方あるまい。さて、ともあれ俺の用事は以上だ。続いては永原先生から君たちに用事があるそうだ」
蓬莱教授が着席して永原先生にバトンを渡す。
「ええ、篠原さん、協会のこと、例の声明でまた進展があったわ」
「おそらくそうだとは思ったわ。私も少しチェックしていたけど、フェミ団体があちこちから声を上げているわね」
とはいえ、僅かに得た情報では、あたしたちの権威は思った以上に高かったみたいだけどね。
他の人ならば、肉体的に両方の性別を体験することは不可能で、それを成し遂げているというのはやはり大きなアドバンテージになっていた。
「だけれども、それはつまり相手を追い詰めすぎていたということなのよ」
「どういうことですか？」

追い詰めすぎていた、永原先生は一見奇妙な話をする。
「何分、私達ＴＳ病は男女の違いに苦しむ病気と言ってもいいもの。私でさえまだまれに男が出ることがあるくらいだもの。だから、フェミニズムやジェンダーフリーなんて思想はどうしたって絵空事にしか見えなくなるわ」
「ええ、あたしも知っています」
それこそあたしたちにとっては常識の常識の話よね。
「だから、どうしたってあたしたちに有効打を与えられないのよ。そうは言っても彼女たちはそれを主張し続けないと行き場を無くしちゃうのよ。窮地に追い込まれたいくつかの団体は、外圧に頼り始めたわ」
「外圧……ですか……」
つまり、海外の団体に応援を要請したということ。
協会の言動があまりにも説得力がありすぎるために、外圧を使わないと屈服できないと考えたらしい。
最も、昔は効果が高かったかもしれないけど最近の日本人は外圧嫌いが多いから効果の程は微妙なのよね。
「うむ、しかし連中としては、諦められねえだろうなあ」
蓬莱教授が、半ば呆れ気味に言う。
「どうしたら良いでしょうか？」
「俺としては、これ以上は無視するのが肝要だと思う。日本国内だけの問題ならともかく、騒ぎを海外まで大きくするのは果たしてどうかと思います。ましてや、この病気は限りなく日本人固有の病気に近いわけですから。無視をすれば、いつかは相手も飽きるでしょう」
浩介くんは、慎重な意見を述べる。
「私は、打って出るべきだと思うわ。ここで引いてしまったらダメよ」
対する永原先生は、積極攻勢に出るべきだという意見を述べる。
「俺としては……打って出る公算があるかどうか？　それが問題だ。勝てる見込みがあるのかないのか？　それが大きな問題となるだろう」
「勝算は９割あります」

永原先生は自信を持って言う。
あたしも、９割は大げさだが８割はあると見ている。最も、これからのことを考えると８割どころかその半分の４割でも打って出るべきだとは思うけどね。
「ともかく、連中は数の暴力を駆使してくる危険性がある。もちろん、勝算が高いならば、未来のＴＳ病患者のためにも、突き進むべきだったとは思うがね」
蓬莱教授は懸念を述べつつ消極的推進という感じで言う。
これで意見を述べていないのはあたしだけ。
「あの、あたしはやはり積極的に主張していくべきだと思います。やっぱりその……このままの風潮はあたしたちにとってもまずいと思います。やはり将来的に、第二第三の『明日の会』が出てくることを阻止しないといけません。そのためにも、早めに芽は摘んでおくべきかと思います」
そして、あたしはやはり積極攻勢に出るということを提言する。
「それからもう一つ、やはりあたしたちも、数少ない、肉体的両性の体験者として、間違った社会的主張に対しては、きちんと間違いだと指摘していくのも、この社会の一員の人間としての責務だとも、あたしは考えています」
あたしは、更にもう一つ、強い確信を持って言う。
そう、永原先生しかＴＳ病患者がいない時代なら江戸城に篭もる事もできたと思う。でも今はもうそんな時代でもないから。
「……分かりました。他の正会員さんも似たような意見ですので、それで行こうと思います」
どうやら、最終確認に近かったみたいね。
「俺としては、協会がその姿勢で行くならそれに従うまでだな」
「ああ、俺も同じだ」
蓬莱教授と浩介くんはあたしたちの提案を受け入れてくれる。
とにかく大事なのは、フェミ団体をどうするか？　ということになってくる。
「それにしても、外圧と言われてもわからないわね」

「信教のような信念を持っている連中にどうやって理解を求めるかと言うのは非常に難しい問題だ。とにかく思い込みの激しい人間は多いからな。特に一神教なんてものを信じている連中は。俺が不老の薬を作るほうが、まだ簡単かもしれん」
そもそも外圧に対してどのように対応するかなんて言うノウハウは、協会にはない。
この病気の特性上、多様性の確保は不可能だからで、それを海外にどのようにして理解を求めるかというのは、極めて難しい問題だった。
あたしたちが協議の末に決めたこと、それは日本と同じように、「容姿プロパガンダ」を行うということだった。
それはあたしたちのような美人の集団には特に有用だった。
やっぱり、人は見た目が大切なのよね、うん。
「それじゃあ、私からも以上よ。2人とも、夏休み満喫するのもいいけど、協会の仕事もあるわよ」
「うん、分かっている。じゃあ失礼しますわ」
「おう」
永原先生と蓬莱教授に見送られ、あたしたちは「蓬莱の研究棟」を後にする。

「ねえ優子ちゃん、夏休みどうする？」
「うーん、どうしようかな？」
浩介くんが、ここに来てようやく夏休みの話をする。
まあ、あの研究棟を出た時点で、あたしたちも夏休みなんだけどね。
「家帰ってから考えるか」
「そうね」
あたしたちは、とりあえずは家へと真っ直ぐ帰ることにした。
佐和山大学は、試験の終了直後からか、ホッとしたようなムードが学校中に漂っていた。
あたしたちも、肩の荷が下りた感じで、家路についた。
「なあ、優子ちゃん、俺さ」

「うん」
電車の中で、浩介くんが小さな声であたしに囁いてくる。
その口ぶりからも、何に誘っているかは明白だった。
「家に帰ってきたら、悪いんだけど俺の部屋に来てくれねえかな？」
「あはは、もしかして溜まっちゃった？」
「うん、中間の日には自分でなんとか処理できたけど、さっきの話が終わったら、急に我慢が出来なくなってきた」
浩介くんが、苦しそうな顔をしている。
「ふふ、しょうがないわね」
あたしは、ニッコリ笑う。
うん、あたしも久しぶりに、ちょっと遠ざかっていたことをしたいからね。

「ただいまー」
「おかえりなさい２人とも」
お義母さんの、いつものお出迎え。
石山家にいたときもだけど、これがあるとやっぱり「帰ってきた」という自覚がある。
そう、あたしに帰る場所はある。場所が変わっただけ、何も苦しいことはないわ。
「うん」
「母さん、悪いんだけど少し休ませてくれる？　ご飯になっても呼ばなくていいから」
浩介くんが緊張した面持ちで言う。
「はいはい、分かったわ。優子ちゃんも？」
「う、うん……試験に疲れちゃって……」
お義母さんは、何かを察して気を配ってくれる顔をする。
多分、これから浩介くんの部屋ですることは、家族にバレてしまうと思う。
でも、仕方ないわよね。夫婦だもん。
こういう生活が充実していることは、夫婦生活の上でとても大事だ

と思う。
「じゃあ、ゆっくり休みなさい。ご飯できたらリビングの机に置いておくからね」
「はーい」
「じゃああなた、行きましょう」
「ああ、俺がたっぷり幸せにしてやるからな」
「うん」
あたしたちは、夫婦で幸福を分かち合うために、浩介くんの部屋へと一直線に入っていった。

## 誘爆に次ぐ誘爆

あれから、永原先生から言われた予言は的中した。

日本のフェミ団体が、あたしたちに外圧効果を期待して海外のフェミ団体にあたしたちのことを告げ口したらしい。

とおあれ外圧で揺さぶる作戦に出たが、そこの海外の団体の声明は、日本の団体がいかにマシかということをあたしたちに思い知らしめてくれるだけの結果となった。

ある海外のフェミ団体いわく、「世界に貴重な両方の性別を経験し、その懸け橋となるべき団体が、性差を肯定し、あろうことか男尊女卑を助長させるような声明文を出すというのは、誠に遺憾であり、即刻訂正と謝罪・賠償を求めたい」などと言っていた。

あたしは、もはや目も眩む思いだった。

そもそも、あたしたちの目的は、「ＴＳ病患者同士の交流」「新しい患者の自殺防止」、そして「世間に対して『１人の女性として扱って欲しい』と広める」という3本柱で、そもそも今回の声明だって、２つ目の目的の延長線上でしかない。

なのでそもそも、「両性の架け橋になるべき」なんていうのは、あたしたちは全く考えたことではない。

つまり、この発言そのものが大きなお世話である以前に、協会はそもそもそんな目的で動いていない団体なのに、勝手に相手がそう言う団体だと決めつけた上で「目的を果たしてない」と批判しているわけだから、開いた口が塞がらないわ。

蓬莱教授いわく、こういうのを「ストローマン」とか「藁人形論法」と言って、典型的な詭弁なのだという。いずれにしても、非常識なのは同じだと思うわ。

あたしたちも、反論声明の中で、そのことを出そうと思う。

また、「男尊女卑を助長させる」というのも意味がわからない。

そもそも、性差を肯定することが即性別の上下関係につながるというのが、全く持っておかしい。

これについてはもはや何をか言わんやとしか言いようがない。

あたしたちは、男から女に変わることで、その大きなギャップに苦しみ、多くの人が自殺していく病気にかかっているのに、この期に及んで性差を否定して穴を埋めようとするのは精神や人格が分裂でもしない限り起こり得ないことだわ。
そもそも「差がある＝上か下か」というのが恐ろしく視野狭窄なことだとあたしは思うけどね。

「優子ちゃーん！　ご飯よー！」
「はーい！」
あたしは、試験期間中に起きた情報収集のため、今日の夕食はお義母さんに任せてもらうことにした。
明日からは予定通りあたしも家事に加わることになっている。
「優子ちゃん、夏休みどうしようかしら？」
「うーん、８月は混んでいるわよねえ」
プールや海に夏祭りと、浩介くんと夏のイベントはそこそこ消化してしまってもいるのよね。
「でも9月はうーん……」
大学は高校と違って9月にも夏休みはあるけど、季節的な意味で夏を過ぎてしまっている。特に雨や台風の多い季節なのでリスクは高い。
ともあれ、今はあまり考えるのはやめて、食事に集中することにした。

「優子さん、これ見てくださいよ」
「え!?」
食事とお風呂が終わった後、いつものように作戦会議兼雑談として幸子さんと歩美さんでチャットをしていると、幸子さんが面白いものを見せてきた。
どうやら、海外で協会に抗議声明を出したフェミ団体の写真と、あたしたち協会が公開している会員の写真とを比べた写真が、つぶやきサイト上で出回っているらしい。

そして、そこで様々な言語で書かれていた言葉は、翻訳機にかけると予想通り容姿による差別発言だった。
後ろめたい気持ちがないわけではない。でも、こういうので得できるならするべき。というのが永原先生のスタンスだった。
「でですね、他の国ではどうも、『日本人は老けないと言われていたが、その最たるものだ』って言う反応もあるみたいですよ」
「あー、日本人は特に若く見られますからね」
実際欧米は無論のこと、中国や東南アジアでも、日本人は若く見られるというものね。
ましてや、永原先生なんて服装を決めれば女子高生どころか女子中学生に見えてしまう。向こうの価値観だとそれこそ小学生の女児にしか見えないかもしれないわね。
「さっき回ってきたんですけど、こんなサイトもあるみたいですよ」
歩美さんが貼ってくれたリンクを見る。
そこは、あたしたちの顔写真での年齢当てがあって、投票せずに結果を見ると、海外の人にはあたしたちが何歳くらいに見られているかがひと目で分かる。
「あたしや幸子さんの写真もあるわね」
そこには、以前「ブライト桜」の記事にあった写真も使われていた。
あたしの顔だけの写真だと、海外目線では１１歳の外見年齢に見られている。
流石に胸も含めた写真だと１４―５歳くらいに見られているけど、それでも実年齢の１９歳はもちろんのこと、女の子になったばかりの年齢が１７歳に近い１６歳だったことを考えれば、実年齢がかなり若く見られているのが分かる。
反応を見ると、「何故こんな幼いのに胸だけこんなにでかいんだ!?」という驚愕の声が次々に書き込まれていた。
どうやら、あたしの胸は海外の基準でも大きい部類らしい。って当たり前よね。
一方で、あたしよりは胸が小さい幸子さんの見た目年齢の予想も１２歳というのが平均値で、ＴＳ病患者がだいたい皆そのくらいに見ら

れているというのが分かる。
「すごいですねえ、向こうの人が見たらこんなに若く見えるんですか！　驚きですよ！」
歩美さんが感心している。
「しかもその若さは永遠だものね。自信になるわ」
ちなみに、あたしのは胸があるからか「入門編」のクイズで、「上級編」は永原先生の写真で年齢を当てるクイズだった。
永原先生に至っては、「１０歳位に見える」何て回答をしている人までいる。確かに、あたしたちの中でも、永原先生は特に童顔で、制服姿になれば女子高生よりも女子中学生に見えるくらいだから、１０歳程度に見られても仕方ないのかもしれないわね。
あたしは、試しに正解である「５０１」と入力してみた所、そのサイトからは「Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｊａｐａｎｅｓｅ？」と返ってきた。
「あはは、これ結構面白いわね」
実年齢よりも若く見られていることに、あたしは言いようのない快感を覚える。女の本能と欲求が満たされていく感覚に襲われていく。
それは単に優越感というだけにとどまらず、驚いている反応に対する「面白さ」もあるんだと思う。
いわば、「してやったり」とか「騙せた」という感じかもしれないわね。
そして、この年齢の見た目から見えてくることがある。
つまり、「無垢で幼い可憐な少女の団体に対して、モテないおばさんが寄ってたかっていじめている」という風潮になりつつあった。
いや、実年齢はあたしを除けば、協会の正会員たちの方が遥かに年上なんだけれども、やっぱり見た目からはそう見えてしまうらしい。
そして、海外でも同じ風潮がすっかり出来上がっていった。
やはり、美人の集団というのは大きい上に、ＴＳ病という病気自体が殆ど知られていない国からすれば、そのような病気が存在すること自体が、驚きを持って迎えられたのだった。
特に、５００歳を超えている永原先生の場合、やはり多く衝撃的なニュースが飛び交っていた。

まだ現地の大手メディアは報じていないものの、蓬莱教授の宣伝部の情報によれば、小さなメディアが色々な報じ方をしているという。
例えばアメリカでは、「ジョージ・ワシントンよりも年上の女性が日本で生きていた」とか、イタリアでは「ガリレオよりも年上の女性が現在も日本で生存中」とか、フランスでは「ナポレオンよりも１５０歳年上の女性、日本特有ともされる不老の奇病により現在も生存中」とかまあ色々と言われているらしい。
もちろんこれらは全て永原先生のことを指す。
いや、比良さんと余呉さんだって、１８０年くらい前から生きていることを考えればとんでもない話だけど、それでも永原先生のインパクトには負けてしまうのでほとんど報じられていないらしい。
「まるで、浮世絵みたいね……」
新しくチャットにログインしてきた永原先生がこれらのニュースを見てそうつぶやく。
「浮世絵？」
また、あたしにはよく分からない例えが来たわね。
「私の家には浮世絵がたくさんあるわ。どれもとても安い値段で買ったものばかりよ」
「と言いますと？」
確かに、安い値段だったというのは聞いている。
「浮世絵っていうのは、ものにもよるけど、今の価値に直せば３００円とか４００円、高くても１０００円位で買えた大衆向けの娯楽なのよ。ところが、幕末になって浮世絵がヨーロッパに入ってくると、それはもうとんでもなく非常識な値段がついたのよ」
「ふむふむ。つまり海外であまり知られていなかったＴＳ病について知られることで、情報の洪水が起きたんですね」
「ええ」
そう、日本では一応ＴＳ病は以前から「知る人ぞ知る」という感じだった。
永原先生のような人がいることは知られていなかったが、日本人に多い病気なので、不老の美少女になるという病気ということで、「名前

と概要は知っている」というのが一般人の認識だった。
ところが海外では違う。
そんなとんでもない病気が実在したとは思いもよらなかった。
ただ、蓬莱教授により「不老の研究」が行われていたことについて、ＴＳ病が大いに参考にされているということが、一部で知られていた程度だった。
「人間は興味が無いと意外と浅はかなものよ。蓬莱先生の不老研究は知っていても、それがＴＳ病を使ったものというのは、殆ど知られていなかったということね」
永原先生の意味深な言葉が、深く突き刺さる。
それは多分、あたしたちにも当てはまることだから。
いずれにしても、あたしたちの画像とフェミ団体の画像の比較画像によって、海外も含めて１日で分かるくらいに世論の形成は一気にあたしたちに傾いた。
あたしたちは、キャラクターのインパクトがとにかく大きな存在だった。
特に永原先生は、数百年と生き、更に男から女へと変わった存在だということ、両方の性別を経験した人間は、誰も彼もがそのギャップに驚かされ、誰の一人の例外もなくフェミニストにならない。
この事実は、要するにフェミニズムそのものが単なる机上の空論にすぎないことを、雄弁に語ってもいた。
「蓬莱先生によれば、戦況はいいらしいわ。私達は英語は分からないし、向こうのことは向こうの人に任せて、ともあれ今は国内のフェミ団体を潰していきましょう」
「ええ」
「分かったわ」
永原先生のチャットでの指示が飛び交い、あたしたちも襟を正す。
そして、影が薄くなったとは言え、相変わらず「明日の会」の監視も必要になってくる。
というのも、これを見た明日の会が、海外に活路を見出す可能性も無きにしもあらずだからだ。

日本ではキリスト教はほとんど支持されていないが、海外では違う。
言うまでもなく世界的にメジャーな宗教であり、最も信徒数が多い。
なので海外の患者は、基本的に無宗教か、あるいは仏教神道を基盤としているあたしたち協会ではなく、「明日の会」を選ぶ可能性は高い。
「とはいえ、孤独感も強く、日本よりも遥かに自殺率の高い海外で、日本でさえ通用しなかった間違ったやり方が通じるとは到底思えません」
幸子さんが冷静な意見を述べる。
「ええ、あたしも賛成です。明日の会の海外の患者については、放置するのが肝要かと思います」
すかさず、あたしも賛成の意見を書き込む。
「そうでしょうね、私達もそこまでの余裕はありませんし」
あたしも、幸子さんも、永原先生も、明日の会のことは放置することで一致した。
ただし、自殺した患者を出したことについては、今後も「不適切な対応をした」ということで、何かきっかけでもアレばネチネチと責めていきたいと思う。
とにかく、この病気は日本人が8割を占め、安定期に限れば9割以上が日本人になっているくらいに偏った病気なので、日本を制すれば世界を制するのは間違いない。
「今の患者さんのケアも疎かにしちゃいけないわね。幸子さんと歩美さんもですよ」
「分かってますって」
「ええ」
幸子さんも歩美さんも、それぞれに恋の悩みを抱えている。あたしもカウンセラーとして、悩みを解決する義務がある。
幸子さんは、好きな男の子に「男だった頃をおもだしてしまう」と言われて振られてしまい、現在再チャレンジ中で、歩美さんも、思い

切って乙女ゲームを買ってプレイすることにしたらしい。
あたしたちを巡る環境は、どんどんと、急激に、かつ確実に大きく変わっていく。
蓬莱教授の研究が効率化し、小谷学園にいた時以上に、あたしたちが注目されるようになったからだと思う。
「歩美さんは、夏休みどうするの？」
「あーうん、受験勉強があるよ。学校の夏期講習設けなきゃいけないし」
「やっぱり？　大変そうね」
「でも、乙女ゲームもやるよ。女の子として生きていくと決めた以上は、やっぱり優子さんや幸子さんみたいに、素敵な王子様を見つけたいもの」
「ふふ、いい傾向ね」
歩美さんも、幸子さんよりもゆっくりだけど、確実に女の子として成長してきている。
あたしのあの緩衝材のお陰で、従来よりも女の子になるまでの時間が短くて済みそうでよかったわ。
以前なら「成績優秀」に分類されていた子も、今では何だか「普通」という感じでさえあるわね。
逆に言えば、それだけ協会のＴＳ病に対する対処ノウハウが改善した証拠で、あたしが協会の正会員の一員として、協会に大きく貢献できているという証拠でもある。
それはやっぱり、とっても嬉しいことでもある。
「私、明日もう一回彼に告白するわ。今度は手を取ってみるの。それで胸に当ててね、強く強く『私のこと、ちゃんと女の子として見て』って訴えてみるわ！」
「ええ、それがいいわよ」
幸子さんの書き込みからも決心した様子が見て取れる。あたしも、応援することしか出来ないけど、必ず成功して欲しいと願わずにはいられない。
最初はとても手のかかる子だったけど、ここまで成長してくれたの

は、本当に嬉しいわ。
　幸子さんの彼氏さんにも、「蓬莱の薬」をあげたほうがいいかもしれないわね。
「ねえ幸子さん」
「うん？」
「幸子さんに彼氏が出来たら、『蓬莱の薬』いる？」
　あたしは、恐る恐る聞いてみる。
「うーん、今はまだいいわ」
　幸子さんからは意外な言葉が返ってきた。
「そう？　老けてからでは遅いわよ」
「分かってるわ、でも彼の意思もあるから。それまでは待つわ」
「うん、じゃあしばらくは保留にしておくわね」
　幸子さんは、蓬莱の薬については保留になった。
「篠原さん、蓬莱の薬のことはあまり話さないほうがいいと思うわ」
　永原先生が、あたしを注意する。
「うーん、蓬莱教授、サンプルは多い方がいいって言ってたから」
　あたしは、蓬莱教授を使って弁解する。
　別に言い訳ではなく、これは事実だ。
「うん、確かに蓬莱先生はそう言っていたから、篠原さんが悪いというわけではないわ。でも、塩津さんの所は私達の住んでいる場所からは地理的にも離れているし、外部への流出も警戒するべきだと私は思うのよ」
「あー、そうかもしれないわね」
　実際、外に流出したら間違いなく高値で闇取引される代物だと思うし。
「どっちにしても、今は蓬莱の薬は保留にさせてください」
「ええ」
　幸子さんの発言と共に、新しい被験者を迎え入れる構想はなくなった。

## 優子の素朴な疑問

大学の夏休み、あたしはようやく、春休みの時のような状況に戻ることが出来た。

幸子さんはともかく、歩美さんは受験勉強が更に忙しくなりそうだった。

あたしたちは、そもそも2年生の時点で佐和山に行くことが決まっていたから、いまいち疎外感を受けているのも事実だけどね。

「ふう……」

あたしたちの宣伝・広報は今の所うまくいっている。

元より、勝算の高い戦いだったのかもしれない。

その中でも、現在もフェミ団体が相変わらず悪あがきを続けている。

あたしたちの反論声明は、世界のフェミ団体たちにかなりの動揺を与えたらしい。

それでも、負けじと再反論を出してくるから恐ろしいわ。

ちなみに、再反論の声明を要約すると、「協会の反論声明はつまり、日本社会のジェンダーフリーが遅れているせいであり、だからこそそれを推し進めなければならない」というものだった。

「はー、どうしてそんな綺麗事が言えるのかしら？」

あたしは、理由もなく一人で部屋の天井に向けて呟く。

あたしたちＴＳ病患者たちは、最初に戸惑うのは、主に身体能力の差と言っていい。

生理が来てしまったり、トイレが近くなったり、体が弱くなったり、そう言った所にまず大きく戸惑う。

そして、カリキュラムなどで、弱くなった体と、かわいくエロくなった顔や体つき、更に周囲の反応の変化や接され方の変化から、あたしたちは男女平等の愚かしさを学ぶことになる。

特に、毎月襲いかかってくる生理があたしたちに与える影響が大きい。

これによって、あたしたちは「女性」を毎月毎月切り刻まれるよう

に自覚させられ、「出産」が女性にとっていかに大切かを学ぶことができるし、周囲もこれをきっかけに大きく人間関係が動いていくことが多い。それは、あたしもだし幸子さんや歩美さんも同じだ。

そうした幾重もの女としての自覚を植え付けられ続けた果てに、「ジェンダーフリーやフェミニズムがどうしていけないのか？」ということを考えるようになる。だから、男の経験のないフェミニ団体の反論を交わすことは、造作もなかったりする。

もちろん、海外でも「彼女たちは例外なく美人であり、また顔つきもとても幼いから、フェミニストたちの気持ちが分からないのではないか？」という反論はあるにはあった。

確かに、美人で男受けのいいあたしたちは、自然と周囲からもちやほやされるから、それがフェミ団体の構成員たちのトラウマを刺激して逆鱗に触れるという気持ちも分からないでもない。

それでも、だからと言って、足を引っ張るような真似をすればますます男から嫌われると思うのに。

「男中心ねえ……」

更に、海外のその団体によれば、あたしたちの振る舞いや容姿が、男性の好みに合わせすぎていて、それがミソジニスト……つまり女性差別主義者を増長させるのだという。

あたしたちＴＳ病患者は基本的に男受けを追求するように教育を受けている。それは単純に彼氏を早く作ることで女性化を早めるだけではなく、男時代の知識を使うことで他の女性よりリードして自信をつけさせたり、また女性として生きていく上での負担を下げる効果もある。

「頭が痛いわね……」

国内の団体も同じようなことを言っていたけど、この理論はあたしたちには理解しがたくて、みんな苦労している。そしてそれは、まず間違いなくあたしの頭が悪いからではなく、このフェミ団体の思考がおかしいからだと思う。

女の子が男に好かれたいから男好みに自分をしたてあげることが、

一体全体何故女性蔑視を増長させるのよ？
あたしには理解できないわ。むしろ逆だとさえ思う。
要するに、あたしたちの足を引っ張りたいだけの、美人へのひがみであると結論せざるを得ないわね。
以前から、本当にかわいくて美人な子は、こうした思想にはならないという。
桂子ちゃんもだけれど、男から好かれるのは素直に嬉しいから、男に喜ばれたい一新でしぐさや振る舞いを男性受けするようにしている。
なのにそう言う女性は決まって同性から嫌われてしまう傾向にあるという。
小谷学園では、桂子ちゃんの影響力が強かったからそう言う雰囲気はなかったけど、他の学校ではそうもいかないらしい。
幸子さんは男子にモテるようになった代わりに、女子からはかなり嫌われているらしく、あたしのアドバイス通り、女子に嫌われてもどこ吹く風の幸子さんは、ますます鼻についているらしい。ちなみに、ＴＳ病患者がこういうことになるのは結構よくあることらしい。
歩美さんは、まだ分からないけれどね。
もちろん、あたしたちは女の子、レズじゃないので男の子に好かれることが優先なのは言うまでもない。
「とにかく、この論争には絶対に勝たないといけないわね」
あたしはもう、何から何まで女の子そのものになれたけど、それでもやっぱり育ちの影響か、他の女性の心理が分からないことがある。
今回のフェミ団体の抗議文も同じで、モテないひがみを持つまでは分かるけど、そこのフェミ団体は、何とかモテようと男受け狙いもしない、する人は女性蔑視を推進させていると言う。
つまり努力もしないでモテないのを男性やあたしたちのせいにして、一体何がしたいのか全く分からないというのがあたしの正直な感想だったりする。
男好みに合わせる女と合わせない女とでは、どちらが好かれるか何て言うまでもないのに。

男の子は、みんな女の子に好かれるように努力していて、無意識でも下心があるから、自然と女性の好みに応じてくれる。
でも、男性のコミュニティで、女の子受けを狙っているからといって、それで嫌われるだなんて話はほとんど……と言うより全くといっていいほど聞かない。
何故性別が逆転するだけで、こうも言われないといけないのか？
生粋の女の子の桂子ちゃんに聞いてみたけど「私にも理解不能」と言ってきた。
まさに、「才能も無く、努力もせず、そのくせ与えられるものに不平を言って、努力する人間の足しか引っ張れないような奴」の典型的な例だわ。
「優子ちゃん、ご飯手伝ってー！」
「はーい」
……そうだわ。お義母さんに聞いてみよう。

リビングに行くとお義母さんと浩介くんがくつろいでいた。
「じゃあ、始めるわね」
「うん」
あたしは、いつものようにお義母さんと一緒に夕食を作る。
お義母さんは、あたしの指導の甲斐もあって技能をよく飲み込んだので、料理の味はあたしと遜色ないレベルにまで上達している。

「ねえお義母さん」
「うん、どうしたの優子ちゃん？」
夕食の準備中、あたしはお義母さんに疑問を相談する。
普段あまりこう言う感じの会話はしないので、お義母さんも少し驚いている。
「女の子って、どうして男受け狙う女の子を嫌うのかな？」
「うん？　どういうこと？」
「だっておかしいじゃないの。レズビアンの人とかなら分かるけど、普通に男が好きなら、男の好みに合わせるのって、変なことじゃない

じゃない」
「それはね。男の前でだけ態度が変わったりするからよ」
お義母さんが優しそうに言う。そういえば、こうやって女性の先輩に女性について聞くって久しぶりのことよね。
「え!? それって当たり前じゃないの?」
あたしたちは女の子で、恋愛対象だって男、なのにどうして好きでもない同性と同じ態度をとらなければいけないのよ?
人によって好みは違うんだから、態度が変わるのは当たり前だし、あたしには理解できないわ。
「優子ちゃんは何もかも完璧な女の子よ。でも、容姿や振る舞いだけを見てきた人はそうは思わないわ。特に嫉妬が混ざると、女性の心は結構すぐに混沌としちゃうのよ」
「そういうものですか?」
「ええ、小谷学園はそうでもなかったけど、女性の集団って言うのは、優子ちゃんが思っている以上に横並び思考が強いのよ。特に女子校の場合はね」
「そうなんですか……」
共学育ちには、全く分からないわ。
「そんな中で、1人だけ空気読まずに抜け駆けしたら周囲は嫌なのよ。特にそれで男にモテると、ね。だから、『同性に嫌われる女性ほどモテる』何て言う話もあるのよ」
つまり、そう言うのを気にしない女性は、ますます男からはモテてますます同性から嫌われると言うわけね。
「でもやっぱり、男が好きって言う気持ちを圧し殺してまで、恋愛対象じゃない同性になびくのは、変な話だと思います」
それは、やはり「優一の知識」が多分に影響しているんだと思う。
男に置き換えれば、変な話そのものだから。
「そうねえ、でも人間理屈ばかりじゃないのよ。時に理不尽な行動をとるものなのよ」
「うーん……」
そうは言っても、やっぱりまだあたしは納得できない。

理屈じゃないなら、それこそ「男に好かれたい」という気持ちが上回ってもおかしくないよね？
「まあ、まだ女の子になって2年ちょっとの優子ちゃんにはまだ難しいかもしれないわね。同じ女性でも、不思議に思う人はいてもおかしくないと思うもの」
どちらにせよ、「モテない行き遅れのフェミ団体が、美少女の集団に嫉妬している」という構図が完成すれば、あたしたちの勝ちになる。
その後は、普通に食事を手伝った。

「優子ちゃん、さっきの話の続き何だけどさ」
「ん？」
今度は、浩介くんがあたしに話しかけてくる。
浩介くん男の子だけど、分かるのかな？
「多分なんだけど、みんな女として譲れないプライドがあるんだと思うんだよ」
「うん」
「男にモテるために男受けしか考えてないって言うのは、要するにプライドを全部殴り捨てて男に媚びているわけだから、プライドを捨てられない女性からしたら、面白くないんじゃないかな？」
浩介くんが、「プライド」という言葉であたしを説得する。さっきの「理屈じゃない」に通じるわね。
「あら、浩介にしてはまともな回答ね」
「『しては』ってなんだよ『しては』って！」
お義母さんも感心しているけど、あたしはまだ納得がいかないわ。
「うーん、そうかなあ？　あたしはそうは思わないけど」
「どうして？」
「だって、男、特に浩介くんみたいにかっこよくて素敵な男性からモテるなら、これ以上ないくらい、プライドが高まらないの？」
女の子にとって、男から好かれるのは最上の喜びだと思う。
男だって、優一がそうだったように女の子にモテるのは憧れだしとっても嬉しいはずで、実際に小説なんかでも男性向けのハーレム小

説や、女性向けの逆ハーレムは、多くの作品が大人気を得ている。
「うーん、そう来たかあ……」
「優子ちゃん、『自分らしく、ありのままでありたい』というプライドが、『男に好かれたい』というプライドを上回ることがあるのよ」
「そうなの？　ありのままというなら、それこそありのままに男に好かれたいものだと思うけど」
あたしはやっぱり、まだ納得がいかない。
なんかデジャブを感じるわねこの会話。
「あー、確かになあ……」
浩介くんも「そこまで考えてなかった」という感じで納得した様子でうんうんと頷く。
「優子ちゃん、人間には矛盾がないって思い込みすぎよ。確かに、あの協会ではそう言う思考が求められるとは思うけど、協会に抗議してきた団体にそれだけだと、足元掬われるかもしれないわよ」
お義母さんが、少し忠告した感じで言う。
「う、うん……分かったわ」
とはいえ、頭の片隅にいれておいて損はないわね。
あたしは食事を終えたあと、お風呂で考えた結果、「永原先生に相談してもいいかもしれない」ということになった。
やっぱりこの時でも、「困った時の永原先生」だった。
永原先生は女性歴４８１年だし、女性については誰よりも知っているはずだわ。

「……それでね、永原会長はどう思います？」
「非合理で不利益なことを自分から行う団体の取る行動に理由を考えるだけ無駄よ。今は抗議声明や抗議文の対策を考えた方がいいわ」
誠に、実も蓋もない回答が帰ってきてしまった。ちなみに、一般論で聞いてみたけどそれもやっぱり「それも含めて、非合理で不利益な行動を自分から行うことに理由を考えるだけ無駄よ」と言われてしまった。

でも、永原先生らしいと言えば、らしいのかもしれないわね。

数日後、海外のフェミ団体はいつの間にか国内の団体そっちのけで、あたしたちを猛烈に批判し始めた。

おそらく、今までは「フェミニズム」を、ある意味で一種の「こん棒」のように使い、「問題発言」をしてきた個人や団体などを謝罪に追い込んできた矜持があったのだろう。

しかし、あたしたちは謝罪と撤回を拒否し、それどころか皮肉たっぷりに反論声明を出したものだから、フェミ団体の逆鱗に触れてしまったらしい。

もちろん、反論に次ぐ反論の応酬で、あたしたちは一歩も引かない。

そして、そうした団体は、もはや蓬莱教授の宣伝部を使わずとも、いわゆる海外のインターネット住人たちが、フェミ団体のアカウントにリプライを送り続けている。

大体は「ブスババアの嫉妬見にくいぞ」「ビッチにもなれない女未満の女が、世界最高の美少女クラブにたてつくのは見苦しい」といった、完全に直接的な文章が占めている。

フェミ団体が消しても消してもそうしたリプライが大量に送りつけられている様子を見て、あたしたちは改めて、美人、特に童顔の美人がいかに得かということを思い知らされた。

また、あたしたちに対しても、中立を装って「もう相手にすんなよ」「いくら説得したって無駄だって」という声も日本人を中心に多く寄せられているが、当然ながらあの手の団体は黙りこめば勝利宣言を出して来ること間違いなしなので、あたしたちは「もう無視しろ」という声に対しても、上のような理由で丁寧に反論する。

とはいえ、相手はもはや壊れたレコードで、ただひたすら「女性蔑視主義者に迎合する女の裏切り者」という言葉を繰り返している。

あたしたちは、かわいそうに思う。

あたしたちは、この不毛な論争を終わらせるために、「男性と仲良くしたい。男性の好みに合わせて、男性が喜ぶのを見たい。男性にいっぱい好かれたいという、ごく普通の女性の根元的な欲望に対して、そ

う言う目でしか見られない女性の集団こそ、真の女の敵であり、あなたたちのような集団がいるからこそ、『女の敵は女』という言葉を、雄弁に証明している」という声明を出した。
あたしたちのこの声明は、国内外のフェミ団体を更に追い詰める結果になった。
例によって、この声明を見た瞬間「日本は女性差別大国だ」と発狂していたが、もはやこのような外圧に屈する日本人ではなかった。
徐々にだけど、確実に、海外のフェミ団体も根負けしていった。やはりあたしたちは長期戦になると敵なしよね。

さて、これらの騒動も、「東京五輪まであと1年」というニュースのお陰ですっかり一段落した、８月半ばのある日だった。
「ねえねえ、協会で海にいきましょう？」
「え!?　海ですか？」
永原先生が、会合中にいきなり海に行くと宣言した。
あたしたちは、突拍子もない提案に目を丸くする。
「そうよ、海。最近みんな根を詰めちゃってるもの。少しみんなで息抜きしようと思ってね」
確かに、協会の存在意義として、ＴＳ病患者の会員同士の親睦を深めるというのがある。
「でもみんな水着は――」
「ふふ、もちろんこれから買いにいくのもよし、去年以前のを使うもよしよ。会員の皆さんは彼氏や旦那さんを連れてきてもいいわよ」
「う、うん……」
あたしたちは、永原先生の勢いに押されている。
「はい、これが当日の日程よ。なくさないでね」
永原先生は、あたしたち会員に向けてプリントを配っていく。どうやら、あらかじめ企んでいたのね。
場所はあたしにとって思いでの場所でもある海だった。
そう、浩介くんを好きになって、日焼け止めクリームを塗ってもらって、それでもあのときはまだ、反射神経に男が残っていて。

あのときのリベンジも、またしたいわね。でもさすがに、今年は水着変えようかしら？

「でもさあ、どないせいっちゅーねん。いきなり言われても準備が足らんで」
「そうねえ……ダイエット……はいらないか」
「うんうん、痩せすぎは男受け悪いものね」
「で、水着はどうすんねん？」
「新しいの買おうかなあ……」
「でも別に流行に流される必要のないわよね」
「うんうん、かわいくエロくが大事よね」

パンパン
「はーい、皆さん、話し合うのもいいけど、とりあえず一旦解散にしていいかな？」
「あ、はい」
永原先生の掛け声に、比良さんが応答して、今日の会合は終了する。
帰ったら、お義母さんとも相談してみようかしら？

## 再び海へ

「へー、いいじゃない浩介も優子ちゃんも、行ってきたら？」
協会で海にいくことになったあたしたちは、早速お義母さんにその事を話す。
お義母さんはすぐにノリノリになってくれた。
「うん、そうするわ。ところでお義母さん、水着なんだけど」
「去年一昨年同じの使ったんでしょ？　さすがに3年目はイメチェンした方がいいわよ」
お義母さんが、予想通りの回答をする。
つまり、一昨年以来2年ぶりに水着選びをしなければいけないということになる。
「はい」
そうと決まれば、早速水着コーナーに行かないといけないわね。またあのデパートに行けばいいかしら？　ここからだと実家よりも数駅分遠いのよね。
「優子ちゃん、この近くのアパレルショップで、水着を売っているわよ」
「うん」
こっちに嫁入りしてからは、区役所最寄り駅の方のデパートやスーパーはあまり使わなくなってしまった。
規模こそ小さけど、今の家の駅の最寄り駅にある店の数々で間に合ったりするというのもあるけど。

早速アパレルショップに移動し、あたしはお義母さんと一緒に、水着コーナーに入ることになった。
「どれがいいかしら？」
実の母さんとは違い、お義母さんはどちらかというと遠くから見つめる感じになっている。
積極的に「これがいいんじゃない!?」とは言ってこない。
優一時代から女の子になる過程を知っている母さんと違って、初め

て会った時には既にそれなりに女の子に慣れていたのが大きいのかもしれないけど。
今までのは、「あどけなさを残しつつも、かわいくエロく」がテーマだったけど、今のあたしは旦那がいる身、あまりエロを強調しすぎるのも諸刃の剣ではある。
だけど、あえて嫉妬させて、その日の夜に一気にぶつけさせるのも、愛を深める上ではとても効果的だったりするから侮れないのよね。
あたしは、黒いストレートロングの髪型に似合う水着を考えながら店内をうろつく。

「ねえこれかわいくねー？」
「あーいいねえ」

上のブラジャーは柄が派手で、また下はデニムのズボンタイプの水着の前で、数人の若い女性が談笑している。
あたしに言わせれば、これはもちろん論外で非日常の海にはふさわしくない。
次に目が入ったのは、ピンクのスカートタイプのビキニ。
これもいいと思ったけど、スカートタイプは前回と重なっちゃうので却下する。
「うーん……」
一昨年に選んだ水着が良くできすぎていて、あたしは大きく悩んでしまう。相談相手だった母さんと桂子ちゃんがいないというのも地味にハンデかもしれないわね。
もう少し、巻いている感じの強いパレオもあるけど、こっちもなんだかそんな気分じゃない。
次に目に入ったのは、マイクロビキニ、露出度を極限にまで高めたタイプ。
「うー、サイズがないわ」
あたしのカップ数が大きすぎて、このマイクロビキニは売っていなかった。

実は、あたしの服は、主に胸のサイズが原因で、このお店には普段着は売っていない。結婚してからは今の所新しい服は買ってないけど、もし買う場合はデパートか、あるいはネット通販になると思う。
水着コーナーにおいても、どうやらそれは例外じゃないのかもしれない。
まあ、どっちにしても、こんなマイクロビキニにしたら、浩介くんの嫉妬は半端ないだろうし、いくらなんでもやりすぎよね。
「あ……」
次に、シンプルな白いワンピースに目が入る。
「意外と男受けはいいのよねこれ」
露出度は低いけど、嫉妬心を起こさず、また慎ましやかなイメージもあって特に「彼女・嫁に着て欲しい水着」としては実はビキニを抑えて1位だったりする。
「これにしようかしら？」
ただでさえ、あたしは水着になると視線を一気に集めがちだし、これでいいかな？
「あーうん、もう少し見ていこうかしら？」
全部見終わってからでも、遅くはない。
あたしはそう考え、残りのコーナーを見回る。
次に見えたのは、黄緑色の、ショーツにフリフリのレースがふんだんにあしらわれたタイプ。
これは一昨年の夏に永原先生が着ていたタイプの水着で、露出度が高め。
ところで、永原先生は今年はどういう水着で来るのかしら？　まあいいわ。
「ねえ優子ちゃん、これなんてどうかしら？」
「え？」
迷っているあたしに見かねたのか、お義母さんが黒いビキニを取り出してきた。露出度も少し高めで、胸が強調されそうな印象を受けるわね。
「優子ちゃん、去年まで白だったんでしょ？」

「うん」
パレオは違う色だけど。
「だったら、思いきって黒でイメチェンするのもありよ。そうすれば、頭のこのリボンも輝くわよ」
「これは水着の時はつけないわよ」
もちろん、似たデザインで海の時用に流れにくいタイプには出来るけどね。
「あらそう？　似たようなリボンで海に行くといいんじゃない？」
「えー、でも……」
「優子ちゃんレベルの美少女に釣り合う水着なんて滅多にないわ。だから逆転の発送で、黒い髪に輝くその白いリボンに注目するのよ」
お義母さんがリボンにがっついてくる。
つまり、このビキニでさえ、引き立て役にしようというのがお義母さんの考え方ということになる。
確かに、あたしの中でこの頭の白いリボンはトレードマークになっているし、チャームポイントだとも思っている。
それでも、まさか水着を脇役に追いやるという発想は無かったわね。
「うーん、いいのかなあ？」
でも確かに、この黒いビキニもまた、セクシーなエロさを醸し出している。ブラジャーの布面積はそこそこだけど、ショーツの方は紐状になっていて横の方の露出度が高い。
いわば、「肉食系女子」の水着と言ってもいいかもしれないわ。
「ええ、それにこの水着だって、エロさを出しているわ。優子ちゃんも人妻何だから、旦那さんをちゃんと誘惑しなさい」
「わ、分かってるわよ」
お義母さんに「人妻」と呼ばれてしまう。
そこはせめて「若妻」とか「幼妻」って言って欲しかったわ。
「優子ちゃん、本当にたまにでいいのよ。たまには優子ちゃんの方から、積極的にがっついて、浩介を食べちゃいなさい」
「ちょ、お義母さん！」

あたしは、少し声を張りあげて抗議する。
「あら、優子ちゃん、いつも浩介に食べられてばかりじゃない」
「で、でも……」
あまり積極的にがっついちゃう女の子は、男受けがよくないのをあたしは知っている。
なのでやっぱり、そう言う態度をとることには二の足を踏んでしまう。普段のキャラクター性にも反しちゃうからあたし自身もうまくやれないと思うし。
「いい優子ちゃん？　これはマンネリの解消でもあるのよ。確かに普段から積極的過ぎるのは、そう言うのが好みな男性以外には逆効果よ。だからほんのたまに。年に一度でいいわ」
渋り顔のあたしに対して、お義母さんが諭すように言う。
それはほんのたまに起こる、逆転劇なのだという。
「うん、分かったわ」
あたしは、流されるままにこの黒いビキニを試着してみることにした。
試着室に入り、あたしは自分の水着姿を見る。一番大きいサイズだけど、胸がきついわ。
一旦出て店員さんに「胸が入らない」と言う。店員さんによれば、更に大きいサイズもあるので、店の奥からそれを引っ張り出してもらい、ようやくぴったり合うサイズにたどり着く。
着てみたら、黒髪に黒水着だけど、白リボンがあって思ったより似合っていた。
「うふふ」
あたしは、いつもの「明るい笑み」ではなく、野球部を壊した時のさくらちゃんみたいな「悪魔の笑み」を浮かべてみる。
「何だかさくらちゃんに生き写しね」
志賀（しが）さくらちゃんは、小谷学園時代のクラスメイトの一人で、一昨年の文化祭以降1つ年上の野球部の元エースと交際中の女の子で、引っ込み思案であたし以上に大人しくおどおどした感じの性格が特徴的な子……何だけど、あたしのアドバイスと後押しをきっかけ

に、さくらちゃんは野球部のマネージャーとして入り込み、そこから野球部のエースと付き合い始め、最終的に小谷学園の野球部は部員同士の仲が険悪になり、今も部活動に支障が出るほどに致命的な打撃を受けてしまった。
あたしは今も野球部崩壊の引き金を引くのを手伝ってしまった罪悪感があるけど、当のさくらちゃんは、今でもその事に罪悪感は全く感じていない。
しかも、さくらちゃんは話がその事に及ぶと、途端に「魔性の女」という感じの微笑みを浮かべるのが常だった。あれは、意中の恋人を手に入れ、他の男を惑わしたことに対する快感なのだと思う。
今のあたしも、どちらかと言えば「小悪魔」という感じの女の子にしたてあがっている。
黒い髪に黒い水着、そのためにますます頭の白いリボンが輝いているわね。
「ふふ、こんなあたしもありよね」
いかにもな感じの肉食系女子の佇まい。といっても、襲って食べるのは浩介くんだけだけどね。
ちなみに、水着の紐は、ただの飾りだった。はらりとほどけて「いやーん」とはならない。確かに海で泳ぐことを考えると当然だし、そういうのは、アダルトグッズで行うしかないのかな？
それを考えると、浩介くんを襲う時用にもう1つ、「ほどける紐水着」もインターネットのエログッズショップから買っておかないといけないわね。
「うん、これにするわ」
前回とは違い、あたしは試着してからはさほど迷わなかった。
2年前の貯金があるというのが大きい上に、あたしの場合不老なので加齢を気にする必要もない。
「お義母さん、これにするわ」
「はーい、お金はこっちで払っておくわね」
お義母さんは、財布を持って話す。
「え!?　いいんですか？」

「ええ、石山さんの方から、毎月学費と仕送りがあるんですもの」
そういえば、結婚を急かしたために、そう言うのが両親の負担になっていたんだったわ。
さすがに一昨年の痴漢事件での慰謝料分は底をついたけど、去年の修学旅行と、今年3月の新婚旅行での蓬莱教授からの支援金がかなりだぼついてて、両親からの仕送りなんて全く考えてなかったわ。お小遣いももらってなかったし。
「そう、分かったわ」
と　もあれ、あたしは、新しい水着を手にいれた。

「ただいまー」
「優子ちゃんお帰り。新しい水着は買えた？」
家に帰ると、早速浩介くんが水着について話しかけてくる。
「うん、楽しみにしててね、あなた」
「うっ……何か優子ちゃん、いつもと違う雰囲気だな」
浩介くん、鋭いわね。
普段はもっと単純なのに。
「えへへ、それはもう、あたしの違った魅力を浩介くんにと思ってね」
「ち、違った魅力？」
「うふふ、海に行った時のお楽しみよ」
あたしは、意味深な笑みを浮かべながら、はぐらかす態度をとる。
何だろう、もうすっかり小悪魔肉食系女子としてのあたしのイメージが染み付いちゃったわね。人間って恐ろしいわ。
「お、おう……」
普段は、あたしは大人っぽいのは好まない。なので、黒い下着を始め、「大人のセクシーさ」をイメージした服は持っていない。
顔が童顔なのもあって似合わないというのもあるし、何より「おばさん臭さ」と紙一重だったから。
でも、今回の水着は、そうした感じではなく、「小悪魔」をイメージできたと思う。
童顔で幼いけど、体はナイスバディなサキュバスというイメージな

ので、海の髪飾りも、白いリボンの結び方を、考えないといけないわね。
「うーん、こんな感じがいいのかなあ？」
あたしは、鏡つきの机の前で、リボンをいじる。
「それとも、こんな結び方が似合うかしら？」
あたしの悩みは、結局海に行く前日までついて回った。

「浩介くん、起きて!!」
あたしは、浩介くんの部屋に行き、ベッドで彼の体を揺さぶってみる。
うーん、浩介くん、昨日は夜更かししちゃったのかしら？　あたしの起こす声にも起きようとしてくれないわね。
「浩介くん！　遅れちゃうよ！」
今日は協会の主催で海に行くことになっている。
「うにゃーうー！」
もう！　よし、こうなったら……
「起きないと来年まであたしの水着姿見れなくなるわよ」
「わー！　嫌だ嫌だ優子ちゃんの水着見たい！」
「きゃっ！」
浩介くんが突然大きな声で布団を蹴りあげて、ものすごい勢いで起き上がってくる。
「うおおおおお!!」
浩介くんが、目を覚ますために顔をパンパンと叩いて顔を振る。
あたしは急いでこの場から退散した。
「……もう、本当に男って単純なんだから」
過去のあたしも、そんな生き物だったんだなあと思いつつ、あたしは浩介くんの準備が完了するのを待つ。

「優子ちゃん、お待たせ」
涼しい格好をした浩介くんがあたしに挨拶をしてくる。
ちなみに、あたしもあたしで、今日は特に暑いので、短めの水色の

ワンピースを着ている。ちなみに、ねこさんのぬいぐるみを抱き抱えながら行くことにした。
そう言えば、一昨年の海も同じ服だったっけ？
「じゃあお義母さん、行ってくるわね」
「うん、気を付けるのよ」
「分かってるって」
そんなやり取りをしつつ、あたしたちは家を後にする。
「間もなく、電車が参ります」
いつもの案内放送を、いつもとは逆のホームで聞く。
こっち方向で終点まで行き、更に乗り換えた先の終点が海水浴場の目的駅になる。

「懐かしいなあ、もう2年前だっけ？」
電車の中で浩介くんと隣り合わせに座る。
「うん、そうね」
あの時は、浩介くんに恋したばっかりの頃で、今のあたしと比べると、ずっと男に近かった。
「優子ちゃん、大変だったよな」
「うん」
体の反射が言うことを聞かなくて、「好きな男の子と触れあえない」という悲しみは、当時のあたしを深く揺さぶった。
日焼け止めクリームの思い出は、心は嬉しいのに体は嫌悪感で一杯で、その辛さに最後は1人で泣いてしまったことも、あたしの中でも深く刻み込まれている。
「まあ、今となってはもう、古い思い出だよな」
「といってもまだ2年しか経ってないのよね」
「そうだなあ……」
あたしたちは、2年前と同じように、電車を乗り換えて、同じ集合場所を目指した。
「おはようございます。永原会長」

「あら、篠原さん、篠原君、いらっしゃい」
見てみると、永原先生を始め、協会の会員が数人そこにいた。
そしてその中にはカップルも1組いた。
「幸子さん！」
「あ、優子さん、おはようございます」
幸子さんは、涼しそうな白のワイシャツと水色のワンピースで、あたしよりも着飾っている。
胸の赤いリボンと頭の上に大きな水色のリボン、2つのリボンが特に目立つ一方で、スカートの裾は白い山のような模様になっていて、これは去年のパーティーの時に着て来た服と同じだった。
「幸子さんずいぶんと遠いところからどうして？」
幸子さんの住んでいる地域は南の方で新幹線も通っているとは言え、東北地方に分類される場所のはず。
「昨日の夜に家を出たのよ」
「へー、そこの彼と一緒に？」
「はい、その……紹介します。私の彼氏の――」
幸子さんが、噂の彼氏を紹介してくれる。
幸子さんがまだ男だった時からサッカーでチームメイトだった男の子だ。
「塩津幸子の彼氏です。彼女がお世話になりました」
サッカーをしているとあって、結構鍛えているみたいね。
浩介くん程じゃないと思うけど。
「篠原優子です、幸子さんのカウンセラーをしています。こちらが主人の篠原浩介です」
あたしが、浩介くんを紹介する。
「篠原です、よろしくお願いします」
「幸子さん、体の方は大丈夫？」
あたしがそうだったように、この時期は身体の反射に苦しむ。とはいえ、時間も時間なのであたしほどじゃないと思うけどね。
「うん、2回目に告白した時はちょっとだけ、『悟』が出ちゃったけど、でも、何とかうまくいったわよ」

「そう、今回の海デート、うまく行くといいわね」
あたしがにこりと笑って言う。
「デ、デート……！」
幸子さんが、ビクッとする。
もうすっかり恋する乙女になっちゃって。かわいいわね。
「うー、塩津とデートかあ……」
「むー！　直哉（なおや）――！　名前で呼んでっていつもいってるでしょ！」
幸子さんが拗ねたように口を尖らせながら言う。
「ご、ごめんよ幸子ちゃん」
「うん、ありがとう」
彼氏さんが慌てて訂正すると幸子さんがにっこりと笑みを浮かべて彼氏をどきんとさせる。
幸子さん、もう男の操縦を心得てるわね。２年足らずでこれは本当に凄いわ。
「あ、優子さんに幸子さん！」
駅から来た人影を見ると、そこにいたのは歩美さんと余呉さんだった。
「歩美さん、おはよう」
歩美さんは、たまにカウンセリングの相談がチャット上である。
とは言え、精神は安定していて、女の子になったばかりに見られた自殺への恐怖も、今はもうほとんどない。
「あれ？　もしかして幸子さんその人って」
「ええ、あたしの彼氏よ」
幸子さんが、彼氏を紹介する。
「はじめまして。えっと、幸子さんとは……優子さん繋がりで友達になりました、山科歩美です」
「よろしくお願いします」
「今日は数少ない男手ですから、きちんと働いてくださいね」
「わ、分かってますって」

余呉さんは、どうやら幸子さんの彼氏とは面識があったらしい。
その後も、比良さんや他の正会員さん、また蓬莱教授と瀬田助教もいた。
協会の会員たちにも彼氏や旦那持ちはいて、男手もそれなりに確保できている。
人数が増えると共に、集合場所は手狭になっていく。あたしたちは通行の邪魔にならないように、うまく場所を工夫する。

「なあ、何だよあの美女軍団」
「すげえよ、かわいい子しかいねえよ。特の黒髪の子、隣にいるの彼氏か？」
「あーあ、まあ世の中そう甘くねえよなあ……」
「しっかしすげえよな、女優の集団かな？」
「さあ？『美女の会』かなんかじゃね？」
「というか、あの黒髪爆乳の子、どこかで見たことあるような？」

道行く男性たちも、あたしたちの噂をする。
ＴＳ病になると、皆絶世の美少女になる。そんな患者が集まれば、当然美少女軍団になってしまう。

「さて、これで全員ね」
永原先生が、名簿を確認する。
「みんなー！　全員揃って時間にもなったから、海に入るわよ――！」
永原先生の掛け声と共に、海水浴場へと入る。団体料金で、永原先生が代表して入場料を支払う。
「じゃあ浩介くん、またね」
「おう」
あたしは、浩介くんたちと別れ、他の会員たちと共に女子更衣室へ入る。
やはり皆さん人生長いので、躊躇なく女子更衣室に入っていく。あたしも送れないように続く。一方で歩美さんはやや緊張の表情をし

ているわね。

# 優子のリベンジ

「篠原さんはどんな水着にしてるの？」
　更衣室で隣になった比良さんがあたしの水着について聞いてくる。
「ふふ、じゃーん」
「へー、篠原さんにしては珍しいわね」
「そうでしょそうでしょ！」
　あたしは、うまく着替えかたを工夫して、中身が見えないようにしつつ、必要なものだけかごにいれて、ロッカーを閉めて鍵を腕に巻く。
　うん、やっぱりスカートじゃないとこういう時にダメよね。
　鏡の前で、あたしの水着姿をもう一度確認、うん、かわいくエロく、小悪魔に決まってるわ。ふふ、今夜の浩介くんがいつもとは逆にあたしに手玉に取られてヒーヒー言わされてる姿が楽しみだわ。
　見ると半数の人がすでに着替え終わっていた。
　あたしたちは大人数なので、着替え終わったら素早く更衣室を出る。
「篠原さん、こっちこっち」
　手を振る永原先生を見て、あたしはそっちへ駆け寄っていく。
　永原先生は、真っ白だけど、ショーツにはフリルがかわいらしくあしらわれ、幼さを強調する水着だった。露出度は、去年よりも控えめに押さえている。
　なのに、胸はかなり自己主張していて、まさしく「ロリ巨乳」「合法ロリ」と呼ぶにふさわしい格好になっている。
「ふふ、篠原さん似合ってるわね」
「ありがとう、永原会長も」
「うふふっ」
　やっぱり、幼さという意味では永原先生に勝つのは難しいわね。
「篠原さん、私の水着はどうかしら？」
　隣で着替えていて、一足先に更衣室を出た比良さんは、何と三角形のマイクロビキニだった。
　ＴＳ病は女の子を強調した体格になるので、まさに１０代の女の子

が大胆な格好をしているようにしか見えず、それはもうあたしたちの中でも一番、男性の視線を釘付けにしていた。
「ひ、比良副会長大胆……」
とても曾孫が既に９０代１人しかいない女性には見えないわね。
「久しぶりの海なのよ。楽しまなきゃ損よ！」
比良さんは、にっこりと笑って言う。
間もなく御年１７９歳になる女性のマイクロビキニと言えばインパクトは大きいわね。

「お待たせー！　って比良さん！　何て格好しているんですか!?」
背後から、また少女の声が聞こえる。
「って、余呉さん、あなたも人のこと言えないわよ！」
永原先生が余呉さんに突っ込みを入れる。
それもそのはず、御年１８６歳になる余呉さんの水着は、何とスクール水着、それもあたしたちはインターネットやコスプレでしか見たことのない、古いタイプのスクール水着だった。
「いや、その……一度でいいから着てみたかったのよ」
余呉さんもちょっとだけ言葉を濁す。
少し昔なら、「現役女子高生が、水着を選べずに学校のスクール水着のまま来ちゃいました」というシチュエーションになっただろう状況になっている。
本当にもう、うちの協会の最高幹部２人がこれじゃあ、先が思いやられるわね。
その後も、次々と協会の会員たちが集まってくる。やはりみんなかなり水着のデザインを考えていて、女の子のあたしから見てもかわいさに見とれてしまうわね。
ちなみに、男衆は団体予約した場所で、テントを張っている。

「うおー、何あれ、みんな超かわいいじゃん！」
「マイクロビキニの子、すげえエロいぜ」
「いやいや、あの旧スクの子じゃね？」

「うーん、旧スクの子みたいなのを求めるなら、あの背の低い白い水着の子がいいんじゃね？」
「あーそうかも……って待て待て、黒い紐パン水着の子、おっぱいでけえし最高だぜ！」
「おー本当だ！　顔もめっちゃかわいいし、黒ビキニの子が優勝だな」

ふふ、あたしが優勝だって、このかわいくて美人の集団の中でそう言ってもらえるなんて、気分がいいわ。
「すみません、遅れました！」
そして、最後に現れたのは幸子さんと歩美さんだった。
多分着替えるのに戸惑ったのよね。
幸子さんは、水色のショートヘアーと水色の大きなリボンに似合う、深い青と白に近い水色との水玉模様のセパレート水着だった。
特にショーツ部分のお尻が大きく見える効果があって、上品なエロさを醸し出している。
そして、歩美さんの方はややぎこちない姿勢で、ピンクと白の縞々の水着だった。
歩美さんはまだ少しぎこちない感じね。多分、こういう水着を着たことないのかな？　誰が選んだのかしら？　まあいいわ。
「さて、テントまで行きましょう」
「ええ」
永原先生の先導で、あたしたちは男がテントの方へ向かう。
「お、女の子たちが来るぞ！」
男たちは既に設営を完了してくつろいでいた。
あたしたちが来るのを見ると、一斉に各々のパートナーのもとへと駆け寄っていく。
もちろん、あたしにも相手がいて――
「お待たせ浩介くん」
「うっ優子ちゃん……！」
浩介くんは、あたしの水着に見とれている。というか、早速という感じで大きくなり始めてるし。

「じゃあ皆さん自由時間にしますけど、ナンパにはくれぐれも注意してね、あまりここから離れたり、沖合いに出ないこと！」
「「はーい!!!」」
全員で返事すると、各自自由時間となる。
あたしのすることはもちろん決まっている。
「ねえ浩介くん……」
あたしはいつもよりもちょっとだけ低い声で、色っぽく誘惑するように言う。
「な、何かな？」
「クリーム、塗ってくれるかしら？」
日焼け止めクリームを取り出して、あたしは浩介くんにぐいと迫る。
「ゆ、優子ちゃん!?」
ふふ、浩介くん戸惑ってるわね。
今日のあたしは肉食系女子だもん。ガンガンがっつかないと。
浩介くんが恐る恐る日焼け止めクリームを受け取ると、あたしはシートの上にうつ伏せになる。
既に水着の中を含め、全身がびっしょりと濡れている。
「……ごくりっ」
浩介くんが唾を飲み込む音が聞こえてきた。
「い、行くぞ……」
浩介くんが、意を決したようにあたしに近づく。
そしてあたしは、背中に浩介くんの手と日焼け止めクリームの感触を受ける。
「ひゃんっ……」
「ゆ、優子ちゃん!?」
「ご、ごめん、続けて」
２年前とは比較にならないその感触に、あたしは背中だけでも声が出てしまう。
浩介くんに、ゆっくりとクリームを塗られていく。
ああ、この感触。反射的嫌悪感が無くなっただけで、こんなにも気

持ちいいなんて思いもしなかったわ。
「きゃはは」
背中が一通り終わると、足の裏にクリームが到達する。
やっぱりくすぐったいのには代わりはないわね。
「優子ちゃん」
「うん？」
「綺麗だ、凄く」
浩介くんに膝をクリームを塗られながら、そんな声でそんなこと言われちゃうと、あたしも興奮してしまう。
「えへへ、ありがとう浩介くん……あーん、優しくね」
「うん、ごめん」
浩介くんの塗る力が少し強くなる。
このお肌はかなり敏感で、特に浩介くんに触れられた時は、なぜ崩れないのか不思議なくらいに敏感さになる。
あたしも、女の子になったばかりの頃は、お風呂で体洗う時の力加減に戸惑ったこともあったわね。
浩介くんのクリームに塗られた手に、あたしは太ももを何往復も触られていく。
「はぁ……はぁ……」
浩介くんの息が荒くなっていく。
既にあたしの体を知り尽くしている浩介くんだけど、それでもこういった非日常的なシチュエーションには、いつも以上に興奮しっぱなしになるのね。
「っ……！」
むにんっ！
「きゃっ、やーん、もう！　えっち！」
浩介くんにお尻を触られ、あたしがいつもより低めに、恥じらいに声を出す。
「うっ、優子ちゃんそれ反則……」
水着の効果か、浩介くんも既に大興奮の様子ね。
「浩介くん、肩もお願い」

「あ、ああ……」
肩甲骨から上を、浩介くんに塗られていく。
「んぁ……あー、気持ちいい！」
浩介くんが、あたしのこった肩をマッサージしてくれる。
やっぱり触っただけでも肩こりが分かっちゃうのね。
「優子ちゃん、相変わらずだなこれ」
「えへへ」
とにかくあたしは、胸にとても重いものをぶら下げているので、肩のこりが半端ない。
コリッコリッコリッ……
「ここだな」
コリコリという音が骨伝導で軽快に聞こえてくる。
言わばあたしの肩こりの真髄みたいな場所になる。
「ん――！　あーそこそこ、そこがうー痛い！」
浩介くんやお義母さんには、たまにこうしてマッサージをしてもらっている。
そう言えば、初めてマッサージした義両親は「予想していたけど想像以上だった」って言っていたっけ？
「ふう、ありがとう。じゃあここもお願いね」
「え!?」
あたしが、水着のブラジャーの背中部分を指差す。
「もちろん、外してからつけるのよ」
「う、うん……」
息を飲んだ浩介くんが、恐る恐るといった感じであたしに近付く。
そしてあたしは、浩介くんにブラジャーを外され、背中にクリームを塗られていく。
「ふう、で、出来たぞ」
「浩介くん、元に戻して！」
「あ、ああ……」
浩介くんにブラジャーをつけてもらう。パチンと音がして、安全を確認してから前に向き直る。

あたしはもう、既に日焼け止めクリーム以外の液体にも濡れていた。
「ゆ、優子ちゃん……」
あの時とは真逆に、浩介くんのすっかり元気一杯になった様子から、目が離せなくなり、あたしはうっとりと興奮してしまう。
あたし、本当にメスになったわ。本能って、怖いわね。
「あ、あの、優子ちゃん、どこ見てるの？」
「えー!? 別にどこでもいいでしょー？ それよりもさあ……」
「うっ……」
いつもとちょっと違う雰囲気に浩介くんが一歩身構える。
そう、一昨年はしなかった前の日焼け止めクリーム塗りを、当然のごとく要求する。
「あの、優子ちゃん、恥ずかしいから」
「何を言っているのよ。あたしたち夫婦よ夫婦」
あたしが、低く誘惑する感じで言う。
「きょ、今日の優子ちゃん、積極的だなあ……」
「えへへ、あたしだってそういう気分になるときもあるのよ」
浩介くんは、水着が見えないように足掻くように近付く。
「い、行くぞ！」
「優しくね」
「ああ」
浩介くんが更に近付いてくる。
「んあああん！」
浩介くんにおへそを触られる。
「はぁ……はぁ……」
お腹回りを丁寧に塗られていく。
「優子ちゃん、結構ぷにぷにしてるんだな」
「えへへ、浩介くんは、ガリガリなのがお好み？」
「そ、そんなわけあるか。か、かわいいじゃねえか」
浩介くんが慌てて否定する。
あたしはデブではないけど、決して痩せているというほどでもな

い。
お腹の肉は、赤ちゃんに食べさせるためにある。痩せてると、自分のエネルギーで手一杯だもんね。
「ふふ、ありがとう」
浩介くんの、クリーム塗りが再開する。
腕と足の方は全て塗り終えていて、お腹も塗り終えたとなると、最後に残るのは必然的に胸の部分だけになる。
「あ、あの……優子ちゃん」
「ふふ、もちろんここもだよ」
あたしは胸の方を強調する。
「うっ……」
浩介くんがうつ伏せになる。
もうバレバレなのに、必死で下半身を見られまいともがいている浩介くんの姿がいとおしいわ。
「い、いくよ……」
「うん」
ぷにっ
「んぁ……」
えっちな声に、えっちな吐息も出る。
浩介くんの体が少し震えていく。
「クリームつけてさわると、また違う感触なんだな」
家で2人きりの時は、あんなにあたしに積極的なのに、こうして海に行くと、浩介くんも緊張してしまう。
いや、プールの時も積極的だったわね。
つまり、あたしが積極的になっているのに戸惑っているのかしら？
「はぁ……はぁ……」
「ふふ、浩介くん……」
浩介くんは、興奮を押さえられない様子、でもそれはあたしも同じ。
まだ海に入ってないのに、水着がびしょ濡れになっている。
全て塗られ終わった後、あたしは唇を近付ける。
「そ、その、優子ちゃん、みんな見ているから！」

浩介くんが慌てた様子で止めてくる。
「あらあ、いいじゃないの。さ、海で遊びましょ」
あたしは、ビーチボールで遊んでいる幸子さんたちを指差す。
「で、でも……その前に！」
浩介くんが立ち上がる。
あの時とは正反対に、立派になった浩介くんにあたしは心も体も大興奮している。
「だーめ」
処理をしようとした浩介くんに、あたしは手を引っ張って止める。
「で、でも……！」
「あら、あたしは嬉しいわよ。『愛する嫁の水着姿見て興奮してます』って、何も恥ずかしいことないじゃない」
あたしはそう言うと、更に腕を浩介くんに絡め、胸を当てる。
すると浩介くんはにんまりとした表情になって、何も考えられなくなる。
浩介くんは、とっても正直な男の子ね。
「さ、海に行きましょ」
「あ、ああ……」
浩介くんは観念した様子で左手も隠していない。まあ、隠したら隠したでバレバレだけどね。
あたしたちは、砂浜を歩きながら、幸子さんたちのもとに進む。

「なあにあの彼氏？」
「うわあ！　正直だねえ！」
「でも彼女かわいいものね。あんな胸で絡まれたらそりゃあああなるんじゃない？」
「あーそうかも」

「おいおい、あいつ見ろよ」
「うえー、すげえ見事だな」
「でもよく見たら女の子かわいい上にエロいじゃん。ああならない方

がどうかしてるって」
「あー確かになあ」
　道行く人々も、あたしたちを噂している。
「えへへ、大注目だね」
「は、早く水に入ろうよ！」
「はいはい」
　今のあたしの気分としては、もっとあたしで興奮している浩介くんを見せびらかして、あたしの女としてのステータスを高めたいところだけど、あんまり意地悪するのもかわいそうなのであたしたちは幸子さんたちのもとに駆け寄る。
「幸子さーん！」
「あ、優子さんにその旦那さん」
　直哉さん、浩介くんの名前覚えてないのね。
「あーうん、それでもいいや」
　浩介くんが投げやり気味に言う。
「なあ、やっぱり大きくなっちゃうものなのか？」
　幸子さんの彼氏の直哉さんが、浩介くんに聞いてくる。
　ちなみに、幸子さんの彼氏は、今のところ正常だ。
「え、あの……優子ちゃん今日は妙に積極的で……」
「へえ、でも心配しないで。さっきも直哉ったら、ってキャー！」
　幸子さんが恐らくさっき大きくなったのを思い出して興奮している。
　悲鳴の出し方も、そのパターンも女の子そのもので――
「あら幸子さん、今のとっても女の子らしいわね」
　あたしは、このエピソードを覚えておくことにした。
　余呉さんに報告して、最終試験を受けさせる準備に入りたい。
「そ、そうかな？」
　本人はまだそこまでの自覚はないみたいで、まだ男が出ることがあるとも言っている。
　その辺りも含めて、最終試験は慎重に決断しないといけないわね。

「ああ、俺も幸子と付き合い初めて、『悟が思い浮かぶ』何て考えた俺は、本当にバカだったよ」
「そうでしょ？　幸子さん、最初は大変だったのよ」
「ああ、覚えてるぜ、こいつ大学にブカブカの服で来てさ、ぶっきらぼうで不機嫌な態度とってて、ＴＳ病だって言ったんだよ。悟が不本意に女の子に乗り移ったみたいでさ、とにかく荒れてたぜあの時は！」
　直哉さんが初期の幸子さんについて話す。
「うー！　あれは黒歴史だからあんまりほじくりかえさないで！」
　幸子さんが抗議する。多分、悟を連想してしまったのは、この時期が原因だと思う。
「おっと悪い悪い。でも今の幸子、本当に別人になったよ」
「えへ？　そう？」
「うん、今も俺の下半身じっと見つめてるし」
　確かに、幸子さんの視線はあたしたちの顔じゃなくて、直哉さんと、あと時たまに浩介くんの下半身の水着に向いている。
　もちろんお目当ては、女の子が大好きでたまらないもので、もちろんあたしも大好きな所。
「もう！　バカ！」
　幸子さんが顔を真っ赤にして怒る。
　うん、これなら最終試験もバッチリね。
「ねえ、幸子さん」
「うん？」
「この海が終わったら、ちょっと来てくれるかしら？」
「え!?　どうして!?」
　幸子さんが驚いている。
「ふふ、渡したいものがあるのよ」
「へー、優子ちゃん、幸子さんに何渡すの？」
　浩介くんが興味津々で聞いてくる。
「うふふ、ダメよ。乙女の秘密」
「ちぇ」
　浩介くんは残念そうな顔をする。

渡すのは乙女の大好物だけど、幸子さんにとっては重要な意味を持つ試験でもあるから、むやみやたらに言いふらすことはできない。
「それよりさ、４人になったしこのゲーム４人で対戦形式にしようぜ」
「あー、いいなあどういうルールだ？」
「ポーンとなるべく垂直に上に上げ続けて海に落ちたら負けだ」
要するに海の中で腕で行う蹴鞠みたいなものかな？
「うん」
「ボールは交互に拾うんだぞ、そーれ！」
ポーン！
「えいっ！」
直哉さんのボールを、浩介くんが返す。
「それっ！」
今度は幸子さんが上空を見上げ、ボールを高らかに打ち上げる。
「優子ちゃん！」
「うん」
あたしは上空を見上げ、海に足をとられながらなんとか進み――
「えいっ！」
「あー」
打った方向が悪く斜め４５度の方向に跳ね上がりそのまま海に着水してしまった。
「はい、優子さんの負け」
「やっぱり運動はダメだわ……あーあ……」
あたしは、とにかく運動神経が壊滅的に悪い。
ま、浩介くんが守ってくれるから、このままでもいいとは思ってるけど。
「あはは、サッカーやってた私だって女子の中では平凡な方よ」
幸子さんがあたしを慰めてくれる。
「あー、優子ちゃんは男時代にはかなりすげえ運動神経だったからな」
「へー、そうなんですか」
幸子さんがあたしに興味の視線を向けてくる。
今までは、あたしはカウンセラーとして、どちらかと言えば師匠の

立場で接することが多かったけど、今はもう普通にＴＳ病という過去を抱えた女の子同士という関係に変わっている。
「ま、とにかく次に行きましょう」
「ああ」
早速、２回戦が始まったんだけど――
「きゃあ！」
ザブーン！
ボールを追いかける過程でバランスを崩して後ろに転倒してしまい、あたしはいわゆるＭ字開脚を晒すことになってしまう。
特に浩介くんからは、下部分の水着が丸見えで……あうー、状況が状況なだけに、裸より恥ずかしいわ。
「はい、優子ちゃんの負け」
あたしはまた負けてしまう。
その後、何度やってもあたしが負けてしまうため、いつものようにハンデをつける話になったが、うまいハンデの付け方が分からず、お開きになってしまった。
「優子ちゃん、これからどうする？」
「うーん、あれ？　あそこに人だかりが見えるわね」
「本当だ。何をやっているんだろう？」
あたしたちは、人だかりのする方へと向かっていく。

# 少女たちは遊び尽くす

「はいはーい！　最後尾こちらですよ！　順番に並んでください！
盗撮は厳禁となっていまーす！　私は被写体ではありませんよー！」
永原先生が、何やら忙しなく動いていた。
どうやら、永原先生はこのぎょう列を整理する役目を負っているらしいわね。
「永原会長、どうしたんですか？」
「あーうん、列の先頭にいけばわかるわよ」
永原先生は「今忙しい」と言う感じでそっけない態度で言う。
「はい」
言われるがままに、あたしと浩介くんは、列を前に進んで先頭に行く。
行列の先頭は、どうやら広がっていて何か「カシャカシャ」と言う音が聞こえてくる。

「はーい、こうですかー!?」
パシャッ……パシャッ……
「いやー、眼福眼福！」
パシャッ……パシャッ……
「もう一枚、道子ちゃん、もっと前屈みになってください！」
どうやら、写真撮影が行われているらしい。
「こうですか？」
「そうそう！　もう少しこっち側でお願いします」
円形に囲まれたエリアで、円の中心には女の子が２人いた。
その女の子というのは、比良さんと余呉さんだった。
「うわあ……」
マイクロビキニとスクール水着、正反対の露出度を持つ水着のコンビは、思い思いに笑顔で、カメラマンさんたちのサービスに答えていた。
あたしはあまりにも意外な光景に驚いてしまう。

やっぱり、外見が１０代なら、実年齢なんてどうでもいいという感じで、円の先頭には小さな紙で「ＴＳ病患者の水着撮影会、お一人様５分１００円」と書いてあって、女の子の紹介として比良さんと余呉さんがご丁寧に実年齢まで書かれて紹介されている。
「はーい、１人５分で１００円ですよーこちらに入れてください！ありがとうございます！」
「比良さん余呉さん！　何でこんなことしてるんですか？」
あたしは、人混みをかき分けて輪の中に入る。

「うおー！　３人目の美女登場だー！」
「ねえねえ、君もＴＳ病ってやつなの？　もしかして江戸時代生まれとか!?」
「すっげえ！　胸でけえ！　水着エッロ！」

ギャラリーたちが、あたしの登場に興奮してるけど、あたしは気にしない。それよりも、今は比良さんと余呉さんのことが気になる。
「何って撮影会よ」
「いやー、実は私達のこと、どうしても写真に撮りたいって人が現れてね。会長が『何なら協会の宣伝も兼ねて撮影会にしたら？』って言ったもので」
……永原先生が戦犯なのね。
「そしたらまあ大繁盛なのよ」
「まあ、無理も無いわよね」
たった１００円払うだけでわざわざリスク犯して盗撮しなくてよくなるものね。
「ねえねえそこの黒い水着の子」
「はい？」
カメラマンさんの１人があたしに話しかけてくる。
「あの、あなたもＴＳ病なら、１枚いいですか!?」
「えー、どうしようかなあ？　うーん」
あたしは、あえて悩んでいるふりをする。

「って、ダメに決まってるだろうが！」
「「わあ！」」
予想通り、独占欲で嫉妬した浩介くんが輪の中に乱入し、あたしを引っ張っていく。
周囲のカメラマンさんとギャラリーたちは唖然としつつも、比良さんと余呉さんの撮影に戻っていた。

「浩介くん、もしかして、嫉妬しちゃったかしら？」
円から離れたらあたしは浩介くんに色っぽい口調で聞いてみる。
「うっ、あ、当たり前だろ！」
浩介くんが珍しく素直に認めてくる。
「ふふ、嬉しいわ浩介くん。あたしのこと独り占めしたいんでしょー？」
あたしは、蛇のようにくねくねしながら浩介くんに近付く。
そして、体を浩介くんに密着させると、あっさりと興奮した浩介くんがまたむくむくとなる。
「ふふ、いくら写真に撮られても、こうされていいのは浩介くんだけだよ」
耳元で、熱い吐息混じりに浩介くんにささやくと、浩介くんの表情が崩れ、目がハートマークになる。
「うふふ、あなた、今夜はたっぷり、寝かせないわよ」
あたしは普段、「今夜期待しているわ」といった感じで浩介くんのサービスを待つような言葉を投げ掛けてきた。
でも今は、あたしががっつくような感じの話し方にする。
浩介くんとは数日禁欲生活してきたし、いずれにしても、今夜はものすごいことになりそうね。
「ねえあなた、ひとまずテントに戻ろうかしら？」
「あ、ああ……」
あたしたちは、一旦テントに戻るにした。
ちなみに、撮影会の行列は遠目で見て分かるくらい凄まじく伸びていて、永原先生も忙しく動いている。

永原先生、大変そうね。
「お、優子さんに浩介さんじゃないか」
戻るとそこにいたのは蓬莱教授と瀬田助教の２人で他には誰も居なかった。
「あ、蓬莱教授」
よく見なくても蓬莱教授と瀬田助教は、水着ではなくいつものワイシャツだった。
「蓬莱さん、水着ではないんですね」
「ああ、俺たちはここでずっと見張り役さ。第一水着なんて持っとらんし、俺は別に海に用はないからな」
蓬莱教授が、爆弾発言をする。
「え!?　じゃあどうしてここに!?」
「俺がずっと見張り役をすることで、他の人で見張りを交代しなくていいということで雇われたんだ。その代わり、永原先生の遺伝子を得られると言う約束になっているんだ。まあ、他の人にも声をかけては見たんだが、『やっぱり遺伝子までは難しい』ってさ」
なるほど、蓬莱教授らしく遺伝子目当てだったのね。
「蓬莱教授らしいわね」
とにかく蓬莱教授ってぶれない人よね。
「そりゃあそうだ。永原先生がの遺伝子は、優子さんのよりも希少だからね。とにかくデータを集めないことには、不老の達成は難しい。何せ不老のメカニズムは、まだ完全に解明できていないからな」
蓬莱教授は、やはり不老研究に時間を費やしていた。
人間が持つ、最大の不治の病が「老い」、それを考えると、あたしたちって「病気」なのかな？
まあいいわ。
「のどかだなあ」
静かな雰囲気に浩介くんが小さくつぶやく。
「うん」
海の方を見つめると、一際目立つ美少女たちが、思い思いにはしゃ

いでいた。
ＴＳ病の女の子たちは美少女揃いなので、他の女性が不憫になるくらい目立っている。もちろん他にも海水浴に来てる若い女性は多いけど、今日は本当に運が悪いわね。
この中に入れても大丈夫なのは、桂子ちゃんと龍香ちゃんくらいかな？
……そういえば、一昨年も龍香ちゃんは彼氏とここに来て、お尻を触られていたっけ？
あたしも、去年のプールではいっぱい触られてたし、少しくらい……
さわさわっ！
「きゃあ！　もう、浩介くんったらー」
そんなことを考えていると、早速浩介くんがあたしのお尻めがけて手を伸ばしてきた。
「ほう、大胆だねえ浩介さんは」
瀬田助教が半笑いで言う。ちなみに、蓬莱教授は表情一つ変えようとしていない。
「いやー、その、やっぱり誘惑には勝てないんです……」
浩介くんもバツが悪そうに言う。
「うふふ、今夜たっぷり触らせてあげるわよ」
蓬莱教授たちに聞こえないように浩介くんの耳元に小さい声で囁くと、また浩介くんが興奮した様子になる。
本当、単純な男の子って何でこんなにかわいくてかっこいいんだろう？
あたしの方が、惚れちゃうわよ。
「さて、もう少し遊ぶか？」
暫く休むと、落ち着いた浩介くんがそこから立ち上がる。
「うん、砂のお城とか作ろうかな？」
砂のお城なら、運動神経悪くても作れると思うし。
「あはは、優子ちゃんお姫様だね」

「えへへ……」
あたしは、砂浜のある部分で膝をつき、浩介くんと向かい合わせになる。
まずは砂を集めないといけないわね。
「よいしょっと」
あたしは、無自覚を装って四つん這いのような形になって、重力で垂れ下がって揺れる巨大な果実を浩介くんに見せつける。
「うっ……」
ふふ、浩介くんったら、また興奮しているわね。
何だか、たまには肉食系女子になるのも悪くないわ。
「よいしょ、うんしょっ！」
あたしが掛け声を上げ、胸に夢中だった浩介くんも慌てた様子で手伝ってくれる。
もちろん、手伝ってくれる時でも視線はあたしの胸に釘付けになりながらだけどね。
「ふふ、浩介くん、ありがとう」
やがて、大きな砂山が出来上がる。これに海水を入れてうまく固めてっと。
「うーん、ここからお城って難しいわよね」
あいにく、あたしは幼少の頃砂山しか作ったことがない。
そこからお城と言うのは意外と難しいのよね。
「うーん、確かになあ……」
よく「砂上の楼閣」という言葉があるように、言うまでもなく、砂で作るお城はとても脆いからバランスを気をつけなければいけないはず。
「うーん、この上に館をのせるってのはどうだ？」
「え？」
浩介くんが面白い提案をする。館ってどういうことかな？
「ほら、一昨年の林間学校の帰りに、先生がと真田家の故郷巡りをしたじゃない？　そこの『真田本城』をイメージしてさ」
「あー、いいわね」

つまり、洋風の城である必要はないということ。
とすると、この山には堀と道をイメージしてっと。
「じゃあ俺は、館部分を作るぜ」
浩介くんはもう一方で、館の部分を作り始めた。

「あら、2人ともお砂遊び？」
「あ、永原会長」
しばらく砂を作っていると、永原先生が一仕事やり終えた表情であたしに話しかけてきた。
「何作ってるの？」
「あーうん、砂のお城よ。それよりも撮影会は大丈夫なんですか？」
そっちの方が気になったので聞いてみる。
「うん、今は他の人に任せているわ」
「そう、良かった」
比良さんと余呉さんは災難だけどね。
「で、これお城なの？」
「うん、一昨年行った真田本城をイメージしてるのよ」
「へー、そうなのね。まあ実物とは大分違うけど、砂のお城ということを考えれば仕方ないわね」
というか、実物を知ってるの永原先生だけのような気がする。
記録も正確に残ってないらしいし。
「私も加わっていいかしら？」
「はい、もちろんです」
というわけで、あたしたちは3人でお城を作ることになった。
「よし、館の部分ができたぞ。海水で固めてっと」
浩介くんが慎重に砂を乗せて削っていく。
これに加えてお城の石垣や、堀みたいなのも出来て完成ね。
「うん、いいわね」
砂のお城は、できてもすぐに消えてしまう。
だから、あまり凝った作りにはしないことにする。
「ふう、いいお城ができたわ。浩介くん、ありがとう」

あたしが、またあざとく浩介くんに近付く。
次の瞬間大きな波が来て、お城の一部が崩れてしまう。
「あちゃー」
永原先生が苦笑いする。
「あはは、まさに砂上の楼閣ね」
「本当だな」
三者三様に、事の顛末を総括する。
そうじゃなくても砂の城は潮風で簡単に崩れちゃうと思うし。
「それじゃあ、私はこれで。２人とも海には気を付けてね」
「うん、分かってるわ」
去っていく永原先生を見送り、あたしたちは再び海で遊んでいた幸子さんたちと合流することにした。

「おっとっと、きゃあ！」
ザブーン！
幸子さんがバランスを崩して海に倒れ込んでいた。
「あっはは、また私の勝ちだね」
「うー悔しいわ」
見ると、幸子さんと直哉さんに加え、歩美さんも遊びに加わっていた。
「何してるの？」
「あ、優子さん、バランスゲームですよ」
幸子さんが立ち上がるとあたしに説明してくれる。
「え？」
「ほら、こうやってお互い手のひらをパチーンと合わせあって、バランスを崩して足が動いたら負けです」
幸子さんと歩美さんが軽く実践してくれる。
「ふむふむ」
「あー、また優子ちゃんが苦手そうな遊びだなあ」
浩介くんが正直に言う。
「ええ、優子さんがする場合は場合はハンデが必要になるわね」

やはり、さっきのことを念頭に置いているみたいね。
「でもどうやって？」
直哉さんが疑問を挟む。
「うーん」
さっきのゲームは、あたしへのハンデが定まらずに終わってしまった感もあった。
でも今回は、比較的ハンデは考えやすいと思う。
「あ、じゃああたしは足が動いても、体や手がつかない限りは負けにならないのはどうかしら？　要するにあたしだけ土俵のない相撲みたいな判定で」
つまり、これなら足を踏ん張る必要が無くなることになる。
「えー、いくらなんでもそれは大きすぎないかしら？」
「うん、私もそう思うな―」
幸子さんが疑問を挟むと、歩美さんも同調する。
「ちっちっち、優子ちゃんの運動神経のダメさ加減を甘く見ちゃ行けねえぜ」
浩介くんが指を振りながらそうアピールする。
「あはは、否定できないのよねこれが」
「じゃあ試しに、幸子ちゃんとやってみてよ？」
そして、試しに幸子さんと対戦して見ることになったんだけど――

「きゃあ！」
ザブーン！
「はい、しお……幸子ちゃんの勝ち」
直哉さんが無慈悲に幸子さんの勝利を宣告する。
「か、勝っちゃったわ……」
幸子さんが、半ば唖然とした表情で「勝っちゃったわ」と呟く。
「うー、やっぱり負けちゃったわー」
あたしにとっては予想された結末だったので、そこまで大きなショックはなかった。
「意外とあっさり尻餅つきましたね」

1回目は片足がよろけ、なんとか踏みとどまったものの、仕切り直した2回目で、あたしは幸子さんに吹っ飛ばされて、再び皆の前でM字開脚を晒してしまった。
「ええ」
女の子になって運動神経が大幅に悪くなるのは、TS病全体に共通していることではあるけど、あたしの場合は、その度を明らかに越している。
「でもよ、これ以上のハンデと言ってもなあ……」
直哉さんが腕を組んで考える。
「うーん、片手縛りとか？」
浩介くんがあたしの思ったことを代弁してくれる。
「あー、その手があったか」
「片手だけにか」
「わはははは」
男子2人が、よく分からない笑いのツボで盛り上がっている。
ともあれ、その内容で幸子さんと再戦となった。

「えいっ！」
パチン！
「えーい！」
片手なら、さすがにあたしはそう簡単に尻餅はつかないけど、相手を崩すのが難しい。
「わわっ！　きゃっ！」
ザブーン！
だけど、長期戦になればなるほど、あたしは息切れしてしまう。最後には根負けして海に倒れ込んでしまった。
今度は比較的平らに倒れたので、M字開脚を晒さずには済んだ。でも、負けは負けよね。
「うーん、幸子ちゃんに防御力を脆くするハンデをつけないとダメだなあ……」
直哉さんがため息気味にそう呟く。

「あーうん、そうなのよ。幸子さん、悪いけど膝が少しでも曲がったら負けでいいかしら？」
「ええ、構いませんよ」
幸子さんは、少しかわいそうなものを見る目であたしを見る。
この表情は、あたしが小谷学園にいた時には、体育の授業で散々に目にしてきたものなので、今さら驚きはないし慣れもしている。
けれども、大学に入ってからは体育もなくなったため（一応それに類する一般教養はあるけど、選択必修制なので、座学だけで単位は十分とれる）、自覚する機会はなかった。
「じゃあ、そのルールで行きますね」

「……はい、膝が曲がった！　優子ちゃんの勝ち！」
「イエーイ！　やっと勝てたー！」
幸子さんの膝が、あたしの両手でわずかに曲がる。
そうすると、すぐさま浩介くんが、あたしの勝ちを宣告する。
やっぱり、こういう分野であたしに勝ちがつくって嬉しいわね。
「何だか、深い闇を感じるなあ……」
直哉さんが、よく分からない意味深な呟きをする。
「あれは、挫折に挫折を重ねて叩き潰された人の喜び方だよなあ……」
歩美さんが、具体的に状況説明をする。
うん、確かにそんな喜び方だとはあたし自身思う。
考えてみれば、小谷学園では、あたしへの極端なハンデが常態化していて、球技大会と体育祭でも、多くそれが踏襲されたものね。
「みんなー！　お昼ごはんにするわよー！」
「あ、みんな、戻るわよ」
「「はい」」
その直後、永原先生が大声で叫ぶ声を聞き、あたしたちは急いで元のテントに戻る。
正会員のあたしが代表して先頭に立ちテントの元へと行く。
予定では、昼食はみんなでバーベキューとなっている。

## 浜辺の宴

さんさんと輝く太陽の下、多くのパラソルで覆われた空間には、あたしを含めて、多くの水着姿の美少女たちが集まり、少人数の男性の姿も見える。

これが日本性転換症候群協会の団体客であると言うアピールがなければ、下手すれば大学のヤリサーとか、ヤバイ団体と思われていたかもしれないわね。

蓬莱教授よ瀬田助教は分からないけど、その2人を除けば、ここに集まっている男性陣は全員彼女もしくは嫁がいる存在で、その彼女や嫁も全員ここにいる。

彼らはいわば不老の美少女を射止めた幸せな男ということになる。彼らもまた、「蓬莱の薬」を渇望している人がたくさんいるわよね。

「さ、みんな揃っているわね。じゃあ早速準備に取り掛かるけど、料理担当は――」

リーダーの永原先生が、担当を割り振っていく。

ちなみに、あたしは「お皿並べ」、浩介くんは「火おこし」になった。

あたしとしては、得意のお料理を担当できないのは不本意だけど、仕方ないわね。

この協会には、女性としての生活が長く、またカリキュラムでは家事をよく教わるために、料理が得意な人が多いので、この中に混じればあたしの女子力家事力も、まだまだという評価なのかもしれないわね。

実際、江戸や明治大正生まれもたくさん来ているし、まだまだあたしの修行も足りないのね。

「それじゃあ、皆さん、各自準備してください」

「「はいっ！」」

永原先生の声と共に、各自が持ち場へと向かっていく。

あたしは、まず飲み物を用意することにした。

男たちが椅子とテーブルを組み立てていて、作業の様子を見ながら

終わったところから順番に紙コップと紙皿を並べていく。
「篠原さん、その水着セクシーでかわいいわね」
準備をしていると、他の会員の一人からそう声をかけられる。
「えへへ、ありがとうございます」
協会の会員からも、あたしは注目の的で、単に水着が似合っているというよりは、若いのに優秀な正会員という評価が大きい。
特に、国内外のフェミ団体や、「明日の会」を撃退してからは以前よりも更にあたしの名前を高めた。
この功績は、もちろん永原先生の貢献がもっとも大きいとはいえ、あたしにも多分に功績が大きいのは客観的な事実。
特に、明日の会側についた患者を早期自殺に追い込んだ件については、協会内でも賛否両論あったが、結果的には被害を最小限に食いとどめたとして、あたしの手腕が他の正会員たちからもとても評価された。
願わくば、幸子さんと歩美さんの功績にも目を向けてほしいけどね。
「うーん、やっぱうちも篠原さんくらいでっかくなりてえよなあ……」
「もー、贅沢すぎますって」
別の会員さんがあたしの胸を見てそんなことを言う。
ＴＳ病の女の子の特徴として、「みんなそれなりに胸が大きい」というのがある。
永原先生と余呉さんは、恐らく身長は１５０センチを切っていると思うけど、それでも両人とも近くで見るとかなり胸が大きく、永原先生の場合、普段のレディーススーツ姿ではそこまで意識しないけど、水着になるとそれは強調されている。
それでも、あたしの胸の大きさは彼女たちに混じっても群を抜いて大きい。
なので、こんな感じで他の会員さんからも大きな胸が羨ましがられることが多い。
海に行くと、特にそれは強調されていて、道行く男性陣はよりどりみどりの巨乳に視線を奪われつつも、最終的にはあたしの胸に視線が

集中する。
「っ……！」
浩介くんが、また嫌な顔をしている。
ふふ、また嫉妬しちゃったのね。
普段なら、後でスカートめくられたり、胸を触られたりして、恥ずかし嬉しな思いで浩介くんのご機嫌を取り戻すんだけど、今日のあたしは肉食系女子なので、家に帰って水着になって、そこで浩介くんを襲うことにする。
「よしこんな所かな？」
やがて、準備が完了すると、各テーブルごとに野菜が配られる。
ちなみに、男性陣は1つのテーブルに隔離し、あたしは永原先生、比良さん、余呉さん、歩美さん、幸子さんの5人テーブルに配属された。
5人でテーブルにすると、余計にマイクロビキニの比良さんとスクール水着の余呉さんが目立つわね。
「ふう」
「篠原さん、遊び疲れました？」
余呉さんが話しかけてくる。
「ええ、お2人はもしかして？」
「ええ、ずっと写真会だったわよ。ふふ、お陰でいい臨時収入になったわ」
比良さんが机の上に箱を出してくれて、中にはとてつもない量の100円玉があった。
「うわー、これ全部収入ですか？　すごいわね」
幸子さんが驚いている。
「ええそうよ」
それにしても、よくずれないわねそのマイクロビキニ。
本当に心もとないというか、あたしだったら絶対ずれちゃいそうだわ。
「へへん、それで、比良さんと余呉さん、トータルではどっちが人気だったかしら？」
「え!?　そ、それは……」

永原先生の問いかけに、２人は結構動揺している。
「いやほら、永原会長も人気あったじゃないですか？」
「えっへん、何てったって会長だからね」
永原先生が「どやっ」という感じで胸を張る。
「あれ？　永原会長は列整理とかじゃなかったんですか？」
あたしたちが着た時も、そんな感じだったし。
「いやー、そのつもりだったんだけど、『どうしても私を撮りたい』ってカメラマンさんが殺到してね。２００円に値上げする代わりに、私も被写体になったわよ」
永原先生の胸も強調しつつ、それ以上に幼さを強調した水着は、自分の需要を知り尽くしている水着でもある。
比良さんのマイクロビキニと、余呉さんのスクール水着と合わさって、かなりシュールな空間になったのは想像に難くないわね。
「さ、そろそろ全てのテーブルで準備完了したかしら？　うん、いいみたいね。じゃあ焼き始めるわ！」
そう言うと、永原先生が乾杯の音頭を取るために立ち上がる。
「えー皆さん、ただいまより昼食のバーベキューを開始いたします。乾杯！」
「「乾杯!!!」」
あたしたちは、紙コップを高らかと上げて、乾杯が終わると比良さんが、熱した鉄板の上に野菜を入れ始める。

「それにしても、篠原さんの協会での評判は上がる一方よ」
「えへへ、そうですか？」
バーベキュー中、余呉さんがあたしを誉めてくれる。
さっきも、似たような話を聞いている。
「ええ、塩津さんに彼氏できたんでしょう？　ここまで短時間で彼氏できる人は少ないですよ」
幸子さんについて褒められていて、幸子さんもちょっとだけ顔が赤くなっている。
「え!?　そうですか？　私は半年要りませんでしたけど」

「篠原さんは特殊中の特殊よ。ええ、２年以内に恋を経験できれば優秀な部類ですよ」
「ええそうね、最終試験だって、本来は年単位必要ですから。本当に篠原さんは優秀ですよ」
　永原先生が補足してくれる。
「あーでも、新しい患者さんはどうですか？」
　例の、積極的に女の子になりたがっているあの子が、かなり優秀だと聞いている。
「あの子でも篠原さんほどじゃないわ」
「「うんうん」」
　比良さんと余呉さんが、同時にうんうんと唸る。
　実際、カリキュラムの成績は、あたしほどに優秀ではなかったらしい。
「私、１回振られちゃってて」
「そうそう、それでも諦めずに、男が喜ぶ方法でアプローチしたのはすごいと思うわ。普通私達が告白されて振られるなんてことはめったに無いけど、それでもあるとかなりのダメージになるのが普通よ」
　幸子さんの言葉に、余呉さんが誉めながらまくし立てる。
　確かに、失恋にもめげず、プライドも持たずに色仕掛けをして、「幸子」をアピールしたのは、生まれつきの女性にはなかなかできないことだとあたしは思う。
「はい、やっぱり今の女性としての魅力じゃなくて、昔のことで振られちゃうのは納得がいかなかったのよ」
　幸子さんがその時の心境を語る。
「ふふ、いい傾向よ」
　永原先生がすかさず褒める。
「はい」
「ところで、幸子さんにはそろそろ最終試験を受けてもいいかなと思ってるんですよ」
「……私はもう少し準備してもいいと思います」
　余呉さんがそうアドバイスしてくる。

うん、まあ近くで見ている余呉さんの意見は蔑ろに出来ないものね。
「そうですか、じゃあもう少し時間を置いて、それでも問題なさそうならやってみましょうか」
「ええ」
とりあえず、幸子さんの最終試験については先送りになった。
まあ本来は慎重を期すべきものだから、あたしが早まりすぎちゃったのかもしれないわね。反省反省っと。
「もう少し先ですか……」
幸子さんがややしょんぼりした感じで言う。
「でも、幸子さんは確実に良くなっているわ。心配しないでこの調子でね」
「うん！　直哉ともっとデートしたりしたいわ」
あたしの声で、幸子さんはすぐに元気を取り戻す。
「あーあ、私も恋ってものを知りたいなあー」
会話を聞いていた歩美さんが、疎外感を感じる口調で話す。
「歩美さん、乙女ゲームやってる？」
歩美さんも、あたしが担当している患者さんなので、きめ細やかに見ていかないといけない。
「あーうん、主人公の女の子はかわいいし、男の子もたしかにかっこよくて魅力的だとは思うよ。でもなんだかなー」
歩美さんは、まだ発病から1年経っていなくて、言葉遣いもまだまだ使いこなせていない上に、態度も所々で「男」が目立っている。
元々そこまで積極的に女の子になると言うよりは、精神を壊して自殺という結末だけは回避したいという思いから、行動していた経緯もあって、いまいち成長は遅い傾向にある。
それでも、さすがに男に戻りたいとか、そういった行動を起こす心配もないので、あたしも安心はしているけどね。
あたしたちにとって、時間はたっぷりあるから、焦る必要はないもの。
「モグモグ……うまいなあこの玉ねぎ」

歩美さんが美味しそうに食べながら言う。
ちょっとお行儀が悪いわね。
「歩美さん、玉ねぎ好きなの？」
「あーそういうほどでもないけど、この玉ねぎ甘めえじゃん！」
歩美さんがにーっとにっこり笑う。
うーん、やっぱり女の子らしさを身に着けたりないわね。
「歩美さん、まずはもう少し言葉遣いを直すといいわよ」
「えー、そうなのか？」
言葉遣いはカリキュラムでも矯正があるんだけど、それでもあたしみたいにカリキュラム終わればだいたい身につくというのは少数派で、全て身につけるのは意外と大変だったりする。これとばかりは周囲の環境にも左右されがちでもあるからね。
「そうよ、ただでさえあたしたちは生まれつきの女の子よりも不安定なのよ。人一倍女の子らしくを意識するくらいでちょうどいいわ」
「えっと、じゃあその……」
歩美さんは戸惑いの表情を見せている。久しぶりに指導してあげないといけないわね。
「美味しいわねこの玉ねぎ。この玉ねぎ甘いのよ」
あたしが、さっきの歩美さんの言葉を借りて、女の子らしい言葉遣いを指導する。
「お、美味しいわねこの玉ねぎ。この玉ねぎ甘いのよ……言えたわ！」
歩美さんがあたしの言葉遣いを真似る。
ふふ、素晴らしいわ。
「うん、今の歩美さん、とっても女の子らしかったわ。特に最後、あたしが言ってない所もちゃんと女の子の言葉になっていたわよ」
こうやってきちんと誉めてあげることが、上達の近道になる。
「あ、ありがとうございます」
歩美さんがいかにも嬉しそうな表情で笑顔を見せてくれる。
うん、その気持ちがあれば大丈夫だわ。
「ふふ、すぐにできる人はそうそういないわ。幸子さんだってあたしだって、完全に女の子の言葉になるには時間がかかったもの」

「篠原さんは結構すぐに女の子の言葉になっていたわよ」
あたしがそう話すと、永原先生が鋭く指摘する。
「あー、そうだったわね」
確かにカリキュラム終わる頃には、言葉遣いで母さんに怒られなくなっていたわね。
「でも、塩津さんはそれなりに時間かかってたわよ。確か去年の今頃はまだだったかも」
余呉さんが記憶を便りにそんなことを言う。
「あーうん、そうだったかも」
幸子さんも、心当たりはあるらしく、口元に指を当てて空を向いて記憶をたどるような仕草をしている。
そういえば、去年のあたしのパーティーの時は幸子さんはまだ完全な女言葉にはなってなかったわね。
いずれにしても、言葉遣いと表面的な女の子の仕草は、患者の精神の女性化の初期段階で、いわば入門編のようなもの。
これをクリアすると深層面で女の子になりきらないといけなくて、むしろそちらが本番と言ってもいい。
「まあどっちにしても、幸子さんもあたしも、永原会長だってまだまだ『男』が出ることはあるのよ。女子力の修行は長いけど、あたしたちは人生も長いのよ。行き急がず気楽にすればいいわ」
無理に成果を急ぐのもそれはそれでよくないというのは、あたし自身の体験から生まれた教訓でもある。
「そ、そうだよな、あ、悪い。私トイレに――」
「こら！　歩美さん！」
不穏なキーワードと共に、席を立つ歩美さんに向かって、あたしが優しくしかりつける。
「え!?」
「今のは女の子らしくないわよ」
「「うんうん」」
あたしの言葉に、比良さんと余呉さんと永原先生の「3長老」が同時に頷く。一方で、幸子さんは「どこに問題があったんだろう？」と

いう感じでキョトンとしている。
「え!? どうして?」
「いい歩美さん、そう言う時は『あたし、ちょっとお花を摘みに行ってくるわ』って言うのよ」
「う、え、えっと……わ、私、ちょっとお花を摘みに行ってくるわ?」
あたしの指導に対して、歩美さんがかなり動揺しながら復唱してくれる。
「ふふ、それじゃあちょっとあたしもお花摘みに行ってくるわね」
「え、どうして優子さんまで!?」
「うーん、何となく?」
「ふふ、私もちょっとお花摘みに行こうかしら」
あたしもトイレに行こうとすると、また別の声がかかる。振り替えると比良さんだった。
「え、どうして何で???」
トイレに行くと歩美さんが言うと、連鎖的にあたしと比良さんが立ち上がる。
あたしも理屈は分からないけど、ただ何となくそういう気分なので、立ち上がることにした。
一方で、歩美さんはかなり動揺していて、幸子さんもとても不思議そうな顔をしている。
そして余呉さんと永原先生は「我関せず」という顔つきをしている。
「ふふ、何となくよ」
「ええ、そういう気分なだけだわ」
あたしも比良さんも、具体的には何も言わず、そのまま歩美さんについていく。
水着で女子トイレに入るのは実はほとんど経験にないのよね。
紐が単なる飾りなので、普通に下ろすことで対応して、この場は収まった。
「ふースッキリしたわ」
「あはは、じゃあ戻ろうかしら?」
「うん」

あたしたちは、３人で戻る。
「ただいまー」
「お帰り、さあ今からお肉焼くわよ」
余呉さんの号令と共に、野菜と共にお肉が焼かれることになった。
考えてみれば、協会にはこういう親睦会も活動内容にあったけど、あたしが入会してからはこういうのははじめてだった。
カウンセリングを無料で行っていたために、その費用で会費だけでは大赤字だった。
ＴＳ病患者は全国に存在し、かつ協会以外ではノウハウもないため、各地方にも支部が必要で、それで費用がかなりかかっている。
そこを蓬莱教授からの支援金で何とか賄っていたのがこの協会の実情だった。
こうした親睦会を開けるくらいには、協会にも余裕が出てきたことになる。
蓬莱教授はあたしたちに対しては謙虚な人で、ややもすれば会の実権を全て握れる立場であるにも関わらず、維持会員という立場を崩さず、協会の詳細には一切口を出してこない。
まあ、蓬莱教授からすれば、ＴＳ病患者との関係悪化は自分の実験の成否に関わる問題だから当然なのかもしれないわね。
「美味しいわねえこのお肉」
「うん」
幸子さんと共に、炭火バーベキューの美味しさを堪能する。
今日は昼間から重いのを食べたので、夜は軽くしたいわね。
「うーん、うまい！」
また言葉遣いが乱れてるわね歩美さん。
「……わ！」
「うん、いい訂正よ歩美さん」
歩美さんと幸子さんとあたし、あたしが２年前の春、幸子さんが秋、歩美さんが去年の秋、もちろん成長速度にも違いがあるけど、それぞれでＴＳ病患者として、女の子としての成長度合いの差が、よく分かる１日でもあったわね。

# 午後の海辺で

バーベキューが終わり、後片付けは、パワーの余っている男たちの仕事になった。
することがなくなったあたしたちは、幸子さんと歩美さんの3人で浜辺で寝転がりながらくつろぐ。
「のどかだわ」
「ええ、そうね」
ふいに、左端にいたあたしが左を向く。そこには、海の家が見えて2年前と同じく焼きそばが売られていて、買い求めるお客さんたちで長蛇の列ができていた。
「優子さん、どうしたの？　海の家なんか見つめて」
幸子さんがあたしに気付いてそう声をかけてくる。
「あーうん、ここの海には、忘れられない思い出があるのよ。あそこの焼きそばもそうよ」
「え、どんな何ですか？」
幸子さんと歩美さんは、その事が気になる様子、うん、後のことのためにも、話しておかないといけないわね。
「2年前のちょうど今ごろよ。あたしは浩介くん、今の旦那さんと一緒にああやって列に並んでいたわ」
「……」
2人とも、あたしの話に真剣に耳を傾けてくれる。
「そしたらね、3人組の男にナンパされたのよ」
「うへえ、優子さんナンパされたことあるんですか!?」
幸子さんがかなり驚いている。
「ええ、幸子さんはそういう経験ないの？」
「あはは、私はあいにくないわねえ……」
「私も、ナンパされたらパニックになりそう」
どうやら、2人ともナンパの経験はないらしい。
これだけかわいくて美人なのに、やっぱり最近は草食系男子って増えてるのかな？

「で、断ったら逆ギレされちゃって、最終的には浩介くんが3人相手に喧嘩して勝ったのよ」
「へー、あの人かっこいいだけじゃなくて喧嘩強いんだ」
歩美さんが浩介くんについて感心したように言う。
ふふ、あげないわよ。
「うん、あたしを守るために鍛えるんだって」
鍛え始めた本当の理由は伏せておく。
「そ、そうなんだ」
「素敵な話ねー」
何となく相槌を打っている歩美さんと、共感を覚える幸子さん。
さっきのお花摘みに行く時もそうだったけど、同じあたしの患者でも成長度合いで反応が違うのがよく分かるわ。
男性に守ってもらえるのって、それだけで惚れちゃう理由になるのよね。
「えへへ、直哉さんも、そんな男性になるといいわね」
「うん」
「ねえ、ちょっとそこのお姉ちゃんたち」
「「え!?」」
突然の知らない男の人の声に、あたしたちはほぼ同時に顔を見上げる。
「ねえ、お兄ちゃんたちと遊ばない？　今なら全部おごってやるからさ」
やっぱりだわ、いかにもチャラチャラした感じで、あたしたちにナンパしてくる2人組の男。
「ね、ねえ優子さん」
幸子さんが不安そうな表情であたしを見る。
「お断りします。あたし、これでも既婚者ですから」
「はぁ!?　お前何言ってんだ!?」
あたしの言葉に、男2人組は口調を強める。
「とにかく、ナンパなら受ける気はありませんから」
「んだよ、固いこと言うなよ！」

男の一人が幸子さんに掴みかかろうとする。
「や、やめてください！」
幸子さんが怯えた表情を見せている。
「いーじゃんかよーそんなかわいい水着着て、誘ってるんだろ!?」
もう一人の男があたしの胸にめがけて手を出そうとする。
話は通じそうにないわね、仕方ないわ。
「きゃあああああああ

「何か寂しいなあ……」
一方で、誰も駆けつけてくれなかった歩美さんは浮かない表情だった。
「ふふ、歩美さん、悔しかったら早く恋愛を覚えて、男の子の恋人を作るのよ」
「うん、分かってる」
歩美さんは、彼氏が自分にだけいないことがちょっとコンプレックスらしい。いい傾向だわ。
「いい？　女の子らしい叫び方を覚えれば、男も守りたくなるものよ」
「「そ、そうなんだ……」」
歩美さんと浩介くんが、同時に驚いている。
「あーん、直哉素敵ー！」
一方で幸子さんの方は目がハートになっていて、どうやら心配なさそうね。
あたしたちは、もう一度テントの方へ戻る。
このことは永原先生にも報告した方がいいわね。

「篠原さん、どうしたの大声で叫んだりして？」
永原先生に報告する前に、彼女の方からあたしたちを心配して声をかけてくれた。
「あーうん、２人組の男に強引にナンパされちゃって」
「あー多いわよねえ」
ＴＳ病患者にとって、ナンパは大きなイベントにもなる。
あたしも、浩介くんに恋した直接の原因は、ナンパから身を守ってくれたことだったし、幸子さんも、自分の身を守ろうとしてくれた彼氏にデレデレに惚れている。
恐らく愛を深める大きなきっかけになったと思うし、歩美さんはより一層恋愛にたいする関心を深めている。
女の子になったばかりの時に男にナンパされた場合、当人に女性としての自覚を深く植え付けるけれど、一方で精神がより不安定にもなるため、ＴＳ病患者、特に発病直後の患者にとっては、「諸刃の剣」の

代名詞的な存在にもなっている。
「以前も海でナンパされちゃったし、海は鬼門だわ」
「まあ、篠原さんの水着姿見たらナンパしたくなるのもしょうがないと思うけど」
比良さんはあっさりとした表情で言う。
明らかに「何度も経験あります」という様子だった。
「やっぱり、副会長さんも？」
「ええ何度もあるわよ。特に女になったばかりの幕末は酷いの何のって」
比良さんはやや疲れた表情で言う。よっぽどひどい思い出みたいね。
「どんな感じだったんですか？」
「ええ」
比良さん曰く、断ったら斬られそうな勢いになったので、全速力で逃げて近くの人に助けを求めたりしたらしい。
なんかめちゃくちゃ喧嘩っ早い話よね。
「それでも、私が生きてた戦乱の時代よりはマシなのよ」
側で話を聞いていた永原先生がそんなことを言う。
「そりゃあまあ、あの時代は最悪の時代ですからねえ」
「ええ、些細なことから大喧嘩になって延々と復讐が連鎖することも珍しくなかったわよ。例えば天正中期……太閤殿下、時の羽柴筑前守殿が天下統一に進まれていた頃、私は京都の商家に仕えていたのよ。その時に私が客の侍にナンパされたのを断ったのをきっかけに私は散々に殴られて店主がそれを聞きつけてその侍をリンチして、そこから場外乱闘が連鎖して最終的には両家の主家の足軽たちが総出で威嚇しあって殺しあいになりかけたこともあったわよ」
「な、何よそれ」
そもそも何でそんなことでそんな大騒動になるのよ。
「他にも、『少し体勢を崩したのを笑われた』とかなんとかで通行人が武士に辻斬りされたとか、真田の村にいた時も『我が畑に勝手に侵入して作物を踏んだ』というきっかけで農民同士が一家総出で農具で殴

り合いになって、最終的には城の人が出てきて仲裁する騒ぎになったこともあったわよ」
永原先生が昔話をしてくる。
戦乱の時代というのは殴られたので殺す、仲間が1人殺されたから2人殺す、じゃあ今度は3人などという事が日常的に起きる世界で、復讐が連鎖する相手も、親類縁者ならまだいい方で、その家の家来だったとか、ひどいのだとたまたま近くを通りかかっていたという理由で、一方的に敵視されて仕返しの対象になることさえあったらしい。
「どんだけ沸点が低いのよ」
あたしが、半ば呆れる感じで言う。
「あの時代の人はみんなあんな感じよ。面子と感情で食べているような人ばかりだったわ。今の『キレる老人』とか問題にさえならないわよ」
やっぱり、戦乱の時代というのは、ろくでもない時代だったのは確かみたいね。逆に言えば、戦乱が続くと人間というのはここまで荒っぽくなれるということでもあるのよね。
「泰平の世になって、私が江戸の家に住む頃でさえも、それはもう江戸はともかく他の村や他の町では辻斬りだらけだったわ。5代様の『生類憐れみの令』がなければ、どうなっていたことか分からないわ」
江戸幕府5代将軍、生類憐れみの令と言えば徳川綱吉よね。
そう言えば、赤穂浪士と吉良家との処分に対しても、永原先生は持ち出していたっけ？
「生類憐れみの令……あれって『天下の悪法』じゃなかったっけ？」
歩美さんが当然の疑問を話す。確かに学校ではそう習うものね。
「山科さん、戦乱の時代から生きている私からすれば……確かにやり過ぎな面はあったかもしれないけど、当時の人の人命軽視っぷりを考えたらあれは必要な法律だったわ」
確かに、さっきの話を聞いたら、これくらいしないといけないのかもしれないわね。
「へえ、でも確かにそうかもしれないよなあ。切り捨て御免とかも

あったって聞くし」
「ふふ、切り捨て御免はリスクも高くて、証明できずに逆に自分が処分されることも多かったわ。平和な時代が定着した江戸後期には殆ど見られなくなったわね」
　永原先生がまた諭すように言う。また永原先生曰く、他の領地の住人を斬るとその藩の大名とのトラブルになるし、特に直轄領だった江戸などでは下手すると幕府への反逆とみなされる危険性もあったので、江戸の町人の中には無礼を受けても斬れない事情を逆手に取りわざと武士を挑発して面白がる遊びが流行したとか。
　とにかく江戸城で歴史の中心を常に見てきた永原先生はとても強いわね。
「へえ、江戸時代って結構複雑なんだな」
「ええ、何もかも最悪だった、血で血を洗う戦乱の時代に比べたら、江戸時代は極楽浄土よ。まあその江戸時代でも、今と比べたら生活水準はあまりにも悪かったわ」
　永原先生によれば、衛生環境という意味では江戸時代は意外としっかりしていて、死体がそこらじゅうに転がっていた戦乱の時代と、工場などの有害物質によるかつてない公害が頻発した昭和３０年代が最悪の双璧で、治安面では戦乱の時代から江戸初期が最悪で、次いで悪いのは幕末、そしてその次が終戦直後から昭和４０年代だとか。
　一方で、治安の良さでは現代が圧勝で、次いで喧嘩に明け暮れてはいたが、幕府が置かれていて、武士の多かった江戸の中期の江戸の町が、比較的マシだと言う。
「総じて、今の時代が一番暮らしやすいわね。日本は治安がいいけど息苦しいなんて言う人がいるけどとんでもないわ。そんなことを言ったら戦乱の時代なんて、それこそ何でもありに近いくらい開放的だったけど、すぐに喧嘩して、大抵のことは力ずくで解決して、略奪でさえ日常の１ページで、乱暴な喧嘩両成敗が横行せざるを得なくて、最悪な時代だったもの」
　永原先生が言うと、説得力が半端ない。
「ええそうね、昭和の高度経済性長期だって、今から見れば本当にひど

い時代だったわよ」
　比良さんがそう付け加える。
「希望があったなんて言う人もいるけど、ひどい環境だったから上に上がりやすかっただけよ」
　余呉さんの言葉には重みがある。
「なるほどねえ、もしかして息苦しい国ほど治安がいいのかな？」
「ええそうよ、逆に言えば、開放的な国や地域ほど治安が悪いわ。開放的だからと言って、些細な理由で大騒動になって斬り合いになる時代なんかゴメンだものね」
　幸子さんの言葉に、永原先生が同意する。
　そう言えば数年前に流行った某イスラムテロ集団だって、開放的と言えば開放的だもんね。
「ええそうね、息苦しいのは嫌だなんて言う人がいるけど、犯罪に巻き込まれるよりかはよっぽどいいことだわ。特に私たちにとっては、寿命にも関わることですから」
　比良さんの言葉は、あたしたちよりもずっと重みが違う。
　なぜなら比良さんもまた、江戸の泰平の時代と、動乱の幕末期を潜り抜けてきた人だから。
「ええそうね、それに昔は性犯罪だらけでしたし」
「そう言えば以前、江戸時代の痴漢の話をしてくれましたね？」
　そう、確かあれは修学旅行の時だったわね。
「えー！　江戸時代に痴漢ですか？」
　幸子さんが驚いている。
「でも銭湯が混浴だったなら、かなりいそうだと思うけど。電気もない時代だし」
　一方で、歩美さんは結構冷静に話す。
「ええそうよ、例えば――」
　永原先生が、あの時と同じように江戸時代の痴漢について話す。
「あの時代、女が1人で夏祭りにいくのは痴漢されたくて行くようなものよ。今は違うけど、あの時はお尻触られたら魅力的な女ということで上機嫌になったものよ」

「うへえ、すげえ話だ」
「へー、じゃあもし幸子ちゃんが江戸時代なら」
「え!?」
突然、幸子さんの背後から直哉さんの声がする。
「こうしたら喜ぶのかな!?」
むにんっ！
「きゃあ！」
幸子さんが背後から両胸を鷲掴みにさせられる。
幸子さん、いい悲鳴をあげているわね。
べちーん！
「もう！　やめて！」
幸子さんが、顔を真っ赤にしながら直哉さんの頬をひっぱたく。あたしのそれより威力が強く、直哉さんは少しよろめき、頬には手の跡も残っている。
「悪い悪い。江戸時代の痴漢の話を聞いてたらつい」
「もー！　今は江戸時代じゃないよ！」

「よし、俺も！」
さらーり！
「きゃあ！」
別の声がしたかと思えば、浩介くんに胸を撫で付けるように触られていた。
「あーん、今はダメよ。後でまた、ね」
「うっ……」
本来なら幸子さんと同じようにビンタしてひっぱたくところだけど、今はちょっと趣を変える。
浩介くんったらまた水着を元気にしているわね。
「あはは、まるで弥次郎兵衛と喜多八みたいだわ」
永原先生が笑っている。
「弥次郎兵衛？　喜多八？」
幸子さんが頭に疑問符を浮かべている。

「あー、弥次さんと喜多さんって言った方がいいかしら？」
「え!?　あれって確か十返舎一九の東海道中膝栗毛に出てくる!?」
　あたしが思わず幸子さんに先んじて言う。
「ええ、そもそもあれはエロオヤジの買春ツアーの物語で、旅先で老若問わず女に手を出しまくっては失敗する作品なのよ」
「そ、そうなの？」
　初耳だわ。
「ええ、例えば2人が茶屋ではまぐりを食べた時に茶屋の女性に対して『お前のはまぐりならなおうまかろう』と言ってお尻を触って怒られるとか、宿屋の娘に夜中に手を出そうとして成敗されるとか、そういうのを繰り返していたのよ」
「うげえ、知りたくなかったわね」
　歩美さんが嫌そうな声をする。
　そもそも、「お前のはまぐりならなおうまかろう」って、思いっきりセクハラだよね？
「私の家に江戸時代に買った本があるわよ。見てみる？」
「うーん、遠慮しておく」
　幸子さんは申し訳なさそうに言う。
「え、家にあるんですか？」
　逆に、歩美さんは興味津々に食らいつく。
「ええ、今の値段だと３００円くらいで買った浮世絵とか、その手の書物とか、後は江戸城で着ていた着物、戦乱の時代から使ってた食器とか、４代様より譲り受けた食器もいくつか残っているわよ」
「ええー!?　それってどれもものすごい価値のあるものなんじゃ――」
「うーん、多分大したことないものばかりよ。あー中にはまず間違いなくとんでもない値段がつく着物もあるけどね」
　おそらく、吉良上野介にもらった着物のことね。
「えーでも、会長さん、鑑定番組に出てみたら？」
「うーん、私は全部本物だってわかっているけど、偽物とか言われるの嫌なのよ」

歩美さんの提案に対して、永原先生が渋る。
そもそも、実際当時を生きてその時代に買ったもの何だから、後世の偽物な訳がない。最初から全部本物と判りきってたら鑑定番組にならないし、万一鑑定士が偽物判定してしまったら、永原先生の顔に泥を塗りかねないし、場合によっては面目を回復させるために、永原先生が別の鑑定士を呼んで、泥仕合に発展してしまう可能性もある。
「あーそうねえ……でもやっぱり、広報部員としては、個人として番組に出るならありだと思うのよ」
「個人としてねえ……」
幸子さんの提案に、永原先生が腕を組む。
「確かに、あくまで個人としてなら、例え会長でも協会が口を挟むことはないわね」
「ええ、私も、特に異論はありません」
比良さんと余呉さんも賛意を示す。
「あたしも、一度永原会長の家宝や資産について知りたいですから」
「篠原さんまで……ええ、分かったわ。あくまで個人としてなら、確かに自分の財産の価値も気になりますから」
こうして、永原先生の、鑑定番組出演計画がスタートした。
「さ、長話もここまでにして、遊びましょう。まだまだ長いわよ」
「ええ！」
あたしたちは、もう一度海に駆け寄っていく。
比良さんと余呉さんも、海の中に入って、あたしたちと海水浴を楽しんだ。
比良さんのマイクロビキニは意外としっかりしていて、あたしの水着の方がポロリしかねなかったのは内緒だったりする。
まあ、緩んでもすぐに気付くから大丈夫だけどね。

## 鑑定番組への出演

「ふー、遊んだ遊んだー！」

あの後、あたしは更衣室に入りシャワーを浴びて水着から普段着に戻り、みんなの到着を待った。

「それじゃあ、今日は解散ね。お疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

永原先生がそう言うと、各自がそれぞれの帰路へと別れ自由行動となる。

解散と言っても、途中までは同じルートに人は多い。

幸子さんと歩美さんは、この会社の路線で都心まで行き、あたしたちとは乗換駅で別れた。

地元の路線にはあたしと浩介くんに永原先生、蓬莱教授と瀬田助教の5人が残る。

「あー、鑑定番組か。いい宣伝になると思うぜ。俺は傍観させてもらうけど」

蓬莱教授の反応は良好だった。いかに個人でとは言っても、やはり永原先生の立場上協会への影響は避けて通れない。

「永原会長、どんなのを出展する予定ですか？」

あたしはまずそこが気になった。

「もちろん、吉良殿に貰った着物は出すわ。吉良殿の言われなき汚名と、赤穂浪人の言われなき名誉に終止符を打つ、またとない、千載一遇の機会だもの」

永原先生がいかにも覚悟を決めたような凛々しい目つきで言う。

もしかしたら、永原先生の頭の中には、この事があって鑑定番組出演を決めたのかもしれないわね。

普通なら、印象操作を警戒して、既存メディアのテレビに出るなんてあり得ないことだもの。

「それからそうね、二束三文で買った浮世絵のコレクションとか、東海道中膝栗毛の出版本とか、古事記伝の出版本とかも出すわね。まあこっちは大量生産されてたものだから、実は私的には大した価値はな

いとは思っているけどね」
永原先生は、あっけらかんな表情で言う。
「まあ、いずれにしても大きな事になりそうだな」
相変わらず、蓬莱教授は傍観の姿勢を崩していない。
まあ、蓬莱教授からすれば、当たり前のことだとは思う。
「うん、ともあれ、どういう企画になるかは、私個人で考えないといけないわね」
そう、これはあくまで「永原先生個人の行動」という建前になる。
なので、協会は一切の関与をしないことになる。なので、全て永原先生が自力で行うことになる。
「次は――」
「あ、私たち降ります」
「ええ、気を付けてね」
あたしたちの最寄り駅に到着し、永原先生たちと別れ、いつもの道を浩介くんと2人で歩く。あれだけ沢山の人で盛り上がっても、最後は浩介くんと2人になる。
あたしは、早速腕を絡めて、浩介くんの二の腕に胸を当てる。
「あ、あの……優子ちゃん？」
「うふふ、今夜は期待しているわよ。絶対抜いちゃやだからねー」
いつもよりやや低い声で、甘い響きで浩介くんにささやくと、浩介くんはブルブルと体を震えさせてくる。ふふ、だいぶ肉食系女子が板についてきたわ。
「ただいまー」
「おかえりなさーい」
あたしたちはお義母さんの挨拶と共に家に帰り、それぞれに部屋に戻った。
「ふー！」
あたしはベッドに横になり、今日のことを思い出す。
海で久々に遊び、楽しかった。
あたしの今までのかわいさとエロさ、そして露出度とあどけなさも両立した水着もよかったけど、今年みたいにエロさと露出度を高めに

して、浩介くんにより強く訴えるのもありよね。
「さて……」
あたしは、こっそりアダルト系のネット通販で取り寄せたもうひとつの水着を取り出す。
ショーツ部分だけの紐水着で、デザインはさっきのと全く同一だけど、唯一の違いは紐がほどけると、はらりと全てほどけてしまうということ。
「うふふ、これで浩介くんもイチコロね」
あたしは水着がはらりと解けてしまい、浩介くんを悩殺するシチュエーションを何度も何度もイメージトレーニングする。
今夜は、あたしの方から襲いかかることになる。
夕食も、精力のつく食事にしてあげないとダメね。しらす干しもたっぷりいれて……って今から考えても仕方ないわね。

「「ごちそうさまでした」」
精のつく夕食が終わり、ごちそうさまをする。この食事の内容、義両親たちも何となく察しているかもしれないわね。
食事が終わったら、まず義両親からお風呂に入る。
最近ではあたしたちに配慮してか、お風呂入ったら2人とも自室にこもりっきりになることが多い。
今日はあたしが最後にお風呂に入ることになっている。

「優子ちゃん、出たよー」
「はーい」
あたしは、お風呂から出た浩介くんと入れ替わる。
あれだけ釘を刺してきたし、多分抜いたりはしてないと思う。
あたしは、エロ水着のショーツと、今日着てきた水着のブラ、そしてワンピースタイプのパジャマを持って脱衣場へと入る。
そうだわ、たまには水着でお風呂入ってみようかしら？
そう思い、あたしは全裸の状態から、紐水着とブラジャーを付けてお風呂場の中に入る。

「ふー、ここまで来たけどどう襲おうかしら？」
体を洗うのに水着の着脱を行い、今は水着のまま湯船に入っている。水着の紐はやや緩めなので、お湯の中でわずかに解けている気がする。
今のあたしはたまに演じる肉食系女子、いつもは浩介くんに、襲われて美味しく食べられちゃっているけど、今日に限ってはあたしが襲う番になる。
立場が入れ替わるのは、思ったよりも難しい。
もしかしたら、浩介くんの趣味に合わないかもしれないという懸念もある。
「そしたら、いつものように襲われる立場にならないといけないのかなあ？」
そうなれば、あたしの肉食系女子は大失敗になる。
そうならないためには、浩介くんを満足させる必要性があるわね。
「うーん」
まあ、なるようになればいいかしら？
あたしは、お風呂から出る。
すると、水着の紐がかなり緩んでしまい、はらりと落ちてしまう。
「いやーん」
誰も見ていないのに、意味もなく恥ずかしげな声を上げる。
うん、これなら浩介くんも満足してくれるわね。
改めて予行演習を終え、体を拭き、水着も絞って少しだけ乾かすことにする。
適度に濡れた水着なら、浩介くんも興奮してくれるはずだわ。
あたしは、一旦ワンピースタイプのパジャマを着込む。
ドアを明け、廊下を進み、浩介くんの部屋の前へと進む。
義両親は部屋から出てこない。
さらーり
衣服が擦れる音と共に、あたしの水着姿が露になる。
コンコン
「はーい」

中からは、浩介くんの声がする。
「入るわねー」
あたしは、部屋の中に入る。
「わっ！　ゆ、優子ちゃん!?」
浩介くんは、ベッドに横になっていた。
ふふ、ちょうどいいわ。
「ねえあなた、この水着見て、今日はずっと興奮してたわね」
あたしは、淫靡な声で浩介くんのベッドに腰かける。
むっちりしたあたしの水着姿の肉体に、浩介くんは目が離せなくなっている。
「ゆゆ、優子ちゃんその……」
浩介くんはあたしの水着姿に動揺している。今日一日我慢した効果もあって、既に元気一杯になっているわ。
「うふふ、おいしそうだわあ……」
あたしは、浩介くんのズボンを脱がしながら、いかにもな「サキュバス」を演じる。
あー、あたしも興奮して大変だわ。
「な、なあ。優子ちゃん、今日ちょっとおかしくねえか？」
違和感に気付いた浩介くんがあたしを静止するように言う。
「あーら？　肉食系なあたしは嫌い？」
上目遣いで、浩介くんを見上げて見る。
「うっ、そ、そんなことはないぞ！」
浩介くんが慌てて否定して言う。
浩介くんはあたしの誘惑に順応しようとしている。
「ふふっ、正直な浩介くん、ますます美味しそうだわ。いただきまーす！」
目の前の草食系男子が、お肉に見えた。
「うわあっ！　優子ちゃんに食べられちゃうよー！」
美味しそうな男の子を食べるメスの肉食獣が、か弱い男の子を容赦なく食べ始めた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はにゃー！　ごちそうさまでしたー！」
ふーいつもよりも、何倍も疲れたわ。
とにかく、上になって自分で自由に動けると言うのは、それは同時に体力的負担も大きいということを意味している。
浩介くんを捕食したあたしは、思い思いに食い散らかして浩介くんを味わった。
浩介くんのお肉はとても美味しくて、あたしは大満足だった。とっても美味しかったけど、いつもこれだと身が持たないわね。
根っからの肉食系の女の子ってすごいわ。
「うひーはえええ……」
一方で、あたしに食べられた浩介くんは、完全にグロッキー状態になってしまった。
多分体力面では何時もよりも小さかったけど、いつもとは違う夫婦生活に、戸惑っていたのかもしれないわね。
「じゃあ浩介くん、お休みなさい」
「うん……はぁ……はぁ……お休み」
あたしは、水着を着直すと息も絶え絶えな浩介くんを見つつ、自分の部屋に戻る。
結論から言えば、浩介くんは一定の満足感を得ていた。
自室にも度ったら、下着に穿き替えて、パジャマを着直してベッドの中に入る。
肉食系女子は今日一日だけ。明日からはまた、普段通りのあたしに戻るつもり。
あたしは、今日の交流会を思い出しながら、睡眠へと突き進んでいった。
「え!?　出演が決まった!?」
数日後、永原先生からテレビ電話で連絡があって、永原先生が鑑定番組に依頼人として出演することが決定したと言う。
ただ、いかに個人的な行動とはいえ、協会の会長を勤めている永原先生のため、いくつかの条件がついた。

それは、「あくまで個人としてなので協会に関することは一切触れないこと」「あくまでも鑑定依頼人としての出演なので、骨董品に関係ないことは問い詰めない、報道しない」といったことだった。
確かに、地球最高齢で５０１歳女性というのは、それだけでも注目を浴びるものの、あくまで肩書きは「高校教諭」として出演すると言う。
「それでね篠原さん、今日の午後から何を出すかうちに番組の人が来て決めるのよ」
とにかく、永原先生の自宅には、古いものが所狭しと置かれているらしく、吉良上野介より譲り受けた着物はもちろん、それよりも後代になって使われた着物、徳川将軍家所縁の品や、戦国時代や江戸時代当時の食器類、江戸の街で買った浮世絵に出版物、普段は女の身ということで差してなかったが４代将軍より士分の証として贈られた刀、更に永原先生自身について書かれた門外不出の「柳ヶ瀬まつ一代記」というのもあるらしい。
「後は江戸城で私の書いた日記も出すつもりよ」
「ええ!?」
そもそも自分自身の作品を鑑定番組に出すって前代未聞よね。
「まあ、とにかくあらゆるものを手当たり次第出すつもりでいるわ」
どうやら、永原先生のコレクションは、どうやらどれも大変な高値がつくことが予想されるため、とりあえず手当たり次第にして、１個だけと言われたら、「吉良の着物」を出す予定だという。
「吉良殿が私にくださったこの着物、これを見せれば、忠臣蔵がいかにでたらめ極まりない作品かを世間に知らしめてくれるわ。そうすれば、日陰で吉良殿を供養してくださった方々も、ようやく浮かばれるわ」
永原先生の目からは、執念のようなものさえ感じるわね。
建前はともかく、ブライト桜以外のあらゆるメディアをシャットダウンしてきた協会にとって、これは大きな転換点になる可能性は高い。
逆に言えば、それほどのリスクを承知の上でも、永原先生は吉良殿

の汚名を張らしたいという気持ちが勝ったのよね。
「永原会長……いえ、永原先生、吉良殿の汚名は、きっと晴れます」
「ええ、そうね」
心の中ではともかく、あたしが口に出して彼女を「先生」と呼んだのはとても久しぶりのことだった。
あたしにとって、やっぱり吉良殿に少しでも恩を返したいという気持ちで頑張っている永原先生を応援したいわね。

「それで、永原先生が鑑定番組に出ることになったのよ」
「へー、確かにものすごいお宝をたくさん持ってそうね」
夕食の場で、あたしたちは早速家族団らんの場で話題にする。
「そうよ、何が出てくるか楽しみだわ」
「やっぱり江戸時代のものとかかな？」
お義父さんも、興味津々になって聞いてくる。
「うん、大体はね」
「へー、でも骨董品が新品だった頃から生きてる人の古い品物なんか、緊張感がないだろうなあ―」
お義父さんは、番組としての不成立を警戒するように言う。
確かに、そこはそこで問題だとは思うけど、純粋に永原先生のキャラクターと、単純に価値のある骨董品の数々で、十分に補えると思う。
「うーん、でも安心感を持って見ることができるよね」
それに対して、お義母さんが別の視点からメリットを説明する。
鑑定士の側も、偽物と判断しても言いにくい空気はあると思うけど、まあ、大丈夫だとは思うわ。

「撮影、どうだったかしら？」
9月になり、全ての撮影を終えた永原先生は、またあたしたちにテレビ電話をかけてきた。
ちなみに、協会とは無関係の建前なので、他の会員さんも、事実は知っているけど無関係を貫いている。
「うん、腫れ物にさわるような扱いでもあったけど……とにかくすご

い価値のものしかなかったわ。全部売ったら３００年は生活に困らないかしら？」
「ヒエー、恐ろしいわね」
まあでも、それくらいになるとは思うけど。
「まあ、予想はしてたけどね」
ともあれ、恐ろしい値段がついたものがあるのは確かね。
でも、「全部売ったら」って、どう言うことかしら？
「全部売ったらって？」
「ああうん、私が出演するの、３時間スペシャルで、しかも全部私に充てるんだって。歴史的価値があまりにも高いとかなんとかでね」
そう言えば、撮影が数日に渡っていたわね。つまり、あまりにも数が多くて１日では鑑定しきれなかったということね。
「永原先生、そんな前例あるのかしら？」
「あーうん、もちろん前例はないわよ」
そうよね。スペシャル番組でずっと同じ人が依頼人って。やっぱり永原先生の影響力が大きいのね。でもその前に聞きたいことがあるわ。
「そ、そう。所で、吉良殿の話はしたかしら？」
「ええもちろん、予想通り『吉良の着物』はメインディッシュと言ってもいいもの。スタジオも騒然となっていたわよ」
どうやら成功したみたいでよかったわ。
「やっぱり？　それで、どんなのを出したのかしら？」
あたしが鑑定品について聞いてみる。
「結果的には予定してた候補のうちほぼ全部だわ。どれもこれも歴史的価値が高いってさ」
「ほうほう」
永原先生によれば、永原先生の家宝の中には、歴史学者が喉から手が出るほど欲しい資料もあるとか。
「ともあれ、これで私に対するイメージも向上するはずよ。それから、実年齢を疑っているごく少数の人間にも、強力な反論材料にもなるわね」

永原先生によれば、テレビ局側もいくつかは反省する材料もあったらしく、永原先生を丁重に扱うことに決めたらしい。
これは、明日の会に失脚とも無関係ではないわね。
明日の会はあの後もホームページだけは残っているが、「患者自死へのお詫び」という一文を最後に、一切の更新を停止してしまった。
あたしたちを批判していたフェミ団体もこの頃には既に根負けし、往生際の悪い一部の団体で、小競り合い程度の反論の応酬こそいくつか続いているものの、大半は権威を失墜し、求心力をなくしてしまっている。
もはや形勢は完全に明らかであり、テレビや新聞といった既存のメディアは力が衰え、代わりにインターネットが台頭した。
あたしたちの事件も、後世にはもしかしたらその象徴的事例となるかもしれないわね。
「永原会長、これで後は、蓬莱教授の研究への協力に専念できるわね」
「ええ、ただ私たちに理解を示しつつも、蓬莱先生の研究に関してはまだ反対意見も根強いわ」
「ええ、そうでしょうね」
その事に関しては、夏休みが終わったらまた蓬莱教授と話し合う必要があるわね。
まだ世間には知られていない「３００歳の薬」についても、いずれは公表する必要はある。
だけど、恐らく問題になるのは単に寿命が長くなる薬ではなく、不老を実現するための薬が完成した時になると思う。
「ともあれ、まだ気が抜けないわ。協会の広報部としても、蓬莱先生を支援していきたいわね」
永原先生も、やはり蓬莱教授からの恩は返したいのよね。
その後も、蓬莱教授のことを中心に、あたしは永原先生とガールズトークを繰り広げた。
「へー、スペシャルに出るのね」
再びその日の夕食で、あたしたちは食卓で永原先生の鑑定番組出演

について雑談を繰り広げた。
当日が楽しみになってきたわ。録画もしないといけないわね。

# 永原先生の家宝　前編

「優子ちゃん、いよいよ今日だよね」
「ああ、そうよね」
　今日は永原先生が鑑定番組に出る。
　しかも、あまりにも宝物が多かったためか、3時間スペシャルを全て割くという。
　インターネットでも大変な噂になっていて、どんな宝物が出てくるか皆ワクワクしているわね。
「何が出てくるのかな？」
「吉良の着物と、一代記は出て来るとして」
　多分だけど、「歴史学者が喉から手が出るほど欲しい」というのは永原先生の江戸城での日記かな？
「まあ、何が出てくるかはお楽しみだぜ」
「ともあれ、後5分ね」
　あたしはテレビを付けて、浩介くんたちと一家総出で見る。

「さて、本日は3時間スペシャルなんですけれども、なんと1人の依頼人が様々な依頼品を持って来たとのことです。それでは早速、本日の依頼人の登場です！」
　番組のプロローグの後、3時間スペシャルにして1人の依頼人が来る。
　その姿はというと……
「本日はよろしくお願いいたします」
　現れたのは和服姿の永原先生だった。入場に際して、会場に向けて一礼している。
　もちろん、吉良殿の着物というわけではない。
「本日の依頼人は、永原マキノさんです」
　永原先生が改めてもう一度一礼する。
「さて、本日の依頼人は、少々特殊な方でして。まずは依頼人さん、生まれは何と戦国時代と」

「ええ」
「その、失礼ですが生まれ年というのが、永正１５年……西暦ですと１５１８年で、記録が正確なら５０１歳ということになるわけですが、ちょっと依頼人さんご説明願えますでしょうか？」
「ええ、私は数えで２１の時に完全性転換症候群、いわゆるＴＳ病という病気になりまして、この病気は老化しないために穏やかに過ごしていればずっと生きていけるんですね。時代が時代ですからいくつか命の危機もあったんですが、今日まで生きながらえております」
　まずは永原先生の自己紹介から入る。アナウンサーから永原先生の半生について再現ＶＴＲが流れる。
「依頼人は今から５０１年前の永正１５年、西暦１５１８年生まれ。現在の長野県上田市出身で、真田幸隆に農作業をして年貢を納めつつ伝令役の半農の足軽として仕えていた。ＴＳ病発病後、名を変え、一時村を離れたものの数年後に復帰し、以来、真田家の村に住んでいたが、女の独り身となり、帰参は叶わなかった」
　ちなみに、永原先生くらいの美少女がいなかったのか、再現ＶＴＲの女優さんよりも明らかに今の永原先生のほうが美人になっていて、永原先生役の女優さんは気の毒に思う。
「しかし、天正１０年、１５８２年の本能寺の変頃には老けないことを周囲の村人に訝しまれ、命の危機を感じて諸国を流浪する。１６００年にはあの、関ヶ原の戦いを公家とともに見物したこともあるという。この戦いの後、金銭を蓄財し江戸在住を決意し、大坂の陣後念願かなって江戸に住む。ここに、依頼人の３３年に渡る放浪生活に終止符が打たれた。しかし彼女に安寧は訪れなかった」
　アナウンサーの話していることは、既にあたしたちにとっては知り尽くしたことだったけど、知らない人が多いスタジオの驚きの声や「本当かなー!?」という声もある。
「江戸の街でも不老を疑われ始め、彼女は再逃亡を考え始める。しかし、江戸に住んで３８年目の１６５３年、思わぬ使者が彼女の元へ来る」
　するともう一度再現ＶＴＲが流れる。

「柳ヶ瀬まつ殿（当時の依頼人の名乗り）に相違ないか？」
「はい、確かに柳ヶ瀬まつと申しまする」
「上様がお呼びにございまする。荷物をまとめられ、至急江戸城へ参上いたせ」
「何と時の将軍徳川家綱の呼び出しだったのである。この時彼女は既に１３０歳を超えていたが、主君の孫に当たる真田信之がこの時９０歳近いながらも存命で、家綱と信之に拝謁が叶うことになった」
　右上に永原先生の顔が映る。表情がかなりぎょっとしている。
　おそらく諱を遠慮なく言うアナウンサーに対して思うところがあるのかもしれないわね。
「実は、不老の女の噂は信之の耳にも入っており、そしてそれがはるか昔に逃亡して行方不明になっていた足軽と同一人物と確信し、彼女を労い罪を許した。その後、依頼人は真田家への再士官を希望するが、時の将軍家綱の命により、江戸城への常駐を命じられた。その後の生活では、江戸の街は比較的自由に歩けたが、江戸の街からは出ることなく、明治維新まで江戸城に住むこととなった」
　おそらく、今回はこの時に買った依頼品が多く出てくるわね。
「明治維新後は、一時期再び諸国流浪の旅に出るが、やがて教師の仕事を初めて現在も教職についている。これが彼女の５００年に渡る人生である」

「いやもう、永原さん自身が歴史資料ですよねー」
「あはは……」
　会場の司会者さんの話に永原先生は苦笑いしている。
　でもそう言う一面があるのは否定できない。
「教師の担当科目は古典ということですけど、やっぱり古典の言葉の方が今よりしっくり来るんですか？」
「いえそうではありません。学校の古典で行うのは主に平安時代の中古日本語でして、私の時代とは大分違います。私の生きていた時代は係り結びもないですし、江戸時代ならラ行変格活用とかナ行変格活用も四段活用で、上下二段活用も多くが一段活用になっていましたか

ら」
　永原先生がそっけなく答える。
「へえ、どういうことですか⁉　もう少し詳しくお聞かせ願えないでしょうか？」
「日本語は奈良時代から上代、中古、中世、近世、現代に分かれていまして、私の母語は後期中世日本語、あるいは近世日本語なんですね。実は中古と中世にはかなり大きな変化がありまして……要するに現代人が私の生まれた時代に行っても話すだけならそこまで困りませんよ。逆に戦国時代生まれの私でも知識なしに上代は無論のこと平安時代の人も院政期より前の人とは頑張っても会話できる自信はありませんね」
「何かよく分かりませんけど、とりあえず、今日はこの人の依頼品が盛り沢山ということで、早速最初の依頼品に入りましょう」
　やはり、難しい話は受けないらしいわね。
「では、最初の依頼品の登場です！」
　扉が再び開かれ、煙とともに入ってきたのは灰色の古いお椀と箸の食器だった。
「これは何ですか？」
「私が戦乱の時代から使っていた食器です。特に有名な人の作品というわけではありませんが、まあ私の父母から受け継いだもので唯一残っているものでして、私が生まれる前からあったそうです」
「ええじゃあまさかこれは？」
「ええ、１６世紀の食器です。本物ではありますが価値を知ることが重要なんですよ」
「はあ……」
　正直に言って、粗末な作りでただ単に古いと言うだけの代物だった。
「では鑑定に移ります」
　無名作者ということで、特にＶＴＲなどもなくいきなりこれである。
　そして、鑑定士たちがおなじみのＢＧＭとともに鑑定を続ける。

「では本人評価額お願いします」
「２００円で」
「え!?」
　司会者さんの声が裏返る。
「これは単に古くからあるってだけですから」
「まあいいでしょう２００円で！」
　そして、鑑定額が出る。
　鑑定結果は１０００円だった。
「あー、やっぱりねえ」
「そんなものだろう。特に名のある人の作品というわけではないんだから」
　永原先生はあっけらかんな表情をしている。

「確かに、考古学的価値は高いですが、やはり状態も悪いですし、遺跡からたくさん出てきますから。まあ、とは言えお金では買えない価値があるでしょうから、これからも大切にしてください」
　鑑定人がそう答える。
　とはいえ、それでも本人評価額よりは高いわね。
「じゃあ次の依頼品は？」
「私が所蔵している浮世絵を幾つか出していきます」
「分かりました。早速続いての依頼品をお願いします」
　そしてさっきと同じ演出でもう一つ依頼品が出てくる。
　出てきたのは大きめの武士の絵で、カラーではなく白黒で書かれていた。
「これは？」
「享保１０年……私が２００歳を過ぎた頃に地本問屋で買った浮世絵です。確か作者は奥村文角と聞き及んでおります」
　よく分からないけど、永原先生が作者名を答える。
「これ、いくらだったんですか？」
「ちょうど２０文でした……今の価値ですとそうですねえ……３００円から４００円くらいですか？」

「え!?　そんな安いんですかそれ？」
　司会者さんがとても驚いている。
「ええ。浮世絵というのは当時のお店には同じものが何枚も在庫にありましたから、特段珍しいものではなかったですよ。江戸の庶民も下級武士もみんな手軽に買ってましたし」
　どうやら、永原先生の価値観ではありふれたものでしかないらしい。
　その後、番組ＶＴＲが流れ作者の紹介がある。奥村文角こと奥村政信は比較的初期に活躍した浮世絵師で、当時は白黒の墨摺絵って……結構すごい作者じゃないのよ！
　そんな人の絵が４００円って……何か色々と凄まじいわね。
「では本人評価額お願いします」
「うーん、買った時の値段を現代の価値に直して４００円で」
「ちょ、ちょちょっと……！」
　またも超低評価に司会者さんも慌てている。
　何だか、凄まじいことになっているわね。
「いやそうは言っても、私にとってはそんなものなんですよこれ」
「まあいいです、分かりました」
　そして鑑定額が出る。
　桁が物凄い勢いで上がっていき、４００万と出た。
「３００年も経ってないのに１万倍とはすごいですねえ……」
　永原先生は、この値段が出ることを予想していなかったらしくかなり驚いた顔をしている。
「こんなの前代未聞ですよ」
　司会者さんも呆れ気味に言う。
「４００円って……確かに当時としてはその程度の価値だったんでしょうけど……とんでもないですよ。はい、真物で間違いありません。しかもこの作品は大変貴重です」
「もうね、依頼人さん、これを４００円って……失礼ながら神を畏れぬ所業としか思えないですよ。現代に作られた偽物でももっとしますって！」

「あはは、すみません。私のコレクションは他にもありますので、見てってもらえませんか？」
永原先生が鑑定士から総攻撃を受けている。
まあ、当然よね。

次に出てきたのも浮世絵だった。
しかも、５×１１で５５枚もの大量品だった。
「これは？」
「ええ、見て通り私が江戸の保永堂で買った東海道五十三次です」
あたしも名前は聞いたことがある。歌川広重の代表作よね。
「ほえ⁉　これ、すごい保存状態いいじゃないですか！」
「明治の頃から殆ど出してなかったですから」
「というか、これも江戸の本屋さんで買ったんですか？」
「ええ、あの頃はとにかくこの絵は大ブームでしたから。当時は今の価値に直しますと１枚３００円位でしたけど、５５枚揃えたら１６５００円ですから、金１分以上しましたね」
「では本人評価額は？」
「先程ちょうど１万倍になりましたので、１億６５００万円でお願いします」
今度は凄まじく強気に出たわね永原先生。
「うおお、この評価額は凄まじいですよ」
そして評価額、スタジオが「おー！　おー！」という掛け声がある。
「千万」という声も聞こえる。
「うおー！　１億１０００万円！」
「恐ろしい、全て初版ですよこれ。しかも保存状態が最高に近い。１枚２００万円としてこの値段です。もはや言葉を失いますよ。そりゃあ依頼人さんは当時から今までを生きていたから簡単に全部集まって保存できたとは思うんですけども。普通今の人が集めようとしたら挫折するのが当然です。全世界の浮世絵愛好家がうらやましがる一品です」
「じゃあ次のも価値がありそうだわ」

「永原さん、次は何を用意しているんでしょうか？」
「まあ見てください」
　そして出てきたのは富士山の絵、６枚×６枚で３６枚だ。
「これもまた、『富嶽三十六景』ですよね？」
「はい、葛飾殿の『富嶽三十六景』の初版本です。個人的に好きだったので葛飾殿の新作ということで何の気なしに街の本屋で買いました。葛飾殿の作品は他にもあったんですけど、いくつかは江戸城を出る時に捨てちゃいました」
「な、なんですかそのさらりとそんな……」
　永原先生、葛飾北斎の浮世絵を躊躇なく捨てる。
「依頼人さん、葛飾北斎の絵を捨てるって罰当たりにもほどがありますよ」
　永原先生は鑑定士の人に怒られてしまっている。
「いやそうは言っても、江戸の人にとっては浮世絵って包装紙代わりになるようなものでしたから」
　永原先生のとんでもない爆弾発言、そして鑑定結果は１枚１５０万円で５４００万円だった。
　その後も、鈴木春信や歌川貞秀、菱川師宣などの名だたる浮世絵師たちの作品が次々と出てきてそれらの全部が本物ということで数百万円を連発していく。
「はい、間違いなく本物です。それにしてもあなた本当に何者なんですか？」
　鑑定士も眼福という表情で言う。
「うーん、ここまでは前座のつもりだったんですが……」
「え!?　これが前座なんですか？」
「私がもっと大事にしてる浮世絵があるんですよ。これだけは絶対に価値があると思っています。多分当時でも１００文……２０００円はしたと思います」
「じゃあ、その依頼品をお願いします！」
　そして出てきたのは、巨大な絵で、錦絵と言われるものらしい。

「これは誰の作品なんです？」
「先ほども出てきましたが広重殿が私にと書いてくださった錦絵です」
「え？　もしかして依頼人さん、歌川広重と会ったことがあるんですか!?」
「はい、不老の娘の噂を聞きつけて『是非俺の作品を後世に伝えて欲しい』と広重殿に言われまして、私のために書いて下さった浮世絵でして、いわゆる肉筆画です」
　そしてまたＶＴＲが流れる。
　永原先生役の女優さんは同じ人で歌川広重の紹介もある。
「依頼人によれば、歌川広重本人の自宅に招かれ、そこで譲り受けたという」
　アナウンサーの音声が流れる。
「なんかねえ、さっきから聞いていると、ＴＳ病って羨ましい病気ですよね」
　鑑定士さんが羨ましそうに言う。
「いやいや、私は私で苦労しているんですよ」
　永原先生は波乱に満ちた人生だけど、江戸城にいたときは比較的平穏だったのは確かだった。
　ちなみに、テレビも既に本物前提で話している。
　問題は、本物だとしていくらかという所なのよね。
「では、本人評価額は？」
「１枚ですが２０００万ですね」
　そして評価額も、２０００万円、初めてぴったりになった。
「おお、ピタリ。慧眼ですね」
「これはね、国宝か重要文化財でもおかしくないですよ。これは世界に２つとない浮世絵です。歌川広重の技量の全てを集めたものでして……さっきの五十三次といい三十六景といい、依頼人さん今すぐ美術館を開いてください！」
　ついに、「美術館を開け」というお達しまで受けてしまう。
　でも、永原先生のコレクションはこんなもんじゃない。

「でですね浮世絵のコレクションはこれだけではないんですけど、他にもあるんですね。そっちにも写っていいですか？」
「はい、何が出てくるんでしょうか……」
永原先生の次なる鑑定依頼品は書物だった。
以前永原先生は「東海道中膝栗毛」を持っていたと言うしおそらくその手の本も大量にあるんだろう。
「では、書物シリーズ最初の依頼品をお願いします」
「はい」
すると、最初に出てきたのは5冊の古本だった。
「これは一体？」
「曲亭馬琴殿の『椿説弓張月』です、後の時代に出来た『南総里見八犬伝』よりも当時は人気でした。この本には葛飾殿の挿絵も入ってます」
「うわっ、本当だ」
いつの間にか手袋をはめた永原先生が本をめくって挿絵を見せてくれる。
「暇な時はこういう小説を読んで潰したものです。江戸城の生活は意外と時間があったんですよ」
「ほう、そういうものですか？」
「ええ」
そして、出た鑑定額はやはり凄まじい高額だった。
「初版本、間違いないです。いやはや、全部揃っているというのは、毎度のことながら素晴らしいです」
そして次に出てきたのは東海道中膝栗毛だった。
「正直、これを鑑定に出すのはちょっと躊躇したんですけど。知名度は高いですが内容がひどいですから」
「え!?　そうなんですかこれ」
「とにかく女の尻を触って隙きあらば手を出すエロオヤジの物語ですから。はまぐりのところなんかは傑作ですよ」
「そ、そうなんですか!?」
永原先生の言葉に司会者さんは驚いている。

「はい、とにかくあの時代は痴漢だらけでしたから、この手のいかがわしい小説や絵は大変盛り上がってまして、私は江戸城住みですから春画や露骨な小説は持ってなかったんですが」
「はへー、知りたくなかった」
「はっきり言いますと、今より江戸時代のほうがそういうのは盛んでしたね。銭湯に入った時はもう、何度も何度も私の胸やお尻に手が伸びてきましたから」
　永原先生の話にスタジオが騒然となる。
「えー!?　そんなことあるんですか!?」
「それはもう、当時は混浴で電気もない時代ですから、やり放題でしたよ。私としても『やられるのは魅力的だから』ということで、『女を試す』感覚で、触られるのを楽しみにしながら銭湯に入ったのよ」
　以前話してくれた、江戸時代の痴漢の話をぶちまける永原先生。
「あーなんか江戸時代行きたいわ」
　鑑定士の一人が暴言を吐く。
　スタジオも思わず笑いに包まれる。
「ええ、当時は『触られて自信がつく』ですからね。でも、やりすぎたら嫌われますよ」
「ですよねー」
「と、とりあえず鑑定行きましょう本人評価額は?」
「そうですねえ――」
　その後も、様々な書物が鑑定されていき、やはりその全てが初版本ということもあり、数百万から１０００万単位の値段を連発していく。
　また、茶器の鑑定依頼もあって、時の将軍徳川吉宗より譲り受けた茶器には葵の御紋だけではなく作者と吉宗の署名まで入っていて、２５００万円という結果になった。
　他にも途中、明治の鉄道の切符まで鑑定に出されていて、こちらも１０万単位の値段がついていたけど、これまでのインパクトを考えると控えめではある。
　放送でも「鉄道の開業から社会から身を隠すのをやめた」ことが紹

介されていて、永原先生の鉄道グッズはどれも鉄道マニアにとっては喉から手が出るほど欲しいものばかりらしい。

放送時間が次々と過ぎていく。まだ吉良の着物などは出てきてない。

# 永原先生の家宝　後編

「では次の依頼品をお願い致します」
「はい」
　そして次に出てきたのは２１冊の小さな古本だった。
　いかにも古い時代に書かれたという感じの、茶色い書物だった。
「これはですね、『柳ヶ瀬まつ一代記』です」
「柳ヶ瀬まつですか？　さっきも出てきましたよね？　昔の名乗りですか？」
　そう言えば、永原先生の昔の名乗りは知られてなかったわね。
「ええ。私が永原マキノと名乗っているのは３０年前からでして、その前は大正元年から北小松貴子と名乗っていました。その前の明治は偽名を多く使ってまして……そのうちの偽名のうち１つが戦国時代に女性になって初めてつけた名前、それが『柳ヶ瀬まつ』というのです」
　つまり、柳ヶ瀬まつという名前で暮らしていた時期が一番長い。
「え⁉　じゃあこれは依頼人のことについて書かれた書物ですか？」
「ええ、私の情報は大名旗本には公然の秘密のような感じだったんですが、厳重に管理されていましたので私に対する記録はこの書物だけなんです」
「依頼人が自分のことを書いた物を出すって……もう意味が分かりませんよ！」
　司会者さんも、思わず天に向かってツッコミを入れている。
　うん、あたしもその気持がわかるわ。
「ええそうでしょうね。この本は１０年に１度、私に関する１０年間を幕府が記録していたものでして、最後の徳川将軍様より持ち出しを許可されました。ちなみに、この本はほぼ全て時の老中や大老、側用人がお書きになっていました。ただ、最初の１冊だけは私が書いたものので江戸城に来るまでの人生を記録したものです」
「え⁉　依頼人自筆なんですか？」
「もちろんです。私は元々戦国の農民ですから、天正１０年頃までは

文字が読めなかったんですが、諸国流浪する時に尼寺を巡ったりして独学で勉強して江戸に住む時には武家の書物も読めました」
「へえ、すごいんですねえ」
そうか、江戸時代はともかく戦国時代じゃ文字読めないのは普通のことよね。
「ええ、不老の身ですから若いままで、文字の習得は早かったですよ」
そしてもう一度依頼品が流れる。
鑑定士の鑑定だが、かなり悩んでいる様子が見て取れた。
「本人評価額はどうでしょうか？」
「うーん、分からないわね。何分私という存在の価値で決まるようなものですから。これが時の老中の真筆なのは私がこの目で見てますからそれが果たしてどれほどの価値になるかというのがわからないんですよねえ……そうですね1冊１０万、私のは無価値として２００万円ですか」
「では２００万円で！」
……そして出てきた鑑定額は倍の４００万円だった。
「はい、歴代老中・大老あるいは側用人の真筆で間違い無しです。依頼人のことが書かれていましたが、特に元禄期の依頼人について柳沢吉保が書いた部分ですね。これが今まで信じられていた吉良上野介の違った一面を表していて大変興味深かったです」
「ええ、私、この番組の出演を決意した理由の一つでもあります」
永原先生にとっては、これが本題みたいなものなのよね。
「と言いますと？」
「吉良上野介殿の汚名を、どうしても晴らしたいんです。私の依頼品は残り2点です。むしろ次の2点だけでも良かったんですけど、コレクションの価値が知りたいのでたくさん持ってきました」
「じゃあ、次の2点というのは、まさか吉良家に関するものなんですか？」
「ええ、次の鑑定品、お願いします」
永原先生がそう言うと、今までにないくらいの大規模なものが入ってきた。

幾つものおびただしい数の本が積み込まれていて、それが何十冊、いや下手したら１００冊以上になっているかもしれない。
スタジオも目を丸くしている。
「な、なんですかこの大量の書物は……」
「これですか？　これは特に名前は無いんですが、そうですねー『柳ケ瀬日記』とでも言いましょうか？　鑑定人さん総出でお願いしたいものです」
柳ケ瀬日記、多分永原先生が付けていた日記よね？
「日記ですか？」
「私が江戸城にいた２１４年間に、毎日ではありませんけど、ほぼ毎日つけていた日記です。こちらが初期で……で、こちらが江戸城を出る日の部分です、長い年月書き綴っていて文体まで大分変わってしまいまして、お恥ずかしい限りなんですが」
「うわあ、まめですねえ……」
司会者さんも、これには言葉を失っている。
永原先生の２１４年の記録が、ここに詰まっている。
「鑑定人さんには、特に元禄期の、私が吉良殿に受けた御恩について、見てもらいたいんです」
「はい」
永原先生の真剣そうな表情に、鑑定人さんの顔も凛々しくなる。
この日記に関する説明のために、番組内でまた再現ＶＴＲが流れた。
「当時、４代将軍家綱の命により江戸城にいた依頼人。５代将軍綱吉もこれを継続し、彼女を戦乱の時代を知る女性として厚遇していた」
徳川綱吉の役者さんは、何だか犬の顔をしているわね。
やはりそう言うイメージなのだろう。
「しかし、快く思わない江戸城の人々や大名・旗本たちがいた。依頼人は武士の身分こそ与えられたものの、ほとんど着のみ着たままで江戸城に入ったため、服装は以前と変わらぬ町人の服で、江戸城では浮いていたのである。そして、日陰で陰口を叩かれているところを何度も聞いて、耐え忍んでいたという」

「江戸城に住み始めて４０数年の時が流れ、依頼人が１８０歳になった頃のある日、それを不憫に思い、見かねた武士がいた。それが、あの忠臣蔵の悪役で有名な吉良上野介義央だったのである。吉良上野介は時の将軍徳川綱吉と掛け合い、依頼人に身分以上に立派な服を与え、今後は士分にふさわしい服を着ることを許し、作法を指導するようにした」

そう、その通り。

「更に、吉良上野介は綱吉に対して依頼人に対する江戸城での陰口についてもやめさせるように進言。綱吉もそれを承諾し『遠き戦乱の時代を知る柳ヶ瀬殿に陰口を叩かず。心から敬意を払うように』と、江戸城で働くものや、全国の大名・旗本に対してお触れを出し、将軍が真っ先に依頼人に敬語を使ったことから、陰口はそれ以来ピタリと止んだのである」

スタジオも、吉良上野介の別の一面を知り、一様に驚いている。おそらく、意地悪な爺さんというイメージしかなかったんだわ。

番組のナレーションは、それ以来吉良家に深い恩義を感じるようになり、心の拠り所ともなっていったとも言ってある。

そして、再現ＶＴＲには刀傷事件から例の討ち入りの話も出てきた。その後の浅野家は浅野大学が旗本として再興したことにも言及されている。

「喧嘩両成敗とは戦国時代の習わしです！　泰平の世にふさわしくないばかりか上様の生類憐れみの令の精神にも反します！」

再現ＶＴＲの不細工な永原先生が熱演をしている。

でも確かに、永原先生はこう言っていたのは事実だった。

「赤穂浪士切腹、吉良家の取り潰しという喧嘩両成敗の判決に依頼人は猛反対したという」

アナウンサーがそう付け加える。

「柳ヶ瀬殿が申されることは最もである。しかれども、いかに徳川幕府の将軍とは言え世論には勝てぬのだ。柳ヶ瀬殿には辛いと思うが、どうか耐えてくれ」

徳川綱吉役の俳優さんがなんとも辛そうに言う。間違いなく永原

先生の監修よね？
「そう言って、綱吉は依頼人の意見を却下したという。改めて依頼品を見てみよう」
　そして、場面はスタジオに戻る。
「はあ、僕今まで忠臣蔵というのを何の疑いもなく見ていたんですが、じゃあその浅野に意地悪をしたというのは？」
「全部嘘ですよ。吉良殿は、天地が逆さになってもそのようなことをなされる御方ではありません。そもそも、もし浅野が失敗すれば指南役の自分にも責任が及ぶんですから、あのようなことをなされたとすれば自殺行為です」
　永原先生が、きっぱりと断言する。
「あー、言われてみればその通りですよね。何で考えにも及ばなかったのか恥ずかしいです」
　司会者さんも永原先生に気圧されているわね。
「本当の吉良殿は、とても温厚で優しく、慈悲深い御方でしたし、４代様は幼少にして立派な御方でしたし、５代様も実直でとても誠実で、戦乱の世から続いていた殺伐とした気風を改める基礎を作られた御方でした」
「やはり、そうなんですか」
「ええ、私は実際に吉良殿と何度も会っていますから」
「もしかして水戸黄門とか――」
「ええ。徳川中納言殿なら大日本史の折よく存じております」
　永原先生がニッコリと笑って言う。司会者は改めて「とんでもない人だ」という顔をしている。
「それにしてもこれ、全部あなたが書いたんですか？」
「ええ」
「依頼人がね、自分の作品を鑑定に持ってくると言うのはですね、番組始まって以来のことですよ本当に」
　４代目以降の歴代将軍とも面識のある歴史の生き証人が書いた日記、確かに価値は高いと思う。
「これは本人評価額はどんな感じですか？」

「……すみません。これと次の1点だけは、どうしても評価しきれないんです」
永原先生がそう訴える。
「んー、確かに、自分の作品ですからねえ。分かりました」
異例の本人評価額なし。
結果はどうなるのか？
分量が多いため、何人もの鑑定士が書物を分担して読んでいて、驚いた顔が何度も見える。
あたしたちにも緊張が走る。
そして結果から言えば、1億円だった。
「1億円ですか？　本日2度目の億ということですがどう思われますか？」
「そうですね、私の価値、２１４年で1億円ですから1年５０万円未満ですか？　そう考えると大したことないですね」
永原先生が吐き捨てるように言う。鑑定額にはそこまでこだわりはなかったのかもしれない。
「えっと、便宜上1億円とはしたんですけど……これ、歴史学者や古文学者にとっては喉から手が出るほど欲しいものです。当時の江戸城の暮らしぶり、江戸の街で起きた事件とか世俗とか、更に時代の変化、江戸時代における日本語の変化まで克明に記されていて、例えば最初の方は動詞の活用が上二段と上一段、下二段と下一段が混在して書かれているんですが、後ろの方は殆ど一段活用になっていたり他にもラ行ナ行の変格活用がある時を境に徐々に四段活用になっていたりしておりまして、これは江戸時代の江戸の事情の大半を知ることが出来る比類のない第一級資料です。しかも、２００年以上全て同じ人が同じ場所で書いたという、それだけでも凄まじい価値になると思います」
確かに、それはその通りだと思う。
２１４年というと今地球上で2番目に年上の余呉さんの人生よりも更に３０年近く長いものね。
「しかも幾つかの事柄については記録が散逸した結果、諸説あって分

からない事までこの本には事実がはっきりと書かれているんですよ、生没年不詳の人の生没年がこの本からいくつも分かります。これはですね学説がね、多くひっくり返りそうな代物ですから、下手したら数億でも足りない可能性はあります」

鑑定士さんによれば、かなり鑑定しづらい代物だということが言えるわけね。

「はい、これはですね。もうお金で買えないとさえ言ってもいいかもしれないです。とても私ごときが値段をつけるものではないです」

もう一人の鑑定士さんがかしこまった表情で言う。そこまで言うとは恐れ入るわね。

でも確かに、２１４年間の記録というのはとてつもない話なのは事実よね。

「特に赤穂事件に関する部分、これは依頼人の無念と、そして浅野家に対する怒りがとても強く伝わってきまして、読んでいるこちらとしても、当時の情景が目に浮かぶようです。後、今日出てきた依頼品を買ったりもらったりした記録もあってそれも面白かったです。依頼人さんの記憶力にも敬服しますね」

鑑定した人は、多分番組史上最多に登っていると思う。

「あと一点気になったのがですね、この日記、浅野家と赤穂浪士の関係者だけが諱で書かれているんですね。さっきまでも依頼人さんは歴史上の人物を頑として諱で呼びませんが、もしかして彼らだけ諱呼びで書いているのは意図的なものなんですか？」

鑑定士さんが、別の視点から疑問を投げかけてくる。

そう言えば、普段もそう言っていたわよね。

「はい。私は今も浅野長矩、大石良雄とその一派を、３００年間恨み続けております。浅野長矩は私にとってかけがえのない恩人を殿中で斬りつけ、吉良殿だけでなく恐れ多くも上様と天子様を愚弄したんです。大石良雄と４６人の一味は、主家の恥を上塗りして、集団で襲撃して、何の罪もない吉良殿を殺したんですから。私には分かりません、何故こんな天を恐れぬ所業が英雄ともてはやされるのか！　そんなことは、もう二度としないでもらいたいです！」

永原先生が、後半はやや涙ながらに、強い口調で言う。
今日の永原先生は、これを言いにこの番組に出たと言ってもいい。
「浅野長矩、大石良雄……この日記はもちろん当時一般の流儀なら浅野内匠頭、大石内蔵助と書くべき所を、彼らだけ諱で書かれているんです。しかも刀傷事件の前や刀傷事件時にはちゃんと『内匠頭殿』と書かれていて、討ち入りがあった後に諱を呼び捨てにして書かれています。これは当時の価値観では相当な敵意がなければ出来ない所業です」
「ええ、分かっています」
永原先生は、そのことを分かっていた。
吉良家に対して、本当の姿を知ってほしい。
そして浅野長矩と赤穂浪士はろくでもない人間なんだということも知ってほしい。
そんな叫びが、この日記から聞こえてくるものだった。

「それでは、最後の1点に参りましょうか」
扉が最後に開かれる。
それはそう、いかにも高級そうな着物が数着あった。
あたしは知っている。これのうちの一つを、永原先生が着ていたのを見たことがあるから。
「これはまた、随分と古く高そうな着物ですね。これが真打ちですか」
「これらは全て、吉良上野介殿にもらいました着物です。幾つかは着すぎて残ってないんですが、依頼品は着るのも惜しいので残っています」
永原先生が貰った吉良の着物について話してくれる。
「これらを、譲り受けたんですか？」
「はい、もちろん、季節によって着るものは変わっていたんですけど、ここに残っているのは特に立派でしたから両手で数えるほどしか着たことありません。そうですね、例の刀傷沙汰の時もこれを着てました」
永原先生によれば、吉良殿に着物を譲り受けたことで江戸城でも武

士の服装を着ることが出来たという。
　あるいは、忠臣蔵が流行するに連れて着る機会もなくなっていったのかもしれない。
「これは歴史を伝えるものなんですねえ」
「ええ、この着物は、吉良殿が本当は慈悲深くて恩義に手厚い御方であることを、今に伝えるものです」
「これらも、値段は付けられないと」
「はい、吉良殿の恩義は金銭的な価値にするのはとても困難だと思います」
「お金で買えないということですか？」
「いいえ、おそらくそうではないとは思うんですけれど……ただ、かなりの出費を覚悟しないといけないでしょう」
　どうやら、永原先生はこれについてはお金で買うことは出来ると考えてはいるみたいね。
「はあ、そういうものですか？　ともあれ、鑑定に移りましょう」
　鑑定士が着物を見ていく。やはり、かなり驚愕した顔を隠せていない。
　今日はとんでもない宝物のオンパレードなのに、「まだこんなものを隠し持っているのか!?」という感じなのかもしれないわね。
「はい、それでは、本人評価額は無しで行きましょうか」
「一……十……百……」
　そして鑑定額が出て来る。
　0が次々と流れていく。
　そして本日3回目の「億」が出た。
　もちろん、数点併せての鑑定額だが、本日最高の2億だった。
「出ましたねえ……2億ですよ」
「これは驚きました。全て間違いなく国宝級です。着物というのはその性質上後世に滅多に残らないんです。残っていても江戸時代の終わり頃とかなんです。そこに元禄期の着物が残っていると言うだけでもものすごい価値になるんですが、これは当時の最高級品が……ああこんな素晴らしい保存状態でこんなに残っているなんて、あの……

あなた明日から人が押し寄せていきますよ」
「あはは、実は2年前これを着たんですよ。夏祭りで」
「ひえええ……！　国宝級の着物を着て夏祭りですか!?」
　あたしたちは、その夏祭りのことを知っている。
「今思えば怖いもの知らずだったなと思います」
「本日の鑑定総額は……もうこれ計算したくもありませんね」
「1億以上が3個に、数千万もいくつかあって、全部鑑定額で売ったら一生遊んで暮らせそうですね」
　司会者さんが心底驚いた風に言う。
「無理ですよ。少なくとも私は９７０歳までは生きていくつもりですし、地球の終わりも見てみたいと思っていますので」
　そう、不老の人間にとってお金はいくらあっても足りないのよね。
「あーそうでした。ここにいる我々が死んだ後もあなたは生きていくんですよね」
　司会者さんも思い出した様に言う。
「そうですね。今は不慮の事故に巻き込まれないように細心の注意を払いながら生きていきたいと思います」
　でもこんなコレクション持ってたらヤバそうだと思うけど。
　まあ、インターネットの反応が楽しみね。
　そして、スタッフロールとともに次回予告が流れ番組が終わる。
　最後に「本日はありがとうございました」という声とともに永原先生が去っていく。
「ここまでね」
「ああそうだな」
　あたしたちはテレビを消し、いつもの日常に戻った。

# 余波

放送開始直後、早速インターネットは大反響になっていた。
タイトルは「５０１歳女性、とんでもない宝物を湯水の如く鑑定に出す」「日本性転換症候群協会の永原会長のコレクションｗｗｗ」と言った類のものだった。
更にはこの番組内でも、「葛飾北斎の浮世絵を捨てる」「当時数百円程度の浮世絵が何百万円になる」「歌川広重と面識があって専用の絵をもらった」「これらに隠れて鉄道グッズがすごい」「徳川吉宗から直接もらった茶器を持っている」「本人が２００年間書いた日記が１億円になる」「吉良の着物など多数の国宝級を所持している」など、あまりにもネタに溢れた放送だった。
これだけのインパクトの前に、本物か偽物かなんてどうでも良かった。
なるほど、これは永原先生だけで鑑定番組が出来てしまうのも当然よね。
ちなみに、あれでもコレクションの一部でしかなく、江戸時代から使っている食器類とか古いおもちゃも数多く残っているらしい。
「やはり取っておいて正解だったわ。本当は浮世絵は江戸城を出る時に全部捨てるつもりだったのよ。でも直前で、『いずれ高くなる』と江戸城の人に言われて残しておいたのよ」
というのは永原先生の談話。もしあの時捨てていれば３億円を溝に捨てていたことになるわけだから、恐ろしい話だわ。
さて、これはあくまで永原先生個人の話なので、各既存のメディアもこの鑑定番組について報道し始めた。
そして、どのメディアも「永原マキノさん（５０１）」と報道していて誤植じゃないのが何とも言えないわね。
また、既存のメディアは永原先生の取材もできなかったので、番組にあった「依頼人来歴」をほぼなぞる形で人となりを紹介している。
元々人類最高齢ということで一部では有名人だったけど今回大々的に夜に出ることになった。

他にも「吉良上野介、すごくいい人だった」「赤穂浪士完全死亡」といった反応もあり、また歴史系のコミュニティでは、「永原先生の日記」の完全公開を望む声が殺到した。
翌日、夕食を食べ終わった後、あたしたちはテレビ電話で永原先生に呼び出された。
「いやー、思った以上の反応で驚いたわ」
永原先生が開口一番にそう発言する。
「まあ、あれだけの宝の山だもんねえ……」
番組で偽物が全く出ないばかりか、本物としてもどれも一級品ばかり。
あの番組は長寿番組だけど、「番組史上最大の発見」と言われていて、もちろん偽物だとする話も出ていない。
「あはは、私自分でも驚いたわよ。まさか億を越える価値になるとは思ってなくて」
永原先生も苦笑いしている。
「それどころか数百万数千万も多かったですからねえ」
「本当、錬金術そのものよ。浮世絵って言うのは庶民や下級武士が楽しむ娯楽なのよ。もちろん、それそのものには価値は高いけど、1枚1枚は安価で手軽なのが浮世絵の強みなのよ」
そう言えば、番組内でも４００円くらいの価値で買ったって言ってたっけ？
「そういうものですか……」
「ええ、まあ鉄道系のは高くなりそうではあったけどね」
永原先生は、明治時代の切符や、最初期の鉄道模型を所持していた。
それらもやはり、鉄道マニアからすれば何十万という高値の価値があるらしい。
これについては、確かに高い価値は理解はできるけど、やはり浮世絵については、永原先生の価値観ではあまり理解できないものらしい。
「私的には、東海道五十三次が全部揃って1億１０００万円って言うのが一番の驚きよ。あの番組に出る前だったら2万円でも譲ってあ

げてたわ」
「あはは……」
「本当は当時価値のあったものは陶磁器で、日本はそれを輸出してたのよ。で、包装紙が必要になるから、そこにミスプリントや使い古された浮世絵を再利用として使ったのよ。それがまあ、大ウケしちゃって、いつのまにかこんな高いものになっちゃったのねえ……」
とはいえ、永原先生によれば、本当に上質なものはそれなりの値段がしたそうで、歌川広重に会って実際に譲り受けたあの1品は、相応の値段じゃないと譲ってあげないとのことだったけど。
「あはは、ところで――」
ピンポーン！
突然、永原先生のテレビ電話から呼び鈴が聞こえた。
「あ、篠原さんごめん……はーい！」
永原先生が入り口へと向かっていく。
「すみません、永原会長いらっしゃいますか？」
見知らぬ男性の声が聞こえる。
「はい、永原マキノは私ですが」
「私……美術館の……うしますが」
「はい……はい……」
「浮世絵の……ええ……企画展示として……お願……はい……」
小声でよく聞こえないわね。
でも、美術館って言ってたし、多分昨日の番組を聞き付けて企画展示を考えているのかしら？
「はい……はい……それは……はい……」
しばらく、2人で何かを協議している。
「……はい、ありがとうございました」
「……りがとうございました」
どうやら終わったみたいね。
永原先生が、またこっちに近付いてくる。
「ごめん、邪魔が入ったわね」
「あーうん、何の話だったんですか？」

「実は昨日放送したお宝の他にも、私が持ってるもので、美術館で企画展示をしたいんだって」
やっぱり、予想通り企画展示の話だったのね。
確かに番組内でも、「美術館開いてください」とか鑑定士に言われちゃってたし、そういう企画が来るのは頷けるわね。
「私としても、あれだけの価値があるものを大量に持ってたなら、展示会を開くのはやぶさかではないわ。でも、美術館側は企画展示には私の名前を冠したいんだって」
どうやら、永原先生はそれがちょっと引っ掛かっているみたいね。
「永原マキノ展とかです？」
あたしが聞いてみる。
「ええ、そんな感じよ。だけど、あたしは美術家ではないわ。確かに色々な宝物を持ってるけど、それらは私が歴史と共に生きていたから当時としては比較的容易に手に入れられたものばかりよ」
確かに、あの番組にはよくある「骨董市場で買った」とか「先祖代々に伝わったもの」とかではなく、「大昔に自分で町の本屋で買ったもの」というものだったものね。
「もちろん中には８代様の茶器とか吉良殿の着物とか、歌川殿の浮世絵みたいに、当時としても高価値のものをコネで手にいれたものもあるし、私の日記は私自身が長年書き綴ったものだわ」
「ええ、確かにそれらの価値が高いのは納得だと思います」
「それでも、これらは私が手に持っているのは、特別の苦労と融通をしたものではないわ。私はね、確かに普通の人の何倍も長生きしてきたし、江戸城に住んでいたから、比較的政治中枢の近くを知っているわ。でも今は、単なる５０１歳女性なのよ」
確かに永原先生は５０１歳女性、地球史上最高齢の人間と言っても、私立高校の先生でしかない。
「一般人ということよね」
「ええ、確かに有名かもしれないけど、あくまで私は『一般女性』よ。展示会に私の名前を出して、宣伝し、アピールする場所ではないわ」
永原先生が謙遜した口ぶりで言う。

普通なら、２番目に年上の人でも２００年生きていない中で、自分だけ５０１歳ということを考えると、一般人とは違うと思いがちだけど、永原先生はあくまで自分は「一般女性」だと考えている。
恐らく逃げ惑った戦国時代、赤穂浪士と世論から吉良殿を救えなかった無念、そして戦時中の囮逃亡計画……これらによって、永原先生は自分の無力感を何度も植え付けられているから、こういう発想になるんだと思うわ。
「うーん……」
あたしにとっては、あまり納得の行く話ではない。
「篠原さん、私は……長生きなだけよ。確かに長生きだからこそ、不老足り得ぬ人ならどんな天才でも分からないことも分かるわ。でも特別な才能がある訳じゃないのよ。もし篠原さんが私と同年代に生きて同じような人生を歩んでいたら、身に付くものよ。展示会の名前については、協会の協議にかけるわ」
「そうですか……」
永原先生は、謀略に長けて、あたしたちをまとめるのにふさわしい頭脳をもっていると思っていた。でもそれは、言うなれば人生経験の長さでごり押しをしているだけにすぎないと、永原先生は考えているみたいね。
もちろん、永原先生の次に年上の人が、３００歳以上も年下というこの差を考えれば、埋まるのは難しいと思うけどね。
「ええ、それに対して、あなたは天才よ」
「え!?　あたしがですか!?」
永原先生が突然あたしに話を振る。
あたしが天才？
「ええ、だって、ＴＳ病にここまで適応して、この歳で新しい指導法まで確立して、自殺を格段に減らしたのよ。あなたはこの年齢で、多くの人の命を救ったのよ」
「あっ！」
永原先生の指摘に、あたしははっとする。
確かに、永原先生の言う通りだった。

従来のカリキュラムでは、自殺率は５０％をオーバーしていた。
一方で、あたしが新しい指導法を確立してからは自殺者は殆ど出ていない。
女性として生きることの喜びを、感情論ではなく具体的に女性の特権を体験させることで抵抗を減らす方法は、思い付きそうで思い付かないものだった。
「あなたと塩津さんの奇跡はあなたたちだけの財産ではないわ」
「ええ」
あたしが救ったのは、幸子さんだけじゃなかった。
それが永原先生の出した答えだった。
もちろんそれは、理屈の上でも簡単に理解できることだった。
「塩津さん、本当に見違えたわね。あの時の彼女と、とても同一人物とは思えないわ」
永原先生は嬉しそうな顔で言う。
「うん、あたしも」
幸子さんの彼氏は、一回幸子さんを振っていた。
それでも諦めずに、色仕掛けも使ってアタックする。
女の子らしい、健気な恋だった。
「やっぱり、意地を張っていた成績不良な子に、彼氏ができたときほど感慨深いものはないわ。もちろん、成績不良な子は結局自殺しちゃうケースが多いけど、男に恋出来るなら、もうほぼ磐石よ」
「ええ」
最後の苦労としては、この後に反射神経の苦労はあるけど、ここまでの苦労を乗り越えてきた患者には、必ず越えられる程度の苦労でしかない。
「篠原さん、あなたのカリキュラムのお陰で、自殺率が減ったわ。今まで何十年あるいは百年以上、患者への治療法を研究する中で、これは大きなブレイクスルーになったわ。もう、大勢は決したわ」
「はい」
「さ、長話してごめんなさい、切るわね」
「ええ」

永原先生が、テレビ電話を切る。
永原先生の言葉、感情を圧し殺して客観的に見れば、永原先生の言ってることは正しいと思う。
自殺者の多いこの病気において、人生経験が長いかこそ、中々変えられなかった所もあったと思う。
いずれにしても、あたしの登場で、世の中は大きく変わったと思う。
あたしのこの協会での功績は、幸子さんの件や新カリキュラム、あるいはフェミニズムへの反対声明や、明日の会の撃退の他にも、まだ不信感の強かった蓬莱教授への研究に対して、あたしが真っ先に協力を表明したこと。
あれは一度は否決されたけど、こうして今は良好な関係を築けているし、ＴＳ病という存在を、世間に向けて大きく発信し、知名度を上げることにも成功した。
また、持ち前の美貌で、宣伝役もこなすようになってから、あたしの役割は日増しに高まっていった。
「ふう……」
ともあれ今は、お風呂に入ろうかしら？
夏休みももうすぐ終盤、後期の履修科目についても、考えないといけないわね。

土曜日、あたしたちは協会本部にいた。
いつもと違い、正会員と、博物館の関係者が集まっての会議だった。外部の人を協会に迎えるのは珍しいことよね。
「やはり、展示品のジャンルに一貫性がないんですよ。共通点は、永原さんが所持しているということだけです」
そう切り出したのが、今回の企画展示を考えた美術館の館長さんだった。
「うーん、そう言われてもねえ……」
「やはり、私たちとしては、会長も私人ですから」
永原先生と比良さんが渋るように言う。
ちなみに、日本性転換症候群協会は任意団体と言うことになってい

る。
「うーん、では……協会の名義で出すと言うのはどうでしょう？　日本性転換症候群協会様の会員たちが集めた家宝という体裁をとるのです」
「あら、いい案ね」
博物館の人の提案に対して、余呉さんが思わずぽろっと言葉を出す。
「うん、あたしもいい案だと思うわ」
あくまで、「協会の会員から良さそうなものを集めたら、たまたま永原先生の所持品に、いいものがたくさんあった」という建前にすればいい。
「そうねえ、でもそうなると1個は別の会員の所持品を展示したいわね」
「では、私が水戸藩士の時に使っていた日本刀などいかがでしょう？」
比良さんが、そんな提案をする。
「ああいいですね、いつ頃のものなんですか？」
「江戸末期です、私が１７９歳ですから刀を持ち始めて、尊皇攘夷運動をしてすぐにＴＳ病になったので……まあそのくらい前のものです」
「ほうほう、それは素晴らしいですね。展示品に出せますか？」
美術館の人々が、一気に目を輝かせた。
「ええ、もちろん。ただし、くれぐれも大切に扱ってくださいね」
「分かっております」
こんな感じで、協会の名義で、東京の美術館で企画展示が行われることになった。
展示品は、ほぼ全てが永原先生の所持品で、申し訳程度に、比良さんの武士時代の品を展示することになった。
もちろん、件の鑑定番組に登場していないものも多く展示する。
また、「永原先生の７大家宝」として「歌川広重の新しい肉筆画」、「徳川吉宗の茶器」、「富嶽三十六景」、「東海道五十三次」、「吉良上野介の着物」、「柳ケ瀬まつ一代記」、そして「江戸城日記」を特に売り出すという。

「9月になってちょうど『芸術の秋』何て言う季節ですからね。お客さんもたくさん入りますよ」
展示方法は、美術館の方から、「全て厳重な防弾ガラス越し」ということが決定した。
美術館の人曰く、「あの鑑定番組は、偽物を本物だと間違える誤鑑定を除けば、鑑定価格が安くなりやすい」とのことで、つまりあれでも永原先生の資産が過小評価されているということになるのよね。
「ですから、これほどの価値のあるものを展示するとなると、細心の注意を払わねばなりません。特にこの『歌川広重の新しい肉筆画』と『徳川吉宗の茶器』、『吉良上野介の着物』、そして『永原様がお書きになった江戸城日記』は特に厳重に扱います。もしかしたら、国の方でこの4点は国宝に指定されるかもしれません」
「……分かりました」
鑑定士さんの言うことと同じことを美術館の人が言う。それにしても本当に国宝になりかねないってとんでもない話になっているわね。
「あはは、そうなったら私も人間国宝かあ……」
永原先生が上の空で呟く。
果たして、自分の作ったものが国宝に指定されたのを見たことがある人がいるのだろうか？
逆に言えば、永原先生というのは、それだけの長い時を生き、２００年以上の江戸城生活を同じ人が記録したということは、極めて大きな注目に値するものね。
「永原さんは何人もいる人間国宝どころか、唯一無二のお方ですよ。我々には想像もつかないような長い時を生きて……我々はもちろん、我々の祖先でさえ、教科書の中でしか知らないような時代を見てこられたんですから」
美術館の人が、真面目そうな表情でそう言う。つまり人間国宝以上の価値があるということよね。
「あはは、私、そんなすごい人じゃないんですよ」
「とんでもない。日記が3日と続かない人がいる中で２１４年も続け

ることがどれだけ大変か。そして、その資料価値がどれだけ高いものか！」
「それは当時単に暇だっただけだわ」
美術館の人の声に対しても、永原先生はあくまで自分は一般の女性だと思いたがっている。
そう言えば、蓬莱教授と協会が協力する時に、真っ先にあたしに協力してくれたのも、そう言う一面もあるのかもしれないわね。
「……永原さん、同じ時代にもＴＳ病の患者はたくさんいたはずです。でも、永原さんを置いて他にこれほど生きている人がいないということは、やはり幸運だけではないと思うんですよ。私は」
美術館の人が静かにそう語る。
「そうねえ……確かに、生き延びる才能はあったかもしれないわね」
永原先生が笑顔でそう答えると、美術館の人もそれ以上は追及して来なかった。
何はともあれ、鑑定番組の出演から、美術展へと繋がっていった。

# 美少女の休日　博物館編

「へえ、永原先生の美術品の企画展示ですかあ！　いやー私もその番組見てたんですけど、もうすごいの何のって……彼のあそこ以外で興奮したのって久しぶりです！」

▪

龍香ちゃんは興奮気味にそんなことを言う。

何かもう、龍香ちゃんのブレなさもいつも通り過ぎちゃうわね。

「いやー、優子さんの論破劇の噂もスカッとしましたけど、やっぱり先生のお宝の高額鑑定のバーゲンセールはもっとすごかったですよ！」

「へー、龍香もあの噂を聞いてたのね」

やっぱり、大学中の噂というのは本当だった。

龍香ちゃんは学部から違うので、あまり会う機会はないのに。

「いやー、目の前で見た桂子さんは羨ましいですよ。私も何の気なしにあの講義を受けてみて、何となく違和感を感じてたんですが、ええそうですよね。男の好みに合わせるのが差別主義への迎合なんて、そんなわけないじゃないですか！」

龍香ちゃんが笑い飛ばすように言う。やはり龍香ちゃんも、あたしや桂子ちゃんと同じ気持ちだった。

あたしたちは男の子に好かれるようにすることに、何の抵抗感もない。

「それで思ったんですけど、結局あの女って、あの味を知らないんだと思うんですよ！　あんなすっごく美味しくて気持ちいい味を知っちゃったら、男の虜になるに決まってるじゃないですか！」

「ちょ、ちょっと龍香ちゃん！」

あたしも全く同感だけど、いくら女の子しかいないガールズトークだからってはしたなすぎるわ。

「あはは、ごめんなさい。それでえーっと、美術館に行くんでしたっけ？」

「ええ、久しぶりに3人で行こうと思って」

「おーいいですね！　女の子3人でですか！」

お互い彼氏持ちなので、トリプルデートの提案もあったけど、さすがにそれぞれの彼氏・旦那の予定もあるので、あたしたち3人で行くことになった。
「にしても、この3人で出掛けるのも久しぶりですね――！」
「そうねえ、出掛けるのは……もしかしたら2年ぶりかも」
「あー、そうかもしれないですね。いやー懐かしいですねえ――！ゲーセンに食事に映画！　あの時の優子さんは、今の優子さんはよりも遥かに男性に近かったですね」
「ええ、そうね」
何分、あの時はまだ女の子として復学したばかりの頃の話だもの。
今の幸子さんはもちろん、歩美さんだってあの頃のあたしよりは女の子していると思うわ。
ともあれ、あたしたちはこんな会話をして、後日美術館の最寄り駅に集合した。

「ほうほう、永原先生はこんなコレクションを持っていたんですねえ！」
結局、美術展は、「日本性転換症候群協会協賛　会員たちの秘宝展」という、何だかよく分からないいかにもスポンサーの意向でねじ曲げられた感じの名前になっていた。
「『美術館への寄贈は行われておらず、あくまでも『個人蔵』のものを展示するので、期間限定です』かあ……」
あたしが、美術館前のポスターを見る。
このポスターはインターネット上を含めて、あらゆる場所で見る。
やはりお客さんを集めるのにはどこも必死みたいね。
「でも、注目度は高いみたいですよ！」
インターネット上でも、この企画展示は極めて評価が高い。
鑑定番組に出てこなかった品も、貴重なものばかりだったからだ。
しかしそれでも人気なのは――
「吉良の着物とか、幕末期の着物とか、先生の書いた日記とか、楽しみですよね！」

「ええ。でも吉良の着物は、私たち一回見たことがあったわね」
桂子ちゃんの指摘に、龍香ちゃんがハッとなる。
「そう言えばそうでした！　先生が吉良上野介に貰った着物！　今思えば何千万って価値の着物で夏祭りに参加していたんですよね！」
あたしたちは、そんな会話をしながら、入館料を払いつつ企画展示室の中に入る。
ちなみに、この美術館は全ての展示を見られる料金と、企画展示だけを見る料金に別れていて、あたしたちは企画展示料金を払って中に入る。
「おー、以外と広々としていますね！」
「でも結構人がいるわね」
あくまでも協会名義の展示会とはいえ、所持者の名前は書いてあって、「永原マキノさん蔵」と書かれている。同じ名前ばかりずらりと並ぶわけで、少し不気味ではあるわね。
最初の展示品は、永原先生が戦国時代から使っていたと言う食器で、鑑定価格は１０００円だったけど、当時の世俗を知ると言うことや、永原先生が本当に戦国時代から生きていることを示す意味で、展示されている。
「箸と食器……今と殆ど変わらないですね」
「ええ」
鑑定番組で見たのと同じもので、展示品の解説には、「この食器は戦国時代の足軽、鳩原刀根之助が両親より受け継ぎ、使用していた食器である。彼は２０歳の時にＴＳ病を患い、名前を数度変え、以降現代に至るまで女性として過ごしてきた」とある。
その隣には、「柳ヶ瀬まつ一代記」の、第一部分が展示されている。
ここは永原先生自身が書いた部分で、漢字は崩し字になっていてよく読めないけど、展示部分の文字と現代語訳が載っている。
「確かにこの文章、現代語訳がなくても読めますねえ。学校の古典は全然違ったのに」
永原先生は鑑定番組内でも、室町や江戸の言葉は、古典で習う平安時代の日本語に比べて、極めて現代語に近いと言っていた。

ここは第一巻の部分で、永原先生がＴＳ病になった日のことをかいてある。
現代語訳もあるけど、原文の文字を楷書にしてくれた文章だけでも、「お腹痛いと思いつつも大したことがないと思って畑仕事をしていたら、急に極めて強い腹痛で倒れ、村の仲間に運ばれて、耳だけは聞こえ、夜になって気付いたら、女の身となっていた」ことが書いてあることは分かる。
更にその続きには、本能寺の変までの村での生活や本能寺の変後の諸国流浪の経歴、更に天正壬午の乱や関が原の戦いといった戦見物の話やその後の落ち武者刈りでの金品稼ぎや更に江戸在住を目指した貯蓄の話も載っていて、あたしたちにも知らない情報が多く載っている。

そして、次に展示されていたのは、徳川吉宗から永原先生に送られた茶器だった。
他にも、幾人かの大名や旗本からの寄贈品が展示されていて、その中には名門と呼ばれる家のものも多く、幕末期に島津斉彬から送られた1品もあった。
「優子さん優子さん！　これ薩摩切子ですよ！　何百万って価値がありますって！」
龍香ちゃんが目を輝かせている。
これは例の鑑定番組には出てこなかった。博物館には、「永原さんによれば、『これらの品々は、代表して徳川吉宗のものを出した』とのことだった」とかかれている。
もちろん、諸大名のこれらもとんでもない価値のあるものばかりだ。やはり何だかんだで戦国時代から生きている不老の女性は敬意を払われるものなのね。
「それにしても、こんな量はどうやって持ち歩いたんでしょう？」
「そう言えば不思議ねえ……」
言われてみれば、それは確かにその通りだった。
「あたし、ちょっとメールで聞いてみるわ」

あたしは、永原先生にメールを送る。
明治時代にも、永原先生は諸国流浪を経験しているけど、こんな膨大な量の宝物を持ち歩くのは不可能に近いはずよね。
「さ、次に行きましょう」
あたしたちは、次のコーナーに移る。
そこは、浮世絵のコーナーで、鑑定番組で鑑定されていたものが主に展示されていて、どうやら浮世絵については、美術館の意向からなのか、ほぼ全てが鑑定品だった。
「すごいですよ！　これが東海道五十三次、でこっちは鈴木春信の名画！　って、東海道五十三次はともかく、鈴木春信って誰ですか？」
「何でも、今有名な浮世絵の原型になった人みたいよ」
「あー本当だ。そう言えば、鑑定番組でもやってましたね！」
桂子ちゃんと龍香ちゃんが盛り上がっている。
どれも保存状態がよくて、その辺りが価値を高めているらしいわね。
ブーブーブー！
「あ、ごめん」
「先生から？」
あたしは画面を確認する。
やっぱり永原先生からだった。
「うんそうみたい、何々？『あの時代は厳重な鍵も鉄道も道路もない時代なので、旅に出る人向けに、質屋さんが倉庫代わりのサービスとして、ものの値段を受け取らずに預かり代として安い金利で預けてくれるお店がたくさんあった』だって」
「へえ、そうですか。あーでも、民衆が歩いてお伊勢参りするご時世ですからねえ」
龍香ちゃんは納得した表情で話す。
また、永原先生によれば、あの時代は戦国時代ほどではないものの、治安面の不安もあったことや、長年江戸城にいて体がなまったことへの不安もあったので、真田の故郷を訪れた時以外は、ほぼ東海道沿いを放浪していたらしい。

実際、永原先生は最初の鉄道を鶴見で見ているものね。
「うーん、ともあれ、保管してくれる場所があったと言うわけね」
近くで見ると、想像以上に迫力があるわ。
永原先生の持っていた保存状態のいい浮世絵の数々の中で、最後に展示されていたのが、あの歌川広重に直接手渡されたと言う肉筆画だった。
「うわー、これ本当にすごいわね」
浮世絵たちの中でも、特段に大きなサイズで作られていて、番組で見た時より威圧感があるわ。
これだけ大きいのに、その精巧さには目を見張るものがあるわね。
「ええ、それにしても、どれも複雑な構図の作品が多いですよね」
「うん、教科書で見た浮世絵と少し趣が違うって言うのかしら？」
龍香ちゃんの指摘に、あたしも答える。
博物館の解説には、「浮世絵は名作の殆どが海外に流出したという風聞があるが、実は海外に流出したのは国内の評価もあまり高くなく、単純な構図の絵が多かった。また、海外流出分の何倍か以上の作品が国内に残留しており、浮世絵そのものが大衆娯楽だったため、思わぬところから出てくることがある」と書いてある。
「へえ、浮世絵って色々な所に転がっているんですね」
それでも、ここまで保存状態がいい作品がたくさん出てくるのは、極めて異例だと思うけどね。じゃなかったらこうやって展示会もないと思うし。
「お、次は書物のコーナーですよ！」
そこには、永原先生が愛用していた小説本などが所狭しと並べてあって、最後の方には「柳ヶ瀬まつ一代記」があって、徳川綱吉側用人の「柳沢吉保」が書いた部分が公開されていた。
そこによれば、「それがしの元にも、上野介殿を通じて上様より伝達があり、『今後柳ヶ瀬殿に無礼の無いように』とのお達しがあった。上様のたまわく、『いかに半農の足軽出身のものと言えど、亡き兄上により士分に取り立てられ江戸城で暮らしに不自由無いようにするよう諸臣に命じられた上、東照大権現様の更にその父君以前に生を受け、

百八十年もの時を生きる柳ヶ瀬殿ともなれば、我々が敬意を払うのは当然である』とのことで、それがしも全くその通りだと思う。以来、上野介殿に対する柳ヶ瀬殿の敬愛は凄まじく、深く恩義を感じ入っている様子が見受けられた。それ故に、赤穂浪人の討ち入りは、柳ヶ瀬殿を深く傷つけ、討ち入りのほうが江戸城にもたらされた暁には、数刻にも渡り柳ヶ瀬殿の嘆き悲しむ声が江戸城中に響き渡っていた」と書かれている。

また、他にも「世論が浅野側に傾く様子を見るに、柳ヶ瀬殿の心痛察するに余りある」とも書かれていた。

多少の誇張はあるとは思うけど、今の永原先生の言動を考えれば、大きく嘆き悲しんだのは事実だと思う。

「苦労してきたんですね」

永原先生にしてみれば、吉良上野介は文字通り恩人として、絶大な尊敬をしていた人物だった。その彼が、ずっとずっと言われもない汚名を着せられ続けている。

最近になって、吉良上野介を擁護する意見が急速に台頭してきたとは言え、いまだに少数派だ。今回の鑑定番組の騒動で、少しは盛り上がってくれればいいけど。

「うわー、何ここ!?」

「辺り一面、書物が展示されていますよ!」

一代記を見終わると、次の部屋に行く。

そこで見たのは、永原先生の日記だった。

もちろん、これで全てではないけど、それでも凄まじい量にあたしたちは圧倒されてしまう。

日記の始めは、４代将軍徳川家綱への賛辞で始まっている。

初恋話は書かれてはいないけど、真田伊豆守殿に罪を許され、徳川家綱が家老の叱責を止め、泣くように言われたことが書かれていた。

他にも、明暦の大火についての記録もあり、永原先生によれば、たまたま日記をつけていた時に避難指示が出たため、日記を持ちながら避難することが出来たという。

最も、結果的には将軍家綱に真っ先に逃がされたものの、永原先生が住んでいた部屋は燃えずに済んだので、永原先生には特に物的被害はなかったとか。

博物館の展示解説によれば、「永原さんの日記には、火災や喧嘩、車による事故の記録が多く、当時の江戸ではこれらが頻発していたのが分かる」と書かれていた。

まあ、例のごとく原文はくずし字でよく読めないけどね。

「ねえねえ、これって本当なのかしら？」

「何だかとんでもなくおおらかな時代よね」

２人組の中年女性が、眉を潜めながら話している。

その日記には、「当時の倫理観」という表題で２つのことが紹介されていた。

１つ目は「寛政元年六月二日、この日銭湯に入り３人の男から胸と尻を撫でられた。そのお陰で私はますます女としての自信がつき、体がよく暖まった」と書いてある。

「あー、修学旅行の時に言ってたっけ？」

「あーうん、そうだったわね」

修学旅行の時に、永原先生はあたしたちに江戸時代の銭湯での痴漢は日常茶飯事だったことや、痴漢されに行く女性も後を絶たず永原先生もその一人だったことを話してくれていた。

でも、次はもっとすさまじい内容だった。

それは、「文政七年七月四日、以前より江戸一番の美人だと吹聴する女がいた。私は常日頃から銭湯や祭りなどで他の女より触られてきた自負があったので、自分こそが江戸一番の美人だと確信していた。そこで今度隅田川で行われる縁日の祭りで、どちらがより多く胸や尻をつねられたり撫でられたりするかで競いあった。立会人の申告では、私は胸に二十四回、尻に五十九回で私の感覚も同様だった。私は積極的に人混みに入っていったのに、あの女は胸に三十八回、尻に七十三回も触られていた。私は女として負けたことに悔しくて悔しくてたまらず、その場で声を張り上げて泣いてしまい、勝った女からは

指で刺され散々に笑われ晒し者にされ、私の三百年余の人生の中でこれほどみじめな思いをしたことはない」という内容だった。
「もはや何をかいわんやですよ！　さすがの私もこれは引きます！」
すっかりエロ女の代名詞になってしまっている龍香ちゃんがそう熱弁する。
「あはは、龍香も納得のモラルハザードよね……」
まず痴漢され、覗かれるために銭湯に行くという時点でも十分に変態だけど、女としての魅力を決める際にも、夏祭りでどちらがより多く痴漢されたかで競い合うというのもすさまじい話だわ。
「何より何なのよこの回数……」
あたしは、半ば呆れ気味に言う。
というよりも、それを数えた立会人もすごいわよね。たぶん立会人も何度も痴漢されたとは思うけど。
「驚きだわ。よく数えたわよね」
ともあれ、江戸時代の「価痴観」は今とは全く違っていたわけね。
次に見えるのは幕末期の日記だった。開国と共に泰平の世が崩れていくことに対し、ペリーや欧米諸国に対する悪辣な罵倒がこれでもかと書き込まれている。
博物館の解説によれば、「様々な部分で、制度の改革は必要ではあったが、それらの外圧さえなければ、誰も幕府を打ち倒すなどとは考えず、この平穏足る世が永遠と続くはずであった。戦乱の世のような時代は、懐かしくもあり、また心踊るところもあるが、起きないことに越したことはない。戦乱への欲望は人が人足る以上存在し続ける。それは私が生まれる前の日の本に限らず、南蛮、唐、朝鮮、天竺の歴史が証明している。だからこそ、二百有余年に渡る平穏を実現した徳川は奇跡であり、徳川の前に平穏なく、徳川の後に平穏なく、徳川の他に平穏はない。私は、ペルリを含め、それを崩した人と国を全て永遠に恨み続けるだろう。浅野長矩のように」と書かれているという。
「恐ろしいわね……」
恐らく、永原先生のキリスト教嫌いも、こうしたことが影響しているのだと思う。

戦乱の世を知る永原先生にとって、徳川幕府を倒すことは最大のタブーだった。
そして最後のページが展示されている。
そこには、「慶応４年４月１０日、ついに江戸開城が決まった。大政奉還と王政復古の大号令の時より覚悟しておいたが、私がここにいられるのも、今日が最後になる。明日にはここを出ていかねばならない。思えば永正十五年に生を受け三百五十年の人生の内、二百十年余をここで過ごした。明日を迎えるというのが、これほどに不安に思うことはない。私のこの日記も、ついに役目を終えるだろう。生きている限り、真田と吉良への御恩を、返せると信じて」と書いてあった。
「何だか、切ないわね」
「ええ」
そして、明治以降の展示品は、鉄道の展示になる。
まさにここだけ、鉄道博物館のようだった。
古い切符、模型、鑑定番組で出てこなかった鉄道品も数多く出て来る。
永原先生が逃亡を止め、人知れず生きるのを止め、社会の一員になろうと決心したのが鉄道だった。
そしてその部屋の片隅に、申し訳程度に比良さんが所持していた日本刀も展示されていて、これでこの企画展示は終わっていた。
「ふー、これで終わりですか」
「結構ボリュームあったわね」
「うん」
あたしたち三人娘は、この後特に予定もないので、食事屋さんだけ見つけて、昼食を食べて帰宅した。
浩介くんも、後日改めて、この企画展示を見た。
その時はやはり「江戸時代の銭湯とか祭りってやばいとこだったんだな」という感想を持っていた。
うん、だってあの龍香ちゃんが引くくらいだものね。

# 後期の始まり

夏休みが終わり、後期に入った。
佐和山大学は小谷学園と同じ前後期制で、後期はまた別の科目の履修が必要になる。
履修登録する前に、どんな科目があるのか、見て回る必要がある。
大学は高校までと違い、とにかく科目数が多い。まあ、専門的なことを学ぶ場所だから、当たり前といえば当たり前で、むしろ中学高校までが大雑把すぎたのよね。
「第2外国語ってあるよね、英語系の科目でも代替できるけどどう思う？」
後期の履修についても、浩介くんと相談しながら決めていく。
「うーん、慣れた英語でいいや」
あたしも、後期は結局浩介くんと同じ履修になりそうだわ。
そして、この時期に行われることと言えば、佐和山大学の文化祭、通称「さわわ祭」の準備ということになる。
あたしたちが所属する天文サークルでの出し物はすでに決まっていて、桂子ちゃんは彼氏と共に、どの写真を出しておくかについて、すでに話し合いを終えていたという。
「なので、出すのはこの写真とこの写真、解説はこれとこれよ」
「うん、いいと思うわ」
放課後の天文サークル。あたしたちは、桂子ちゃんの選別した写真を最終確認する。
天文知識については、桂子ちゃんの方が遥かに詳しいから、よっぽどのこと以外は任せておけばいいものね。
「それにしても、あの薬を飲んでから調子がいいわ」
「お、木ノ本もか!?」
浩介くんが「おおっ」という感じで喋る。
「うん」
蓬莱の薬には、老化を遅らせる以外にも様々な効果がある。

「もしかして、例の副作用のせいかしら？」
「そうみたいだな。優子ちゃんも体調悪くなるのは月に1回くらいだし」
浩介くんが半笑いで言う。
「もう、大変なのよ！」
「うーん、ちょっと今のはデリカシーないわねえ……」
あたしの抗議に桂子ちゃんも同調する。この場に女性が2人いてよかったわ。
「うっ、悪い悪い」
浩介くんも、さすがに分が悪くなったのか、あたしに謝ってくれる。
まあ、浩介くんは浩介くんで、こういう日には優しくしてくれるんだけどね。
例外は今年のバレンタインデーの時くらいかな？　あれはうん、まあ男の子が興味持っちゃうのは仕方ないとは思うけど。
「でも、風邪とか引かなくなったのは助かってるわ。何せ病気と重なると大変だもの」
「あーうん、そうかも」
ＴＳ病になると、免疫力が高まるため、女の子の日に風邪を引いたり病気になったりといったことは経験がない。
とは言え、優一時代の幼い頃に、何度か病気や風邪になったこともあったので、その時の辛さを思い出せば、何となく推測することができる。
「優子ちゃん身体弱いから、不老遺伝子があってよかったよ」
「うん」
不老遺伝子があるからこそ、今の研究が必要という意味でもあるけどね。
「私も、３００歳まで生きていれば、超新星爆発の１つは見られる気がするわ」
「うーん、永原先生も見たことないから１０００歳は必要じゃない？」
桂子ちゃんの発言に、あたしは胃を唱える。
「あーそう言えばそうだったわね。とは言え、ここ数百年は地球近傍

で超新星が無いからねえ。どうなるかしら？」
「うーん確かに」
どちらにしても、天文イベントを見るためにはかなりの長寿が必要になるのよね。
そう言う意味でも、蓬莱教授の研究が待たれるところだわ。
「さ、次はレイアウトよ」
「ええ」
「おう」
あたしたちは、雑談もそこそこに、大まかなレイアウトを考え始めることにした。やるべきことは、早めに終わらせるのが吉だものね。
「ごめんくださーい」
「はーい」
準備をしていると、部屋の外から知らない人の声がした。
「あの、文化祭実行委員なんですけど」
「はい」
どうやら、文化祭実行委員の人みたいね。
「今年のミス佐和山コンテストに出られる方を探しているんですけれど……ってあなた方最高じゃないですか！　是非出てみませんか!?」
文化祭実行委員の女性は、あたしを見るなり目の色が変わったようにミスコンに誘い出す。
「あたしはパス」
ミスコンならば、当然あたしは出るつもりはない。
「え!?　何でですか!?」
文化祭の人が、驚いた顔をしている。
「『ミセス』コンテストなら、出てあげてもいいけどね」
あたしは左手を突き上げて結婚指輪を見せつける。
「あ、すみません……そちらの方は？」
「あー私？　うーん、去年ミス小谷で優勝したばっかなのよねー」
桂子ちゃんは、彼氏はいるけどまだ未婚なのは事実なので、あたしと同じ言い訳は通用しない。
まあ、もちろん「出ないったら出ない」でもいいんだけど。

「あ、もしかして木ノ本桂子さん、そっちはいし……じゃなくて篠原優子さんですか!?」
　ようやく気付いてくれたみたいね。
「ええそうよ」
「本当ですか!?　木ノ本さん、出てみませんか!?」
　文化祭の実行委員さんがかなりがっついている。
「いいけど、内面も判断するとかいう曖昧基準でコネで選出とかは勘弁してね。出るからには彼氏の手前、優勝に近い成績じゃないと」
　桂子ちゃんが釘を指すようにして言う。
「分かってますよ！」
　文化祭実行委員の人は、多分同じことを何度も言われてきたわけね。
「じゃあ、彼と掛け合ってみるわね」
「ありがとうございます!!!」
　桂子ちゃんがそう言うと、文化祭実行委員さんは嵐のように去っていった。
「なんだかすごいパワフルね」
　まあ、そんなんじゃないとこういうのは務まらないんだとは思うけど。
「それにしても優子ちゃん、うまく機転を利かせたわね」
　まあでも、既婚者なら誰でも思いつきそうだとは思うけど。
「うん、あたしもう浩介くんのものだし、出たら出たでまた優勝しちゃいそうだし」
「あはは、優子ちゃんなら世界ミスコンでも余裕で優勝しちゃうでしょ!?」
「違いない」
　桂子ちゃんと浩介くんが、笑いながらそんなことを言う。
　まあ、それ以前に、ミセスのあたしはミスコンテストには出られないんだけどね。

　同時並行して、夏休み明けで新しい講義を一通り受けてみたが、相

変わらず専門であるはずの再生医療とは関係のない一般教養多目で前期とほぼ変わらない。
特に文系の一般教養はあたしたちにとって全くテンションが上がらない。
軽い気持ちで、永原先生に履修しようと思っていた「日本近代史」の教科書を見せたら案の定「でたらめばかりが載っている」とものすごい剣幕で怒ってしまって、よっぽど我慢ならないことが書かれていたのか、永原先生が著者に抗議する騒ぎになっちゃったし。お陰さまで履修を取り消す羽目になってしまった。まあ、デタラメを教わってデタラメを書いて単位取るってのも変だしね。
あたしたちは代わりに、古典系の科目として、「江戸時代の文学」を選んだ。
鑑定番組や美術館に出てきた永原先生の所持していた本も出てくるという。
「ふう、こんなところね」
「ああ、にしても先生があんなに怒るなんてなあ……」
浩介くんが驚いたように言う。
永原先生は、もしかしたら歴史学会に対する不信感も強いのかもしれない。
それは恐らく、赤穂事件が大きく関係しているのかもしれないし、あるいは歴代将軍全てと面識を持った永原先生が、各将軍についてでたらめ書いていることへの怒りなのかもしれない。
永原先生は、ああ見えて歴史に関してはかなり狭量な人なのかもしれない。
いや、戦国時代の生まれだからこその、価値観の相違と言ったほうがただしいかな？
例えば、永原先生の「真田幸村」と「忠臣蔵」に対する異常な憎悪にしたって、当時の人間、特に当事者にとっては極めて重大な問題だからこそ、ああした行動を取るのだと思う。
「でも、以前にもにたようなことがあったわよね？」
「あー、あったなあ……あれは確か上田駅だっけ？」

浩介くんが懐かしい場所を言う。
「うん」
そう、2年前の林間学校の帰りに、あたしは浩介くんと共に永原先生の先導で真田家所縁の土地を巡った。
それはすなわち、永原先生の故郷でもあった。
永原先生は上田駅前の「真田幸村」の銅像に対して怒りをぶつけていたし、止めようとした浩介くんにまで怒鳴り散らしてしまった。
永原先生にとっては、諱は極めて重大な意味があり、口に出すだけでも恐れ多くてできないものだから、それを曲げて伝えるというのは冒涜どころでは済まされないことなのだろう。
実際、「切腹を言いつけられて文句は言えない」「討伐の大義名分にさえなる」と言っていたし。
「あの後の夏祭りでも、さくらちゃんに怒鳴ってたものね」
「ああ、あれは志賀にも気の毒だったよ」
あの時の永原先生は「吉良の着物」を着ていて、さくらちゃんが吉良上野介に対する世間一般の誤解を話した時にも、浅野長矩と赤穂浪士を罵倒して、吉良を貶めたと思えば、周囲が振り向くほどに怒鳴り込んでいた。
確かに、主君の孫のことを曲げて伝えられたり、自分にとってかけがえのない恩人を悪く言われたら、不愉快な気分になるのは理解できるわ。
でもそれにしたって、数百年も経っているのに……いや、それだけ長い間続いているからこそ、なのかもしれないわね。
「ま、ともあれ今は、学業に専念しようかしら？」
「ああ、そうだな」
協会の広報部も、仕事が落ち着き、今のところはあたし一人で回せている分量になった。
幸子さんと歩美さんも、まだ広報部に籍は置いてあるけど、それぞれが普通会員として、元の活動に戻っている。
歩美さんは乙女ゲームを始めたけど、「まだいまいち男の子にときめかない、私だって女の子なのに、優子さんや幸子さんみたいに男の

子を好きになれないのは辛い」と悩んでいた。
歩美さんは、まだ女の子になって1年経っていないから、焦らなくていいことだけは伝えておいた。
彼氏なら、大学なり就職先なりで見つけても遅くないというのが、あたしの持論だったりする。
一方で幸子さんの方は、相変わらず彼氏とはうまくいっている。
彼女や妻がＴＳ病のカップルや夫婦は、別れたり離婚したりというケースが他と比べて極めて少ないことが特徴的でもある。
もちろん、理由は言わずもがなだ。
また新しいＴＳ患者も、あれから現れていない。
一方で、現在カウンセリングを主に受けている患者さんたちは、全員が安定した生活を送っている。
お昼休みに浩介くんと、学食へと歩く。
あたしたちはいつものように思い思いに食券を購入し、テーブルで隣り合って食べる。

「ねえねえ知ってる？　ジェンダー論の講師、退職したんだってー！」
「うんうん、聞いたよ。学生、それも1年生に言いくるめられてるのを大勢の前で見られたんだってさー」
「うん知ってる、あれはマジで傑作だったよ」
「あはははは」
「論破した優子ちゃんもすごいよねえー！」
「うんうん」
「それにしても、４０手前の未婚者が１９歳の既婚者に喧嘩売るって……本当女の嫉妬って怖いよなあ」
「本当、女の敵は女だよねえー」

どうやら、あたしに喧嘩を吹っ掛けたジェンダー論の講師が、この大学をやめてしまったらしい。
あたしとしては「ざまあみろ」っていうのが第一印象だけど、第二印象としてはやっぱり生活に支障まできたしちゃったのは、やっぱり

どうしても罪悪感があるわね。
何なら、後任として協会の方から講師を出してもいいかもしれないわね。両方の性別を経験した人こそこういうのは大事だもん。例えば、客員教授として永原先生とか。
「どうやら、あの講師、辞めたらしいな」
「ま、当然だわ。男女の違いを無くそうだなんて、土台無理な話なのよ」
あたしにはもう、あまり関心もない。
「だけど、国外はそうでもないらしいぜ」
浩介くんが興味深い話をしてくれる。
「へー、どんな感じで？」
「それがだな――」
蓬莱教授の宣伝部の話では、あたしたちのこの声明をきっかけに、ジェンダー論において場外乱闘に発展しているらしい。佐和山大学でも一悶着あったけど、世界ではもっとすごいらしい。
それというのも、海外のフェミニズム団体は日本とは比べ物にならないような影響力を持つ圧力団体もあるらしく、そうした団体の嫌がらせなどを受けてきた人々が、あたしたちの団体の声明を大義名分にして、世界各地で逆襲を繰り広げているらしい。
３年前くらいから、世界は行き過ぎた進歩的思想から脱却する空気が流れていたわけだけど、今回のあたしたちの声明は、欧米諸国では特に重視され始めているらしい。
日本とは違って、ＴＳ病という病気を知る機会がなかった海外では、「両方の性別を体験した」という権威の突然の登場に動揺する人が多く、そのためにその権威は、半ばパニック的に日本以上に高いものになっているらしい。
「協会の方にも直接的な外圧はあったんじゃないか？」
協会でも、外国メディアの取材申し込みがあったらしいけど、永原先生が「うちは英語の団体でも国際団体でもないので、日本語以外受け付けません。それから、取材条件を満たすことは絶対です」と言って事実上の封鎖を行ったらしい。

「まあ、あまりなかったわね」
　永原先生はもちろんのこと、比良さんや余呉さんや江戸生まれの正会員たちもおそらく外圧というものにいい感情は持ってないと思う。
「おうそうか、やっぱり先生の手腕ってすごいんだな」
「うん、永原会長は自分のことは一般女性だって言っているけど、他の人が同じように５００年生きて同じような振るまいが出来るかと言ったら違うと思うわ」
　あたしだって、あんな身体能力じゃすぐに死んじゃうと思うし。
「ああ違いねえよ。運だけで戦国時代や江戸時代を切り抜けられねえのは、先生以前の人が誰もこの世にいなくて、しかも先生の次に年上の人が江戸後期の生まれな所からも明らかだしな」
　浩介くんが正論を述べる。
　以前にも永原先生は言っていたように、戦国時代の人間は異常なくらい喧嘩っ早かったらしく、また際限なく事を重大化させるという点でも江戸時代の比ではなかった。しかも戦乱があちこちで起きていたから死体が転がってたり人身売買なんてのも日常的だっただろうし。
　江戸時代になると治安が劇的に改善したと言っても、「火事と喧嘩は江戸の華」何て言葉が残ってるくらい、喧嘩に明け暮れていた時代だったものね。
「それにあの時代は性犯罪だらけだったと思うし」
「ああ、あの祭りでの痴漢の下りの日記はひでえよなあ……」
　浩介くんがうんざりした感じで言う。
「うん」
　そもそも、江戸一番の美人を決めるために、痴漢された回数を競い合う何てことを、仮にも江戸城に詰めている武士身分の娘がすると言うのもさることながら、痴漢された回数で負けたことについて、「大声を出して泣くほどに人生で一番みじめな思いをした」というのがとにかく衝撃的だったわ。
　あたしも以前、電車で痴漢されたことがあったけど、恐怖と嫌悪感で一杯だったのに。

まあ、あれは永原先生に限らず当時の時代がそうさせたという一面が強いけどね。
「先生、もしかしたら……あーいややめておこう」
浩介くんが何かを考えて、そして思いとどまる。
「うん、江戸城に住んでるもの。吉原にいるわけ無いわ」
というよりも、吉原の遊女は、途中で死ぬことが多い危険な職業だったわけだもんね。
「ま、とにかく先生が会長でいる間は協会は問題ないさ。少なくとも、先生は寿命で死ぬことは無いから当面心配は要らんだろ」
「ええ、そうね」
永原先生は、長生きするために不慮の事故に遭わないように慎重に暮らしていて、それはあたしたちも同じ。
「さ、今日も講義が終わったら文化祭の準備しようぜ」
「うん」
あたしたちは、学業を始め、秋の文化祭に向けて準備を開始する。
久々にゆっくりと、大学生活を楽しむことができるわね。

# さわわ祭りの開始

ピピピピッ……ピピピピッ……

「うーん」

目指し時計の音で起きる。

今日はいよいよ佐和山大学で文化祭が行われる日。

あたしは、まだ見ぬ大学の文化祭に、期待を抱いていた。

「お人形さん……」

まだ時間に余裕があるので、あたしは部屋にあったお人形さんで遊ぶ。

仲のいい家庭をイメージした、ほのぼの生活を考えて、おままごと遊びも加えてっと。

「かわいいわー」

秋の季節も深まったので、お人形さんの服を着せ変えてあげる。

このお人形さん遊びやぬいぐるみさん遊びは、こっちに来てからも以前と変わらずに続けている。

かわいらしいお人形さんの服を着替えさせてあげて、ぬいぐるみさんと一緒に楽しく暮らす楽園を思い浮かべる。

「うー、お人形さんには全部見られちゃってるのよね」

そう思うと、あたしは急に恥ずかしくなってしまう。

もちろん、あたしだって子供じゃないから、お人形さんに心なんてのはないんだけど、気持ちの問題かしら？

「ううん、気にしちゃダメだわ」

頭をぶんぶんと横に振り、あたしは気持ちを切り替えて、お人形さん遊びを再開した。

「うーん、どれにしようかしら？」

お人形さん遊びを終えたあたしは、今日の服装で迷っていた。

高校までの文化祭は、制服だったのでその日の服に迷うことはなかった。

２年生でミスコンに出た時に私服審査があったけどあれもあらか

じめ準備期間があったからよかった。
「うーん、やっぱりこれかなあ？」
あたしが取り出したのは赤い服と赤い巻きスカートだった。幼さを全面に強調した服で、あたしのお気に入りの服の１つ。これまでも、何度もいざという時に取っておいた服だけど……
「ううん、今日はこっちにするわ」
あたしは、迷った末に白いＹシャツと茶色いジャンパースカートを手に取る。
こちらも幼さを強調した服で、ぬいぐるみさんを抱きながら歩くのがあたしのお気に入りになっている。
「よし、これにするわ」
あたしは、ミスコンには出なかったけど、小谷学園で桂子ちゃんや永原先生と戦って優勝した「伝説のミス小谷」ということで、「評論審査員長」というごたいそうな肩書きで参加することになった。
つまり審査員長であると共に、各候補について評論するというもので、審査員票も去ることながら、あたしの発言で一般票が大きく動きかねない。
まあ要するにミスコンの運営のトップに担ぎ上げられちゃったと言っていい。
……最も、他の候補を見れば一目で桂子ちゃんの優勝が決まったようなもののため、あたしも桂子ちゃん支持でいきたいと思う。
本当、２年前のこととは言えこの桂子ちゃんにミスコンで勝てたのって我ながらすごいと思うわ。
「あなたおはよー」
「優子ちゃんおはよう。文化祭、それで行くのか？」
「うん」
リビングに行くと、すでに着替え終わっていた浩介くんがくつろいでいた。
そしてキッチンではお義母さんが既に朝食の準備を始めていた。
「手伝うわ」
「ありがとう」

あたしは、お義母さんと共にキッチンに入って朝食を手伝う。
「優子ちゃん今日はさわわ祭？」
「うん。ミスコンで審査員なのよ」
「あらあら大変ねえ」
審査員は、審査員なりの大変さがあるとはあたしも思う。
「うん」
佐和山大学は、偏差値がそこまで高くないためか、知名度も蓬莱教授絡みでしか知られておらず、大学のミスコンでありがちな「女子アナ志望」という人はほとんどいないらしい。
佐和山大学は、色々な学部学科があるけど、ノーベル賞学者の蓬莱教授の影響で、理系の学部の力がやや強めで、その結果男子学生がやや多い。
なので、男性受けについてあたしから伝授してある桂子ちゃんについては、特に心配は要らないと思う。
ちなみに桂子ちゃんの彼氏は、二つ返事でミスコン出場を快諾した。
というのも、あたしが結婚を理由にミスコンに出ないことを知り、勝利を確信したから、彼氏として桂子ちゃんに箔を付けさせたいらしい。
確かに佐和山大学でも、あたしを除けば、桂子ちゃんは「学校一の美少女」と呼ぶにふさわしい女の子だったから、あたしが桂子ちゃんの彼氏の立場だったとしても、同じように考えたと思うわ。
あたしが見ても、今回のミスコンは去年と同じく、桂子ちゃんが別の候補に負けるとは考えにくい。
「まあ、頑張りなさい」
「ええ」
そして、桂子ちゃんの彼氏から桂子ちゃんを経由しての噂だけど、小谷学園の文化祭でも永原先生が2年ぶりにミスコンに出るとのことが分かった。
既に最有力候補になっていて、制服姿になった永原先生を見たことのない1年生たちはとても衝撃を受けていたとか。

去年の年度末のエピソードを知っている生徒たちからは、制服姿の永原先生は意図的に「先輩」と呼ばれているらしく、永原先生の喜ぶ顔が浮かんでくるわね。
永原先生、ミスコンに出るということは結婚暦はないみたいね。
まあ、恋愛についてトラウマがあるものね。
あたしたちは、朝食を食べて、学校へと行く。
ひとまずあたしたちの拠点は天文サークルなのでそこを目指す。ぬいぐるみさんを持ちながらの移動で、大学でも特に何も言われなかった。
ガチャッ……
「あ、篠原先輩。久し振りです」
あまり聞き慣れない、でも去年まではよく聞いていた声が聞こえた。
「おう、しばらくぶりだったな」
「うん、久しぶりね」
桂子ちゃんの彼氏さんで、去年度まで小谷学園の天文部で一緒だった男子生徒、今は小谷学園の天文部で部長を務めている「中庄達也(なかしょうたつや)」さんがあたしたちに挨拶をしてくれる。
名字が同じになったので、一緒に呼ぶ時は1回で済む。
「ふう、優子ちゃん、旧姓で呼ばれることめっきりなくなったわね」
「うん」
パソコンを操作していた桂子ちゃんが、顔をあげてあたしに話しかけてくる。
桂子ちゃんの服は、青を基調としたロングスカートに、お腹にはゆるいピンクのリボンを緩く結び、頭にはカチューシャと胸には白いケープにリボンというかわいらしい清楚な少女の出で立ちだった。
桂子ちゃんのこのスタイルは以前にも何度か見たことがあって、一昨年のミスコンの私服審査でも着ていた服だった。
「だってよ、去年の後夜祭のあのイベントは小谷学園激震と言っていいくらいのメチャクチャ衝撃的だったからなあ」
さすがに、去年の後夜祭での全校生徒と先生を目の前にしたプロ

ポーズ劇があったらねえ……それどころか結婚式前からも時々「篠原優子ちゃん」何て呼ばれてたし。
まあ、それもそれでちょっとどころかとっても嬉しかったけどね。
「あはは、今思うとずいぶん無茶したもんだと思ったよ」
浩介くんが、どこか苦笑いする感じで言う。
あたしも、恥ずかしい台詞をマイクで拾われちゃってたし、今となっては思い出しただけで顔が赤くなりそうなエピソードよね。
「俺も桂子ちゃんに素敵なことしたいなあ……」
「な、何よもう！　ばかぁ……」
達也さんの惚気に対して、珍しく桂子ちゃんがかわいくうろたえている。
「うひょー、かわいー！」
そこにちょっとだけ演技も入ってることをあたしは見抜いているけど、達也さんの方は純粋無垢に喜んでいる。
やっぱり、男は適度にバカで単純じゃなきゃね。それが魅力だもの。
桂子ちゃんも桂子ちゃんで、やっぱり雰囲気がよりかわいくなっている。
幸子さんも、大学のサッカーサークルの仲間からも「最近今までよりもかわいくなった」って言われてるらしいし、恋は女の子をかわいくするのはやっぱり本当のことよね。
「もうっ！」
桂子ちゃんがべったりしてくる達也さんを笑いながら引き剥がす。
その仕草にも、はっきり拒絶するのではなく「嫌よ嫌よも好きの内」と思わせるための工夫がなされているわね。
「あはは、2人ともうまくいってるみたいでよかったよ」
「うんうん」
あたしと浩介くんも、一安心という感じで言う。
桂子ちゃんは、男の子の気持ちをよく考えて行動していて、あたしからもそうしたことを伝授されてきたので、やはり男の扱い方はうまいわね。

「それにしても、天体観測の写真かあ……」
「うん、どうかな？」
「よく撮れてるよ。やっぱり桂子ちゃんには叶わないなあ……」
　達也さんも、小谷学園にいたときは「先輩」とか「部長」って呼び方だったのに今やすっかり「桂子ちゃん」って呼んでいるわね。
　まあ、恋人になったんだから当たり前よね。
「えへへ」
　さて、そろそろ開始時間が近いわね。
「さ、天文サークルもこの文化祭に参加するわけだけど、あたしと桂子ちゃんはミスコンの仕事もあるから２人ともその時は持ち場をお願いね」
「おう、任せとけ！」
「ああ」
　あたしの最終確認の言葉に、２人とも力強く頷いてくれる。

　ピンポーン
「文化祭実行委員長の――」
「お、始まったわ」
　文化祭実行委員長さんの放送が始まった。
「ただいまより、２０１９年度さわわ祭を開催いたします！」
　ワーパチパチパチ!!!
　ここからも聞こえるくらいの喚声と拍手が巻き起こり、それと同時に音楽が放送で流れ始めた。
「じゃあ、ここは私が持っておくから、３人とも自由に回っていいわよ」
「うん」
「おう」
「ありがとう」
　あたしたちは、桂子ちゃんにそう言われると、早速外に出る。
「じゃあ、俺はこっちを見てきます」
「おう、気を付けてな」

あたしたちはまず達也さんと別れ、早速大学の文化祭を見て回る。
まずはこの建物だけど、普段は講義で使っている場所で、サークルも殆ど零細しか入っていないため文化祭ながら閑散としている。
「まずはお隣さんから見てみる？」
「そうするか」
でも、あたしたちの天文部の隣の部屋には一応小さなサークルが入っている。
それが――
「こんにちは、真ダンスサークルへようこそ」
中に入ると、２人の女性が声をかけてくれる。準備中にも、何度か見知った顔でもある。
こちらのサークルはダンスサークルなんだけど、古いダンスサークルが、いわゆる「ヤリサー」になってしまったため、改めて立ち上げたサークルなんだとか。
「ふう、とりあえず見せてくれますか？」
「はい、それでは」
ダンスサークルの人が快く返事してくれる。
ちなみに、例のヤリサーも形だけの出展はしているけど、その実文化祭が終わってから飲み屋に誘うのが真の目的だったりする。
もちろんサークル名は隠してだけど、驚くべきことに、ここでも女性が何人も犠牲になってしまっているのだという。
「私たちの躍り、見て下さい」
「ワンツー」
２人組の女の子が、足をステップさせ、踊り始める。
そこにはどことなく、百合な感じの雰囲気が漂っている。
「それ、１、２、３……」
「ルンルンルン！」
独特のリズムとかけ声で、約１分のダンスが終わった。
ちなみに、２人とも動きやすさ重視なのかショートパンツに半袖のトレーナーという、この季節には寒そうな出で立ちをしていた。代わりに、トレーナーが緑とピンクで色分けされていて、うまく差別化を

図っているみたいね。
パチパチパチ！
「ありがとうございます」
「最後まで見てくださって本当に、ありがとうございます」
あたしたちの拍手に、２人は感激したようにお礼を言ってくれる。
「すごいわ。あたし運動苦手だからこんなのできないわよ」
「楽しんでもらえてよかったです。真ダンスサークルは、決して負けませんから！」
彼女たちの、悲痛な決意が伝わってくる。
「あー、やっぱりあっちのせいで大変なのか？」
浩介くんがややデリカシーなく言う。
「そうなんですよ！　佐和山大学のダンスサークルはおかしいって噂になっていて、私たち迷惑なんです！」
「本当ですよ、ダンスサークルと言って新入生の飲み会であれこれひどいことをしているんですよ！」
しかし、あたしが浩介くんに何か言う前にダンスサークルの人はいかにも「待ってました」といわんばかりに捲し立ててきた。まさに、「声を大にしていいたい」と言う感じだった。
やはり、迷惑を被っていると言うことみたいで、もしかしたら浩介くんが鋭いのかもしれないわね。
「お願いします。私たちみたいに真面目なダンスサークルもあるって、みんなに分かって欲しいんです！」
「うん、分かった。うちの家内もあっちの連中に勧誘されてたからな」
「そうなんですか⁉　大丈夫でした？」
浩介くんが例の事件に言及すると、ダンスサークルの人があたしを心配そうに覗き込んでくる。
「はい、浩介くんが守ってくれましたから」
「いいわー、やっぱり羨ましいわね」
「うんうん」
やはり、ダンスサークルの女の子たちも、あたしたち夫婦は憧れの的ということらしい。

まあそりゃあ、男の子に守られたいって女の子の本能だものね。
「それじゃあ、失礼するわね」
「「ありがとうございました」」
礼儀正しくお辞儀した2人に見送られ、あたしたちは階段を降りる。ここには零細サークルが他にもあるけど、零細らしくどこも閉まっていた。
建物の外に出ると、始まったばかりの文化祭で多いに盛り上がっていた。

「お、あれが噂の篠原夫妻だぜ」
「ひゅー、手なんか繋いじゃってー！」
「チキショー！　このリア充がああああ!!!」

「ふふ、気持ちいいわね浩介くん」
「ああ」
結婚して余裕もできて、浩介くんは以前からだったけど、今はあたしもこうした嫉妬の声を心地よく聞くことができるようになった。
そしてますます手をがっしり繋いで腕も絡めて、彼らの嘆きの声をエネルギーにしていく。
「浩介くん、どこに行く？」
「うーん、とりあえずまずは蓬莱さんが何してるか気になるな」
「うん、あたしも」
「よし、行き先が決まったな」
あたしたちは、まず「蓬莱の研究棟」へと向かうことにした。
ちなみに、蓬莱教授の銅像はそのままになっている。
どこかの一流大学のように、いたずらをされると言うことはない。
まあ、蓬莱教授については生きている現役の教授だし宗教的な境地に近いような信奉者も珍しくないし、この銅像にいたずらしたら冗談抜きに命狙われかねないものね。
……それ以前に、蓬莱教授は事実上この大学の王だということを考えれば、そんな大それたことをする人はいないと思うけど。

でも蓬莱教授も、あと２００年は生きるのよね。あーでも、蓬莱教授も５０歳になるからその時から飲んでもそこまでの効果がないかもしれないわね。

ともあれ、あたしたちは蓬莱の研究棟の入り口にある蓬莱教授の銅像を横目に建物の中に入っていった。

## ＴＳ病の存在意義

研究棟の中の1階には、それなりの数の学生がプロパガンダエリアを見ていた。
おそらく、学生だけではなく、外部の人も今日はここに多く訪れると思う。

「すげえよなあ、人間の人生２００年ってさ」
「しかもガンにもならなくなるんだろ？　それだけでもすげえのに……やっぱ蓬莱教授こそ佐和山の誇りだよな」
「ああ、俺たちが蓬莱教授を支えるんだ。この偉大な人のためにできることを考えねばな」
「反対者を、許してはならないな」

プロパガンダエリアの展示の前で、２人の男子学生が熱心な会話をしている。
このエリアは元々観光客向けで、蓬莱教授がこれまでいかに偉大な業績を成し遂げてきたかということをこれでもかと言うほど強調している。
面白いことに、このエリアは助手の功績も素直に書く。これは蓬莱教授の性分なのか、それとも「手柄を横取りしない人」という印象を与えるためにあえてそうしているのかは分からない。
ただ一つ、文化祭という非日常的な環境が、いつも以上にプロパガンダエリアを輝かせているのは確かだと思う。
「優子ちゃん……」
学生たちが熱心な信者になる様子を見て浩介くんが少しだけ後ろめたそうに言う。
「うん、これも必要なことよ。それに、蓬莱教授が偉大なのは事実じゃないの」
「ああ、そうだな」
瀬田助教が蓬莱教授に心酔しているのはよく知られているが、表向

きはそういうそぶりを見せない。
アメリカ人彫刻家による銅像の寄贈も、確かに熱心な行動だけどその彫刻家がが心酔する様子を見たことはなかった。
そういう意味で、あたしたちははじめて、蓬莱教授に宗教に近いような信望を抱く人を生で直接見たことになる。
あたしたちは、もう一度プロパガンダエリアを見直す。
そこにはＴＳ病のことについても触れられている。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？　どうしたの？」
浩介くんがさりげない口調で話しかける。
「ＴＳ病ってさ、何で存在するんだろうな？」
「え!?」
出てきた質問は、あまりにも突拍子のないものだった。
病気が存在する理由と言われても、よく分からない。
「そんなこと言われても……第一、病気の存在意義なんて……」
「俺には、どうもただの病気に思えねえんだ」
浩介くんから、意外な言葉が出る。
でも確かに、当たっていなくもない。
「性別が変わるってことは大変なことだとは思う。でもどうして、男に生まれた人間が、ある日突然女になる病気があるんだろうか？　しかもそれだけならいざ知らず、老化しなくなっちゃうなんてよ」
「うーん……考えたこともなかったわ」
あるものはある。としか言いようがない。
そもそもそんなことを言ったら、なぜこの病気が比較的若い男性だけで、中高年はならないのかとか、それ以上に何故有史以来１３００人しか発病事例がない珍しい病気に日本人が全患者の８割以上を占めているのか？
等々、疑問点はつきることがない。
「日本人に多いことからも、遺伝病の一種なのは確かだと思う。でも、それなら、子孫に発病事例が頻発すると思うんだ」
そう言えば、比良さんはひ孫のひ孫、あるいはその子まで知ってい

るらしいけど、子孫は誰一人発病していない。
　となると、いかに日本人に多いとはいえ、相当複雑なトリガーを引かないと、この病気は発病しないことになるわね。
「でも、比良さんの子孫は誰も発病していないわ」
「ああ、つまり、条件はとても複雑ということになるな」
　でしょうね。
「……やっぱり、ＴＳ病の存在意義を考えるのは、意味がないと思うわ」
「うーんそうなのかなあ……」
　浩介くんは、まだ納得がいってない様子で言う。
「なっちゃったものはなっちゃったもの。あるものはあるで仕方ないんじゃない？　それを考えるだけ無駄だと思うわ」
「いや、そうとも限らんぞ」
　背後から聞こえてきた声にあたしたちは振り向く。
　そう、それは蓬莱教授だったからだ。
「蓬莱教授！」
　ちなみに、他の学生も特にあたしたちを気にかけていると言うわけではないみたいね。
「病気がある理由は様々だ。もちろん遺伝子なり細菌なりが悪さをするというなら話は簡単だがね。しかしだ。ＴＳ病の存在意義の哲学的な意味を論じることで、特に浩介さんの所属する宣伝部にとっては思わぬ材料になることもあるんだ」
「あ、もしかして！」
　蓬莱教授が言いたいことが分かった。
　何のためにＴＳ病がいるのかという意味。
「ほう、思い付いた顔だな。優子さん、君の意見を言ってみてくれ」
「はい、例えばそう……あたしたちは、男と女の違いを思い知ることで性役割の重要性とフェミニズムの愚かさを学びます。恐らくはそれを、みんなに伝えたりするために、この病気があるんだと思います。不老なのは多分、この病気そのものがとても珍しいからです」
　あたしは、即席にしてはそれなりの回答を得られたと思う。

「ああ、いい答えだと思う。もちろん、恐らくはその意図で出来た病気ではなく、純粋なエラーだとは思うよ。ただ、一般的には遺伝子にエラーがあるのは、遺伝的多様性の維持によって、急激な環境変化による人類の絶滅を防ぐ意味もあったのだと言われているな」
　蓬莱教授が一般論を述べる。
「遺伝子は進化する。そのことを踏まえれば、途中でエラーも出るとは思う。とはいえ、不老遺伝子はどうだ？　そんなものは必要ないといわんばかりに強靭な遺伝子だ。もしかしたら、ＴＳ病というのは生命の究極を目指している途中なのかもしれないな」
「そ、そうなんですか？」
　あたしは、身体能力とっても弱いけど。
「ああ、もちろんこれは仮説だ。それも恐らくは間違っている。俺もあれこれ考えては見たことはあったが、結局君が最初に言ったように、『なっちゃったものはなっちゃったもの。あるものはあるで仕方ない』というのが正しいと思うよ」
　散々引っ張っておいて、結局スタート地点に戻る蓬莱教授に、あたしたちも動揺する。
「ああいや、結論に至る過程も重要さ。その間に、色々な新しい発見もあるからな」
「そ、そうよね」
　錬金術は不可能だけど、その過程で様々な発見がもたらされたと考えれば分かりやすいわね。
「ともあれ、だ。『あるものは使う』というのも、大事なことだぞ」
「「はい」」
　蓬莱教授にとってみれば、不老研究のためにも、「あるものは使う」べきなんだと思う。
　もちろん、丁重に扱うけどね。
「さ、俺は研究に戻るよ。引き続き文化祭を楽しんでくれ」
「蓬莱さん、こんな時まで研究ですか？」
　浩介くんが少しだけ嫌そうな顔で答える。
「ああいや、学部生と院生には普通に文化祭に参加してもらっている

よ。ただ俺は……どうも何故かこの『さわわ祭』は苦手なんだ」
「そうですか……」
まあ、蓬莱教授は学校の文化祭みたいな若いノリと勢いで盛り上がると言うタイプではないのかもしれないわね。
「だから、いつもこの日は気分転換の研究をしているんだ。ちなみに、最初にもらったノーベル賞も、最初は気分転換から生まれたもので、その後不老にも使えそうかなと言うことで期待したけど……単なる万能細胞だったんだよ」
「そ、そうだったんですね……」
何だかとんでもない話だわ。
そもそも「単なる万能細胞」ってのがまたとんでもないパワーワードだわ。
「ああいや、誤解してもらいたくないのは、あくまで最初のきっかけってだけで、数年くらいは不老完成の候補として真面目にそれに取り組んでいたんだよ。実際、今のように不老研究を薬一本に絞ったのは、『１２０歳の薬』が大分現実味を帯びてきてからだよ」
ちなみに、今は別の研究者が蓬莱教授の万能細胞に関する研究を行っている。
不老の薬が完成しても、事故をきっかけにした再生医療の需要は消えないので、どちらにしても重要な研究には間違いない。
蓬莱教授は軽視しているけど、これだってノーベル賞の中でもかなり偉大な方の発見なんだ。ただ「蓬莱の薬」が凄まじすぎるだけ。
「そ、そうですか」
「そういうことだ。じゃあ今度こそさようなら。あ、そうそう、うちの研究棟は、何も展示していないよ」
蓬莱教授がそう言い残し、階上へと去っていく。
「……行くか」
「うん」
プロパガンダエリアを見終わったあたしたちは、「蓬莱の研究棟」を出てある教室棟に入る。
ここにはそれなりのサークルが、展示品を出している。いわばメイ

ンと言っていい場所でもある。
「さあいらっしゃい！　佐和山大学漫画小説研究会だよ！」
早速目に飛び込んだのは、佐和山大学の中でも最大級の規模を誇る「漫画小説研究会」だった。
あたしたちは、躊躇なく中へと入っていく。
中は多くの同人誌が展示され、販売も行われていた。
「さあ、この同人誌は５００円、コミケと同じ価格だよ！」
「こちらの同人誌にある小説は、『小説家になろう』でも掲載しております。是非ご購入ください！　後、アカウント持ってる人は巻末のＵＲＬ踏んで５―５の評価下さい！」
部費に直結するため、男子部員たちが必死に販促活動をしている。
何だか別の声も聞こえたけど、気にしないでおこう。
「浩介くん、どれがいい？」
「うーん……」
１冊くらい買ってあげたいけど、さてどうしようかしら？
「なあ、これなんてどうだ？」
浩介くんが１冊の同人誌を指差す。
どうやら、有名作品の２次創作らしく、日常を書いた４コマ漫画という体裁になっている。
あたしはざっと読んでみる。絵は結構うまくて、なかなか素晴らしい出来だわ。
「うん、良さそうだわ」
「お、篠原夫妻じゃん」
向かい合わせに座っていたサークルの人が、あたしたちに声をかけてくる。
「あら、あたしたちを知ってるのね」
「知ってるも知らねえも、篠原夫妻と言ったら佐和山大学で知らない人はいない超有名人だぞ」
サークルの人に、「何を今更」と言う顔をされてしまう。
「あはは、やっぱりそうよね……」

まあ、この胸じゃ変装してもすぐにバレそうだし。
というか、この部屋全体の視線が、あたしの胸に凝縮されてるし。
「とりあえず、これ1冊」
「はーい、５００円です」
浩介くんが財布から５００円玉を出す。
「はいちょうどですね。ありがとうございます」
徐々に文化祭の人口密度も増え、この部屋も大分人が増えてきた。
あたしたちは、次の部屋を目指す。
さて、「漫画小説研究会」の隣にあったのが、「鉄道研究会」だった。
「鉄道ねえ……」
永原先生の影響で、あたしたちも鉄道に関しては並みの人より詳しくなってはいる。
だけど、そうは言っても専門に鉄道研究している人には叶わないはず。
「とりあえず、入ってみようぜ」
「うん」
あたしたちは、鉄道研究会の展示を期待しながら見ていく。
「お、模型のジオラマに会報誌かあ……」
中は小さな鉄道模型があって、やはりぐるりと一周している。
鉄道の車両は、比較的新しいのが多いわね。
ジオラマは自由に操作できる。列車を止めたり走らせたり、ある程度までなら加速も可能になっている。
「このボタンかな？」
じゅーーーーー！
「お、加速したわね」
浩介くんがボタンを操作すると、列車のひとつが駅から発車して、線路を進んでいく。
「で、これでブレーキ……とと」
浩介くんがブレーキボタンを押すと、列車がすぐに止まったため、駅のホームの大分手前で停車してしまう。
「ゆっくりゆっくり加速して……よしっ」

慎重に加速ボタンを押し、浩介くんは何とか模型を元の位置に戻すことに成功した。
「ふービックリしたわ」
「列車はあんな急には止まれないって」
「模型だからこそよね」
たしか永原先生によれば、在来線でも非常ブレーキで６００メートルなんだっけ？
新幹線の場合は、確かブレーキかけてから止まるまで数キロだったはず。
「できれば、本の方も見ていってください」
やはり、部費調達のためか会報誌への誘導もなされているみたいで、あたしたちが部屋の出口に向かおうとすると、サークルの人に声をかけられて、そちらの方へと誘導されていった。
「こちらがですね、コミケで出しました我が鉄道研究会の本です」
地元の、いつもあたしたちが使っている鉄道について書かれている本らしい。というか、またコミケって単語が出てきたわね？
今度調べてみよう。
「写真集ね」
中には、鉄道写真が多く納められていた。
「あれ？　ここって優子ちゃんの家の近く？」
「あーそうかも」
浩介くんの指摘で気付いたけど、この角度はあたしの実家近くの道路から撮影したもので、こっちの方にはあまり行ったことがなかったりする。
「お、俺たちの駅から撮影したのもあるな」
今では馴染み深くなったあたしたちの最寄駅のホームから撮った電車、どうやら珍しい編成らしい。
「これ珍しかったのか」
「確かにそんな感じだったけど……意識しないとやっぱり気にしないものなのね」
永原先生から、鉄道については色々教えてもらっていたけど、地元

でいつも使っている鉄道には、あたしたちは関心を向けていなかった。
灯台もと暗しとはこの事を言うのね。
「そうだよなあ……優子ちゃん、１冊買っていくか？」
「うん、さっきは浩介くんが払ったし、今度はあたしが払うわね」
「おう、ありがとう」
あたしは、スカートのポケットから財布を出し、１冊購入する。
ちなみに、鉄道研究会の人にも「篠原夫妻って鉄道が好きなんですか？」何て聞かれてしまった。
あたしは、「高校の時の担任の先生の影響で」と、お茶を濁しておいた。
「それって、永原先生だったり？」
鉄道研究会の人に簡単に当てられてしまう。
「ああうん、そうです」
「やっぱり！　あの鑑定番組で出てきた鉄道グッズ、凄かったですよ！」
小谷学園の永原先生のことは、もちろん佐和山大学でも広く知られているし、多分その気になれば、その鉄道好きの先生が永原先生ということはすぐにわかっちゃうわね。
そう言えば、永原先生、鑑定番組でも鉄道系の依頼品を出していたものね。
「しかしまあ、永原先生が鉄道マニア……いわゆる鉄子だったって意外だよなあ」
鉄道研究会の人がそんなことを言う。
「でも、最古参の鉄道マニアと言ってもいいわよね」
何の気なしにあたしが言う。
「ああ、ＳＬや特急全盛期にも生きてきたわけだもんなあ」
永原先生は、歴史と共に生きる人で、鉄道が出てきたのは永原先生の５００年以上の人生からすれば「比較的最近」に位置する。
それでも、鉄道は永原先生の価値観をも変えた。
恐らくは、あの幕末の日記に書かれていたペリーと欧米諸国に対す

る恨みも、鉄道を見ていくらかは緩和されたんだと思う。
「鉄道が永原先生を変えたのよね」
「ああ、そうらしいな。でも、この鉄道も変わっていくぜ」
「うん」
あたしたちは鉄道研究会を後にし、次なるサークルを目指す。
階段を上がり、上層階に行くと、そこは「クリエイトサークル」と呼ばれるサークルだった。
「へー、ゲーム作るんだ！」
いわゆる同人ゲームと呼ばれるゲームのサークルで、一次創作のゲームだけではなく、よく見かける人気のシリーズの二次創作ゲームもある。
「さ、やっていってやっていって」
戦車が出てくる対戦型のゲームとか、他にもシューティングゲームや音ゲーのようなものもあるみたいね。
「へー、結構本格的なの作ってるんだな」
「絵もうまいわね」
あたしたちには到底真似できそうにない代物ばかりね。
お試しプレイも出来るらしいので、浩介くんがちょっとだけやってみる。
「……あれ？」
浩介くんが苦虫を噛み潰したような表情をする。
それと言うのも、一定のラインまで進んだら、ボスが出てきて倒して終わり。のはずなのに「ゲームクリア」とはならずに同じ画面がひたすら続いている。
「あ、すみません、これ時間的な都合で１ステージしかできてないんです。このボタンを押してみてください」
サークルの人に左上のｅｓｃキーを押してもらい、タイトル画面に戻る。
まあ、そうそう簡単に完成はできないものね。
「って、もしかしてあなたたち、篠原夫妻ですか!?」
「ええそうよ」

またあたしたちについて声をかけられる。
「うわー、やっぱ優子さんは生で見るときれいだなあ……よかったよミスコンに出ないで」
「そりゃあミセスのあたしが出たらそれもうミスコンじゃないわよ」
サークルの人の話に、あたしが見も蓋もないことを言ってしまう。
ちなみに、あたしや永原先生、幸子さんなどの写真がネットに出てからと言うもの、ミスインターナショナルやミスユニバースの優勝者が誹謗中傷されることも多く、特にアメリカなどではあたしたちの写真と比べた画像が大量に出回っているらしい。
「おっとそうだったな。うちのサークルからも1人出るんだ。優子ちゃん、融通してくれるか？」
「うーん、ダメ」
あたしは即答する。
「え!?　どうして？」
「あたしは別の候補を推薦するってもう決めてあるわ」
「うー、もしかして桂子ちゃんだったり？」
やはり、このサークルの人も、誰が優勝するか心の中では分かっていたのね。
「うん、大当たりよ。桂子ちゃんはあたしにとって唯一の幼馴染みだもん」
「そ、そうか。すみません、変なこと話して」
サークルの人もばつが悪くなったのか、あたしに頭を下げてくれる。
「いえいえ。それよりも、他のゲームを見て回るわね」
「はい、ごゆっくり」
あたしと浩介くんは、他にも完成未完成を問わずにゲームを一通り楽しんだ。
ちなみに、一番優しいモードは子供向けなので、あたしでも十分に楽しむことが出来た。
「さて、そろそろ時間ね」
そう、ミスコンのための審査員での集合がある。

あたしは1年生の時から審査員長の大役を任されている。
「じゃあ俺、天文部に戻るわ」
「うん」
桂子ちゃんもミスコンに出るので、天文部の留守居役は浩介くんになる。
あたしは、あらかじめ決められた集合場所に、集合時間通りなんとか間に合って到着した。。
やっぱり、慣れない場所に行くと迷っちゃうわね。

# 審査員長になった優子

「こんにちはー」
「あ、審査員長。今日はよろしくお願いします。過去の優勝者として、お願いします」
「はい、よろしくお願いします」
男子学生さんがあたしに挨拶してくれる。
やはりあたしは例の「伝説のミスコン」の優勝者ということで、先輩後輩を越えた敬意を受けているみたいね。
まだ集合時間までにはもう少し時間があって、見るともう一人だけ審査員の姿が見えていない。
ガチャ……
「あ、私が最後でしたか！　遅れてすみません！」
「あー大丈夫よ。遅刻してるわけではないですから」
駆け込む音とともに、龍香ちゃんが、やや息を切らせ気味に入ってきた。もちろん、遅刻ではないので何の問題もない。
「そう言ってもらえると助かります！」
審査員やその他ミスコンの実行委員の選定はさわわ祭での実績の他にも、出身高校やその高校でのミスコンや学園祭での実績などが考慮される。
そして、佐和山大学の学生の中で、最大派閥が小谷学園ということになり、実際に以前見たような顔の先輩も何人かいる。
「へー、君が噂の篠原優子さんかあ。３年の時に乱暴な１年がいるって話に聞いてたけど……生で見ると写真よりかわいいんだな」
実行委員の１人があたしの顔を見て言う。あ、視線はやっぱりその後胸に生きました。
「えへへ、ありがとう。もしかしてあたしがここに入る前から？」
「ああ、小谷学園の後輩を通して、優子さんの話は噂になってたぜ」
やっぱり、小谷学園と佐和山大学の繋がりは強いわね。
この人、あたしが女の子になったときには卒業してたはずよね？
「あ、あはは……もしかして、永原先生の正体も？」

「ああ、2年前の時点で戦国生まれというのは一部で知られていたぜ。それにしても、ＴＳ病なんて珍しい病気が、同じ学校に2人いたんだよなあ……」
「うん」
　佐和山大学は小谷学園の派閥が最大勢力なので、伝統的に体育会系とは相性が悪く、あまり先輩後輩を意識する感じではない。
「おっと紹介が遅れたな。俺は和邇友蔵（わにともぞう）ってんだ」
「よろしくね。ちなみに、旦那さんいるから手を出したらボコボコにされるわよ」
「分かってるって」
　和邇先輩は少しだけ恐怖に染まった顔をする。
「あはは、大丈夫だよ。和邇の奴、蓬莱の研究棟に入るために勉強一筋なんだ」
　別の先輩があたしをフォローしてくれる。
「へー、そうなんですか？」
「ああ、そりゃあ蓬莱の研究棟は佐和山大学で一番倍率が高いからな。成績だけではなく、様々な能力を要求されるんだぜ。蓬莱の研究棟に入るために、わざわざ旧帝大を蹴る奴だっているんだ」
「そ、そうですか……」
　あたしは、ＡＯ入試の時とにたような罪悪感に教われる。
　何故なら、あたしたちは既に蓬莱の研究棟に内定しているからだ。
　それは、蓬莱教授の、文字通り崇高な研究目的のため。
　そうは言っても、やはりどこかで歪みは生まれる。あたしたちは成績が悪くても、蓬莱の研究棟に入れるし、大学院も修士までなら融通してくれると言う。
「どうしたんだ優子さん」
　和邇先輩があたしを少しだけ不審そうに見て言う。
「あー、ごめんなさい、ちょっとだけ考え事をしてて」
「？　まあいいや、さ、そろそろ始めようか」
　和邇先輩の掛け声と共に、会合が始まる。
　まず、各審査員が事前に提出した応援候補のすりあわせじゃらなん

だけど――
「ものの見事に全員桂子さんですか……」
龍香ちゃんは、「さすがに予想してなかったです」という表情で言う。
「まさか1人くらいは別の候補を支持してくれるとは思っていたんですが……」
さすがに、審査員の全員が同じ候補を支持してしまえば、ミスコンがあまりにも盛り上がらない。
とはいえ、客観的に見ても桂子ちゃん以外を支持するのは難しいし、必殺技の「中身」は荒れる元になるということでこのミスコンでは使わないお約束になっている。
「うーむ、やはり圧倒的な美人というのも困ったものですなあ……」
和邇先輩がそうつぶやく。
桂子ちゃんもかわいさが増していて、今のあたしはともかく女の子になったばかりのあたしには既に匹敵しているかもしれない。
「やはり、審査員長さんに今からでも出てもらうのはどうですか？」
「いやあそれは無理でしょう」
「ええ、やはりこの誓いを破る訳にはいきませんわ」
確かに、あたしなら「ミセス」ということを差し引けば、2年前永原先生を入れて3人でほぼ互角に争った歴史を鑑みれば桂子ちゃんといい勝負が出来るかもしれないけど、やはり浩介くんの手前それは出来ないわ。
「となると、どうしたものかのお……」
和邇先輩がかなり悩んでいる。
つまり、バランスをとるために誰かに嘘をつかせなきゃいけないわけだけど、桂子ちゃんは小谷学園の出身なのでまず同じ学校のそれも同じクラス出身のあたしと龍香ちゃんは除外される。
まず間違いなく大人の事情が露骨だし、圧力で無理やり言わされているという評判が立ってしまうだろう。
幸い、小谷学園出身のミスコン参加者は他にも居るけど、でもあたしと龍香ちゃんが嘘を付くのは厳しい。

「……よし、俺がやろう」
熟考した末に、言ってきたのは、和邇先輩だった。
和邇先輩は副審査委員長ということになっているので、立場上桂子ちゃん以外の候補の支持が難しい審査員長のあたしに代わって別候補の支持を申し出てくれた。
「それでも、1人だけの支持ですからねえ、それも本音では俺も桂子ちゃんの支持だから……まあ、うまく演技してみるよ」
和邇先輩がそのように言い、本番の流れを確認したらいよいよ控室に移動する。
ミスコンの参加者さんたちと改めて挨拶する。
桂子ちゃんも紹介されていて、明らかに他の参加者よりもかわいくて美人なのが分かる。ちなみに、和邇先輩は一番体格の小さい女の子を支持することにした。
その候補は永原先生と同じくらいの背丈で服装も明らかに子供服を着ていた。
それそのものは彼女の戦略だとは思うんだけど、要するに桂子ちゃん以外の候補を支持するとしたら、もう「重度のロリコン」ということにするしかない。
和邇先輩は、あえて汚れ役を買って出てくれたのだ。
時間が近くなり、あたしたちは審査員席に移動する。
あたしの座る場所の前には「審査員長　篠原優子」と書かれている。
「それでは、２０１９年度小谷学園ミスコンテストを開始いたします」
マイクの前に立った司会者さんの宣言とともに、ホールの幕が開けられる。
ワー!!!　パチパチパチ!!!
ホールの観客席はかなり埋まっていて、小谷学園と同じく、ミスコンは注目イベントなのには変わりはないみたいね。
「まずは、審査員さんの紹介です。審査員長は篠原優子さんです」
「はい」
あたしは席を立ち上がって頭を下げて挨拶をする。

観客たちが一斉にあたしに注目する。
「篠原優子さんは、2年前の小谷学園ミスコンテスト優勝者で、現在はご結婚なされていますので、このミスコンには参加できません。よって今回は審査員長としての参加となります」
パチパチパチパチ!!!
あたしに関しては、やはり歓声は大きい。
大学でも既に有名人で、いきなり審査員長に抜擢されても特に悪い噂はかけられなかった。
「続いて、副審査委員長の和邇友蔵さんです」
「よろしくお願いいたします」
続いて和邇先輩の紹介が入る。
こちらの方の反応はあまり良くない上に、あたしみたいに詳細な紹介をしない。
まあ、あたしの後では仕方ないわね。

「さあ、それではお待ちかね、今回の候補者に入場してもらいましょう!」
他の審査員たちの紹介も全員終わり、いよいよ今回のミスコンの参加者が入場してくる。
ちなみに、やはり優勝候補と目されている桂子ちゃんがセンターに来るようになっている。
「それでは各候補者の紹介です。ではまずは皆様から見まして一番右から――」
各候補の紹介が始まる。そして、1人1人がマイクを渡され、今回のミスコンの抱負を語る。
一生懸命にアピールしながら「私に投票してください」と言っているけど、観客の関心は桂子ちゃんに集中しているのか、あまり反応が良くない。
ちなみに、私服審査を兼ねていて、この後水着審査と最終発表に入ることになっている。
観客の視線はここから見ても分かるくらいに桂子ちゃんに集中し

ている。
桂子ちゃんの私服は他の参加者と比べると一番露出度が低いのに、少女性の強調という意味では一番だった。
「次は木ノ本桂子さんです」
ワーーー!!! ワーーー!!!
桂子ちゃんの番になると観客のボルテージもＭＡＸになる。
佐和山大学の方が学生数が多いけど、あたしが結婚してミセスになり、永原先生も小谷学園の先生なので、事実上ライバルが消えてしまった。
去年の小谷学園でのミスコンと同じよね。
「1年の木ノ本桂子です。昨年は小谷学園のミスコンに優勝しまして、ミス小谷２０１８となりました。ここ佐和山大学の方でもミス佐和山となって２連覇２冠を目指して頑張っていきたいと想いますので、応援よろしくお願いいたします」
ワーーー!!! ワーーー!!! パチパチパチパチ!!!
桂子ちゃんが一礼すると何とスタンディングオベーションまで起きている。
ふと他の候補者を見る。既に戦意を喪失している人も多い。

「それでは、私服審査に参りますが、その前に審査員さんの第一印象をお聞かせ願えないでしょうか？　まず河瀬龍香さんお願いします」
司会者さんがそう言ってまずは龍香ちゃんにマイクを渡す。
あたしは審査員長なので一番最後になる。
「私はですね、もちろん木ノ本桂子さんです。桂子さんは審査員長の優子さんと共に去年一昨年と高校でもクラスメイトだったんですが、クラスの女子でもリーダー格で、本当に美人で皆さんの憧れの的でした。美人ほど性格が悪いというのが、いかに間違っているか分かる。そんな女性です」
龍香ちゃんも、それなりの美人なんだけど、あたしや桂子ちゃんを見て悪感情を抱かなかったのは、あたしや桂子ちゃんよりも先に彼氏を手に入れたという事実や、彼女自身の性格もあると思う。

「では次に――」
「俺も木ノ本桂子ちゃんが一番だと思いますね。まず服のセンスも素晴らしいです――」
審査員たちも、次々桂子ちゃんを賞賛する。
会場も、当然だなという雰囲気で盛り下がり始めている。
「えーでは、つぎは副審査委員長の和邇友蔵さんよろしくお願いいたします」
そしてついに、和邇先輩の番が回ってくる。
「えっとですね、俺は空気が読めない人間なので……ここは能登川麻美（のとがわまみ）さんを選んでいきたいと思います！」
ワハハハハ!!!
和邇先輩が別の候補を推薦した途端、会場が一気に笑い声に包まれる。
「能登川さんは、自分の需要をよく分かっていらっしゃる。とにかくこの未成熟さがなんとも素晴らしいと言いますか。普通こういう人はこういうのをコンプレックスに思って無理矢理大人っぽくしたりして失敗するんですが、能登川さんは強みをうまく活かしているといいますか、特に俺はこういう人がとても好みなんですよ！」
会場の男子は「よく言った！」と言う顔をしていて、逆に女子は全力で引いた目をしている。
和邇先輩、無茶しちゃったわね……本当、いい人だったわ。
ちなみに、当の能登川さんは「そうでしょそうでしょ!?」と言う感じで嬉しそうな表情をしている。
「えー、ありがとうございます。では最後に、審査員長の篠原優子さんお願いします」
「はい」
そして最後に、あたしが司会者さんからマイクを受け取る。
「あたしは、やはり木ノ本桂子ちゃんを推したいです。２年前のミスコンでも、あたしとも互角に戦いましたし、去年のミスコンでは圧倒的な成績で優勝しました。桂子ちゃんは謙虚な所は謙虚に、自信のある所は素直に自信を持つ女の子です」

みんな、あたしの話を真剣に聞いてくれている。
「あたしは2年前にＴＳ病になって女の子になりましたが、真っ先にあたしを支えてくれて、女の子として生きていく上での大切なことを多く学びました。今桂子ちゃんが着ているのは、小谷学園でのミスコンの時の私服と同じ服ですが、私にはこのような優雅で少女らしい服の真似はできません……以上です」
結果的にあたしのスピーチが一番長くなってしまった。
「ありがとうございます」
佐和山大学には、一昨年のミスコンのことを知っている人も多い。小谷学園出身でなくても、「伝説」とまで言われているし、あたし自身の知名度もあるからと言っていい。
あたしが桂子ちゃんを応援するのは、立場上当然だとは思う人も多いだろう。
何故ならこのミスコンで桂子ちゃんが2連覇すれば殊更に桂子ちゃんを負かしたあたしの評価も上がるものね。
「それでは、これにて私服審査を終わりたいと思います。こちらのホールにて投票を受け付けておりますので、奮ってご参加ください」
ともあれ、司会者さんの締めの言葉と共に、幕が降ろされて最初のミスコン審査は無事に終了した。
……和邇先輩を除いてだけど。

「ふー、終わった終わったー！」
全てが終わり、あたしたちは控室で反省会をする。
「和邇先輩、お疲れ様でした！」
「お疲れ様でした！」
審査員全員が同じ候補を推薦するのはさすがにまずいということで、犠牲となった和邇先輩を審査員のみんながねぎらっている。
「なに、いいってことよ。それにそう言う男だっていっぱいいるだろうし。むしろ男子からは『よくぞ言った』って感じだったぜ」
「あはは……」
和邇先輩も、満更でもないのがちょっと気になるわね。

もしかして、女性から蔑む目で見られるのに快感を感じる人種なのかもしれないわね。
でも、確かにああいうのが好きな人はいつも虐げられてたものね。そう言う人達からは、英雄視されるからいいのかな？

「浩介くん、待った？」
ホールの出口で立っていた浩介くんにあたしが声をかける。
天文部で留守居役をしていた浩介くんだけど、今は多分達也さんが持ち場を守っているはず。
高校生にそんなことをやらせていいのかと言うそう言う細かい所は気にしないことにする。
一応桂子ちゃんの彼氏ってことになってるし。
「ああいや、待ったは待ったけど別に大した時間じゃないよ」
「そう？　それは良かったわ」
確かに、「待ってない」じゃ嘘になっちゃうものね。
浩介くんは本当にこういうところがうまいわ。
「よし、じゃあさっきの続きに行こうか」
「うん」
さっきはゲーム制作のサークルを見ていたけど、次はその隣から再開することになる。
さて、何が出てくるかしら？

## 蓬莱教授の演説

「野球研究会へようこそ」
あたしたちはミスコン審査の仕事で中断していたサークル巡りを再開した。
ゲーム制作サークルの隣りにあったのは、「野球研究会」だった。
このサークルの目的は、その名の通り「野球を研究する」ということになっているけど、今回文化祭に出してきたのは「インターネットにおける野球の用語」ということになっている。
「いろいろな用語があるんだな」
「これ、こういう意味だったのね」
他にも、インターネットで使われる用語としての由来についても説明していて、どうやらインターネットにおいての用語というのは、ゲイビデオ由来のものが多いらしい。でも何でそれを野球研究会がしているかというと、「野球とゲイビデオはインターネットでは親和性が高い」らしい。
というか、いくつか流行ってた言葉の由来を見るのって結構きついわね。
「それにしても、何でゲイビデオと野球って親和性高いんだ？」
「よくぞ言ってくれました！」
「わっ！」
浩介くんのふとしたつぶやきに対して、いきなりサークルの人があたしたちに話しかけてくる。
どうやら「待ってました」と言う感じだったらしい。あたしたちの心臓には悪いけど。
「実はですね、この話は２００２年まで遡るんですよ」
「え!?　そんなに昔のこと？　１７年前ですよね!?」
あたしたちも、まだ２歳の頃の話だ。この問題、そんなに昔からあったのね。
「はい、なので結構根深い問題なんですよ。実はその年、さる大学で大活躍したピッチャーが居たんです」

サークルの人はやや深刻そうに話している。
どうやらデリケートな問題らしい。
「もしかしてその人が？」
「ええ、将来を渇望されていたんですけれども、プロ入りの直前になって『ゲイビデオに出演している』と言う噂が流れたらしいんですよ」
あちゃー。
「でも、そんなスキャンダルがどうして今も鎮火しないんですか？」
正直に言うと、不思議でさえある。
インターネットの炎上なんて、１週間で鎮火するのが大半なのに。
「まあ、多く用語として残っているように、将来有望な野球選手のスキャンダルと言うだけじゃなくて、ゲイビデオそのものの独特の『癖』というものがウケたんですよ。特に同じビデオの別の章に出ていたとある男優は……完全にとばっちりですけど、とにかくインターネットでネタにされ続けて『一生ネットの晒し者』何て言われるようになっちゃったんです」
「うわー」
「怖いわねえ……」
サークルの人によれば、結局その野球選手は渡米を余儀なくされ、後年になってようやく日本球界に帰ってくることが出来たという。
ちなみに、「当時はお金が必要でした」というのが当人の釈明ということになっているが、ゲイビデオの出演料とドラフトの指名回避の損失を鑑みれば、凄まじい大損だったことは確かだと言えよう。
「それ以降、インターネットでは『ゲイビデオを緩く楽しむこと』そのものが文化になっちゃいました」
「なるほどねえ」
他にも、ここでは最近の野球用語やインターネットでの俗語化したものなど、様々な展示をしてくれていた。
例えば、圧倒的な大差を表す「３３―４」というのも、とあるシーズンの日本シリーズにおけるプロ野球の４試合の結果ということになっている。しかもそのうちの一試合が「濃霧コールド」というのも、ネタに拍車をかけているらしい。

こちらも元ネタは１４年も前からのもので、比較的これらのネタは息が長い傾向にあるという。
それにしても、野球をするというわけではなく、野球を研究するというのもまた、奥が深いのね。
「この世界、中々奥が深いですよ」
野球研究会の人も、あたしたちが篠原夫妻と知ってか知らずか、目を輝かせて熱心になっている。
「うん、そうみたいね」
ともあれ、ここも一通り見終わったので、あたしたちは次へと進む。
次にあったのは囲碁将棋部で、こちらはサークルの人同士の対局や、参加者同士の対局がある。
「うーん、ここはどうする？」
「あー、パスでいいわね」
あたしたちはちらりと見ただけでここは素通りすることにした。
その後も、いくつかサークルの展示を回り、建物２つ分を回った所で、ちょうどお昼をかなり過ぎた時間となった。
今の時間なら、そこまで混んでいないと思われる。
「ふー、何を食べようか？」
食堂は、文化祭でもいつもどおりの営業だった。
「浩介くんは何にするの？」
「うーん、ラーメンにしようか」
「じゃああたしは牛丼で」
値段も、メニューもいつもと同じ。
外はお祭り騒ぎだけど、ここだけはいつもと同じ空気が流れている。
こういう場所も一箇所は必要なのかもしれないわね。
でも、お客さんの状態とか外の雰囲気の完全な排除は難しいのか、やっぱり何となくの雰囲気がいつもと違うわね。
「はいおまたせ、ラーメンに牛丼だよ」
「はい」
「ありがとうございます」

食堂のおばちゃんからトレイを受け取り、カウンターで隣り合わせになって食べる。
ちなみにこれを食べ終わったら、次に浩介くんが天文部に戻る算段になっていて、あたしは桂子ちゃんとミスコンの時間まで回ることになっている。
ミスコンが終わったら、次のミスコンまではあたしが天文部の持ち場に戻ることになっている。
「このサークルの本、読んだら聞かせてくれるかな？」
あたしが漫画小説のサークルで買った本を出して言う。
「ああいや、次に留守番する時にでも読めばいいんじゃないかな？」
とか何とか言っておきなら、浩介くんはさり気なくあたしから本を受け取った。
「分かったわ」
とりあえず、今は食事に集中した方がいいわね。

「「ごちそうさまでした」」
あたしは浩介くんよりも食べるのが遅いけど浩介くんが待ってくれた。
幸い今日は屋台がたくさんあるとあって、お昼時でも食堂は空いていた。
あたしたちは特に何もなくトレイを返却ＢＯＸに返すと、皿洗いを担当していた食堂のおばさんに「ありがとうございます」と言われた。
「よし」
「じゃあ浩介くん、またね」
「おうっ」
あたしは浩介くんと別れ、桂子ちゃんと合流することになった。
桂子ちゃんとは特に集合場所を決めていないので、メールを打つ約束になっている。
題名：集合場所
本文：どこにする？　今食堂の前にいるわ
よし、これでいいわね。送信っと。

あたしは、桂子ちゃんが近くにいてメールをせずにそのまま声をかけてくる可能性を考慮して、その場を動かずに返信を待つ。
「ふう……」
ブー！　ブー！　ブー！
メールを送信してから1分もしないうちに、桂子ちゃんから返信が来る。
題名：Ｒｅ：集合場所
本文：うん、すぐ近くにいるからその場で待ってて
近くに居るということなので、あたしはその場で立ち、壁に寄り掛かる形で待つ。
あら？　ここ、いいかどっ子になってるわね。
えーっと、ここをこうやって……おっ！
肩の奥から、こりっという音が聞こえ、あたしの肩がマッサージされる。
「うーん、気持ちいいわ」
コリコリ言う感覚が楽しくて、あたしは辞められなくなる。
とにかく女の子になってから肩こりひどくて、こういうマッサージは本当に大事だわ。やっぱり一時的にでもほぐれてくれるのは嬉しいわ。

「優子ちゃん、優子ちゃんどうしたの？」
「ふえっ!?　あ、桂子ちゃん」
突然桂子ちゃんの声がして、あたしが慌てて振り返ると、桂子ちゃんが心配そうな目であたしを見つめてくれていた。
どうやら、マッサージに夢中になっていて桂子ちゃんが近付いているのに気づかなかったみたいね。
「もう、優子ちゃんまた肩が凝ってるの？」
「うん、そうなのよ。もうこの肩こりしつこくて」
もはやあたしの肩こりはいつものこととは言え、さすがにさっきのは呆れられてしまっているみたいね。
「もー、まあ私だって肩はこるわよ。優子ちゃんには遠く及ばないけ

ど、それでもそれなりに大きいって自負してるもの」
そういえば、桂子ちゃんもバスト９０のＦカップを目指しているんだっけ？
あたしは普段自分のサイズとかＴＳ病患者たちとの交流もあるから感覚が麻痺しがちだけど、世間一般では９０のＦカップというのはかなり大きいのよね。
それを考えると、あたしのサイズというのは、文字通り規格外と言うにふさわしいといえるわね。
まあ、浩介くんはあたしの胸が大好きだけど。それも何か「あたしの胸が浩介くんをおっぱい星人にさせちゃった」という一面は否定出来ないのよね。
「あはは、桂子ちゃん、サークルの方は回っちゃった感じ？」
「うん、優子ちゃんも？　あっちの方はまだ行ってないのよ」
どうやら、あたしも桂子ちゃんも回った場所はあんまり変わらないらしい。
「じゃあ広場に行ってみようよ」
「うん」
広場では、これから誰かの講演が行われることになっていて、文化祭ではあるが、比較的真面目な話をするという。
「講演者は誰なんだろう？」
あたしが疑問を述べる。
「うーん、とりあえず行ってみようよ」
「そうね、行けば分かるわね」
あたしたちは、広場へと歩をすすめる。
広場は既にかなりの人数がガヤガヤしていた。あたしたちは後ろの方を陣取る。
壇上には２つの棚があった。つまり２人がいるってことかな？
「一体誰が何を講演するんだろう？」
「真面目な演説だって言うんだろ？」
「ああ、そうらしいな」

既に、様々な人が噂をしていた。
あたしも桂子ちゃんと、同じような話をして過ごす。
数分後、よく聞き慣れた声で「それでは、講演を始める」という言葉が聞こえてきた。すると、ガヤガヤの声も徐々に収まってきた。
そして声の主、蓬莱教授が壇上に立つ。
その後ろに居たのが、永原先生だった。
「え!?　ねえ、桂子ちゃん」
「うん、永原先生と蓬莱教授だよね？」
あたしたちは心中穏やかではない。永原先生と蓬莱教授が一体何を講演するんだろう？
「学生の皆さん、今日はよく来てくれた。今日は俺とこちらに立っている永原先生についてのことを話そう」
「皆さん、私のことはもう知っている人は多いと思いますが、近くの小谷学園で古典の教師をしています永原マキノといいます」
その後、永原先生の簡単な自己紹介とともに、２人の演説が開始された。
永原先生が日本性転換症候群協会の会長を兼任しているということはよく知られているが、その協会に関する具体的な活動について紹介している。
確かに、協会については情報封鎖も長く、あまり知られていなかった。
この手のことは広報部長のあたしも知っていることがほとんどだけど、今回はあたしを通していないので、おそらく今日のことは永原先生の独断で動いたものだと思う。
まあいいわ。せっかくだし聞いていこうかしら？
「俺は不老研究を達成するために、協会の協力はなんとしてでも必要不可欠だ。そこで、みんなにお願いしたいことがある」
蓬莱教授がそう言うと、周囲もざわつき始める。
この大学は、あたしたちが思った以上に蓬莱教授の力が強い。
それは教授会と言うだけではなく、学生たちにとってもで、例のプ

ロパガンダエリアは、その大きな役目を果たしている。
その蓬莱教授が、学生に向けてお願いをするというのは、ただならぬことだということが分かる。
「俺の研究を支えるとともに、日本性転換症候群協会についても支えてもらいたい。不老研究を達成するためには、是非とも学校単位で協力していかなければならない。元々この大学は小谷学園出身のものが多いが、今後は指定校として更に枠を広げようと思っている」
どうやら、協会と蓬莱教授との結びつきを、更に強めることを表明したらしい。
「佐和山大学の学生の皆さん、インターネットで蓬莱先生はもちろん、私や協会、ＴＳ病の患者たちへの誹謗中傷を見つけたら蓬莱教授の宣伝部までご報告をお願いします」
実際には、これらの誹謗中傷は、現在はもう既に沈静化している。
しかし、蓬莱教授たちによれば地下に潜る時期が一番危ないのだという。それを見越しての、先制攻撃というわけね。
「さて、君たちにどうしても言っておきたいことがある。それは、俺の研究は決して不死の研究ではないということ。そしてもう一つ、不老というのは決してディストピアではないということだ」
周囲が更にざわついた反応をする。
不老社会はディストピアではなく、不老の人間は悲惨ではないというのは、去年の夏にＡＯ入試を受けに（といっても、合格はずっと前から決まっていたことだけど）ここに来た時に蓬莱教授から教わったことだった。
「まず、創作における不老不死と、俺が今研究している不老研究との違いだが、これは本当に理解しておかないと、後々面倒なことになるから心しておいてくれ」
そして、蓬莱教授はあの時にあたしと浩介くんに話してくれた演説と同じ内容のことを話す。
創作物における不老不死を悲惨に書いていると言っても、蓬莱教授が目指す不老とは根本概念から異なること、不老というのは悲惨ではないのは、この永原先生の存在がそれを証明していると言った。

蓬莱教授の配慮もあってか、永原先生の初恋の事実は暴露されなかったが、永原先生の人生観における矛盾を鋭く指摘する場面では、永原先生は身構えつつも動揺した表情を崩せなかった。
「やっぱり、蓬莱教授ってすごい人よね」
「うん、あたしもそう思うわ」
蓬莱教授の演説中、桂子ちゃんのそんな言葉があたしの耳に残り続けていた。

「蓬莱教授、どうしてこんな演説を？」
「おう、優子さんに木ノ本さんか」
「先生、久しぶりです」
「あら、木ノ本さん。奇遇ね」
演説が終わった後、あたしたちは蓬莱教授のもとに駆け寄る。
そうすると、永原先生と桂子ちゃんが顔を合わせることになった。
卒業生のＳＮＳではちょくちょく交流があるけど、こうして２人が直接顔を合わせたのはもしかしたら卒業式の時以来だったかもしれないわね。
「あー、挨拶はその辺にしてさっきの質問の答えだが……単純に言えば、佐和山大学での学生の団結心を強めるためだ。そして、永原先生を呼んだのも、小谷学園との結びつけを今まで以上に強めるためだ」
「実は、小谷学園の文化祭でも蓬莱先生を招くことになったのよ。そうね、広報部長のあなたに話さずに行動したことはいくら会長とはいえ軽率だったかしら？」
「ああいや、それはいいんです。でもどうして？」
永原先生が申し訳無さそうな表情をしたので、あたしが慌てて取り繕う。
「あーそれはだな、説明すると長くなるが――」
蓬莱教授があたしたちに丁寧に話してくれる。
永原先生と蓬莱教授、どちらもその学校の中では名目上の校長や学長ではないが、永原先生はともかく蓬莱教授は佐和山大学では事実上の最高権力者になっている。

そして永原先生も、本人は遠慮しているが他の先生達は年長者、それも５０１歳という年齢に加え明治からの教師の実績もある人なので、永原先生の意志とは関係なく、職員会議でも永原先生の意見にどうしても流されやすくなっているらしい。
そこで、この状況を利用し、蓬莱教授の不老研究に対する今後予想されるネガティブキャンペーンに備えるということで、まずは下地の基礎を固めるという意味で、今回の演説を思いついたという。
ちなみに、演説時間帯以外は、研究室で研究をするのはいつも通りらしい。
「協会に対する攻撃は今後はしばらくは止むだろう。だが俺の不老研究についてはまた別だ。そのためにも、俺の考えと情報を小谷学園と佐和山大学に浸透させねばならん。この文化祭もそれが大事なんだ。それが終われば、今度は支持者向けに、そして一般向けに出していくんだ」
「ええ、つまり今日のこれは、地盤固めよ」
「そうですか、でも、蓬莱教授の話、すごかったわ。目からウロコよ」
桂子ちゃんは、かなり感心している。
あたしにとっては真新しさのない話ではあるけど、それでも改めて聞けたのは良かった。
演説を聞いていた学生たちも、概ね満足そうな表情を浮かべていた。
偏差値がそこまで高くないこの佐和山大学にとって、蓬莱教授の存在は、大きな心の支えになっているんだと、改めて実感させられた。
「それじゃあ蓬莱先生、私はまた次の演説まで待機してますね」
「ああ、また頼む。じゃあ、俺達は研究棟に戻るよ。君たちは文化祭を楽しんでくれたまえ」
「はい」
言われるがままに、あたしと桂子ちゃんは、蓬莱教授と永原先生の後ろ姿を見送っていった。

# 無縁の演劇

「桂子ちゃん、次にどこに行こうかしら？」
蓬莱教授たちの演説が終わり、あたしは再び目標喪失になったので桂子ちゃんと次の目標を相談することにした。
「うーん、この棟の地下で演劇サークルの実演をやっているらしいわ」
桂子ちゃんが指を差す先は講義棟の地下に大人数で出来るホールが有る所。
ここの地下は、必修科目などいわば多くの学生が履修する講義が主に行われていて、元々人気の高い蓬莱教授の講義はほぼ全てここで行われていた。
「じゃあ、そこに行ってみる？」
「うん」
あたしは桂子ちゃん情報で、演劇サークルが借りているホールに向かう。
チラシと広告によれば、オリジナルの劇をやるらしい。
「どんなお芝居なのか楽しみだわ」
「噂によれば悪くはないみたいよ」
桂子ちゃんがスマホを見ながらそんなことを言っていた。本当、今はこうやって文化祭の情報もリアルタイムで分かるのよね。
大学のサークルは、高校までとは違い、それなりにクオリティの高い人が集まっているらしく、一方でサークルの多様化にもつながっているらしい。
ともあれ、今回の演劇の内容は、「本当はもっと早く死ぬはずだったのに死神の手違いで生きていたために、一週間後に死ぬと言われる主人公をの最後の1週間を偉いた物語」らしい。
「ある日突然一週間後に死ぬと言われたらあなたはどうしますかっか、優子ちゃんはどうおもう？」
「あたしはそんな与太話信じないわよ。第一そんな話、ＴＳ病にふさわしくないもの」
桂子ちゃんの話にあたしは軽口のように答える。

「あはは、私もそうかも。この薬じゃ、若い内に命にかかわる病気にはならないもの」
蓬莱の薬は強力な遺伝子を身体に刻み込む薬だからね。そう、浩介くんだけでなく、桂子ちゃんも蓬莱教授の実験に協力する代わりにこの薬を飲んでいて、寿命３００年となっている。もちろん、将来的にはもっと伸びるとは思うけどね。
それにしても死神ねえ……演劇だからこそ出来る話よね。
まあ、どっちにしても蓬莱教授は絶対に信じない類のものよね。
「皆さん、大変長らくお待たせいたしました。ただいまより、佐和山大学演劇サークルによる演劇、『１週間の死神』を上映いたします」
アナウンスとともに、ざわつきがさっと収まる。
パンフレットによれば、死神たちは死ぬ寸前の人間の処理を担当したりしているらしい。
よく分からないわね。
ともあれ、実際に見てみれば分かることよね。

幕が上がる。
ピッ……ピッ……ピッ……ピーー!!!
そして心電図らしき音が聞こえる。
「ご臨終です……」
どうやら、病室の一場面みたいね。
そして、おそらく人が死んでしまったんだろう。多分、手違いの主人公のことかな？
するとライトスポットが変わり、女の子が立っている。
「よし、後はこの魂を死者ファイルに入れて……あれ!?　しまったー！　ファイルが違う！」
かなり慌てふためいた演技が終わると、再び心電図の音が動き出し、白衣の役者たちが「奇跡だ、奇跡が起きたぞ！」と叫んでいる。
つまり、魂をファイルに入れ忘れると手違いで死ぬ予定が死ななくなったというわけね。
黒子たちがベッドや心電図を急いで片付けているのが見える。

そして、死ぬはずだった人は大学生になったというわけね。
平凡な大学生として佐和山大学に通っていた主人公だったが、ある日突然死神に会ってしまう。これが本編の始まりというわけね。
「１０年前、あなたは小児がんになりましたね？」
「ええ、でも奇跡的に治ったって」
なるほど、さっきのあれは小児がんだったのね。
ますますあたしには縁のない話だわ。
「でもね、それは死神の私の手違いでそうなっちゃったのよ。だから本来あなたは１０年前に死んでなきゃいけなかったのよ」
「そ、それで何だって言うんだ？　まさかいきなり俺を殺すつもりか!?」
「うーんとね、死神界にも法律があって、こういうミスがあった時には猶予期間を設けるのよ。私もミスの責任を取って１週間居るわね」
「１週間？」
なるほど、読めてきたわ。
「そういうこと、あなたはこれから、１週間後に死にまーす！」
死神役の女の子がおちゃらけた感じの仕草混じりに言う。全くシリアスさがないわね。
主人公の男の子もなんかポカーンとした表情で見つめている。
「あの、警察に連絡していいですか？」
「待ってくださいよ！」
まあ、普通はいきなりこんなことをあんな態度で言われたら変なイタズラだと思うわよね。
「悪戯などではないぞ！」
すると、突然メガネを掛けたスーツ姿の男性が現れた。
「あ、部長！」
呼ばれ方からして、死神役の女の子のいわば上司ということね。
「これは運命だ。逆らうことは出来ない、これからの１週間、悔いなく過ごせよ」
「え、でも……」
「大丈夫です、私が付いてますから！」

そうは言っても、やはりいきなりそんなことを言われても事態は飲み込めない。
やがて主人公は、半信半疑になりつつも、死神の女の子に対して自分の過去のことや思い出を語っていくことになる。
死神役の女の子は、いわばヒロインのポジションで、主人公に想いを寄せ始めてしまったわけね。
だけど、1週間後には主人公を殺さないといけない。その狭間で揺れる。まあベタベタな話よね。
ちなみに、思い出のアルバムを死神に見せた時、死神は「色が分からない」と言っていた。
つまり、死神たちは見るものが全てモノクロに見えるらしい。
理由は、特に語られていないわね。
さて、そんなこんなで1週間の過ごし方は、どうも急なことで殆どいつもと同じ生活をしてしまったらしい。
ただ、家の人に「独り言が多い」と怪しまれていたみたいだけど。結局家族や友人には言えずじまいだった。まあ、当然よね。
さて、そんなこんなで最後の日になる。というか、途中の日は殆ど省略されている。
死神役の女の子は、殺すことに躊躇するようになっていて、それに対して上司役の人は壊れたレコードみたいに「これは運命なんだ！」「仕事だ」「逆らえない」と連呼している。
あたしは、この劇の中でふと永原先生のことを思い出す。
1週間後に死ぬのが運命なら、５００年以上生きるのも運命なのかしらね？
あたしたちにとって、余命というのは受け入れ難い概念ではある。
もちろん、ＴＳ病になったばかりの患者ならともかく、あたしのようにＴＳ病がすっかり染み付いた患者にとって、1週間後はもちろん、1年後、１０年後、いや１００年後に死ぬという余命宣告だって受け入れられないものだと思う。
最終的に「寝てる間に俺は死ぬんだな」と言うのが最後の言葉になり、上司の発破もあって死神の女の子が魂を奪ってファイルに入れて

おしまい。という流れになった。
おそらく、「限られた命の中で何をするか？」というのがこの舞台のテーマになって入るんだろうけど、他の観客はともかくあたしにはどうも非現実感が強すぎていまいち感情移入できなかった。
まあ、普通老いて死ぬ方が現実的なはずなんだけど……大分毒されているわねあたし。
ともあれ、演劇は２０分程度の短いもので、手軽に見られるのは良かった。
「桂子ちゃんどうだった？」
「うーん、『蓬莱の薬』を飲む前だったら、もう少し感情移入できたんだけどなあ……」
桂子ちゃんも、「いまいちしっくり来ない」というのが正直なところみたいで、浮かない顔をしている。
他の人には文化祭の演技としては好評みたいだけど、あたしと桂子ちゃんにはイマイチ感情移入出来なかったのは、あたしたちが特殊すぎるせいかもしれないわね。
「うん、あたしも。１週間どころか１００年後に死ぬと言われても、質の悪い冗談たと思うわ」
「あはは、優子ちゃんらしいわね。でも、色がわからないという設定必要だったのかしら？」
桂子ちゃんが話題を変えてくる。
「うーん、あたしはいらないと思う」
まず間違いなく、なくても話は通じると思うし。
多分製作途中に色々設定を盛っている間に削り忘れてああなったんだと思う。
「あたしも、まあとにかく、次に行きましょう」
「うん、どこを回ろうかしら？」
桂子ちゃんといる場所は、学校の中でも比較的端っこの方なので、もう一度開けた広場の方に戻ってみる。
そこでは、次の蓬莱教授による演説の時間が書かれていた。
そして、桂子ちゃんと色々なスポットを見て回った後に最後にやっ

てきたのは屋台と模擬店、こちらは文化祭実行委員の人が直々に行っているもので、あたしたちは軽食としてアイスクリームを頼むことにした。
「ふー、冷たいわね」
「うん、この季節に食べるアイスもまた美味しいわ」
季節はもう秋になっていて、お世辞にもアイスクリームという季節ではなくなってしまっている。
本来、冷たい季節に冷たいものは身体にも悪いし、あたしたちみたいな女の子には特に冷えは大敵だけど、そうした所に逆らう所に、背徳感的な美味しさがあるのかもしれないわね。
実際、季節外れなのに結構売れているし。
「さ、ミスコンに行こうかしら」
「うん」
桂子ちゃんの言葉と共に、あたしたちはミスコンの会場に移動する。
「じゃあ桂子ちゃん、水着審査頑張ってね」
「うん」
佐和山大学のミスコンは、この後の水着審査と最終選考で終わりになる。
投票状況は1時間毎に更新で、結果を見てみたらやはり桂子ちゃんが圧倒的な人気を誇っていた。
ちなみに、「篠原優子」という無効票が大量にあって、桂子ちゃんに次ぐ2位につけているというのには思わず笑ってしまった。
有効票の中では、和邇先輩が推薦した能登川さんが2位につけている。何だろう？　もし永原先生が出てたら彼女は唯一の武器も奪われてた所よね。
そうなったら、和邇先輩だけでなく何人かは永原先生を推薦してうまく接戦を演じられたと思う。
「お疲れ様ー」
「お、2位のお出ましだ！」

部屋に入ってくるなり、和邇先輩が早速あたしをいじってくる。
「もう、あたしは審査員よ。１００万票あっても無駄よ」
「あはは、違いない」
なんとか交わし、あたしは所定の席に着く。
「それで、水着審査はどうするんですか!?」
「そんなの決まってるだろ？　俺だけがさっきと同じ理由をつけて能登川さんを推薦するから、みんなは正直に桂子さんを推薦してくれ」
龍香ちゃんの疑問に、和邇先輩が大きな声で堂々と答える。
「「はいっ！」」
みんなが心の中で、和邇先輩に敬礼していた。

「それじゃあ、そろそろ行きますよ皆さん」
「「はいっ」」
和邇先輩の声と共に、あたしたちも立ち上がり準備に取り掛かる。
本来なら司会の人か審査員長のあたしが仕切る必要があるのに、和邇先輩は本当に人望のある人よね。

「さて皆さんお待ちかね、ミス佐和山を決めるミスコンテストの水着審査がやってまいりました！」
ワー!!!　ワー!!!
観客たちの盛り上がりも尋常じゃない。もちろん観客たちのお目当ては桂子ちゃんの水着姿ということになる。
「えーそれではですね、準備ができたようなので、参加者の皆さんにご入場していただきましょう！」
うおおおおおおおお!!!
男たちの大きな声が聞こえ、ミスコンの参加者たちが歓声を上げる。
視線は、この中で一番胸が大きく、かわいらしい美人の桂子ちゃんに向けられていた。
桂子ちゃんも、大きな歓声に対して満足そうにニッコリと笑っている。

水着は水色を基調にした感じの生地で、私服の面影が残っている。高校の時に穿いていたミニスカートよりも少し短めのパレオがなんとも愛らしいわ。
「えーそれでは、各候補の皆さん、お気持ちをお願いします。まずは能登川麻美さんからお願いします！」
そして、候補の一人一人が、今回の水着審査に対する思いをぶちまけていく。
あたしは審査員長という立場上、真剣に聞かないといけない場面だけど、どうしても桂子ちゃん以外の人には身が入らなくなり、適当に聞き流すだけになってしまう。
他の候補の人も「桂子ちゃんには到底敵わない」と思っているのか、最初の頃よりも心なしか気持ちがこもってないように聞こえるわね。
そうこうしているうちに、すぐに桂子ちゃんの番になった。
「では次に、木ノ本桂子さんお願いします」
「はい」
うおおおおお!!!
桂子ちゃんがマイクを持って一歩前に出ると、それだけで会場の盛り上がりは凄まじいものになる。
「今回の水着審査、一生懸命選びました。どうすればみんなに喜んでもらえるかなって考えて、女の子なので、素直に男の子に喜ばれるのが嬉しいので、男の子の視線を釘付けにする、そんな水着を選んでみました」
パチパチパチパチ!!!
拍手とともに、桂子ちゃんに対する応援の声も沢山聞こえてくる。これは同時に、他の候補にとっては気落ちの材料となってしまう。
そして、残りの水着審査の人のテンションは落ちたまま、桂子ちゃんへの視線ばかりが釘付けになっている。
「それでは、審査員の皆さん、誰がいいと思いますか？　まずは河瀬龍香さんからお願いします」
続いて、審査員の評論が始まり、まずは龍香ちゃんから。
「はい、私はもちろん木ノ本桂子さんです。どうすれば男性に喜ばれ

るか？　ということを素直に追求している所に好感が持てました」
龍香ちゃんがまずそう述べると、色々な角度からそれが裏付けられていく。
そして、次々と審査員たちが桂子ちゃんを絶賛していく。
「では、次に副審査員長の和邇友蔵さんお願いします」
そしてついに、注目の和邇先輩にマイクが渡る。
会場も少しだけ真剣になっている。
「えーとですね、私はやはり能登川明美さんですね！　見てくださいよ、このワンピースから見える未成熟でかわいらしいボディ！　ああ、これこそ我々男が望む姿！　辛抱たまりませんよね皆さん！」
「よくぞ言った！」
「お前は漢だ！」
一部の男子が、そう激励の野次を飛ばしてくる。
だけど大多数の男女は、何か危ない目で和邇先輩を見ている。
「ありがとうございます。では最後に審査員長の篠原優子さん、よろしくお願いいたします」
そしてあたしにもマイクが渡る。
「はい、あたしは木ノ本佳子ちゃんです。やっぱり桂子ちゃんの水着、小谷学園のミスコンの時とまた違っていて、そのどれもが似合うのは本当に素晴らしいと思います。小谷学園では『学校一の美少女』と言われていたのも、納得だと思います」
和邇先輩の空気を元に戻すのも、あたしたちの役目だったりする。
そして、これらが終わると、ミスコンは再び閉幕し、学園祭のラストに結果発表があるくらいになる。

「優子ちゃん、待った？」
「ううん大丈夫」
再び私服に戻った桂子ちゃんと合流する。
既に優勝を確信しきった顔になってるわね。
ちなみに、審査員票も既に決まっていて、和邇先輩だけ能登川さんに入れてあとは全員桂子ちゃんで、既に一般票とも合わさって桂子

ちゃんの圧倒的な優勝がほぼ決まっている。
「桂子ちゃんはこれからどうするの？」
「うーん、彼氏と見て回るわ」
この場で優勝確実のことを伝えちゃってもいいんだけど一応黙っていることにした。
「そう、じゃああたしは、天文部に戻るわね」
「うん、じゃあまたね」
「うん」
桂子ちゃんと一旦別れ、あたしは天文部へと戻る。
これからは、桂子ちゃんが彼氏さんと一緒に行動し、浩介くんが単独行動、あたしが持ち場に戻ることになっている。
天文部には、浩介くんが居るはずだわ。

## 祭りが終わる

「ただいまー」
「あ、優子ちゃんお帰り」
天文部の持ち場の中には、やはり浩介くんがいた。
今から学園祭の終了まで、あたしはミスコンの最終発表時以外は、ここに釘付けになる。
「じゃあ浩介くん、あたしが交代するわね」
「おう、じゃあ留守番頼んだぜ」
「うん」
あたしと入れ替わるように、浩介くんが天文部から出て、あたしは部室に一人になる。
あたしがここに来るまで、何人かのお客さんがここに来たと思うけど、まあこの場所自体ニッチな場所なので人通りは少ない。
さっきも、ダンスサークルの２人が暇そうにしていたし。
「さて、だいたい回ったし、どうしようかしら？」
あたしは暇つぶしのためにＰＣを立ち上げ、サイト巡回を行うことにした。
最近のニュースや蓬莱教授に対する噂などを調べていく。
今日は佐和山大学の学園祭なので、例のつぶやきサイトでは蓬莱教授の演説に関する話題もちょこっとだけ話題になっている。
「うーん、放置で問題ないわね」
あたしは、書いてある内容が軽く触れるか絶賛だけだったことを確認し、特に問題ないと判断する。
次に、幸子さんと歩美さんのチャットを調べる。
誰もログインしてないみたいなので、ここも一瞥しておしまい。
うーん、どうしようかしら？
「とりあえず、天文部らしくＪＡＸＡのホームページでも見るかな……」
あたしは、もう一度ＪＡＸＡのホームページを見ることにする。
宇宙開発はとにかくスケールが長い。数千年でさえ短いというも

のね。桂子ちゃんが不老を望んだのも頷ける話よね。
「それにしても、ここは不人気よねえ……」
まあ、今年できたばかりのサークルだから当たり前だけど、びっくりするくらい人が来ないわね。
外での音楽の喧騒が、まるで遠くの出来事のようだわ。
あたしは、サークルの中に展示されている天体観測の写真をもう一度見る。
そこには人は一切写っていない。まあ、当たり前といえばそうだけど、だけどどれも見事よね。
これらの星々は光年単位の遥か遠くに位置していて、そこからの光が地球に届いているのよね。
今回の写真、これらの星々も宇宙からすればごくごく一部の光度の高い星なのだという。
太陽系から一番近い星は、肉眼で見えないって言うしね。
コンコン
「はーい」
誰かが扉をノックする音が聞こえた。
どうやらお客さんみたいね。
ガチャッ……
「優子さん、私です」
「あ、龍香ちゃん」
入ってきたのは龍香ちゃんだった。
「ここが天文部ですか。これ、写真ですよね？　誰が撮ったんです？」
龍香ちゃんは、まず部屋の写真についてあたしに聞いてくる。
「うん、桂子ちゃんが撮ったものよ」
「へえ、私も星空を背景に彼と写真を撮ろうとしたんだけど、うまく撮れなかったんですよ！」
龍香ちゃんが失敗談を話す。
「そういう時は、シャッタースピードを調整するのよ」
あたしは、以前天文部で教わった知識を動員して話す。
「なるほどなるほど」

「龍香ちゃん、こっちに来てみて？」
あたしは、大急ぎで星空の写真の撮り方のサイトを開き龍香ちゃんに見せる。
「ほほうほうほう、結構いいカメラが必要だったのですね」
龍香ちゃんは感心した風に見る。
どうやら、星空の写真について少しだけ関心があるみたいね。
「しかし、ここはいい場所ですね」
「え？」
龍香ちゃんから何の気無しのつぶやきが漏れる。
「喧騒を忘れて、ゆったりとしていられるんですよ。ずっとお祭り騒ぎでは疲れてしまいますから」
龍香ちゃんがあたしの隣にふうと一息ついて座る。
それなりの広さの部屋に女２人が近くに座る。
「ねえ龍香ちゃん、そういえば彼氏さんはどうしたの？」
「あー、今日は家にいることになりました。ミスコンの審査員に決まりましたので、私としても彼を惑わす訳には行きませんから」
龍香ちゃんはかなりしたたかな表情で言う。
やはりこの龍香ちゃん、用心深くて計算高いわね。
魅力的な女性には彼氏を近付けさせない所は大切にしている証拠よね。
「ふふ、龍香ちゃん独占欲強いわね」
「へへん、当たり前ですよ！　彼氏の大きなアレを他の女に絶対に渡したくありません！　もちろん優子さんにもですよ！」
龍香ちゃんが堂々と胸を張って言う。
「あはは……龍香ちゃんって本当にそれが好きよねー」
まあ、あたしも浩介くんのは大好きだけどね。
「ふふっ、優子さんも好きなんでしょー!?」
「え!?　いやそのー」
急に話題を振られてあたしは動揺してしまう。
うー、浩介くんのを想像しちゃったわ。
「正直になってくださいよ！　そもそも、男性のあれが嫌いな女の子

なんていないんですから！　どうなんですか優子さん!?」
　龍香ちゃんが更にぐいぐいと迫ってくる。
「うー、もうっ！　そんなの大好きに決まってるわよ！　あたしだって見ただけでうっとりしちゃうわ！」
　あたしも、意地を張って嘘をつく理由もないので、正直に言う。
　一昨年の最終試験以来、それが大好きなのは知っていた。
「あはは、そうでしょうそうでしょう！」
「もー、龍香ちゃん！　あたしだって女の子なのよ！　男の子の大きいの大好きで口に加えたりしたいに決まってるじゃないのー！」
　あたしが、少し抗議して言う。
　もうっ！　浩介くんのを思い浮かべてちょっと身体を濡らしちゃったじゃないの！
「うんうん、分かっていますよ！」
　龍香ちゃんのこういう生々しい所は、あたしもちょっとだけ苦手だったりする。
　もちろん、乙女しかいないこの空間で、乙女の大好物について語るのも悪くないけどね。
「それで優子さん！　大きさと固さ、どっちが好きですか!?」
　龍香ちゃんが更にぐいぐいと押して来る。
「ふえ!?　ええっとその……あたし、固くて大きいのが好き――」
「優子さん優子さん、それじゃダメなんですよ！　そりゃあどっちもあるのがいいに決まってますよ！　ですが、どちらがより重要かというのが大事なんです！」
　龍香ちゃんの暴走は止まらない。
「そ、そんなこと言っても、浩介くんは固くて大きいから……選べないわよ……」
　あたしはちょっとだけしょんぼりして申し訳なさそうに言う。
「ふふーん、やっぱり優子さんもですか。私の彼もそうなんですよ。今年のプールデートも大変だったんですよ！」
　龍香ちゃん、今年はプールに行ってたのね。
　あたしも、去年浩介くんと行った時のことを思い出しちゃうわ。

「あ、あはは……あたしも去年は大変だったわ」
「ほほう、去年プールに行ったんですか優子さん！」
龍香ちゃんは、あたしと浩介くんとの恋愛話には本当にぐいぐいと押してくるわね。
「はい、もう胸もお尻も何回も何回も触られちゃったわ……」
あの時のことを思い出すと、今でもちょっと興奮してしまう。
というか、デート中に浩介くんにされたセクハラは、どれも思い出すだけで興奮してきちゃう。
そしてひとしきりに興奮した後に思い出すのは、あたしが心底浩介くんに惚れちゃっているんだってこと。もう何をしても、浩介くんに虜にされちゃってることを自覚するばかりね。
「あはは、それだけならまだいいほうですよ。私の彼ったらそれに飽き足らずに、水着に押し付けてきたんですよ！」
「ええ⁉」
そう言えば、3年前の海でも龍香ちゃんのお尻触ってたっけ？
やっぱり、龍香ちゃんの彼氏って大胆だわ。
「で、『もう我慢できない、ここでしたい』とか言ってきて！　仕方なく身障者用のトイレに駆け込んで抜いてあげましたよ！　あの時は本当に焦りました！」
「龍香ちゃん、よく別れないわね」
「何を言ってるんですか⁉　えっちだからいいんですよえっちだから！　恋愛を長続きさせるためにも、身体の関係はとっても大事ですよ！　何せ会う度に気絶するまで気持ちいい思いをさせてもらってるんですから、別れたくないに決まってるじゃないですか！」
龍香ちゃんがまた、速射砲のように彼氏への愛を語る。
「あはは、龍香ちゃんぶれないわね」
「当たり前ですよ！」
でもあたしは、龍香ちゃんのそんな態度も時折羨ましく思う。
女の子の多くは、その本心を押し殺して「別にそんなのでは興奮しないし」とか「女の子は心でするものだから」と否定的なことを言う。
もちろん、それはそれで女の子なりのプライドがあってのことだと

思う。
でも龍香ちゃんは、とっても正直な女の子らしい女の子だった。
あたしもそう、男が好きだから、当然自分についてない（以前は付いてたけど）ものにとても興味津々だし、大好きで愛おしくなると思う。

コンコン
「おっと、はーい！」
突然扉がノックされる音がしたので、あたしと龍香ちゃんは男の象徴に関する話題を止めて応対する。
うん、第三者には到底話せないものね。
「「失礼しまーす」」
入ってきたのは、ダンスサークルの2人だった。
あたしが立ち上がると、龍香ちゃんもつられて立ち上がる。
「あらいらっしゃい、さっきはダンスありがとうね」
「ええ。ここが天文サークルですか？」
「はい、うちの部長が撮影した天体観測の写真を展示してます」
「部長さんって、あの木ノ本さんですよね？」
ダンスサークルの女の子が桂子ちゃんに話題を持っていく。
「ええ」
「私達、ミスコン、木ノ本さんに入れさせてもらいました」
まあ、普通なら桂子ちゃんに入れるものね。
一部特殊な男性だけが、能登川さんに入れているみたいだけど。
「ありがとう」
「あら、そういえばあなたも審査員長さんでしたね」
ダンスサークルの人はあたしの顔を見て、気付いたように言う。
「ええそうよ」
「天文サークル、篠原夫妻に桂子さん……小さいですけど濃いメンバーですよね」
ダンスサークルの人が、羨ましそうな目であたしを見る。
そうよね、この人達は無名な上に、事実上本家が乗っ取られちゃっ

てるもの。
「ミスコンの仕事、いきなり大役を任されて大変でしたね」
まあ、あたし自身有名人だし、ね。
「いえいいんですよ。あたしが出ないにもちゃんと理由がありますから。せめてこれくらいはしないといけないでしょう」
「ええ」
「ちなみに、私も審査員させていただいてます河瀬龍香です！」
「はい、河瀬さんもよろしくお願いいたします」
ダンスサークルの人と、龍香ちゃんも混じって気楽に雑談をする。龍香ちゃんは、結構どんな人ともすぐに打ち解けられるのよね。
ちなみに、やはり女の子しかいない空間は異様なのか、龍香ちゃんはまた例の話題を持ち出して、最終的にはダンスサークルの人も折れて「大好き」と口走るようになってしまった。もちろん、言うまでもなく女の子が女の子な以上、好きなのは好きだけど、出会ってすぐにそういうのを言い合える関係にしてしまうって……龍香ちゃんパワー恐るべし、ね。

「戻ったぞー、お、河瀬も居るじゃん」
「お邪魔してまーす」
「優子ちゃんお留守番ありがとうね」
浩介くんに達也さんという男性が入ってきて、龍香ちゃんのガールズトークにようやく終止符が打たれた。
文化祭も最終盤になり、いよいよミスコンの最終発表がある。
既に投票は締め切られていて、この後はあたしたちがミスコンに出ている間に浩介くんと達也さんとの男2人で天文サークルの展示を片付けることになっている。
「じゃああたしたち、ミスコンに行ってくるから」
「おう、頑張ってくれよ」
浩介くんと挨拶し、あたしは桂子ちゃんと2人で部屋を出る。
審査員長と参加者という立場上、親しく歩くのはまずいかもしれないと思ったけど、まあ気にしないでいいわね。

「じゃあ桂子ちゃん、多分、というか間違いなく優勝確定だと思うけど、頑張ってね」
「あはは、今からじゃもう頑張りようがないわよ」
桂子ちゃんが笑いながら突っ込んでくる。
うん、そうよね。

あたしは扉を開けて、スタッフの控室へ、桂子ちゃんも別の控室へと進む。
「審査員長、お疲れ様です」
「和邇先輩も、お疲れ様です」
和邇先輩があたしに挨拶をしてくれる。
でも、今回のミスコンの功労者は、和邇先輩だと思う。いくら何でも審査員全員が1人の候補を推すのはバランス上良くないけど、誰の目明らかに桂子ちゃんが優勝というこの状況。
そんな時に、自ら特殊性癖役になることを買って出てくれたんだもの。
ちなみに、さっきのつぶやきサイトの情報では、大学生になるとみんな大人なので、和邇先輩が明らかにバランス取りの大人の事情でのポジショントークだということを見抜いているらしく、和邇先輩の評判は落ちていないみたいで良かったわ。

「ではこれより、２０１９年度佐和山大学ミスコンテスト最終発表を開始いたします。まずはじめに、参加者の入場です！」
司会者さんの声と共に、桂子ちゃんを始め参加者が入場していく。
参加者たちは、みんな私服姿で、桂子ちゃんもあの格好に戻っていた。
「投票結果の発表です、最初に参加者票です」
各参加者一人一人に票数が発表されていく。
結果は言うまでもなく、桂子ちゃんがダントツの1位だった。
桂子ちゃんがホッとしたような表情をしているように、この時点

で、審査員全員が2位の候補に入れても桂子ちゃんの優勝が確定してしまったけど、司会者さんはおくびにも出さない。
「続いて審査員票ですが、能登川麻美さん1票、木ノ本桂子さん9票です！　よって、２０１９年度ミス佐和山は、木ノ本桂子さんに、準ミスは能登川麻美さんに決まりました！」
うおおおおおおお!!!
桂子ちゃんは予想通りという顔をしていて、準ミスに選ばれた能登川さんも満足そうな表情を浮かべている。
まあ、相手が桂子ちゃんだものね、準ミスなら上々という気持ちなってもおかしくないわね。
観客たちの盛り上がりも、それなりだった。
戦況を決して居るとは言え、この手の投票性というものは、どこからか横槍が入って強引に捻じ曲げられてしまうのではないかという不安は常に付きまとう。
そして往々にして、陰謀論がまかり通りかねないこともある。
しかし、今回もきちんと、桂子ちゃんの優勝が決まった。
「それでは審査員長より、優勝トロフィーと準優勝トロフィーの授与です。まずは準優勝トロフィーから、審査員長さん、能登川麻美ちゃん前に出てください」
「はい」
あたしが立ち上がり、司会者さんから準優勝のトロフィーを受け取ると、前に出てきた能登川さんに手渡す。
「おめでとうございます」
「ええ、妹の無念、これで少しは晴れると思いますわ」
あー、やっぱり、能登川って言うから関係者かなと思ったけど、小谷学園で出てたミスコンの人のお姉さんだったのね。
「続いては優勝トロフィーです。木ノ本桂子ちゃん、前に出てください」
「はい」
そしてもう一度、優勝トロフィーを受け取って桂子ちゃんへと渡す。

「桂子ちゃん、連覇おめでとう」
「うん、ありがとう」
その後、２人で記念撮影をし、ミスコンも無事に終わった。
「お疲れ様でした」
これが文化祭最後のイベントなので、あたしたちは挨拶もそこそこに、帰宅することになっている。
あたしも、すぐに桂子ちゃんと合流し、天文部の部室へと戻る。
「遅いぞ２人とも。優勝おめでとうな」
浩介くんたちは、既に片付けを終えていた。
「へへ、桂子ちゃんやっぱり優勝したんだ」
「うん、私がミス佐和山よ」
桂子ちゃんの彼氏さんも、やっぱり自分の彼女が優勝すると嬉しいみたいね。
天文部室はあたしたちに龍香ちゃんも入れて５人になっていた。
「それでは、私は彼とイチャイチャする約束がありますので、これで失礼します！」
龍香ちゃんが勢い良く出ていく。
本当お盛んよね。まあ、あたしも今夜するつもりだけどね。
「じゃあ、俺達も帰ろうか」
「うん」
あたしたちは日没後の学校を、ゆっくりと帰宅することにした。
明日からはまた、いつも通りの学校が始まる。大学の非日常は、終わった。
小谷学園での文化祭と違い、今年は浩介くんからの大きなイベントはなかった。
後日行われた、小谷学園のミスコンでは、永原先生が優勝した。これで、２年前のミスコンで１位を争ったあたしたちは、全員が優勝経験を持つことになった。
それでも、永原先生はあたしに対する悔しさは残っていると言って

たけどね。

# 篠原家の師走

学園祭が終わって日常を過ごすうちに、季節はあっという間に１２月になった。

この間に、幸子さんが最終試験に合格したという報告を受けた。

幸子さんは２年でこの試験を通過したことになる。思えば最初は最悪に近かった成績から、一気に最優秀の水準まで持っていったのは、今までの価値観からすれば奇跡そのものだという。

ちなみに、幸子さん本人の弁によれば、「好きになってる気がしたけど、まさかこんなに大好きになっているとは思っていなかった」と言っていた。

あたしは、「女の子だもの、好きになるに決まっているわよ」と言っておいた。

幸子さんについては、もう心配はいらないわね。

次に会った時に、不老人のあたしたちのための最終定着の面談をすれば、後はカウンセリングもほぼないと考えていいだろう。

以前なら、パートナーとの寿命問題でのカウンセリングもあったけど、それも蓬莱教授の研究さえ成功すれば問題ない。

さて、あたしたち篠原家の話題としては年末年始の帰省の話である。

あたしの家と浩介くんの家は近いけど、あたしは篠原家に嫁入りしてから一度も実家に帰っていない。

実の両親からも全く帰還要請もなく、また連絡も殆どなかった。

もちろん、協会がくれたテレビ電話を使えば交流できることを考えたらそこまで寂しいわけでもないし、何度か電話はかかってきている。

実家の両親は多分元気にしているとは思うけど、１８年間一緒に過ごした子供が居なくなったら寂しいに決まっているわよね。

「という訳なので、年末年始の帰省は、あたしの実家に行きたいと思います」

クリスマスの日に行った家族会議で、そんな提案をあたしはしてみ

る。
　ちなみに、夫婦になったのでクリスマスプレゼントやデートというのもなく、代わりに家でたっぷりといちゃつくようにしたりすることにした。
「いいわね。でも、おばあさんはどうしようかしら？」
「うーん、あたしあのおばあさん苦手だわ」
　どうせまた、子作り子作りと壊れたレコードのように繰り返すんだと思うし。
　しかもあたしたちの両親も割合すぐに子供作らせようとするし。
「うーん、でも呼ばないわけにも行かないわよ。とりあえず年末の２日間、大晦日の午前中までおばあさんに来てもらって、大晦日と元旦の２日間を優子ちゃんの実家で過ごしましょう」
「ああ、お母さんに賛成だな」
「俺も」
　我が家の男陣が一気に賛成し、あたしも特に異論はなかったので（あのおばあさんそのものが苦手だけど）年末年始の予定が決まった。

　ピンポーン！
「はーい！」
　そして迎えた１２月３０日、２０１９年も残すところ後２日となった日の昼、我が家に呼び鈴が鳴った。
　玄関に一番近かったあたしが、応対する。
　杖も介護者もつけずに、おばあさんが仁王立ちしていた。
「わしじゃよ！　入るぞ！　おお優子ちゃん、赤ちゃんは妊娠したか？　ちゃんと検査薬は買ってるか!?」
「……」
　早速始まったわね。まあ、仕方ないわ。
　おばあさんは９０代とは思えない身のこなしで玄関へと入っていく。
「ふう、毎度のこと疲れちゃうわ……」
「この甲斐性なし！　優子ちゃんほどのいい女を何で孕ませられねえ

んじゃ！」
玄関からおばあさんの大きな声が聞こえてくる。
ああ、かわいそうな浩介くん。
あたしは、浩介くんには悪いと思いつつ、何食わぬ顔で自室へと戻る。
「ふう……」
ともあれ、また夕食になったらあたしと浩介くんは針のむしろになるわね。
何せ、あたしも浩介くんも、愛を深めるためにしかしてなくて、子作りするためにしたことはまだないし。
あたしは、ベッドに寝転がって、夜に起きるであろう心労に備えることにした。

「優子ちゃーん！　ご飯手伝ってー！」
「はーい！」
あたしの部屋は、元々おばあさんの部屋で、この２日間、おばあさんは両親の寝室で布団を敷いて寝ることになっている。
まあ、いくら元気とはいえ９０代の老い先短い身なので、義両親が近くにいた方がいいということよね。
「おう優子ちゃん、うちの浩介に何か問題でもあるか？」
「いえ別に」
ご飯を手伝っていると、またおばあさんが話しかけてくる。
「んじゃああんたが不妊なんか!?」
また始まったわ。
「違いますよ！」
「おおそうか、じゃあどうして生まれねえんだ!?　ちゃんと日にち選んで中でするんだぞ！」
またあたしと浩介くんに妊娠を促す。
本当、そればっかりなんだから。
「もう、これ以上は食事抜くわよ!!」
「おお怖い」

ご飯を抜くと脅したところで、ようやくあたしへの妊娠催促が止まってくれた。
とはいえ、おばあさんを安心させるためにも、今夜は激しくしないといけないわね。
「あーあ、せめてあと３０年、蓬莱の薬の開発が早けりゃ、子孫代々見れたのになあ」
おばあさんの愚痴を、あたしは無視する。
もう相手にするだけ無駄だわ。
「お義母さん、鍋よく見て」
「あ、はい！」
あたしは、おばあさんに気をとられていたお義母さんの関心を料理に戻す。
ともあれ、鍋料理は加減が難しいから、あたしも注意していかないといけないわね。出来上がった鍋は、お義母さんに運んでもらい、５人でテーブルに並ぶ。
「「いただきます」」
鍋の野菜をよそい、思い出思いに食べ始める。
おばあさんの食欲が意外に高くて驚きだわ。

「で、浩介、優子ちゃんの抱き心地はどうなんじゃ!?」
あたしの体、抱かれ心地には自信がある。
もちろん胸に脂肪がたまってるだけではなく、お腹にもぷにっとした脂肪がある。
浩介くんもあたしも知っているけど、このお腹のぷにぷに感は、赤ちゃんへの栄養を蓄えている証拠なので、あたしのように平均体重よりもちょっと重い女性の方が、痩せている女性よりも男からは人気がある。
あたしはダイエットするつもりもないし、あたしより軽いのにダイエットにいそしむ女性を見ていると、かわいそうに思えてくる。
「ぶふっ！　悪い訳ねえだろ！　最高に決まってるだろ！」
「もうっ！　浩介くんまで！」

とはいえ、今は調子に乗られるのは嫌だわ。
「おっとごめん」
浩介くんは、あたしに怒られると素直に謝ってくる。
「まあでも、確かに男は優子ちゃんくらいしっかり重たそうな女の子が好きなんだよね」
「ちょっとお父さん！」
お義父さんの言葉に、今度はお義母さんから抗議が入る。
「ふふ、でもその通りだったりするのよね。あたし、実は女の子になってからダイエットしたことないのよ」
「え!?　優子ちゃんダイエット経験無いの!?」
浩介くんがかなり驚いた表情をしている。
「当たり前じゃないの。今の体型は理想よ理想」
「そ、そうなのか。優子ちゃんも女の子だから、1回位は体重を気にしたことあるかなって思ってたんだけど？」
「ふふ、浩介くんはガリガリに痩せてるのと、ふっくらむちっとしてるのとどっちが好きかしら？」
あたしがぐいっと浩介くんに迫る。
「えっとそれはその……」
「愚問じゃろ浩介！　そんなのふっくらむちっとに決まっとるがな！」
おばあさんが突然口を挟んでくる。
もちろん、それが正解なのよね。
「あ、うん……だってほら……痩せてたら赤ちゃんに栄養が行き渡らなそうだし」
「うんうん、そういうことだ」
夜になると、浩介くんがあたしのお腹をよく観察していることも知っている。
むちっとした肉付きは、より男には本能に訴えるところがあって、今までは「優一の知識」と、それに付随したぼんやりした理屈でしか知らなかったけど、改めて浩介くんと深く関わることで、身をもって知ることになった。

逆に言えば、浩介くんの興奮度も高くなるから、妊娠しやすい体だとも思うので、その辺は注意しないといけない。
ともかく今はまだ、焦る時間じゃない。浩介くんも、薬を飲んでから、ますます性欲旺盛になっているし。もし不老化さえできれば、今の性欲を維持してくれるはずだわ。
「それにしても、優子ちゃんは無事出産できるかしら？」
「うん、あたしも不安だわ」
ＴＳ病患者には、出産事例もあるし、不妊治療をしたというの例も聞いたことがない。
とはいえ、男から女に変わるわけだから、その仮定で何かが起きていても不思議ではない。
まあ、今のところ、産婦人科に行く必要はないわね。
「ひ孫は男の子か女の子か、ばあちゃん楽しみにしてるよ！　さっさと産んでくれよ！」
本当にもう、ボケ老人って嫌だわ。
こういうのを見てたら、蓬莱教授の研究は絶対に必要なんだってあたしは思う。

「「ごちそうさまでしたー！」」
全て食べ終わり、浩介くんはお風呂へ、義両親はおばあさんを寝室に連れていき介護をして、あたしが夕食の後片付けをする……はずだったんだけど……
「優子ちゃん、このお皿はどう置けばいい？」
「あーうん、これは立てちゃって大丈夫よ」
浩介くんは甲斐甲斐しそうにお皿を運ぶのを手伝ってくれて、あたしは鍋洗いに専念できる。
「よし、大分板についてきたぞー！」
浩介くんはヤル気満々になっている。
普段はあたしとお義母さんが家事をして、浩介くんを手伝わせないようにしている。
でも、お義母さんが出掛けると、隙あらばあたしの家事を手伝おう

とするようになった。
あたしが恥ずかしがるところにすごく興奮するらしく、浩介くんは「家事を手伝ったご褒美」というシチュエーションでスカートをめくりたいという欲望が丸見えになっている。
本当にもう、エロの力って偉大よね。
「優子ちゃん、これでどうかな？」
浩介くんが終わったみたいなのであたしは皿洗い機の中を見る。
「ありがとう、あ、こっちはこうして……こうかな？」
「へー、微調整するんだなあ―」
「ふふ、浩介くんにはそこまでは求めないわよ。お義母さんもできてなかったことだからね」
今はもちろん、あたしの指導の甲斐もあってお手のものだけど。
「そ、そうか……そっちはどうだ？」
「うん、ちょっと待っててね」
あうー、もう興奮し始めちゃったわ。
とにかく今は鍋洗いに集中してっと。

「ふー、終わったー！」
「よし、じゃあ優子ちゃん、約束だよ」
浩介くんがにやけた顔つきで言う。
その顔を見ただけで、あたしは体が火照ってしまう。
「は、はい……」
あたしは従順に、腕を後ろに組んで恭順の意を示す。
ぺろーん
浩介くんに、スカートの端を掴まれ、そのままゆっくりとめくられていく。

「はぅ……あうっ……」
いつものいたずらの時のめくられ方と違い、ご褒美に際してはこうやってゆっくりとめくられていく。
「うほー、優子ちゃんの白パンツキター！」

「ああーん!!! 恥ずかしいよおー!!!」
浩介くんにパンツの色を言われて、あたしが恥ずかしさに耐えられなくなって声をあげるところまでが「ご褒美」のお約束になりつつある。
「下腹部のお肉がいいよねえ。パンツに包まれたこの質感がもー素晴らしい!」
「あーん、じろじろ見ないでえ……」
さっきの食事でそういう話題が出たので、浩介くんにいつも以上にじっくり観察されてしまう。
ちなみに、とっくにあたしは興奮しきっていたり。
「ふーふーふー!」
「きゃっ! やあっ!」
あたしは浩介くんの息をパンツに吹きつけられる。
時々されている恥ずかしい行為だったりする。
「びくんびくんしててかわいいね、ふーふー!」
「うわああん、あなたあ! お願い、もう許してえ!」
堪らなくなり、あたしは降参する。
「はいはい」
降参するためには、ありったけの保護欲と嗜虐心を煽る声で許しを乞う。
そうすれば、浩介くんが放してくれる。
「いやー、これだからやっぱ家事手伝いは辞められねえな!」
あたしは恥ずかしさのあまり、そのまま床にへたりこんでしまう。
まあ、本当に嫌なら「手伝わなくていい」と断ればいいわけで、断らないと言うことは、ある意味であたしもこうされるのを楽しみにしてたりもしちゃうのよね。
「んじゃ、俺は風呂に入ってるからね。今日は優子ちゃんの部屋にする?」
「うん、あたしの部屋で待っててね」
浩介くんがお風呂場へと向かう。
あたしは急いでこの後着るパジャマを出し、部屋で待つ。

浩介くんと入れ替わりでお風呂に入り、体を洗ってよく拭いて、パジャマを着て浩介くんの待つあたしの部屋へ。
「あなた、お待たせ」
「おう、優子ちゃん、可愛がってやるぜ」
「はい……」
浩介くんとキスをして、あたしたちは長い夜を過ごした。

翌日になって今日は大晦日、あたしの隣には浩介くんが気持ち良さそうに寝ている。
あの後、浩介くんは自分の部屋に戻らず、あたしのベッドで寝始めた。
元々、このベッドは広いので問題はない。
「くんくん……んっ！」
少しきつい臭いがするわ。
「うーん、あー」
浩介くんの汗の臭いだった。
……あれ？
あたしの顔が、浩介くんから離れないわ。
ああ、浩介くんが寝ている間にかいた汗の臭い……男の臭いの虜になっちゃってるのね。
昨日もまた、浩介くんは満足そうだった。
あたしもあたしで、大満足。
この汗を嗅いでいると、頭がくらくらしちゃって、心臓がドキドキするわ。
「もう少しこうしよう」
浩介くん、大好き……
うん、この場所、あたしにとってとっても居心地がいいわ。
実家のことは、多分大丈夫ね。

「優子ちゃん、おはよう」
「うん、おはよう。着替えは見せないわよ」

浩介くんはあたしが汗の臭いに興奮していたことには気付かずに、朝起きてくれた。
「へいへい分かってるって。パンツの色は、スカートめくった時のお楽しみに取っておくよ」
「う、うん……」
まあ、しつこく見ようとしてた時よりましかな。
今日は久しぶりに実家に帰る日でもある。
午前中におばあさんを送って、その後にあたしの実家に帰ることになっている。
朝起きるのが遅くて、今ちょうど義両親がおばあさんを送っている予定の時間になっちゃってるけどね。
まあ、おばあさんはこの方がかえって安心するわよね。
元旦はまた、初詣に行くことになっている。
そう言えば、また和服なのよね。浩介くんにせがまれそうだわ。
「ふう」
大晦日は昨日以上に寒い。あたしはくるぶし丈のロングスカートを取り、防寒に勤める。
明日の元旦に着ていく服も、決めないといけないわね。
あ、そうだわ。ぬいぐるみさんとお人形さん、それから少女漫画も忘れずにっと。
それらを考慮しつつ、あたしは荷物をまとめ、それをリビングに置く。
浩介くんも浩介くんの方で荷物はまとめたみたいね。
「よしっ、浩介くんあたしは準備できたわ」
「優子ちゃん、お疲れ様」
あたしの準備が完了すると、浩介くんもねぎらってくれる。
「うん、浩介くんもね」
「今年も今日で最後だよなあ」
今年は結婚と高校卒業、そして大学入学を除けば、比較的平穏だったわね。
「うん」

「クラスの連中もうまくやってるみたいだし、そろそろ同窓会が開かれるかもな」
浩介くんが、同窓会の話をする。
「いつになるんだろう？」
「田村の都合をつけるのが難しいからなあ。でも今はテニスシーズンオフだろ？」
「うん」
恵美ちゃんは、プロテニス界で大活躍をしていて、既に世界ランキングもツアー出場のレベルに達している。
もちろん、いくら恵美ちゃんでもプロの壁は厚いわけだけど、それでも、１９歳という年齢を考えれば前途洋々といっていいだろう。
日本のテニス界は、ここ数年男子はまさに「最高の黄金期」と呼ぶにふさわしい状況だったけど、女子がいまいち男子の波に乗れていない感もあった。
そこに登場した恵美ちゃんは、日本どころか世界中の注目を浴びていて、ニュース上では蓬莱教授の注目度に勝るとも劣らない状況になっている。
ちなみに、恵美ちゃんはプロテニス選手ということで世界を飛び回ってはいるが、拠点は日本に置いていて、家も特に引っ越ししていないらしい。
恵美ちゃん曰く、「女子は楽だぜ、何せその辺の男子を捕まえれば練習相手になるんだから」と言っていた。まあ、住み慣れた自分の国を拠点にする方が、色々とやり易い面もあるのかもしれない。
もちろん、男子の場合は練習相手などの問題からそうもいかない事情があったりするみたいだけどね。
「まあ、ともあれ何とかなるさ。久しぶりに高月ともバカ騒ぎしてえしな」
「あはは……」
高月章三郎（たかつきしょうさぶろう）くんは、小谷学園時代のクラスメイトで、整形外科医の家の息子。
浩介くんの古い友人で、とっても性欲が強くて嫉妬深いけど、頭は

よくて今はお父さんの病院の跡継ぎとなるべく勉強に勤しんでいる。
「ま、でも優子ちゃんにてを出したら容赦はしねえぜ」
「うん」
浩介くんが頼もしそうに胸を張って言う。
そうね、久々に、同窓会を開きたいわね。
ピンポーン！
「はーい」
玄関から呼び鈴が聞こえ、浩介くんが応対してくれる。
「ただいまー」
どうやら声からして、義両親が帰ってきたらしいわね。
「うん、お帰りなさい。おばあさんはどうだった？」
「あーうん、盛んになってる所を邪魔しちゃ悪いからとかなんとかで」
「相変わらずぶれないわね……」
何かもう、感覚が麻痺してきたわ。こんな老人は極一部だと思いたい。
「さ、少し休んだら優子ちゃんの家に行くわね」
「そう言えば、うちの両親が優子ちゃんの実家に行くのは珍しいよな」
浩介くんがやや物珍しそうな顔で言う。
浩介くんがあたしの実家に来たことはあったけど、浩介くんの両親は殆ど無い。もちろん、結婚前の調整時には何度も来てたけどね。
「うん、言われてみればそうね」
まあ、嫁入りって言うくらいだものね。
それを言ったら、あたしの両親だって、この家にはほとんど来てない気がするけど。ともあれ、あたしたちはいつでも出られるようにしておかないと。

# 大晦日の帰省

「さ、出発するわよ」
「「はい」」
お義母さんの号令で、あたしたちはそれぞれ荷物を持ち、家を出る。
大晦日でも、もちろん鉄道は平常通り。
ただし、今日は火曜日だけど休日ダイヤで、いわゆる年末年始のダイヤと言う感じだ。
「間もなく――」
そして、上りの電車がやってくる。
年末年始の電車内だけど、昼間なので結構空いている。
あたしたちは、難なく4人で並んで座ることができた。
「優子ちゃんの家ってどんな感じだっけ？」
お義母さんは、あまり印象に残っていないらしいわね。
「うーん、篠原家とほとんど変わらないわよ」
実際の所、空き部屋があるので特に問題はない。
あたしの部屋も、倉庫部屋になっているはず。
「次は――」
「あ、降りるわよ」
小谷学園と佐和山大学の最寄り駅を過ぎて数駅後、あたしの実家の最寄り駅に到着する。
あの卒業式の日以来、篠原優子としてこの駅を降りるのははじめてのことだった。
「……優子ちゃんどうしたの？」
やや挙動不審気味に階段を歩いていたあたしに、浩介くんが少しだけ心配そうに話しかけてくる。
「あーうん、久しぶりだわって思って」
「あー、もしかしてあの卒業式と結婚式の日以来、使ってなかった？」
「うん、あの日までは毎日のように使ってたのに。このホームもこの風景も、そしてこの改札口も――」
ピッ

あたしがかざしたＩＣカードの音がする。
「何もかもが懐かしいわ」
そんな感慨も知らずに、自動改札機とＩＣカードは極めて事務的に、チャージ金額を不足分、つまり大学最寄り駅から実家の最寄り駅までの区間との差額だけ、引き下ろしていく。
「変わらねえな」
町の風景を見て、浩介くんが呟く。
あたしたちは、駅の外を歩き始める。
「あはは、まだ９ヶ月半だもの」
町は変わりやすいというけど、さすがに１年で目まぐるしく変わることはそうそうない。
東京の方は、来年に控えた東京五輪のこともあってかなり目まぐるしく開発が進んだらしいけどね。
「そうだなあ、まだ９ヶ月なんだなあ……」
浩介くんが感慨深く言う。
「そうねえ、９ヶ月しか経ってないのよね」
お義母さんも、同じ感想を言う。
「お義母さんも？」
「何か、優子ちゃんは１０年前から浩介の妻みたい」
お義母さんにとっても、結婚してからの日々は濃かったらしいわね。
「あはは、あたしはまだまだ新婚ホヤホヤよ」
それにしても１０年前からって、あたし９歳よ。
「ええ、でもなんだか、優子ちゃんと浩介は何年経っても新婚って感じがするのよ」
「……もうっ！」
お義母さんにまで、恥ずかしい台詞を言われてしまう。
浩介くんを見ると、やっぱり顔が赤くなっていた。
「こっちこっち」
記憶を頼りに、あたしが誘導する。
「お、ここが例の分かれ道か？」

「うん、こっちを違う方向に曲がると、桂子ちゃんの家があるのよ」
この分かれ道も、小学生の頃からのお馴染みと一緒に通った道なのに、今はまるであの日々が別世界での出来事のように感じられた。
「なるほどなあ……」
あたしたちは、石山家へと近づく。
そしてついに、あたしの視界には、「石山」と書かれた表札が目に飛び込んできた。
「あら、ここね」
「ええ」
あたしが代表して、一歩前に出て呼び鈴を押す。
ピンポーン！
「はーい」
篠原家とよく似た呼び鈴の音と共に、懐かしい声が聞こえてきた。
「あら、優子！　皆さんいらっしゃい！」
母さんが、あたしたちを招いてくれる。
「「お邪魔します」」
「お、お邪魔します……」
あたしは一瞬迷った末に、「お邪魔します」と挨拶する。そう言えば、以前の練習でも言われてたっけ？
「ふふ、優子も遠慮なくくつろいでね」
「う、うん……」
あたしたちが靴を脱ぐと、間髪入れずにどんどんと言う足音が聞こえてくる。
「おお優子！　よく帰ってきたな！」
「うん、父さんも元気でよかったわ」
「優子、しばらく見ないうちに色々と変わったなあ」
「う、うん……」
父さんは相変わらずなマイペースかと思ったけど、久しぶりの帰還とあってやはり心に高揚感があったのね。
「ふふ、皆さんもいらっしゃい。歓迎するわね」
母さんの一言と共に、あたしたちは家の奥へと入る。

あたしは、迷わずに自分の部屋、いや元自分の部屋に移動する。
「ふー、当たり前とはいえ、跡形もないわね」
あたしの部屋のものは、ほぼ全て浩介くんの家に運び込まれていて、中には布団が2つ敷かれているだけだった。
今日はこの部屋が、あたしと浩介くんの寝室になる。
「お、ここが優子ちゃんの部屋か」
「うん、浩介くんも面影はないけどね」
あたしは、布団に座り込んで手荷物の中からお人形さんとぬいぐるみさんをいくつか取り出す。
「これで時間潰すのか？」
「うん、ねえ浩介くん、一緒におままごとしようよ」
結婚してから、おままごとをほとんどしなくなっちゃったので、あたしも久々におねだりをする。
「え!?　おままごとというか、俺たちいつも普通に家庭生活してるじゃない」
浩介くんは困惑したように反論する。ちなみに、結婚してからもおままごとは1人ですることがほとんどだった。
「それでもよ。はーいあなた」
「お、おう！」
混乱しながらも、応じてくれる浩介くんは、本当にいい人だわ。
やっぱりそう、あたし、子供の女の子がする遊びが大好き。
子供っぽいものはあたしの心を癒してくれるから。
お人形さんを家族に見立て、あたしたちはおままごとを楽しむ。幸い、両家両親は別の用事があったのかあたしたちの所には来なかった。
「ふー、遊んだ遊んだ」
「じゃあ俺、リビングにいるから」
遊び終わると、浩介くんはリビングに、あたしは、布団の上で横になる。
「あー、懐かしいわね」
全くといっていいくらいに昔の面影がないのに、あたしは部屋の壁

紙を見て、あの頃の日々が思い浮かぶ。
初めて部屋を貰ったのは、小学校5年生の時だった。
当時は何のこともない殺風景な感じだったのを覚えている。
中学に入り性格が荒むと同時に、部屋もやや荒れ気味に散らかった。
女の子になってからは、本棚が少女漫画に、部屋のクローゼットも女の子の服になったけど、それ以外は以前と変わらなかった。
2年前の夏休み、林間学校の帰りにあたしが浩介くんに恋をした少し後に、桂子ちゃんと恵美ちゃん、さくらちゃんがあたしの家に泊まりに来て、今のような女の子の部屋にしてもらった。
そして小谷学園を卒業すると同時に、あたしは浩介くんと結婚して、この部屋は無主となった。
今年ももう、残すところ半日になった。もしかしたら、2年前に負けず劣らずの、波乱に満ちた日々だったかもしれないわね。

「優子ー！　ご飯よー！」
「はーい！」
母さんの懐かしい呼び声が聞こえ、あたしは布団から起き上がってお昼の食卓へと向かった。
食卓は総勢6人の大所帯で、以前3人で使った時の半分しかスペースがない。
食卓は大きく真ん中に盛り付けて自由にとる方式と、1人1人にそれぞれ盛り付ける方式の2つにに分けられる。
スペースと手間という意味では前者の方が楽だが、往々にして盛り付け配分や他の人への配慮などが問題になってくる。
なので、石山家では後者の方式が多かったんだけど、今日は人が多いために机のスペースを考慮して、山盛りのそばが2山大きく盛り付けられていた。
「ふう、全員揃ったわね。それじゃあいただきます」
「「いただきます！」」
母さんの号令と共に、あたしたちは一斉にそばに手をつけ始める。

両親たちは世間話に身を高じているんだけど――
「あら、優子まだ妊娠してなかったの？」
「ちょ、ちょっと母さん!!!」
あたしに対して母さんが最初に話しかけたのがこれ。
「そうなのよ、ごめんなさいね。うちの浩介ったら甲斐性なしで」
「もー！　やめてくれよ！」
浩介くんもお義母さんに抗議する。
「やれやれ、新婚早々にもう遠ざかってるのか？」
もう、父さんまで乗ってきちゃったわ。
「うーん、時折優子ちゃんのかわいい声が寝室まで響いてくるから……何か小細工でも弄しているんじゃないか？」
「もうっ!!!　やめて!!!」
お義母さんのひどい暴露話に、あたしは耐えられずに大声をあげて抗議する。
でも、寝室まで響いているって言ってたわね。
ドアはきちんと閉めてあるはずなのに。
「あー、確かに優子ちゃんは声を我慢しないもんな。素直なのはとっても好きだけどね」
もー、浩介くんまで！
「しないじゃなくてできない……って何を言わせるのよ!!!」
うー、また墓穴を掘っちゃったわ。
「優子、声を我慢するのを興奮する人もいるけど、我慢しすぎは体に毒よ。新婚さんなんだから、別に恥ずかしがることないわよ」
母さんが優しい口調で慰めるように言う。
「だってー！」
「それに、優子の声が聞こえてくるってことは、きちんと夫婦仲がうまくいってる証拠なのよ。そうすれば、舅さん姑さんも安心するわよ」
母さんはやっぱり、あたしよりもポジティブ思考だわ。
まああたしも、優子になって少し性格が楽観的になったと思うけどね。
「浩介、ちゃんとそのままでやってる？　変なものつけてないよね!?」

「いやその……黙秘する！」
もちろん、今はまだ子供作るのは早いと言うことで、きちんと回避してはいるけど、両家両親はそれが気に入らない様子で、孫を作れと言う大合唱を、あたしたちは一斉に受ける。
「いいかしら優子、ただ闇雲に毎日するんじゃなくて、大切な日まで我慢させるのも大事なのよ！」
「うー、分かったわよ！」
母さんはさっきから、あたしを捲し立てている。
何か本当に子供を産むまで、同じやり取りが続きそうだわ。
あたしたちは、改めて妊娠と出産の圧力を受けつつ、昼食を食べた。

「ふあー！　疲れたー！」
両家両親からの執拗な妊娠催促は、予想以上に精神的に疲れるものがあった。
あたしは布団の上に横になって疲れを癒す。
「はあ、母さんたちにも困ったものだわ」
あたしにも大学の勉強があるし、浩介くんのために、その後のために、長期的な視野で動かないといけない。
「うーん……」
精神的な疲労が大きく、あたしは自然と瞼が閉じられ、そのまま何も考えずに意識が暗闇の中へと葬り去られていった。

「……ちゃん……見えてるよ……」
男の人の声がする。あれ？　あたし確か？
「優子ちゃん……てるよ……」
あれ？　浩介くんがあたしを呼んでる？
「ふぇ？」
「優子ちゃーん！　パンツ丸見えだよ！」
「え!?」
浩介くんの「パンツ丸見え」の声に瞼を開ける。
「うっ！」

あたしは部屋の明かりの眩しさに目を細めて腕で目を隠す。
あれ？　スカートに違和感が……
「きゃあ！」
顔を足元の方に向けると、ロングのスカートが真上までめくれていて、パンツ丸出しにさせられていた。
慌ててスカートをおさえ、浩介くんを睨み付ける。
「へへ、優子ちゃん、女の子女の子してててかわいい！」
あたしは勢いよく立ち上がってにやけた浩介くんの頬めがけて平手を伸ばす。
ぺちっ！
「浩介くんのえっち!!!」
あたしの力は弱いので、ビンタしても、浩介くんはびくともしない。
「えへへ、だって優子ちゃん、全然起きないんだもん」
「え!?」
確かにあたしは寝てたけど。
「もうすぐ夕御飯だよ」
「あ」
浩介くんが、スマホの画面を見せてくれる。
うん、確かに夕食の時間は近かった。
「もしかして、急いだ方がいい？」
「ああいや、まだちょっと時間あるよ。それにしても、やっぱり優子ちゃんの女の子らしい反応はかわいいよね」
「もー、おだてたってパンツ見せてあげないわよ！」
浩介くんに釘を指すように言ってつける。
「優子ちゃん」
「え!?」
浩介くんがやや真顔であたしを見つめてくる。
「パンツ見せるかどうかじゃなくて、パンツ見るかどうかは俺が決めるんだよ」
「な、何言ってるのよ!?」
突然の話に、あたしは動揺を隠せない。

「そら、もう一発！」
　ぶわっ！
「きゃあ！」
　浩介くんにスカートの裾をつままれ、長めのはずなのに一気に上までめくられてしまう。
「ほら、薄い水色っ！」
「うー！」
　あたしは、2回もスカートめくられてパンツ見られた上にパンツの色まで口に出されて、恥ずかしさのあまり、また浩介くんの頬に平手を構える。
　ぺちっ！
「浩介くんのえっち!!　恥ずかしいからやめてよ!!」
「またまた照れ隠ししちゃってー！　本当はパンツ見られて嬉しいくせに」
　浩介くんがしたり顔で必殺の文言を言う。
「うー！　それは言わない約束でしょ!?」
「あーあ、あの時の優子ちゃんかわいかったなあ……」
「もう！　恥ずかしいからやめてよ！」
　実はある日、お義母さんが買い物に遠くまで出掛けると言うことで、あたしたちが留守番になった時に、浩介くんが「忘れ物をした」と言って大学に引き返した。
　帰ったらすぐする約束にあたしはちょっとご機嫌ななめになって、浩介くんが帰ってくるまで前哨戦をすることにした。
　その時に、浩介くんにスカートめくりされてパンツ見られる妄想で興奮を高めていたら、浩介くんに一部始終を覗かれてしまった。
　というのも、「忘れ物した」というのが実は最初から嘘で、あたしは思いっきり罠に嵌められちゃったのだ。
　まあ浩介くんも浩介くんで、「夢でも優子ちゃんとしちゃったし、今でも優子ちゃんとする夢はよく見る」って言ってたし、おあいこよね。
「恥ずかしい思いでいつも興奮してるのに？」
　浩介くんが、またにやけた顔をする。

「あ、あたしだって四六時中発情期じゃないわ！」
　あたしも負けじと抗議をする。
「へいへい、でもああ言うのって深いところでの本心が出るからね。大好きな旦那にパンツを見られて恥ずかしい思いをしたいって言うのが、優子ちゃんの心の底だもの。俺はそれを受け入れるし、そういうのが好きな優子ちゃんに合わせてるだけだよ」
「むむむっ」
　浩介くんに完璧な理論を突きつけられて、あたしは反論できなくなってしまう。
　でもこれ、多分浩介くんに繰り返しされたせいであたしも愛する旦那に合わせようとして染み付いちゃったのよね。あーあ、恋愛って本当に惚れた方が負けよね。

「優子ちゃーん！　浩介ー！　ご飯よー！」
「はーい!!!」
　お義母さんの声がして、あたしたちは食卓へと向かう。
　大晦日の夕食は、いつも通りの食事だった。
「お昼に年越しそば食べちゃったものね」
「あはは……」
「優子、明日は朝ごはん、手伝ってもらうわよ」
　母さんが明日の予定について話してくる。
　明日はあたしも家事手伝いをするのは予定通り。
「うん」
「それにしても優子ちゃん、夫婦仲が良さそうね」
　お義母さんがややにやけついた表情で言う。
「え!?　どうしたの今更？　あたしと浩介くんがラブラブなのはいつものことじゃないの」
「あーうん、優子ちゃんの照れ隠しの声がここまで聞こえてきたわよ」
「っ～！」
　さっきのやり取りが聞かれていたことを知り、あたしは声も出なくなってしまう。

「本当に、仲が良さそうでよかったわ。本当に嫌ならグーで殴る音が聞こえてくるもんね」
母さんが安心しきった表情で話す。
「もうっ！　知らない！　いただきます！」
あたしは、これ以上墓穴を掘らないように、食事に集中することにした。

「うんうん、来年はもう２０２０年よね」
「うん、あたしたちもついに２０歳よね」
まあ、数年前に選挙権も１８歳になったし、酒は飲んじゃいけないと言うのがＴＳ病の「安全講習」で受けたことだし、タバコも吸うつもりはないから、正直２０歳で成人と言われても、全く自覚がない。多分、何にも変わらないとは思う。
「それよりも、俺はオリンピックが楽しみだな」
浩介くんがうまく食事を飲み込んですかさず会話に加わっていく。
古来から、「来年のことを言うと鬼が笑う」ということわざがあるけど、もう来年まで後６時間を切っていた。
つまり、来年とは遠い将来のことではないということでもある。
「ああ、難産ではあったが、いざ開催してしまえばみんな盛り上がるものだ」
いつも通り寡黙な父さんだけど、オリンピックは楽しみにしていたらしい。
確かに、オリンピックに際しては様々な問題があった。
それでも、開催に向けてこぎ着けたのは大きかった。
「前の東京五輪は、私たちは知らないのよね」
「まあな、５６年も前の話だからな」
永原先生とか比良さん余呉さんあたりなら、前回のオリンピックはもちろんのこと、それこそ近代オリンピックなら第１回から全て知ってるとは思うけど。
「そうねえ……どんな時代だったのかしら？」
母さんが遠い目をして言う。テレビもやはり、来年のオリンピック

についての話題が多い。
「永原先生によれば、治安も悪くて公害も多くて、あまりいい時代じゃなかったってさ」
「へー意外だわ。いかにも昔を懐かしみそうな人なのに」
　お義母さんも、永原先生のイメージは大体そんな感じらしいわね。
「あはは、多分生まれた時代が最悪だったせいじゃないかしら？　些細なことで大喧嘩になるしあっちこっちで復讐の連鎖が起きて死体があちこちに転がってたって言ってたし」
「あー、そう言えばそういう時代の生まれよね」
　お義母さんが苦笑いする。
「こら優子！　お食事中にそういうことを言うもんじゃありません！」
　母さんは張り切った口調であたしを叱りつける。
「はーい、ごめんなさい母さん」
「やっぱり、優子もまだまだ真の女子には遠いわね」
　今のは男子でもやっちゃいけないことだとは思うけどね。
「あはは、うん、女の子の修行に終わりは無いものね」
「そういうことよ、夫婦になったからって油断しちゃダメよ」
「うんわかってるわ」
「ならよろしい」
　母さんも母さんで変わらないわね。
　やっぱり、あたしは母さんには叶わないわ。

「「ごちそうさまでした!!!」」
「それじゃあ優子ちゃんからお風呂に入って、片付けは私たちがしておくわ」
「はーい」
　あたしは、大晦日に毎年流れている歌番組を尻目に、自室からパジャマを取り出してお風呂に入る。
　お風呂のレイアウトは懐かしくて、それだけでも感動した。
　あたしは浩介くんとのハラハラドキドキの夫婦生活の後、早めに布

団に入り、就寝することにした。さっき寝ていたので、あまり眠れなかったけど、静かな空間に除夜の鐘が響いていた。

# 五輪の年

何もない静かな空間に、ほんのりと朝日が入り込む。
元旦というのは、人々にとって新しい年を迎えると言う意味で、とても特別な一日になる。
けれども、地球にとっては何てことのない自転と公転を繰り返す時間の一部でしかない。
地球の自転により、あたしたちは太陽が登っているように見えるけど、実際には地球の動きで朝日が上る。
いや、太陽だって銀河の中を勝手気ままに動いているけど、宇宙の密度は極めて低く、星同士が衝突する何てことは宇宙でも極めて珍しい。
ちなみに、この地動説を大々的に発表して宗教裁判にかけられ、「それでも地球は回っている」と言ったのがかの有名な「ガリレオ・ガリレイ」で、彼は永原先生よりも年下だったりする。
今では地動説は一般に受け入れられている。
ともあれ、この広い宇宙の中で、地球人たちは特に理由もなく今日という1日を祝っていることになる。
「ふう」
隣には、浩介くんの姿は既に無かった。
今日は初詣で振袖姿になるから、まだパジャマのままでいいわね。元旦くらい、ゆっくりしたいし、一応、振袖だけは布団の上に出しておこう。
「おはよー」
テレビでは、威勢のいいアナウンサーの実況と共に、あたしたちと同年代の大学生たちが、長距離走を競いあっていた。沿道には何人もの人々が応援に駆けつけていた。
「あら優子ちゃんおはよう、パジャマのままなの？」
お義母さんがテレビの画面から目を離して言う。
「あーうん、どうせこの後振袖になるから」
「あ、そうだったわね」

あたしの指摘で、お義母さんも気付いた様子。
「ふふ、優子、着付けてもらうわよ」
「はーい」
母さんの目が光る。あれは間違いなく、良からぬことを考えている目付きだわ。
「ところで、振袖ってどんな風に着替えるんだ!?」
また浩介くんが、あたしの着替えを覗きたそうに言う。
「ダメよ、見せてあげないわ」
「ええ、大奥は男子禁制よ！　例え夫であっても立ち入ることはまかりならないわ！」
浩介くんのセリフに対して、母さんが「待ってました」とばかりに決め台詞のように言う。
それにしても「大奥」って表現はどうなのよ。
「そ、そういうものですか……」
さすがのセクハラ大王浩介くんも、大奥という表現にいささか気圧されているみたいね。
まあ、浩介くんみたいなのはこうでもしないと直らないとは思うけど。
「そうね。『女子更衣室』に男は入っちゃいけないでしょ？　そういうものよ」
「う、うん……」
まあ、女子更衣室に男が入ったら警察に捕まるものね。
「さ、優子ちゃん、ご飯手伝ってね」
「はーい」
母さんに呼びつけられて、あたしは料理を手伝う。
「ふふ、しばらく見ないうちにずいぶん上達したわね優子」
「えへへ」
あたしがこの家で食事を作るのは、浩介くんとの結婚式の日の朝の時以来で、その時もあたしは、両親の要望で朝食を作った。
「優子、火加減に注意してね」

「あ、うん！」
母さんがあたしに注意を促してくれる。
いけないいけない、篠原家の感覚に慣れすぎちゃってて、こっちのＩＨのことを忘れてたわ。
電子レンジの方も、ワット数などを使って慎重に調整していく。とにかく感覚を思い出さないと。
「ふふ、やっぱり優子はうまいわね」
「えへへ、ありがとう母さん」
突然の誉め言葉に、あたしはちょっとだけ照れ笑いを浮かべる。
「うん、優子がきちんと女の子の修行を続けていてよかったわ」
母さんも、一安心という感じで言う。
「うちのお義母さんはどうだった？」
あたしはお義母さんの方に話を移す。
「うん、一昨年に夏でキャンプ場に行った時と比べると上達してるけど、まだまだよ」
「そ、そうですか……」
一瞬、『一昨年』と言われて違和感を感じるが、今日が元旦なのを思いだし、心の中で平衡感覚を取り戻す。
概ね毎年１ヶ月は、この違和感と戦わないといけないのよね。
「まあ、優子の教え方もあるとは思うけど、少しずつ上達させれば大丈夫よ」
「はい」
「あのー、全て聞こえてますよー」
お義母さんからのお達しが入る。
「あ、あはは。ごめんなさい」
「いいのよ。上達してるって評価をもらえるだけで十分だわ」
お義母さんが心の広い人でよかったわ。
ともあれ、ほぼ９ヶ月ぶりの母さんと一緒に作った朝ごはんが出来上がり、食卓へと持っていく。
６人分はとにかく数が多いけど、浩介くんには手伝わせないことにする。

「よし、これで全部ね」
「優子、どうして浩介くんに手伝わせなかったの？」
　母さんが不思議そうな顔で言う。
「え!?　ああいやその……も、もちろん、手伝って欲しい時には手伝って貰ってるわよ！」
　あたしはちょっとだけ目が泳いでしまう。
「そう？　ならいいけど」
「うんうん、今は何となくそういう気分じゃないってだけよ。本当に忙しい時は浩介くんも手伝ってくれてるわ！」
　と、とにかく家事手伝いをして貰ったら、ごほうびにスカートをめくらせてあげる約束があるだなんて言えないわ。
「何か怪しいわね」
　お義母さんからも、疑念の目を向けられてしまう。
「大丈夫大丈夫、何でもないからさ、ほらっ」
　浩介くんも、バレてしまうのは嫌だろうから、必死でごまかしてくれる。
「そう？　まあその様子だと、どちらかって言うと『仲が良すぎるが故の悩み』って感じみたいね」
　母さんも、とりあえず一旦は引き下がってくれてよかったわ。
「さあここで、抜いた！　抜きました！」
　テレビの陸上競技の様子をバックに、あたしたちは朝食を済ませた。

「さて、２人とも、振袖は持ってきたわね」
　朝食後、あたしたちはお皿を片付けた後にあたしの部屋で母さんの着付け教室を習うことになっている。
　あたしは、もう何度か経験があるので、早速パジャマを脱いで全裸になる。
　うー、実母と義母のいる前で肌をさらすのって思った以上に恥ずかしいわね。
　まあ、母さんもお義母さんも脱いでいるんだけど。おばさんだし別

に問題ないよね。
「あー、それはダメです」
「え!?」
母さんの指摘に、お義母さんが驚く。
あたしは和服の下着に当たる襦袢を持っているので、胸に晒しを巻いた上でそれを着ているわけだけど、お義母さんは持ってないらしく、いつもの下着に振袖を着ようとして、案の定母さんにとがめられた。
「ダメですよ。和服は洋服の下着の上に着るものじゃなくて、今あたしが着てるのが和服の下着になるのよ」
晒を巻き終わり、襦袢姿のあたしが母さんに加勢する形で注意する。
「えーでも、そんなの持ってないわ」
「なら、何もつけないでいるのよ」
「うっ、確かにそうよね」
お義母さんは納得した感じで、下着を脱いでそのまま直に着込み始めた。
「帯はそうそう……優子うまいわね」
「ありがとう、あ、でもここは無理みたい」
この振袖は、1人で着るのは難しくて、どこかで手伝ってもらう必要がある。むしろどうして母さんは1人で着込めるのかは謎だわ。
ともあれ、3人とも何とか振袖姿になる事が出来た。
やはり3人揃うと見事ね。
「何か、案外落ち着きますね」
お義母さんがそう感想を述べる。
まあ、どこかの悪代官みたいに「よいではないかよいではないか」と回されたりでもしない限り、まず大丈夫なくらいガードは固い。
「来年からは、優子ちゃんが持ってたのを持っていきます」
お義母さんもどうやら覚えたみたいね。
ふふ、まるで3年前の夏祭りの時のあたしみたい。
でもあの時は浴衣だったから心許なさは何倍にもなったけどね。

「うん、洋服用の下着の上に着込むと身体のラインが出てみっともないのよ」
　あたしが事務的な解説を付け加える。
「あーうん、優子ちゃんも、何だかいつもより胸が小さく見えるわね」
「うん、和服は晒し巻いて胸を潰すのよ。ちょっとだけ憂鬱だわ」
「あー、優子ちゃんは胸が自慢ポイントだものね」
「ふふ、じゃあ行きましょう」
　母さんの掛け声と共に、あたしたちはリビングに移動する。
「お、女性陣の出番だな」
　書斎に籠り気味だった父さんも含め、３人とも和服姿になっていた。
「お待たせ」
「おー優子ちゃんかわいいね」
　浩介くんもご機嫌はいい。
「うん、ありがとう」
　両親たちも、それぞれパートナーごとにペアになる。
　いつもと違う格好に、それぞれ若い時を思い出しているのかしら？
　……まあいいわ。
「じゃあ行きましょうか」
　母さんの掛け声と共に家を出る。
　６人で横に並んで歩くのはさすがに迷惑なので、２人１列で並んで歩く。
「それでね、浩介くん」
「あはは、いい話だな」
　それぞれが思い思いに雑談をする。
　初詣への道のりは、やはり去年とほぼ同じ。
「それでさ、オリンピックだけど」
「誰を応援する？」
　道行く人たちの話題を見ていると、２０２０年の元旦と言うこともあって、オリンピックの話題も多かった。

オリンピックが東京の決まったときは、あたしもまだ優一で、「大学生になったらオリンピックかあ」という、何となくぼんやりとした感じでしかなかった。
その後、会場の問題などもあったけど、何とか開催にこぎ着けることができた。
駅を通りすぎ、神社への道へ向かい、去年一昨年と同じように、初詣を終える。
「ふう、少し休憩しようかしら？」
「うん」
あたしが疲れているのを察してくれた母さんが、休憩を提案してくれる。
だけど、休憩所には黒山の人だかりができていた。
「あれ？　何かしら？」
一昨年も、蓬莱教授が来て、人だかりになったこともある。
うーん、やっぱり遠くからじゃ見えないわね。

「あれ？　こっちにいるのも優子ちゃんじゃね？」
「え!?　いや待て待て、優子ちゃんはこんなに胸小さくねえだろ！」
「いやでも顔そっくりじゃん！　あの美貌、見間違えるか普通？」
「でもよお、顔と同じくらい胸だって目立つじゃん」

げっ、あたしに関する噂まで広がっちゃってる。
晒しを巻いておいてよかったわ。
「なあ、一体誰が来てるんだ？」
浩介くんが、あたしの代わりに通行人に聞いてきてくれる。
「ああ、蓬莱教授と永原さんだよ。２人って旧知の仲だったらしいぜ」
「ちょっと通してくれるかしら？」
あたしと浩介くんで、人混みの中を進む。
輪の中心には、蓬莱教授と永原先生、さらに何故か桂子ちゃんまでいた。
「あれ？　桂子ちゃんまでどうしたの？」

「あ、優子ちゃんに浩介じゃん！　実は神社の前で2人と落ち合って、一緒に初詣し終わって帰ろうとしたら捕まっちゃって」
「面目無い。瀬田君あたりに、警備役を頼むべきだった」
　蓬莱教授も、珍しく困り顔で話す。
「あの、戦国時代ってどういう生活だったんですか？」
「江戸城では大奥で働いていたんですか？　将軍としちゃったりしたんですか!?」
「あのー、私一応は元男だし、東照大権現様はもとよりその父君より年上だったので――」
　永原先生の方は、入れ替わり立ち替わりで人々から捕まっている。
「浮世絵、素晴らしかったです」
「もしかして今でも痴漢されたいとか思ってるんですか？」
「いいえ今は違います！　触ったら警察に通報しますよ！」
　ぶしつけな質問にだけ、答えているという感じ。
「永原会長！」
　あたしが、助け船を出してあげる。
「あ、篠原さん、ちょうどいいところに来たわ」
「とりあえず3人とも、ここから出ましょう。輪の外であたしと浩介くんの両親が来ています」
「ええ、分かったわ」

「どいてどいて！」
　列の先頭に浩介くん、最後尾にあたしで縦一列になり、人だかりから脱出する。
「はーい、どいてね」
　あたしは、痴漢に警戒しつつ、何とか脱出に成功した。
「あ、2人とも無事でした？　あら、桂子ちゃんに先生に蓬莱さん！　もしかして人だかりの中って？」
　母さんがあたしたちを迎えてくれる。
「うん、この3人だったわ。とりあえず、早急に神社から脱出しましょう」

「分かったわ」
　あたしの両親と浩介くんの両親が４隅を固めつつ、四角形の形であたしたちは迅速に神社から脱出した。
「ふー、ありがとう優子ちゃん」
「うん、桂子ちゃん災難だったわね」
「うん」
　桂子ちゃんは、完全に巻き込まれた感じでかわいそうだわ。
「やれやれ、これじゃろくに出掛けることもできねや」
　蓬莱教授も、うんざりした感じで言う。
「今後の研究に支障がでなきゃいいんですけど」
「いやはや全くだ。俺は芸能人ではなく、あくまでも学者だからな」
　確かに有名人と言っても、蓬莱教授はあくまで大学教授が本業であって、それ以外のことはするつもりはない。
　ともあれ、研究に支障が出るならまた蓬莱教授は支援金の一部を警備費に充てる必要に迫られるわね。
「私だって芸能人じゃなくて、学校の先生よ」
　永原先生は慌てていたのか、久しぶりに「先生」の発音が「しぇんしぇい」になっていた。
「そうよね」
　永原先生は時折発音が昔の日本語になって、今まで特に気にしてはいなかったけど今のは結構露骨で目立っている。
「あーあ、これじゃろくに誕生日も祝えないわね」
「あー、そう言えばそうだったわね」
　桂子ちゃんが思い出したように言う。
　永原先生は生まれた年までしか分からず、どんな季節に生まれたかさえ定かではない。
　１月１日は、あくまでも仮の誕生日ではあるけど、それでも何百回と迎えていれば、それなりに愛着があるのかもしれないわね。
　ともあれ、今日は２０２０年の始まりとともに、永原先生にとっては５０２歳となった日でもある。
「じゃあ、私は蓬莱先生と帰るわね」

「うむ」
「はい、お気をつけて」
「ああ、分かっている」
蓬莱教授もうんざりしていたのか、あたしの「お気をつけて」にも、素直に返事をして家に戻っていった。
「あたしたちも帰ろうかしら？」
「ええ、そうしましょう」
残りの7人で帰り道を行く。
「じゃあ私、電車乗るから」
駅で桂子ちゃんがそう切り出してきた。
「え!?　桂子ちゃん家は――」
「彼が風邪引いちゃったのよ。昨日から私は看病よ」
桂子ちゃんが笑顔で言う。
「年末年始なのに大変だな」
「うん、まあ私の天体観測で冬の夜にたくさん連れ出しちゃったせいもあるから、そのお詫びも含めてね」
桂子ちゃんはかなりリラックスした表情で言う。
「桂子ちゃん、健気だね」
母さんが桂子ちゃんを誉める。
「ありがとう。でも、まだまだ健気さでは優子ちゃんに負けちゃうかも」
桂子ちゃんが謙遜して言う。
でも立派よね。桂子ちゃん。
「うーん、まあとにかく、今は彼のところに行ってあげるといいわ」
「うん、それじゃあね」
桂子ちゃんが、改札の奥に消えていく。
そしてあたしたちも、順番に家路につき、振袖姿から普段着に変わった。
ふう、終わった終わった。
毎年の恒例行事になっている元旦だけど、今年はあたしの実家で過ごす。

そして、あたしは母さんとともに、昼食を手伝う。
昼食は元旦らしく、おせち料理が振る舞われた。これについては、お義母さんはもちろん、あたしもまだまだ修行が足りないため、母さんの指導を受けながら作ることになった。
テレビでは相変わらず、大学生による長距離リレーの実況が行われていた。これ、結構長いのよね。
「優一の持久力だったら、もしかしたらこいつら並みだったかもなあ」
「さすがに無理よ」
浩介くんがそう呟く。
浩介くんは普段からかなり体を鍛えているけどそんな浩介くんと互角の身体能力が優一にはあった。
中でも持久走や２０メートルシャトルランでは優一の頃のあたしは浩介くんにも圧勝していて、陸上部にも勝っていたくらいだった。
とはいえ、小谷学園は弱小陸上部。こんな全国的な大会に出る人に勝てるとは思えないのよね。
「まあ、そうかもな」
あたしたちは、少し休んで日が沈まないうちに帰ることになっている。
あたしは早めに元自室に戻って荷物をまとめることにする。
ちゃんと畳んで入れてっと。
あたしが荷物をまとめ終わると、今度は浩介くんの番になる。
「よし、こんな所だな」
浩介くんの荷物まとめはあたしに比べてかなり短くて済む。
時をほぼ同じくして、義両親たちも荷物をまとめ終わったので、あたしたちは玄関に移動する。
「それじゃあ、あたしたち帰るわね」
「ええ、近いんだから、遠慮しないで気軽に帰ってきていいのよ」
母さんが「また歓迎する」という感じで言う。
「あーうん、でも特に帰る理由もないわね」
「そう？　それならよかったわ」
母さんも、あたしの幸せのことを考えてくれている。

そう言えば、妊娠の催促以外では、昨日今日の母さんは比較的真面目だった。
もしかしたら、あたしたちのことをそれなりに考えてくれてもことなのかもしれないわね。
あたしは実家に別れを告げ、電車に乗り、再び浩介くんの家に戻ってきた。
そこからは、いつも通りの冬休みの毎日になった。
大学はまた、1月から始まる。後期の講義も、全てきちんとついていけている。
ともかく、蓬莱教授の研究室で何があるのか？
今はそれが関心事だった。

## 夫婦のバレンタイン

冬の講義は、移動中の寒さとの戦いでもある。

小谷学園に在学中はミニスカートだったので、ストッキングを使って防寒対策をしていたけど、今は足元まで伸びるレギンスなどに頼ることもできる他、コートに関しては小谷学園のものをそのまま流用もでき

たので、防寒対策という意味では高校時代よりも選択肢は広がったのは事実なのよね。

まあ制服も制服で、選ぶ必要がない利便性が高いけどね。

「ふー、今日の実験も無事に終わったわね」

「ああ、今週のレポートも、うまく提出できそうだ」

浩介くんも、大学の講義は順調についていけている。

近くにあたしが居ることが、いい刺激になっているらしく、浩介くんも成績は悪くない状態で推移していると思う。とはいえ、大学の場合、定期試験くらいしか成績の判断材料はないけどね。

とにかく、大学生活の中で一番大変なのは実験だった。

さて、この講義と実験とレポート提出が揃った科目は、必修なので出来なければどこかで留年が確定すると言う恐ろしい科目だけど、その分試験はなしで出席点も高く、またレポートが再提出になった場合でも、どこがどう悪いのか懇切丁寧に説明してくれるらしく、またいいレポートでもさらにアドバイスをくれるなど、至れり尽くせりの教科でもある。

蓬莱教授によれば、「2年次以降に向けての予習的な意味合いの科目」とのことで、レポートの書き方出し方は、今後ともによく学んでおきたいわね。

ちなみに、あたしは前期のこの教科は「優」、つまりSを貰えた。

蓬莱教授は、滅多にこれをつけないと言われていて（その代わりやることやれば不可も少ない）、あたしのことを高く評価してくれているのは事実みたいね。

ともあれ、今の調子を来年以降も続けていきたいわね。

さて、そんな冬も一段と厳しさを増してきた2月11日のこと。
あたしは天文部で桂子ちゃんからこんな相談を受けた。
「彼にチョコレートを作ってあげたいの。今まで義理だったから全部買って済ませてたけど手作りってどうしようかしら？」
あたしは、桂子ちゃんの家に行って、一緒にチョコレートを作ることにした。この日は火曜日だけど祝日なので大学は休みになっていた。
約束の日は生理の予定日と重なってしまったけど、幸い終わりかけが見込まれたのでよかったわ。

「いい？　バレンタインデーは甘いチョコレートがいいわよ」
当日、桂子ちゃんに手作りチョコレートの作り方を教えながら、あたしも自分のを作る。
「やっぱり？」
桂子ちゃんが交ぜる手を止めてこちらを向いて話しかけてくる。
「うん、甘い日にはとびきり甘いものよ」
甘くすることで、気持ちが伝わることもあるものね。
「そうねえ……」
桂子ちゃんは、まだちょっとだけ心配そうな顔をする。
どうも、桂子ちゃんには他に不安点があるみたいね。
「どうしたの桂子ちゃん？　元気ないわね」
あたしも少し気になるように話しかける。
「うん、実は今年のバレンタインデー、あの日と重なっちゃいそうなのよ」
桂子ちゃんが小声であたしに告白してくる。
あーなるほどね。
「もしかして、去年のあたしと同じ？」
「うん、優子ちゃんはどうだった？」
やっぱり、去年のあたしがバレンタインデーと生理とが重なってしまったことは、桂子ちゃんの印象にも残っていたらしい。
「そりゃあもう大変だったわ。浩介くん、あたしのアレの様子に興味

津々だったわ」
あの時も浩介くんがちょっと暴走気味だったものね。
「へー、どんな風に？」
桂子ちゃんも興味津々で聞いてくる。
達也さんの参考になるかは分からないけど、話すのもいいわね。
「今だから言えるけど屋上でパンツ脱がされちゃったわよ」
「うげえ、やっぱ男ってそういうものなの？」
あたしが当時のことを話すと、桂子ちゃんも多少身構えた感じで言う。
「まあほら、自分の性別にないものって言うのは、どうしても興味が出て、好きになっちゃうものらしいのよ。ほら、あたしたちが男の子についてあたしたちにないアレが大好きなのと同じでさ」
「あはは、確かにあたしもそれは好きだし……うん、そう考えるとお互い様よね……」
やっぱり、桂子ちゃんも大好きらしい。
まあ、女の子なんだから当たり前よね。
「まあ、あんまり露骨に拒否しちゃうのもよくないわよ。ただ、辛いから、懇願するように言うといいわよ」
「うん、言われなくても分かってるわ」
あたしのアドバイスに対して、桂子ちゃんも当然だという表情で答える。
やっぱり桂子ちゃんは、男を心得ているわね。
「そう言えば、今日も優子ちゃんもしかして？」
「あーうん、大変だったのは昨日までぐらいだから、あまり心配しなくて大丈夫だわ」
「そう、それはよかったわ」
あたしの方の生理も、やっぱり桂子ちゃんに見抜かれていたわね。
ともあれ、あたしたちはチョコレート作りを再開し、ついでに義理チョコもいくつか購入した。
こうして、金曜日にあたしたちはバレンタインデーの当日を迎える

ことになった。
大学生になって最初のバレンタインデーであると同時に、人妻としても初めてのバレンタインデーでもある。
佐和山大学は割合として男子学生が多いため、何も貰えないで終わってしまう人も多い。
高校までと違ってクラスもないので、あたしが渡す相手は浩介くんの他、桂子ちゃんと龍香ちゃん、そして義両親の5人だけになった。
何ももらえない男子学生が多いのも、大学という空間独特の特徴があったのだとは思う。
「優子ちゃん、私たち以外の誰にバレンタインチョコあげるの？」
身なりを整え、大学に行く前の朝、「義」両親に文字通りの「義理」チョコを渡すと、お義母さんから質問が飛んできた。
「えっと、龍香ちゃんと桂子ちゃん」
「それだけ？」
お義母さんが驚いたように言う。
「うん、大学はいつも浩介くんと一緒だし」
「ダメよ！　優子ちゃん、家が近いんだから実の両親にも渡してあげなさい！」
お義母さんに叱られることは滅多にない。
でも今回は怒られてしまった。
「う、うん。分かったわ」
「大学終わったら、帰りに買っていきなさい」
お義母さんからあたしに対して司令が飛ぶ。
家事ではあたしが主導権を握ることも多いので、結構珍しい風景なのよね。
「はーい……」
ちょっとだけ出費が増えるけど、仕方ないわね。
確かに、母さんたちに用意してなかったのは失敗だったと思うし。
「優子ちゃん、そろそろ行くよ」
「あ、はーい！　お義母さん、じゃあ行ってくるわね」
浩介くんに呼ばれ、あたしは少し急いで準備する。

「行ってらっしゃーい」
お義母さんに見送られて、あたしたちはいつものように大学へと向かっていった。

「龍香ちゃーん！」
午前の講義が終わってお昼休み、あたしは食堂で龍香ちゃんを捕まえてバレンタインデーチョコを渡す。
龍香ちゃんは「ありがとうございます！」と言うと、その場で食べ始めた。
食べ終わるとあたしにも義理チョコをくれたので、あたしもその場で食べることにした。今日の昼食は軽めでいいわね。
桂子ちゃんには放課後の天文部で会ったので、そこで渡し、最後にその場で浩介くんにもチョコレートを渡す。
ちなみに、桂子ちゃんはいつもの時以上に気分が悪そうで、「集まってもらって悪いけど解散にするわ」と言って天文部は5分で終わってしまった。
達也さんとのバレンタインデーがちょっと心配だけど、あたしはうまくいくように祈るしか無いわね。
「俺たちも帰るか」
「うん、でもちょっと寄ってっていいかしら？」
お義母さんからの指令で、「実」両親に「義理」チョコを買って、渡す必要がある。
「あー、お袋に言われたチョコレートか。じゃあ俺、先帰ってていいか？」
「うん」
あたしは浩介くんと別れて単独行動になる。
チョコレートを売っているコンビニへ行き、適当に甘めのチョコレートを2つ買う。
「ふう」
少し減っていたＩＣカードの残額をチャージしてから、あたしは両親の実家へと向かった。

あたしにとっては、元旦の時以来の実家への帰宅となった。
ピンポーン！
「はーい！」
呼び鈴を押すと、中から母さんの声が聞こえてくる。
「あら優子じゃないの、どうしたの？」
母さんは突然の訪問に驚いている様子だった。
「あーうん、父さんと母さんにチョコレートを渡そうと思って」
そう言いながら、あたしは鞄からチョコレートを出そうとする。
「あら？　そう言えば今日だったのね。ありがとう。お父さーん！　優子がチョコレートくれたわよー！」
母さんがあたしのチョコレートを受け取ると家の中に向けて駆け込みながら父さんを呼ぶ。
「おう優子、ありがとう。上がってくれ。お茶でも飲んでいきなさい」
すると父さんも、すぐに玄関に駆けつけてくれた。
やっぱりあたし、実家からも愛されているわね。毒親に育ったら、こうはならなかったもの。
「あ、はい。ありがとうございます」
本当はそのまま帰るつもりだったけど、せっかくの好意なので受け取っていく。
あたしはリビングで椅子に座る。
前回来たのは元旦の日で、まだ1ヶ月半しか経ってないけど、それでも懐かしく感じてしまう。
もちろん、浩介くんと毎日いる今の方が幸せなのは確かで、そこはブレるつもりはない。
その上、この家には優一の思い出も残っているから、懐かしく感じたとしても、悪い思い出も残っている。
ここには最愛の浩介くんがいない以上、やっぱり早く帰りたいと思ってしまう。
うん、やっぱりあたしは、もう「篠原優子」なのね。
「はい、優子」
「ありがとう母さん」

暖かい緑茶が振る舞われ、あたしはゆっくりとお茶を飲み干した。
「じゃああたし、帰るわね」
「うん、気を付けるんだぞ」
父さんが釘を指す。
「分かってるわ。こっちのことは心配しなくていいわよ」
あたしの両親も、あたしたちがいなくなっても大丈夫だと改めて分かる。
あたしは2人の様子に安心して、この家を後にする。そして、浩介くんに遅れて、あたしは帰るべき家に帰った。

「ただいまー」
「優子ちゃんお帰りなさい。両親の方は大丈夫だった？」
お義母さんが出迎えてくれる。
「うん、お茶を出されただけだったわ」
「そう、お疲れ様。ご飯まで休んでてね」
「うん」
お義母さんはあたしのことをとてもよくしてくれている。
もしかして、美人な嫁に嫉妬する意地悪な姑って都市伝説じゃないかしら？　そう思えてしまうくらいお義母さんは温厚な性格だった。
「ふー！」
やっとあたしにも、休息の時が訪れる。
浩介くん、バレンタインデーチョコ気に入ってくれたかしら？
って杞憂よね。今までも渡してきたし、夫婦になって劇的に変わるわけじゃないもの。
実際に、夕食の時には「今年も優子ちゃんのチョコレートがおいしかった」って言ってくれたものね。
そしてその日の夜、あたしは浩介くんと、チョコレートよりも甘い夜を過ごした。
金曜日で明日明後日が土日だったこともあったけど、いつも以上に浩介くんに気合が入っていたようにも感じた。気持ちよさのあまり気絶させられちゃうのは、何回されても慣れないわね。

……まあ、スカートめくられてパンツ見られちゃうのも同じだけど、慣れたくもないというのが本音だったりするけどね。
やっぱり、バレンタインデーが幸せな日になったのも、あたしが女の子になってからだわ。

さて、実はバレンタインデーと並行して行われていたイベントに、期末試験があった。毎年２月１１日が祝日になるのでその振り替えとして２月１０日から１７日の月曜日までが試験期間だった。
あたしたちにとっては２回目の試験で、最初の夏よりは少々リラックスして受けることが出来た。
蓬莱教授からは「１年お疲れ様、どうやら、俺の融通がなくてもいい成績でよかった。まあ、仮に留年しても俺の研究室になるから安心してくれ」とのことだった。
まあ、学費のこともあるから、あたしとしても留年するつもりは毛頭ないわ。
それにしても、忙しい１年だったわ。
世の中には、「大学生になると暇になる」何ていう人が多いけど、確かに夏休みみたいな長期休暇は暇だけど普段は結構レポートとか含めて忙しいわ。
試験で全部決まるよりはよっぽどいいとは思うんだけどね。

「ねえ優子ちゃん、春休みはどうする？」
試験とバレンタインデーが全て終わった翌日、春休みに入ると、浩介くんが開口一番そう言ってきた。
「春休み？　決まっているわよ」
あたしが勢い良く断言する。
「え!?」
あまりに勢いが良かったのか、浩介くんが面を食らって驚いているわね。
「もう！　結婚記念日に決まってるわよ！」
「うっ、そうだったごめんごめん」

春休み中に来る３月１６日、それがあたしたちの結婚記念日。
特に特別なことがあったわけではない。ただ、去年小谷学園の卒業式だったから、一気に人生を変えるという意味で選んだに過ぎなかった。
それでも、特別な１日であることには間違いない。
「結婚記念日、どうしようかしら？」
「うん、久々にデートらしいデートしたいかな？」
「うん、あたしも」
毎日同居していると、なんだか毎日がデートって感じだけど、たまには以前のようにデートしてみるのも悪くないわね。あたしと浩介くんは早速、結婚記念日について考え始めることにした。

# 久々の再会

今日は3月15日日曜日、明日は結婚記念日だけど、その前に同窓会というものがある。

同窓会は3年1組卒業生で作るＳＮＳで周知され、あたしたちはその予定を知ることになった。

ちなみに、同窓会の幹事は恵美ちゃんが勤めてくれることになった。

どうも今シーズン得たテニスの賞金で同窓会を開いてくれるらしい。場所は小谷学園近くの焼肉屋さんで、永原先生を含めてほぼ全員が参加してくれる運びになった。

ちなみにクラスメイトたちとは、卒業生ＳＮＳだけではなく、協会のホームページにある会員専用掲示板でも交流があって、去年の夏頃まで一悶着あったときにも色々アドバイスをもらったりした。

直接会うきっかけこそ、同じ佐和山に進んだクラスメイトを含め減っちゃったけど、それでもこうやって太いパイプを維持している。

クラスメイトたちが会員になったことで、また既に卒業をした後と言うことで、あたしがＴＳ病で倒れた時や、復学した時の第一印象を協会に話すことができた。

やっぱり、あの時はクラスメイトたちも最初は別人だと思ったし、知識などから同一人物だと分かった後でも、外見はもちろん、中身も似ても似つかなくなっていてとても困惑したと言う。特に球技大会の時にあたしが泣いたのは、高月くんや浩介くんだけでなく、他の男子にも極めて衝撃的な出来事だったという。

こうしたクラスメイトたちの本音や反応は、多く協会の財産となった。

そういう意味でも、あたしのクラスメイトたちも、後に続く患者たちの負担軽減に貢献したと言えるだろう。

「優子ちゃん、着替え終わった？」

浩介くんがドア越しに語りかけてくれる。

「うん、入っていいわよ」

あたしの私服は、赤のトップスに赤の巻きスカート。そしてねこさんのぬいぐるみさんを抱くスタイル。
幼さを最大限に出してこそ、あたしは健在ぶりをアピールできると考えていたから、ぬいぐるみさんを持ちながら歩くのは、恥ずかしくなかった。
「優子ちゃん、やっぱりその服かわいいよね」
「えへへ、ありがとう浩介くん。じゃあ行きましょう」
「ああ」
同窓会にはぬいぐるみさん以外は特に持ち物はないので、あたしは財布だけをポケットに入れていく。

「高月、田村、安曇川に志賀、あいつらどうしてるかな？」
電車の中で浩介くんが話しかけてくる。やはり、しばらく会わないと気になっちゃうわよね。
「恵美ちゃんはよくニュースに出てくるけど、他の子はどうかしら？」
「元気にしているといいな」
世間的には、恵美ちゃんがこのクラスの卒業生の中では一番の有名人で通っているけど、恵美ちゃんが人類最高齢でもある永原先生のクラスだったということまではほとんど知られていない。
一方で、世間に与えている影響力という意味では、あたしは恵美ちゃんでさえ、１００倍にして勝ると自負している。
「そうね、でも恵美ちゃんより、あたしたちの方が影響力大きいわよね」
「だろうなあ……」
以前、浩介くんがスポーツアカデミーからしつこいスカウトを受けたことがある。
何を隠そう僅か１ヶ月の練習で恵美ちゃんを女子がしない５セットとはいえ、テニスで負かしたから。男女の差が大きいと言っても、やはり浩介くんに特別な才能がなければ出来ないことでもある。
その時、浩介くんは断る口実として、「スポーツで世界ランキング１位になるよりも、蓬莱教授の研究に参加する方が世間への影響力が大

きい」と言った。
　そう言う意味では、浩介くんはともかく、蓬莱教授の研究に貢献しているあたしは、世間的な知名度では恵美ちゃんに負けていても、世界に与えている影響力ではテニスやゴルフの世界ランキング１位よりも、いやサッカーで世界一有名な選手よりも大きいと思っている。
　それくらい、ＴＳ病以外の人間も不老にすると言うのは大きいことだから。
「それどころか、今のテニスの世界ランキング１位と比べたって、あたしたちの方が影響力が大きいわよ」
　まあ、あたしだってインターネットではそこそこの有名人だけどね。
「あー、俺はともかく、優子ちゃんは間違いなくそうだろうなあ」
　あたしは協会の正会員として、実際に「明日の会」を潰し、また世界のフェミ団体も、あたしたちに完全敗北して以降、世界各地で性役割の重要性が急速に再評価され始めている。
　そう言う意味では、あたしのあの声明は、間違いなく億単位の人間に影響を与えたと思う。
　これはもう、スポーツでどんな偉業を成し遂げたとしても、到底できないことだとあたしは思う。
　やはり、「両方の性別を実際に経験した」というのは、大きな説得力になることは確かだった。
「うん、あたしの提案で出した声明のお陰で、世界中でフェミ団体が大打撃を受けているみたいよ。ボールを打ち合うだけのテニスじゃどうやってもそんな風に社会の価値観を変えることなんてできないじゃない？」
「ああ。だろうなあ。永原先生なんかはもっとすごいだろうね」
　そう言う意味では、あたし以上に会長たる永原先生が世界に与えた影響は大きい。
　実際、江戸城では好むと好まざるとに関わらず、歴代将軍たちの政治に大きな影響を与えてきたと思うから、５０２年の人生だって決して細いものじゃない。

「うん、あたしたち以前から、蓬莱教授の実験を支えていたものね」
まあ、本格協力する前は、取引材料と言ったほうが正しかったけど。
「多分、それ以外の学問にも影響与えるんじゃねえか？　例の鑑定番組もあるしさ」
「あー、そうよね」
恐らく「江戸城での日記」と「柳ヶ瀬まつ一代記」も、今後学会に大きな影響を与えて行くと思う。
ちなみに、美術品の数々は、永原先生が再び所有していて、保存方法については美術館の人から指導を受けた。
また、「江戸城の日記」と「柳ヶ瀬まつ一代記」については、大学の方で原本を電子化し、続いて文字にして現代語訳もして、データベースにもするという。
特に「江戸城の日記」と「柳ヶ瀬まつ一代記」の最初の巻は、作者が永原先生本人なので、著作権が消滅していないことになる。
どうやら、その辺りの問題の処理もあったらしい。永原先生本人は「日記そのものはともかく、文章の内容は公の所有物なので自由にしていい」とのことだったけどね。
ちなみに、永原先生の所有物について、国宝や重要文化財には、まだ指定されていない。
世間では、「永原マキノの七大国宝」として「江戸城の日記」、「柳ヶ瀬まつ一代記」、「吉良上野介の着物」、「徳川吉宗贈の茶器」、「富嶽三十六景初版」、「東海道五十三次初版」、「歌川広重の肉筆画」として、これらを国宝に指定するように呼びかけているという。
もっとも、「富嶽三十六景」と「東海道五十三次」については、重要文化財止まりで、別に大名から譲り受けたもので代える意見が多いみたいだけど。

ともあれ、あたしたちは駅についたら電車を降りて、集合場所へと行く。
するとそこには、恵美ちゃんが数人の男女に囲まれていた。
「恵美ちゃん、久しぶり」

人混みをかき分け、あたしが話しかける。
「おう、優子！　１年ぶりだな！　元気にしてたか⁉　にしても優子は相変わらず少女趣味だな」
恵美ちゃんは相変わらず豪快な口調で話す。体格は、小谷学園にいた頃よりだいぶがっしりしている気がするけど。
どうやら、この１年でかなり自信がついたらしいわね。
「うん、あたしは元気よ。恵美ちゃんこそ、来シーズンはグランドスラムに出場するの？」
「ああ、もうすぐあたいのランクで予選に進めそうなんだ」
プロになると言っても、やはり最初は一番下でポイントを得ないといけないらしい。
去年は国内やアジアの大会が中心になったと言う。
とはいえ、最下部の大会では恵美ちゃんはほぼ敵無しだったのも事実。上の大会で壁にぶち当たっていると言っても、まだ１０代なので延びしろは抜群でもある。
「それは良かったわ」
「でだ、折り入って２人にお願いがあるんだ」
恵美ちゃんがあたしたちにへりくだるように言う。
「え？　恵美ちゃんが珍しいわね」
まあ、何を求めているかは大体想像つくけど。
「ああ」
「あんたたちの大学の蓬莱教授ってのが作った『蓬莱の薬』、あれをあたいにも分けてくれねえか？」
恵美ちゃんの目的は、予想通りだった。
「え⁉　蓬莱の薬を⁉　田村が⁉」
一方、浩介くんは驚いているみたいね。
「ああ。今はいいが、２０代になっちまったら体の成長は殆ど止まっちまう。しばらくは技術の蓄積でなんとかなるが、３０代になるとそれもカバーしきれなくなってくるんだ」
「う、うん」
言いたいことが分かってきたわ。

「だからあたいは、ずっと世界一じゃねえと気が済まねえんだ。そのためには、蓬莱の薬がどうしても必要なんだ！　もちろん、蓬莱教授の同意は必要だろうけど、よ」
「んー」
　浩介くんが唸っている。
「その件については、あたしたちだけでは決められないわ。とりあえず、永原先生と４人でまずは話しましょう」
　蓬莱教授本人を呼び出すのは難しいので、まずは永原先生に相談することをとっさに決めた。
「ああ、分かった」
　でも何となく、今回は蓬莱教授も賛成してくれると思う。プロのスポーツ選手が実験に参加してくれるのは、蓬莱教授としても望むところだし、そもそも蓬莱の薬を禁止薬物にする理由がない。
　何故なら、ドーピングというのは、最悪競技中に選手が死亡するなど、身の安全に関わるために禁止されているわけだけど、蓬莱の薬は明らかに禁止薬物の成分のような危険なものではなく、それどころか老化を筆頭に、ガンを始めとして多くの病気から身を守ってくれる万能薬と言っていい。
　そしてもう一つ、もし蓬莱の薬が禁止薬物で、不老になるのが不正だとするならば、あたしたちＴＳ病患者はスポーツをしてはいけないことになってしまうもの。そうなったらもう、協会案件よ。
「優子さん……お久しぶり……です……」
　人だかりの中で、次にあたしに話しかけてきたのはさくらちゃんだった。
「さくらちゃん、唐崎先輩とはうまくいってるかしら？」
「はい……色々な名所を……あの美術館にも行かせてもらいました……」
　さくらちゃんは恐らく、永原先生の企画展示のことを言っているんだと思う。
「あー、あの展示、私も見ましたよ」
　横から聞こえてきた声は、虎姫ちゃんだった。

「あ、虎姫ちゃん、久しぶり」
「優子も元気そうで何よりだよ。あー、旦那はどうしてる？」
　この遠慮のない割り込みは、気心がしれてる証拠。
「あそこで高月くんと何か話してるわ」
　あたしが、浩介くんの方を見る。
　浩介くんはいつの間にか高月くんと雑談していた。

「そりゃあもう、優子ちゃんの中身、気持ちいいの何のって！　しかものりが良くてさー！　家事の手伝いするとご褒美スカートめくり何だぜ！」
「くそー！　すげえ羨ましいぜ！」
「そうそう、ご褒美でも何でも、優子ちゃんスカートめくられると、すっげえかわいい声で『恥ずかしいよお……』ってさー。演技だと思うだろ？　最初は演技も入ってたけどいつの間にか本当に恥ずかしくなっちゃったんだって」
「うー！　しかもあのおっぱいも触り放題揉み放題何だろー!?」
「はっはっはっ！　死んでも優子ちゃんは渡さないぞ！」

「ちょっと2人とも！　何話してんのよ！」
　聞いてられなくなったあたしが、会話の中に強引に入っていく。
「わっ、ごめん優子ちゃん、久々に高月に会ったらつい優子ちゃんの自慢したくなっちゃって……」
　浩介くんがいかにもな感じで言い訳をする。
「もうっ！　あたし、エッチなところだけが魅力じゃないでしょ!?」
　もちろん、エロさも相当数加味するべきだとは思うけど。
　あたしも浩介くんの心情を理解できちゃうのが辛いのよね。
「分かってるって、優子ちゃんは性格も名前通りの優しい子だし、母性に溢れてて、大学の成績もいいし、何より主婦らしく家事がうちの母親よりもうまいもんな！　世界一の女だぜ！」
　浩介くんに講習の面前で誉められてしまう。
「むー、またそんなこと言ってー！　本当にずるいわよ浩介くんった

ら！」
あたしは顔を赤くして言葉が出ない。
「ラブラブそうでよかったぜ」
高月くんが締めるように言う。

「みんなごめーん、遅くなったかしら？」
クラスメイトが次々登場する中で、最後に永原先生が表れる。
永原先生は、いつも通りにレディースーツで決めていた。
「実は同窓会って出るの初めてなのよ。だから私もよく勝手は分からないのよ」
永原先生が少し慌ただしい口調で言う。
「あーそうか、先生は老けねえもんな」
浩介くんが鋭く指摘する。
いつまでも老けなければ、卒業生に怪しまれちゃうものね。
最も、それは不老故の悲惨さというよりは、「隠そうとするから悲惨に見える」と言うだけだと思うけどね。
「うん、３０年前に名前変えたのもその為なのよ。まあ、今は問題ないし、他に先生してる患者さんもカミングアウトできてるけどね」
どうやら、ここ2年でＴＳ病患者について理解が広まって、大分過ごしやすい世の中になったらしい。
まあ、「変な配慮とかいらないから女の子扱いして」ってだけだものね。そんなの出来ないほうがどうかしてるわ。
「さ、ともあれ、これで全員揃ったし、行こうぜ」
「「はい！」」
幹事の恵美ちゃんの誘導のもと、あたしたちは店内に入る。
お店の人に席を案内され、あたしたちはもちろん隣同士に座る。
恵美ちゃんとも協力して、永原先生との４人が近隣になるように配置する。
「よし、全員座ったな……ごほんっ！　えー今回は２０１９年度小谷学園３年１組同窓会に参加していただきまして、誠にありがとうございます！　幹事の田村恵美です」

恵美ちゃんが、いつになく敬語で話す。
「とりあえず、こうして再び会えたわけだし、今日はゆっくり楽しもう！　以上！」
やっぱり恵美ちゃんも、小谷学園の卒業生だった。
校長先生があたしたちに教えてくれた大切なこと。
それは、「話は短く簡潔に。長話は嫌われる」ということだった。
焼肉屋さんなのだけど、今日はあたしたちが貸し切っての食べ放題、もちろん利益を出さなきゃいけないから質は下がるけど、大学生にはそれくらいでいいのよね。
「うーん、こんなところかなあ？」
肉と野菜を適当に取り、焼肉のたれをお皿に入れる。
目の前にある網の上に、野菜から入れて、次に肉を入れる。
「ねえ優子ちゃん、このお肉なんだけど」
「うん、どこから仕入れたんだろうね？」
食べ放題と言っても、それなりに仕入れるお金はかかるはずよね？
「まあ、大方アウトレットとかじゃないかな？」
浩介くんがそんな意見を言う。
「うん、そうかも」
確かに、神戸で食べた時のお肉とは比べるのもおこがましいけど、それでも時折スーパーで買ってしまう「ひどい肉」よりはずっとマシだと思う。
まあ、あれはスーパーの「ひどい肉」が悪いだけだとは思うけどね。品質管理がなってないと、ダメなのよね。
「やっぱ肉はスタミナつくなー！　くーうめー！」
恵美ちゃんも、笑顔で肉を頬張っている。
それにしても、相変わらずお行儀悪いわね。女子力低いわ。
「あはは、恵美ちゃんったら！」
「ふごっ……あたいはテニスがあんだよ！」
テニスと関係ないわよね？　まあいいわ。
「あーうん、そうよね。ところで恵美ちゃん、さっきの話はしなくていいの？」

あたしが、蓬莱の薬について持ち出す。
「おっとそうだったな。今が好機だもんな」
恵美ちゃんは急に真面目な顔になって、永原先生の方を向いた。

# 天才テニス選手と天才再生医療学者

「なあ先生」
「どうしたの田村さん？」
恵美ちゃんが、真剣そうな表情で永原先生に話しかける。
その表情に、永原先生も身構えている。
あたしたちにも話したように「蓬莱の薬がほしい」と言うつもりだ。
「佐和山の、蓬莱教授と親しいんだろ？」
「ええ。田村さん、どうしたの？　何時になく真面目な顔して」
永原先生もただならぬ雰囲気を感じ取ったみたい。
周囲はそれぞれ去年のクラスメイトたちがわいわいガヤガヤしていて、ここだけまるで異空間みたいだ。
「あの蓬莱の薬、あたいにも融通してくれねえか!?　蓬莱教授の研究になら、協力するからさ」
「田村さん！　うーん、これは困ったわね」
恵美ちゃんの申し出に対して、永原先生も困り顔をしてしまう。
そう、最終的な判断はこの場にいない蓬莱教授がしなければならないわけだけど、今回とばかりは蓬莱教授の出方が本人以外には全く分からない。
「そうねえ、幸子さん……ってあたしが面倒を見たＴＳ病の患者さんなんだけど、その幸子さんにも最近彼氏ができて、一時期蓬莱の薬を飲ませると言う案もあったのよ。でも蓬莱教授は外部流出を警戒して、お流れになっちゃったわ」
特に恵美ちゃんは日本を拠点にしていると言っても、世界を飛び回ってテニスの試合をするわけだしね。外部流出の危険性は格段に高いものね。
「あー、それだったら今薬を服用してるのは誰と誰と誰なんだ？」
恵美ちゃんが更に突っ込んでくる。
「蓬莱の研究所の関係者を除くと、桂子ちゃんと浩介くんの２人だけよ」
２人とも服用しているのは俗に言う「３００歳の薬」と呼ばれるも

ので、蓬莱教授は今、４００歳ないし５００歳の薬を目下開発中となっている。
「なるほど、２人とも佐和山、それも優子に近い人だもんなあ。じゃああたいじゃ厳しいかなあ……にしても桂子が飲んだってんならあたいも飲みてえなあ」
恵美ちゃんは少し悲観的な顔で言う。
それにしても、やっぱりまだちょっとだけ桂子ちゃんへの対抗心が残っているのね。意外だわ。
「でも、恵美ちゃんが実験に参加するメリットもあるわ。恵美ちゃんがテニス選手ってことよ」
あたしが、永原先生の背中を押すように言う。
もっとも、最終的に判断するのは蓬莱教授になるけど、蓬莱教授はきちんとメリットを説明すれば話が分かる人なので悲観はしていない。
「うん、それで禁止薬物には？」
やはり永原先生の懸念事項はそこよね。
「もちろん指定されてねえぜ」
そもそも、蓬莱の薬は外部への極秘性の強いもので、アンチ・ドーピング機関の査察も受け入れていない。飲んだか飲んでいないかの区別はつきようがない。
「うーん、でも変な成分が入ってる可能性はあるわよ」
永原先生が異議を唱える。
「あーそうか」
恵美ちゃんが再び思慮をする。
「私が今、問い合わせてみましょうか？」
「え!?　いいのかよ!?」
永原先生の申し出に、恵美ちゃんが驚愕する。
「ええ大丈夫よ。この時間なら、自宅か研究室にいると思うわ」
永原先生がそう言うと、携帯電話を取り出して蓬莱教授にかける。
２０２０年のこのご時世でも、あたしと永原先生はガラケーのまま、まあ、物持ちがいいからというのもあるけどね。

「あ、もしもし蓬莱先生？　ええ、それで、うちの卒業生でテニス選手の田村さん何だけど……ええ、ええ、薬を融通してほしいと……はい、はい……本当ですか⁉　ありがとうございます！　はい、はい……ええ……はい……場所ははい……例の駅前の小谷学園側の焼き肉店です……はい……では失礼します……はい……」

ピッ

「蓬莱先生、今からここに来るって！　なんかすごい感激してたわ」

永原先生の表情はとても明るく朗らかなものだった。

蓬莱教授が了承したのは、明らかだった。

「おうそうか！　よかったよかった！」

恵美ちゃんは、安心した表情で言う。

これで恐らく、恵美ちゃんは他の選手よりもずっと長く現役を続けられるようになるわね。

「優子ちゃん、これ焼けてない？　裏返した方が」

おっと、こっちのことも考えないといけないわね。

「ああうん、ありがとう」

あたしたちも、マイペースで焼き肉を焼く。

お肉をたれにつけて食べる。最初に取ったお肉はどんどんと少なくなっていく。

「ねえ優子、篠原との夫婦生活ってどんな感じ？」

近くを通りかかった虎姫ちゃんがあたしに話しかけてくる。

あたしたちはこの同窓会では一番乗りの既婚者なので、やっぱり皆の注目度もとても高い。

「ええ、満足よ。浩介くん、強くて素敵だわ」

虎姫ちゃんの質問に、あたしがきっぱりと答える。

「へへへん、俺も俺で優子ちゃんには助けられているけどね」

「うん、本当にいい夫婦になれたわよあたしたち」

隣で食べていた浩介くんが話に乱入してきて、あたしもうまく話を合わせる。

虎姫ちゃんは一瞬だけ安心した表情をして、すぐに真顔に戻る。

「あーうん、優子たちは心配してないのよ。それよりも私、いまいち彼

氏ができないのよ。優子、何かいいアドバイス無い？」
虎姫ちゃんから持ちかけられたのは、恋愛相談だった。
まあ、結婚一番乗りのあたしを頼るのは分からないでもないけど、正直まだ結婚してはいないけど、あたしたちより長続きしている龍香ちゃんを頼ったほうがいいと思うのよね。
「うーん、あたしじゃ難しいわね。やっぱり龍香ちゃんみたいに少しだけ積極的になること、なのかなあ？」
あたしは適当に話を合わせる。
あたしは浩介くんに助けてもらったことで恋に落ち、浩介くんもあたしに思いを寄せていたから、案外すんなりとうまくいってしまったけど、虎姫ちゃんのように普通の元サッカー少女には、そう言う出会いをするのは難しいもの。
「合コンとかに積極的に出るとかかな？」
虎姫ちゃんが更に身を乗り出してくる。
「大学で気になる男の子がいたら、声をかけるのもいいわね」
「だねえ、待ち状態だとうまく行かねえぜ」
「そう言うものかあ……とりあえず、頑張ってみるよ」
虎姫ちゃんもある程度決心がついたみたいね。
「うん、それよりも、私よりも龍香ちゃんを頼ったほうがいいと思うわよ」
「分かった。考えてみるよ」
虎姫ちゃんを見送ると、あたしの方もちょうど皿が空になったので、追加のお肉を求めて席を立つ。
「浩介くん、お肉取ってくるね」
「おうっ」
虎姫ちゃんは、たまたま近くにいた龍香ちゃんのもとに駆け寄っていく。
「それでですね、いいですか虎姫さん!?　虎姫さんに限らず、女性の皆さんが例外なく好きなものというのはですね――」
なんか、虎姫ちゃんの顔が赤いような。あー、龍香ちゃんにアドバイスを求めさせたのは失敗だったかもしれないわね。

ともあれ、あたしに出来ることはもうない。あたしはあたしで追加を食べようっと。
「うーん、こっちはまだ食べてなかったわね」
前回取らなかった肉野菜を中心に、お皿に合わせていく。
ピンポーン
「お客様に、お呼び出しを申し上げます。田村様、永原様、蓬莱様がお待ちです、至急、入り口までお越しください」
「え？　呼び出し？」
「田村と先生って、しかも蓬莱ってまさか」
「あいつ、年齢的な衰えから逃げようとしてるってことか？」
盛り合わせ中に案内放送が入った。
突然の案内放送と共に、同窓会の人たちからも動揺が走る。
蓬莱と言えば、もちろん蓬莱教授のことで、蓬莱教授が恵美ちゃんと永原先生を呼び出した格好になったのだ。

「すまんな、お楽しみの所失礼する」
「おいおい、あれ本物の蓬莱教授じゃん」
「ああ、俺も佐和山だから知ってるよ。やっぱ近くで見ると威厳あるよなあ」
「何お前、やっぱ蓬莱教授好きなのか？」
「そりゃあ、佐和山に在学してる人間にとって、蓬莱教授は大学の誇りと言ってもいいんだぜ。何せノーベル賞取って、その上で不老研究まで完成させようとしてるんだ。今この世に存在する学者でも、最も偉大な学者と言っても過言じゃないんじゃないか？」
「あーそうかも知れねえな」

うちのクラスメイトたちも、蓬莱教授についてあれこれ話をしている。
そしてあまり時間も経たないうちに、蓬莱教授があたしたちの席に座ろうとする。
もっとも、このテーブルはスペースに余裕があるので、あたしの座

るスペースは十分にあるけどね。
「ふう、蓬莱先生、ご足労ありがとうございます」
恵美ちゃんよりも先に、永原先生がまずお礼を述べる。
「なあに、礼には及ばんよ。ほうほう、確かにあの有名な田村選手だな……君が永原先生の教え子というのは知っていたが……君が俺の実験に協力してくれるとは何てついているんだ。これで俺の実験も捗るというものだ……これを受け取って欲しい」
蓬莱教授は笑顔で鞄から5本のペットボトルを取り出す。
どうやら、蓬莱教授にとってもこれは幸運だったのかもしれない。
「これが例の『蓬莱の薬』ってやつなんか？」
恵美ちゃんが興味津々になって覗いてくる。
「ああそうだ。田村さんには、毎日の昼御飯の後に1本、合計5日間飲んでもらいたい。そうすれば君の寿命は延び、君は長くて１００年の命の3倍、すなわち３００年の命を得られるだろう」
蓬莱教授は逸る興奮を抑え、努めて淡々とした口調で話そうとする。
「ほうほう、本当にそんなんでいいんだな!?」
一方で恵美ちゃんは、興奮を隠しきれない様子でまくし立てていく。
「ああ、それと、悪いんだが俺の研究所の研究員を1名派遣して欲しい。蓬莱の薬は老化以外の病気にも耐性を持つことが出来て、それによるスポーツに対する効果を是非とも知りたいんだ。あーもちろん研究員の費用はこちらが負担させていただくよ」
「ああいいぜ、この事はコーチにも話は既に通してある。コーチもまた、負けず嫌いでな。『引退前にこの薬が実用化されて欲しかった』と言っていたよ」
恵美ちゃんが笑顔で言う。どうやら問題はないらしいわね。
まあ、実際にはこれもこれで未完成なんだけどね。本当に完成するのは老化寿命がなくなる時だもの。
「ああ、だがこのペットボトルはコーチにも見せないように細心の注意を払ってくれ。とりあえずコーチには研究に参加して、薬を飲むこ

とになったとだけ、伝えることが条件だ」
どうやら、蓬莱教授はやっぱり漏洩を警戒しているみたいね。
漏洩すれば、偽物や模造品が出回る危険性があるものね。
「分かったぜ、研究員の方はどうするんだ？　あんまりしつこく付きまとわれると困るんだが」
恵美ちゃんが蓬莱教授に問いかける。
「ああ、そっちの懸念か。ああ大丈夫、接触はこちらとしても最小限にしたい。試合には同行させないから、安心してくれ」
「え!?　試合にも同行しねえのか!?」
恵美ちゃんはちょっとだけ驚いた表情で言う。
さすがに予想外だったのね。
「ああ、こちらとしても色々と警戒しなきゃならんのだ。どこに何の目があるか分からんからな」
蓬莱教授がややうんざりしたような表情をする。
それは間違いなく「マスコミ対策」という感じだった。
「おいおいあたいより大変だな。一体何だってそんなことになってるんだ？」
恵美ちゃんは怪訝そうな表情で言う。
「どうも例の週刊紙の記者が俺と永原先生のスキャンダルを狙っているらしい。お互い独身なのにな。ありもしない噂を追うんだから哀れな奴らだとは思うが。単純に鬱陶しいんだ」
あー、そういうスキャンダルを追う記者とかいるもんね。
そういうのがスクープになるものね。
「ほへえ、記者に狙われているのか？」
恵美ちゃんも少し嫌そうな顔をする。
「もちろん、俺もバカじゃねえ。尾行には細心の注意を払っているし、この辺には複数の学生で見張りを立てている」
蓬莱教授は、かなり警戒心の強い人らしい。おそらく、文化祭でのプロパガンダもこういう人員を増やしたい思いもあったんだと思う。
ちなみに蓬莱教授は、記者の動向も既に掴んでいるという。
「でだ。実は今度の5月中旬に俺が地方の学会に出張することになっ

た。そこで永原先生も同じ場所で講演会を開くことにしたんだ」
蓬莱教授が、何やら不敵な笑みを浮かべている。
「え!? どう言うことですか?」
横で聞いていた浩介くんが思わず割り込んでくる。
「ま、見てのお楽しみさ。ビリオネアの俺に楯突く週刊誌の記者がどうなるか。見せてやろうってんだ」
「うんうん」
蓬莱教授と永原先生が、また良からぬことを考えているわね。
おそらく、わざとらしい行動を取り何らかしらの記事を書かせて、訴えたりするつもりなんだと思う。
まあ、あたしたちの預かり知らないことでいいのかな?
「大丈夫よ。ちょっと罠にはめるだけ。5月の定期会合で話すから」
「あーうん、分かったわ」
とりあえず、今は気にしないでおこう。
罠にはめるっていうのが気になったけど。
「それで、あたいからもう一つ質問があるんだ」
恵美ちゃんが最後にもう一つ質問があるという感じで言う。
「ほう、何なりと聞いてくれ」
「この薬は、ドーピングになると思う? そう言う成分は入っているのか?」
「……なるわけがなかろう。もちろん、その手の成分は一切入ってない。俺は以前俺自身でこの薬を飲んだ直後にドーピング検査と同じ検査をしたことがあったが、どの検査を取ってもこの薬は『ただの水』だ。便宜上薬と言っているだけで、これは薬ともいい難い代物だ。そもそも、ドーピングは健康を損なうからいけないという面が大きいが、この薬は全く逆だろう?」
「あー、確かにガンにも心筋梗塞にもならねえんだっけか?」
恵美ちゃんが、納得した感じになる。
「そうだ。それにもし仮にこれがドーピングになると言うならば、俺も永原先生も、そしてそこに座ってる優子さんも黙ってはいないさ」
蓬莱教授は、あたしの名前も出して言う。

「恵美ちゃん、よく考えてみて？　この薬はあたしたちＴＳ病患者に体質を近付けると言うだけのものよ。そもそも、もしこの薬がドーピングなら、あたしたちは存在そのものがドーピングということになっちゃうわ」
「ええ。篠原さんの言う通りよ。蓬莱先生の薬がドーピングだと言うなら、私達ＴＳ病患者は、あらゆるスポーツ大会から締め出されるということになっちゃうわ。もしスポーツ団体がそう主張するなら、私たちは全力で戦うし、スポーツ仲裁裁判所がそう言ったなら、蓬莱先生にも頼んで、あらゆるスポーツ関係者に、完成した蓬莱の薬を売らないことにするわ」
　つまり、スポーツの道に進めば、不老を諦めねばならないということになる。
「それに、この薬が大衆にまで浸透すれば、蓬莱の薬を受け入れざるを得ねえさ。俺はな、今米軍よりも強力なカードを持っているんだ」
「べ、米軍よりなのか？」
　浩介くんは少し驚いている。
「そう、この蓬莱の薬は米軍よりも強力な力を持つカードだ。もちろんまだ未完成だが、完成した暁には人類はこぞって、俺にひれ伏すことになるだろう。ドーピングだと息巻いたとして、薬を融通してやらないと言ってしまえばいい」
　そうなれば、スポーツの人気は間違いなく大打撃を受けるのは想像に難くない。
「おう、何だかよく分からねえが、とりあえず、明日からこれを飲むことにするぜ」
　ともあれ、恵美ちゃんがこの実験に加わったのが、この同窓会最大の大事だった。
「そんじゃみんな、名残惜しいがこの辺でお別れだ」
　各自で参加費を払い、恵美ちゃんが代表して会計をする。ちなみに蓬莱教授は何も食べていないので経費は０円だ。
　各自思い思いに２次会を開くと言う。

あたしたちはもちろん、明日のデートのことがあるので、恵美ちゃんたちに挨拶しつつ、家までまっすぐ帰った。

## はじめての結婚記念日　高校生に戻ろう

同窓会の翌日、あたしたちは久しぶりにデートの約束をした。
この日はあたしと浩介くんにとって結婚記念日でもある。
あたしは、朝起きたらまず、デートのために服を出すことにした。
昨日と同じ服は使えないので、実は今日の服は選ぶ必要はない。
あたしはクローゼットから小谷学園の制服を取り出す。
実は、あたしたちは久しぶりに高校生に戻ってデートしようということになった。
浩介くんも、1年ぶりに小谷学園の男子制服を着ることになっている。
小谷学園の制服を着ているけど、もちろん既に卒業しているから、生徒のつもりをするだけで生徒ではない。
そう言えば幸子さんの指導の時に、小谷学園に生徒としてではなくて、協会の正会員として学校に来たことがあったっけ？　あの時以来かしら？
あたしは、一旦全裸になり、浩介くんが好みそうな下着に穿き替える。
そしてブラウス、ブレザー、スカートと久々の制服着替えにわくわくしつつ、スカートを在学中よりも、ほんの少しだけ短くすると、姿見の前にはあの頃と変わらない「石山優子」としてのあたしの姿が浮かび上がってきた。
ふふ、やっぱり制服ってかわいいわね。
学生鞄も持って、うん完成。ふふ、何だか新鮮な気分だわ。
ちなみに中身は当時の教科書類ではなく、えっちな道具がたくさん入っている。これは、あたしがこの家に「お邪魔」するときに使うもの。
もちろん、今日のデートは高校生に戻った設定なので、あたしのはめている指輪も一時的に「婚約指輪」に戻る。実家からスタートしないのはまあ、しょうがないけど。
「ふふ、浩介くん、喜んでくれるかしら？」

家を出たあたしは、ますます楽しみになる。
ちなみに、浩介くんには先に出てもらっている。
そう、高校生の時のデートらしく待ち合わせをしようということになって、待ち合わせ場所は区役所の最寄り駅に決まった。
ちなみに、遊ぶ場所は公園になった。
そう、あたしたちが初めてデートをしたあの公園だ。
あたしは、電車に乗る。
電車内には小谷学園の制服は見えない。学園の最寄り駅を過ぎて、実家の最寄り駅、そして区役所の最寄り駅に到着する。
同じ時間のはずなのに、何だか長く感じたわね。
あたしはＩＣカードをかざして、改札口を出る。
浩介くんは……いたわ！
「ごめーん！　待ったー!?」
あたしは、制服姿の浩介くんに話しかける。
高校生の時はお互いこのセリフを何度も言ったけど、夫婦になってからはすっかり言わなくなってしまった。
「うん、ほんの少しだけね」
浩介くんが模範解答をする。
もっとも、この待ち合わせは高校生に戻るために意図的に作ったものだけどね。
「とにかく、行きましょう」
「ああ」
本当はゲームセンターに行くことなども考えたけど、今のあたしたちは「生徒ごっこ」なので、その手の場所は色々とまずいと思って公園になった。
「懐かしいなこの道」
「うん、久しぶりだもの」
ここの公園は、もちろん最初のデートの時以外にも、時折週末のデートとして、小谷学園の頃よく訪れていた。
それでも、夫婦になってからは今回が初めてのデートな通り、しばらく来てない道なのは確かだった。

ぴゅううう……
「きゃっ」
あたしは、めくれ上がりそうになったスカートをちょこんと押さえる。
制服を着るのは久しぶりだけど、こんなにも風に弱かったのね。
そう言えば、あの頃はよく押さえるしぐさしてたわね。1回誰もいない時に思いっきりめくれちゃったこともあったわね。
それでも、制服のスカートが人気なのは、かわいさがそのでメリットを補ってあまりあるからだとあたしは思う。
「優子ちゃんかわいいね」
「かわいい？　うん、ありがとう」
浩介くんの口からポロっと出た「かわいい」の声。あたしも、もう何度も言われているのに、まるで彼女になったばかりの頃のようにぎこちなく返事をする。
ああ、お互い制服を着ているだけで、こんなにも気分が高ぶってしまう何て思わなかったわ。
そんなこんなで、閑静な住宅街をあたしたちは進み、目的の公園へと向かう。
あの時と違って、子供は誰も遊んでいなかった。時間帯の問題かもしれないわね。
「誰もいないわね」
「ああ、ここは俺たちの貸し切りだな」
浩介くんが周囲をキョロキョロしながら言う。
もちろん、何度見渡してもここは無人地帯だ。
「あれ？この公園、ここに植物生えてたっけ？」
公園に隣接している小さなマンションの方に、植物が植え付けられていて、そこがちょうど死角になっている。
「自生したとかじゃね？」
「あーうん」
それもそれで変な話だと思うけど。
「ともあれさ、シーソーで……あれ？　シーソーがねえな」

「本当だわ」
浩介くんがシーソーがないという。確かに3年前にはそこにあったはずのシーソーがなくなっていた。
代わりに、真新しいブランコと、以前はなかった鉄棒があるわね。滑り台は以前のまま、かな？
ともあれ、こんな公園でも3年近くも経つと様変わりしてしまうものね。
「なくなったものは仕方ないや。優子ちゃん、鉄棒乗ってくれる？」
「え!?　でもあたし――」
「いいじゃないほら」
スカートだからと言いたかったけど、浩介くんに物理的に押されて鉄棒の前に行かされる。
誰かが置いたのか逆上がりの補助板もある。
「あの、あたし絶対できないわよ」
あたしの運動音痴には定評があるし。
「大丈夫だって、ほら、棒つかんでみて？　一回転してみてよ」
「で、でもパンツ見えちゃうわよ」
ただでさえ、現役時代より短くしているし。
「大丈夫だって。見るのは俺だけだから」
「う、うん」
あたしは結局、自分の被虐本能に負けて鉄棒を両手で掴んでしまう。
そして両手で体重を支えようとするんだけど――
「はぁ……はぁ……はぁ……うー、無理……」
５０キロを優に越すあたしの体重を、この貧弱な腕力では支えきれず、何もできないまま数秒で地面に逆戻りしてしまう。
ちなみに、めくれないようにゆっくり下りました。
「うーん、優子ちゃんやっぱりかわいいなあ」
「もう、浩介くん、鉄棒にかこつけてパンツ見たいだけでしょ!?」
「当たり前じゃないか！」
浩介くんが清々しい顔で開き直る。

「うー、予想できてたけど」
「というわけで、こっちの逆上がり補助で逆上がりしてみてよ。大丈夫、今度は俺が全面バックアップしてやるぜ！」
浩介くんが逆上がり補助器具をあたしの前に持ってきながら言う。
ここまで堂々と下心を丸出しにされると、怒るに怒れないわね。
「うー、どうせ『バックアップ』と称してあんなことやこんなことするんでしょ!?」
「もちろんだ！　安心してくれ、大事な優子ちゃんだ。痛いようには決してしねえぜ！」
「もー！」
浩介くんの堂々とした態度にあたしもちょっとだけ抗議する。
「まあ、したくないなら無理強いはしねえぜ。パンツならどうせあ後でたっぷり見ることになるからね。ただいつもとは違うシチュエーションでパンツ見たり触ったりしたいだけなんだ」
確かにその通りなのよね。
「わ、わかったわよ」
あたしは、もう一度鉄棒を掴んで目の前の逆上がり補助器具を睨み付ける。
あーあ、結局あたしも誘惑に負けちゃうのよね。本当、あたしもメスになっちゃったわ。
「えいっ！」
逆上がりに成功するイメージはつかないので、素直に駆け上がる感じで――
ズルズルズル……
あうー、まだ半分もいってないのにー！
やっぱり駄目だけど、これならパンツ見られなくても――
「それっ！」
むにっ！
「きゃあ！」
急にお尻を捕まれる感覚に襲われると、身体が浮き上がり逆上がりの格好になる。

制服のスカートが重力に従い落下して、あたしのパンツが丸見えになる。
すると、浩介くんの手がお尻から腰に変わり、中途半端な所でそのまま停止して、スカートが完全に垂れ下がってしまう。
「こ、浩介くん！」
「ほら！　もう少しだ！　頑張れ！　そのままパンツ丸見えでもいいけどね！」
うー、浩介くんの意地悪！
あたしは、既に浩介くんの補助で半分以上進んでいたため、何とか逆上がりを完了させる。
「うー、浩介くんのえっち!!!」
「いやー、実に新鮮な水色縞パンだったよ！」
浩介くんが満足げな顔つきで言う。
「もー言わないでって！　恥ずかしいから！」
「へいへい」
浩介くんも大満足なのか、それ以上はしてこなかった。
「こっちのブランコはどうする？」
「うーん、あたしは遠慮しておくわ。それに、誰かが来ちゃったら大変だし」
「あーそうだな」
さっきは幸い誰も来なかったけど、いつ誰か来るかも分からない。
なのであたしたちは、ベンチに座って休息を取ることにした。
ベンチに座って――
すりすり
「きゃあ！　もー！　本当に手癖悪いわね」
浩介くんに、またお尻を撫でられてしまう。
「ごめん、なんか久しぶりに制服姿の優子ちゃん見てたら無性にムラムラしてきて」
「浩介くんはいつもムラムラしてるわよね」
「いや、今日はなんか特別な気分なんだ。学校にいた時も女子の制服ってエロいなあって思ってたけど、今こうやって自分の妻が制服姿

になると印象が全然違うんだ」
今は高校生に戻ってるから、正確には不適切な言い分ではある。
「でも今はほら、あたしたち高校生でしょ？」
浩介くんに、今日のデートの設定を思い出させる。
「ああうん、そうだったな。雰囲気重要だったから、さっきのはちょっと反省だな」
「うん、ありがとう」
浩介くんはこうやって素直に反省できる所も魅力だとあたしは思う。
それに何だかんだで、あたしが心の底で願ってる願望を叶えてくれたりしちゃうし。さっきの逆上がりも、実際あたしのほうが興奮しちゃってると思う。
「じゃあ優子ちゃん、休憩はこのくらいにして、次は何して遊ぼうか？」
「うーん、最近は公園の遊具も少ないのよね」
色々と、クレーマーがうるさいのが、最近のご時世だから公園の遊具もちょっとしたことですぐに無くなっちゃう。
「んじゃあさ、また野球場に行ってみない？　今日は誰もいないから鍵かかってるとは思うけどさ」
「うん」
3年前の夏休み、公園に隣接している野球場で、あたしたちは試合を外野から見た。
今は閉じられているけど、あたしたちにとっては思い出の野球場の外側をぐるっと一周する。
そういえば、あたしの昔の名前。あれに対するトラウマを払拭してくれたのも、ここの浩介くんだったっけ？
「よし、ここがいいかな？」
突然前を歩いていた浩介くんが立ち止まり、あたしの方を見る。
「どうしたの浩介くん？」
「あ、あのさあ優子ちゃん。話があるんだ」
「うん」

浩介くんが、ちょっとだけずれた感じの真顔で言う。
「俺……俺、優子ちゃんが好きだ！　結婚するほど好きだ！　ずっとずっと、俺の側に居てくれるか!?」
浩介くんの顔が真っ赤になったと思ったら、愛の告白を言ってきた。
「うっ……もう、何よ今更？」
あたしは、ちょっとだけ肩透かしを食らった感じで言う。
「だって俺たちまだ高校生だし、結婚とか親に反対されそうだし」
あーうん、そうだったわね。今のあたしは、「石山優子」だものね。
「あはは、きっと大丈夫よ。この指輪に誓ったでしょ？」
あたしが、「婚約指輪」を浩介くんに見せる。ちなみに、浩介くんも指輪をはめている。
「ああ」
茶番だと分かっていても、やっぱり面と向かっての愛の告白は、好きな人ほど恥ずかしいのよね。
「ふふ、ねえ浩介くん」
あたしは周りを見通す。ここは野球場の裏手で、場外ホームラン対策にフェンスもとても高く、薄暗くて周辺からは完全な死角な上、人通りはない。
そのことを確認し、あたしは、スカートの裾に手をかける。
「ど、どうしたんだ優子ちゃん？」
「ふふっ、恥ずかしいけど……見ててね」
息を呑む浩介くんの前で、少しずつ、あたしはスカートを上げていく。
今までは浩介くんのためにこういうことはしてたし、カリキュラムの時に失敗したあたしに対するおしおきとして母さんにさせられたくらいで、自分の意志でこんなことをするのは初めてだった。
「うっ……優子ちゃん、エロい」
さっきもあたしのパンツを見た浩介くんだけど、今はシチュエーションが全く違うため、やはり浩介くんの興奮も変わってくるらしいわね。

「ねえ浩介くん、鞄の中、見てくれる？　そこに丸いマッサージ器があると思うの」
「え？」
　あたしの声に浩介くんが、慌ててあたしの鞄の中に手を入れて、マッサージ器を取り出してくれる。
「えっと……これ？」
　浩介くんが出したのは、お目当ての機械だった。
「うん、それ」
「で、これがどうしたんだ？　まさか!?」
　どうやら、マッサージ器の形を見て、浩介くんも察してしまったらしい。
　あたしも全身の湿度が高まっていき、浩介くんもまた落ち着きがなくなっていく。
「あたし、さっきから疼いちゃってるのよ。それを使って沈めてくれる？　ボタンはちょうどそこにあるはずよ」
「うっ……ゆ、優子ちゃん！　ここじゃまずいって！」
　浩介くんが、一歩引いた感じで言う。
「うん分かってる。でもここなら、まだバレないと思うから」
「うっ……」
　浩介くんが、ゴクリとつばを飲み込む。
　やっぱり、かわいい女の子の誘惑には勝てないのよね。
　ういいいんん!!!
　意を決した浩介くんは、マッサージ器のスイッチを押すと、あたしの身体の疼きを止めるために、適切なマッサージを始めてくれた。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
「あーあ、結局全部やっちゃったよ！」
　息を切らして座り込んでいるあたしの隣で、同じく倒れ込んで疲労困憊した浩介くんがそうつぶやいてくる。
　何だか、高校生気分も少し吹き飛んじゃったわ。
「えへへ、浩介くんも、大分理性が崩れてきたわね。以前だったら『結

婚まで取っておく』って言って聞かなかったのに」
　そう、高校生だった頃は、あたしがどんなに誘惑しても浩介くんは頑として理性を崩そうとはせず、結局初めての夜までおあずけになっていた。
「うっ、それはその……だって……」
　浩介くんは、かなり混乱している。
「あたしたち……結婚前にしちゃったわね」
「え!?　いやあのその」
　浩介くんが動揺するのも無理もない。
　今のあたしたちは時系列の法則が乱れている。いや、因果律が狂っていると言ってもいい。
　本来のあたしたちは２０１９年３月１６日に小谷学園を卒業し、同日に結婚している。
　そして今日は２０２０年３月１６日の結婚記念日で、今のあたしたちは何故か小谷学園の生徒に戻っていて「結婚指輪」も「婚約指輪」に戻っている。
　実はさっきも、「初めて」なんて嘘をあたしが付いて、最初痛いフリまでしてしまった。もちろん、あの時を思い出しながらだけど。
　とは言え、途中からはそう言う演技もバカバカしくなってやめちゃったけど。
「あはは、優子ちゃんごめん」
「あーうん、いいのよ」
「じゃあ、行こうか。幸い、全く人の気配はしないみたいだし」
「うん」
　あたしたちはようやく落ち着いてきたので身なりを整えてデートを再開した。
　まだ３月ということもあって、この野球場で野球をしていないので、もう少し別の所を見て回ろうということになった。
　本当はこの後、小谷学園に忍び込んで、屋上でえっちなことをしようという計画も立てた。
　それについては、あたしたちの顔はよく知られているだろうし、先

生に見つかったら大変なことになるということもあって中止になった。それ以前に、さっき我慢できなくてしちゃったから無理なことには変わらないけどね。

公園には、結局この時間はあたしたちだけがいたということになった。子供たちが遊ぼうという気配は、なかった。

## はじめての結婚記念日　暴走する６人

「こっちはどうかな？」
浩介くんが、公園から更に奥側を目指す。
このあたりの地域は、バスは通っているけど鉄道はあまり通っていない場所で、でも一応道路があるのでそれなりに栄えている場所でもある。
あまり行ったことのない場所で、深入りはしない方が良いと思う。
「どうしようかしら？」
「うーん」
周囲を見てみると、近くにラーメン屋さんが目に入った。
ここのラーメン屋さんは、まだ一度も入ったことがない。
「へえ、もやしラーメンかあ」
「安そうね」
もやしと言えば安い野菜で有名だけど、最近は景気の向上もあってある程度の値上げもされていたりする。
あんまり安い野菜にばかり頼るのはよくないものね。
「キャベツラーメンのほうが良さそうだな」
浩介くんがそうつぶやく。
「あーそうかもしれないわね。でもまあ、あたしはもやしラーメンでいいわ」
「そうかい。じゃあ俺はキャベツラーメンで」
あたしたちは店の前のメニューを見て、食べるラーメンを決定したので意を決して扉の中に入る。
ガララララ……
「いらっしゃいませー」
店員さんが笑顔であたしたちに応対する。小谷学園の制服なのは気にされなかったみたいだ。
今は春休みなので、制服姿のあたしたちにもあまり違和感を感じずに済んでいる。
まあ、警察の人とかに咎められたら、コスプレがバレちゃうわけだ

けど。
この制服も、今後コスプレに役立てるためにきちんと補修しないといけないわね。
「ご注文はいかがなされますか？」
あたしたちが椅子に座ると、すぐに店員さんがコップに水を入れて持ってきてくれる。
ちなみに、カウンターの上に水があるのでセルフサービスということになる。
「あたし、もやしラーメンで」
「俺はキャベツラーメン大盛りで」
「かしこまりました。もやしラーメンにキャベツラーメン大盛りです！」
店員さんが厨房の人に叫ぶように話す。
「お待たせいたしましたー！　こちら――」
店内はそれなりに混んでいて、店員さんが忙しそうにラーメンを持っていく。
まあ時間もお昼時だし、しょうがないのかもしれないわね。
「ねえねえ浩介くん、午後はどうしようかしら？」
「あー、小谷学園に行くのはやめて、素直に家の中で結婚記念日を祝おうぜ」
やはり、近付くのは危険ということになった。
そうよね、卒業したはずのあたしたちが制服を着てたら怪しまれるもの。
「うん、そうするわ」
とりあえず、一旦家に戻って着替えてから、結婚記念日のためのお買い物をするって感じになるのかな？
ラーメン屋さんには、待ち時間を利用したテレビもある。
あたしたちはそれを利用して時間をつぶす。
「お待たせいたしました。こちらもやしラーメンとキャベツラーメン大盛りになります」
すると案外あっという間に、ラーメンを持ち込んでくれた。

「「いただきまーす！」」
あたしたちは、静かにラーメンを黙々と食べた。
大盛りだけど食べるのは浩介くんのほうが早く、これは以前からずっと変わっていない。
「ふう、おいしいわね」
「ああ」
ラーメン屋さんも中々に競争が激化しているため、あまりまずいラーメン屋さんには当たらなくなってきた。
このラーメンは学食のラーメンほどじゃないけど、薄味になっている。
野菜も多いから、ヘルシーをイメージしているのかもしれないわね。

「「ごちそうさまでした！」」
「浩介くん、これ」
「あーうん、そうだな」
割り勘ではなく、それぞれの値段を払う。あたしたちが以前からしていたデートの方法でもある。
あたしたちはラーメンを食べ終わり、会計を済ませて家に帰ることにした。

「ふー、ただいまー」
「おかえりなさーい。どうだった？」
お義母さんが、制服姿のあたしたちを出迎えてくれる。
「あーうん、久しぶりに『石山優子』に戻ったわ。まあでも、こういうのはごくたまにするからいいのよ」
「ええ、そうね」
やっぱり、今の結婚生活の方があたしにとって幸せだから。
気分転換のスパイス程度にとどめないといけない。
「じゃああたしたち、着替えてくるわね」
そう言うと、あたしたちは靴を脱いで家の中に入る。

「優子ちゃんお疲れ様」
「うん、慣れないことすると疲れるわね」
逆に言えば、もう小谷学園の日々は過去のことになったという意味でもあるけどね。
「ああ、俺も。とりあえず、着替えて休んだら俺を読んでくれ。ケーキ買おうぜ」
「うん」
ともあれ、このままではあたしはまだ結婚してない「恋人関係」ということになってしまう。
わざわざそうしたのは、単なるマンネリ防止のためなだけで、今はもう必要がない。早く結ばれた2人に戻りたい。
今は急いで制服を脱いで「篠原優子」に戻らないといけないわね。
あたしは、ちょっと濡れている縞パンなどの下着も穿き替えて、いつもの私服に戻る。
制服はかわいいし選ぶ必要もないけど、やっぱりあの3年間でしか着られないから価値があると言ってもいいのよね。
まあ、あたしなら不老だし永原先生と同じく今後も折に触れて着ていきたいわね。

「あなた、お待たせ」
あたしは、意識して「あなた」と呼ぶ。
普段はその時の勢いで「浩介くん」と併用しているけど、今日は違う。デートの時も、一回も「あなた」とは言わなかったし。
「ああ、行こうか優子ちゃん」
浩介くんは、結婚前も結婚後も同じ呼び方でいいわね。
って、あたしも「浩介くん」と言う呼び方は変わってないわね。
ともあれ、あたしたちはまず駅前に繰り出してケーキ屋さんに行くことにした。
「ほら見てよ。このケーキ」
浩介くんが大きめのチョコレートケーキを指差す。
でも、かなり大きい。「6号」「6人前」って書いてあるし、これを

４人で食べるのはさすがに食べきれないわ。
「あ、そうね、お義父さんお義母さんがいるものね……でも大きすぎない？」
「あーいや実は、優子ちゃんには黙ってたんだけど、さっきのデート中にメールがあってさ」
浩介くんが言いにくそうにしている。
「うん」
「優子ちゃんの両親が、俺の家に来るって」
「え!?　そ、そう……分かったわ」
ということは、６人前のうち２人前はあたしの母さんと父さんの分ってことね。
「優子ちゃん、異議はある？　同じ６人前でも他のがいいとか」
浩介くんは常にあたしのことを考えて行動してくれている。
「あーうん、これでいいわ」
最も、あたしに異議はないから、殆ど形式的なものになっちゃって、この手のやり取りが「儀式化」が著しいのも事実なのよね。
「そうか分かった。優子ちゃんが好きならそれでいいんだ」
うーん、浩介くんがあたしに合わせてくれるのは嬉しい……もうちょっとすれ違ったほうがいいのかなあ？
「そう？　浩介くん無理して無い？」
「ふっふっふっ！　俺も甘いチョコレートケーキが大好きなんだ！それに、筋トレするにしてもこういう糖分は必要不可欠だからね！」
浩介くんが「どうだっ」と言わんばかりの堂々とした物言いで言う。
どうやら、単純に好みが同じだけな話だったわね。
杞憂という言葉がこれほど似合う状況も珍しいわ。
「このケーキ、６号ください。それから今日が結婚記念日なので、この２名でお願いします」
浩介くんがあたしと浩介くんの名前を書いた紙を店員さんに渡す。
「はい、おめでとうございます。ケーキが２０００円と、メッセージカード代で２２００円です」
浩介くんが１０００円札を２枚、１００円玉を２枚出す。

しばらくすると商品が出来上がったので、浩介くんは商品を受け取り、あたしはレシートを受け取る。
「よし、早く帰って冷蔵庫にしまおうぜ」
「うん、気をつけて早く帰ろうね」
なかなか両立は難しいと思うけど。
「そうだな」
とりあえず、この手のものは鮮度が命なので、ここには長居は無用ということであたしたちは行きよりもやや急いで家路につく。
あ、もちろん車には気をつけたわよ。
「「ただいまー！」」
「あら優子。ちょうどよかったわ」
あたしたちの声に、普段はいない人の声がする。
「母さん！」
どうやら、あたしの両親が来たみたいね。
「今日の夕食はケーキにするわ」
お義母さんの高らかな宣言を尻目に、浩介くんが急いでリビングに行き、ケーキを冷蔵庫にしまう。
「あたし、少し休むわ」
「ええ、優子の部屋。私達の頃と変わらなくてよかったわ」
母さんがやや不審な笑顔で言う。
「もうっ、母さん！　勝手に入らないでよ！」
「あはは、ごめんなさいね」
母さんのこの様子、絶対反省してないわよね。まあ、変わってないのは良かったわ。
あたしは部屋に行って休むと、母さんもあたしの部屋に入ってくる。
「優子の部屋にはあまり入ってこなかったけど、本当、優子の結婚生活が充実しててよかったわ」
「ありがとう」
ともあれ、あたしのことはそれなりに心配してくれているみたいでよかったわ。

「それでね、優子。母さんたちから結婚記念日にプレゼントよ」
母さんがポケットから何かを出してくる。
それは見慣れない一本の棒みたいなものだった。
「え!? 母さん何これ!?」
「ふふっ、優子、これは妊娠検査薬よ！」
母さんがニッコリと笑顔で言う。
「も―!!! 母さん!!!」
あたしは毎度のことに頭に血が上ってしまい、大きな声を出してしまう。
両家両親や浩介くんのおばあさんによる妊娠催促はいつものことだけど、まさかこんな圧力をかけてくるなんて思わなかったわ。
「あのね優子、よく聞いて？ まさかと思うけど、旦那さんとレスになったりしてないわよね？」
「そ、そんなわけ無いわよ！」
頭に血が上っているあたしは、女の意地が恥じらいにあっさりと勝ってしまう。
「だったら、受け取りなさい。いい？ 避妊というのは決して万能ではないのよ。もし生理予定日から1週間から10日経っても生理が来なかったら、これを使いなさい」
「うっ……」
母さんに、諭されるように言われてしまう。
そう、確かに避妊には色々な方法があるけど、それで確実に妊娠しなくなるというわけではなく、様々な偶然で妊娠は起こり得る。
「いい？ ここに尿をかけるだけで判定できるわ。もし陽性の場合は、両方が変色するわよ。そうなったら、産婦人科に行って見てもらいなさい」
「は、はい」
久々に母さんから女性としての教育を受ける。
確かに今すぐじゃなくても、あたしも赤ちゃんは欲しいので、今知っておいても損はないものね。
「ともあれ、おかしいなと思ったら、これを使ってね。ただし、生理予

定日から1週間から１０日は厳守するのよ。フライングで検査すると、妊娠を見落としちゃうわ。そうなったらまた判定し直しになるわよ」
「う、うん……」
久々に母さんの話を聞き入る。
「とにかく、これは母さんからのプレゼントよ。今は使わないとしても将来的には必ず必要になるわ。無駄にしないでね」
「わ、分かってるわ」
あたしはとりあえずこのプレゼントを受け取り、タンスの中へと入れる。
色々と疲れたので、あたしはベッドの上に寝転がり、スカートから下を布団で覆う。
「ふふ、優子が女を忘れてなくてよかったわ。結婚してしばらくしちゃうと、女らしさを無くしちゃう女性が多発しちゃうのよ」
あたしのこの何気ない仕草を、母さんが褒めてくれる。
「もう、母さんったら」
だって、浩介くんがあんなにえっちだと、嫌でも女の子らしさが身についちゃうもの。
それに、結婚してからますます浩介くんのことが好きになっちゃったわ。
多分あたしが、不老だからだと思うけど。
「でも大事なことよ。その御蔭で、母さんだってずっと父さんを射止めてるんだから」
それにしても、母さんが女を忘れていないのは素晴らしいと思うわね。
父さん、全然浮気しない人だって言うし。
「優子ちゃん、準備できわよー！」
「はーい！」
あたしと浩介くんは部屋で休ませてもらい、両家両親が準備してくれている。

テーブルにはさっき買ったケーキの上に「浩介と優子、結婚記念日おめでとう」と器用な文字で書かれていた。ちなみにこれも食べられる。
そしてテーブルの上にはもう一つ、結婚式の時にもらったキャンドルがある。
今は全く燃えていなくて、これから結婚の年数と共に燃やしていくことになる。
ちなみに一番下は「２５」になっている。
「いいわねえ、母さんたち1年出すの忘れてて2年燃やしたりしてグダグダになっちゃったわ」
「あはは……うちもなんですよ……」
どうやら、比較的ラブラブの夫婦でも燃やし忘れみたいなのはあるみたいね。
「よし、俺が燃やすぞ」
浩介くんがそういうと、マッチ棒を擦って素早くキャンドルに火をつける。
ともあれ、これで1の部分まで燃やせばいいのね。
「さ、始めるわね？」
「はーい！」
あたしが代表してケーキを六等分していく。
６人前のケーキは意外と量が多く、等しく切り分けられなかったけど、あたしが小さく、浩介くんに大きいサイズのを分ければよかった……んだけど……
「ちょっと待って2人とも」
お義母さんが食べ始めようとしたあたしたちを止める。
「浩介の所に残ってるカード。これ、２人で食べなさい」
浩介くんのケーキにカードが入っていたため、お義母さんはそれが気に入らないらしい。
「え!?　あ、ああそうだな」
浩介くんがフォークに手をかけようとする。
「あーダメ！　ラブラブ夫婦らしく口移ししなさい！」

「「ええ!?」」
お義母さんの突然の宣言に、あたしたちは同時に固まってしまう。
「ふふ、優子も浩介くんもラブラブだものね。それくらいしたら愛も深まるわ」
「は、恥ずかしいって！」
突然の提案に、浩介くんが抗議する。
あたしはというと、浩介くんとの口移しを想像して、あっという間に顔を真っ赤にしてしまう。
「あらあ？　恥ずかしいからいいんじゃないの。優子はどう思う？」
「あうあう……浩介くんと口移し……結婚記念日カードを口移し……」
「優子ちゃん？　大丈夫？」
「こ、浩介くん！」
正常な判断力がなくなったあたしは、浩介くんを上目遣いで見つめてしまう。
「うっ……よ、よし分かった！」
浩介くんがカードの端を唇に含み、こっちに近づけてくる。
「んっ……」
あたしがもう一方の端を口で掴んでお互い少しずつ唇同士を近付けていく。
考えてみたら、バレンタインデーの時もこれをしてたっけ？
「んっ……ちゅっ……」
そして、中央の地点で唇同士がふれあい、あたしは殆ど本能的に浩介くんとキスをする。
「じゅっ……じゅるるるっ……」
浩介くんも理性が吹き飛んじゃったみたいで、あたしが浩介くんの唇に舌を当てると、すぐに受け入れてくれた。
ああ、ずっとキスしていたいけど、息苦しくなっちゃうのよね。
「じゅっ……じゅるっ……ちゅぅううう……」
「んっ……ちゅぱっ……ぷはあー！」
唇が離れると、茶色い唾液の混合物の糸が落ちる。

「わー！　２人とも大胆！」
「うおお！　母さん！　俺たちも……！」
「ちょ、ちょっとあなた！　もうっ、しょうがないわね。ちょっとだけよ！」
　お義母さんが感激の声を上げると、父さんまで年甲斐もなく母さんにキスを迫っている
「あ、あの！　ケーキ食べないと！」
「お、おっとそうだったな！　失礼失礼」
　珍しく父さんが暴走してしまっていて、あたしが慌てて止める。
　まあ、元はと言えばあたしたちが悪いんだけど……いや、元凶はお義母さんかな？
　うーん……まあいいわ。
　ともあれ、この後はケーキを普通に食べる。
　母さんも少し反省したのか、妊娠の催促をしてこなかった。
　まあ、いい加減あり得ないとは思うけど、この歳で弟か妹ができた何てなればシャレにならないものね。
　というか、２人兄弟で姉が既婚者ってなったら、もうほとんど一人っ子と変わらないわよね。
　というより、あたしもこの歳になると弟妹というより息子娘に近いと思うし。
　……って、変なこと考えても仕方ないわね。あたしまでおかしくなってるわ。

「「ごちそうさまでした！」」
　あたしたちでごちそうさまをする。
「じゃあ母さんたち帰るわね。大丈夫よ弟妹は出来ないわ」
「ああ、父さんもちょっとおかしくなってた」
　どうやら、問題はないみたいね。
「うん、帰り道気をつけてね」
「分かってるって」
　母さんたちが家に帰り、あたしたちもそれぞれ夜の自由時間を過ご

す。
浩介くんはさっきの出来事があまりにも刺激が強かったらしく、「本当に悪いんだけど、今日はさっきのあれでどうか勘弁して欲しい」と言っていた。
あたしも子供ではないし、さっきので十分満足だったので、今日はお互い休むことでお開きとなった。
あたしたちは明日から春休み、そして4月からは大学2年生になる。
またどういう日々になるのか、2年目は何を勉強するのか、今から楽しみだわ。

# 第十章　女子大生　篠原優子の物語　上級生編

## 意外な仲間

「浩介くん、行こうか」
「おう」
今日は、４月最初の登校日、この日からあたしたちは大学２年生になったことになる。
１年生は入学式があるけど、面倒なイベントのない大学では、あたしたちは単に最初の講義を受けに行けばいい。講義概要やシラバスから２年次には主に何をやればいいのかはあらかじめ決まっている。
サークルの勧誘も桂子ちゃんが申し訳程度にとどめている。
２年になればようやく一般教養が少なくなり専門的な科目が増えていく。ようやく「再生医療学科」の本領発揮と言ってもいいだろう。
あたしたちも専門とする再生医療の内容を、蓬莱教授や瀬田助教以外から教わることも増える。といっても、彼らはみんな蓬莱教授に頭が上がらないらしいけど。
まあ、蓬莱教授の実績を考えたら、致し方ないのかもしれないわね。
とにかく、大学は高校みたいなイベントは少ない。だから新年度でもいきなり講義が始まる。このことには、来年以降は慣れていきたいと思う。
あたしたちは大学についたら、さっそく１限目の講義を聞きに行くことにした。
「えー皆さん、哲学を担当しております――」
２年次の１限目に設けられていたのは哲学と中国語だったため、あたしたちは哲学を選択した。
ちなみに、再履修せざるを得ない科目も、落とした単位もないあたしたちは、万全の状態で２年次に挑むことができる。
「哲学というと、難しくてお硬いイメージを持つ方もいらっしゃるでしょう。しかしその世界は、とても興味深く、皆様を飽きさせることはないと言う気持ちで、教えてまいりたいと思います」

哲学の先生は、とても物腰が柔らかい先生だった。
「次はどうするか？」
「うん、ここは専門科目の――」
あたしと浩介くんは、相談しながら履修を決めていく。
同じ学科であるのみならず、同じ家の夫婦のあたしたちは、いつも大学で一緒だった。
さすがに今年には履修単位が変わると思ったけど、1週間の時間割とにらめっこした感じでは、どうやら全くそんなことはなかったみたいね。
「またずっと、浩介くんと一緒になれるわね」
「ああ」
浩介くんとずっと一緒なら、生理の時とかにノートを写させて貰うことも出来るのも、メリットのひとつだったりする。
今年は前半の定期試験に当たる7月中旬がやや危ない感じなので、ちょっとだけヤキモキしている。まあ、前回の試験の時も、少し重なってたけど何とか乗り越えられたし、最悪な日に当たらなければ大丈夫だと思うわ。
とにかく、重ならないことを祈るしかないわね。
「ふう、今日も終わったな」
浩介くんが少しだけ疲れた風に言う。
「うん、天文部に行こうよ」
講義が終わったら、サークル活動として去年に引き続き天文部がある。
「そうだな」
あたしたちは、桂子ちゃんに指定されたいつもの天文サークルの場所へと向かう。
コンコン
「はーい！」
扉をノックすると中から桂子ちゃんの声がする。
ここは去年度と何も変わらないわね。

「あたしよ」
「あ、優子ちゃんいらっしゃい、入っていいわよ」
　ガチャッ
　桂子ちゃんの声と共に扉を開ける。
　さて、今年の天文部と言えば、小谷学園から新しいメンバーが来ることになっている。それが――
「あ、篠原先輩。去年はお世話になりました」
　去年というのは、文化祭のことよね。
「いいのよ。頑張っているんでしょ？」
「ああ」
　達也さんは、桂子ちゃんを意識してかあえてぶっきらぼうに話す。
　他にも僅かながら、見かけたことのある男子たちの姿が見える。
　そう、彼らは去年卒業した、元小谷学園の天文部の面々だ。
「お、懐かしい顔だな。みんな久しぶり」
　浩介くんがそう声をかける。
「篠原先輩も、２人とも仲が良さそうでよかった」
　彼らもまた、あたしたちの夫婦仲が良好なことに胸を撫で下ろしているみたいね。

「何だか、一昨年に戻ったみたい」
「うんうん」
　小谷学園にいた頃と違うところと言えば、桂子ちゃんと達也さんが付き合い始めたことくらいかな？
　コンコン
「はーいどうぞー」
　また扉がノックされ、桂子ちゃんが応対する。
　あれ？　まだいたっけ？
　ガチャッ……
「すみません、ここが天文部ですか？」
「え、ええ……って歩美さん!!!」
　扉が開かれると、何とそこにいたのは歩美さんだった。

「あ、優子さん！　良かった！　やっぱり天文部にいたんですね！」
「あれ？　あなた確か優子ちゃんの結婚式にいたわよね？」
桂子ちゃんがはっと気づいたように言う。
「はいっ！　山科歩美です！」
歩美さんはビシッとした顔で言う。

「うおっ、そう言えばいたなあ、とびきりかわいい子！」
「石山先輩や木ノ本先輩ほどじゃないけど、中々雰囲気が出てて良さそうだな」
「おいっ！　今は石山先輩じゃなくて篠原先輩だろ！」
「おっとそうだった！」

天文部の人も突然表れた第３の美少女に、動揺を隠せないみたいね。
「そんなことより、歩美さんどうして佐和山大学に？」
確かに、距離的に通えない距離ではないとは思うけど。
「いやー、まあその、偏差値的にもちょうど良かったですし、優子さんや蓬莱教授がいるって点で、ここを選びました！　ええ、学部も蓬莱教授のところですよ！」
どうやら、歩美さんも再生医療を学びたいらしい。
「ねえ篠原先輩、もしかしてこの子って？」
後輩の男子の一人があたしに声をかけてくる。
「ええ、あたしや永原先生と同じくＴＳ病よ。あたしがカウンセラーとして、この子の面倒を見てあげてるわ」
「はいっ、優子さんにはずいぶんとお世話になりました！」
歩美さん、大学デビューしたばかりなのか、言動が時折緊張感のあるものとなっている。
でも、新しいＴＳ病患者が佐和山大学に入った。となると、どうしても蓬莱教授の顔がちらついてしまうわね。
「それでその、歩美さん」
「はい？」

歩美さんが不思議そうな顔をする。
気付いていないわけ無いと思うんだけど。
「蓬莱教授の所に、行ってみる気はないかしら？」
「え!?　今からですか!?」
歩美さんは、かなり驚いている。
「ええ、蓬莱教授の実験ですよ」
「えっと、遺伝子を提供するって言う、あれですか？　うーん」
歩美さんはかなり悩んでいる。
まあ、普通はそうよね。歩美さんには、恋人もいないわけだし。
「どっちにしても、だ。この学校にもう1人ＴＳ病の人、それも優子ちゃんがカウンセラーとして面倒を見た患者がいると言うことになれば、蓬莱さんの方から接触を図ってくると俺は思うぜ」
浩介くんがもっともな推察を述べる。
「そうね……えっと、浩介さんに賛成です！」
「ええ、あたしもそう思います」
コンコン
あたしたちの意見がまとまりかけていると、また扉がノックされる。
「はいどうぞー！」
ガチャ……
「失礼する。おお、やっぱりここにいたか！」
扉から現れたのは蓬莱教授だった。
ナイスタイミングね。
「あら、噂をすれば表れたわね。蓬莱教授」
桂子ちゃんが蓬莱教授に対してリラックスしたように言う。
「おう。して君が山科歩美さんでしたな。久しぶりだ」
「あ、蓬莱教授。あの……2年前、その節はお世話になりました。本当にありがとうございます」
歩美さんがペコリと蓬莱教授に頭を下げる。
歩美さんが「お世話になりました」と言っているのは、例の女子更衣室問題のことだと思う。

「何、礼には及ばんよ。俺としても、山科さんを助けることで、多大な利益と財産を得られたからね。あー、財産と言うのはお金という意味ではないぞ」
蓬莱教授の宣伝部にとってのノウハウと言う意味での財産よね。
「あれ？　山科さんと蓬莱教授って繋がりあったのね？」
どうやら、桂子ちゃんは忘れているみたいね。
「ほら、２年前の秋ごろに、ＴＳ病患者と学校での女子更衣室問題があったじゃない？　あの時の患者さんが歩美さんなのよ」
「あ、そう言えばあったわね！　へー、世界って意外と狭いわねえ」
桂子ちゃんが思い出し、感心した風に言う。
「でだ、君にも是非協力して欲しい。何、することは綿棒で頬の内側をこすって、このガーゼに置くことだけさ」
蓬莱教授が、さっそくガーゼと綿棒を取り出す。
「は、はい」
「何にせよ、入学者の名簿に君の名前があったのを見た時には、最近の俺にも、ようやく光の時代が来たと思ったものだ」
蓬莱教授が、朗らかそうな表情で言う。大学では、目的の人物を無理なく呼び出すのはとてつもなく難しい。
そう言う意味でも、天文サークルが一番可能性が高いとは言え、歩美さんをこうも早く見つけられたのは幸運と言って差し支えないと思う。
そう言えば、恵美ちゃんが実験に参加したいと言ってきたときも、蓬莱教授は喜んでいたっけ。
「えっと……こうやって？」
歩美さんが、言われるがままに綿棒で頬の内側を擦り、遺伝子を蓬莱教授に提供する。
「ああそうだついでに君たちにも、してもらおうか」
「おう」
「はい」
「分かりました」
蓬莱教授は同じセットを３つ持ち出すとあたしと桂子ちゃんと浩

介くんがそれぞれ綿棒で蓬莱教授に細胞を提供する。
「さて、必要な用事は済んだから、俺はここで失礼させてもらうよ。山科さんには改めて礼を言う。ひとまず、さらばだ」
そう言うと、蓬莱教授は颯爽と扉を開けて普通に立ち去っていった。
「何か、こうして身近になると改めてすごい人だよね」
歩美さんが一息つく。
「ああ、蓬莱教授の不老実験、俺もまた、待ちわびているんだ」
「ええ、私たち天文部もよ」
被験者の浩介くんと桂子ちゃんが、蓬莱の薬への想いを述べる。
今の薬は、あくまで未完成品だから、まだ足りないという思いが強い。
「さて、早速今年度初めての天文サークルを開始するわ。みんな……自己紹介は不要よね」
「ええ、そうですね部長」
歩美さんを除けば、ここの天文部は全て小谷学園出身で、あたしにとっても、一昨年に天文部で面識のある顔ばかりだった。
ちなみに、去年空席だった副部長には、達也さんが座ることになった。

「オリンピックまで、後3、4ヶ月ねえ。聖火リレーとかどうなるかねえ」
「そうだなあ、日本選手団はどれくらい活躍してくれるかしら？」
桂子ちゃんもオリンピックの話題を持ちかけてくる。
「まあ、優子ちゃんはそういうのとは無縁だよなあ」
「あはは、あたし身体能力だけは本当ダメなのよねー」
本当、それだけはどうしようもないって感じよね。

「なあ、歩美ちゃんもかわいいよなー！」
「うんうん、しかも篠原先輩と同じＴＳ病だってさ」
「しかし、相変わらずそうには見えねえよなあ」

「だよなあ、女の子そのものって言うか、あ、でも時々篠原先輩より男の名残が色濃く出てる気がするな」
「どっちにしても、中庄に木ノ本先輩を取られた今、俺たちの希望は歩美ちゃんだけだぜ！」
「ああ、負けねえぜ！」

男たちは早速歩美さんの取り合いをし始めている。
本当、男ってそればっかりよね。まあ、それが魅力とも言えるけど。
天文系のサイトを巡回したり、情報を集め終わったら、あたしたちはいつものように雑談に入る。
あたしも浩介くんと適当に話しているし、他の天文部員たちもさっきから歩美さんの奪い合いばかりで天文系のことは何もしていない。
この緩さは小谷学園譲りなんだけど――
「あの優子さん、ここってこんなに緩いサークルなんですか？」
歩美さんが不思議そうな顔で聞いてくる。
「ええそうよ」
「何だか、カルチャーショックかな？」
「あはは、小谷学園ってものすごい自由なのよ。自由すぎて受験生に敬遠されちゃうくらいにはね」
「あー、聞いたことあります。でもどうして佐和山大学の天文部までこんななんです？」
まあ、幸子さんの地方まで噂が広まるくらいだもの。歩美さんが知らないわけないわよね。
「ふふ、このサークルで小谷学園出身以外の学生さんは、歩美さんだけよ」
「え!?　確かにさっき自己紹介は不要って言ってたけど」
「あー確かに、この学校の出身高校で一番多いのが小谷学園だけど、もちろん他の高校出身の人もいるわ。このサークルがちょっと異常なだけよ」
そもそも、桂子ちゃんにあたしが誘われて、いつの間にか浩介くんがいついて、坂田部長が卒業してから、桂子ちゃんが部長になって、あ

たしもいると言うことで男子たちが多数釣られたのが天文部の隆盛の原因だった。
直哉さんによれば、あたしたちが卒業してから、また部活の雰囲気も大きく変わったらしいけど。
「そ、そうですか」
「ふふ、でも身構えなくていいわ。歩美さんなら、優子ちゃんの結婚式で一応顔は見ているし、みんな優子ちゃんや永原先生を通じて繋がりがあるわよ」
「はい、分かってます」
歩美さんが力強く言う。うん、これでもう心配要らないわね。

「それにしても、なんか早速私を巡って奪い合いになっている気がするなあ」
歩美さんは、どこか上の空で他人事のように言う。
「当たり前でしょ。この部活に女子は3人、あたしも桂子ちゃんもパートナーがいるんだたら、残った男たちで歩美さんを巡って争いになるに決まってるじゃない。ただでさえ歩美さんは美人なのよ」
「うっ、確かにそうは言ってもねえ……」
歩美さんはまだ慣れていないという感じの表情になる。
まあ確かに、生粋の女の子でもサークルに入ったばかりで、いきなり複数の男子から狙われて動揺しないわけがないものね。無理もないわ。
「歩美さん、あなたは今、長い長い安定期に入っているわ。あなたもいずれ、好きな男の子ができるようになるわよ。だけど、あんまり悠長に構えすぎたり意図的に何十年も避け続けるのはダメよ」
あまり恋愛を放置すると、永原先生の初恋みたいなことになりかねないもの。
「う、うん。恋愛、頑張るわ」
「うん、その調子で、女の子らしくするのよ」
歩美さんの決意を、あたしは応援してあげたい。
歩美さんは幸子さんと比べても女の子としての成長が遅いけど、こ

れでも平均的なレベルには収まっている。
今回の天文部もいつも通り、適当に切り上げて帰宅となった。

「ただいまー！」
「あ、２人とも、お帰りなさい」
昨年度と同じようにお義母さんに迎えられて、あたしたちは今年度最初の大学生活を終えた。

# 2つのＴＳ病　前編

歩美さんも大分天文サークルの生活に馴染んできた４月半ば、あたしたちは永原先生から四国で新しい患者が現れたというニュースを除いて、ほとんど平穏無事に大学生活を送っていた。

去年の前期は、１年生ながら「明日の会」の対策など、大忙しの大学生活を送っていた時に比べれば対照的だ。

ちなみに、「明日の会」は未だにホームページは消えておらず、例の患者自殺に対するお詫びの文章だけが、寂しく掲載されていた。

あのホームページも、いつか風化するのかと思うと、何ともいえない気分になる。

あたしたちの記録の中に残り続けるだけ、他の無縁仏よりはマシなのかもしれないけど。

「再生医療の成果として、これまでは座して死を待つしかなかった病気や、あるいは死亡率の高かった病気を治すことができました。特にガンの治療率も年々改善していまして、日本一死亡率が高く不治の病とまで言われましたこの病気も、当校の蓬莱先生の薬の開発もありまして、『治る病気』という認識が広がっています。日本の医療は悪いニュースばかり流れていますが、実際にはかなり充実しているのです」

蓬莱教授以外の再生医療の准教授から、専門科目を受ける。

「――ですから蓬莱先生の業績は素晴らしいのです」

佐和山大学の教授陣は、講義中に隙あらば蓬莱教授の絶賛をしている。

彼らの研究費も、恐らく蓬莱教授から出ているのだと思う。

いや、きっとこの佐和山大学だって、蓬莱教授が事実上の運営者として実験を握っているようなものよね。

あたしと浩介くんはこの講義でもノートを取り、復習に充てる。

人生が長いお陰で、大学の勉強にはかえって集中できた。遊ぶ時間が社会人になると短くなると言っても、あたしたちにとっては他の人

より十分長くとれるし、それ以前に、今勉強すれば、絶対に何かいいことが起きると思っていたから。
「特にこの万能細胞、これは当校の蓬莱教授が発見し、今では私が主に研究しております。この細胞はですね、人間のあらゆる細胞になることができる。それ故に、様々な難病を治療したり、場合によっては若返りも可能であると、まあそう言う細胞でもあるわけですね。ですが、いいことばかりではないのです。その点は、次回に回しましょう。では、本日の講義はここまで、ご清聴ありがとうございます」
時間になったらしく、准教授が頭を下げて教室を出る。
佐和山大学の再生医療系は、ノーベル賞学者の蓬莱教授を擁するとあって、学生たちの士気がとても高い。もちろん、あたしほどに明確な目標がある人は珍しいけれども、それでも全員が、大きなやりがいを感じていた。
小谷学園程ではないけど、一般教養を除けば、話し声がうるさい講義は殆どなかった。
それはそれで、やはり快適で、あたし自信のモチベーションアップにも繋がると思う。
「ふう、今日は天文サークルなしね」
「ああ」
天文サークルも、小谷学園の時とは違い、毎日あるわけではない。
桂子ちゃんの履修状況次第になっているし、場合によっては達也さんとのデートが優先されることもある。あたしたちは、今日のところは荷物をまとめてまっすぐ帰宅することになった。
「にしても、あの先生、まさか蓬莱教授の万能細胞を研究していたとはね」
浩介くんが、今日最後の講義について話す。
「うん、京都大学で医学を学んで、わざわざこっちに来たって言ってたけど」
普通なら、そのまま京都大学に残りそうなのに。
「それだけ、蓬莱教授が偉大だってことだ」
「そうよね」

蓬莱教授の薬、今のところ国は静観を決め込んでいるけど、完成すれば、いずれ蓬莱教授に総理大臣も接触してくると思う。
民間の私立大学の教授と言っても、こんなとんでもない薬を開発してきた教授に、いつまでも政府や国際社会が静観を決め込んでくるとは到底思えないもの。
「ま、ともあれ俺たちは、今のうちに勉強して、修士博士になるんだな」
「うーん、博士までは分からないわよ」
その辺りは、成績との兼ね合いもあると思うし。
まあ、今のところあたしの成績は優が多いけど、これも一般教養が多分に含まれているから、これからのことは正直分からないわ。
あたしたちは、順調に大学生活を続けている。でも、先のことがわからないのが大学生活の難しさでもあるのよね。

ブー！　ブー！　ブー！
「うーん？」
自宅に帰宅後、あたしが寝る前に自室でくつろいでいると、突然携帯電話が鳴った。どうやらメールみたいね。
ピッ
あたしは携帯電話を開けて、宛先を見てみる。
「え？」
送り主は、珍しく蓬莱教授だった。

題名：大きな発見があった
本文：優子さん、大きな発見をした。やはり、山科さんを誘っておいて正解だった。詳しいことは明日の昼休みか講義終了時に話したいと思う。浩介さんにも同じ内容のメールを送ったから、よく相談して、明日の昼までに返信してほしい。

大きな発見？　歩美さんのお陰？
「うーん、どういうことかしら？」
まあ、どういう発見をしたのかは、明日行ってみれば分かるわね。

とにかく今は、浩介くんの部屋に行って、昼か放課後かで相談しないといけないわね。
「よし、蓬莱教授の所に行くか」
「ええ」
翌日、浩介くんと話し合った結果、昼食を食べ終わって直ちに研究棟に行くということになり、蓬莱教授にも連絡してそれを了承してくれた。
あたしたちは、食堂から一直線に「蓬莱の研究棟」を目指す。
研究棟の前に行くと、蓬莱教授が佇んでいた。
「蓬莱教授、お待たせしました」
「おお、待っていたよ。悪いな、時間取らせて」
「いえいいんです」
蓬莱教授があたしたちにお礼を言ってくれる。
とにかく、本題を聞く必要があるわね。
「さて、こっちへ来てくれ」
「「はい」」
あたしたちは、蓬莱教授の部屋へと呼び出される。
部屋の中を見ると、既に歩美さんもいた。
「あ、歩美さん」
「あ、優子さん、こんにちは」
歩美さんが椅子から立ち上がって、あたしに軽く頭を下げてくる。
その所作は、とてもきれいで見とれてしまうくらいのものだった。
「ええ、こんにちは」
あたしも、挨拶をしてから椅子に腰かける。
「うむ、みんな揃っているな。では話そう。俺はＴＳ病について、ある一つの仮説をほぼ立証することに成功した」
蓬莱教授が物々しく言う。
「あの、仮説と言うのは？」
まず歩美さんが蓬莱教授に質問をする。
「ああ、どうやら、ＴＳ病には２通りの機能があるみたいなんだ」

「え!?　２通り!?」
　あたしたちは、驚いてしまう。
　そもそも、女性に変わる病気に２通りの機能なんて？
　あたしたち、外見上も内面的にも全て女の子なのに？
「ああ、両者は外見上も、内面においても不老という意味では本質的には違いはない。ただ、不老となる上で、そのメカニズムが、ほんのわずかに異なるんだ。もちろん、日常においては全く同じだし、どちらの系統も完璧な不老には代わりないから安心して欲しい」
　蓬莱教授は、よく分からない話をする。
　だったらどうして２通り？
「え!?　どう言うことですか？」
「細胞が分裂する際に、普通の人間では分裂前よりも情報が劣化する。これがテロメアの長さとなって人間は老化すると言われている」
「ええ、そんな話を聞きました」
　確か以前、協会の会合でそんな話を聞いたことがある。
「ところが、君たちＴＳ病の不老遺伝子では、細胞がどれだけ分裂しても、劣化を引き起こさない。なぜか分かるかい？」
「もしかして、テロメアが短くならないとか？」
　というか、それ以外考えられないわよ。
「ああそうだ。どうやら君たちには、テロメアが短くなるとそれをすぐに修正する力が働くみたいなんだ」
　蓬莱教授が興味深そうに張り切って話す。
「恐らく、ＴＳ病特有の免疫情報以外にも、細胞の中にそういう情報が含まれているんだと思う。分裂してテロメアが短くなったり、ガン細胞のような異質な細胞が入ったりすると、ＴＳ病の人の細胞は周囲の細胞と密に連携していて、何か異常事態があると即座に他の場所からデータベースを参照して、分裂する都度、自動的にテロメアを修復できるんだ」
「じゃあつまり、ＴＳ病患者が癌にならないって言うのは？」
　あたしが更に質問を追加する。
「その機能によって、ガン細胞やウイルスに侵された細胞をも修復し

てしまうんだ。更に、白血球に代表されるように、無くてはならないが多すぎてもいけないようなものに関しても、自動的に何でも修復してしまう。これが従来俺が考えていたＴＳ病における不老のメカニズムだ」
　あたしたちは、一言も言葉を発さずに、蓬莱教授の話に耳を傾ける。
「そして、このデータベースの解析さえすれば、万事がうまく行くと思っていたが、ここのところ研究に行き詰まっていた」
「ええ」
　そこで今回の発見というわけかな？
「そこに現れたのが救世主山科歩美さんだ。山科さんの遺伝子の不老メカニズムは優子さんや永原先生とは全く性質を異にしていたんだ。何故なら山科さんの細胞は、分裂してもテロメアに何の変化もない。修復さえも起きていなかった」
「そ、そうなんですか!?」
　想定内というあたしの表情とは違い、歩美さんは驚いた表情になっている。
「山科さんの細胞は癌化しても何度か分裂した後いつの間にか元に戻ってしまう。ウイルスに侵された細胞も同じだ。何かがあっても修復力が働くというよりは、悪性の細胞は何事もなかったかのように普通の細胞にも度って振る舞うんだ」
「何か、山科さんの方が優れてそうね」
　蓬莱教授の説明に、あやしは率直な感想を述べる。
「ああいや、そうでもないぞ。優子さんの方、こちらを仮にα型とすれば、β型よりもバックアップが多いことになる。何せ全ての細胞がバックアップになっているからな。β型は、平時の修復力が一見強そうだが、実際には癌細胞が完全に元通りになるまでにはα型よりも時間がかかるからな。一長一短だ。最も、免疫力の強さを考えれば、どちらにも大きな違いはないといっていいさ」
「じゃあ何故それが大発見なんですか？」
　蓬莱教授の取り繕うような話に対して、歩美さんが更に質問をする。

「蓬莱の薬を作る時に重要になってくるんだ」
「どうしてですか？」
　あたしたちは、まだ釈然としない。
「どうやら、ＴＳ病患者にはα型とβ型、両方の性質が色々な割合で混ざりあっているんだ。つまり、どちらか一方しか持っていないというわけではなく、『どちらかがより色濃く出ているか』ということだ。優子さんにもβ型の遺伝子があるし、山科さんにもα型の遺伝子があるってことだ。おそらくやろうと思えばそちらでも出来るだろう」
　蓬莱教授が詳細に説明してくれる。
　つまり、２通りの形態と言っても０か１００かの世界ではないということを意味している。
「何故俺の研究が行き詰まりかけていたか。これでわかった。つまり、今までの薬はα型の遺伝子しか無い、あえて悪い言葉で言えば『かたわ』の薬だったんだ。それで何処かに破綻が生じて寿命が３００歳までにしかならなかったんだ」
　つまり、「歩美さんのお陰でβ型を発見したので、今後はその再現も行い、更に薬の完成に近付けたい」というのが、今回の蓬莱教授の趣旨だということね。
「もちろん、γ型やΔ型がある可能性もあるが、とにかくこのことは永原先生を通じて、協会にも早急に情報を共有したいと思っている。それでよろしいかな？」
「ええ、分かったわ。永原会長たちにも、伝えておいて下さい」
「了解した」
　ともあれ、これで蓬莱教授の研究は先に進みそうね。
　協会の方は、まあ、どちらも本質的には不老という意味で違いはないし、純粋に片方の型しかない人は恐らくいないと思うから大丈夫ね。
　まあ、型が一方しかなかったら、そもそもその患者は不老にはなれないというのが、正しい考え方なのかもしれないけどね。
「さて、俺の話は以上だ。悪いな、時間をとらせてしまって」
「いえいいんです。それではあたしたちも失礼します」

「失礼します」
「失礼します」
あたしが失礼しますと言って立ち上がると、浩介くんと歩美さんも続いて部屋から退室する。
蓬莱教授は、あたしたちにはとても丁寧に接してくれていて、いくら大人の世界の大学とは言え、教授と学生という考えには程遠いものがある。
もしかしたら、あたしや歩美さんなどを、学生としてではなく、協会の会員として接しているのかもしれない。
「びっくりしたなあ、まさか私と優子さんで、普段運用している不老の仕組みが違っていたなんて！」
研究棟から出た後、開口一番に歩美さんが興奮したような口ぶりで言う。
「でも、遺伝子の割合が少しだけ異なるだけでしょ？　普段使われてないだけで、あたしにも歩美さんと同じシステムが搭載されてるって話だし、きっと誤差の範囲よ」
「あー、そうなのかも」
あたしの楽観的な見立てにたいして、歩美さんも同調してくれる。
今回の蓬莱教授の発見によって、あたしと歩美さんの関係が、あるいは他のＴＳ病患者同士の関係が変わるわけではない。
α型もβ型も、あたしたちＴＳ病患者に無くてはならない機能で、どちらが色濃く出るにしても、一長一短があると言うだけだった。
「なるほどねえ、つまりあの薬を飲んだ今の俺は、本来不老足るには複数の型が必要な所を、α型しか所持してないのか」
浩介くんが自分の胸に手を当てながら言う。
「うん、まあそれ故に不完全なのよね」
多分、片方の型だけでは、不老足り得るには不十分だった。それ故に、「蓬莱の薬」はあたしたちと違って完全不老の薬ではなく、有限の寿命の薬になってしまったのだと思う。
あたしと永原先生は、共にα型だったので、蓬莱教授の手によってα型の研究こそ進んだけど、それだけだったら研究は早晩行き詰まっ

ていたことになる。
　もちろん、協会の姿勢もあるだろうけど、あたしと永原先生にもその性質が潜在的にあった以上、分かりにくくても、β型はいずれ発見されていたとは思う。
　それでも、歩美さんの佐和山大学への進学が、その発見を大幅に早めてくれたのは事実だった。
「だなあ、でも、β型の解析だけで、研究は進むのかなあ？」
「分からないわ」
　浩介くんが、まだ不安を克服できないという表情で言う。
　多分だけど、あたしの「女の勘」として、まだ一山も二山もあると思う。
「さ、考えても仕方ねえじゃん。とりあえず午後の講義に行こうぜ」
「うん、じゃあ歩美さん、あたしたちはここで。また放課後ね」
「はい」
　あたしたちは、歩美さんと分かれて、午後の講義へと進んでいく。
　歩美さんが何の気なしに提供した遺伝子、歩美さんはまだ自覚がないと思うけど、あの時、歩美さんは人類の歴史をも動かしたことになる。
　今、老化という全人類の不治の病が、蓬莱教授とあたしたちＴＳ病患者によって克服されつつある。これを行うということは、間違いなく今のあたしたちは全人類の歴史の中心に、あるいは最先端にいるということ。
　それはそう、間違いなく今年のオリンピック、日本人がありとあらゆる種目で金メダルを取ることの総和、いやそれらを相乗することよりも、数倍にして勝る程に偉大なことだと思う。
　そういう意味で、歩美さんもまた、人類史に名を残したのかもしれないわ。

# ２つのＴＳ病　後編

「えっと、それでは会合を開始します」
　ゴールデンウィーク前の土曜日、あたしは他の会員たちと同様に、永原先生に協会の会合に呼び出された。
　今回の会合は正会員のみならず、数多くの普通会員が参加しているが、維持会員としてよく参加していた蓬莱教授や高島さんは、多忙を理由に参加していない。
「今日の議題は他でもないわ。蓬莱先生の発見についてよ」
　協会にも、蓬莱教授の発見は驚きを持って迎えられた。
　ＴＳ病の不老遺伝子は、今まで考えられていた以上に堅牢なものだと分かった上に、２つのタイプがあると分かったからだ。
　あたしたち協会の会員たちはまさに一枚岩という結束力を持っていた。そのＴＳ病に２つの機能で分類できるというのは、本質が変わらないにしても大きなことだった。

「私たちに、別のパターンがあったなんてね」
「せやな、うちら不老の仕組み含めて、１つや思っとったのに」
「でも本質的には違いはなくて、色濃く出てるだけよね」
「うーん、それがいまいち分からへんのよ」
「うんうん」

　今日の会合は他の会員たちも、いつも以上のざわつきが見られる。
「はいみんな、静かにして。今回の蓬莱先生の発見、α型とβ型について話すわね」
　結局、当分の間は仮称だったαβがそのまま使われることになった。
「α型は、少なくとも私と篠原さんが該当します。こちらが従来から知られていた不老のメカニズムです。こちらは細胞同士が密に連携しあい、異常を発見し次第、直ちに修復を繰り返しています。一方のβ型は、山科さんの協力で発見できました。β型では、そもそも細胞

分裂の際に完全コピーを行っています。そしてウイルスや癌細胞などによる何らかの外圧があれば、その異常細胞ごと正常細胞に戻してしまいます」
　永原先生が、蓬莱教授と同様の説明を繰り返すと、会員たちも真剣に聞いている。
　あたしにとっては2回目の説明だけど、図解の入ったパネル入りで分かりやすいわね。
「蓬莱先生によれば、何らかの重病になった時にはα型の方が治りが早いとのことでした。一方で、何もない場合、β型の安定性が勝ると言います。実は蓬莱先生からこの事実を聞いた時には、私には心当たりがありました」
　永原先生が、そう言うと、比良さんと余呉さんも何かを思い出したような顔をする。
「その件に関しては私から説明します。あれは大正の終わりごろの話です。私と会長の2人で、結核……おそらくですけど肺結核になったことがあったんですよ」
「ええ、そんなこともありました。当時結核と言えば死因としては1位になったこともある程の難病でしたから、最初に会長が慢性的な体調不良が急に悪化したと言うので、医師にかかってみたら結核……当時の言い方で言えば『テーベー』だと言われたときには驚きました」
　比良さんと余呉さんが、懐かしそうに話す。
「でも、当の私は、全くといっていいくらい危機感はなかったわ。何分江戸時代にも様々な病になったことがあったんですが、全て翌日にはケロリとしてましたし、大正時代は江戸時代よりも衛生環境が良くなってましたから、今回も問題ないと思ったんです」
「えっ!?　いくら何でも嘘ですよね!?」
　永原先生の物言いに、あたしは思わず口を挟んでしまう。
　だって当時の結核と言えば、今とは比較にならないくらい蔓延していて恐ろしい病気だったはずなのに。
「嘘じゃないですよ。何せ、隔離入院だと言われて病室に入った頃には明らかに咳も止み始めて峠を越したような感じがしましたし、明日

どころかその日の夜にはもう完全に咳は止んで、明日以降何事もなかったかのように振る舞えたもの。あの時何度検査しても陰性反応しか出なくて、驚いた医師の顔は忘れられないわ」
恐らくだけど、このエピソードが比良さんと余呉さんに特権意識を植え付けたんだとあたしは思う。
だって、打つ手も少ないくらい人々がバタバタと死ぬような病気を、何もしないで半日で完治してしまうんだもの。特別意識を起こすなという方が難しいわ。
「で、その翌年に、私も体調を崩して病院に行ってみたら結核に感染していると診断されまして。私としても、世間は震撼してるけど、会長が病状を悪化させても半日で自力完治させた病気ですから、どうってことないと思ってたんです」
比良さんが淡々とまるで「若き日の思い出」のように語る。
まあ、永原先生を見たらそう思うわよね。
「当時の価値観からすればとんでもないことですが……私の場合、治るまで2日を要したんです。お恥ずかしいことですが、たまたま永原会長と同じ医師だったので、事情を説明してお医者さんではなく会長に看病してもらいました」
比良さんがさっきとは声色を変えて、少し恥ずかしげに言う。
恐らく、このエピソードを統合すれば、比良さんはβ型の遺伝子を持っていると言うことになるわね。
「ありましたね、そんなこと。私は幸い、結核にはならなかったですが。ちなみにそのお医者さん、私達の顛末を見てＴＳ病の患者は、特別な免疫力を持っているんじゃないかと世間に初めて公表したんですけど……当時は誰にも相手にされなかったわね」
余呉さんも、昔を思い出した風に言う。
まあ、そもそも永原先生と比良さんとでサンプル数が2では「誤診」とする方がいいものね。
「恐らく、今思えばこれが同じＴＳ病患者でも私と会長で、難病を完治させるまでに時間差が出た理由だと思います。蓬莱先生の推測では、β型の人の場合、α型のシステムが必要になった時にタイムラグがあ

るために、完治が遅れるのではないかとも言ってます。なので、『ＴＳ病患者は癌にも脳梗塞にも心筋梗塞にも動脈硬化にもならない』というのは、極めて厳密な意味では間違っていると言うことにもなります……もっとも、『それはもうならないと同じ』と見なしてもいいレベルですけどね」

余呉さんが、更に分析と感想を述べて、周りの会員たちもウンウンと頷いている。

「むしろ不思議なのは、何故初期の段階で私たちが結核菌を駆逐できなかったかよ。普通なら医者にかかる前に何事もなかったかのように治ってるはずなんですが」

永原先生が不思議そうに言う。

「おそらく、深刻な事態になるまでは強力な免疫は作用しないんではないですか？」

あたしが疑問に対して推測で答える。

「いや、おそらく当時は今と比較にならないくらい結核菌が猛威を奮ってたせいよ。私達と言えど万能ではないわ。ま、でも今はいいわ。私たちは同じ病には2回とならない体質だから、今の私なら結核菌の塊を飲み干したとしても何も起こらないはずよ」

比良さんの言う通りね。

とんでもないことだけど、あたしたちはそういう体質のもとに生まれ変わったのよね。

「ええ、そのことは蓬莱先生の研究でも示されているものね。それよりも今はβ型の特徴についてが大事よ」

そして、もう1つの可能性が浮かび上がると蓬莱教授は言ったそうだ。

「今開発されている従来型の蓬莱の薬ですが、あれを発展させればβ型の人も早期に完治させる特効薬になり得ると言うことです」

つまり、蓬莱教授によれば一時的に体内にα型を取り入れることで、修復を早めることができる可能性があるのだと言う。

「とはいえ、リスクに見合うとは思えません。仮にβ型だとしても、少しだけ待てばいいだけですから」

蓬莱教授の特効薬案に対して、比良さんは即座に否定的な感想を述べる。
これはあたしも同意見ね。
「せやなあ、あの薬で遺伝子おかしゅーなったら元も子もあらへんし」
「うんうん、あくまでも私たちは理想でなきゃいけないわ」
「結核も癌も恐れるに足らずよね」
他の会員たちも、概ね、比良さんに賛成の様子で、同じくβ型の当事者である歩美さんも頷いていた。
「それでですね、そもそも今回皆さんを呼んだのはですね、蓬莱先生の発表したこの事実を、どう公表していくか？　あるいは黙ったままでいるのか？　ということなんです。というのも、今のところ第３第４の型がある可能性も否定できませんし、確かに研究の完成には近付きましたが、蓬莱先生自身まだいくつも関門があるとおっしゃっています」
「うーん、いずればれるでしょうから、今思いきってすべて公表してしまうのはどうですか？」
「ええ、確かに、この事を公表することによる私たちのデメリットも見受けられませんね」
比良さんと余呉さんが相次いで公表への賛意を示す。今回はあたしも同意見だわ。
「あたしも、今回の出来事は、新しい薬を作った時の記者会見と同時に、公表していいと思います」
とはいえ、どういうタイミングで行うかはまだ未定よね。
「あら？　今回は珍しく皆さん意見一致ね」
永原先生が感心している。
というのも、今までは、重要議題においてしばしば比良さんと余呉さんを中心とした保守的な江戸派と、永原先生やあたしを中心とした革新派との間で、派閥対立のような状態になることも多かった。
まあもちろん、私生活や他の議題では仲は悪くないし、実際に交流

イベントなどでは違った一面が見られて楽しかったし、やっぱり大人よりも大人な人だから、そういった所はキチンと分けて考えることが出来るのよね。
「ですが、もし公開するとしたら、私達がするにしろ蓬莱教授がするにしろ、『今回の壁を乗り越えても、更に幾重もの困難が予想されること』を強調するべきです」
あたしは、1つ注文をつける。
そう、蓬莱教授の宣伝部が、まだ未完成な上に、あたしの広報部も実績らしい実績といえば「明日の会」の征伐ぐらいで、名実ともに貧弱なのは否めない。
なので、今回はあたしも、慎重を期すべきだと判断した。
「比良さんと余呉さんはどう思います？」
「全く、篠原さんに賛成ね」
「ええ、私も同じく」
比良さんと余呉さんが、相次いで賛成してくれて、どうやら他の会員さんも賛成をしてくれたみたい。
「それでは、今回の情報はしばらくは極秘でお願いします……蓬莱教授と調整することにしましょう。では次の議題です、四国で新しい患者が発生しましたが、カリキュラムの成績はどうでしょうか？」
「はい」
中国・四国地域を管轄する支部長さんが立ち上がり、経過報告に入った。
新しい患者さんは、概ね成績良好。ただし昨今の患者の中では中の下といったところだと言う。
「言動面にかなり男が残っていますが、おそらくこの成績なら今回も自殺には至らないと思います。後は、はい。女の子の日が来てからが問題になるでしょうが、楽観材料があります。私服に関してですが、毎日スカートを穿くようになったという報告が上がっていますので、まず心配は要らないでしょう」
「分かりました」
支部長さんの報告に、永原先生もほっと胸を撫で下ろす。

特に毎日スカートを穿くようになったというのは、いい材料よね。

「良かったわ」

「にしても最近の人は本当にみんな優秀だわ。もう毎日スカートを穿くようになるなんて」

「篠原さんが来なかったらどうなってたかしらね？」

「ホンマに、篠原はんが来てから環境が変わったで」

周囲の会員さんたちも、今回の患者さんへの賛辞を惜しまない。

これでもこれだけの賛辞があるなら、あたしが女の子になったばかりの頃、永原先生の報告を聞いた会員さんたちは、どんな反応をしたのかしら？

それにしても、患者さんたちの実年齢を考えれば、普通こういうのは「最近の若いものは」という感じになりがちだけど、やっぱりみんな男から少女に変わって、そして少女のまま不老になったことや、誰の目にも明らかに優秀な患者が増えたら、そんな風に思う気にもなれないものね。

「ともあれ、自殺防止のための『最後の関門』とも言える『女の子の日』に向けて、全力で支援していきます」

「分かりました。警戒を怠らないように、教育をお願いします」

「はい」

永原先生が軽く労って今回の議題も終了する。

あたしは、ＴＳ病そのものはもちろん、協会が世間の知名度を格段に上げたことも、透明性に繋がってあたしたちに対する信用が高まったのも、自殺率の低下に貢献していると考えている。

あたしが正会員になったばかりの幸子さんへの対応の頃は、会員たちにも「成績不良」と烙印を押された患者に対するあきらめムードが広がっていた。

その頃とは違い、今では新しい患者への救済の気力も各々高まっているのがはっきりと分かる。

自殺率が減少したために、初期患者の死が身近でなくなり、元々不

老だったのも相まって、命がぐっと重くなったお影と言えるわね。
「では、本日の会議はここで終了します。後は各自で2次会等を開いてください。解散」
永原先生の解散の声と共に各自が一斉に席を立つ。
あたしは今回の功労者に向けて足を向ける。
「お疲れ様、歩美さん」
「はい優子さんもお疲れ様です」
「大学生活は大丈夫？　もう慣れたかしら？」
「はい、大丈夫です」
歩美さんは、家と本部が比較的近いため、協会の会議には積極的に参加してくれていて、また通学も逆方向なので、座りながら悠々自適だと言う。
「それはよかったわ」
「それよりも優子さんこそ、大学生活は大丈夫なんですか？」
「え、ええ」
歩美さんから逆に指摘されるとは思ってなくて、あたしも一瞬驚いてしまう。
確かに、むしろ体力に劣るあたしの方が問題かもしれないわね。
「私なら大丈夫ですよ。普段から元気ですから」
確かに歩美さんは、普段からあまり大学生活に疲れた様子はない。
どうやら、あたしの心配は無用みたいね。
「じゃあ、あたしは浩介くんも待ってるし、帰るわね」
「お疲れ様でした」
あたしは、軽く会釈して歩美さんと別れ、他の正会員さんたちとも挨拶しつつ、協会の本部を後にして家路についた。

その夜、蓬莱教授からあたしたち協会に向けて、「今度の記者会見は8月の東京五輪の直前に行う。オリンピックが始まってしまえば、世間の関心はしばらくそちらに向かう。３００歳の薬をこれ以上引き伸ばすのも難しいが、やはり今は正面切って反対派と対決するにはリスクがある。また、優子さんの提示した条件は、何もなければこちら

から考えていたことなので歓迎する」との連絡があった。
これを受けて、協会でも2つのメカニズムについての公表は蓬莱教授に任せるということになった。
また、その連絡から程なくして、「東京五輪のチケットを入手した。俺たちで貴賓席だ。やはりビリオネアの資産とは素晴らしいものだ」という連絡まであった。
つまりあたしたちは、蓬莱教授から東京五輪への観戦に誘われたということになる。
あたしは浩介くんと義両親とも相談の上、蓬莱教授の誘いに乗って、東京五輪に行ってみることになった。
ともあれこれで、ゴールデンウィークから東京五輪まで、予定が埋まったわね。
ゴールデンウィークが終わったら、7月に期末試験があり、8月の五輪前に蓬莱教授の会見、そして蓬莱教授と共に五輪を観戦し、大学は後期に入る。
まずは来週のゴールデンウィーク、あたしたちは初めて4人揃っての家族旅行に行くことになったから、それを存分に楽しまなきゃいけないわね。

# 初めての家族旅行　1日目　ダム湖畔の温泉

「優子ー！　そろそろ行くわよー！」
「はーい！」
5月1日金曜日、大学から帰ってきたばかりのあたしは、慌ただしく昨日までにまとめておいた荷物を持って玄関に向かう。
実は今日を含めて2泊3日でゴールデンウィークの旅行に出かけることになっているのだ。
そしてその場所として選ばれたのは、新潟県だった。
と言っても、実は今日は移動に専念することになる。
ところで、かの有名な「トンネルを越えるとそこは雪国だった」のトンネルとは、群馬県と新潟県の間にあるトンネルだという。今そこには鉄道だけで3つのトンネルがあるという。
今日はともあれ、その手前の群馬側に宿をとってあり、明日にここを越えて新潟を探訪し、明後日に帰ってくるという算段となっている。
あらかじめ買った乗車券としては新潟市内までの往復乗車券に加えて、渋川駅から吾妻線分の往復乗車券が購入されている。
また途中でも、寄り道を行う予定があるという。というのも、お義母さんはあたしに楽しみにして欲しいという意味で旅行の詳細を教えてくれなかった。
「よし、じゃあ駅に行くわね」
「おう」
お義母さんが先頭に立ち、あたしたちが続く。
あたしたちは、今回この連休を2泊3日の小旅行としたのは、いわゆる大混雑を避けるため。実際に、行きは新幹線を使わずに、在来線を予定しているし、3日目の5月3日は日曜日で、実際にはまだ後ろに複数の休日が残っているので帰宅ラッシュは遅れるはずと読んだ。
その隙に帰宅してしまおうと言う作戦でもある。
「まもなく――」
そしてアナウンスと共に電車が入る。

この電車ももう、すっかりお馴染みになった。最近では、協会本部などに行くときに実家の最寄り駅を通るけど、実家のことを意識することも少なくなった。

３か月前にあったバレンタインデーを見たら、実家の両親に対する心配ももう無用だと言うことに、あたしは気付いた。

「次は――」

「優子ちゃん、降りるわよ」

「はーい」

切符のルールの関係上、東京都区内にある駅からならば、どこから乗ってもいいことになっている。

なのであたしたちは、東京駅ではなく、沿線と山手線との乗換駅で乗車券を使い始めることになった。これは新婚旅行の時もほぼ同様だった。

「みんな、切符はちゃんと持ったわね」

「お母さん分かってるから」

やや過保護気味なお義母さんに対して、お義父さんが抗議をする。

「あ、うん分かったわ。さ、行きましょう」

ともあれ、幸いにしてこの駅からは高崎線に直通する列車がたくさんある。

あたしたちは、迷うことなくホーム中央のグリーン券を販売し、ＩＣカードに入れる機械に並んで、大きな荷物のこともあるのでグリーン券を購入した。

「荷物があるから平屋席にしよう」

「え？　どうして？」

浩介くんの提案に、お義母さんが首をかしげる。

「あーうん、グリーン車のうち、端の平屋の部分だけ荷物置き場があるのよ」

新婚旅行の時の知識が、今になって役に立ったわね。

「なるほど」

やがて電車が入線する、あたしたちは正しい行き先かをもう一度確認してから中に入る。

幸い時間帯も中途半端なので、電車の中は混んでおらず、あたしたちは容易に４人席をゲットした。
席は回転せず、あたしたちは独立して２人ずつ座った。
「この電車は――」
車内アナウンスを聞き、あたしたちはようやく一息つくことができた。
「でね、あなた」
「うん」
平屋部分は狭くて不人気なのか、あたしたち以外にお客さんがいなくて、貸切状態になった。
なので、あたしも義両親も、それぞれ世間話に高じている。
「蓬莱教授のオリンピックだけど、どんな服がいいかしら？」
「そうだなあ。いつも通りでいいんじゃねえか？」
浩介くんは軽い感じで言う。
「いやその、あたしは顔が割れてるじゃない？　蓬莱教授の隣に座ると、テレビやスクリーンに写っちゃわないかなって？」
「あー、そうかあ。優子ちゃん、世界中に知られてるもんなあ」
とはいえ、ほとぼりは冷めていると思うけど。
「あたし、オリンピックの時には２０歳になるでしょ？　でも、諸外国の知らない人からすれば、１４、５歳じゃない？　若く来てもらえるのは嬉しいけど、さすがに変に見られないかしら？」
「まあ、俺だって似たようなものだろ」
浩介くんはあくまでも軽く捉えている。
「うーん、それなら大丈夫かな？」
「優子ちゃん、優子ちゃんが幼く見せたいことは知ってるし、それなら世間が何と言おうが堂々とすればいいじゃねえか」
浩介くんがあたしを励ましてくれる。
「う、うん」
あたしは、これから蓬莱教授の研究に協力するに当たって、間違いなく世界、いや、欧米の視線に晒されることになる。
今回の五輪も、蓬莱教授の連れという形で、瀬田助教や永原先生、山

科さんと一緒に参加することになっている。
全身全霊で男に媚び続けていたあたしたちだけど、欧米の、特に白人女性たちの間では、「自分を押し殺している」と、全くの誤解とはいえ、評判がすこぶる悪いという情報は知っていた。
「外の連中の反応なんざどうでもいいだろ？　優子ちゃんには、幼かった日々がなかったんだぞ」
「うん」
ともあれ、オリンピックの会場は、炎天下が予想されるから、涼しい格好で行きたいわね。
まあ、なるようになるかしら？
「それによ、連れのこと気にすんなら、永原先生はどうなるってんだ？　５０２歳だぜ」
「あ、そうだったわね。あはは……」
浩介くんの指摘は最もだ。
あたしよりもずっと幼く見えて、日本人の間でも女子中学生みたいな見られ方もする永原先生なんて、その見た目に反して人類最年長、しかも2番目の人と比べても倍以上生きているじゃないの。
それを考えたら、何の問題もないわね。
「それに、こう言ってやればいい。『君たちは『日本人が幼く若く見える』ということは、『それを踏まえたら』日本人からは君たちはどう見られていると思う？』ってな」
「あはは。じゃあ、今度の反論はそれで行くわ」
浩介くんが、とてもいい指摘をしてくれる。
そうよね、女が若くなんて当たり前のこと。ましてや愛する旦那さんに喜んでもらえるもの。
気にする必要はないわね。
実はここ最近、フェミニストが地下に潜って、メディアを使ってあたしたちへの攻撃を散発的に繰り返している。
それは、例えばあたしたちのように男好みする女性を全力で排撃する評論だけど、既にテンプレになっていて、どうやらどうしてもあたしたちの価値観が女性に広まるのをよしとしないらしい。

協会はもちろん、これに一つ一つ、今までのテンプレ通りに反論している。
「それに、例えば優子ちゃんはダイエットしてねえじゃん。他の女性ならダイエットしそうな体格なのに」
「えへへ、だって、ちょっとお腹に肉がある方が男好みじゃない？」
実はあたし、結婚してから少しだけ体重が増えて５０後半になっている。
だけども、男好みのふっくら丸みを帯びた、「妊娠させたい」と思わせる体格になるためには、身長にもよるけど５０後半から６０程度がちょうどよかったりもすることがわかった。
とにかくウエストに肉がないと、男はときめかない。このことを知っているか知ってないかで、女性の価値観は大きく変わってくる。
「うん、龍香ちゃんも、ダイエット止められたものね」
龍香ちゃんは、少し体重が増えてしまったと、ダイエットしようとしたら、彼氏に止められてしまったそうだ。
それはもちろん、龍香ちゃんの体格が、男から見たら、痩せていないからに他ならない。
「やっぱり、むっちりしてる方がいいよなあ」
「うん」
もちろん龍香ちゃんも彼氏にそう言われたら、素直にダイエットは止めたらしい。
ここで、「自己満足」を優先させてダイエットを続けていると、みんなが不幸になってしまう。
「それにさ、ダイエットしちゃうと、おっぱい、小さくなっちゃうじゃない？」
浩介くんが直球的に言う。
そういえば、最近ちょっとだけブラジャーきついかしら？
「あはは、確かに体脂肪率落としちゃいけないよね」
胸に脂肪を集めないと、男好みになれないものね。
「後はほら、ダイエットってストレスになるじゃん？　不機嫌な彼女は嫌だし、一緒に色々なもの食べたいもの」

「あはは、言えてるわ」
浩介くんとは、男女の価値観の違いでよく話が合う。
それは、あたしの中に残った「優一の知識」のお陰もでもあるのよね。
「もちろん、デブじゃダメだよ。でも、女の子らしい丸みを帯びた体を持ってて、お腹にぷにぷに感がなかったら、赤ちゃん育てられねえじゃん」
「うん」
さすがに、６０をオーバーしちゃったら体重を少し減らそうとは思うけどね。あ、でも浩介くんがいいならそれでいいかも？　まあいいわ。
電車が東京駅から遠くなるに連れ、お客さんの数も減っていき、車窓も郊外へと移っていく。それに伴い、ますますこのグリーン車も閑散としている。
時折、グリーン車のアテンダントさんが車内販売として巡回してくる程度で、あたしたちは静かな時間を過ごすことができた。
「次は、終点高崎、高崎です。新幹線――」
「降りるわよ」
「ああ」
浩介くんと雑談に講じていたら、あっという間に終点の高崎駅に到着する。
この駅は群馬県の交通の要衝で、新幹線もここから上越新幹線と北陸新幹線に別れている。
「こっちよ」
あたしたちは、グリーン車を降りる。
今夜は素泊まりの宿なので駅構内のコンビニで夕食を買うことにする。
「お弁当一杯あるね」
「ああ、コンビニ弁当って、結構食材費かかってるんだってな」
浩介くんが弁当を見ながら言う。
「あーうん、意外に高級なの使ったりするもんね」

一方で、廃棄になっちゃう食料も多いから、社会問題でもあるわよね。
「よし、俺はこれ」
「あたしはこっち」
それぞれ買うべきお弁当を決めたら、母さんが代表してお弁当を買ってくれる。
「さ、吾妻線はこっちよ」
母さんの誘導と共に、あたしたちは別のホームを目指す。
吾妻線の電車には、比較的古い車両が充てられているて、どことなく懐かしい雰囲気だった。
あたしたちは、先程と同じように、2列の座席で2×2になる。
「この電車は吾妻線、万座・鹿沢口行きです。行き先にご注意下さい」
渋川までは上越線と同じ線路を走り、そこから草津方面へと進むことになっている。
高崎駅まではともかく、そこから先は本数も少ないから乗り過ごしや誤乗は致命的になる。
「優子ちゃん、明日は遅れないように注意してね」
「うん、分かったわ」
明日は比較的、朝早く起きることになっている。
というのも、先ほどあった「国境の長いトンネル」という区間に、本数が少ないからだと言う。
「昔から、群馬と新潟の県境は難所だったのよね」
「そうらしいな」
永原先生の知識がなくても、あそこが負担なことは分かる。
ともあれ、今は目的地まで行ってしまおう。
「まもなく発車します。ご乗車のままでお待ちください」
車掌さんの声と共に、列車の発車放送が流れ、ドアが閉まって発車する。
「お待たせいたしました。この列車は吾妻線、万座・鹿沢口行きです。この先高崎問屋町、井野、新前橋の順に、終点万座・鹿沢口まで各駅に止まります――」

「次は高崎問屋町です」
車掌さんの放送が終わる。いつものように、列車の編成数や、車内禁煙のことや、トイレの位置といった案内や、主要駅の到着時刻だった。
電車は新前橋駅で両毛線と別れ、渋川駅で上越線と別れる。
そして、温泉と名のつく駅を含め、１０数駅を経て、あたしたちは目的地の温泉駅にたどり着いた。
駅舎はかなり近代的で新しいけど、降りたのはあたしたちだけだった。
山の中に入ったので、５月と言ってもまだ寒さが残っている。
「すごいなあ、ここは」
眼下には、巨大なダムの水が見えて、とても壮観だわ。
そのダムの上にあるのが、今回泊まる温泉旅館ということになっている。比較的新しくできた温泉旅館で、ダムの景色を売りにした旅館だと言う。
でもチェックインの時間まではまだ余裕があるので、あたしたちは資料館に立ち寄ることになっている。
「懐かしいわね、八ッ場ダム」
「え!?」
お義母さんが不思議なことを言う。
懐かしいってどう言うことだろう？　だって、ダムは最近出来たばかりだったのに。
「このダムはね、昔一悶着も二悶着もあったのよ。優子は生まれてないか、子供の頃だから覚えてないとは思うけどね」
「政治に翻弄されたんだよ。このダムは」
義両親がこのダムについて解説してくれる。
まあともあれ、資料館を見れば大丈夫かな？
「ふう」
「結構歩いたわ、あたしもうヘトヘトだわ」
「優子ちゃん、大丈夫？」
息を切らせたあたしを、浩介くんが心配してくれる。

「ちょっとだめかも」
浩介くんも片手が荷物で塞がってるから、「おんぶして」とは言えないわ。
「うん、私も少し疲れたし、休もうかしら？」
と言っても、ベンチがあるわけではない。
道路の脇に寄りかかって休むだけ。フェンスは堅牢で新しいけど、少しだけ緊張する。
「ふう」
あたしは、荷物の中から水を取り出して飲む。
「優子ちゃん、荷物持ってあげるよ」
「うん、ありがとう浩介くん」
ああ、もう本当に素敵だわ。あたしの旦那は。
「さ、もうすぐよ。道の駅も兼ねてるから、到着すればゆっくり休めるわ」
「あ、ああ」
あたしたちは、駅から歩いてしばらくし、それほどまで時間のかからずに目的地の資料館に入ることができた。
それにしても、結構歩いたわね。どうも車で来るお客さんも多いらしくて、資料館と道の駅の中は、結構な人数で賑わっていた。
「今夜泊まる温泉だって、元々はダムの底にあったのよ」
「え!? そうだったの!?」
お義母さんがさらりと衝撃的な事実を話す。
なるほど、温泉がダムに沈むとなれば、穏やかじゃないわね。政治的な問題にもなるはずだわ。
ともあれ、あたしたちは郷土資料館の前の映像を見てみることにした。
ちょうど、八ッ場ダムに関する歴史を、放映してくれているみたいね。
「八ッ場ダムが出来るきっかけは、今から約７０年前に起こったカスリーン台風です。この台風で、利根川の堤防は悉くが決壊し、下流が壊滅的な被害を受け、数多くの死者を出しました」

カスリーン台風、あたしたちの両親が生まれる前の古い映像で、増水した川を泳ぐ人や、流された屋根の上で途方にくれている人などが写し出されていた。
そう、当時は今と比べて、治水もろくに施されていなかった。いや、今だって最近でも堤防が決壊することはあるもの。
「うわあ……」
当時の映像を見た浩介くんが驚いた表情で言う。
更に、ダムを作ればある程度水を蓄えることが出来るため水不足に強くなる他、水力発電所としても期待できると言う。
「ところが、ダムの水没区域に含まれる住民の間では、賛成派と反対派で真っぷたつになり、地域は大きく割れました」
資料館の映像では、当時の「ダム建設反対」運動の様子も流れていて、かなり騒々しいことになっているわね。
そしてその後、多くの政治的駆け引きがありつつも、一旦はダム建設でまとまった様子が紹介されていた。
ところが、２００９年にそれまでの野党が政権を取って、再び政争の具となってしまったと言う。そういえば、あたしたちが幼い子供の頃、「政権交代」の話があったっけ？
その２年後には東日本大震災による電力危機が起きたことで、水力発電所として使える八ツ場ダムは、一気に全国の世論も容認に傾いたと言う。
「新しいダムの建設に向け、新しい橋を初め、様々な建造物が出来、ついに今年２０２０年、ダムは完成し、７０年越しの悲願が達成されました」
映像はここで終わっている。
「さ、行きましょう」
「ああ」
あたしたちは、更に奥の部屋に行く。
そこには、ダムに沈む前の集落の様子や、今のダムのミニチュアなどが飾られていた。
「なるほどねえ」

「沈む前に入りたかったな」
義両親は展示資料を関心高そうに見ている。
沈む前の温泉は、源頼朝の時代からの歴史の流れを組んでいて、永原先生が生まれる更に３００年前からの歴史があった。
今の源泉は、ダムに沈む前とは違う所から引っ張っているらしい。
「でも、今年はダムが完成したってことで、観光客はそれなりに多いかもしれないわよ」
「ああ、何だかんだで話題になったもんな」
義両親は、当時の話で盛り上がっている。
あたしたちは、生まれてなかったわけではないけど、小学生の頃の話だったから、記憶に古くて薄い。
どちらにしても、今のあたしたちにとっては、目の前のダムが見事なことには代わりはなかった。
「さ、今日の旅館に行きましょうか」
「ええ」
あたしたちは、一通り資料館を見終わって、今日の最終目的地に向かうことにした。

# 初めての家族旅行　1日目　浩介くんのマッサージフルコース

「いらっしゃいませー」
旅館の自動ドアを入ると、中年の女将さんが頭を下げてくれる。
「すみません、予約した篠原です」
「はい、お待ちしておりました。こちらへどうぞ」
宿泊料金をまず支払ってから、女将さんに部屋を案内してもらう。
旅館はとても真新しい感じで、最近になって移転したということがよく分かるわね。
「こちらが、篠原様のお部屋になります。大浴場はここから左に行きまして――」
部屋の中は和室で、4人用ということで、大きめの個室と小さめの個室、小さなユニットバスと洗面所に、更に独立した個室にトイレがついていた。
トイレもウォシュレットつきで、本当に手厚いわ。
「ふー、疲れたー！」
膝下のロングスカートなので、あまりパンツ見えることを気にせずに、横になれる。
とにかく、大学での疲れも併せて、まずは休んで取りたいわね。
「優子ちゃん、大丈夫？」
「あーうん、かなり疲れちゃったわ」
あたしも途中でバテてしまったこともあってお義母さんが心配そうに声をかけてくれる。
「そうでしょう？　お義母さんたちはお風呂に入ってるから、優子たちは休んでいなさい」
「うん、そうさせてもらうわ」
お義母さんたちはお風呂セットを手早く取り出して、部屋から出ていった。
「優子ちゃん、マッサージしてあげようか？」

「え!?　いいの？　やったー！」
お義母さんとお義父さんがお風呂に行くと、浩介くんがマッサージしてくれると言ってきてくれた。
浩介くんのマッサージ、気持ちいいのよね。
「肩こってるだろ？　うつ伏せになってよ」
「うん」
あたしは、言われるがままにゴロンと横になって半回転する。
「よし、ここだな」
ぐいっ
「んあっ！　ああー！　いっ……んー気持ちいいわー！」
浩介くんの指圧が、あたしの凝り固まった肩をほぐしていく。
浩介くんは時折さするような感じで、特にこっている部分を重点的に押していく。
あー、この痛いのが何とも言えない至福の時間だわー！
「ねえねえ優子ちゃん、有料だけど、肩だけじゃなくて全身マッサージしてあげようか？」
「え!?　全身マッサージ？」
何となく、嫌な予感もするわね。
「ああ、肩だけじゃなくて腰とかとのバランスの問題もあると思うんだ」
「あー、じゃあお願いしていいかしら？」
あたしは、嫌な予感なんて忘れて軽い気持ちでつい承諾してしまう。
「よっしゃ！　じゃあフルコースだ！」
浩介くんがテンション高そうに言うと、肩甲骨よりも更に下側の、背中に近い部分を押す。
「ほら、ここがこってるだろ？」
「うん」
実際、背中もどうしても猫背になりがちなので、マッサージされると気持ちいいわ。
「こういう凝りが、上っていって肩に達するんだ」

「へえー」
本当にそうかは知らないけど、ここは普段マッサージされてないので、気持ちいいことには代わりはない。
「優子ちゃん、ちょっと体持ち上げるね」
「う、うん……わあ！」
あたしは、浩介くんに、右肩の方を持ち上げられる。
「腕を下に下ろして……そう……ここだっ！」
ゴリゴリゴリッ！
「いたたたたた!!!」
浩介くんの指が、容赦なくあたしの凝りをほぐしていく。
「我慢して！　ほぐれるから」
「痛い痛い痛い!!!」
「それっ！」
「うー、痛いけど気持ちいいわ……ひぐっ……」
浩介くんが更にほぐすと、一旦解放してくれる。
「もー、泣き虫な優子ちゃんかわいいね」
気持ちいいのは気持ちいいけど、痛みもすごくて、あたしは浩介くんに泣かされてしまう。
「このやり方じゃ不完全だな。優子ちゃん、悪いんだけど前屈みに座ってくれる？」
「う、うん……」
あたしは一旦起き上がって、女の子座りになり、前に屈む。
「肩を前に出す感じで、ほら。ここが優子ちゃんのこりの源だよ」
浩介くんが、肘をあたしの肩に当てる。
「待って浩介くん、肘はうんぁぁぁっ！」
浩介くんが、ゆっくりと丁寧に肘を回していく。
「よいしょっと！」
「んっ!!!」
さっき泣かせてしまった反省からか、慎重に慎重を期している。
コリッコリッと軽快な音がして、肩がどんどんほぐれていく。
「ふう、こんなものかな？」

「うん、ありがとう」
うん、大分ほぐれたわ。
「よし、じゃあ次のコースだ。もう一度うつ伏せなってくれるか？」
「こう？」
あたしは、また浩介くんに言われるがままにうつ伏せになる。
「よしっここだ」
もみっもみっ。
「んえ!?」
浩介くんが揉んできたのは、脚のふくらはぎの部分で、肩もみのようにマッサージしてくれる。
「ここ、結構こるんだぜ」
「ああうん、あー確かに気持ちいいわ」
肩ほどではないけど、筋肉が固まっているらしく、さっきよりはかなり優しい手つきでマッサージしてくれる。
浩介くんも、あまりマッサージしたこと無いのか慎重そうにしてくれる。
「さて、ここはこのくらいかな？　肩と違って普段はあまり揉んでいないからな」
「そう？　ありがとう」
ともあれ、今はこれでいいわね。
「よし、じゃあ次だ」
モゾモゾ
「え!?　きゃあ!?　ちょっと浩介くん！」
いきなりスカートがめくれあがる感覚がしたと思ったら、浩介くんに頭をスカートの中に入れられてしまう。
「何してるに浩介くん!?」
「何って……『おしりマッサージ』に決まってるじゃないか。スカートの中に潜って、パンツの上から新鮮にマッサージしてあげるぜ」
「い、要らないって！　きゃう！」
浩介くんの手があたしの大きなお尻を掴んでくる。
「フルコースだっていっただろ？　お尻にだって筋肉があるんだ。き

ちんとほぐしてあげないと、バランスが悪いしお尻が可哀想だろ!?」
「やっやだ、恥ずかしいよお！」
そうだとしても、どうしてスカートの中に潜られなきゃいけないのよ。
「恥ずかしがらなくていいって、マッサージなんだから」
とか言っても、浩介くんの手つきはいつも通りのいやらしさ。
揉み揉みされるだけではなく、手のひらでパンツの上をわさわさと素早く触られる動作もあって、明らかにマッサージ目的じゃないわよね。
「あうー、浩介くんのえっちー！」
「ふひひ、何とでも言え！　有料だって、さっきも言っただろ!?」
「うっ」
浩介くんがあたしに鋭い指摘をして来る。
というか、もう隠そうともしてないわね。
すりすり
あたしが怯むと、浩介くんに容赦なく、パンツの上から頬擦りされてしまう。
あたしはとっくに全身が火照ってしまい、湿度も急上昇している。
「優子ちゃんも興奮してるんだね」
「もー！　愛する旦那にこんなことされたら、当たり前じゃないの」
「結局優子ちゃんの方がえっちなんだよね」
あっという間に浩介くんに論破されてしまう。うー、悔しいわ。
「うー！」
「さてと、『おしりマッサージ』はこの辺にして、最後にバストアップマッサージをしようか」
浩介くんがひょいとあたしのスカートの中から顔を出し、そんなことを言う。
「え!?　胸大きくするの？」
「ああ、女の子は大好きな男に胸を揉まれて感じると、女性ホルモンが出て胸が大きくなるんだぜ？」
確かに、その話は優一の頃から知ってたし、実際に結婚して大きく

なった気もするけど。
「わ、分かったわ」
「うひょー！　優子ちゃん大好き！」
「うっ」
突然の直球的な告白に、あたしは胸がどきりとしてしまう。
本当にもう、浩介くんはずるいわね。
あたしは再び女の子座りをし、浩介くんの前に胸を出す。
「じゃあ、ゆっくり揉むぞ。痛かったら言うんだぞ」
「う、うん」
浩介くんの手が延びる。
もみんっ
「ぁん」
堪えきれずにあたしが小さくあえぐと、浩介くんに両胸を掴まれてぐるぐると回され始める。
「んんっ……ああんっ！」
浩介くんに優しくさわられて、あたしも気持ちよくなってしまう。
「真面目な話、胸もきちんとマッサージしねえと、肩こりの改善には繋がらねえからな」
「もうっ、何も今……んんっ……言わなくても……あん……いいじゃないの」
「あはは、ごめんごめん」
もう、こんな雰囲気なのに急に真面目な話しちゃって。
「ふう、これでフルコースおしまい。じゃあ、料金ね」
「え!?　お金取るの？」
有料って、そのことなの？
「お金な訳ねえだろ。ほら、ここ、個室2部屋あるだろ!?」
「う、うん……」
ま、まさか？
「今夜、優子ちゃんの体で、支払ってほしいな」
「うー！」
もう！　言い方は最低なのに、あたしがしたくてたまらなくて、こ

れじゃ有料どころか最後まで至れり尽くせりのサービスじゃないの。
浩介くんの「体で支払う」という独特の言い方で、あたしはあっという間に全身が興奮してしまう。
「ふふ、さ、親が帰って来る前に、平常心でいろよ」
「浩介くんこそ、その大きくなったの、ちゃんと抜かずに鎮めてね」
とか何とか言って、あたしも目が話せなくなっちゃってるけど。
「う、うん。分かったよ」
あたしたちはテレビをつけ、ニュースを見て平常心を保つことにした。

「ただいまー、優子ちゃんたちも入ってきたら？」
「あ、うん。どうだった？」
「ええ、絶景な上に泉質も、思ったよりよかったわ」
お義母さんによれば、悪くないらしい。
泉質が変わってしまっても、今度は絶景で売り出すと言うわけね。
まあ、あのダムを見たら予想はつくけど。
「そう？　じゃああたし行ってくるわね」
あたしは荷物からお風呂セットを取り出して立ち上がる。
お、体が軽いわね。
「行ってらっしゃーい」
あたしは部屋から出て女将さんの言っていた言葉や案内を頼りに進む。
本当にもう、えっちなマッサージの癖に効果ばかりは絶大なんだから。ある意味でたちが悪いわね。
あたしは女湯の暖簾を潜り、服を脱いでから髪をお団子に縛り上げて、タオルを巻いていつものスタイルで脱衣場を出る。
「うわー」
思わず声が漏れそうな絶景だった。
眼前に迫り、こっちに来そうなくらいに近いダムの水や、奥にわずかに見える森林はまさに「絶景の露天風呂」だった。
このダムの湖底には、かつて温泉街があった。

湖底に沈む前の温泉街の様子はさっき資料館で見た。
あれが全て、今はもうこの深いダムの底にあるなんて……そんなこと、想像もつかないわね。

「すごいわね」
「水はこんなにたまるのね」
「でもこれで、水不足も少しは解消されるかしら？」

このダムはまだ出来たばかりで他の観光客も、ダムを見て感激している。
今世界では、水不足が叫ばれている。
一方で高温多湿で雨が多い日本では、「水と安全はタダ」「水道水はガブガブ飲める」というのが常識のようにまかり通っていた。
だけど、今でも時折夏場に水不足として、節水の呼び掛けが出たり、場合によっては「断水」という2文字がニュースに躍り出ることもある。
四国には、溜池がたくさんあると小中学校で学んだ。
ここのダムもまた、様々な恩恵をあたしたちにもたらしてくれるのよね。
「ふー、熱いわね」
5月と言っても、山中は寒さが残る。雪こそ溶けたけれど春がようやく訪れはじめたという程度でしかなく、春も終わりに近付いているあたしたちの地域とは、大分様相が違う。
湯船から出ると、肌についた温泉を介して、物凄い勢いで熱が奪われていく。
「ふー、気持ちいいわ」
一通り熱を逃がしたら、ダムの絶景を見ながらもう一度湯船へと入る。
本当は、急激な温度変化は体によくないけれど、あたしはついつい楽しんでしまう。
この温泉、景色はいいけど、そういうお風呂って覗かれやすいのよ

ね。
まあ、あたしが覗かれていいのは、浩介くんだけだけど。
「ねえ、あの子見た？」
「羨ましいわよねえ、あのナイスバディ」
「顔もすごいかわいいし、もしかしてアイドルとか？」
「いやあ、アイドルでもあそこまでかわいくないよね」

女湯にいた若い２人組の女性があたしを羨ましそうに見ている。
胸への視線と言えば、男からのが圧倒的に多いけど、こうして貧乳の女性からも、羨ましさと恨めしさの混じった視線で見られることがある。
まあ、それはそれで、宿命と諦めなきゃいけないけど……そうだわ！
「うーん！」
あたしは、自分の左手を右肩に当てて、セルフマッサージをする。
あたしの肩こりはとても広範囲かつ頑固で、浩介くんのフルコースマッサージでも、完全にほぐしきれてはいない。
浩介くんがほぐし漏らしたところを、重点的に指圧していく。
「あ、肩揉み初めたわよ」
「そうよね、あんだけ大きいのぶら下げてたら凝りそうよね」
「大きい人にも大きい人なりの悩みがあるのね」

あたしの様子を見た女性たちは、途端に巨乳なりの悩みを考えるようになった。
その手のひらの返しっぷりはどうかと思うけど、肩こりに悩んでそうな仕草をすると、貧乳の女性の視線は、和らぐか更に殺意が増すかのどっちかだったりする。
「そろそろ出ようかしら？」
あたしは湯船から起き上がり、素早く体を拭いて脱衣場に行く。

新婚旅行の時ほどじゃないけど、寒い中での温泉は、気持ちはいいけど、素早く行動しないと冷えちゃうのが欠点ね。
あたしは脱衣場でパジャマに着替え、部屋に戻った。
ちょっとみっともないかもと思ったけど、浩介くんに覗かれるよりはいいわね。
「ただいまー！」
「あ、優子ちゃんお帰りなさい。さ、ご飯にするわよ」
部屋には、既に布団が敷かれていた。
でも、2枚しかないような？
まあ、今はいいわ。ご飯もあるし。
あたしたちはテーブルの前に思い思いに座る。あたしも座布団の上にペタんと女の子座りをする。
「「いただきます」」
ここに来る途中で買ったお弁当を食べる。
「明日は8時前に電車に乗らないといけないから、みんな7時には起きてね」
「うん、じゃあ今日は早めに寝ようかしら？」
「ええ」
明日は出立が早いので朝食はなくて代わりに栄養ドリンクを飲むことになっている。
なので、今日はカロリーが多目のお弁当を買ったというわけ。
「それにしても、景色最高だったな」
「うんうん」
とにかく、ダムの絶景は素晴らしかった。
そういった温泉施設は、しばしば「景色だけ」という状態になりやすく、温泉本来の良さや、その他のサービスがおろそかにされがちだけどこの温泉はそういったこともなく、あたしたちはおおむね満足が行く結果になった。
「「ごちそうさまでした」」
お弁当を食べ終わったら、テレビをつけて時間を潰すことにする。
「そうそう、母さんたちは奥の部屋で寝るわね」

「あ、うん。そっちに敷いたんだ」
ふと奥の部屋を見ると、少し狭そうに布団が並んでいた。
「仲居さん、気が利く人だわ。優子ちゃんも浩介も、声を出しすぎないように注意してね」
「もうっ！　母さん!?」
また始まったわ。もちろん、浩介くんのは大好きだけど、妊娠はまだ後でいいのよ。
「あらあら、ごめんなさいねー。でも、私たちは気にしないから、隣に聞こえない範囲で、声を出しなさい」
「はいはい」
浩介くんも、すっかりいつものこととして受け流す。
あたしはと言えば、ほんの少しだけ、不安が頭の中をよぎっていた。
あたしもあたしで、お風呂に入って少し落ち着いたとは言え、さっき浩介くんにマッサージと称してエッチなことをされたために、体が火照って仕方がなかった。
「さて、次のニュースです。オリンピックまで残り3ヶ月となった東京、聖火リレーも始まり外国人観光客で盛り上がる中、こんな指摘も出ています――」
ニュースでは、オリンピックが近付くにつれて、外国人観光客のニュースが流れ続けている。
思えば、この手のニュースはあたしがまだ優一だった頃、中学に入ってからこの手のニュースが続いていて、かれこれ7年のロングスパンになっているわね。
「それにしても、どこまで増え続けるのかしら？」
「本当だよなあ。このダムのここは、メインストリートから外れてたお陰か、ほとんど外国人を見なかったけど」
「そうねえ」
聞くところによれば、こういった外国人観光客の少ない場所こそが「穴場の名所」であり、特に中国の団体客が来ない場所は、とても評判がいいらしい。
数年前、中国人観光客が政治的な問題でとあるホテルをボイコット

した結果、「中国人がいないホテル」と評判になり、日本人の宿泊客が殺到して、帰って稼働率が上がったらしい。
ここ数年、ホテル業界はどこも大盛況で、様々な販売戦略がなされているんだそうだ。
もちろん、このテレビはそんなことおくびにも出さないけどね。
「まあ、逆に今までの訪日客が少なすぎたという意見もあるけどな」
確かに、以前の日本は他の先進国と比べて観光客が少なすぎたが、あるきっかけで一気に爆発したという所よね。
「うん」
ともあれ、今日の宿は静かに夜を明かせそうね。
明日も明日で、穴場の名所をめぐることになっていて、どこをめぐるのか楽しみだわ。
今回の旅行は、お義母さんと永原先生で相談して決めたらしく、今日の予定はある程度聞かされていたけど、明日はほとんど聞かされていない。
どんな予定になるのか、今から楽しみだわ。
「ニュースをお伝えいたしました」
「ふー疲れたわ」
あたしはテレビを消して横になる。
大学の講義もあったし、今日は早めに寝たいわ。
「ねえ優子ちゃん。その、さ」
「うん」
「俺、マッサージし忘れた場所があるんだ」
浩介くんが、またあたしを回りくどく誘う。
「言わなくてもいいわ。あたしも、えっちなこと、したくてたまらないもの」
「うっ……！」
浩介くんが、唾を飲み込む。
「ちょっと待っててね……あれ!?」
あたしは、鞄の中にてを突っ込んで、違和感に気づく。
「どうしたの？」

「浩介くん、ゴムがないわ！」
どうしよう……
「え!?　何だって!?」
浩介くんもとても驚いた様子で言う。
だって、行くときはちゃんと持っていったのに！
「親父とお袋が隠したんだ！」
「うー、じゃあそのままする？」
「暴発しない自信がない」
浩介くんが弱々しそうに言う。
「もー、お義母さんにも困ったものだわ」
あたしは仕方なく、パジャマのトップスを脱ぎ、ブラジャーをはずす。
「仕方ないわ。代わりのことをしてあげる」
「いやちょっと待って！　優子ちゃん、まず優子ちゃんから、気持ちよくなってね」
「やあん！」
浩介くんに押し倒され、パジャマを脱がされる。
あたしたちは、出来る範囲で、この場を楽しむことにした。

# 初めての家族旅行　２日目　長いトンネルに取り残されて

「はぁ……はぁ……はぁ……うーーー！」
「ふふっ、ごちそうさまでしたー」
ぐったりと横たわり、エネルギーを搾り取られた浩介くんの横で、あたしは舌をペロリと舐め回してごちそうさまをする。
あたしも浩介くんも、体が少し調子悪かったので、もう一回マッサージをすることにしたのだ。
最初は浩介くんに頑張ってもらって、あたしは疼きを止めてもらった。次にそのお礼として、あたしが久々に「挟み込み」を使って、体が硬くなった浩介くんを気持ちよくマッサージしてほぐしてあげることにした。
あたしのこの「挟み込み」は、浩介くんにとっては「あまりに気持ちよすぎて、我慢できなくなってしまうので封印してほしい」とまで言われた位には定評のあるやり方だった。
そして今回も案の定、浩介くんが女の子みたいな声を出し始めて、最終的にはぐったりとしてしまった。
あたしにとっては、お腹いっぱいになれる嬉しいことだけどね。浩介くんはとってもへとへとになっちゃう。
まあ、これだけ大きいものね。視覚効果も相まって凄いことになっちゃったわね。
もちろん、お義母さんの策略もあって、本格的なことは出来なかったけど、それは仕方ないわ。
「優子ちゃん、やっぱりこれ、普段はあまり使わないで欲しい」
浩介くんがゼエゼエと息を吐きながら言う。
やはり大分疲れてしまうみたいね。
「うーん、でもあたしは結構好きなんだけどね」
浩介くんがかわいい声を出してくれるし。
「うー優子ちゃんの意地悪」

浩介くんが、少し不満そうに言う。
普段意地悪されちゃってるし、ちょっとだけ今回は意地悪してもいいかなとも思ったけど。あまりやりすぎちゃうと浩介くんの身が持たないし我慢してあげないとね。
「……分かったわ。とりあえず、今日はもう寝るわね」
「うん、おやすみ」
あたしと浩介くんは、こうして、夜の長い眠りへとついていった。

「うーん、んっ……」
あたしの目が覚める。真っ暗な視界が目に飛び込んでくる。目覚まし時計があるわけではないから、今が何時かはわからない。
電気は消えていて、窓の外を見ると、暗闇だった。
外の明かりもなく、あたしは手探りで机の上の携帯電話を持ち、開くことで光を得る。
現在時刻は午前5時ちょっと前だった。
まだ太陽が上っていない時間帯に、起きてしまったと言うことになり、浩介くんもぐっすりと眠っている。旅行で疲れて早めに寝てしまうと、こういうことがよくあった。小谷学園での林間学校の時も、修学旅行の時もそんな感じだった。
「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」
よく見ると、浩介くんとても深く眠ってるみたいだわ。
「うーん……ちゅっ……ふふっ」
あたしは、悪戯心に浩介くんのほっぺたに短くキスをする。
ふふ、何か浩介くんが素敵なことをしたら、こうしてあげると喜びそうだわ。
あたしは浩介くんが起きないように慎重に立ち上がり、タオルとカギを持って、携帯電話の光を頼りに「お風呂に行ってきます」という置き書きを何とか作り、静かに部屋を出る。
廊下はしーんと静まり返っていて、ひんやりとした何とも言えない冷気を感じ、ここが山奥だと言うことを思い知らされる。
忍び足でお風呂場に進むと、さすがにこの時間は脱衣場には誰もい

なかった。
あたしは服を脱ぎ、髪をまとめあげて、タオルも巻かずにそのままお風呂へと進む。
「うー、やっぱり寒いわ」
あの時ほどじゃないけど、あたしは寒さを紛らわすために、風呂桶を使って体にかけ湯をする。
「ふー」
昼間に見えたダムは、ほとんどが暗闇となって見えない。
ただ、それでもわずかにこの露天風呂や脱衣場が発する光などから、ダムの水がどの辺にあるのかが分かる。
だけど、そのダムの水も、昼間は見事な水色に見えたのに、今は真っ黒い色のようにしか見えない。もちろん、それは単なる目の錯覚でしか無い。
ダムの水が水色なのは、単に太陽の光の反射のせい。水は無色透明で水たまりの水が青くないのがその証拠だもの。
「静かね」
温泉のお湯が流れる音以外何も聞こえてこなくて、周囲は不気味なほどに静まり返っている。
昼間のような雄大さはないけれども、夜明け前のお風呂もどこか幻想的な雰囲気が漂っている。
この広い露天風呂を独り占めできるのも、素晴らしいわね。
のぼせさえしなければ、何分見ても飽きないかもしれないわ。
「さてっと……」
何度か反復入浴し、体も十分暖まったら、あたしは露天風呂と脱衣場との間にある緩衝部屋で体を拭き、脱衣場へと入ってバスタオルで体を拭く。
パジャマをもう一度着たら、あたしは髪を下ろし、備え付けの櫛を使ってとかす。
あたしの髪はかなりさらさらしているけど、それでも細かな手入れは欠かせないから、毎日大変だったりする。
それでも、あたしは女の子になったばかりの時を除いて、ショート

ヘアーにしようと思ったことはない。あたしにはこの巨乳に真っ黒なロングヘアーが、頭の白いリボンと共にすっかりトレードマークになちゃったもの。多分髪を切ったら、あたしと認識してもらえないかもしれないから。

「ふう、こんな所かしら？」

美容については、あたしは母さんの手解きをよく受けた。

お化粧に関しては、元々があまりに良すぎて化粧の効果が見受けられず、ついに結婚式の時にうっすらと区別できないくらいのメイクしたっきりになっちゃったけど、それ以外の美容術には、あたしもお世話になっている。

あたしは、身なりを整えて、もう一度部屋に戻ることにした。

「ふう」

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

浩介くんは、まだ寝ていた。

あたしは、もう一度布団の中に入ることにした。

１時間くらいでいいから、２度寝したい気分だわ。

なかなか眠れなかったけど、それでもお風呂に入れば少しは気持ちよく寝られるはずだわ。

「んっ……」

意識が徐々に元に戻っていく。

意識がはっきりしたら、あたしは布団からゆっくりと起き上がる。

「お、優子ちゃん起きたか」

「うん」

あたしが起きると、浩介くんがあたしを出迎えてくれる。

義両親も起きていて、あたしはどうやら最後らしい。

「優子ちゃん、奥の部屋で着替えてね」

「あ、うん」

お義母さんが義両親が寝ていた奥の部屋を見つめながら言う。

「ねえ優子ちゃん」

「うん？」

着替えをあさっていると、今度は浩介くんが話しかけてくる。
あたしは、振り向かずに応対する。
「今日はさ、できれば短いスカート穿いて欲しいんだけど」
「え!?」
浩介くんから突然の注文が入る。
確かに、昨日はロングスカートで、他に膝丈のスカートと、ミニスカートを1着ずつ持ってきてはいる。
ミニスカートは明日の予定で、今日は膝丈の茶色いスカートにしようと思ったんだけど。
「まあその、明日よりは今日見たい気分なんだ」
浩介くんがいかにも怪しさ満点の口調で言う。
「何か怪しいわね」
「まあいいじゃないか」
「はいはい分かったわ」
と言っても、あたしも断らなきゃいけない理由もないので、青いプリーツミニのスカートを手にとって、奥の部屋に進む。
義両親も見張ってくれているだろうし、浩介くんに覗かれちゃう心配は無いわね。
それでも、開けようと思えば容易に開けられちゃう扉一枚隔てた小部屋で全裸になるのは、かなり緊張したけど。

「さ、このドリンクを飲んで」
「うん」
あたしは、お義母さんから、いわゆる「栄養ドリンク」と呼ばれるものを一本渡される。
どうもこれを飲めばエネルギーがかなり付くので、朝ごはんの代わりになるらしい。
「お菓子の方も持ち込んでるから、お昼まではそれでやり過ごそう」
お義父さんがそう宣言し、あたしたちは慌ただしくチェックアウトした。
「いってらっしゃいませー」

女将さんが、あたしたちを見送ってくれる。
「さ、まずは駅まで歩くわよ」
「荷物持つよ」
「あ、うんありがとう浩介くん」
昨日のことを考えてか、浩介くんが荷物を持ってくれると言ってきてくれた。
その御蔭で、あたしは身軽になって歩くことができた。本当、気遣いできて素敵だわ。
「予定の電車まで、後１５分ね」
「結構早くつきすぎちゃったな」
「道中は何があるかわからないもの。鉄道の旅は常に余裕を持たないといけないわよ」
お義父さんの言葉に、お義母さんがどや顔で答える。
「それって、永原先生の受け売りですよね」
「ギクッ……もー、優子ちゃん鋭いわね」
だって新婚旅行の時にあたしたちも永原先生に散々叩き込まれたことだし。
「まあ、俺たちも新婚旅行の時に永原先生に同じこと言われたんだよ」
「あ、そうよね。優子ちゃんたちの新婚旅行も、永原先生のプロデュースだものね」
浩介くんがフォローをしてくれる。
あたしたちは、渋川駅までの復路の乗車券を持ち、駅で電車を待つ。
駅の中はは相変わらず閑散としていて、時間帯もまだ早いので、ゴールデンウィークにもかかわらず、乗客はあたしと他数名のみ。一方で、道路は結構混むらしい。
「間もなく――」
遠隔操作の放送が聞こえて、あたしたちは電車の中に乗り込む。
昨日と同じタイプの電車で、あたしたちは容易に座席を得ることに成功した。
「やっぱりきれいよね」
「ああ」

ダムの車窓はとてもきれいで、温泉に入った後には行きとは違う感慨も見せてくれた。
渋川駅で下車し、あたしたちはすぐの接続となる水上行きの電車を待つ。
「水上駅から先の本数が少ないから、気を付けないといけないのよ」
ゴールデンウィークは、いわゆる「青春１８きっぷ」の利用期間になってないため、普通列車の車内は、新幹線の混雑ぶりと比べると、格段に閑散としていた。いわば、「穴場」と言ってもいいだろう。
それでも、上越線の沿線には魅力ある観光地が多いのか、色々な所で沿線アピールをしている。
特に沼田駅と後閑駅では「２０３５年の皆既日食」についてのＰＲの看板が立っていた。どうやら、このあたりが、ちょうど一番長く皆既日食を楽しめるラインらしい。
今年が２０２０年だから、後１５年後、あたしたちも３５歳になる。
そう考えるとそれなりに歳を取る気もするけど、逆に永原先生は５１７歳になると考えると、そこまで遠い未来には感じないのがまた不思議なことよね。
同じ差でも２０から３５と５０２から５１７では、全く印象が変わるんだから、人間の感覚ってあてにならないわよね。

「ご乗車お疲れ様でした。まもなく終点水上、水上です。水上から先、湯檜曽、土合、土樽、越後中里、越後湯沢、六日町方面の普通列車長岡行きは、階段を登りまして――」
「降りるわよ」
「うん」
車掌さんの案内放送が聞こえてくると、周りの乗客たちも、降りる準備をし始めている。
車内をよく見ると、登山客らしき人がちらほらと見受けられる。
あたしたちはまず列車から降りて、跨線橋を渡って、隣に止まっているピンク色の近代的な電車に乗り込んだ。
「何かこっちの方が新しいわね」

首都圏から遠ざかってるはずなのにね。
「うんうん」
さっきの車両よりも外観が近代的で、車内も清潔で、座席の方はもちろん、トイレなども首都圏と同様の仕様になっていて、明らかに新しい車両だと分かる。
おそらく、旧型車両の置き換えのタイミングの問題から、こちらが新しくなったのね。
「お待たせをしております。普通列車の長岡行きです。この先湯檜曽、土合、土樽、越後中里、岩原スキー場前、越後湯沢の順に、終点長岡まで各駅に止まって参ります。発車までしばらくお待ちください」
高崎や渋川などから来たほとんどのお客さんが水上駅で降りるためか、ここはどうも閑散としている。
「この辺りは、昔は特急列車もたくさん走っていたけど、上越新幹線ができてからはローカル線になったのよ」
「まあ、そうだろうなあ」
新幹線ができる前は、この県境の区間にも特急が沢山走っていたのは想像に難くない。
「途中の駅で降りるわよ。注意してね」
「あ、はい」
どうやら、ここで寄り道をするらしいわね。
浩介くんが膝を必死になって凝視してくるけど、もちろんこの角度では絶対に見えないから大丈夫。
「お待たせをいたしました長岡行きまもなく発車いたします。ご乗車のままでお待ちください」
しばらく待っていると、車掌さんによる放送と駅の発車メロディと共に、ドアが閉まって列車は出発する。
ガタン……ガタンゴトン……
「次は湯檜曽、湯檜曽です。お出口は、右側です。Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｔｉｏｎ　ｉｓ　Ｙｕｂｉｓｏ．」
放送まで、首都圏と同じなのね。

「お待たせいたしました、普通列車の長岡行きです。この先の主な駅の到着時刻をお知らせいたします。越後湯沢――」
自動放送の後に車掌さんの放送が流れ、自動放送よりも更に決め細かなサービスが繰り広げられる。
電車が発車すると、車窓は一気に山奥に入る。とんでもない山の中ね。需要があるのかしら？
おそらくこの山中を進んだ後に、長いトンネルになっているのよね。
「まもなく、湯檜曽、湯檜曽です。お出口は、右側です」
そう言うと、電車がトンネルの中に入る。
電車の速度が徐々に減速されていき、最終的にトンネルの中の暗い空間に止まった。
「トンネルの中に駅があるのね」
「ああ、そうみたいだな」
進行方向の右側に、ほんのりと「湯檜曽」の駅名標が見えて、ここが駅だと知らせてくれる。
「ふふっ」
地下鉄のように、明るいというわけではないこのトンネルの中の薄暗い駅に興奮気味のあたしたちだけど、お義母さんだけが、何故か不適に笑っていた。

「次は、土合、土合です。Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｔｉｏｎ　ｉｓ　Ｄｏａｉ．」
電車は再び、スピードをあげる。
トンネルの中が真っ暗ということもあって、車内の照明が、不気味に反射している。
「あたしたちの顔が見えるわね」
「ああ、そうだな。それにしても、やっぱり長いよなこのトンネル」
まさに、新潟と群馬の間の長い長い、日本海側と太平洋側を分ける山脈の中を突き進んでいることが分かる。
「うんうん」

何分、ここは難所のトンネルだったから、とにかく長い。
ただひたすらトンネルを進んでいるのを見て、あたしはこのトンネルがどこまでも、どこまでも続いている気がした。
「このトンネルは１３．５キロあるのよ。青函トンネルの５３．８５キロに比べればまだまだ短いわ」
お義母さんがそう説明してくれる。
数年前まで長らく世界一の長さだった青函トンネルを潜ったことはまだないけど、このトンネルの４倍近くあるらしいから、きっと想像を絶する長さなんだと思う。
「まもなく、土合、土合です。お出口は、右側です」
一向にトンネルから出る気配はなく、自動放送が無慈悲に流れ、電車が速度を落とし始める。
「優子ちゃん、降りるわよ！」
「え⁉　は、はい！」
お義母さんが、突然降りると言い出したので、あたしは慌てて荷物を持って席を立つ。
どうやら、この駅で降りることはあたしには知らされてなかったらしいわね。
「あれ？　まさかここも？」
「ええそうよ。この駅もトンネルの中だけど、ちょっと面白いことになってるわ」
真っ暗なホームを見ると、何と数人の乗客が立っていた。
しかも降りるのはあたしたちだけではなく、数人の登山客と思われる人と、軽装の若い男性が１人、この駅を利用するらしい。
「もしかして集落があるの？」
「ううん、ここは山の中の駅よ。谷川岳への登山客や、鉄道マニアが主な利用客なのよ」
おそらく、これも永原先生の知識よね。
あたしたちは、ゆっくりとホームに立つ。
独特のひんやりした空気がとても心地いい。
若い男性は、列車の写真を撮り、続いて駅名標、更に登山客たちが

登っていった階段の写真も撮影する。
そして数枚の写真を撮った後、若い男性も階段に向けて歩みを進めていき、駅の中にはあたしたちだけが取り残された。

# 初めての家族旅行　２日目　４８６の道

「さ、私たちも写真撮ったら行きましょう」
「ええ」
　お義母さんの先導で、あたしたちはそれぞれ思い思いにトンネル内の暗い駅の様子を撮影する。
　そして、あらかた撮影し終わって最後に残ったのが、この長い長い階段だった。左側には、不自然なスペースが開いていて、「日本一のモグラ駅」という文字が見え、何かの案内が書かれている。
「ど、どこまで続いているのかしら？」
　あたしは、不安な表情になる。
「優子ちゃん、荷物は俺が持つよ」
「うん、ありがとう」
　また浩介くんが、荷物を持ってくれる。
　こうした気遣いをさらりと出来る男性って素敵だわ。
「さ、行くわよ」
　お義母さんの声を受けて、あたしたちは階段を1段1段上る。
「すげえなあ、全然出口が見えねえぜ」
　浩介くんが遥か上を見上げて言う。
「うん、そうだね。はぁ……はぁ……」
　数十段上ったところで、あたしは息を切らせてしまう。
　幸いにして踊り場も多く、今何段目かも階段の左側に数字が書かれている。
　その数字によれば、まだまだ殆ど進んでいないことが分かる。
「優子ちゃん、私たち先に行ってるから、気にしないでね」
「あ、うん」
　先行するお義母さんがあたしに気を使ってくれる。
「浩介、ちゃんと優子ちゃんを守るのよ」
「言われなくても分かってるぜ」
　何か、はめられている気がするけど、まあいいわ。
「さ、荷物は私たちで預かるから、頑張りなさい」

「はーい」
　義両親に荷物を持ってもらうのは情けない気もするけど、浩介くんにおんぶしてもらうためには仕方ないわね。
「ほれ優子ちゃん、俺の背中に乗りな」
「うん、ありがとう」
　浩介くんが、しゃがみこんでくれる。
　林間学校の時を、思い出すわね。あの時は
「さっき見た所、この階段は４６２段あって、更に２４段別の階段があるから正味４８６段ってとこだな」
「それは大変だわ」
　浩介くんの背中に乗せて貰うと、再び階段を登り続ける。
　浩介くんはちょっとだけそわそわしている。背中に胸が当たっているのが気になってるのね。ふふ、あの時のままだわ。
「お、１００段目だ」
「うん」
　比較的すぐに、１００という数字が見える。これでもまだ、３８６段もあるのよね。
　極めて規則的に、５段ごとに踊り場、１０段ごとに数字が貼り付けられ続けている。
「ふー、お、ベンチがあるじゃん」
「あ、本当だわ」
　踊り場に、ベンチが置かれている場所を見つけた。要するにここが休憩所になっているのね。
　義両親の背中が近付いたと思ったら、どうやらここで休憩を取れたからしい。
「さて、休むか」
「うん」
　あたしは浩介くんに、背中から下ろしてもらってベンチに腰かける。
　おんぶしてもらったお陰で、大分体力も回復してきた。
　そういえば、お水がないわね。

「あー、お袋たちに荷物取られちゃってたんだっけ？」
「そうみたいね」
つまり、水なしでここを登らなきゃいけないということね。
まあ、浩介くんなら問題ないとは思うけど。
「ちょっと俺は疲れたから横になるよ。優子ちゃん、先に行っててい
いよ。あ、できればスカート折って短くしてくれる？　思ったよりこ
の階段緩いし」
もう、浩介くん、いくらなんでもそれは露骨すぎるわよ。
「もー、浩介くん。必死すぎよ」
「いやほら、階段を上る優子ちゃんのスカートの中を、下から見上げ
るってのはまた違う魅力があるじゃん。ヒラヒラ揺れてパンツがチ
ラチラと見えるってのもいいじゃない？」
「だーめ」
あたしはやんわりと浩介くんを拒否する。
「えー、いいじゃないか。まだ２００段以上残ってるけど、おんぶして
あげないぞ」
「うっ」
浩介くんが、優しく脅迫してくる。
むむむ、そうだわ！
「ねえあなた」
「何？」
あたしが甘い声で言う。
「いつもあたしを守ってくれてありがとう」
「うっ、な、なんだよいきなり」
浩介くんの顔が一瞬で真っ赤になる。
ふふ、やっぱり男ってちょろいわね。
「愛してるわ……ちゅっ」
あたしは、女の子とは違う浩介くんのほっぺたにキスをする。
「うほほほほほ!!!　えへへ」
すると浩介くんは簡単にへなへなになってしまう。
やっぱりほっぺたにキスは効くわね。

「ねえー！　あなたー、おんぶしてー」
「うっ、いよっしゃあああああ!!!　優子ちゃんを上まで運ぶぞー!!!」
甘い口調であたしが言うと、浩介くんがいきなり立ち上がり、体を前屈みにしていく。
ふふっ、あたし、何もかも思い通りだわ。
「うふふ、お願いね」
むにんっ
あたしは、もう一度浩介くんにおんぶさせてもらい、さっきよりも胸を深く当てる。
「うおおおおおおおおお!!!」
「わわっ、きゃあっ！」
気合を入れた浩介くんが、ものすごい勢いで階段をかけ上がっていく。
あたしも、振り落とされないようにしがみつく。
「あなた、もっとゆっくり！」
「ああうん、わ、分かった」
あたしが浩介くんにそう言うと、浩介くんが少し速度を落としてくれる。
浩介くんの気合いもあって、あっという間に４５０段まで登ってしまった。
ここまで来ると、もう地上の明かりが間近に見える。
「さ、残りの１２段は優子ちゃんで登りなよ」
正確には３６段だけどね。
「うん、覗かないでね」
「大丈夫だって、この緩い階段じゃ見えないから」
うん、あたしも女の子を３年近くやってるからそれくらい分かる。
あたしたちは、残りの階段を登り始める。
「それもそうよね。それにしても、あたしにミニスカート求めたのって？」
「うん、お袋は今日階段の長い駅に行くって言うから、優子ちゃんのパンツを下から鑑賞しようと思って」

最近の浩介くんは、スケベ心を隠そうともしないわね。
「何かどんどん堂々とするようになってるわね」
「まあほら、俺たち結婚しちゃったし」
「ま、まあね」
確かに、あたし自身の魅力もあるけど、他の女になびかないなら、あたし限定ならちょっと変態なくらい、妻としても許してあげないといけないわよね。
「ふう」
階段を４６２段登り終えると、道が右にカーブして、廊下上になっていた。
そうそう、確かここから更に歩くと、２４段の階段があるんだっけ？
「よし、あとはここだけだな」
やはり、少しだけ階段があった。
「うん」
さっきよりも角度が急だけど、浩介くんはさっきキスしたお陰か、先に行くようには言わない。
「よし、もう少しだな」
４８６という数字を見る。どうやらここが終点らしい。
「なあ思ったんだけど」
「うん」
全て登り終えると、浩介くんがあたしに向き直って言う。
「もし、さっきの階段を1年に1段しか登らなかったとしても、永原先生の人生の方が長いんだなって」
「あ、そういえばそうよね」
永原先生の方が、更に１６段分長い。逆に言えば、あたしたちが生まれた頃は、1年1段としたらまだこの階段の方が長かったわけだけど。
どちらにしても、あの果てしない階段を、1年にたった1段という途方もないペースで上ったとしても、永原先生の人生はそれよりも長い。

今までもそうだったけど、永原先生の人生の長さは、様々なことに例えられるのね。
「さて、上りホームはこっちらしい」
どうやらこの駅は、東京方面は地上にホームがあって、新潟方面の地下ホームは４８６段の階段を使う必要がある。これほどに遠いのは珍し……というよりは他にないわよね。
「あ、優子ちゃんお疲れ」
上りホームの近くのスペースに近付くと、義両親が自販機の前で飲み物を買っていた。
待合室はどうも閉鎖されているらしい。
上りホームには、さっきの鉄道マニアと思われる軽装の男性が立ち尽くしていた。おそらく、上り電車をのんびりと待っているのかもしれない。
上りのホームは、平凡な地上駅という感じだけど、下りホームのインパクトを知った後では感慨深いわね。
「さ、優子ちゃん、駅前に行くわよ」
「うん」
あたしたちは、駅を出て土合の駅舎を見る。駅の周囲は山になっていて、民家のひとつもない。
まあ、登山客向けの駅だから仕方ないのかな？
一方で、駅までの駐車場には、車がかなり止まっていた。
「谷川岳の最寄り駅だけど、今は車の他にも水上駅からのツアーなんかもあって、あえてこの駅を使うのは少ないわね。この車たちも、おそらく谷川岳が目的よ」
お義母さんが駅について解説してくれる。
「まあ、そうよね。登山の前にあんな階段上らなきゃいけないなんて」
「昔は賑わってたのよ。それに、登山者にとっては『ウォーミングアップ』にもなるわけだもの」
「あー、なるほどなあ」
確かに、階段としては緩いものね。
「そして、この駅は穴場になったのよ。登山家の中にもあえてこの駅

を使う人はいるけど、いかんせん1日に上下5本しか電車が来ないもの。谷川岳への観光客の大半は、別ルートを使って、この駅はまさに『知る人ぞ知る』となったわ」
確かに、この駅で降りた登山客も比較的中高年が多かったし、喧騒とはかけ離れた駅なのは確かね。
ちなみに、夏よりも冬の方が列車が増発されるらしい。確かに、いかにも冬は雪が凄そうだものね。
「さ、次の列車まで後４０分程度よ。降りる所要時間は１０分が目安だけど、優子ちゃんのことを考えて２０分前には戻るわよ」
「あ、うん、分かったわ」
大事を取るのはいいわね。
「それにしても、やっぱりこの駅って不思議だわ」
「ああ」
あたしたちは、駅構内の散策もそこそこに、今度はもと来た道を下って戻ることにした。
下りの通路は、上りと比べてもはるかに楽で、あたしは荷物を持ちながら、ゆっくりと余裕をもって、ホームへと戻ることができた。
ホームは、さっきよりも閑散としていて、まさに静寂の時間になっていた。
「ふう、すごい駅だったわ」
「そう？　じゃあ次に訪問する駅も、きっと優子ちゃんのお気に召すと思うわよ」
どうやら、まだもう一箇所、訪問するところがあるらしい。
「へー、どこの駅なの？」
「それは来てのお楽しみよ」
お義母さんは、またも秘密にしたいらしいわね。
まあ、いいわ。楽しみに待つことにしよう。
土合駅の地下ホームに立っているのはあたしたちだけ。
ゴールデンウィークならもっといてもいいとは思うんだけど、何だかんだでまだ朝早いのかしら？
かなり時間に余裕を持ったので、次の電車までが長く感じたけど、

それでも比較的すぐに電車が来た。
来た電車はさっきと同じタイプの車両で、車内はさっきと同じくらいの混雑度だった。
扉が開く音と共にさっきよりもかなりまとまった人数の乗客が降りる。もちろん、そのほとんどは登山客だった。
なるほど、首都圏から乗るとちょうど今頃ここにつくせいなのかもしれないわね。
あたしたちは、容易に空いたボックスを1つ手にいれることが出来た。

「次は土樽、土樽です。Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｔｉｏｎ　ｉｓ　Ｔｓｕｃｈｉｔａｒｕ．」
相変わらずの車内放送と共に、電車はトンネルの中を更に進む。
もしかしたら、次の土樽駅もトンネルの中かなと思ったけど、それは間違いで、トンネルを出てすぐに駅に止まった。
あ、ちなみにトンネルを出ても雪はとっくに溶けていました。
駅から出ると、車窓には「土樽ＰＡ」も見える。
「真冬だったら、車窓ががらんと変わって感動ものなのかな？」
浩介くんが小声でそう呟く。
「うーん、真冬だと、水上の時点で雪国なんじゃない？　よく冬の雪のニュースでも出てくるし」
あたしが、身も蓋もない突っ込みをしてしまう。
「あはは、違いねえな」
「次は、越後中里、越後中里です。Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｔｉｏｎ　ｉｓ　Ｅｃｈｉｇｏ－Ｎａｋａｚａｔｏ．」
土樽駅を過ぎ、越後中里駅に近付くに連れ、山奥を抜けて本格的に、列車は新潟県に入った事が分かる。そしてその次の駅は「岩原スキー場前」だけど、今は多分営業はしてないかな？
「昔はゴールデンウィークまでスキーは楽しめたけど、今は5月ともなるとよっぽど盛況な所でもない限り営業はしてねえぜ。まあ、ガーラ湯沢ならやってるとは思うけど」

スキーが得意な浩介くんが、スキーについて解説してくれる。
ちなみに、車内放送では、次は越後湯沢駅で、上越新幹線への乗り換え案内を行っていた。
「そうなのね。ねえ浩介くん、『ガーラ湯沢』って何？」
「この次の駅の越後湯沢駅のちょっと先にあるスキー場さ。ほら、冬になると『新幹線で行けるスキー場』ってことでよく宣伝してるだろ？」
「あー、そういえばあったわね」
列車は、春の新緑の香りが残る新潟を北上していく。
しかし、それもやがて終わった。
越後湯沢駅から5駅目の「六日町駅」で、お義母さんが「優子ちゃん、降りるわよ」とあたしに言ってきたからだった。
「もしかして、ほくほく線に乗り換えるの？」
さっきも「『北越急行ほくほく線』はお乗り換え」って言ってたし。
「ええそうよ。2つ目の『美佐島』で途中下車するわ」
「う、うん。分かったわ」
あたしたちは、ホームに止まっていた青い色の電車に乗り込む。電車の側面には独特のうさぎさんの絵があった。
「この電車は、後ろ乗り前降り、ほくほく線経由、犀潟行きです。整理券をお取りください」
ワンマン列車の自動放送は、ＪＲなどと違って男性の声だった。
車内は、地元住民と思われる人たちでそれなりに賑わっていた。
車内はよく見ると地方に装備されているトイレの類いはなく、また横の向い合わせのシートと、ボックスシートが混在する作りになっていた。
ボックスはすべて埋まっていたので、あたしたちは横長のロングシート部分に腰かける。
「お義母さん、『美佐島』には何があるの？」
「ふふ、見てのお楽しみよ」
今はシーズンではないけど、車内の案内に、「青春18きっぷはご利用になれません」という案内もあった。

「ここはＪＲではないのよ」
「あー、何か雰囲気的にそうよね」
　ほくほく線何て名前、ＪＲはつけそうにないし、電車のデザインもちょっとだけ独特な上に古めかしいし。
「元々は越後湯沢駅から北陸方面に特急列車が通ってて、地方の第三セクターとしては珍しく黒字経営だったのよ」
「だった？」
　つまり今は赤字ってことかしら？
「北陸新幹線が出来て、特急はくたかは廃止、もとい北陸新幹線に転身したわ。だから今ではここもローカル線よ。でも、真冬でも遅延と運休がＪＲよりも少ないとあって、地元住民からの支持は高いわ」
「なるほどねえ」
　お義母さん、というよりも、永原先生の話を聞いたお義母さんによれば、ほくほく線は難工事の連続で、一方でこの路線は踏み切りがないこともあって特急列車は最高速度が１６０キロで走っていて、日本の在来線では最速を誇ったそうだ。
「間もなく発車いたします。閉まるドアにご注意下さい」
　運転士さんの放送と共に、ドアが閉められ電車が発車する。
　ピーポーン
「次は、魚沼丘陵、魚沼丘陵です。後ろの車のドアは開きません――」
　そして、やはりＪＲとは違う独特のワンマン放送が流れていく。
　列車はやがて高架を進み左に大きくくカーブする。上越線と違い、単線になっている。
　眼下には、稲作の盛んな新潟県らしく見事な田んぼが広がっていた。
　秋にはおそらく、辺り一面が黄金に輝くんだと思う。
　魚沼丘陵駅では、乗客が１人だけ降りた。そして間もなくすると、また電車がトンネルの中に入った。
「このトンネルは難工事だったのよ」
「確かに、何かそんな気がするわね」
　トンネルはどこまでも続いていて、途中なぜか右側が空いていた。

線路がガタンゴトンといったので、恐らくは単線での行き違い用の場所だと思う。
確かに、トンネル長いものね。
ピーポーン
「間もなく、美佐島、美佐島です。運賃、きっぷは、整理券と一緒に運賃箱にお入れください――」
先程と同様の感じの放送が流れ、列車はブレーキと共に減速していく。
やはり、ここもさっきと同じくトンネルの中の駅という訳ね。
「さ、運賃はこの袋にいれてあるわ。降りましょう」
お義母さんがそういうと、あたしたちはこの駅で降りるために列車を立ち上がることにした。

# 初めての家族旅行　2日目　要塞の地下駅

土合駅では何人かの登山客などが降りたが、こちらの薄暗い美佐島駅で降りたのは、あたしたちだけだった。
一番前の運転士さんの立ち会いのもと、六日町駅からの運賃を大人3人分支払ってあたしたちは駅のホームに出る。
「うー、やっぱりひんやりしてるわね」
トンネル内独特の薄暗いひんやりとした空間の中に、駅名標が薄っすらと見えるのは、さっきの土合駅と同じ。
その駅名標には「美佐島」とある。
そして、出口と思しき扉も見える。
お義母さんが扉に近付くと、「ピシューン」という、冷気の伴った高い金属音のような音と共に扉が開く。
「優子ちゃん、早く出ないと怒られちゃうわよ」
「あ、はーい」
あたしは言われるがままについていく。怒られちゃうってどういうことだろう？　まあいいわ。
そこを出ると、物々しい雰囲気の中、まるで地下のシェルターのような雰囲気が広がっていた。
電光掲示板には「電車が到着するまで扉は開きません」と表示されていた。
扉から出てすぐの真ん前には、ベンチが置かれていた。
更に奥側には、もう一つ、先ほどと同じような重厚な扉が広がっている。
その奥の左側の扉は開いていて、恐らく待合室になっているものと思われるけど、不審な音もして不気味だわ。
それにしても、「扉を閉めないでください」というのは面白いわね。逆の注意書ならいくらでもあるのに。
ともあれ、まずはそこに入ってみようかしら？
「ここはこうなってるのね」
中には美佐島駅周辺の観光案内がある。

美術館がある他には、宗教家の生誕地でもあるらしいわね。
「これが音の正体ね」
どうやら、この待合室はトンネルの湿度を逃がすために除湿器を常時稼働中らしい。
また、ほくほく線への意見を書いた張り紙や、駅スタンプも置かれていた。
あたしたちも、折角なので持ってきた手帳にスタンプを押していく。
「さ、行きましょう」
「ええ」
スタンプを押し終わったら、あたしたちは、もう1つの重厚な扉を潜り抜け、外に出る。
扉の前には「ホームのドアが空いている時にはこのドアは開きません」とある。
つまり電車が来るときには、既にこの空間にいないといけないというわけね。
そして目に飛び込んできたのは、土合駅よりも格段に段数は少ないけど、踊り場も少なく、少し急峻な階段だった。
まずは義両親から階段を上っていく。
「優子ちゃん、先行っていいよ」
「え!?」
「レディーファーストって言うだろ?」
「もー、浩介ったら!」
浩介くん、さっき覗けなかったせいでついに義両親の目の前で堂々と破廉恥行為に及ぼうとしてしまうとは。
お義母さんもさすがに引いている。
「それにさ、俺ちょっと靴紐がほどけちゃって」
浩介くんが露骨に言い訳を取り繕う。
というか靴紐って、覗く気満々じゃないの。
「いいわよ。どうせパンツ見たいだけなんでしょ?」
「うぐっ、さすがは優子ちゃん……」

「いや、分からなかったらさすがにバカよ」
いかにも「何故分かった」みたいな演技をする浩介くんに、あたしは思わず突っ込みを入れてしまう。
「ちぇー、何か今日の優子ちゃん、ガード固いなあ……」
「当たり前でしょう。一応ここ、駅の中なのよ。それにまだ、太陽も沈んでないもの」
「うぐっ、そうだよな。まだ昼だものな。優子ちゃん、淑女のはずだわ」
その納得の仕方もあれだけど、浩介くんに何とか我慢してもらい、あたしは浩介くんの後ろで最後尾になる。
「浩介くん、もし触ったら痴漢よ痴漢」
「わ、分かってるって。でも夫婦だろ？」
浩介くんは、どうやらあまり反省してないらしいわね。
「もう、夫婦だからこそまずいのよ！」
「どうしてさ？」
「あ、あたしが興奮しすぎちゃって、大変だからに決まってるでしょ！」
そう、あたし自身の抑えが効かなくなってしまう恐れもある。
そうなってしまえばもう、ブレーキが効かない。確かにここは秘境だけど、それでも人間というものはいるわけだし。
「うっそうだよな。他の人もいる場所で、優子ちゃんのえっちな所は見せたくないな！」
浩介くんったら、急に独占欲丸出しになっちゃって。
まああたしもあたしで、独占欲はあるけどね。
「でしょ？　その代わり2人きりになれる場所でね」
「お、おう」
淑女と娼婦は、よく使い分けないといけない。
どちらかだけでは、男の子を満足させることは出来ないもの。
「優子ちゃーん、浩介ー、こっち来てーすごいわよー」
「うん？」
階段を登り終えて右側から、お義母さんの声がする。

あたしがそっちの方向に進むと、そこは待合室だった。
「うお、すげえな」
待合室は全面畳の和室だった。
そして箪笥と食器棚、食器棚の方には湯飲みとコップまである。
「あら、手前と奥にストーブが2つあるわね」
雪国だから必須とは言え、2つもいるのかしら？
「ああ、そのくらい冬は寒いんだろう」
お義父さんがそう推測する。
まあ、雪国な上に山の中だものね。1つじゃ足りないくらい寒いこともあるのかもしれないわ。
まあ、とにかくここで休めそうね。
「よいしょっと」
あたしは、浩介くんの視線に警戒しつつ、ゆっくりと膝をついて、正面に足を伸ばす。
「むむう、優子ちゃん隙がない」
あたしは前屈みになって胸を守りつつ浩介くんをかわいく睨み付ける。
ちなみにお尻は壁につけてるので大丈夫なはず。
「あらあら、優子ちゃん。嫌がりすぎちゃうと、余計にしたくなっちゃうから注意してね」
お義母さんが、あたしに忠告をしてくれる。
「わ、分かってるわよ。あたしだって一応元男なんだから」
優一の知識でも、嫌がる声に余計に盛り上がる男というのはある。
まあ、あたしもあたしで、それ含めて計算しちゃったりしてるのよね。
だって、「本当に」の枕詞をつけてないもの。
「むむ、やっぱ優子ちゃんには男心見抜かれちゃうんだなあ」
浩介くんも、リラックスした表情で言う。もうセクハラはしなさそうね。
これでようやく、あたしもリラックスできそうね。
「じゃあ、私たちは駅の外を見てくるわ。くれぐれも公序良俗に反す

ることはしないでね」
「はーい」
　義両親が待合室を出ていく。確かに、外の景色は丸見えだから、浩介くんもあたしに近付いてこない。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
「今日、トンネル駅多いよな」
　確かに、普段利用する地下鉄とは全く性格の違うトンネル駅だと思う。
「ええ」
「やっぱり、永原先生のプランってすげえよな」
「ええ」
「さて、俺も待合室の外をみようと思うんだけど、優子ちゃんはどうする？」
「あーうん、あたしもそうするわ」
　あたしは、カリキュラムでやったように、まず足を横にして、女の子座りになり、膝をうまく使ってゆっくりと立ち上がる。
　この動作をしたのも、久しぶりね。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
　立ち上がって靴を履いていると、浩介くんがまた話しかけてくる。
「駅の中と外、どっちから見てみる？」
「うーん、じゃあ外からで」
「分かった」
　あたしたちも、靴を履き直してから駅の外に出る。
　駅舎は、小さな小屋のようなもので、義両親が道路の端に立って談笑していた。
「美佐島駅かあ」
　駅舎の看板の案内では、この近くにハイキングコースもあるらしい。
　でも、駅前には民家の一つ見えない。何故ここに駅を作ったのか、

分からなくなってくるわ。
「家がねえのに駅なんか作ったんだなあ」
浩介くんがやや毒を含んだ物言いをする。
「多分、これのせいだと思うわ」
さっき地下で見た宗教の開祖と思われる人の生誕地が近いという。
でも確かに、美しい場所なのは確かで、永原先生が選ぶくらいだから、きっと鉄道マニアにも人気なのよね。
「にしても駅を作るったって立派すぎるだろこれ。この宗教の人を除けば、後はよく分からない美術館くらいだろ？」
「ええ、それにしても静かな場所ね」
道路の安全を確認しつつ、あたしたちは義両親に近づく。
「あら、優子ちゃんたちも来たの？」
「う、うん」
目の前には、雄大な大自然が広がっていた。
川のせせらぎの音も聞こえ、手付かずの自然という感じで、美しいわね。
「さ、そろそろ中に戻りましょう」
「うん」
あたしたちはもう一度駅の中に戻る。
「さて、中の展示を見たら、一旦地下に戻るわよ」
お義母さんが、時計を見てそんなことをつ夫役。
「え!?　あんな辛気くさい所、乗る前でいいじゃない」
あたしは異議を唱える。
それに、階段上がる時にまた浩介くんに覗かれそうだし。
「ふふ、実はもうすぐ快速がこの駅を通過するわ」
「それがどうしたの？」
通過列車を見るってどういうことかしら？
「すごい迫力になるわよ。まあ、特急ほどじゃないけどね」
すごい迫力ねえ。
ともあれ、あたしたちはさっきの待合室を通りすぎて、展示スペースの方に進む。

「ここには、近隣の観光案内の他にも、近くの美術館の宣伝があるみたいね」
「ああ」
どうやら、件の美術館は、インド美術を専門に集めているらしい。
それにしても、いくら車社会の地方とはいえ、こんな駅の近くに美術館を開くって面白いわね。
まあ、仏教生誕の地だし、そういうものなのかな？
多分違うとは思うけど、とりあえずそういうことにして納得することにする。
あたしたちは、美術品をゆっくりと鑑賞し終わり、もう一度階段を降りて扉の前に立つ。
独特な金属音と共に、地上とは似ても似つかない物々しい雰囲気が流れている。
「何だか、のどかな地上を見た後だと、感慨が違うわね」
あたしたちが最初に通った扉の裏側は、経年劣化のためか、茶色く変色し、至るところで痛んでいた。
「やっぱ空かねえな」
「うん」
浩介くんが正面に立ってみるが、扉はうんともすんとも言わない。
また、タブレットがガラス越しに置かれていて、北越急行が平常通り運転していることを示唆していた。
電光掲示板も、しばらく電車が来ないことを示している。
やはり、かなり物々しいわね。

ドーミーソードー
「間もなく、下り電車が、高速で通過します。危ないですから、ホームに出ないでください。下り電車が高速で通過します。ご注意ください」
ドーミーソードー
「間もなく、下り電車が、高速で通過します。危ないですから、ホームに出ないでください。下り電車が高速で通過します。ご注意くださ

い」
ソンランソンシンソンランソンシンソンランソンシン
「間もなく、高速で電車が通過します。大変危険です。ホームには絶対に出ないでください」
ソンランソンシンソンランソンシンソンランソンシン
「間もなく、高速で電車が通過します。大変危険です。ホームには絶対に出ないでください」
突然、女性の高い声と、物々しい琴のようなベル音が交互に響き渡る。
そもそも、出ることが出来ないわけだけどね。それにしてもホームに出たら危険なのは分かるけど、大げさな表現だわ。
ぴぃーーーーうううううーーーーーーー!!!!!
扉から漏れた風切り音が、駅に響き渡る。
恐らく、トンネルの空気が押されて、こうなってるのね。
それにしても、まるで厳戒令みたいだわ。
そして、徐々に押された空気が轟音になっていく。
「間もなく、高速で電車が通過します。大変危険です。ホームには絶対に出ないでください」
ふぃいいいいいいーーーー!!!!
「……!!!!」
それは一瞬の出来事だった。凄まじい轟音と、耳をつんざくような風切り音と共に電車が通過するのが見え、今度は待合室側から、トンネル側への隙間風が流れ続けた。
ふぃいいいいいいーーーーーーーっっ!!!!
そして、ある時間を境に、風の音が一気に止んだ。
おそらく、列車がトンネルを出たんだと思う。
「昔はもっと、迫力があったのよ」
お義母さんの、永原先生譲りの講釈がまた始まった。
それによれば、現在のほくほく線は普通列車のみで、列車は最大でも2両編成の時速110キロで通過する。しかし以前は特急はくたかが150キロ程度の速度でこの駅を通過していたらしい。

以前永原先生に言われたように、通常在来線はブレーキの制約から１３０キロが限界だが、この路線には踏切がないために１６０キロの運転を許可された。アナウンスにある「高速で通過します」というのは、その名残だという。

「さ、これを見たらもう一度上に戻りましょう。ここからは自由行動とするわ。ただし、時間管理はしっかりするのよ」

「了解」

あたしたちを指揮するお義母さんの指示の下、各自思い思いに過ごすことになった。

あたしはもう一度駅の畳の待合室に戻り、入口付近にあったノートを読む。

日本全国から色々な人がこの駅に来ているらしく、おそらくその多くが鉄道マニアなのだろう。

「あれ？　これ……？」

そんな中の１ページ、「久々にここに来た。変わりないようでよかった。はくたかがなくなって以降のことは苦しい経営になっているが、再黒字化を諦めないで、この駅をアピールして欲しい　平成２９年５月４日　私立小谷学園教諭、日本性転換症候群協会会長より」と言う記述があった。

「これ、永原先生の？」

平成２９年といえば、３年前のこと。５月４日、あたしが女の子になる直前の日付になっていた。

永原先生の名前は書いてないが、小谷学園の先生で更に日本性転換症候群協会会長と言えば、永原先生以外にあり得ない。

そうよね、今回の旅行も永原先生がプロデューサー役だもの、訪れていないわけないものね。それにしても、もしかしたら永原先生はこれを発見してほしくて、この駅をプロデュースしたのかもしれないわ。

「おや、優子ちゃんどうしたんだ？」

浩介くんが待合室のノートを見たあたしに気付いて近付いてくる。

「ねえ浩介くん、これ見て？」

あたしが、ノートのページを浩介くんに見せてみる。
「お、これ永原先生のか」
「うん、そうみたいね」
その後、あたしたちは2人で丁寧にノートを見て、この駅を訪れた人々の思いを見ていく。
ノートの中で一番最後の日付の最後のページの後ろの空白に「1家4人で来ました。すごい駅でした　２０２０年５月２日」と書き込みノートを閉じた。
それからすぐに「優子ちゃん、そろそろ行くわよ」というお義母さんの声がしたため、あたしたちは急いで地下の鉄の扉を潜り、除湿機が稼働する待合室に移動した。
「にしても、すげえ音だよなあ」
「うん」
ドアの開閉音は相変わらず冬の金属系の音を放っていた。
そして、ホームへの扉の前には下側の「電車が到着するまで扉は開きません」との表示が相変わらず輝いていた。
ドーミーソードー
「間もなく、上り電車が到着します。電車が到着するまで、ホームの扉は開きません。扉の前で、お待ち下さい。電車到着後、青ランプが点灯し、自動で開きますので、ホームに出て、ご乗車ください。上り電車が到着します、ご注意ください」
ドーミーソードー
「間もなく、上り電車が到着します。電車が到着するまで、ホームの扉は開きません。扉の前で、お待ち下さい。電車到着後、青ランプが点灯し、自動で開きますので、ホームに出て、ご乗車ください。上り電車が到着します、ご注意ください」
さっきと同じ呼び出し音とともに、女性のアナウンスが流れる。
ガッタン、ゴットン、フィーーー！
先程よりも格段に弱い風切り音と共に、停車する電車がゆっくりと入ってきた。
電車が停車すると、右横にあった黒い電光掲示板が、「電車が到着す

るまで扉は開きません」と言う表示から、下側の「電車が到着しましたので御乗車下さい」との表示に変わる。
扉の前に立つと、「ちゅおおお」という独特の表示とともに、電車の中で「入口」と書かれた扉を目指す。
扉の前のボタンを押し、「整理券をお取り下さい」と言う放送通り、あたしたちは４人で整理券を取る。
よく見ると、降りる人が数人いた。
ともあれ、ほくほく線の寄り道旅はここで終わり、あたしたちは再び六日町駅に戻ってきた。
「あたし、お腹空いたわ。そろそろ昼食にしましょうよ」
「うん、この先は特に立ち寄る所もないからそれがいいわね」
あたしたちは、六日町駅で精算して改札を出ると、東口から昼食のお店を探した。
本当は次の列車の時間も調べるべきなんだろうけど、ここから新潟なら間に合うだろうということで、そこまで気にしないことにした。

# 初めての家族旅行　２日目　名前ばかりの交通機関

「このラーメン屋さんにする？」
六日町駅を出たこのあたりは、ちょうど商店街になっていてあたしたちも食事屋さんを見つけるのには苦労しなかった。
問題はむしろ、選択肢が多いことだった。
お義母さんがまず見つけたのがラーメン屋さんだった。
「あーそうだな。優子ちゃんは？」
義両親はこれに賛成している。
「うん、ここでいいわ」
特に断る理由もないので、あたしたちも賛成する。
家族４人でラーメン屋さんに入ることになった。
「いらっしゃいませ、何名様ですか？」
「４人です」
お義父さんが代表して店員さんと応対する。
「かしこまりました、こちらのテーブル席へどうぞ」
あたしたちは４人ということでテーブル席に案内される。
あたしたちは、メニュー表を見てラーメンを決めて、いつものように店員さんに注文する。

「それにしても、『美佐島』って駅はすごかったなあ」
「うんうん、階段の長さでは土合だけど、美佐島はこう色々な顔があるわよね」
ラーメンを決めて注文をし終わったあたしたちは、今日の旅行で訪れた２つのトンネル駅について総括を始める。
美佐島駅は、そもそも１６０キロ運転をしていた特急はくたかがあったためにあのような重厚な装備になった。噂通りすごい駅だったし、永原先生が訪れた記録も見ることが出来た。
一方で、土合駅も止まらない貨物列車と１日数本の旅客列車しかないため、最低限度の設備でも問題なく、またこの駅が登山客が主な需要ともあって、長大階段への抵抗感も少なくなったためにこういう構

造になったという。
「俺は土合が良かったかな美佐島よりももっと山奥って感じがしたし」
「そう？」
浩介くんは、どうも異論があるらしい。
「何より、優子ちゃんのマシュマロみたいにふわふわなおっぱいが背中に程よく当たったし」
「もうっ!!!」
本当に、性欲に忠実よね、浩介くんって。
まあ、あたしみたいに胸が大きかったら、浩介くんに限らず当たり前かもしれないけどね。
「浩介、最近ちょっと暴走しすぎよ」
見かねたお義母さんが浩介くんに注意する。
今までは積極的に加担する側だったけど、昨今の暴走はさすがに注意した方がいいものね。
「うっ……反省します」
「浩介くん、確かにあたしは魅力的な女性だと思うし、あたしだって元は男だったから、あたしみたいな女の子と毎日いたら浩介くんだって変態になっちゃうのも分かるけど、時折気をつけてね」
「お、おう。わかったぜ」
ともあれ、浩介くんにはもう少し自重をしてもらわないと、さっきの美佐島駅でのこともだけど、浩介くんが暴走しすぎたらあたしまで白い目で見られちゃうと思うし。
ラーメン屋さんだからあまり大きな声では言えないけど。どうやら問題ないみたいね。
「その代わり、2人きりの時は、ね」
「うっ……うん」
あたしの告白みたいな小声での発言には、浩介くんもちゃんと動揺してくれる。
やっぱり、ちょろい男の子よね。
そうは言っても、今夜も今夜で、どうなるか分からないけど。

「お待たせいたしましたこちら――」
話し込んでいると、店員さんがお盆に４つラーメンを持ってきてくれた。
「あ、来たわね」
店員さんからラーメンを受け取り、あたしたちは各自で「いただきます」をしてラーメンを食べ始めた。

「ふー、美味しかったわね」
「ああ。お腹いっぱいだ」
ラーメンを食べ終わり、会計を終えたあたしたちは、駅に向かう。
お義母さんが駅の時刻表と時計を見比べる。
「次の電車まで後３０分あるわ」
どうやら、美佐島から乗った電車はすぐに長岡行きと接続していたため、１時間後に次の電車になっていた。
つまり、あたしたちはラーメン屋さんに３０分弱いた計算になるわね。
それはともかく、あたしたちは六日町で途中下車にしていた切符を再び使用し、一路新潟駅を目指すことになった。
「それでね、優子ちゃん」
「うん」
「お袋が新潟駅からは、また面白いものを見せてくれるんだってさ」
長岡行きまで時間があるので、あたしたちは待合室で待つと、またあたしにちょっと情報を提供してくれる。
「そうそう、面白いわよ。名前負けって意味でね」
お義母さんが意味深な言葉を言う。
何だかあたしだけ知らないって楽しみにできていい気分のような、除け者になっててい気分じゃないような？　分からないわ。
「名前負けって？」
「ふふ、そうね、宿までバスに乗るのよ」
つまり、バスに関することってことよね？
バスが名前負けってどういうことかしら？

だって、バスっていうのは単に道路を走ってる大型車じゃないの？
……まあいいわ。
「それで、今日の夕食は、この店を予約しているわ」
お義母さんが旅行雑誌の記事の記事を見せてくれる。海の幸のお店ということになっていた。
まあ、確かにこういう時に打ち合わせしておくといいわよね。
「後、今日のホテルは２人部屋が２つになったわよ」
「よし、俺は優子ちゃんと同じ部屋」
まあ、当たり前よね。
「分かってるわよ。浩介、頑張るのよ」
「お、おう」
むむむ、この話題はむしろ義両親のほうが自重しないわよね。
そうだわ、あのことも言わないと。
「お義母さん、昨日、あれ隠したでしょ？」
「あらあら、ごめんなさいね。やっぱりそういうものを使ってたなんて思って、ちゃんとそのままでするようにして欲しかったからよ」
お義母さんが開き直るように言う。
「なあ、あれは優子ちゃんのだから返してくれよ」
「分かったわよ、大丈夫、優子ちゃんの鞄の中に入ってるから」
浩介くんの追求に対して、お義母さんが弁明する。
「本当かしら？　イマイチ信用できないのよね」
あたしは鞄の中をガサゴソと探る。
もちろん、外に見えないように気をつけながらだけど。
「あ、本当だわ。浩介くん、確かにあるみたい」
「ふう、これで今夜はたっぷり楽しめそうだな」
「もうっ！　浩介くんったら」
本当、浩介くんって。まあ、あたしもあたしで楽しみにしているのは事実だったりするんだけどね。
「さ、そろそろホームへ行きましょう」
「ああそうだな」

早め早めを心がけるあたしたちは、待合室からホームに出る。
すると、数分後にアナウンスとともに電車が入線してくる。
「何だここ、このピンクと黄色の電車しかないのか」
確かに、さっきから来る電車も、すれ違う電車も全てこの色になっている。
「そうね、実はね。永原先生によると――」
永原先生の話をお義母さんがあたしたちに伝えてくれる。
それによれば、この電車になる前の電車は、車齢が５０年に迫ろうかという極めて古い電車だったため、こうして急いで置き換えたというのが真相らしい。
ちなみに、あたしたちが林間学校の帰りに使った「しなの鉄道」に走ってたあのタイプと同型で「１１５系」という国鉄時代からの古い車両らしい。
あたしたちは、六日町駅から更に新潟県を北に進む。
「次は、五日町、五日町です。Ｔｈｅ ｎｅｘｔ ｓｔａｔｉｏｎ ｉｓ Ｉｔｓｕｋａｍａｃｈｉ．」
六日町駅からは、終点までそこまで時間はかからなかった。
長岡駅ですぐに次の電車に乗り換える。新幹線で行ってもいいんだけど、まあ、長岡新潟くらいなら、在来線でもいいわよね？
ちなみに、長岡駅の手前の宮内駅で上越線は終わっていて、そこからは「信越本線」の領域になるらしい。
「この列車は、普通新潟行きです。北長岡、押切、見附の順に、終点新潟まで各駅に停まってまいります。次は北長岡、北長岡です。お客様にお願い致します。車内は禁煙です――」
長岡からの電車も、結局同じ電車になった。
あたしたちは何とか開いているボックスを１つ見つけて座り込む。
「これから先、主な駅の到着時刻をお知らせいたします。見附――」
車掌さんが主な駅の到着時刻を伝えているのも今までと同じ。
その放送によれば、ここから新潟までの所要時間は、約１時間２０分、おそらく新潟駅に近付くに連れて、どんどん混んでいくんだと思う。

「次は、終点新潟、新潟です――」
しかし、まだ「昼間」と言える時間帯なのか、そうはならず、あたしたちは無事に新潟駅につくことが出来た。
あたしたちは停車する寸前に席から立ち上がり、ドアにすでに並んでいたお客さんの後ろに並ぶ。
新潟駅のホームを上がり、お義母さんの誘導であたしたちは進む。
「さ、お楽しみはこれからよ」
「う、うん」
お義母さんがまた何やら笑みを浮かべている。
「といっても、実は大したことないんだけどね」
「え!?」
ここまで言っておいてそれ？
まあ確かに、六日町駅でも「名前負け」って言ってたから、確かに大したものではないのは想像がつくけど。
改札口から出たお義母さんは、「万代口」と書かれた案内口に向かって進む。あたしも、何とかついていく。
「今夜は新潟駅からバスで向かうわ」
どうやら、ここからバスに乗るらしい。
「さ、ここよ。優子ちゃん、これに注目してみて？」
お義母さんが案内表示の一部を指差しながら声をかけてくる。
「え!? 『ＢＲＴ』って書いてあるわね」
聞きなれない単語だわ。ＢＲＴって何のことかしら？
「ＢＲＴというのは『バス・ラピッド・トランジット』っていうのよ」
「普通のバスとは何が違うのよ？」
「ああ、俺も知りたい」
どうやら、浩介くんもここまでは知らされてなかったみたいね。
「ふふ、来れば分かるわよ」
あたしたちは、他の乗客たちとともに、バスが来るのを待つ。
すると、心なしか、大きなバスが入ってきた。
「あれ？　このバス、随分と長くない？」

ちょっとだけ違和感があった。
「ふふ、これは『連節バス』よ。真ん中へんを見てみて」
お義母さんに言われるがままに、あたしは連接バスの真ん中を見る。
すると、真ん中につなぎ目みたいなものを発見した。
それにともなって、車輪も6本あることがわかった。
「あ、本当だわ」
あたしたちは他の乗客とともにバスの中に入る。車内は連接バスらしく、通常のバスよりも遥かに長い車体をしていた。
そしてそれに伴って乗客の数もそれなりに多かった。
「ねえお義母さん、もしかして、ＢＲＴって連接バスのこと？」
「違うわよ。ＢＲＴっていうのはＬＲＴから発展した概念で、ＬＲＴっていうのは要するに次世代型の路面電車のことよ」
お義母さんがあたしの誤りを正すように言う。
「えっと、じゃあ路面電車のバス版ってこと？」
「ええ、なのでＢＲＴというのはバス専用の道路や車線を持っているのよ。ええ、『優先』ではなく『専用』よ。いわばＢＲＴのＲの部分よ。例えば東日本大震災で被災した路線の復旧の一部にもＢＲＴとして一部に専用道路が作られているわ」
「え、ええ」
ふむ、とすると何となく見えてきたわ。
「間もなく発車します。お掴まり下さい」
運転士さんの言葉と共にバスがゆっくりと発車した。
そして市街地を進む。どうやらこれは、「萬代橋ライン」と言うらしい。
そう言えば、さっきの新潟駅での出口も「万代口」だったわね。
「あれ？　専用レーンは？」
しばらく進み、バス停を幾つか進むが、一向に一般道を進んでいる様子に、あたしが疑問を投げかける。
「ふふ、優子ちゃん気付いたわね。このバス路線、実はＢＲＴとは名ば

かりで専用レーンが全くないのよ」
「じゃあ何でＢＲＴ何て名乗ってるんだ？」
浩介くんが当然の疑問点を答える。
「ええ、それは当初はそういう計画で進んでいたからよ。まあ、今じゃ名前負けしているってことで、地元民も含め、日本全国から笑われちゃってるけどね」
「あー、うん、察するわ」
ＢＲＴの特徴が無いのにＢＲＴを名乗るんじゃあねえ。
「さ、次で降りるわよ。ホテルにチェックインしたら、食事にしましょう」
「「はーい」」
お義母さんの導きの元、あたしたちは今宵のホテルにチェックインする。
街中にあるホテルということで、それなりに立派な作りになっている。
部屋は隣同士で、それぞれが２人部屋ということになっている。
荷物をホテルの台車に入れてもらい、ホテルの人が広いエレベーターに乗せてくれた。

「それじゃあ浩介に優子ちゃん、１９時にここに集合よ」
「「はーい」」
あたしと浩介くんは、義両親と別れようやく部屋に入った。
「ふー疲れたわー」
「ああ」
予定の時刻までは、まだいくらかの時間があった。
お昼が遅めのラーメンということで、夕食も少し遅めになった。
ちなみに、さっき言ってくれたように、新潟は港町なので、港町らしく海の幸にしようという事になった。予約の時間帯も、守らないこともいけないわね。
もちろんそれは何とも言えないこじつけではあったが、事前に下調べはしてはあるつもりでもある。

「ふう、良かったわあって」
あたしは、カバンから避妊具を取り出す。
「なあ、俺が持っていようか？　また隠されるとあれだしさ」
「うん、お願いしていいかしら？」
浩介くんの申し出を、あたしは快諾する。
ともあれこれで、今夜はバッチリね。
「テレビでも見るか」
「うん」
地方に泊まるとよくあるのが、テレビのチャンネルの法則が関東と違って戸惑うこと。
バラエティ番組は相変わらずつまらないので、あたしたちはニュースを見て過ごすことにした。
「続いてはスポーツコーナーです。田村恵美選手が女子ツアーで優勝を飾りました！」
「お、田村のやつ順調だな」
「うん」
恵美ちゃんのことは最近ではスポーツコーナーによく出てくる。
日本女子テニス界としても恵美ちゃんの存在はとても大きいものになってきている。
世界ランキングも既に１００位を切っていてうまく行けば今年中には日本人の中では１番になる可能性がある所まで来た。
蓬莱の薬の効果か、最近では恵美ちゃんは以前にも増して強くなっている。
恵美ちゃんはまだ１０代ということを考えれば、誰もドーピングを疑うものもいない。まあそもそも、蓬莱の薬はドーピングじゃないんだけどね。
「優子ちゃん、浩介、そろそろ行くわよ」
「あ、はーい」
ニュースが終わる頃、あたしたちはお義母さんに呼び出され、予約していたホテルの近くにある海鮮料理店に足を運ぶことになった。

新潟港で取れた魚介類を使っての調理ということで、鮮度抜群を売りにしていた。
「うむ、この海鮮丼もうめえな」
浩介くんがマグロたっぷりの丼を元気よく頬張っている。
もちろん、これだけ食欲旺盛なのは、その後のことを考えているのよね。
「浩介くん、よく食べるわね」
「だってよ、キチンと食べねえと、優子ちゃんに全部絞り尽くされちまうんだもの。そしたら干からびちゃうぜ」
「あらあら、浩介ったら」
浩介くん、本当に豪胆になったわよね。
でも確かに、あたし最近肌が潤っている気がするのよね。気絶させられちゃうことも以前より増えたし、これっていい傾向かしら？
「だってよお、本当にすげえんだぜ優子ちゃんって」
「もう、浩介くん。あまり大きな声でそんなこと言わないでよ」
「おっとごめんごめん」
周囲も「やっぱりあれだけかわいいと旦那さんも幸せだろうなあ」とか「あれって恋人じゃなくて夫婦？」とか「そう言えば、あの女の子の顔何処かで見かけたようなきがする」なんていう会話をしている。
浩介くんは、追加で一品物を頼み、それが響いて珍しく最後に食べ終わったのは浩介くんだった。
「ふう、さて、休んだら早速するぞ優子ちゃん」
「う、うん……」
店を出ると、浩介くんは既にやる気満々になっていた。
その日の夜は、ものすごいものだった。意識が飛び、気絶してしまい、浩介くんも「いつも以上に多かった」と言って、息を切らせた。
そして、最後は浩介くんまで最後は気絶してそのまま眠ってしまった。
なんだろう、まさか男の子が気絶するなんて思いもしなかったわ。
やっぱりあたしたち、最高の夫婦だわ。こんな生活が、ずっと続け

ば、いいのに。

# 初めての家族旅行　最終日　颯爽とした帰路

「んっ……」
朝日の光が目に染みる。そしてあたしはゆっくりと目を覚ます。
昨日はお風呂に入ってすぐに激しくしてしまって、とにかく凄まじい夜だった。
「優子ちゃん、起きたかい？」
「うん、おはよう浩介くん」
「おう」
ホテルでの朝、まずあたしは今日の服に着替えるため、別室に移動する。
コンコン
「浩介ー！　優子ちゃんー！　後１０分したら朝御飯にいくわよー！」
遠くでノックとお義母さんの声がする。
どうやら、朝食の時間が迫っているらしい。急いだ方がいいわね。
あたしは気持ち急ぎ目で、服を着替え、歯を磨いて口をゆすいだ。
「よし、優子ちゃん。これで準備完了かな？」
「うん」
あたしたちは、義両親との約束の時間に遅れないように支度を整える。
今日は早めにホテルを切り上げ、新潟の町を観光し、そのまま新幹線で早めに戻ってからお昼頃には家に帰る予定になっている。
これもゴールデンウィークにおける、いわゆる「Ｕターンラッシュ」を避けるための工夫というわけね。
ガチャッ……トン……
「ふう」
ドアを開けて鍵を閉めると、まだ義両親はいなかった。
まあ、約束の時間まではまだ少しあるものね。
ガチャッ……
「２人ともお待たせー。さ、いくわよ」

そしてあたしたちが出るとすぐに義両親が姿を表した。
レストランは1階の奥の部屋なのでそこへと向かう。
朝食は、バイキングだった。

「優子ちゃん、今日は新潟港へ行くわ」
朝食中、お義母さんが今日の予定を話してくれる。
新潟港？
「う、うん。港ってこと？」
「ええそうよ。港町だもの。ここも島みたいな場所でしょ？　東に進めば新潟港へ行けるわ」
そう言えば、ここも信濃川と海に囲まれているのよね。
その後、上越新幹線で帰ることになっている。ちなみに、名前負けのＢＲＴの他にも、帰りをちょっと特別な列車で帰るために、わざわざ新潟駅まで行ったとか。
「お義母さん、特別な列車って？」
「ふふ、乗ってのお楽しみよ」
お義母さんにはぐらかされてしまった。
お義父さんと浩介くんにも聞いてみたが、どうやら2人にも知らされていないらしい。
「ともあれ、ご飯食べ終わったらすぐに行くわよ。少しでも新潟港の滞在時間を長くしましょう」
「え、ええ」
あたしたちは、気持ち早めに食事を食べる。
相変わらず、浩介くんはエネルギー回復のためにもりもり食べていたけど。

「優子ちゃん、準備できた？」
「ええ」
支度の途中、浩介くんに数回お尻を触られつつも、あたしは帰宅の準備を完了する。
そして最後に、忘れ物がないかもう一度確認する。

「おし。じゃあ行くか」
「うん」
あたしは、最後に部屋の鍵を持ち、扉を開けてから、外に出る。
外には既に、各々荷物を持った義両親が立っていた。
「お、全員揃ったな」
「じゃあ行きましょう」
お義母さんの声と共に、あたしたちは鍵をホテルに返却して、一路バス停を目指す。
今度は、新潟港方面のバスでこちらはごく普通のバスらしい。昨日のＢＲＴとの違いって、車両が違うだけよね？
まあ、昨日のＢＲＴが、ただの名前負けだったんだけど。
「さ、降りるわよ」
朝早い時間で、バスはとても空いていた。
そしてあたしたちは、海が近くに見える新潟港までやって来た。
「うわー、船が一杯ね」
「ああ、あの船はどこから来たのかな？」
あたしの声に、浩介くんが反応する。
「日本海側の要衝だからね。昔はここからウラジオストクまでの船が出ていたり、北朝鮮から『万景峰号』という船も出てたりしてたわ」
「万景峰号？」
聞き慣れない船よね。というより、北朝鮮の船が日本に堂々と渡ってたなんて信じられないわ。
「ええ、日本と北朝鮮を結んだ貨客船、つまり旅客貨物混合の船だったわ。当たり前だけど、昭和には拉致担当の工作員を連れ込んだりしたわよ。他にも麻薬の密輸何かにも使われていたから、随分と早い段階で経済制裁の対象になって、今はもうずっと前から入国禁止よ。優子ちゃんや浩介が生まれてすぐの頃だったかしら？」
あたしたちにとっては幼い頃の話とはいえ、そんな最近まであの北朝鮮の船が堂々日本に入国していたことが信じられないわ。
「ああ、あったな。『北朝鮮の貨客船万景峰号』と言えば、早口言葉にもなったものだ」

お義父さんも、ある意味では懐かしさを感じている。
これはそう、ジェネレーションギャップと言ってもいいかもしれないわね。
「それからもう一つ、なくなった船と言えばここから日本海を挟んでちょうど対岸にあるウラジオストク港までの旅客船もなくなっちゃったわね」
「あったなー、新潟ウラジオストク航路」
「へー、飛行機で良さそうなのに」
「ええ、船は大量に輸送出来るから貨物にはいいけど、とにかく遅いのよ」
お義母さんがそう説明してくれる。
「とすると、九州と釜山の間に船があるかしら？」
「ええ、それを使えば一応飛行機なしで外国に行けるわよ。後はそうねえ……永原先生によれば鳥取県の境港からウラジオストクまで船で行けるらしいから、後はそこからシベリア鉄道とを乗り継いで一応ヨーロッパまで飛行機なしで行くことは可能よ」
所要時間を聞きたいような聞きたくないような。
「ちなみに、所要時間は？」
浩介くんがあたしの代わりに所要時間を聞き出そうとする。
「飛行機で半日のところをモスクワまでで2週間以上かかるわよ」
「うげえ、やっぱり飛行機って偉大だな」
「でも、旅客機ができる前ってヨーロッパまではそれくらい時間がかかったのよね」
あたしが、古い時代に思いを馳せる。
「ふふ、飛行機のほとんどなかった戦前は、シベリア鉄道はソ連の管轄だったというのもあったから、大抵は太平洋航路を通ってアメリカのシアトルに出て、鉄道で大陸を横断して、ニューヨークからパリやロンドンに出たわよ」
「そ、それって所要時間がとんでもないことになりそうだわ」
太平洋と大西洋を渡って遠回りよね。
「今は太平洋も大西洋も、旅客船はないから、アメリカに行くには飛行

機が必須になっているわ。むしろ日本とヨーロッパが未だに飛行機なしで行けるのが驚きよ」
「確かに、そうとも言えるわね」
実際に行く人なんてよっぽどの酔狂者よね。
長距離旅客船は少なくなっても、逆に貨物船は盛んに使われている。
「でも、貨物船は多いわね」
「ええ、日本からヨーロッパへの貨物船は、大抵は太平洋を南に抜けてインド洋からスエズ運河を渡って行くのよ。だいたい４０日かかるわ」
「４０日かあ、それでも貨物機よりは効率がいいのよね」
「ええもちろん。飛行機はとにかく燃料が要りますもの」
ということは、太平洋はもっともっと貨物船がたくさんありそうよね。
日米は貿易が盛んだもの。
「そう言えば、ウラジオストクまで貨物を運んで、そこからシベリア鉄道を使って貨物輸送できないのか？」
ここで、お義父さんから疑問符がつく。
「あー、そう言えばそうよね。それも多そうだけど」
「永原先生に聞いてみては？」
「あーうん、そうさせてもらうわ」
あたしの提案にお義母さんはスマホを取り出してメールを打ち始めた。
「さて、電車も早いから、そろそろ行くわね」
「あ、うん」
ちなみに、帰りは普通車指定席を使うことになっている。
実を言うと、蓬莱教授への支援金は日増しに増えていて、「実験への謝礼」という名目で、あたしたちにもかなりの金が押し付けられている。
本当はこういう予算の強引な浪費は避けたいわけだけど、寄付金が集まってしまう以上、どうにもならないという。

あたしたちも、当初は帰りの新幹線をグリーン車にする計画だったが、さすがに浪費癖がつきすぎるのもよくないということで、普通車になった。
あたしたちはバスに乗ると、新潟駅を一気に目指した。
「よし、間に合うわね」
時刻はまだ9時前、目的の列車は東京行きの「とき」だった。
途中停車駅の所には「大宮」とだけ書かれている。
「さ、乗り込むわね」
上越新幹線を使うのは、去年の新婚旅行以来2回目だけど、前回は夜だったので車窓は見えなかった。
今回はと言えば、朝早い時間なので、当然車窓を見ることができる。
アナウンスと共に、目的の列車が入線し、あたしたちは指定席に座る。
ちなみに、2人の列に2人で乗ることになっている。
あたしと浩介くんが、後ろの列に座り、義両親が前に座る。
「本日も新幹線をご利用いただきましてありがとうございます。この電車は――」
車掌さんの案内放送が聞こえてくる。
いつものように、車内禁煙とかを話している。
「――次の停車駅は大宮です。この電車は新潟を出ますと大宮まで止まりません、停車駅にご注意ください」
あー、つまり直行便みたいなものなのね。
「優子ちゃん、この電車はね元々大宮通過だったのよ」
「え!? つまり、昔は東京までノンストップだったの？」
お義母さんの衝撃的な発言が飛んでくる。
「ええ、7年前までは、これよりも古い２００系を使っていて、大宮駅も低速で通過していたのよ」
7年前、つまり２０１３年ということになるわね。
「あ、２００系と言えば新婚旅行の時に行った鉄道博物館にもあったな」

浩介くんが思い出しながら言う。
そう言えばあったわね。緑の新幹線だっけ？
「ええそうよ。今の車両……といってもこれももう大概旧式だけど、この車両になって性能が上がったから、停車駅は増えたけど所要時間が短くなったのよ」
「へー、鉄道技術の進歩はすごいわね」
お義母さんによれば、この列車は特急いなほとの接続を重視して、日本海側の諸都市に対する航空便への対抗列車と位置付けられているらしい。
「うん、あっちょっと待って」
お義母さんが何かを取り出すような仕草をする。
最も、前の椅子の影になってて見えないけど。
「ふむふむ、なるほどねえ」
「どうしたの？」
「さっきのシベリア鉄道の話、確かに所要時間は短いけど、船よりもお金がかかる上に、色々とシベリア鉄道側が信用ならない行動を繰り返したこととか、後は輸送力は鉄道より船が上なんだって」
お義母さんが恐らく永原先生から来たメールを読みながら言う。
「なるほどなあ」
「大量に運びたいなら船、本当に急ぎたいなら飛行機だものね」
「お待たせいたしました、間もなく発車いたします。ご乗車のままでお待ちください」
あたしたちの疑問が解決したところで、新幹線が発車する。
新幹線はゆっくりと加速し、ホームを出る。
そして、いつもの放送が流れ、停車駅は「大宮」と「東京」しかないことも教えてくれる。
お義母さんによれば、「このパターンは1日1往復しかない」とのこと。
つまり、速い上に珍しい列車に乗ろうと言うことで、この予定を組んだらしい。
列車はぐんぐんとスピードをあげていくが、やはり以前感じたよう

に、東北新幹線と比べると、ややスピード間は遅い。
まあ、上越新幹線は２４０キロで、東北新幹線は３２０キロと考えれば、その差は８０キロだものね。
「それでね、新潟港の近くには新潟空港もあって、かつては羽田から新潟への航空便もあったのよ」
「あー、懐かしいな。羽田新潟線、上越新幹線ができて、無くなっちゃったんだよな」
走行中にも、義両親が様々なことを教えてくれる。
「新幹線と飛行機って仁義なき戦いって感じよね」
「ええ、７年後にはリニアができるから、羽田伊丹線もそれなりに打撃を受けると言われているわ」
「でしょうね」
東京五輪には間に合わないとは言え、中央リニア新幹線が、現在目下建設中だ。
大阪には更に後になるとは言え、これが完成すれば、航空便とのシェアの勢力図も、大きく塗り替えられると予想されている。
そう言えば、永原先生が「４時間の壁」って言ってたっけ？
うん、それじゃあ上越新幹線には相手にならないわよね。
これは一番速い電車だけど、新潟から東京まで、２時間を大きく切っているもの。
電車が、燕三条駅を通過する。近くに高速道路のインターチェンジが車窓に見え、そちらは「三条燕」になっていた。
燕と三条でどちらを先に置くかで対立した結果、新幹線の駅と高速道路で違う名前にして妥協したらしい。
これはあたしも学校の授業で何度もやった有名な話だけど、やっぱり実物を見ると違うわね。
「なあ優子ちゃん」
「うん、やっぱり実物を見ると感慨深いわね」
前に乗ったときは、日も落ちていて、疲れていたのでほとんど車窓に目が向けられなかった。

「高速道路と新幹線、これもライバルになるのよね」
「あはは、あたしは格安バスなんて使わないわ」
お義母さんの言葉に、あたしは笑い飛ばすように言う。
「ああ俺も」
「あー優子ちゃんたちはそうよね」
お義母さんが納得したように話す。
そう、不老人たるあたしが死ぬとすれば不慮の事故に巻き込まれる場合がほぼ全てと言っていい。
特に道路は危険が一杯と考えれば、格安のバスなんて金をつまれても乗りたくないわ。
「そうかあ、不老と言うのはそういうところで価値観を変えていくんだな」
そう、毎日乗って１００年に1度事故に遭遇するかしないかという確率は、一般の人間からすれば無視できるような低確率でも、あたしたちにとっては「極めて危険な行為」に分類される。というのは永原先生の安全講習での話。
ちなみにこの安全講習、大学の春休み中にはあたしが幸子さんに向けて講習した。
ここから発展した雑談で、あたしたちは長岡駅を通過する。
上越新幹線は、長岡駅や越後湯沢駅には停車するパターンが多く、ほとんどの駅を通過するこの列車は改めて異彩を放っていることがわかる。
「そうそう、優子ちゃんに浩介、２人とも大学はどう？　順調？」
お義母さんがあたしたちの勉強について心配してくれる。
「ええ、専門基礎が増えて、ますますモチベーションが上がっているわ」
「俺も。やっぱり優子ちゃんとずっとずっと過ごすためにも、今の研究水準じゃ不十分だからな」
あたしと浩介くんが力強く答える。
「そう、やっぱり目標があると違うわよね」
「ああ」

考えてみれば、愛する人を勉強の目標にできるあたしたちは幸せなのかもしれない。
他の人なら、何となくぼんやりとした将来の夢を抱き、それに向けて勉強するという感じかもしれない。
桂子ちゃんだって、天文が好きとは言っても、あたしたちほどにモチベーションが高いとは思えない。
外の車窓には、田畑が大きく広がっている。
稲作の盛んな新潟県らしい風景があちこちに広がると共に、列車は突然浦佐駅を通過した。
「市街地って感じじゃなかったな」
「うん」
「ここ浦佐駅は、政治駅の代表的な例とまで言われているわね。実際、前後の六日町と小出に比べて、明らかに小さな町だもの。当初ここに駅が出るって話になった時は、当の浦佐駅の住人も困惑したらしいわ」
新幹線の駅ができるというのに、当の地元民にさえ困惑されるってよっぽどよね。
実際、この駅の前には上越新幹線の開業を推進した元総理大臣の政治家の銅像が建てられているために、余計にその印象が強いらしい。
「一応、政治駅ではないとする立場では、『六日町や小出だと越後湯沢や長岡と近すぎるから間をとった』という話よ。でも、そういう間取りは大抵失敗するものよ」
永原先生の話によれば、特急列車でも距離が近い住人同士が停車駅で争ったために、国鉄が間の小さな駅に止めた結果、両町共に衰退した上に片方の駅に乗り入れていた地方鉄道が廃線に追い込まれたこともあったらしい。
「浦佐だって、これでもかなり発展した方なのよ」
鉄道、特に新幹線は、どうしても新幹線駅ができるところが発展しやすいため、政治と密接に関わってしまうらしい。
そして次に通過したのが越後湯沢駅ここを過ぎれば、土合駅のある県境を越えることになる。

「しかし、トンネルはいくつあるんだ？」
長いトンネルに入ると、浩介くんが疑問符を述べる。
「うーんと、上越線に清水トンネルと、関越道にもあるし、新幹線で３本かしら？」
あたしが答えをあてずっぽうで言う。
「あーうん、上越線は上下でトンネルが違うらしいわ。それも合わせると４本よ」
なるほどねえ。さすがに一般道はないのかな？　まあいいわ。
「新幹線のトンネルは、難工事だったらしいわ。越後湯沢温泉の泉脈にも影響を与えてしまったとも言われているわね」
お義母さんが上越新幹線の負の側面を語る。一方で、トンネルから出た湧き水は「おいしい水」としても売られている。
それ以来、地熱発電所に対しても、温泉町は懸念を示し続けているらしい。
「なるほどねえ」
行きの時とは段違いの速度で、トンネルを通過すると、間もなく上毛高原駅を通過、ここは新幹線だけの単独駅で、利用客は多くないらしい。
その後、北関東の街、高崎駅で北陸新幹線と合流する。
この市街地を通過すれば、後はもう首都圏だった。
「間もなく、大宮、大宮です――」
「さ、降りるわよ」
大宮駅が近付くと、以前鉄道博物館に行ったときに乗った電車を見ながら、あたしたちは降りる支度をする。
大宮駅で降りるお客さんもそれなりにいて、この追加停車は随分役に立っていた。
「さ、後はまっすぐ帰る……と言いたいけど、うちの近くの料理屋さんに行くわよ。どこがいい？」
「えっと――」
あたしたちは、自宅の最寄り駅にあるイタリア料理店でパスタを食べて早めの昼食とし、家に悠々と帰宅した。

# 蓬莱教授の罠

ゴールデンウィークが終われば、あたしは女の子として3年を迎えたことになる。

3年も迎えると、大抵の患者さんは女の子として一人立ちできる目安になる。

まああたしの場合は、半年でほとんど一人前といってよかったけど、ほぼ完全に男が消えたと思うのは、結婚してから。

それを考えればあたしでも2年近くを要したことになる。

歩美さんも大学生になって、最近天文サークルの男の子の1人に目を奪われてしまうことが増えているという。

歩美さんも、幸子さんと同じように、これから好きな男の子を見つけて、ますます女の子が磨かれていくのよね。

あたしたちは、日々を順調にすごし、蓬莱教授も５００歳の薬を完成させたという。

「さて、っと」

浩介くんが、早速その薬を飲用している。

これで、浩介くんは寿命が２００年延びることになる。

もちろん、桂子ちゃんと恵美ちゃんも同じ。

5月のこの時期、恵美ちゃんは日本全国のスポーツニュースを独占していた。

もちろん優勝には届かなかったが、全仏オープンでベスト4に入ったからだ。

恵美ちゃんは昨シーズンがほぼ下部大会だったのもあって、試合に出れば出るほどランキングが上がっているという。

恵美ちゃんの報告では「ドーピング検査は全て通っている」とのことだった。

まあ、当然と言えば当然よね。

「しかし、東京五輪、どうなるかね？」

「うーん、恵美ちゃんも間違いなく出られるとは思うけど」

恵美ちゃんによれば、「今のあたいにとって問題なのは怪我の心配

だ」とのことだった。
確かに蓬莱の薬は不老の薬ということで、多少の身体能力は上がるものの、他のドーピング薬のように劇的に上昇するわけではないし、怪我をしにくくする薬でもない。
「にしたって、あいつ、すげえ上達したよな。あの時の俺じゃ、もう勝てねえだろ」
浩介くんが思い出すように言う。
「そうよね。でも、浩介くんならあの後数年も練習すれば女子の世界ランク1位より強くなると思うけど」
実際、テニスは比較的男女差の大きいスポーツで、特に上半身のパワーや体力と言う意味では、男女には相当な差があるらしい。
なので、浩介くんのように元々の身体能力が極めて高い男性が努力すれば、力と体力に任せたテニスをすれば女子の世界ランク1位に勝つことは難しくないらしい。
「だろうなあ。まあ、俺は蓬莱教授につくよ」
浩介くんがあっさりした口調で言う。
あのスカウトのことは、もう終わったこと。
「うん」
これからの予定としては、主に蓬莱教授の記者会見と、そうそう、週刊誌の記者を罠にはめるんだったわね。
さて、今日の蓬莱教授の講義が休講になっている。また、永原先生も出張で休みと言う連絡が入ってきた。
これはつまるところ、記者を罠にはめるための策略の結構日が、今日であると言うことである。
そのような策略に果たして週刊誌が引っ掛かるのかは分からない。
でも、やってみる価値はあるだろう。
「よし、今日も1日頑張るか」
問題なのは、むしろ休講になった時間の使い方かもしれない。
こういう時に、支給のＰＣはとても役に立つわね。
「そう言えば、優子ちゃん来月誕生日だっけ？」
「うん、２０歳になるわね」

「そうすると成人式かあ」
浩介くんが小さく呟く。
来年の1月に成人式がある。
「面倒くさいわね」
「まあでも、同窓会の代わりになるだろ」
「あー、そうねえ……」
浩介くんがやや投げ槍気味にそんなことを言う。
同窓会の代わりねえ。3月にもしたけど、大学生まではともかく、社会人になってからは毎年同窓会とも行かなくなる。
まあ、協会の会員として、今後も付き合いがあればいいとは思うけど。
とにかく、あたしたちにはいつも通りの大学を過ごすことになった。

事態が動き出したのは、5月末だった。
行き帰りの電車の中にある週刊誌の中吊り広告が更新されたわけだけど、その中に「佐和山大学教授、ノーベル賞学者の熱愛疑惑、相手は小谷学園の教諭にして人類最高齢の女性」という文字を見つけた。
「浩介くん、どうやら週刊誌が引っ掛かったわね」
「ああ、メディアが色々問いかけてくるぞ」
「うん、注意しなきゃ」
佐和山大学に入ると、「蓬莱の研究棟」の前にテレビカメラが集まっていた。
あたしたちは、テレビカメラを避けつつ、大きく迂回した進路をとる。
何分あたしもあたしでそれなりに顔が割れている。触らぬ神に祟りなし、浩介くんが護衛についてくれているとは言え、無茶はできない。
ガララ……

今日はあたしたちにも蓬莱教授の担当の講義がある。
ちなみに、護衛を使ってメディアの記者をシャットダウンしていた。
「さて講義を始めるぞ。始めに言っておくが、あの週刊誌の報道は捏造……というよりも全くの根拠のない妄想だ。知っての通り、俺はマスコミどもに追いかけ回されている。だからこそ、ちょっと罠にはめてやったのさ。何、心配はいらん。今夜にはあいつらは一泡吹くだろうさ」
蓬莱教授が冒頭そんなことを言いながら、早速講義が始まった。
学生たちは冷静で、講義もいつも通りだった。
一応、むやみやたらとカメラ向けられて激昂した学生が、何人かトラブルを起こしたらしいが、蓬莱教授が「マスコミが全面的に悪い」ということにして学生側には何のおとがめ無しになったらしい。

「「ただいまー」」
「あ、2人とも大丈夫だった？」
家に帰ってくると、お義母さんが早速心配してきた。
「ええ、大丈夫よ」
「ああ、カメラは向けられなかったぜ。まあ向けてたら俺がボコボコにしてやるけどな」
浩介くんが力こぶを見せつけてくる。
「ふふ、浩介くん頼もしいわ」
「まあとにかく、蓬莱教授のことだからこれも謀略の一貫だとは思うけど」
お義母さんにも、やはり予想はついていたらしい。
「ええそうよ」
あたしは、部屋に戻り早速テレビをつける。
ちなみに浩介くんは、久々に宣伝部の活動があるとのことで、別行動をとっている。
インターネットでは、既に蓬莱教授側が疑惑を否定する記者会見を開くことが決定されていて、手際のよさに「蓬莱教授が罠をしかけた」

とする書き込みが殺到している。
もちろん、蓬莱教授の宣伝部としてもその事実が広まるのは、むしろ歓迎ということになっている。
インターネットでは、マスコミの評判がとても悪い。
そうしたマスコミが、個人に手玉に取られたとなれば痛快極まりない。
ちなみに、そのマスコミの写真によれば、同じホテルに出入りする2人の写真が掲載され、「仲睦まじそうな様子」と伝えている。
もちろん、わざとそうするように仕向けたのは明らかだけど。
「えー、今から、蓬莱教授が記者会見を開く模様です」
テレビのアナウンサーがそう叫ぶと、「Ｌｉｖｅ」の文字と共に、記者会見場が写し出されている。
ちなみに、前の机には既に蓬莱教授が足を組みながら侮蔑の目で座っている。
恐らく、子供だましの小細工だったんだと思う。そんなものに引っ掛かるとは、もしかしたら蓬莱教授も予想外だったのかもしれないわね。
また、机にはＰＣがあって、正面にはプロジェクターもある。
これで、動画を流して、潔白を証明するつもりなのね。
「えーそれでは、記者会見を始めます」
司会者さんの発言と共に一斉にフラッシュがたかれ、蓬莱教授はマイクを取る。
「ごほんっあー、昨日発売の週刊誌、あれはなんだ!?　ありもしない嘘をばらまきやがって！　どこだ!?　出てこい！」
蓬莱教授は第一声、大きな声でマスコミを威圧する。
もちろん、誰も名乗り上げない。
「ふん、回答無しかこの臆病者め。まあいい、どうせいるんだろうから言っておく。お前たちのしたことは！　俺だけならばともかく、永原先生にも迷惑をかけた前代未聞の所業だ！　報道の名のもとに、人の権利を踏みにじることを全く厭わない社会の敵だ！」
蓬莱教授の大きな声に、記者たちのシャッター音もほとんど聞こえ

てこない。
「あーもちろん、報道倫理をきちんと理解されている記者が大多数なのは、俺もよく知っている。むしろ、こんな破廉恥なメディアと一緒にされる危険性ということを考えれば、俺以上の被害者といっても差し支えないだろう！」
蓬莱教授は、さわわ祭での演説の時よりも、更に演説的な口調で話す。
「ごほんっ、長々と申し訳ない。真面目に取り組んでいる記者の方々にとってみれば、この時間は完全に無駄な時間ということになる。ただ、俺の冒頭の発言だけを切り取って編集するようなマスコミがあれば、それはこの破廉恥週刊誌と同罪であることも、一応釘を指しておこう」
生中継になっているので、もちろんカット編集はできない。
蓬莱教授、本当に賢いわね。
「本題に入ろう。確かに俺と永原先生は、偶然あの場でばったりと出会った。永原先生は日本性転換症候群協会主催の講演会に、俺は学会での研究発表を行いに行ったものだ。ホテルが偶然同じだったのは事実だが、階数は違っていたし、お互いに部屋を行き来はしていない。出る時間が同じだったのも、ちょうどそのタイミングがお互いベストだったからにすぎない」
蓬莱教授がもっともらしい弁明をする。
もちろん、熱愛疑惑は全くの捏造だが、これらが週刊誌を罠にかけるために故意に仕掛けたのは事実だ。
「といっても、記者の皆さんには信用できないであろうから、昨日永原先生と出会う直前から、ホテルに出て永原先生と別れるまでの映像を提供しようと思う」
そう言うと、蓬莱教授はＰＣを操作し、前方の画面が写る。
「お前たち週刊誌が、無いこと無いことを書き立てたときのために、俺は常にこうして小型カメラを身に付けている」
蓬莱教授がそう言うと、路上が見えてくる。
ちょうど駅から出てしばらくしたところらしい。

「あれ、蓬莱先生！」
驚いた表情の永原先生が画面に写る。
「おや、永原先生、こんなところで会うとは奇遇ですな」
「ええ、私は協会の仕事で。蓬莱先生も大学の仕事ですか？」
横に並んで歩いているのか、永原先生の姿が見えなくなる。
「ああ、そんなところだ。ＴＳ病のメカニズムについて発表するんだ」
「確かテロメアが特殊って言ってましたよね？」
永原先生は、学会で発表した以上の情報、つまりＴＳ病の遺伝子が２通りの機能があることをこの時には知っている。
つまり、この会話には台本があることが分かる。
「ええ、ところで……おや、ホテルが同じでしたか」
「あら、本当ね。奇遇だわ」
永原先生の表情は見えないが、横に並んでホテルに入っていく。
おそらく、この間を写真に撮ったのが、例の記事ということになるわけね。
そして、お互いにチェックインし、軽く挨拶をした後で蓬莱教授は自室へと入る。
「ここからはカメラは定点になる。早送りするからよーく見ててくれ」
蓬莱教授がそう言うと、カメラが早送りされる。
途中ホテルの風呂を作業するのと、鞄から夕食を取り出して食べ、学術誌を見て寝ているが、部屋から出ていない。
そして、深夜はひたすらに暗闇を写しており、もちろん誰かが来るというわけではない。
一気に蓬莱教授が加速を強め、朝起きて別の部屋に入り、別の部屋で着替えてスーツ姿になる。
そして荷物をまとめると小型カメラが再び装着され、ホテルの朝食ラウンジに進む。
「おや、永原先生、いらっしゃいましたか」
「これは蓬莱先生、何時からですか？」

「あー、俺は朝9時半にホールに行くんだ」
「あら？　じゃあ方向は真逆ですけど、途中までは一緒になりますか？」
「そうなりますね」
　永原先生と蓬莱教授の間には、極めて事務的な会話ばかりが続いていて、おおよそ週刊誌が言うような「熱愛」とはほど遠い状況が写し出されている。
「ふむ、さて、ではそろそろ行きますかな」
「ええ」
　永原先生と蓬莱教授が、ホテルをチェックアウトし出ていく。
「それで、新しく遺伝子提供を申し出た患者はいますか？」
「いえ、今のところ、佐和山大学に入った1人が最後です」
　歩美さんのことよね。
「そうですか。ですが、感謝しますよ。やはりサンプル数が1増えるだけでも、実験の進み具合は大違いですから」
「ありがとうございます」
　そして途中まで同じ道を進み、やがてT字路に差し掛かる。
「では、俺はこちらを左ですので」
「ええ、またよろしくお願い致します」
「こちらこそ、いつもありがとうございます」
　そして蓬莱教授が永原先生と別れ、1人で単独行動をとって数分で動画が終わる。

「以上が、この日に行われた本当の出来事だ。ところでもう一度その週刊誌の記者に聞くが、君たちはこれを見てどこに『熱愛疑惑』を感じたんだね？」
　しかし、誰も手を挙げない。
　もしかしたら、本当に来ていないのかもしれないわ。
「……答えなし、か。今回は俺が警戒心の強い人間だったからよかったものを、人のプライバシーをないがしろにしたあげく、あらぬ噂をたてるとは言語道断！　今後、俺に内緒でカメラを向けたり、尾行し

たりすることの一切を禁ずる！」
マスコミ関係者から、動揺の声が流れる。
たまらず1人の新聞記者が手をあげ、司会者さんからマイクを受けとる。
「あの、いったいどういう権利を持ってそんなことを言うんですか!?
我々には報道の自由が――」
「やかましい！　報道の自由のためなら嘘や名誉毀損を書いても許されると思っているのか!?」
発言を途中で遮り、蓬莱教授が大声で怒鳴り付ける。
「もし、了承できないとするなら、こちらとしても報復措置がある。その会社の関係者や子孫には、開発中の蓬莱の薬を、完成しても売ってやらんぞ！」
蓬莱教授が檄を飛ばすように言う。
「将来的に、この薬は大衆にも普及することになるだろう。ここで俺に嫌がらせすれば、どういう報復が待っているか？　我が身を考えたいなら、よーく考えることだな」
マスコミ関係者は、自分達だけ不老の薬を飲めないとなれば、当然いい顔はしない。
あたしたちは、以前蓬莱教授が「俺は米軍よりも強力なカードを持っている」と言っていたが、その意味がようやく分かる気がしたわ。
「いいか？　俺も永原先生も、大学や高校の先生という立場ではあるが、あくまでも私立の教員であって私人だ。公務員ではないと言うこと。忘れるなよ」
蓬莱教授の発言に、マスコミ関係者は、凍りついている。
ここまで動かぬ潔白の証拠を突きつけられてしまえば、どうすることもできない。
「それから、この記事を書いた週刊誌！　まさかこの場にいないとか、聞いてないとは言わせんぞ！　昨日の記事の訂正と謝罪を、俺たちは要求する！　聞き入れない場合は裁判所で会おう！　俺からは以上だ」
そしてその後、蓬莱教授へマスコミからの質問コーナーに移る訳だ

けど、蓬莱教授が、もはや私人でありながら、国家以上の権力者になっていたという事実にすっかり萎縮してしまったのか、誰も質問者として手をあげなかった。
それからまもなく、中継はスタジオに戻った。
あたしは、インターネットの反応を見る。
そこには週刊誌に対する嘲笑いの声がこだましていた。

「完全に謀略にはまってやんの！　蓬莱教授ＧＪ」
「裏をろくに取らないとか、もう完全に終わったな」
「最も偉大なノーベル賞学者に喧嘩売るとかマスゴミ調子乗りすぎだろ」
「にしても、蓬莱の薬売ってやらないとは考えたな」
「もう日本やアメリカなんかより蓬莱教授の方が強い。アメリカは今すぐ蓬莱教授個人と友好条約を結ぶべき」

そうした声に混ざって、蓬莱教授がもはや国家以上に強い存在になっているということを示唆している書き込みも多く見受けられた。
とは言え、政府が動くのはまだ先だとあたしたちは考えている。
さすがに完成が現実のものになり始めたら、政府もそれなりに考え始めるとは思うけど。
「ふう」
あたしは、多忙であろう浩介くんには声をかけず、インターネットの反応を観察し続けた。
やはり、マスコミというのはインターネットでは「悪の権化」という扱いのため、騙し討ちにした蓬莱教授を正義視する声が響き渡っていた。
一方で、マスコミを擁護する声には、容赦ない罵倒が投げつけられてもいた。

「優子ちゃーん！　ご飯よー！」
「はーい」

お義母さんの声と共に、あたしは日常へと引き戻されていった。
お義母さんは、これを蓬莱教授が仕組んだことをすぐに見抜いたけど、まあ仮にそうだとしても、ありもしないことを勝手に憶測で書いた時点で、週刊誌側の立場は相当に苦しいことは確かだった。

「この度は、蓬莱教授並びに永原様に大変なご迷惑をお掛け致しましたこと、深くお詫び申し上げます。申し訳ございませんでした」
パシャッ、パシャパシャパシャパシャ
翌日、週刊誌側の対応は早かった。
社長、編集長、そして当該記事を書いた記者の３人が記者会見を開き、記事の捏造を全面的に認め、謝罪を表明したのだった。
また、週刊誌のホームページにもトップに今回の不祥事を深くお詫びする文章を記載し始めた。
それは、蓬莱教授とマスコミの力関係が、明確に開いてきた証拠でもあった。
そう、そもそも「蓬莱の薬」は、老化の病気を抑制できないとしても、数多くの難病を消してくれる夢の薬には違いない、もし蓬莱教授の機嫌を損ねればそこの会社の社員というだけで、薬を融通してもらえなくなってしまう。
諸外国や他の研究期間は、そもそもＴＳ病患者の遺伝子を手に入れることができず、完全に蓬莱教授がこの分野の研究を独占していた。
もちろん、他の研究機関が追試する必要はあるけど、ＴＳ病患者の遺伝子が絡むため、蓬莱教授以外の研究機関は、ＴＳ病に関する研究さえ難しくなっている。
そのため、結局蓬莱教授がこの分野では独壇場になっている。
つまり、もしある組織が蓬莱教授に将来薬を融通してもらえないとなれば、それだけでその組織の存続さえ危うくなってしまう。
やはりみんな、不老というものは「なりたいもの」だからだ。
そして案の定、翌週発売の週刊誌にも、捏造報道を深くお詫びする謝罪文が長々と掲載された。
今回は完全な捏造報道のため、他の記者たちもやはり週刊誌を非難

している。海外のメディアまでは見てないけど、浩介くんによれば「今のところは問題ない」そうだ。

さて、あたしたちもあたしたちで、前期期末試験に備えないといけないわね。頑張らなくちゃ。

## 五輪前の駆け込み

「ふー、夏休みだー！」

浩介くんがほっとした表情で言う。

「あなた、お疲れ様」

「おう、優子ちゃんもな」

前期、相変わらず大変なのは実験とレポートだったけど、あたしたちはそれらも無難にこなし、あたしたちは無事に試験も終えることができた。

こうして、あたしたちは大学に入って２度目の夏休みを迎えることになる。

蓬莱教授と週刊誌の騒動もいつの間にか風化し、世間の関心は、すっかり６６年ぶりに東京で開かれるオリンピック一色になってしまった。

特に注目されるのが、恵美ちゃんの出場する女子テニスだ。

で、あたしたちもそのオリンピックの競技の１つを、蓬莱教授のつてで見ることができるという連絡が入った。

あたしと浩介くんとそれぞれの両親、そして桂子ちゃんと達也さん、更に歩美さんと幸子さん一家と直哉さんも来るとか。

蓬莱教授に瀬田助教、更に永原先生比良さん余呉さんも見に来るため、総勢２０人以上の大所帯で、蓬莱教授が取ったＶＩＰ席が満席になるらしい。

というか、何でＶＩＰ席なんか取れたんだろう？　まあ、資産２０億ドルの蓬莱教授だもの、不思議じゃないかな？

だけど、オリンピックの前に、まだ蓬莱教授にはやるべきことが残されている。

そう、それが「５００歳の記者会見」で、オリンピック開会式の前日にそれをぶちこむという離れ業だ。

もちろんこれは、世間の関心をそらさせ、反対の声をあげ辛くさせる戦法にもなっている。

確かに、多くの人にとって、蓬莱教授の不老研究は待ち望まれるも

のではあるが、やはり一部の宗教団体は、かたくなに抵抗を続けていて、特に海外では未だに反対派が優勢になっている国もあるという。
そうした状況を考え、まだまだ盤石とはいえないため、オリンピック前というこのタイミングで、雲隠れを計る計算になっているのだ。
「優子ちゃん、帰ろうか」
「うん」
ともあれ、試験からやっとの思いで解放された今は大学の夏休みを満喫したい。
桂子ちゃんの天文サークルは、今日は定休日になっている。
夏休み中には天体観測も行う予定になっていて、その時に撮影した写真を文化祭に掲載することになっている。
ちなみに、あらかじめこれらを毎年の恒例行事にすることも、すでに天文サークルでは検討し始めている。
「ねえ、優子ちゃん」
「うん？」
帰り道、浩介くんが何の変哲もない廊下で立ち止まってあたしの方に振り向く。
「ちょっとさ、ここに入っていい？」
そして、浩介くんは誰もいない薄暗い空き教室を指差して言う。
「もー、どうしたの？」
最近の浩介くんがここを指差す時は決まっている。
「そ、その……優子ちゃんの服に、ムラムラしちゃって」
「もー、家に帰ってからよ。いい？」
「うっ、は、はい」
夏場はどうしても服の露出が高くなり、あたしも浩介くんも性欲が高まってしまう。
今あたしが着ているのはノースリーブの白いワンピースで、制服の時と同じくらいの短さになっている。とても涼しい上に頭の白いリボンと長い黒髪と併せて清楚なエロさを醸し出していてあたしのお気に入りのスタイルの1つ。
浩介くんもそんな肌の露出の多いあたしを見て、いつもいつも最高

潮に盛り上がっていたりもする。
高校の頃からもそうだったけど、浩介くんは責任感が強いから外では性欲を抑えようと頑張っているけど、それでも家の中はもちろん、家の外でも性欲を押さえきれないことが度々ある。
とはいえ、あたしたちもさすがに大学生にもなったから、学校でこういうことをするのはまずいと思い、「家に帰ってから」と言うようにしている。
すると責任感強い浩介くんなので、こうやってすんなりと引き下がってくれるのだ。

実は大学の中なら、スカートめくりか胸やお尻をちょっと触るだけで終わるんだけど――
「じゃあ優子ちゃん、『利子』をつけてもらうからね」
「は、はい……」
浩介くんを家の中まで我慢させた場合、その「利子」として、あたしは浩介くんに服を全部脱がされてから観察されてしまう。
「うっ……浩介くん、恥ずかしい……」
「優子ちゃん、かわいいよ」
浩介くんにゆっくりと1枚1枚、全裸に剥かれるまでゆっくりと焦らされながら服を脱がされるのは、この上なく恥ずかしい思いでいっぱいになる。
「ふふ、優子ちゃんのヘアヌード、俺だけのものだぜ」
全部脱がされた所で、浩介くんがデジタルカメラを取り出して、鼻息を荒くする。
「はーい、優子ちゃん、そうそう足をあげて」
「っ……！　恥ずかしいよお……あなたぁ！」
カシャッ
「そうそう、恥ずかしそうにしてね」
「あーん」
そう、「利子」として浩介くんに、ヌード写真を撮られてしまったり、全身を弄られたりすることになっている。

ちなみにこの写真、流出しないようにインターネット通信機能のない小型の中古ＰＣに保管されている。
もちろん、リベンジポルノに利用されたりする可能性は全く考えていないけれど、見られるだけでも恥ずかしいのに、それを写真にずっと記録されてしまうという恥ずかしさが、今までとは比較にならないくらい高い。
「そうそう、手で隠して……もう少し上目遣いで」
「はい……」
２人きりの空間になると、あたしは途端に嫌と言えない従順な女の子になってしまう。
いや、それは正確な表現ではないかもしれない。
なぜなら、あたし自身も、心の奥底で恥ずかしい思いをして興奮したいという願望があるから。
だからどんどん、浩介くんにのめり込んでしまう。あたし、もう浩介くんなしでは生きていけないわ。
世の中には、旦那さんを尻に敷く奥さんもたくさんいるという。
得てしてそういう家庭はうまくいくらしい。でも、あたしの家はどうだろう？
浩介くんは亭主関白というわけでもない。
……そうだわ。これこそが「昼は淑女、夜は娼婦」何だわ。ここで言う夜と言うのは、単に時間帯だけではなく、２人きりの空間のことも、言うのね。
「ふう、優子ちゃんありがとう。服着ていいよ」
「う、うん」
浩介くんによるヌードグラビア撮影会が終わり、あたしは改めて白いワンピースを着る。
ぶわっ
「きゃあ！」
全部着終わった所で、また浩介くんにスカートをめくられる。
「もー、裸見たのに、何でまためくるの？」
「いやさほら、スカートをめくってその先に見えたパンツの魅力も再

確認したいからさ」
浩介くんが悪びれもせずに言う。
「もー、エッチなんだから！」
今はもう、このやり取りも撮影会の後の、お約束みたいなものだけど。
とは言え、この「利子」も、当分は支払わなくていい。
大学が終わり夏休みになって、「大学でムラムラ」ということも無くなるだろうから。

「さあ！　ついに明日になりました東京オリンピック開会式！　ここで町の声を聞いてみましょう！」
「いよいよ今日が来たなって言う」
「前回のオリンピック、カラーで見ました。今回は４Ｋですか８Ｋ？　とにかくえれえ進歩したものだなあと」
さて、今日は東京五輪の開会式の前日で、今日も含め１週間前から連日連夜東京五輪のニュースばかりをやっている。
まさに、日本中が熱気に包まれているといってもいい。
その報道加熱に紛れて、蓬莱教授が記者会見を仕組むことになっている。
「えっと、ここで臨時ニュースです。本日、佐和山大学の蓬莱伸吾教授が記者会見を開く模様です」
「え!?　この時期にですか!?」
突然の臨時ニュースに、アナウンサーさんも動揺している。
今日はほとんど東京五輪の話題で埋め尽くしていれば視聴率が取れると思っていた所に、蓬莱教授の記者会見のニュースが飛び込んできたからだ。
「蓬莱氏は、万能細胞の発見により、ノーベル生理学・医学賞を受賞、最近ではＴＳ病研究と共に、不老化への実現に向け、研究を積み重ねて参りました。今回の記者会見で何が発表されるのか、注目が急がれます」
テレビ局も、突然のことに完全に不意を突かれたのか、テロップが

「澤山大学」と誤字が表示され、３０秒くらい後に「佐和山大学」と訂正される慌てぶりだった。
マスコミは、もはや完全に蓬莱教授の手玉に取られていた。
協会の方でも、「メディア戦略」という意味で高島さんとも協力しながら様々な策略を労してきたけど、やっぱりカードを持っている蓬莱教授の強さは段違いだった。
「まさか、この時期に発表してくるとは。目眩ましでしょうか？」
「うーんだとすれば五輪期間中ですよね」
スタジオでも、様々な憶測が流れている。オリンピックの開会式の前日ということで、既にサッカーの予選は始まっている。
そういえば、３年前に蓬莱教授が最初に１２０歳の薬を発表した時も、クリスマスだったかしら？
「えー、今会見が始まります」
蓬莱教授の記者会見が始まったことを、アナウンサーさんが伝えていく。
そして、またもや簡単なやり取りと共に生中継が始まることになった。
「ごほんっ、本日記者会見を開いたのは他でもない。ＴＳ病患者の遺伝子に関する話と、それに伴っての新しい蓬莱の薬についてだ」
蓬莱教授が早速またスピーチを開始する。
マスコミ関係者のフラッシュやシャッター音が明らかに少ない上、フラッシュもたかれていない。
更にシャッターを切るタイミングも、一言言い終わってから次の言葉までの間に集中している。
前回の記者会見ではマスコミ関係者も遠慮なく思い思いにシャッターを切り、フラッシュも激しく点滅していたが、今回はとにかく蓬莱教授の起源を損ねないように配慮しているのが分かる。
そう、蓬莱教授はノーベル賞学者でしかも人間社会を根底から覆しかねない薬を開発しているが、立場上は私学の教員でしかない。
だからマスコミも「権力に対抗する」何て言えない。
実際には今の蓬莱教授は既に国家権力以上の力を持っているが、権

力者ではない。
　しかも政府と裏の繋がりがあるわけでもない。ある意味で、最もたちの悪い存在に、今の蓬莱教授はなっていた。もしかしたら、佐和山大学にとどまっているのも、学会の嫌がらせ以外にもこうした理由があったのかもしれない。
　だからこそ、マスコミはどこも萎縮している。海外メディアでさえも、蓬莱教授から薬を融通してもらえないという恐怖心からか、研究開発の経過を報道することがあっても、そのスタンスについての批判は避けられているくらいだ。
「それで、今回俺が発見したのは、第２の不老遺伝子というものです。先日、例の週刊誌が勇み足をした会合でも、不老遺伝子のメカニズムについて解説しましたが、実は不老遺伝子には２つのタイプがありまして――」
　蓬莱教授が、以前あたしたちに話してくれたα型とβ型の話をしている。
　ちなみに、蓬莱教授はα型のことを「即時修復型」、β型のことを「無損傷型」という名前をつけていた。
　最も、長ったらしいので、これまで通りαβと言っているけど。
「――で、ＴＳ病患者と言うのはですね、この２つのタイプ、あるいはまだ未発見の上に本当にあるかも定かではありませんが、第３第４のタイプとを組み合わせて、老化に備えているわけです」
　記者たちも、難しい話を必死にメモしているのか、カメラの作動音はますます少なくなる。
「つまり、α型の患者にもβ型の機能は備わっていますし、β型の患者にもα型の機能が備わっています。ただ、どちらが強いかで出方が変わるわけです。あえて違いを言えば、普段の修復力はβ型に、大きな病気などになったときに治療が早いのがα型です」
　それは、永原先生と比良さんが、当時猛威を振るっていた結核に感染した時のエピソードが有名だと思う。
　でも、蓬莱教授もそのことは話していない。
「ですから、患者本人の日常生活と言う意味では、どちらも本質的に変

わりませんし、本人に生きるモチベーションさえあれば不慮の事故に巻き込まれたり、隕石などで地球そのものが破壊されるといった極端なことがなければ永遠に行き続けることができることには変わりませんので、そのことは強調しておきたいと思います。最も、そうなれば死ぬということを鑑みれば、不老は決して不死ではないことに関しても、重ねて強調しておきたいところですが」

蓬莱教授は、今回の記者会見で起こる誤解について、かなり恐れているのが見てとれる。

最も、不老と不死の違いについては、最近ではあたしたちや蓬莱教授の宣伝部が「不老警察」と揶揄されるほどのしつこい啓蒙活動によって、混同されることは少なくなっている。それでもやはり、警戒は解いていない。

また、蓬莱教授はあたしたちの要望通り、α型とβ型は本質的な違いがないことも強調している。

「つまり、今までの我々の想像以上に、ＴＳ病患者の完全不老遺伝子は堅牢な作りになっていたということです。今までの実験では、３００歳の薬の開発の後、しばし実験が停滞しておりましたが、今回の新しいメカニズムの発見により、５００歳の薬を開発することに成功いたしました」

記者会見での蓬莱教授の口ぶりは、自信にあふれていたが、ほんの少しだけ、不安も見受けられた。

「それでは、記者の皆さんから質問はありますか？」

すると、記者の１人が手をあげた。

周囲からは、やや驚きの声が飛んでくるが、蓬莱教授は顔色１つ変えない。

「ニュースブライト桜の高島です」

マイクの主は、蓬莱教授とも旧知の仲だった高島さんだった。

「差し支えなければですが、今後蓬莱の薬はどのように販売していく予定ですか？」

「あー、それは完全に不老となる薬が出来たときに考えている。確かにこの薬は５００歳の薬、これを飲めば今人類最高齢となっている永

原先生と同じくらいの人生を歩むことができる。だが、そうはいってもこれはまだ不完全なものなんだ。だから売る訳にはいかない」
蓬莱教授は、あくまでも完璧主義的に物事を考えている。
そもそも、今の薬だってノーベル賞と言う枠さえ収まりきらないようなレベルの内容だが、それでも世に出したりはしないし、「完成」したわけでもない。
あくまでも、建前上は「研究の途中経過の報告」でしかないのだ。
まあ、「それでも欲しい」ってのが世間の圧倒的大多数だとは思うけどね。
「分かりました」
蓬莱教授に対する記者会見は、その後は質問も出ずに、自然解散となった。

「という訳なんですが、番組では急遽専門家の方をお呼びいたしまして、今回のテーマについて討論していきたいと思います」
そう言うと、テレビでは専門家の人がスタジオに立っていた。
記者会見は遺伝子の説明がそれなりに長かったとは言え、そこまで時間が経っていない。
本当に素早い対応だわ。神業と言っていいわね。
「まずその、この薬というのは未完成とおっしゃってましたが」
「まあその、蓬莱教授の考え方ですよね。我々からしてみれば、５日間飲んだだけで５００年も生きられるような薬何てとんでもない発明だと思うんですが、蓬莱教授からすれば不十分でしかないんですよね」
「ええ」
蓬莱教授からすれば、かなり年上の名誉教授が解説してくれている。
「でですね、こういった蓬莱教授の完璧主義というのでしょうか、ＴＳ病の方々と同じような不老をみんなで分かち合えるまで、あくまでも途上の報告という体裁を崩していません。ここに、蓬莱教授の実直さが現れていますよね」

週刊誌の事件以来、マスコミの報道やテレビのコメンテーターの発言も蓬莱教授に配慮した内容が増えているが、今日は今までにないくらい露骨だった。

まさに権力におもねるマスコミそのもので、これまでの所業を考えれば醜いことこの上ないものだが、ある意味で、政治力０の権力は何よりも怖いものなのかもしれない。

あたしだって、自分がマスコミの立場だったら、同じことをしたと思う。

それはともかく、これで蓬莱教授の宣伝部も、以前よりは少し枕を高くして眠れるかもしれないわね。

## 五輪観戦

「優子ちゃん、準備できた？」
「うん、できたわよ」
今日は蓬莱教授のつてで皆で東京五輪を見に行く日。
オリンピックは日本選手団が活躍した種目もあったし、一方で期待はずれに終わった種目もある。
日本選手団だけではなく、注目を集めていた外国人選手にも、様々なドラマが生まれていた。
盛大な開会式から、東京の街は短い熱狂に包まれていた。一方で、あたしはこの日が生理痛と重なりそうで冷や冷やしたけど、昨日の時点で既に済ませてしまったので、なんとか行けそうでよかったわ。
もちろんテニス競技も進んでいて、恵美ちゃんはほとんど危なげなく勝ち進んでいる。
恵美ちゃんの報告では、「蓬莱教授の薬を飲んでから、信じられないくらい身体能力が延びている。ドーピング検査も真っ白だし特に学習能力が上がった気がする」とのことだった。
ちなみに、蓬莱の薬は他のドーピング薬の機能を打ち消すものでもないらしい。
それというのも、ＴＳ病患者でも大麻覚醒剤などの麻薬類に手を出すと依存症から抜け出せないとされているし、もっと言えば酒を飲みすぎてアルコール中毒や依存症にはなり得るので過信は禁物だ。あくまでも、自然の病気に強いだけなのかもしれないわね。
まあ、あたしもあのときの安全講習の又聞きだし、今までＴＳ病患者がその手の薬物で逮捕された前例もないから、実際の所どこまで本当かはあたしは分からないけど。
そして今夏の東京オリンピックでも、やはりドーピング検査に引っ掛かって選手村を追放された選手は出てしまった。
繰り上げで金メダルになった選手も「競技の将来を思うと喜べない」というのが偽らざる本音だろう。
もちろん、負の側面は少数だ。現に今、日本の観光客は以前にも増

して劇的に増えている。
８年前に政権が変わって以降、様々な要因が重なり、日本は外国人観光客が、異例とも言える速度で急増していった。
オリンピックでそれがしぼむという意見は、今やほとんど見られなくなっていた。
あたしは荷物を最低限にまとめる。服装も、真夏ということで黄緑色で薄手のミニのワンピースにすることにした。
やはり暑さがきついので熱中症予防をしっかりすることにした。まあ、一番いい席で観戦できるから、そこまで身構える必要はないと思っているけどね。
「よし、じゃあ行こうか」
「うん」
「久々のオリンピックじゃあ！　気合い入れるで！」
今回は、話を聞いた浩介くんのおばあさんが、飛び入りに近い形で参加することになった。
蓬莱教授によれば「何の問題もない」とのこと。
５６年ぶりのオリンピックとあってか、おばあさんもあたしたちに妊娠催促はほぼしてこない。
準備が完了し、あたしたちは５人で駅に進む。
今回は駅を出た所で蓬莱教授と待ち合わせになっている。
電車はいつもよりやや混雑の様相を見せている。
オリンピックと言っても会場は混雑しているというわけではない。
会場のスペースには限りがあるため、テレビ中継で見る人が多い。生で見られるのは、大変な幸運といっていいわね。
まあ、蓬莱教授の力なら、ちょっと脅せばすんなり従いそうだけど。
「うわー、すごーい」
指定された駅を出ると、見えてきたのは極めて大きな新国立競技場だった。
様々な論争があり、揉めた競技場だったけど、いざ実物ができるとその巨大さと雄大さには圧倒されるわね。
「お、優子さんたちも来たか」

あたしたちが感動に囚われていると、1人の男性があたしたちに話しかけてくる。
「あ、蓬莱教授！」
それはあたしたちを招待してくれた蓬莱教授だった。
「あの、この度はご招待いただきまして、誠にありがとうございます」
お義父さんが蓬莱教授に頭を下げる。
「優子久しぶり、ついにこの日が来たわね」
「あ、母さん」
次にあたしに話しかけて来たのは母さんだった。
母さんは、今までよりも元気そうな声で、あたしとの再会を喜んでいた。
多分、オリンピックを観戦できるという喜びもあるかもしれないわね。
「優子さん、久しぶりです」
次に前に出てきたのは幸子さん一家と直哉さんで、何故か最年少の徹さんが代表していた。
「はい久しぶりね。幸子さん、直哉さんとうまくやってる？」
あたしは、浩介くんに嫉妬されないためにも、徹さんのことはほどほどに、幸子さんの方に話題を振る。
「ええ、もちろんよ」
幸子さんがにっこりと笑って言う。幸子さんの服は結婚式の時に来ていた、裾にポケットがたくさんついた、水色のスカートだった。
どうやら、心配はなさそうね。
「ふふ、いつの間にか幸子さんにも彼氏ができてたのね」
今度は桂子ちゃんが、あたしたちの間に入ってくる。
桂子ちゃんもまた、ミスコンの私服審査の時に着ている青い服でおめかししている。
「はい、確かあなたは……」
「優子ちゃんと浩介の高校時代からのクラスメイトで、今は共に佐和山大学の天文サークルに所属している木ノ本桂子よ」
「あ、はい思い出しました。優子さんの結婚式と、1周年記念のパー

ティーにいましたよね？」
　そういえば、あたしが女の子になって1周年の時にも、幸子さんいたわね。
「ええ」
　徹さんは、達也さんを苦々しく見ている。
　本当にがっつくわね。
「今日はよろしくお願い致します」
「よろしくお願いします」
　桂子ちゃんと幸子さんが挨拶し会う。
「すみません、待ちました？」
「ああいや、問題ないよ」
　次に現れたのは、歩美さん一家だった。
「あ、優子さんに幸子さん！」
「あら、歩美さん久しぶり！」
　幸子さんと歩美さんが、再会を果たす。
　２人は同じ師を持つＴＳ病患者と言うことで、今でもチャット上で交流があるけど、こうして直接会う機会はなかなかない。
「あの、妹がお世話になりました」
　しばらく見なかった顔の男性が、あたしに頭を下げてくる。
　そう確か、この人は歩美さんのお兄さんだったわね。
「ええ、こちらからもお礼を言わせてください」
「そ、そんな！　滅相もないですよ！」
　あたしが頭を下げようとすると、今度は歩美さんのお母さんが、慌てて取りなしてくる。
「いえ、歩美さんのお陰で色々助かっているんです。この前の蓬莱教授の記者会見をご覧になりました？」
「ええ、不老遺伝子が２つあるって」
「歩美さんが遺伝子提供に協力してくれたからこそ、出来たのよ。これで、浩介くんがあたしにとって真の生涯の伴侶に近付きました」
「そうですか……って、あの発見は歩美のお陰だったの!?」
　歩美さんのお母さんが案の定驚きの表情になると、歩美さん本人を

除いた家族も、全員が驚愕の顔に染まる。
「ああそうだ。そこの山科歩美さんのお陰だ」
　すると話を聞いていた蓬莱教授がこちらに近付いて追い討ちをかけるように言う。
「えっと蓬莱教授、どうして？」
「今まではどちらもα型に属する優子さんと永原先生の遺伝子しか使っていなかったから、まさか２つのシステムが備わっているとは思いもよらなかったんだ。そこに歩美さんが我が佐和山大学に入学してくれて、歩美さんの遺伝子を調べて分かったことなんだ」
　蓬莱教授が淡々と事実を述べると、歩美さんの家族たちも複雑な表情を見せ始めた。
「ねえ、歩美さん」
「何ですか？」
　歩美さんは、まだ無自覚だと思うので、ここではっきりとしておきたい。
「オリンピックに出るって、すごいことだと思わない？　国を代表して、参加するのよ」
　参加することにこそ、意義があると言われるけど、そもそも参加が難しいのがオリンピックだった。
「ええ、とても素晴らしいと思うわ。日本選手団なんて特に全国から注目を浴びるだろうし」
「それに比べれば、歩美さんもあたしも、知名度はないわよね」
「う、うん……」
　歩美さんは、いまいち真意をつかみ損ねている表情をしている。
「でも、あの時歩美さんがしたことは、このオリンピックで金メダルを取ることよりも、大きなことだったのよ」
「え!?　優子さん、どうして!?」
　歩美さんは、案の定驚いている。
「蓬莱教授の不老研究に貢献することは、スポーツでどんな実績を積み上げるよりも大きなことよ。いい？　あの時の歩美さんの遺伝子提供は、今後の研究に向けて大きなブレイクスルーになったのよ」

「そ、そうよね」
歩美さんも、何だか納得するように頷いている。
蓬莱教授の不老研究は、世間に与える影響が計り知れない。
今はまだ、みんな先送りにしているけど、そろそろ「完全不老の薬」が完成した後の社会についても、本格的に議論していかなければいけない時代になったと思う。
まあそれよりも今は、オリンピックを見たいわね。
「まだ来てないのは……永原先生たちだな」
蓬莱教授がざっと見渡して言う。
もちろん、まだ約束の時間には余裕があるので、何の問題もないけれど。

「あ、私たちが最後ですね」
「すみません、待ちました？」
比良さんと余呉さん、そして永原先生の３人が、最後にあたしたちに合流する。
３人とも、特に永原先生はかなり幼さを強調した服装をしている。
「ああいや、約束の時間を過ぎているわけではないから、気にしなくていいよ」
「ありがとうございます」
蓬莱教授も、ごく普通の応対をする。
「いやー、飲み物食べ物を買っていたんで」
余呉さんの腕からは、ビニール袋がぶら下がっていた。
やはり、この３人の場合は、こういうのは余呉さんがするのかな？
……って、余計な詮索をしてはいけないわね。
「なるほど。じゃあ長居は無用だ。中に入ろうか」
「「はい」」
他の席は分からないが、ＶＩＰ席は飲食も自由になっている。
あたしたちの席は「ボックス」のような作りで２部屋ある。
炎天下でも冷房を効かせながら観戦が可能となっているらしい。
蓬莱教授が先頭となり、競技場の中に入る。

「蓬莱伸吾だ。ＶＩＰ室を２部屋」
「はい、こちらでお連れの人は全てですか？」
「あー」
蓬莱教授がもう一度確認すると、小さく頷く。
「失礼、問題ない」
「分かりました。では担当の者をお呼びいたしますので中でお待ちください」
警備員さんがあたしたちを中に通すと、近くの椅子に腰かけるように促される。
本当に至れり尽くせりだわ。
そして２分もしないうちにＶＩＰ席の担当者が走ってきた。
「お待たせいたしました。ご案内いたします」
担当者さんの後ろに、あたしたちはついていく。
今回２部屋を使うわけだけど、あたしたち篠原家と石山家、そして永原先生たちと蓬莱教授と瀬田さんのグループと、山科家、塩津家、木ノ本家のグループとに別れる。
本来はもっと少人数で使い、定員まで使うのはほぼないらしいんだけど、部屋単位で販売されているので、もちろん問題ない。
「ふっふ、血湧き肉踊るねえ！」
おばあさんが一番気合いが入っている。
部屋の扉が開かれ、所定の数揃えられた椅子が現れる。
ちなみに、この部屋は１２名なので、６×２となっている。
「おー、さすがＶＩＰ室ね」
永原先生が感心しつつ、ふかふかの椅子に座る。
蓬莱教授と瀬田助教が前列の中央２席に、蓬莱教授の左隣にあたしが、あたしの左に浩介くんが、瀬田助教の右隣２席にはあたしの両親が座る。
後ろ側は左からおばあさん、お義母さん、お義父さん、そして余呉さん、永原先生、比良さんとなった。
「いい眺めね」
競技場全体が程よく見渡せるようになっている。

これより前方では、かえって見辛いと思われる配置になっている。
「ああ」
競技の開始までにはまだ時間があるため、選手たちは思い思いにウォーミングアップしていた。
「ふー涼しい」
ＶＩＰ席は、他の観客と鉢合わせにならないように作られている。まあ、芸能人や著名人、あるいは各国の要人が使うことが前提だものね。
蓬莱教授、どれだけお金積んだのかしら？
「さて、もうすぐ競技が始まるぞ」
後ろでは、永原先生たちが、前回のオリンピックについて話していた。
それによれば、やはり新しい国立競技場は当時よりも輝いて見えたと言う。
「皆さん、大変長らくお待たせしております。ただいまより、東京オリンピック――」
アナウンサーの声と共に、オリンピック開始の号令が鳴り響く。
選手たちの競技が、始まろうとしていた。

「それでは、本日の競技はここまでです」
楽しい時間はあっという間だった。
日本人の選手だけではなく、外国人選手の活躍にも期待が集まっていた。
いざ競技が始まれば、あたしたちはそれに釘付けだった。
ちなみに、対面の貴賓席には、有名な男性アイドルグループが座っていて、写し出されたときは、黄色い声がこだましていた。
ちなみに、あたしたちのボックスだけ、写し出されることはなかった。
まあ、あたしたちがわざわざそんなことをするわけにもいかないものね。
「しかしま、競技だけじゃなかったな」

「うん、イベントもすごかったわね」
　各競技の間には、様々なイベントが挟まれていた。
　もちろん、なるべくその競技と関係あるイベントにしようとはしていたけど。
「ま、今日のことは思い出になりそうね」
「篠原さん、また次のオリンピックも楽しみね」
　あたしたちの会話に、永原先生も加わってくる。
「ええ、４年後は確かパリでしたっけ？」
「何を言ってるのよ。次に開かれる日本のオリンピックのことよ」
「え!?」
　永原先生はとんでもないことを言う。
　だって、次のオリンピックっていつになるかわからないし、そもそも前回の東京オリンピックは５６年も前のことで……ああそうか。
「もしかしてあたしたち」
「そうよ、５６年前のオリンピックを見た人の多くは、恐らく既にこの世を去っているわよ。でも違うわ。私や比良さん、そして余呉さんは、もうあたしたちＴＳ病患者しか生きてない最初の近代オリンピックから全てのオリンピックを見てきたわ」
　永原先生が、前回のオリンピックについて話す。
「そうね、みんな競技レベルが高くて驚いたわ。第一回のオリンピックはもちろん、前回の東京オリンピックでさえ、今のオリンピック選手から見たらまるで子供の遊びよ」
　比良さんによれば、それはとても衝撃的だったらしい。
　特にレベルの向上が著しいのが体操だと言う。
　まあ今回は屋外だったので、別の陸上競技だったけどね。
「えっと、蓬莱教授、今日は誘ってくださいましてありがとうございます」
　幸子さんが頭を下げる。
「幸子さんはこれからどうするの？」
「ええ、私たちと直哉で東京を観光します」
　やはり、なかなか東京には来られないものね。

「そう、気を付けてね」
「分かってるって。いざとなったら、俺が幸子ちゃんを守るから」
直哉さんがかっこよく言うと、幸子さんが下にうつむいて耳まで真っ赤にして照れている。
もう、本当にあたしに似てきたわね。
一方で、歩美さんはというと――
「ねえねえ優子さん、あの男性アイドル、かっこよかったね」
「うーん、そうね。でもあたしはあんまり関心なかったかな」
「えー!? どうして!?」
あたしの素っ気ない対応に、歩美さんが驚きの声をあげる。
それに対して、あたしは無言で左手を突き上げて歩美さんに指輪を見せる。
「あ、そうよね。うんうん」
結婚指輪を見た歩美さんがきっぱりと頷く。
「歩美さんには釈迦に説法だと思うけど、男の嫉妬は深いからね。もし恋愛するなら、男性アイドルのことはすっぽり忘れた方がいいわ」
「うん、分かってるわよ」
歩美さんの話し言葉にも、徐々に女の子の言葉が混ざり始めている。
それは、女の子としての生活を続けていけば当然身に付くこと。
だけど、男の子に恋するのは、その後にもなってくる。
「歩美さん、大学の天文サークルで、男子から狙われてるのはわかるよね?」
「うん」
まあ、それが分からなかったら鈍感すぎるもの。
「誰か気になる人とかいる?」
「うーん、何人か」
「うんいい傾向よ。いい? 歩美さんには選択肢がたくさんあるわ。よく考えて、誰と付き合うか決めるのよ」
「うん」
「あら? 部長抜きで部内恋愛の話してるの?」

側で聞いていた桂子ちゃんが、会話に乱入してくる。
「あ、部長」
「歩美ちゃん、男は結構2面性のある人が多いわよ。そういう時はあなたも2面性を持つべきよ」
桂子ちゃんが、歩美ちゃんに近付いてアドバイスしている。
「歩美さん、『昼は淑女、夜は娼婦』って言葉知ってるかしら？」
あたしは、浩介くんに聞こえないように小さな声で話す。
「え、うん。何となく意味は分かるよ」
「いい？　それが男にとっての理想の女の子なのよ。彼氏をつかんで離さない。そんな女性になるのよ」
「は、はい！」
「それじゃあ、私たちはこれで」
「お疲れ様です。永原会長」
永原先生たちはそれぞれの帰り道に、幸子さんたちも東京観光として別行動になる。
途中駅で歩美さん一家が帰宅ルートために分かれ、沿線に入ってまず母さんたちと桂子ちゃん一家、佐和山大学の最寄り駅で蓬莱教授たちが分かれ、ついにあたしたち7人だけが電車に取り残される。
何度も経験した、「人が減っていく」現象だけど、いざ遭遇するとやはり寂しいものがある。
こうしたお祭り騒ぎも、終わりなんだと感じることができる。
「じゃあ、おばあちゃんを送っていくわね」
「ほっほっ、楽しかったわい！」
本当にこの人、９０代なのかしら？　あまりにも元気だわ。
「留守番頼んだぞ」
「はい」
そして家につくと、すぐに義両親が車におばあさんを乗せて発進させる。
あたしたちは、また2人きりで家の中へと入り込んだ。
「ふー、疲れたわ」
「ああ、休みたいわ」

すりすり
「きゃあ！　もうっ、浩介くんのえっち！」
手癖の悪い浩介くんに、一瞬の隙を突かれてスカートの中に手を入れられて、パンツの上からお尻を2往復で撫でられる。
「優子ちゃんのパンツ、お尻の柔らかさと合わさって触り心地最高だよ」
「本当にもう、油断も隙もないわね」
触られているうちが華という言葉通り、あたしは浩介くんに相変わらずセクハラされまくっていた。
世間が東京五輪で盛り上がっていても、あたしたちの生活はいつも通りだった。
翌日、あたしは予定通り生理で気分悪くなっちゃったけど。毎月襲い掛かってくるとは言え、慣れてしまうのも難しいのが怖いわね。

## 懐かしい顔

「――えー今、閉会式が終了いたしました」

テレビでは、オリンピックの閉会式を中継していて、それがたった今終わったことを示していた。ちなみに、パリのオリンピックも、準備が着々と進んでいるみたいでよかったわ。

日本選手団の活躍は、もちろん目立ったけど、特に恵美ちゃんの金メダルには、日本中が大きく盛り上がった。

恵美ちゃんは、決勝戦で世界ランキング1位の選手と対戦し、第一セットを惜しくも落とすが、続く2セットを奪取し、見事逆転優勝したのだ。

当の恵美ちゃんはと言えば、「全米オープンに向けて頑張るぜ」とだけ言っていて、淡々とした様子だったけど、それでも世界1位にも勝ててしまうというのはとんでもないことだと思う。

一方で蓬莱教授は、「今回のオリンピックでいいデータがたくさんとれた」とも言っていた。

やはり恵美ちゃんが被験者に加わったのは大きいことだったらしい。

一方で、オリンピックの直前に話した蓬莱教授の記者会見は、目論見通りマスコミに忘れ去られていき、一部のインターネットで議論が続くだけになった。その議論も、蓬莱教授の宣伝部のおかげか、優勢な情勢で続いている。

ただ、蓬莱教授の残した爪痕がある。

それは芸能人や政治家などの不倫報道がピタッと止んだことだった。

蓬莱教授と永原先生の疑惑は、「不倫」ではなくあくまでも「熱愛」という疑惑だったが、どちらにしても蓬莱教授の小型カメラという手法によって週刊誌の記者が嵌められたため、従来の「ターゲット」たちもこぞって同じ手段を使うようになった。

一時期は、秋葉原の小型カメラの店が「景気いい」とまで言ってた程だ、よっぽどなのだろう。

そのために、週刊誌や夕刊紙は今、経営に苦しんでいるという。一社だけ、「最初からみんな嘘と分かっている」とか「そこの報道にマジになるのは大人げない」とか言われている夕刊のスポーツ誌だけは、相変わらず好調らしい。
まあそこは、敵を作る報道をするのではなく、「無害な嘘」しかつかないせいだけど。

「ふー、浩介くん、愛してるわ」
「俺も」
オリンピックが終わった夏休みのある夜、あたしは寝込みを浩介くんに襲われた。
今はお互い裸でベッドの布団の中に入り込んでキスをしている。
この事は夏休みとしていつもの日常の一コマなんだけど、今日はいつも以上にあたしが声を出していた。
「ねえあなた、またお義母さんたちに聞かれちゃったかしら？」
「だろうなあ、あれでも押さえている方なんだろ？」
浩介くんが少し笑いながら言う。
「う、うん……」
ついつい我慢できなくなってしまうというのが、正確なところ。
「じゃあ、今度ラブホテル行こうぜ。新婚旅行の時以来じゃん？」
「え!? う、うん……」
ラブホテルはそういう場所だから、声を我慢する必要もない。
あたしは思う存分に、快楽の叫び声をあげることができる。
あたしとしても、家の中ばかりではなく
「あ、そうそう優子ちゃん協会の方は大丈夫？」
浩介くんが、話題を変えてくる。
「うん、新しい患者さんはみんな順調よ。後、1人積極型の子が新しく普通会員になったわ」
「ＴＳ病かあ……ねえ優子ちゃん」
「うん？」
「俺さあ、最近夢に出てきたんだよ。あの時女の子になったのが優一

じゃなくて俺でさ、女の子になった俺が優一のままの優子ちゃんと結婚して、それで優一に毎晩のように犯されて、でも子供たちに囲まれて幸せな家庭を築くっていう」
確かに、あたしみたいなＴＳ病と結婚したら、そういうのを一度は考えてしまうと思うけど。
「へー、でも、それは嫌かな」
「あー、そうだろうなあ。優子ちゃん、本当に今が一番幸せって感じだもの」
「やっぱりそう見えるかしら？」
「ああ、この幸せを掴もうぜ」
「うん」
あたしはこれからも、浩介くんと共に生きる。
オリンピックが終わり、日本は喪失感に包まれているかと言えばそうではない。
むしろ、オリンピックの後に行われるパラリンピックの終了後も、観光客は減らないと予想されているのだ。
そして何より、蓬莱教授の研究が、少子化問題に対して一種の答えになりかけてもいた。

夏休みが明け、大学は後期に入った。あたしたちは、再び日常へと戻っていく。
大学の勉強をし始め、時折蓬莱教授に遺伝子を提供し、あるいは協会の定期会合を続けていった。
協会の活動に関しては、今はあたしがここに入ってから一番暇な時期になっていた。
夏休み中に、浩介くんとラブホテルに行った。その時は、とにかくいつも以上に大きな声が出たのを覚えていて、浩介くんも「やっぱあれでも抑えていたんだな」って言われてしまった。
それよりも凄まじかったのは、ラブホテルから出てきたあたしたちが、たまたま高月くんに見られていたこと。
そのせいで、後日浩介くんがすごい詰問を受けていたらしい。

また9月には、北関東の茨城県で新しい患者さんが現れたというニュースが流れたけど、協会が暇ということもあってかあたしではなく水戸藩士の比良さんが同郷ということでカウンセラーを申し出てくれた。
一方でブライト桜の高島さんは、あたしたちとは対照的に、多忙を極めていた。
というのも、高島さんの戦略が成功し、今や既存のメディアを完全に脅かしていた。
インターネットの急伸企業と手を組んで、テレビ局を買収するという案まで出たくらいで、しかしこれは過去の失敗の歴史から中止となった。
一方で、今期からあたしは一般教養の単位をすべて取得し、今回から専門基礎科目と専門科目に専念することが出来た。
相変わらず厳しいのが実験の単位で、あたしも浩介くんも幸いレポートは再提出にはなっていないが、他の学生の中には苦戦する人も多く出始めている。
実験は3年次にも前期後期で用意されていて、しかもその名前は「応用実験」だというのだから一生懸命頑張らないと。
「ねえ優子ちゃん、これでも受ける単位減らしてるはずだよな」
浩介くんも、精神的な疲労が溜まり始めている。
「うん、1科目1科目が大変になってるわね」
まあ、学年が上がれば難易度も上がるのが普通だもの。でも、それも高校までと比べるとかなり急激な感じはするのも事実だ。
とはいえ、本格的な再生医療を学んで、蓬莱教授にもっと貢献したいわ。
そのためには蓬莱教授の研究室に入って、大学院で成果を上げるためにも、こんな場所でへこたれるわけにもいかないけどね。
「さ、サークルに行くか」
浩介くんが軽い口調で話す。
「うん」
今日は桂子ちゃんが、天体観測の成果を見せてくれるという。

コンコン
「はーいどうぞー！」
あたしが扉をノックし、中に入る。
「あ、２人とも、お疲れ様」
桂子ちゃんが顔をこちらに向けて挨拶してくれる。
「おう、木ノ本、写真はどうなってる？」
「うん、見て見て」
桂子ちゃんは、既に机に写真を広げていて、他の天文部の面々が閲覧していた。
「うおー、すげえ」
さて、そんな中に、懐かしい顔を見かけた。
「あれ!?　もしかして、坂田部長!?」
「あら、えっと……篠原さんお久しぶりですわ」
そこに立っていたのはあたしたちの１年先輩で、「坂田舞子さかたまいこ」元部長、彼女はあたしたち天文部の元部長で会うのは結婚式の時以来のことになる。
坂田元部長はあたしが天文部に入った時の小谷学園天文部部長で、とても温厚で物腰の柔らかい人だった。
あたしが来る前の天文部は坂田元部長と桂子ちゃんだけで、そこにあたしが加わり、浩介くんが入ってきて、今の達也さんたちが入ってくる時には卒業していたので接点はない。今の天文部部長から見れば、３代前のＯＧということになるわね。
あの頃は、天文部が小さかった頃で、その頃の部長さんという意味で、坂田元部長はとても懐かしい存在だわ。
「ええ、それよりもどうしてここに？」
「ええ、木ノ本さんが大学でも天文サークルを開いたということで、去年は私わたくしの事情もありましたが……遅ばせながら、お祝いに参りましたわ」
坂田元部長は律儀な人で、天文に関する知識が桂子ちゃんの方が上ということで、先輩ながらも桂子ちゃんのことを尊敬していた人だった。

今は佐和山大学とは別の大学に通っている。
「あの、坂田先輩が現役の頃の天文部って、どんな感じだったんですか!?」
達也さんががっついてくる。結婚式の時に聞きそびれたのね。
「私が1年生だった頃は、それはそれは部員がたくさんいたわ。でもその年の新入部員が私だけで、その次の年も木ノ本さんだけでしたから、木ノ本さんの卒業で天文部は閉まる予定でしたわ」
「じゃあ、桂子ちゃんが、当時の石山先輩を呼んで!?」
達也さんが、わざわざ「当時の」をつけて結婚したあたしに配慮してくれる。
「ええ、そこから篠原さんがいらっしゃって、木ノ本さんが部長になってから、また部員が増え始めたんですわね」
もちろん、坂田元部長も、自身の卒業後の動静については知っている。
「ああ、実はあの時は俺も含めて桂子ちゃん目当てで入った部員が殆どだったんだ」
達也さんがばつの悪そうな顔で言う。
今は信じられないけど、当初はそんな感じだったわね。
「いいんですのよ。きっかけが何であれ、天文部の再興に貢献したのは事実ですわ。それに、あなたは今こうして木ノ本さんと天体観測までなされているんですもの」
「あ、ありがとうございます!」
あたしは、それぞれの会話もそこそこに、天体観測の写真を見る。
それはどれも美しくて、星々が美しく輝いていた。これを選別するのは、去年よりも骨が折れるわね。
「うー、やっぱり木ノ本はすげえよなあ」
浩介くんが唸るように言う。
「うん」
桂子ちゃんはとにかく天文のことなら何でも知っていると言う感じだった。
それだけではない、達也さんやあたしたちを始め、天文の知識がな

かった人にも、その魅力を伝え、引き込んでいく能力もあった。
下心丸出しだった当時1年生の男子部員たちも、今では天文部の最上級生として、多くの新入部員を抱えて頑張っているらしい。
まあ、今でも歩美さんは、他の男子部員たちからは狙われているけどね。
「さあ、写真鑑賞もいいけど、今日はこの中で文化祭展示する写真を決めるから、みんな気を引きしめてね」
「「はーい」」
そして、今日の天文部は、坂田元部長も加わって、これらの写真を篩にかける作業になった。
ちなみに、坂田元部長も坂田元部長で、今の大学の天文サークルで副部長を勤めているらしい。
天文知識はあちらのサークルでも並みだけど、人柄のよさが買われたとか。
「それで、篠原さん結婚生活はどうですか？」
「ええ、順調よ」
あたしも、久々に坂田元部長と長話を楽しむ。
あたしと桂子ちゃんと3人、あるいはそれに浩介くんも加えた4人でいた頃は、懐かしくもあり静かだった。
クリスマスには屋上で天体観測もしたわね。
今の賑やかな天文部も悪くないけど、去年の天文部も含めて、静かなのが好きなのも、また事実だったりする。

「では皆様、ごきげんよう」
坂田元部長はそう言って、あたしたちと名残惜しく分かれた。
あたしたちも、時間が時間なので、それぞれ帰宅の徒につく。
あたしと浩介くんは駅までの道を歩きながら、空の星々に思いを馳せていった。
ちなみに、帰り道はさすがに浩介くんも自重してくれるので、胸やお尻を触られたり、スカートをめくられたりしたりはしなかった。
「ただいまー」

「お帰りなさい2人とも。ご飯できてるわよ」
「うん、分かったわ」
あたしたちは、お義母さんに迎えられ、いつもの日々に入っていった。
家での生活はゆっくり休むことが出来る。もちろんあたしは休日には、家事を手伝わなきゃいけないけどね。
今はそう、文化祭に向けて、また天文サークルの出し物を準備しなければならない。
幸いにして、今年はミスコンの勧誘はなかった。
あたしは審査員としての参加もなくなり、完全にフリーになった。
ただし前回優勝者として、桂子ちゃんが審査員長へと回ることが決定している。桂子ちゃん、去年のあたしと同じ役目になるのね。

「あー、優子さんに浩介さん。呼び出して悪かった、早速定期的な報告をしよう」
ある日、あたしたちは放課後に蓬莱教授に呼び出された。
もっともこれは、いつもの定期的な情報交換で、あたしが蓬莱教授と協会の橋渡しを勤めるのは、協会の正会員として、広報部長として、重要な仕事の一環ということになっている。
「まず今年の文化祭だが、今年は去年以上に積極的に前に出ていきたいと思う」
蓬莱教授は、去年の文化祭では不老研究の実現に向けていつもよりも少しプロパガンダを強めていたが、今年も新入生向けにそれをする準備があると言う。
研究所に届くメールや手紙、電話は、圧倒的に激励や応援のものが多いが、反対派による嫌がらせのものも多数含まれている。
しかも嫌がらせは、最近急にかつ不自然に増え始めたものだと言う。
蓬莱教授の推測では、例の「明日の会」の牧師が、ほとぼりが覚めてまた活動を始めたのではないかとのことだった。
「……本当に、往生際が悪いわね」

「ああ、俺もそう思う。素直に下らない神とやらを崇め続けていればいいものを」
蓬莱教授が吐き捨てるように言う。
明日の会は、あたしたちの活動のみならず、明日の会側の失策や、担当した患者の難易度の高さもあって、被害最小限で無力化することも出来た。
もちろん、あたしたち協会と提携している全国の病院も、明日の会のことはおくびにも出さない。ホームページも放置され、ネットの海に消えるのも時間の問題だ。
その御蔭で最近では、存在さえ忘れていたという患者さんも現れてきたところだったのに。
「やっぱり、ほとぼりが覚めたからかしら？」
「だろうなあ、ただＴＳ病患者にはもう手を出さないだろう。さすがに連中もバカじゃない。今更明日の会や、あるいは他の団体を立ち上げてのＴＳ病支援活動を再会させようとはしていないだろうさ」
「つまり、蓬莱さんの研究への反対を唱えるつもりですか？」
「ああ、そうだろうさ」
蓬莱教授が、当然という顔で言う。
「おそらく、これらの嫌がらせの手紙なども、奴が糸を引いているものもいくつかあるはずだ。ただ連中は、おそらく不老実験への反対活動を始める準備をしている頃だろう」
もちろん、やろうと思えばそれらの活動を報道しないようにテレビメディアに圧力をかけることも、蓬莱の薬をちらつかせれば可能ではある。
「問題はインターネットだ。反対派に圧力をかけても雨後のタケノコだし、逆に圧力をかければかえって怪しまれる危険性がある」
蓬莱教授の研究は、今のところ寄付金で全て賄いきれている。
予算も潤沢なので、その方面の心配はいらない。
「問題なのは、研究反対派に対して、どうやって論戦を戦っていくかだ。そのためには、やはり優子さんの存在が必要不可欠になってくる」

「ええ、ＡＯ入試の時に聞きました」
あの話のことは、今でも覚えている。
蓬莱教授が天才であることを、見せつけられたエピソードでもあるもの。
「おう、それなら話は早い。高島さんにも連絡して、例の牧師に不穏な動きがあれば、報告するように伝えておく」
「はい」
「そしたら、俺たちも反撃開始だ。浩介さん、あなたの存在も、重要になってくるぞ」
「……分かりました」
蓬莱教授が気合いを入れるように言う。
あたしたちも、久しぶりに忙しくなりそうね。

## 2度目のさわわ祭り、ダンスサークルの賭け

「ついたわね」
今日は文化祭の日であたしにとっては2回目の文化祭になる。
あたしは純白のワンピース姿で文化祭へと望むことにした。
とにかく、道行く人たちのあたしの、主に胸への視線はもちろん、浩介くんに対する殺意の視線もすさまじかった。
「浩介くん、今日はいつも通りの服だけど、やっぱりなんだかかっこいいわね」
天文サークルはあたしたちが一番乗りだったので、あたしたちは早速のろけることにした。
「いやー優子ちゃんもその服似合ってるよ」
「ふふ、ありがとう。この白いワンピース、お気に入りなのよ」
やっぱりかわいいって言ってもらえるのは嬉しいわ。
「ああ、今でも覚えてるぜ。高2の文化祭の後、俺が優子ちゃんの彼女になって始めてのデートの時に着ていた服だろ？」
「う、うん、よく覚えてるわね」
まあ、あたしだってちゃんと覚えているけど。
「忘れるものか、優子ちゃん、家に帰ってからあんなにエロくなって」
「ふふ、今のあなたならあの時どうしてた？」
あたしがちょっとだけ、小悪魔チックな口調で言う。
「そ、そんなの即ヤるに決まってるだろ!?」
浩介くんが顔を真っ赤にしながら大きな声になる。
そうよね、浩介くんらしいわ。
「そうよね。ふふ、えっちな浩介くんで安心したわ」
「ところでさ、優子ちゃんの清楚な格好って、やっぱり夜を知り尽くした俺にとっては格別なのよね」
「うっ」
鼻高々な口調になった浩介くんに、あたしも動揺してしまう。
「何せこんなかわいい顔して、穢れなんてものとは全く無縁にしか見えない純白の服を着た優子ちゃんが、夜のベッドの上ではかわいく

えっちな言葉を大声で乱発しながら両親の部屋まで聞こえる大きな声で――」
「もうっ！　浩介くんやめて！　誰か来たらどうするの!?」
暴走してきた浩介くんに対して、あたしが咎めるように言う。
「おっと、ごめんごめん」
本当にもう、興奮しちゃうじゃないの。
ガチャッ
扉が開かれる音がする。もう、危なかったわ。
「あら優子ちゃんに浩介、早いじゃない」
「お、木ノ本に中庄、おはよう」
ドアに近かった浩介くんが挨拶をしてくれる。
「あ、優子さんおはようございます」
「歩美さんもおはよう」
あたしたちの次に入ってきたのは桂子ちゃん達也さん、それに歩美さんだった。
３人とも、文化祭ということでいつもより服装に気を使っている。
「えっと、他の部員たちは？」
「まだ来てないわね」
あたしがざっと一面を見渡しながら言う。
もちろん高校までの教室と同じように、この中はそうそう隠れることはできない。
「そう。まあ、この時間じゃ早すぎるくらいだものね。さ、パソコン開くわよ」
桂子ちゃんの指示のもと、パソコンを開く。
文化祭という空間のためか、あたしもまずはＪＡＸＡのホームページにアクセスすることにした。
宇宙開発もまた、蓬莱教授の研究と同様、大きな期待を持たれている。
「うーん……」
あたしは、彼らを味方に引き込めないかと考え始めた。
それは、宇宙と天文が好きだった桂子ちゃんが不老を望んだよう

に、宇宙のスケールにとって人間の寿命は余りにも短すぎる。
だからＪＡＸＡの人ならば、もし不老の薬が完成すれば、歓迎してくれるかもしれない。
それはもちろん、他の国の宇宙開発期間、例えばＮＡＳＡにも影響を与えると思う。その起爆剤として、ＪＡＸＡと協力することが出来ないかな？
「どうしたの優子ちゃん、ＪＡＸＡが何か難しいこと言っているのか？」
隣に座っていた浩介くんが不思議そうな顔であたしを見つめてくる。
「あーうん、その……この人たちを、蓬莱教授の味方にできないかなって考えていたのよ」
「え!?」
あたしの提案は突拍子もなかったのか、浩介くんが驚いた声をあげる。
コンコン
「はーい」
「失礼します」
しかしそれも、間が抜けた扉のノック音と、部員の入ってくる声にかき消されてしまった。
「……ええっと、それで、優子ちゃんは何でＪＡＸＡが蓬莱教授の味方にできるって考えたんだ？」
浩介くんが気を取り直してあたしに聞いてくる。
「えっとね、桂子ちゃんが蓬莱の薬を飲んだ理由、思い出してみてよ？」
「えっと……何だっけ？」
ありゃりゃ。
「浩介忘れたの？　ほら、宇宙のスケールに人間の寿命は短すぎるっていう話よ」
見かねた桂子ちゃんが自分から話しかけてくれた。
「あ、なるほど、そういうことか！」

浩介くんが納得した評定をする。
「ええ、ＪＡＸＡの人にだって、桂子ちゃんと同じ思いを抱えて、密かに蓬莱の薬の完成を待ちわびている人は多いはずだわ。そしてそれは、日本のＪＡＸＡに限らないはずよ」
「ああ間違いなくそうだろうな！」
浩介くんが、確信を持った声で言う。
この事は、蓬莱教授にも話しておかねばならないわね。
味方が増えることは、いいことだもの。
ともあれ、これであたしたちの方針は決まったわね。

「みんな揃っているわね、じゃあ、今日の天文サークルの見張り当番だけど各自確認してね」
その後、部員が全員到着したところで桂子ちゃんが挨拶する。
「「はい」」
とりあえず、去年と同様、この部屋には誰か1人いれば大丈夫ということになっている。
担当は部長の桂子ちゃんが一番長く、あたしと浩介くんは人数的な余裕もあって見張りの時間帯には充てられなかった。
つまりあたしたちは閉会まで自由時間ということになる。
ピンポンパンポーン
「文化祭実行委員です、ただいまより２０２０年度、さわわ祭を開催いたします！」
ほどなくして、実行委員さんのアナウンスが聞こえ、一気に外の騒ぎが大きくなった。
「ねえ浩介くん、どこから行く？」
「そうだな、まずはお隣さんからで」
「分かったわ」
あたしたちは桂子ちゃんに挨拶し、そしてまずは隣に構えているサークルに入った。
そしてここにいるのは――
「いらっしゃいませ！　ダンスサークルへようこそ！」

去年と同じように、近くにはダンスサークルがいてサークルメンバーは相変わらず2人だった。
「こんにちは」
驚くべきはその服装で、ノースリーブでへそ出し、下はあたしが浩介くんを性的に誘惑する時に着るあの超ミニスカート並みに短いプリーツスカートで、その短さは直立不動でもスパッツが見えているくらいのものだった。
去年も比較的露出度の高い服を着ていたけど、今年は去年以上に扇情的になっている。
というか、スパッツがなかったらあたしが浩介くんに誘惑する服と同じくらいの露出度よね。あ、でもこの2人は胸が小さいから違うかな？
「えっと、1年ぶりだな」
「ええ、また来てくださってありがとうございます」
浩介くんの発言に、ダンスサークルの人もペコリと頭を下げる。
その礼儀正しさと服装のギャップが凄まじいわね。
「そんなことよりどうしたの？　去年と服が変わってるわね」
「はい、やっぱりこういうので釣らないとあっちの方ばかり注目されてしまいますから」
ダンスサークルの人が丁寧に応対してくれる。
「何か本末転倒な気もするわね」
そんな露出度高い服で踊ったら、どう取り繕っても性的アピールにしかならないわよね？
「ああいえ、見ての通りスパッツ穿いてますから大丈夫です」
「はい、安心安全です」
ダンスサークルの2人はニッコリしながら答えている。
うーん、やっぱり生粋の女の子はそう考えちゃうわよね。
それが間違いだということの感覚が分かるのは、ＴＳ病の女の子じゃないと難しいのかもしれない。
「うーん、まあ本人がそう言うならそれを尊重しよう。とりあえず、今年のダンス……といっても去年のもうろ覚えだけど、よろしく頼む

よ」
浩介くんも困惑しつつ、そのように言ってくる。
あたしも、あまり追求しないようにするわ。建前上大丈夫ってことになっているんだし。
「はいっ！」
ダンスサークルの２人が元気よく言葉を発すると、早速ダンスが始まる。
「それっ！」
見て分かるのは、明らかに去年よりもくるりと回転する場面が多いこと。
スカートが場合によっては水平以上にめくれあがって、スパッツが完全に見えることさえもある。
「はいっ！」
また、足を高らかに上げてハイキックする場面も、去年はなかったのに今年は複数取り上げられている。
男の子の立場から言えば、中身そのものよりも、スカートがなびくことそのものに魅力を感じる人も多い。そういう人から見れば、かなりの目の毒なのが見てとれる。
確かに影が薄く２人しかいないために性的アピールをしないと注目されないとはいえ、それはヤリサーと化した昔のサークルとの棲み分けを、困難にする恐れのある諸刃の剣でもあると思うのよね。
「それっ、ワンツー、ワンツー!!!」
「えいっ！」
そして、しばらくするとダンスも終わる。
浩介くんが、ダンスに釘付けになっている気がする。
そりゃあこの部屋で動いている人はダンスしかしてない
「ありがとうございました！」
「ありがとうございました！」
パチパチパチ
２人が同時に頭を下げ、あたしたちは拍手をする。
「じゃあ、あなた、次に行きましょう」

「え!?　せっかくだからもう少し話してもいいじゃないか」
　あたしは、つい浩介くんに対する独占欲から、この場からすぐに立ち去ろうとしてしまう。
「え、あ、うん」
　浩介くんが、今更この貧乳の2人になびくはずがないと分かっていても、ついついメスの本能と、男の浮気癖の知識のせいで、浩介くんを独占したくなってしまう。
　また「挟み込み」しないとダメかな？
「どうして今年はこんなダンスにしたんだ？　これだとリスクもあるんじゃないか？」
「はい、ですが去年のように地味なだけでは部員は集まらないんです。もちろん、ヤリサーには絶対にさせませんけど、でもこういう時くらいは、アピールしないといけないんです。そうしなければ、座して死を待つだけなのです」
　サークルの人の決意は、あたしたちが思っている以上に苦渋の決断だった。
　去年は全く、人気が出なかった。そのために、今年は賭けに出ざるを得なかった。
　仮により悪い結果になったとしても、現状のままでは自然消滅してしまうと言う危機感が、彼女たちを突き動かしたんだと思う。
「そう……あたし、ダンスは専門外ですけど、とにかく頑張ってください」
「はい、ありがとうございます」
　あたしが応援の言葉を発すると、ダンスサークルの人も笑顔で応対してくれる。
　その心は本当に純粋で、あたしは何て心が醜い女なんだろうと自己嫌悪してしまうほどだった。
　女の子になりきっても、まだまだ「優子」になるには道が遠いと、改めて思い知らされた。
「さ、浩介くん、今度こそ行くわよ」
「あ、ああ」

あたしは一通り話し終わったら立ち上がって腕を少し引っ張る。
「ありがとうございました」
「また来てください」
ダンスサークルの人に見送られて、浩介くんと一緒に次の場所を探す。
しかし、浩介くんの様子がおかしい。
「浩介くん、そっちは違うよ！」
浩介くんが、階段を上っていく。
この階より上層は空き教室が開かれているだけで、サークルなどによる展示もない。
つまり、上に上がっても何もないわけだけど。
「まあまあ、優子ちゃんついてきてよ」
階段から、浩介くんが振り向いてあたしを誘ってくる。
「むー、またなにか良からぬことを企んでるような」
「ちっ、バレたか」
浩介くんが悪びれもせずふざけた様子で答える。
どうやら、またえっちなことをしたいみたいね。
「もー、今回はあたしもちょっとだけ嫉妬しちゃったから、ついていってもいいわよ」
まあ、今回はあたしもされたい気持ちが大きいから、了承しちゃうけどね。
「よっしゃー！」
あたしの言葉を聞いて、浩介くんがたちまち上機嫌になる。
ああ、あたし、浩介くんに独占されちゃってるわ。うん、あたしも浩介くんを独占したいわ。当たり前よね。夫婦だもん。
「いよっしゃ！　誰もいない教室みっけ！」
ガララララ！
「優子ちゃんも入ってよ！」
「うん」
浩介くんが扉を明け、中に入るとそこは講義で使う教室で、今は何

もなく、太陽の光だけが薄暗く入り込む空間だった。
浩介くんは扉をゆっくりと閉めて廊下側からは見えないような位置に移動する。
「ねえ優子ちゃん、さっきのダンスサークル、すごかったね」
「うん」
もしかして？
「でさ、優子ちゃんのその水色のワンピース、それでちょっとダンスして欲しいんだよ」
浩介くんの要求は予想降通りだった。
「もーあたしスパッツ穿いてないわよ」
それに、あたしの運動神経じゃ大したこと出来ないし。
「当たり前じゃん、ほら、思いっきりくるっと回ってみてよ」
つまり遠心力でスカートがめくれて、パンツ見える様子を観察したいというのが浩介くんの狙いね。
「もー、恥ずかしいよお！」
あたしはちょっとだけ拒絶する。
「大丈夫だって。パンツ見るのは俺だけだから。まあ、スパッツ穿いてたら俺が脱がしちゃうけどね」
浩介くんがスケベな顔を丸出しにして言う。
「もー、浩介くんだから、愛する旦那だから見られるの恥ずかしいのよ！」
あたしは、顔が赤くなるのを必死でこらえながら浩介くんに訴える。
「それでも、愛する旦那の頼みなら断れねえのが優子ちゃんだよね」
「もう、分かったわよ……浩介くん、恥ずかしいけど……見ててね」
浩介くんの変態的力説とそれに対するあたしの反論の末、いつものようにあたしは最後には折れてしまう。
こうなるのはいつものことなのに、これをした後だとより興奮することがわかっているからついこんなやりとりをしてしまう。
これもまた、様式美のようなものね。
「んっ……えいっ！」

あたしは無言で、足を捻らすと、勢いをつけて一気に一回転する。
スカートが遠心力で捲れ上がって、パンツが外気に触れるのを感じ、あたしは顔が一気に熱くなる。
「おー！　水玉模様がかわいいね！」
「あうぅ……恥ずかしいよぉ……」
浩介くんにパンツの色を実況され、あたしは目を細めて顔をうつむかせてしまう。
「くあー！　恥ずかしがってる優子ちゃんかわいい――！」
「うー！」
浩介くんは大喜びではしゃいでいて、それがますますあたしの恥じらいを煽ってくる。
「そーれ！」
ガバッ！
あたしは、浩介くんに頭をスカートの中に潜り込まれてしまう。
「きゃあ！　ちょ、ちょっと浩介くん!!!」
「うーん、水玉パンツかわいい！」
浩介くんの頭がスカートの中に入り込み、至近距離から凝視されてしまう。
「あーん、もう許してー！」
恥ずかしさに耐えきれなくなったあたしが、浩介くんに白旗をあげる。
「もう、しょうがないなあ」
浩介くんが頭を元に戻してくれる。
あたしの全身は、もうぐっしょりと汗をかき始めていた。
「ふう、優子ちゃん、さっきの嫉妬治った？」
やっぱり、浩介くんに見抜かれていたわね。
「う、うん。治ったわ」
浩介くんにセクハラされる度に、あたしはますます浩介くんにのめり込んでしまう。
あたしは一瞬、ここでするのもドキドキ感がありそうと思ったけど、ばれるリスクを考えて即座に首を横に振った。

「どうしたの優子ちゃん」
首を勝手に振ったあたしを見て、浩介くんがちょっと怪訝そうに言う。
ちなみに、浩介くんは下の方を大きくしている。それを見てあたしは満足感が急速に満たされていくのを感じる。
「ううん、何でもないわ。あなたがあたしだけを見てくれてるって思うと、ちょっと嬉しかったわ」
「そうか」
「じゃあ、続きを見ようか」
あたしは、教室から出てもう一度文化祭を回ろうとする。
ぺろーん
「きゃあ！　もー！　浩介くん本当に見境無いわね！」
浩介くんに後ろからスカートをゆっくりめくられてしまう。
やっぱりいつものように、あたしは2人きりではセクハラされる運命にあるらしいわね。

## 蓬莱教授と浦島太郎

「お、演劇サークルか。今年も大ホールでだっけ？」
あたしたちは、自分達が入っている建物に張ってあったポスターを見て、演劇サークルが目に入る。
「うん、去年は確か……死神だっけ？」
「あー、優子ちゃんとは対照的な話だよなあ。余命幾ばくもないって」
どうやら浩介くんも、同じ感想を抱いたらしい。
あの話は、周囲では評判が良かったけど、あたしたちにとってはあまり感情移入できなかったのを覚えている。
「うん」
一方で、今年は違う。
何と浦島太郎をアレンジした作品で、その名も「佐和山大学演劇サークル　浦島太郎アレンジ」だと言う。
「浦島太郎のアレンジってどう言うことなの？」
ただの浦島太郎じゃないってことは分かるけど。
「確か、亀を助けて竜宮城に行ったら、外の世界では何百年も経って、箱を開けたらおじいさんになってしまったってやつだっけ？」
「あーうん、そんな感じよね」
浩介くんが解説してくれたように、浦島太郎と言えば、子供にも有名なおとぎ話の一つに数えられる。
他にも有名な「桃太郎」や「花咲かじいさん」などと違って、どちらかと言えば「かぐや姫」などのように主人公側は比較的救いようの無い話に分類されるわね。
「浩介くん、とりあえず今年も行ってみる？」
「うむ、そうしよう」
あたしたちは、演劇サークルのある地下ホールへと一目散に下っていった。

まだ早い時間帯、地下のホールは最初の演劇とあって、既に多くの人で賑わっていた。

「去年はオリジナルだったけど、今年は浦島太郎のアレンジか」
「アレンジってところがくせ者だよなあ。どう出るんだろう？」
「うーん、竜宮城の辺りとかが変わってくるのかな？」
「だろうなあ」

周囲の学生たちも、この「アレンジ」というのが気になる様子だった。
もちろん、「ただの浦島太郎じゃないならどこが変わるの？」という問いになるのは当然といえば当然よね。
「皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、『佐和山大学の浦島太郎』を開始します」
そのアナウンスがなされると、お客さんの拍手と共に、上映が始まった。
演劇のセットは、暗くてよく分からない。
「昔々、今からちょうど５０年前、時は高度経済成長期の１９７０年のことでした」
何もない画面に、いきなりナレーション的な天の声から入る。
そして徐々に、証明が明るくなる。
「ある日、ある海辺に浦島太郎と言う心優しい若者と、幼馴染みの咲太郎という２人の男がいた」
いきなり登場人物が２人に増えている。
しかも物語の年代も、確かに昔ではあるけれども、昔々というにはちょっと語弊がある昭和の時代という設定になっている。
まあ、アレンジというから、いきなり脱線するのは掴みとしてはいいと思うわ。
「さてそこに、１匹の亀をいじめる意地悪な小学生の集団がいました」
「えいっ」
「おら！」
「ほら、殻に閉じこもってみろよ！」

「ぎゃはははは！」
そして、亀をいじめる集団が写し出される。
ちなみに、亀は作り物だし、ナレーションでは小学生の集団と言うけど、服装も含めて明らかに大学生の集団なのがシュールだわ。
「咲太郎、俺止めてくるよ。君は先に帰ってて」
「ああ」
浦島太郎がそう言うと、少年たちに近付く。
咲太郎は別の方向に行ってしまいそのまま画面外へ。
「おい、お前ら！」
「げっ」
小学生の集団は、体格が殆ど変わらない大学生を見てビビっている。
まあ、しょうがないのかなこの辺は。
「弱いものをいじめるんじゃない！」
「うっ、やべえ!!!　おい、逃げるぞ!!!」
やはり年齢的にも、小学生とあって、浦島太郎が助けるとすぐに逃げていく。
「助けてくださいまして、ありがとうございます」
天の声と同じマイクから、今度は女性の声がする。
どうやらこの亀はメスらしい。
「うおっ、って待て待て、亀がしゃべるわけがない。空耳だな」
まあ江戸以前の人ならともかく、昭和の人ならそういう反応するよね。
「空耳ではありませんよ」
ぷー！
「わっ！」
作り物の亀は風船上になっているのか、いきなり大きくなった。
それに、浦島太郎も驚いている。
「私は、竜宮城の亀であります。もしよろしければ、あなたを竜宮城へとご招待いたします」
「は、はあ……」

浦島太郎役の人、よく聞くと去年運命運命連呼してた死神の上司役の人よね？
ともあれ、現代に浦島太郎という名前の人がいるわけだから、この世界では昔話としての浦島太郎はオミット……つまり存在しないことになっているわね。
「さあ、私の背中に乗ってください。竜宮城へとご招待いたします。大丈夫です息はできます」
浦島太郎役の人は、言われるがままに背中に乗り、そして背景が海岸から海中へと変わる。
普通なら変な詐欺だと思いそうだけど、亀が喋っている時点でまあ、こうなっちゃうわよね。
「うわあ！　海の中ってこうなっているんだ」
「海の中の生物を見て、浦島太郎はとても感心しています。鮫や鯨も、近づいたり襲ったりしてきません」
アナウンサーの天の声と背景の作り物の魚が、いかにも文化祭の学芸会という感じを醸し出している。
「あそこが竜宮城です！」
背景の人が、真っ黒な衣装を着て、今度は竜宮城を舞台に出していく。
裏方は大変よね。
「うわあ！　海底にあんな城があるんだ！」
「そして、亀が近付くと、ドアが自動で開かれました」
天の声と共に、場面が大きく変わる。
お姫様役の人が来た訳だな。
「あなたが、この亀を助けてくださいましたの？」
「はい、浦島太郎です」
大層美しいとか、美人という表現が使われていて、実際化粧からも、そんな雰囲気が見てとれる。
もちろん、そんな美人のお姫様でも、あたしには負けるけどね。
「よくぞいらっしゃいました浦島太郎様、心行くまで、竜宮城をご堪能ください」

そして場面が変わる。
大量の女性が同じ服を着て、躍りを披露している。
さらに浦島太郎が豪華な食事を頬張って満足するシーンが続く。
「ねえ浦島さまあ……私と気持ちいいことしません？」
お姫様役の人が、服をほんの少しだけはだけさせる。
「ああいやその、さっき前の人にこってりと絞られちゃって……」
て、そうよね。竜宮城で女性たちの接待といったら、当然こういうサービスも含まれるわけで。
いくら大学の文化祭とはいえ、ちょっとやり過ぎな気もするけど。
……まあいいわ。
「そんなこんなで、竜宮城で3ヶ月が過ぎた。浦島太郎は咲太郎や家族のことを思い出し、『そろそろ帰って地上に残した人と連絡を取りたい』と言い出した。すると乙姫は箱を取り出したのである」
そうか、ここで未来になっちゃうのよね。
「浦島太郎様、こちらが竜宮城の玉手箱でございます。外の世界でもし、別れが辛い時にお開けください」
「はい」
あれ？　確かここは、「絶対に開けちゃいけない」だったわよね。なのに「お開け下さい」って？
……ああそうか、「アレンジ」だものね。
「分かりました」
「では、帰りも私の背中に乗ってください」
乙姫が再び大きな亀になり、背景もさっきの海と同じものが流れる。
「こうして、浦島太郎は身も心もそして性欲も満たされ、竜宮城を後にして元の海岸に戻ってきた」
「んー！　あれ？　何だここは!?　こんな建物なかったぞ！　それに車のデザインも全然違う！」
風景が様変わりしていることに、浦島太郎が驚く。
未来の風景は、現代風になっている。
「浦島太郎は、自分の家に帰ろうとするが、そこは別の家の表札が立っ

ていた」
「どうなってんだ！　ここは浦島家だろう!?」
　そうね、時が経ってるものね。
「隣は、咲太郎の家だ……」
　ガチャッ
　すると、その隣の家からは鍵が開く音がする。
　そしてそこに現れたのは――
「あっ！」
　あたしは思わず、声に出してしまいそうになる。
　何故なら、そこには歩美さんが立っていたからだ。
「あれ？　あなた……そ、そんなはず無いわ。もう６０年も前のことなのに！」
　つまり、この浦島太郎は今から１０年後の２０３０年にタイムスリップしちゃったわけね。
「な、なあ、変なこと聞くけど、この家に『咲太郎』って人はいるか？」
　浦島太郎がその名前を出すと、歩美さんがいかにもな感じで驚いた表情を作る。
「え!?　あなた、どうして私の昔の名前を知っているんですか!?」
「信じてもらえないかもしれないけれど、俺、１９７０年に、海岸で亀を――」
　ああやっぱりこういうオチなのね。
「ああ、太郎！　浦島なのね！」
「な、何であなたが俺の名前を――」
「それはこっちが聞きたいわ。どうして６０年も行方不明になってたのよ！　それに今も変わらない姿で！」
　歩美さんの演技は、やはり急造なのか演劇サークルの人と比べるとちょっとぎこちない。
　それにしても、予想していたとは言え、家族にも会えずにおじいさんになっちゃうよりはずっとマシよね。
「それが、その亀を助けて、竜宮城に行ったら……でもお前こそどうして女の子に!?」

「私、あの後ＴＳ病っていう不老の女の子になっちゃう病気になったのよ。あなたのことを、ずっと待っててて、いつのまにか女性になって、ああ、素敵！　とにかく入って！」
「おわっ！」
浦島太郎は腕を引っ張られ、家の中に案内される。
背景が、現代風の家の中になる。
「そこには、６０年の技術の成果が現れていました」
アナウンスと共に、家電の進歩に驚く浦島太郎が映し出される。
食器洗い機や巨大なテレビなど、あの時代からは考えられないものね。下手すれば、原作の数百年よりも、大きな変化かもしれないわ。
「ねえ、咲太郎」
「咲子、今の私は咲子よ」
歩美さんがムッとしたように今の名前を言う。
「ああ、咲子。お前その……かわいくなったな。竜宮城のお姫様よりずっとかわいいぜ！」
そりゃまあ、歩美さんはＴＳ病らしく美少女だし。
「うん、ありがとう。私もね、女の子になって、あなたのこと、あなたの帰りをずっと待っていたわ。もう、別れたくないわ！」
ベタベタなストーリーにベタベタな告白、ここはもう、完全に原作にはないアレンジシーンね。
「俺も……だけどお前、不老なんだろ!?」
「うん、だからいつか、別れちゃうわね」
「そんな！　せっかく再会できたのに！」
歩美さんが演じる咲子と、浦島太郎が悲しそうな演技をする。
まさに上げて落とすの典型例ね。
「外の世界でもし、別れが辛い時にお空けください」
すると、海底にある竜宮城のお姫様が天の声として出てくる。何かシュールよね。
「そうだ！　この玉手箱！」
「え？　この箱は？」
歩美さんが不思議そうな顔をする。

「竜宮城のお姫様から、別れが辛い時に開けろって」
「うん、開けてみよう」
パカッ
無駄に大きな効果音と共に箱が開けられる。
当然、「開けてはならない」というわけではないので、煙が出ておじいさんにはならない。
そして中からは、５本のペットボトルと水が出てきた。
「ねえ見て、置き書きがあるわ！」
「浦島太郎様、この薬は飲んだものを不老とする薬です。この薬を５日間、１日１本飲めば、あなたは老けることなく何百年何千年、あるいはそれ以上と生きられるでしょう。そうすれば、あなたはきっと生涯の伴侶といつまでも共にいられるはずです。でもこれだけは気を付けて。この薬は不老の薬だけど不死の薬じゃないわ。もし不注意で事故に巻き込まれたら、あなたは死にます。それだけには、特に注意してください」
お姫様の声で、手紙が読み込まれる。
要するに、この薬は蓬莱の薬ということで。なるほど、ここで佐和山を絡めてきたわね。
「これ、きっと蓬莱の薬よ」
歩美さんがそう叫ぶ。
「え!?」
もちろん何も知らない浦島太郎は驚く。
「佐和山大学の蓬莱教授が作った飲んだものを不老にする薬だわ！
ねえ太郎、お願いだからこれを飲んで！　そして、私と結婚して欲しいの！」
いきなり結婚って……
「お、おい。咲子落ち着け！」
「嫌よ！　もう６０年も、女の子になって６０年も、あなたの帰りを待ち続けたのよ」
歩美さんの演技にも、熱がこもる。
「わ、分かったって！」

そう言うと、浦島太郎がペットボトルを開けて、水を飲む。
「こうして、竜宮城が手に入れた我らが蓬莱教授の作りし蓬莱の薬により、２人は永遠にとわに結ばれたのでした。めでたしめでたし」
何か最後が強引な気がするけど、まあ、ハッピーエンドってことでいいのかな？
それよりも、歩美さんが何でここにいるのかが疑問だけど。
パチパチパチパチ!!!
そして、演劇が終わると、一斉に拍手が鳴り響く。
そして観客たちもそれぞれが次の目標へと向かっていく。

「いやー、やっぱり佐和山大学の浦島太郎はこうでなきゃな！」
「うん、いいハッピーエンドだった。それにしても、あの子は何なんだ!? あんなかわいい子、演劇サークルにいたっけ？」
「見てみろよ、天文部からのヘルプで、山科歩美ちゃんって言うらしいよ」
「へえ、本当だ。天文部って優子ちゃんと桂子ちゃんもいるんだろ？」
「くそー、何であの部活だけ美人が集まってるんだ!?」

観客の男子たちは、今回の演劇に満足げな様子だった。
「浩介くん、行こうか」
「ああ、それにしても驚いたな。まさかあいつ、演劇サークルの助っ人になってたなんて」
浩介くんもやっぱり、歩美さんの助っ人は驚いたらしい。
「うん、でもＴＳ病と蓬莱教授、確かに最後いきなりプロポーズは強引だけど、上手くプロパガンダにしたわね」
「ああ、せっかく長く待っていた想い人と再会できても、ＴＳ病不老になった故の別離がある。だから蓬莱の薬はそれを避けてくれる。俺もいい塩海だったと思うぜ」
浩介くんも、上手く浦島太郎をアレンジしつつも、蓬莱の薬の必要性を説く今回の演劇を高く評価しているみたいね。
「さ、次はどこに行くか？」

「またサークルを見て回りましょう」
「おう、そうするか」
あたしたちは、もう一度、去年と同じ場所をめぐることにした。
途中、「蓬莱の研究棟」を通るわけだけど――
「さあいらっしゃい！　蓬莱教授の研究棟だよ！　蓬莱教授の業績を、文化祭を機にもう一度振り返ってみよう！」
蓬莱教授の銅像の前で、瀬田助教が客引きをしていた。
「瀬田助教、どうしたんですか？　今年は偉い気合い入ってますね」
「あ、篠原さん。よくいらっしゃいました。実はですね、今年から蓬莱の研究棟では、文化祭でもっと自らを発信しようと言うことになりまして」
瀬田助教がこっちに振り返る。
「え!?　じゃあもしかして浩介くん、演劇サークルのこと――」
「ごめんごめん、実はあれ、俺も脚本書いたんだよ」
浩介くんが申し訳なさそうに言う。
「え!?　じゃあ歩美さんのことは？」
「あーうんそこまでは知らなかったよ。俺はあくまで蓬莱教授の宣伝部の代表として、脚本とストーリーの一部を手掛けただけだから」
浩介くんはどうもちょっとした参加だけだったらしい。
「浦島太郎は未来に行った果てに玉手箱を開けてしまっておじいさんになっちゃう話だけど、こっちの方ではうまくＴＳ病を絡めて、蓬莱教授の研究を宣伝しようということになったんです」
瀬田助教が補足してくれる。
それにしても、大学の演劇サークルまで利用するって恐ろしいわ。
「そうですか」
「言っておくが、これは俺の圧力でそうしたんじゃない、演劇サークルが俺たちに企画を持ち込んできたんだ」
あたしたちが話していると、横からいつもの声がしてきた。
「あ、蓬莱教授！　お疲れ様です！」
やはり、蓬莱教授だった。
「ああ、瀬田君にも苦労をかけたな。演劇部のことをよくまとめてく

れた、感謝する」
「はいっ！」
　瀬田助教はやはり蓬莱教授のことをかなり慕っているらしい。
「それにしても、おじいさんになってしまうのが、蓬莱の薬を渡されてＴＳ病になった恋人と結ばれるとは、思い切りましたね」
「ああいや、実はそこにもちょっとだけオリジナルの部分を取り入れてるんだ。実はオリジナルでは、浦島太郎はおじいさんになった後、鶴になって竜宮城にいた亀と結ばれるってことになってるのさ」
　蓬莱教授が浦島太郎に関して、本当の話を話す。
「もしかして『鶴は千年亀は万年』って？」
「ああ、これが由来だ。もし完成した蓬莱の薬を飲めば１０００年後には４桁の年齢を迎えるものも増えるだろうな」
　うん、そうよね。
「さ、よく来た。俺の研究棟を今日は大幅に開放している。是非とも、見ていってくれ」
「浩介くん、見てみる？」
「ああ」
　おそらく、中はかなりのプロパガンダが繰り広げられているのね。

# 蓬莱教授の栄誉

蓬莱の研究棟の中にはかなりの数の学生がいて、プロパガンダエリアには人だかりができていた。
そこは去年よりも、明らかに盛り上がっていた。

「なあ、演劇部の浦島太郎見たか？」
「ああ、すげえ話だよな」
「うんうん、でもＴＳ病ならあり得るんだろ？」
「だよなあ」
「やっぱり、蓬莱教授の薬は必要なんだな」
「うむ、事故の危険性さえ減っていけば、それだけ寿命も長くなるんだ。社会保障費だってぐんと少なくて済む」

蓬莱教授のプロパガンダエリアには、寿命５００歳の薬の成功と、ＴＳ病の不老のメカニズムが載っていた。
「『２つの不老のメカニズム』かあ」
浩介くんが、展示の前で小さくつぶやく。
「こんなに断定しちゃっていいのかしら？」
実際、第３第４の機能があるという仮設は否定できてないし。
「まあ、こういうのは勢いが大事だし、な」
蓬莱教授がそう言ってくれる。
１階のプロパガンダエリアも、そろそろスペースの余裕も減ってきた。
それはつまり、蓬莱教授の業績が増えたということ。
「今俺は、プロパガンダエリアを、もう少し拡張するべきかな？　と思ってる。そこで今は１階にあるこの俺の部屋を移動する計画があるんだ。そしたら、『不老社会がいかに過少評価されているか』ということを示したい」
どうやら、蓬莱教授はプロパガンダの充実には余念がないらしい。
蓬莱教授の恐ろしい所は、これらを狂気や自己陶酔で行っているわ

けではなく、むしろ自分の崇拝者を見て承認欲求が満たされるどころか、むしろ見下すくらいの態度を取っている。
しかし、そうした崇拝者が増えることは、支持者を固める上でコアになる部分だし、自らの研究に対して常に迫害の可能性を想定する上で重要になってくる。
そこで、蓬莱教授はプロパガンダに騙される層に内心は呆れつつも、利用しない手はないと考えた。
しかもそういうのは時と共に得てして狂気に染まりそうなものなのに、蓬莱教授からはそう言う感じが全くしない。
……本当に、恐ろしい人だわ。
「ええ、それはいいと思います」
「うむ、そう言ってもらえると助かる」
あたしたちは、去年と同様に、プロパガンダエリアを見て回り、蓬莱教授に挨拶して研究所を去ろうとする。
「ああ待て待て、せっかくだ。今年は2階も開放しているんだ。優子さん、見ていかないか？」
「え!?」
蓬莱教授に、止められた。
「今年はどうも、研究に身が入らねえんだ。優子さんたちに2階を見て欲しい」
研究棟2階は講義室や会議室が主で、いわば蓬莱教授や瀬田助教の講義がある時に、使われることが多い場所でもある。
何とそこには、一番手前の教室に豪華な飾り付けがなされていた。
「えっと、一体？」
「今年は俺のプロパガンダエリアの一環として、ここの1室を開放しているんだ。まあ入ってくれ」
蓬莱教授が中にあたしたちを入れてくれる。
中にいる学生はまばらで、どうやら2階も開放していても、階段を登るのに抵抗感があるのかもしれない。
講義室の中央の部分に、とても大きなガラスの横に長い長方形の直方体の箱が目に入る。

よく怪盗対策として覆われている強化ガラスみたいな感じのものを、かなり大きくした形になっている。
そしてその中には、有り余るようなメダルと賞状がこれでもかというほどに大量に掲げられていた。
「蓬莱さん、これってもしかして？」
「ああ、今まで俺がもらった賞の記念メダルだよ。ほら、これを見てみろ」
蓬莱教授が、それらのコレクションの中でも中心の特に一際目立つ部分に吊るされていたメダルを指差す。
「こ、これって!?」
あたしがそのメダルに回ってみると、そこには金色のメダルで横顔の老人が掘られていた。
左側には「ＡＬＦＲＮＯＢＥＬ」、おそらく「アルフレッド・ノーベル」という文字が刻まれている。
そして右側には「ＮＡＴ．ＭＤＣＣＣＸＸＸⅢ」と言う文字と、「ＯＢ．ＭＤＣＣＣＸＣⅥ」という文字が刻まれている。
「蓬莱教授、右側の文字は何ていうんですか？」
「ああ。１８３３年に生まれ、１８９６年に死んだという意味だ。ノーベル賞の元になった発明家、アルフレッド・ノーベルの生没年だよ」
ということは、これはローマ数字ということね。
Ｍが１０００でＤが５００でＣが１００でＸＣが１００―１０で９０でＸが１０でⅥは５＋１で６という意味ね。
「じゃあ永原先生は？」
「ＮＡＴ．ＭＤＸⅧだな。そして生きている年数はＤⅡだな」
「そうなるわね」
１５１８年に生まれ、５０２年生きている。
凄まじいことだわ。
「後ろに回ってみ？」
「あ、はい」
蓬莱教授に言われるがまま、あたしたちはメダルの後ろ側に回る。

そこには1組の男女と思われる絵画が掘られていた。
女は男に首を倒して寄りかかっているが、男は座っていながらも女の方を見ておらず、右手にお椀のようなものを持っている。
えっと、外縁部に書かれている文字は……
「ＩＮＶＥＮＴＡＳ・ＶＩＴＡＭ・ＩＵＶＡＴ・ＥＸＣＯＬＵＩＳＳＥ・ＰＥＲ・ＡＲＴＥＳ」
あたしは、よく分からないローマ字を英語風に読んでごまかす。
『見出された技術を通じ、人々の生活を高めたことが喜びとなる』と言う意味だ。まさしく、この俺にピッタリの言葉だろう？」
蓬莱教授が、自慢げな顔つきで言う。でも、そこに狂気は感じられず、確かな自信だけが見て取れる。
このメダルはそう、蓬莱教授が確かにノーベル賞を受け取ったという証拠でもある。
「この絵はか弱い病気の少女のために岩から流れる水を汲む医者を表しているんだ。時代的にも有り得んが……その水がもし蓬莱の薬だったら、俺はそう思わずにはいられないものだ」
「ええ」
蓬莱教授は、名誉欲に関しては人並みだと思う。
でも、これだけ賞を総なめにしておきながら、ノーベル賞以外の賞をおくびにも出さなかった。
それだけ、このメダルが、偉大だということを示しているということよね。
この展示だって、ノーベル賞の他の賞は、「おまけ」みたいな扱いなんだと思うし。
「ノーベル賞、平和賞や文学賞はともかく科学3部門のノーベル賞というのは、言うまでもなく誰もが認める偉大な賞だ。だが、これだけで俺は満足していない、このメダルを取った研究は、ただの余興だったことは話しただろう？」
「ええ」
「そこでだ、俺は思うんだ。蓬莱の薬がもし出来たら、この世界一権威のあるノーベル賞でさえ、役者不足になってしまうだろう。そうなっ

た時、世界は俺に何を贈ると思う？　ノーベル賞を超えた何かということになる……どうなると思う？」
蓬莱教授は、知的探究心を持って聞いてくる。
ノーベル賞は最高の賞、でも蓬莱教授の研究はそれさえ生ぬるい。それも確かなことだと思う。
じゃあ不老の技術が人類に生き割った時の蓬莱教授にふさわしい賞は何か？
あたしには全く分からない。
「……見当もつきません」
「だろうなあ。無理もない。俺も教えてほしいくらいだ。もし蓬莱の薬が完成したら、ノーベル賞では済まないことくらい分かってる。だがこの俺でも、『その先』にあるものが分からんのだ。この医者が、少女に蓬莱の薬を飲ませ、自らも飲み不老足り得たら……医者はどうなってしまうのかと」
「あ！」
蓬莱教授のその発言に、あたしははっと気付く。
「俺も、一応博士医学だ。今の日本の医学倫理は、とにかく寿命を先延ばしすることに心血が注がれている。つまり死を最も恐れるのが医者であり、医学者なんだ。そして不老というのは、その究極の終着点と言っていいだろう」
「ええ、ＡＯ入試の時に聞きました」
浩介くんがここで言葉を発する。
そう、だからこそ蓬莱教授の研究について日本のいかなる医学界も反対することは出来ない。
「だがその先は、医者たちはどうなるのだ？　産婦人科医やあるいは不慮の事故での怪我人を治す外科医などは問題ないだろう。俺の学友にも、医師免許を持って医者としてやっているものは多くいる。俺は時々このメダルを見て思うんだ。蓬莱の薬を浸透させるためには、彼らの生活のことも考えねばならないのだ」
蓬莱教授は、何か深刻そうな顔をしている。
いくら不老になっても、生活がおぼつかなくなれば、そうした企業

からの文句は来るはずだ。
「それだけじゃないな、葬儀屋さんとか、どうするんだろうか？」
浩介くんが懸念を述べる。そうだ、人間が不慮の事故事件か自殺に巻き込まれるでもない限り死なないなんてことになれば、そうした仕事も急速な縮小を余儀なくされる。
「そうだ、だがそうした連中の利権のために、一部の裕福な人間だけ不老化するなんてのは以ての外だ。それじゃこの薬を開発した意味ない……ただ……ついてきてくれるか？」
「う、うん」
蓬莱教授が、更にもう２つ奥の部屋にあたしたちを案内する。
そこには誰も居なかったし、何の展示もなかった。蓬莱教授とあたしたちだけ。
どうやら蓬莱教授は、あたしたち向けに、秘密の会話をしたいらしい。
しかし、中に入ると蓬莱教授はあたしたちに背を向けて、何か機械を取り出し、教室中をくまなく捜索し始めた。
「あの、蓬莱教授、何をしてるんですか？」
「隠しカメラや盗聴器がないかどうか、確認をしているんだ。これからの会話は外部に漏らす訳にはいかないからな」
「そ、そうですか」
本当に、用心深い人だわ。
まあ、決して油断しないのが、蓬莱教授の最大の強みでもあるとは思うけどね。
「さ、どうやら問題ないみたいだし本題に入ろうか」
全てチェックし終わった蓬莱教授が、あたしたちの方に向き直る。
「そろそろ、俺の薬も５００歳まで来た。ＴＳ病の遺伝子も解明しつつあるから、俺の存命中に、おそらくは蓬莱の薬は完成するだろう」
「ええ」
もちろん、とんでもない困難に直面してしまう可能性は無きにしもあらずだけどね。それでも薬を飲んだことを考えると数百年の猶予がある。

「ごほん……問題は完成した後だ。君たちにとっては、浩介さんが不老化してめでたしめでたしだろうが、現実問題それだけで立ち去るは行かない」
「分かってます」
そう、人類が不老化ともなれば、様々な影響が出てくる。
職業によっては、壊滅的な被害を被ることにもなるだろうし、あるいは別の職業にとっては、爆発的な需要の増加を記録するかもしれない。
それは間違いなく社会に影響をもたらす。
「ただ、その対策をどうするか？　どうやって緩和するかまでは、まだ未定なんだ」
「そうですか……」
「おそらく、来年には政治的な問題にもなってくる。そこで、だ。大学生活が忙しくなるだろうに誠に恐縮だが……もし政府や政治家との交渉になったら、優子さんと浩介さんにも、来て欲しい」
「ええ」
「分かりました」
蓬莱教授の要望は単純だった。
つまり、今後は政治家への融通と根回しも必要になってくるため、あたしたちに広告棟になって欲しいということだった。
「ただこれだけは守って欲しい。優子さん、枕営業だけはやめてくれな。リスクが高すぎる」
「わ、分かってますって!!」
そもそも、あたし浩介くん以外に色目なんか使いたくないわ。
「ああいや、優子さんなら心配いらないとは思うが、こういうのは言っておかないとまずいからな」
「おう、優子ちゃんに迫るやつが居たら、俺がぶちのめしてやる」
浩介くんが、頼もしい口調で力強く言う。
ああもう、本当に素敵すぎるわあたしの旦那は。
「うむ、その心意気だ。さ、文化祭はまだ続くだろう存分に楽しんできてくれ」

「「はい」」
　こうして、あたしたちは蓬莱教授から開放されて、研究棟を後にした。
「あ、浩介さん、優子さん」
「はい」
　外に出ようとすると、再び瀬田助教に声をかけられた。
　蓬莱教授の影響からか、あたしたちは他の教授陣にも名前で呼ばれることが多くなった。
　まあ、「篠原」と呼ぶ度にあたしたち２人が同時に振り返ってたらそうなるわよね。
　１人だけ、旧姓を使用して欲しいって言う先生が居たけど、あたしが「愛する旦那と別姓なんて絶対に嫌だ」と断固拒否したのでその先生も名前呼びになった。
「蓬莱教授から、話は伺いました？」
「……ええ。将来のこと、ですよね？」
　あたしは、周囲に悟られないように、なおかつ相手に意味が伝わる表現を慎重に選びながら会話する。
「はい、そのことについては、来年度……どうかよろしくお願いいたします」
「分かりました」
　瀬田助教もお願いするような物言いだった。
「それで、向こうの都合にもよりますが、近く高島さんがまたこちらにいらっしゃいますので、予定を開けておいて下さい」
「……分かりました」
　あたしたちは、本格的に蓬莱教授の広告塔の役割をすることになる。
　もちろん、一昨年夏のＡＯ入試の時から分かっていたこととは言え、やはりいざ本当にするとなると緊張するわ。
　あたしたちが、段々とこの世界を本格的に強く動かし始めていると言う自覚が芽生えてくる。
「引き止めてすみません」

「いえ、浩介くん、行こう」
「ああ、失礼します」
あたしたちは、瀬田助教に一礼をして、サークルたちの展示を見て回る。
文化祭は蓬莱教授のプロパガンダが強まった以外は概ね去年通りだった。
そして、桂子ちゃんが審査員を務め、龍香ちゃんや和邇先輩がいるミスコンの様子も見て回った。
文化祭の終わりに、歩美さんに問いただした。
歩美さんは「隠すつもりはなかったけど、でも言わなきゃいけない理由もなくて結果的に黙ってちゃった」と申し訳なさそうに言っていた。
とはいえ、この大学でＴＳ病なのはあたしと歩美さんだけで（まあ普通１人いるだけでも極めて稀だけどね）、ああいう役回りになる以上旦那の嫉妬を警戒して歩美さんに白羽の矢が立つのは当然だとは思うけどね。

「あの、みんな聞いてくれる!?」
歩美さんが、文化祭の終わり、全員が揃った所で、大きな声を出した。
「どうしたの？　歩美さん」
「その、私……あの……」
歩美さんが、明らかにぎこちなさそうにしている。
「その、大智君！」
「え!?」
「大智君」と呼ばれた男の子が目を丸くして、振り返る。
周囲もざわついている。歩美さんは普段、基本的に天文サークルの男子は名字呼びだったから。
「私……その……私、ね……」
「ううっ……」
大智さんの顔が、真っ赤に染まっていく。

歩美さんが言いたいことが、伝わってくる。
そう、歩美さんも、ついにここまで来たのね。
「大智君のこと、好き！　彼氏に、彼氏になって下さい!!!」
歩美さんが、思い切って大きな声で、愛の告白をする。
「……はいっ！」
「うおおおおおお!!!」
パチパチパチパチ!!!
「くそおおおおおお!!!　嫌だあああああ!!!」
また一人、ＴＳ病の子が女の子への道を進み始めた。
歩美さんは、文化祭前まで、大智さんと共同で作業することが多かった。もしかしたら、好きになっていたのかもしれない。
祝福するあたしたちと、呪詛の言葉をかける他の天文部の男子、そして、照れくさそうに真っ赤にしている２人の姿が、いつまでもいつまでも忘れられなかった。
歩美さんによれば、例の演劇で「演技とは言え、好きでもない人に告白するのがあんなに辛いなんて思わなかった。自分の気持ちに素直になって、演技じゃない告白をしたかった」のが、大きなきっかけだったという。
本当、人生何が起こるかわからないわね。
帰り道、あたしはずっと考え込んでいた。
社会はよく、歯車に例えられる。
社会人１人１人の歯車はとても小さくて、だけど地位が上がったりすれば影響力も上がって大きな歯車になる。
例えば、会社の社長や国会議員なんて言うのは、大きな歯車だろう。
歯車は１つかけても周囲で修正が効く、もちろん大きければ大きいほど影響力も甚大になる。
そして、この歯車は子供や老人も当然含まれている。
あたしは本当にちっぽけな、ちっぽけな歯車でしかなかった。あってもなくても変わらない、いやむしろ、優一の頃は周囲を乱すだけの欠陥歯車だった。
だけど、あたしが女の子にされてから、あたしの歯車は、いつの間

にか政治家や会社の社長並みに、あるいはそれ以上に大きくなっていた。
最初はそう、あたしは女の子になっても、とびきりにかわいくて美人で胸が大きいことを除けば、ただの高校生だった。
だけど、乱暴だった自分を変えたいという思いで、女の子らしくなろうとしたその姿が、まず永原先生に影響を与えて、協会のあり方を変えて、他のＴＳ病患者たちにも大きな影響を与えた。
そして、あたしにも出来た恋人、今の旦那との死別について考えていたら、蓬莱教授という巨大な巨大な歯車があたしたちを導いてくれた。
協会と蓬莱教授を批判する歯車や、あるいは他のＴＳ病にされた歯車を修理するうちに、あたしの歯車は大きくなる一方だった。
幸子さんという歯車が死にそうになっていた。あたしは幸子さんの命を助け、命の恩人にまでなった。
高島さんの取材を受けて、高校生ながら全国にその顔が知られ、そして歩美さんを助けた時にも、大学生になってからは広報部長になり、「明日の会」を主催した牧師を失墜させるために暗躍して、更に将来防衛のために、フェミニズムに壊滅的な打撃まで与えてしまった。
あたしはもう、支えられるだけの歯車ではない。積極的に周囲を支える歯車になっていた。
そして今回、政治的な根回しにも、まだ２０歳そこそこのあたしと浩介くんが回されることになった。
もしかしたら、今のあたしの歯車はもう、取り除いたら重大な機能不全になるのかもしれない。
もう後戻りはできない。一度ＴＳ病になった女の子が男に戻れないように、あたしももう、小さな歯車に戻ることは、出来ないのかもしれない。
そう考えると、あたしは少しだけ気分が重くなりながら、文化祭の会場を後にした。

## 永原先生の野望

１２月、あたしたちは高島さんの取材を受けることになった。

それまでの会合でも、高島さんはあまり顔を出さなかった。

もちろん、永原先生を通して取材の申し込みがあって、あたしも広報部長として記事を閲覧させてもらっている。

蓬莱教授は、「ノーベル賞を受賞した経験もある大学教授」という立場上、取材拒否や恣意的な取材の制限も難しい。

しかし、あたしたちの方は表向き完全私人の団体なので今でも取材条件は以前と変わっていない。

協会に関する情報は、引き続き「ブライト桜」を経由するしかないわけだけど、それについては嬉しい誤算もあった。

というのも、蓬莱教授が永原先生と手を組んで週刊誌を嵌めた際に、協会側が永原先生を無断で撮影したことを問題視し、いわば「無断取材」と見なすことにしたのである。

そして、協会としては「今後同じようなことが起きれば、蓬莱教授と掛け合って当該メディアの関係者や子孫に薬を融通しないことも考える」という声明を出した。

これにより、ブライト桜以外のメディアは、ＴＳ病という存在そのものがタブーになってしまった。

もちろん、異を唱えればその会社ごと蓬莱の薬が出禁になりかねないともなれば、あえて声を上げるジャーナリストは皆無だった。

永原先生によれば、「本人にだけ懲罰を与えるのではいくらでも無鉄砲者が現れる。だから江戸時代でも五人組を作ったし、豊臣右府の子は８歳でも死刑になったのよ。私たちには向かわせないためには本人の処罰だけではダメだわ。北の国があそこまで存続できたのもそのためよ」と言っていた。

本当に、恐ろしい人だわ。でも、それが本当に通ってしまうのがもっと恐ろしいわ。

あたしたちは、完全に権力者になってしまったことを思い知らされる。

ある意味で、政府が口を出せば「権力者の言論弾圧」と言えることからも、マスコミをコントロールする能力では、もはや政府以上の権力者といえるかもしれないわね。
「浩介くん、行こうか」
「ああ」
準備ができたあたしは、浩介くんを呼び出して早速協会の本部へと向かう。
「あ、篠原さんいらっしゃい」
「本日はよろしくお願い致します」
協会の本部にいつものように入ると、永原先生と高島さんが既に到着していた。
高島さんは、最初に会った時よりも少しだけ痩せていた。
「えっと、後は蓬莱教授ですね」
「ええ」
後は蓬莱教授が来れば、この場に役者は全員揃う。
今回は極秘事項ということで、他には誰もいない。比良さんと余呉さんや他の正会員さんたちにはいてもいいんだけど、彼女たちもあたしたちを憚ったのかみんな「病気」と称してこの場に居なかった。
「篠原さん、今後のことについてだけど、いいかしら?」
永原先生から、何かがあるらしい。
「はい」
「蓬莱教授との同盟関係を深める上で、協会側も政治的抗争に巻き込まれる危険性があるわ」
「ええ、分かっています」
元より、覚悟の上だ。
「おそらく、『蓬莱の薬』はそのまま日本の外交カードにもなり得るわ。というよりもするべきなのよ、そしてガンガン使うべきなのよ」
「永原先生、まさか!?」
あたしは、永原先生が恐ろしい考えを持っていることを知った。
今までもその片鱗はあったが、今回はそれまで以上に凄まじいオーラを感じていて、高島さんも浩介くんも、僅かに恐怖の表情を見せた。

「ええそうよ、日本の言うことを聞かない国や、日本を貶める国や反日的なの人間には、この薬を売らないことにするのよ。人は誰しも老いから逃れたいと思うわ。この薬とその製造法を、最重要国家機密にして、私達も蓬莱教授以外に遺伝子を取られないように、最新の注意を払わねばいけないわ」
「もし、それに諸外国が怒ってきたらどうするんだ!?」
永原先生の発言に対して、浩介くんが思わず口を挟む。
「大丈夫よ。蓬莱の薬はとても強力なものよ。それにこの薬は蓬莱教授の研究グループが占有しているもの。蓬莱の薬はあくまで『私企業の商売』と言う立場を取れば、外国が何を言ってこようが、日本政府は『民間企業のことに政府は口を挟めない』としらばっくれればいいだけよ」
永原先生が、半笑いで不気味な顔つきで言う。
今までに見たことのない、永原先生だった。
「う、うん」
ともあれ、蓬莱教授が来ないことにはこのことは詳しく話し込まないようにしよう。
ピピッ……ガチャッ
「失礼するぞ……おお、みんな揃っていたか」
扉のカードキーの音が聞こえ、最後に来たのは蓬莱教授だった。
いつもはよく一緒にいる瀬田助教は別の用事があるのかここには来ていない。
すると蓬莱教授は以前の機械を取り出した。
「ああ、蓬莱さん、盗聴器なら私の方で調べておきましたよ」
「なに、ダブルチェックだよ」
高島さんが静止するが、蓬莱教授は構わずに盗聴器が仕掛けられていないかをチェックする。
「よし、問題なし」
蓬莱教授がひとまず安心した空気になる。
「ともかく、ＣＩＡでもＫＧＢでも公安部でも、あるいはマスコミでも何でもいいが、盗聴されるわけには行かないからな」

どうやら蓬莱教授は、ここ最近かなり警戒心を強めているらしい。
まあ、薬の完成が現実的になれば、色々な勢力の妨害もあるだろうこと、あるいはその恩恵のおこぼれに預かろうと利権を狙って出てくる人がいるのは、想像に難くないものね。
「あーそれでだ。今回は相変わらず海外では根強い俺の研究への反対論だ。特に国外についてだが」
「ええ、ですから私としては、蓬莱先生の薬を、日本政府と交渉して外交カードに仕立て上げてはどうかと思っているんです」
永原先生がさっきの話しを早速切り出してくる。
日本では、反蓬莱教授の急先鋒だった「明日の会」主催の牧師が失脚したことで、蓬莱教授の研究への批判は収まりかけている。
それどころか、マスコミが萎縮しているのを見て、インターネットでは「蓬莱教授の研究に国家予算を注ぐべきだ」とか「蓬莱の薬を特産輸出品とし、外交カードにするべきだ」という声も聞こえだした。
しかし、海外は事実上野放しの傾向がある。ペリー来航や終戦後のことを知っている永原先生は外圧をかなり警戒している。
「無論、無論懲罰的に蓬莱の薬を禁輸することも、外交カードとしては考えられるだろう。だが、あまり使いすぎるのもよくないと俺は思っている」
比較的冷静な蓬莱教授は、永原先生とは違い、慎重な構えを見せた。
「蓬莱先生、それはどうしてですか？」
「蓬莱の薬は、ただでさえ影響力が強い。俺は軽い実験の気持ちで、マスコミ共に外交カードとして使ったが……その効力の大きさに驚いてしまった」
「それならなおのこと、政府にも働きかけて外交カードにしていくべきです。戦国生まれの私としても国が舐められるのは嫌なんですよ」
永原先生は慎重な蓬莱教授をやや感情的に揺さぶるが、それでは通じない。
「永原先生の気持ちも分かるが……無闇な濫用は下手をすれば戦争にもなりかねん。もちろんカードとして捨てるのは論外だが、慎重に事を構える必要性があることに相違はないだろう」

「……分かりました。ともあれ、今はいいでしょう。高島さん」
永原先生も、これ以上は無理と判断したのか、本題に移る。
人生経験は永原先生が蓬莱教授の１０倍だが頭脳の力では圧倒的に負けていることを永原先生もよく分かっている。
「ええ、今回取材を申込んだのは、蓬莱の薬の研究にかける思いを伝えたいです。それをもっと、外部に宣伝して欲しいと」
今日の高島さんの取材は、蓬莱教授が以前あたしたちにＡＯ入試で話したことや、去年の文化祭、そして今年の文化祭でも行った演説の内容、そして、あたしがＴＳ病で不老故に、長い死別を経験せねばならないことを回避したいという思い。
それらを混合した、とても長い記事が書かれることになっている。
つまりそれらを全国民に共有したいということだ。
「ではまず、蓬莱教授に伺います」
高島さんの取材とともに、どういう感じで記事にしていくのか、あたしたちがそれぞれの立場から意見を出し合って、共同で記事を作っていく。
「ここはこうした方がいいのではないか？」
「いや、これですと蓬莱教授が聞くという印象を与えかねません」
基本的に、これまでと同様に高島さんの意見が説得力があって通りやすい。
そして、全ての取材が終わるまで、数時間かかった。
記事には、あたしたち篠原夫妻の写真も載っていた。
あたしたちを使い、「美しい永遠の少女は、愛する旦那と共に添い遂げたい」という願いを押し出し、感情に訴える。
蓬莱教授は感情論を嫌ってはいるが、利用はする。
感情と理性を巧みに操って、蓬莱教授とあたしたち、そして高島さんによるプロパガンダ記事は完成した。
国際世論のことも考えねばならない時期に入ってきたので、こちらの記事は場合によっては英訳し、英語圏向けにも発信する用意もする。
そちらの方は、蓬莱教授の研究室や、ブライト桜に所属している英

語翻訳担当が共同で行うという。

「さて、これで私の取材は全て終了です。ですが気になっています。その、政府に蓬莱の薬を外交カードにするかどうかという問題です。蓬莱教授はどうして慎重なのですか？　あー記事にはしないんですが、あくまで差支えなければ、もう少し詳しく教えていただけませんでしょうか？」

全ての取材が終了した後、高島さんが冒頭で出ていた話をもう一度持ち出してくる。

やはり高島さんとしても、永原先生の野望に魅力を感じたらしいのか、蓬莱教授が何故慎重なのかどうしても気になるらしい。

「人類が不老となる、それはとても重要だ。しかし、俺としては技術が可能になったときに『一部の人間だけ』がこの恩恵を享受するような事態は極力避けねばならんのだ。外交や交渉のカードとして使うのは、これからはなるべく避けたい」

「どうしてですか？　最初はそのようになってしまうのは致し方ないと思うのですが？」

蓬莱教授の回答に対して、高島さんが更に追求する。

「何故なら、衰えることのない不老遺伝子を持つ人間はそうでない人間に比較して圧倒的に強い。永原先生など５００年以上も生きている。ところで、何故永原先生は選挙に立候補しないと思う？」

蓬莱教授は永原先生の方に向き直る。

「えっと、それは……私の存在が世に出れば、おそらく周囲は放って置かないと思うんです。必ず、私を総理大臣に、それも下手すれば終身総理大臣に仕立て上げようとする人が出てくるでしょう。現に今でもインターネットでそのような書き込みを見かけます。私にとっての終身というのは文字通り半永久です。そうすれば、必ず私の身に危険が及びます。寿命を延ばす上で、好ましくないのです。ですから、私はあくまで影から操る方がいいと思ったんです」

永原先生は、あくまでも自分が表に出るというつもりはまったくなかったらしい。

まあ、そう言う所も含めて永原先生らしさよね。
「そうだそういうことだ。もし一部の人間、特に日本人だけのように一部の国の人間だけが不老となれば、必ず不老足り得ぬ人間は奴隷のように扱われるようになる」
「それは、想像に難くないわね」
「ああ」
あたしも浩介くんも、蓬莱教授に賛同する。
とはいえ、あたしたちは、間違いなく「不老の側」に立つことができるだけど。
「今では協会の会員が３００人も居ない超少数だったことや、性別も全員女性だったこと、そして何より表立って政界などへの進出を好まなかったことが世の中のバランスを取った大きな原因になっている。蓬莱の薬はどうしたってそれを崩さざるを得ない。日本人だけが蓬莱の薬を飲んで全世界を支配することは恐らく可能だ。だが必ずしっぺ返しを食らうと俺は考えている」
蓬莱の薬は男女共に問題なく使うことが出来る。
だからもし一部の人間、富裕層や政治家だけが使うことが出来れば、あるいは一部の国の人間だけが使うことが出来るならば、そうでない人々の扱いは変わってくる。
「特に深刻なのは、富裕層だけが使える状況ではない。本当に良くないのは大多数の人や国は使えるが、貧困層や途上国の人間だけが蓬莱の薬を使えないという状況だ」
「どういうことですか？」
蓬莱教授の意味深な言い方に、高島さんが訝しげな言い方をする。
「一握りの人間だけが使えるなら、まだ人々も諦めはつくさ。だけど多数の人間が使えるのに、少数だけ薬を飲めないとなったら？　恐らく、飲めない側は間違いなく一部の人間の奴隷として扱われるよりも更に悲惨な扱いになるだろう」
「……篠原さん、私達の特権を知っていますよね？」
永原先生があたしたちに向けて話す。
「ええ。年金を支払わなくて享受できることと、社会保障費分の税金

を支払わなくていいこと、ですよね？」
　そのことは、実際に協会の会員たちの雑談の中でも何度も聞こえてきた。
「ええ。私たちには『老後』の概念がありません、逆に言えばずっと働くことが出来るわけです」
　とにかくあらゆる税金が普通の人より安いし、「老後」の概念がないＴＳ病は当然年金も全て支払い免除になる。
　不老ということは、ずっと働くことが出来る。貯金だっていくらでも回せることになる。
「ええ」
「ですから、老後の保証はそもそも必要ないわけです。衰えないからずっと働く代わりに、社会保障にかかる分だけ税金を免除されているんです」
　永原先生の言葉、そこから導き出される蓬莱教授の結論は、特定の人間だけが不老を享受できない未来を恐ろしいものとしている。
「ああ、そうなれば少数の不老足り得ない人間は間違いなく『役立たず』の烙印を押されるだろう。就職だってろくにできなくなる未来が待っているし、老いたらそれこそ餓死するしか無いだろう。何故なら不老たる人間は身体能力そのままに経験と技術の蓄積を繰り返す。衰えがないということは、そういうことだ」
　蓬莱教授によれば、例えば先進国の人間だけこの薬を飲めば、途上国の人間を永遠に奴隷の楔につなぐこともできるだろうと言っていた。
　今は日本だけがこの不老技術を持っている。ＴＳ病がほぼ日本人特有の病気であるから、諸外国の研究機関が蓬莱教授と同じように不老の薬を開発するのも至難の業だ。何より、日本よりも抵抗勢力が根強い。
「蓬莱先生のおっしゃることは分かりました、ですが私は――」
「永原先生、あなたが国際社会に恨みを持っていることも重々知っている。だがここで、不老の薬で差別するとなると、必ずや将来に悪いことになるでしょう。もちろん、外交カードとしては排除しない姿勢

は必要だとは俺も思うがね」
「……分かりました」
永原先生が国際社会に恨み？
「あの、永原会長が国際社会に恨みというのは？」
あたしが質問してみる。
「……私の江戸城での日誌の幕末部分を読めばわかります」
「あー、あったな」
そうだった、永原先生は外圧によって最終的に江戸幕府が倒れてしまったがために、２００年以上も安住の地とした江戸城を追われたんだったわね。
「永原先生、あなたは恐らく、この外交カードをたくさん使って、日本を中心とした国際社会に秩序を変えたいと思っていることは分かっています。ですが、それはおすすめできません。リスクが高すぎます」
蓬莱教授が、永原先生を制止するように言う。
永原先生は、日本と親日国に飲み、不老の薬を与え、かつて日本に対して危害を加えた国や、反日教育をしている国や民族に薬を与えず、奴隷として使おうという企みを持っていたのかもしれない。
だけどそれは、長期的にはさらなる恨みを生みかねないというのが蓬莱教授の話しだった。
蓬莱教授は、あくまでも人類全員が不老であるべきだという考えで動いている。
「もちろん、誰しもが容易に不老になれる中で、不老にならない選択をした人間が悲惨な目に遭うのは一向に構わない。そこは強調しておこう」
「分かりました。この薬は蓬莱先生の開発です。私が、深く干渉できるものとは思っていません」
蓬莱教授がそう言うと永原先生もすんなりと引いてしまう。
まあ、永原先生としても、蓬莱教授との関係を損ねてまでリスクを犯すメリットはないということよね。
「ああ。そう言ってもらえると助かる。さ、時間を取ってすまなかっ

たね」
蓬莱教授が言い終わると「ふー」と一息つく。
「じゃあ、解散でいいですか？」
「ええ」
「はい」
あたしたちへの取材は、終わった。

# 行く年来る年　クリスマスから正月へ

２０２０年１２月、あたしたちはクリスマスを迎えることになる。
結婚してから２回目のクリスマス、思えば石山優子としての人生よりも、篠原優子としての人生のほうが長くなっていた。
もちろん、優一だった頃にもあの家に居たから、実家にいた時間の方がずっと長い。
だけどそう、将来、あたしは「篠原優子」としての人生を、ずっとずっと歩み続けるんだと思う。
さて、そんなクリスマスのはずだったんだけど――
「うー」
「優子ちゃん、大丈夫？」
クリスマスの日、分かっていたとは言えイブと今日で生理と重なってしまった。約束していたプレゼントを買いに行くことは、できなかった。
しかもいつもよりも殊の外重くて、布団から起き上がるのも面倒で、浩介くんがこうしてつきっきりで看病してくれる。
「１２月は寒いからな、お腹冷やすなよ」
「うん、分かってるわ」
浩介くんの優しさが身に沁みてくる。
身に沁みてくるんだけど――
「どれ、俺が温めてあげようかな」
モゾモゾ……
「ちょ、ちょっと浩介くん！」
浩介くんが布団の中に潜り込んであたしの下腹部をさすってくる。
正直スケベ心が本心だと思う。
「んっ……ありがとう……」
でも、お腹を温めてくれるのは、素直に嬉しくて、やっぱり弱ってる時に優しくされちゃうと、本当に惚れちゃうわ。
やっぱり、恋愛は惚れたら負けなのよね。
「ちょっと待ってて優子ちゃん」

「うん」
布団から出た浩介くんは、あたしの部屋を出て別の部屋、恐らくリビングルームに向かっていく。
これまでも、生理の日は浩介くんに面倒かけっぱなしで、だけど浩介くんはいつも「普段優子ちゃんにえっちなことしてるから、その見返りとしてこれくらい当然だよ」と笑いながら言ってくれている。
多分、浩介くんも他の男の子と同様、いや、ましてあたしみたいなかわいくて美人でしかも劣化しない女の子だから、もちろん性欲が凄まじいことになっているんだと思う。
あたしも元男だからこういう看病も優しさも、全ては浩介くんが性欲を満たすためのご機嫌取りだということも分かっている。
それでも、女の子として、浩介くんの気遣いは、下心があってもなくても、とても嬉しいことには代わりはなかった。
それは結局、メスの本能には最後には負けちゃうという意味でもあるのよね。
「優子ちゃん、辛いだろ？　ほら、これ」
「あ、うん」
浩介くんが部屋から戻るとあたしにお義母さんが作った山盛りの野菜炒めを出してくれる。
あー、人参たっぷりで美味しそうだわ。
「いただきます」
あたしがベッドから起き上がり、野菜炒めを食べると、浩介くんがまた部屋を出て行く。
そしてすぐに戻ってきて、今度はカイロをあたしに渡してくれる。
「気分悪かったら、これで温めるんだぞ」
「うん、ありがとう。大分温まってるわ」
浩介くんの看病が、身に染みてくる。
あたしは生理が重い方だけど、幸い精神的には軽い方で済んでいる。
人によってはホルモンバランスが崩れやすくて、不安定な精神になってしまう人も多い。

まあ、気分が悪くなりがちで、それに支配されすぎているという一面も無きにしもあらずだと思うけど、肉体的に重くても、心の変化が少ないのは、男性にとってはプラスらしい。
「ふう、クリスマスでもバレンタインでも容赦ねえんだな」
「ええ、辛いわ」
クリスマスプレゼント、去年は面倒くさくなっちゃって何もやらなかったから、今年はやろうということになったのに。だから余計に辛いわ。
「なあ、俺からだけ、プレゼント送らせてくれねえかな？」
「え!?」
浩介くんが、突然そんなことを言う。
「やっぱり、さ。去年もなあなあで終わっちゃったし、今年くらい、プレゼントしてやらねえとって思って」
「え?　でもあたしだけ――」
「いいから！　ちょっと出かけてくるから、大人しくするんだぞ」
あたしだけは悪いと言いたかったけど、浩介くんはそのまま部屋を飛び出すように出ていってしまった。
あたしは、野菜炒めを食べ終わると、眠くなったので寝ることにした。
とにかく、今日はゆっくり休まないと。

「うんっ？」
電気がついていなくても、昼間ということもあってあたしは殆ど眠れなかった。
生理の日はこういうことが多かった。
「優子ちゃん、起きた？」
寝ている間に、いつの間にか、浩介くんがまた隣に座っていた。
「はいこれ」
あたしは、クリスマスの日に浩介くんからぬいぐるみさんを貰った。
「わあ！　鯨さんのぬいぐるみね」

あたしは、新しいぬいぐるみさんを抱きしめる。
このフカフカ感が、何とも言えない安心感を与えてくる。
お人形さん、大好き。
「気に入ってくれてよかったよ」
「うん、ありがとう浩介くん。あたし、嬉しいわ」
こんな風に、弱ってる日に優しくされると、あたしは簡単に落ちてしまう。
浩介くんも、乙女のツボが分かっているのよね。
「今日みたいな日は、甘えていいんだぞ」
「本当にもう、浩介くん、もうあなたに依存しちゃいそうだわ」
浩介くんは、あたしの心を捉えて離さない。
普段はスケベなくせに、こういう時に頼りがいのある男の子になったら、ますます浩介くんにのめり込んじゃうわ。
「はは、『依存』と来たか。優子ちゃんにはいつも無理言ってるし、こういう時くらい感謝しねえとな」
浩介くんが物騒な単語を出したあたしを軽く笑ってくれる。
うん、今はその方がいいわ。
「本当にありがとう。でも、ここまでしてもらっちゃったら、また次の日から頑張らなきゃ」
「健気だね優子ちゃんは。でも、優子ちゃんは弱くてもいいんだよ。辛い時が合ったら、ちゃんと泣くんだぞ。俺が守ってやるからさ」
うん、そうだったわ。
あたしの胸の中には、「泣いてもいい、弱くてもいい、甘えてもいい、かっこ悪くたっていい。だって私はもう、女の子なんだから」という気持ちが、いつまでも残り続けている。もちろん、今も。だから意地を張らずに、こうやって強い浩介くんに守ってもらっている。
だから、弱くてもいいんだって。それでも、一生懸命になれば、浩介くんが助けてくれるから。
あたしは健気だって言われることもある。もしかしたら本能的に、「そうすれば浩介くんが守ってくれる」って思ってるのかもしれないわね。

「ありがとう、浩介くん」
「クリスマス、ゆっくり休みなよ。何、俺は優子ちゃんに毎日プレゼントもらってるようなものだもの」
「……もうっ！　ますます好きになっちゃうわよ」
浩介くんの恥ずかしいセリフ。
でも、そうしたセリフも、何だか安心感を覚えてしまうのも確かだった。
今年のクリスマスは残念だったけど、それでも浩介くんが鯨さんのぬいぐるみをくれて、生理が重い日にはいつも、あたしのことを看病してくれた。
くれたんだけど――
「浩介くん、ちょっと部屋の外のリビングで待っててくれる？」
「優子ちゃん、立つの大変だろ？　俺が取り替えてやるよ」
生理用ナプキンを取り替えるために布団から起き上がろうとすると、浩介くんがまた、布団の中に潜り込もうとする。
「大丈夫！　そこまではいらないから！」
「えー、遠慮しなくていいよ」
本当にもう、結局浩介くんスケベなんだから！　大体、一昨年のバレンタインの時をはじめ、浩介くんはあたしの生理に興味津々すぎよ。
あたしは、浩介くんを何とか説得して、生理用ナプキンをトイレのゴミ箱の中に入れて、新しいナプキンへと取り替えた。
「うー」
やっぱり今日は特別辛いわ。それこそ初めて体験した時以来かもしれない。
今日とばかりは介護してもらっても良かったかも？　いやいや、浩介くんはまた良からぬことを考えてそうだから、今後もやめておこう。

クリスマスが終わると、1週間で元旦になる。
あたしたちは、去年と同じようなスケジュールで実家に帰省した。

違ったのは１２月２９日に大掃除をしたことくらい。
何だけど――
もみもみっ！
「きゃあ！　もう、あなた！　お掃除中にやめて！」
「う、ごめん。優子ちゃんの大きい胸見たら、つい」
「もー、本当にしょうがないんだから！」
浩介くんが頻繁にスケベなセクハラをしてきて困ったわ。
まあ、あたしとしても、お掃除中にどうしても胸やお尻が強調されちゃうこともあるから、仕方ないと割り切って入るんだけどね。
ちなみに、大掃除の中で一番手がかかったのは、お義父さんの書斎で、「いらないものを捨てる」作業を行った。
幸い、この家はまだスペースに余裕があるらしく、捨てないと切羽詰まるということではない。
大掃除中にお義母さんが「家族のものを勝手に捨てるのは違法行為だって知らない人があまりにも多くて驚いた」と言っていた。
確かに、ちょっと考えれば分かることなのに、無断で断捨離するのはその人の所有権の侵害になるというのは分かりそうなのにそのことをご近所の主婦仲間やインターネットなどに投稿するとものすごい驚かれてしまうらしい。
お義母さんは「世も末だ」と言っていた。
あたしも、そう思う。例え知識がなくても、ちょっと推測すれば他の人のものを無断廃棄したら所有権の侵害になることくらい分かることなのにね。
そして大掃除が終わった翌日の１２月３０日から３１日の朝までは、おばあさんを自宅に呼ぶ事になっている。
おばあさんには毎度のように、「まだ子供産んでなかったのか！」と怒られてしまった。
あたしとしては、もうしばらく待って欲しいんだけど、何だろう？
あたしたちが子供を産むことによって、おばあさんに死相が出る気がしてならないのよね。だって、今はひ孫が人生の目標って感じだもの。

まあ、そうでなくてもおばあさんはもう９０代だし、いつ死んでもおかしくないから必死になるとは思うんだけどね。だけどあたしたちにも生活計画があるもの。

大晦日におばあさんを送った後、あたしたちはあたしの実家に移動して年末年始を過ごすのもいつも通り。

あたしの両親は「よく来たわね」と歓迎してくれた。

実家では去年と同じく、あたしがこの家を出てからは抜け殻となった「元あたしの部屋」に布団を敷いて、間借りすることにした。

ちなみに、これも去年と同じことなんだけど、父さんと母さんからも浩介くんのおばあさんと同様「まだ子供産んでいないの？」と言われてしまった。

とにかく、「大学卒業までは待ってくれ」と２人を説得し、何とかこの場は収まった。

おばあさんよりはまだ寿命が長いせいか、父さん母さんは必死さが低い。まあ、仮にあたしたちが博士課程まで進んだとしても、十分寿命は残っているものね。

大晦日は、去年と少し違って、夕食に年越しそばを食べた。ちなみに、大晦日ということで、いつもよりもかなり遅い時間で年越しそばを食べた。というよりも、「夕食」というより「夜食」というべき時間だった。

ちなみに、このお蕎麦はあたしと母さん、そしてお義母さんで共同で作ったもので、あたしの母さんがお義母さんに「だいぶ家事がうまくなったわね。優子の指導が効いているわ」と褒めてくれた。

本当、母さんが家事ができる人でよかったわ。もし家事ができない女性だったら、あたしのカリキュラムの指導にも支障をきたしただろうし、あたしの花嫁としての能力にも悪影響を及ぼしたに違いないもの。そしたらそこで、嫁姑問題が起きた危険性だってあるもの。

「ふー、ごちそうさまでした」

「優子ちゃん、良いお年を」

「うん、お義母さんもね」

年越しそばを食べ終わったら、義両親と実両親はテレビで歌番組を

見るためにリビングに残り、あたしたちはあの部屋に進む。
「なあ優子ちゃん」
「え!?　まだ、みんな起きてるよ……」
「でも、俺我慢できない……年越しでしたい」
「もうっ！」
　あたしたちは、初めて夫婦生活中に新年を迎える事になった。
　でも多分、全国には同じカップルがたくさんいるのよね。

　こうして、２０２１年になった。４月からは大学も後半戦に入る。今のところあたしも浩介くんも、大学の勉強は問題なくついていけている。
「優子ちゃんおはよう。あけましておめでとう、だね」
「うんでも寝る前からそうなってたわよ」
「あはは、そうだったな」
　昨日は散々あたしを快感の渦に巻き込んだ浩介くんが、澄ました顔で新年の挨拶をする。

「あけましておめでとう」
「うん、優子おめでとう。昨日は激しかったわね。浩介くん、ちゃんと何も無しで注いだかしら？」
「うっ！　か、母さん！」
　あうー、いつもよりも声が出ちゃってたから、やっぱり聞かれてたみたいだわ。
「歌手の音楽と優子ちゃんの声がいいメロディーになってたわよ」
　お義母さんがくすくす笑いながらあたしをからかう。
「そうね、私達の若いころそっくりだったわ」
「もうっ!!!」
　母さんがさらに冷やかすと、浩介くんもさすがにバツが悪そうにうつむいてしまった。
　そう言えば、以前にも「優子ちゃんのかわいい声が寝室まで響いてくる」とか言われちゃってたっけ？

これば っかりは浩介くんの技術力が凄すぎるのもあるし、どうやっても気をつけようがないけど、何とかしないといけないわね。
さて、今年も振り袖を着ていつも通り初詣に向かった。これももう、女の子になって４回目の出来事だった。
その振り袖も、３人で着替えたのも去年と同じ。

「あ、篠原さん、あけましておめでとう」
「あ、永原会長。あけましておめでとうございます」
初詣先では、またもや永原先生に出会った。４年とも出会えたのは、やっぱり永原先生の格好が目立つからなのかもしれないわね。
ちなみに、永原先生は５０３年目の人生について、「今年から来年以降にかけて、また大きく変わっていくかもしれない」と言っていた。
やはり、それは「蓬莱の薬」に関することだと思う。
「蓬莱教授はどうでした？」
「ええ、変なギャラリーに捕まらないように、さっさとお参りしてすぐに去ったわ。私とも、ちょっと声を掛け合って挨拶したくらいだったわね」
蓬莱教授は、今年は直接には会わなかったけど、永原先生によれば「さっき帰った」とのことだった。
「やっぱ、有名になるって大変なんだな」
「まあ、私も私で、実は声をかけられるのよ。ほら、２年前に鑑定番組に出たでしょ？」
「あーはい」
永原先生の鑑定番組出演、今は「柳ヶ瀬まつの日記」と「柳ヶ瀬まつ一代記」が歴史学会と古典の研究学会に長期貸出されている。
これまで没年不詳だった人物の没年や諸説あってわからない学説が次々と定まっていくため、今でもニュースで時折「永原氏の資料で新事実」という感じで流れていく。
特に日記は２００年以上もの日々を書いたもののため、どうしても精査が遅れてしまうという。ただ、今年の夏頃までには、いずれも永原先生のもとに返却されることになっている。

ただ、皮肉にも赤穂事件の部分に関しては「著者の感情が露にでている」ということで資料価値が下がってしまっているという。
本当に、救いようもない話だわ。
最も、それ以前から「吉良は悪くないんじゃないか？」と言われて定説化しつつあったため、この資料も「それを補強する」上では十分重要な資料ではあるとは思うけどね。
ちなみに、あの鑑定番組は、「永原先生個人」としての出演だったため、協会への取材には当たらないというのは、永原先生自身も認めたことではある。
「特に最近では、オリンピックが終わって、世間の関心が蓬莱教授に集まりつつあるわ。そのせいでどうしても、私への関心も高まるのよ。篠原さんも、広報部長という立場だから、特に注意してね」
「ええ、分かってるわ」
初詣が終わると、あたしたちは普段着に着替えてから去年と同じく家に帰還した。
「ふう、疲れたな」
「うん、浩介くんもお疲れ様」
家に帰ったら、あたしたちは早速お互いをねぎらうことにした。
「優子ちゃんもね」
今年の年始のイベントは全て終了したけど、１０日後の１月１１日にはあたしたちは一生に一度のイベントが待っている。
それが成人式で、高月くんが幹事になった同窓会を行うことになっている。
そこでまた、面白いことになりそうだわ。

# 成人式

「浩介くん、準備できたわよー！」
「おう」
あたしが集合する部屋に行くと、浩介くんが和服姿で出てきた。
今日は２０２１年１月１１日、世間ではいわゆる「成人の日」という休日になっていた。最も、あたしはあの日から容姿が全く変わっていないし、浩介くんも浩介くんで、蓬莱の薬を飲んで以降、容姿が殆ど変わっていない。
で、去年２０歳になったあたしと浩介くんは成人式に出るということなんだけど、あたしは振り袖、浩介くんもかしこまった和服になっている。
「ふう、やっぱり振り袖は違うわね」
「うん」
特に、胸を潰して晒を巻かなきゃいけないのがちょっと嫌なのよね。
まあ、顔がいいから、それでも似合いはするんだけどね。
浩介くんはというと、やっぱりキリッとしていてかっこいいわね。
「にしても、今更成人ですって言っても何か違和感あるよな」
「あはは、うん、もう結婚しちゃったものね」
結婚すると、一部法的には成人と同じ効力を持つようになる。
あたしとしても、成人して２０歳になって何か変わったかというと、何も変わっていない。
むしろ、酒もタバコもしない身としては、殆ど何かが変わったという自覚はない。
「他の連中はどうしてるかね？　塩津幸子さんだっけ？」
浩介くんの方から幸子さんのことを話すなんて珍しいわね。
「幸子さんなら、４月から社会人よ」
「おおそうか、あいつ、俺達より年上だもんな」
幸子さんは大学の卒業論文を書き終わり、就職先も決まった。
サッカーサークルの仲間と、サークルのメンバーの彼女たちや、幸

子さんのゼミ仲間などで、冬休みを利用してスキーに行こうということになった。
当初は格安のツアーバスを探す方向で案がまとまりかけていたが、幸子さんが「ツアーバスは事故が怖い。鉄道を使いたい」と言ったために、新幹線で移動することになった。
当初は出費がかさむことにサークルやゼミの仲間たちは難色を示したけど、幸子さんは「これからの人生が長い私にとっては、事故の確率は無視できない」と言ったために周囲も最終的に納得してくれた。
「スキー、楽しんでいるかな？」
「どうだろう？　それよりも、直哉さんが蓬莱の薬を飲んだのよ」
「え!?　そうなのか!?」
また蓬莱教授の情報によれば、冬休み中に、やはり全ての単位を取得して就職先が決まった直哉さんが単独でここを訪れ、「どうしても幸子さんと共に暮らしていくために、蓬莱の薬が欲しい」と直談判してきた。
蓬莱教授は、「遠い所から必死だな」とも思ったけど、その熱意に押され、最終的に5日間佐和山大学の敷地から出ないことを条件に、薬を融通することに決定した。また、この時に幸子さんも蓬莱教授のお金で呼び寄せて、遺伝子サンプルも提供することになった。
蓬莱教授によれば、幸子さんはいわゆるα型らしい。
「へー、そんなことがあったのか」
「うん、これで少しは研究が早くなるといいけど」
「だなあ……ところで山科のやつも、彼氏とうまくやってるようだな」
「うん、歩美さん、来年は成人式にいるのよね」
そして、歩美さんも歩美さんで、大智さんと付き合い始めた。
１０月の文化祭から2ヶ月半、ここまでは順調に来ているみたいでよかったわ。
他の天文サークルの男子たちは、ガックシとしつつも、大学の他のサークルなどに活路を見出している。
例のダンスサークルの2人も、複数の男子から声をかけられたとか

何とか。
本当にもう、あの人達は女の子と付き合うことしか頭にないのかしら？
……まあいいわ。
「そうだな、そう言えば、田村の奴も予定がついたんだっけ？」
「そうみたいね。今やもう、世界的スターの恵美ちゃんよね」
浩介くんが今度は恵美ちゃんについて聞いてくる。
「だよなあ。あの田村恵美が高校の２年間同じクラスだとは今でも信じられねえぜ」
浩介くんがそうつぶやく。
恵美ちゃんは、今シーズン最終的に順位を２位まで上げ、ツアーファイナルまで進むことになった。
今シーズン特にニュースとなったのは、恵美ちゃんが全米オープンで優勝したこと。
世界ランク２位と言っても、１位との差は僅差で、実力的には１位の選手さえ圧倒し始めている。
恵美ちゃん曰く、「もう少し立ってから世界の上位を狙う予定だったが、とにかく蓬莱の薬を飲んでから不調に陥ることがなくて安定している」と言っていた。
それまでの恵美ちゃんは好不調の波もあったわけだけど、今はそういうのも少ないらしい。
恵美ちゃんは元々身体能力も高かったし、年齢的な衰えも５００歳の薬で他の人の６倍以上は遅くなっている。
恐らく来シーズン以降、このまま行けば恵美ちゃんは３０代くらいになれば敵なしになるわね。身体能力ほぼそのままにベテランの経験を会得したら、それはいわゆる「チート」と呼ばれる状態だもの。
「そうよね」
だけどあたしの中で、何となくだけど、あたしと浩介くんがそのうち恵美ちゃん以上に有名になるんじゃないかという気がしてくる。
その根拠は分からないけどね。
「じゃあ、行ってくるぞー！」

「いってらしゃーい」
あたしたちは、義両親に「行ってきます」をしてから成人式の会場に向けて進む。
会場は区役所の中の地下ホールで行われる予定で、あたしにとっては久しぶりの訪問となる。
区役所に行ったのは婚姻届を出して以来で、その前にはあたしが女の子になったために性別と名前を変更する届け出を出した時まで遡れる。
うちの都市は政令指定都市なので、区ごとに新成人が集まり、区長さんがそれぞれ挨拶することになっている。
「お、マスコミが来てるな」
あたしたちが受付を済ませると、会場には多くの報道関係者が詰めているのが分かった。
「多分、恵美ちゃん目当てよね」
今日、日本中を沸かせた恵美ちゃんの成人式がここで行われる。
ということで、マスコミが大量にやってきた。
恵美ちゃんはまだ来ていないのか、マスコミの人もゆったりとしている。

「おい、あれ篠原夫妻じゃねえか」
「あ、本当だ。まずい！　カメラ向けるな！」
「おい、篠原夫妻だ、まずいぞ！　カメラしまえ！」
「カメラしまえ！」

あたしたちに気づくと、メディアの人々はとっさにカメラをしまい始めた。
「浩介くん、何か様子がおかしいわね」
「ああ、どうやら俺たちは蓬莱教授の仲間として恐れられているらしい」
浩介くんがそんなことを言う。
そうか、蓬莱教授がマスコミを脅してから、マスコミの人々も蓬莱

教授の身辺を調べ、危険そうな人物をあらかじめ洗っておいたのね。
そうなれば蓬莱教授と協会との橋渡し役をしているあたしの名前も出るのは当然だろうし、もしカメラに写り込んでしまえば無断で撮影したと言いがかりをつけられる可能性を排除できないというわけよね。
あたしたちだけではない、永原先生や他の協会関係者、蓬莱の研究室の関係者も同じような扱いを受けていると思うわ。
「浩介くん、どう思う？」
「まあ、散々印象操作で人々をペンで弾圧してきたんだ。これくらいの報いは受けてもらわねえとな」
浩介くんは、清々しそうな表情でそう吐き捨てる。
「うん、あたしもそう思うわ」
印象操作などをこれまで平気で行っていたマスコミが、蓬莱教授が民間人ながら絶対的権力者の立場にあると分かるととたんに媚びへつらうようになった様子を見るのは、率直に言って気持ちよかった。
散々あたしたちに印象操作とネガティブキャンペーンをして、「第４の権力」を傘に着て敵意を剥き出しにしていた連中が、蓬莱教授という更に強い「第５の権力」が来た途端に媚びへつらうようになった。
「にしても、政府でさえマスコミをこうはコントロールできねえよな」
「うん、つまりあたしたちは、もう引き返せないってことよね」
マスコミの関係者は、旧知の仲である高島さん擁するブライト桜を除いて、あたしたちに腫れ物に触るような扱いをする。
それはつまり、あたしたちは今や２０歳の大学生にして既に「権力側」の人間だということを示している。
「ああ、蓬莱教授の理性は、結婚前の俺以上だよ」
「あはは、今は反動が出ちゃってるかな？」
そして、自分たちがいつの間にか「権力を振るえる側」になっていたということが分かれば、今まで自分たちを苦しめていた相手に対して仕返ししてやろうと思うのは普通のことで、そう言う意味では永原先生があの時あのような提案をしたのも頷ける話だった。
永原先生はおそらく、反日的な国や、日本と敵対した国に対して蓬

莱の薬を禁輸とすること、そして蓬莱の薬の治療研究を日本の独占とすることで、日本を国際社会における絶対的支配国にしようと目論んだんだと思う。
そして多分それは、蓬莱教授自身も認めたように蓬莱の薬の絶大な需要を考えれば、十分に可能なことだと思う。
富と力を手に入れたものは、それを誇示したくなるのが人情というもの。多くの歴史の中で、権力者はそうなって生きてきたもの。
そしてそれを危険と分かって止めた蓬莱教授は、やはり天才と言わざるを得ないわね。
「蓬莱教授は、すげえよな」
「うん」
ワー！　ワー！
あたしたちが雑談していると、突然会場が大きな歓声に包まれた。
それは、振袖姿の恵美ちゃんだった。
ちなみに、いつぞの夏祭りの時のように左前にはなっていなかった。
恵美ちゃんに向けてカメラのフラッシュが大量にたかれる。
「あ、恵美ちゃーん！」
「わわっ!!!」
試しにあたしが恵美ちゃんを呼んでみると、マスコミが大慌てでビデオカメラを消し始める。
ふふ、楽しいわ……って、あんまり調子に乗っちゃいけないわね。
「???　何なんだ？」
狼狽したマスコミに対して恵美ちゃんは困惑した表情で、あたしたちに近付いてくる。もちろん、周囲も不審そうな目をしている。
「恵美ちゃんこっちこっちー！」
「何だ、ラブラブ夫婦の優子に浩介じゃねえか。何でメディアの連中はビビってんだ？」
恵美ちゃんが困惑した表情で話す。
さり気なく「ラブラブ夫婦」何て言っているけど。
「あーほら、あたしたち、蓬莱教授に近しいから、もし言いがかりでも

つけられたら蓬莱の薬を売ってもらえないんじゃないかってビクビクしてるらしいのよ」
「ははーん、それでビビってんのか!?　やっぱ蓬莱の薬ってのはすげえんだな」
　恵美ちゃんもマスコミには思う所があるのか鼻で笑って見下すような態度を取る。
　あたしたちもマスコミには苦しめられてきたけど、世界的なテニス選手として注目を集めている恵美ちゃんはその比じゃないはずだわ。
「ああ、蓬莱教授曰く『蓬莱の薬は米軍以上の外交カードになる』ってさ」
「だろうなあ。飲むだけで老化しなくなるだなんて、夢のような薬だし」
　浩介くんと恵美ちゃんがそう話す。
「にしたって、お前らの権力はすげえな。あたいも欲しいぜ」
　恵美ちゃんはあたしたちを羨ましそうな目で話す。
　そう、恵美ちゃんがあたしたちの近くに来たために、マスコミは一枚も写真を取れず、そのまま奥へと引き返してしまった。
「ま、何にせようざい連中を払いをしてくれたのには感謝するぜ」
「気にしなくていいわよ。あたしも何の気無しに声かけただけよ」
　恵美ちゃんのお礼に対して、あたしも気にしないでいいと答える。
「そう言ってくれると、助かるぜ」
　恵美ちゃんには、色々な所でお世話になったし、これからも付き合いは続くと思う。
　世界的テニス選手になったと言っても、拠点は日本に置いているし、何よりも蓬莱教授の研究でつながりがあるわけだものね。

「なあ、あれテニスの田村恵美だよな」
「ああ、それにしても、そいつと親しそうに話している2人は何なんだ!?」
「古い友人とか？　いや待てよ、あの女の子、何処かで見たことあるような？」

「あー言われてみれば……でももっと胸が大きかったような」

周囲も、恵美ちゃんの登場にざわついている。

だけど恵美ちゃんと親しく話しているあたしたちにも関心があってやっぱり以前と同じく、晒しを巻いて胸を潰しているせいであたしと気付いてもらえない。

まあ、あたしと言えば胸が大きいことが大きな特徴だったものね。それが殺されてしまっているだけでも、大分印象が違うのかもしれないわ。

「お、始まるぜ」

前方のホールで大きな動きがあったのが見えると、周囲のざわつきがやや収まる。

そして、会場アナウンスの女性から「只今より成人式を始めます」という声が聞こえてきた。

「はじめに、区長挨拶です――」

アナウンスの声から、区長さんがマイクの置かれている壇上に上がる。

踏み台があるのか、区長さんの頭が少しだけ上がった。

「えー、新成人の皆さん、区長です！　私は、小谷学園の校長先生とも親しくしているのでですね、話は、短く簡潔にしたいと思います。新成人の皆さん、これからは、２０歳という節目の歳を迎えまして、これからも健やかに、そして社会の一員として責任を持った行動を取って下さい！　以上です！」

パチパチパチパチパチ!!!

「うおおおおおお!!!」

「いいぞおおおおお!!!」

「区長、万歳!!!」

区長さんが短く簡潔に挨拶すると、新成人たちからは割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こり、自然とスタンディングオベーションが形成された。

あたしたちも自然と立ち上がり、区長さんに惜しみない拍手を送

る。
そう、短い時間に簡潔にまとめることこそ、最も人々にいい印象を与える。
長ったらしい話は嫌われるというのは、校長先生の長話でも知られている。
それを避けて、短い間に魂を込めた1文をあげた区長さんは、あまりの絶賛ぶりに少しだけ顔を赤くしていた。
「続いて、来賓挨拶、佐和山大学教授の蓬莱伸吾先生、よろしくお願いいたします」
「お、蓬莱教授じゃねえか」
やはり、予想通り来賓は蓬莱教授だった。
おそらく、ここでも宣伝活動をするつもりなんだわ。
「えーっと、皆さん知っての通り、俺が蓬莱伸吾だ。今、俺の研究所が開発中の飲料水……もとい薬によって、世界の仕組みが大きく変えられようとしている。さて、ここから話すと長くなるが……短いほうがいいかな？」
蓬莱教授がまず、あたしたちに問いかけるように話す。
「あー、短い方がいいな。ともあれ、俺から言えることは、悪い社会にはならないし、そうはさせないということだ。老いを克服すれば、その先には素晴らしい世界がきっと待っている。俺はそれを信じて研究を続けている。だから、皆も俺のことは気にしすぎないでくれたまえ。以上！」
パチパチパチパチ!!!
蓬莱教授がそう言って頭を下げると、再び大きな拍手が沸き起こった。
成人式のスケジュール上、2人とも短く話をまとめてしまうとは思っておらず、予定はかなり前倒しで進行することになった。
「それでは、これより、記念撮影に移りたいと思います」
そのアナウンスと共に、成人式のレクリエーションは記念撮影を残すのみとなった。

やはり予定よりも早い時間で、各自の記念撮影が終われば、あたしたちは同窓会を残すのみとなる。
「行こうぜ」
「うん」
恵美ちゃんの先導のもと、あたしたちも記念撮影できそうな所に移ることにした。

# 同窓会と禁酒

成人式もいよいよ最後の撮影会に入る。あたしたちが恵美ちゃんの「護衛」となったため、マスコミはついに取材することができなさそうで気の毒だった。

「ふう、優子すげえな。あたいらじゃああはいかねえぜ」

諦めて帰るマスコミ関係者も多く、恵美ちゃんも久々にゆっくりできそうだった。

「えへへ、ありがとう」

成人式では親御さんなどが撮影者になることもあるし、自分達で撮影することもある。

スマホで撮影する人も増えているけど、あたしたちは、自前のカメラを使って撮影する。

「よし、優子たちはあたいが撮影するぜ」

恵美ちゃんが撮影役になってくれたので、すんなりと撮影が終了した。

あたしも、振袖姿の恵美ちゃんを撮影した。

「お、あれは桂子じゃねえか？」

「ん？」

そこには、初詣の時によく見る振袖姿の桂子ちゃんだった。

隣で話していたのは桂子ちゃんのお母さんだった。

「桂子ちゃん」

「あ、優子ちゃんに浩介。それに恵美まで。成人式おめでとう」

「うん」

桂子ちゃんと、挨拶をする。

「あらあら、皆さんお揃いですか」

「はい、ご無沙汰しております」

桂子ちゃんのお母さんとも、きちんと礼儀正しくを心がけて挨拶する。

「桂子、成人式おめでとうな」

「ええ」

あたしたちは、とりあえずまずは振袖から着替えるために、区役所が用意した大きな更衣室を借りることにした。
「じゃあ浩介くん、またね」
「ああ」

「にしても、他の奴らはどうしたんだ？」
更衣室で、見かけない顔について恵美ちゃんが話す。
「龍香は多分午後の同窓会には来ると思うわ」
桂子ちゃんから朝来た情報によれば、龍香ちゃんは午前中は彼氏との家デートの約束をしているらしい。
今頃、振袖姿で色々なプレイをさせられてる頃合いね。
あたしも振袖ではないけど、新婚旅行のホテルの浴衣でノーパンにさせられちゃったことはあったし多分あんな感じだと思う。
「龍香ちゃん、またかわいくなってるかしら？」
「でしょうねえ」
桂子ちゃんが遠くを見るような感じで言う。
龍香ちゃんは同じ大学だけど、高校までの時みたいに気軽に会えるわけではない。もちろん、たまに天文サークルに顔出してくるから疎遠というわけではないけど。
「ところで桂子、あんたは彼氏と上手くいってるんか？」
恵美ちゃんが桂子ちゃんに話題を移す。
「ええ、天文趣味で、上手くいってるわ」
「それはよかった。優子は？　旦那はどうなんだ？」
恵美ちゃん、嫌にがっつくわね。
まあ、恵美ちゃんも恋話が大好きな女の子という生き物だからしょうがないとは思うけど。
「え!?　ああうん、浩介くんなら大丈夫よ」
「あいつは家事とかちゃんと手伝ってるのか？」
「あーうん、うちはほら、お義母さんもいるから」
「あそっか、元から2人いるもんな」
それに、家事手伝いを頼んだら「ご褒美」としてスカートめくられ

て浩介くんにパンツ見られないといけないし。
恥ずかしいのでよっぽど困ってる時だけ頼みたいけど、あんまり拒否しちゃうと不機嫌になるから、たまに浩介くんのために「手伝わせてあげる」ようにしないといけないのよね。
「どうしたんだ優子？　顔が赤いぞ」
「ああうん、何でもないわ」
いけないいけない、この前お義母さんが出掛けてるときに家事を手伝ってもらって、その後におへそまでガバッとめくられて前から後ろからパンツ見られた時のことを思い出しちゃったわ。
とにかく、着替え終わったら浩介くんたちと合流して、同窓会の会場にいかなきゃ。
「お、優子ちゃんお疲れ様」
「あ、浩介くん、高月くんも」
高月くんがいつの間にか浩介くんと合流していた。
「優子ちゃん久しぶり。うー、桂子ちゃんにも彼氏できちまったんだよなあ」
高月くんは、相変わらず性欲のことばかり考えているわね。
まあ、それが男のパワーの源だし、仕方ないかな？
「何だ高月？　あたいは眼中にねえってか？」
「いやだって、田村は世界的なテニス選手だろ？　そもそも恋愛にかまけてる暇ねえんじゃねえか？」
「うぐっ」
高月くんのとっさの言葉に、恵美ちゃんがぐさりと来る。
「恵美ちゃん？」
「くー、高月に非の打ち所の無い正論を言われて反論できねえぜ」
どうやら、恵美ちゃんにはよっぽどのウィークポイントだったらしいわね。
「まあいいや、同窓会の会場に行こうぜ」
「おう」
恵美ちゃんが、強引に話を終わらせる。
ちなみに、今日の恵美ちゃんは久々に見たスカート姿だった。

丈もこの冬にしては短めで、恵美ちゃんの私服のスカート自体が珍しいことを鑑みれば、中々新鮮だと思う。
「よし、ここだ」
今回の同窓会の幹事は高月くんなので、高月くんの先導で目的の店へと到着する。
そのお店はいわゆる居酒屋さんで、今日は成人式の日なので特別に営業中になっている。
まあ、あたしたちの予約で、席はほぼ埋まっているんだけどね。
「いらっしゃいませー」
「予約しました小谷学園同窓会です」
営業スマイルの店員さんに、幹事の高月くんが代表して応対する。
「お待ちしておりました、こちらへどうぞー！」
するとそこには――
「あ、永原先生」
永原先生が、一番乗りをしていた。
「あ、篠原さんに篠原君、それから高月君、田村さんに木ノ本さん、こんにちは」
永原先生が座っていた席の回りに、あたしたちも座る。
「こんにちは」
「田村さん、テニスどう？」
「ああ、今度の全豪もいただきだぜ！」
恵美ちゃんは、かなり自信をつかんだ。
蓬莱の薬に身体能力の強化があるのかと言えば、どうやらそういうわけでもなく、浩介くんの性欲が増したのも含め、蓬莱の薬で当面の老化から逃れることができたことによる精神的な余裕が極めて大きいと結論付けられた。
まあ、あたしがこんなに運動神経が壊滅的な時点で、「蓬莱の薬が身体能力を上昇させる」という仮説は苦しいと個人的には思っていたけどね。
ガチャッ
「いらっしゃいませー」

どうやら、誰かが来たらしいわね。
「お、あれは龍香じゃない。こっちこっちー！」
桂子ちゃんが、来たのが龍香ちゃんだと確認すると、手をあげて手招きし、それに気付いた龍香ちゃんがあたしたちの側に座る。
「あら、まだこれだけですか？」
「龍香ちゃん、見かけなかったけど、成人式どうしたの？」
あたしが一応聞いてみる。
「あー、参加してないです」
予想通りの回答が帰ってくる。
「もしかして？」
「はい、彼と家デートしてました。彼ったら他の男に私の晴れ舞台を見せたくないって！」
龍香ちゃんが、彼氏に独占される嬉しさを語っている。
「うげえ、龍香の彼氏、束縛強いよねー」
「それがいいんですよ！　私も、彼氏は独占したいですから」
なるほど、いわゆる「ヤンデレ」同士でくっつくと、こういうバカップルになるのね。
って、あたしたちも人のこと言えないかも。
「それでですね、今日は久々に彼から『おしおき』されちゃいました！」
龍香ちゃんが、おしおきされたことを嬉しそうな表情で語る。
「え？　おしおき？」
あたしもおしおきされたことはあるけど、それは女の子になったばかりの頃に、あたしが女の子らしくない行動をとったことによる、文字通り「反省」や「自覚」をさせるためのおしおきだったから、龍香ちゃんのような言葉には少し違和感がある。
まあ、あたしも浩介くんに似たようなシチュエーションを受けたことはあるけど。
「はい、振袖になったんですけど、彼氏に『下着のラインが出てみっともない。罰としてノーパン』って言われちゃいました！」
うっ、まずい。龍香ちゃんの暴走が始まったわ。
「もー私の彼ったら振袖めくって丸出しにさせられちゃいまして、

キャーー!」
「龍香ちゃん、うん、皆まで言わなくていいわ」
あたしが必死に暴走した龍香ちゃんをなだめる。
「河瀬も相変わらずだなあ……」
あの高月くんでさえ、龍香ちゃんのこの態度には、かなり困惑しているわね。
「えへへ、もう身も心も彼から離れられません。大学卒業したら、すぐに結婚予定ですよ!」
龍香ちゃんがそう言うと、左手薬指の婚約指輪を見せてくれる。
「おー、河瀬おめでとう!」
「龍香ちゃんおめでとう!」
「えへへ、ありがとうございます」
すかさず、全員で祝福の声をあげる。
これで、このクラスで指輪持ちは、あたしたちに続いて2組目ね。
まあ、あたしは結婚指輪で龍香ちゃんはまだ婚約指輪だけど。
「うー、俺も彼女欲しいなあ……」
高月くんが、うなだれた表情で下を向きながら愚痴を言う。
高月くんは、父親の整形外科を継ぐために、現在医学部で勉強中となっている。
「大丈夫よ高月君、医学部で医師なら、引く手あまたよ」
「うー、やっぱ金かあ……やっぱそこが大事なのかなあ……」
「そうよ、篠原さんや河瀬さんみたいなケースはむしろ少数かもしれないわよ」
永原先生が高月くんを慰めるように言う。
それに、蓬莱の薬のことを考えると、今後整形外科医は相対的に需要が上がっていくと思うし。
「よし、俺も勉強頑張るか」
高月くんも、何とかご機嫌を取り戻す。
その後も、同窓会のメンバーが続々と集まっていく。
さくらちゃんはちょっと彼氏と喧嘩しちゃって、仲直りに奔走していたとか。

「さて、おほんっ、本日は、我が小谷学園２０１８年度卒業３年１組の同窓会にご出席いただき、誠にありがとうございます！」
出席者が全員集まると、高月くんが席を立ち、最初の挨拶をする。
パチパチパチパチパチ!!!
高月くんが着席すると、他のメンバーが拍手をする。
「またですね、折に触れて、同窓会をし続けていきたいと思っています！　では、長ったらしい話はやめて、乾杯！」
「「乾杯ー!!!」」
チンッチンッ
コップのグラス同士があちこちで鳴り響く音がして、あたしたちは食事を食べることにした。
成人式の同窓会らしく、お酒も振る舞われている。
「ビールで！」
「梅酒で！」
成人式の後とあって、みんなお酒を頼む人が多い。
「あたしはオレンジジュース」
「リンゴジュース」
「俺は烏龍茶」
「私も烏龍茶で」
あたしたち禁酒組は、恐らくまだ誕生日を迎えてない人でさえお酒を頼んでいるだろうこんな場所でも律儀にそれを守っていた。
「優子ちゃんと先生はお酒飲まないの？」
桂子ちゃんがそう疑問を口にする。
そういう桂子ちゃんだって、リンゴジュース頼んでいるのに。
「あーあたしたちは酒いいわ」
「私も」
桂子ちゃんの問いかけに、あたしと永原先生がそう答える。
「そう？　どうして？　いいじゃないこの時くらい」
「あーうん、酔っぱらうと生存能力落ちるからね。私たちにとっては深刻なのよ」

永原先生が「安全講習」で言っていたことと同じことを言う。
「あー、やっぱり？」
ちなみに、恵美ちゃんもコンディションに関わるからか、オレンジジュースで済ませている。
「というよりも、木ノ本さんも蓬莱先生の薬を飲んでいるんでしょ？
寿命が長くなってるの自覚しなさいよ」
「はい、分かってます」
永原先生の注意に、桂子ちゃんもはっとした様子で応対する。
それにしても、蓬莱の薬が普及すると、みんな事故になるのを嫌って自家用車や居酒屋なんかにも影響しそうだわ。
「あら？　篠原さん考えごと？」
浩介くんが今の会話を聞いてうつむきながら何かを考えていた。
「あーうん、蓬莱の薬ができたら、居酒屋さんの売り上げにも影響するかなって」
永原先生の安全講習でも、禁酒が唱われているし。
「いや、俺はそうも思わねえぜ」
浩介くんがあたしの意見に異を唱える。
「え!?　あなた、どうして？」
「俺たちは不老というのが死から免れるものではないと知ってはいる。とはいえ、若いままでいると言うことには代わりはないだろ？
俺達の価値観じゃ警戒するのが当然と言っても、蓬莱の薬が普及したとして『長生きするために少しでも死に繋がりそうなことは避けよう』と考える人ばかりじゃないってことだよ」
「うん、私も、篠原君の方に1票かな？」
永原先生が、浩介くんの意見に味方をする。
「『若気の至り』って言うじゃない？　人間、どうしても『自分だけは例外』とか、『自分だけは大丈夫』って考えがちなのよ」
「うーん、確かに、ＴＳ病になった患者さんも、そういう思考に陥る人が多いわよね」
最も、最近ではあたしの新教育のお陰で、そういった考えに凝り固まって自殺への道に至る患者さんは極めて少なくなったけどね。

もちろんあたしが協会に関わる以前は自殺への道から引き戻そうとして失敗するケースも多く、その時には、彼女たちは皆、「自分は例外」と思っていた。
「それに、こういうのは、今の人間にして見ると超長期スパンだからね。いまいちイメージがつかないと思うのよ。私は５００歳超えてるし、ＴＳ病の正会員は篠原さん以外は歳行っているからＴＳ病の患者はこういうのもイメージつきやすいけどね」
永原先生が鋭い指摘をする。
確かに、若いうちに数百年単位のことを考えるのは至難の技なのかもしれない。
あたしはそういう感じでもなかったけど。
その後も、同窓会では昔話や近況の話、将来の話などをして盛り上がった。

「えー皆さん、本日はこれにてお開きとなります。２次会３次会行かれる方は気をつけて下さい。以上、解散です」
最後、高月くんがそう挨拶して、あたしたちは思い思いに居酒屋さんを出て道路に行く。
幸い、酔いつぶれてしまった人はいないみたいでよかったわ。
「ふう、篠原さんそれじゃあ――」
ピピピピッ……ピピピピッ……
「あ、ごめんなさい」
永原先生と挨拶を交わそうとすると、突然永原先生の携帯電話が鳴った。
ピッ
「はい、永原です……はい……はい……え!?　はい……はい……今は、はい、いますけど……はい、はい……分かりました」
ピッ
「篠原さん、成人式前日に倒れた患者さんがいるって」
「え!?　はい、場所は？」
もう、何もこんな時に新しい患者さんがでなくてもいいのに。

「それがね――」
「え!?　近いわね」
　ちょうどそれは沿線の終点から、海の方向とは逆方向に電車に乗ったときに到着する場所だった。
「篠原さん、カウンセラー、お願いしていいかしら？」
　やっぱり、そりゃああたしにお鉢が回ってくるわね。これで広報部長と初動カウンセラーを初めて兼務することになるわね。
「うん、分かったわ。浩介くん！」
　あたしは、高月くんと雑談していた浩介くんに話しかける。
「ん？　どうした？」
「新しい患者さんが出たから、あたしそっちに行くわね。悪いけど、先に帰っててお義母さんに説明してくれる？」
「おう、分かった」
　浩介くんにへの連絡は、すんなりと終了した。
「それじゃあ篠原さん、私も行くわね」
「え!?　いいんですか？」
「ええ、どうせ休みですし、せっかくですから」
　永原先生が、軽い口調で答える。
「ありがとうございます」
　こうして、あたしたちは目的の患者が入院中の病院に直行した。

「お世話になります。新しい名前、自分で考えられる？」
　患者さんのお母さんが、動揺の色を隠せない本人に優しく声をかける。
「う、うん……もう、男に戻れないんだよね？」
　今回の患者さんは、元々気が弱くて、また声も高くて顔も女顔に近く、男らしくない自分に悩んでいたという。
　あたしは、「これからは女の子らしくを目標にしなさい」と優しく声をかけ、患者さんを説得することにした。
　こういったタイプのＴＳ病は結構珍しいらしい。
　永原先生曰く、「過去の未練を捨てられれば、気持ちを切り替えられ

やすく、案外割りきるのが早い」のだと言う。そのため、ミニスカートなどの女の子らしい服を早めに穿かせるといいとかなんとか。
このタイプの自殺率は平均より少し高いレベルだけど、今の時代ならそこまで恐れるべきことではないとのこと。
自殺率が平均以上という声に、少しだけ家族の人はぎょっとしていたけど、あたしはこれよりも数段状況が悪い患者さんを救ったこともあるのと、最近は劇的に自殺率が改善されているデータを見せてあげて、その辺は心配しないでいいとは言っておいた。
ちなみに、患者さんもあたしや永原先生のことは知っていたらしく、患者さんも第一声は「本物だ」だった。
患者さんはあたしや永原先生のことを「写真よりも美人でかわいい」と言ってくれたけど、患者さんだってあたしには負けるかもしれないけど、かなりの美人には代わりはない。

「ただいまー」
「あ、優子ちゃんお帰り。新しい患者はどうだった？」
家に帰ると、浩介くんがあたしを出迎えてくれる。
「今回は男だった時に自分は男らしくないって悩んでた子で」
「ふむふむ、また新しいタイプなんだな」
浩介くんが感心している。
「ＴＳ病にも色々あるのよ。このタイプは早めに女の子の服を着せてあげるのがいいのよ」
「ふーん、まあいいや上がってよ」
お義母さんと食材などの買い物に行く時には、浩介くんがこうして出迎えてくれることが増えた。それはあたしがしてほしいことでもあった。
あたしが嫁入りしたばかりの時とは違い、今ではあたしは篠原家の一員として家庭内の不文律を作る側にも回っていた。
それから時間が経ち、あたしたち一家の関係に、ちょっとだけ変化の兆しが現れたという意味でも合った。

## 嫉妬との付き合い方

新しい患者さんが現れ、あたしが担当カウンセラーになったことで、大学の試験勉強とも重なって久々に大忙しの日々を送った。

幸いにも、新しい患者さんはあたしと同い年なので、大学の放課後を利用して「女の子体験プログラム」を実施することができた。

ちなみに、その患者さんは成人式に行こうとして前日準備していたら倒れたとのことだったので、あたしは、家族に即座に女性ものの振袖を買うように指示し、記念撮影することにした。

患者さんは抵抗感があるとのことだったので、まずは無理せず、体験プログラムを受けてもらった。

最後の女湯に入るのは、かなりの抵抗感を示したけど、言葉巧みに誘導することで女湯に入れることに成功した。

ちなみに、1回入ってしまえばその患者さんも女性になることへの抵抗感も薄れてしまうらしい。

女湯というのは、どうもあたしが考えていた以上に「超えてはいけない一線」らしく、男の心が色濃く残っている患者さんにとっては「女湯に入っても叫ばれない」というのはかなりショッキングな体験らしいわね。

その後は、彼女も女性としての人生と、女性としての新しい名前を自分で考え、本格的なカリキュラムに入ることに同意してくれた。

彼女は、男らしくなれないと言う悩みを解決し、「今度はちゃんと女の子らしくなりたい」と、カリキュラムに前向きに取り組んでくれるようになった。

1月末には、友人たちからも、女子として受け入れてくれるようになったと言う。

ただ、患者さんの悩みとして、「最近、男友達同士の仲が悪い気がする」と言っていた。

ふふ、そこで男を惑わして、一番いい男を手にいれるのが、「魔性の女」なのよね。

やっぱり女の子としては一途に愛するのもいいけど、さくらちゃん

みたいに多くの男を手玉にとることにも、憧れがあるのよね。
もちろん、胸の奥深くに封印するべき事柄だし、今の患者さんには難しすぎるから話さないけどね。
さて、大学2年生終盤のこの時期、次なるイベントはバレンタインデーと期末試験、そして結婚記念日となっている。
講義の内容は1年生の着実に難しくなってきて、「単位を落とした」「留年しないようにしないと」といった切羽詰まった会話もちらほらと聞こえてくる。
でもあたしと浩介くんは、夫婦二人三脚で悠々と乗り越えてきた。大変なのは相変わらず実験だった。
バレンタインデーはほぼ去年と同じで、桂子ちゃん、龍香ちゃん、そして歩美さんに義理チョコをあげることになった。
ちなみに、天文部の男子は浩介くんが嫉妬するのでもちろんなし。
また家族枠として、実両親と義両親に義理チョコがあるので、義理チョコをあげる対象は7人となった。
そして何よりも、愛する旦那、浩介くんに渡す本命チョコを準備した。
今年のバレンタインは、歩美さんにとって初めて彼氏に本命チョコを与えるバレンタインデーでもある。
歩美さんが女子高生になって最初のバレンタインの時は、クラスの女子たちから義理チョコをもらってかなり困惑してしまったらしい。
義理チョコを持ってきてないと知ったクラスの女子からは、「まあ、歩美ちゃんじゃしょうがないよね」という扱いを受けたそうだ。
一方で、学校一の美少女になった歩美さんからチョコをもらえないと知った男子たちの落胆は相当なものだったらしい。
高校3年生の時は、クラスの女子向けに義理チョコは配ったけど、まだ恋愛についてよく分からなかった歩美さんは、結局男子にはチョコレートを渡さなかった。
そして、今年もバレンタインの季節がやって来たのだけど――
「あ、あの！　大智くん！」
「あ、歩美ちゃん」

女子3人があらかた義理チョコを配り終えると、今度はそれぞれ女子3人が本命チョコを天文部員全員が見ている前で渡す儀式を行うことになった。ちなみに、そうなったのも桂子ちゃんの気まぐれ。
正直、公開羞恥プレーだけど、あたしも桂子ちゃんもしなきゃいけないということでは平等ではあった。
「んっ……そ、その……うー、恥ずかしい……その、大智くん、これ……」
歩美さんは初々しい恋する乙女らしく、ハート型の包装紙に包まれたチョコレートを大智さんに渡す。
「うっ、あ、ああ。ありがとう」
パチパチパチパチ
あたしたちが拍手をすると、大智さんも歩美さんも、顔が耳まで真っ赤になっていた。
「ふー、次は私ね」
今度は、桂子ちゃんが一歩前に出る。
「たっちゃん！」
「うっ！」
桂子ちゃんは、去年夏辺りから、呼び方を「たっちゃん」に変えた。
夏休みが開けて呼び方が変わっていてあたしたちは驚いた。
達也さんは、来るとわかってるのにドキッとしてしまっている。ちらっと浩介くんにも視線を移すと、浩介くんも落ち着かない様子みたいね。
「はい、これ。バレンタインデーチョコレートよ」
「お、おう……あ、ありがとう桂子ちゃん」
達也さんが顔を真っ赤にして、ぎこちなく頷いている。
「ふふ、たっちゃんったらかわいいわ」
「うーっ！」
桂子ちゃんと達也さんのカップルは、桂子ちゃんが年上なことに加え、天文の知識については桂子ちゃんが教えたことや、達也さんの天文部への入部経緯もあって、圧倒的に桂子ちゃんが主導権を握っている。

ここでも、さっきは2人揃って顔を赤くしたのとは対照的に、達也さんの顔は真っ赤になっているけれど、桂子ちゃんは余裕綽々の表情を浮かべている。
うふふ、このまま行けば、達也さんは間違いなく桂子ちゃんの尻に敷かれちゃうわね。
「さ、最後に優子ちゃんよ」
余裕の表情でチョコレートを渡し終えた桂子ちゃんが、あたしにそう告げる。
「う、うん……」
うー、いざ自分の番になると恥ずかしいわね。
トリを引いたのは失敗だったかしら？
「こ、浩介くん」
「あ、ああ……」
あたしは、浩介くんと見つめあって目が合ってしまう。
はうー、浩介くん素敵……って、早くチョコレート渡さないと。
「その、ね。いつもありがとう、愛してるわ」
「「おー!!!!」」
何を血迷ったのか、夫婦ではないカップルに負けたくないとの思いが強くなりすぎて、あたしはついつい公衆の面前で愛の言葉を言ってしまう。
周囲の歓声はよそに、あたしは浩介くんのことを見つめ続けている。
「あの、このチョコレート」
あたしが、恐る恐る浩介くんにチョコレートを渡す。
うー、いつもより恥ずかしいわ。
「おう、開けていいか？」
「はい……」
周囲の視線も声も、気にならない。
今はもう、浩介くんのことしか見えないわ。
……そういえば、プロポーズの時も、こんな感覚だったっけ？
「ねえ優子ちゃん」

浩介くんもそれは同じだったみたいで、口に小さくハート型のチョコレートを加えてアピールする。
「はい」
あたしは、もう片方の方に口を進めていく。
そして、ハートの真ん中で、口同士が落ち合って――
「ちゅっ……じゅるっ……れろっ……」
「ぴちゅ……じゅううぅ……んんっ……」
「うわあ、大胆！　これが夫婦のなせる技か！」
あー、雑音がほんのりと心地いいわ。
「じゅるるる……ぷはーっ！」
あたしたちの夫婦生活にディープキスは欠かせないけど、バレンタインデーのディープキスは、年に一度だけ、甘い茶色が混ざった混合液の糸を作り出す。
「……」
ぷにっ
「んっ!!!」
興奮した様子の浩介くんに、胸を揉まれてしまう。
体を引き寄せられ、お尻もスカートの上からしっかりと鷲掴みにさせられる。
「あなた、そんなことされたらあたし……」
「いいんだよ、ほら、おいで……」
「はい、あなた……」

「ちょ、ちょっとストーップ!!!」
「!!!」
いきなり大きな声が聞こえてきて、あたしたちは急激に現実へと引き戻される。
胸とお尻を掴まれながら、あたしは固まってしまう。
「優子ちゃん、浩介！　ここ、天文サークルの部室よ！」
「あ、木ノ本、すまん」
「ごめんなさい、浩介くんについ夢中で」

桂子ちゃんに怒られたあたしたちは、シュンとなりながらごめんなさいをする。
そうだった、みんなが見ている前だったんだわ。
「もう、気持ちは分かるけどね。さ、チョコレートも出し終わったし、天文サークルの活動をするわよ」
「はい」
桂子ちゃんの一声で、は天文サークルの活動が再開される。
その夜、浩介くんは残ったもう一個のチョコレートを口に含んでからの夫婦生活になった。
浩介くん曰く、「いつも美味しく食べてたけど、チョコレートを混ぜて食べる味もとってもよかった」と、満足そうな表情を浮かべていた。
本当にもう、浩介くんってこういう変態チックなことを考える才能が凄いわよね。
さて、そんなバレンタインデーと共に行われた大学の期末試験は、概ね良好な手応えだった。
浩介くんは2、3点の不安があるというけど、進級等に影響はしないだろうと読んでいる。
あたしたちは、残りの単位数からして、来年度はこれまでより多くの履修は必要ないと踏んでいた。
もちろん、来年度は専門科目中心となって、卒業論文を除く全ての講義の受講が解禁される。
必修科目や選択必修は大分終わっていて、むしろ自由な選択科目に悩む時期になっている。
とはいえ、来年度の卒業論文は、蓬莱教授の指導もあるから、3年次のうちに多く履修するのも手だけどね。
大学の成績の判断には、ＧＰＡというのがあるので、「単位を多目に履修して取捨選択する」作戦も使いにくい。
なので、予備の講義を履修するのは4年次のラストにとどめておきたい。最も、あたしたちの場合は「蓬莱の研究棟」への所属がほぼ確定しているから、気にしなくてもいいんだけどね。やはり世間体というのがあるもの。

「それで浩介くんはこっち受ける？」
「ああいや、こっちはあんまりかなあ？」
期末試験が終われば、もう3年次の講義を読み漁る時間になる。
もちろん、応用的な講義がほとんどになるから、勉強も大事になってくるんだけど。
「こんな所かな？」
「うん」
浩介くんと2人で履修科目を確認する。
結局のところ、あたしと浩介くんはいつも付きっきりになる。
実験では2人以上でペアになることも多いが、蓬莱教授以外の教授での実験では、あたしは浩介くん以外の男子と実験を組むことが多い。
この学部は元々女子学生が少ないせいもあるけど、実験でちょっとでも親しそうに話すと、浩介くんが嫉妬しちゃうのよね。
「優子ちゃん、今日提出のレポートはどうだった？」
「うん、相方の人の実験結果も入力して、全部うまくいったわよ」
「ああ、そうかい！」
浩介くんが、また不機嫌になる。
ふふ、浩介くんったらまた焼きもちやいちゃって。
浩介くん自身は、「行きすぎていると思うし、直したいとも思っているけど、やっぱり優子ちゃんが好きすぎてどうしても嫉妬してしまう」とのことだった。
浩介くんがそう思ってくれてるのはとても嬉しいので、あたしはついついもっと嫉妬させるようなことを繰り返してしまうのよね。
まあ、あたしがそういうのを期待しているのを見越して、浩介くんがわざとやってるかもしれないけど。
ともあれ、これにはデメリットも当然あって――
「もう我慢ならんぞ！　旦那がいながら他の男に色目使いやがって！」
「あ、あたし、そんなつもりじゃ――」
「ええい、優子ちゃん、おしおきだ！　ついて来い！」

いつものように、嫉妬した浩介くんに引っ張られながら、薄暗い空き教室に連行される。
これからされるおしおきというのが――
「優子ちゃんは俺だけのものだってことを教えてやる！」
椅子に座った浩介くんの膝に、うつ伏せの状態でお腹をのせられる。
いわゆる「おしりペンペン」の体勢でもある。
「うー、ごめんなさい。もうしませんから許してー！」
「何度目だ!? 今日という今日は許さんぞ！」
「うわーん！ ごめんなさいー！」
このやり取りは、悪代官を泳がせて一通り懲らしめた後に印籠を突きつけて断罪する某時代劇並みの定型文と化している。
やっぱり、浩介くんも浩介くんで、「嫉妬して欲しい」「浩介くんに支配されたい」というあたしの気持ちを読んでやっているのかもしれないわね。
ふぁさ
浩介くんにスカートをめくられ、パンツ丸出しにさせられてしまう。
「あーん、恥ずかしいよお！」
これだけでは、絶対に慣れることはない。これからも恥ずかしい思いをしそうだわ。
「それ！ おしおきだ！」
さわっ！
本来は、ここで思いっきりお尻を叩かれるわけだけど、浩介くんもそれはいけないと分かっているので、あたしの被虐願望を満たすためにお尻をパンツの上から撫でられることで、ペンペンの代わりとしている。
「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいー！」
ある意味で、叩かれるよりも恥ずかしさが強い。
「反省が足らんぞ！」
すりすり

「うえーん、ごめんなさい。もう許してー！　お願い！」
恥ずかしさに耐えられなくなったあたしが許しを乞う。
浩介くんにスカートをめくられるのは、もう１００回は優に越えていると思うけど、何回めくられても慣れるものじゃないし、それどころか最近は以前にも増して、恥ずかしさを強く覚えるようになった。
「反省してるか⁉」
「はい」
浩介くんが、ようやくあたしを解放してくれる。
「ふう、このやり取り、何回目だろう？」
「あはは……」
浩介くんも浩介くんで、やはり定型化していることは気になる様子みたいね。
だからあたしは、これだけは伝えておきたい。
「あのね、浩介くん。どんなにやり取りが定型化してもね。スカートをめくられて、パンツ見られちゃうのはすっごく恥ずかしいわ」
あたしが、顔を赤くしてそう告白する。
「お、そうなのか。確かに、恥ずかしがる所かわいいもんな。優子ちゃん、やっぱり俺を嫉妬させて楽しんでるでしょ？」
「……ばか」
浩介くんも浩介くんで、あたしの気持ちはお見通しだった。
「へへ、だてに優子ちゃんと４年もいないって。俺だって優子ちゃんが喜びそうな嫉妬の仕方を考えているんだぜ」
やっぱり、そうだったのね。
「あはは……４年かあ……もうすぐ結婚記念日なのよね」
「ああ、去年は制服着たっけ？」
「うん」
去年の結婚記念日のデートのことを思い出す。
あれからもうすぐ１年、長いようで短く、短いようで長かったわ。
「今年は……家の中にするか」
「そうね」
あたしたちは、結婚記念日の日のことを話しながら、大学２年生を

無事に終えることができた。

春休み中に訪れた結婚2年目の日、この日はどうしても、昔を振り返ることになる。

今年もまたあたしは特に意味もなく、小谷学園の卒業証書を見ていた。

そこに書いてある宛名は、「石山優子」、そして、あたしが実家から持ってきた机の奥にあった、1年生の頃の教科書とノート、そこには「石山優二」という名前が、今も残っていた。

あたしは財布から学生証を取り出すと、中には「篠原優子」と書かれたのが見えた。

結局、今のあたしが最初の名前から受け継いだ文字は、「優」だけだった。

でも、この文字があたしの名前の中で、最も大きな意味を持っていた。

何故なら「優しい人に育って欲しい」という願いがこもっているから。

優一は、「一番優しい人」に、これは無理だったけど、「優子」は、「はじめから終わりまで、優しい子に」にという願いが込められている。

あたしは、多分優しい子に、少し離れていると思う。

「優子ちゃーん！　準備できたぞ！」

「はーい！」

あたしは浩介くんに呼ばれ、かつての思い出を元の場所に戻してから、部屋を出る。

毎年この日は、昔を振り替えることになるとは思うけど、あたしは今が一番幸せだと分かっているから、「昔に戻りたい」とは思わない。

今日のこれからは、また温故知新を繰り返していくことになると思う。

結局今年の結婚記念日は、ロウソクをまた燃やしたことよりも、その夜の制服プレイがとっても激しかったことがいつまでも印象に残り続けていた。

# 国際反蓬莱連合

「優子ちゃーん！　準備できたか⁉」
「うん、大丈夫よ！」
２０２１年４月、大学３年生の生活が始まって２週間が過ぎた。
新しい講義は難易度も上がっていて、本格的に専門的な科目を学んでいるという気持ちが嫌でも身に付いてくる。
一方で、蓬莱教授の研究は、再び行き詰まりを見せはじめていた。
と言っても、何百歳の薬の記者会見を小出しにするのはよくないと言う戦略的判断から、次の目標が一気に１０００歳になったのもあるけどね。
でも、もう一つのブレイクスルーが必要なのは確かだと思う。
「間もなく――」
「よっしゃ、ついたな」
「うん」
あたしたちはいつものように電車を降りて、大学の最初の講義の教室へと進んでいた。
「おい！　出てけ!!」
「Ｗｅ　ａｒｅ…　Ｗｅ　ａｒｅ…」
いつものように講義を受けようと所定の場所に向かって歩いていたら、何やら罵声のようなものが聞こえて来た。
「ねえあなた、あれ一体？」
浩介くんの顔を見ると、かなり驚いた顔をしていた。
多分あたしも同じ顔をしていると思う。
「蓬莱さんの研究棟の前だよな？」
蓬莱の研究棟の前で、２つの集団が罵りあっていた。
どうも、雰囲気がただの罵り合いとも違うわね。
「浩介くん」
「ああ、大丈夫だ」
浩介くんが、あたしの前に出てあたしを守ろうとする。
やっぱり男の子よね。

「あ、篠原夫妻じゃん！」
「本当だ」
あたしたちを見ると、他の学生たちもざわついていた。
よく見ると、もうひとつの集団は外国人の集団で、先頭で対峙していたのは和邇先輩だった。
「あれ？　和邇先輩じゃないですか」
「あ、篠原さん。お久しぶりです」
和邇先輩は留年したわけではなく、蓬莱の研究棟に入って、今年から大学院修士1年に入っている。
「これは一体どうしたんですか？」
かなり攻撃的な集団で、明らかに学生という感じではない。
「どうしたもこうしたも、こいつら、行きなり現れて研究棟の前で大声をあげはじめたんですよ！」
和邇先輩も、かなり怒った様子で興奮しているのが分かる。
「Ｈｅｙ！　Ｈｅｙ！　Ｄｏｎ’ｔ　ｉｇｎｏｒｅ！　Ｄｏｎ’ｔ　ｉｇｎｏｒｅ！」
あたしたちが相手を無視して会話していると、向こうから「無視するな」という罵声が飛んでくる。
仕方ないので、和邇先輩がもう一度あたしたちから向こうに向き直る。
「Ｄｒ．Ｈｏｒａｉ　ｉｓ　ａ　ｃｏｗａｒｄ！」
相手列の先頭に立っていた男が、「蓬莱教授は卑怯者」と罵っている。
もう意味が分からないわ。
「Ｗｈｙ!?」
それに対して和邇先輩が負けじと応戦する。
「Ｈｅ　ｉｇｎｏｒｅｄ　ｏｕｒ　ｐｒｏｔｅｓｔ．」
えっと……この人達、「蓬莱教授は我々の抗議を無視した」と言いたいらしいわね。
言ってることが中学レベルの英語で助かったわ。
「とにかく、ここは大学ですから、学生の迷惑になることは慎んでもら

いましょうか？」
　あたしが、日本語で応対する。
　英訳したらどうなるかは知らない。
「Ａｈ!?　Ｗｈｙ　ｄｏｎ’ｔ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ？　Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　Ｊａｐａｎｅｓｅ．」
　……何よこの人、「何で英語で話さないんだ。俺たち日本語わからねえんだぞ。」って、いくらなんでも横柄すぎるわ。
　それはここが日本だからとしか言いようがないわよ。
　よし、ここはフランスを見習って、意味は理解できるけど英語を無視して日本語で応対し直すことにしよう。
「それはここが日本だからよ？　まさか世界中どこ行っても英語が通じると思っているのかしら？」
「……」
　あたしが攻撃に動じないのを見て、列の先頭にいた男も黙り込んでしまう。
　ともあれ、あたしたちだけでは収拾がつかないのが明らかね。
「和邇先輩、警備員を呼んでください」
「いや、もうとっくに呼んだよ。手がつけられないってことで……お、噂をしたら来たぞ！」
　和邇先輩がそう言うと、数人の人の駆ける音が響いてきた。

「ここですか？」
「違法な抗議活動を繰り返してやめないので、蓬莱教授の要請です。建造物侵入の現行犯でお願いします」
　どうやら、呼んだのは蓬莱教授だったみたいね。
「……分かりました」
「Ｗｈａｔ!?　Ｗｈａｔ!?　Ｗｈｙ!?　Ｗｈｙ!?」
　和邇先輩が現行犯逮捕を要請すると、警察官の制服を着た３人のお巡りさんが、警備員さんと共に主犯の男を建造物侵入で現行犯逮捕する。

「Ｉｔ ｉｓ Ｕｎｆａｉｒ ｒｅｐｒｅｓｓｉｏｎ！ Ｎｏ！ Ｎｏ！ Ｎｏ！ Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!」
その間、抗議者たちは英語でよく分からない呻き声をあげていたけど、あたしたちは無視することにした。気にしていたら身がもたないわ。
「さ、講義に遅れないうちに、早く行こうぜ」
浩介くんも気持ちを切り替えて、あたしに講義の場所まで誘導してくれたけど。
「うん、そうね」
最も、この日の最初の講義は蓬莱教授だから、事情を説明すれば問題ないと思うけど。

「優子さん、浩介さん、今朝は災難だったな。まあ、いきなり変な抗議をしてきた奴らが全面的に悪い以上、俺が謝ったところでどうしようもないとは思うが」
講義が終わった後、蓬莱教授があたしたちに今朝のことを話題に出してきた。
ちなみに、講義の冒頭でも、「抗議者については、現在調査中」と言っていた。
「蓬莱さん、どうして突然抗議者が現れたんですか？」
浩介くんが、最初に質問をする。
あたしもそれが知りたいわ。
「ああ、以前から宗教団体を中心に海外の連中も俺の研究所に抗議文を届けていたんだが……いちいち構ってたらとんでもない時間のロスになるからって、無視し続けてたらああなった」
「なるほどねえ」
まあ、無視するしか無いよね。
「今のところ、例の牧師との繋がりを示す証拠はないし、まあ実際陰謀めいたことは無いとは踏んでいるよ。それよりも問題なのは、宗教全般との対決だ」
蓬莱教授は、何かを考えている。

恐らく、話すと長くなってしまうことなんだと思う。
「あー、この続きは、また後でいいかな？　研究に戻らないといけないからな」
「はい」
ともあれ、今はやり過ごすことにしよう。
あたしたちは、次の講義を受ける頃にはさっきの話も頭の片隅程度に置いておくことに成功した。

「悪い、宣伝部から呼び出しがかかった。優子ちゃん、先に帰ってていいよ」
放課後、浩介くんが蓬莱教授の宣伝部に呼ばれた。
「ううん、あたしも聞いておかないと」
「あーそうだったな」
協会の広報部長になって3年目、あたしの仕事で最も多いのは、協会と蓬莱教授との間の橋渡し役で、明日の会失脚以降は、積極的な宣伝活動は殆ど行っていない。
たまに幸子さんと歩美さんの任意も含め、蓬莱教授の宣伝部にヘルプという形で行く程度だ。
今朝、蓬莱の研究棟に外国人の集団が抗議に現れたことについても、永原先生たちにすぐに情報を共有させなきゃいけない。
なので、浩介くんが宣伝部に呼ばれたら、なるべくあたしも同行しておきたい。

「おお、2人ともよく来た。早速宣伝部の集めた情報をまとめよう」
蓬莱教授があたしたちを歓迎してくれた。
「はい」
「結論から言えば、アメリカに本部を構える『国際反蓬莱連合』とでも言うべき集団によるものだと分かった」
「国際反蓬莱連合？」
蓬莱教授が何やら良く分からない単語を述べる。
「原文だと『Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　ａｎｔｉ　Ｈｏｒａｉ

ｎｅｔｗｏｒｋ』って言うらしい。件の牧師もそこの会員と思われるが、警察の話では今の所は今日の抗議活動で奴の関与は確認されていない」
何かシュールな名前よね。
それにしても、蓬莱教授に対抗する国際ネットワークって……まああたしもいつかはできるとは思っていたけど。
「ちなみに、連中の活動は、俺の寄付金には影響は与えていないぞ。むしろ最近でも、寄付金は増えている」
まあ、そうよね。
経済誌の資産家ランキングでも徐々に上に上がっているらしいし。
「しかし、漢字なら7文字で済むのに、英語だと長ったらしいな」
浩介くんが別の着眼点から話す。
なるほど、つぶやきサイトが日本ではやるわけよね。
「長い名前はまあ、色々煙に巻く効果があるのさ」
蓬莱教授がそんなことを言う。
「7文字だと最初の『Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ』も書けないわね」
「まあ、それはあまり重要な話ではない。ともかく、だ。今回の事件は連中が迷惑をかけたと言うことになる。だから俺たちはその事を強調し、最終的に警察を呼んだということにするんだ。浩介さん、頼めるかな？」
「分かりました」
浩介くんが蓬莱教授から指示を受ける。
恐らく、他の宣伝部も今頃同じ事を行っているんだと思う。
「あたしも、今夜テレビ電話で永原会長に連絡しておきます」
「ああ、そうしてもらえると助かる」
蓬莱教授の表情が、少しだけ柔らかくなった。
ノーベル賞学者とは言え、政治家でもない個人を糾弾するためにわざわざ国際組織が作られた。
いよいよ持って蓬莱教授の影響力が世界に広がってきているというわね。
「それから、宣伝部としても、そろそろ英語の宣伝活動家をそろそろ雇

いたい。あーもちろん、現地にも俺を擁護してくれる在野の人は多いが、やはり数人程度はこの研究棟に置いておきたいんだ」
「はい」
「ひとまず、大学で英語を勉強している学生たちに声をかけてみることにするよ。あー、俺は研究で忙しいからな。さ、忙しい所、いつも悪いな」
「いえ、これも仕事ですから」
あたしの広報部長としての仕事、報酬は殆ど出ていないが、浩介くんとの寿命問題の解決がなされるということを考えれば、安いものだわ。
「そう言ってもらえると、本当に助かるよ」
蓬莱教授が英語の宣伝部創設の話をして、今回はお開きになった。

翌日、インターネットの動画共有サイトに、例のトラブルの様子を撮影した動画がアップロードされていた。
表題は「不法滞在者の違法抗議！　最後は警察につまみ出される」とある。
実はこのメンバーのリーダー格の男は、自称「国際反蓬莱連合日本副支部長」で、短期ビザで超過滞在、つまり「オーバーステイ」の状態で、あの後入管法違反容疑で入国監理局に引き渡されたらしい。
蓬莱教授が入国監理局に聞いた話では、近く強制送還になるらしい。本当、迷惑な人だわ。
動画には親指を立てた「Ｇｏｏｄ」評価が多数ついていて、最も評価が高いのは、「厚かましい！　不法滞在の上に他人の科学研究に抗議、しかも学生まで迷惑かけるとか。祖国に帰ってどうぞ」というものだった。
また他にも、「動画に出てくる黒髪の巨乳がかわいすぎる」というもので、こちらは、「残念、彼女は篠原優子ちゃんって言って、旦那がいる既婚者なんだ」という返信がつけられていた。
ちなみに、反蓬莱連合側も英語で動画をアップロードしていたので見てみると、最後の警察を呼ばれる下りがカットされていた。

こちらの動画は低評価が大量につけられていて、高評価の3倍にも上っていた。
英語でのコメントも似たようなもので、大学に行きなり土足で入り込んで学生たちを恐怖させたことに非難が集まっていた。
そしてこちらでも、「12歳の幼い顔に超巨乳のこの女の子かわいい」という書き込みと、「悲しいことに彼女は人妻何だぜ」という英語の書き込みがあった。
……あたしも、かなり有名になったものだわ。

「昨日午前9時頃、佐和山大学に立つ蓬莱伸吾教授の研究棟の前で、無許可で敷地に入り込み、集団で恫喝的抗議に及んだなどとして、不法滞在のアメリカ国籍の男を含む12人が、建造物侵入などの疑いで現行犯逮捕されました」
そしてその夜、この顛末がテレビのニュースにもなった。
「逮捕されたのは、自称『国際アンチ蓬莱ネットワーク日本支部副支部長』の――」
ニュースは淡々と、起きた事実と、動画共有サイトで流れた映像を使っている。
「――容疑者につきましては、入国期限が過ぎた後も不法滞在を続けたとして、昨日入国監理局に身柄が移送され、近く強制送還される見込みとなりました」
やはり、強制送還というのは、間違いないわね。
「なお、被害者の蓬莱教授は番組の取材に対し、『全く迷惑な抗議であり、以前から私の研究所にも嫌がらせのような抗議文が大量に届いている』と述べました……では、次のニュースです――」
既存のマスコミ各社も、蓬莱教授を全面的に擁護し、またパネリスト達も抗議者側を避難する声で埋め尽くされていた。
明らかに相手側に全面的に非がある上に、マスコミ各社も蓬莱の薬の非融通の恐怖があるとは言え、抗議団体側の言い分を伝えたメディアは一切無く、かなり凄まじいことだと思う。
あたしたち協会や蓬莱教授を、例の牧師も含めて印象操作で批判し

ていた3、4年前と比べると、まさに「隔世の感」という言葉がぴったりだった。
また、「国際反蓬莱連合」の公式サイトの抗議団体の声明を見た浩介くんによれば、「我々の抗議の声を握りつぶした蓬莱教授こそ非があり、蓬莱教授こそ謝罪すべきだ」ということらしい。
「これは、政府との連携を早めるべきかもしれないわね」
寝る前の1人自分の部屋で、そう考える。
反蓬莱連合のメンバーは、あたしたちの活動の成果もあって日本人は少ないらしいけど、外国では無視できないロビー団体になっている可能性もある。
そうなれば、いかに蓬莱教授といえども押しきるのは難しいかもしれない。
元々薬が現実化すれば政府との接触は必要不可欠になる。
だから今のうちに、話しておいた方がいいかもしれないわね。

「そうだな、反蓬莱の勢力が強まる前に、政府と良好関係を築いた方がいいかもしれん。今までは俺もあまり政府の力を借りるとしがらみを受けると思って敬遠していたんだが、このままでは国際的にはジリ貧に追い込まれる危険性もある」
翌日、あたしたちの話を聞いた蓬莱教授は、腕を組んで唸っていた。
「俺の当初の予定ではもう少し後に政府との関係を築こうと思っていたんだが、前倒しをした方がいいだろう」
自分達の本部にまで抗議活動が迫ってきた以上、政府とのパイプは早めに築いた方がいいのかもしれないわね。
政府とのパイプと言っても、いきなり総理大臣の予定を開けられるわけではないし、それに総理大臣の予定は逐一公開されている上に人目につくということで、まずは内閣官房副長官あたりと接触することにした。
「うまく行くかしら？　政府との接触」
研究棟から出たあたしは、早速浩介くんと政府対蓬莱教授の話をする。

「さあな。だが政府側だって、蓬莱さんとのパイプは築きたいだろ？」
浩介くんは、あくまでも楽観的に物事を考えている。
「うん、そうよね」
今回の抗議活動は、結果的に反対派側の首を絞める結果に、少なくとも日本ではなっている。
海外の反応でも、ざっと見た感じでは抗議者側の傍若無人な振るまいが非難されている。
とは言え、本当のところは分からない。
国レベルで蓬莱の薬を拒否する所が現れれば、国際社会は大混乱に陥る危険性がある。
反蓬莱国が多くなった場合、状況によっては、「俺たちが蓬莱の薬を拒否したから、お前たちの国も拒否しろ」という内政干渉を受ける危険性もある。
そうなったら、いくら蓬莱教授でも押し通すのは苦しい。
「とは言え、内閣府との接触だけでは不十分だと俺は思う」
蓬莱教授は、内閣府との接触を試みていた。
「うん、少なくとも外務省と、厚生労働省、経済産業省との接触は必要よね」
他にも、政府ではないけど経団連のような経済団体や、蓬莱の薬で損失を被りそうな企業の人にも、再就職を斡旋しないといけない。
ともあれ、あたしたちが出来ることはそんなに多くない。
今はとりあえず、蓬莱教授と政府の出方を見守るしかないわね。
調整にも時間がかかると思うし、しばらく様子を見守ることにするわ。

# 政権との交渉　前編

「え!?　あたしたちも!?」
「ああ、明日の昼、ちょうど優子さんたちが早い時間に講義終了になっていると思うから……実は総理大臣が直々に来てくれるとのことだ。ただ、次回以降からは代理で官房副長官とのことだったが。ともあれ、優子さんたちにも来て欲しい」
あれから数日後、世間はもうすぐゴールデンウィークという季節。
あたしたちは蓬莱教授の口から、驚きの情報を聞いた。
何と、あたしたちは総理大臣と直接協議することが出来るようになったということで、蓬莱教授としても予想外だった。
もちろん、公開される総理大臣の動静をどうするかと言う問題はあるけど、蓬莱教授としてもあたしたちとしても、もちろん願ったりかなったりだわ。
政府だって蓬莱の薬については、極めて強力な劇薬になることは分かっている。そのためにも、蓬莱教授とは密に連携し合うことが重要になるのだろう。
「今回は永田町にこちらから乗り込むことになった。政府側が動いていたら、怪しむ人間もいるからな」
「分かりました。それで服装は？」
総理大臣と会うわけだから、ちゃんとしていないといけない。
「永田町に行く時だけ着替えてくれれば大丈夫だ」
蓬莱教授によれば、今話しているこの部屋で着替えてくれればいいとのことでよかったわ。
「当日はブライト桜の高島さんに、永原先生も来ることになっている。政府側も総理大臣だけでなく、蓬莱の薬に興味を持っていた議員たちが法整備に向けて超党派で集まりたいとのことだった」
そう、あたしたちＴＳ病患者には、年金分の税金がなくなるみたいに、不老化が一般にも浸透すれば、社会保障費が大幅に減るため、大減税が予想されるだろう。
そういうこともあって、立法行政による協議は急ぐ必要がある。

「……それにしたって、どうしてあたしたちが？」
そんなとんでもない場所に、大学生のあたしたちは明らかに場違いだと思う。
公聴会だって、呼ばれるとしたら蓬莱教授と、せいぜい５０３年の人生を聞くために永原先生が呼ばれる可能性があるくらいだ。
「優子さんたちは、言わば広告塔でもあるし、俺達と協会とのちょうど両方に所属する人だ。その事を、政府にも話す必要がある」
「……分かりました」
とにかく、行っていいなら行って損はない話だ。
何分、大学生が現役の総理大臣に直接会えるなんてそんな機会は滅多にない。
「うむ、ともあれ、明日は頼んだぞ。あーこの事は協会にも共有してあるから、心配は要らないぞ」
「「はい」」
ともあれ、明日のことは義両親にも話さないといけないわね。

「え!?　総理大臣と会うことになった!?」
家に帰って、食事中にそのことをお義母さんに話すと、予想通り大きな声で驚いている。
「蓬莱教授がらみで、やっぱり政府も水面下で動いていたのか」
お義父さんは、平静を装っているけど、内心は驚いていることは間違いないわね。
「ええ、超党派の議連も出来ていたらしくて、彼らと政府で協議するってことで、政府に正式に呼ばれたわ」
「そう……何だか優子ちゃんが遠い存在になっちゃったわね」
お義母さんが、少しだけため息混じりにそんなことを言う。
確かに、一般の人が総理大臣に会うことはほぼ無いと言っていいものね。お義母さんがそう思うのは無理もないことね。
「大丈夫よ。あたしは、この家を出るつもりはないわ。こんなに優しい姑さんだもの」
あたしは、あえてお義母さんを「姑さん」と呼ぶ。

遠くに行くと言っても、家族とは一緒だもの。
「ふふ、ありがとう。でもそういう意味じゃないわよ」
「あーうん、分かってるわ。でも確かに、あたしたちも、この街にずっと住んでいるのに、遠くに行ったような気もするけどね」
それは多分、あたしがＴＳ病になってから、明らかに世の中そのものが大きく動いているせいかもしれないわね。
「例えば何があるの？」
お義母さんはまだ興味津々だった。
「成人式の時も、恵美ちゃんを狙ってたマスコミが、あたしたちを見るなりカメラをしまっていたし」
「ああ、俺たちはどうやら、優子ちゃんとの寿命問題を解決したいがために、権力側の人間になってしまったらしい」
あたしの言葉に対して、浩介くんがしみじみとした感じで付け加えるように言う。
「でも、昔より権力へのネガティブイメージも減ったわよね」
お義母さんが面白いことを言う。
「うん」
確かに最近の小説では、主人公や正義の味方が権力側の人間ということも多く、反権力的な作品が減少傾向にあると言う。
それはつまり、権力に対するネガティブイメージが減ったか、あるいは反権力に対するネガティブイメージが根強くあるのかのどちらかと言うことになる。
これまでは、権力側ヒーローと言えば江戸時代という太平の時代を舞台にした時代劇が多かった。
それは将軍本人だったり、町奉行だったり、あるいは御三家の隠居だったりと同じ権力側ヒーローでも地位は違ったりするけどね。
「じゃあ、あたしは部屋に戻るわね」
ご飯を食べ終わり、食器を片付け終わって言う。
「ま、ともあれ総理大臣に会うなら、しっかりした格好でいかねえとな」
「ええ」

「よく分からないけど、頑張れよ」
お義父さんがあたしを応援してくれる。

あたしは、クローゼットから入学式以来のレディースーツを出す必要性に迫られた。
とにかく、明日に備えないといけないわね。多分、サイズは変わってないと思うけど一応試着しないといけないわね。

翌日、あたしたちは大学が終わったら一旦家に戻ってから、着替えることにした。
蓬莱教授とは一番前の車両で待ち合わせることになった。
「よし、これでＯＫね」
あたしは鏡を見て、身だしなみが乱れていないかを確かめる。
ともかく総理大臣に会うということになるので、緊張がすさまじく、大学の講義に集中するのも一苦労だった。
それは、隣で講義を受けていた浩介くんも同じだった。
「あなたー、行くわよー」
「あいよー」
あたしは浩介くんを呼んで、玄関に出る。
履く靴もいつもと違う。
「ちゃんと持ち物持った？」
あたしもきちんと確認をする。
「うん、大丈夫よ」
さすがにお義母さんも、いつもより心配性な様子を見せている。
「じゃあ行ってくる」
「行ってらっしゃーい」
お義母さんに見送られ、あたしたちは再び電車に乗る。
「蓬莱教授は一番前って言ってたわね」
「ああ」
いつもよりも長い距離を歩きつつ、ホームの端を目指す。
「結構歩くわね」

電車１両で２０メートル程度だからホームの端は結構かかるのよね。
「ああ、やっぱり編成が長いとホームも長いよな」
身近な場所だけど、足を踏み入れることはほぼない。近くて遠い場所と言ってもいいわね。
「間もなく――」
駅の放送とともに電車が来て乗り込み、そして大学の最寄り駅につく。運転士さんの運転の様子も見えるのが、何だか新鮮だわ。
そして、大学の最寄り駅のホームには、蓬莱教授と瀬田助教、そして永原先生がいた。
「篠原さん、こんにちは」
「お久しぶりです、永原会長」
永原先生とは、もちろん今でも協会での付き合いがある。むしろ、先生と生徒の関係よりも、協会の会長と正会員という関係の方が、ずっと長いのよね。
それでも、小谷学園にいた時のように、毎日のように顔を合わせるということはなくなった。
「お、ちゃんと集合場所と時間を守ってくれてよかった」
「蓬莱さん、俺たちも子供ではないですから」
「おっと、そうだったな」
浩介くんのとりなしに対して、蓬莱教授が軽く微笑む。
「さて、真面目な話だが――」
蓬莱教授が電車の中で作戦会議を始める。
とは言っても、隠語を多用しているけど。
「それで、あっちの方は何て？」
「まだ分からない。ただ、不老技術の大衆化が必要であると言う点には、同意してもらわないと困るな」
ともあれ、総理大臣がどう思っているかが大事よね。
「うん」
ともかく、蓬莱教授は、この薬を一部の人間だけに行き渡らせることをかなり避けようとしている。

とは言え、この薬は社会の変革を伴うためいきなり安い値段で売れば、急激な社会変化に大きなリスクを伴うことになる。
そのため、最初は高額で売り付け、その後段階的に値下げするようにするのが妥当だけど、その程度が重要になってくる。
「その辺り、政府側がどう考えているか？　見物だな」
「うん」
もしそこで、政府と一悶着あったら大変だわ。
また、蓬莱教授は暫定措置がそのまま既成事実になってしまうのも恐れていた。
永原先生は「東日本大震災のＢＲＴがいい例ね」と言っていた。
「次は、霞ヶ関、霞ヶ関です――」
「よし、降りるぞ」
霞ヶ関駅に間もなく到着することを確認し、あたしたちは瀬田助教を先頭に霞ヶ関駅を出た。
「えっと、内閣府はこっちかな？」
永田町と霞ヶ関と言えば、日本の政治の中枢で、この永田町、霞ヶ関、三宅坂一帯には国会議事堂や各省庁、議員会館に最高裁判所や国会図書館、政党の本部や国立劇場などが存在する。
「久しぶりね。ここも」
永原先生が、懐かしそうに話す。
「永原先生がここが？」
「ええ、江戸の大名屋敷が連なってた頃から、見てきたわ」
永原先生は、戦国の人であると同時に、最古参の江戸っ子でもある。江戸時代はほぼずっと、この街からでなかったものね。
今のこの場所は、政治的中枢としての顔しかあたしたちは知らないけど、それ以前の顔を、永原先生は知っていた。
霞ヶ関駅を出てあたしたちは約束の場所である首相官邸を目指す。
ちなみに、高島さんは別行動で、既に到着していると言う。
「まさかこんなに早くここに来れるとは、思ってもみなかったな」
蓬莱教授も、予定よりも研究は進んでいるらしいわね。
「ええ、私も、ここが首相官邸になってからは、来るのははじめてだわ」

永原先生と蓬莱教授はしみじみとした様子で語る中、あたしと浩介くんは緊張しすぎて体が固くなってしまっている。
「ふう、総理大臣との面会を予約した佐和山大学の蓬莱伸吾だ。通してもらえるか？」
蓬莱教授が門の前に立つ警備員さんに声をかける。
「はい、お話はうかがっております。身分を証明できるものはありますか？」
「分かった」
蓬莱教授が財布を取り出し、警備員さんに何かを渡す。
警備員さんはじっとそれを見つめている。
「ありがとうございます。そちらのお3方も、よろしくお願い致します」
「「はい」」
あたしと浩介くんは学生証を、永原先生は運転免許証を取り出していた。
ちなみに、永原先生によれば、自動車は危険なので免許を取った最初の1年も運転してないらしい。
永原先生は、「路上教習中は生きた心地がしなかった」とも言っていた。
「はい、了解です。こちらへどうぞ」
門を開けてくれた警備員さんの誘導で、あたしたちは首相官邸の中へと進む。
ニュースのテレビカメラでも、外観しかほとんどみないその建物の内部は、驚くほどに静まり返っていた。
「こちらです」
警備員さんにまっすぐ通された部屋、そこは小さなホールのような明るい部屋だった。
「ここって――」
「ほう、ここで会議するわけだな。ところでブライト桜以外のメディアの取材は来ないのか？」
蓬莱教授はまだ冷静に話している。

「極秘と言うことおになっております」
警備員さんも、かなり丁重に接してくれている。よく見ると、テーブルの上に名前が書いてあって、「篠原優子」の文字も見えるのでその場所に座った。
何だか、雰囲気的には蓬莱教授の方が上座っぽい感じさえするわね。
「分かった」
そして、中で暇そうに座っていたのが――
「高島さん、お久しぶりです」
「おう、皆さんも到着されましたか」
高島さんの隣には、いつぞやのカメラマンさんも座っていた。
「あれ？　そちらの方――」
「お久しぶりです。今はブライト桜で国会の記者クラブに所属しています」
永原先生がそう言いかけると、カメラマンさんが自己紹介してくれる。
「そうですか、また会えたのも何かの縁ですね」
そう、あたしと永原先生が、高島さんと初めて取材をした時にいた人だった。
「あ、もうすぐ総理がいらっしゃるとのことです」
「おっと」
全員で立ち上がり、総理大臣を迎える準備をする。
本来はあたしたちがお客さん的な立場だけど、やっぱり総理大臣ともなると話は別よね。
「お疲れ様です」
「お疲れ様です」
すると、かなりまとまった数の男女の集団が足音を鳴らしてこちらに向かってきた。
先頭には、ニュース番組やインターネットで毎日のように見る、総理大臣の顔の男性だった。

「蓬莱先生、お忙しい中、よくいらっしゃいました」
「いえ、総理こそ。お忙しい中、よく予定を開けてくださいました。感謝します」
蓬莱教授と、総理大臣がお互いに挨拶をする。
「あ、皆さんお座りください」
「「はい」」
総理大臣に促されあたしたちも席に座らせていただく。
テーブルには紙コップとお茶があったので、遠慮なく注がせてもらう。
「ではですね、私の自己紹介は説明不要でしょうから、各議員の皆さんの紹介をして参りたいと思います。まず私の隣に座っておりますのが――」
総理大臣と共に入ってきたのは、ニュースで見る人々ではなかった。
聞くところによると、件の議員連盟所属の議員と言うことで野党の議員もここに呼ばれているらしい。
思いの外、女性議員の参加が多いわね。
「今回野党の皆さんにもご協力いただきまして、蓬莱の薬の今後について、話して参りたいと思います」
「あの、野党と言いますと、与党の妨害が仕事にも思えるんですけど」
永原先生がいきなり核爆弾を放り込んだ。
とは言え、永原先生は一般国民だ。
永原先生の爆弾発言で凍りつきそうだった空気も、会場が少しだけ笑いに包まれるだけで何とか収まった。
「あー、まあそう言う人もいると思います。その辺りは確かに、我々の不徳の致すところではあるんですが……蓬莱の薬というのは、私たち女性議員にとっては党派や党利党略といったことを超越して、何としても欲しいものなんです」
「ええ、私もです」
女性はいつまでも美しく女性らしくありたい。
それは、国会議員になっても同じだったというわけね。

「えっと、とりあえずこちら側も自己紹介しておきます。俺の自己紹介は不要だろう、まずは俺の隣に座っている『瀬田博』さん、俺の大学で助教をしつつ、研究を手伝ってもらっている」
「瀬田と申します、よろしくお願い致します」
　パチパチパチパチ
　瀬田助教が立ち上がると、国会議員や総理大臣から軽めの拍手が舞い起こる。
「こちらが、『永原マキノ』先生です。小谷学園で高校の教諭を本業としつつ、日本性転換症候群協会の会長を務められています」
「永原マキノです、本日はご招待ありがとうございます」
　パチパチパチパチ
「永原先生はですね、ご存知無い方もいらっしゃると思いますので紹介させてもらいますと、日本性転換症候群協会、つまり俺が不老研究をするに当たって基礎となる遺伝子を提供していただいています。永原先生は人類最高齢の方でして、西暦で言うと１５１８年生まれですから、今年で５０３歳となります」
　蓬莱教授の永原先生の紹介に際して、動揺の声は聞こえてこない。
　やはり、あの議連に参加する位だものね。知ってて当然かもしれない。
「で、その隣が篠原優子さんと篠原浩介さん夫妻です。現在は佐和山大学の学生ですが、現在我々と永原先生の協会で広告塔を勤められておりまして、特に篠原優子さんは同じくＴＳ病の当事者であると同時に、永原先生の協会では広報部長をなされています」
　あたしは、浩介くんほぼ同時に立ち上がる。
「紹介にあずかりました篠原優子です」
「篠原浩介です、よろしくお願い致します」
　パチパチパチパチ!!
　議員さんからの拍手が、少し強まる。
　その一方で、拍手が終わると何か議員たちがヒソヒソと話しているのも見えた。
「えっと――」

「あ、そちらの2方は大丈夫です。よく記者会見で見かけますので」
「そう言って貰えると助かる」
蓬莱教授が高島さんたちを紹介しようとしたら、総理大臣が止めてきた。
確かに、時間の制限もあるものね。
ともあれ、これでお互いの自己紹介も終わったし、いよいよ国家の中枢中の中枢との接触になるわね。

# 政府との交渉　後編

「では、本題に入りたいと思います。えー、日本政府としては、やはり蓬莱の薬は人々に夢と希望を与えると同時に、社会に大きな変革を巻き起こすことになると思います」
「はい」
　それはもちろん、言うまでもないことだ。
　全員永原先生みたいな世界と考えれば容易に想像がつく。
「まず、不老ということは介護福祉業界に与える影響が最も大きいでしょう。昨今人手不足が叫ばれておりますが、この業界については特に深刻です。国民が蓬莱の薬を使用するようになれば、ゆっくりと、だが確実にですが、無くしていくことができると思います」
　総理大臣が、そのように私見を述べる。
　あたしたちは、一言も発さずに総理大臣の私見に聞き入ることにした。
「次に財政ですが、まず社会保障費です。これを大幅に削減することができます。そうすると財政も黒字化するだけではなく、社会保障費が浮いた分、公共事業費やあるいは大学などの技術、研究開発に、多くの予算を回すことができるでしょう」
　うん、それは簡単に予想できることよね。
「私としてはまず、蓬莱の薬が浸透した時点で年金制度を廃止します。保険に関しましても、大幅な減額が可能でしょう。また、大減税と共に若者ばかりの社会となれば、人々の生活が豊かになることが予想されます」
「うむ、その辺りは予想している。だが次の問題がある」
　ここで初めて蓬莱教授が口を発した。
　そう、以前より不老によって懸念されている問題がある。
「はい、まず考えなければいけない問題が人口爆発の問題です。現在日本は少子高齢化による人口減少となっていますが、もし蓬莱の薬によって人類が不慮の事故や事件に巻き込まれない限り死ななくなるとすれば、平気で数千年と生き続ける人も増えるでしょう。もし、1

００年に1人だけしか子供を産まないとしても、蓬莱の薬を飲んだ人の平均寿命を仮に１０００歳とするならば、出生率は１０という数字になります」
　途上国でも、まず見ない数字だわ。
　いくら今の日本が少子化だからと言って、これはいくらなんでも極端すぎるわよね。
「そうすると、食料問題が肝要になってくるな」
　蓬莱教授が人口問題に伴って生じる問題としてまず考えたのが、食糧問題だった。
「はい、遺伝子組み換えという代案が考えられますが……国民の理解を得るのは難しいでしょう」
　総理大臣が暗い表情で話す。
　人口問題の解決のためには、農業や漁業のブレイクスルーが必要不可欠になる。
　しかし、遺伝子組み換え食品に対するネガティブイメージは強い。公然と認めれば角が立ってしまう。
　総理大臣によれば、諸外国には遺伝子組み換え食品を売る巨大企業があり、そこと遺伝学の権威である蓬莱教授が協力するという提案も考えたが、その企業が、日本人の価値観では「殿様商売」に写ることもあって、更に日本人の心証を悪くしているために難しいという。
「ああ、不老人間になれば、そんなことは気にしないでいい。と言えるんだがな。あー、もちろん、想定外のことは起きるものだがね」
　そう、多少の不健康なら、不老遺伝子が駆逐してしまうのは、結核が死刑宣告とほぼ同義だった時代に結核になってもすぐに治ってしまった永原先生や比良さんを見れば明らかだもの。
「そうすると、農地を増やして、従来と同じように品種改良を重ねるしかないわね」
　ここで初めて、永原先生が声を出す。
「でも、人はたくさんいるからいいとして、農地を増やすと言っても、限度があるだろ」
　浩介くんも、遠慮なく意見を出す。

若い力が大切だものね。
「ああ。そこで建物の中に、立体的に農地を作れないか考えている」
総理大臣によれば、農業用のビルを使って、立体的に農地を活用する方法を考えているらしい。
問題は維持費だが、不老化に伴う社会保障費の大削減で補えることを祈るしかないという。
「そしてもう1つ、俺からも解決案がある。これはもっと長期的な話だが」
蓬莱教授が、他に提案があるという話をする。
「はい」
「月や火星、金星をうまく惑星改造して、住める土地を増やせるようにできないか？」
総理大臣は、それを聞いて腕を組む。
「宇宙移民ですか。その調整は更に難航すると思います。国家間の領地争いにもなるでしょうから」
とは言え、人口問題の根本的な解決手段としては、他の星にも人類を移住させて、可住地面積そのものを増やしてしまうのがもっとも確実なのも確かではある。
「いずれにしても、今の技術ではＳＦの域を出ないわ。まずは総理大臣の提案で急場を凌ぎつつ、ＪＡＸＡの予算を増額させつつ対応しましょう」
あたしはここで、初めて自分の意見を言う。
「ええ、そうしましょう。蓬莱先生もそれでいいですか？」
「ああ、俺も異存はない」
「ええ、賛成ね」
「私も」
このあたしの提案に、総理大臣が頷き、蓬莱教授と議員たちも賛意を示す。
この瞬間、あたしは「国を動かしている」という実感を初めて持った。紛れも無く、今のはあたしが初めてこの国の政治を動かした瞬間だ。

あたしは、国会議員のバッジをつけているわけではない。というよりも、議員になるには後最低5年は必要になる。
でもこうやって蓬莱教授の力を借りながらだけど、それでも国家の長期的方針を決めてしまった。
まるで自分が、山の頂上から地上を見下ろすように。
「それでは、次の問題です。この薬を、我が国の専売特許とする特例法を出すかどうかです」
「専売特許ですか!?」
専売特許という総理大臣の声に永原先生の目が、一瞬輝いた。
そう、永原先生は以前、この薬を日本だけで独占し、気に入らない国や反日的な国に対する経済制裁として用い、日本を事実上の世界の宗主国にする計画を練っていた。
「特許には期限というものがありますが、蓬莱の薬は非常に大きな作用をもたらす薬ですし、その効力も長期的に見る必要があります。ですから、特許の期限を無くし、蓬莱教授の研究機関のみで生産する必要性があることは間違いないでしょう」
「ええ、それから、１００年間は日本限定で発売するべきだと思います」
永原先生が間髪をいれずに付け加える。
「１００年ですか、それはまたどうして？」
総理大臣が永原先生に疑問符を投げ掛ける。
「外国人に蓬莱の薬が効くのか？　その治験が必要だと思います」
永原先生からすると、当然の疑問よね。
「確かに、今までは日本人のＴＳ病患者でしか実験していないが、うちの研究所にも複数の日本人の血が入ってない、あー帰化一世の方にも薬は飲んでもらっているから、問題はないだろう」
永原先生の言葉に対して、蓬莱教授が実証的データをもって反論をする。
「そうですか、それはよかったです」
もし日本人にしかこの薬の効果がないとすれば、長期的には否応なく日本の影響力が国際社会で極端に大きくなる。

今までは、不老人間と言っても、３００人に満たず、しかもほぼ全員が日本人女性という状況だった。でも、「1億総不老」ともなれば、その有り余る寿命に物を言わせ、優秀な人間が日本ばかりに一方的にたまっていくことになる。

どうやら、その心配はないらしい。

「よく考えなくても、これだけ日本人に偏った病気だ。それを基にして薬を作るんだから、外国出身の被験者は必須だよ」

蓬莱教授が当然という表情をする。

まあ、外国人には効かない可能性を想定しないわけがないものね。

「特定の人間にはこの薬を融通しない。という手段は、俺自身1回使ってみて分かったが、なるべく使いたくない。もちろん、あまりにも反日的なことを繰り返し続ける国があるなら、それもありだろう」

「そうですか、ではどうして？」

永原先生は、自分の主張を一部肯定した蓬莱教授の方を少しだけ怪訝そうな表情で見ている。

そう、永原先生は以前より反日的な国や国益に反する国に対する制裁手段として蓬莱の薬を使用する構想を抱いて蓬莱教授に却下されたばかりだった。

「もし蓬莱の薬の禁輸を外交カードとして使うとしても、それはあくまでも最後の最後に使うべき手段だ。下手をすれば、軍事的な武力制裁の何倍もの効果をもたらすことになる。それこそ核攻撃に匹敵する危険性さえある」

「……分かりました。蓬莱教授の懸念、心にとどめておきます」

やはり、蓬莱教授は戦争の危険性を懸念していたみたいだった。

「1個いいですか？　蓬莱の薬を大衆にも浸透させるということなんですけど、いきなり安値で売り払うというのですか？」

総理大臣が次に疑問を投げかけてくる。

「ああいやもちろん、それは最終目標だ。もちろん当初のうちは富裕層にしか届かない値段で売るつもりだが――」

「あの、長期分割払いというのはどうでしょう？」

ここであたしが、もう一度声をあげる。

「長期分割払い、なるほど。だがインフレ率というのがある」
　確かに、これまでの寿命スケールを考えたらそうなるわよね。
「それははい、最初から太字で『インフレ率考慮』ということにすればいいんです。例えば、この薬を６０００万円で売るとします。ただし支払うのは毎月１万円とすれば？」
「年間１２万円、支払いを終えるまで５００年かかるな」
　あたしの話に浩介くんが単純な計算をする。
「一括なら５０００万円だとすれば、５００年で１．２倍、かなり良心的だな」
　５００年で１０００万円なら、単純計算で１年あたりで２万円、２５００分の１の利子になる。
　つまり、０．０４％ということになるわね。
「ただし、インフレで物価は上がりますから、ある年を基準に、物価指数で利子を決めていくといいと思います」
「なるほど」
　総理大臣が修正案を示してくれる。うん、やっぱり総理大臣という味方は心強いわね。
「ただ、その長期分割払い、不慮の事故に巻き込まれた時も考えて保証人も必要になるな」
「ええ、最初にある程度一括で払えば、分割も安くなるなど、柔軟なサービスが求められるわね」
　蓬莱教授の異議に対して、あたしも答える。
「ただ、何としてでも費用は回収しなきゃならんからな。そこでだが――」
　会議の中で蓬莱教授は、数百年単位の超長期的な分割払いの場合、特例法によって、自己破産したとしても返済義務は残り、また自殺等においても遺族などは相続放棄できないようにするように求めた。
「特例法は社会の反発も予想されるだろうが、蓬莱の薬の影響力を鑑みれば、これまでの法律では絶対に対応できないでしょう。普及のための法律も、是非すぐに整備して欲しい。そうすれば迅速に世界に蓬莱の薬を普及させることが可能だろう」

蓬莱教授は、長期分割払いで予想される出来事を話す。
「とは言え、やはりかなり慎重に普及させていかないと、リスクが高いと思います。これまでの新商品やイノベーションとは、全く次元の異なるな話ですから」
総理大臣が、次に異論を唱える。
やはり、普及には賛成でも、より慎重にしたいのが政府の意向なのだろう。
「俺としては、一部の富裕層や先進国だけが不老を享受している状況は、必要最小限度の年数に止めたい。でなければ、国や国際社会の分裂が決定的になる上に、既成事実化する恐れがある。それだけは避けたいのだ」
蓬莱教授は、分裂による治安悪化に伴う、寿命の低下を危惧しているのかもしれないわね。
「……分かりました」
「実は蓬莱の薬はそこまで高値で作るものじゃない。具体的な原価は……政府の皆さんと言えどお伝えすることはできませんが」
「そうですか」
まあ、確かにそうかもしれないわね。
詳しい医療知識がなくても、単に毎日1本を5日間飲むだけでよくて、悪い副作用も何もないもの。
「次の議題に入っていいかな？　最近、俺の研究所に妨害者が現れたのはニュースで見た通りだと思う」
「ええ、公安調査庁と公安警察の話では、『国際反蓬莱連合』の創始者は『明日のＴＳ病患者を救う会』の創始者と同一人物で、現在は日本支部長で、蓬莱教授の抗議事件の黒幕と黙されています」
総理大臣が、政府側の情報を蓬莱教授に提供してくれる。まあ、あの事件では蓬莱教授は被害者だものね。
「うむ、やはりそうだったか。関与は、あったんだな？」
蓬莱教授は以前「そのような陰謀はないと思われる」と話したため、予想が外れたことになる。
「ええ、そのようです」

「ふー、やはり公安には勝てねえな」
蓬莱教授が頭をポリポリとかく。
「公安としましては、蓬莱教授の集団は、例のマスコミ恫喝事件以降、権力者となる野望がある恐れがないかどうかを調査中でしたが――」
「とんでもない！　むしろ政府や公安に協力してほしいからこそ、ここに来たんですよ」
総理大臣の話に対して、蓬莱教授が割って入る。
「そう言って貰えると嬉しいです。とは言え、公安調査庁、公安警察としては、立場上政府外の組織と積極的に連携するというのは難しくなっています」
「うむ、それでいいよ。ただ、俺を危険視する気持ちは分かるが、『蓬莱は権力欲は特になく、政治的問題は専門的立場から助言はするが最終的には首相に任せるつもりでいる』ということだけは、肝に命じて欲しい」
蓬莱教授としては、自分の監視に人員を割くのは無駄だと言いたいのだろう。
「そもそも、選挙に出たら研究どころじゃないですし、寿命を延ばす蓬莱の薬では政府転覆など出来ませんよ」
「ああ、その通りだ」
永原先生の補足に対して、蓬莱教授も肯定する。
「分かりました。では『国際反蓬莱連合』については、引き続き公安調査庁に監視させることにしましょう。その中でできる範囲で、情報を協力していきましょう。実用化した後には、私が総理大臣かどうかは分かりませんが、政府広報として国をあげて支援できる体勢を整えていきたいと思います」
「恩に着る」
例の牧師が糸を引いていることが明確になっただけでも、今回の政府との接触は大きな成果になるのに、総理大臣は政府として蓬莱教授と協力していくことを約束してくれた。
超党派の議員連盟の議員たちも、しきりに「この事は挙国一致」「与党も野党も関係ない」「何でも反対党の汚名を削ぐチャンス」といった

会話を交わしている。
「あー、それから永原先生の協会についてなんだが」
「はい」
蓬莱教授が、今度は永原先生の方に首を向ける。
「私たち日本性転換症候群協会としても、今回の蓬莱の薬は是非普及させたいと思ってます。まず反対者の出鼻をくじくための既成事実の作りのために、まずはＴＳ病の患者と結婚した旦那に優先的に売っていくのはどうかとも思っています」
「なるほど」
つまり、浩介くんや直哉さんのような人に、まず蓬莱の薬を売っていくということになる。
それならば、世論の理解も得やすいと永原先生は踏んでいる。
「うちの副会長は天保生まれで、子孫たちがいるんですが、今では曾孫までは全滅、玄孫の代も半分は死んでいるんだそうです」
「なるほど。それは辛かったでしょう」
永原先生の話に総理大臣が重い口調で言う。
曾孫が全滅ってことは、あのおじいさん亡くなったのね。
「うーん、比良さんはそんな感じではなかったですけど」
「ちょ、ちょっと永原会長！」
もう、永原先生正直すぎよ。
そこは嘘でも「悲しそうな感じを受けます」とか言おうよ。
「いえ、不老は悲惨だと言いますけれど、完全な不死とは違いますし、集団で不老になれば怖くないんですよ」
永原先生は、どうやらそれも言いたいことだったのであえてぶっちゃけたらしいわね。
「なるほど。分かりました。ですが反対派はデメリットを強調してくるでしょう。不老不死とも言いますから」
総理大臣が「不老不死」という言葉を使う。
もちろん、不老と不死の違いは総理大臣も知っているはずだ。
「さすがに不老と不死を混同する言動はしてこないと思うが、それでも小説などを持ち出して、しきりに不老に関するネガティブキャン

ペーンを繰り広げるだろう」
「うむ」
　その話は、ＡＯ入試の段階でも蓬莱教授が予想してきたことよね。
「そこで対策なんだが、普段の広告塔は篠原夫妻だが、不老に対するネガティブキャンペーンにおける反論としては、永原先生を広告塔にしたいと思っている」
「ええ、私は今のところ人類一の長生きですから。それに江戸の街で２００年以上、そこから出ずに生活した実績があります」
「分かりました。政府としても、それに賛成です」
　総理大臣も、永原先生にも広告塔になってもらう案にすんなりと賛成してくれる。
「ありがとうございます」
「ふう、さて、そろそろ時間も押して参りましたな」
「おっと、もうこんな時間かい」
　総理大臣が時計を見ると、蓬莱教授が驚いた表情をする。
　どうやら、総理大臣は蓬莱教授と意気投合ができたみたいでよかったわ。
「それじゃあ、名残惜しいですけれど、私たちはこれで失礼いたします」
「ありがとうございました」
　全員で立ち上がり、まずはあたしたちから出口へと向かう。
　蓬莱教授が総理大臣と親しそうに話している。
　あたしも、会議の中で僅かながら総理大臣と会話することが出来たし、それどころか政治まで動かしてしまった。
　義両親は知っているけど、さて桂子ちゃんたちにはどう説明しようかな？
「では、お気を付けてお帰りください」
「「はい」」
　あたしたちは総理大臣に見送られ、官邸を後にした。

# 永原先生の拠り所

「では、私たちは記者クラブで今回の情報をまとめます」
日没後の首相官邸の門の外、あたしたちの中でまず言葉を発したのは、記者という立場のためか会議にはあまり参加してこなかった高島さんだった。
「ああ、我々としても、総理大臣が味方になってくれたことは積極的に宣伝したいところだ。他のマスコミにも、情報を流しても構わないぞ」
「ええ、ではそのようにいたします」
高島さんたちは、この近くにある記者クラブに急いで去っていく。
ふふ、総理大臣が味方になると知られれば、反蓬莱教授の勢力にとっては大打撃を受けるわね。
「……」
一方で、永原先生はあたしたちとは違いどこか遠い場所を見つめている。
「永原先生、どうしたんですか？」
「この奥は……私がかつて住んでいた場所よ。でもあの日から……一般参賀に参内した時以外はここに入ってないわ」
永原先生の言葉には昔の日々を思い出している。
永原先生はあの時代、江戸城での生活がずっと続くと思っていた。
「ああ、そうか。皇居だものな」
永原先生が、これまでの人生で最も長く過ごした場所、それが江戸城だった。
永原先生の日記の最終日の翌日、江戸城は明治新政府に引き渡され、皇居となって今日に至る。
「私にとって、この町は第２の故郷よ。この町が、どこよりも好きだわ」
今年で５０３歳になった永原先生の人生のうち、江戸での人生が半分を占めるし、東京在住の時代を合わせれば、まさに第２の故郷と言ってもいいと思う。

あたしたちは駅には向かわず、三宅坂の方を目指した。途中「ここら辺に上杉殿の屋敷があった。今の上杉家は吉良上野介殿の子孫ということで私もお世話になった」とも言っていた。もちろん、今は影も形もないけどね。
「ここが三宅坂……」
「ええ、江戸城も、江戸も、変わったわね。私はそう……あのあたりに住んでいたこともあるし、別のところに住んでいた時もあったわ」
永原先生の首は、常に皇居の方を向いている。指で住んでいた場所の建物があった所の方角を示すけど、それが正確かどうかはあたしたちにはわからない。何せ、江戸時代の記憶だもの。
「だろうなあ、永原先生が初めて江戸に来てから４００年近く、明治維新からでも１６０年近く経っているんだから」
永原先生は、小さく息を吐き、蓬莱教授が諸行無常のような言葉を話す。
それを聞いた永原先生は、更に皇居に近づいて、今も流れる壕と、そしてかつて自分が住んでいたその向こうを見つめ始めた。
そこには生い茂った森が見えるだけだった。
「私は、あの時以来ずっと政治の中枢にいたわ。でも今は、天子様は元より総理大臣に会うだけでも、一苦労だわ」
「そりゃあそうでしょう」
永原先生は一介の庶民になることを、選んだんだから。
もちろん、やろうと思えば明治政府の中に入り込むことだって、永原先生の実績からすれば可能だったけど、しなかった。
いかに戦国生まれの元男といえど、か弱い少女のような女の子では、あの時代の政争を生き残るのは難しかったのかもしれないわね。
「私ね、時折自分の帰属が分からなくなるのよ」
永原先生が皇居を見つめながら、重そうな口調で答える。
「無理もないだろう」
蓬莱教授が淡白そうに答える。
このあたりは、蓬莱教授らしいわね。
「時折ね、かつて私があの壕、あの門、あの石垣の向こうにずっと、４

代様に呼ばれてから２１４年間も住んでいたことが、夢のことのように思えるのよ」
　江戸時代の永原先生の日々、あの時永原先生がどういう生活をしていたかは分からないが、それでも懐かしむことができるくらいにはいい時代だったのよね。
「だって私は北信濃の真田家のその一介の足軽、あるいは農民でしかなかったのよ。それなのに私はただ長生きだからという理由で、私はあの神聖な城にずっとずっと住むことを許されていたわ。でも、本来ならそれはあまり好ましいことじゃないと思っていたわ」
　その通り、実際に永原先生は江戸時代に何度も何度も真田家への再仕官を申し出ている。
「私は、今でも自分は真田家の家臣だと思っているわ。どれだけ時代が変わっても、私が真田源太左衛門様にお仕えしていた事実は消えないもの」
　その話は、以前にも聞いたわ。
　４年前のあの時見せた「真田幸村」と「真田十勇士」に対する憎悪も、それが理由だと思う。
「でもね、２５０年以上もこの町に住み続けて、私は江戸を一番に……真田の村以上に愛するようになったわ。戦乱の時代の真田の村では到底考えられない位にこの町は文明も文化も発達したわ。だから私は、江戸っ子だと思うの」
　そりゃあそうだろう。それこそ東京が江戸と呼ばれていた時代でまだ生きているのは、永原先生と江戸時代生まれの正会員しかいない。
　その中でも永原先生は江戸城という江戸の中心に住んで様々な文化を受けてきた。本当の意味でも江戸っ子だ。
「それにね、鉄道を目にしてからは、私は新しい時代を愛し、天皇陛下への尊皇心が強く芽生えるようにもなったわ。天子様への敬意は、それこそ戦乱の時代、後奈良天皇や私より1歳年上の正親町天皇の時代から持っていたし、5代様や吉良家や水戸中納言殿といった勤皇家の影響も私は強く受けていたわ。でも明治以降のそれは、完全に違った

わ」
　かつて江戸城と呼ばれていた場所の森を見つめていた永原先生がこちらに向き直る。
　そう、永原先生が盛っているアイデンティティは真田と江戸だけではない。
　明治時代以降は天皇陛下への忠義を深めていった。
「それ以降は、ずっとその価値観でやって来たわ。でも時折分からなくなるのよ。私の本質は生まれた時の真田の家臣なのか、人生で最も長い時を過ごした徳川の家臣なのか、それとも明治以降今も持ち続けている天皇陛下の臣民なのか？　ってね」
「永原先生、徳川将軍だって天皇から信認を得て征夷大将軍に任命されている訳だから、ずっと天皇陛下でいいんじゃないの？」
　浩介くんの言葉に対して、永原先生は柔らかい表情でゆっくりと首を横に2回振る。
　どうやら、それではダメらしいわね。
「ううん、篠原君、それは現代の人間がよくする間違いよ。それではダメだわ」
「え!?　どうして？」
　浩介くんがとても驚いた評定をする。
　あたしと瀬田助教も、驚きに包まれる。蓬莱教授は、あまり驚いていないようだけど。
「武士は二君には仕えないのよ。例えば私がもし真田の家臣とするなら、真田家が徳川家の家臣だったとしても関係ないのよ。あくまで私は徳川から見たら陪臣であって、もし命令が相反したら、真田家の言うことを聞かなきゃいけないのよ」
　うーん、武士って難しいわね。
「会社の課長と部長で言ってることが違ったら、課長に対して『しかし部長がこう言っていますのでこうします』と言えば、課長も納得するしかない。だが武士の主従関係はそういうものではなかったんだ」
　蓬莱教授が、現代っ子のあたしたちにも分かるように説明してくれる。

つまり、大名に仕える以上は、主人が更に上の主人である幕府に反旗を翻すなら、それに従わないといけないと言うこと。
「もちろん、主君についていけないと思ったら見限るのもありよ。私が最初に生きていた戦乱の時代は、そんな時代だったわ。安房守殿は武田、織田、上杉、北条、徳川、上杉、豊臣と主君を変えていったわ。でも、江戸時代になると、そういうのが見苦しいとなったのよ……そのせいで、吉良殿は……」
永原先生が、またうっすらと涙を流している。
あたしとしては、この吉良家への恩義が、また永原先生のアイデンティティー意識を難しくしているのだと思う。
「私ね、本当は誰かに仕えているという意識がないとやっていけないのよ。でも今の私は？　主従関係なんて関係、結びたくても結べなくなってるわ。私は、誰なのよ？」
永原先生は、長い人生故に多くの呪縛を抱えていた。
永原先生の人生、それは足軽の家に生まれ、終戦時までの４００年以上、誰かに仕えながら生きてきた。
８０年弱の時はあたしたちにとっては途方もなく長い時でも、永原先生にとっては４００年以上も染み付いた癖を治すのには足りないのだという。
「永原会長」
「篠原さん？」
「会長は、日本人ですよ」
あたしは、務めて明るい口調で言う。
「日本人？　ええ、確かにそうだけど」
「永原先生、さっき言ってたじゃないですか。主君を変えるのもありだって。だったら、本質なんてどうでもいいんですよ」
「……そうかもしれないわね。ええ、その可能性も含めて、悩んでいたわ」
永原先生も、やはりそう考えたことがあったらしく、すんなりと頷いてくれる。
「それに、真田家の人だって、永原会長を武士の身分にした上で、徳川

家の直接の家臣に取り立てることには、悪い顔をしたかしら？」
「……覚えてないわ」
　永原先生が少しだけ考えて「覚えてない」と答える。
「でも、真田家が断り続けたって言うのは、きっと幕府に遠慮したってだけではないと思うわ。永原会長の江戸城での生活が、充実していたのを見ていたからよ」
　だって、あんなにたくさんの家宝を贈られたんですもの。
　それだけじゃなくて、比較的自由な生活を許されていたし。
「うん」
　永原先生が小さく静かに1回、首を縦に振る。
「だったら、本質は日本人でいいんですよ。明治維新からは、天皇陛下のご意向で、あの時と同じように、天子様の家臣になったんだって」
「ええ、そうね。そう思うことにするわ。ふふ、考えてみれば、私ずっと日本人だものね」
　永原先生が、付き物がとれたような笑顔を見せる。
「さ、時間取らせて悪かったわ。行きましょう」
　あたしたちは、今度は霞ヶ関駅ではなく、永田町駅から、帰りの電車に乗り込んだ。
　帰りの電車は、既に帰宅ラッシュということもあって、それなりに混雑していて、浩介くんが「俺が痴漢から守る」と息巻いてあたしを守ってくれたんだけど――
　すりすり
「もうっ！　肝心の浩介くんが痴漢しちゃったら元も子もないじゃないの！」
「ごめんごめん、優子ちゃんと密着してたら、つい」
　家に帰ってあたしの部屋で浩介くんと2人きりになった途端、浩介くんにスカートの中へ手を入れられて、パンツの上からお尻を触られてしまった。
「本当にもう！」
　あたしが浩介くんの腕を掴みながら言う。
「ごめんなさい。でも満員電車で痴漢したくなる衝動を抑えて家の中

までは我慢したぞ！」
「うー」
浩介くん、そこ自慢するところじゃないわよ！
「でもさ」
「え!?」
浩介くんが急に真顔になる。
「優子ちゃん、時間はもうとっくに夜だよ？　優子ちゃんって、夜はどうなるんだっけ？」
「うぐぅー！　あーん浩介くん、もっと触ってー！」
浩介くんに3秒で論破されてしまい、あたしは急速に身体が火照るのを感じながら、浩介くんと夜を共にした。

「ねえ浩介くん」
「ん？」
浩介くんに身体をほぐしてもらった後、あたしは浩介くんと一緒にベッドに入りながら、声をかける。
「さっきの話、永原先生のこと、覚えてる？」
「ああ、覚えてる」
浩介くんも覚えていた。
「あたしね、ちょっと詭弁を使っちゃった」
そう、あれはあの場を抑えるための、口から出たでまかせでしか無い。
だって、永原先生が揺れていた帰属意識は、故郷や主君に対するもので、国に対するものじゃないもの。
「……やっぱり優子ちゃんはそう思うか」
「うん、永原先生の主君のこと。戦国時代と江戸時代での価値観の変化、それに付いていくのが難しいと思えてならないわ」
戦国時代の価値観では、主君を変えるということは珍しいものではなかった。
むしろ、自分たちの妻子を守るために、落ち目の主君からは離れていくというのは普通のことだった。

でも、平和な江戸時代になると、1人の主君に忠実に仕え続けるのが良しとされた。
赤穂浪士の討ち入りだってそうだ。
世論が浅野家に味方してしまったのも、戦国時代なら全く持ってあり得ないことだった。
だからこそ、永原先生は苦しんでいるんだ。
「そうか、永原先生のような長い人生を歩んでいると、時折自分はどこの時代の人間なのか分からなくなるんだな」
「ええ、今のあたしや浩介くんは平成の人間だし、義両親やあたしの両親は昭和の人間でしょ？　比良さんや余呉さんは、多分江戸時代の人間だと思う。じゃあ永原先生は？　やぱりあたしにも、永原先生を戦国時代の人間と言い切って良いのかわからないわ」
そしてそれは、「長い時代を生きてきたんだから、『甲時代の人間でもあり、同時に乙時代の人間でもある』でいいじゃないか？」ではすまない。
これだといわゆる「ハーフ」だの「クォーター」だの言われている人は、何も悩まなくていいことになってしまう。
「……だろうな。だからこそ、永原先生は、自分の本質は真田家の人間なのか、徳川家の人間なのか、はたまた臣民なのかで悩むのだろうな」
もしかしたら、今頃永原先生はあたしの言っていることの間違いに気づいてまた悩んでしまっているかもしれないわ。
今度会ったら、また話さないといけないわね。

「あら？　そのこと？　ええ、心配しなくていいわよ。もう私の中でも整理できたわ」
会合の日に永原先生に永田町でのことについて話そうとしたら、既に心の中で整理できていたという。
「どういうことです？」
「もちろん、『私は私だ』みたいな、小説とかにありがちな曖昧な結論じゃないわ。結局、『私が不老』だった故のことだったのよ。つまり、就職先を変えたのと同じってこと。ことさらにアイデンティティに

しなくてもよかったってことよ」
要するに、永原先生は戦国時代の価値観を選んだことになる。
でも確かに、それが一番いいのかもしれないわね。
「もちろん、だからといって忠義や想いをないがしろにするつもりはないわ。戦乱の時代だって、忠義に殉じた武士はたくさんいたもの。いやむしろ、あのような時代だったからこそ、忠義の2文字を貫いた家臣は、輝いて見えたものよ」
永原先生がしみじみと話す。
遠い昔のことは分からない。だからそう、永原先生が答えを出したなら、もういいと思う。
多分あたしがこの気持ちを理解するには、後数百年は必要なことだと思うから。
今は、そっとしておくのが、一番賢い。
あたしはそう思うことにした。

# 不気味な安息

大学3年生の前期も終わり夏休み、あれから反蓬莱勢力は、不気味なほどに静まり返っていた。
公安調査庁からも定期的に問題のない範囲で蓬莱教授に情報が送られてくるみたいだけど、蓬莱教授には「動きがない」との情報しか伝えておらず、あたしたちは喉元過ぎてしまったのか、すっかり熱さを忘れて勉強と夫婦生活のことばかりを考えていた。

「最近出た新しい患者さんですが、篠原さん、もう1人お願いしてもいいですか？」
永原先生から、このような依頼をまた受けた。
幸い、高校期間も夏休みでよかったわ。
「……分かりました」
とはいえ、この時期に新しい患者さんが来てくれるのは一番ありがたい。
とにかく大学生は宿題もほぼ無いに等しいので、夏休みにしても春休みにしても、とにかく暇で暇で仕方がないのよね。

えっと、ここかしら？
うん、患者さんはもう家に帰っているらしいのでここでいいはずだわ。
ピンポーン！
「ごめんくださーい」
「はーい、あ、協会の方ですか？」
あたしが呼び鈴を押すと呼び鈴越しに声が聞こえてくる。
「ええ。篠原優子と申します」
「それじゃあ話を聞かせてもらうわね」
今度の患者さんは中学3年生であたしの家からもかなり近くて、しかも志望校の1つに小谷学園があった。
その患者さんも、「会長さんが先生をしている小谷学園に行きたい」

とも言っていたので、この受験の時期にＴＳ病になったのは不幸だったけど、それでも小谷学園に合格することが出来れば不幸中の幸いとも言えるわね。
場合によっては、小谷学園に入学と同時に、相談相手を永原先生に変えてみるのもいいかもしれないわね。
そのあたり、永原先生ともよく相談しておこうかしら？

「――というわけなんです」
協会本部に帰還したあたしが患者さんの状況をまとめたメモを片手に永原先生と話す。
「……なるほど、小谷学園に合格できるといいわね」
「ええ。それでもし合格できたら何ですけど――」
「カウンセラー変わってくれって？　別にいいわよ。都合いいことに来年度は1年生の担任になる予定ですから」
永原先生が「もちろん」という感じで胸を張ってくれる。
「ありがとうございます。小谷学園はＴＳ病患者には過ごしやすくなれますね」
「ええ、『石山さん』のおかげだわ」
確かに、高校生の時は未婚で旧姓だったので問題ない。
「あはは……」
とはいえ、中学生だったから良かったけど、もし患者さんが高校生だったとして永原先生がいるというメリットを差し引いても、やはり転校というのはおすすめできない。
あたしが女の子になった時代と比べれば、世間一般にはＴＳ病の知名度はかなり広がっているとは言え、今でも更衣室問題が起きることがあることは知られている。
まあ、大抵は歩美さんの時のことを引き合いに出せば、学校側も素直に従ってくれるんだけど、それでも一手間かかってしまうのは事実なのよね。
ちなみに、当の生徒たちについては、意外とすんなり受け入れてくれるらしい。

まあ、仮に無理解な女子生徒がいたとしても、学校生活を続けていればかならず訪れる「女の子の日」が来るとみんな理解してくれるので、「最初の生理の日は、無理してでも学校に行き、女の子アピールすること」というのが、以前からの経験則になっていたりもするんだけどね。

それに、あたしはあたしで、更衣室問題で少し嫌な思い出がある。

今の小谷学園なら、そう言う心配がないというのが実際のところでもあるけどね。

「それじゃあ、私はこれで失礼します」

「お疲れ様でした」

あたしは永原先生やその場にいた正会員さんに挨拶して協会の本部を出る。

入会からもうすぐ４年、あたしも大分この協会に馴染んできたという自覚がある。

東京オリンピックから１年が過ぎ、蓬莱教授に対する騒動も、完全に風化してしまった。

蓬莱教授は「７００歳の薬」の開発には成功したけれど、これについては浩介くんを含む被験者たちに飲ませるだけで、記者会見は１００歳まで行わない予定になっている。

そのため、世間でも蓬莱教授の研究が苦境に立たされているのではないかという推測が飛び込んでいる。

最も、その推測は当たってないこともないのよね。

蓬莱教授曰く、「もう１つ、決定的な何かを見落としている」と話していたし。

夏休み中にあった他の出来事と言えば、あたしと浩介くんの成績が返ってきたこと。

あたしはまだ何とかなったけど、浩介くんの方はギリギリで単位を取れた科目もあって、結構ヒヤヒヤものだった。

それでも、蓬莱教授によればお互いかなり成績は良いほうなので、コネがなくても「蓬莱の研究棟に入れてもいいレベル」とのことだった。

佐和山大学では、3年次の後半から各教授の研究室への配属が決まる。
なので講義する教室でも、「どこを志望する？」とか「蓬莱教授がもちろん本心では第一だけど、まあ無理だよなあ」と言った声が聞こえて来ていた。
一番定員が多いのが蓬莱教授の研究室だが、人気はもちろん毎年ダントツの1位、なので成績はトップクラスに良くないと配属されないわけで、この研究室目的にわざわざこの大学に入る学生でほぼ全員が占めている。
まあ、あたしたちの場合、仮に留年したとしても入れてもらえるわけだけど、とりあえずそういうことがなくてよかったわ。
とはいえ、色々な研究室を見学しているのに、あたしたちは蓬莱教授の研究棟ばかりにいつも1年次から入り浸っていたから、殆ど研究棟の見学もしていない。
蓬莱教授からは、「アリバイ作り程度に他の教授たちの研究室も見学してくれ」と言われていたけど、モチベーションは上がらないのは否めないわ。
あたしはまだいいんだけど、演技が苦手な浩介くんは大変よね。
浩介くんからは、「優子ちゃんって演技力がすごい」と言われてしまった。
優一の頃は、もちろん感情的だったから「演技力がうまい」なんてことは全くなかった。
あたしは、女の子になってから、無意識に演技力が高くなっていた。このことは以前から気付いていたけど、最近また言われるようになって、思い出す。
そう言えば、「女はみんな女優」何て言葉さえあるものね。あたしだって女だから、例外ではないわね。
それでも浩介くんは、「でもやっぱ、他の研究室を見て回るのも、知見を増やす上で重要だよな」とも言っていた。
他の大学がどうかは知らないけど、やはり「蓬莱の研究棟」で行っている研究とは、規模もスケールも全く違う。かなりお金のやりくり

苦しんでいて、蓬莱教授とは全く対照的だった。
蓬莱教授の発見した万能細胞を研究している研究室の先生の話によれば、「うちはまだ国や蓬莱先生から微々たる補助金が出てるからマシ」とも言っていた。
蓬莱教授は、実は国からの補助金は殆どもらっていない。
何故なら、研究内容は世界から注目されていて、寄付金だけでビリオネアになってしまうレベルで、世界各地から寄付が集まっているからだもの。
最近では、反対派の活動が動画共有サイトに上げられた際にも、寄付金はかなり集まっていて、宣伝部の存在が、かなりの黒字を生み出しているとも言っていた。
一方で、研究資金も有り余っているために、予算を使い果たす事ができずに、内部留保の形でたまり始めているのが問題になっている。
あたしたちの旅行代にも色々と押し付けてくるけど、それでも使い切れなくなってきているのよね。
まあ、研究が苦戦した時に寄付金が少なくなったときのことも考えないといけないけどね。

「優子ちゃん、それで、夏休みはどこに行く？」
もう夏休み中だけど、人が少なくなってくる9月に、どこかへ旅行しようという話になった。
「うーん、あたし、新しい患者さんの面倒も見ないといけないからねえ」
「あーそういえば近所なんだっけ？」
浩介くんが思い出すように言う。
「うん」
「じゃあ、近場で探さなきゃな」
患者さんが倒れたのは8月下旬で、カリキュラムが終了したばかりでまだまだ精神的に不安定な時期にある。
あちらの親御さんの報告でも、「荒れている時もある」とのことだったので、注視する必要がありそうなのよね。

とは言っても、あたしが脅したのもあるけど、「男に戻りたいとはもう思わない」と言ってはいるし、そこまで心配はしてないけど。
ともあれ、今年の夏休みは患者さんの新しい世話を除けばゆっくりと過ごせそうだわ。
幸子さんは地理的に難しいけど、歩美さんなら、あたしが今年から世話している患者さんに会わせておいてもいいかもしれないわね。
「それで、ここがいいかな？」
「うん、そうしよう」
結局、以前にも行ったことのあるデートスポットを再訪問するということに鳴った。
「ところで優子ちゃん、旅行もいいけど9月からは研究室への配属だけど」
「うん、第2志望はどうしようかしら？」
「そこだよなあ」
もちろん、第1志望に通ることが決まっているとは言え、第3志望まで埋めなきゃいけない。いわば、あたしたちにとっては唯一の「夏休みの宿題」と言ってもいい。
小中高の時に出たような夏休みの宿題に比べれば遥かに分量が少ないし、人によっては夏休み前に終わってることもあるだろうし、あたしたちに至っては第一志望が終わっているから労力が3分の2で済むはずなのに、何かとても大変だわ。
多分、第一志望に最初から決まっているというのが、モチベーションを下げさせている原因なんだと思う。
実際、第一志望だけ書いたとしても多分通ると思うし。
蓬莱教授と親しい河毛教授は専門が応用数学だし、一応あたしたちの学科にある程度合った人にしなければならない。
「とすると――」
浩介くんが、第2、第3志望を埋めていく。
よし、あたしもそれにしようかしら？
「なあ、どうせ蓬莱教授の所に決まってるわけだし、優子ちゃんは別の志望を書けばいいんじゃないか？」

浩介くんがそう提案してくる。
「え？　どうして？」
「まあほら何だ？　アリバイ作りだよアリバイ作り」
浩介くんがボールペンを振りながら気楽に話してくる。
「うーん、そういうものかなあ……」
確かに、あたしたちは夫婦で同居してて、しかも大学でもずっとベッタリしているから、「実験のレポートを写し合っている」という疑いが、本来なら真っ先にかかってもおかしくないのよね。
幸いにして、そのようなことはなかったけど、いずれにしても気をつけなきゃいけない。
「ま、何にしても、来期で実験も終わるな」
「うん」
あたしたちはそれが一番嬉しい。次を乗り越えさえすれば、来年はほぼ卒業論文に専念できそうでよかったわ。
でも、他に何を履修しようかしら？
まあ、それも含めて、この夏休みに考えておくのもいいかもしれないわね。
ジリリリリ……ジリリリリ……
「あ、ごめん浩介くんテレビ電話」
浩介くんと話していると、テレビ電話が鳴った。
かけてきたのは、新しい患者さんではなく、もう1人成人式の時から面倒を見ている患者さんからだった。
「おっと、じゃあどいてるよ」
「うん」
まあ、浩介くんがいてもいいんだけどね。
ある程度女の子が定着したら、「あなたもこういう風に旦那さんの家に嫁入するのよ」って言えるわけだし。
「もしもし」
「あ、篠原さん実は――」
女の子になって最初の1年は、色々と戸惑いがある。
あたしだってそうだった。

４人の患者と接して改めて分かったことがある。あたしは、この４人から、自分があまりにも優秀過ぎたことを思い知らされている。
「うん、どうしたの？」
「俺の親が――」
「こーら！　また言葉遣いが乱れているわよ！」
それは言葉遣いの矯正は比較的楽と言っても、やはり絶対評価としてはそれなりに難しいということ。だからこうして、優しい口調で叱りつけてあげないといけない。
「うっ……すみません。その、私の親が、転校させようとしてきて――」
もちろん、カリキュラムが終わった上に、テレビ電話越しだから、スカートめくりのおしおきはないけどね。
でもきちんと言い直させなきゃいけないのよね。
「うん、いいわよ。さ、女の子が男の言葉を使っちゃった時はどうするんだっけ？」
「えっと……私は女の子……私は女の子……女の子なんだから女の子らしくならなきゃいけない……」
そして、カリキュラム終了後も暗示をかけさせることは重要になってくる。
あたしはカリキュラムが終わった時には言葉遣いはほぼ完成していたのでこういうことをすることがなかった。
「そうよ、それでいいわ。でもどうして急にそんな話になったの？」
ＴＳ病患者を普通の女の子よりも女の子らしく生きるように教育するのは、男の子から変わったという事情から。でもそれは、当然ながら女の子が女の子らしくするよりも苦労を伴う。
こうやって悩みを聞いてあげて、適切なアドバイスが出来るようになりたい。
他の正会員さんは年齢も離れているけど、あたしならうん、そう言う意味では有利かもしれないわね。
まあそうは言っても、その有利さだって今だけだし。
それに、今の所はあたしが大学生になってからは明日の会になびい

た患者1名を除いて自殺者は出ていないけど、あたしのやり方でもうまくいかない例は出てくるとは思うし、今後あたしが担当した患者にも自殺者は出ると思う。
もしそういう患者が出てきた時のための心の準備も、必要かもしれないわね。挫折を知らないのも、それはかなり問題だもの。
失敗を予測して、想定していた上の挫折なら、ある程度ショックも緩和できるはずだものね。
「えっとあの、篠原さん、今日はありがとうございました」
「うん、また元気な姿を見せてね」
今回は、「学校でクラスメイトが戸惑っているから親が転校を検討し始めた」という話だった。
もちろん、それらの「戸惑いは必要経費だから、あなたにとっても学びになるわ」と、言っておいた。
親御さんもあたしには全幅の信頼を寄せている。
あたしの年齢はまだ21で女の子歴は4年だけど、既に旦那がいる身。
もちろん、高卒と同時に結婚したのも、TS病患者の結婚としては最年少記録だ。
不老の身であるから行き遅れという概念がないと同時に、女の子を身につけるまでに時間がかかるからって言う側面が強いんだけどね。
「浩介くん、終わったわよ」
あたしはテレビ電話を切り、そう伝える。
「お、そうか」
浩介くんがまた、あたしの近くに来てくれる。
「ねえ浩介くん、おままごとしよ？」
「うん、分かった」
浩介くんが、すっかり慣れた顔であたしを見つめてくる。
夏休みの暇な日々、あたしは浩介くんとおままごとやお人形さん遊びに講じることが多い。
もちろん、優一時代から持っていたゲームで遊ぶこともあるけどね。

「ふふ、あなた」
「優子ちゃん」
あたしが、部屋からおままごとセットを出す。
「それにしてもこのキッチン、よく出来ているよな。今のおもちゃってすげえな」
「うん」
野菜やウインナーのおもちゃ何て似て過ぎ思わず口に入れてしまいそうになりそうだわ。
実際、「口に入れない」という注意書きもかなり強調されているし。
「はーい、じゃあ完成ね！　ご飯できたわよあなたー！」
こうして、反蓬莱連合の動向がわからない夏休みは、裏は分からないけど、表向きは平穏に過ぎていった。
政府から一度だけ、あたしだけが内閣官房に呼ばれたことがあった。
その時は官房副長官と超党派議連の代表の人、蓬莱教授、そして永原先生の5者面談だった。
今後もこの5者でちょくちょく面談を行うことになっている。
ただ、更に不老の薬が現実味を帯びてきたら、総理大臣が出てくることになるとも言っていた。
もちろんその時の総理大臣が同じ人とは限らないけど、蓬莱教授の影響力を考えれば、大丈夫かな？
政治的パイプも、とにかく自然消滅だけは避けたいから、ある程度の交流を図らないといけないわね。

# 反旗の狼煙

「ふう、それで優子ちゃん、研究室はどうなった？」
　文化祭が終わってすぐに、来年以降の研究室の配属先の発表がある。
「聞くまでもないわよ。浩介くんもでしょ？」
　蓬莱教授の研究棟に入ることで、あたしは遺伝子の提供がしやすくなるし、宣伝部の浩介くんもやりやすくなる。
　……ということであたしたちの所属研究所は入学前から決まっていたことだった。分かっていてもやはりドキドキするわね。そう言う意味でＡＯ入試の時にあの場で合格証を渡したのは蓬莱教授なりの優しさだったのかもしれないわね。
　あたしたちは、今日の放課後に研究棟の皆さんに挨拶することになっている。

「あー、来年度からうちの研究室に配属となる学生たちだ。まずはもしかしたら皆さんも知っているかもしれないが、篠原夫妻だ」
　蓬莱教授からまずあたしたちが紹介された。
「夫の篠原浩介です」
「妻の優子です」
　パチパチパチパチ
　あたしたちに向けて、歓迎の拍手が沸き起こる。
　拍手している人たちを見ていると瀬田助教や、大学院の修士博士課程の人たちや、一般の研究員たちの中に、和邇先輩の顔も見えた。
「あー、皆も知っての通り、篠原夫妻は俺の実験の要となる存在だ。それと言うのも、妻の優子さんはＴＳ病の当事者でもあり、また旦那の浩介さんも、当事者の旦那と言うことで、成績優秀なのに加え、宣伝部でも１年次から既に活動を始められている」
　蓬莱教授が、「一応」という形であたしたちを紹介してくれる。
「やっぱり、ここに来たのか」

「ま、コネだとしても必要なコネだわな」
「ああ、実験成功のためにも、是非とも欲しい人材だからな」
「それに、聞くところによると、夫婦ともに成績がいいらしいぜ」
「へえ、すげえじゃん」
「ま、何にしても、『リケジョ』は貴重だしな」
「ああ、あれで元男とか何かの間違いだろって思えてくるよな」

研究員や大学院生などからも、あたしたちの感触はいい。
特にあたしのことを「元男なんて信じられない」と言ってくれたのは、最高に嬉しかった。
男扱いや中間扱いで、あたしは最近ほとんど悩んだことはない。何故なら、皆あたしのことはきちんと女の子として扱うようになってくれたから。
ＴＳ病の当事者にとって最も理想的なのが、カミングアウトした時に「女の子扱い」してくれることだった。
どうしても、生まれつきの女の子でない以上、こうなるのは当然だった。

「何にしても、篠原夫妻は歓迎だな」
「ああ、大学院に行ってくれれば、我ら蓬莱の研究棟の貴重な戦力になるぜ！」
「うむ」

浩介くんはともかく、あたしはかわいくて胸が大きく、また黒髪のロングストレートなヘアスタイルも男受けがいいから、人妻ということを差し引いても、やはりムードは上がる。
まあ、ここ「蓬莱の研究棟」もご多分に漏れず、「リケジョ」が少ないせいもあるけどね。
うーん、歩美さん、早まったかもしれないわね。
あ、でもこういう所は彼氏や旦那持ちの方がいいかもしれないわね。何気に、１人の女性に多数の男性って女の子にとってはよくて

も、男たちには危ない環境だと思うし。
「さて、次に来年度から我々の研究所に入ってくれるのは――」
蓬莱教授が次々とあたしたちと同じ学科の学生たちを紹介してくれる。
その中には、もちろん見知った顔がたくさんある。
「よし、これで全員だな。来年度から、よろしく頼むぞ。何、心配はいらん。学部4年なら、雑用程度だし、卒業論文だって、そんな本格的なものを求める訳じゃないさ。身構えなくて大丈夫だ」
ちなみに、「ゼミ」と言う言葉もあるけど、そちらは文系の大学で使われる用語だとか。
タッタッタッタッタ……
すると突然、廊下を走る音が聞こえてきた。
音だけでもかなり慌ただしいのが分かる。
「はぁ……はぁ……教授、宣伝部から連絡です……はぁ……はぁ……」
伝令役の人が、かなり慌てた様子で駆け込んでくる。
「おう、どうしたんだそんなに慌てて」
蓬莱教授も、こういうことがめったに無いのか、かなり驚いているわね。
「国際反蓬莱連合が、蓬莱教授の研究中止を求めて、東京で大規模な抗議集会を計画しているという情報が入ってきました！」
「何と！」

「え!?　抗議集会!?」
「どう言うことだよ」
「蓬莱教授の研究を妨害しようってのか！」
「何て奴らだ！　許せん！」

研究員たちはもちろん、あたしたち大学3年生にも、動揺の声が広がっていく。
そして、徐々に「許せない」「叩き潰すべきだ」という声が上がっていく。

「蓬莱教授、あたし、ちょっと抜けますね」
ともあれこの事は、永原先生にも話さないといけないわ。
「ああ、頼む……浩介さん」
蓬莱教授は、浩介くんにも頼み事をするらしい。
「はい」
「君も宣伝部長に、『集会を不許可にするように警察に圧力をかけるよう、政府に取り合ってくれ』と伝えてくれ。多分無理だと思うから、一応という感じで頼む」
「分かりました」
あたしと浩介くんが、それぞれ所定の場所へと駆けていく。それらの様子を見て、周囲の同様は大きくなる。
その背後で蓬莱教授が「うろたえるな、俺たちも、反撃の集会を計画する」と発言しているのが聞こえた。
あたしは、近くの適当な空き部屋に入って急いで携帯電話から永原先生に電話する。
多分、小谷学園の授業は終わっているはずだわ。
ピピピピッ……ピピピピッ……
「頼むわ……」
「はい、永原です」
良かった！
「あ、永原会長、あたしです」
「あら篠原さん、電話とは珍しいわね。随分慌ててどうしたの？」
電話越しにも、永原先生の動揺が伝わってくる。
「うん、実は国際反蓬莱連合が動いたのよ。東京で大規模な抗議集会を行う計画だって情報です」
「そう、分かったわ。それで、私たちにできることは？」
「蓬莱教授の方で、カウンターのデモ集会を開くと言っていたわ。そのためにも、人員を集めたいの」
とりあえず、明確に断言できるのは今はこれだけ。
「分かったわ。もちろん協会も協力するわ。この事は私の方ですぐに比良さんたちにも伝えておくわ。篠原さんは……今大学？」

「ええ」
「じゃあ、塩津さんと、山科さんに連絡して。後の方はこっちでやっておくわ」
「ありがとうございます」
「じゃあ、切るわね」
「はい」
　ガチャッ
　永原先生と電話をし終わったら、あたしは急いで幸子さんにかける。
　ピピピピ……
「はい、塩津です」
　よし、出たわね。
「幸子さん、あたし」
「どうしたの？　私今仕事中なのに」
　あ、そう言えば幸子さん就職していたんだったわね。
「あーうん、ごめんなさい。その、国際反蓬莱連合が東京で大規模抗議集会を計画しているって」
「え!?　まさか本当に？　動いてくるなんて思わなかったわ」
　幸子さんが電話越しにも動揺している声が聞こえる。
　実際、夏休み中に動いていなかったせいで取るに足らない組織ではないかという認識が蔓延していたのだ。
「幸子さんは地理的に大変かもしれないけど、蓬莱教授がカウンターを計画しているわ。ここで世論操作に失敗したら、直哉さんと死に別れちゃうかもしれないわ」
「うん、分かったわ」
　幸子さんと、電話のやり取りを終える。
　仕事中にかけちゃったのはまずかったけど、仕方ないわね。
　よし、次は歩美さんね。
　……ダメだわ。繋がらない。
　おそらく、帰宅途中で電車の中なんだわ。
　ブー！　ブー！　ブー！

何度か応答しない歩美さんにかけていると、あたしの携帯が震え始める。
案の定、電車の中だったのか、歩美さんの方からメールが届いていた。
題名：どうしたの？
本文：今電車の中、どうしたの？
あたしが、抗議集会のことと、カウンターのことを書いて送ると、歩美さんから「了分かった。協会広報部としてもがんばる」とのメールが返ってきた。
よし、これでいいわね。
あたしは部屋から出て、さっきのところへと戻る。
見ると蓬莱教授と瀬田助教だけが、その場に残っていた。
「おお、優子さん、どうだった？」
あたしの姿を見た蓬莱教授が、やや心配そうに声をかけてくれる。
浩介くんは、まだ戻っていないみたいね。
「ええ、協会の方は協力してくれるみたいだわ」
「よし、連中は学園祭の前の土曜日に集会を開くらしい。佐和山大学の威信をかけて、今こそ、我がプロパガンダの成果を見せてやろう」
蓬莱教授は、既に覚悟を決めていた。
よし、あたしも頑張らなきゃいけないわね。
「あの、浩介くんは？」
「まだ戻ってきてないな。宣伝部の活動で時間を取られているのかもしれん」
「分かったわ」
あたしは、記憶を便りに宣伝部がある方向へと進む。
よしよし、ここが宣伝部の部屋ね。
コンコン
「はーい」
ガチャッ
「あ、優子さん。浩介さん、優子さん来たよ」
宣伝部の人が応対してくれた。

「おう」
浩介くんが、部屋の入り口に来てくれる。
「浩介くん、そっちはどう？」
「ああ、一応うまく行っている。宣伝部の方で、今回の集会のネガティブキャンペーンを実施すると共に、今はダメもとで政府に連絡して、集会とデモを不許可にしようと画策している」
ともあれ、カウンター集会の参加を警察に届け出ないといけないわね。
そのためにも、人を集めないことにはしょうがないわ。
「分かったわ」
日時は学園祭前の土曜日、休日出勤になったらまずいわけだけど、最近は人手不足だし、そこまで大きな問題とは思っていない。
「よし、じゃあ俺たちは、帰っていいですか？」
「ああ。学生に負担はかけさせられん。優子さんと、よく連携してくれ」
「「はい」」
宣伝部の人に見送られて、あたしたちは外に出て家に帰る。

「まあ！　分かったわ。私たちもなるべく参加するわ。優子ちゃんは実家の両親に連絡して？」
帰ってすぐに、あたしはお義母さんにこの事を伝えると、お義母さんも、やる気満々になってくれた。
「ええ」
あたしと浩介くんは、それぞれの部屋に別れ、あたしは早速ネットニュースを見る。
そこには、「国際反蓬莱連合が大規模抗議集会を計画」と題された記事が掲載されていた。
そこによれば、東京都において「蓬莱教授の研究に反対」「生命の摂理と倫理を無視する研究を許すな！」というスローガンを掲げ、デモ行進が計画されているという感じの報道だった。
ちなみに、これを報じているメディアはブライト桜ではないもの

の、既に他の既存メディアでも、蓬莱の薬を融通してもらえない恐怖感からか、今回もあたしたちに配慮して、サブタイトルには「身勝手な抗議理由」と書かれていて、実際にニュースの下にあるコメント欄も非難轟々たが、あたしたちが知りたいのはそうではない。

カウンターをするからには、当然近くで計画しないといけない。

あたしは、まずニュースから「国際反蓬莱連合」のホームページに向かった。

例の抗議動画の事件の時には、公式ホームページが存在していなかった。

このホームページは、宣伝部の方では認識していたらしいけれど、あたしには情報伝達されていなかったために、あたしたち協会の方はこのホームページの存在を認識していなかった。

まるでお役所の縦割り行政のような失態だけど、今更悔やんでも仕方ないわ。

「これは酷いわね……」

あたしは思わずそこに書かれている内容に目がクラクラしそうになってしまう。

そこには、「生命の摂理と倫理を無視する蓬莱伸吾の研究を許さない」「不老の人間はこれまでの人間よりも圧倒的に強く、就職面などでも絶対的に優位であり、選択制だとしても、事実上の強制になる」「人は老いて死ぬものであり、それを受け入れられないのは神への冒涜だ」などと書かれていた。

更に蓬莱教授のみならず、あたしたち協会についても誹謗中傷されていて、「日本性転換症候群協会は、蓬莱伸吾の研究に対して、一貫して協力姿勢を貫き、この悪魔の研究に荷担するために欠かせない役割を示している」と糾弾されていた他、「身勝手な声明によって、男女平等の気風を一掃し、女性差別主義者が跋扈する世界に逆戻りさせた」、「自称戦国時代生まれの女が指揮する究極の独裁的圧力団体」とも書かれていた。

恐らく、この事はすぐに永原先生たちの耳にも入ると思うから、2年前と同じように、反論声明を出していく必要があるわね。

それにしても、あたしが高校生の頃から、まるで成長していないわねあの牧師。
そしてこの抗議デモの協賛団体を見ると、例の牧師が信仰していると思われる宗教関連の組織の他、あたしたちのよって活動がほとんどできなくなったフェミニスト団体が目につく。
「……はぁ―、まるで不死鳥だわ」
不老に比べれば、不死は更に強い。飛行機が墜落しようが何年間も飲まず食わずだろうが生きているのが不死だ。
フェミニズム団体は、あたしたちの声明によって、大打撃を受けた。
普通ならそこで死んでいるはずなのに、また蘇ったようなもの。蓬莱の薬でも、あたしたちＴＳ病でも、死んだら生き返れないのは同じだ。
……まあいいわ。あたしたちは生まれつきの男から、後天的に女に変わったからこそ、両者の違いをよく熟知している。
だからこそ、フェミニズムには到底賛同できない。
ともあれ、その夜は義両親と実両親にこの団体について話すことにした。
フェミニズム団体については、「３０代後半のモテなくて性格悪い独身女性は特に優子ちゃんみたいなのを僻むものよ。行き遅れをこじらせて、あんな感じになるわ」と言っていた。
１８歳で結婚したあたしには、ちょっと想像もつかないわね。

「浩介くんの方はどう？」
夕食後、あたしは浩介くんの部屋で作戦会議をする。
「ああ、とりあえず、人を揃えることはできそうだ。ただ、やはり抗議デモを不許可にするのは、政府という立場上、厳しいらしい。ただ、カウンターデモは許可が取れそうだとよ」
「ええ、分かったわ」
浩介くんの方も、宣伝部の活動として、カウンターデモを拡散している。
集合場所や時間も、急ピッチで決められるらしく、明日にはイン

ターネット各地に拡散できるようになっている。
「後は蓬莱教授は、拡散の時にプロパガンダのために優子ちゃんの名前と写真を出したいとのことだ」
「ええいいわ」
あたしの美貌が役に立つ場面、浩介くんも寿命問題となると、嫉妬を押さえてくれる。
っと思ったんだけど――
ぺろり
「きゃあ！」
女の子座りをしていたあたしは、浩介くんにスカートをめくられて上から純白のパンツを覗かれてしまう。
「優子ちゃんって、穢れがなくて清楚だね」
「もう！　浩介くん、真面目な話してるのにやめて！　うわーん、またパンツ見られちゃって恥ずかしいよおー！」
あたしがスカートをおさえながら、ちょっとだけ涙目で抗議する。
「ごめんごめん、優子ちゃんの顔写真拡散ってなったら、つい嫉妬しちゃって――」
またこれだわ。
「もうっ!!!　何も今しなくてもいいじゃないの」
浩介くんは、嫉妬するといつもエッチなことをして独占欲を満たそうとしてくるのよね。
「ごめんなさい……優子ちゃんを独占したいと思うと、こうするくらいしかなくて……」
浩介くん、本当に不器用なんだから。
まあ、確かに「自分にしかできないこと」をすることで独占欲を満たすのは普通のことだし、あたしだってそうだと思う。
何よりそうさせたのは、あたしにも原因があるんだし。
だからこそ、不倫は深刻な問題になるのよね。
「ふう、とにかく、決戦は再来週ね」
「ああ、天王山だな」
それまでは、あたしたちもきっちり宣伝していかないと、とにかく

数で負けると分が悪い。
久々にあたしたちも、ちょっと不安な毎日を過ごすことになったわね。

# 集まった人々

「みんな、行くわよ」
「「はい」」
今日はいよいよ、反蓬莱連合が抗議集会を開く日。あたしは一家４人と別行動であたしの両親も参加する。
抗議集会の事実を発見し、蓬莱教授が、早速連合側に間者を送り出した。
その患者のお陰で、内情を徐々に知ることができた。
それによれば、例の牧師がフェミニズム団体などと接触し、また海外でも蓬莱教授を快く思わない人と、大同団結を試みていた。
「分断工作は失敗したのね」
「ああ、間者がいるとバレる危険性もある」
蓬莱教授は、何とかしてこれらの仲を引き裂こうと画策したが、うまくいかなかった。
「何とかして、男女比が偏った状況を作りたいのよね」
特に、大勢の独身男性に1人の女性という、いわゆる「紅一点」の状況が、コミュニティを崩壊させるには最もやりやすいのだという。
つまり、その女性をめぐって男たちは簡単に争い始めてしまうのよね。
有り体に言えば、さくらちゃんが入ったことで小谷学園野球部が崩壊したのにも似ているわね。
「中々難しいよな」
そもそも、日本の反蓬莱連合そのものが、ほとんどの構成員が在日外国人と、アンチ蓬莱の気持ちが強い外国人で構成されているとのこと。
そしてその理由は何かと言えば、日本での宗教心の薄さ、更に牧師に対するネガティブイメージもあって、日本人のほとんどが、蓬莱教授の研究を支持していた。
「やはり、日本人から崩すべきかしら？　足元を固めないといけないと思うのよ」

「だけど、それはジリ貧だよなあ」
反蓬莱連合に参加している日本人たちは、蓬莱教授の研究によって仕事が無くなりそうな人が殆どなので、彼らはイデオロギーで反対しているわけではない。
こういう人たちには、以前と変わらない収入を約束できるようなシステムを作れば、大半が賛成派に転じてくれるだろう。
既得権益の排除というが、生活を困窮させるほどに排除すれば、治安も悪くなってしまい、それは寿命の低下という実害となって跳ね返ってくる。だからやり過ぎてはいけないのよね。
……とはいえ、海外はそうもいかない。
「ええ、イデオロギーに凝り固まった人を説得できないなら、やっぱりまずは、日本からなのかなあ」
永原先生が唱えた、蓬莱の薬を使った日本中心の新世界秩序構想は、蓬莱教授に危険すぎるとして却下された。
とはいえ、海外で反対が増えれば、やはり日本だけでも「不老国家」として地位を固めて、世界にその威力を見せつけた方が長期的にはいいのかもしれない。
「うーん、最初の数年はそれもやむを得ないかもなあ」
蓬莱教授は、「反対派の連中も、バカな宗教家どもも、いずれ俺にひれ伏す時が来る」と言っていた。
それならばやはり、永原先生の新世界秩序構想も、全くの間違いではないのかもしれないわね。
あたしたちは、そんなことを話ながら、抗議集会のカウンターデモの集合場所の公園へと向かった。

「うわあ」
あたしは驚きのあまり口元を手で覆ってしまう。
義両親はあたしたちを置いて公園の中へ進んでしまった。
「すげえな、もうこんなに集まってるのか」
大分早く着いたつもりだったのに、公園の中は既に溢れんばかりの人で一杯だった。

都内の公園ということもあるけれども、まさに満員御礼という言葉にぴったりだった。
「蓬莱教授」
あたしはなんとか蓬莱教授を見つけて声をかける。
ちなみに、隣には瀬田助教の他、取材の記者としてブライト桜の高島さんの姿も見えた。
「おお優子さんか、しかし困ったものだ。まさかこんなに人が来るとは」
蓬莱教授が、嬉しい悲鳴をあげている。
「それで、向こうはどうです？」
「今、間者を忍び込ませとる。ちょっと待ってくれ」
蓬莱教授が「調査中だから待て」と指示してくる。
「……分かりました」
ともあれ、今はスパイの情報を待たないといけないわね。
さて、その間にあたしは知ってる人に挨拶しないと。
「うーん」
と言っても、体力のないあたしとしてはあまり動き回りたくない。
これからも、ここに人がどんどん増えていくから、スペースも考えないといけないわね。

「なあ、あれ、篠原優子じゃね？」
「あ、本当だ」
「うひょー、あの噂、本当だったんだな」
「うんうん、にしても、実物はもっとかわいいし胸も大きいよな」
「くー、あの超巨乳を毎晩拝める旦那が羨ましいぜ！」
「全くだ！　しかも優子ちゃんの方から惚れたんじゃノーチャンスだよな」
「やめとけ、優子ちゃんの旦那さん、嫉妬深い上に力も強いらしいぜ」

あたしの知名度も、以前と比べると上がっている。
他の参加者からの注目度も高い。

「あ、幸子さん」
ふと、公園の入り口を見ると、幸子さんと直哉さんがこっちに向かってくるのが見えた。

「お、何だ何だ!?　またとびきりの美人だぞ」
「あーでも、優子ちゃんほどじゃないかな？」
「いやいや、確かにそうかも知れねえけど、幸子さん？　だってとんでもねえ美人な上に巨乳だぜ」
「お前やっぱおっぱいなんか」
「うるせえ！」

幸子さんとあたしが近づくと、また男たちが会話で盛り上がる。
分かっていたけど話題は「かわいい」と「胸でかい」ばかりだわ。
というかよく見ると、この公園の参加者のほとんどが若い男性で構成されているわね。
つまり、あたしの姿を一目見ようと、人妻にも関わらずこんなに集まっていったのね。
……うん、やっぱり男って単純でバカな生き物だわ。それが男の魅力でもあるんだけどね。
「幸子さん、遠いところからわざわざありがとう」
「いやいいのよ。今回は協会が支援金出してくれるって」
幸子さんによれば、交通費を協会が支給してくれたらしい。
何となく、その金の出所がわかるわ。まあ、協会と蓬莱教授が蜜月関係なのは既に公然かつオープンなことだし今更バレたところで痛くも痒くもないけどね。
「うむ、にしても、男の姿が多いな」
直哉さんが、そう話す。幸子さんへの独占欲からか、ちょっとだけ警戒心を見せている。
「あはは、あたしの写真に吊られて来たみたいよ。頭数必要だから、助かってはいるけどね」
「あー分かるわ」

幸子さんが、納得したような表情を見せる。
その後も、あたしたちが知らない顔が何人もこの公園に入っていく。
お巡りさんたちも、何やら話始めている。
そしてその次、現れたのは佐和山大学の天文サークルの仲間を中心とする佐和山大学の関係者たちと、坂田元部長とその家族たちだった。
ちょうど期末試験が終わったその日なので、部員はほぼ全員、というか、佐和山大学で見知った顔も見かける。
そしてその中には――
「あ、あの篠原さん、2年前は失礼しました」
件の、ヤリサーの2人組だった。
聞くところによればこのヤリサーの人は2年留年しているらしい。
そしてその近くには――
「篠原さん、お久しぶりです」
文化祭で、あたしたちの隣になる、ダンスサークルの2人組と、新入部員だという女子部員が1人いた。
「今年は3人になったのね。それよりいいの？　あのサークルは敵じゃなかったの？」
「もちろん敵よ。その事について私たちは許すつもりはないわ。でも、蓬莱教授を助けたいという気持ちはみんな一緒なのよ。私たちも子供じゃないですから」
ダンスサークルの人が、きっぱりとそう答える。
やっぱりその辺り、大学生って大人より大人なのよね。
「ふふ、ありがとう」
「歩美さんも、天文サークルのみんなも」
佐和山大学組は、学生本人だけではなく、家族まで参加している例も多い。
やはりみんな、蓬莱教授を助けたいという思いで、ここにいるのね。
「あ、皆さん！　集合時間前なんですけれど、この公園が満員になりそうなので、近くのもっと広い公園に一部移動してもらえますでしょう

か!?」
佐和山組は到底ここには入りきらないと思った矢先、お巡りさんからついにデモ隊の分散を頼まれる。
「うーむ、分かった」
蓬莱教授も速攻で納得する。
とりあえず、この公園に今いる人のほとんどを、向こうの公園に移動させるという。
「ここには誰をここに残そうかしら?」
集合場所はここだから、それなりの人を残さないといけない。
「向こうの挺団長は瀬田君に任せよう。頼めるか?」
「はい!」
瀬田助教が勢いよく返事する。
「で、残るのは俺、篠原さん石山さん一家、見映えの問題もあるから幸子さんたちと山科さん、木ノ本さん一家をここに残そう」
「……分かりました」
「あの、大智もここに残してください」
歩美さんが蓬莱教授に彼氏を残すように言う。
「っと、山科さんにも彼氏ができたのか。分かった」
もうすぐ1年なんだけどね。
「では皆さん、私とお巡りさんについていってくださーい!」
「うえー、まあこんだけ参加者多いんじゃしゃーないわな」
瀬田助教とお巡りさんたちが、参加者の大半を別の広い公園へと誘導していった。
すると、入れ替わるように1人の男性がこちらに駆け込んできた。
そういえば、あの顔、抗議集会の第一報を持ち込んできた人よね。
「伝令であります」
「おう、どうした?」
蓬莱教授に、柔らかそうな表情で情報を伝える。
いいニュースなのは明らかね。
「反蓬莱連合、参加者は今のところ目視で数えて４０名程度との情報が入ってきました!」

「おう！　しめた！」
「うん、この調子なら、勝てるわ！」
あたしと蓬莱教授が、喜びを表す。
問題は、相手が暴力に訴えてこないかどうかよね。
その間にも、どんどんと参加者が入ってくる。
その中には、佐和山大学の学生が多く、またたまたま通りかかっただけの一般人の中にも、あたしたちを見て飛び入りで参加する人もいた。
「蓬莱先生、皆さん、久しぶりです」
次に来たのは、溢れんばかりの美少女軍団で、そのあまりの壮観ぶりに通行中の一般人も思わず目を丸くしている。
その先頭にいたのが、永原先生だった。
「永原会長！　それに皆さんも」
「ふふん、真打ちは遅れて登場ってね！」
永原先生も上機嫌になっている。
でもよく見ると、あたしがカウンセリングしている新しい患者さんの姿もあり、彼女たちも学校の女子制服で参戦している。
「永原先生、まだ集合時間前ですぜ」
「もー、蓬莱先生。それにしても、参加者以外と少ないですね」
蓬莱教授が野暮な突っ込みをし、永原先生は参加者の少なさを気にかける。
「あー、実はこの公園が参加者で埋め尽くされててな。近くのもっと広い公園に移動してもらったよ」
「あら？　そんなにもたくさん？」
永原先生も驚きの声を上げる。
「ああ」
「頼もしいわね。あら、塩津さんも来てたのね」
永原先生が、幸子さんを見つける。
「ええ。お久しぶりです会長」
正会員全員に、一般会員が多数、蓬莱教授との結束がうかがい知れる。そして――

「さあ皆さん、近くで蓬莱教授の研究に反対する集会開かれるそうですよ！　あたしたちで抗議デモしましょう！」
「蓬莱の薬があれば、私達と共に何百年も過ごせますよ！　さあ、あなたも参加してみませんか？」
　比良さんと余呉さん、更に数人の正会員は、それぞれミニのスカートを穿いていた。
　ＴＳ病の女の子たちのそのかわいさとエロさで、男を釣るという作戦で、次々と通行中だったおじさんたちが飛び入り合流してくる。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
　隣にいた浩介くんがあたしにささやいてくる。
「男って、あんなに単純な生き物何だな」
「あら？　あたし、単純な男は好きよ」
「む、そ、そうなのか……」
　浩介くんがぎこちないながらも納得してくれる。
　ふふ、浩介くんだって単純だものね。
「ふふー、飛び入りありがとうー道子嬉しいわー！」
「ふへへへへ。俺も蓬莱教授に協力するぜ！」
　目の前で作り笑いを浮かべている比良さんは、もう実年齢が１８０歳を越えていると知ったら、このおじさんは何て顔をするかしら？
　そうこうしていると、更にまた多くの集団がやって来た。
「お、石山さん！　久しぶりです！」
「……」
　見知った顔が、あたしのことを旧姓で呼ぶ。
「あれ？　あの？」
　そこにいたのは守山元生徒会長だった。４年前にあたしが女の子になったばかりの時の文化祭のミスコンでお世話になった人だ。
「あたし、結婚したから、今は篠原優子よ」
　結婚式いたわよね？
「おっとごめん、４年前のミスコンの時はお世話になったよ」

「うん」

「小谷学園の卒業生と、在校生をかき集めてきた」

守山先輩の集団の中には、唐崎先輩とさくらちゃんや、あたしたちの2年2組と3年1組だったクラスメイトの多くや、あたしが優一の時にさんざん怒鳴った男子などもいた。

「永原先生……篠原さん……お久しぶりです……」

「うん、さくらちゃんも久しぶり」

「志賀も元気そうでよかった」

「あの……河瀬さんは？」

「龍香ちゃんたちはちょっと別の場所に行ってるわ。大丈夫よ」

それを聞いてさくらちゃんが安心した顔になる。

「久しぶり、篠原」

「お、高月に安曇川じゃねえか」

そして、高月くんや虎姫ちゃんの姿も見える。

何だか同窓会みたいだわ。

「ふぉふぉふぉ、わしら先生もおるぞ！」

「あ、校長先生！」

在校していた時にお世話になった校長先生の姿も見える。

「ほほ、わしは今は前校長じゃよ。今は隠居して理事をやっとる。校長先生は――」

「篠原さん、お久しぶりです」

それはかつての教頭先生だった。

付き物がとれたような朗らかな顔をしていて、あたしが在校してた頃とはまるで別人だ。

「えっと、今は校長先生、でいいのかしら？」

「ええ、僭越ながら、校長になりました」

元教頭の隣には、数学の先生で学年主任でもあった小野先生がいる。

「篠原さん、お久しぶりです。今は教務主任をしてます小野です」

「小野先生、こちらこそお久しぶりです」

小野先生は、あたしたちの在校時には学年主任の先生で、あたしが女の子になったのは、小野先生の授業中だった。
そして、女の子になったばかりの頃には、更衣室の問題などで永原先生とひと悶着あった。
でも最終的に、浩介くんのプロポーズの時に理解者になってくれた。
前校長先生と小野先生は、永原先生が、３４年前まで「北小松貴子きたこまつたかこ」と名乗ってた時の教え子でもある。
ちなみに、恵美ちゃんはさすがに試合があるのか姿は見えない。
その代わりに、元校長先生が「テニスの田村恵美選手から応援メッセージを預かっている」とのことで、これもあとで読ませてもらおう。
「皆さん、私たちと蓬莱先生のために、ありがとうございます」
永原先生が小谷学園組の集団に向かって頭を下げる。
「いいってことよ。小谷学園と佐和山大学は一心同体！　これからも、よき関係を続けて参りたいものですな」
「そう言ってもらえると助かるな」
近くで聞いていた蓬莱教授も嬉しそうな表情をする。
「みんな、篠原先輩の夢を、叶えてあげたくて、俺たちも、蓬莱教授の薬が欲しくて、来たんです」
小谷学園組はかなりの大人数で、元々見映えのよさから協会組はここに残留しているため、またほぼ全員に向こうの公園に行ってもらった。
そうこうしている間にも、もう一度伝令が入る。どうやら、向こうにもこちらの人数の多さが伝わったらしく、かなり動揺が広がっているみたいね。
「あ、えっと……篠原優子さんですよね？」
「はい」
３０歳くらいの男性があたしに話しかけてきた。
「その……４年前……本当にすみませんでした！」
「えっと、確かあなたは？」
どこかで見覚えがあるけど、思い出せないわ。

「野洲です。野洲康平やすこうへいです！」
「あー！　あのナンパバスガイドね！」
どうやら、2年生の時の林間学校の時の添乗員らしいわね。
何を隠そう、あたしはこの人に林間学校の帰り道にナンパされ、強引に引きずり込まれそうになった所を、浩介くんに助けてもらい、そのお陰で、あたしは浩介くんに惚れ込んだ。
「おう、どの面下げて来たんだ！」
浩介くんが怒るのも無理はない。
「はいその……すみませんでした」
ただただ、頭を下げるばかり。
「まあええわ。それよりもどうして、ここに来たんだ!?」
「もちろん、蓬莱教授を支持するためですよ」
うん、そう答えるしかないわよね。
「あー、俺の聞き方が悪かった。俺たちがいることくらい、分かってたんだろ？」
「はい、その……やはり遅いと思いつつも、謝罪した方がいいと思いまして。それに、今は別の会社に勤めてますから」
やはり、就職口は見つかりやすいらしい。
「そうかい。まあ、俺もそこまでねちねち言うつもりはねえよ。お陰で、優子ちゃんには大満足の日々だからな」
「それはよかった」
「もうっ!!!!」
あたしはちょっとだけ怒った感じで言う。
「おっとすまん、優子ちゃんにはトラウマだもんな」
「あー、あたしもいいのよ別に、それよりも、もう1人、会わせたい人がいるわ」
あたしはそう言うと、直哉さんと楽しそうに話していた幸子さんの元へと駆け寄る。
「あ、優子さん、どうしたの？　そちらの男性は？」
「幸子さん、この人は野洲さんよ。4年前の夏、あたしをナンパして、浩介くんに成敗されたの」

「っ……」
野洲さんにとってみれば、黒歴史をほじくりかえされたようなものよね。
「あーそういえば言ってましたね。優子さん、その事がきっかけで、浩介さんに惚れたって」
「ええ、でもその前に偶然林間学校で一緒に実行委員になったのもあったわ。幸子さん、あたしと浩介くんは、遅かれ早かれ結ばれる運命にあったわ。でも、それが遅いと、あたしは協会の正会員になるのが遅れて、あなたのカウンセラーはできなかったわ」
「じゃあもしかして？」
幸子さんが驚いた顔をする。
「ええ、結果論だけど、野洲さんの暴力的なナンパが東北で大学生をしていた幸子さんの命を救ったのよ」
「え!?　俺がこの子を!?　どうして!?」
野洲さんは、狐につままれたような表情で驚きを隠せない。
まあ、誰だって「身に覚えない人の命を救った」何て言われたら驚くわよね。
「この子はあたしと同じ、ＴＳ病の女の子でね。あたしが東北に行って初めて幸子さんに会った時には、『男に戻るんだ』ってかなり危険な状況だったわ。もし来るのが遅れたら、幸子さんはとっくの昔に、精神が耐えられなくなって自殺してたわ」
「それが今や彼氏持ちかあ……本当に人生何があるか分からねえんだな」
野洲さんが、しみじみと語ると、蓬莱教授から、「そろそろ時間だ」という声がかかったため、こちらには最低限の誘導人員だけ残し、あたしたちも本部の公園へと移動することにした。

## 出発前の演説

「うわぁ……すごい人の数ね。合戦ができそうだわ」
永原先生が、思わず驚嘆の声をあげた。
そこには広大な空間に２０００人を超えようかという大集団が出来ていて、さっきの公園よりも遥かに広い空間が、手狭になっていた。
どうもあたしたちが来る前にも、ここへの大移動があったらしく、この前首相官邸で会った国会議員３人の姿も見えた。
また、公園の外側には、さっき移動した高島さんを含めてメディアの姿がある。
蓬莱教授のスパイから、「敵は多くても２００人足らず」との情報が加えられたから、こちらは既に１０倍して余りある人数だった。
ちなみに、その情報はデモ隊全体にも伝えられ、士気が大いに向上した。
「さてデモコースだが……」
当初は、両デモ隊が鉢合わせになるように計画したわけだけど、それはうまくいかなかった。
しかし、あたしたちには嬉しい誤算がある。それは――
「敵のデモ隊はここをゴールにしているということだ。しかもこちら側から見て右から左に」
敵方のデモコースは、スタートが公会堂のある公園で、ゴールがこの公園になっている。
この公園は、敵方の屋外公会堂と比べれば狭いが、ここでさえ、今のあたしたちには正直手狭に感じる。ゴール地点はもっと広い所じゃないと、飛び入り参加を受け入れきれない危険性がある。
「今、瀬田君が警察と交渉をしてくれている……お、噂をしてたら来たぞ」
「教授、警察側としても、『この人数ならば、ゴール地点の変更はやむ終えない』とのことです」
走り込んできた瀬田助教がほくほく顔で成果を報告する。

「でかした！」
　警察側も、人口密度によるリスクを認めてくれたみたいね。
「よし、じゃあ本格的に、挺団分けに入ろう。シュプレヒコール役の挺団長と、列を管理する挺団長に分けたいと思う。まず、我々の発表するこのデモの人数だが、警察発表をそのまま垂れ流すことにしよう」
「え⁉　いいんですか？」
　主催者発表は、大体警察発表よりも多目に出すものという相場がある。
　ところが蓬莱教授は面倒くさいのか警察発表をそのまま主催者発表にしてしまおうとしている。
「今、伝令役の人がお巡りさんに何人くらいの参加者か聞いている。もちろん、まだ確定ではないが。まあ、ざっと見た感じで、仮に２００人としよう」
　蓬莱教授が紙に出す。
「うん」
「まず、先頭の第１挺団、５人を１列として１００列、これを１個挺団とするだろ？」
「第１挺団の一番前と二番目は、いわばデモの顔だ。横断幕も持つ必要がある。中央左に俺、更に道路側に優子さんと浩介さん中央右には挺団長役の永原先生、彼女にシュプレヒコールをお願いしたい」
　そうすると、一番右が余るわね。
「そして、２列目と合わせて残り６人だが、今回のデモに参加することになった議員連合の国会議員３人を入れよう。そして残りの３人だが……永原先生」
「はい」
　蓬莱教授が近くで聞いていた永原先生を呼ぶ。
「協会の方からは、何人が来ている？」
「１７１人です」
　凄いわ。普段の会合でもそんなにいないのに！
「よし、じゃあ協会の中でも選りすぐりの美少女を３人集めてくれ」
「……分かりました」

更にデモ隊の道路側には、見栄えを良くするために全ての梯団になるべく均等に協会の会員を置くようにするという。
全体の比率では、男性の参加者が多く、大半はＴＳ病患者のナンパなどを目的とした人々だ。
しかし、この手の運動では、数こそ力になる。
烏合の衆であることは確かだが、外観さえよくするれば、何とかなるわね。
「列管理上の第1挺団長は、瀬田君にお願いする。他の列管理上の挺団長を束ねる役割もかねてもらうから、他の列管理役の梯団長を研究所から適当な人間を選んでくれ」
「……分かりました」
そう言うと、瀬田助教はある集団の中に入っていく。
「第2挺団は日本性転換症候群協会を挺団の顔にする、挺団長は比良さんにお願いしたい」
「分かりました、比良さんに伝えておきます」
「うむ、頼んだ」
永原先生が、その場から去る。
第2挺団の先頭は、他に余呉さん、歩美さんが加わることが決定した。
ちなみに幸子さんとその彼氏の直哉さんは、あたしたちと同様に、隣り合わせで最前の2列目に来ることになった。
続く第3挺団は佐和山大学の挺団で、こちらは学長を含む大学の教授陣で最前列を埋め、一番前道路側の2人のみ、桂子ちゃんと龍香ちゃんが担当することになった。
ここでシュプレヒコールをする挺団長は、桂子ちゃんが大抜擢になった。
桂子ちゃんはビックリしていたけど、やはりこういうのは美人の女性がするべきなのよね。
また、前方の列も、研究室の関係者や在校生、卒業生で固める方針をまとめた。
そして、第4挺団は小谷学園が挺団の顔になる。

こちらの先頭列は、小谷学園の元校長先生や永原先生以外の教師陣を先頭に、小谷学園の在校生や卒業生を前方の列に集中配備することになった。
女性ばかりに挺団長をさせてもまずいので、ここの挺団長は現校長先生が担当することになった。
ちなみに、永原先生と蓬莱教授の策略もあって、卒業生なのに在校生を装うために制服で来ている人もいた。要するに「子供」を演出し、「子供が不老を求めている」というプロパガンダに使うためである。
もちろん、それぞれの挺団の中には、「雑兵」を多数仕込むことになる。
というよりも、全体の構成員としては、どの梯団も「雑兵」が圧倒的に多数派になっている。
「よし、こんなところだろう」
蓬莱教授が中核となるメンバーに対して構想をまとめると、あらかじめ用意してあった箱の台の上に立つ。
「えー、皆さん！　本日は反蓬莱連合へのカウンター集会のため、不老の薬の実現のため、貴重な時間を割いて下さいまして、誠にありがとうございます」
デモの参加者は、時を追うごとに大人数に膨らんでいる。
それでも参加者たちは、マイク越しの蓬莱教授の声が聴こえると一斉に蓬莱教授の方へ向き直る。
「皆さん、蓬莱の薬は、必ず国益になります。我々の生活を、豊かにします。社会保障費が大幅に削減され、科学技術や公共事業に、多くの予算が使われることになることでしょう！」
蓬莱教授の演説は、総理大臣との会談の内容も含まれている。
「皆さん、老化しないで、いつまでも健康な体でいられるって、素晴らしいことですよね！　それを科学的に実現できる時が来ているのです！　それを！　非科学的な宗教や、あるいは個人差のあるイデオロギーで妨害することは、決して許されないばかりか、これは基本的人権のもっとも基本的人権である、生存権の侵害に他ならない!!!」
「そうだー!!!」「そうだー！」

蓬莱教授の演説で断言すると、周囲からも「そうだー！」という声が聞こえてきた。
「今、我々は人間の寿命を１０００歳とする薬を開発している。しかしそれだけでは足りない！　完全なる不老の実現に向け、ＴＳ病の人たちとも同じような時を過ごすためにも、今日は皆さん、俺に力を貸してください!!!」
「「おーーー!!!」」
蓬莱教授の力を求める声に、集団が割れんばかりの歓声をあげて応える。
蓬莱教授も、この手の活動をするのは初めてのはずなのに、本当に凄いわ。
「では次にですね、日本性転換症候群協会から、永原マキノ会長が来ていらっしゃいます。永原先生、よろしくお願いします」
永原先生が壇上に上がり、蓬莱教授がマイクを渡して下に下がる。
後ろの方に控えていたマスコミのカメラマンさんたちは、慌てて機材を片付けにかかった。
「はじめましての人ははじめまして。２回目以降の人はこんにちは。日本性転換症候群協会の永原マキノです。私はＴＳ病と言われる、体が女の子になり、老化しないでずっと生き続けるという病気になりました。この闘病生活は生きている限り続きます」
永原先生の話を、みんなで注視する。
「私の人生について、皆さん知っているでしょうか？　恐らく、知っている人が殆どだと思いますが、知らない人のために説明しますと、私は永正１５年に、現在の長野県上田市で、真田家が治める村の足軽として生まれました。永正１５年というのは西暦に直すと１５１８年ですから、私は現在５０３歳ということになります」
この辺りは、まだそこまで動揺の声が漏れない。
以前にも鑑定番組でやっていたことだし、既に現実にもよく知られているものね。
「私は、戦乱の時代から江戸時代、そして明治以降も、多くの私より後に生まれた人々が老いで死んでいきました。今私は小谷学園で教師

をしていますが、教師を始めたのは、既に約１４０年前のことになります。ですから、もう死んでしまった教え子の方が、数としては多いでしょう」
永原先生の話は、不老故の重さを醸し出している。
しかしそれらは、「みんなが不老ならどうってことない」ものであるところが味噌だ。
「私たちの協会に、江戸時代の天保生まれ、１８１歳になる副会長さんがいらっしゃいます。彼女は結婚し、子供を産みましたが、子供は既に寿命で全滅し、孫も、そして最近ではひ孫も全員この世にはもういないとのことです。こうしたことは、蓬莱先生の研究によって、確実に防ぐことが可能になるでしょう」
永原先生が、そう話すと、周囲もうんうんと頷いている。そう、最後の一言が重要なのだ。これで印象がガラリと変わる。
蓬莱教授とはまた違ったアプローチの仕方を、永原先生は行っている。
「私たち日本性転換症候群協会は、蓬莱教授の研究に、協力していきたいと思います。今回、私たち協会は、全会員の過半数にあたります１７１人が参加します。今回はその中で代表して、篠原優子さんにスピーチをお願いします」
事前の予定通りあたしが指名され、壇上に立つ。永原先生からマイクを受け取り、注目を一斉に浴びる。
こうやって大勢の前でスピーチしたのは、小谷学園の卒業式の時以来だった。
「皆さん、ご紹介にありました、日本性転換症候群協会広報部長の篠原優子です」
「うひょー！」
「かわいー！」
あたしが壇上に上がると、一斉にそんな声が聞こえてくる。観客の声は壇上からだとより響くわね。
聞こえなかったけど、恐らく永原先生も同じだったんだと思う。
「それでですね。あたしの人生について、今回話したいと思います。

あたしは元々、石山優一という名前でした」
その後は、あたしがいつもしている人生のこと、女の子になって辛かったこと、良かったこと。
最終的には愛する男子と結ばれて、今は結婚3年目だということを話す。
「今回、反対派の集会には、あたしたち協会によって葬り去られたと言っていいでしょうフェミニズム団体が多数参加するとのことです。あたしたち、日本性転換症候群協会としましては、男の体から女性になり、男の心のまま過ごしていくことは不可能だということを知っています」
周囲も、あたしの話を真剣に聞いてくれている。
「女性の心をもって生きていかないといけません。それ以外のＴＳ病患者が迎える結末は、例外なく『死』でした。あたしたちＴＳ病患者は、これまでの歴史上、たった1人の例外もなく、フェミニストになった人間はいません。それは、男と女の違いは、皆さんが考えている以上に大きいからなのです」
「……」
このあたりは、当事者故の権威主義になってくるけど、仕方ないわよね。
「実は、協会に反フェミニズム声明を提案したのもあたしです。あたしには、健全な次世代の患者のケアのために、どうしてもフェミニズムの排除が必要だったんです。あたしがこの協会に入る前、患者の自殺率は５０％を大きく越えていました。ですが、今は殆ど０です。この流れを、逆流させてはいけません！」
「そうだー！」
あたしの演説にも、いい感じで激励が飛んでくる。
「あたしには、旦那さんがいます。蓬莱教授の薬の実験に協力して、未完成の蓬莱の薬を飲んでいます。でも、未完成ではダメなんです。完成させなければ、あたしはいずれ、浩介くんとバラバラになり、未亡人がずっと続く運命になるんです！」
あたしはかねてより、前半は理性に、後半は感情に訴えかける。

本当は感情論はよくないけれど、これも仕方ないわね。
「皆さん、あたしのこの運命を変えるためにも、蓬莱教授に力を貸してください！」
「「おーーー!!!」」
あたしが頭を下げると、観衆のボルテージが更に上がっていく。
「次にですね、テニスの田村恵美選手から、応援のメッセージが届いています」
そして次に、恵美ちゃんから貰った応援文を読み上げる。
あたしが、実は恵美ちゃんが元クラスメイトということを話すと、
「おー」という声が方々から上がっていた。
「では、次の方に変わりたいと思います。今回はですね、国会で出来ました、蓬莱教授の研究に協力する超党派の議員連盟からですね、与野党の枠を超えて、３人の国会議員の皆さんが来ていらっしゃいます!!!」
「うおおおおおお!!!」
あたしがそう宣言すると、デモ参加者たちは、更に士気が上昇する。
何せ国会議員の権威は絶大だ。しかも超党派の議員連盟なのだからなおのことよね。
どうやら、「国会議員までこのデモに参加してくれている」というのは、とても安心できるわね。
あたしがまず、最初の与党の女性議員さんにマイクを渡し、壇上から降りる。
「ご紹介に預かりました、衆議院議員の――」
「ふう」
「優子ちゃんお疲れ」
あたしが下に降りると、すぐに浩介くんがあたしを労ってくれた。
ペットボトルをくれたのでありがたく飲ませてもらう。
「女はいつまでも若くきれいで美しく！　それを求めるのは、当然の欲求です！　何も、恥ずかしいことはありません！　ババアになりたくない！　ずっとずっと美人になりたい！　それを望むことの何が悪いんですか!?」

壇上では、女性議員の演説が続いている。
ここでは、男性の声よりも女性の参加者たちが賛成の声をあげている。
そう、女性だって、多くのサイレントマジョリティはそう思っていた。だからこそ、美容と健康は気遣われていたのだ。
「ふう、全くその通りよね」
あたしも、この女性議員さんの言い分は正論だと思っている。
というよりも、そう思えない方がむしろ異常と言っていいかもしれないわね。
『ありのままでいいじゃないか』って言う人がいます。だったら私たちはありのままに、ＴＳ病は羨ましい！　いつまでも若くきれいで清く正しく美しく、女に生まれたんだから、いつまでも女の子らしくなりたいと、女性が女性らしくなりたいと思うことの何が悪いのかと、そう叫ぼうじゃありませんか!!!」
「そうよ！」
「ええ!!!」
この人が言いたいのは、欲望に正直になろうということ。
声の大きな少数派の対策には、多数派が声を張り上げるしかないのだ。
つまりは、「ノイジーマジョリティ」を作り出すしかない。
「さあ、蓬莱教授の薬を完成させて、みんなで美人を目指しましょう!!!
次の方に代わります」
女性議員が降りると、今度は野党の女性議員が壇上へと上がる。
「えー皆さん、衆議院議員の――」
そう、この議員さんは、前の議員さんとは政敵同士で、この前も国会中継で激しく論戦を戦わせた。
「私は、確かに彼女とは敵同士です！　それははっきりと宣言しておきましょう」
ワハハハハ
その宣言に、集団からは、笑いの声も漏れている。
「ですが!!!　今回の蓬莱教授の実験、不老研究の成功！　それを支援

すると言う意味では、仲間です！　共に戦っていきたいと思います！」
　パチパチパチパチパチ!!!
　観衆からは、割れんばかりの拍手が巻き起こる。
　あちこちから、「よく言った」「見直したぞ」という声が聞こえてくる。
　それらの声がどこまで本気なのかは分からないが、少なくとも僅かながら、女性議員の印象も良くなっただろう。
「私も、声を大にして言いたい！　私だって、女性なんですよ！　男性に好意を持って貰えるのは嬉しいんです！　旦那がいるとかいないとか、そういうのは関係ないんです！　このデモには独身女性の方もいるでしょう、私は声を大にして言いたい。１００人の女性に嫌われようとも、１人の男性に、そう自分の彼氏、あるいは自分の旦那に好かれた方が嬉しいんだって！　女だって、男が好きなんですよ！　男に媚びることの、ぶりっ子の何が悪いんですか!?」
　見た目は国会議員なので当然「おばさん」何だけれども、そのあまりの正直さに、男女問わずに歓声が飛び交っている。
「すげえ演説だな」
「ふふ、浩介くん。あたしも女の子よ。乙女はみんな、素敵な男の子に捕まえられるのを待ってるのよ」
　あたしが甘い声で、「ぶりっ子」しながら浩介くんに近付く。
「うっ……でも優子ちゃんは――」
「ふふ、あたしはもう浩介くんに、捕まっちゃったわー」
　あたしは左手薬指の結婚指輪を浩介くんに見せる。
　気持ちは本心だけど、男を刺激するためにぶりっ子の口調になっていることに、男特有のおバカを発揮している浩介くんは全く気付かない。
「うっ、優子ちゃん、いちゃつくのは後にしようよ」
　浩介くんが顔を赤くして訴えてくる。
「あーうんそうよね」
　あんまり意地悪しちゃかわいそうだものね。

「――を持って、私の演説を終わりたいと思います」
パチパチパチパチパチ!!!
さっきよりも激しい拍手と共に、次に与党の男性議員が演説し、最後にもう一度、蓬莱教授が壇上に立つ。
これから、デモ行進が始まり、反対派に致命的な打撃を与えに行くことになっている。

## デモ行進

「皆さん、これから、デモに出発したいと思います。道中それなりに長い距離を歩きます。気分が悪くなった方は、無理をせずに列から離れてスタッフや警察の方の指示にしたがってください。また、過度な旗揚げは危険ですのでご注意ください。これから本隊は４つの挺団に別れたいと思います。それぞれの挺団の先頭集団の方が立っていますので、お好きな挺団にお入りください」

蓬莱教授がそう言うと、あたしたちは早速第一挺団の先頭の形成に入る。

先頭の２列１０人は先程の作戦会議通り、蓬莱教授、永原先生、あたし、浩介くん、幸子さん、直哉さん、国会議員の３人と、会合でよく見るあたしたちの中でも美人に分類されるだろう女の子が選ばれた。

まあ、女の子って言っても、明治生まれの１４０歳なんだけどね。

ちなみに、永原先生の隣には国会議員の与党議員が選ばれた。

あたしたちの挺団の横断幕は、「不老の追求は生存権！　蓬莱教授の不老研究を認めよ！」と書かれていて、もちろんあたしもこれを持ちながら最前列を更新することになっている。

あたしは一旦列から離れて、横に並んでいる他の挺団の様子を見てみる。

第２挺団には、「みんなのために不老の実現を応援しよう！」という横断幕を持つ協会の仲間たちがいて、後ろの「雑兵」の割合がもっとも高い。一方で、この梯団には、『日本性転換症候群協会』と書かれた旗や、国旗を掲げている人もいる。とにかく旗は多い方がいいのかもしれないわね。

第３挺団の横断幕には、「我々佐和山大学は蓬莱教授を守ります！」と書かれていて、更にデモ隊の多くの人によって、佐和山大学の校旗が多数掲げられていた。

最後に第４挺団の横断幕には、「夢の実現に向けて蓬莱教授を応援しよう！」と書かれていて、小谷学園の教師陣や、制服を着た在校生

や卒業生が多数見えた。
ともあれ、これが我々デモ隊の全容ということになった。
「はい、1列5人です。ご協力お願いします！」
「はい、こちら空いてます！」
「詰めてください！」
警察の人の監視の中、スタッフさんたちが場所を指示している。とにかく5人の所を4人で占領してしまう例が多いらしい。
こういうのは、先頭の方の第1挺団に人気が集中しそうなものだけど、協会の会員をほぼ満遍なく配置したお陰もあって、少しだけ第2梯団が人気になっていただけで、比較的スムーズだった。
「よし、瀬田君、出発するぞ！」
「はいっ！」
中央の蓬莱教授がそう宣言すると、あたしたちは5人一斉に、横に並んで歩き始める。
そして拡声器付きのマイクを永原先生が握っていて、拡声器は肩にかけている。
よく見ると、永原先生は横断幕を掴んでおらず、紙を片手に持っている。
「私たちは、佐和山大学の蓬莱伸吾教授が進める不老研究を支持し、不当な学問侵害集会に対する、抗議活動をして降ります。シュプレヒコール！」
「「おーーーー!!!」」
シュプレヒコールの声と共に、デモ隊の挺団が、一斉に声をあげていて、後ろを振り向けば、拳を突き上げているのが見える。
「私たちの生存権を守るぞー！」
「「守るぞー！」」
左側には、スマホを持った老若男女が、物珍しそうにあたしたちを撮影していく。
あたしや永原先生、蓬莱教授のことを指差してヒソヒソ何かを話している人もいる。

「蓬莱教授を、支持するぞー！」
「「支持するぞー！」」
永原先生の音頭が続く。
隣の浩介くんやあたし、蓬莱教授、更に列整理係の瀬田助教も声を張り上げている。
一致団結しているという気分が、あたしたちを否応なしに群集心理へと追い込んでいく。
「宗教による、学問弾圧を許すなー！」
「「許すなー！」」
警察官と瀬田助教の誘導に基づきデモ隊は歩いているが、そんな中でも、あたしたちは必死に声を張り上げる。
「日本政府は、不老技術の実現に向け、蓬莱教授を支援せよー！」
「「支援せよー！」」
「不老技術で、より良い社会を実現するぞー！」
「「実現するぞー！」」
ここまで来て、一旦シュプレヒコールが終わる。
永原先生が少しぜえぜえと息継ぎをしているのが見えた。
「ご通行中の皆様、お騒がせしております。私たちは、より良い未来のために、佐和山大学教授の蓬莱伸吾先生の研究を支持し、人類の不老化による、活性化を支持します。本日は、その蓬莱教授の科学的な研究に対して、非科学的、感情的な宗教団体が、蓬莱教授の研究を差し止めようという抗議集会を開こうとしていると、私たちはそれを阻止するために立ち上がりました」
永原先生の演説が、デモ隊と通行人に向け発せられる。
通行人達も、何人かが足を止めてあたしたちのことを見ていた。
「シュプレヒコール！」
「「おーーー!!!」」
そして演説が終わると、また同じシュプレヒコールが繰り返される。
実は「学問の自由を守る」、「生存権を守る」、というのは、蓬莱教授にとってはあくまでも建前で、本音は「不老の実現によって、より良

い社会が作れるからそれを実現しよう」というもの。
もちろん、その本音だって立派な大義名分だから、それも使っていく訳だけれどもね。
「篠原さん、交代してみる？」
何周かシュプレヒコールをし終わったところで、デモ隊がちょうど赤信号で止まっていると、蓬莱教授を挟んで２つ隣にいた永原先生があたしに拡声器を渡そうとしてきた。
「え？　あたしが？」
そうなると、あたしがこのデモ隊を指揮することになる。
突然の申し立てに、あたしは固まってしまう。
「ああ、やってもいいぜ」
蓬莱教授がそう話す。
まあ、ダメとは言わないわよね。
「……分かりました」
覚悟を決めたあたしは、永原先生からマイクとカンペを受け取り、横断幕から手を離す。
左隣にいた浩介くんの右手が、あたしを埋めるように右側に行き、永原先生が横断幕を持ち直す。
「優子ちゃん、頑張って」
「うん」
浩介くんも、あたしを応援してくれる。
信号が青に代わり、お巡りさんの笛が鳴って前に進む。
カンペには、あたしや蓬莱教授用のセリフもあった。
どうやら、あたしがこれをするのも予定調和だったらしいわね。
「ご通行中の皆様、お騒がせしております。あたしたちは、佐和山大学の蓬莱教授を支持し、不老研究を推進していくために、活動しております。今、蓬莱教授の不老研究を待ち望んでいる人がいます！」
交差点を左に曲がりながら、あたしがカンペを読んで演説を始める。
「皆さん、あたしはＴＳ病です！　かつては男でしたが、ＴＳ病では完全な女性になり、今は男の人と結婚しています！　ですが、もし蓬莱

教授の研究が完成しなければ、旦那とは生涯の伴侶となることが出来ないのです！」
　あたしは、ふと後ろを見る。
　あたしの視界には挺団の後ろ側の人だかりが見え、通行人の1人が飛び入りでデモ隊の中に入っていくのが確認された。
「シュプレヒコール！」
「「おーーー!!!!」」
　あたしがシュプレヒコールを叫ぶと、デモ隊の梯団たちも反応してくれる。
「あたしたちの、生存権を守るぞー！」
「「守るぞー！」」
　よし、アドリブしてみよう。
「蓬莱教授への悪意と、戦うぞー！」
「「戦うぞー！」」
　お、あたしのシュプレヒコール通りにしてくれたわね。
　ふふ、ちょっと楽しいかも。
「蓬莱教授を、支持するぞー！」
「「支持するぞー！」」
　あたしがこんなに大きな声を張り上げたことは……あ、性質は違うけど浩介くんに何回もあるわね。
「宗教思想を押し付けるなー！」
「「押し付けるなー！」」
　こっちは紙にもあるパターンのひとつ。
「蓬莱教授、頑張れー！」
「「頑張れー！」」
　あたしの選んだコールで、デモ隊全体が動く。でも、拡声器の性能からしても、おそらくはこの梯団のみに影響があると思う。
　それにしても、第2挺団以降はどうなっているかしら？　ここからでは伺い知れないわね。
「ご通行中の皆様、お騒がせしております――」
　そしてあたしはまた、自分の言葉で蓬莱教授を支持する言葉を並

べ、再びシュプレヒコールを開始する。
通行人たちも、心なしか永原先生より注目している気がするわ。
「はぁ……はぁ……」
でもやっぱり、声を張り上げると疲れるわね。
「優子さん、次は俺が変わろう」
あたしが疲れているのを見た蓬莱教授が、あたしに手を差しのべてくれる。
「ありがとうございます」
あたしはそう言うと、蓬莱教授に担当を変わってもらう。
永原先生と同じように拡声器とカンペを蓬莱教授に渡し、横断幕を持つ位置を調整する。
「えー、ご通行中の皆様聞いてくれ。俺が、かの有名な蓬莱伸吾である！　今回は、デモをさせていただきまして、大勢の方にご参加いただきました。また、反対派によるヤジなども殆どなく、我々の主張に聞き入ってくれた方が大半であり、更に飛び入りで参加された方も多くいらっしゃるとのことです。誠にありがとうございます！」
蓬莱教授の演説は、あたしや永原先生とは違い、とても男性的で力強い。
「不老は、俺たちの希望です！　ご通行中の皆さん、実はですね、あまり知られていないんですけど、ＴＳ病の人は社会保障費分の税金が免除になりますし、年金を支払う必要もないのですよ！　何故ならば、彼女たちに、老後の概念はないから、その分の税金を払う必要が無いんです！」
蓬莱教授があたしたちの特権を話すと、通行人が羨ましそうな表情をした。今の国家予算では社会保障費が膨れ上がっているため、それらが免除になるというのは、他の人に比べて税金が極めて安いことを意味する。
ＴＳ病の人の免税特権を話すことで、人心を掴むのが蓬莱教授の戦略で、それはとても効果が高かった。
「いいですか？　もし、老いという概念そのものがなくなり、老後の心配をしなくていい社会になれば、我々の税金を、もっと世の中を便利

にする、公共事業や技術開発に回すことも可能ですし、将来の健康の悩みからも、解放されるでしょう！　あるいは、『ベーシックインカム』も可能かもしれません！」
「そうだー！」
「そうだー！」
　蓬莱教授の声に、デモ隊からもそうだそうだの声が沸き起こる。
「シュプレヒコール！」
「「「おーーー!!!!」」」
　蓬莱教授がそう叫ぶと、デモ隊の声は一層大きくなる。
　やっぱり、蓬莱教授の人心掌握術は素晴らしいわね。
「我々は、宗教思想による研究弾圧を許さないぞー！」
「「「許さないぞー！」」」
　蓬莱教授のシュプレヒコールも、カンペからは少々のアレンジが加えられている。
「我々は何としてでも不老社会の実現を成功させるぞー！」
「「「成功させるぞー！」」」
　前方左にゴールが見えてきたわね。
　そう、あそこが反対派が根城にしていた公園で、警察の手引きで反対派のデモのルートはあたしたちとはほとんど重ならないようになっている。
「我々は、生存権と幸福追求権を、守るぞー！」
「「「守るぞー！」」」
　それでも、出発したばかりと思われる反対派のデモの後ろ側を含め、敵のほぼ全体が見えてきた。
　パット見た感じではあたしたちから見れば、半個挺団にも満たないような数だった。
　反対派はこちらには気づいていないみたいね。
「ご通行中の皆様、今マイクをとっていますこの俺が、不老研究の第一人者と呼ばれております蓬莱伸吾です。不老の実現による、老化の概念の消滅は、確実性があり、なおかつ、人口問題を除けば、メリットが極めて大きいものでありますが、宗教的な価値観からこれに反対す

るのは、極めて抽象的であり、不合理でありますから、皆様もそのように心得てください！」
蓬莱教授が拡声器で演説をする、この演説が終われば、ゴールが完全に見えるだろう。
「浩介くん」
「ああ、もうすぐ終わりだな」
長かった道のりも終わりが見え、あたしたちは公会堂の入り口に入り、公会堂に近い最奥部の所定の位置で停止した。
「おーすごい人数だ！」
ふと、後ろの方に向き直ると、大人数がこちらに合流してきた。
「皆さん、ここを反対派の連中は我々がデモ行進を始めたあの広い公園を目指しているとのことですから、えーこれからはお散歩ですけど、盛大に歓迎してやりましょう！」
わー!!!
蓬莱教授がそう煽ると、デモ隊が一気に盛り上がる。
あたしたちに遅れて来た第2挺団の先頭にいた余呉さんが同じことを説明した。
警察側はというと、見て見ぬふりをしていた。
それどころか、お巡りさんたちはデモのスタート地点、反対派からすればゴール地点への近道をこっそりと蓬莱教授に教えている始末だった。
そう、実は蓬莱教授によれば、警察としても不老社会は歓迎するべき事態だという。
というのも、昨今の治安技術の向上と共に、若者が犯罪をしなくなったおかげで犯罪率が減少し、判断力の衰えた高齢者の犯罪割合が急増していたからだ。
しかも高齢者は体も弱いため、下手に逮捕すると警察不祥事に発展しかねないリスクまである。
日本の警察はこういうのを嫌う傾向にあるが、それを曲げるということはやはり不老というのはそれだけ大きな出来事なのね。
４挺団が全て到着後、ここで建前上解散となったが、「道案内」と称

して反対派のデモ隊のゴール地点に先回りすることになった。
反対派に対して、群衆心理でストレス発散になると考えた雑兵を含め、それなりの人がデモ隊に留まり、あたしたちはデモ行進した時の3分の1もかからない時間で元の場所へと戻ってきた。
ちなみに、大半の人数が落伍したけど、まあそれは折り込み済みだし、それを差し引いてもこちらが多い。

「優子さん、本当に先頭に出るの？」
移動を終えると、あたしの隣で移動していた幸子さんが心配そうに声をかけてくる。
幸子さんも、あたしたちほどじゃないけど、デモ隊の顔として一番先頭という重責をこなしていた。
「ええ」
蓬莱教授、永原先生と浩介くんとあたし、この４人が代表して一番先頭に出て、反対派のリーダーを論破し、致命的な打撃を与えようという作戦になった。
ちなみに、国会議員の3人は、立場上の問題もあるのでここで解散し議員会館に戻った。
「やっぱり心配だわ。やめといた方がいいと思うわ」
幸子さんはあたしを心配してくれる。
でも、あたしは覚悟を決めている。
「大丈夫よ、あたしは以前、フェミニストの女を論破したことがあるわ」
まああれも、どこまで役に立つかは分からないけど。
「そう」
「幸子さん、見ててね」
幸子さんも、納得した表情をしてくれる。
「うん」
幸子さんと別れ、あたしは先頭組に合流する。
あたしたちは公園の最奥部に集まり、あたしたちが矢面に立つ格好を作る。

列形成の挺団長たちが、何やらデモ隊に指示をしている。
ふふ、楽しいことが始まりそうね。
「神の摂理を無視した、蓬莱教授の研究に反対ー！」
「「反対ー！」」
すると、中年女性の声と別の群衆のシュプレヒコールが聞こえてきた。
……ついに来たわね。
「お、お客さんのお出ましだぜ！」
「来たぞー！」
「歓迎じゃあ！」
敵のデモ隊の先頭が、この公園に集まっていた。
スパイの情報によれば、あたしたち親蓬莱軍が約２０００に対して、反蓬莱軍はスパイの情報ではスパイ自身を入れても僅か１６８だという。
もちろん、こちらに参加しない人を考えれば、こちらの勢力も１０００人はいないけど、それでも数倍は軽い。
念のため、間には警察官が入る。
反対派の中に仕組んでおいたスパイは、どさくさ紛れにこちら側に合流する。
さあ、本格的な戦争の始まりね。本来こういうのは、トラブルになりかねないから止めるはずなのに、やっぱりお上と直接繋がっているって大きいわ。

# 団結力の勝利

「あー！　お前ら！」
反対デモの先頭列にいたのは、例の牧師だった。
あたしにとっては生で見るのは初めてで、更にあの時いた反蓬莱連合のメンバーも何人かいる。
そして何より驚いたのは、２年前にあたしに言いがかりをつけて返り討ちにされた、元講師の姿もあったこと。
「ふ、俺の研究を邪魔しているのはお前らか！」
あたしたちのデモ隊が、あっという間に敵を包囲する。
敵の周囲３６０度を数倍の兵力を持つ味方で囲み、いわゆる「包囲殲滅陣」を完成させる。
「神を冒涜し、自然をねじ曲げる蓬莱伸吾！　許さんぞ！」
圧倒的不利の情勢の中でもこの気勢、勇気があるというよりも、身の程知らずと言った方がいいわね。
「具体的にどこがどう自然をねじ曲げるのよ？」
ここで、永原先生が発言する。
多くの人に反論させることで、敵の孤独感を強めるための戦法だ。
「全ての生き物は、本来老化して死に、自然に帰る運命だ！　お前らはそれをねじ曲げている！」
「あら？　老いずに死ぬ生き物なんて、いくらでもいるわよ。猫に食べられるネズミとか、昆虫なんてほとんどは幼虫で死ぬわよ」
あたしがすかさず反論する。
「しかしだ！　老いから逃れるなど言語道断だ！」
「あら？　あたしたちＴＳ病は存在そのものが言語道断と言いたいのかしら？　それって差別主義者よね」
あたしが笑いながら皮肉を込めて言うと、元講師の醜いおばさんが、ビクッとする。
手の方を見ると、相変わらず左手には何も嵌めていないのが見えた。
かわいそうに、あれから2年も経って、更に老けちゃって、完全に

行き遅れたわね。
「ぬー！　そうやってすぐに人の揚げ足を取りやがって！」
「あら？　これのどこが揚げ足取りなのかしら？　あなたの言い分に整合性がないだけなのに、言い訳するんじゃないわよ」
今度は永原先生が牧師を煽る。
「あんた、あんたが日本性転換なんちゃらの会長なのね！」
すると、例のあたしに撃退された旧ジェンダー論講師のおばさんが声を張り上げる。
「ええ、私がいかにも日本性転換症候群協会会長の永原マキノよ」
「あんたたちのせいで、私らみんな食いっぱくれちゃったわよ！　何よ！　あんたたちちょっと美人だからって調子にのって！」
「あらあらまあまあ―」
おばさんの必死の口撃を、永原先生は手慣れたように何事もなく受け流す。
恐らく、江戸城にいた頃から、この手の口喧嘩には慣れていたのかもしれないわね。
「そうよそうよ！　男から好かれてるからって、このぶりっ子集団！」
デモに参加していたフェミニスト団体の構成員たちが、一斉に少ししわがれたおばさん声を永原先生とあたしに浴びせ続ける。
ちなみに、手を見れば分かるように、全員独身だというのが見て取れた。
「あはははは、あなたたち、結婚できないのがそんなにコンプレックスなのね。それならなおのこと、私たちについていけばよかったのに」
永原先生は、自身も未婚なのにこの余裕の表情
やっぱり度量が違うわね。
「ふふっ、蓬莱の薬があれば１００歳でも婚活できるわよ！」
「な、何よ！　え!?　ちょ、ちょっと！　どうして!?」
あたしのその言葉から、反対派のデモ隊に参加していた若い女性たちなどが、一斉に列を離れて包囲に加わった。
要するに、「１００歳でも婚活できる」という言葉を受けてあたしたちに寝返った訳で、その数は反対派の半数近くにも上っていた。

ただでさえ圧倒的だった戦力差が、更に大きく広がった。
「もう分からないのかしら？　あなた方は、思想も容姿も劣化しきって何もかもが賞味期限切れってことよ、おばあさん」
　ワハハハハ！
永原先生が最上級の煽りを放ち、デモ隊の周囲も挑発的な笑い声を上げる。
そんな中、味方からも「あんたが言うかー」というツッコミが入る。
永原先生の話術は、はっきり言ってあたしがするそれとは格段に効果が違っていて、「優子」を心がけているあたしにとっては、到底思い付かないわ。
永原先生の実年齢は５０３歳で人類最高齢、自分たちよりも４００歳以上も年上で、１０倍は生きているだろう女性から、「おばあさん」と呼ばれることは、この上なく屈辱のはずだわ。
「おばちゃーん」
「おばあちゃーん！」
デモ隊の包囲側が、この機を逃すなとばかりに、フェミニスト団体を煽り続ける。
耐えられなくなったおばさんたちは醜い泣き顔を晒し始め、ついに総退却し始めた。
「この野郎！」
更に味方を失った牧師が、大声で怒鳴る。
「今のお前らの行動こそ、人類が不老になってはならない最大の理由だ！」
「あらあら」
永原先生は、相変わらず飄々とした表情で牧師を嘲笑うような目つきをする。
「こうやって、不老の人間と不老でない人間に、分断をもたらす！」
「ふ、やはり君は頭が悪いな。そんなこと、ノーベル賞の俺が予想してないと思ったか⁉　だからこそ、人類が等しく不老になるべきだと、俺は主張しているんだ！」
しばし沈黙していた蓬莱教授が、ここで大きく前に出た。

「何を言うか！　不老を嫌がる人間は、必ずいる！」
牧師も負けじと応戦する。
「もちろん、それはそいつの勝手だろう。だが、お前らのワガママで、ここにいる多くの人間の不老への追求心を、止めていい理由はない！
何なら、民主主義らしく、国民投票をしてもいいだろう。この状況が、既に結果を暗示しているとは思うがね」
「このお！」
蓬莱教授の煽りに牧師が反論できず、無情に声を荒げる。
「けっ、反論できなきゃ結局わめき散らすしかできねえんだな！　この状況、ビデオに録られてるぜきっと」
「あんたには、私からも言いたいことがあるわ」
ここで、永原先生も前に出る。
「ええ、日本性転換症候群協会としてね」
あたしも永原先生に続いて前に出る。
更に、前方で包囲していた比良さんや余呉さんを始め、協会のＴＳ病患者組が一斉に前に出て反対派のデモ隊を包囲する。
ちなみに、この包囲においても逃げ道も一応用意してあるので、こうしている間にも反対派のデモ参加者は１人、また１人と抜けていき、遂には先頭列にいる一部の痩せ我慢したフェミ団体の幹部たちと牧師、そして数人の関係者のみになっていた。
「明日のＴＳ病患者を救う会、最近全然活動されていないみたいですね」
あたしが、牧師を問い詰めるように言う。
「うるさい！　病院に全て断られているんだ！　『患者は面会謝絶です』ってな！」
まさに四面楚歌としか言いようがないの状況で、牧師は尚も吠え続ける。
「当然じゃない。あたしたち協会はね、『明日の会』のような治療法は禁忌なのよ。ちなみに、プログラムを新しくしてからは、自殺者が０よ」
あたしが更に、牧師を追い詰める。

「うぎぎぎぎぎ」
「ねえ、今ここで、『明日の会』の正式解散を宣言してちょうだい」
「嫌だ！」
永原先生の要求を、牧師が拒否する。
既に自然消滅も同然なのにね。
「あら、そう？　まあ、解散しなくても、あなた方につく患者はいないわよ」
明日の会のホームページ自体が、更新停止中で、「患者自殺のお詫び」を消したのでは、遺族に申し訳が立たないし、仮に立ったとしても、あたしたちがしつこく追求すればいい。
「ふぎぎ、うるさい！　お前らが、お前らさえいなければ、俺たちの教会は！」
「そっちから喧嘩売っておいて、自業自得だわ」
永原先生が、冷徹に言う。
「ぐあああああ!!!」
永原先生の嘲弄に耐えきれなくなったのか、仮にも聖職者であるはずなのに、醜い声を出す。
「もう、やめろ!!!」
「「!?」」
突然、あたしたちの方から別の声がした。
その人は、首から十字架をぶら下げていた。
つまり、あの牧師と同じクリスチャンということになる。
「全く見苦しい！確かに蓬莱教授は神を冒涜し、無神論を是とする人間だ。最後の審判があれば間違いなく地獄に落ちるだろう」
「……」
蓬莱教授も、ここで「地獄などあるわけないだろ！」とは言わない。さすがにそこまでは空気が読めない男ではない。
「だが、人間がより長く生きたい。より長く、現世で神に仕えたいというのは、信心深く、敬虔な者ならば誰でも思うことだ。蓬莱教授個人が神を冒涜したとして、その薬には、その薬を求める者に罪はない！」
「お前、この裏切り者！」

牧師がそのクリスチャンを罵倒する。
「裏切り者はあなたです。回りを見てください。もう殆ど、この包囲網から脱出していますよ」
ちなみに、あたしたちのデモ隊も、既に殆どが勝利を確信して包囲を外れて帰宅の徒についている。
この牧師は、他のクリスチャンからもかなりの批判を浴びていたのは事実だ。
「う、うぎぎぎぎぎ」
「もう、お前に味方など、この国にはいない。とっとと帰るんだな！」
蓬莱教授が更に煽ると、牧師はもう押し黙るしかなかった。
「帰れ！　帰れ！」
パン！　パン！
「「帰れ！　帰れ！　帰れ！　帰れ！」」
浩介くんが手拍子をしながら帰れとコールすると、デモ隊が一斉に帰れコールを浴びせる。
「っ―!!!」
牧師とフェミ団体、そして最後まで反対派に残っていた数人は、目に涙を浮かべながら、その場から退場する。
そして完全に敵が退却した後、あたしたちデモ隊は、大きな歓声をあげた。
「えい、えい、お―！」
何処からともなく、勝利の声が上がる。
「「えい、えい、お―!!!　えい、えい、お―!!!　えい、えい、お―!!!」」
そしてあたしたちは、今度こそ正式にデモを解散させ、各自帰宅の徒についてもらった。
そんな中で、永原先生は「えいを言うのは大将だけよ」と愚痴をこぼしていた。
「浩介くん、インターネット、どういう反応が出るかしらね？」
「さあ？　どうだろう？」
聞くところによれば、ネット工作会社も、反蓬莱連合の仕事を引き受けてくれないらしい。

そう、もしその事実が蓬莱教授側に漏洩すれば、不老の薬を受け取れないリスクがあるから。
インターネットは比較的本音が書かれているが、この時には既に殆どが蓬莱教授を支持する意見で埋め尽くされていた。
「デモのこと、どう報道するかしら？」
「さあなあ……」
浩介くんも、予想できないという顔をする。
既存メディアも既に蓬莱教授が制圧したも同然とは言え、どこかに反骨心が残っている可能性もある。
「まあどちらにしても、あの牧師は今度こそ終わりよ」
お義母さんが、そう呟く。
あの後、あたしは包囲隊に加わっていた義両親と合流し、多くの人から挨拶を受けつつ、拍手で駅に向かうことができた。
蓬莱教授や永原先生を残して家に帰るのはちょっと気が引けたけど、まあ仕方ないわね。
「ふー」
あたしは、家のベッドで横になる。
まずはとにかく、疲労を回復したい。
「うーん……」
あたしは、すぐに気になって休憩に集中できず、ＰＣをつけてブラウザを開く。
今日のことは早速、ニュースサイトに載っていた。
そこには、「反蓬莱デモ、親蓬莱の１０分の１以下」という題名が書かれていた。
中身を見ると、蓬莱教授の研究に反対するデモが開かれたことが報じられているが、その中で、「これを受けて蓬莱伸吾教授は、直ちに対抗デモを計画、結果的に蓬莱教授を支持するデモには、反蓬莱デモの１０倍の参加者が集まった」として、それぞれのデモの主催者発表と警察発表の人数を載せていて、最終的には「力の差は明らかだった」としていて、あたしたちが嘲笑った所は報道されていない。
コメント欄を見てみると、「哀れだったぜ反蓬莱デモ、あの後蓬莱教

授のデモ隊に包囲されて論破されてた」「こいつ蓬莱教授だけじゃなくて人類最高齢の永原さんのとこにも喧嘩売ったんだろこいつら？

自業自得だね」といった声が次々に上がっていた。

もちろんこの中には、蓬莱教授の宣伝部の活動ももちろんあると思うが、実際にはかなりの割合で一般人の書き込みが占められているだろう。

既に世論は蓬莱教授を支える方向でほぼ一辺倒になっていた。

「すごいわね」

あたしたちは、世論を動かしている。

あたしたちの声が、日本を動かしている。

いつの間にか、そんなに大それたことを、あたしたちはしていた。

きっかけは、小さなことだった。

ただ乱暴だった自分を変えて、女の子としての新しい人生を歩みたい。

そんな1人の高校生の想いが連鎖に連鎖を重ね、遂には総理大臣とも面会し、蓬莱教授の研究を進めさせた。

そもそも、協会と蓬莱教授の仲を深めたのだって、あたしの大きな決意によるものだった。

あたしは、今度の文化祭は、このデモの成果を大々的に宣伝するべきだと思った。

浩介くんにその事を話すと、「分かっている、既に宣伝部でもプロパガンダを考えている」とのことだった。

「桂子ちゃん、この前のデモのことなんだけど」

翌週の月曜日、天文サークルは人が更に増えているため、あたしたちは蓬莱教授の方にヘルプに行っていいかを桂子ちゃんに聞いてみた。

桂子ちゃんは2つ返事で、「ええ、人がだぼついてるからいいわよ」と言ってくれた。

ちなみに、今年の佐和山大学の天文サークルは、初めて歩美さん以外の小谷学園出身ではない非生え抜きのメンバーが多数加わってい

て、ますます盛況を見せていた。1年目にあたしと浩介くんと桂子ちゃんの3人だけだったのが、嘘みたいだった。
最も、それでも多くのメンバーが、あたしと面識のある人だったけどね。
「じゃああたしたち、蓬莱の研究棟に行くわね」
「行ってらっしゃーい」
桂子ちゃんに見送られ、あたしたちは蓬莱教授の研究棟に行く。
「おう、来たか」
「はい」
蓬莱教授が早速出迎えてくれる。
「今我々は、今度の文化祭に向けて大急ぎで展示品を製作している。それを優子さんに手伝って欲しい」
「分かりました」
「浩介さんは、宣伝部に合流してくれ。この文化祭では、反蓬莱の残党が嫌がらせをする可能性が高い。少しでも敵の戦力を削ぐために、活動してくれ」
「……と言いますと？」
浩介くんが疑問を投げ掛ける。
「ああ、そうだなあ――」
蓬莱教授によれば、反蓬莱連合日本支部の事務所には、インターネットやマスコミの報道を見た人々が、早くも直接的に抗議のヤジを飛ばしているとの情報がある。
どうやら無防備にも事務所の住所を晒していたらしく、反蓬莱連合の代表の牧師が「明日の会」の代表でもあると言うことがデモ動画と共にすぐに特定され、嫌がらせの電話がひっきりなしにかかってくる状態となった。
併せて、動画途中で最後まで反蓬莱連合に与した人物の特定作業が、蓬莱教授とは独立して、インターネットのコミュニティで独自に進められているという。
「うへえ、嫌がらせですか……」
「優子」であるあたしとしても、ちょっと気が重たいわ。

「うむ、我々もこれに便乗しようと思っている」
蓬莱教授によれば、既に宣伝部でも、公衆電話を使って、「人殺し」「売国奴」「カルト」などといった罵倒の電話をかけまくっている。
本来ならば誉められた行為ではないけれども、警察が完全にあたしたちの味方となったため、黙認してもらえると踏んだらしい。
「そこで、連中を完膚なきまでに潰しきるためにも、例の牧師の運営する教団は教義を逸脱し、腐敗の限りを尽くしたというデマを流すことにした。とにかく奴の宗教的権威を失墜させねば、奴の中核的な信者によって、不死鳥のように甦るだろう」
蓬莱教授によれば、この手の洗脳を解除させるためには致し方なく、また幸いにもデモ動画ではクリスチャンの人間が例の牧師を避難していた部分があったこともあったので、蓬莱教授はこれを最大限に利用することにした。
「いいかい？　人を騙すためには9割の真実の中に1割の意図的な嘘を混ぜるんだ。そうやって奴を失墜させるための嘘を人々に信じ混ませる。これは例のよくテレビで出てくる歴史や社会を解説している……ああいややめておこう」
誰のことを言っているのかしら？　まあいいわ。
「取り敢えず、その手法は人々を洗脳するのにとても効果的だ。何せ1割しか嘘を混ぜないわけだから、バレても単なる勘違いと言い逃れできるからな」
「いいんですか!?」
正直、かなり気が引けることだと思うけど。
「ああ、仕方のないことだ。ここで反蓬莱の芽を徹底的に摘んでおかないと、蓬莱の薬の流通に支障が出てしまう」
「……」
蓬莱教授は、「致し方ない」と割り切っている。それが出来るのも、蓬莱の薬がもたらす恩恵が、強固に明らかだからだと思う。
あたしはどうしても、永原先生や蓬莱教授よりは冷徹になれないわ。
「ああ、気が重いのは無理もないだろう。優子さん、あなたは大人の世

界には向いてない。だが安心してくれ。優子さんが『優子』であり続けられるために、俺や浩介さん、永原先生が汚れ役を引き受けてるんだ」
「蓬莱教授……」
もちろん、あたしだって汚れ役になったことはある。
大学1年生の時には、あたしはジェンダー論の講師を退職に追いやり、佐和山大学からフェミニズムを一掃し、更には最善の策とはいえ、結果的には明日の会に寝返ったＴＳ病患者を自殺に追い込むよう幸子さんと歩美さんを使って工作させた。
もちろん、それは今でも、最善の方法だということに疑いは持ったことはない。
「優子ちゃん、心配するなって。こういうことから女の子を守るのも、男の役目なんだよ」
「うん、ありがとう」
浩介くんがそうフォローすると、浩介くんは宣伝部の方にかけていく。
「さて、俺たちは学園祭の準備に戻ろうか」
「はい」
蓬莱教授に促され、あたしたちは学園祭の宣伝活動に戻った。

## 次なる戦いへ

「それでだ、人を騙すには9割の真実に1割の嘘を混ぜるのがいいといっただろ？」
「ええ」
展示品の構成案をパソコンで見せながら、蓬莱教授が今回の宣伝の概要について詳しく説明してくれる。
蓬莱教授が、またあたしに人を騙すためのプロパガンダ方法についてレクチャーしてくれるのかしら？
まあ、こういうのは自分で使わなくても相手のやり方が分かるから知っておいて損はないわね。
「だがここは、蓬莱の研究棟だ。つまり専門的な学問を是としている。汚い手は使えない。だから嘘を混ぜてはいけないんだ」
蓬莱教授は今度は「嘘を混ぜるな」と言ってきた。
この前と言っていることが変わってるわね。
「どう言うことですか？　この前は違うことをおっしゃっていましたよね？」
「ああ。時と場合、いわゆるＴＰＯってもんがあるんだ。学問においては、例え1％でも意図的な嘘を発見されればそれは致命傷になるものなんだ。もう6年くらい前になるか……既に存在していた万能細胞を、新発見の万能細胞だと捏造したバカが大騒ぎになっただろ？」
「ええ、あたしも覚えているわ」
あの時は、最初は「蓬莱教授を超える大発見」何て言われていたのに、あっさりと嘘がバレた記憶がある。
確かに、論文の盗用やデータの捏造は大きな問題になるものね。
「取り分け俺の研究は以前から賛否両論があるものだ。匿名の宣伝部なら、嘘を混ぜて世論操作をするのもいいが、研究所としては、『科学による不正行為』は絶対にする訳にはいかない」
「ええ」
論文の盗用やレポートの丸写しといった行為は絶対にしてはならないということは、この大学では蓬莱教授に限らず多くの先生から口

酸っぱく言われて来ていた。
　それでも、成果を急ぎたいのか、国を問わずにこの手の不正行為が蔓延しているのだという。
「それでだ、今回はデモ隊の人数を、主催者発表を敢えて警察発表と同じくらいに発表することに決定した」
「……ええ、それがいいわね」
　何分、敵よりも既に十分に多い人数がこちら側のデモに参加していたことは分かっている。
　今さら水増しをするメリットもこちらにはない。
　つまり、「警察を信用する」でも十分で、水増しした人員でプロパガンダするリスクにリターンが似合わないものね。
「それよりも、あの後出した例の牧師の言い分だ。これを攻撃したい」
　蓬莱教授は主張を書いたメモ書きをあたしに見せてくれる。
　蓬莱教授の字は中々にきれいだった。
「ええ」
「俺としては、特に連中の信仰は徹底的に排撃する必要があると思う。他の科学者のためにも、科学は宗教に負けないということを、ここに示す必要があるんだ」
　詰まるところ、「蓬莱教授の不老技術は神を冒涜し、自然の摂理に逆らっている」という主張だ。
「優子さん、４年前に水族館で会った時のことを覚えているかい？」
　蓬莱教授がぱっと思い出した風に言う。
「えっと、４年前というと……確か浩介くんと夏に行った？」
　確か、海水浴場に隣接していた水族館だったわね。
　うん、そこに蓬莱教授がいたんだったわ。
「ああ、覚えてくれてよかった。そこで俺が、何を見ていたか分かるかい？」
「えっと確か……」
　あたしは、何とか頑張って思い出そうとする。
　そして、１つのエピソードを思い出した。
「そうだわ。クラゲ」

「そうだ。よく覚えてくれていた。俺が水族館で見ていたのは、ベニクラゲだ」
思い出したわ。ベニクラゲは若返りの生き物でって言ってたわね。
確かあの時、蓬莱教授はあたしのことを「佐和山大学で偉大なことを成し遂げる」って言ってたわね。
あの予言、当たったわね。
「そのベニクラゲは、一定まで老化すると、若返る性質があると言っただろう？　その例を見ていいように、不老は別に自然の摂理に反しない。それに俺の研究が引き起こすのは、ＴＳ病の人間が持っている性質を、他の人間が取り入れるだけのことだ」
蓬莱教授は、既に何度も話してくれたことをまた繰り返す。
大事なことだものね。
「ええ、分かってます」
もし不老がが神を冒涜し、自然の摂理に反するならば、あたしたちは生きて行けない。
ましてや生まれ持った性別が変わってしまうんだから、ただ不老というだけよりもはるかに大きな意味を持つ。
「俺達は、その事をとにかくしつこく宣伝し、我々も不老の追求は幸福追求権だと主張し続けることにしようと思う。こうすることによって、例の教会を間接的に印象悪化させることもできるだろう」
要するに、基本的人権を侵害しているという印象を与えようというのが蓬莱教授の考えだった。
「はい」
蓬莱教授の分かりやすい説明から、今後の大まかな方針が決まる。
問題となったのはレイアウトで、まずはあたしたちの主張を載せ、真ん中に反対派の反論を、最後にあたしたちの再反論を載せて終わる感じにすることになった。
「宗教的思想の矛盾に対して、科学で反論するのは気持ちいいぜ、特にこういう分野ではな」
蓬莱教授が、笑顔で話す。
「そうでしょうね」

あたしも、蓬莱教授の気持ちが分かるわ。
「よし、じゃあ優子さんにやってもらいたい作業がある」
「はい」
あたしに与えられた仕事は、ＰＣに保存された画像から、適切な画像を選んで載せるというもの。
その多くはあたしたちと反対派が対峙した画像や、デモ参加者のクリスチャンが反論する場面がほとんどで、でも本体についてはそこまで重く触れずに済ませることにする。
また、反蓬莱連合の参加者たちがこの研究棟を襲撃した様子の時の画像も選別する。
ちなみに、あたしは蓬莱教授側と協会側双方の広報担当なので、よく写り込む必要がある。
なので、あたしが写り込んだ写真は優先的に展示するようにしていく。
また、国会議員が応援に駆けつけたり、恵美ちゃんが蓬莱教授を支持しているという事実も、強調して垂れ流す。
彼らの主張を一瞬載せた後、おびただしい反論で埋め尽くして印象操作をする。
「ふー」
よし、とりあえず原案は出来たわね。
早速蓬莱教授に見てもらおう。
「蓬莱教授」
「お、出来たか、どれ？」
あたしが呼ぶと、蓬莱教授がすぐにこっちに向かってきてくれる。
そして速攻で使う写真の一覧を並べたパソコンの画面と、机の上にある大まかなレイアウト原案の紙を覗き込んでくる。
「ふむふむ、おお。いいじゃないか。よし、時間もそこまでないから、これで行こう。これを宣伝部に持ち込んで、もし宣伝部の方で変えたい部分があるというならフィードバックしてもらおうか」
「はい」
蓬莱教授が席を代わり、原案の紙を写真に撮り、写真一覧とともに

添付してから宣伝部にメールを打った。
　宣伝部が来てくれるとのことだったので、あたしはもう後は待つだけになる。
　これでＯＫをもらえば、後は印刷してポスターを貼るだけになる。

「蓬莱さん、連絡です」
「おう、浩介さん、どうした？」
　しばらくすると、宣伝部から来た浩介くんが、駆け寄ってきた。
「２つありまして、１つ目は今回の文化祭の展示案ですが、宣伝部としては異論がありません」
　それを聞いたあたしと蓬莱教授は、安堵のため息をあげる。
　でも、２つってどういうことだろう？
「おうよかった。それで、２つ目は？」
「国際反蓬莱連合日本支部と明日のＴＳ病患者を救う会の本部を兼ねていたと思われる事務所何ですが、既にもぬけの殻という情報です」
「何だと!?」
「ええ!?」
　しかし、安堵のため息も、浩介くんから寄せられた２つ目の情報で打ち消されてしまう。
　もぬけの殻？　つまりどこかへ逃走したってことかしら？
「それどころか、例の牧師が運営していた教会も既にもぬけの殻で、現在牧師は行方不明とのことです」
「うー、しまった！　先手を打たれたか！」
　蓬莱教授が珍しく悔しそうな表情をする。
「それで、俺たちが雇っていた興信所は？」
　蓬莱教授は、反蓬莱連合の動向を探るために、間者の他にも探偵を雇っている。
「恐らく、国外に脱出したのではないかと――」
　浩介くんが、更に悪い報告をする。
「何ぃ!?　ふー、仕方あるまい。国外に逃げられてしまえば追跡は困難だ。しかしだ、これでよりいっそうの国内の足場固めが進むはず

だ」
　蓬莱教授は、足場固めに余念がない。
「宣伝部に連絡。事務所への嫌がらせ電話は中止し、インターネットの世論操作と、政府関係者との関係強化に全力を尽くせと伝えてくれ」
「分かりました。失礼します」
　蓬莱教授の指示を聞き、伝令役の浩介くんが再び部屋から出ていく。
「さて、足場固めは容易になった。とすれば、これからは宣伝部も英語圏のインターネットに進出せねばならないだろうな。そのことに、予算の一部を使うことにしよう」
　蓬莱教授がそうため息をつく。
「ええ、そうですよね」
　これには、あたしも賛成だわ。
「俺が一番恐れているのは、奴が海外で無いことを吹き込み、国連をはじめとした国際機関で蓬莱の薬が禁止薬物にされてしまうということだ」
　蓬莱教授が考えているのは、恐らく最悪のパターンのことだと思う。
「え!?　でもそうなったら困りますよ!」
　もしそうなればあたしの浩介くんとの願いが、ＴＳ病患者たちの思いが、生存権を叫ぶ人々の思いが、絶たれることになる。
「もちろん、蓬莱の薬がもたらすメリットを考えれば、核武装して鎖国し、国連から脱退してでも突っぱねるべきだと俺は思う。それに不老の人間の強さを鑑みれば、最終的には永原先生が提唱したような新世界秩序が完成するだろう」
「じゃあそれでもいいんじゃないですか？　それこそ自業自得じゃないですか」
　宗教に溺れて騙されて、自ら強い不老人間になることを放棄するのは、上から目線かもしれないけど、「愚行権」の範疇に入ると思うわ。
　あたしとしては、最悪日本限定で蓬莱の薬を融通することにし、永

原先生が提唱した蓬莱の薬による新世界秩序を一旦実現させ、その後世界に蓬莱の薬の必要性を説くというプランだって考えられるとは思う。
「ああ、だがそれは、最終的には日本による世界征服でしかない。そしてもう1つ懸念するべきは、もし国際機関で蓬莱の薬が禁忌となれば、間違いなく日本へ亡命者が雪崩のように押し寄せることになるだろう」
「あ！」
蓬莱教授の鋭い指摘に、ようやくあたしも蓬莱教授が新世界秩序を受け入れられない理由が分かった。
そう、蓬莱の薬の欲しさに、日本に難民のような形で大量に外国人が押し寄せる危険性があるということ。
「外国人の急激な押し寄せは治安の悪化にも繋がるだろう？　8年前から急増し続けた外国人観光客たちでさえ、軋轢は所々で生じているわけだろ？」
蓬莱教授が、あたしにも分かりやすく説明してくれる。
「つまり、寿命を縮めかねないということね」
「ああ。だがその事を想定する必要はある。そうなった際に入管だけでは限界がある。そこでだ」
「はい」
蓬莱教授は更に落ち着いた様子で話す。
「以前政府と話した農業改革の話、あの研究、特に基礎研究に予算をつけるように、次の政府の会合で話すことにする」
「分かりました」
蓬莱教授は、農業改革について更に重視したいという考えに至った。
あたしたちは次の方針を考え終わり、文化祭の準備を押し進めていった。
あたしたちが準備している途中、演劇部より今年の文化祭での演劇の内容の打ち合わせがあった。
内容は例の「襲撃騒動」を受けて作ったもので、蓬莱の薬を飲んだ

兄と、蓬莱の薬を飲まなかった弟の物語になっているらしい。
大まかな内容としては、蓬莱の薬を飲んだ兄の子孫は反映し、蓬莱の薬を飲まなかった弟の子孫は、兄本人を含めた兄の子孫から使い捨ての奴隷のような扱いを永遠に受けてしまうという結末になるという。
つまり、蓬莱の薬の偉大性を訴えるというもの。
「去年にも増して、露骨だわ」
去年は浦島太郎をアレンジしたものだったけど、あれだって蓬莱教授の研究への賛美が激しいものだった。
「いいんだよ。これは俺が所属する佐和山大学の演劇だ。それだけ佐和山大学の学生が蓬莱教授を誇りにしているということが伝えるのが、この演劇の狙いだ」
蓬莱教授は、あっさりとした口調で言う。
うん、確かにそれでもいいわよね。
更に他のサークルからも、「何処かに蓬莱教授をからめられないだろうかで」という問い合わせが殺到した。
もちろん、ゲーム製作系などはプロパガンダゲームを作るだけでいいから簡単だけど、鉄道サークルや運動部などは難しい。
そういったところで、蓬莱教授は「無理に俺を絡めようとしなくていい」とアドバイスしていた。
まあ、あまりに露骨だとさすがにイメージ悪くなっちゃうものね。

「よし、じゃあ帰るか」
「うん」
浩介くんと合流し、あたしたちは「蓬莱の研究棟」を後にする。

「なあ知ってるか、蓬莱教授に楯突いたあの牧師、行方不明になってるんだってさ」
「へー、それはまたいい気味だな」
「だけどよ、蓬莱教授の方でも、行方は掴めてないって」
「え!?　じゃああいつ、どこにいるんだよ!?」

「どうやら、国外に逃亡したんじゃないかってさ」
「うわー、ある意味厄介だなそれ。あいつのことだ、海外で情報を発信しようって算段だぜ」
「くそー、負ける訳には行かねえのに！」

蓬莱教授のプロパガンダの効果もあってか、デモに参加した学生の数は多く、また例の牧師が国外に逃亡したのではないかという情報も、あたしたちが帰宅する頃には大学中で流れていた。
あたしたちの前を歩いていた男子学生たちも、反蓬莱の第一人者だった牧師の行方不明事件について話している。
「浩介くん、あたしも、海外に出なきゃいけないのかな？」
「どうだろう？」
あたしは、日本から出た経験はない。
これは浩介くんも同じで、最近の若い人には多いらしい。
「治安悪い所には行きたくないのよね」
それはつまり、寿命を縮める行為だから。
あたしはかわいくて美人だから、絶対に狙われると思うし。国連本部のあるアメリカは銃社会だから、運が悪ければ浩介くんがいてもどうにもならない。
「ああ」
まあ、さすがに護衛がつくとは思うけどね。
……って、そういうのは蓬莱教授や政府の仕事よね。いくら広報担当とはいえ、あたしがそんなことする必要ないじゃないの。
「まあ、杞憂だとは思うけどね」
「だな」
家に帰ると、今までのことも忘れ、プライベートの空間が広がる。
浩介くんによれば、あたしに飽きることはどうやら無いという。
結婚も3年目になったら、そろそろ将来のマンネリ解消についても、考えておく必要がありそうね。

## 行政内の利害

文化祭は、盛況のうちに幕を閉じた。

インターネットの一部には、「蓬莱推しがひどい」という声が上がっていたが、「佐和山大学という大学の性質を考えれば仕方ない」で押しきることにした。

また今回の文化祭では、小谷学園を中心に、高校生の姿がとても目立った。

以前からオープンキャンパスなどで高校生の姿を見かけることもあったけど、今年はとにかく多い。

蓬莱教授が講義中に、「俺の最初の１２０歳の会見以降、志願者が増加傾向だったが、今年は志願者がすさまじく急増している」とのことだった。

特にあたしたち「再生医療」に関わる学科は、以前から他の学部よりも少しだけ偏差値が高い状態だったが、今年は志願者の急増ぶりがすさまじく、来年の入試の難易度が、場合によってはこの学科だけ一流大学並みになるかもしれないとのことだった。

他の学部学科は、そこまで偏差値の急増は起きておらず、まさに1つの大学なのに2つの大学があるかのような状態になっている。

「そういう意味では、君たちは運がいい。今までは一流大学並みの待遇を得られるのは『蓬莱の研究棟出身』だけだったが、これからは学科レベルに広がるだろうということだ」

それはつまり、あたしたちのように「蓬莱の研究棟出身」は、もっと就職が有利になるということでもある。

まあ、あたしたちの場合は、大学院に進学するから就活はもう少し先送りになりそうだけどね。

文化祭中には、「敵対していた牧師の海外への事実上の亡命が、正式に確認された」という情報も入ってきた。

国際反蓬莱連合日本支部は事実上の解散に追い込まれたが、今後はアメリカで反蓬莱活動を行うため、現地の牧師と連携をとるという。

「それで、大学院では――」

他の教授はもちろん、蓬莱教授の講義の中でも大学院の話題は増える。
大学側としては、大学院生を増やすためにこの手の大学院の推進はよくあることだけれど、他の教授は宣伝を兼ねているというのが露骨よね。
蓬莱教授の場合は、むしろ大学の学部レベルでは行わない学習内容に対して、補足の形で登場するのが殆どになっている。
蓬莱教授の講義は好評で、比較的単位をとりやすいが、高評価も難しいことで有名だ。
そんな蓬莱教授の講義で何回も「優」を取ったのはあたしの自慢だったりする。

「ふう、優子ちゃん、レポートできてる？」
「うん、提出しようか」
「ああ」
３年度後期で実験もついに最後になる。
レポートと講義にもう何度か出れば、この厄介な講義からも解放される。
「これでも毎週提出だったのに比べれば楽だったはずなのになあ」
浩介くんが呟く。
「それはほら、１つ１つ大変になったのよ」
レポートの分量も増えているし。
「だろうなあ、卒論なんて最たるもんだろ？　４単位のためにあんなに頑張らなきゃ行けねえんだし」
「ねー」
あたしたちは既に１０６単位を取得している。
佐和山大学の卒業用件は１２４単位で、そのうち卒論が４単位、つまり講義分は残り７科目１４単位必要で、この実験は卒業への必修科目に選定されている。
あたしたちは、実験を含め７科目履修で、１日が丸ごと空き日にもなっている。

もし、今期で全ての単位を取得できれば、来年は卒論に専念できることになる。
やはり大学前半での貯金がとても大きいわね。
「ま、でも何とか卒業できそうでよかったよ」
「うん」
テストの出来映えから推測するに、蓬莱教授のコネは間違いなく使われていない。
もしかしたら、これは小谷学園の貯金もあるのかもしれないわね。
桂子ちゃんと龍香ちゃんは、あたしたちほど余裕はなくて、幾つかの単位は落としてしまったらしいけど、留年に繋がる致命的なミスはしていないので、取り敢えず卒業は大丈夫だろうということだった。
まあ、あたしたちとは学部が違うけどね。
あたしたちはレポートの提出を終え、通常通り家に帰る。

「次のニュースです。国際反蓬莱連合は、アメリカのニューヨークの本部で記者会見を開き、蓬莱教授への非難声明を発表いたしました」
「始まったな」
テレビのニュースに対して、お義父さんがゆったりとした冷静な口調で、しかし力強く話す。
全面対決が始まったという雰囲気が、我が家に流れていた。
「優子ちゃん、浩介、大丈夫？」
お義母さんも、心配そうに話しかける。
「大丈夫よ。負けないわ」
「うん、でも……」
お義母さんは、「そういう意味じゃない」みたいな顔をする。
「そうしたの？　お義母さん、元気ないわよ」
「あーうん、優子ちゃんがどこか遠くの人みたいに思えてくるのよ」
お義母さんは、意味深そうに言う。
「もしかして、総理大臣と話したから？」
「まあねえ、ＴＳ病って時点で普通じゃないとは思ったけど」
「大丈夫よ。あたしはこの家を出ないわ。お義父さんとお義母さんが

生きている限り、あたしは嫁であり続けるわ」
　それは、浩介くんと離婚は絶対にしないということ。
「うん」
「あたしだって、自分が権力者の側にいるんだって気づいたのは、今年に入ってからよ。成人式の時にね、あたしと浩介くんが姿を見せたとたん、恵美ちゃん目当てだったマスコミがカメラを隠したわ
　あの時のエピソードはとても印象的だった。でも実際は、あたしが佐和山大学への進学を決めた時から、こうなるのは決まっていたと思う。
「優子ちゃん」
「あたしは、浩介くんと悠久の時を過ごしたいだけなのよ。だから、どんなに遠くに行ったように見えても、あたしはずっとここにいるわよ」
「ええ」
　あたしの言葉に、お義母さんも安心してくれる。
　あたしたちは、最後にはこの家庭に戻ってくるということを、再確認した。
「それでね、蓬莱の薬なんだけど――」
　今日の夕食も、ゆったりと続いていた。
　ここが、あたしの我が家、あたしが戻ってくる道。安らぎの時を、過ごしたいわね。

　季節は１２月初頭になった。
　あたしは浩介くんと共に、何度目かの総理大臣官邸を訪れた。
「あら？　今日は総理自ら？」
「ええ」
　普段は官房副長官があたしたちの調整役になっている。
　更に公安警察の人も見える。
　そればかりか、外務大臣まで出席していた。
　あたしたちの側は、蓬莱教授に瀬田助教、永原先生にあたしと浩介くんの４人だけ。

「現在、国際反蓬莱連合にスパイを送り込んでおります」
「ふむ、そうか」
公安調査庁の人も仕事は早く、すぐに諜報員を送り込んでいるという。
「反蓬莱連合は、間違いなく国際的なロビー活動を行うでしょう」
公安調査庁の担当者が、そのように話す。
国際的組織なので、こういうのは公安調査庁が得意だ。
「そこで、我が国だけでも、大衆に不老技術の浸透を一刻も早くしていきたいと思いまして」
議員連合の代表者が資料を出してくる。
「与野党全会一致での可決を目指していきたいところです。蓬莱の薬がもたらす利益は計り知れないものがあります。あの日のデモの繰り返しになるが、宗教に負けるわけにはいきません」
全員が資料を読む。
法律の条文なんて大学一般教養でやった法学の時以来だけど、相変わらず読みにくいわね。
「えっとつまり、『老化防止薬に関する特例法』というのは、蓬莱の薬の特許期限を永久とするというわけか」
「はい、薬が薬です。偽物や同業他社が出て競争が働き、品質に影響してしまえば重大な問題になり得ます」
更に条文では、外国での生産も禁止することが書かれていた。
蓬莱教授はそれに目をしかめたが、下の方にそうしなければならない理由が書かれているのを見ると、一転して納得した表情になる。
「それから、偽物の薬を、スパイの設立した現地法人を使って外国で販売することにします」
「え!? どういうことですか?」
あたしが、公安調査庁の人の提案に驚く。
「外務省の方から、蓬莱の薬を日本の専売特許とするために全力を尽くした方がいいとアドバイスを受けまして。もちろん、海外には発売するわけですが」
総理大臣が、公安調査庁に代わって説明してくれる。

「しかし、偽物の販売はリスクが大きすぎる。俺としては断固反対だ」
蓬莱教授が、強硬姿勢を見せた。
まあ、そこは譲れないわよね。
「私としても反対よ。でも、蓬莱先生の所で販売を独占した方がいいのは、確かね」
例えば、５００歳や７００歳の薬を「不老」と偽った場合、詐欺が発覚するのは数百年後になる。そんな遠い未来では、現行法での特許の期限はあまりにも短すぎる。
そういったことを防ぐためにも、蓬莱の薬は独占禁止法の例外規定にするべきなのだ。
「ああ、独占は俺も反対はしない。だがその正当化のために、わざと偽物の薬を売るというのは反対だ」
蓬莱教授はそのように主張する。
「うーむ、では仕方がありません。この案については企画倒れといたしましょう」
公安調査庁の人が提案をすんなりと取り下げてくれる。
「ですが、独占を正当化するための代案を出していただかないことには困ります」
しかし、外務省の人はまだ納得が行かないみたいね。
もちろん、代案がないのに反対では無理もないことだけど。
「私としては、最初の１００年を日本だけで販売するというのがいいと思います」
永原先生がそう発言する。
「なるほど、冷却期間か」
永原先生の提案は、これまでと比べるとやや軟化した印象だ。
つまり、最初の１００年で不老の効力を見せつけることで、反蓬莱連合を追い詰めるという、気の遠くなるような作戦だ。
「ええ、ＴＳ病が日本人に多いということで『念には念を入れて』と言い訳すればいいわ。もちろん、生命に関わることだからという理由で、日本人だけに売ることも正当化するのよ」
「なるほど」

それで１００年も販売が渋られるってのはかわいそうな気がするけど。
だって今生きてる外国人は、まず間違いなく恩恵を受けられないわけだし。
「まあ、いざとなれば最高裁判所にも通達しておくよ。とにかく蓬莱の薬は前例のない大変革を日本と世界に沸き起こす。近代的な措置では講じきれないというのは、十分に大義名分になるでしょう」
総理大臣も、蓬莱の薬の独占化に賛成している。
「それでだ我々外務省としては、これからの国際反蓬莱連合対策として、蓬莱の薬をもっと外交カードに使っていきたいと思っている」
外務大臣が本音を言う。
昔ならば、反日国家に対することなかれ主義として、技術譲渡を言い出すような官僚が多かったらしいが、今の外務省官僚は全く逆だ。
まあ、世界の盟主として君臨できそうなものを手にいれたら、誰だってそうなるわね。
「しかし、俺としては反対だ。効力が強すぎるし、武力制裁はともかく、経済制裁の可能性がある」
外交カードにすることに慎重な蓬莱教授が外務省官僚と外務大臣を牽制する。
「うーむ、しかしそれは、日本だけが蓬莱の薬の恩恵を享受しても同じなのではないかな？　どっちにしても、日本が非難される算段が高いだろう」
外務省官僚が鋭く指摘する。
「なるほど、そうすると必要になるのが軍事力だな」
「ここに防衛省の人がいませんね」
蓬莱の薬は、ついに防衛省まで動かす可能性が高まった。
農林水産省と経済産業省は既に蓬莱の薬に対する対策を立て始めている。
「うーむ、次は内閣を召集するとしましょう」
総理大臣から、恐ろしい声が上がる。
ついに蓬莱の薬のために、日本政府の中枢が全て動くことになっ

た。
「とはいえ、自衛隊の最高指揮官殿、蓬莱の薬独占における経済制裁を想定するならば、まずはやはり核武装が肝要だと思うぞ」
「でしょうねえ、しかし国民の支持を取り付けるにはどうすればいいでしょうか？」
蓬莱教授の提案に、総理大臣は当然の懸念を示す。
「もちろん、そこは広報担当のあたしが出ます。そして蓬莱の薬による生存権と幸福追求権を、日本は国際社会から不当に奪われようとしている。こう叫ぶ宣伝は可能になると思うわ」
あたしが先手を打って訴える。
「そうですね」
総理大臣も、一瞬だけ戸惑いの表情を見せたが、すぐに賛成してくれる。
まあ、ないに越したことはないけど。
「そしてこの前話した農業改革の他にも、海底資源開発を急ピッチで進めよう。これで自給自足体制を作れば、国際社会の圧力は避けられるはずだ」
蓬莱の薬が禁止薬物にされる危険性は、常に考慮しなければいけない。
国際反蓬莱連合が、果たしてどれ程の政治力を持っているかは未知数だ。
公安調査庁のスパイによれば、そこまでのロビー力は無いのではないかと言われているけどね。
「俺が国際社会が蓬莱の薬を突っぱね、結果として日本に権力が集中するのを恐れるのは、それに伴って世界中から蓬莱の薬目当てに外国人が押し寄せる危険性だ」
「ふむ、そうすると、法務省管轄の入国監理局の意見も聞かないといけないですね」
本格的に、政治の世界が動き始めている。
国会議員たちはそれらの意見を聞きつつも、「国際社会の意向に関わらず、日本は蓬莱教授を支持する」ことではブレがない。

幸いこの議連には、与野党まんべんなく所属している。

「取り敢えず、今は議員連合の所属を増やして欲しい。与野党一致で採択となれば、抵抗する人はほとんどいなくなるだろう」

地方の選挙では、与党と野党で同じ候補を支持する、いわゆる「相乗り」という形がよく見られる。

この蓬莱教授の特例法案も、そうした無風な形で可決されれば、国民も納得するだろうという算段だ。

「はい、私たちも、声をかけております」

ともあれ、蓬莱教授側と政府側、国会議員側、そしてあたしたち協会側、それぞれ「蓬莱の薬を一般社会に行き渡らせる」という最終目標と、「その影響力を考え、薬の販売や普及などは蓬莱教授の影響下にある組織が独占するべき」という方針では大筋で一致している。

だけれども、その過程での手段には、まだまだ隔たりがある。

もちろん、政府や各省庁も一枚岩ではないし、議連だって、それぞれ描いている想像図は違うはずだ。

永原先生の唱えた新世界秩序論は、以前正式に撤回されたものの、それでも永原先生の姿勢がやや強硬的なのは事実で、外務省が今回永原先生寄りであることが分かった。

これまでの会談の状況から整理すると、永原先生、そして経済産業省が最右派で、永原先生は現在でも、「蓬莱の薬を世界が突っぱねるならば、不老人間となった日本人が世界を統べればいい」という考えで動いており、むしろそれを実現させるために、世界的な普及には消極的な姿勢を見せている。

経済産業省も、「経団連は『国際競争力のためにも、適当な理由をつけて日本国内のみの販売にするべき』と言うに違いない」という構えを見せ、永原先生に同調的だ。

他に右派に属するのが外務省と農林水産省で、外務省は「蓬莱の薬を外交カードとして、日本に優位な国際秩序を作り上げていくべきだ」としている。

農林水産省も、人口問題から蓬莱の薬の国外への早急な普及には、慎重な姿勢を崩していない。

一方で蓬莱教授と財務省が最左派で、速やかな蓬莱の薬の普及を訴えている。
ただし、財務省は「世界に速やかに普及させるべきではあるが、国内への普及を最優先にして欲しい」とのことだった。
財務省としては、蓬莱の薬によって社会保障費が極限までに削減できるため、大減税にも賛成するとしていた。
これらに続く左派が公安で、公安警察は高齢者の犯罪を根本からなくすことで警察の負担を軽減するべきだとしている。公安調査庁も、同様の見解を示している。
防衛省を含め、その他の関係省庁の見解はまだ不明だ。
国会議員たちと総理大臣はやや右派寄りで、外交的な駆け引きが必要になってくるため、国防の強化が必要になってくると踏んでいる。
そしてあたしたちと厚生労働省が、ちょうど中立的な立場に位置している。
蓬莱教授程に早急な普及は混乱も招くだろうし、かといって永原先生たちみたいに、蓬莱教授に反対する人や国、あるいは反日的なことをした人や国に対する報復の道具にするのも気が引けるというのが厚生労働省の考え方だった。
どこまでいっても、結局蓬莱の薬は、あたしたちにとっては浩介くんとの幸せのための道具でしかない。
本来は協会の人たちも、そういう考えなのだと思う。
でも、蓬莱の薬の影響力はそんなものではないと知って、欲が出ちゃったのよね。

「では、本日の協議はここまでにしましょう」
「ありがとうございました」
あたしたちは、総理大臣から「今日はここまで」との声を受けて、総理官邸を後にする。
ともあれ、次回はいよいよ関係大臣が全て登場することになる。
恐らく、大きな会議になることは間違いないわね。

「優子ちゃん、緊張しているか？」
自宅最寄り駅からの帰り道で、浩介くんが心配そうに話しかけてくる。
「ええ、政府の人がどんどん出てくるんでしょ？」
総理大臣どころか官房副長官が出てくるだけでもお腹一杯なのに、今度は政府関係者がみんな出てくるなんて。
「ああ、でもよ心配しねえでいいぜ」
「え!?」
浩介くんは、あたしよりもリラックスした表情になっている。
「俺が守ってやるからさ」
「……もう、不意打ちはやめてよ」
浩介くんからの突然のかっこいいセリフに、あたしはぼんっと顔が赤くなる。
浩介くんに恋をして４年、結婚して３年、まだまだあたしの恋は収まりそうもないわ。
うん、だってあたし不老だし、それに何より浩介くんは素敵だもの。
「優子ちゃんは、黙って俺に守られていればいいんだよ」
「はい」
浩介くんが頼もしいからこそ、女の子に響くセリフ。
そうよね、結局か弱い女の子は、強くて頼もしい男の子に守られるものだものね。

# クリスマスから２０２２年へ

２０２１年１２月２４日、あたしたちは結婚して３回目のクリスマスを迎えることになった。

政府間協議は、日程の調整が難航し、ついに４ヶ月後、つまり２０２２年の３月まで延期された。

その代わり、その間は多忙なことも少なくなって、あたしたちは再び休息を得ることが出来た。

あたしが担当した２人の患者さんもすくすく育っていて、この前歩美さんが、平均よりやや遅いながらも最終試験に合格してくれた。

かつては自分についていたもので本心から興奮できるというのは、なかなか難しい問題でもある。

歩美さんによれば、「それ以前から男性の下半身をじっと見つめてしまう癖があった。女の子ならそうなるのは自然なんだってことを知ることが出来て嬉しかった」と言っていた。

もちろん、「それはとってもいい傾向だわ」と、あたしは言っておいた。

ただし、今後の注意点としては、「彼氏の前で他の男性の下半身は絶対に見ないように」とは警告しておいた。

それに対して歩美さんは、「善処します」と自信なさげに答えていた。

うん、気持ちは分かるわ。男性の下についてるのは、乙女にとっては何よりも大好物だものね。それを我慢するのが難しいのは分かるわ。

でも、好きな人のが一番大好物になれるってことも、覚えておきたいわね。あたしも、浩介くんのが一番の大好物だし。

２０２１年も終りを迎え、今年もクリスマスの季節が訪れた。

数年前まではクリスマスといえば天皇誕生日と近くて慌ただしかったけど、今は天皇誕生日が２月２３日に変更されている。

「浩介くん、プレゼント、何買うの？」

大学からの帰り道、あたしは浩介くんとクリスマスプレゼントの話題をする。
「ふふ、今年はお楽しみにとっておいてよ」
「う、うん」
今年は、大学の帰りに浩介くんと別行動を取って、クリスマスプレゼントを買おうということになった。
あたしたちは普段の帰り道とは逆の電車を使い、実家の最寄り駅も通りながら、区役所の最寄り駅へと到着する。
「じゃあ、プレゼント、いいもの持ってきてよな」
「うん」
あたしは駅前で浩介くんと反対方向に進む。
一旦浩介くんとはここでお別れになる。
……さて、どうしようかしら？
あたしは毎年冬に着ていた浩介くんのコートが気になっていた。
というのも、冬場の浩介くんのコートは高校の頃から同じものを使っていたからだ。
「よし、コートにしよう」
少し考えた末、あたしは浩介くんに新しいコートをプレゼントしてあげることにした。
あたしは、早速街中にあるデパートの中に入っていく。
「ここも変わらないわね」
商店街を発展的解消する形で誕生したこのデパートはあたしにとっては特別な愛着がある場所だった。
エスカレーターを登って行き、目的の階を通り過ぎて、あたしは古着屋さんと古本屋さんのフロアに到着してしまった。
もちろん、中古品じゃプレゼントには不適格だけど、理由もなくここに足を入れてしまった。
「休憩所……」
そう、ここはあたしが女の子になってまだ1週間も経ってない時に、ミニスカートで男時代の本と古着を売った所。
そしてあの時は母さんに尾行されて――

「あら？　優子じゃないの！」
「え!?　か、母さん！」
突然声をかけられてあたしが振り向くと、そこには母さんがいた。
母さんはあたしが家を出たあの日と殆ど変わらない……いやむしろ若返っている印象さえ受ける。
あたしももう21歳だけど、あたしにとって実年齢は人生経験の年数程度の意味しか持たない。
厳密には違うんだろうけど、そう考えてしまう理由としては永原先生や比良さん、余呉さんのような人と長くいたからだと思う。
「どうしてここにいるの？　優子、クリスマスプレゼントに中古品はダメでしょう？」
母さんがちょっと不思議そうな目つきであたしを見つめてくる。
「うん、ちょっと懐かしくなっちゃって、ね」
ここには、女の子になったばかりの頃の思い出以外にも、桂子ちゃんたちと女の子3人で初めて遊んだ思い出や、浩介くんと恋人として初めてデートした思い出や、卒業式が終わって浩介くんと婚姻届を出した後に初めて寄っていった思い出などもある。
「あーそうよね。あの時の優子は今の優子とは違う、荒削りなりのかわいさがあったわね。ふふっ、おしおきのしがいもあったわねー」
母さんは懐かしそうに言う。
「もう、思い出したら恥ずかしいよー」
あたしの恥じらいが他の女の子よりも強いのも、間違いなくあの時の影響だと思う。
「ふふっ、相変わらずでよかったわ」
でも、そんなあたしを見て、母さんも安心してくれた。
あたしとしても母さんが健在なのは嬉しいわ。
あたしが実家に帰る機会は、あまりないけど、母さんからは何も言われない。
むしろ母さんとしても、頻繁に実家に帰ることはあまり良くないことと判断しているのかもしれないわね。
「ところで、母さんはどうしてここに？」

「ちょっと本を買いにね。優子も結婚して老後のことを本格的に考えなきゃいけないのよ」
母さんは古本屋さんで買ったと思しき本をビニール袋から吊り下げていた。
ここからでは、母さんが何を買ったかまでは分からない。
「それでここにいたのね」
「ふふ、熟年になってもお父さんをちゃんと繋ぎ止めないといけないからね」
母さんが、魔女のような笑みを浮かべる。
それは、男の人には分からないかもしれないけど、まさに獲物を狙うような仕草で……父さん大丈夫かしら？
「そう……」
「優子は浩介くんへのプレゼントでしょ？」
もちろん、それ以外にはあり得ない。
「う、うん……」
「母さんも手伝ってあげるわ」
まあ、せっかくこんな所で偶然会えたものね。
厚意は素直に受け取っておこう。
「ありがとう」
「それで、優子は何を考えているの？」
もちろん、プレゼントは新しいコートにすることは決まっている。
「うんとね、浩介くんのコートが高校の頃から同じものを使ってたから、冬らしくコートをプレゼントしたいわ」
「いいわね。じゃあ早速行きましょう」
母さんも、あたしのプレゼントチョイスには満足してくれたみたいだわ。
「はい」
あたしは母さんの誘導で、メンズ服のコーナーにやってきた。
女の子になってからは、ここに足を踏み入れたことは殆どなくて、遠い昔の記憶になりつつあった。
「浩介くんのサイズは把握しているかしら？」

「もちろんよ」
洗濯の時に浩介くんの服を担当することもあるからね。
サイズは嫌でも気になって覚えてしまったわ。
「ふふ、どこで覚えたの？」
母さんが怪しげな目つきで聞いてくる。
「えっとその……お洗濯の時に――」
「ふふ、母さんと同じね。私もお父さんの服のサイズはそうやって覚えたのよ」
あたしが恐る恐る答えると母さんが「私も同じ」と明かしてくれる。
「あ、あはは……」
「ふふ、やっぱり優子は色っぽくなったわね。ところで優子、まだ妊娠してないみたいだけど」
そして、母さんと言えば当然その話題も出る。
「あの、本当に子供はちょっと――」
「あらどうして？」
あたしが慌ただしく応えると、母さんが首を傾げながら聞いてくる。
「あたしと浩介くんの成績からも大学院への進学も濃厚になっているし、それに今は政府関係者との交渉の席にも呼ばれていて忙しいのよ」
とにかく、浩介くんとの寿命問題の解決が先決だというのがあたしたちの考え方。
もう蓬莱の薬の効き目のないおばあさんのことまで、正直手が回らないのが実情だわ。
「そう言えば、官房副長官と会ったんだって？」
母さんが物凄く驚いたようにしている。
「あーうん、実はもっとすごい人とも会ったことがあるんだけど――」
「へえ！　どんな人と!?」
あたしたちと政府との関係については、あたしの方からではなく、お義母さんを通して話が通されている。
どうやら、お義母さんは総理大臣とあったことまで話してないらし

いわね。
「ああうん、実は今度の3月に蓬莱教授と永原会長とあたしたちのいつものメンバーに内閣が総出で出てくるってことになったのよ」
あたしは他の人に聞かれていないか警戒しながら話す。
「へえー、優子も出世したわね」
母さんも当然ＴＳ病患者の両親として、報道関係はそれなりにチェックしているから、「政府が蓬莱教授の支援を検討している」という所までは、間違いなく知っているはず。
だけど実際にはすでに支援は確定していて、来る蓬莱の薬の完成を見越した国造りが話し合われていて、あたしと浩介くんも、会議に参加するという形である程度は意見を出し、総理大臣に採用されることもある。
そう言う意味では、今のあたしたちは国会議員並みかそれ以上に、日本の政治にに影響を与えている。
「ねえ母さん、この後実家に寄ってもいいかしら？　話そびれてしまったけど、あたしと浩介くんと、政府との関係について色々と話さないといけないことがあるのよ」
「……分かったわ」
母さんは納得したような表情をした後、あたしに向き直る。
「さあ、優子、コートを選ぶわよ」
母さんはもう、いつもの柔らかくて、ちょっとだけイタズラ心のある表情に戻っていた。
「はい」
あたしたちは、気を取り直してコート選びに邁進した。

「じゃあ優子、これでいいわね？」
「はい」
母さんのアドバイスもあって、あたしは黒くて防寒性に優れたコートを選ぶことが出来た。
これなら優一に着せても大丈夫かもしれないわね。
「じゃあ優子、家に帰ったら話を聞かせてくれるかしら？」

「はい」
あたしは、母さんと一緒に電車に乗り、実家へと戻ってきた。
「お邪魔します」
「ふふ、ゆっくりくつろいでいいのよ」
固くなっていたあたしに、母さんが気軽な口調で話してくれる。
「はい」
「おお優子、どうしたんだ？」
リビングへと上がっていくと、父さんがあたしの突然の訪問に驚いていた。
「デパートで母さんとばったり会ったのよ」
嘘は言っていない。
「おうそうか」
父さんも、深くは追求して来ない。
周囲を見渡すと、実家のレイアウトは相変わらずだった。
また年末年始は、ここに戻ってくるのよね。
「で、優子。優子は政府の人と何を話しているのかしら？」
母さんがお茶を汲んで、あたしに出してくれる。
このおもてなしも、あたしが実家に帰ったら定番になっている。
「はい、えっと――」
あたしは、母さんに政府と蓬莱教授、そして協会で何を話しているかを話していく。
「へえ、すごいなあ優子」
全て話し終わって2人を見ていると、母さんよりも父さんがかなり驚いている様子だった。
そもそも、大学生のあたしが政府の会議まで呼ばれるようになったのも、協会の広報部長として蓬莱教授と永原先生との間を取り持っていたというところに大きい。
政府内部はもちろんのこと、永原先生と蓬莱教授の間にも、蓬莱の薬に関する見解の相違があったことが分かったので、結果的にあたしと浩介くんが全体の緩衝材役として政府との会議に参加したのは正

解だったわね。
もちろん、永原先生も蓬莱教授も「大人を超えた大人」と言っていい人だから、最終的には折り合いがついてしこりも残らないとは思うけど、時間的に大きく遅れたことは確かだと思う。
そう言う意味でも、あたしがあの会議に加われたのは、蓬莱教授たちの情勢をより有利にしたことに違いはないと思う。

こういうことが一つ一つ重なって、今の奇跡があるんだと思う。
1つでも選択肢を間違っていたら、あるいは1つは大丈夫でも2つ3つと間違い続けたら、蓬莱教授の研究は、あたしの未来は、失敗していたかもしれない。
例えば、もしあたしが女の子になろうとせずに自殺の道に突き進んだら？
母さんの指導が不適切だったら？
浩介くんのことを許せずに「優子」になれなかったら？
林間学校の実行委員のくじ引きで浩介くんと一緒にならずに、あるいは添乗員がたまたまナンパしたがりの男じゃなかったら、ナンパされたときにたまたま浩介くんが不在だったら、あるいは最初の協会会合の時に幸子さんのカウンセラーを申し出なかったら？　それらのせいで幸子さんが死んでしまっていたら？
学力のことを考えて佐和山大学以外の大学に進学しようとしていたら？
あるいは高校卒業時に浩介くんと結婚していなかったら？
……多分今のような状態にはならなかったと思う。
歴史にＩＦはないとは言うけど、それでも今の選択肢より悪い方向の選択肢を、考えずにはいられないわ。
「優子大変ね。でも、蓬莱の薬を一般社会に浸透させるというのはそれだけの困難を伴うのよ」
「ええ、分かってるわ」
あたしは、母さんに出してもらったお茶を全て飲み終わる。
そして、あたしの話も大方終わりに近づいた。

「じゃあ優子、頑張りなさい」
「はい」
あたしは母さんに見送られ、実家を後にした。
「ただいまー」
「お、優子ちゃん帰ってきたか。お、優子ちゃんプレゼント大きそうだな。よし、早速プレゼント交換しようぜ！」
実家から、住んでいる家に戻ると、既にプレゼントを買い終えて帰宅していた浩介くんが、玄関で出迎えてくれた。
「うん、あたしから、これ」
あたしは、大きな袋とともに、コードを浩介くんに渡す。
「お、コートか。確かに、あれはちょっと古いもんな」
浩介くんが笑いながら、気楽な気持ちでコートを受け取る。
「うおー、暖かそうだぜ！　ありがとう！」
よかったわ。とっても喜んでくれたみたい。
「ふふ、気に入ってもらえてよかったわ」
あたしがホッとした表情で言うと、浩介くんがぐいっと近づいてくる。
「でも、優子ちゃんの体のほうが、気持ちよく暖まることができるけどね」
浩介くんが、さらりとセクハラ発言をしてくる。
「もう、バカ……」
浩介くんのセリフに対して、あたしは顔を真っ赤にして、下を向くしか無かった。
「おっと、それよりも俺からのプレゼントもあるぜ」
浩介くんが、あたしから離れると、持っていた鞄をあさり始めた。
「はい、これ」
浩介くんが渡してきたのは、あたしとは対照的に小さい小物入れだった。
「うん、開けていいかしら？」
「もちろん」
浩介くんに促され、あたしが袋を開ける。

「これもしかして？」
中に入っていたのは、白の大きなカチューシャだった。
右上の方には白いリボンの髪飾りが付いていて、つけたら頭の天辺でリボンをしているようにも見える。
「うん、優子ちゃん、いつも白いリボンでしょ？　もちろんかわいいんだけど、カチューシャも似合うかなって？　どうかな？」
「うん、ありがとう！」
あたしは、早速頭にカチューシャを付けてみる。
「うんうん、真っ黒の優子ちゃんの髪には、白い飾りは似合うよね」
浩介くんが、そんなことを言う。
それは確かに、女の子になったばかりの頃に母さんからも言われていた。
黒くて長いこの髪は、この大きな胸と並んであたしの象徴だものね。
「あはは」
「さあ、行こうぜ」
「うん」
浩介くんに促され、あたしはリビングルームに向かう。
お義母さんからは「あら？　カチューシャ浩介のプレゼント？」と聞かれた。
あたしが「うん」と答えると、母さんに「似合っているわよ」と言われたのがとても嬉しかった。
浩介くんのプレゼント、大切に取っておいて、いざという時に使おうかしら？
その日の夜は、去年生理でうまく行かなかったクリスマスのうっぷんを晴らすかのように、浩介くんの愛をたっぷりと受け取った。
多分他のカップルも、同じことをしていると思う。

クリスマスが終わり、1週間すれば年末年始になる。
実はキリストの誕生日は分かっていなくて、「1番夜の長い日にしておけばいい」程度のものだったらしい。

まあ、それも４日ずれているし、そもそも西暦のキリストだってずれているしで、まあ昔のいい加減さがあるわよね。
２０２２年は去年一昨年と同じように、あたしは実家へと帰省した。１週間ぶりの帰省だったけど、それでも懐かしい。
でも帰る頃には、やっぱり浩介くんとの結婚生活に思いが入ってしまうのよね。
４月からは、あたしはとうとう大学４年生となり、「蓬莱の研究棟」に配属になる。
これまで以上に、蓬莱教授との関係は密になる。
卒業論文を提出し、卒業要件を満たせば、恐らくあたしと浩介くんは大学院に進学することになる。
最も、その前にまずは３年次の後期期末試験を受けないといけないわね。

## 結婚記念の大会議

「よし、優子ちゃん。準備できたら行くぞ」
「うん、分かったわ」
今日は２０２２年３月１６日、この日はあたしと浩介くんの結婚記念日だけど、あたしたちはどうも悠長にそれを祝うことは出来ないみたいだわ。
総理大臣や閣僚たちの日程調整の問題から、この日に会談することになってしまったのよね。
あたしたちが期末試験の最終日にその日程を聞いた時には、思わず「結婚記念日じゃない」と言ってしまった。
蓬莱教授は、「そのことについては申し訳ないとは思ってはいるが、政府側の都合もどうか汲みして欲しい」と言っていた。
あたし達も子供ではないので、そのくらいは分かるんだけどね。反射的に反発しちゃうあたりあたし達もまだまだなのかもしれないわ。
集合場所はいつものように大学最寄り駅の電車の一番前、タイミングが悪く、真ん中の車両にやや駆け込み気味に乗ってしまったので車内で前に移動する。

「ねえあの２人」
「あの女の子、篠原優子ちゃんでしょ？」
「あー、報道でよく出てくるよね。蓬莱教授の研究に協力しているんだって？」
「それどころかね――」

あたしたちのことが電車でも噂になっている。
最近は広報部長として、高島さんのブライト桜から大学の空きコマにいくつか取材を受けているだけではなく、他のインターネットメディアでも協会の打ち出した方針に追従する所が現れて、そこの取材で今までにも増して有名人になってしまった。
まあ、あたし自身初めて取材を受けてから元々それなりの有名人

だったってのもあるけど、とにかく忘れた頃に燃料が投下されるのもあって、芸能人以上に人気になってしまっているかもしれないわね。
電車が約束の駅に到着する。
車窓からは、蓬莱教授たち数人の人影が見えた。
ピンポーンピンポーン
「お、優子さん、浩介さん、こんにちは」
「蓬莱教授、瀬田助教、永原会長、こんにちは」
あたしは目があった3人にまずは挨拶する。
「篠原さんもね。ふう、さすがに緊張するわ」
永原先生も、今日はさすがに緊張している様子だわ。
確かに、今日は今までの協議とは全く様相が違うものね。
そう言う意味では、いつもと全く様相が変わらない蓬莱教授はすごいわね。
「あら？　篠原さん、私達もいるのよ」
蓬莱教授と瀬田助教の影に隠れてて見えなかったけど、何と列の後ろには比良さんと余呉さんまでいた。
「比良さん、余呉さん、今日はあなた方も参加するんですか!?」
あたしは、まさか比良さんと余呉さんまで出てくるとは思っても見なかった。
浩介くんも、意外な参加者に驚いているみたいだった。
「ええ。今回の大会議、かなりの人が出席すると聞いてますから、永原会長と篠原さんだけでは協会としてもやや不安ですから」
確かに、言われてみればそうよね。頭数揃えるのも大事だし。
比良さんも余呉さんも、いつもとは違う黒っぽい服装をしている。
さすがに今日は、いつも以上に服装に気を使ったつもりだけど、総理大臣からは「篠原さんは固いよりも普段のおしゃれの方がいい」と言われてもいるのよね。
「それで、優子さん、浩介さん、来年度の卒業論文だが」
「はい」
電車が発車すると、蓬莱教授が話題を変えてくる。
「大学の教授は俺もだが卒業論文はそこまで期待していない。修士論

文から本番だから気楽に臨んでくれ」
蓬莱教授がリラックスするように言う。
「分かりました」
とはいえ、修士論文やましてやその上の博士論文はそれなりのものを仕上げないといけないので、大変なことには変わりないわね。

「おいおい、あの7人」
「どう見ても蓬莱教授に永原会長じゃねえか」
「篠原夫妻に蓬莱教授に永原会長、一体どこに行く気なんだろう？」
「さあ？　まさか政府とかどっかの国の大使館とか？」
「まさかあ！」

あたしはびくっとなる。
政府で総理大臣と各閣僚と会う予定なのだから、当たってなくもないからだ。
「優子さん、落ち着くんだ」
蓬莱教授が小声であたしに話しかけてくる。
「あ、はい。すみません」
蓬莱教授も永原先生も、踏んできた場数があたしとは違いすぎる。
動揺するなっていうのは難しいのよね。
電車が都内に入ると、徐々に空き始めたのであたしたちは座席に座ることにした。
「篠原さん、修士の後はどうするの？」
「うーん、そこまでは考えてないわ」
永原先生の質問に対して、あたしはそう答えるしかない。
でも、頭の片隅程度には考えておいたほうがいいのよね。
「俺の予想だが……何となく博士まで行けそうな気がするんだよな。いや、それ以上かもしれん」
蓬莱教授はお世辞を言う人ではない。
ということは、やっぱり何か根拠があってのことだと思う。
5年前の夏の水族館でのこと。あたしには未だに印象に残り続け

ている。
あの蓬莱教授の予言、あたしの中には最近まで忘れていたけど、こんなことを言われたら嫌でも気になってしまう。
あーでも、気にし過ぎたらいけないわね。
「さ、優子さん、降りるぞ」
「はい」
地下鉄を乗り換え、ぼーっとしているといつの間にか霞が関まで来たのであたしたちは地下鉄を降りる。
いつ来ても緊張する日本の中枢。毎度のことながら、ここには他では味わえない独特のピリピリした空気がある。
あたしたちは、いつものように総理大臣官邸に到着した。
「おや、蓬莱さん、お待ちしておりました」
守衛さんも笑顔で蓬莱教授を見ると、門を開けてくれる。
最近ではあたしたちも顔パスになっている。
ただ、比良さんと余呉さんはかなり落ち着かない様子で「明治の頃とは大分違うわね」とか言っていたわね。
「本日は別の部屋を用意しております」
いつもは総理大臣官邸にある「小ホール」という所で会議をしていたんだけど、今日は別の部屋が用意されるという。
守衛さんの案内も、いつもとは全く違う。
もう何度も来ているけど、それでも新しい場所に行くのはとても新鮮な感覚を受ける。
「こちらになります」
そこは、大会議室と呼ばれる会議室で、左側のテーブルには既に蓬莱教授を支援する超党派議連の議員たちが全員と、中央のテーブルには総理大臣を除く官房長官副長官に各国務大臣が、更に別のテーブルには高島さんとブライト桜の記者さんの姿の他、公安警察や各省庁の官僚たちの姿も見える。
まさに今ここで、大きな議論が行われていることは明白で、ブライト桜以外のマスコミ関係者たちもぞろぞろと集まっていた。
「これであとは来てないのは総理だけですね」

官房長官が、笑いながら話す。
まあ、総理大臣は忙しいものね。仕方ないわ。
「では、総理大臣が来るまでの間に、皆さんの自己紹介をお願いできますか？」
官房長官が時間つぶしとして、自己紹介を提案する。
ガタッ
そして最初に立ち上がったのが――
「はい、ではまず俺から。みんなも知っているとは思うが、俺がかの有名な人類不老化を目指す蓬莱伸吾だ」
蓬莱教授がわざと尊大な態度で話す。
まあ、普段から尊大な人だけど、これも蓬莱教授の戦略なのだろうか？
「で、隣にいるこちらが、俺の助手の瀬田博助教だ」
ガタッ
「どうも、瀬田と申します。普段は蓬莱教授の研究を手伝ったり、研究の全般を統括しております」
瀬田助教が蓬莱教授とは対照的に謙虚な感じで挨拶する。
おそらくあたし、浩介くん、蓬莱教授、永原先生と合わせた５人の中ではおそらく一番知名度は低い。
「えっと、ブライト桜のお２人は皆様もご存知と言うとのことで省略させて頂くとして、こちらのお２人は篠原優子さんと篠原浩介さんの夫婦だ」
ガタンッ
蓬莱教授に紹介されたあたしと浩介くんが立ち上がる。
「篠原浩介と言います。よ、よろしくお願いします」
「あたしが篠原優子と言います。もしかしたら、メディアで知っていらっしゃる方もいるとは思いますが、よろしくお願いします」
浩介くんが緊張した面持ちで話すと、あたしがその後に続く。
「お２人は我々と、不老研究に必要不可欠なＴＳ病患者を統括している協会との橋渡し役をしてもらっている。優子さんの方はこれから紹介する日本性転換症候群協会の正会員兼広報部長の仕事もしてい

るんだ」
　あたしは協会の広報部長という役職についてもうすぐ４年になる。
　平の正会員だった頃が、今では懐かしいわね。
「さて、では次にこちらの３名を紹介しよう。左から比良さん、余呉さん、永原さんだ」
　カタンッ
　蓬莱教授の紹介を受けて３人が殆ど同時に立ち上がる。
「永原マキノと申します。皆様も、もしかしたら私のことはご存知かもしれません。日本性転換症候群協会会長として人類の長老をやってます」
　フハハハハ
　永原先生がちょっとだけジョークをかますと会議の場も和やかな笑いに包まれる。
「生まれ年は永正１５年です。これは西暦で言うところの１５１８年になります。誕生日は私も分かりませんので１月１日にしています。ですから……数えでは５０５ですね」
　永原先生が、長くなりそうな自己紹介を始める。
　皆はそれぞれ、聞き入っている。
「そうですねえ……織田前右府殿の１６歳、豊臣太閤殿下の１９歳、東照大権現様の２５歳、武田大膳大夫様の３歳、今川治部殿の１歳それぞれ年上でありますか。逆に我が主真田源太左衛門様の５歳、北条左京大夫殿の３歳、正親町天皇の１歳それぞれ年下であります」
　うーん、やっぱり何度聞いても永原先生のインパクトはすごいわね。
　と言うか織田豊臣東照大権現あたりならともかく、他の人はこの場で通称で言っても分からないって。まあ、仕方ないとは思うけど。
「私の人生は……話すと長いんですけど……そうですね。真田家で足軽をしていたとか、江戸城に住んでいたと言ったことだけ話し込んでおきましょうか。ええ、明暦の大火で燃え落ちる前の江戸城の天守の姿も知っていますよ。それから関ヶ原の――」
　永原先生のこの手の昔話は話しだすとキリがないのか、隣に立って

いた比良さんが制止した。
「会長、そのへんにしておきましょう……私は比良道子と申します。政府の皆さん、はじめまして。協会で副会長をさせていただいています」
比良さんがいつも以上に腰を低くして話す。
でも、永原先生ほどではないとは言え、その外見に似合わず、長生きしてきた貫禄を感じさせる。
「私のことはあまり知られていないと思いますので話しておきますと、私の生まれは水戸藩士として、尊王攘夷運動をしておりました。生まれ年は……旧暦で言うところの天保１１年７月２３日ですから……今は１８３……満年齢だと１８１といったところです。後１９年で２００歳ですね。私の紹介は以上です」
江戸時代の元号でも有名な「天保」という言葉が漏れた途端に会議室はどよめきに包まれる。
永原先生に比べればインパクトは薄いが、それでもＴＳ病でもなく、蓬莱の薬を飲んでない人からすれば１８０年も生きる何ていうのは到底不可能なことだ。
ＴＳ病があまねく不老で、しかも寿命という概念を超越していることを示す証拠でもある。
「では最後に……私は余呉と申します。協会では支部長統括兼北海道・東北支部長です。まあ、協会のナンバー３だと思っていただければ差し支えありません。私は農村の生まれでありまして、生まれは天保３年１２月ですから今年で１８９になります。一応永原会長に次いで長生きしてます」
比良さんと余呉さんは、永原先生よりも体格が小さくて、周囲からも「どう見ても未成年にしか見えない」という会話も聞こえてくる。
でも、比良さんも余呉さんも、果たしてどれほどの人が天保生まれまで先祖を遡れるだろうか？
昔の人らしく、３人とも体格が小さかった。
「ふふ、比良さん余呉さんはともかく、私なんかは今でこそ小柄ですけど、あの時代の中ではむしろ大柄な部類だったんですよ。私が生きて

た戦乱の時代は男だって今の女性よりも小柄だったですから」
永原先生が胸を張って言う。
確かに、男性の平均身長でさえ１６０センチなかった時代だもの。
推定１５０弱の永原先生が当時の女性としては大柄と言うのはあながち間違っていない。
あの胸の大きさだって、体格からすればかなりのものよね。
「じゃあそちらの方も紹介をお願いできますか？」
「えっと、じゃあ私から」
最初に立ち上がったのは、官房長官を筆頭とした、内閣官房の面々だった。
「まあ、私達のことは知っているでしょう。内閣府で官房長官をしております――」
官房長官と会うのは実はこれで初めてだけど、もちろんニュースで見る顔なので知っている。
「で、こちらが官房副長官の――」
そして、官房副長官たちは当然、あたしたちが一番良く知っている人だ。
普段の小さな調整の時には、この官房副長官と会議している。あたしからすれば一番身近な政府関係者と言っていいわね。
「では閣僚と官僚たちの紹介として……まずは防衛省から行きましょうか」
総理大臣の代理として、官房長官が閣僚と官僚を紹介していく。
防衛省に関しては、防衛大臣の他、自衛隊の制服を着た統合幕僚長がここに出席していた。
「私は厚生労働省で事務次官をしております――」
「経済産業大臣の――」
そして、厚生労働省、経済産業省、農林水産省、総務省、法務省、財務省、外務省、文部科学省、環境省、国土交通省の各大臣と事務次官がそれぞれ紹介されていく。
更に警察庁やエネルギー庁など、各省に置かれている外局の中でも、これまでの協議から関係が深そうな所の面々が出席してきてい

て、まさに政府関係者としては大人数という様相を見せている。
官房長官によれば、「これでも、威圧目的と思われないために人数は抑えた」とのことで、実際全部の庁が出てないあたり偽らざる本音だと思う。
また、人口問題解決法のために宇宙開発が出たため、国立法人からもＪＡＸＡの理事長が出席していた。
「というわけで、以上がこの出席者になります。皆さん、これは政府内部と更に蓬莱先生、協会側の意見や立場をすり合わせる場所ですから、遠慮せずにどんどん発言していって下さい」
官房長官の言う通り、今回は政府内部と蓬莱教授、そして協会での意見をすり合わせて妥協点を探る場所となっている。
政府側も一枚岩ではないとは言え、協会側の出席者はあたしと浩介くんを含めて５人、蓬莱教授側も、あたしと浩介くんを入れて４人しかいない。
一方で政府側は、全ての省にいくつかの庁の関係者が出席していて、国務大臣も大半がこの会議場にいる。
これに更に総理大臣まで加わるのだから、さっきの官房長官の配慮を差し引いたとしても、やはりどうしても威圧感を感じるのは事実で、下手をすれば政府側に主導権を握られっぱなしになってしまうかもしれないわね。
いかに蓬莱教授と言えども、これは苦しいかもしれないわ。
「さて、それでは皆さん、後は総理大臣だけですが――」
「私がみんなも知っている日本国の内閣総理大臣です。さ、自己紹介はこの辺にして、本題に入りましょうか」
官房長官が何かを言おうとした次の瞬間、ホールの外から、別の男性の声がして、あたしたちが一斉に振り向く。
「そ、総理！」
「待たせて申し訳なかった。仕事が押していたものですから」
総理大臣がお詫びを述べながら、所定の席に座る。
とにかく、これで役者が揃ったわね。
「それでは、会議をはじめましょう。まずは蓬莱先生、実験の進捗具合

と、今後の考えについて、初めて出席する人が多いので、もう一度はじめから説明してもらえますか？」
「……分かりました」
蓬莱教授が椅子から立ち上がり、出席者が一斉に蓬莱教授を注目する。
いよいよ、日本と蓬莱教授の将来を占う、大事な協議が開始されたわね。

## 21歳の国会議員

「それでは皆さん、蓬莱の薬と蓬莱教授、日本性転換症候群協会のそれぞれの方針は確認されたと思いますので、まずは各省庁の立場をここで明らかにしてもらいましょう。まずはそうですねえ、経済産業省から参りましょうか」

「はい」

総理大臣に指名された経済産業大臣と事務次官が立ち上がる。

「経済産業省といたしましては蓬莱の薬の普及に際しまして、日本国全般には速やかに波及を進めるべきとは思いますが、一方で国際的な普及はその摩擦も大きいでしょうから、特に慎重にするべきと考えております」

「ふむ、やはり経団連の意向か？」

蓬莱教授でなくとも、それは思い付く。

「ええ、国際競争力の確保という意味では、衰えない人間というのは大事になって来ます」

「しかし――」

「まあ待ってください。他の機関の意向も聞いてからでないと」

総理大臣が、一旦蓬莱教授を制止して、ジェスチャーで次の行政機関に移る。

「法務省といたしましては、高齢者の犯罪が増加の一途をたどっております。老後に関するネガティブイメージが波及しておりまして、そうした不安イメージなどから来る犯罪の根絶や、刑務所でさえ役に立たない税金の無駄を減らすという意味で、不老化というのは重要になってくるでしょう。また、無期懲役となった犯罪者などにつきましては、安楽死制度が必要不可欠だと考えております」

高齢受刑者は、刑務作業もろくにできず、刑務所の作業さえろくにできないらしい。

そうした存在をなくすには、人間を老化させないのがもっとも手っ取り早い。

法務省は、警察などと同じく、治安の観点から賛成の意見が多い。

「分かりました。では次に、外務大臣、よろしくお願いします」
「はい」
　続いて、外務大臣と外務省次官が立ち上がる。
「外務省といたしましては、反日的な国や、日本に対して不利益なことを繰り返す国に対する制裁手段としての蓬莱の薬の活用に賛成するものであります。そのためには、我が国の国益に反する国には、蓬莱の薬の販売に慎重になるべきと存じます」
「ありがとうございます」
　やはり外務省は以前の主張を繰り返してきた。
　永原先生にとっては一番心強い味方ということになる。
「財務省は、財政の再建ということに折り入って、今回のこの蓬莱の薬の普及は、早急になされるべきと存じます。また、国外の人々につきましても、早急な普及により、日本政府及び日本国民への還元がなされるような機能を構築するべきと考えております」
　財務省は、早期普及派に回った。
　これも予想通り。
「文部科学省としましては、社会保障費の大幅減衰による影響は歓迎するものの、いたずらに普及を急ぐのも、また問題だと思います。まずは学者や大きな実績を残した人などから順番に蓬莱の薬を配っていくべきでしょう」
　文部科学省は、科学者の優遇を唱えている。
　ただ、この提案を蓬莱教授は絶対に飲まないだろう。
「総務省としましては、蓬莱の薬の普及そのものは迅速に行うべきと思いますが、社会的な混乱も、また大きくなると考えております。まずは、それに伴う制度作りを入念に行ってから、一般への販売に踏み切るべきだと考えています」
　総務大臣の意見には、蓬莱教授もうんうんと頷いている。
「防衛省としましても、総務省の意見に賛成でございます。蓬莱の薬の独占は薬の影響力を考えれば、必要であることは確かですが、必ずや外国は我が国に言いがかりをつけてくるでしょう。蓬莱の薬の権益を守るためには、必ずや国防予算の増額をご検討くだされ」

防衛省は統合幕僚長が立ち上がって話し、防衛大臣もうなずいている。
制服自衛官がこういう場に姿を表せるのも、時代が変わった証拠よね。
「うむ、では次に国土交通省の見解をうかがいたい」
「国土交通省としましては、やはり人口の急増という懸念がありますが、一方で鉄道と道路の充実に際して、この不老技術は使えるのではないかと確信しております。ゆっくりと普及させて行くことが重要になっていくでしょう。ただ危険職に対する敬遠の懸念はありますが、今は静観します」
国土交通大臣の言い分からは、国土交通省も中立的考えで、あまり関与しないという方針が見受けられるわね。
次に立ったのは環境省だった。
「環境省としましては、不老の全人類への普及は反対です。ごく一部の人のみが、これを享受するべきです」
環境大臣が、きっぱりとそう発言したために、会議場もざわつきが見られた。
「大前提として、俺はこの薬を選民思想の道具にはしたくない」
居たたまれなくなった蓬莱教授が、割り込んで話す。
「私としても、少なくとも日本には広く普及させてもいいと思っているわ」
最右派に属していた永原先生も、環境省の見解には異議を唱える。
「ですが、こんな薬を一般大衆まで、世界人口あまねく所まで認めたら、あっという間に地球はパンク状態になってしまいます」
「そのために、俺は浮いた社会保障費を、宇宙開発に充てるべきだと考えているのだ」
環境大臣の弁明に対して、蓬莱教授が負けじと応戦する。
「しかしそれが成功するとは限らない！」
「ねえ、1ついいかしら？」
「「え!?」」
あたしがここで口を挟んだことに、会議室全体が驚きの声に包まれ

る。
「ごく一部だけっていうのは、どういう人たちを指すのかしら？　日本人だけ？　富裕層だけ？　それとも、あたしたちＴＳ病患者と結婚した旦那さんやその家族だけを言っているの？」
「えっと、それは……」
　環境大臣が言葉に詰まる。
「農業や水問題は確かに大きいわ。でも、人口が急増するといっても、１０００年は大丈夫のはずよ。いずれにしても太陽系がいつかダメになる以上、宇宙開発は必要なのよ」
「ＪＡＸＡとしても、篠原さんの意見には賛成したい」
　あたしの意見に、ＪＡＸＡの理事長さんが賛意を示してくれる。
「ふう、では次に行きましょうか」
「はい」
　そして次に、農林水産省の担当になる。
「農林水産省ですが、やはり農地改革、戦後の農地改革ではなく、農地そのものを増やす、そういう改革が必要になってきます。品種改良を進めることだけでなく、土地を増やす方法といった技術を整備してから、蓬莱の薬を世に出すべきだと思います。特に外国に関しては、食料戦争への懸念もございますから、食料自給率の向上を、重要な目標とするべきです」
　農林水産省は総務省とほぼ同じだが、より慎重な考えを持っている。
　また、海外との食料戦争を割けるためにも、外国への蓬莱の薬の販売には、慎重な姿勢を見せた。
「では最後に厚生労働大臣、お願いできますかな？」
「はい。厚生労働省としましては、蓬莱の薬の早急な普及には心情的には賛成でありますが、高齢者への福祉の大幅削減をどうやって穏便に進めるかが、肝要と思います。また、不老による世代交代の鈍化から、世間の硬直化も考える必要があると思います」
　高齢者の身では、蓬莱の薬は、いわば「手遅れ」となる。
　おそらく、高齢者に対する福祉を全廃すれば、否応でも若者たちは

蓬莱の薬を飲まざるを得ない。
　そうすれば、老い先短い高齢者は全滅し、若者と一部の中年だけが残るだろう。
　とはいえ、長生きする人ばかりになれば、世の中が硬直化するのではないかという懸念もあるらしい。
「分かりました。では蓬莱先生、以上を踏まえて、どう思いますか？」
「蓬莱の薬の完成を見越した立法を行うのには賛成だ。しかし、最終目標としては全人類への蓬莱の薬の普及というところは譲れない。一部の人間にのみ普及させるとしても、その期間は必要最小限にしたい」
「それは、どうしてですか？」
「しかし、硬直化した世の中になるのではないか？」
　環境省は、まだ諦めていないらしいわね。
　さっきの厚生労働大臣の発言を援用している。
「ああいやそうではないんだ」
　永原先生の例を見ればわかるように、１５０年以上若いままで過ごせば、むしろ柔軟な思考を持つことが知られている。
「どうしてですか？」
　厚生労働省の事務次官が質問する。
「ここにいる永原先生がその証明だ」
「というと？」
「実は――」
　蓬莱教授が、数年前に起きた会議の顛末を話す。それは、今は蜜月の関係にある協会と蓬莱教授だけど、実はあたしたちが佐和山大学への進学を決意する頃まではそうでもなかった。
　その時の投票で、当初蓬莱教授との協力案は否決されてしまったけど、実は永原先生が賛成票を投じていた。
　永原先生が比良さんや余呉さんよりも柔軟な思考回路を持っていたことを示している。
「なるほど、そういうこともあったんですか」
「人間というのは、な。代を重ねずに進化できる唯一の生命なんだ」

蓬莱教授が何時かに話した言葉。
それは単純な人間讃歌でもない。蓬莱教授は淡々とした感じに事実をのべているだけという風潮で話す。
「さ、制度作りという意味でだが……財務大臣殿に伺いたい。もし不老化が実現すれば、社会保障費はどれ程下げられる？」
「老人がいなくなるとして、また少子化対策も不要になることも換算して、9割は減らせると思います。国家予算に占める社会保障費の割合を考えれば、数十超円単位の予算が浮くことになります」
「おお」
「ではそれをどのようにして浮かしていくかだが――」
各閣僚たちが、目を輝かせながら予算の皮算用をする。
もちろん、人口問題への備えから、公共事業費の増大がまず大事になってくる。
とはいえ、あまりにも急激な予算増加はそれはそれで予算の使い道に困ってしまって問題となる。
そこで、当初は公債費、つまり「国の借金」の返済に大部分を充てることになった。
「まあ実は国の借金というのも我々が流したプロパガンダなんですがね」
財務省の事務次官まで、派手にぶっちゃけてしまった。
おそらく、公然の秘密だったのか、誰も動揺する様子がなかった。
「それでは、農業改革の予算を第一に、それで急場をしのいだら宇宙開発ということにしましょう。それから、経済産業省によるイノベーション推進にも使いましょう」
財務省も、社会保障費の足枷が外れたという仮定なので、かなり気前がいい。
総理大臣も、あたしや浩介くんも、政治的な協議に加わっていく。
「そして大事なのが、防衛予算ですね」
「あーそうですなあー」
永原先生の言葉に、外務大臣がうなずく。
そう、彼らのなかで共通しているのが、「詐欺企業などの登場を警戒

して、蓬莱の薬は国家機密として、事実上の独占とする」という所、これまでの習慣や法律では対処しきれないのがその理由だが、日本の独占に対しては必ずどこかの国が不満を漏らすことになる。
そうなった際に押さえ込むためには、軍事力も必要になってくる。
蓬莱の薬の禁輸は、あくまで最終手段になる。
他の国がどう出るかは分からない。
「ですから、禁輸措置はもう少し積極的に使ってもいいものと思います。とにかく最終的には、相手の戦意をくじくことができると思います」
「うむ、だが強力すぎるのだ」
「うーむ……」
外務省と蓬莱教授の間の軋轢は、なかなか埋まらない。
環境省と並んで蓬莱教授とは最も遠い距離に位置している。
経済産業省と永原先生は、やや態度を軟化させているが、外務省はやはり最前線に立たされるだけあって強硬手段を容認して欲しいと蓬莱教授にしきりに訴えている。
「しかしだなあ、単なる脅しだけでもあまりに強すぎるからなあ」
蓬莱教授は、蓬莱の薬の禁輸は核攻撃に匹敵する制裁措置だと主張している。
つまり、蓬莱の薬の禁輸は、核攻撃を示唆するということになりかねない。
「うーむ……どうしても必要なら使ってもいいが……もし蓬莱の薬の門戸を解放しないことを理由に経済制裁ないしは武力制裁をするというのなら、対抗手段として使ってもいいだろう」
蓬莱教授がふうとため息をついて言う
武力制裁された時などに限るとしていた蓬莱教授は、外務省に対して譲歩したかたちになる。
「承知しました」
外務省の事務次官も、その妥協案を受け入れた。
「しかし、海外の世論は分からんのかね？　俺の方では把握してないのだが」

蓬莱教授が国家公安委員長の方を向く。
「公安調査庁としても、そのことについては把握しておりません」
「うーむ」
蓬莱教授が知りたい情報は、公安にも持っていないらしいわね。
こうして議論は進んでいった。

「うむ、自衛隊の防衛費増強ではまずは――」
「人と兵器を増やしていきたいと思う」
防衛大臣がそう答える。
ともあれ、予算の使い道の詳細も決まった。
「恒星間宇宙船の開発についても、最終的には考えていかねばなるまいな」
「あはは、私も乗りたいわね」
蓬莱教授の遠い未来の構想に、永原先生が笑いながら答える。
「どうなるかなあ……」
会議は、日が落ちた後も続いた。
各大臣やＪＡＸＡの理事長、更に超党派の国会議員たちなど、あらゆる立場から意見を束ね会う。
比良さんと余呉さんも、永原先生の意見を補う形で、会議を進めていく。
「いいえ、ＴＳ病患者の立場としては――」
「そういえば、ＴＳ病になると女の子を支えにしないと生きていけないんでしたね。すみません」
超党派の野党議員の的はずれな意見に、あたしが「専門家」の立場からアドバイスをする。
「はい、ですからＬＧＢＴ団体と協会の提携は考えておりません」
「ありがとうございます。やはり当事者が言うと違いますね」
野党議員さんも、やはり実際に男から女に変わった人の意見には簡単に納得してくれる。
「では、篠原さんの意見を採用しましょう。不老が実現した後の教育としては、やはり性役割の過小評価はいけないという方向で参りま

しょう」
そして総理大臣が、最終的な決定を下す。
あたしは今、浩介くんとともに、「２１歳の国会議員」になっていた。
「では、本日はここまでにしましょう。皆様、お疲れ様でした」
「「お疲れ様でした！」」
全員で起立して挨拶する。
あたしは浩介くんと共に、２人で歩く。

「じゃあ私、家に帰るわね」
「はい」
そう言えば、永原先生の家がどこにあるかは、知らないのよね。
恐らく東京都在住だとは思うけど。
ともあれ、永原先生はあたしたちとは別行動を取ることになった。
「篠原さん」
「「はい」」
突然の総理の呼び掛けに、あたしたちはまとめて振り返ってしまう。
まあ、苗字で呼ばれたら今までもそうしてたけど。
「あー、お２人は、今後下の名前も含めて言った方がいいですね」
「ええ」
「今日は、どうもありがとうございました。お若いのに、ご立派ですね」
総理大臣が、あたしを誉めてくれる。
「ええ」
「それにしても、どうして協会はあなたをそこまで買っているんですか？　広報部長と言うのは、他にもいたはずじゃないですか」
「あたしが協会に入る前と後で、大きく変わったんですよ」
あたしがにっこりと笑う。
総理大臣は、さすがと言うべきか、もうそれなりの老齢だからか、あたしの胸は凝視して来ない。
「ああ、優子ちゃ……家内が協会に入る前は、ＴＳ病患者の自殺率は５

割を越えていたんです」
　浩介くんが、あたしのことをいつもの呼び方でいいかけたのを、慌てて「家内」と呼び直す。
　こう呼ばれたのも久しぶりだわ。
「ええ、実際に自殺率が高い病気だと、聞いています」
「5年前の１０月に、あたしが協会に入って、新しい患者さんの教育方針について、制度改革をしたんです。そのお陰で、自殺率も減りました。あたしが教育した患者さんは、今のところ４人ですが自殺者は出ていません」
　新しい患者さんも、１人は無事に小谷学園に入学が決まっている。
　あそこなら、永原先生もいるし、都合良く永原先生は1年生の担任になるので、当然あの患者さんは3年間永原先生のお世話になる予定になっている。
「そうだったんですか」
「ええ、この子は、とても優秀なんです。私たちの誇りといってもいいんです」
「あ、比良さん！」
　あたしたちと総理大臣との会話に、比良さんが乱入してくる。
「確か天保１１年生まれの――」
「はい比良道子です」
「あなた程の人でも、優秀に見えるのですか？」
　総理大臣が比良さんの方に向き直る。
「ええそうです。この病気になった人は、多くの人が『男に戻りたい』と思ってしまい、無駄なあがきと共に心身を疲労して自殺してしまうんです」
「ええ、知っています」
　ＴＳ病のことは、今日の議題でも上がったものね。
「成績優秀な人は、運命を受け入れ、女として生きる他に道がないことを知って、消極的ながらも少しずつ女の子としての人生を歩んでいきます」
「では、篠原優子さんは？」

総理大臣は、内心は予想ついているとは思う。
「ええ、優子さんは、運命を受け入れただけではなく、『昔の自分を変えたい』という一心で、必死になって、一生懸命一生懸命に女の子らしくなろうと、努力してきたんです。本当に、滅多にいないタイプですよ」
そう、だからこそ、もちろん永原先生が担任の先生だったということもあったけど、一生懸命に女の子になろうとして、実際に異例の早さで女の子らしくなれたあたしはあの年齢で協会の正会員になることができた。
「それはそれは……性別がある日突然変わってしまうというだけでも、計り知れない心労があると思うのに」
「総理、あたしは、女の子になりたく何てなかったって思ったことは、一度もなかったわ」
あたしがそう答えると、比良さんが頷くような顔をする。
「そうよ。それが篠原さんの何よりも勝る強みよ。男の人生を、誰もが羨み、取り戻したいと思うことはあるわ。私も、水戸藩士だった頃の日々を今でも懐かしく思うことがあるもの。患者さんは皆、男の頃の人生と折り合いをつけるのに苦労しているのよ」
「あたしは、女の子らしい女の子になれて、幸せな家庭を築くことができたわ。ううん、もちろん蓬莱の薬が完成するまでは、道半ばですけれども」
「……そうですか。引き留めて申し訳なかった」
総理大臣が軽く頭を下げる。
実直な人よね。
「ええ、では、あたしたちもこれで失礼いたします」
「ありがとうございました」
あたしたちは、総理大臣官邸を出て駅に向かい、家に帰った。

## 研究の最前線

大会議のことは、翌日には早くも大きな動きが見られた。
朝のニュースで、テレビが速報として、「総理大臣が閣僚を集め、佐和山大学の蓬莱教授、日本性転換症候群協会の永原マキノ氏らと会談し、『蓬莱の薬』が一般に普及した後のことについて話しあった」と報じた。
そしてインターネットでもすぐにそのニュースが流れ、「ついに現実に近付いているんだな」とか「総理大臣も蓬莱教授の味方か」とか「反蓬莱連合涙目だな。今後世界はどうなるのかな?」といった声が聞こえている。
日本では、もはや世論の大半は蓬莱教授の研究に賛成とはいえ、諸外国のメディアは未だにろくな世論調査をしていない。
昨日の議論でも、諸外国の世論調査の話は出たが、公安調査庁でさえ把握していないということは、恐らく単純に世論調査をしていないというのが正しい認識だとあたしは思う。
さて、このニュースがいったいどう出るかしら?
「ねえあなた」
「ん?」
今日は義両親が外出しているため、浩介くんに昼食の片付けを手伝ってもらっている。
「今朝のニュース、海外の動向が重要になってくるわね」
台拭きの手を止めて浩介くんの方を向く。
「ああ、足場はすでに固めたからな。国際世論がどうであれ、蓬莱さんと総理大臣が毅然としていれば大丈夫さ」
浩介くんは、あくまでも楽観的だ。まあ、あたしとしても同意見なんだけどね。
蓬莱の薬が世間にもたらす効果は計り知れないし、以前から海外にもちょくちょく注目されていたものね。
あーでも、不老論争はまた別かもしれないわね。

「これで全部ね。浩介くんありがとう」
浩介くんと力を合わせて、食器を全て食器洗い機に入れ終わった。
「ふう、後は食器洗い機のボタンを押してっと」
ピッ……ウイーン！
そしてボタンを押せば、いつものように食器洗い機の動作音が聞こえてくる。
「ふー、少し休むわね」
少し休んだら、今度はお掃除しなきゃ。
「おっとその前に」
浩介くんがあたしの肩を叩いて呼び止める。
「あ、うん」
浩介くんがにやつきながら要求すること。それが――
ぺろーり
無抵抗のあたしは、浩介くんにスカートを掴まれ、ゆっくりとめくり上げられていく。
もちろん、浩介くんのお目当てはあたしのパンツの観察。
「優子ちゃん、今日はシンプルでかわいい純白だね」
あたしは、家事を旦那に手伝ってもらった見返りとして、スカートをめくる権利を浩介くんに提供する。
この、「旦那さんが家事を手伝う報酬はスカートめくり」というルールは、新婚1年目に決まったルールだけど、未だに続いている。
「ふえええん、わざわざ言わないでー！　恥ずかしいよおー！」
浩介くんがどんどんスケベになっているために、パンツを見られる恥ずかしさに耐えるのは新婚の時よりも難しくなっていて、あたしはやや涙声で恥ずかしさに耐えていく。
「ふー、かわいいかわいい」
浩介くんはひとしきりに満足すると、スカートから手を離してくれる。
「はぅー、やっと終わったー」
あたしはフラフラになってそのまま床にぺたんとへたり込んでしまう。

浩介くんが無言で頭を撫でてくれて、ますますあたしは心を奪われていく。
分かっている、本当はスカートをめくられても無反応でいれば浩介くんも自然と飽きてくることも。
だけど、あたし自身が浩介くんにスカートをめくられたがってしまっている。
その現実を自覚してしまえばしまうほど、あたしは浩介くんから逃げられなくなってしまう。
だからあたしは、愚かにも次に掃除の時にこんな依頼をしてしまう。

「あなた、こっちの部屋、ホウキとちり取りで掃除してくれる？」
「おっしゃあ！」
浩介くんが気合たっぷりの掛け声とともに、がむしゃらに一生懸命掃除してくれる。
掃除が終われば、もちろん待っているのは――

ぺろーん
「んっ……恥ずかしい、恥ずかしいよお……」
さっきよりも緩急をつけ、ゆっくりと焦らされながらスカートを持ち上げられてしまう。
あたしは、目を細めて涙目になりながら恥ずかしさに耐える。
「いやー、2回目もかわいいね優子ちゃん」
「ふえええええん、恥ずかしいからまじまじと見ないでえー！」
大抵は、1回目よりも凝視され、長期間パンツを見られることになってしまう。
そして――
「あれ？　もしかして優子ちゃん」
浩介くんが何かに気づいたように一気に顔をパンツに近付けていく。
「いや、やめて！　恥ずかしいから見ないでー！　見ないでー！」

一連の流れで興奮してしまっているあたしを、よりにもよって最愛の人に知られてしまうのが恥ずかしくて、あたしは顔を真っ赤に沸騰させながら、浩介くんに懇願する。
「う、優子ちゃん、そんな風に言われると俺――」
どうやらこれが、浩介くんの心の琴線に触れてしまうらしいわ。
分かってても、あたしはやめられないのよね。
「あなた……」
「はぁ……はぁ……我慢……できない……」
ガバッ！
「きゃあ！」
浩介くんにお姫様抱っこの形で体を持ち上げられ、どさくさ紛れにスカートもめくられて、パンツ丸出しにさせられてしまう。
あたしはとっさにスカートを押さえると、浩介くんは更に嗜虐心を刺激させられたのか、あたしの部屋のベッドに向けて走るスピードが速くなる。
「そーれ！」
「きゃあああああ!!!」
浩介くんにお姫様だっこの形から投げ飛ばされ、スカートが丸めくれになりながら、乱暴に、しかし受け身を考えられていてふわふわなベッドに着地する。
ガチャリ……サラサラ……
何かが外れる金属音と衣服が擦れる音がする。
「いいよな、優子ちゃん。俺、我慢できねえ……」
「はい」
浩介くんに甘い声でささやかれ、あたしは脳機能が低下し、理性の奥に隠れた、あたし本来の「メスの本能」が剥き出しになった。
「はぁ……はぁ……はぁ……もう、浩介くん。まだ日没前よ」
「うーすみません」
さっきまでのハイテンションが嘘のように項垂れた浩介くんが謝ってくる。

まあ、あたしもあんまり怒ってないんだけどね。
義両親がいない日って、いつもこんな感じ。
あたしから助け船を求めることもあるし、浩介くんから手伝おうとする時もあるけど、いずれにしても浩介くんに家事を手伝ってもらって、見返りに浩介くんにスカートをめくられてパンツを凝視され、あたしが恥ずかしい思いをアピールすると、浩介くんが我慢できずに「暴発」する。
ちなみに、私生活でもこれがあるので、あたしは私服でズボンを穿く機会が殆どない。
このルールは、あたしがズボンの時は胸かお尻を触られることになっている。
実際にはスカートの時でもそれで代用できるんだけど、浩介くん曰く、「優子ちゃんの反応としては、やっぱりスカートめくりが一番かわいい」とのことだった。
そのせいで、あたしは浩介くんに喜ばれたいために、スカートを選ぶことが自然と殆どになってしまっている。
「でもよ、夫婦円満のためには、これも必要だって」
「う、うん……」
そう、夫婦仲維持のためには、こういうえっちなことにどれだけお互いが満足できるかというのは、とても大切なことになるのよね。
「さ、お互い落ち着いたところでニュースの反応を見ようぜ」
欲望を発散すると、一気に冷静になるのも、男の子らしいわよね。
「そうね、じゃあまた情報集まったら集合で」

あたしは浩介くんとは別に、パソコンを開いて海外の反応を検索しようとする。
海外メディアで「Ｈｏｒａｉ」と検索したが、どうやらまだあんまり注目されていないのか、記事ができていないのか、総理大臣との会談を報じたメディアはない。
もしかしたら、薬を融通してもらえないことを警戒しているのかもしれないわね。

他の国内メディアのニュースでも、大々的に取り上げている割には軒並みストレートニュースもしくは蓬莱教授に肯定的な報道に一貫している。
「うーん、それにしたって不気味だわ」
国内ならともかく、海外のマスコミに報道命令を出すわけにもいかないし、もしかしたら報道されてない方が蓬莱教授には有利かもしれないわね。
海外の世論、インターネット上では海外も含めて明らかに蓬莱教授に優位と見えるけど、実際の所は分からない。
結局、あの後有力な情報もつかめず、あたしたちは不気味な日々を過ごしながら、４月の新年度を迎えた。

「えーではですね。我が研究棟に、新しい仲間が加わりました」
蓬莱の研究棟、今日からあたしたちはここに正式に配属になり、卒業論文を書くことになる。
とはいえ、あたしたちのすることは、講義を受けることも多い。
あたしと浩介くんも、前期にはまだ達成していない単位を取らなきゃいけない。
「ふー、さてと」
他の学生が全員研究棟の１階から出ていくと、蓬莱教授があたしたちに向き直る。
「ここまでが、普段大学４年生及び修士課程の人が入れる領域だ。だが君たちは、俺の研究への当事者だ。将来のためにも、この奥を見ていって欲しい」
蓬莱の研究棟は６階建てで、１階が蓬莱教授の私室とプロパガンダエリアだ。
２階が主に講義室や会議室になっている。
３階には実験室や研究成果として蓬莱の薬の製造と保存、他にもコンピュータなどがあって、一般公開できる研究は全てここに集約されている。
他にも、蓬莱の薬を飲んだ人もここで検査を受けることになってい

る。
４階が主に研究室の所属者が研究以外の用途で使う所で、浩介くんも所属する宣伝部や、予算の管理部などもここにある。
従来のあたしたちが今まで入れたのはここまでだった。
「これから行く5階と6階は、主に研究の中枢だ。ここではマウスを使った実験や、君たちの細胞を活かした研究が進められてるぞ。蓬莱の薬も、全てここで生まれたんだ」
この研究室の中枢は、博士課程の人と、研究員の人しか入れない。
蓬莱教授がエレベータに案内してくれる。
このエレベータ、行先階がタッチパネルになっていて、1から4までしか無い。
蓬莱教授がパネルの別の場所に手を触れると、少し遅れて「認証しました」という声と共に5と6の数字が浮かび上がった。
「ちなみに、テロリストが俺を殺してかざしたとしても、警備室の監視カメラで見られているのでそこで弾くことができる」
蓬莱の研究棟のエレベータでは、5階と6階は生体認証がないと入れない。
また常用の階段は4階までしかなく、4階から5階へは扉らしきものがあるが、かなり固く閉ざされている。
そして非常階段の扉には、常に監視カメラがあって、4階の警備部で侵入者が居ないかどうか常に監視しているという。
ピンポーン
「5階です」
エレベータの声と共に扉が開く。
5階のエレベータの前には、空のパネルがあった。
「さ、優子さんと浩介さんにも、ここへの通行を許可しよう」
蓬莱教授が指紋認証を促され、あたしと浩介くんが指紋を取る。
機械音声で「登録しました」と言われ、これでいつでも通行が自由になった。
こんな厳重な所に通してくれるのは、蓬莱教授の信頼の証でもあるわね。

「研究所の情報は極秘なんだ。だからここのパソコンはインターネットにも繋いでない。あるのはクローズドなネットワークだけだ」
物々しい雰囲気だけど、それでも中は独特の緊張感を内包しつつ、表面上では意外と緩んでいた。
「あれでも皆しっかりやってるんだ」
表面上の身だしなみに惑わされない蓬莱教授らしい発言だわ。
「ふう、皆さん待たせた」
蓬莱教授が研究所の一室を開ける。
そこでは、全員が顕微鏡の画面と格闘していた。
「あ、蓬莱教授」
「どうかね？　今度の理論は？」
ここで、蓬莱の薬が作られているのね。
「ええ、残念ですが、全て失敗のようです」
「まあ、予想はしていた。プランFに移動しよう。こっちの方がまだ可能性は高いだろう。それよりも、君たちに紹介したい人物がいる」
蓬莱教授があたしたちのことを紹介してくれる。
「おや、篠原夫妻ですか。あー、もうそんな時期なんですね」
「はい」
どうやら研究棟の人は、あたしたちのことを知っていたらしい。
まあ、当然と言えば当然よね。これでも大学一の有名人な訳だし。
「やっぱり、別の形式があると思うんだよなあ……」
蓬莱教授が、小さく呟く。
恐らく、蓬莱教授はγ型の遺伝子方式の存在を疑っているんだと思う。
「ですが、このままでも、１０００歳の薬までは――」
「それでは意味がない。あくまで必要なのは『不老の薬』だ。それを達成できないということは、まだ何かが足りないという意味だ」
蓬莱教授が軽い口調でそう言う。でも、中身は深刻そのものだわ。
「ともあれ、頑張ってくれ。俺の実行したプランF、しくじらないでくれよ……まあ、俺の理論が間違ってたら、どうしようもないがね」
「「はい！」」

蓬莱教授が、研究員たちに新しい指示を下し、あたしたちはこの場を後にする。
「邪魔したな」
蓬莱教授に見送られ次に6階への階段を上る。
「実は5階と4階の間には扉があるが、非常時には自動で開くことになっている。そうでなくても、内側からなら簡単に開けられるからな」
蓬莱教授の説明と同時に、あたしたちは最上階へと上がっていく。
「蓬莱教授、ここは？」
「基本的に5階でやっていることと変わらんよ。あちらが実証的な実験だとすれば、こちらはコンピュータを使った理論実験だ。で、ここが俺の今までの研究の資料室だ」
蓬莱教授によれば、卒業論文や修士論文を書く際には、ここへの立ち入りを許可することもあるという。
「俺の作った薬を飲んだ人の寿命を推定したのも、ＴＳ病患者が理論上何年でも生きられると証明したのも、俺の研究成果がまだ不十分だと示しているのも、ここのコンピュータによるものだ」
「そうだったのね」
恐らく、比良さんと余呉さん、永原先生の年齢もこういった研究成果の分析で証明されたものだと思う。
「さて、ここまでで何か質問はあるかな？」
「うーん……」
あたしと浩介くんが質問内容を考える。
「あー、無理に考えなくてもいいよ。質問のある学生なんてそうそう――」
「蓬莱教授」
蓬莱教授が止めようとしたその刹那、あたしは言いたいことを思い出す。
「お、優子さん、どうしたのかな？」
「ここ資料室となってますけど、もう1つ、何かさっきから音が聞こえる部屋があるんですが？」

あたしがそう質問する。
「ああこれかい、そう言えば言い忘れていたな。まあついてきてくれ」
蓬莱教授が、あたしたちを促してくる。
あたしたちがついていくと、そこには大きな機械があった。
いや、機械というか、これは高校の教科書で見た――
「蓬莱さん、これはまさか、スーパーコンピュータじゃ!?」
「その通り、うちの大学にもう一つある、大学の教授たち共用して使っているスーパーコンピュータよりも性能がいいんだ。俺はこれを使って理論を弾き出すんだ。まあ、さっきの研究室を見て分かるように、コンピュータの理論通りにはなかなか進まないがね」
やはり、ＡＩは万能ではないらしい。
「さて、ここで俺の研究室の終点だ。立ち入りを許可するといっても、実際にここに立ち寄る機会は、博士課程まではそうそう無いと思うが……もし立ち寄った時は帰りはなるべくエレベータを使ってくれ」
「はい」
あたしたちは研究所を後にして、講義へと向かった。
実験がないというだけで、心理的には大分違う。勉強する負担も、かなり減ったと言えるだろう。

「卒業論文、どうしようかしら?」
昼食後、研究室の3階の部屋で、他の学部生や大学院修士課程の人と一緒に休息を取る。
今日は午後にもう1つ、蓬莱の研究棟で、蓬莱教授の講義がある。
「違うテーマにしなきゃいけねえしな」
あたしはもちろん、ＴＳ病患者が持っている不老のメカニズムに関する論文を書こうと思う。
蓬莱教授の論文や文献を、多いに参考にさせてもらおう。これまでの実験などで提出したレポートが、助けになるわね。
「卒業論文は、蓬莱教授は結構厳しいけど、単位を落とすことは少ないから安心していいよ」
「あ、和邇先輩」

あたしたちに話しかけてくれたのは、今年で修士2年になる和邇先輩だった。
和邇先輩は、蓬莱教授に目をかけられていて、このまま博士まで行くらしい。
「まあ、いわゆるC判定は簡単に取れるけど、B以上は難しいってやつだ」
「成る程ねぇ……」
その蓬莱教授の講義でAをたくさん取れたのは運が良かったわね。
「でもよ、篠原夫妻は優秀って聞いてるし、卒論くらいならそんなに悲観しないでいいよ」
「う、うん……」
とはいえ、ベストを尽くした方がいいのは確かだ。
不老のメカニズムとしては、α型とβ型がある。
今度永原先生に確認して、結核に感染した時の事を、詳しく聞き取る必要があるわね。
後はそうそう、歩美さんにも協力してもらわないといけないわね。
「ねえ浩介くん」
「ああ、俺は俺で、別のテーマを考えておくよ」
浩介くんは、あたしが心配そうにしているのを見抜いたのか、優しそうな声でささやいてくれる。
「ありがとう」
ともあれ、テーマが重ならなければ、あたしたちは大丈夫なはずだわ。
「ふう、でもテーマが早くに決まってよかったわ」
α型とβ型を、蓬莱教授がどう区別したのか、そして蓬莱教授が考えているγ型の存在可能性について、あたし自身で色々考えて、テーマとしてまとめよう。
まだまだ4月で時間もたっぷりあるわ。行き詰まりそうだったら、蓬莱教授に相談すればいいわね。

# 遠くでのせめぎあい

「浩介くーん、一緒に帰ろー」
「おう」
大学４年になって、初めて浩介くんと履修する科目が変わった。浩介くんの方がより心配性なのか、履修科目が１つ多い。
あたしはその日はいわゆる空き日になっているけど、卒業論文のこともあるので蓬莱の研究棟に詰めたり、あるいは新しい患者さん２人の相談に乗ったりすることにしている。
むにっ
「あうぅ……」
あたしが腕を絡め、浩介くんの二の腕に胸を当てると、浩介くんからかわいい声が漏れてくる。
あたしが何回スカートめくりされても、慣れることはなくて恥ずかしいのと同様に、浩介くんもあたしに誘惑されると、慣れることはなくてドキドキしてしまうらしい。
「ふふ、浩介くん大好き」
浩介くんは以前、「慣れ始めたら愛が覚める兆し、そうなりそうになったら、慣れないようにドキドキするように意識を集中させるんだ」と言っていた。
指摘されるまで気付かなかったけど、考えてみるとあたし自身も同じような傾向にあったと思う。
最も、浩介くんよりは意識してないとは思うけど、それでも浩介くんの愛情は変わらなかった。
「優子ちゃん、俺もだよ」
愛を確認し合うこのやり取りも、数えたわけじゃないけどあたしたちは既に１０００回を数えていると思う。
うー、もしかして浩介くんになまめかしい声をあげさせられちゃった回数もそれくらいかも。
あたしたちは、周囲の視線も気にせずに、ラブラブな雰囲気で家へと帰宅した。

「え!?　何よそれ！」
４年目の大学生活を謳歌していたある日、公安調査庁から提出されたレポートに、あたしは目を疑った。
国際反蓬莱連合がバチカンのローマ教皇と、イスラム教各国とで同時にロビー活動し、「神の真理に反し、老いの宿命を否定せんとする無神論者蓬莱伸吾を倒せ」と扇動し始めたという。
「優子さん、落ち着くんだ」
あたしの動揺ぶりが酷かったのか、蓬莱教授にたしなめられてしまう。
「え!?」
「ここを見ろ。今のところはロビー先の団体には相手にされていない。何分敵の大将である例の牧師はプロテスタントだ。イスラム教の連中はもちろんのこと、カトリックであるローマ教皇庁が、まともに相手にするわけがない」
蓬莱教授が一息つくと続いて指摘する。
「こちらには、既存の宣伝部や協会の広報部だけではなく、公安調査庁という心強い味方がいる。日本人は諜報が下手だなどというのは思い込みだ。今公安調査庁の人間が、ローマ教皇庁と接触していて、奴の悪行ぶり、特にＴＳ病の患者を自殺に追い込んだことを虚実入り交えて説き伏せているところだ」
蓬莱教授が、あたしを落ち着かせるために現況を説明してくれる。
「それでもやはり、どこか落ち着かないわ」
「確かに、キリスト教はともかく、イスラム教の連中は注意した方がいいだろうな。２１年前に起きた事件、そして６年前に栄えたイスラム国……日本でも、反イスラム的な書物だという理由で、翻訳しただけの大学教授が殺されたこともあった。しかも連中の教義では指導者が出した殺害命令は撤回できねえんだ」
蓬莱教授もイスラム教には警戒を強めている。
幸いにして、日本では「他人に迷惑をかけるな」という強固な概念

があり、それが治安を支えている。
「日本のイスラム教徒は、日本の監視社会と村社会のお陰で温厚な人が多い。だが、もしイスラム世界で反蓬莱思想が蔓延したとすれば、俺たちが海外に出る時は注意せねばなるまい」
蓬莱教授は、少しだけ頭を悩ませているようだった。
何せ蓬莱教授が無宗教かつ無神論者であることは周知の事実だった。
イスラム教でもキリスト教でも、無神論は偶像崇拝と並んで絶対悪の象徴だということは、高校の授業でも習った。
もちろん、この「蓬莱の研究棟」が、テロの標的にはなるとは思えないけどね。
「ともあれ、俺としては宗教勢力と妥協するのは気に入らねえが、蓬莱の薬を開発し、その効力を証明しねえことには、やつらは信仰を捨てることはねえだろうな」
やはり、蓬莱教授は現実主義者だ。
宗教を害毒と見下しつつも、現況勢力の強さを鑑みて何とか説き伏せようとする。
そのためには自前の宣伝部では不十分なので、公安調査庁を頼ると。
「とりあえず、今は様子見かしら？」
「ああ、もし何かあれば、政府が派遣したＳＰが警護してくれるとのことだ」
「それは頼もしいわね」
「いいや、出来ることなら避けたいものだ」
蓬莱教授が嫌そうな顔をする。
確かに今の蓬莱教授は、総理大臣と並ぶか、それ以上の権力を持っているけど、国家的権力は何一つ有しない民間の大学教授でしかない。
そこに過剰な警備を行えば、要らぬ噂を招く恐れがあるのよね。
そもそも、佐和山大学は事実上蓬莱教授の王国だし、見えない所で監視の目を光らせているとも言っていたし。

「ともあれ、この大学なら安全だ。幸いなことに、中東系、アラブ系、白人系の学生はこの大学に1人もいない。ここはマイナー大学だから、日本人と、後はアジア人の留学生が僅かにいる程度だ。これが例えば東京大学とかだと、そうもいかなかっただろうがな」
蓬莱教授が、薬完成後の海外リスクを見越していたことは十分に考えられる。
何せノーベル賞学者、それも不老研究に比べれば遥かに実績が小さいとはいえ、ここ数十年で最も偉大な発見と言われるほどの万能細胞の開発者に教わりたいという海外の学生は多いはずだもの。
とはいえ、ここの研究所には驚くほどに外国人が少ない。
一応研究成果の確認のために、薬を飲んでいる外国人の治験者が何人かいるだけだ。
もちろん彼らは上層階には入れない。
「ええ、でも蓬莱さんに教わりたい海外の学生は多いのでは？」
浩介くんも、同じ疑問を持っていたみたいね。
「そりゃあ、潜在的には多いだろうが、特定の教授個人に学ぶためだけにここを選ぶようなリスクを取れるのは、国内の大学までだよ」
「あー、そういうものかあ」
「確かに言われてみればその通りね」
あたしたちも、合点がいった。
「さて、宗教との対決のためには、海外にも多い俺の崇拝者を動かすとしよう」
蓬莱教授は、崇拝者をまるで手駒のように扱っている。
蓬莱教授は、自らへの個人崇拝については、かなり軽蔑している。それは蓬莱教授が宗教を軽蔑しているから。
「富豪として財を成した連中ほど、俺の薬を欲しがるものだ。アメリカには特に、な。そこで、アメリカ人の富豪をそそのかし、宣伝部のアメリカ支部を作ることにする」
以前から海外支部の構想はあったが、ついに具体的に作ることになった。
場合によっては、ＣＩＡに対してもロビー活動を展開させるつもり

らしい。
「はい」
「それについてはこちらで済ませておくから、優子さんと浩介さんはもう帰って問題ない」
「「ありがとうございます」」
蓬莱教授に言われ、あたしたちは、研究室を後にした。
海外メディアは、未だに蓬莱の薬のことについて詳しく報じていない。
公安調査庁が報道機関に依頼し、現地のマスコミと接触した所、「大混乱が予想されるので自主規制して先送りしてしまっている」という。
本来はこういうのを自主規制するのはジャーナリズム上よくないことだが、今回の蓬莱の薬はものがものであるため、特別にということになった。
そのため、現地ではインターネットや一部の富裕層以外、蓬莱の薬については関心がないらしい。
翌日、蓬莱教授はあたしたちに向けて、「１０００歳の薬を出す時には、記者会見を全世界に中継する」と宣言した。
またこの日は、比良さんが「蓬莱の研究棟」を訪れて、β型の遺伝子を提供した。
これで、歩美さんと併せてβ型の遺伝子サンプルが複数になり、研究が格段に進むと思われた。
「ねえ比良さん」
「あら篠原さん、どうしたの？」
遺伝子を提供し終わった比良さんを、あたしが捕まえる。
「今度の会合で、全会員に『遺伝子提供』の機会を与えたいと思います」
「え!?」
あたしの提案に、比良さんが驚いた顔をする。
そう、今までは遺伝子協力は自由意思だった。でも機会がほとんどなくて、今の比良さんみたいに、わざわざ佐和山大学に出向くか、蓬莱教授が来てくれるかしかなかった。

「協会の本部で、遺伝子を提供できる体勢を整えるんです」
「……何故わざわざそれを？」
比良さんはまだ納得足りない様子だった。
「遺伝子提供を積極的にしていけば、蓬莱の薬の完成は早まると思います。蓬莱教授の研究の信用度が低かった以前ならばともかく、今はもう、大分完成が現実味を帯びているでしょう？」
比良さんも、納得したような表情になる。
「そうですね。今度会長たちと相談してみましょう。次の定例会議で、よろしくお願いします」
「お願いします」
あたしたちは次の定例会議で、遺伝子提供のことを話し合うことになった。
この事は蓬莱教授にも連絡し、「俺も参加させてもらおう」ということになった。

「ただいまー」
蓬莱の薬を巡る情勢は、徐々に国際的な様相を見せ始めていた。もちろん、総理大臣を始め日本政府も動き出しているはず。
「優子ちゃん、浩介お帰りなさい。卒業論文は進んでいる？」
お義母さんが、あたしたちをいつも通り迎えてくれる。
この日常だけは、失いたくない。
「うん、でも前期は大雑把に文献集めだけで、まずは卒論以外の単位を取ることに重点を置いているわ」
「俺も同じく」
あたしと浩介くんが、４年生になって始めて卒業論文のことを聞いてくる。
「分かったわ。ご飯は作っておくから、ゆっくり休んでね」
「はーい」
あたしや蓬莱教授、永原先生たちが国際情勢に巻き込まれそうになっている中でも、唯一以前と変わらない安らぎを得られるのが我が家だった。

この家の中では、あたしは「主婦兼大学生」の篠原優子に戻ることができる。
あたしが蓬莱教授を中心にした騒動に大きく巻き込まれれば巻き込まれるほど、浩介くんの存在が大きくなっていく。
夫の支えがあったからこそ、ここまでうまくいっているのよね。
あたしは自分の部屋を目指す。
でも今日はちょっとだけ浩介くんの様子がおかしい。
「どうしたの浩介くん」
「その……優子ちゃんを抱きしめたくなっちゃって」
「もー、浩介くんったら。ちょっと疲れたから、休ませてね」
浩介くん、また体が冷えちゃったのね。
「うんうん」

「ふー」
あたしが荷物を置いて、ベッドに横になると、浩介くんも隣に寝転がってくる。
「優子ちゃん、大変だな」
「うん、大学そのものは楽になったけど、他のことで大忙しになっちゃったわね」
あたしが首を曲げて、浩介くんの方に向き直る。
「だよなー、俺はまだあまり政府との会談に呼ばれねえけど、優子ちゃんや永原先生は頻繁にだろ？」
「ええ」
あたしが呼ばれて、浩介くんが先に変えるということも増え、一時期よりは夫婦でいつもべったりというわけには行かなくなった。
「それに世界情勢次第だもんな。俺も宣伝部として、『不老が神への冒涜なら、ＴＳ病患者はみんな冒涜ってことになる』って日本語や英語で書き込みまくってるけど、どこまで効果あるかは不明だぜ」
浩介くんも、心のどこかで不安は隠せないらしい。
無理もないわね。だってあたしも不安だもの。
「あたしも、正直今より不安な気持ちになったことはないわ」

「だろうな。何せ宗教的な連中を説き伏せるのは至難の技だって言うし」
浩介くんが、ややうんざりした表情で話す。
「そうなると、やはり宗教的な洗脳で上書きするしかないのかもしれないわね」
そう、例えばあるカルト宗教への洗脳を解くために、彼らが使うような洗脳術を使って、「宗教は邪悪」「カルト宗教は絶対悪、今まで洗脳されていた」と、「逆洗脳」の形で上書きをするようなもの。
もちろん、諸刃の剣の行為ではある。
「そうなっちゃうよなあ。ふー、優子ちゃん、大分疲れ取れた？」
こうして話している間にも、あたしの疲労は癒えていく。
「う、うん……」
「まだちょっと疲れてる感じだな。休んでていいよ」
浩介くんは、あくまでもあたしへの気遣いを忘れない。とっても紳士的な男の子だ。
紳士的なはずなんだけど――
べろんっ
「いやあ！」
浩介くんに何の前触れもなくスカートをゆっくりめくりあげられ、あたしが押さえて抵抗する。
幸いめくられたスピードがゆっくりなので、パンツは見えなかった。
「ふふ、抵抗する優子ちゃんやっぱりかわいいや」
浩介くんが満足そうな表情を浮かべる。
「もー、浩介くん、休んでていいんじゃなかったの？」
こんなことされちゃったら別のことしないと疲れがとれなくなっちゃうわよ。
「どうせなら、服を全部脱いで休んだ方が、疲れとれねえか？」
「……もう、えっち」
えっちな浩介くんに幻滅することはない。
何故なら浩介くんの性欲は、全てあたしに向いているから。

「俺がこんなにえっちになるのは、優子ちゃんだけだぞ」
「……分かってるわよ」
あたしが、スカートを押さえていた手を緩めてまた脇に戻す。
「優子ちゃんは、本当に世界一の女の子だよ」
浩介くんの甘く優しい声に、あたしの脳が蕩ける感覚を覚える。
「世界一っかあ、他の女性ならお世辞だと思うけど」
「優子ちゃんレベルにかわいければ、お世辞とは言えねえだろ？」
「うん」
最も、協会の本部に行けば、あたしが本当に世界一かと言われると、ちょっと自信がないけど。
それでもあれだけの美人揃いの中でも、１番はともかく、美人な方だと言って恥ずかしくない程度にはあたしにも自信はあるけどね。
「俺さ、今優子ちゃんに赤ちゃん孕ませたいって思ってる」
「ふえ!?」
浩介くんの突然の真顔での告白に、あたしは驚いてしまう。
「ああいや、実は結婚する前から、ずっとそう思ってたんだ。本当に」
でも、それが男の子だと思う。
浩介くんの気持ちは、痛いほど分かる。だってあたしも同じだから。
結婚する前からそう思っていても、不思議じゃないわね。
「うん、あたしもよ。浩介くんの赤ちゃんが欲しくて堪らなかったわ」
性欲だって、最後に行き着くところはそこになるものね。
「ああでも、やっぱり、もう数年待たねえとな」
それでも、浩介くんはここでも持ち前の責任感の強さを発揮している。
「うん、おばあさん１００歳過ぎても生きそうだものね」
「だな」
おばあさんはもう９０代も後半に差し掛かった９６歳だけど、元気さは相変わらずで、老衰の気配すらない。
あたしたちの所へ帰省する時も、話題と言えば新しい子供のことだけだった。

「隙あり！」
　ガバッ！
「きゃー！」
　スカートがめくれあがり、パンツが外気に触れる感覚を受ける。
　浩介くんに隙を突かれて、パンツを見られてしまった。
「今日はピンクの縞々だね」
　浩介くんにまたパンツの色を言いふらされちゃったわ。
「ふえー、もう。どうして？」
「優子ちゃんのちょっと気が緩んだ隙を突くってのも楽しいぜ」
　浩介くんがあたしのパンツを見る情熱について語る。
「本当にもう、えっちなんだから」
「何とでも言え。優子ちゃんだって本当は楽しみにして毎日パンツを選んでるんだろ？」
　あたしはまた、分かりやすく図星を突かれてしまう。
「……もうっ！　知らない！」
　ぷにっ
「まあそう拗ねるなって、かわいい顔が台無しだぞ」
　あたしがプイッとそっぽを向くと、浩介くんが胸を触ってくる。
「もう、しょうがないわね。愛し合いたいのはあたしもよ」
　あたしもあたしで、浩介くんの手で優しく胸を触られると、脳が蕩けてしまう。
　そしてそのまま、浩介くんにうっとりとした目を向ける。
　そう、浩介くんも分かっているのよね。
「ちゅっ……」
「じゅるる……ちゅっ……ちゅぱっ……」
　また長い夜が、始まった。
「もう、２人とも。ゆっくり休むのはいいけど、ちょっと早すぎない？」
　廊下に出ると、お義母さんが、あたしたちを察するような目で見る。
「あ、うんその……ごめんなさい」

こういうことは、篠原家では今まであまり多くなかった。
夫婦のプライベートな時間は、主に食事とお風呂の後と決まっていたからだ。
「優子ちゃんの声、子供ができた後は考えた方がいいな」
「うー、精進します」
一度、浩介くんが布団を口に被せてくれたこともあったけど、息苦しくなってすぐにやめてしまったこともある。
やっぱり、あれだけぎゅーってやるとああなっちゃうわよね。
「私たちに聞かせるだけならいいけど、子供に聞かせないようにはしないといけないわよね」
うっ、そろそろそのことも考えないといけないわよね。
「うーん……でもどうしたらいいかなあ？」
「あたしとしても、声は我慢できるものじゃないし」
正直、あれを受けて声を出すのを我慢できたら、世界のあらゆる我慢大会で優勝できると思う。
「そこなのよねえー」
結局、今はまだ子供を作る時じゃないので、この問題は棚上げになった。

# 更なる蜜月関係

「それでは、会議を始めます。今日は比良さんと篠原さんからの議題がありますが、その前に各患者の状況を知りたいと思います。まずは篠原さん」

今日は日本性転換症候群協会の定例会議で、インターネット中継つきの最大規模のものだ。

「はい。特に変わったこともなく。男子にモテモテで女子に嫌われるという状況も、徐々に受け入れられるようになっています」

永原先生に指名されたあたしは、患者1名の近況を詳しく伝える。

そう、男の心が強く残っていると、ここで女受けを重視してしまうことがある。

そうすると、生粋の女の子とは違って、やはりアイデンティティが不安定になってしまう事が多い。

「女の子として」、きちんと男とつるめるようにならないと、合格とは言えないのよね。

「良かったわ」

あたしが幸子さんや歩美さんにアドバイスしたように、「女子は男子に好かれるものよ。あれはブスグループの嫉妬だから気にしないでいいわよ」とアドバイスしたお陰で、きちんと軌道修正ができているので、ひとまず安心できるわね。

「では次に、私が面倒を見ている患者さんですが――」

あたしがカウンセラーを勤めていたもう1人の患者さんは、小谷学園に入学したと同時にカウンセラーを永原先生に引き継いでもらった。

もちろん、彼女は3年間永原先生のクラスに入ることが決まっている。

永原先生にとっては、教え子が自分と同じＴＳ病なのはあたしに続いて2人目になる。

永原先生によれば、学校生活は始まったばかりだけど、ＴＳ病を隠さずに公表したこともあって、クラスからは一目置かれているらし

い。
　小谷学園では、未だにあたしは出身有名人らしく、そういう所からも彼女の学校生活は順風満帆になりそうな気配だった。
「クラスメイトがある日突然女の子になったのと、最初から女の子として入学するのでは違うし、そもそも担任の先生が生徒と同じＴＳ病という状況自体が、あたしと永原先生を含めて２例しかないので、判断には慎重を要するわね」
　ＴＳ病は初動が大事になる。なので、初動を終えて安定した後と、初動から対応したのとの違いも考慮しなければいけないわね。
　ちなみに、あたし自身にもカウンセラーは付いていて、書類上は永原先生のままだったりする。ここ数年全くと言っていいほど、ＴＳ病の相談をしていないけど。
「ええ、初動の有無がありますから、あの当時の石山さんの事例をそのまま当てはめるのは難しいと思います」
　とは言え、初めからＴＳ病の女の子を３年間かけて担任として見守るというのは、永原先生にとっても、協会にとっても財産となる。
　ともあれ、新しい患者についての会合は、特に問題なく終わった。
「さて、じゃあ次の議題ね」
　永原先生が口を開く。
　そして、比良さんが立ち上がった。
「はい。篠原さんからの提案なんですが、これからはもっと蓬莱教授と協力するために、協会の本部にも私たちの遺伝子を提供できる環境を整えてはどうかという提案がありました」
　ざわざわ……
　比良さんの提案に対して、周囲もかなりざわついている。
「どういうことや？　うちらも遺伝子提供せにゃならんのか？」
「さすがにそれはないんじゃないかしら？」
「そうはいってもなあ。確かに蓬莱教授は信頼できる人だけど――」
「皆さん落ち着いて下さい」

ざわついた会場を比良さんが一旦ストップさせる。
「それについては、俺から説明しよう」
蓬莱教授が立ち上がる。
「ここの本部に研究員を派遣する。遺伝子の提供の仕方は、皆さんの手元にある箱の中に入っている。優子さん、実演してもらえるかな？」
「は、はい」
突然、あたしに指名が入る。
こんな大勢の前でするのは初めてとは言え、何度もやって来たことなので普通に行おう。
あたしは箱を明け、いつものように綿棒で頬の内側を擦ると、それを協会にある冷蔵庫の中に入れる。
「このように、冷蔵庫の中に入れてくれれば、定期的にうちの研究員が遺伝子を持っていく。だから冷蔵庫に入れればもう大丈夫。たったこれだけで、皆さんも俺の研究に貢献ができるんだ」
蓬莱教授が丁寧に説明してくれる。

「何や、そんなんでええんんか」
「お手軽ね」
「それだけで研究に貢献できるなんて」
「素晴らしいわね」

実験への協力はとても手軽であるということが判明した途端、協会の雰囲気が一気に良くなっていく。
あたしが入ったばかりの頃の雰囲気を思い出すと、時代の変化を如実に感じるわね。
やはり、あたしが小谷学園にいた頃や、佐和山大学に入ったばかりの頃と比べて、協会のメンバーたちの蓬莱教授への信頼感は格段に上がっていた。
蓬莱教授は、何かあたしたちに理解を求めるように積極的に働きかけたわけではない。

結局、実験と結果によって、雑音を消去したのだった。
パンパン
「はいはい、みんな静かにね」
議長の永原先生が、ざわついていた会場を鎮める。
この辺り、秩序がよく取れているわね。
「蓬莱教授の遺伝子提供機会を協会本部にも増やす。異議はありますか？」
「「異議なし!!!」」
不老の少女たちの「異議なし」の声が響き渡る。
蓬莱教授も、そして永原先生も満足そうな表情を浮かべた。
よく見ると、既に頬の内側を擦り付けている会員さんが何人もいた。
サンプル数が多いことはとても重要になる。それはγ型の発見可能性だけではなく、仮になかったとしても、α型とβ型がどれだけの割合で存在するのかを知ることもできる。
最も、今回の会合では本部に提供の機会を与えるだけで、各支部にも提供の機会を設けていかないといけないわね。
「余呉さん」
「はい、どうしました篠原さん？」
あたしは、綿棒を擦り終わった余呉さんに声をかける。
余呉さんは支部長を統括しているので、声をかけるのは永原先生や比良さんよりも余呉さんの方がいい。
「本部だけではなく、各支部にも機会を設けてみてはどうでしょう？」
「うーん、私個人としては賛成ですが」
余呉さんがそう言って、他の支部長の正会員たちに目配せをする。
「ええ私は特に異議はないですよ」
「私も」
「あたしも」
余呉さんの支線に対し、他の支部長さんが一斉に賛意を示す。
それを見た余呉さんもほっとしたような表情をしていた。
「うむ。全国に散らばる各支部にもとなると、回収員を雇った方がい

いな。運送会社はどうも信用ならんからな」
蓬莱教授が早速「取った狸の皮算用」をし始める。
「え？　別に運送会社でもええやねんと思うけど」
会議に参加していた会員の1人が異議を唱える。
「いいや、遺伝子は最も重要な個人情報だ。それに万が一外部に漏れてしまえばライバル会社を作ることになりかねない」
蓬莱教授が警戒心を露にする。
やはり機密の漏洩には最新の注意を払っているみたいだわ。
「うーん、蓬莱はんがそう言うならしゃーないわな」
まあ、協会が負担を被るわけではないものね。
「うむ。さ、今日はこの保冷クーラーの中に入れて、そのまま佐和山大学に持ち帰ることにしよう」
蓬莱教授が、会議の参加者全員分のガーゼを受けとると、全て中のクーラーボックスに入れていく。
「よしよしみんな済まないな」
蓬莱教授が頭を下げつつも、少しだけ嬉しそうな表情をする。
これで間違いなく、研究の速度が上がるはずだわ。
「では、本日はここまでにします。お疲れさまでした」
「「お疲れさまでした」」
永原先生の号令と共に、各自解散となる。
蓬莱教授は、クーラーボックスを持ちながら、協会本部を出ていく。
あれはそう、「今すぐ研究したい」という意思表示だわ。
あたしもあたしで、今日の会議が無事成功したので、気分上場でその場を後にした。

「やっぱり篠原さんって凄いわよね」
「ああ、彼女がここに来てから、協会も、蓬莱教授も、新しい患者さんも、どんどんよくなってきてる」
「うん、今回の遺伝子提供の話、これで私も旦那と死に別れずに済むわね」

帰り道に聞こえてきた他の会員たちの会話でも、今回のあたしの提案の可決で、あたしの評判が更に上がっていったことが分かる。

「ただいまー」

「お、優子ちゃんどうだった!?」

家に帰ると、浩介くんが出迎えてくれた。

いかにも、「早く結果が知りたい」という表情になっている。

「うん、上手くいったわ。これからは遺伝子が大量に提供されるわよ」

「それはよかった」

浩介くんもまた、蓬莱教授と同じように安堵の表情を浮かべていた。

ともあれ、今は蓬莱教授からの結果待ちだ。

「優子さん、ここの記録を整理してくれ」

「はい」

蓬莱教授から渡されてきたデータを並べかえたり、名前をつけたりして整理していく。

研究棟に配属されて、学部生がすることと言えば雑用がほとんどだ。

これが修士博士あるいは大学に残って助教クラスともなってくると、また違ってくるんだとは思うけど。

一方で、浩介くんは雑用をすることもあるけど、実験に立ち寄りつつも宣伝部としての仕事を優先させることが多い。

浩介くんは、宣伝部の中でも今や欠かすことのできない戦力となっていて、大学院以降は研究にシフトさせるために宣伝部には浩介くん分の穴が開くことになり、それが蓬莱教授には悩みの種にもなりつつある。

「よし、これでいいわね。蓬莱教授、出来ました」

「お、もう出来たのか。凄いな」

今回の整理作業は、ファイル名に患者さんの番号と遺伝子型をつけ

るものだった。
　実験協力者のサンプル数そのものは統計学的には少ないけど、それでもα型が明らかに多い。
「ありがとうございます。それで、調べた感じではα型がちょうど７０％という結果になりました」
「やはりα型が多いのか。そしてγ型は発見できず、か」
　蓬莱教授が腕を組んでいる。
　あの場にいたＴＳ病患者だけではなく、各支部からも遺伝子情報が送られてきて、今はあたしや永原先生などを含めて２００人の患者さんのデータがあり、内訳はα型が１４０人、β型が６０人という割合になっている。
「血液型に稀少なタイプがあるように、ＴＳ病にも稀少なタイプがγ型として存在する可能性は否定できないが」
「そもそもＴＳ病自体が、極めて珍しい病気ですから」
「うむ、そこが問題だ」
　あたしの発言に対し、蓬莱教授も深く考え込んでいる。
「今の俺の薬の技術では、もしＴＳ病の遺伝子型で、α型とβ型しか存在しないのならば、７００歳の薬の時点で、既に「不老の薬」として完成しているはずなんだ」
　蓬莱教授は、本格的に手詰まりを感じているようだった。
　そう、理論上では、既に「不老の薬」になるはずなのに、実際にはこの薬を飲んでも、７００歳程度になると老化で死んでしまう。
　まだ実感は湧かないけど、今のままでは、浩介くんも蓬莱教授も、７００年後にはこの世にいないことになる。
「この薬を飲んでも不老とはならずに、老化の進行を遅らせることしか出来ないということは、どこかで見落としているということになる。つまり、α型とβ型の解明が不十分か、またはγ型の存在が示唆されていることになるわけだが――」
　蓬莱教授が腕を組む。
　そしてあたしたちの存在が見えないかのように、深く深く考え始める。

「あの、蓬莱教授、もうすぐ講義の時間なので、行ってもいいですか？」
数分後、あたしは待てなくなって声をかける。
「――あーすまない、優子さん、ありがとう。後で色々試してみるよ」
「失礼します」
研究所に蓬莱教授を置いていき、あたしは浩介くんと合流してから講義に向かう。
あたしは、蓬莱教授とも信仰が深い河毛教授の面白そうな解析数学の科目を、選択科目として履修した。
河毛教授は講義の冒頭で「難しい」と言っていたけど、その言葉通りだったわね。
そして講義が終わったら、また蓬莱の研究棟に戻り、雑用をする。
「そうだ優子さん。悪いんだが、この前の遺伝子回収作業、協会本部の分は優子さんが担当してくれるか？」
研究棟での作業を全て終えると、蓬莱教授が声をかけてきた。
「え？　あ、はい。ですが、クーラーボックスは重くないですか？」
あたしの身体能力のなさは相変わらずで、その中でも上半身の力、例えば重いものを持つのは特に苦手だったりするのよね。
「あー、あの時のよりは軽いものを用意しておくよ。ほら、あの時は参加者が一斉に提供していたからね」
「……分かりました」
ふう、どうやらある程度の配慮があるみたいでよかったわ。
ともあれ、今日はもう後は家でゆっくり休むだけになるわね。

「優子ちゃん、反蓬莱連合だけど」
「うん」
家に帰って夕食とお風呂が終わって寝る前の時間、浩介くんが国際反蓬莱連合について新しい情報をあたしに持ち込んできた。
「公安調査庁によれば、俺達のロビー活動もあって、ローマ教皇庁は蓬莱の薬に関する諸問題については静観を約束してくれた。どうやら彼らは『不老社会に対応した宗教体制の構築』を目指すらしいんだ」
「それはよかったわ」

浩介くんによれば、公安調査庁のエージェントは、ローマ教皇に対して「あの団体の牧師は日本のプロテスタントからも鼻つまみものとして有名だ」と、いわゆる「人格攻撃」に終始したらしい。
確かに嘘は言ってないんだけれども、プロパガンダの相手が蓬莱教授だったら絶対に伝わらないやり方だと思う。
嘆かわしいことだけれども、この手の感情的な人格攻撃は、理知的で理論的な攻撃よりも有効で、それが「聖職者中の聖職者」と言っていいだろうローマ教皇でも例外ではないらしいわね。
「イスラム系に関しても、『怪しいニセキリスト教の牧師が言っていることだから信用しないように』と釘を指して見たら、感触は悪くなかったらしい」
「変わり身が早いわね」
どうやら、大きな宗教団体も、蓬莱教授の薬が現実味を帯びてくると、途端に日和見を決めるようになったらしいわね。
ローマ教皇庁なんて、最初の１２０歳の会見の時は避難声明まで出していたのに。
おそらく、こういうところがあるからこそ、これらの団体は長生きできたんだとは思うけどね。
いずれにしても、蓬莱教授が協力な無神論者かつ無宗教者であることは、障害ではなくなりつつあるのは、喜ばしいことだった。
「まあそもそも、あの薬は水を飲むだけのお手軽仕様だからな」
「うん」
とは言え、小さな宗教団体は、大きな問題になる。
そうした団体は、得てしてカルト化しやすい。例の牧師も、他の教会との交流を疎かにして、殻の中に閉じ籠ったことが、今回の問題を引き起こしたと、佐和山大学で宗教学を教えている講師は話していた。
「とはいえ、追い詰められた連中は何をするか分かったもんじゃねえ。これからだなあ問題は」
「うん、テロ組織に発展しなければいいけど」
母体が小さな団体でも、カルト化すれば一気に大きくなることは

往々にしてある。
世間を騒がせた宗教集団だって、最初は町の小さな道場で、宗教色でさえ希薄だったらしい。
毒ガスがばらまかれた事件だって、２７年前の事と考えれば、それ以前の宗教色が薄かった時代というのは、あたしたちが生まれるよりも遥か昔のこと。
だからこれらは、もちろん両親や永原先生の言伝てだけど、それでもとんでもないことだと言うのは分かる。
「そこだよなあ……」
日本は幸いにして、テロとは無縁の社会を築いている。
それは、もちろんある程度の監視社会的な側面こそあるものの、もしかしたら、追い詰めすぎてしまうと、蓬莱教授を狙ったテロに発展する可能性も考慮しなければならない。
瀬田助教への引き継ぎ体制は当然整ってはいるが、蓬莱教授という頭脳は誰でも変えることはできない。いずれにしても、テロを避ける方法を考えねばならないわね。

# 夏の夫婦旅行1日目　最後の夏休み

蓬莱の研究棟での生活は、あたしをますます充実したものにさせていった。

夏休み中もあたしは暇だと思ったら研究棟へと足を運ぶことにした。

とにかく知見を広めて、蓬莱教授の研究に少しでも貢献したい一心で、浩介くんもついていってくれた。

一方で、反蓬莱連合は地下に潜り始めた。

「公安調査庁の報告によりますと、反蓬莱連合は活動対象を途上国にし始めたらしいです」

「うーむ、よくない傾向だなあ……」

官房副長官の報告に対して、蓬莱教授が腕を組んで唸っている。

途上国の人間は、ただでさえ先進国との格差によって、先進諸国に対していい感情を持っていない。

彼らを扇動されれば、国の数という意味で、国連総会で不利になる危険性があった。

「そうねえ」

もちろん、蓬莱の薬の持つ効力を考えれば、大真面目な話国連脱退でさえ選択肢に入っている。

永原先生も蓬莱教授も、そして政府側も、蓬莱の薬さえ完成していれば、仮にそうなったとしても日本が勝つと考えているし、それは間違いないと思う。

とは言え、それも最後の手段になる。

一方で蓬莱教授は、公安調査庁への援護射撃が、宣伝部では出来ないことを、申し訳なさそうにしていた。

「我々も、蓬莱教授には頼りすぎない方向で行きます。政権は選挙結果で変わるものですから」

「ああそれがいいな」

それについてはまあ、仕方ないという感じだったが、「国に頼りすぎない」という蓬莱教授の理想は達成できなかった。

蓬莱教授は、政権交代時のリスクを考えている。
このまま与党による長期政権が続いたとしても、総理大臣は変わるもの。そうなった時には、リスクがある。
「もう十何年も前の話だが、『2位じゃダメなんですか？』と言った政治家がいただろ？　全く、俺だったらその場で『ダメに決まってるだろ引っ込んでろボケ女』と言っていただろうが……とにかく政府への依存は最小限にした方が、帰って連携が取りやすいってものだ」
あたしにとっては、子供の頃の話なのでよく分からない。
ただ、「2位ではダメ」なことは、大学生のあたしでも分かる。
「ええ。私としても、総理としても、それには異論がないでしょう」
官房副長官も、蓬莱教授に賛同する。
お互い持ちつ持たれつの方が、良好な関係になる。
そのためにも、何とか蓬莱教授は自前の宣伝部で出来ることを探している。
蓬莱教授がアメリカに作った宣伝部も、少人数ながら始動し始めていて、蓬莱教授を支持する現地の大手インターネット企業のＣＥＯたちの出資もあって、既に工作活動が始まっている。
また公安調査庁も、この件についてＣＩＡをどのようにして味方につけるかを考え始めている。

さて、そんな中で、他の大学生以上に多忙な日々を送っているあたしたちにも休息は必要になる。
「優子ちゃん、準備できたか？」
「うん、大丈夫よ」
小中高の夏休みが終わる9月の平凡な平日に、あたしたちも大学生活最後ということで、修学旅行代わりの旅行を、2泊3日で計画していた。
これまでの家族旅行も、殆どが義両親も同伴してのもので、2人きりの旅行というのは意外と少ない。
夫婦水入らずで、これだけ長く過ごせるのは、もしかしたら新婚旅行の時以来かもしれないわね。

「で、今回の旅程も永原先生に作ってもらったのね」
「まあ、そう言うなって」
今回の旅行のターゲットは富山県になる。
永原先生が「とにかく凄いので絶対に行っておいた方がいい」というので、「立山黒部アルペンルート」を選択した。
まず列車で富山県に入るのが1日目、1日目には富山県の路面電車も体験するらしい。
次に宇奈月温泉と「黒部峡谷鉄道線」をめぐるのが2日目。
そして3日目は朝一番に富山駅を出て、立山黒部アルペンルートを一気に横断し、信濃大町からそのまま帰るというものだった。
あたしとしては3日目はかなりの強行軍だと思うけど、永原先生曰く、「アルペンルートは強行軍だからこそ分かる魅力があるのよ。長野側から行くよりも、富山側からの方が個人的には好きだわ」と言っていた。
更に、その前日に「黒部峡谷鉄道線」に乗ると、更にいいらしい。
「じゃあ、行ってくるわね」
「気を付けてねー」
「帰ったら土産話聞かせてくれよ!」
玄関で義両親に見送られ、あたしたちは駅へと進む。
まずは、大宮駅まで行き、そこから富山駅までは「かがやき」のグランクラスが用意されている。
これもいつもの蓬莱教授の散財要請によるものだ。

「グランクラスは――」
「グランクラスか。若いのにこんなに乗ってて大丈夫なのかな?」
大宮駅で新幹線を待っていると、浩介くんが申し訳なさそうな表情でぼそりとつぶやいた。
「気にしなくてもいいんじゃないの? 蓬莱教授が『予算使いきれないからお金使ってくれ』って言ってるのよ」
あたしは浩介くんを安心させるように言う。
「まあ、そうだよな」

確かに、今のあたしたちは蓬莱教授からの支援金の他にも、協会の、それもあたし個人に対する寄付金まで集まり始めている。
以前からあたし個人に対する寄付金の声はあったけど、あたし自身の遠慮もあって全て改めて協会に寄付していたが、協会側も「だぼついてきた」とのことで、実は今のあたしはちょっとだけ金持ち大学生になっている。
ちなみに、協会の正会員の会費も永原先生が建て替えてくれた分は全部返済してあるし、それどころか蓬莱教授の支援金を使って２０年分、つまり３６万円を前金で払っている。
最も、インフレで会費が値上がりしたら、その時は支払うことにもなっているけどね。
「それに、金持ちが金使わないでどうするのよ？」
「んー、そういうものか」
「ええそうよ」
最近はようやく変わってきたけど、数年前までは大企業や富裕層が金使わないとして大きな問題になっていたし。
最近では高級志向に対する抵抗感はすっかり薄れてきたものね。
「間もなく、かがやき号金沢行きが参ります、当駅を出ますと停車駅は長野、富山、終点金沢の順に止まって参ります」
北陸新幹線は、来年敦賀駅まで延伸する予定で、その先のルートも既に決まっていて、あたしたちにとっても開業は楽しみの種になっている。
北陸新幹線が大阪に来るようになれば、大阪と北陸の結び付きが強くなると期待されている。
元々、北陸は首都圏よりも京阪神の勢力が強い地域で、現在は在来線特急との接続列車の「つるぎ」がその任を担っている。
新幹線の青い電車がゆっくりと入線してくる。
「このタイプのグランクラスは２回目だな」
「うん、懐かしいわね。あの時は確か、シートだけだったんだっけ？」
そう、この電車にはあたしたちにとって思い出がある。
「だったなあ……」

浩介くんも、5年前を懐かしく語る。
小谷学園での林間学校は、今思えば人生の大きな転換点だったわね。
あの時の浩介くんは、とっても素敵で、あたしがナンパされた時――
「どうしたの優子ちゃん？　顔が真っ赤だよ」
浩介くんが、あたしの顔を覗き込んでくる。
「ああうん、その……浩介くんとの思い出を思い出しちゃって」
「あーうん、その――」
「間もなく発車します。次は長野です」
あたしたちの会話が聞こえない車掌さんが、空気を読まない放送をする。
そして扉が閉まる音と共に、電車が静かに動き出した。
「でさ、俺実をいうと、ね」
「うん」
浩介くんが気を取り直して話しかけてくる。
平日昼のグランクラスのお客さんは、後方のあたしたちの他には、最前列で音楽を聴きながら寝ているサラリーマンだけだった。
「2日目のさ、山登りの時、優子ちゃんをおんぶしたじゃん」
「あったわね」
あの時は、登山からすぐにへばってしまって、あたしだけリタイアになってしまいかねなかった。
でもそれでは仲間はずれでかわいそうだと、浩介くんがあたしを山頂までおんぶしてくれた。
今でもあたしが思い出す、理想のヒーロー像だった。
本当に少女漫画みたいな展開だったと思う。
「そのさ、ずっと大きくなっちゃってて……帰ったらすぐに風呂場のトイレ中でさ」
浩介くんが恥ずかしそうにあの時のエピソードを話してくれる。
「ふふ、嬉しいわ」
「え!?」

あたしの余裕の発言に、浩介くんの顔が驚きに変わる。
「あたしで興奮してくれたんでしょ？」
結婚後はあたしと同居しているけど、それ以前は禁欲もあったものね。
「でもほら、あの時の優子ちゃんはまだ――」
「うん、確かに、はっきりと恋に落ちたのはナンパの時よ。でも、あの時のあたしだって、男心は分かるわよ」
永原先生や比良さん、余呉さんがそうであるように、どれだけ月日が経とうともあたしの男としての１６年が記憶から消える訳ではないもの。
「ああうん。そうだったな」
浩介くんの５年越しの秘密の告白も、何て言うことはない内容だった。
あたしたちは、車掌さんの放送を聞き流しつつ、林間学校の話を続ける。
「ここで、永原先生が秘密を話してくれたんだよな」
「そうね」
今でも、永原先生はあの時の初恋の秘密を、あたしたち以外には打ち明けられていない。
部分的に、蓬莱教授が独自に秘密を導きだしただけになっている。
「あの秘密、いつか打ち明けられる日が来るのかな？」
浩介くんも、永原先生に残った「しこり」を気にしている様子だった。
「そうね。これとばかりは永原先生次第よ」
吉良殿のことにしても、さくらちゃんや他の人に、秘密が共有されたからこそ、あたしは永原先生を救うことができた。
でも、真田家のことはともかく、初恋のことや、あるいは戦時中に昭和天皇を裏切ったと思っている事件は、ほとんど知る人がいない。
これではヒントを得るのも難しく、解決の糸口がつかめないわ。
「だなあ」
浩介くんも同意見だった。

「でも、その秘密だって、もし優子ちゃんがあの時恋に落ちてなかったら」
「ずっと永原先生の中だけで封印されていたのよね」
永原先生は、江戸城で記した自身の日記にも、あの事を匂わす記述をしていないらしいし。
よっぽど秘密にしておきたかったというのが分かるわね。
「だよなあ、本当に、今の世の中は薄氷を踏むようなもんだよな」
「うん」
考えてみれば、浩介くんだって、責任感の強い性格じゃなかったら、あの後あたしを許せたのだろうかと思うことがある。
それでも、時間は元に戻ることはなくて、あたしたちは前に進んでいくしかない。
「ＴＳ病になると、正しい道は一本しかないんだよな」
「そういうこと。もしあたしがちゃんと女の子になれなければ、浩介くんはあたしと結婚できなかったし、蓬莱の薬だって、開発がもっと遅れていたわ」
それどころか、永原先生たちの持っていた不信感を払拭することでさえ、遅れていたかもしれないもの。

新幹線は熊谷駅から徐々に田畑の多い場所を通過していく。
この辺りは、上越新幹線とも合わせて何度か通った場所になる。
「ゆったりとしているな」
「うん」
またあたしはふと考える。
結婚だって、両親はもっと早くさせようとしていたけど、もしかしたら高校在学中に結婚していたら？
多分大差はないと思うけど、もしかしたら妊娠を急かす双方の両親やおばあさんの圧力に耐えられなかったかもしれない。
そしたら、また蓬莱教授の研究も遅れていたかもしれない。
「ま、人生何が起こるか分からねえよな」
「そうよね」

これから行く「立山黒部アルペンルート」だって、様々な交通機関が用意されているという。
その雄大な景色はどれも素晴らしいというのが永原先生の話だった。
また少し大きな駅を通過する。
前面のテロップには、「ただいま、高崎駅付近を通過中です」と書かれていた。
「高崎かあ」
「しばらくすると、あの駅よね」
「ああ」
永原先生の出身地は、現在上田市の一部となっていて、町の中心に上田駅がある。
この電車は北陸方面への最速達列車なので上田駅には止まらない。
「やっぱ遅くなるよな」
あの時も感じたけど、高崎駅の向こう側のトンネル内の区間は結構ゆっくりで、それでいて次の駅に到着するまでは早い。
そして電車はあっという間に安中榛名駅を通過してしまう。
「うん」
「永原先生によれば、ここは『碓氷峠』っていう難所だったらしい。今はないけど、在来線時代はここはＪＲの在来線で最急勾配だったんだってさ。その急勾配から、専用の補助機関車を要しんだたって」
浩介くんが、またメモ帳を出しながら話す。
というよりも、どうして永原先生は毎回毎回律儀にこんなことまでしてくれるのかしら？
「凄まじいわね」
「その維持費の高さから、廃線になって、横川駅と軽井沢駅の間は、今はバスで結ばれているそうだ」
いずれにしても、人里離れた難所だというのは分かるわ。
「ふむふむ」
安中榛名駅から軽井沢駅も、新幹線としてはかなりの急カーブや急勾配が続くため、こうして速度が落とされる。

「飲み物でも飲むか」
「うん」
浩介くんが代表し、アテンダントさんの呼び出しボタンを押す。
浩介くんが麦茶、あたしがリンゴジュースを頼んだ。

「優子ちゃん」
「うん？」
飲み終わった浩介くんがあたしに話しかけてくる。
「アテンダントが来た時、優子ちゃん胸張ってたよね」
「え!? そう!?」
浩介くんが少し笑いながらニッコリと指摘する。
正直、全く気付かなかったわ。
「うんうん、『どうだっ』って感じでさ」
「あはは、そりゃあまあ、胸が大きくて不便なことも多いもの。こういう時くらい、ね」
肩もこるし、運動神経が悪いのも、あたしのこの胸が大きく関わっていることは間違いないもの。
だけど、男性受けは抜群だし、浩介くんも巨乳好きなので、もちろんあたしにとって巨乳は全くコンプレックスに思っていない。
というか、あたし並みに大きい人、未だに見たことないわ。
「まあ、そんな自信家の優子ちゃんは好きだけどね」
浩介くんも、あたしを妻にしてから、相当な自信がついていると思う。
「ふふ、ありがとう」
グランクラスの椅子は、相変わらずゆったりとしていて座りやすい。
「でさ、優子ちゃんは――」
浩介くんと雑談を楽しんでいると、電車が上田駅を通過した。
前回はここから乗ってきたもので、ここから先が未知の領域になる。

「永原先生の故郷かあ……」
「考えてみれば、俺たちにとっても原点だよなあ」
「うん」
もし永原先生が生きてなければ、あたしはクラスでどう過ごしていただろう？
その事は、以前にも考えたことがある。
「真田家ってのも、すごい一族だったよな」
「うん、あのときに立ち寄れなかった記念館、行きたいわね」
「ああ」
永原先生と一緒に故郷に行った時には、真田家を記念した石碑のある公園と、永原先生も自宅があったと推定される場所、そして、永原先生がかつて男だった時に登城していた真田本城の跡地を訪問しただけだった。
途中、真田家所縁の品を納めた記念館を通ったけど、時間の都合で通り過ぎるだけだった。
そこには恐らく、真田家3代だけではなく、江戸時代の真田家の品も納められているに違いないわね。
「にしても、江戸時代の真田家はやりにくかっただろうなあ」
浩介くんが苦々しい顔で言う。
「そうね。自分の先祖を知っているような人が江戸城にいるわけだもの」
大名家は参勤交代として領国と江戸とを頻繁に往復し、江戸に参勤した場合は江戸城で将軍に謁見することになっている。
永原先生は、身分としては徳川家の直臣で武士の身分という立場ながら、足軽の生まれということで領地は持っていない。
当時の永原先生は、悪い言い方をすれば「穀潰し」なわけだけど、戦国時代を知る日本唯一の人物として、歴代の将軍や老中、大名から意見を求められたり、関ヶ原の戦いを目撃したことからも、自分の先祖が関ヶ原に参加していたという大名を中心に、戦話をせがまれたりしたことは想像に難くない。
真田家は、徳川家綱に武士に取り立てられる前の主君と言ってもよ

く、お互いに気を使ったことは確かだし、真田家が気を遣ったからこそ、永原先生は真田家への再士官は叶わなかったのよね。

# 夏の夫婦旅行1日目　新たな戦略を秘めいざ富山へ

「間もなく、長野です――」
電車はやがて減速を始め、それと共に長野駅に到着する放送が聞こえてきた。
大宮から最初の停車駅で、次はもう目的地の富山駅になる。
「長野からのお乗りかえ列車ご案内いたします。この先飯山、上越妙高、糸魚川の順に、終点金沢まで各駅に止まりますはくたか――」
自動放送が終わると車掌さんの乗り換え案内が始まる。
今乗っている「かがやき」は、いわゆる速達列車で、逆に車掌さんの放送にあったように、「はくたか」が、長野から先にほぼ各駅停車になるタイプで、高崎から長野までの停車駅はまちまちになっている。
そしてあたしたちが以前乗ったあさまが、長野駅までの区間運転で、こちらは比較的近距離とあって停車駅は多めになっている。
ふと見ると、あたしたち以外のグランクラスの乗客だったサラリーマンは、この長野駅で降りるらしい。
ドアが開くと、列車の乗降があるみたいだけど、窓の外を見る限り、長野駅で降りるお客さんが多い。
「ふう、どうやら、グランクラスに新しい客はいねえみたいだぜ」
ここに入ってくるお客さんの姿はいない。
つまり、この場はあたしと浩介くんが独占することになる。
次の停車駅は富山駅なので、あたしたちは終点までここを独占できることになる。
「貸し切りということね」
まあ、9月の平日、あたしたち大学生は夏休みとはいえ、世間一般にはいわゆる「閑散期」に該当するわけだから、これも当然なのかもしれないわね。
ましてや、大学生で新幹線のグランクラスっていうのは、あたしたちみたいによっぽどお金が余っているか、鉄道好き位だと思うし。
「かがやき金沢行き間もなく発車いたします。ご乗車のままでお待ちください」

さっきまでとは違う声の車掌さんの放送と共に電車のドアが閉まり、再び放送が流れる。
「えー皆様、長野駅より乗務員交代いたしました。ここから先終点金沢までの運転士は――」
「こういうのは普通会社境界の駅とか運輸区ごとに乗務員を交代するんだ。北陸新幹線の会社境界は上越妙高駅だけれども、かがやきはこの駅に停車しないので、長野駅で乗務員を交代するらしいな」
永原先生のメモを握っている浩介くんがまた解説してくれる。
「長距離を運転するなら、乗務員の交代が必要よね」
「ああ、在来線の夜行列車なら、『運転停車』として、時刻表上では通過駅にしている駅に停車して、そこで乗務員を交代することもあるらしい。他にもほら、特急こだまが運転中に乗務員交代の荒業をしていたな」
「うん、そういえばそうだったわね」
確か鉄道博物館でそんな話をしていたわね。
浩介くんによれば、他にも北海道新幹線ができる前にも、東日本と北海道における境界駅が小さな無人駅になっていたために、手前の特急停車駅で乗務員を交代していたらしい。
電車は、ますます山の中を進んでいく。
とにかく新幹線というのはトンネルが多い。
新幹線はここから、進路を北から西に変えることになる。
「ねえ浩介くん」
「ああ」
そんな時、上越妙高駅をあたしたちは、奇妙な発見をする。
それは新幹線の前方に流れている「ニュース」だった。
そこには、「国際反蓬莱連合、国際スポーツ仲裁裁判所に、蓬莱の薬を禁止薬物に指定するように要請」とあった。
「恵美ちゃん、大丈夫かしら？」
あたしがまず不安に思ったのは既に蓬莱の薬を飲んでいる恵美ちゃんのことだった。
蓬莱の薬は、中に不老遺伝子細胞と、それを全身に転移させるため

の触媒が入っているが、味などを含め殆ど水と変わらない。
蓬莱教授自身が実験しているように、従来のドーピング検査には絶対に引っ掛からないし、そもそも「選手の健康」という観点からドーピングを禁止する理念を鑑みれば、むしろ蓬莱の薬は、これまであらゆる選手が直面してきた「老化による年齢的な衰え」という事態を防いでくれるのだから、むしろ推奨されるべき事柄だ。
まあそもそも、仮に禁止薬物になったとしても、蓬莱教授が絶対に協力はしないとは思うが、ともあれ、この事は――
ブー！　ブー！　ブー！
マナーモードにしていたあたしと浩介くんの携帯とスマホがほぼ同時に振動する。
送り主は予想通り、蓬莱教授だった。

題名：スポーツ仲裁裁判所について
本文：反蓬莱連合が動いた。奴ら、搦め手にと今度はスポーツ介に介入してきた。俺たちも宣伝部を使い、世論に訴えていく。今のところは立て込んでいないから、優子さんたちはゆっくり休暇を楽しんでくれ。

「浩介くん」
「ああ、蓬莱教授からだろ？」
浩介くんも、少しだけ慌ただしい表情をする。
「うん、でも立て込んではいないって」
「まあそうだろうな。ともあれ、アメリカ支部の宣伝部が重要になってくるだろうな」
浩介くんの推測には、あたしも同意見ね。
とにかく、相手は国際組織。
あたしも一応、大学で単位取るレベルには英語ができるけど、スラングなどを織り混ぜたネイティブのような理解が出来るわけではない。
そうなれば、蓬莱教授に心酔しているアメリカ人を使う方が利口

だ。
「ええ」
それに、あたしたちもそろそろ、研究の現場での活躍が重視され始めている。
特にあたしの才能については、あたし自身は自覚がないけど蓬莱教授がかなり買ってくれている。
浩介くんも浩介くんで、現在している宣伝部の活動を別の人に引き継ぐということを、そろそろ考えないといけないわね。
あたしがしている蓬莱教授と協会とのバランス調整は、残念ながら代わりはいないと思うけど。
ブー！　ブー！　ブー！
「あっ！」
またあたしの携帯が震えた。
あたしは慌ててもう一度携帯を取り出す。
「優子ちゃんまた？　俺は特にないけど」
今度は浩介くんの携帯は震えていないので、メールが届いたのはあたしだけだった。
そして送り主は予想通り、永原先生からだった。
「優子ちゃん、またメール？」
浩介くんが重ねて聞いてくる。
「うん、永原先生からみたいだわ」
あたしはもう一度画面に目をやる。
「それで、何て？」
「ちょっと待って」
まだ本文を読んでいないので、あたしは浩介くんを制止する。

題名：スポーツ仲裁裁判所提訴事件
本文：篠原さん、既に新幹線のニュースで聞いているかもしれないけど、国際反蓬莱連合が蓬莱の薬の服用をドーピングだとして国際スポーツ仲裁裁判所に提訴したわ。
今回は教会も積極的に動くわよ。

協会としては、提訴そのものに断固として抗議するわ。
もしこれが通れば、ＴＳ病患者は存在そのものがドーピングということになって、国際大会から町の小さな大会までにあらゆるスポーツの場から締め出されることになるわ。
裁判所が蓬莱の薬がドーピングだという判決を出したら、これは私たちにとって重大な人権侵害になるから、絶対に通してはいけない懸案よ。

永原先生の文面からは、強い意向が伝わってくる。
そう、蓬莱の薬がドーピングではない最大の理由がこれだ。
もし不老になることが不正ならば、ＴＳ病になることそのものも不正ということになる。
しかし、この病気は後天的に、しかも本人の意思に関係なく発病するものだ。
あたしたちにとって、性別が変わることと老化しなくなることは、表裏一体にある。
病名こそ性転換のことしか書いていないけれど、それでも性転換と不老は切っても切れない関係にあると、あたしたちは考えている。
そう、これは蓬莱教授サイドよりも、あたしたち協会サイドの方が真剣に考えなければいけない問題だわ。
ならば、解決の糸口は見えるわね。
「優子ちゃん、どう？」
「ふふ、どうやら国際反蓬莱連合は墓穴を掘ったわね」
あたしの顔から自然と笑みが浮かぶ。
「どうしたんだい？　そんなにやけついて」
浩介くんがやや不審そうにあたしを見つめてくる。
ふと車窓を見てみると、既に日本海の近くに達して、「糸魚川駅を通過中」となっていた。
「あーうん、この問題は、あたしたちにとってこそ、大きな問題というわけよ」
「つまりどういうことだ？」

浩介くんはまだ要領をつかめない様子でいる。
「あたしたちは、例えるなら発病した時に性別が変わると同時に完璧な蓬莱の薬を服用しているようなものなのよ。もし、スポーツ仲裁裁判所が『蓬莱の薬はドーピング』だと判断したら、あたしたちは存在そのものがドーピングになってしまうわ」
以前の同窓会で、蓬莱教授が恵美ちゃんにしてくれた説明と同じ内容を、あたしは繰り返す。
「それは分かってる。でもよ、もし連中が留保条件をつけてきたらどうするんだ？　例えば、『ＴＳ病は本人の意思に関係なく発病するから、その場合は特例として認める』とか言ってきたら？」
浩介くんが、鋭く疑問点をついてくる。
もちろん、それに対するあたしの回答も用意してある。
「もし仮に『ＴＳ病患者は例外』というルールを判決に追加したとしても、あたしたちは整合性を求めて徹底的にロビー活動をするわ。もしそれもうまくいかないとしても、『ＴＳ病患者は蓬莱の薬を飲めないスポーツ選手と結婚することが難しくなる』と訴えればいいし、あるいは蓬莱教授と同じように『蓬莱の薬が飲めないとなれば、スポーツ選手になりたがる人なんていなくなる』と訴えてもいいわね」
そう、蓬莱の薬は「ＴＳ病患者にとっての真の生涯の伴侶を確保するため」というのが、建前上の製作動機になっていて、それ以外の作用は「副作用」「外部効果」のような扱いになっている。
外部効果ながらも、蓬莱の薬を一般にも広めれば、より良い社会になるということになっている。
また、ＴＳ病患者の夫だけに蓬莱の薬を飲む資格を得られるとすれば、希少種であるＴＳ病患者を奪い合うことになって悲惨なことになるリスクがあるということも想定に入っている。
「うーん、さすがは優子ちゃん。ちゃんと想定してるんだな」
「えへへ」
浩介くんがあたしを感心したように誉めてくれて、あたしもちょっと照れてしまう。
ともあれ、あたしたちの方で作戦は決まったので、永原先生には、も

し通ってしまった時の挽回策の案をメールで送っておいた。
あたしたちはひと悶着あったけど旅行に戻ることができた。
「ねえ優子ちゃん、軽食にしねえか？」
一段落すると、浩介くんが軽食を提案してきた。
「うん、いいわね」
メニューを決め終わり、浩介くんがアテンダントの呼び出しボタンを押して、軽食を頼む。
こちらも、あらかじめ作り置きしていたものらしく、すぐに食事が出てきた。
「うまそうだな」
浩介くんが弁当箱の中身を見て感激するように言う。
「うん」
グランクラスの軽食でも、あたしにとってはそれなりにお腹が膨れるもので、更に地域の名産品ということもあって鮮度も高い。
車窓を見ながらテーブルを広げて優雅におやつの軽食を食べていると、電車は「黒部宇奈月温泉駅」を通過していった。
「いかにもな駅名だよな」
「うんうん」
そもそも、新幹線の駅名は、最近この手のが多い。
例えば、北海道新幹線の「新函館北斗駅」も当初は単に「新函館」とする予定だったと聞いたことがある。
宇奈月温泉は確かに一般人のあたしでも知ってる程度には有名だけど、それにしたって長すぎるわよね。
「でもよ、俺たちが行く『立山黒部アルペンルート』、これも長いよな」
「でも、それ以上短縮できなくないかしら？」
立山から黒部を通る山岳地帯のルートという意味で、こちらはこれ以上短縮しようがない。
あるいは単に「アルペンルート」と言うのが限界かもしれない。
「あーそうだな」
浩介くんと、どうでもいい話で貸しきりグランクラスの中が盛り上

がっていく。
　あたしがちょうど食べ終わり、ゴミ箱に弁当箱をそれぞれ捨て終わる頃には、電車は減速を始め、「まもなく、富山です」の放送が流れていた。
「富山と言えば、コンパクトシティらしいな」
「うん、ライトレールだっけ？」
　今日はこれから、「富山ライトレール富山港線」という路面電車に乗ることになっている。
　この「ライトレール」というのは、別名「ＬＲＴ」と呼ばれていて、２年前に新潟を家族で旅行した時の「名前負けＢＲＴ」が伏線になっている。
　ちなみに、こちらのＬＲＴは全く名前負けしていないらしい。
　富山のコンパクトシティーの一環としてこの「ライトレール」が活躍しているそうだ。
「さ、降りようぜ」
「うん」
　あたしたちは、２人きりのこの車内で荷物を整える。
　ガバッ！　ぐいっ！　ずーり！
「きゃあ！　こらっ！」
　浩介くんにガバッとお尻を掴まれて、そのままぐいぐいと深く円をなぞるように撫でられる。
　今までの撫でられ方でも、一番手を感じる撫でられ方だわ。
「ごめんごめん、優子ちゃんのお尻を凝視してたらつい手が出ちゃって」
　浩介くんが、あんまり反省してないような表情で話す。
　いくら貸し切り車内だからって本当に油断も隙もないわね。
「もうっ、エロオヤジみたいな触り方して。他の女性には絶対にしないでね！」
「分かってるって、一旦優子ちゃんの触り心地を覚えたら、他の女なんか触る気にもなれねえぜ」
「もー」

本当に浩介くんはあたしのコントロールがうまいんだから。
まあそれが浩介くんのいい所でもあるんだけどね。
「――本日は北陸新幹線をご利用いただきまして誠にありがとうございます。まもなく富山です。富山の次は終点金沢です」
やり取りと降りる準備が終わる頃には、電車は完全に駅構内に近づいていて、かなり減速していた。
「さ、降りようぜ」
「うん」
浩介くんに促され、あたしも扉へと向かう。
グリーン車のお客さんと思われる人が数名、扉の前に立って待っていた。
あたしたちも彼らに続いて、富山の地に降り立った。

# 夏の夫婦旅行1日目　遺産を活用して

「ふう、結構暑いな」
浩介くんが開口一番、そんなことを言う。
9月とは言え、まだまだ残暑厳しい所がある。
これから山岳地帯に行くということで、今日は普通の服だけど、明日以降はそれ相応の服装をして行くことになっている。
「関東ほどじゃないけど、まだまだ残暑よね」
とはいえ、富山駅は町中にあるため、ここには山のような寒さはない。
今日は早めの宿ということになっているため、これからの予定は「富山ライトレール富山港線」に乗って宿泊ということになる。
「えっと、ライトレールはっと」
「こっちか」
浩介くんが駅の案内図を見ながら進む。
首都圏の大きな駅はあまりにも複雑で案内表示を見ても分からないことがあるけど、地方の駅は大きな駅でもそこまでの複雑さは持っていない。
富山ライトレールは「富山駅停留場」と言うくらいなので、駅構内の案内を見ていけば自ずと目的地が見えてくる。
「よし、ここだ」
浩介くんが、乗り場に案内してくれる。
そこはいかにも近代的な感じの乗り場だった。
今はちょうど、次の電車の入線を待つ時間になっている。
そして、線路の向こう側を見ると、どうやら路面電車になっているらしい。
「永原先生によれば、ここは元々『富山港線』っていう旧国鉄とＪＲが運営していたローカル線だったらしいんだ」
浩介くんがまたメモ帳を読みながら話す。
「富山港線？　でも何で路面電車が？」
聞き慣れない名前だけど、国鉄が路面電車なんて運営していたのか

しら？
　そんな感じじゃないのに。
「あーいや、最初から路面電車じゃなかったんだよここは」
　浩介くんが衝撃の事実を話してくれる。
　えっと……路面電車じゃなかったのに路面電車になったの？
「え!?　どういうことなの!?」
　まあ、あり得ない訳じゃないとは思うけど。
　そもそも、路面電車じゃないならその線路活用すればいいのにと思ってしまう。
「ああ富山港線は元々単線のローカル線で、富山の市街地を通るのに本数も少なかったんだ。利便性もないってことで２００６年に廃線になったんだけど」
「うん」
　つまり国鉄、ＪＲの富山港線としては廃止になったというわけね。
「実はその2年前にこの富山港線を引き継ぐ形でライトレールの運営会社が設立されて、ＬＲＴに生まれ変わることになったんだ」
「へー、そうなのね」
　浩介くんが、この「富山ライトレール」の成り立ちについて話してくれる。
　２００６年ということは、もう１６年も前の話になるから、あたしたちは小学校入学前の話よね。
「お、来たわよ」
　あたしたちは、やって来た車両を見る。どうやら富山駅を挟んで南北に路面電車が直通しているらしいわね。
　それは低い床の路面電車だった。
　いわゆる、昔の漫画に出てくるような路面電車とは全く違うわね。
　段差もなくて、バリアフリーが徹底されているのが分かる。
「よし、これで終点まで乗ってみよう」
「はい」
　浩介くんが、終点まで乗るという。
　路面電車ということなので、所要時間はそこまでかからないだろ

う。
ともあれ、このライトレール、どんな感じになっているのかしら？
「路面電車になったのは、富山駅からの線形を変えた結果なんだ。で、次世代型の路面電車にしたことで、駅が増えた上に列車の本数も３倍になったんだよ」
座席に座った浩介くんが、さっきの話も続きをし始めた。
「さ、３倍!?」
確かに普通の鉄道よりは定員は少なくなるとは言っても、３倍とはまた思いきったわね。
「で、ＪＲ時代よりも格段に利用客も増えて、大成功を納めたんだ。これが、富山市が掲げる『コンパクトシティ』への布石になったわけだ」
浩介くんのメモ帳をちょっと覗いてみる。
見るとメモはここまでのようだった。
「へー、でもそもそもコンパクトシティって？」
まあ、何となく意味は分かるけどね。
「うーん、要するに市街地を狭くして集中させるってことじゃない？
そうすれば色々とやりやすいわけだし」
「ふむ」
浩介くんの推測に、あたしも頷く。
東京を中心とした首都圏の場合だと、それこそどこまでもどこまでも都市が続いているから分からないけど、地方だとまた違うのね。
「それから、このＬＲＴ……ライトレールの成功は、路面電車を見直すきっかけにもなったんだって」
浩介くんがメモ帳の次のページに目をやる。
本数が増えたことで、市街地での利用が特に盛んになったという。
「それまでは、『路面電車は交通渋滞を引き起こす』と言われて、どんどん廃止になったんだ。地盤的な理由で地下鉄を作ることが困難な広島には、たくさん残っているけどね」
あー確かに、そんな風聞を聞いたことがあるわね。
「うーん、でも本当に渋滞を引き起こすものなのかしら？」
確かに、こんな大きいのが道路に走ってたら車の交通にも影響しそ

うだけど。
「実はね、むしろ逆なんだよ」
しかし、浩介くんから帰ってきた答えは意外なものだった。
「へー、それはまたどうしてなのかしら？」
あたしも、興味津々になって聞いてみる。
「車内のお客さん、例えば通勤者１００人を自家用車で運んだら？」
「えっと、親子や兄弟、夫婦で共働きとかでもない限りは１００台の車が必要よね」
もちろん、複数人で乗ることもあるとは思うけど。
「そうそう、もし３車線の道路だとしたら、３４列、車１台に４人乗っていても９列必要だろ？　ところが、この路面電車なら、少し詰め込めばたった１編成で１００人運べるわけだ」
「そう考えると、路面電車ってすごいわね」
でも、そう考えたらあたしたち首都圏の鉄道はもっとすごいと思うけど。
そう考えると、あたしたちの地域を車通勤に置き換えたら、大変なことになりそうだわ。
……というか、都市が成り立たないわね。
「そういうことだ。渋滞のひどいある都市で路面電車を作ろうとした時に、『渋滞を悪化させる』というのは自家用車のユーザーが路面電車を全く使わないという誤った前提によるものなんだ」
「そういうことなのね」
もちろん、そんなことはあるわけがない。
いくら地方が車社会と言っても、路面電車を引けば、当然何人かがそちらにシフトしてくのだから。
「もちろん、バスや路面電車でも運びきれない時は、俺達が普段使ってる普通鉄道の出番さ。１０両編成なら１０００人を大きく越える量の人間を運べるし、そんな電車が数分おきに出ているんだぜ」
鉄道の大量輸送能力は凄まじいものがあるわね。
逆に言えば、自家用車がいかにスペースを無駄にするものかというのも分かる。

もちろん、道路の張り巡らされ具合を考えても、自動車の方が小回りは聞くけどね。
「まもなく発車します」
まもなく発車のアナウンスと共に、扉が閉められて電車が発車する。
すると、電車は市街地の真ん中を堂々と走り始めた。
路面電車ということで、線路の性質も普段乗っている鉄道とは全然違う。
「この辺りは、昔とは違うのよね」
「ああ、こうなったのはもちろん、ライトレールになってからだ」
路面電車が、自動車たちと並行して進みながら走る。
前方を見ると、信号機もあって、この列車もそれに従うようになっている。
ピンポーン
「まもなく――」
路面電車らしく、次の駅までの距離が短い。
おそらく、ＬＲＴとなって新しい駅も増やされたんだと思う。
次の駅で何人かが乗り降りする。会社の本社前らしく、単線の軌道にホームが左右に見える。
「道路の真ん中に駅ってすごいわよね」
「こういうのは正式には停留場とか電停何て言うらしい」
浩介くんが、路面電車の駅の言い方について解説してくれる。
最も、地方によって違うらしいけど。
でも正直、自動車と事故にならないか冷や冷やしてしまうわ。
今後路面電車のある街で乗るときには交通事故には気をつけないといけないわね。
電車はその後も市街地を進むが、２つ目の駅に到着する時に、線路の様子が大きく変わった。
「あれ？」
下の線路が、まるで普通の鉄道のような線路になった。路盤には石も詰められているし、車と共存していない。

「これがいわゆる『専用軌道』ってやつらしいな。さっきまでのは『併用軌道』って言うらしいんだ」
あたしにも、聞いただけで意味は何となく分かる。
つまり、あたしたちが普段乗っている鉄道も、この「専用軌道」と言ってしまってもいい。
「これって、まさか？」
「ああ、ＪＲ時代の富山港線の線路を、そのまま活用したらしい」
浩介くんから出てきた回答は、あたしの予想していたのと全く同じだった。
富山港線の時代からも駅間は短かったけど、ライトレールになってからは更にいくつかの新駅が開業したらしい。
そして数駅後、単線による行き違いとして、対向列車が見えた。
対向列車の車内を見てみると、そちらの方にもかなりの乗客がいるのが見えた。
「繁盛しているわね」
地方の鉄道というと、人が少ないというイメージがどうしても付きまとってしまうもの。
「ああ、当初は富山県と言えば車社会の地方の中でも特に車社会だって言われていて、この富山ライトレールも開業前はうまくいかないんじゃないかって思われていたんだが、蓋を開けてみれば予想以上の成功になったんだ」
「へえ」
地方と言えば自動車というのがあたしたちには当たり前になっているけど、そうでもないらしいわね。
その後も、ライトレールは単線の線路を進んでいく。
富山ライトレールの本社なども見えていて、終点に近付くにつれて乗客が減っていく。
これは、この手の路線ではよくあることだし、あたしたちの乗っている鉄道も基本的には同じだけど。
「――まもなく終点、岩瀬浜です」

浩介くんと車窓を見ながら楽しく話していたら、いつの間にか終点が近いというアナウンスが入ってきた。
「あ、浩介くん」
「おっと、終点か。実は終点にも利用促進のための工夫があるらしいぞ」
浩介くんがメモ帳をしまいながら話す。
「へーどんな？」
「行ってのお楽しみだってさ」
どうやら、永原先生もそこまでは解説してくれないらしい。
まあ、当たり前かな？
「ふーん」
ともあれ、あたしたちは左側に開いたホームに降りる。
線路の終点は、ぽっかりと途切れていた。
この終点の駅も含め、富山ライトレールの駅立ちは、ほぼシンプルな駅舎もない無人駅で占められていたけど、多分ＪＲの富山港線時代も似たようなものだったと思うわ。
あ、もしかしたら駅舎はあったかもしれないけど。
「ほら優子ちゃん、ここ」
浩介くんがあたしに正面を見るように促してくる。
「わぁ、こんなにバス停が近いのね」
駅にバスのターミナルが併設されているというのは、首都圏でも珍しくないけれども、こんなにすぐ近くで乗り換えができるのは首都圏には存在しない。
「今回はこれには乗らずに、もう一回運賃を支払って富山に戻るぞ」
「はい」
浩介くんに誘導され、数点のいくつかの駅を携帯のカメラで写真に撮ってから、あたしたちはすぐに元来た鉄路を戻る。
浩介くんによれば、「駅の南側にも、古くからの路面電車があるけど、今回は乗らない」とのことだった。
あの路面電車自体は、南側にもつながっているらしいけど。

あたしたちは、夕方のうちに、ホテルに入って休息を取ることにした。
ちなみに、明日もここに泊まるので、２泊で予約してある。
「ふー、疲れたー」
あたしは、ベッドに腰かけてようやく安息を得る。
「明日明後日、特に明後日は朝早いから、ゆっくり休まねえとな」
浩介くんも、隣のベッドでゆっくりと休む。
「うん」
新幹線のグランクラスは快適だったし、ライトレールもとてもよかったけど、やはり昼食後に旅行に出発するってのは疲れるわね。
「んー」
あたしは少しだけ、うとうとし始めてしまう。
今寝ちゃうと、明日以降に支障が出ちゃいそうだし……そうだわ！
「ねえあなた」
「ん？」
あたしは、スカートの中に自分で手を入れてこっそりノーパン状態になる。
久しぶりに、肉食系女子になりたいわ。
「あたし、ちょっと今日は肉食になりたい気分なの」
「え!?　じゃあ焼き肉店に行くか!?」
あたしの甘えた声に対して、浩介くんは持ち前の天然ボケを発揮する。
ふふ、かわいいわね。
「そうじゃないわよ。あたしが食べたいのは、あ・な・た」
このホテルはそれなりの高級ホテルで、部屋も広く、隣に聞こえる心配はない。
「ふえっ!?」
浩介くんが、驚いて裏返った声をあげる。
あたしは浩介くんの顔に胸を当てて、そのまま体重で浩介くんを押し倒す。
「えへへ、いただきまーす！」

ああ、美味しそうな身体だわ。
「あうう、優子ちゃんに食べられちゃうよー！」
あたしは、主導権を握りながら、浩介くんを責め続けた。
「はぁ……はぁ……はにゃーごちそうさまでしたー！」
「はぁ……はぁ……はぁ……あうー」
体力を極限までに搾り取られて、ぐったりと疲れ果てている浩介くんの上に乗りつつも、あたしも立てないほどに疲労困憊する。
「あなた、あたしに食べられるの好き？」
甘い声で、あたしがささやく。
「うん、普段と全く違う一面が見えるから」
普段は、あたしはどちらかと言うと、浩介くんに食べられちゃう方だから、こういうのは新鮮に写る。
今までも、あたしが上に乗って浩介くんを翻弄することがあったけど、普段は力も性欲も強い浩介くんが主導権を握ることが多い。
浩介くんにとって、あたしの方から襲われるのはいつもと違う感覚を強く受けるらしい。
「ふふ、ありがとう」
自分で自由に動けるのはいいけど、体の弱いあたしにはかなりの負担でもある。
「それにしても、優子ちゃんってすげえよな」
浩介くんが、息を切らせながら言う。
「えへへ」
「だってよ、これだけ鍛えてる俺が、こんなヘトヘトになるくらい何だぜ？　俺以外の男と結ばれてたら、その男は死んじゃってもおかしくねえな」
「あはは、そうかも」
浩介くんは大学に入ってからも筋トレを続けていて、講義の合間や天文サークルでも、時間があればトレーニングを続けている。
そんな鍛え上げた浩介くんでさえ、あたしの相手は大変らしい。
だからもし、浩介くん以外の男があたしの旦那になったら、その男

性は耐えられないのではないかと言っていた。
もう、そんな風に考えていたら、ますます浩介くんから離れられないじゃないの。
「さ、ホテルのレストランに行ってみようぜ」
「うん」
浩介くんの言葉と共に、服を着直してからホテルのレストランで夕食を取り、お風呂に入ってから、明後日を見越して早めに睡眠を取ることにした。

# 夏の夫婦旅行2日目　朝の出来事

「うー」
暗い部屋の中で、ゆっくりと意識が戻っていく。
昨日寝るのが早かったため、起きるのが早まるのはいつものことだった。
「浩介くんは……あれ？」
あたしが見通すと、浩介くんのベッドには誰もいなかった。
ということは、どこかに出かけているのかしら？
「ん？」
よく見ると、トイレのある部屋の明かりが点いていた。
どうやら、単にトイレに行っているだけだったみたいね。
「良かったわ」
トイレが流れる音がすると、浩介くんが出てきた。
「浩介くん」
「あ、優子ちゃんも起きたんだ」
浩介くんも、トイレに行ってる間にあたしが起きていたことに気付いてちょっとだけ驚きの表情をしてくれた。
「うん」
外を見ると、まだ日の出前だった。
浩介くんが、二度寝防止も兼ねて部屋の電気を一斉に点ける。
「うっ、眩しいわ」
「おっとごめん」
あたしは少しずつ視界を増やして目を慣らしていく。
部屋の明かりの外には、富山の夜景が見えていた。
もちろん、結婚初夜の時や、協会の会合が夜まで続いた時に見た東京の夜景のような大胆さはない。
でも地方の都市は、また違った趣があるらしく、慎ましい印象を受ける。
「落ち着いた？」
「うん、もう大丈夫よ」

浩介くんが、安心した表情になる。
「よし、それじゃあ今日の予定をもう一度復習するか」
「うん」
浩介くんが、地図を取り出してくる。
載っているのは主に富山県で、どうやら鉄道を重視している感じの図だった。
「今日は富山地方鉄道本線と、黒部峡谷鉄道線に乗るぞ」
「うん、トロッコ列車なんでしょ？」
黒部峡谷鉄道線については、あたしも少しだけ調べたことがある。
「ああ、それでだな。途中で宇奈月温泉にも行くわけだけど――」
浩介くんと旅行の予定を再確認する。
また、今日の服は、明日も含めて山の中だからスカートは禁止だけど、標高は高くないので、いわゆるデニムの短パンという動きやすい格好を心がけるようにと浩介くんから指示があった。
また、あたしがいつもつけている頭の白いリボンも、飛ばされないようにしっかり締めるようにという指示があった。
浩介くんは、2人きりの時に性癖が暴走した時を除いて、あたしの服装には殆ど口を出してこないから、これは異例のことだ。
もちろん、山で風の強い場所という意味で、スカート禁止なのは言われるまでもなくわかっていることだけど、ね。
とはいえ、普段のあたしがスカートが多すぎるので、浩介くんは気が気でなかったらしい。
「ちゃんと、指定の服は持ってきたか？」
浩介くんは、どうも心配症らしいわね。
しょうがないわ。
「うん」
あたしは、それを証明するために、服を2着、浩介くんに見せる。
「よし、俺が着替えさせてあげよう」
「ふえ!?」
浩介くんがいきなり突拍子もないことを言ってきたので、あたしも思わず驚きの声を漏らしてしまう。

反射的に、身を引いて防御態勢を取ってしまう。
「優子ちゃん、いつも俺に着替えを見せてくれねえからな。だったら俺がお姫様を着替えさせてあげるんだ！」
浩介くんが、またノリノリな目付きになって話す。
そう、まさにあの「変態の目」そのものだわ。
「い、いいって！　大丈夫よ！」
嫌な予感を直感したあたしが浩介くんの申し出を断るように言う。
「遠慮するなって。良いではないか！」
浩介くんが鼻の下を伸ばしながら、あたしに近付いてくる。
「もう！　子供じゃないわよ！　ってか、子供だって、ひとりでできるもん！」
あたしがもう一歩お尻を後ずさりさせる。
しかし、簡単に浩介くんに捕まってしまう。
「それをあえて手伝うところに良さがあるんじゃないか。昔の亭主関白なんて、着替えを妻にやらせてた奴もいたんだぜ。それに比べれば、妻を着替えさせてあげる俺はサービス精神旺盛だろ？」
浩介くんが、あたしの服に手をかけ始める。
いやらしい手つきで、浩介くんに物色されている感覚で、あたしの興奮がすぐに高まってしまう。
「もう！　変態精神の間違いでしょ!?」
もちろん、本能では浩介くんに興奮しているため、払い除けたりはしない。
「とか何とか言ってー、払い除けないところを見ると、優子ちゃんもひっそり期待してたんだろ!?」
「バカ!!!」
完全に図星を疲れたあたしが、照れ隠しに浩介くんを罵倒する。
浩介くんはそれを無視してあたしを無理矢理立ち上がらせる。
昨日はあたしが主導権を握っていたはずなのに、今日は朝から握られっぱなしだわ。
「やっ、やだ恥ずかしい！」
浩介くんの手で、ワンピースタイプのパジャマをめくり上げられ、

あっという間にパンツ丸出しにされてしまう。
「やだ、やーだー！」
「もう、嘘つきだなあ優子ちゃんは！」
浩介くんが、わざとゆっくりとパジャマをめくりあげると、パンツに続いてブラジャーも丸見えになり、あたしは前が見えなくなってしまい、いわゆる「茶巾」という状態にさせられてしまう。
あたしの中にある恐怖が混ざったえっちな興奮が更にあたしの心臓を高鳴らしていく。
「お、これかわいいな。あーでも、優子ちゃんのかわいい顔が見えないのは嫌だな」
スポリッ
浩介くんによって、下着姿にさせられてしまう。
「あーん」
「もう優子ちゃん、俺に脱がされたこと、もう数えきれねえだろ？」
浩介くんが「恥ずかしがることないのに」という風に言う。
「それとこれとは訳が違うのよ！」
何回されても、慣れることはないと思う。
浩介くんには、惚れ続けているから。
「ふーん、まあいいや。そーれっと！」
バッ！
「いやーん！」
変な掛け声と共にパンツを脱がされ、あたしがしゃがみこむ暇もなく浩介くんにブラジャーを脱がされて、あたしはついに全裸に剥かれてしまう。
「ふふふ、さ、足を出して」
浩介くんが、あたしの靴下を持ってにやけついている。
昨日あんなに締め上げたはずなのに、浩介くんのパジャマからは、浩介くんがとっても元気な様子が見てとれた。
本当にもう、あたしも男だったから分かるけど、それにしたって回復が早すぎよ。
「うー」

「ほら、着替えないと全裸のままだよ」
「っ……はい……」
浩介くんに促され、とうとう屈服させられたあたしは、ベッドに座って浩介くんの前に足を出す。
もう一方の足も同様にして靴下をつけてもらうと、今度は水玉模様のパンツを出してくる。
「はい、両足揃えてねー」
「あうう……」
浩介くんに「諦めなさい」という感じの口調で促されると、あたしはそのまま服従して足を揃えてしまう。
浩介くんによってパンツを穿かされる。他の人に下着を穿かせられたのは、結婚式の時以来だけど、あの時とは全く状況が違う。
脱がされる時もとっても恥ずかしいのに、今はもう、その数倍恥ずかしいわ。
「よし、これでいいな」
すりすり
しかも案の定、どさくさ紛れにお尻を触られちゃったし。
「はい、次にブラジャーね」
「……はい」
あたしは、両手で隠していた胸から手をどけて、浩介くんにブラジャーをつけてもらう。
全て自分でできることを夫にしてもらうというのも、またかなりの屈辱感が伴うことだった。
「よし、じゃあ、今日はこれとこれでいい？」
「……はい」
浩介くんが提示してきたのはシンプルな夏用の服、もう一組は明日に使う予定だったので、浩介くんのチョイスはあたしと同じだった。
「はーい、万歳してねー」
「はい」
まるで、未修学の子供にするような着替えさせ方が、更にあたしを恥ずかしさの渦に巻き込んでいく。

最後にデニムの短パンを穿かされて、お着替えは終了になった。
「はいおしまい。優子ちゃん、お疲れ様」
浩介くんが満足そうな表情でニッコリと笑う。
「あうう、脱がされるより恥ずかしかったー！」
あたしは、全身が火照っているのを感じる。
「本当に？」
「うー、だってー！」
浩介くんの分からないふりに、あたしはますます身体が熱くなってしまう。
「一人で出来ることを旦那にしてもらったから？」
あたしは浩介くんの回答にコクリと頷く。
「そうよ。もー」
あたしにとって、着替えは見られたくないものなのに、ましてやそれを浩介くんにしてもらう何て。
「でも、俺としても勉強になったよ。それにほら、いつも優子ちゃんは大変だもの。たまには楽するのもいいぜ」
浩介くんがニヤニヤしながら話す。
本当に分かりやすい人なんだから。
「もー、そんなににやけついて！　下心丸見えよ！」
「うーごめんなさい」
……言葉では反省しているけど、体は全く反省していないわね。
「もう、そんな浩介くんにはおしおきよ！」
ガバッ
今度はあたしが、浩介くんのパジャマのズボンを、下着ごと下ろす。
「わっわっ！」
突然のことに浩介くんが動揺している。
よし、主導権を握ったわ！
「全部これが悪いのよ！　沈めてあげないといけないわね！」
あたしは、浩介くんに「おしおき」するための究極技を行うため、着ていた服の一部をもう一度脱いだ。

「はぁはぁはぁはぁ……」
浩介くんが、ベッドに倒れ込みながら激しく息遣いをする。
やっぱり、下半身が苦しそうになった浩介くんには、「挟み込み法」でマッサージしてあげるのが一番効果的な方法みたいね。
「浩介くん、どう？　懲りた？」
今度はあたしがニッコリと笑顔で浩介くんに迫る。
「はぁはぁ……うん……はぁはぁ……優子ちゃん、ごめんなさい……」
浩介くんにとっては、「挟み込み法」はあまりにも刺激が強いため、おいたが過ぎる時によく使う方法になった。
いつでも暴走気味の浩介くんには、この方法はとっても効果的だったりする。
最後には、あまりの刺激ぶりに「もう許して下さい」と言うんだけど、もちろんオイタが過ぎた浩介くんを、あたしは許すつもりはない。
「じゃあ浩介くん、あたしちょっとシャワー浴びてくるから、絶対に覗かないでよ！」
いつもよりも、ちょっとだけ強い口調で話す。
「えー！」
浩介くんが不満そうな声をあげる。
「えー！　じゃないわよ！　もし覗いたら、次はもっと刺激的に行くわよ！」
「は、はいっ！」
浩介くんが素直に大人しくなってくれたので、あたしは安心してシャワーを浴びることが出来た。
「挟み込み法」の最大のメリットは、あたしの体力消費が少ないこと。それでいて、浩介くんにはほぼ一方的に体力消費を強いることが出来る。
普段は並みの男女以上に体力差のあるあたしたちカップルにとっては、この方法で浩介くんの体力を一方的に奪えるのは大きい。
「お待たせー浩介くん」
「優子ちゃん、お疲れ様」

浩介くんが、あたしを労うように話しかけてくる。
浩介くんの方もシャワー時間を利用して、既に新しい服に着替えていた。
「で、まだ時間あるんだけど、どうしようか？」
さっきのゴタゴタで大分時間を潰せたけど、朝食まではまだ少し時間がある。
「うーん、浩介くん、テレビ見てみようか」
「ああ、そういえば、スポーツの方はどうなってるかな？」
昨日新幹線の中で、「国際反蓬莱連合が、国際スポーツ仲裁裁判所に、蓬莱の薬を禁止薬物に指定しようと提訴した」という情報を入手している。
恐らく、既存メディアも一斉に報じているはずだわ。
「おう」
浩介くんがホテルのテレビをつけて、チャンネルを合わせる。
「――では続いて気象情報です」
「……タイミング悪いな」
テレビでは、ちょうど気象情報のコーナーをやっていた。
そりゃあまあ、都合よく行くわけないものね。
そのため、あたしたちは件のニュースが出てくるまで待つことにした。

「では、次のニュースです。『国際反蓬莱連合』と名乗る集団が昨日、国際スポーツ仲裁裁判所に対して、蓬莱の薬をあらゆるスポーツの禁止薬物に指定するように求めた事件につきまして、スポーツ仲裁裁判所は、『検討に入る』としています」
ニュースキャスターの声を聞いて、あたしたちは焦りを隠せない。
とはいえ、「検討に入る」だけならまだ十分に何とかなるわね。
「これに対して、佐和山大学の蓬莱伸吾教授は、『蓬莱の薬は選手の健康を損なうものではない。むしろ選手が抱えている病気を直してくれるものだ。これをドーピングと呼ぶのは甚だ心外だ』として、反蓬莱連合を牽制しました」

テレビでは、蓬莱教授がインタビューに応じる映像が声無しで流れていて、代わりにアナウンサーさんが蓬莱教授のインタビュー内容を要約した原稿を読んでいる。
蓬莱教授の主張は、以前の繰り返しだけど、公に発表するのはこれが初めてだろう。
「また、体の性別が男性から女性に代わり、また老化が止まる完全性転換症候群、いわゆるＴＳ病と呼ばれる病気の患者で作る『日本性転換症候群協会』の永原マキノ会長は、『到底容認できない。もし蓬莱の薬がドーピングならば、私たちは存在そのものがドーピングになってしまう。もしそうなれば、私たちはあらゆるスポーツ大会に出る権利を永久に剥奪されることになってしまう』と述べて、危機感を強めております」
ニュース映像は、本部の入っている建物を映すだけで、永原先生の写真や映像、そして年齢は出てこない。
ただ、こうしたコメントを発し、ブライト桜以外のメディアも報道するということは協会の方から何らかの力を働かせたことも意味するわね。
そして、場面はスタジオに戻った。
「はいそれで、スタジオの皆さんはどう思われますか？」
司会の人がゲストに意見を促している。
「はい、協会側の主張、これが全てですよね。老化を止めることをルール違反としてしまいますと、ＴＳ病になってしまった患者さんたちの立場が無くなってしまいます」
大学教授が、蓬莱教授と協会の主張を補完する解説をする。
「仮に特例で対処するとしても、将来ＴＳ病のトップ選手が出た時に、他の選手からの不公平感はぬぐえませんし、そもそも『スポーツの道に進むと不老になれない』とすれば、スポーツ界そのものが、大変な人材損失を招くことになるでしょう」
世間一般には、恵美ちゃんが蓬莱の薬を飲んでいることは知られていない。
恵美ちゃんもテニス選手になって４年目で、世界ランキングはずっ

と1位を独走していて、「田村時代」何て呼ばれている。
海外の人の間では、「日本人は老けない」と言われているため、幸いにして、今の所怪しむ人はいない。
「そうですねえ、今後の動向に、目が離せません。では次のニュースです――」
結局、この番組も蓬莱教授と永原先生の主張のみを流して、更に両者に同調する意見を流して終わりだった。
反蓬莱連合側の主張は一切流していない。
一言で言えば偏向報道そのもので、国家権力の批判は出来ても、民間権力たる蓬莱教授と協会の批判は、もはや完全にできなくなっていた。
蓬莱教授の宣伝部からはまだ情報はないが、あたしの推測では海外メディアも大差ないと思われる。
あの後わかったことだけど、実は蓬莱教授が自らに逆らい、反蓬莱活動をするものは、子孫や関係者にまで蓬莱の薬を融通しないことに言及していたのも、永原先生の差し金だった。
こうなれば、自らが迷惑を被るだけではないということになる。
永原先生によれば、「戦乱の時代や、あるいは私が生まれる前の時代は今よりも遥かに権力基盤が弱かった。些細な事で人が死に、復讐の連鎖の果てに激しい闘争が起きることもあった。戦闘的な人間に対して戦意を喪失させるにはこれが一番いい」と言っていた。
江戸時代になるとそうした極めて戦闘的な考えは捨てられていったが、永原先生は江戸以前の時代を知っているため、血で血を洗うことが日常化していた時代に、何が人間にとって最も恐怖を感じるかを心得ている。
それがまさに「族滅」なのだという。
蓬莱の薬を自分だけでなく自分の家族や親戚、果ては子子孫孫まで融通してもらえないとなれば、当然不老が一般的になった世界での彼らの社会的立場は決定的に悪化する。
自分だけならばともかく、家族や子孫に影響を及ぼすとなれば、よほど周囲が見えない人間でもなければ蓬莱教授に逆らおうという声

を出さないもの。
そしてそれは、蓬莱教授と懇意にしている永原先生を始めとする協会の人間も、広告塔となったあたしたちにも言えること。
「……とりあえず、そろそろ朝ごはんにするか」
「ええ」
あたしと浩介くんは荷物を整えて、朝ごはんを提供しているホテルに向かう。
今日はこのまま、一旦鍵をフロントに預け、一路宇奈月方面に向かうことになっている。
「宇奈月温泉、楽しみだな」
「ええ」
男女別に分かれている共同浴場なら、浩介くんに覗かれる心配もないものね。
あ、でもちょっとだけ寂しいかも。

# 夏の夫婦旅行2日目　地方の足

「よし、富山駅はこっちだな」
「うん」
　富山駅と言っても、今日乗るのは昨日乗ったＪＲでもないし、並行在来線の「あいの風とやま鉄道線」でもない。
　あたしたちが今日これから乗るのは「富山地方鉄道本線」で、電鉄富山駅に行くことになっている。
　そして電鉄富山駅に到着したんだけど――
「あれ？　これ確か？」
「ああ、首都圏の鉄道会社のものだよな？」
　あたしたちを待ち受けていたのは、一昔前に首都圏にある鉄道会社の車両として走っていたような、やや古めかしい電車だった。
　行き先表示はもちろん宇奈月温泉という表示になっているんだけど、明らかに元々はこの鉄道会社の車両ではないと思わせるに十分だった。
　そして車内も、座席の雰囲気は少し変わっているようだったが、それでも昔を強く忍ばせるものには違いない。
　2両編成のワンマンカーで、明らかに後から付け足されたであろうワンマン設備がどうにもツギハギな印象を受けてしまうわね。
　というよりも、長大編成が普通のこの手の電車が、2両しかないというのもまた、違和感を助長しているのかもしれない。
「そうだわ、浩介くん、永原先生のメモには何か書かれてないかしら？」
「ちょっと待ってな……えっと……あ、あった。富山地方鉄道はっと……」
　浩介くんがメモ帳を取り出し、該当の記述を探してくれる。
「ふむふむ……地方の私鉄は元大手私鉄の古くなって使わなくなった車両を格安で譲ってもらうことが多いらしい。関東だけではなくて、関西の大手私鉄に所属していた電車もあるらしいな」
　浩介くんが、永原先生の解説を納得しながら読んでくれる。

「ふむふむ、そうすれば経費削減になるのね」
とはいえ、使い古された車両のお下がりだから、早期の陳腐化は免れないとは思うけど。
あ、でもそういうのを気にしてたらいけないのかしら？
「ああ、地方私鉄は経営努力が必要不可欠だからな。多くの会社が赤字に喘いでいるんだ。でもまだ、ここはまだマシな方なんだぜ。１３年前に南側に展開している路面電車に新線を開業させてるくらいには、余裕があるんだ」
浩介くんが厳しい地方の事情について話してくれる。
「そうなのね」
ともかく、これは富山県に根城を貼る鉄道会社で、特に宇奈月温泉へは本線と呼ばれてメインの路線になっているらしい。
「特急列車も運行されているんだけど、今回は時間の都合で使わないことになった」
「特急かあ……乗ってみても見たかったわね」
「地方鉄道」と名乗るくらい地域密着型の会社ながら、長距離輸送を彷彿とさせる特急列車というのは、中々に面白いわね。
「まあ、運転本数は多くねえからな」
浩介くんが、旅のお供にと印刷してあった時刻表を見せてくれる。
確かに、本数が少ないから、あたしたちの予定では特急を使うにはちょっとタイミングが悪いわね。
「この電車は、電鉄富山発、宇奈月温泉行きです。お乗り間違いの無いようご注意下さい。駅員のいない駅でお降りの際は、一番前のドアからお降り下さい。後ろの車両にご乗車の方は、お降りの駅が近付きましたら、前の車両でお待ちいただきますようお願い致します」
プルルルルルルルルル
アナウンスの声と発車ベルの音と共に電車のドアが閉まり、列車が発車する。
昼間に近い時間帯ということもあって、列車内は空いていた。
「お待たせしました。本日も、地鉄電車をご利用いただき、ありがとうございます。宇奈月温泉行きです。次は、稲荷町、稲荷町です」

電車が発車し、アナウンスが再び聞こえ、左手には高架が見える。
どうやら、あいの風とやま鉄道線や北陸新幹線と並行しているらしい。
地方の鉄道会社ということで、駅と駅の間は首都圏並みに短い。
その後も、時折行き違い列車をはさみながらも、大きな音で単線の線路を進む。
「結構揺れるわね」
「まあ、古い車両だしなあ。線路の補修だって首都圏の会社ほど贅沢にはできんだろう？」
のどかで建物もまばらな車窓と合わさって、地方の鉄道会社の苦しい台所事情が窺い知れる。
そもそも、元の鉄道会社で新しい車両に置き換えられるということは、既に老朽化で寿命が来ているはずなのに、こうやって地方の鉄道で使い倒されていく。
列車の風景も、どんどんと建物が少なくなっていくが、あるところで増えていく。
「ご乗車、ありがとうございました。上市、上市です。お忘れ物ございませんようにご注意下さい。運賃は駅改札口にてご生産下さい。これより先、終点の宇奈月温泉まで、進行方向が変わります」
「おや、進行方向が変わるのか」
浩介くんが進行方向が変わることについて注目する。
確かに、終点では進行方向が変わるの普通だけど、途中駅で変わるっていうのはあまり見ないわね。
「そうみたいね」
前を見ると、どうやら線路が行き止まりになっているので、折り返すしか無いらしいわね。
確かこれって――
「スイッチバックってやつらしいな」
浩介くんが永原先生のメモ帳にある用語を見て言う。
「うん」
バタン！

運転士さんが慌ただしく乗務員室から出てこちら側の車両に移ってくる。
一瞬だけジリリリリという鐘の音が聞こえ、「この電車は、宇奈月温泉行きです」との言葉と共に、再び逆方向に走り始めた。
「お、こっち側に行った」
さっきまで左の線路が合流してきて、進行方向が変わって右の線路、つまり合流前とは違う線路に走っていく。
「左側の線路が、さっきまで行った場所ね」
ともあれ、列車は再び初秋の富山を走り始めた。
何駅か過ぎると、左側に複線の線路が見え始めた。
おそらく、「あいの風とやま鉄道線」だと思う。
「浩介くん、これ『あいの風とやま鉄道線』よね？」
「ああ、昔の北陸本線だな」
どうやら、あたしの読みは当たっていたわね。
やはり、元ＪＲとして、新幹線ができる前は特急をバンバン走らせていたこともあってか、地鉄電車とのやはり設備の格差は否めないわね。
中滑川駅、ここは地鉄電車の方の駅があるだけで、左側の複線には駅はない。
「地方の私鉄とかだと、こういう光景はよくあるらしいぜ」
浩介くんが解説してくれる。
というか、首都圏でもあったような？
そうそう、新婚旅行の時のニューシャトルもこんな感じだったわね。
「駅間の違いからかしら？」
さっきそんな話題が出たし。
「ああ、国鉄は長距離重視だから、大都市圏を除けば、駅を細かく設けることは少ねえんだって」
浩介くんがまた、メモ帳を見せて話してくれる。
永原先生のメモによれば、「これからそれで面白い駅が出てくる」とのことだった。

「お、今度は左にも駅があるぜ」
到着したのは、滑川駅で、向かい側からはあいの風とやま鉄道線の銀色の電車が到着するのが見えた。
あの電車は確か――
「あれ？　あの電車、修学旅行で乗ったわよね」
「ああ、でも俺達が乗った新快速とは仕様は違うらしいぜ」
浩介くんが、「５２１系」と書かれたメモを見せてくれる。
どうやら、交直流電車で、元々ＪＲが作った車両で、北陸新幹線に並行する在来線が、「あいの風とやま鉄道線」として再出発する際に、経営支援のために幾つか譲渡されたということらしい。
「なるほどねえ」
そうこう話している間にも、電車はあいの風とやま鉄道線と並行する。
向こうが複線でこちらが単線なのを見ると、やはり格差を感じざるを得ない。
とはいえ、こちらは駅の数が多いので、速達性はともかく、短い距離でも気軽に利用できそうなのが良かった。
「結構並走するわね」
「ああ、珍しい」
首都圏でも、違う会社の鉄道同士が長い距離を並走するということはよくあるけど、この富山県でもこういったことが起きているというのは若干驚きだわ。
「あれ？　今度は向こうに駅があるわね」
「本当だわ」
越中中村駅の手前に、あいの風とやま鉄道線の駅があったが、今度は逆にこっちには駅がない。
「何かチグハグだわ」
乗り換えとか出来ないわよねこれじゃ。
「うーん、会社が違うとこういうことがあるんだなあ……」
この駅を過ぎると、すぐに列車は橋を渡る。
この橋、結構横幅が短くて、安全面は当然問題があるはずはない

んだけど、やはりどうしても見た目で緊張してしまうのはあたし自身の問題かもしれない。
人でさえ見かけによらないのに、橋が見かけによらないなんて当たり前だものね。
そして列車が左にカーブすると、あいの風とやま鉄道線の下をくぐってこちらが左へと移動する。
いつの間にか車掌に建物も多くなってきて、魚津という街が近いことを教えてくれる。
ピンポーン
「次は、電鉄魚津、電鉄魚津でございます。すべてのドアが開きます」
「お、次だ次。電鉄魚津だよ」
浩介くんが張り切って話しかけてくれる。
ちょっと見えなかったあいの里とやま鉄道線を右側に見て、3本の線路が高架を走る。
「浩介くん、この駅がどうしたの？」
見た感じ、やはり右側には駅は無さそうだけど。
「まあ見てなって」
「うん」
ピンポーン
「電鉄魚津、電鉄魚津でございます。降り口は左側全てのドアが開きます。お忘れ物の無いようご注意下さい」
自動放送とともに、電車は減速して電鉄魚津駅へと止まった。
ホームが一本あるだけの比較的簡素な作りで、右側にあるあいの風とやま鉄道線の線路には駅が存在していない。
「電鉄魚津ー！　電鉄魚津っ！」
駅員さんの独特の抑揚の放送とともに、何人かの乗客が降り、何人かが乗っていく。
この駅は、新幹線ができる前は、富山県としては唯一の高架駅だったらしい。
「実は、あいの風とやま鉄道線と接続しているのは次の新魚津駅なんだ」

発車直後に浩介くんが更に知識を披露する。
「そうなの？」
ピンポーン
「次は、新魚津、新魚津です。ＪＲ線ご利用の方は、お乗り換えとなります」
「あ、本当だわ」
浩介くんの言う通りのアナウンスが聞こえてくる。
「実はここ地鉄電車にとっては、運行上あくまで電鉄魚津駅が中心駅になっているんだ。実際、以前はこの駅の古い駅舎には『電鉄魚津ステーションデパート』っていうのあって大繁盛をしていたんだけど、やっぱりＪＲとの利便性のある新魚津駅に押されてしまってたんだ」
「古い駅舎？」
メモ帳を持った浩介くんに、あたしが質問をする。
「ああ。旧駅舎の末期時代には、３階建てのデパートの建物の殆どが使われていなくて、半ば『廃墟』何ても言われていたんだ。バリアフリーにも問題があって、１０年位前にきちんとリニューアルされているんだ」
浩介くんによれば、最終的には3階へと進む階段だけが解放されていて、古い時代のポスターなどがそのまま貼り付けられていた状態だったらしい。
今は、新しい建物になって、バリアフリーも実現できたらしいけど。
「ふむふむ」
浩介くんの説明は、現在魚津の中心街となっている新魚津駅到着頃まで続く。
昔はあそこの街は、中心街だったのだろう。
また、北陸新幹線開業に伴う地鉄電車の利用促進もにらんで、電鉄魚津にあいの風とやま鉄道線に駅を作る要望もあるらしい。
「でも、パット見た感じではホームを作るスペースが無さそうだったわ」
あいの風とやま鉄道線と富山地方鉄道線の間にもう少しスペースがあれば、ホームを作れそうなんだけど。

「だなあ。とはいえ、利用者数がやっぱり新魚津駅の方がかなり多いから、あいの風とやま鉄道線の方では駅を作る予定は無さそうだな」
浩介くんが無慈悲な一言を言う。
「うん、あたしもそう思うわ」
その後、あいの風とやま鉄道線とも線路を別れ、数駅を過ぎてやがて電鉄黒部駅に到着する。
電鉄黒部駅では数分の行き違い待ちを経験しつつ、再び電車は発車する。
「結構待ったな」
「うん」
そして電車は再び、宇奈月温泉を目指す。
そして何駅か過ぎた後、前方に新幹線が見えて、やがて電車が「新黒部駅」に到着した。
前後の駅と比べて明らかに新しく、明らかに「新幹線によってできた」という感じになっている。
「なるほど、黒部宇奈月温泉駅はここから乗るんだな」
ホームを見ると、それなりにまとまった人数のお客さんが乗ってくる。明らかに定年を過ぎた老人の観光客たちで、車内も話し声で包まれる。
さっきまでの閑散も、嘘みたいだわ。
その後も、駅を過ぎるごとに、地元のお客さんが少なくなっていき、そして線路もカーブが多くなり、本格的に温泉へと向かっていくのが分かる。
「森の中だわ」
「ああ」
短いながらも、トンネルの中も何度か通る。
さっきも「小さな町を進んでいる」という印象を受けていたけど、今の状況を見れば、さっきまでは街の中を進んでいたんだなって思う。
「お、次で終点だな」
「あら、本当だわ」
浩介くんが「音沢」と書かれた駅名標を見る。

確かにこの駅名標に書かれている次の駅は、あたしたちの最初の目的地の「宇奈月温泉」ね。
有人駅の証拠である、「全てのドアが開きます。運賃は駅改札口にてご精算下さい」というアナウンスを聞く。
電車は切り立った崖などをゆっくりとした速度で走る。
恐らく、温泉街はそれなりに施設があるはずだわ。
「さて、宇奈月温泉とはどれほどのものかな？」
浩介くんも、冷静な口調の中にワクワク感が隠せないでいる。
「うん、あたしも楽しみ」
「いやね、本当は黒薙温泉にしようかなとも思ったんだ。あそこは宇奈月温泉と泉質が同じだし。だけど施設はこっちが充実しているし。あと個人的にもちょっと嫌な施設があるからね」
浩介くんは、黒薙温泉に嫌な施設があるらしい。
どうしてかしら？
「え？」
「いやほら、実はそこには混浴露天風呂があるからさ。他の男がいる所に優子ちゃんを入れたくねえんだよ。もちろん、2人で貸し切りなら、絶対混浴だけどな！」
浩介くんは、いつものように独占欲を発揮していた。
「もう、浩介くんらしいわね」
結婚生活4年目で未だにぶれないってある意味すごいわよね。
「間もなく、宇奈月温泉です――」
「お、もうすぐ着くぞ」
山の中の鉄路から一気に温泉街が見え、電車はベル音とともに一気に速度を下げて、ゆっくりと宇奈月温泉駅に止まった。
「さ、何はともあれ、風呂に入ろうぜ」
「うん」
宇奈月温泉に入り、食事処も探して、それから黒部峡谷鉄道ね。
永原先生によれば、ここも一押しらしいけどさてどう出るかしら？
宇奈月温泉の温泉街に到着したあたしたちは、地図を見るために人

通りの邪魔にならない所をまず陣取った。
「ちょっと待ってくれ」
浩介くんは、インターネットの地図をコピーした紙を持っている。
それに従えば、目的の日帰り入浴施設に到着できるようになっている。
「よし、こっちだな」
「うん」
浩介くんが地図を頭にインプットし、正しい道を進んで行くと、立派な建物が見えてきた。
浩介くんが中に入り、券売機で大人2人を購入する。
「すみません」
窓口の係員さんに券を渡すと、あたしたちは靴を脱いでロッカーへと入れる。
まずは、列車に乗った疲れを癒そうということになり、あたしたちはまず休憩所に行く。
「食事はどうする？」
浩介くんが今後の予定を聞いてくる。
「うーん、ここで取っちゃおうか」
多分、黒部峡谷鉄道線まで乗るとそこの価格はここより高くなると思うし。
「分かった。じゃあまずはここで休んで、一段落してお風呂入って、お風呂から出たらここで集合ということで」
「はーい」
浩介くんと今後の予定について話し終わると、あたしたちもようやくゆっくり休めるようになる。
休めるようになるはずだったんだけど――

さらーり
「浩介くん！　お尻触っちゃダメよ」
さて休憩も一段落してお風呂へ入ろうと思った矢先、いつものようにどさくさに紛れて浩介くんにお尻を触られてしまう。

本当にもう、触り心地がいいのはわかるけど。
「ごめんごめん、でも大丈夫だって、ここは角っこで俺の手はどの角度からも見えてねえだろ」
浩介くんは、「大丈夫だって計算しているから」という表情をする。
「うー」
実際その通りなので、あたしは何も反論できなくなってしまう。
浩介くんは、触りたいがためにわざとこういう所に陣取ってくる。
本当に嫌なら、あたしが目立つ中央に陣取ればいいのだから、あたしも強く出ることができない。
それにしても、朝に挟み込んで干からびるまでこってり締め上げたはずなのに、もう復活してるのよね。
「ふう、優子ちゃんのお尻触ったら元気が出てきた。優子ちゃんはどう？」
浩介くんがさらりとセクハラ発言をする。
「うー、あたしも、悔しいけどこれだけ休んだら疲れが取れたわ」
決して、浩介くんにお尻触られたからではない。
「あーうん、俺がお尻触ったのは無関係だろ？　とにかく、大浴場に行こうか」
「うん」
あたしたちは、案内表示にしたがって、大浴場と露天風呂のある場所へと行く。
そして1分もしないうちに、男湯と女湯の暖簾がある前までたどり着いた。

# 夏の夫婦旅行2日目　宇奈月

「んじゃ、さっきの集合場所でな」
「ええ」
男湯と女湯の分かれ道の前。
あたしは浩介くんと別れ、あたしは女湯の暖簾を潜って脱衣場へと行く。
あたしは適当な番号のロッカーを見つけて服と頭の白いリボンを全て脱ぎ、タオルを巻いて、最後にストレートロングの髪をお団子にまとめあげる。
この辺は全て温泉地帯で施設が分散しているということや、平日ということもあって、人の数はとても少なく、またお客さんの殆どは中年女性たちだったので、あたしのような若い女の子は、とても目立つ存在だ。
特に胸に関してはやはりというか何というか、おば様方の嫉妬の目線が凄まじいわね。
あたしはそんな嫉妬をエネルギーに変えつつ、まずはかけ湯を流し、洗面台に向かって一直線に歩いていく。
ちなみに、温泉は結構熱いお湯だった。

「ふう」
普段からそうだけど、あたしくらいに髪が長くなると、髪の毛を洗うのがとにかく大変だわ。
お団子ヘアーも、一時的にほどかなきゃいけない。
かといって、最初からこのままだと、かけ湯の時に、温泉が髪につく問題があるし、かけ湯なしで洗面台にに行くと、それもそれでまた急激な温度変化を受けやすい。
とは言え、あたしの中で髪を切るという選択肢はない。
何だかんだで、この黒髪のストレートロングのヘアスタイルも、5年間馴染んでいることや、何より男性から、特に浩介くんからの受けがいいもの。

男の子に好かれる嬉しさに比べれば、こんな苦労なんてことない。
そう思える女性になれて、本当に良かったわ。
「っ……！」
あたしは髪の毛の手入れを終え、もう一度髪型を整えてから、タオルを脱いで温泉の中へと入る。
やっぱりお湯は少し熱くて、あたしはゆっくりと中へ入ることにした。
「ふー」
温泉に入ることで、さっきの休憩では取れなかった疲れが取れていく。
ちなみに、温泉で疲れを癒すには、さっきみたいに一旦休んでから温泉に入るといいらしい。
ふと下を見ると、あたしの胸がお湯の上でゆらゆらと揺れているのが見えた。
おっぱいというのは脂肪の塊で、２年前に体脂肪率を測ったら３０％って出ちゃったけど、間違いなくそのうちの５―１０％くらいはこの胸に集中していると思う。
浩介くんにもこの体型は受けがいいし、とにかくダイエットはせずに現状維持を続けていきたいわね。
熱いお湯が、あたしの中の体を暖めてくれる。
これから先は、本格的に山岳地帯を進むことになっている。
もちろん、明日ほど高地には進まないとはいえ、服装も動きやすさ重視になってるから、ちょっと寒くなるかもしれないわね。
「ふー、んーっ」
お風呂に浸かり続けて、ちょっとのぼせぎみになったので、湯船から出て休憩する。
うーん、やっぱりおばさんたちの嫉妬の視線がすごいわ。この年であたしに嫉妬しちゃってもしょうがないと思うんだけど。まあ、女性の性だから仕方ないわね。
「露天風呂に行こうっと」
あたしは、一往復浸かったらタオルを巻き直して露天風呂へ行くこ

とにした。
そう言えば、この共同浴場、あたしとしてはクラスメートたちと入った林間学校を除けば、幸子さんと東京を巡った時が初めてだけど、ＴＳ病になった女の子が最初に「女の子体験」として入れられるのよね。
まあ、その「女の子体験」も、幸子さんとの東京巡りが原点にはなってるけど。
今のあたしはもちろん平気だけど、案外女の子になったばかりの患者さんも、この高そうなハードルを拒否する人はいない。
体験プログラムの手法は、女の子になったばかりの患者に対して、興味を誘って女性専用スペースに入れて、最後には女湯にも入らせて退路を断つという、悪い言い方をすれば麻薬商法まがいのやり方でもある。
あたし自身がそうだったように、カリキュラムさえ受けてないレベルでの女の子になったばかりの時は、精神はバリバリ男だったりする。
そんな折りに、「体が女だから、女湯に合法的に入れる。せっかく女になったんだから、一回くらいは入ってみたら？」何て呟かれたら、そりゃあエロのことばかり考えている男の思考回路で拒否するわけがないものね。
もちろん、女湯にも「理想と現実のギャップ」というものがあるわけだけれど、一度入ってしまえば、「女湯に入ってしまった以上、もう男には戻れない」と言ってしまえる訳で、実際このプログラムを受けた患者さんは実利面でも「女性は得なんだ」と思わせる側面もあるから、この体験プログラムを導入したことで自殺率が減るのも納得だわ。
あたしは、もう一度身体を温め直し終わったので、満を持して露天風呂への扉を開く。
「うっ……」
やはり、露天風呂へは温度変化が体に響く。
男の頃はこの温度変化もほどよく気持ちよかったと思ったんだけ

どねえ。
やっぱり冷えに弱くなるのは女の子の特徴よね。
「ありがとうございます」
あたしは後ろにいた女性のためにドアを開けたままにしておき、引き継いだら露天風呂へと入る。
「温かいわー」
あー気持ちいいわー。
よく耳を済ませてみると、６０代くらいのおばちゃんたちが笑いながら雑談している音に混じって、温泉のお湯の音や、小鳥のさえずり声も聞こえてくる。
のどかな温泉街の、ささやかな温泉はとても素敵な存在だった。
露天風呂から出たらもう一度大浴場でゆっくり暖まり、あたしも気分よく温泉を出ることが出来た。
もう一度着ていた服を着直して、うん完成だわ。
あたしは、脱衣場にあった串で髪をほぐしていると、心なしか顔が笑顔になっているのに気づいた。
何だか、浩介くんと結婚してから、ますます笑顔が増えた気がするわ。
女の子は、恋をするとかわいくなるというのはひしひしと痛感するけど、冷めない恋を続けていれば、こうやって笑顔になるのも当然なのかな？
温泉にマッサージ、更に浩介くんとの夜の生活、浩介くんと結婚してからは、気持ちいい思いをすることも増えたものね。

「お、優子ちゃん」
集合場所に行くと、浩介くんがあたしを待っていてくれた。
「あなたお待たせ、待った？」
「えっと……４分１３秒ほど」
浩介くんが時計のある方向を見ながら言う。
「あはは……」
いつになく細かい浩介くんに、あたしも思わず笑みが浮かんでしま

う。
いつもはこういうことがないので、ノリで遊んでいるだけだと分かる。
「じゃあ、食事処に行こうか」
「おう」
あたしはくるりと体を回転させ、お食事処に行く。
あれ？　浩介くん、横に並ばないわね。
「どうしたの浩介くん？　いつもは横に並ぶのに」
「おっとごめん」
あたしの声を聞いた浩介くんが慌てて横へと並んでくる。
うーん、別のことに気を取られていたのかしら？　まあいいわ。
「で、どれにする？」
「うーん、せっかく山の中だし、山菜そばにするか」
「じゃああたしは、たぬきそばで」
券売機には並ばずに買えたので、あたしは受付で食券を渡す。
「で、浩介くん、どうして横に並ばなかったのかしら？」
あたしは、大体は想像つくけど、意地悪して浩介くんに問い詰めることにする。
「えっとその、優子ちゃんの服、お尻にぴったりフィットしててその……」
つまりあたしのお尻に見とれてたということね。
「浩介くん相変わらず性のことばかり考えているのね」
あたしがちょっとだけにこりと笑顔で浩介くんを詰問する。
浩介くんはあたしの無言の圧力に、ちょっとだけ冷や汗をかいている。
「だって、優子ちゃんだし」
「ふふ、しょうがないわね。あたしもそんな浩介くんが好きだから、蓬莱の薬を完成させようね」
ここで拒絶反応を見せるのが、女性がやりがちな大きなミス。
あたしは男として生きてきたこともあるので、浩介くんの愛情が性欲に結び付くことにも理解を示すことができる。

「あ、ああ……」
今の浩介くんは、普通の人の８分の１程度とはいえ、老化をしている。
はじめて蓬莱の薬を飲んだのが大学１年の時で、以前の薬の性能も合わせれば、そろそろ高校卒業時から１歳歳を取った外見年齢になっていると思う。
「お待たせいたしました、山菜そばとたぬきそばのお客様ー！」
「あ、あなた」
「おう」
呼ばれた声を聞いて、あたしたちはほぼ同時に席を立ち、そばを受け取った。
そばの味は悪くはなかったけど、特段よいというわけではない。
まあ、ここはあくまで共同浴場であって、専門料理店ではないのでそこまでの贅沢は言ってはいけないわね。

「ふー、食った食ったー。優子ちゃん、食べながら聞いてくれるか？」
「うん」
浩介くんがいつものように先に食べ終わり、あたしに話しかけてくる。
「これから乗る『黒部峡谷鉄道本線』何だけど、結構危険なトンネルを通るから、身を乗り出したりとか絶対にしないでくれ」
「もー、子供じゃないのよ」
浩介くんの釈迦に説法な話に、あたしも苦笑いしながら答える。
まあ、確かにＴＳ病のあたしにとっては寿命に直結する重要なことではあるけどね。
「ああ、うん。分かってるとは思うけど、元々は電力会社の作業員のための列車なんだ」
「そうなの？」
あたしは、そばを食べながら浩介くんと会話する。
「ああ、言うなれば、工事建設現場の鉄道に便乗しているようなものだ。今は観光鉄道にもなってるけれど、便乗が始まったばかりの頃に

は、『生命の保証はできません』って切符に書いてあったぐらいなんだぜ」
浩介くんが、驚くべき情報を教えてくれる。
「ふえー、そんなに危険なの!?」
そうともなると、乗るのはちょっとためらわれるわね。
「もちろん、今は改善されているから、安全性は増しているし、事故もないから大丈夫だよ」
浩介くんが、安心させるように言う。
まあ、確かに時刻表にも出てるし、旅番組とかにも取材されるって聞いてるから、安心して乗れるとは思うけどね。
「う、うん」
とは言え、やはり気を付けておいて損はないわね。

温泉施設を出たあたしたちは、黒部峡谷鉄道本線の宇奈月駅を目指して歩く。
富山地方鉄道線との接続もあって、空いた時間になっている。
富山地方鉄道線の宇奈月温泉駅とは、少しだけ離れているみたいね。
「すいません、往復2名お願いします」
「はい」
浩介くんが窓口の人に言われた通りの値段を支払う。
結構、というよりも、物凄く高い。
観光鉄道な上に、電力会社のための鉄道が本業だから当たり前と言えば当たり前だけど。
「観光地と安全の維持のためには、お金が必要なんだろうね」
「ええそうね」
あたしたちが高校生の頃までは、値上げとか高価と言うとネガティブなイメージが強かったけど、今の時代ではサービスの対価としての価格転移は、かなり受け入れられている。
更に政府の方針として、蓬莱の薬の実現により、不老人間が増えれば、社会保障費の大幅圧縮による大減税が実現される上に、今まで支

払ってきた年金も大部分が帰ってくる予定になっていることが公表されている。
人間とは現金なもので、こうした不老における実利的メリットが報道されるにつれ、今や世論調査では圧倒的に不老社会に賛成になっているし、特に若い世代では９７％が不老社会の到来に賛成となっている。
さて、しばらく待合室で待っていると、向こう側からトロッコ列車がやって来た。よく見ると窓のない吹き抜けになっていて、なるほど浩介くんが言ってたのも頷けるわね。
これに乗るわけね。

「宇奈月、宇奈月です」
放送と共に、欅平からのお客さんが降りていき、入れ替わりで、あたしと他のお客さんが入る。
ちなみに、あたしたちは普通客車を選んでいて、中には簡素な椅子があった。
「結構固いわね」
座り心地は、木の椅子という感じだわ。
「まあそんなもんだろ」
そして編成の一番前には、オレンジ色の独特の機関車も見える。
心なしか、車体も少し小さいイメージだ。
「この鉄道路線は、一般の鉄道よりも線路幅が小さいらしいな」
「そうなの？」
「ああ、永原先生のメモに書いてあった」
浩介くんがメモ帳を開き、あたしに見せてくれる。
客車の他にオレンジの車両が２両繋がれていて、それが機関車らしい。
「ふむふむ、途中は川沿いに多くのダムが見えて風光明媚らしいな」
川でダム、電力会社、つまり水力発電かしら？
「もしかして電力会社って言うのは？」
「ああ、水力発電らしい。冬は営業していなくて、近くにある徒歩用の

トンネルを歩くそうだ」
浩介くんが、メモ帳を見ながら、左側を向く。
確かに、この山の中、しかも日本海側ともなれば、冬の大雪は容易に想像ができるものね。
とは言え、電力会社にとってみれば、冬にも発電所の作業員は必要なので、鉄道が止まっていたら、歩くしかないと言うわけね。
「黒部ダムから宇奈月まで、多くの水力発電所が軒を連ねているんだ。この列車は欅平までだけど、そこから先も黒部ダムまで鉄道があって、そこは電力会社の専用らしいな」
「ふむふむ」
そんなことを話している間にも、多くの人が乗ってくる。
大半は定年退職して悠々自適の生活を送っている老人や、休暇を取ったと思われる外国人観光客たちだが、ごくたまに夏休み中と思われる大学生と思しき姿もある。
そして、辺り一面はあっという間にうるさい声で包まれていく。
「蓬莱の薬ができたら、こんな光景もなくなるのかね」
浩介くんがポットつぶやく。
「そうでしょうね」
そうなると、観光業界にとっては平日と休日でお客さんの差が激しくなっちゃうリスクがあるわね。
それを補ってあまりあるメリットがあまりにも大きすぎて目立たないだけで、当然蓬莱の薬にもデメリットはあるのよね。
「欅平行きです。まもなく発車いたします。おつかまりください」
しばらく時間が経つと、女性の放送が聞こえてきた。でも車掌さんなのかな？　口調はそんな感じじゃないわね。
ガッタン
そして小さな衝撃と共に、列車がゆっくりと動き出した。
さて、永原先生が薦める黒部峡谷鉄道線、一体どんな感じなのかしら？

# 夏の夫婦旅行2日目　絶景と電力と

「お待たせいたしました。本日は、『黒部峡谷鉄道トロッコ電車』をご利用くださいまして、誠にありがとうございます。これから先黒薙、鐘釣、終点欅平の順に止まってまいります。皆様、是非ともこれから、黒部峡谷と黒部川の雄大な自然を、お楽しみ下さい」

女性の声で車掌さんの放送が響いていく。

やはり、いつもの事務的だけど丁寧な感じの車掌さんとはちょっと違うわね。

何と言うか、観光列車らしくフレンドリーな印象を受ける。

「列車は右手に宇奈月温泉の温泉街をを眺めております。また現在走っている橋は――」

発車して早い時期に、列車は赤い橋に差し掛かる。

下の川は黒部川でこの橋は「新山彦橋」と言うらしい。

「前方に見えますは――」

「うーむ、永原先生のメモに全て書いてあるな」

あのダムは「宇奈月ダム」と呼ばれるダムで、発電に使われているそうね。

「あはは……」

浩介くんが苦笑いしながら、永原先生のメモを使ってネタバレをしていく。

うーむ、さすがにこのネタバレは清々しいわね。

「そうそう、この黒部峡谷鉄道本線には放送された駅以外にも駅があって、これらは全て電力会社の専用駅になっているんだ。それらの駅には、原則止まらないらしい」

そしてまた、浩介くんが先回りでネタバレをしてくる。

「えっと、つまり観光需要がないってことかしら？」

あたしが当てずっぽうで話す。

「まあそういうことだな。一部の駅はたまーに登山客に解放されることもあるらしいけど、安全性の問題もあるから滅多にやらないらしい」

浩介くんが、あたしの主張を肯定する。まあ、確かにそれ以外なかなか考えられないというのが実際のところだと思う。
そういう意味でも、あたしたちはアウェー感が強いと思う。ましてや観光特化列車と業務列車が併存しているわけだし。
いわば別の意味での「お客さん気分」も味わえるわね。
峡谷鉄道なので、当然森や山などにも線路があって、一部の区間はトンネルの中を突き進むことにもなる。
トンネルの中も、よく見ると岩が剥き出しで、恐怖感を覚えてしまう作りになっているわね。
「浩介くん……」
「ああ、しょうがねえさ」
もちろん、右側に見える風景はとてもきれいなことには代わりはない。
やがてホームのある駅が見えてきたが、列車が減速する気配はない。
しかしご丁寧に駅名標はあって、名前は「柳橋」というらしい。
「たった今通過した駅ですが、トロッコ電車には電力会社の関係者も通勤に使っていまして、私達の列車が停まる駅以外にも、こうした電力会社専用駅があります」
「そうそう、ここが電力会社の専用駅だ。ここにはこういった駅が観光客に解放されている駅よりも多く存在するんだ。右手に見える城みたいなのが『新柳河原発電所』って言うらしいぜ」
浩介くんが、永原先生のメモを見ながら解説の人が解説してくれない部分まで解説してくれる。
「なるほどねえ」

列車は更に、進んでいく。
相変わらず見えるのは黒部川と森の絶景と、暗くゴツゴツとしたいかにも「工事現場」といった感じのトンネルの連続だった。
「進行方向右手下の方に見えますのは、おさるさんの移動のための橋でございまして、ダム開発の際に川幅が広がって渡れなくなり、動物

たちの活動範囲が狭まる懸念を見越して、作られました」
案内ガイドさんの声を聞き、あたしたちは一斉に右下を見る。
確かに、人間が渡るには強度もなさそうな、極めて狭く簡素な作りの橋が見える。
今は何者も渡っていないけれど、確かにあの橋は、猿が渡るくらいなら支障はないと思う。
「しかし、川の向こうまで渡る用事が猿にあるのかな？」
あたしにはどうも疑問が尽きない。
猿の知能なら、川を渡れないなら上流などに行ったりしそうなものだし。
「さあ？　山菜探しとかじゃね？」
浩介くんも投げ槍気味にそう答える。
まだ9月ということもあって、山肌は紅葉していないけど、紅葉の季節はさぞきれいだと言うことは、あたしにも分かる。
やがて列車は、もう一つの電力会社専用駅を通過して間もなく、カーブしながらの駅である、黒薙駅に停車した。
「ここ黒薙駅は黒薙温泉の最寄り駅です。実は、宇奈月温泉はここ黒薙温泉の源泉を、配管パイプで引き込んで使用しています」
案内の人が意外な言葉を話す。
つまりさっき入った温泉も、ここから引っ張ってきたってわけね。
「そうなの？」
「ああそうだ。何せここは山奥だからここまで行くのは大変だ。ちなみに、黒薙温泉の配管パイプにおいては、『権利の濫用』という表現が初めて出てくる有名な裁判があったんだ。法学部では必ず習う出来事らしいが、最も詳しいことはここには書かれてないな」
浩介くんがメモ帳を見ながら話す。
配管パイプと権利の濫用って言うくらいだから、地主が何かごねたのかもしれないわね。
まあ、いいわ。
黒薙駅では、温泉目当てと思われるお客さんが数人降りていった。
「左のトンネルには電力会社専用の支線があって、黒薙温泉への近道

として駅員に申し出れば通れたらしいけど、今は通れねえらしい。山道を進めば、黒薙温泉だな」
浩介くんの声に従ってそっちの方を見ると、ヘルメットを被った電力会社の作業員のおじさんたちの姿も見える。
「ふーん、やっぱり色々安全確保に苦労しているのね」
まあ、この鉄道の険しさを見る限り、当たり前のことだとは思うけど。
こっちの支線だって、一般人には馴染みはないけど、工事のおじさんたちにとっては職場へ向かうための大切な足になっているのよね。
「だな」
発車時間になると、車掌さんの放送が入り、列車は警笛を鳴らして再び発車する。
そして今度は、列車がすぐに大きな赤い橋を渡りはじめた。
眼下に見下ろす黒部川はこれまでにないほどに絶景で、あたしは思わず声が出そうになる。
秋の季節の紅葉は、どれほどにきれいだろうか？
遠くの山の風景を見ながら頭に光景を思い浮かべるだけで、感動してしまう。
「川もすげえな、まさに清流という感じだ」
浩介くんの声からも、息を呑む様子が伝わってくる。
「うん」
ガイドさんの案内には耳もくれず、あたしたちは写真を数枚撮る。
この景色の中、列車は徐行してたけど、川を渡り終わるとすぐにまた山の中に入った。
そしてその後、トンネルに入ってしばらくすると、曲がった先にまたホームに駅が見えた。
右側には、「笹平」の駅名標と共に、あたしたちの客車とは全く違い、機関車も1両しか連結されていない簡素な列車が見てとれた。
「あれが電力会社の専用列車だ。機関車が1両だろ？」
「ええ」
よく列車の中を見ると、車内にはヘルメットに青い作業着姿のおじ

さんたちばかりが、リラックスして座っていた。
今日は平日だけど、完成したダムの建設は、休日も作業員が必要なのよね。
「休日も働かなきゃいけない人がいるのよね」
もちろん、休暇はあると思うけど。
「むしろ、休日は必ず働いて、例えば水木が休みとかも面白くねえか？」
「あー確かに、観光好きにはその方がいいかも」
浩介くんが面白い話をする。
確かにそれなら、今のあたしたちみたいに、混んでいるのを避けられそうだし。
ともあれ、この駅もそのまま通過する。
「さて、先ほどの駅ですが、こちらも電力会社専用駅になっておりまして、一般の人は利用できません。電力会社の社員さんたちは、それらの駅にも停車する私達とは違う専用列車を利用することになっています」
さっきもその専用列車と行き違いしたわよね。
大丈夫かしら？
「実はこの黒部峡谷鉄道線は、川にダムを作るために作られた鉄道であります。さて、この黒部峡谷鉄道線は冬は雪に閉ざされ運行することができません。しかし、ダムの管理作業員としては、当然冬も必要になりますが、さて、ダムの作業員たちは、雪の降る冬の間はどのようにして、ダムに通勤しているでしょうか？」
「浩介くん、さっきやったわね」
「ああ」
あたしと浩介くんが余裕の表情をする。
最も、永原先生のメモに間違いがあったらおしまいだけど。
「はい、正解はですね、左手に人が1人入れるくらいの小さなトンネルがありまして、冬の間は寒い中、ダムまで徒歩で通勤しているのです！」
ガイドさんも気合いを入れて話しているけど、事前に永原先生のメ

モを知っているあたしたちは「うんうん」と唸る。
そりゃあ、こんな道路もない雪山の中じゃ、後はもう徒歩くらいしか無いものね。
ちなみに浩介くん曰く、繁忙期には電力会社の専用列車に観光列車も併結するらしい。

列車は再び電力会社の専用駅を通過する。
右手にはダムの設備が見えていて、ダムの上で作業員さんたちが何かを作業しているのが見える。
「まだ未完成なのかしら？」
あたしは、疑問を挟む。
「あーいや、補修作業とかじゃねえか？」
「あー、それがあったわね」
意識を絶景に集中している分、浩介くんとの会話は簡素なものになっていく。
浩介くんも浩介くんで、永原先生のメモには目もくれていないので、多分浩介くんの推測だと思う。
このあたりのトンネルの中は、9月だと言うのに微妙な冷気があるわね。
そうこうしているうちに、列車はやがて、次の鐘釣駅に到着する。
そしてここにも駅員が居る。
安全のためとはいえ、一般客が降りる駅が全て有人駅なのも、この鉄道の値段を上げている一因かもしれないわね。
「間もなく発車いたします」
ガタンッ！
「おや？」
あたしは不審に思う。
発車するのに、どうして列車がバックしたんだろう？
そして、バックして一旦停止し、今度は転線する音とともに別の方向へ向けて走り出した。
「優子ちゃん、この駅はちょっと特殊らしいんだ」

不思議そうな顔をしていたあたしを見て、浩介くんがまたメモ帳の別のページを見て言う。
「行き違いの線路の長さと、列車の長さから、こうやって一旦バックする必要性に迫られたって訳だ」
浩介くんがそんなことを話す。
うーん、言葉で説明すると分かりにくいわ。
「つまり、スペースの都合でこうなったってことかしら？」
「ああ、何てったってこんな山沿いに走らせてるから、こういうこともあるだろう」
イマイチ要領がつかめてないあたしを見て、浩介くんが永原先生のメモ帳に書いてある図を見せてくれる。
確かに、列車の長さを考えたら、この駅に停車するためには、一旦行き止まりの線路に乗り入れる必要があるのが分かる。
確かこういう感じの線路のことを「安全側線」って言うんだったっけ？
永原先生のメモにもそんな用語が出てくる。
ちなみに、ここ鐘釣も温泉の名所で、河原の近くに温泉が湧いていて、いかにも「昔の山奥の温泉」という感じらしい。
ただし、温泉場には遮るついたてなどもなく、見物人や登山客も多いため、もしまた行く機会があったら、水着を持っていく必要がありそうね。
「次は終点欅平に止まります。欅平から先は電力会社の専用線になっておりまして、指定の見学会ツアーでのみ、一般に解放されております。そちらも専用線を使いますと、黒部ダムに通じております」
「専用ツアーねえ」
ということは、また別の機会に行かなきゃいけないってことよね。
「倍率は高いけど、やってる回数も多いから、根気よく葉書を出せばいつかは当選するって話らしいな」
もちろん、今回の旅行ではそのツアーには参加しないことになっている。
浩介くんによれば、今回これに応募しなかったのは、あたしの体が

弱いのと、やはり登山道も進まなきゃいけないため、安全性を考慮してとのこと、そして何より大学の夏休みと応募締め切りを考慮してとのことだった。
「あたしの体の問題なら、見学会は参加できそうにないわね」
「……だろうなあ」
浩介くんがあたしの言葉に賛成してくれる。
「ま、とにかく黒部ダムは明日のお楽しみだ。今はこっちを楽しもうぜ」
浩介くんがにっこりと笑いながら話してくれる。
「ええ」
明日のアルペンルートに、黒部ダムが含まれている。

更に絶景を進む。本格的に山の中と言う雰囲気が増す中、列車はまた駅に停車するが、特にアナウンスはないのでここは欅平ではない。
どうやら、ここもやはり電力会社専用駅みたいだわ。
ふむふむ、駅名標には「小屋平」とあるわね。
お、よく見ると、やはり青い服を着た工事のおじさんたちが頑張っているわね。
「昔はダムの工事現場って言うと、そりゃあ殉職者が大量に出たもんらしくてな」
浩介くんは、メモ帳も見ずに言う。
ダム建設が危険な職場だというのは、あたしたちも知っている。
「あー黒部ダムとか凄そうだわ」
「今は技術の向上で、かなり良くなったらしいぜ」
これらのダム建設現場は昔と比べて機械化の恩恵もすさまじく、またここ数年極度の人手不足が続いたお陰で待遇も良くなってきて、最近では体力自慢の元自衛官を中心に人気の職場にさえなりつつあるらしい。
あたしがまだ優一だった時代と比べると、本当に隔世の感があるわね。
「そうねえ、でも蓬莱の薬が出来たら、ここも更に人手不足になるのか

しら？」
「だろうなあ……国土交通省が言うように、危険な仕事は否応なしに給料を上げないといけなくなるだろうし」
実は、あたしたちと政府との会議でも、国土交通省の方から、「危険職」に対する極度の人手不足を懸念する声が出ていた。
とは言え、ダムにしても発電所にしても、そうした工事現場は定期的に補修作業も必要だし、どうしたって最後の最後に確認するためには人間の力が必要不可欠になる。
しかし、蓬莱の薬が浸透した場合、人間の寿命を決めるのは、「いかにして不慮の事故に巻き込まれないか」ということになる。
そうした時に、いわゆる「ブルーカラー」と呼ばれる職業が敬遠されることは想像に難くない。
それを補うためには、相当な高給が必要になるわけだけど、建設会社も含め、そうした体力がない企業も多い。
国土交通省は、政府に対し、「浮いた社会保障費を使い、そこに補助金を出して欲しい」と要望しているのだ。
「ええ」
話し込んでいると、向かいからは関西電力の専用列車がまたすれ違ってきた。
乗り慣れた様子の工事のおじさんたちを何人か下ろし、この列車も発車する。
あたしはそんなおじさんたちにささやかに敬意を胸に秘め、最終的に欅平駅に到着した。

# 夏の夫婦旅行2日目　終点の山奥

終点の欅平駅で、あたしたちは客車を一斉に降りる。
旅客の大半を占めるジジババたちに続いて、あたしたちも改札を終わらせて駅のホームを後にする。
線路を少し見てみると、やはりあたしたちが普段乗ってる鉄道よりも狭い印象を受ける。
この駅には、電光掲示板もあって、そこにはあたしたちの観光列車だけではなく、「専用列車です」と表示されて、電力会社専用の列車も表示されている。
また、駅ビルの中にはお土産屋さんを含め、様々なものがある。
上層階には食事処があるけど、食事はさっき宇奈月温泉でしたので今回はスルーする。
駅の外に出ると、「黒部峡谷鉄道　欅平駅　ＫＥＹＡＫＩＤＡＩＲＡ」という文字と、その下に黒い石碑で、「国指定特別名勝　特別天然記念物　黒部峡谷　附猿飛ならびに興鐘山」と書かれ、当時の富山県知事の名前が彫られていた石碑が目に入った。
その隣りにあるオレンジ色の建物が「欅平ビジターセンター」で、外国人観光客の姿がよく見える。
またその近くには、天然の石と黒い石碑が合わさった石があり、天然の石には「かおり風景百選　黒部峡谷の原生林」と書かれていて、黒い部分には平成１５年１０月、つまり今から１９年前、あたしたちが３歳の時の宇奈月町長の名義で、「日本最大級のＶ字谷である黒部峡谷の一体の原生林が、平成１３年に環境省によって『かおり風景百選』に選ばれたことを記念」していた。
そして、あたしたち観光客に混じって、ここ欅平でも電力会社の工事のおじさんたちがせっせと働いていた。
「にしても、本当にすげえよなあ」
「うん」
絶景を職場にすると言っても、毎日のように見ていれば見慣れてしまうだろうし、大自然が厳しいのには代わりはない。

今はまだ9月だからいいけど、黒部峡谷鉄道本線が運休になる冬には、ただでさえ寒く雪深いのに地下通路のトンネルを歩いていかなければならないのだから大変だ。
「2年前に八ツ場ダムに行ったときもそうだったけど、ダムの水力発電ってのはすげえよな」
浩介くんが感心するように言う。
「そうよね」
あたしも知っているけど、水力発電は自然エネルギーで古典的な手法ながら、太陽光や風力などとは違い、天候に左右されず、安定的かつ大規模な電力供給が可能という、他の自然エネルギーにはない大きなアドバンテージを持っている。
あたしたちが車窓を共にしたこの黒部川も、黒部ダムを筆頭に数多くのダムを抱え、また今まで見てきたダムは、複数で連動・連携しながら動かすこともできるという。
「小学校の社会科でやったけど、ダムってのは水を蓄えて水不足に備え、台風の時には水を塞き止めて水害を防ぎ、更に水の力で発電もできるって訳だ。急流の多い日本には欠かせねえよな」
浩介くんのダムに関する説明は、もちろんあたしも小学校の社会の勉強で習ったことだった。
これだけのメリットがあるからこそ、殉職者さえ出かねない危険なダム建設が、数多く行われてきたのよね。
「ええ」
川のやや暴れ気味のせせらぎの音を聴きながら、あたしと浩介くんは、小さなトンネルの中を通る。
そしてたどり着いた先には、岩場と川があった。
ここがさっき出てきた猿飛というらしい。
「ここから更に山奥に進むと、別の温泉があるらしいな」
浩介くんが、永原先生のメモを片手にそう語る。
「あたし、登山は苦手だわ」
間違いなく、へばる自信があるわ。
「だろうなあ、俺も林間学校の比較的緩い登山道はともかく、この辺の

道をおんぶできる自信はねえな。噂によると比較的緩いらしいが、優子ちゃんをおんぶしていくともなれば話は別だものな」
そもそも、地理的にも良く分からない山道をおんぶして登るのはリスクが高いものね。
「でも代わりに、ほらあそこ。足湯があるぜ」
浩介くんが、近くの小さな建物を指差す。
確かに、足湯っぽい雰囲気が見えるわね。
「本当だわ。行ってみようよ」
あたしが浩介くんにそう言うと、浩介くんが前に進み始める。
独特の水の音を聞くと、そこにあったのは「欅平園地足湯」だった。
「協力金が必要か」
もちろん、小さな足湯ということもあって協力金はとても安い。
あたしたちは財布を取り出してお金を入れ、靴と靴下を脱いで足湯に浸かる。
ちなみに、今ここにはあたしたちの他には誰もいない。
「うーん、暖かいわー！」
やはり一番冷える足元に温泉が入るというのは、全身のお湯とはまた違う暖かさがある。
更に、靴と靴下だけでいいので、お手軽なのも魅力よね。
そして――
「優子ちゃん、肩揉んであげるよ」
「うん、ありがとう」
浩介くんが足湯から一足先に上がると、あたしの後ろに回り込んでくれる。
ぐいっ、もみもみ……
「うーん気持ちいいー」
足湯に浸かりながら肩揉まれるの最高だわ。
あー気持ちいい。
「この辺かな？」
こりっ……こりこりっ……！
「痛っ、んー、そこもっとお願いー」

浩介くんが、今一番こっているところを見つけたのか、そこを重点的にもいでくれる。
浩介くんのマッサージはいつも上手で助かっている。
「よしよし。ここをぐいっと」
浩介くんが拳を握って指の間接であたしの肩についているしつこいこりをほぐしていく。
「んぁ……あー、いい、んぅ……気持ちいいのおー！」
浩介くんのサービス満点のマッサージにあたしも満足感で一杯になる。
一通り肩と首筋をほぐしてもらったら、あたしは靴下と靴をを履き直して立ち上がり、足湯から出る。
「さて、折り返すか」
「うん」
浩介くんが時計を見ながら「折り返す」と言う。
あたしも時間的にそろそろいいかなと思ったので賛成し、駅舎の前まで折り返す。
次の旅客列車を逃すと、それなりの時間待ちぼうけなのであたしたちは先に手前の椅子に座ることにした。
あたしたちが座っているのを見たのか、帰りの列車を待つ人たちが集まってきた。

「えー間もなく、宇奈月温泉行きの改札を始めます」
しばらくすると、所定の時間になったのか、駅員さんの放送と共にあたしたちは止まっていた客車の「普通客車」に乗り込んだ。
「浩介くん、楽しかったわね」
絶景を堪能できたのは、とてもいい思い出だった。
でも、明日の「立山黒部アルペンルート」が本番なのよね。
「ああ、でもここから行きと同じだけ、時間をかけなきゃ行けねえぜ」
そう、行き止まりだから、結局富山に引き返すには行きと同じルートをたどることになる。
新黒部駅から、黒部宇奈月温泉駅に乗り換えて、そこから富山駅ま

で北陸新幹線を使えば、富山地方鉄道線を使い続けるより相当の時間短縮が見込めるけど、今回は見送ることにした。
あたしたちは、行きと同じように、電力会社専用駅や行き違う列車、そこに乗ってる乗客たちを眺めながら、鐘釣駅では行きと同じく一旦バックしての発車をし、次の黒薙駅では温泉からの帰りのお客さんなどを拾いつつ、列車は再び絶景を走りつつ宇奈月駅に到着した。
ここから一直線に数分歩くと、富山地方鉄道本線の宇奈月温泉駅に到着する。
あたしたちは券売機で、富山駅までの切符を買ってホームへと出る。
「お、行きとは列車が違うな」
浩介くんが、帰りに乗る電鉄富山行きの電車を指差す。
「うん、そうね」
帰りの列車は行きとはタイプが違い、こちらは新幹線などと同じように、列車の進行方向に座席が備わっている。
ちょうど1列が2人になっているのであたしと浩介くんも、隣り合って座ることにした。
車内のお客さんたちを見てみると、平日真っ盛りとあってか、やはり現役を引退したと思われる中高年の観光客の姿が多く、外国人観光客の姿は、そこまで多くなかった。
「電鉄富山行き、間もなく発車いたします」
ちなみに、帰りもまたワンマン列車だった。
行きとは進行方向が逆になり、また見えてる景色左右違ったけど、それだけで印象は大分変わった。
だいたい富山に帰るまでに要した時間は１００分程度だったと思う。
途中の新黒部駅で中高年の方々は多くが降りて、そこからは徐々に富山に近づくに連れて地元住民が増えていくという感じだった。
「電鉄富山、終点です」
アナウンスの音とともに、あたしたちは荷物をまとめ、電鉄富山駅へと戻ってきた。

あたしたちが富山に戻った時には、外はすっかり夕方になっていた。
もしかしたら、富山近くで地元住民がいくらか乗ってきたのも、いわゆる「タラッシュ」とも微妙にぶつかっていたかもしれないわね。
「あー戻ったー！」
朝旅立ったホテルへと帰還すると、浩介くんがベッドに思いっきり横になる。
「優子ちゃん、分かってるとは思うけど、明日は早いからな」
「うん」
浩介くんが、また注意を促してくる。
もう何度も聞かされたわよ。
「とにかくこのアルペンルートは、平日でも繁盛するくらいの大人気観光スポットだ。場合によっては交通機関が数時間待ちとかになって、その日のうちに抜けることが不可能になる場合もある。最も、さすがに今日みたいな平凡な平日なら大丈夫だとは思うが、念には念を入れてだ」
「うん、分かってるわ」
明日の予定としては、朝一番に富山駅を出て、立山駅を目指す。
ここからまずケーブルカーで美女平へと行き、そこから山道をバスで登る。
バスの終着地が室堂で、ここからトロリーバスを使って山の中をトンネルで進み、山の向こう側の大観峰と呼ばれる場所へとたどり着く。
そこから黒部平と呼ばれる山の中腹まで一気にロープーウェイで降り、黒部湖までケーブルカーを使って降りると、黒部ダムにたどり着く。
そこから黒部ダムを端から端まで歩いて、今度は電気バスで扇沢と呼ばれる場所に行く。
扇沢に到着するとまた路線バスがあって、長野県の信濃大町駅に抜けることが可能になる。

これについては、既に何度も口頭でレクチャーを受けている。
「信濃大町からは大糸線だ。とりあえず、信濃大町から特急に乗ることになってるが、もし逃しても松本駅に行けば都内まで直通している特急がある」
浩介くんが、鉄道の広域路線図を広げて解説してくれる。
「ええ、分かってるわ」
アルペンルートがどの程度混むかは不明だけど、特急列車は時間に余裕を持って予定を組んでいる。
もし、道中が空いていて、時間が余りそうならば、黒部ダムで時間を潰すことになっている。
「はいこれ」
浩介くんが、あたしに1枚の大きな紙を渡してくれる。
「えっとこれは？」
「開いてみて。アルペンルートの時刻表だよ。明日はこれを見ながら、慎重に予定を立てて進むぞ」
浩介くんのしゃべり方にも、気合いが籠り始める。
雄大な景色故にたっぷりと楽しみたいが、一方で時間に遅れてしまえば家に帰ることが難しくなりかねない。
「はい」
あたしは浩介くんに言われた通り、アルペンルートの時刻表を広げる。
上の方には地図もあって、ご丁寧に乗り物や標高などが書かれた絵も書かれている。
「警戒すべきは室堂だ。アルペンルートの中でも２０００メートルを越える最高地点にあるから高山病にも気を付けたいし、何より2日で通り抜ける人はここに宿泊する客も多い」
室堂は立山連邦の登山客の拠点でもあり、日本唯一の氷河のある山にも程近い。
日本最高の温泉宿もあり、また雷鳥の住みかにもなっていて、ただ絶景であるにとどまらない。
あたしたちは、アルペンルートを1日で一気に通り抜ける予定だけ

ど、中高年層などは途中で1泊することが多い。
「絶景だからもちろんある程度の時間は滞在したいが、余りに長居をしすぎると、弥陀ヶ原室堂の宿泊組にぶち当たる。だが大観峰と黒部平を抜け、黒部ダムまで行ってしまえば、ほぼ安心と言えるだろう」
浩介くんが作戦会議さながらにあたしに細かく指示をする。
「更に途中は観光地の上に山奥と言っていい場所だ。食事や飲み物はどれも高い。できれば今日コンビニで明日の飲み物と朝食は仕入れたい」
浩介くん曰く、立山駅で少し時間があり、またレストランの営業が早いので、それを勘案すれば朝食を立山で取れないこともない。
しかし、あたしの食べる速度を鑑みるとリスクがあるので、素直に明日の朝コンビニで買って、地鉄電車などで食べるのがいいだろうとのことだった。
「よし、じゃあ夕食にするぞ」
「はい」
作戦会議が終わると、浩介くんは早速夕食をあたしに指示し、あたしは浩介くんの半歩後ろを歩く。
頼もしい浩介くんに、引っ張られているこの感覚が、最高に居心地がいいわ。
ああ、やっぱりオスとメスの本能には抗えないんだってしみじみ思うわね。
あたしたちは、ホテルで夕食を取る。
ちなみに、夕食は相応に豪華なものだった。
地産地消を掲げた料理は、どれも美味しかった。

「ふう、よし優子ちゃん、少し早いけど寝ようか」
「うん、そうよね。でもさすがに眠れないかな?」
時刻はまだ7時代で寝るというにはさすがに早すぎる。
とは言え、明日起きる時間を考えると、そろそろ眠りたいのも事実。
「よし、じゃあ運動をしよう!」
浩介くんが、またなにか悪巧みをしている表情をする。

もちろん、そう言う表情をした時にすることは決まっていて――
すりすりすり
「あーん！　もう、またお尻触って！」
浩介くんのいやらしい手つきがお尻の触覚から脳に直接伝わってくる。
「優子ちゃんはズボンだとお尻強調されるんだよ。特に短くて青いのだと、我慢するのも大変なんだぜ！」
そして浩介くんが、また「性的な格好をしている優子ちゃんが悪い」と言い訳する。
「もう、浩介くんったらあたしが何着ても同じこと言うじゃないの！」
あたしはいつもの浩介くんに業を煮やし、思わず本音を言ってしまう。
「何だ気付かれてたか」
半笑いの浩介くんは全く悪びれた表情もせず――
すりすりすり
「もうっ！」
――あたしは浩介くんに、今度は両手でお尻を撫でられ続けた。
「でもよ。実際こうすれば、俺も優子ちゃんも良く眠れると思うんだ。明日は人も多いから、家に帰るまで我慢せにゃならんしな」
浩介くんが、また理論武装をしながらあたしにねだってくる。
要するに、「我慢できない」ということ。
もう、朝あれだけ干からびるまでおしおきしたはずなのに。
「――分かったわよ」
あたしもあたしで、メスの本能に忠実に、浩介くんに従順な女の子になる。
あたしは浩介くんに優しく押し倒され眠気を誘うまで、たっぷりと快楽地獄を味わわされた。

# 夏の夫婦旅行3日目　遙かなる立山へ

ピピピピッピピピピッピピピピッ……!!!
いつもよりも遥かにけたたましい目覚まし時計の音が鳴るのが聞こえた。
「ふえ？」
「んぅ」
あたしとはそれを聞いて起きると、手を伸ばして目覚まし時計の音を止める。
「うー、こうひゅへひゅん」
「ゆひゅこひゃん……」
視点が定まらない。
というよりも、これは夢かしら？　現実かしら？
あたしはもう一度、下の柔らかい何かに倒れ混む。
真っ暗な夜景が、一瞬外に見えた。
ピピピピッピピピピッピピピピッ……!!!
「うあっ!!!」
さっき消したはずの目覚まし時計が、また大きな音を鳴らしていた。
あたしがそれをつかんで音を消すと、どうやらそれは、あたしがいつも使っている目覚まし時計ではなく、浩介くんのスマートフォンだった。
「あれ？」
あたしは首を左右に振る。
ようやく目が冴えてきた。
浩介くんも目を擦らせながら何とか起きていく。
「優子ちゃん、起きた？」
「うん」
浩介くんがスマホを見ながら現在時刻を確認する。
「よし、セーフ。でもあと1時間半くらいしかねえからな気を付けてくれ。それから、二度寝防止のために目覚まし機能はそのままだぞ」

「はい」
この手の朝で一番怖いのが二度寝と言ってもいい。
そうならないためにも、まずは浩介くんが部屋の明かりを一気に全開にして、明るい部屋になった。
「じゃあ優子ちゃん、隣で着替えてきて」
「ええ」
浩介くんに言われるまでもなく、あたしは自分の荷物をお風呂場の脱衣場に持っていき、今日の服装に着替える。
今日はシンプルな白い長ズボンに灰色の服、頭の白リボンはもちろんあるけど、高所の寒さ対策に黒いコートも羽織ることになっている。
黒いコートはホテルを出るときに着る予定なので取りあえず出しておき、あたしは着替え終わったら歯磨きをする。
コンコン
「優子ちゃーん、歯磨きしたいんだけど」
「あ、はーい今開けるわー」
既に着替え終わっていて、かつ脱いだ服も仕舞ってあったので、あたしは快く鍵を開けて浩介くんを通す。
ちなみに、歯磨き中も、しつこいくらいアラームが鳴り響いていた。
浩介くんによれば、「5分ごとに鳴るようにしている他、ホテルのモーニングコールも合わせている」とのことだった。

「おし」
あたしと浩介くんが歯を磨き終わったら、ホテルに忘れ物がないかもう一度確認し、いつでも出立できる状態にしつつ、余った時間はテレビで潰す。
「浩介くん、やけに張り切ってるわね」
あたしが何の気なしに浩介くんに話しかける。
「ああ、何てったって山に行くわけだ。観光地として整備されているからって油断しちゃいかん。こういう時こそ、旦那の俺がきちんと優子ちゃんをリードして守ってやらねえとな」

「もう、あなたったら、頼もしいんだから」
あたしの惚れた心をつかんで離さない浩介くん。
妻のあたしが頼もしい夫の一歩後ろを進んでついていく。
全体としては、妻が主導権を握った方がうまく行く家庭の方がむしろ多いとは昔から言われているけど、あたしの家はそうじゃない。
旦那が頼もしいなら、奥さんだって安心だものね。

「えー、たった今入ったニュースです。国際反蓬莱連合が国際スポーツ仲裁裁判所に対して、『蓬莱の薬を、禁止薬物に指定する』ように訴えを起こしていた問題で、先ほどスポーツ仲裁裁判所は、反蓬莱連合の訴えを退けました。繰り返します。国際反蓬莱連合が――」
テレビのニュース速報で国際反蓬莱連合の訴えが退けられたことを報じていた。
「浩介くん、やったわね！」
あたしも浩介くんも、安堵の表情を浮かべる。
これで生き生きと、アルペンルートを楽しめるわね。
「ああ。これで安心だ」
テレビでは、国際スポーツ仲裁裁判所の本部の映像が流れていく。
「――裁判長は、『もし蓬莱の薬を禁止薬物とすると、完全性転換症候群の人を排除することになってしまう。また完全性転換症候群はその性質上、他の選手と比べてあまりにも身体的に有利である。今のところ患者数が少ないためトップ選手は出てきていないが、もし出てきた場合、他の選手と著しい不公平が生じる事実は否定できない。また、蓬莱の薬のその効力を考えれば、仮にスポーツの世界で禁止した場合、将来的に著しい人材の流出を招く恐れがあるばかりか、スポーツ団体の分裂にも繋がりかねない。よって、選手たちが蓬莱の薬を使うことは、やむを得ないこと』としました」
こんなに早く結論が出ることにも驚きだけど、テレビ報道で流れている判決内容にしたがえば、国際スポーツ仲裁裁判所は、あたしたちの主張を全面的に認めたに等しい判決だった。
そして、テレビのコメンテーターたちも、「当然の判決」「あの団体

は何を考えているのか」といった意見が殺到する。
海の向こうの遠い国々でも、徐々に反蓬莱連合が追い詰められていくのが分かる。
やはり、蓬莱教授は、「試し」と言っていたけど、まさに「ここぞ」というタイミングで、蓬莱の薬の非融通カードを切ったと思う。
蓬莱教授が持っている、「蓬莱の薬を融通しない」という交渉カードは余りに強力で、使いすぎれば反発もあってひどい悪意に晒されるだろう。
しかしそれでも、自身の力に溺れ、身の程知らずで増長しきった相手に使う必要もある。
「浩介くん、やっぱりあの時、蓬莱教授がカードを切ったのは正しかったと思うわ」
蓬莱教授は、自らの意のままに操れない。いや、自らと利害の対立する団体で、最も厄介なのは誰かを、見抜いていた。
それが、増長していたマスコミ関係者たち。特に怖いもの知らずで知られ、多くのスキャンダルを書いてきた週刊誌の関係者たちだった。
蓬莱教授は永原先生と共謀して、その週刊誌を罠に嵌め、増長しきっていたマスコミに対し、恐怖を植え付けた。
しかも蓬莱教授はあくまでも民間の個人だ。
つまり、マスコミ側は「権力者による不当な弾圧」という反撃カードが使えない。
最も、もし今使えば、「政府の後ろ楯のもと行っている」として、反発されたかもしれないわね。
そういう意味でも、絶妙なタイミングだったわ。
「だろうなあ」
浩介くんも納得した風に頷く。
「もしあのカードを使うタイミングが遅れていたら？」
「多分、今ほどうまくは行ってねえよなあ」
「でですね、蓬莱の薬の世論調査、我が国では国民の９５％以上が支持

している蓬莱教授の不老研究なんですけれども、海外の世論調査が無いんですよね」
コメンテーターさんが、不思議そうに話す。
そう、世論調査の結果が現れてこない。
そこが不安要素なのよね。
「もちろん、蓬莱の薬のことは海外でも報じられています。例えばアメリカではですね『人類の未来を大きく変える薬になるだろう』と報じています」
コメンテーターさんによれば、海外のメディアも、蓬莱教授について否定的な報道はほとんどしなくなったという。
それは恐らく、日本のマスコミと同じく、蓬莱教授からの報復措置を恐れているためだと思う。
「やはり日本で9割以上の圧倒的歓迎ムードの中採用ともなりますと、いくら自国で反発があったとしても、日本の1人勝ちを防ぐためはですね、他の国も受け入れざるを得ないのが実情だと思います」
コメンテーターさんは、専門家でなくても分かりそうな分析をテレビで話す。
正直、芸能人でもできそうな話で宝の持ち腐れだわ。
「以上ここまでのニュースでした」
テレビのアナウンサーさんの発言と共に、ニュースから気象情報へ変わる。
今日の天気、富山のテレビということで、立山の天気も予報してて、天気は晴れだった。
「よし、ちょっと早いがそろそろ行くか」
「うん」
テレビの時計を見ながら、浩介くんがそう答えると、あたしたちは荷物を持って最終確認をし、ホテルをチェックアウトする。
立山に行く人が朝早く出るのが珍しくないのか、ホテルの人が既にフロントに立っていた。
今日の出発地は、昨日と同じく電鉄富山駅、だが向かう方向が違う。
朝の富山の街は、心地いい涼しさと、とても少ない人通りだった。

あたしたちは、まずは立山駅までの切符を買う。
「立山行きはこっちだ」
浩介くんが、昨日とは違い、左側の方向を目指す。
そこには既に、立山駅行きの電車が止まっていた。
「あれ？　浩介くんこれ」
一番左側の壁に掲げられていたものが目に入る。
そこには様々な列車名や種別の名前が書かれた案内表示のボードが展示してあった。
「これは、この鉄道で運転されている列車の案内ボードだよ」
「いや、それは見れば分かると思うけど、どことなく昔の雰囲気よね」
駅名標や案内表示はともかく、案内ボードの上部にある広告が、とても古い印象を受ける。
いや、もしかしたらこれはわざとなのかもしれないわね。
そういう雰囲気で、観光客を釣る……みたいな？
「だなあ。さ、車内に入ろうぜ」
「うん」
あたしたちが乗り込んだこの電車は、快速急行の立山行きで、昨日とは違い一部の駅にのみ停車する速達列車だ。
要するに、あたしたちみたいに立山へ向かう早朝の観光客を、主にターゲットとしている訳だ。
あたしたちは、クロスシートに隣り合わせで座り、発車を待つ。
車内は発車時間が近付くと共に、徐々にお客さんも増えていく。
やはり昨日と同様に、定年退職をしたと思われるジジババ集団が乗ってくるお客さんの大半で、彼らの装備も似たり寄ったりだった。
しかし中には、明らかに日本語でない会話をする人たちもいる。
キョロキョロしたあたしを見た浩介くんが、再びアルペンルートの時刻表パンフレットを見せてくれる。
「ここにいる乗客の全員が室堂まで直行するとは限らない。何故なら、途中で降りる地元のお客さんもいるだろうし、何せ立山駅からは美女平には向かわずに称名滝行きのバスが出ている」
「称名滝？」

また、新しい地名が出てきたわね。
でも実際、このパンフレットにも、立山駅からのバスとして、称名滝に行くバスが存在していて、時刻表が書かれている。
「ああ、称名滝っていうのは三段式の滝になっていて、それらを合わせた落差は日本一と言われていて、常願寺川の源流にもなってる名高い滝なんだが……そこに立ち寄ってたら室堂で宿泊組に捕まって家に帰れねえ可能性が限りなく0に近いくらいのレベルだが出てくる。俺たちは横目に見るだけだ」
「そうね」
まあちょっと残念だけど、永原先生が言う「アルペンルートを1日で一気に抜ける魅力」というのも知りたいものね。
「お待たせいたしました。快速急行立山行き間もなく発車します。停車駅にご注意ください次は寺田に止まります」
そうこうしているうちに、発車時間になっていたらしい。
車掌さん思われる放送からドアが閉まって列車が発車する。
「お待たせをいたしました本日も地鉄電車をご利用くださいましてありがとうございます。快速急行立山行きです、次は寺田、寺田です。これから先寺田、五百石、岩峅寺、千垣の順に止まって参ります。なお千垣から先は終点立山まで各駅に止まります」
どうやら今日この列車はワンマン列車ではないらしい。
昨日早く寝たお陰で、あたしたちは目が冴えている。
昨日とほぼ同じルートを途中まで取る。
昨日停車していた駅も、通過する。
ちなみに、時刻表を見た限りでは、快速急行と言っても、1日に1本早朝にあるだけだ。
列車は、やがて寺田駅に到着する。
そしてここから、立山線に入る。
「結構速いわね」
列車は古いけど、結構飛ばしている。
「まあ、快速急行って言うぐれえだもんな。ちなみに、他の時間帯には急行も走っている他には、有料特急も何本かあるらしいな」

浩介くんが流れ行く車窓を見ながらそう話す。
そう言えばこの車両もやっぱり、大手私鉄のお古なのかしら？
昨日の浩介くんの話では、関西私鉄の中古列車も走っているらしいけど。
「へー、有料特急って地方私鉄には珍しいのかな？」
「まあ、特急料金取るような列車なら、別に列車を保有しなきゃならねえからな。長い距離を走ってるＪＲならともかく、制約のある私鉄ともなりゃ、ある程度経営に余裕でもなきゃできんだろ」
浩介くんがそんなことを話す。
車内はといえば、「紅葉してるかな？」「さすがにまだだろ」とか「称名滝」とか「室堂」とか「絶景」とか「黒部ダム」とか、そういった単語の会話で埋め尽くされている。
あたしたちはと言えば――
「今日中に解決してよかったわね」
「ああ、取りあえず一安心だ。たった今気づいたんだが、昨日寝ている間に蓬莱教授からメールが届いていたんだ、どうやら連中は――」
そう、朝のニュースの確認の話に盛り上がっていた。
「資金繰りに苦しんでいて、寄付を無心しているんでしょ？」
あたしも、たった今携帯を確認して気づいたわ。
アラームは鳴らしていても、メールに気付かないってのも変な話だけど。事実だから仕方ないわ。
「ああ、その通り」
朝のニュースであったように、今反蓬莱連合は、資金的にも追い詰められている。
元々国内で失敗し続けたせいで、莫大な赤字を抱えているらしい。
更に明日の会事業も、事実上停止しているが、遺族に払う賠償金で、現在も苦しめられているそうだ。
「もはや引くに引けねえだろうな。蓬莱の薬を今更『飲みたい』とも言えねえだろうし」
「ええ、さすがのちょっとかわいそうかも」
蓬莱教授と永原先生を擁するあたしたちに、更に政府までも味方に

ついて、彼らが勝てるわけがなかった。
列車は寺田駅、五百石駅、岩峅寺と続いて停車し、徐々に市街地を抜け、森林に差し掛かる。
「ここからは、主に常願寺川に沿って進むんだ」
いつの間にか永原先生のメモ帳を取り出した浩介くんがそんな話をする。
永原先生のメモによれば、常願寺川は、２０００メートルを越える高所に源流がありながら、総延長は６０キロ足らずというとてつもない数字になっている。
これは、日本三大急流よりも更に急流で、一説によれば「世界一の急流」とも言われていて、よく外国人が日本の川を見て「これは川ではない、滝です」と言ったというエピソードは、この常願寺川が元になっているという。
「すごいわねえ」
「ああ。急流が多いと氾濫も起きやすいし、水害は深刻になる。一方で、水の流れが速いから水力発電所は作りやすいということだ」
浩介くんがまた小学校の社会科の復習をしてくれる。
そう言えば、日本の河川の特徴ということで、似たような話は中学校の時にも行ったわね。
「じゃあ今回の黒部ダムも？」
「あそこはまた別だ。当時はあの場所に到達することさえ困難だったんだからな」
そう言えば、そんな話だったわね。
快速急行は、途中駅のみの停車だけど、時間帯も時間帯なためか、途中の駅で乗り降りする人はほとんどいなかった。
「やっぱり、朝早い時間だものね」
「ああ」
ちなみに、「立山黒部アルペンルート」というと、立山から扇沢までの間というのが一般的だが、富山駅から立山駅までの地鉄電車の区間と扇沢から信濃大町までのバスを含んだり、立山から信濃大町までの区間をアルペンルートと呼んだりもするそうだ。

観光ルートということもあって、富山から信濃大町までは１０００円でも足りない位には高額になっている。
これも観光と環境の両立のために必要なことで、黒部峡谷鉄道もかなりの値段だったけど、これらはきちんと納得できる高値と言えるだろう。
電車はどんどんと山あい深くを進んでいく。
あまりお腹が空いてないので、予定を変更して、電車の中ではなく室堂までの間に食事にすることに決定した。
もうすぐで、終点の立山駅に到着する。
立山駅までは地鉄電車以外にも自家用車などで到達できる他、ここに宿をとった人もいるだろうから注意しないといけないわね。
「そう言えば、冬はやってないんでしょ？　それじゃあこの駅は冬は閑散としているのかしら？」
あたしが疑問を浩介くんに投げ掛ける。
「まあ、確かに冬シーズンは人は少ねえけど、一応冬はスキー場へのバスが運転されているし、立山駅の間にも、少ないながら温泉があるんだ」
「へー、一応冬にも楽しめるのね」
「もちろん、登山者になれば、真冬の立山に突撃する人も多いさ。俺はごめんだけどね」
「あはは……」
こんないかにもな山岳地帯、しかも日本海側を真冬に行くなんて、体力のないあたしにとっては真っ平ごめんだわ。
「ご乗車お疲れさまでした。間もなく終点立山です。どなた様も落とし物、お忘れ物のないようにご注意ください。本日は富山地方鉄道をご利用くださいまして誠にありがとうございます――」
「あなた」
「ああ」
終点の放送が聞こえてきたら、あたしは浩介くんにほぼ目配せで視点を合わせ、荷物を持って電車のドアの前に移動する。
他のジジババと外国人観光客も、あたしたちに続いて、列の後ろに

並ぶ。
　さて、いよいよ日本屈指の大規模山岳観光地、立山へと乗り込む時がやってきたわね。

# 夏の夫婦旅行３日目　天にとどく

ドアが開き、あたしたちは改札を済ませる。
案内表示には「ケーブルカー乗り場」があるので、あたしたちは容易に切符売り場に到着することができた。
「扇沢まで、大人２名でお願いします」
「はい」
浩介くんが代表して、窓口の人に所定の金額を払う。
既にここに前日泊まっていた人々が合流していて、まだ朝の６時台だというのに、駅は活況を要している。
一方で、ケーブルカーの発車まではまだかなり時間があるので、あたしたちは駅のベンチに腰かけて、昨日コンビニで買ったご飯を食べる。
「美女平はハイキングコースになっているらしいな、とは言え、ここで降りてくれる人はほとんどおらんだろうな」
浩介くんが、次の予想を話す。
室堂の標高は２４００メートルを越えている。
美女平から室堂までには、「弥陀ヶ原」と「天狗平」と呼ばれる名所があって、特に弥陀ヶ原はカルデラや湿原もあって、それなりの人気名所になっているから、降りるお客さんも多いだろうというのが浩介くんの見立てだった。
他にも、室堂までには降車専用の地点がいくつもあるが、こちらの方は殆ど期待できないとのことだった。
「さ、早め早めだ。一気に通り抜けるためにも、並ぶか」
「うん」
あたしたちはベンチでご飯を食べ終わると所定のゴミ箱に捨てて、ケーブルカー乗り場へと急ぐ。
ケーブルカー乗り場には、既に数人の観光客が雑談しながら並んでいて、あたしたちはその後ろに並ばせてもらう。
ケーブルカーという乗り物に乗ったのは、優一の頃に漫然とした記憶があるのみ。

乗り場からして階段状になっていて、いかにもな急傾斜が続いている。
そしてあたしたちが普段使ってる鉄道とは違い、線路の真ん中には太いロープのようなものが張られていた。
「本当に上れるのかしら？」
あまりの急斜面に、あたしは思わず不安になってしまう。
「大丈夫さ、ケーブルカーのあの太いロープで２つのケーブルカーを繋いでいるんだが、もちろん重さの安全ラインは念には念を入れてるさ」
浩介くんが冷静な顔で話してくれる。
「あはは、そうよね」
本当に杞憂だわ。
逆に言えば、上からケーブルカーが降りていく力は、このケーブルカーが上る力にも応用されている。
ケーブルの長さが一定なので、２つのケーブルカー同士の距離は変わらない。
「お待たせいたしましたー」
係員さんの一声と共に、ケーブルカーへの乗車が解禁になる。
よく見ると後ろはとてつもない行列で、乗りきれるか不安だわ。
あたしたちは、当然一番前を陣取る。
上を見上げると、とてつもない傾斜が更に急に見える。
係員さんが、ケーブルカーの一番前の乗務員スペースに入る。
「実はケーブルカーってのは、運転は別の場所でするんだ」
浩介くんが、また永原先生のメモ帳を見ている。
「へえ、じゃああの人は運転士さんじゃないのね」
「そそ、前方を注視するための、言わば車掌のようなものさ。ケーブルカーには動力がないんだよ」
浩介くんが借り物の知識であたしに自慢してくる。
本当にもう、男の子らしいわね。
「なるほどねえー」
「まもなく発車です。揺れますのでお捕まりください」

あたしたちは座れているけど、それでもやや警戒する。
ブー！
大きなブザー音と共に、扉が閉まる。
そして前方の車掌さんの動作とは無関係にケーブルカーが動き出す。
ケーブルカーは、この急勾配も楽々と言った感じで登り続ける。
「皆様おはようございます。本日は立山黒部アルペンルートをご利用くださいまして誠にありがとうございます。この車は、美女平まで参ります。美女平からは室堂行きの観光バスにお乗り換え下さい」
係員さんがマイクを出して全体に放送する。
よく見ると、ケーブルカーは立ち客も多数出ていて、ほぼ満員に近い状態になっている。
時間帯も時間帯なのか、構成員は殆どが６０代くらいの老人たちで外国人観光客の姿はそこまで多くない。
とても平日の早朝とは思えない人だかりだった。
もし休日とかに来ていたら大変なことになっていたことは想像に難くないわね。
本当に、どこから湧いてくるのかしらこんなたくさんの人。
「美女平の由来は、立山連峰を開山した佐伯有頼の婚約者として、美しい姫がいました。姫は彼に会いたい一心で立山に登りますが、追い返されてしまい、下山途中に一本の杉に祈り、恋が結ばれたという『美女杉』に由来します。『美しき御山の杉よ、心あらば、わがひそかなる祈り、ききしや』と3度唱えると恋が成就すると言われています。またもう一つの伝説として、立山は山岳信仰と共に女人禁制ともなり禁を破った尼僧が杉に変えられてしまったという伝説もあります」
「あれ？　永原先生って女人禁制の場所には入らない主義だったわよね？」
もう大分昔になるけど、永原先生からそんな話をちょろっと聞いたことがある。
「あーうん、実はこのメモ帳の先頭に書いてあるんだけど、永原先生がここに来たのは今から１２年前で、当時の永原先生は、協会の会員た

ちから、『どうしても会長とも一緒に行きたい』と言われて、断り切れなかったらしい」
浩介くんが、そこの部分を見せてくれる。
永原先生は戦国時代の人とあって信心深く、女人禁制が解除された後も、それらの土地に足を踏み入れることを憚っていた。
このメモによると、「バスに乗った上に著しく観光地化したため、山の神聖さが失われたのでセーフ」という、本人もそう認める位には、極めて苦し紛れの乱暴な話で自分を納得させたらしい。
「そうだったのね」
もちろん、無宗教のあたしには関係ないし、仮にあたしが「有宗教」だとしても、女人禁制はとっくの昔に解除されているので、やはり関係ない。
永原先生が変なこだわりを持っているだけ。とも言えるわね。
「現在、美女平は緩やかなハイキングコースとして、初心者やお年寄りでも、気軽に山の自然と野鳥を楽しむことができます。お時間ございましたら、是非お立ち寄りください」
ともあれ、今は美女平のハイキングはいいわね。
野鳥は魅力的だけど。
ケーブルカーはゆっくりと登っていき、上の方に到着すると、操作パネルと思われる何かをじっと見ている作業員さんがいた。
「ほら優子ちゃん、あれが運転士だ。さ、ドアが開くぞ」
「はーい」
浩介くんが先に進み、あたしも続く。
人の数が多いのではぐれることだけは無いようにしたいわね。
「ふう」
ケーブルカーを降り、あたしたちは通し切符を係員さんに見せる。
案内表示に「バス乗り場」とあったので、すぐに場所が分かった。
「あれ？　人が増えてるわよ」
一番早いパターンの接続を使ったはずなのに、室堂行きのバスを待っている人がたくさんいた。
「ああ、恐らくもっと速いケーブルカーに乗ったか、立山をもっと早く

出て、ここまで歩いてきたんだろう」
浩介くんがそう推測するように、前に並んでいた観光客の多くが、リュックサックなどを始め、登山器具を装備していた。
室堂行きのバス、うーん、バスの広さも考えるとこの行列で座りきれるかしら？
「優子ちゃん不安？　多分大丈夫だよ。バスは大型だからね」
浩介くんがあたしを安心させるように言う。
列がだんだんと前に進む。どうやら、既にバスに入り始めているらしい。
「切符を拝見させていただきます」
こちらでも係員さんによる検札が行われていて、あたしたちは同じように扇沢までの通し切符を見せ、通行を許された。
駅舎の外に出ると、荷物を下ろしてくつろいでいる観光客が多数いた。
どうやら、あそこで列整理してしまうらしいわね。
「よし、これで勝利確定だ」
浩介くんが「よしっ」とガッツポーズをする。
ここで足止めを食らうと、更に大きな時間ロスになりかねないと懸念していたのだろう。
道路には、「ハイブリッドバス」と書かれた大型バスが止まっていた。
これを室堂まで乗り通すことになる。
「お、これじゃねえか？」
浩介くんが、掲示を指差す。
そこには、「美女杉伝説」と書かれた掲示板と、更に巨大なしめ縄をした杉の大木、その下にお地蔵さんと見られる仏像が見えた。
あたしと浩介くんが、それらをそれぞれ写真に撮っていく。
また近くには、ハイキングコースの案内や、珍しい野鳥類なども見ることができるとうたっている。
「昔はここにも宿泊施設や売店があったんだが、弥陀ヶ原や室堂の方が充実するに当たって、徐々に閉店していったらしいな」

「へー」
最も、この辺の観光を司っているのはどこも同じ会社だとは思うけど。
「ここからは特に標高も高いし観光地価格になるからな。水は持ってったな？」
「うん」
浩介くんの注意に対し、あたしが荷物から水を取り出してアピールする。
しばらくすると、バスのドアが開く。
前の人に続き、あたしたちもバスに乗る。
「室堂までは約1時間だ」
「案外速いわね」
ここの標高は、まだ７００メートルにも満たない所を、一気に２４５０メートルの高所まで行くわけだし。
それを1時間というのは、意外と時間をかけていないと思う。
あたしたちは、進行方向右側の2列を陣取り、ゆったりと座る。
見えてくるのはやっぱり老人たちと外国人が大半で、若いカップルのあたしたちはこの中で相当に目立っているが、あたしたちのことを気にする会話はない（外国語はわからないけど）
やがて、全てバスが満席になり、補助席が使用され始めた。
運転士さんはしきりに「シートベルトをお締め下さい」と、マイクで連呼していた。
「すげえな。大繁盛だぜ」
浩介くんも驚いている。
もしかしたら、ケーブルカーとバスの定員のギャップで、こうなっているのかもしれないけど。
「もし休日だったら数本待つ必要があるわね」
想像もしたくないわ。
「ああ、混雑時には立山から室堂直行のバスが運転されることがあるらしいぜ」
浩介くんがメモ帳の一転を見つめて話す。

やがて補助席も含めて全ての座席が埋まると、すぐにバスのドアが閉まった。
「皆様、本日は立山黒部アルペンルートをご利用くださいまして誠にありがとうございます。このバスは、美女平発、弥陀ヶ原、天狗平経由、室堂行きです――」
バスが発車すると、すぐに案内放送が流れる。
途中3箇所のバス停以外は降車専用で、案内表示もないため、3つのいずれかのバス停まで歩く必要があるらしい。
バスは早速、大きなカーブを曲がる。
最初のバス停では、降車客は特にいなかった。
その後、途中のバス停で僅かに登山客と思われる人が降りたのを除き、バスは激しいカーブを続ける以外、大きなイベントはない。
「お、でも景色はいいぞ」
浩介くんが窓を指差す。
「わあ、本当だわ」
そこには、晴れた空の雄大な山々と、地上の情景が見てとれた。
旅はまだ始まったばかりなのに、もうこんな絶景が見られるなんて夢のようだわ。
「まもなく左手奥に見えます称名滝は、3つの滝からなり、1つの滝の落差では那智の滝が日本一ですが、合わせた落差ではこちらが日本一となっています」
バスの案内放送が、称名滝のことをやっている。
もちろん、その滝は立山駅からのバスが最適だけど、ここからもちらりとだけ見えるらしい。
やがてバスが減速し、何もない場所に止まる。
道路の右側には「称名滝」と言う案内板が見えた。
あたしたちは首を左に傾け、携帯とスマホを取り出して小さく見える称名滝を撮影していく。
しばらくして、「シートベルトをお締め下さい」のアナウンスと共に、バスはまた何事もなかったかのように走り始めた。

「――戦国時代、佐々成政は周囲を敵に囲まれ、徳川家康の救援を求めるため、この立山を越え、これは現代では『さらさら越え』と呼ばれています」
「へー、佐々成政？」
立山に関する観光案内で、佐々成政という戦国武将の名前が出てくる。
徳川家康と言う名前からも、永原先生が生きていた時代のことだろう。
「ああ、このメモによれば、佐々内蔵助殿は、小牧・長久手の戦いの後、親徳川方に再起を促すために西を前田家、東を上杉家、南は姉小路の下が秀吉の直轄領と親豊臣の大名に囲まれていたんだ。そこで、佐々殿は立山経由で道なき道を真冬に越えたらしい。もちろん死者も出たわけだけど、何とか徳川家康に会うことは出来たが、断られてしまったらしいな」
その後、佐々成政は秀吉の臣下に入って今の熊本の領主になったけれども、一揆の責任を取らされてついに切腹を申し付けられてしまったらしい。
一揆が起きた原因は、「現地の風習を無視した強引な太閤検地」というのが一般的な見方らしく、永原先生の元でも、その噂話が流れていたという。
「戦国時代の武将が真冬にここを越えたなんて、信じられないわ」
現代でさえ、この山はよく遭難してニュースにもなるのに。
戦国時代の装備じゃたかが知れているわよね？
「ああ、当時の佐々成政の年齢が５０近かったこともあって、『実際の通り道には異説もある』って書いてあるな」
浩介くんが、メモ帳に書いてあることを更に話す。
うん、現代の５０歳でさえ、この冬山を抜けるのは困難だろうに。
永原先生のメモによれば、「天正１２年当時の私は京都にいてよく分からなかったが、『上杉家に融通を図ってもらい、越後を通ったのではないか？』という噂もあったが、概ね立山を越えたという話が受け入れられていた」とのことだった。

「まもなく、弥陀ヶ原です」
弥陀ヶ原、ここは立山の中腹に位置する観光地帯で、室堂ほど標高が高くなく、また山岳の森林なども満喫できる他、さっき見た称名滝や立山のカルデラに立ち寄ることもできる。
プー！
弥陀ヶ原では、バスのブザー音と共に、多数の乗客が降りていく。
それと同時に、弥陀ヶ原のホテルで前日泊まったと思われる観光客が乗っていく。
ここはそれなりに活況を要しているけど、今のあたしたちは1日で通り抜けることが目標なので、ここでは降りない。
平日の早朝なので、やはり乗り降りするのは老人が多いわね。
バスは再び発車し、次のバス停を目指す。
無人の降車専用バス停ではそこまで降りる客もいない。
バスは更に山道をカーブしながら進んでいく。
「あー、この辺りからだろうな。冬に雪深くなるのは」
「あ、それあたしも知ってるわ。雪の壁があるんでしょ？」
あたしも、写真で見たことがある。
冬が開けても、この辺りには雪は残っていて、立山黒部アルペンルートが開通する時に、雪の壁を使って観光名所にするって話は聞いている。
日本ほどに雪が降る場所は世界的にも極めて稀で、外国人観光客の需要がすさまじいらしい。
「そうそう、『雪の大谷』って奴だ。天狗平か室堂で降りて、わざわざ山道を上ったり引き返したりするんだ。歩行者が道路に出てバスとの対比を楽しむ。それはもう雄大だそうだ」
その代わり、そのシーズンの混雑はすさまじいものがあって、特にゴールデンウィークは地獄だそうだ。
もちろん今は台風も多い9月、夏を過ぎた頃合いの時間で、雪なんてこれっぽっちも見えない。
秋のように紅葉しているわけでも、夏のように避暑というわけでもない。

そして平日の早朝という、まず間違いなく一番空いている時間帯にも関わらず、この人通りは凄まじいと思う。
途中、霧のように視界の悪い区間があったが、数分後にはそれを脱した。
バスは天狗平を発車、弥陀ヶ原と比べると乗り降りする人は少なかった。
天狗平を過ぎれば、終点の室堂に到着する。
この室堂が、今回の旅の最高地点になる。
というよりも、あたしの人生の中でも一番高い所なんじゃないかしら？
「浩介くん、室堂の標高よりも高い所に行ったことはあるかしら？」
「いや、ないな。２４５０だろ？」
浩介くんもないと回答する。
そして、浩介くんが永原先生のメモ帳を見る。
「どうやら永原先生も、この室堂が人生最高地点らしいぜ。富士山は女人禁制だったから登る気がしないって」
浩介くんがメモ帳を見ながらそう答える。
でもさっきの理屈だと、とっくの昔に世界遺産になった富士山は登ってもセーフだと思うけど。
「まあ、永原先生が気にしてるだけで、他のＴＳ病の人は気にしてないと思うわ」
「だろうな」
現に、永原先生だってここに来た理由は他の会員さんに押されてのことだし。
バスがくねくねした道を曲がっていくと、やがて左前方にやや大きな建物が見えてきた。
「ご乗車お疲れ様でした。間もなくこのバスの終点、室堂です。室堂から先大観峰、黒部ダム方面はトロリーバス乗り場へお越しください。なお、混雑状況によっては待ち時間が発生します。時間に余裕をもって行動してください」
そして、運転士さんの放送と共に、周囲も慌ただしく準備をし始め

た。
あたしたちは荷物を足元に置いてあったので、そのまま持ち上げるだけでＯＫだ。
一足先に準備を終え、あたしたちは先頭を切ってバスから降りた。
さて、アルペンルートの旅の拠点と言われている室堂には、何が待ち受けているのかしら？

# 夏の夫婦旅行３日目　雲上の世界で

ぴゅううう

「うー、風が冷たいわ」

あたしのズボン、コートに容赦なく風が吹き付けられていく。

９月だと言うのに、標高２４５０メートルの高所から吹き付ける風はかなり強く、そしてひんやりとしている。

「とりあえず、建物に入るぞ」

ともあれ、まずは軽い高所順応も含め浩介くんが空調の効いた建物の中に入るように促してくる。

「うん」

事前の打ち合わせでは、ここ室堂の滞在時間は１時間となっている。

ともあれあたしたちはまず、急いで乗り場のある「室堂駅」という建物の中に入った。

「ふー」

心なしか、空気の薄さは不思議とそこまで感じなかった。

一方で、建物の中はかなり空調が聞いていた。

あたしたちは、まず建物を散策する。

まず目についたのが大観峰行きのトロリーバス乗り場、これに乗るのは１時間後ということになる。

更に２階にはレストランとお土産屋さんがあり、レストランでは「立山そば」というのが名物らしい。

お土産屋さんもちらっと見た限りだけど、先ほど話題に出ていた「さらさら越え」の佐々成政のお酒と称するお土産も売られていた。

もちろん朝食はさっき食べたばかりだし、何よりいかにも高そうな場所なのでここでは何も買い物はしないことになった。

佐々成政のお酒も、室堂限定となっているけど、あたしたちはお酒を飲まないので意味はない。

「よし、向こう側に名所があるから、そっちに行ってみようぜ」

建物の探索を終えて落ち着いてきたら、浩介くんが外に行きたいと

言ってきた。
うん、ちょうどあたしもそう思ってたところだわ。
「うん」
浩介くんの誘導で、建物を出て更に奥側へと進む。

ひゅううう……
「少し寒いわね」
といっても、やはり9月でもこの寒さというのは恐ろしいことだわ。
やはり高山という場所の寒さはものが違うのかもしれないわね。
「ああ」
さて、あたしたちの正面に見えてきたのは、無造作に置かれ、大きな文字で「立山」と書かれた石碑だった。
またその石碑には、「中部山岳国立公園」「標高２４５０メートル」とも書かれている。
それらを写真に収め、そこから更に奥側に進むと、また石碑が見えてきた。
そこには、昔の富山県知事が書いたと思われる「立山玉殿の湧水」という文字が書かれた石碑。
更に右側の黒い石には、この水の成り立ちなどが書かれていて、昭和６０年という、３７年前の文字が見える。
どうやらこの涌き水は飲むことができるらしく、ひしゃくが置いてある。
「飲めるらしいな」
浩介くんが、ひしゃくを手にとって口に水を含む。
「んーー！　冷たくて美味しいぞ！　優子ちゃんも飲んでみなよ！」
「そう？　じゃあ」
浩介くんに勧められて、あたしは同じように水を飲んでみる。
「んー！」
飲んで分かるが、この水は氷に近いくらいに冷たい。
でも、その冷たさに反して飲みやすく、あっという間にひしゃくが

空になる。
いかにも純粋という感じの冷水が、あたしの喉を潤していく。
乾いた喉がすぐに潤う。
高山特有の空気の薄さも、更に緩和されたように感じた。
あたしたちの隣にいた老夫婦は、ペットボトルを持って水を汲んでいた。
「美味しいわ」
「だろう？」
この冷たさと澄んだ水に対して、あたしには月並みな表現しか出てこないわね。
水を飲み終わり、立ち上がったあたしはふと奥へ進んでいく。
ここからなら、富山の街が一望できるんじゃないかと思い、左を向いてみた。
「わあ！」
目に広がる素晴らしい光景に、あたしは思わず感嘆の声をあげた。
「？　どうしたの優子ちゃん？」
立ち上がったあたしについて行く浩介くん。
いつもとはちょっと違うシチュエーションになっている。
「見て見て、町が一望できるわよ！」
「お、本当だ。すげえや！」
あたしたちの目の前に、高山植物たちが生い茂る草原が広がっていた。
所々に山肌がむき出しになっていき、遠くに行けば行くほど、高度が低くなればなるほど、植物の密度が高くなっていく。
視界の左右には山が続いていく。
一番左側には、さっきバスで来た通り道が見える。
道路をよく目を凝らしてみてみると、遥か下界からバスが上っていくのが見えた。
目の前で見ればあんなに巨大なバスが、ここから見るととても小さい。
雲が、あたしの上側だけではなく、前方下側にも見える。雲海が、目

の前に迫ってくる。
あたしたちにとって、雲というのはいつも地上から上を見上げて見えるもので、あたしにとって雲を上から見たのは人生で初めての経験だった。
そして、雲の中から見え隠れする、あたしたちの正面の遥か遠くに見えるのは、青い色をした水のようなものだった。
そう、これが海。そしてその手前に見える銀色のミニチュアたちが、富山の街だった。
あたしたちは今日、あの小さな所から出発した。
ここからでは、もちろん電車が走っている様子は見えないし、人の往来の様子なんて分かりっこない。
だけれども、そこが文明の営みのある場所だと分かる。
あたしはこの景色の写真を、撮っていく。
「凄いわ。あたしたち、あんなところから来たなんて」
「ああ、まるで信じられねえぜ」
もちろん山の上からの景色、高い所からの絶景ならば、今までも経験がある。
高校2年生の春休みに遊園地に行ったときに、最後に観覧車で浩介くんにセクハラとプロポーズされた時も、外の景色は素晴らしかった。
でも、ここの景色は「格」が違う。
これまで体験してきた数多くの絶景のどれとも違う。
富山という大きな街の全てが、ここから見える。
それどころか、あたしは文字通り「雲の中の人」、いや「雲の上の人」となった。
室堂は、「雲上の世界」だった。
まるであたしたちは地上を下に見下ろす天人のようで、この回りの雄大な絶景も併せて、ここはまるで天国のようだった。
あたしたちは今、蓬莱教授と共に、世界を変えようとしている。
でもこの絶景を見たら、それも所詮は「人間世界」を変えているにすぎない。

永原先生や蓬莱教授でさえ、雄大な地球からすれば何でもないようなこと何だと思い知らされる。
あたしたちに打ち付けている風も、いつの間にか寒さより心地よさが勝っていた。
「浩介くん、ここって、この世なのかな？」
「何言ってんだ？　当たり前じゃねえか」
ふとあたしの口から出た疑問に、浩介くんが笑いながら答えてくれる。
いつの間にか雲海の位置が変わって、富山の街が霧に覆われたような見え方になる。
「永原先生も、ここを見た時、どう思ったのかしら？」
永原先生が、この雄大な絶景を見てどう思ったかが知りたい。
きっと、あの時代の人だ。あたしたちよりも更に感動したと思う。
「あー、どうだろうなあ？　どれどれ……ほう、『三十三天の住人になったようだ』と書かれているな」
「三十三天？」
聞き慣れない単語にあたしは思わず首をかしげた。
「仏教には極めて高い角柱のような山が宇宙の中心にあると信じられていて、山の頂上と中腹にそれぞれ天人が住んでるんだってさ。といっても、この立山の頂上はもっと上だけど」
永原先生のメモ帳には、「三十三天」の説明について簡単なことしか書かれていない。
そもそも、メモ帳の体裁だけど、今回のはほぼ全てがプリントを貼り付けたものだったりする。
「それよりも、こっちにはもっと面白いのがあるらしいぜ」
あたしたちと一緒に絶景を眺めている人もいるけど、それ以上に、更に奥に進む人の影が多い。
どうやら、「みくりが池」という名所池が、そっちにあるらしいわね。
「池を一周したいところだが、時間の都合もあるから、さっと見ていくだけにしよう」
「うん」

ふと、視界の右側を見る。
そこからは、山頂が見える。山頂は眼下の優しい雄大さとは違い、近付くことさえ拒まれるような威圧感をもってあたしたちに接してくる。
立山の山頂は３０１５メートルあるから、あそこはここ室堂から更に５６５メートルも高い位置にある。
浩介くんや、他の老人と外国人と共に、あたしは池のある場所へ向け更に奥へと進んでいく。
「ここも凄いわ」
そしてそこにあったのは、まるで宝石のような色をした美しい池だった。
かつて火山の噴火で窪地が出来、そこに水がたまったのがこの池だという。
正面の山体が光に反射して、ゆらゆらと池にかすかな虚像を写し出す。
だけど室堂には風が吹いているので、池の水面が揺れるとその像は簡単に吹き飛んでしまう。
「ああ、こんなに澄みきった池があるんだな」
澄みきった池にきれいな湧水、冬はもちろん厳しいんだろうけど、今のここは、まさに永原先生が言うように「天」そのものだ。
まるでここは天上世界で、あたしたちは天の人。
そんな虚構の錯覚があたしの心に侵食してきて、徐々に現実との境界線が曖昧になっていく。
「おーい優子ちゃん。こっちにすげえもんがあるぞ」
浩介くんが、ややずれた位置から、あたしを呼び止めてくる。
僅かに、現実と虚構の境界線が修復された。
「？」
あたしが浩介くんの場所まで行き、浩介くんが指を指した方向を見る。
「え？　これ雪？」
９月のこの季節に似ても似つかないその白いもの。

普通なら、とっくに溶けているはずなのに。
そこだけ、まるで季節を置き忘れたように根強く残っている。
「ああ、立山にある『万年雪』だ。その名の通り1年を通して溶けない雪のことだけど、地熱や太陽光で中身は入れ替わってるらしいぜ」
確かに、近くの観光案内でも「万年雪」と書かれていた。
9月という時期にも関わらず溶けない雪を、あたしと浩介くんが写真に撮っていく。
「この池の近くには『みどりが池』ってのもあるらしい。更にこの池の向かい側の上には、『みくりが池温泉』って言う温泉があって、『日本一高い所にある温泉』ということで、ここに泊まって行く客が多いらしいな。夜は夜で星空が絶景らしいんだ」
なるほど、ここに泊まる人が多いのはそういうことなのね。
「さ、名残惜しいが、そろそろ戻った方が良さそうだ。待ちぼうけは食らいたくねえからな」
「うん」
あたしたちがここを降りて35分が経っていた。
さっきの美女平が結構ギリギリだったし、並ぶ時間も考えるとそろそろ引き返した方がいいわね。
あたしたちはやや急ぎ気味に元来た道を引き返す。
途中左側に石の塔みたいなのが見えたけど、これは「遭難者たちの慰霊碑」だそうだ。
「ふー暖かい」
高所にもある程度慣れたとはいえ、やはり屋内の方が過ごしやすいことには代わりはない。
トロリーバスの乗り場を案内に従って行くと、既に相応の行列が出来上がっていた。
最も、トロリーバスの大きさこそわからないけど、普段使っているバスの大きさを鑑みれば、余裕で乗ることができる量でしかない。
浩介くんによれば、まだまだ午前の早い時間帯で、大観峰や黒部平を悠々観光しながら黒部ダムに抜ける算段は出来ているという。
さて、トロリーバスってどんな乗り物なんだろう？　ワクワクする

わね。
さっきのように係員さんに通し切符を見せて通してもらう。
乗り場につくと、そこは薄暗いトンネルの中で、既にバスが到着していた。
でも、通常のバスとは違い、車体の中央部分に、電車のパンタグラフのようなものが延びていて、トンネル上部には電気が流れていると思われる架線が引いてあった。
トロリーバスの見物はそこそこに、あたしたちはバスの中に入っていく。
車内はと言えば、運転台も含めて、殆ど通常のバスと見分けがつかなくなっている。
さながら、バスをちょっと鉄道にした感じになっている。
「ここはもう、日本唯一のトロリーバスなんだ」
席に座ると、浩介くんが早速永原先生のメモ帳で知識を披露してくれる。
「日本唯一？」
つまり他にはないってことよね。
「昔は、東京にも至るところにトロリーバスがあったらしいんだ。だけど通常のバスと違って、環境には優しくていわゆる『ガス欠』の心配もないけれど、決められた所しか通れない上に架線の整備費用もあって、更に鉄道みたいに大量輸送にも向かないから、今やここにしか残ってないんだ」
確かに、そう聞くと鉄道とバスの悪い所取りと言う印象も受けなくもない。
「ここは以前はディーゼルバスだったんだが、立山という土地柄、環境的な問題でトロリーバスになったんだ。ちなみに、扱いは鉄道の扱いで、トロリーバスの免許は鉄道の免許の仲間になっているんだ」
浩介くんの話は、以前にも聞いたことがある。
確かに、こんな密閉された場所で排気ガスの出るバスは不味いわよね。
「4年前までは、黒部ダムから扇沢までもトロリーバスだったんだが、

今は電気バスになってるな」
電気バスが出来た今、ここのトロリーバスが残っている理由としては「日本唯一」ということそのものなのだと思う。
逆に言えばトロリーバスが最後までここに残っているのも、この立山黒部アルペンルートが「様々な交通システムを使う」ということを売りにしている証拠でもある。
トロリーバスが鉄道扱いになっているため、室堂駅は日本一高い駅ということになっている。
また、これから向かう大観峰駅までの間にも、登山客向けの駅があったけど、登山道が崩落してそのまま修復できず、廃止になってしまったらしい。
「間もなく発車いたします、ご乗車のままでお待ちください」
やがてトロリーバスの運転士さんが現れ、運転台へと腰かける。
よく見ると、バスは既に立ち客が出るほどに混雑していた。
車内はそれに伴って話し声が大きくなる。
老人たちの訛りのある日本語と、外国人観光客の外国語が混じった声の集団は、小谷学園や佐和山大学での集団の話し声とは全く性質が違う。
いずれにしても、相当な数の人数が乗っているのは確かで、次のロープーウェイはここほど大量輸送はできないはずなので、ちょっと不安だわ。
ともあれ、バスが発車する。
「おや、静かだね」
「うん」
電気で走っているとあって、トロリーバスはエンジンの音が聞こえてこない。
トンネルをゆっくり右にカーブし、やがて長い直進に入る。
「皆様、本日は、立山トンネルトロリーバスをご利用くださいまして、誠にありがとうございます。トロリーバスは――」
さっきの浩介くんの説明と同じ説明を、自動案内でも行っている。
隣の浩介くんも、ちょっとだけ苦笑してしまっている。

これから標高３０１５メートルの立山をバスで横断し、黒部湖が見える大観峰につくことになっている。
そこからはロープウェイが待っているわけだけど、バスの案内では「大観峰の雄大な景色」のことを話していて、春夏秋冬どの季節に行っても絶景だと話している。
トロリーバスはトンネルばかりなので、車内放送の観光案内が絶え間なく流れ続ける。
途中、対向のトロリーバスとすれ違うが、かなりギリギリのスペースで行っていた。
衝突事故にならないか不安だけど、多分トロリー線の制約で何とかしているんだと思う。
「優子ちゃん、大観峰はすかさずロープウェイにも乗れるけど、ここは一本遅らせるぞ」
「はい」
どうやら、浩介くんによれば、黒部平からのケーブルカーの関係で、後から乗ってもそこまで変わらないらしい。
それに、大観峰も大観峰で絶景なので、是非滞在していきたいそうだ。
「――ご乗車、お疲れ様でした。間もなく大観峰、大観峰です。この先も、立山黒部アルペンルートをどうぞごゆっくり、お楽しみ下さい」
その放送と共に、バスが徐々に減速し、大観峰と書かれた駅に停車する。
「ご乗車ありがとうございました」
運転士さんの案内放送と共に、バスの扉が開かれ、あたしたちも立ち上がって、立っていた乗客に続いて降りる。
同じようにあたしたちも、地下から地上へと抜け出し、新鮮な太陽光の当たる建物に入った。
さて大観峰と言うほどの景色、楽しみだわ。

# 夏の夫婦旅行３日目　天空から地底へ

黒部ダムメインのお客さんや、早起きした室堂宿泊組の人々が、ロープウェイへ向けて列をなしているのを、あたしたち居残り組が少し距離を置いた遠くから見つめていく。

もちろんこの駅の中にも見所がある。

ロープウェイに関する展示があったり、あたしたち同様、次のロープウェイに向けて待合室で待つ観光客もいて慌ただしい。

「展望台は、こっちね」

ここ大観峰駅は断崖絶壁にあるので、スペースも小さくわずかな休憩所と展望台があるのみである。

この次のロープウェイは１５分後だけど、あたしたちはそれには乗らずにその次のロープウェイに乗ることになっていて、正味ここでの滞在時間は３５分となっている。

絶景はその間に拝むことになっている。

ここは室堂の２４５０メートルよりも１３４メートルだけ降りて２３１６メートルとなっている。

あたしと浩介くんが横に並んで、外の展望台へと上る。

そろそろロープウェイの出発時間ということで、他の観光客達も何人かが展望台に向かっていった。

「す、すげえ……」

「……」

展望台の階段を登り、銀色の柵と双眼鏡を横目に一番高い所からそれを見たあたしたちは、２人とも言葉を失ってしまった。

絶句、とはまさにこの事だった。

ここが「大観」と名乗るだけのことはあった。

何もかもが雄大すぎた。

あたしの表現力では、何と表現したらいいか分からない。

さっきの室堂の絶景は、人間の小ささを見せてくれる絶景だったが、こちらの絶景は室堂とはまた趣の全く違った絶景だった。

まずあたしの目に飛び込んできたのはロープウェイだった。

途中に支柱が何もなく、だらんと垂れ下がっていていかにも心許ないのに、さっき出発したロープウェイはすいすいと降りていく。
ロープウェイは、遥か下方にある黒部平に繋がっていて、ゆっくりと、だが確実に目的地へと向かっている。
豆粒ほどのロープウェイはやがて黒部平の小さい箱のようなものの中に吸い込まれていった。
また黒部平から上がっていくロープウェイも見え、こちらも途中ですれ違っていた。
あたしは最前列に降りてロープウェイをもう一度見ると、徐々にこちらへと上がっていくのが間近で確認できた。
迫るロープウェイを写真で撮影すると、中の人たちの様子まで撮ることが出来た。
中にはもちろんたくさんの人がいて、一瞬見た感じではやはり中高年の人が圧倒的に多かった。
更に真下の地面には歩道らしき道があり、登山客ならば徒歩で進むこともできることが示されている。
岩肌はあるがより標高の高い室堂よりも露骨ではない。
そして前方に飛び込んできたのは遥か奥に見える雄大な山々、右を見ても左を見ても山脈がどこまでも連なっている。
写真を数枚撮ってから、展望台にあった山の図を見ながらどれがどれかを確認する。
しかし、この景色から何よりも目立ったのは、右の遥か下界に見える僅かに緑がかった水色の湖で、僅かに見え隠れする人工物のようなものからも、それが黒部ダムを要する「黒部湖」であることは容易に想像がつく。
あたしも社会の写真でしか見たことはないけど、あの巨大な黒部ダムの湖が、あんなに小さく見えるというのは、さっきの富山の街が小さく見えたのと、同じように衝撃的なことだった。
そして、山脈の上方から中腹には、やはり雲が所々に見えて、雄大さに限りはなかった。
「おや？　これは何だ」

浩介くんが、後ろ側にあった人工物に目をやる。
後ろ側はもちろん山になっていて、濃い雲に覆われていて絶景があるわけではない。
そんな中で、何かを運ぶためなのか、ミニチュア鉄道のようなよく分からない構造物が目に入る。
あまりにも急勾配過ぎて、押したら暴走しそうだわ。
「何のために使うんだこれ？」
浩介くんが首をかしげつつ疑問を話す。
「うーん、そこのメモには何か書いてないの？」
困った時の永原先生だ。
「あーいや、永原先生のメモにも『用途不明、謎の構造物』としか書いてねえぜ」
どうやら、永原先生にもよく分からない構造物らしい。
「そう……」
時折、風の音が反射して独特の音色を静かに奏でている。
大観峰には風力計がついている。
恐らく、危険な強風になったら運行を休止するためだろう。
今回は幸いにも穏やかで、よく晴れた日だ。
「おや、動いた」
浩介くんがそう言うと、確かにその構造物が動いていた。
そして急な坂道に差し掛かって……加速した後にまた止まった。
「ねえあなた」
何となく、あたしはこの得体の知れないものに対して不安になる。
正直今のも何故動き出したのか、そして止まったのかも分からない。
「考えるだけ無駄だな」
浩介くんは、あっさりとした口調で言う。
うん、そう思うのが一番健全なのかもしれないわね。
「うん、そうよね」
あたしたちが大観峰を楽しんでいる間にも、次から次に老人たちがこの展望台にやってくる。

みんな、一様に「凄い」と感動していた。
外国人観光客も多くここに来ていて、大きな声で感動の声を上げる。
「さ、優子ちゃん。あれに乗るぞ」
この場にふさわしくない大きな声が聞こえ始めたのと、大方景色を見終わったのであたしたちもこの展望台から立ち去ることにした。
「はい」
浩介くんの誘導で、あたしたちは建物に戻る。
途中、飲み物を売っている自販機が目に入った。
こんな山奥の山奥なら、どれだけ高いのかと期待してみたが、ドームの中の値段と変わらなくて、あたしは別の意味で期待を裏切られた。
もちろん、地上と比べれば、天界の物価はかなり高いけどね。
「さっきより人が増えてるわね」
待合室は、恐らくさっき昇ってきたロープウェイのお客さんと思われる人が多く座っていた。
「ああ、トロリーバスを待っているんだろう」
それにしてもこの待合室は狭い。
これ、本当に夏休みとかゴールデンウィークは通れるんだろうか？
もちろん、事故が起きたなんてニュースを聞かない所を見ると入場制限などをうまく使っているんだと思うけど、それにしたって閑散期でさえこの様子では不安になってしまう。
「間もなく改札を開始いたします」
「よし優子ちゃん乗るぞ」
係員さんのアナウンスがすると浩介くんが立ち上がる。
「はい」
浩介くんと共に、あたしたちは再び「通し切符」を見せて、ロープウェイの乗り場に入る。
その乗り場から見える風景もまた、絶景で、あたしたちはロープウェイの一番先頭に陣を構える。
眼下に広がる山々、僅かに見える登山道と豆粒ほどの大きさの２人

の人影、そして何より、右に広がる黒部湖。
そしてそこには、ロープウェイの支柱の1つ見えない。
幻想的な雰囲気だった。
永原先生が、「神々の領域」「まるで天道」と評したのは頷ける。
いやそもそも、永原先生の時代から見れば、今この文明世界こそ天道なのかもしれないわ。
だって、これらの乗り物は、永原先生の人生の大半を占めている江戸時代以前には考えにもつかなかったはずだもの。
外の喧騒が激しくなる。後ろを振り向くと、ロープウェイは半分くらいが埋まっていた。
大観峰で1本遅らせたことで、さっきまでの混雑もある程度分散していった。
とはいえ、室堂からの宿泊組がそろそろ本格的にこっちへと向かう頃合いでもある。
あんまりのんびりとしていても、また混雑に巻き込まれる可能性はある。
それにしても、だらりとたら下がったロープはどうしても心もとない印象を受ける。
いや、物理的にはピンと張るほうが危険なのはちょっと考えれば分かることだけど。
（永原先生のメモを読んだ）浩介くんによると景観保護のみならず、冬場の雪崩による危険性を考慮してこのようなロープウェイになったらしい。
また、永原先生はこのロープウェイに乗った時、まるで「高天原から天孫降臨」をしたような錯覚に陥ったという。
「間もなく発車いたします」
係員さんに扉を閉められ、ロープウェイがゆっくり動き出した。
支柱なしのロープウェイとしては日本一の長さらしいが、あたしにとっては下の方の登山客の方が気になった。
こんな道を歩くなんて凄いと思う。
あたしは右側に目をやる。

大きな黄緑色の湖が、どんどんこちらに近付いていく。
ロープウェイが下層へ向けてどんどんと下るうちに、大観峰で見た雄大な景色は消えていく。
そう、あたしたちは更に下に降りたんだ。
そして次に迫ってきたのは下から登っていくロープウェイで、こちらもかなりの人数が乗っていて、あたしたちがそのロープウェイの写真を取っているように向こう側の人もこちらの写真を撮っている人や手を振っている人の姿も見えた。
しばらくすると、目の前に穴の開いた建物が迫ってきた。
そして、「間もなく黒部平」という放送と、黒部ダムへは再びケーブルカーを使う必要があるという案内をしていた。
「優子ちゃん、降りる準備をしようか」
ロープウェイが減速を始め、浩介くんも準備に取り掛かる。
「うん」
あたしたちが出口の方を向くと、既に下り場に向けて人々がウズウズしていた。
こうしてあたしと浩介くんは、「黒部平」と呼ばれる場所に到着した。
乗り場から上を見上げると、先程まであそこに居たということが信じられないほど、はるか天空に大観峰が見えた。
大観峰は、やはりあそこから見た黒部平と同様、小さな箱のような形をして見えた。
その写真を撮ると、浩介くんが「すげえよな、こんなに降りていったんだ」と言っていた。
「お、ここには庭園があるらしいな」
黒部平の滞在時間は、事前の予定では大観峰より少し短く、２５分を見込んでいる。
もちろん、混雑状況を考慮して黒部ダムの元滞在時間の１時間を抜いて１時間の余裕時間は持っているが、このまま行けば黒部ダムで２時間を過ごすことになりそうだわ。
ともあれ、建物を出たあたしたちに飛び込んできたのは、「中部山岳

国立公園　黒部平　昭和６２年８月建之　１８２８米」という表記だった。
「１８２８メートルかあ」
浩介くんがそうつぶやく。
室堂の２４５０メートル、大観峰の２３１６メートルに比べるとかなり低い。
「大分降りてきたわね……えっと大観峰から４８８メートル、室堂から６２２メートルかな」
暗算だから合っているか分からないけど。
「……だな」
ここから更にケーブルカーで降りれば、黒部ダムへと到着するわけだけど、この黒部平からは、前方の山が影になっていて黒部ダムは見えない。
代わりに、高山植物の庭園があるわけだけど、まず目に飛び込むのは上層に見える大観峰の景色だった。
ここから見る立山も、また違った趣があるわね。
庭園の植物の様子の写真を、あたしたちは撮っていく。
あたしと浩介くんの視界に「写真のほか何もとらない」「足跡のほか何ものこさない」という環境保護のスローガンの書かれた看板が目に飛び込んできた。
「絵にして記録をとっちゃいけないのか？」
浩介くんがそう言うと、永原先生のとは違う自分のメモ帳の中に絵を書き始める。
もちろん、それを咎める人は居ない。
何だろう、浩介くんそういうのうまくなったわね。
「じゃあ、あたしも、頭の中に思い出を残しちゃいけないかしら？」
あたしも調子に乗って、この標語にツッコミを入れる。
「はは、ダメだと言われても残るだろそりゃあ！」
浩介くんが、笑いながら身も蓋もない突っ込みをする。
「というか、ここにも湧き水あるじゃん。水をとったらダメなのか？休憩とったらダメなのか？」

浩介くんの突っ込みが更に冴えているわね。
というか、これじゃまるで一休さんじゃないの。
気を取り直して、あたしたちは様々な高山植物を見て回る。
この庭園は意外と狭く、また通り道を除けば立入禁止にもなっているので、すぐに1周することが出来た。
それが終わったら、あたしたちはもう一度湧き水を飲む。
室堂で飲んだのとは、ちょっと違う味だったわね。
あたしたちは建物の中に入り、屋上にあるらしい展望台を目指す。
「お、すげえな」
眼下には、黒部湖とダムの人工物が僅かに見える。
大観峰で見たときよりも、倍くらいの縮尺で見ることができる。
そして案内板には「黒部平　標高1，828m　中部山岳国立公園北アルプス山座案内」と書かれていて、ここからどういった山々が見えるかが分かる。
大観峰と同じように、オレンジ色のロープウェイが遥か上層の大観峰に向けてゆらゆらと登っていくのが分かる。
室堂と大観峰が、上の山から見下げる雄大な下界の景色ならば、ここ黒部平は下から見上げる雄大な山々の景色だった。
それ自体はよく見る景色とも言えるけど、いつもと違うのは、「さっきまで自分たちがあの雄大な場所に居た」という事実だった。
その事実を噛みしめるだけで、景色の見え方が、他の絶景とはかなり違うことを思い知らされる。
残りの時間を考え、あたしたちはケーブルカー乗り場へと向かった。
改札を済ませ乗り場に行くと、薄暗いトンネルの中にケーブルカーがあった。
それは、最初に立山から美女平に向かって登るケーブルカーとは何もかもが逆だった。
あのケーブルカーは雄大な山なども見える開放感あふれる場所を登っていくが、こちらはまず急勾配を降りていくことや、全てがトンネルの中にあり、ダムに通じるとあってどことなく工事の跡が見受け

られる。
昨日行った黒部峡谷鉄道よりも、更に露骨かもしれない。
あたしたちはケーブルカーの座席に座る。
正面を向くと、底知れぬ黒い穴が続いていた。
さっきの登っていくケーブルカーよりも、ずっと不安定感が強い。
その穴は、どこまでもどこまでも続いていそうな感覚を受ける。
まるで、地底世界の入り口という感じさえ、受けてしまう。
「このケーブルカー、全てトンネルを走るケーブルカーらしいぜ。他には青函トンネルにもあるな」
永原先生のメモには、色々なことが書かれている。
「やっぱり全てトンネルなのね」
発車時間が近付くに連れ、やはり後続の観光客たちが乗っていくのが見える。
そして、係員さんが先頭に入っていくのも美女平行きのケーブルカーと同じ。
そしてブザー音と共にケーブルカーが発車し、トンネルの中を進んでいく。
「黒部ダムの建設には、延べ１０００万人が携わり、7年かけて昭和３８年に完成しました。来年は黒部ダム完成後６０週年に当たり、多くのイベントを計画しております。ダム建設にあたっては難工事が続き、１７１名の殉職者を出しました」
ケーブルカーでは、これから行く黒部ダムのことを説明している。
やがて、トンネルの中間地点に行き違い施設が見られ、地下から登ってきたケーブルカーとすれ違う。
さっきのロープウェイと違い、中の人はよく見えなかった。
「――皆様、間もなく黒部ダム駅に到着します。この先も、黒部ダムをごゆっくりお楽しみ下さい」
下の方に幻想的な明かりが見えて来た。
まるで地底世界のような錯覚を受ける。
そしてケーブルカーが減速をはじめ、地底の底に到着してみると係員さんが出迎えてくれた。

もちろん、ここは地底の底ではない。ここから出れば黒部ダムを間近で見ることができる。
ここからは、黒部ダムを歩き、そして扇沢までのトンネルを電気バスで進むことになっている。
黒部ダムの徒歩での所要時間は15分だけど、もちろん昼食も含め、ここでは長期滞在することになっている。
あたしは、浩介くんに続いてケーブルカーを降り、他の観光客たちとともに、出口を目指していく。
黒部湖駅は、トンネル内ということもあって、大観峰以上に、極めて人工的な施設になっていた。
最初に見たのは、黒部ダムへの道と、遊覧船への道だった。
「遊覧船ガルベ……かあ。優子ちゃんどうする？」
遊覧船は、「日本一高い所にある遊覧船」というのを売りにしていた。
「うーん、やめておこうかしら」
「そうするか。2時間あると言っても、ダムを見るだけで時間が潰れそうだ」
黒部ダムには遊覧船があるらしいけど、今回は乗らないことにした。
というわけで、あたしたちは素直に正面の道、つまり黒部ダム本体へと歩を進めていくことになった。

# 夏の夫婦旅行3日目　文明の偉大さ

濃くて済んだ空気と、静かな水の音があたしたちを包み込む。
深呼吸がとても気持ちいい。
立山や美女平とは違う、室堂での空気の薄さを感じた時の記憶が生々しく、美女平よりもまだ標高はずっと高いはずなのに、まるで立山や美女平、下手をすれば朝にいた富山よりも濃い空気に感じてしまう。
永原先生がアルペンルートを1日で一気に通り抜けるようにあたしたちに勧めたのも納得できる話だった。
人の話し声が、聞こえてくる。
ダムの音が、聞こえてくる。
眼前には、黄緑色の水が見える。天界から見た時よりもずっと緑がかっている。
ふと後ろを振り返ると、極めて人工的な銀色のトンネルが見えた。
あたしたちが、来た道だった。
そして正面は、アーチのように曲がった道が見える。
電気バスの場所に行くには、あの長い長い道を進めばいいのね。
ダムの通路の先には、小さな施設が見える。
またやや上部に別の施設が見える。
あれは一体何の建物かしら？
先へ進めば、何か分かるはずだわ。
「浩介くん」
「ああ、進もうか」
ダムの入り口で立ち尽くして写真を撮っていたあたしたちは、もう撮影することはないと思い先へと進む。
しばらく真っ直ぐ進むと右に直角に曲がる。目の前に広がっていたのは弧を描いた道だった。
ダムの向こう側には、２つの滑り台のあるような施設も見える。
大量の水が、出ていく音が聞こえてくる。
「ねえ見て！　あなた凄いわよ！」

道の端から顔を出してみると、そこには驚くべき光景が広がっていた。
ダムから巨大な水が2箇所から放水されている。
これはいわゆる「観光放水」と言われる類の放水だという。
今までとは違う。何もかもが違う。
ここ黒部ダムは、室堂や大観峰で見せた雄大な自然に対して、人類が挑戦するかのような印象を受ける。
今のあたしにはここ黒部ダムは大自然の力に果敢に挑み、勝利を収めた記念碑のような印象さえ受ける。
あまりにも巨大な水が常に放水され続け、下の川へと流れていく。
いや、よく見ると落差の問題か、多くの水が霧状になって蒸発していっているのさえ分かる。
その証拠に、水の落ちる川を見てみると、流れる水量は驚くほど少なく、しかも放出口から出た水からは湯気のようなものさえ立っているからだ。
パシャッ……パシャッ……
放水の様子を、あたしたちや、他の人々がどんどんと写真に取っていく。
ダムから流れる川は、森林に挟まれ、昨日の黒部峡谷鉄道に繋がっている。
ダムの構造物の所々に、点検用のはしごと思われるものも見えた。
室堂や大観峰と比べても、とにかく広さが広いため、人の数は割合まばらに見える。
先程見えた上部の建造物も、どうやらこのダムの観光地の一環らしい。
更にダムの通路を進み、より近くで見るとダムの放水口から水が勢い良く扇状に吹き出しているのが分かる。
これは明らかに、人工的に大きく放水しているためだろう。
ダムのアーチの端に、階段のようなものも見える。
もしかして、上層部には、あの階段を使うのかな？
「お、ここが放水口正面かな？」

浩介くんが下を指差す。
「そうみたいね」
あたしも下を向いてみると、ここがちょうど両者の放水口の中間点にあたるらしい。
真上から放水を見ると、驚くほど霧状になっているのが分かる。
もしかしたら、これだけの量をそのまま放水したら、川底が削れてしまうからかもしれないわね。
「何かなあ。俺も空を飛べれば、このダムを飛び降りて、そこからこう羽を広げてさ、大観峰まで飛んでいきたい気分だよ」
浩介くんがいきなり面白いことを言う。
あたしは、大観峰のあると思われる方向を向くが山しか見えない。
黒部平からでも豆粒のように小さな大観峰だった。
もうここからでは、大観峰は遠すぎて見えない。
あたしたちがそのくらい下の方まで来た。という証拠だろう。
すぐ近くに、「ここは黒部ダム中心」と書かれた案内表示が見える。
それによればダムの高さは１８６メートル、長さは４９２メートルでここ黒部ダムの標高は１４５４メートルになる。
「室堂から、１０００メートル近く降りてきたわけだな」
「ええ。そうなるわね」
あたしたちは最高地点の室堂からトロリーバス、ロープーウェイ、ケーブルカーを駆使し、ここまで降りてきた。
あたしたちは更にダムの放水に夢中になり、左側、真上に続いて右側からの放水の様子も写真に撮っていく。
豪快で、どこか繊細な水音とともに、霧状に水が流れ、それはさながらこの大自然に対する人の叡智の勝利を記念しているような印象を受けた。
途中、「ここでしか撮れない」という記念写真もあったけど、あたしたちはそれをスルーしダムに夢中になる。
歩いていくとあたしたちはダムのアーチの終点に到着した。
「優子ちゃん、どっちへ行ってみる？」
目的の「ダムレストハウス」が見えた。ここでは休憩ができるが、ま

だ遊び足りない。
足を止めながら進んだのと、さっきまでよりだいぶ標高も下がったおかげで、あたしはあまり疲れていなかった。
「じゃあ、この脇に行ってみようよ」
こちらを更に進むと、ダムの展望台や無料休憩スペースがあるという。
「おや、こっちの道は……優子ちゃんはどうする？」
「うーん、まずは下に降りてみようかしら？」
やがて、あたしたちは2つの分かれ道にたどり着いた。
1つ目は左側の階段を下に降りて間近でダムを見るもの。
案内表示によれば「新展望台」だという。おそらくさっき見た風景を思い出せばこっちは行き止まりのはず。
そして2つ目は2つの階段の右側で、恐らく上層部へとつながっている長い階段よね。
あたしは1つ目の選択肢を降りてみることにした。
そこには、黒四ダムとしての記念展示の他、黒部ダムの放水の様子が、先程よりも更に鮮明に映し出されていた。
「きれいだな」
浩介くんがそう呟く。
「うん」
もうすぐ正午の時間だけどどうやら室堂や大観峰にいた時と違い雲が晴れたらしい。
絶え間なく放水し、その影響で右側には小さな虹が常に出続けていた。
足を踏み入れることすら困難だったこの地で、人々が作った建造物たるこの黒部ダムに対し、この虹がまるで祝福の言葉を述べているような感覚でさえあった。
ここには他の観光客もあまり来ていない。
他の人達は皆、向こうの階段で上を目指す人や、右側の休憩所を目指す人が多い。
でも、ここの絶景も、忘れて欲しくないとあたしは思う。

あたしたちは、一度現在時間を確認する。
ダムに何度も足を止め、既に２５分が経過していたがまだ９０分以上の余裕がある。
「よし、上に行ってみるか」
「うん」
あたしたちは元来た階段を登り、更に左に曲がって上層部へとつながる道へと行く。
ダムのコンクリートの絶壁に張り出したその階段は心許ないが、足元は頑丈になっている。
そしてある程度登ると踊り場にたどり着く。
ここから見るダムの光景もまた素晴らしく、あたしたちは他の観光客たちと足を止めるついでに写真を撮っていく。
そして途中にはダム工事で使われたと思われる黄色い機材も展示してあった。
黄色い建物のミニチュアみたいなのは「コンクリートバケット」というらしく、黒部ダムの建造工事に使われた。
「ふう」
かなりの段数の階段を上らなければならないのは、さすがにきついわ。
富山から朝一番で行ったことや、室堂などの高所にいたことからも、休み休みとは言えあたしの体力がどんどん落ちていく。
「ほら優子ちゃん」
疲れたあたしを見て、浩介くんが優しく声をかけてくれる。
もう、何でこんなにかっこいいのよあたしの旦那は！
「あーうん、ありがとう」
かなり恥ずかしいけど、あたしは浩介くんにおんぶしてもらう。
周囲から、「クスクス」と笑う声が聞こえてくる。白人の男性２人組がよく分からない言語で歓声を上げている。
いつもの浩介くんなら、背中に胸が当たっているのに刺激され、このドサクサに紛れてお尻でも触ってきそうなのに、周囲の人の目があるのでそういうことはない。

そして、あたしは浩介くんに助けてもらいつつ、「黒部ダム展望台休憩所」へとたどり着いた。
標高はさっきよりちょっと上がって１５０８メートルになっている。
どうやらさっき見えた「上層部に張り出した人工物」はここみたいね。
「よし、休もうか」
「うん」
苦労して登った甲斐があって、さっきよりも小さな黒部ダムは、更に雄大に見えた。
ダムレストハウスも、さっき渡ってきたアーチも、ここからははるか眼下に見えるが、しかしここからはるか天空に位置する大観峰は遠すぎて見えない。
「どうやら休めるらしいし、まだ時間もたっぷりあるから休もうぜ」
「うん」
あたしと浩介くんは、休憩スペースの椅子に座る。
すると浩介くんが肩を揉んでくれる。
「んー、気持ちいい」
済んだ空気の黒部の大自然の中で、愛する旦那がしてくれるマッサージは至福の時間だった。
「優子ちゃん、やっぱり幸せそうにしてるのが一番かわいいな」
「えへへ」
浩介くんはあたしにいつも、「優子ちゃんは幸せそうなのがかわいい」と言っていた。
そういう気持ちがあると、あたしも幸せになれるのよね。
もしかしたら、あたしが「優子」でいられるも、浩介くんがいるからだと思う。
「脚もマッサージしてあげるよ」
「うん、そうしてくれると助かるわ」
あたしは、疲れた脚を浩介くんに差し出し、揉んでもらう。
このマッサージがあると無いとで、また違うのよね。

「さ、上に行ってみようぜ」
「うん」
ここから更に上層部には、別の展望台がある。
そこが本来の展望台に当たる場所で、あたしたちは更に階段を登って、最上層部へとたどり着く。
「うわあ、きれいだわ」
「ああ」
本日何度目か分からないこのセリフ。
でも、本当にそう言うしかない。
あたしは自分の語彙力の無さを呪いたくなるほど、だ。
テレビ中継用のカメラもそこにあるほどの絶景で、さっきよりも更にダムが小さく見える。
そして先ほど歩いたアーチに歩く人々が、砂粒のように小さく見える。
あれだけ大きい放水も、ここからだと全景が見える。
左側に広がる黄緑色の湖は、とても幻想的だった。
そして展望台の奥に行くと、また薄暗い人工的なトンネルが見えた。
「なるほど、この階段を降りればトロリーバス乗り場のところへつながってるのか」
「うーん、あたしもう少し居たいかな？　５分だけ」
もう少し、この絶景を記憶しておきたい。
時間はまだ、１時間存在する。
「よし、じゃあ、これで計っとこうか？」
「うん」
浩介くんがスマホのタイマー機能を使ってくれる。
何もしないでただ眺めていると、５分って意外と長いのね。
あたしたちは、奥へと続く道へ進む。
そこは、長い長い階段になっていて、トロリーバス乗り場につながっているらしい。

緑色の階段をひたすら降りていくと、破砕帯から出た湧き水の宣伝や、黒部ダムの過酷な工事の様子の写真が見えて取れた。
「真冬でも工事しねえといけねえんだよな」
「うん、想像するだけで大変だわ」
歩道の吊り橋の建設の様子が見える。
あれじゃあ転落事故が耐えないはずだわ。
向かいには黒部ダムをモチーフにしたドラマの台本などが見えた。
あたしには記憶が無いけど、とにかく有名らしい。
更に当時の作業員たちの作業服のマネキン展示も見えた。
「こんなので作業してたのかよ」
ヘルメットこそ装着しているけど、黒部峡谷鉄道で見た関西電力の工事のおじさんたちに比べ、かなり心許ない。
更に近くにはダムのミニチュアのような模型も展示してあった。
確かに、こんな形してたわね。
あたしたちは、トロリーバス乗り場ではなく、もう一度ダムレストハウスのある所に戻ってきた。
「ふう、優子ちゃん、早いけどご飯にする？」
「あーうん、そうしようかしら？」
今はまだ空いているので、ここらへんでお昼ごはんにしようということになった。
休憩所の食堂コーナーへと進むと、まだまばらとは言え、それなりの人数で混んできた。
黒部ダムの滞在時間は残り４０分程度、あたしたちは食券に並び、迷わず「ダムカレー」を注文することにした。
「ダムカレーか。どんな感じだろう？」
正直「ダム」と「カレー」が全く連想できないわ。
「うーんどうなのかしら？」
「お待たせいたしましたダムカレー――」
食堂のおばさんの声とあたしたちの番号を確認するが、どうやら次に来るらしい。
もう少々待って、あたしたちは食券を見せてダムカレーを受け取っ

た。
「なるほど、ダムカレーというのはこういうのか」
浩介くんが合点したような感じで言う。
あたしたちに来たダムカレーはお米が黒部ダムの形になっていて、カレールーをダム湖の水に例えた感じだった。
そう、つまりダムの形をしたカレーというのが、このダムカレーの正体だった。
「うーん、うめえな」
浩介くんはあたしより食べるのは早いが、それでも満足して味わっている。
「ええ」
あたしとしても、ここまでの疲労が一気に取れる、美味しいご飯だったと思う。
また、この「ダムレストハウス」で、あたしたちは黒部ダムにまつわるお土産を買って帰ることになった。
お土産は室堂や大観峰にもあったけど、そこでは買ってなかったので、ここ黒部ダムで買うことにする。
さすがに何も買わないのは悪いものね。

「優子ちゃん、まだ巡ってない所があるな」
お土産を買い終わった浩介くんが「まだ巡っていない場所」について話す。
「ええ」
そう、レストハウスの奥、一瞬だけだけど、当時の工事の様子を描いたレリーフのようなものをあたしたちは見ていた。
そこにも何かあるかもしれないと思い、あたしたちは、レストハウスを出て左側へと行くことにした。
黒い石に「黒部ダム」と書かれ、その脇に「黒部ダム　標高１４５４メートル」と書かれた木の小板が見える。
そしてその右側には「↑慰霊碑」という案内があった。
どうやら殉職者を慰霊しているらしい。

そして更にもう一つ、石碑があるのが見えたので覗いてみると、それは「黒部記」と書かれていた。
近くで見てみると、そこには、「昭和３１年５月に工事が始まりトンネルを掘り始めたが、翌年５月に大破砕帯に遭遇し、人智人力の限りを尽くして半年でこれを解決し、昭和３５年１１月に電力が湧き始め、昭和３８年６月に電力源が全く整った」と書かれてあった。
また、この「黒部記」の近くには富山や大町の他、東京名古屋大阪までの距離と方角、更に本日の水深を案内するオブジェが見えた。
ちなみに、大町は２０キロ、富山は４２キロ、東京は２１０キロ先にあるらしい。
さて、それらを見終わったあたしたちは、殉いよいよ職者たちの慰霊碑のある場所へと歩いていく。
そこは、観光客も気分が重くなるのか、あまり多くの人が訪れておらず、ひっそりと佇んでいる様子だった。
ふと後ろを振り返ると、ダムレストハウスが見えた。
観光客は相変わらず老人や外国人が多くて、景色を見ながら楽しそうに世間話に講じていた。
そんな喧騒から離れ、ひっそりと佇むこの場所に、６人の工事作業員の男性の彫刻が、少し高い位置に張り出されるような形で存在していた。
恐らく、当時の黒部ダムの建設作業の様子なのだろう。
「これが慰霊碑……なのかしら？」
彫刻の題名は「尊きみはしらに捧ぐ」、そしてこの彫刻の右側には、緑色の石の下に、やはり張り出した机があって、机の上には花瓶に花が手向けてあった。
「優子ちゃん、これ……」
「うん」
近くで見ると、それは「殉職者」と書かれた緑の石碑だった。殉職者の名前がたくさん載っていて、この１人１人に家族がいるということを思えば、とても気が重い。
そう、黒部ダム建設で命を落とした人々の名前が刻まれていた。

更に、花の他にはカップのお酒が備えられていて、お供え物を入れる箱の他、鈴と鈴棒が置かれていた。
あたしは、襟を正して、慰霊碑に近付いていく。
チーン
あたしが鈴を鳴らし、浩介くんと共に手を合わせる。
犠牲者たちがどうか安らかに眠ってくれることを、あたしは祈った。
もちろん、そんなことはないんだろうけど、あたしが鳴らした鐘の音が、ダム中に、いや大観峰や室堂、美女平を超え立山の麓まで響き渡っているような、そんな気がした。
「なあ、優子ちゃん」
「ん？」
手を合わせ終わった浩介くんがあたしに向き直る。
「すげえよな。人間って、これだけの犠牲を払っても、こんな所にこんなものまで作ってしまうんだからよ」
浩介くんが、感激した表情を見せる。
「うん、あたしもそう思うわ」
このダムが出来た当時は、登山家がここに徒歩で到達するだけでも困難だった。
それなのに、そんな場所にこのようなダムを作り、そしてあたし達も、延べ１０００万人の人々と、１７１名の命の上に、こうしてダムの絶景を楽しむことが出来る。
それだけではない、この犠牲者の上に今の電力があり、あたしたちの暮らしがあるんだ。
「俺、やっぱりさ、蓬莱の薬は作らなきゃいけねえと思うんだ」
「うん」
「絶対に、不可能じゃない。俺はこのダムを見て、この慰霊碑を見て、そう思ったよ」
浩介くんが、決意に満ちた目をする。
そうよね、蓬莱の薬は、殉職者なんて出てないもの。
「さ、名残惜しいが、そろそろ扇沢に行こうぜ」

「うん」
あたしたちがここに来てから、既にもうかなりの時間が経っていた。
あたしたちはもう一度トンネルに進み、扇沢までの電気バスのある所へと進んでいった。

# 夏の夫婦旅行３日目　残りの道

「ここからは今までの会社じゃなくて昨日見た電力会社が運営しているらしいんだ」
　乗り場の手前についた浩介くんが久々に永原先生のメモを出して話す。
「もしかしてこのトンネルって、さっき黒部記に出てきたトンネルかしら？」
「うん、このメモには確かに黒部ダム建設のために掘られたものって書いてあるな。電気バスの前はトロリーバスだったから……２０１８年までは実は鉄道会社でもあったんだよ」
　浩介くんが面白い話をする。
　確かに、トロリーバスはバスのように見えるけど、れっきとした鉄道の仲間という扱いになっている。
　もちろん、今は電気バスに置き換えられているけど、それでも電力会社が鉄道事業、確かに変な話じゃないけど、そんなことがつい最近まであったというのが、あたしにとっては驚きだわ。
「この電気バス、急速充電が可能なタイプらしいな」
「へえ」
　浩介くんによれば、このタイプの電気バスならば、トロリーバスよりも経費も安くて済むという。
　まあ確かに、トロリー線が要らないものね。
　最近では電気自動車も大分普及してきて自動運転技術ともども次世代技術として重宝されていくわね。
　黒部ダムを出て行くお客さんで後ろもだんだん人が増えてきた。
　しばらく待ってくると、トロリーバスよりも静かな音で電気バスが黒部ダムバス停にやってきた。
　まずは扇沢から来たお客さんを降ろし、それが終わったらあたしたちがバスの中に入る。
　いよいよ、このアルペンルートもこれで最後になる。
　この電気バスを乗り終われば、扇沢に到着する。

そこからは信濃大町駅までバスで、道中には日向山高原や大町温泉郷があって、これらはアルペンルートの長野側入り口として栄えているという。

これまでと同じように、バスは大勢の観光客たちを乗せていく。

やはりこの方面は帰りのお客さんが殆どなのか、車内で聞こえてくる会話は、「すごかったわね」とか「また行きたい」といった声が多数を占めていた。

あたし達もそれは同感で、この絶景は何度来ても飽きそうにない。

あたしは今、永原先生の言っていた意味が分かった。

何故この「立山黒部アルペンルート」を富山側から、それも1日で一気に通り抜ける必要があったのか？

一気にめぐると記憶が薄れないうちにアルペンルートを楽しめ、さっきの記憶と対比しやすいというのもある。

実際、室堂、大観峰、黒部平、黒部ダムでそれぞれの景色の顔は目まぐるしく変化していた。

それに加えて、室堂や大観峰における秘境の雄大な自然を見せておきながら黒部ダムを見るというその順序が、あたしたちを奮い立たせるための舞台装置だった。

浩介くんと同じように思う。

何が会っても、蓬莱の薬を諦めてはいけない。

何故なら、この黒部ダムだって、「出来るわけがない」と言われてきたんだから。

そう言えば、永原先生と修学旅行に行った時も、新幹線について似たような話をしていたっけ？

今まで永原先生が鉄道についてあたしを熱心に教えていたのも、もしかしたら何て思ってしまう。

もちろん、永原先生がそこまで考えていたとは思えないけど、それでも、凄いことだと思う。

「間もなく発車いたします。お捕まり下さい」

いつの間にか立ち客が出るほどに混雑したバスの車内でバスの運転士さんのアナウンスが聞こえ、あたしたちは発車の準備をする。

といっても、シートベルトを締めているか確認するのと荷物を確認するくらいだけどね。
バスはエンジン音をあげずに発車する。
電気自動車は最近大分普及してきたとは言え、まだまだ内燃機関に比べると信頼性が落ちる。
あーでも、徐々に切り替えていく必要性もあるのよね。
「皆様、本日は関電トンネルバスをご利用いただきまして、誠にありがとうございます。立山黒部アルペンルートはいかがでしたでしょうか？　このトンネルは、黒部ダムの――」
そして、黒部ダムとこのトンネルについての解説放送が始まった。
さっきの「黒部記」に出てきた「大破砕帯」と言う単語も出てくる。
件の放送によれば僅か1メートルにも満たない距離を掘り進めるのに、半年を要した。
またこの大破砕帯から出てきた水を利用して、天然水が売られている。
……似たような話を2年前に聞いた気がするわね。
昭和３０年代当時の技術力の問題というのもあっただろうけど、いずれにしても難工事だったことには違いはないわね。
「扇沢から先、信濃大町駅までは、『アルピコ交通バス』が出ております。なお、信濃大町駅までの間にも、日向山高原や大町温泉郷といった観光名所が名を連ねております。是非ご利用下さい」
「へー、『日向山高原』かあ」
バスの案内放送に、あたしがぼそっとつぶやく。
「ああ、そこにはゴルフ場やテニスコートなんかもあるらしいぜ。アルペンルートは冬には営業してないけど、扇沢からのバスは冬も日向山高原止まりで営業しているんだ」
富山から立山までの地鉄電車も、当然冬に運休するわけではない。
アルペンルートが富山から信濃大町とする解釈と、立山から扇沢とする解釈の２つあるのは、恐らくこういう所にあるのかもしれないと感じた。
浩介くんは、永原先生のメモではなく、アルペンルートの観光パン

フレットを見ながら話している。
どこで手に入れたのかはまあ、聞かないでおこうかしら？
バスは暗いトンネルの中を続々と進むが、やがてトンネルから出て向こう側に付いた。
ともあれ、このトンネルによって、あたしたちは赤沢岳を越えて富山県から長野県に入ったことになる。
乗ったのは、１５分位かな？
あたしたちはそれなりの長さをバスで進み、バスを降りると、改札口で通し切符を見せる。
これであたしたちは、立山から扇沢へと抜けたことになる。
ここ扇沢の標高は１４３３メートルで、黒部ダムとさほど変わらないが、ここからのバスは更に標高が下り、信濃大町に着くことには完全に地上に戻ることになる。
ここでは展望台やレストランがあるけど、すぐに信濃大町行きのバスに乗り換えることができる。
路線バス用の切符売り場で信濃大町駅までの切符を買った。
結局、富山駅から信濃大町までの運賃は、予定通り１００００円をオーバーした。
「マイカーもここまでは来られるから、駐車場があるんだ」
「あ、本当だわ」
浩介くんが手をかざす先には一般有料駐車場という看板が見えた。
もちろんあたしたちは、マイカーではないのでここに用事はない。
「結構並んでいるわね」
信濃大町行きのバス乗り場を見ると既に結構な行列ができていた。
とりあえず一番後ろに立つわけだけど、あたしは乗れるかどうか、ちょっと心配になる。
「ああ、だけど1本逃しても余裕があるように予定は組んであるから心配しなくて大丈夫だよ」
浩介くんによれば、関東から信濃大町駅に停車する特急列車は普段1往復で、下りは千葉駅から、上りは信濃大町より先の南小谷駅から出ている。

この特急列車の切符をあたしたちはあらかじめ購入してある。
バスには「信濃大町駅⇔扇沢」と書かれていた。
運営しているのは「アルピコ交通バス」と言うらしく、鉄道事業もやっているらしいわね。
「よし、乗れそうだな」
浩介くんがバスの中を確認し、あたしたちは最前列に立つことになった。
ふう、ギリギリセーフね。
「うー立ちながらかあ……」
とはいえ、途中で座れる可能性は殆ど無いし、うー、辛いわ。
「優子ちゃん、大丈夫？」
浩介くんも、心配そうにあたしを支えてくれる。
「うん」
本当に、あたしの心を捉えて離さないわよね。うちの旦那は。

やがて発車時間になり、バスがゆっくりと発車した。
「次は、日向山高原です」
日向山高原までの道のりはやはり長い。
このバスは室堂行きほどではないけどカーブが続いていて、一気に下るため、あたしとしても、よく体を支えなきゃいけない。
「おっと、優子ちゃん」
「あ、浩介くんありがとう」
あたしがバランスを崩しそうになると、浩介くんが優しく支えてくれて、心を奪われて惚れてしまったあたしの顔が一気に真っ赤に染まってしまう。
外国人観光客の男性の集団が、あたしたちを恨めしそうに見ているけど、大半の老人や外国人観光客たちは、あたしたちのことを微笑ましそうに見ている。
浩介くんにこうして守られることで、女の子はかわいくなっていくのよね。
そうすればまた、浩介くんもあたしのことが好きになってくれるは

ずだわ。
もしかしたら、不老になったら、恋も冷めないのかもしれないわね。
「間もなく、日向山高原です」
しばらくすると、バスは減速を初めて日向山高原へと到着した。
日向山高原までは小気味いい林道で、室堂までのバスとは全く趣が違っていて、これもまた「帰り道」にはもってこいの環境だった。
ここからは地域輸送も兼ねていて、またバスの案内によれば大町温泉郷よりも先のバス停は降車専用になるらしい。
日向山高原では数名の乗客が降りていった。
そして、そこからはバス停の距離が一気に短くなり、地元住民と思われる人も乗ってくる。
既にかなり混雑しているから大変だけど、それでも「大町温泉郷」というバス停では先程の日向山高原よりも多い人数が降りてくれて、それなりにマシになった。
と言っても、あたしたちにとっては立ちっぱなしなのは変わらないけどね。
大町温泉郷は、アルペンルートを長野側から行く人々の玄関口として栄えてもいるらしく、あたしたちみたいに一気に直帰せずに、恐らくここに温泉宿を取る人も多いんだと思う。
ここから先にある降車専用のバス停では、さっき乗ってきた地元住民以外誰も降りず、結局信濃大町駅までずっと立つ羽目になった。
信濃大町駅までは４０分程度かかった。
そして件のバスは、信濃大町駅から扇沢に行くお客さんたちを乗せていく。
現在時刻は既に１４時を回っていて、あたしたちが富山から既に９時間を要したことを考えると、今から行っても立山には抜けられる気がしない。
もしかしたら、黒部ダムだけ見ていくのか、あるいは室堂か弥陀ヶ原で宿泊するのかもしれないけどね。
「ふう、疲れたわ」

ともあれ、浩介くんが支えてくれたとは言え、最後の最後でこの４０分立ちっぱなしはあたしにとってはあまりにも辛く、足が悲鳴を上げていた。
「少し休もうか、優子ちゃん」
「うん」
目の前には、赤と茶色で木造建築風に仕立てられ、個性的な「信濃大町駅」と書かれた看板が見える。
「信濃」という地名で分かるように、ここは紛れもなく、長野県だった。
あたしたちは、富山県から長野県へと抜けたのだ。
正確には扇沢の時点で長野県だけど、やはりこうして「信濃大町」に着くと長野県という事実をより強く力付けられる。
行きの北陸新幹線が、新潟県を一旦通って行ったものだから、未だに現実離れを覚える。
「何か現実感がないわ」
「ああ。永原先生も、『理屈ではアルペンルートを使えば立山から信濃大町に抜けることが出来ることは分かってたけど、それでも富山県の山奥を見てきていきなりここにたどり着いたのが信じられなかった』『佐々内蔵助殿と同じように越中から我が故郷信濃に抜けた現実が全く沸かなかった』って書いてるな」
浩介くんが、永原先生のメモを取り出して言う。
駅前にはタクシーやバスが止まっていて、恐らく扇沢までのタクシー需要を見込んでいるのかもしれない。
そう言えば、扇沢でタクシーを降りていたお客さんもいたっけ？
……まあいいわ。
ともあれ、あたしたちは駅の中に入ることにする。
駅構内は、やはりアルペンルートの案内が多い。
今のあたしたちにとっては終着駅だけど、多くの人にとっては始まりの地でもあるものね。
でも、今のあたしには、もう逆回りに行く気にはなれないわ。
「信州の土産もあるのか」

「うーん」
あたしたちが乗る列車まで、あと1時間近くある。
その間、あたしと浩介くんは、信濃大町駅付近でどうやって時間を潰すか考えた。
だけど、あたしが立ち疲れたのもあって、待合室でゆっくりと休むことになった。
待合室は結構空いていて、恐らくあたしたちと同じ列車に乗る人々が主に座っていた。
その装備からして、あたしたちと同じようにアルペンルートに行ったことは明らかだ。
「優子ちゃん、特急列車の切符あるかい？」
「うん」
あたしは、信濃大町からのＪＲ切符を浩介くんに見せる。
グリーン車指定席の番号が、浩介くんとは隣り合わせになっている。
ブー！　ブー！　ブー！
「あら？」
浩介くんにマッサージしてもらいながら、列車の到着をひたすらにボーっとして待っていると、また携帯電話のバイブの音が鳴り響いた。
よく見ると、浩介くんのスマホの方にも届いていたらしい。
「優子ちゃん、誰から？」
「蓬莱教授からだわ」
宛名は蓬莱教授だった。
あたしは、携帯電話を操作して内容を確認する。

題名：新しい薬が出来た
本文：優子さん、浩介さん、ようやく寿命を１０００歳とする薬ができた。これについては2人の家に薬を送っておくので、旅から帰った翌日昼から飲んで欲しい。併せて記者会見の準備も始めておくので心して置いて欲しい。ただ、未だに不老への理論の道筋は出来てい

ない。もう一つのブレイクスルーを、早く見つけたいものだ。
「浩介くん」
「ああ、これで6日後には俺も１０００歳まで生きられるということだな」
浩介くんが小さな声で話す。
待合室の人は、世間話に夢中になっていてあたしたちの会話を気にも留めない。
最も、「蓬莱の薬」については機密事項なので、おいそれと言いふらすのもまずい。
うーん、今のうちに隠語でも考えておいたほうがいいかしら？
「間もなく、1番線に、特急あずさ――」
「あ、浩介くん、列車が入るわよ」
「おう」
信濃大町駅の自動改札に切符を入れ、あたしたちは特急列車が入る1番線へと歩みを進める。
あたしたちが乗るのはグリーン車で、毎度のことながらこれも蓬莱教授の支援のおかげだわ。
「ふう」
アルペンルートに行ってきた観光客たちが主な乗客だけど、グリーン車に乗っているのはあたしたちと1組の老夫婦だけだった。
あたしたちが電車のグリーン車に座ると、特急らしく、慌ただしく出発していった。
「――次は穂高です」
その割には、自動放送は簡素だったけど。
「信濃大町からご乗車のお客様、本日もＪＲをご利用下さいまして、誠にありがとうございます。この電車は特急あずさ新宿行きです。これから先止まります駅は穂高、豊科、松本、塩尻、岡谷、下諏訪、上諏訪、茅野、小淵沢、韮崎、甲府、八王子、立川、終点新宿です。お客様にお願い致します――」
すぐに補足のように、車掌さんからの案内放送が入る。

この電車は終点の新宿駅までは3時間ほどの所要時間がかかることになっている。

もっと停車駅の少ない「スーパーあずさ」ならば所要時間は短くて済むらしいけど。

「こっちは主にあずさ用で、スーパーあずさには別の車両が投入されているらしいな」

この電車は登場してから２０年目になる列車で、そろそろ新型の投入と言う時期に来ている。

一方で、「スーパーあずさ」の方は、５年前に紫色の新型車が投入されている。

大糸線に入る特急列車は「スーパー」ではないので、そちらは別の機会があったら乗るということになる。

あたしたちは、旅を振り返り、そしてこれからのことを考える。

蓬莱教授は「１０００歳の薬」に成功したとしているが、長期的な研究には行き詰まっている。

しかし、あたしたちが、黒部峡谷鉄道と関西電力の人々を見て、そして立山黒部アルペンルートを旅した。

今回の旅行で、蓬莱教授と永原先生から、単に休みを楽しみリフレッシュせよというだけではなく、「蓬莱の薬は不可能ではない」「苦難を乗り越えろ」と言うメッセージを受け取ることもできた。

列車は松本からスピードを上げ、中央線へと進んでいく。

グリーン車に乗っていた老夫婦も甲府駅で折り、また途中の駅から乗ってきたお客さんも見える。

特急列車から降りた後は、家に帰るまで夕方のラッシュ時にぶつかっちゃったけど、そこまで長い時間ではなかったので苦労はなかった。

「ただいまー」

「優子ちゃん、浩介、おかえりなさい」

お義母さんが旅行の帰りに出迎えてくれ、疲れたあたしに配慮して

荷物を運んでくれる。
あ、鍛えてる浩介くんは自分持ちだけどね。
「おお、さ2人とも、話を聞かせてくれるかい？」
そしてお義父さんが、あたしたちに土産話をせがんでくる。
ふふ、絶景の写真を、たくさん見せちゃおうかしら？
でもその前に、温かい夕食を食べて、明日以降の卒業論文に備えることにした。
多分このまま研究に協力していけば、きっといいことがあると思うから。

# 秋へ向けて

「えーニュース速報です。佐和山大学の蓬莱伸吾教授によりますと、本日人類の寿命を１０００歳まで引き伸ばす薬の発明に成功したと発表しました。また、以前に完成した『１２０歳の薬』につきまして、抗がん剤などの治療薬としての販売を併せて検討しているとしています」

大学生活の夏休み最後の日、あたしと浩介くんはテレビの報道に釘付けになっていた。

やはり、報道機関を握っている蓬莱教授の情報通りだった。

ちなみに、風前の灯になっている国際反蓬莱連合は、いつもなら同時に反対表明を出すのに、今回に関しては何も声明を出してこない。

どうやら、公安調査庁とＣＩＡの共同作戦によって内紛を誘発し、自然消滅しかかっているという情報は信用して良さそうね。

どちらにしても、件の牧師はどんどんと追い詰められているのは確か。

やはり、本気を出した国家機関に民間人が勝つのは不可能に近いのかもしれないわね。

ましてやそれに、今やその不可能を実現させ、国家以上の権力を持つ蓬莱教授が加わったともなればなおのことだ。

「えーでは、これより記者会見を始めます」

テレビがまた、ライブ中継で蓬莱教授の記者会見の様子を写し出す。

テレビのテロップには、「佐和山大学教授蓬莱氏、人間の寿命を１０００年にする薬を発表」と書かれていて、記者会見が終わった後には、ニュースのアナウンサーは「これまでの薬の２倍の寿命」とか「人類最高齢の永原マキノ氏の２倍の人生が目の前に」という発言を繰り返している。

また、蓬莱教授の意向なのか、「旧約聖書の登場人物よりも長生きできる世界が迫っている」とも、アナウンサーがしきりに主張している。

蓬莱教授はこの会見で、「日本性転換症候群協会のご協力の下、多く

のＴＳ病患者からサンプル遺伝子を得られた」という内容も話している。
　この事については、当初永原先生が公表に難色を示したものの、「反蓬莱連合に、更に打撃を与える効果が期待できる」というあたしの意見で採用されたものだったりもする。
「それでは、完全不老の薬も開発実現が近いということでよろしいでしょうか？」
　あるマスコミの記者の人が質問をする。
「あーいや、まだ実は、乗り越えねばならない壁がある。コンピュータのシミュレーション上では、実は既に不老の薬になっているはずなんだ。それが１０００年で寿命が来てしまうということは、どこかを見落としているという証拠だ」
　蓬莱教授が以前あたしたちに話してくれたのと同じ内容を話す。
　現在に至るまで、γ型の存在は確認されていない。
　老いを司るとされるテロメアを、原情報を常に参照しながら絶えず修復するα型、最初から完全な状態で複製するβ型、あたしたちＴＳ病患者は少なくともこの２組の遺伝子を使い分けて不老を維持しているとされている。
　しかし、この組み合わせだけでは、あたしたちの遺伝子を再現していることにはならない。
　何かもう１つ、あたしたちにはバックアップの機能があるはずだ。
　だけど、それを主に使っているＴＳ病患者は、今の所は見つかっていない。
「報道加熱したい気持ちも分かるし、筆が滑る気持ちも重々理解しているし、『いい加減聞き飽きた』という人もいるだろう。無理もない。ただ、まあ一応言わせてくれ」
　蓬莱教授は、記者会見の最後に、決まり文句のように言う言葉がある。
　それを言う前には必ずこうした枕詞をつける。
　萎縮しがちなマスコミに対して、蓬莱教授の優しさアピールとも言えるだろう。

「俺が作る薬は、かぐや姫に出てくる不死の薬でもないし、秦の始皇帝が求めた『不老不死』の薬でもない。死なぬ薬だと思って変な気持ちを起こさないでくれ」
そう、現在のマスコミではほぼ全くといっていいほどになくなったが、現在でもインターネットでは「蓬莱教授の不老不死」という文言が跡を絶たない。
あたしたち宣伝部の方でも逐一訂正させてはいるが、中には「老化しないだけでも不死を名乗るだけの資格はある」「不死じゃない警察」と開き直る人もいて困ったものだわ。
死ぬことがあり得るのに不死な訳無いってことくらいすぐに分かることなのにね。

「とりあえず、ようやく安心して研究に望めそうでよかったわ」
一通りの記者会見が終わると、あたしはそう呟く。
遺伝子による研究テーマを選んだあたしは、卒業論文の構成に悩んでいた。
既に大体の骨組みは完成していて、後は適度に肉付けをすれば、蓬莱教授に見せて指導を仰ぐことができそうだけど、その肉付けがとても難しいのよね。
とにかく明日からはまた、大学での研究が続く。蓬莱教授のためにも、いい卒論を書かないと行けないわね。

「浩介くんの方は卒論は進んでる?」
研究室での空き時間、あたしは浩介くんに卒論の進行具合を訪ねる。
「ああ、蓬莱教授によれば、『かなりいい論文になる』ってさ」
どうやら浩介くんは、先に論文を見せたらしいわね。
「それはよかったわ」
ともあれ、蓬莱教授のお墨付きさえあれば、ひとまず卒業はできそうね。
問題は、修士以降の話だろう。

「で、優子ちゃんの方こそどうなんだ？」
浩介くんがあたしの進捗具合を訪ねてくる。
「あたしの方はまだ蓬莱教授に見せてないわ」
「そうか、そろそろ提出した方がいいんじゃねーか？」
「うん、考えておくわ」
あたしの方が、ちょっと積極性が欠けているのかも。
とりあえず、あたしとしてはＴＳ病の不老メカニズムについて、もう少し考えていきたい。
卒論レベルなら十分かなとも思うけど
データベースにあるあたし自身の遺伝子も、存分に活用しないといけないわね。

コンコン
「はーい」
あたしたちのいる部屋の扉がノックされる。
この時期は、来年度からの研究室配属のため、３年生たちの見学がとても増える時期なのよね。
ガチャッ
「あ、優子さん、浩介さん！」
入ってきたのは歩美さんと大智さんだった。
あたしたちが４年になって、天文サークルの部長は副部長が昇格する形で桂子ちゃんから達也さんに、そして副部長は大智さんになっている。
「あら？　歩美さんも見学かしら？」
「ええ、蓬莱教授の研究に、少しでも役に立ちたいですから」
歩美さんが笑顔でそう話す。
一方で、歩美さんの彼氏の大智さんの方は浮かない表情だった。
「おや？　大智さんは浮かない表情ね」
「まあ、俺の成績だと配属される可能性低いからさ」
大智さんが、苦々しい表情で話す。
確かに、この研究棟は人数も多いけど人気も高く、よほどいい成績

じゃないと入れない。
　幸いにして、あたしたちは蓬莱教授の意向もあって問題なくここに入れたし、歩美さんもＴＳ病ということで大丈夫だけど、大智さんはそうもいかないものね。
「それで、見学かしら？」
「ええ、優子さんと浩介さんは卒論ですか？」
　歩美さんがあたしたちがＰＣに向き合っている状況を見て言う。
「ああ。俺達２人とも、後はこの卒論が終われば卒業決定なんだ」
　それは浩介くんだけでなく、あたしも同じ。
「へえ、私達は後期の実験に苦労しているわ」
　あー、やっぱりそうなのね。
「実験は大変だぞ。でも、それを乗り越えれば４年になって楽できるぜ」
「う、うん」
　浩介くんの話に、歩美さんも納得した表情をする。
　やはり実験がきついのはみんな同じらしいわね。
　蓬莱の研究棟は見学者が多いけど、この研究棟で何が研究されているのかは、世界的にも有名なので、参加者たちはそこまで見学をしない。
　研究棟上層の中枢部へは、あたしたちを除き、論文の資料検索以外でも自由に立ち入るためには、博士課程まで行かないといけない。
「えっと、それじゃあ私達は失礼するわね」
「うん、頑張ってね」
「はーい」
　歩美さんが気楽な表情で部屋を出ていく。
　歩美さんは蓬莱の研究棟へ配属が決まっているとはいえ、去年のあたしたちと同様、アリバイ作りのために研究室を見学しないといけないのは大変よね。
「そう言えば、中庄の奴はここに来ねえんだな」
　浩介くんが達也さんが来ないことを気にしている。
「あーほら、彼なら学部も違うし、桂子ちゃんの研究室が第一希望じゃ

ないのかしら？」
まあ、蓬莱教授は世界でも有数の有名教授なので、学部違いだとしてもみんな一度は見学しに来るものだけどね。
「ところであなた、話変わるけど宣伝部は大丈夫？」
あたしは、最近出入りしていない宣伝部について浩介くんに問い合わせる。
「ああ、最近じゃ情報の取り次ぎが主だよ。何てったって、学生の本分は勉強だし、最近は俺がいなくても十分にやっていける体制作りにもなってるぜ」
浩介くんが柔らかい表情でそう答える。
「それは良かったわ」
国際反蓬莱連合への内部分裂工作は、相変わらず進んでいる。
そのお陰で、蓬莱教授の１０００歳の記者会見の時には、僅かにＷＥＢ上で抗議声明を発表しただけで、実質的に何も妨害活動していないところまで確認できた。
公安の調べによれば、件の牧師は独身で、家族親戚関係もない天涯孤独だという。
永原先生は、「族誅出来ないのが彼をここまで無謀化させた原因だわ」「失うものがない人ほど怖い」「私は失うものだらけだからここまで弱くなってしまった。まさに天下無敵の無一文という言葉通りだわ」と嘆いていた。
日本語での宣伝部は、最近は海外宣伝部への指導や、政府側との微調整といった活動にシフトしていて、浩介くんの活動は最近では「不死」文言の監視にとどまっている。
「そそ、俺はいい意味で『用済み』になったんだよ」
浩介くんが明るい笑顔で「用済み」という言葉を使う。
でも、浩介くんが「宣伝部」で用済みだからといって、この「蓬莱の研究棟」で用済みになったわけではない。
浩介くんにはこれから、あたし共々「修士課程」に進むことがほぼ確定している。
場合によっては、修士でも就職せず、「博士課程」に進んだり、その

後も研究員としてそのままここに残ることだって考えられるだろう。
まだまだあたしたちの進路は不透明ね。
「優子ちゃんも、そろそろアドバイスを受けとけよ。蓬莱さんの好みに合致しているか、確認しておくんだぞ」
浩介くんが重ねてあたしに忠告してくれる。
「うん、分かってるわ」
理系の大学の研究室は、教授の権限が強く、場合によっては独裁的な空間にもなるとされているが、蓬莱教授は、あまり学生に干渉したりしない。
３年生の時にあたしは他の教授たちからも、「研究室は教授の王国だ」とか散々に脅されていたので、拍子抜けしてしまった。
その事について蓬莱教授に訪ねたことがあったけど、「今俺がしている研究は人類史にさえ関わるものであることで、学生１人１人に干渉するのは時間の無駄」ということで、要するに「研究が忙しい」という理由と、「単純に研究所の規模が大きいため、学生管理何てものがそもそも非現実的」という、身も蓋もない理由とをあげていた。

一方で、１０００年の薬は今度の文化祭でも大々的にアピールすることになった。
「それで、うちの天文サークルでも、『１０００年あれば何が出来るか？』ということを宇宙に絡めてアピールしたいんですよ」
部長になった達也さんが、開口一番にそんな発言をする。
あたしたち天文サークルも、そして他のサークルも、蓬莱教授に何か協力できないかと気を揉んでいるのだ。
「うーん、１０００光年となると広いし、かといって恒星間宇宙船ともなると１０００年でも短すぎるのよねえ」
例えば、海王星は１０００年で何周するとか、そういった展示にとどめた方がいいというのが、慎重派の桂子ちゃんの考えだった。
桂子ちゃんとしても、自身が蓬莱の薬を服用し、寿命が１０００年となった身なので、他人事ではないとはいえ、これまでの展示の慣行を変えるのには難色を示している。

最も、慣行といってもまだ3年しか続いていないものだけどね。
「天体観測で撮った星の光年数を表示してみるというのはどうですか？」
歩美さんが新しい視点で提案する。
「あら、いいわね。それなら折衷案になりそうだわ」
桂子ちゃんが、歩美さんの提案を好意的に受け入れている。
「うん、いいなそれ」
「惑星とかにも応用できそうだな」
「金星まで歩いて行けたとしたらとか面白いかも」
天文部の各々が、意見を出し合う。
天文サークルのマンネリ化した展示方法が、にわかに活況を帯びてきた。
ただ、蓬莱教授からの通達もあるように、「露骨な個人崇拝」だけは厳禁となった。
いかに佐和山大学が蓬莱教授の大学と化しているとはいえ、やはり露骨な個人崇拝に繋がるのは蓬莱教授としてもイメージ戦略としてよろしくないと考えているらしい。
それに対しては、蓬莱教授自身が大の宗教嫌いであることも学生の間では有名になっているため、学生同士が自重し合う展開になっている。
「ふう、じゃあ本日はここまでにします」
「「お疲れ様でした」」
達也さんの号令と共に天文サークルも解散する。
文化祭が終わればあたしたち4年生はサークルも引退となる。

「優子さんたちは大学院ですか!?」
「うん、龍香ちゃんは？」
帰り道、桂子ちゃんと達也さん、合流した龍香ちゃんと合わせて5人で帰る。
「私は大企業ですよ。いやー人手不足っていいですねー！」
5年ほど前から、日本は「空前の人手不足」と呼ばれていて、就職

活動は売り手市場が続いている。
龍香ちゃんも含め、あたしたち小谷学園の元クラスメイトたちは就職に大して苦労していない。
あの時のクラスメイトたちが集まるＳＮＳも、卒業直後に比べると大分落ち着いたけど、それでも蓬莱教授や永原先生に関するニュースや情報交換に対して頻繁に用いられている。
というのも、やっぱりテニスの世界ランキングで、相変わらず１位の恵美ちゃんや、メディアの取材などを受けているあたしたち、そして永原先生が参加しているのが大きい。
多分、そういった「著名人」の参加がなければ、今頃あのＳＮＳは廃墟になっていたと思う。
永原先生曰く、「これほど結束力の高いクラスは今だかつてないわ」とのことだった。
「でゅふふ、もうすぐ彼と結婚して、彼の収入が上がり次第、できちゃったで寿退社しますよー！」
龍香ちゃんは、専業主婦になる気満々らしいわね。
ちなみに、蓬莱の薬も、彼氏に早く飲ませたいらしい。
「それで、木ノ本さんはどうなんですか？」
「私は修士になるわ」
あら？　桂子ちゃんもここに残るのね。
「？　どうしてですか？　今売り手ですよ！　また景気悪くなったらどうするんですか？」
あたしたちはともかく、桂子ちゃんに対しては確かにその疑問は合っている。
「あーうん、ＪＡＸＡ行くには修士がいいかなって。これから蓬莱の薬ができれば、ＪＡＸＡは間違いなく超人手不足になるわ」
桂子ちゃんはあたしたちと政府とのやり取りをある程度までなら知っている。
蓬莱の薬が完成した後は、それに伴う人口爆発を見越して、農業開発と宇宙開発に多額の予算が投じられることは、公表こそされていないが、各種のインターネットでは当然の前提とされている。

いずれにしても、桂子ちゃんは大学院まで一緒ということになる。
思えば桂子ちゃんとは、幼稚園・小学校から修士まで、同じ学校に通っていたことになるわね。
家はちょっと離れちゃったけど、今でも正月の時には交流があるし、達也さんの家は幸いにして同じ沿線なので、桂子ちゃんが結婚しても、あたしたちはいつでも会いに行けるわね。
「なるほど、したたかですねえー」
龍香ちゃんも唸っている。
「へへーん」
桂子ちゃんが、あたしほどではないその豊かな胸をピンと張る。
彼氏が出来てから、目標だった「９０センチ、Ｆカップ」を達成したらしいけど、それでもあたしと並ぶと、桂子ちゃんの巨乳も全然目立たない。
……まあ、それだけあたしが規格外ってことだけどね。

久しぶりの集団下校はとても楽しかった。
あたしたちは、桂子ちゃんたちとは方向が逆なので、駅で別れる。
「皆それぞれの道に行くんだな」
「ええ、あたしたちは、あたしたちで頑張りましょう」
それぞれができることをする。
あたしたちは、蓬莱の薬を完成させる。
その目標に向けて頑張ることを、あたしたちは改めて胸に誓った。

# 久々の小谷学園

金曜日の昼下がり、あたしたちは昼休みに学食を食べていた。
「ねえねえあなた、今度の日曜日、学園祭に行かない？」
「え!?　学園祭なら来週だろ!?」
浩介くんが不信感を示す。
「へへーん、学園祭は学園祭でも、小谷学園の方の学園祭よ」
そう、今年は小谷学園の学園祭が佐和山大学の学園祭よりも1週間早く行われる。
年度によっては順序が逆になることもあるし、この辺りはそれぞれの学校の調整の問題だったりもする。
「あーそうか、あそこ2日目なら一般にも開放されてるもんな」
実は、小谷学園の学園祭に行くのは、永原先生からの呼び出しも兼ねている。
そう、中学時代に発病し、高校に入るまではあたしが担当し、小谷学園に入学したら担当を永原先生に引き継いで貰った患者さん、「稲枝弘子（いなえひろこ）」さんの様子を見に行くのだ。
「そそ、で、浩介くん、制服捨ててないわよね!?」
「もちろんだよ。てか先週制服でしちゃったばかりじゃねえか！」
浩介くんがあたしの問い詰めに少し大きな声で否定する。
小谷学園の制服は、あたしたちの中ではかけがえのない思い出であると同時に、夫婦生活の刺激を維持するために欠かせない物でもある。何分、当時のことを思い出すと今でも盛り上がったりするから、ね。
なので今でも、大切にクリーニングし、あるいは補修作業をしながら維持管理に勤めている。
「ふふ良かったわ。じゃあ制服着ましょう？」
卒業生が学園祭に制服で参加すること自体は、小谷学園では珍しいことではない。
ただし、ルールにあるわけではないけど、何故かみんな、卒業生であることを隠して参加するのが慣例になっている。

また、1日目に見つかった場合は、穏便かつ丁重に追い返されることにはなっているけど、実際にはそういった事例は確認されていない。
まあ、先生が生徒の制服着てミスコンに出たりする学校だものね。
「でもよ、もう大学４年だろ？　優子ちゃんはともかく、俺は似合わねえんじゃね？」
浩介くんが自分の容姿について懸念を話す。
でも、あたしには全くそうは見えない。何故なら――
「大丈夫よあなた、蓬莱の薬を飲んでいるんでしょ？」
「あー、そういやそうだったな」
浩介くんは、蓬莱の薬を飲んだお陰で、高校を卒業してから殆ど容姿に変化がない。
外見年齢にすれば１９歳にもなっていなくて、十分に高校生でも通じる外見だ。
もちろんあたしに至っては、女の子になった5年前から、一切容姿に変化がない。
「ふふ、じゃあ楽しみにしましょう」
「ああ」
あたしたちは、当日のことについて話し合った末に午後の研究所勤めに入った。

ピピピピッ……ピピピピッ……
目指し時計の音が鳴る。
今日は日曜日でゆっくり休む日、というわけではない。
あたしは、自分の気持ちを高校生だった頃へと戻していく。
あたしは布団から出て目指し時計を止める。
パジャマ姿のまま制服と下着だけを持ってお風呂の脱衣所に行く。
「ふう」
あたしは、手慣れた手つきで服をぱぱっと脱いで全裸になる。
自分の裸なんて何度も見慣れているけど、こうやって気分転換するときれいでエロい体してるなあと思うわ。

あたしは、水色と白のしましまの下着を着込む。
次に制服の下のＴシャツを着て、次に白いブラウス、そしてリボンをつける。
リボンがちょっと曲がったので、あたしは微修正して直す。
そしてブラウスやシャツの裾を巻き込んでスカートを穿く。
最後にスカートをちょっとだけ折り曲げて、在学当時の短さを思い出しながら調整して完成。
ふふ、大学４年生で２２歳になったけどあの時と何も変わらないわ。ＴＳ病患者に実年齢は無意味、ね。
残った着替えは別の荷物の袋に入れる。
「おはよー」
「優子おはよう、あらあら、昔を思い出すわねー」
母さんが、あたしに挨拶してくれる。
そう、実は数日前に浩介くんが「折角だから校門で待ち合わせしようよ。優子ちゃんは実家に帰ってさ」と言ってきた。
なのであたしは今、最初の結婚記念日の時と同じく、また「石山優子」に戻った。
ただし、あくまでも「気分だけ」なので、最初の結婚記念日の時みたいに結婚指輪がまた婚約指輪に戻るということまでは気にしない。
浩介くんによれば、あくまでも「文化祭に合わせたごっこ遊び」の範疇にして、のめり込みすぎないようにしたいそうだ。
「優子、相変わらずだな。まるでタイムスリップしたみたいだ」
「えへへ」
父さんの言う通りだった。
この光景は、浩介くんと結婚する前の日常だった。
今の生活から、浩介くんを抜くことは考えられないし、多分浩介くんも同じだと思う。
あえてお互いがこうして距離を取ることで、再会後に愛を深める役割を持っているんだと思う。
でも、昔の生活を追体験するのも懐かしいものだった。
浩介くんがこういうことを言ってくるのは、よほどあたしとの関係

に自信があるということでもある。
あたしは、昔のように朝食を取ると、歯を磨いてトイレに行き、筆記用具と空のノートを入れた通学鞄を持つ。
「行ってきまーす」
「行ってらっしゃーい優子」
母さんに見送られ、あたしは実家を飛び出す。
次に訪れるのは、恐らく年末年始のことになると思う。
もちろん、ひょんなことから帰る可能性はあるかもしれないけどね。
あたしは、持っていたＩＣカードを取り出して自動改札機を通る。
あの時と違うのは、定期区間ではないので、チャージしていたお金を引かれるということ。
電車の中をよく見ると小谷学園の制服が見えた。
ふふ、あたしもうまく溶け込めているかしら？
あの時のことを、あたしはまた思い出す。
文化祭は（いや正確には後夜祭はだけど）常にあたしの人生の中で大きな転機をもたらしてきた。
２年生の後夜祭の時に浩介くんに告白されて、あたしは正式に浩介くんの彼女になった。
そして３年生の後夜祭の時には、全校生徒と先生の前で公開プロポーズされた。
「まもなく――」
小谷学園の最寄り駅が近い放送を受けて、あたしは他の生徒たちに混じって、降りる準備をする。
本当に、何だか今が４年前みたいだわ。
ワイワイガヤガヤとした中で、あたしは駅の階段を上がって、佐和山大学とは反対の方角へと進む。
こっちの改札口に来ることは殆どなくて、久しぶりの出来事にとても懐かしく感じてしまう。
４年前までは、毎日のように通った道を進む。
後輩たちが、文化祭を楽しみに歩いている。

「なあ、稲枝以外にあんなかわいい1年いたっけ？」
「え⁉　あー確かに、あいつとは髪型違うもんなあ」
「うーん、でもどっかで見たことある気がするんだよなあ俺」
「そうそう俺も、何か誰かに似ていると言うか」

近くを歩いていた人の会話でようやくあたしが、制服の色から1年生に扮していることに気づく。
1年生と言えば、あたしはまだ優一だった頃で、もちろんいい思い出はない。
1年生の時にも林間学校や文化祭、体育祭といったイベントはあったし、優子になってからとは違って、体育は得意科目だった。
何だろう、今のあたしは1年の女子生徒って思うと、ちょっとだけ気持ちが軽くなったわ。
最初の1年間は、女子生徒として通えなかった分の埋め合わせだと思えば、あたしも気が楽だわ。
道中、あたしが女の子として最初に目覚めた総合病院や、女の子として初めて外食したハンバーガー屋さん、また遠目には、男の時の制服と体操着を売ったリサイクルショップといった、女の子の黎明期時代の思い出の建物たちも見えた。
「懐かしいわ……」
誰にも聞こえない程に小さな声で、あたしはそう呟く。本当に自分が女子生徒としてここに参加しているような錯覚を覚える。
やがて小谷学園の校門が見えてきた。
あたしはすぐに、校門前で佇む1人の「男子生徒」の存在に気づいた。
「浩介くん！」
「おはよう優子ちゃん！」
そこにいたのはあの頃と変わらないままの、制服姿の浩介くんだった。
あたしは、寂しさを紛らわしたい一心で、浩介くんの腕を絡めて胸

を軽く当てる。
「っ！」
浩介くんが「ドキッ」という音を立ててしまいそうな程にビクンとする。
制服を着るだけで、あたしたちの気分は大きく変わってしまう。
あたしたちがいちゃついているのを見て、周りの生徒たちの視線も一気に集まる。
「な、なあ優子ちゃん。その、言いにくいんだけど」
「うん？」
浩介くんが、ゆっくりと口を開いてくる。
もしかして恥ずかしいのかしら？
「下駄箱、どうしよう？」
「あーうん」
予想に反して浩介くんが心配していたのは下駄箱だった。
確かに、卒業したあたしたちに下駄箱があるわけない。
それどころかまだ文化祭は正式に始まってる時刻ではなく、言わばあたしたちは「潜り」をしているわけだ。
「その……ほら、こっち」
あたしは中庭に繋がっている方の場所へと移動する。
ここはそう、在学中の知識では人気もなくて、うん！
「ここで履き替えよう」
「ああ」
あたしは鞄から上履きを取り出して、足をちょっとだけ上げて上履きに履きかえる。
ローファーもそうだったけど、とっても懐かしい感触だわ。
そして何より、上履きにあった「石山優子」の文字、今ではすっかり「篠原さん」だけど、この上履きはあたしがかつてこの学園では結婚する前に「石山」を名乗ってた証でもある。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
浩介くんがちょっとまずったという顔をする。

「俺たち、上履きに『3―1』って書いてあるぜ」
「あ」
浩介くんに言われてあたしはもう一度視線を下に下ろす。
さっきは気付かなかったけど、上履きには「3―1　石山優子」と書かれていて、浩介くんの方も「3―1　篠原浩介」と書かれていた。
しかし、制服の校章の色からも分かるように、浩介くんもあたしも、今は1年生に扮しているということになる。つまり、今のあたしたちは1年生の制服なのに、上履きは3年生を名乗るという奇妙な状況になっている。
「どうしよう?」
浩介くんがちょっとだけ不安そうに聞く。
「まあしょうがないんじゃないかしら?」
第一、今日は一般開放されてる文化祭なので、紛れ込んでいるのがバレたところで失うものはない。
それに、浩介くんはともかく、あたしの顔は既に世間一般でも有名人だし、あたしが小谷学園出身で永原先生と同じＴＳ病というのも知られている。
「うーん、じゃあとりあえず行ってみるか」
「ええ」
あたしたちは、在学中とはちょっと違う入り口から、校舎の中に入る。
「懐かしいなー」
「うん、もう4年も経つのよね」
中に入ると、在校生たちが文化祭の展示物の最終確認をしていた。
ちょうどここは今1年生のスペースになっていて、みんな大忙しだ。
「ねえ、誰か下の看板取って!」
女子生徒が、脚立に座って宛もなく叫んでいる。
ちょうどあたしが通りかかったので、あたしは前屈みになって取ってあげる。

「はい」
「ありがと……」
あたしから目当てと思われるら看板を受けとると、女子生徒は見かけない美人な顔に一瞬硬直しつつも、何とかお礼を述べてくれる。
「どういたしまして」
あたしもにっこり笑いながら、その場を後にする。
「で、優子ちゃん、これからどうす――」
「あ！」
浩介くんがそう言いかけた瞬間、正面に見える教室の扉から、制服姿の永原先生が飛び出してきたのが見えた。
永原先生の姿に気付いたあたしたちは大慌てで脇にあった階段に駆け込んで、一気に屋上まで駆け上がってしまった。
生徒はともかく、先生たち、特に永原先生には卒業後も頻繁に会っているからあたしの顔は当然よく知られている。
「な、何だよ。隠れる必要あったのか？」
逃げ終わってから、落ち着いた浩介くんが疑問を口にする。
「あはは、はぁ……はぁ……何となくかしら？」
実際、まだ一般解放の時間じゃないというのがちょっとやましい感じになっていたのも事実だけど。
「とりあえず、ここに隠れるか」
「うん」
あたしたちは、ほとぼりが覚めるまで、とりあえず屋上に隠れることにした。
屋上もあたしたちがいた頃と変わらず、常時解放されつつも、ベンチも何もないために人気がない。
それに屋上はちょっと風が強くて、ミニスカートの女の子には苦手な場所でもある。
あたしにも、えっちな風さんにスカートをめくられて、浩介くんの前でパンツを見られたことがあった。
幸い今は風が吹いてないので、あたしたちは通学鞄を使って椅子の代わりにして腰かける。

「こっから放送は聞こえて……」
「ただいまより、２０２２年度――」
「来たな」
放送が聞こえるかどうか疑問に思った矢先、生徒会長さんと思われる人の放送が聞こえてくる。
「ええ」
放送と共に、人々の騒ぎ声が大きくなる。
そう、今まさに文化祭が始まったのだ。
「思い出すな、ここも」
会話中に、浩介くんが当時のことを思い出す。
何も話さず見つめていると、浩介くんの顔が徐々に赤くなっていく。
「どうしたの浩介くん、顔が真っ赤だよ」
あたしも自分をごまかすために浩介くんの顔が赤いと指摘する。
「ゆ、優子ちゃんだって真っ赤だぞ。その、ここでの出来事を、思い出してたら、さ」
浩介くんに「優子ちゃんも真っ赤」と返される。
ここ屋上も、あたしたちにとってはいくつもの思い出がある。
文化祭の時に嫉妬した浩介くんのご機嫌を取り戻すために。
体育祭の時の休み時間にいちゃついた思い出、更に3年生の時のバレンタインデーの時に、生理中の様子を浩介くんに見られた思い出。
って、思い出したら身体まで熱くなっちゃったわ。
「あはは」
あたしは笑ってごまかす。
ぺろん
「きゃあ！」
浩介くんに、スカートの裾を摘まれて、パンツを見られてしまう。
「かわいいパンツで良かった」
「んもー！　恥ずかしいよー！」
スカートめくりをされたあたしが、浩介くんに抗議する。
「さて、じゃあ文化祭が始まったから、そろそろ行くか」

「うん」
ほとぼりも冷めたと思うので、あたしたちは立ち上がり、身なりを整えて入り口を目指そうとする。
ガチャッ
「「わっ！」」
しかしあたしたちが入り口のドアの目の前に立った矢先、屋上の扉が開けられ、そこから制服姿の永原先生が姿を表した。
「……やっぱりここにいたわね」
永原先生が大きく息を吐いて話す。
「な、永原先生！」
あー、やっぱりあの時気付かれてたのね。
「こらっ！　2人とも、一般解放されてない時間に潜り込んじゃダメでしょ!?　先生方に迷惑になるわ！」
永原先生が人差し指を上に上げて、指導モードになる。
何だか在学中より気合が入ってるわね。
「ごめんなさい……」
「す、すみません……」
うー、「迷惑」ということ場を使われてしまってはおしまいだわ。
何せここ小谷学園は自由の学校だけど、それは「他人に迷惑を掛けるな」という校則ともセットだから。
あたしたちには返す言葉もなく、謝るしかなかった。
「ふう。まあ、うちの制服で潜り込む子は毎年いるんだけどね。私だって似たようなものだし」
制服姿の永原先生は、あたしたちが現役だった頃と同様に、女子高生というよりは女子中学生というのに近い容姿だった。
「とりあえず、弘子さんとの約束の時間まで文化祭で遊んでいきますね」
「ええ、時間に注意してね」
既に一般解放されてる時間なので、永原先生からお許しを得られた。
「永原先生もね」

「分かってるわ」
あたしたちは3人で屋上からの階段を降りる。
既に卒業から4年の月日が経ち、2年以上留年でもしてる人でもない限り、あたしたちのことを知っている生徒はここにはいない。
「こうやって並んでると、やっぱり昔のことを思い出すなあ」
浩介くんがしみじみと語る。
「ええ、篠原君と石山さんのプロポーズ劇は、今でも小谷学園で語り継がれてるわよ」
永原先生が、あたしの左手薬指を見ながら言う。
「うえ、語り継がれてるのかよ！」
高校3年の終わりには、実際制服に指輪をはめて登校していたので、この姿は別段おかしくない。
違いをあげるとすれば、婚約指輪が改造を施されて、結婚指輪になったことくらいだ。
「ええそうよ、卒業式の日に結婚式を挙げて、そのままハネムーンに行ったことまでを含めて、篠原夫妻と言えば小谷学園の幸せの象徴なのよ」
「あ、あはは……」
永原先生の熱弁に、あたしは苦笑いするしかない。
確かにあのプロポーズは衝撃的だったし、結婚式の件は卒業式の時にもスピーチで話した。
何よりあたしがＴＳ病患者というのもある。
さて、４年ぶりの学園祭、何をしているかしら？

## 頓挫した企み

「よし、じゃあまずは3年生から見てみるか」
「うん、私も付いていっていいかしら？」
どうやら、あたしたちに永原先生もついてくるらしい。
最初の教室は、今年の修学旅行の展示だった。
「ふむふむ」
写真にあった内容は、あたしたちの時と大きな差ないものだった。
3年生は最後の文化祭なので、比較的展示は簡素になっている。
「先輩ー！」
あたしたち「偽生徒組」は1年生に扮しているため、永原先生は生徒に向かってわざと「先輩」と呼ぶ。
意外と楽しいかもしれないわね。
「はーい……って永原先生じゃないですか!?」
すると近くにいた女子生徒が対応してくれた。
「えへへ、バレたわね」
やや呆れ顔の「先輩」の表情が見える。
もしかしたら、毎年同じことをしているのかもしれないわね。
「それで、何ですか？」
とりあえず、あたしたちのことはスルーして永原先生がまず対応する。
「これに写ってるここの解説なんだけど――」
永原先生は、史跡の解説文が気に入らなかったらしい。
安土桃山時代に、実際に京都の街には滞在しているので、こういった辺りは永原先生は敏感で、生徒も申し訳なさそうに応対していた。
「所で、そちらの2人は――」
「ああうん、私のクラスの生徒よ」
永原先生が意図的に「元」を省略する。
「えっと、あたし、河瀬龍香です」
「た、高月章三郎です」
あたしたちは、適当に名前を考えるのではなく、元クラスメイトの

名前を勝手に借りてしまった。
　ごめん龍香ちゃん、高月くん。
「え!?　うーん」
　しかし、あたしたちの様子を不審に思った「先輩」が、ぐいっと顔を覗き込んでくる。
「ど、どうしたんですか先輩！　あ、あたしの顔に何かついてます!?」
　あたしは冷や汗をかきながら、「先輩」の動向を伺う。
　というか、かなり近いわよ！
「うーん、この超がつく程にかわいくて美人な顔、深淵のような黒い髪、そして何よりこの凄まじいまでの胸！　なーんか誰かに似てるのよね!?」
　うぐっ！
「だ、大丈夫ですよ。この子達は私のクラスの生徒ですから！」
　永原先生が必死に取り繕うが、「先輩」が別の「先輩」の男子生徒を連れてくる。
「ねえ、この生徒、誰かに似てないかな？」
　あたしは、更に追求の手をかけられる。
　うー、後輩にじろじろ見られるって結構恥ずかしいわ。
「で、ですから気のせいですって！」
　あたしは慌ててごまかすけど、その態度が既に「訳ありです」と白状しているようなものだよね。
「いや似てるも何も、この人、あの伝説の石山先輩まんまですよ！」
「今は篠原よ……ってしまったわ！」
　つい旧姓で呼ばれたことに反応してしまうあたしに、永原先生と浩介くんがジト目であたしを睨んでくる。
　うー、ごめんなさい。そんな目で見ないでー！
「『篠原先輩』、何で制服なんか着てるんですか!?」
　正体がバレ、後輩の女子生徒に呆れた顔で応対されてしまう。
「そ、その、せっかく取ってあるんだし、昔を思い出したいと思って」
　本当は、小谷学園の学園祭に卒業後も来るのは初めてで、稲枝さんの様子を見るように永原先生に依頼されたからで、制服デートはつい

でだったりするけどそこは黙っておこう。
「それにしたって、篠原先輩もういい歳した大人ですよね!?　というか、さっき屋上に走っていましたよね!?　潜入行為ですよね!?」
「は、はい……」
　ＴＳ病のあたしからすると正直４歳差なんてあまり変わらないけど、１７、８歳の普通の人にとって４年というのは結構大きい。
　高校は基本的に３年間なので、去年には小谷学園はあたしがいた頃と比べて、全生徒入れ替わっているのだ。
「永原先生も、どうしてこんなこと容認したんですか!?　いくら小谷学園といっても、卒業生を制服にするって――」
「別に私だって文化祭では毎年制服よ。篠原さん、当時の石山さんが女性になった年に始めたから今年で６回目ですし」
　後輩の追求に対して、永原先生が助け船を出してくれた。
　そう、先生がミスコンに出て、先生が生徒になる。
　それがあり得るのが小谷学園だ。
「２人とも、私たちに会ったついでに、前校長先生と永原先生について話してあげましょうか？」
「え!?」
　この人たちは３年生だけれども、それでも小谷学園の真髄を理解しきれていないみたいなので、あたしが卒業前に永原先生が一時的に生徒になっていたエピソードを話す。
　そもそも、永原先生が文化祭で制服になるのも、永原先生が持ってる青春に対する根深いコンプレックスが原因だと言うことも話した。
　このエピソードも、後輩たちに語り継がれていい話なはずなのに、あたしたちの文化祭のエピソードよりは有名ではないらしく、２人とも珍しい物を見る目で聞き入っていた。
「ヒエー、小谷学園ってそんなことまでするのね」
　後輩たちの驚く声が聞こえてくる。
　いつの間にか、学園祭に来ていた生徒の多くが、あたしの話すエピソードに聞き入っていた。
　周囲からは「篠原先輩が制服姿で学園に忍び込んでいる」という噂

声まで聞こえている。
ちなみに、永原先生が小野先生におしおきされたがっていたことは隠しておいた。
話の流れ上、先代の校長先生が永原先生の元教え子だと言うことは話したけど。
「さて、じゃあ私たちは展示の続きを見るわね」
「あ、はい。ごゆっくり」
永原先生が話を切り上げると、後輩たちもかしこまった感じになっている。
「それから、今の俺たちは1年だから、遠慮しないで接してくれよな」
ここまで黙り気味だった浩介くんが最後に締めて、ようやくあたしたちも解放され、展示を見終わった。
3年生の展示は、予想通り今の時間は空いていて、模擬店でのアイスクリームも、新鮮だった。
ちなみに、3年生の展示が見終わる頃には、「永原先生が制服姿の篠原先輩夫妻を連れて学園祭を見回っている」という情報が、出回ったのか、あたしたちが「先輩」と呼ぶ前に向こうから「先輩」と呼ばれてしまった。
「うー、1年生気分を味わいたかったのにー！」
「もう、篠原さんがしらを切らないからでしょ！」
あたしの不満に対して、永原先生が無慈悲な一撃を容赦無く放ってくる。
「ごめんなさい」
本当に、我ながら同情の余地が全く無いわ。
「まあでも、特別な先輩気分でいるのも楽しいわよ」
永原先生が気分を切り替えるように言う。
「で、次は2年生を見に行くか」
2年生のエリアに、あたしたちは入る。
ちなみに、永原先生はここで部活の方に行くとのことで、あたしたちと別れる。
最初に見たのは自主製作映画の展示で、ちょうど上映時間の直前

だったので、見てみることにした。
あたしたちの時もそうだったけど、この手の自主製作映画は、大抵はミスコン出場の女の子が主人公になって、際どいシーンを連発しながら投票を訴えるもの。
この映画も、中身こそ見えてないが、主人公の女の子が手を変え品を変えスカートをめくられて恥ずかしそうに叫ぶお話になっている。
これを考えたのって、絶対この子自身よね。
「何かすげえな」
浩介くんが終わると開口一番に言う。
「え!?」
あたしはちょっとだけ不安になる。
そう、これが嫉妬だわ。
「優子ちゃんのパンツ見た後だと、驚くほど魅力無いのな。結局最後まで見えねえし」
浩介くんが冷静な表情で恥ずかしいことを言う。
「もうっ」
言葉とは裏腹に、あたしは内心ほっとした。
「大体ああ言うのは見えそうで見えないのがいいって言うけど、最後の最後に見えちゃうのがいいんだろ!?」
浩介くんが、またパンツ論議に夢中になる。
よく聞くと、周りの男子も似たような話をしていた。
「あはは、うん、そうよね」
女の子になってもう5年の月日が流れるが、あたしは今でも男の感性を知識として理解できる。
女の子になって４９０年近くが経つ永原先生でさえ、男の感性を知っているし、昔存在しなかった性癖や感性でも、知識的な推察から導くことが出来るのがＴＳ病の強みよね。
戦国時代の女性感なんて今とはかなり違うはずなのにすごいことよね。
そして今回も、浩介くんの言いたいことは、あたしにも重々分かってしまっていた。

続いての展示はお化け屋敷、何だけどあたしたちが展示していた頃のお化け屋敷より、かなりレベルが上がっていた。
具体的には、お化け役の人のメイク能力が。
またゲームコーナーもあって、あたしたちは当時と今とで間違い探しに高じることができた。
ちなみに、ここではじめて「篠原先輩ですよね？」と言われてしまった。
やっぱり、学校は狭い世界だから、噂が広まるのも早いわね。
そして最後に表れたのが――
「執事喫茶？」
「うん、そうみたいね」
要するにあたしたちがやったメイド喫茶の男女を逆転させたようなもの。
メイド喫茶が男性向けなら、執事喫茶は女性向けで、この学園祭は生徒数はともかく、一般の参加者は男性が多いので、こういう形態の店は見たことがなかった。
「うーん、ここはいっか」
浩介くんが回れ右をしようとする。
ふふ、独占欲だわ。
……よし！
「えー!? 面白そうじゃないの！」
あたしが「興味本意」という気持ちを込めて言う。
「いやその……」
浩介くんの目が泳ぐ。
「嫉妬しちゃうの？」
あたしがど真ん中直球で浩介くんの図星をつく。
「うぐっ、そ、そうだよ！ わ、悪いか？」
浩介くんがあっさりと白状してくれた。
「ふふ、嬉しいに決まってるじゃないの。大丈夫よ。どうせひ弱なヘロヘロ男しか出て来ないわよ。浩介くんみたいに強くてかっこよくてたくましくてあの技術もある素敵な男何てここにはいないわよ」

あたしが、ありったけの言葉を込めて浩介くんに大好きアピールをする。
最後の最後に「あの技術」と言う辺り、あたしにも遠慮があるのかしら？
「よし、分かった！　優子ちゃんがそう言うなら安心だ。俺もちょっと興味あるからな。優子ちゃんのためにも、女の好みを学習しないと」
「ありがとうあなた」
浩介くんが前向きになってくれたので、あたしたちは改めて執事喫茶のある教室に入る。
「「お帰りなさいませお嬢様ー！」」
あたしが扉を開けると、開口一番に執事服を着た男子陣が一斉に挨拶をしてくれる。
お客さんたちは予想通り女子生徒で占められていた。
「こちらにご案内いたします」
一瞬、執事さんの顔が緩む。
まあ、飛びきりのかわいい女の子がお客さんに来たら嬉しいだろうけど、残念無念、あたしは彼氏持ちどころか既婚者で旦那持ちなのだ。
「メニューはこちらになります。決まりましたらお呼びください」
執事さんにメニューを渡され、あたしたちは吟味を開始する。
ふむふむ、見た感じではあたしたちが現役だった頃とあまり変わらないわね。

「なあおい、あれさっき出回ってた篠原先輩じゃね？」
「じゃねじゃなくてどう見ても篠原先輩だろ？　て言うか、平成３０年度卒だから確か今２２だろ!?　全くそう見えねえぜ」
「そりゃあＴＳ病何だから当たり前だろ!?」
「いやいや、俺が言いたいのは旦那の方だよ。俺の兄が篠原先輩の１個下だけど、ずっと老けてるぜ」
「大方、コネで蓬莱の薬でも飲んでるんじゃねえの？」
「違いねえ」

執事たちの噂は合っている。
まあ、そりゃあＴＳ病になったり、蓬莱の薬を飲んだりしたら、実年齢なんてあってないようなものだけど、それにしても年齢を大声で話されるのはいい気分じゃないわね。
本当、女性に年齢って失礼だわ。
あたしは気を取り直して、メニュー表を見てメニューを決めることにした。
「うーん、この『豚カツサンド』にしようかしら？」
「よし、俺はこの『カレーサンドにしよう』、すみませーん！」
「はーい！」
メニューを決め終わると、浩介くんが代表して執事を呼ぶ。
執事さんがこっちにゆっくりと近付いてきた。
「豚カツサンドとカレーサンドで」
浩介くんがそう言うと、執事さんがメモを取っていく。
「はい、ご注文決まりました豚カツサンドとカレーサンドです！」
「はーいただいまー」
厨房と思われるスペースで、女子生徒の声がする。
あの時とは、何もかも正反対だわ。
「何かあの時とはアベコベの世界っていうか鏡の中の国っていうか……そんな感じがするぜ」
浩介くんがやや苦い声でそう話す。
うん、それはあたしもそう思っていた。
「あー分かるわ」
５年前でもあの時の記憶ははっきりと覚えている。
「あのー篠原先輩ですよね？」
「え!?」
突如、執事さんの１人があたしに話しかけてくる。
「ええ、ああうん俺たちは篠原って言うんだ」
浩介くんが、「たち」を強調して話す。
それは「俺の嫁だ」という威嚇を多分に含んでいた。

「その、先輩たちの時代の学園祭ってどんな感じだったんですか？」
執事さんの質問に対して、浩介くんが困惑した顔になる。
「どんなって言っても――」
「あまり変わらないわよねー」
あたしと浩介くんの目が合う。
ただ、この執事喫茶は、３年間を通じて存在しなかったことを話しておいた。

「んじゃ、さっきの集合場所でな」
「ええ」
「ふむふむ」

小谷学園の学園祭も、変わったのは中の生徒だけ。
校則が厳しくなったわけでもない。
相変わらず自由な校風が生きている。
「ところでお嬢様」
執事さんがあたしに笑顔を振り撒いている。
……よし！
「はーい！」
あたしも、ちょっとだけ愛嬌よく振る舞う。
「追加のご注文などはございますでしょうか？」
「うーん、浩介くんは？」
あたしは、浩介くんに顔を向ける。
「ああいや、別にない」
「うーん、あたしも特に無いかしら」
「かしこまりました。この先もごゆっくりお楽しみください」
笑顔で特にないと告げると、執事さんも笑顔で「ごゆっくり」と言う。
まあ確かに、まだ混雑する時間帯じゃないものね。
「それで、先輩方は文化祭では何をしてたんですか？」
「えっと、あたしは２年生の時にメイド喫茶して、３年生の時には修学

旅行の展示をしたわね」
あたしは昔を思い出しながら言う。
あたしの中では、どちらかと言えば後夜祭の方が思い出に残っているけどね。
「へー、篠原先輩のメイドって、大人気だったですよね!?」
「えっへん、そりゃあもう、うちの旦那が嫉妬しちゃって、大変だったわ！」
あたしがあえて浩介くんが聞こえる場で話す。
執事さんと楽しく話すことで、浩介くんの嫉妬の炎がメラメラと燃えている気がするわ。
男の嫉妬は愛が冷めることもあると言うけど、あたしたちの場合は必ず後で埋め合わせがあると言う安心感があるので、そうはならない。
「へー、結構嫉妬深いんですか!?」
執事さんが浩介くんに聞いてくる。
「うぐっ、ひ、否定できない」
浩介くんも、自分が嫉妬深いことを認めているらしい。
まあ、それがまた、魅力だったりするんだけどね。
だってそれは、あたしが嫉妬するくらいいい女って意味でもあるもの。
「ふふ、ご機嫌を取り戻すのも、妻の勤めなのよ」
あたしがにっこりと笑う。
浩介くん、また嫉妬しているわね。
「ふえー、結婚って大変ですね！」
執事さんも高校生だから、結婚については想像するのは難しいと思う。
いや、そもそもあたしたち大学生だって大多数にとっては結婚を想像するのは難しいと思うけど。
「そうでもないわよ。浩介くん、素敵な男性だもん」
そう言うと、浩介くんの顔がちょっとだけ赤くなる。
「あーその、他のお嬢様もいらっしゃいますので」

「あ、すみません」
と言っても、女の子は恋話が大好きな人たちなので、そこまで敵意を向けられていない。
「ふう、じゃあたしたち、そろそろ行くわね」
一通り雑談をしたらあたしが椅子から立ち上がり、浩介くんとそれぞれ会計を払う。
もちろん、別会計だ。
「行ってらっしゃいませーお嬢様ー！」
執事さんたちに見送られ、あたしたちが教室を出る。
これで2年生のエリアを全て見回ったことになる。
さて、浩介くんはと言うと――
「ねえ優子ちゃん、次はどうする？」
「その前に、浩介くんちょっと不機嫌そうだわ」
執事喫茶であたしが執事さんの後輩たちと楽しく話していたら、いつの間にか浩介くんも焼きもちを焼いちゃったらしい。
「そ、そんなことねえよ！」
もう、図星が分かりやすすぎだわ。
「いいのよ無理しないで。ほら、せっかく制服で来たんだし、屋上へ行きましょう？」
「お、おう」
浩介くんの胸がドキンと高鳴った気がする。
どれだけ結婚して一線を越えても、高校時代の文化祭を思い出すこの場は、あたしたちにとっては特別な場所で、しかも以前にしたことのあるシチュエーションになっている。

# 懐かしい思い出

あたしたちは、再び屋上の扉を開ける。
もちろん何もない屋上には、誰もいない。
そして都合のいいことに、今は風が強くなってきていて、制服のスカートがゆらゆらとなびいている。
あたしはあの時を思い出し、屋上の角へと進む。
「ふふ、浩介くん」
　ぴゅううう……
「きゃあ！」
あの時と同じように、あたしはえっちな風さんにスカートをめくられて、慌てて押さえようとしても全く間に合わず、浩介くんの目の前で青白の縞パンを晒されてしまう。
浩介くんも、５年前のことを思い出したのか、顔を赤くしながらごくりと唾を飲み込む。
「優子ちゃん、５年前から変わってねえな」
浩介くんがそう呟く。
うんだってあたし、ＴＳ病だもの。
「うん、浩介くん不機嫌そうだったから、５年前と同じようにしていいのよ」
努めて甘い声で、あたしはそう囁く。
「うっ、よ、よし！」
　ガバッ
「きゃあ！」
浩介くんにスカートの裾を思いっきり摘まれ、あたしは一気にスカートをめくられた。
あたしは恥ずかしさのあまりスカートを押さえる。
うー、５年前よりもっと恥ずかしいよお……
「ふひひ、ほら、手をどけて」
「はい……」
浩介くんが、スカートから一旦手を離すと、スカートを押さえてい

たあたしの手を優しく払い除ける。
　ぺろーん
　そして今度はゆっくりとした速度でめくられていく。手を優しくどけられたせいで、抵抗する気力がなくなり、恥ずかしさばかりが積み上がってくる。
　屋上の風が、あたしのパンツに吹き付けてきて、浩介くんに思いっきり見られているのと合わさって、恥じらいをこの上なく煽ってくる。
「優子ちゃん、俺……はぁ……はぁ……」
　あたしが恥ずかしがるので、浩介くんはもっと先まで行っているにも拘らず、パンツ見るだけでもとても喜んでくれる。
　そう、それからこの後浩介くんは――
「悪い、ちょっと俺……トイレに――」
　我慢しきれなくなった浩介くんが、屋上から出ようとしたので、あたしが腕を取る。
「うっ、ゆ、優子ちゃん」
　ここから、5年前とは別の歴史を辿っていく。
「ねえ浩介くん、あたしのこと、ずっと待たせちゃったでしょ!?」
　あたしが、昔のことを話す。
　そう、卒業式の日まで、浩介くんは自分の責任感から、一線を越えることが出来なかった。
　結婚するまで処女で、結婚式の夜に奪われたと言うこと自体は、むしろあたしの中では素敵な思い出として残ってはいるけど、それでもやっぱりちょっとだけ、龍香ちゃんみたいな人生も悪くないと思えてくる時もある。
「ゆ、優子ちゃん、ここは、まずいって！」
「あなた、いいのよ。あなたが素敵な責任感であたしの処女を守ってくれたことは感謝しているわ。でもほんの少しだけだけど、高校青春の1ページに刻み込みたかった思いもあるわ」
「うっ……」
　浩介くんが、あたしの告白にかなり困惑している。

「じゃ、じゃあさ」
「うん」
浩介くんが、あたしに向き直る。
「後夜祭、後夜祭まで待ってくれ」
「え!?」
浩介くんが、後夜祭を持ち込んでくる。
もちろん、後夜祭は一般には解放されていない。
まあ、あたしたちは幸い制服だけど、それでも浩介くんはともかくあたしは有名人なので先生に見つかったら潜りだとバレる可能性は高い。
「後夜祭後半戦の時に、場所選びをしようぜ」
「うん」
後夜祭の後半なら、確かに校舎の前でゲームをするのがメインなので、校舎の中は静まり返るはず。
「でも、あたしたちの知識は4年前で止まってるわ」
「あーうん、でもま、賭けてみるしかねえだろ」
浩介くんが、「賭けに出る」と言ってきた。
校舎が静まり返った時なら、確かにスペースはできると思う。
あたしたちは、浩介くんが自然に静まるのを待ってから、今度は1年生のスペースへと進む。
ここは、ゲームコーナーや屋台コーナー何てのもある。
そして――
「ねえねえ、今度はメイド喫茶よ」
弘子さんのクラスは、メイド喫茶を担当していて、そとでメイドさんが列を処理していた。
「お、本当だ」
ふふ、今度はあたしが焼きもち焼かないといけないわね。
浩介くんはバカだから、ちょっと演技っぽくてもバレないし。
教室の壁には、「イチオシメイド」と称して、メイド服の永原先生と弘子さん、そして2人の女子生徒の写真があって、更に「ミスコン代表、稲枝弘子に清き一票を!」というスローガンまで掲げられていた。

「「お帰りなさいませご主人様ー！」」
あたしたちが店内に入ると、メイドさんたちから早速歓迎を受ける。
今のあたしたちは、一応1年生のつもりなので、同級生っぽく振る舞おうとしたんだけど――
「篠原先輩ー！」
やはり既に学校中に噂されていたとあって、あたしの黒髪と胸が目立つせいか、どこへ行っても「先輩」と呼ばれてしまう。
うー、制服の色は1年生なのに！
「えっとその――」
「何かしら？」
もし「篠原先輩」と呼ばれた場合、あたしと浩介くんが同時に応対する。
「あ、お二人とも結婚されてたんでしたね」
「あはは、うん」
メイドさんの女の子が、戸惑いつつ愛想よく振る舞っている。
「それで、先輩はどうやって出会ったんですか？」
「好きになったきっかけとか教えてください！」
特に浩介くんは、早くにあたしを射止めたためか、メイドの女子たちから質問攻めを受けている。
浩介くんは、満更でもない表情を浮かべてるわね。
よし！
「あーなーたー」
あたしはジト目を使ってかわいく浩介くんを睨み付ける。
「うっ」
「あ、すみません先輩」
メイドさんたちが、退散していく。
さて、ちょっとだけご機嫌ななめタイムかな？
あたしもあたしで、本当にちょっと妬いちゃってるし。
「優子ちゃんごめん、機嫌直してよ」
「ふふ、ご機嫌を直したいなら条件があるわよ」

あたしたちは、会計を済ませたら、条件を満たす場所へと移動する。

べろんっ

「はうっ……恥ずかしいわ」

メイド喫茶から出たあたしたちは今、中庭の送風機の裏にある人気の無いところに移動している。

この場所にも、あたしはいくつもの思い出を残していて、今もこうして、5年前と同じく、あたしは浩介くんにスカートめくりをされて恥ずかしい思いをさせられている。

「はぁ……はぁ……優子ちゃんから誘ったんだろ!?」

「うん、浩介くんは、あたしを見てればいいのよ」

そう、あたしの嫉妬を沈めるのも、結局同じスカートめくりになった。

つまり浩介くんが嫉妬しても、あたしが嫉妬しても、どっちにしてもあたしは浩介くんにパンツ見られることになる。

「いやー美味しい役だな俺は」

浩介くんもその事がわかっていて、前から後ろから、そして下からと、あたしはパンツをあらゆる角度から鑑賞されてしまう。

「あ、あんまりじろじろ見ないで」

「ふう、やっぱり制服のスカートから見えるパンツは格別だな」

浩介くんが感心したように言う。

確かに、浩介くんの気持ちは分かるわ。

今までの制服プレイでも、あたしはいつも以上にスカートめくりに時間を割かれていたし。

「よし、こんな所にするか」

ようやく、あたしがスカートめくりから解放される。

「うん、ふー、やっと終わったわ」

あたしは何とか浩介くんについて行く。

中庭にはほとんど人がいない。

「ここ、この木懐かしいな」

浩介くんが、中庭の木を指差す。

「えっと、確か……」
そう、この中庭で浩介くんに告白されたことや、あたしがバランス崩して倒れちゃったことなどは覚えてるけど――
「ほら、ここ、優子ちゃんがバランス崩した『キューピットの蔦』だよ」
浩介くんが指を指す。
多分、あたしの角度からは見えなかったんだと思う。
「あはは、これにバランス崩したのね」
あたしが、当時立っていた場所を思い出す。
そうそう、この角度だったわ。
「ここで、俺が告白したんだよな。優子ちゃん、最初は悩んでたよな」
「ええ」
あの時は、まだ最近まで自分の本能に男が残ってたこともあって、浩介くんの彼氏になるのにまだ迷いがあったのよね。
「優子ちゃん、愛してるぜ」
「えっ!?」
浩介くんの突然の告白に、あたしは完全に不意を突かれ、恥ずかしさで顔を真っ赤にしてしまう。
「あはは、赤くなった赤くなった。もー優子ちゃんって相変わらずかわいいよね」
「うーもう!」
あたしが、あの時を思い出して、浩介くんの腕を引っ張り、後退りする。
確かここで足を引っ掻けちゃって――
――あれ?
「うまくいかないわね」
「そりゃあ、蔦があるってわかってたら無意識に警戒しちゃうさ」
浩介くんがにっこりと笑って言う。
浩介くんの言う通りだった。
転びそうなものがあるとわかってると、わざと転ぼうとしても難しい。
あの時のようなロマンチックな夜は再現できなかった。

もちろん、転んだとしても、うまく浩介くんの手があたしの胸を触らないとダメなのよね。
「でも、優子ちゃん、俺に胸を触られた途端に、覚悟を決めたようにキスをねだってきたよね」
「うん、あの時は、無我夢中だったわ」
浩介くんとの思い出話に花が開く。
「全校生徒の皆さん、ただいまより、２０２２年度ミス小谷学園コンテスト――」
おっと、そう言えば弘子さんのミスコンが近付いてきたわね。
ミスコンが終われば面談の時間だし、体育館に急がないと。
「浩介くん」
「ああ、行こうぜ」
浩介くんと一緒に、近くの体育館へと入る。
そこは多くの人たちで賑わっていた。
やはりミスコンは小谷学園の大人気スポットだわ。
「懐かしいな。優子ちゃんの優勝劇」
「うん」
自然と一般人の塊と、生徒たちの塊が出来ていて、あたしたちは、生徒に混ざるように座席を探す。
よし、ここでいいわね。
「先輩、ここいいですか？」
あたしは、２年生の「先輩」の女子生徒の隣の席に座ろうとする。
「ええ空いて……って、あなた篠原先輩ですよね!?」
もー、またこの反応だわ。
せっかく在学中に楽しめなかった１年女子になってるのにいい加減興ざめね。
……よし
「しー、今のあたしは１年生ですよ」
「いやそう言われましても――」
「お願い、あたし２年生の時にＴＳ病になったから１年女子の経験がないのよ。だから今だけでもいいから後輩扱いして！」

なおも渋る「先輩」にあたしがちょっとだけ強めの口調でお願いする。
「わ、分かりました……いえ、分かったわ。ええ空いてるわよ。座りなさい」
「……はいっ！　ありがとうございます！」
あたしは嬉しさで一杯の表情でにっこりと笑顔になって座る。
ああ、こんなに嬉しいなんて思わなかったわ。
永原先生が学校生活にコンプレックスを持っていたのもわかった気がするわ。
だって、他の人は当然に持ってるものを持ってないんだもの。
あたしは、子供時代がないことが大きなコンプレックスで、今でも女児向けのおもちゃでたくさん遊んでいる。
小谷学園は大好きな母校で、だからこそ、一見小さなことでもコンプレックスになるんだわ。
「優子ちゃん、最初は『ごっこ』って言ってたのに、ノリノリじゃねえか」
隣の浩介くんが、思わず突っ込みを入れる。
「あはは、うん、まあね。やっぱり普通なら体験できるものを体験できないって、何だかんだで多かれ少なかれ、劣等感になるものよ」
とはいえ、幼女時代に対するコンプレックスとは違って、2年生の途中からとはいえ実際に女子として学園生活を送ってるので、コンプレックスと言ってもそんなに深刻なものではない。
正直、今のでもお腹一杯だったり。
「まあ、そんなに深刻そうじゃねえみたいだし、俺は特に気にしねえな」
そりゃあまあ、浩介くんは男の子として生まれてから今まで生きてるわけだし。
そんなこんな話し込んでいると、舞台前方が慌ただしくなってきた。
マイクがセットされたりするのは、あたしたちと同じね。
「えー皆さん、大変長らくお待たせいたしました。私が生徒会長の―

―」
あれ？　今年の生徒会長って女子なんだ。
さっきの放送は男子生徒だったのに……っていうか、水着姿よね!?
「えへん、ではまずは小谷学園ミスコンテスト最初の水着審査に入りましょう！」
パチパチパチパチ！
あたしは、周囲の拍手に釣られるように拍手をする。
そして、ミスコンの参加者たちが中に入ってくる。
うん、やっぱり弘子さんは飛び抜けてるわね。
あ、でも生徒会長さんもかなりの美人だわ。
「えーでは、ここからは司会進行役を副会長の――」
あ、さっきの声、そうか。今年は生徒会長さんが自らミスコンに出るから副会長さんの職務が増えているのね。
「では、まず生徒会長の――」
生徒会長さんの水着姿、あたしほどじゃないけど、胸が結構大きくて、桂子ちゃんと同じかちょっと大きいくらいある。
でも、水着のセンスはあたしや桂子ちゃんに負けていて、これなら弘子さんが勝てそうかしら？
他の参加者さんは、うん、でもやっぱりそれなりの美人さんもいる。
特に自主製作映画で見たスカートめくられる女の子は、どこから手にいれたのかあたしが出場した時の水着を、パレオの色を含めて完全に丸パクリしていた。
「なあ、あの水着」
浩介くんが小声であたしに話しかけてくる。
「うん、完全にあたしが出たときの水着よね」
しかもご丁寧に、くるりと一回転したりするなどして、超ミニのパレオの中身をちらちら見せてくるポーズまで同じだった。
男子たちの「おー」という声が聞こえてくる。
うーん、弘子さんも真っ赤なビキニで対抗してるけど、これはちょっと危ないわね。
「続いては私服審査になります。しばらくお待ちください」

副会長さんの声と共に、一旦全員が舞台から降りる。
その瞬間、男たちがミスコンを吟味している。
「くー、水着だって分かってても、あいつのスカートの中見えたの最高だったな」
「ああ、映画じゃ寸止めだったもんな」
「本人によれば、せめてラストシーンだけでもパンツは見せたかったらしいんだけど、先生から『さすがに学校に迷惑かかるからやめなさい』って言われたらしいぜ」
「あー、『迷惑かかる』って言われちゃしょうがねーよな」

小谷学園で何かを禁止される場合、その理由のほぼ全てが「迷惑がかかるから」ということになる。
小谷学園にも3年に1回だけ全校で頭髪検査が実施されるが、髪を染めていて怒られるのではなく「シラミ」などがあって感染のおそれがないかどうかチェックするものになっている。
ちなみに、髪型や長さ、色は完全自由なので、もちろん誰も何も言わない。
確かに、あの映画で最後までパンツが見えなかったのも、また5年前の自主製作映画でも、主人公のミスコン出場の女の子がアクションシーンを連発しつつ、カメラの角度でパンツが見えなくなっていたのも、多分「超えちゃいけない一線」ということになってるからだと思う。
しばらくすると、「準備ができました」という放送と共に、私服審査に入る。
弘子さんの私服がこの中では一番露出度が高い。
ノースリーブにへそ出しにスカートも制服より短いという、真夏のあたしが浩介くんを誘惑したい時くらいにしか着ない服になっている。
「まずは、稲枝弘子ちゃんです！」
パチパチパチパチ!!!

どうやら、一番手として、弘子さんの出番みたいね。
拍手が一段と強いわ。どうやら本命みたいね。
弘子さんは、やはりＴＳ病患者らしい大きな胸を谷間として強調しながら男を誘惑する。
この辺りはさすが元男子で、他の参加者とは一線を画するスキルを持っているわね。
「ありがとうございました」
最後に弘子さんが一礼する。
えっちな誘惑の中にも、どこか上品なお嬢様という形を醸し出しているわね。
「では次に――」
次々と私服審査に入る。
その中で、ミニのスカートを穿いた「めくられヒロイン」が、わざと失敗して転んでパンツを見せていた。
「いやー！」何て顔を赤くしちゃって、あざといけど男の好みを捉えていて、生徒会長さんのような美人じゃないけど、正直これは難敵ね。
「やっぱやるんじゃねーかと思った」
他の男性たちが鼻の下を伸ばす中で、浩介くんだけは、呆れた顔つきで話していた。
「あはは、もしかして？」
「うん、やっぱり優子ちゃんのパンツと肉付きを見たら、やっぱあれじゃもの足りねえよ」
うん、あたしもそれはそう思う。
何せパンツの色が男性受けとしてあまりよくない色になっていたものね。
ふふ、あたしのビデオは持っていても、パンツまでは調べ尽くせなかったみたいで、まだまだだわ。
最後に生徒会長が私服審査に出る。
こちらは唯一のズボンで、後ろを向いて思いっきりお尻をアピールする作戦に出ている。
ふふ、これはちょっと失敗かしら生徒会長さん。

「優子ちゃん、どうしたの？　にやけついて」
隣の浩介くんがちょっと不審そうに話しかけてくる。
「ああうん、やっぱり男子受け狙いなら、弘子さんがダントツだったなって思うの」
「ああ、俺もそう思う」
弘子さんの服は露出度が高くて、デートの時に「彼氏受け」を狙ったら最悪だけど、不特定多数の男子相手なら、あれが正解になる。
そう言えば、龍香ちゃんも彼氏とデートする時にこれを勘違いしちゃったことがあったっけ？
あれもあれで、あたしの信頼感が高まった出来事よね。
ともあれ、これでミスコンの審査は全て終了ね。

## 注目の的

「さて、弘子さんに挨拶して、ミスコンに投票してから、面談をするわよ」
「おし分かった」
浩介くんと一緒に、あたしたちは例の舞台控え室の前に進む。
「あー懐かしいぜ。あの時は、優子ちゃんに本当に救われたよなー」
移動中、浩介くんがずっと控え室の奥を見つめていた。
「ふふ、感傷に浸る前に、まずは弘子さんを探しましょう」
浩介くんには、あの控え室に思い出がある。
あたしが女の子になったばかりの頃のこと。
2年生の球技大会の時に、あたしがドッチボールで当てられて泣いちゃった時のこと。
あの時、浩介くんはあたしをいじめていたのに、恋心まで抱いてしまった罪の意識に耐えられなくなってあの部屋に籠って自暴自棄になっていた。
もちろん、その時の借りなんてとっくの昔に消えてなくなっているし、今ではあたしが借りてばっかり……というわけでもないわね。
「あ、弘子さーん！」
弘子さんを見つけたあたしが大きな声で呼ぶ。
「えっと、篠原先輩！」
すると弘子さんが大きな声であたしを呼び返してくれた。
すると周囲から「え、篠原先輩!?」「あの伝説のミスコン優勝者の!?」「こうしちゃいられないわ」といった声が聞こえてくる。
もー、どんだけあたし伝説になってるのよ。
「弘子さん、ここはまずいから相談室にいきましょう」
「え、はい」
とにかく、人が増えたら厄介だわ。
あたしは、弘子さんの腕を引っ張り一撃離脱を試みた。
「篠原先輩！　サインください！」
「篠原先輩、私に投票してください！」

「稲枝さんだけ独り占めなんてずるいわ！　私なんてあのミスコンの映像を見て研究したのよ！」
が、あえなく失敗してしまった。
あたしはあっという間に、ミスコンの参加者に囲まれてしまう。
「えっとその、みんな、今のあたしは1年生ですから」
動揺したあたしから出た言葉は全くの効果のない言葉だった。
「何を言ってるんですか！　篠原先輩は、今の私たちの４年先輩だから、結果的に1年生の色になってるだけですよ！」
うー、生徒会長さんのぐうの音もでない正論に全く反論できないわ。
「その、あたし、永原先生の呼び出しとして来てるので――」
「とか何とか言ってー、先輩制服じゃないですかー！」
今度は例のスカートめくられ子に鋭い指摘をされてしまう。
「ああいやその――」
といっても、弘子さんと面談しないといけないのは本当で――
「ほーら、優子ちゃん困ってるでしょ！」
「!?」
突然、この場にはいなさそうな女の子の声がする。
聞き覚えのある声にあたしも振り向く。
「「木ノ本先輩!!」」
そこにいたのは、制服姿の桂子ちゃんだった。
やはり桂子ちゃんも有名人らしくミスコン参加者たちは皆一様に驚いている。
「桂子ちゃん、どうしたのよ制服で」
まさか、桂子ちゃんまで同じことをしているとは思わなかったわ。
「それはこっちのセリフよ。優子ちゃんこそどうしたのよ？」
あたしの疑問に、桂子ちゃんも同じ質問を返す。
まあ、考えることは同じよね。
「あーうん、この子、稲枝弘子さんって言うんだけど、あたしや永原先生と同じＴＳ病の子で、あたしが今日面談することになったのよ」
あたしが、桂子ちゃんに弘子さんのことを紹介する。

「へーその子が、通りで美人な上に男好みがうまいと思ったわ」
桂子ちゃんが感心した風に言う。
桂子ちゃんも男性受けのスペシャリストだけど、それでもやっぱりＴＳ病の子ほどではない。
ちなみに、あたしと弘子さんがＴＳ病なのはこの学園では周知の事実なので、周囲は特段の驚きはない。
「それよりも、桂子ちゃんが制服なのはどうして？　あたしたちはうん、浩介くんと昔を思い出しながらデートするためだけど」
「あーうん、あたしもそんなとこ。達也はほら、あそこで別の集団に捕まってるわ」
桂子ちゃんが指差すと、浩介くんと同じように制服姿の達也さんが男子生徒に捕まっていた。
大方、男子たちは桂子ちゃんをゲットした処世術でも学んでいるんだと思う。
「ふう……あ、篠原さんに木ノ本さん、こんにちは」
するとあたしたちの集団に颯爽と現れたのは永原先生だった。
弘子さんとは永原先生とも合わせて「３者面談」するので、永原先生がここに来るのは当然だった。
「あ、永原会長」

「キャー、あの３人が揃い組してるわー！」
「すごいわすごいわ！　あの伝説のミスコンの再来よ！」
「こうしちゃいられないわ！」

さて、今度こそ相談室に行かなきゃと思った矢先、制服姿の永原先生が見えたとたんに周囲の歓声が大きくなってしまった。
更に生徒会長さんが、舞台裏に駆け込んでいくのが見えた。
というか、桂子ちゃんが割って入ったのに、状況がさらに悪化してるような!?
「えー皆さん、生徒会です。突然ですが、ここで当校にスペシャルゲストとして、当校出身者の篠原優子先輩と木ノ本桂子先輩がいらしてい

ます」
「ちょ、ちょっと!!」
生徒会長さんの前で全校放送が流れてしまう。
「お2人は永原先生と共に伝説のミスコンを戦い、またそれぞれミス小谷に輝いた実績を持っています」
んもー、無駄に詳しい自己紹介しないでよ！
「永原会長、早く退散しましょう」
「ああ、どこに逃げたらいいか――」
「うーん、でも逃げるわけにもいかないわね」
永原先生も、苦笑いしながら話す。
浩介くんも逃げる場所を計算しつつもうまくいかない様子で、桂子ちゃんが心配になったのか、達也さんもこっちに駆けつけてくる。
「先輩！　サインください！」
またサインをねだられてしまう。
「あそこの舞台に立ってください！　5年前のミスコンみたいに！」
落ち着いて周囲を俯瞰してみると、あたしたちは完全に生徒たちに包囲されていた。
そして、あたしたち3人で舞台に並ぶようにしきりに要求してくる。
「永原会長、弘子さんの面談時間どうしましょう!?」
正直、急がないといい加減まずいわ。
「ここまで騒ぎが大きくなってはしょうがないわ。特別に少し遅らせることにします……稲枝さん、先に戻ってください。時間は文化祭終了の30分前、ミスコンの表彰式が終わってからにします」
永原先生は仕方ないという表情で話す。
「はい」
弘子さんが、自分の持ち場に戻る。
騒ぎを聞き付けた人々のうねりが大きくなり、浩介くんと達也さん共々、あたしたち「偽生徒組」は舞台裏に隔離されてしまった。
「ふー、これからどうしようかしら？」
桂子ちゃんがため息をつく。

今更だけど、制服で来たのは失敗だったかもしれないわ。
生徒の中に紛れ込もうと考えたけど、よくよく考えてみれば、「卒業生が制服着て母校の文化祭でデートしている」何て格好のネタだものね。
「あたしたちもまだ部活を見て回って無いわ。５分だけよ」
あたしは生徒会長さんにそう要望する。
はっきり言って、この後の仕事のこともあるから、それ以上は待てないわ。
「わ、分かりましたって」
生徒会長さんも、悪い人ではないみたいね。
そして、浩介くんと達也さんはここに隔離となった。
更に、永原先生とも協力し、退場時の安全確保も条件とした。
「じゃあそろそろお願いします」
生徒会長さんの声と共に、あたしたちは渋々会場を上がっていく。
キャーーーーー!!!
あたしたちが壇上に上がると、瞬く間に大歓声に包まれる。
そしてよく見無くても、舞台の縁には男子生徒たちがあたしたちのスカートの中を覗こうと必死になって張り付いていた。
それを察知したあたしたちは、やや後ろ側に構える。
先頭の男子たちはあたしたちのパンツが見えなかったのか、悔しそうな表情を浮かべている。
「油断も隙もないわね」
あたしも元男で、分かっていたこととは言え、やっぱり呆れてしまう。
「ええ」
あたしは既婚者、桂子ちゃんも彼氏ともう４年目、永原先生に至っては５０４歳と、彼らが恋愛の範囲に入るかは甚だ疑問な人ばかりなのに、容姿だけでこうもスケベな男子に注目されるというのは、予想してたとはいえ、悲しい男の性よね。
「先輩、何か一言お願いします」
「えー」

生徒会長さんからマイクを渡される。
と言っても、何を話せばいいのかわからないわ。
「篠原先輩！　がんばってください！」
そんなあたしの気持ちも知らず、会場はますますあたしに何かを求めて煽り続ける。
うー、何だかミスコンや卒業式の時よりも緊張するわ。
「えっと、あたし、小谷学園卒業生の篠原優子です！」
うおおおお!!
キャーーーーー!!!
あたしがしゃべるだけで、この歓声。ちょっとは落ち着いてよもう。
「きょ、今日は学園祭ですから、気分を変えて、1年生女子になりました。この後あたしを見かけても1年女子の扱いをしてくれると、あたし嬉しいな！」
とりあえず、このことをみんなに伝えておけば大丈夫かな？
周囲は周囲で、大分困惑してるみたいだけど。
あたしは続けて、マイクを永原先生に渡す。
「えっと、全校生徒の皆さん、永原マキノです。小谷学園の文化祭には、毎年制服を着た卒業生が紛れ込んでますが、もし見つけても騒ぎを大きくせずに暖かく見守ってくださいね」
永原先生が、周囲を諭すように言う。
うん、これならあたしたちも気楽に巡回できると思う。
そして、最後にスピーチするのが桂子ちゃんだ。
「えっと、皆さん、私は卒業してからも毎年小谷学園の文化祭には来ていますが、ここまで注目されるのははじめてです。私と優子ちゃん、永原先生で争ったミスコンテストは今も思い出になってます。以上です」
桂子ちゃんのスピーチが終わり、マイクを生徒会長さんに返す。
「木ノ本先輩は彼氏とデートの途中ですし、篠原先輩は日本性転換症候群協会の仕事も兼ねてここに来ていますので、生徒の皆さんはくれぐれも迷惑にならないように心がけてください」

「「はーい!!!」」
生徒会長さんの注意喚起と共に、周囲が元気よく返事をする。
あたしたちはようやく人の波から解放され、体育館の外まで安全に出ることができた。
「じゃあ私たちは達也と見て回るから、優子ちゃんも天文部に顔を出すのよ」
「うん、分かってるって桂子ちゃん」
あたしたちは、桂子ちゃんと別れ部活棟へと進む。
永原先生も、「メイドのシフトの時間」とのことで、弘子さんのクラスへと戻っていった。
永原先生、相変わらず生徒気分で文化祭を堪能してるみたいね。
コンプレックスはあの時に消えたとは言ってたけど、やはり年に1回くらいは、また生徒気分になりたいのよね。
「お、今年も文芸部は雑誌かあ」
「そうみたいね」
卒業してから4年経つけど、相変わらず文芸部は小説雑誌の売り上げを部費の足しにしているらしいわね。
更に美術部も今年の絵画はよく分からない勢いの絵だった。
「これは何て表現なんだろ?」
浩介くんが独特の色使いをした絵を見て言う。
「うーん、そもそもこれは何を書いて、何を表現してるかさえ分からないわ」
蓬莱の研究棟には、入り口にある「蓬莱教授の銅像」以外、美術的なものは何もない。
あたしは、美術的なセンスは何もなかった。
「これはですね、竜巻を表現しているんですよ」
「え?」
近くにいた美術部員が、解説をしてくれる。
確かに、形だけ切り取ると竜巻に見えなくもないけど――
「うーん、竜巻ってピンク色だったかしら?」
そもそも、ピンク色の自然現象って何があるのかしら?

「俺はこう、土砂が混ざった赤茶色と灰色の混ざったイメージだな」
浩介くんも共感してくれる。
「まあ、その辺が美術なんですよ」
確かに、絵画だから必ずしもリアルに書く必要はない。
それならカメラで事足りるわけで、それにしたってあたしは違和感を感じずにはいられない。
部活棟の一番奥、あたしが入った時と同じ部屋に、天文部があった。
どうやら今は、部長さんがいらっしゃるらしい。
今では、桂子ちゃんの次に部長になった達也さんから数えて４代目になったはずだわ。
コンコン
「はーい」
男子生徒の声が聞こえる。
ガチャッ
あたしはその声に合わせて扉を開く。
「お邪魔しまーす先輩！」
あたしが明るい声で1年生を装う。
天文部の面々は、男子がとても多い。
みんな一様に、目を丸くしている。

「な、なあこの女の子」
「ああ、どっからどう見ても篠原先輩だよな!?」
「ああ、さっき体育館で見たぜ」

あたし達を見た男子たちが、ヒソヒソと話している。
あたしが自分達に向かって「先輩」と呼んできたことに違和感を感じているらしいわね。
まあ、制服の色だけ見ればその通りのはずなんだけどね。
「えっと……どうぞゆっくり見てってください」
部長と思われる男子生徒が、あたしと浩介くんを歓迎してくれる。
部長の席は、かつての坂田部長や桂子ちゃんの席だった。

どうやら部長の席の位置も、きちんと受け継がれているみたいでよかったわ。
今年の展示は人工衛星特集で、なかでも日本が５年前に打ち上げた高性能ＧＰＳの「みちびき」の自作模型が展示されていた。
「凄いわね」
「ああ」
人がそれなりに多くなったのか、あたしたちが部員だった頃に比べて、展示品のレベルは格段に上がっていた。
まずきれいだし大きいし、一目見ただけでも作りが細かいのが分かる。
よしっ、ちょっと質問してみようかしら？
「先輩、これどれくらいかかったんですか？」
「あー、この『みちびき』は去年のだよ。今年はこっち」
「先輩」の部長さんも、空気を読んでため口になってくれる。
どうやら、あの時のあたしの放送が、全国に流れていたみたいね。
「わー凄いわ」
こっちの人工衛星も、とても完成度が高かった。
こんなものを文化祭で作り込んじゃうなんて、本当に凄いわ。
「これは半年くらいそれでその、俺たちにも聞きたいことがあるんだけど」
やはり向こうからも質問が飛んでくるわよね。
「うん、あたし1年生だからよく分からないわよ」
またあたしは、こんな振る舞いをしてしまう。
何だろう？　自分で言うのも何だけど、もう単に引くに引けなくなってるだけって感じだわ。
「あーいや、そのー、もしよろしければ、５年前の天文部について、木ノ本先輩とか坂田先輩のこと、知っていたら教えて欲しいなーって、僕思うんですよ」
天文部の部長さんが、それとなくあたしに話す。
「ふーどうする優子ちゃん」
浩介くんがふうと一息ついてから言う。

もう後輩ごっこはしなくていいわね。
「仕方ないわね。でも5年前のことを知ってもそこまで面白い訳じゃないわよ。佐和山大学の天文サークルと、していることは変わらなかったわ」
これだけの精巧な模型を作れるようなサークルではなかった。
あたしは、膨大な展示品を見回したけど、懐かしい展示はなかった。
「地球近傍の恒星たちの模型はどこかしら？」
「あれですか？　部活棟の倉庫にあります」
あら？　倉庫持てたのね。
あたしたちの頃はそういうのはなくて部室の中に置いておいたのに。
「あれはあたしと桂子ちゃんと、それから当時あたしたちの1学年上だった坂田部長との3人で作ったのよ」
シリウスが白い綿だったり、他の恒星も大きさこそ忠実だったけど、色々と難点があったもので、これとは比較にならないくらい簡素なものだった。
「あれがですか!?　あれを3人でですか？」
部長さんが驚いている。
「ええ」
「人手不足を考えれば、十分すごいことですよ。これなんて１０人以上で時間をかけて作ってるんですよ」
部長さんが、あたしの正体を見破った前提で話してくる。
まああたしもあたしで、ほとんど正体ばらしちゃったけど。
「篠原先輩の頃の天文部も見たかったなあー」
部長さんが遠い目をして言う。
「あはは、毎日ＪＡＸＡとかのホームページ見ながら、天文中心にゆるーくトークするだけの部活だったわよ。佐和山大学の天文部も、似た感じだわ」
あたしが、あの当時を思い出して言う。
もしかしたら、今の部活の雰囲気だと、あたしたちは合わないかも。
「そうですか、今は結構部員が増えて……多分篠原先輩の頃よりは真

面目になったと思います。でも、木ノ本先輩は小谷学園天文部『中興の祖』ですから」
部長さんが、そう笑顔で答える。
「そうだな、俺たちが3年になった時の新入部員なんて、中庄も含めてみんな優子ちゃんや木ノ本目当てで近付きたい男子ばかりだったんだぜ」
言うまでもなく、ものすごく不純な動機で、この天文部は大きくなっていった。
桂子ちゃんが「中興の祖」になれたのだって、それは桂子ちゃんが、あたしが女の子になる前まで、「学校一の美少女」と呼ばれるくらいにかわいい女の子だったから。
「そうらしいですね。今はもう、木ノ本先輩や篠原先輩を目当てに入部した部員も、みんな卒業していきました」
天文部長さんが、遠い目で見る。
「僕たちにとって、結婚前の石山先輩と篠原先輩がいて、坂田先輩がいた時代というのは、遠い昔の、それこそ宇宙の始まりのような、口伝で語り継がれるような時代なんです」
天文部長さんの面白い発言にあたしたちも思わず押し黙ってしまう。
変な話だけど、彼らにとって、あたしたちがいた時代、特にあたしが高校2年生の時の少人数でやっていた時代は、「神話の時代」と言ってもいいのかもしれないわね。
たった5年前のことでも、あたしたちにとっては、長い長い出来事だと思う。
「そうね、あたしだって、例えばあたしたち以前の先輩たちがいた天文部の時代は神話のようなものよ」
あたしたちも初代の部長さんを……いや、坂田部長以前の部員の誰にも会ったことさえないし、名前だって誰一人として、知らないもの。
「ええ、先輩、ゆっくり展示を見ていってください」
「はい」
あたしたちは天文部を最後に部活棟を去り、運動部のある場所へと

進んでいった。

# 小谷学園の伝説

「ねえ浩介くん」
「うん？」
運動場につくまでの間に、あたしは浩介くんに話しかける。
「蓬莱の薬が普及したら、今みたいに人間が寿命で死ぬような時代も、神話になるのかしら？」
それは、遠い遠い未来の話だと思うけど。
「ああ、そうだろうなあ」
蓬莱の薬で不老になることが当たり前になった時代になれば、人間が長くても１００年しか生きられない時代があったことだって信じきれないだろう。
更に言えば、老人という存在だって、伝説になるかもしれないし、彼らが経済の足かせになっていた何てのは、もっと信じられなくなることかもしれないわね。
そしてそんな時代を、今「寿命で死ぬことが当たり前の時代」を生きているあたしたちが、目撃できる可能性があるのが、蓬莱の薬。
あたしが女の子になったばかりの頃、「人生１００年時代」という言葉がもてはやされたが、蓬莱の薬によって瞬く間にかき消されてしまった。
それだけではない、永原先生が生きてきた時代は、「人間５０年」とさえ言われていた。まさに、今や隔世の感があるわね。
「なあ、まずはテニス部から行こうぜ」
運動場などがある場所の前で浩介くんが呟く。
テニスコートは、小谷学園の最奥部だ。
「うん」
やはり、最初に気になったのは恵美ちゃんが所属していたテニス部だ。
小谷学園のテニス部は、団体戦では地区予選を突破できない弱小だったが、個人戦では現在も世界ランキング１位を維持し続けている恵美ちゃんを擁していた。

とはいえ、恵美ちゃんがいた部活だから、多分それなりに人気にはなってるとは思うけど……

「お、それなりに部員いるじゃん」

「う、うん」

あたしたちは、あえて語らない。

テニスコートの入り口に、テニスウェア姿でテニスをしている（おそらく等身大の）恵美ちゃんの銅像が建っていた。

確かに、恵美ちゃんが日本人女子テニス選手として、類を見ない活躍をしているのは事実だ。

……でも、銅像まで建てなくていいのにと思うけど。

「見学の方ですか？　あ、もしかして、篠原先輩ですよね！」

女子部員の1人があたしに話しかけてくる。

「え!?　うん、そうだけど」

恵美ちゃんの銅像のインパクトがすごすぎて、ごまかす気力がなくなってしまった。

「確かに俺たち、ここの卒業生で篠原だけど」

「あはは、そうですよね。今この学校で、田村先輩の銅像に驚く人はいませんって。これは田村先輩の世界ランキング1位を記念して、わが小谷学園の美術部が作ったものなんですよ！　あ、もちろん田村先輩に許可は取ってますよ！」

やっぱり、世間一般には、小谷学園の出身有名人と言えば恵美ちゃんなのよね。

いや、あたしだってこれだけ世間でも有名になったしそろそろ、インターネットの某百科事典に自分の項目が出来てもいい頃合いだと思うけど、それでも恵美ちゃんほどには長くならないだろうし。

ちなみに、あたしの知人の中で、恵美ちゃんの他に項目があるのは、政府関係者を除けば、蓬莱教授と河毛教授、更に何人かの佐和山大学の教授たちに、ブライト桜の高島さん、後は協会関係者として、人類最高齢の人物として永原先生、そして永原先生の他には、比良さんと余呉さんを始め、江戸生まれの正会員たちがそれぞれ「江戸時代生まれの存命人物」という特筆性を持って、自分の項目を持っている。

あたしも、協会の広報部長として、フェミニズムを潰したり色々してきたんだけどねえ。今後次第かしら？
「にしたって、銅像はやりすぎだろう」
浩介くんがいかにも苦々しそうに苦言を呈する。
「小谷学園は昔から自由な校風と引き換えに、体育会系は徹底的に排除されてきたんですよ」
小谷学園は、体育会系的なノリと物凄く相性が悪い。
もちろん、部活はどれもあたしたちがいた時の天文部みたいなもので、恵美ちゃんがいた頃のテニス部は例外中の例外だった。
「今だって、田村先輩効果で入部してくる部員はそれなりにいるんですけど、学校全体を覆うゆるゆるな雰囲気のお陰で、真剣にやりたい人は近くのテニススクールに通うことになってます」
女子部員さんが詳しく説明してくれる。
つまり、恵美ちゃんが抜けて、小谷学園のテニス部は元の弱小テニス部に戻っちゃったわけね。
「あれ!?　篠原先輩の旦那さんって……たしか田村先輩と！」
女子部員が、頭の上に電球が点ったような顔をする。
おそらく、球技大会のことを思い出したんだと思う。
「え、ああ。確かに3年の球技大会の時に田村とは試合したけど」
「え!?　やっぱり、やっぱり篠原先輩ですよ！　ねえみんなー」
女子部員が、部員仲間を呼びにテニスコートへと入っていく。
そう、４年前の６月の小谷学園での球技大会、１ヶ月練習した浩介くんと、恐らく当時既に世界ランキング数百位レベルだった恵美ちゃんが、球技大会を５セットマッチでテニス対決したことがあった。
浩介くん自身は当初は難色を示していたが、結果的に試合を受けることになった。ちなみに、試合を提案したのは幸子さんだった。
結果を言えば、浩介くんが勝った。
序盤は恵美ちゃんが一方的に押していたけれど、浩介くんの男という性別に任せたパワーと体力による持久戦術で、第２セットは後半に追い付かれた末にタイブレークで浩介くんがセットを取り、第３セットもほぼ浩介くんが圧倒し、最終セットに至っては浩介くんが１ゲー

ムも与えずにベーグルで完封した試合だった。
あの時の恵美ちゃんは、色々な意味で印象に残っていた。
ラケットを叩き壊した所や、棄権を勧めた部員を叱りつけて、負けが決まった時にはコートの真ん中で大きな声をあげて泣いていた。
恵美ちゃんが泣くのを見たのは、あの時が最初で最後だった。
プロになってからは、恵美ちゃんはコートマナーがいい選手として知られている。
あの後、スポーツアカデミーが、既に進路が決まっていた浩介くんをしつこく勧誘していて、あたしと別れるように仕向けようとしたのが浩介くんの怒りを買って、結構大きな騒動にもなったりしたのよね。
やがて、文化祭用に活動していたテニス部員たちが全員集まってきた。
「篠原先輩、この田村先輩の銅像、見覚えありませんか？」
女子部員が目を輝かせながら言う。
「見覚えって……そりゃあまあ、田村だわな」
浩介くんが要領を得ない回答をする。
「そうじゃないですよ！　実はこの田村先輩の銅像は、４年前の球技大会で篠原先輩と対決した時のものなんですよ！　最終セットで篠原先輩のサーブを返しきれずに弾いちゃった場面です」
確かに、銅像の中の恵美ちゃんは苦しそうにボールを返そうとしているわね。
もちろん実際には、そのままラケットを弾いちゃうわけだけど。
「あー、あそこか。でも何でそんな場面に、もっと序盤で押してた時とかあるだろうに」
浩介くんが苦々しい表情で疑問符をつける。
うん、こんな場面じゃなくて、もっとかっこいい、例えばスマッシュを打つ場面を選んであげればよかったのに。
「それはですね、田村先輩たっての希望なんですよ！」
「ええ!?」
あたしたちは、ほぼ同時に驚きの声をあげてしまう。

いやだって、普通そんな場面を希望しないわよね。
「ほら、ここを見てください！」
テニス部員が指差したのは、銅像の横にあったレリーフで、そこには、「世界的にも有名なテニスの田村恵美選手が、3年生の球技大会の時に、同じクラスの男子と試合した。序盤こそ田村選手は一方的に押していたものの、徐々に相手選手による体力勝負に押され、最終セットは一方的展開になった。この銅像は、その最終セットで疲労困憊した田村選手が相手のサーブを返そうとしてラケットごと弾いてしまう場面である」と書いてあった。
「本当だわ」
それは紛れも無く、あのシーンを指していることは明白だった。
「田村先輩にとって、テニス半生を振り返った中でもっとも悔しく恥ずかしかった試合だったと言ってました」
確かに、恵美ちゃんにとっては男女の力の差を思い知らされた試合でもあった。
自分のテニス人生で努力に努力を重ね、全国でも圧倒的強さを誇っていた恵美ちゃんは、いくら力自慢でしかも女子の苦手な5セットとはいえ、1ヶ月の付け焼き刃で試合に臨んだ浩介くんに、最終セットは1ゲームも取れずに負けてしまった。
「どれだけ地位を重ねても、決しておごりたくないということで……ほら、この銅像、道路からも見えるんです」
そういえば、そうだったわね。
「田村先輩は、今でもここに来るそうです。それはかつて篠原先輩に負けた試合のことを思い出し、謙虚になりたいんだと思います」
恵美ちゃんは、テニスでの男女問題に殆んど口を出さない。
そもそも、恵美ちゃんが世界ランキング1位になった頃には、あたしたち協会が、フェミニズムを壊滅させてしまった。
恵美ちゃん自身、この試合があったからこそ「テニスで男女平等は無理」と思ったんだと思う。
「篠原先輩、優子先輩に聞きたいんです。男と女は、差があるんですよね？」

別の女子部員が、あたしに質問してくる。
もちろん、この質問の答えは、ＴＳ病になれば１週間もしないうちに嫌でも答えが分かる。
「ええ、とっても差がありますよ。特に身体能力なんて、ＴＳ病になったら、男女平等がどれだけ愚かな思想なのか、嫌でも思い知らされますから」
あたしが優しく諭すように話す。
そう、不可能なものは不可能なのよ。
「だから、男性にできないことを見つけるといいわ。わざわざ相手に地の利があることで、張り合わなくてもいいのよ。もちろん、女性同士で争うのはいいけどね」
あたしの言葉に、女子部員たちがうなずく。
そう、無理に男子と争う必要はない。
勝てるわけがないんだし、余計な対立を生むしでいいことはない。
「ええ」
女子部員たちは、あたしの話に純朴そうに頷いている。
あたしの中で、ちょっと悪戯心が湧く。
「そうよ、女性の良さを活かさなきゃ。例えば、みんなも男の子にはあるけど、女の子には存在しないものは大好きでしょ!?」
あたしが、露骨に浩介くんの下半身を見つめながら言う。
すると女性部員たちが一気に赤くなる。
「な、何言ってるんですか！」
「ゆ、優子ちゃん！」
浩介くんも、顔を赤くしているわね。
「ふふ、無理に否定しなくていいのよ。そういうのだって、立派な男女の違いよ。自分達に存在しないものに興味を惹かれるのは誰だって同じことだわ。浩介くんだって、あたしの胸が大好きなのよ」
「う、うん……」
「うー、優子ちゃん、否定はしないけど恥ずかしいって！」
否定はしないのよね。
「さ、ここはこの辺にして、次に行きましょ」

「あ、ああ」
「ありがとうございました」
時間的な都合もあるし、あたしたちは急いで最後の目的地、野球部のある野球場へと進む。
野球場では、坊主頭の部員が何人もいた。
パット見た感じでは、試合ができるかは分からないけど、それでもさくらちゃんが崩壊させた時と比べれば、大分復興が進んでいた。
「あ、篠原先輩ですよね!?」
「え、ええ」
入り口にいた野球部員が声をかけてくれる。
「どうぞ見ていってください。練習の様子です」
「今部員は何人いるのかしら?」
あたしが部員さんに聞いてみる。
「15人です」
部員さんが淡々と答える。
「へー、じゃあ試合もできるわね」
「ええ、後3人増やして、紅白戦ができるようになるのが目標です」
部員さんが生き生きと答える。
練習の雰囲気も、とても和気あいあいとしていた。
「へー頑張ってるわね」
「まあ、大会は相変わらず、県大会の最初の試合で敗退してるんですけどね。以前と同じように、うちは殆んど草野球の遊びに近いですから」
部員さんが苦笑いして答える。
まあ、小谷学園は勝つために死に物狂いみたいな学校じゃないものね。
「ええ、それでいいのよね。ブラック部活なんて誰も望んでいないもの」
「何分校風が校風ですから」
あたしたちが現役の頃、世間では「ブラック部活」という言葉が流行った。

要するに非常識にきつい部活のことで、部活を苦に自殺する生徒までいたから驚きだ。
ちなみに、この「ブラック部活」は、教員にとってもブラックな環境だったらしい。
もちろん、最近はそういうのも無くなってきたけど。
それでも、小谷学園のように自由奔放な学校は少ない。
「ふう、でも、野球部が復興しているみたいでよかったわ」
「？」
あたしがそう呟くと、野球部員が頭に「？」マークを浮かべた。
「あーうん、あたしが3年生だった時は、9人いなかったのよこの野球部」
あたしがこの事を話す時、さくらちゃんとのエピソードを思い出さずにはいられない。
あの時は「さくらちゃんは魔性の女」と思ったけど、今思えばあたしも似たようなものだったわね。
「え!?　そうだったんですか!?」
まあ、あたしたちが卒業して、1回入れ替わってるものね。
「ええ、よくここまで持ち直したものよ」
「だなあ。18人いれば、それなりに強くはなるんじゃねーか？」
もちろん、勝つために厳しい部活にしちゃったらあっという間に人が引いちゃうけどね。
小谷学園の生徒に限ってそういうこともないだろう。
「はい」
あたしたちは、他の運動部もざっと見ていく。
校庭を陣取ってた陸上部もゆったりまったりとした雰囲気を全面に押し出している。
これを見て分かったが、小谷学園は他の学校との差別化として、むしろ「弱い運動部」を売りにしているんじゃないかとさえ思えてくる。
普通、学校のアピールでは「強い運動部」として、競争する傾向にあり、それは保護者も煽っていく。
小谷学園はそうしたきつい運動部にならないようになっているん

じゃないかと思う。
つまりそういう運動部が欲しいなら、他の高校に行ってくれと言うことよね。
「ふう、優子ちゃん、どうする？」
一通りざっと見終わった浩介くんが、今後のことについて相談してくる。
「そろそろミスコンの結果発表よ」
「おっといけねえ、投票しなきゃ！」
浩介くんが慌てたように言う。
「いけない！　急がなきゃ締め切りになっちゃうわ！」
あたしたちは小走りで体育館へと向かう。
体育館のミスコンの投票は「まもなく締め切り」となっていて、駆け込みでの投票者が多く混雑していた。
「すみません、えっと一般２人で」
生徒手帳はもちろん持ってないし、卒業して無効なのでこう答えるしかない。
こことばかりは、潜りがバレてしまうのは致し方ないわね。
「はーい、篠原先輩ですね、よろしくお願いします」
生徒会の人があたしたちに投票用紙を渡してくれる。
あたしたちはそのまま、「稲枝弘子」という名前を書いて、投票箱へ入れる。
投票締め切り後、しばらく開票に時間をかけ、結果発表になっている。
ミスコンの結果はというと、あたしが出た時ほどではないが、それなりに接戦になった。
とはいえ、最後の最後まで分からないというわけではなく、弘子さんの優勝は途中でほぼ確実視され、逆に準ミス争いが激しかった。
最後の数票までもつれ込んだが、最終的に色仕掛けをした「スカートめくられヒロイン」が準ミスになった。
生徒会長さんも美人なんだけど、やっぱりもっと露骨に男受けを狙わなきゃ勝てなかったわよね。

一方で、余裕をもって優勝した弘子さんは、やや困惑しつつも満足した表情を浮かべていた。
これで、この学校にいるＴＳ病患者は、３人ともミスコンで優勝したわね。
表彰式に参加者紹介にと、ミスコンの大まかな流れは、あたしたちが現役の頃と変わらなかった。
「さ、ミスコンも終わったし、先に弘子さんの所に行くわね」
時間的にも、相談室の前に行けばちょうどよくなるはずだし、何分あたしがあそこに入ってったら大騒ぎは必死だわ。
「分かった。その方がいいだろう」
あたしたちは喧騒に背を向けて校舎に戻り、ミスコンが終わったばかりの学園祭の喧騒を背景に、職員室のそばにある相談室の前へと向かう。
そこは在学中の３年間の文化祭では行ったことのない場所で、信じられないくらいに静まり返っていた。
まあ、教師たちも殆んど仕事に出ているし、ここに何か特別なものがあるわけでもない。
文化祭中に流れている音楽が、どこか間抜けな印象だった。
まあ、ミスコン終わったばかりだし、多少はね。

## 学園祭の面談

「相談中は浩介くん、ここで待っててくれる？　女の子だけで話したいからね」
まあ、正確にはＴＳ病の女の子だけどね。
「あ、うん」
幸い、相談室の近くには椅子が設けられていた。
在学中にはあったっけ？
……まあいいわ。
ガララララ……
「おや、篠原さん、２人ともいらっしゃい」
職員室の扉から出てきたのは、あたしたちに数学を教えていた小野先生だった。
あたしたちがいた頃よりも、いや、去年の「蓬莱教授支持デモ」で会った時よりも顔のシワは増えたけど、かなり温厚な顔つきになっていた。
「小野先生、お久しぶりです」
「お久しぶりです」
あの時のことはもう、遠い遠い記憶の彼方だった。
あたしと浩介くんは、小野先生に礼儀正しく頭を下げる。
小野先生も、とても穏やかに笑っていた。
在学中の時と、同一人物とはとても思えないわ。
「お２人とも元気そうで何よりです。それよりもどうしたんですかその格好は？」
小野先生は、あたしたちの制服姿を見て驚いた様子で言う。
やはり小野先生にとっても、あたしたちのことは忘れられない思い出なのよね。
まあ、噂が全校に広がってたので分かってたとは思うけど、それでも聞かずには居られないわよね。
「あーうん、浩介くんと……ちょっと、ね」
あたしも、ややごまかすように話す。

小野先生は困惑した様子で頭をポリポリとかく。
もしかしたら、4年も経っているのにほとんど容姿が変わらないあたしたちに驚いているのかもしれないけど。
「あー、まあいいでしょう。毎年のことですから」
小野先生は今は昇進していて、学年主任たちを統括し教頭を補助する「教務主任」という役割を追っている。
もちろん小野先生も卒業生が制服を着て紛れ込むことは知っている。
「あ、篠原先輩ー！」
小野先生と話していると、弘子さんと永原先生がこちらにやって来た。
あたしたちが小野先生と話していたのが、ちょっと意外だったらしく、少しだけ驚いた表情をしている。
一方で、永原先生と小野先生は軽く挨拶をする感じで、あたしたちが在学中にあったいざこざの面影は完全になくなっていた。
「あれ？　篠原先輩って小野先生と親しかったんですか？」
弘子さんが素朴に聞いてくる。
「うーん、あたしたちは数学を教えてもらってたわ」
女子更衣室の問題のことは、小野先生の名誉のためにも話さないでおく。
「そうですか」
よく見ると、永原先生と弘子さんは制服姿ではなくメイド服姿だった。
おそらく、後夜祭の特殊シフトに対応するためだったんだと思う。
「さ、弘子さん、面談を始めるわよ」
あたしは気持ちを切り替え、弘子さんを促す。
「あ、はい」
浩介くんと小野先生を除く3人が面談室に入っていく。
「小野先生、それではまた」
「ええ、では私は学園祭を巡回してきます」
小野先生はそう言うと、あたしたちや弘子さんが来た道を進んでい

き、廊下に消えた。
小野先生の印象は、やっぱりかなり変わったという感じだわ。
あたしたちは面談室のボードを「使用中」に合わせると、弘子さんには手前に、あたしたちが奥に座る。
そして浩介くんは外でお留守番してもらう。
この面談室にも思い出がある。
あたしが初めて女の子の日になった時のことから始まって、色々なことをカウンセラーの永原先生に相談してもらったし、幸子さんのカリキュラムの総括も、その後の長生きするための安全講習もここでした。
また、一度だけあたしが永原先生のカウンセラーになったこともあった。
なのでこの「相談者側」の光景を見るのは2回目で、今回座っているのは永原先生ではなく弘子さんだった。
「じゃあ弘子さん、小谷学園の生活はどうかしら？」
漠然とした質問だけど、まずはその事を話さないといけない。
「はい、その……私、やっぱり女子との付き合いでまだちぐはぐ何です」
弘子さんは一瞬間をおいて口を開く。
「ふふ、もしかして『そこんころがまだまだ女子力が足りないのよ』とか『やっぱり深いところで女の子に成りきれてない』とかかしら？」
弘子さんがビクッとなる。
ふふ、やっぱりこの子もあたしと同じだわ。
「は、はい……今は落ち着いたんですけど、夏休み前はそればっかりでした」
弘子さんが、「やっぱり生まれが違うと女の子になりきれないんじゃないか」と心配するような顔つきで話す。
「心配しないでいいわよ。あたしだって女の子1年目はそんな感じだったもの。クラスの女子たちから男っぽい仕草や言動に、『まだまだ女子力低い』って言われ続けてて、その都度直していって、今のあたしがあるのよ」

「はい」
あたしが当時を思い出しながら話す。
特に浩介くんに恋する前の時期は、虎姫ちゃん、龍香ちゃん、さくらちゃんに桂子ちゃん、永原先生や母さんも含め色々な女子たちから「まだまだ女の子になれてない」「それは女の子らしくないわよ」などのお叱りお説教を受けることが多かった。
特に桂子ちゃんからのお説教が多くて、間違いなく今の女の子としてのあたしにとって、永原先生の次に影響を与えたのが桂子ちゃんだと思う。
「中学の時のお陰で、女子更衣室には慣れたかしら？」
そして、あたしは女の子として生きていくために更に重要なことに言及する。
女子更衣室や女子トイレを平然と使えるかというのも重要なことになる。
「はい、そこは問題ないです……それからその……実は私……最近……その……」
弘子さんが言いにくそうにモゾモゾとする。
ふふ、分かったわ。
「もしかして、好きな男の子かしら？　大丈夫よ、あたしだって通った道よ」
あたしは、弘子さんを安心させる風に言う。
「う、うん……でも、まだちょっと気になるってくらいなんだけど」
弘子さんは、顔を真っ赤にして、頷いてくれる。
そうよね、弘子さんだってそろそろ1年経って、女の子としての人格が多く形成されてくる頃だもの。
でもまだ、これが恋なのかどうか、そもそも自分が男に恋できるのかも分からなくて、ちょっと気になるってくらいなのね。
まあ、恋にはきっかけが必要だもの。あたしにも、そして永原先生にも、ね。
「そう、弘子さん、だったら積極的に声をかけてみるとかどうかしら？
体育でもし男女で混合になった時とか、あるいは一緒に順番を待っ

てる時とかに」
「う、うん……でも、緊張しちゃうかもなあ」
あたしが落ち着かせるように言って聞かせるけど、弘子さんはなおも躊躇している。
うーん、この辺りあたしや永原先生は体験してないことなのよねー。
「それでも、よ。文化祭、後はもう後夜祭しか残ってないけど、その気になる男の子に近づいてみて。あたしも、文化祭で大きく恋が動いたのよ」
あたしが優しく、弘子さんの恋――というにはまだ早いかもしれないけど――の悩みを導いていく。
「うん、私、勇気出して頑張ってみるよ」
学校の放送では、一般の人に対して、「まもなく終了」のアナウンスが頻繁に流れていた。
でも、今のあたしは協会で仕事をしに来ているので気にしないで進める。
「うん、いい調子よ」
だけど、弘子さんには、まだ所々言葉遣いが粗いところも見受けられるわね。
あたしや桂子ちゃん、永原先生や、幸子さん、歩美さんのような女の子らしい言葉遣いになれば、よりいっそう女の子らしい性格になるわよ。
「何か他に、学校で困ってることあるかしら？　永原先生に言いにくいこととかある？」
「うーん、特にないです。ただ、以前ちょっとクラスで男装させられそうになったことがあって」
「うんうん」
弘子さんの言葉に、永原先生が頷いている。
「永原先生は『しない方がいい』って言ってたけど」
うんあたしも永原先生に賛成だわ。
ＴＳ病患者が男装するのは、生粋の女の子が男装するのと訳が違

う。
　あたしや永原先生のようにきちんと女の子が確立されている人ならいいけど、弘子さんみたいな人は厳禁だと思う。
「弘子さん、『男装の麗人』って言葉があるでしょ？」
　あたしが弘子さんを見つめる。
「はい」
「あれはほら、男装してても『女性』って分かるでしょ？　それは本当の男とはまた違った形にしているのよ」
　弘子さんは、お世辞にもそういう感じの人じゃない。
　あたしもだけどね。
「弘子さんは、ＴＳ病の女の子だし、お世辞にもそういうのは似合わないわよね？」
「はい、私もそう思います」
　弘子さんは、あたしほどじゃないけど、身長の割には胸は大きめだしお尻はかなり大きい。
　顔は下手をすれば永原先生や比良さん、余呉さんより童顔で、現に身長は永原先生より小柄で、さっきのメイド喫茶を見た限りでもクラスでも一番小柄と見受けられた。
　男装が似合うためには、胸は小さくお尻も小さくでがっちりした体格に凛々しい顔つきと言うのが理想になる。
　ＴＳ病になると、多かれ少なかれ女を強調した女になるので、男装には都合が悪くなってしまう。
「うん、弘子さんの言う通りよ。拒否して正解だわ」
　あたしが柔らかく話す。弘子さんはホッとした顔をする。
　ＴＳ病の女の子に厳しくするのは「男に戻りたい」と言って聞かなくなったときだけでいい。
「ありがとうございます」
「他には、何かないかしら？」
　あたしがもう一度、弘子さんの目を見て話す。
「はい、大丈夫です」
　弘子さんは今度こそ何もないみたいね。

「それじゃあ稲枝さん、先に戻ってて。私はもう少し篠原さんと話していくわ」
永原先生が、弘子さんに先に教室に戻るよう指示を出した。
「はい、失礼します」
弘子さんが礼儀正しく頭をペコリと下げると扉を開けて部屋の外へ、すると入れ替わりに浩介くんが中に入ってきた。
「同席してもいいかな？」
「ええ、構わないわよ」
永原先生が笑顔で快諾する。
一応浩介くんも、協会の維持会員ということになっているので、特に大きな問題はない。
「それで、篠原さんは稲枝さんのこと、どう思ったかしら？」
永原先生があたしに印象を尋ねてくる。
「言葉遣いの発達に比べ、恋愛が進んでますよね」
幸子さんやあたし、あるいは歩美さんの場合、恋愛に目覚めたのは言葉遣いが女の子になってからだった。
でも弘子さんは違う。
まだ言葉遣いが女の子になり切ってない段階から、「気になる男の子がいる」と言っていた。
「ええ、実は最近の患者さんはその手の傾向にあります。成長が早まった結果とも言えますね」
あたしは例外としても、幸子さんにしても、歩美さんにしても他の患者さんにしても、ＴＳ病患者の女の子に彼氏が出来るまでには２年を要していて、女の子になったのが去年の弘子さんはかなり早熟の部類に入る。
もちろんそれは成績優秀なので歓迎すべきことだけど、複数の成長が同時に起こるために、慌ただしく生き急いでいるという意味でもある。
「今では、篠原さんの作ったカリキュラム修正のお陰で、とんでもなく早熟な子も出てきたわ。もちろん、自殺率が減ったのはいいことよ。でも１つだけ、不安があるの」

永原先生は、ちょっとだけ深刻そうな顔をする。
あたしは、永原先生が不安を抱く理由を探る。
「あの、永原会長、それってもしかして、あたしが浩介くんのことを好きになったばかりの時ですか？」
あの頃の思い出は、根強く残っている。
だからあたしには、永原先生が言いたいことがすぐに分かった。
「ええ、そうよ」
あたしが浩介くんを好きになったばかりの頃は、女の子としての心を持っていても、反射的な身体的本能が男のままだった。
これ自体は成長段階の相違なので他の患者でも起こり得ることだけど、これまでの患者さんはそれなりの期間ゆっくりと女の子になっていくため、反射的な本能で男が残っていても、落ち着いて対処できていた。
あたしは、女の子になるのが早すぎたためにああいうことになったのよね。
「過去にも恋愛ができたのに男の本能が残っていることに悩んだ患者さんは何人もいたわ。でも、5年前のあの時の海での石山さんみたいに、激しく泣きじゃくった例は初めてよ」
永原先生が思い出話をする。
正直海辺で一人ないてた思い出は今となっては恥ずかしいわ。
「優子ちゃんは……悲しかったんだよな」
浩介くんも、あのときあたしを止めていた。
あたしは生き急ぎすぎていると。
そしてそっちもまた自殺の道の可能性があるとも永原先生に言われた。
「もしかして、あの時のあたしみたいに、生き急ぐ人が出てくるってことかしら？」
「ええ、ご名答よ」
永原先生が、少し重苦しい表情で話す。
そう、急ぎすぎもまた自殺の道の可能性があるというのは、あたしほど優秀な患者さんがいなかったので実証できてないけど、仮設とし

ては残っていた。
「幸いにも、まだ篠原さんよりも一生懸命で、早熟な子はいなかったわ。女の子の日が始めてきた時も、篠原さんみたいな反応をした患者さんはいないわ」
「優子ちゃん、生理痛が嬉しかったんだって？」
浩介くんが、さらりと生理痛の話題を出してくる。
もう、いくら旦那だからって……まあいいわ。今はその話題も必要よね。
「うん、さすがに今はそういう感情もないわよ。でも、『痛みを受け入れないと女の子じゃない』って言うのは、今もそう思っているわ」
今日は大丈夫だけど、このまま行けば佐和山大学の文化祭は、生理予定日と重なっちゃっている。
今までもバレンタインデーやクリスマス、夏休み明けのような重要なイベントと生理が重なったことはある。
不便と言えば不便だけど、浩介くんに守ってもらえることなどを加味すれば、男なんかよりもずっと恵まれているわ。
「ふふ、さすが篠原さんね」
永原先生がにっこりと感心しながら言う。
でもあたしが初めて生理になった時にその言葉を聞いた永原先生は、この相談室で泣いてたっけ？
吉良殿の時とを合わせれば、永原先生はこの部屋で、あたしの前で2回泣いているわよね。
「でも、今みたいに、篠原さんが受けた時よりも洗練されたカリキュラムで育った子なら、篠原さんみたく『女の子になれてとても嬉しい。生理痛が嬉しい』って子だって、現れないとも限らないわ」
「あはは……」
当人が言うのも何だけど、「生理痛が嬉しい」って、かなり特殊な人だと思う。
あたしの場合は、あのときはまだ優一の記憶が色濃かったし、何より今と比べて遥かに孤独で暗い時だったから、そう言う心理状態も手伝ったのかもしれない。

そう言う意味で、あたしはあのいじめられていた日々も必要だったんだって改めて思える。
昔は、「罰」という側面でしか見てなかったけど、今は違うわ。
「でも多分、将来的には篠原さんと同じくらいの水準で、成績がいい子が出始めると思うわ。でもそうなった時に、周囲との摩擦もあり得るわ」
それはあたし自身もそうだった。
周囲が女性扱いするのは大事なことだけど、カリキュラムを終えたばかりの水準では、最低限度女としての生活を身につけられるというだけで、とても女性を使いきれてない状態なのよね。
そういう時に、女性扱いを続ける上で周囲が気を付けるべきことを、今後考えていかないといけない。
「ともあれ、一朝一夕で出る結論ではないですから、自殺者を出さないことを優先に、頑張っていきましょう」
「はい」
あたしたちが話し込んでいると、「まもなく文化祭終了」の放送が聞こえてきた。
本来、あたしたちはこの会場から立ち去らないといけない時間帯になるんだけど――
「篠原さん、せっかくだからメイド喫茶に行ってみる？」
永原先生がそう提案してきた。
「え!?　でも――」
もちろん、浩介くんとの秘め事のために後夜祭まで残るつもりではあるけど、その間は先生や生徒の目を盗むことになる。
「大丈夫よ。弘子さんの成長を見守るって言う建前を作っておくわ。じゃあ私は先に戻っているから、適当に時間を潰したら弘子さんのクラスに行っててね」
永原先生は、そのまま相談室を出てしまった。
「まあ、後夜祭までいるつもりだったし、渡りに船だろ」
「そうよね」
浩介くんの言う通りだわ。

ともあれ、あたしたちはこの相談室の中で時間を潰す。
先生たちがうようよしていて、大丈夫かしらと思ったけど、制服だからごまかせるかしら？
あたしと浩介くんは、後夜祭開始のアナウンスを、相談室の中で聞いた。

## いけないこと

後夜祭の前半戦が、文化祭の延長にあるのは、あたしたちが卒業しても同じ。一般の人達がいなくなるのも同じ。でも今日は違う。
相変わらず音楽と共に遠くの喧騒の雰囲気がここまで伝わってくる。
「優子ちゃん、そろそろ行こうか」
浩介くんがなんの前触れもなくそう囁いてくる。
「うん」
後夜祭が始まって5分、あたしたちは相談室を出ることにした。
もちろん、まだこの学校でするべきことは残っている。
「おや、2人とも、早く帰ってください。もう後夜祭の時間ですよ」
「あ、小野先生！」
部屋から出ると、タイミング悪く、あたしたちは小野先生と出くわしてしまう。
「すみません、永原会長から、稲枝弘子さんのメイド喫茶に寄って様子を見るように言われましたので」
あたしが、正直に理由を説明する。
やましいことをする後半戦はともかく、前半戦は一応小谷学園に残る大義名分がある。
「あ、協会の依頼でしたか。これは失礼いたしました」
生徒と先生という関係ではなくなったためか、小野先生は妙にあたしたちに丁寧な扱いをしてくれている。
まあ、あたしたちもいい加減子供ではないということよね。
「いえいえ、ではあたしたちも急いでいるので失礼します」
「失礼します」
2人で軽く頭を下げる。
「気を付けてください」
同じく軽く頭を下げた小野先生に見送られ、あたしたちはメイド喫茶のある弘子さんのクラスへと向かう。
幸い、制服姿なので遠くから見れば不審者に見えないらしく、何と

か騒がれることなく弘子さんの教室まで来ることが出来た。
「はーい、列に並んでー」
すると、メイド喫茶はあたしたちがしていた時に負けないくらいに大繁盛していた。
永原先生と弘子さんを軸に、クラスからかき集めた美人を使って特別シフトを組んでいた。
「あれ？　篠原先輩、まだいたんですか!?」
近くの男子生徒が、あたしを見とがめる。
制服の色はあたしたちと同じだけど、もちろんあたしたちは生徒になりすましをしている訳で、時間も時間だから、「今は1年生」はさすがに通用しない。
「あーうん、永原会長から、弘子さんの様子を見るように言われたのよ」
「え!?　稲枝の様子を？」
男子生徒が驚いている。
「あの子、ＴＳ病でしょ？　あたしたち日本性転換症候群協会は、患者さんが１２０歳になるまでカウンセラーをつけてるのよ。今は一番近い永原会長が担当しているけど、弘子さんが中学生だった時はあたしの担当だったのよ」
あたしが、経緯をまず説明する。
男子生徒は一つ一つにかなり驚いていた。
「え!?　篠原先輩が、中学の頃の稲枝の面倒を見てたんですか？」
「面倒ってほど大袈裟じゃないわよ。ただ、この病気は男には絶対に戻れないし、戻ろうと思ったり中途半端に生きようとすると、精神がすぐにやられて自殺してしまうわ」
ＴＳ病の基本的な特徴から分かりやすく話していく。
「それを防ぐためには、女性として生きていかなきゃいけないのよ。あたしは弘子さんと一緒に、初めて『女性専用』のスペースに連れていったり、初めての女湯にも入れてあげたわ」
「はえー」
周囲で聞いていた別の男子生徒が、驚嘆の声をあげる。

あたしはその後、この際なのでカリキュラムがどういうものかを説明していく。
例えば男言葉を使ったりすれば怒られること、その度に自分は女の子だということを繰り返し自己暗示させられることや、カリキュラムの後半には学校生活を送る上での課題もあって、がさつな振る舞いをすればもちろんその都度訂正させ、「私は女の子」と言う暗示をかけさせられたり、男時代の服や本などを、女の子を強調したミニスカートで古着屋さんや古本屋さんに売らなければならないという課題についても話した。
もちろん、かなり大雑把にだけどね。もちろん、スカートめくりのおしおきのことは話さないでおいた。弘子さん、ものすごい恥ずかしそうにしてて涙目になってかわいかったわ。
「それにしても、ＴＳ病って大変なんですね」
みんな弘子さんがＴＳ病なのは知っていても、こうした苦労のことは知らない。
男子たちは感心した風に言い、ある男子生徒は「俺、ＴＳ病になったら耐えられないかもしれない」とも言っていた。
確かに、カリキュラムは厳しいものだし、完遂しても表面上女の子になれるだけで、深いところは学校生活などで覚えていかなきゃならない。
もちろんそのことも、事前に患者さんにも断ってある。
そうこう話していると、列が捌け、あたしたちの番になった。
「おかえりなさいませーご主人様ー」
メイドさんが元気な声で挨拶していて……って弘子さんじゃない。
「ご主人様、お嬢様、こちらへどうぞ」
「お、おう」
弘子さんが、浩介くんとあたしを引っ張っていく。
うーん、あたしがメイドした時よりも、こなれている感じさえするわね。
女の子歴でいえばあの時のあたしのほうが短かったとは言え、うーん、何か悔しいわ。

「ご注文、お決まりでしたらどうぞ」
弘子さんが、注文メニューを出してくる。
「ホットコーヒーにハムサンドで」
浩介くんが即答する。
「えっと、オレンジジュースとバタートーストで」
あたしも、後ろがつかえているので空気を読んで早めに決断する。
「ご注文承りましたー、ホットコーヒー、オレンジジュース、ハムサンドバタートーストでーす！」
弘子さんが厨房に向かってメニューを注文する。
そしてまた、目まぐるしく応対する。
かなりの繁盛ぶりなためか、本来もういないはずのあたしたちがここにいることに違和感を話す会話はない。
あたしは、永原先生の言いつけ通り、弘子さんの様子を見て回る。
弘子さんはあたしではなく、暇があれば厨房の方ばかりに視線を写していた。
ふふ、気になる男の子が、あの中にいるのね。
「お待たせしましたーこちらがホットコーヒーにハムサンドになります」
弘子さんが、両手にトレイを持って浩介くんの手前にお皿を出してくれる。
「こちらがオレンジジュースにバタートーストです」
そして続いてあたしにも、注文したメニュー通りのものを渡してくれる。
あたしたちは、弘子さんに「ありがとう」と言い、食べ始める。
混雑が激しいので、「観察」という名目で長居するのもしにくい。
メイド服姿の永原先生も、5年前と同じように忙しそうに対応に追われていた。
「懐かしいなあ。あのメイド喫茶、俺が最後のお客さんだったんだよな」
浩介くんがハムサンドを飲み込んでから話す。
「うん、そうだったわね。あたしがコーヒーを淹れたんだっけ？」

そう、浩介くんがあのコーヒーを飲み終わって、後夜祭の前半戦が終了したんだったわ。
「そうそう、あの時最後のご主人様になった時に、俺は初めて、本当の意味で『主人』になりたいと意識したんだ」
「ふえ!?」
突然の浩介くんの告白に、あたしはぼんっという音がしそうな勢いで顔を真っ赤にする。
つまり、あの後夜祭の時に、浩介くんはもう、結婚まで意識していたのね。
「あーいや、初めて『結婚を意識した』ってだけで、本当に『もう引かない。俺は絶対優子ちゃんと結婚する』って決意したのは春休みの遊園地の時だよ」
浩介くんが慌てた様子で弁解する。でも、そんな風に秘密を暴露されるだけで顔がどんどん赤くなっていく。
確かに、高校2年生が終わって、3年生までの春休みの時に行った遊園地デートをきっかけに浩介くんは彼氏から婚約者へと変わったと思う。
何だろう、雰囲気が雰囲気だからかもしれないけど、今日は何だか過去を振り返ってばかりだわ。
まあ、たまにはそういう日も必要よね。

「ふう、ごちそうさま」
「うん、ごちそうさま」
コーヒーが熱かったのもあって、あたしと浩介くんはほぼ同時に食べ終わると、レジに行って会計を済ませた。
……あれ？　永原先生の姿が見えないわね。
ともかく、外に出ようかしら。
「あ、篠原さん、稲枝さんはどうだった？」
外で列整理していた永原先生が、あたしたちを呼び止めた。
「あーうん、厨房の方をずっと見つめてたわ」
あたしは、弘子さんの様子を永原先生に報告する。

「そう、じゃあ大体の目星はついたわね。ふふ、稲枝さんの恋、実るといいわね」
永原先生が、頬に手を当てて優しそうな表情で微笑んでいた。
やっぱり、永原先生も恋話が大好きな女の子なのよね。
「ええ」
「さ、篠原さん、そろそろまっすぐ帰ってね。小谷学園は自由な校風だけど、部外者に対しては話は変わってくるわよ」
朝のこともあったのか、永原先生が釘を刺すように注意してくる。
「分かってますって」
幸い、制服着用中なのでパッと見では不審者とは思われないけどね。
「行こう、優子ちゃん」
「ええ」
あたしは浩介くんの後ろをついていき、校舎の外に出た。

「なあ、優子ちゃん」
校舎を出てすぐ、浩介くんがあたしに話しかけてくる。
「ええ、このまま抜けるわけにはいかないわ」
まだ後夜祭の前半戦だけど、意外とメイド喫茶に居座った時間が長かったため、時間的にはそろそろ後半戦へと入る。
そうなれば、全校生徒と先生は校庭に集められ、そこでカードゲームやボードゲームをすることになっている。
あたしたちは進路を変え、部活棟に忍び込む。
ここからは完全に「逸脱行為」だ。
「とりあえず、トイレに隠れましょ」
「ああ」
あたしたちは話し合いの結果、後夜祭後半戦が開始して5分後まで、部活棟にあるトイレの個室に、それぞれ入ることにした。
ほとぼりが覚めたのを見計らい、あたしたちは行動を開始することにした。
トイレに入る前に、一旦部活棟の鍵を確認する。うん、あの時と同

じ、中からは脱出できるわね。
まあ、後夜祭の後半戦が終わるまでの時間で、ことを済ませれば大丈夫なはずだわ。
「よし、じゃあ何かあったら携帯で」
「うん」
あたしたちは男子トイレと女子トイレの分かれ道で別れる。
トイレの個室の中で、一番奥に座る。
そうだわ。お漏らししないように、今のうちに済ませちゃおう。
そう思ったあたしは、制服のスカートをペロンとめくりあげ、パンツを下ろして便座に座る。
「ふー」
音姫を鳴らしながら、あたしはそのままその場でやり過ごす。
生徒会長さんの、「後夜祭後半戦がまもなく開始」という放送から、どたばたと部活棟が揺れ始め、後片付けを終えた部活から多くの人の話し声と共に移動していくのが見える。
このトイレにも何人かが入ってきて、あたしの中での背徳感がいっそう高まっていく。
小谷学園は極めて校則が緩く、こうした露骨に「いけないこと」をするのは高校生活でもなかった。
いや、後夜祭の後半戦は、こうした行為をするカップルが後を絶たないという噂さえあった。
今のこの背徳感も、あたしたちがすでにいてはいけない卒業生だからというのもあると思う。
やがて後夜祭後半戦開始のアナウンスが聞こえ、3分後には完全に静まり返ってしまった。
アナウンスから5分後、浩介くんとメールでやり取りし、トイレを流してあたしは浩介くんに合流する。
「よし、どこに行くか？」
「うーん、天文部室……かな」
あたしは、とっさに思い付いた場所を言う。
「うっ」

「あそこは部活棟の最奥部だし、何より思い出の場所だもん」
そう、最奥部なら、あたしの大きな声が校庭に響く危険性は低い。
屋上も安全度は高めだけど、夜の音の通りのよさを勘案するとあまりよくない。
「ああ。分かった」
あたしたちは、天文部室へと歩を進める。
天文部室に行くまで、これほどに緊張した経験は他にない。
桂子ちゃんに初めて連れていかれた時以上だ。
「空いてるといいわね」
「ああ」
後は、部室に鍵がかかっていないことを祈るしかない。
あたしは、意を決してドアを開けようとする。
ガチャッ
「あら、閉まってるわね」
「ああ」
やっぱり、用心深かった。
あたしたちは部活棟を出て今後について議論する。
「な、なあ」
「ん？」
今度は浩介くんから提案があるみたいね。
「教室、2年2組の教室は、どうだ？」
「う、うん」
うん、そこにもたくさんの思い出があるものね。
あたしたちは、真っ暗な校舎を、5年前と同じように進む。
あの時は中庭を、そして今は2年2組の教室を目指す。
「浩介くん……」
あたしの中で、緊張と興奮が高まっていく。
あたしが女の子になってから、学校の中で規則違反をしたことがなかった。いや、しようがなかったとも言える。
でもこれからすることは、どう考えてもよくないことで。
童心に帰るだけじゃない。あらゆる感情があたしを渦巻いていた。

そんなことはつゆ知らず、校庭から聞こえる後夜祭の喧騒と、人々の声が妙に生々しく聞こえてきた。
もしかしたら、他にこういうことをしているカップルもいるかもしれないけど、あたしたちは何一つ考えられずにいた。
誰にも遭遇することなく、あたしたちは教室の前に来ることが出来た。
ガララララ……
教室の扉は、開いていた。
あたしたちは念のため、扉を閉めてカーテンも閉め、内側から扉の鍵をかける。
「優子ちゃん……本当に、いいんだな？」
浩介くんがまた、確認するように言う。
「ええ、来て……浩介くん……」
月明かりと校庭の明かりだけを頼りに、あたしは唇を前に突き出してキスをせがむ。
「んっ……」
「ちゅるっ……じゅうっ……ちゅぱっ……」
あたしの興奮が、一気に高まる。
破裂するほどに心臓がドキドキする。
いつもそうだったけど、今日の興奮度は比較にならないほどに高い。
「じゅううっ……じゅぅ……ぷはっ……」
とろりとした目つきであたしと浩介くんの唾液の混合糸が垂れていく。
あたしが血を吐いたところも影も形もなく、ロッカーも別の生徒のものになっている。
「優子ちゃん、ほら」
浩介くんが椅子を差し出してきたので、あたしも座る。
そこはそう、あたしが２年生の時の座席位置で――
「よく覚えていたわね」
浩介くんの記憶力に、半ば唖然としてしまう。

「優子ちゃんこそ」
「ふふっ」
自然と笑みが溢れる。
ぺろっ
「やだっ……」
浩介くんにスカートをめくられ、パンツに手が伸びてくる。
月と校舎の明かりで、あたしのパンツがいやらしく光っている。
「優子ちゃん、かわいいよ」
「浩介くん恥ずかしい……」
どうしても、これに慣れることはない。
特に制服のスカートはめくりやすいというのもあるわよね。
「優子ちゃん、今からもっと恥ずかしいことするんだよ。この思い出の教室で」
浩介くんがあたしの耳元で息を吹きかけながら囁いてくる。
「うー、言わないで……」
顔を真っ赤にしながら、あたしはうずくまる。
もーだめ、興奮しすぎて頭がおかしくなっちゃいそうだわ。
浩介くんに主導権を終始握られながら、あたしたちは制服姿で、秘密のイタズラをした。

「ふう、これでよしっと。急がないと」
「ええ」
立つ鳥跡を濁さずというからには、あたしたちは原状復帰をさせ、素早く教室の扉を開けて裏口から逃げた。
幸いなことに、この時間にあたしたちと相対した人はいない。
どうやらあの時の出来事は、秘密にできそうだった。
あたしたちは、後夜祭の参加者よりも少し早く、家に到着した。

「「ただいまー」」
「おかえり、2人ともどうしたの？　遅かったじゃない」
遅い時間に帰ってきたためお義母さんに心配されてしまう。

まあ当然よね。
「あーうん、弘子さんの都合で、ね」
嘘は言っていない。
ちなみに、お義母さんも弘子さんのことは知っている。
「あー、うん。それよりも、明日の月曜日、ちゃんと準備しなさい」
「分かってるって」
制服を着ていると、どうしても高校生に見えてしまう。
ましてやあたしも浩介くんも、他の人とは年齢の進み方が違う。
名残惜しかったけど、あたしはこの制服に新しい思い出を加え、パジャマへと着替えていった。

小谷学園の文化祭は思い出に残ったけど、反対に佐和山大学の学園祭は、あたしは腹痛で気分が悪くなってしまった。
それでも、大学生としては最後の学園祭なので、浩介くんに介抱してもらいながら出席することが出来た。
といっても、大半は天文サークルと蓬莱の研究棟で時間を潰した。
もちろん、体脂肪率を極端に下げたり、体重を極端に痩せ型にすればこれも止まるらしいけど、そうなったら子供を作れなくなるので、そういったことは絶対にしたくない。
辛いけど、それでも赤ちゃんのためと思えてくると、それだけでも全く気分が違った。
そうよね、やっぱりこれが、あたしの中の「母性」なのかもしれないわ。

# 蓬莱教授の驚愕

小谷学園と佐和山大学の文化祭が終わった１１月、あたしは卒業論文をまとめ上げ、一旦蓬莱教授に論文を見てもらうことにした。
不老に関するメカニズムについて、徹底的に調べ、これまでの学部での４年間では学びきれなかったこともふんだんに取り込んだ。
蓬莱教授が記者会見などで発表したことの根拠になっている論文にいくつもアクセスした。
これらは、資料庫に常時入れたことが大きく幸いしたと思う。一応上層部以外にも、あるいは大学の図書館にも資料はあるけど、やっぱり蓬莱教授の研究の深層を知るにはこっちに立ち寄る必要も会った。
浩介くんは、まだ卒論を書ききってないので、そういう意味でもあたしの勝ちだわ。
まとめ上げるには図表も含めＡ４で３０枚程度、カラー印刷すれば大丈夫だ。
で、蓬莱教授に持っていったんだけど――
「優子さん、君、本当にこれを学部の卒業論文だと思って作ったのかい？」
蓬莱教授が、物凄く驚いた顔をしていてこっちが面を喰らってしまった。
「え!?」
蓬莱教授の言っている意味が、よく分からないわ。
しばらく固まっていると、根負けした蓬莱教授が大きく息を吐いて論文を見ていた顔を上げてこちらを見つめてきた。
「これ、修士論文だと言われても、俺は2つ返事でＯＫを出す代物だよ。さすがに博士論文ならいくつか不十分だからやり直しだと言うが、学部生がこのレベルの論文を出すこと自体、驚嘆ものだよ」
蓬莱教授は、心の底から驚いているという顔をしている。
確かに、ＴＳ病はあたしも当事者の病気だから馴染み深くモチベーションも高いとは言え、知らず知らずのうちにそんな大それた論文を作ってしまったことは驚きだわ。

「優子さんは、今も協会の仕事などもあるんだろう？　大学の修士は忙しい。これは卒業論文にはもったいなさすぎるから修士論文にとっておくといい。大丈夫だ、成績判定もこの論文を基準にするように融通は図っとく。あーもちろん、この論文も修士で出すにしても2年の間に手直しはしてもらうがね」

蓬莱教授が冷静にあたしの将来のことを話してくれる。

でも、これを修士にとっておくということは、もう一個論文を書かないといけないという意味で、後4ヶ月しかない。

「ああ、心配しないでくれ。前にも言ったかもしれないが、大学の教授なんてのは俺も含めて卒業論文ごときに大した期待をしていない。いやむしろ、そうだからこそ、優子さんのこれは飛び抜けて優秀に見える……無論、それを差し引いてもこれが修士論文のレベルに達していることは、否定しないがな」

蓬莱教授が冷静に、あたしの評価を下していく。

あたしにとっては、あまりにも急転直下な事実に未だに気持ちの整理ができてない。

「やはり、俺の見立ては正しかった。優子さん、やはりあなたは天才と呼ぶにふさわしい人間だ。どちらかと言えばそう、本来の優子さんは多くの凡人たちではなくて、例えば多くの大学教授たちや……俺のようなノーベル賞学者、そういった方の側にいるべき人間だったんだよ」

蓬莱教授が確信を持った目つきで言う。

あたしには現実感がつかめない。

いや、以前からそういう伏線はあったと思うし、実際同じようなことを以前にも言われたことは何度かある。

それでも、改めて言われると、嬉しさよりもショックのほうが大きい。

あたしが普通とは違うのは、ＴＳ病になってから嫌というほど思い知らされてきたけど、それでも、こんな「異常の塊」のような人から言われると、改めてとっても衝撃的だわ。

「そこでだ。さっきも言ったように、これを卒論に使ってしまうのは

あまりに惜しい。実際、大学の学部過程を大きく超えた内容もいくつもあるんだ。そこで今からもう一つ別の論文を作るといい」
「はい」
蓬莱教授がさっきと同じ話をしてくる。
多分、蓬莱教授からすればあたしのことを天才だと思っていたんだけど、まさかこれほどとは思っていなかったんだと思う。
「何。気負わなくていいよ優子さん、卒業論文に求められるレベルは優子さんが作ったこの論文より遥かに低い代物だ。翻ってこの論文は修士論文の中でもレベルは高い方だ。だから今から作る卒論にはもっと簡単なテーマ、そうだなあ……ＴＳ病をテーマにするなら――」
蓬莱教授は、よっぽどこの論文を修士課程の時にとっておかせたいらしいわね。
代わりに、あたしに課したテーマは「ＴＳ病患者の治療方法」だった。
つまり、あたしと幸子さん、そして大学にあたしがは言って以降の患者の自殺者のことや、「明日の会」がすぐに自殺へと至ったことなどから、正しいＴＳ病患者の治療法の実績をまとめなさいということだった。
凝り性にならないように配慮するためか、分量はこの論文の半分程度でいいとのことだった。
確かに、それなら４ヶ月も必要ないわね。
いや、２日もあれば完成するかもしれないわね。

こうして、あたしは今から意図的に「手を抜いた」卒業論文を書くことになった。
このことを浩介くんに指摘したら「やっぱり優子ちゃんは頭がいいんだよ。蓬莱教授が言っていたこと、本当かもしれねえぞ」と言っていた。
おそらく、浩介くんが言いたいのは５年前の水族館のことだと思う。

あの時、蓬莱教授は「優子さんはいつか佐和山大学で偉大なことを成し遂げる気がする」と言っていた。

学部生の身分で、既に修士論文のレベルのものを、しかもほとんど周囲の助けも借りずに書くことが、どれほどに凄まじいことかはあたしだって、いやそれこそバカにでも分かる。

それと同時に、あたしの博士課程行きも、ほぼ決まっただろう。

でも、修士の2年はともかく、博士は更に3年が必要になる。

そこから就職して今から更に6年後となると、あたしの義両親も定年退職が近くなる。

その時のことも、考えないといけない。

もしかしたら、ここで教鞭をとるのかなあ、なんてことさえ考えてくるけど、さすがにそこまでの未来はあたしには分からない。

今は好景気が続いているけど、5年後はさすがに景気が悪くなっていくんじゃないかと思う。

そうなると、博士余りとも言うし、就職が辛いかもしれないわね。

ともあれ、あたしは日本性転換症候群協会広報部長を退いたわけではないから、他の学生よりも忙しいことには変わりはない。

新しい患者さんのケアについても、最終試験前の今は2人とも落ち着いているため、場合によってはあたしに白羽の矢が立つこともある。

政府との調整も相変わらず続くのであたしにとっては忙しい日々になることに違いはないわね。

「和邇先輩、どう思います？」

「どう思うって言われましても。俺は修士の論文で四苦八苦してるのに、学部生の優子さんがもう修士レベルの論文書いちゃったとは。手抜き論文と言われても……うーん、悪いけど力にはなれそうにないですね」

和邇先輩に、「いい手抜きの方法」を聞こうとしたけど、要領のいい回答はもらえなかった。

おそらく既にあたしの学力が和邇先輩を追い抜いてしまったのか

もしれないわ……ってそれはさすがにないかしら？

さて、こうして順風満帆なあたしたちは、残りの大学生活を存分に満喫するはずだった。

あたしと浩介くんが、内部推薦での大学院進学も決まっていて、11月下旬に行われるのが龍香ちゃんの結婚式だ。

あたしたち２０１８年度小谷学園３年１組卒業生の中では、あたしと浩介くんに続く２番乗りの結婚になった。

最も、付き合いの長さで言えば、龍香ちゃんの方が先になるんだけどね。

「優子ちゃん、他の人の結婚式に行くときは、装飾品をつけたり、過度な飾りつけはダメよ」

「はーい」

龍香ちゃんの結婚式位に招待されたあたしは、お義母さんの指示に従って、当日のコーディネートを考える。

あたしの結婚式の時も、幸子さんが少し派手な服を着てきただけで、他の子は地味な服が多かった。

あたしの場合、頭の白いリボンは、これがないと下手すると認識してもらえない危険性があるのでそのままで、服装は黒いタイトのロングスカートに、トップスも黒い服で胸もなるべく目立たないようにする。

純白の花嫁の龍香ちゃんを引き立たせるには、やっぱり黒くて地味な服がいいかしら？

「うー、難しいわね」

いつも頭につけている白いリボンも、いつもよりずっと小さいのを選んでいたけど、それがあってもなくても、あたしの顔と巨乳はどうしても目についてしまう。

龍香ちゃんも、彼氏にたっぷり調教されたのか、高校在学中に比べてもかなりの美人になったと思うけど、それでもあたしと比べると劣ってしまうのは否めない。

とにかく、結婚式は明日になる。
それを考えると、あまり悠長に構えてもいられないのよね。
「んー、まあこれでいいわね」
さすがに、これだけ地味ならウェディングドレスの龍香ちゃんには負けると思うわ。
あたしも着たことあるから分かるけど、とにかく花嫁ってきれいだし。
ともあれ、お義母さんに見てもらおうかしら。

ガチャッ
「お義母さん、どう……かな？　これなら噛ませ犬になれるかしら？」
部屋をて、お義母さんのいるリビングに行く。
「うーん、まあ優子ちゃんだからしょうがないわね」
お義母さんは、少しだけため息をつきながらも了承してくれた。
あたしの素材があまりによすぎて、これ以上地味にしようとすると、マスクをつけるとかそういう方向性に攻めていくしか無くなってしまうのよね。
うーん、露骨過ぎる手段を取らず、かつ意図的に「ブスになる」ってのも難しいわね。かわいくて美人で損するってのも珍しいわ。
ともあれ、これで浩介くんと一緒に行く結婚式の準備はできたわね。

翌日、龍香ちゃんの結婚式場は、あたしたちの式場とはまた違っていた。
婚姻届は前日に出したらしく、学生証とかを新姓に変える準備をしているそうだ。
どうして卒業と同時にしなかったのか聞いてみたんだけど――
「いやー、実は卒業と同時に結婚しようと思ったんですけど、彼の姓で学生生活送ってみるのも楽しいかなあ何て思っちゃいまして！」
というのが龍香ちゃんの弁だった。
まあ、気持ちは分かるわ。

あたしも、この前弘子さんと会うついでに浩介くんと制服で学園祭を回ったけど、「篠原優子」としての学校生活も、ちょっとだけ恋しくなった。
まあそれでも、卒業式の日に結婚式をして、初めても奪われる体験に比べたら、あの形での結婚がベストだったのは分かるし、後夜祭の時にもその体験をちょっとだけさせてもらったので、あたしにとって思い残すことはない。
あたしたちは、結婚式場へ行くために電車に乗る。
うーん、やっぱり胸への視線を感じるわね。
「優子ちゃん、やっぱ花嫁のためにも晒し巻いた方がよかったんじゃねえか？」
浩介くんが、相変わらず胸に視線が集まるあたしに対して、半ば呆れ気味にそう話す。
「あはは、でもさすがにそれは……あたしと認識されなくなっちゃうし」
この大きな大きな胸を小さく見せるのは、あたしにとってはとても辛いことだわ。
あたしが和服を苦手としているのも、晒しを巻かなきゃいけないことが大きいもの。
「だよなあ……」
浩介くんがそう呟いたことで、この話は無しになった。

「よし、ここだな」
龍香ちゃんの結婚式場は、あたしたちのよりも小さかった。
まあ、あれはかなりの人数が参加してたものね。
それでも、小谷学園の卒業生なども多く参加していて、一般的な結婚式よりは人が多いかもしれない。
あたしたちは、受付を済ませると、招待客の枠として、中へと通される。
「おお、篠原夫妻のご登場だぜ！」
高月くんが第一声。

それと共に、控え室が湧く。
同窓会で会った卒業生たちも、あたしたちに注目しているようだった。
「うー、やっぱり優子ちゃんを射止めた篠原は幸せもんだよなあ――」
「うんうん、あれで確か、家事もうまいんだろ？」
「本当、理想の嫁だよなあ。今日だって花嫁より目立たなきゃいいけど」
元クラスメイトの男子たちが、あたしと浩介くんの噂をしている。
うーん、確かにあたしが目立っちゃったら結婚式の意味がないし、あたしたちのテーブル、式場の端になってくれるといいけど。
もし新郎新婦のすぐ近く何てなったら、龍香ちゃん絶対嫉妬しちゃうだろうし。
まあ、さすがに事前に式の人に言ってるわよね。
その後もクラスメイトの他、大学に入ってからの龍香ちゃんの友人と思われる女性も何人か参加していて、同じ佐和山大学のはずなのに向こうはあたしたちのことを知っていて、こっちは知らない。ということが頻発した。
「うー、やっぱりあたしたち有名人なのねえー」
「そりゃあそうだろ、佐和山大学で俺たちのこと知らない学生がいるか？」
あたしがややうんざり気味になっていると、浩介くんが冷静に突っ込んでくる。
やはり蓬莱の薬を普及させる際にあれこれメディアに出たのが聞いているわね。
さすがに、政府との交渉までやっている事実は漏洩してないけど、万一世に知られたら大変なことになるわね。
ガララララ
「あら、みんな揃っているわね」

そして次に控え室に入ってきたのは、レディースーツの永原先生だった。
「永原先生、お久しぶりです」
「お久しぶりです」
小谷学園の卒業生たちが、我先にと挨拶しに永原先生の元へ殺到する。
やはり美人で童顔の先生、しかもＴＳ病で容姿が全く変わらないとあって、在校生だけではなく卒業生からの人気も高いわね。
あたしにとっては、この前の学園祭の時の他に、定期会合での再会があるので、「久しぶり」というものではなかった。
でも、他の卒業生たちにとっては、永原先生に会う機会なんて言うのはそうそうないのよね。
永原先生があたしたちと同じ席に座ると、結婚式場はさながら同窓会の様相を見せてきた。
そして、更に遅れて桂子ちゃんが達也さんを連れて会場入りする。
卒業生たちも、「まだ関係が続いててよかった」という顔をする。
桂子ちゃんも、そして今回の龍香ちゃんも、更に言えばさくらちゃんも、男子の気持ちをきちんと分かって、合わせようとしている女の子はきちんと長続きする。
それに対して――
「はー」
ため息をついていたのは恵美ちゃんと虎姫ちゃんだった。
恵美ちゃんの方はロンドンから帰ってきたばかりと言うことだけど決勝戦で久々にツアーファイナルの優勝を逃したと言うこともあって不機嫌そうだった。
「虎姫ちゃん、どうしたの？　元気ないわよ」
シーズンが終わって疲労のたまっている恵美ちゃんの方はともかく、虎姫ちゃんは精神的にも元気がなさそうだった。
「いやーね、私、どうしても彼氏と長続きしないのよ。優子だけじゃなくて、龍香も結婚だし、桂子もさくらも長続きしてるし、どうしてなのかな？」

虎姫ちゃんがあたしに恋愛相談を持ちかけてくる。
「虎姫ちゃん、ちゃんと男心を分かってる？　どんな人が好みなの？」
「えー、うーん……えっちなのがあんまり好きじゃなくて、自制心ある人がいいかなあ……後、デートおごってくれる財力があって、私にあれこれ役割を求めない人で――」
あー、それじゃあやっぱり長続きしないわね。
元男だからなおのこと求めすぎだって分かるわ。
「虎姫ちゃん、そんなの求めたら、あたしレベルでも長続きしないわよ」
間違いなくあたしでもそんな彼氏や旦那を求めたら売れ残って行き遅れる自信あるわ。
浩介くんだって素敵な男性だけど、きちんとあたしに対しても求めるところは求めるわけだしね。
「ええ⁉　そうなんですか⁉」
虎姫ちゃんはビックリした顔をする。
やれやれ、先が思いやられるわ。
「当たり前よ。男の子だって女の子に好かれたいから女の子の好みに合わせてはくれるけど、限界があるわよ。そんな何でもできる男の子なんていないのよ」
あたしが、顔の前で人差し指を上げて言う。
何だか昔を思い出すわね。
「うー、相変わらず優子の説得力は半端ないですよ！」
虎姫ちゃんが少し悔しそうな表情をする。
やはり、女の子になって、もう5年になるけど、それでも男の頃の17年近い人生に比べれば、まだ3分の1程度にしかなってない。
もちろん、幼い頃の記憶は薄れているから、それも含めればもう少し格差は縮まるかもしれないけどね。

# 龍香ちゃんの結婚式

ガララララ

突然、待合室のドアが空かれ、入ってきたのはウェディングドレス姿の龍香ちゃんだった。

いつになく、落ち着いた様子できれいで可愛らしい龍香ちゃんと、終始鼻の下を伸ばしっぱなしの新郎とのギャップが凄まじいわね。

「さあさ皆さん！　そろそろ披露宴を始めたいと思いますので、会場にお集まりください！　あ、こちらが今日から私の旦那になった――」

龍香ちゃんが、自分の旦那を紹介する。

「ご紹介に預かりました――」

龍香ちゃんの紹介が終わると、新郎が礼儀正しそうにペコリとお辞儀をする。

パチパチパチパチ

女子はみんな気付いているけど、新郎はズボンの下をもっこりとさせていた。

浩介くんも、あんな感じだったっけ？

「それじゃあ、あちらの方に来てください！」

龍香ちゃんの案内の元、あたしたちが最初の結婚式場へと歩いていく。

「ねえ優子ちゃん、あの新郎、もうあんな興奮してるよな？」

教会風の建物につくと、浩介くんがそんな話をして来た。

確かに、新郎はさっきからずっと興奮しっぱなしだわ。

「あら？　あなただって結婚式の時大きくしてたわよ」

浩介くんも、誓いのキスをしてから、元気な下半身をあたしやみんなに見せてくれたものね。

「うっ……面目ない」

図星を突かれた浩介くんがしょぼーんとなる。

「いいのよ。結婚式ってそういうものよ。ここはみんなに見せつける

ための場所なのよ」
あたしがすかさずフォローを入れる。
ふふ、こういうフォローが、長続きするためのコツなのよ虎姫ちゃん。
それに、結婚式だもの、興奮しちゃうの当たり前よね。
「そうだったな」
浩介くんも、納得してくれたのでそれ以上は言及はしなかった。

やがて、荘厳なパイプオルガン……のレコード音と共に、新郎新婦が入場する。
うー、結婚式に新郎新婦として参加したことはあったけど、こっちの方で参加したことはなかったわね。
あ、幼い頃したかもしれないけど、それはノーカウントで。

さて、やはりみんな注目しているのは新郎の下半身で、相変わらずだった。
龍香ちゃんも龍香ちゃんで、前をろくに見てないで、新郎の下半身を夢中になって見つめている。
何だろう、案外蓬莱の薬が発明されたら、一番強固なカップルになりそうだわ。
神父らしき人が入ってきて、愛を誓いあって、指輪をはめ祝福を受け、誓いのキスをする所まではあたしたちの結婚式と一緒なんだけど

――

「んぅ……あなたぁ……」
龍香ちゃんが見せたディープキスは、あたしたちの時よりも更に過激で、しかも龍香ちゃんが新郎にお尻を撫でられていた。
「もう、龍香ったら大胆……」
桂子ちゃんも、ちょっとだけうっとりした目付きをしている。
ふふ、桂子ちゃんったら、達也さんに同じことをされたいと思ってる顔だわ。

まあ、あたしも似たようなものだけどね。
そしてあたしたちは、披露宴へと進み、龍香ちゃんと新郎の両親のメッセージなどが寄せられている。
さすがにこの場面では、龍香ちゃんも、エロネタは封印してきた。
とはいえ、思い出のビデオに、「平穏な純愛」とするのはいくらなんでも詐欺に近いんじゃないかしら？
あ、ちなみに龍香ちゃんの計らいで、あたしの席は端しっこの目立たないところになりました。

「龍香ちゃん、結婚おめでとう」
夫婦最初の「共同作業」も合わせ、あらかたのイベントが終わったらあたしも龍香ちゃんに挨拶をする。
龍香ちゃんは嫉妬深いので、新郎が他のテーブルで友人と話し込んでる隙を狙う。
ちなみに、新郎の方も元気なままの下半身をいじられている。
「ありがとうございます。はぁ……はぁ……」
龍香ちゃんの息が荒いわね。
まあ、原因は想像つくけど。
「龍香ちゃんどうしたの？」
知っていて、あたしが聞いてみる。
「あーうん、やっぱり今夜のことを考えちゃってるんですよ。ダーリンが大きくしてからかわれてますけど、私だってもう、ぐっしょぐっしょ何ですよ！　優子さんだって、そうだったんでしょう!?」
龍香ちゃんが、あたしに秘密を告白してくる。
あーうん、あたしはさすがにそこまでではなかったわね。
「うーん、あたしはさすがにそこまで乱れていなかったわよ」
「ガビーン!!　そんなー！」
あたしがそう言うと、龍香ちゃんが雷に打たれたようなショックを受けてしまった。
実際、あたしが汗だくだくになっちゃったのはホテルで２人きりになってからだから嘘はついていない。

「龍香ちゃんショック受けすぎよ。でも、今夜は頑張ってね」
きちんと励まさないと。龍香ちゃんは欲望に正直な所もかわいいんだし。
「はい、お互い尽くしきりますよ！　そのために、今はゆっくり休んで疲労回復です！」
ここの結婚式場もホテルになっていて、龍香ちゃんも新郎さんも、結婚式の資金とドレスを買うためだけに、ひたすらデートも節約して4年間過ごしたらしい。
まあ、するだけならタダだものね。
やっぱり、体の相性って大事だわ。
「おっと、彼が戻ってきました！　優子さん」
「ええ」
龍香ちゃんは、あたしと桂子ちゃんを何としてでも新郎と合わせ無いように執心している。
あたしたちも、龍香ちゃんの気持ちはよく分かるし、あたしと桂子ちゃんとしても、浩介くんや達也さんに無駄に嫉妬されるリスクは回避したいので、両者の利害は一致している。
ふふ、やっぱり男の嫉妬を理解している女の子は強いわよね。
「ふう、ただいま」
「優子ちゃん、徹底されてるな」
自分の席に戻ると、浩介くんから「徹底されている」と言われた。
「徹底されているって？」
あたしは、わざとすっとぼけた風に言う。
「そりゃあ、新郎に合わせないようにされてるだろ？　警戒心強いよな」
「あーうん、でもあたしも浩介くんに嫉妬される危険性があるもの、特に不満はないわよ」
あたしが素直に理由を説明する。
「あーうん、そういうことかあ……」
浩介くんも浩介くんで、自分が嫉妬深いことはよく分かっているらしい。

分かってても、嫉妬してしまうし、適度な嫉妬ならむしろあたしが喜ぶことも知っているから、治そうとも思っていないのが浩介くんだ。

その後、あたしたちは記念撮影に行き、結婚式が終わったら龍香ちゃんたちは新郎新婦の服のままホテルの部屋へと消えていった。

ふふ、多分あたしたちと同じことが、あの部屋で繰り広げられるのよね。

あたしたちは2次会としてゲームセンターで遊ぶことになった。

ちなみに、あたしは相変わらず、大半のゲームがハンデつきでプレーさせてもらった。

当時のハンデと同じようなハンデにしないと、ゲームにならないというのが実際の所で、クイズゲームだけは、唯一ハンデ無しで戦えた。

元クラスメイトたちも、「優子ちゃんの運動神経が相変わらずで安心した」と言っていた。

むしろ、高校と違って大学には体育の授業がないから、あの時よりも落ちているかもしれないわね。

晩秋に行われた龍香ちゃんの結婚式の後は、あっという間に１２月になった。

あたしたちは、大学生最後のクリスマスと年末年始をどうするか考え始めた。

年末年始と言えば、今年もおばあさんを始めとする妊娠催促が飛んでくるのは容易に想像ができた。

最近では、プレッシャーになるとのことで、あたしの両親や義両親は、話題にしないことにはしているが、おばあさんにとっては切実な問題でもある。

今年のクリスマスはプレゼントは、話し合いの結果「豪華な食事」ということになった。

あたしの部屋も、お人形さんやぬいぐるみさんが大分集まってきたことや、プレゼントのネタ問題なども合わさって、「それよりも美味し

いものを食べた方が思い出に残る」という意見で一致したからだった。
そして、年末年始、大晦日前日に早速おばあさんが「早くひ孫産め」と言ってきた。
でも今年は、黙っているだけじゃない。
「でも、あたしたちの両肩には、人類の歴史がかかっているのよ」
「ああ、悪いが後６年は待ってもらうぞ」
この際なので、あたしたちはきっぱりと言うことにした。
おばあさんは衝撃を受けたような表情を一瞬するが、「いいじゃないの。後１０年は生きてやる！」と息巻いていた。
６年後と言うと、おばあさんも１００歳を越える年齢になるが、初めて会った時から全く衰えておらず、相変わらず老人ホームでも一番元気らしいので、あながち嘘じゃないのがすごいわね。
大晦日からはあたしの実家で年を越す。
母さんたちも、さすがにあたしたちの妊娠ついては、催促しなくなった。
まあ、色々あったものね。

「蓬莱教授、できました」
１月に入って最初の登校日、あたしはＴＳ病患者を今まで見て、実際に指導してきた体験談や、自身の経験などを元に、１ヶ月もたたない時間で卒業論文を完成させた。
特に、幸子さんの成功体験はいい卒業論文になりそうだけど、それでいて前回選んだテーマよりはずっと柔らかい仕上がりになっている。
名目上は再生医療の論文とはなっているけど、不老社会になった後にもＴＳ病は発生し得る上に、そもそもＴＳ病が存在したからこそ不老研究が発展しているので、将来にきっと役立つはずだわ。
「どれどれ……うむ。いいだろう。うちは確かに再生医療の研究所だから、ちょっと専門から外れてはいるが、ＴＳ病を研究していると言う意味では、ストライクゾーンど真ん中とも言える話題だ。こういう

のは、優子さんくらいにしか書けない論文だから、とてもいいと思う」
「ありがとうございます」
蓬莱教授は、学生にはかなり優しいことでも有名だ。
おそらく、それは単に彼の計算、つまり「リスクを回避する」というところに動いているんだと思う。
ともあれ、これで修士の始まる４月まではゆっくりと過ごせるわね。
またどこか旅行にいこうかしら？
「ああ、優子さん、待ってくれ」
蓬莱教授が、あたしを呼び止める。
「実はさっき、浩介さんの卒業論文にＯＫを出した所何だが、夫婦揃って大変に優秀だ。そこでだ」
蓬莱教授が、あたしに何かが入った袋を渡してくれる。
「蓬莱教授、これは？」
「修士課程で行う講義の教科書だ。修士というのは基本的に大学をより厳しく難しくしたものだと思って欲しい」
蓬莱教授が、中身を取り出して説明してくれる。
蓬莱教授が見せてくれた本は、「応用」という文字も並ぶ、いかにも難解そうな蓬莱教授の著書だった。
これまでも、蓬莱教授自身の著書が教科書になることはあったが、より複雑な内容が書かれていることは想像に難くなかった。
「で、うちの大学の修士というのは２年間で論文なども含めて３０単位が必要になってくる。だが、今の優子さんの実力ならば問題なくこれをクリアできるものと確信しているよ」
しかし、蓬莱教授は修士の過酷さを話しつつ、「優子さんには問題ない」とも言ってくれていた。
それはつまり、あたしを相当見込んでのことというわけね。
「分かりました……失礼します」
ともあれ、この教科書たちは、あたしの方で受けとることにした。
あたしは早速、研究室の一角に入って浩介くんと待ち合わせる。
「あ、浩介くん」

浩介くんは、教科書を読んでいた。
それは、修士課程で、必要になる教科書だった。
「お、優子ちゃんももらったのか？　修士の教科書」
「うん」
やはり浩介くんも、大学の成績がよくなっているらしい。
卒業論文であたしたちは蓬莱教授から「問題なし」という判定を一足先にもらい、これで必要な単位が全て出揃ったため、佐和山大学の卒業が確定した。
でも、あたしも浩介くんも、卒業したという気分は全くなかった。
何故なら、ここから2年間の修士課程が始まるし、おそらく蓬莱教授の見立て通りなら、その後3年間の博士課程が待っている。
ともすれば、あたしたちの大学生活はまだ半分にも満たないのではないかと、思えてくる。
「博士が終わるのが、最短でも２７かあ」
「ええ、そうよね」
まあ、あたしたちにとって、２７歳と言われても、ほとんど見た目は同じだけど。
蓬莱教授は１０００歳の薬以降、実験への行き詰まりを危惧し、被験者を増やしている。
とは言え、情報漏洩の危険性も加味してか、あたしたちに近い人ということで、大智さんと達也さんそして龍香ちゃんとその旦那さんが選ばれた。
龍香ちゃんは、「これでずっと美味しく味わわれることができます！」と喜んでいた。
まあ、そういうのは完全不老の薬が出来てからでも遅くはないとあたしは思うけどね。
ガララララ
「あ、優子さん」
中に入ってきたのは、歩美さんだった。
「あら歩美さん、どうしたの？」
「はい、私も来年からはここに配属ですから。優子さんたちは卒業で

すか？」
歩美さんも、あたしたちのことは気になっているらしいわね。
「ええ、でも来年もまたここに通うわ。修士課程ですから」
「ああ、俺も」
あたしたちが見ている教科書も、修士課程のものだ。
「へー、2人ともすごいですね。私は、普通に大学を出たら就職しようと思ってます」
歩美さんが将来展望について話す。
うん、そうよね。それがいいわ。
「大智と同じ会社って言うのは無理だと思うけど、それでも関係を続けられるように頑張るわ」
歩美さんが健気にそう話す。
ＴＳ病の女の子は、自分から別れようとすることは極めて少ない。
特に経験を済ませてしまった子の場合、そのことによる価値の急落をよく分かっているからなおのこと別れないように彼氏に尽くしやすいし、男の方も男心が分かるかわいい女の子は貴重なので、やはり別れるパターンはとても少ない。
それに、佐和山大学は偏差値が低めだけど、蓬莱教授から「蓬莱の研究棟」にいたというお墨付きをもらえれば、一流大卒並の待遇を得ることが出来るから、就職は大丈夫だと思う。
「ふふ、頑張ってね。単位落とさないのよ、特に実験」
「はーい」
あたしの姑のおせっかいみたいな言葉にも、歩美さんはにっこりと応対してくれる。
ガララララ
「おや、先客がいましたか」
扉の中に入って来たのは和邇先輩だった。
「和邇先輩」
「ああ、少し、修士論文をまとめておくよ」
和邇先輩は、後もう少しで修士論文を書き終わるという時期になっている。

和邇先輩は椅子に座りノートパソコンを開いた。
ちなみに、和邇先輩も成績は優秀で、このまま博士課程へと進む予定だそうだ。
それぞれが次年度に向けて、頑張っている最中だ。
小谷学園と佐和山大学は、偏差値では小谷学園が優位なので、小谷学園出身の学生は、留年者が少ないらしい。
ともあれ、あたしたちに待っていたのは、後は卒業式だけ。
それまでは、高校３年生だった４年前に大学の予習をしたように、修士課程の予習をするようにした。
こうして、佐和山大学の冬の日々が過ぎていった。
あたしたちには、卒業という２文字よりも、進学という２文字が、より強く印象づいていた。
卒論も書き終わったので、忙しそうにしている桂子ちゃんを尻目に、しかし書き終わってからは桂子ちゃんも加わって、最後のサークル活動へと参加することになった。
桂子ちゃんは、「来年はまた３人、あるいは達也も入れて４人で、時間を見つけて天体観測をしたいわね」と言っていた。
ここの所、桂子ちゃんは宇宙開発に強い関心を抱いている。
それなら、一応ＪＡＸＡとも小さな繋がりがあるあたしたちとは、付き合いを長くしていくのもいいかもしれないわね。
いずれにしても、あたしたちの大学生活は、タイムリミットが近付いている。
大半の学生は就職し、社会へと出ていく。
あたしたちは、ここに取り残されているような気も、少しだけしていた。

## 卒業とサプライズ

「ふう、こんなところかしら？」

佐和山大学は、元々大学なので校則も何もないけど、小谷学園の影響もあってか、かなりフリーダムな空気がある。

今日の卒業式も、「堅苦しい服装はしなくていい」というお達しが大学の方からわざわざ入っていた。

３月初旬は徐々に冬から春の陽気になっていて、あたしも防寒ばかりに気を遣う必要はない。

そこで選んだあたしの服は、Ｙシャツに茶色のジャンパースカートだった。

これにぬいぐるみさんを抱き締めれば、かなり幼さを強調できる、あたしのお気に入りの服で、浩介くんと始めてデートした時にもお世話になっている。

「おはよー」

「お、優子ちゃんおはよう」

浩介くんも、ラフな格好で決めている。

意図した訳ではないけど、５年前に２人でデートした時とほぼ同じ組み合わせだった。

さすがに浩介くんの私服は色々と入れ替わっているらしいけど。

うーん、この服もだけど、あの赤い服もお気に入りだし、そろそろ同じ服を買おうかしら？

「今日は卒業式か？」

お義父さんがコーヒーを飲みながら聞いてくる。

「うん」

「優子ちゃんたちもいよいよ大学卒業かあ」

お義父さんが遠い目をして、いかにも「月日はあっという間」という感じに話す。

この卒業式が終われば、あたしたちは結婚記念日というイベントを経て４月から始まる修士課程に備えることになる。

そういう意味で、あたしにとってあまり卒業という感じはしない。

「優子ちゃんも変わったわね」
お義母さんが小さな声で呟くように言う。
「そうかしら？」
あたしには、あまり自覚はない。
「ええそうよ、優子ちゃんが結婚したばかりの頃は、まさか優子ちゃんが人類と地球の将来まで担って、総理大臣を含めた政府との交渉パイプになるだなんて、夢にも思わなかったわよ」
お義母さんの深い深い言葉。
確かに、蓬莱教授の研究に加わるということはそう言う要素もあるということだったけど、あたしは分かっていても、その重大さから目を背けてきたのかもしれない。
「うーん……あんまり自覚がないのよね」
だから、あたしはまだそのことについてイマイチ自覚することができない。
確かに、事実だけ述べればとんでもないことだけど。
「どうして？」
お義母さんは当然疑問に思うわよね。
「それはね――」
あたしはお義母さんに、１つ１つ説明していく。
それは、今の地位も、偶然が重なってのことだと言うこと。
あたしがＴＳ病になったこと、浩介くんと林間学校で実行委員になれたこと、永原先生が勇気出してあたしを正会員にしてくれたこと、そして蓬莱教授の力添えや、高島さんの取材など、多くの幸運があって、今の地位があると思う。
「優子ちゃんの言いたいことは分かったわ」
お義母さんが顔を伏せる。
「でも、それって全部運と環境のせいだけなのかしら？」
「え!?」
お義母さんが面白いことを言う。
確かに、運と環境のせいだけじゃない。
あたしが正会員に選ばれたのだって、あたし自身の努力も多くあっ

たからなのは間違いないし、大学に入ってからだって、最終的に政府と蓬莱教授、協会の橋渡し役になったのも、あたしの実力とも言えるのかもしれない。
「もちろん、運が良かったときもあったと思う。それでも、優子ちゃんは誇っていい実績を、既にあげているわよ」
「うん、そうよね」
お義母さんの声を聞き、あたしは気持ちを新たにする。
家から出たあたしはいつものように浩介くんと一緒に歩いて佐和山大学に行く。
どうやら、この習慣は大学院になっても続きそうだわ。
「ふう、混んでいるな」
「あはは」
この時間帯、どうしても行きは混雑してしまう。
他の年次の学生は春休みで来ていない。
大学の中は閑散としているが、卒業式場だけは混雑している。
ちなみに、卒業式の会場は入学式と同じだった。
大学の卒業式と言えば、何と表現していいか分からない独特の服装があるけど、ここ佐和山大学ではそういったことはない。
「お、優子さん、浩介さん、おはよう」
蓬莱の研究棟の前を歩いていると、蓬莱教授に声をかけられた。
卒業に対する祝辞の言葉は特にない。
まあ、早い段階から進学が決まっていたというのもあるけどね。
「蓬莱教授、おはようございます」
「おはようございます」
あたしと浩介くんも、いつものように軽い感じで挨拶をする。
蓬莱教授には、大学在学中どころか、大学に入る前からお世話になってきた。
最初にお世話になったのは、林間学校の部屋割り問題の時だったわね。
もしかしたらあの時点で、あたしの才能を感じる所があったのかもしれないわね。

今回あたしたちがもらうのは、「卒業証書」ではなく、「学位証」と呼ばれるもので、大学卒業はいわゆる「学士」となる。
一応再生医療が専門と言うことになっているので、あたしたちの学位は「学士（医学）」となる。
あたしたちは蓬莱教授と別れ、前方に張り出されている学籍番号から、所定の座席を見つけて並ぶ。
あたしたちは、夫婦と言うこともあり、学籍番号も隣り合ってて、席も隣同士になる。
これは、半年に一度ある試験の時や、実験のような座席指定の講義の時も同じだった。
「また隣だな」
「うん」
卒業式ともなると、自由な服といってもやはりみんなきちんとしたがるわけだけど、そうなってくるとあたしはやっぱり浮いてしまう。
まあ、あたしの場合、地味な格好すると痴漢に狙われる危険性があるという、割りと切実な問題もあるので、周囲も理解はしてくれているけどね。
女の子になって、雰囲気も正反対になったって話だし。

「えー皆さん、おはようございます」
学長さんが、国旗と校旗が掲揚されている壇上に上がって挨拶する。
どうやら、時間になったみたいね。
「ただいまより、２０２２年度、佐和山大学学位授与式を開始いたします。始めに、国歌、校歌斉唱です。ご起立ください」
年はもう２０２３年だけど、今は３月なので、年度は２０２２年になっている。
はじめに、起立して国歌と校歌の斉唱ってことになってるけど、校歌なんて一度も歌ったことがなく、周りの学生も、国歌に比べて明らかに声が小さい。
学長さんも、少し動揺しつつ、次のスケジュールである来賓挨拶に

入る。
「えー来賓は、小谷学園教諭であります永原マキノさんです」
って、来賓って永原先生なのね。
いつものレディースーツ姿の永原先生が壇上に上がり、学長さんと入れ替わる。
「えー佐和山大学の卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。永原マキノです。佐和山大学の蓬莱先生の研究に対して、私たちも多くの支援を行っておりましたが、皆様も、ここで学んだことや蓬莱教授のことなどを、社会、あるいは進学先の大学院で十分にいかしてください。以上です」
パチパチパチパチパチ
永原先生の演説が終わると、会場からは拍手が漏れ出る。
永原先生が元の来賓席に戻ると、この次のスケジュールが蓬莱教授の挨拶になる。
「えー皆さん、ご卒業、おめでとうございます。在学中は、蓬莱の研究棟に対しまして、多くの学生の皆様からの支援と支持をいただき、大きな支えとなりました」
蓬莱教授が述べたのは、自らの研究に対する感謝の言葉だった。
やはりこういうところでも、全くぶれないわね。
「現在、日本の世論調査では、我が不老研究を支持する声は９７％以上にも達しております。しかし、逆に言えば、残る３％は、まだ態度を決めかねていたり、あるいはこの期に及んで我が研究を支持しないとしている人間もいると言う意味でもあります」
蓬莱教授は完璧主義者らしく、残りの３％を取り込みたくて仕方ないらしい。
まあ、不老の薬を完成させたいなら、完璧主義者じゃなきゃ勤まらないもの。
だって、副作用の時点で、既にノーベル賞が幾つも取れちゃうレベルの発見で、既に蓬莱教授はノーベル賞の有力候補になっている。
「皆さんにおかせられましては、蓬莱教授に対する言われなき誹謗中傷を見つけましたら是非蓬莱の研究棟の宣伝部までご報告願います。

以上です」
パチパチパチパチパチ
蓬莱教授が万雷の拍手を受けて壇上から下がる。
蓬莱教授の研究を支持しないと答えた人が、まだそれなりにいるということ。
例え１％でも、日本の人口を考えれば、１００万人の不支持者がいるという意味でもある。
政令指定都市が１つ出来るレベルと考えれば、早急な対策が必要であることは言うに及ばないだろう。
「では続きまして――」
卒業式の予定がどんどん進んでいき、最後に「学位証」の授与式になる。
ちなみに、卒業生代表は別に首席がするわけではないらしく、桂子ちゃんがスピーチをしていた。
こちらも五十音順になっていて、多くの学生が壇上に上がっていく。
その中には、高校時代からのクラスメイトの名前もある。
そして――
「篠原浩介」
「はい」
浩介くんが呼ばれ、壇上へと上がる。
時間短縮のため、あらかじめ行列を作ってあって、小谷学園での卒業式の時は、「石山」に「篠原」だったので、あたしが先だったけど、あたしが結婚したことによって、「浩介」と「優子」で判断され、あたしが後ろになる。
「――おめでとう」
パチパチパチパチパチ
ほぼ惰性になった拍手が鳴り響く。
学位証を渡すのは学長さんだった。
さすがにそこまで露骨には蓬莱教授は推さないらしいわね。
「篠原優子」

「はい」
あたしが呼ばれ、壇上の上へ。
自分と固い素材で出来た「学位証」を渡された。
「成績は、君が首席だよ。おめでとう」
「あら、そうですか……ありがとうございます」
学長さんが、さらりととんでもない発言をしてしまう。
あたしは意外な事実に目を丸くしてしまう。
それでも冷静を心がけてペコリとお辞儀すると、会場からは惜しみ無い拍手が送られた。
アイドルよりもかわいくて美人なあたしが、大学を首席で卒業。ふふ、浩介くんは幸せ者よね。
「優子ちゃん、凄いじゃないか！」
椅子に戻ると、浩介くんが興奮したように話しかけてくる。
うん、無理もないわよね。
「多分、蓬莱教授があたしの卒論を鑑みて融通したんじゃないかしら？」
大学の成績を図る上で、ＧＰＡという指標があったけど、単純にその数値だけ見たら、あたしがこの大学で一番優秀というのは無いと思うし。
「あー、なるほどなあ……」
浩介くんが腕を組んで唸る。
やがて卒業生立ちの数も少なくなり、わで終わる名字の人が受け取り終わると、卒業式は終了となった。
「ねえねえ優子ちゃん、首席ってすごいわね！」
卒業式が終わると、桂子ちゃんがあたしを捲し立ててきた。
ちなみに桂子ちゃんも、宇宙物理系の教授の研究室に配属されることになっている。
「あーうん、あたしもビックリしちゃったわ」
「無理もないわよね。今日はゆっくり休むといいわ。じゃあね」
「うん、またね桂子ちゃん」

桂子ちゃんを見送ると、あたしたちも立ち上がって会場の外へと出る。
外では後輩たちなどがあたしたちを祝福してくれる。
「どうしよう優子ちゃん」
浩介くんが困ったという感じであたしに話しかけてくる。
ただでさえあたしたちは、メディアの取材などもあって佐和山大学では知らない人はいない超有名人だ。
それなのに首席になっちゃったら、なおのことここを通り辛いわね。
「優子さん、浩介さん」
「あ、蓬莱教授」
次の一方が踏み出せないでいるあたしたちに声をかけてきたのは蓬莱教授だった。
「こっちから迂回しよう。ついてきてくれ」
「「はい」」
蓬莱教授が、あたしたちを誘導してくれる。
もちろん、蓬莱教授はあたしたち以上にこの大学では目立つ存在だけど、それでもあたしたちの「護衛」としては最適の人物だった。
卒業式の会場から、蓬莱の研究棟までの道のりを迂回し、あたしたちは蓬莱の研究棟の1階にある蓬莱教授の部屋に入った。
「あー、座ってくれ」
「「はい」」
あたしたちは、蓬莱教授に促されて座席に座る。
この光景も、もう何度となく繰り返したことだ。
「優子さんの首席についてだが……察しはついているかもしれないが、卒業論文の影響だ」
蓬莱教授が話したのは他でもないことだった。
あたしが、こうした特例措置を受けるのは、ＴＳ病そのものを直接主因としたものを除けば、永原先生から、２０歳以上と規定されている協会の正会員に、１７歳の時に就任して以来だ。
「確かに、普通ならＧＰＡで決めるというのが一般的だが、一応学則上

では、『ただし、その他特別に優秀な学生と認めた場合』というのがある。今回はそれを使わせてもらった」
蓬莱教授がコップに水を注ぎ、一杯飲む。
あたしたちの手元にもコップがあったけど、手をつける気にはなれなかった。
「元々あったことなんだが……この大学は今、俺が所属している再生医療系の学科と、それ以外の学部学科との格差が深刻な問題になっている。俺への世間からの支持が広まるにつれ、この大学の再生医療系に受験者が殺到しているんだ」
蓬莱教授によれば、このまま行けば佐和山大学の偏差値は、蓬莱教授の学科だけ、東京大学を越えかねないという。
不老研究が実用化ともなれば、ノーベル賞では済まないような、極めて重大なことがあちこちに起こる。
そのための政府との調整は、今も続いている。
各省庁や協会側とのすり合わせはあり、蓬莱教授もある程度の妥協点を探っていて、そのバランサーとして、あたしの役目も重要になっている。
「でだ、今年からは慣例として、首席は俺の学科から出すということに決めたんだ。そうすると、優子さんが1番優秀になるって訳だ」
蓬莱教授が、きちんと説明してくれる。
「あーもちろん、首席だからといって重圧に感じる必要はない。今年からの慣例とはいえ、一応まだ『特例首席』なんだからな」
蓬莱教授はあくまで、あたしにリラックスをして欲しいらしい。
でも、あたしを特例首席にしたのは、単にあたしの卒業論文の成績がいいだけじゃないと思う。
……よし、聞いてみようかしら？
「蓬莱教授」
あたしは視線をまっすぐ、蓬莱教授の方に照準を合わせる。
「うむ、何かな？」
「もしかして、あたしを首席にしたのも、研究棟の広報も兼ねてるんですか？」

「……結論から言えば、イエスだ」
あたしの質問に、蓬莱教授は一瞬間を置いてから口を開いた。
蓬莱教授は「優子さんなら見抜くだろう」と思っていたのか、表情を一切変えていない。
やはりあたしの見立てはあっていたわね。
「だが、それだけが目的ではない。むしろ副次的なものだ。優子さんを首席にしたのは、他学部に比べて講義の難易度が上がっていることに対する是正措置として、たまたま今年から講じたにすぎん。もちろん、広報効果も想定内だ」
「はい、分かってます」
とにかくあたしは経歴が特殊も特殊だ。
高校2年生の5月初めまでは男性で、しかも今とは正反対の乱暴な性格。
ＴＳ病の女の子としては「優秀な患者」と言われ続けて特例で協会の正会員に。
高校卒業と同時に結婚し、佐和山大学で蓬莱教授と共に活動し、今では政府や総理大臣にすら顔が利いている。
そして、高島さんからの取材を受けて以来、取材慣れもしている。
蓬莱教授としても、協会としても、広報にはもってこいだものね。
「そうか、ならばよかった。俺の話は以上だ。他に、聞きたいことはあるかな？」
「いえ特に」
「俺も特には」
今の所特に聞きたいことはない。
「じゃあ、ここで解散だ。悪いな、こんな日まで引き留めて。修士過程の開始まで、ゆっくり休んでくれ」
「はい」
蓬莱教授の話が終わり、あたしたちは特に質問がない旨を話すと、蓬莱教授から休むように言われた。
あたしたちは蓬莱の研究棟を出て、人目のつかないように、いつもとルートを変えて駅へと向かった。

普段はずっと同じ通学路を進んでいたけど、今日はいつもと違う道を進む。
それだけでも、なんだか物珍しくて、新鮮な雰囲気がした。
とはいえ、この道を次に使う時が果たしてあるのか？
……多分、無いんじゃないかしら？

「ただいまー」
「優子ちゃん、お帰りなさい」
家に帰ると、お義母さんがいつも通りあたしを出迎えてくれた。
「学位証、見せて」
「うん」
お義母さんが学位証を見せるように言う。
あたしと浩介くんは、鞄から学位証を取り出して、開いてみる。
するとそこには、学長名義で、あたしを「学士（医学）」に認定するとあった。
当たり前だけど、浩介くんにも同じことが書かれていた。
「ふふ、2人ともおめでとう」
「ありがとう」
夫婦で祝福されたあたしたちは、お礼の言葉を述べる。
でも、大学院に入ってからが本番だと思うから、あたしたちには、「通過点を過ぎた」という感覚で、「ゴール」あるいは「新たなスタート」という感じには、全く思えなかった。
あたしは部屋に戻り、布団に横になる。
ぬいぐるみさんを抱き締めながら、あたしは卒業式の疲れを癒していった。

# 幕間　ここまでの小説に出てくる歴史上の人物　第十章

第十一章に入る前に、一旦ここまでに出てきた歴史上の人物（実在）についてまとめてみました。

なので、読まなくても物語に支障はありませんが、永原先生のキャラクター設定も大分溜まってきたので（当初はこんなに大きな役柄や設定ではなかったのですが）一度復習してみるのもいかがでしょうか？

真田幸綱／真田幸隆／真田源太左衛門／真田弾正忠（１５１３～１５７４）

永原先生が鳩原刀根之助と名乗っていた時代の主君に当たる人物。信濃の小豪族で海野氏の支流とされている。永原先生の５歳年上で弟の矢沢頼綱は永原先生と同い年。

永原先生は、元々天文２年（１５３３年）より５年間真田家に仕えており、役割は伝令役の足軽だった。また、小さな小規模争いにも参加していた。

天文７年（１５３８年）、永原先生はＴＳ病に倒れ村より逃亡、天文１０年（１５４１年）には武田信虎が諏訪頼重・村上義清と同盟を組んで海野氏を滅ぼすために侵攻を開始。

これを海野平野戦いといい、この時真田幸綱も上野の長野業正を頼って逃亡、永原先生がほとぼりが冷めて領地に戻った時には、既に主君は村上義清に代わっており、永原先生がＴＳ病に起因する最初の罪悪を抱くきっかけとなってしまう。

その後、武田信虎が息子の武田晴信に追放されると、真田幸綱は武田に仕えるようになり、村上義清への調略に参加、一時は砥石崩れによる大敗も遭ったものの、天文２０年（１５５１年）には村上義清より旧領を奪還し、義清は長尾景虎を頼って越後へと逃れている。

当時ＴＳ病は不吉とされてすぐに殺されてしまっていたため、永原

先生は真田家へ帰参できず、「柳ヶ瀬まつ」と名乗って村娘の一人になっていた。
永原先生は武田家に仕える以前の真田家に仕えており、「弾正忠」ではなく通称の「源太左衛門」の方を用いている。
永原先生にとって、真田家は自らの罪の象徴であるとともに、心の拠り所でもあり、物語内でも「私は真田家の人間」と度々言及している。

村上義清／村上佐渡守／村上左近衛少将（１５０１～１５７３）
真田家のほど近くを領地に持っている北信濃の豪族。
武勇に長け、小領主ながら守護大名の武田信虎とも互角にやりあっていた他、上杉氏の後ろ盾を得ていた小豪族とも争っている。
佐久郡を武田信虎に奪われるが、やがて和解し、天文１０年（１５４１年）の海野平の戦いで海野氏を攻める。この時真田の村も連合軍に襲われることになり、真田幸綱は海野家共々隣国に逃亡、真田の村は村上義清のものとなり、真田本城の支城だった砥石城を拠点とする。
その後武田信虎が息子の武田晴信に追放されてしまい再び武田氏と対立、天文１７年（１５４８年）の上田原の戦いで武田軍を破ると、天文１９年（１５５０年）には砥石崩れで大勝を収めた。
しかし真田幸綱が武田家に仕え始めると状況がいっぺん、天文２０年（１５５１年）には真田幸綱によって砥石城が攻略され、調略によって村上側の諸将が武田型に寝返り、最終的には越後の長尾景虎（上杉謙信）を頼って逃亡した。これが後に川中島の戦いの導火線となる。
永原先生はこの戦いの時に別の村の住人となっていたために難を逃れ、故郷に帰ってきてから真田幸綱に再び放逐されるまでの間に主君として年貢を納めていた。

武田晴信／武田信玄／武田太郎／武田大膳大夫（１５２１～１５７３）
ご存知武田信玄。父晴信を追放後、川中島の戦いで上杉謙信と死闘

を演じ、三方ヶ原の戦いでは徳川家康を破るなどの活躍をしたものの、志半ばで病死した。

「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という言葉は有名。

父を追放した他、嫡男に謀反の疑いをかけて切腹させる、北条・今川と結んだ三国同盟やその後に結んだ徳川家との大井川同盟や、織田家との同盟も破るなど、不義理な人物でもあり、上杉謙信にはかなり嫌われていたらしい。

武田信虎／武田信直／武田左京大夫／武田陸奥守（１４９４～１５７４）

武田信玄の父、当時としては長生きで息子信玄の死後まで生きていた。

彼が生まれた時は、甲斐国内で祖父・叔父・父が相続争いをしており、最終的に祖父・父が相次いで死去して家督を継ぎ、挙兵した叔父を倒し、その後甲斐国衆や今川氏とも闘って甲斐を統一、富士山にも登り御鉢廻りを巡っている。

その後は信濃の諏訪氏、村上氏、関東北条氏や駿河の今川氏などと戦いつつ、最終的にはこれらと和睦、諏訪氏村上氏と共に海野平の戦いで真田氏と海野氏の駆逐に成功、同盟関係にあった今川義元の領地に向かう帰路、息子である武田晴信によって街道封鎖によって強制隠居させられてしまった。

その後は駿河の今川義元の元に身を寄せ、出家した上で隠居生活を送り、京都や奈良などに何度か上洛、京都と駿河を往復する生活を送りつつ、桶狭間の戦い以降は今川と武田が手切れとなり、在京奉公を開始、信玄死後は三男が居城とする信濃高遠城に身を寄せそこで死去した。

永原先生からは海野平の戦いで言及されている。主君を一時的に追い出したことには特段恨み等は感じておらず、「戦乱の時代によくあること」という認識を持っている。

真田信綱／真田左衛門尉（１５３７～１５７５）、真田昌輝／真田兵部丞（１５４３～１５７５）

直接には言及されていないが、長篠の戦いで戦死した真田昌幸の兄２人。

永原先生はこの時にも、何もできなかった自らを嘆いている。武勇に優れ、将来を期待されていた。

長篠の戦いの頃、永原先生は自らを不老ではないかと疑い始めた。

織田信長／織田上総守／織田上総介／織田弾正忠／織田右府／織田前右府（１５３４～１５８２）

ご存知織田信長、あまりにも有名な人物なので事績は記さない。

永原先生の生まれ年を聞いた時に真っ先に「織田信長より年上」と生徒が言及していた他、永原先生も本能寺の変の時には「織田前右府」と称しており、明智光秀は「明智日向守」と称しており、このことは優子が桂子、龍香と３人で遊んだ時のクイズゲームで役に立った。

一方で、永原先生自身は織田信長については深く言及していない。

木下藤吉郎／木下秀吉／羽柴筑前守／羽柴秀吉／豊臣秀吉／関白殿下／太閤殿下／豊太閤／豊国大明神（１５３７～１５９８）

ご存知豊臣秀吉、こちらもあまりにも有名な人物なので事績は記さない。

永原先生からは天下人として度々言及されていて、主に「太閤殿下」と呼んでいる。

天下人として、永原先生は多大な敬意を払っているが、江戸城暮らしが長いためか、長い泰平の世を築いた徳川家康ほどには尊敬していない様子が見て取れる。

松平蔵人佐／松平元信／松平元康／松平家康／徳川家康／徳川次郎三郎／徳川内府／徳川右府／征夷大将軍／上様／大御所／神君／東照大権現（１５４３～１６１６）

ご存知徳川家康。上記の呼び方はごく一部。

やはりこちらも説明不要の人物で、永原先生は関ヶ原の戦いを公家とともに遠目で見物した時に一度だけ姿を見たことがある。
徳川家康について、永原先生は基本的に「東照大権現」と呼んでおり、関ヶ原の見物談を話すときのみ当時の呼び方であった「徳川内府」と呼んでいる。太平の世を築いた偉人として敬意を示している。
ちなみに、体育祭の騎馬戦の時には、２年２組男子の戦法を「島津の退き口」になぞらえている他、小早川秀秋の裏切りや大谷吉継隊の壊滅のことも話している。
また、方広寺鐘銘事件でも言及されており、永原先生は「諱を犯すことは極めて無礼」として、「徳川方の言い分は言いがかりではない」として擁護している。

木下辰之助／羽柴秀俊／小早川中納言／小早川秀秋／小早川秀詮（１５８２～１６０２）
豊臣秀吉の正室の甥で、豊臣家親族として、重きをなした。
小早川隆景と養子縁組をなし、１８歳ながら豊臣家の重鎮となっていた。
関ヶ原の戦いでも、大軍を率いて松尾山に陣をはり西軍として参加するが、既に徳川方に内応しており、戦闘には参加せず傍観する。
徳川方の催促もあって小早川秀秋は東軍に寝返り、以降明智光秀と並んで「裏切り者」の代名詞的存在になる。
１６０２年に２１歳の若さで急死し、跡継ぎもなく小早川家は断絶となった。
永原先生は、「小早川中納言殿の裏切り」として、関ヶ原の戦いの目撃談の時には必ず登場する。

大谷吉継／大谷紀之介／大谷刑部（１５６５～１６００）
大谷吉継の名で知られる武将。病のため失明していた。
関ヶ原の戦いでは西軍に属し、小早川秀秋の裏切りを受ける。圧倒的な兵力差でも奮戦し、数度小早川隊を押し返すも、山の麓に小早川の裏切りに備えていた４将が連鎖的に寝返ったこともあって衆寡敵

せず。
大谷吉継は家臣の介錯で切腹して果て、小早川秀秋に対して「人面獣心なり、3年の間祟りをなさん」として死んだとされている。小早川秀秋はこの2年後に死亡している。
石田三成の無地の親友であるが、東軍諸将とも交流が深く、また関ヶ原の戦いでも西軍必敗を見抜き石田三成を止めたが、三成の熱意に押されて西軍に属するなど義理堅い人物で、その死は多くの人から惜しまれた。
永原先生は、小早川秀秋の裏切りによって大谷吉継の軍が壊滅する様子を見物している。

島津義弘／維新斎／島津兵庫頭／島津侍従／島津宰相／鬼石曼子（１５３５～１６１９）
戦闘民族と称される島津家の１７代当主。
慶長の役では明朝鮮連合軍５万人をわずか７０００の兵で破るなど伝説的な戦いを何度も演じてきた。
関ヶ原の戦いでは東軍に参加しようとして伏見城に馳せ参じたが、鳥居元忠が援軍を拒否したためにやむなく西軍に参加。
石田三成にも軽んじられたため、関ヶ原本戦では兵を動かさなかった。
そのうちに小早川秀秋の裏切りで西軍が壊滅し、島津隊は退路を断たれ完全に孤立してしまう。
島津義弘はここで、東軍が一番多く集まる所に突撃しながら退却するという捨て身の戦法を取った。
多数の東軍諸将が動揺し、３００人のうち僅か８０人のみが薩摩に帰れたとされている。
永原先生は関ヶ原の戦いの一部始終を見物しているため、当然島津の退き口も目撃しており、体育祭での騎馬戦で、浩介らが取った戦法をこれになぞらえている。

真田昌幸／真田安房守（１５４７～１６１１）

真田家の2代目、永原先生とは面識はないが、領民として接している。

長篠の戦いの後、真田家の家督を継ぐ。

織田信長による武田征伐で自主独立、最初は織田信長に仕えて滝川一益の与力となるものの、すぐに本能寺の変が発生。

その後は独立勢力として上杉、北条、徳川、上杉と次々に主君を変え、「表裏比興」と言われながらも生き残る。

この頃の永原先生は村人からも不老を疑われており、本能寺の変を機に再び村を逃亡。その後に待ち受けていた真田家の苦難を知っておきながら、凶事を恐れて大坂の陣後まで村へと戻ることは出来なかった。

豊臣秀吉が没し、関ヶ原の戦いが起きると真田家は分裂、真田昌幸は西軍につき、徳川軍を苦しめるものの結果的に破れ九度山に配流され、そこで病死した。

永原先生からは「安房守殿」と呼ばれており、主君であった父とともに謀略に長けたその智謀に尊敬の念を抱いており、林間学校で優子の部屋を男女から引き離そうとしていた教頭先生を謀略にはめた時には「我が主真田源太左衛門様や真田安房守殿が今の私をご覧になれば、さぞお褒めになってくださると思いますわ」との言葉を残している。

永原先生の謀略を好む性格は、真田幸綱及び真田昌幸、真田信繁の影響が強い。

真田源三郎／真田信幸／真田信之／真田伊豆守（１５６６～１６５８）

真田昌幸の嫡男で真田家を継ぐ。永原先生からは「伊豆守殿」と呼ばれており、恩人にして罪悪感の象徴であるとともに、２人の初恋の相手の１人でもある。

関ヶ原の戦いでは父、弟と袂を分かち東軍に付く、これが結果的に真田家の存続となる。

関ヶ原の戦いの後、父と弟の助命懇願を行い、大坂の陣後は信濃松

代藩となる。
一方、永原先生は大坂の陣後に江戸に住むようになったが、人口の多い江戸ではすぐに不老の噂が流れ、再逃亡を考えていた矢先の承応２年（１６５３年）に当時の４代将軍徳川家綱への拝謁が許された。
信之は当時８８歳であったものの健在で、永原先生の話を聞き、それがすぐに所領で噂になっていた「不老の娘」と同一人物であることを理解し、出奔したことを許し、そればかりか長年の苦難に耐えたことを労った。
永原先生はこの寛大な処置に感極まって大泣きしてしまった。既に１３６歳になっていた永原先生は、ろくに恋愛などもしておらず、優しくされただけで恋に落ちてしまった。
鑑定番組では、大まかな内容は紹介されたものの、恋に落ちたことは伏せられていた。
それ以来「大恩人に対して恩を仇で返した」として、自らの回想録でも「私は自分が憎い。私がしたことは許せない。命惜しさに自己断罪するような勇気さえもないことも含めて」と記している。

真田源二郎／真田信繁／真田左衛門佐（１５６７～１６１５）
真田昌幸の次男、兄は源三郎で弟は源二郎であるが、この時代にはよくあることである。
関ヶ原の戦いで東軍に付いた兄と袂を分かち、父とともに西軍に付く。徳川秀忠の軍勢を苦しめ、遅参に追い込むものの、関ヶ原本戦で西軍が敗れ、兄の助命懇願もあって九度山で配流の日々を過ごす。
ちなみに、兄の仕送りが家計の頼りでもあった。
その後、大坂の陣が勃発、真田信繁は密かに逃亡し大坂城に入ると冬の陣では真田丸を築き徳川方を苦しめた。
また、夏の陣でも徳川本陣間際まで追い詰めるも、一歩及ばず戦死。
永原先生からは「主君の跡継ぎの、偉大な息子」として尊敬されている。
また、真田信繁は真田幸村の名でも知られるが、永原先生はこの名で広められることを極めて嫌っており、上田駅前の「真田幸村像」に

向かって悪態をついた挙句、なだめにかかった篠原浩介に怒鳴り込んだり、真田氏を記念した公園でも、「真田幸村」に対して「恐れ多くも安房守殿の次男、真田左衛門佐殿の名を勝手に剽窃して作り上げた架空の人物」と称している。

現在の記録では、真田信繁は少なくとも死の前日まで「真田信繁」と名乗っていたことが確認されており、徳川光圀もわざわざ「幸村というのはあやまりなり」と記していることからも、「真田幸村」は作られた存在である。

諱を曲げて伝えるというのは、永原先生の価値観では到底あってはならないことなのである。一方で、永原先生自身は諱を直接口にすることは憚って、当時の呼ばれ方である「左衛門佐殿」と呼んでいる。

また、真田十勇士の逸話についても「デタラメ」として極めて嫌っている。

京都の龍安寺に真田信繁とその妻の墓があり、普段は非公開ということになっているが、永原先生は真田家関係者のため、優子達も特別に墓参りすることができた。

徳川家綱／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４１～１６８０）

江戸幕府４代将軍、父は3代将軍徳川家光。

永原先生が後年「大恩人」と評するとともに2人の初恋の相手の1人でもあり、また「罪悪の象徴」でもある。

１６５１年にわずか１１歳で征夷大将軍となる。江戸幕府が開かれ５０年目の節目の年に「江戸の街の不老娘」の噂を聞き、永原先生を江戸城へと呼び寄せる。

永原先生に生まれ年を聞き「永正１５年、１３６歳」との答えを得る。また、真田家への仕官を証言したため、真田信之を呼び、その後、永原先生が自分の目の前で大泣きする事件が起きる。

この時、そばにいた家老は「無礼者！」と永原先生を怒鳴りつけるが、すぐに「よい、泣かせてやれ」と制止して事なきを得る。

永原先生が一通り泣き止んだの地、真田信之を下がらせ、ねぎらい

の言葉を述べると、永原先生はまた大泣きしてしまう。
その様子を見て「辛かったろう、気の済むまで存分に泣け」と言って江戸城に泊まるように申し付ける。
これをきっかけに、真田信之とともに永原先生の初恋の相手になった。
永原先生はこのことに多大な罪悪感を感じており、後年には「時折藩主や旗本たちに戦乱の話を聞かせ伝え、毎晩毎晩罪を懺悔する日々だった。２人の恩人はあの世から今も私を許してはくれないだろう」と述懐している。
永原先生は徳川家綱より江戸城に常駐するように命じられ、以降代々の将軍に引き継がれた。
その後明暦の大火が発生し、この時は永原先生は徳川家綱から真っ先に逃されており、また将軍ながら真田信之に敬意を払うなど、彼の立場を超えた年長者への敬意が伺える。ＴＳ病がバレても殺されなかったのも、父家光による儒学教育の影響とも言われている。また、地位が不明瞭だった永原先生に武士の身分を与えている。
後年、永原先生からは「幼少にして立派な人だった」と、後世の印象とは違った評価を下している。

徳川光圀／徳川中納言／水戸光圀／水戸中納言／水戸黄門（１６２８～１７０１）
ご存知水戸黄門。永原先生は江戸城で何度か面識があり、水戸藩が勧めていた「大日本史」の編纂の時には、直接話を伝えている。永原先生は「徳川中納言」や「水戸中納言」と呼んでいる。
ちなみに、時代劇でよくある「諸国漫遊」についても永原先生は「嘘」と断じている。
史実の光圀は江戸に常駐していて、諸国漫遊どころか、関東からもほぼ出たことがなく、実際に諸国漫遊をしていたのは彼の家臣である。

吉良義央／吉良上野介（１６４１～１７０３）

吉良家出身の高家旗本。吉良家は名門の家柄で、領地に黄金堤を築くなど領民をよくいたわり、安定した治世をしていたとされる。

永原先生にとっては大恩ある人として、「3人目の恩人」とも呼んでいるが、一方で「またも恩を返せず」として、自らの無力と罪悪の象徴でもある。

当時の永原先生は、江戸城内で住んでいながらも、城内では町娘としての服を使用しており、他の大名や旗本、江戸城内で働く人々は、表向きは「不老の町娘」として敬意を払うものの、裏で陰口を叩かれ続けて耐え忍ぶ日々を送っていた。

これを不憫に思ったのが吉良義央であり、徳川綱吉とも掛け合って立派な服を与えた他、上方の作法を教え込むなどした他、徳川綱吉にも陰口を辞めさせるように進言し、綱吉もこれを採用。

徳川綱吉は江戸城内や大名・旗本に向けて「遠き戦乱の世の時代を知る柳ヶ瀬殿に陰口を叩かず、心から敬意を払うように」と命じ、陰口は途端に止んだ。

この一件以降、永原先生は吉良義央及び吉良家に対して強い恩義を感じるようになるが、元禄14年（1701年）に江戸城内で朝廷の使者を迎え入れる儀式の準備中に浅野長矩から斬りつけられる事件が発生。

この時に徳川綱吉より「無抵抗だったのは寧ろ殊勝である」としてお咎めなしとなり、一方で浅野長矩は即日切腹・赤穂藩も改易となった。

しかし元禄15年（1703年）、大石良雄を中心とする赤穂浪士が吉良邸に討ち入りに入り、非業の死を遂げた。

この時、吉良義央が討たれたという報を聞いた永原先生の嘆き悲しみは深く、柳沢吉保の記録では「数刻にも渡り柳ヶ瀬殿の嘆き悲しむ声が江戸城中に響き渡っていた」と記されている。

永原先生はこの一件以来、浅野家や赤穂浪士に対して、極めて無礼と知っておきながら故意に諱を呼び捨てるほどに強い敵意を持っている。ただし浅野長矩の弟浅野長広については「大学殿」と呼んでおり、特に敵意はない。

また、忠臣蔵の物語についても「吉良殿にいわれなき汚名を着せた」として、永原先生は赤穂浪士を連合赤軍やオウム真理教と同列に置くほどに嫌っている。

後年の永原先生の述懐でも、「温厚で優しい方」「恩義に手厚い人」と言った絶賛を受けている。

一方で、吉良上野介に対して、「あれだけの恩を受けておきながら何もできなかった」と後悔していて、「きっとあの世で恨んでいるに違いない」と考えていたものの、後に優子の手により罪悪感から解放された。

自身が持つ多くの家宝を鑑定番組へ出すことを了承したのも、最終的には吉良の汚名を削ぐことが大きな動機になっている。

浅野長矩／浅野内匠頭（１６６７～１７０１）

江戸時代の大名で赤穂藩主、忠臣蔵で有名。

元々癇癪持ちな上に精神病のきらいがあったらしく、母方の叔父も同様の刀傷事件に及んで切腹・改易となっている。

吉良の「いじめ」について、永原先生によれば、「無理矢理吉良殿を悪人に仕立て上げるための創作」だという。また、永原先生は「かけがえのない恩人にいわれなき汚名を着せる行為」として、このような話をすると誰彼構わず怒り出してしまい、忠臣蔵の話を真に受けていた教え子の志賀さくらに対して、「吉良殿はそんな御方ではない」などとして、我を忘れて怒鳴りつけている。

ちなみに、江戸城での刀傷事件については、一般的には勅使に対する礼儀作法の指南役だった吉良に授業料を出さなかった（賄賂とされているが、現在の価値観では授業料という意味に近い）ことを咎められて逆恨みした上での犯行という説が根強い。

斬りつけられた後の取り調べでも、吉良は「何ら身に覚えがない、乱心としか言いようがない」と答えていた。

これは、乱心ならば罪が軽くなるとしての配慮だったが、浅野は単に「恨みがある」とのみ繰り返していて、具体的には何も語らなかった。

一方で朝廷との重要な儀式を台無しにされた将軍綱吉は、永原先生が「あの時の怒りの形相は今も目に焼き付いている」と称するほどに激怒し、浅野長矩に即日切腹を言い渡した。

永原先生は、本来の流儀ならば「内匠頭殿」と呼ぶべき所を「長矩」と諱を故意に呼び捨てにしている他、「キチガイ」「狂人」とも言っており、評価は散々である。

このことは、鑑定番組内でも江戸城の日記を鑑定した鑑定人から、「浅野家に対する恨みが見て取れる」と評されている。

大石良雄／大石内蔵助（１６５９～１７０３）

赤穂事件の中心人物。浅野長広を当主としてのお家再興に向けて尽力していたが、それが叶わないと知ると、吉良家に討ち入りを決定する。

吉良の首を泉岳寺にある浅野長矩の墓前に供え、その後は他の赤穂浪士とともに切腹を命じられた。

永原先生はこの行為を「逆恨み」だとして、また恩人を殺害しただけでなく、吉良家の取り潰しのきっかけを作ったとして、赤穂浪士に対しても「大石良雄」と諱を呼び捨てにするほどに強い敵意を抱いており、同情の余地がないとしてオウム真理教や連合赤軍と同列に置くほどに嫌っている。

徳川綱吉／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４６～１７０９）

江戸幕府５代将軍、徳川家綱の弟で、兄の死と共に将軍となる。

戦国時代の気風を一掃し、文治政治を推進した。勤皇家でもあり、朝廷との関係を重視した。

後年の永原先生の述懐では「実直な人」「誠実な人柄」と肯定的な評価を下しており、「天下の悪法」とよばれた「生類憐れみの令」についても、「やりすぎな面もあったが、戦乱の時代の荒廃を一掃した」として肯定的な評価を示している。

永原先生にとっては、徳川綱吉に対しても吉良上野介の進言を受け

入れたため、恩義を感じていて、後年の否定的な評価にはいい顔をしていない。

赤穂事件の時の処分について、永原先生は「喧嘩両成敗は時代遅れであり、生類憐れみの令の精神にも反する」と進言したものの、「柳ヶ瀬殿の言うことは最もではあるが、征夷大将軍といえど世論には勝てない」と却下されてしまった。この判断については、永原先生も一定の理解を示している。

一方で、刀傷事件における浅野家取り潰し、吉良お咎めなしの裁定にはほぼ全肯定的な態度を取っている。

柳沢十三郎／柳沢出羽守／柳沢左近衛少将／柳沢美濃守／柳沢保明／柳沢吉保（１６５９～１７１４）

江戸時代の譜代大名で、徳川綱吉の側用人として重用されるが、綱吉死去後には新井白石に実権を奪われ、やがて隠居となった。

幕政を手動しつつ、水戸黄門や忠臣蔵では悪役を割り当てられてしまっているかわいそうな人物でもある。

物語内では、永原先生の江戸城での人生を記録した「柳ヶ瀬まつ一代記」の著者の一人で、吉良上野介が徳川綱吉と掛け合って「柳ヶ瀬殿に陰口はやめ、敬意を払うように」という所を「全くもってその通り」とした他、赤穂事件の時には永原先生の嘆き悲しみを表現し、また「世論が浅野側に傾く様子を見るに、柳ヶ瀬殿の心痛察するに余りある」とも評しているなど、他人を思いやる心を持った情け深い人物として書かれている。

徳川吉宗／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６８４～１７５１）

江戸幕府８代将軍、享保の改革でも知られる。

米将軍と呼ばれた他、暴れん坊将軍のモデルとしても有名。

永原先生は徳川吉宗より葵の御紋と本人の署名がついた茶器を贈られており、これは後世の鑑定番組では２５００万円という値段がついた。

奥村源八／奥村政信／奥村文角（１６８６～１７６４）
江戸時代前期の浮世絵師で、浮世絵の歴史の中でも重要人物の一人。永原先生は彼の墨摺絵を持っている。
浮世絵の様々な分野を開拓し、錦絵以前の浮世絵文化洗練に果たした役割は大きかった。
永原先生は享保１０年（１７２５年）に彼の浮世絵を当時の値段にして２０文で購入している。これは現在の３００円から４００円である。
鑑定番組に出演した時には、本人評価額を「買った時の値段を現代の価値に直して４００円」としてしまったため、４００万円と鑑定した鑑定士からは「こんなの前代未聞ですよ」「失礼ながら神を畏れぬ所業としか思えない」とたしなめられている。

中島八右衛門／葛飾北斎（１７６０～１８４９）
江戸時代後期の浮世絵師。世界的に有名な浮世絵師で、高齢ながらも様々な創作活動を行っていた。
一方で、奇行も目立つ変人で、典型的な天才型だった。
「蛸と海女」などの春画にも積極的に取り組むマルチタレントで、永原先生も「富嶽三十六景」を初版で全てきれいに所持しているが、幾つかの浮世絵は「持ちきれない」として江戸城を出る時に捨ててしまっており、このことを鑑定士からは「罰当たり」と評された。

滝沢左七郎／滝沢興邦／曲亭馬琴（１７６７～１８４８）
江戸時代の作家、『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』で知られている。
永原先生も曲亭馬琴の小説を愛読していて、当時書店で買った『椿説弓張月』を鑑定番組に持ち込んでいる。
また、葛飾北斎とも親しかったとされている。

安藤重右衛門／歌川広重（１７９７～１８５８）

江戸時代末期の浮世絵師。東海道五十三次で世界的にも有名で、西洋画家にも影響を与えた巨匠。

永原先生は東海道五十三次を全て良い保存状態で初版ものを全て所持している他、広重本人とも面識がある。歌川広重は「不老の娘」の噂を聞きつけ、永原先生を直接自宅に呼び出した後、「是非俺の作品を後世に伝えて欲しい」として、永原先生のためだけに書いた肉筆画を託されている。

島津斉彬／島津又三郎／島津薩摩守／島津左近衛中将／照国大明神（１８０９～１８５８）

幕末の大名、永原先生の正体は当然に知っており、薩摩切子を送っている。

吉良上野介の一件以降、永原先生は特に大名や旗本から敬意を持たれるようになり、こうした大名旗本からの寄贈品を数多く所持している。

織田信長、徳川家康、伊達政宗の血を引いており、薩摩藩の富国強兵に成功し、明治維新の礎を築いた。

この功績により、死後正一位を追贈された上、鹿児島市照国町照国神社の祭神となって「照国大明神」と言われるようになった。

昭和天皇（１９０１～１９８９）

ご存知昭和天皇、あまりにも有名なので事績は記さない。

永原先生にとっては戦時中に裏切った相手として罪悪感を持っている。

永原先生は教師として、戦時中は田舎に疎開しており、「久々の大戦争に血湧き肉躍る」と振り返りつつも、「真田家や吉良家に恩を返せていないからまだ死ねない」と思いこんでしまい、米軍が襲来した際には当時の教え子を囮に一人山へ逃げる計画を立てていた。

この計画は未遂に終わるものの「よりにもよって天皇陛下を裏切ってしまった」として後に「私は最低の女」とまで考えるようになってしまった。

島安次郎（１８７０～１９４６）
明治から昭和にかけての鉄道人。
特に明治期は後藤新平、十河信二と共に国鉄広軌化に邁進、また蒸気機関車の設計に数多く関わり、永原先生からはその優れた技量から、木下淑夫、結城弘毅と並び３人の神様、「車両の神様」として讃えられている。
一方で、永原先生は連結器交換の功績については詳しく話してはいないが、日本の鉄道が世界を驚かせた最初の事例とも言われている。
原敬内閣により、広軌化の夢を絶たれ鉄道省を下野し、満鉄に転身、そこでは筆頭理事などを勤め上げ、また新幹線のプロトタイプだった弾丸列車計画に、息子の島秀雄と共に関わるが、戦局悪化によって計画は頓挫し、終戦直後に間もなく亡くなった。

結城弘毅（１８７８～１９５６）
鉄道省の運転士、当初は山陽鉄道に入社し、国有化に伴って国鉄職員となった。
彼の機関士の技術は随一と言われ、また投炭の名人でもあった。
彼は「時間に正確な鉄道の重要性」を世界で初めて認識し、それを実際に実行に移した。
彼の技量は当時他の職員を圧倒していて並び立つものはいなかったが、その卓越した指導力で彼の技量は他の職員にも受け継がれていった。
彼は今日の時間に正確な日本の鉄道を文字通り１人で作り上げた人物でもあり、速度計もない時代から時間に正確な鉄道を目指した。
永原先生からは「運転の神様」として、木下淑夫、島安次郎と共に３人の神様と讃えられ、特に結城弘毅は「３人の神様の中でも最も偉大な人物」としてその筆頭に上げている。
その後、鉄道省では「超特急燕」の運転を開始し、指導に加わるが、間もなく鉄道職員の減俸問題に抗議するために辞表を提出、２度と鉄道省に戻ることはなかった。

木下淑夫（１８７４～１９２３）
明治・大正期の鉄道官僚、訪日外国人向け旅行ガイドブックの先駆けとなるものを作ったり、また観光と鉄道の融合を思いついた人物。
その手腕は「営業の神様」と呼ばれ島安次郎、結城弘毅と並び称され「３人の神様」と呼ばれた。
鉄道博物館での会話ということで、永原先生の口からは軽く出てくるだけだが、実際には現在の日本の鉄道における手厚いサービスの基礎を作った偉大な鉄道人である。

十河信二（１８８４～１９８１）
東海道新幹線建設時の国鉄総裁、頑固一徹な性格で人情深く、情熱が凄まじいという、良くも悪くも昭和の力強いおじいさん的な性格の人だった。
戦前から師匠の後藤新平のもとで広軌論者として活躍、その後しばらく隠居生活をしていたが、東海道新幹線開発のため１９５５年より７１歳にして国鉄総裁に就任する。
既に「古びた老機関車」と揶揄されるが、その強い政治力で東海道新幹線の開発を強く推し進めた。
永原先生からもその手腕は高く評価されており、東海道新幹線に初めて乗ったときには鉄道開業時以上の衝撃を受けた。
永原先生の時代は２週間以上かかった距離を３時間で到着できることは同時代人以上に衝撃を受けていたことは想像に難くない。
東海道新幹線に反対する勢力に対抗するためにあらゆる手段を講じるが、東海道新幹線開業直前に予算の過少申告が発覚、１９６３年に総裁に再任されなかったが結局歴代総裁で一番長い８年を国鉄総裁として仕事をこなした。
新幹線は翌年１０月に開業するが、開会式には正体されず、「新幹線の父」と言われた男を招待しなかったことは後年罪悪感が残ったのか、東海道新幹線東京駅のホームには十河を記念したレリーフがあり、１９７３年にこれが出来た時、十河はたった一言「似とらん」と言ったとされている。

朝倉希一（１８８３～１９７８）
明治から昭和にかけての鉄道人で、京都の鉄道博物館の蒸気機関車を解説する際に永原先生の口からその存在が語られる。
島安次郎に師事し、また師の息子である島秀雄を指導した。
鉄道技師として多くの著書を執筆しており、９６００やＣ５１蒸気機関車の設計に関わり、その後も蒸気機関車の設計に携わる。
昭和１１（１９３６）年に一旦鉄道省を退官するが、戦後は十河信二、島秀雄と共に東海道新幹線の調査委員に就任し、また日本鉄道技術協会の会長も務めるなど、９５歳で亡くなるまで重鎮として活躍した。

島秀雄（１９０１～１９９８）
島安次郎の長男で鉄道技師、朝倉希一の弟子で、蒸気機関車から新幹線までの開発まで関わった。
永原先生をして「車両の神様」と呼ばれた父安次郎を上回る日本最高の鉄道人と絶賛されており、実際に彼が日本の鉄道に与えた影響は大きく、ＪＲや大手私鉄の鉄道会社の社長から、現場に携わる人、一介の鉄道マニアや鉄道に触れ合う子供に至るまで、おおよそ日本で鉄道に係る人間のほぼ全員が、島秀雄に何らかの影響を受けているとさえ言われており、彼と並び称されるのは、日本の鉄道に「正確さ」の概念を創造した「結城弘毅」のみとされている。
劇中ではＣ１１やＤ５１、またＣ５３からＣ６２までの各蒸気機関車の設計に携わったとして永原先生からはＣ５４を除いて高く評価されている。
弾丸列車計画では父の島安次郎と共に深く関わり、機関車の試作などをしていたが結局実現しなかった。
戦後は鉄道技術者や旧陸海軍の技術者などを集めて基礎研究を続け、「電車」の重要性を見抜き、戦後は中距離電車の先駆けとなった湘南電車の開発に関わった。
ところが桜木町事故で一旦国鉄を辞職し民間に転身したが、東海道

新幹線を作る際に十河信二の熱意に押されて技師長として復帰する。
その後は１５１系こだまや０系新幹線電車の設計の責任者になった。
最終的に予算超過の問題の際に十河信二ともども辞職してしまい、開業式は自宅のテレビで見ていたという。
彼の末弟はＹＳ―１１の設計に加わり、また次男も鉄道技術者として東海道新幹線の開発に携わった他、台湾新幹線の建設にも大きく関わっている。
その後、島秀雄は現在のＪＡＸＡの前身の１つ宇宙開発事業団が創設されると初代理事長に就任し、６８歳にして新天地に旅立ち、日本の宇宙開発の基礎を作り上げた人物でもある。

細川泉一郎（１９０８～２０００）
鉄道技師、島秀雄の弟子として永原先生から紹介されている。
Ｃ５７やＣ５８、Ｄ５２の開発やＤ５１の改良に携わった他、戦後は１５１系こだま電車の設計にも深く携わっており、永原先生からも「とても優秀な人」とやはり高い評価を受けている。
本人は生前「島さんが常に大将で僕は生徒」と言っていたそうである。
２０００年５月に亡くなったため、優子が生まれる１ヶ月前まで生きていたことになる。

# 第十一章　解答への道

## どんより結婚記念日

「優子ちゃん、今日は結婚記念日だけど、どうする？」

朝のひととき、浩介くんがキャンドルに火を灯して、「４」の数字へと燃えかかっている。

あたしはというと、少し気分が悪いのでベッドで休んでいる。

幸いにも今月は軽い方だけど、それでも普段と比べると体調はよくない。

最初の２年に比べれば、大分生理と向き合えたけど、それでも鎮痛剤の副作用はある。

我ながら、こんなんでよく大学を卒業できたものだとあたしは感心してしまう。

生理の時は、浩介くんは「待ってました」と言わんばかりにあたしに献身的になる。

下心があったとしても、あたしにとってはとてもありがたい。

何分、結婚前のあたしは、生理中でも家事を免除されなかった。

これは母さんの教育方針だったわけだけど、将来のことを考えて、比較的軽い今日は家事をしようと思う。

「優子ちゃん、起きちゃって平気なの？」

「あーうん、いつまでもこんなんじゃいけないもの。今月は幸い少し軽いから家事頑張らないと」

あたしは、老化がないので閉経もない。

そのためにも、生理中の家事もまた、大事なことになってくる。

ともかく、生理前と生理中は、野菜中心の食事を心がけている。

お義母さんには、あたしの周期もバレバレで、食卓のメニューを工夫してもらっている。

「うー、やっぱ優子ちゃんって健気だよなあ」

「ふふ、ありがとう」

浩介くんに誉められるの、あたしとっても大好きだわ。

そんなことを思いながら、あたしは起きてお義母さんのお料理を手伝うことにした。
「あれ？　優子ちゃん、大丈夫なの？」
これまでも生理中に自主的に家事を手伝ったことはあったけど、その度にお義母さんはあたしを心配してくれる。
「うん、今月はね」
お義父さんは幸いこの場にはいないので、生理の話題も大丈夫だ。
浩介くんにも、とっくの昔に周期は把握されているし、前日になると「明日は生理だな、大丈夫か？」何て聞いてくる。
気遣ってくれるのはありがたいけど、浩介くんは何でいつもちょっとだけにやけついているのかしら？
男としては恋愛経験がないからよく分からないけど、そんなに彼女や妻の生理って気になるのかな？
「それにしても、今日は2人の結婚記念日なのにねえ」
お義母さんは、「今日くらい休みなさい」といいたいのね。
「ううん、結婚記念日だからこそよ」
こういう生理中の結婚記念日こそ、浩介くんの前で女子力を構成する重要要素になっている「家事力」の腕の見せ所だもの。
あ、もちろん無理して心配されちゃったら元も子もないから気を付けないといけないけどね。
「やっぱ優子ちゃんって健気だよなあ」
浩介くんが、さっきと全く同じ言葉を反復するように言う。
「うん、お義母さんもそう思うわ」
あたしは、今までも「健気」って言われたことがある。
特に女の子になったばかりの頃は、女の子として学ぶべきことが多くて、そんな時に桂子ちゃんや永原先生から「優子ちゃんは健気」って言われることが多かった。
あの時は夢中だったけど、今になって思えば、突然女の子になってしまって、自分を変えたいという動機があったにしても、男女の違いの大きさを考えれば、あれだけの短時間で女の子を身に付けていったのは、とてつもないことだと思う。

あたしは、鎮痛剤の恩恵を受けつつ、お義母さんと協力して、朝食を作り上げた。
大学院、特に2年で行う修士課程は、多忙になることも多い。
元々身体能力に問題のあるあたしとしては、当初提出した卒業論文の殆どを、修士論文に流用出来るのは幸いだった。
「「いただきます」」
お義父さんも加わって、一家で朝食をとる。
「優子は今日も家事か」
「うん」
お義父さんは、あたしの生理には鈍いらしく、あたしが家事を手伝ってるのを見ると、「健康」と判断するらしい。
まあ、男の子には理解しにくいことだものね。
「やっぱり、優子が来てから、うちの雰囲気も大きく変わったよな」
「うん」
特にお義母さんが、いい人だったのがよかった。
今のあたしなら断言できるけど、もし浩介くんに姉か妹……つまりあたしに小姑がいても、うまくやっていける自信がある。
それはやっぱり、結婚前に花嫁修行をしたことや、その時にお義母さんが「優子ちゃんは物凄くかわいくて美人で、しかも男心も分かって家事まで上手。完璧すぎて嫉妬する気にもなれない」と言ったのは大きかったわね。
「ごちそうさまでした」
それぞれが食べ終わり、カウンターの上に食器を置く。
浩介くんが皿洗いを手伝うように申し出てくれたけど、あたしはそれを断った。
今日だけは、浩介くんの手伝いは借りたくない。
……2つの意味で。
今日のお洗濯は元々お義母さんが担当するのであたしはお休み。
ありがたくベッドに横になって、テレビを見ることにする。
「えーではですね、続いてのニュースです」
この時間帯は世間一般的には「平日昼間」に当たる。

なのでターゲット層は露骨に主婦、それも４０代以上をターゲットにした番組が多い。
なのでニュースも、芸能関係に関するスキャンダルな報道がやけに目につく。
あたしはあまりこういうのには興味はない。
うーん、あたしだって学生だけど主婦でもあるのよね。
特にこういう長期休暇の時は、あたしの主婦としての顔が大きくなるのよね。
蓬莱教授が、数年前にこうしたスキャンダルを追うマスコミを罠にはめて、実質的な支配下に置いた時、こうした罠の嵌め方が他の芸能人や政治家に応用され、「報道の自粛」が起きたこともあった。
しかし、蓬莱教授と関係ないであろう芸能人関係については、やはり「喉元過ぎれば熱さを忘れる」なのか、今ではすっかり不倫関係のスキャンダル報道が報道を賑わせるようになっている。
……最も、５、６年前の頃に比べると、芸能人や政治家側の自衛手段が充実してきて、マスコミ側が苦境なのは事実だけどね。
特に政治家に関しては、国会議員の全員が「蓬莱教授の不老研究を応援する議員連盟」に加盟したことで、マスコミを黙らせることに成功した。
もちろん、政治資金規正法違反のような大きな疑惑は報道されるけれども、不倫みたいな比較的小さな疑惑については、完全に沈黙してしまっていた。
小さな疑惑に限定してとはいえ、政治家の疑惑が報道されなくなったのは、あまりいいことではなく、蓬莱教授本人が苦言する始末だったけど、もはや蓬莱教授の権力はそこまで増大してしまったんだと諦める他なかった。
一方で、マスコミ陣は慎重な報道をすることも多く、情報の精度が上がったとのことで、マスコミ内部にもこの空気を消極的に支持する声があるのもまた事実だったりする。
そんな中で、ターゲットになりやすいのは若い女性アイドルの恋愛疑惑だ。

例の蓬莱教授に目をつけられた週刊誌も、アイドルの彼氏疑惑で名を馳せた経緯がある。
「さて、このアイドル交際問題なんですけれども、実は去年にも同じグループのメンバーがですね――」
「はい、まあファンからすれば、2回裏切られたということになりますよね」
テレビでも、コメンテーターたちが議論を交わしている。
「嫌ならアイドルやらなきゃいいんですよ。アイドルというのは夢を売るわけです。夢というのは現実逃避なんです。これはお金のやり取りであって契約な訳です」
アイドルの恋愛禁止問題に異議を唱える人に対して、若い男性のコメンテーターが異論を述べている。
「お金をみんなで出しあって夢を買ってるわけですから、そういう存在になっておきながら特定の人と交際していたら、ファンたちの逃げ場がなくなっちゃいますよ。ただでさえこういうファンというのは現実に疲れた人が多いわけです。だから現実を見せつけられながら働いて得たお金をつぎ込むんですよ」
コメンテーターさんの言い分は、あたしにはよく分からない。
だけど、恋愛競争というのが不平等なのは分かる。
モテない人たちがアイドルという存在にお金を出すとすれば、アイドルが恋愛をするというのは、お金を払って現実から逃げようとしたのに、現実を見せつけられるわけだから、怒るのは無理もないのよね。
「さて、続きましては、最新の家電の情報です！」
昼間の番組には、こうした家電などの家事の時に役立つアイテムや方法などもよく報道されている。
まさに女性向けという感じだ。
「ふう」
とは言え、こういう「知恵」も、既に結婚前に母さんから教わっていることが多い。
もちろんたまに掘り出し物があるけどね。

「優子ちゃーん！　お昼手伝ってー！」
「はーい！」
お昼前になると、お義母さんから昼食を手伝うように言われた。
結婚してしばらくは、あたしとお義母さんとで家事のスキルに格差があったけど、今のお義母さんは、すっかりあたしの技術を吸収してしまった。
もちろん、それは嬉しいし、家にとってもいいことだけど、一方でちょっとだけ、寂しくもあるのよね。
「お義母さん、今日は何を作るのかしら？」
日々の料理のメニュー決めは、お義母さんが担当してくれる。
もちろん、あたしも意見を出すことは出来るけどね。
「今日は少し寒いから、温かいお蕎麦にするわよ」
「はーい」
母さんはそばを茹で、あたしが野菜を切る。
「ふう」
今は、指を切らないように特に注意しないといけないわね。
生理中の料理は、どうしても神経を使ってしまう。
さっきとは違い、怪我の可能性もある料理なのでなおのことあたしに緊張感が強まる。
「よし、これで大丈夫ね」
あたしはスープと野菜を煮込み、お義母さんがそばを茹で、最後にうまく4人の食欲に合わせて分配していく。
「浩介、お父さん呼んできて」
「あーい」
タイミングがよくなったら、浩介くんがお義父さんを呼び食卓に並ぶ。
朝食と同じように一家団らんの場がやってくる。
今日は生理中のあたしに合わせて、野菜多めのそばになっている。
特にニンジンとほうれん草が、この時期大好物になる。
やっぱりビタミン取りたいのかしら？
「ごちそうさまでした」

浩介くんが最初に食べ終わり、昼間のテレビを探す。
その後に食べ終わったあたしたちは、朝食ともども食器洗い機に食器を入れる。
この後に待っているのが、お掃除の時間なんだけど。
「優子ちゃん、本当に手伝わなくて大丈夫？」
浩介くんが甲斐甲斐しくあたしに「手伝う」と言ってくる。
要するに、家事手伝いついでに生理中のあたしの羽根つきパンツを見たいのよね。
「大丈夫よ、『こういう日こそ、きちんとやりとげなさい』って、あたしの母さん言ってたから」
「うー、分かった」
浩介くんも、さすがにあたしの気持ちを汲んでくれるので、しつこくはしない。
ただまあ、残念そうな顔をするのよね。
もーそんな残念そうな顔されちゃったら困っちゃうわ。
……ってダメダメ、毎回毎回浩介くんのそんな顔を見て、最後は結局手伝わせちゃって恥ずかしい思いしちゃってるんだから！
あたしは、今日の掃除エリアとして、寝室とお義父さんの書斎となっている。
軽くほこりを払うだけの簡単なお仕事になるわね。
「よしっ」
浩介くんに手伝ってもらわなくても、これくらいなら大丈夫。
お義母さんも、別のところを手伝ってくれるものね。
「うー」
とは言え、ちょっとだけきつい。
あたしは、一旦自室に戻り、服の中にナプキンを忍ばせて、トイレに入る。
スカートをペロリとめくり上げてパンツを下ろし、ナプキンを取り替える。
古いナプキンはゴミ箱へっと。
うん、今日は出血量は少ないわね。

「うー」
便座に座ると、ちょっとだけ股から血が出てくる。
結婚記念日でも、当然生理は待ってくれない。
予測はついていたとは言え、やはり気分は重たい。
これまでも、あたしの中で生理は大きなイベントになってきた。
初めての時はもちろん、浩介くんを好きになってから最初の生理の日も、浩介くんに保健室までお姫様抱っこで運んでもらった思い出が色濃く残っている。
今思えば、あの時にあたしから反射的な嫌悪感が消えるきっかけになったんだと思う。
女の子にとって、生理中の問題は切っても切り離せない。
ナプキンを取り替え終わり、出血も収まったので、あたしはビデのボタンを押してトイレットペーパーを使い、パンツをもう一度穿く。
便器から立ち上がると、便器の水がほんのりとピンク色に染まっていた。
いつものことだけど、女の子になって1年目の時には、どうしても慣れないものだった。
今はうん、もう何十回と生理来てるから見慣れちゃったけど。
「ふー」
あたしはもう一度、お掃除に戻った。
浩介くんは相変わらず、あたしを心配してくれている。
下心があると分かっていても、あたしは罪悪感を感じてしまう。
「うー」
バタン
あたしはさっき、出血を処理したため、貧血気味になってしまい、ベッドに倒れ混む。
確かに生理が軽いと言っても、それなりには気分も重くなる。
鎮痛剤も限度があるし、休めるときに休むのも主婦として大事なことだわ。
「優子ちゃん、大丈夫？」
あたしが寝ていると、すぐに浩介くんが駆けつけてくれる。

「あーうん、夕食の準備までは時間があるから、今のうちに休んでるのよ」
「そうか、大変だよなあ」
「うん」
テレビで暇を潰そうとも思ったけど、あたしは蓬莱教授からもらった修士課程の教材を眺めて予習する。
教材を眺めて思ったが、やはり修士課程はそれまでの学部生の過程と比べても、更に抽象的で難解になっている。
いやまあ、高校の内容だって十分に難しいとは思うけど、今思えば中学までが義務教育って言うのもそれなりに合理的なんだなあとは思う。
「優子ちゃん、予習？」
「そうよ、あなたとずっとずっといるためのね」
「ありがとう、俺のために」
浩介くんが、嬉しそうににっこりと笑う。
「ふふ、どういたしまして」
やはり、「浩介くんのため」という名分があるだけでも、飲み込みは全然違う。
理系の大学は留年や退学が比較的多いと聞くけど、それはやっぱり、みんながみんな、あたしのように大きな勉強へのモチベーションがある訳じゃないからだと思う。
「大学院、頑張らねえとなあ」
「うん」
とは言え、努力だけでどうこうできるのは、せいぜい高校の内容くらいまでだと思う。
大学の課程になってくると、どうしたって才能がものをいい始めると思う。
ましてやこんな大学院のないようになってきたら、向いてない人にはどれだけ努力しても無理だという気がしてくるわね。
ということは、あたしはこれに向いているのかもしれないわね。

「さて、夕食を手伝わなくちゃ」
時間が近いので、あたしは大学院の予習もそこそこに、家事へと向かう。
今日の夕食のメニューは野菜炒めと鶏のから揚げになっていて、消耗したあたしへの配慮がなされている。
「お義母さん、夕食作るわよ」
「はーい」
ノートパソコンを開いていたお義母さんが、あたしの声に応じてPCを閉じて立ち上がる。
あたしは食材を用意し、お義母さんがフライパンやお皿などを出す。
今日はあたしが生理中なので、お昼に引き続いて野菜を切るのと、ご飯やお味噌汁を作る方へと周り、お義母さんが唐揚げを揚げて、野菜を炒める作業を担当する。
このあたり、結婚したばかりのお義母さんは本当に頼りなかったけど、今はもちろんちゃちゃっとあたしの教えた通りにこなすことが出来る。
キッチンは女性2人入ると、少しだけ狭い。
まあそれでも、1人でするよりはずっといいんだけどね。
生理中はどうしても本調子が出ないけど、それでも生理中なりにうまく出来る方法を工夫しているので、特段の問題はない。
「お義父さんー！　あなたー！　ご飯よー！」
「はーい！」
あたしが大きな声でご飯だと伝えると、お義父さんと浩介くんが食卓へと上がってきた。

さて、夕食が終わったらお風呂なんだけど――
「しまったわ……お風呂掃除忘れてた」
久々にあたしは家事でミスをしてしまった。
お風呂のお掃除をして、お湯を沸かさなきゃいけないのに、掃除をしていなかった。

うー、お風呂の時間が遅れちゃうわ。
ともかく、お風呂掃除しなきゃ。
「優子ちゃん、ピンチなんだろ？　お風呂掃除手伝ってあげるよ」
「うっ……浩介くん」
浩介くんが、鬼の首を取ったような嬉しそうな表情で、あたしの弱味に漬け込んでくる。
「その、急げば大丈夫だから」
「うー」
浩介くんが不満そうな顔をする。
でも、生理中にスカートめくられるのは――
――やっぱり我慢できないわ！
「うん、あなた、悪いけど代わってくれるかしら？」
「いよっしゃあ！」
浩介くんが気合いを入れた表情をすると、お風呂がごしごし洗われていく。
「ここはそう、これでカビを取ってくれる？」
「よっしゃ！　任せとけ！」
浩介くんの火事場の馬鹿力もあって、お風呂の遅延は最小限に食い止められた。

「ふふふ、優子ちゃん、生理中だからって容赦しねえぜ」
浩介くんが、家事を手伝ったご褒美をあたしに所望する。
「……はい。あなた、どうぞ」
あたしは手を後ろに組んで従順の意を示す。
ご褒美はお尻、胸触り、またはスカートめくりってことになっていて――
ベロン
「……っ！」
あたしはまた、浩介くんにスカートをめくられ、パンツを見られてしまう。
しかも今日は生理用の羽根つきパンツで――

「うひょー！　優子ちゃんの生理用パンツキター！」
「やっ……恥ずかしい……」
浩介くんがにやけついて喜ぶ声を出す。
小さく細い声で、あたしは恥ずかしさに耐えるしかない。
こうなると分かっていても、浩介くんがしたがってる顔を見ると、断りきれない。
もう、浩介くんったらどうしてあたしの生理に執着するのかしら？
って、女にあって男にないものだものね。あたしたち女の子が自分達になくて男にあるものに興味が出るのと同じよね。
「あ、あなた……あんまり見ないで……！」
あたしは、切実な表情で浩介くんに訴える。
浩介くんが残念そうな表情でスカートを下ろしてくれた。
ともあれ、これでもう、お風呂が湧くのを待つだけになったわね。

思わぬハプニングでお風呂が遅れたけど、あたしが最後に入って、あたしがお風呂から出る頃にはもう寝る時間になる。
「ふう」
パジャマに着替えたあたしは今日の結婚記念日のことを振り替える。
結婚記念日も４回目、特別なことはなく、生理中だったということを除けば平凡な１日だったけど、多分この穏やかな平凡な日々が一番大切だと思うから。
４月からはまた、新しい日々が始まるから。
今のうちに、束の間の日常を楽しんでおきたいわね。

## 蓬莱教授の大学院

修士課程の日々が始まった。
大学院ともなると、何か特別な式典があるわけではない。
とにかくひたすらに研究と、学位取得に向けての３０単位を取る必要がある。
幸いなことに、蓬莱教授の配慮で、修士論文が既にほぼ完成しているのが幸いだけど。

「優子さん、浩介さん、改めて、蓬莱の研究棟へようこそ」
修士課程最初の実験で、蓬莱教授があたしたちに挨拶をしてくれる。
「あーさて、特に優子さんなんだが、これからは研究所の戦力としても期待していきたい。まず、学界というものについて、もう少し詳しく説明しようか」
蓬莱教授が、あたしたちに学界の存在を教えてくれる。
まず、学界の中でも、「ノーベル賞」という権威は絶大だということを教えてくれた。
「俺よりも年功が上の学者何てのはいくらでもいる。だが、俺はこのメダルのお陰で、そんなものは無視できる。まあ、学界というのはもとより実力主義だが、ね」
蓬莱教授がいつぞやに見せてくれたノーベル賞のメダルを、あたしたちに誇示する。
蓬莱教授は様々な章を得ている訳だけど、やはりノーベル賞にだけは愛着はあるらしい。
「さて、優子さんに浩介さん、このメダルを２つ持ってる学者ともなると、極めて数が限られているというのは知っているかな？」
「ええ、もちろんです」
そう、蓬莱教授は、このメダルの２つ目を得たいと考えているらしい。
「まあともかく、だ。特に優子さんにはＴＳ病の当事者として、学界で

も注目されることになるだろうから、心しておいてほしい」
蓬莱教授は、注意を促すように言う。
「はい」
みんなの前で発表する、というのは、卒論の時も一度だけしたことはある。
だけど、修士課程でするのとはそれとは訳が違う。
蓬莱教授の研究所の一員として、外部の大学の先生なども見ている中で、演説をしないといけないのだ。
どちらにしても、これからの2年間は、これまでの4年間とは比較にならない厳しい日々が待っている。
「よしそれじゃあ早速、実験を始めようか」
「はい」

あたしたちは、蓬莱の研究棟でしている実験や、あたしたちが提供してきた不老遺伝子のこと、更にどのようにして年齢証明をしたかを学ぶことになった。
実験の助手を勤めたことは学部生の頃もあったけど、より多くのことが要求されるようになる。
あたしたちは早速、多忙な日々を送ることになった。
蓬莱教授は、あたしたちとは比較にならないほど多忙だった。
特に、政府との調整も大詰めに入った現在は特に多忙で、来年は少しはマシになると踏んでいる。

「ふー」
大学院の時間の進みは早く、4月もあっという間に下旬になった。
とにかく研究研究の日々が続いていて、休む機会は少ない。
あたしは家に帰って早速ベッドで休む。
ただ、あたしの身体能力の無さは噂にはなっているし、何分この研究所では数少ない女性とあって、あたしはかなり甘く見てもらえてもいた。
「とは言え、あたしは女の子の中でも体力がないものねえ」

つまり、そっちの方面では、元より期待されていない。
ただ、これでも蓬莱の研究棟はかなりのホワイト待遇だ。
あたしがついていけるという点だけでもそうだけど、寄付金はますます増加傾向にあっていて、新規の研究員がどんどん増えている。
蓬莱教授も、研究室での指示も抽象的になる。
まあ、組織が大きくなったら仕方ないわよね。
「優子ちゃん、これ」
「え？」
あたしが休んでいると、浩介くんがスマホの画面を見せてくれた。
それによると、とある国際環境保護団体が、蓬莱の薬に反対し、「限りある命の国家連合」の樹立を目指すというものだった。
「どうしたの？　反蓬莱連合なら機能不全よね」
あたしは、不可解な気持ちで一杯だった。
国際反蓬莱連合は、公安調査庁の工作活動もあって、内部分裂と共に四散しているし、アメリカでも、多くの資産家が協力して設立したアメリカ支部の宣伝部とＣＩＡが協力して、「蓬莱の薬を歓迎する」という世論が既に７割に達し始めている。
そして蓬莱教授の強硬姿勢もあって、どこの国の政府も、蓬莱の薬への反対声明など、出せっこなかった。
「どうも連中は、行方をくらました末に、環境保護を隠れ蓑にしようって算段らしいぜ」
「はー、本当にしょうがないわね」
あたしはあきれ気味に頭を抱える。
例の牧師が参加しているとは限らないけど、どちらにしても厄介な的が現れたものね。
「とは言え、ある程度は想定済みだろう」
「ええ」
実際、日本政府の中でも、蓬莱の薬の普及に最も消極的だったのが環境省だった。
世間向けには、「ＪＡＸＡの予算が増える」ことが喧伝されている。
蓬莱教授には、「暫定的でいいので、１０００歳の薬を販売して欲し

い」という手紙やメールが殺到している。
しかし、「蓬莱の薬は、まだ完成には至っていない。未完成品は売ることはできない」として一切応じていない。
蓬莱教授には、何か考えがあるんだとは思うけど、あたしにはよく分からない。
ブー！　ブー！　ブー！
あたしと浩介くんのの携帯電話が鳴る。
送り主は案の定蓬莱教授からだった。読む前から、何について語っているのか分かる。

題名：環境保護団体の声明について
本文：想定内だ。心配しないでくれ、宇宙開発や農業開発で代替できるということは、既に政府との交渉通りだ。優子さんたちは、気にせず実験に専念して欲しい。例の牧師がこの組織に参加しているかどうかは、現在公安調査庁が調査中とのことだ。

「ともあれ、俺たちは見守るだけだな」
修士課程が始まるに当たって、浩介くんは正式に宣伝部の任務を解かれた。
といっても、研究所の一員には代わりはないので、宣伝部の協力をすることはもちろんＯＫね。
「ええ、今は研究と勉強に専念しましょう」
修士課程の研究が多忙なので、あたしの方でも協会の広報部長としての仕事は軽減してもらっている。
といっても、ここ2年は、ほとんど広報部長らしい仕事はしていなくて、仕事の軽減というのは、要するに新しい患者のカウンセラーを、永原先生や関東支部長さんに任せるという意味だけどね。
世間の関心も蓬莱教授に集中し初めて、協会自体も、以前みたいな緩やかな組織になったのも大きい。
元々は、あたしがいなくても協会は回っていたので、メディアの取材依頼や、世間の注目が薄れれば、協会にも余裕が出てくるのは当然

だった。
まあ、そのカウンセラーの仕事も、つきっきりになるのは最初の「女の子体験」の時と、カリキュラムで「学校生活」を学ぶ時くらいだけどね。

さて、例の環境団体の蓬莱の薬を使わないというロビー活動、これは日米ではなくヨーロッパ発祥の運動だった。
しかも、ヨーロッパの特にアラブ系の移民層に、この運動が支持され始めているということで、蓬莱教授は「思ったより深刻かもしれない」と、危機感を強めている。
「優子さん、こちらの方へのロビー活動も、今後強めていく必要がある。だが、英語に比べてフランス語やドイツ語などは話せる人も減ってくる」
お昼休み、研究棟の一角であたしと浩介くん、瀬田助教と宣伝部長さんは、蓬莱教授と共に食事をとっていた。
「ええ、分かってます」
とにかく、あたしたちにはどうすることもできない。
一応、英語発表の訓練は行われているし、引用する論文が英語ということもある。
だけど、庶民向けのロビー活動となると、当然に現地語が必要不可欠になってくる。
そうなってくれば、現地の蓬莱教授支持者を集めていくしかない。
「この日本に、本格的に移民が殺到することも考えねばなるまいな。しかしそれでは、俺たちの寿命に関わる」
蓬莱教授が腕を組み悩む。
もし、反対多数の国家が現れ、「我々は蓬莱の薬を受け入れない」という声明を出せば、その国の住人の少なからない人数が、不老を求めて日本に殺到する可能性がある。
「ええ、あたしも同感です。早急に手を打つべきですね」
あたしたちにとって、治安は文字通り単なる不安とかではなく、寿命に直結する重大問題になる。

蓬莱の薬が完成した暁には、交通安全と治安向上に、相当な予算がかけられることになっている。
「うむ、公安調査庁やＣＩＡとも連携して、大至急、ヨーロッパへの宣伝活動を開始しよう。宣伝部長、早速そのようにして欲しい」
「わかりました」
蓬莱教授がそう指示を出すと、宣伝部長さんが部屋から出て支持へと入る。
一時期に比べると、蓬莱教授の警戒心も和らいでいた。
以前なら、こういった会話は研究所内であっても、まずは盗聴機やボイスレコーダーが仕掛けられていないかを逐一確認していたけど、現在はそうしたことはほとんどなくなっている。
まあそれでも、警戒するときはするんだけどね。
「さて、次に、だが。もしヨーロッパ内で反蓬莱国家が誕生してしまった時についてだ」
蓬莱教授が重苦しい様子で話す。
でも、悪い結果も想定しないわけにはいかない。
「そうなった場合には……そうだなあ、永久にその国の民は子々孫々まで薬を融通しないというのは、さすがに不味いだろうと俺は思う」
「ええ」
もちろんそれは、被差別者としての扱いをずっと受け続けるということになる。
そうなれば……いつまでも子孫に累積が及び続ければ、当然行き着く先は戦争一直線ということになってしまうだろう。
もちろん、不老国家とそうでない国では、当然国力は雲泥の差になるから、最終的に日本を含む不老連合が完膚なきまでに叩き潰すだろう。
しかしもしそうなれば、既に撤回された永原先生の新世界秩序論が復活することにもなりかねない。
「とは言え、俺の薬の素晴らしさを証明するためには、やはりどこかの国にスケープゴートになってもらった方がいいのではないか？　とも考えているのもまた事実なんだ」

蓬莱教授が冷静な口調でそう述べる。
それはやはり、ある意味で全くぶれない蓬莱教授の姿だと思う。
「永原先生が以前言ってたように、ここは１００年というのはどうだろう？　全世界に一斉に解禁するとして、その国の住民だけ１００年のペナルティがつくと。もちろん、別の国に帰化した人は、このペナルティから逃れられる、と」
蓬莱教授は、帰化という逃げ道を用意することにした。
理由は恐らく、「大量に自国民が流出することで、よりその国が悲惨な目に遭うから」と考えているのだろう。
「ええ賛成です」
瀬田助教が賛意を示す。
「俺も」
「あたしも」
「よし、決まりだな。後は政府と永原先生がどう出るかだ」
あたしと浩介くんも異議なしとなり、蓬莱教授がこの議論を締める。
さて、次の政府との会合が楽しみになってきたわね。
永原先生のことだ、恐らくまたどす黒いことを考えているに違いないわ。

「私としては、１００年は生ぬるいと思います。もう更に、１００年必要でしょう」
あれから数週間後、ゴールデンウィークが明け、あたしが女の子として６周年になった週の土曜日のことだった。
件の環境団体の対策として、政府との会合の場で、永原先生が予定通り異議を唱えてきた。
もちろん、これ自体は予想できていたことだけどね。
「うーん、もう１００年という根拠は何ですか？」
総理大臣が永原先生を問いただす。
ちなみに、環境省もこの会議に参加していて、開口一番に「そのような国は放っておくべきだ」と述べて、蓬莱教授に却下された。

まあそれでも、当初から比べると大幅譲歩してはいるんだけどね。
「本音としては、蓬莱先生の薬に楯突く何て、２００年どころか永久にその国には売りたくないですし、帰化という逃げ道にも反対なんですけど、それでは蓬莱先生が反対なされると思いますので、私の譲歩です」
永原先生が、笑顔でそんな話をする。
まさに交渉の達人という感じだわ。
「あーいや、永原先生の気持ちは分かった。ただ、通常は１００年も経てばほぼ生きてる人は入れ替わる。あの時の意思決定に関わった層がほぼ死滅するなら、許されてもいいと俺は思う。見せしめにだって限度はあるし、１００年も経てば、どんなバカも、俺の正しさに目覚めるだろう」
蓬莱教授が自信満々な態度を取りながら話す。
一方で、永原先生も負けていない。
「しかし、その国の政府、あるいはマスコミが、恐らく数十年間は『我々はあえて不老を選ばなかった崇高な民族』という教育や宣伝を国民にすると思います」
確かに、永原先生の指摘も一理あるわね。
それを考えると、確かに１００年は心許ないと永原先生が感じるのも無理はないわね。
「そのように洗脳された彼らもまた、その子供にそう教育するでしょう。そういった謝った考えがその国から消え失せるまで、制裁は続けるべきです」
永原先生の言葉に、蓬莱教授が腕を組ながら熟考する。
「……なるほど、確かに一理はある。だがそれでも、２００年は長すぎると俺は思う。間違いに気付いた者が移民すれば、連中が過ちに気付くのも早まるだろう」
「蓬莱先生、やはり、歴史の知識と知恵に関して、私は蓬莱先生の上を行っているみたいですね」
永原先生が珍しく、蓬莱教授に挑発的な発言をする。
蓬莱教授はそんな永原先生の言動に、一瞬だけ驚きを見せるが、何

も発しない。
「蓬莱先生、私は伊達にあなたの１０倍も生きてないのよ。もし帰化という逃げ道を用意するなら、なおのことその国は永久に子々孫々、薬を融通するべきではないわ」
永原先生が意外なことを述べる。
総理大臣たちも、永原先生の話を必死に聞いている。
永原先生が言っていることは、「融和策を取るなら強硬手段をとれ」と言っているようなもので、それは「アクセルとブレーキを同時に踏め」と言っているのと、また同じことよね。
「何故だ？　まあ、言われて見れば俺も薄々は勘づいているが」
蓬莱教授も、永原先生の言いたいことを、もう理解し始めた。
本当にもう、いろんな意味で非常識な人よね。
「帰化せずに残った集団が、更に一層態度を硬化させるわよ。赤穂浪人、大塩平八郎、オウム真理教、連合赤軍をはじめとする共産主義者……彼らは閉鎖的な小さな集団で、より過激化していったわ。江戸時代、幕府が禁じた邪教でさえ、明治まで２００年以上人知れず生き残ったのもそのためよ」
永原先生は、キリスト教を邪教と言って憚らない。
だけど本題はそこじゃない。
問題なのは、自国民たちが蓬莱の薬を求め、次々他国に帰化した時に、残った集団が丸ごとテロ組織になる危険性についてだった。
「もし彼らがテロリストになったら、私たちが真っ先に狙われることになるわ。それを防ぐためにはどうすればいいと思う？」
「……奴等の憎悪を、帰化人に向けさせるってか？」
これはあたしにも分かること。
「ええそうよ。どうせ期限を設けたって不満は出るわ。でも、この方法は決定的な亀裂をもたらすわね。そうすれば、彼らは永遠にそれに気付けなくなる。私はそれでもいいけど」
「要するに、帰化の逃げ道を残す場合、どうしても分かりやすい不老帰化人に憎悪の対象を向けざるを得ない。でもそうなると、解禁そのものがおぼつかなくなるってことか」

蓬莱教授が簡潔にまとめてくれる。
「ええそうよ。だから、もし期限を設けるなら、不老の帰化人を作るべきではないわ。もし、不老の帰化人を認めないなら、憎悪をもっと内側に向けさせないといけないわ」
つまり、もし期限を設けるなら、逃げ道を奪った上で、国民同士で争わせようというのが永原先生の考え方だ。
永原先生、相変わらず考えることがえげつないわよね。
「1ついいかな？」
ここで総理大臣が口を挟む。
「永原さんの理論はわかりました。ですがそれはあくまで思考実験上のことです。実際にそう運用するとして、各国との調停や根回しの面で困難が伴います。とすると、帰化人は出てこざるを得ないと思います」
「うーん、確かにそのとおりね」
あたしが納得したように声を出す。
総理大臣の言っていることは一理も二理もある。
「そうですか、存外難しいのですね」
「今は色々なことが多様化してますから」
永原先生の言葉に、総理大臣が優しく諭すように言う。
このあたりは、政治的運用知識が江戸時代で止まっている永原先生の限界なのかもしれないわね。
「そうなると、つまり帰化による不老の機会は認めるが、その国家国民に対しては期限は設けないという。無期制裁ということになるな」
「そうですね、ではそうしましょう」
この後、協議は微修正と、薬を売る会社に対する特例法についての調整が相次いだ。
超党派の議連ともよく組み、全会一致での可決を目指したい。
まあ、蓬莱教授の威光と、日本の世論を考えれば、反対に投票する議員は居ないだろうというのが、大方の見方だったけど。

# 往生際の悪い抵抗勢力

「よし、今日の研究はここまでだ」
「「はいっ」」
修士課程になったあたしと浩介くんは、蓬莱教授から研究の手ほどきを受けている。
研究では、初めて学界での発表ということも行った。
そこで分かったのは、学界での蓬莱教授は、かなり畏怖されるようになったということ。

「俺は元々この国では最年少のノーベル賞学者というのもあって、一目置かれてはいたが、不老研究には散々なことを言われたものだ。だが、今の連中の様子を見てどうだった？」
初めての発表を終え、緊張がほぐれたあたしに、蓬莱教授がリラックスした口調で話す。
「かなり、扱いにくそうだったわね」
特に高齢の教授からは、腫れ物にさわるような感じさえ受けた。
「だろう？　奴ら、散々俺に圧力をかけて、旧帝の教授でもおかしくない俺を佐和山大学に追いやったんだぜ。ま、お陰で好き放題出来るから、利害は一致してたけどな」
蓬莱教授がにんまりと笑う。
あたしはまた、６年前の水族館でのことを思い出す。
あの時、蓬莱教授は、「俺に逆らう奴も、いつかはひれ伏す」と予言していた。
蓬莱教授は、自らの手で予言を成就させた。
あれから６年、蓬莱教授も既に５０代で本来なら壮年になっているが、蓬莱の薬の効果もあって、６年の老化を全く感じさせていない。
もちろん、薬は完全ではないから、僅かに老けてはいるはずなんだけどね。
あの６年前の水族館の出来事から４か月後に、蓬莱教授は最初の記者会見を開いた。

恐らく、あの時は１２０歳の薬の完成手前で行き詰まっていたのかもしれない。
「優子ちゃん、どうしたの？」
隣にいた浩介くんが声をかけてくる。
「あーうん、蓬莱教授の予言が当たったなって」
実際に、蓬莱教授はマスコミを屈服させたこともあったし。
「ふふ、優子さん、あれは予言ではないさ。こうなるのは、ほぼ必然だったと俺は思う。何故なら、『不老は決して不死ではない』からだ」
「だろうな」
蓬莱教授の言葉に、浩介くんが頷く。
そう、蓬莱教授がＡＯ入試の時に話してくれたように、「不死ではないこと」が、蓬莱教授の研究に対する反対勢力の勢いを大きく削いだ。
不死を求め、死から免れようとすることへの愚かさを説く作品は古今東西に沢山あるけれど、蓬莱の薬は不死の薬ではないので、それらの批判は全く効果がなかった。
そして、現に不老の人間はあたしたちＴＳ病患者という実物がいて、１人だけではあるが、戦国時代から生きている人がいる。
永原先生たちが不老の人生を否定していなかったために、反対派は説得力を失ってしまったのよね。
「さて、明日以降も頑張ってくれ」
「はい」
残党を集めたと思われる環境保護団体対策も、徐々に進んでいった。
政府が、来る不老社会へ向けての展望を、話すことになっている。
インターネット上では、様々な議論がなされている。
ＴＳ病患者には、社会保障費分の免税特権があることは既に世間でも広く知られていて、そのためにＴＳ病患者は皆比較的裕福な生活を送っている。
ちなみに、これらに対するやっかみの声は少ない。
そりゃあそうだ。不老でもあり、また数多くの病に耐性を持つＴＳ病患者が、下手すれば自分たちより１００歳以上も年下の「老人」の

ために社会保障費を負担すべきというのは、あまりにも理不尽だというのは、中学生でも分かる理屈だ。
永原先生や、江戸や明治生まれのＴＳ病患者からすれば、高齢者といっても自分たちよりも遥かに年下な訳だものね。
ちなみに、最低でも１１３歳になっている明治生まれも、後数年もすればＴＳ病患者を除いて全滅すると言われている。
いや、もしかしたら既に、ＴＳ病患者の方が多数派になっているかもしれないわね。

「ただいまー」
「２人ともお帰りなさい」
家に帰ると、お義母さんが出迎えてくれる。
大学院は忙しいので、あたしは休日も家事を免除されるようになった。
ただ、そうは言っても自主的に一通りするようにしているので、以前と変わらない。
これは、「勘の維持」というのも多分に含まれている。
あたしは女の子になって、女の子が持つ母性というものがいかに大きいかを知ることができた。
あたしの中で明確に母性が生まれたのは幸子さんの所に来たときだけど、今はもう、あの時よりも遥かに自分の母性について考えることが多くなっている。
それは、まだ見ぬ浩介くんとの赤ちゃんのことも、多分に含まれていると思う。
両方の性別を経験すると、「母親」という言葉が身に染みてくる。
「ふー」
初めての学界発表で、あたしも疲れた。
あたし自信がＴＳ病患者、それもかなり著名な患者というのも、拍車をかけていた。
後、教授陣があたしの胸に視線を集中していて、危うく浩介くんが嫉妬しかけてた。

まあさすがに、あんな高年男性になびくはずがないことは浩介くんも分かっているので、すぐに冷静になってくれたけど。
ちなみに、あたしが発表したのは、修論に回したことの一部だった。
ＴＳ病患者の遺伝子分類、そして今だ未発見のγ型の存在。
γ型がもし存在しないならば、どのようにして蓬莱の薬を完成させるのかというのも、今後重要な課題になってくるだろう。
「とにかく、今は研究しかないわね」
今後の多忙さ次第では、政府との交渉も欠席した方がいいのかもしれないけど、それをすると協会と蓬莱教授との調整役がいなくなってしまうため、あたしは小さな打ち合わせでも必ず出席している。
まあ、論文が既に完成している分、他の院生よりいくらかはましだとは思うけどね。
「優子ちゃーん！　ご飯よー！」
「はーい！」
あたしたちの、忙しい生活はまだ始まったばかりだった。
でもしばらく、膠着状態が続きそうだわ。

「速報です、国際環境保護団体は本日声明を発し、全ＥＵ諸国に対して蓬莱の薬に対して受け入れるかどうかの国民投票をするように要求しました。なお欧州各国の世論調査では、ほぼ全ての国で、蓬莱の薬に対する支持不支持は６０対４０程度とのことです」
事態が動いたのは６月のことだった。
環境保護団体のロビー活動と、蓬莱教授の宣伝部、協会の広報部、そして政府の公安調査庁の連合軍がしのぎを削る中で、世論調査はややこちらに有利だった。
ちなみに、政府と決めた蓬莱教授の方針は、まだ世に知られていない。
最終的に、もし蓬莱の薬を受け入れない国が出た場合の制裁案として、「２００年間、当該国民に蓬莱の薬は融通せず、また帰化による逃げ道も認めない。この方針に異を唱えた政治家や家族、国家も同罪とする」というものだった。

これを発表した暁には、諸外国から相当な圧力がかかることは想像に難くない。
もちろん政府側は撥ね付けるつもりであるし、蓬莱教授としても「認める国は使う使わないを選べるが、否決する場合選べない。制裁されるのが嫌ならば可決すればいい」と反論するつもりらしい。
とはいえ、それはあくまで悪い想定であるし、世論調査ではこちらが有利なことも分かっている。
しかし、今ではかなり昔の話になるけど、あたしが女の子になる前に行われたアメリカ大統領選挙や、イギリスのＥＵ離脱など、世論調査と実際の結果が相反することも少なくない。
「これ、国民投票が行われるんでしょうかねえ？」
「うーん、しばらく様子見といったところでしょうか？」
テレビのコメンテーターさんも、話に窮している。
蓬莱教授からは、動きはない。
あたしたちに連絡がいってもおかしくはなさそうだけど、大学院に入ってからは、あたしたちは本格的に研究がメインになっている。
特にあたしに対しては、雑用が他の院生より更に免除されていて、ささやかながらも、自分のための研究の時間まで蓬莱教授は提供してくれていた。
ブー！　ブー！　ブー！
「優子ちゃん」
「ああ、うん」
携帯電話が鳴っている。
あたしは手に取り、蓬莱教授からの電話だと気づいた。
「もしもし」
「ああ、優子さんか。俺だ。蓬莱だ」
「はい」
やはり出てきたのは、予想通りの人物だった。
「例の環境団体の国民投票、各国の世論操作を今公安調査庁とＣＩＡで協議している」
ＣＩＡとしても蓬莱の薬は願ったりかなったりなため、今ではすっ

かりあたしたちの味方になっている。
　とはいえ、蓬莱教授も、日本政府や公安調査庁ほど信用はしていないし、ＣＩＡとしても、「むしろその方が助かる」とのことだった
「それで、どうなんですか？」
「環境保護団体に、既にＣＩＡも公安調査庁も、エージェントを送り込んで潜入を開始しているぞ。ただ、６０％の支持率は、過半数を確保しているとはいえ、日本の９７％と比べるとかなり低い」
　蓬莱教授はやはり最低でも７５％、つまり４分の３の支持は欲しいと思っている。
　また日本政府も、各国に対して蓬莱の薬に対する推進運動を展開している。
「ですが、なかなかに難しいのでは？」
「でしょうねえ」
「もしかしたら、優子さんにはまた、宣伝役を務めて貰うことになるかもしれん。覚えておいてくれ」
「……分かりました」

「えー、速報です。ドイツの――」
　電話を切ろうとしたその時、ドイツの首相が１か月後に国民投票を行うと発表したニュース速報が流れた。
　どうやら、全面戦争が展開されそうね。
「蓬莱教授」
「ああ分かってる。とにかく、『有能な味方』だけでなく、『無能な敵』も増やさねばなるまいな。俺たちの出る幕じゃあなさそうだ。研究に専念して、早く薬を作ることの方が大事だろう」
「……分かりました」
　既に米軍よりも強力なカードを持っているとはいえ、あたしたちは所詮は大学教授を中心とした研究期間でしかない。
　宣伝部もいるし、協会や高島さんのブライト桜といった強力な味方はいるけれども、それでもあたしたちがあれこれ手に終える限界を越えていた。

「早めに政府とパイプを築いておいてよかった。根回しは、大事だな」
最後に、蓬莱教授がそう呟いて、電話が切れた。
「優子ちゃん、蓬莱さんは何だって？」
電話が切れると、浩介くんが早速話に割り込んでくる。
「うん、あたしたちで出来ることはもう多くないから、研究に専念すべきだって」
「そうかあ。よかったな。政府と関係を持っておいて」
「うん」
浩介くんも、やはり蓬莱教授と同じ感想を持っていた。
政府間でも、もちろん省庁によって見解の相違はあるが、ほぼ意思統一は図れたし、将来的に政権交代が起こっても、野党への根回しと９５％以上の支持率を背景に、この計画は完璧なほどに磐石だった。
ただ、ここで失敗すれば、外圧との戦いが待っていることになる。
とはいえ、あたしたちには何も出来ないかといえばそうではない。
今後も政府との協議には呼ばれるだろうから。

ドイツが国民投票をするというニュースが流れ、日本でも様々な世論が巻き起こっている。
とはいえ、考えが変わった人はほぼなく、むしろ「なぜ未だに海外では反対派が根強いのか？」という方向での議論が中心だ。
また、蓬莱教授もかねてから予定通り、「否決した場合の制裁案」を全世界に向けて発表していて、これが反対派をかなり動揺させた。
とにかく徹底した連帯責任を取らせることで、他者の気持ちを慮ることのできる人間を追い詰めることが出来るのよね。
さて、そんな中で、あたしたちは大学院の生活にも徐々に慣れていった。
多忙になると、浩介くんといちゃつく時間は減っているけど、毎日顔を会わせているのもあって、信頼関係に傷がつくことはない。
それはそう、あたしも浩介くんも、「今忙しいのはあたしたちの将来に対する投資」であることを、十分に理解しているからだった。
あたしも浩介くんも、高校生の頃の自分たちと比べて、何もかもが

「大人」になっていることに気づいた。
それも、下手な社会人よりも遥かに、だ。
それは蓬莱教授と永原先生、比良さんに余呉さんといった人々の影響が、とても強いからだと思う。
協会の人たちは、外見は少女だし、普段の振る舞いもそんな感じになっている。
だけど、めぐってきた人生経験は、確実に彼女たちを成長させていた。
彼女たちが「大人を越えた大人」になるのも、永原先生をはじめとした人の影響を受けるからでもあると思う。
「優子ちゃん、そっちはどう？」
「うーん、なかなかうまくいかないわね」
あたしは今、γ型の捜索を研究としている。
これは、本来なら博士課程でするべきことだけど、蓬莱教授曰く、「当事者である優子さんだからこそ、俺に出来ない発想が出来る可能性が高い」と言っていた。
「うーん、私には何が何だか分からないわ」
蓬莱教授のそういう助言もあって、研究室には歩美さんも入れている。
しかし、歩美さんは大学院に行くつもりはあまりないらしく、助手的な役割に終始している。
どこかに、γ型の痕跡があるはずだけど、あたしにはまだ発見できていない。
とはいえ、「千里の道も一歩から」とも言うし、今はこつこつと、事を進めるしかないわね。
「うーん……」
実験が終わるとあたしはいつもよりこった肩に手を当てる。
「優子さん、大丈夫ですか？」
「え!?」
歩美さんが心配そうに声をかけてきて、あたしが一瞬驚いてしまう。

「優子ちゃん、最近根を積めてる気がするぜ」
浩介くんにも心配されてしまう。
「あはは、その、最近ちょっと肩がこっちゃってて」
肩こりそのものは、女の子になってからほぼずっとだけどね。
「あーうん、そうだろうなあ」
言われなくても、浩介くんがあたしの肩に向かってくれる。
ぐいっ……ぐいっ……
「んー！　気持ちいい！」
浩介くんのマッサージはいつも気持ちいいわ。
歩美さんが羨ましそうにあたしたちを見ている。
「あ、歩美さん、これ終わったらマッサージしてあげる」
「う、うん……」
歩美さんは、浩介くんのマッサージを受けたいと思っているけど、当然あたしは巧みにシャットダウンする。
ふふやっぱりあたし、独占欲があるわよね。でも何だろう？　浩介くんが誰かに浮気したとしたら、浮気した女ばかり呪いそうだわ。
……って、そんな変なこと考えちゃダメよ優子。
「山科も肩こるんだな」
「うん、優子さんと同じで、女の子になったばかりの時は良かったんですけど、徐々にこってしまって」
ＴＳ病の女の子は、肩こりになりやすい。
もちろん、胸が大きいために肩がこるというのに加え、女の子になったばかりの時に、慣れない女性の体を扱うために肩がこるという一面もある。
永原先生も肩こりに悩んでいたし、多分幸子さんも肩がこっていると思う。
「ふー気持ちいいわー」
あたしのマッサージに、歩美さんも満足そうな表情を浮かべている。
あたしは、こりの重点的な部分をゆっくりとほぐしていく。
「うん、ありがとう」

あたしはパワーはないので、そこまで強く押すことは出来ない。
なので、体を傾けて、重力で押すというマッサージが多い。
「それにしても、肩こりに悩んでいるって言いにくいわよね」
マッサージが終わると、歩美さんがそう呟く。
「うんうん、あたしも、高校の時贅沢な悩みだって言われたわ」
浩介くんがキョトンとしている。
まあ、覚えてないのも無理もないかな？　あたしにとってはクラスの女子との肩こりのイベントは特に思い入れが強いんだけど。
「あーうん、そうそう。私も高校の時、肩こりは贅沢な悩みだって言われて、『どうして？』って聞いたら、『やっぱり優子ちゃんはまだまだ女子力低い』って言われたわ」
ＴＳ病の女の子は、女子力低い行動を見せると他の女子からいじられる傾向にある。
それは善意からというのもあるし、女の子になろうとしている元男という立場が考慮された「いじり」だったりもする。
でもどちらにしても、ＴＳ病患者にとって、女子力の向上は大事なことだから、素直に受け取って女子力を高めることが重要になる。例え、その女子本人が出来ていないことでもね。
生粋の女の子以上に女の子らしくなることが大事になってくる。
幸い、この手のお説教で多かった相手は、女子力が高かった桂子ちゃんだったのも幸いだったわね。
「そうなのね。優子さんにも、そんな時代があったんですね」
歩美さんがしみじみとした表情で言う。
「ええ、あたしも女の子初心者の頃があったのよ」
今ともなれば、「胸が大きい」というのは、肩こりになるということはよく知られている。
「よし、じゃあ今日は帰るか」
「うん」
あたしたちは「蓬莱の研究棟」を出て、各々の家路につく。
途中、たまたま桂子ちゃんとも出会っていて、「ついていくのは結構大変だけど、それでも頑張っている」とのことだった。

ドイツでの国民投票は気になるけど、今は研究のことを考えないと。

あたしには、一個気になる点もあるし。

# 不老と世界征服

矢のように早い時が過ぎていき、季節は既に7月になっていた。
日本時間の明日には、いよいよ最初にドイツで国民投票が行われることになっている。
あたしたちはそんな中でも、変わらず実験を続けた。
「さて、いよいよ明日だな」
蓬莱教授も、さすがに緊張の色を隠せない。
もちろん、この国民投票は、ＥＵでの今後を占う重要な試金石になる。
永原先生は相変わらず、「拒絶するならするで、『手駒』として扱えばいい」と言っていた。
まあ、それは極端にしても、何らかの手を打つ必要性はあるだろう。
世論調査は蓬莱の薬の支持率はＥＵ諸国としては低めで６２％になっている。
これは十分にひっくり返り得る数字でもあるから、注意する必要性があるだろう。
特に宗教の強い国には要注意だ。
日本で大騒ぎし、「国際反蓬莱連合」を作り上げた例の牧師の足取りは、依然掴めていない。地下に潜っていると言っても油断をしてはいけない。
どちらにしても、あたしたちに出来るのは実験と、後は協会と蓬莱教授の間を取り持つことくらいだけど、政府との交渉でも最近は調整もできてきてあたしたちの役割も相対的に低下しているのは否めないのよね。
まあ、蓬莱教授も永原先生も物分りいい人だものね。
「ねえ優子ちゃん、ここなんだけど」
「ああうん、ここはね――」
あたしは、浩介くんと一緒に、課題の実験をし続けている。
ともかく、するべきことをしないと、不老の薬への道筋はたたない

わ。
蓬莱教授は、あたしたちが大学院に入ってからは、本格的に蓬莱の薬についての研究の詳細を述べてくれるようになった。
あたしは、γ型の発見において、ぼんやりとだけど発見のための道筋が見つかりつつある。
それは、蓬莱教授がおそらく想定してないことだと思う。
だけど、まだ断言は出来ない。何より実験さえしていない仮説な上に、もしかしたら蓬莱教授も気付いていて単純に「順番待ち」なだけかもしれないから。
そこで、あたしは大学院のするべきことを今年に目一杯回し、来年は既にできている論文に関係する時間を、独自研究に充てることにした。
そう言う意味でも、今年は我慢の年になるわね。
ガララララ
あたしたちが課題の研究をこなしていると、研究室に、宣伝部の人が入ってくる。
「失礼します」
「お、ご苦労。それで、首尾は？」
蓬莱教授が出迎えてくれる。
おそらく、今ドイツで開かれている「蓬莱の薬に対する国民投票」についてのことだわ。
「現在開票速報をしています。現地メディアの見方では、蓬莱の薬賛成派が６６％の得票を得て可決とのことです」
宣伝部の人から聞こえてきたのは、世論調査よりも高い調査結果だった。
「ふーむ。うん、それはよかった」
蓬莱教授が落ち着いた様子で、しかし内心ではとてもホッとした様子で一言述べた。
それを合図に、研究室でも安堵のため息が流れた。
「しかし、安心はできません。今後フランス、スペイン、イタリアなどの国民投票、更にはＥＵに所属していないイギリスがどう出るかが、

不透明です。また、ロシアや他のアジア諸国、第三世界の動向も気になります」
宣伝部の人はその専門分野柄か警戒心を解いてはいけないとしている。
もちろんそれはあたしたちもそれは分かっている。
「うむ、ともあれ、まずはＥＵだ。アメリカ、日本、ＥＵを手中に納めれば、我ら蓬莱の薬は必ず、全世界に成就するはずだ」
蓬莱教授は、ゆっくりと落ち着いた表情で話す。
日本政府が、蓬莱の薬による経済効果として、「老人の不在による社会保障費の大幅圧縮」を宣伝したために、また蓬莱教授を「日本の誇り」と持ち上げるメディアの活躍もあり、日本の支持率は磐石になっている。
また、蓬莱教授が宗教に対してかなり悪い印象を持っていることは、海外には殆ど知られていないらしい。これも、プラスに働いたと思う。
そしてアメリカ世論もＣＩＡの活躍や蓬莱教授の宣伝部の力もあって、一部の過激なキリスト教徒を除いてほぼ支持で一貫している。
日米欧を親蓬莱で固めさえすれば、後は中国程度ということにもなる。
しかし、蓬莱教授曰く、「あの国が俺の蓬莱の薬に反対するとは露ほどにも考えていない」と断言していた。
それもそのはず、あの国は秦の始皇帝の時代から「不老不死」を追い求めてきた国だからものね。
「さて、優子さんに浩介さん、今日の実験が終わったら、ちょっと来てくれないか？」
宣伝部の人が部屋から出ると、蓬莱教授から突然の依頼が来た。
「はい」
何のことかは分からないが、ともあれあたしたちも返事をしておく。

「さて、呼び出して済まなかったね」
「いえ、いいんです」
今日するべきことが全て終わり、あたしと浩介くんが、研究棟1階にある蓬莱教授の個人室に呼ばれた。
蓬莱教授が、水を出してくれる。
「さて、俺の研究だが、可能性を全てしらみつぶしに検討している最中だ。遅くても来年春までには、いい知らせが届くだろう」
蓬莱教授は、確信に満ちたように自信満々に答えてくる。
あたしとしては、まだ一ヶ所、取り違えている所もあると思うし、多分このままだとまた実験に行き詰まるとも考えている。
しかし、そうだとしてもあたしの予想が正しいとも限らないからまだしゃべれないけど。
「はい」
浩介くんも、まだ気付いていない。
いや、今回の実験のことに気付いているのは今のところあたしだけだ。
でもまずは、蓬莱教授の話から聞かないといけないわね。
「蓬莱の薬が完成した暁には、全世界に販売をしなければならない」
「ええ」
それは、蓬莱教授の基本的な方針だった。
最終的に全世界全人類の不老を目指す。それが蓬莱教授の一貫した計画になっている。
「そこで、俺たちの会社……『蓬莱カンパニー』を作ろうと思う」
そう言うと、蓬莱教授が野望に満ちた鋭い目付きになる。
「会社……つまり蓬莱の薬を販売する会社ですよね？」
「その通り。政府との協議で、蓬莱の薬の販売形態については話したよな？」
「ええ、超長期分割払いによる、インフレ考慮の特例や、死亡時の相続放棄禁止。特許の特例などですよね！」
あたしが、以前の協議のことを思い出しながら話す。
「その通り。恐らくこの蓬莱の薬は地球社会と人類史にかつてないほ

どの変革をもたらす。故に、蓬莱の薬を発売する企業には絶対的な安定が必要不可欠だ。そのために、私はあえてレントシーカーになったのだ」
「レントシーカー？」
おおよそ、聞きなれない横文字の単語にあたしは首を捻る。
レントをシークするってどういうことかしら？
「そう、レントシーカー。あー、つまりだ。政府に働きかけて蓬莱の薬に永遠の特許と独占を保証することで、薬によって得られる利益を独占するというものだ。発明したのは俺だし、人類の時間をこれまでの数倍数十倍あるいは数百倍以上にしてくれるものだ。これくらいの利権、当然とは思わないかね？」
あたしには、蓬莱教授が考えていた構想がよくわかった。
すなわち、蓬莱の薬による社会の大変革による不安定化による治安悪化を緩和させるためという名目で、全世界の人々があたしたちの蓬莱の薬を買うというビジネスモデルだ。
政府に対して自分たちが儲かるために法的規制を呼びかける。これがレントシーキングというものらしい。
「宇宙開発によって、人類の行動範囲が広がるようになれば、強固なビジネスモデルになるだろう。人が増える限り、この会社は繁栄を約束される」
蓬莱教授がそのように語る。
蓬莱教授の見立てでは、最初の１００年は日本人のみの開放として述べ２億人、８０億人の世界人口のうち、世界に開放した暁には１年あたり２億人を新規顧客として想定しているという。
随分と楽観的だとは思うけど、蓬莱教授曰く、「分割払いは最長１００年まで考えている」とのことだった。
「あれから少し考えたんだが、最初の値段として蓬莱の薬の値段は３億円を考えている。段階的に引き下げて最終的にはインフレ込みで今の価値で２０００万円にしていきたい。もし１０００年分割払いなら月２０００円の負担にしたい」
１０００年で２０％とは、もはや金利と言えるかさえ分からない良

心的な値段。
　もちろん、１０００年後のお金の価値は大分インフレしている筈で、それを込みにして値上げがなされていくのがこの契約の味噌だ。
　もし、２億人が２０００万円を１０００年分割払いにしたとして月２０００円で２４０００円、それが２億だと年間の売り上げは４．８兆円になる計算だ。
　それどころじゃない、例えば世界開放した時に分割払いを続けている人が膨れ上がって毎年毎年売上金が４．８兆円ずつ増えていく計算になる。
　１０００年もかかると言うだけで、１人１人は毎月２０００円しか払わなくていいという良心的な内容だが、世界人口レベルでそれをやってしまえば、とんでもないことになってしまうわね。
「そして、今後生まれてくる難病の子供のために、我が薬の『副作用』に期待する需要を見込んで『１２０歳の薬』も販売することにしよう。こちらはまあ、副業の特効薬程度に考えておこうか」
　蓬莱教授によれば、こちらは手頃な値段で販売するという。
「さて、この『蓬莱カンパニー』だが……会社として設立するためには人材と株主を決めねばならない」
「株主……」
　有限会社という制度もあるが、あたしたちが子供の頃に廃止されているし、こんな巨大な会社でそれは許されないわよね。
「もちろん、上場するかどうかの問題もある。仮に上場するにしても、乗っ取りだけは避けたいからな。そのためにも身内で相当数を固めたいと思っている。俺が株主にと考えているのは、俺たちの他には、永原先生が率いる協会だ」
　蓬莱教授が利害関係を調査する。
　もちろん株主としては、あたしたちも含まれる。
　……上場したら配当だけでとんでもないお金になりそうだわ。
「経営者の人事についてはまだ未定だが、少なくとも俺は研究に専念したい。もしかしたら筆頭株主にはなるかもしれないが、物は言わないつもりだ」

蓬莱教授は、経営が専門ではない。
それに、お金ならば既に十分に多いということもある。
今年の蓬莱教授の資産額は２１億ドルで、世界でもそれなりの地位にあるビリオネアだ。
「いずれにしても、この不老商法が実現すれば、ただでさえ虫の息の俺に対する抵抗勢力は、たちどころに力を失っていくだろうな」
蓬莱教授は、既に社会保障制度の大幅整理を政府と約束している。
これは蓬莱の薬の実現により、社会保障以外に様々な国家予算を割り当てることが出来るメリットが極めて大きいからだ。
しかし、これは事実上選択の強制でもあることに、あたしは気付いている。
「不老商法と、それに伴う社会保障制度の大撤廃……具体的には老人に対する保証を全廃することで、この世は否が応でも俺たち……この蓬莱カンパニーにひれ伏さざるを得ない社会になるというわけだ」
もし、人口の大半が蓬莱の薬を飲んだ人で埋め尽くされた将来の日本があったとする。
蓬莱の薬を飲まなければ、最初から不老であるＴＳ病患者を除いて老いたときにその人はぼろ雑巾のように捨てられることになる。
そうならないためには、蓬莱の薬を飲むことが、唯一の回避方法になる。
そして、その人はごく僅かな金額とは言え、数百年から１０００年にかけて「蓬莱カンパニー」に薬の代金を支払い続けねばならない。
更に、少しでも「蓬莱カンパニー」に逆らうものが現れれば、家族や国単位で連座させると脅しをかける。
新規参入を要求した国や集団も、制裁対象になる。
蓬莱の薬を飲むことができなくなれば、それは死刑宣告と同義である。数百年数千年の命が当たり前になれば、長くて１００年の今の普通の人の人生など死刑に等しいだろう。
家族や縁者、下手すればその国の国民全員に責が及んでしまうともなれば、よほど精神が倒錯した状態でもない限り二の足を踏まざるを得ない。

そしてそれらを正当化させるため、「民間企業」という名目を持たせるためにも、政府は株主にはさせないという。
場合によっては「政府も脅されている」「逆らったら蓬莱の薬を売ってくれない」ということにして、行政さえ蓬莱カンパニーに逆らえないように「演じる」ことも想定されている。これは、行政側ももし外圧があればそういうことにしておいた方が都合がいいということで、あっさりと了承してくれた。
仮に蓬莱カンパニーに直接外圧があったとしても、「民間企業に外国政府が口を出すな」「日本国内のみ販売だから外国は関係ない。内政干渉するな」「安全性と流通を保証できない」の一点張りでしらばっくれればいい。
万が一日本政府に外圧を全力でかけたとしても、極端な話戦争になったとしても、それこそ早期に仕掛けられでもしない限り、蓬莱の薬で不老集団となった日本では旧人類では太刀打ち出来ない。
最終的に蓬莱カンパニーが脅せば、報復制裁を決意した時のリスクを考え海外政府も受け入れざるを得ないだろうと蓬莱教授は踏んでいる。

「蓬莱教授」
ここまで聞いて、あたしは話を中断させる。
「何だ？」
「永原会長も相当な世界支配構想を持っていると思いましたけど、蓬莱教授の方がよっぽどえげつないわ」
正直、永原先生の漫然とした世界征服構想何かよりも、圧倒的に用意周到だわ。
しかも政府や国ではなく私企業による実質的な世界征服というＳＦの世界そのものの構想なのに……本当に恐ろしいわ。
「はは、そうかもな。だがこれは国家の支配じゃない。その分永原先生よりは有情だろ？　それに、有史以前からＴＳ病患者を除くほぼ全ての人間が苦しめられてきた『老い』から解放されるんだ。この程度の特権は享受してしかるべきだろう？」

蓬莱教授は、平然とした表情でとんでもないことを話す。
国家の支配よりも企業の支配のほうが、ずっとえげつないと感じるのはあたしだけかしら？
蓬莱教授は、本格販売後に反対運動が起きた場合、本人以外に制裁対象を広げ、また密告制度により技術の流出を防ぐという。
とは言え、確かに技術防衛が必要なのはその通りで、だけど特定の国による世界秩序よりも、更にたちが悪い気もするわ。
「まあとにかく、今は構想だけだ。薬が完成し、量産体制に入らないと行けねえからな。ともあれ今日はここまでだ。今の話、頭の片隅にいれておけよ」
「はい」

「なあ優子ちゃん」
帰り道、浩介くんがあたしの方を向き、重い気持ちで話しかける。
「蓬莱さんがさ、６年前に水族館で言っていたことがさ。俺にはやっと分かったよ」
浩介くんが、恐怖混じりに小さく囁いてくる。
「うん」
蓬莱教授はあの時、「俺に反対する連中も、いずれ俺にひれ伏す時が来る」と言っていた。
今までは、それは単に「見返してやる」程度の意味にしか捉えてなかった。
だけど、それは間違いだった。
蓬莱教授が「ひれ伏す」というのは、文字通り「奴らは俺の被支配者になる」という意味だった。
以前から何となくその意味で言っていたことには気付いていたが、あたしは見て見ぬふりをしていた。
「永原先生がさ、戦国時代の習わしとして、『連座制』を蓬莱教授に提案した時に、蓬莱教授の『世界征服構想』は完成していたんだな」
浩介くんがやや恐怖感に包まれた表情をする。
永原先生と蓬莱教授、もしかしたら、この２人が組んだ時から世界

の運命は決まっていたのかもしれない。
「ええそうね。でも、あたしたちは支配者側、そうでしょう?」
実際、蓬莱教授は「優子さんたちを大株主にさせる」とも言っていたし。
「だな」
あたしたちは、ゆっくりとした足取りで家へと帰還した。
蓬莱教授の構想は、間違いなく世界から大きな反発を受けるだろう。
そうならないための対策を、政府とも協議しなければならないだろう。

## 海外の動向

「外務省としては、蓬莱教授の会社運営の構想について一部賛成です」
総理大臣も呼んだ大会議、この前の話を蓬莱教授は政府の前で開陳して見せた。
各官僚閣僚たちが判断を決め兼ねていると、真っ先に外務次官が立ち上がった。
外務省の反応は、「一部賛成」というものだった。
「一部というのは？　何処かに反対する部分があるということですかな？」
蓬莱教授がやや訝しんだ様子で外務省官僚に尋ねる。
「あー、政府が株主にならないという所です」
やっぱり、そこに噛みついてきたわね。
外務省の立場としては、蓬莱の薬を外交カードにしたいという一面が強い。
政府が株主になるのは、言わばそのためだ。
「しかし、政府が株主となると、相手も軍事力を持ち出す危険性がある」
蓬莱教授は、その事を懸念している。
今でこそある程度の攻撃能力を持った日本の自衛隊だけど、まだまだ予算的には足りないところもある。
蓬莱の薬ができれば、社会保障費が大幅削減されるため、この防衛関係費も7倍に増額される予定にはなっている。
とは言え、軍備の整備には予算だけではなく時間もかかる。
もちろんそのために、「万一の安全」を言い訳に、当初は日本人限定で販売するのだ。
「ふむ……」
やはり外務省官僚も、軍事力を相手に持ち出されると難しくなってくるらしい。
「ただでさえ、ガチガチのレントシーキングをしたんだ。国際社会からの批判をかわすためには、あくまでも『純民間企業』という体裁を

取らなければならないと俺は思う。だから公務員の天下りも一切認めないことにする」
蓬莱教授には、その辺は譲歩するつもりはないらしいわね。
「うむむ……」
最近では、蓬莱教授の発言力も政府内で強くなっている。
もちろん、それでも政府との妥協は必要で――
「とは言え、政府からはアドバイザーを派遣するというのはどうでしょう？　あくまで無関係という体裁で、社員を使って取り次ぎをさせたい。そこで政府から何かあれば、アドバイスを聞くことにしよう」
「うむ、それならこっちとしても願ったり叶ったりだな」
蓬莱教授としても、政府は味方につけたい存在だから、ある程度の顔色は窺う必要があるし、専門外の分野については積極的にアドバイスを聞きたいところだと思う。
また政府や官僚側としても、うまい汁は吸いたいけれども、蓬莱教授を怒らせてしまって、何らかの制裁対象にされてしまえば元も子もなくなってしまう。
その両者のつばぜり合いは、やや蓬莱教授側に優位に傾きつつも、複雑な様相を見せ始めているわね。
いずれにしても、この手の問題は０か１００ではない。
それぞれの勢力のことも考え、今回は蓬莱教授の６５、外務省の３５といった感じでの妥協になった。
更に、厚生労働省側が、「蓬莱の薬について医療保険を適用させるべきである」という案を出してきた。
これに対して社会保障費の圧縮という大義名分から財務省が大幅適用に慎重な立場になり、両者で利害が衝突した。
これについて、蓬莱教授が仲裁に入った。
蓬莱教授は、短期的には財務省寄りの立場を、長期的には厚生労働省寄りの立場を見せた。
蓬莱教授の戦略としては、まずは短期的に社会保障費を大幅削減を実現させて見せ、浮いた国家予算で産業振興などに多くをつぎ込むこ

とで国力を増強して見せる。
しかし、「持たざるもの」が出ることは財務省としても本意ではないということを名分に、５０年後程度を目処に、老人がいなくなったのを見計らって蓬莱の薬に対して一定の保険を適用させるという案を示した。
これについては、財務省と厚生労働省でそれぞれ５０対５０の解決法となり、蓬莱教授の仲裁案に双方が納得して、矛を収めてくれた。
蓬莱教授も、心なしか交渉術がうまくなった気がするわ。
あたしなんて、まだまだよね。
「私としては、この不老事業を国家ブランドにしていきたいと。不老の国日本、不老立国日本の実現を、政府与党のスローガンにしていきたいです」
総理大臣がそう言うが、実際のところ野党も既に蓬莱教授の味方になっている。
そうなると、むしろこのスローガンには野党も積極的に乗っかかってくる可能性が高い。何せ蓬莱の薬には９７％以上の支持率がある、いくら「何でも反対野党」と揶揄されていると言っても、これほどの支持率のある事象に対して反対なんてすることは出来ないことくらい分かる。
むしろ外国から、「不老翼賛」とか「不老全体主義」と、一方的にレッテルを張られることの方が怖いというのが正直なところだわ。
「まあ、政府が広報してくれるのはありがたい」
蓬莱教授が満足そうに話す。
確かに何らかの外圧を呼び込む危険性はあるが、メリットが上回ったと蓬莱教授は感じているみたいね。
「ええ、私たちも、不老社会の実現と共に、本当の意味での、生涯の伴侶を得られることを、楽しみにしています」
永原先生も、政府の更なる大々的な広報には歓迎してくれている。
むしろ、協会の方がこのスローガンには賛成しそうではあるわね。
蓬莱カンパニーの設立について、まだまだ微調整は必要だけど、それでもこの世界が間違いなくいい方向へと進んでいるのは確かだっ

た。
その後も政府との交渉は続いた。
各省庁の利害調整も、大分進んできて、完全不老の薬さえ出来れば、記者会見を開くことも出来るだろうと感じた。

政府との交渉が終わり、駅を降りて自宅への帰り道のこと。
あたしと浩介くんは、駅前のラーメン屋台に並ぶ行列を目にした。
そこの屋台は、「高級ラーメン」と名乗っていて、値段は学食の３倍近い１５００円もするラーメンだったが、その値段でも競うように食べ求める人々がいる。
ここ数年、スーパーでも、いやコンビニでさえも、高級志向の製品が日に日に増えているのが見て取れた。
それは、消費者たちの考え方が、大きく変わったことの表れでもある。
蓬莱の薬に対する人々の希望が、これまで以上の好景気を、２０２３年の日本にもたらしてくれていた。
あたしが１０代後半頃までは耳が痛くなるほど聞いた、「実感はない」「金持ちだけ」何て声はもうどこからも聞こえてこない。
そんな声があれば、「あなたの感性がおかしい」と言われるのがオチになっているもの。
「浩介くん」
それでも、こんな高級ラーメンに、こんなに多くの人が並んでいる光景は、初めてだった。
「ああ、すげえよな。高級ラーメンにあんなに人だかりが出来るなんて」
浩介くんにとっても、驚きの光景だった。
「あたしたちに、運命がかかっているわね」
「だな」
今でも好景気と言っていいと思うけど、これから蓬莱の薬がもたらすであろう好景気はこんなものではないことはあたしにも分かる。
経済産業省の試算では、蓬莱の薬を日本人全員が享受した場合、社

会保障費と老人という足枷がなくなった日本は、薬享受から２５年で世界最大の経済大国に君臨し、１００年目には全世界のＧＤＰの半分を占めるに至るという予測さえあるのよね。
とは言え、日本解禁の１００年後には全世界で蓬莱の薬が発売され、その後は不透明だ。
最も、１００年のアドバンテージはそう簡単には崩せないだろうというのが経済産業省の予測で、それにはあたしも蓬莱教授も賛成だけどね。
「浩介くん、あのね」
あたしは家の前で、浩介くんに向き直る。
「何？」
「その……あ、愛してる」
うー、面と向かって言うのって、やっぱり恥ずかしいわ。
「う、うん……どうしたんだいきなり？　俺たち愛し合ってるのはいつものことじゃん」
浩介くんも、やっぱりピュアで、街灯に照らされた顔がほんのりと赤くなっているのが分かる。
「ふふ、何だか言いたくなっちゃって」
実際、そんな感じだったりする。
何となく言ってみたくなったという感じ。
きっと、さっきのラーメン屋台を見て、気分が乗ったんだと思うわ。
「変な優子ちゃん」
浩介くんがそう言うと、あたしたちはいつもの安息の地に帰ってきた。

「えー、本日はフランスとイギリスにおきまして、蓬莱の薬に対する国民投票が行われています。以前ドイツでは賛成が多数となりまして、日本の医療関係の株が軒並みストップ高となりましたが――」
今日は、ドイツに続いてフランスとイギリスで、蓬莱の薬を受け入れるかどうかの国民投票が行われている。
いずれもドイツ国民投票の影響を受け賛成派が勢いを増している

というのが事前調査で分かっている。
さて、蓬莱の薬の恩恵を受けた日本の未来について予測した経済産業省の試算を、全世界に公開するという案も総理大臣から出されたが、これについては永原先生と蓬莱教授が反対し、あたしたちもそれに同調して、お流れとなった。
独占というと聞こえが悪いが、蓬莱の薬が持つ特殊性ゆえ、それを守る必要があるのだという。
現在、開票が進んでいて、おおむねどちらも幅広い地域で賛成多数と予想されている。
「これね、7年前にあったイギリスのEU離脱の国民投票、あれはですね、残留派の多かったスコットランドと離脱派の多かったイングランドで激しい対立が起きたわけですけれども、今回はですね――」
テレビのコメンテーターさんも今回の蓬莱の薬について、国際的に世論が味方していっているという。
どこの国も、蓬莱教授に期待を寄せていて、寄付金が世界各国から集まっている。
特に、仮想通貨での寄付は、蓬莱教授の資産を更に膨らませる結果になっている。
このままいけば、数年後には蓬莱教授の資産総額が1兆円を突破するんじゃないかと、世間では専らの噂になっている。
「浩介くん、あたしたち、蓬莱カンパニーに勤めるのかな？」
蓬莱教授の会社構想により、あたしたちの未来、将来の就職についても何となく青写真が見えてきた。
「さあ？　でも、悪いようにはしないさ」
蓬莱教授はああ見えて結構筋を通す人間だものね。
もし、蓬莱カンパニーに勤めることが出来れば、あたしたちも裕福な生活はできると思う。
朝のニュースを切り上げ、真夏の佐和山大学に向け、あたしたちは今日も研究棟に向かう。
もちろん、研究棟には取材の申し込みが、世界各国からひっきりなしに来るが、現在は「研究に専念」という名目で（実質もそうだけど）、

全て断っている。
あたしたちは時間通りに、佐和山大学の「蓬莱の研究棟」に入った。
「さて、今日は国民投票の日だが、世論調査からは楽観的な予測が流れている。みんなもいつも通り、過ごしてほしい」
蓬莱教授がそう号令をかけ、今日という1日が始まった。
昼頃に出た結果的では、イギリスとフランス、どちらも賛成の投票が7割を占め、環境保護団体は「厳しい結果」という声明を出さざるを得ない状況に追い込まれてた。
結果的に国民投票は彼らの自爆となり、ますます環境保護団体は追い詰められていった。
自分達が呼び掛けた国民投票は、蓬莱の薬への賛成多数だったのだから。
しかし一方で、蓬莱教授は日に日に焦りを深めていた。
それはそう、うまくいかないからだった。
それと共に、ますますあたしの仮説が現実味を帯びてくる。
「蓬莱教授には、見落しがある」、蓬莱教授はもちろん、他の大学院生や助手の人たちも気付いていない。もしかしたら、ＴＳ病患者だからこそ分かるのかもしれない。
一方で、「１０００歳の薬」も改良され、既に「２０００歳の薬」になっていた。
だけどもちろん、蓬莱教授はこれで満足はしない。
報道機関にも、この事は公表していなくて、やはり浩介くんや蓬莱教授、桂子ちゃんなどが飲んだだけだった。
あたしの仮説を実証する日は、刻々と迫っている。
でも今は、修士課程で行うことを学習していかなきゃいけない。昨年度の貯金があるとは言え、まだまだ油断はできないのよね。
大学院にも夏休みらしき休暇はあるが、大学とは違い教授し次第となっている。
とにかく科学の世界は日進月歩なのでついていけるようになりたい。

幸い、「蓬莱の研究棟」の予算は極めて潤沢で、「超ホワイト」として有名だった。
まあ元々、「ブラック企業」という存在もどんどんと減っていって、今ではそうした企業はあっという間に社員に逃げられてしまうのですぐに立ち行かなくなるようになっている。
これも、人手不足による売り手市場が、政権が代わって以来１０年近くも進んだ結果と言えるわね。
蓬莱教授の方では、徐々に企業の設立にも準備がかかっている。
研究棟には、「不完全でもいいから蓬莱の薬を売って欲しい」という要望が日増しに増えている。
特に２０代後半から３０代の女性からの要望がもっとも多く、中には「元フェミニスト」を名乗る女性からもそうした手紙が送られてもいた。
「うーむ、これも失敗か」
あたしが蓬莱教授に言われた通りに調合し、失敗したことを報告する。
遺伝子のバランスをどう考えるか？　どうすればＴＳ病の細胞を再現できるか？
基本的な原理は、最初の「１２０歳の薬」と全く変わらないし、この根本原理そのものは、あたしも異論はない。
つまり、蓬莱教授の万能細胞を使い、ＴＳ病の遺伝子を完全再現できれば、うまくいくはずだ。でもうまくいかない。
蓬莱教授は、「何かを見落としているかもしれない」と考えている。
「蓬莱教授、あたしに考えがあります」
「うむ、分かった。そこは多分違うとは思うんだが……ともあれ、まずはこれを全て試してからだな。優子さんも、課程をちゃんと進めてくれ」
蓬莱教授がだるく了承してくれる。「そこは多分違う」と言っておきながらも了承してくれるあたり、藁をもつかむ思いなのが分かるわね。
元々、この手の研究は失敗率が極めて高い数打ち戦法なので、助手

や院生の意見も通りやすい。
「はい」
こうして夏の日々も過ぎていった。
この間、ＥＵの各国では続々と国民投票が行われていった。
何かと歴史的にも対立しやすい英仏両国で共に賛成多数になったことが大きな呼び水となり、イタリア、スペイン、ポルトガル、オランダと言った国々も全て大幅に賛成多数となった。
続いて投票が行われた、北欧諸国では、賛成の投票が９割にも達していた。
これは、高福祉に伴う重税が、老人がいなくなるために大幅減税が期待されるからで、蓬莱教授はこの結果を予測していたらしい。
今回の国民投票は一般の選挙と同様に匿名投票だけど、ヨーロッパのインターネット上では、「蓬莱教授の手の者が監視を行って、反対派に対する制裁を試みている」という陰謀論が流れた。
もちろん、これは全くもって事実無根の話だけど、蓬莱教授は「結果として、まだ俺の偉大さを理解できない連中にいい薬になっている」と、この陰謀論を利用するように宣伝部に指示を出した。

「浩介くん、夏はどうする？」
国際的な情勢が一段落し、あたしたちは久々に夫婦で遊ぶ計画を立てることにした。
「うーん、今年も優子ちゃんの水着を見たいなあ」
浩介くんがそう呟く。
今は高校３年生の時に行った例のプールは改装工事中で、海の方に行くことになる訳だけど――
「ねえ浩介くん」
「うん？」
「家でプールにしようよ」

## 楽しい水遊び

「家でプールにしようよ」
あたしの提案は、一見荒唐無稽に見えた。
というのも、家庭用プールというのはあくまでも子供向けのものだから、それを大人２人だけで遊ぶというのは少し変かもしれないと思った。
「え？　あの、膨らませるやつ？」
浩介くんもやや困惑した表情で聞いてくる。
「うん」
「うー、家にあったかなあ……ちょっと聞いてくる」
浩介くんが、立ち上がると、義両親がいるリビングの方に消えていった。
優一の頃は、家での小さなプール何て使ったことはなくて、もちろん女の子になってからも使ったことはない。
幸い、この家には庭があるので、場所に困ることはない。
もちろん、小さな女の子がする遊びだということは知っているけど、いや、小さな女の子の遊びだからこそ、あたしはしてみたいのよ。
既に女の子になって６年になる。つまりあたしが女の子になったときに生まれた子も、もうすぐ小学校に入学することになる。
それなのに、あたしにとって幼い遊びをしたいという欲求は、収まることはない。
もしかしたら、これから数百年単位で、あたしが付き合わなければならないコンプレックスなのかもしれない。
「優子ちゃん、もう家に無いから買いなさいって」
戻ってきた浩介くんが新しく買わなければいけないことを告げる。
「うん、じゃあ準備したら買いにいこうか。えっと――」
あたしは売ってそうなお店を頭に浮かべる。
「佐和山大学の近くにホームセンターがあったじゃん。あそこにあるんじゃない？」
答えが出る前に、浩介くんが即答してくれる。

「あ、うん。そうね」
実はあそこには行ったことは無いんだけど、せっかくだし見てみようかしら？
そう考え、あたしは小さな鞄を用意する。まあ、でもプールを買いに行くだけかな？
「ふふ」
あたしは自然と上機嫌になる。
浩介くんとお出掛けの準備、何だか最近は研究に忙しくて、こういうことも久しぶりだったかも。
結婚してからもデートは多かったけど、大学院になると、やはり忙しさが強いのよね。
もちろん、仲を維持するためにも、夫婦生活は欠かさないけどね。

コンコン
「優子ちゃん、準備できた？」
「うん、バッチリよ」
浩介くんが部屋に入ってきたので、あたしも立ち上がると、定期券で電車に乗って、佐和山大学の最寄り駅に到着した。
「ふう……暑いわね……」
「ああ」
外に出るとむわっとした暑さがあたしを襲い掛かってくる。
あたしはミニスカートだからまだいいけど浩介くんは足元まである長ズボンで見ぬからに暑そうだわ。
女の子のほうが体が冷えやすい分暑さには強くて、しかもミニスカートみたいに露出の多い服で暑さを紛らわせられるのは、女の子に生まれ変われてよかったと思える部分だわ。
この夏の暑さなので、あたしたちは駅についたらすぐに待合室に入って涼む。
このあたりは結構涼しくて、電車の中はもっと冷房がきいていて気持ちよかった。
席は空いてたけど、浩介くんが周囲の視線に嫉妬して、あたしの膝

に浩介くんの荷物も置いてきた。
うーん、スカート、ちょっと短すぎちゃったかしら？
「次は――」
「優子ちゃん、降りるぞ」
「うー」
正直、この涼しい列車の中から出るのは億劫だったけど仕方ないわ。
電車から降りると温度変化もあってさっきよりも暑さが身に沁みてくる。
でも我慢すれば、水浴びできるものね。
ホームセンターへは、佐和山大学への道のりと途中までは同じ。
分かれ道を曲がってしばらくすると、見えてくる。
「ここだな」
浩介くんが指を差す先に、「ホームセンター」の文字が読める看板が見えてきた。
あたしたちは駐車場を尻目にそのままお店の正面入口へと入っていく。
「はうー、涼しいわー」
中に入ると、さっきの電車以上に冷房がきいていた。
とても涼しくて、スカートの中まで冷える感覚が効いてくるわ。
「さ、行こうぜ。水はもっと涼しいだろうからな」
この暑さなら、きっと水着に着替えて水を浴びたらさぞ気持ちいいと思うわ。
そんなことを考えつつ、あたしたちはまずホームセンターを見て回ることにした。
「うーん、こっちかなあ？」
何となくの品揃えの雰囲気で、あたしと浩介くんが売り場を進んでいく。
うーん、この辺がここだから、あるとしたらこっちだわ。
「優子ちゃん、こっちで大丈夫なの？」

浩介くんが不安そうな顔で聞いてくる。
「ええ、大丈夫よ」
あたしが浩介くんを安心させるように話す。
「すげえ品揃えで、俺よく分からねえや」
浩介くんは何でそっちに行くかとかは分かっていないみたいだけれど、あたしについてきてくれる。
ふふ、普段はあたしが頼もしい浩介くんに後ろについていく感じだけど、やっぱりこういうところでは、あたしが優位ね。
あたしにも「主婦」としての自信がついてきたわね。
そうして、家庭用プールのある場所に来たんだけど……
「予想してたとは言え、やっぱり小せえなあ……」
浩介くんの言う通り。
家庭用プールは子供が遊ぶのが主目的に作られてて、大人たる親は1人入るかどうかが想定されている。
なので、サイズも小さいのが多い。これだと、あたしと浩介くんの夫婦2人で遊ぶにはやや手狭になってしまうわね。
「うーん……お、これがいいんじゃない？」
浩介くんが指差したのは、値段が一番高い代わりに、サイズも一番大きいタイプのプールだった。
どうも、これはいわゆる「子沢山」家庭を想定した大型サイズで、これならあたしと浩介くんの2人でも広々と遊べるわね。
「うん、これなら間違いなく入るわね」
「よし、ちょっと待ってろ……よしっ！」
棚のやや上方にあったので、あたしの場合脚立がないと届かない。
そこで浩介くんがちょいと背伸びして軽々と商品を腕に抱えてくれた。
ふふ、やっぱり浩介くん頼もしいわね。
「優子ちゃん、膨らませるために空気入れも手に入れねえとな」
「うん」
あたしは次の商品を見つけるために足を進める。
いわゆるビーチのボールなどを膨らませるためには、空気を流し込

む必要がある。
おそらく、プールの近くにあるはずだわ。
えっと……このあたりに売っているはずだわ。
「優子ちゃん、これで大丈夫？」
浩介くんがポンプの商品がある場所を指差してくれる。
ふふ、お目当ての商品は、あっという間に見つかったわね。
「うん」
浩介くんはプールの箱で両手が塞がっているので、ポンプの方ははあたしが持ち、レジへと進む。
浩介くんは涼しい顔で持っているけど、帰りの電車がなんか心配だわ。
「台車持ってくればよかったかしら？」
あたしは、カリキュラムの時のことを思い出しながら言う。
あの時も荷物が多いので、台車を使って服と本を売ったし、重さはあの時のほうがずっと重いけど、とにかくプールのサイズが大きいのよね。
「いや、大丈夫だろう？」
浩介くんにとっては、あまり重たくないものなのかもしれないわね。

会計を済まし周囲から、微妙に好奇心の視線を感じながら、あたしたちはまた暑さと涼しさを交互に経験しながら家に帰宅した。
少し疲れたので休んでからプール作りに取り組むことになった。
ちなみに、浩介くんがプールを床に置くと最初にしたのはあたしのスカートをめくることだった。
浩介くんは「やばいと思っていたが性欲に負けてしまった」と供述していた。
あたしは気を取り直して、部屋の鍵を閉めてカーテンで窓を多い、水着に着替えることにした。
「うーん」
あたしには、水着の選択肢が２つある。

１つ目は、白いビキニに青い超ミニのパレオをつけたタイプで、あたしが高校生の時に最初に買った水着。幼さとあどけなさ、そして露出度とエロさを兼ね備えた、今でもあたしの中では最高傑作と思える水着。

２つ目は大学の時に買った水着で、こちらは露出度が更に高く、胸を特に強調したビキニになっている。また色も黒で、肉食モードになろうとして着用した水着だった。

言うなれば、この水着は１つ目と比べると浩介くんを襲う意図が強い水着とも言えるわね。ふふ、あの時から、あたしも肉食系女子になることも出来るようになったわね。

「うーん……よしっこっちにするわ」

あたしが選んだのは、１つ目の水着だった。

庭先でことに及ぶ訳じゃないけど、プールが終わったらそう言う雰囲気になることは十分に予想ができる。

そうなった時は、特に積極的にならなくてもエロさを演出できる１つ目の水着が最適だった。

もちろん、肉食系女子になってもいいんだけど、今の浩介くんの気分はそんな感じじゃないものね。

あたしは下着も含めて全部の服を脱ぎ、すっぽんぽんになって水着のブラ、ショーツ、そしてパレオの順に着ていく。

コンコン

「優子ちゃん、そろそろはじめていいか？」

「あ、うん」

あたしは、鍵を開けてドアを開けて、部屋の中に浩介くんを入れてあげる。

浩介くんも既に水着姿で、空気入れとしわくちゃのプールを両手に持っていた。

「うっ、優子ちゃん、やっぱりかわいくてエロい……」

浩介くん、もう鼻の下伸ばしちゃってるわね。

これじゃあすぐに元気になっちゃいそうだわ。

まあ、あたしの魅力を考えれば、当然かしら？
「ふふん、遊び終わるまで我慢するのよ」
「はーい」
あたしが小悪魔チックに言う。
うーん、こういうのは黒い水着の方が似合うのよね。
あ、でもそうでもないかもしれないわね。
「よし、ここだな」
浩介くんがプールを床に置き、小さい蓋を開けて、そこに空気入れの先端を合わせる。
スーポン、スーポン、スーポン……
そして空気入れの棒を上に引き、下に押すを繰り返す。
するとみるみるうちに、しわくちゃだったプールが膨らんで、大きな丸い形になっていく。
何だかこの音ってあれに似て……ってダメダメ！　そんなはしたないこと考えちゃダメよ優子！
「ふう、こんなところかな？」
パンパンになったプールを見て、浩介くんが素早く栓を閉める。
内部はほぼ空気なので、あたしの力でもひょいと持ち上がる重さでしかない。
あたしたちは大きなプールに四苦八苦しながら庭に向かう。
途中お義母さんと出くわしてニヤニヤした顔で「ラブラブねえ」と言われてしまい、夫婦揃って顔が真っ赤になってしまった。

「よし、ここでいいな」
浩介くんが庭にプールを置くと、あたしは庭の水道の蛇口を緩め、ホースを伸ばして中に水をためていく。
水が近くにあるだけで、かなり暑さも和らいでいく。
水着の涼しさも相まって、これで水に入ったらもっと涼しいなあと想像する。
浩介くんは、水着を見る限り別のことも想像してそうだけど。
「なんか優子ちゃんかわいい」

「ふふ、どうしたの？」
水をためていると、浩介くんがぽろっと言葉を漏らす。
あうう、また浩介くんにかわいいって言われちゃったわ。
かわいいって言われるのはもうとっくに慣れっこだけど、恋が続くためにも、意識してドキドキするようにしている。
そうやって意識しちゃうと、本当にドキドキが続くから不思議だわ。多分、浩介くんも同じことしているんだと思う。
「いかにも夏って感じで。左手に水鉄砲とか持ってたらさ」
「あはは」
ホースに水鉄砲で水着でプール、確かにいかにも夏って感じだわ。
「そう言えば、まだあるかも」
浩介くんが思い出したように言うと、庭の倉庫に向けて歩き始める。
あたしの方は既にプールに水を入れ終わったので、ホースを止め、水道も止める。
「優子ちゃーん！　あったぞーー！」
「え!?　どれどれ？」
浩介くんが倉庫から出ると、小さな黄緑色の水鉄砲を2丁をあたしに見せてくれた。
「まだ使えそうだ。これで遊ぼうぜ」
「うん」
あたしたちは、ホースを取ってそこから水を入れて満タンにし、壁に向けてためし撃ちをする。
うん、問題ないわね。
「よし、じゃあ早速、遊ぼうぜ」
「うん」
あたしも浩介くんも、実年齢と外見年齢に大きな相違が現れ始めていた。
あたしは元々、女の子になってからは子供っぽい遊びが大好きだったからいいけど、浩介くんもやはり外見年齢がほぼ停止したために、他の学生たちと徐々に意識が変わっているのかもしれないわね。

それにしても、さすがに外にずっと居て暑くなってきたわね。早く水に入りたいわ。

「んー！　冷たーい！」

足を入れると、水道水の冷たい水が熱を奪っていく。

このプールはかなり大きくて、直径が２メートル以上もあるので、浩介くんと隣り合って足を伸ばしても十分に余裕がある。

「ふー、気持ちいいな」

あたしのすぐ隣に浩介くんがピッタリとくっついてきた。

「うん」

ドキドキドキドキ

あーん、かっこいいー！

水着姿の浩介くんは、当然上半身は裸で、今でも鍛え続けているというそのたくましい体に、あたしは嫌でも見とれてしまう。

やっぱりいつまでも女の子よね。

「ねえ優子ちゃん」

「うん？」

浩介くんが、プールの中で体を器用に１８０度回転させ、あたしと向かい合わせになる。

「お、やっぱりエロいな優子ちゃんは」

浩介くんが、またニヤニヤした顔で言う。

確かに、水の中でパレオがゆらゆらとはためいて、水着になることで胸は普段よりもずっと強調されていて、多分浩介くんの角度からはとてもエロくなってると思う。

「えへへ、あなたの前だもの、愛する人の前だと、女の子だってエッチになっちゃうのよ」

これは、男の子に喜ばれたくてついている嘘じゃない。

あたしも浩介くんも、あんまりにお互いが好きすぎて、どうしても性欲と結びついてしまう。

「そ、そうか……」

あたしが女の子になって、性格から本能まで女の子になって、よく

分かった。
男とは違って、他の異性には全くエロくなろうとかそういう思いはない。
なのに浩介くんに対しては、自分でも信じられないくらい淫乱で、ビッチで、変態になってしまっている。
普段は淑女を装っているけど、浩介くんと2人きりになってしまうと、信じられないくらいにタガが外れてしまうのがあたしだった。
「うふふ……おっと」
まだ昼間だけど、屋外だけど……あたしは「娼婦モード」になっていることに気付く。
ちょっとだけ理性を取り戻し、浩介くんに気付かれない範囲で深呼吸をして落ち着かせる。
どこもかしくも娼婦モードだと、浩介くんの好感度落ちちゃうものね。
うーん、やっぱり「優一の知識」で理性は取り戻せるけど、優子が持っている「メスの本能」に抗うのって、とっても難しいのね。
だって今も、浩介くんが水着で苦しそうにしてる所から目が話せなくなっちゃってるもの。
「ゆ、優子ちゃん……その……」
あたしの視線に気付いた浩介くんが、顔を赤くして体をそらしてくる。
「ああうん、ごめん」
あたしも慌てて、顔をそらす。
うん、理性は意識すれば強いわね。
ザブーン！
「それっ」
「きゃっ！」
突然、あたしの顔に水がかかる。
浩介くんが素早く水鉄砲をあたしに向けて撃ってきた。
「もー！　やったわね！」
あたしも負けじと立ち上がり、浩介くんのからだめがけて水鉄砲を

かける。
浩介くんが防御体制をとると、今度はプールの水をあたしにかけてくる。
小さな笑い声が、閑静な住宅街に弱々しく響き渡る。
でも、あたしたちにはとても大きく聞こえ続ける。
途中、お義母さんが「優子ちゃん、浩介、買い物に行ってくる」と言っていたが、軽く返事するだけで、すぐにまたあたしたちだけの世界に没頭していく。
「優子ちゃん隙あり！」
ぺろっ
「きゃあ！　もー！　浩介くんのえっち！　どこめがけて撃ってるのよ!?」
パレオをめくられ、中の水着めがけて狙いが飛ぶ。
あたしも負けじと、浩介くんの水着の目標物に狙いを定める。
「んっ……こらっ！　優子ちゃんはいけない子だなあ……！」
そのうち、水鉄砲の掛け合いも、予想通りこういう合戦になってしまう。
おかしいわね、水で涼しんでいるはずなのに、体の芯は暑いままだわ。

「ふー」
遊び疲れたあたしたちは、プールを傾けて水を捨て、空気を抜く。
あらかじめ用意しておいたタオルで身体を拭くと、水着のまま浩介くんの部屋へと向かう。
「もう、涼む計画が台無しだわ」
ベッドについたら、あたしはあれだけ水で冷やした身体がもう火照り始めたのが分かる。
「そう言うなって、冷たいのも気持ちいいけど、暖かいのも気持ちいいぜ」
「……もうっ。ばか」
浩介くんのかっこいいセリフに、あたしはあっという間に骨抜きに

されてしまう。
「んっ……ちゅっ……」
水着姿のあたしは、浩介くんとキスをする。
水着を半脱ぎにさせられたのは、とても恥ずかしかった。
この暑い夏、庭のプールで涼むという計画は、あえなく失敗に終わってしまったけど、それ以上に素晴らしい思い出が、あたしの中に刻まれていった。

## 世界を使った宣伝準備

夏が終わり、秋になる。

結局、ヨーロッパ諸国での国民投票では、全ての国が蓬莱教授の薬を支持するという結果となった。

更に他の世界の国々でも連鎖的に国民投票が行われたが、一か国の例外もなく、全て賛成多数の結果になった。

蓬莱教授も、「既にこちらの優位は確定的」として、全世界に向けて勝利宣言をするに至った。

海外のインターネットでも、概ね蓬莱教授に好意的な世論が形成されている。

最も、世界の国の数を考えれば、投票していない国が圧倒的大多数だけどね。

蓬莱教授は、「不老の薬」完成と同時に、会社を起業するとした。

それまでは、薬の生成方法は、最重要機密事項として蓬莱の研究棟で管理することになった。

現在の蓬莱教授の課題は、この「蓬莱カンパニー」のビジネスモデルを世界にどう納得させるかが焦点になっている。

大まかには永原先生、経済産業省を中心にした勢力と、蓬莱教授、財務省を中心にした勢力との折衷案である「１００年の猶予期間」を、いかにして活用するかというのが問題だ。

財務省の予想では、蓬莱の薬によって少子高齢化問題が解決し、社会保障費を極限まで圧縮した日本は、将来的には、現在よりも大幅に低い税率で今以上の財政出動が可能になり、同時に財政黒字化を達成できるという、まさに夢のような状況にぶち当たるとしている。

しかしだからこそ、世界に対して圧倒的な国力を実現させ、蓬莱カンパニーの正当性を見せつけねばならない。

蓬莱の薬発売から１００年を経れば、薬が全世界に解禁されることになる。

そうなった時に、日本がいかにして１００年のアドバンテージを維持し続けるかも問題になってくる。

財務省は、様々な増税案を国に投げかけてきたが、ここに来て一気に大減税案を次々にぶちまけてきた。
あれだけ税入を上げようと血眼になっていた財務省でさえ、蓬莱の薬の前には簡単に手のひらを返してしまうのね。
「やはり、軍事力の強化で、国際社会への発言力を強めましょう。自衛官の練度も、もし蓬莱の薬があれば、他国軍を圧倒できると確信しております」
防衛大臣と統合幕僚長を要する防衛省は、軍事力の重要性を説いている。
公安調査庁や公安警察もまた、予算の増額を狙ってか防衛省にのっかかっている。
「ええ私も、１００年間この技術を守るためには、諜報組織を中心に、軍事力の強化、特に核武装を最優先事項とするべきだと思います」
そして、この防衛省が掲げる大軍拡案に賛成し、強力に推し進めているのが、協会会長の永原先生だ。
政府間交渉も、既に2年続けているが、この間の永原先生を見て分かったことは、永原先生の愛国心と戦闘心は半端なものではなかったということ。
だけどそれは恐らく、戦国時代や江戸時代の日本人なら、誰しもが持っていたものなのかもしれないわね。
「うむ、しかし核武装ともなると、国際社会からの避難や制裁も――」
「蓬莱の薬禁輸で十分だわ。それで十分、あちらの経済制裁以上の制裁になるわ」
総理大臣の慎重的な反論に対して、永原先生がすかさず再反論をする。
そう、「不老国家となった日本ならば、世界を敵に回しても最終的には勝てる」というのは、この会議場にいる全員の見解の一致するところになっている。
ならば、不老国家にふさわしい最強の軍隊を作り、全世界が逆らえないようにしてしまおうと考えるのは、自然なことだった。

「しかし、力のみに訴えるのも少々危険だと俺は思う。犠牲を払いかねないのは、やはり蓬莱の薬の信念とも矛盾するからな」
それでも、蓬莱教授は慎重な姿勢を崩さない。
蓬莱教授によれば、１００年の猶予期間は、あくまで「安全」を強調すると共に、「社会実験」という言い訳も考えているという。
あたしは、蓬莱カンパニーが故意に無能を演じて、国際市場に進出できないように演技するという提案をしてみたが、「それは新規参入や政権に対する介入や規制緩和の圧力を呼び込むから藪蛇となる」として、蓬莱教授に却下された。
つまり蓬莱教授の主張は、「モルモット国家日本による実験が成功するまでは、全世界をモルモットにするわけにはいかない」という建前論を唱えるべきだということになる。
しかし、これに対して永原先生は、「それがうまくいくのは最初の４０年だけ」と反論した。
確かに、最初の１０年から２０年程度ならば、「不老によって思わぬ弊害があるかもしれない」として、諸外国も我慢強く見守ってくれるだろうが、４０年目にもなれば、人類不老化と高齢者消滅による社会保障費大幅圧縮が、いかに人々に恩恵をもたらすものであるか嫌でも世界は思い知らされることになるだろう。このように永原先生は反論した。
「蓬莱先生、もしそうなれば、残りの６０年間、国際社会から常に「解禁しろ」の圧力を受けることになるわよ。大丈夫なのかしら？」
それは皮肉にも、蓬莱教授が国際社会でロビー活動を続けたせいでもある。
彼らの中には「自分たちが生きているうちに不老の恩恵を受けたい」と思っている人が圧倒的大多数だろうから。
「その辺りは、だ。俺に考えがある」
蓬莱教授が、何か深く思慮するように言う。
どうやら、何か作戦を思いついたらしいわね。
「６年前に起きた……学園問題を覚えているか？」
蓬莱教授が、意外なことを述べた。

それはとても懐かしい出来事であった。
「ええ覚えてますよ。総理大臣が1年にも渡って、マスコミや野党から、証拠もないのにひたすら空虚な疑惑を延々と追求されたあれですよね？」
あたしが女の子になってすぐの頃、総理大臣が2つの学校法人との不正と思しき関係を、証拠なしに書かれて追求され続けた。
そのために、与党と内閣が一時支持率を大幅に下げていた。
あの時のあたしは下らないニュースだと思ったけど、当時のマスコミと野党は、冤罪説が濃厚になった後も狂ったように追求し続け、テレビを見ていたあたしでさえ、うんざりした記憶がある。
この事件、今では「言いがかり」という見方が圧倒的に多く、「報道犯罪」「偏向報道」の典型例として扱われている事件になっている。
「それを利用するんだ。野党にはわざと悪役になってもらう。蓬莱の薬を守る重要性を鑑みれば納得してくれるはずだ」
蓬莱教授の口から、作戦が語られていく。
つまり、国会での審議で、時の総理大臣に何らかの疑惑をかける。
もちろんそれは言いがかりでもいいのだが、とにかく政局化させて故意に国会を空転させる。
そうすることで、国際社会からの圧力に対して、なるべく時間を稼ぐと共に、軍拡を裏で進め、また自給自足体制を作るために注力するという。
つまり、無能な野党のせいで議論が進まない状況を故意に作り出し、国会をわざと機能不全に陥らせる様子を、国際社会に見せつけさせるというわけだ。
これは、外野である諸外国から見ると、民主主義国家には付き物の「何も決められない病」が深刻になっているように見えてしまう。
そのため、民主主義を標榜する先進諸国は、表だって日本のこの様子を批判はできない。批判したらしたで、自国へのブーメランになって返ってくるからだ。
「時間稼ぎをして体制を整え、強大な日本にしてしまい、国際社会を日本に逆らえなくさせる」というのが蓬莱教授の狙いだ。

「蓬莱教授の構想の実現のためにも、今からでも海底資源開発に、これまでの倍の予算をつけたいと私は思っています」
議連に所属する野党議員がそう提案してきた。
「ああ、日本は資源がない。などと言われているが、まずこの前提を崩し、食料自給率を上げるのは、軍事力強化と並んで必須条件になるだろう」
とにかく、１００年を乗りきればいい。
いや、９０年を乗りきれば、「無理に急かさずとも、もう少し待てば解禁される」という風潮が世論を支配してくれるはずだわ。
幸いなことに、日本には海という天然の要塞がある。
貿易を止められても持ちこたえるだけの能力を、日本は蓄えないといけないわね。
「食料自給率につきましては、我々農林水産省にお任せください。蓬莱教授の提案なされた農業改革も、滞りなく進んでおります」
「ああ、期待しているぞ」
蓬莱の薬で唯一懸念されるのが、寿命の極端な増大による人口爆発と言っていい。
これを解決するために、蓬莱教授が宇宙開発と共に、ビル内農業を提案していた。
日本では、遺伝子組み換え技術に対する抵抗感が強いため、土地そのものをいかにして増やすかが課題になってくるわね。
もし自給率が低いままでは、それだけ日本の「弱み」になる。
幸いなことに、このことに関する予算は潤沢だった。
あたしも蓬莱教授も、大して悲観してはいない。
今回の政府との調整も、概ねうまく行ったと確信できるわね。

あたしたちは、蓬莱カンパニーの設立と、予想される国際的圧力への対策協議をすると同時に、「さわわ祭」の準備もしなければならなくなった。
佐和山大学に入って5度目の学園祭だけど、この学園祭は蓬莱教授にとっては大切な宣伝になる

新しい学生たちにも、蓬莱教授のことをよく知ってもらいたいから。
蓬莱教授によれば、全世界で支持を広げていても、一番身近な学生たちに向けた支持固めは大事になるそうだわ。
足元は、掬われたくないものね。
「そこで、今回は国民投票の結果を大々的に発表する。題して、『世界で支持される蓬莱の薬』だ」
今回、蓬莱の薬でもたらされる社会保障費の大幅削減などの効果に対しては、展示しないことにした。
これは、あたしたちがあえて「気付いていないふり」をすることで、将来的な外交圧力を少しでも遅らせるための時間稼ぎだった。
最も、これらを海外政府が想定していないとは到底考えられないから、ほとんど意味の無いことだと思うけどね。
「まずはドイツ、次にイギリスとフランスで……」
あたしたちは、国民投票の時系列を思い出しつつ、現地メディアの報道を張り付けていく。
蓬莱の薬が多く支持されていると喧伝するわけだけど、実際にはあたしたちは焦ってもいる。
というのも、日本の世論調査では、現在蓬莱の薬に対する支持率は９７―９８％に達している。
余程の偏屈者でない限り、蓬莱の薬に反対する人間はいない。
これは、蓬莱教授が「蓬莱の薬に反対すれば、家族や子孫、親戚にも薬が融通されなくなる」という噂を流した成果でもある。
ところが、海外では６０％から、多い国でも８０％にとどまっている。
いや、０か１かの世論調査で、８０％は十分に大きいとも言えるけれども、蓬莱教授は満足していないし、あたしたちとしても、２０％も反対者がいれば、十分すぎるほど圧力団体ができ、世論を曲げてしまうリスクがあると踏んでいる。
特にＥＵ諸国は、日本など比較にならないほどのエリート、官僚主義なのは知られているもの。

「とりあえず、ＥＵの国々は全て国民投票で賛成多数だが、まだ油断はできんぞ。ＥＵというのは『ナチスの反省』を錦の御旗に、エリート官僚が平気で民意を踏みにじる連中だ。あんな組織が俺と同じノーベル賞だとよ。全く、もはやノーベル平和賞には１００円玉の価値も、小学校の校内コンクールの参加賞ほどの栄誉もねえよ」
準備中、ＥＵ官僚の一部が、蓬莱の薬に反対声明を出したニュースを張り付ける時があったが、蓬莱教授がこう切り捨てた。
一方で、科学３分野のノーベル賞は、最高の栄誉であることは否定していない。
「蓬莱さん、とは言っても、ここまではっきりと国民投票で結果が出れば、ＥＵ官僚も反対は難しいと思いますよ」
近くで聞いていた浩介くんがそう反論する。
「うむ、俺もそう思う。しかし油断してはならんのだ」
蓬莱教授は、ここまで来ても、あくまでも慎重な姿勢を崩さないみたいね。
用意周到に大胆な行動に出て成功するというのが、蓬莱教授のやり方だわ。
「恐らく今後は、先進国以外でも国民投票、あるいは独裁国家ならその独裁者や独裁政党が、蓬莱の薬をどうするか決めてくるだろう」
博士１年になった和邇先輩が今後の展望について語る。
しかし、個人的には独裁国家については心配をしていない。
無能な独裁者と言っても、蓬莱の薬に反対するのは、頭にウジが湧いている人間だけだ。
蓬莱の薬がもたらす国益は、政治家をすれば誰にでも分かることだから。
そういう意味で、あたしたちは、戦いをかなり有利に進めてはいる。
当日の準備は、大成功した戦果を、文字通り「大本営発表」する。
ここ佐和山大学では、最近ますます蓬莱教授がピックアップされている。
元々蓬莱教授の王国に等しかったこの大学だが、もはや完全に学長は名目的な存在になり下がっていた。

その証拠に、教授会でも、今や学長は1教授としての権限しか与えられておらず、最終的に議論が紛糾した場合、蓬莱教授が決めることになっている。
「さて、他のサークルや研究室は、何を発表してくるかな？」
一時期は、このさわわ祭も蓬莱教授一色だったが、現在では、日本人のほぼ全員が蓬莱の薬に賛成しているため、かえってカルトとみなされないためにも、プロパガンダは「蓬莱の研究棟」のみにしておくことになった。
演劇部による、蓬莱教授を礼賛する演劇も、今年からは演じられなくなり、通常の演劇に戻るという。
蓬莱教授によれば、「確かに消極的支持者を積極的支持者にしていくのは大事だが、そのためには積極的支持者は積極性を隠さねばならないことがある」というらしい。
９８％が賛成と言っても、「多いに支持する」は3割にとどまり、残る7割りは「どちらかと言えば支持する」に属している。
つまり、もし今後の世界世論の変化次第では、日本もまだ、完全に安心はできないというのが蓬莱教授の見立てになっている。
「やっぱり、蓬莱教授は用心深いよなあ」
「うんうん」
和邇先輩の言葉に、あたしたちもうなずく。
蓬莱教授はとにかく警戒心が強い。
あたしたちや永原先生などには心を許しているけど、実際赤の他人には露骨に警戒心を見せることはないが、基本的に信用はしない。
特に、マスコミ嫌いなのは永原先生と同じ。
「でもよ。同じくマスコミ嫌いで有名だった小谷学園の永原先生、その2人に囲まれて、そこまで嫌悪感がない篠原夫妻もすごいよなあ」
和邇先輩が話題をあたしたちに向ける。
「うーん、まあそうねえ……色々あるのよあたしたちも」
今になって思う。
永原先生があそこまでマスコミを嫌いになったのは、もしかしたら永原先生がまだ男だった戦国時代に、伝令役の足軽だったからかもし

れない。
戦場において情報は大切だけど、だからこそ敵は偽情報を流す。
そうした所で、偽情報に騙し騙されというのはあったと思う。
あたしたちは、学園祭の準備を続けていく。
天文サークルでの準備は今年からはなく、大学院生のあたしたちはそうしたサークル活動も基本的にはしなくなった。
一方で、歩美さんには天文サークルの準備もある。
大智さんとはうまくいっていて、就活も比較的近い会社に就職できたので、今後とも恋人関係を少し続け、いずれは結婚したいとのことだった。
桂子ちゃんと達也さんの方でも、「結婚を前提にした付き合い」に変わっている。
ふふ、やっぱり女の子が男受けを考えると本当に恋愛ってうまくいくのね。
「世の中は変わるわね」
「だなあ」
今後、日本が不老社会になれば、あらゆる産業で大変革が起こると思う。
人手不足という言葉が流行っているけど、それもある程度緩和できる。
そして、人手不足解消のために１０年ほど前より進歩著しいＡＩ、これについても、「人件費に応じてＡＩに課税する」という法律が出来た。
あたしたちは、これから起こり得る色々なことを考えながら、文化祭への準備を推し進めていった。

# 大学院の文化祭

あたしたちは5回目の、しかし大学院に入ってはじめてのさわわ祭を迎えた。
例年通り、蓬莱教授のプロパガンダには、ノーベル賞のメダルが公開される。
実際の所、これを目当てにさわわ祭に参加している一般人も多いのが最近のトレンドなのよね。
ガララララ
「おはようございます」
部屋の扉を開けると、中には研究所のメンバーが集まり始めていた。
蓬莱教授に和邇先輩、瀬田助教の姿も見える。
「おう、優子さん、浩介さん、おはよう」
去年までは天文サークルで文化祭の開始を迎えていたけど、今年からは蓬莱教授のプロパガンダエリア、2階の教室部分で迎えることになった。
プロパガンダエリアも、中々洒落ていて居心地は良いものね。
「大学院に入って初めての学園祭だな」
大学の4年に修士2年に博士3年と考えると、今年がちょうど真ん中なのよね。
「うむ、最も、院生は無理に参加しなくてもいいんだぞ。本当の意味で勉強に専念していい身分だからな」
あたしたちの会話に、蓬莱教授がゆったりした口調で乱入してきた。
そう、実際、あたしたち意外の院生でこれらの準備に参加していたのは、和邇先輩だけだった。
「いえ、蓬莱教授を助けるのも、大切な役目ですから」
「ありがたいねえ。しかし、これを2つに増やせるかな?」
蓬莱教授が、ガラスケースの中に展示してあるノーベル生理学・医学賞のメダルを凝視する。

確かに、薬を完成させないことには、ノーベル賞とはならないだろう。
毎年秋には、ノーベル賞の受賞者が発表される。
実際の所、蓬莱教授はかなり若いノーベル賞学者で、実際こうしてまたノーベル賞級の研究をしている例は少ない。
「これを2つ持っている人は、歴史上でも数例しかない。有名なのだと、マリー・キューリーだな」
あたしも、キューリー夫人のことはよく知っている。
放射性物質で多大な功績を残し、夫や娘もノーベル賞学者という、まさに天才一族だったわけだけど、女性の研究者というのは、今でも珍しいらしい。
蓬莱教授によれば、「科学の世界は実力至上主義だから、生理や子育てを待ってくれない」とのことだった。
そういう意味でも「優子さんの才能は並々ならないものがある」とも言っていた。
「まあ、今やその数例に、俺も加わる予定だがね。俺の寿命は幸いにもまだ後１０００年以上はある。どこかで必ず、この壁を突破して見せるさ」
そう、普通に考えれば、今の不完全な蓬莱の薬でも、十分すぎるほどにノーベル賞には値する。
でも、蓬莱教授は、「未完成品でノーベル賞は絶対にもらわない」とも公言していた。
まさにそれは、完璧主義な蓬莱教授らしいと言っていいことだと思う。
ノーベル財団も、恐らくは空気を読んでか、あるいは単純にまだ判断しきれてないのか、「蓬莱の薬については、現状でもノーベル賞に十分に値するが、完成までは保留する」と明言していた。
逆に言えば、完成さえすれば、すぐにノーベル賞という運びになるという意味でもあるけどね。
「ただいまより、２０２３年度、さわわ祭を開催いたします」

いつものように、文化祭実行委員長の放送の声が聞こえ、あたしたちの文化祭が始まった。
「浩介くん、どこにいく？」
「うーん、いまいち回る気にならねえな」
浩介くんがちょっと苦々しそうに言う。
でも、それはあたしも同じ気分。
「うん、あたしも」
やっぱり、大学院生になると、それまでの大学生とは気分も変わるのかな？
「どうする？」
とはいえ、ここでじっとしているのも気まずいわね。
「ねえ、研究棟の上層に行ってみない？」
あたしがまず提案したのは研究棟の上層に行くこと。
建物の上の方から文化祭を見るのも、楽しいと思ったから。
「うむ、そうするか」
あたしたちは教室を出る。
すると既に第一陣が、このプロパガンダエリアに到着していた。
あたしたちは彼らを尻目に、例のエレベータで一番上にたどり着く。
ここはもちろん、誰もいない。
今日は普段いる研究員さんたちも休暇になっているし、研究棟にいる人たちも基本的には下層階のプロパガンダエリアや研究所前で文化祭の参加者たちへ対応している。
なのでここでは、信じられないほど静まり返った空間になっていた。
「何か、小谷学園の後夜祭みてえだな」
「うん」
特にここは特別なセキュリティがないとは入れない。
あたしたちは特別に学部生の頃からは入れたけど、普通は研究所に所属する博士課程以上でしか入れず、今日ここにいるメンバーの中で、あたしたち以外に入れるのは蓬莱教授を、瀬田助教、そして和邇

先輩の3人だけになっている。
「な、なあ優子ちゃん」
浩介くんがごくりと唾を飲み込んでいた。
「うーん、ダメよ」
「えー」
あたしが、浩介くんの欲望をやんわりと止める。
まだ始まったばかりだし、何より焦らせば焦らすほど、いいものになるし。
「ほら、こっち来て見てよ」
性欲が高まってきた浩介くんに対して、気をまぎらわせるために、あたしは窓から外の風景を見せる。
そこは、始まったばかりの文化祭に対して、大勢の人が行き来している様子だった。
たくさんの人々が、この文化祭を楽しみにしていた。
「天文サークルに行くか」
「うん」
浩介くんの意見にあたしも賛成し、エレベータを降りて、プロパガンダエリアに夢中になっている学生たちを尻目に、あたしたちは天文サークルのある建物を目指す。
あたしたちが大学に入ったばかりの頃と同じ場所に、天文サークルは構えていた。
ガララララ
「いらっしゃ……あ、優子さん」
中には歩美さんがぽつんと1人いただけだった。
どうやら、ちょうどお留守番らしいわね。
「歩美さん、今ちょうど担当かしら？」
「ええ」
歩美さんも、もう大学4年生で、こうしたことからは比較的自由だと思ってたけど、そうでもないらしい。
「大変だな」
「まあ、部員が多いですけど、部への帰属意識が薄い人もいますから」

「それは小谷学園の時からそうだったぜ」
歩美さんの言葉に、浩介くんが反応する。
実際の所、歩美さんに彼氏ができてからと言うもの、男子部員たちは新しい女子部員の獲得に躍起になっていた。
もちろん、他の女子部員もいるとはいえ、やはり男子部員たちの露骨な勧誘は警戒されるらしい。
「まあ、大学生に限らず、男は性欲で動いているようなものよね。特にかわいい女の子が絡んだら。仕方ないわね」
「ええ」
「おいー、ここに男がいるぞー」
歩美さんとあたしが同調していると、浩介くんが抗議してくる。
「おっとごめんね。でも大丈夫よ。そういうのも含めて、女の子は男の子を好きになるものよ」
「うっ、そうか」
浩介くんがやや持ち直してくれる。
「心配しないで、あたしも歩美さんも、元男よ」
「あーそういえばそうだったな」
そう、女として扱うのと、元男として扱うのは矛盾しないし、競合することもない。
それはＴＳ病患者の持つ特徴でもある。
時折、あたしたちを「都合のいい時に男扱いのようなことを望んでいる」と批判している人がいるけど、あたしたちにとって、「元男扱い」というのは、「女性らしく振る舞えなかったら指導してね」とか「男性の感性を解っちゃうけど、今は男じゃないよ」というような意味が大きい。
男扱いをすることには当然断固反対だし、そのためにも、あたしは協会の広報部長を続けている。
「それで、肝心の展示の方はどうなんだ？」
「はい、今年は天文台からの写真とかを載せてます」
写真を展示するのはいつものことだけど、今年はやけに気合いが入っていた。

普通肉眼では山奥でも見えないような満点の星空になっている。
それもそのはずで、これらは天文部員たちが持っている望遠鏡で撮った写真だったりするからだ。
「うわー本格的だわ」
天文部は緩いサークルとして作られていたけど、中身はあたしたちがいた頃よりも真面目だった。
いや、もしかしたらあたしたちがいい加減すぎたのかもしれないけど。
「でも最近は、ちょっと部員の知識不足が問題になってるのよ」
しかし、歩美さんから出た言葉は意外なものだった。
どう考えても、洗練されてそうなのに。
「え!?　どういうことかしら？」
「うん、撮影道具や技術は上がったんだけど、逆に言えばそれだけなのよ。カメラの知識は豊富でも、例えば今撮っているのが何座かも分からないとかね」
「なるほどなあ」
歩美さんの言いたいことは、要するに知識が偏り始めているということだった。
つまり、天文サークルの「写真サークル化」を懸念しているということだった。
元々、あたしたちがいた頃、特に小谷学園時代の天文部では、天体観測はそこまで重視されていなかった。
代わりに普段していたことは、パソコンを使ってＪＡＸＡを始め天文ニュースを見て、知識と見聞を深めることだった。
それはある意味で、知識探求に重心を置いたサークルとも言い換えることができる。
「確かに、そういうのも天文ですけど、それなら以前からある写真サークルでも出来るじゃないですか。棲み分けをしたいんですあたしたち」
去年行った小谷学園の天文部はそんな感じではなかった。
とすると、やはり小谷学園外の部員が主導しているのかしら？

「そうねえ、でもあたしたちはもう部員じゃないから」
あたしたちにはどうにもならないわね。
「そうですよね」
「ああ」
今後のことは、後輩たちに任せよう。
一応今でも、自由研究レポートのようなポスターが張られていて、知識方面もないがしろにされていないわけだし。
あたしたちは一通り天文サークルの展示を見て教室を後にした。

「で、次はどこに行くか……って、お、ダンスサークルがあるじゃねえか」
「うん」
ダンスサークル、佐和山大学には2つのダンスサークルがあって、元々のサークルは乗っ取られていわゆるヤリサーになってしまっていた。
大学側の追求の手もあったのか、今では名前を変えて今度はテニスのサークルを名乗っているらしい。
なので、今はこのサークルが佐和山大学唯一のダンスサークルになっている。
「お邪魔しまーす」
「あ、篠原夫妻ですよね!?」
去年までとは全く違う部員の顔が見えた。
多分新入生だと思う。
「ああ」
「先輩方から聞きましたよ。『苦しい時に支えてくださった』って」
後輩の女の子が笑顔で言うから、あたしも浩介くんも困惑してしまった。
そもそも、あたしたちとダンスサークルの接点は文化祭ってだけだし。
「うーん、それはちょっと誇張が過ぎると思うけど」
浩介くんが苦言を呈するように言う。

「うん、あたしもそう思うわ」
「謙遜しなくていいんですよ！　お陰で、このダンスサークルが正統とようやく認められたんですから！」
別の女の子が今度は割り込んでくる。
２人とも、ぴったりフィットした長袖長ズボンの動きやすさと暖かさをうまく両立した服装になっていて、「これぞダンスの服」という感じにまとまっている。
一時期は、かなり苦しい情勢に追い込まれてたことを考えたらかなり状況は改善されているわよね。
「それじゃあ、ダンス見せてくれるかしら？」
「はいっ！」
ダンスサークルの人達が集まって、５人でダンスを見せてくれた。
その様子は、２人だった頃よりもずっと表現力が豊富になっていて、見ているあたし達も飽きなかった。
パチパチパチパチ!!
「ありがとうございます」
「ありがとうございます」
ダンスサークルの男女たちが微妙にずれたタイミングで、ニッコリと笑ってあたしたちに頭を下げてくれる。
あたしたちも、いいものを見せてくれたと思う。
うん、もう大丈夫ね。
その後も、あたしたちはサークルを見て回った。
鉄道研究サークルにしても演劇サークルにしても、していることは毎年そこまで大きな違いはない。
さすがに５回目となるとあたしたちにも「飽き」というものが出てくる。
演劇サークルの演劇は、かなり面白かったけどね。
「ふー、優子ちゃん、次はどうする？」
「うーん、研究棟に戻ろうかしら？」
遊び疲れたのもあって、あたしたちは蓬莱の研究棟に戻ることを決

めた。
途中、あたしたちを見ると「篠原夫妻だ」と言う声が聞こえてくる。
普段の大学生活では、そういったひそひそ話はないんだけど、今日は一般に開放されているせいか、はたまたお祭りでハイになっているのか、そういった声があちこちから聞こえてきて、これが意外とあたしたちの精神をすり減らしていった。
……芸能人って、大変だわ。
「ふー」
また誰もいない空間に戻る、外を見るとある程度時間が経ったのか、まだ明るいけど、僅かに、ほんの僅かに空が暗くなっている気がしていた。
「どうする？　優子ちゃん」
「今は、誰もいないから。こういう時こそ捗ると思うのよ」
あたしはそう言うと、資料室へと向かっていく。
この中には蓬莱教授の研究ノートなどが置いてある。
あたしは最近の電子化された資料を見る。
「浩介くん、あたし思うんだけどね――」
文化祭の２人きりの空間で、あたしは浩介くんに詳しく持論を述べる。
浩介くんは聞き手に徹してくれる。
「――と思うのよ。浩介くんはどう思うかしら？」
「うーん、難しいなあ……」
あたしの話している内容についてくるのも、浩介くんにはちょっと難しいのかもしれないわ。
分かりやすく説明したつもりだったんだけど。
「そう？」
「ああいや、言っていることは分かるんだ。でも、何かに引っかかるんだよ」
浩介くんの言いたいことは、もっと別のことらしい。
……紛らわしいわね。

「それより、外が暗くなってるなあ」
浩介くんが窓の方を見て言う。
あたしもつられて首を振り向く。
「え……あらやだっ！」
一応まだ終わりの時間ではないけど、どうやら夢中になって時間が経ってしまったらしいわね。
「蓬莱さんの所に行くか」
「……そうね」
あたしたちは蓬莱教授のいるであろうプロパガンダエリアに戻った。
そこには蓬莱教授はおらず和邇先輩がいた。
「和邇先輩、蓬莱教授はどこにいます？」
「ああ、優子さん。教授なら今は演説に出かけていますよ」
どうやら、ちょうど全校向け演説をしているらしいわね。
今はプロパガンダエリアにそれなりに人がいるけど、やっぱりお目当ては蓬莱教授のノーベル賞メダルだった。
あたしたちも蓬莱教授からメダルの解説を受けたことがある。
蓬莱教授の偉大性を証明するメダルだが、今や蓬莱教授がノーベル賞を貰うきっかけになった万能細胞でさえ、蓬莱の薬の業績に比べたら大した業績でさえない。
まあ、今も一応プロパガンダエリアではそれなりにスペースを割いているけどね。

ガチャッ
「お、優子さんたちも戻ったか」
しばらくボーッとしていると、蓬莱教授が戻ってきた。
「どうですか？　演説は？」
「ああ、みんな『消極的支持』が『積極的支持』になってくれたと思う」
蓬莱教授は朗らかな顔をしていた。
どうやら、手はずは良かったらしい。
「よかったわ」

あたしたちは残りの文化祭の時間をここで過ごし、軽く三本締めして解散となった。
やっぱりあたしは勇気が出ない。
まだ、蓬莱教授にあたしの考えを述べることが出来ない。
おそらく、来年度修士2年、あたしは色々事情があって、既に修士論文が完成しているので時間があれば博士課程の予習や自己の研究に時間を割くことができるはずだわ。

# 教え子の巣立ち　前編

季節が流れるのは早く、２０２４年の４月になった。
相変わらずあたしたちはクリスマス、バレンタイン、結婚記念日と忙しい日々を過ごしていた。
あたしも浩介くんも、修士課程の全ての単位に問題はなかった。
で、今月から修士２年が始まるんだけど、蓬莱教授の焦りは露骨になってきた。
というのも、あたしの予想通り蓬莱教授の想定は全て失敗に終わった。
蓬莱教授は「くそ、もう一度想定を見直さねばなるまい」と言っていた。
だけど、あたしの領域には達していない。
おそらく、あたしの見立て通り、ＴＳ病患者当人でないと思いつきにくいと思う。
といっても、蓬莱教授は大天才と呼ぶにふさわしい科学者だし、蓬莱教授自身もそれを認めている。
とは言え、修士２年の前期は、まだいくつか単位もあるし、自分の実験は程々にしておきたいわね。

そして、政府間交渉も続いている。
今政府との間では、蓬莱カンパニーを守る規制のあり方について議論がなされている。
ここで鍵を握るのが経済産業省になっている。
元々経済産業省は最も永原先生寄りの省庁で、蓬莱カンパニーの１００年日本限定案も、当初はもう少し短い予定になっていたけれども、永原先生と経済産業省の要求で１００年に延びた経緯がある。
「私個人、そして省庁官僚としては、今の案で異論はありませんし、不老ビジネスという極めて特殊なビジネスですから、蓬莱カンパニーの独占というのもやむを得ないでしょう。ですが経団連がどう出るかが問題です。経団連にしても経済紙にしても、『規制緩和しないと死

んじゃう病』の患者が多すぎるんです」
という経済産業省の事務次官さんの言葉が印象に残っていた。
それについては、永原先生が、「あまりにもしつこいならば蓬莱の薬を融通しない」というやり方を取ればいいと言っていた。
蓬莱教授は永原先生よりは力の行使には慎重だけれどもカードとしては残しておくことまでは否定していない。
そして現在問題になっているのは、蓬莱の薬が密造される可能性のこと。
特に機密が漏れて日本国外で密造された場合、大変なことになる可能性がある。
永原先生は、「私たちが独占できるうちに、薬密造を違法として罰則をも受ける法律を各国に作らせるべき」と主要した。
永原先生としては、「法的規制をかけなければ蓬莱の薬は売らない」という外交圧力を全世界にかけるべきと主張しているが、例によって蓬莱教授は「内政不干渉の原則に反する」として、それには慎重的だ。
これには外務省も賛同し、永原先生は主張を引っ込めた。
蓬莱教授としては、「外交圧力も必要だが、とにかく売上に応じて多額の金額を各国に納税して理解を得るべき」というのが持論で、そういう意味でも１００年の猶予期間は長いと感じているらしい。
さて、そんな修士２年目の日々が始まったわけだけど、あたしのしていることは、１年目とあまり変わらず、変わったことと言えば博士課程に向けての焦点だけ。
後は歩美さんが就職し、卒業していったということ。
幸子さんに続いて、あたしが担当した患者さんが社会人になった。
あたしはまだ学生ということを考えると、教え子の患者さんの方が進んでいるわよね。

「優子ちゃん、手紙が届いているわよ」
さて、そんな４月始めに、あたしの元に手紙が届いた。
「はーい」
お義母さんから、手紙を受けとる。

確かに、宛名は「篠原優子様」となっていて、あたしへの手紙となっている。
「幸子さんからね」
幸子さんの名字が変わっていることに気付いたのは、すぐだった。
あたしは、裏面を見てみると、それは直哉さんと結婚したという報告だった。
そして、結婚式への招待状も届いていた。
「どうしようかしら？」
幸子さんとあたしは、女の子になった日数で言えば半年も違いはない。
そういう意味では、あたしと比べると大分結婚は遅いと言えるわね。
「へー、結婚式の招待状じゃない」
幸いにも、日時的にはこちらは用事はない。
とすると、結婚式に行ってもいいわね。
「あなた」
あたしは、部屋でくつろいでいた浩介くんに声をかける。
「ん？」
浩介くんが顔をあげて、あたしに目を向ける。
何だかちょっとドキッとしちゃうわね。
「ねえあなた、幸子さんが結婚式挙げるんだって」
「お、本当だ。招待状か。よし、俺も行こう」
浩介くんも、あっさりと同行を申し出てくれた。
「あら？　浩介も行くのね。行ってらっしゃい」
お義母さんも快く受け入れてくれたので、これで多分大丈夫ね。
あ、でも、念のためにも蓬莱教授に連絡しようかしら？
「ああ、分かった。こちらとしても問題ない」
蓬莱教授に電話し、あっさり了承を得ることができた。
あたしは、2年前の大学4年生の時の龍香ちゃんの結婚式を思い出しつつ、服装や参加者としての振る舞い方を復習することにした。

幸子さんの花嫁姿、楽しみだわ。

そしてやって来た結婚式当日、あたしと浩介くんは朝早くに出て着替えを済ませ、列車に乗ることにした。

「ふう、楽しみだな」

新幹線の駅にいくまでの列車の中で、浩介くんがそう話す。

「うん」

幸子さんの地元の東北までこっちから出向くのは久しぶりのことだった。

もちろん幸子さんとの交流自体は何度もあるし、今でもインターネットの専用チャットなどで雑談や広報部の活動の割り振りもしている。

幸子さんも、蓬莱教授の影響でＴＳ病への関心が高まっているこのご時世に、余呉さんともども地元テレビ局の取材を受けたこともあったという。

一応、幸子さんが１２０歳になるまであたしはカウンセラーを続けるわけだけど、もちろん相談することは少ない。

もしかしたら、結婚生活に関して何か相談が来るかもしれないけどね。

「さて、ついたぞ。ここから新幹線だな」

「うん」

あたしたちは上野駅に到着した。

ここから新幹線に乗って幸子さんの地元まで行くことになっている。

列車は「はやぶさ」の指定席で、普通車を使う。

「普通車かあ、久しぶりだよな」

「あーそうかもしれないわね」

蓬莱教授は、寄付金予算が多いので、新幹線の移動がグリーン車やグランクラスになっている。

あたしたちも、色々な旅行をする時にはそういった高い座席に乗っていたんだけど、今回は会社設立のための準備に大幅な予算を使うと

いう名目で、蓬莱教授の援助がなかった。
なので新幹線は普通車の利用が決定した。
在来線でも間に合うとは言え、東北本線の途中区間には強風遅延のリスクがあることや、朝かなり早い時間に行き、正確な道順を辿らないといけないということで除外となった。
ちなみに、夜行バスという選択肢は、はじめから排除してある。
夜行バスや自家用車などは交通事故のリスクが高いため、寿命に影響するというのがＴＳ病患者の常識になっている。
あたしたちは、上野駅の改札を通り抜け、新幹線ホームへとやって来る。
東北新幹線を初めて使ったのも、幸子さんのカウンセラーを引き受けたからだった。
「間もなく――」
「あ、来るわよ」
新幹線駅のホームに馴染みの放送が聞こえ、東京駅からの電車がやって来る。
出てきたのはエメラルドグリーンのお馴染みの電車だった。
あたしたちは列に並んで切符を見ながら座席を探す。
「ふう」
やはりグリーン車やグランクラスに比べるとやや固く狭い印象を受けるが、それでも特急の座席ということもあって座り心地はいい。
「ようやく落ち着けるわね」
「ああ」
上野駅は途中駅なのでドアが閉まるとすぐに発車する。
大宮駅までは、ゆっくりした速度で進むことになっている。
「それにしてもあいつも結婚するのか」
「ふふ、浩介くん、幸子さんは直哉さんのものよ」
「分かってるって。もう、優子ちゃんは独占欲強いんだから」
浩介くんが、ちょっとだけ「やれやれ」という感じであたしを安心させるように話す。
やっぱりどうしても、あたしは独占欲を発揮してしまう。

「ふふ、幸子さんってすごいかわいくて美人だものね。結婚できた直哉さんは幸せよね」
あたしは少し小悪魔チックに話す。
「何言ってるんだ！　優子ちゃんと結婚できた俺の方が幸せだって！」
浩介くんが大きな声で取り繕ってくる。
ふふ、やっぱりかわいいわね。
「うん、でも幸子さんの花嫁姿、楽しみよね」
「なあに、あの時の優子ちゃんの花嫁姿に勝てる女はいねえよ！」
浩介くんが本気の目付きで捲し立てる。
浩介くんはどうやら「優子ちゃんがＮｏ．１」だと本気で思っているらしい。
もちろん、あたしはすごいかわいくて美人だと思うし、美人揃いのＴＳ病患者の中でも一際目立つ方だと思っているし、それこそその辺のアイドルや女優には絶対に負けないという自負がある。
それでも、今のあたしの服装だと、花嫁姿の幸子さんには勝てる気がしないわ。
幸子さんは、お人形さんみたいなかわいらしさを持っていて、あたしの方がまだ僅かに勝ってると思うけど、それでも１００人いれば５５人賛成してくれるくらいの程度のもので、自信をもって「あたしは幸子さんに勝てる」と言うのは難しいのよね。
桂子ちゃんや永原先生相手なら、彼女たちも超がつく美人だとは思ってるけど、小谷学園のミスコンのこともあって、あたしが勝っているという自負があるだけ違うのよね。
「間もなく――」
新幹線は幸子さんの街に到着した。
駅に列車が止まり、あたしたちは扉から出て地下鉄乗り場へと向かう。
幸子さんの結婚式場は、「東西線」で２駅先にある。
地下鉄東西線は開業してもうすぐ１０周年を迎える新しい路線だ。

そう言えば、幸子さんが東京に来た時、「東西線は最近できた」って言ってたっけ？
そう考えると、あたしたちも付き合い長いわよね。
比較的新しい地下鉄の施設を進む。
ここは南北線とはまた別の路線になっている。
「何か違和感あるなあ……」
車両が入線して車内に入ると、浩介くんが違和感を感じながら席に座った。
「うん、何だか狭いわね」
あたしが、車端部にある扉を見ると、違和感に気付いた。
そして、車内全体が普段使っている鉄道よりも、小さい幅で作られていることに気付いた。
ドアが閉まり、列車が発車する。
車内にある液晶と表示は、東京の地下鉄と全く同じに見える。
「間もなくドア閉まります」
駅の放送と共にドアが閉まると、列車が発車した。
地下鉄の2駅はとても近く、あたしたちはあっという間に結婚式場の最寄り駅に到着する。
あたしにとって、初めての結婚式は自分の結婚式だった。
龍香ちゃんの結婚式にも参加したとしても、まだサンプル数が少なくて、幸子さんの結婚式がどういうものになるかは分からないわね。

「えっと……あ、この建物だわ」
招待状にあった建物をあたしが指差す。
そこは確かに、ホテル兼結婚式場だった。
「少し予定より早いけど、行きましょう」
「ああ」
あたしたちは、建物の中に入っていく。
受付の人に招待状を見せると、控え室に行くように促され、そちらへ案内された。
「こちらでお待ちください」

「「はい」」
あたしたちが中に入ると、何人かが目を丸くしていた。
「なあ、あれってまさか」
「うん、あの篠原夫妻だよね？　どうしてこの結婚式に!?」
「うーん、妻の方が新婦と同じＴＳ病だって言うし、その繋がり？」
「にしても関東住みだよね？」

どうやら、幸子さんの友人たちは、あたしと幸子さんとの関係について知らないらしいわね。
「篠原さん、こんにちは」
「あ、永原会長」
すると控え室の一角に陣取っていた美少女２人組から声をかけられた。
言うまでもなく、日本性転換症候群協会会長の永原先生と、余呉さんだった。
「あれ？　永原会長と余呉さんだけですか？」
「ええ、他の会員さんは忙しいですから」
余呉さんが落ち着いた口調で話す。
それにしたって、永原先生まで来ているというのは意外だった。
さて、永原先生からスペースを譲ってもらい、一角にやって来ると、そこには既にあたしが担当した患者さんたちが、歩美さんを除いて全員揃っていた。
「あれ？　みんなもいたんだ」
みんな結構遠いのに。
「ええ、会長がお金を出してくれたわ。あたしたちにとって、幸子さんは一番上のお姉さんみたいな人なのよ」
弘子さんがそう説明してくれる。
確かに、カウンセラーのあたしを師匠とすれば、幸子さんは長女弟子みたいなものだもんね。
「そう、でも一番仲がいい歩美さんは――」

サー！
あたしがそう言いかけるとふすまが開く音がした。
「んー、あ、皆さんお久しぶりです！」
扉を開けたのは、歩美さんの彼氏の大智さんだった。
彼の後ろの歩美さんが、中に入って挨拶し、あたしたちの所に近付いてくる。
「歩美さんもここに？」
「はい、塩津幸子さんの結婚式、楽しみです」
歩美さんが勢いよく話す。
ふふ、ちょっとだけ指導かな？
「歩美さん、幸子さんはもう、塩津じゃなくなってるわよ」
あたしがやんわりと注意をする。
「おっとそうだったわね」
「ＴＳ病の女の子は、みんな女の子としてのアイデンティティを確立したがってるからね。式場では間違っても旧姓で呼んじゃダメよ」
「分かってますって」
そう、これはとても大切なこと。
あたしがそうだったように、あるいは他のＴＳ病患者がそうだったように、結婚というのもＴＳ病患者をまた一歩成長させる効果がある。
以前永原先生から、「ＴＳ病患者は、職場などで旧姓使用等をしている人が、未だに1人もいない」「周囲や会社側が要望しても、拒否する」などという話を聞いて、あたしも驚いた。
第三者目にはくだらないことでも、ＴＳ病患者にはどうしても「生まれつきも女の子ではない」ということに負い目が出てしまうのだという。
それを取り戻すためには、こういうのにこだわるしかないのよね。
あたしだって、部屋の中にお人形さんやぬいぐるみさん、おままごとなどの女児向けの遊び道具が増える一方だし。
「それにしても、あたしも結婚できるかしら？」
弘子さんには彼氏がいる。

まだ最終試験には合格できていないけど、もうすぐ受けたいとも話していた。
言葉遣いも、すっかり女の子になってるし、立ち居振舞いも大丈夫そうだわ。
「問題は大学生や社会人になってからよ。遠距離恋愛に耐えられるかというところだわ」
その点では、既に結婚しているあたしたちは心配ないわね。
「就職かあ……あたしもどうしようかしら？」
弘子さんが唸っている。
「あたしは、普通にＯＬやってるわ。一応、蓬莱の研究棟で学べたってことで、それなりの会社に勤められたわ。まだ始まったばかりで、結構右往左往してるわ」
あたしは、専業主婦になるか、蓬莱カンパニーで浩介くんと共働きのどちらかになると思っている。
浩介くんは、多分蓬莱カンパニーに就職できると思う。
うーん、選択肢は浩介くんの方が少ないから迷わなくて良さそうだけど、あたしの方が恵まれてる気がするわ。
「ふふ、皆さん頑張ってくださいね」
余呉さんが少しだけ微笑んでいる。
そう言えば、余呉さんって普段は何をしているのかしら？
「はい」

「なあ、あれってもしかして、例の永原会長じゃね？」
「もしかしても何も、どう見てもそうだろう？」
「じゃあもしかして、あそこにいる女ってみんな元男なのか!?」
「しかもあの会長は５００歳越えてる訳だろ!?　信じられねえよなあ、ＴＳ病ってまさに神秘だよ」

近くで見ていた人たちが、またヒソヒソとあたしたちの話に会話を咲かせている。
しばらくすると、今度は幸子さんの両親と弟の徹さん、それに直哉

さんの親族と思われる人たちが部屋に入ってきた。
そう言えば、幸子さんの家族と会うのは久しぶりかしら？
「あ、皆さん、本日はお忙しい中直哉と幸子の結婚式にご来場くださいまして誠にありがとうございます」
幸子さんのお父さんが頭を下げる。
あたしたちも吊られて、そのままの体制でペコリとお辞儀をした。
その後、親族の軽い自己紹介がある。
徹さんは相変わらずあたしたちのことをじろじろと見ているが、彼氏がいることを知って落胆していた。
徹さんは蓬莱の薬を飲んでいないので、初めて会った時とは大分印象が変わっているけど、どうやら中身には大した違いはないみたいだわ。
「準備が出来ましたので、ご案内いたします」
その言葉と共に、あたしたちは結婚式場へと足を進める。
所定の席につくと、扉が開いた。

「わあ……」
「おー！」
「すげえ！」

みんな、そのあまりの綺麗さに驚いていた。
幸子さんは、この世のものとは思えないくらいかわいらしい姿をしていた。
フリフリとレースがふんだんにあしらわれ、真っ白なドレスに顔も笑顔になっている。
そして直哉さんは、大胆に開かれていた幸子さんの胸をガン見していた。
ふふ、浩介くんも、ずっとあたしの胸を見てたわね。
花嫁衣装は、龍香ちゃんとは違い、どちらかと言えばあたしの系統に近いわ。

うーん、やっぱり幸子さん、かわいいわね。

# 教え子の巣立ち　後編

その後の結婚式の進行は、予定表を見た限りではあたしや龍香ちゃんと大差はなかった。
愛を誓いあって、最後に誓いのキスをする。
直哉さんが大きくなってるのを悟られたくなかったのか、必死で腰を引いてる様子に、周囲は笑いをこらえるのに必死だった。
……浩介くんや龍香ちゃんの旦那さんもそうだったけど、結婚式でかわいい新婦を前にすると、どうしても新郎は大きくなっちゃうものね。
もちろん、生まれつきの女の子なら、「神聖な結婚式を汚された」という風な見方をする人もいるかもしれないけど、あたしたちＴＳ病患者は、大きくしてしまった新郎の気持ちに共感出来るから、そういったことはないけどね。

誓いのキスは、あたしや龍香ちゃんの時とは違って、ごく普通に軽く済まされた。
そして、宴会場に移り、様々なイベントが催されることになっている。
「それではまず、新郎新婦ご家族の皆様のスピーチを行います。まずは新郎――」
まだ食事は運ばれておらず、まずは新郎新婦の両親のスピーチがある。
まずは新郎の父母ということで、直哉さんの父と母がスピーチをする。
スピーチを要約すると、「サッカー部の仲間だった２人が、数奇な運命で結婚した。とても珍しいと思う」というものだった。
と言っても、実はＴＳ病患者の結婚相手として最も多いのが「男時代の親友・悪友」といったポジションの人で、幸子さんの結婚は、むしろ典型的とさえ言えるのよね。
でも、ＴＳ病そのものが非常に珍しい病気と考えれば、両親の言っ

ていることも間違っていないのよね。
「続きまして、新婦弟の塩津徹様より、スピーチがございます」
「え!?」
あたしは驚く。
普通、こういうのは両親のスピーチで、弟が来る場所ではない。
動揺するあたしたちを尻目に、徹さんがマイクの前に立ち、高さを調整する。
「えー、幸子お姉ちゃん、結婚おめでとうございます。皆さんも知っていると思いますが、私は幸子の弟の徹と言います。お姉ちゃんはＴＳ病です。お姉ちゃんが女の子になったのは７年前の秋でした。あの時、お姉ちゃんはとても荒れていました。大好きだったサッカーが、みんなともうできない。そんな思いから、お姉ちゃんは間違った道に進もうとしてしまっていました」
徹さんは、整然とスピーチをする。
スピーチでは、敢えて普段取り「お姉ちゃん」と呼んでいる。
「そんな時に、お姉ちゃんを助けてくれた人がいました。お姉ちゃんと同じＴＳ病の女の子で、彼女の指導があってから、お姉ちゃんはどんどんと女の子らしくなっていき、そしてとうとう彼氏が出来て、今日の結婚に至りました。日本性転換症候群協会の皆様には、本当に感謝しています」
パチパチパチパチ!!!
徹さんが頭を下げ、スピーチが終わる。
幸子さんは、相変わらず笑顔でスピーチを続けている。
次に、幸子さんのお母さんのスピーチが始まる。
「幸子、あなたはこれから、本当の幸せを手に入れることが出来ると思います。幸子の名前は、実はとっさになって考えた名前でしたが、とてもいい名前だと思います。名前の通りの幸せな女の子になって、羽ばたいていってください。お母さんもお父さんも、そして弟の徹も、協会の皆さま方も、みんな幸子のことを応援していますよ」
パチパチパチパチ!
幸子さんのお母さんのスピーチも終わる。

徹さんのスピーチよりもやや短い。
徹さんの時と同じように、あたしたちについて言及されている。
そして最後には、幸子さんのお父さんのスピーチになる。
「おほん。改めて、今日という日を迎えられたことに感謝します。幸子は、多くの人に支えられて、今日羽ばたきます。特に、幸子を変える転機になった7年前のあの日、幸子はとても荒れていました。幸子は元々、男としての人生を歩んでいました。それがたった1日で、女としての人生を歩まなければならないという、とても辛い日々だったと思います。ですが、その日々も無駄ではありませんでした。幸子、向こうへ行っても、どうか幸せに暮らしてください」
パチパチパチパチ！
幸子さんのお父さんのスピーチが終了し、次に新郎新婦のスピーチに入る。
今回の結婚式では、新婦側からスピーチが開始するようになっている。
ウェディングドレス姿の幸子さんが、手紙を持ち、マイクの前に移動する。
「お父さん、お母さん、徹、そして協会の皆さん、今日まで本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。結婚式を挙げるにあたって、こんなにも多くの方々のご参列があるとは思っていませんでした……荒れた時もありました。皆さんに迷惑をかけてしまったこともありました。ですが、今の私はとても幸せです。女の子の幸せ、女の子らしさ、それを手に入れることができたのは、家族と、大学の皆さん、そして協会の皆さんのお陰だと思います。特に、最初の時に私をご指導くださいました篠原さん、支部でいつもお世話になった余呉さんには、特に感謝しています。ありがとうございました」
パチパチパチパチ！
幸子さんが最後に頭を下げて、スピーチが終了する。
スピーチの中では、あたしにも言及されていた。
その中で、あたしはあの日々のことを思い出す。

幸子さんに初めて会った時のこと。
幸子さんは女の子の声に似合わない乱暴な口調で、「俺は性別適合手術で男を取り戻す」と息巻いていた。
もちろん、その手術を受けたら、今はもう幸子さんはこの世にはいない。
あの時、あたしは幸子さんをひっぱたいた。そうでもしないと、どうしようもないくらいに切羽詰まった状況だった。
その後、幸子さんを東京に招待したけど、それでもまだ口調などが直っていなかった。
幸子さんが口調を間違えたりしたらガミガミとお説教した覚えがある。
今思えば、あの時のあたしは小姑そのものだったわね。
そんなことを思いつつ、続いては直哉さんのスピーチ。
直哉さんは「最初に幸子から告白された時は悟がちらついて断ってしまった」「幸子が諦めなくてよかった」と言っていた。
スピーチが終わると、慌ただしくブーケ投げと共同作業に入る。
ちなみに、ブーケは弘子さんが取っていた。

「さ、浩介くん、幸子さんに挨拶するわよ」
「おう」
一通り落ち着いたので、あたしは浩介くんと共に、幸子さんの元へと駆け寄る。
「幸子さん、結婚おめでとう」
「はい、優子さん」
幸子さんは笑顔だった。
「結婚してみて、どうかしら？」
「うん、とっても幸せだわ」
幸子さんの顔は、女の子の、メスの顔になっていた。
「ふふ、幸子さん、今夜はじっくりとメスになるのよ」
あたしが、小悪魔チックな笑みを浮かべて言う。
幸子さんは一瞬びくっとなるけど、すぐにこっちに向き直る。

「はい、直哉のものに、なりたいわ」
「その『もの』って言うのは、従属物って意味よね？」
あたしが、今も持っている新婚当初の気持ちを見せて、ちょっと意地悪する。
「うー、優子さん鋭いわ……そうなのよ。私もそういう欲が出て来ているっているか」
幸子さんが、顔を赤くしながらそう答える。
「あらあら図星だったかしら？　心配しないでいいわよ。それはあたしもよ。いい幸子さん、それがメスの本能なのよ」
「はい……メスの本能、まだよく分からないところもあるけど、女の子はメスでもあるものね。頑張るわ」
幸子さんがうっとりした顔になる。
ふふ、そうよね。結婚まで我慢したあたしたちが珍しいわけで、幸子さんはもう既に済ませているわけだものね。
「ふふ、今夜は楽しみにとっておくのよ」
「ゆ、優子さん！」
いたずらっぽくあたしが言うと、幸子さんの顔が真っ赤に染まっていた。
そりゃあそうよね、結婚式の特別な夜のことを思っちゃったら、ね。
あの日を思い出したのか、よく見ると隣の浩介くんも赤くなっていた。多分、あたしの顔も真っ赤になってると思う。
「ふふ、じゃあ引き続き楽しんでね」
「はい……」
あたしは手を振って元の席へと戻る。
「篠原さん、おかえりなさい」
席に座ると、余呉さんが声をかけてきた。
「ただいま。ふふ、幸子さんもすっかり乙女になったわ」
「そうね。女の子らしい女の子って、やっぱりかわいいわよね」
美人としてちやほやされるのは、誰だって気分がいい。
そういった環境もまた、迷えるＴＳ病患者を女の子に導いてくれる。

「でも、これからよね、幸子さん。結婚してからも、まだ女の子の修行は終わってないもの」
「ええ、女の子の修行に、終わりはないわ」
余呉さんが小さな声で冷静に語りかける。
思えば、結婚して、浩介くんとの初夜を終えてから、あたしには男の面影がなくなって、知識の中に埋没したものだと思っていた。
でも、それは間違いだった。
女の勘というものが分かるようになったのは結婚前のことだけど、女の子の持つメスの本能、特に好きな男への屈折した欲望についてよく分かるようになったのは、結婚してしばらく経ってからだった。
浩介くんに抱く欲望、浩介くんに乱暴に犯されて、無理矢理赤ちゃんを妊娠させられたいと思う欲望が止まらなくなることも多い。
結婚したばかりの頃は、その本能でずいぶんと苦しんだ。
でも今は、そういう気持ちが現れたら、浩介くんに素直に打ち明けられるようになった。
余呉さんに結婚歴があるかは分からないけど、いずれにしても困ったことがあったらあたしや余呉さんに相談してくれればいいと思う。
そしてその後、結婚式の思いでビデオが流れる。
そのビデオでは、幸子さんの男だった頃の写真も載っている。
世間では、既に「完全性転換症候群」についての正しい理解が深まっている。
それは皮肉にも、あたしがフェミニストたちを言論界から退場させたためだった。
そのために、その手の権利運動が萎縮する効果もあった。
そのお陰で、あたしたちはＴＳ病の理解、つまり「もう女の子だから女の子として扱って」という要求が通りやすくなった。
あたしは、もう一度幸子さんの方を見る。
あたしがカウンセラーを担当した患者さんたちが、幸子さんと親しそうに話している。
小野先生や歩美さんのケースを見ても分かるように、以前までは、あたしたちはトランスジェンダーと混同されていた。

永原先生が学名を「完全性転換症候群」と改めさせたのも、きっとそういった誤解が後を絶たなかったせいでもあると思う。

「ふう」

幸子さんと話終えた歩美さんたちが席に戻ってくる。

「みんな、おかえりなさい。あたし繋がりで交流するのもいいけど、きちんと他の会員さんとも縦で交流するのよ」

あたしが担当した患者さんたちは、みんないい子に育っている。

だけど、懸念はある。

それは、横の繋がりばかりが意識されると派閥に発展しかねないこと。

今のところ正会員はあたし1人だけど、将来的にはもしかしたらあたしの担当から正会員が誕生する可能性だってある。

そうなれば、協会の分裂に発展する危険性がある。

もちろん、そうならなうためにも、あたしは永原先生とよく話し合う必要があると思うんだけど――

「どうしたの篠原さん、浮かない顔してるわよ」

永原先生が不思議そうにあたしの顔を覗きこんでくる。

「ああうん、仲がいいのはいいことなんだけど」

「けど？」

「あたしが担当した患者さんも数が増えてきて、あんまり横の繋がりばかりだと派閥になっちゃわないかなって」

あたしは正直に、永原先生に考えていることを打ち明ける。

永原先生も「うーん」という感じで考える。

「そうねえ、今は大丈夫でも将来的には、無くはないものね」

「会長、懸念のしすぎですよ。時折違うパターンの交流をするでいいと思います」

余呉さんが、あたしたちの悩みに異論を唱える。

確かに、普通なら余呉さんの楽観主義でも何の問題もない。

だけどそれでも、あたしたちには不安がよぎってしまう。

「そうねえ、定例会合なんかで集まる時に、普通会員同士で派閥にならら

ないように、少し工夫したいと思います」
永原先生がまず提案をする。
「でも、普通会員は座席指定にはしてませんよね」
協会の会合では、正会員には席次が決められているが、普通会員にはない。
ちなみに、新しい正会員はまだいないのであたしは相変わらず正会員の中では最下位だった。
一時は広報部長の実績を考慮してそれなりの席次にする案もあったけど、結局敵失の連続などもあってお流れとなった。
まあ、正会員ってだけであたしにとっては十分だし序列が変わったと言っても、永原先生と比良さん余呉さん以外はあんまり意味がない序列だものね。
「派閥や集まりで固まらないように、あたしたちで呼び掛けましょう。女の子はどうしても派閥を作りがちですから」
あたしがそのように言うと、余呉さんと永原先生も、うんうんと頷いている。
「え!? でもそれってＴＳ病には関係ないんじゃないの？」
あたしたちの話を聞いていた弘子さんが、そんな話をして来る。
「ふふ、やっぱり弘子さんはまだまだ女の子として半人前ね」
あたしが笑顔でそう言うと、歩美さんは共感していて、他の患者さんはちょっと頭に「？」のマークを浮かべている。
ふふ、やっぱり女の子の成長課程が分かるわね。
「弘子さん、確かにあたしたちは『普通の女の子』ではないかもしれないけど、女子には代わりはないのよ。もちろん、派閥を作りたがるのは男にもよく見られるけど、女子はもっとすごいのよ」
あたしも、こうした「男性でも普遍的に見られるけど、女性により強く見られやすいこと」というのを決め細やかに分かるようになったのは協会の会員になってからの話だった。
そういう意味では、ＴＳ病の女の子にとっては、それなりのスキルと経験が求められるものだと思う。
まああたしの場合、女の子になったばかりの頃はクラスの女子に２

つの派閥があったのも影響してるかもしれないけど。
「そ、そうよね」
実際、あたしが協会の会合に参加して分かったことは、「協会は女子会」だということだった。
皆かわいくて美人で、だけど実年齢が行っていて、特に永原先生に比良さん余呉さんと言った江戸時代以前生まれの「長老」も多くいるので、「女子会特有のドロドロ」みたいなのはほとんど見受けられないけどね。
「そうよ、皆協会に入る時は、女子会に入るものと思ってね」
「うっ、じょ、女子会……」
あたしの言葉に、弘子さんが一歩引いてしまう。
これはいけないわね。ちょっとお説教しなきゃ。
「こら弘子さん！　あなたも女子なんだから、女子会への参加を恐れちゃダメよ！」
「はーい、でも彼氏との――」
「もちろん、女子会にばかり参加するのもダメだし、男と付き合う用事に優先させちゃダメだけどね」
弘子さんに適切なアドバイスをする。
女子校への転入がＴＳ病患者に不適切とされているように、男のいない空間に長居するのは、ＴＳ病患者には毒として扱われているのも事実だ。
「はい、彼氏の用事があったら、そっちを優先させます」
そう、うちの協会の女子会が他の女子会と違うのは、男との用事を優先させる女性に寛容なこと。
男性社会なら、女性優先は当たり前に受け入れられているので、その辺りは生粋の女の子と違うＴＳ病患者の特徴と言ってもいいだろう。
「それにしても」
余呉さんがまた口を発する。
「うん？」
「篠原さんって将来教育ママになりそうだわ」

余呉さんが優しく微笑んで言う。
教育ママ……あたしがママ……よく分からないわ。
「うーん、ママ……うーん……イメージが沸かないわ」
「そりゃあそうよ、実際に赤ちゃん産まないと、ママのイメージは沸かないわよ」
永原先生がゆっくりと諭すように言う。
「でも、優子ちゃんにもいつかはママになってもらわねえとな」
浩介くんがにっこりとした笑顔であたしに話しかけてくる。
「……もうっ」
ぽっと顔が赤くなるあたしは、また照れ隠しに顔をぷいっとしてしまう。
そんなあたしの様子を、浩介くんが微笑ましそうに覗いていた。

全員がご飯を食べ終わり、しばらくしたら記念撮影へと移る。
全参加者の記念撮影に新郎新婦親族の記念撮影、そして幸子さんと、あたしたちＴＳ病患者とで記念撮影もした。
全てが終わり、幸子さんもまた、この後初夜を迎えるために準備をするという。
一応２次会までは幸子さんたちも参加するけど、ホテルでの初夜を優先するため、軽く顔を出す程度で、お酒などは飲まないという。
あたしたちは関東へ帰らなければならないので、２次会に参加するのは余呉さんだけになる。
まあ、まだ日も高いけどね。
幸子さんの初夜については、まあ詳しくは聞かなくていいわね。
もしかしたら、幸子さんのお腹が大きくなってるかもしれないわね。
あたしたちは、それぞれ新幹線に乗り込む。
乗るのは同じ電車だけど、座席は違う。

「ねえ浩介くん」
「ん？」

結婚式が終わり新幹線の中で、あたしは浩介くんに告白する。
「研究がね、うまくいったら」
「うんっ！」
浩介くんがゴクリと唾を飲み込む。
告白の時、プロポーズの時、初夜の時、人生の変わり目はどれも今まで以上にドキドキしていたけど、今もそれに匹敵するくらいに緊張しているわ。
「あたし、浩介くんの赤ちゃん……欲しいの」
心臓がばくばくと音を立て、全身がじわりと濡れていく。
「あ、ああ……分かったよ優子ちゃん」
赤ちゃんを作るということは、当然今までのしていることとは大きく違ってくる。
初めての夜以来、あたしと浩介くんは、避妊具で自制はしていた。でも、それがなくなることになる。
「ふふ、期待しているわよあなた」
赤ちゃん作るためにする時、それはきっと、理性が吹き飛ぶんじゃないか？
あたしには何となく、そんな気がしてきた。
今までは相手のことを考え、気を使い合う面が強かったけど、子供を作るという前提になると、変わってしまうんじゃないか？
そんな予測が、あたしにはある。
でも、不思議と怖くはなかった。それはあたしの中で、浩介くんへの、確かな信頼があったから。
もしかしたら、浩介くんも同じことを考えているかもしれないわね。

# いつもの休日いつもの誕生日　前編

「うーん、また失敗だわ」
大学院修士2年の日々が本格的に始まった6月。
あたしは自分で見つけ、蓬莱教授に提案したやり方で、不老遺伝子のメカニズムを見つける作業を行っていた。
浩介くんが課題研究と修士論文に追われる中で、あたしは少しだけ余裕ができた。
とはいえ、もちろんあたしのモデルだって成功するのは難しい。
野球でも、3割打てれば強打者だけど、この世界はもっともっと少ない確率で勝負している。
あたしの考えた理論でも、その通りに行くかどうかは分からない。
もちろん、まだ始めたばかりなので、あたしはそこまで悲観をしていない。

「浩介くんの方はどうかしら？」
むしろ気になるのは、来年浩介くんが博士課程に進めるかどうかということ？
あたしはほぼ問題ないけど、浩介くんの方はどうだろう？
あの時のＡＯも、「博士は何とも言えない」と言っていたし。
「優子さん、浩介さんのことかい？」
あたしは、側にいた蓬莱教授に話しかけられた。
「あ、うん」
「何、大丈夫さ。浩介さんもああ見えて成績がぐんぐん延びているぞ」
蓬莱教授が笑顔でそう話す。
どうやら、あたしの知らない間に浩介くんも成績が上がっていたのね。
「それよりも優子さん、博士課程になるとまた修士とは違って、新しい業績を開拓する必要があるぞ。優子さんもそろそろ自分のことを気にかけるべきだぜ」
蓬莱教授、今年度も始まったばかりなのに、もう来年のことを話し

ているわね。
まあ、それだけあたしに見込みがあるということかもしれないけど。
「はい」
「まあ確かに、この研究所は、間違いなく最先端にいるだろうけどな」
うん、そういう意味では、博士になるのにはうってつけの研究所ではあると思う。
ともかく、実験を成功させないといけないわね。
「うーむ、しかし……」
蓬莱教授も蓬莱教授で、何か引っかかるのか、ずっと実験結果とにらめっこしている。
あたしたちの実験は、マウスでの実験はとっくにうまくいっている。
しかし、それでダメだ。
人間と遺伝子が近いと言っても、全く違う動物である以上、応用するのは遥かに難しい。
まあ、人体実験の志願者は殺到中なので、「新薬開発と治験」という名目にはなっている。
恵美ちゃんの元にも、蓬莱教授のスタッフが入り込んで、スポーツ選手に与える影響を精査している。
そして今では、「不老の選手の育成方法」について、恵美ちゃんのテニスチームはノウハウを蓄積させている。
なので恵美ちゃんは、年を追うごとに、他の選手よりも強くなっていった。
身体能力そのままに、技術力がどんどん蓄積していくのだから、当たり前と言えば当たり前なんだけど。
日本人は身体能力が弱い何ていう風説もあったが、仮にそうならば、不老人間がいかに強靭かが改めて分かったと思う。
まあ、あたしみたいに、不老でも身体能力が弱い人はたくさんいるけどね。
でも、少なくとも生存能力は不老でない人よりは強いはずだわ。

「うーん……とりあえず、成功例から見せてくれれば、理論も作りやすいんだがねえ」
蓬莱教授は、あたしのモデルケースを見て何やら唸っている。
おそらく、どこかに納得が行っていないのかもしれない。
まああたしもあたしで、このことについては納得ができないところはあるけどね。

さて、6月と言えば、あたしはもうひとつ、生まれてから24回目の誕生日を迎えることになっている。
大学院に入った去年からは、もう「誕生日プレゼント」という年齢でもなくなったため、あたしの誕生日も、浩介くんの誕生日も、何か祝うということはなく、ごく普通の日になった。
唯一違うのは、ちょっと高いお店に外食をするくらいで、普段と変わらない1日になっている。
まあ毎年プレゼンと買ってとかしてたら贈る方も受けとる方も大変だし、それでもいいかな？
6月22日があたしの誕生日で、今年は土曜日になっている。
あたしは5日間の疲れをとるため、部屋の中でお人形さんたちとおままごと遊びをしていた。
「さあ、子猫さんのご飯作りましょうねえー」
ミニチュアのテーブルに、お人形さんと犬さん、猫さん、ペンギンさんのぬいぐるみを椅子に座らせる。
そしてあたしがご飯のおもちゃとお皿のおもちゃで食卓を作っていく。
はうー、かわいいかわいい！
ああ、おままごとにぬいぐるみさん遊びってやっぱりとっても楽しいわ。

コンコン
「優子ちゃん」
遊びが一段落して次のことを考えていたら、浩介くんが扉をノック

してきた。
「あらあなた、何かしら？」
「今日夕食、レストランに行くぞ」
扉の向こうから、浩介くんの声が聞こえてくる。
休日のあたしがこういった遊びに熱中することもあることを知っているためか、部屋には入らないらしい。
「はーい」
今年も去年と同じように、レストランで外食するという。最も、何を食べるかまでは考えていないけれどね。
あたしは、お人形さんとぬいぐるみさんを使ったおままごとが一段落したのでテレビを回す。
ちょうど今は朝の時間帯で、毎週欠かさず……というわけではないけど、とにかくこの時間にやっている女児向けアニメを見るためにチャンネルを合わせた。
「さ、皆で仲良く、一緒に見ようね」
そして、お人形さんとぬいぐるみさんを、あたしの両脇に置いて、頭の向きをテレビに向ける。
あたしは、女児向けアニメが大好きで、それも、大人の視点で好きというわけではないし、大人の心で女児向けアニメを見ているという感じではない。
やはりどれ程の時間がたっても、帰ることのできない童心を本能的に追い求めてしまうのよね、あたし。
だけど、その事に罪悪感を感じてしまうことも、もうほとんどなくなった。
今はもう、「これがあたしの性分なんだ」って、はっきりと割りきることにした。
ＴＳ病として女の子に生まれ変わったあたしの個性。
だって、女の子が女児向けアニメを見たっていいのよ。あたしには、実年齢はほとんど意味がないんだし。
女児向けアニメが始まった。
このアニメは、いわゆる変身アイドルもので、女児たちの変身願望

をよく捉えていると思う。
あたしは、至福の時間を過ごした。
浩介くんとの夫婦生活とは、また違った幸福感が、あたしを包み込んだ。
あたしは、本棚からふと古い少女漫画を取り出した。
これは、あたしが女の子になってから、ううん、あたしが人生で初めて読んだ少女漫画だった。
主人公の平凡だけどかわいい女の子が、お坊っちゃまに恋をするけど、許嫁の意地悪お嬢様にいじめられてしまう漫画だった。
最後はいじめられ過ぎた主人公が泣いてしまい、その様子をお坊っちゃまに目撃され、お嬢様は婚約解消の憂き目に遭い、会社も没落して行方不明、一方で主人公の女の子は愛しのお坊っちゃまと結婚して幸せを手にいれるというストーリーになっている。
あたしがカリキュラムとして手に取った時点でかなり古い少女漫画だけれど、今でもカリキュラムには必ずこの漫画が取り入れられている。
それは、この漫画がよく王道を踏んでいて、女の子の感性を漫画で理解するのにとてもいい教材だから。
お金持ちでかっこいい男の子、女の子に優しい男の子……ふふ、浩介くんもそんな感じかしら？
あ、でもお金持ちっていう訳じゃないか。
「ふう」
少女漫画には、エッチなシーンが結構多い。
この漫画の場合は、スカートめくりのいじめを、お嬢様にされてしまうシーンがあり、これに泣き出した主人公を見て、物語が大きく動くようになっている。
少女漫画を読み終わったあたしは、朝食を食べにリビングへと向かう。
「おはよー」
「おはよー、今日は優子ちゃん誕生日ね」
お義母さんが、早速あたしの誕生日について触れてくる。

「あーうん、でもいつもと変わらないわよ」
そう言うと、あたしはいつものようにキッチンへと向かって家事の準備をする。
さっきまでは女児モードだったあたしも、キッチンに立てばたちまち「主婦モード」に大変身になる。
主婦的な所も、女児的な所も、少女的な所も、全部「篠原優子」という女の子を構成する上で欠かせないもの。
あたしはお料理をいつものようにお義母さんと一緒に作り上げた。
誕生日の朝食と言っても、何か特別なものを作るわけでもないので、いつも通りを心掛けることにした。

「優子ちゃんも浩介も、研究はうまくいっているかい？」
お義父さんが、珍しくあたしたちの大学院について聞いてくる。
「ああ、今のところ大丈夫だ」
「うーん、あたしはちょっと課題があるかしら？」
浩介くんは自信たっぷりに大丈夫と答え、逆にあたしはまだ課題が残っていることについて少し触れる。
絶対的な水準では、あたしが上回っているけど、従事している研究を考えれば、こういう回答にならざるを得ないと思う。
「あら、意外だわ」
お義母さんの顔が少し驚きに染まる。
「あーうん、優子ちゃんの方が難しい課題しているんだよ」
浩介くんナイスフォローだわ！
「へー、そうなのね」
それ以降、あたしたちは通常の朝食へと戻った。

朝食が終わり、あたしはまた部屋で少女漫画を手にとって読み返す。
と言っても、既に読んだ内容の漫画を、また読み返しているので、軽く読むという感じ。
女の子になったばかりの頃は、空いている場所が多かったのに、今

ではもう、本棚がいっぱいいっぱいになってきた。
古い女性誌などは捨てているけど、それでも、新しく買った単行本だけで結構な分量に上ることになる。
少女漫画業界や、少年漫画業界も、蓬莱の薬に大きく期待している。
それは、言うまでもなく蓬莱の薬が少子化への特効薬になる可能性が大きいからだ。
考えて見れば、今まで蓬莱の薬について言及しない業界はほぼなかった。
雇用どころか産業の消滅さえ確実視される老人ホーム業界でさえ、蓬莱の薬に反対しなかったらしい。
それは、９８％という圧倒的世論のみならず、介護業界の待遇の悪さもあると思う。
いずれにしても、外国のイデオロギー団体も、徐々に追い詰められている。
世界の国民投票では、これまで全ての国で蓬莱の薬に賛成が多数となった。
こうなると、いわゆる「ロック」と呼ばれる人たちが蓬莱の薬に反対しそうなものだけど、日本のロックたちも、誰も蓬莱の薬には反対とは言わないらしい。
とはいえ、海外では少数とはいえ、蓬莱の薬に反対する勢力がいる。
彼らは国民投票で何度結果が出ても、諦めないらしい。
とはいえ、反対派包囲網は確実に狭まっている。
日本時代からあたしたちに反対してきた例の牧師も潜伏していると思われる環境保護団体は、追い詰められた末とはいえ、その国の有権者に矛先を向け始めている。
こうなるのは、既に末期の証拠というのが、蓬莱教授の話だった。
「優子ちゃーん、手伝ってー」
「はーい」
お義母さんに呼ばれ、あたしは家事を手伝いにリビングへと入る。
今日は土曜日でお義母さんが終日いるはずなので、浩介くんが出る幕がないわね。

……と思ってたんだけど……
「いけない！　ネギが切れてるわ！　ちょっと買ってくるから、優子ちゃんお洗濯続きお願いね」
うーん、やっぱりいくら気をつけても、野菜は切らせちゃうのよね。
「あ、はい」
お義母さんが急いで外出の準備をして、家を出ていってしまった。
うー、この量を1人でって……
浩介くんを見ると、露骨にガッツポーズをしていた。
「えっとその……浩介くん、洗濯物を入れるの手伝ってくれる？」
「いよっしゃあ！」
浩介くんが気合いを入れてガッツポーズをする。
とにかく今は、これを片付けないといけないわ。

そして――
「ふひひ、優子ちゃん、ご褒美ちょうだい」
「きょ、今日くらいは許してえ……」
あたしが演技した涙声で浩介くんに懇願する。
「ふふ、ダメ」
あたしは簡単に演技を見破られてしまい、浩介くんに赤い巻きスカートの裾を掴まれてしまう。
ぺろー
「ううっ、恥ずかしいよお……」
顔を両手で覆って、視界を閉ざすことでなんとか耐える。
「かわいい熊さんだね」
熊さんがプリントされた、あたしのお気に入りのパンツ、やっぱり浩介くんに見られるのは、とっても恥ずかしいわ。
特にこの、「ご褒美」というシチュエーションも、効いていると思うわね。
「ふう、やっぱり家事手伝いはやめられないぜ」
「あうう……」
やっぱり、性欲に働きかけると簡単に行動してくれるよね。男っ

て。
確かに恥ずかしいけど、これさえ我慢すれば、家事を手伝ってくれるんだから、他の主婦の皆さんも見習えばいいのにと思ってしまうわね。

「ただいまー」
言いつけられたことを全て終え、部屋で休んでいるとお義母さんが帰ってきた。
「おかえりー」
あたしはお義母さんを玄関に迎えて買ってきたものを冷蔵庫に入れるのを手伝った。
「もう洗濯終わったの？」
「うん」
洗濯が終わっていることを伝えると、お義母さんが驚いた顔になる。
確かに、あたし1人であの時間で終わらせるのは結構難しい。
「俺が手伝ったんだ」
浩介くんが「どうだ」という感じで胸を張るようにして言う。
「まあ、浩介もそういうことするようになったのね」
浩介くんが家事を手伝ったことに対して、お義母さんが大いに感心している。
「もちろん、優子ちゃんが困ってる時だけ手伝ってるぞ」
「ふふ、そういう所も含めて、いい旦那さんよね」
お義母さんが、ますます浩介くんを誉めている。
「えへへ」
浩介くんも気分よく愛想笑いをしている。
ふふ、浩介くんのモチベーションが、あたしのパンツを見たいということは、言わない方がみんなのためになるわね。
「さて、それじゃああと少ししたらお昼作るから待っててね」
「おう」
あたしがお昼ご飯を待つように言うと、浩介くんは自分の部屋の中

に戻っていった。
あたしも、自分の部屋に戻って、自室のお掃除を開始することにした。
「うーん、これはここでいいかしら？」
お掃除と並行して行うのが整理整頓。
実家にあったあたしの部屋をこの家に忠実に再現した結果として、高校時代の教科書なんかも残っている。
大学に進んだ時に何かの役に立つと考えていたけれども、結果的に大学1年の時にたまに開いた位で、今はほとんど役に立っていない。
「そう言えば、屋根裏部屋が物置になっていたかしら？」
結婚してから、屋根裏部屋を訪れたことはあまりない。
大体は冬場の暖房器具や、夏場の扇風機の取り出しやレジャーの時に使う器具の収納などに使っていて、それを取り出したりする時に開ける訳だけど、それなりの重さがあるものも多く、浩介くんやお義父さんに力仕事を任せている。
ともあれ、今は整頓だけでいいわね。
時間も時間だし、そろそろお昼ご飯の支度をしようかしら。
「ふう」
「優子ちゃん、ご飯作る？」
ノートパソコンで何かを見ていたお義母さんがあたしを見てご飯の準備を暗に促してくる。
「うん」
今日のご飯はうどんを作る。
お義母さんと一緒に、役割分担をしながら作る。
ちなみに、1人でも全て出来るように、毎回役割を入れ換えたりしながら進めている。
「お義母さん、そっちは大丈夫？」
「ええ、問題ないわよ」
2人で協力して、うまく作っていく。
麺と具を茹で、またお皿に盛り付けていく。

季節も6月になって、暖かくなったので、冷たいうどんを作る機会が多い。
「できたわよー」
そして、あたしが代表して浩介くんとお義父さんを呼ぶ。
すると、男2人が部屋から出てきて食卓を囲み、いつものように一家4人でお昼ご飯を食べる。
結婚生活の間、ずっと続けてきた食卓囲みだった。

# いつもの休日いつもの誕生日　後編

お昼ご飯を食べ終わったら、お皿洗いをお義母さんに任せて、あたしはさっきやり残した整理整頓作業へと戻ることにした。
「うーん……」
これ、どうしようかしら？
まあ、ともあれ、屋根裏部屋まで持っていって――
「うー」
お、重いわ、どうしよう？
屋根裏部屋に行くには階段を登らないといけないし。
とすると、荷物を分割するしかないわね。
「うーんっ!!!」
こういう時は、腕力がないのって嫌な話だわ。
「お、優子ちゃん。どうしたの？」
うー、運がいいんだか悪いんだか、トイレから出てきた浩介くんに出くわしちゃったわ。
手伝ってもらいたいのは山々だけど、またスカートめくられて恥ずかしい思いしなきゃいけないし。
「うん、高校の参考書を屋根裏部屋に入れようと思って」
ともあれ、正直に話す。
「大丈夫か？　随分重たそうだぞ」
浩介くんも、心配そうな表情をしている。
「う、うん……」
あたしは、屋根裏部屋へと通じる棒状の鍵を引っ掻けて、階段を引き出す。
この急で心許ない階段を上れば、屋根裏の小さな物置に行くことができる。
「手伝おうか？」
「大丈夫よ。覗かないでね」
ともあれ、数冊回に分ければ大丈夫なんだけど、浩介くんが虎視眈々とあたしのスカートの中を覗こうとしてくるのが心配だわ。

「え!?　いやこれ下ろしたら向こうに行くの苦労するし」
　もちろん道幅は狭いけど通れない広さというわけではない。
　だから浩介くんの言っていることは間違いなんだけど――
「まあほら、階段の下からパンツ見るってシチュエーション、まだ経験してないなあって」
　また浩介くんが正直に己の欲望をぶちまけてくる。
「もー！　えっちぃ！」
　相変わらずぶれない浩介くんに、あたしが抗議する。
「何とでも言え！　好きな女の子にえっちになるのは男の本能なんだからな！」
　また浩介くんの必殺技が炸裂してしまう。
　もう、これじゃ反論できないわ。
「んもー！　浩介くんずるいー！」
　あたしが、ＴＳ病の女の子故に元男で男の子の気持ちがわかることを、上手に逆手に取られている。
　結婚する前から、こういうことは何度となく続いたけど、あたしが浩介くんに惚れ込んでるせいで、分かっていても引っかかり続けてしまうのよね。
「まあいいじゃないか。どうせ俺に手伝ってもらったって同じことだろ？」
　浩介くんに痛いところを突かれてしまう。
「うー」
　浩介くんに運んでもらったら、家事手伝いのご褒美としてスカートめくりが待っているし、あたしが運ぶとしても、浩介くんに下から覗かれて……そうだわ。
「ちょっと着替えてくるわね」
　そもそも、最初からズボン穿けばいいのよ。うん。
「ちょっと待った」
「ふえ!?」
　しかし、浩介くんに回り込まれて、通せんぼされてしまう。
「ちょ、ちょっと浩介くんどいて！」

あたしが浩介くんにそう訴える。
「優子ちゃん、自分に正直になりなよ」
浩介くんがにやにやとしたり顔になる。
間違いなく意地悪モードの浩介くんだ。
「ふえ!?」
「本当は、下から覗かれて、恥ずかしい思いしたくて、濡らしたくてたまらないんだろ？」
半笑いな声で、浩介くんがそう囁いてくる。
浩介くんの誘惑する声が、あたしに容赦なく突き刺さる。
「そ、そんなわけないわよ!!!」
図星ど真ん中に直球を放り込まれたあたしが、余計に墓穴を掘るような声をあげてしまう。
これ自体、既に「はい、あたしは浩介くんにパンツ覗かれたがっている変態です」と言っているようなもので――
「またまたー、嘘はいけませんよ奥さん」
浩介くんが「待ってました」とばかりににっこりと笑っている。
そんな浩介くんの声が、あたしの胸に容赦なく突き刺さっていく。
「はうっ……もー！　あなた、どうしてこういう時だけ鋭いのよ！」
普段は男の例に漏れず、浩介くんもものすごい単純でバカなのに。
「全く、俺たち何年夫婦生活してると思ってるんだ!?　優子ちゃんって、本当は俺に喜ばれるのが好きでたまらないんだろ？」
「あうー」
観念したあたしは、本の一部を持ち屋根裏部屋へ続く階段をゆっくりと登る。
「おお、おおーもう少し……もう少し……」
「んぅ……！」
下から浩介くんが、わざとあたしに聞こえるような声で実況してくる。
あたしは恥ずかしさのあまりこれ以上登れなくなってしまう。
「どうしたの優子ちゃん、早く片付けなきゃ」
浩介くんは知ってか知らずか、早くパンツ見たいという感じに煽っ

てくる。
「っ……！」
あたしは、意を決して階段をもう一度登る。
「うひょー！　白パンツキター！　かわいー！」
ううっ、浩介くんに実況されて恥ずかしいよお……！
あたしは荷物を屋根裏部屋において、何とか下に降りる。
そして、降りきったときにはすっかり頭が混乱してしまった。
「浩介くん、残りのを運んで」
「よっしゃ！　分かったぜ！」
浩介くんが張り切って残りの本を持ち、あたしよりもずっと早いスピードで作業を終わらせる。
これが最悪の選択だと気付くのは浩介くんが屋根裏部屋への階段を登りはじめてからだった。

「さて優子ちゃん、ご褒美ちょうだい」
屋根裏部屋の鍵を閉め、あたしの部屋に戻って来て、浩介くんが開口一番にそう話す。
「はい……」
浩介くんに必要とされて、性的な目で見られるのが、たまらなく嬉しいわ。
ぺろん
浩介くんに後ろに回り込まれ、後ろからスカートをめくられてしまう。
「へー、後ろは全部真っ白なんだね」
「っ……」
浩介くんにパンツを見られ、あたしは必死で恥ずかしさをこらえ、プルプルと震えが出始めてしまう。
すると浩介くんは、片手で後ろの部分をめくったまま、体を前に出してくる。
「で、こっちは」
ふぁさっ

「いや……！」
あたしは浩介くんに前から後ろから両方から両手でスカートめくりさせられ、完全にパンツ丸出しにさせられてしまった。
「へー、こっちだけにプリントされてるんだな」
浩介くんに、さらに近い距離からパンツを凝視されてしまう。
あたしはまた浩介くんにメスの本能で興奮してしまう。
「あーん、もう許してえ！」
「おや？」
浩介くんが、何かに気付いた様子を見せてくる。
それが何かは、あたしにも分かってしまう。
「優子ちゃん、やっぱり興奮しているんだな」
「うっ、うん」
あたしは、すんなりと白状をしてしまう。
浩介くんが、スカートから手を離してくれる。
「はうー、恥ずかしかったー！」
恥ずかしさのあまり、あたしは力が抜けてベッドに座り込んで顔を隠してしまう。
「優子ちゃん、今夜、もっと恥ずかしいことしようぜ」
「……はい」
浩介くんが一転して優しそうな声を使い、あたしの理性は完全に溶けてしまう。
ああ、やっぱり好きな男の子ってだけで、こんなにも気分が違うのね。
「優子ちゃん、俺も必ず、我慢するからさ。優子ちゃんの誕生日だものな」
「はい……」
ともかく今夜は、浩介くんもあたしも、満足したいわね。
今日の誕生日は優一としての誕生日だけど、それでも浩介くんはこうしてお祝いをしてくれる。
その事が、何だかとても嬉しいのだ。
あたしはベッドに横になって、火照った体をゆっくりと元に戻して

いく。
落ち着いて、午後の家事をきっちりこなして、夜の外食に備えることにした。
「優子ちゃーん、出掛けるわよー！」
「はーい！」
横になってくじらさんのぬいぐるみを抱きながら休んでいると、お義母さんの声がして、あたしはベッドから起き上がる。
そうだわ。久しぶりにぬいぐるみさんを抱いて行こうかしら？
うん、デートの時も何度かしたことあったものね、大丈夫。
そう思い、あたしはくじらさんのぬいぐるみを抱いたまま、自分の部屋を出た。
この赤い服に赤い巻きスカートは、ぬいぐるみさんを抱くととても幼い女の子を演出しやすいのよね。
「よし、全員揃ったわね」
家族はみんな、あたしが持っている女の子としてのコンプレックスをよく知っている。
なので、こうやってぬいぐるみさんを抱いたまま出掛けても、特に何も言われない。
こういう所も、あたしは恵まれていると思うわね。
例えば、これが嫉妬深い姑とかだったら、あたしがぬいぐるみさんやお人形さん、おままごとに少女漫画や女児向けアニメが好きなことを絶対認めてくれないし、多分この赤い服だって、着ることはできなかったと思うもの。
「よしじゃあ、回転寿司に行くか」
「「はい」」
お義父さんがそう宣言し、あたしたちも特に異議はなかったのでそのまま家を出ることになった。
あたしたちの家と駅とを結ぶ道からちょっと横道にそれた道路沿いに、回転寿司屋さんがある。
いわゆる「安い回転寿司」というわけではなく、1皿数百円が普通

で、ものによっては1皿１０００円するものもある。
あたしがまだ子供だった頃は、「どれを頼んでも1皿１００円」とか、「1皿８０円の激安寿司」のようなセールスが目立ったが、今の時代はそうした安売り寿司は、一転して苦戦を強いられている。
回転寿司と言えど、ある程度の品質が求められるようになったし、実際、ここも頼み方によっては1人で５０００円かかったりもする。
でも、そんな高級志向のお店が、今では繁盛するようになっている。
あたしが女の子になったばかりは、「この好景気も東京五輪まで」が合言葉だったが、どうやら宛が外れたらしくてよかったわ。
最も、それは蓬莱教授という希望があったからかもしれないけどね。
「ついたわね」
「いらっしゃいませー何名様ですか？」
店内に入ると、早速店員さんがお決まりの話をする。
「4人です」
お義父さんが代表して人数を伝えると、カウンター席なら空いているとのことでそちらに座らせてもらう。
あたしたちが案内されたのは、ちょうど右側がテーブルとの境になっている所からの4席で、あたしが一番右に、浩介くんがその隣、そして左側の2席に義両親がそれぞれ座る。
持ってきたぬいぐるみさんは、膝の上に置いてバランスを取る。
回転寿司は右から左に流れていて、目の前には納豆巻きが並んでいた。
「よし」
あたしは、食は太くないので、まずはこの納豆巻きを取ってゆっくりと食べることにした。
浩介くんはお茶を汲みつつ、別のお寿司に手を出している。
「すみませーん」
「はーい」
「大トロ1つ」

「はい、大トロ1枚！」

別のカウンター席から、大トロを頼むお客さんがいた。

大トロはここではそれなりの値段がするけど、この回転寿司はもっと高いネタもある。

回ってくるお寿司を眺めつつ、２皿目を取る。

「すみません」

浩介くんが今度は注文をする。

「はい」

「特上穴子」

浩介くんがまた高い品物を頼んできた。

「はい、特上穴子ね」

義両親も、マイペースで食べていて、一方で浩介くんは高いお寿司も含めて結構なハイペースで食べている。

ここの回転寿司のイチオシは、「大トロ」「中トロ」「赤身」の「マグロセット」で、更にその中でも特に上質なのを使った「特上マグロセット」は、１皿１０００円の高級品になっている。

店内に掲げられているメニュー表には、「特上マグロセット」に対して「一番人気」と書かれている。

これが、一番値段の高い品物を買わせようとする店側の戦術なのかはわからないけど、いずれにしてもこういう商法が成り立つようになった時点で、あたしが小学生だった頃に比べると遥かに過ごしやすい世の中になったと思う。

納豆巻きを食べ終わって次のお皿へ。

うーん、どうしようかしら？

今日はあたしの誕生日祝いだし、よし。

「すみません」

「はい」

寿司職人さんがあたしを見てすぐに視線が胸に固定される。

「特上マグロセット」

いつものことなので、そのままあたしは特上マグロセットを頼む。

「特上マグロセット、ありがとうございます！」
寿司職人さんが、明らかに張り切った顔をする。
胸に視線が行くのも、男たちの士気が上がるのも、すっかりお馴染みの光景だった。
ふふ、浩介くん、他の男の視線についてもすっかり慣れたみたいね。
あたしが友達や恋人になったばかりの頃は、いちいち嫉妬しちゃってたのに。

「はい特上マグロセット」
数分後、前のオーダーを含めて作り終わった寿司職人さんが、あたしに特上マグロセットを渡してくれた。
お皿の色は金色で、いかにも「高いです」というオーラを醸し出している。よし、まずはこの赤身からいこうかしら？
あたしは、まずはお寿司にお醤油をつけてから口へと運ぶ。
半分ほどで、あたしは口の中がいっぱいになる。
「んー」
結構赤身が効いてて美味しいわ。
あーでも少しわさびきつめかしら？
「うーん、やっぱりお寿司は『わさび微量』に限るなあ」
浩介くんが独り言を呟いている。
「あなた、『わさび微量』って？」
浩介くんにその心を聞いてみる。
「ああ、わさび抜きはつまらないけど、わさびが多いのもよくねえと俺は思うんだよ」
いわゆる、「わさびのない寿司」は、「足りなくてまずい料理」の典型例だという風潮もある。
しかし、それが極論なのは言うまでもない。
「最近のお寿司はわさび多すぎだとも思うんだよ。素材の味を殺すというか」
浩介くんの意見は面白いわね。
つまり、浩介くんに言わせれば、わさびというのはあくまでも調味

料だというのだ。
「わさびが主役になっちゃ行けねえと思うんだ」
「あら？　わさびが主役のお寿司もあるわよ」
あたしたちの会話に、お義母さんから思わぬ横槍が入った。
回転寿司のレーンを見てみると、「わさび」と書かれたお皿が巡ってきて、巻き寿司の海苔の内側に、シャリの白いのに混ざって不気味な緑色をしたお寿司が６貫乗っていた。
「ああ、うん。遠慮する」
「そうだな。それがいい」
見た目の雰囲気だけでも、ヤバい感じがしたので、あたしたちはこれをそのまま取らずにスルーした。
さて、あたしは「特上マグロセット」の中トロに手をつける。
「うん、おいしいわ」
やはり、お寿司屋さんもその辺は分かっているのか、中トロはわさびの味がほとんどせず、ほぼマグロの味だった。
ほどよく脂がのっていて、「大トロよりも好き」という人がたくさんいるのもうなずける美味しさだった。
「優子ちゃんの『特上マグロセット』美味しそうだな」
浩介くんが羨ましそうに話す。
「うん、でも、４人で食べたら４０００円よねー」
お義母さんは、主婦らしくお財布が心配なご様子だった。
まあ確かにおいしいけど、これに１０００円を１人１皿は贅沢よね。
「ま、いいんじゃねーの？」
「そうだな。たまには」
「うん」
あたしが中トロを食べ終わる頃には、議論は終わっていたらしい。
「すみませーん」
「はい」
浩介くんが代表して、寿司職人さんを注文に呼びつける。
「特上マグロセット３つで」

「はーい、ありがとうございます！」
寿司職人さんも、モチベーションが高まっている。
あたしは、それを尻目に大トロに差し掛かる。
「んー！」
口に入れた瞬間、絶品の脂身があたしの口に入ってくる。
確かに、これだけ美味しいなら、一番人気も納得だわ。
あたしが大トロを食べ終わる頃には浩介くんたちの「特上マグロセット」ができていた。
その後、あたしはサーモンやぶりなどを楽しんだ。
食べた皿の数は、結局あたしが一番少なくて1桁で、浩介くんが一番多く、あたしのちょうど2倍だった。
会計は、もちろん1万円を大きく越えた。
場所などにもよるだろうけど、昔の安い回転寿司なら多分半額で済んだと思う。
「お腹いっぱいだね優子ちゃん」
「うん」
帰り道、浩介くんが満足そうな表情をしてくれる。
家が近づくにつれて、あたしはさっきのことで頭がいっぱいになる。
「少し休んだら、ね」
「ああ、優子ちゃんはえっちだな」
浩介くんがまたにやにやしているわ。
「……もうっ」
分かってるわよ。本当はあたしの方がメスなんだってことくらい。
だって、こんなに素敵な浩介くんと同居してる妻なのよ？
女の子だって、えっちになっちゃって当たり前じゃないの。
「ねえあなた……」
「ああ、おいで」
夜のあたしの部屋、義両親が寝た頃を見計らって、あたしと浩介くんが落ち合う。

最初は聞こえちゃわないか不安になるけど、途中からはどうでもよくなってしまうのよね。
「やっぱり、大きいよな」
向かい合って座っているから、浩介くんの視界からは、あたしの大きな胸がよく見える。
もみっ……もみっ……
「うん……ひゃうっ」
浩介くんに、ゆっくりと胸を揉まれていく。
「柔らかい、よな。脂肪って」
「もう」
浩介くんがあえて「脂肪」と言う。
間違ってないのがたち悪いわ。
「優子ちゃん、体脂肪率は何％？」
「え!?」
浩介くんから、セクハラ質問が飛んでくる。
でもあたしは、不快感はない。
何故なら、何％と答えても、文句を言わないって知ってるから。
「さ……３０％……」
うー、どうして本当のこと言っちゃうのよ優子！
「へえ、そのうち何％がここに集中しているのかな？」
ぷにっ……ぷにっ……
浩介くんに胸を揉まれる速度が早くなる。
「あうう……」
「ふふ、優子ちゃん、今夜も長くなるね」
「はい……」
あたしは、大好きな浩介くんに、もう何回目か分からないほど、きつく抱き締められた。

## 突然の成功

誕生日も終わり、季節は夏の終わり、大学院にも夏休みらしきものはあるが、あたしには無縁だった。

というのも、あたしたちはついに難関を打破することができたから。

変化は突然に、そして何の予兆もなく急激に訪れた。

それは7月のある日、あたしと浩介くんは、蓬莱教授と数人の助手と共に、実験を見守っていた時のことだった。

「うん、これで成功だわ。やったわ！」

あたしは、とうとう新しくγ型遺伝子を発見した。いや、あたしの理論で蓬莱の薬に改良を加えていき、ついに成功したというのが正しい。

あの時は何時ものようにしらみつぶし的にあたしの仮説を実証する日々だった。

すぐに駆けつけた蓬莱教授にも見てもらう。

「優子さん、成功だ！」

そしてしばらくして、蓬莱教授が追試を始め、翌日、これまでの蓬莱の薬では防げなかった細胞分裂における僅かな劣化が完全になくなったという報告が蓬莱教授から入った。

γ型の要素は、α型やβ型と違って、ＴＳ病患者にとって「主」となることはなく、発見は困難を極めた。

でも、今はもう、それが何者なのかもはっきりした。

γ型は、分裂直後に同じ遺伝子を２つ作り、片方を冬眠させる性質を持っていた。いわば分裂時に予備を作ってから参照するβ型を補う役割があり、復元保存のためのシステムというのが正しいだろう。

β型と対をなすこの方法で、仮にどちらかの原本が何らかの形で劣化しても、元に戻せる二重構造になっていた。なるほど、確かにこれならこれを「主」とする患者が居ないのも頷けるわね。

こうして、不老は完成した。

これまでの蓬莱の薬では、時間がたつにつれてわずかに劣化することが知られていたが、既にこの手法で、ＴＳ病患者と同じ遺伝子を再現できることがわかった。
あの時、蓬莱教授はとても興奮していた。
大学院生のあたしが、蓬莱教授でさえ発見できなかった新事実を発見し、大層に喜んでいた。
この報告をした時には、義両親が、あたしの両親も連れて赤飯を炊いてパーティーを開いてくれた。
おばあさんも「これでようやくひ孫ができる」と喜んでいたけど、もちろんまだまだやらなきゃいけないことがあるのよね。
一方で、永原先生もとても喜んでいて、正会員に情報が拡散され、正会員たちからお祝いのメッセージがたくさん届いた。
一方で、マスコミには高島さんのみに情報を流し、「まだ再現性に乏しく、時期尚早なので報道しないで欲しい」とだけ伝えてある。
ともあれ、浩介くんをはじめとする被験者の細胞で実験した結果、あたしたちはついに完全な不老の薬を作り上げることができた。
この事が判明すれば、後は再現することは容易で、海外を含めた複数の他研究期間にも追試をしてもらい、これもすべて成功させた。
これで不老の薬ができるはずだった。
しかし、実用化にはまだもう１つの壁があった。
それが――
「相変わらず、歩留まりが悪いな」
実験終了後、会議室で蓬莱教授がため息をつく。
そう、再現実験に成功するはする。しかし、方法が悪いのか成功する確率が非常に悪く、これではまだ世間に発表はできないとあたしは考えている。
運次第で蓬莱の薬は完全なる薬ではなく、例えば１００００歳の薬とか、３０００歳の薬などになってしまう。
これでは、欠陥商品なので世に売り出すことができない。
あたしや蓬莱教授が作った完全な薬は、ＴＳ病患者と全く同じ特徴を有するようになるので幸い成功失敗の見分けは容易ではある。

「これでは生産力に大きな壁ができてしまう。それでは、蓬莱の薬の意味がない」
蓬莱教授が苦々しい顔をする。
「生産力が追い付かないというわけですね」
これでは生産に成功しても、まともに発売することができなくなってしまう。
蓬莱教授は不老の特権化を嫌っている。生産力が極端に悪いまま発売するくらいならしないほうがマシくらいに考えている。
「ああ、向こう１００年の間に、最低でも消費分と合わせて在庫を合わせて１５億本は作らないといけないが、そうすると１日に４１０００本以上のペースが必要になる」
蓬莱教授が紙の上で皮算用をして資料を見せてくれる。
蓬莱の薬が１人５本とすれば確かにその程度が必要になる。
「無理ですよ。今は丸１日から２日に１本が限度です」
とにかく、今の蓬莱の薬は成功率が悪い。
２０００歳の薬ならば、今の研究所でも１日に１００本を作り出すことができる。
もちろん、今は生産ラインが１つだけだから、うまくいけば何本か生産ラインを作れる。
工場を作るにしても、予備の設備も必要だから、最低でも１日にのべ５００００本を作れる能力のある工場を全国に作らないといけないし、ましてや世界に広げるとなると、その１００倍以上の在庫と生産力が必要になってくる。
大きな工場を作るにしても、最低でも今の２０００歳の薬のペースにしないといけないし、専門的な知識も必要になる。
「その通り、今の歩留まりでは、蓬莱の薬は間違いなく数十億円単位の値段に高騰するだろう。我々が安く売ったところで、転売屋が高値で取引するだけで無駄だ。蓬莱の薬は、大衆に広めなきゃならないものなんだ」
蓬莱教授は、「一部の人だけが不老になるのでは、蓬莱の薬の意味がない」と繰り返し繰り返し訴えていた。

あくまでも、「1億総不老社会」の実現こそが、ここ数十年の至上命題になっている。
「生産能力の向上かあ……」
浩介くんが上の空でつぶやく。
「やり方としては、やはり歩留まりを改善させて効率化するか、非効率を承知で巨大な工場と人員と予算でごり押しするか。後者の方法を使えば、蓬莱カンパニーは間違いなく赤字倒産するだろう。そうなれば政府からの補助金に頼るしかなくなるから、それはそれで色々とまずいだろう」
特に、政府などの行政機関に弱味を握られてしまえば、蓬莱の薬が持つ交渉力を手放さざるを得なくなってしまうのが致命的だ。
日本人の不老にのみ対応ならば、まだ後者のやり方でも国民を納得はさせられるだろうけど、１００年後の国際解禁に備えた国力の増強にも支障が出るばかりか、外国人の不老に対して日本人の税金を使うなど、１００年後の国民は絶対に承服しないだろうことは容易に想像できた。
「しかし、これが大発見であることは事実だ。改善の余地はあるが、優子さんのお陰で一応は完全な蓬莱の薬を完成させたことは事実だからな」
蓬莱教授は、今回の研究をあたしの功績だと言ってくれた。
もうまもなく、浩介くんが不老の薬を飲む。それでもう、あたしの目的は達成されたようなもの。
でもそれだけでは足りない。
あたしたちには、やり残したことがある。
「はい」
「よし、それじゃあ、記者会見を開こうか。悪いが優子さん、会見に出てくれないか？」
「え!?」
予想してなかったと言えば嘘になる。
でも、記者会見をするなんていきなり言われたら、あたしだって驚いてしまうわ。

「蓬莱さん、その……優子ちゃんをどうして!?」
浩介くんが動揺してちぐはぐな言葉遣いになる。
「落ち着いてくれ。今回の蓬莱の薬、俺は全く想定してなかった部分だったんだ。もし優子さんが気づいてくれなかったら、薬の完成は最低１０年、下手すれば１００年以上は遅れていたさ」
蓬莱教授がさらりととんでもないことを言う。
あたしは、やっと自分がしたことを理解した。
蓬莱教授も、当然にこれを想定していると思っていたが、あたしの発見で、蓬莱教授が見当違いだったと言うことも分かった。
「こう見えて潔癖だからね俺は。優子さんの功績はきちんと優子さんのものにしてやりたいって言うのもあるのさ。とはいえ、現状では歩留まりがあまりにも悪く、実際に販売するのはもう少し先になることも、きちんと記者会見で話すつもりだ」
蓬莱教授は、ごまかすのが嫌いらしい。
そういうのは必ずばれると思っているらしく、学問的なことについては異常なくらい潔癖を貫いている。
思えば、盗聴をいちいち警戒したり、マスコミなどに対して、自身に不利な報道を押さえつけようとしたりしたのもそういったところがあったのかもしれないわね。
「それから優子さん、君はあまりにも優秀だ。そこで、今からこの発見を元に博士論文を書いてもらいたい。何、博士号は心配いらん。この業績だけでも、論文博士……いや、大真面目な話でノーベル賞ものだ」
確かに、あの蓬莱教授の盲点に気付いたあたしが、優秀じゃないわけがない。
蓬莱の薬がもたらす世間への恩恵を考えれば、その最後のピースを嵌めたあたしがノーベル賞に値しないというのはおかしいというのも分かる。
冷静に、客観的に評価すれば、それは当たり前としかいいようがない。
それでも、あたしがノーベル賞なんて、全く予想ができないことだった。

受賞するとしても、蓬莱教授がするものだとしか、あたしには思えない。
「でも、博士論文ってどうやって――」
「あーそうだなあ……」
あたしの一言に、蓬莱教授がはっとした様子で拳を顎に当てて考え込んでしまった。
「……やはりこの事はしばらく内密にしておこう。もちろん、発見の業績は優子さんということにはするぞ。論文を書き終わったら、まずは世界的な科学雑誌に記載させよう。それで、世間に問うんだ」
「はい」
あたしたちは、今後のことについて話し合う。
まず、歩留まりの改善を今後の目標とすること。
あたしは学部生の頃に書いた修士論文を微修正の上提出し、直ちにこの業績を持って博士論文を書き上げると共に、博士課程の内容を進めていく。
来年の4月を目処に記者会見を開き、この業績を世間に知らしめると共に、「蓬莱カンパニー株式会社」を正式に設立することも発表するという。
「蓬莱カンパニーの経営なのだが、社長は優子さんか浩介さんにお願いしたいと思っている」
「え!? どうしてですか!?」
蓬莱教授の唐突な指名に、あたしと浩介くんが驚いてしまう。
会社の社長って、そもそも経営学なんてしたことないのに。
「俺や他の研究者は、みんな研究肌過ぎるし、何よりもう1つの利害関係者との橋渡しとしての役割もあるからな」
蓬莱教授が言う「もう1つの利害関係者」とは、言うまでもなく永原先生と協会のこと。
元々は永原先生たちの協力があってこそ不老研究が成り立ってきた。
協会と蓬莱教授の研究は、いつもセットで批判者から批判されており、協会側も政府と交渉パイプを持っている。

また、薬を今後改良する上でも、ＴＳ病患者たちの遺伝子提供は欠かせないから、「もう用済み」というわけには断じていかないのよね。
まあ、永原先生も「大人を越えた大人」らしく、蓬莱教授側にあれこれ利権を要求するということはない。
基本的に蓬莱教授の研究方針そのものには文句は言わず、しかし薬の普及についてあれこれ意見を述べるだけだ。
「永原先生……ですよね？」
年のために聞いてみる。
「もちろんだ。永原先生がいなければ俺の研究は間違いなく最初の薬も発明できずに行き詰まったさ。それに、ＴＳ病患者は美人ばかりだ。広報担当として今後もずっと必要になってくる」
「そうですね。もし敵に回せば、反対派を勢い付かせるだけでしょう」
永原先生や、ＴＳ病患者の遺伝子で、今回の研究は成り立っている。
もし、「私たちの遺伝子を一般人に拡散させるのは嫌」何て言う声明文を発表されてしまえば、それだけで蓬莱教授は大打撃を受ける。
永原先生が増長する可能性はほぼないため、引き続きあたしたちは、ＴＳ病患者は厚遇するべきという意見でまとまっている。
単純に過去の功績だけではなく、永原先生自身の能力も極めて優秀だということも、また事実だった。
「ああ、幸いにも、永原先生は５００歳を越えている。封建時代の人間らしく『わきまえる』という能力に関しては本当に素晴らしい。これが、不老足り得ぬ人間の年齢なら、増長して『老害』何て言われていたかもしれないがな」
蓬莱教授が軽く笑いを作る。
うん、たしかにそれはその通りだと思う。
永原先生という、たった１人の戦国時代生まれ。もしかしたら、そういった存在がいて、しかも蓬莱教授と勤務地の近い小谷学園に勤めていて、以前から私的な交流が盛んだったからこそ、一旦信頼関係が出来れば強固な蜜月関係になれたんだと思う。
もし、創設された時の協会が、余呉さんを始め江戸時代以降の生まれしかいなかったら、もしかしたら今日このような成功はなかったと

思う。
「さ、今日はこの辺にしておこう。明日以降、歩留まりの改善策を考えようじゃないか」
蓬莱教授がそう解散を宣言する。
歩留まりの改善は遅々として進んでいない。
つまり、まだブレイクスルーが必要であるという意味でもあるのよね。
でも、何故だろう？
あたしには、もう大丈夫な気がしていた。多分もう、大きな壁はないと思えてくる。
後はあたしや浩介くん、蓬莱教授が不慮の事故などに巻き込まれないように注意するだけでいいような、そんな気がしてきた。
「ふう」
大学から帰って自室に戻り、一息つく。
あたしはまた、考える。
今の状況が出来るまでに、いくつもの困難を乗り越えてきた。
最初の困難は１５３８年、今から４８６年前に、当時の鳩原刀根之助がＴＳ病になり、うまく逃げおおせて殺されなかったこと。
ＴＳ病が男の面影を残さずに女の子になると言うのも大きかったと思う。
今思えば、あの時点で両親が既に死んでいたのが幸いだった。
不老が疑われ始めた１５８２年、今から４４２年前に本能寺の変が起きて柳ヶ瀬まつは村を飛び出した。
あの時代の治安の悪さを考えれば、大坂の陣で江戸に住むまで生き続けたのは奇跡としか言いようがない。
そして、江戸時代も。
火事と喧嘩が多かったあの時代、確かに戦国時代と比べれば比較的平穏だけれど、それでも２００年以上安全に暮らせたのも、再逃亡を考えた矢先に江戸城に呼び出され、そのまま江戸幕府が倒れるまで江戸城に定住できたのが大きかった。
あのとき逃亡してたら、またどこかで事件に巻き込まれたかもしれ

ない。
永原先生はその後、明治時代や、戦時中の未遂に終わった逃亡策に罪悪感を感じつつも戦中戦後をも生き延びた。
永原先生の存在があったからこそ、蓬莱教授が年齢証明について深入りし、不老研究へと突き進むことになった。
蓬莱教授も性格だからこそ、途中で投げ出したりしなかった。
そして現代、最初の奇跡は、あたしが小谷学園に入って永原先生のクラスになったこと。
永原先生のクラスにいた時に発病したお陰で、あたしは永原先生の指導をとても手厚く受けられた。
それだけではない。
今思えば、クラスの女子が当初、桂子ちゃんと恵美ちゃんで分裂していたことさえ、この奇跡の一端を担っていると思える。
あたしを受け入れると言うこと、女の子として生きていく上で、小谷学園の、特に高校2年生の日々は、どの日も欠かせなかったと思う。
あたしが女の子らしくなるのが早かったお陰で、そして林間学校で実行委員に浩介くんが選ばれたお陰で、そしてあの時にバスガイドのナンパから救われたお陰で。
あたしは、女の子としての恋を知ることができた。
いや、出来たことではない。早まったことが大事なことだった。
そして、ずっと近くで見ていた永原先生が、思いきってあたしを正会員に迎え入れてくれた。
「そのお陰で、幸子さんが救われたのよね」
この間結婚した幸子さんは、当初は男に戻りたいと願ってしまっていた。
もちろんそれは自殺の道で、あたしが早くに正会員になったからこそ、幸子さんは女性としての幸せを手にいれることができたし、何より新しいカリキュラムを作ることができた。
あの時の小谷学園での林間学校の実行委員のくじ引きが救った命は、幸子さんだけではなかった。
幸子さんが絶望的な状況から回復したからこそ、あのカリキュラム

ができて、過半数を越えていた自殺者が限りなく０に近い状態にまでなった。
そしてその実績があったからこそ、あたしたちは早期に「明日の会」を打ち負かすことができた。
あたしが佐和山大学への進学を決意した時も、永原先生は最終的には教師よりも協会会長を取った。
これもまた、もしかしたら浩介くんに恋したのが早く、寿命問題を考える時間があったためかもしれないわね。
更に言えば、あたしの実績があったからこそ、歩美さんが佐和山大学に来てくれたんだと思う。
あるいはこれは「ブライト桜」の高島さんが、ある意味ではプライドを捨てる決断をしてくれたお陰でもあると思う。
歩美さんが佐和山大学に来てくれたからこそ、α型とβ型という概念を知ることができた。
研究が早まったお陰で、敵に態勢を整えさせる準備を与えずに済んだ。
これも大きかった。
さりげないことが、大きな奇跡へと連鎖していった。
あたしはそう痛感している。
「優子ちゃーん、ご飯よー」
「はーい！」
お義母さんの呼び声と共に、あたしは食卓への道を急ぐ。
大丈夫よ。きっと、全てうまくいくわ。
だって、こんなにも多くの奇跡を、全ていい方向に、進めているんだもの。
浩介くんとあたしの幸せな日々に思いを寄せ、あたしは美味しい料理を食べることにした。

## 困難は続く

「うーん、ダメだなあ。うまくいかない」

大躍進があったと言うのに、あれから蓬莱教授は苦悶していた。

あたしはポジティブに考えていたが、どうやら歩留まり改善は思ったより難関になるみたいだわ。

もちろん、1を100にするより0を1にする方が偉いとか、難しいというつもりはあたしもない。

ただ蓬莱教授にとってみれば、これまでとは全く違うアプローチを求められるため、非常に難しいことらしく、同僚の教授たちなどにも意見を積極的に求めていた。

「どこから手をつけていいのか、うーん、うーん……」

これまでも研究に行き詰まることはあって、蓬莱教授が悩ましそうにしている所は何度も見てきたが、最近のそれは格段に強い。

蓬莱教授によれば、「見当違いを救世主に助けられ、これでついに完成したと思ったのにまた壁があって、しかもそれが今までの攻略法方が通じない。これほどの絶望感はかってない」とのことだった。

救世主って、あたしのことよね？

「生産を続ける中で、見つけるしかないわね」

あたしが、正攻法を提案する。

歩留まりが悪い中でも一応生産は続けられていて、蓬莱教授、今年から昇進した瀬田准教授、そして浩介くんに桂子ちゃんと恵美ちゃんが、既に完全不老の道へと足を進めていた。

健康診断は数回行い、全て問題がないことが証明されている。

今は、幸子さんの旦那さんの直哉さんに、歩美さんの彼氏の大智さん、桂子ちゃんの彼氏の達也さん、更に龍香ちゃんとその旦那さんの夫婦からも、蓬莱の薬の注文が入っていて、龍香ちゃんと旦那さんには、あたしの女の子としての人格形成に貢献してくれた恩返しもある。

「閃き頼りは本当の運任せになるぞ」

「分かってます」

そう、今まで幸運だったからといっても、今回もうまくいくという考えが甘かった。
まさに出口のない迷路、いや、迷路なのか一本道なのか、はたまた大きな部屋にいるのかさえ、あたしたちは認識できないでいる。
「優子さん、そろそろ博士論文を書く時間じゃないか？」
「あ、はい」
まずは大まかなプロットを作り、蓬莱教授に見てもらう。
博士論文は、修士論文ともまたレベルが違う。
だから、あたしは頻繁に論文を蓬莱教授に見てもらう必要がある。
そしていい点悪い点を評価してもらい、何度も何度も手直しをする。
博士論文は内輪向け論文なので、これを微修正したものを、著名な科学雑誌に送り込むという。
そこに記載されれば、世界は大きな驚きに包まれるはずだ。
歩留まりの改善さえ出来れば、正式に蓬莱の薬を販売することができる。
問題は、１００年後問題だけど……果たして大丈夫かどうかは分からない。
政府との調整では、「完全不老の薬ができかけている」という記者会見を、あたしたちの記者会見の直前に開くと共に、「蓬莱教授の方から、『想定外のリスクがあった。安全のために１００年間は日本限定販売にする』『また、資金面の都合からもしばらく日本限定販売とし、世界全体に広めるためには準備期間が１００年は必要』との連絡があった」と発表させる予定になっている。
これはもちろんフェイクだけど、いわば猶予期間を求めるための方便になっている。
そもそも猶予期間についても、急激な社会変化によるリスク管理が方便になっている。
思えばこれも、ＴＳ病患者がほとんど全員日本人という偏り具合だったからこそ、説得力が生まれるものなのよね。
世界はもちろん、感情的な反発もあるだろう。

むしろ完成してからが、問題になるかもしれないわ。
まあ今は、歩留まりを改善させないといけないわね。

「どうしようかしら？」
あたしは、博士論文の構成に迷っていた。
それというのも、γ型の発見について、実験ノートもあるし経緯も説明できるけど、原理についてどのように書くかが問題になっている。
動画を使わずに、不老証明をするのも論文にしてみると結構難しいわ。
「明らかに、博士論文のレベルを越えているわ」
考えてみれば、それも無理のないことだった。
蓬莱教授が看破したように、「ノーベル賞に値する」ならば、２４歳のあたしに、大半の科学者が書けない論文を書けと言っているようなものだもの。
でも、この仕事はやらなきゃいけないわ。
蓬莱教授の水族館の予言が、今や現実のものとなっている。
後はそれを、論文という形にして、世間に発表する必要がある。
抽象的な自己の思考を、文章に記すのはとても難しい。思い通りにいかないことは多いし、まるで小説を書いていて、「物語に作者が動かされる」ような錯覚を受けた。
「ふう、今日はこんなところかしら？」
とはいえ、まだあたしは修士課程だ。そこまで慌てることはない。
蓬莱教授はもしかしたら、あたしを早期に卒業させてあげたいのかもしれないけど。

季節はあっという間に過ぎていった。
密度の濃い日々が続くと、時間の流れはあっという間で、既に外は１２月に入っていた。
蓬莱教授は、記者会見の予定を１２月に前倒しすることにした。
政府の会見も同時に行うことになり、どうやら筋書きを変えるつも

りらしい。
歩留まりの改善は、未だに解決の糸口さえつかめていないが、浩介くんがややそわそわするようになっていた。
さて、記者会見になるということは、当然あたしも参加することになる。
「優子さんは記者会見は初めてだったかな？」
「はい」
マスメディアの取材はもう何度も経験済みだけど、記者会見を受けるのは未経験だった。
でも、蓬莱教授の記者会見は何度も見てきた。
多分、蓬莱教授の関係者ということで、あたしに変な質問とかは来ないとは思うけど。
「あー、まああれこれフラッシュを炊かれたりとかするわけだけど、リラックスして大丈夫だ。俺がついているからな」
「あ、うん」
蓬莱教授なら、確かに安心感はある。
あたしだって今までも、人前に出る、注目されるということはあったけど、今回のは今までとは訳が違うと思う。
「ともあれ、主要なことは俺がやる。ただ、この発見は間違いなく優子さんの功績なんだ。それだけは、世間に知らせんとな」
あたしを記者会見に出す目的は、功労者を取り違えないようにするためだという。
「もし優子さんが記者会見に出なければ、世間は当然この発見を全て『俺』が行ったものだと思うだろう。しかしだ。もしどこかで情報が漏れて、『あれは本当はかの有名な篠原優子の発見だった』何てことが広まったら？　俺の研究に反対する往生際の悪いレジスタンスどもが、未だに地下で何をしているか分かったもんじゃない」
蓬莱教授の発言には、警戒心がにじみ出ていた。
元より、蓬莱教授が完璧主義者だというのは有名な話だったが、それにしてもよっぽど弱みを作りたくないというのが見てとれる。
「他の大学教授だったら、意気揚々と優子さんの手柄を横取りしただ

ろうが……俺にはもう、十分すぎるほどに名誉がある、財産もある、だから、この功績をきちんと優子さんに分けたとしても、何にも惜しくないのだよ」
蓬莱教授の言うことは最もだった。
経済誌の認定した蓬莱教授の資産は既に３０億ドル近くに膨れ上がっているし、名誉についても、既に最高権威たるノーベル賞を１２年前に取っている。
そして今回、不老に関する研究で既に２回目のノーベル賞には十分すぎるくらい功績を残している。
そんな蓬莱教授のこと、あたしが記者会見に出るのは、単純に勇気がないだけだもの。
だったら、あたしも蓬莱教授と一緒に、記者会見に出ていいと思う。
「分かったわ。記者会見に出ましょう」
決意を、伝える。
浩介くんも、納得したような表情をしている。
「ああ、助かる。すまんな、無理を言って」
あたしは一瞬、そもそもあたしがいなくても、蓬莱教授がその場で「これは俺の大学院生が発見したもので」って言ってしまえば済むことかもしれないと思った。
でも次の瞬間には、そうなるとこの研究所にメディアが殺到して余計に大変なことになることに気付き、あたしは二言目を飲み込んだ。
あるいは蓬莱教授だけが出たら、いくら口では「優子さんの功績」と言っても、みんな信じようとはしないんじゃないかと蓬莱教授は考えているのかもしれないわね。

「ただいまー」
「お帰り浩介に優子ちゃん、改良は進んでる？」
お義母さんが、いつもの質問をあたしに投げかけてくる。
「ううん、今日もあまりうまくいかなかったわよ」
「ああ」
あたしと浩介くんも、いつも通りの返事をする。

そう、なかなかうまくいかないことは事実だった。
一方で、浩介くんは何やら思慮をしているのがよく見えたのも事実だった。
ともあれ、今は記者会見のことを考えないといけないわね。
あ、でもその前に、まずは浩介くんとの夫婦生活かしら？

「優子さんおはよう、いよいよ今日だな」
「はい」
季節が巡り、１２月になった。
この日はちょうど、蓬莱教授が１２０歳の薬を発表して７年目で、ちょうどクリスマスに当たる日だった。
電車の１両目、ここが今回の集合場所だ。
記者会見場は都内にあるので、政府との交渉をした時と同様に、効率化のために電車の中を集合場所に選んだ。
昼間だというのに、やはり日にちが日にちなのか、それなりの混雑を見せていた。
町はどこもかしくもクリスマスで賑わっている。
人々が笑顔で話し、華やかにおめかししている。
高級ブランド店は激安ではなく品質を売りに出している。
クリスマス商戦の雰囲気も、以前とは全く違う。
永原先生は、「これだけ長く続いた好景気も珍しい」と言っていた。
あたしが女の子になったばかりの頃は、まだ不景気時代の不信感や、東京五輪が終わればダメになるという予測もあったけど、さすがに東京五輪から４年がたち、人々の不安も吹き飛んだ。
都内は、あの頃よりも更に多くの外国人観光客が溢れ、あたしが小中学生だった時にはあちこちで見かけたホームレスも、今ではほとんど見かけなくなり、街の活気は年々賑やかになっていた。
人口減少社会への不安が、まだ残っていないわけではない。
だがしかし、そのわずかな不安も、今日の記者会見で半分以上は吹き飛ぶだろう。
あたしたちの蓬莱の薬、後は生産効率を上げる作業をするだけでい

い。
実際にはそこがかなりの難所にはなっているんだけれども、それでも国民の深層にある、「もしかしたら完全な蓬莱の薬は実現不可能なのではないか？」という不安は少なくとも払拭できるはずだわ。
「さて、事前に準備した通り、だ。浩介さん、悪いがやはり調整はつかない。控え室で待っててくれるか？」
「はい」
蓬莱教授の話しに、浩介くんが頷いてくれる。
浩介くんは、本来いなくても大丈夫なんだけど、やっぱり心配性なのか、あたしについていくと言って聞かなかった。
もちろん、愛する旦那様ががついていてくれるのはとっても頼もしいことだし、独占欲を持っててくれているのは、愛されているって実感があって嬉しいけどね。
「それにしても、相変わらず景気がいいなあ」
浩介くんがそう呟く。
「ああ、人々に活気が現れたのも、俺たちのお陰かも知れねえぜ」
蓬莱教授が自信たっぷりに言う。
そしてそれは、きっと間違っていないこと。
あたしの発見が世間にもたらしたことは想像以上に大きい。
以前あたしは、世界からフェミニズムを一掃させたことがある。
その時も、あたしは世界の空気を変えると言う大事業を成し遂げたわけだけど、今回のあたしのしたことは、そんなことは比較にならないくらいに大きな出来事だった。
人々の深層心理には、まだ「本当に実現可能なのか？」という不安感があると思う。
それでも、蓬莱の薬がもし本格的に世に出れば、そんな不安感ともおさらばできる。
今回の記者会見で、人々の不安感は、「一部の恵まれた人間にしか不老の恩恵がないのではないか？」というものになると思う。
現状では歩留まりが悪いことも正直に伝えるつもりだから、「改善を目指す」と言っても、人々が不安に思うのは確かなことだと思う。

だけれども、「実現可能かどうか？」を不安視するよりは、大きな前進だ。
そして、ある程度歩留まりが改善すれば、本格的に一般に売り出しをすることになる。
蓬莱カンパニーの構想については、政府も含め、まだ大きく情報には出さないことにはする予定だけど、その辺りも話し合われることになるわね。
あたしたちは、鉄道を乗り換え、首相官邸を目指す。
今日の記者会見は、政府の記者会見とセットになっているため、あたしたちは普段官房長官などが会見しているスペースを使うことになっている。
まさかあたしが、そんな大それた場所で記者会見をするようになるなんて、本当に思っても見なかった。
人生、何が起こるか分からないわね。

「俺だ、蓬莱だ」
「あ、蓬莱教授、お疲れ様です」
守衛さんともすっかり顔馴染みになったあたしたちは、軽く挨拶をした上で中に入る。
正直、こんなんでいいのかと不安に思ってしまうけど、顔パスで通れるに越したことはないわね。
あたしたちは、もう何度も来ている首相官邸の場所を、暗記してしまった。
だけれども守衛さんは、律儀に毎回案内をしてくれている。
「控え室はこちらです」
「はい」
取材陣が控える控え室と、あたしたちの控え室は当然別で、メディアの盗撮を防ぐために様々な工夫がなされている。
政府関係者なら公人だから、ある程度は甘んじて受け入れる必要があるけれども、蓬莱教授はもちろんのこと、一応は1大学院生に過ぎないあたしと浩介くんは私人も私人なので、特に丁重に扱われてい

る。
あたしたちは、きちんと控え室に入った。
「ふう、にしても厳重だな」
浩介くんが不思議そうな顔で話す。
普段の官邸も当然テロなどが警戒されているけど、今日の警戒ぶりは更にすごい。
「そりゃあ、俺たちは私人だからな。マスコミも丁寧に扱わんといかん」
蓬莱教授は、当然という顔をする。
「とはいえ、この記者会見が終わったら、どこまで完全私人と言えるかしら？」
いわゆる「準公人」という概念がある。
つまり、厳密には私人でも、公益性から考えて一部に公人的要素もあるというもので、例えば芸能人とかスポーツ選手とか弁護士、大企業の役員何て言うのが代表的な人種で、あたしの場合も、今回の発見があったらその範疇に入るかもしれないのよね。
「はは、大丈夫だ。優子さんは美人だから、嫌がらせをすればそこのマスコミは総スカンだし、ネット世論を背景に、俺が薬融通の制裁をしてもいいんだぜ。まあ滅多には使いたくないけど」
蓬莱教授が少しだけ笑いながら話す。
そうよね、でも、あの時の脅しは、今でもマスコミには効いているらしく、腫れ物に触る扱いなのは相変わらずだ。
いや、そもそもこの９７―９８％という支持率も、マスコミがあたしたちにおもねるようになったから。
フリーのジャーナリストたちも、あたしたちに逆らうのは及び腰だった。
それはもちろん、これだけの高支持率があるからで、しかも永原先生の入れ知恵で、人々に反対世論への密告を奨励したため、ロックと呼ばれる人たちの間でさえ、蓬莱教授に逆らうのはタブーになっている。
「ふふ、そうよね」

あたしたちが、「支配者側」の人間になってしまったことなんて、もう何年も前から分かっていたことだけど、改めて認識するとやっぱりまだ慣れない。
しかもあたしたちが持っている権力は、下手をすれば総理大臣よりも高いものということなのだから。

コンコン
「どうぞ」
あたしたちが雑談をしていると、突然扉がノックされた。
特に入ってきても問題ないので蓬莱教授が代表して「どうぞ」と言う。
「失礼します。まもなく記者会見開始です」
「じゃあ浩介くん、行ってくるわね」
「ああ、気を付けてな」
控え室にも一応テレビ画面があり、浩介くんはそこからあたしたちの様子を見守ることになっている。
あたしは蓬莱教授と共に守衛さんに守られながら記者会見場へと進む。
そして、扉の前に立つ。
この向こうがおそらく、会見場になっている。
事前に打合せした通り、あたしが手前側、蓬莱教授が奥側ということになっている。
扉の向こうから、ガヤガヤと話し声が聞こえてくる。
どうやら、既に彼らの準備は終わっているのかもしれないわね。
あたしの心臓も、かなりばくばく言っている。
この時間は、とてつもなく長く感じる。この時間を基準にしたら、永原先生の人生は想像を絶する長さになると思う。

# 政府共同の記者会見

「……では時間です」
守衛さんが扉を開け、あたしたちが中に入る。
「きゃっ」
パシャパシャパシャパシャ
眩しい光があたしの目を襲う。
向こう側から、凄まじいフラッシュが目に入る。
そしてとてつもないカメラの音の数がする。
写真が次々と撮られていく。
あたしの中で、更に緊張感が高まる。
このような光景は、テレビで何度も繰り返し見てきた。
自分は当事者にならないからと、対岸の火事のように思っていた。
でも違う。今はもう、あたしも立派な当事者の一員になっている。
ゆっくりと歩き、蓬莱教授と一緒に指定された椅子に座る。
カメラマンさんと相対することになるので、もっと眩しく感じてしまう。
「っ……！」
あたしがちょっとだけ眩しそうな仕草をすると、マスコミのカメラ攻勢が一気に緩む。
やっぱり、あたしはまだまだデリケートな存在らしいわね。
「えーそれでは、ただいまより、佐和山大学の蓬莱教授と、篠原優子様の記者会見を開始します。始めに注意事項を申し上げます。篠原優子様ですが、大学院生の私人でありますから、質問内容や報じ方には十分に報道倫理をわきまえてください」
司会者さんから、記者会見開始と注意事項のアナウンスがなされる。
よく見ると、写真のカメラだけではなく、後ろの方にはテレビカメラを持った記者もたくさんいて、あたしは今テレビに写っているということを思い出してしまう。
「では、まず蓬莱教授から、今回の記者会見の説明があります。蓬莱教

授、よろしくお願いします」
そう言うと、司会者さんがマイクを蓬莱教授に渡してくる。
蓬莱教授も、手慣れた手つきでマイクを受け取っている。
「おほん、えー今回記者会見を開いたのは他でもない。我々の研究所は、ついに完全なる蓬莱の薬の発明に成功したんだ」
蓬莱教授がいきなり核心に触れると、記者たちのシャッターが一瞬鈍る。
そう、ついにこの時が来てしまった。
いつかは来ると思っていても、いざそう言われると驚くしかないのだろう。
身構えていた記者たちも、驚きを隠せない様子だった。
「しかし、実用化にはまだ歩留まりが悪い。だから販売はできない。これは常日頃から言っていると思うが、『大衆に普及させるべき不老が特権として既成事実になること』だけは阻止せねばならないと言うことだ」
蓬莱教授の説明は予定通り。
歩留まりの悪さを説明させることが大事で、このままでは一般に販売はできない。
「将来的には日本全国、世界全土にこの蓬莱の薬を行き渡らせる必要があるが、今の歩留まりでは1人5本必要な蓬莱の薬が、1つの生産ラインで1日から2日に1本しかできず、日本や世界に普及させるにはあまりにも生産力が足りないんだ」
蓬莱教授が必死に話す。
ここを理解してもらえるかどうかで、蓬莱の薬の運命も変わる。
一般庶民はこの説明に納得するだろうが、問題は経済産業省をはじめとする経済界だ。
「富裕層は、高い金を払ってでも一刻も早く不老の薬が必要になると言い張るだろう、そうなったら今度は特権として保持しようとすることは容易に想像が出きる。それは俺の理想とは相反する。多少の時間がかかってもよい、庶民に不老を行き渡らせることこそ、俺の使命なのだ」

蓬莱教授が力強く話す。
カメラマンたちも、写真を撮っていく。
「さて、ではどうやって完全なる蓬莱の薬ができたか？　それのついて話してきたい」
そしてついに蓬莱教授の言及があたしに移る。
そう、世間の発表では、１０００歳の薬で認識が止まっている。
「これまで、ＴＳ病患者の不老を司る遺伝子はα型とβ型のみと思われていたんだ。ただ、それなら理論上は１０００歳の薬の時点で完全な薬が発明されていたはずだった」
そう、その事はよく知られている。
でもそうは行かなかったから、蓬莱の薬は世論からはやや不安視されていた。
「そこで、だ。そうならないのはおそらく第３の要素があると思っていた。しかし、日本性転換症候群協会のＴＳ病患者の皆様にご協力をしていただいたんだが、γ型の遺伝子を主とする人はついに発見できなかった」
蓬莱教授、経緯をかなり省きながら説明しているわね。
あまりに長すぎると、一般の人には分かりにくいものね。
「しかし、しかしだ。今回ここにいらっしゃる大学院生篠原優子さんの発想によって、隠されていたγ型の要素の発見に成功したんだ」
記者席からも、思わず「おー」という声が漏れる。
蓬莱教授は筋を通す人というのは、あたしたちは知っていても世間はそうではない。
おそらく、マスコミからは「愚直」と思われているだろう。
手柄なんて横取りしてしまえばいいと思っている人も多いだろう。
しかし蓬莱教授はそうはしない。
何故なら、ノーベル賞を取ることになったとして、あたしと蓬莱教授で競合するなんてあり得ないもの。
「彼女がいなければ、発見できなかったか、あるいは大幅に遅れたことは厳然たる事実だ。そしてこの３つの遺伝子を組み合わせ、蓬莱の薬を調合し、被験者の細胞分裂などを調べたところ、これまでとは違い

ＴＳ病患者のそれと完全一致したんだ。つまり、ＴＳ病患者の不老のメカニズムを、他の人にも再現させることに成功したというわけだ」
蓬莱教授の説明に、時折、カシャッ、カシャッとカメラのシャッター音が聞こえてくる。
「ただし、この薬は常に作れるとは限らない。おそらく未知の手法がある。その手法を取らなかった場合、生成に失敗して、『３０００歳の薬』になったり、あるいは『１００００歳の薬』になったり……いずれも完全な薬とはいえない欠陥品になってしまうのだ」
あたしの出番は特に回ってこない。
というよりも、あたしは「蓬莱教授に紹介してもらえる」だけで十分に役目を果たしたことになるものね。
うん、ここに座っているだけならそれもそれでいいわね。
「えっと、優子さんからも一言いいですか？」
司会者さんが、いたたまれなくなったのか、あたしの方に話題を向けてくる。
うーん、できればこのまま無言でいきたかったけど、そう甘くはいかないわね。
あたしはやれやれという形でマイクを受け取り、記者さんの前で話す。
カメラマンさんたちの視線や、カメラの向きがあたしの方に変わる。
うー、緊張するわね。
「えっと、篠原優子です。この度、あたしは新しい遺伝子を発見いたしました。き、きっかけはですね、はい。失礼ながら蓬莱教授が見落としをしているのではないかと思って、蓬莱教授に新しいアプローチからの開発を提案したんです。そしていくつかの実験を続けて、ついに成功させました。その後は、はい。いくらかの追試などを行いまして今回の公表に踏み切りました」
あたしがそう言い終わると、カメラの点滅が激しくなる。
あたしがまた目を細めると、フラッシュの点滅が和らいでいく。
気を遣ってくれているみたいでよかったわ。

「ありがとうございました」
司会者さんにマイクを返し、再び蓬莱教授へとわたっていく。
「はい、今篠原さんから説明がありましたようにですね。まあ俺の見落としを、発見してくれたわけです。それでですね、今後の予定なんですけれども」
蓬莱教授が、今度は今後の予定について話す。
「まず、歩留まりの改善を目指します。効率化させたら、会社を興しまして、そちらの方で販売を全世界にしていきたいと思います。販売におきましては、既に政府の方とも調整をしております。何分前例のないことですから、政府の方とも様々にですね、交渉して参りました。その上でですね、特例法というのを作っていくことになっています」
蓬莱教授が、政府と交渉した特例法について世間に初めて公表する。
マスコミの人たちからは、特段の動揺はない。
まあ、こんな薬を一般に販売すると言うんだから、政府と交渉をして特例法を設けてもらうことなんて簡単に予想できることだものね。
「えーそれらの特例法につきましては、次に行われます政府との記者会見の方でご質問願います。我々の話は以上ですので、えー皆さんの方から、ご質問あるでしょうか？」
さて、ここからが質問タイム。
もちろん、あたしにも質問が転がるはずで、ここからが本番になるわね。
「はい」
一瞬の躊躇の後、1人の男性が手をあげた。
マイクを受けとるとまず、所属と名前を名乗る。
どうやら大手新聞社の人らしいわね。
「えーっと、蓬莱教授に質問なんですけれども、歩留まりが悪いとのことですが、今までの薬はそうじゃなかったんですか？」
「はいそうですね。今までは1日に何本も何本も作ることができましたから。ですが、完全な薬は不良品になりやすくてですね、今までの成功水準に持っていくまでには時間がかかる可能性があります。や

はり完全な薬を作るのは不可能ではないのですが、不完全なこれまでの薬より難しいのは事実みたいです」
「ありがとうございました」
記者さんは満足した表情でにっこりと笑っている。
これまでは、蓬莱教授に対する接し方は恐怖の念が多かった。
それは蓬莱教授がマスコミを脅したせいもあると思う。
でも今は、そんな恐怖の中に、大きな安堵感が見てとれる。
それは、彼らにも消息を掴みきることができていないという意味でもあると思うわ。
国民投票を呼び掛けた環境保護団体に合流したというのは確かだとは思うけど、それ以上のことはもう、あたしたちには分からないわ。
例の環境保護団体も、今では細々としか活動しておらず、完全に蓬莱の薬には触れなくなった。
もしかしたら、本当に死亡したのかもしれないわね。まあ、地下に潜っているのかもしれないけど。
「では次の質問どうぞ」
別の記者さんが手をあげる。
「蓬莱先生の研究には、反対する人が、日本はもうほぼいないですけれども海外にはいると思うんですね。例えば例の牧師とかです」
あたしが考えていた矢先、新聞記者さんが同じ質問をする。
考えてみれば、あんな人の主張がマスコミのテレビ報道に出ていたこと自体が異常だったわね。
「しかし、あの人はもう行方不明だろう。消息はこちらではつかめていないし、反対勢力と言われてもよく分からないな」
蓬莱教授としては、もう既に「過去の人」という扱いだし、記者たちも同じ。
でも、他にもいわゆる「隠れアンチ」が多くいる可能性もある。
それでも、反対勢力については、もう判断材料がないのは事実でもある。
「分かりました」
おそらく、マスコミ側も殆ど情報を持ってなかったのか、あまり深

くは追求してこなかった。
そして次の質問者にマイクが移る。
「えっと、優子さんにお伺いしたいんですが、今回のこの発見、ノーベル賞に匹敵すると思うんですけれども、どう思われますか？」
今度はあたしへの質問。
不思議と緊張感はなかった。
マイクが再び、あたしの方へと渡っていく。
「正直に申し上げまして、自覚はありません」
あたしが、偽らざる本音を話す。
これはその通りで、確かに理屈では分かるんだけれども、どうしても実感がわかない。
「……あたしが女の子になったばかりの時もそうだったんですけれども、『これが大きな発見だ』というのは分かるんです。ですが、体の方はまだ、追い付いていないという感じなんです」
そう、女の子になったばかりの時、最初見目覚めた日の夜明け前も、理屈の上でも「どうやら女の子になっちゃった」ということは分かっても、感情的には納得しきれておらず、結局そのまま先のばしにして、時間と共に女の子としての自分に納得したことがあった。
その時と同じで、あたしとしてはまだ自覚が持てないというのが実情だった。
「……ありがとうございます」
「では次にいきます」
そして次に、また別の新聞記者さんが手をあげる。
「えっと、蓬莱教授にうかがいたいんですけれども、一部の人が不老化する社会というのを絶対に避けたいとのことですが、その理由は何でしょうか？」
次の質問は蓬莱教授へ。もちろん、これも世の中は知りたいところだと思う。
「いい質問です。不老人間が一部だけでは……世の中が劇的によくなることがありません。一般庶民まで不老化すれば、国は社会保障費を大きく削減するこができます。これによって減税と共に公共事業や

科学事業への投資が可能になりますが、今一部のＴＳ病患者のみが不老を享受している社会がそうであるように、極一部の人間しか不老になれないとなれば社会保障費の削減が不可能になるわけです」
蓬莱教授の説明に、記者席の記者たちがとても納得した表情を浮かべていた。
老化しない人間が多くなればなるほど、国は強くなる。
だからこそ、値段の高騰を抑えるために大衆に行き渡るくらいの供給能力を得て、初めて世間に発売するべきだというのが、蓬莱教授の言い分だった。
「ありがとうございます」
「ただ、歩留まりが悪くなったので、発売までどの程度かかるかは未知数です」
蓬莱教授がまた追加する。
よほど歩留まりの悪さを強調したいということらしい。
続いての質問、それは「蓬莱の薬はいくらになるか？」というものだった。
これも、多くの人にとっては気になることよね。

「あー、一番最初は３億円を予定しているが、これを数十年かけて段階的に２０００万円まで引き下げたい。蓬莱の薬の性質上、１０００年分割払いプランというのも用意したい。これなら月２０００円で済む」
記者席から「おー」という声が漏れる。
２０００万円と言うと高いが、１ヶ月ずつ１０００年かけて払えば、金利含めて支払いは毎月たった２０００円、年間でも２４０００円で済む値段になっている。
学生でも十分に支払える規模だ。
もちろん、このような極めて長期の分割払いをするので、物価を考慮して支払い金額が上昇したり、破産しても一時免除はあるが完全免除の救済はないなどの制限もあるが、政府からは特例法をいただいていることになっているて、それについてはこの後の政府との記者会見

で明らかになると蓬莱教授が付け加えた。
「特例法は、人間の不老化と、それに伴って、これまでの人間ではなし得ない超長期に渡る返済プランが存在するために必要なんだ」
そう、不老によって人類の時間スケールがこれまでにないほどに長くなるため、これまでの長くて人生１００年ということを前提とした法律では対処しきれないという。
しかも、一部の特権階級のみが不老の恩恵を受ける訳にもいかないから、否が応でも大改革を余儀なくされる。
蓬莱教授はそこにつけ込んだ。
一括では高額で売るけど、寿命が延びたから一般人にも無理のないローンを組めますよ、と。
実際には、法的救済措置が一切得られず、本人が事故などで死んでも遺族や連帯保証人に払わされ続けることになる。
そして、将来的には、全世界の何億人何十億人、あるいは何百億人という人々から、わずかな金を毎月受けとることで、極めて安定した収入を、会社が得ることが出きる。
国に社会保障費を大幅削減させて、その恩恵を間接的に国民に与えることで、抵抗力を奪い、老人となれば何の社会保障も受けられない運命とさせることで、逃げ道を無くさせる。
本当にやり方がえげつないわ。
「もちろん、臨時収入が得られたということで前払いしても構わないし、その場合には当然金利も安くなるといった特典は与えるつもりだ」
蓬莱教授がそのように説明する。
もちろん、歩留まり改善と共に、巨大な工場は必要不可欠だろう。
次の質問に移る。
「その、現在は法的にも蓬莱教授のその会社が特別に独占販売ということですが、将来的にそうした保護に対する反発の声は出てこないんでしょうか？」
当然、記者さんもそこは気になるわよね。
「大丈夫だ手は打ってある。蓬莱カンパニーのみが、不老の薬を独占

販売できるから、これがまず一点。更に蓬莱の薬の生成法は『永年特許』に指定してもらっているから、国内の他の会社は手出しできないし、いざとなれば子孫に売らないと脅しをかければ十分だ。とすると海外が問題になるが、まず蓬莱の薬は我が蓬莱カンパニーのみが作れる代物で、現地生産をしなくても他の産業を全く圧迫しないから雇用を奪うということにはないと言ってしまえばいいし、いざとなれば『国ごと禁輸する』と脅してしまえば十分さ」

蓬莱教授が、愉快な笑みを一瞬浮かべていた。

不老人間が、旧人類と比べていかに強い存在かを知り尽くしているからこそ、蓬莱教授も強硬手段を取れる。

……いや、「取る振りが出来る」のよね。

「ありがとうございます」

もし問題が起きるとすれば世界に売った１００年後から、更にしばらく経った頃になると思う。

その頃になれば、世界の国力も日本との１００年の差をいくらか縮めて来るはずで、そうなった時に「蓬莱の薬に対する規制緩和」を求めてくる可能性はある。

しかし、蓬莱教授には、恐らく何かもう１つ、企みがある。

そんな気がしてならないのだった。

その後も、記者会見は続くが、最初の１００年に関する問題は、結局話されなかった。

「あー終わったー!!!」

控え室に戻ったあたしは、疲れたので椅子に思いっきり腰を掛ける。

あたしが注目されたのは一瞬で、殆どが蓬莱教授への質問だったとはいえ、あの場に座るだけでも、精神的な疲労は凄まじいものがあった。

「お疲れ優子ちゃん」

浩介くんが労いの言葉をかけてくれる。

「うん、ありがとうあなた」

「さ、次は政府の記者会見だぞ」
蓬莱教授が、テレビの画面を見ながら言う。
そう、この後は蓬莱の薬に対する政府の規制事項などが発表されることになっている。
蓬莱の薬は、日本に莫大な恩恵をもたらすことが分かっていて、それに伴って様々な改革がなされることになっている。
いわばあたしたちが初めて政府と交渉し初めてからの、集大成とも呼べる記者会見だった。

## 官房長官と記者会見

１５分の休憩時間の後、官房長官が記者会見の場に姿を表した。
カメラの激しい点滅が、テレビの画面越しに伝わってくる。
恐らく、ニュース番組でも同じように生で放送が流れているはずだわ。
「えー、皆さん大変お待たせいたしました。官房長官の――」
官房長官が自己紹介を始め、今日のテーマである蓬莱の薬に関する記者会見を始めた。
「まずはですね。蓬莱の薬に関する法的事項として、既に国会では全会一致で可決する予定の法案があります」
そう、政府間交渉と共に、既に超党派の議員連盟にも根回しは済んでいて、すんなりと野党も賛成する見込みとなっている。
「そこにですね、あります蓬莱の薬の規制事項についてお話しします。まず、蓬莱の薬は、その社会に超長期的にもたらす影響力を考えまして、通常２０年で切れます特許を『永年』といたします」
官房長官が高らかに宣言するが、記者席から驚きの声はない。
「これはですね、例えば１０００歳の薬を『不老の薬』と偽る例とか、そういうのが出てくるのを防ぐ目的もあります。特に生命にか変わる重大な薬ですから、蓬莱カンパニー自身が問題にならないように、その人が不老かどうかは、医療機関でもチェックできるようにするとのことでした。また、政府機関でも、複数の省庁管轄の、蓬莱の薬が本当にそうであるかを認定する機関を作ります」
官房長官が、独占措置を決めた背景について話す。
そう、「生命に大きく関わるから」というのも、強大な大義名分になる。
それをもって、蓬莱教授は独占を正当化した。
規制緩和絶対主義者でも、生命の大義名分には勝てない。
「そしてですね、蓬莱の薬の普及に伴いまして、社会保障費を９０％以上カットすることができます。合わせて減税と財政健全化、更に公共事業と政府開発事業、そして防衛関係費などの大幅な向上が望めま

す。特にこれまでの少子化とは一転して、人口急増問題がありますから、宇宙開発と農業開発に特に予算をつぎ込むことになるでしょう」
蓬莱の薬ができた場合、特に目玉となるのがこの社会保障費大幅削減の実現だ。
何せ不老人間だけの国になれば、老後の概念も老人の概念もなくなる。
そのため、年金制度も障害年金などを除いてほぼ廃止となり、国民の負担を減らしながら、なおかつ公共投資などに大きな税金を割くことが出来るということになる。
この事はワイドショーなどで繰り返し宣伝されており、日本における蓬莱教授に対する絶対的支持に繋がっている。
「またですね、安全上の問題もありまして、当面の間は蓬莱の薬は日本限定販売とせざるを得ないとのことでしたが、これについては外交的圧力が予想されますので、防衛関係費や農業開発、更に海底資源開発にも重点的に予算を出していこうと思います」
官房長官は、慎重に物事を考えている。
対外的には、「数十年後に思わぬ弊害が現れないとも限らない」ということにするだろうというのが蓬莱教授の予想だった。
「またですね、蓬莱カンパニーなのですが、基本的には蓬莱教授が創設した純民間企業という体裁にして欲しいという要望がありましたので、政府及びその他の行政機関はですね、国地方問わず株主にはならないということになりました」
そう、この「純民間企業にする」というのも、政府と蓬莱教授との間で利害が一致してそうなった。
そうすれば、商売する国を「蓬莱カンパニーが勝手に自主規制しているだけ」ということになる。
一方で特権的に独占を認めつつ、他方では「純民間企業」の原理を使う。
蓬莱教授のえげつなさが、ここに現れているわね。
「以上です。記者の皆様から質問はございますか？」

細かいことを話し終わり、官房長官が質問の時間に移る。
あたしたちの会見よりは、手を挙げた人数は少ないわね。
「えっと、社会保障費の大幅削減に伴う高齢者への社会保障がなくなるということですが、その場合、蓬莱の薬を飲む人が殆どということになりますよね？」
確かにその通りで、「飲まない」という選択肢が事実上消えてしまう。
「何もすぐに廃止するわけではありません。蓬莱の薬の性質上、例えば今の７０代８０代ともなれば、薬を飲んでもそれまでの『老い』からは逃れられませんから、４０年くらいの時間をかけて、段階的に削減していくと、まあ言うことになると思います」
「ありがとうございます」
これから生まれてきたり、あるいは老人になったりする人たちのことは、もちろん考えられていない。
蓬莱の薬には年齢上限目安が存在していて、飲む時の年齢が６０歳を越えた場合、不老による半永久的な命は保障できず、自己責任で飲むことが記されている。
もちろん、それらは人によって違うし、「保障外なだけで、割増料金や保証人の徹底などの諸条件を満たせば可能」ということになっている。
これらに突っ込む記者さんは、今のところいない。
まあ、高齢者の場合、分割払いに制限をしたりすれば、大丈夫だろう。
「その、防衛関係費が大きく増えるというのはどういうことですか？」
続いての質問に入る。
今度は防衛関係費のお話だ。
「まあ、我が国に対して、やっかみを起こす国が存在する可能性があります上に、社会保障費を大幅削減できる世の中になれば、当然他の費用に回せるということになって、防衛関係費も増大していくのであります」

この辺りは、「防衛省だけ予算が増えないと著しい不公平感をもたらす」ということでもあるんだけどね。
もちろん本音としては、蓬莱カンパニーと、それに付随した日本の権益を守るために必要なことでもあるのよね。
「当面の間、海外には売らないとのことでしたが、具体的にはどれくらいを考えていますか？」
ついに来たわね。
あたしも浩介くんも、蓬莱教授も緊張しているわ。
「はい、歩留まりが思った以上に悪くてですね、生産能力の向上などを考えますと、どんなに急いでも１００年はかかると、蓬莱教授はそうおっしゃっています」
官房長官の言葉は間違っていない。
実際には１００年というのは、日本が他の国に不老のハンデをもって圧倒的な国力を持つに至るまでの猶予時間だけれども、歩留まりの悪さで一気に８０億人を対象にした生産能力を得られないのもまた事実だったりする。
税金を投入するとまた利害関係が出て、特権化へ繋がる恐れが出ること。
とにかく、一見独占的な出来事の言い分に対してことごとく「不老の特権化を防ぐ」「歩留まりが極端に悪く、その改善が出来るまでやむを得ない」という大義名分を与えていく。
そして、不老を全世界に満遍なく行き渡らせるために、まずは日本限定で販売し、資金や設備、ノウハウを貯めて、歩留まりを改善させてから、全世界一斉販売にこぎ着けたいというのも、記者会見で明かされていく。
この辺りは官房長官を間に通すことで、世間の反発を和らげる効果もあるだろう。
その後も、蓬莱の薬が実現した後の国の行方を話していき、政府の記者会見も終了した。
そして、この記者会見で印象付けられたことを総括すると、「蓬莱教

授は不老が特権になるのを極端に恐れている」ということだった。
「あ、蓬莱教授、篠原さん、お疲れ様です」
あたしたちが控え室から出ると、ちょうど記者会見を終えたばかりと思われる官房長官があたしたちに話しかけてきた。
ここはマスコミがいないので、心置きなく立ち話ができそうね。
「うむ、とりあえず、うまくいってよかった」
「これならさすがに、『金持ちだけ』という人も大人しくはなるでしょう」
「ああ」
蓬莱教授の作戦としては、やはり「不老によって特権階級を作り出したくない」という気持ちを強調することだった。
これがとにかく厄介で、いくら蓬莱教授が「特権化したら不老技術の社会的メリットがない」「全体の利益を考えれば大衆に不老を行き渡らせることが金持ちにも有利なのは明らか」と説明しても、いまだに日本のインターネットでも「どうせ金持ちしか不老を受けられない」という書き込みが散見され続けていた。あたしは、本物の壊れたレコードを見た気がするわ。
もちろん、宣伝部などではこれを否定するために全力は尽くしているが、どうやら宗教のように凝り固まっている救いようの無いバカが一定数いるらしく、思うように効果をあげていない。
ちなみに、これに対して蓬莱教授は「これが恐らく残りの3％だろう。宗教というのは救いようがない。信じたものこそ地獄に落とされる」と言っていた。
「では私は、別の仕事があるのでこれで」
「ええ、俺たちも失礼します」
蓬莱教授と官房長官が挨拶をする。
「お疲れさまでした」
あたしと浩介くんも、官房長官に一礼し、総理官邸を出て家路についた。

翌日、あたしたちを待っていた反応は概ね五分五分だった。
今更蓬莱の薬そのものに反対する人はいないとしても、その徹底した特権化の阻止には疑問視の声もあったのが事実だ。
確かに目論み通り、「どうせ金持ちしか」という意見は一掃されたが、インターネットでは「技術が技術だし最初は高くなって特権になるのは当然でしょ？」とか、「一旦特権になったら既成事実化するという可能性はあるにしても、思い込みが強すぎる」とか、「特権化を防ぎたいのは分かるけど、世界には１００年売らないとかいくらなんでもやり過ぎ。共産主義っぽい」という意見もあった。
要するに、「特権化を防ぐという方針には賛成」だが、「いくらなんでもやり方が徹底しすぎ」というのが概ねの意見だった。
一方で、蓬莱カンパニーが独占して販売することに関しては、「薬が薬なので仕方がない」とした上で、第三者の医療機関で簡単に不老かどうかチェックでき、また縦割り行政を逆手にとって複数の行政機関に常に品質を検査させるという方針については、全面的に賛成か、「もっと徹底するべき」という意見でまとめられていた。
蓬莱教授は、このような風潮に対して、「徹底しないと、蟻の穴から堤も崩れるものだ」と言っていた。
いずれにしても、歩留まりの悪さを改善させなければ、実用化ができない。
という所には、何とか世論も納得してくれたようでよかったわ。

「おはようございます」
数日後、あたしたちはいつものように研究棟に入った。
気になるのは、そろそろ海外の世論が入ってくるということ。
「おお、優子さん、浩介さん、おはよう」
「はい、おはようございます蓬莱教授。それで、海外世論の方はどうですか？」
「うむ、やはり日本より風当たりは強い。やはり、『最初は高くてもいい』という意見が、特にアメリカでは多いらしい」
蓬莱教授がちょっとだけ重い口調で話す。

やはり、日本みたいにうまくはいかないわね。
「最初は高くてもいい……ねえ……」
「俺は頭がいいから、いずれ値段を下げて大衆に普及させるべきだということが分かる。奴らもそれを理解できないほどバカじゃない。だが、特権を一旦手にすると、利益を度外視して守りたがるバカが必ずいるんだ」
「そ、そういうものですか？」
あたしは、少しだけ疑問が生じてしまう。
人間は、そこまで頭が悪いのかしら？　理屈に訴えれば、わかってもらえるとは思っていたのに。
「ああ、そうだ。実際に、俺たちよりもずっと長い時間を生きていた協会の幹部だって初めはその間違いを犯しただろ？　ほら最初の、１２０歳の薬を発明した時の後の会合でだ」
「あ！」
蓬莱教授に言われて、あたしは思い出した。
そうだった。あの緊急会合で、比良さんと余呉さんが、協会と蓬莱教授で、密接な関係になることを反対していた。
賛成票を投じた永原先生からは、「無意識に不老をＴＳ病の特権のように考えていた」と指摘されていた。
あの時だって、反対勢力が強かったら、蓬莱の薬は完成が遅れたかもしれないわね。
僅かに否決されたからこそ、軌道修正も容易だったのよね。
「そう言うことだ。永原先生ほどに長生きすればまた別かもしれないが、いずれにしても、一旦利権や既得権益と化せば、ひっくり返すのは容易ではないんだ。俺はそれを、一番恐れている」
実際、蓬莱教授が言うことは最もだと思うし、それをしなければならないのも分かっている。
しかし、インターネット住人が看破したように、「やり過ぎ」なのも事実だった。
まあ、どっちにしても、「あたしたちは支配者側」何だから、気負う必要が無いのかもしれないけどね。

「うむ、蓬莱さんの言う通りだな、ともあれ今は、歩留まりを改善させねえと、日本にも売れねえぜ」
「だな、よし、今日も手がかりさえないが、とにかくやるっきゃない」
蓬莱教授の号令により、あたしたちは歩留まり改善のために意見を出しあった。
浩介くんは、何か別のアプローチをしているみたいだけど、あたしにはよく分からない。
いずれにしても、あたしよりは時間は取れず、論文に追われているみたいだけどね。
「そう言えばさ」
「ん？」
実験中、浩介くんが何の気なしに話しかけてきた。
「木ノ本の奴、ＪＡＸＡから内定もらったらしいぜ」
今朝メールで、そんな話が桂子ちゃんから入った。
あたしとしては、本当に驚きだった。
「ああうん、あたしも聞いたわ」
「ま、蓬莱の薬が完成したともなれば、予算もかなり増えるらしくて、一説には『最終的にはＮＡＳＡの数倍になるんじゃねえか』って噂でさ」
確かに、蓬莱の薬がもたらす人口問題解決のために、安全な宇宙旅行と宇宙移民は、かなり優先度の高い課題になっている。
しかしそのためには、予算と人員が今の規模では全然足りないから、大幅増額が必要不可欠だ。
「それじゃあ人手不足にもなるわよね」
蓬莱の薬により、日本の空気はどんどん明るくなっている。
あたしが女の子になるちょっと前から、日本は「好景気」「人手不足」「景気回復」何て言われていたけど、蓬莱の薬が現実味を帯びるにつれ、人々の気持ちの持ちようも変わっていった。
蓬莱の薬の登場で、東京オリンピックが終わった後も経済は上昇気流に乗り続けている。
そんな中で、特にＪＡＸＡは注目度合いが高く、桂子ちゃんがそこ

に就職できたのは大きいわね。
「俺たちは……博士課程だな」
「ええ。ここまで進むのも……小谷学園でもあたしたちくらいよね」
小谷学園から佐和山大学へ進む人は多い。
実際修士課程でも、何人かはあたしと桂子ちゃん以外にも元クラスメイトが進んでいる。
でも修士から博士はかなり少なくて、とうとうあたしたちだけになる予定になっている。
もしかしたら、他のクラスの出身で、誰かいるかもしれないけど、さすがにそこまでは知り得ないわ。
「だろうなあ。ま、寂しいと言えば寂しいけどさ」
浩介くんが感傷に浸るように言う。
「うん」
「あいつらと過ごした2年間は、かけがえのねえもんだ。もし俺たちが蓬莱カンパニーで世界を支配したとしても、あいつらだけは幸せに暮らして欲しいもんだ」
「そうよね」
噂では、高月くんが博士課程に進むと言う。
浩介くんによれば、「医師免許と博士医学はまた別だけど、取っておいた方がいいのは確か」とのことだった。
浩介くんは、高月くんとはいまだに親交があるらしく、メールや電話でやり取りをしていて、高月くんは「医者になれればモテる」という信念を、ずっと持っているらしい。
まあ、年収多ければそうよね。
「そう言えば、俺たちも一応医学なんだよな」
「うん」
同じ医学でも、全く分野が違う。
あたしたちは、見ての通り再生医療が専門分野になる。
そのため、病院で患者を診るという感じではない。
「まあ、専門化が進んだってことだな」
浩介くんがあっさりと話す。

実際、医師免許は大半の科を内包しているわけだけど、実際には殆どの医師は1つないしは2つの科に絞って、開業している。
あたしたちもあたしたちで、医学の博士でも医師免許があるわけではないし、実際そういう人は多いらしいわね。
「ええ、そうね」
そんなことを話しながら、日々が過ぎていく。
浩介くんも、修士論文は順調に進んでいるみたいね。

## 会社発足会議　篠原夫妻の衝撃

「さて、今日集まってもらったのは他でもない。蓬莱カンパニーの株式分配と、具体的な経営手段についてだ」

年が開けて２０２５年、ついに２０２０年代も半ばに差し掛かったわと思う暇もあたしたちには殆どなかった。

というのも、蓬莱教授が正月休みが開けて早々に、日本性転換症候群協会と協議したいと言ってきたから。

そこであたしたちは、蓬莱教授に瀬田准教授と共に協会本部へと訪れることになった。

さて、協会の正会員としてのあたしはと言えば、実験の多忙を原因にカウンセラーを免除されては来たが、あまりに長い間指導をしないのもまずいと思い、秋に現れた新しい患者さんのカウンセラーとなることになった。

そしてその子に関しては、１２月に「安定期に入った」と報告することができた。

もちろんまだまだ言葉遣いとか直さないといけないけど、それでも自殺の危険性はほぼ去ったと見ていい。あたしも腕が衰えてなくてよかったわ。

ふふ、それにしても、カリキュラムの時におしおきされて、一生懸命に恥ずかしがるＴＳ病の女の子の姿は、いつ見てもかわいいわね。

多分、おしおきされていたあの時のあたしも、あんなにかわいかったんだなって考えると、愛しく思えてくるわ。これも母性なのかしらね？　ちょっと歪んでいる気もするけどまあいいわ。

ともあれ、協会本部に入り、挨拶もそこそこに蓬莱教授が蓬莱カンパニーについての協議を始めることになった。

「まず、株式分配の案の前に、経営者の案なのだが……」

蓬莱教授が、まずは経営者の布陣について話すことになった。

「俺や瀬田准教授は出来れば研究に専念したい。あーもちろん会社設立当初はそうも行かないだろうがな。会社が軌道に乗ったら、筆頭株

主にはなるが、基本的に物は言わないつもりだ……そこでなんだが、もしよければ篠原夫妻を経営陣にと思っている」
「「え!?」」
あたしと浩介くんが、同時に驚いた声を出す。
えっとつまりその、あたしたちのどちらかがが社長ってことでいいのよね!?
「え、本気ですか蓬莱先生」
永原先生が、あたしたち以上に驚いた声をあげた。
おそらく、永原先生もあたしたちと同じように、まさか「篠原夫妻に経営をさせる」ということを蓬莱教授が考えていたなんて思っても見なかったことらしいわね。
「何でこの夫婦なんや？　他に適任もおるやろ」
「仮にいないとしても、外部から招くとか他に方法があるわよね」
そしてそれは、他の会員たちも同じだった。
あたしたち自身も、みんなも、蓬莱教授と瀬田准教授を除くすべての人が混乱していた。
「落ち着いてくれ。まず蓬莱カンパニーの経営者は信頼できる人物でなきゃならん。信用できない外部の人物を不用意に招いて、会社や事業を外資に売られたりでもしたら目も当てられない。そのためには、俺たちがよく知る人物を経営者にせねばならん。俺たちや瀬田准教授は研究に専念したいし、永原先生たちにも本業がある。他の院生でもちょっと心もとない。ならば、『完全不老の薬』を作る立役者となった優子さん、あるいはその夫でこれまた歩留まり改善の功労者である浩介さんが一番適任というわけだ」
蓬莱教授は、確かに以前にもあたしたちが経営に携わる可能性について触れていた。
でもそれは、せいぜい取締役程度の話だと思っていた。
でも実際には違った。
蓬莱カンパニーの社長はあたしか浩介くん、ということになる。
「もちろん、優子さんには体力的な問題もある。それならば、一番多忙な社長としては浩介さんは適任だろう？」

「うーん、自覚が湧かない」
浩介くんは、既に完全不老の薬を飲んでいる。
そう言う意味で言えば、スキルならいくらでも積むことが出来る。老人特有の頭の硬さにとらわれるのも、蓬莱教授によれば１５０歳程度までと言うし。
当初は国内限定だから、そこまで経営は難しくないかもしれない。
「なあに、会社は株主のものだ。そこまで気負うものじゃないよ」
蓬莱教授が気楽な口調でそう話す。
「でだ、会社は株主のものということは、株主総会でもし株主が無茶な要求をしてそれが可決されてしまえば、それに従わなければいけないことになる」
「ええ」
そのあたりは、大学1年の時の一般教養でやったわね。
つまり、株式もあたしたちが握る必要があるということね。
「上場するということは数多くの株主から資金を集められるが、こうした乗っとりリスクもある。そこでだ」
「はい」
「非上場、という手段もあるが、この規模の会社で果たして大丈夫かという問題もある」
そう、そこで登場するのが今回の議論、つまり会社の株式を上場するべきか否かということ。
非上場でも問題はないのだが、蓬莱カンパニーが世間に与える影響力の甚大さを考えると、非上場について何らかの圧力をかけられる恐れがある。
「俺の構想では、もし上場を余儀なくされた場合、全体の７０％を俺たちで得ようと思うんだ。７０のうち２０を俺が、優子さんと浩介さんで１５―１５、そして永原先生に１０、残りの１０を協会かもしくは正会員が分担して所持する。上位3株主でちょうど５０％ならぎりぎり同族会社にはならないはずだ」
「それで、残りの３０を？」
「ああ、上場するってわけだな。非上場なら、まあ俺達と近い人に株式

を分けてもいいだろう」
あたしたちは、株式分配について議論を進めている。
もしこの蓬莱カンパニーが上場した場合、株主総会がどう言うことになるのか？
蓬莱教授もその不安はぬぐえないらしく、株式上場には及び腰になっている。
「悪質株主が現れたら、即座に上場廃止するという手もあるが、出来れば使いたくないな」
うん、あまりに露骨だと、それはそれで不評を買ってしまうだろうし、株主からの訴訟リスクもある。
そうすると、やはり非上場を貫く方が賢いやり方にも見えるわね。
「とは言え、上場にもメリットはある。企業の利益を追求していきたい株主たちとしては、俺が今まで政府へのロビー活動で作り上げた我が社への法的保護を何としても維持したいだろう？」
蓬莱教授が別の視点を示してくれる。
つまり、非上場で協会と蓬莱教授の「二頭経営」の場合、独占市場に圧力がかかりやすいだろうし、あるいはその薬の影響力から世界を支配しかねない企業であるから、風当たりも強くなるだろう。
もし株式上場をした場合、株主たちは当然蓬莱カンパニーによる独占市場を維持したくなる。
そうすれば、上場によって投資した株主たちそのものが相手への牽制になる。
もちろん、外国人投資家に関しては、何らかの規制が必要な企業であることは確かだけど。
「俺の計画では、工場は2ヵ所に集中させたいんだ」
蓬莱教授が次の提案をする。
「工場を集中？」
「ああ。工場を国内にいくつも分散させた場合、海外に輸出した時に現地生産の圧力がかかりかねないからな。そうなれば機密漏洩のリスクは格段に高まる。かといって、1ヶ所の集中はそれはそれで問題になる。そこで2ヵ所に生産設備を集中させたいというわけだが、何

せ全世界の需要を賄うんだ。その２カ所は、思いっきり広大な土地が必要にはなるだろう」
そう言うと蓬莱教授は日本地図を広げ、２つの地点を指差した。
北関東と北海道だった。
「世界に輸出することを考えれば海沿いが良さそうだが、海沿いはテロリストなどにも狙われやすい環境にある。そこでだ、関東平野の内陸部に、北海道の原野、この２箇所に大きな工場を建てることにした。メインはもちろん、大消費地に近い関東内陸工場で、北海道工場の方は、予備設備を多目にとることにしよう」
「ふむふむ」
あたしたちは巨大工場を作る訳だけど、最初の１００年はそれよりは大分小さな工場で済むと予想されている。
問題は１００年後に全世界に解禁した時だ。
この時に海外がどのように出るかが問題になってくる。
場合によっては、株主は日本人だけという法的規制を政府に呼び掛ける必要が生じるかもしれないわね。
「次に流通に関してだが……何せ運んでいるものがものだ。他社に頼るのは心許ないと俺は思っている。とは言え、自前で揃えるのも難しいのが現状だ」
蓬莱教授は、既存の流通会社に、業務提携を呼び掛けることになるだろうと言っていた。
ただし、分割払いとは言え５本で２４００万円、一括払いでも２０００万円で１本４００万円もする代物ではあるから、運送費についても、特別な料金を払って安全運転をさせたい所よね。
「とは言え、トラックに限らず、物を運ぶというとどうしても事故は起きてしまう。ひとまず最初の１００年は、自動車よりも相対的に事故率の低い鉄道、船舶をなるべく利用したいと俺は考えている」
蓬莱教授は、その中でも特に鉄道貨物に着目している。
鉄道は船舶ほどではないが、大量輸送が可能であり、トラックよりは安全性が確保されている鉄道貨物の利用が国内向けには欠かせないという。

「１００年後に世界に解放する場合の流通手段は……それは７０年後に先送りしたい」
「ええ、そうね」
蓬莱教授が７０年後に先送りしたいという声に対して、永原先生が平然とした顔で賛意を示す。
普通なら、これは「子孫への責任転嫁」ということになるだろうけど、今は、いやこれからは違う。
あたしも浩介くんも、この場にいる人は全員が完全不老なので、最年長の永原先生も含めて７０年後や１００年後だってピンピンしている可能性の方が遥かに高いのよね。
「ところで、密輸の対策はどうするつもりかしら？」
ここで比良さんがはじめて口を開く。
そう、国内限定にする場合、当然海外では法外な高値で取引される危険性がある。
蓬莱の薬が欲しい人なんてそれこそ全世界の人口の大半がそうだろう。しかし日本でしか売れないとなれば当然密輸が横行する危険性が高い。
「もちろん、空港では税関による厳しい管理を常に行いたいが……問題は密航者による密輸だろう」
蓬莱教授によれば、太平洋はともかく、日本海ならば例え命のリスクがあっても密輸業者が蓬莱の薬を海外で売りさばく可能性があるという。
何せ成功すれば不死になるわけではないとは言え寿命が格段に伸びる訳だから、賭ける人間はいくらでもいるだろうというのは容易に想像できた。
「究極的には海岸線を徹底的に地雷で埋め尽くすことくらいだが、うーむ……」
密輸防止のためには、どうやっても顧客に対して負担を強いることになってしまうがやむを得ないわね。
もちろん、薬が薬だから、顧客の理解は得やすいとは思うけど。
究極的には、かつて幸子さんの彼氏がそうだったように、５日間特

定の場所に隔離する方法もある。
しかしそれではいくら蓬莱の薬でも抵抗が大きすぎる。
「こんなのはどうかしら？　全国各地に厳重に警備された支店を設けて、そこで取りに行かせてその場で飲ませるというのは？　店舗まで行くのが辛い場合は、職場まで出張サービスするんです」
永原先生がそう提案する。
つまり、顧客の手には決して渡らないようにするということ。
「うむ、ひとまずそれでいこう」
蓬莱教授が首を縦に振る。
ちなみに、顧客からの流出を防げても、流通途中などの従業員による横流しという危険性がある。
これに対する対策としては、やはり伝家の宝刀である「相互密告制度」を永原先生が提案し採用された。
具体的には、常に３人以上の人員を置き、不正に対して互いに監視し合うように仕向けさせ、決して団結させないという。
ただしこれは、リスクもあるので、薬そのものや生成法の情報などを横流しする裏切り者に対してだけ使う方がいいというのが、蓬莱教授の意見だった。
また、生成法についても身内の取締役以外は全容を知ることが出来ないようにするということも考えられた。
「ともあれ、蓬莱カンパニーの基礎はこんなところだ。後は歩留まりを改善させ、日本人レベルで普及させねばなるまい。とは言え、歩留まりが悪いのはむしろ幸いかもしれんぞ」
蓬莱教授が、また奇妙なことを話してくる。
不良品を出すことがむしろ幸いって、どうしてかしら？
「え!?」
永原先生が、思わず疑問に思って声を出してしまう。
「歩留まりが悪い、不良品になってしまった場合、有限の寿命の薬になってしまう。ならば、こうも言えないか？『ＴＳ病の多い日本人には完全不老でも、外国人にはもっと精度を高めないと完全不老の薬にならないかもしれない』と」

「あーなるほどね」
永原先生が納得したように背もたれにもたれ掛かった。
歩留まりの悪化のために、「欠陥商品を売ってしまう危険性がある」「遺伝子的にも外国人の方が要求水準が高い『可能性がある』」、いかにも腰の重い役人がやりたくないことを拒否するための言い訳って感じだけど、これに反論するのは困難なのも事実よね。
しかも蓬莱の薬自体が機密の塊になっている上に、肝心のＴＳ病患者自体がほとんど日本人しかいない上、協会の人はみんな蓬莱教授にも好意的だから、海外で独自開発も難しい。
……本当、薬の販売にかけて、蓬莱教授のすることはいちいちえげつないわね。
「ふふ、まあ、こうでもしねえと、な。供給過小になれば当然インフレが起きて、蓬莱の薬は富裕層の特権と化するわけだ」
蓬莱教授も大義名分は、いつもこれだった。
確かに本心ではあるが、周囲の反応も「徹底しすぎ」と言われていて、「共産主義的」という言葉さえ出ていた。
「ふう、蓬莱先生の話、共産主義的だって人もいますけど、この歪みを見るとそんな気がするわ」
永原先生が、やや疲れた表情で話す。
「ああ、無茶をやっているのは自覚がある。というよりも、蓬莱の薬そのものが無茶の象徴と言ってもいいだろうな」
蓬莱教授が豪快な感じに言う。
確かにその通りではあると思う。
「最新テクノロジーを駆使した画期的な商品ってのは、最初はみんな高いもので、一部の富裕層しか手が届かないものだ。もちろんそれが大衆化するということもあるが、ずっと高級品のままということもあり得るわけだ。特に蓬莱の薬はイデオロギーも絡みやすいだろう？」
「ええ、そうなれば、むしろ最初は富裕層しか手が届かないものになるのは当然というわけよね」
蓬莱教授の言葉に、永原先生が同意する。
「しかしそれでは蓬莱の薬の意味がない。さりとて理想的な『いきな

り全世界に販売』は非現実に過ぎるし、競合企業の出現は極めて証明困難かつ悪質な詐欺を招きかねない。というわけで、まずは歩留まりと生産性を理由に日本限定販売をすると。日本の大衆に行き渡らせ、そしてそれが終わったら世界的に販売することで、特権化を防止する。しかし、だ。市場原理に従えばこれは全くもっておかしな話だ」

そこまで話すと、蓬莱教授が水を飲み一息つく。

「本来なら、最初に供給が足りないうちは富裕層しか手が届かなくて当然だし、大衆化する前に富裕層向けに売り出すのが普通だ。まあその点は、当初の値段を3億円にしている所からもうかがえるがね」

そう、だけど蓬莱の薬がもたらす恩恵を考えれば、3億円だってダンピングレベルの値段なのよね。

まあ最終的には、物価も考慮して今の価値で２０００万円にはなるけれども。

……実は原価はもっともっと安いけどね。

「ところがそれを最初から大衆に売る、全国民が恩恵を受けられるようにする。これは非常に共産主義的だ。俺たちが安く売っても、供給能力が足りなければ結局転売屋が蔓延るだけだろうしな」

そう、市場原理に逆らえば、必ずどこかで歪みが生じるというのが蓬莱教授の見立てだ。

適正価格で売らないと、高ければ売れず、安ければ結局転売屋が値段を釣り上げてしまう。蓬莱カンパニーと言えど資本主義には逆らえないというわけだ。

「需給のバランスが崩れれば、当然価格が極端に上がったり下がったりする。最初は供給が小さいから値段は高騰しやすい。しかし、国の保護のもと規制を設けて最初から相応の供給で売り込ませるためには、他にも様々な所で無理をする必要がある。何せこの薬だ。日本限定販売と言っても、何が何でも手に入れようとする外国人はいるだろうしな」

それを阻止するためには、相互監視を含んだ強圧的なことが必要になるのは、歴代の共産主義国家も同じだという。

永原先生は戦乱の時代という特殊な時代故にこうした強圧的なや

り方を知っているわけだけど、それらは歴代の共産主義国家も同じようなことをしてきたことでもあるのよね。
「もちろん、人間がみんな俺のように合理的な行動を取るならば、こんな面倒なことはしなくていい。大衆まで不老を行き渡らせることが人類全体の恩恵になることは明らかだからだ。でもそうもいかないらしい。不本意だが、どうしても人間というのはバカが一定数現れてしまう。あるものに優れていても別のことでとんでもなく劣等生だということもある。もしかしたら俺もそうかもしれん……というわけで、共産国家的な制度をとらざるを得ないというわけだな」
蓬莱教授が簡単に解説してくれる。
確かにそうだ、これはとても共産的だとあたしも思う。
「さて、ともあれ、これで株式の分配や具体的な流通方法は大分煮詰まってきた。後は政府とも調整して、容認して貰うだけだ」
蓬莱教授がそう締めて、新年の会社設立の説明会は終了した。

その夜、浩介くんが修士論文を完成させたと報告してきた。
蓬莱教授からは、博士課程でもよろしく頼むとのことだった。
あたしはあたしで博士論文を書かなければいけないけど、浩介くんも、最近は何やら慌ただしい様子を見せている。
どうやら、歩留まりの改善も、もうすぐ進むのかもしれないわね。

# 博士の道と役員人事

修士課程を終え、研究所の同級生の皆は多くが就職していった。
一方であたしたちは、博士課程を終えるために大学に残り続けた。
博士は最近は数が多いとされているが、それでもこの学位に一定の権威があることは確かだ。
博士には課程博士と論文博士とがあって、どちらにしても博士論文が必要なのは確かなのよね。
もちろん、論文の難易度としては当然論文博士が高い。
あたしたちは博士課程の名の通り、課程博士になる予定になっている。
「ふう」
博士課程が始まったけど、することは修士とそこまで大きな違いはない。
特にあたしの場合、修士2年の時に「蓬莱の薬の完成」の引き金となった発見をすでにしている。
この発見は、大真面目に後世の理科の教科書にも乗りかねないくらいの、大きな発見だとあたしは思うし、蓬莱教授も同じことを言っていた。
いかに謙遜は美徳と言っても、これを大発見と呼ばないのは逆に失礼と言う他ないと言うのが、大方の意見だと思う。
「優子ちゃんは、まだ論文？」
「うん、何度か蓬莱教授に見てもらって、うまくいったら科学雑誌に投稿しようと思ってるの」
特に大変なのが、英語の論文で、蓬莱教授が書いた英語論文も参考にしながら、文法の校正などをしないといけないのよね。
もちろん、英語にしないと国際的な注目を浴びることがないというのも要因のひとつだけどね。
「そういえば、大学のレポートも、日本語もしくは英語ってあったけど、誰も英語にしてなかったな」
「あったわね、実験のレポート」

正直に言って、同じ内容の英語レポートも作ればよかったかな何て思ってたりする。
浩介くんは、果たしてどう思っているのかしら？
「しかしまあ、まさか俺たちが博士まで進むとは思ってなかったぜ」
「うんうん」
優一時代はもちろん、大学卒業して人手不足のうちに就職したいと漫然と考えていたけれども、女の子になって、蓬莱教授の不老研究に携わるにつれて、ここまで大学に残ることは考えてもいた。
博士課程は修士より1年長い3年が通常で、このまま行けばあたしたちは２０２７年度院卒ということになる。
その年は、中央リニア新幹線が開業することになっていて、東京と名古屋の所要時間が４０分まで短縮されることになっている。
蓬莱教授は、「パフォーマンス的な意味でも、この年に蓬莱の薬を販売開始にしたい」という。
それはちょうど、東海道新幹線が、昭和の東京オリンピックとほぼ同時に開業したのと同じことだという。
つまり、蓬莱の薬を新しい時代の象徴とするためには、リニアとセットにするのが都合がいいという。
この辺りは、永原先生の意向も入ってそうだわ。
「ま、研究所ですべきことは同じだぜ。俺は歩留まりを何とかして、一般に販売できるようにしたいものね」
「ええ」
あたしたちの博士課程は、始まったばかりだった。
博士課程になると、蓬莱の研究棟の上層部にいつでも入れるようになるんだけど、あたしたちは特例で大学４年生の時にここに配属されてから、通行が許されていたので、実際の所殆ど変わりがない。
「博士課程にようこそ、修士とはまたレベルが違ってくるから覚悟するんだぞ」
あたしたちに、和邇先輩が軽めに声をかけてくる。
考えてみれば、和邇先輩とも大学1年の頃からの付き合いで、初めて会ったのはそう、大学1年生の文化祭の、ミスコンの審査員を勤め

た時のことだった。
そう考えると、和邇先輩との付き合いも今年で6年になる。
6年と言えば小学校、あるいは中学高校と考えると、意外に長いわよね。
和邇先輩は今年で博士課程3年なので、博士論文を書き終わり、卒業ということになると思う。
もちろん、浩介くんとの付き合いは、もっと長くなるとは思うけどね。
「ああうん、ありがとうございます」
和邇先輩はどうやら蓬莱の薬は飲んでいないらしく、初めて会った時から年齢相応に老けていた。
ただ、蓬莱カンパニーへの就職あるいは別の企業を経て蓬莱カンパニーに就職という進路を考えているのも事実で、その場合は付き合いももっと長くなるかもしれないわね。
さて、もう1つ気になることと言えば、小谷学園に入り、昨年度に卒業した弘子さんのことだけれども、こちらは佐和山大学ではなく、別の大学に入ることになった。
蓬莱の薬の完成がほぼ見えていて、既にＴＳ病患者を特別に融通する必要性もなくなったからで、偏差値的にも蓬莱教授の再生医療の学科は高すぎで、逆に他の学部はやや低めだという。
結果的には滑り止めとして受かってはいたけれども、別の大学にも合格していたためそちらに進学となった。
「にしても、蓬莱カンパニーはどうなるかねえ？」
和邇先輩が天井に向かって小さく呟いた。
おそらく、「蓬莱の研究棟」で大学院を出た学生の多くが、この「蓬莱カンパニー」に就職するだろうと予想されている。
蓬莱の薬の機密を守るためには、ムチばかりではなくアメも必要で、給料も高く設定される予定になっている。
蓬莱カンパニーの構想は、政府と協会とで極秘交渉になっている。
永原先生が議論の途中で「結局、蓬莱先生も世界支配の構想を持っていたじゃないの」と言っていた。

あたしもその通りだと思うけど、蓬莱教授は「永原先生のそれは支配そのものが目的だったが、俺の構想は『不老の平等普及』のために、結果的にそうなっているだけ」と反論した。
あたしにはそうも思えなかったけど、でも確かに、蓬莱カンパニーによる支配構想は極めて具体的ではあった。
いずれにしても、この先がどう言うことになるか、それはあたしにも分からないことだった。
「あ、蓬莱さん」
「おお、あの件か、うまくいってるぞ。博士論文のテーマ、早くも決まりそうだな」
「わはは」
浩介くんは、最近蓬莱教授とのやり取りが多くなっている。
どうも歩留まりの改善に向けて決定的な何かを掴んだらしく、ここ数日、歩留まりがとてもいい。
浩介くんが考案した解決法が、うまくいってるらしく、この調子なら、巨大工場2つで全世界を賄える水準を達成できそうだという。
「あなた」
「おう、優子ちゃん」
浩介くんが朗らかな表情になっている。
「うまくいってるみたいね」
「ああ、蓬莱さん曰く、『今までにない発想を要求されるから、こういうのは院生の方が向いている』だってさ」
どうやら、最後の扉の鍵をこじ開けたのは浩介くんだったのね。
それにしても、蓬莱教授って本当に正直な人だわ。
「へえ、珍しいわね」
「何を言っているんだ、去年の優子ちゃんだってさ」
浩介くんが軽くいじる感じで、あたしに突っ込みを入れてくる。
そう、あたしもあたしで、大きな発見をしたのは事実だった。
「うん、そうだったわね」
「ああ、これで蓬莱さんの2度目のノーベル賞は確実だぜ」
浩介くんがにっこりと笑いながらガッツポーズをする。

ノーベル賞を取るような研究に対して、大学院生ながら貢献できたことはとても誇らしいことだった。
「ええ、あたしたちも、お祝いしないといけないわね……って、さすがに気が早いかしら？」
「そうだな、いけないいけない」
「アハハハハハ」
浩介くんとずっと生涯の伴侶になれて、しかもこんなに偉大な研究に携われ、そして大きな発見ができたのは、この上なく嬉しいことだった。
あたしにとっては、これでも十分満ち足りていると思う。
これから、蓬莱カンパニーの経営にも携わることができるとあっては、あたしたちの未来は本当に前途洋々だと思った。
これ以上、あたしたちが素晴らしい人生を送ることは、もうないのじゃないか？
とさえ思えてくるのだった。

「ねえ優子ちゃん、話があるんだけど」
「うん」
大学院が終わり、家に帰ると、浩介くんがあたしの部屋で真剣な顔をして対面してきた。
一体、何の話かしら？
「大学院を出たらさ、赤ちゃん、作ろうぜ」
「……」
それは、いつかは必ず出てくるだろうと思っていたこと。
おばあさんは相変わらず元気にあたしたちをせっついてくるけど、さすがに最近は身体的な衰えが出始めていた。
それを考えると、もうそろそろ、焦った方がいい時間なのかもしれなかった。
「分かったわ」
「優子ちゃん、博士論文も前倒ししているんだろ？　だったらさ、卒業する前に、妊娠してもいいと思うんだ」

つまり、出産予定日を卒業後にするということ。
「ええ、分かったわ。あたしも、あなたの赤ちゃん、欲しいわ」
あたしや浩介くんが不妊とは考えにくかった。
浩介くんは知らないけれど、あたしはＴＳ病で、実際に女の子になったばかりの頃に「赤ちゃんを産めるところまで女の子だ」って言われたもの。
あたしの中で、妊婦になったあたしの姿が浮かんでくる。
大きくなったお腹をさすって、いとおしそうに赤ちゃんを慈しむあたし。
そんなあたしの姿が、あっさりと目に浮かんできた。
だけどほんの少しだけ不安がある。
深刻な障害をもって生まれてしまったらどうしよう？
赤ちゃんが死んじゃってたらどうしよう？
ううん、ダメダメ、そんなことを考えちゃダメよ優子！
「優子ちゃん、どうしたの？」
浩介くんがちょっとだけ心配そうに顔を覗きこんでいた。
「うん、大丈夫よ」
以前にも、赤ちゃんの話が出たことがある。
あれ以来、あたしは今までにも増して、赤ちゃんをかわいいと思うようになった。
本能が、あたしに呼び掛けてくる。
浩介くんとの赤ちゃんは、あたしたちに新しい幸せを運んでくれるって。
「優子ちゃん、頑張ってね」
浩介くんの優しい呼び掛けが、いつまでも響き続けていた。

「それでだ、９月から蓬莱カンパニーを正式に起こすことにする」
蓬莱教授が高らかに宣言した。
蓬莱教授への寄付金は、一時期よりは収まりかけているが、それでも蓬莱教授の資産が３０億ドルに迫る程度には資金力がある。
「まずは用地の習得だ、関東平野の内陸部と北海道、山の多い日本にお

いて、巨大工場を作るのは大変だ。工場に支店、そして役員と従業員の確保、そして監査法人を何としてでも進めねばなるまい。販売を開始できるのは、早くて3年後になるだろうな」
更に株式の発行や公開の是非などを考える必要がある。
また政府との調整は終わっていても、蓬莱カンパニーの工場を誘致したい自治体は、それこそこぞって競争するはずで、その辺りの調整が特に難しいだろう。
「役員人事だが……まず会長は俺がすることにした。と言っても、事実上は名誉職で実権を持つつもりはない。代表取締役社長には浩介さんか優子さん……俺としては体力的な問題があるから浩介さんを推したい」
蓬莱教授が役員人事を決めていく。
あたしは浩介くんと共に社長候補になっているけれど、正直そう言うのに向いてないことは分かっている。
「社長は浩介くんでいいと思います」
「うむ、じゃあ優子さんが専務取締役、あるいは常務取締役と言ったところかな？」
うー、その役目だってかなり重いわよね。
とはいえ、他に適任を見つけるのも難しいし、今はそれを了承しよう。
「……分かりました」
「他にも通常の取締役として……少なくとも協会の人にも複数名、取締役になってもらいたい。できることなら、永原先生に専務か常務をしてもらいたいんだが、教師の職業や協会会長としての責務もあるし、永原先生は難色を示すだろうな……相談役にしておくか」
蓬莱教授が永原先生の人事について考える。
代わりに、大株主にするという優遇措置を取ることにしたのよね。
蓬莱カンパニーの予想売上と、そこから考え得る株式価値を考えれば、配当金だけでも十分すぎる生活ができるはずだわ。
「まあ、後はアリバイ作り程度に何人か社外から取締役を迎え入れていけば、取締役会は完成だろう……問題があるとすれば、従業員の確

保だな」
世界的に影響を及ぼす企業ではあるが、やっていることと言えば「助っ人がいる学生ベンチャー企業」でしかない。
まあもちろん、学生ベンチャーが世界的企業に成長することは珍しいことではないし、独占商売が出来て潰れるとも思えない。
ならば、あたしたちがいきなり重役につくのも問題はないわね。
そして、役員人事以上に蓬莱教授が特に懸念しているのが従業員の確保だ。
「まず工場長だが……これは現場職員だが、待遇としても取締役にしたい。組織論に詳しい人を迎え入れたい」
蓬莱教授は、工場の組織をどのようにするかで悩んでいる。
あたしはここで、「とりあえず、まずは工場を作ってから専門家の意見を聞いて考えるべき」と意見して、それが採用された。
問題は賃金面で、かなりの高賃金で募集しても黒字が見込めるわけだけど、どの程度が適当なのかが皆目見当もつかなかった。
「契約社員やアルバイト、派遣社員は一部の末端の末端を除いて絶対に使わない予定だ。蓬莱の薬の機密情報が外部に漏れる危険性が増す。果たしてこの事を、株主総会で市場の株主がどれ程理解しれくれるかが問題になるな」
そう、懸念はそこにあるのよね。
とにかく株式会社は会社内でも利害の衝突は十分に起こる。
その辺りをうまく擦り合わせる必要性があるのよね。
「ともあれ、今はこれでいいだろう。まず取締役の初期人員を決めて、用地を決めて建設会社に巨大工場の発注をせねばなるまい。その間にも、浩介さんが考案してくれた歩留まり改善策をどんどん改善させていく。浩介さんには、博士論文も書いてもらわないとな」
「はい」
浩介くんも、あたしと同様「歩留まり改善の功労者」と位置付けられていた。
近々、それも含めて博士論文として、学界に大々的に取り上げてもらう予定だと言う。

「さ、協会と調整したら、合同で記者会見だ」

蓬莱教授の張り切った表情が、いつまでも目に焼き付いていた。

永原先生がこれを受けて、正会員の会合を開いた。

永原先生はそこで、協会からの取締役として、比良さんと余呉さんを推薦し、併せて優秀な一般会員から正会員を2名増やすことで対処することになった。

ちなみに、そのうちの1人は幸子さんで、「絶望的な状況を挽回した実績が将来の患者さんに役立つ」とのことで選ばれ、あたしとしてもとても嬉しかった。

永原先生は協会会長の仕事が今後増えると言う予想から、蓬莱教授の提言通り、相談役として、「ご意見番」的な立場に収まることになった。

それにしても、比良さんと余呉さんもそれなりに多忙なはずなのに、よく受け入れてくれたわね。

まあ、考えても仕方ないかしら？　普通にこの仕事の方が儲かると考えたからかもしれないし。

ともあれ、蓬莱教授の提案に、協会も概ね賛成してくれたので、この事を蓬莱教授に報告し、すぐにでも記者会見を開く運びになった。

今度の記者会見は、以前行った首相官邸ではなく、別の会見場で行われる。

まずは会社を正式に設立すること、社長には浩介くんがなること、常務はあたしで専務は比良さん、取締役には余呉さんで相談役に永原先生、蓬莱教授は会長ではあるが、研究に専念したいため、名誉職として実権は持たず、ほぼ口出しもしない。

そして社外からも何人か取締役を募集したいと発表する。

そしてもう1つが、巨大工場の建設や、機密漏洩防止のために会社として行う販売方法も発表されることになっている。

記者会見にも、蓬莱教授やあたしたちだけではなく、協会の人たち、取締役に選ばれた比良さん余呉さん、そして相談役の永原先生も出ることになっている。

## 永原先生の宗教接触

「ふう。今日の記者会見を、果たして容認してもらえるかが問題だな」

記者会見前の事前打ち合わせの時間、あたしたちは蓬莱教授の司会進行のもと、記者会見での応答や、想定される世論について考えを巡らせていた。

蓬莱の薬に対する世界的な支持率は依然として高いままだが、蓬莱カンパニーが行う商法まで容認されるかは別問題になる。

特に特権階級化の防止と、詐欺薬の流通防止という名目から行った数々の法的規制や商法については、「共産主義的」という批判はどうしても避け得ないとあたしは踏んでいる。

機密漏洩防止のために、相互密告を推奨するやり方や、本人のみに責任を帰結させず親族に対しても蓬莱の薬を売らないなどの苛烈手段については、当然伏せる予定になっている。

あたしとしては、日本国内以上に、これまであたしたちと協力関係にあったアメリカのＣＩＡなどからなされる危険性を懸念している。

「皮肉なことに、富裕層による不平等を避けるために、日本人だけが１００年も早くこの恩恵に預かれるというのも批判の対象になるだろうな」

蓬莱教授がそのように話す。

もちろん、国際競争力をつけたい経済産業省や、新世界秩序論を唱えた永原先生側への配慮もあるが、最終的には資金的な都合で、「特権階級化防止のためには、１００年間の日本人限定販売はやむを得ない」という結論になった。

つまり、経済産業省と永原先生がこのような主張をしなくても、「蓬莱教授や財務省側の都合で」同じような制度が作られた可能性は高いというのがあたしたちの結論だった。

「間違いなく、年を追うごとに、日本に対する批判は高まるでしょう。そのためにも、防衛関係費を伸ばす必要があるわね」

結局最後の砦になるのは軍事力であって、幸いなことに日本の自衛隊もかなり強くなっている。

「何、共産主義的と言われようが民間企業のすることだ。『特権階級化の防止』や、『想定外の詐欺の防止』の一点張りでいいとさえ思えてくるよ」
「そうかしら？」
もちろん諸外国からの批判には、そうした言い訳が考えられているが、永原先生はそれについては難色を示していたのも事実だった。
「おや、相変わらず永原先生は納得がいかないみたいですね。失礼ですが、理由をお聞かせ願いますか？」
蓬莱教授は永原先生に難色を示している理由を聞いていなかったため、ここで改めて聞き出すことになった。
「蓬莱先生、日本人相手ならそれでもいいと思いますけど、彼らには通用しないと思うわ」
永原先生は、日本人と外国人の違いについて、思い当たる節があるという感じだった。
「永原先生、どう言うことだい？」
蓬莱教授がことの趣旨を尋ねると、永原先生の表情を見ると、やや呆れた顔をしていた。
その表情は、遠い昔のことを思い出す時に似ていた。
永原先生の５０７年間が、現れる瞬間でもある。
「蓬莱先生、日本人が無宗教と言っても、古来より受け継いできた神仏思想の遺伝子があるように、彼らにもキリスト教の思想遺伝子があるわ」
永原先生が、珍しく真剣な目付きになる。
最近は永原先生の年齢についてあまり意識する機会は多くなかったが、いまはその「意識のし時」何だと思う。
「その思想はね、自分達と相反するものに対する徹底的な不寛容が元になっているのよ。私も、自分の生きてきた歴史と共に知っているわ」
「ああ、確かにそうだったな。聖書には、下らない理由で民を虐殺する神というのがお決まりだものな」
蓬莱教授も、思い出したかのように吐き捨てた。

そうだった、蓬莱教授は宗教全般が嫌いであり、永原先生はキリスト教が嫌いだったんだわ。
以前にも、戦乱の時代のキリスト教徒が、日本で共存していた寺や神社を焼き討ちしていたのを豊臣秀吉が目撃したって話をしていたわね。
「確か、秀吉だったっけ？」
浩介くんが軽く思い出したように言う。
「……ええ。篠原君に篠原さん、私は知っているのよ。彼らの思いやりのなさと共存心の欠如……これは戦乱の時代の日本人にもあったわ。私自身だってそうだった。それでも、日本人は泰平の世を経験することで生まれ変われたわ」
永原先生がゆっくりした口調で話しかける。
以前にも、戦国時代の日本人は些細なことでキレるし、命が軽く、代わりに自分や共同体の面目が重い社会だったし、自力救済が基本なので司法は機能せず、簡単なことで小競り合いになるという話を聞いたことがあった。
「それでも、戦乱の間でも、仏教と神道が混ざりあい、また仏教の間にも宗派が多くなっても、それが例えば十字軍のような宗教戦争になったり他の宗派とで本格的な殺しあいになる何てことはなかったわ。理性とか自重という文字が辞書になかった戦乱の時代の日本人でさえ、宗教戦争は極力避けたものよ。一向宗だって、戦ったのは大名や領主たちで他宗教他宗派ではなかったわよ」
永原先生が、あの時代の宗教について話す。
あの当時は末法思想というのもあったために、戦乱で国が乱れていたために、更に荒廃した世の中になっていた。
それでも、宗教同士で殺しあいになるというのは、数少ない例外を除けば、ほとんどなかったという。
「数少ない例外が、キリスト教なのよ。忘れもしないわ。あれは天正１１年のことよ私が京の商家に奉公していた時に、任務で数人の商家仲間と共に日本各地を回ったわ。だけど、キリシタンがいた時の領内には焼け残った寺院がたくさんあったわ」

「それってもしかして？」
「ええ、キリシタンが絡んだ時だけ、こんなことが起きたわ。私はバテレンからキリスト教について聞いたことはあったわ。でも、全く心に響かなかったわね」
永原先生の昔話には、いつも興味が湧いてくる。
イエズス会が日本に布教活動に来ていたことはよく知られていて、江戸時代にキリシタン禁制によって途絶えたことも学校で習ったこと。
そんな学校で習ったような歴史を、永原先生は体験してきている。
永原先生も、あの時代の宣教者に会ったことがあったらしい。
「もう４５０年近く前のことだけれども、あの時のことは、今でも鮮明に覚えているわ。私がバテレンに向かって、『全能の神ならば、何故今まで日本に伝わってこなかったのか？　何故人間を皆善人に作り替えず洪水など起こしたのか？　そもそも全能なら何故あんな致命的な木の実を作ったのか？　ずいぶんと無慈悲で無能な神で、とても全知全能とは思えない』と言った時のその男の青ざめた顔……言葉に窮していて、私は察したわ」
永原先生は、どうやら安土桃山時代に、キリスト教と接触していたらしい。
まあ、あの当時なら当たり前かもしれないわね。
「実はだな。永原先生と同じような突っ込みを当時の日本人はよくやっていたんだよ。他には、その全能の神はどうやって生まれたのか？　という疑問もあったな。旧約聖書には、『何々は穢れている』何て言うのもあるが、全知全能で全てを創造したというなら、穢れたものを作るなよと突っ込んだ人もいたな」
蓬莱教授が得意気な顔で話している。
「蓬莱教授、専門外なはずなのにずいぶん詳しいですよね」
あたしは、思わずそう突っ込んでしまった。
実際、こんな宗教の知識なんて、再生医療には全く役に立たない知識だと思う。
「ああ、俺は宗教アンチだからな。宗教の欺瞞や悪質性を罵るために

は、宗教についてよく知らなきゃいけないんだ」
蓬莱教授が朗らかな笑顔で話す。
確かに、あるものを嫌いな人は、好きな人よりも詳しい何て言うことは往々にしてあるものね。
……それにしても、蓬莱教授は徹底しすぎているとあたしは思うけど。
「時は過ぎて、やがてキリスト教の危険性に気付いた太閤殿下と東照大権現は、キリスト教を禁じられたわ。江戸時代……赤穂事件が終わって１０年位経った宝永頃の話だけど、私は新井筑後守殿と話す機会があったわ。新井殿は当時幕府で権勢を誇っていて、ちょうどキリスト教の宣教師が布教のために日本に密入国した時の出来事を、私に話してくれたわ」
永原先生によれば、その時の事は江戸城での自らの日記にも記したという。
ただ、キリスト教に関しては幕府の目もあったので、日記が外部に流出しないよう、細心の注意を払う事にもしたらしい。
「新井殿が対面したシドッチという名前の宣教師は、天文学や科学、哲学にとても通じていた人だったらしいのよ。実際、その博識ぶりは新井殿に対して、幕府に即処刑などの手段を思いとどまるように進言させるほどだったわ。でも、いざその宣教した宗教について聞いて見たら、新井殿は『あまりの戯言に、違う人が話しているようにしか見えなかった』という印象を持たれたそうだったわ」
永原先生は、その新井殿に対して、天正時代に会ったバテレンとの問答の内容を話したという。
バテレンが永原先生の問答に窮したのを聞き、新井殿は「柳ヶ瀬殿誠に聡明なり」と仰せになってくれたという。
そのことは、今でも永原先生に強く印象に残っているのだとか。
ここまで話してくれてあたしにも分かったけど、新井殿というのは、おそらく新井白石のことよね。
まあ、ずっと江戸城に居たら、会ってても不思議じゃないわよね。
「その後私は、新井殿に戦乱の時代で見たキリシタン大名などによる

神社仏閣の破壊行為について話したわ。新井殿は『誠に。己のみを絶対と考え得るは愚者なり。いわんや仏教の焼き直しをそう称するならば尚の事』と、そう仰せだったわ」
永原先生の回想では、自らが体験したキリスト教に対する不信感が見てとれる。
「仏教の焼き直し？　キリスト教がですか？」
あたしが再び疑問符を投げかけてみる。
もちろん、西暦上ではキリスト教の方が後だけれども、キリスト教の時代にはユダヤ教があって、それが元になっていることくらいはあたしだって知っている。
「ああうん、今の時代なら無関係なのは分かるわよ。でも当時の新井殿は関連性を見出してキリスト教の欺瞞性を指摘したのよ」
永原先生によれば、新井白石はキリスト教の神話を見て、仏教を焼き直し、偽装したものと考えていたらしい。
例えば天使の話は仏教に出てくる「光音天」に酷似しているとか、そう言う指摘をしてくれたという。
結論から言えばこれらの新井白石の分析は的外れだったわけだけど、無関係の宗教同士の類似点を指摘した上で、キリスト教を鮮やかに批判していた新井白石は、当時の永原先生に取ってみれば「憑き物が取れたような」感じを受け、相対的に「とても賢く」見えたという。
「でも、当時と今じゃ違うだろ？」
ここに来て、黙っていた浩介くんが思わず突っ込んだ。
確かにその通りだ。
永原先生の体験したそれらの出来事は戦国時代や江戸時代、今から数百年も前の話で、いくら精神の支柱にあると言っても、キリスト教そのものが大きく変わっているはずだものね。
実際、永原先生の時代と前後して、ルターやその支持者による宗教改革とかもあったわけだものね。
「ええ。そう思って、私も明治になって、文明開化として西洋化が持て囃された時に、もう一度教会に行ってみたことがあったわ……でも、私が見た時、それは３００年前と何も変わってなかったわ。それどこ

ろか、私があの時と同じような問答をした時に、苦し紛れの正当化まで覚えていたもの」
永原先生によれば、この時にキリスト教に対する希望は完全に破壊されたという。
もちろん、それは単に布教が下手な宣教師が重なったことによる不幸や、安土桃山時代から江戸時代、明治初期を通じて、「キリスト教は邪教」という環境で５０７年の人生の半分以上を過ごしてきたということもあると思う。
「その後、私は教師の職業を始めるに当たって世界史を学んだわ。そこで分かったのは、『あの時、３００年前に洗礼を受けなくて良かった』ということよ。私は知っているわ。彼らに言葉での説得は無意味よ。するとするならば、資金力を背景にして、徹底的に大声と大金を使って力で黙らせるロビー活動よ」
永原先生は、あの手の宗教はイデオロギーのぶつかりであるから、とにかく大声で主張するべきだという。
それは江戸時代の長い間に培ってきた日本人の美徳とは相反するが、彼らにはそうでもしないと絶対に通じないと考えている。
永原先生の話は大分横道にそれた議論だったけれども、永原先生の宗教観について知ることが出来てよかった。
永原先生は、仏教を中心とした神仏習合の天道思想を基本としているけれども、最近の仏教に疑問を持っていて、今では神社に行くことが多いというのも、今までと同じだという。
「さ、長くなっちゃけど、何れにしても『１００年待ってもらう』ことは、受け入れさせるしかないわ。そのためには受け入れない国に、例によって連帯責任を取らせるべきなのよ」
永原先生は、どうもそうした過激な手段をよく好む傾向にある。
それは彼女が戦国時代に経験してきたエピソードが原因であることは、明らかだった。
逆に言えば戦乱の時代のような人間でも押さえつけることが出来る方法と言い換えることも出来るのよね。

それが現代に通じるかどうかと言えばまあ、逆らう人はいなくなるだろうけども。
「人事については、批判は出ねえだろうな」
蓬莱教授は、取締役の人選については殆ど批判は出ないだろうと考えている。
国内のマスコミはすでに掌握しているし、海外も海外で、制裁を恐れて筆が鈍る人は多い。
それ以前に、会社の人事がどうこう何て言うことまで、海外のマスコミが突っ込んでくるとは考えにくいから。
何れにしても、まずは建設会社と建設用地、工場の作業員の確保を進めていく必要があるわね。
それを募集するためにも、この記者会見を足掛かりにして、まずは事業を起こさないといけないわね。

トントン
「はい」
打ち合わせが一段落すると、扉をノックする音が聞こえてきた。
「はいどうぞ」
蓬莱教授が扉の外の人物に呼び掛ける。
ガチャ……
「時間です」
扉から出てきた関係者の人がそう告げると、あたしたちは一斉に立ち上がる。
案内人さんを先頭に、蓬莱教授と浩介くんが前列に立ち、その後ろからあたしと永原先生と、比良さんと余呉さんが続く。
「こちらでお待ちください」
扉を開けると、記者会見場には、まだ記者の姿もまばらで、あたしたちの様子を写真に撮るわけでもない。
どうやら、正式な開始時間が別にあって、そこでよーいどんって感じみたいね。
あたしたちが座り終わると、記者たちも慌ただしくなってきて、奥

の入り口からも多くの記者さんが入ってくる。
この間行われた「完全不老の記者会見」では、「歩留まりの悪さ」が大きな課題になっていた。
ということは、この記者会見は当然、それが改善したことを報告する記者会見なのは容易に想像ができた。

## 新会社の立ち上げ

「それでは始めます」

司会者さんの声と共に、フラッシュが一斉にたかれていく。

うー、この独特の点滅に慣れる必要があるわね。

「えー、佐和山大学の蓬莱です。今日はですね数ヶ月前の記者会見でもありましたように、歩留まりの改善……もちろんまだまだ改善の余地はあるんですが、ひとまず、日本国内に日本人向けに販売する目処がたったことをお知らせいたします」

蓬莱教授が本題に入っても、記者席の動揺は小さい。

それは事前に、そのことが知られていたからだろう。

「まずですね、生産から販売までの方法について説明いたします。当初の値段は1人5本で3億円になりますが、経営効率の改善などを目処に遅くても販売から４０年後までには２０００万円まで段階的に引き下げます。また、値下げと共に最大１０００年での分割払いも実施したいと思います」

値段についても、これまでの情報とほぼ同じ。

記者たちも既知の情報だからか、みんなリラックスしている。

「まず生産方法ですが、国内に2箇所の工場を建てて、これを世界販売の時にも引き続いて続ける予定です。工場の敷地面積は広大になりますが、国防にも関わるというその都合上から、メインの1箇所は関東の内陸平野部に、もう1箇所はサブとして北海道に建設したい」

蓬莱教授がそう言うと、一部の地方紙と思われる記者が一生懸命にスマホを打っている。

恐らく、地元に「蓬莱カンパニー」の工場ができるかもしれないという期待もあるのだろう。

「工場で生産された蓬莱の薬は、全日本人、将来的には全人類への普及が必要ながら、その機密性も守る必要がある。そこで、全国の都道府県や市町村に支店を設け、或いは出張サービスなどで受け取り、その場で飲んでもらうことにした。お客様には不便を強いることにはなってしまうが、蓬莱の薬というものの特殊性ゆえ、やむを得ないも

のとした」
蓬莱教授がパネルを使いながら上手に説明してくれる。
ちなみに、出張サービスは住宅だけではなく、職場にも対応する予定だという。
これについては、「逆らう企業はいないだろう」というのが蓬莱教授の見立てだった。
「重要になってくるのは人手不足だ。工場の従業員や流通に携わる社員、全国規模で展開する以上、相当の人数が必要になってくるな」
蓬莱教授が、「蓬莱カンパニー最大の課題」とするパネルを掲げ、人手不足をあげていた。
「さて、次に役員人事に移りたいのだが、今回は少し長い。ここまでで質問のある人はいるか？」
司会進行を無視し、蓬莱教授が「一旦質問」の体裁をとる。
司会者さんも一瞬驚いていたが、すぐに持ち直して手をあげた記者の1人にマイクを渡した。
「――えっと、その工場というのは……もっと具体的な場所とかはあるんですか？」
予想通り、一番気になる質問をして来た。
実際ローカル紙の記者なら絶対に気になるところだものね。
「あー、具体的には決まっていないが、大体の構造としては、鉄道貨物やトラック何かが行き来できるスペースといったところかな？　トラックは事故が多いから、鉄道貨物が重要になってくると思う。住宅地から近いか、などはあまり重要視していないな」
蓬莱教授の説明に、記者さんが聞き入っている。
そして次の質問に入る。
「何故、2箇所だけなんですか？」
やはりこれも、想定内の質問ね。
「まず、1箇所の集中は非常に問題があること、つまりリスクの分散なんですが、逆に数が多すぎたりしますと、今度は末端から技術流出の危険性も出てきます。技術が流出した場合、偽薬を売り付ける詐欺……それも数百年発覚しない危険性のある詐欺が誘発される危険性

がある」
「ありがとうございます」
そう、蓬莱の薬の独占が認められたのは、極めて捜査が難しい詐欺が発生する可能性があり、社会的に大混乱をもたらす可能性が高いことだった。
工場は集中リスクと分散リスクとを天秤にかけて、2箇所に決定した。
「あー、次の人事の話に行ってもいいかな？」
蓬莱教授が質問を一旦打ちきり、本題へと戻す。
「まずこの蓬莱カンパニーだが、まず会長、これは名誉職としてあまり実権は持たないことにする。これについては俺が就任する予定だが、物はあまり言わないつもりだ」
蓬莱教授は、まず会長について話すことにした。
代表取締役ということにはなっていて、いざという時に権限を行使するという立場になると理解していいわね。
「んで、社長何だが……これが大変に迷った。蓬莱の薬の機密を守るためには、ある程度近く信頼できる人がいいが、俺や瀬田准教授は研究を中心にしていきたいし、協会の人たちはそれぞれ本業があるから、そこの仕事をやめてもらわないといけない。ベンチャーの社長はリスクがある。そこでだ、ここに座ってる篠原浩介さんを社長に推薦した」
パシャパシャと、カメラの音が一段と激しくなる中、浩介くんが立ち上がって黙って一礼する。
「彼は今回、会社を興し、国内向けに売れる程度には歩留まりを改善してくれた立役者でもあるんだ。彼の妻の優子さんと、そして彼自身の発見がなければ、蓬莱の薬は世に出ることはなかったんだ。俺が社長に推薦したのは、機密保持と信頼度の観点からだ。まだ大学院の博士1年だが、準備期間に最低2年かかる。そのことも踏まえて、どうか理解してもらいたい」
記者たちの動揺の顔も見てとれる。
社長には、もっと別の実業家が迎えられるのではないかという予想

もあったものね。
　でもこの会社は、ある程度は信頼のおける身内で固めないと、競合会社が出た時点で、それが詐欺の入り口になりかねない。
　一方で、あたしたちの会社は、蓬莱の薬が効いているかどうかの診断を、全国の病院で、保険適用の上無料で行えるようにした。
「おほん、その他の役員人事だが、専務取締役に日本性転換症候群協会副会長の比良さんにしてもらうことになった」
　カメラの音が、また激しくなる。
　比良さんも、見た目はあどけなさの残る少女で、身長は小学生並み。
　でもＴＳ病ということを知れば、実年齢はとても高いことは、記者にも分かる話。
　すると比良さんが、蓬莱教授からマイクを受け取った。
「私は、生まれは天保１１年７月……１８４０年生まれですから、１８４……今年で１８５歳になります」
　その話はあたしたちは何度も聞いているが、やはり記者さんたちには驚きに染まっている。
　女性の年齢のことは、蓬莱教授本人の口から言うわけにはいかないから、こういう体裁になったのね。
「おほん、では次の人事に参ります。常務取締役の人事ですが、こちらは社長の篠原浩介さんの妻に当たる篠原優子さんに決定しました」
　あたしが椅子から立ち上がり、浩介くんと同じように一礼をする。
　あたしのことについては、既にみんな知っているし、蓬莱の薬の完成に貢献したこともよく知られている。
　そのため、あたしの自己紹介は省略された。
「それから、本業の私立高校の教師や日本性転換症候群協会会長としての責務もあるが、ご意見番として相談役を設けた。皆さんも知っての通り、永原マキノさんだ」
　またカメラのフラッシュが激しくなる。
「ご紹介に預かりました永原です。よろしくお願い致します」
　永原先生もまた、世間一般にも有名人で、一介の私立高校の教師でありながらも「人類の長老」でもあり、最後の江戸幕府以前の生まれ

でもある。
それを考えれば、もっと重役でもおかしくない。
しかし、永原先生は協会の会長の職務に小谷学園の教師の仕事もある。
それを鑑みて、永原先生は「相談役」になり、蓬莱教授と同様に、何か大きなことがあったときに意見を述べる程度の地位になるという。
永原先生は、取締役にはならないということも確認された。
「続いて、取締役として、えーやはりＴＳ病当事者であります余呉さんを迎え入れることになりました」
そして今度は、余呉さんが立ち上がって、蓬莱教授からマイクを受けとる。
「日本性転換症候群協会の余呉と申します。生まれは農村ですが、天保３年１２月に生を受けて、人生今年で１９２年になります。一応会長の次には年上なのでよろしくお願い致します」
余呉さんは、落ち着いた口調で話していく。
比良さんも余呉さんも、江戸時代の人とあってかかなり小柄で、あどけない少女の印象さえ受けるだろう。
もちろん、実年齢は今生きている老人たちよりもずっと高い。
彼女たち「３長老」は、言わば蓬莱の薬がもたらす未来の青写真でもあるのよね。
「他にも、工場長２名はまだ未定だが、取締役待遇としたい。現在決まっているのは取締役は７人、この他にも社外からの取締役や、監査法人を迎えての会計監査など、大きな会社として必要なことを整備したいと思う。人事についてはここまでで、次に株式についてだ」
蓬莱教授から、役員人事の説明があった。
そして、質問時間に入る前に、次の話題に入る。
「株式については、上場するか否かは決まっていない。というのも、純民間のベンチャー企業ではあるのだが、特殊な会社故に上場のデメリットが大きいからだ」
そう言いつつ、蓬莱教授が円グラフのパネルを出す。
「株式としては、色々に考えた結果、上場を想定する場合として、この

ような分配方法にすることにした……まず２０％を会長の俺が持ち、１５％ずつ優子さんと浩介さんに、この時点で５０％ぴったりで、ギリギリ同族会社にはならない。残る５０％のうち１０％を相談役の永原先生に、５％ずつを専務の比良さんと平取の余呉さんに、残る１０％を日本性転換症候群協会が持ち、残りの３０％を市場に公開したい」

確かに、蓬莱教授とあたしたち、永原先生、比良さん、余呉さんには血縁関係は何もなく、日本性転換症候群協会という団体の集まりで親しい関係か、あるいは蓬莱の研究棟での教授と院生という関係でしかない。

しかし、あたしたちはともかく、永原先生と比良さん余呉さんは、もう１１０年の付き合いがあるわけで、蓬莱教授も、彼女たちとの付き合いは３０年に及んでいる。

血縁関係のある同族経営ではないが、下手な家族経営よりもよほど強い絆になっている。

「ただ、もちろん上場ともなれば、そううまくはいかないだろうし、株式の配分についても、考え直す必要があるだろう」

蓬莱教授としては、上場するかどうかは、まだ未定で、仮にするとしても、敵対的買収などをされてしまえば一溜まりもない。

ちなみに、上場した場合でも、その特殊性から外国人株主は制限することになっている。

「医療機関への保険面で固めることで、独占維持を図っていきたいし、数百年単位で発覚する詐欺の防止にも繋がると思う」

逆に、蓬莱の薬を全て飲み終わった時に、「確認医療カード」を、マイナンバーつきで渡すという。

とにかく、競合企業を出さず、なおかつ全日本、行く行くは全世界に売っていくのは並大抵の難しさではない。

「人事と株式については以上だ。さて、ここまでで皆さんの方で何か質問はあるかな？」

「はい」

すると記者さんの１人が手をあげた。

「――えっと、役員人事についてなんですけれども、社外取締役というのは誰を迎える予定なんですか？」
確かに、そこは気になるわよね。
正直、まだ決めていないんだけれども。
「あー、実はまだ決めていないんだが、流通業界や、再生医療業界に頼むつもりではある」
蓬莱教授が無難な回答をする。
まあ、社外取締役を募集したら、いくらでも候補者はいそうだけどね。
「ありがとうございます」

「株式の上場の時期というのは分かりますか？」
次に出たのは、株式上場の時期についての質問だった。
うーん、こんな質問してどうするのかしら？
「あー、上場そのものもまだ未定だから、ましてや上場するとして時期を決めているわけでは、ないな」
ほら、蓬莱教授としても、こう答えるしかないもの。
記者さんは不満そうな顔になっているが、ちょっとさすがに自分勝手じゃないかしら？
「えーではですね、最後に海外展開について何ですが……浩介さんの尽力もあって販売にこぎ着けるレベルでの歩留まり改善は実現しました」
浩介くんが、ちょっとだけ照れているのが分かる。
最も、あたしたちでイチャイチャした時ほどの照れ方ではないけどね。
「ですが、それでも、工場から販売形態から……あーそれらを1から構築しながら、日本全国に販売するとなるとかなりの初期費用がかかりますし、一応純民間ですから、税金の力は極力借りずにですね、行うともなりますと、海外に同時発売するためにかかる費用を工面するためには、やはり１００年はかかると思います」
実際には、海外展開するまで５０年くらいしかかからないんじゃな

いかとも言われてはいる。
ただ、万全を期して世界同時発売する場合は、８０年くらいの時間が必要という話もあり、実際に８０年経てば、残りの２０年を時間稼ぎできるはずだわ。
「何故それほど時間がかかるかと言いますと、まずもって、『比較的安全性と蓬莱の薬に寛容な日本を除いて、売る国に順番はつけたくない』というのがあります」
蓬莱教授は、共産主義者ではない。
ただ、売る国に順番をつければ、その順番において後回しにされた国が日本を恨む可能性があるという実利的懸念がある。
また、実際に売る国に順番をつけて少しずつ販路を拡大すれば、１００年よりはるか前に全世界に浸透するという試算結果も出ているが、これについては握りつぶした。
政府側の外交的都合と、競争力と国力増強のために日本限定期間を長くとりたい経済界と防衛界隈、そして蓬莱教授側の企業経営都合全ての利害が一致しているが、今回は政府の外交的都合を隠しつつ、経営的都合を全面に押し出すことになった。
いずれにしても、蓬莱教授は日本人以外の外国人全員が不幸になる判断を、最もらしく正当化することに成功しているわね。
「というのもですね、発売する国に順番を設ければ、必ずや後側に回された国は不満を持つでしょう。それに順番だってどう決めますか？
予約の多い順番では人口の多い国が有利ですし、献金合戦させたら経済力が全てになってしまいますし、ビジネスライクなやり方をするにしても、解釈次第で大きく変わってしまうでしょう」
蓬莱教授が、順番を設けない理由を坦々と語っていく。
実際の所、純民間企業なのだから、売る国の順番なんて自由でもいいんだけど、この辺りは上手くダブルスタンダードを使っていきたいわね。
……罪悪感はあるけど。
「ですから、多少遅くなったとしても、まずはしっかり利益を出しながら、全世界に同時販売できる生産と流通基盤を作って、その上で全世

界に販売したいと思います。民間ですから、自国他国問わず、政府からの献金などは受け取らないことにします。政治的、外交的な抗争に巻き込まれたくないというのもありますが」
いかに蓬莱教授の財力でも、いきなり全世界同時発売はできないし、リスクも高いことはみんな知っている。
政府や自治体からの献金は、政治的・外交的抗争に巻き込まれる恐れがあり、純民間企業として好ましくない。
そこで、ひとまず社会実験も兼ねて、蓬莱の薬の基となるＴＳ病患者の大半を占める日本において一斉発売を行い、企業としての財力やノウハウなどを貯めてから、全世界に一斉に打って出る。
でもそのためには、長い準備時間がどうしても必要になる。
本当に、蓬莱教授は徹底的に考えていると思うわ。
「さて、俺からの話は以上だが、記者の方で質問はあるかな？」
「はい」
また別の記者さんが、手をあげた。
「あの、それでも強引に、外国政府が日本政府に対して圧力をかけてくる可能性はあると思うんですがいかがでしょう？」
確かに、その懸念はあるのよね。
何分、薬の効果が効果だから、「ルール違反上等」でなりふり構わず日本政府に圧力をかける可能性はあるのよね。
「ええ、そうなった場合はまあ、最終的には軍事力ということにはなるでしょうけれども、俺たちがとる方法は、『民間企業に政府が干渉するな。うるさいこと言うとお前の国には永遠に売らないぞ』と脅しつけるくらいでしょうか」
そう、あたしたちには最終的にはこのカードがある。
逆らうなら売ってやらない。お前たちだけではなく子孫も含めて。という連座制で、これならば無鉄砲な人も大人しくなる。
「ありがとうございます」
その後も、海外の不満をどう押さえ込むかという問題について質問が何度も交わされた。
蓬莱教授はその都度、坦々と理路整然に語っていく。

記者会見は以前の会見よりも長く続いていたが、それでも満足にいく結果にはなったと思う。

そしてあたしたちは、昼食を食べて、その足で会社設立のための書類を届け出た。

もちろん様々な手続きが必要だけど、あたしたちには他の日常生活があるので、なるべくこういうのはこういう時に済ませないとね。

## 予定地を絞り込もう

翌日以降、インターネットのコミュニティでは蓬莱教授がついに会社を設立したことで持ちきりになっていた。

１００年間猶予が必要という話については、日本国内では意外と好意的に受け止められていた。

実際には更に複雑な背景があるものの、純民間の体裁を取ったお陰で、うまく矮小化して政府との繋がりを絶つことができたわね。

「それで、関東の本部工場から発注したい」

１００年の間に、生産効率を１０倍にするとして、まずは用地を確保し、一部に工場を建てていく。

本部工場の面積を考えると、それ相応に大きな土地が必要ではあるものの、生産品の性質上公害や環境破壊はほぼない。

そのため、今蓬莱の研究棟には、北関東だけではなく他の地方の自治体からも工場誘致の請願書が殺到していた。

兎にも角にも、あたしたちはこの請願書の中から、条件に見合った土地を提供してくれる自治体を見つけ出す必要がある。

「ともあれ、条件に会わない手紙を除外してくれ」

蓬莱教授は、この作業を学部生にやらせることにした。

そしてあたしたちは、今回の蓬莱の薬の成果を、論文にまとめなければいけない。

浩介くんの論文にあたしの論文は博士論文にして、あたしと浩介くんの業績とも合わせて、蓬莱教授との共著という形で別の論文も書くことになっている。

「もし、学術誌に載ったら、ノーベル賞ものだ」

「ええそうね」

蓬莱教授の、２回目のノーベル賞は決まったも同然だった。

あたしは論文を作りながら、蓬莱教授の指導を受けていく。

そしてそれは浩介くんも同じだった。

コンコン

「はい」
不意に、研究所の扉がノックされた。
中に入ってきたのは手紙を整理していた学部生だった。
よく見ると、手には紙の束を持っていた。
「おう、整理ができたか」
「はい、条件を満たしているのはこれだけです」
紙の束が机にドサッと置かれる。
どうやら、北関東ではないなど、最低限の条件も揃っていない書類だけが除外されているらしいわね。
蓬莱教授は紙の束を一瞬眺めると、それを浩介くんとあたしに押し付けてきた。
「さ、社長に常務、良さそうな場所を決めるんだ」
「は、はい会長」
もう既に、会社は始まっているというわけね。
ともあれあたしたちは、ひとまず今日の予定分だけ論文をまとめ終わってから、書類の整理も時折行うことにした。
土地の大きさについては、蓬莱の研究棟にある「製造ライン」を工場に大量に再現するとして概算する。
まずは明らかに用地面積が足りない自治体を排除する。
そうすると、紙の束が3分の1だけ残った。
でも問題はここからなのよね。
「土地の余っている駅前何て言う都合のいい話はないから、さて」
個人的には、駅間の長い区間で、駅と駅のちょうど中間にある農地がいいと思っている。
そこならば、駅もないからあまり発展していないし、既存の線路があるから新しい駅も作りやすいもの。
「新駅を考慮して、建てたいなあー」
浩介くんがそう呟く。
実際に、蓬莱カンパニー向けに大きな工場ができれば、それだけで駅にしてもいいと思う。
ただ、北関東でも東京から近いと、駅と駅の間も住宅地などの建物

で埋まっている。
かといってあまり遠すぎると、人材が集まらない危険性もある。
うーんでも土地が安い方がいいだろうし、社宅や社員寮何て言うのも、作る必要があるわね。
そんな風に取捨選択していると、ついに候補を3つに絞ることができた。
「蓬莱教授、とりあえず候補を3つに絞れました」
「おおそうか、どれ見せてくれ」
あたしから、蓬莱教授が書類を受けとる。
蓬莱教授は処理に目を落とすとうんうんと頷き始めた。
「なかなかいいじゃないか。鉄道の駅と駅の中間にある、関東平野の農業地帯、ここなら確かに、巨大工場を作るのに打ってつけだ」
工場への貨物列車の専用引き込み線も含めて、かなりの大型案件にはなるだろうけど、蓬莱教授の財力なら、払えないお金ではない。
「特にこれが一番いいな。一番近い上に土地が安い」
蓬莱教授が、最終的に最も良さそうな1件を提示してくれた。
うん、後はこの自治体に連絡を取って、交渉するだけね。
「むしろ問題は、北海道に作るサブ工場だろう」
蓬莱教授が同様に話す。
北海道はほとんどの自治体が過疎にあえいでいる。
蓬莱の薬が出来ても、あまり希望はない。
工場ができるかどうかで、自治体の命運がかかっていると言ってもいい。
だからどこの自治体も、必死になって請願してくることは想像に難くないのよね。
「俺が考えているのは、札幌と旭川の間だ。ここなら比較的交通の便がいいし、空いている土地もある。とは言え、北海道は冬が厳しい、通勤環境をどう整備するかも、問題になってくるだろうな」
幸い、まだサブ工場の誘致請願は来ていない、というのも、まずはメインの工場だけを建設し、ノウハウを貯めることになっているからだ。

並行して行うのが人の募集、つまり求人票を職業安定所などに出すわけだけど、これがむしろ箱の決定よりも難しいかもしれない。
あたしたちはハローワークに掛け合って、求人票を出すことにした。
募集要項としては、いわゆる工場の作業員や事務員といった所、まずは全国に支店を作る前に、工場で直売のみで運用を始めることにする。
値段も3億円一括払い固定になっていて、「どうしても今すぐ飲みたい人」に絞る方針になった。
「5日連続で工場に行かないといけないのは大変よねえ」
機密維持のためにも、お客さんの手に持たせるわけにもいかないものね。
そう考えると、今までの蓬莱の薬はちょっと無防備だったかも。浩介くんも持ち歩いてたし。
「そこで考えたんだが、工場にホテルも併設しようと思う」
関西などの遠方からのお客さんのために、工場に隣接してホテルを作ることを浩介くんが提案してきた。
あたしとしては賛成だけど、全国に支店が出来、出張サービス、値下げと超長期分割払いも実現した場合、このホテルは役割を失うので、使い捨てを前提にしたい。
「とは言え、3億円を出せるお客さん向けだからな。豪華にはしておこう」
浩介くんも、きちんと商売相手を考えているわね。
それにしても、使い捨ての豪華ホテルって何だかシュールだわ。
売上金や蓬莱教授の財産などを元手に、全国各地に支店を作り、サブ工場と合わせて蓬莱の薬を生産し、支店に運んでいく。
「財政に余裕が出てきたら、値下げをどんどん行っていこう」
「ええ」
具体的な工場のデザインや、支店のデザインは、その道のプロに任せることにして、あたしたちがするべきことはおおむねこれでおしまいだった。

新しく命が産まれてくる限り、蓬莱の薬の需要はなくならないが、今は必要ないけれども、生産力に余裕が出てきたら、今度は海外の顧客向けに、在庫をどんどん溜め込まないといけないわね。

蓬莱の薬の長期的維持、保存方法については、今後蓬莱教授自身が研究してくれとのことなので、あたしたちはそれを待てばいいわね。

全てが終わって、あたしたちはもう一度論文の執筆作業に戻った。

翌日、常務であるあたしは、最終候補に残った自治体の市長宛に電話を掛け、工場候補地として本命であることを直接伝えることになった。

社長の浩介くんの仕事とも思ったけど、「こういうのは女性の優子さんがやると好感度がアップする」とのことで、あたしも我ながら全くその通りだと思ってしまったのでそのまま引き受けてしまった。

うー、緊張するわ。

総理大臣とも面と向かって話したことがあるというのに、高々地方の市長と話すのさえ緊張してしまうのはどうしてなのかしら？

まあ、人生初の「商談」ってこともあるんだと思うけど。

「といっても、しないわけにはいかないわね」

あたしは意を決して受話器をあげて、市長へと電話を掛けた。

プルルルル……プルルルル……

「はいこちら――」

出たのは、恐らく事務の女性ね。

「あの、あたし蓬莱カンパニー株式会社常務取締役の篠原優子と申しますが、市長様いらっしゃいますか？」

あたしは人生ではじめて、蓬莱カンパニーの常務取締役としての肩書きを告げた。

「あ、はい篠原様ですね。ただいま市長にお繋ぎいたします」

そう言うと、電話からは音楽のメロディーが流れていく。

音楽が2周すると突然切れた。

「もしもし、私市長の――」

「あ、市長様ですか？　お世話になっておりますあたし蓬莱カンパ

ニー株式会社常務取締役の篠原優子と申しますが」
「ああ篠原様、どういったご用件で?!」
市長さんの驚いた顔が目に浮かぶ程に大きな声を出す。
もしかしたら女性とは思わなかったのかしら?
「えっとですね――市の案を採用して、工場を誘致したいんですけれども――」
「ああ、ありがとございます! 本当にありがとうございます!」
電話越しでも分かるくらいに、感激した市長さんの声が響いてくる。
確かに、一番いい条件を出したのがここだった。
それでも、この工場の誘致が町の活性化に繋がることはよく分かっていた。
「ただですね、工場のみならず社員寮や社宅といったものも建設する必要があります。それらについての詳細を述べても大丈夫ですか?」
「ええもちろんです!」
市長さんは、まだ興奮が覚め止まないみたいね。
「まず、この土地なのですけれども、駅と駅の中間にありますよね?」
「はい、ですから駅前とかを提示した所に負けるんじゃないかと思ってまして――」
「いえ、だからいいんです。新駅を誘致してもいいですし、貨物列車のための引き込み線も欲しいんです。蓬莱の薬は機密性が高く、情報を漏らすわけには参りませんから、事故率の低い鉄道貨物も、有効に使っていきたいんです」
そのためにも、ＪＲとも交渉しないといけないわね。
「はい、では駅のスペースは?」
「当然確保します。後ですね、蓬莱の薬は5日間連続で服用する必要がありまして、当初は全国各地に支店を作る余裕がありませんので、小さなホテルも誘致したいと思っています」
「おお、ホテルですか! ありがとうございます!」
どちらにしても、地元住民にとっては雇用の創出になる上に、そうじゃなくても社員たちの昼食需要や娯楽需要が期待できるものね。

「もちろん、全国各地に出来ましたら、ホテルは廃止する予定です。その後は社宅に改築したいと考えています」
「分かりました。では一旦、私どもの市役所に来ていただけますか？」
「ええ、分かりました。時間はいつがよろしいですか？」
「えっとですね……あー、夏まで埋まってますねー一番早いので８月の――」
　意外と多忙ねこの市長さん。
「分かりました。じゃあその日でお願いいたします」
　あたしは、机にあった小さな紙切れに日付をメモする。
「了解です。時間はどうされますか？」
　時間、困ったわね。
「うーん、家や大学院からもそれなりに離れていますから……ちょっと今は分からないですね」
「分かりました。この日は今の所終日開いておりますので決まりましたら電話でお知らせください」
　あたしはメモの続きに「時間きょうぎ」と書き込んだ。
「分かりました。では失礼いたします」
「我が町を選んでくださり、本当にありがとうございました！」
　プツッ、プー、プー、プー、プー……
　輝かしい声で、市長さんが感謝の言葉を述べ、電話がプツリと切れた。
「ふう」
　さらーり
「きゃあ！」
　市長さんとの電話が終わり、一息ついていると、えっちな手にスカートの上からお尻をまさぐられた。
　ぺちっ！
「もうっ！　浩介くんのえっち！」
　全然痛くないビンタを、痴漢の犯人である浩介くんに浴びせる。
「悪い悪い、優子ちゃんが無防備そうだったからつい」
　また浩介くんがいつものように子供じみた言い訳をする。

本当にもう、油断も隙もないわね。
「はあー、浩介くんって年がら年中エロいこと考えてるわよね？」
まあ、優一も似たようなものだし、あたしだって浩介くんとのことを考えない日はないけど。
「うぐっ、そんな訳ねえぞ！」
浩介くんが自白にも等しい位に墓穴を掘る。
「ふふ、まあいいわ。さ、建築会社を募集しなきゃ」
そう、誘致する場所を決めたら、今度は建設会社と機材の発注先を決めなきゃいけない。
改めてその事を、浩介くんと話し合う。
工場を建設し、更に機材を発注する工場の選定、更には従業員の募集も大切になってくるわね。
機密の核心に触れる部分は、ここ蓬莱の研究棟出身の人に頼むことにした。
「問題はヘッドハンティングよね」
「ああそれについてだが、金の力はとてつもない。精神論は難しいそこでだ」
浩介くんには秘策があるらしいけど、あたしには分かる。
「密告制度かしら？」
「分かってるじゃねえか。さすがは優子ちゃん」
浩介くんがニヤリと笑う。
そう、機密情報を売り渡そうとする社員がいないかどうか、常に互いに監視させ密告を仕向ける。
更にはそうしたことをしでかす会社には、関係者に蓬莱の薬を売らないとあらかじめ脅しを掛ける。
蓬莱の薬に関しては機密保護法がある。
製造法を漏らしたりすれば、当然背任に問われるが、それ以上に関係者に対する薬の不融通の方が強烈な抑制になる。
不老前提の社会となり、高齢者向け福祉が皆無となれば、蓬莱の薬の不融通は、死刑宣告と同義だものね。
問題は、薬を飲んだ人間による不義だけど、それについても親類縁

者に累を及ぼすことで防ぐ。
いかに金に転ぼうとしても、自らと近しい関係にある人間まで迷惑を被る可能性があるともなると、人間は極めて鈍くなる。
「採用の際にも、末端はともかく、こういう重要情報に触れるであろう幹部候補には、親族や親しい友人がいるかどうかも重要な案件になるな。この連座制は、天涯孤独の人間には効果が薄いからな」
浩介くんも、社長として、蓬莱教授のやり方を覚えてきた。
まあ、年収や給料を上げれば、十分すぎるとも言えるけどね。
「さて、夏が楽しみだな」
「ええ」
夏になれば、あたしも論文をほぼ書き終えることができる。
後は課程に専念しつつ、浩介くんと共に会社業に専念できそうね。
あ、でも赤ちゃんを産むことも考える必要があるから、その時は常務は別の人に任せて、主婦に転身しようかしら？

「ふー、とりあえず承認をもらえてよかったわ」
あたしは、修士時代に発見した「完全な蓬莱の薬」の生成方法について、博士論文にまとめることができた。
蓬莱教授からも承認をもらったので、これで後は単位と会社経営に専念することができる。
と言っても、蓬莱の研究棟に居座ることに違いはない。
最近になって分かったことだけど、和邇先輩が工場で蓬莱の薬を生成する重要な役割を担うことになったらしいわ。
管理はコンピュータでするらしく、ハイテクな仕様になっている。
「優子ちゃん、どうだった？」
「うん、バッチリだって、蓬莱教授によると、『２年で卒業』も考えてるって」
「へーすごいな」
博士課程は一般には3年が必要になる。
しかし、「成績優秀ならば、２年で卒業」という例もある。
あたしたちがそれに該当するかは不明だけれども、うまく単位を融

通して貰えれば大丈夫かもしれないのよね。
まあそれを言うなら、浩介くんだって、十分にすごい発見をしているとは思うけれども。
「まあそうは言っても、あたしは体力的な問題もあるから、3年でゆっくり学びたいわね」
実際の所、浩介くんの寿命問題が解決した去年の時点で、あたしには佐和山大学に残り続けている理由はなくなった。
でも、そこにたどり着くまでの過程で、あたしは多くのものを持ちすぎた。
蓬莱の薬と、ＴＳ病患者を世間に認めさせるための宣伝活動に始まり、対立勢力との対決に加えて、蓬莱の薬を普及させるために、政府と交渉し、身内の協会との間を取り持って、あたしが自らパズルのピースを嵌めたとき、浩介くんと共に会社の社長と常務をすることになった。
「まあ、俺もここまで来たからには、全力で行きたいね。博士の学歴も、何かの役に立つだろう。ましてや医学だしな」
浩介くんが力強く言う。
「ええ」
最も、あたしたちは医師免許はないので、患者さんに何かをするということはできないけどね。
ともあれ、まずは建設関係の人を含めて、市長さんの所に行かないといけないわね。

他にも、あたしは建築業界のお偉いさんに電話を掛けた。
蓬莱カンパニーの工場建設は、業界でも「どこが受注するのか？」で、大きな話題になっていたと話していて、今回土地が決まったことを話すと「おおそうですか！」と、大きな声で張り切っていたのが電話越しにも分かった。
こういうのは、本来社長の浩介くんが地位的には相応しいんだけど、「ああいうおじさんたちの機嫌を良くするには、女の子のあたしの方が向いているわ」と主張したため、浩介くんも渋々認めてくれた。

ちなみに、浩介くんの独占欲を満たすための口説き文句は、「電話だと相手の顔が見えないけど、浩介くんとは毎日顔を会わせているわ」だったり。

あたしは、「優一の知識」を使って、男の印象をよくするために、声のトーンをやや甘えた高めの声にした。

ただでさえ、あたしの声は女の子の中でも高い声に該当するので、それを意識的にトーンをあげて甘い声にしたから、さぞ印象は良かったと思うわ。

ちなみに、例によって浩介くんはそうしたあたしの演技に全く気付いてなかった。

## 市長の歓迎

「優子さんに浩介さん、おはよう」
夏のある日の都内の東京駅、今回はあたしたちの他にも建設業界の偉い人も1人来るとのことなので集合場所がここになった。
会長の蓬莱教授に社長の浩介くん、そして常務のあたしがまず到着し、建設業界の人はまだ来ていない。
浩介くんも蓬莱教授もあたしも、ビシッと決めた感じのスーツで、もしかしたらこの格好も入学式や卒業式以来かもしれないわね。
「俺たち、どうやら就活しないで済みそうだな」
「ええ」
浩介くんが何の気なしに言った言葉が突き刺さる。
そう、自分達で会社を始めてしまったのだから、「就活をしないでいい」のは当たり前の話だ。
会社で社長や役員をしていたともなれば、何か大きな不祥事で潰れたというわけでもなければ、再就職に困ることはそうそう無いはずよね。
それに、今のこの会社ならあたしたちの勝利は約束されたようなものだわ。

この時間でも、東京駅はビジネスマンで混雑している。
観光客も多いけれど、やはり駅前がビジネス街とあって、利用客の中で目につくのはやはりスーツのサラリーマンたちだった。
そんな中で、何の気なしに高年のスーツのサラリーマンがこちらに向かってきた。
「あ、もしかして蓬莱カンパニーの方ですか？」
そして、あたしたちに声をかけてきてくれた。
「はい」
蓬莱教授が、代表して挨拶する。
「あ、どうもはじめまして私日本建築――」
サラリーマン風の人と言っても、この人は建築界隈ではとても偉い

人で、言わば建築界の重鎮とも言える人なのよね。
今回はあたしたちに力を貸してくれることになったからありがたく協力を仰ぐことにしよう。
「……蓬莱カンパニー会長の蓬莱伸吾といいます」
「同じく蓬莱カンパニー社長の篠原浩介です」
「常務取締役の篠原優子です」
蓬莱教授の挨拶に続き、あたしたちも自己紹介と共に一礼し、作ったばかりの名刺を手渡す。
そこには「蓬莱カンパニー株式会社　常務取締役　篠原優子」とあり、会社の電話番号などはまだ無い。
「できたばかりの会社でして、まだ本社のビルも決まっていないんですすみません」
あたしが、スカスカな名刺を詫びて頭を下げる。
「ああいえいいんですよ。蓬莱の薬は皆さん待ち望んでいますから」
あたしが申し訳なさそうにお詫びをすると、おじさんもどことなく優しい顔になる。
その視線は、時折あたしの胸元を覗き混むように一瞬だけ視線が行く感じになっている。
ふふ、やっぱりかわいい美人って特だわ。
蓬莱教授はともかく、浩介くんが頭を下げても、あたしと同じような好感触を得られたとは思えないもの。
ちなみに、本社ビルの予定地としては、永原先生のいる協会本部と同じビルが有力候補地になっている。
協会と同じ階に入居していた会社がちょうど移転になるので、その前後のフロアと併せて蓬莱カンパニーのテナントにする予定になっている。
とはいえ、ビルの所有者や、既にいるテナントとも交渉が必要で、その辺りの調停がまだ煮詰まってないのよね。
「では参りましょうか」
「ええ」
蓬莱教授が先導し、目的のホームへと行く。

もちろん使うのはグリーン車で、全員でＩＣカードにチャージして、駅のホームで待つ。
北関東は群馬方面と栃木方面とあり、正しい方面の列車に乗る必要がある。
「――グリーン車は、足元の数字、４番と５番でお待ちください」
おなじみのアナウンスの声が流れ、やがて列車が入線してくる。
あたしたちはグリーン車の２階に陣取り、１列の席に座った。
あたしは窓側で、隣には浩介くんがいる。
さて、今日は市長さんとの会合だけではなくお客さんの接待もしないといけないわよね。
接待と言っても、旦那がいる身なので、当然建築のおじさんにセクハラされるつもりはないわ。
「あー、蓬莱先生、今回の工場なんですが、どうしてこの場所に決めたんですか？」
向こう側では、どうやら今回の土地決定に関するプロセスの質問があるあらしいわね。
「ええ、まずこの蓬莱の薬ですが、大衆の普及が必要であると同時に、機密を守る必要性も生じます。そこで海岸沿いの立地はその機密保護の観点から問題があります。幸いにして、輸入しなければいけないものは殆どありません」
蓬莱教授が、あたしたちに説明したのと全く同じ理由を彼に説明している。
また、工場の場所や立地なども、鉄道の新駅を考えた構想にしているという。
特に、貨物列車の使用などは、建築の人も驚いていたけれども、販売方法等については、専門外なのか一切質問してこない。
そして重要になるのが――
「蓬莱カンパニーとしては、工場はどういう工場なんですか？　低コスト……というわけにはいかないでしょう？」
そう、建築家が聞きたいのは、建築の中身よね。
「ええ、詳しいことは後々建築会社とも協議していきたいですが、やは

り蓬莱の薬の生成部分についてはですね、やはり機密として守りたいと思います。なのでこの工場のコンピュータも、インターネットとして外には繋がない……つまり物理的に繋がらないようにしないといけないと思います」
機密漏洩の防止のためにも、工場の従業員も省力化していきたいが、やはり規模そのものが大きいので、最終的にはどうしてもそれなりの人員が必要になってしまうという。
基本的には、材料を入れて機械で生成し、その後ＡＩと人間で２重に「完全不老かどうか？」を確認し、合格したものをペットボトルに詰めていく。
冷蔵で保存すれば、基本的に薬の効力は実験の上では最低２００年は大丈夫になっているが、まあ現実的には大事をとって８０年程度が限度にはなると思う。
「かなり厳重ですね」
普通の工場ではここまですることはあり得ないのか、建築業界のお偉いさんも驚きの表情を隠せない。
「ええですから、工場には権限のある社員のみ入れるスペースが必要になります。しかもそこは外からの攻撃が最後になるであろう中心部に置いて、更には部屋に入るにも二重に扉でロックする必要があるでしょう」
蓬莱教授が、具体的な防犯システムについて話し込んでいる。
建築の人も、かなり考え込んでいて、いかに侵入者を撃退するか、あるいはテロが起きた時の対策も考えねばならない。
何せ純民間資本ではあるが、その影響力から政府からの法的保護も認められている会社だものね。
「なるほど、ですが費用は高くなりますよ？」
「問題ない、万一機密が漏れて競合会社が現れでもしたら大変なことになる。あるいは海外などに『不完全な薬』を完全な薬と偽って売り込む詐欺だって横行するだろうさ」
蓬莱教授は、その辺りのコストは惜しまないらしい。
とはいえ、これは独占の維持に不利に働く恐れもないわけではな

い。
何故なら、「コスト削減の企業努力の欠如」と言えば、独占の弊害の1つでもあるから。
まあそうは言っても、それに正面切って批判するようなマスコミは、どこにもいないとは思うけどね。
2人での協議中も、電車は走っていく。
車窓を見ると、建物が密集した地域を抜け、徐々に人家などがまばらになり、更には農村や森林が広がる光景に変わっていく。
北関東は基本的に都市が続いているとはいえ、駅と駅との間には、時おり大きな空き地がある。
そして今回、駅と駅の中間にある農耕地帯の土地が、今回の工場の用地候補になる。
ちなみに、地域住民も、この工場建設に対して反対する者は誰一人としていなかったらしい。

「間もなく――」
「さて、降りますよ」
「はい」
蓬莱教授の先導で、あたしたちは駅を降りる。
途中、他の乗客が思いっきりあたしの胸をガン見していた。
いつものこととはいえ、あまりにも目立ったので気になってしまった。
そう言えば、この建設業界の人も、さっきはあたし胸を見てたわね。
……ふふ、奥さんが一緒じゃなくて良かったわね。
駅を降りたら、あたしたちはそこに停まっていたタクシーに乗る。
タクシーはあらかじめ配車アプリで呼んだもので、ナンバープレートはもちろん緑色になっている。
まず、お客様である建設会社の人が奥に入り、次に浩介くんと蓬莱教授が続く。
後ろの席は3人掛けなので、社内席次では3人の中で一番格下にあたるあたしが助手席の方に座る。

「えっと、市役所までお願いします」
「はい了解」
タクシー運転手さんの笑顔対応を受けながら、車が走り出した。
ちなみに、料金の支払いなどは会社の経費になるけれども、ここではあたしが応対することになる。
市役所まではそこまで離れておらず、タクシーは数分で到着してしまった。
あたしが料金を払い、タイトスカート特有のパンチラに気を付けながら車を降りる。
あたしたちは遅れないように約束の時間に無事到着することができた。

ウィーン
「涼しいですねえ」
「ええ」
市役所の自動ドアを潜ると、中は冷房が効いていた。
何分この辺の夏は関東平野の内陸部で結構暑いのよね。
工場の冷房装置も、きちんと考えておかないと不味いわね。
「すみません」
「はい」
ここは社長の浩介くんが、窓口の担当者に声をかける。
「えっと、私（わたくし）蓬莱カンパニー株式会社社長の篠原と申しますけれども、市長様いらっしゃいますか？」
効力は浩介くんが、社会人モードになっているわね。
うーん、あたしはまだ全然学生気分が抜けていないのよね。
おいおい身に付けておかないと、あたしも常務取締役だものね。
「あ、はい！　お待ちしておりました！　こちらへどうぞ！」
窓口のおばさんが勢い良く立ち上がると、こちら側に出て市長室に案内をしてくれる。
あたしたちは一言も喋らずに黙って女性についていく。
「こちらでございます」

コンコン
そう言うと、おばさんが一刻も早く呼びたいのか、すぐに扉をノックをした。
「市長、蓬莱カンパニーの方々がいらっしゃいましたよー！」
「はーい、どうぞ！」
市長さんの朗らかな声と共に、あたしたちは部屋に通される。
「あ、どうもはじめまして市長の――」
「私は――」
あたしたちは、先程と似たような自己紹介をしあいつつ、市長さんとまた、名刺のやり取りをする。
市長さんの部屋は事務的で質素だけれども、所々に豪華さもあるわね。
「まだできたばかりで慌ただしくて、事務をする本社のビルの方の交渉も終わってないんですすみません」
「ああいえ、それはいいんですよ」
あたしが申し訳なさそうに言うと、市長さんがにこやかに返してくる。
ちなみに、やっぱりオスの本能なのか、レディースーツの上からでも分かるあたしの爆乳に視線が食いついているわね。
「では、おかけください」
市長さんがそう言うと、あたしたちは椅子に腰かける。
途中、お茶のポットが目に入る。
さすがに役員のあたしがお茶汲みはしないと思うけど、あたしがしたら、男性社員はとても喜びそうだわ。
そう言えば、女の子になったばかりの時のカリキュラムの時に、「お茶だしマナー」の話が出たっけ？
……今思えば、母さんの予言は外れちゃったわね。
「えーではですね、まずは私の方から、お礼を述べさせてください。この度は、我が町に蓬莱カンパニーの工場を誘致してくださることを決意いただき、誠にありがとうございます。改めて市民を代表して、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます」

やはり、最初に出てきたのはお礼の話だった。
まあ、地域経済からすると、救世主とも言えるものね。
「ではですね、予定地について申し上げますけれども、鉄道駅と鉄道駅の間の農地となっておりまして、蓬莱教授の熱心な支持者が提供してくれました。最も、蓬莱カンパニーの工場の経済効果が高いので、競うように応募してくれましたが」
恐らく、ここに限った話じゃないわ。
北関東、いや全国の自治体で、同じような光景で溢れていたはずよ。
「ですから、私としては、最も広い土地を選んだつもりなんですが、よろしければ選んだ理由を教えていただきますか？」
「はい、まず土地が広く、平野になっていること、そして線路に近くて貨物列車の引き込み線が引けそうなことです。鉄道駅を作る余裕があるのが大きいです」
浩介くんが理路整然と話し始める。
最も、これは想定内のやり取りではあるけどね。
「ありがとうございます。具体的に、どのような工場になるのでしょうか？」
「はい、蓬莱の薬を生産し、全国に運んで参ります。機密漏洩対策が大切ですから、警備や耐震性などは特に厳重にする予定です」
浩介くんが、先程話した警備体制などについても話す。
ちなみに、印象が悪くなるので、社員からの漏洩対策については話さないおく。
まあ、市長さんの方も、興味はなさそうだけどね。
「ありがとうございます。ではこれ以上は現地を視察しながらとしましょうか」
「分かりました。市用車を用意しておりますので、こちらへどうぞ」
市長さんが立ち上がると、あたしたちが続く。
「いやー、やはり好感触ですね」
建設業界のお偉いさんは、あたしたちのＶＩＰ待遇に驚いているみたいね。
まあ、それもそうよね。普通お役所といったら少し殿様だったりす

るものね。
「ええ、やはり蓬莱カンパニーの経済効果はすさまじいですから」
「でしょう？　我々も、どのような企業連合を組むか、何せ事業が事業ですから、それぞれの企業の得意分野を活かして、最高の工場にして見せます」
おじさんは、とても張り切っていた。
建築業界だけではない、今後は流通業界やネット通販業界も動いてくるはずね。
もちろん、あたしたちとしても、そういった業界との付き合いも大事になる。
逆らう者には薬は売らない一辺倒では、最終的には屈服させることはできても、大きな遺恨を残しかねない。
あくまでも、なるべく使わない手段という建前は守らないといけないわね。
「こちらでございます」
市役所の駐車場に停まっていた市用車に案内してくれる。
その車は6人乗りで、助手席には市長さんが座り、真ん中の2列にあたしと浩介くん、奥に建設業界のおじさんに蓬莱教授となった。
「シートベルト閉めましたか？」
「はーい！」
全員が閉めたのを、市長さんが確認すると、「主発してくれ」との言葉と共に車が静かに走り出した。
今では珍しくない、電気で走る電気自動車で、しかも目的地まで自動で運転してくれる。
「おお」
やはり、運転手が何もしなくてもひとりでに動き出す自動運転はいつ見ても素晴らしいわね。
ちなみに、自動運転が普及しても、タクシーはなくならなかった。
運転技術ではなく、例えば走行中にお客さんとトークをしたり、他にも詐欺やぼったくりといったことを防止するためにも、やはり「白タク」はいけないものらしいわね。

しばらく走っていると、先程乗ってきた鉄道の線路が見える。
そして線路と平行になってしばらくして、小さな駐車場に止まった。
……ってここ、月極駐車場じゃない、市の車だし無断駐車じゃ無いとは思うけど、大丈夫かしら？
「さて到着しましたよ。あ、駐車場の人にはもちろん許可取ってますよ。蓬莱カンパニーの工場を建築するための下見なんて言われて、断る駐車場がどこにありますか？」
市長さんが平然とした表情で話している。
「浩介くん、あたしたちって世間知らずだったのかも」
「ああ、そうかも知れねえな」
もちろん、世論が圧倒的に蓬莱の薬を支持していることは知っている。
それこそ９８％前後の支持率を維持している。
しかし、そうは言っても、その支持のほとんどは、消極的支持だと思っていたのだ。
「あ、蓬莱カンパニーの篠原様に蓬莱様ですね。私ここの駐車場のオーナーでございます。本日はどうぞ心行くまで下見なさってください」
月極駐車場のオーナーを名乗る男性が、わざわざ若いあたしたちに平身低頭でへりくだっている。
本来なら、こちらの方が「本日は当社のために特別に駐車を許可していただき誠にありがとうございます」と言うべき所なのに、あまりに下手に、そして丁寧に出られてしまい、そうした言葉をかける余裕もなく、蓬莱教授が、「いえいえ、こちらこそご迷惑をおかけいたします」と言うにとどまった。
やはり、蓬莱の薬はかなり積極的に支持され始めていると思う。
「こちらです」
市長さんの案内のもと、あたしたちは予定の用地へと足を進める。
さて、この蓬莱カンパニーの工場の用地が楽しみだわ。
一応インターネット地図でバーチャル下見はしたけど、本物はどう

なっているかしら？

# 工場の土地

「こちらです」
「ほほう」
市長さんが腕を広げてあたしたちに場所を見せてくれる。
そこは見渡す限りの畑だった。
近くには線路があり、電車がガタンゴトンと音をたてながら通過していく。
電車の本数は多いものの、この辺は農地中心で、しかもかなり広い面積を持っている。
「市長さん、どこからどこまでが、あたしたちの土地になる予定なんですか？」
見取り図では知っていても、実際に目で見ないと分からないので、あたしが市長さんに質問する。
「はいちょうどここから……あそこの小さな山のふもとまでと……あの古い建物までの四角形です」
あれ？　ずいぶん広いわね。
まあ、広い分には歓迎だけども。
「あれ？　見取図より広くないか？」
蓬莱教授が、あたしと同じ疑問を市長さんに投げ掛ける。
すると市長さんが、また笑顔になる。
「はい、元々は農地の一部ということだったんですが……ここの土地の所有者がですね、正式に農業から引退して、跡を継ぐ人は別の農地で続けているということですから、ここら辺一帯は全て蓬莱カンパニー様の土地となります」
どうやら、この辺りの土地は全てあたしたちの工場になるらしいわね。
「うむ、これは後年に土地を買収する手間が省けたかもしれんぞ」
蓬莱教授が、明るい顔で言う。
向こう１００年は、来るべき世界的販売に備え、余った土地に工場を拡張する準備をしないといけない。

それに加えて、線路の近くであるから、鉄道貨物を有効利用していきたい。
「それで、蓬莱カンパニーはどんな感じに工場を作るんですか？」
ここで、建築業界の人が声を掛ける。
「ここを仮想新駅として、工場は反対側の道路沿いと仮想駅前の２地点を入り口にする。さらにこの場所に、豪華ホテルを作る。ホテルについては流通が揃った後でも観光需要も見込みたいが……将来には工場の一部にしたいから２０年ほどで閉鎖したい」
「ふむ、分かりました。ではホテルの方はそこまでお金をかける必要はないですね」
更に地盤については、あまり強くはないものの、横長で平屋の工場ならそこまで耐震基準を満たすのは難しいことではないらしい。
問題はむしろ、高いところに物を置いたり巨大照明を吊るしたりする場合だけど、この工場ではあまりそういうことをしないらしい。
「建築会社の方や詳しい設計はこちらで決めてもいいですか？　あ、もちろん、蓬莱カンパニーの意向は極力取り入れますが、物理的に難しいものについてはお断りさせていただきます」
「ああ、構わないよ」
蓬莱教授は筋は通す人なので、実際に不可能なことまでは要求はしないらしい。
もちろん、どういった設計なのかとか、どういった会社なのかということについては、今後とも打ち合わせを続けていくことは確かだ。
「では明日、我々の方で建築会社を招きまして、こちらにお伺い致します。恐らく入札は激しい競争になるとは思いますが」
「ああ、ただ安けりゃいいってもんじゃねえんだこの建設は」
「分かってます。今回は事が事ですからね。談合を取り入れてもいいでしょう」
建築業界の人から、「談合」という言葉が出る。
談合というと、不正の象徴みたいな扱われ方をしているが、今回のような特殊な事情があったり、あるいは昔のようにデフレの不景気が長期化していた場合には、極端な敗者を出したりしないためにも、談

合が重要になることもあるという。
「それに、仮に談合したとして、今さらどこのメディアに蓬莱カンパニーの不正を告発する人間がいるとお思いですか？　下手をすれば自分だけではなく、家族や子孫や親戚まで、根こそぎ奴隷同然の生活に叩き落とされる訳ですから。蓬莱カンパニーに逆らうというのは、勇気とか正義ではなく、無謀と言うんですよ。例え蓬莱カンパニーに非があったとしてもね」
市長さんがまた、とんでもない発言をしてきた。
世間一般には、「蓬莱カンパニーの不正を告発する人間はいない」のだと言う。
支持をしない残りの３％でさえ、蓬莱カンパニーに反対を露にすることはない。
「これがもし、自分だけがひどい目に遭うならば、無謀な人間はいくらでも出てくるでしょう。しかし家族や親類縁者、子孫まで同じ罰を下すなどと言うことを言われてしまえば、口をつぐむしかありませんよ。これでは逆らう人間はまず現れません。蓬莱会長、こんなえげつない制度を考えたのは誰ですか？」
建築業界の人が更に付け加えてきた。
そして彼は、この制度を考えたのが蓬莱教授ではないことを直感的に見抜いていた。
やはり、お偉いさんとあってそれなりに頭のいい人みたいだわ。
「ふう、確かに考えたのは俺ではない。だがこれを言っていいものか……」
蓬莱教授は、永原先生に配慮して口をつぐむ。
でも、あたしとしては、別に話してもいいのではないかと思う。
「うーん、別にいいとは思いますけど」
「そうか分かった」
あたしが助言をすると、蓬莱教授がコクりと頷いた。
建築業界の人と市長さんが一斉に蓬莱教授に着目する。
「この制度……連座制を俺に提案したのは……日本性転換症候群協会会長の永原先生だ。あー、我が蓬莱カンパニーの相談役でもあるな」

蓬莱教授から出た永原先生の名前、それを聞き、市長さんは驚き、建築業界の人は小さくうつむいて「やっぱりな」という感じの仕草をしていた。
「そんな、あの女性が……あんな恐ろしいことを考えていたんですか!?」
市長さんは、いかにも「信じられない」という顔で蓬莱教授を見る。
永原先生が、いかに５００歳以上を生きてきたと言っても、外見は温厚そうな幼さの残る合法ロリの女の子だものね。
「それだけじゃないさ。永原先生は、この蓬莱の薬を売るのは永遠に日本だけにして、不老国家となった日本が世界を統べる『新世界秩序構想』まで考えていたんだ。最も、これは俺の反対で流れたがね」
「な、何ということを……!」
蓬莱教授は、既に廃案になった永原先生の「新世界秩序構想」まで持ち出した。
市長さんの表情が、恐怖に染まり上がっていく。けれども、建築業界のお偉いさんは、涼しい顔をしている。
「無理もないだろう。永原さんは戦国時代の生まれだ。あの混沌とした時代で生まれ育った背景を考えれば、ああいった発想をするのも不思議じゃないだろう」
建築業界の人が冷静な口調で話す。
すると市長さんの表情にも、落ち着きが戻ってきた。
「あーそうですよね、それに、世界中に普及させつつ独占維持、しかも発売も全世界同時を目指す。これだけ無理をすれば、やむを得ないのかもしれません。そのためには、永原さんのように、過酷な時代を生き抜いた人の知恵が、必要になるわけですね」
そう、市長さんの言う通りね。
永原先生は戦国時代の人でもあり、江戸っ子でもあり、徳川幕府の家臣でもあり、真田家の家臣でもあり、そして勤皇家でもある。
それでも、どれだけ時代が変わっても、永原先生が戦国時代の人であることには変わりはない。
人間同士の争いが最も過酷だった時代を知っているというのは、本

当に大きいわ。
「ああ、そういうことだ。とにかくここに工場を作ることは確定だ。ＪＲの方も……まあこれだけ大きな工場ができれば、勝手に駅を作ってくれるだろうが、いずれにしても、スペースを邪魔しないようにだけは気を付けてくれ」
「はい！」
蓬莱教授の支持に、建築業界の人が気合いをいれた返事をする。
さてどんな会社が、建築をしてくれるのかしら？
「では、そろそろ戻りましょうか？」
一段落して、浩介くんがはじめて口を開く。
「ええそうですね、では市役所に戻りますか」
市長さんが、さっきの駐車場へと歩を進め始めた。
「あ、私はこれから一刻も早く会議を招集したいんですが」
しかし途中で、建築業界の人が市長さんを呼び止めた。
建築業界の人は、もう早速会議したくてたまらない様子ね。
「分かりました。では一旦駅に立ち寄りましょう。蓬莱カンパニーの皆さんはこれから町おこしについて話したいので、もう一度市役所に来てもらっていいですか？」
「ええ」
工場の予定地視察を最後にしたいと思っていたのに、どうしてかしら？
……まあいいわ。
「では、私はこれで失礼致します。本日はどうもお疲れさまでした」
「「お疲れさまでした」」
市用車が一旦駅の前に止まり、建築業界の人を下ろす。
そのままあたしたちは、さっきのタクシーと同じように、市役所へ向かい、そのまま市長室にもう一度入った。
「さ、お座りください」
「それにしても、どうして一旦視察してまたここに戻ったんだ？」
蓬莱教授が、あたしが思っても口にしなかった疑問を口にする。

「ああ、そのことですか。実はですね、今回我々は町おこしをしたいと思っているんです。蓬莱カンパニーの工場がある町ということで、あそこに工場を作る上で、どのような町おこしができるか、是非皆さんにも考えてもらいたいし、思い付かないとしても、我々の提案の是非を判断してもらいたいんです」
「ああ、分かった」
とは言え、すぐには思い付かないのも事実なのよね。
あたしも蓬莱教授も、浩介くんも悩んでいる。
「あー、すぐに結論を出す必要性はないですよ。ですが、我々の間にはいくつかの候補があります」
市長さんがそう言うと、パネルをいくつか出してきた。
そこには、「ようこそ不老長寿の町へ」とか「蓬莱カンパニー工場のある町」とか、そういったスローガンが掲げられている。
「不老長寿ってのもちょっと違うな」
すると、蓬莱教授がパネルの1つに異議を唱えた。
確かに、不老でも長寿とは限らない。
現にＴＳ病患者だって、昔は数年以内に自殺する人がが半数を越えていたから、むしろ一般人よりも平均的には短命と言われていたくらいだものね。
「どうしてですか？」
とはいえ、一般の人がＴＳ病に抱くイメージは永原先生や比良さん余呉さんのような自分たちの祖先が生きていた頃から生存している人のこと。
「不老とは言え不死ではない。不死でない以上運が悪ければ薬を飲んだ翌日に交通事故で死ぬことだってある」
蓬莱教授が、夢も希望もなさそうなことを言う。
もちろん、それはとても確率の低いことだし、薬を飲めば無謀なことをしないのが日本人でもあるのよね。
「うーむ、そうですか。ですが単に不老ですと、パンチが効かないんですよ。それに不死という文言も使えないわけですから」
市長さんは困った表情をしている。

確かに、この手の町おこしは、多少誇張してでもインパクトを重視した方がいいのは確かなのよね。
「そうは言ってもなあ、蓬莱の薬はあくまでも老化と、ＴＳ病患者が持つ難病への抵抗力を手に入れるだけのものですから、それ以上のことは保証できんのよ」
蓬莱教授としても、そこは譲ることはできないらしいわね。
まあ、それはあたしも浩介くんも、同意見ではあるけれども。
「うーむ、そうなるとそうですねえ……不老と希望の町というのはどうですか？」
希望、確かに、蓬莱の薬は希望の薬でもある。
それは全世界が、蓬莱の薬を待ち望んでいることからも明らかで、この町も、いわばそうした希望を全国に、そしてゆくゆくは全世界に輸出していくわけだものね。
「分かりました。そうしましょう」
スローガンをいくつか決め、空白の部分には工場の外見をいれる予定なのだという。
「町おこしすれば、工場への見学者も多く現れることでしょう」
「うちとしては、基本的に見学は許可したくないのだが……機密に触れない範囲で何とかできないかどうかは、これから入ってくる社員の判断に任せるよ」
蓬莱教授が工場見学には慎重な姿勢を見せる。
そう、蓬莱カンパニーでは基本的に機密保持が重要になってくるものね。
マスコミ側が、果たしてどう出るかは分からないけど、それでもおかしなことはないと思いたいわね。
その後も、町おこし以外にも様々なことを話し合い、途中市の食堂を使わせて昼食とし、あたしたちもこの場を後にした。
「さて、それでは、名残惜しいですがそろそろお別れとなります」
「ああ、いい話しが出来た。後はうむ、建設会社に任せようじゃないか」

「そうですか、蓬莱教授がそうおっしゃるのならば、そうしましょう」
市長さんが、これまで以上にあたしたちに敬意を持った接し方をする。
あたしたちは再び市用車に乗り込み、駅へと降り立った。
市長さんが、あたしたちに深々とお辞儀しているのがずっと目に焼き付いていた。

「ああ、しかしまさか、世の中の俺に対する姿勢があんなになっているとはな」
帰りの電車のグリーン車の中で、蓬莱教授が困惑した表情で話しかけてきた。
「ええ、俺達も知りませんでした」
蓬莱教授も、まさか世間でこれだけ自分達が多大な期待と、そして崇拝にも似た扱いを受けているとは思っても見なかったらしい。
確かに、以前より、インターネットでは「蓬莱教授こそ神だ」とか、「蓬莱教授こそ真のメシアである」何て言う狂信的な言動をする人はとても多かった。
だけれども、それは半ば冗談めいたものか、あるいはよほど頭のおかしい人か、それとも蓬莱の薬を過大評価している人の言動だと思っていた。
でもそうじゃなかった。
世間では蓬莱教授を「神の生まれ変わり」と本気で信じる人も中にはいるし、そこまでいかなくても「偉大な研究者」であることに、必要以上の崇拝的感情を持つ人が思ったより大勢いたということ。
しかも、恐らくそれらの崇拝は、彼らには自覚のないことで、以前の宗教を持ったまま、あるいは無宗教を自認したまま、この道に進んでいる人も多いと思った。
「しかし、あまりに狂信的な人間が多いなら何か対策を取ったほうがいいな。俺は無宗教だ。であるから、当然にして俺自身も神などではないからな」
これまでは、そういうのは「利用してやる」程度にしか蓬莱教授は

思っていなかった。
でも今は、増長しすぎるとかえってまずいと考えているらしいわね。

あたしたちは電車に揺られながら自宅に戻った。
「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
駅から降りて自宅に帰るまでの間、浩介くんがあたしに話しかけてくる。
また何かたくらんでいる顔つきだわ。
「悪いんだけど、その服さ、今夜着てくれる？」
「ええ!?」
やっぱり浩介くんは企んでいた。
あたしのこのレディースーツ姿が気に入ったらしいわね。
「ほら、俺も一応社長じゃん。ＯＬ姿の優子ちゃんにセクハラしてみたいなあ何て」
「もう、セクハラならいつでもしてるでしょ!?」
あたしがちょっとだけ語気を強めて抗議する。
「まあ、優子ちゃん喜んじゃってるからセクハラにならないか」
浩介くんがぽろっと言葉を漏らす。
あたしはまた、じゅうっと顔が赤く熱くなってしまう。
「もう、バカ」
あたしは、セクハラどころか、無理矢理レイプされたいと思ってしまうこともあった。
今でも、浩介くんに「今夜は強引にお願い」とお願いすることもある。
セクハラに痴漢にレイプ、どれもこれも犯罪なのに、浩介くん相手というだけで、あたしは心がときめいて、もっとされたいと思ってしまう。
うん、多分それが恋何だと思うわ。女の子の恋、よね。

「さ、優子ちゃん」
「……はい」
あたしはもう一度レディースーツに着替え、浩介くん部屋に入る。
さらーり
「やーん！　やめてください社長ー！」
浩介くんにスカートの上からお尻を一撫でされてしまう。
「ふひひひひ、エロい体つきしちゃって！　こうしてやるっ！」
「やーだー！」
浩介くんがにやけた顔でセクハラを堪能する。
口では嫌がりつつも、あたしのからだと心はとっても正直な反応を見せてしまっている。
大好きな浩介くんに、もっともっと性的に消費されたくてたまらないわ。
ああ、今夜もまた、夜が長くなりそうだわ。

## 論文の掲載

「どう思う？　浩介さんに優子さん」

あの夏からしばらくすると、建築会社の人から、完成を想像した工場周辺一帯のジオラマが送られてきた。

あたしたちの要求通りの工場のデザインとホテル、そして社宅や新駅、更に貨物列車の発着の様子までを想像してあり、あたしたちの工場への専用の貨物引き込み線も描かれている。

「ああ、俺たちの想像通りだな」

浩介くんが、満足の表情を浮かべて言う。

「ええ、この敷地なら、将来的に世界へ輸出できるだろう。さて、次の問題はサブ工場だが、こちらはメインより少しゆっくりでいいだろう」

サブ工場は北海道の広い土地にと決まっている。

こちらの方は、メインほど大きな規模ではないが、それでもそれなりの規模にはしたいというのが蓬莱教授の希望だった。

こちらは大分絞られているので問題もないし、今はメインの工場を中心に建設していきたい。

「次にするべきは、全国各地への支店だな。これを整備すれば、全国的な普及に支障がなくなる。支店が浸透し始めたのを見て、値下げとともに超長期契約を進めたい。ただ問題なのは、機密維持で必要なことに対して、自分たちが正しいと信じ込んでけちをつけてくる人間だろうな」

その辺りの規制緩和派は、どうやら「自分達は正しい」と信じて疑わないため、この期に及んでもなお、蓬莱カンパニーに反旗を翻す可能性があるという。

それこそが「蓬莱カンパニーと世間のためになる」と本気で思っている。

でも実際そうではないことは、何度も説明する必要がある。

しかし、いくら言っても改まらず、世論が動揺しそうな時は、非融通をちらして脅しをかけることも視野にいれないといけないだろう。

「全く……永原先生の言う通りだわ」
女の子になったばかりの頃にも、「自らを正しいと思ってする悪行は、悪事を知り、悪意をもってする悪行よりもたちが悪い」ということを学んだけれども、今になっても、それは全くその通りだと思うわ。
「ああ、あの頃が……優子ちゃんがまだ俺の家にいなかった時が懐かしいよな」
既に女の子になって8年の月日が流れ、結婚生活も6年になったけれども、あたしも浩介くんも蓬莱教授も、あの頃と容姿が全くと言っていいほど変化がない。
桂子ちゃんと恵美ちゃんも同じで、高校の時のクラスメイトたちが、同窓会で大分変わっていたのとは対照的だった。
あたしにとって特別なあのクラスメイトたちには、特別に割引での融通を考えてもいいかもしれないわね。
「ええ」
何年経っても、小谷学園という母校のことを忘れることはない。
永原先生も、相変わらず小谷学園で教師の仕事は続けている。
永原先生から教わったことは多かったけど、肝心の古典については、もう大半を忘れてしまったわ。
「さ、感慨に浸っている場合じゃないな」
あたしたちはもう一度、この完成想像図について吟味を重ねることにした。

「ああそうだ2人とも」
「はい？」
作業が一段落すると、蓬莱教授があたしたちに話しかけてきた。
「今度発売のこの雑誌なんだが――」
蓬莱教授が、有名な学術誌を出してくる。
権威の高い雑誌で、あたしたち大学院生には縁が無さそうな雑誌だわ。
「ええ」
「俺たちが書いたあの論文が、日本語と英語の両方で載ることになっ

たんだ。あー優子さんと浩介さんのも載ることになったぞ」
「ええ!?」
蓬莱教授がまたしても衝撃的な一言を発してくれたわね。
蓬莱教授によれば、蓬莱教授自身の論文の他にも、不老の薬の歩留まりをよくする浩介くんの論文、更にあたしが開発した「完全不老の薬」についての論文まで、この雑誌に載るという。
この雑誌は査読が厳しくて、とても権威の高い雑誌でもある。
そんな所に、あたしたちの論文が載る何て、考えたこともなかった。
それにしても、どうして内輪向けの博士論文でさえ英語も書かせるのかと思ったら、そういうことだったのね。
「いいか？　今の蓬莱カンパニーを語る上で、優子さんと浩介さんを欠かすことができない功労者だ。無視したらそれは、俺による研究業績の横取りだよ」
蓬莱教授は、どこまでも筋を通したいらしいわね。
まあいいわ、それでも注目されるのは、蓬莱教授だけだと思うから。
――科学雑誌に掲載されると発表していた時は、そう思っていた。
でもあたしは、あたし自身の知名度を、まだ十分に理解してなかった。
あたし自身が、何年も前から協会で広報部長をしていて、しかも早くから取材を受けて、更に言えば蓬莱の研究棟でも広報担当だったために、あたしの世間での扱いはかなり違っていた。
それは、雑誌が発売された翌朝のことだった。
インターネットではあたしたちが発見したということに、疑いの目が向けられていたらしい。
でも、あたしがああした論文を発表したことが、ついに決定打になった。
あたしが不老の薬のメカニズムの発見者であるということに疑いを書ける人は誰もいなくなった。
そしてインターネットで目についたのが、「蓬莱教授のノーベル賞」に関する議論だった。

そしてそれは、「蓬莱教授はノーベル賞に相応しいかどうか?」という議論ではなかった。
議論されているのは「『いつ』ノーベル賞を受賞するのか?」ということ。
そして、共同研究・共同受賞として、あたしや浩介くんがノーベル賞を受賞するのかどうかということだった。
「おはよう」
そんな信じられないような議論があたしたちの知らない外野で繰り広げられているのを見て、やっぱりどうしてもあたしはやや気が重いと言わざるを得なかった。
「おはよう優子ちゃん、騒ぎになってるわね」
こんな日でも、お義母さんは、いつものようにあたしたちを気遣ってくれていた。
やっぱりこの家は、あたしにとっての安息の地よね。
「ええ、主にインターネットでだけど」
あたしたちが不老の最後の発見を作ったなどのことは、既にマスコミに向けて記者会見もしているから、世間も知っている。
しかし、それでもあたしたちがきっかけを作ったという動かぬ証拠が、あの学術誌への記載だった。
それにしても、あたしたちへのノーベル賞って、さすがにちょっと冗談が過ぎる気がするわ。
「まあ、なるようになるわよ。優子ちゃんがどんなに有名になっても、ここのプライベートだけは、私たちが守っていくから」
「ああ、ありがとう」
お義母さんの優しい言葉が身に染みてくる。
この家は、あたしの最後の避難所でもあるのよね。
「じゃあ、行ってくる」
「ええ、行ってらっしゃい」
お義父さんが仕事に出て、あたしたちも大学院へと向かう。
佐和山大学の最寄り駅に何時ものように出ると、あたしたちに対する視線が、普段以上に凄まじいことに気づいた。

まあ、あんなニュースがあったら、あたしたちの顔を知っている人からするとやっぱりどうしても気になっちゃうんだとは思うけどもね。
「お、篠原さんたちじゃないか。おめでとう」
そして大学構内では、何年かぶりに河毛教授に声をかけられた。
よく考えてみれば、河毛教授には会うのも久しぶりだったわね。
「あ、河毛教授。お久しぶりです」
大学院に入ってからは、ほとんどの時間を蓬莱の研究棟で過ごしたこともあって、応用数学が専門だった河毛教授とはほぼ会う機会もなかった。
「驚いたよ。まさかうちの大学院生の論文が掲載されるなんて思っても見なかった。あの雑誌は私も何度か論文を出したんだが……全て弾かれてしまったんだよ」
河毛教授は、冷静沈着な人だけど、今回とばかりは話は別という表情をしている。
「え、ええ……」
実際あたしたちも、まさか自分達の論文が掲載されることになるとは思っても見なかった。
だがそれ以上に河毛教授の表情は朗らかだった。
「あそこの雑誌に掲載されるのは、それだけで栄誉なことだ。そこでだ、今篠原夫妻を2年で卒業させる計画があるんだ。今教授会議でも議論中なんだ」
「そ、そうなのね……」
河毛教授の話は以前にも聞いたことがある。
でもあたしたちには、自覚がなかった。
「それに、もし君たちが2年以内にノーベル賞を受賞する何てことになった時、『ドクター』じゃなくて『マスター』じゃ格好がつかないだろう？　ましてや科学3分野の1つ、ノーベル生理学・医学賞何だから」
河毛教授が、あたしたちを早くに卒業させたい理由を説明してくれる。

確かに、あたしたちとしても早期卒業で会社経営に専念できるのはありがたいけど。
「あ、あはは……」
あたしたちがノーベル賞を受賞するなんていう前提で話されている。
正直に言って、現実感が無さすぎるわ。
「さ、引き留めて悪かったね。じゃあこれで失礼するよ」
河毛教授がその場を離れ、あたしたちもまた、蓬莱の研究棟へと進む。
「ねえあなた、あたしたちがノーベル賞何てあり得るのかしら？」
あたしは隣を歩く浩介くんに疑問をぶつけてみる。
「さあ、でも多分ねえだろうな。受賞するのは蓬莱さんだよ」
浩介くんが冷静な口調と表情で答える。
うん、あたしも同意見だわ。
「ええそうよね」
そう、あたしたちは博士課程の、大学院生の夫婦でしかない。
名だたる業績を残した博士たちでさえ、ノーベル賞を取れるのはほんの一握りの学者しかいない。
そんな世界一権威がある賞に、あたしたちが選ばれる可能性だなんて、考えるだけでも現実逃避でしかなかった。
……でも心のどこかで、「ノーベル賞にならないという方が逆に現実逃避よ優子」という声がしているような気がしてならなかった。
「お、浩介さんに優子さんか。おはよう」
こんな日でも、蓬莱教授は何時ものように平然としていた。
まるで「この雑誌に論文が載ることくらいどうってことない」と言わんばかりのマイペースぶりだった。
立派な大学教授の河毛教授でさえ、全て弾かれて1回も掲載されなかったと言うのに。
「おはようございます」
あたしも、勤めて平然とした表情で話す。

ノーベル賞の話はせず、今日の課題と今後の蓬莱カンパニーについて話すことにした。

「あーそういえば優子さん、大学院、もしかしたら2年で卒業になるかもしれねえぞ」

蓬莱教授が、さっき会った河毛教授と同じ話題をしてくる。

「え!? もしかしてそれって――」

正直、まだ自覚がないのでどうしても驚いた声になってしまう。

ノーベル賞受賞の可能性を考慮して、博士号をすぐに与える可能性については、あまり考えたくないわ。

「あーいや、別に博士じゃないとノーベル賞はないってのは違うぞ。日本だって20年以上前に民間人の学士がノーベル賞になっているぞ」

蓬莱教授があわてて訂正する。

確かに、あたしたちが産まれた頃に、大学教授でもない民間人のサラリーマンがノーベル賞になったって話題になったって言っていたっけ?

「そうじゃなくて、優子さんたちが早期に卒業するのは単純に成績がいいからさ」

蓬莱教授としては、あくまでもあたしたちの成績をもって飛び級卒業をさせたいらしい。

「あーそもそもだ。この雑誌に論文が掲載されたというだけでも、大学院生にとっては雲の上の様な出来事さ。実際、博士論文なんかよりもはるかに高いことさ。でも、優子さんと浩介さんのこの論文なら、俺は載ると思ったのだよ」

蓬莱教授が、誇らしげに話す。

そう、ノーベル賞かどうかは関係ない。

あたしたちの業績と成績の優秀さが、早期卒業を検討し始めることになった。

「ま、とはいえ可能性レベルの話だ。だから基本としては、3年の卒業を念頭に置いて、早期卒業は頭の片隅に置く程度にしてほしい」

「ええ、分かったわ」
ともあれ、あたしたちがすることは以前と変わらない。
ただ、宣伝部によれば、あたしたち夫婦のこの発見は、特に海外では大きなニュースになっているとも言っていた。
特にあたしは以前より広報担当だったのもあって、「こんな１０代半ばにしか見えない少女が２５歳で、しかも世紀に残る大発見をしたなんて信じられるか？」という反応も多いらしい。
あたしとしては、もちろん女の子だから若く見られるのは嬉しいし、これからの「蓬莱の時代」を考えれば、そうしたあたしたちこそ、広告にふさわしいわね。

あたしたちは、研究面では浩介くんの歩留まり改善を推進しつつ、経営面では建設会社たちでの調整も始まっている。
この調子なら、１年半後の来年度中には工場ができるとのことで、あたしたちはそれに向けて事務職の募集と、そして本社の制定に入る。
本社機能を備えた事務所は、結局協会と同じビルの４８階と４９階の協会部分を除いたフロアに決定した。
オフィスとしての機能を備えたら、今後はそこで新規事業を立ち上げるために諸々のことをしなければいけない。
今年博士課程を終える和邇先輩が蓬莱カンパニーの社員に加わったし、色々と気心の知れた和邇先輩なら、工場長になってくれる可能性が高い。
他にも今後卒業予定の学部生や修士たちも、工場への就職を希望する人が多い。
身内で固めすぎるのもあまりよくないけど、いずれにしても人材に困るといったことはなさそうでよかったわ。
あたしたちは、いつも通りを心がけ、研究を進めることにした。

「優子ちゃーん、浩介ー、手紙よー」
大学院での１日が終わり、いつものように家に帰ると、お義母さん

があたしたちに手紙があると言ってきた。
一体何かしら？
「はーい」
あたしと浩介くんで手紙を受け取り、一緒に中を見る。
「何かな？　お、また結婚の報告か。いいことだ」
浩介くんが朗らかな顔で話す。
手紙は結婚式への招待状だった。
そう、この時期になって、高校時代の元クラスメイトが、次々と結婚をし始めていたのだった。
大学を普通に卒業し、そのまま就職していれば、今年で社会人３年目だものね。不思議じゃないわ。
一方で、桂子ちゃんはと言えば、社会人１年目でＪＡＸＡの仕事が忙しいので、達也さんとはもうしばらくしてから結婚すると言っていた。
でも桂子ちゃんには焦りはない。
桂子ちゃんも達也さんも、今年の健康診断で分かったように、蓬莱の薬が完全に効いていて、もう老化することは一切無くなったのだから。
……焦る必要はないものね。
「ふー、結婚して時代も変わるわね」
「ああ」
あたしたちは高校卒業直後の結婚だったから、すぐに続くクラスメイトはいなかったけど、さすがに７年も経てば、結婚する人が続出してもおかしくないわね。
あたしたちは……大学院生と社会人を兼任する、何だか変な状態になっているけど。
あたしたちが大発見をしてから、荒廃していた高校の同級生達で作るＳＮＳに再び活気が戻ってきた。
あたしたちにおめでとうと言う人たちもいるし、あるいは「田村を超えたんじゃないか？」何て話もある。
もちろん単純な比較はできないけれども、あたしたち自身、浩介く

んがスポーツアカデミーのスカウトを受けたときの断り文句に、「どんなスポーツの偉業よりも、蓬莱教授の研究を成功させる方が偉大」と語ったこともあって、こうした声に口を挟むことができなくなっている。

あたしたちは再び結婚式への参加準備を整えつつ、疲れた体を休ませるために、それぞれ自室へと入っていった。

# 安らぎのない日々

夏が終わり、秋になり始めると、蓬莱カンパニーの仕事も一旦落ち着き始めた。

事務作業は事務員さんに任せればいいし、工場の建設に関しても、建設現場の報告や、あたしたちが雇った第三者の建築士さんなどの報告を織り混ぜつつ、時折出張すればいい。

また、ＪＲのお偉いさんが蓬莱の研究棟を訪ねてきた。

それによれば、「工場が出来た暁には新駅を設置したい」という申し出だった。

従従業員数は、最初はそこまで多くはないし、ノウハウを積まなきゃいけないので、需要は小さいだろうけど、将来を見込んでの新駅設置になるという。

あたしたちもこれを了承し、また貨物駅も含めて、ＪＲと整備する。

この辺りは、既に工場を建設している会社連合とも、上手く調整していきたい。

政府との調整はほぼ終わり、最近では官房副長官に、月１回進捗状況を報告するにとどまっている。

株式の発行と配分もほぼ終わり、あたしたちは当初予定されていた通り、会社全体の株式の１５％をそれぞれ夫婦名義で得ることが出来た。

さて、そんな秋のある日のことだった。

「そう言えば、今年のノーベル賞はどうなるかな？」

「どうだろう？　まだ蓬莱教授って訳にはいかないでしょ」

浩介くんとお義父さんは、少し気が早く、今年のノーベル賞は誰が受賞するのかを議論している。

蓬莱教授については、さすがに今受賞することはないと考えている様子だった。

「だよなあ」

いつもよりこの談義のシーズンが早いのは、秋になってますますあたしたちを「次期ノーベル賞候補」と世間が持ち上げているせい。

正直に言って、あれからそれなりの月日が経ったけど、未だにあたしたちにとっては「質の悪い冗談」にしか聞こえなかった。
しかし一方で、「蓬莱教授が単独受賞する」という可能性については、客観的に見てもかなり懐疑的なのも事実だった。
ノーベル賞は、もちろん単独受賞はあるけど、ここ数十年は、文学賞や団体が受賞され得る平和賞を除けばそれは滅多になくなった。
つまりノーベル賞で特に価値の高い物理学賞、生理学・医学賞、化学賞の場合、共同受賞として、更に貢献度に応じて賞金が山分けされるのが普通だから。
十数年前に受賞した蓬莱教授でさえ、他のもう1人の研究者との共同受賞で、貢献度は1／2ということらしい。
「にしても、やはり今回は蓬莱さんが単独受賞だろうなあ」
「そうすると貢献度は1／1かあ。カッコいいよな」
ちなみに、これついて蓬莱教授は、「あれはあくまでも脇道の研究だからな。不老研究なら、通常のノーベル賞の最低10倍は偉大な業績だ。貢献度はほとんど意味がない」と笑っていた。
確かにその通りだけど、やはり蓬莱教授の偉大さのためには、蓬莱教授が単独受賞してしまった方がいいと思う。
そうじゃないなら、瀬田准教授が候補にはなると思うけど、彼が一緒にノーベル賞というのはちょっと思い浮かばないわ。
でも、彼以外に共同受賞する候補というと、やはりあたしか浩介くんしかいないわけで……
あたしは、ここでも強引に「蓬莱教授が単独受賞だろう」と脳内で決めつけて、現実から逃れるようにした。

さて、時間的に余裕が出来たので、あたしは久々に協会の正会員としての仕事が入り始めた。
蓬莱の薬が普及しても、TS病はなくならない。
TS病患者の免税特権は、蓬莱の薬の適用と共にほぼなくなる予定だけれど、他の納税者の負担が減るから相対的に特権ではなくなるだけで、税負担そのものはこれまでと同じになる。

それでも、蓬莱の薬を飲む前から不老になれるということで、蓬莱カンパニーにお金を払わなくていいというだけでも、ＴＳ病患者は他の人よりもかなり有利な位置にいるのも事実だった。
……まあそれが、女の子に性別が変わることへの大変さの割に合うかというと、微妙なところかもしれないけどね。
あたしの住居から少し遠い関東地方で発病した今回の患者さんは高校１年生だった。
その少女は、「ＴＳ病になったこと」についての印象について、「蓬莱の薬を飲まなくても不老になれたのね」と言っていた。
最近では、この手の患者が増えている。
以前は不老の特徴よりも、性別が変わることに患者さんの関心が行っていたし、実際そっちの方が負担でもある。
不老でどうこうするのは遠い将来の話で、短期的には「とにかく女の子に慣れる必要」に迫られる訳だもの。
だけど、蓬莱の薬がＴＳ病とともにニュースに出るようになってから、性別の変化よりも不老の方に着目する声が患者さん質の間でも広がっている。
もちろん、そういった患者さんは、あとで痛い目を見るのがお約束になっている。
不老というのは遠い将来のことで、今は女の子に適応することの方がずっと大変だから。
確かに蓬莱の薬の出費は高いけど、それでも性別変化への適応に対する精神的負担は大きい。
あたしの新しいカリキュラムのお陰で、自殺者こそ出なくなったものの、患者さんへの精神的負担が重いことには代わりはない。
「はい、それで言葉遣いはどうですか？」
協会から支給され、そろそろ旧式化もかなり進んでいるテレビ電話で、あたしは新しい患者さんと面談する。
少女はまだどこか落ち着きがなく部屋のあちこちをキョロキョロと見ていた。
「えっとその、まだ慣れなくて、俺――」

「こらっ！」
あたしは笑顔で微笑みながら、患者さんを優しく叱りつけてあげる。
「ごめんなさい。私その、女の子らしい言葉遣い、意識するのが難しくて」
さすがに、今のがまずかったのは分かるらしい。よかったわ。
「うんうん、誰かに指摘されたら直していけば大丈夫よ。さ、暗示かけてね」
「わ、私は女の子……私は女の子……女の子になったんだから女の子らしく生きていかなければいけない……」
新しい少女が一生懸命声に出して「女の子らしくならなきゃ」と意識を集中してくれる。
うん、この気持ちさえ忘れなければ、いつかは大丈夫よ。
「ふふ、いいわね。でもスカートの動作が危なっかしいわよ。見えたら減点1よ」
患者さんもまだスカートに慣れていないらしく、危なっかしい場面があるのであたしも指導に熱が入る。
「はい、気を付けます」
患者さんへの指導自体は久々だけど、やっぱり体は覚えていたみたいでよかったわ。
新しい正会員さんも加わったお陰で、新規患者さんへのカウンセラー枠にも余裕が出てきたけど、これからも一定の割合でＴＳ病患者は出てくるから、頑張らないといけないわね。

「優子ちゃん、新しい患者さんの具合はどう？」
全て終わると、別室にいたお義母さんが進捗状況を気にし始めた。
「うん、やっぱり不老に注目しすぎてて躓いている感じだわ。もちろん自殺はしないとは思うけどね」
「そう、大変ね」
今回の患者さんのような「不老偏重型」は、以前からも少数ながらいたけれども、最近はその数があまりにも多い。

もちろん原因は明らかで、あたしたちの不老研究が世間に着目され、ＴＳ病も不老の一面がよくクローズアップされたのが原因だと思う。
だけど、「完全性転換症候群」という病名を見て分かるように、この病気で本当に問題になるのは性別が変わる方ということで、不老で苦労するのは、せいぜい最初の１００年程度と言われている。
しかし一度この病気になったら女の子として生きていくこと以外に、生き続ける道はない。
そのためには、あたしたちに対する「女性」としての扱いが必要不可欠になる。実際、協会の方でも不老の方は女の子になりきってから安全講習をする程度で、女の子になったばかりの頃のカリキュラムでも、そこまで重視されてはいなかった。
協会としても、「最近は不老ばかりが着目されているけど、実際には患者さん１人１人にとって、性別が変わることがとても大変」だということを示し続けるしかない。
なので久々に、あたしは高島さんの取材を受けて、広報部長としての仕事もこなした。
あたしの顔で宣伝すると、かなり世間への影響が大きくなるみたいでよかったわ。
ブライト桜は、今ではインターネットの大手メディアに成長し、既存のメディアを完全に圧倒し始めている。
特に今では規制も大分緩んだけれども、長らく協会はブライト桜以外のメディアをシャットダウンしたということや、蓬莱教授と極めて親密な団体だということもあって、あたしたちの取材相手は、結局今でもほぼブライト桜の独占状態が続いている。
数年前に出したあたしたちの声明によって、フェミニズムはほぼ壊滅したし、復活の兆しを見せる度に、あたしたちが都度反論声明を出したのもあって、今では「過去の遺産」という扱いにはなっているが、それでも「明日の会の亡霊」が草の根で続いていることもある。
男女の差を思い知らされて、いかにフェミニズムが空虚なものであるかを知っているあたしたちＴＳ病患者は、これを止めることも社会

的責任という認識を共有するようにもなっている。
それが結局、巡り巡って患者さんの自殺防止にも繋がるものね。
ちなみに、明日の会のホームページは更新の放置が続いた挙句、何者かによってクラッキングされていて、今では「永原マキノ様を崇める会」というホームページ名になっている。
「ふう」
ともあれ、安定期に入ればまた一段落ができるはずだわ。
そのためにも、あたしたちが今まで教えてきた他の患者さんと同じように、女の子らしい女の子に成長して欲しいわ。
「優子ちゃん、最近大変そうだな」
あたしがリビングのソファーで休んでいると、遅れて部屋に入ってきた浩介くんがあたしを労ってくれる。
「うん、そうね。最近では不老偏重型も多いのよ」
「あー、間違いなく俺たちの研究のせいだな。でも、それも今だけだよ」
浩介くんが優しい口調で言う。
「うん、あたしもそう思うわ」
それは「今」の蓬莱の薬は、「もう少しで手の届きそうな偉大なもの」だったから。
あたしが女の子になったばかりの頃や、完全不老の薬ができる前くらいまでの時代は、「蓬莱の薬」とか「不老」というものは、「遠すぎてほとんど空想上のおとぎ話の世界」と大差がなかった。
逆にこれからの未来の場合、恐らく「蓬莱の薬」とか「不老」というものは、「みんなが当たり前に持っていて、身近なもの」程度でしかなくなると予想されている。
今蓬莱の薬が置かれているような、「手が届きそうで届かないけど、もうすぐみんなの手に届く近未来技術」というもどかしさが、人々の不老への関心をより一層高めていた。
永原先生も、「今の状況は一時的なものだけど、その間の患者さんのこともきちんと考えるのよ」とのお達しだった。
もちろん、あたしとしても異論はない。

今も永原先生は協会の会長として、蓬莱カンパニーの相談役としては、未だにその顔を見せていなかった。
最も、永原先生自身は「その方がいい状況よ」とは言っていたけれどね。
「優子ちゃーん、手伝ってー」
「はーい！」
あたしはお義母さんに言われると急いでソファーから立ち上がって食卓へ移動する。
浩介くんもあたしに気を使ったのか、来ると思っていたスカートめくりが来なかった。
まあもちろん、いつも来る訳じゃないし、来る方が珍しいけどね。

「優子ちゃん、頑張ってるわよね」
お義母さんにも、今日は労われる日になった。
「ええ」
最近のあたしは、比較的会社の仕事が少なくなった。
でも、これが一時的なものであって、すぐにまた仕事が増えることは分かりきっている。
来年には果たしてどのような状況になっているのだろう？
あたしがあの時、小谷学園の教室で倒れてから、まだ１０年も経っていないのが信じられないくらい、今の社会が大きく変化している。
永原先生に協会に推薦され、蓬莱教授と共に研究を進めることで、あたしの中にあった世界は急速に広がっていったいった。
「でもこの家の中だと、私たちの前だといつも通りよね。ビックリするくらい」
「ええ、何があっても、家族は変わらないもの」
ここはあたしにとって安息の地、だものね。
「あら？　家族だって変わるわよ」
「え!?」
お義母さんは、ちょっとだけ意地悪そうな笑みを浮かべていた。
でも、その中にも優しさが見てとれた。

「例えば、優子ちゃんが赤ちゃんを産むとかね」
「……っ！」
年末年始などには、義両親や実両親はともかく、おばあさんからは、相変わらず妊娠の催促が届いている。
そう言えば、赤ちゃんを作る約束もしていたわね。
「ふふ、でも優子ちゃんが照れ屋さんで、浩介にずっと恋している所だけは、変わらないわね」
お義母さんがにっこりと微笑ましそうに笑っていた。
あたしは、恥ずかしくてうつむきながらご飯を作った。

「ふー、ごちそうさまでした」
今日も美味しいご飯を作ることが出来たわ。
この後はお風呂に入るわけだけど――
「優子ちゃん、一緒に入ろう」
浩介くんがにっこり笑って一緒にお風呂に入ろうとする。
今でもたまに、こうしたお誘いが来る。
「もう、しょうがないわね」
あたしとしても、浩介くんと一緒にお風呂はいるのは恥ずかしいけど、浩介くんが喜んでくれることの嬉しさの方が、勝っている。
「へへ、ありがとう」
でも、こういうお誘いをされた時は大抵、その後のこともセットになっているのよね。
お風呂で浩介くんが肩を揉んでくれる。
こっている部分をぐいっと押してくれるのがとっても気持ちいい。
何分特に重たいものをぶら下げているので、肩こりがいつまでたってもよくならない。
もちろん、浩介くんや男性受けのことを考えれば、胸を小さくするなんていう発想は、絶対に浮かばないけど、あたしくらいに大きい女性だと「小さくする手術」何て言うものを受けちゃう人もいるんだとか。
せっかくの才能を潰すなんて、もったいないなあとあたしは思っ

ちゃうのよね。
「優子ちゃんの肩って押しがいがあるんだよね」
突然浩介くんが、面白いことを言ってくる。
確かに浩介くんの指圧は強くて気持ちいいけど。
「どうしたの？　もしかして、あたしにずっと肩こってて欲しかったりするのかしら？」
あたしがちょっとだけ、意地悪そうな口調をする。
あたしとしては、結構肩こりで痛かったりするし。
「うっ、無いとは言い切れない……でも優子ちゃんくらい大きかったら、肩こりするしかねえじゃんって」
浩介くんが、半ば諦観を含めた語気で話す。
そうなのよね。肩こりは仕方ないのよね。
この肩マッサージは、普段一緒にお風呂に入ったり、旅行で家族風呂として浩介くんと一緒に温泉に入ったりする時には、特に気持ちがいい。
全身の疲労が取れる上に肩もほぐれるからとても身軽なあたしになれる。
「うーん、体が軽いわー！」
身軽になれたあたしは、湯船から気持ちよく立ち上がる。
こうやってマッサージとお風呂で体が軽くなるのは、大抵は浩介くんの罠だったりする。
ガシッ
「ふふ、優子ちゃん、お尻も軽くなっただろ？」
浩介くんに背を向けた一瞬の隙きを突かれ、あたしは浩介くんにガシッとお尻を掴まれてしまう。
「あーん」
「さて、優子ちゃんのお尻も軽くなった所で、始めようっと」
浩介くんの仕掛けた罠にまんまと引っ掛かったあたしは、いつものようにそのまま浩介くんに食べられてしまった。
あたしは罠だと分かっていても、まるで学習能力のない獣のように、そこにはまりにいってしまった。

分かっていても、その後の快感のことを思うと、どうしてもやめられないのよね。
ああ、やっぱりあたしってビッチな女よね。
……もちろん、浩介くん限定だけどね。

# 女性常務のお茶出し

「浩介さん、優子さん、明日は出張だ」
蓬莱の研究棟で、昨日蓬莱教授に言われた言葉を思い出す。
何でも、建設業界の人たちと、建設チームと、そしてあたしたちで会議をするらしい。
場所は市役所の会議場で、言わば中間報告とその進捗状況についてだと言う。
あたしも浩介くんも、成績優秀だからということで、大学院は休んでも大丈夫とのことだった。
そこでとりあえず蓬莱教授は大学院に残ってもらって、あたしと浩介くんだけで会議に参加することになった。
あたしはレディースーツに着替えて、スーツ姿の浩介くんと共にいつもより遠くへと向かう。
「ふう、これも大分着なれたわねお互いに」
「ああ、そうだな」
スーツの格好なんかを見ると、とても日本の未来を左右する会社の社長と常務には見えないのよね。
若手社員、いや、高校生のカップルが無理に気取っているような雰囲気さえ受ける。
浩介くんはともかく、ＴＳ病のあたしは正真正銘１７歳のあの時から老化が止まっているので、より若く見える。
女の子になったばかりの頃は「本当に不老なのかな？」と思ったけど、今のあたしを見ると、「ああ本当に不老なのね」と思えてくる。
「ともあれ、早めに行っておいた方がいいな」
浩介くんが時計を見ながら、やや慌ただしそうになっている。
「ええそうね、遅刻したら目も当てられないわ」
更に言えば、こんな見た目だし、偉いおじさんたちに舐められないかという心配もある。
あたしは意外と平気だと思うけど、浩介くんの方はやや警戒した方がいいかしら？

ともあれ、あたしたちは夏と同じように電車に乗り、今回は普通車で市役所の駅まで行くことになった。
駅について改札を降りて、今回は市役所まで徒歩で行くことになっている。
それなりの時間はかかるけど、今は秋で真夏ではないし、外もいい陽気なので徒歩になった。
あたしの体力では、途中で疲れてしまうのは確実だったので、途中に休憩を挟みつつ、あたしたちは市役所へ到着した。
「あ、篠原様お待ちしておりました。さ、こちらへどうぞ」
既に顔を覚えられていたのか、あたしたちは市役所の人に顔パスで会議室まで通される。
「こちらです」
「ありがとうございます」
コンコン
「はい」
浩介くんが扉をノックし、中から声が聞こえてくる。
ガチャッ
「失礼します」
それを聞いて浩介くんが扉を明け、中に入ってあたしも後ろに続く。
「あ、お待ちしておりました篠原さん。私――」
「はい、蓬莱カンパニー株式会社社長の篠原浩介と申します」
「同じく常務の篠原優子でございます」
中のおじさんたちとは初対面で、あたしたちは自己紹介と共に名刺交換をする。
あたしたちの名刺は、本部事務所のある建物の住所と階が載っている新しいものになった。
「お噂はかねがね聞いております」
頭の固そうなおじさんたちと思ったら、そうではないらしいわね。
どうやら、やはりあたしたちが日本の中でも、かなり特別に思われているのはたしかみたいね。

最初は中にはあたしたちとそのおじさんの3人しかいなかったが、その後も何人もの人が会議室に入ってきて、逐一あたしたちは名刺交換をする。
うー、こういう会議場に放り込まれるのってやっぱり緊張するわね。
いや今までだって協会や政府との交渉で会議慣れはしているとは言っても、やはりこういう商談はしたことないわけだし。
あたしは、気をまぎらわせるために、部屋の隅を見ると、そこには座席分の湯飲みと大きめのお盆、そしてお茶のもとが置かれていた。
あれでお茶くみができそうだわ。
その後、建築会社の人や建築現場のリーダー、そして今回沿線に新駅を作るとあってＪＲの取締役の人まで出席していた。
いずれも、総理大臣と比べればそこまで大物ではないと言っても、体力がものを言うブルーカラーを束ねるとあってか、みんな強そうなおじさんで、あたしは紅一点だった。
いや、浩介くんだって、男性と言っても若いから目立つ。
そして、おじさんたちの視線のほとんどがあたしの胸に注がれている。
さすがに浩介くんもここまで露骨だと気付いているのか、ちょっとだけ不機嫌そうな顔をしている。
「あなた、しょうがないわよ」
「わ、分かってるって」
おじさんたちに聞こえないように、あたしたちが会話をする。
まあ、これだけ大きいと、やっぱりどうしても視線が行っちゃうわよね。あたしは慣れっこでも、浩介くんは不安に思っちゃうわよね。
最後に市長さんが入ってきて、会議がスタートした。

「まず、進捗状況についていいでしょうか？」
最初に口を出したのは、建設チームのリーダーだった。
「はい」
司会進行役の市長さんが同意の頷きをする。

「進捗状況なんですけれども、予定より大分進んでいます。蓬莱カンパニー様が潤沢な予算に多い人員を割り当ててくれたのが効を奏しています」
工事のリーダーさんがそう発言すると、会議場からは「おー」という声が漏れる。
実際に、かなり進捗が進んでいるらしいわね。
うん、それならあたしの出る幕はあまりないわね。
そうすると、あのお茶、いつ汲もうかしら？
ふふ、おじさんと言っても、やっぱり下心見え見えでも男性に喜ばれるのって嬉しいわ。
「これまでの予定では工期は1年半となっていましたが、蓬莱会長の予算増額のお陰で、品質を更に高め、将来の維持費も削減した上で、来年の夏には完成できそうです」
パチパチパチパチ
自然と、会議場からも拍手が沸き起こる。
大幅に工期が短縮できるということは、人件費の削減にも繋がるし、次の仕事にも移りやすくなる。
こういう所できちんとお金を出せるのも、蓬莱教授の強みよね。
「ただ、今回関連してもう1つ、建設の仕事が入ってきています」
そして次に発言したのがＪＲの取締役だった。
そう、追加の工事というのは新駅のこと。
この工場は線路沿いに面しているが、そこに駅は出来ていなかった。
「はい」
「新駅の建設ですが、ただ建てて列車を止めてで終わりではありません。様々な書類作業やコンピュータの更新なども含め、当然来年までにはできません。そのことを蓬莱カンパニーのお二方にはご理解をお願いしたい」
「分かっています。あくまでも工場の建設とは独立して進めてください」
あたしがすかさず、ＪＲの人を安心させるように言うと、おじさん

の顔も緩んで安心感に包まれていた。
どうやら、やっぱりあたしたちは恐れをもって迎えられているのかもしれないわね。
もちろん、相手に主導権を握られて、無茶な要求をされたり、必要なことを曲げられたりしないためにも、恐れを抱かせることも時には必要だけど、それだけではよくないのも確か。
蓬莱教授がそうであるように、筋は通すし、無理な要求も極力しないし、万が一しなきゃいけない時も、「無理を承知で頼む」といった感じに下手に出ることが大事よね。
「それで、駅のデザインなのですが、工場の従業員も専用出口を設けたいと思います。その上で地域住民の出口なんですが、実際の所需要の多くは工場の作業員さんだと思うんですよね」
「ですが、工場の従業員の数も多いですから、臨時駅というわけにはいかないでしょう」
浩介くんが、すかさず釘を差す。
もちろん、「念のため」という感じではあるけど。
「ああ、もちろんそのつもりだ。不老の工場ということで、数は少ないだろうが、観光需要も招けると思う」
「そのための町おこしです」
不老の薬がこの町から生まれると知れれば、多くの人がここを訪れるようになるだろう。
それを考えれば、今は存在しない商店や飲食施設もできるかもしれないわね。
「工場だけではなく、この区域全体を、町の発展に役立てたいと思います」
実際、路線上では、東京や更にその奥の神奈川県まで通じている列車が多い。
それらの需要も含めて考えれば、交通の便はかなりいいわね。
ただ、ここはちょっと北関東過ぎて、手前の駅までの区間列車が多いけど。
「分かりました。で、次に貨物列車なのですがよろしいでしょうか？」

「はい」
別のＪＲ関係者が今度は貨物列車について話す。
全国の支店に対して速やかに流通させるためにも、鉄道貨物の需要は重要になる。
トラックももちろん活用はするけれども、大量輸送という意味では鉄道は強い。
「この度は蓬莱カンパニー様には鉄道貨物の利用を決定していただきありがとうございます。ですが、需要予測も分かりませんし、わが社としましても鉄道貨物の利用は年々増えておりまして、経営体力として蓬莱カンパニー様のご要望にお答えしきれるかは分かりません」
貨物の人が、とても申し訳なさそうに言う。
国鉄民営化後、貨物には専門の会社がついている。
「いいえ構いませんよ。こちらとしても御社に時間が必要なことは分かっております」
浩介くんが笑顔混じりの柔らかい表情で話す。
「ああ、助かります」
さっきのこともあったのか、こちらの方は落ち着いた安堵の仕方をしていた。
ふふ、これでイメージアップかしら？
「なので、当面は支店の建築も含めて、蓬莱の薬はこの工場の直売所でのみ販売したいと思います」
浩介くんが、かねてからの予定を話すと、会議場もうんうんと頷く様子が見てとれた。
そしてその後は、細かい調整に入る。
具体的には、工場完成後、引き込み線をどうするか？
これについては、貨物列車が曲がりきれるカーブにし、機関車の付け替えのための整備も必要になる。
「その場で折り返すでもいいですし、あえて反対側から入るという手も――」
「ああいや、折り返し設備はここに設けた方がいい。幸い、設計には余裕があります」

「駅とは少しずらした方がいいでしょう。こう跨線橋で渡れるようにして」
建築業界の人とＪＲの人とで議論が進み、あたしたちはやや置いてけぼりになる。
でも、永原先生が高校時代からささやかながら鉄道講座をしてくれたため、全くの意味不明とはならなかったのが幸いね。
「ふう、さて皆さん、そろそろ休憩にいたしますかな？」
会議の時間が押してきて、市長さんが提案する。
「分かりました」
「はい」
「異議なし」
「では１０分休憩で」
あたしたちも全員賛成し、一斉に席を立って背伸びする。
……ふふ、よし。
「市長さん」
「あ、これは篠原さん。どうされました？」
市長さんがリラックスした顔であたしに応対してくれる。
夏よりもずっと壁がとれている感じがする。
「お茶、汲んできますよ」
「え!?　とんでもないですよ。うちの事務方にやらせておきます」
市長さんが当然の対応をする。
「まあまあ、市長さんだって、本音ではあたしのお茶の方がテンション上がるんじゃないんですか？」
「ギクッ、そ、そんなとんでもないですって！」
あらあらまあまあ、本当に男って分かりやすい生き物だわ。
……あたしがＴＳ病なのもあるかもだけど。
「ふふいいんですよ。あたしだって、自分の価値くらい分かってますから」
「わ、分かりました」
ここであっさり引いちゃう辺り、市長さんの本音が出ているわね。
ふふ、こういう時に士気を上げるのも大事な仕事よね。

あたしがお茶を組んでにっこり笑って出せば、商談もきっと和やかに進むと思うし。
それを考えると、ある意味一番重要な仕事でもあるわよね、これ。
あたしはこっそりとトレイと湯飲み、お茶のもとを取って、さっき横目で見た給湯室へと向かう。
熱湯専用の蛇口があるので、まずは会議全員分の湯飲みを並べてお茶のもとをいれる。
えっと今の時間は……もう少し待った方がいいかしら？
あーでもまだ秋が始まったばかりだし、あんまり熱いのはよくないかしら？
初めてのお茶汲みにあたしは緊張しつつ、その後の反応について楽しみでもある。
ふふ、常務のあたしがお茶汲みをしてるのを見たら、驚くかしら？
それとも、「さすが美人、価値をちゃんと分かってる」って誉めてくれるかしら？
どっちにしても、悪い印象を抱くのは少なくともあの場にはいないわね。
あたしは上機嫌になりながら、タイミングを見計らってお茶を汲んでトレイに並べていく。
順番は、うん、建築業界のお偉いさんが一番役職高いし、次にＪＲの取締役の人、建築現場のリーダー、そして市長さん、最後に浩介くんでいいわね。
「そろそろ休憩時間が終わるわね」
あたしは、意図的に少し遅れた時間に給湯室を発つと、トレイを持って扉を軽くノックした。
うん、ちゃんと落とさずに出来たわね。
「失礼しまーす」
あたしは笑顔で部屋に入る。
市長さん以外は、全員驚いた顔をしている。
「どうぞ」
あたしはいつもより高く柔らかく、「優子」を心がけた声のトーンで

語りかける。
だけど、動揺しているのか、最初の人は固い表情で受け取るだけ。
「どうぞ」
「ありがとうございます」
次の人は、事態が飲み込めたのかお礼の言葉と共に頭を下げてくれた。
心なしか、柔らかい表情をしている。
あたしは、遠い昔に母さんに教わったように、相手の右側からお茶を出していく。
やはりおじさんたちも若くて美人でかわいくて胸の大きい女の子には弱いみたいだわ。

「あなた、どうぞ」
最後に浩介くんにお茶を出し、自分の席にお茶を置いて着席する。
「おほん、では改めて、先程の続きに参りましょうか」
市長さんがそう言うと、ちょうどさっきの議論から再開する。
どうやら始まったばかりみたいね。

「貨物列車を工場の敷地に持っていくとすると、内部の構造はこう変更したいですね」
「それだと工期は遅れますか？」
浩介くんが工期を気にしている。
「ええ」
「では引き込み線は工場まではなしで、従来通りでお願いします」
完成を優先させる決断を、浩介くんがした。
とは言え、もちろんなるべくならば将来へ改良の余地も残したい。
それらも踏まえ、あたしたちは細かい微調整をしていく。
そもそも、ＪＲ側がここまで早い段階で新駅を決めてくること自体が想定外だった。
敷地は残すといってもどんぶり勘定で、大分敷地に余裕はできたが、工場内部まで貨物線を引くほどではなかったらしいわね。

「分かりました」
心なしか、さっきよりも和やかな会議になっている気がするわ。
ふふ、やっぱりあたしのお茶出しのおかげかしら？
だとしたら、とっても嬉しいわね。もちろん、愛してるのは浩介くんだけだけどね。
そしてその後、２回目の休憩に入った時だった。

「いやーあの常務の人、あの有名な優子さんでしょ？　すごいいい子だよね」
「うんうん、まさか『常務取締役』の人のお茶をもらえるなんて思っても見なかったよ」
「ああ、俄然やる気になるよな」
「そうそう、ゲイの人だったら男性のお茶汲みの方を好むだろうけど、俺たちはそうじゃねえもんなあ」
「だよなー、優子さんみたいな女の子は貴重だよなあ。まあ、旦那もいるし、付け入る隙はなさそうだな」
「何言ってんだ、妻に怒られるぞ」
「おっと失敬」

廊下の一角で、建築会社の偉い人と、現場のリーダーが雑談していた。
ふふ、どうやらあたしの作戦は大成功で良かったわ。
あたしの行動で、男性が喜んでくれるのはとっても嬉しいわ。
少し前、あたしは「常務になっちゃったしお茶出し何てしない」と思っていた。
でも違っていた。「優子は美人なんだから、会社の士気を上げることも重要」と言っていた母さんが正しかった。
それにしても、どういう人なのかしらね、こんなに喜んでもらえてみんなのモチベーションを上げる大事な仕事を卑しいみたいに言った人は。
そういう態度をしていたら、絶対に男にはモテないと思いつつ、あ

たしはトイレを済ませて会議室に戻った。
「ねえ優子ちゃん」
「どうしたの？」
　席につくと、今度は浩介くんの番になった。
「さっきお茶汲みしてたよね？」
「ああうん、あたしが出せば会議の士気も上がるかなって。ふふ、大丈夫よ。あれは営業スマイルだから」
　市長さんも含めて誰もいないので、あたしがぶっちゃける。
　まあ、分かってても本能的に好きになって、本能的に嫉妬しちゃうのが男の性だけどね。
「ああうん、分かってる」
「ふふ、理屈で分かってもどうしても嫉妬しちゃうかしら？　なら今夜、また、ね」
「あ、ああ……」
　あたしが甘い声を出すと、浩介くんがまた顔を赤くして俯いてしまった。
　そして次の会議は、更に微妙な部分を調整しつつ、駅も含めた全体像が完成する。
　ここから先の詳しい町おこしや町作りは、市長さんが主に決めることで合意した。
　最も、不老を押し出す町になるから、蓬莱カンパニーもスポンサーという形で参加することにはなると思うけどね。

　――そしてその日の夜だった。
「優子ちゃんはいけない女の子だなあ！　俺という旦那がいながら、あんなおじさんたちに色目を使って！」
　レディーススーツ姿のあたしは、浩介くんにノリノリで「おしおき」されてしまう。
「あーん、ごめんなさーい！」
　胸とスカートの中に、それぞれ手を入れられて、エロオヤジのセクハラのノリで責められる。

いけないあたしがおしおきされるというシチュエーションは、あたしが女の子になったばかりのカリキュラムから続く伝統のプレイでもあるし、あたしが初めてした性的経験でもある。
そういったこともあって、あたしも浩介くんが嫉妬しちゃった時には積極的に行っている。
「さてと、反省が足りないようだから、教育してあげないとね」
浩介くんがズボンを脱ぐ。
これからあたしには一番きつい、でも一番気持ちいいおしおきが、待っていた。
何度も何度も「許して」と言ったけど、結局浩介くんは、気絶するまで許してくれなかった。

## 支配者の論理

建築会社とあたしたち、そしてＪＲとの合意も進み、新しい患者さんも何とか落ち着いてきてくれた頃には、今年もすっかり冬に突入していた。

１２月の寒い冬の日々の中で、あたしたちがしているのは歩留まりの更なる改善だった。

おそらく、蓬莱の薬の原理上、歩留まり率を１００％にすることは今の感じでは難しいが理論的には不可能ではない。とはいえ、理論と実情は違うもので、発生した不良品は選別機と人間の目で選別した上で廃棄するしか無いのが実情になっている。

蓬莱教授も、今後はこの研究に力を入れ、蓬莱の薬が一段落したら、今度は蓬莱の薬でも治らない先天性の難病の治療について研究していきたいという。

また会社経営面でも、浩介くんと共に具体的なルール作りの議論に入っていた。

あたしたちは新しい本社事務所のビルを見回ると同時に、早速雇用された新規の事務員さんから挨拶を受ける。

ここの本社機能については、主に専務取締役を任された比良さんと、取締役の余呉さんが取り仕切ってくれている。

「あ、２人ともお疲れ様です」

「比良さん、お疲れ様です。それじゃあ会議室まで」

「はい」

今日は、比良さんたちと共に情報の共有を兼ねた会議がある。

そこでの会議での開口一番、比良さんが、「もし顧客がＴＳ病になったらどうするのか？」と聞いてきた。

あたしとしては、「ＴＳ病になった以上蓬莱の薬は不要になるため、１年以内にＴＳ病になった場合は無条件で全額返金、それ以降でＴＳ病になったならば分割払いならそこで打ちきり、一括払いの場合は、１０００を分母にＴＳ病になるまでの年数の分を残して返金ということ」を意見し、それに決定した。

次に、５日間の途中に、何らかの事情で支店に来られなくなった場合の対処法について考えることになった。
これについては「全国どこでも出張サービス」で対応することにした。
もちろん、本人の家や職場にも出張出来るように手配し、職場とも即時交渉することになっている。
ちなみに、この出張サービスを拒否する会社が出てくることは考えにくいとした。
何故なら、あたしたちが「蓬莱カンパニー」だから。
「うーん、でもこれだけでは問題よね」
「ええ、その場で社員が立ち会う必要がありますから」
そういう意味で、時間の指定もできるようにしたいわね。
ただ、例えば客側に非がないこと。端的に言えば例えば歩道を歩いていて飲酒運転の車に跳ねられた何て場合には、日を改めて５日間もう一回蓬莱の薬を飲ませるという方法もあるわね。
まあ実際の所、５日は過剰で、３日でも威力を発揮する可能性が高いものだけど。
「比良さん、他にも音信不通になったりした場合ですけど」
「まあその場合は仕方ないわよね。連帯保証人なり家族なりに違約金を請求しましょう。もちろん、相続の放棄はさせないわ」
政府が作った「蓬莱の薬に関する特例法」のおかげで、自己破産で支払い義務はなくならないし、あるいは支払い期間中に自己の過失や故意で死亡しても家族や保証人に延々と請求権が移る制度になっている。
とは言え、分割払いなら月に２０００円だし、その金額、あるいはその価値が例え１０００年続くとしても、あたしたちに逆らってまでこの低額を意地になって払わない人はほぼいないだろうとあたしは踏んでいる。
もちろん、いたとしても強制執行で差し押さえできるし、差し押さえるものさえない場合は、特例法によって他の関係者にどこまでもどこまでも責任転嫁できるようなシステムになっている。

他人名義に変えても、家族の名義である以上そちらに責任がいくので同じことになる。
天涯孤独であった場合でも、そうではない保証人がいなければ顧客は分割払いはできないようになっている。
つまり、いずれにしても誰かがどこかで支払わなければいけないようになっているのが蓬莱の薬ということになっている。
まあ、１０００年で１．２倍という超低金利で２０００万円のものを毎月２０００円分割という超良心的な商売をしているわけだから、逃げ得させないように徹底して貰う権利くらいあってもいいわよね。
もちろん、このどこまでもどこまでも追いかけていく制度に関する抗議の声をあげたい人はいるだろうが、実際に上げる人はいないと思っている。
蓬莱カンパニーに逆らうという発想をする人は、実際にはほぼいないというのがあたしたちの意見だった。
そしてそれは、この前の夏と秋での出張からもうかがい知ることが出来た。
「問題は世界に販売する時だけど？」
「簡単です。日本と同じ法律を設けない国には売らないですし、法律を廃止するのはもっての他です」
比良さんの疑問に対して、あたしはそう答える。
１００年後には、不老のメリットを世界は嫌でも思い知ることになるだろう。
しかし、蓬莱の薬は蓬莱カンパニーにしか作れない。
どうしたってあたしたちから買わざるを得ないし、今後は国連に対してもあたしたちが国内に作らせた法律を、全世界に作らせる条約を全加盟国に署名させるように働きかける予定になっている。
そうなった時に「法律作れません」何て言う無神経な国がいったい何処にあるのか見物だわ。そんな国は「薬封鎖」をさせてしまえば、あっという間に干上がるはず。不老足り得ぬ国が、不老の国に勝てる道理はどこにもない。あたしたちは全世界の生殺与奪の権利を握っているのは、紛れもない事実だった。

ただ問題は、日本と違って治安面だけど、それについては１００年後に期待するしかないわね。
「ええ、分かりました」
比良さんも専務として、支店の出店計画を統括している。
各支店に客が直接足を運ぶという制度上、どうしても「単純に忘れていた」ということが起こり得る。
そこで、従業員の方で自宅までの「無料出張サービス」を作るわけだけど、その場合でもその場で飲んでもらうための誓約書を書かせなければいけない。
「誓約に反しようとする人は？」
「出ないでしょう」
当然ながら、それには強い制裁が待っている。
「蓬莱の薬に関する特例法」によって、「長期的巨大詐欺の防止」という名目で、機密保持と独占維持、そして蓬莱カンパニーの制裁措置に都合の悪い法律条項が、全て無効化の上、書き換えられている。
一部では憲法違反の指摘もあるというが、最高裁判所でさえあたしたち蓬莱カンパニーには及び腰になっているから心配はいらないし、反対運動をすれば家族や親類、子孫もろとも「薬封鎖」という名の死刑宣告とともに奴隷身分に落とされてしまう。
それなら大人しく月２０００円を払うほうがよっぽど利口というものだ。小学生でも、このリスクとリターンのバランスを分からないとは思えない。
「本当にえげつないわね。みんなが不老になる社会が実現したら、蓬莱の薬を売ってくれないのは死刑と同じよ。いや、むしろ死刑よりも質が悪いわ。そんなの、じわじわと何年も嬲りながら、死ぬまでシャバという名の牢獄に入れるようなものよ」
比良さんは、あまりに強固な蓬莱教授の支配体制に、改めて驚きの声を漏らしていた。
「ふふ、でも比良さん、あなたも『こちら側』の人間よ」
「ええ……ですから離職者はなるべく出したくないわね。特に現場の工場です」

比良さんは、工場内の労働環境を考えている。
比良さんの言う通り、蓬莱カンパニーは「機密漏洩防止」名目で、ただでさえ強圧的な企業にありがちな、一昔前の言葉で言うならブラック企業にありがちな、相互密告・相互監視制度を取り入れているから、普段の業務はなるべく負担にならないようにしないといけないわね。
そうなってくると、やはり高い給料で人材を集める必要がある。
幸いにして、蓬莱の薬は最大限に儲かるようになっている。
人件費が高いのは、必要経費と言えるわね。
「ええ」
とは言え、環境に不満を持った労働者がいたとして、彼らが告発する可能性は極めて低い。
メディアも既にあたしたちが牛耳っているも同然だから、匿名告発はあたしたちに忖度して全て黙殺するし、いわんや実名だったとしても同じこと。むしろ積極的にあたしたちに密告をしてくれるはずだわ。
ブログにしても個人サイトにしても、今更この９８％という世論に逆らうのは無駄だと悟るだろう。
「そうなるとむしろ問題なのはそうですね……やはり外国勢力だと思います」
比良さんの懸念は、やはりあたしたちと同じだった。
彼らとしても、不老のメリットは享受したいだろう。
おそらく最初は、蓬莱カンパニーに莫大な金銭を寄付してくることが予想される。
そうなった時に、「民間企業なので外国政府からの献金は受け取れない」はまだ通じても、海外の民間団体からの寄付を撥ね付けるのは難しい。
一応今は「中立性のため、蓬莱カンパニーはいかなる団体からも寄付は受けない」ということになってはいるけど。
「株式も取得を制限してますからね」
比良さんがやや悩ましい顔で言う。
「やはり国防問題に落とし込むのが最適だろうな」

浩介くんが以前出た結論と同じ話を繰り返す。
結局の所、数年前から分かっていたように、軍事費を増やして軍事力を背景に押しきるしかなさそうだ。
不老国家ともなれば、日本が遅れているという技術でも、追い付くことができる。
自衛官たちの練度も高まる。
「そうですか。とは言え、軍事技術から新しいものも生まれています。防衛費の増大は歓迎すべきでしょう」
蓬莱の薬最大のメリットである社会保障費の大幅削減は、もうすぐそこに迫っている。
政府は既に、蓬莱の薬が売り出され、老人がいなくなった後の日本の財政や税制について議論を始めている。
蓬莱カンパニーに対して予想される外圧を撥ね付けるだけの軍事力や国力、食料自給率などを高める政策の予算が次々と打ち出されている。
それらの新技術がまた、組合わさってどこかで大きなイノベーションを起こすことは確実で、最初の数十年はよくても、しばらくすれば諸外国がなりふり構わない圧力をかけてくることが予想されるのよね。
「そうですね。防衛産業から、また何か新しいものが生まれてくることも多いですから」
社会保障費が大幅に削減され、より生産的な事業に国がお金を出す。
大学の研究費もあらゆる分野で大幅増額が予想されているし、数十年後には外国が手を出せないような大国になっていなければいけないわね。
「そうね、ところで初期の支店出店計画はどうなっているかしら？」
大分話が脱線してしまったのでモトに戻して、支店の出店候補についてあたしが比良さんに話す。
「まずは都内のビルの一角に、次々に設けていく予定です。最初はやはりどうやっても富裕層が主要ターゲットになるでしょうから」

比良さんは現実を見据え、まずは富裕層の多い都内から、次いで郊外の住宅地、最後に地方都市の順番で支店を建設し、彼らに蓬莱の薬を売り、その売上金を元に、薬を値下げしつつ、販路を広げていく。
「お金については、自動引き落としというのが良さそうです」
「あ、それから政府からの要望なんだが、最初は広告を中年向けにして欲しいんだと」
ここで浩介くんが政府からの情報を比良さんに伝えた。
そう、蓬莱の薬が当たり前になった社会になった後、社会保障費を大幅圧縮させるために高齢者向けの年金などは全て廃止される予定になっている。
ＴＳ病患者がそうであるように、これからの時代は実年齢に大きな意味を持たなくなる。
今でこそ比良さん１８５歳にあたしと浩介くんが２５歳だけど、これが３００年後には４８５歳と３２５歳の違いでしかなくなってしまう。これなら、現代で例えるなら４０代と３０代程度の違いでしか無いことになる。
同じ１６０歳差でも、比というものがある、年代が進めば進むほど、差が同じなら比率が縮小していくのは年齢算の通りよね。
「分かりました。そうですよね、はい」
人々の老化を止め、新しい老人を産み出さないことが、国力増強の第一歩になることは厳然たる事実だった。
もちろん、普及と共に即座に廃止して、そのときの老人を「運が悪かった」「努力が足りない」で一蹴するのもありだけど、世論的なリスクを考えるとあまりおすすめできない。
今の中年世代には、中年にとどまってもらい、それによって老人の消滅をスムーズに進めれば、社会保障費大幅圧縮も滞りなく、波風もたたずに進みやすい。
そして並行して中年以下の若年層にも薬を一気に普及させ、国全体を「若く」する。
これが政府の考えている構想で、もちろんあたしたち蓬莱カンパニーも、この政府案には全面的に賛成することにした。

日本の国力増強を実現させれば、国内の支持基盤はますます強固になるし、１００年後についている世界との差も広がっていく。
「マーケティング部を作りましょう。広告に詳しいフリーの人を呼び寄せましょう」
フリーランスの人間に声をかけ、自社の所属にすることを比良さんが提案する。
もちろん、自我の強いフリーランスではダメだけど、蓬莱カンパニーの名声を考えたら、そこまで悲観する必要は無いのではないかというのが比良さんの意見だった。
「ええ、それがいいわね。この会社に入りたい人はいくらでもいるでしょう？」
「ええ、余呉さんが驚いていましたよ、『このご時世にこんなに求職者が殺到するなんて』って」
とにかくこの国はもう１０年以上にも渡ってあらゆる業界で人手不足が続いていて、ＡＩへの置き掛けも進んでいるが追いついていない。
一時期は移民受け入れを強硬に経済界が主張していたが、政府と若年層を中心とした国民の抵抗、そして何より蓬莱の薬によって、人口問題が解決する見通しになったために、お流れになった。
このお陰で、日本限定販売も、とてもしやすくなった。
やはり村社会というのも、悪い面ばかりじゃないのよね。
「当然よ。蓬莱カンパニーで働きたい人なんて、沢山いるのはすぐに分かるわよ」
蓬莱カンパニーは、今後日本と世界を支配する可能性が高い、人類がこれまで経験したことのない企業になることは、世間一般にも知られている。
そもそも社会保障費の大幅削減や、老後の概念の消滅により諸保証がカットされるのも、国民の選択肢を事実上奪い、日本人全員を蓬莱カンパニーの顧客にしてしまうという側面があるもの。
「そうだろ？　俺だって怖いよ。こんな会社の社長になるなんてさ」
人間たるもの、それならば「支配者側」の企業で働きたいと思うの

は当然のことだろう。
人々は不老の幸福と引き換えに、蓬莱カンパニーには逆らわない誓いを立てる。
それは日本だけではなく、全世界が同様であった。
どこの国だって財政の削減は出来るに越したことはない。
果たして、１００年後に「蓬莱の薬を選ばなかった人にも保証を継続します」などと明言できる国が何処にあるかしら？
それはつまり、「我が国はあらゆることで出遅れます」と言っているのと同義だもの。
そして浩介くんが、そんな会社の社長になっている。２５歳の男の子が、「自分が未来の世界の支配者である」という事実を自覚して、怖くない訳がない。
「心配しなくていいわよ。ここはあくまで企業よ、私達は決して行政的な権力者じゃないわ」
比良さんが落ち着かせるように、静かで柔らかい口調になる。
その通り、比良さんの言う通り、蓬莱カンパニーは政府ではない。国家権力でもない。単なる民間企業という位置づけになっている。
だから税金を取ったりしないし、人々に何か義務を課するわけでもない。
国に代わって犯罪者を罰するというわけでも、裁判をするというわけでもない。
１ヶ月２０００円相当という極めて小さな金額を、毎月、１０００年間払い続けるだけでいい。
それだけで半永久的な命を得ることが出来るし、人々の生活に干渉することもない。
「まあな、ただ、蓬莱カンパニーの割を食う人間は絶対出てくると思うんだよ」
浩介くんはまだ不安を払拭しきれていない。
もちろん、「独占をやめろ。競争しろ」とか「不老の薬には反対だ」などという人間には蓬莱カンパニーは容赦しない。
内部告発や離反における分社を防止するために相互密告制度を作

り、あるいは反対者には本人以外の関係者まで懲罰が課せられる。
ここまで苛烈なことをしておいても、結局逆らった所で月２０００円の出費が安くなるだけでは、それはもちろんまともな思考回路を持っていればメリットに合わないことは分かる。
結局、蓬莱カンパニーによる支配体制が出来たとしても、国を動かすのはあくまで立法行政司法であって、蓬莱カンパニーは民衆に対して政治的、権力的な支配をするわけではないわけだから、逆らわなければ何も起こらない。
ただ不老の享受とともに、ささやかな金額を、長い時間ではあるけれど、支払えばいいというだけのこと。
まともな人間ならば、メリットとデメリットを天秤にかけ、蓬莱カンパニーに逆らうという選択肢はなくなるはずよね。
「大丈夫よあなた。この状況であたしたちに逆らう人がいるとすれば、それはメリットデメリットも、何も考えられずに、ひたすら損害を度外視して感情だけで動く人だけよ。そんな人はどうせ遅かれ早かれ周囲からも見捨てられるわよ」
「ああ、優子ちゃんの言う通りだな」
あたしが浩介くんを安心させるように言うと、浩介くんも安心してくれたようでよかった。
ともあれ、比良さんによるマーケティング部の早期設立にはあたしも賛成で、ともかくこの道を進んで行けば間違いはないと、あたしたちは信じるしかなかった。

「ふう、ともあれこんな所かしら？」
「ええ」
小規模で、人員もまだ少ない蓬莱カンパニーだけど、徐々に大企業になるべく、経営の専門家を顧問に迎えることが決まった。
警察官や弁護士の大物も顧問に迎え入れたいところはあるけれども、さすがに露骨過ぎるため、蓬莱カンパニーが大企業となって経営が軌道に乗ってからそれを行うということになった。
ともあれ、あたしたちのすることは、徐々に少なくなってきた。

## 始動

２０２６年になった。

クリスマス、帰省、バレンタインに結婚記念日、これらのイベントはいつものように毎年繰り返しているけれど、やっぱり1年はそれなりに長いので、飽きることはない。

そして結婚式でもらった結婚記念のキャンドルも大分燃えてきて、もう上の部分は燃え尽きて、７の文字まで来ている。

４月からの大学院博士2年目、もちろん今まで通り単位の取得もあるけど、今年度は去年よりも会社に関する時間が増えると予想がなされている。

けれども、今のところは比良さんや余呉さんが仕切ってくれているので安心ではあるわね。

さて、そのためにあたしの中で増えたのが――

「じゃあ会合を開くわね」

土曜日の午前中、本社にほど近い協会本部で蓬莱カンパニーに入った比良さんと余呉さんも、この協会の定例会合にはなるべく参加している。

会社の本社と近いのもあって「抜けた」という感じは少ないが、それでも正会員、特に副会長などの役職としての仕事は少なくなってしまった。

新しい正会員たちは覚えもよく、幸子さんも早速1人の患者さんのカウンセラーに抜擢された。

余呉さんが推薦していて、あたしと違って、最初は男に戻ろうとするよくない状況だった経験が、よく指導に反映される期待があった。

幸子さんも結婚して、名字が直哉さんのものに変わった。

最も、あたしは「幸子さん」呼びのままだけど、他の会員さんが新姓で呼ぶと、あたしと同じようににっこりと微笑んでいたのが印象的だった。

「まあ、これでも前の本業よりはマシなのよね」
会合が終わった後、あたしたち正会員の一部が集まって雑談中、余呉さんは「今は多忙だけど、それでも前の本業よりマシなので、協会の仕事も続けていきたい」と言っていた。
余呉さんは一体、何をしていたのかしら？
……まあ、追求しても仕方ないわね。
「将来的には、私たちと会長で４人会議も考えましょう」
「そうですね。篠原さんと比良さんと余呉さんの仕事が終わってからでもいいわね」
今は佐和山にいることが多いけど、将来的にはあたしたちもここに向けて通勤することになっている。
あたしの体力的問題もあるから、時差通勤になることが多いとは思うけど。
「ふむ、あるいは私達３人だけなら平日にもできますよね」
「同じビルの近くですもの」
比良さんの言葉に、あたしも同意する。
協会の本部と同じビルで、フロアもほど近いので、会議や打ち合わせには持って来いだし、協会も蓬莱カンパニーの株主なので、協会の会員たちを株主総会に招いてもいいかもしれないわね。
とは言え、永原先生のいない中で、どれほどの会議ができるかは疑問だけどね。
「私たちにはインターネットという方法があるわね」
協会本部もリニューアルをしているらしく、スクリーンから会議に参加も可能らしい。
そこで、実際に会っての定例会合を減らすなどして、比良さんと余呉さんが蓬莱カンパニーの取締役になった穴を埋めようと考えている。
ともあれ協会の方は、たまにフェミニストの残党に対してテンプレの声明文を発表する程度で、以前のように殆ど新しく発生したＴＳ病患者のサポートに専念できるようになった。
忙しさも大分減ったお陰で、あたしの広報部長としての役割も、ほ

ぼ形だけになったわね。
あたしはそんな風に思いながら、蓬莱カンパニーには立ち寄らず、協会本部を後にした。

さて、この春の季節、浩介くんの歩留まり改善方法にヒントを得た蓬莱教授が、更なる改善方法として、生産機械の改良に挑んでいた。
この作業は、蓬莱の研究棟で行うことになっている。
既に量産型は発注済みだけど、あたしたちは既に試作の機械を使って更に改良する計画を練り始めている。
これらについては機械を量産する業者さんにも分かりやすいように設計しないといけないから大変ね。
「工場の建設も進んでいて、機械を発注する時にも少しでもいい設計図を渡さねえとな」
さて、今日も蓬莱の研究棟での作業が終わり、あたしたちは3人で反省会を開いていた。
この問題は、先方とも協力して、機械を生産する工場の機密情報も守らせないといけない。
最初はその機械を作る会社に発注するけど、いずれは安全性をより高めるためにも、社内で生産・メンテナンスをしたいと思っている。
まあ、漏洩したら報復される可能性もあるから、そうそうしないとは思うけどね。
「機械を作り、メンテナンスするためにも、経験豊富な人材が必要だな」
「ええ、良い待遇で中途採用でいいわね」
「ああ、だがそう言う人材を採用する場合、ヘッドハンティングには気を付けねえとな」
蓬莱カンパニーは、その扱う製品の性質上、強権的・支配的な会社にならざるを得ないため、社員のストレスを軽減させるためにも、給料と待遇はよくしてある。
これも独占維持のために高い値段で蓬莱の薬を売ることができるためで、巡り巡って機密漏洩防止に一役買っている。

色々あたしもこの会社について考えたけど、要するに欲張りさえしなければ無害な会社なのよね。
独占を甘んじて受け入れて、競争相手になろうと考えず、黙って毎月２０００円相当を支払えばいいだけ。
それだけで、蓬莱カンパニーは不老というＴＳ病患者だけの極めて限られた特権だったものを、誰でも享受できるようにしてくれるもの。
「いずれにしても、俺達の蓬莱カンパニーなら給料にはない魅力もアピールできるはずだと信じている」
蓬莱教授がそれをどうしていくか考えている。
蓬莱カンパニーの存在感を増すためにはどうしたらいいか、みんなで意見を出しあっている。
「あたしとしては、余呉さんと同じく株上場をしていきたいわね」
余呉さんは、蓬莱カンパニーの株式の上場を主張していて、あたしたちとしても、国の法的規制に守られつつ、日本人の投資家を呼ぶことにしようと考えている。
「監査役を誰にするか？　監査法人をどこにするか？　そこが問題だ」
浩介くんが深刻そうに懸念を述べる。
蓬莱カンパニーが上場する上で最大のネックは監査役と監査法人なのは間違いない。
監査なので当然あたしたち蓬莱カンパニー内部の統制を司るわけだけれど、蓬莱カンパニーは極めて強権的な会社で、不老販売の独占ということもあってどこの監査法人も、あたしたちには萎縮せざるを得ないと思う。
そうなってしまうと、上場が難しい場合も生じてくるだろう。
「ああ、機密漏洩防止のためには、法的規制と強権的な販売制裁はやむを得ないとは言え、それをしてしまえば当然監査役だって人間だ。こっちが萎縮するなと言ったとしても萎縮するだろうしな」
蓬莱教授もその事は分かっている。
もちろん、あまり監査役が機能しておらず、癒着の激しい企業なん

ていうのはいくらでもあると思う。
でもそれだと、やはり世界の反対派に漬け込まれる「隙」になってしまうというのが、あたしたちの一致した意見だった。
あたしは、下手をすれば「萎縮するな」というあたしたちの言葉に萎縮した結果、どこも監査を引き受けてくれないという状況にもなりかねないと懸念している。
そうならないためにも、何とか引き受けてくれる人材を探さないといけないわね。
プルルルル……プルルルル……
「おっと」
突然蓬莱教授の電話が鳴り、蓬莱教授が操作をし始める。
ガチャ
「はい、蓬莱です……はい……はい……え!? そうですか、分かりました……はい……はい……了解です」
蓬莱教授の話しぶりを聞くと、おそらく悪いニュースでは無さそうね。
ガチャ
蓬莱教授が受話器を下ろす。
「優子さん、浩介さん、いいニュースだ。どうやら、機械の量産体制が整ったそうだぞ」
「え!? もうですか?」
当初は、販売まで早くて3年かかると思われていた。
それは、機械の量産体制が整うのが遅れるだろうという予測からで、これは完全に想定外のことだった。
どうやら、今の試作型をベースにした改良案は、一旦棚上げにしないといけないみたいね。
「ああ」
ともかく、あたしたちと商談に関わっている企業は、どこもモチベーションが高いらしく、こうして予定を前倒ししてくることが多い。
そのため、あたしにも、蓬莱の薬の販売が予定より早く進めること

ができそうな気がしてきた。
「よかったですね。これで社員訓練も進みます」
ともかく、まずはあたしたちが研究所で得た薬生成のノウハウを社員たちに覚えさせなければいけない。
用意周到な準備が出来てこそ、あたしたち蓬莱カンパニーの信頼性も上がるものね。
「社員訓練と並行して、ネット予約も開始せねばな。当初は3億円で、『時間をかけて段階的に２０００万円まで値下げ、１０００年分割払いで月２０００円のサービスもあり』というキャッチコピーも入れねえとな」
すっかり気を良くした蓬莱教授も身が弾んでいる。
訓練が順調に進み、作業のマニュアルも完成すれば、それらを第一陣の在庫として売出しにかかることが出来る。
最初の方は値段も高いけど、富裕層ならば買うという予想を持って、初期投資をうまく回収したいわね。
「ええ、第一印象は大事ですわね」
ともあれ、このあたりはあたしよりも更に専門的な広報担当に任せよう。
幸い、今の蓬莱カンパニーはベンチャーオブベンチャーと言ってもいい急成長企業なので、社員のモチベーションはとても高いみたいなので今の勢いに任せたいわね。
「よし、比良さんにも連絡するわ。広告のことも」
「ああ、頼む」
あたしは、本社にいる比良さんに電話をすることにした。
もちろんかけるのは会社の番号で、比良さんも今はオフィスに居るはずだわ。
「はい、蓬莱カンパニー株式会社です」
出てきたのはもちろん事務員の人だった。
「あ、あたしだけど、比良専務お願いします」
でもあたしの声はよく知られているので問題ない。
「あ、はいお疲れ様です」

そして件の独特の取次用の音楽が流れていく。
もちろん、将来的には社長室として使う予定の専務の部屋につなぐことになる。
「もしもし、篠原さん？」
「うん、あたし。比良さん、実はですね、薬の工場で使う機械の量産体制が整ったってさっき蓬莱会長に連絡があって」
蓬莱カンパニーとして話すので、ここでは「蓬莱会長」と呼ぶ。
「え!?　でも予定はまだ先じゃ……って、いつものように前倒しなのね」
比良さんも、毎度のことで感覚が麻痺仕掛けている。
「それが普通なんていう認識にならないければいいけど」
もちろん、「前倒しが当たり前」何ていう認識がおかしいことも、そんな状況がいつまでも続くわけがないのもあたしたちはよく知っている。
「同感ね、社員にも注意喚起した方がいいかしら？」
それでも、人間が人間である以上、熱狂にある中で感覚がおかしくなり、世間一般の常識と乖離することはよくあることなので注意しないといけないわね。
比良さんや永原先生といった面々はともかく、あたしや浩介くん、他の社員さんたちは気をつけたほうがいいわね。
「はい、お願いします。それから、販売広告を打ちたいと思います。こちらの方で協議したんですが、マーケティング部の方を動かすことはできますか？」
「分かりました。デザインについては任せていいかしら？」
「ええ、ですがあたしたちも見ておきます。連絡は以上です」
「はい、分かりました。それでは」
ガチャッ……
ふう、これでいいわね。
「さ、歩留まりを改善しようか」
蓬莱教授の一言で、会議が終わって再び研究へと戻っていく。

あたしたちはまだ研究中心だけど、もしかしたらそれも今年までかもしれないわね。
比良さんにも連絡し終わって、後はあたしたちに出来ることと言えば、広告のデザインを待つばかり。
機械の量産体制が整って、自社でもある程度生産等が出来るようになれば、そのこと広報してもいいわね。

比良さんの広告は、1週間で出来た。
ゴールデンウィークが近づいてきたこの季節、世間は旅行や観光に関心が向いていて、あたしたち蓬莱カンパニーに対する関心は少し落ちている。
まあ、不老の薬が当たり前になれば、どうしたって今よりも注目はされなくなるだろうから、今のうちにこういう風に世間の関心が薄れることにも慣れておく必要があるわね。
ちなみに、比良さんの広告についての協議は――
「広告、どうしますか？」
「ゴールデンウィーク終了後でいいわ」
「ええ、私も賛成です」
というだけのやり取りで終わってしまった。
まあ、こんなの馬鹿でも分かる話だものね。
「して、この機械は従来の研究所のものの半分の値段とスペースで4分の3の効率を達成できたと」
蓬莱教授が説明書を見ながら、機械がスペック通りに動くかをチェックしている。
どうやら問題はないみたいね。
「コストパフォーマンスは良さそうね」
試作品や研究所のものよりもスペースと経費を取らない上に、本体との性能比はこちらが上。
薬を量産する工業用品としてはまたとない水準ね。
ともあれ、これをいくつ量産出来るかが勝負になりそうね。
「よし、早速中を解析しようぜ」

「ええ」
一応機械の量産はノウハウのある向こうに作ってもらうことにはなったけど、それでもこちらでも修理や改良、生産を出来る契約にはしてある。
改良が出来れば、もちろん相手とも共有する。
何故なら、この機械は顧客があたしたちの蓬莱カンパニーしか居ないというのがある。
最も、この機械だけ盗んでも、蓬莱の薬を作ることは到底不可能だけれどね。
材料や製造法まで知られたらまずいけど、そうはさせないために工場の従業員はうまく役割分担をしている。
それらを統括するのも、主に取締役として工場長就任が決まった和邇先輩……和邇博士になっているし。
「ともあれ、解析が終わったらこいつを運び込んで、早速訓練と俺達の介入しない状態での製品の試作に入らねばな」
「ええ」
蓬莱教授の話す声はどこか穏やかで、これからの未来を明るく照らしている。
そんな気がしていた。

「よしじゃあ始めてくれ」
昨年卒業した和邇先輩がそう言うと、工場作業員に内定した新卒・中途採用の人などが作業を手探りで始める。
マニュアルはこちらが用意してあるのでその通りにして一定以上の歩留まりになれば成功になる。
あたしと浩介くん、和邇先輩に蓬莱教授は見ているだけで特にアドバイスなどはしない。
最初はむしろ失敗してくれたほうがこちらの本音としては嬉しい。
何故なら、それでマニュアルが改良されるからで、そのあたりは既に従業員さんたちにも伝えてある。
あーもちろん、わざと失敗してほしいわけじゃあないけれどね。

そして開始した従業員さんたちによる蓬莱の薬の生産はもちろんうまくいかない点もあった。
むしろこれからが問題で、マニュアルの改善案については末端の（といってもそこまで多くの人はまだ居ないけど）従業員たちも含めて大きな会議にかける予定になっている。
特にあたしはこの会社の常務取締役なのでこうした現場の作業員たちの意見などを聞いて管理監督をするのが大きな役目になる。
うー、そう考えると和邇先輩も取締役と言っても平だし、あたしの部下ってことになっちゃうのよね。
……って、考えないようにしよう。
永原先生だって自分の教え子の下で働いていたことも何年もあったんだし。
逆転現象なんて、今後いくらでもあるわ。年上の部下だって、和邇先輩以外にもたくさんいるんだし、蓬莱教授の期待に応えるためにも、頑張らなくちゃいけないわね。

# 宣伝活動

ゴールデンウィークの束の間の休息も終わり、特に大きな新しいニュースもなく、世間もいわゆる「なぎ」の状態に入ったので、いよいよデザイン検討も終了したマーケティング部の広告が世に送り出されることになった。

その広告を見て、人々は、いよいよ蓬莱の薬が販売されることになることを知ることになる。

ネット予約も始まるわけで、そうしたシステムを構築するチームの人達も、大忙しになってきた。

当初の値段はとても高いが、借金してでも買う人も多いだろうというのが予想だった。

当初は3億円で段階的に２０００万円まで下がると言っても、やはりその間に事故に巻き込まれたり不治の病になったりしないかという不安がある。

そう言う層が無理に借金するのではないかという不安はあるけれども、それは顧客の自己責任であたしたちの知ったことではない。

さて、比良さんが広告を世間に出した後の反応は、おそらく「いよいよか」と言った所になると思う。

「さて、後は天命に任せるわね」

そう最後に言い残した比良さんの言葉が、あたしの中ではとても印象的だった。

さて、そんなあたしたちの中で最後に残った懸念点は、３億円という販売価格を「どうせ既成事実にする」という空気を作り出そうとする人々だろう。

要するに、何かと理由をつけて値段を据え置きにしたまま、結局は富裕層しか買えないものになるのではないのかという懸念の声だった。

これについては払拭が難しいし、蓬莱教授の宣伝部の方で無理に世論操作をしようとするとかえって懸念が増大する恐れもあるので、放置することにした。

こうしたネガティブ意見は、消極的賛成派や、声の大きい残りの３％の人がよく唱えているとあたしたちは考えている。

この期に及んでこうした考えを持つ人は、仮にそれを否定したとしても別のことをこじつけて何が何でもネガティブ意見に持っていこうとする強力バイアス者なので、直接見つけ出して洗脳させる以外の方法では改善が難しいことが理由の１点目。

そして２点目としては、値下げは記者会見でも話したように決定事項でもあるので、実際に値段を下げてしまえばこんな空気はすぐに吹き飛ぶと読んでいる。

それに、実は今の段階でも蓬莱の薬の原価は１本１０万円もしない。

１人５本で５０万円以下ということを考えれば、実は１０００年分割払いの２４００万円相当だってかなりのボッタクリだったりする。

なので、蓬莱教授やあたしを含めて取締役たちの気が変わりさえしなければ問題ないし、蓬莱教授の心変わりがまず考えられない以上、あたしたちの中では既に値下げをする前提で動いている。

まあ、それを知っているのは会長の蓬莱教授、社長の浩介くん、専務の比良さん、常務のあたし、取締役の余呉さんと和邇先輩、そして相談役の永原先生だけで、他の従業員たちには原価を知られないように厳重な機密情報を敷いているけれどね。

最も、今の原価は安めだけど、これから機密保持や流通面などでも巨額のコストをかけるため、最終的には原価はもっと上がることにはなるだろうとは予想されてはいるけど、それでも暴利と言えば暴利には違いないのは確かだった。

とはいえ、どちらにしてもあたしたちが莫大な利益を得るのは、その資金源で反対する勢力を抑える必要性もあるから。

広告には、老いによる様々な恐怖が止まることをアピールしている。

今の日本は、あたしが物心付く前から少子高齢化社会が大きな問題になっているが、ＴＳ病の人がそうであるように、蓬莱の薬を飲んだ人間なら何歳になっても生産年齢人口でいられることになる。あた

しが女の子になったばかりの頃は「人生１００年時代」何て言われていたけど、もはやそんな言葉でさえ、陳腐になっていた。
……といっても、永原先生の場合、江戸城ではほとんど悠々自適の生活だったらしいから、人生の半分近くは無産だったのかもしれないけど。
いやまあ、ご意見番として江戸城で色々働いていたから、そういうわけではないかな？

「広告についてはインターネットで宣伝します。更なる予算があればテレビＣＭを打つことも可能ですが」
初めて広告をインターネットの自社ホームページで公開し、今日は会議室で取締役全員と相談役の永原先生を集めて今後について協議している。
比良さんは、更なる周知活動のため、テレビＣＭを計画しているらしいわね。
「あたしはコストパフォーマンスが悪いと思うわ。この２０２０年台も後半になった時代にインターネットをしないレベルの高齢者は、もはや手遅れの年齢でしょう」
あたしは、テレビＣＭはコストパフォーマンスが悪いとして反対した。
その理由として、テレビ自体が、あたしが物心ついた頃から影響力を著しく落としていること。
更に言えば、まだ正式発売はしていないのに、既に蓬莱カンパニーの知名度と影響力は絶大で、あたしたちがＣＭを打つまでもなく、マスコミやテレビ番組が勝手にニュースにしてくれるという可能性が大きく、改めてテレビで周知する理由も薄かったことを理由に上げた。
「……そうですか、社長はどう思われます？」
「うーむ、俺も優子ちゃん……常務に賛成だな。今はまだ、会長の資金力を食いつないでいるに過ぎない。確かにこれまでの寄付金で蓬莱会長の資産は膨大とは言え、会社経営ともなれば個人の資金では限界

があるからな」
「うむ、まだ余裕はあるとは言え、そう湯水の如く使うわけにもいかん。俺には研究だってあるわけだからな」
蓬莱教授は、今後は蓬莱の薬でも治らない不治の病や、大きな怪我をした時に早く直せるような治療法などを研究していきたいと言っていた。
蓬莱カンパニーについては、自身の名を冠し、会長には就任したものの、今のような黎明期を除いて、経営面の口出しはしない予定になっている。
今はそう、蓬莱教授の資金に頼り切りだものね。
もちろん、ある程度金融機関から借り受けも出来るし、無借金経営なんて逆に難しいのは分かっているけど、蓬莱教授としても余剰の資金が削れていくのは心臓に悪いと思うし。
「分かりました、ではテレビCMは使わない方向で行きましょう」
もちろん、テレビ局のスポンサーになるというのも、その会社に対して影響力を保つ意味では重要になる。
だけど、それはあくまで何もカードがない組織だからこそスポンサーになるわけで、あたしたちの場合「蓬莱の薬」という強力なカードがある。
そう言う意味でも、やはり今更スポンサーに頼るという意味は薄いのが実態だった。
「広告なんですが、私達も出るということでいいですか？」
「ええ、中高年向けだけではなく、若い女性、特に独身女性にも顧客を増やしたいですからね」
比良さんと余呉さんは、出る気満々らしいわね。
もう何年も前だけど、海に行った時にも比良さんと余呉さんは写真撮影会してたっけ？
……懐かしいわ、浩介くんとは結婚していたのに、もう7年も前になるのよね。
「行き遅れることはない。これだけでも、余裕は持てるでしょうね」
余呉さんの言葉に、女性陣が全員うんうんと頷く。

独身女性は結婚を焦っている人も多い。
今のままでは年齢と共にどんどんと競争力が落ちてしまうが、蓬莱の薬があれば、ＴＳ病患者と同じように、年齢という概念を超越できる。
例えば、人類最高齢の永原先生は独身だし、恋愛については本人にもトラウマがあるので難しいけれど、その気になれば相手に困るなんてことは絶対にない。
比良さんには子孫がいるけど、それでもあれだけの美人なら結婚したいなんて思う男性はいくらでもいるだろうし、いわんやＴＳ病患者ならみんな同じだと思う。
そうでなくても、蓬莱の薬で不老になれば、これまでよりも遥かに腰を落ち着かせ、ゆっくりと結婚相手を探すことだって可能になる。
蓬莱の薬は、女性の心にゆとりをもたせることが可能だと宣伝することで、かなり優位に立てる。
蓬莱の薬に対する反対運動がまだ根強かった頃に、「蓬莱の薬を飲めば１００歳でも婚活できる」というこちらの発言が、相手に打撃を与える決定打になったこともあったし、今こそこれを使わない手はないわね。
「そうだよなー、若くありたいというのは人間の本能だし、特に女性なんてそういうものだろう？」
「あーうん、私たち、若いままだからそのへんはよく分からないわ」
浩介くんの言葉に、永原先生はあっけないような口調で言う。
そう、あたしたちはＴＳ病で、他の女性と何も変わらないけど、そうは言っても元々男性だった人が後天的に女性になった故の違い、そして不老のために若いままの容姿を保ったままという特徴故に、完全に生まれつきの女の子と同じ感性を持つことは出来ない。
それがいい方向にも、悪い方向にもなる。
例えば――
「うーん、優子ちゃんだって、不老だけど若く見せようとしてるけどなあー」
そう、浩介くんにこんなことを言われてしまう。

「あの、あなた。それはちょっと違ってて――」
あたしが幼く振る舞いたがり、小さな女の子向けのおもちゃや遊びが好きなのは、いわゆる年齢の行った女性の若作りとは全く性質が異なること。
あたしの場合は、他の女の子たちが持っている当たり前を持てなかったから。
結局女の子になって9年の月日が経っても小学校低学年向けのものから逃れることはできなかった。
不老でも人間の精神は成長するが、正気のまま幼児退行するのは難しいというわけよね。
「分かってるよ、でも、俺には優子ちゃんが持ってる女性としての本能も関係していると思っているんだ」
でもそうは言っても、「若く見せたくある」という浩介くんの指摘も、全く間違ったものではなかった。
実際あたしだって女の子になってこれだけの月日が流れて思う。
もしかしたら、あたしが幼いものに目がないのも、単にコンプレックスの解消というだけではないのかもしれないわね。
「まあどちらにしても、むしろ男性よりも女性の方が潜在的な需要は遥かに高いでしょうね」
永原先生が話を戻す。
それについては、あたしたちにも異論がない。
男性ならば、少し老けてても大丈夫なこともある。
極端な例だと６０代７０代の大富豪が２０代の若い女性を連れていたりもする。
でも女性の場合、出産の年齢が男性よりも許容範囲が狭い。
高齢出産と言えば、リスクの高い行いでもあるし、染色体異常の確率も高い。
ＴＳ病の女の子の場合、ずっと若いままなので、常に１０代の容姿と、そして１０代の出産力を持ったままになっている。
「そうですね、何歳でも赤ちゃんを産めますという広告も、効果的でしょう」

余呉さんは分からないけど、彼女を除けばこの中では唯一出産の経験がある比良さんが重い言葉を言う。
そう、何歳でも産めるというのもまた大きい。
あたしがそうであるように、女の子は本能的に赤ちゃんを産みたくなることが何度もある。
今もそう、本当は浩介くんの赤ちゃんが欲しくてたまらない。
多分その願いが叶う日はそう遠くないと思う。
だけど、当然今のままではＴＳ病の女の子でもない限り、赤ちゃんを産む年齢にはどうしても限界があるし、子供を産めないとは言わずとも、「産みにくい身体」というのもあって、その場合でも焦りというものを女性は覚える。
「ええ、賛成だわ」
あたしも自然に笑みがこぼれながら言う。
男性陣が少し議論から置いてかれているけど、話の流れ上仕方ないわね。
コンコン
話の最中、扉がノックされた。
どうやら、反応の暫定的なまとめが来たわね。
「失礼します」
「どうぞ」
マーケティング部の部長さんが入ってくる。
フリーランス経験も長く、様々な企業を渡り歩いてきたベテランの人だけど、取締役が集まった会議の中に入るということで、さすがに緊張の色が見えるわね。
「えっと、広告に対するインターネット上の反応をまとめておきました。何かこちらでしておくべきことありますか？」
部長さんが、机の席、浩介くんの席の前にプリントを置いてくれる。
ふう、貴重な情報源になるわね。
「ああ、女性、特に若い女性に向けた広告を作ってください。女性社員を使うといいだろう。こちらの方では、何歳でも婚活できるとか、何歳でも出産できるということを全面に押し出すべきではないかと、女

性の役員の方から意見が出ていますので参考にしてください」
「……分かりました社長」
浩介くんよりも1周りどころか2周り近く年上に見える部長さんだけど、浩介くん自身が歩留まり改善の立役者とあってか、「年上の部下」になっていても、あまり気にしてない様子だわ。
……最も、あたしのほうが生まれるのが少し早いから、実は取締役で一番年下なの浩介くんなんだけどね。
部長さんが出ていき、あたしたちは早速プリントを回し読みすることにした。
そこには、やはりあたしたちが事前に予想した通り、「いよいよ来たか」とか「これで日本は良くなる」とか「待った甲斐があった」といったものだった。
「うん、概ね良好ね」
将来を楽観視する声も多く、「値下げと分割払いで俺達の手にすぐ届くんだろう?」とか「今買うのはアホ」と言った声もある。
……正直それにはあたしたちも同意せざるを得ないのが痛いわね。
「とは言え、やはり悲観論も根強いな」
一方で、やはりというかなんというか、何が何でも「どうせ一部しか恩恵を受けられない」という声が多い。
今になって思うのは、こうした声を発しているのは貧困層や中間層でも、あるいは富裕層の手前の中途半端に豊かな層でもなく、当の富裕層なのではないかとさえ思えてくる。
もちろん、富裕層から見ても庶民にまで万遍無く蓬莱の薬が広まったほうが特をする訳だけど、どうしても「優越感に浸りたい」という感情は捨てられないらしい。
むしろ「一部だけの不老」はかえって海外の反対派を勢い付かせかねないから、こちらとしてもそんな状況は阻止しないといけないのよね。
「悲観論については捨て置け。あら捜しして強引に悲観論呟いて悦に浸っているような人間のクズどもだ」
「俺も、会長に賛成です。完璧なことは重要ですが、これを治そうとす

るとかえってヒビが入りかねません」
蓬莱教授が吐き捨てるように言うと、和邇先輩がすぐさま同調した。
もちろん、こうした悲観論がでないくらい完璧にしたいのは山々だけど、お金を集めなければ規模の拡大ができないし、こうした数少ない傷を塞ごうとすれば、間違いなく別の場所に傷が入るというのも事実だった。
「私も、蓬莱先生に賛成です。私達があれ程の強力な権威を振りかざして潰したはずのフェミニズムが未だにゾンビのように現れるように、どうしても潰せない愚かな思想というものはあるのです……共産主義がそうであるように、あるいはカルト宗教がそうであるように」
相談役の永原先生も同調した。
永原先生の今の言葉は何気に重いわね。
永原先生も普段は小柄な女の子という感じだけど、こうした時折自らの人生を背景とした発言をすることがある。
そうした言葉は、いつだってあたしたちの糧になってきた。
「永原先生の言葉、深いな」
蓬莱教授が、永原先生の言葉を「深い」という。
誰よりも研究者として深淵を覗いてきたであろう蓬莱教授がそのように言うことで、永原先生の言葉を深く、そして重くしていく。
やっぱり、この2人が組んだらとんでもないことになるわね。
結局、あたしたちは今後蓬莱カンパニーに対する悲観意見は、よほどのことがない限りはインターネットで各自個人で工作するにとどめ、組織としてはなるべく無視するということに決まった。
全てが終わったらもう一度比良さんがマーケティング部の部長さんと話し、今後の方針を連絡するという。
あたしたちも、会議が長引いていて、いい加減もう遅い時間なので、そのまま家に帰宅することになった。

# 工場ができていく

マーケティング部の宣伝活動も順調に進み、いよいよ販売予約を開始する所まで進んでいた。

工場が完成間近になり、いよいよ中に一部の機械を入れて、いよいよ従業員たちの手で本格的に生産開始することになった。

蓬莱の薬を生産するにあたり、従業員たちの意識も高いが、裏切り者が出ないかどうかは常に目を光らせる必要がある。

重要な調合は、工場長たる和邇先輩が自ら行うという案も出されたが、別の蓬莱の研究棟出身の幹部工員にさせることにした。

生産開始についての広告は結局出さないことになり、会社のホームページでニュースとして触れるにとどめた。

さて、あたしたちも徐々に大学院でするべきことも少なくなってきた。

博士論文も既に書き終えてしまっていて、うまくいけば今年度で卒業も可能になっている。

最も、会社が忙しくなれば大学院の単位も難しくなってくるし、あたしの予想では通常通り来年度の卒業にはなると思っているけどね。

さて、あたしたちは生産が始まった工場を視察することになった。

視察メンバーとしてはあたしと浩介くん、そして蓬莱教授といういつもの3人だった。

まあ、蓬莱カンパニーが行っている薬開発は蓬莱教授が大部分を設計してあたしと浩介くんが最終工程に貢献したという形ではあるけどね。

「おー、なかなかすごいな」

浩介くんが社長ながらも工場の外観に飲まれている。

やっぱり自分の会社がこんなに大きな工場を持っているというと

一部が建設途中でありながら、工場の中は既に稼働していて、しかも線路沿いの駅や、工場に隣接したホテルも、絶賛工事中で、外観を見る限りでは工事中にしか見えない。

「こちらです」
今回案内してくれるのは、工場長で取締役の和邇先輩だった。
和邇先輩も役員に迎え入れられて、とても満足そうだった。
まずは入口に入ると中には受付があった。
「お疲れ様です」
受付嬢たちは当然、あたしたちの顔は知っているので、あたしたちに挨拶をするだけでおしまいになっている。
社員が何人か居るけど、あたしたちの顔を見るとやはり顔に緊張が走るのはあたしたちの肩書上仕方ないわよね。
「熱心な人はもうここに来て買いたいと言っているんで困ってます」
生産開始の報を聞きつけ、「まだ販売開始前」と断っているにも関わらず、わざわざここまで足を運んで、不老の薬を求める人間が多い。
それだけならまだいいんだが、時折ゴネる人もいて警備会社の警備員さんが困った顔をしていた。
まあ、大金を叩いて不老になろうという人なので、必死になっちゃうのは分かるんだけどね。
「ホームページでも注意喚起したのにねえー」
あたしも和邇先輩につられて、困った感じの表情になる。
今ここに来られても、もちろん準備作業もあるので販売はできない。
予約販売するにしても、ある程度の在庫を確保してからでないといけないから、生産開始と同時に販売ではない。
「まあ仕方ないわ」
インターネットの他、ハガキでも予約を受けつけていて、それについては高級住宅街にダイレクトメールを送るという手段も考えている。
「ここに訪問する人は、高齢の方も多いですから、二重の意味で厄介なんです」
和邇先輩がカードキーを使ってあたしたちを通してくれる。
まあ、あたしたちも持っているけど、和邇先輩が先行してくれるのはありがたいわ。

「ええ、そうね」
また、あたしたちを悩ませているもうひとつの懸案は、蓬莱の薬を「若返りの薬」と誤解する人のことで、蓬莱の薬はあくまでも「現状を維持し続ける薬」だから、もちろん若返り何て芸当は出来ない。
そのため、６０歳以上は、もちろん欲しいと言うならば販売はするが、若返らせることが不可能な以上、その年齢では何らかの拍子に病死する可能性が高いことだけは、入念に説明することになっている。
これは、「蓬莱の薬を飲んだのに病死した」というクレームを避けるためでもある。
最も、それでも欲しいという人が殺到するということは、それだけ蓬莱の薬に対する期待が大きいということになるけどね。
「ここが現在の稼働中スペースです」
あたしたちは、普段は管理職などが巡回用に使っているルートを窓から中を見ることができて、あたしたちがあの時に見た高度な機械が忙しなく動いていた。
この機械で生成し、次に出来た液体が不老の薬かどうか入念に調べて初めて販売が可能になる。
不老の薬を判定するための手法も、効率化が進んでいて、従来の半分程度の時間でできるようになっている。
それでも、まだまだ改善の余地は残されているはずで、そのあたりは研究者たるあたしたちの仕事でもある。
まあだからこそ、若いあたしたちが最高幹部であることを、社員たちが容認してくれるのもまた事実なのよね。
「ご覧のように、こちらでは順調に作業が進んでおります。トラブルも起きておりますが、都度部長以下部下が解決してくださっておりますのでご安心ください。在庫が溜まり次第、連絡します」
「ええ、分かってるわ」
和邇先輩によれば、概ねあたしたちが予想した通りの成果を得られているという。
思ったよりも、機械の性能がいいなんてこともあったらしい。
「では、次の部屋です」

あたしたちは廊下を進んで行き、更に奥の部屋が見えてきた。
そこでは、さっきまでとは打って変わって、「試運転中」という機械を目にすることが出来た。
数はさっきの稼働中よりもかなり多く、工員さんたちが目を光らせていた。
一方で、稼働中の機械はなく、生産には移れていない様子が見て取れた。
「こちらでは、納入された機械の試運転が行われています」
和邇先輩によれば、今のところ歩留まりの悪い機材はないらしい。
「もし状態が悪いなら、発注した企業の技術者と共に、こちらで修理を行うことになっています」
「むしろ、今のうちに初期不良を洗い出しておきたいわね」
新しく設計した機械である以上、どうしても想定外の初期不良は起こってしまう。
そうなった場合には、当然改良も必要になる。
そうしたノウハウはそれぞれの財産として共有することが出来るのよね。
いずれにしても、試運転も急ピッチで、かつ確実に進めるために人員を割いて進めることになっている。
とにかく、生産力を増やさないことには、売上も伸びないものね。
「ええ、ではこちらへどうぞ」
和邇先輩が、更に奥に進む、途中右に曲がって奥に進むと、工事の音が徐々に強くなっていく。
そして試運転の機械ではなく、ちょうど納入されている部分に入った。
「今はこのように、到着した機械を並べる場所になっています。試運転を待っている状態と言っていいでしょう」
機械を並べ、試運転し、そして稼働に入る。
もちろん、定期的なメンテナンスも必要不可欠になっている。
「ふむ、順調そうで何よりだ」
蓬莱教授も満足しているみたいだわ。

そして、あたしたちはそこから更に奥へ進むと、扉の前にヘルメットが置いてあるのが見えた。
「ここからは工事中になりますので、安全のためにこれをつけてください」
「はい」
あたしたちは、お馴染みの「安全第一」と書かれたヘルメットをつける。
えっと、ここをこうすればいいのね。よしっ。
「優子ちゃん大丈夫？」
「うん、ありがとう浩介くん。好きよ」
浩介くんの気遣う声に、あたしも思わず笑みがこぼれていく。
こういう気遣いに、あたしは思わずポロっと「好き」という言葉が漏れてしまう。
「あーいい雰囲気な所悪いが、そろそろ行くぞ」
「「あ、はい」」
あたしたちは蓬莱教授の言葉で意識を現実に引き戻す。
顔の赤みまでは、戻らなかったみたいだけどね。
これまで以上に思い扉を開けると、そこでは至るところで工事作業が進んでいた。
大きな音と、工事のおじさんたちが連絡しあう大きな声がこだましていく。
工事は急ピッチで進んでいて、あたしたちは邪魔にならないようにその合間を進みつつ、和邇先輩の解説を聞いていく。
「懐かしいな、何だか」
浩介くんが、ふと小さな声でそう漏らす。
「うん、あたしも」
これだけの大きな工事現場を間近で見たのは、生まれて初めてだった。
何もない所に、建物が建つ様子が見て取れる。
あたしは、３年前のことを思い出していた。
あの時、あたしは浩介くんと２人で富山県に旅行していた。

その時、黒部峡谷鉄道鉄道線と、立山黒部アルペンルートに乗った。
黒部ダムと、黒部峡谷鉄道線では、工事のおじさんを何人も見た。
今こうして働いているのも、そうした人々と同じ人たち。
彼らの建設技術がなければ、この工場も建たなかった。そう言う意味でも、やはり蓬莱カンパニーで全てを賄うことは不可能だった。
「上に気をつけてください」
「はい」
和邇先輩の注意喚起に、あたしたちも上部を注意する。
上では工事の人たちが忙しそうに歩いていて、手には資材らしいものを持っていた。
足場はあるけど、あそこを歩くのはちょっと気が引けるわね。
「機械化が進んだといっても、最後のチェックはどうしたって人間がしないといけません。機械にチェックできたとしても、人間の目と2重にする必要があるんです」
和邇先輩の言葉はよく言われること。
機械化やＡＩの技術が進んでも、それらをメンテナンスするのは人間の仕事になる。
いわんやメンテナンスの機械が進んでも、人間は常に最後の砦になる。
「さて、ここからが新しい駅を作る鉄道の区域です」
更に奥に進むと、工場の外に出て駅のホームができ始めていた。
今でも新駅開業はあるけど、ここの駅は本当に工場の人向けという感じになるわね。
「この辺に蓬莱カンパニー専用の改札口ができます。そして道路に直結している道が、一般用です」
この手の大きな本社や工場があると、そうした従業員専用の改札口もよくできる。
この駅も、それに倣うのだという。
「新駅の完成にはしばらく時間かかりますので、おそらく薬の販売には間に合わないと思います」
駅を作る鉄道会社とは、全く独立しているので、それも仕方ないわ

ね。
「あーうん、問題ないです。無理に急がなくていいと先方に伝えてください」
「了解しました」
和邇先輩の説明に、浩介くんが焦らないようにと伝えるように答える。
それにしても、社会に出ると大学や大学院の先輩後輩も殆ど形骸化するわね。
まあ、あたしたちもまだ、院生ではあるんだけど。
あたしたちは一通りの見学を終え、元に戻った。
元々予定が前倒しになっていて、少しくらい遅れても大丈夫なのも、あたしたちに余裕を与えてくれるわね。
「それじゃあ、俺たちはここで失礼するよ」
全てを一通り見終わったので、蓬莱教授が引き上げを宣言する。
「はい、気を付けてください」
現場は特に大変だ。あたしたち上層部が無茶をすれば、それだけすり減ることにもなるし、蓬莱カンパニーの機密防衛にも関わることになる危険性がある。
あたしたちはそのまま今ある駅までタクシーを使って、そこから電車で元に戻った。

「ただいまー」
「あ、２人ともお帰りなさい」
家に帰ると、お義母さんがあたしたちを優しく迎え入れてくれた。
「どうだった？」
「うん、順調だわ」
勤めて平常心で、そう答える。
正直に言えば、こんなにうまくいくなんて、はしゃぎたい気分でもあるけど、我慢することにした。
ちなみに、今現在あたしたちは役員報酬は殆ど貰っていない。
あくまでも、販売を開始したら始めるというのが建前になってい

る。
株式については、まずは上場に向けての準備を続行はするものの、上場のための条件を整えるだけの時間と余裕がないということで、ひとまず優先順位を下げることに決まった。
最も、将来的な上場には含みは残したままなので、「このまま非上場で行く」と決まったわけでもない。
このあたりは、取締役会でも意見がまとまらない難しい問題で、ひとまず今は目の前の問題を片付けることが先決と決まった。
「じゃあご飯作るから、待っててね」
「はーい」
お義母さんに見送られて、あたしと浩介くんがそれぞれ自分の部屋に入る。
あたしは、部屋のドアの鍵を閉めて浩介くんに覗かれないようにしつつ、レディースーツを脱いでパンツとブラだけの下着姿になると、今日はもう出掛ける予定もないので、ゆったりと動きやすい膝下丈のスカートに着替えることにした。
ふー、やっぱりタイトって言うだけあって、普段着てるスカートよりも狭いわね。
さて、浩介くんの所にでもいこっと。
コンコン
「はーい」
浩介くんの部屋の扉をノックすると、中から浩介くんの声が聞こえてきた。
「入るわね」
ガチャッ
「あ、優子ちゃんいらっしゃい」
「うん、来ちゃった」
着替え終わった浩介くんがあたしを歓迎してくれる。
ふふ、何だかいつもよりかっこよく見えちゃうわ。
「今日の工事現場、すごかったな。あれが、やがては完成するんだよな？」

やはり、浩介くんの印象にも、残った話らしいわね。
「うん、あの足場とか、大変そうだわ」
とにかく、不安を誘うこと間違いなしだと思うわ、あれ。
しっかり補強していても、大きな地震とか起きたら崩れちゃいそうだもの。
「うーん、俺はあの足場の上に優子ちゃんがいて、俺が下から覗き放題って場面を想像してて、沈めるの大変だったぜ」
浩介くんがニヤリと歯を出して言う。
「もう、浩介くんのえっち！」
本当にも、どうしてこういうことしか考えられないのよ浩介くんは!?
そりゃあ、夫婦だからそう言う発想もあるとは思うけど……あの足場にスカート姿で立っていて、浩介くんに下から覗かれて、全部見られて……あうー、想像しただけで恥ずかしいよお……
「とか何とか言ってー、その顔、想像しましたって言ってるようなものだよな」
プシューっと、あたしのほっぺが吹き出してしまった。
浩介くんにはもう何年も前に全部知られちゃっているのに、やっぱり恥ずかしいという気持ちを払拭することはできないし、多分これからも、慣れてはいけないことだと思う。
……あれ？　浩介くんは？
「うん、やっぱりこうやって覗くのとあの足場で覗くのとだと魅力が違うよな」
浩介くんが床に寝転がっていて、あたしはパンツを思いっきり覗かれていた。
「きゃー！　えっちー！」
あたしは反射的に声を上げ、顔を真っ赤にしながら、スカートを押さえてその場に座り込んでしまった。
あうあう……下から丸見えだよお……
「やっぱりかわいい反応するね優子ちゃんは」
「もう、浩介くんは本当にえっちが好きなんだから」

あたしが顔を尖らせて抗議する。
スカートの中を覗かれた回数だって、もう数えきれないわ。
だけど覗かれれば覗かれるほど、恥ずかしいという気持ちが強くなっていった。
「当たり前だろ。こんな好きでたまらない女の子と毎日暮らしてるんだぞ。性欲が湧かないわけがないだろ」
「もう、それはお互い様でしょ」
あたしだって、浩介くんにされるのとっても好きだもん。
今のやり取りで、またちょっと興奮度が高まっている。
だからあたしはこう誘い込む。
「ねえあなた、両親が寝たら、ね」
「ああ」
あたしたちは、ちょっとしたことから、こういうことに発展してしまうことが多い。
他の家がどうなっているかはわからないけど、あたしたちも気を付けた方がいいかしら？
まあ、夜になったらそういうことも全部忘れてしまうんだけどね。

## 高月章三郎の指摘

工場建設中、会社の仕事の多くを専務の比良さんがしてくれていて、あたしたちの中では大学院での研究の比重が再び大きくなってきた。

そんな8月の夏のことだった。

あたしたちはいつものように蓬莱の研究棟で実験や研究を行っていた。

「優子さん、浩介さん、いいニュースだ」

蓬莱教授が少し微妙な笑顔であたしたちに話しかけてきた。

いいニュースって何かしら？

「あら？　何かしら？　最近いいニュースしか聞いていない気がしますけど」

実際、あたしたちの当初の想定がいかに世間の不老への需要を過小評価していたか思い知らされてばかりだし。

「昨日から正式販売が始まったことは知っていると思うが、俺の予想に反して速攻で完売した。さすがにこの値段で、しかも供給が増えるから最終的には１０分の１以下の価格になると言っているにも関わらずだ」

蓬莱教授は驚きを持って伝えてきた。

やはり、どうしても早く買いたいという人がいるというのは分かっていたが、蓬莱教授はどうも狐につままれているらしいわね。

ちなみに、蓬莱教授のＰＣから見える総合サイトでもトップニュースとして「蓬莱の薬発売、予約分は即完売」と報じている。

「でだ、供給不足ということはもしかしたらもう少し値段を下げる速度を遅くせざるを得ないかもしれん。工場の方にはとにかく急ピッチで供給を増やすように指示しているがそれも限界だ。本当はすぐに値段を落として大衆に売り出さねばならないが……どうやら見通しが甘かった」

蓬莱教授の口ぶりはあまり良さそうに見えない。

「え？　いいニュースじゃなかったんですか？」

浩介くんが思わず突っ込んでしまう。
あたしも、同じ気持ちだわ。
「ああ、それだけ高く売れるということだからな。金が集まれば、その分供給速度も上がるし、北海道に作るサブ工場もこれで予定を前倒しして工場を作ることが出来る」
蓬莱教授にとってはあまりいいニュースではないのかもしれないけど、企業としてはいいニュースなので、「いいニュース」として紹介したのかもしれないわね。
蓬莱教授はそこまで言い終わると、水をついで自分で飲む。
「ごくっ……ふー、ただ完全にいいニュースとはならない。理由は……聡明な2人なら分かるだろう？」
蓬莱教授が言いたいこと、さすがにあたしでも分かる。
それは今まで蓬莱教授がどうしても避けたいと何度も何度も、これでもかというくらいに強調してきたから。
「ええ、特権階級化への懸念ですよね？」
あたしの言葉に蓬莱教授も「当然」という顔をする。
「そうだ。値下げ速度を遅くすれば、また問題が起きるはずだものな」
さりとて、急激に値下げしても転売屋が値段を吊り上げるだけ。
もちろん、これまでのように共産主義的と言われようとも、転売屋を親類縁者含めてまとめて不売買を宣告するのもいいだろうけど、さすがにそれを発動するのは問題がある。
「強権はなるべく発動せず、威嚇だけ行い、なおかつ大衆に売り出しながらも市場経済にも逆らい過ぎない……超難問だ」
これまでには、幸いにも親類縁者への連座制を適用された人物はもちろん、不売買を宣告された人間も居ない。
やらないに越したことはないが、「単なる脅し」と捉えられて舐められてしまうのも問題でもあるのよね。
「ともかく、最終的に予定通りの値段に下げれば十分だろう。もしどうしても難しいなら、工場を広げればいい。どうせ世界に売るときには今よりも遥かに広い敷地が必要になるだろう？　そこら辺も、今のうちに買っているわけだからな」

浩介くんが話した通り、実は今工場の周辺部の土地を地主たちから買い取っている。
といっても、立ち退いて貰う必要はない。
ただ、蓬莱の薬を全世界に売り出す場合に必要とされる推定の場所を予め買っておくのだ。
大体は農地が多くて、工場の人の家族用に娯楽施設などが建つ予定もある。
最も、それらも拡張時には取り壊しが決定している施設でもある。
……まあ１００年後の話だものね。
「そうだな、浩介さんの言う通りだ。周囲の声に一喜一憂せず、粛々と増産体制を進めていこう」
完全不老の薬の供給を増やせば、値上がりは防げるはず。
もちろん、２０００万円より下げるつもりはないけどね。
「そうね。さて、販売に伴う様々な手続きやサービスもきちんとうまくいっているか確認しなきゃな」
そして販売と同時に開始されたのは、全国の医療機関による、不老証明検査で、これは蓬莱の薬を飲み切った人を対象に、本当に不老かどうか検査するというもので、不老かどうかの認定については、蓬莱教授の論文が広く開示されており、医師たちも嘘をつけない状態になっている。
間違って不良品を売ってしまった場合には、蓬莱カンパニーが追加で不老の薬を手渡すことになっている。
場合によっては、お詫びとしての割引サービスも考えられている。
一応、蓬莱教授の研究室でかなりまとまった人数の治験者が居るけれども（彼らはお金を払わずに不老の薬を飲んだということで、勝ち組でもある）、それでも体質問題が生じかねない可能性は常にある。
日本人ならＴＳ病が多いからなんとかなるけど、外国人に売るのは気をつけないといけないわね。
そんなある日、あたしたちは顧客情報に見覚えのある人の名前を発見した。

「高月章三郎……これ、高月くんよね」
顧客の名簿に、小谷学園の時の同級生で浩介くんの親友だった高月章三郎という人の名前が載っていた。
「ああ。整形外科医の2代目を目指して俺達と同じように医学博士を目指しているんだ」
浩介くんは、今でも高月くんと定期的にやり取りをしていて、たまにテレビ電話で近況を報告し合うことがあるらしい。
それでも、蓬莱の薬を買うということまでは、連絡してこなかった。
「ねえ、浩介くん」
「ああ、ちょっと会ってみるのも行幸だろうな。幸いにも、工場に行く日は俺達も休みを取っている。問題はないだろう」
こうして、あたしたちは高月くんと久しぶりに会うことになった。
実家の医業を次ぐ何てとても大変だと思うのに、頑張っているわね。

その日はよく晴れた快晴だった。
浩介くんが事前に会いに行くということで、あたしたちには「普段の私服のままでいい」と言ってきたけれども、今回の高月くんは「お客様」になるので、あたしも浩介くんもビジネスで応対することになった。
最も、今は夏なのでいわゆる「クールビズ」というものだけれどね。
やっぱり、膝が見える黒いタイトスカートってどうなのかしら？
ＯＬっぽさはあるけど、やっぱりあたしの普段のおしゃれの方がかわいいと思うのよね。
それでも頭の白いリボンだけは、欠かすことはないけれども。
工場のある駅までは、地味に電車でも時間がかかる上に、そこから工場に行くにも駅からかなり歩く必要がある。
ＪＲの新駅はまだ建設中だし、建設が終わっても試運転やシステム上、更にダイヤ改正の問題があるので、開業は来年の3月になるという。
これも機密漏洩防止の為に致し方ないとは言え、全国への支店の充

実を、推し進めなければいけないわね。
「支店への強盗対策も念入りにしねえとな」
「ええ」
銃弾を受け付けない強化防弾ガラスや、また支店の倉庫もなるべく地下に設置するなど、対策は念入りにしているとはいえ、蓬莱の薬を求めた外国人や密輸業者などが、強硬手段に出る危険性は常に考えておかないといけない。
まあ今は、この工場の防犯力が大事になってくるけどね。
あたしは約束の時間に集合場所になっている工場正門前へと集まった。
あたしたちが来たばかりの頃と違い、既に工場も立派になっていた。
「ねえ浩介くん、あれ」
あたしが向こう側を見ていると、人影が見えた。
「ああ、高月だな」
歩いていたのは、あの時よりも少しだけ大人っぽくなった高月くんだった。
あたしたちはあの時から変わってないから、少しだけ時間の流れを感じるわね。
もしかしたら、あたしたちくらいに若く見える人は、少なくなるのかもしれないわね。
「あ、優子ちゃんに浩介じゃねえか」
「おう、高月、しばらくぶりだな」
浩介くんはあくまでため口で応じるつもりらしいわね。
ふふ、ここはちょっと趣向を変えようかしら？
「高月様、今日はお待ちしておりました」
あたしが営業スマイルで応対すると高月くんの顔が少し動揺していた。
「ああ優子ちゃん、いつも通り、あの時と同じでいいよ」
高月くんに速攻で訂正されてしまった。
「……分かったわ」

まあ、「お客様」がそう言うなら仕方ないわね。
「にしても、優子ちゃんはともかく、何でお前までそんなに変わってねえんだ？」
高月くんもリラックスした様子になってくれてよかったわ。
「そりゃあ、俺は蓬莱の薬で既に不老だからな。ちなみに木ノ本も既に不老だぞ」
蓬莱の薬を飲んでいるのは恵美ちゃんも何だけど、一応極秘ということになっているので、浩介くんもそれについては伏せる。
ちなみに、恵美ちゃんが蓬莱の薬を飲んでいるという疑惑については、未だに海外では一切報じられておらず、向こうの人々も全く気付いていないという。
まあ、ただでさえ日本人は若く見られるというし、それに永原先生の見た目年齢なんてかなりのものだものね。
「そうだった。俺もそうなれるってわけだ。俺は一応まだ博士過程の途中だが、既に医師免許は取っていて後継に内定してるってことで、親父から不老の薬を勧められたよ」
でも、この場に父親の姿は見えないわね。
「あれ？　でも親父さんは？」
浩介くんもそのことは気になっている様子だわ。
「ああ、今の所うちの病院の稼ぎだと複数人分の薬を出す余裕はないんだ。そこで、一番優先順位の高い俺がまず蓬莱の薬を飲んで、値下げ次第両親も飲むってさ」
うーん、出来れば父親から飲んでほしかったんだけど……仕方ないわね。
「そうか、じゃあ行こうか」
「おう」
あたしたちは、改めて身体の向きを変えて工場の門を目指す。
工場正門の警備員さんがあたしたちに敬礼してくれる。
「俺だ、こっちは顧客で旧友の高月章三郎だ。通してくれ」
「了解しました社長」
おっと、高月くんは手続きしないといけないから、釘を差さないと

いけないわね。
「あ、ちゃんと手続きしてよね」
警備員さんに門を開けてもらい、高月くんはＩＣチップ付きの顧客証を門の中の警備員さんに見せてもらい、所定の手続きをしてから中に入る。
やっぱりこういう所はしっかりしないといけないわね。
「ここが工場か、えっと、販売所はこっちか」
高月くんは手慣れた動きで販売所へ向かっていく。
まあ、地図があるからすぐに分かるんだけど、今の所ここに来ている顧客はおそらく浩介くんだけね。
「うん、ここだな」
高月くんは迷わずに販売所のある場所まで到着した。
「いらっしゃいませー！……って、これは社長に常務！　どうされたんですか!?」
販売所の従業員さんがかなり驚いている。
まあ、普通にこんな所に社長と常務が来たら驚くわよね。
従業員数もかなりの数になっている、これから北海道に出張に行って工場を建設する事になったら更に従業員数は増えるし支店も出来たら……やめよう。
それに世間への影響力っていう意味なら、あたしなんてもうとっくの昔にとんでもなく行使しているし、総理大臣に何度も自分の意見を採用させたものね。
「あーうん、このお客さん、高月章三郎さんは俺達の高校時代のクラスメイトなんだ。それで今日は特別にって。まあいつも通りにしてくれていいよ」
そうは言っても、なかなか難しいわよねそれ。
「そうでしたか。では高月様、本日はこちらをその場でお飲みください」
販売員さんはかなり緊張した面持ちで高月くんに薬を手渡し、高月くんもそのままその場で飲み干す。
うーん、あたしたちは早く退場したほうが良かったかしら？

仮にもこの会社の役員なわけだし、平社員の販売員さんからしたら緊張するななんてのが無理な注文だものね。
「高月くん、行こうか」
あたしはそれとなく高月くんにその場を離れるように促し、高月くんもあたしたちの立場を思い出したのかすぐに駆けつけてくれた。
「ふう、やっぱここまで来なくても良かったかもな。ほら、あのあたりとか」
高月くんが物陰になっている場所を指差す。
でもあそこから2人して覗き込むって、単なる不審者よりもある意味たち悪いわよ。
「といっても、遠くで待っててもも他の従業員さんに怪しまれるかもしれないわよ」
「優子ちゃんの言う通りだな。物陰から覗き込むのが不審者ならまだしも会社の最高幹部がそんなことしてたら社員も動揺しちまうぜ」
浩介くんも、あたしと同意見みたいね。
実際、あたしが正門に行くまでにも通りがかった社員が驚いた顔をしていた。
「ところでさ、この会社、しばらく非上場なのか？」
高月くんが株のことについて話す。
「ああ、今は国に外国人投資家を規制の上で上場する案がなされている。その時でも俺と優子ちゃんと蓬莱教授でちょうど株式が５０％で、他に永原先生が１０％に、日本性転換症候群協会の関係者で更に１０％の予定になっていて、市場に出すのは3割の予定になっている」
「そう言えばそんな話をしていたな……なあ、2人共、よく聞いてくれ。その株、絶対に手放さないほうがいい」
高月くんが珍しく真剣な表情をしている。
もちろん、手放す気は毛頭ない。
蓬莱カンパニーの大株主という立場を手放すなど、それこそ一国の支配権では到底割に合わないほどの大きなことだということくらいあたしにも分かる。

「分かっとる。上場しようがなかろうが、例え何兆円を積まれようともな」
「ああ、大真面目に、その株は何兆円じゃ効かないような価値を持つだろう。確か配分は、蓬莱教授が４に対して、優子ちゃんと浩介で３ずつで全株式のちょうど半分だったかな？」
「……高月くん、よく株式分配率覚えていたわね」
何気に記憶力いいわよね。
身近な人だったからというのもあるかもだけど。
「だとしたら、おそらく篠原家は世界一の資産家になる」
高月くんが真剣な表情をして言う。
あたしたちは、驚きのあまり固まってしまう。
これはノーベル賞の話が出た時や、あたしたちが蓬莱カンパニーの経営幹部になるという時と同じくらいの衝撃的な話だった。
でも、冷静に考えれば当たり前だった。
蓬莱カンパニーの株式が高値で取引されることは容易に想像ができた。
そうなった時に大株主であるあたしたちや蓬莱教授、永原先生の配当金を含めた資産額がとんでもない額に膨れ上がることは必然でもあった。
「せ、世界一って……」
それでも、あたしも浩介くんも、事態を飲み込めなかった。
あたしがあの時、永原先生の教師としての反対を押し切って、日本性転換症候群協会の正会員として、また浩介くんとの寿命問題を解決したいがための決断が、あたしをノーベル賞学者へと導き、蓬莱カンパニーの経営幹部になって、そして最後には世界一の資産家にまでなってしまうなんて。
……いや、落ち着くのよ優子。そんなこと、まだ決まったわけじゃないわ。
ノーベル賞だって、きっと蓬莱教授が単独受賞に……なるかは分からないけど、でも……
「２人共、落ち着くんだ。おそらく、急な社長や常務への抜擢だ。だが

それでも、大学院生とこんな大きな会社の経営者を両立できてる篠原夫妻なんだ。世界一の資産家になったって不思議じゃないよ」
高月くんはあくまで冷静な顔つきで言う。
それでも世界一何て言うのは、まるで現実感はない。
いや、それに個人で言うなら、蓬莱教授のほうが資産は高い。
既にビリオネアにはなっているし、新規事業で今年はかなり資産を減らす予定にはなっているけれども、それでも株式公開や株の配当金などがあれば、そんなものはすぐに取り戻せそうな雰囲気さえ漂っている。
「さ、俺はこのホテルに予約している。明日からは元の生活に戻ってくれ。久しぶりにあえて嬉しいよ。これからも永く付き合っていこう」
「ああ、末永く、な」
あたしたちは高月くんとホテル前で別れる。
この別れは、一時的なもの。
あたしたちにとっての「末永く」は文字通り意味が違ってくる。
「なあ、高月が言ったことさ」
「気にしない方がいいわ。それに、株式公開しなければ例の世界の富豪ランキングにも反映されないわよ」
もちろん、そのことで上場するか否かを決めることはないけどね。
確かに蓬莱教授もそうしたランキングに載ってはいるが、それでも世界一の資産家というわけでは全くない。
でも、こうした現実感のないことは、否が応でもあたしたちを、別の渦へと巻き込んでいくのだった。

# 北海道へ

「それで、優子さんたち。俺と一緒に北海道に出張に行って欲しい」
蓬莱教授からそんな指令が下ったのは、高月くんと久々に再会した翌日のことだった。
あたしはまだ、高月くんの言葉が頭に残っていたけど、今はとにかく北海道に作るサブ工場の視察をしないといけない。
ここから北海道に行くには2通りの方法がある1つ目は羽田空港から新千歳空港に行くルートで、大抵はそれを選択する。
もう1つ目が北海道新幹線を使い新函館北斗駅から在来線に乗り換える方法で、こちらについては5年後に札幌開業が行われる予定になっているので、今はあまりメジャーではない。
主に鉄道好きなどが使うルートになっている。
で、今回あたしたちが使うのも前者のルートで、羽田空港から新千歳空港まで飛行機に乗り、更に新千歳空港から目的地を目指すというもの。
単純にこちらの方が格段に速いということで、今回は空路を使うことになった。
「行ってきまーす」
「気をつけてね2人とも」
「分かってるって」
お義母さんに見送られて、あたしと浩介くんは出張のために羽田空港を目指す。
と言っても、今回も蓬莱教授と先頭車両で合流して、その後電車を幾つか乗り継いで羽田空港を目指すことになる。
羽田空港まではリムジンバスのルート、自家用車のルート、京急空港線のルート、そして東京モノレール羽田空港線のルートがあるけど、あたしたちは京急空港線ルートを選択した。
あたしたちはいつもの待ち合わせのために列車のホームを見た。
「あれ？　優子ちゃん」
「うん」

あたしたちは違和感に気付いた。
蓬莱教授と共にいたのは永原先生だった。
「あれ？　永原先生どうして？」
本来なら、あたしたち３人で行く予定だったのに。
「あーうん、私も一応相談役だし、工場には何度か来させてもらったんだけど、北海道に行くのは久しぶりだから、ちょっと、ね」
どうやら、出張という名目で北海道にも行ってみたかったらしいわね。
……まあいいわ。
あたしたちは、電車を乗り継いで京急蒲田駅から空港線へと乗り込んだ。
永原先生曰く、この「京急蒲田駅」というのがかなりの曲者らしいんだけど、あたしにはよく分からないわね。
「搭乗手続き、確認番号のメモは持ったよな？」
「もちろんよ」
朝にこの家を出る前にも、もちろん確認したわ。
飛行機乗れなくなったら大変だし。
「それにしても、相変わらずここ羽田は外国人が多いな」
蓬莱教授がそう話すように、あちこちで外国語が聞こえてくる。
東京駅から名古屋駅までのリニアの開業を来年に控え、羽田空港を離陸する伊丹空港行きの航空便は、採算が取れないとしてほぼ全てなくなる予定になっている。
１０年ほど前から羽田空港の再国際化が進んだけど、あたしたちが子供の頃はほぼ国内線のみの空港で有名だった。
あたしたちはまず、予約の確認を行うため、チェックインカウンターへと向かう。
「えっと、あたしたちはこっちだから……」
あたしたちが予約した会社はもちろんＬＣＣという安いものではない。
割引運賃は使うけど、あたしたちだって一応それなりに有名で世間に与える影響力の大きな会社の役員たちなので、ビジネスマンらしく

「ビジネスクラス」を使うことになっている。
「このチェックインカウンターは自動チェックイン機だな。有人のカウンターもあるけど、外国人が多いみたいだ」
「ええ、そうみたいね」
一方で、自動チェックイン機は日本人のお客さんも多く、列が捌けるのも意外と速い。
それでも、それなりに並んではいるので、やはり1時間前に来ておいてよかったわね。
あたしが代表して、４人分の航空券を受け取る。
えっと、この番号を読み込んで……よしっ！
あたしは、無事に飛行機の搭乗券を手に入れ、次に向かうのは手荷物カウンターへと向かう。
「そう言えば、飛行機にのるのも何年ぶりかしら？」
永原先生は、あまり乗ったことがないらしい。
「うーん、あたしも記憶に無いわね」
優子になってからはもちろん飛行機の経験はないし、優一時代だって、家族で遠い所に旅行するというのも、あまり多くなかった。
総じて、あたしが飛行機に乗るのはこの２６年の人生で初めてということになる。
「俺は……家族で一度だけ沖縄に行ったことがあったかな？」
浩介くんが思い出すように言う。
「俺は学会なんかでしょっちゅうだな。だが人生で一番心が踊ったのはノーベル賞を貰った時のストックホルムに行く時の飛行機だな。途中で一回乗り継ぎが必要だったけど。あの時は、さすがにワクワクしたもんだ」
蓬莱教授にとって、最初のノーベル賞の受賞研究は「脇道の研究」だった。
でも、おそらく次にストックホルムに行く時は、きっと蓬莱教授にとってあの時以上に素晴らしい旅になるわね。
「ストックホルムかあ……スウェーデンはともかく、ノーベル賞というのは魅力があるよな」

浩介くんも、「俺には無縁だ」という感じで、意識して他人事のように話す。
あたしたちは色々と考えたが、やはり蓬莱教授の単独受賞になると思った。
ノーベル賞は一応貢献度での配分があるけど、最小でも４分の１で、どう贔屓目に見てもあたしたちの発見が蓬莱教授の４分の１もあるとは思えなかったもの。
「だろう？　だが今回の研究、果たしてそんな陳腐な賞で収まるものなのかな？」
蓬莱教授もあえて挑発的な物言いをする。
確かにその通り。でも、ノーベル賞を選出する機関がどう出るかはまだ分からないわね。
「まあいいわ。早く手荷物検査しましょう」
永原先生にそう詰め寄られ、手荷物カウンターに預け、あたしたちは次に貴金属の検査を受ける。
もちろん同性の検査官で、あたしたち夫婦も安心ね。
「ふう、ここで待つのね」
今回は手荷物しかないので、あたしたちは荷物が出てくるのを待つ。
荷物は案外すぐに出てきたので、あたしたちは出発ロビーに進んでいよいよ飛行機の中に入る。
搭乗口から案内に従ってタラップの階段を登るといよいよ機内に入った。
「これは『ボーイング７７７―３００ＥＲ』かあ……あーこれももういい加減旧式だな。どうせなら７９７に乗りたかったんだが、致し方あるまい」
蓬莱教授が少しだけ嫌そうな顔をする。
そう言えば、優一時代に「最新モデル登場、７８７ドリームライナー」何てニュースでやってたし、今は７９７も登場しているものね。
「ああいや、同じ７７７でも世代によって違うんだよ。もっと新しい７７７もあるよ」

あたしたちの顔を見たのか蓬莱教授が慌てた様子で付け加えてくる。
そうこうしている間に機体前方にあるあたしたちの座席を見つけたので、あたしたちはゆっくりと座り落ち着くことになった。
ビジネスクラスに４人で一列に座ることになり、あたしと浩介くんはもちろん隣同士。
ちなみに、あたしたち４人で一列全てが埋まるというわけではなく、向こう半分は別のお客さんが使う。
「例えば７３７型機なんて、俺が生まれる前からあるけど、未だに改良を重ねて今でも運用、開発中さ。あーでもそろそろ７３７も限界とも言われてるな」
あたしも、ボーイング７３７くらいは聞いたことがある。
あれも古いのと新しいので全く別物になっているらしい。
いずれにしても、この飛行機がやや古めの飛行機であることは分かったわ。
「ともあれ、『安全のしおり』だけはきちんと確認して、シートベルトを締めるんだぞ」
蓬莱教授が念を押すような感じで言う。
「分かってるわよ」
あたしたちも、飛行機事故の検証番組を見たことがあるから分かる。
ここは機体前方の方だけど、万が一、いや億が一のこともあるからきちんと対策をしないといけないわね。
あたしたちに続いて、お客さんが続々と入ってくる。
ビジネスクラスは比較的座席が広くてゆったりとしている。
「当機の機長です。間もなく離陸いたします、シートベルトを必ずお締めください」
機長の男性の声が聞こえ、エンジンの音が僅かに聞こえ始める。
「お、動き出した」
飛行機が誘導路をゆっくりと進み、そのまま滑走路へと入る。
エンジンの音がますます大きくなり、一気に加速していく。

おそらく強い向かい風が吹いているのよね。
それからは一気だった。
機首が上がった上で飛行機は簡単に浮かび上がり窓の向こうからは東京の街が見えてくる。
あたしたちが住む、この街がどんどんと小さくなっていく。
昔プロポーズした観覧車よりも、室堂よりも、大観峰よりも、富士山よりも、あるいはエベレストよりも高い場所へ、飛行機は進んでいく。
やがて雲に阻まれて窓から地上を見るのも難しくなっていく。
座席の前のテレビでニュース番組をやっているみたいなので、それに合わせることにした。
しばらくすると前方のシートベルトランプが消灯したが、あたしたちは気にせずそのままシートベルトを付けておいた。
「この感覚も久しぶりだな。だが今後北海道に出張する際には、飛行機も何度も使うことになるだろうな」
「ええ、そうでしょうね」
とは言え、北海道工場の責任者にも、新たに別の取締役を充てる予定になっている。
その人はあたしたち研究所の先輩で、今は別の医療系企業で働いている人を迎え入れることになっている。
彼もまた、かなり蓬莱教授に心酔していた人だったらしいので、まず問題ないだろうとのことだった。
「あーただ、北海道新幹線が開業したら、台風シーズンや冬場なんかはそっちを使った方がいいだろうな。空の便は、欠航になりやすいが、新幹線は悪天候にとても強いんだ。時間がかかっても、選ぶメリットはある」
蓬莱教授が静かにそう言う。
「それに、今回の工場の予定地を考えても、札幌ですぐ乗り換えられるから、搭乗手続きの煩雑さがなくて済むのよ」
永原先生は、やはり鉄道を推すみたいだわ。
飛行機の外のエンジン音は、思ったより大分静かで、かなり機内は

快適になっている。
とは言え、それでも時折僅かに揺れるみたいで、これらはどうしても気流の乱れなどもあって致し方ないらしい。
「飛行機、これも私にとっては登場した時には信じられないものだったわ。今でも覚えているわよ。『アメリカのウィルバー・ライトとオービル・ライトの兄弟が飛行機で空を飛んだ』ってニュースはね」
ライト兄弟は伝記にもなっている人物で、自転車屋さんを本業としつつ、人類で初めて空を飛ぶことを実現させた兄弟でもある。
「あの日は、鉄道が開通したときほどではなかったけれど、それはもう驚いたわよ。比良さんも、余呉さんも驚いたって言ってたわ。戦乱の時代から鳥は空を飛べるが、私達には無理なことが常識だったもの」
今こうして飛行機というものを使って、大きな飛行機なら何百人もの人間が2人の操縦士によって空をとぶことが出来ると考えると、ライト兄弟の時代でさえ、そんなことは考えられなかったはずだわ。
永原先生の５０８年の人生は江戸時代まででその7割近くを占めている。
でも、残りの3割は、急速に世の中が変わっていき、時間の進み方さえ遅く感じてしまっているという。
あたしが女の子になったのは１６歳の終わりの頃で、来年女の子１０週年を迎えると考えれば、永原先生における明治以降の人生の濃さが分かるわね。
「ああ、テクノロジーは大きく変わったさ、人類は宇宙にさえ行けるし、いや……この技術を日本中に浸透させ、日本人は１００年後までに月や火星、金星への移住を実現させねばな」
蓬莱教授が改めて決意を込めて言う。
そう、今から行くのもそんな希望と未来を作り出す工場だから。
極めて事故率の低い飛行機は、とても安全に日本列島を北上していった。
津軽海峡を越えて、函館から更に北へ行き、そして高度を下げ始めた。
「ご搭乗の皆様、当機の機長です。本機は間もなく着陸いたします。

シートベルトを締めて、着陸に備えてください」
機長さんのアナウンスと共に、あたしたちも足元の手荷物をまとめ、ゆったりと座る。
離陸時と同じように、機首がやや引き上がる形で少しだけ下から押し上げられるような感覚を受け、そのまま減速し、一旦停止すると、飛行機はゆっくりとした速度で誘導路へと向かっていった。
「さ、飛行機が完全に止まったら、俺達も出るぞ」
「はい」
あたしたちは蓬莱教授の誘導のもと、他の乗客たちに紛れ込んで、飛行機の外へと出た。
ビジネスクラスなので、出るのは比較的早く出られた。
何だかあたしたち、ちょっと視線を感じるけど、まあ気のせいよね。
「よし、ここが新千歳空港だ」
一瞬、ここがもう北海道だというのがあたしには信じられなかった。
だって、離陸してからまだ、2時間も経っていないのに、もう北の大地に到着してしまったんだもの。
でも確かに、ここが北海道だということはあたしにも分かる。
「新千歳空港駅から乗車券は買っているか？」
「はい」
今回は、新千歳空港駅から快速列車に乗って、札幌駅で旭川方面へと乗り換えることになっている。
工場の建設を予定しているのは、特急列車こそ止まらないが駅前にはそれなりの人もいる駅に決まっている。
あたしたちは空港のすぐ近くに隣接している駅に入ると、「快速エアポート」と書かれた電車に乗り込んだ。
アナウンスは男性の声で、「小樽行き」であることを案内している。
札幌、小樽、あたしでも知っている、北海道の有名な地名だ。
「京浜急行と同じで、これも空港連絡列車よ。鉄道と飛行機は競合しつつもこうして協調もするのよ」
永原先生が、柔らかくそう話してくれた。

快速列車は南千歳駅を発車し、そのまま北上していく。
この辺は札幌近郊圏とあってか、人の数も比較的多い。
列車内も、あたしたちと同じように飛行機から乗り継いだお客さんで占められていたが、途中の駅で乗り換える人も多かった。
そしてどんどん、あたしたちが普段住んでいるような、大都市の雰囲気を醸し出してきた。
「間もなく、札幌です」
アナウンスの声が示す通り、ここが北海道最大の都市、札幌ということになる。
札幌駅は比較的大きな駅で、ホームの数も多い。ラーメン屋さんにでも寄りたいけど、今は我慢して乗り換える。
……市役所の人が、ご飯をもてなしてくれるそうなので。
札幌駅の案内に沿って、今度は旭川方面の普通列車に乗り換える。
それにしても、北海道とあって、あたしたちの住んでいる首都圏と比べると大分涼しいわね。
「工場の最寄り駅と市役所の最寄り駅が違うから、注意してね」
「うん、分かっているわ」
市役所から帰りの電車の乗車券はまだ買っていない。
普通列車はさっきとは違ってオールロングシートの雰囲気で、扉にはボタンが付いていてそれを押してドアを開閉するタイプだった。
「そう言えば、さっきの快速列車もだけど、防寒対策が凄いわね」
関東の列車と比べると、そういった設備が充実している代わりに、スペースの効率は悪そうに見えた。
これも、北海道という土地柄、そうなのかもしれないわね。
「そりゃあそうよ、北海道の冬は本州以南とは格が違うのよ、格が」
永原先生が自慢げにそう話す。
おそらく、永原先生も以前、教師の仕事で北海道に来たことがあったのかもしれないわね。
「そ、そうなんだ……」
各駅停車は、比較的短い駅間で進んでいく。
途中の白石駅まではさっきの道を引き返すわけだけど、これは分岐

駅を通過する故に、仕方ないことだった。
永原先生によれば、「こういうのは『分岐駅通過の特例』で運賃には含まれないのよ、ただし途中下車はダメよ」とのことだった。
「間もなく――」
「さ、つくぞ。準備してくれ」
「「はい」」
あたしたちは、蓬莱教授の誘導のもと、駅を降りて市役所へ向かう準備をする。
さて、今回の市長さんは誰かしら？

## 北海道での歓迎

「あー、優子さん、市役所はこっち」
「あ、はい」
あたしが列から少し前に出ると蓬莱教授に呼び止められてしまう。
ちょっとだけ道を間違えたが、すぐに修正できてよかったわ。
広い北海道で迷ったら最悪遭難ってことに成りかねない。今は夏だからいいけど、冬ともなれば凍死の危険性もあるし。
うーん、北海道に来るのは初めてだけど、とにかく涼しいわね。
さっきの札幌と比べても、この辺りは札幌の衛星都市と言っても、都市化もそこまで進んでいないものね。

「よしここだ、ついたぞ」
しばらく歩くと、蓬莱教授が市役所の前に立ち止まる。
この時間の通行人は少ないが、それでもあたしたちに向けられる視線は強烈ね。
傍目から見ると見た目年齢４０代おじさんと、２０歳位の長男、１０代後半くらいのかわいくて胸の大きい長女と１０代前半に見えるロリ巨乳の次女という感じに見えるのかもしれない。
実際には一番年下に見える永原先生が一番年上で、しかも蓬莱教授の９倍近い年数を生きているのよね。
もちろん、あたしたち４人のことをきちんと知っている人ならば、あたしたちが「蓬莱カンパニーの重鎮たち」であることはすぐに分かる。
それを察している人からすれば、それは「うちの街に蓬莱カンパニーの工場ができる」という意味でもある。
ピピピピ……ピピピピ……
中に入ろうとした所、突然誰かの電話が鳴ったので、あたしたちは一旦立ち止まることにした。
「おっと、比良さんからだ」
浩介くんのスマホに比良さんから電話がかかって来たみたいね。

一体何かしら？
「そういえば、定期連絡を頼んでおいたっけ？」
蓬莱教授が思い出したかのように言う。
もー、常務のあたしにも共有してよねえ……こういう所大事よ。
「ああ……はい……はい……はい、それで変わったことは？　はい……分かりました……それではお願いします」
電話はごく短い時間で終わってしまった。
どうやら、特に問題はなかったらしいわね。
「よし、じゃあ行こうか」
浩介くんも、特にあたしたちに伝える必要はないと踏んだのか、何の電話かも話さずに建物の中に入ろうとする。
あたしも気にしないことにしよう。今はこっちが大事だもの。
「ああ」
あたしたちはどうだったかも聞かずにそのまま市役所へと進む。
市役所は北関東のものよりもやや小規模だがそれでもこの街もそれなりの人口はいる。
この交渉が終われば、正式にここに工場ができる。
そうなれば、北関東にある本部工場がそうであるように、間違いなく祝賀歓迎ムードに包まれるはずだわ。
あたしたちは市役所をくぐって中へと足を進めた。
そして、市役所にある受付へとまっすぐ向かっていく。
「あ、蓬莱カンパニー御一行様ですか？」
あたした近付くと、向こうの方から声をかけてきてくれた。
これなら面倒がなくていいわね。
「はい、俺がいかにも蓬莱カンパニー会長の蓬莱伸吾だ」
「同じく社長の篠原浩介と申します」
「同じく常務の篠原優子です」
「相談役の永原マキノと申します」
あたしたちが全員名前を名乗る。
すると受付の人も安堵の表情をしてくれる。
どうやら待っていたらしいわね。

「こちらでお待ち下さい。今市長が参ります」
受付の人に椅子に座るように促されあたしたちもゆっくりと腰掛ける。
市役所の中にはあまり多くの人はいなくて、一応市の人口としては北関東とそこまで変わらないはずだけど、やっぱり北海道だと違うのかしら？
すると向こうからやはり初老の男性がこちらに歩いてきた。
それが市長さんであることは、あたしには容易に想像できた。
「ああお待たせ致しました。今回は蓬莱カンパニー様の工場にですね、当市を選んでいただきまして、誠に感謝の極みでございます」
まずあたしからが立ち上がり、1人1人市長さんと握手する。
やはり市長さんは北関東の本工場の時の市長さんと同じく歓迎ムードだった。
「私この市で市長をしております――」
そして、あたしたちはまた各自自己紹介をして名刺を渡していく。
あたしが持っている「蓬莱カンパニー株式会社常務取締役篠原優子」という名刺も、多くの人に語り継がれるのかもしれないわね。
ともあれ今は、市長さんについていかないと。
「では予定地までは市用車で向かいましょうか？」
「ああいや、徒歩でいいよ」
工員さんたちの通勤ということも考えないといけないもの。
そう言う時にあたしたちも実際に体を動かして確かてみるのはとても大事なことになるわね。
「分かりました。では私がご案内いたします」
市長さんが前に進み、あたしたちもそれに続く。
市役所を出て左に曲がって何度か曲がった後に、道路を道なりに進むと大きな橋に差し掛かった。
「石狩川……」
浩介くんが川の名前が書かれた看板を見て川の名前をつぶやく。
工場の予定地はこの川を渡った向こうにある。
このあたりまでは建物が多いが、川の向こう側は農地になってい

る。
氾濫の可能性も考慮してあたしたちの工場は川から少し離れた所に建設することになっている。
「そうそう、このあたりは別の川とも合流するんですよ」
このあたりは石狩川とその支流の合流点でもある。
関東の内陸部と比べると比較的海に近く、この川も向こう岸までは結構歩くわね。
「ふう……」
大学に入って、高校の時は「軽い身体障害」とまで呼ばれたあたしも、今は少し体力がマシになった。
とは言え、あたしの元の体が弱いことには変わりはないのよね。
だから、大企業の常務だからって無理をしすぎないように気をつけないと、体調を崩したら浩介くん悲しんじゃうわ。
「ここが予定地です」
予定地は、やはり本部工場の元の土地と同じく、辺り一面に広がる巨大な農地だった。
そして、権利者たちはあたしたちに快く土地を売ってくれるという。
話しによれば、稼働する工場の広さはメインの工場よりもやや小さめで車社会を反映して駐車場のスペースをやや広くする予定になっている。
また予備の設備のスペースも広めに取る予定で、それらを総合するとメインの工場と同じくらいの広さになるが、土地代の違いから、こちらの方が投資額は少なくて済むようになっている。
いずれにしても、北海道に大きな雇用を作り出すことは間違いなく、地方の活性化にもつながっていくとあたしたちは考えている。
……最も、北海道にサブ工場を作ったのは、相も変わらず防衛的な動機だったりするんだけど、誘致を受ける市の人達からすればそんなの関係ないわよね。
「では、これで以上です。ありがとうございました」

あの後市役所へ戻り、この前のメイン工場の時と同じように市長さんと交渉を終え、いよいよここにも工場が建つことが決定した。
あの時とは違い、あたしたち最上層部が出る機会は少なくなった。
この先の建設会社の決定などは、建設業界の例のお偉いさんに任せている。
「それじゃあ、遅くなりましたがご昼食に致しましょう。こちらへどうぞ」
「はい」
市長さんがそう言うと、立ち上がって、ラーメンを奢ってくれるという。
北海道には多くの名産品があるけど、そうした名物の1つにラーメンがあるというのは、あたしたちも知っている。
北海道ラーメンといえば、あたしたちの地方でもインスタント食品ながらテレビでＣＭをしている。
今回市長さんがおすすめしてくれるラーメン屋さんはこの市役所のすぐ近くで、駅までの道の途中にある。

ガララララ……
「いらしゃい、おう市長さん。こちらが蓬莱カンパニーの方々で？」
ラーメン屋さんのおじさんがあたし達を見た途端に顔が変わる。
言うまでもなく、ラーメン屋さんにも既に予約が入っているので店内には開いたスペースがある。
「ええ」
あたしが肯定の意を示すと、ラーメン屋さんのおじさんがニッコリと笑う。
「本当に、わが町を選んでくださってありがとうございました。さ、どのラーメンも無料ですからね、遠慮なくどうぞ」
といっても、ラーメンを残すわけには行かないので、あたしたちはラーメンの量を考えつつ適当な量を注文する。
あたしと永原先生は普通にみそラーメン、市長さんと蓬莱教授はみそチャーシューメン、浩介くんがみそチャーシューメンの大盛りだっ

た。
　このあたりは札幌圏なので、味噌ラーメンが中心になっている。
「北海道のラーメンは美味しいわよ。特に冬の寒い環境が、ラーメンを熱く、太くしたわ」
　永原先生の講釈が始まったわね。
　本当、永原先生は人生が長いせいか、あらゆることに知識を持っているわね。
「おう、よく知っとるな」
　ラーメン屋のおじさんも、驚いた顔をしているわね。
「えへへ。私も北海道は何度も来たことがあるのよ」
「って、よく見たらあなた。永原さんじゃないか。本当に５００年も生きているんかい？」
　永原先生も、真の人類最高齢の人ということもあって蓬莱教授の不老研究が注目される度に知名度が上がっていって、今では永原先生目当てに小谷学園を受験する人も多いとか。
　で、見ず知らずの人から永原先生に向けられる質問というのはいつも年齢のことばかりで、いくら実年齢が重要じゃないと言っても、女性にそういうのを気軽に聞くのって本当に失礼しちゃうわよね。
「ええもちろんよ。蓬莱先生の年齢証明があるもの」
　永原先生も、最初は「女性に年齢を聞くなんて失礼」って返してたけど、それで問いが終わるわけでもないので今ではこうやって答えているらしいわね。
「へえ、文献的には？」
　おや？　こう突っ込む人は珍しいわね。
　そういえば歴史学的にはどこまで遡れるのかしら？
「うーん、一応私の日記の筆跡から、江戸初期の頃から生きていたのは証明できていて……あ、そうそう、真田家の古文書で当時の戸籍が出てきて、その中に『鳩原刀根之助は永正１５年生まれで天文７年に行方不明』『柳ヶ瀬まつは生年不明で天正１０年に行方不明』という記録があったってニュースでやってたわね」
　永原先生は、自分のことなのにどこか他人事のように言う。

「へえ、じゃあ文献的には証明は難しいと」
「ええ、『鳩原刀根之助』と『柳ヶ瀬まつ』を直接繋げる文献は、私自身が書いた『柳ヶ瀬まつ一代記』と江戸城で書いた『柳ヶ瀬日記』のみよ」
文献的には、遡れるのはそこまでだという。
つまり、歴史学的文献では、「鳩原刀根之助」と「柳ヶ瀬まつ」をつなげる直接的証拠は存在していない。
もちろん、真田家の戸籍やその他各所に残る「柳ヶ瀬まつ」の文献からも、一代記との記述が一致するので、少なくとも『柳ヶ瀬まつ』が室町時代生まれの人で、ＴＳ病のために現代まで名前を変えながら生きていて、更に天文７年に行方不明になった「鳩原刀根之助」という人物と、ほぼ９割型同一人物なのは史学的にも濃厚だけど、立証まではされていないそうだ。
「ああ、そこで俺の研究の登場ってわけだ」
それを、蓬莱教授の開発した年齢証明によって、永原先生の年齢を証明することが出来ている。
蓬莱教授は胸を張るように言う。
何分、この天才教授はＴＳ病患者の年齢証明を、あたしたちと同い年の時くらいにしてしまったんだから、驚きだわ。
「なるほどな。やっぱ蓬莱教授は日本の誇りだ。永原さんも、本当に凄まじい波乱万丈な人生だったな」
最も、文献上でも、江戸城の日記から永原先生の年齢が分かる。
筆跡が永原先生のものとほぼ一致し、更にその日記の冒頭にも、「時に承応二年、我柳ヶ瀬まつは鳩原刀根之助として永正十五年に生れ、齢百三十六、天文七年に女の身となりし奇病により村を逃亡し候」という記述が存在するので、これをもって永原先生の年齢は文献的に証明できないこともないという。
また永原先生の貢献により、戦国時代及び江戸時代の話し言葉が相当復元されていて、「室町時代の言葉」とされていた狂言も、ずばり母語話者たる永原先生によって幾つか修正されたりもしているらしい。
「そうよ、伊達に世界一の長寿じゃないのよ。１２０歳の壁も殆ど越

えられないおばあさんたちには負けないのよ」
永原先生が自信たっぷりにそう答える。
普段の永原先生の言動からしても、もはや永原先生の年齢を疑う人は居ない。
ちなみに、長寿認定をする国際機関は、ＴＳ病の患者を最初からカウントしないことになっている。
今後は蓬莱の薬を飲む人が日本人では一般化し、１００年後には世界でも一般化するため、長寿記録を考える意味は急速に薄れてきているのも事実。
最も、ＴＳ病の存在が世界的に知られるようになったのも、ここ１０年経ってない最近のことではあったけど、それにしても、「長寿世界一認定」何てことをしていたのをみて、永原先生はどう思っていたのかしら？
「永原先生は長寿認定ってどう思ってるのかしら？」
「そうねえ、不老足り得ない人で勝手にしているならいいけど、今になって思えば『長寿世界一』って言いふらさないで欲しいって思っちゃうわね。私なんて比良さんと余呉さんを合わせた年齢よりも生きているもの。比良さんや余呉さんだって、不老たり得ない人間なら到底ここまで生きられないのにね」
永原先生の戦いは孤高だった。
永原先生の次に年上の人の生まれ年は江戸後期、それまでＴＳ病は不吉だとしてすぐに殺されてしまっていたもの。
「へい、ラーメンお待ち」
話し込んでいると、いつの間にかラーメンが出来ていた。
「わあ、美味しそうだわ」
あたしたちは、ラーメンを食べる。
うん、味噌の味がとっても美味しいわ。
この麺もとても食べごたえがあって、でも北海道らしくてあたしにはちょっときついかしら？
普通サイズにしておいてよかったわね。
「さ、我がラーメン屋も繁盛するな。場合によっては移転も考えんと」

「その必要はないですよ。ここはいい場所ですから」
ラーメン屋のおじさんの言葉が、耳を離れなかった。
この地域も、のどかな地域だけど、あたしたち蓬莱カンパニーの工場が出て繁盛するようになると思われる。
こんな風景も、もうあと少しなのかもしれないわね。
「今日はありがとうございました」
「ええこちらこそ、お気をつけてお帰りください」
北海道への日帰り出張なので、あたしたちはすぐに駅から新千歳空港に引き返す。
出張の終わりの時間は全く読めなかったため、飛行機に乗るにはそれなりに高い運賃を払わなければいけないのよね。
……まあ、仕方ないわ。それでも時間のかかる鉄道だったら、日帰りは無理だったもの。

ちなみに帰りの飛行機は、ボーイング７９７という、去年納入されたばかりの最新機種だった。
燃費もよく、乗り心地も行きの飛行機よりも抜群に良かった。
行きに乗った「７７７―３００ＥＲ」という旧式の飛行機と比べると、その技術の差は歴然としていた。
「ただいまーふー疲れたー」
帰りはさすがに疲れたので、あたしたちはそのまま家のベッドで休むことにした。
母さんたちも、今日は配慮してくれたのか、わざわざ夕食を家に持ってきてくれた。
「今日は北海道まで出張したのね、凄いわ優子ちゃん」
「うん、ありがとうお義母さん」
あたしとお義母さんの関係は、結婚前から良かったけど、結婚当初よりもずっと良くなっている。
あたしが「優子」を心がけ、女の子らしい女の子になったことで、お義母さんも「女」を取り戻したくなった。
最近は、お義母さんのお化粧もうまくなっていて、本当に凄いわ。

あたしたちは長年慣れ親しんだ安息の地で、ゆっくりと身体を休めることにした。

さて、新工場の話はどう出るかしら？　心配するほどのことでもないあかな？

## 支店建設

「はい、はい……分かりました」

８月終わり。あたしは、専務の比良さんから電話を受けとって急ぎの話をした。

比良さんによれば、「蓬莱の薬は３億円一括払い、工場直売のみという状況にも関わらず連日完売」とのことで、増産がとても追いつかないと和邇先輩が悲鳴を上げているという。

今は一応その販売構造上、転売は物理的にも不可能にはなっているが、需給曲線が狂うと色々と不安定なことになるのは確実なので、早急に対策を取る必要があるのは事実だ。

蓬莱教授としては、こうした早期完売は、「自社の供給能力不足」というネガティブな認識なので、急いで北海道の工場を作るための予算を増額すると同時に、流通の確立を目指すためにも全国各地の支店建設も急ぐことになった。

まずは支店第一号として、あたしたち蓬莱カンパニーの本社も入っているビルの１階に、第１号店をオープンする運びになった。

さて、あたしたちの当面の目標は、当然全国全ての都道府県に支店を出すことに決まった。

そのための協議として、今日は本社で会議何だけど、服装はいつもよりもラフな感じになった。

「これからというベンチャー企業だからな、あまり服装にこだわっても仕方あるまいて」

蓬莱教授がニッコリとした表情で話す。

蓬莱教授ももう実年齢は６０代だけれども、外見年齢は４０代後半で停止していて、ある意味であたしたち以上に実年齢と外見年齢の差異が出てきた。

一方でこれは、蓬莱の薬が、確実に効果のあるものだという傍証にもなっている。

「今のところトラブルはないようで良かったわ」

今、インターネット上の数多のＳＮＳサイトでも、「3億払って蓬莱の薬を飲んでみた」という投稿と共に、数日後に病院で不老の薬が効いているかどうかの診断結果を投稿する人も相次いでいる。
今の所は、「飲み忘れ」のトラブルが一番多いけど、実際の所は1日くらい忘れてしまっても問題はないようには出来ている。
一応、飲み忘れた場合は専用の従業員さんが連絡し、時間的に余裕がつかない場合は、所定の場所まで直接持っていくことになっていて、お客さんにもその場で飲んでもらっている。
ちなみに、あたしたちは本当に不老になったかどうかの医師の診断結果の公開を一切自由としたため、多くの人たちが「不老化」を喜ぶ投稿を続けていた。これによって蓬莱の薬に対する「偽物説」は払拭され、また最近では「高くて買えない」という人も「待てばいい」という風潮に変化し始めてくれた。
この前会った高月くんも、匿名ながらＳＮＳで、ついに不老の薬で不老化したと喜んでいた。
一応、5本の薬のうち3本が不良品でも、残り2本が完全不老なら問題ない程度には安全係数が高くできている。
もちろん歩留まりも絶賛改善中で、今後供給を増やし、更なる大衆化に弾みをつけたいわね。
とはいえ、何分今は全日本、いずれは全世界の人間が対象だから、どうしてもまずいケースというのは出てしまうんだろうけど。
コンコン
「はーい」
扉をノックする音と共に、比良さんと余呉さんが入ってきた。
「すみません、ちょっと仕事が押していまして」
比良さんと余呉さんは、あたしたちに代わって普段のここを任されていて、最近はかなり多忙を極めている。
これは、あたしたちよりも役員報酬を増額してあげないといけないわね。
「ああいや、いいんだ。それよりも今日のテーマだな。早速本題に入ろうか」

蓬莱教授の指令のもと、会議が始まった。
この場にいるのは全員取締役だけど、現場を任されている和邇先輩は不在になっている。
「はい、支店網の建設ですよね」
「ああそうだ。まず1号店はこのビルに入れる。2号店以降は、まずは高級住宅街や大手企業の本社が多数林立するオフィス街などのある街を中心に建設していきたい」
浩介くんがまず東京の地図を持ち出して青写真を広げた。
それによれば、高輪、青山、永田町、銀座などといった高級中の高級所から支店を作っていくという。
実際に、顧客のデータからも、今の所はこうした場所に住んでいる人々や、務めている人々の割合が極めて高いことが分かっている。
「……悪いが俺は反対だな」
「え!?」
これに対していきなり蓬莱教授から異議が入り、浩介くんも驚いてしまう。
まあ、あたしは「これは反対されるわね」ってすぐに分かることだと思うけども。
「考えてもみるんだ。そんな高級地域にばかり出店したら、将来のイメージとしてよくないだろ?」
「あー、そうか」
浩介くんも、自分の間違いに気付いたのか、「あー」という表情になる。
とにかく、声の大きいネガティブ意見を払拭するためにも、これだけの支持率を持っていても蓬莱教授は油断はしないわね。
「俺としては、まずオフィス街やオフィスビルに出店していくのがいいと思う。そこなら、初期の不老ターゲットである俺と同年代か少し下の高年の男女を対象にできる」
蓬莱カンパニーとそれを支持する日本政府がまず目指すのは、とにかく老人の数を減らすことで社会保障の楔を切って国力を増強させること。

今いる老人は仕方ないにしても、将来的に再生産しないようにはしていきたい。
そこで、まずは４０代５０代の人を優先的に配りたいと思っている。
「ええですが、今の所ある程度恵まれた会社員からの需要もそこまで高くないんですよね。どちらかというと親の金を借りた３０代以下といったところですか」
ただ、今のところ、その世代の販売状況は芳しくないらしい。
というのも、蓬莱の薬や蓬莱教授の思想には賛同するものの、自らはそのまま老いて死んで、子供などに薬を飲ませるという方向で考えている人が多いという。
高月くんの両親もまた、それに似ているのよね。
「ふーむ、とはいえ、早く法律や税制を予定通りに変更して、蓬莱の薬を前提とした社会を作り上げねばならん。そのためにも、供給を一刻も早く増やし、値段を下げさせるしかない。急がねばまたネガティブ論が台頭してしまう」
実際の所、その手のネガティブ系の議論をする人は極めて少数の声の大きい人であると見られていて、実際何が起こってもネガティブにしか捉えられない救い用のない人間でもある。
しかし、需給バランスを言い訳に価格の高止まりが続けば、例え結論が間違いであったとしても、それらに説得力を与えてしまうことにはなってしまうのよね。
「ともあれ、今はこのビルに支店を建てて、1ヶ月ほどしたら試験として今度は大阪に2号店、更に大都市圏の、特にオフィスビルと住宅街のある地域を中心に店舗を増やしていきましょう。商店街や歓楽街の多い地域や、観光の強い地域は後回しでいいと思います」
比良さんが、地図を見ながら出店先を考えている。
逆に言えば、観光的地域には、そこまで支店を構える必要はないということになるわね。
「他には、出張所形式もいいでしょう。地方の小さな町に在住している人が、予約制で受け取るというもので、普段は無人にしておくんで

す。もちろん、在庫は毎日支店に持ち帰って厳重に管理します」
比良さんが、新しい出店方式を提言する。
「うーん、それだと機密の保持に不安があるなあ」
蓬莱教授はやや難色を示した。
実際、この出張所システムでは機密漏洩の危険性もあるし、相互監視にするためには複数人の派遣が必要不可欠になる。
「私としては、ある程度日付を同日にしてもらうのと、車で運ぶ時に複数で監視して、更に運転席にも監視カメラをつけて支店の方でも不振な動きがないか監視しましょう」
比良さんの方でも、対策は考えておいたらしいわね。
「……ああ、それがいいな」
監視企業は居心地悪いだろうが、蓬莱の薬の特殊性をかんがみて、従業員たちには理解を求めていく他ないわね。
まあ幸いにも、うちの従業員さんたちはマナーもいいけど。
……そういえば、うちの高校の元クラスメイトも、何人かここに転職してきたわね。
「経費削減も、少しは考えた方がいいでしょう。もし上場したときに株主総会が行われるとして、『機密保持』一辺倒では限界がありますから」
「うーむ」
結局、従業員に対する相互監視を徹底することで、機密漏洩を防止するというのが、最も安全で妥当だという結論になった。
ともあれ、出張所は小さな集落などにも作ることも考えられてはいるけど、とにかくどうすればいいかはもう少し煮詰めておいて、今は大都市圏の「支店」システムも考えなければいけないわね。
「大都市圏ばかりに支店を建てるのもよくないな。地方と平行しないと、またネガティブ論者が今度は『都会の人間だけ』と言ってくるだろうしな」
蓬莱教授は、とにかく完璧主義者らしいわね。とにかく「隙を与えたくない」というのがひしひしと伝わってくるわ。
あたしだったら、「もう何を言っても無駄」位にしか思わないのに。

とにかく自分に逆らってネガティブ論を撒き散らす１％いるかいないかの人間を打ち負かすことに夢中になっている姿は、あたしから見ると少し怖い印象さえ与えてしまうわ。
まあ、だからこそ蓬莱教授はノーベル賞になったんだと思うけどね。
「さて、次だ。具体的に支店を出すと言っても、支店の数や出店計画を我々で把握しきるのは、今は可能でもすぐに不可能になることは明らかだ」
あたしたちは、組織の巨大化を前提とした議論に移行した。
「ええ、分かっています」
余呉さんが、当面の計画をまとめたプリントをあたしたちに手渡してくれる。
「まず店員さんを統括する店長を作ります。そして店長の上に付近一帯の店を管轄するスーパーバイザー……地域ＳＶを作ります。お店の数が増えて地域ＳＶの数が増えて来たら、今度はそこに広域ＳＶを、更に広域ＳＶの上に『支店統括長』を置きまして、こちらを余呉さんにしていただく予定になっています」
余呉さんは平の取締役で、今は色々な事業を統括しているけれど、今後は各支店を統括する役割も担うことになるらしいわね。
「うむ、それから社内監査についてはどうなっている？」
「ええ、及び腰な法人が多かったですけれども、１法人が手をあげてくださいました」
「おお、よかった」
ともあれ、株式上場に向けては、この監査法人の存在が欠かせない。
とはいえ、蓬莱カンパニーの強権性を考えると、世間から「果たして正常に監査法人が機能するかどうか」に疑問符が投げ掛けられてしまうのは、致し方ないとは思う。
蓬莱教授の意向はわからないけれど。
「支店が建ち初めて、株式も公開したら、俺はいよいよ会長としては名誉職化させるつもりだ。あー後残っているとすれば、子供の難病患者向けの『１２０歳の薬』を販売することくらいだな」

蓬莱の薬の副作用で、ガンや心筋梗塞などの病気にはならなくなる。

小児のうちにこの薬を飲むと、そこで老化が止まってしまうため、蓬莱の薬には１６歳以上の年齢制限がある。

つまり１６歳未満で難病になり、かつ蓬莱の薬で治せる病気の患者向けに、北海道工場で１２０歳の薬を作るかという。

この薬を飲んだ患者には、特別割引のサービスをつけることも決定してはいるけれど、もちろん２つ買った方が高くついてしまうのにはか代わりはない。

「更に新規出店には、そのための経営戦略部を創設する予定にもなっています」

あたしたちが決めるのは、大まかな出店方針までで、そこから先は部下の裁量に任せることになった。

まだできたばかり、生まれたばかりも企業だけれども、すでにかなりの人数を抱える大所帯になってきて、既にあたしたちだけでは判断が難しい状況にもなっている。

今の所は特に問題はないけれども、今後は子会社や関連会社も数多く必要になってくるだろうし、そうした事業を俯瞰的に見た役割が、今後社長の浩介くんを含め、あたしたち取締役に求められていくと思う。

新規店舗の進出やマーケティング部との連携なども、十分に考えていかなきゃいけないわね。

「求人はきちんと出しておかないとな。それから、一度面接で落ちた人も『また来ていい』ということも、ちゃんと宣伝しておいてくれ」

浩介くんが比良さんにそう指示を与える。

「はい、分かりました」

比良さんも、江戸時代の元水戸藩士とあってか、「わきまえる」ということをよく心得ている。

２人の間に歳の差は１６０歳、親と来孫位の差があるけれど、あたしたちにはそれは関係がなかった。

今はまだ遠い将来のことだけど、この年齢差も、あまり大きな問題

にはならなくなるから、時代を先取りしているにすぎないのよね。
「よし、じゃあ今日の会議はここまでかな？」
「ええ、特に無いな。北海道の工場については、札幌まではトラックを予定していたが、もしかしたらＪＲ側が貨物駅を作りたいと言うやもしれん。そしたら貨物列車の引き込み線を作るために追加で出費が必要かもしれないので注意してくれ」
「ええ、分かったわ」
今はもう、蓬莱教授の資産からの出費は少なくなっている。
売り上げが思った以上に堅調で、既に蓬莱カンパニーは初期投資を除けば大幅な黒字を達成していた。
ちなみに、儲かった金額の多くは、従業員を引き留めるためにも、給与に充て、株主への配当は控えめにすることになった。

あたしたちは帰り道に新聞を読んでいる人に出くわした。
それ自体はもう数えきれないくらいに見てきた光景だけれども、そこの新聞には、蓬莱の薬で広まる明るい未来が書かれていた。
「価格固定化への懸念の声とは、メディアも書かないわね」
どうやら、蓬莱カンパニーのメディアへの影響力は、いまだに強力なままだった。
もう蓬莱教授が脅したのだって、かなり昔の話なのにね。
「ああ、何せほら、新工場のことが新聞でやっているぜ」
北海道に工場が建設され始め、生産数が上がれば、不老に対する金銭的ハードルも格段に下がる。
値段を下げきれば、ついに超長期的な分割払いも行われることになっている。
蓬莱の薬は、その時になってようやく、始まるとも言えるわね。
「ええ本当だわ」
自分達のことがこうして新聞に取り上げられているというだけでも、あたしたちはずいぶんと遠いところまで来てしまったんだと感じてしまう。
だってあたしは、女の子になっちゃった高校生で、最初に浩介くん

に恋をして、普通の結婚生活を送って、かわいい子供たちに囲まれる。
そんな普通の幸せが欲しかっただけだった。
あたしがこの大学に入って、蓬莱教授に協力したのだって、浩介くんと死に別れたくなかったから、時間の進みかたを、同じにしたかったから。

「ねえあの２人」
「よく見たら篠原夫妻じゃない？　蓬莱カンパニーの」
「ああ、日本と世界の救世主だぜ」

それなのに、あたしは……全人類を、全世界の運命まで変えてしまった。

「今まだ大学院生なんでしょ？　あの歳で会社の重役と同時なんて大変よねー」
「本当よ。私だったら過労死しそうね」
「うんうん」

一番に変えたのが蓬莱教授だとしても、あたしと浩介くんが行った影響力も決して無視できない。
街の人たちの話し声を耳に傾けながら、あたしと浩介くんは安息の地に向かって歩いていった。
そこだけは、あたしが嫁入りしてからも、ずっと変わらない光景が広がっているから。
「ただいまー」
「あ、２人ともお帰りなさい」
お義母さんが、あたしたちをにっこりと出迎えてくれる。
変わらない安心感が、あたしを包んでくれた。ここに帰れば、大丈夫よね。

## 明かされた秘密

秋の日々があたしたちを包み込む、あれからあたしたちのビルに建設された1号店は順調に売り上げを伸ばしていた。

東京でも販売を開始したため、予約や依頼は更に殺到し、あたしたちは全速力で薬を生産し続けている。

昨日、日本政府は老後の概念がなくなることを念頭に、社会保障費の大幅削減とそれに伴う大減税、更に防衛関係費を中心とした他事業予算の大幅増額を発表した。

本来なら野党議員が猛反発しそうなものだけど、元々蓬莱の薬の性質上こうなることは確定事項で、また圧倒的な世論を背景に、反対の声やデモはことごとく起きていなかった。

最も、これについては、「子孫が連座させられる」という噂が流れ、自然と国民同士で相互監視のような状況になったのも大きいけど。

改めて考えると、これも永原先生の狙いだったのかもしれないわね。

家族や子孫を連座させられると脅されれば、当然声をあげるのが難しくなるし、そのうち疑心暗鬼に陥った反対派は、こちらがなにもしなくても勝手に自滅してくれる。

もう数は少ないけれど、日本は1億人を大きく越える人口を持っている。

そのなかで支持率９７％は結構不安定でもあるのよね。

永原先生曰く、「今の国民を信用するのは危険」とのことだった。

「ふう、今日も実験終りね」

博士課程も、多くが終わっていて、あたしたちも博士論文は既に学術誌に載ったもので済ませているため、他の院生たちと比べて、大学院の時間は余っている。

また、企業の黎明期に比べて、取締役が具体的にあれこれ決め細やかに指示する時期は過ぎ、徐々に部長などがその任に当たることになっている。

「あなた、そっちはどう？」

「うん、うまくいってるよ」
あたしたちは、企業が立ち上がったばかりながらも、蓬莱教授と行動を共にした方がいいということで、学費は蓬莱教授持ちながら、ほぼ単位を全て取った状態で、大学院に残ることになった。
言うなれば、蓬莱の研究棟に「出勤」する形になることが増える。
「ここにいるのも来年までよね」
「ああ、思えば長かったよなあ」
浩介くんも、この佐和山大学に長くいたので、かなりの愛着を持っている。
考えて見いれば、大学に4年間、修士2年に博士3年と、小谷学園の3倍の月日をここで過ごしたことになる。
それでも、女の子になったばかりの頃だった小谷学園の日々は、佐和山大学の8年間以上に、かけがえのない思い出がたくさんあるけどね。
「ねえあなた」
あたしはふと、浩介くんの制服姿が見たいと思ってしまった。
蓬莱も薬を飲んでいるから、もちろん現役で通る容姿になっている。
「うん？」
「家に帰ったら、制服、着よっか」
「あーうん、そうだな」
あたしたちの思い出の制服でのプレイは、昔を振り返ったり、懐かしく思った時にしたくなるもの。
在学中にできなかったえっちなことで、あたしたちはとても盛り上がる。
そう言えば、4年前にも、一度だけ、制服で文化祭に行ったっけ？
あの時も学校の夜で、やらかしちゃったわね。
「ただいまー」
「おかえりなさーい。ご飯もう少しかかるからねー」
「はーい」
うん、よかったわ。これならちょっとだけ制服プレイができるわ

ね。
「ねえあなた」
「分かってるって」
ほとんど以心伝心に近い位の夫婦間の目あわせで、あたしは自分の部屋に入ってクローゼットから制服を取り出す。
あの時と変わらない、小谷学園の制服。
今でも駅などで、小谷学園の生徒たちを見る。
その度にあたしは、あの時の日々を、あたしの原点の日々を、思い出していく。
あたしは、下着姿になって制服に着替える。
スカート丈も、あの時の感覚を覚えている。
あたしは、着替え終わると浩介くんの部屋を目指す。
コンコン
「入っていいぞー」
ガチャッ
浩介くんの勢いのいい返事と共に、あたしは部屋の中へと入る。
そこには、あの時と変わらない、素敵な男の子がいた。
「あなた……」
「うっ……やっぱり、女子高生の優子ちゃんってかわいいよね」
「もうっ……」
浩介くんにナチュラルに「かわいい」と言われると、どうしても顔が真っ赤になってしまう。
「ほら、おいで」
浩介くんの優しい手招きが見える。
あたしには、それが罠だと分かっている。
「……はい」
だけどもあたしは、知ってて浩介くんの罠にかかっていく。
完全に心を奪われ、何もかもが虜にされいていく。
さらっ
「やっ……浩介くん、痴漢……」
浩介くんは、制服姿のあたしを痴漢するのが大好き。

浩介くんにスカートの上からお尻をゆっくりと回されていく。
「優子ちゃんのお尻にパンツとスカートが織り成す絶妙な肌触りがたまらねーなあーそしてこっちは――」
むにっ……もみっ……
「んぅあっ！　はぁ……もー」
今度は制服の上から胸を揉みしだかれてしまう。
浩介くんの手の感触がとても心地よくて、あたしの脳がどんどんと蕩けていく。
「優子ちゃん……」
「うん、あたし……」
バタンッ
「浩介ー！　ご飯よー！」
「!!!」
あたしと浩介くんがドアの音に驚いて振り向く。
するとそこには、お義母さんが立っていた。
うー、お義母さんの気配に全く気付かなかったわ。
「え、えっとその……」
浩介くんが、苦し紛れに言葉を発する。
「あーうん、制服でしょ？　別に変じゃないわよ。私もお父さんも知ってたし」
お義母さんは、あっけらかんな表情でそう話す。
「え!?」
ば、バレてたのね。
「そりゃそうよ、翌日の浩介のクローゼットとか見ると、何故か小谷学園の制服がしわくちゃになってることあったもの。それにしても、2人ともかわいいわね」
「あうー」
結婚8年目の夫婦が高校時代の制服でプレイしていたのを義母に見られるって、かなり恥ずかしいシチュエーションだわ。
「ふふ、2人とも本当におしどり夫婦になったわよね」
「あ、あはは……」

あたしたちは結婚したのが早かったから、まだ２０代後半でも結婚は８年目になる。
これだけの年数が経つと、「飽き」のようなことを言う人もいる。
でもあたしたちは、月日が増すごとに、欲求が高まっていくのを感じている。
それは恐らく、蓬莱の薬のお陰だと思う。
「せっかくだから、今日は制服のまま夕食にする？」
お義母さんの突然の提案に、あたしたちはビクッと固まってしまう。
「ああいや、その……遠慮する」
浩介くんが苦々しそうな表情で「遠慮する」と断る。
「あら？　２人とも似合ってるわよ。それに蓬莱の薬飲んでいるんだし、優子ちゃんも不老なんだから大丈夫よ」
「うー、でも恥ずかしいわ」
何故かよく説明できないけど、制服姿でいるのは恥ずかしいと思うようになっていた。
「あら？　制服でデートしたり、文化祭行ったりしたじゃないの」
お義母さんがあたしたちに鋭い突っ込みを入れてくる。
でもそれは、ムードがそうだったからなのよね。
「で、でも今は――」
「あら？　私たちも、高校生の２人と食卓を囲んでみたかったわ……ふふ、そうだわ」
お義母さんがにやけついた表情で言う。
そのニヤニヤ感は、どこか浩介くんに似ていて、浩介くんの母親だと言うことをあたしに改めて教えてくれる。
「へっへーん」
お義母さんがスマホを取り出して電話を掛けようとする。
「ダ、ダメー！」
あたしの訴えも空しく、お義母さんは容赦なく電話を掛ける。
「あ、もしもし石山さん、はい……実はですね、うちの浩介と優子ちゃんがですね。学校の制服を着て部屋に居まして……はい、え!?　じゃ

あ是非うちに来てください！　はい……はい……脱がせないように言っておきますね！」
やっぱり、あたしの両親への電話だった。
今でも両親とは帰省中の他にも、ひょんな所で偶然再開することもあるし、たまにこうして家に呼ばれあうこともある。
でも、こんな理由で呼ばれちゃうなんて、うー、恥ずかしいよお……
「というわけだから、制服脱いだりしちゃダメよ」
「はーい……」
あたしたちは呆然としながら、お義母さんの後姿を目で追っていた。
「ねえあなた、ごめんなさい。あたしのせいで」
「いやいいんだよ。こういうもんは、いつかばれるだろ？」
浩介くんは、仕方ないという表情で、淡々と話す。
「それにさ、ほら。俺たちも不老じゃん？　実年齢なんて気にする必要ないじゃない」
「う、うん……」
浩介くんが気持ちを切り替えるようにあたしに促してきた。
でも知っている。あたしの母さんが暴走気味だってことを。
でも知っている。いかに蓬莱の薬を飲んだとしても、実年齢の問題は完全には払拭されないことを。
「まあ、確かにこれから８０年は勝負だと思うよ。１１０歳越えちゃえば、案外どうってことないんじゃね？」
「あーうん、それはあるかもしれないわね」
蓬莱の薬の価値観が浸透し、当たり前になる前は、やはり実年齢についてはどうしたって付きまとってくる問題だとは思う。
１００歳１１０歳ともなれば現実離れしてくるけど、これから３０代４０代５０代６０代となってくると、イメージと見た目のギャップに苦しむかもしれないわね。
「ま、ともかくこうなっちゃった以上は覚悟を決めねえとな」
「う、うん……」
あたしは、精神的な疲れから、部屋の床に女の子座りをする。

「優子ちゃん、大丈夫？」
「うん、ちょっと疲れちゃって」
「そう？　じゃあ……」
　もみっ……もみっ……
「あー気持ちいいわ……」
　浩介くんから肩を揉まれ、凝りがほぐれていく。
　この時間は、いつもあたしを夢中にさせてくれるわ。
「優子ちゃん、肩こり相変わらずだな」
「うん、そうよね」
　これだけ重いものを、ずっとぶら下げているのだから当たり前と言えば当たり前で、自分の部屋で休むときはベッドで横になることが多いのも、この重みから解放されるからという側面も強い。
「俺たちがこうして制服着てた時からもこうだったもんな」
「うん……あー気持ちいいわ」
　あたしの至福の時間、こうして肩がほぐれ続ける。
　すると突然、玄関の扉が開く音がした。
「おじゃましまーす」
　母さんの声が聞こえてきた。
　あたしたちは大慌てで立ち上がる。
「もうやけだ。行こうぜ」
「うん」
　浩介くんも、やけっぱちな表情で言う。
「あ、でもその前に」
　ぺろんっ
「いやー！」
　浩介くんにどさくさ紛れにスカートめくりされてしまう。
「優子ちゃん純白多いよね。かわいい優子ちゃんにとっても似合ってかわいいよ」
　さっきのお義母さんにそっくりの、にやけついた浩介くんの表情が、すっごく恥ずかしいわ。
「んっ……恥ずかしいけど、ありがとう……」

やっぱり、かわいいって言ってもらえるの、嬉しいわ。
あたしたちは、急いでリビングにいくと、そこにはあたしの両親がもう座っていて――
「あらまあ！　かわいいわね優子！　本当に、あの頃のまんまだわ！」
母さんが感激した表情をする。
帰省中もそうだったけど、母さん、全然老けないわね。
「あの、母さん……」
気になったので聞いてみることにした。
「あら？　どうしたの優子？」
母さんがきょとんとした表情で首をかしげてくる。
どことなく、あたしの仕草にも似ている気がするわ。
「母さんこそ、全く変わってないんだなって。もう１０年近く経つのに」
「あーうん、まあその……ね」
何だか煮え切らない態度を取っているわね。
「どうしたの？」
「ああうん優子、よく聞いてくれるかしら？」
母さんが、珍しく真剣そうな表情で話していて、制服姿のあたしと浩介くんも、ビシッと顔が引き締まる。
「母さんたち……それから篠原さんのご両親もだけど、蓬莱教授から薬を融通してもらっていたのよ」
「「え……!?」」
あたしも、浩介くんも、固まってしまう。
でも確かに、その兆候はあった。母さんも帰省する度に高校生だった時とずっと変わらないどころか、若返っている印象さえ受けていた。
「中高年の被験者が少なかったからね。２人には内緒で、していたのよ」
お義母さんが、そう付け加えると、母さんもうんうんとうなずく。
まさか、こんなに身近な人が、蓬莱の薬を飲んでいたなんて思いもしなかったわ。

「そ、そうなのね」
「ええ、これで母さんも、いつまでもこうして優子を愛でることが出きるわ！」
ナデナデナデ
「ちょ、ちょっと母さん！」
母さんがあたしの頭をくしゃくしゃに撫でてくる。
本当に、「変わらない」わねえ。
「ふふ、蓬莱の薬って、本当にすごいわ。治験者になったら勝ち組だわ」
蓬莱の薬の治験者は、既に多くの人たちが蓬莱カンパニーに就職している。
蓬莱の薬の代金を支払わなくていいというのは、大きなメリットになる。
あたしや浩介くんの両親は、その数少ない例外と言えるのよね。
「それで母さん、あたしたちの制服姿見て満足かしら？」
「ええもちろん。浩介くんも、制服似合ってて、あの時のままよね」
母さんが、とても深いものを見る表情で言う。
「……変わらないのが、蓬莱の薬ですから。いつまでも、若くいられるのが、蓬莱の薬ですから」
浩介くんは、困惑しつつも蓬莱の薬にとって一番重要なことを、母さんに言っていた。
ともあれ、あの家に住む人は、ずっと決まっているのね。
「今ね、お父さんが支払っていた年金が返ってきているわ。蓬莱の薬を飲むと社会保障費分の税金と、年金が免除になるのよ」
宇宙開発や防衛関係費、公共事業費が大きく増額されてはいるが、それでも社会保障費の減額分に比べれば、半分程度でしかない。
まあ、あたしたちＴＳ病患者にとっては、実は増税であったりもするんだけど、これまで受けてきた特権分を考えれば、十分に容認できるらしいわね。
「なるほどねえ……」
日本年金機構も、その役割は大きく下がる。

何故なら、高齢者向けの年金が全て無くなり、障害年金などが一部に残るだけになる。
あたしたちが量産体制を早期に整え、値下げを始めれば、いよいよ高齢者に対する福祉サービスが全て廃止されることになっている。
また、寿命の大きな増大に伴って、少子化の対策も不要になる。
故に社会保障費は、その殆どを無くしてしまうことが出来る。
蓬莱の薬を買わざるを得ない状況に追い込み、あたしたちは儲けて、国も活気に包まれる。
人々は老後の不安や衰えの不安からも解放される。
「これからの明るい日本を引っ張っていく優子のこと。お母さん誇りにしているわ」
母さんがにっこりと、優しい笑顔で言う。
そこにはさっきまでの笑顔とは全く性質が異なっていた。
「うん、ありがとう」
日本は現在、蓬莱の薬に引っ張られ、ごく一部の産業を除いてほぼ全てが空前の好景気に沸いている。
しかし、皆が知っていることだけど、今の好景気は始まりでさえない。
これから起きることは、総人口のほぼ全員が生産年齢人口となることによる、人類がかつて経験したことのない躍進が待っている。
「今の日本の活気はね、間違いなく優子たちが作り出したものよ。お父さんも仕事がたくさんあって大変だってさ」
「う、うん……」
やっぱりこういう手の話をされてしまうとあたしは弱い。
あたしが全世界に影響を与えていることくらいわかっている。
それこそ「明日の会」を潰して、フェミニズムを再起不能に追い込んだのも、あたしが協会にそれを呼び掛けたから。
そして、あたしは最終的には、蓬莱の薬の完成において、重要なトリガーを引いてもいたのだ。
「頑張ってね優子。でも、無理はしないでね。たまにはそう、こうやって制服着て、原点に立ち返るのもいいわよ。それじゃあね」

母さんが、玄関へと向かっていく。
あたしと浩介くんは制服姿のまま、玄関へと向かっていき、お義母さんは夕食の準備のためにその場に戻る。
「ふう、それじゃあね。バイバイ」
「うん、バイバイ」
あたしと浩介くんで、母さんを見送る。
バタン
そして、扉が閉まった。
べろん
「きゃあ！」
浩介くんに、またスカートめくりされちゃった。
「いやー、その反応かわいいよね優子ちゃん」
「もう！　浩介くんのえっち！」
あたしがそう言うと、浩介くんはごまかすように玄関の扉の鍵を閉めにいった。
「あははごめんごめん。女子高生の制服のスカートってさ、やっぱめくりたくなっちゃうんだよね。ましてや愛する妻が穿いてるんだぞ」
「もう、他の子にはしないでね！」
浩介くんの力説に、あたしも思わず異議を挟む。
でも、顔はどんどんと熱くなっていく。
「あはは、その優子ちゃんのかわいい反応見たら、他の子何てする気も起きないって！」
浩介くんにそんなことを言われ、好きな男の子にパンツを見られた恥ずかしさと、好きな男の子にかわいいって言われた恥ずかしさの相乗効果であたしの顔が瞬間湯沸し器のように真っ赤になってしまった。
「もー、あなたってずるいわ」
浩介くんとの今日の制服お披露目会で分かったのは、あたしがますます浩介くんの虜になって、離れられなくなってしまったことだった。
制服で行う夫婦生活は、あたしたちにとって、今でも特別な意味を

持っていた。

## 久々の永田町

「優子ちゃん、今日は政府との交渉だって」

「はい」

それは11月のある日、あたしたちに極秘の文書が届いたことに端を発している。

そこの文書には総理大臣の署名入りで、「今後の蓬莱カンパニーの法制度について、協議を深めていきたい」というものだった。

あたしたちがはじめて総理官邸に赴いてからもうかなりの年月が経っている。

総理大臣を始め、政府との交渉は、「蓬莱カンパニーは純民間企業」という建前で、これまで行われてこなかった。

しかしながら、現実には蓬莱の薬の普及を前提とした法改正や、独占禁止法などの法律に対する例外規定といった法的恩恵も受けている。

特に、今後は国全体で「老人不在」を前提とした法整備に変えていき、否が応でも蓬莱の薬を飲まざるを得ない社会状況を作り出すことになっている。

しかし、それを行うとしても、いつどのタイミングで決行するのかはまだわからない。

一応政府や行政内部でも、この議論は行われているが、どうにも政府だけでは対処しきれないというので、今回の交渉を政府が申し入れてきた。

あたしたちの方でも、支店の建設や、サブ工場の建設も進められていて、こちらの方も既に一部は稼働を開始している。

今のところ足りてないのは人手であり、採用についても「今すぐに必要というほどではないが、数ヵ月後に必要な人材」というのが数多く現れていて、これは急拡大する企業にはよくあることだという。

「それでだ、久々に首相官邸に行くことになった」

やはり行く場所は予想通りの場所だった。

以前はあたしたちはこの場所によく行ったものね。

「ええ、時間は？」
「明日の午後1時から、蓬莱教授は既に把握済みだ」
こうして、あたしたちは、明日の会議について出張することとなった。

「久しぶりね」
「ああ」
翌日、あたしたちは早めのお昼を食べ終わると、すぐに永田町に向かった。
今回参加するのはあたしと浩介くん、そして専務の比良さんの3人で、比良さんは首相官邸の中で会うことになっている。
数年前までは、何度も訪れたここ永田町も、久々に行くととても感慨深い場所だった。
最後に訪れたのは政府と共同で記者会見をした時のことで、その頃から数えると、最も長い間の不在期間ではあったと思う。
今でこそ少し忘れていたけれども、あたしと浩介くんは、数年前まで日本の政治を動かしていた。
もちろん、国会議員のように直接動かすというわけではなかったが、まず間違いなく、今の政治にもあたしが残した影響力が残っている。
今日だって色々なことで与党と野党が対立しているが、こと蓬莱の薬に関してだけは、あらゆる政党は無論のこと、無所属議員だって蓬莱の薬に賛成の立場を表明している。
国会議員の人数的に言えば、反対派の議員がいてもおかしくないのだが、政党などがある間接民主制のため、９７％の支持率では少数派を議会に送るのは困難であるのも実情だ。
最も、それ以前に反対などしようものなら、蓬莱カンパニーや世論から袋叩きにされるのが目に見えてるというのもあるけれどもね。
「ここか」
「うん」
あたしたちは、当時の記憶を便りに、首相官邸へと無事にたどり着

いた。
警備員さんの顔も最後に訪れた時から変わっていて、どうやら以前のように顔と身分証だけですぐにパスというわけにはいかなさそうだわ。
「すみません」
「はい」
警備員さんが柔らかそうな顔で応じる。
もしかしたら、個人的にあたしたちのことを知っていたのかもしれないわね。
「本日総理に呼ばれました蓬莱カンパニーの篠原と申します」
あたしはそう言うと、身分証明となるパスポートを取り出した。
浩介くんも、同じようにパスポートを取り出すと、警備員さんが丁寧にそれを受け取って奥へと進んでいった。
ちなみに、あたしたちは自動車の運転免許がないので、身分証明は基本的にパスポートになる。
将来的に海外に売り出す時に、海外にも出張で行くことになるかもしれないけど、今は日本の外に出る機会はない。
なので、このパスポートが本来の使われ方をすることは、当分ないだろうなあというのが、あたしと浩介くんの見解だった。
「お待たせいたしました。こちらへどうぞ」
やはり国の警備員さんとあって、とても丁寧に対応してくれる。
あたしたちは再び警備員さんの案内のもと、首相官邸の中に入る。
入ったのは小さな会議室で、今日行うのはあくまで小規模な交渉であることを暗示していた。
「あなた、今日は総理は来ないかしら？」
あたしは何となくそんな気がしていた。
政府との交渉と言っても、重要な骨子は既に何年も前に終わっている上に、あくまでも純民間の建前上行政のトップが出てくるのは色々とまずいもの。
「だろうな。まあ、深く介入すると色々と疑われるし、これくらいがちょうどいいんだろう」

おそらく、最も頻繁にやり取りしていた官房副長官との交渉になるとは思う。
政府側との交渉で、大きなルール変更に関する交渉も、恐らく無いものと思われる。
「多分、今まで決めたことに関する、タイミングの交渉が主になるわね」
「だろうなあ……」
誰も来ていない会議場で、あたしたちは勝手に盛り上がる。
久々の政府との交渉は、あたしにとってとても緊張するけど、多分本番になれば、そこまでもないのよね。経験上。
コンコン
突然扉をノックされる音と共に、あたしたちが反射的に立ち上がった。
そして中に現れたのは、少し若いおじさんだった。
「どうも始めまして。私が官房副長官の――」
「蓬莱カンパニー社長の篠原浩介です」
「同じく常務の篠原優子です」
あたしたちは、ビジネス交渉で初対面の人と会う時にお馴染みになった名刺交換を開始する。
あたしたちがよく会っていた官房副長官は、今は別の所で大臣を勤めている。
今回官房副長官になったのは、政治家の中でも「期待の若手」といわれている人で、あたしたちよりは年上だけど、同じ平成生まれでもある。
「さ、お掛けになってください」
官房副長官に促され、あたしたちは席に座る。
そして官房副長官から、あたしたちに資料を渡される。
政府側の代理人は官房副長官のみで、この会議場には3人しかいない。
「それではですね、今日の議題なんですけれども、まずは高齢者向け福祉の打ちきりタイミングです。既存の高齢者はそのまま続けるとし

て、問題は将来的な話になります」
そう、この老人向けの福祉費用をどのようにして打ち切っていくか？
いつまでも残してしまえば、蓬莱の薬を選択しない人間が社会の足を大きく引っ張ってしまい、薬の効果が半減してしまう。
かといって、今すぐ打ちきりはあまりにも酷でもある。
「我々としては、工場が全て稼働し、生産力がフルパワーになったら、政府が５年を目処に福祉の打ちきりを通告するといいでしょう」
既に公安調査庁などによる世論調査によって、「将来的に蓬莱の薬が値下がりしたら、高齢者向けの福祉を大幅削減することに大賛成」の世論が出来上がっている。
日本人は特につまはじきになるのを嫌う性質にある。
これはこの日本では災害が多いために、共同体による協力がなければあっという間に無法地帯になってしまうからだというのが永原先生の話だった。
「分かりました……それから、既存の高齢者の寿命ですね。既存の高齢者については、何となくな感じで、ばれない範囲で平均寿命を下げさせるよう考えています」
官房副長官がそのように話す。
要するに、今後の輝かしい日本を築くためにも、用済みになった「老害」をさっさと処分しようというのだ。
ある意味で彼らは「運が悪かった」とも言えるけれど、まあ仕方ないわね。
いずれにしても、一定年齢世代以上では、年金が出ないことになる。
ただし、蓬莱の薬を飲めば、これまでに払った分は全額戻ってくる。
逆に一定世代以上は、「蓬莱の薬を飲んでも対処不能」となるので、こちらは薬をそもそも販売できない上に、仮に飲んだとしても年金は帰ってこないし、１２０歳以上になったら、問答無用で打ちきりと決まっている。
浩介くんのおばあちゃんも、既に１００歳を越えていて、このまま老化による自然死を待つ状態になっている。

「ともあれ、早めに福祉を削ってくれと財務官僚たちがうるさいんでね」
やはり、政府との交渉でも、最も強力に急速普及を促し、公的資金の注入を最後まで主張し続けただけあるわね。
「今は急いで北海道工場を作っております。もうしばらくお待ちください。来月にでも、削減の声明は出せるでしょう」
浩介くんが、財務省という言葉にも動じずに、堂々と話す。
この辺り、純民間人はある意味で強いわよね。
「……分かりました。不支持者が声をあげる可能性についてはどうですか？」
「もちろん考えていません。私たち蓬莱カンパニーに逆らう人は、もうこの日本にはいないでしょう」
「でしょうな」
官房副長官があっさりとした表情で納得の意を示す。
「では、次の議題に入りますね」
「「はい」」
さて、官房副長官から次にあたしたちに突きつけられた議題は、削った福祉予算の使い道だった。
政党によっては、公共事業や科学技術を中心とする声が上がる中、防衛関係費をめぐって議論が紛糾しているらしい。
「そこでなんですけれども、是非とも蓬莱カンパニー様には、来年の通常国会で、是非とも公聴会に出てほしいのです」
「「え!?」」
官房副長官の突然の申し出にあたしたちは戸惑いの色を隠せない。
確かに、公聴会という立場ならあくまで「意見をのべる」ことは出来るけれど、決議に参加したりするわけではない。
とは言え、蓬莱カンパニーの影響力を考えれば、国会で発言するというだけで、議員はもちろん、世論だって動かしかねない。
そうなれば、対外的に「純民間」の大義名分が崩れてしまう。
「ねえあなた……いえ、社長、どうされますか？」
あたしはあえて、形式ばった敬語表現を使って浩介くんに話しかけ

る。
よく考えると、浩介くんをはっきりと「社長」と呼んだのはこれが初めてだった。
「あーそうだなあ……今この場で返事をするのは難しいというのが答えですが……私個人としては、難色の意を示さざるを得ません」
浩介くんも、かなり堅苦しい表現で応対する。
「理由はどんなところですか？」
官房副長官は当然理由を聞きたがる。
「はい、やはりまず考え得るのは、我々は対外的な圧力が政府にかかることを避けるために『純民間』を名乗っています。確かに公聴会は『参考にする』という程度ですが、国会の場で我々が具体的な意見を述べるとなると、政府としてもそのように動かざるを得ないでしょう」
動かなかったら制裁を発動しないと「制裁はこけおどし」という意見が出かねない。
あるいは一部採用や全面採用でも、何もしない訳にもいかず、あたしたちとしてはとても苦しい。
かといって、「我々は民間なので、自分達の持つ影響力を鑑みても、政府のすることには口出ししたくありません」と言ってしまえば、そもそも公聴会に出る意味もないし、そのように声明文を発表すればいいだけだ。
「なるほど……では、こんなのはどうですか？」
官房副長官の声色が変わる。
まるで何か温めていた策略を出すかのように。
「私たちが、『議論がまとまらないので、蓬莱カンパニーの人を参考人として公聴会に呼びたい』と要請するんです。そしてそれに『辞退』してください」
「え、ええ……」
大体言いたいことがわかってきたわ。
要するに、「三願の礼」じゃないの。
「そしたら、また我々だけで議論を進めます。もちろんこの間にまとまればいいですが、そうでないのならば再度我々が公聴会を要請する

ので、そこでも辞退してください」
「えっと……要するに、3回目に要請されたら『折れて公聴会に参加してください』ってことですか？」
浩介くんも官房副長官が言いたいことを理解したらしく、先取りして話を先取してしまう。
「理解が早くて助かります。これならば、『再三の要請なので不本意ながら参加して意見を述べた』と言うことができますし、これならば政府側が意見を不採用にしたとしても、『元々政府に任せるつもりだった』と蓬莱カンパニー側が説明なされれば、わだかまりも残らないでしょう」
官房副長官さんの説明は理路整然としていて分かりやすい。
確かにこれならば、政府の顔も、あたしたちの顔も立つわね。
「うーん……確かに最もらしいのですが、八百長を疑う人も多く出ると思います」
「確かにこれなら筋も通りますけれど、あからさまではあると思います」
この手の「三顧の礼」は、昔からよく行われていたことで、「謙虚も3度断るのはかえって失礼」は、日本のみならず世界中でよく見られる作法でもある。
それはつまり、「これが仕組まれたシナリオ」であることを見破るのも容易ということ。
「では、一旦断って2回目というのはどうでしょう？」
「うーん……色好い返事は難しいですねえ……」
浩介くんも、やはり難色を示している。
純民間という名分を守るには難しいくらいに、あたしたちは多くの法的保護を政府から受けてもいる。
だからこそ、浩介くんとしてもより慎重にならざるを得ない。
「では、意見を我々の方で聞いて、極秘裏に処理するというのはどうでしょう？」
「うーん、やはり機密漏洩した時のリスクは公聴会以上に高いでしょう。『裏で操っていた』ということになるわけですから」

浩介くんは、ほぼ即答に近い速度でこれを却下にした。
あたしももちろん、浩介くんには賛成ね。
「分かりました。では公聴会は難しいと」
「ええ、そうなりますね」
もちろん、国会の場に出るというのも、面白そうではあると思う。
だけれども、政治の場に口を出すというのは、かなりのリスクが伴うというのが、あたしたちの答えだった。
官房副長官は少し残念そうな顔をしていたが、あたしも浩介くんも、ここで政府に意見を述べるのは危険と判断した。
これが会社を立ち上げる前なら、遠慮なく意見を言うこともできたとは思うけれども、今は無理だ。
「そうですか。わが党としましては、やはり防衛関係費からと思うんですが」
「んー」
浩介くんが腕を組んで考える。
「我々としては、国民の税金も1円も投入されておらず、いかなる公的機関も、わが社の株を1株も持っていない。いわばこれ以上無いほどの純民間資本で運営されています。先進国の常識では、よほどのことがない限り、このような民間のことに政府が首を突っ込むのはご法度と言われています」
浩介くんが慎重な口調で話す。
まあ、今もこうして首を突っ込みあっているわけだけれども。
「にもかかわらず、我々は外国政府からの口出しを受け、外交的な圧力を受ける危険性もあります。自国政府でも問題なのに、純民間企業が外国の政府から圧力を受けるなどというのは大変に理不尽なことですから、我々としましては、日本政府には、我々の生命と財産を守るために、国家の義務を果たすために努力してほしいと思っています」
そう、これが浩介くんも答え。
極めて官僚的で婉曲的な表現だけれども、要するに「防衛関係費をまず増やして欲しい」ということだ。
「分かりました。蓬莱カンパニー様の名前は伏せさせていただきま

す」
「……ありがとうございます」
結局この後は、細かいことを確認し合うのみで、あたしたちの政府との交渉は極めて短時間に滞り無く終わった。
あたしは主にメモを取り、蓬莱教授を始めとする他の取締役たちに情報を伝えることになった。
「ふう、とりあえず俺達はこれでいいな」
「うん」
あたしたちは政府との交渉も蓬莱教授抜きで行うことが出来た。
それは浩介くんが、経営者として成長したから。だから蓬莱教授が同行しなくてもいいと判断したのね。
今後は、そういった機会も増えるかもしれないわね。

## また師走の時

「えー、次のニュースです。不老の薬を製造・販売しております蓬莱カンパニー株式会社は今月より3億円だった蓬莱の薬を1ヶ月ごとに２０００万円ずつの値下げを行い、最終的に２０００万円とする声明を発表しました。また２０００万円となった後は最大１０００年までの分割払いも行うということになりました。当社の取材に対し蓬莱カンパニーの篠原社長は――」

１２月、テレビのニュースで、浩介くんが写っている。

世間的には、浩介くんが研究段階においてこの蓬莱カンパニー設立のために重要な役割を果たしたことはよく知られている。

それにしても、２６歳というテロップにしては若いという声が多くて、でもこうした声はそのうち見られなくなるのよね。

「俺も随分と出世したものだ」

テレビに映る自分の姿を、浩介くんがどこか他人事のように見つめていた。

芸能人とか政治家とかならともかく、こういったことでテレビに出るというのは、普通は滅多に無いことだ。

会社の社長だって、そんなにテレビに出る機会は多くはない。

あたしの場合は、記者会見の時に出た時があったけど、それ以前にもインターネットメディアに取材されたこともあったので、あまり感慨深さはない。

「そりゃあまあ、あたしたち有名人だものね」

あたしはまだ協会の広報部長としてＴＳ病の広告塔にもなっている。

インターネットメディアの取材もあってあたし自身も世間にはよく知られているし、そんな夫婦が蓬莱の薬完成に貢献して、こうして蓬莱カンパニーの上層部になっていると知られれば、知らない人も居ない。

「ともあれ、このニュースでネガティブキャンペーンも少しは収まるといいんだがな」

浩介くんはニュースを見ながらふうと一息つく。
「ええ。後は『どうせ途中で値下げも終わる』だと思うけど、もうここまで来たらどうしようもないわ」
あたしとしては、そこまで言われたらもうどうしようもないと思っている。
隣で見ていた義両親も、自分の息子が会社の社長としてテレビに出ているという現実を飲み込みきれていないのか、まだ一言も発していない。
「優子も浩介も、これからは殆ど公人みたいなもんだ。立ち居振る舞いにはくれぐれも気をつけるんだぞ」
「はい、お義父さん」
お義父さんの言葉に、あたしも気を引き締める。
あたしたちは、いい加減にそろそろ一般人気分でいたらいけないのかもしれないわ。
そもそも考えてみれば、あたしたちは以前にも総理大臣と直接会って、そしてその総理大臣の判断さえ動かしたことがある。
そのことを踏まえれば、今更テレビに出ていることも、どうということはないと思うことにした。

値下げに伴うインターネット世論の反応も様々ではあったが、概ね「悲観論者息している?」といったものだった。
あたしたちが有言実行すれば、悲観論は簡単に吹き飛ぶことも、すぐに分かった。
蓬莱教授の懸念も過大評価であると分かったところで、あたしたちは北海道の新規工場が出来次第、新規投資の資源を日本全国の支店の建設へと振り向けることに決定した。
「ふう……」
今日の会議が終わり、あたしたちも一息つく。
季節も秋になり今年もノーベル賞の発表時期がやってきた。
肝心の蓬莱教授はノーベル賞に選ばれていなかった。
まあ、薬の完成まで1年程度しか経ってないということも踏まえれ

ば、無理もないことだわ。
幸いにして、蓬莱教授は既に不老の薬を飲んでいるため、これからいくらでもチャンスはある。
蓬莱教授も「今年来るとは思っていなかった。一応メールは届いてたけど」と言ってた。
メールとは何かしら？　蓬莱教授も何か隠していたような気がするけど。
……まあいいわ。

値下げが決定し、これによって蓬莱カンパニーの売上は一時的に下がることが予想された。
いかに富裕層がターゲットと言えども、1ヶ月で２０００万円という値下げ幅は非常に大きい。
この時に買う人は、いわゆる「ガンが発見された」とかそう言う「一刻を争う病気」の患者が主であった。もちろん、「今すぐ」という人も多かったけどね。
既に3億時代にかなりの金額を稼いだので、極端な話２０００万になるまで売上０でも何とかなるようにはなっている。
むしろ、２０００万になって分割払い制度がスタートしたら、これまで以上に予約が殺到するため、それまでに在庫をためておくための冷却期間でもあるというのが浩介くんの経営戦略だった。
さて、蓬莱カンパニーは１２月の末に忘年会をすることになった。
忘年会の最初の場では、取締役たちと相談役の永原先生で1人1人挨拶することになった。
今の所、取締役にいるのは代表取締役会長として蓬莱教授、代表取締役社長として浩介くん、専務取締役として比良さん、常務取締役としてあたし、そして平の取締役として本社詰めの余呉さん、そして本部工場長兼任の和邇先輩と北海道工場長の人の７人、それに相談役の永原先生を加えると８人で、８人が入れ代わり立ち代わり挨拶するともなるとかなりの長丁場になる。
永原先生は小谷学園の教師たちの忘年会もあるので、そちらと日程

が重ならないように整理しないといけない。
とはいえ、この整理は実に簡単に終わってしまった。
「しかし、初めての忘年会を社長として参加するなんて、そう滅多にないことだぜ」
「あはは、そうよね」
忘年会当日、会場に行くまでの道すがらでの浩介くんのそんな発言は、あたしたちの特異な人生を象徴していた。
これまでも、そしてこれからも、あたしたちは「普通の人のように普通に暮らす」ことは不可能となった。
あたしは「浩介くんと『ずっと』平穏に暮らしたい」という思いから、蓬莱教授に協力することになったけど、蓬莱カンパニーの社長と常務の夫婦という立場になったら、あたしたちにそのような生活が訪れることはないだろうということは分かっていた。
それは蓬莱カンパニーという会社の特異性もあるし、あたしたちが最終的な成功の引き金を引いたせいでもある。
来年から１４ヶ月をかけて、蓬莱の薬は段階的に２０００万円まで値下げを続けることになる。また、最長１０００年に渡る分割払いのプランもスタートする。
今現在でも、「今後は値下げがなされる」とのことで、注文数は減ってきている。
とはいえ、値下げが終われば一気に注文が殺到することは容易に想像がつく。
その間に生産をどんどん続け、とにかく在庫を稼がないといけないわね。
蓬莱カンパニーの忘年会実行委員の人たちは、忘年会会場として、それなりに広い宴会場を選んだ。
「さて、ここが会場だ」
既に、会場には大勢の従業員たちが詰めかけていた。
あたしたちは普通に正面の玄関から入り、中に入る。

中は宴会場になっていて、実はあたしたちが結婚式を挙げた会場の隣のビルだったりする。
中には既にガヤガヤと賑やかそうな音も聞こえてくる。
まだ発足したばかりの会社だけど、みんなとにかくモチベーションが高いわね。
「あ、社長、常務、お疲れ様です」
社員の一人があたし達を見て深々と頭を下げてくる。
この前まで学生……というか今も大学院生なので、こういうのにはどうしても慣れないわ。
「ああうん、お疲れ様」
「お疲れ様、今日はゆっくりしてね」
今日のあたしは純白のワンピースのロングスカート。
とにかく清楚を強調した服で、浩介くんの嫉妬心を抑えることが出来る。
最も、この服はいわゆるブラフで、本命は忘年会が終わってからにある。
浩介くんの独占欲を満たすため、家に帰ったら白い超ミニスカートに胸元も極限に露出したへそ出しの服に着替える予定になっている。
もうこのやり方は何度も何度も続けていて、浩介くんも多分分かってはいると思うんだけど、律儀に毎度毎度引っかかっている。
だから、今夜この忘年会が終わった後のことも容易に想像ができて

---

「んっ……」
だめ、まだ反応しちゃダメよ……もうちょっと待ってあたしの体……
あたしたちは、開場時間になって取締役たちで舞台裏に集まることになっている。
忘年会とは言え、最高幹部のあたしたちにとっては、社員たちのモチベーションを上げるための大事な場でもある。
むしろ、一般社員はともかく、あたしみたいな役員は普段以上に気が抜けないのよね。

「お疲れ様です」
「社長、常務、お疲れ様です」
中に居たのは、余呉さんだけだった。
テーブルの中にぽつんと余呉さんが座っていて、かわいいわね。
「あれ余呉さん、他の人は？」
「ええ、まだ来ておりません」
まあ、集合時間から考えれば、全く問題ないものね。
むしろあたしたちが早すぎるくらいかしら？
「そうですか、ところで余呉さんは、今日のスピーチはどうされます？」
あたしが余呉さんに聞いてみる。
協会の序列では名目上は正会員で同格とは言え、余呉さんの方が実質上位だけど、この蓬莱カンパニーでの序列ではあたしのほうが上位なので、どうにもやりにくいのは否めないのよね。
「ええ。新店戦略、関東の方は進んでいるんですが、関西ではやや遅れています。現在ある売上金をめいいっぱい使い、全国的普及を急ぐように激励を出したいと思います。お金には余裕がありますので、速さ重視を心がけたいですね」
「……分かりました。あたしは……そうですねやっぱり、研究とか工場の交渉秘話とかをお話をしようかしら？」
あたしが斜め上から天井を眺めて言う。
「研究については、蓬莱さんの口から話すのが一番いいな。俺は……やはり来年の経営方針について、話すことにするよ」
浩介くんは社長らしく、経営方針を話すことにするという。
うん、それがいいわよね。
ガチャッ……
「失礼するぜ」
「あ、会長、お疲れ様です」
ドアを開けて中に入ってきたのは蓬莱教授だった。
そして後ろに見えるのが和邇先輩と北海道工場長の両取締役で、これで比良さんと永原先生の到着を待つばかりとなった。

「永原先生はもう少しで来るそうだ。比良さんともども、協会の仕事が長引いてるとのことだ」
協会では、これまで比良さんの負担が比較的大きかったが、比良さんが蓬莱カンパニーの専務になってからは、正会員を増やしつつ、永原先生の負荷が増えている。
永原先生は、部活の顧問をしていないため、本業の教師とも両立ができるようになっている。
「えっと、蓬莱教授はスピーチどうしますか？」
「ああ、もちろん研究についてだ。研究成果が雑誌にも掲載されるようになったから、その御蔭で色々といいことが起きているんだ」
蓬莱教授はやはり自身の研究について話すことで、従業員たちのモチベーションを上げるのが一番良いと判断していた。
また、工場長の2人は、やはり工場作業員たちへのねぎらいの言葉を述べることで、年末の挨拶に代えるという。
まあ、あまり接点のない社員に声を向けても仕方ないと言えばその通りなので、ある程度は内向きになるのも仕方ないのかもしれないけどね。
ガチャッ……
「すみませーん、遅れましたー」
部屋の中に2人の女の子が入ってくる。
「あ、みんな揃っているわね」
比良さんと永原先生が最後に入ってくる。
あたしの予想では、比良さんは本部社員に対しての、永原先生は蓬莱の薬が実現した後の社会について語るのかしら？
「よし、比良さんと永原先生はどんなスピーチをするつもりなんだ？」
早速、会長の蓬莱教授が2人に問い合わせる。
もしテーマが重なったり、とても近いもの同士だったら、すり合わせをしないといけない。
「私は……蓬莱の薬にかける思い……協会の立場から演説します。私はここでは、あくまでも相談役ですからね」
永原先生は、軽い感じでそう話す。

うん、外部からの相談役なら、それでいいわよね。
「私は……ええ今年頑張ってくださった本部の社員の皆さんに、『ありがとう』を言いたいです。本当に、マーケティング部の皆さんも、人事部の皆さんも、本当によくやってくれました。えっと……支店関係の皆さんは余呉さんの方で大丈夫ですよね？」
比良さんはそんな感じに落ち着いた表情で、話していた。
「ええ、問題ありません」
ともあれ、これで重なった話題はなかったことが判明した。
「よしじゃあ、各自演説の内容をよく頭に入れてくれ。忘年会の最初に、取締役の挨拶があるわけだけど、みんなウズウズしているから、あまり長くならないでくれ」
「ええ分かってるわ。あたしの母校の元校長先生のことを、思い出して頑張ってみるわ」
「ああ、いたなあ。懐かしいぜ、話の短い校長先生」
あたしと浩介くんが母校の話で盛り上がっていて、永原先生もこころなしかニッコリとしている。
あたしたちが小谷学園を卒業して8年、高校は3年間だから、もう2周りは生徒の数が入れ替わっている。
弘子さんも卒業して、今は大学で彼氏とアツアツな日々を過ごしているという。
彼氏さんは、弘子さんが男性だった頃を知らない人で、実はそれはＴＳ病患者では少数派のパターンだったりもする。
それでも、男心の分かる弘子さんは、彼氏さんの性欲によく答えていて、お互い掴んで離さない間柄になっている。
弘子さんも弘子さんで、他のＴＳ病の女の子と同じく、最終試験に合格してからは、より強く乙女心に目覚めるようになった。
ＴＳ病患者の成長は、あたしや、先輩のＴＳ病患者たちが辿ってきたのとほぼ同じ道を辿っている。
「そうそう篠原さん」
「うん？」
永原先生から、連絡が入る。

「悪いんだけど、また協会の仕事量増やしていいかしら？」
永原先生がちょっとだけ申し訳なさそうに話す。
でも、悪い話というわけでは無さそうな雰囲気だ。
「え？　どうしてかしら？」
「実はその……正会員の1人が妊娠して、産休に入るのよ」
え⁉　そんな話聞いてないわ。
「あら？　聞いてないわね。でもいいことじゃない」
「ああうん、実はたった今連絡が入って、そのことで遅くなっちゃったのよ」
比良さんが、付け加えてくれる。
それにしても、妊娠した正会員って、誰のことかしら？
「実は、幸子さんが妊娠しまして」
「え⁉」
あたしの隣りに座っていた余呉さんが耳打ちしてくる。
さ、幸子さんが妊娠……確かに、おかしな話じゃないけど。
「幸子さん、妊娠したの？」
「ええ、それでしばらく産休に入りたいと言ってたわ。でも、会社の方は退職するって。出産したら、また戻ってくるわ」
「……そう。分かったわ」
あたしは椅子の背もたれに寄りかかって、ため息をつく。
少しだけ、悔しい気持ちがある。
幸子さんはあたしの1番の教え子で、女の子としての成長はあたしよりも遅かった。
だけどそれでも、あたしたちがこうしてもたついている間に、幸子さんは大好きな直哉さんとの赤ちゃんを身ごもっていた。
「先を越されちゃったわね……」
「大丈夫だよ優子ちゃん。焦らなくて」
浩介くんの励ましが、今は嬉しい。
もちろん、しようと思えばあたしもすぐに妊娠はできると思う
でも今は、それは許されないと思う。
この忘年会もそうだし、来年だってきっと、蓬莱カンパニーのこと

で忙しくなると思うから。
「さ、そろそろ時間だ。行こうぜ」
「……うん」
社員たちも首を長くして待っているわ。
忘年会の予定、遅れないようにしなきゃ。

## 忘年会の始まり

「皆さん、大変長らくお待たせ致しました。当忘年会の司会進行を担当させていただきます――」

ついに忘年会が始まった。今回は忘年会実行委員の人が司会進行を勤めてくれる。まあ、あたしたちは大忙しになるだろうし、あたしたちがしたら何もでき無さそうだわ。

あたしたちは会場にある壇上の控室に入っている。

会場を見てみるが、従業員数はかなりの数に上っていて、実行委員会によれば結構テーブルはギリギリだったらしい。

もちろん、来年以降はもっと多くの従業員さんが出席することになるから、ここよりも広い会場が必要かもしれないわね。

「えーまずはじめに、取締役の皆さんから一言ずつご挨拶がございます。えーまずは、代表取締役会長、蓬莱伸吾さんよろしくお願いいたします」

トン……トン……トン……

まずは蓬莱教授が立ち上がって壇上のマイクへと向かう。

蓬莱教授の姿をみんなじっと見つめていた。うー、結構重圧がかかりそうだわ。

「優子ちゃん大丈夫？」

緊張しているあたしを見て、浩介くんが心配して声をかけてくれる。

「ああうん、大丈夫よ」

あたしの演説の内容は決まっている。

工場について、そしてあたしがどうしてこの研究の道へ進んだかを演説するつもり。

「おほんっ。俺がこの蓬莱カンパニーの創設者、蓬莱伸吾だ。元々俺の研究の中で生まれたこの技術は、今では全国から顧客が殺到している。従業員の皆さんには多忙を極めるだろうが、今後はしばらく値下げ期間ということで顧客処理は少なくなる予定だ。代わりに、生産は全力でせねばなるまいし、値下げが終われば分割払い制度も

スタートする。それまで、よく今日も含めて英気を養って欲しい。今後は、会長としてはあまり大きな声は出さず、研究を中心にしていきたいと思っている。以上」

パチパチパチパチ!!!

蓬莱教授は一礼すると、そのまま下に降りてテーブルの自分の席に座る。

この忘年会ではチームやグループごとに丸いテーブルがあって、あたしたち取締役全員と永原先生で1つのテーブルに座ることになっている。

テーブルの中では席順は自由なのであたしはもちろん浩介くんの隣を陣取ることになる。

「えー続きまして、当社代表取締役社長、篠原浩介さんです」

最初に会長が呼ばれたということは、次に呼ばれるのは当然社長の浩介くんだった。

「よし行ってくる」

浩介くんが直ぐに席を立つ。

「がんばって」

「ああ」

あたしが軽くスピーチへの応援を口にすると、浩介くんも小さく答えてくれる。

浩介くんの次はあたしの予定になっているので、ますます緊張するわね。

「えー。皆さん。今年は若輩者の私についてくださいましてありがとうございます。先程会長からありましたように、来年からは値下げが14ヶ月間続きます。それに伴いまして、顧客の減少が予想されます。とにかく、これから一時的に売上が落ちることは覚悟したい。支店建設も大急ぎで進めますので、率直に言いまして来年は赤字転落もあり得ると思いますが、翌々年以降に向けての先行投資ですから、全く気にする必要はありません。また来年初頭には株式の上場を正式に開始したいと思います。皆さんにもぜひ長期的な視野を持ってもらいたいと願っております」

パチパチパチパチ!!!
蓬莱教授に負けないくらいの割れんばかりの拍手が浩介くんに浴びせられる。
浩介くんは２０代後半の若社長で、しかも蓬莱の薬を飲んでいるから外見年齢は２０歳程度でしか無い。
蓬莱カンパニーほどに社会への影響力の強い会社で、そんな若い人が社長になっているというと、社員たちも不安に思うかと思えばそうではなかった。
今では、浩介くんもかなりのカリスマ性を持っていて会社を動かしている。
いや、もしかしたらこういう企業だからこそ、蓬莱教授も若い浩介くんが社長になったほうがいいのかもしれないわね。
浩介くんからは株式の上場の話も伝えられている。あれこれ考えた末、「株主と言えども蓬莱カンパニーには逆らわない」と結論付けられた。
投資家目線でも、今の蓬莱カンパニーを守る規制の緩和を要求するとは思えないからだった。
「では続きまして、常務取締役の篠原優子さん、お願いします」
浩介くんがテーブルの方へと向かうと、あたしが次に続く。
「はい」
皆の注目する中、あたしはマイクの高さを合わせる。
皆の支線はどうしても、あたしの胸元に注がれてしまっている。
このワンピースは露出度も低くて、胸も強調するわけではないけど、それでもあたしの大きさだと、どうしても目立ってしまうので、周囲の視線はそのままだ。
「んっ……皆さん、本日はお集まりいただき、ありがとうございます。当社で常務をしております篠原優子です。あたしはこの蓬莱カンパニー設立のために、研究で貢献をして参りました。あたしはＴＳ病で、実は元々はとても乱暴な男の子でした。今は社長の旦那さんもいて、とても幸せな生活を送っています。一生懸命女の子らしくなるのは大変でしたけれども、今日という日を迎えられて本当に良かったと

思います。来年は、あたしが女の子になって１０年を迎えます。本当に色々なことがありましたが、来年はきっといい年になるように、そう願っています」

パチパチパチパチ!!!

ここまでで一番長いスピーチを行い、あたしも壇上から降りてテーブルへ。

浩介くんの席の隣へ自然と座る。

ふふ、ラブラブ夫婦の秘訣よね。

「えーではですね、ちょっと前後しますけれども当社専務取締役、比良道子さんお願い致します」

続いて壇上に上がったのは比良さんだった。

「えー、専務取締役をさせていただいております比良道子と申します。私は、江戸時代の水戸領分の生まれでありまして、これまでの常識なら到底生きていけないような年齢になっておりますが、ＴＳ病のために本年まで生きながらえてきました。こちら蓬莱カンパニーに来てから、本当に多くの人に支えられましたことを感謝申し上げたいと思います。特に人事部の皆さん、マーケティング部の皆さんには、本当にお世話になりつつ、私の成長にもなりました。どうか来年も、私をお支えください」

パチパチパチパチ!!!

比良さんに対しては、やはり本社務めの古参の社員からの拍手が大きい。

あたしたちとは違い、本部の社員から見ると比良さんは上層部の中でも一番身近な存在でもある。

比良さんがあたしたちとは少し離れた所の椅子に座る。

「しかし、こうして幹部ばかり固まってしまったら社員の皆さんも声をかけ辛いでしょうに」

テーブルを見ながら、比良さんがやや「やれやれ」と言った表情で話す。

確かに、それはその通りかもしれないわね。

「なあに、俺達が自ら徘徊すればいいのさ。それよりも、余呉さんのス

ピーチが始まるぞ」
蓬莱教授の言う通り、今日はあたしたちが積極的な行動に出ないといけない。
もちろん、あたしたちもあたしたちで積もる話はあるだろうけど、そういうのは別の機会にもできるものだものね。
「取締役の余呉と申します。最初は取締役として、その後全国の支店を管轄するＳＶ長となりまして、全国の支店展開と支店戦略の統括を任されました。私はこの地球では永原さんの次に年上でありまして、６年後には２００歳という節目の年を迎えることになっております。来年以降は支店の展開について社員の皆さんにはより一層の多忙を強いることにはなるとはございますが、どうぞよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございます」
パチパチパチパチ!!!
余呉さんがペコリと頭を下げてこちらへと向かう。
次に両工場長の演説もあり、こちらは工場務めの社員さんの参加者が盛り上がっていた。
それらの演説も聞き終わると、テーブルの椅子はついに最後の１席になる。
そう、最後の１人に居るのが、相談役の永原先生だ。
「えー最後に、当社相談役で、日本性転換症候群協会会長でもあります永原マキノさんです」
会場からの「おー」というざわつきがよりいっそう大きくなる。
永原先生が蓬莱カンパニーの大株主の１人で、また相談役なのは皆知っていることだけど、殆ど会社の経営には口を出してこない人で、協会会長としてあのビルに出入りしている姿のほうが圧倒的に多い。
それでも、永原先生は今や世界的にも有名な人物で、そう言う人がこの会社のバックについているだけでも、社員たちにとっては心強いものだった。
比良さん余呉さんほどではないにしても、永原先生は現代人からするとかなり小柄な女性であるにも関わらず、その頼もしさは群を抜いていた。

「皆さん、今年もありがとうございました。永原マキノと申します。私のことはすでに皆さん、聞いて知っているとは思いますが……私はこの蓬莱の薬の完成をとても心待ちにしていました。私は５００年以上の長い人生のうち、同じ境遇の人に会えたのは４００歳近くになってからでした。それまでは人々が生まれ、老い、死んでいくのをひたすらに見てきました。少し長くなりますが、どうか聞いてください」

永原先生の話は、簡潔にまとめたあたしたちの話とは違い、長い話になりそうだった。

永原先生は少しだけ思い詰めた表情をしつつも、その目は決意に満ちていた。

一体、何を話すつもりなのかしら？

「今、この世に生きている江戸時代以前の生まれの人は私を入れて６人ですが、実は１０９年前に協会を作りました当時は８人でした。つまり２人はもうこの世に居ないのです。１人は交通事故で、もう１人は家族との死別を悲観しての自殺でした。これまで、ＴＳ病患者たちには、恋愛の寿命問題という問題がのしかかっていました……ですが、当社の篠原夫妻を皮切りに、この蓬莱の薬の完成をもって、その問題も解決するものと期待しております」

やはり、話していたのは寿命問題だった。

実際には寿命問題は患者本人にとってそこまで大きな問題ではない。

現にここにいる比良さんだって、子孫が次々に生まれては死んでいるが、全く気にも留めていないし。

「これまでＴＳ病患者には恋愛は大きな障壁にもなっていました……恥を晒すようで申し訳ないのですが……このことは墓場まで持っていこうかと思いましたが、時代も変わりました。私も以前、恋愛に問題を抱えていました。そして今も、踏み込めないでいるのです」

永原先生が何を話そうとしているのか分かった時、あたしと浩介くんの顔から冷や汗が流れる。

忘れもしない９年前、あたしが浩介くんに恋をした林間学校の帰り

道、新幹線の車内で永原先生があたしと浩介くんにだけ話してくれた初恋の秘密のことを、話そうとしているのだわ。
「私は……それは今から……もう３７０年以上も前になります。私は１３６歳にして、初恋をしました。皆さんも既にご存知と思いますが、私は永正１５年……今から５０８年前に信濃で生を受けて以降真田家に仕えておりました。しかしＴＳ病で倒れて以降、主君に帰参できず、本能寺の変以降は諸国を流浪しつつ尼寺で文字を習ったり京都の商家に奉公したりしておりました……関ヶ原の戦いを見物したりしつつ、大坂の陣が終わって私は江戸に住み始めました……しかし、江戸の街でも不老を疑われたため、再度の諸国流浪を考えていた矢先のことです」
　永原先生の人生は、今ではインターネットでも多く語り草になっている。
　たまに雑談系の掲示板でも、そのことが話題になることさえある。
　だから、徳川家綱に謁見し、その御前で泣いてしまったことも、世間にはよく知られている。
「私は４代将軍様より江戸城への呼び出しを受けたのです。私は主君の孫であられた真田伊豆守殿が生きておられると知り、謁見が叶うことになりました。１１０年以上もごまかしてきた人生をお許しになってくださった伊豆守殿……上様の御前で泣き出してしまった私をお許しくださった上様……今思っても罪の重さに押しつぶされそうなことですが……私はこの２人に同時に初恋をしてしまったんです」
　永原先生の話に、会場が騒然となる。
　永原先生の中でも、最も知られたくないであろう恥部を、自ら話し込んでいる。
「奇妙な上に……極めて無礼なことです。私は翌日……お２人の姿を直視することができませんでした。以来、この秘密を長い間、誰にも打ち明けることは出来ませんでした。私は……あまりにもこの人生で罪を作りすぎました。真田家のこと、徳川家のこと、吉良殿のこと……そして天皇陛下にもです……あまり重たい話はしたくないので

この辺には致しますが、皆さん、これからの時代……蓬莱の薬の時代になれば、私のようなことも、きっと起こらなくなりますから。以上です」

パチパチパチパチ！

永原先生へ向けられた拍手は明らかに動揺が混ざっていた。

それはこんな話をいきなりされても、反応に困る上に事実なのかどうかも確かめようがないものね。

そんな中で冷静な顔をしていたのは蓬莱教授だけだった。

「ふう……話しちゃったわ」

永原先生が肩の荷が降りたという表情で話す。

「会長に、そんな秘密があったんですね」

「驚きだわ」

比良さんと余呉さんも、やっぱりこの秘密については知らされていなかったのか、大きく動揺している。

「いや驚いたぜ永原先生、俺はてっきり、恋をしたのは徳川家綱だけかと思っていたぜ」

蓬莱教授も落ち着いた表情に反して驚いていたと話す。

確かに、以前の蓬莱教授の推論では、真田信之にまで恋をしたことまでは突き止めきれていなかったものね。

「あはは、蓬莱先生も、まさか９０歳近いご老体に恋してるとまでは思っても見なかったのね」

さすがに蓬莱教授であっても、そりゃあそこまでは思いつかないわよ。

「……当たり前だ。まあ、９０歳と１０代の年齢差など、時期に意味のないものになるがな」

蓬莱教授が自信たっぷりの表情で答える。

さすがにそれはないんじゃないかと思うけど、まあ今は勢いが重要だものね。

「それにしてもどうして永原会長はこのことを？　墓場まで持っていくって」

あたしが疑問に思って話す。

「ああうん、やっぱりこれから時代が変わる事も考えて……いつまでも重荷として背負うのではなく……話してしまえば、楽になるかなと思いまして」
おそらく、永原先生も恋愛に対して憧れがあるんだと思う。
だからこうして、周囲にもこの話を話すことにしたのね。
最も、永原先生がまだ世間に話し切れていないことがまだ1つある。
それは戦時中に天皇陛下を裏切ったこと。これとばかりは、やはり事が事なので、おいそれと話せるものではないと思うわ。
「さあ、では歓談の時間と致しますので、皆さんグラスを持って乾杯をしましょう」
「おっと、俺達が先導しねえと示しがつかねえぞ」
「はい」
司会の人の放送と蓬莱教授の号令に、あたしたちは既に飲み物が注がれていたグラスを取る。
いけないいけない、あたしたちがボーッとしてたら気まずくなっちゃうわね。
「かんぱーい！」
「「かんぱーい！」」
チン、チン、チン……
浩介くん、蓬莱教授、永原先生など、近くのテーブルの人と乾杯をする。
そしてあたしたちはテーブルの垣根を超えて顔も見たことのない社員たちとも乾杯をする。
テーブルのあちこちから、「ちん」というグラス同士の当たる音が会場内に響いた。
いよいよ本格的に忘年会が、始まった。忘年会の日程は完全に実行委員任せになっている。
さて、この先のプログラムはどうなっているかしら？

## 社員との交流

「さて、ご飯を取りに行くか」
「ええ」
あたしと浩介くんは、椅子から立ち上がって、夕食を取る。
今回はバイキング形式になっていて、社員全員で平等に並んでいるので、あたしたちも行列の最後尾に行く。
社員たちはみんな、思い思いに雑談に講じていて、社内のいい雰囲気がこちらにも伝わってくる。
ちなみにこの忘年会は、参加費は無料で、あたしたち蓬莱カンパニーが負担をしている。
まあ、顧客1人分の単価にも満たない経費だし、会費を取ると参加率が悪くなるということで、またこの後に行われる企画でも、事前に希望者を募る形にしてある。
各上司や同僚たちにも、こうしたものに参加しなかった社員に対して悪いい印象を持たないように通達してある。
「優子ちゃん、次」
「あ、うん」
いつの間にか進んでいた行列に気付かず、浩介くんに促されてあたしはトレイのお盆とお皿を取る。
前の方を見ると、お寿司とかお肉とかが、山盛りに盛られているみたいね。
他にも、ジュースやお酒といった飲み物も充実していて、更にうどんそばラーメンは作りたてを食べられるみたいだわ。
取りすぎに注意しつつ、あたしも食材を取っていく。
デザートはまだ並んでないので、それも含めて考えていかないといけないわね。
「ふう、いただきます」
「いただきます」
あたしたちはテーブルに戻り、まずはご飯を食べることにした。
お肉にお寿司にフライドポテト、どれも宴会場のバイキング相応だ

けど、社員たちの賑やかな様子が、いい調味料になっている。
よく見ると席には余呉さんだけ不在で、各テーブルを回っているのが見えた。
役員たちの巡回は、もちろん部下たちに挨拶するのもあるけれど、それ以上に孤立している社員がいないかどうか、話の輪に置いていかれている社員がいないかどうかを見るのも大事な作業になる。
とにかく社内機密の保持が重要な会社なので、社内の人間関係については特に注意をしないといけない。
かといって、あんまりにガチガチに監視させすぎちゃうと、「待遇面ではいいけど、あまりに窮屈すぎる」という評判にもなりかねない。
ただでさえ、相互監視を多用している会社だし。
まあ、窮屈なほど秩序がよくなるというのも、永原先生の話だけれどもね。
……あたしも、これを食べ終わったらきちんと常務の役目を果たさないといけないわね。

「じゃあ俺、挨拶回りに行ってくる」
「うん」
先に食べ終わった浩介くんが席を立ち、社員さんたちの元へと向かっていった。
歓談の時間はまだたくさんあって、役員が集まるこのテーブルにも、何人かの社員さんたちが声をかけてきている。
「あの、篠原常務」
少し食べ終わって一息ついていると、1人の女性社員があたしに話しかけてきた。
「あら？　どうしたのかしら？」
あたしが振り返ると、よく知らない人だった。
同じ会社と言っても、やはり社員全員の顔を覚えているわけではないもの。
「その……男子にモテるにはどうしたらいいと思います？」
どうやら、男性受けが悪いのを気にしているらしいわね。

よし、あたしからアドバイスをしてあげよう。
「うーん、まず変な意地を持たないことよ。言葉遣いとか、態度とかね」
「えっと……つまり？」
女性社員は、まだ要領をつかめていないみたいね。
ふふ、ＴＳ病患者のこういうアドバンテージは、蓬莱の薬が普及しても変わらないわね。
「いい？　ぶりっ子が一番男受けがいいのよ。言葉遣いもきちんと女の子らしくして、テレビでやっているアイドルみたいな態度を取ると、とってもモテるわよ。それから、変顔とかプリクラとかで猫顔にしたりとか、男受け最悪だから絶対やったらダメよ」
とにかく外見は自然なままの美人こそ、一番男に受ける。自信のある女の子は、そういったことはしないもの。
逆に性格といった内面は、徹底的にか弱いぶりっ子になるべきなのが男にもてるコツなのよ。康介くんだってか弱いあたしのことを守ってあげたくなるくらいに好きだし、あたしも、そんなかっこいい浩介くんが大好きだもの。
「えー、でもそれだと女性社員に嫌われ――」
「だーめだーめ！　それを気にするのが一番ダメなのよ」
予想通りの反論に、あたしはきちんと強調する。
そう、ここで吹っ切れるかが大事な所なのよね。
「え、でも……嫌われたくない……」
そう、結局一歩を踏み込めないのは、「女性に嫌われる」という謎の不安感から。
女の子になって１０年近く経った今でも、レズビアンでもない生まれつきの女の子が何故女性受けを気にして男子からモテず、その事で悩むのかあたしは理解できないわ。
「ふー、お馴染みのパターンね。私には、どうしてそんなことを気にするのか理解できないけれども」
お義母さんともその事を何度も討論したけれど、やっぱりその辺りは、ＴＳ病の女の子には、それこそ永原先生並みに生きても決して分

からない「何か」があるのかもしれないわね。
協会も基本的には「女子会」だけど、この辺りの感性を理解できる人は、永原先生を含め誰もいなさそうなのは確かで、逆に言えばあたしたちと生粋の女の子で、どうしても埋めきれない「差」なのかもしれないわ。
「いい？　あなたにレズビアンの傾向があるというなら話は別よ。でも、男子にモテたいんでしょ？　例え周囲の女性全員に嫌われても、あなたが男性に好かれているなら、女の子は幸せになれるのよ」
「あ、あの……常務はどうしてそんなに割りきれるんですか？」
女性社員の方があたしを不思議そうに見つめてくる。
「……逆に聞きたいわ。あなたはどうしてそんなに贅沢なのよ？　二兎を追う者は一兎も得ずよ。同姓に嫌われることへの辛さなんて、異性に好かれる嬉しさで簡単に吹き飛んじゃうし、むしろ『モテないから僻んでいる』とか『努力してないのに無い物ねだりしている』と思えば快感でさえあるのよ。いい？　彼氏や旦那が出来たら、女友達よりも必ず彼氏旦那を優先しなさい。何か文句言ってきたら『あたしはレズじゃない』って言えばいいわよ」
結婚した今だって、あたしは浩介くんに好かれるため、全力で男受けを追求している。
あたしの中には、男として歩んだ１６年間の「知識」がある。
もちろん、浩介くん以外の男子にも未だにモテてるけど、それもまた、浩介くんの嫉妬を引き出すことで更に親密度を深める要因になる。
そう、女性に嫌われることが、むしろ気持ちよく思える。
そこまで徹底して男性に好かれるようになれば、後は結婚まで一直線だったりする。
「そ、そうなのね……」
「ええ、あたしくらいに美人じゃなくても、男子受けをきちんと考える女の子なら、ちゃんと『性格がよくてかわいい子』に見えるわよ。大丈夫よ、男って単純なのよ。あたしはＴＳ病だからその辺はよく分かるわ」

ぶりっ子には気付かないし、気付いても結局本能が勝つのが男の性質だったりする。
だからこそ、ぶりっ子になることを恐れちゃいけないのよね。
「でも、男の前だけで態度変わるのってよくないような気もするけど」
「気にしちゃダメよ。あなたも女性なら、男性の前なら、態度を変えた方がいいわよ。陰口なんて気にしちゃダメよ。そういうのは『努力しないブスの僻み』何だから、低レベルに合わせちゃダメよ」
あたしが更に、背中を押すように言う。
「……はい。ありがとうございました」
女性社員が去っていく。
これでもう大丈夫。
同姓、特にモテない同姓同士でつるむと、女から見たかわいいと男から見たかわいいのずれから、どんどん悪循環に陥っちゃうことも多いものね。

「ねえねえ、常務のアドバイス聞いた？」
「うんうん、あそこまで割りきれるのって、本当に尊敬するよ」
「あーあ、やっぱり常務くらいの美人だと、苦労しないんだろうなあ……」
「いやいや、常務レベルで美人で胸が大きいと逆に悩み大きいでしょ？　絶対男とかに言い寄られまくってるって」
「でも常務にとってはそれが快感なんでしょ？　そりゃあ私だって、ぶっちゃけ男にちやほやされたいとは思うけどさー」
「いいよねー常務は本能に忠実で」

あたしたちの会話を聞いていた、隣のテーブルの女性社員たちが盛り上がっている。それにしても近くにあたしがいる場所でよく噂話できるわね。
まあせっかくの忘年会なんだし、今は特になにもしなくていいわね。

「……ふう」
お皿に盛った食べ物を全て食べ終わり、あたしも椅子から立ち上がって忘年会の様子を見て回ることにした。
今はほぼ中途採用の社員で占められているけど、来年度からは、本格的に新卒社員の採用に入ることになっている。
人事部の採用課によれば、あたしたちの企業はかなりの人気を誇っているものの、「待遇はよく、ハラスメントなどもないが、機密に関しては極めて監視体制がきつい。実際に勤めていれば『この会社に逆らってはいけない』ことを身に沁みて分かる」という評判で、一部の学生からは敬遠もされている。
まあ、野心的な人間は役員以外この会社には必要ないし、その辺りはきちんと負の面も認識してもらった方が、こちらとしてもありがたいわね。
「お疲れさまー」
「あ、常務お疲れ様です」
あたしは、先程噂話をしていた女性社員たちのテーブルへと向かう。
あたしの突然の登場にも、彼女たちは動じていない。
「ふふ、どんな話してたのかしら？」
さっきのあたしについての話についてはあえて話題には出さない。
「あーうん、今流行ってるファッションスタイルがね、これなんですよ」
そう言うと、女性社員がファッション雑誌を見せてくる。
どうやら「流行ファッションで彼氏の心を掴め」とあるらしい。
「うーん、悪くはないわよ」
女の子になったばかりの頃に読んでいた女性誌と比べると、かなり男性受けが追求されていて、素直にとてもいいと思った。
落ち着いた感じで膝が隠れる程度のスカート丈のワンピースで、これが色が白なら、今のあたしの服装に近い。
「え!?　本当ですか？」
「ええ、ただし、男子受けと彼氏や旦那受けはまた違うから注意して

ね。あたしが今着ているこの服は、彼氏受けにも男子受けにもいいけど……もしこの服でデートするなら、彼氏と2人きりになった時に、露出度とエロさを極限まで高めた服と併用すると、効果抜群よ」
「へー、どうしてですか!?」
女性社員たちが、興味津々であたしの話に耳を傾けてくる。
ふふ、何だか、小谷学園の頃を思い出すわね。
あの頃もそう、龍香ちゃんや桂子ちゃんといったクラスの女子たちに「モテる秘訣」を伝授してたっけ？
「外では落ち着いた格好でガードを固くして、でも自分だけには無防備な姿を見せる……彼氏や旦那には、独占欲がとっても満たされるのよ。いい？　男は単純な生き物よ。狙って狙いすぎることはないわ。あなたたちも彼氏や旦那がいたら、そのようにしてみてね」
「はい」
女性社員たちもあたしがＴＳ病だということは知っているので、やはりそのあたりの説得力は女の子になって何年経っても健在だった。
「じゃああたし、他のテーブルも回るわね」
そう言ってあたしは立ち上がり、次のテーブルを目指す。
テーブルの数はとても多いので、全部を回りきることは不可能だと思う。

「お疲れさまー」
「あ、常務お疲れ様です！」
次に来たのは男性社員の多いテーブルで、もしかしたら浩介くん嫉妬しちゃうかな？
ともあれ、ここは支店を出している各ＳＶたちのテーブルで、言うなれば余呉さんの部下たちでもある。
「支店の方、聞いているわ。順調みたいでよかったわ」
「ええですが、遅れている地方もあります」
おそらく、その遅れている地方のＳＶと思われる人があたしに現状を報告してくれる。
うーん、遅れていると言っても大したことはなくて、あくまでも相

対的に遅れているってだけなんだけど。
「そう？　でも会社としてはこれでもかなり進んでいるから、無理をしちゃダメよ。最初は薬販売まで3年かかる見込みだったのよ」
「へー、そうなんですか。いやはや知りませんでした」
黎明期の事情を知る社員は今や少ない。
というより、発足時から居るのはあたしたちと蓬莱教授、そして永原先生と比良さん余呉さんくらいだものね。
「慌ててしまって大きな失敗をしてしまうよりはよっぽどいいわ。すぐに欲しい人なら、ちゃんと遠くまで足を運ぶと思いますから」
あたしが、各ＳＶにそう話す。
もちろん、余呉さんがどう出るかは分からないけど。
「分かりました。余呉さんにも伝えておきます」
「ええ、お願いするわ……じゃあ他のテーブルに行くわね」
「「いってらっしゃいませー」」
ともあれ、常務のあたしがあまり口を出しすぎちゃうと、もし余呉さんと言っていることが違った時に板挟みになりかねないから、慎重に発言した方がいいわね。
うー、改めて責任のある立場よねあたし。
「お疲れさまー」
「わっ、これは常務！　お疲れ様です！」
こちらは主に工場勤めの社員さんの集まりで、あたしとはあまり接点がない。
工場勤めといっても、かなり待遇はよく、熟練した人も多いので、年齢はほぼあたしより１０歳位年上の人が多い。
「あら？　みんなあたしが常務だって知っているのね。旦那の社長の顔くらいだと思ってたわ」
あえてあたしが、意地悪を言ってみる。
「いやいやいや、常務はもう世界的にも有名人でしょう？　今海外の雑誌でも、蓬莱カンパニーは注目されているんですよ」
「あら？　そうなのね。まあいいわ。機械の調子はどうかしら？」
「ええ、今の所は問題ありません!!!」

社員さんが大きな声で話す。
うーん、そういうのはちょっと苦手なのよね。
「そう？　メンテナンスは怠らないでね。あ、あと、あんまり大きな声で話さなくても聞こえるわよ」
「わ、分かりました」
普通の話し声に戻ると、あたしはここにも別れを告げて、次のテーブルに向かおうとする。
「お、優子ちゃん」
浩介くんと鉢合わせになったわね。
「あらあなた、奇遇だわ」
お互い全く狙ったわけではないけど、浩介くんと目が合ったのでこちらへと向かった。
浩介くんの片手には、ジュースの入ったコップが設けられている。
「ジュースっておいしいわよね」
「ああ、酒なんかよりもよっぽどいいよな」
蓬莱カンパニーでは、お酒を飲む社員が少ない。
それは、蓬莱の薬を飲んだ顧客に対して、あたしたち協会が行っている「安全講習」と全く同じ内容のことを教えているから。
そこの安全講習では、ＴＳ病患者にとって、酒はタバコよりも有害だということを教わることになる。
それは長期的な健康への有害性ではなく、酔っぱらうことによる「注意力散漫」が事故を引き起こす危険性を格段に高めるから。
タバコも有害には違いないが、ＴＳ病患者の修正力からすれば、実は長期的には無害でさえある。ニコチンにしてもアルコールにしても、ＴＳ病の耐性の場合なら、よっぽどの摂取でない限りは依存症にならないことが分かっている。
もちろん、覚醒剤などのレベルになれば、ＴＳ病の遺伝子でも耐えきれないので、絶対に使用はしてはならない。
これらの内容は機密でも何でもなく、むしろこちらは世間にどんどん広めていきたいものなので、むしろ漏洩を推奨さえしている。
まあ、こういうのを設けておけば、意外にもガス抜きになるのが強

いわよね。
「浩介くん、テーブルの方はどうかしら？」
「あーテーブルというよりも、結構道中道中で声をかけられてるよ」
浩介くんがやや苦笑い気味に話す。
まあ、社長とは言ってもまだ若い会社だからね。
「あらそうなのね。あたしは特にそういうことはないかな？」
「あーうん、優子ちゃんはほら、俺がいるじゃない？　男性社員は声かけにくいって」
「あはは、そうだったわね……」
男なら、男の嫉妬をよく知っている。
あたしの場合、単に会社の常務取締役というだけではなく、社長夫人でもある。
男性社員がそんな人に声をかけたら、社長にどんな報復をされるか分かったものじゃないと警戒するのも当然だった。
「俺も、女性社員は誰も声をかけようとはしねえしな。まあ、そんなもんだろ？」
「あーうん、そうよね。あたしも嫉妬深いと言えば嫉妬深いし」
愛するが故の嫉妬だけど、外野から見れば「触らぬ神に祟りなし」となるのは当然だ。
実の所を言うと、あたしが嫉妬しても浩介くんが嫉妬しても、後ですることは同じなんだけどね。
「そうそう、もし更に人が増えて多忙になったら秘書が必要になると思うんだけど」
「あーうん、男性限定で求人出して。理由欄に、『妻が大変嫉妬深いため』って書けば大丈夫よ」
つまり、女性であるあたしが浩介くんに対して圧力をかけたという形にしておけば問題はない。
そう理由に書いておけば、よっぽど頭おかしい人じゃない限り、求人に出そうとは思わない。
それに、蓬莱カンパニーに逆らうとどういうことになるかは、日本人なら皆知っているはずだものね。

「あはははは……うん、そうしてみるよ」
どっちにしても、あたしが嫉妬するということにしておけば、世間から非難を浴びるにしても、あたし個人に浴びせられるだけで済む。
「いやいや篠原さん。それじゃあ甘いわよ」
あたしたちが話している横から、よく見知った声が聞こえてきた。
あたしが振り返り、浩介くんがあたしの向こう側に視線を移す。
そこに立っていたのは、永原先生だった。

## 幹部同士の交流

「あれ？　永原会長」

会社の中では、相談役という立場も、協会会長としての顔を全面に押し出すので、永原先生のことを、あたしは自然と「永原会長」と呼ぶことが多くなっている。

「求人票に書かなくても、採用する際の内規でそうしておけばいいのよ。あるいは社内で良さそうな人物を見つけて、それで採用するというのもいいわよ」

永原先生が少しだけしたり顔であたしにアドバイスをしてくれる。

「なるほど、そうよねえ」

確かに、言われてみればその通りだった。

女性なのに応募しちゃった人は、気の毒としか言いようがないけど、変なクレーマーに絡まれるよりはマシかしら？

「でも漏洩リスクがなあ……ただでさえ相互監視で締め付けてるし……」

だけど浩介くんは、まだ納得がいかない様子だった。

うん、確かに浩介くんの言い分にも一理あるのよね。人手不足になっちゃうとよくないし。

「まあ、その時になって考えるといいわ。やっぱりおすすめは、社内でこっちから選抜することだと思うけどね」

永原先生の言う通り、余計なリスクを負わないためにも、その方がいいみたいね。

「あー分かった。じゃあそうするわ」

「えへへ、私ちょっとは相談役らしいことできたかしら？」

永原先生がやや照れ顔で話す。

永原先生は役員報酬こそ貰っていないけど、今後は大株主として配当金というものを貰う予定になっている。

今後の売上高や株価次第では、何もしなくてもずっとやっていけるだけの金額は得られるということだけど、永原先生曰く、「教師にも愛着がある」とのことだった。

「ええ。助かるわ」
ともあれ、こういうときにどっしりとあたしたちにアドバイスできるご意見番というのは、やっぱりいざというときの必要なのよね。
こういったいざという時の助言役は、よく「老害」とも言われているけど、永原先生の場合はそういったことは全く無くてよかったわ。
「ふふ、篠原君も篠原さんも大人になったわね」
永原先生が感慨深そうに言う。
あたしたちの付き合いも、単なる学校の先生と生徒という枠組みを、完全に飛び越えていて、特にあたしと永原先生は、ただでさえ複雑だった関係がもっと複雑になってしまった。
「あ、うん、ありがとうございます……って、さすがにもうあたしたちもとっくに大人ですって」
少しだけ乾いた笑いが漏れる。
成人してから大分年数も経つのもそうだけど、生まれたばかりとはいえ、これだけ大きな会社の役員なんて、子供どころか並大抵の大人でも到底勤まるようなものじゃないし。
そういう意味では、あたしだってもう立派な大人になったと胸を張って言えると思う。
「ああうん、そうよね……ごめんなさい、ちょっと感覚が狂っちゃってたかも」
永原先生は、ただでさえ「大人を超えた大人」といっていい人で、気の遠くなるような長い人生を過ごしてきた。
特に江戸城時代は、常に政治の中枢部と密接な関係を持っていたわけで、それこそ世間や大人の汚い部分なんて、嫌というほど思い知っているはずだもの。
いくらあたしが立派な大人になったと思っていても、永原先生の内心では、「１００年生きてない人はみんな子供」くらいに思っていても不思議じゃない。
まあ、永原先生はそういう人ではないけれど。
「うん、私も自分のことは分かってるわ。私が、その辺の大人らしい大人が子供に見えてしまうようなくらいには、大人になっちゃってるこ

ともね」
　もしかしたら、あたしが幼少期がないことをコンプレックスに、子供っぽいものに執着しているせいで、そう見えてしまったのかも知れまい。
　それに、実際には永原先生にも子供っぽいところはある。
「でも、永原会長だって、子供っぽいところはありますよ」
「ああうん、そうよね……私もほら、子供っぽいグッズとか子供っぽい格好とか好きだし。青春のこととかもあるから――」
　うーん、そうじゃないのよね。
　そう思って、あたしは静かに首を横に振る。
「違うわ。永原会長が子供っぽいのは、例えば真田幸村とか、忠臣蔵とか」
「な!?」
　あたしがちょっと図星を突いてみると、永原先生の顔が、みるみるうちに赤くなっていくのが分かった。
　怒らせちゃったかな？　と思った矢先、永原先生はぜえぜえと、息を吐いた。
「はぁ……はぁ……確かに、篠原さんの言う通りかもしれないわね。確かに私にとって、左衛門佐殿のことを幸村と呼ぶのは許せないし、忠臣蔵での吉良殿を貶める話も大嫌いだわ」
　もちろんそれは、当時の価値観からすれば、常識ある大人なら、忠義を受けた恩人にはとにかく報いるというのが当たり前だったから、間違いではないとはあたしも思う。
　それでも、現代の人に対して、例え私たち現代人が間違っていたとしても、例えばあの時の上田駅前での振る舞いや、９年前の夏祭りでのさくらちゃんに対する振るまいが、大人の振るまいとは到底思えない。
「まあでも、当時の大人だったら、たぶん私のこうした振る舞いを非難はしなかったと思うわ」
　やっぱりあたしの予想した通りのことを、永原先生が言ってくる。
「そうね……昔の人って、子供だったのかしら？」

以前にも、永原先生から戦乱の時代の話は聞いたことがあり、とてつもなく切れやすく些細な事で喧嘩が始まるということを聞いていた。
そうしたエピソードを見ると、そうとしか思えなかった。
「ああうん、間違ってないと思うわ。あの頃はそう、今思えば随分と簡単なことで人が死んだもの。私も女になって、我慢を覚えたものよ」
永原先生は、否定しなかった。
昔の人は昔を美化しがちだというけれども、永原先生にはそれがないのよね。
やっぱり老化しないせいなのかもしれないわね。
「それでも、主君のことや恩人のことだけは、私もどうしても譲れないわ」
永原先生は、その事を「かくすれば　かくなるものと知りながら　やむにやまれぬ　大和魂」だと言った。
これは幕末の「吉田寅次郎松陰」の歌で、志士に多大な影響を与え、現代の人の心にも響いている短歌だという。
「確かに昔の人は、今から見ればバカじゃないだけで、精神は子供だったかもしれないわ。それでも、私たちが日本人である限り、この歌のことは忘れないわ。絶対に、ね」
永原先生が笑顔で話す。
確かに、あの時の「真田幸村」のことも、さくらちゃんに忠臣蔵について怒った時も、いや、もしかしたら永原先生が忌み嫌っている赤穂浪士たちも、この歌と同じ思いだったのかもしれないわ。
彼らだって、世論がいかに同情したとは言っても、後世の人間が冷静に振り替えったら、自分達の旗色が悪くなることは知っていたと思う。
実際、今の日本では、永原先生の名誉回復運動もあって、吉良上野介は何も悪くなかったことはほぼ常識になっている。
それどころか、当時の法律でも仇討ちとは認められないことも知っていながら、あの行動に出た。
「何だろう、蓬莱さんの研究も、そんな感じがしてきたよ」

浩介くんが、しみじみとした表情で話す。
確かに、蓬莱教授も不老の研究をすれば、世間の目は最初は厳しくなることは知っていたと思う。
それでも実現が可能と踏んだから、大和魂で作り上げたんだと思う。
「うん、私もそう思うわ」
時代と共に変わる価値観はあるけれど、絶対に変わらないものもある。ということなのかもしれないわね。
そのあたりをどうバランス取るかは、今後の日本を左右しそうだわ。
「さ、話もここまでにして、私も他のテーブルに行くわね」
「いってらっしゃーい」
永原先生が、あたしたちから離れる。
「じゃあ浩介くん、また会いましょう」
「ああ、そうだな。親睦を深めねえと。あ、他の男にセクハラされたりしたら、ちゃんと言うんだぞ。即刻しばいてクビにしてやるから」
浩介くんが、相変わらず盛り上がった力こぶを見せてくれる。
蓬莱の薬を飲んでいるお陰で、浩介くんは体力が落ちていない。
だから今でも、あたしを守る力があるのよね。
「あはははは……うん、気を付けるわ」
浩介くんなら本当にやりかねないから、あたしも気を付けないといけないわね。
まあでも、実はあたしもちょっとだけ期待しちゃったりもしてるけどね。
「お疲れさまー」
「あ、これは篠原常務！　お疲れ様です！」
あたしは今回の忘年会の実行委員のテーブルに向かい、司会進行役の人に声をかけた。
忘年会の実行委員の人たちは、忙しい仕事の時間の合間を縫って、今回の企画を考えてくれた。
「今回は本当にありがとうね。お陰で来年以降の社員の士気も上がる

わ」
今後は会社の方で「社員の慰安」を考えて、そうした会社の雰囲気作りや、休憩所の整備、また専属のマッサージ師を雇って社員たちにマッサージして貰う人などを所属させるグループを人事部傘下に作る企画が、比良さんの方で進行中でもある。
ふふ、あたしも、肩を揉んでもらいたいわね。
「はい、我々も、この経験を活かして、来年以降の企画に役立てたいと思います」
司会の人も、モチベーションは高そうでよかったわ。
「ええ、楽しみにしているわ」
忘年会の企画には、大きな負担が必要で、永原先生の学校と重ならないことが大きな条件になっている。
幸い、協会には忘年会はなかったのが大きな救いだわ。
「はい、ありがとうございます」
あたしはテーブルを離れて考える。
そうだわ。協会も株主になっているし、来年以降は来賓に協会の関係者を呼ぼうかしら？
ＴＳ病の女の子には美少女が多いし、場合によってはカップルが何組も誕生するかもしれないし。
……そうだわ。この事は永原先生にも話さないと。

「え？　うん、いいわね」
一旦幹部のテーブルに戻り、永原先生を捕まえると、永原先生はすんなりとした表情でＯＫサインを出した。
後は企画グループの方だけど、今の所この会社の社員構成には男性が多いみたいだし、ＴＳ病の美少女軍団が来ることに反対する人は多分いないから大丈夫そうね。
「うまくいけば、今まで恋愛を諦めてた人でも」
「ええ、夢が広がるわ」
永原先生とあたしで盛り上がる。
あたしも、浩介くんと付き合った当初は、寿命問題とは無縁ではな

かった。
でも、幸子さんと直哉さん、歩美さんと大智さんには、そうした問題はなかった。
それだけ、あたしたちＴＳ病患者も蓬莱教授に助けられているということでもあるのよね。
「あ、皆さんもお疲れ様です」
「あ、余呉さんお疲れ様」
余呉さんも、この席に戻っていた。
いつの間にか最初の歓談の時間も少なくなってきた。
あたしたちがテーブルに残ったのは、残りの時間を上層部同士での打ち合わせに参加するため。
忘年会では、みんなの本音が出るため、社員たちが不満の声をあげてないかきっちりと監視する必要がある。
会社が終わった後の飲み会で、上司への愚痴を言う何てこともあるが、機密漏洩を防止するためには、こうした声をなるべく聞き取らなければいけない。
そのために、以前には怪しい社員をリストアップして尾行の上陰口を調査する機関を設けることも検討されたが、さすがに監視が過ぎるのと、監視機関そのものの監視も必要で、いくらなんでも経費がかかりすぎるとのことでお流れとなった。
「今の所、不満の声は出てないようです」
比良さんが少しだけ安堵の声で話す。
「とはいえ、信用はできんな。俺たちここにいるし」
浩介くんが至極全うに分析する。
その通りで、あたしたちが社員たちからもある程度の恐怖を持たれているのもまた事実だった。
それは世間一般が持っている蓬莱カンパニーへの賛辞とは、全く別のものだった。
何故なら、彼らも「自分達が信用されていない。監視されている」ということは重々承知だから。
未だに薬を生成する際、重要な工程は取締役の工場長が自ら自室に

籠って行っており、また機密情報にある程度アクセスできるのも、蓬莱の研究棟出身の部長や次長クラスの社員だけ。
とはいえ、普通に働いていれば、そんなこと気にもならないようにできている。
そう、結局のところ余計な欲を出さなければ、蓬莱カンパニーはこれ以上ないほどに働きやすい職場になっている。
何分独占商売のためにかなりの利ざやを確保できるため、社員の福利厚生も給与も、極めて高水準にあるから。
人も気持ち多目に雇うことで、仕事持ち帰りなしの残業０を達成している。
「不満の声を漏らす場所がなかったとして、まあ今の所は機密漏洩なんてしでかす社員はおらんだろうな」
社外の人間が上層部を通さずに接触してきた場合、必ず上に報告するように義務付けている。
また、当社の管理職に対して、金にものを言わせたヘッドハンティングのような行為に対しても、蓬莱カンパニーへの反逆行為と見なし、常に相互監視と密告を奨励させ、もし他社で機密を漏らせば、子孫代々の「薬封鎖」が待っているし、そうしたことを試みた会社にも、末端社員に至るまで子々孫々に制裁措置を行うシステムになっている。
「問題は海外だ。手段を選ばない国によってはハニートラップを仕掛けてくるかもしれん。俺も優子ちゃんを妻に持っているから知っているが、男と言うのは美少女に迫られると弱いものだからな。まあ、優子ちゃんを知っちゃったら、他の女じゃもの足りねえけど」
浩介くんがさりげなくのろけを混ぜてくるので、あたしの顔もぷしゅーっと赤くなってしまう。
もう、浩介くんってたらしこみの天才なんじゃないかしら？
うーん、今の所は国内限定販売ということで、海外への出張は存在しないけど、海外出張の際には、現地人によるハニートラップに引っ掛からないように色々と今のうちに考えておく必要があるわね。
「うーむ、どうしたらいいかしら？」

テーブルに座っていた永原先生も腕を組んで考えている。
自分達がかわいくて美人だからこそ、ハニートラップの恐ろしさは理解ができる。
これで弱味を握られれば、面目が優先されて連座制でさえ崩壊しかねない。
あたしたちは、この対策についても大真面目に考えないといけないわね。
「そうね……妻がいる社員は常に妻を同行させ、そうでない場合も女性社員と1組に組ませて、お互いが絶対に離れないように対策をとる。というのはどうかしら？」
経費はもちろんかなりかかっちゃうけど、ハニートラップ対策にはそれしか無いわよね。
とにかく、この手の敵諜報機関からの揺さぶりには気をつけないと。
「それで行こう」
あたしの意見に浩介くんが賛同し、他の役員からも異議は出ない。
結局、単独行動を阻止させる以外に、対策方法はないと思う。
機密漏洩の可能性がある時は、常に複数人で行動させ、怪しい行動をした社員を密告させるのが、裏切りを防ぐのには一番確実と言うことになるわね。
もちろん、虚偽の密告は重罪に処することでバランスも取っているし、手厚い労働環境があってこそだけど。
「まああれだ。海外出張が必要になる頃までに、日本と世界で経済格差を広げていくことが大事だろう。その辺りは、俺たちの領分じゃあないな」
浩介くんのその総括で、あたしたちはひとまず対策協議を終えた。
その後、他の役員たちも続々と戻ってきて、あたしたちのテーブルは再び全席が埋まった。
蓬莱教授や和邇先輩も、社員たちの評判を聞いて回ったけど、「あまり見回りするのもよくない」とのことで、次のレクリエーションが終わったら、またあたしたちだけで話を進めることにした。

## 永原先生の意地悪問題

「さあ続きましてはですね。全テーブルが参加しましてのクイズ大会となっております。こちらの問題を作ったのはですね。相談役の永原さんでして、主に鉄道クイズになっております！」

永原先生が今回のクイズ問題を作成したことは知っている。

でも、何だか難しい内容になりそうだわ。

「各テーブルから1人代表を選んでください。優勝したチームには豪華商品をプレゼントいたします」

ちなみに、さっき「全テーブル」と言っていたが、あたしたち役員テーブルは参加しないことになっている。

出題者がいるという意味もあるし、他の社員が役員組に配慮してしまう可能性もあるから。

永原先生は意地悪そうににっこりとしていた。

どうもあの顔、「正解させる気ありません」って感じだわ。

そうこうしているうちに、他のテーブルからは代表者が続々と集まってくる。

ちなみに、強制ではないので参加しないテーブルも出てきている。

まあ豪華商品といっても、大したものは出ないし、そもそも欲しければ買えるものばかりなので、あたしたちの今後の収入を考えたら、別に棄権しても痛くも痒くもないわね。

「ではですね、このクイズは問題を出題していきます。制限時間がございます。お手元のボードに、正解をお書きください」

「きゅふふ」

永原先生の不適な笑みはどうしてもあたしにサディスティック性を印象づける。

あたし自身も、たまに肉食系女子に変身して、浩介くんを食べる時にあんな表情になっていると思う。

壇上にあるスキャナーからも映像が見えていて、出演者たちはみんな緊張している。

これだけいれば鉄道マニアもいそうだけど、果たしてどうかしら？
「ではですね、最初の問題に移りたいと思いますででん」
司会者の人がよくあるのりで入る。
無駄に効果音まで放送していて凝っている。
「次の４人のうち、最も安い普通乗車券で往復移動した人は誰でしょう？　１、東京駅から大阪駅　２、東京駅から明石駅　３、大宮駅から大阪駅　４、東京駅から姫路駅　さあこれは地理的な位置関係や距離関係が問われるクイズですね」
何人かの人が勢いよく書いている。
もう何人かは、一瞬躊躇した後に書いている。
テーブルからも、ヒソヒソ声が聞こえてくる。
「では、一斉に回答をオープンしてくださいどうぞっ！」
全員が回答ボードをこちらに向ける。
圧倒的に多いのが「１」で、何人かが「３」を選んでいて、「４」だけ１人だった。
「さあ圧倒的に多いのが１で、深読みした人が３番４番を選んでいますね。じゃあ３番を選んだ人、どうしてですか？」
「嫌なんかあるんじゃないかなと……大宮からなら北陸からの方が近いとか？」

「ふふっ、楽しいわ。全員不正解ね」
永原先生がにやにやと笑っている。
まさにしてやったりの展開だったんだわ。
「もしかして２番なんですか？」
「ええ、正解よ。往復移動というところがポイントなのよ」

「じゃあ正解は……２番です！」
すると会場全体から驚きの声で「えー!?」という音が聞こえてきた。
確かに、この中だと一番無さそうな解答だものね。
「じゃあですね、出題者の永原さん、どうして２なんでしょうか説明してください」

「はい」
　永原先生が椅子から立ち上がり、マイクを受けとる。
「普通乗車券には片道辺り６０１キロ以上の切符には片道運賃が１割引になる往復割引があります」
　永原先生が手元のパソコンを操作し解説をする。
「するとですね、５６１キロから６００までの間の往復乗車券は、６０１キロから６４０キロまでの間の往復乗車券よりも割高になるんです。１番と３番はちょうどそれに合致する距離になりますし、４番の場合は逆に長すぎてしまうので、２が正解になります」
　スクリーンには、具体的な経路とキロ数が地図と共に合わさっている。
「んー、それにしてもいきなり全員不正解とは。これは難問が続きそうですよ！」
　おそらく、１を選んだ人は、「忘年会だしそんな難問は出ないだろう」とタカをくくっていたんだと思う。
　一般的な感覚で言えば、姫路や明石、大宮と東京大阪の位置関係を問う問題だと思うはずで、どうしたって１を選びたくなるもの。
「では次の問題に移りましょうででんっ！　ＪＲ山手線の『正しい』路線区間の駅を『過不足なく』全て書いてください、ＪＲ山手線の『正しい』路線区間の駅を『過不足なく』全て書いてください。この問題は制限時間７分となっています。あ、ちなみにひらがなでもＯＫとのことです」
　これは、あたしも以前永原先生に聞いたことがあるので知っている。
　そして、永原先生はまた意地悪な問題を出してきたことも分かる。
　答えは「品川、大崎、五反田、目黒、恵比寿、渋谷、原宿、代々木、新宿、新大久保、高田馬場、目白、池袋、大塚、巣鴨、駒込、田端」で、東側の区間は東海道本線と東北本線の所属になっているので、除外しないといけない。
　山手線と言えば環状線でぐるぐる回っているというイメージだけど、それは「便宜上そう案内している」というだけで、正式には品川

駅から田端駅までの区間のことを言うのだと言っていたものね。
「さあ時間一杯ですどうぞっ！」
回答者たちは困惑しつつも、パネルを前面に出した。
「ふむふむ、皆さん東京から始まっていますね」
もちろん、「東京」とあるのは不正解だけど、「銀座」とか「大久保」とか「王子」何て言う誤答や途中の駅をいくつも飛ばしているパターンも散見されている。
どうやら、鉄道に詳しいマニアの人はここにはいなかったみたいね。
「うーん、やっぱり全員不正解ね」
永原先生は、回答者が全員誤答していることにとても満足気な様子だった。
それにしても、これで嫌われないと思っている所が、永原先生の大胆さよね。
「では正解です。こちら」
画面に、正解が写る。
あたしの予想通りで、会場からも再び驚きの声が漏れる。
そもそも、なぜ「品川から田端」なのかは、一般の人に説明するのって難しいわよね？
「うーん、またしても全員不正解ですねー、にしても意外ですよね。山手線っていうと一週ぐるりなイメージですが、これでは西側だけになりますよね。解説お願いします」
また永原先生が前に立ってマイクを受けとる。
２回続けて引っかけ問題が出され、回答者も永原先生に向ける視線が厳しくなる。
「はい、山手線を一週全て山手線と呼ぶのは便宜上の話で、実際には東京から品川の間は東海道本線、東京から田端までは東北本線に、それぞれ属しています。実は山手線は元々品川から新宿を通って赤羽に抜ける、東海道と東北との連絡路線として明治に開通したんです。その後、池袋駅が完成して、田端方面への支線が分岐し、こちらが山手

線に編入され、池袋から赤羽の間は赤羽線という別の路線になりました」
永原先生の解説と共に、スクリーンの画面が変わっていく。
明治と言えばもう遠い遠い昔の話で、祖先たちの出来事だけれども、永原先生や比良さん余呉さんにとっては、昔の古い記憶の１つでしかないのよね。
「実は東京駅ができたのも大正時代の比較的新しい時期でして、それまでターミナル駅はとても分散していたんです」
永原先生の解説が終わり、続いて第３問に入る。
第３問には４枚の鉄道写真が載せられていた。
「次の各列車の『運転最高速度』が一番速い列車はどれでしょう？」
４枚の写真のうち、１枚は、来年度に開業する「中央リニア新幹線の車両」だった。
残り３枚は、今走っている既存の新幹線車両で、当然素直に考えれば、時速５００キロ運転が予定されているリニアが一番速い。
しかし、引っかけ問題を２問続けたために、回答者の間で疑心案義になっている。
「ふふ、今回はサービス問題よ。別に営業開始前の車両にも、運転最高速度はあるわよ。そうじゃなかったら大変じゃない」
そう、常識的に考えればその通り。
だけど回答者たちは、かなり悩んでいる様子だった。
もしこれが１問目なら、間違いなく全員正解をしていたはずよね。
……永原先生って、「真田の人間」を自称するあたり、性格悪くなろうとすれば徹底しているわよね。
「さあ、回答をオープンしてみましょうどうぞ！」
パネルを出してみると、約半分がリニアの車両を選んでおり、残りが新幹線の車両に分散していた。
司会者さんのインタビューによれば、引っかけ問題を続けた後の素直な問題ということで、回答者もかなり困惑しているらしいわね。
「では、正解はこちら」
そして、リニアの車両が一番速いという回答結果に、会場からは

さっきまでとは違い「おー」という声になっていた。
「今回は素直な正解ですね。解説いいですか？」
「はい」
また永原先生が椅子から立ち上がる。
どうやら、あたしたちにネタバレしたいらしくてわざわざ毎回往復しているらしい。
おそらく、あたしたち役員に対して優越感を持たせるため、よね。
「運転最高速度、当たり前ですけれども営業前の車両にも存在します。そうでなければ見切り発車になってしまいますから。ですので、正解は普通に３のＬ０系になります」
永原先生の解説は淡々としている。
一方で、正解にありつけた回答者たちはほっとした表情になっていた。

その後も、鉄道クイズは引っかけ問題とストレート問題、あるいは単純な超難問とをうまく混ぜ合わせ、回答者たちを翻弄しつつ、クイズ大会が終わった。
参加している人は一喜一憂しているけど、あたしたちは別の視点から眺めている。
疎外感よりもストレスフリーな印象が、あたしには強かった。
「えーでは優勝したのは……３番テーブルの広報チームの皆さんです」
パチパチパチパチ！
「では、こちらが商品になります。どうですか？　やってみて」
「ああはい、鉄道って奥が深いんだなあと思いました。でもいくつかは、鉄道マニアの友人に聞いた内容もあったので、落ち着いて答えられました」
何だかあまり気分はよくなさそうだけど、永原先生としては、狙い通りのことかもしれないわね。
「ふふ、良かったわ」
テーブルの永原先生は、相変わらずマイペースににっこりしてい

た。
確かに意地悪な問題構成ではあったけど、永原先生の解説は後半になるにつれて分かりやすく、興味深いものになっていた。
これが俗に言う「落としてあげる」という方法で、いわゆる「洗脳」の常套手段にもなっている方法でもあるのよね。
「あ、来年以降は別の企画でお願いしているわ。クイズ作るのも大変なのよ」
意地悪な出題も、作るとなると難しいというのは、その通りだと思う。
漫画にしてもアニメにしても小説にしても、「産みの苦しさ」というものは必ずあるものね。
「そうなのね」
「ではこれにてクイズ大会を終了いたします。この後は引き続きご歓談となります。皆さんこの後も忘年会をお楽しみ下さい」
パチパチパチパチパチ
司会者さんがそう言うと、会場からはしっかりとした拍手が沸き起こる。
ともあれ、最初はどうなることかと思ったけど、クイズ大会も一応うまくいったみたいね。
さて、この後の歓談タイムだけど、予定ではデザートなどが並ぶことになっている。
ふふ、甘いもの、楽しみだわ。どんなのが並ぶのかしら？
「優子ちゃん、行こうぜ」
「うん」
そして後半の時間は、あたしたちは浩介くんと2人で行動することになっている。
役員、それも社長と常務という立場ではあるけど、忘年会はみんなで楽しむべきものだもの。
だからあたしも、浩介くんとの忘年会、全力で楽しまなきゃいけないわ。
あたしと浩介くんが、また列に並ぶ。

自然とあたしが手を出すと、浩介くんが手を握り返してくる。
「えへへ……」
あたしの顔が自然とほころぶ。
あたしが左側で浩介くんが右側なので、あたしの手には、浩介くんの指に嵌められた堅い誓いの印が伝わってくる。

「ねえあれ……」
「うん、社長と常務、噂通りのアツアツよね」
「いいよねえ、あんな風に夫婦で手を繋げるの」

「うー、何だよあれ！」
「僻むな僻むな。社長と常務でラブラブなのはこの会社ができるずっと前からじゃないか」
「うおおおおお!!!　不平等だあああああ!!!」

社員たちの間でも、あたしたちの様子を見て盛り上がっている。
あたしは心持ち、浩介くんと繋ぐ手を強めた。
あたしは、不意に左手をあげて、薬指に嵌めてある結婚指輪を見つめた。
「っ……」
あたしが微笑むと、浩介くんの顔が真っ赤になってうつむいていく。
それを見て、あたしも顔をそらしてしまう。
結婚してから来年で8年、あたしたちの年齢は、あの頃から止まったままで、それは「永遠の新婚」を意味していた。
「あなた……愛してるわ」
「うん……」
一番近い所にいる浩介くんにだけ聞こえるような小声で、あたしは何度目か数えるのを諦めるほどに言った「愛してる」を繰り返す。
あたしたちの列は一歩、また一歩と前に行き、それは一緒に浩介くんとお手々を繋いでラブラブ出来る時間が短くなっていることを意

味している。
「ねえ優子ちゃん、そろそろ」
「あ、うん……」
浩介くんが前方を見ると、既にあたしたちの番はすぐそこだった。
あたしたちは先程と同じようにトレイを持ってお皿を起き、前方のメニューを見る。
焼きそばやフライドポテトなどが補充されていた他、一番向こう側には人だかりができていて、あれがデザート部分だということが分かる。
あたしはともかく、浩介くんはまだ食べ足りないらしく、結構な量を盛っていた。
もちろんあたしは、浩介くんのペースに合わせる。少しでも、浩介くんと一緒にいたいから。
そして、デザートのコーナーが見えてきた。
どんなデザートがあるのかしら？　楽しみだわ。
「はーん、美味しそうだわー！」
パイナップルやミカン、イチゴやブドウなどのフルーツ類の盛り合わせバイキング、更に甘そうな色とりどりの味のゼリーたち、そして何よりチョコレート味とバニラ味の数多くのショートケーキがとてもきれいに並んでいた。
　んー！　美味しそうだわー！
「優子ちゃんの幸せそうな顔、大好きだよ」
「うん、ありがとう」
あたしは、夢中でフルーツにケーキを取っていく。
更に近くにはオレンジジュースにリンゴジュース、ミカンジュースなども置いてあり、どれもこれも甘くて大好物ばかり。
「うーん、きれいだわー」
盛り付けが終わり、デザートの部分を見てあたしの目がハートになる。
甘いものはエネルギー源でもあり、女の子の大好物でもある。
あたしにとっては、特に、ね。

「あーでも、今は優子ちゃんの服の方がきれいかも」
また浩介くんがお馴染みの誉め言葉をかけてくる。
でもあたしは、何度されても慣れることはなく、顔がポット赤くなってしまう。
もちろん、意識的に慣れちゃわないようにしないといけないけどね。
「もう、浩介くんったら……さ、食べましょ」
確かに今のあたしは膝下丈の純白のワンピースで、清楚さを強調した格好になっている。
もちろん、あたしのかわいい顔やスタイルも含めて、「きれい」ってことだとは思うけどね。
「ああ」
あたしと浩介くんは、トレイを持ちながら役員のテーブルへと戻る。
テーブルには、既に永原先生と比良さん余呉さんが座っていた。
甘いものに夢中になりすぎてて、どうやら途中で追い抜かれちゃったみたいね。

浩介くんと抜け出し

「あら、篠原さんお帰りなさい」
「あらあら、相変わらず篠原さんも甘いものが好きなんですね」
比良さんは、自分のトレイにあるデザートの多さを棚にあげて、あたしの甘いもの好きについて触れる。
「えへへ、何てったってあたし、女の子だもん」
男だった頃から、甘いものは嫌いじゃなかったけど、女の子になってから、とにかく甘いものに目がなくなった。
それは永原先生や比良さん、そして余呉さんも同じだった。
特に余呉さんは、台の中央にあった砂糖をまぶして更に糖度をあげている。
ＴＳ病なので、よほどのことをしない限りは糖尿病にはならない。
そういうこともあって、あたしは「ＴＳ病になって女の子になると、味覚も甘党になる」と思っている。
実際、女性誌でもスイーツはよく特集されるし、小谷学園や佐和山大学の女子たちの話題も、スイーツ多いものね。
「ふー、これを振りかけると甘いわよ」
余呉さんが、あたしにぐいっと薦めてくる。
うー、誘惑がとんでもないわ。
「うーん、じゃあ少しだけ」
「はい」
もちろん、あたしは男の頃から砂糖と塩の区別はついている。
もちろん、この白いのが砂糖そのものなのは分かる。
「優子ちゃん、それかけるの？」
「ええもちろん」
といっても、ちょっとだけだけど。
あたしは意を決してショートケーキの上から砂糖をまぶして見る。
「んー」
ダメ、ヨダレが出ちゃいそうだわ。
はしたないから我慢しないと、女子力落ちちゃうわ。

「美味しそうねえ……」
永原先生も、目をキラキラと輝かせている。
女の子の甘いもの好きは有名で、あたしたちは特にその傾向にある。
だからこうしてスイーツに砂糖がまぶされているのを見ると、もうたまらないわ。
「あーんっ……はうう、美味しいわー！」
口の中に広がるスイーツの甘味に、まぶされた純粋な砂糖がよくアクセントになっていて、甘いものに甘さが加わったその美味しさを引き出している。
口の中がとろけるように響き、幸せに包まれていく。
余呉さん、美味しい食べ方ありがとう。
「ふふ、篠原さん気に入ってもらえたかしら？」
「はい、とっても美味しいです！」
とにかくこの甘さがたまらないわ。
「幸せそうに食べている優子ちゃんっていいよなあー」
浩介くんが、ボソッと呟いた。
幸せそうな女の子はかわいいって言うけど、それが自分の妻ならなおのことよね。
「えへへ、甘いものだーいすき」
「やっぱり、女子って甘いもの好きだよなあー」
浩介くんが、あたしたちの甘いもの好きを見てそう漏らした。
あたしも永原先生も、そして比良さんも余呉さんも大の甘党で、幸子さんと歩美さんも甘いものが大好きなのよね。
もしかしたら、ＴＳ病の特徴なのかも？
「うんうん、甘いものに精通してると、何だか女子力高いって感じかしら？」
「そうねえ、確かに女性誌でもよく特集しているものね」
比良さんは、女性誌を愛読しているらしい。
あたしたちはどれだけ女の子になりきっても、元々男だったという事実は消えない。

もちろん、ＴＳ病ということで、「これは男受けしない」とか、そういった選別もお手のものだから、悪いことばかりじゃないけどね。
比良さんは、小さなチョコレートケーキを、半分食べる。
同じ量のケーキを、浩介くんが豪快に１口で食べ、あたしは３回に分けてゆっくりと味わう。
「チョコレート美味しいわー」
「うん、やっぱりこういうの作れる人って珍しいよなあ」
確かに、パティシエの人ってすごいと思う。
お菓子作りと言えば、あたしにとってはバレンタインデーの手作りチョコレートがあって、バレンタインデーは今でも毎年、浩介くんが美味しそうに手作りチョコレートを食べている。
楽しい時間はいつかは終わってしまうもので、よく見るとあたしの目の前からデザートが全て消えていた。
全部、食べつくしちゃったみたいだわ。
「ふうーごちそうさまでしたー」
「お粗末様でした。これからどうしようかしら？」
この後は、将来への抱負と称して、浩介くんが具体的な目標や、企業の業績を語ることになっている。
これ自体は、最初の挨拶でもあたしたちがちょっと触れたけど、今度は比較的具体的に、新規部の立ち上げや、また来るべき海外進出について触れ、また来賓の人たちの挨拶もある。
「とりあえず、会場の外に行ってみようぜ」
「あ、うん」
今日ここでの宴会は、この時間はあたしたちだけが使用中というわけではないけど、一番広いスペースを借りているのは事実。
もしかしたら、他の会社の人と、耳よりな話が出来るかもしれないし、あたしたち役員にとっては、それも重要な仕事でもある。
あたしたちは並んで歩き、会場の扉を開けて外に出る。
ちなみに、この扉から出る人は、主にトイレ目的の人も多い。
扉の向こうの人はまばらで、会場内の喧騒感から少し静けさも感じている。

こういう一歩引いた感じの、落ち着いた雰囲気が好きな人も大勢いそうだ。
「何だか幻想的ね」
この雰囲気、あたしには同じ建物の、それも近くとはとても思えなかった。
「だなあ」
廊下には、名前の知らない画家による、何とも言えない絵画が揃っていて、だけど恐らく、鑑定したら高い値段がつきそうなことだけは確かだった。
廊下にある椅子とテーブルには、４人が座りながら雑談をしていて、完全に静かという訳でもなく、独特の空間を醸し出していた。
「あ、社長！　それに常務まで！　お疲れ様です！」
あたしたちを発見した４人が一斉に立ち上がると、笑顔で軽く頭を下げてきてくれた。
あたしたちに対して、ある種の畏怖心を持つ社員さんも多いけど、きちんと機密を守れば、何ら恐ろしい存在ではないことも事実だった。
ちょっと老けなくて、蓬莱教授の研究に貢献しただけの、「普通の」２０代の男女だと分かる。
「はい、お疲れ様です。ここは静かね」
「はい、中の騒ぎからは、少し離れるのもいいですよ」
窓の向こうには、東京の夜景が広がっていた。
聞くところに寄ると４人は会社以前に知り合った友人同士で、たまたまこの蓬莱カンパニーで再会できたという。
「すごい偶然もあったものね」
「俺たちはみんな転職組でして、前の会社にも恨みはないんですが、やっぱりここの魅力は強いんですよ。それどころか、前の会社にも配慮してくださって、前の会社の人も、『蓬莱カンパニーはまるで仏のような会社だ』と言ってましたよ」
あたしたちは、人材を引き抜く時には、なるべく引き抜き元の会社に配慮するようにしている。

マーケティングにおいても、フリーランスの勧誘だけでは人は足りず、他社の広告事業部から社員を引き抜く時にも、こちらが人員不足のうちは、補填の意味合いも込めて、予め交換条件のように引き抜き元の会社に広告作成を依頼したし、またそうした関係が難しい場合、蓬莱カンパニーが引き抜き元の会社の株を、経営権などに影響しない程度に買い支えたりもしている。

恐らく、世間一般にこの話が広まれば、「そんな必要はない」という人も多いだろうし、「癒着」だという指摘も出てくるだろう。

幸いなことに、蓬莱カンパニーには「競争相手」が存在しないばかりか、それに対して直接的・間接的な法的保護もある上に、逆らう勢力に対しては容赦のない制裁措置も待っている。

つまり、引き抜く会社と対立しても、全くの別業種なのでこちらにもメリットはないし、強権的なことをしている以上、「こちらから損害を与える」ということはしてはならないし、人員集めのようなやむを得ない場合でも、こうした手厚いことをすれば、巡りめぐって業界の噂になり、抵抗勢力もいなくなってくる。

「ふふ、それは良かったわ」

飴と鞭、とはよく言ったものだけど、鞭は今の所は殆ど見せかけだった。

まだこの会社が存在しなかった頃に、蓬莱教授がマスコミ相手に脅しをかけた位だった。

「それじゃあ、俺たちはこっちに行くから」

「はい、いってらっしゃいませ」

あたしたちは、廊下の中でも少し柱の影になっている所に2つの椅子を見つけ、そこに腰かける。

「今後は、法務部も必要になるな。今は支持者ばかりだからいいが、いずれトラブルは起こり得るからな」

浩介くんが椅子に座ると、開口一番に法務部のことを話した。

頭の狂った人間が、蓬莱カンパニーの制裁措置に対して、訴訟を起こす可能性がある。

その対抗措置だったり、あるいはあたしたちの特許権を侵害した

り、蓬莱カンパニーを名乗る詐欺グループが出現することも考えられる。
最も、連座制の制裁措置がある中で、どこまでそれをする人間が現れるかは分からないが、世界にこれだけの人口がいれば、視野が極度に狭く、無謀な反逆者はどうしても出てきてしまうだろう。
「ええ」
そこで必要になってくるのは法務部だ。
訴訟に関しては、曲がりなりにも弁護士や裁判官と呼ばれる人々ならば、自ら進んで蓬莱カンパニーに逆らう人はいないと思うけど、今は「本人訴訟」というものが存在する。
国としては訴状を受け取ったら裁判を開かざるを得ないから、取り下げさせるのは得策ではない。
そこで、優秀な弁護士を顧問として雇う必要が出てくるわけだけど――
「弁護士と言っても、一人一人得意分野が違うんだ。例えば不動産とか相続とか、離婚トラブルに詳しい弁護士もいれば、あるいはインターネット問題だったり、刑事事件だったり、あるいは税金関係に詳しい弁護士だったりするんだ」
ということは、あたしたちは1人の弁護士ではなく、複数の専門分野を持ったかなり多くの弁護士が必要になってくるわね。
でも税金ってどういうことかしら？
「あれ？　税金に詳しい弁護士なんているの？　税金と言えば税理士じゃないかしら？」
あたしが首を捻りながら疑問点を述べる。
「もちろんその通りだよ。ただ、実態はともかく、司法試験の内容を考えれば、『弁護士は法律の万能選手』と言われているから、弁護士は弁護士の資格があればそのまま税理士の仕事も出来るんだって」
「知らなかったわ」
とはいえ、それはあくまでも国家資格上の話なので、法的には可能でも、やはり税金問題に詳しい弁護士か、あるいはもっと確実に税理士を頼る方がいいという。

浩介くんによれば、他にも「司法書士」「行政書士」などと言った職業も、弁護士から見れば下位互換に当たるらしい。
「弁護士ってすごいわね」
まさに文字通り、あらゆる領域に対応できるプロということになる。
弁護士の職域範囲は広く、またなれる人も超がつくエリートの一握り。
現実問題として司法試験は非常に大きな大きな難関なので、一部の仕事に特化した下位資格を設けて人手不足を補っているそうだ。
とはいえ、一時期は弁護士の数も「多すぎ」という問題はあったらしく、実際こんな超エリートとは思えないくらいに無能な弁護士もいて、３０代の時に炎上して、５０歳近くなった今でも未だにインターネットでいじられ続けている人もいるらしい。
さっきまでの話を聞くと、どうして「無能弁護士」が存在するのかわからないくらい、弁護士ってすごそうなのにね。
「うちの法務部は最強にしたい。ただ単に弁護士を揃えるだけじゃダメだと思っている」
浩介くんが熱意を込めて言う。
あたしには、もう少し詳しく説明してほしい。
「？」
「いいかい優子ちゃん、俺が考えている『最強の法務部』というのは、ただ単に法的知識とか、法廷術がすごいというものじゃない。つまり、蓬莱さんや俺たちが会社創設前にしたように、政府に働きかけて法的制度そのものを変えてしまうのさ」
浩介くんが考えていたのは、もっと踏み込んだことだったつまり、自分達に都合のよいルールに、ルールそのものを変えてしまうことこそ、最強なのだという。
何だろう、あたしは何だかそれって、よくないことに思えるけど。
まあ、あたしもあたしで、そういう規制の恩恵を受けているわけだし、あまり言っちゃいけないのかもしれないわね。
「もちろん、ルールを変えるのは最小現にしなきゃならんが、『そうい

う力を持っている』ことを世間に誇示するだけで、十分すぎる抑止力になるんだ」
浩介くんが言うには、強力なカードというのは、見せるだけにするのが理想で、実際に使用するのは、最小現にしなければならないという。
それにはあたしも賛成だけど、より踏み込んで、力を見せつけるのも、なるべく少なくした方がいいのではないかと考えている。
あたしが思うに、恐怖による支配は、結局国力を削ぐので長期的にはマイナスに働くのではないかとあたしは思っている。
「それも優子ちゃんらしい考えだけど、誇示することが少なすぎると、今度は舐めてかかる人間が増えて、かえって炎上しやすいんだ。まあつまり、反対者を生まないためには『生かさず殺さず』じゃなくて、普段は伸び伸びと生かした上で、一線を越えそうになったら殺しにかかり、それでも引かなければ全力で殺す必要があるんだ。これは日本だけではなくて、世界に売るときもそうしたいと思っている」
浩介くんは、既に蓬莱カンパニーにおける全国展開が、一通り終わった後のことを考えている。
世界各国に進出する歳にも、恐らく待ち焦がれた世界が取る行動は何通りかある。
つまり、「素直に蓬莱カンパニーに従う」か、あるいは「俺たちの国に技術などを開示しろ」と言ってくるか？
今の浩介くんの構想では、日本に今ある法律と同じ法律を作り、それを実行する国にのみ、薬を売るということにしている。
蓬莱カンパニーの規模を考えれば、実際には日本の会社だけでも十分すぎるくらい巨大な会社になれるので、特定の国が従わないならば、普通にその国に売らなければいいだけになる。
そうなれば当然、その国はいずれ最貧国に落ちぶれることになる訳だから、やはり蓬莱カンパニーに逆らう国は現れないだろう。
逆ギレして日本政府に難癖をつけても、当然１００年後の軍事力は今とは隔世の感があるだろうし。
「ええ、そうね……賛成するわ」

「おや？　優子ちゃんはそれでいいのかい？　てっきり異論があると思ったけど」
浩介くんは、てっきりあたしが異議を唱えてくると思ったらしく、ちょっと不思議そうな顔であたしを見つめてきた。
「あなたが社長だもの。あたしは、全力でサポートするだけだわ……っていうとよくないかしら？　イエスマンはいらない何て言うけど別に反対すればいいって訳でもないでしょ？」
「それもそうだな」
何事もバランスだとはよく言うけど、それこそまさに「言うは易し行うは難し」の典型的な例だと思う。
「ま、こんなところでいいだろう」
「うん」
浩介くんが突然あたりをキョロキョロと見渡し始めた。
ここは柱の影で、会場の出口からは見えないようになっている。
すっ……もみゅっ
「きゃ！」
浩介くんが手を伸ばし、あたしの胸がいやらしくまさぐられる。
胸を揉まれるのは何度もあるけど、あたしはもちろん慣れてしまう何てことはない。
それどころか、あたしの中で興奮がますます高まっていくことさえ感じてしまう。
「もう、あなたったらー、えっちなんだからあー」
「うぐっ、だって好きな女の子のこんなエロいおっぱいを間近で見たら、理性保つの大変なんだって」
浩介くん、本当に男の子よね。
まあ、あたしも優一だった頃の性欲は高めだったし、浩介くん蓬莱の薬飲んでるからいくつになってもこの調子よね。
うん、他の女に手を出させないためにも、しっかり妻の役目を果たさなきゃいけないんだけど、今はもう少しだけ、我慢して欲しい。
「ほら、誰か来たら大変よ。家に帰ったら、ゆっくりしましょう」
「あ、ああ……」

浩介くんが、名残惜しそうな様子で、手を離してくれる。
さて、歓談の時間はまだあるから、もう少し休んだらテーブルへ戻ろうかしら？

# 忘年会が終わって

「ふう」

「お、2人とも帰ってきたか。そろそろ、次のプログラムに移る準備をした方がいいぜ」

テーブルに戻ってくると蓬莱教授が「そろそろ時間だ」とあたしたちに忠告してくれた。

「はい」

最後は社長の浩介くんによる具体的な業績と目標を発表する場所になっている。

忘年会と言っても、社員の親睦だけではなく、会社が上向きの時はこういったポジティブな情報を元に、社員たちの士気向上を図ることになっている。

時間が近いので、浩介くんが向こう側へと消えていった。

「ふう」

浩介くんがそばにいないのは、やっぱり寂しいわ。

もちろん1人で行動することも多いけど、浩介くんと2人で楽しい時間を過ごした後は、どうしても寂しさというものが出てきてしまうものなのよね。

それでも、老化のなくなったあたしと浩介くんは幸せだと思う。一時的に寂しくなっても、また楽しい時間がいつまでも来るもの。

「えー、ご歓談中の皆様、名残惜しいですが、間もなく閉会の時間になります。最後に、当社の篠原社長から、皆様に今年の業績と来年の抱負について語っていただきます」

この忘年会は、相対的に歓談の時間が長く取られている。

全体参加のクイズ大会などは、やはりどうしても馴染めない人が多いので、自由度の高い忘年会にするようにあたしの方から注文をつけた。

実は当初はもっといろいろな企画が行われることになっていたんだけど、孤立化してしまう社員さんも居るはずなので

とはいえ、「開会と歓談と閉会だけではいくらなんでも手抜きが過

ぎる」という主張から、妥協案としてこうした日程に決まった。
社長の挨拶ということで、社員の話し声もピタッと止まる。
パチパチパチパチパチ!!!
そして浩介くんが拍手と共に、壇上へと出てきた。
「えー皆さん、早いもので、もうこの忘年会も、終わりが近付いて参りました。最後にですね、今年の業績と目標、まずは蓬莱の薬の売り上げ販売数を発表していきたいと思います」
そう言うと、スクリーン上に、今年の蓬莱の薬の売上数が表示され、「おー」という声が沸き上がった。
そこには当初のあたしたちの想定も載っていて、それを大幅に上回る実績を示したからだ。
「ま、ご覧の通りですね、販売前から値下げを告知していたこともありまして、値下げ前はそこまで注文は殺到しないと予想しておりましたが、このように多くの方々から、注文を受けました。ただし来年はですね、生産力向上に伴う段階的な値下げを踏んでおりますので、さすがに売上が落ちると私の方でも見込んでおりまして……当社は赤字になることも予想しております」
その事は、実際に最初の挨拶で話した通り。
とはいえ、社員からは悲観の声は聞こえてこない。
何故なら、そんな赤字はすぐに回復することは、誰の目にも明らかだった。人間の生存欲という根源的な欲求は、誰だって持っているから。
「ただし、この赤字はですね、将来の投資にはやむを得ないというのも実情であります。来年はですね、今年以上に『先行投資』の年になると思っています。今年予想外に儲かった売上を使いまして、まずは全国４７都道府県全てに支店を設け、全国どこでも不老になれる環境を整備していきたいと思っています」
浩介くんの演説内容は、とても理路整然としていて、社長に就任したばかりの頃よりも経営者として確実に成長していた。
蓬莱の薬を飲むと、こういった所も強くなるのよね。
「次にですね、来年の目標として、株式上場であります。本来私達の方

では数年後を予定していたのですが、証券会社の方から是非との声がかかりまして、特別に上場してもらえる……というよりも頼み込まれて上場することになりました」

その瞬間、「おー」という声と共に拍手が沸き起こった。

やはり、株式の上場というのは、企業としてはステータスになるのかしら？

「上場にあたりましては、当社は『蓬莱の薬に関する特別法』におきまして、外資規制会社として国から認定を受けまして、大口の投資や敵対的買収、外国人投資家の参入を禁止しております。また、我々経営陣の株式割合も、えー当初の予定通りとしております」

蓬莱カンパニーの場合、市場の投資家から株を買ってもらってお金を集めなくても十分にやっていけるため、上場する意味は薄かった。

それでも、やはり日本人限定で、株式の公開を進めることにした。

また、将来的に海外に進出する際には、外国からの圧力いかんでは、上場廃止も当初から想定しているけれども、浩介くんはその事までは話さなかった。

ちなみに、上場する会社は、堂々の東証一部と決まった。

大学院生が社長を勤める会社として、東証一部上場を果たしたのは、恐らく史上初のことだと思う。

……まあ来年度卒業だとは思うけど。

「以上、店舗拡大と、株式上場について述べて今回の忘年会を終わりたいと思います。それでは皆様、お疲れ様でした」

パチパチパチパチ!!!

浩介くんが軽く頭を下げると、社員たちから惜しみ無い拍手が送られる。

むしろ、若い社長だからこそ、大きく支持されているという側面も、間違いなくあると思う。

「最後にですね、記念撮影をしたいと思います。皆さん中央にお集まりください。近くにテーブルがある所は、テーブルを移動させてください」

会場の照明がつけられ、何人かの男女がテーブルを動かす。

社長の浩介くんや会長の蓬莱教授も、自らテーブル運びを手伝っていて、永原先生も、その小さな体からは想像できないほどに椅子を運びながら往復している。

あたしは、1往復に椅子1つを、ゆっくりと運ぶことにした。

他の人よりも明らかに能率が悪いけど、身体能力がないのは、女の子だし仕方ないわよね、うん。

「あ、前の方は椅子お願いします」

写真撮影の都合上、前列の方は椅子を使い、また後ろの方は階段状の壇を使う。

これで社員が全員写るようになっている。

ちなみに、最前列の椅子の中央に座るのが、あたしと浩介くんで、その周囲を、役員たちが、2列目を部長や課長クラスの中間管理職が、3列目以降は、係長クラス以下の社員たちが自由に並んでいく。

「はーい、そこそこー！　最後列もう少し詰めてくださーい！」

あたしの白いワンピースが一際目立つ中で、この時のためだけに呼んだカメラマンさんが脚立の上に立ってあたしたちに指示を飛ばしてくれる。といっても、常務のあたしは座ってるだけだけどね。

これだけの集合写真は、結婚式の時以上で、現場の社員たちには、忘年会に参加してない社員も多いことを考えると、ずいぶんと大きな会社になったものだと感心してしまうわね。

社員さんたちはカメラマンさんの指示に

「はーい、それでは行きますよ。はいチーズ」

ピピッ……カシャッ

お馴染みの掛け声と共に、カメラの音がなってフラッシュが光る。

シャッターが成り終わると、「ふー」っと緊張の糸が切れた声が随所で聞こえてくる。

「もう1枚行きます、はいチーズ」

ピピッ……カシャッ

もう1枚の声に再び緊張が走り、写真を撮り終わると再び緊張の糸が切れる。

この感覚は、結構慣れるのに大変だわ。

「はいありがとうございまーす」
そして撮影が終わると、さっきよりも大きな「ふー」っと肩の荷が下りたようなため息と共に、社員が思い思い行動し始める。
これで忘年会は解散で、後は各自で自由に独自の二次会に行くなり、あるいは家に帰るなりすることになる。
あたしたちは、疲れを取るために、今日は早めに解散することになっている。
あたしが一般女性と比べても身体能力が低いことは、蓬莱カンパニーでは知られていない。ただ、生理が重そうだって言う噂が女性社員の間で流れているって聞いたけど。

「ふー」
「優子ちゃん、お疲れ様」
浩介くんが、あたしを労ってくれる。
社長に声をかけてくる社員さんは多いけど、妻であり常務でもあるあたしに向かっていくと、みんなさっと避けてくれる。
やっぱりそのあたり、しっかりしてるわよね。
若い社長という意味では、女性社員たちからも多分モテてるとは思うけど、さすがに誰もあたしに対して張り合おうという気分にはなってないみたいでよかったわ。
「うん、じゃあ疲れたし帰ろうかしら？」
「そうだな」
あたしたちは忘年会会場を後にして、予定通り早めに家に帰ることにした。
忘年会の会場ではもちろんのこと、電車の中でも相変わらずあたしへの視線はすごかった。
それはこの真っ白でロングなワンピースが清純さを強調していて、その上で胸のエロさが隠しきれてないせいでもあると思う。
ちなみに、上着のコートも、白で決めていて、真っ黒なあたしの紙と、頭の白いリボンとでとても目立つお姫様のような存在になっている。

「優子ちゃんって目立つよね」
「うん、真っ白の服だものね」
それに加えて、あたしと浩介くんが、ラブラブに手を繋いでいるせいでもあるけども。
あたしは、家に帰るにつれて、ドキドキが止まらなくなっている。
それはこうして手を繋いで、愛する旦那のぬくもりを感じているだけではなく、この白い清純なワンピースと対をなす服を、これから着ることになるからだと思う。
「次は――」
「優子ちゃん」
「うん」
電車のアナウンスを聞き、あたしたちは外へ出る。
家までの行き慣れた道を進み、家へと帰った。

「ただいまー」
「お帰りなさい。忘年会うまく行った？」
家に帰ると、いつものようにお義母さんが出迎えてくれる。
このやり取りも、もうすっかり安らかな平穏に戻って、安堵していいという合図になった。
いつもと違うのは、いつもより遅い帰宅だったので、お義母さんもパジャマ姿だったこと。
「うん、バッチリよ」
あたしも顔を緩め、にっこりとした表情で答える。
「じゃあお風呂沸いているから、好きな時間に入っていいわよ。お義母さんたちは、もうすぐ寝るわね」
「分かった」
そう言うと、お義母さんは寝室の方へと向かっていった。
「じゃあ俺から入るな」
「うん、あたしの部屋で、ね」
あたしも浩介くんも顔が赤くなる。風呂から出てすることは、分かっている。

またきつく、あたしの体をぎゅーっと抱きしめてくれるから。
「分かってるって」
浩介くんがお風呂場に行き、あたしは自分の部屋に行く。
あたしはタンスの奥にしまってある露出度が高い、白い勝負服を取り出す。
「はぁ……はぁ……」
白は清純な色だけど、この服は白い服でも清純とは程遠いデザインになっている。
真っ白なトップスは胸元を極限まで露出していて、丈も短くへそ出しで、スカートもパンツすれすれの短さな上に、風にも弱くめくれやすいフレアミニで、ちょっとだけ体を動かしても、簡単に見えてしまう。
もちろん、これは外出に使う服ではなく、家の中で意中の人と2人きりになった時に、想い人……つまりあたしの旦那を誘惑するためだけに作られた服。
浩介くんはお風呂から出たら、あたしに連絡し、一旦自室に戻ってから、あたしがお風呂に入ったのを見計らって、あたしの部屋で待つことになっている。

コンコン
「優子ちゃーん、出たぞー！」
扉がノックされ、浩介くんの声が聞こえてきた。
「はーい！」
返事をすると、あたしは着替えの服を持って浩介くんと入れ替わるように脱衣場に入る。
脱衣場の鍵をしっかりと閉めて、あたしはまず頭にいつもつけている白いリボンを外し、服を全て脱いでお風呂場へと直行した。
うー、やっぱり12月って寒いわね。
「ふー」
体と髪を洗い終わり、髪をお団子ヘアーにしてから湯船に浸かると、あたしは精神的にとてもほっとした。

お風呂の暖かさが、あたしを穏やかな心に導いてくれる。
「あうー」
でもそれは一瞬で、これから浩介くんにされることを想像すると、顔が真っ赤になってしまう。
浩介くんには、もう数えきれないくらい翻弄されてきたけど、今でもあたしは浩介くんを求め続けている。
浩介くんも、あたしのお陰で十分性欲が満たされているみたいで、安心だわ。

「ふう」
一通りお風呂に入り終わったら、あたしはお風呂から出て身体を拭き、脱衣場のかごにおいてあった服に手をかける。
まずは白いパンツを穿いて白いブラジャーをつけ、次にトップスとスカートを穿く。
「うー寒いわー」
女の子は冷えやすく、寒さに弱い。あたしの場合は特にそう。
しかも今みたいな冬の季節で、この服装は堪えるものがある一応浩介くんがあたしの部屋を暖房してくれているみたいなので、あたしは大急ぎで自分の部屋まで走ることにした。
誰もいない状況でスカートをはためかせて、あたしは部屋の前にたどり着く。
寒い寒い、とにかく中に入ろう。
ガチャッ……
「ふー」
部屋の中の暖気が、あたしを優しく包み込んでくれる。
それを味わった後は、ドアを閉めて浩介くんに目を向ける。
「うっ、優子ちゃん……」
浩介くんがどきりとしていて、姿勢がやや丸くなる。
嬉しくなるだけなんだから、隠さなくてもいいのにね。
「ふふ、どうかしら？」
ちょっとだけ身体を揺らすだけでも、この超ミニスカートからはパ

ンツがチラチラと見えてしまう。
当然浩介くんはその様子を見ると「もっと見たい」という欲望に刈られてしまう。
「そ、その……やっぱり、すっごくエロくて淫乱で……同じ白い服なのに……さっきまでの清楚な優子ちゃんと同じ人に見えないぜ」
清楚な白のイメージと相反するこの露出度の高い服は、浩介くんにとって大のお気に入りだという。
ましてや、そんな格好をしたあたしを清楚な白いワンピース姿の後に見たら、余計にギャップが大きく見えるわよね。
「うふふ、ありがとう。ねえあなたぁ……」
あたしがぐいぐいと浩介くんに近付いて誘惑度を強める。
ぺろっ
「きゃあ！」
浩介くんにいきなりスカートを掴まれて、上までべろんとめくられ前方部分のパンツを丸出しにさせられてしまう。
あたしは顔を真っ赤に染めて、恥ずかしさに耐えながら、スカートを押さえる。
うー、誘惑用の服でも、スカートをめくられるのって、やっぱり恥ずかしいわ。
「優子ちゃんかわいいね。ほら、こっちへおいで」
「きゃっ……んんっ……」
あたしは浩介くんに腕を引っ張られ、ベッドに押し倒されて強引にキスされた。
「んっ……じゅるっ……ちゅっ……じゅうう……」
浩介くんのキスで、あたしの脳が急速にとけていく。
あたしたちの夫婦生活は、浩介くんがいつも以上に興奮している様子だった。
露出度の高い服は、見られているだけで恥ずかしさが込み上げてくる。
「優子ちゃん……エロすぎ……俺……もう我慢できない……」
半分だけめくれ上がったスカートを上までめくられ、あたしはパン

ツを凝視された。
「やっ……本当にもう……しょうがないんだからぁ……」
興奮した浩介くんの様子が、ますますあたしの顔を赤く染め上げていく。
それを見た浩介くんの顔が、また1つほころんで興奮へと導いていく……やっ……恥ずかしい、恥ずかしいよお……
浩介くんはどんどん元気さを増していって、あたしの思考力がどんどん薄れていく。
「なあ優子ちゃん……優子ちゃんは、俺だけのものだよな？」
「うん……あたし……あなたに独り占めされたいの……お願い……」
あたしがそう言うと、浩介くんの理性の糸がついに切れた。
浩介くんも、独占欲が満たされているみたいでよかったわ。あたしも、浩介くんを独占できるのが、何より嬉しいわ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
浩介くんの姿はもうない。
あの後少しだけ雑談して、時間も時間なので直ぐにお休みをすることになった。
あたしは、まだパジャマに着替えられなかった。
1人この姿で置かれている様子が、あたしの中にあるメスの被虐願望を強く刺激していたから。
でも、浩介くんに捨てられたわけじゃないと分かっていることが、あたしに安心感を与えてくれたのも事実だった。
……うー寒くなってきたわ。あたしも早く着替えて寝ないといけないわね。

## マネー・ゲーム

２０２７年の１月初頭、正月のイベントを終え、いよいよ株式上場となった。

実の所、蓬莱カンパニーはまだ上場の条件は満たしてないんだけど、あたしたちの急成長ぶりと、上場いかんで迷っていたあたしたちを見て、証券会社の人が「今なら特別に１部にしますよ」と言ってあたしたちを揺さぶってきた。

１部のステータスは魅力的だったので、最終的には証券会社側の特例を受け入れることにした。

株式公開をして売買するのは全体の３割で、あたしたちが持っていた株も一部売却することで、あたし、浩介くん、蓬莱教授の株式の割合の合計が５０％を越えないように調整した。

当初の予定では、株は全部で１万株を用意し、蓬莱教授が２０００株、あたしと浩介くんが１４９９株、永原先生が１００２株、更に協会の取り分で１０００株で、その内５００を比良さん３００、余呉さん２００で分割し、残りの５００を協会名義とし、最後に残った３００株を売買の対象として市場に委ねることになっていた。

もし新株を発行する際にも、あたしたちで７割の比率は、維持していくことが確認されている。

ところが、これに監査法人が異議を唱えた。

というのも、蓬莱カンパニーの将来性や今持っているポテンシャル、更には独占企業な上に国民のほぼ全員が顧客となる可能性が高く、更には法的保護まであるこの状況では、新興会社とはいえ、大量の投資家が殺到することは容易に想像がつき、これでは１株の値段が高騰して、買えない投資家が殺到することが予想できるとのことだった。

そこであたしたちは監査法人の意見を受け入れ、株の総数を１万倍の１億株として、あたしたちの保有数も、それぞれ分割した上で３０００万株を市場に売り出すことになった。

ちなみに、取引は１株単位で可能となっていて、なるべく多くの投

資家に分散して株主になってもらうことになった。
「いよいよ今日だな」
「ええ」
初上場と共に、この日は新年の初取引でもある。
あたしたちの回りにも、報道関係者が集まっていて、大勢のカメラを抱えている。
初値がつき、その後どういう値段になっていくのか、とても見物だった。
「ふー、さすがに緊張するな。株価次第じゃ、俺の資産もとんでもねえ金額になりそうだ」
蓬莱教授は、既に経済誌からも、資産３１億ドルのビリオネアと見られている。
蓬莱教授の現在の資産としては、現金資産が多く、蓬莱カンパニーの会社立ち上げでいくらか失われているものの、その大半は寄付金で賄われている。
しかし、今は違う。
蓬莱カンパニーの株価が世に出れば、株券分の資産が、経済誌に記載されることになる。
ことと次第では、あたしたちも、世界長者番付に載ることになる。
「ふう、まさか５０９年の人生で、私が世界の大富豪になる可能性がある日が訪れるとは思わなかったわ」
永原先生が、緊張した面持ちでそう述べる。
果たして初値がいくらになるのか？
今日の経済新聞も経済誌も、連日連夜蓬莱カンパニーの上場のニュースで持ちきりになっている。
かつてないほど高まった熱気が、オフィスに充満していく。
「もうすぐだな」
取引の開始時間が迫っている。
そしていくらで買われるのか、全く予想もつかない。
もしかしたら、上場と同時に暴落する可能性だってある。
いつだって、一寸先は闇なのが投資の世界だもの。

モニターには、「取引開始前」の文字、そして時刻は既に1分を切っている。

それは、突然だった。

「今、初値がつきました」というアナウンサーの声と共についた初値、それは４万０２９８円だった。

それは、２０００万株を持つ蓬莱教授にとって８０５９億円の資産が追加され、元の資産と合わせると1兆円を越えたことを意味していた。

「さあここからだな」

浩介くんは自分の資産がどうなったのかは考えず、冷静に物事を分析していた。

モニターには、取引開始早々に、矢継ぎ早に買い注文が殺到していることを示している。

「どんどん上がっていきます。あーこれはどうなるでしょう!?」

アナウンサーの絶叫する声が聞こえた。

一方で、あたしたちは現実感がなかった。

永原先生は、にっこりと笑っていた。

物凄い勢いで株価が上がっていく。蓬莱カンパニーにかける投資家たちの期待は、あたしたちは無論のこと、件の監査法人の想定さえ遥かに越えていた。

蓬莱の薬が全国に普及すれば、日本経済は、これまで人類がかつて経験したことのないような高度経済成長を成し遂げると言われている。

蓬莱カンパニーだけではない、他の会社の株式も、最近はかなりの上がり調子だった。

「値幅制限ってどうなっていたかしら?」

取引開始から既に１５分、株価は４３０４４円になっていた。

「一応、７０００円増でストップ高という決まりになっている」

つまり、４７０００円を少し越えた辺りで、ストップ高になるということね。

「お、下がった下がった」
蓬莱教授が、株価が一旦４２０００円代になっていることを示した。
恐らくは「利益確定」の売りと思われるので、あたしたちは無視することにした。
報道関係者たちも、一端の調整は入ったものの、再び堅調に上げ始めた株価を見てホットしている。
「日経平均株価も全面高だ。俺たちのお陰だぜ、俺たちが経済を回してるんだ」
蓬莱教授が力一杯の声を出す。
あたしとしても、それは歓迎するべきことだった。
席に座り、取締役全員がモニターを食い入るように見つめている。
「えっと、２００万株で、１株が４５０００円で……あら!?　９００億円じゃないの！」
余呉さんが、自分の資産に驚いている。
更に言えば比良さんの資産は１３５０億円になっているし、協会も一気に総資産が２０００億以上の金持ち団体になってしまった。
「数字のマジックって怖いですわね」
全株のたった３割しか市場に流れていなくても、株価はどんどんと上昇していく。
いつの間にか、取引開始から１時間が経過していて、４６０００円のところに指値の売りが１億円分も殺到していたが、その壁も難なく突破した。
「さて、そろそろ業務に戻るか」
蓬莱教授は今日の勝利を確信し、周囲の社員にも解散を命じた。
マスコミの人たちも、後は本社でも分かると確信し、続々退社していった。
最終的に浩介くんはあたしのみに「株価の監視」を命じ、他の社員たちも一斉に通常業務へと戻っていった。
そしてスクリーンも、撤去されていった。
あたしは自分に割り当てられた机の上で、自社の株価を眺めてい

く。
買い注文の殺到と共に、また蓬莱の薬の普及にともなって、ほぼ全ての銘柄に、買い注文が出ている。
蓬莱カンパニーは、間違いなく震源地だった。
株の取引は午前と午後とあって、その間に休憩が挟まれる。
果たして、蓬莱カンパニーの株価は午前取引終了直前に、４７２９８円をつけてストップ高となった。
あたしは、浩介くんに「ストップ高になった」と伝えた上で、通常業務へと戻っていった。
しかし、あたしたちに平穏は訪れなかった。
社長室に、「世界長者番付」を発行している雑誌の記者を名乗る人が現れたのだった。
「突然の訪問申し訳ありません。何分急なものですから」
これまで、蓬莱カンパニーの株価は非公開株で不明だった。
ところが今日上場したことで市場の評価を受け、更にストップ高でその取引を終えたことで、具体的な株価が分かった。
これにより、あたしたちが持っている株、すなわち合わせて２９９８万株の資産価値が分かった。
蓬莱教授はもちろんのこと、今日のこの株式上場によって、何とあたしと浩介くん合わせて資産総額が１兆円を大きく越えてしまったことが分かった。
「俺たちだけで資産１．４兆円か……現実感無さすぎてもう訳わかんねえよ……」
日本人の長者番付でも、蓬莱教授共々、最上位に位置するようになった。
総資産が１０億ドルを越えると、いわゆるビリオネアと呼ばれている訳だけど、明日以降の株価次第では、あたしと浩介くん単独でも１兆円になる可能性は残されている。
「そこでですね、３月には当社の方で『世界長者番付』を発表する予定になっております。篠原さんだけでなく、既に掲載されている蓬莱さん、それから大株主の永原さんに比良さん、余呉さんも、当誌の発表

する世界長者番付に掲載される可能性が高くなっております」
世界長者番付に掲載されるためには、総資産が１０億ドルを越える必要があって、蓬莱教授は既にビリオネアではあるものの、順位を大きく上げる予定になっている。
ちなみに、世界一の資産家の総資産は１０００億ドルを優に越えていて、まだまだあたしたちとの差は大きい。
どちらにしても、世界中の人間が羨むランキングになを連ねることになった意義は大きい。
そして、今日午前中にもストップ高になってしまったように、あたしたちの資産はまだまだ増えることが予想できた。
蓬莱の薬は、将来の値下げが確定しているにも関わらず、新年から予想に反して注文が殺到しているという。
今度開く株主総会の羽振りも、とてもいいものになりそうだった。

「ただいまー」
「２人ともお帰りなさい。すごいことになってるわよ。テレビもインターネットも大騒ぎよ」
お義母さんが疲れきった顔で話す。
間違いなく、あたしたちのことだった。
「うん、あたしたち、夫婦で資産が１．４兆円だって」
「もう、アメリカドルにしたら１００億以上よ。マスコミの取材がとてつもなかったわ」
どちらにしても、プライベートの空間は守らないといけないわね。
「おお、２人とも、大変だったな。しかしよくやった。これなら会社をやめられそうだ」
お義父さんが、にっこり笑いながら言う。
確かに、こんなに資産があったら、そう思っちゃうのも当たり前よね。
「ダメよ。資産といっても、全部株券で、保有割合が決められてるのよ」
「しかし配当金というのもあるだろう？　それだけでも十分すぎるん

じゃないか？」
お義父さんが、すかさず痛いところを突いてくる。
「うぐっ……ま、まあねえ……」
否定はできない。
間違いなくあたしと浩介くんが持っている株券の配当金だけで、億単位のお金が入ってくると思うから。
「まあでもよ、息子夫婦にたかる父親ってどうなのさ？」
あたしが言葉に詰まっていると、今度は浩介くんが反撃に出た。
「うー確かになあ……いくら資産家でも、家族や親戚をこぞって養ってたら簡単になくなりそうだもんな」
ふう、引いてくれたみたいでよかったわ。
「とにかく、あたしたちはもう寝るわ。最近はほとんど会社勤めだし」
大学院生としては、既に博士論文も夫婦揃って書き終えていて、去年までに多く単位を取ったこともあって、来年度は単位を１つ取ればいいことになっているけれど、多忙化にともなって、蓬莱教授がオフィスでも出来るように配慮してくれることになった。
特に後期以降は、ほぼビジネスに専念することになっている。
創業当初は半々くらいのエネルギー分散だったけど、今はもう９割が会社になってしまっていた。
今日はあまりにも疲れすぎた。
お風呂に入り、ご飯を食べる気力もなく、ベッドの中で眠りについた。
あの一瞬で、あたしたちは世界的大富豪になってしまったのだった。

翌日、蓬莱カンパニーの株価はまたストップ高を記録した。
７０００円株価が上昇すると、あたしたちは資産を１０００億円以上それぞれ増やすことになる。
しかし、これはあたしの物語たちにとって、ほんの序章にすぎないことは、あたしにも分かることだった。
１株から購入できるといっても、株価自体はかなり高い状況で、ど

こかで株式分割と呼ばれる行為を行う必要があるという。
例えば、強制的に株価を半分にした上で、全ての株主に今ある株と全く同じ数の新株を渡して保有数を2倍にするというもので、理屈の上では全く同じになる。
要するに、株価が高騰したために、桁数の大きくなった株に対する措置だったり、あるいはこの行為を行うと株が高騰する傾向にあるので、それを狙った戦略もできるとのことだった。
あたしたちは緊急の取締役会を開き、今後株価の終値が１０万円を越えた場合、１：５の株式分割を行うことを決議した。

上場してから3営業日目、もう一度ストップ高になったため、取引所のルールとして、次はストップ高の値幅制限が2倍になる。
あたしたちとしては、「山高ければ谷深し」ということで、さすがに明日の株価は下落するだろうと思っていた。
しかし、次の営業日でも利益確定と思われる売り注文で午前中は下落の瞬間もあったが、午後にはそれを押し退けるほどの買い注文が殺到した。
さすがに4日連続のストップ高にはならなかったが、株価が8万円を越える事態になって、既に初値の2倍になっていた。
「なあ優子ちゃん」
株取引が終わり、浩介くんが新聞から目を落としてあたしに話しかけてくる。
「ん？」
「俺たち、もう個人で資産が兆になっちゃったぜ。たった1週間もしないうちに、兆単位の資産が倍になったんだぜ」
その通り。ちなみに蓬莱教授も、既にあるのと合わせて資産が2兆円に達している。
それも、今の蓬莱カンパニーは値下げ段階期間で、顧客数は少なく、場合によっては赤字もあり得る状態なのに、この株価なのだ。
もし値下げをしきり、日本人全員が顧客になったら？
不老の人たちが子供を作り、子孫たちも蓬莱カンパニーを利用する

となれば、当然ながらその顧客の数はねずみ算式に増えていく。
会社の売上金は、去年だけで兆に届いていたけど、株の時価総額は、そんなものではなかった。
どちらにしても、あたしたちにとっては、自分のことなのにどこか他人事だったのは事実だった。

蓬莱カンパニーでの仕事が続き2月中旬、蓬莱カンパニーの株式高騰のニュースが連日連夜流れ続けた。
もちろん、調整局面というのはあって、２日連続でストップ安になった時は「もうバブル崩壊か？」などと言われていたが、何のことはない、単なる利益確定の調整だった。
その後も株価はＮの字を書くような理想的なチャートで推移していた。
そして株価は１０万円を越えて5倍の株式分割を行ったが、また高騰しそうなので翌日には早くも2倍の株式分割を行い、あたしたちの株の保有数は合わせて１０倍になった。
これによって、株価が一旦は1万２０００円強になったけど、今はまた４万円台に戻している。
そしてこの４万円台で、株価が波のように数日周期で一定額の幅で揺れ始めた。いわゆる「安定期」と呼ばれる時期に、ようやく入ったことになる。
そしてこの間の株価上昇であたしたちの資産は、既に１０兆円を越えてしまっていた。
そしてニュースが連日連夜流れるにつれて、あたしたちには色々な人から電話が鳴り始めていた。
そんな電話の中でも、特に印象に残ったのが桂子ちゃんからの電話だった。
桂子ちゃんは予算が大幅に増えたＪＡＸＡで、若い技術者として活動を続けている。
現在、ＪＡＸＡが見据えているのは宇宙移民、そして太陽系の未来を考えた太陽系外移住という途方もない計画で、これも蓬莱の薬が発

明されたからこそ、このような長期的な計画を練ることができた。
元々好景気が続いていた日本だけど、ここに来ての蓬莱の薬はあまりにも大きく、桂子ちゃんは近々テレビの取材を受けることになったという。
「でも、優子ちゃんほどじゃないわ。私なんてテレビ出るくらいではしゃいでるんだもの。日本一の資産家になった優子ちゃんと浩介に比べたら、小者よ小者」
桂子ちゃんはそんな感じで謙遜していたけど、あたしにとっては桂子ちゃんの実績いかんでは、蓬莱の薬以上に偉大なことを成し遂げる可能性があると思う。
ともあれ、桂子ちゃんとも久々に話もできたし、またここに来て恵美ちゃんも注目されている。
恵美ちゃんと言えども、常に世界ランキング1位というわけにはいかないらしいけど、それでも最近は全く他を寄せ付けなくなりつつあり、さすがに２０代も後半になって、世界からも蓬莱の薬の使用が疑われ始めていた。
とはいえ、蓬莱カンパニーが世界アンチドーピング機構に「圧力」をかけたお陰で、「仮に蓬莱の薬を飲んでいたとしても、ドーピングには決して当たらない」という声明が出されているけれどね。
その他、小谷学園で2年間苦楽を共にしてきたクラスメイトたちからの祝福の電話は何よりも嬉しかった。
クラスメイトたちは、蓬莱の薬の値段が下がり次第、随時顧客になってくれることを約束してくれた。
一方で、この株価の急上昇を受けて、外国政府からもあたしたちへの接触が相次いだ。
というのも、株価が上がっていき、市場の投資家からの資金が大量に蓬莱カンパニーに流れ込んだため、資金力をもって海外市場に前倒しできるのではないか？
というものだった。
「さて、懸念事項が来たわね」
桂子ちゃんの電話があった翌日、その事について取締役会で話し合

いが行われた。
「もちろん、言い訳は考えてある」
そう、結局の所、「外国人はＴＳ病が極めて少なく、技術的には研究を続けないと安全は保証できない上、世界同時発売をするには、今よりも生産性と在庫を格段に増やさないといけないから、資金だけではどうにもならない。工場を海外に作るにしても、できたばかりの企業なので流通や人員のノウハウも全くない。結局、１００年の時間はどうしても必要」というものだった。
外国政府は、あたしたちのこの声明に深くは突っ込まなかった。
それというのも、あたしたちは改めて、恵美ちゃんの「蓬莱の薬疑惑」が起きた時において、国際的スポーツ機関と国際スポーツ仲裁裁判所を「子孫親類もろとも締め出す」と脅迫し、彼らを震え上がらせた実績があった。
各国政府もそれを意識していた。更にだめ押しと言わんばかりに、あたしたちに対して早期市場解放を求めた国の企業の株価が、軒並み大暴落してしまった。
逆に火消しに走ったり、蓬莱カンパニーに従うことを明言した国の企業の株価は安定した。
つまり国際社会も、「蓬莱カンパニーには逆らわない方がいい」と認識してくれたのである。
ちなみにこのエピソードのお陰で、蓬莱カンパニーの世界への権力性を市場が認識してくれた。
株価は久々のストップ高になり、その後も上昇傾向が続いて、調整を挟みつつ８万円から８万５０００円で安定してくれるようになった。

## 桂子ちゃんのお仕事

株式公開のお陰で、市場からは兆単位の資金が集まり、来年度の赤字決算は免れる可能性が強くなった。

もちろん、蓬莱カンパニーの性質上、余ったお金を内部留保に回すメリットは薄く、従業員たちの給料も既に十分に満足度が高いため、やはり順当に株式配当に回すことに決定した。

このまま高配当の株価だという噂が回れば、あたしたちの会社の株は更なる上昇が見込めることになる。

既にあたしたちは夫婦個人でも資産が１２兆円超になっていて、夫婦名義では２５兆円、蓬莱教授に至っては個人資産で１６兆円台というとてつもない金額になっていて、このまま株価が暴落しなければ、３月に発表される「長者番付」では世界のトップ１０に立つことになる。

特に蓬莱教授は株価の傾向から世界長者番付で１位となる可能性が高く、あたしたちも個人個人なら蓬莱教授についで２番目の資産家に、「篠原家」としてなら文句なしに世界一の資産家になる。

結果的に以前言っていた高月くんの予言は、当たっていた。あたしたちは蓬莱カンパニーの創設者として、大株主になったことで「世界一の資産家」になってしまった。

監査法人による決算も極めて良好で、あたしたち蓬莱カンパニーの評判は上がっていくばかりだった。

一方で、会社の売り上げの方はやはり予想通り減ってはいた。

しかしそれでも、待ちきれない金持ちたちが、次々と薬を注文していき、工場は連日大忙しなことには代わりはなかった。

とにかく今年のうちに、どれだけ在庫を貯めていけるかが、勝負の分かれ目になるものね。

「えー続いてはですね、今日本で、社会保障費で浮いた国家予算で、様々な事業支援がなされておりまして、その中の１つに、宇宙開発があります」

ニュース番組で、男女のアナウンサーが話し込む。
今日は桂子ちゃんがテレビの取材を受けるというということで、あたしたちもテレビにかじりついていた。
「今ＪＡＸＡでは、来るべき1億総不老の社会に向け、これまでになかった時間的スケールでの長期的事業が計画されています。そのうちの1つが、こちら。宇宙移民計画です」
続いて、女性のアナウンサーがうまくＣＧと組み合わせつつ、説明をしてくれる。
その名の通り、地球だけではキャパシティが足りず、またリスク分散という意味でも難点があるため、こうした宇宙移民が真剣に検討され始めたのだという。
「この宇宙移民計画には、ある1人の若い女性技術者が参加しています。今日はその技術者に、密着いたしました」
すると画面が代わり、ＪＡＸＡの本部ビルが写し出され、そこにキリリとした表情の桂子ちゃんが座っていた。
アナウンサーが「木ノ本桂子さん」と紹介する。
「宇宙移民を考えるというのはどう言うことですか？」
アナウンサーが桂子ちゃんにマイクを持っていく。
いかにもな感じのインタビューよね。
「はい、将来的には太陽系も生命が住めなくなります。宇宙開発においては、文明の存続が鍵となってくることは間違いないでしょう」
桂子ちゃんは、以前小谷学園の天文部時代から言っていたことと同じことを繰り返していた。
そしてそれについて、今までの人間の寿命ではそういったことは自分が当事者でないために分かり得なかったが、今は違うという。
「ほんの１０年くらい前には、私たちはＴＳ病の人のように数百年単位で長生きするということは考えにも及びませんでした」
桂子ちゃんがそう話すように、あたしが小谷学園で浩介くんと付き合ったばかりの頃も、寿命問題が課題になっていた。
今はそんな心配がなくても、あたしが取り残される可能性はあの時は十分に考えられた。いや、むしろ今みたいになっていることこそ予

想できないことだけどね。
「実は木ノ本さん、現在地球最高齢とされている永原マキノさんの高校時代の教え子でもあります。永原さんは、木ノ本さんについてこう語ります」
ナレーション役のアナウンサーがそう言うと、画面が切り替わって、永原先生の顔になる。
永原先生は相変わらず教師を続けているけど、あたしたちのことはずっと忘れなさそうよね。
「とても美人で、天文にとても詳しい生徒でした。女子たちの中でもまとめ役で、同級生の田村さんと共にクラスのリーダー的な人でした」
「田村さんと言うのは？」
インタビューの人がマイクを戻して聞く。
「ええ、あのテニスの田村恵美さんです。彼女たち2人と蓬莱カンパニーの篠原優子さん……当時の石山優子さんの3人が、あの当時私のクラスの女子の中では特に目立っていました」
永原先生が、あたしと恵美ちゃんの名前を出す。
あたしも恵美ちゃんも、世間的にも超がつく位の有名人で、おそらく永原先生も名前を出して大丈夫と思ったに違いない。
でも、アナウンサーさんは凍りついてしまっている。
それはそうだろう、桂子ちゃんはともかく、世界的テニスプレイヤーであり、日本が誇るテニス選手でもある恵美ちゃんと、蓬莱カンパニーとして不老技術の完成に貢献し、今では世界トップの資産家となったあたしたち篠原夫妻が、人類史上最も長生きしているとされている永原先生の元で教え子として同じクラスになっていたもの。
「そ、そうですか……」
ともあれ、画面も変わって再び桂子ちゃんのインタビューが流れる。
「実際にこの計画は、いきなり恒星間での移動を考えるのではなく、近隣の、生命の住めない星々を改造していくことから目指していきます」

桂子ちゃんが何故そのようなことを話しているのか、あたしには分かる。
何故ならこの計画は、あたしと浩介くんが、政府との交渉の時に、計画を話し合ったものだから。
桂子ちゃんは、あたしたちの提案した宇宙開発計画に沿っている。
そのことを、テレビの関係者は知る由もないだろうし、もしかしたら、桂子ちゃんだって知らないと思う。
「宇宙移民というものに経済的メリットはあるんでしょうか？」
費用対効果は大事よね。
「そうですね、蓬莱の薬の実用化で爆発的な人口増加が予想されます。世界同時発売となる１００年以内に、まずは月からスタートしたいと考えています」
「ありがとうございます」
桂子ちゃんのインタビューでの受け答えは整然としているが、どこかに男性を引き付ける魅力があると思う。
もしかしたら、達也さんに嫉妬されちゃうんじゃないかしら？
「木ノ本さんは、婚約者との結婚を来年に控えていて、今後はキャリア女性としての活躍が期待されています」
「へー、あいつ、来年結婚するんだな」
浩介くんが関心深そうに言う。
元々桂子ちゃんと達也さんが付き合い始めたのって大学入ってからだから、結婚まで７年かかったことになるわね。
あたしたちにも知らせてなかった所を見ると、恐らくこのテレビ番組で知らせたかったのかな？
「そうね、また結婚式に行かなきゃ」
クラスメイトたちの結婚の報告が続々入っていて、さすがに式全てに誘いがある訳じゃないし、会社が忙しいというのもあるからなかなか出席できてないけど、桂子ちゃんの結婚式だけは参加しないとね。
幼なじみの桂子ちゃんのインタビューも終わり、その後はＪＡＸＡの別の職員さんのインタビューに入る。
やはり重要になってくるのは、「世界的人口増加への対応」というこ

とで、日本政府が「農業改革」と共に、重点強化を考えているそうね。
そう言えば、蓬莱カンパニーが「すぐに世界同時発売」ができない理由をいくつか語っていたけど、この「人口増加問題への根本的対応」を言い訳にするのも、よかったかもしれないわね。
そう思ったけど、あたしは、「ならば解決したら１００年を短縮してもいいよね？」と突っ込まれて他の理由を無視される可能性に気付き、思考段階で飲み込むことにした。
「世の中、変わっていくな」
浩介くんが、天井に向けて上の空で呟いた。
「ええ、１００年後は、どうなっているかしら？」
まだ２０代のあたしたちにとって、いや、世の中の人のほぼ全員にとって、１００年後と言うのは遠い未来で、ＴＳ病でもない限り、自分達には縁のない時代だった。
でも今は、あたしだけじゃない、浩介くんやあたしの家族も、１００年後に今と変わらないように生きていることが可能になった。
「さあなあ……そんな遠い未来のこと、俺には分からねえよ」
だけど結局、１００年も先の未来のことは、寿命が延びただけではどうしようもないのも事実だった。
もちろん蓬莱カンパニーでも、来るべき１００年後については話し合いは持たれているが、やはり予測が難しいのは事実だった。
桂子ちゃんの宇宙開発だって、そういった遠い未来のことを考えてのものだけど、いつなんどき反対運動が起こるかもわからない。
あたしたち蓬莱カンパニーのような報復措置を、ＪＡＸＡが取れる訳ないもの。
これとばかりは、寿命が大きく延びたことで、短期的なもののみかたが改善されてくれることを、祈るしかないというのが実情だとあたしは思う。
プルルル……プルルル……
就寝前、あたしの携帯に電話がかかってきた。
電話の主は桂子ちゃんだった。

ピッ
「もしもし優子ちゃん？」
電話の奥から聞こえてきたのは、桂子ちゃんの声だった。
あの頃から変わっていない、あたしと同じくらいの少女の声だった。
「うん、桂子ちゃん結婚するのね。おめでとう」
「ありがとう。婚約自体は随分前には済ませてたんだけどね。色々どたばたしてたから来年になっちゃったわ。それよりも、永原先生まで出てくるなんてビックリしたわ」
どうやら、永原先生のことまでは知らなかったみたいね。
「ええ、でも今思えば不思議よね。あたしと桂子ちゃんと恵美ちゃんが同じクラスで永原先生の授業を受けてたなんて」
「ええ、そうよね。多分きっと、優子ちゃんと私のこと、評判になるわよ」
「うん、桂子ちゃんかわいくて美人だもの。それがまたかわいくて美人のあたしと同じクラスだったってだけでも、当時の男子は羨ましがられそうだわ」
実際、今になって思えば、あの時の男子たちは羨ましい存在だったと思う。
現実は、あたしと浩介くんがいちゃいちゃしてて、他の男子は浩介くんを呪ってたけど。
「ふふ、そうよね」
「まあでも、優子ちゃんがいちゃついてて、現実は厳しかったけどね」
桂子ちゃんがふふっと笑った感じの口調になる。
確かに、その通りだった。
「ええ、よく呪いがこだましてたわね。ま、男子から見れば悔しいわよね。一番のいじめっ子だったはずの浩介が、取っちゃうんだから。呪いたくもなるわよ」
確かに、桂子ちゃんの言う通りかも。
どうしてよりにもよってっていう気持ちはあったと思う。
でも、あの時の浩介くんは歪んだ浩介くんだし、男時代のあたしを

罰する側面もあった。
　事実、本当の浩介くんは、えっちだけどとっても素敵な旦那様で、今でも結婚を後悔することはない。
「あーうん、そうかも。でも浩介くん、本当に素敵な人だもん。あの時のプロポーズは特にね」
　男子たちの呪いが止まるのは、３年生の後夜祭の時に、浩介くんが全校の前であたしにプロポーズした時からだった。
「あーあったわね。あの時は本当に驚いたわよ。まさか全校生徒の前で求婚するなんてさ」
　桂子ちゃんの言葉に、あたしの顔が熱くなる。
「あうあう……思い出したら恥ずかしくなってきちゃったわ……」
　思えば、結婚する前からそうだったけど、結婚してからますます恥ずかしがり屋さんになっちゃったわねあたし。
　もしかして、浩介くんへの恋の熱が強まってるのかしら？
「あはは、優子ちゃんってピュアだよねー。もう恋人になって１０年は一緒にいるのに」
「うん、不老だと、そういうものかも」
　浩介くんが性欲凄まじいのも、蓬莱の薬の効果だと思う。
　あたしの恋の熱が覚めないのも、恐らく同じ不老同士で、惹かれるものがあるせいよね。
「あーあるかも。でも、みんなが不老になれば、そういう『長いカップル』っていうのもたくさん誕生するのよね」
　実際には、桂子ちゃんも不老の薬を飲んでいて、達也さんも不老には問題ない。
　来年になれば、蓬莱の薬の値段も下がりきり、大衆にあまねく恩恵を授けることができる。
　これから生まれていく子供のことも考えれば、売上高は更にガンガン増えるのは確実になっている。
「そうよね。そうなれば、蓬莱カンパニーは安泰だわ」
　正直、いくら売上が兆単位になったとはいえ、今の株価は過大評価だとはあたしも思っている。

だけど、法的保護や世界への影響力から、日本人にだけ解放にも関わらず、投資家が殺到しているのよね。
「世界進出した時にどうなるか見ものよね。そう言えば、優子ちゃん、資産家になったんだっけ？」
「うん、驚いたわ。今や資産１０兆円以上よ」
正直に言うと、株式の配当を貰っていないし、株券も売るに売れないので、生活は今までとあんまり変わらない。
もちろん、役員報酬はそれなりにある上、実家住まいなので、高級なものをなるべく食べるようにはしてるけどね。
「想像もつかないわ」
「あたしだってそうよ。それに資産の殆ど全部が株券よ。これは蓬莱カンパニーのこともあって売れないのよ。配当金もまだ貰ってないし、資産１０兆円も砂上の楼閣だわ」
「なるほどねえ……確かに資産といってもそういうものよねー」
桂子ちゃんも、どこかがっかりしたような声を出して話している。
ちょっと補足し方がいいわね。
「とはいえ、配当金だけでも年収数千億行くわよ」
株価８万円で、配当金は１株あたり１５００円を予定していて、あたしは１億４９９０万株あるので配当金は２２４８．５億円ということになる。
配当金の総額は２兆円で、これでも株式で得た収入で、社員の給料を上げた上で、広告などを打つことになったので、かなり押さえ気味の配当だったりする。
「うぐっ……やっぱり羨ましい……！」
桂子ちゃんが、今度は苦々しそうな声を出す。
そりゃあまあ、そこにたどり着くまでには努力と成功があったとはいえ、何もしなくても年収数千億じゃあ嫉妬されるに決まってるわよね。
ちなみに、それらの年収も、当然多くが税金になるとはいえ、それでも十分すぎる量が手元に残る。
それらのお金はそのまま現金にしておくというよりは、他の会社の

株を買ったりして、個人的な投資に回すことも検討されている。
現物取引にとどめ、信用取引などに手を出さなければ、蓬莱カンパニー株の分の配当金でどうにかなるものね。
「桂子ちゃんも、蓬莱カンパニーの株を買うといいわよ……って常務のあたしが言っちゃうとまずいかしら？」
下手すると、インサイダー取引何てことにもなりかねない。
もちろんあたしたちを追求するような無謀メディアはいないとは思うけど、用心するに越したことはないものね。
「あはは、まあお金に余裕ができたら、ちょっとだけ株主になってみようかしら？」
株価が上がれば、当然配当額も上がるし、企業としても嬉しいことだもの。
「うん、ありがとうね」
「うん、じゃあ長くなっちゃったけど、今日はありがとうね」
「うん、またね桂子ちゃん」
あたしたちは挨拶を交わしあって、電話を切る。
株式の配当率、今回はこれだけの量になったけど、来年以降も同じように配当が来るとは限らない。
客単価が最終的には１０分の１以下になる上に、分割払いサービスもあって、実質的な客単価はもっと減っていく。
もちろん、客数は日本の人口のうち、高齢者人口を除いたほぼ全員になるし、新しい子供も増えていくから、膨大な数で売上をカバーできるようにはなっているけどね。
ちなみに推計では、１００年後の日本の人口は今の半分と予想されていたけど、今では逆に今の２．５倍に膨れ上がると予想されている。
そうなると、あたしたちの年間売上は、今の価値で５兆円以上に、更に全世界に解禁すれば、その数十倍になるし、更に世界人口、あるいは月や火星の人口も増えれば、それこそ１００兆円企業にだってなれる。
その時のあたしたちの資産は……計算したくもないわね。

あたしは、自分の未来から目を背けつつ、今日という1日を終えた。

# 移住計画　前編

３月、あたしは世界的経済誌が行っている、「世界長者番付」、はやい話が「世界金持ち決定戦」で２位になった。

あたしたちは蓬莱カンパニーの株式騒動で、世界的大富豪になってしまったんだけど、経済誌はそのランキングの付け方に注文をつけてきた。

というのも、あたしたちの資産を、「Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ」と「Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ」で分けて掲載するのか、「Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ　ａｎｄ　ｈｉｓ　ｆａｍｉｌｙ」とするのかで順位が変わってしまうから。

前者の場合、１位には「Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ」が約２４兆円で入り、あたしたちが同率２位で約１８兆円になる。

ところが後者の方法だと、あたしたちの資産は約３６兆円となって圧倒的１位になる。

あたしたちがランキング２つ占める代わりに１位を諦めるか、代わりに名前１つにして１位になるかは、結構難しい問題だった。

蓬莱教授とも話し合い、最終的には蓬莱教授への敬意や、「１位は魅力的だけど優子ちゃんの名前も載せたい」という浩介くんの意向もあって、このような形になった。

一方で、「世界大富豪家ランキング」では、これまでのアメリカ人のビリオネア一家などを抑えて、あたしたち「Ｓｈｉｎｏｈａｒａ　ｆａｍｉｌｙ」が、世界一の富豪一家へと一気に躍り出たことになる。

ちなみに、個人の資産ランキング７位には「Ｍａｋｉｎｏ　Ｎａｇａｈａｒａ」という名前もあって、総資産は堂々の１２兆飛んで５０億円となっている。

株価が１株１２万円と評価され１億株、残りの５０億円というのは、永原先生が持っていた古い家宝類を、経済誌が独自に評価したためらしい。

インターネットでもこのランキングは見ることができて、あたしたちの「ａｇｅ　２６」もだけど、永原先生の「ａｇｅ　５０９」には、

「ＴＨｅ　ｏｌｄｅｓｔ　ｐｅｒｓｏｎ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ」という文字の他、比良さんと余呉さんも、それぞれ兆円単位の資産を持つということで、日本の大富豪ランキングの上位も、ほぼ蓬莱カンパニーの関係者で占められてしまった。

もちろん、この事は日本の経済誌や経済新聞も軒並み報じ始め、「世界長者番付、１位は蓬莱氏、蓬莱カンパニーの株式の２割を握る。同社社長と常務夫妻もそれぞれ同率２位」とか、「蓬莱カンパニーの大株主が軒並み大富豪に、蓬莱カンパニー大株主の６名で世界の下位５０％の資産を占有」何て言う、妬みを煽るような見出しもあった。

まあ、この程度では抗議とかはしないけど、ちょっと危ない記事なのも事実よね。

あたしたち自身がまさかこんなことになるなんて思いもしなかったし。

「どれもすげえニュースだなあ」

「それにしても、マスコミの取材がすごいわね」

他人事のように話す浩介くんに対して、母さんは呆れた顔で話している。

実は今、あたしの実両親も、この家に避難している。

以前からマスコミによる取材攻勢はあったんだけど、あたしたちの場合蓬莱カンパニーの強権が怖くて、この閑静な住宅街には殆どメディアは来なかったけど、あたしの実家の所には、以前からかなりの取材申し込みが来ていたらしい。

あたしとしても簡単に予想がついたこととは言え、母さんから連絡がないので大丈夫だと思っていた。

ちなみに母さんによれば、「優子たちを心配させたくない」との理由で、明かしていなかったという。

「でも石山さんたちも含めて、このままこの家にいるのも考えものよね。早く新居を決めないと」

お義母さんが腕を組んで考える。

現実問題として、マスコミの取材攻勢は近隣の迷惑にもなっていたし、今の所「蓬莱カンパニー」だから近隣から苦情は来ていないけど、

内心不満が溜まっていても不思議じゃない。
そこであたしたちは、住居の移転を真剣に議論していた。
まずあたしたちは新しい住居として、いくつかの候補地を絞ることにした。
住み慣れた我が家を手放すのは心苦しいけど、これ以上マスコミの取材依頼に対して近隣に迷惑をかけるわけにもいかないし、かといって強権の発動は極力避けたいのも事実だった。
実際、困ったことにマスコミは「あたしたちの業績をもっと世に広めたい」という名目で取材攻勢を仕掛けていて、あえて無能な味方を演じることで、いわゆる「ありがた迷惑」を狙ったものでもあった。
本当、なんでこういう嫌がらせの才能を、もっときちんと報道に活かせないのかしらね？
「どこがいいかしら？」
あたしたちは、両家両親との6人、もしくは浩介くんのおばあさんを含めて7人で住める住居を探している。
ただ住めればいいというだけでなく、マスコミ慣れしている地域……つまりそれなりの著名人がいくらか住んでいる土地を選ぶ必要がある。
そこでまず東京都内の高級住宅街を見つけ、あたしたちで絞りこんでいき、都内にあるそうした高級住宅街専門の不動産屋さんに予約を入れておいた。
最終候補地は田園調布、麻布、白金高輪、赤坂、そして松濤の5箇所だった。
どれも都内の高級住宅街として著名であり、あたしたちが買う予定の住宅も、そうした高級住宅街に佇む豪邸の中でも一際目立つ程の豪邸で、普通の人なら生涯賃金を全て叩いても到底購入できないような金額のものばかりだった。
でも、今のあたしたちなら、今度の株主総会で予定されている配当金で、問題なく豪邸が購入できる。
都内中心部には、いわゆる「億ション」と呼ばれるセキュリティがしっかりしている高級マンションもあるけど、これまでの家と同様

に、庭つきの一軒家がいいと思ったので候補地は自ずと絞られていった。
　最初は三軒茶屋や成城学園前などの世田谷区の高級住宅街を中心に考えたものの、「仮にも世界一の資産家ファミリーが建てる家だ。どうせ建てるなら、もっと高級な、それこそ最高級の住宅街にした方がいい」という父さんの進言もあって、高級住宅街の中でも、いわゆる超富裕層と呼ばれる人々が多く住む土地へと家を建てることになった。
「俺は松濤がいいと思うな。渋谷とも程近いし、通勤時間も短くなる。佐和山大学へは遠くなるが、逆方向で空いているだろう？　田園調布も安くて魅力的だが、通勤時間を考えれば、高くても松濤だ」
　浩介くんが、この中では一番高いプランである、松濤の３２０坪、３階建て屋上付き２世帯住宅プランを提案する。
　いや、田園調布だって今の家に比べたらかなり高いわけだけど、あたしたちが持っている株の配当金と比べれば、松濤のプランだって、何の問題もなく支払うことができる。
　こんな値段の家、普通だったら一生涯働いてても買えないような値段だし、ついこの間までは考えにも及ばなかった場所だった。
　そんな東京の真ん中に場所に３２０坪もの敷地面積を持った豪邸を建てちゃったら、固定資産税もすさまじいことになりそうだけど、世界一の資産を持つ一家となった今のあたしたちからすれば、はした金も同然だった。
「でもこういうガチガチの高級住宅街だと、成金に厳しいんじゃないかしら？」
　それに対して、お義母さんは松濤プランに懐疑的だった。
　確かに、あたしたちは株式上場によって一夜にして兆単位の資産を持つに至った典型的な「成金」で、先祖代々続く「旧家」というわけではない。
　そういった一代で成り上がった成金はマナーなども一番悪く、横柄な振る舞いをしやすいということで、こうした高級住宅街の中でも最高級と思われる住宅街では避けられてしまうのではないかという懸

念だった。
それなら、田園調布程度の高級度にとどめておくべきではないかというのが、お義母さんの意見だった。
ただ、田園調布も田園調布で、景観規制が厳しいのが難点なのよね。
「高輪はどうかしら？　通勤時間もそこまで長くないですし、沿線も空いてるわよ」
今度は母さんが、白金高輪のうちの高輪の方を提案する。
ここは都営地下鉄三田線と、東京メトロ南北線が別れる分岐駅で、しかも山手線の内側で目黒駅が近いので、東京都区内のどこにいくにしても不便はしない。
ただ、元麻布も同じだけど、松濤と比べるとやや交通の便と通勤時間が悪い。
「あたしは浩介くんに賛成かな？　松濤の最寄駅は神泉駅でも、渋谷駅も徒歩圏内にあるわ。候補の中では蓬莱カンパニーのオフィスに一番近いし、何より渋谷駅の利便性と渋谷の活気度は言うまでもないわ。それに、いくら成金が嫌われるといっても、世界一の資産なら話は別でしょ？」
実際、経済誌に載っている資産ランキングだって、1代で資産を築いた人が多い。
それなら、成金と呼ばれようが堂々としていればいい。
それに、蓬莱カンパニーがもたらす恩恵は、富裕層にも絶大であることは明らかであった。
「うーん、私としては、莫大な資産を持っているのは息子夫婦だし、2人の意見を尊重したいな」
ここまで沈黙を守っていたお義父さんは、謙虚な姿勢を見せてきた。
あたしと浩介くんが、共に松濤を提案したことで議論は一気にまとまり始めた。
「さて、そうと決まれば明日早速不動産屋に行こうぜ」
「ええそうね」
あたしたちは、翌日に、渋谷にある不動産会社を訪ねることになっ

た。
引っ越しが決まっても、しばらくは建築期間もあるので、ここに住み続けることになるけど、今年の夏くらいには、新しい住居に住むことができると思う。

ガタンゴトン……ガタンゴトン……
電車が、静かに揺れ動く。
あたしたちは昨日の家族会議の通り、予約してあった渋谷の不動産屋さんを目指して電車に乗っていた。
「楽しみよねあなた」
「ああ、出来れば麻布なら通勤時間ももっと短くなったんだが、致し方あるまい」
あたしの両親が、新しい家について、楽しみにしていた。
父さんは麻布派だったらしい。その理由が自分の通勤時間とはいえ、松濤でも十分短縮になるし、何より今の家と比べたらどこだって素晴らしい家に違いはなかった。
電車の扉の上にある液晶パネルがニュースを報じていて、あたしたち「蓬莱カンパニー」の躍進ぶりが書かれていた。
更に、「蓬莱カンパニー、１００年後の世界解放の際には世界の富の半分が集中？」何て言うニュースまであった他、「ＪＡＸＡの宇宙移民計画が本格始動、軌道エレベーターも実用化へ」というニュースもあった。
格差拡大を煽るような報道もないわけではなかったが、人々の顔は総じて明るかった。

「間もなく渋谷、渋谷です」
しばらく電車を乗り継いだりなどして、あたしたちは渋谷駅へと到着した。
多くの人がどっと降り、あたしたちはあらかじめ予約しておいた不動産屋さんへと歩いていく。
「このビルの……ここかな？」

何故か外国人観光客が多い駅前の巨大な交差点を渡り、あたしたちはビルの中に入る。
この中に、松濤を扱っている不動産屋さんが入っていて、インターネットで見た物件もこの会社で扱っているはず。
あたしたちはエレベーターで所定の階に行く。
うー緊張してきたわ。
「こんなところ、普通の人には一生縁が無さそうよね」
エレベーターもビルも、古びた雰囲気なのに、どこか高級感が漂っていた。
「ああ」
義両親も興奮気味に話していた。
あたしが先頭で、扉を開く。

「いらっしゃいませー」
中には誰もおらず、店員さんが頭を下げてきた。
「すみません、本日予約を入れた篠原です。松濤に引っ越したいんですが」
「え!? あ、はいわかりました!」
浩介くんが「松濤に引っ越したい」と言うと、店員さんが目の色を変えてすっ飛んでいった。
恐らく、このお店でも一番坪単価が高い場所なのかもしれないわね。
「お客様どうぞお座りください」
テーブルの方に誘導され、あたしたちは椅子に腰かける。
かなり高級な椅子なのか、あたしたちはみんなそのふわりとした感じに驚きの声を漏らしてしまった。
いけないいけない、こういうのが成金扱いされちゃうのよね。
「松濤プランはこちらです。土地代とお値段はこちらの住居プランですと新築でこのお値段になりますがよろしいですか?」
普通の庶民なら、人生を30回はやり直さないと払えなさそうな金額……って、もうあんまり関係ないかしら?

１０００年生きるのだって、珍しくないだろうし。
「はい、今度株主総会がありまして、そちらの配当金で十分に支払えます」
「では利息を少しお付けしまして一括払いでよろしいですか？」
「こちらとしても異存はない」
浩介くんと店員さんの交渉は、とんとん拍子で進んでいく。
ちなみに、豪邸の内部３２０坪のうち、家の敷地面積が２００坪、庭などの屋外面積が１２０坪で、その中には車８台分の屋根付き駐車場があるけど、あたしたちは両家とも車を所有してなかったので、そちらも含めて庭に含めてもらうようにした。
大きなリムジンでも買って専用の運転手さんを都度雇うのもありだけど、さすがにそこまで散財する気には今はなれないわね。
親世代はともかく、免許さえ持ってないあたしたちに自家用車があっても仕方ないし、それ以前に長寿の実現を考えたら好ましくない乗り物なのも確かだった。
「完成予想図はＣＧにしますね。こちらになります」
テーブルに付随してあったパソコンを操作し、職員さんが完成予想図を見せてくれる。
ＶＲにすることもできるけど、３Ｄ酔いが気になるので、ゆっくりと画面を直線的に動かすことにする。
入り口は堅牢そうな柵に囲まれ、中に入るといかにも高級そうな資材で作られた家で、しかも四方には監視カメラがつけられている。
そして家の中に入ると、玄関の靴入れはあたしたちの家のそれの３倍以上で、カーペットも赤くて明らかに高級なもので、「中東製」が予定されているという。
廊下は向こう側まで広がっていて、１階にはそれぞれ２０畳の部屋が６部屋、１０畳の部屋が４部屋、また４畳半から５畳の小部屋も６部屋用意されていて１６ＬＤＫという間取りになっている。
更にトイレも１階だけで２箇所もあり、更にお風呂まで２０畳もあって、浴槽は広々と寝ながらつかることができるばかりか、シャワーと鏡まで２つついている。

メインのリビングルームは６０畳で、キッチンはＩＨとガスの両方が使える他、食卓の他大きなテレビの前には、高級ブランドのソファーが置かれていた。
キッチンにはよく分からない機材も置かれていたけど、何だったのかしら？
「すごいわねえ……」
「続いて２階になります」
もう一度玄関に戻り、今度は２階へと進んでいく。
階段の他、何と住宅用にエレベーターまで併設されていて、これならおばあさんもこの家に入れてよさそうだわ。
２階もまた、２０畳の部屋が５部屋、１０畳の部屋が４部屋、また６畳間が４部屋あって、床の面積は１階より狭いけど、広々としたベランダが、心地いい日当たりを提供してくれる。
お風呂は１階と同じ仕様で、またキッチンも同じ仕様、ただしリビングは７０畳と１階よりやや広めに取られている。
こちらは１３ＬＤＫね。
「こちらのエレベーターで、食材などを運ぶことも可能です」
「へーこれってエレベーターだったのね」
母さんが感心した様子で話す。
お風呂の状態や、双方のキッチンも、映像で見ることが可能になっている。
いずれにしても想像を絶するような豪邸には代わりがない。
最後に３階で、こちらは倉庫前提になっているのか、２階と比べても更に狭く（それでも今の家の面積の倍くらいだけど）なっているものの、それでもトイレがあったりお風呂場に数部屋の部屋もあって、ここにおばあさんと介護士の人を住まわせれば良さそうね。
更に階段があって、自宅の屋上に出ることができる。
屋上はガーデニングの他、渋谷の町を一望できる光景を楽しめる他、専用プールまでついている。
こちらのプールは夏はプールに使える他、冬は温水プールにもできるという。

次に画面が飛んで庭に移る。
庭にはバーベキューできるスペースの他、小さな庭園もあって、このあたりは前の持ち主のものを使い回すことになるという。
更に庭園を巡っていくと倉庫に使えるはなれが2つ並んでいて、1つは倉庫として、もう1つは何と茶室になっていた。
ここでお茶会が開けるということになっていて、そうでなくても離れた和室ということで、何かに使えそうな雰囲気ではあった。
「以上になりますがよろしいですか？」
「はい、大丈夫です」
ともあれ、これだけすさまじい豪邸なら、この値段も納得だわ。
マスコミが押し寄せても、門前でシャットダウンして要所要所に監視カメラを入れれば、入ってくることは難しいし、各界の著名人も多く住んでいるので、マスコミが誰かの自宅に押し寄せるということにも、ある程度耐性がついているだろう。

# 移住計画　後編

「それでは、現地へとご案内いたしますね」
「はい」
あたしたちは、店員さんの案内について行く。
車で行くことも出来るけど、車を出すのはやめた。
駅から近いということも去ることながら、実際に駅からの道のりを実感して覚えるためにも、あたしたちはあえて徒歩での移動を選択した。
ちなみに、帰りは井の頭線の神泉駅で解散することになった。

このあたりはかなり閑静な住宅街だけど、建っている住宅はどれもいかにもな高級戸建てばかりで、土地代も高いはずなのに、家の広さはどれも１００坪はある感じだった。
この光景に圧倒されそうになっていると、やがてそれらの高級住宅街でも一際大きい家が建っていた。
「こちらです。現在亡くなった前の持ち主さんの家が建っておりますが、遺族の方が相続税はきついとのことで、家と土地を売るとのことでした」
それを、あたしたちが買い取った上で新築するのよね。
取り壊される建物も、かなりの趣はあるけど、建ててからそれなりの年数があるので、あたしたちは取り壊して新築を選んだ。
「あれ？　でも狭い気がするわ」
３２０坪という広大な敷地ともなると、あたしたちの家の６倍以上の広さで、縦横比でも一辺あたり２倍以上はあるはずだけど、この敷地は２倍という水準もない。
「はい、実は今回、『もし篠原様がこちらをお選びになるなら、喜んで立ち退く。老い先短いから相続税のことも考えたい』と、周囲の方々も仰せでした」
不動産会社の人がさらりと話す。
どうやらあたしたちはそれほどの上客らしいわね。

「なるほど、そういうことなのね」
あたしたちは、思わず苦笑いしてしまう。
ここに住んでいるのは、みんな富裕層の中の富裕層といっていい人なのに、いや、そういう人だからこそ、あたしたちに感謝しているのかもしれないわね。
「まずこの家と左隣の1建が取り壊されます。そして先程のＣＧの通りに家を建てて参ります。工事期間は現在よりおよそ半年弱を予定しております」
今は3月で完成予定は早くて8月、遅くても9月末という予定になっている。
「はい」
家具はモデルケース通りに配置できるけど、一部は前の家から使い回すことにしている。
とはいえ、よっぽど思い入れのあるものでもない限り、高級家具に取り替えることにはなっているけどね。
ちなみに、そのまま持っていくのは携帯電話とかパソコンとかが主で、他にもあたしが買ったぬいぐるみさんなどのおもちゃも、まだ見ぬ豪邸に持っていくことになっている。
「予定通りに参りますと、今年夏から秋には引っ越し業者を手掛けることになります」
「分かりました。といっても、あの豪華な家に持っていく荷物は少なそうね」
「ええ」
あたしの両親も、義両親も、今からワクワクしていた。
いわゆる「子の七光り」とはいえ、一介のサラリーマンだった自分達が、こんな凄まじい高級住宅街の、一際輝く豪邸に住むことができるのだから。
「2人とも、同僚に嫉妬されないといいわね」
帰り道、あたしたちは江戸時代に著名な大名の土地だったという公園に立ち寄ってから、井の頭線の神泉駅を目指していた。

その道すがらにも、嗜好を凝らした豪華絢爛な住宅が数多くの目についている。
色合いがとても成金趣味な家もあれば、逆に質実剛健ながらも、お金を使うところに使っているような印象の家もあって、あたしたちの目を楽しませてくれた。
そんな中で、あたしたちが懸念に思ったのは、普通のサラリーマンとして働いている男親が、会社の同僚などに嫉妬されないかということだった。
「あーいや、さすがに自分の娘夫婦が世界一の資産一家ともなると、逆に同情されたよ」
あたしの心配に対して、父さんからの返事は意外なものだった。
それは何と、「逆に同情された」というものだった。
「あーうちの会社もそんな感じだったよ。泣く子も黙る蓬莱カンパニーの、しかも社長の父親だぜ？　比べられる前に『比べられちゃいそうでかわいそう』だってさ」
お義父さんもあっけらかんとした感じで言う。
よく考えれば、あたしたちの家にはマスコミが殺到していたし、そればかりかあたしたちが資産家になったのだって数か月前からのことだったし、そうでなくても以前からあたしたちは蓬莱カンパニー最高幹部として世間に知られていた。
「そうでしょう？　お父様たちは大変だったと思いますよ」
不動産屋さんの人も、同情してくれた。
やっぱり、成金は嫉妬されると言っても、限度というものはあるのね。
「こちらです」
駅が見えてくると、不動産会社の人が横にどいてくれた。
「ありがとうございます」
渋谷駅へは徒歩圏内とはいえ１０分以上の時間を要したけど、こっちは数分で済んだ。
元々分かっていたこととはいえ、こうして歩くとどちらも徒歩圏内と言っても神泉駅が大分近いわね。

しかし、神泉駅は井の頭線の各駅停車のみが停車する駅で、井の頭線のみならず、山手線や地下鉄などが通っている渋谷駅と比べると利便性には雲泥の差がある。
とはいえ、渋谷での乗り換え時間を考慮しても、余程のことがない限り神泉駅からの方が速いのも確かなので、よく時刻と相談しながら決めたいわね。
「では、本日はありがとうございました」
「ではまた頼みます」
店員さんの深々としたお辞儀に見送られて、あたしたちは駅から電車に乗って家に帰った。
こちらは渋谷駅まで1駅で乗る時間はかなり短かった。
井の頭線の駅での乗り換え時間もあるから、場合によっては渋谷駅まで歩いたほうがいいかしら？　まあ、生活しながら覚えればいいわね。
後は別の場所に引っ越すことになったことや、夏までは建設がかかる旨を今の地域の人に話しておく必要があるわね。

「さて、どうしたものかね？」
家に帰って、再び家族会義が開かれた。
間取り図を貰ってきたけどとにかく広い。
日本の住居は、実は言うほど狭くないという統計はあるらしいけど、世間一般的には狭いと言われている。
だけど、今回のことで分かったんだけど、広くても持て余し気味になるから、広いに越したことはないと言っても、そこまでは羨ましいものでもないということだった。
「優子ちゃんの部屋が２０畳で、俺の部屋があって……」
浩介くんが間取り図を見て悪戦苦闘している。
将来の子供部屋などに温存する部屋を入れても、どうしても余る部屋が出てしまう。
例えばそれを書斎という名前で仕事用の部屋を作るとして、1階はともかく、特にあたしの両親のフロアの部屋が余ってしまう。

２階には来客用の部屋を設けたり、あるいは階段を外付けした上で監視カメラを見る警備員さんの部屋を作るという案も出された。
警備員さんの部屋とするには様々な問題が生じたので、結局２階の部屋の一部は「シアタールーム」と称して映画などを家庭で見ることができるように変更した。
それでも埋まりきらなかった場合は部屋を統合してもうことにした。
結果的に、１階の６部屋ある２０畳の部屋はそれぞれあたしの部屋プライベート用、浩介くんの部屋プライベート用、お義父さんの部屋、お義母さんの部屋、２人共用での仕事用の部屋で将来的には子供部屋に、そして入口から一番近い部分の部屋は、来客者の応対用の部屋を用意した。
更に４部屋ある１０畳の部屋これが厄介で、１部屋を季節で出し入れする短期的倉庫に、もう１部屋をあまり出し入れしない長期的倉庫にして、残り２部屋のうち１部屋は、「家族の趣味の部屋」として、これから何か趣味を見つけたらここに集まることにした。
最後の１部屋をどうするかについては、浩介くんが「できてから決める」として保留となった。
また、小さな５畳部屋たちも、結局大きな用途が決まらず、「庭で栽培していた園芸を緊急退避させる部屋」とか「まだ買っていない美術品の専用部屋」といった感じで、いかにも「苦肉の策」という感じの用途になっていく。
２階にある５部屋の２０畳部屋は、両親の部屋とマイシアター、また泊まり掛けで来た来賓向けの部屋を１室用意した。残りの１部屋は、子供が出来た後の、あたしと浩介くん共用の仕事部屋にして、今は空き部屋とした。
４部屋ある１０畳部屋については、やはり石山家専用の倉庫として２部屋、更に浩介くんの筋トレのための専用機材を多数揃えた部屋に決定した。
残りの１部屋は、音楽鑑賞及びカラオケ用の部屋として、防音仕様にすることが決定された。

この部屋では、食事などの呼び出しがあった場合には、信号機を模した機材で応答するようにしている。
また、他の小部屋には、「監視カメラのデータを保存するための専用サーバーの部屋」がもうけられた他、蓬莱教授が来た時などのために、「ミニ研究室」を設けることが決定した。
ここでも1部屋は用途不明で、空き部屋とする対策がとられた。
何かこの家で問題があった時に、警備員さんや警察の方のための部屋とするというのが結論になった。
そして3階については、おばあさんの部屋の他、介護士さん専用の部屋も設けられた。
また、簡易的なキッチンと給湯室も設けられ、労働環境に配慮することになった。
屋上は専用プールで、夜などには露天風呂にもなる場所で、もちろん脱衣場やトイレも設けてある。
離れについては、倉庫の他、和室は茶室として使えるけど、定期的に手入れをしてくれる庭師さんの控え室とすることが決定した。
庭のデザインは和風にしつつ、何本かの木を植えることになった。
「よし、こんな感じだな。これで後は家具を注文するだけだな」
浩介くんの号令と共に、家族会義も終了し、母さんたちも実家へと帰っていった。
「あー何かすっげえ疲れたぜ」
家の部屋利用を終え、浩介くんが床に座り込んでしまった。
「うん、あたしも」
肉体的にというか、精神的に。
これが多趣味な人ならいいんだろうけど、ごく普通の一軒家に住んでいるあたしたちからすれば、これだけ多くの部屋を埋めていく作業だけでも大変だわ。
部屋だって使わなければ宝の持ち腐れになっちゃうものね。
とにかく、大富豪と言えば羨ましがられることもあるけど、この家から引っ越しを余儀なくされたように、大富豪は大富豪で大変なのよね。

幸いにして、あたしたちの収入はほぼ全てが株式の配当金で、役員報酬は少なくなっている。
所得税という意味では、株式の配当金は安いし、蓬莱の薬を飲んだ以上、相続税は心配しなくていい。
まあ実際には、社会保障費が０に近くなったおかげで所得税についても減税がなされる予定ではあるけどね。
「ま、今はこの家で満足しようぜ」
浩介くんが、空元気気味に話す。
あの広い敷地が、周囲とともにあたしたちのものになるというのは、未だに想像にもつかないことであった。
「うん」
この家は、あたしの実家ともども中古物件として売りに出されることになる。
篠原家の思い出が詰まった家への愛着もあるけれど、さすがに世界一の資産家になったあたしたちがいつまでもこの家に住むわけにもいかない。
治安のいい日本なので今のところは大丈夫だけど、場合によっては強盗や略奪といった被害に遭う可能性だってある。
もちろん、この家を荒らしたところで金目のものはほとんどないし、第一株式の配当金だってまだもらっていない上、株券も電子化されている。
とはいっても、やはり不法侵入されるのは嫌というのは事実で、換言すれば今あたしたちは一番命の危険にある状態と言ってもいい。
件の豪邸は幸いにして塀も大きく、セキュリティもバッチリしているから、そこに移れれば大丈夫だとは思うけどね。
「一時的に賃貸住宅を買うのもいいと思うわよ」
「賃貸かあー面倒なんだよなあ……」
浩介くんは、難色を示していた。
ともあれ、あたしたちにとっては苦難の道のりであることは間違いないわね。

さてこの季節に並行して行われたのが、監査法人と協力して行われた「決算報告書」だった。

そこにはかなりの黒字経営になっていて、蓬莱カンパニーがかなり儲けていることが分かる。

とはいえ、それ抜きでも黒字ではあるけれども、黒字額のほとんどが、株式上場以降に市場の投資家が投じた株購入による収入になっていて、言い換えればあたしたちの会社の株は、「１００年後を見据えた投機の対象」でもあった。

株主総会では、この黒字経営からいくらか配当金を流していく訳だけれども、設備投資や従業員への給料アップにも投資するため、配当金の率は少し控えめにする予定となっている。

まあ、来年度の決算が今年度よりもよくないことは目に見えて明らかなことなので、巨額の黒字を出したその日も、株式市場はとても冷静だった。

株主総会の日程なども決定していて、あたしたちは新年度に向けて最後のスパートを切ることとなった。

あまりに多くのことが起きてしまって忘れがちになるが、あたしたちは大学院博士課程が後１年残っている。

前期のうちに最後の必要単位を取ってしまえば、博士論文も終わっているあたしたちは、何もしなくても卒業と博士の学位授与は可能だけど、蓬莱カンパニーが必要とする研究職としては、まだまだこの研究室が必要になってくる。

今後は佐和山大学そのものを、蓬莱カンパニーの傘下に入れることも考えている。

同時に関係の深い小谷学園についても、中等部を新設した上であたしたちの影響下に置くことを、永原先生と相談している。

学校法人から良質な研究者を輩出し、成績のいい人や創造性の高い人を蓬莱カンパニーに就職させる。言うなれば青田刈りと呼ばれる行為だけど、もちろん他の学校や企業にも、人材を出すことが大きな目標になっている。

蓬莱カンパニーは多角経営を目指すわけではないけど、蓬莱教授と

関係の深い組織と一体になるメリットは大きいと思う。
小谷学園と佐和山大学は、あたしたちの出身校ということそのものが、人気を集めるらしく、小谷学園のパンフレットには「人類最高齢、永原マキノ先生」という表現と共に、「篠原夫妻と田村恵美の母校」と書かれていた。
つまり、あたしたちも世界一の資産家になったことで、「著名な出身者」となったのだ。
ついでに、あたしと浩介くんも、インターネット百科事典に掲載されるようになった。
それによれば、あたしたちは実業家で、蓬莱カンパニーという学生ベンチャーを教授と共に立ち上げ、世界で2番目の富豪、一族別では世界一の富豪と掲載された。
しかしまだ、研究者という一面はあまりクローズアップされておらず、あたしの項目では、「初めて完全不老の理論を確立」したことを、浩介くんの項目では「蓬莱カンパニー設立のために必要不可欠だった歩留まり改善理論を確立」と書かれているにとどまっていた。

「ふう……」
色々考えを巡らせながら、お風呂に足を曲げて入りつつあたしの部屋でベッドに眠る。
松濤に引っ越したら、今のお風呂やこの部屋よりも、ずっと豪華な生活が待っている。
それは、あたしたちが「人類不老化」という業績を成し遂げた当然の対価だとも思っていた。
あたしたちは、夏に訪れる新しい生活に思いを馳せつつ、残り少ないこの家での生活を満喫することにした。

## 蓬莱教授の戦略的慈善

「よく来た2人とも、さ、卒業まで後少しだ」

あたしたちの会社が学校法人佐和山大学を傘下に入れることを計画しておきながら、自分達はいまだに大学院生だった。何だか、奇妙な話だわ。学生が学校を買収するって。

昨年度の卒業は見送られて、あたしたちは最後の単位を受けることになっていたが、蓬莱教授曰く、「もう優子さんたちは1年目の時点で博士には十分だった。とりあえずアリバイだけ作って、適当に講義に出席していれば単位とらせるから」とのことだった。

蓬莱教授とあたしたち2人での実験は、世界のＴＯＰ３の富豪による講義と実験だったのよね。

最近では殆ど会社絡みの仕事が増えていて、そもそも会社を作ったのも蓬莱教授ということで、自己都合で卒業に支障をきたさせるのはまずいと考えているのかもしれないわね。

あたしたちは大学の敷地から「蓬莱の研究棟」まで進む間にも、色々な人から視線を感じるようになった。

あたしたちが「世界一の金持ち」と経済誌に掲載されてから、いかにもお金に不自由ないと思っている人も多いけど、今はそうではない。

お金に不自由しなくなるのは、肝心の資産の大半を占めている株券の配当金が出てからとなっている。

とにかく厚かましいのは、殆ど会ったこともない人がいきなりしゃりしゃり出てきては、「ご飯をおごってよ」といったねだり行為をすることで、さすがにあたしが「優子」でも嫌な感じがする。

特にひどかったのは大学生男子2人組で、例の「ヤリサー」の後継者らしく、「世界一の金持ち何だろう？　乱行パーティー計画してるんだけどおごってくれない？」というもので、さすがのあたしも久々に本気で怒ってしまったし、浩介くんはもっと怒ってヤリサーの男を殴り倒してしまって一時学校が大騒ぎにもなった。

ちなみに、「蓬莱の薬を売らないぞ」という脅し文句が効いたのか、

こうしたしつこいまとわりつきも、１週間で収まった。
「優子さんたち、最近災難だな」
蓬莱教授もいたたまれなくなったのか、あたしたちを心配してくれた。
「そうねえ、会社の近くとかはそうでもないんだけど」
オフィスビルまでの通勤ルートではこうしたまとわりつきはない。
サラリーマンのおじさんやＯＬのおばさんお姉さんたちは、他の会社の人でも、みんなあたしたちに気を使ってくれている。
オフィスの面積も足りなくなってきたので、あたしたちは更に増床を行うとともに、大阪にもオフィスを構える準備を進めることになった。
値下げ期間中とあって、予想以上には売り上げがあるものの、やはり売り上げの数そのものは落ちている。
しかしそれは、値下がりしきった後の反動が大きいため、全力で生産力増強と、支店の充実、更に現場の社員の訓練やＳＶの人材育成や、人材の迎え入れ、また転職元の企業に対するケアについても話し合われていた。
「そりゃまあ、大学生は社会経験ない人が多いからな」
普通なら、あたしたちみたいな大物は、見かけても気を遣うものだけど、ミーハー感情のある若い人の場合、あたしたちのことを「芸能人」と勘違いしている人も多いのよね。
「ったく、俺たちは研究者で実業家であって芸能人じゃねーのに」
浩介くんも同じことを考えていたのか、似たような話をしていた。
「まあ確かに、若くして、しかも日本人の世界一の資産家ってのは３０年以上出てなかったからな」
あら？　以前にはいたのかしら？
むしろそっちの方が驚きだわ。
「あたしたちが生まれる前……というより、あたしたち以前にも世界一の資産家だった日本人っていたのね」
３０年以上前ってことは、まあ多分、いわゆる「バブル景気」の影響だとは思うけども。

「まあな。ただ、世界一の資産家で当時３兆円近くの資産を持ってたとされた人が、そのまま世界一の資産家として亡くなった時には国の発表では資産１２０億円だったってのもあったな。主な原因としては、会社名義の土地も彼個人の土地に計算したせいだ」
へー、そういうことがあったのね。
……まあいいわ。今は今、あたしたちが、蓬莱教授こそが世界一のお金持ちだもの。
「バブルは土地バブルだったからな。今は株が大富豪たちの資産の多くになっているな」
大体は、あたしたちと同じで、創業して大株主になったり、黎明期から投資した会社が大成功して資産家になるケースが多いらしい。
あたしたちも、創業した蓬莱カンパニーの株式上場のおかげで、こうして「世界一の資産家」と評されるようになった。
「ええ」
配当金を利子にしたりしていけば、あたしたちの資産は更に増える。
もちろん、税金対策として、余ったお金を、ふるさと納税などに回していく必要性も出てくるだろう。
……まあ正直言うと、税率高いと言っても、手元に残ったお金も使いきれないし、節税したいとは毛頭思わないわ。
蓬莱の薬を飲んじゃったから、相続のことも心配しなくていい身分になったし、万一相続するにしても、相続税で半分取られたところで痛くも痒くもないのよね。
富を再分配してくれるならむしろ蓬莱カンパニーとしても歓迎だし。
……って、そういう発想が成金なのかしら？
「俺も資産がとてつもないことになったから、寄付もきっぱり止むと思ったんだが……見通しが甘かった。どうやらそうでもないらしい」
「へー、意外だわ」
蓬莱教授は個人ランキングでは、あたしと浩介くんでさえ同率２位なのに、株だけであたしの３分の４も持っている文句なしのダントツ

世界一の大富豪となっている。
正直に言って、世界一の大富豪に寄付なんかしてどうするつもりなのよ？
寄付するとしても、例えばお金がなくて蓬莱の薬を買えない貧困層にしようよ……もう因果律滅茶苦茶だわ。
「正直、今度の株式配当も含めて、以前から俺の手元には使わない……というよりも使えきれないお金ばかりがたまっておる。これは経済にとっても非常によくない」

「富裕層は富裕層らしい生活をせねばなるまい。優子さんたちも松濤に豪邸を建てるんだろ？　実際俺も佐和山大学からほど近い所に家を持っているんだが、その家を１６００坪くらいに拡大できないかと思っている。あーこれでも優子さんたちの家よりは費用はかからんよ。あーもちろん１６００坪だからそれなりの値段はするがね。だがそれでも毎年数千億なんてレベルだと、使い切れんものは使い切れん。そこで俺は、寄付金や株式の配当金の一部を割り当てて独自に金融機関を作ることにした」
「どういうことですか？」
「会社のお金にして株主の配当と従業員の給与に回そうと思ったんだが、それもそれでよくないと思ったんだ。そこでだ、使って持て余したお金で年金財団を作り、毎年一定額に対して国民の数で等分した金額を、彼ら全員に配ろうと思う。あ、優子さんたちまで参加を強要する訳じゃないぞ」
はっきり言って、それは共産主義的な発想ではあった。
しかしながら、このまま行けば、あたしたちに富の集中が起きるばかりか、貧困者がますます貧困になって、月２０００円さえ払えない状況に陥る国民が増えたら、あたしたちにとって致命的な問題となる。
あたしたちは、いわば「厚利多売」な商売をしている。しかも独占権を得て安全圏内から。だからこそ世界一の資産家となった。
そして国民全員、引いては全世界の全人類に蓬莱の薬を売っていく

必要がある。
　しかし日本や世界には、蓬莱の薬のお金さえ払うのが難しい人もたくさんいる。
　もちろん今すぐにではないが、そうした人のための寄付財団というのも、必要にはなってくるだろう。
「とにかく、一部の人だけが利益を得るような状況はまずいというわけね」
　あたしたちは未来の顧客のために、暴利の一部を還元した方が結果的に自分たちもより暴利を貪れるとも言えるけど。
「ああ、そういうことだ」
　結局、「共産主義的」と批判された蓬莱カンパニーの方針を達成させるためには、「資本主義の権化」とも言えるあたしたち自身が、共産主義的な手法を実践する必要があった。
「さて、この寄付において問題になることが１つある。日本だけならまだあまり問題ないんだが、世界に寄付する時だ」
　蓬莱教授は次の議題に移ろうとしていた。
「どういうことですか？」
「アフリカがいつまでたっても発展しない理由はな。寄付をしても途中で役人がごっそり持っていっちゃうせいなんだ。つまり中間搾取というやつだな。あーもちろん、さすがに１００年経てば色々と変わってくるとは思うがね？」
「ええ」
「腐敗の激しいいわゆる『失敗国家』と言われる国に寄付する場合には、未来でも同じことが起こる可能性があるんだ。つまり役人の中間搾取だったり、あるいは被支援者自身の堕落だ」
　蓬莱教授の方針では、日本の場合は全国民だが、世界にこの支援を拡大する場合、所得が一定以下で、なおかつ蓬莱の薬を購入する意思のある人にのみ支援を行うつもりだという。
「ただ金を渡すだけじゃその日のうちに遊びで使っちゃうなんてこともあるからな。ちゃんと蓬莱の薬のローン支払いに使ってもらわないと困るだろ？」

「そうだな」
蓬莱教授によれば、潤沢な支援を受けているにも関わらず発展しない国の腐敗度はあまりにもひどく、上から下までどうしようもない状況だという。
とにかく労働意欲がなく、しかも貯蓄ができない。
生き方が刹那的で、財産があると見るやすぐに使ってしまう。
しかも、欧米に植民地にされた経験から、何か都合の悪いことがあるとすぐに彼らのせいにして、援助慣れもひどく「また援助してもらえばいいんだから働く必要はない」と考えている人が多いのだとか。
「何だか、永原先生の話を思い出すわ」
「ああ、『貧すれば鈍する』とはよく言ったものだ。だが、だからと言って彼らを放置するわけにもいかん」
蓬莱教授としては、蓬莱カンパニーの内部統制と同じように、相互監視と密告制、そして連座制で、そうした腐敗を徹底的に取り締まることも考えた。
しかし彼らの場合、あまりにも刹那的な生き方をしているので、すぐにばれるような虚偽の密告をしたり、不正を地域ぐるみ、部族ぐるみで隠蔽したり、そもそも目の前の果実を前に連座制のリスクさえ忘れてしまうくらい欲望に忠実な場合さえあるという。
「最終的には彼らの成熟を期待するしかない。果たして１００年で変われるかどうか、だな」
今のところは、この問題は先送りにするしかないというのが蓬莱教授の結論だった。
不老社会が到来した結果、今の日本は今まで以上に高度成長に沸いていて、ＡＩに置き換えられた仕事があったと同時に、ＡＩの登場によって、これまでなかった新しい仕事も創出されたため、あたしが高校生の頃によくあった「大量失業時代」は、ついに訪れることはなかった。
また、現在は生産ばかりが注目されているけれども、「消費するＡＩ」という新しい概念を提唱する会社も出てきた。
「どちらにしても、世界同時解放というのは衝撃的になるだろう。１

００年後、今と同じ国々がそうなっているかはともかく、先進国と途上国は存在するだりろうさ。その時に全世界全国民にいかようにして蓬莱の薬を配った上で、企業としても収益を出すか、そこが課題になる」
日本がもたらした不老は、世界から羨む目を向けられている。
しかしながら、諸外国からの蓬莱カンパニーに対する「市場解放」の要望は、今はぴったり止まって来なくなった。
とはいえ、日本の一人勝ちが鮮明になればなるほど、彼らは無理と分かっていても圧力をかける可能性が増すのよね。
……今度松濤に建てる豪邸の警備も、見直した方がいいかしら？
あたしたちは、在庫をどんどん溜めていて、工場の倉庫や各支店に、次々と納入されている。
一時、小売業界から「うちの店に置かせて欲しい」という要望があったにはあったが、これについては「安全と機密保持上の問題がある」と回答した結果、すんなりと引き下がってくれた。
向こうもいかにも「ダメ元」って感じだったし、この件に関しては一切わだかまりも残らなかった。
「とにかく、今は短期的には値下げが終わった来年に向けて、長期的には全世界発売が解禁になる１００年後に向けて、頑張っていくしかないわね」
「そうだな。流通網に関しても、木ノ本さんの宇宙開発がうまく行けば、宇宙規模での流通事業の開拓が必要になってくるな」
実は桂子ちゃんは、かわいく若く美人だという理由で引っ張り出された。
もちろんチームの中では重要な地位にはいるものの、総責任者というわけではない。
まあ、イメージって大事だものね。
あたしもかわいくて美人な女の子だから、いるだけでイメージ向上して雰囲気がよくなるのは、よく分かるわ。
「さ、休憩はこの辺にして、実験を続けようか」
「「はい」」

あたしたちは最後の単位に向けて、実験と講義を続けていく。
最後の最後ともなると、あたしたちも無意識に力が入るわね。
これがいい結果を産み出してくれると、本当にいいんだけど。

「続いてのニュースです、政府は、昨年度のＧＤＰの値を上方修正し――」
家に帰ってニュースを見ると、また経済指標のニュースをやっていた。
「続いては特集です。今や将来的に生きていくのに必須とも言われるようになった『蓬莱の薬』、蓬莱カンパニーへの支持率は９９％に達しています。しかし一方で、宗教的理由などから、子供に蓬莱の薬を飲ませないと公言する親も出てきています」
しかし一方で、「蓬莱の薬を買えない人々」という特集が組まれていた。
それによれば、親が信じている宗教的な問題で、「蓬莱の薬に反対されている」という見出しだった。
もちろん、蓬莱教授としては、そうした親は絶縁理由になるほどの「毒親」であることは間違いない。
しかし、変なところで優しすぎるため、それに踏み込むことはしにくいという。
「どうしようかしらね？」
「んー、こういう事例も出てくるよなあー」
親族の縁を担保に、蓬莱の薬を売らせないというのは、生存権の侵害でもあるし、政府の福祉縮小を邪魔する行為でもある上に、そもそもこれからの価値観で言えば、数十年にも及ぶ拷問の末での殺人に等しい。しかも本人に非はないからなおのことたちが悪い。
本来ならその宗教ごと蓬莱の薬の不融通を宣告し、脱会を促すべきなのだろうけど、薬の不融通は彼らにとってみれば痛くも痒くもない上に、企業ぐるみで脱会を促しちゃったら信教の自由とぶつかってしまうのよね。
カルト宗教の２世問題はそういった意味で被害が深刻で、あたした

ちとしても解決しなければいけない問題にはなってくると思う。
「ともあれ、値下げが終わったら、『飲ませてもらえない人のための相談窓口』を設けねえとな」
「ええ」
もちろん、本人を救うだけなら、積極的に絶縁を促してしまい、洗脳を上書きしてしまうのが一番早い。
実際蓬莱の薬を飲まなかった両親は、その短い寿命の中で、悲惨で惨めな最期を遂げることは確実であるから、本人も「ああならないでよかった」と胸を撫で下ろすに違いないわ。
だが世間一般では、蓬莱カンパニーは優良企業であり、社員への福利厚生は抜群で、しかも商売方法も良心的で知られている。
逆らうものに容赦しない以上、それ以外のところは徹底的に面目を傷つけないためのシステムになっている。
そのため、相談窓口で積極的に絶縁を促す何てことをしたら、間違いなく大きなスキャンダルになる。
とはいえ、今はともかく、近未来の日本では、蓬莱の薬を飲ませないというのは、恐らくあらゆる虐待の中でも最も深刻な虐待になることは容易に想像がつく。
「とりあえず、児童相談所や教育委員会と連携して、蓬莱の薬を飲ませないように脅したりすることそのものを『虐待』と認定してもらうように、呼び掛けるしかないわね」
「ああ、今はそうするしかないだろうな」
あたしたちは、この期に及んで蓬莱の薬を飲まない人々の子供に対する対策を考えながら、この日を終えた。
この内容、株主総会でも話した方がいいかしら？

# 初めての株主総会　前編

５月９日、あたしは女の子になって１０年が経った。
高校２年生だったあたしは、大学院博士課程の３年生になり、蓬莱カンパニーの常務取締役となった。
そしてこの日は日曜日。
まだ一般的な時期としては早いけど、あたしが女の子になって１０年という節目を記念して、蓬莱カンパニー本社ビルで株主総会が開かれることになった。
あたしたちはもちろん、主要な大株主を除いて投資家たちとはもちろん面識はない。
あたしたちは自身も大株主ではあるけど、投資家たちも株価の維持のために重要な株主であることには違いはない。
だから、あんまり自分の意見ばかりを押し付けちゃうと、株価急落という形で、資産が目減りすることになる。
まあ多少減ったところで、来年の資産ランキングが落ちるだけでどうということはないんだけどね。
「株主総会、楽しみだけど緊張するぜ」
浩介くん、かなり緊張しているみたいね。
あたしでさえ心臓がバクバク行っているのに、矢面に立つ浩介くんの緊張度合いは想像もつかないほどになるわよね。
「うん、あたしも」
株主総会には、取締役が全員出席することになっている。
蓬莱カンパニーには現在取締役が７人いて、そのうちの５人は主要株主も兼ねているため、特に社長であり保有株の１５％弱を保持している浩介くんにのし掛かる負担は大きいわね。
「それにしても、この電車に乗るのもそろそろ見納めね」
「ああ」
住みなれた沿線に乗り慣れた電車、あたしたちが住む新しい豪邸の完成はもうすぐそこに迫っている。
家だけではなく、今まで使っていた家具類なども、これから住む豪

邸にふさわしくないと判断されたものの多くは売りに出されて、最高級のものに交換される。
また歯ブラシや箸などの日用品は使い慣れというのを踏まえていくらかは使い回しになるけれども、これも寿命というものがあるため、買い換える時は住宅街付近の店で買うことになるために、随時高級品に変わっていくことが決定している。
最も、売りに出されると言っても、正直に言えばこれからの収入に比べれば、無いに等しいようなはした金なので、得た金は高級料亭に行く際のお金にしようかと考えている。
あたしたちはいつもの通勤ルートを使って、蓬莱カンパニー本社の入っているビルへと向かう。
今回はそのビルの４８階にあるオフィスフロアを全て間借りした上で株主総会は開かれることになっている。
あたしたちは、上層用エレベーターに乗り換える。
エレベーターに乗った人は全員が４８階の「蓬莱カンパニー株主総会」を目的地にしていた。
「社長、常務、お疲れ様です」
見ず知らずの株主さんに声をかけられた。
「あ、お疲れ様です」
蓬莱カンパニーは今、専務と常務が美人として注目されていて、特にあたしは以前からの知名度があったために特に世間の注目度が高くなった。
取締役７人のうち３人が女性とその比率は高いけど、一部には「女性と言ってもＴＳ病で元男だしなあ……」という意見があった。
こうした意見については、あたしたちと協会とでそれぞれ厳重に抗議することにした。
男のような扱いをするのは、今でもあたしにとっては最も尊厳を傷つけられる行為であることには変わりはないもの。
「４８階です……４８ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」
エレベーターの機械音声が階数を話し、全員が一斉に降りていく。
ドアパネルに一番近かった浩介くんがボタンを操作し、最後にあた

したちが降りる。
まあ株主の序列からすれば、あたしたちが一番最初に降りちゃってもよかったんだけどね。
エレベーターを降りたところには「株主総会会場はこちら」という表示が見え、中で株主を証明するための手続きが行われているが、言うまでもなくあたしたちは顔パスだ。
中に入ると、既にオフィスの中は株主総会用に、大量の机と椅子が並べられ、前方にあたしたちのための長机、そしてプロジェクターが装備されている。
要するにこれで株主の人に説明する、というわけね。
「おはようございます」
「おはようございます」
既に到着していた取締役の和邇先輩と挨拶をする。
今回この株主総会では、主に社長の浩介くんが矢面に立つことになっていて、あたしたちも自分の職能範囲についての質問が来た場合は、それに答える義務がある。
外国人投資家を制限しているため、中は日本人で埋め尽くされていた。
株主さんたちの席は自由で、みんな思い思いに話している。
株主総会では、今後の経営方針や、決算報告などからの配当金の決定、更には資金や経営資源の使い方を話し合う。
また、現在のところ乏しい株主優待制度についても、蓬莱の薬の割引を含め、いくつか検討していきたい。
もちろん、短期的な蓬莱カンパニーの基本方針は譲れないけれど、彼らもそうした根本を覆すような主張を執拗に繰り返すとは思えない。
とはいえ、市場はとにかく正直だし、いくらあたしたち自信が株主とはいえ、いくらか配慮する必要がある。
とはいえ譲歩のしすぎは彼らの増長をも生むから注意しないといけないのよね。
「篠原さん、おはよう」

「あ、永原会長」
あたしに話しかけてきたのは、相談役の永原先生だった。
「ふふ、今日は株主総会だね。私は向こうの席に座るわね」
永原先生は取締役ではないので、役員でもない。
そのため、１０％強の株式を保有する永原先生は、いわば「取締役でない人の中では筆頭株主」ということになる。
いや、それどころか永原先生の場合、やはり５％保有の「日本性転換症候群協会」の会長でもある。
永原先生は、この株主総会に、「協会の代表」としても出席しているため、実質的にはちょうど１５％保有のあたしと浩介くんを僅かに上回る議決権を持っていることになる。
とはいえ、取締役ではない人は蓬莱カンパニーの従業員であるないに関わらず、向こうの自由席に座ってもらうことになっているのは同じ。
「はい、よろしくお願いします」
とはいえ、永原先生はあたしとも１０年来の付き合いだし、永原先生自身が既に１０兆円以上の資産を保有しているため、わざわざあたしたちに異を唱えるとも思えなかった。
ちなみにこの株主総会は、さすがに１株所持者からの参加は会場手配の問題もあったので、今回は１０株所持以上という条件に変更し、来年以降は広い会場を借り上げて、１株でも保有している株主から参加可能とする予定になっている。
「お、よく集まっているな」
「蓬莱教授、お疲れ様です」
代表取締役会長の蓬莱教授が姿を表すと、株主からもどよめきがわいてきた。
株主席からも、「２回目のノーベル賞はいつになるんだろう？」といった声が流れていた。
「さて、待ちに待った株主総会だ。これまでは俺たちだけが株を持っていたから、開く必要のないものだったが、今年からは毎年これが開かれることになるな。来年は、会場を広くするんだってな」

「ええ」
あたしたちにも、緊張の一瞬が流れる。
蓬莱教授の後、取締役も全員が集まり、株主さんたちもどんどん集まってくる。
うー、それにしても、すごい数だわ。
「とにかく、株主の機嫌は損ねたくはねえが……まあ俺たち自身も筆頭株主だからな。その辺りは忘れちゃいかんぞ」
「ええ分かってます」
会社は株主のものであって社長のものではないという言葉はよく聞くが、実際には社長を始め経営者自身が株主であることの方が圧倒的に多い。
特に大きな企業で筆頭株主何て言う場合には、あたしたちと同じように、「ビリオネア」と呼ばれる大富豪になることがよくある。
ともあれ、もうじき時間になるので、あたしたちも直前準備に終われている。
プロジェクターからのモニターには、「蓬莱カンパニー株主総会」という文字が並んでいる。
2ページ目以降に、会社概要や主要株主が説明されることになっている。

「えー時間になりましたので、ただいまより株主総会を開きます。始めに、我々取締役会の構成員を紹介いたします。まず、司会進行役を勤めさせていただきます私代表取締役社長の篠原浩介と申します皆様よろしくお願い致します」
パチパチパチパチパチ!!!
浩介くんが最初の挨拶と自己紹介を終えると、株主たちの席から大きな拍手が沸き起こった。
浩介くんの経営手腕は、正直に言って平凡なものだった。
蓬莱教授やあたしも含め、前例のないことに挑戦し続けるためにこれまでの知識が役に立たないし、国から独占を始め様々な特権を与えられたが故にできたこともあった。

それでも、浩介くんの経営手腕は失敗がほぼなく、安定起動に会社をのせることができただけでも、創業間もないベンチャー企業の経営者としては、有能なのかもしれないわね。
拍手はかなり長く続き、拍手が終わったのを見計らって、浩介くんが再び動く。
「えー続きまして、知らない方はいらっしゃらないとは思いますが、当社代表取締役会長の蓬莱伸吾です」
パチパチパチパチパチ!!!
蓬莱教授が椅子から立ち上がり、黙って一礼をする。
さっきの拍手が長かったために気を遣わせてしまった反省からか、今度は拍手が短くなった。
「続いてですね、えーこちらに座っているのが専務取締役の比良道子です」
「よろしくお願いします」
パチパチパチパチパチ!!!
比良さんの番になると、さすがに手が痛くなったのか、拍手も短くなる。
「次にですね、こちらが当社常務取締役の篠原優子です」
「よろしくお願い致します」
パチパチパチパチパチ!!!
あたしはゆっくり立ち上がって、丁寧な所作を心がけて一礼する。
株主さんたちの視線は、やっぱり露骨なくらい、あたしの胸に向かっていた。
比良さんや余呉さんだって、ＴＳ病なので胸は結構大きいけど、江戸時代の人とあってか、やはり飛び抜けて大きいあたしと比べると小さいと言わざるを得ない。
男の視線は、胸が一番大きい女性に集まる傾向にあるので、あたしはいつも注目の的だった。
「続いては――」
浩介くんが取締役全員を紹介し終わると、元の位置に戻り、プロジェクターを制御しているノートパソコンの後ろに陣取った。

キーボードを叩くと、プロジェクターの画面が代わり、会社名や従業員数、創立年度や資本金といった基本データが表示された。
「ではですね。まずは蓬莱カンパニーの簡単な会社概要から振り替えって参ります。こちらに関しましてはお手元の資料に同じものが入っていますので併せてご覧ください。えーまず蓬莱カンパニーの創設は一昨年、代表取締役は私と蓬莱会長、資本金は――」
表に基づいたデータを浩介くんが読み上げていく。
株主さんたちは、前のプロジェクター画面を見る人と、手元の配布資料を見る人とで半々といった感じね。
「では続きまして、蓬莱カンパニーの株式について見て参ります」
ガチッという音と共にプロジェクターの画面が切り替わる。
画面の多くが円グラフになっている。
「蓬莱カンパニーの株式総数は現在約１０億株となっております。金曜日の終値が１０９０１１円、保有割合ですが蓬莱会長が２０％、私と常務でそれぞれ１４．９９％、取締役ではありませんが、永原相談役が１０．０２％、それからＴＳ病患者で作ります日本性転換症候群協会が５％となっておりまして、こちらの協会には永原相談役が会長として就任しております他、比良専務が副会長を、篠原優子常務が正会員と広報部長を、余呉取締役が正会員と東北支部長、そして統括支部長をそれぞれ務められております」
プライベートではあたしのことを「優子ちゃん」と呼ぶ浩介くんも、やはりこういった場では他人行儀な接し方のならざるを得ない。
やっぱり、ちょっとだけ寂しいかしら？
「蓬莱の薬の研究は、男性から女性へと変貌を遂げた上で老化しなくなるＴＳ病が全てのベースで作られておりまして、協会の協力なしには蓬莱カンパニーは実現しませんでした」
もちろん、この事も今では世間での常識にはなっているが、初めて開く株主総会ということもあってか、基礎からの復習を行っている。
「えーグラフに戻りまして、主要株主では更に比良専務に３％、余呉取締役が２％の株式を保有しています。でですね、私たちは経済誌からビリオネアとして『世界長者番付』に掲載されました。特に会長と私

と常務はそれぞれ長者番付の1，2，3位の表彰台を独占しました」
蓬莱教授の資産21兆円を筆頭に余呉さんの2．1兆円まで、あたしたち大株主の資産額が出て、株主たちから「おー」という声が上がった。
いずれも、世界長者番付としてあげられた資産10億ドル以上のビリオネアたちのランキングの中でも、あたしたちが表彰台独占の他にも、永原先生が1桁順位に、比良さん余呉さんも2桁順位となる上位にランクインしていることが示された。
しかも、これらのランキングは、蓬莱教授以外の人は全員初登場であることも注目された。
「これを見て分かりますように、今回の株主総会、司会進行は私が勤めさせていただきますが、同時に私たち自身も株主として意見を出したり、議決に加わったりしたりしますことを予めご了承ください」
浩介くんがそう言うが、株主たちの反応は薄い。
まあ、分かりきってることだものね。
「さて、では本題の入りましょう。まずは定足数を満たしているかですが、今我々取締役と、永原相談役が本日出席しております故に、それだけで定足数は満たしております」
浩介くんの定足数報告は、すぐに終わってしまった。
まあ、こんなこと分かりきっているし、時間をかけても仕方ないものね。
「続きまして、営業報告に入ります。えー、こちらが当社の貸借対照表となります」
株主さんから「おー」との声が聞こえてくる。
大幅な黒字決算となっていて、法人税もかなり納税している。
「えー、当社上場前より再三申し上げておりますが、今年は減収が予想されております。来年度以降で、値下げが終わってから、おそらく予約が殺到するものと思われます」
浩介くんのいっていることは、当然株主さんも知っている。
「これに関しましては、蓬莱カンパニーの社会的責任に起きましても、不老を享受できる人とできない人で社会的分断を引き起こさないと

いうのが最大の課題になっております」
次に浩介くんは、「何故そうした分断を起こしてはならないか？」について懇切丁寧に説明し始めた。
もしかすれば、値段据え置きのまま客単価を上げた方が収益が上がるという見方もできるが、国民全員が不老となった方が、将来的にも人工が大幅に増加し、長期的には売り上げが伸びるという計算がたてられていた。
「皆さんこれからはですね、人生数百年、あるいは数千年、もっと言えば万単位の人生を歩んでいく人も出てくるでしょう。投資家の皆さんですとそういったことは難しいのかもしれませんが、数百年後、あるいは数千年後を見据えた当社の経営につきまして、是非ご理解ください」
特にこの会社は、人類をこれまではＴＳ病患者でもなければ考えにも及ばなかった長寿へと導く会社になる。
そういった意味で、この会社がもたらす社会的な意義は大きい。
さて後は、この階層分断の防止という名目を、世界が理解できるかどうかよね？
「さて次に参ります。我々は当初は工場での直売のみでしたが、全国各地に支店を建設して参ります。まもなく全都道府県に支店が完成しますと同時に小さな村には出張所を設けることになっております」
浩介くんが、資料を用いながら支店と出張所について解説を加えていく。
ちなみに、資料の中には「ワンオペ厳禁」と書いてある。
この辺りは、営業報告としても重要なところよね。

## 初めての株主総会　後編

「ここにワンオペ厳禁とありますように、当社は社内の機密管理を徹底しております。その理由につきましては、もし他所にこれが流れてしまった場合にですね、数百年単位で発覚する極めて特定困難な詐欺が横行する危険性があるからです。同様の理由で、当社は蓬莱の薬の製造について独占販売特権を持っております」

蓬莱の薬は、事実上のインフラやライフライン、つまり電力や水道、ガスなどと同じ扱いを国から受けた。

純民間ではあるものの、公共性も強い企業という意味では、大手私鉄と呼ばれる民営鉄道がそれに当てはまるわね。

こういった企業では、民間と公共性を都合よく使い分けることがしやすいというのも事実だった。

「人件費と従業員数は、実はもっと削ることができるのですが、機密漏洩とそれに伴う超長期詐欺の防止のためには、どうしても社員が不正していないか、相互監視や密告という制度にある程度頼らざるを得ないということを、株主の皆様もどうかご理解ください」

浩介くんはいつにも増して平身低頭に接している。

株主という存在は会社にとっては生命線でもある。だから自分たちが大株主でも、株主さんたちに配慮する必要があるということね。

この相互監視や密告制度は、組織ぐるみでの不正計画を立て辛くする効果もある。

「でですね、このような制度を作るわけですから、当然に他の部分でカバーする必要があることはご理解ください。当社では従業員の給料を高く見積もっておりますことは、こうした密告制度の採用による社員の不満を、代償として押さえる側面があるということでもあります」

つまり、現状において人件費が高いのは「無駄遣い」ではないということを浩介くんは言いたいわけね。

最も、現在進行形で、人手不足があまりに長く続いている影響からか、最近の企業はどこもかしくも「人への投資」を考えるようになっ

た。
蓬莱カンパニーもそれに倣って、給与の金払いに気を遣うことになっている。
「配当金はある程度の額を確保するつもりでありますが、社員たちの給与アップにもかなりの金額を回すことはご理解ください」
さて、次のお題に入ったわね。
「株式の配当金なんですけれども、今回は内部留保や社員の給与、特に全世界同時販売に向けた設備投資などを回していった結果、今年度の配当金は1株あたり１５００円と致します」
株主さんたちから「おー」という声があがった。
株価１０万円で配当金１５００円というのが果たして安いのか高いのかは分からないけど、あたしたちは夫婦併せて４５００億円近い収入を得ることができた。
もちろんこれにも税金はかかるけど、配当金の税率は一般の所得税よりも安いし、正直年収なんて４５００億どころか1億でも多いくらいよね。
あー、あの豪邸だと1億だときついわね。
「配当金について異議のある方はいらっしゃいますか？」
浩介くんがそう言うと、あたりを見渡す。
しかし、誰も手をあげようとしない。
「えっと、無いようでしたらこのまま――」
「はい」
浩介くんが次の議題へと話を進めようとした瞬間、会場から女性の声と共に手があがった。
みんなで一斉に見てみると、それは永原先生だった。
永原先生が株主としての意見を通すということね。
「えっと……はい、それでは……」
浩介くんがそのまま歩いてもう1つのマイクを永原先生に渡し、素早く自分の席に戻る。
永原先生はそれを見てからマイクを握り直す。
「えっと、設備投資の費用ですけれどももう少し下げられないですか

？」

おそらく、閉塞感を打破するための質問よねこれ。

永原先生自身、この意図は分かっているはずだもの。

「えっと、はい。日本への生産ならば大丈夫なんですけれども、やはり１００年後の全世界同時販売に向けた生産増強と考えますと設備投資の拡充は必要になります。特にこれから１００年間は在庫をひたすら増やす必要もありますから」

「ありがとうございました」

永原先生が、軽くそう挨拶する。

「他に、配当金について意見のある方はいらっしゃいますか？」

すると今度は、恐る恐る数人が手を上げた。

やっぱりさっきの永原先生の質問は雰囲気作りのためだったのね。

「えっと、来年度の配当見込みはどうなっていますか？」

「まず来年度は段階的な値下げもありまして減収が予想されます。それによって株主さんたちの投資熱も収まると考えておりますので、確実に今年よりは少なくなると思いますが、具体的にいくらというのは何とも言えないところであります」

浩介くんが株主さんに丁寧に説明する。

その後もいくつか質問があったものの、結局この配当金の案が可決された。

「続いて、役員の人事に移ります。現在の取締役は先程紹介致しました7人体制となっております。現在のところ、これを変更する予定はございません。各取締役の役割ですが、私が全体を統括し、会長は重要事項に関しましての最終決定権を、専務には運営、労働のあり方を、常務には新事業の進行を、各工場長と支店統括の取締役は、それぞれの役割に応じて業務をしてもらっています」

浩介くんが取締役の人事について、今年度は人事に変更はなく、しかし来年度以降には、新しく取締役を迎え入れる予定になっているという。

その辺りはまた来年度の株主総会で行うとのことで、この事については「異議なし」となった。

まあ、何でもかんでも「異議あり」じゃしょうがないものね。
株主さんたちも、この会社が置かれている状況が特殊なことは分かっている上に、既に独占などの権利が認められているため、これ以上の主張は国の機嫌を損ねてかえって損をする可能性があることも知っていた。
そのため、比較的静かな株主総会が、維持され始めている。
「えーではですね、最後に蓬莱カンパニー全般についての質疑応答に入りたいと思います」
浩介くんが次のスライドを出すと、そこには白い背景に巨大な黒文字で「質疑応答」とのみ書かれているシンプルなもので、こちらで最後のスライドになっている。
「はい」
すると、やはり数人の株主さんから手があがった。
まあ、ここからが本番よね。
「ではこちらの方」
浩介くんが直接マイクをもって動き回る。
疲れるだろうなあ……さすが浩介くんだわ。
「えっと、蓬莱カンパニーの今後なんですが、他の事業に進出する予定はありますか？」
おっと、これはあたしの方がいいかしら？
「あ」
「うん」
浩介くんに目配せし、あたしがマイクを受けとる。
ふふ、長い付き合いっていいわね。
「はい、現在蓬莱カンパニーでは佐和山大学と小谷学園との連携を強めて、将来的な技術者の養成を考えております。佐和山大学の蓬莱教授をはじめとした研究成果を、素早く反映させることも可能です。また、場合によっては学校法人の買収もあり得ます」
あたしが初めてマイクを取る。
あたしは今後行われる事業を説明していく。もちろん、これらに関してはまだ検討中の段階ではあるのよね。

「もうひとつはですね、今後全国民に蓬莱の薬を飲ませる際に、親などの宗教的事情や極度の貧困から蓬莱の薬を飲めないという人に対しての支援事業を展開して参りたいと思います。こちらの方としましては、我々経営陣がこぞって世界上位の資産家となりましたことや、蓬莱の薬における長期的な販売の拡大を元に行って参りたいと思っております」

あたしが全てを説明し終わる。

ふう、株主総会で説明するって疲れるわ。

「ありがとうございました」

「では、次の質疑応答です」

「はい」

今度は別の株主さんが指名された。

次は何が来るかしら？

「その支援事業なんですけれども、蓬莱カンパニーで行うということですか？」

「あー、それにつきましては会長の方からお願いします」

今度は浩介くんが蓬莱教授を指名する。

蓬莱教授がマイクを受けとると、株主さんたちの表情もやや緊張が走る。

や播磨だどこかで、蓬莱教授が恐れられているということはあると思う。

「おほん、えーそれにつきましてはですね、関連企業として、『蓬莱財団』というのを作りたいと思っております。今回の株主総会での配当金を使用したりすることになるでしょう」

蓬莱教授は、以前あたしたちに説明してくれたことと全く同じことを株主総会で説明する。

不老化ともなれば、例え１００年に１人しか子供を産まずとも、１０００年生きれば出生率は１０となることを示しており、このことからも、一部の富裕層のみが恩恵を受けるのは、長期的には大損になることが示されている。

「なるほど、よく分かりました。未来への投資ですね」

「そうだ、何も慈善事業という側面だけではないことは、あえて強調しておきたい」
株主さんも、おそらく蓬莱の薬を飲んでいる人が多いと思う。
そうなれば、当然蓬莱の薬が人口の爆発を引き起こし、それがすなわち宇宙開発へと向かっていくことは確かだった。
しかし人口の爆発は、それだけ蓬莱カンパニーの未来、それもこれからの時代のスケールではとても近い未来の顧客が増えるという意味でもある。
今の時代不慮の事故に巻き込まれる確率はとても低くなり、恐らく蓬莱の薬を飲んだ人や、ＴＳ病になった人は、１０００年以上生きるとは思う。
そうやって人の数が増えていけば蓬莱カンパニーの売り上げも青天井になり、それが更に投資家の投資を呼び、最終的にはあたしたちの資産がとてつもない金額になることは明白だった。
そしてそのためには、低所得者に対する支援も必要になってくるのだという。
投資家たちは株主総会でも短期的な要求を行うと言われており、中にはあまりにもそれで振り回され続けたがために上場を廃止してしまった企業もある。
だけど、さすがに不老を提供する蓬莱カンパニーとあってみんな「未来への投資」に理解があるみたいでよかったわ。
「では次の質問をお願いします」
「はい」
また別の株主さんから質問が入った。
「地方都市への支店計画が優位みたいですけど、もう少し人口の多い大都市圏に多く出店した方がいいのではないですか？」
どうやら、首都圏への出店が少ないのが不満らしいわね。
とはいえ、これは予想していた質問だった。
「それについては、余呉取締役の方からお願いします」
支店関係については、全て余呉さんが受け持っているので、余呉さんに答えてもらうのが一番いい。

余呉さんは支店を地域ごとに統括するＳＶをまとめるリーダーを勤めていて、支店の出店計画にも携わっている。
「えっとですね、大都市圏につきましては、まずは１路線に１店舗を目指しております。一方で地方に関しましては交通の便が悪いところも多いですから、まずは面積的なカバーをしていきたいと思っています。工場直売時代からもそうですが、製品が製品ですから、多少遠い所でも買いたい人はそちらに向かう傾向が強いというデータがあります。また、店に行列ができるといったことも今のところ起きておりません」
「ありがとうございます」
余呉さんの説明はとても分かりやすい。
つまり、店が混雑するということもあまりないので、地方の住民へ機会を与えた方がいいという判断だろう。
株主さんたちの質疑応答は続くが、回答の後納得できないとして積極的に突っ込もうという人はいない。
まあこの辺りは、蓬莱カンパニーの性質上、しょうがない一面もあるとは思うけど。
「では、次の質問です」
「あの、どうして今日株主総会なんですか？　もう少し、例えば６月とかあると思ったんですが」
確かに、法的には問題ないとは言え、この時期に株主総会を行う会社は少ない。
「あー実を言いますと本日に関しましては、ＴＳ病の私の妻が女の子になって１０年目ということで、この時期に行うことになりました」
株主さんからも、「おー」という感じの感心した声が上がっていく。
あたしはＴＳ病の女の子としては随分と有名になってしまった。
そのため、あたしももう、女の子になって今日で１０年になることはそれなりに関心があったらしい。
あたしは相変わらず、１０年前と変わらない、幼さの残った顔つきで、永原先生や比良さん、余呉さんほどでないにしても、あたしが会社の常務取締役をしているとは、微塵も思えないとは思うけどね。

その後も質疑応答は続き、全てが終わったのは昼過ぎだった。
それなりに時間は会ったものの、会社の核心に迫るような鋭い質問はなかった。
まああってもそれは困るとは思うけどね。
これらが終わると、次に株主さんとの懇親会ということになっているんだけど、こちらもオフィスにおいて美味しそうな寿司やその他の食事を振る舞うことになっている。
親睦会と言っても、少しだけ食事を共にするだけなので、これからのビジネスの付き合いを学ぶことが主になるかな？
そう思っていると、お寿司屋さんの人が出前を大量に持ってきた。
株主さんの数も考えつつ注文を頼んでみて、少しちょうどいい量になったみたいでよかったわ。
親睦会では、あたしたちは常に注目の的だった。
来年以降の株価についての話もあったけど、これからの蓬莱カンパニーは長期安定体勢へと入るので、おそらく上場当初のような急速な上がり調子にはならないと答えざるを得なかった。
じゃあいつ急騰するのかと言われた時には、「９９年後」と答えた。
普通なら「ふざけるな」と言われても文句言えない場面だけども、やはりそこは「超長期」の蓬莱カンパニーで、周囲の反応も、「まあそうだろうなあ」と言ったところだった。
とはいえ、国家をも超越しかねないくらいには力を持っているので、利益確定売りなどで下がることはあっても、「暴落」するようなことはあり得ないと考えている。
昼食代わりの食事会が終わり、あたしたちはようやく株主総会が解散となった。
株主総会が終わると、株価が僅かに上昇した。
今後の予定としては８月の夏にいよいよ松濤の豪邸に引っ越すことになっている。
それに向けて、あたしたちは様々な手続きを始めていた。

# 新天地へ

株主総会も終わり、株の配当金が入ってきて、あたしたちの口座は一気に１０００億円以上が入ってきた。

ちなみに、面倒なので税金についてはあれこれ節税するのではなく、自分で確定申告を出すだけにとどめることにした。

これだけの収入があったら節税なんてしても仕方ないし、更に全国民が満遍なく蓬莱の薬を飲めるようにするためにはある程度の再分配も必要だろうという観点からも、タックスヘイブンへの所得移転をする必要性は無いと判断した。

そして、収入の一部は、もちろん例の豪邸に充てられることとなった。

８月初頭、ついに豪邸が完成したという電話を受けた。

最も、その後は色々と試運転があるので、実際にあたしたちが住むのは１週間後ということになる。

ちなみにその間にも、大学院で残っていた最後の単位の合格通知が届き、あたしたちは佐和山大学に行くことはもうなくなった。

まあ、最後３月に一応卒業式が控えているけどね。

いずれにしても、これからは会社にほぼ専念することになるのは間違いない。

「この家も、もうすぐおさらばなのね」

「ええ」

あたしたちは、荷物をまとめている。

引っ越しの前準備で、段ボール箱に持っていくものをつめていく。

家具類に関しては、愛着のあるもの以外はほぼ持っていかないけど、衣服やおもちゃなどはあちらの家でも使っていく。

また、豪邸に引っ越す際にも、各自が独自に購入するものもあって、それらはインターネットの通販か、あるいはオプションとして不動産屋さんが追加料金で高級家具店に行って購入してくれたものを選ぶ。

あたしも、最新型高性能の家電品をいくつか買い求めている。

「何だか、そう思うと惜しいよな」

「まあ仕方ないわよ。今でも身に覚えのない親戚とかここに来るもの」
件の経済誌で、篠原家が「世界一の資産家ファミリー」に認定されてから、とにかく困ったのはこの手の「自称親戚」や「自称古い友人」というもので、あたしの実両親の元にも来ているらしい。
とにかく彼らは「お金を分けてくれ」とうるさい。
いくらあたしたちでも、所得を国民全員に配っていったら２０００円にもならなくて到底生活も出来ない。
また自称親戚ではなく、本当に近しい親戚たちまであたしたちにたかり始めていて、もちろんあたしたちはそういうのは「いくら世界一に資産家でもそんなことしてたらすぐに破産する」と言ってお引き取りをお願いした。
実際、年収が１０００万ドル以上あるようなアメリカのプロスポーツ選手も、そうした「たかる親戚」のせいで、引退後に数多くの人が破産してしまっているらしいし。
まあ、あたしたちの年収は、１０００万ドル単位じゃなくて１０億ドル単位だけど。
「ま、これで親戚連中からは恨まれるだろうな」
浩介くんがふうとため息を付きながら話す。
「仕方ないわよ」
ただでさえ浩介くんは、かわいくて美人でその上家事も上手いと評判のあたしと若くして結婚したことで、親戚たちからは嫉妬されていた。
そこに来て、今回の蓬莱カンパニーの成功で、蓬莱の薬を飲めた上で大金持ちになってしまったのだから大変だわ。
最近は、何の気なしに家の中を徘徊することが増えた。
この家に住んでいたのは８年半程度の時間で、石山家の実家に住んでいた時間の約半分だった。
「優子ちゃん、知ってると思うけど明日引っ越しになるわ。石山さんとは現地集合で、準備が一通り終わったらおばあさんが来るわ」

引っ越しの予定日はもちろん既に知っていた。
豪邸はもう、あたしたちの入居を待つだけの存在になった。
「ええ」
既に分かっていたため、特に深い感慨もなく、あたしはご飯を食べる。
ただ1つ気になるのは、また母さんたちとも住み始めること。
これは、実両親の元にも「自称親戚」や「自称古い友人」、あるいは「親戚」が来ているせい。
結果的ではあるけどあたしたちが迷惑をかけた補償でもあるけれども、仲のいい実両親と義両親が同居を始めることに不安がないわけでもないのよね。
まあ広い豪邸だし、大丈夫だとは思うけど。
「ふう……」
あたしは意味もなく、この家の周囲を回った。
やっぱりこの町にも、そしてこの家にも愛着があるから、引っ越しというのはやはり少しだけ心残りになるわね。
もちろん、引っ越す先は都内の高級住宅街で、敷地面積も交通の便も圧倒的にいいし、固定資産税やその他の維持費はかかるものの、あたしたちの収入からすれば、どうってことのない金額である。
恐らく、この家かあの豪邸か、あたしたちと同じくらいの収入があると仮定すれば、間違いなく１０００人に１０００人は豪邸の方を選ぶと思う。

ピンポーン
玄関の呼び鈴が鳴った。間違いなく、あたしたちのこの家での最後の来客になる。
「はーい」
そのとき一番玄関に近かったあたしが、応対する。
ちなみに玄関には、大量の段ボールが置いてある。
向こうに持っていく物は全てこの中に入っていて、今夜はホテルに泊まることになっている。

「すみません、これからこちらの段ボールを運びますね」
やって来たのは予想通り、引っ越し業者の人だった。
ちなみに、安全を期したいので、前日に来てもらって明日までという余裕のある日程で運んでもらうことになった。
お金は余っているので、もちろん余裕のある資金を持って人も増やしている。
「はい、お願いします」
「それでは」
玄関の向こうにトラックが見える。
この段ボールの中には、お人形さんや少女漫画、おままごとセットといったあたしの私物も入っている。
また、ベッドのように大きく重たいものは解体されている。
あたしのベッドは広くて大きいので倉庫部屋に予備として置いておくことになっている。
あたしは引っ越し屋さんを見送りつつ、昼食に向けてもう一度リビングへと向かった。
今日はいつもの休日と同じく、あたしとお義母さんで昼食を作ることになっている。
今はもう、あたしの部屋は殺風景で何もない。浩介くんの部屋はベッドがあるだけで、やはり多くは段ボール箱の中に入ってしまっている。
あたしたちは、この家で最後のお昼ご飯を食べる。
引っ越し業者さんが全ての荷物をしまい終わったら、あたしたちもいよいよホテルに向けてこの家を出ることになる。
そうすれば、この家は無人になる。
いくつか家具があるので、もしかしたら中古でこの家を買いたいという人も出てくるかもしれない。
「ごちそうさまでした」
食事が終わり、あたしたちは慌ただしく最後の準備をする。
あたしは念のためトイレに入った。
あたしは、小谷学園の卒業式の日を思い出す。

あの時も、実家から出る前には、「最後の食事」とか「最後のトイレ」というものが存在した。

実家での石山優子としての最後の食事は、あたしが作った。

「さ、行くわよ」

この住み慣れた家とも、とうとうお別れの時が来た。

あたしはリビングのソファーに座って、最後のひとときを過ごす。

未練はある、愛着もある。篠原家も、あたしの実家の石山家もなくなる。でもそれは新しい始まりに過ぎない。これから住む家は、間違いなく今よりもずっと住み心地がいいはずだから。

「はい」

お義母さんを先頭に、あたしたちは僅かな手荷物を持って家を出る。

浩介くんが財布から家の鍵を取り出して鍵を閉める。

正直、もうこの家に空き巣が入ってきても構わないんだけど、一応中古として買いたい人を想定することにした。

古い家の鍵は、不動産屋さんに後で郵送で送ることになっていて、それについても今夜ホテルに引っ越し業者さんが来てくれることになっている。

うーん、何でもかんでもやってもらっちゃってて、あたしたち大丈夫かしら？

「間もなく、電車が参ります」

この電車に乗るのも、恐らくもう殆どない。

もしかしたら、実験や研究のために佐和山大学に行くことはあるかもしれないけど、少なくとも今までと比べれば使用機会は格段に減ることは間違いなかった。

子供の頃から、ずっと慣れ親しんできた沿線だということを考えると、ある意味で家よりも未練があった。

使い慣れたＩＣカードも、明日から定期券の区間が変わることになる。

渋谷駅と悩んだ末、結局「定期代は大したことない」ということで

神泉駅から渋谷駅で乗り換えるルートになった。
「ふう」
あたしも浩介くんも、少しだけ感慨深いものがある。
でもまあ、この電車にもう二度と乗らなくなるというわけではないから、さっきの家よりは、深い感情はないかしら？
あたしたちは電車を何度か乗り継いで、渋谷駅に到着した。
「人が多いわね」
「ああ」
この駅は広くて迷う、立体的な複雑せいだけではなく、その人の数の多さも、渋谷駅の大きな特徴になっている。
あたしたちは目的のホテルに近い出口から出て、そのままホテルにチェックインした。都内のホテルで、比較的観光客が多く、あたしたちのような客は稀だった。
本当はスイートルームでよかったんだけど、部屋の都合上２人部屋が２部屋となって、あたしはもちろん浩介くんと２人の部屋になった。
「ふう、明日が楽しみねあなた」
入ったホテルは、以前浩介くんと２人で旅行した時と同じような広さのホテルだった。
恐らく、富山県の黒部と立山に行った時のホテルが、一番近いかしら？
「ああ」
ホテルでは、基本的に引っ越し屋さんが鍵を取りに行くのと、夕食があるだけで、後は全て自由時間になっている。
あたしたちは、テレビのニュースを見て過ごすことにした。
「次のニュースです、蓬莱カンパニーは――」
「また俺たちの会社がニュースになっているな」
蓬莱カンパニーは、今や日本中から毎日のように注目を浴び続けている。
「ええ」
正直、大したことでもないのにいちいちニュースにされるのは鬱陶

しい気分でもあった。
今日話しているニュースだって、実際には取るに足らないニュースなのに。
「明日の引っ越し、スムーズに行くといいわね」
「だなあ、俺たちはともかく、親世代やばあちゃんはマスコミに慣れてねえし」
浩介くんは、明日豪邸にマスコミが押し寄せてくることを警戒している。
インターネットでは、「固定資産税や相続税で空き地になった松濤が1つになって豪邸が建設されている」という噂になっている。
そこには色々な憶測が飛び交っていて、もちろんその中には「篠原家の新築じゃないか？」という声もあった。
幸い、玄関の名札は直前までつけないことにはなっているけどね。
「通達は出しておいたし大丈夫でしょ？」
あたしたちは静かに引っ越したいので、マスコミに対しては来ないように通達を出してある。
もちろん、それを無視するような無謀な人間はいないと信じたい。
「さあな、問題は情報を嗅ぎ付けた一般人だろ？」
「あーそうよねえ……」
場合によっては、今ある空き部屋を活用し、警備員さんの部屋を充てて、常時玄関を見張ってもらうことも考えている。
まあ、今のところは必要ないとは思ってるけどね。

「優子ちゃんお休み」
「お休みなさいあなた」
あたしたちは、来てくれた引っ越し業者さんに鍵を渡して、夕食を食べてお風呂に入って、早めに寝ることにした。
夫婦生活について浩介くんは、「うずうずしているけど我慢する」と言っていた。
まあ、明日は新居だものね。当たり前かしら？

「ん……」
ゆっくりと意識を回復する。
「んーっ！」
窓の外には朝日が見える。
朝の渋谷は、既に人々が動き始めていた。
昨日は火曜日で今日が水曜日、あたしたちは有給休暇を取って今回の引っ越しを行った。
その理由としてはやはり、休日ともなるとどうしても人目につきやすく、また野次馬が発生しやすいと思ってのことだった。
とはいえ、もしかしたらあたしたちも既に昨日の時点で篠原家が渋谷のホテルに泊まったという情報が流れてしまっているかもしれない。
「お、優子ちゃんも起きたか」
あたしが起き上がると、浩介くんが声をかけてきてくれた。
ワンピースタイプのパジャマなので、あたしは予めスカートを直してから慎重に起き上がって着替えを出す。
「覗かないでね」
「う、うん」
あたしはいつものお決まりの台詞を言ってから、脱衣場と浴室のある部屋へと向かい始めた。
「ふう」
あたしはいつものように着替えを終え、浩介くんの元へ。
昨日着た衣服は手荷物の中に入れて、豪邸にある洗濯機の中に入れることになっている。
「お待たせー」
「おし、後数分あるし、座って休むか」
「そうね」
宛もなく、ボーッとする。
現代社会では、こういった時間はとても貴重だと思う。
寝起きの疲れが、どんどんと取れていく。
「優子ちゃん……」

浩介くんが、だらりとした感じで話しかけてくる。
浩介くんもまだ寝ぼけているのかしら？
「うん？」
「……えいっ！」
もみっ
「きゃあ！」
浩介くんに、両手で胸を鷲掴みにされ、もみもみと揉まれてしまう。
激しく揉むのではなく、微妙なゆっくりさで小さく揉まれていく。
揉まれるというよりは、触られているに近い。
もみっ……むにっ……むにんっ！
「もう、浩介くんえっちぃ！」
「あはは、昨日我慢しちゃったから、優子ちゃんの大きいの見てたらつい」
本当にもう、分かってはいるけど男の子って性欲の塊だわ。
「むー、ほらもうそろそろ時間よ」
「あーうんそうだね」
あたしがもうそろそろ時間だと言うと、浩介くんが手を離してくれる。
数十秒後に扉がノックされ、あたしたちはホテルの1階で朝食をとってからチェックアウトする。
渋谷の所定の位置であたしたちは石山家と合流し、一斉に豪邸を目指すことになった。
渋谷の道は広いけれど、さすがに6人も横に並んで歩けるスペースは、駅前のスクランブル交差点くらいなもので、他の場所では、あたしたちは2人1組で行動する。
この前の下見でたどったのと同じ道を進み、住宅街へと進んでいく。
「確かこの辺だったわね」
「あ、これだわ」
あたしがキョロキョロしていると、母さんが別の方向を指差した。
それは、あの時のCGで見たまんまの大豪邸だった。

フェンスはかなり高く侵入者を阻んでいて、玄関の柵も、容易には入れないようになっている。
「お待ちしておりました」
「あ、お疲れ様です」
あたしたち６人が到着したのを見て、不動産会社の人があたしたちに頭を下げてきてくれた。
渋谷の松濤は高級住宅街の中でも最高級住宅街と言ってよく、この家の坪単価は７００万円以上、敷地面積は３２０坪、家の部分だけでも１００坪を優に越える３階建ての２世帯住宅で、部屋の数は１階が１６ＬＤＫ、２階が１３ＬＤＫ、これでも２０畳以上の部屋が多く、家の面積の割には部屋の数は抑え気味になっている。
３階は主に使わない倉庫で死にスペースが多いけど、それでもおばあさん用に４部屋あって、更に屋上には温水にも冷水にも出来る専用のプールまであり、これに広大な日本庭園の庭とはなれの倉庫と茶室も含めて、総工費は１００億円という文句なしの大豪邸だ。
まさかこんな家に住むことになるなんて、蓬莱カンパニーが上場した時でさえ思いもよらなかったわ。
「こちらがご自宅の鍵になります」
「はい」
鍵については不動産会社の方で合鍵が１つの他、あたしたち７人と家の中にそれぞれ３つつで合計１１個の合鍵を作ってある。
正面の玄関は比較的単純な鍵だが、銀色の鉄格子のような扉は、威圧感抜群だ。
その後更に数歩歩いて、あたしたちは家の扉に到着する。
家の建物はあたしたちが住んでいた場所よりもずっと大きく、しかもピカピカで真新しさに溢れていた。
こっちは以前の家と同じく、上下２箇所に鍵があり、またチェーンでもロックできるようになっている。
バタンッ
鍵が開けられ、ついにこれからあたしたちが住むことになる、その豪邸の内部が姿を表した。

# 豪邸生活1日目　前編

「うおっ、すげえ……」
遥か向こうまで続くフローリングの床と、正真正銘の大理石で出来た壁があたしたちを圧倒する。
しかも視界で見る限り、廊下は途中で左への分かれ道があることも分かった。
よく見ると部屋1つ1つに鍵がしてあって、また扉と扉の距離からも、その部屋の大きさが見てとれる。
ひとまずどこがどこなのかもきちんと覚えておかないといけないわね。
「それでは、もし何かございましたら私は外でお待ちしておりますので」
「あーいや、ここでいいよここに座って待っててくれ」
浩介くんがそう言うと、不動産会社の人がにっこりと玄関扉の前にあるベンチに座った。
ちなみに、待つ時間は正午までと決まっている。それ以降に問題が起きた場合は、電話で呼び寄せるしか無い。
「かしこまりました。ありがとうございます」
あたしたちは靴を脱いで玄関を上がる。
ちなみに、玄関の絨毯はサウジアラビア製の高級ブランド品で、石油王たちも愛用しているものだという。
アラブの石油王といえば、自家用のジェット機を持っていたりと、とにかくお金持ちの中でも桁違いの大金持ちということでワイドショーに騒がれていたけど、今やあたしたち篠原家の方が、彼らよりも遥かにお金持ちだというのがどうにも実感が沸かないわね。
まあ、豪邸を買ったということ以外、富裕層らしいこと殆どしてないから当然といえば当然だけど。
「よし、じゃあとりあえず事前にあったように、まずは各自部屋に行こうか」
「うん」

「よし、お母さんはエレベーターに乗ろうっと」
母さんがボタンを操作すると、エレベーターの扉が空いた。
父さんは階段で行くと言って階段を登り、それぞれ2階へと消えていった。今日から2階があたしの両親の住むスペースになる。
廊下は2人が横に並んで歩いても全く問題ないスペースにはなっているけど、さすがに4人横に並ぶのは不可能なので、やはり2列で家を進む。
廊下の右側には、それぞれ20畳の部屋が6部屋あって、それぞれ予定していた通りの部屋にまず入る。
ちなみに、廊下の左側は、左後方部分が10畳や6畳の小部屋群と、トイレやお風呂場のある場所で、左前方部分には60畳のリビングルームがある。
ちなみに、リビングの近くにも、トイレが設けられている。
あたしの部屋は、もちろん浩介くんの部屋の隣にある。
「ふう」
あたしは扉を開けて自分の部屋の中に入る。
「わあ!」
思わず驚いて声をあげてしまった。
20畳の部屋は思ったよりも大きくて、これ全てがあたしの部屋とは思えなかった。
ベッドは優に大人2人が入れるほど広く、その布団の素材も、見ぬからに高級感を漂わせている。
更に部屋の壁に掲げられている薄型の8Kテレビはダイナミックで、テレビの下には専用の長いコードのヘッドホンがかけられていた。
あたしのパソコンを置いてある机と椅子も新品の高級ブランドに変えられていた他、鏡台の家具はもちろん、箪笥に関しても名のある伝統工芸の職人さんが手作りで作ったものを購入した物を使用している。
ピンク色のカーテンも素晴らしく、また布団の回りに置かれているぬいぐるみさんや、薄型テレビの横に置かれていた机の上にお人形さ

んが置かれ、更に本棚一杯にあったはずの少女漫画や女性誌は、新しい棚には半分も埋まってなかった。
ベッドの下のハート型クッションとその近くにある小机はこれまで通りだけど、浮いた感じはしない。
そしてクローゼットなどの衣服の収納スペースも、衣替えの服を別の部屋に移動したこともあって、大幅にスペースが余っていた。
「広いわね……」
あたしが抱いた感想は、とにかく「広い」の一言だった。
更にいえば家の壁紙や床のフローリングもとても高級感溢れるもので、実際最高級品を使っているとのことだった。

コンコン
「はーい」
部屋を一通り見て、あたしが腰掛けると、扉をノックする音が聞こえてきた。
「俺だけど、入っていい？」
扉をノックしてきたのは、浩介くんだった。
「うん、いいわよ」
ガチャッ
「うおっ、優子ちゃんの部屋広いなー」
浩介くんが驚いた顔をしている。
「って、それは浩介くんもでしょ？」
実際、部屋の広さは同じはずだし。
「あーうん、そうなんだけど、やっぱほら、昨日までの部屋に慣れちゃってるからさ」
まあ確かに、無理のないことよね。
「まあねえ、それで、どうしたの？」
「とりあえず、一旦４人でリビングに集合しようかって」
「分かったわ」
ともあれ、あたしたちは一旦部屋を出て今度はリビングへと向かう。

リビングへの扉は3箇所あって、どれも比較的簡素な作りになっている。
「やべえなこの広さ」
入る前から分かっていたとはいえ、リビングの広さはとてつもないものだった。
８Ｋテレビはあたしの部屋のものよりも更に大きく、正面に設けられたソファーは3メートル近くもあり、しかも天井を照らしていたのはシャンデリアだった。
ダイニングのテーブルは、普通の（といってもかなり高級な石で出来たものだけど）四角いテーブルの他、中華料理店で使う回転テーブルまであり、キッチンはＩＨとガスコンロが両方備わっているという豪華さだった。
「さっきお風呂も見てきたけど、シャワー2つにしかも壁も大理石だったよ」
お義父さんの報告に、あたしたちも驚きを隠せない。
冷蔵庫もこれまでの1．５倍の広さになったので、冷蔵庫の中もかなり広々としていた。
「とりあえず、テレビつけるか」
お義父さんが気張らすように言う。
「ええ」
全員でソファーに座ると、かなり深々と柔らかく、あたしたちは一瞬陥没しそうになってしまった。
「すげえ座り心地」
「うん」
こちらも日本製の高級家具を割り当てている。
「では次のニュースです。今日午前１０時頃、神奈川県の――」
お義父さんがテレビをつけると、これまでにない大画面でニュース映像が写った。
「迫力あるな」
単なるニュースでも、これだけの大画面ではやっぱり違う。
しかもこれらが全ての個室にあるんだからまさに至れり尽くせり

だわ。
「ええ」
それにしてもこれ、何インチなのかしら？
……まあいいわ。
「そうだわ。洗濯室に行きましょう。昨日着たの洗濯しなきゃ」
「うん、そうするわ」
あたしたちは、一旦全員から服を回収して洗濯機と乾燥機のある小部屋に入った。
この洗濯機は乾燥機を兼ねていて、畳む所まで自動化されており、しかも計測によって洗剤の量までＡＩがアドバイスしてくれる優れものだ。
ちなみに最新技術の固まりでもあり、またあたしたちのためだけに作った特注品とのことで、値段はこれだけで１００万円だとか。
「えっと洗濯物を入れて……あ、あたし洗濯物を先に入れておくわ」
ともあれ、あたしたちはもう「洗濯物を干す」という作業は不要になった。
洗濯物を入れて、機械の指示通りに洗剤を入れて後はボタンを押して放置するだけ。
「うん、優子ちゃんお願いね」
と言っても、あたしもすることは少なく、すぐに追い付いてお義母さんの元へ行く。
うー、やっぱり広いわこの家。
リビングに戻ると、テレビが消えていて、浩介くんだけになった。
どうやらお義父さんは、この家をもう少々探検することにしたらしい。
「さて、昼食を作ろうかしら？」
「ええ」
それにしても、家具の数がやたらと多いわね。
電子レンジは普通の家庭用のものに加え、業務で使うコンビニの強力電子レンジまであるし、それに加えてトーストにオーブン、圧力鍋でご飯も炊けるけど炊飯器まであるし、しかもどれも高価格帯のもの

で揃えられている。
鍋などの調理器具もあたしたちが使っていたものに加えて、かなり高級そうなものまであって、これだともったいなくて使えないわ。
「とりあえず今日は、いつもの調理器具でやりましょう」
お義母さんが、圧倒されそうな表情で言う。
とにかく今は、あたしたちは「家に住んでいる」というよりは、「振り回されている」という状況に近い。
まずはこの状態から脱出しないといけないわ。
「ええ、賛成だわ」
まずはこのガスコンロとＩＨに慣れないといけない。
家によっても微妙に違うとも言うし、まずはこの家の感覚に慣れないといけないわね。

あたしたちは、ＩＨのスイッチを入れた。
前の家では１１段以上が「ハイパワー」の１２段階だったこのメモリも、今は２１以上が「ハイパワー」の２４段階もある。
つまりこれまでの感覚の２倍程度の数字にすればＯＫということで、実際にその通りになった。
ただし、フルパワーにした時の火力は、今までのとは格段に性能が上昇していた。
「ごはんできたわー！」
「誰もいないわよ」
お義母さんの叫び声むなしく何の反応もない。
もちろんその理由はこの家が広すぎるから。
「ほらこれ」
あたしは、キッチンの横にある「呼び出し」と書かれたパネルを指差す。
つまりこのパネルを操作すれば、呼び出すことが出来る。
各部屋には呼び出し用の機材があって、最初は光だけで呼び出す仕組みで、またそれぞれの部屋とコミュニケーションを取ることもできる。

広い家ならではの設備だけど、ここだけはちょっと以前の家の方が便利なのも事実だった。
ともあれ、これで1階の各部屋に呼び出しができる。
向こうから足音が聞こえ、浩介くんとお義父さんが歩いてくる。
優に10人座れる大きなテーブルにあたしたち4人が座る。
あたしはテーブルにそれぞれご飯を並べて準備完了ね。
「おや、意外と普通の食事だな」
豪勢な食事が出るのかと思ったのか浩介くんも驚いている。
「えへへ、しばらくは以前の家にあった食材が続くわよ」
あたしとしても、高級食材三昧だと、それに舌が慣れちゃって高級のありがたみが薄れるし、かといって以前のままの食事を続けたら、あまりにもケチすぎだし、仮にも世界一の大富豪一家がそれだと「庶民に還流しない」って批判されちゃうだろうし、難しいわよね。
あーでも豪遊してたらしてたでけちつけられるかも。
「でも、今ある食材が無くなってきたらどうするんだ？」
お義父さんも疑問符をつけて話している。
「うーん、高級なのばかり食べてたらありがたみもなくなっちゃうけど、かといって以前のままというのもねえー」
「そうなのよねえーどうすればいいかしら？」
どうやらお義母さんも同じことで悩んでいるらしい。
「うーん、日替わりってのはどうかな？　高級食材と普通の食材を交互に食べるとか」
すると浩介くんが別の提案をしてくる。
確かに、それがいい折衷案ではあると思う。
幸い、大衆的な物や店は、ここから程近い渋谷にいくらでも転がっているから、そこから仕入れればいいものね。
「ま、ともあれ食べようぜ」
「うんそうね」
あたしたちは、いつも通りに「いただきます」をする。
それにしても、このテーブルは少し広すぎる。
今日みたいに1人1人に盛り付けるタイプならともかく、真ん中の

大皿に盛り付ける料理の時は、小さいテーブルのある場所を使わないといけないわね。
幸い、小さな大理石テーブルは、以前４人で使っていた時と同じくらいの大きさが取れている。
って、よく見たらこの家のリビング、壁も床も大理石になってるわね。
「ねえお義母さん？」
「うん？」
「この家、大理石だらけよね」
「もう、今頃気付いたの？　床のフローリングだって高級木材だし、その辺り優子ちゃんたちが『最高級プラン』ばかり考えてたじゃない」
お義母さんに少し呆れられてしまったわね。
「あーそういえば俺の部屋の壁も白い大理石だったな」
浩介くんも鈍そうに話す。
とにかく、この豪邸は今までの家とは桁外れの家になっている。
桂子ちゃんとかを呼ぶ時にどうしようかしら？
ともあれ、あたしたちはいつものように食べ終わると、食器を食器洗い機に入れる。
この食器洗い機もまた優れもので、適当に中に入れておけば搭載したＡＩが自動で並べかえて洗ってくれるというもの。
お陰さまであたしたちは作業時間を格段に短縮することができた。
唯一大変なのがお掃除になりそうだけど、これも各部屋に1個お掃除ロボットがあって負担を軽減させてくれる。
唯一大変なのは庭で、こちらは庭師さんを探したい。

ピピピピッ……ピピピピッ……
「おや？」
昼食が終わり、あたしは一旦自室に戻って寝そべっていると、突然電話が鳴ってきた。
電話の主は高島さんだった。
「はい、篠原です」

「あ、篠原さんですか？」
　声はやっぱり高島さんだった。
「はい」
「高島ですお世話になっております。実はですね、今インターネット上で、『篠原家が松濤に引っ越した』と噂になっておりまして」
　さすがインターネット、情報が素早いわね。
「ええそうですけど」
「それでですね、その豪邸に取材って出来るんでしょうか？」
「うーん、まあ高島さんならって所ですか？　では明日に折り返しでもいいですか？」
「ありがとうございます。では明日連絡します。では、一旦失礼いたします！」
「はい」
　ピッ……
　あたしは電話を切り、もう一度リビングに戻って呼び出しのボタンを押す。
　すると義両親と浩介くんがリビングに急行してくれた。
　あたしはさっきの高島さんの話をして、あたしたち篠原家は賛成でも、２階の石山家がどう出るかわからないということで一旦保留になった。
　そこであたしは廊下を進み、まだ進入していない２階に向かうことになった。
「エレベーター使おうっと」
　あたしは、エレベーターの上ボタンを押す。
　すると真上の表示の光が「２」から「１」になる。
　ピンポーン
「１階です……上に参ります」
　エレベーターは定員１０人、ボタンは１２３Ｒで開く閉じるに開延長、更には呼び出しボタンもあるごく普通の様式のものだった。
　あたしは「２」のボタンを押し、閉めるボタンを押すと、「ドアが閉まります」の声と共に、エレベーターの扉がしまると、ゆっくりと２

階へ向けて動き出した。
そして2階に到着する。
2階の広さは1階よりやや狭いと言っても、実際には父さん母さんが住んでいるので1人あたりの面積は広く、そのため一部は浩介くんのトレーニングルームのように、篠原家が使っている部屋も多い。
2階でも、やはり高級そうな廊下といくつもの部屋があるのは同じで、一方階段を上がってすぐの場所にリビングがあるのが大きな違いだった。
2階のリビングは、1階より日当たりがよく、また広々としていた。
シャンデリアこそないが、蛍光灯がとても目に優しそうな印象を受けた。
あたしが中に入ると、母さんと父さんが親しそうに何かを話していた。
「あら優子じゃない、どうしたの？」
あたしに気付いた母さんが声をかけてくれる。
「あーうんその……実はインターネットであたしたちが引っ越したことが噂になってて……高島さんが取材したいって」
「お、高島って、あのブライト桜の高島か？」
「うん」
高島さんも今や知る人ぞ知る敏腕記者として知られていて、あたしたちとの付き合いもかなり長い。
もちろん、あたしの両親も高島さんがあたしや協会とも懇意なのは知っている。
「ふふ、この家を取材したいのね。いいわよ」
「ああ、俺としても特に異論はねえな」
両親からも、承諾を得た。
あたしは、両親に「ありがとう」を言うと、そのままリビングルームを出ていく。
リビングの構成は、あたしたち1階とほぼ同じで、部屋の奥行きがわずかに広いのと、張り出したベランダがあるという程度のものだった。

あたしはそのまま、別の部屋を探検する。
開き部屋のところもあれば、ジムさながらに機材が揃えられた部屋もあった。
そしてその機材の部屋で――
「はぁ……はぁ……」
浩介くんが上半身裸で汗を流していた。
あーん、素敵ー！　かっこいいわー！
「……優子ちゃん……優子ちゃーん!?」
トンッ
「はっ！」
浩介くんにトンと肩を叩かれ、あたしはびくんと体が震えてしまう。
どうやら浩介くんに魅了されちゃって回りが見えなくなってしまったらしいわ。
「どうしたの？　俺、最近運動不足だったからトレーニングしてたんだけど？」
浩介くんが前屈みになりながら顔を近付けて話しかけてくる。
うー、その仕草、また一目惚れしちゃうからー！
「あ、ああうんそのー」
今までも筋トレしてた浩介くんは何度も見てきたけど、こんな風に機材まで使って本格的な特訓をしたのを見たのは初めてだった。
汗を多く流している浩介くんの肉体は、「このオスに犯されれば強い子孫が残せる」と、あたしの中にあるメスの本能を容赦なく刺激してくる。
「あー、俺もここまで動いたのは久しぶりで、ちょっと疲れたぜ」
あたしは、必然的に浩介くんの下半身に目がいってしまう。
男の子のたくましい肉体、それもずっと連れ添った素敵な旦那のものとあったら、惚れない方がおかしいわ。
「あうー素敵―」
「おや？　もしかして優子ちゃんメロメロモード？」
ぷしゅーっという音が出そうなくらいに顔を赤くしていると、浩介

くんが更にあたしをどきりとさせる一言を言ってくる。
もうダメ、旦那が素敵すぎて頭おかしくなっちゃいそうだわ。
「うん、そうみたいだわ」
心なしか、あたしもちょっとだけ汗をかいている。もしかしたら汗じゃないのかもしれないけど、まあいいわ。
「まあほら、お楽しみは今夜にとっておくんだ。ところで、高島さんの方はどうだった？」
浩介くんが備え付けの冷蔵庫にあったスポーツドリンクを取り出して飲む。
ちなみにこれらは高級というわけではなく、普通に自販機でも売っているもので、もちろんあたしたち自身で仕入れる必要がある。
「うん、大丈夫だったわよ」
「じゃあ今夜は、日時を決めねえとな」
「そうね」
浩介くんの肉体から、何とか目をそらす。
「ふう、俺は自分の部屋で休むよ。優子ちゃんは？」
「あーうん、屋上に行くわ」
「そうか。屋上のプール兼露天風呂は今日はまだ使わねえぞ」
「うん、分かってるわ」
露天風呂はまた、明日の予定になっていて、今日は石山家が使うことになっている。
今は暑い8月なので、プールとしての使用も、もちろん考えてあって、明日の昼はそれぞれプールを使うことになっている。
あたしは今度は階段を上がって3階に行く。
階段は吹き抜けの手すりつきで、やはり廊下と同じ広さに保たれている。
3階はまだ誰もいない。
ここにはおばあさんと介護の人が入るようになっているけど、おばあさんが亡くなった後は倉庫ないしは警備員さんや庭師さんの控え室として使う計画になっている。
比較的狭めの3階から、更に階段を上がるとあたしはとうとう屋上

にたどり着いた。

# 豪邸生活1日目　中編

屋上には男女別の脱衣場があって、男女で作りは同じになっている。
ドアを開けると夏の熱気があたしを襲う。
安全のために二重の鉄フェンスがあって、その向こうには渋谷の街を一望できる。
３６０度パノラマというわけにはいかないけど、それでもかなりいい景色を味わうことが出来る。
もちろん、近所からは見えないようにはなっているけどね。
屋上の中央には巨大なプールがあり、今は水が全く入っていない。
「あのプール、いらなくなっちゃったわね」
去年浩介くんと買った家庭用プールのことを思い出す。
一応持ってきてあるけど、不要になってしまった。
あーでも、水位高いし、これから産まれてくる子供が小さいうちはまだ使えるかしら？
「ふう、中に入ろう」
とにかく今はまだここは暑い。
あたしは脱衣場を抜けてエレベーターのボタンを押し、「屋上階です」の声と共に、一気に1階へと降りた。
そして、１０畳や6畳の小部屋の位置を覚え、そこに何があるのかを探っていく。
唯一１０畳の部屋1つだけ開かなかったけど、まあ仕方ないわね。
これで後は、お風呂場を見ていないだけだけど、それは今夜のお楽しみにとっておこうかしら？
あたしは、自分の部屋に戻り、今度は新しく4画面になったＰＣを試すことにした。

ピポッ！
あたしが広くなった画面のＰＣでインターネットを楽しんでいると、突然ＰＣの画面にポップアップウィンドウが現れた。

部屋をよく見ると、「1階リビングより呼び出し」と表示されていたモニターがあり、あたしは呼び出されていたことが分かった。
「あ、優子ちゃん、ご飯2階で食べるわよ」
「あ、はーい」
お義母さん曰く、今日は新築祝いということで、両家合同で食事を作ることになった。
キッチンの広さは、もちろん女3人がいても十分に賄いきれる広さになっている。
これまでの帰省の時にも、女3人で料理を作ったこともあったけど、やや手狭で手こずることも多かった。
「エレベーター使う？」
「うーん、あたしは階段で」
「分かったわ」
あたしたちは2手に分かれ、ほぼ同時に2階に集合する。
「ふふ、2人ともよく来たわね。さ、お料理始めるわよ」
「「はーい！」」
あたしたちは、男たちに内緒で、料理を作ることになった。
「それにしても、本当にこの家すごいわね」
お義母さんが驚いたように話す。
まあそりゃあ、高級住宅な訳だもの、当たり前よ。
「そうよねー、しかも全部優子たちのお金でしょ？　家電の性能もみんなどれも高いし、調理器具も高級品だらけで本当に様々だわ」
母さんによれば、昼食を作った時に実家との差を特に実感したらしい。
うーん、あたしも何だかんだで主婦も8年目になってるけど、まだ所々修行が足りないみたいだわ。
「ふふ、腕によりをかけなきゃね」
と言っても、使う食材は、まだ既存の家から持ってきた食材のみ。
おそらく来週には、本格的に高級食材を使った料理が食卓に並ぶことになる。
もちろん料理人みたいにうまくはいかないけど、それでもあたした

ちは腕が悪いというわけではない。
素材が良ければ、少なくとも今の素材よりはうまく行くはずよね。
「この呼び出し機能、叫ばなくてよくなったのはありがたいわ」
「あれ？　母さんはそっち派なのね」
あたしたちは昼食の時、こうした呼び出しをしなきゃいけないのは不便だと思っていた。
でも母さんは、全く逆の考えを持っていたらしいわね。
「ええ、叫んでも反応が鈍いもの」
母さんが、父さんの部屋と、更に1階の浩介くんとお義父さんの部屋に呼び出しをかける。
ちなみに、呼び出し機能については、当然部屋を選別出来るし、そのパターンは保存も出来る。
「そう言えば、あたしがいない生活はどうだったの？」
再び両家で同居したことで、父さんと母さんが、結婚してからあたしが生まれるまでの間以来の2人同居という状況は二度と訪れなくなった。
もちろん、その間のことは帰省中も話していたけど、改めてこの機会なら本音を話してくれると思って聞いてみた。
「うーん、最初の1ヶ月は寂しかったわね。でも、時間が経つに連れて、優子が1人立ちできたんだって思うと、落ち着けるようになったわ」
「そう、やっぱりそんな感じだったのね」
あたしたちが帰省したときは、「特に問題ない」といった感じだった。
でもやっぱり、最初は寂しいものなのね。
「まあでも、今はこうして、2世帯とはいえ同じ所に住めたんだもの、またかわいい優子と一緒に暮らせて、お母さんも嬉しいわ」
また母さんがちょっとにやけついた表情になっている。
もう、本当に困った人だわ。
「母さん、また変なことたくらんでないよね？」
「ああうん、大丈夫よ。私だって、優子はもう、旦那さんのものだって

知ってるわよ」
母さんの言葉に、あたしはさっきジムで体を鍛えていた浩介くんを思い出す。
「あらあら、相変わらず熱々でかわいいわねー」
またあたしの顔が真っ赤に染まると、母さんにまたからかわれてしまう。
「そうなのよ。優子ちゃんってば、浩介のことになると急に恥ずかしがり屋になるのよ」
もう、お義母さんまで！
「あはは、優子って本当にかわいいわね。少女漫画から出てきた主人公みたいだわ」
「あうあう」
あたしは、いいようにやられている。
母さんは、あたしのことを「少女漫画から出てきた主人公みたい」と形容した。
確かにそれは当たってなくもない。
小谷学園に女の子として復学してからの浩介くんとの日々は、今思い返せば少女漫画っぽいところもあったと思う。
特に3年生での後夜祭でのプロポーズがそうだった。
結婚してからの生活については、よく分からないけどね。
「うーん、確かにそうとも言えるわよねー。でもそうなると浩介がヒーローになるのよね？」
「ふふ、高校生の時よりも、お金持ちになった今の方が、ヒーローらしいかしら？」
母さんがにやっと笑う。
それを聞いてあたしは、またさっきのことを思い出して顔を真っ赤にしてしまう。
ジムで上半身裸で汗を流しながら鍛えていた浩介くんの体のことは、しばらく……もしかしたら一生忘れないものになるかもしれないわね。
しかも今は世界屈指の資産家で、個人としては蓬莱教授に次ぐ2番

目の資産家で、しかも蓬莱カンパニーの社長。
独身だったらまず間違いなく世界トップの人気物件になってたと思う。
「おっと、あんまりからかいすぎるのもよくないわね。さ、お料理を続けましょ」
「あ、はい」
やっぱり、3人で家事をすると、リーダー役は自然と母さんになる。
あたしたちは日が落ちる前に夕食を作り終わると、呼び出しパネルで男たちを2階のリビングへと呼び出した。

「お、焼き肉と餃子じゃん」
浩介くんが目を丸くしながら言う。
餃子や焼肉、鳥の唐揚げの他、野菜炒めや手作りのフライドポテトなどの食材も使って、手元の白いご飯以外は全て大皿タイプを採用した上に品目が多いので、テーブルは例の回転テーブルを採用した。
「えへへ、まだ前の家の食材だけど、今夜は引っ越し祝いよ。ついでに、このテーブルも試してみるわ」
「よし」
あたしたちは6人で丸いテーブルを囲むと一斉に「いただきます」をした。
ご飯はうまく調理ができていて、料理の素材や料理人の腕だけではなく、調理器具も大事な要素であることが身に染みて分かった夜ご飯になった。
やはり、「弘法筆を選ばず」というのは、料理の世界ではあまり当てはまらないみたいね。
まあ、そうじゃなかったら安値の調理器具しか売れないものね。

「えっと、こっちはこうで……」
「うーん、そんなにはいらないわよ」
さすがに作りすぎてあたしたちは食べきれなかった。
そこで明日の朝食は、この残り物を使うわけだけど石山家と篠原家

で分け前を調整する。
人数は2対4なので両もその比率に合わせればいいと言えるかといえばそうではなく、浩介くんの食べる量が多いことや、母さんがお義母さんよりもやや少食といったことも考慮に入れながら割り振っていく。
ちなみに、この場にいるのはあたしと母さんの2人で、お義母さんは1階のキッチンで待機している。
それというのも――
「じゃあこの量でいいわね？」
「ええ」
あたしは鍵のボタンを押して扉の鍵を明け、その後手で扉を上に持ち上げる。
そして上に固定したら、数皿のお皿をゆっくりと小さな対物エレベーターに入れていく。
全て入れ終わったら扉を閉めて「移送」というボタンを押す。
するとブザー音の後に「するするするっ」というエレベーターのかごが降りる音がした。
ちなみに、かごが来ている時にしか扉は開けられないため、呼び出すときは「呼出」ボタンを押す必要があるが、もちろん停止時でかつ向こうの扉が鍵も含めて完全に閉まっていなければ呼び出しはできないので、相互の連携が必要不可欠になる。
場合によっては、キッチンにあるモニタで連絡し合うのも肝要になるわね。
「ふう、疲れたわ」
「うん、でも精神的な疲れって感じね」
とにかく、新居はハイテクで便利だけど、まだ慣れないのも事実だった。
あたしは、人用のエレベーターで1階に降りると、自室に直行してベッドに横になった。
この後は、お義母さんが洗濯物を整理してあたしたちの部屋に持ってきてくれる。

それと同時に浩介くんとお義父さんがお風呂から出たら、あたしが入ることになっている。
コンコン
「優子ちゃーん、洗濯物を持ってきたわよー」
「はーい」
部屋の扉がノックされ、あたしはお義母さんから洗濯物を受けとる。
そしてタンスの中にし舞い込んで、今日のあたしの家事は完了した。
「ふー」
とにかく、しばらくすれば慣れるわよね？
「優子ちゃーん、お風呂上がったぞー」
「はーい」
実際には浴場にも呼び出しパネルがあるんだけど、浩介くんは直接あたしの部屋に来て呼び出しをしてくれた。
まあ実際、呼び出される人が熟睡していたらどうにもならないというのも実際の所だものね。
「すっげえぞお風呂、気持ちいいぜ」
「う、うん……」
あたしは、浩介くんと入れ替わる形でお風呂場の脱衣場へと向かう。
脱衣場は８畳程度のスペースで、冬に配慮して断熱材が使われていて、少し暑いかもしれない。
また体重計や体脂肪率などを図る健康器具の他、マッサージチェーンがあり、またトイレも装備されている。
歯磨きなどが出来る洗面台は、各人の個室にあるけど、ここにも完備されていて、歯ブラシなどが置いてあった。
脱衣場かごは１０個で、客人が来たときを前提としている。
この辺りは、先程のエレベータも同じね。
「ふう」

あたしは無意味にも、「浩介くんが使ったかご」を見つけようとしたが、痕跡はなかったので、適当に一番近いかごに脱いだ衣服を入れて、隣のかごに着替えのパジャマを入れた。
……おっと、髪の毛をお団子にするのを忘れずにっと。
ガララララ……
「うわあ、凄いわ！」
思わず声をあげてしまうくらいの豪華な浴室は、あの時に見たＣＧ以上の様相だった。
それこそ、小さなお風呂屋さんか小さな旅館にある浴場と言ってしまってもいい内容だった。
あの時は大きな風呂釜が１つだけだったのに、この２０畳もある浴室は、壁一面天井まで光輝く大理石があしらわれていて、お風呂場に入ってすぐの右側シャワーと鏡が４セットもあり、そこの向かい側には寝そべることが出来る広さのある四角いお風呂で、よく見るとユニットバスまでついている。
更にその奥、つまり左奥側には檜風呂、更に右奥側には五右衛門風呂と打たせ湯があり、檜風呂と五右衛門風呂との間には、一休みできるベンチまで置いてあった。
これを、これを毎日独り占め出来るなんて信じられない贅沢だわ。
脱衣場のかごは１０個あったけど、それも納得できる広さだわ。
あたしは慌てずに、まずは落ち着いて洗面台の方に向かって体を洗うことにした。ちなみにタオルもまた、何種類もある他、やはり４人なので１人に１つ割り当てられているような状況になっていた。
ボディーソープに石鹸にシャンプーとリンス、更にシャワーの仕様、どれを取っても最高級仕様になっている。
あたしはボディーソープを使って、体をゆっくりと洗うことにした。
シャワーで流し終わったら、今度は髪を洗う。
シャワーの当たりは心地よく、新品感が高いわね。
リンスも含めて、あたしの髪をきちんと毛先まで洗い終わる。
あたしにとって、この真っ黒なストレートロングの髪型は、とても

大切だと思う。
この髪の毛の手入れはとても大変だけど、やっぱり今になって、髪を切るという選択肢は存在しなかった。
「ふう」
全て洗い終わったら、髪をお団子にしてっと。
さて、どれから入ろうかしら？
「とりあえず、大浴場からかな？」
あたしは、一番手前にあるジェットバスのある大浴場に浸かる。
「ふー暖かい」
足を伸ばして浴槽にもたれ掛かりながら、あたしは今日の疲れを癒していく。
頼めば温泉のお湯も楽しめるらしいけど、色々と手続きが面倒なので、ここのお湯は相変わらず水道から引っ張っている。
「毎日の水道代が大変そうだわ」
いくらお金があると言っても、さすがに節水した方がいいかしら？
うーん……まあいっか。お風呂は大事だもの。
あたしは、ジェットが出ている部分に肩を当てて肩こりをほぐしていく。
んー！　やっぱり疲れた時にお風呂入りながら肩こりを解消できるのって最高だわ。
背もたれの鉄枕も、中に冷水が流れていて、頭を強く冷やしてくれる。
「ふう」
ザブーン
全身に熱が回り、少しのぼせて来たのであたしは一旦お風呂から上がり、立って熱を逃がすとすかさず五右衛門風呂の中に入る。
そう言えば、この五右衛門って言うのも、秀吉暗殺未遂のために釜茹での刑にされたという石川五右衛門に由来するらしいわね。
風呂釜の容積とあたしの容積の関係で、お湯がざぶーんと抜けていく。
それにしても、出ていくお湯の量、あたしは結構多いのよね。

って、この巨大な胸の容積が大きいせいかしら？
五右衛門風呂からは、浴室の入り口と、さっき入った大きな風呂釜が見える。
「んっ……」
お風呂に入ってたら肩がこってきたわ。
そうだわ、打たせ湯があったわね。
あたしは五右衛門風呂の隣にあった打たせ湯の元に移動する。
打たせ湯からはドドドドという音と共にかなり太めのお湯が流れている。
「よしっ」
入るのには少し勇気がいることで、あたしは小さな椅子に座りながら前屈みになって肩のこっている部分に体の位置をずらしてみる。
「んー気持ちいいわー」
肩こりしやすい部分に、天井から落ちてきたお湯が熱と共にあたしの方を規則的に打ってくる。
肩がほぐれるだけではなく、そこから流れていくお湯が、上半身を軽く暖めてくれる。
「はうー、至福だわー」
打たせ湯がとにかく気持ちいい。両肩同時には刺激できず、都度肩を移動する必要があるとはいえ、重いものを常にぶら下げているあたしとしては、この肩へのマッサージはとてもありがたいものだった。
「ふー」
とにかく気持ちいいわ。
肩をほぐしたらさて、檜風呂に入ってみようかしら？
常にこの辺からも匂いが漂ってくる檜風呂は、当然その成分も染み込んでいる。
檜の香りが、森の中のお風呂のような気分にさせてくれる。
もちろん時間と共にそれは失われていくから、何年かに一回は新しいものに交換する必要があるらしいけど。
それでも、新品の檜風呂はとてもよかった。
今日は使ってなかったけど、実際には脱衣場の下には入浴剤がバッ

チリと詰められている。
機会があれば、そういうものを詰めるというのも、ありかもしれないわね。
「ふう」
あたしはお風呂から出て、体を拭き、パジャマに着替える。
髪を下ろして脱衣場にあるマッサージチェアに腰を掛ける。
お風呂やさんの場合有料のことも多いけど、もちろん我が家では無料でマッサージし放題。
ボタンを押し、あたしは肩こりをもう一度ほぐしていく。
「肩さんお疲れ様……」
散々に悩んでいる肩こりでも、10年も重いのをずっと吊るしていると思えば、愛着もわいてくる。
それどころか、これからもずっと、肩には負担をかけ続けることになると思えば、きちんと毎日のマッサージで、ほぐしてあげないといけないわね。
「はうー」
あれ？　何だか眠くなってきちゃったわ。
「んー」
あたしの意識が薄れていく……おやすみなさい……

「……ちゃん……こちゃん」
あれ？　誰かが呼んでるわ。
「優子ちゃーん！　起きてー！」
あうう、起きたくないわ。
「ふーね、寝てるみたいだし、ちょっとくらいいいよな？」
もみもみっ……
「んにゅ」
あれ？　変な感じ、おかしいわね……むにゅう……
「お、珍しく起きないぞ、よしこっちも」
さらーり
「んっ……」

あれ？　何だか、さっきの肩とは別の意味で気持ちいいわ。
「んー……」
あたしが目を開けると、浩介くんが密着していて……
「あ、優子ちゃんおはよう」
「あっ、あっ……」
浩介くんに、全身を思いっきりまさぐられていて……
「きゃあああああああ!!!」
思わず悲鳴をあげると、浩介くんがのけ反った。
もー、恥ずかしいわ、色々な意味で！
「あははごめんごめん。でも優子ちゃんが無防備に寝てたらそりゃあちょっといたずらしたくなっちゃうだろ？」
「もー、男心に訴えるの反則ー！」
よく、「ＴＳ病患者のカップルは長続きしやすい」と言われているのも、男時代の性欲の高さや、そうした気持ちへの理解があるからで、逆に言えば男側もそれを利用することは往々にしてある。
でもあんまり使われ過ぎちゃうと、女の子としての気持ちにも関わるので、時折注意しないといけない。
「悪い悪い。でさ、パジャマな所悪いんだけど、さっき着てた服に着替えてくれる？　一緒に着て欲しいんだ」
「え？　う、うん……」
浩介くんがそう言うと、部屋を出る。
あたしは浩介くんのよそよそしい態度に違和感を覚えつつも、もう一度下着姿になってさっきの服に着替え直した。
一体浩介くん、あたしをどうするつもりかしら？

# 豪邸生活1日目　後編

「お、優子ちゃん、それじゃあ行こうか」
「う、うん……」
浩介くんが前を進み、あたしが一歩後ろを歩く。
浩介くんは明らかに何かを企んでいるという表情だったけど、目的地には、案外あっさりとたどり着いた。
「あれ？　この部屋は確か……」
さっき入ろうとして、開いてなかった部屋よね？
この部屋に、何があるのかしら？
「うん、この部屋は鍵がないと開かないんだ。ほら！」
浩介くんが鍵を見せてくる。
ドアノブの鍵穴に鍵を入れて、解錠してからドアを開ける。
「ちゃんと内側からの鍵もあるから、閉めるんだぞ」
「はい」
あたしも恐る恐るそれに続く。浩介くんが何かを取ったような気がしたけど、あたしは気にしない。
「きゃっ」
部屋に入って振り向いてみると、そこは一目見て分かるくらいに異様な部屋だった。それを見てあたしは、詳しく中も確認せず慌ててドアを閉めて鍵をかける。
改めてよく見ると、このドアにもスポンジのようなものが敷き詰められている。
部屋の入り口部分の左右には収納スペースがあって、右側には特殊な形の冷蔵庫とともにいわゆる精力増強剤と思われるエナジードリンクなどがあって、中の異様な光景から目をそらしながら左を見渡すと、そこにはいわゆる「大人のおもちゃ」が、以前から使っていたのを含めてぎっしりと敷き詰められていた。
あたしは、この10畳の部屋が何のための部屋なのか？　そしてどうして浩介くんがずっと鍵を閉めていたのか？　あたしたちに秘密にしたのかを理解した。

「ようこそ優子ちゃん。ここは俺たちの愛の巣だよ」
浩介くんがにっこりと腕を後ろに組んで前屈みになりながら話す。
床は何故か細かい鉄格子状になっていて、右側にはラブホテルでよく見た大きめのベッドと壁にはあたしたちの部屋よりは小さいけどやはり薄型の大型テレビがあった。
またベッドの頭上の棚には、カメラと思われる機材がたくさん詰まっている。
左側には何故か壁に円の形をしたものが飾られていて、円の中に手足を拘束すると思われるものまである。
壁の円の手前側、ここからはやや見えにくい場所には服が置いてあって、それはあたしたちが着ていた小谷学園の制服だった。
部屋の壁は反響しやすい作りになっているらしく、浩介くんの声もいつもとはちょっと違う感じになっていた。
そして部屋中央部の天井には、よく分からないものがぶら下がっていた。
「あの、あなた……もしかして？」
「うん、昨日一昨日我慢したのは、今日このためだよ。この部屋は音は反響しやすいけど外に対しては徹底的な防音仕様になってるんだ。ここなら遠慮せずに声を出せるよ。さ、おいで」
浩介くん、こんな部屋作っちゃうなんて本当にもう。
でも、十分想定できた話でもあるわよね。
「う、うん……」
浩介くんの元へ近づくために、あたしは部屋の中に一歩足を踏み入れた。
ピピッ……ブオオオオオオ――！
「きゃああ!!」
突然、足元から風圧を感じ、あたしはとっさに声をあげてスカートを押さえた。
でも間に合うわけもなく、浩介くんの位置からは丸見えになってしまった。
「ちょ、ちょっと何よこれ！　止めてええ!!」

スカートがめくれあがり、あたしは必死にスカートを押さえる。
浩介くんの足元には風は吹いてないのに、あたしが風から逃れようと歩いて移動しても風の位置が移動してついてくるので効果がないわ。
「あーん、止めてええ！」
「分かった分かった。ほら」
ピッ……ヒュウウウウウン……
浩介くんがリモコンのボタンを押すと、ようやく風が吹きやんでくれた。
「もう、えっちー！　どうなってんのよこれー！」
スカートを抑えつつ、前かがみになって浩介くんに上目遣いで抗議する。
「悪い悪い。実は足元には優子ちゃんを見つけるとＡＩによって自動追尾する機械があるんだ。この部屋に優子ちゃんが居る限り常に下から優子ちゃんを追尾し続けるから、俺がリモコンのボタンを押すことで優子ちゃんに下からえっちないたずらが出来るようになっているんだ」
浩介くんがにこにこした顔で話す。
「もー何よそれー！　技術の無駄遣いだわ」
最も、こういう所から技術が発展していくのも事実なんだけどね。
「と言ってもやれることと言えば、今みたいに風を起こしてスカートをめくったり――」
浩介くんがベッド側のテレビに首を動かし、あたしもつられて首を動かす。
ピッ！
「きゃあー！　えっちー！」
浩介くんがリモコンの別のボタンを押すと、足元からあたしのパンツを覗きこむ構図の映像が、大画面でドアップになっている。
あたしは下の機械で常にローアングルで撮影されているのね。
「こうやって、下からパンツを撮影して拡大収縮も……優子ちゃん、座り込まないで」

浩介くんがリモコンを操作してあたしのスカートの中にズームインしようとしてくる。
あたしは恥ずかしすぎて、たまらずその場に座り込んで機械からスカートを押さえてパンツが見えないように工夫する。
「もー嫌よ！　何なのよこれー！」
浩介くんはあたしに恥ずかしい思いをさせようと躍起になるところがあったけど、まさかこんなことに世界トップの財力を使うとは思いもしなかったわ。
でもこれ、入ったら二度と出てこられないくらいはまっちゃいそうだわ。
「ほら、消したから。優子ちゃんご機嫌直して」
「むーっ」
テレビの画面が消えていたので、あたしはゆっくりと立ち上がって浩介くんを見つめる。
……ハマっちゃいそうで怖いわ。
「隙ありっ！」
ブワッ
「きゃっ！」
今度は浩介くんの手で思いっきりスカートを上までめくられた。
抑えようと抵抗するけど、浩介くんのめくる力が強くて抑えられず、それどころか浩介くんの顔が逆に近づいてきた。
至近距離からパンツを凝視される、一番恥ずかしいパターンになる。
「ふー、やっぱりじっくり鑑賞したいよね。じろじろじろ～」
「あーん、恥ずかしいよおー！」
浩介くんに「凝視してますアピール」されると、あたしの顔がますます赤く熱くなってしまう。
「おっとごめん」
恥ずかしいと訴えると、浩介くんがスカートを戻してくれる。
既に体の奥から服を脱ぎたくなるくらいの高熱を帯始めていて、心臓が異常なくらいに鼓動を増している。

あうう、スイッチが入っちゃったわ。
「優子ちゃん、ほらこっち見てごらん？」
浩介くんが円のある方、つまりあたしから見て後方を指差す。
「これ？　制服？」
「うん、制服でしたくなったらここに来ればいいんだよ。それから、この棚を開けてみて」
あたしは、言われるがままに収納スペースになっている襖を開けてみた。
「う、うん……って、何これぇー」
そこはクローゼットになっていたんだけど、明らかに異様だった。
そこには、あたしに着せるためと思われるコスプレがたくさんあって、チアリーダーの衣装や体操着にスクール水着がそれぞれ違う種類のものが数着、メイド服や他校の制服、サンタコスや特定職業をイメージした衣装や、更にはアニメやゲームのキャラクターのコスプレもあって、ウィッグや持ち物といった小物類、更には小さなタンスの中にはそのキャラクターがいつも穿いていると思われる下着まであった。
それらのほぼ全てが新品で、この時のために浩介くんが買い増していた事が分かる。
「気分次第で優子ちゃんに着てもらうものだよ。着替える時は――」
ピピッ……シャー
「きゃっ」
あたしに左側から、カーテンが自動で展開された。
つまりこれで隠すことで、お着替えができるようにするのね。
「優子ちゃん、カーテンの足元を見てごらん」
「え？」
言われるがままに足元を見ると、足元にもボールのようなものがついていて、引き上げようとしても床にへばりついてめくり上がらないようになっている。
本当、こういうところだけは気を使うんだから。
「これでカーテンが完全に展開されれば、俺は優子ちゃんの着替えを

覗けないって訳だ。コスプレへの着替えは変身だからね。あえて見たくても見られない構造にしたんだ。じゃ、カーテン戻すね」
再びピピッという音と共にカーテンが開かれる。
それにしても、「変身は見たくても見られないようにしたい」って、何だかある意味普通以上に変態よね。
「そう言えば天井にあるあれは何かしら？」
「あれは拘束具を取り付けるためのものだよ。優子ちゃん、たまに俺にレイプされたがるでしょ？」
「う、うん……」
つまり、天井からロープを吊るして、あたしの手を縛るためのものらしい。
あうう、想像しただけでまたおかしくなっちゃいそうだわ。
さっきからずっと浩介くんのペースで、あたしの中にある被虐願望、被支配願望が刺激されちゃっているみたいね。
「で、こっちは優子ちゃんを天井ではなく壁に拘束するためのものだよ。ちょっとやってみようか？」
浩介くんが壁側にあった円形の拘束器具の前に移動する。
「え!? う、うん……」
あたしはほとんどメスの本能に従って壁の前に立つ。
「いいかい？ 痛かったら我慢せずに痛いって言うんだぞ」
浩介くんが、これからすることとは不釣り合いなくらい優しい声で話す。
やっぱり、雰囲気に特化しているのね。
「はい」
まず浩介くんに、足を少し開くように言われた。
足元を見ると、確かに拘束具の固定する場所がある。
「ちょっと、見ないで」
浩介くんが足元にかがみ込んだのを見て、あたしはスカートを押さえて警戒モードになる。
浩介くんは何も言わずにあたしの両足を単純な拘束具で嵌めていく。

「しっかりと、それでいて痛くないようにしねえと行けねえんだ。とにかく安全第一だ」
カチッという音がした後、ほんの一瞬だけ締め付けられる感覚がしたらすぐに緩んだ。
あたしの両足は確かに抜けなくなった。
これなら確かに、浩介くんにされたい放題だわ。
「じゃあ次に両手を広げてみて、ほら、左右にもあるだろ？」
「あ、うん」
浩介くんに促されるがままに両手を広げる。
浩介くんはさっきと同じ要領で手に拘束具を嵌めるとあたしはついに壁に固定されて動けなくなってしまった。
「優子ちゃん、かわいいね」
両手両足を広げられたまま動けないあたしに、浩介くんが嗜虐心を見せてくる。
「優しくしてね」
「分かってる」
もみっ
あたしの甘い声に対して、この状況とは驚くほど似合わないくらい優しく胸を揉まれていく。
「んっ……」
あたしは唇を尖らせて、キスをねだる。
「優子ちゃん……ちゅっ……」
「じゅるっ……ぴちゅっ……じゅうう……」
唇の中で激しいキス、あたしは手足が動かせず、より浩介くんにされるがままの状況になった。
「じゅう……れろっ……ちゅっ……ぷはーっ！」
浩介くんのとろけた顔から、２人の唾液の混合液がひたたり落ちる。
あたしの体がまた熱くなる。
これ以上はないと思ったのに、人間の体ってもっと熱くなるのね。
ああ、あのベッドで、もしくはここで、早くしたいわ。

「ねえ優子ちゃん、これ円の形してるでしょ？」
浩介くんが腕を縁に動かす。
「うん」
「こうすることも……できるんだっ」
ガララララララ！
「きゃー！」
「ガララララ」という音と共に、視界がぐるぐると半周し、天地が逆転している。
もちろん、あたしが回されただけで――
「じろじろー！　うーん、優子ちゃんの縞パンかわいいねー！」
「いやー！　恥ずかしいよおー！　元に戻してえー！」
重力にそって、あたしのスカートが下に垂れ下がって、パンツを全部見られてしまう。
しかも浩介くんは、わざと恥ずかしさを煽るために、わざわざ声に出して「じろじろー」何て言ってくる。
「ふふふーこの部屋にはこんなのもあるんだ」
浩介くんが布団の上から持ち出してきたのは、デジタルカメラだった。
「やだ、記録されちゃうー！　恥ずかしくて死んじゃうよー！」
浩介くんに見られるだけでも恥ずかしいのに、写真という記録にずっと残り続けてしまうのはもっと恥ずかしいわ。
「大丈夫、恥ずかしさのあまり死んじゃった人なんていないから」
カシャッカシャッカシャッ
浩介くんのカメラで、逆さまに拘束されたあたしの写真が記録されていく。
恥ずかしい撮影会なら、以前もされたことがあるけど、今回のそれは次元が違うわ。
「うわーん、お願い、もう許してえー」
「ふう、しょうがないなーほら」
泣きながら浩介くんに許しを乞うと、浩介くんはすぐに元に戻して手足の拘束を解いてくれた。

「でも優子ちゃん、ズームしてみたらさ」
「い、いやーん！」
浩介くんがさっき撮られた写真をテレビ画面に写し、あたしがこの状況に興奮してることを強烈に示唆してくる。
浩介くん、何だか最近ますますスケベになったわね。
「ふふ、ごめんごめん」
浩介くんがリモコンを操作して、また画面を黒く戻してくれる。
「これはね、今みたいな使い方だけではなくて、例えば録画したビデオを再生したりとか、過去の思い出を写して盛り上げたりにも使えるんだ。例えば小谷学園の時の映像とかね」
「そうなの？」
完全にエロ目的だけではないらしい。
といっても、それも場を盛り上げるには違いけど。
「他にもアニメのキャラクターなどのコスプレをする時に、本物を写して比べながら微修正したりとかね」
「結構使い道があるのね」
何だか、そう考えるとこのモニターも憎めないわよね。
「ところでさ優子ちゃん、優子ちゃんがあんまりにかわいくてエロくて……俺、そろそろ理性で我慢するの限界になってきた。さっきから破裂しそうなんだ」
「うん、あたしも」
そしてとうとう、浩介くんからお誘いが来た。
あたしも、さっきから興奮してしまって収まりがつかないわ。
早く浩介くんが、欲しいわ。
「それじゃあ」
ドンッ
「きゃっ」
あたしは軽く突き飛ばされてベッドに押し倒された。
ベッドの柔らかい感触がとても心地いいと思うまもなく、上から浩介くんが襲いかかってくる。
浩介くんの手が、今日も果てしない快感の渦へとあたしを巻き込ん

でいった。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
「うー」
完全に息が切れたあたしと、疲労のあまり視界の焦点が定まらずにグロッキーになっている浩介くん。
壁に反射する音による興奮はもちろんのことだけど、浩介くんの欲望がもっとすさまじかった。
「あなた、あたしもう寝るわね」
「んぁーうん、おやすみー」
激しくぎゅーっとお互いの体に抱きついて締め付け合うというのは、浩介くんほどに体力がある男性でもこうなってしまうくらいに体の負担は大きい。
それでも、荒い息遣いすらせずに、ここまで魂が抜けたような感じになるのは異例だった。
ともあれ、あたしは服を着直してお風呂場に戻り、パジャマに着替え直すと、そのまま自分の部屋に戻った。
部屋のベッドも、さっきのベッドと同じくらい上質なものだった。
「そう言えば、赤ちゃんもどうしようかしら?」
今少しだけ冷静になって思えば、あの部屋は子供を育むためにも必要になる重要な部屋だと思う。
それに多分だけど、今日紹介しただけで終わるような部屋でもないと思う。
それは入り口の左右や押し入れの中にあった多くの「付属品」をまだ、試していないことからも明白だった。
「んー眠いわ」
お風呂場で寝てしまったけど、それでもさっきはかなり激しい運動量だったので、あたしが睡魔に嵌まりこむのに、そう時間はかからなかった。
思えば、今日は色々なことがあったわね。でも明日以降は、日常になるのかしら?

# 豪邸生活２日目　前編

「うーん……」
　ベッドから起きて目を覚ます。
　ベッドはかなり広く、また部屋の広さから、あたしたちが昨日、新築の豪邸に引っ越したことを思い出す。
　あたしの部屋も広さは２０畳で、朝日を検知して自動で開いたカーテンの向こうに見える自宅の庭を見つつ、あたしはゆっくりと起き上がる。
　ジリリリ……ジリリリ……
「優子ちゃん、大丈夫？　朝ごはん手伝ってー！」
　ベッドの近くにあった呼び出し用のパネルから、お義母さんの言葉が聞こえてくる。
「あー今起きたところよ」
　よく見てみると時間が９時になっていた。
　目覚ましは８時にセットしてあったし、昨日も夜１０時前に寝たはずなのに、目覚ましを突き抜けて今起きてしまったらしい。
「疲れている？　無理しないでね」
「う、うん……」
　あたしは、急いで起き上がって着替えをし、リビングルームへと向かう。
　うー、やっぱり広いお家はどうしても歩く距離も長くなるわよね。
　それにまだ何だかボーッとしちゃうわ。
「おはよー」
「優子ちゃんおはよう、どうしたの？　疲れた？」
　お義母さんは、朝食の支度をしていた。
　と言っても、昨日の残りを温めるだけの簡単なお仕事だけど。
「うん、１１時間寝たのに」
　これだけ寝たのだって、下手をすればあたしが女の子になった時以来だと思う。
「そう？　私も精神的に疲れたわ。優子ちゃんも？」

「うーん、両方かも」
昨日は心も体も疲れたと思う。
「両方!?　さては浩介ったら！」
「あ、あはは……」
あたしたちの様子を聞かれなくなっても、以前に住んでいた家での記憶がなくなるわけではない。
特にあたしの声はそれなりの頻度で聞かれていたこともあって、あたしが疲れきっていると義両親にも察されてしまう。
それだけではなく、逆に浩介くんが疲れきっていてあたしが満たされた顔をしている場合にも、色々と下衆の勘繰りをされてしまう。
伊達に8年間も一緒に暮らしていたわけではないということよね。
「優子ちゃん、強力レンジお願い」
「はーい」
我が家には、コンビニなどで使う強力な電子レンジと、普通の家庭用の電子レンジとがあり、強い方の電子レンジは今から「強力レンジ」と呼ぶようになった。
あたしは唐揚げなどを強力レンジに入れる。
こちらの電子レンジは、もちろんワット数をかけているので暖まるまでの所要時間は短いが、普通なら電気代と消費電力が凄まじくて家庭用には適さない。
でもあたしたちにとっては、その程度の電気代などどうってことはないので、素直に使っていく。
お義母さんの電子レンジと並列作業を行い、普段の半分以下の速度で終わらせることができた。
うーん、こうやって実際に使ってみると、強力レンジ恐るべし、ね。
「並べてくれる？　私は2人を呼び出すわ」
「はーい」
あたしは食事のメニューをそれぞれの食欲に応じて並べていき、浩介くんたちが来たら「いただきます」をする。
世界一の資産一家が住み始めた新しい豪邸での最初の朝食が昨日の残りというのもちょっとどうかと思うけど、食べ物は粗末にできな

いものね。
「お、昨日の残りか。美味しそうだな」
浩介くんが嬉しそうな顔で話す。
どうやら、昨日食べたのは美味しかったみたいね。
「まあ、昨日は作りすぎたもんな」
そう、なので2階の家も同じように唐揚げや野菜炒めを食している。
「うん、美味しいわ」
朝ごはんとしてはちょっと重たいけど、昨日の疲れを早急に取るためにも、このくらいパワーの出る食事の方がいいわよ、ね？
「次のニュースです。大手電気メーカーの――」
大画面テレビで見るニュースは、何だか外出しているみたいだわ。
「おー、新製品開発か。へー軍事技術から発展、ねえ」
最近では、日本発のイノベーションがあちこちで起きている。
あたしたちが値下げをし終わる２０２８年の時点で６０歳未満の全ての世代で年金は廃止されることが正式に決定し、代わりに既存の年金の納入額が全て返還され、更には医療保険も段階的に値下げし、また蓬莱の薬によって難病の多くが解決されたのも手伝い、保険料は国民皆保険を維持したまま、往時の１０分の１以下になる。
社会保障費は今年からすでに大削減が始まっており、浮いた財政で様々な分野に公的資金が注入され始めた。
国は「金を出すが用途以外に口は出さない」をモットーに、様々な企業の研究開発を支援し始め、その効果が早くも随所で現れ始めている。
言うなれば、日本だけ手厚い補助金を使って企業の力が大きくなっているわけだけど、それに対して本心はともかく、公然と日本を批判する声は上がってこない。
何を隠そう、そんなことをすれば「その国は蓬莱カンパニーに逆らう」と思われ、株価大暴落とそれに伴う大不況に襲われることは明白だし、場合によっては蓬莱カンパニーから「薬の非融通」という制裁を受ける危険性があるから。

「にしても、最近の勢いは本当にすげえよなあ」
「うんうん」
５年くらい前に出された経済産業省の試算は甘かった。
あたしたち蓬莱カンパニーの大株主があっという間に世界トップの資産家になったように、蓬莱カンパニーがもたらす影響は、もっと迅速に現れた。
これでもし、人々が完全不老になったらどうなっちゃうのかしらね。
「こりゃあ、日本による世界支配も近いんじゃねえか？」
浩介くんが、半ば本気の表情でそう話す。
「かもねえー」
お義母さんが乗ってくる。
でもそうなると、あたしたちが祭り上げられちゃうわよね。
「ま、今や軍事力も絶賛増強中だし、諸外国は完全に手詰まりだな」
「ええそうね」
後は逆恨みしたテロリストに暗殺される懸念だけど、その辺りも最近では監視カメラが随所に増えたし、何だかんだで村社会で相互監視が得意な日本なら、そこまでする人もいないだろうというのが結論だった。
食料の輸入量も、来年から少しずつ減らし、自給率を上げていく目標を立てている。
こちらも、農業イノベーションが建前だけど、実際には人口対策と外圧対策が本丸になっている。
「次のニュースです。毎年恒例の夏祭りが――」
地域ニュースでは、東京のニュースを行っている。
昨日引っ越したことで、あたしたちも「都民」の仲間入りをした。
テレビで行うニュースは関東のものが多いけど、以前にも増して東京のものが多くなった。
「ごちそうさまー」
朝食を食べ終わり、お義母さんが洗濯を、あたしが皿洗いをそれぞ

れ始める。
皿洗いは高性能な機械を使っているのですぐに終わってしまった。
さて、お休みは今日までで明日からは会社、忙しくなる前に昨日探検し忘れた所を散策することにしようかしら？
そう思い、あたしはまず玄関に一番近い２０畳の部屋に入る。
ここは机とお茶セットにホワイトボードがあって、会社の応接室や会議室を思わせる作りになっている。
何を隠そう、ここはあたしたちが来客をもてなすための部屋で、今は特に用事がないので、正常な状態なのを確認してこの部屋出る。
後はもう、庭を散策するだけになった。
「でも暑いのよねー」
とはいえ、敷地の半分近くが庭に割かれている。
あたしの服も、昨日よりも更に露出度の高い水色のワンピース。
「とりあえず、出てみようかしら？」
あたしはそう思い、靴を履いて玄関の外に出る。
「うー」
やっぱり8月とあって暑いわね。
「でも道路よりはマシかしら？」
庭には芝生が生い茂っていて、更に大きなこの家の向こう側に行くと、きれいな池を中心にした日本庭園が姿を表した。
庭の池は、あたしたちの部屋からは見えないけれど、リビングからは見ることができる。
リビングを出てすぐのところには木の板が張り巡らせていて、前の家から持ってきた植物たちが元気よく育っている。
手前にはリンゴと柿の木が植えられていて、収穫時期になったら食べることもできるし、近所の人たちに配ることもできる。
丸い池の方に目をやると、正面に橋がかかっていて池の中には今のところ特に何も住んでいないけど、場合によっては鯉を飼うこともできる。
池の水が幾分とこの庭の気温を下げてくれる。
池の橋を渡って中央まで来ると、右側の奥には離れの倉庫が、更に

は右に９０度の位置には茶室が、左側には木々が生い茂った小さな小さな林があるのが見える。
池の中を見てみると、石の上に一苔（こけ）が生えていて暑さを和らげる工夫がなされている。
事実、橋の中心はそれなりに涼しいと感じるようにできていた。
あたしはそのまま橋を渡りきるとまずは左の方へと進んで見た。
これらの木々は、前の持ち主が接ぎ木して植えたものだという。
木の密度は結構高くて、数本がやや密集している。
うーん、この木は何の名前かまでは分からないわね。
そう言えば昔から名前も知らない大きな木の名前を知りたがる歌があったかしら？
「まあいいわ。とにかく入りましょう」
あたしは自分に言い聞かせながら、木々の中に入っていく。
その中は、木の中とあってやはりやや薄暗く、真夏ということもあって上空は緑におおわれていた。
そして、さっきの池の上以上に涼しかった。
そして何よりも――
「あなた！」
浩介くんが木に寄りかかって本を読んでいた。
「優子ちゃん、ここ、居心地いいよな」
「あーうん、今初めて来て」
そもそも、庭に出たのも今日が初めてだった。
「そうか、ここはいいぞ。特に今は夏だから、特に木にとっては過ごしやすいみたいだな」
「そうね」
あたしは、浩介くんの隣に座って足を伸ばす。
「えっちなことはやめてね」
別にされてもいいんだけど、昨日さんざん恥ずかしい思いをさせられたので、あえて意地悪をしてみる。
「あはは、頑張ります……」
浩介くんはあたしの胸をじっと凝視しながら自信なさ気に答える。

本の続きを読もうとしているけど、さっきと違って至近距離にあるあたしの胸が気になってちらちらと覗いてくる。
ふふ、もっと意地悪しちゃおうかしら？
「ねえねえあなた、何を読んでるの？」
ぐいっ
「っ……！」
ぼんっと音がしたように浩介くんの顔が真っ赤になる。
ふふ、どうやらあたしの胸がそばに来るとこうなっちゃうのよね。
「ゆ、優子ちゃん、ち、近いって！」
浩介くんが慌てて離れるように言うけど、目線が胸の谷間に向かっていて全く説得力がない。
うふふ、どうしようかしら？
「いいじゃないのあなた」
あたしは構わずに、本の中身を見る。
本はどうやら税金に関する本だった。
「あら？　税金？」
「ああ、会社の方は監査法人があるからそちらの税理士さんに任せておけばいいんだが、俺たちも年収が４桁億だし、さ」
「あーうん、そうよねえー、確定申告も大変そうだもの」
いやむしろ、あたしたちのレベルならきちんと税理士に頼んだ方がいいわよね。
まあ、節税してもしなくても、あたしたち不老だし収入はこの豪遊生活でも問題はないし、お金に困ったりもしないもの。
「そういうことだ。とはいえまずは、税理士さんを見つけねえとな」
浩介くんがどぎまぎしながらそう答えてくれる。
ふふ、浩介くんも、あたしに飽きたりすることはないみたいでよかったわ。
「なるほどね……」
有能税理士の見つけ方については、この本には書いていない。
なのであたしたちの方で見つける必要性がある。
まあ、近くの税理士事務所にまず行くといいかしら？　幸いここは

超高級住宅街なので、富裕層個人向けの税理士さんならたくさんいると思うし。
「う、うん」
浩介くんが顔をそらしながら本を読む。
うー、あたしに構ってー！
「あなたぁ……あたしのこと見てー」
むにっ
肉食系女子になったあたしは、また浩介くんを誘惑したくなって、浩介くんの背中に胸を当てる。
ふふ、浩介くん大きくなってるわね。
「うっ優子ちゃん、意地悪しないで」
浩介くんが慌てた表情で話す。
それでも、あたしの胸に視線は行っちゃうらしいけど。
「はーいごめんね。じゃああたし、向こうに行ってくるわ」
「いってらっしゃい」
庭の小さな森から出ると、また熱気が襲いかかってくる。
この庭だって、すぐ近くの喧騒溢れる渋谷の町に比べたらかなり涼しいはずなのに、やっぱり小さくても木がたくさんある空間ってすごいわね。
あ、でも永原先生によれば、森林は現代の方が多いんだってね。
「こっちの中には何があるかしら？」
こっちにあるのは倉庫と茶室、倉庫には主に両家で使っていた穴堀のショベルとか、日曜大工の機械、更にはあたしたちが買った家庭用プールも置いてある。
とにかく家が広いので、捨てるものは最小限で済んだのよね。
倉庫の方は軽く見て終わりで、本丸の茶室へと向かう。
こっちから行くと、茶室は裏口になる。
茶室は池の右側にあるので、あたしは池と茶室の間のスペースを通り、茶室の入り口の扉を開ける。
中は純和風で、ここで色々なお茶会の他、華道もできるようになっている。

と言っても、あたしはよく分からないんだけど。
靴を脱いで中に入る。
やはり中は純和風で、掛け軸にはこの家のために書道家の人が書いてくれた文字が掲げられている。
そして――
「あら優子じゃない、どうしたの？」
そこにいたのは、母さんだった。
「母さんこそ、どうしたの？」
「ご近所付き合いもあるから、茶道を習おうと思ってね。ここで近所の人とお茶会が開けないかなって」
母さんは、どうやらここでお茶会を開き、近所のセレブ仲間と親睦を深めたいらしい。
「『娘の七光り』とはいえ、私達この住宅街でも一番のお金持ちでしょ？　だからこそ、こういう教養も深めないといけないと思ってね」
掛け軸の隣に掲げられている絵は、何と永原先生のコレクションの１つで、江戸時代に買った浮世絵の作品の１つだという。
この絵は少なく見積もっても１１０万円の価値はあると言われているけど、永原先生が買って残しておいた浮世絵の中では一番安いものだったらしい。
「あーうん、そうよね。あたしたちも商談でお茶会をするかもしれないし」
あんまり無さそうだけど、無いとは言い切れないものね。
「そうそう、茶道に華道のお稽古、わびさびの心は、優子も身に付けておいて損はないわよ」
「そうよねえ」
以前あたしは、会社の常務という立場でありながらも、会議中にお茶汲みとお茶出しをして、会社のイメージを格段に向上させたこともあった。
こうした茶道や華道を身に付ければ、より穏やかに、「優子」に近づけるかもしれないわね。
「ふふ、じゃあ母さんはそろそろ出るわね。優子も、お昼御飯の準備に

遅れないでね」
「うん」
と言っても、最新鋭の自動化家電のおかげで、家事の負担は格段に減っていて、昼食の準備にもまだ時間は1時間以上ある。
母さんが出ていき、あたしはその場に座り込んで庭の方を見る。
庭の方にはししおどしがあるけど、今は水が流れていない。
お茶会を開く時や、気分転換をしたい時、あるいは庭でバーベキューなどをする時にスイッチをいれて水を流すようになっている。
池の向こう側、橋の影で全部は見えないけど、浩介くんが本を持って歩いているのが見えた。
よし、そろそろ行こうかしら？
あたしはそう思い、玄関から家の中に入り、自室に戻ってパソコンを始めることにした。
しばらくすると昼食の準備に呼ばれた。

「ねえ優子ちゃん」
「うん？」
食事の準備中、早めにリビングに来てテレビを見ていた浩介くんが話しかけてくれる。
「お昼食べ終わったら、屋上のプールで遊ぼうぜ」
「え？　うん、いいわよ」
元々、その予定だった。屋上のプールは露天風呂と兼用だけど、泳げるだけの広さがある。
もちろん水着も、すでに買ってあるのを使う。
あの水着も、何だかんだで10年使っていて、流行という概念を越えて、男受けは抜群だと思う。
あの頃に比べると、体が少しだけむっちりになっているけど、それでも着られなくなったというわけでは全く無い。
「よっしゃ！　じゃあ水入れてくる。ご飯を食べ終わる頃には、プールが完成しているさ」
浩介くんが、急ぎ足で駆け上がっていく。

「ふふ、2人ともラブラブね。私達は邪魔しないから、存分に楽しむといいわ」
「ありがとう」
というよりも、実両親はわからないけど、義両親は今日の午後3時から介護施設の人と共に、おばあさんを迎えにいくことになっている。
介護施設の人は、以前までいた老人ホームの所属を維持しつつ、あたしたちが金銭的な交渉を行い、おばあさんが亡くなるまでの専属となることが決定した。
おばあさんの老人ホームでの手続きなどに時間がかかるため、家に帰ってくるのは今晩の晩御飯が終わってから。
晩御飯は老人ホームの方でご馳走してくれるということなので今晩の夕食は浩介くんと2人きりということになっている。
しばらくすると屋上から戻ってきた浩介くんが、こちらへと駆けつけてきた。
「ふふ、優子ちゃんの水着優子ちゃんの水着優子ちゃんの水着……」
浩介くんったら、もう興奮しちゃって……さっきのあれ、まずかったかしら？

# 豪邸生活2日目　中編

「さ、プール行こうぜ！」
昼食を食べ終わると、待ちきれない様子で浩介くんがあたしを急かしてくる。
本当、性欲の力って凄いわね。まああたしも早く浩介くんの前で水着に成りたいと思ってるからおあいこだけど。
「あ、うん。ちょっと待って水着持っていかないと」
もちろん、水着を自室に取りに行かなければいけないので、その時間が必要になるので。
「おっと、そうだよな」
浩介くんも冷静になったらしく、一先ずは部屋に戻って水着を取りに行くことになった。
「さて、どっちにしようかしら？」
水色の超ミニスカートなパレオ付きの白いビキニと、黒を基調にした更に露出度の上がったビキニがある。
前者はかわいさとエロさ、露出度とあどけなさを併せたバランスのいい水着であたしのお気に入り。
後者はエロさにやや傾いていて、さっきみたいに「肉食系女子」になりたい気分の時に使う。
実際、この水着を穿いた日は、必ず浩介くんを獲物として「食べて」いる。
「やっぱりうーん……」
さっきの木でのこともあって、今のあたしはかなり肉食系女子な気分だった。
でも、今日の水着という意味では、よく使っている前者の水着の気分だった。
「そうだわ。この水着で肉食系になるのもいいかも」
あたしは、そんな結論に達して、水着を取り、プールセットと共に部屋を出て浩介くんと合流した。
「水着迷った？」

「うん」
浩介くんも、あたしが複数水着を所有していることは知っているので、特に待ったことは気にしていないらしい。
あたしたちはエレベーターを呼び寄せて乗り込み、「R」ボタンを押して一気に屋上へとたどり着いた。
「よし、じゃあまた」
「うん」
脱衣場は男女別なので、浩介くんと一旦別れる。
あたしは鍵を閉めて脱衣場のかごを取る。
「そうだわ、誰もいないし」
バッ……
はしたないと思いつつも、あたしは誘惑に負けてワンピースを一気に上までめくりあげ、パンツとブラを一気に脱いで全裸になった。
誰も見ていないけど、やっぱりこの明るくて開放的な中では素っ裸は恥ずかしく、あたしはすぐに水着を着た。
ふう、やっぱり恵美ちゃんのようにはいかないわね。
これを他の人が見ている中でするのは絶対に無理だわ。
ともあれあたしは、軽く準備運動してから脱衣場の扉を開けて、既に立っていた浩介くんの元へと駆け寄った。
「あなた」
足元が暑い。屋上はビルの屋上と同じような感じなので、太陽光の熱を溜め込みやすい。
本当はホースを使って水撒きしてからの方がよかったわよね。
「うっ、やっぱり優子ちゃんのその水着エロい……」
「ふふ、ありがとう」
むにっ
「ひゃうっ」
あたしが背中から胸を当てると浩介くんが溜まらずにすっとんきょうな声をあげた。
ふふ、やっぱり水着になっちゃうと、あたしでも主導権握れるわね。
まあ、そうは言っても――

すりすりすり
「きゃあっ！」
浩介くんの右手に、あたしは水着越しにお尻をすりすりと素早く撫でられる。
深く撫でられるのとは違う感触で、やっぱり黒い水着よりは簡単に主導権握れないわね。
「こーら、入るわよ」
「うん」
あたしは浩介くんを誘導しながら一緒にプールの中に入る。
本当はもっと準備運動をした方がいいんだけど、激しく泳ぐ訳でもなく、また浩介くんに襲われちゃいそうなので水の中ですることにする。
冷たい水の感触が気持ちよくあたしの胸が水に浮き、パレオもヒラヒラと水中ではためいていた。
「気持ちいいわー」
水風呂と同じで、暑い夏にはうってつけの環境だった。
体から熱が逃げていく様子を全身で感じることができる。
手を水から出すと、夏の気温と太陽光が、水の熱伝導もあってかなり強烈な勢いで感じていく。
「うん、本当にな」
プールから目をやると、渋谷の街が見えた。
あたしたちは思い思いに水の中を泳ぐ……というわけにはいかない。
相変わらず運動神経が壊滅的なあたしは全然泳げないので、浩介くんが泳ぎを披露してくれることになった。
「あーんかっこいいー！」
プールサイドに腰掛けながら浩介くんのかっこいい泳ぎでメロメロにされてしまう。
背泳ぎのスタートの時に分かったけど、浩介くん、まだ大きくしてるのね。
「ふう、どうだった俺の泳ぎは？」

一通り泳ぎ終わるとあたしの隣に浩介くんが腰かけてくる当然あたしの視線は、吸い込まれるように浩介くんの下半身へと向かっていく。
あーん、あたし、乙女の大好物から目が離せないわー！
「うん、かっこよかったわ」
「そ、そうか……ゆ、優子ちゃん、あんまりそうじっと見ないでくれる？」
浩介くんもさすがに気付いたのか、両手で恥ずかしそうに隠してくる。
もー、余計に見たくなっちゃうじゃないの。
「あははごめんね。あたしも女の子だから、本能なのよ」
浩介くんも、あたしの胸に釘付けになっちゃってるし。本当、本能って怖いわね。
「うー、恥ずかしい」
浩介くんが顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしてくる。
ふふ、昨日はやられっぱなしだったし、最近もそんな感じのが続いてたから、ちょっとくらい、いいわよね？
「ふふ、特に背泳ぎが素敵だったわ」
あたしは、何とかメスの本能に抗って、浩介くんの顔を見つめながら言う。
「え!?　どうして!?」
でも、出てきた言葉はやっぱりメスそのものだった。
だって――
「上からだからあたしが大好きなのが見えちゃってたし」
あたしがうっとりした顔で言うと、浩介くんの顔がみるみるうちに赤くなっていく。
「うー！・　優子ちゃんのえっち！」
あたしはこの言葉を週に何度も言ってるけど、浩介くんがこの言葉を発した記憶はほとんど無い。
それだけ、あたしが攻勢になることは珍しい。
ふふ、このまま一気にいきたいわね。ここは屋上だけど、もうそん

なこと関係ないわ。
「んんっ……！」
あたしは強引に浩介くんの唇を掴み軽くキスをする。
浩介くんは力を出してしまえば簡単に振りきれるがそうはしない。
浩介くんも半ば、こうなることを予測してたからだと思う。
「ふふ、いっぱい楽しもうね、あ・な・た」
プールサイドに浩介くんを倒し、あたしが上から胸を押し当てて囁く。
「うっ……ああ、優子ちゃんに食べられちゃうよぉ……！」
状況を察した浩介くんが、いつものセリフで従順になった。
「はぁ……はぁ……はぁ……はにゃー！　ご馳走さまでしたー！」
「ひゃうう……もう……だめぇ……」
ザブーン
浩介くんが疲れきった様子でプールに飛び込んで横になる。
そしてすぐに溺れそうになってから、慌ててプールサイドに掴まり、ぐったりした様子で粗い息づかいをしている。
あたしはというと、浩介くんのお肉をがぶりと美味しく食べた後はやっぱり疲れきっていて、水着を直して水を張ったプールサイドの上で仰向けに寝頃がる。
水中で抱き締めた感触はいつもと全く違った。
屋外ということで浩介くんが口に手を当ててくれたので、声は多分聞こえなかったと思うけど、次からは我慢できなくても屋内でしなきゃいけないわね。
「うひー」
浩介くんはかなりぐったりしている。
あれほど鍛えた浩介くんでもこうなっちゃうなら、他の男性だったら命に関わっちゃうかも。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
ふう、あたしも疲れたわ。
それにしても、普段は運動能力全く無いはずなのに、こうやって肉

食系女子になると途端に力が出ちゃうわよね。
そう考えると、性欲の力って偉大だわ。
「ふう、今日は大丈夫よね？」
確実に安全ということはないけど、今日は大丈夫な日のはず。
ちゃんとした道具がなくても、ある程度なら回避はできるはず。
まあ、大学院の卒業も確定していて、正直もう身ごもっちゃってもいいとは思うけど。
浩介くんは、まだぐったりしている。
どうやら相当効いたらしいわね。
「優子ちゃん、先に行ってていいよ。俺もちょっと、部屋で休むから」
浩介くんが、相変わらずプールサイドに掴まりながら息を切らせて言う。
何だか今日は、いつにも増してすごいわね。
「うん、分かったわ。それじゃあ」
あたしは浩介くんを置いて一人で戻り、脱衣場で着替え直す。
エレベーターを使って1階に戻り、あたしも自分の部屋へと舞い戻る。
「ふー」
あたしは冷房をつけてベッドに横になる。
している最中はいいけど、終わってから時間が経つと疲れてくる。
それを感じながら、あたしは冷房の効いた広い部屋でうとうとする。

「あうー」
寝ていたのは1時間ほどだった。
あたしは急いで起きると、昼食の準備に取りかかることになった。
浩介くんは、さすがに部屋に戻ったわよね？
リビングは無人で、６０畳のスペースが広く、とても静かに感じる。
あたしは今日の食材を見極めてご飯の調理を開始する。
ちなみに、作るのは冷たいうどんになった。

「優子ちゃん、おはよう」
「おはようあなた、どうしたの？　さっきはあんなに元気なかったのに」
うどんを作っていると、浩介くんがすっかり元気を取り戻した表情でリビングに入ってきた。
どうやら、よく眠れたみたいね。
「あの部屋にあったまむしのエナジードリンクを飲んだんだ。それで少しマシになった」
あーそういえば、そんなのもあったわね。
「すごいわね。そのドリンク」
「まあ短時間でも寝れば違うんだ。あーでも悪い、まだ気力がねえから家事は手伝えねえや」
浩介くんは、まだ本調子と言う感じじゃなさそうね。
いつもなら、あたしと2人きりになったら、浩介くんはこれ幸いと性欲のために甲斐甲斐しく家事を手伝ってくれるのにね。
「うん、それでいいわよ」
あたしは、一先ずうどんの具材に肉を加えることにした。
浩介くんには、沢山鍛えて貰わないと困るものね。
って、あたしもちゃんと、これからは妊活もあるんだし頑張らないといけないわね。
「優子ちゃんは、全部の部屋に行った？」
「うん、2階のオーディオの鑑賞部屋とかマイシネマはちらっと見ただけだけど」
正直あの辺り持て余してるし、今度映画のブルーレイでも買おうかしら？
考えてみれば、庭も含めてこれで全部回ったのよね。
「ああ俺もそんな感じ。にしたって広いよなこの家」
浩介くんも、やっぱりまだこの家の広さには圧倒されているらしい。
それもそうよね。ついこの間……というか一昨日まで、土地面積10分の1位の家に住んでいたわけだし。

「あはは、でも世界の豪邸からすればまだ狭い方じゃないの？」
実際、世界の豪邸には数千坪レベルの広い豪邸もあって専用のテニスコートとかゴルフ場まであるって言うし。
「そりゃあさ、都市部から離れているからだろ？　俺たちがすげえのは、利便性最高の渋谷という東京のど真ん中にこんなどでかい居を構えていることだろ？　坪単価考えれば、俺たちのこの家だって決して負けてねえぜ」
確かに、浩介くんの言う通りだと思う。
その証拠に、この家の近所だってみんな名だたる富裕層たちの家ばかりなのに、あたしたちの家ほどの豪邸はほぼ無い。
ピンポーン、ピンポーン……
突如、家の呼び鈴が鳴った。
誰からかしら？　お義母さんたちはまだ老人ホームだろうし。
とにかく出てみよう。
「はい……！」
ボタンを押して家の入り口と繋ぐと、知らないおばさんが出てきた。
い、一体何かしら？　まさか富裕層狙いの詐欺師かしら？
「すみません、篠原さんですか？」
「ええそうですけど」
一体、何の用事かしら？
「ああよかった！実はですね、私蓬莱の薬飲みまして、この松濤では多くの人が薬を飲んでいるんですよ」
どうやら、お客様らしいわね。
確かに、この富裕層の街なら多くの人が顧客になっているわよね。
「ええ」
「近所の人と『この大きな家の持ち主誰になるのかしら』と話していたら、まさか蓬莱カンパニーの篠原さんだったとは思いもよらずですね。で、篠原さんに感謝の印として、私達松濤住人一同で、是非贈りたいものがあるんですよ」
おばさんによると、「お金は死んだら消えてしまう」ため、みんな寿

命が怖かったのだという。
言われてみれば、お金持ちからするとそういう不安もあったわよね。
蓬莱の薬のお陰で、そうした心配はなくなりつつあるのだとか。
まあ、蓬莱の薬は人類全体での共有財産になると思うけどね。
「……分かりました。えっと、今昼食を作ってますので……申し訳ないんですが呼び鈴の下にあります『篠原』という所のテプラに入れて貰えます？」
「はい」
おばさんが、テーブルに贈り物を入れるのが見てとれる。
どうやら、こういうのは慣れているらしい。
「入れたら『送る』のボタンを押して下さい。私達のところに届きます」
「はい、ありがとうございます。すみませんお忙しい時に、失礼いたします」
そういうと、おばさんが去っていった。
この家に来てから知ったことなんだけど、郵便物や宅配物などは、わざわざ取りに行かなくても専用の地下コンベアーを通って、あたしたちのリビングに直接届くようになっている。
今みたいに送った人が即時ボタンを押すこともできるし、定期的に機械が重さなどを検知して送りつけてくれる。
もちろん、大きな物などは手渡しにする必要があるので、その場合は入り口まで歩く必要がある。
ピンポーン
「荷物が届きました」
「お、届いたぜ」
浩介くんが立ち上がりリビングに置かれた段ボール箱を手に取る。
そして机に運び、箱を解体する作業に入った。
あたしはその音を聞きつつ、うどん作りに集中する。
「おー、優子ちゃん！　すごいぞ！　真珠のネックレスだってさ！」
浩介くんがネックレスを取り出してくれた。

そこにあったのは「真珠」で、よく分からない銀座のお店の名前が書かれていた。
「本当だわ。でこっちが――」
「これ、ダイヤモンドじゃねえか、俺たちの指輪より大きいぞ」
ダイヤモンドの塊だった。
松濤の人たちがお金を出しあってくれたって言うけど、すごすぎるわよ。
「何だか勿体ないわね。母さんたちに渡しておいた方がいいかしら？」
正直、あたしたちが持っててもだかなあって感じだわ。
って、それもそれでまずいかしら？
「まあともあれ、俺たちへの感謝の印だし、とりあえず俺が管理しておくよ」
「うん、そうしてくれるかしら？」
おっと、うどんは……ふう、ギリギリセーフね。

トントントン
「優子？　お客さんでしょ？　ってそれ！」
あたしがうどんをお皿に盛り付けていると、母さんがあたしたちの部屋に来た。
真珠とダイヤモンドを見るなり、母さんがかなり驚いている。
おそらく、かなりの値打ちがするものなんだと思う。
「あー、さっき近所の人がくれたんだ」
浩介くんがさらりとした口調で話す。
「くれたんだってまあまあ！　真珠にダイヤモンド。数百万数千万はするわよこれ」
母さんが目を輝かせながら話す。
宝石に疎いあたしでも、これが高いものだということくらいは分かるわ。
「あたしたち蓬莱カンパニーに感謝の気持ちを込めて、町内の人たちでお金を出しあったんだって」

「あらあらまあまあ、こうしちゃいられないわ。直ぐに感謝回りにいってくるわね」
母さんが慌てた様子で部屋を出た。
あたしは冷静にうどんをお皿に盛り付けると、食卓へと運ぶ。
「さ、あなた、お昼ご飯よ」
「お、おう……」
浩介くんはまだ動揺を隠せない様子だけど、ともあれあたしはまずお昼御飯を食べてから考えることにした。
浩介くんも落ち着かない様子ではあったけど、一先ずお肉も入った冷たいうどんを一緒に食べてから考えることにした。

「「ご馳走さまでした」」
まだ回復していないらしく、いつもなら甲斐甲斐しくお皿を運んでくれる浩介くんがすぐに部屋に戻り、あたしは食器洗い機にお皿などを入れて自室に戻る。
本来ならここでお掃除の時間なんだけど、まだ住み始めたばかりなのであたしには空白の時間となった。
そして、あたしはパソコンを開いてインターネットをすることにした。
ともあれこれで、夜ご飯の準備までは時間を潰せるわね。

# 豪邸生活2日目　後編

母さんから、「お礼回りに行ったら随分とにこやかで手厚い歓迎を受けた」という報告を受けつつ、あたしは夕方になりはじめたのを見て、夕食の準備をすることにした。

今日の夕食はハンバーグになった。

浩介くんも既にリビングにいたけど、また疲労が溜まってて、「家事を手伝える気力がない」と言っていた。お昼のうどんもかなりスタミナに気を使ったはずなんだけど。

ふふ、どうやら回復は明日まで待つ必要がありそうね。

普通なら半日もすればすぐに復活する程度には体力あるのに、ちょっとやり過ぎちゃったかしら？

それにしてもこのキッチンは広い。

作業スペースが広いのはいいんだけど、あたし1人だとやっぱりどうしても持て余しちゃうのよね。

あたしは、ハンバーグを作り、焚き終わった白いご飯や野菜、豆腐などを載せていく。

「よし」

出来たものから机に置いていく。浩介くん、まだぐったりしているわね。

「ねえ優子ちゃん？」

「うん？」

ご飯を並べていると、浩介くんが話しかけてくる。

「優子ちゃんって本当に家事得意だよね」

浩介くんがいつも言わないセリフを言ってきてちょっとどきってしてしまう。

「えへへ、もちろん、女の子らしくなる時に母さんにみっちり鍛えられたからね」

もちろん、その後も鍛練は欠かさなかったけども。

それでもやっぱり、母さんの教育がよかったのもあると思う。

あたしくらいに美人でも、家事が悪いとダメって言うのが、母さん

の持論だった。
「本当にさ、今冗談とかひいきとか抜きでさ、優子ちゃんが世界一の女性なんじゃない？」
浩介くんは、ぐったりした様子だけども、それでもしっかりと信念を持っている様子だった。
一方であたしはと言えば、蓬莱カンパニーが一段落した後の目標をいまいち見失っていた。
「そ、そうなの？」
あたしが世界一って、浩介くんの贔屓も入っている気がするのよね。
「当たり前だろ、男心分かってくれて、家事も得意でかわいくて美人でスタイル抜群で、性格は穏やかで名前の通りとっても優しくて清楚で、だけどいざとなった時にはさ、それなりに鍛えてるはずのこの俺がこんなんなっちゃうくらいすごくてさ、だけど旦那だけを愛してくれて、しかも蓬莱カンパニーの常務で大株主で、資産１０兆円以上で配当金だけで１０００億円以上稼いできて……優子ちゃん以上にいい女なんてこの世にいるか？」
あたしは、はっとなって歩みを一瞬止めてしまう。
そして、ほんのり暗くなり始めた中庭の方を見つめながら考え直してみる。
……言われてみればその通りだった。
自惚れでも何でもなく、あたしよりもいい女は、多分今この地球のどこにもいないと思う。
でもそれは、浩介くんだって、決してあたしと釣り合いがとれていない男じゃないと思う。
その証拠に、浩介くんは浮気性とかじゃないし……って、あたしが世界一の女だからかしら？
「うん、そうかもしれないわね。確かにあたし、自分で言うのもあれだけど、本当にいい女になったと思うわ」
「だよなあ、元は優一のはずなのに、なあ」
浩介くんが、あたしが男だった頃の名前をふと出す。

今は再び同じ家の２階に住み始めたあたしの両親がつけた「一番優しい子に育って欲しい」という意味で名付けた名前は、今になって、「ずっと優しい子でいて欲しい」という「優子」という名前で、実現していると思う。
「懐かしいわね。その名前」
嫌な思い出の詰まった名前でもあるけど、今となれば「優一こそが悪い夢」とさえ思えてくるのよね。
「あの頃のことは、もう何もかもが懐かしいぜ。小谷学園にいた１０年前の俺たちが、今の俺たちを見たらどう思うかね？」
「そうね、きっと信じられないと思うわ。まさか会社社長と常務の夫妻になって、世界トップの資産家になったので渋谷の豪邸に住んでますだもの。それこそあたしが蓬莱カンパニーの常務になった時でも、こんなことになるなんて夢にも思ってなかったわよ」
「そうだよなあ」
浩介くんも、やっぱり信じられないらしいわね。
まあ、当たり前と言えば当たり前よね。
「さ、ご飯を食べましょう」
「ああ」
あたしたちはご飯を全て並べて、ハンバーグなどを食べる。
浩介くんは、エネルギーを取り戻したかったのか、かなりがっついているわね。

「ふー、ごちそうさまー」
「あー美味しかった」
ガチャッ
あたしたちが食べ終わると同時に、玄関が開く音がした。
トントントン
「ただいまー」
「おかえりなさーい」
義両親がリビングに入ってくる。
おばあさんはどうしたのかしら？

「おばあさんは寝ているわ。明日の朝に歓迎会するから、優子ちゃんたちもよろしくね」
「はーい」
ちょうど食べ終わったところなので、あたしがお皿を運んで食器洗い機に入れる。
義両親も夕食を食べ終わった後なので、今日の家事もこれで終わりになる。
「浩介、どうしたの？」
「うー」
お義母さんが声をかけても反応が鈍い。
食事の時はあれだけがっついてても、まだ身体の方は本調子じゃない様子ね。
うーん、浩介くんがここまでぐったりしちゃうのも珍しいわね。
「あら浩介、疲れているの？」
「うーん、優子ちゃんがすごくってー」
「まあ、優子ちゃんったら！」
お義母さんが、昨日浩介くんに投げ掛けたセリフを、今日はあたしに向かって言ってくる。
まあ実際の所、あたしが食べられちゃうケースの方がずっと多いし、そっちでも浩介くんはぐったり疲れちゃってるけどね。
「もう、お義母さん、昨日は浩介くんに同じセリフ言ってたわよ」
あたしも思わずほぼ反射的に突っ込んでしまった。
「あらごめんなさい。そう言えばそうだったわね」
お義母さんが、少しばつの悪そうな表情をする。
「まあこれなら、おばあさんも枕を高くして寝られるだろ」
「ええそうね」
結局、話題はそっちに移ってしまった。
おばあさんは、老人ホームにいるとは言え、やや老衰の気配こそ見受けられるが、それでもかなりの元気さを誇っていて、記憶力も、１００歳越えとしては周囲が驚くほどにいいらしい。
ともあれ、あたしは食器洗い機にお皿などを全て入れると、お風呂

に入る準備をする。
今日のお風呂は屋上で、お昼までにあたしたちが使った水を一旦抜いて、タンクの中で追い焚きをして戻すことになっている。
あたしは自室に戻り、壁に備え付けられたモニターで屋上のお風呂の進行状況を確認する。
それによれば、現在進行状況は６４％で、このままいけば後２０分くらいで出来るわね。
「ふう」
あたしはその間に、テレビを見ることにした。
土曜日にはブライト桜の高島さんが取材に来る。
インターネットではもうこの家が篠原家と石山家で二世帯住宅になっていることは特定されてしまっている。
それでも、かなりのセキュリティな上に、蓬莱カンパニーの関係者とあってここに突撃したりする人はいなかった。
ブライト桜の取材で、人々が落ち着きを取り戻してくれるかは分からない。
だけど、豪邸の中を見せた時に、「世界一の資産家のわりには物足りない」という反応になるのが、一番冷静だと思う。
今マスコミでは、最近は蓬莱カンパニーのニュースも一段落し、治安もよくなっているため深刻なネタ不足に苦しんでいるらしい。
おそらく高島さんの取材を引用する形で、あたしたちの豪邸の話は出てくると思う。
蓬莱教授と篠原夫妻の資産額は膨大な額に上っていて、一部のインターネットでは嫉妬の書き込みが書かれていた。まあ、何十兆円もの金を持っているというのはちょっと嘘だけど、配当金だけでも１０００億単位のお金だものね。
まあ、その手合いについても「不老にならなければもっと悲惨な目になるぞ」という周囲の脅しに、簡単に屈しちゃったけどね。
「屋上のお風呂が沸きました」
お、沸いたわね。
あたしはそのままエレベーターで屋上へ向かい、女性用の脱衣場へ

向かう。
屋根もついていて閉められる設計上、外からは見えないようにはなっているけど、念のために水着を着用することになっている。まあ、なので屋根を開けっ放しって訳だけどもね。
あたしは昼に着た白い水着をもう一度着用する。
もちろん、今回はお風呂に一人で入るため、誘惑用のパレオはつけないことになっている。
「ふう」
ガララララ……
熱帯夜の空気だけど、それでも3階建ての家の屋上は風が吹いてて涼しげだ。
冬は多分、かなり寒いとは思うけど。
「っ……！」
試しにプールサイドから足を入れると、それなりに熱いお湯になっていて、昼前とは大違いだった。
それでも手足から少しずつ足を慣らしていくとあたしの中で程よい温かさになっていく。
「疲れが取れるわ」
水着での露天風呂は、実は男時代を含めてはじめての経験で、第一印象としては、やっぱり水着で覆われている場所が温まりにくい感じがするわね。
あたしは、向こう側に見える夜景を見つめる。
東京の夜景自体は、とても見慣れたものだった。
だけどこうして、自宅の温水プールから眺めるのは、一段と印象が違った。
それはやっぱり、この暖かさがあるからよね。
静かな時間、この広いプール、さっきは浩介くんと泳いだこの場所の夜の顔は、全く違うものだった。
昼にあれだけあたしたちを疲れさせたこの屋上が、今はあたしを優しく包み込んで、癒してくれる。
「ふう」

少しのぼせてきたので、プールサイドに腰かける。
体を伸ばして天を向くと、一際きれいに輝く欠けた月が見えた。
月は人類が唯一たどり着いた他天体で、桂子ちゃんたちの推進する移住計画でも、最初の目的地にあげられている。
あたしたちの不老技術が、宇宙開発を促したことは、大いに誇っていいことだと思う。
「んー」
再び起き上がって伸びをして、もう一度お風呂に入る。
プールサイドのはしごにちょうどいい場所を見つけたので、肩を当ててごりごりする。
「あーん気持ちいいわ……」
肩のマッサージは、色々なところで出来るけど、効果も様々である意味でギャンブル的な楽しみもあった。
あたしはお風呂から上がり、体を拭く。
やや高い所から庭を見ると、池と橋、そして茶室と倉庫が小さく見えたけど、一番小さく見えたのは、浩介くんが読書していた木々の密集地帯だった。
あれだけ小さくても、中に入るとそれなりの広さがあるし、気温を下げる効果もあるのね。
木ってすごいわね。
そう思いながら、あたしは体を拭き終わると脱衣場に戻って水着から全裸になる。
体重計に乗ってみたら、相変わらず５０キロ後半で、体脂肪率も超がつく巨乳なのが手伝って３１％だった。
赤ちゃんの重さを合わせたら……６０キロ越えちゃうかしら？
まあ、仕方ないわよね。
お腹回りなどにも肉はついているけど、エロいむっちりという感じで、デブという印象を全く受けない体だった。
あたしはパジャマに着替え終わると、エレベーターで1階に戻って洗濯機に水着と服を入れて自室に戻った。
「優子ちゃん」

「え？」
浩介くんが、声をかけてきた。
一体何かしら？
「お皿、元の場所に戻し忘れてたから俺が戻しておいたぞ」
「あらしまったわ。見てくる」
あたしは大急ぎでリビングに行き、食器洗い機を見ると中には何もなく、棚の上にしまってあった。
「優子ちゃんうっかりしてたわね。浩介が片付けてくれたわよ」
「あ、あはは……」
何かおかしい、はめられたと思いつつも、あたしはもう一度廊下に戻る。
すると浩介くんが半笑いになっていた。
「そろそろ俺も復活しねえと行けねえからな。というわけで、俺の部屋に来てくれ」
「……はい」
あたしは従順になりながら、浩介くんの部屋に入る。
浩介くんの部屋は以前の部屋と同じような感じだけど、あたしの部屋と同じものがあった他、いくつかコレクションが増えていた気もする。
「さ、優子ちゃん。家事を手伝ってもらったごほうび、こっちに来てからは始めたてだね」
「はい……どうぞ……」
パジャマがズボンなので、浩介くんには、お尻を触られるか胸を触られるかのどっちかだった。
ガシッ……ムニンッ……
「あんっ」
浩介くんの右手が思いっきり開かれ、５本指１本１本に触られた後、ぐいっと食い込むと大きな円を撫でるように揉み回された。
「あー、優子ちゃんのお尻柔らかーい！」
「もー浩介くんのえっちー！」
「好きなくせに」

「ばかぁー」
浩介くんは、痴漢そのものの触り方で、やっぱり家事を手伝ったご褒美ということで、いつもよりテンションは高いわね。
「さ、じゃあ俺は寝るよ」
ひとしきりに触られ終わると、浩介くんが涼しい顔でそう話す。
「う、うん」
ともあれ、もう寝る時間だわ。
明日は会社だし、お互い早く寝た方がいいわね。
そう思い、あたしも自分の部屋に戻って眠りについた。
この2日間、せっかくの休みだったけど、あまり疲労回復とはいかなかった。
更に今度の土曜日には、高島さんの豪邸取材もある。
なのであたしたちが本格的に休めるのは、もう少し先になりそうだわ。
「仕方ないわよね」
ともあれ、あたしもいつまでも起きておらず、すぐに眠れるように、広いベッドの中に入り、冷房の聞いた心地よい部屋で眠りについた。

土曜日、高島さんたちの取材を受け、初めて玄関の応接室を使用した。
その時は、「釈迦に説法だとは思うけど、淡々と報じることで妬みを誘発させないように」ということを注意使用しておいた。
とはいえ、どう取り繕ってもあたしたちの家が都内の一等地、いや住宅という意味では「特等地」に立つ、巨大な豪邸であることに間違いはなかった。
最も、世界最大の資産家の家としてはかなり控え目なのも事実だったので、その辺りを報道することになった。
まあ実際の所、金を使っても使わなくても叩かれるのが金持ちだったりもするのよね。
あたしからすると理解に苦しむが、ここ１４年間の間にこれだけ景気がよくなっても、どうしようもなく頭が悪くて、就職にさえ苦しみ、

うだつが上がらない人は出てくるらしい。
そしてそうした人は得てして声だけは大きいのだという。
それでも、さすがに今の時代ならそういうことを理解できる訳だけど。
蓬莱の薬を飲んでも出口は見えず、さりとて高齢者福祉の全廃で飲まなければもっと悲惨な死に方をする。
それでも、蓬莱の薬の支持率は高かった。蓬莱の薬がもたらす好景気は、もはや誰の目にも明らかで、「自分が恩恵を受けられないのは自分が無能だから」というのを、よっぽどの無能でない限り気付くからだった。
ともあれ、あたしたちの豪邸の様子、その生活の様子は多く取材を受けた。
もちろん、あたしと浩介くんだけの秘密の部屋の存在は黙殺した。
代わりに２０畳ある各人の個室や、庭の様子、屋上のプール兼露天風呂などを写した。
特に贅沢なのが浴室で、かなりの水道代がかかることも示した。
ちなみに、駐車場スペースはあるものの、自動車はまだ買ってなくて、電車で通勤していることも話した。
理由としては「東京の道路は渋滞が多いので電車が速い」というものだった。
この豪邸に対してインターネットの反応としては、「世界一の資産家というには物足りない」「石油王とかアメリカの大富豪の豪邸とかもっとヤバイ」「使用人が１００過ぎたおばあさんの介護担当とたまに来る警備員と庭師だけってのが驚いた」といったもので、あたしの予想通り、「贅沢ってほどじゃないよな」という感じに収まることができた。
あまりに質素だと「経済を塞き止めている」だし、あまりにも贅沢すぎると「妬み」が強まるので、あたしたちの豪邸は結果的には「世界一の資産家としては控え目だよね」という感じに収まってくれたようでよかったわ。
夏休みの終わり、あたしたちは予定通り大学院の最後の単位を修得

し、後は卒業を待つばかりとなった。
秋からは、完全に会社に専念することが出来る。
学生ベンチャーだと、事業が忙しくて学校を中退するケースも多いけど、どうやらあたしは、きちんと博士課程を終えられそうでよかったわ。
季節は再び、暑い夏から涼しくも寒い秋へと移り変わっていった。

# 1本の電話

「それでは、報告を終了しますね」
「お疲れさまです余呉さん」
余呉さんからの新規支店進出計画の報告を受ける。
北は北海道から南は沖縄まで、満遍なく支店と出張所を建設していく。
とにかく引きこもり志向の人にも、蓬莱の薬は欲しいからね。
「優子ちゃん、ちょっと来てくれる？」
「え？　何かしら？」
会社の事業が順調に起動に乗り、幸子さんの出産祝いも一段落した10月のことだった。
世間では新しいノーベル賞受賞者候補のことで盛り上がっていて、もちろん本命は不老を発明した蓬莱教授だった。
そろそろ帰宅の時間と思っていた時に、浩介くんから突然呼び出しを受け、あたしは社長室へと向かった。
何でも、「重要な電話」があるらしい。
この時期に重要な電話というのは何かしら？
「失礼しまーす。あれ!?　会長まで！」
社長室の中には、蓬莱教授までいた。
一体何なのよ。もしかして、蓬莱教授がノーベル賞を取ったとかかしら？
「ああ、2人とも来たか。これから重要な電話がかかってくる」
蓬莱教授も、浩介くんと同じような話をする。
もう、何のことかわかっちゃったわ。
「あのーもしかして、蓬莱教授のノーベル賞受賞ですか？」
あたしはいたたまれなくなって答えを言う。
「んー、まあ正解ではあるな」
蓬莱教授が涼しい顔で話していて、その真意は読めない。
まるで「ノーベル賞何て大したことじゃない」と言わんばかりだった。

「そうですか、おめでとうございます蓬莱さん」
浩介くんが祝福する。
実際、ノーベル賞の受賞、しかも2回目ともなれば蓬莱教授ほどの大学者でも嬉しくないはずがないわよね。
「はっはっは、どういたしまして」
ジリリリ……ジリリリ……
突然、部屋の電話の呼び出し音がけたたましく鳴った。
「お、かかってきたぞ、優子さん」
「は、はい」
蓬莱教授に促され、あたしは恐る恐る受話器を取ってみる。
「Ｈｅｌｌｏ．」
見知らぬ男性の声だった。
「は、ハロー」
英語はほとんど使ったことがなく、あたしはぎこちない発音で応対する。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｍｒｓ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ？」
「あー……い……Ｙｅｓ．」
突然の電話に困惑しつつ、あたしが応対する。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ！」
わわっ、と、突然大きな声で話さないでよ……
「Ｙｏｕ　ａｎｄ　ｙｏｕｒ　ｈｕｓｂａｎｄ…　Ｄｒ．Ｈｏｒａｉ…　Ｎｏｂｅｌ　ｐｒｉｚｅ…　ｙｏｕｒ…」
えっと、早口でよく分からないけど、あたしとあたしの旦那、つまり浩介くんとがノーベル賞を受賞したっていっているのよね？
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」
適当に相槌を打ってごまかしつつ、電話が終わった。
浩介くんの様子を見ると、知らないみたいね。
「どんな電話だった？」
蓬莱教授は、どうやら既に知っていたらしい。
「えっとその、ノーベルがどうこうって」
電話の主は、あたしと浩介くんが夫婦でノーベル賞を受賞したこと

を言っていた。
「その通り！　優子さんと浩介さんは、今年のノーベル生理学・医学賞を、俺と共に受賞することになったんだ」
蓬莱教授がパンと手を叩いてとんでもないことを言ってのけた。
「え……」
あまりにも現実場馴れした事実に、浩介くんが固まってしまう。
確かにあたしは、蓬莱の薬を作る上で、最後の障害を乗り越えた。
浩介くんの改良によって実用化が格段に早まり、こうして今や一般の人でも不老になれる道が開かれている。
蓬莱カンパニーの大株主になったことで、あたしたちは世界一の、あるいは蓬莱教授に次いで世界2位の資産家になった。
その事で随分と経済誌からも取材を受けて、世間でも大きく騒がれたし、あたしたちの豪邸も、高い塀に阻まれているとはいえ写真を撮っていく人がとても多い。
その時も衝撃的だったけれども、今のこのノーベル賞受賞というのはもっと衝撃的だと思う。
ノーベル賞と言えば、「科学界の最高の栄誉」であり、「お金で買えないもの」の筆頭格でもあるもの。
「あー、2人とも大丈夫か？　そんなに驚くことでもなかろう？　いつか声がかかることくらい、覚悟はしていたんじゃないか？」
蓬莱教授が心配そうに言う。
「その……目を背けてました。まさか自分がノーベル賞なんて、あるわけないってずっと……」
「お、俺も」
あたしも浩介くんも、「蓬莱の薬でノーベル賞を取る可能性があること」に気付いていないわけではなかった。
これだけの大きな研究に貢献すれば、むしろ「取るわけがない」と決めつける方がよっぽど変な行動だと思う。
それでも、やっぱりノーベル賞というその権威が、あたしたちの判断を誤らせた。
世の中の圧倒的大多数の人ならば、むしろ権威のある大学教授のよ

うな人ほど、「自分がノーベル賞を取れる何て思えない。それは現実逃避だ」と思うことだろう。
だけど、今回のケースに限って言えば、現実逃避をしていたのはあたしたちの方だった。
「ふう、無理もない。俺だって1回目のノーベル賞の時は、まさか脇道の研究でノーベル賞をいただけるとは思っていなかったさ。いや、可能性を考えてなかったと言えば嘘になるが、受賞があんなに早くなるとは思ってもいなかった」
蓬莱教授が椅子から立ち上がり、浩介くんが使っている社長室の机に寄りかかった。
そう、蓬莱教授でさえ、最初はまさか自分の研究がノーベル賞ものだとは確信しなかったのだ。
「だがこの研究はどうだ？　どこからどう見てもノーベル賞……いやノーベル賞でさえ役者不足と言えるだろう？　現に、これまでのノーベル賞受賞となったどの業績よりも、偉大だとは思わんかね？」
「えっとそれは――」
浩介くんが言葉に詰まる。
蓬莱教授の言っていることは正論だった。
「逆に聞こう。この蓬莱教授と、優子さんと浩介さんが発見した不老研究よりも偉大なノーベル賞の発見はどこにあるかね？」
「そ、それは……」
どう贔屓目に見たって、あるわけがない。
「確かに、この研究は俺の功績が大きい。だがこの研究そのものが偉大なんだ。今回受賞するのはここにいる3人だが、本来なら研究に関わった10人くらいを例外的に受賞させてもいいレベルのものだ、そうだろう？」
「はい」
全く、その通りだった。
蓬莱カンパニーの株主たちが、まだ世界進出もしていないような段階で世界最大級の資産家になっているのも、それだけ影響力の大きい事業だから。

更に蓬莱カンパニーの不老技術の影響のお陰で、日本は今後１００年間、あらゆる分野で国際社会を支配するとさえ予想されている。
どう見ても、ノーベル賞ものの研究だった。
それだけ大きな研究が、蓬莱教授１人の受賞で収まるはずもなかった。
「功績は俺が２分の１、お２人でそれぞれ４分の１だ。ノーベル賞の賞金は……今の俺たちには誤差みたいなもんだが、まあそれよりも名誉だろう？」
「ええ」
コンコン
「はーい」
「失礼します」
浩介くんの秘書の男性が社長室に入ってきた。
「マスコミ各社から、相次いで当社へ取材依頼が届いております」
「おや、もうお出ましかい。さすが現代社会は情報が早い」
蓬莱教授は不敵な笑みを浮かべながら口元を抑えていた。
「わっ、本当だ」
浩介くんがＰＣを開くと、「蓬莱氏と篠原夫妻がノーベル賞」という見出しのニュースがもう流れていた。
記事の本文では、不老研究によってあたしたちがノーベル賞になったことや、２７歳での受賞はノーベル生理学・医学賞では最年少であることや、あたしのノーベル賞は、日本人女性としては初ということにも言及されていた。
あたしの中で、ようやく現実が芽生えてくる。
どうやら本当に、あたしがノーベル賞に選ばれたらしい。
ブー！　ブー！　ブー！
すると今度は、あたしの携帯が振動した。
電話の主は想像通りの人だった。
ピッ
「はい」
「もしもし優子？　自宅前が大変なことになったわ。とりあえず『今

は会社にいる』とだけ伝えて出ていってもらったわ」
「そう、とにかく、自宅には近付かせないで。いざとなったら強健を発動するわ」
「ええ、そうしたくれるかしら？」
あたしたちはいざとなったら、「往来や業務を妨害したら薬売らない」を発動する可能性にも言及した。
これならば、マスコミは簡単に追い払える。
不老研究については、既によく知られているし、あたしたち自身も有名人だから、今更ノーベル賞であれこれ私生活がクローズアップされることはないだろうと思う。
あたしは電話を切ると、マスコミへの対応を始めることにした。
「比良さん、もう知っていると思うけど、あたしたちはちょっと大事な用事が出来ちゃったから、しばらく留守をお願いします」
「ええ、分かっています。任せてください、篠原さん、あなたは本当に、ＴＳ病の誇りです」
比良さんとやり取りしてから、あたしたちは緊急記者会見を開く運びになった。
最寄の記者会見場へ向かう駅までの道で、新聞各社が「号外」を配っていた。
手にとってみると、それは「篠原夫妻　蓬莱氏　ノーベル生理学・医学賞」という見出しで、あたしたち３人の写真や、不老研究の業績、蓬莱カンパニーのことや、世界最大の資産家としての評価も含まれている。
「はは、やっぱり何か、これって夢じゃねーのって思えてくるぜ」
でも、これは夢じゃない。
漫画や小説の世界なら、確かに「夢オチ」というのは存在するが、もちろん現実にはこんなリアルな夢は存在しない。
「ねえ、あの３人」
「間違いねえぞ、ノーベル賞の３人じゃないか！」
「本当だ、篠原夫妻に蓬莱教授！」

町行く人たも、あたしたちを見て大きく注目してくる。
うー、明日以降の通勤、どうしようかしら？
自動車は事故率高くて遅いから嫌だけど、電車で通勤してたら目立ちすぎちゃうわ。
「ここが記者会見場だ」
蓬莱教授の誘導で進むと、あたしたちは会見場の控え室に通される。
いわゆる「謝罪会見」でもないし、することと言えば、ノーベル賞受賞に際しての記者たちの質問に答えるというもの。
あたしと浩介くんとしては、「信じられない」というものだろうし、蓬莱教授としては「まあ、受賞するだろうな」というものになると思う。
それでも、やはり全くのだんまりというのは、よくないもの。
「さて、始まる……か」
記者会見では、既に多くのメディアが集まっていた。
あたしは、記者会見の最中にふと浩介くんが言った「優子ちゃんは最高のお嫁さん」という言葉で思い出した。
今の豪邸で暮らし始めた時にも、浩介くんが同じことを言っていた。
今はどうだろう？　これだけ男を立てる嫁でありながらも、実際にはノーベル賞まで受賞する程に大きな業績を残したことで、より一層理想の嫁に近づいたかもしれない。
いや、もしかしたら、頭がよすぎる女性は敬遠されちゃうから、もしかしたらマイナスかもしれないわね。
まあ浩介くんもノーベル賞だし、きちんと釣り合いがとれているわよね。
「優子さんは今回のノーベル賞はいかがですか？」
「まだ、ちょっと現実感がありません」
あたしは、そう答えるのが精一杯だった。
大学生の頃、学園祭で見てきた蓬莱教授のノーベル賞メダルは、あ

たしにとっては縁のないものとばかり思っていた。
だけど、今はあのメダルをすぐに受けとることが出来る立場にある。
あたしは、意識がボーッとしながら、記者会見を受けた。
そして思うのが、ノーベル賞というものはあたしたちが思った以上に大きな賞だということだった。

「信じられるかい？　このどう見ても１０代前半にしか見えない２人が２７歳にして世界一の資産家でノーベル賞学者なんだぜ！」
家に帰って、あたしは自室でＣＳ放送で海外ニュースの様子を見ていた。
家に到着するまでに、母さんとお義母さんが人払いをしてくれていて、あたしたちは特に支障なくスムーズに家に帰ることができた。
ちなみに、今は入り口に警察官のガードマンが立っていて、マスコミや野次馬を威圧している。
最も、あたしたちが現れたら、さすがに野次馬たちもまずいと思ったのか、特に写真なども撮らずにそのまま見ているだけだった。
テレビでは、「蓬莱の薬」がテーマらしく、あたしたちの若く見える容姿について、色々ともてはやしていた。
ノーベル賞の授与式はもう少し後になる。
もちろんあたしたち３人だけではなく、あたしたちの家族や親しい人を招くことにはなっている。
「蓬莱の薬は、人をいつまでも若く保ってくれるんだ。ただ、日本人に多い病気をベースにしている上に、諸般の都合もあって俺たちが享受できるのは１００年後だとよ」
海外のニュースでは、蓬莱の薬の恩恵を自分達が受けられないことに不満を持っているらしい。
海外への解放は西暦２１２６年を予定していて、また６０歳以上は保証外となるため、計算の上では、海外の人が恩恵を受けられるのは２０６７年生まれ以降ということになる。
もちろんそれ以上の年齢でも蓬莱の薬は飲めるけど、現実的に考え

れば、２０世紀以前の生まれ、いや２０５０年以前の生まれは、全員日本人ということになる。
彼らは「オールド世代」とも言われるだろうし、もはやＴＳ病患者しか生存していない１９世紀以前の生まれとなると、もっと重宝されそうな気がする。
ましてや１６世紀前半生まれの永原先生なんて、最たるものだと思う。
「にしても、若作りしすぎでしょこの２人？」
女性アナウンサーが、特にあたしを見て嫉妬の目で話す。
ふふ、そんなんじゃ行き遅れちゃうわよ。
「いやいや、優子さんはＴＳ病といって、１７歳の時から不老だし、旦那さんの方も１８歳になってからは不完全な薬を飲みつつで殆ど老化してないんだ」
男性アナウンサーの方がそう付け加える。
どうやら、あたしたちが幼く見えるのは気に入らないらしい。
ふふ、授賞式が楽しみね。行き遅れたおばさんたちの嫉妬が、あたしたちを包み込むかしら？
ふふ、それならちょっとだけ、楽しみになってきたわね。
っていけないいけない。そういうことで喜んじゃダメよ優子！
ノーベル賞取っても「優しい子」でしょ？
「おっと、そろそろご飯ね」
呼び出し用のパネルモニターが光ってるのを見て、あたしはテレビを消して食卓へと向かった。
今日の食事は鉄板を使った焼き焼きで、野菜はどれも国産の最高級品、お肉もあたしたちが以前食べた神戸ビーフに勝るとも劣らない、Ａ５ランクの肉ばかりを使った名産肉で揃えてある。
近くのスーパーがこうした高級品を中心にメニューを揃えていて、以前の住居から持ってきた食料が底をついてからというもの、高級品での買い物が増えた。
「一度高級品生活になると、なかなか戻れないわよね」
以前の計画では、中流向け食品も買おうと思っていたけど、下手に

中流向けの味に慣れて、それを知っているあたしたちからすると、高級品の絶品さを味わってしまい、しかもその食費を十分に出せる金額があるとなれば、自然と高級志向になるのも当たり前だった。
「うん、そうよねー、なかなか戻れないわ」
お義母さんは、特性の焼き肉用のタレと、野菜などに使う今までのタレを両方用意し、お皿に入れていく。
鉄板も鉄板で今まで以上に高性能で、早く焼き上がる上に美味しいものになっていた。
こうした鉄板焼きでは、どうしても油などの問題もあるけど、部屋が広い上に換気扇の性能も高いのがいい。
「んー、おいしいわー」
林間学校などでも、こうした鉄板での焼き焼きはしたことがあったけど、今以上においしい料理はない。
料理人の腕はそこまで変わらなくて、素材だけよくなっているのだから、当たり前と言えば当たり前だった。
毎日毎日、優雅に会社に出勤しては社員たちに指示を与え、経営も順風満帆で、最高級のおいしいご飯を食べ、２０畳の広い浴場を独り占めし、２０畳の広々とした個室で眠ることが出来る。
夏場はプールで浩介くんと遊んで、その度に浩介くんと気持ちよくなれた。
１２０坪の庭園は秋の顔を見せてくれて、以前にはお茶の先生を招いてあたしたちで和服を着ながらお茶会に何度かチャレンジしたこともあった。
これ以上ない幸せな生活、それはあたしと浩介くんが、「不老技術の完成」という大偉業を成し遂げた対価だと思う。
幸せな生活だけじゃない、お金だって、毎年配当金だけで１０００億円以上が入ってくる。
更に資産額のランキングでも、あたしたちは世界最大の資産家だという名誉まで貰った。
ビジネスマンとしての金銭的な名誉だけではない、学者としての最高の名誉であるノーベル賞まで貰った。

今この世界で、あたしより幸せな女の子は、いないんじゃないかと思えてくる。
「……」
「どうしたの優子ちゃん、浮かない顔して、もしかして疲れちゃった？」
お義母さんがちょっと驚きながら言う。
「う、うん……そんな感じ」
「無理もない。ノーベル賞だなんて言われたら、誰だって疲れるさ」
浩介くんが、フォローを入れてくれる。
旦那との関係も、実両親との関係も、義両親との関係もみんな良好で、とっても仲がいい。
これだってとても幸せなことのはずだわ。
だけど、理屈で分かっていても、どうしてもあたしの中ではもやもやしたものが残っている。
これ以上何かを求めるのもおこがましいのに、まだ何かを足りないと欲している。
人間の欲望はひどく醜いと思いつつも、その欲望を成就させたからこそ、今の幸せがあるのも事実だった。
「まあほら、そう言うときは、たくさん食べて元気つけるのよ」
のんきなお義母さんの発言に、あたしも落ち着きを取り戻した。
そうね、今はこの、おいしい料理を楽しみましょう。

## 日程の確認

翌日以降も連日連夜、ノーベル賞の話題で持ちきりだった。

何分「世界一の資産家がノーベル賞受賞」というそのインパクトもさることながら、あたしたち篠原夫妻、特にあたしは小谷学園の頃から、ＴＳ病の活動家として有名だったから。

あたしは殆ど、協会のカウンセラーとしての活動もできなくなっていた。

幸子さんの出産のことも、一時期は後回しにして忘れてしまうくらいに熱中していた。

最も、幸子さんも、そして既に結婚済みながらも来年初めに結婚式をあげることになった歩美さんも、あたしと浩介くんのノーベル賞を祝福してくれていた。

それだけじゃない、蓬莱カンパニーの株価がまた連日連夜暴騰してあたしたちは再び5倍と2倍の株式分割を実施し、一旦株価を2万円にした所で、ようやく調整が入り、現在は1万５０００円程度で推移しているが、それでも分割前の１５万円に相当するわけだから、あたしたちの資産は夫婦合わせて４４兆９７００億円ということになった。

既に時価総額は１５０兆円で、世界の企業の中でも1位となっていた。

このまま行けば、ファミリーでは篠原家が、個人では蓬莱教授が世界初のトリオネア、つまり資産が1兆ドル以上になるのは時間の問題だった。

経営陣のノーベル賞という好材料が重なったのもあるけど、上場したての日よりも資産が３０倍以上に膨らんでいる。

永原先生からも祝福が届いていた上に、「ノーベル賞の授賞式に篠原さんと一緒についていきたい」とも言っていた。

うーん、永原先生参加できるのかしら？

「さて、これから話すのは12月１０日の授賞式までの日程だ」

「はい」

１１月に入った今日、会社に蓬莱教授が来て、これからの日程について話してくれるという。
ちなみに、あたしたちは特例でノーベル賞発表後に大学院をすぐ卒業させ、博士論文と博士の学位を授かることになった。
というのも、ノーベル賞の授与式で「Ｍａｓｔｅｒ」というのは格好がつかないだろうし、面目を傷つけるだろうという蓬莱教授と佐和山大学の教授会の判断だった。
あたしたち２人だけの卒業式の時には、佐和山大学の先生たちはみんなあたしたちにヘコヘコするばかりか、卒業証書を呼び方まで「篠原先生」に変わっていて驚いた。
つい昨日まで学生で、一応大学内では蓬莱教授以外の教授とも身分関係はわきまえていたはずだったのに、あたしたちがノーベル賞となった途端、まるで昔からの偉大な学者に接するような態度に変わっていて驚いた。
とはいえ、ノーベル賞という権威、そしてそれを取ることの難しさを考えれば、あたしは彼らを責めることは出来ないと思う。
「えっと、スウェーデンまで行くんですっけ？　どの飛行機に乗るんですか？」
そうね、まずはそこが気になるわね。
「実はだ。俺は今持ち前の資産を切り崩して、新しく『ボーイング７８７』を買ったんだ。本来なら時間はかかるんだが、蓬莱カンパニーということで、別の会社が融通してくれたんだ」
蓬莱教授が、さも当然のことのように言ってのける。
「え⁉　まさか自家用ジェットに７８７ですか？」
そもそもボーイング７８７って、ああいうのは航空会社が使うもので、自家用ジェットに使うような代物じゃない。
その上ボーイング７８７と言えば、「Ｄｒｅａｍｌｉｎｅｒ」とも言われ、国際線にも多く使われる、ボーイング７９７に次いで比較的新型の飛行機のはずよね？
「おいおいおい、仮にも俺たちは世界一の資産家だぞ⁉　自家用の大型機を持ってなくてどうするんだ？」

あたしたちの驚いた様子に対して、蓬莱教授から逆に突っ込まれてしまった。
でも確かに、今後世界進出する際には、自家用ジェットが必要になるわよね。
とはいえ、それにしたって小さめの自家用ジェットにするべきで、１００人以上が乗るような飛行機をまるごと買っちゃうってのは恐ろしいわ。
「は、はい」
「んまそういうことだ。それにノーベル賞の授与式はスウェーデンのストックホルムで行われることになっている。日本からはスウェーデンへの直行便が存在しないから、どこかで乗り継ぎをせにゃならんわけだが、我々の自家用ジェットなら、問題なく直行できるわけだ。しかも俺達で贅沢に飛行機を独り占めだ」
蓬莱教授が悠々と説明する。
飛行機を独り占めといっても、今まで乗った機内のことを考えると、そこまでノリノリにはなれない。
まあ、改装はしているとは思うけど。どういう改装になるのかしら？
「今日に向けて、今はゆっくりと余裕を持った日程で整備を行っている。更にパイロットについても、通常交代パイロットも合わせて３名の所を、新人からベテランまで３組６名体制でいく。更に機内も至れり尽くせりのサービスだぞ」
蓬莱教授が笑いながらそう話す。
もちろんあたしたちがエコノミークラス何て使ったらそれこそ冷やかしそのものだし、ファーストクラスでさえ少し物足りないと感じてしまうかもしれない。
それならば、自家用ジェットで何百人が乗るボーイング７８７を丸ごと借りてしまうのが吉だと思う。
「今回はＴＳ病という病気を更に全世界に広めるべく大きな広報ともなる。俺たち３人以外でこの飛行機に乗るのは優子さんと浩介さんの家族、更に永原先生と比良さん余呉さんの１０人だ。ちなみにキャ

ビンアテンダントは1人につき1人充てられるぞ。乗客１０人乗員１３人だ」
「え!?　ちょっと、それだと会社の穴が――」
「大丈夫だ。俺達がノーベル賞のために会社を開けている間は、さすがに全面公休にするよ」
浩介くんの反論に、蓬莱教授がすかさず応対する。
確かに、社長会長専務常務更には相談役に取締役1人抜けちゃったら、会社の対応力は著しく落ちちゃうけど、ノーベル賞の授賞式はそれに値する大きなイベントであることは間違いないわね。
「でだ、飛行機にはもちろん万全を期してほしいし、色々と遅れたりもするだろう。それに、最悪授賞式だけ出席できればいいと俺は思っているが、授賞式以外にもやることはある。だから日程には3日の余裕をもって出発することになる」
「はい」
集合空港は成田国際空港で、そこまでは山手線と京成スカイライナーで普通に成田空港まで移動することになった。
成田空港では、プライベートジェット専用の搭乗口に行ってそこで色々な手続きをした後、機内に入る。
飛行機での移動は概ね1泊2日で、時差ボケなどを治しつつ、スウェーデンを観光してからノーベル賞の各種式典に参加することになる。
式典が終われば、再びスウェーデン側の空港から帰路につく。
「1つ注意して欲しいのは、スウェーデンは治安が非常に悪い。その上俺たちは不老研究でノーベル賞を取る。未だに反対派の残党が潜んでいる可能性もあるから、単独での行動は慎んでほしい」
「ええ」
スウェーデンが治安悪いってか、日本の治安がかなりいいだけだと思うけど。
知らない異国の地、用心するに越したことはないわね。
「それに、蓬莱の薬を飲んでなくとも、特に日本人は若く見られるからな。永原先生には護身術の心得があるそうだが、優子さんはそうもい

かねえだろうし、な」
「分かってます」
ともあれ、観光には注意した方がいいわね。
いや、もしかしたら授賞式当日の方が問題かしら？
「もちろん、ガイド兼通訳はつけるぞ。英語とスウェーデン語は近いとは言え、みんなが話せるわけじゃねえからな」
幸いにも、付き添いに通訳がいてくれることになったけど。
「それから、以前来た時にも言ったとは思うが、あの時期のストックホルムは夜が長い。もちろん太陽が覗くこともあるが、殆ど一日中夜だと思ってもいいくらいだ」
「ええ、知ってます」
12月10日と言えば、殆ど冬至に近い上に、スウェーデンは日本と比べてかなり北極に近い。
となれば、それこそ一日中夜でもおかしくないわよね。
まあ、極夜になるにはもう少し北に行かないといけないらしいけど。
「知識で知っていても、実際に体験すると驚くぞ。俺も1回目の時には戸惑ったものだ。まあだからこそ、治安もよろしくないんだ。どちらにしても、感覚が狂うから気をつけろよ」
「はい」
ともあれ、警戒しておいて損はないわね。
「それから授賞式当日だが……あー服装に関しては、一応ドレスコードはあるらしいが、そこまで俺はとやかく言うつもりはねえぜ。特に優子さんはな」
「そ、そうかしら？」
ああいうのって、色々と服装規定に厳しそうなのに。
「特に俺たちは不老の薬を作ったことに対する功績でノーベル賞を受けるんだ。むしろ幼い服装の方がアピールになると俺は踏んでいる」
蓬莱教授が面白いことを言う。
幼い服装にするということは、ノーベル賞を受賞するような学者が集まるところでは、当然かなり浮くことになる。

でも、あえてそうすることで、あたしが文字通り「永遠の美少女」であることをアピールできるのね。
あたしも、そういう格好をするのは好きだし、いいかもしれないわね。
「授賞式の後には晩餐会もあるんだ。特にそこではそういう服で行って、蓬莱の薬というもののすごさを連中に思い知らせてやるんだ。実際そのためにも永原先生たちを呼ぶんだぞ」
蓬莱教授が胸を張りながら言う。
ＴＳ病患者は、蓬莱の薬以前からの不老の身ではあるけれども、蓬莱カンパニーがまだ始まったばかりなのを考えれば、不老をアピールするにはやはり「三長老」の協力が必要不可欠だった。
「確かに、永原先生たちを見たら、欧米人はきっと驚くわ」
昔からジョークとして「日本人は老けない」何て言われていたけれど、蓬莱の薬ができていよいよその傾向が強まってくる。
老けない体になれば、女性たちは特にもっと若々しくなれる。
それは巡りめぐって、男子にモテる「いい女」が増えることになる。
現在、蓬莱の薬が日本人限定ということになっているので、国際結婚が急激に減っていると言う。
それはそれだけ、恋愛の競争相手が少なくなっているという意味でもあり、逆に言えば恋愛ゲームでも、不老人間はそうでない人間に対して、圧倒的かつ絶対的な強者になっちゃったのよね。
恐らく、今後老人不在となった日本を見て、外国人観光客はとても羨ましがると思う。
「驚くなんてもんじゃねーだろ？　俺たち日本人から見ても若く見えるんだぜ？　向こうからすれば言わずもがなさ。おっとそうだ。晩餐会の最後には、英語でのスピーチがあるから、きちんと考えておくんだぞ」
「は、はい……」
うげえ、大変だわ。
晩餐会が終わると、今度はホテルだと言う。
泊まるホテルはもちろん警備の行き届いた最高級ホテルで、授賞式

が終わった翌日には、空港で待っている航空会社の職員さんと共に、成田空港へ帰還し、そしてそこからはまた普通にスカイライナーなどを使って渋谷に帰還することになった。
「以上が、１２月６日からの日程だ。覚えておいてくれ」
「はい」
まとめると、１２月６日に出発し、現地時間の同日にストックホルムに到着、７、８、９と休みを入れ、１０日に授賞式に参加、そして１１日午後にここを出て、日本時間の１２日昼に渋谷に到着すると言う日程になる。
時差ボケ解消のために、休みは１４日まで取るとして、あたしたちはノーベル賞のために９日間休みが必要になるわね。
そう言うと、蓬莱教授は会社を去っていく。
あたしたちも、ノーベル賞でしばらく会社を離れないといけないことを、早めに社員に通知しておく。
永原先生に、比良さん余呉さんの方も、既に知っていたので問題はなかった。
ちなみにこの９日間は会社全体でも「ノーベル休暇」と称した特別所定休日とすることになった。
もちろん、最低限の留守居役は必要で、会社の指揮は、取締役の和邇先輩に任せることになった。

「ねえあなた」
「ん？」
帰り道、あたしは浩介くんと授賞式の話をした。
「授賞式は、どんな服がいいかしら？」
一応浩介くんや蓬莱教授にはタキシードというドレスコードがあるけど、あたしは日本人女性として初めての受賞者だし、蓬莱の薬という業績のためにも、周りよりも子供っぽい服にしたいのよね。
「そうだなあ……やっぱり『少女性』を強調したのがいいな。あの赤い服とか」
浩介くんが、あたしにとって１０年来のお気に入りの服を指定して

くる。
ちなみに今は、デザインそのままにもっと素材がよくて着心地のいい2代目になっている。
「あーいいわねー声も少し高くしようかしら？」
声を高くすると女の子らしさが出てイメージアップって言うものね。
「うんうん、女の子らしくするのは優子ちゃんらしくていいと思うよ」
まず間違いなく、かなり浮くとは思うけど、「永遠の若さ」を開発してノーベル賞を取ったんだから、バチが当たらないわよね。
まあ幼いとバカにされるって言う人もいるかもしれないけど、今のあたしはノーベル賞だし、幼い見た目や振る舞いでどうこう言われる筋合いはないわね。
それにあたしには、幼い頃の女の子としての自分がないことに、未だに悲しむことがある。
お人形さんやぬいぐるみさんでたくさん遊んだけれども、それでも満たされることはなかった。
多分、これからもそうだと思う。
それならば、自分に正直な格好をしていきたいと、あたしは思った。
小さな女の子が着ていくような服という意味で、あの赤い服と赤い巻きスカートは、何よりも適任だった。

「ただいまー」
「おかえりー優子ちゃん」
豪邸に引っ越してからは、あたしは玄関の扉を開けて挨拶するのではなく、まず自室で荷物をまとめ、リビングに入ってから挨拶するようになった。
これは、この家がとても広いからというのが、まず第一にある。
それに今では、義両親も実両親も、あたしたちのことは完全に信頼しきってくれている。
家の中では、4人ともあたしたちに気を遣ってくれているのか、ノーベル賞の話題を殆どしてこない。

実両親と義両親も、「ノーベル賞受賞者の親族」という枠で参加することになっているから、あの飛行機に乗ることはもうみんな知っている。

おばあさんはさすがにお留守番だけど、介護の人が付きっきりで面倒を見てくれるみたいなので、心配する必要はない。

唯一気がかりなのは、最近少しだけ、庭での運動が増えたこと。

１００歳過ぎて元気なのはいいけれども、さすがに「年寄りの冷や水」になりかねないもの。

あのノーベル賞発表の後、あたしたちはもう何度目かもわからない回数で「一躍時の人」になってしまった。

そのせいで、通勤中にいきなりサイン求められたりしたこともあって、正直に困惑しているのも事実だった。

リムジンを頼むことも検討しつつ、これだけのお金がありながら未だに「定期代がもったいない。払い戻すのも面倒くさい」などというバカみたいな理由で電車通勤を続けていた。

まあ、「線路の上は道路より安全だから長寿になれる」というのも大きいんだけどね。

また、連絡の少なかったクラスメイトたちからも、一斉に「ノーベル賞おめでとう」のメールが届いた。

驚いたのは、あたしが女の子になってからのことは知らないはずの小学校、中学校時代の知り合いからも、そうした手紙やメールが届いたこと。

優一の時点で既に疎遠化していたのに、あたしにたどり着くのはなかなかすごいわよね。

まあ、あたしがＴＳ病であることは、既に知れ渡っているけれども、性格の変わりようを考えたら、優一と優子を結びつけるのって難しいと思うのよね。

……まあいいわ。

今日のご飯も高級食材を惜しみ無く使った料理で、あたしは幸せなうちに食事を終えた。

だけど、ちょっとだけまだ、パズルのピースが足りない感覚も、残っ

ていた。
それが何なのかは、考えないことにしよう。
今はとにかく、連日連夜起こっているあたしたちの「ノーベルフィーバー」を横目に、授賞式の準備をしなきゃ。
まずはとりあえず、現地に持っていく服とか、その他観光会社に行って、名所なんかも考えておかないといけないわね。
せっかくノーベル賞授賞式に出るわけだもの、夜が長くとても寒いといっても、観光も楽しまなきゃね。
あ、防寒着も、今あるのじゃ不十分かしら？　その辺り、浩介くんともよく相談して、買い物しておかなきゃ。
あ、マスコミの取材については、「既に多くの取材に出た」ということで、最初は激しかったけど、すぐに沈静化してくれました。
ノーベル賞受賞前から一般でも有名人ってケースは、科学分野だと少ないものね。で、そういう人は話も広げ辛いのかも。

## ２０２７年１２月６日　成田への道

「……よし、みんな持ったな。悪い。留守を頼む」
「ええ、分かりました。お任せください」
今日は２０２７年１２月６日。今日はあたしたちが４日後に開かれるノーベル賞の授賞式に出るために、家を出る日になっている。
この間、篠原家も石山家も留守になるので、庭師さんと警備員さん、更に１人残ったおばあさんのお世話をする介護の人、そして今回雇ったハウスキーパーさんたちが連携して留守居役を勤めることになっている。
滞在に当たっては、空き部屋をいくつか活用する他、１階のお風呂と２階のお風呂をそれぞれ男女別に仕分け、また現状回復を条件にトレーニングルームとオーディオルーム、マイシアターの利用も許可した。
どうせ留守にしている間にフルで使われても痛くはないので、ケチ臭いことはしないことにした。
まあ、彼らも遠慮しちゃうとは思うけど。
「それじゃあ行ってきます」
「「行ってらっしゃいませー」」
大勢の人に見送られ、家を出たあたしたちは渋谷駅を目指す。
いつも通勤で使っている神泉駅から出発しようかとも思ったけど、渋谷からは地下鉄なので乗り換え時間がかかることを鑑みて、渋谷駅まで歩くことにした。
ちなみに、パパラッチなどのマスコミは来ていない。
日本にあるスウェーデン大使館の方に対しても、「無許可の盗撮等は蓬莱カンパニーにおいて厳罰を持って処する」と伝えてあるので、まず間違いなく大丈夫だと確信できる。
マスコミは見境ないと言っても、やはり何の利害関係もない一般人よりはマシだもの。
とはいえ、６人でキャリーバックに大きな荷物を持てば嫌でも目立つ。

ましてや、あたしと浩介くんの姿を見れば、それが「ノーベル賞の篠原夫妻」だということがわかるため、スクランブル交差点に差し掛かった時に撮影する人が多く出て少し騒動になった。
浩介くんが一喝して人だかりを強引にどけさせる一幕もあって、
「やっぱり神泉駅の方がよかったかしら？」何て思いもした。
「こっちよ」
忠犬ハチ公の銅像と、昔の路面電車の保存車両を通り抜け、改札を通り階段を登って山手線ホームへ。
渋谷と日暮里だと、ほぼ山手線の向かい側なので、どっちの周りで進むかは悩ましいところだった。
ＩＣカードをチャージして電車の中に入る。
山手線の車内でも、あたしたちがノーベル賞の授賞式と晩餐会に行くとわかっていて、あちこちでひそひそ話が聞こえてくる。
「やっぱり目立つわね」
母さんが嫌そうな顔をして話す。
「そうだなあ、しばらくの辛抱だぜ」
妨害されることはないと思う。
ただキャリーバックはみんな大きいので、座ることが憚られるのが難点よね。
一応渋谷から成田エクスプレスというルートもあるけど、所要時間の面で難点があるのでこちらを選んだ。
「次は日暮里、日暮里です――」
「あ、降りるわよ」
あたしの号令と共に、あたしたちは山手線の列車を降りて、日暮里駅へと到着した。
ここからは京成スカイライナーに乗り換えることになる。
そして、この日暮里駅前で合流するのが――
「通して通して」
「うおー、篠原夫妻じゃねえか！」
「ノーベル賞だ！　偉大な蓬莱カンパニーの大富豪たちだ！」
一般民衆の人だかりで、すぐに分かった。

もちろんこうなることは折り込み済みだったが、１０人という団体での行動はさすがにあれだと思って、あたしたちはあえてここでの集合を選んだ。
あたしたちは人だかりを避けつつ、中にいる蓬莱教授たちと合流する。
「おお、篠原さんたちも来たか」
そこにいたのは、あたしたち６人に加え、蓬莱教授と永原先生、比良さん余呉さんの４人だった。
永原先生と蓬莱教授は著名人で、比良さん余呉さんも、「知る人ぞ知る」ＴＳ病の中でも長寿の部類に入る人だった。
ちなみに、当人の日程と飛行機の都合もあってか、蓬莱教授の家族は別行動らしい。
まあ、ファーストクラスは手配したそうだけどね。
「みんな退いてくれ！　そろそろ時間だ！」
蓬莱教授が大きな声でそう宣言すると、人だかりがさっと消えた。
あたしたちは、予め用意しておいたスカイライナーの切符を改札に通して、指定された号車の前で並んだ。
スカイライナーは空港連絡用の特急なので、日暮里を出れば、あとは成田空港までノンストップの快適列車になる。
「最高時速１６０キロの在来線は、ほくほく線の『はくたか』がなくなってからは、ここが唯一なのよ」
待ち時間、永原先生がまたあたしに鉄道の話題を振ってくる。
この癖とも、かれこれ１０年は付き合ってる気がするわね。
「ええ、以前にもそんな話があったわよね。でもどうして？」
そのほくほく線も、以前永原先生の勧めで少しだけ乗ったし。
「実は成田新幹線って計画があって……あ、来たわね」
永原先生が何か話そうとすると、駅の自動放送から、列車が来ることが分かった。
入ってきたのは、「スカイライナー」の名にふさわしい、青い色の独特の列車だった。
空港連絡列車、しかも成田空港と言えば殆どが国際線の列車なの

で、車内はもちろん荷物置き場が充実している。
スカイライナーはすぐに発車し、あたしたちも車内放送を聞きながら、他のお客さんの邪魔にならないように荷物を移動する。
「持ってあげるよ」
「ありがとう」
重たいあたしの荷物も、力持ちの浩介くんにかかれば軽くひょいと持ち上げてくれる。その姿にうっとりしてしまうあたし。
んー、やっぱりこういうのにあたしは弱いのよねえー
あたしは通路側の一番前の席、浩介くんが隣の窓側の席だった。
あたしたちが降りるのは「空港第2ビル駅」の方で、座席にも航空会社ごとの案内がある。
「えっと、永原先生、その……成田に新幹線って、あんな短い距離に?」
座席に座ると、あたしは永原先生とさっきの話の続きをした。
確かに成田空港は遠いけど、それでも新幹線なんていう大それた計画があるなんて知らなかったわ。
「元々、羽田の東京国際空港が手狭になったから、新しい空港を作ろうという話になったのよ。だけど東京だと殆ど空いている土地もなくて、それで出来たのが成田空港なのよ。出来たときは反対運動が凄かったわね。今でも色々抵抗している人がいるらしいけど」
永原先生によれば、成田という遠い場所に出来るために、空港連絡が重要になった。
京成スカイライナーと成田エクスプレス、更にリムジンバスの連絡が有名だけど、このスカイライナーができる以前にはどれも時間がかかったので、新幹線を作ることになったという。
「例えば、京葉線の東京駅ホーム、あれは元々成田新幹線のために作られたのよ。そしてこれから乗るスカイライナーも、一部は成田新幹線の土地を使ったのよ」
永原先生が自慢気に話す。
なるほど、それで高速運転できるのね。
電車はそこまで速いスピードではないが、順調に駅を通過していく。

「もうすぐ、『京成高砂駅』を通過するわね」
　永原先生が、「青砥」と書かれた駅名標を見ながら言う。
「そこを通過するとどうなるんです？」
「成田スカイアクセス線……あー、『京成成田空港線』というのに入るのよ。でも実は、大きな問題があるのよね」
　永原先生が、やや言葉に詰まった感じで話す。
　一体問題って何かしら？
「問題？」
「ええ、実は京成高砂駅から途中の印旛日本医大駅までは、『北総線』という別の会社の路線として、線路を共有しているのよ。正確にはこちら側が『線路を借りている』という状態だけどね」
「へー、じゃあもしかして運賃は？」
　あたしがさりげなくそう発言すると、永原先生がギクリとした感じでビクッとする。
　ありゃりゃ、どうやら地雷を踏んじゃったみたいだわ。
「そう、そこが問題なのよ。実は北総線は建設にお金がかかったせいで運賃がとても高くなってしまったのよ。しかも直通先が別の会社になるものだから東京に出るととんでもない金額になっちゃって……そのせいで地方議会で揉めるような騒ぎにもなっちゃったのよ」
　運賃が高額ということは、当然沿線住民には負担になるし、せっかく鉄道が通っててしかも東京にもすぐという沿線のブランドも下がってしまう。
　一定の値下げもなされてはいるものの、元々の運賃が高すぎて焼け石に水らしい。
「17年前に成田空港線との共用がスタートしたことで、あたしたちみたいに成田空港に行く人は、北総線に準じた運賃になったわ。一応北総側も収入が見込めるということで運賃は引き下げられたけどね」
　どうやら、高いと言っても昔よりはマシではあるらしいわね。
「え!?　じゃあもしかして」
「そうね。本線経由より高くなってはいるわ。ちなみに、このスカイライナーは無停車でも、アクセス特急はいくつかの停車駅があるわ

よ。その停車駅だけ、２つの路線での重複駅扱いとなっているわね。もちろん、管理は従来の所がしているけども」
「アクセス特急？」
また見慣れない新しい言葉が出てきたわね。
そもそもただの特急とは何が違うのかしら？
「そうよ。実はここのライナーというのは特急よりも格上という感じになっているのよ。特急と名前がついているのは、特別な料金は不要になっているわ。で、『アクセス特急』というのは、いくつかの駅に止まりながら、成田空港を目指す列車で、一般の車両を使うから最高速度も押さえられているわ。場合によっては、途中でこのスカイライナーに抜かれることもあるわね」
永原先生によれば、この「成田空港線」ができる前は、スカイライナーも京成本線の方を通ってて、しかも通勤電車もかなりの本数走っていたために所要時間もかなりかかっていたらしい。
「だからスカイライナーは、昔は口の悪い人から『ツカエナイナー』何て言われていたのよ。でもそれも、本当に遠い日の思い出よ。今はこの成田空港線ができて速度も距離も短くなって、所要時間が大幅に短くなったお陰で、今では成田エクスプレスとの競争を優位に進めているわね」
これができる前は、京成本線はカーブや制限速度も多く、ノンストップのスカイライナーといえども、上野と日暮里しかないというアクセスの悪さも手伝って、苦戦していたらしい。
「昔の特急車両はどうなったんだ？」
「今はもうないわよ。ただ、朝と夕方には、着席機会を求める通勤者向けのライナーを走らせているわよ。以前のスカイライナーに停車駅を少し加えた列車も運行してたけど、利用低迷で無くなっちゃったわね」
永原先生によれば、この会社では「ライナー」というのが事実上特急よりも格上の種別として機能しているらしく、他にも本線には「快速特急」というのもあるみたいね。
ともかく、今は空港アクセスではこちらが圧倒的に多いらしい。

列車はスピードをあげていて、新幹線ほどじゃないけど、かなりのスピード感があるわね。
窓の外には、千葉の田園風景と、ニュータウンの雰囲気が交互に訪れていく。
あたしたちの両親同士でも、世間話に盛り上がっていた他、蓬莱教授は比良さん余呉さんとも盛り上がっていた。
「そういえば、余呉さんはアルフレッド・ノーベルと同級生じゃないかな？」
「えっと、２０２７から１９４を引くと……１８３３ですから……」
「ああ、だったら同級生だな。俺の持ってるノーベル賞のメダルにノーベルの生没年が書いてある」

全く意識したことはなかったけど、これは授賞式と晩餐会で使えそうなネタだわ。
ふふ、ノーベル博士はＴＳ病について知らなかったと思うし、まさか２１世紀も２０年以上たったこの時代に自分と同い年の人が生きている何て、思いもしなかったと思うわ。
車窓はますます田園風景が強くなり、列車のスピードも上がっていく。
そしてその空気が一気に強くなっていく。
どうやら、永原先生が言っていた１６０キロ運転が始まったらしい。
「ここからは成田空港まで途中に『成田湯川駅』があるだけよ」
いつの間にか線路も単線になり始めている。
ちなみに、成田駅を過ぎると、ＪＲと今度は共用する部分もあるとかなんとか。
ともあれ、あたしたちが降りる駅はもう少し先になる。
成田空港までの距離がどんどん近付くにつれ、あたしは自分の人生として、はじめて日本から出ることを思い出した。
不安がないわけ、無いわ。

「日本から出るって大変だわ」
「不安？　私もよ。私だってはじめてよ」
「え!?」
永原先生が、意外な話をする。
永原先生も、あたしと同じで日本国外に出たことはないという。
「会長、海外初めてなんですか？」
比良さんも驚いていた。
確かに、５０９年の人生と言っても、大半は海外とは縁の無さそうな時代に生きていた。
とは言え、戦後に入ってからも、永原先生が一度も海外に出たことがなかったというのは、とても意外なことだった。
「ええそうよ。私は５００年以上の人生の中で、台湾や朝鮮にも、もちろん南洋や樺太にも行ったことはないわ。教師の仕事で、そこまで行く機会はなかったのよ」
永原先生はあっけらかんとした表情で話す。
海外に出たこと無いから何だと言わんばかりの表情になっている。
「何、恥じ入ることはない。昔俺が一回目のノーベル賞を取ったときと殆ど同じ頃合いかな？　英語話せなくて海外出たことなくて、ノーベル賞での授賞式が初めての海外だったっていう先生を知っているよ」
へー、そんな人もいるのね。
「あ、お母さん覚えているわ。確か英語が全然ダメで、スピーチも日本語で通したんだっけ？」
後ろから、母さんが割り込んできた。
「ああ、そうだ。その人は『Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ．』とだけ言って、後は通訳の人に英語字幕をつけてもらったらしい。まあ俺は、英語でスピーチをするけどな」
どうやら、英語でスピーチしないという前例も、一応あったらしいわね。
そうは言っても、「英語無理です」と言ってしまうのはいくらなんでも恥ずかしすぎるわね。

でも本当に、スピーチ内容どうしようかしら？
「ねえあなた」
「ん？」
「スピーチって、どういうこと話せばいいのかしら？」
すると浩介くんも考え込んで――
「俺もよく決まらねえんだ」
やっぱりあたしと同じだった。
「あー、確かに難しいよな。何、スピーチの内容は自由さ。軽い世間話やジョーク、あるいは自分の思いや子供の頃の話をすればいいんだよ」
蓬莱教授が、あたしたちを落ち着かせるように話す。
何でもいいと言われても、やはりあたしは研究のことを話したいと思っている。
どういう思いでこの研究に参加したかということ。
そのためには、やはりＴＳ病のことについて理解してもらえるように話さないといけないわね。
「大変よね、ノーベル賞も」
「うんうん」
後ろの親世代は、他人事のように話している。
まあ、確かに「対岸の火事」といったら変だけど、そんな感じなのも事実なのよね。
ともあれ、あたしはノーベル賞スピーチについて、だいたいのテーマを決めることができた。
後はどれくらい、簡単な英語で伝えられるか？　よね。
「もう後７分ほどで、空港第２ビル、空港第２ビルです。お降りのお客様は――」
「お、到着だぞ」
車内放送に促され、あたしたちは荷物を取り出して、床に置く。
あたしの荷物も、浩介くんが取り出してくれた。
「よし、行くぞ」
あたしたちは、一番前の列からドアに並んで列車の到着を待つ。

それにしても、さっきまでと違ってあたしたちで騒ぐ人はいないわね。

まあ、外国人が多いのもあるし、国際線への、しかも特急列車の車内だし、リテラシーの高い人が多いみたいでよかったわ。

２０２７年１２月６日　Ｓｋｙ　ｔｏ　Ｄｒｅａｍ
～空から夢へ～

あたしたちは、開くドアから列車を降りる。
この駅は、改札口を出ればすぐに空港で、セキュリティもいつもよりもかなり厳重になっている。
「こっちだ」
多くの人は、「空港第２ビル」つまり「成田空港第二旅客ターミナル」を目指し、それぞれの発着を目指す。
でも、あたしたちの乗り場はちょっと違う。
あたしたちは、黙って蓬莱教授のいる場所へと近づく。
「ここだな」
そこは、プライベートジェット専用の受付所だった。
結構豪華に作られていながらも、やはりまだまだ利用が少ないのか、かなり閑散とした雰囲気だ。
「あー失礼、ストックホルムまでのビジネスジェットを飛ばす予約をしていた蓬莱だ」
「はい、お待ちしておりました。では、待合室で出国手続きを取りますね」
まずあたしたちは荷物を預けることになった。
プライベートジェットなので、持ち物の規制はやや緩いが、それでも安全に関わるものは持ち込めない。
あたしたちは、ファーストクラスと同じ仕様だというかなり豪華な待合室に通され、そこでパスポートなどを渡して手続きを取る。
あたしたちに数人のスタッフさんがついていて、本当にＶＩＰだった。
時間に相当な余裕を持って来たというのもあるけど、搭乗手続きには、１時間半ほどかかる。
特に国際線なので荷物の手続きはかなり厳重になる他、レントゲンなどを使った検査もあった。

「うー、やっぱりかったるいわね」
お義母さんは、やや呆れ気味に話す。
確かに、手続きが煩雑な上に、時間もかかる。
ここからも滑走路の様子は見えていて、色々な塗装を施された航空機が、次々と飛び立ち、あるいは降りていく。
もちろん、全てが国際線ではないにしろ、この空港は世界の玄関口なのは間違いない。
すると、1機の一際目立つデザインの航空機がこちらへと近づいてくる。
「お、俺たちの搭乗機のお出ましだ」
「え!? あれがですか?」
横向きになってその塗装を見ると、それがあたしたちが乗る飛行機だと気付いた。
何と白い塗装の上に「蓬莱カンパニー株式会社」と書かれていたから。
「これが蓬莱カンパニーのビジネスジェット仕様のボーイング７８７だ型機で、所持者はもちろんこの俺だ!」
蓬莱教授が胸を張って話す。
確かに、あの飛行機は大きい。国際線用の中型機ということで、「ジャンボ機」ほどではないにしても、近くで見るとかなりの威圧感を持っている。
そもそも、こんな広い飛行機をたった１０人で使うというのも、我ながら大変な贅沢だと思うわ。
「うー、暇だわ……」
「優子ちゃん、スピーチ考えようぜ」
「ええ」
あたしは、浩介くんの提案で、ノーベル賞晩餐会で行われる英語スピーチの内容を考えることにした。
うーん、あたしの研究……いや、生い立ちかしら?
でもあたしの生い立ちというと、優一の話になっちゃうわよね。
とはいっても、あたしのこの研究や、ノーベル賞のことを考えると、

やっぱり優一の話は避けて通れないわね。
そうするとうーん、やっぱり幼い格好して出席したいことに関係があるかしら？
あたしは「永遠の美少女」であっても、「幼女」にはなれないのよね。
そうすると、やっぱりＴＳ病の話を中心にしたいわね。
でも、スピーチって何分くらいなのかしら？
その辺り分からないと、どうしようもないわね。
ま、いいか。あたし美少女だし、他の受賞者のおじさんの話よりもよっぽどみんな聞きたがってるはずだわ。

「お待たせいたしました。こちらへどうぞ」
そんなこんなで時間を潰していると、空港の職員さんが「手続きが終わった」とのことで、案内される。
ちなみに、大きな荷物は今頃格納庫に送られているとのことだった。
「どんな感じになるのかしら？」
間違いなく機内も蓬莱カンパニー仕様に改装されているはずだわ。
「ふふ、入ってのお楽しみさ」
「う、うん……」
横付けされている飛行機に近付いていく。
どの航空会社とも塗装が違っているこの飛行機は、異彩を放っている。
ちなみに、滑走路そのものは、他の航空会社と同じになっている。
それにしても、あたしたちであの飛行機を独占するって、何だかとんでもない気分だわ。
フライト代もバカにならないわね。
あーでも、あたしたちの資産からすると大したこともないのかしら？
搭乗券を改札機に入れて最後の手続きをし、そのまま開けられた機内のドアから中へと入る。
「うおっ、すげえ！」

「まあ信じられないわ！」
先にいた父さんと母さんが驚いた声を発する。
あたしたちも、気持ち早めに機内へと入る。
「わあ！」
あたしも、中を見て驚きの声をあげた。
そこはまさに「Ｄｒｅａｍｌｉｎｅｒ」だった。
ファーストクラスよりも広々とした深々のソファーがあり、寝転がれる広さで１人１列を与えられていて、列の数はちょうど２０もあった。
「後ろには食事用のスペースや歓談用のスペースもあるぞ」
蓬莱教授がそう言うので移動してみると、確かにそこにはバーのような雰囲気のスペースに、その手前には大きなテーブルと２０のふかふかそうな高級椅子があって、あたしたちの豪邸に勝るとも劣らないものだった。
床も、あたしたちが豪邸で使っている高級カーペットと同じ素材が使われていて、また飛行機の壁にも絵画が飾られていた。
まさに豪華飛行機に、あたしたちはみんな一様に目を輝かせていた。
ファーストクラスだって、あんなにスペースないわ。
「ようこそ蓬莱カンパニーご一行様」
後ろから、声をかけられ、あたしたちは全員で振り返った。
「当機の総機長です。よろしくお願い致します」
「「よろしくお願いします」」
６人の男性と、後ろには１０人ほどの女性が控えていて、あたしたちに一斉に頭を下げてくれた。
おそらく、この飛行機のクルーだと思う。
男性の方はおそらくパイロットで、６人のうち、４人が肩に４本線、残り２人が３本線となっている。
「えっと、他の方は」
「交代機長や交代副操縦士です。４本線が機長、３本線が副操縦士です。ちなみに、機長資格を持っている人が２人で操縦する場合は、片

方が副操縦士の役割をすることになっています」
別の機長さんが、あたしの疑問に対して丁寧に説明してくれる。
最も、これらのことはあたしも既にとっくの昔に知っていることなんだけどね。
「では私たちは出発前のチェックリストの確認に入ります」
そう言うと、パイロットさんたちは、機体前方部へと消えていった。
「蓬莱カンパニーご一行様、お疲れ様です。当機のＣＡです」
キャビンアテンダントさんたちは、女性１０名で、あたしたちが以前から言っていたように１人につき１人のＣＡがついて接待してくれるという。
うー、浩介くんにも誰かがつくのよね？
やっぱり、この飛行機のＣＡするくらいだからみんなあたしほどじゃないけど美人で揃えているし……うー、嫉妬しちゃわないようにしなきゃ。
「えっと、間もなく離陸いたしますので、後方の席へお集まりください」
「「はい」」
どうやら、この歓談室の奥にも、席があるらしい。
カーテンで仕切られた更に後方に行くと、ファーストクラス程度の広さの席が２０用意されていた。
「あれ？　これは？」
いったいどうして、こっちにも席があるのかしら？
「あー、前方部は主に巡航中に使うんだ。あっちは自由に寝転がったりできるけど、離着陸時はシートベルト必須だからね」
「なるほどねえ」
ともあれ、あたしたちは言われるがままに席に座ってシートベルトを締める。
ちなみに、巡航中に何かあった場合でも、きちんとシートベルトがある他、酸素についても通常の飛行機と同じ分だけ積んであるので、あたしたち少人数ならそれだけ生存率が高まるらしい。
「蓬莱先生、機体後方が比較手時安全って」

「ああ知っているさ」
永原先生の問いに、蓬莱教授がにこやかに答える。
飛行機はとても安全だということを考えれば、蓬莱教授の用心深さが伺えるわね。
まあ、前方も後方も関係ない事故が多いってのが普通だけど。
「当機の機長です。離陸許可が出ましたので滑走路に参ります。携帯電話、スマートフォン、タブレットなどの電子機器は、機内モードに設定ください」
あたしたちがシートベルトを締めてしばらくすると、放送がまた流れた。そして、エンジンの音も少しずつしてきた。
ちなみに、電子機器は家を出る前に機内モード、あたしは電源をオフにしてあるので問題ない。
「お、いよいよだな」
先程の機長さんと同じ人がそう言うと、飛行機が静かに動き出した。
行き先はストックホルム、目的はもちろんノーベル賞の授賞式と晩餐会への出席だけど、その間にも観光をする必要があるわね。
誘導路を走っていると、色々な飛行機が目に見える。
欲目を凝らすと、カメラを抱えた写真家の人も見えた。
飛行機は大きく角度をつけ曲がったと思うと、一気にエンジンをふかしてスピードが上がっていく。
北海道に出張に行ったりする時にも体験する、離陸の瞬間だ。
飛行機の機首が上がり、ふわりと離陸する。
上空で旋回し、高度を稼いでいく。
「当機の機長です。本日は総機長に――」
機長さんが、クルーの名前をあげていく。
彼らはみんな大手航空会社のパイロットで、ベテランで揃えるのではなく、中堅パイロットや新人に近いパイロットも混ぜている。
どうも「ベテランばかりはかえってよくない」と蓬莱教授は思っているらしい。

まあ、それにはあたしも賛成かしら？
下を見てみると、既にかなり上空に飛んでいて、東京スカイツリーが遥か下界に見える。
ポーン
小さな音とともに、シートベルトのサインが消えた。
「ふう」
あたしたちはシートベルトを外して思い思いに機体前方の大きなソファーへと向かった。
最前部には、外気温や対気速度、対地速度に高度が、メートル法やヤードポンド法で示されている。
と言っても、まだ離陸したばかりで、高度は３０００フィートとなっていた。
「冬場だからな。偏西風に押し返されて、ストックホルムまではそれなりに時間がかかるだろう」
蓬莱教授が後ろでそう話しているのが聞こえた。
あたしは、飛行機に乗るまででも結構疲れていたので、すぐに仮眠を取ることにした。
うーでも、なかなか眠れないわね。初めての海外で、緊張しているのかしら？
「ふう」
それでも、横になって休んでいるだけでも、大分違うわね。
前方にはテレビがある。
映画などが見られるらしく、確かに時間を潰すにはもってこいだけど。
「何をやってるのかしら？」
メニューを見てみると、恋愛映画をはじめとした様々な映画やドラマ、更にアニメ1クールに、アニメ映画などなどがまるごと入っている。
うん、これなら行きも帰りも暇潰しには事欠かないわね。
飛行機はどんどん高度をあげていて、いつの間にか雲を見下ろす状態になっていた。

高度は、３２０００フィートと、表示されていた。
「皆様、間もなく昼食の準備を始めます」
巡航高度に入る、現在北に向かって進んでいて、まだ日本海に出ないというところで、最初の食事が提供されることになった。
あたしは起き上がって机の準備をする。
と言っても、リモコンのボタンで勝手に来てくれるので至極快適だ。
窓の外を見ると相変わらずの冬の晴天で、高度は３２０００フィートのままだった。
食事はというと、和食のお弁当だった。これからは日本時間で今日の夜に明日の朝の食事があり、また機内ではパブタイムのようなものもある他、ドリンクバーでいつでもＣＡを呼ばずとも飲み物は飲み放題になる。
「こちらがお弁当になります」
「ありがとうございます」
ＣＡさんに手渡され、お箸をつける。
「ドリンクはどうされますか？」
「うーん、オレンジジュースで」
「かしこまりました。あ、こちらがナッツになります。もうしばらくお待ちください」
どうやら、昼食のお弁当だけでは少ないのか、ナッツをサービスしてくれるらしい。
「あ、えっと、受け取ってもいいかしら？」
どうして持ってるだけなのかよく分からないけど、あたしは困惑しつつもナッツを受けとることにした。
「え!?　あ、はい……あっ」
あたしはＣＡさんからナッツの袋を受け取って、切れ目を探してそこで破いて食べられるようにすると、ＣＡさんはどこか戸惑いながらもドリンクバーに向かってくれた。
「おや、優子さん大人だねえー」

真後ろにいた蓬莱教授がにこやかに話しかけてくれる。
「え？　何か今のに特別なことあったんですか？」
「ファーストクラスではナッツはお皿に盛り付けた状態で渡すものなんだよ。昔それで大騒動になったことがあってね。もう１０年以上も前の話だが」
確かに、ＣＡさんが袋を破いてお皿に入れてくれた方がサービスいいのは確かだけど。
「いや別に、そんなこと。大したことじゃないですよね？」
正直、あたしにはよく分からないわ。
「今みたいに巡航中じゃなかったからまだ良かったんだが、離陸準備中にな。たまたまファーストクラスにいた航空会社の副社長が、それが原因で『サービスがなってない』って、大声で怒鳴り散らしたあげく機長を脅迫して無理矢理引き返しをさせたって言う事件があってね」
「へえ、そんなことがねえー」
正直、あたしには内心不満に思うならともかく、怒ることじゃないと思うんだけど。
やっぱりセレブの行動ってよく分からないわね。
「ああ、社会問題にもなったぜ」
蓬莱教授によれば、その事件は「ナッツ・リターン」と呼ばれているらしい。
うーん、そういったセレブなんか問題にならないくらいあたしたちは金持ちのはずなんだけど、やっぱり未だあんまり自覚がないのよね。
「お待たせしましたオレンジジュースになります。えっと、それからその、篠原様」
「はい」
「こちら、ナッツのお皿になりますので是非お使いください」
そう言うと、ＣＡさんが小さなお皿を机に置いてくれた。
「あらこれはご丁寧に。どうもありがとうございます」
「いえいえ」

ともあれ、あたしは和食のお弁当を開けてみた。
機内食ではあるけど、やはりどれも豪華な食材が並んでいて、恐らくはファーストクラスの機内食に準じているはずよね。
「いただきまーす」
あたしは、機内食を食べ始めた。
あたしの周囲も、みんな美味しそうに食べていて、団欒の場になっている。
ただ1人1列なので、話すときちょっと大変なのが難点かしら？
次は後ろのテーブルで話したいわね。

ご飯を食べ終わったら、夕食まで自由時間で、もうすぐ日本海を渡りきってロシア上空に入る所になった。
さて、そんな中であたしは暇潰しに見る番組を決めあぐねていた。
「うーん、やっぱり恋愛映画かしら？」
中に入っていた恋愛映画はどれも結構昔のもので、その中にはあたしが林間学校で見た映画もあった。
あの頃はそう、永原先生と女性について話していたっけ？
あたしが女の子になったばかりの頃に、男との違いに戸惑った経験は、１０年経った今でも色濃い。
特に浩介くんに恋するきっかけになったあの林間学校のことは、忘れられない思いでになっている。
この映画はそう、永原先生と「女性ばかり助けられたのは女性差別」という話題で盛り上がった。
そうだわ。ノーベル賞のスピーチに、これは使えるかもしれないわね。
あたしは、日本人女性として初めてのノーベル賞だけど、ＴＳ病患者として初めてのノーベル賞でもある。
むしろ後者の方が大切で、ＴＳ病患者としてあの場でできることは、完全な男性から完全な女性になったことでの体験談だと思う。
うん、それを軸に、スピーチを進めるとすれば、かなり良さそうだわ。

あたしは、１０年ぶりに、豪華客船の映画を見た。
３０年前の映画ながら、かなり品質は高い。
物語は、悲劇と言えば悲劇だけど、やっぱりあたしの中では、１０年前にあのバスの中で永原先生と話した時のことがどうしても頭に残ってしまっていた。
あの頃とは、随分と変わってしまった。
永原先生とあたし、浩介くんとの関係は、あの頃は今よりもずっと単純だった。
高校生の人間関係なんてそんなものなのか、それとも、あたしたちの関係が複雑なのかしら？
あたしと永原先生は、高校生の頃から関係は複雑だった。特に一気に複雑になったきっかけは、あたしが協会の正会員に誘われてからだと思う。
そんな中で、あたしの容姿と永原先生の容姿は、全く変化がない。
まるで老化だけが、それに取り残されてしまったように。
永原先生は相変わらずその小柄で幼いながらも、巨乳で美人な容姿で小谷学園では人気を博しているし、あたしほど真っ黒じゃない黒髪を肩まで伸ばしている。
あたしもあたしで、相変わらずきれいに保ち続ける肌と顔、そして深い深い漆黒とも言えるロングストレートの黒髪に、誰もが目を止めるほどで、巨乳が多いＴＳ病患者たちの中でさえ並び立つ人がいないほどの巨大な胸。
１０年経っても、２０年経っても、それは変わらない。
変わり続ける社会の変化の中で、あたしはお金を取り、今から名誉を取る。
それでも、あたしの中で何かが足りない気がしていたのも、事実だった。

２０２７年１２月６日　空の宮殿

「ねえ優子ちゃん」
「ん？　どうしたの？」
　映画が終わり、することもなく暇なのでとりあえず寝そべってくつろいでいたら、前にいた浩介くんが話しかけてくれた。
「夕食は後ろのスペースになったぞ。もう後３０分くらいだから、準備しておけよ」
　どうやら、ぼーっとしていたら、もう夕食の時間が近付いてきたみたいね。
「う、うん」
　飛行機の運行情報を見ると、今はシベリアの原野上空を飛んでいる。高度は燃料が少なくなったお陰か、３４０００フィートに上昇していた。
　シベリアは広いので、当分はこのままね。
　あたしは少し喉が乾いたので、コップを片手にドリンクバーに行って、ボタンを押してオレンジジュースを入れる。キャビンアテンダントさんに頼んでもいいけど、少しは動かないといけないものね。
　あ、そうだわ。砂糖も取ってもう少しだけ甘くしよっと。
「ごくっ……んー、おいしいわー」
「優子ちゃん、オレンジジュースに砂糖入れたの？」
　浩介くんが驚いた顔であたしを見つめてくる。
　まあ、ただでさえ甘いオレンジジュースに更に砂糖まで入れたら、普通は驚くわよね。
「えへへ、あたし女の子だもん。甘いの大好きだわ。女の子が甘いもの好きじゃダメかしら？」
　あたしはニッコリと笑顔で、恥ずかしがらずに話す。
　女の子が甘いものが好きなのって、別に恥ずかしいことじゃないものね。
「まさかあ！　甘いもの美味しそうに食べている優子ちゃんかわいいよ。それにしたって本当に優子ちゃんって理想の女の子そのものだ

よな」
浩介くんに、もう何回目かも分からないくらいに言われた誉め言葉を言われる。
今でもあたしにとって一番嬉しいのが、「女の子らしい」という誉め言葉だった。
「えへへ、ありがとうあなた」
飛行機の中でいちゃついても、誰も何も言わない。
もちろんあたしたちの家族や蓬莱教授、永原先生たちも居るけど、あたしたちがラブラブ夫婦だと知っているので問題ない。
これもプライベートジェットのメリットだわ。
「そうだわ」
あたしは、手荷物の中から、熊さんのぬいぐるみを取り出した。
そして、片手でぬいぐるみさんを持ってみた。
「あれ？　優子ちゃんぬいぐるみ持ってきたの？」
浩介くんが、「まさか持ってきたの!?」という感じで、意外そうな表情で話してきた。
うーん、そこまで驚かれちゃうとは思わなかったわ。
「うん、もちろんよ。初めて海外に行くから、ね」
ぬいぐるみさんやお人形さんをいくつか持ってきた。
晩餐会や授賞式も、緊張しすぎちゃってるみたいなら、持ってきてもいいかしら？
「うん、優子ちゃんは優子ちゃんらしく振る舞えばいいよ」
浩介くんはあくまで優しい表情であたしと接してくれる。
「うん、そうするわ」
浩介くんに促され、あたしも決心を固める。
世界がどう思っているか？　周囲がどう思うかは、もうあまり関係ない。
あたしには、どうしても女の子としての幼い日々を取り戻したいという、二度と叶わない願いがある。
それなら、ノーベル賞の場でも、アピールしてもいいじゃない。
不老技術を作ったもの。その位しても、バチは当たらないはずだ

わ。
間もなく夕食の時間となり、あたしたちは担当の機長に促され、今度は後ろのテーブルへと集まった。
あたしたちの両親は大分冷静になっていたけど、比良さんと余呉さんは、まだどこか興奮が覚めないといった様子だった。
余呉さんが特に興奮している様子だった。
「余呉さん、さっきから興奮しすぎですよ」
比良さんが大きな声を出した余呉さんを注意する。
うーん、誤差とは言え余呉さんの方が年上なんだけど、こうしてみると比良さんが姉って印象よね。いや、比良さんも十分小柄で童顔なんだけど。
「だって、今まで私エコノミーしか乗ったことなくて、こんなファースト以上の待遇で乗れるなんて素晴らしいわ!!! あー食事も楽しみだわ！」
余呉さんが、全員が座ったタイミングでそう叫ぶ。
あたしたちは実年齢を知っているから、年甲斐もなくはしゃぐ余呉さんの図だけど、何も知らない人が見たら、１０代女子の興奮に見えるのかしら？
「ふふ、そうだろう？　ちなみにこれは、会社名義の飛行機ってことになってるが、お金を払っているのは俺だ」
蓬莱教授ではなく、蓬莱カンパニーがこの飛行機のオーナーということになっているから、比良さんと余呉さんも、この会社の取締役という立場を考えれば利用は当然で、むしろ部外者なのはあたしと浩介くんの両親ということになるわね。
「あれ？　椅子が２つ空いてるわね」
「あー、実は交代の機長さんたちの席だよ」
蓬莱教授がそう解説してくれる。
どうやらそういうのも、こういった飛行機では行われることらしいわね。
「お待たせしました」

肩に４本線を入れた制服の男性２人が座ってくる。
１人はさっき見た「総機長」で、もう１人も機長資格を持っているようだった。
「今日の機内食は仙台の牛タン弁当ということです」
「お、名産じゃねーか」
ＣＡさんのその一言に、蓬莱教授が満足そうににっこりとしている。
仙台の牛タン弁当は、幸子さんにも進められた、仙台のみならず東北地方を代表する名物だという。
東北生まれ東北育ち、東北在住の幸子さんらしいチョイスと言えばそのとおりだけど。
「お待たせいたしましたー」
１０人のＣＡさんが、それぞれの机に牛タン弁当を置いていく。
「ドリンクはどうされますか？」
あたしの右から、ＣＡさんがドリンク注文を聞いてきた。
ここは自分で取りに行くのは億劫なので、ありがたくＣＡさんにドリンクバーまで行ってもらおう。
「えっと、じゃあ麦茶で」
毎回オレンジジュースなのもつまらないので、今回は麦茶にして見た。
「かしこまりました」

「篠原様って、すごいですよね。社長として、やっぱりモテるんですか？」
あたしの左側、浩介くんの右側にいたＣＡさんが浩介くんに話しかけている。
浩介くんは、やや困惑した様子で「ああ」と言った。
確かに浩介くんは、あたしが彼氏として選んだ当初こそ「冴えない」「不釣り合い」という評判だったけど、今はかなり男が磨かれたために女性受けがかなりよく、「不釣り合い」何て声は聞こえてこない。
「永原様の人生で一番思い出に残っているエピソードって何ですか

？」
「うーん、やっぱりＴＳ病になった時かしら？　あの時はまさかこんなに生きるとは思ってなかったもの」
　よく見ると、他のＣＡさんもそれぞれ話している人と、ドリンクを持っていく人とで別れている。
「篠原様、ノーベル賞という名誉に、更にお金も持ってるんですよね」
「ああ」
　あたしと付き合う年数が長くなるに連れて、浩介くんは他の女子からもモテるようになった。
　あたしという嫁がいることを知っていても、どうしても話しかけたくなっちゃうのが女だと思う。
　浩介くんは、あたしで満足してくれてるのもあって、他の女には目もくれないけどもね。
　ま、浩介くんをして「地球最高の物件」と評してくれた今のこのあたしが浮気されるなんて万どころか億……いや兆京に１つもないと思うけど、それでも神経を尖らせちゃうのは悲しき恋する乙女の性だよね。
「篠原様、お金持ちでしたら――」
「あーいや、俺は優子ちゃんがいるから、他を当たってくれ」
　浩介くんが心底嫌そうな感じで断っている。
「えっそういうつもりでは……あ、はい。申し訳ありません」
　うっ、さらりと逆ナンしようとしてるし。
　油断も隙もないわね。
　……あ、でもそういう感じでもないかしら？
「あー、うん。多分もっと別のこと？」
　浩介くんもさすがに気まずくなったのか、フォローを入れる。
「はい、食事中のマナーについてなんですけれども。実はですね――」
　うー、何よもう、驚かさないでよー。
「あら優子、もしかして逆ナンだと思って驚いちゃったかしら？」
　突如母さんの声が聞こえ、あたしの頭が一瞬真っ白になる。
「ギクッ……べ、別にそんな訳じゃないわよ!!」

ハハハハハ！
そんな訳に決まっていると、あたしは白状してしまい、機内から失笑がどっとこぼれる。
うー、早とちりして墓穴掘っちゃったわ。
でも……
「はい、次からはそうするといいですよ」
ＣＡさんが浩介くんに丁寧にマナーを教えている。
悔しいけど、その所作ではあたしは負けている。
世界一の資産家と言っても、あの株式上場があるまではビリオネアどころかミリオネアでさえなかった。
これからも、超富裕層、いや世界一の資産家夫婦の妻としての自覚や振る舞いを随時覚えていかなきゃいけないわけだけど、やっぱりこういう所は、成金にはきついのよね。
「ありがとう」
やっぱりあたしって嫉妬深いわ。
また後で、浩介くんに沈めてもらわないと。

「最近はパイロットの不足が叫ばれていました。どんなに機械が進歩しても、最後の砦は人間にしか担えないんです」
一方でこちらは、機長さんと蓬莱教授が話し込んでいた。
「蓬莱カンパニーのおかげで、航空業界も大助かりですよ」
どうやら、航空会社でも、蓬莱の薬は待ち望まれていたものらしく、またベテランパイロットも、身体的衰えから解放されると期待されているそうだ。
でも、それを言ったら人手不足の業界はどこもかしこも「蓬莱カンパニー万歳」よね。そして、日本はもう１０年以上人手不足が続いているし。
「ノーベル賞の授賞式、頑張ってくださいね」
「ああ、でもノーベル賞のためにストックホルムに行くのは２度目だ。そういう意味では、他の受賞者よりはよっぽど気が楽ってもんだ」
パイロットさんたちは話し上手聞き上手で、雑談には事欠かなかっ

た。
　また元自衛官のパイロットさんも居て、その人によれば航空業界だけではなく、自衛隊、特に航空自衛隊が蓬莱の薬に大きな期待を寄せていることも分かった。
「ま、こうして話を聞いていると蓬莱カンパニーの経営陣が世界一の資産家ってのは納得だよな」
　蓬莱教授とパイロットさんとの話を聞いていたお義父さんの言葉は説得力があった。
　ある業界の製品が、他の業界に影響を及ぼすことは枚挙にいとまがないけど、蓬莱の薬ほどに大規模かつ広範囲に影響を及ぼした例も無いわよね。
　そうこうしているうちに機長の１人が交代が近いということで、懇談会も自然とお開きになった。
　飛行機はまた少し上がって、ロシア上空３６０００フィートの巡航高度を、一定の速度で飛んでいた。
「ねえあなた」
「ん？」
　皆が元の席に戻ったのを見計らって、あたしは誰にも聞こえない範囲で浩介くんに話しかける。
「あたし、ちょっと焼きもち妬いちゃった」
　いけないと思っていても、やっぱりどうしても妬いてしまう。
「え!?　や、やっぱり!?」
　浩介くんも、予想がついていたみたいね。
「う、うん……お願い、鎮めてくれるかしら？」
　あたしは浩介くんの腕を引っ張り、機体の一番後方へと進む。
　カーテンで仕切られたそこは、離着陸の時にだけ使う座席だった。
　今はここには誰もいないけど、カーテンでしか仕切られてないから、大それたことはできない。
「ゆ、優子ちゃん」
「ふふ、ロングスカートをめくるのも楽しいわよね？」
　浩介くんは、露出度の高いミニスカートが大好きだけど、人前だっ

たりすると不機嫌になる。
で、今の服装はというと、あたしが女の子になって初めて穿いたスカート、つまり足元のくるぶしまであるロングスカートだ。
もちろん、スカートめくりが大好きな浩介くんだから、冬場でもいたずらだったり、家事手伝いのご褒美だったりで、めくられちゃうことは何度もある。
「えっと、じゃあ……」
さらーり……
「んっ……」
ミニをめくられるときは、すぐにパンツを見られてしまうから、それはそれで恥ずかしいけど、今日みたいなロングは、焦らされる恥ずかしさと、ガードが固いはずなのに見られてしまうという恥ずかしさとの相乗効果がとても大きい。
うー、ミニより恥ずかしいわ。
浩介くんは知ってか知らずか、ロングの時はわざとゆっくりめくる傾向にある。
「ああんっ……」
「優子ちゃん、かわいいよ」
浩介くんが嫉妬した時も、あたしが嫉妬した時も、どっちにしてもこのやり方で嫉妬を沈めることになる。
あたしがズボンだったりする時は、胸やお尻を触られるのも、いつも同じだった。
ふぁさー
布が擦れる音が断続的に続き、ついにあたしは中の水色の縞パンを見られてしまった。
「あーん、恥ずかしいよお……」
「はぁ……はぁ……」
そして、ロングの場合、いやミニの場合でも高確率で起きるようになったのが――
「んー、こうして見るのも絶景だなー」
「こ、浩介くん！」

あたしは、スカートの中に頭を入れられて潜り込まれてしまう。
このシチュエーションは、外気に丸見えにさせられるのと同じくらい、あるいはそれ以上に恥ずかしいことだった。
「スーハースーハー、うん、最高だなあー」
「ああーん、もう許してー！」
あたしがギブアップ宣言をすると浩介くんも離してくれる。
浩介くん曰く、このあたしの許しを乞うのが一番かわいいとか何とか。
「ふう、多分聞こえてないな」
浩介くんが、やや焦った声で話す。
「うん、大丈夫よね」
あたしたち小声だったし、エンジンの音もしているもの。
多分大丈夫のはずだわ。まあ、聞かれちゃっててても、秘密にはしてくれると思うけど。
「んじゃあ、俺から外に出るから、タイミングを見計らって優子ちゃんも出てくれ」
「うん、分かったわ」
浩介くんがカーテンの外に出る。
ノーベル賞を取っても、浩介くんの性欲は変わらない。
それは、蓬莱の薬が成せることでもある。
数分間の後、あたしも自分のソファーに戻ることになった。
お義母さんから、「心配したわよ。どこに行っていたの？」と言われたけど、「こんな上空で、飛行機の外に出られるわけないわよ」と返したら、すぐに納得してくれた。
相変わらず、飛行機は広大なロシア上空を飛んでいて、メルカトル図法では遠回りに見えても、正距方位図法だと、やはり遠回りながらも比較的まっすぐに飛んでいるのが分かる。
地球は丸いから、ここまでの航空路も、一部中国上空を飛んでいる以外、全てロシア上空の、それもかなり高緯度を飛んでいる。
そういえば、アメリカに行くにも、アラスカ付近を経由するのが最短なんだっけ？

「当機の機長です。当機は間もなく仮眠時間に入ります。機内灯を消灯します」
時差の関係で、飛行機には約１１時間乗るが、時間は４時間程度しか進まない。
とはいえ、寝ないわけにはいかないので、これから3時間程度の仮眠タイムに入る。本眠は現地のホテルについてからということになる。
ちなみに、緯度が高いのもあって、日本では到底日が落ちない時間なのに、既に夕方のような景色を披露していた。
「こちらをどうぞ」
「ありがとうございます」
機長さんのアナウンスと共に、枕と毛布を渡される。
あたしたちが普段豪邸で使っているものと遜色ないくらいに、着心地のいいものだった。
あたしはソファーに横になって目を瞑る。
瞼越しに飛行機の機内灯が消えるのが分かると、機内から聞こえてた話し声が止み、エンジンの規則的な音だけが、ゆっくりと響いている。
まどろみの中で、あたしも眠気に誘われていた。
明日はいよいよ現地に入る。さてどうなるか、楽しみだわ。

# ２０２７年１２月６日　遥か空からノーベルの地へ

ゴオオオオオ
無機質で規則的な音が時折聞こえつつ、あたしはゆらゆらとゆりかごに揺られているような感覚を受けた。
あたしは、流れに身を任せながら、目を閉じて休む。
ポーン
さっきまでとは違う音が聞こえてきた。
「おはようございます。当機の機長です。後、1時間ほどで、ストックホルム国際空港に到着いたします」
突然、人間の男性の声が聞こえ、あたしはゆっくりと起き上がる。
そこは飛行機の中だった。
うー、そうだった。あたし、ノーベル賞取っちゃって、授賞式に出席するんだったわ。
「んー！」
心地よく両腕をあげて伸びをすると、すっかり明るくなっていた機内から話し声が聞こえてきた。
「ねえねえすごいわ」
「この緯度でこの季節だと、この高度でも成層圏何だなあ」
義両親が、食い入るように窓の外を見つめていた。
正面の飛行情報を見ると、寝る前に高度が３６０００フィートだったのが４３０００フィートになっていた。
４３０００フィートというと、旅客機の中でもほぼ一番高い高度になる。
恐らく、燃料が少なくなって機体が軽くなった分、より効率のいい高高度を飛べるようになったのね。
「あ、優子ちゃん起きた？　窓の外、見てみなよ」
浩介くんが声をかけてくれたので、あたしもつられて窓の外を見る。
「わあ！」
それは幻想的な風景だった。

飛行機の窓の外は、青い空と、更に遥か下の地上、下に見える雲、そして上部の空は水色から深い青、濃紺となって視界の上部の空は黒かった。
「まるで、宇宙のすぐそこみたいだわ」
桂子ちゃんでも、もしかしたらこんな空気を見たことはないかもしれない。
ここまで登ってくると、対流圏ではなく完全に成層圏に入っている。
黒い空は宇宙にも見えるが、成層圏の上にも中間圏、そして熱圏があるから、まだ宇宙は遠い上空なのよね。
「ここまで高いと、パイロットの酸素マスクも必要になってくるんだが、この飛行機は普通の定員分と同じ量だけ積んであるので問題ないんだ」
更に言えば、あたしたちの乗っている人数が少ないのも、失速リスクを下げているのは容易に想像できる。
モニターを見ると、ロシアを抜けて間もなくフィンランドに差し掛かろうと言うタイミングだった。
ストックホルムは、ここまで来ると大分近い印象を受ける。
「優子ちゃん、朝御飯は着陸前だって」
幻想的な風景に見とれていると、浩介くんが朝食について連絡してくれた。
「うん、分かったわ」
機内食としては、ここでスウェーデンの料理が振る舞われるらしい。
ともあれ、これは仮眠だから、ホテルについたらまた休む必要があるわね。
「あーまるで文明開化の時みたいだわ！」
義両親と実両親以上にはしゃいでいたのは余呉さんだった。
昨日も興奮していたし、余呉さんの場合、江戸時代生まれで出身は地方の農民だったから、こういう光景への興奮は余計に大きいのかもしれないわね。

「本当に、飛行機も鉄道も、すごい乗り物だわ」
一方で、永原先生は、やや落ち着きながら外を見ていた。
あたしは、何もすることはなく、機内のテレビで短めのアニメを見ることにした。

「こちら朝食でございます」
「あ、はい。ありがとうございます」
昨日と同じＣＡさんが、あたしに朝食を渡してくれた。
寝起きで喉が乾いたので、オレンジジュースも頼み、あたしはお弁当箱を開けた。
「いただきます」
「「いただきます」」
皆で一緒に頂きますをする。
料理の味はよく分からなかったけど、ファーストクラス以上に力を入れているとあってか、かなり美味しかったのだけは確かだった。
ご飯を食べ終わると、飛行機は既に降下をはじめていて、既に４０００フィートを切っていた。
あの幻想的な風景も、もう見られなくなった。
「スウェーデンは楽しみね」
「うん、どこに行こうかしら？　やっぱりノーベルは欠かせないわよね」
お義母さんと母さんが、ストックホルムでの観光について話し合っている。
あたしたちの両親世代は、スウェーデンを楽しみにしているらしい。
ノーベル賞の授賞式は１０日、６日着で７日から９日までは主に現地を観光することになるけど、時差ボケ解消の意味もあって７日はほぼホテルに籠りっきりにする予定になっている。
ストックホルムでは、「ノーベル賞」に備え、様々な祭典を準備しているのだと言う。
朝食を食べ終ると、飛行機はフィンランド上空を飛んでおり、高度

も徐々に下げ始めていた。
ストックホルムの地は、刻一刻と迫っていた。
「当機の機長です。長らくお待たせいたしました。当機は間もなく着陸体制に入ります」
「よし、みんな準備してくれ」
飛行機はノルウェー上空を西に飛び、機長さんのアナウンスを聞くと、蓬莱教授が後ろの座席へとあたしたちを誘導する。
ちなみに、手荷物は置いたままだ。
あたしは、離陸時と同じようにシートベルトなどを閉め、着陸に備えた。ＣＡさんがあたしたちのシートベルト状況をチェックし、ＯＫを出してくれた。
高度がどんどん下がり、着陸態勢が顕著になっていく。
窓から外を見ると、恐らくストックホルムと思われる町の風景がどんどんと拡大されて迫ってきた。
機首が一気に上がり、車輪が地面につく音と、ほんの少しの衝撃で、飛行機は着陸、エンジンのこれまでとは違った独特の音と共に、飛行機が低速で誘導路を進み、ゆっくりと停止した。
「さ、準備するぞ」
「「はい」」
蓬莱教授の指示のもと、あたしたちはゆっくりと手荷物を確認する。
この飛行機はあたしたち専用なので、帰りの時までこの空港に駐機してくれる。
なので、もし機内に忘れ物をしても対応は楽にはなっているが、それでも面倒なのでしないに越したことはない。
「よし、みんな荷物は持ったな」
「はい」
「じゃあ降りるぞ」
全員忘れ物がないか確認し終わったのを見計らって、蓬莱教授が機体最前方にある出口を目指す。

出口には、クルーの人々が立っていた。
「「いってらっしゃいませ」」
ＣＡさんたちと、更にパイロット全員からも見送られて、あたしたちは飛行機の扉を開けた。
いよいよ、あたしにとって初めて、海外の地を踏むことになる。
ガララララ
「ふう、うー寒いわ」
あたしが機外に降りた第一印象は「寒い」だった。
やはり北欧ということもあって外は寒い。
それに現地時間では午後３時だというのに、外は完全に夜だった。
北欧の１２月は、日が沈むのが早いことは分かっていたとは言え、違和感が半端ないわ。
「日が落ちてるな。今日はもうホテルに直行だ」
あたしたちは飛行場のプライベートジェット専用ラウンジに移動する。
中は暖房が効いていて幾分か楽になる。
「お待ちしておりましたこちらへどうぞ」
外の文字も分からない中、あたしたちは日本語で話す日本人の職員さんに誘導してもらう。
あたしたちについてくれる職員さんは全部で４人いるみたいね。
「本日から通訳兼ガイドを勤めさせていただきます」
「よろしくお願い致します」
とりあえず、観光案内も含め、これからは常にこの通訳さんが付きっきりになってくれるらしい。
うん、それなら安心だわ。
「こちらです」
空港の人たちからも、プライベートジェット専用のスペースから来たあたしたちはどうしても目立ってしまう。
ましてや、ノーベル賞受賞者のスウェーデンでの注目度は半端なく高い。
なので、「誰かが騒ぎ出すと大騒ぎになる可能性がある」と忠告さ

れ、あたしたちは足早にその場を後にする。
……うーん、過剰反応だと思うけど。
ともあれ、専用の通路を抜け、あたしたちは止まっていた広いリムジン車に誘導される。
ちなみに、これを手配してくれたのもノーベル財団で、黒塗りの車の扉にはノーベルと思われる横顔に、「ＮＯＢＥＬ　ＰＲＩＳＥＴ」「Ｔｈｅ　Ｎｏｂｅｌ　Ｐｒｉｚｅ」という文字が彫られていた。
「こちらで移動します」
「すっごい……本当にＶＩＰじゃない」
義両親と実両親は、更なる至れり尽くせりのサービスに、目を輝かせている。
黒塗りの、いかにも高級そうなリムジンの中は広々としていて、あたしたちはそこに揺ったりと腰をかける。
中も広いので、１４人乗っても問題はなかった。
「――」
通訳さんの１人が、よく分からない言葉で、運転士さんの人に言うと、運転士さんが返答をし、車が発車した。
恐らく、目的地を告げたのか、それとも単に「準備ができた」という意味だったのかは分からない。
都市の景観は日本とはまるで違っていて、とにかく水が目立つ。
夜の長い高緯度のためか、どことなく治安の悪そうな雰囲気も受ける。
ただ街の様子を見る限りでも、あちこちでノーベル賞と思われる祭りが催されているのは事実だった。
「おっとそうだ、これこれ」
蓬莱教授が、大きなカバンを広げて、何かを取り出してあたしたちに見せてくれた。
「あれ？　これって？」
蓬莱教授が見せてくれたのは、金色に輝くメダルだった。
もちろん、あたしには見覚えがある。
「ノーベル賞メダルのレプリカさ。俺はこの賞を受けるのは２度目だ

からね。ストックホルムの連中に、『俺はノーベル賞だ』ってのを見せつけてやるのさ！　もちろん、これはレプリカだが、授賞式には本物を持っていく予定さ。やっぱり何だかんだで、ノーベル賞は特別なんだ。他の章とは格が違うのさ」

蓬莱教授は、よっぽどこの賞がお気に入りらしい。

名誉には興味をほぼ示さなかった蓬莱教授も、やはりノーベル賞だけは例外だったみたいね。

そんな蓬莱教授でさえ魅了して止まない賞に、まさかあたしと浩介くんまで選ばれたことに、改めて光栄さを通り越して重圧感を感じてしまった。

車は、町の道路を緩やかに進んでいく。

これからあたしたちは、ノーベル賞の晩餐会で行われるスピーチを考えたり、ストックホルムの観光名所をめぐったりすることになっている。

治安の悪さもあるので、もちろん集団で行動してのことだけども。

道路は広いけど、やはり時期が時期なのか、それなりに混雑はしている印象を受けた。

「到着しました」

やがて車が停まると、どうやらホテルの真ん前に突いたらしい。

「お、以外に短いんだな」

父さんがやや驚いた声を出す。

スウェーデンの飛行場に降り立った時は興奮と熱狂があったけど、やはり寒さもあってみんなかなり落ち着き始めた。

あたしたちが乗っているリムジンは、ノーベル財団専用車ということもあって、道行く人達も歩みを止めている。

「どうぞこちらへ」

通訳さんによれば、この高級ホテルの中でも、スイートルームを選んでいるという。

まあ、ノーベル賞な上に最大の資産家だものね。そのくらい当然かしら？

「よし、これで準備ＯＫだ」
蓬莱教授が、首からノーベル賞のメダルのレプリカをかけていた。
自動ドアの上には電光掲示板にノーベル賞のメダルと「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ Ｎｏｂｅｌ Ｐｒｉｚｅ Ｌａｕｒｅａｔｅｓ．Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ ｏｕｒ ｈｏｍｅ ｔｏｗｎ．」という、ノーベル賞受賞者を歓迎する文字が見えた。
ホテルの自動ドアが開き、通訳さんが先頭に立つ。
「――」
「予約しました蓬莱です」
「――」
「かしこまりました、この度はおめでとうございます」
ホテルのチェックインのやり取りにも、いちいち通訳さんが通訳してくれている。
そしてやっぱり、蓬莱教授が泊まるとあると相応の注目を受けるらしく、ホテルの受付さんも、注目していた。
どうもこのグランドホテル、ノーベル賞を受賞した人がよく泊まるらしく、蓬莱教授が以前受賞した時もそこに泊まったのだという。
「――」
「荷物お持ちします」
「あ、すみません。ありがとうございます」
「――」
「この度はノーベル生理学・医学賞おめでとうございます」
「あら、どういたしまして」
「――」
どうやら、あたしのことも知られているみたいね。
日本では有名人だけど、ノーベル賞になったことでこのストックホルムでも有名になったらしい。
あたしたちは、何組かに別れてエレベーターに乗り、最上階の部屋へと案内された。
そこのスイートルームは、予約した人数に応じて広さの違う５部屋があるらしく、あたしたち篠原家で１部屋と、石山家で１部屋、蓬莱

教授と既に到着したその親族で1部屋、そして永原先生、比良さん、余呉さんの3人が泊まる1部屋、更に通訳さんたちが泊まる1部屋にそれぞれ別れている。
　石山家の部屋と永原先生たちの部屋はどうやら別の階、恐らくは一つ下のフロアにある部屋で、あたしたちは石山家と同じ階になった。
「それじゃあ、優子、明日までゆっくり休むのよ」
　母さんが分かりきっている一言を話す。
「分かってるって。ノーベル賞なのよあたし」
「あらあらごめんなさい。そうよね。優子はもう、私なんかよりもずっと賢いものね」
　母さんも、心配する気持ちは分かるけど、いくらなんでもこの疲れきった状況で夜更かしなんか出来ないわよ。
「ええ」
　ホテルのスタッフさんから鍵を受け取り、あたしはホテルの部屋に入った。
「おお、ここもなかなかだな」
　ホテルの中は、広々とした大きな部屋になっていて、寝室もあたしたちが普段使っている個室より少し狭い程度になっている。
　バスルームもあるけど、さすがにこちらはあたしたちの豪邸が上、部屋の数も少ないものの、1部屋ごとの広さは格別で、さすがにあたしたちの豪邸には劣るものの、ゆったりとした空間に、暑すぎず寒すぎない暖房は素晴らしかった。
「よし、今日はもう寝よう」
　現地時刻では、まだ午後4時だけど、あたしたちにとっては、朝まで眠れる自信もあった。
「じゃあ、それぞれの部屋で着替えようぜ」
「うん」
　あたしは比較的奥の部屋に移り、昨日から着っぱなしだった服を脱いでいく。
　誰もいない空間で、海外初のフルヌードを広々とした空間で晒しつつ、パンツ、ブラジャー、そしてパジャマの順番に丁寧に着ていく。

ちなみに、脱いだ服はフロントに頼めばよく、担当の通訳さんがその手のことをしてくれるという。
「ふあぁ……もう眠いわ」
飛行機での睡眠はとても浅く、一時的には覚醒するものの、やはり長続きしないわね。
「うん、優子ちゃんの言う通り。眠いからもう休もうぜ」
「ええ」
浩介くんの言葉にみんなも賛成し、あたしたちは寝室へと足を進めていった。
ベッドも高級材質を使っていて、寝心地はあたしたちの家と同格といったところかしら？
「むにゃ……」
ノーベル賞のことを考える。きっと素敵な式典になるはずだわ。
目の奥が歪み、あたしの意識は再び闇の中へと落ちていった。

「ん……」
朝起きる、いや、まだ夜かしら？
外はまだ真っ暗になっている。
「えっと、今の時間は……午前３時……」
ストックホルムでなくても真夜中の時間よね。
ちなみに、蓬莱教授から渡された表によると、この時期もストックホルムの日の出は午前９時ちょっと前で、日の入りが午後３時前。つまり日照時間は６時間しかなく、１日が２４時間と考えると１８時間も夜が続くことになる。
あたしたちが普段住んでいる東京ならあり得ない日照時間の短さだわ。
ということは、今が夏至に近い季節なら、この時間でももうすぐ夜が開けるということかしら？
……何だかあんまりそういうのって好きじゃないわ。住めば都何だろうけど。
ベッドを見ると義両親はまだ眠っていて、浩介くんは起きた形跡が

あった。
あたしは別の部屋に移動し、今日の服を着ることにした。
今日は1日中暖房の効いたホテルで過ごすことになっているので、薄手の室内着を選ぶことにした。
「これでよし」
あたしは着替えを終えると、メインの部屋へと足を進めていく。
さて今日からの滞在期間、どういうイベントが待ち受けているのかしら？

２０２７年１２月７日　ホテルの中で

「おはよう」
「優子ちゃんおはよう」
浩介くんは、よく分からない言葉でしゃべっているテレビを見ている。
しかし、予め日本人が予約していたと知っていたのか、ご丁寧に下に日本語字幕がついていた。
「今日は早く起きちゃったわね」
「ああ、まあしょうがねえだろ」
明日以降は、このストックホルムを本格的に回ることになる。
街の服屋さんで、浩介くんはタキシードを買う。
あたしは、既にパーティー用に買い直したドレスがあるので、授賞式はそれで、晩餐会は別の服で出ることになる。
いずれも、ぬいぐるみさんは欠かせないわね。
特にあたしにとっては緊張を和らげる効果もあるもの。
「テレビ、これ何かしら？」
「現地の深夜番組だけど、よく笑いのネタが分からねえや」
まあ、日本人だものね。
スウェーデン人に向けたお笑いが分からなくても仕方ないことよね。
「他のテレビ番組では徴兵制についてもやっていたな」
「へー、この国って徴兵するんだ」
正直意外だと思う。
「ああ、１８歳から２１歳の男女だってさ」
浩介くんが驚きの発言をする。
男女って……女の子を戦場に送っちゃうの？
「女性まで兵隊に出すの!?」
「ああそうらしい。ただ、女性兵士を前線に出す弊害ってのが一杯あって」
浩介くんが女性兵士の弊害を話している。

「分かったわ。あたしみたいに体力の無い女の子を出しても足を引っ張るだけとか？」
「あーいや、今の戦争は体力ある男でもそれはあるんだ」
え？　それじゃあ徴兵しても仕方ないわよね？
スペシャリストじゃないと役に立たないわけでしょ？
「え？　だったら徴兵制はいらないわよね？」
「まあ、現代の戦場では基本的にそうだよな。ただ、それを言っちゃったらおしまいだ。どうしても量を確保したいんだろう？」
まあ、徴兵するってそういうことよね。錬度や士気だって低下しそうなのは素人でも分かるけど、それを差し引いても量が必要ってことは、相当な人手不足なのは明らかな話。
ましてや女性まで兵隊に取らなきゃいけないって、第２次大戦末期でも、女性が軍隊に駆り出されたなんて話、日本じゃ聞かないのにスウェーデンはどれだけ切羽詰まってるのかしら？
やっぱり蓬莱教授の言う通り、スウェーデンは治安が悪いのは本当みたいね。この国に生まれなくてよかったわ。
あたしが軍隊なんかに入ったら、何もかもできなくて自殺に追い込まれそうだし。
「でも、徴兵ってことは、あたしもってことでしょ？　そんなの無理なんじゃない？」
高校の体育の授業でさえ、全然ついていけないし、対戦型のゲームだと頻繁に泣かされたりしてたし。
「あー、優子ちゃんだとなおのことだろうけど、実際十分に強い女性兵士でも、男性と行動を同じくするってのは難しいんだ」
「へー、でもどうしてかしら？」
浩介くんが、恐らくさっきのテレビでの知識をもとに話している。
うん、あたしも気になるので聞いてみよう。
「そりゃあ、一瞬の油断で死ぬような戦場で、もし近くに女性兵士がいたら、男だったらどうする？」
「どうするって、女性兵士を守ろうとするに決まってるわよね？」
それがオスの本能ってものだし。

ましてや戦場だもの。
「そう、その通り。でも戦争の場合は、時には助からなさそうだと思ったら見捨てることも必要だし、場合によっては自分たちの方を優先してそれからの方がいい場合もあるだろ？　だけど女性兵士が近くにいると、男ってのはそういう打算を全く取れなくなっちゃう。だから男女が戦場にいるときは真っ先に女が狙われちゃうんだ。そしてこれは、どんなに訓練しても無理らしいんだ」
浩介くんが話すことは、あたしも同意見だわ。
実際、あたしも男だったし、何よりも男らしい男の子の浩介くんの妻になったから、男はどうしたって女を守りたくなるし、あるいは女の子の前ではかっこつけたくて仕方の無い生き物だってことも知っている。
原始時代、狩りに出ていたのも主に男だったのは、そういう所に原因があると思う。
「ふう、それでも、女性への徴兵はやめないのかしら？」
「もちろん、後方支援だけって国が多いよ？　実際、安全な後方で介護とかをする方が男性の士気も上がるんだ。生きてまた帰ろうって」
「あー分かるわ」
やっぱり、あたしはどこまで行っても、何年たってもＴＳ病の女の子だった。
浩介くんが話す男心も、既に優一でなくなって１０年以上の月日が経っても、忘れることはない。
いや、既に男を失って５００年近く経つ永原先生も、男心のことをよく分かっていた。
あたしたちは雑談をしつつ、朝の時間を過ごした。

「あら、優子ちゃん、浩介、起きてたのね」
「うん」
午前５時前、義両親が起きてきた。
「２人とも、お義母さんたち、今日は通訳の人と観光に行くわ」
通訳の人は、ガイドさんも兼ねている。

あたしたちは今日はこのホテルから出ないけれども、お義母さんたちは違う。
「ええ、気を付けてね」
朝食は午前８時の予定で、ホテルの方がこっちに持ってきてくれるそうだった。
それまであたしたちは、思い思いホテルの中を散策した。
浩介くんはもう一度横になって仮眠をとっていた。
うー、時差って結構辛いわね。肉体年齢上のはずの義両親は、大丈夫かしら？

コンコン
「はい」
「シツレイシマス、アサゴハンオモチシマシタ」
明らかに片言の日本語が聞こえてきた。
通訳さん呼んでもよかったのに、何だかちょっとだけ嬉しいわ。
そう思いながらあたしは扉を開けて、ホテルの人を通してあげる。
「コチラガ、アサゴハンニナリマス、ゴユックリドウゾ」
やはりスイートルームとあって、お金を払った分サービスはとても良い。
この日本語も、ホテルなりの粋なサービスといった感じでとても好印象だった。
並べられた料理も、このホテルのシェフが腕によりをかけて作ったものなのは確かみたいね。
ちなみに、料理まで和食と言うことはない。
こんな遠い異国に来てまで和食というのももったいないものね。
「「いただきまーす」」
家族全員でいただきますをして、早速一口食べてみる。
「もぐっ……んー！」
「やはり美味しいな」
スウェーデンの料理と言われても、あたしたちには馴染みはない。
だけど結構あたしたちの好みに合わさっていると思う。

まあもしかしたら、ノーベル賞の日本人が泊まるということで、日本風にアレンジを加えているのかもしれないけど。
「そりゃあ高級ホテルのスイートルームの朝食だもの。美味しいに決まってるわ」
お義母さんが実も蓋もないことを言ってしまう。
それでも、あたしたちがよく食べている銀座や市ヶ谷などにある料亭の日本料理の方が、美味しく感じてしまう。
まあそこは日本人だということを差し引けば、互角と言う判定に十分ね。
ただ、1つだけ違和感を感じることと言えば、朝食を食べる食卓なのに、外は真っ暗ということ。
午前8時代なら、日本なら冬至でも明るくなっているはずなのに、高緯度に位置するストックホルムはそうではない。
これが赤道なら、季節による日照時間に差がなくなる代わりに、季節もほぼ夏一色になるのよね。
「ん、このサラダいいわね」
お義母さんがサラダに着目する。
確かに、美味しいとはあたしも思う。
「ええ、我が家でも参考にしたいわね」
食べた感じ、ドレッシングの調節がうまいと思う。
あたしたち主婦と違って、腕と時間をかけてもいいものを作るのがシェフなので、微妙に畑違いかもしれないけど。
ともあれ、試してみる価値はありそうね。
……まあ、ノーベル賞の授賞式が終わって家に帰るまでに覚えているかは別だけども。

「「ごちそうさまでした」」
朝食を食べ終わる頃になってようやく空がほんの僅かに明るくなり始めていた。
でも、日の出の時刻にはまだなってないので、いわゆる「薄明」と呼ばれる時間なのが分かる。

食べ終わった食器は、ホテルの人を呼び出せば問題なく、ホテルの人に片付けてもらった。
「じゃあ、私たち行ってくるから、お留守番お願いねー」
「はーい」
これ自体は、家庭でも以前からよくあることだったけど、見方を変えれば、ノーベル賞学者2人にお留守番を頼むおじさんおばさんという構図でもある。
もちろん家族だからいいんだけど、微妙にシュールではあると思うのよね。
扉が閉められ、あたしたちは2人きりになった。
「優子ちゃん、どうする？」
「うーん、スピーチの内容考えようよ。そろそろ英訳もしていかないといけないし」
「あーそうだなあ……」
あたしたちは日本人だし、そんな素晴らしい英語を使う必要も無いと思う。
さっきの、スウェーデンでの徴兵のお話で分かった。
今国際世論では、あたしたちの提言もあってフェミニズムは大幅に勢力を弱めたはずだったが、やはりゾンビのように復活するらしい。
女性への徴兵は、実現不可能な男女平等を無理矢理推し進めた果てのことだとあたしは感じた。
ＴＳ病のことを、協会の英訳では「Ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓｓｅｘｕａｌ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ」っていう。
そうね。あたしのコンプレックスや、幼い日々への思いだけではなくて、こういったことを考えていかないといけないわね。
そうするとうーん、これはこうがいいかしら？
まず浮いた格好について言われると思うから、それについて話すとして……やっぱり、自分のＴＳ病に関する思いとかを、話すといいかしら？
「そうすると、やっぱりフェミニズムに対するアンチテーゼになっちゃうわね」

大学生だった時に、フェミニストの講師がいて、あたしが論破したあげくに退職に追い込んだことがあった。
その時と同じような論争を、あちらでもするかもしれない。
旦那好みに男好みに、それが理想だもの。
ふふ、今頃そのあたしが世界一の資産家でしかもノーベル賞になっちゃって、驚いているわよねきっと。

「ふー少し休憩」
「うん」
外がすっかり明るくなると、あたしの中でも構想がほぼ出来てきた。
男性としての生い立ち、ＴＳ病になってからのこと、女の子になって出来たコンプレックスのこと、そしてＴＳ病になったからこそ分かる、男女平等がいかに無理なことかということも。
浩介くんの方も順調に進んでいるけど、あたしほどではなかった。
休憩はとりあえず昼食を挟んでたっぷり取ろう。
あたしはもう少しで、日本語を英語に直すだけになると思うから、電子辞書を片手にスピーチの原文を書いていきたいわね。
浩介くんの方はどうかしら？
「ねえあなた、あなたは原稿進んでるかしら？」
「ああ、もちろんだよ。まあ、優子ちゃんほどじゃないけどね」
「う、うん」
「ところで優子ちゃん、街がきれいだぜ」
浩介くんが、街の風景を見ながら言う。
「あら、本当だわ」
ホテルの最上階から見たストックホルムの街はきれいだった。
少ない日照時間のこの明るい時間には、やはり飛行機で上から見た時と同じく、水が多いイメージの通りだった。
「空気は澄んでいるみたいだけど、果たしてどうかな？」
「あはは……」
治安の悪さというのもあって、やはりよく分からない。

一方で、ノーベル賞の季節とあってか、ホテルからも分かるくらい、あちこちに飾りつけがなされていて、以前メダルで見た時と同じく、ノーベルの顔らしきもののもちらほら見える。
「えっと、式典はこっちで……」
「晩餐会が、この建物だっけ？」
授賞式にはストックホルムのホールで、晩餐会は市役所にある「青の間」という宴会場で行うことになっている。
スウェーデン国王の他、王族たちまで参加するという。
平和賞の人だけ、ノルウェーのオスロで行われるが、他の受賞者たちは出席することになっている。
「おや？　これ」
「ん？」
浩介くんがホテルの入り口付近に行くと、現地のものと思われる新聞が置かれていた。
そこの新聞の内容のうち、ノーベル賞に関するところだけ、印刷された白い紙で、翻訳文が入っていた。
「ほうほう、どうやら今日は俺たちの特集らしい。えーっと何々？」
日本人女性としてはじめてのノーベル賞受賞者の篠原優子さんと最年少のノーベル生理学・医学賞受賞者の篠原浩介さん夫妻、彼らの指導教官でもあった蓬莱伸吾さんは、日本人初の複数回受賞であると同時に、世界ではじめてノーベル生理学・医学賞を2度受賞した。
彼らの業績は歴代のノーベル賞の中でも、突出して偉大な研究と言えよう。
元来ＴＳ病の人のみが受けていた不老を、あらゆる人類に向けて適応し、日本経済急成長の原動力ともなっている。
また、彼らは、不老サービスを提供する「蓬莱カンパニー株式会社」を立ち上げ、瞬く間に資産が急成長し、現在の資産額は蓬莱さんが世界一、篠原夫妻がそれぞれ世界2位につけている。
「なるほどねえー」
最近では、ノーベル賞にばかり意識が向かっていたけど、あたしたちは世界最大の資産家でもある。

普通こうしたお金持ちは実業家なので、ノーベル賞とは畑違いになる。
実際、これほどの資産家でノーベル賞を受賞したのも、史上初よね。
コンコン
「はーい」
「チュウショクヲオモチイタシマシタ」
先程のホテルの人が、昼食を持ってきてくれた。
昼食もまた、おいしかった。

ストックホルムの昼は短い。改めて午後2時の夕焼けと、3時前に日が落ちて真っ暗になってしまう現象には驚かされた。
お義母さんたちは、夕食を食べてホテルに戻るらしく、夜8時に戻るとの連絡が入った。
「うー、スピーチが決まらねえ……」
浩介くんが、唸っていた。
あたしは英語に直す作業を完了して寛いでいる。
スピーチの内容は、晩餐会まで取っておきたいから。
「そうだ優子ちゃん」
「ん？」
浩介くんが自分のキャリーバックに行き、何かを取り出していた。
「これ、着てよ」
「え!?」
それは、「秘密の部屋」にあるチアリーダーのコスプレで、まだあたしが着ていない水色で一番露出度の高いタイプだった。
しかもご丁寧に、ボンボンまで持ってきているし。
「応援、優子ちゃんが元気くれたら、頑張れると思うから」
「うー、わ、分かったわ……覗かないでね」
「おう」
相変わらず、浩介くんは誘うのがうまい。
でも確かに、こういうコスプレもまた、楽しいのも事実なのよね。
あたしは衣装とボンボンを受け取り、部屋の鍵を閉めて寝室へと向

かう。
まず服の上着とスカートを脱ぎ、下着姿になる。
うー、トップスもスカートも、今までのチアよりずっと露出度高いわ。ここが暖房効いてなかったら大変だわ。
まずトップスから。
んー、少し胸がきついわ……ふう……うー、完全にへそ出しね。
で、これがチアの命綱とも言えるアンダースコート、スカートと同じ色でブルマタイプのゆったりとしたタイプで、パンツの上に重ね穿きをする。
こっちは今までと違って布面積広めで、いわゆる「ハミパン」率は一番低い。
今日のパンツが純白なのもいいわね。
最後にスカートを穿いて、ボンボンを持って鏡の前に立つ。
「うっ……これで浩介くんの士気を上げるのよね」
胸が強調され、スカートも短く、アンスコを重ね穿きしてるので、見せるのを前提に激しく動き回る。
とすると、やっぱり重要なのは……
「フレーフレー、浩介くん。フレーフレー、浩介くん。頑張れ頑張れ浩介くん」
ボンボンと足を使い、足をキックしたりその場で一回転したりして、鏡の前でアンスコを披露してみる。
うん、良さそうね。
あたしは意を決して、浩介くんのいる部屋に戻った。
「うおー！　優子ちゃんエレー！」
「あううっ……」
浩介くんの反応は、あまりにも予想通り過ぎるものだった。
「フレーフレー浩介くん、頑張れ頑張れ浩介くん！」
あたしはさっき実践した通り、浩介くんの前でアンスコを使って応援する。
スカートの中を堂々と見せるのは、やっぱりアンスコがあっても恥ずかしいわ。

「うっ……よーし！　頑張るぞおおお!!」
浩介くんは、あたしの応援でしゃかりきになってくれた。
やっぱり、あたしのコスプレほどに効果のあるものはないみたいね。
そして……
「あの……実は下半身も頑張っちゃって……」
「うー、またなのね」
「優子ちゃんのチア、可愛すぎて……」
チアのコスプレでは、アンスコを重点的に注目されることが多い。
今回もきっと、そうなるはずだわ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
もー、こんな時までこんなことするんだから。
しかも浩介くん、大事な物忘れてるし。うーん、でもいいわよね。
もうそろそろなっちゃっても。
あたしは急いで服を着替え直してから、帰ってきた義両親に対応し、夕食を一緒に食べた。
ちなみに、夕食はスウェーデンではなく周辺の別のヨーロッパの国の料理になった。
まあ、せっかくだし、色々な国の料理を味わいたいわね。
起きたのが早かったので、すぐに眠くなってきたけど、頑張って起きた。
お風呂場は、ヨーロッパのホテルということで、仕様が日本より大分変わってて驚いた。
あたしが寝たのは午後９時だった。
スピーチも完成し、明日明後日はほぼ自由時間になるわね。

## ２０２７年１２月８日　伝説の足跡へ

１２月８日、今日は完全に観光を楽しむ日になっている。
ひとまず朝食を食べて、あたしたちは何組かに別れて観光を楽しむことになっている。
なので今日の服はロングスカートに暖かいストッキングを履き混む重装備になっている。
「ねえあなた、どこに行こうかしら？」
ご飯を食べ終わり、あたしと浩介くんが雑談に講じていた。
「やっぱ遊園地とか博物館がいいなあ」
遊園地に博物館かあ。
でも美術館も捨てがたいわよね。
「うーん」
スピーチの内容は決まったけど、観光の内容は全く考えていなかったわ。
「まあ、こういう時はさ。蓬莱さん所に行こうぜ。何せ２回目だし、色々と知ってるだろ？」
浩介くんは、当たり障りのない提案をしてくれる。
まあ、夫婦じゃなくても考えることは同じよね。
「うん、そうかも」
ということで、あたしたちは蓬莱教授の所に行って、指示を仰ぐことにした。

「ふむ、では一緒に行くとするか」
「ええ、お願いします」
あれ？　蓬莱教授の部屋の前に永原先生たちもいるわね。
どうやら、何かを相談しているみたいだけど……
「おや、優子さんに浩介さんではないか。どうしたんだ？」
蓬莱教授がこっちに気付いて話す。
「えっとその……今日はどこに回ろうかと思って――」
「なるほど。永原先生たちと同じだな」

蓬莱教授が少しほっとした表情で話す。
「といっても、通訳の人がサポートしてくれるんだほら」
「よろしくお願いします」
蓬莱教授が、一昨日見た通訳さんを紹介してくれる。
通訳さんが軽く一礼をした。
「とはいえまあ、俺といた方がいいと思うのも無理はないだろう。よし、7人は少し大所帯だが、いいだろう。一緒に行こうか」
「「はい！」」
蓬莱教授の号令に、あたしたちも一斉に答える。
何だか、付和雷同ここに極まるって感じだけど、知らない場所だし仕方ないわよね。
まあ、治安の悪い場所もあるから、なるべく固まって行動した方がいいというのは、ここに来る前に日本で散々教わったものね。
「篠原さん、どうして蓬莱先生のもとに？」
永原先生が、「念のため」という感じであたしに質問を投げかけてくる。
「うん、やっぱり、外国って不安で」
ノーベル賞を取って、世界一の資産家になりながら、「自分の国の外に出るのが怖い」と言うのも、何だか情けない話だとは思うけど。
今はノーベル賞のお祭り中だけど、だからこそ妬みのあるの人の襲撃は怖いのよね。
そういったことを考えれば、治安の悪い場所に行くのは怖いのは事実だった。
お金と名誉だけじゃ、物理的には身を守れないのよね。
「ええそうでしょう。私たちはむしろ年齢が行っているからこそ不安なのよ」
永原先生、比良さん、余呉さんの「3長老」も、やっぱり女性だけで歩くのは不安という認識らしいわね。
むしろ余呉さんの言う通り、長生きした果てで初めて海外に行くのはむしろあたしたちよりも不安かもしれないわね。
「そうだろうな。一緒に行った方が良さそうだ」

永原先生と比良さん余呉さんの服装は、やはり北欧の冬らしく、かなりの厚着になっている。
あたしはこれだけの厚着でも胸が目立つけど、永原先生たちのレベルの巨乳だと、さすがに隠れてしまっている。
あたしだって、永原先生たちより薄いと言うわけでないことを考えれば、やっぱりあたしの胸って大きいわよね。
ふふ、この辺りの国の人は巨乳が多いと言うけど、そうじゃない人がいたら、また妬まれるかしら？
「よし、じゃあ１０時になったら行くぞ。それまで待機してくれ」
あたしたちは、今日の行き先を蓬莱教授に委ねることにした。
恐らく、数ヶ所を回ることになると思うわ。
どこを回るかは、お楽しみといったところね。

「――」
「いってらっしゃいませー」
通訳さんが、ホテルのフロントの人の言葉を翻訳してくれた。
この手の通訳と言えば、ＡＩの仕事になりつつあるけれども、それでもＡＩはどうしても極端な直訳になっちゃう。
ヨーロッパ系の言語同士ならこうした問題も解消されつつあるけど、日本語と英語などの場合、日本語が持つ言語学的な遠さの問題から、こうして人間の通訳が必要だったり、あるいは通訳が観光案内を兼ねていたりと様々な多角事業がなされている。
「はうー、寒いわー」
外は真冬日でかなり寒い。
しかも例によって午前１０時過ぎといっても朝日が登り始めたばかりの時間帯だったから、余計に寒さが身に染みるわ。
一応、これだけの高緯度にしては、暖かいらしいけど。
そもそも北欧でなくても、ヨーロッパって大半の地域が北海道より北にあるのに暖かいのって、海流のお陰なんだっけ？
「よしこっちだ」
蓬莱教授に導かれるまま、ストックホルムの明るい街中を歩く。

そこはまさに「水の都」にふさわしい場所で、もっと言えば「海に浮かぶ町」でもあった。
ストックホルムはスウェーデンの中でも南の方で、逆に言えばこれより北の北欧地域やアイスランド、グリーンランドといった地域では、一日中昼だったり、逆に一日中夜だったりするのよね。
確か北緯６６．７度以上だとそうなるんだっけ？
あたしたちは、蓬莱教授の後をひたすらついていく。
道行く人々も、あたしたちに注目して、何かを話しているけど、あたしには何を言っているのかはよく分からないわね。

「――」
「おっと」
「わわっ」
「きゃっ」
順調に歩いていると、蓬莱教授の足取りが急に止まった。
あたしたちもぶつかりそうになって、何とか避けた。
よく見ると、前には数人の男女のグループがいた。
「サインください。だそうです」
通訳の人が棒読み口調でそう話す。
あたしたちが歩み寄って見ると、蓬莱教授がいつの間にかメダルをかけていた。
そうよね、ノーベル賞だもの。
「蓬莱教授、これって？」
わざわざ、ノーベル賞のメダルを掲げながら歩かなくてもいいと思うんだけど？
「ああレプリカだよ。本物は本番の授賞式に持っていくんだ。普段は自己顕示はしねえけど、あんまりそういうのに無関心も不健全とも思ったんだ……まあこういう時くらいはしておいたほうがいいんじゃねーか？　何せ、俺は数少ない２回目のノーベル賞だからな」
蓬莱教授がサインを書きながらそう話す。
蓬莱教授も、やっぱりノーベル賞にはかなりの愛着とこだわりを見

せている。
ましてや、自分は世界でも数例しかない複数回の受賞者ということもあって、見せびらかしたくなるのが人間ってものよね。
「――！」
蓬莱教授の近くにいたあたしを見て、男女グループの目の色が変わり、あれこれ叫び始めた。
「この人、ノーベル賞じゃない!?　ほら、篠原夫妻の妻の方だよ！　だそうです」
あはは、どうしようかしら？
嘘つくのも悪いしうーん……
「えっとその、確かにあたし篠原優子よ。今日はみんなで観光に行くのよ。今日はゆっくりしたいから、どいてくれるかしら？」
「――」
通訳さんが、あたしの日本語をスウェーデン語に直して話してくれる。
うーん、やっぱり不便と言えば不便よね。
大学に入ってからも一応英語の講義はあったし、考えながらなら多分問題ないとは思うけど。
……お、みんなどいてくれたわね。
よかったよかった。
「よし、じゃあこっちだ」
蓬莱教授は、街中をまっすぐ進んでいく。
どんどん街並みが古くなっていくと共に、ここが「旧市街地」だと通訳さんが教えてくれた。
永原先生が建物の古さに感心していた。旧市街地に、何があるのかしら？
そして、あたしたちは1つの建物の前に到着した。
いかにもな欧風建築で、高さは低いが重厚そうな建物だった。
スウェーデン語はよく分からないので、何の建物かは分からない。
でも、正面の入口をよく見ると、ノーベル賞のメダルのデザインと同一になっているから、ノーベルに縁のある建物だということは容易

に推測できた。
「ここはノーベル博物館……要するに、ノーベル賞に関連する事が展示されている博物館です。普段はまだ開館時間ではないのですが、今はいわゆるノーベルウィークなので早めに開館してます」
通訳さんが蓬莱教授に代わって説明してくれる。
どうやら、この建物は昔、証券取引所として利用されていたらしく、役目を終えてノーベル博物館になったらしい。
「その通り。ここには歴代のノーベル賞受賞者が称えられているのさ。もちろん、この俺もな」
蓬莱教授が、国からぶら下げたノーベル賞メダルのレプリカを見せつけながら話す。
蓬莱教授にとっては、ノーベル博物館に称えられるのは2度目ということになる。
あたしは、この期に及んでまだこの博物館の凄さ、当事者としての自覚が芽生えていない。
いや、ノーベル賞という実感さえ、まだ沸かない。
正確に言えば、飛行機に乗ったときはぼんやりと湧いてきた気もするけど、この街の非現実的な空気に押され、その自覚は風に吹き付けられた雲のように散り散りになってしまった。
ノーベル賞を取ると、マスコミが一挙手一投足追いかけてくる。
ましてや、蓬莱教授は2回目な上に、これまでのノーベル賞と比べても、全く「格が違う」業績を称えられることになる。
この博物館での注目度も、高いはずよね。
「いやー、1回目も来たんだが、やはりノーベル賞を取ったからには、ノーベル賞の先輩方に思いを馳せルノも重要だ。そう言う意味で、ここに行くのは必須と言っていいだろう。よし、じゃあ入るか」
蓬莱教授が中へと入ろうとすしたので、あたしたちも続く。
館内はやはり暖房が効いていて暖かかった。
さて、入館料は「スウェーデン・クローナ」っていう現地の通貨を使わなきゃいけないのよね。

「ねえ蓬莱先生」
「ん？」
券売機で入館料を払うために入場券を買おうとした蓬莱教授に永原先生が話しかけてくる。
「私と比良さんと余呉さん、子供料金でもいいかしら？」
「え!?」
永原先生がとんでもないことを話し、蓬莱教授もさすがに驚いている。
子供どころか、その辺の大人数人分は長生きしてる永原先生たちが子供料金って……
「一回やってみたかったんですよ。海外では日本人女性がどれくらい若く見えるか？　私たちなんて特に日本人の中でも１０代前半で通じるくらいには若いですから、こっちなら小学生でも行けるかなって？」
確かに、よく見ると永原先生たちの着ている服はいつもより厚着になっている。
永原先生は黒いワンピースに頭と胸に赤いリボンという、以前修学旅行で見たようなかなり幼い少女性を強調した格好だったし、比良さん余呉さんも、似たような格好だった。
まず間違いなく、騙せるとは思う。
「あー、どうなっても知らんぞ。俺は責任取らんからな。子供のボタンはこっちだ」
「はーい。きゅふふ」
この中でも一番背の低い余呉さんが不適な笑みを浮かべ、券売機で子供３人を買う。
通訳さんは見て見ぬふりで、結局大人４人に子供３人となった。
というよりも、永原先生って、ここにいる他の６人の年齢の合計と同じくらいよね？
あーでもさすがにそこまでではないかしら？
「大人４人に子供３人お願いします」
「――」

蓬莱教授がチケットをまとめて渡すと、受付の人が驚いていた。
あらら、やっぱり永原先生たちばれちゃったかしら？
「――」
「えっとその、『あなたたち、本当に大人料金でいいんですか？』とのことです」
って、あたしたちなのね。
まあ確かに、日本人は若いって言うし、あたしたち不老ならあり得るかしら？
でも、あたしたちの顔を見たら分かりそうなものだけど。
「おいおい、俺の顔は知ってると思うけど、この２人の顔も知らないのかい？」
「――」
蓬莱教授がそう言い、通訳さんが伝えると、受付の人の目の色が変わった。
恐らく、そっくりさんか何かだと思ってたあたしと浩介くんが、本物だと気付いた顔だわ。
「――」
「失礼しました。どうぞ」
結局、永原先生たちが子供料金なのは、全く怪しまれなかった。
「へっへん、やっぱり女性は若く見られてこそよね」
永原先生が得意気に胸を張る。
確かに、これは女性としてかなり自信がつくわよね。
子供料金で通じたってことは、それだけ若く見られたってことだし、受付の人の態度を見れば、あたしと浩介くんだって、子供料金が通じる容姿ってことだものね。
永原先生だって、人類最長寿で５０９歳で、しかも世界でも５番目の大富豪だというのに、やっぱり知られていない人には知られていないのよね。
うー、子供料金で入ってみたいわ。ってダメよ優子。いくらコンプレックスでもそれはいけないって。
「さ、気を取り直して行こうか」

その場にとどまっているのもあれなので、蓬莱教授が歩き始めた。
ノーベル博物館には、ノーベルの業績の他、各ノーベル賞受賞者の業績や、その他様々なノーベルに関することが展示されているという。
もちろん、受賞者全員が称えられているということは、もちろん蓬莱教授の展示も、この博物館のどこかにあるのよね。
それにしても、広そうな館内だわ。
「上の方を見てみ？」
「え!?」
蓬莱教授が、突然館内の天井の方を指差した。
すると、ローラー状に多くの人の名前と顔写真が飛び交っていて、視界には「Ｈａｎｓ　Ｓｐｅｍａｎ」という名前が書かれていて、写真はいかついおじさんだった。
恐らく、小谷学園の時にやった「シュペーマンの実験」の人よね？
「あらシュペーマンって、あの生物で出てくる奇形をわざと作り出す気味の悪い実験の人よね？」
永原先生は古典の先生だけど、やっぱり「シュペーマンの実験」のことは知っていた。
まあ、発生学の教科書には必ずと言っていいほど出てくるものね。
２匹のイモリの胚を使った根気のいる実験で、双頭のイモリが出てくるのよね。まあ気味が悪いと言えば悪いけど、永原先生も口が悪いわね。
「永原先生、そう言うことを安易に言わないでくれ！　気持ちは分かるが、彼の実験のお陰で、生命の誕生の秘密や、クローン技術や細胞移植といった技術の基礎になっていったんだ。高校の教科書では表面的にしか出てこないが、偉大な学者なんだぞ！」
蓬莱教授は、同じノーベル生理学・医学賞受賞者としての仲間意識があるのか、珍しく永原先生にも強めに当たっている。
それよりも、あれだけ自尊心の高い蓬莱教授が、ここまで褒め称えるというのは、よっぽどすごい人なのよね。
「あはは、ごめんなさい」

そう話している間にも、いくつもの旗が行き交っている。
その多くは白人男性、特にアメリカ人男性のものだけど、一部には他の人種も混じっている。
既にノーベル賞の歴史の中でも１０００人近くの人物がこれを称えられている。
１人１人が偉大な人たちだけど、やっぱり歴史が長いだけあって数も多いわね。
「この旗の中のどれかに、俺の名前と顔が刻まれているし、優子さんたちもこの仲間に入るんだ。さ、進むぞ」
蓬莱教授の言っていたこと、このノーベル博物館を見て、あたしたちがノーベル賞になったんだということを、少しずつ自覚し始めた。
ここの展示コーナーは、まず「ノーベル賞」の成り立ちが紹介されていた。
ノーベル賞は、ノーベルの遺言と共に作られた賞で、賞金がノーベル財団から出ている。
賞の種類は「物理学賞」「生理学・医学賞」「化学賞」「文学賞」「平和賞」、更に後年になって「経済学賞」が加えられて現在に至る。
特に前者３部門は、「科学３部門」とも言われていて、特に権威が高い。
あたしたちが受賞する、その「最高の栄誉」たる科学３部門を受賞した学者さんは、みんな偉大な学者が多く、あたしも浩介くんも「こんな偉大な人たちと一緒でいいのかな？」という疑念が深まっていく。
一方で、文学賞、平和賞、経済学賞は一部に異論があったりもするらしい。
「ノーベルはダイナマイトを作った。彼は『ダイナマイトのような強力な爆発物が兵器に扱われれば、きっと人々は恐れおののいて戦争をやめるだろう』と思ったんだ。現実は２つの世界大戦と共に、核兵器の登場でようやく収まったがね」
蓬莱教授が、ノーベル本人について話し始めた。確かに、ノーベルもバカじゃないわけで、ダイナマイトが兵器に使われることくらい、

容易に想定できるというのは、言われてみれば確かにその通りなのよね。
永原先生は、その説明を聞いて、何やら煮えたぎらない表情をしていた。
「ともあれ、ノーベルはダイナマイトで巨万の富を得たのは事実だ。こうして今でも遺産の利子などを使って、賞金の分配ができる程度にはね」
「ええ」
蓬莱教授の先導で、あたしたちは前に進んでいく。
それにしても、蓬莱教授が頭からメダルを掲げているせいか、さっきからかなり目立っていて、周囲の視線も凄いわ。
中には「Ｈｏｒａｉ！　Ｈｏｒａｉ！」何て声を上げている人もいるし、メダルを見に人だかりができないのが不思議なくらいだわ。

## ２０２７年１２月８日　偉大な人々

人々の騒ぎを尻目に、あたしたちは展示を進んでいく。
あたしたちはもちろんノーベル賞当事者だけど、だからこそ博物館を見て回りたいのよね。
蓬莱教授が、年代別のノーベル賞受賞者の展示に目を向けた。
最初は、１９０１年からだった。この年から、ノーベル賞が始まったらしい。
「確か余呉さんがノーベルと同級生だったかな？　それを踏まえれば、永原先生たちは大半のノーベル賞の受賞者たちよりも年上ということになるな」
蓬莱教授が、最初期のノーベル賞受賞者の展示を見ながら話す。
一応、ノーベル文学賞の受賞者に、ノーベル本人よりも年上の人がいたらしい。
この間、例えば北里柴三郎などが候補だったらしいけど、様々な事情で受賞しなかったという。
「北里柴三郎がむしろ研究を主導してたんだがね。死んでしまえばノーベル賞は二度と叶わん夢と消えるのさ。もちろん、例外はあるがね」
蓬莱教授が静かにそう話す。
「おお、これだこれ。見てみなよ」
蓬莱教授が、１つの展示を指差す。
「えっと、ピエール・キューリー……マリー・キューリー……」
この人たちのことはあたしも知っている。
キューリー夫人と言えば、女性科学者として唯一、ノーベル賞を２回受賞した人だもの。
この展示によれば、キューリー夫人は物理学賞と科学賞をそれぞれ受賞しているという。
「そそキューリー夫妻だよ。篠原夫妻以前に夫婦でノーベル賞を取ったんだ。ラジウムってあるだろ？　それが有名だけど、他にも色々な業績があるのさ。夫の方は、志半ばで馬車の交通事故で死んでしまっ

たのが残念だがね」
業績の展示欄は、英語の展示を見る限り、やはり放射性物質に関する研究ということになっている。
キューリー夫人も、その娘もノーベル賞を取ったけど、当時はまだ危険性がよく分かっていなかった放射性物質を浴びすぎて、白血病で死んでしまったらしく、彼女たちの使っていた実験室は、除染作業が進んで最近ようやく公開できるようのなったとか。
「他に複数回受賞した人としては、物理学賞を2回受賞した人が1人、科学賞を2度受賞した人が1人、後は科学賞と平和賞を受賞した人も1人いるな。この生理学・医学賞を2度受賞したのは、この俺が初めてだ」
そして、蓬莱教授は日本人としても、2回ノーベル賞を受賞したのは初めてのケースだった。
1回取るだけでも想像を絶する偉大さなのに蓬莱教授はそれを2回、しかもどちらもノーベル賞の業績の中でも最も偉大と言われている。
いや、不老業績は、ノーベル賞どころか「人類史上最大の革命」とさえ言われるようになった。その業績としてあたしたちまでノーベル賞になったのは意外だったけど。

他にも、1回目の受賞者はそれなりにクローズアップされていて、ノーベル物理学賞の第一回の受賞者は、あの有名な「レントゲン博士」だった。
今でも、健康診断なんかで「レントゲン」って言うものね。
あたしたちは黎明期のノーベル賞受賞者たちの展示を見ていく。
１９００年代から１９１０年代、１９２０年代と受賞者の展示は続いていく。
他にも、様々な学者がノーベル賞を取っているのがこの展示からも分かる。
もちろん、知らない名前が圧倒的に多い。
また初期のノーベル賞では共同受賞は少なく、単独受賞が多いのも

目についた。
そんな中で、あたしはとても身に覚えのある顔を見つけた。
「ほら、この人」
あたしが、１９２１年のノーベル物理学賞の受賞者として、「Ａｌｂｅｒｔ　Ｅｉｎｓｔｅｉｎ　１８７９―１９５５」という表示を見つけた。
この人の展示はやはり多めで、ここで写真を撮っている人も多かった。
比良さんが「来日した時はニュースにもなった」と言っていた。そう言えば、比良さんも余呉さんもアインシュタインよりも年上なのよね。
「お、優子さんいい所に目をつけたな。そう、恐らく歴代のノーベル賞受賞者の中でも最も有名なアインシュタインだな」
そこのパネルには、アインシュタインの顔と共に、彼の業績が書かれていた。
２０世紀で最も偉大な物理学者も、この栄誉に預かっていた。まあ、当たり前といえば当たり前よね。
「ところで、アインシュタインのノーベル物理学賞の受賞理由は何だと思う？」
蓬莱教授がここで問題を出してきた。
普通に考えれば相対性理論ということになるんだろうけど――
「わざわざ蓬莱先生が問題にするってことは、相対性理論ではないということよね？」
やっぱり永原先生も、同じ考えに至っていた。
「その通りだ。彼は『光量子仮説による光電効果の発見』によってノーベル賞になったんだ」
蓬莱教授曰く、相対性理論はあまりにも革命的な理論だったため、当時まだ学者の間でも議論があった。
とはいえ、これほど偉大な学者にノーベル賞を授与しないわけにもいかず、そこでノーベル物理学賞の理由として、ノーベル財団があえて光電効果の方を選んだという。

とはいえ、光電効果だって、立派なノーベル賞レベルの大発見で、場合によってはむしろ相対性理論よりも大きな発見でさえあるという。
「彼が物理学賞を受賞したということは、まあ当然と言えば当然だ。だが、俺は彼に親近感を感じているんだ」
蓬莱教授が「アインシュタインに親近感を感じる」と言った。
それは、単に「同じノーベル賞」という意識を超えている。大天才同士何かあるのかしら？
「あら？　蓬莱先生がですか？」
比良さんが不思議そうな顔をする。
恐らく、蓬莱教授がアインシュタインに親近感を感じている原因は、蓬莱教授1回目のノーベル賞の時の話だと思う。
「彼の業績で有名なのは、相対性理論だ。しかし彼は、相対性理論でノーベル賞を貰ったんじゃない。そうさ、俺と同じ、一番偉大な業績ではノーベル賞を取れなかった。俺がアインシュタインと違うのは、間違いなく人類史上最大の革命となるであろう『不老技術の立証』でもノーベル賞を取ったことさ」
蓬莱教授が、首から掲げられたメダルをまた誇示している。
博物館の天井部分に、数多くの人々の白黒写真が束のように渋滞していた。
「さ、もっと新しい年代に行こうか」
蓬莱教授がアインシュタインの展示から歩みを外す。
１９３５年のノーベル生理学・医学賞には、さっき出てきた「ハンス・シュペーマン」もいた。結構威圧感のある写真だけど、近くで見ると、確かに「偉大さ」を醸し出している。
他にも、ノーベル賞の受賞者たちの経歴はたくさん紹介されていて、また展示品の中には、ノーベル賞を取った実験の実演まであって、あたしたちを飽きさせない。
そして、戦後のノーベル賞受賞者のコーナーになると、日本人のノーベル賞受賞者たちの顔が見えてくる。
「ほら、彼が日本人で初めてノーベル賞を受賞した『湯川秀樹』だ」
蓬莱教授が、日本人の展示の前で止まる。

「私も覚えてるわ。日本人で初めてノーベル賞ということで、多くの人が自信を取り戻したのをね」
永原先生はどこか傍観的に言う。
つまり、永原先生には、そうしたことで自信を取り戻したりといった感じではないのかもしれないでわね。
恐らく、江戸時代を生きてきたからというのもあるかもしれないわね。
「日本人のノーベル賞は結構数が多いんだ。特に最近はね」
「そして、私たちのお陰でこれからも増えますね」
余呉さんが明るい顔をして言う。
それはそうだ。今日本政府はその財力と長寿命に物を言わせ、基礎研究に膨大な予算をつぎ込んでいる。
多くの国民が蓬莱の薬を飲み始めたことで、日本人の思考回路が極めて長期的な視野になっている。
そのために、今後更なる科学技術の発展と、それに伴いノーベル賞受賞者も急増すると考えられている。
もちろん各国も日本に勝とうとはしているけど、不老ならざる人々は、不老の人間の集団に、どのようにあがいても勝つことはできない。
「そうだな」
「まあ、私は今まで、蓬莱先生くらいしかノーベル賞取ったって人には会ったことないですけど」
永原先生が、つい勇み足を出してしまう。
「おいおい永原先生、それはちょっとないんじゃないですか！」
思わず、浩介くんが突っ込んで抗議する。
まだ自覚がないからあまり傷つかなかったけど、あたしたちを忘れられちゃうのはちょっとどうかなとも思うわね。
うーん、あたしももう少し、「ノーベル賞らしい」振る舞いを覚えたほうがいいのかしら？　でも、やり方分からないし、今まで通りでいいかしら。
「あ、篠原君、篠原さん、ごめんなさい……そうよね。私、教え子がノーベル賞に……それも2人も、なのよね」

永原先生が、自分に言い聞かせるように深呼吸しながら暗示をかける。
そう、永原先生にとっても、あたしと浩介くんのノーベル賞は、自分の教え子のノーベル賞でもある。
もちろん、高校ではそんなに専門的なことはしないとは言え、それでもノーベル賞ともなれば思いは違うはずだわ。
「さ、どんどん見ていこうか」
戦後のノーベル賞は、共同受賞が多い。
取り分け多いのが、「ノーベル物理学賞」で、文学賞と平和賞を別にすれば、あたしたち「生理学・医学賞」は単独受賞が多い。
最も、今回はあたしたちの共同受賞だけどね。
また複数回受賞した人は、それも含めて多いに称えられている。
その後、あたしたちは戦後のノーベル賞受賞者たちを次々と見ていき、そして２０００年代のコーナーに入る。
このあたりは、あたしたちが生まれて、物心つくかつかないかの頃の受賞者たちだった。
様々な分野で受賞者がおり、その中には民間人までいた。
「俺としては、この人こそ素晴らしい研究者だと思っておる。博士どころか修士号も取ってないのに、科学3分野でノーベル賞だからな。大天才がノーベル賞取るにしても、最低限基礎的な知識はどうしたって必要だ。そのラインが、博士だと俺は思っとる。そういう意味では、彼の受賞は俺の理解をも越えるものだ」
以前話していた、民間人のサラリーマンのノーベル賞受賞者の話だった。
蓬莱教授によれば、ノーベル賞受賞者の多くが、電話がかかってきたときに「冗談」だと思うらしい。
もちろん、あたしたちや彼のような例外を除けば、事前に候補者としての兆候があるらしいんだけど、仮にあったとしても、「まさか自分がノーベル賞になるとは思わなかった」というらしい。
ノーベル賞になるに決まっていると思っているような例外的な存在は、それこそ2回目の蓬莱教授くらいなものだった。

「彼の受賞で、マスコミのノーベル賞熱は高まったんだぜ」
２０００年代の受賞者はとても多い。
業績についても、昔のノーベル賞に比べると、かなり複雑化している。
いくつもの発見で、科学は加速度的に上昇していた。
そしてあたしたちはついに、２０１０年代の受賞者のコーナーに入った。
「ふう」
蓬莱教授が、少し緊張している。
そう、何を隠そう蓬莱教授は２０１２年、今から１５年前にも「ノーベル生理学・医学賞」に輝いている。
さっきから再三言われているように、この博物館にも蓬莱教授の展示があるはずだもの。
「よし、こっちだ。これを見てくれ」
蓬莱教授が一目散に目指した目標、そこには、今より本の少しだけ若い蓬莱教授の写真があった。
名前も「Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ」とあり、下の英文には１回目のノーベル賞の受賞経緯として、「万能細胞の発見」があった。
あの時メダルを見せてもらった時と同じくらいか、それ以上に、蓬莱教授のノーベル賞を自覚できるわね。
蓬莱教授が、展示に背を向けて自分の写真と並ぶ。
するとあたしたちだけではなく、周囲もざわつき始めた。
「Ｄｒ．Ｈｏｒａｉ！　Ｈｅ☒ｓ　Ｄｒ．Ｈｏｒａｉ！」
「Ｈｅ　ｉｓ　Ｎｏｂｅｌ！」
「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！　Ｓｈｅ　ｉｓ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ！」
さっきまでは、「何だか似ている人」という感じだったが、こうして写真と並ぶと、言い訳できないくらいに同一人物で、周囲が騒ぎ立てるのも無理はなかった。

「ほ、蓬莱教授、まずいですよ」
あっという間にあたしたちは人だかりに囲まれ、サインや記念撮影をねだられ始めた。
蓬莱教授だけではなく、あたしと浩介くんもノーベル賞なので、人々の注目はとても高い。
しかも、今はノーベルウィークで、2日後に授賞式があるから尚の事よね。
「全く、落ち着いて展示も見られねえなあ。これからが本番だったのに。ったく、しょうがねーや」
蓬莱教授は半ば呆れつつも、サインや記念撮影に応じ始めた。
というか、そりゃあ博物館で記念されてる人本人が来たら、普通にこうなるとは思うけど。

何とか警備の人が群衆を散らしてくれたので、あたしたちは見学を再開することができた。
更に館内放送でも、「現在ノーベル賞の方が見えられていますが、迷惑のないように」という注意喚起の放送まで流れる始末だった。
まあそりゃあ、ノーベル賞学者だって、ノーベル賞のお勉強したいものね。

「ここは歴代のノーベル賞たちの名言などを集めた場所だ」
色々な所から映像が流れ、ノーベル賞の人たちが何かを話している。
「すごいわね。でも、一体これって？」
永原先生が不思議そうに話す。
「まあ待て、よく見ていろって」
「「あ！」」
蓬莱教授がそう言いかけた次の瞬間、映像の中に蓬莱教授が写し出された。
映像の中の蓬莱教授は、展示の頃と同じ感じだった。
「ノーベル賞は栄誉だ。だがそこで立ち止まってはいけない。研究に

終わりはない。俺には更に大きな予定がある。その時に、できればまた、ここに来たいものだ」
映像の中の蓬莱教授は、今横にいる本物よりも少し若い声で話していた。
蓬莱教授の映像が消え、また別の人が写し出された。
「俺が1回目のノーベル賞を取った時にマスコミに向けて言った言葉だ。『ノーベル賞は目標ではない』ということに加え、『また取ってやる』という意思表示もあるんだ」
そして今、蓬莱教授は15年越しに有言実行して見せた。
「さ、次に行くぞ」
蓬莱教授は、次の展示へと向かっていく。
途中、団体客が何やら実験に注力していて、団体の1人があたしを指差し一時騒然となりかけた。
うー、もしかして、明日も明後日もこんな感じになるのかしら？
授賞式が終わって帰国してもしばらくは針のむしろだろうし、ノーベル賞って大変だわ。
「さて、これがノーベルのデスマスクだ」
更に館内を歩いていくと、ノーベル本人のコーナーに入った。
ノーベルは、死の直前に遺言状で自らの遺産を使ったノーベル賞を構想した。
2日後に行われる授賞式も、ノーベルの命日に行われている。
「そしてこっちが遺言状だな」
よく分からない言葉で、ノーベルの遺言状が書かれている。
もちろん、みんな内容は知っているけど。
言うなれば、「全てはここから始まった」といってもいいわよね。
「この遺言状、レプリカを博物館で買うことができるぞ」
蓬莱教授がとんでもない事実を話す。
いくらノーベル賞と言っても、遺言状が販売されているって、世界広しと言えどもここくらいじゃないのかしら？
「そ、そうなのね」
内容は知っていても、スウェーデン語なんて読めないし、買わなく

ていいわよね？
ともあれ、ノーベルについて、もう少し展示を見て行こう。
その後も、ダイナマイトを作るノーベルの様子などが、この博物館で誇らしげに展示されていた。
「兵器から、人々の生活は便利になっていくんだ。ノーベルはダイナマイトが軍事利用されることなんてはじめから分かっていたし、実際軍需会社に多く売っているからな」
軍隊だけではなく、トンネル工事にもダイナマイトは多く使われていて、またノーベル自身はダイナマイトの改良品として「ゼリグナイト」を世に出しているという。
「まさに彼は死の商人さ。でもその死を補って余るほどに、『生の商人』でもあったのさ」
蓬莱教授によれば、ダイナマイトやゼリグナイトの長所は、これまでの爆薬よりも安全であることこそが真価であり、そういう意味ではまさに「生の商人」でもあったのだという。
「蓬莱先生の言う通りだわ。私も京都の商家に奉公してた時があったから分かるわ」
蓬莱教授は、「死の商人は生の商人でもある」と語っていた。
永原先生は、その話に大きく賛成していた。
ノーベルは自信の発明が大量殺戮に使われることを悲観してノーベル賞を作ったと言うのは、どうやら俗説らしい。
ただ、ノーベルは当時のマスコミの誤報で、一度死んだことにされていて、その時に「死の商人死す」と書かれて以来、死後の評判に執着するようになったんだという。
結果的に、その執着が、世界で最も権威があると言われている「ノーベル賞」を生み出した。
そうこうしているうちに、あたしたちは展示のほぼ全てを見終わってしまった。
途中様々な妨害もあって、結構長居してしまい、いつの間にか時間は既に午後1時を回っていた。
「さて昼食といきたいんだが、その前に優子さんと浩介さんにやって

もらいたいことがある」
蓬莱教授は、博物館にある食事コーナーに向かいながらそう話す。
やってもらいたいことって何かしら？

## ２０２７年１２月８日　記録を残す

「こんにちは」

「――」

蓬莱教授が、食事コーナーのスタッフさんに話しかける。

すると、スタッフさんが大慌てで後ろに下がり、こっちに向かってくると、あたしたちにペンを渡してきた。

「蓬莱教授、マジックペンでどうするの？」

蓬莱教授が何をしたいのか、あたしにはよく分からない。

「ふふ、そこの椅子を倒してみ？」

蓬莱教授に言われるまま、あたしは椅子を倒してみた。

「あれ？　これって？」

椅子の裏には、白い文字でサインがしてあった。

そして、それはさっき受賞者のコーナーで見た人のサインだった。

「ノーベル賞の受賞者は、みんなこの椅子にサインを書き残していくんだ」

この受賞者は日本人で、実際日本語での名前も書かれていた。

ちなみに、この人の日付は１２月６日になっていた。

「え？　そういうことあるんですか？」

恥ずかしながら、色々と忙しくて、そういったことまで調べきれなかったわ。

あたしたちのノーベル賞が決まってからも、現実逃避の意味もあって会社の仕事が多かったせいでもあるけど。

「ねえ優子ちゃん」

浩介くんがあたしの肩を２回トントンと叩くと、食事コーナーの入口を指差す。

そちらをよく見るといつの間にか報道陣まで集まってきた。

もー、今日は人払いしたはずなのに。海外のメディアはそんなの関係ないのかしら？

「――」

「写真など撮ってもいいでしょうか？」

現地のマスコミの人たちがあたしたちに向けて許可を求めている。
うん、やっぱり蓬莱カンパニーの制裁措置に対する恐怖は残っているみたいね。
「ああ、別に構わねえぞ。大っぴらに許可出したんだから、こそこそ隠れずに堂々と正面から撮ってくれ！」
蓬莱教授が豪胆に言うと、一斉にカメラが向けられていく。
隠れていた人もいたらしいけど、さすがにこう言われちゃったら隠し撮りもできないわね。
正面から堂々と撮影すれば波風立たないものね。わざわざ隠し撮りするのは小学生くらいだわ。
「さあ、報道陣のことはともかく、他の椅子も見てみ？」
蓬莱教授が、カメラの方からあたしたちの方に視界を向けてくる。
「うん」
他の椅子も倒してみたけど、やっぱりサインがあった。
どれもこれもサインがあって、これらはノーベル博物館の名物になっているんだとか。
「さて、ここに何も書かれていない椅子がある。俺達も続くんだ」
蓬莱教授が何も書かれていない空の椅子を見せてくれる。
どうやら、この上にあたしたちがサインを書くらしいわね。
「えっと……そのー」
浩介くんもあたしも、その場に立ち尽くしてしまう。
「心配するなノーベル賞の特権だぞ。優子さんも浩介さんも、その特権を行使していい権利をもっているんだ。堂々とするんだよ」
蓬莱教授があたしたちを勇気付けるように言う。
やっぱり、落書きをしているみたいでどうしても躊躇してしまうわ。
「ほら、こうやるんだ。それっ！」
呆然としているあたしたちを尻目に、蓬莱教授がマジックペンのキャップを外すと、スラスラと椅子の裏面に文字を書いていく。
そして出来上がったのは、椅子の背もたれを上にして、白い文字で「蓬莱伸吾　２０２７　２回目」「Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ　２ｎｄ

Ｎｏｂｅｌ　ｐｒｉｚｅ　ｉｎ　２０２７」というものだった。
蓬莱教授は、あたしたちにサインを見せてくれるが、報道陣にはまだ見せていない。
「さ、みんな待っているぞ」
「うん、分かったわ」
再度蓬莱教授に促され、あたしは蓬莱教授のサインの左側を上に、
「２０２７年１２月８日　蓬莱カンパニー株式会社常務取締役　篠原優子　ノーベル博物館来訪記念」と書き込んだ。
そして最後に浩介くんが半ばやけくそ気味にキャップを外すと、蓬莱教授のサインの右側を上にした状態で、「２０２７．１２．８　ノーベル賞受賞記念　篠原浩介ここに参上！」と書き込んだ。
３人書き込むと、椅子はほぼサインで埋め尽くされていた。
各人でそれぞれ、個性が出ているわね。
「よし」
蓬莱教授がにっこりすると、あたしたちが並びんだのを見て椅子を倒し始める。
あたしたちは、大勢の人、大勢のマスコミが見ている前で、堂々と椅子に落書きをしてしまった。
永原先生も、比良さんも余呉さんも、それを見ていた。
それなのに、あたしたちは明らかに周囲から祝福を受けていた。
何故⁉　それはあたしたちがノーベル賞だから。
いつの間にか食堂の中にはあたしたちとマスコミ以外は誰もいなくなっていて、椅子が全てテーブルの上に上げられていた。
ノーベル賞受賞者たちがそれぞれ個性を出しながらサインを書いていて、あたしたちは確かにこの一員になった。
あたしたちがそれらを見ていくと、その中の１つに「Ｓ．Ｈｏｒａｉ　Ｄｅｃ　６　２０１２」「Ｉ　ｓｈａｌｌ　ｒｅｔｕｒｎ．」という書き込みを見つけた。
「蓬莱教授、これ……」
「おう。よくぞ見つけた。懐かしいな。これは、１５年前に俺がノーベル賞を取った時のものだ。『Ｉ　ｓｈａｌｌ　ｒｅｔｕｒｎ．』つま

り、俺は必ず本命の業績でここに戻ってくるという決意を込めたんだ」
蓬莱教授のその椅子には、他のノーベル賞の受賞者の書き込みはなかった。他の椅子は、殆どが共同受賞者のサインもあったのに、この椅子は蓬莱教授単独で使われていた。
最初のノーベル賞でさえ、不老研究が世に出るまでは、「近年のノーベル賞の発見の中でも最も偉大な発見」と言われていたからかしら？
「ふふ、分かったかな？　この重みが」
蓬莱教授が、首に掲げたレプリカのメダルをまた見せてきた。
博物館の中を見たら、それはあたしたちが思っていた以上に偉大なメダルだった。
一通りノーベル賞受賞者のサインを見終わると、蓬莱教授が1回目の受賞の時のと合わせて2つの椅子を持って報道陣の前に出る。
あたしは、ようやく現実を飲み込みつつあった。
ノーベル賞受賞者として、あたしはこの街で歓迎されているんだってことを。

「ところで、お腹すいたわ。美味しそうな食べ物はないかしら？」
報道陣のカメラ攻めが一段落し、余呉さんがご飯にしたいと言ってきた。
椅子も元通りになり、さっきまでの喧騒が嘘のように静まり返っていた。
他のお客さんはおらず、周囲もあたしたちに遠慮しているのは明らかだった。
「お、ここにデザートあるじゃねーか」
浩介くんが、デザートの写真を指差す。
「え？　うわぁー！　美味しそうだわー！」
余呉さんの目がキラキラと輝き、食べたいアピールをする。
うん、確かにこのスイーツ美味しそうだわ。
「あー、このデザートは食べねえ方がいいぜ」
「ええー!?」

蓬莱教授の「待った」に、あたしと余呉さんが同時に不平の声をあげてしまった。
こんなに美味しそうなのに。
「落ち着くんだ。このデザートは明後日の晩餐会の時にタダで食べられる。ここでわざわざ金を払って食わなくても、明後日最高の環境で食べられるんだ」
あー、そういうことね。
「なるほど、じゃあ食事は別のところでしようかしら？」
晩餐会で食べられるものを、予め食べるというのも、何だかネタバレみたいだものね。
「ああ。ただし、ここでしか買えねえものはあるぞ。ほれ、これだ」
蓬莱教授が、ノーベルのメダルを模したものを指差す。
ここでしか買えないって？　メダルは買えるものじゃないし。
「蓬莱先生、これは？」
「ノーベル賞のメダルの形のチョコレートだよ。ここでしか買えねえんだ」
「チョコレート……ごくりっ」
チョコレートと聞いた余呉さんが、喉を鳴らす。
ノーベルチョコレートって面白そうだわ。
「うむ、ノーベル賞の受賞者たちも、よく買っているぞ。よし、俺は２０個」
蓬莱教授がそう言うと、財布から「スウェーデン・クローナ」と呼ばれるお金を出し、ノーベルチョコレートを２０個買った。
「私、４０個」
「私は７０個でお願いします」
「私はうーん……蓬莱先生と同じ２０個でいいかしら？」
「俺、３０個」
蓬莱教授の後ろに立ったあたしたちが、その財力に物を言わせて、思うがままに買っていく。
昔流行ったいわゆる「爆買い」そのものね。
……って、よく考えるとここにいる６人の資産って１００兆円近い

わよね。もう、富裕層とかそう言うレベルじゃないわ。
そういう意味でも、凄まじい状態だと思う。
「よし、買ったな」
ちなみに、ノーベル賞受賞者は、ここのチョコレートを大量に買い込む人も珍しくないらしい。
ちなみにあたしはメンバーの中で一番多い１００個買って、そのうち５０個は渋谷の豪邸に送って貰うことにした。
「じゃあ、近くのレストランでお昼ご飯にしようか」
「う、うん……」
蓬莱教授に連れられて、近くのレストランでお昼になった。
ちなみに、蓬莱教授がメダルを仕舞うのを忘れてしまっていて、レストランでも多くの人がメダルのレプリカを見て入れ替わり立ち替わりに興奮してしまい、店長や店員さんたちまでノリノリになっちゃって大変だったわ。
ちなみに、さすがにホテルのご飯の方が美味しかったけど、価格帯が違うので文句は言えないわね。
こういうのも、旅行の一環と考えると良さそうだわ。

「もう、夕方なのね」
午後２時３０分、西に大きく輝く夕日が眩しい。
さっきまで日が上ったばかりと思っていたのに、もう日没間際の時間になっている。
この環境は、もう３日目のはずなのに、どうしたって慣れることはできないわね。
一方で街中は相変わらずお祭り騒ぎだった。
途中人だかりが出来ていたので首を突っ込んでみたら、何と今年のノーベル化学賞の受賞者だった。
思わぬ鉢合わせにマスコミや群衆は大盛り上がりで、あたしたちはまたしても７分間足止めを食らってしまった。
あたしたちはこの時間からだけど、スウェーデンにあるもう１つの博物館を巡り解散となった。

永原先生は、博物館を見ると「自分のほうが年上」と言ってはしゃいでいた。ちなみに、あたしたちは行っていないけど、ストックホルムには１７世紀に沈んだ古い戦列艦が展示されていて、永原先生は周囲に「私はこの船よりも古くに生まれた１５１８年生まれ、５０９歳の永原マキノです」と言いふらしていたらしい。

永原先生も、普段は相変わらず小谷学園で教師をしているけど、蓬莱カンパニーの株で莫大な富を持っていて、資産は蓬莱教授の半分強だけど、それでも世界の１０本の指に入る大富豪でもあるから、知る人ぞ知る世界的著名人でもある。

ちなみに、ノーベル賞とはまた違った博物館だったにも関わらず、またしても「ノーベル賞ハンター」に捕まってあたしたちは足止めを食らってしまった。

蓬莱教授も、「以前来た時はこんなにすごくなかったぞ」と愚痴をこぼしていて、どうやら「不老研究」ということであたしたちは他のノーベル賞受賞者よりも圧倒的に注目されてしまっている存在らしい。

治安を恐れるあまりにあたしたちで固まって行動するのは、結果的に失敗だったかしら？

「ふう、さてホテルに戻ろうか」

「ええ」

永原先生も比良さんも余呉さんも、かなり疲れている。

彼女たちはノーベル賞ではないけど、あたしたちに同行しているためにいつも足止めの巻き添えを食らってしまっていた。

ノーベル博物館の展示はすごかったし、蓬莱教授の偉大性と、あたしたちがあの殿堂の中に入れることを改めて自覚できたのはよかった。

「あなた、明日はホテルで１日ゆっくりしましょう」

「うん優子ちゃんに賛成」

とにかく、こうも注目されてたら溜まったものじゃないわ。

ましてやあたしたちは芸能人じゃないんだし。

明後日まで引きこもろうそうしよう。

「残念なお知らせだが、そうもいかん」
「「え!?」」
蓬莱教授が、あたしたちの希望をあっさりと打ち砕いてしまった。
もう、今日椅子やあたしたちを見かけた多くの人々にサインするだけでも疲れたのに、明日は何があるのよ。
「明日は授賞式のリハーサルだぞ。そのためにコンサートホールに行かねばならん」
「あーそうか。リハーサルかあ―」
浩介くんが疲れた表情で言う。
リハーサルはまだ簡単な流れの確認だけだけど、本番にはスウェーデン国王を含め、王家からメダルなどを受けとることになっている。
王様が直々にメダルを渡してくれるというけど、それがかえって緊張するわよね。
本当に、名誉を得るというのも大変だわ。
「ああ、ちゃんと準備しておけよ。今日の椅子に、ノーベル賞学者としてサインを書いたんだ。今更『やっぱやめます』はもう通じねえぞ」
「わ、分かってるぜ……」
蓬莱教授が脅すように言い、浩介くんが少し後ずさりする。
そう、もう後戻りはできない。
あたしが女の子になった時も、「2度と男には戻れない」ということは最初に言われたことだったけど、今はそれ以上に「二度と戻れない」に重みを感じている。
うん、ここまで来た以上、今更ノーベル賞を辞退することなんて出来ないわ。
いや、そもそもノーベル賞に辞退何ていうシステムがあるのかも分からないけど。
「まあもちろん辞退の前例はあるが、椅子にサインを書いて辞退した人は今だかつていねえさ」
蓬莱教授が当たり前と言う感じに言う。
確かにそれはその通りだった。
あたしも浩介くんも、覚悟を決めることにした。

明日のリハーサルに向けて、あたしは気持ちを新たにホテルに戻った。

「ただいまー」

「あ、優子ちゃん、浩介、お帰りなさーい」

ホテルの部屋なのに、まるで我が家のような安心感があった。

さしもの「ノーベルハンター」も、ここまでは追ってこないはずだもの。

というか、追ってきたらあたしたちの「もう1つの顔」が出ちゃいそうだし。

「あー疲れたー」

浩介くんがベッドの上に寝転がった。

「そんなに疲れて、どこ行ってたの？」

お義母さんも浩介くんを心配そうに見つめている。

「蓬莱さんと、永原先生と、比良さんと余呉さんと通訳さんで、ノーベル博物館に行ったんだ」

「あら？　昨日私たちが行った所じゃない」

お義母さんが優しい口調で話す。

やっぱり、考えることは同じらしいわね。

「あはは、チョコレート買っちゃった」

「あら？　私たちもよ。それにしてもスイーツも美味しそうだったけど、明後日食べられるってことで通訳さんに止められたわ」

「あはは、それも同じだわ」

違うことと言えば、ノーベル賞受賞者として、椅子にサインをしたことくらいだわ。

「優子ちゃんも疲れたでしょ？」

お義母さんが、あたしを労ってくれる。

「うん、あちこちであたしたちに人だかりが出来ちゃって、それに蓬莱教授がメダルを見せびらかすものだから」

「あー、まあノーベル賞ほどの賞を2回も受賞したともなれば、蓬莱教授ほどの人でもそうしたくはなるだろうさ」

お義父さんが、近くに来て椅子に腰掛けながら話す。
そう、名誉欲のない蓬莱教授でさえ、ああさせてしまうくらい、ノーベル賞は凄まじいものがある。
「とにかく、あたしもちょっと休むわね」
「うん、ご飯になったら呼ぶから、それまでゆっくり休んでてね」
義両親が、そう言うと別の部屋に移動してくれた。
あたしは、浩介くんと同じ部屋のベッドで横になることにした。

「優子ちゃんお疲れ様」
「うん、あなたも」
昨日はほとんどの時間がそうだったけど、今日は珍しい浩介くんとの２人きりの時間だった。
あたしは、この間少し考えた。
昨日のこと、お金も名誉ももう十分だと思った。
それでも足りてないもの、もうあり得るとすればこれしか無いから。
「ねえあなた」
「うん？」
あたしは、浩介くんに決意を話す。
「おばあさんを、これ以上待たせちゃいけないかなって」
おばあさんはもう、１００歳代になっている。
「ああ、そうだな。まだ元気だけど、いつ老衰死しても不思議じゃねえもんな」
浩介くんも、そのことは分かっていた。
そして何より、あたしにとっても、赤ちゃんが欲しいという気持ちが何年も前からあった。
「あなた、あたしの赤ちゃん、産んで、くれるかしら？」
「うっ……」
言葉にするだけで、欲しくて欲しくてたまらなくなる。
浩介くんに無理矢理レイプされて、妊娠しちゃったらどれだけの快感になるだろう？

想像しただけで怖いわ。
「ねえあなた、明後日の授賞式が終わった夜、いいかしら？」
「え!?」
浩介くんが驚いている。
それはつまり、今日明日は何もしないということでもある。
「明後日がね……一番危ない日なの……その日に、ね」
明後日はノーベル賞の授賞式が開かれる日。
晩餐会が終われば、浩介くんとあたしは、今までで一番強い絆で結ばれることになる。
「う、うん……分かった。しっかり、我慢して、頑張るよ」
浩介くんも、あたしを見て決意を固めていた。
だけど、ちょっとだけ不安な顔も見せている。
「あなた、どうしたの？　顔が不安そうだわ」
「うん、やっぱり、今までと違ってさ。今回はお遊びじゃないじゃん？
俺、猿に退化しちゃうんじゃねえかって」
浩介くんが思っていた不安は、あたしと同じものだった。
そう、今までは相手を気遣ったりするような理性が働いていたけど、これから浩介くんとすることは、完全に理性が吹き飛ぶこと。
浩介くんは、あたしのことを「優子ちゃん」ではなく、「子孫を残すための1匹のメス」として見ると思う。
でもそれは、あたしだって同じ。
今ここでも、オスに征服されたいという欲望で一杯になっているもの。
「あたしだって、同じだわ」
「じゃあ、いいか。ノーベル賞学者だって、ずっと理性ある人間じゃ辛いものな」
浩介くんが、明るい声でそう言った。
あたしも、その通りだと思う。
ノーベル賞だって、子供を作らなきゃ頭脳を受け継がせられないもの。
不老は不死じゃない。だから子供を産んで育てるということは、こ

れまで通り必要なことだものね。
「優子ちゃーん、浩介ー！　ご飯よー！」
「はーい」
お義母さんの呼び掛けと共に、あたしたちは夕食を取ることにした。
明後日に向けて、あたしたちは英気を養うことにした。

## ２０２７年１２月９日　リハーサル

１２月９日、ノーベル賞授賞式を明日に控え、義両親と永原先生たちは再びストックホルムの街に繰り出すという。
永原先生たちも同じチームで行動するため、ホテルに残っているのはあたしたち３人の受賞組だった。
「リハーサルは午後からだ。それまではここで大人しくしておこう」
蓬莱教授も、昨日のあれは想定外だったらしく、参加する必要のあること以外はなるべくしない方向に舵を切ったらしい。
それそのものは、あたしも賛成だった。何分、結構治安悪い所は悪いらしいし、そうじゃなくてもああやって人だかりに囲まれていたらすぐに疲れちゃうわ。
「ええ、それでリハーサルというのは？」
もちろん、授賞式がコンサートホールで、晩餐会が市庁舎の「青の間」と呼ばれる場所で行われるのは知っている。
あたしたちも予習はしてきたけど、インターネットで予習しただけなので実際の所は体験してみないとわからない。幸い、体験者は近くにいるけど。
「あー服装はそこまでかしこまらなくても大丈夫だ。あくまでも『流れの確認』だからな」
「コンサートホールってことは？」
「もちろん、名のあるオーケストラが呼ばれるぞ」
やはり、荘厳な雰囲気には違いないらしいわね。
博物館で見た授賞式の写真を見る限り、あたしの子供っぽいドレスは浮きそうだけど、知ったことじゃあないわ。
それに、スピーチの時にそのことは話すつもりだもの。
「所で、優子さんはどんなドレスにするんだ？」
「えへへ、ちょっと待ってて」
蓬莱教授の問いに答えるべく、あたしは奥の部屋に移動し、授賞式で着る予定のドレスと、晩餐会で着る予定の服を持っていく。
「これです」

あたしが、左右に服を見せてアピールをする。
特に晩餐会で着ていく服は、赤い服に赤い巻きスカートの、幼さを強調した格好になっている。
「ふふ、優子さんらしいぜ」
蓬莱教授が優しく微笑んだ。
会場も、みんなあたしに注目すると思う。
今年のノーベル賞は、女性の受賞者はあたしだけ。
それに今までの受賞者と違って、胸が大きいことを除けば、外見年齢はここの基準ではそれこそ１０代前半の女の子だものね。
だったら、それに相応しい格好で、小さな女の子がパーティーに参加した位でいいのよ。
「さて、タキシードの着方だけど――優子さんは別の部屋に行っておいた方がいいな」
「うん、そうするわ」
浩介くんが脱ぐ様子なんて、興奮しないわけないものね。
「よし、それじゃあ始めようか」
「はい」
浩介くんと蓬莱教授の会話を聞きつつ、あたしは離れた別室に移動する。
ここにいれば、２人の音も会話も聞こえてこない。
あたしは迫る誘惑を抑え、浩介くんから呼び出しがかかるまでそのままじっとしていることにした。

「さ、出発するぞ」
「はい」
お義母さんたちがまだ帰らない時に、あたしたちは通訳さんと共にホテルにあるレストランで昼食を取ってから外に出た。
さすがに高級ホテルとあって、あたしたちに気付いても特に他のお客さんも反応しなかった。
ホテルの前には既にタクシーが止まっていて、あたしたちをストックホルムのコンサートホールまで連れていってくれるという。

ちなみに、タクシー運転手さんとのやり取りも、通訳さんを通す。
「それにしても、英語を覚えないんですか？」
タクシー運転手さんの言葉を、通訳さんがそう訳す。
「あーいや、英語の論文は書くがね。そうでなくてもスピーチは英語だよ。だけどだからといってスラスラ話せる訳じゃねえし、母国語の人にしか分からないような微妙な違いのことを考えたら、通訳をつけた方がいいんだ」
「――」
蓬莱教授の言葉を、通訳さんが随時翻訳していく。
「――」
「なるほど。確かにそういう人はよくいますよね」
「日本人だったらｌとｒとかな」
蓬莱教授が愉快そうにそう話す。
確かに、今でもあたしたちはｌとｒの区別はほとんどつかないし、英語の人からいくら「全く違う音」と言われてもよく分からない。
そのため、日本人と英語で話すときは、その辺りを特に気を付ける必要があるのは言うまでもないわね。
「――」
「こちらです」
そんなことをタクシーの運転手さんと話していたら、やがて目的地のコンサートホールに到着した。
蓬莱教授がお金を払い、通訳さんが応対しつつ車を降りる。
それにしても、自動ドアじゃないのね。
「さ、ついたぞ」
そこは、やはりいかにも厳かという感じの建物だった。
今日のリハーサルはラフな格好だけど、明日は違う。
建物に入り、受付を済ませてからノーベル賞のリハーサルの場所へ移る。
「さあ、昨日既に１人会っているが、今日は平和賞以外の全受賞者が一同に介する場だ」
「「ごくりっ」」

その言葉を聞いて、あたしと浩介くんは思わずほぼ同時に唾を飲み込んだ。
あたしたちは、今年のノーベル賞受賞者の中では一番の若輩者で、学位だって、単位こそ足りているけど、ノーベル賞ということで急遽前倒し特例で博士をとったばかり。
「恐れることはない。みんな俺ほどには実績はないさ」
蓬莱教授が、首からぶら下げていたノーベル賞メダルのレプリカを取り出して見せつけてくる。
そう、蓬莱教授は既にノーベル賞を取っている。
それを除けば、初めてのノーベル賞という意味ではみんな同格だものね。
「うん」
ともあれ、あたしたちは蓬莱教授に続いて、集合予定の部屋に入ることにした。
ガチャッ……
「Ｈｅｌｌｏ．」
「Ａｈ　Ｄｒ．　Ｈｏｒａｉ．」
会話は、英語だった。
豪華な部屋に入ったあたしたちはやっぱりやや控え目に、蓬莱教授の後ろを歩く。
貢献度が蓬莱教授の半分づつというのもあると思うけど。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ?」
高年の白人男性があたしに話しかけてきた。
「Ｙｅｓ，Ｉ　ａｍ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」
「Ｉ　ａｍ…」
早口ではあるけど、どうやらこの人は今年のノーベル物理学賞の受賞者とのことだった。
ともあれ、英語は少しは復習してきたし、何とか話せるようになってなきゃ。
「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｎｏｂｅｌ　Ｃｌｕｂ．　Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ．」

ノーベルクラブへようこそ。あなたを歓迎します。ってところかしら？

今日の通訳さんは英語の通訳さんだけど、このくらいの平易な英語なら、通す必要はないわね。

「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ．」

あたしは、彼や他のノーベル賞受賞者たちと握手しながら考える。

あたしたちの本業はあくまでも実業家であって科学者ではない。

世間は、あたしたちが会社の経営で多忙になることを惜しむと思うし、実際に研究者として転身して欲しいという声も一部では見られる。

ただ、経営幹部の多くが抜けているため、今残った社員たちは、仕事やあたしたちの一挙手一投足に大忙しと聞いている。

だから、ノーベル賞を取ったからといって、あたしたちのライフスタイルが変わるわけではないし、研究に関してはやはり蓬莱教授任せになるのは同じだと思う。

そういう意味では、あたしたちにとっては、「ノーベル賞が終着点」なのかもしれないし、そういう意味では、蓬莱教授を含め、ここにいる人との疎外感を、感じずにはいられないのも事実だった。

それでも、あたしたちは佐和山大学でのあの大発見が今に生きていると思っている。

「Ｉ　ｃａｎ，ｔ　ｂｅｌｉｅｖｅ．　Ｓｈｅ　ｌｏｏｋｓ　ｌｉｔｔｌｅ　ｇｉｒｌ．　Ｓｈｅ　ｌｏｏｋｓ　１３，ｈｅｒ　ｈｕｓｂａｎｄ　ｌｏｏｋｓ　１４．（信じられねえよ、彼女は１３歳の幼い少女にしか見えない。旦那だって、１４歳の少年みたいだ）」

ふふ、随分とあたしのことを買ってくれているみたいで嬉しいわ。

それにしても、ノーベル賞を受賞するほどの大学者たちでも、あたしの胸をチラチラ見るのね。

本当、女になって分かったけど、男って信じられないくらい単純だわ。

「俺１４歳かあ……」

嬉しいあたしとは対照的に、浩介くんは半ば呆れた様子で話す。

女の子と違って、男は若く見られるメリット少ないものね。
「でも、若く見えるっていいわよ。むしろそれこそが蓬莱の薬だもの」
「まあ、そうだろうなあ」

「Ｓｈｅ　ｗａｓ　ｓｔｏｐｐｅｄ　ａｇｉｎｇ，１０　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ．（優子さんは１０年前から不老になったんだ）」
「１０　ｙｅａｒｓ？　Ｈｕｍｍ…　Ａｈ！　Ｓｈｅ　ｉｓ　ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓ　ｓｅｘｕａｌ…（１０年？　あーそうか！　彼女はＴＳ病で……）」
「Ｙｅｓ　Ｙｅｓ」
「Ｈｏｗｅｖｅｒ，　ｓｈｅ　ｉｓ　１７　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ？　Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｓｏ，Ｉ　ｃａｎ，ｔ　ｂｅｌｉｅｖｅ　ｔｏｏ．（でもそれにしたって１７歳の時だろ？　やっぱそれでも信じられないよ）」

蓬莱教授が、別の受賞者と会話している。
その中でも、あたしがＴＳ病で不老になったことや、浩介くんが早い時期に蓬莱の薬を飲み始めたことなどを話していた。
ちなみに、やっぱりというかなんと言うか、１７歳だとしても信じられないくらい若く見えるらしいわね。
よくよく思い出せば、最初に病院でこの姿を見た時も、「幼さの残る童顔」に見えた位だから、外国人が見たらなおのことそう見えると思う。
ふふ、これは明日はもっと皆を驚かせることができそうだわ。
この場に来たのはあたしたちが最後で、蓬莱教授と、ノーベル物理学賞、ノーベル化学賞、ノーベル文学賞、そしてノーベル経済学賞の受賞者たちはみんなそれぞれ英語で雑談に高じていた。
「中々入り辛いわね」
「ああ、英語を読むことはできても、会話は難しいもんなあ」
研究者ということもあって、英語を読む機会は多かったけど、こうやって話す能力に関してはどうしても後手に回らざるを得なかった。

実際、最初の電話も、「ノーベル賞になった」ということは分かったけど、詳しいことについてはあまりよく聞き取れなかったし。

一方で、蓬莱教授の方は、かなりの日本語訛りだけど、それなりに会話ができている様子だった。

トントン

すると突然、扉がノックされ、辺り一面が静まり返った。

「Ｈｅｌｌｏ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ，ａｈｈ…Ｄｒ．　Ｈｏｒａｉ，Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ，Ｄｒ．　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ，…」

スタッフさんと思われる人が、あたしたちの名前を呼んで確認していく。

ノーベル賞の場ということで、あたしも浩介くんも「博士」と呼ばれることになっている。

「ＯＫ，Ｉ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ　ａｌｌ　ａｔｔｅｎｄａｎｃｅ．（オーケー、全員の出席を確認しました）」

そして、「これからノーベル賞授賞式当日の流れについて説明と簡単なリハーサルを行う」と宣言した。

ちなみに、この人はノーベル財団の偉い人で、アルフレッド・ノーベルの子孫とのことだった。

まず、授賞式を開始する時には、オーケストラの演奏と共に入場する。

あたしたち受賞者が座るのは赤い椅子で、王族の方々が座るのが向かいにある豪華な椅子、そして青い椅子は過去の受賞者やノーベル財団関係者、更にはあたしたちのノーベル賞を決めた「カロリンスカ研究所」を含めたノーベル賞決定機関のお偉いさんたちの席だという。

今日はもちろんリハーサルなので、曲はカセットテープでのものになっている。

会場の客席には誰もいないけど、当日はもちろん満員になる。

「…Ａ　ｍｅｄａｌ　ａ　ｃｈｅｃｋ，ａｎｄ…」

当日はスウェーデンの国王陛下が直々にあたしたちにメダルと賞金の小切手や、その他賞状を渡してくれるという。

更に各受賞者に対しても、陛下より直々に声をかけられるという。
「うー、想像しただけで緊張しちゃうわ」
国王自らあたしたちにメダルを手渡ししてくれることや、王族も全員見えられることは知っている。
知っていてもやっぱり、いざ改めて告げられると緊張度は高く、他の受賞者たちも緊張の色を隠せない。
「だろうな。無理もない。俺もさすがにその時は心臓が大変なことになったよ」
あたしが不安そうに緊張していると、蓬莱教授が気遣ってくれた。
蓬莱教授は、さすがに2回目ともあってかなり落ち着いていた。
それでも、やはりみんなどこか表情も姿勢も固かった。
「Ｎｅｖｅｒ　ｍｉｎｄ！　Ｌｅｔ，ｓ　ｅｎｊｏｙ．　Ｄｏｎ，ｔ　ｗｏｒｒｙ．（心配するな！　楽しもうぜ。大丈夫だって）」
固くなっていた会場に、蓬莱教授の明るい声が響き渡る。
すると、受賞者たちからも笑い声が漏れた。
蓬莱教授がパンパンと手を叩くと、他の受賞者たちも、説明してくれるノーベル財団のスタッフさんも、リラックスした表情になった。
いつの間にか、蓬莱教授は受賞者たちのリーダーのような立場になっていた。
それは恐らく、ここに来るのが2回目だという一面がとても大きいと思うし、そうでなくても、その業績の大きさや、蓬莱教授が以前より持っていたカリスマ性もあると思う。
百戦錬磨のノーベル賞学者たちさえ、彼に惹かれてしまうというのは、すごいことだと思った。
「Ｉｔ，ｓ　ｏｖｅｒ．　Ａｎｄ　ｎｅｘｔ　ｄｉｎｎｅｒ　ｐａｒｔｙ．　Ｗｅ　ｗｉｌｌ　ｕｓｅ　”Ｎｏｂｅｌ　ｂｕｓ”．（これで授賞式は終わりです。そしたら次は晩餐会になりますが、ノーベル財団のバスを使います）」
そう言えば、空港に来た初日のリムジンも、何だが豪華だったわね。
もしかしたらあれもノーベル財団のものなのかもしれないわね。
ともあれ、今日は少人数なので、あたしたちはコンサートホールか

らストックホルム市庁舎まで、ノーベル財団のジャンボタクシーを使って移動することになった。

「Dr. Yuko Shinohara, what your future resseaarch ?（篠原優子博士はこれからどんな研究をするんですか？）」

タクシーで隣になった文学賞の受賞者があたしに話しかけてくる。

えっと、これからの研究についてよね？

「My regular occupation is a business person. My husband too.（私は実業家が本職ですから。浩介くんもです）」

「It's regret.（それは残念です）」

あたしが、本職が実業家であることを伝えると、文学賞の人はいかにも残念そうな表情で「それは残念です」と返してきた。

「Hey hey! It's the world's loss!（おいおい、それは世界にとっての損失だぞ！）」

更に後ろであたしの会話を聞いていた化学賞の受賞者の1人が会話に割り込んできた。

うん、気持ちは分かるけど、あたし自信ノーベル賞何て取れると思ってなかったから、今さら研究畑に戻るつもりもないのよね。

「No no, our business is very important! In fact, we are world's richest family.（いえいえ、あたしたちの事業はとても重要だわ。事実、あたしたちは世界一の資産家ファミリーですから）」

「Oh, I forgot.」

アハハハハ

化学賞の人が、うっかりといった顔で「忘れてた」と言うと、タクシーの中が笑い声に包まれた。

そう、ノーベル賞は世界の学者にとって最高の栄誉だし、実際それを受賞できたということは、少なくとも研究畑に進んでいても、あたしも浩介くんも間違いなく成功したとは思う。

でも、それでも、ノーベル賞は毎年の行事だし、何人も選出されるけど、蓬莱カンパニーの事業は、その特殊性からも、従来の経営学は通用しない。
だから、薬のことを知り尽くしているあたしたちにしか経営を担うことは出来ない。
ノーベル賞には代わりはいても、蓬莱カンパニーには代わりはいないもの。
それに、今年に入ってからこうやって贅沢ができるのも、あたしたちが実業家の道に進んだからだ。
しばらくすると、タクシーが道を外れ、駐車場へと入っていった。
「Ｗｅ　ａｒｒｉｖｅｄ．（到着しました）」
財団の人がそう言うと、あたしたちもタクシーを降りる。
目の前の建物、ストックホルム市庁舎は、古いながらもかなり立派で、ノーベル賞晩餐会が行われる建物ということを加味すれば、余計に荘厳に見えた。
既にスウェーデン国内や日本などからと思われるマスコミが殺到していて、写真が撮られていく。
うー、もう少し改まった服の方がよかったかしら？
って、当日のこと考えたらそんなこと考えても仕方ないわね。

## ２０２７年１２月９日　明日のこと

スタッフさんによれば、これから晩餐会、そしてその後に行われる舞踏会、更に晩餐会で話したスピーチと同じ内容の講演を、ストックホルムの大学で行うことになっている。

授賞式には午後２時に会場入りし、最後の講演が終わるのが午前０時近くになるという。

「優子ちゃん、体力持ちそう？」

「うーん、善処するわ」

とにかく目眩がしそうなイベントの内容に、浩介くんもあたしを気遣ってくれる。

今はなるべく体力の温存に向けて、頑張るしかなさそうね。

何分、あたしたちにとっては、ある意味で「この後」が本番だもの。

あたしたちは、一目散に、晩餐会が行われる「青の間」に移動する。

ちなみにメニューは当日発表だとか。

あたしは、トイレの場所を確認する。

少しだけ外して、新しい服にしないといけないわね。

「え？　意外に狭いわね」

あたしたちが青の間についたとき、あたしが思った第一印象は「意外と窮屈」という印象だった。

青い床の上に、椅子と机がぎっしりと数えきれないほどある。

「Ｔｏｍｏｒｒｏｗ，ａｂｏｕｔ　１３００　ｐｅｏｐｌｅ　ｊｏｉｎ．（明日は約１３００人の人々が参加します）」

うげえー、１３００人も来るのね。

確かに、あたしたち受賞者の関係者だけではなく、来賓さんの他にもスウェーデンや他の国の学生さんとかも招待されて来るって聞いてたし。

それよりも気になったのは……

「永原先生、それにお義母さんたちまでどうしてこんな所に」

青の間の中央には、集団がいて、その中には永原先生や、義両親、実

両親の姿もあった。
「あはは、ほら、私たちも一応篠原さんたちの招待できているから。当日のリハーサルをしていたのよ」
「リハーサル⁉　永原先生も？」
「ええ」
　永原先生によれば、そのリハーサルというのは、当日の動きの流れの確認や、招待客としての振る舞いの学習だという。
　そして永原先生によれば、晩餐会と舞踏会に出席する人たちは、授賞式にも出席するのということだそうだ。
　まあ、それはもちろん最初から分かっていたわ。
　晩餐会でのラストスピーチと、そして最後に行われる恒例の「蛙飛び」があるそうね。
「さ、永原先生、とにかく次へ進もうか」
「ええ」
　あたしたちは１つの集団に合流する。
「Ｓｈｅ，ｓ　Ｍａｋｉｎｏ　Ｎａｇａｈａｒａ．　Ｓｈｅ　ｉｓ　ｏｖｅｒ　５００　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ．　Ｏｌｄｅｓｔ　ｐｅｒｓｏｎ．（彼女、永原マキノだよ。５００歳越えている、人類最高齢の）」
「Ｉｔ，ｓ　ｍｙｓｔｅｒｙ．」
　永原先生は、他のノーベル賞学者にも知られている有名人らしく、物理学賞を受賞した学者たちに年齢のネタで噂話をされていた。
　もー、デリカシーないわね。
「Ｈｅｙ，　Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｔｈａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｒｕｄｅ　ｔｏ　ｓｐｅａｋ　ＬＩＴＴＬＥ　ＧＩＲＬ，ｓ　ａｇｅ．（ねえ、「小さな女の子」の年齢のことを話すのって失礼だと思うんだけど）」
　永原先生が凄んだ表情でノーベル賞学者を睨み付ける。
　わざわざ「ｌｉｔｔｌｅ　ｇｉｒｌ」を強調するあたりが余計に威圧感を醸し出しているわね。
　それよりも、永原先生、ノーベル賞受賞者に一歩も引かないのも凄いわよね。

「Ｏｈ　ｓｏｒｒｙ　ｓｏｒｒｙ　ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ！」
ノーベル賞の人たちが慌てて謝り始めた。
確かに見た目だけなら永原先生たちはあたし以上に若く見える。
それがより一層神秘的に感じるとはいえ、やはり本人がいる前で大っぴらに女性の年齢を話題にするのは感心しないわね。
まあ幼く見えて実際にはあたしたちよりもずっとずっと年上なので、そういった部分で威圧感はあるわね。
「ふう、こんな複雑な英語なんて、使うの初めてだわ」
永原先生も、疲れた顔をしている。
今のは高校レベルの英語だけど、結構複雑な文法が使われている英語よね。
「永原先生、英語って？」
「ほとんど使ったことないわよ。たぶん今のも２５年ぶりくらいかしら？」
あー、そう言えば永原先生も海外に出たことなかったんだっけ？
それを考えると、ほとんど使ったことないというのも納得だわ。
あたしたちは、ノーベル財団の人についていく。
上の階にあるこの部屋が、舞踏会が開かれる場所になっている。
舞踏会も王族たちが参加するが、踊るのは自由意思だという。
「ふぁあー、何も変わってねえなー」
蓬莱教授が心底だるそうにあくびをした。
それを見て周囲はある意味で感心した目付きをしていた。
あたしたちにとっては初めてでも、蓬莱教授にとっては２回目のこと、というのもあるだろう。
「よし、記念撮影だ」
マスコミの人たちも集まっていて、あたしたちはそれぞれの来賓と共に、ここで撮影会をした。
うーん、最後の方で撮影が行われるはずなんだけど。まあいいわ。
「ふう、ここで解散ですね」
比良さんが「疲れた」という感じで話す。
あたしもだけど、今日疲れていたら明日はもっと大変なのに、と

思っちゃう。
でもとにもかくにも、あたしたちは明日が全ての本番で、「ノーベルウィーク」の締め括りとして、ストックホルムやスウェーデンだけではなく、世界中がこの授賞式に着目しているのよね。
あたしたちは、ノーベル財団のタクシーを使わせてもらい、ホテルに戻った。
それにしても、ノーベル財団ってすごい財力だわ。あたしが言うのも難だけど。
ホテルに戻ると、あたしたちにパンフレットが届いていた。
中を見ると、授賞式当日の日程や、あたしたちの紹介のスウェーデン語の英訳もある。
受賞者は、物理学賞、化学賞、そしてあたしたち生理学・医学賞、文学賞、経済学賞の順番で進む。
平和賞はノルウェーのオスロで別個に授賞式がなされるため、これで終わり。
ちなみに、平和賞だけノルウェーなのは、ノーベルの遺言のためだという。
まあこのあたりは、当時の政治的な事情もあったものね。
「優子ちゃん、明日に向けて、よく休んでおけよ」
「うん、分かってるって」
浩介くんに言われなくても、あたしは今夜はゆっくり休むことにしている。
明日、あたしはノーベル賞のメダルと、そして賞金などの記念品を受けとることになっている。
名実共に、明日からあたしは「ノーベル賞学者」という肩書きを得ることになる。
あたしは、今回のノーベル賞が初めての学術的な賞になるわけで、他にも様々な賞を獲得している蓬莱教授や、他のノーベル賞学者たちと比べて、圧倒的に経験が不足しているのも事実だった。
ホテルの人の夕食は、一層豪華なものだった。
「ジツハデスネ、イママデノメニューハスベテカコノバンサンカイノ

モノデス」
そしてあたしたちが一番驚いたのは、今まで食べていたのが過去のノーベル賞晩餐会で振る舞われたメニューだったことだった。
あたしたちの義両親と実両親は、最初の日に市庁舎の地下食堂でそれを食べて知っていたらしいけど。
「「いただきます」」
あたしたちは、ある意味で「最後の晩餐」となった夕食を楽しむことになった。
「これも、過去の晩餐会で出たのよね？」
お義母さんが食べながら疑問符を投げ掛けている。
「ええ、そうみたい」
これからは、「過去の受賞者」として、授賞式や晩餐会に招待されるという。
もちろん、あたしたちは来年以降参加するつもりはない。
それはやっぱり仕事が忙しいからだ。
「しっかし、明日はどんな食事が出るのかね？」
「さあ？　でも、この味なら期待できそうだわ」
明日は国を代表する料理人たちが、腕によりをかけて作る。
しかも、ホテルなどとは違い、無料で食べることができる。
「ふふ、明日はみんなどんな顔するかしら？」
昨日は比較的厚着だったけど、それでも胸は目立っていた。
だけど明日着る予定の服では、これまでよりももっと大きな胸が目立つことになる。
「あの会場狭いよなあ。うー、優子ちゃんすごい注目を浴びそうだぜ」
浩介くんが、複雑な表情をする。
他の男にエロい目で見られることに関して、浩介くんは独占欲から来る嫉妬と同時に、自慢の嫁が注目されることへの自尊心の強化という気持ちもある。
特に明日は、あたしが子供っぽい格好になる。
永原先生も、比良さんと余呉さんも、それぞれ子供向けのドレスでアピールをすることになっている。

蓬莱カンパニーと、それに伴う「不老」について、永原先生たちには宣伝役になってもらうから。
「ふふ、若く幼いあたしたちを見て、当地の女性はどう思うかしら？」
「そりゃあ妬ましいだろうさあ。弱いくせに男にモテてるって」
スウェーデンでは、女性まで徴兵の対象になっている。
それによって、軍事訓練を受けさせられているということを鑑みれば、あたしのような極端に弱い女性は早々いないと考えられる。
ふふ、そう考えると、あたしはこの国では物凄いモテる自信があるわ。少なくとも、「弱い女の子を守りたい」と思っている男性は、絶対にあたしに殺到するもの。
風土的にモテないといっても、必ず一定数はそういう男性がいるはずで、そうした男性からの人気を、ほぼ独占できるもの。
まあもちろん、浩介くんが一番だけどね。
「恵美ちゃんとのテニスを思い出すわね」
小谷学園でのテニスの試合のことを、あたしは思い出した。
あの時も、今や世界一の女性テニスプレイヤーとなった恵美ちゃんを、1ヶ月練習しただけの浩介くんが勝ってしまった。
もちろん、女子にはない5セットだったというのや、浩介くんがかなり鍛えていたというのもあるけど、それでも男女の力の差を思い知るには十分すぎるエピソードだった。
「ああ、ましてや軍隊だろ？」
ましてや極限状態の軍隊でのこと。
軍隊の訓練だなんて否が応でも男女の差を見せつけられることになると思うけど、それでもやめない辺り、何か宗教的なイデオロギーでもあるのか、それともよっぽど軍隊の人手不足が切羽詰まっているのかのどっちかよね。
「そうよねえー」
「しかも調べたところ、男女で部屋まで同じだとか」
「「ぶっ」」
黙ってあたしたちの話を聞いていた義両親まで、食べ物を噴き出してしまった。

ちょっとちょっと、いくらなんでもそれおかしいわよね？
「どう考えてもいかがわしいこと起こるわよね？」
男女で日々の生活同じ部屋って、着替えとかも含めてって……あたしたちみたいなラブラブ夫婦でもそんなことしないのに。
「軍隊の広報によれば、そういう事例はほとんどないらしい」
どこから調べあげたのか、浩介くんが淡々とそう話す。
「絶対信用できないわよ」
男の性欲というものの凄まじさを考えたら、そんなこと絶対にあり得ないと断言できる。
それこそ組織ぐるみで揉み消しているか、そうでないならよっぽど女に魅力がないかのどっちかになるわね。
レイプまでいかなくても、セクハラ程度いくらでもすると思うし、いくら「海外の女性は強くて反撃もする」といったところで、相手も訓練している兵士なら、本気の本気になった男に勝てるわけがない。
「ああ、俺もそう思う」
浩介くんがしたり顔でそう話す。
浩介くん自体、そう言った性欲が強いのは自覚があるらしいわね。
「浩介、あんまり優子ちゃんに負担かけないのよ」
お義母さんが注意する。
「え？　うん、まあ俺が喰われちゃうこともあるけどね」
「も、もうっ!!!」
浩介くんのさりげない一言に、あたしも抗議する。
確かに、そういう日もあるけどあってもそんなに多くない。
大体多いのは夏場に水着になったり、一緒にお風呂に入ったりした時だったりする。
「あはは、ごめんなさいねー」
お義母さんが申し訳程度に謝ってくる。
ふと、ホテルの窓の外を見て見た。
明日に向けて、ストックホルムの夜景が更に輝いていた。
永原先生たちや母さんたち、蓬莱教授も、今頃それぞれ夕食を食べているわよね。

皆どういう思いで明日を迎えるのかしら？
食事が進むのに比例して、あたしの心臓も高鳴ってくる。
今日はいなかったけど、明日はノーベル財団や過去の受賞者、そして王族の方々も見えられることになっている。
あたしたちは、ノーベル賞といっても、学者が本業ではない、大学院を卒業したばかりの２０代の男女でしかない。
もちろん、世界一の資産家ファミリーという肩書きもあるけど、「お金より名誉」を地でいくような場所で、それは何の役にもたたない。
もしかしたら、あたしたちが「世界一の資産家ファミリー」という称号を得てから、その称号がほとんど何の意味も持たない場所は、ここストックホルムが初めてかもしれないわね。
「「ごちそうさまでした」」
全員でごちそうさまをする。
あたしたちは食器を軽く片付けて、お風呂の準備に取りかかった。
豪邸のお風呂に慣れすぎたというのもあるけど、海外のお風呂も初めてで、結局最後まで慣れそうにはなかった。
「ふう……」
浴槽に備え付けられたカーテンを閉める。
義両親と同じ部屋なためか、浩介くんがお風呂を覗いてくる、何てことはなかった。
今の豪邸に引っ越す前は、ちょこちょこ浩介くんが「覗き」をして来たけど、今はすっかり止まってしまって、何だかちょっと寂しい感じもするのよね。
何て言うか、複雑な乙女心そのものよね。
「まあ、あの部屋でのスケベ心が増えてたし、それでバランス取れていたかしら？」
あたしたちの「秘密の部屋」の存在は、義両親も実両親も話題にしないけど、薄々感付いているとは思っている。
あの部屋であたしは浩介くんにやられたい放題、セクハラされ放題になっている。
あたし自身も最後は気絶してそのまま寝てしまい、目が覚めたら朝

あの部屋にいたということも何度かある。
授賞式を明日に控え、あたしはお風呂の中で最近の豪邸生活のことをよく思い出す。
やっぱりあの家は居心地がいいのか、ここもスイートルームのはずなのに、あたしもちょっぴりホームシックな感じになっていた。
まあ、明日が終わって、明後日の朝には、もう帰るから、逆に言えば後2日しかいないのよね。

「おやすみなさい」
「おやすみなさい」
義両親の配慮もあって、あたしたちはこれまでとは違う部屋で2人っきりで寝ることになった。
もちろん、かなり大きな声を出してしまえば聞こえてしまうとは思うけど、それでもそれなりに離れた部屋で、恐らく義両親なりの「配慮」があったんだと思う。
でも、あたしは明日に絞ることを、浩介くんに伝えている。
今日だって危険日だけど、明日が一番危ないし、帰国してからは、もっと頻度を増やすことにしている。

「ねえ優子ちゃん」
眠れないのか、浩介くんが話しかけてきた。
「うん、何かしら？」
「明日、うまくいくかな？」
浩介くんの口ぶりからは、やはり不安がにじみ出ている。
「あたしだって不安よ。何だかちょっと、場違いって感じだもの」
あたしたちは他の受賞者たちよりもかなり若い。
実際、生理学・医学賞では一番若い記録だった。
もちろん、不老の業績を考えれば、それくらい当然だというのが恐らく客観的にも正しい意見だとは思う。
ただそれでも、あたしたちは長く研究を続けたわけではなく、蓬莱教授という土台があってこその研究だった。

「よく考えてみればさ。蓬莱さんがあの時、俺と優子ちゃんが見つけた発見を『自分が発見した』って言うこともできたわけじゃん。そしたら多分、蓬莱教授が貢献度1分の1で独占できたよな」
「うん、あたしもそう思う」
蓬莱教授は、間違いなく「助手や院生の手柄を横取りした」と書かれることを恐れていたために、あるいは、「弟子に一部の功績を譲っても自分のノーベル賞は揺るがない」という確固たる自信もあったから、ああいう行動に出たんだと思う。
蓬莱教授の異常とも言える警戒心と、それに一見相反する余裕の現れが、あたしたちをノーベル賞に導いたんだと、今になって思えてくる。
「ねえ、優子ちゃん。俺たち、林間学校の後に水族館でデートした時にさ、蓬莱教授と会ったよな」
忘れもしない、蓬莱教授が不老研究について語った思い出の水族館だ。
あたしたちがノーベル賞を取ったことで、今では「ベニクラゲ」のコーナーに、その時を想像した絵画が掲げられ、あたしと浩介くん、蓬莱教授の始まりの地として売り出している。
「ええ。あの時の予言、今になって思うわ。偉大さのスケールがあまりにも違いすぎるって」
本当の始まりは、小谷学園であたしと永原先生を助けた時だけど、実際の始まりは、あの時だとあたしは思う。
「俺も」
あの水族館で、蓬莱教授はあたしに向けて、「君は将来、佐和山大学で偉大なことを成し遂げるだろう」という言葉を投げ掛けてきた。
最初はせいぜい、「蓬莱の薬の完成をアシストした」ことくらいだと思っていたし、その時点で「予言は成就した」と思っていた。
でもそうじゃなかった。あれは単なる入り口にすぎなかった。
蓬莱カンパニーの経営者、大株主として世界最大級の資産家になり、その上あたしの業績は、この短時間で「ノーベル賞」になるほどのものだった。

「蓬莱教授って、凄い人よね」
「当たり前だ」
蓬莱教授は、ノーベル賞学者たちの中にあっても、一際天才性が強かった。
この手の人は大抵は「自分が天才とは思わない」と言う。でも蓬莱教授は違う。
蓬莱教授はあまりにも客観的に物事を見すぎていた。
確かに、普通に考えれば、こんなすさまじい研究を発表して、世界中を変えてしまうのは才能以外の何者でもないとあたしも思う。
「あたしたち、そんな蓬莱教授と共に、受賞するのよね」
「そうだよなあ」
あたしと浩介くんの功績は4分の1なので、2人合わせて蓬莱教授と同じ功績ということになる。
まあ実際、ノーベル賞のシステム上こうなっているだけで、蓬莱教授半分にあたしたちが4分の1ずつなっておこがましいとは思うけど。
「蓬莱教授がいてよかったわ。これがもし、蓬莱教授が急死してあたしたちで2分の1とかなってたら目も当てられなかったわよ」
「蓬莱教授に限って死にはせんよ」
浩介くんが、ふふっと笑いながら言う。
「そうね。授賞式が終わったら、今度は子作りして、幸せな家庭を築きたいわね」
「だな」
普通、ファンタジーなどの世界なら、こういうような会話を「死亡フラグ」と呼んで、悲劇を演出するお約束になっている。
いわゆる、「この戦いが終わったら結婚する」とか、「引退する」とか、「家庭を築く」、あるいは「ここは俺に任せてお前たちは先に行け」何て言うのが典型例だ。
でも、あたしたちの世界はそんな荒れ果てた世界ではない。
むしろ将来の日本の見通しはとても明るくなっている。
言うまでもなく、それはあたしたちのお陰で、そういう意味では、あ

たしたちがノーベル賞になったのは、正しいことだったのかもしれないわね。
それ以降、あたしたちは何もしゃべることなく、緊張して眠れない状況に耐え、遂に眠りについた。

２０２７年１２月１０日　当日の朝

「んっ……」

家のものとは違う、でも見慣れた天井が視界に入る。

現地入りした６日を除いて、ストックホルム生活は４日目に入った。

このホテルも今日もう一泊したらおしまいになる。

海に浮かぶ町は魅力的で優雅ではあったけど、街全体がお祭り騒ぎで、あたしたちはどこへ行っても芸能人のような待遇で、あたしにとっては「静かな渋谷」である松濤生活の方が性に合っていた。

そしてもう１つ気がかりなのが、とにかくここは夜が長いことだった。

１日は２４時間、冬至でも１０時間近く日照時間が確保されているのに、ここストックホルムはいくら冬至に近いからと言え、１８時間夜が続き、６時間程度しか明るくないのは地味に時差ボケよりも辛いことだった。

それでも、朝８時半だと言うのに真っ暗なこの環境にもたった４日で慣れてしまったのだから人間の適応力は恐ろしいわ。

ストックホルムは、スウェーデンの中では比較的南に位置していて、同国の中ではマシな方。

ストックホルムから更に北方の都市に行くと、この時期は太陽が全く登らずに、一日中夜が続く何て言う日になってしまう。

それを考えれば、９時から３時前までの短い時間でも、太陽が登るだけマシなのかもしれないわね。

「おはよう……」

「おはよう優子ちゃん」

今日の午前中は、外に出ずにホテルに引きこもることにした。

というのも、授賞式当日の今日は、ノーベルウィークの中でも一番に盛り上がる日な上に、あたしたちの注目度が他の受賞者に比べて明らかに高いという理由もある。

一昨日、ノーベル博物館ともう１つの博物館を見学するだけでも一

苦労だったことを思えば、ますますノーベルで盛り上がっている今日の外出は極力避けたいというのが偽らざる本音だった。
幸い、ここスイートルームは警備がしっかりしているので、邪魔は入らない。
暇つぶしにつけたテレビでは、やはりノーベル賞のことをやっていて、とにかく国家ぐるみで盛り上がっていることがうかがえる。
番組内での受賞者の紹介も、他の賞の受賞者に比べて、明らかにあたしたちに重点がおかれている。
２回目の受賞となった蓬莱教授、そしてその蓬莱教授の教え子でもあり、大学院生の時に大発見をした、「若き世界一の資産家ファミリー夫妻」ともあれば、日本のマスコミでなくたって嫌でも注目してしまうものね。
うー、有名人になったのは高島さんの取材の時からだったけど、どんどん有名になっていくのはある意味で辛いわよね。
「いよいよ今日ね」
「ああ」
部屋には既に朝食が置いてあって、あたしたちの分が取ってあった。
あたしたちは遅めの朝食を軽くいただきながらテレビの続きを見る。
「あれ!?」
浩介くんが違和感に気付いた。
テレビでは、何と永原先生、比良さん、余呉さんの紹介に移っていた。
永原先生たちは、あたしたちの研究に多大な貢献はしたけど、受賞の直接的理由ではない。
それでも、海外ではＴＳ病は「日本人が発症する幻の病気」として、時折こうしてブームになることがあるという。
「――」
字幕の翻訳によれば、「永原氏は人類最高齢で５０９歳、２番目に年上の余呉氏は１９４歳でこれはノーベル賞のアルフレッド・ノーベル

と同い年なのです」とあり、ＴＳ病患者を特集している。
　そこでの教育方法について、テレビで議論されていた。
「日本人が８割を占めるＴＳ病の患者たちで作る団体、日本性転換症候群協会の支援方法とはどう言うものなんですか？」
「私が見た限りではですね。かなり男女の差を強調し、女性としての自覚を強調する教育をしていると言います。そうしないと、精神的に耐えられずに自殺してしまうと。実際、１０年前まではそれでも半数以上が数年以内に自殺という結末をたどりましたが、篠原優子さんが現在の教育方法にした結果、現在では自殺者はほぼいないそうです」
　テレビでは、あたしたち協会のことが話されている。
　協会の手によって、フェミニズムは完膚なきまでに叩きのめされたはずだったが、今でも亡霊のようにさ迷っていて、あたしが思うに、スウェーデンの女性徴兵もその名残のように思えてくる。
「私たちが思っている以上に男女の差が大きいということですか？」
「そういうことみたいです。今日はですね、ＴＳ病の当事者に来ていただきました」
　パチパチパチパチ！
「「あっ！」」
　あたしたちは、ほぼ同時に口をあんぐり開けていた。
　そこには、永原先生、比良さん、余呉さんの３人と、通訳さんが写っていた。
　永原先生たちの私服姿は、やはりかなり幼さを強調した格好で、それそのものが「不老」という存在を象徴していた。
「ご紹介します。１５１８年生まれ、永原さん、１８３３年生まれ余呉さん、１８４０年生まれ比良さんです。本日はよろしくお願い致します」
　通訳さんを介して、永原先生たちに意味が伝えられていく。
「よろしくお願い致します」
　永原先生が代表して頭を下げる。また
「永原さんたちの人生、これは大変興味深いのですが、放送時間がなくなってしまいますので、その事は置いておきましょう」

スウェーデンの人は日本史のことは知らないためか、永原先生の半生などには触れる予定はないらしい。
まあ、それだけで番組どころか大河ドラマ作れちゃうものね。
「えっとですね、お三方とも失礼ですが幼い女の子にしか見えないんですが、発病してからずっとこんな感じなんですか？」
「ふふ、そうよ。私たちも女性ですから若くありたいもの。誉めてくれてありがとう」
永原先生の回答に、女性のアナウンサーさんが少し複雑な表情をしている。
まあ、そりゃあ日本人が若く見えるように、あたしたちから見ると、外国人はどうしても老けて見えちゃうもんね。
自分たちの祖先並みに長生きなのに、若々しい永原先生たちに嫉妬しても不思議じゃないわ。
「あー、どうしてそこまで幼く振る舞うんです？」
アナウンサーさんが特に余呉さんに視線を合わせながら言う。
余呉さん、黙ってれば一応日本人的には１８歳位に見えるのに、今は完全にませた小学生にしか見えない。本当、女って凄いわ。あたしも女だけど。
「どうしてって、それはもちろん男にモテるからよ」
３人の中でも、子供服を着てランドセルまで背負っていた余呉さんが平然とそう答える。
すると、２人のアナウンサーさんが固まってしまった。
確かにあたしも余呉さんと同じ意見だけど、平然と言ってのけるのは、いくらなんでもちょっと不味いわよね。
「私たちは女性でありながら、後天的にそうなったという所から、『女性としての幼少期』に憧れているんです。今回ノーベル賞になった篠原さんは特にそうですよ」
さすがに会場が凍りつきそうになったのを察したのか、永原先生が慌ててフォローしていた。
そう、ＴＳ病の女の子にとって、「幼少期、少女期を男として過ごした」というのは、ＴＳ病患者に女の子としてのアイデンティティーが

確立されると同時に持ち上がってくる大きな問題だったりする。
永原先生は青春に対するコンプレックスが強く、学園祭などのイベントで「制服通学」をしたりするし、あたしだって、今日の授賞式はそういう格好をすることになっている。
「えっと……おほん。まあいいでしょう。それでやはり、両方の性別を経験してみて、男女の違いというのは大きいもの何ですか？」
永原先生の日本語には、スウェーデン語の字幕が、スウェーデン人のアナウンサーさんたちのスウェーデン語には日本語の字幕がそれぞれついている。
「はいとても大きいです。私たちの国ではＴＳ病が身近でしたからそうでもないんですが、はっきり言いまして他の国は男女の差を過小評価しすぎていると私たちは思っています」
比良さんが淡々とした口調で、それでいてとても断定的に話す。
海外、特にヨーロッパやアメリカでは、日本のような玉虫色のような決着は望まずに白黒はっきりして０か１００みたいな思考になりやすいという傾向があるなんて噂があるけど、今のこの状況を見ると、そうだとは言いがたいのが分かる。
まあ結局どこの国も「妥協」というのは重要ということなのよね。
「既に８年ほど前から私たちはフェミニズムの愚かさを世界に訴えていまして、私たちがそうした声明を出すと収まるのですが、いつの間にかまた復活しているのは、嘆かわしい限りです」
永原先生も半ばうんざりした口調でそう話す。
フェミニズムはよく、協会の会員からは「のれん」に例えられる。
まさに、「暖簾に腕押し」という言葉通り、のれんに対して腕を押しても意味がない。一時的には向こう側に行くけど、手を離せばすぐに元に戻ってしまう。
「んー、私たちは通常、片方の性別しか経験しませんから、あなた方に説得力のある反論ができません。ですが、あなたたちの中にも、フェミニストになる人はいるんじゃないでしょうか？」
あちゃー、またこの質問だわ。
これも何回言っても理解してもらえないのよね。困ったわね。

「はい、いません。少なくとも、私はここ１００年の間に日本でＴＳ病になった患者は全員知ってますし、私たちが知る範囲での外国人のＴＳ病患者も、誰一人としてフェミニストにはなりません」
比良さんがそう続ける。
比良さんの服は胸元にかわいらしいイルカさんがプリントされていて、余呉さんほどではないけど子供っぽさがかなり演出されている。
永原先生と比良さんが中学生、余呉さんが小学生という見た目で、余呉さんは元農民、比良さんと永原先生は元武士という違いもあるのかもしれないわね。
「本当なんですか？」
「ええ、少なくとも私たちは数百人の患者さんを見てきましたが、本当の本当にたった１人の例外もいません。いないものはいませんのでいませんと言うしかありません」
比良さんの説明が終わると、アナウンサーさんはまだ納得できない表情で「うーん」と唸っている。
確かに、普通なら数百人ものサンプルがあれば、例外は必ず現れるはずだという固定観念にとらわれるものだものね。
「この病気は、そもそも男女の違いで戸惑う精神的負担の大きい病気で今では支援法の改善によってほとんど見られませんが、２０１７年頃までは性別の違いを苦にした自殺者が患者全体の過半数を占めていました」
支援法を改善したのはあたし。
特に「女湯に入れる」というのが効果てきめんなのよね。
男の精神が残っているのが、かえって患者たちを女湯に入れやすいのよね。
「男女の違いを身をもって思い知らされ、その違いに苦しめられる病気にかかった人間が、どうやったらフェミニズムに染まるのか、私たちが教えて欲しいくらいです」
比良さんの説明に加え、永原先生が止めの一撃を放つ。
アナウンサーさんたちは、ぐうの音も出なくなってしまった。

「協会では女性の権利向上みたいな運動は全くしていないとのことでしたが」
「私たちには不要よ。女の子にとって一番幸せなのは、男の人に好かれるってことだもの。男と衝突するなんて自滅行為にしか見えないわ」
永原先生が更に堂々とした口調で話す。
余呉さんは、「私たちにとって一番プライドが満足する瞬間は、他の女性よりも男性に好かれているとき。そのためには努力は惜しまない」とまで断言した。
「ですが……ですが……」
女性アナウンサーさんも、理屈はわかっている。
だけど、どうしても感情が許さず、許容できないという反応になっていると思う。
「あなた方ＴＳ病は皆さん美人ばかりです。そういうことも差し引いて考えるべきかと思いますが」
見かねたもう１人の男性のアナウンサーがフォローを出した。
あたしたち協会が「反フェミニズム」の声明を出す時に、決まってフェミニストの残党から出る反論声明が、「あなたたちは飛び抜けた美人だからちやほやされている。私たちの気持ちは分からない」というものだった。
当初はこうした声明のような反論はインターネットの匿名掲示板で出るものだったけど、何度も叩きのめされたために最近では彼女たち自身が使い始めていた。
最も、それはそれで恥の上塗りで、高齢独身女性ばかりがそれを支持しているらしく、１００年後には弱体化することを祈るしかないわね。
「努力をしないから、ますますブスになるのよ。そして性格も歪んでいくの。女性というのはね、努力するだけでも見違えるのよ。特に男性にちやほやされると、どんどんとかわいくなっていく生き物なの」
余呉さんの言葉は、優しいけどそれでいて、無慈悲だった。
「うーん、分かりました。私は女性として生まれ女性として育ちまし

たし、あなたたちのことを完全に理解するのは、どうしても難しいかもしれないですね」
女性アナウンサーさんも、無理矢理納得したような表情になり、最後に挨拶と共に永原先生たちが立ち去った。
何だか、難しい話よね。
「浩介くん」
「まあ、授賞式か晩餐会で問い詰めればいいだろ」
あたしの疑問を察した浩介くんが当たり障りの無い返答をしてくれる。
「ええ」
あたしたちは、明るくなった外を見ながら時間を過ごした。
ちなみに、蓬莱教授からは「１２時にホテルフロント集合」となっているので、まだ時間はある。
ちなみに、晩餐会に備えて昼食は抜きになった。
それまでは暇なのだけど、外に出たらあっという間に時間がつぶれちゃいそうで怖いのよね。
まあどっちにしても、このスイートルームが安全だった。

「そろそろ準備するぞ」
「はーい」
浩介くんの指示で、あたしたちはそれぞれ男女で別々の部屋に入って、授賞式の準備をする。
「優子ちゃん、ありがとう」
あたしは、お義母さんの振り袖を着付ける。
それが終わったら、今度はあたしはこの時の為に買ったパーティードレスに着替える。
「あらあら、優子ちゃんってスッゴいナイスバディ。嫉妬しちゃうわ」
うー、お義母さん、改まって言われると恥ずかしいわよ。
ともあれ、あたしはお義母さんにも見て貰いながら、白いパーティードレスを着る。
もちろん高級品だけど、デザインは子供っぽい。あたしのトレード

マークになっている頭の白いリボンもそのままだった。
「ふう、やっぱり優子ちゃんかわいいわね」
「えへへ、ありがとう」
かわいらしさ全開の、膝下丈の白いドレスだけど、あたしには足りないものがある。
あたしは手荷物の中からくまさんのぬいぐるみを出して、右手でぶら下げるように持った。
「ふふ、どうかしら？」
「う、優子ちゃんさすがに子供っぽすぎない？　仮にもノーベル賞がぬいぐるみ抱いて式典に出るって」
案の定、お義母さんは反論してきた。
でも、それこそが蓬莱カンパニー宣伝の狙いだった。
「いいのよ。緊張も和らぐし、あたしとしてもこの方が魅力的だと思うもの」
そう、この人形はこの式典のために買った高級ブランドもので、傷ひとつついておらず、上流階級の幼いお嬢様という感じに仕上がっている。ふふ、今のあたしの男ウケは最高になっているはずね。
実年齢からしたら幼稚だって言うなら、今朝の永原先生たちなんて人権剥奪されそうな勢いだもの。
「そうねえ……まあいいわ」
「うん」
お義母さんからも「ＯＫ」を貰い、あたしたちはリビングに出た。
浩介くんとお義父さんも準備は終わっていて、タキシード姿になっていた。
「うお、優子ちゃんかわいい」
「えへへ、ありがとう」
男に褒められるのは嬉しいけど、やっぱり一番愛してる浩介くんから「かわいい」と言われるのが一番嬉しいわ。
「うーむ」
お義父さんは、まだ少し違和感があるみたいだけど、蓬莱カンパニーにおける不老の誇示という意味では、とにかく若く見せたいのが

本音だった。
「じゃあ行くか」
「うん」
あたしたちは、ホテルの部屋を出て、1階にあるフロントへと繰り出した。
「まだ誰も来てないわね」
「ええ」
お義母さんとあたしが見つめる限り、ここにはまだ他の人はいないみたいね。
あたしたちが待つ間も、周囲のお客さんは見て見ぬふりをしてくれている。
やはり、ここのホテルは民度が違うわね。

「お、優子さん、本当にそれで参加するのか。すげえな」
蓬莱教授とその家族と思われる人たち、更に永原先生たちに父さんと母さんが合流した。
これで全員揃った。12時5分を目安に、ノーベル財団のリムジンが2台迎えてくれるという。
1台目はあたしたち受賞者3人と永原先生たち。
2台目が蓬莱教授の家族親戚とあたしと浩介くんの両親義両親という配分になった。
もちろん、各自動車にも通訳さんがついている。
「――」
「では発車しますね」
とはいえ、目的地はコンサートホールに決まっている。
昨日もリハーサルで行った所なので、特に感慨はない。
あたしたちは車内で雑談しつつ、目的地へと到着した。
さて、あたしの服装、どういう反応が出るかしら？

２０２７年１２月１０日　国王陛下

「さ、行くぞ」
蓬莱教授の号令と共に、あたしたちは車を出る。
蓬莱教授を見ると、いつの間にかメダルを首からぶら下げていた。
今までも見た、ノーベルの横顔が掘られたメダルだった。
昨日までぶら下げていたメダルよりも、かなり輝いて見えた。
「蓬莱教授……」
「おおこれかい？　優子さん、これはレプリカじゃない。本物だよ。俺が１５年前にノーベル賞を受賞した時にもらった、あのメダルだ」
蓬莱教授がそう教えてくれる。
うん、分かってる。蓬莱教授が1回目のノーベル賞の時に貰ったメダルを掲げることで、蓬莱教授は晩餐会などにも、メダルを2つ見せることになる。
蓬莱教授は首からメダルをぶら下げ、あたしは手に熊さんのぬいぐるみを持って、浩介くんは手荷物だけを持って、寒い屋外を通り抜けて、すぐにコンサートホールの中に入った。
コンサートホール会場では、この時間でも人々が忙しなく動いていた。
「Ｏｈ！　Ｄｒ．　Ｈｏｒａｉ！」
昨日のリハーサルでも見た顔の男性が蓬莱教授に話しかけてきた。
よく見ると、他のノーベル賞受賞者たちもそこにいた。みんな随分と早い到着なのね。
「Ｈｅｌｌｏ」
蓬莱教授は、入り口にいたノーベル賞学者と話す。
みんな蓬莱教授や浩介くんと同じタキシードで、あたしのドレスはかなり目立つ格好よね。まるでお姫様みたいだわ。
「Ｈｅｌｌｏ　Ｄｒ．：Ａｈ．：Ｍｒｓ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ！　Ｍｒ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ！」
蓬莱教授の後ろにいたあたしたちに気付くと、ノーベル賞受賞者があたしと浩介くんに話しかけてきた。

「ドクター」だとフルネームでないと区別できないので、「ミセス」と「ミスター」で呼んできた。
一応式典だとフルネームになると思うけどね。
「Ｈｅｌｌｏ．」
あたしたちもノーベル賞たちと挨拶をする。
昼食は抜きなので、あたしたちはそのまま授賞者の控え室の中に案内された。
「優子、頑張るのよ」
「もう、大丈夫よ母さん」
母さんの心配する声に対して、あたしは母さんを安心させるように言う。
まあ、もちろん「大丈夫」何て全く根拠はない。もしノーベル賞を取ったとして、そんな言葉を自信を持って言えるのは全人類でも蓬莱教授くらいだろう。
あたしの両親と浩介くんの両親、そして永原先生たちはコンサートホールへの道を、あたしたちは控え室へと進む。
そう言えば、永原先生たちも服装変わっていたわね。
特に永原先生は、吉良殿の着物を着ていたのが分かった。
やっぱり、教え子のノーベル賞だものね。
あたしたちには、通訳さんがいるにはいる。でも、授賞式までついていくことはできない。
うー、論文何かを読むことばかり考えていて、英会話は殆どからっきしだわ。ここまでうまく行っているのが奇跡よもう。
「ふう」
ともあれ、あたしたちは控室に座って、とりあえず一休みすることが出来た。
ノーベル賞の受賞者も、あたしのドレス姿が昨日にも増して幼く見えるのか、それともぬいぐるみさんが気になるのか、かなり驚きの目で見ている。ふふ、晩餐会の時はもっとすごくなるわよ。
まだ授賞式の開始まで2時間近くある。
その間、あたしたちはこの控え室で他の受賞者たちと共に過ごす。

実はこの控え室にはあたしたちと共に壇上に上がる人たちが入れ替わり立ち代わり挨拶することになっている。
「Dr. Horai, how shall I do Nobel prize 2 times ?（蓬莱博士、どうしたらノーベル賞を2回取れるんだ？）」
「Ah… I think that big and useful discovery 2 times… Ah… more useful than first discovery.（そうだなあ……有用的かつ大きな発見を2回すればいいと思うよ。あー、1回目よりも有用であるべきだな）」
「You, re very genius Dr. Horai. Usually that, s near impossible for Nobel Prize Laureates.（蓬莱教授、あなたは信じられない天才だ。普通はそんなことノーベル賞受賞者にだって不可能に近い）」
「Hmm… however, Nobel prize must be big and useful discovery. So your question, s answer only it.（うーむ、しかしノーベル賞というのは大きく、なおかつ有用性の高い発見が必要だからなあ。君の問にはそう答えるしかないよ）」
「It, s difficult.（難しいことだな）」
「Commonplace… You, re Nobel prize Laureate. You should understand.（当たり前だ。君もノーベル賞学者なら、理解しているはずだ）」
「Exactly.（おっしゃる通りです）」
控え室で、蓬莱教授が物理学賞の学者と何やら話し込んでいる。
どうやら、蓬莱教授と同じように、「ノーベル賞を2回取りたい」と思っているみたいで、「どうすれば2回取れるか？」という質問に対しては、「偉大な発見を2回すればいい。それも1回目よりも偉大な発

見で」と答えている。

もちろん、「並みのノーベル賞学者」には、そんなことは不可能に近い。

とはいえ、蓬莱教授はそれを成し遂げてしまったからこそ、今回特に注目されている。

「Ｍｒｓ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」

「？」

文学賞の受賞者が、あたしに話しかけてきた。

一体何の用かしら？

「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｃａｒｒｙ　ａ　ｔｅｄｄｙ　ｂｅａｒ？（何で熊のぬいぐるみを持っているんだい？）」

やっぱり来たわねその質問。

「Ｂｅｃａｕｓｅ，Ｉ　ｎｅｅｄ　ｒｅｌｉｅｖｅ　ｔｅｎｓｉｏｎ．（緊張を和らげるためです）」

あたしが、くまさんのぬいぐるみを軽く抱き、頭を撫でながら答える。

その様子は、背が高く、胸とお尻が大きいことや、顔も幼女というにはさすがに大人びていることを除けば、小さな女の子そのものだった。

「…　Ｉ　ｓｅｅ．（分かった）」

周囲の視線も、あたしの方に向かう。

ただ、その視線は好意と困惑が入り交じったものだった。

ノーベル賞を取るような女性が、いくら「不安を和らげるため」とはいえ、明らかに子供向けのぬいぐるみさんを抱いているのは、彼らにとっては衝撃的なことなんだろう。

それだけではない。あたしが着ているドレスは、かなりかわいらしさを強調したもので、価値観によっては、熊さんのぬいぐるみと合わせて、「かわいいんだけどあまりにも子供っぽすぎる」という印象を与えていると思う。

でも、どれだけ文化が変わっても、最終的な男の本能は、あたしみたいな女の子が好かれることは知っている。だからあたしも、堂々と

過ごすことにした。
ふと思ったのは、ここは女性はあたししかいない空間。もしここが無人島で、しかも浩介くんがいなかったら、このコミュニティはあたしを巡って殺し合いが始まっても不思議じゃないということだった。何だろう、それが始まったら、女として一番有頂天になれる気がするわ。
ってダメダメ、何変なこと考えているのよ優子。落ち着かなきゃダメよ。本番はこれからなんだから。

コンコン
しばらく何もしないで待っていると、突然扉がノックされた。
昨日いたノーベル財団の人が入ってきて、これから授賞式の壇上に上がる人を紹介してくれるという。
委員会の人たちの視線も、あたしの、特に胸と熊さんのぬいぐるみに集中する。
今年のノーベル賞受賞者の中で、あたしは唯一の女性で、いわば「紅一点」だ。
それに加えて、あたしの格好にも注目が集まっているということね。
あたしたちをノーベル賞に推薦した「カロリンスカ研究所」の人は、特にあたしの格好に驚いているみたいだわ。
また、この式典に参加してくれた過去の受賞者も参加している。
特に、蓬莱教授が１５年前にとったノーベル賞と同い年に受賞し、かつ生存している人は全員出席だという。
１５年の月日が流れ、受賞者の何人かが亡くなっているばかりか、そうでなくても相当な老人になっていて、蓬莱教授は１５年前よりほんの少し老けただけで、彼らも非常に驚いている。
蓬莱教授が４０代の若さでノーベル賞になったことを差し引いても、異常な光景だわ。
やっぱり、それが蓬莱の薬というものだものね。
その後も、彼らの紹介、挨拶、交流が続くけど、あたしは研究所の

ほぼ全員から、「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｃａｒｒｙ　ｔｅｄｄｙ　ｂｅａｒ？（どうしてくまのぬいぐるみなんか持っているんだ？）」とか「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｄｏ　ｃｈｉｌｄｉｓｈ？（何故子供っぽく振る舞うんだ？）」と聞かれて、ややうんざりしてしまった。

特に後者の質問については、晩餐会のスピーチのネタバレにもなってしまうので、詳しくは話さないことにした。

まあ、あたしたちＴＳ病と、不老についての宣伝も兼ねているというのが、実際の所だけどね。

「優子ちゃん、大変だな」

一息ついたタイミングで、浩介くんが話しかけてきた。

確かに、まだ授賞式すら始まっていないこのタイミングで、正直勘弁してほしいのは事実だけども。

「うん、浩介くんは？」

「俺はまだ優子ちゃんほどは注目されていないよ」

蓬莱教授は不老研究以前にもノーベル賞を取っていてこれで２回目、あたしは初めての日本人女性のノーベル賞かつＴＳ病患者という立場がある。

浩介くんも、蓬莱カンパニーの社長として、また数ある名家を差し置いて世界一の資産家ファミリーになった家の主人として、既にかなりの著名人ではあるけれど、あたしや蓬莱教授と比べれば、相対的に注目度が落ちていたのも事実だった。

「ふう、そうみたいね」

「ああ」

いずれにしても、他の受賞者よりも注目度が高いのは事実だった。

実際、「俺たちのこともう少し注目して欲しい」みたいな会話をしていたし。

その後、ノーベル財団の人があたしたちに専用パンフレットを配って、扉を閉めた。

どうやら、この広い控え室で、あたしたちは開始を待つということになるみたいね。

控え室には、テレビがあるけど、画面にはなにも写っていない。

「蓬莱教授、あとどれくらいですか？」
「あー、意外に時間が経ってるぞ。残り４０分と言ったところか」
蓬莱教授が、自分の時計を見ながらそう答える。
いつの間にか、かなりの時間が経っていたらしい。
開場時間になったら、みんな指定された席に座っていくのかしら？
開始時間は１４時半の予定で、恐らくあたしたちの入場もそのタイミングになると思うんだけど――
　コンコン
また扉がノックされた。
今度は誰かしら？
　ガチャッ……
「おっ、優子さん浩介さん！」
「え!?」
中に入ってきた人物を見るなり、蓬莱教授があたしたちに呼び掛けてきた。
扉の方を見て、あたしたちもとても驚いた。
何故なら、部屋の入口に立っていたのは、スウェーデンの国王陛下を始めとする、王族の方々だったから。
もちろんあたしもスウェーデン国王陛下の顔くらい事前に予習はしてある。それだけあって、あたしの動揺も大きい。
「――」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｐｌｅａｓｅ　ｓｅｔｔｌｅ．（大丈夫です大丈夫です。落ち着いてください）」
国王陛下の言葉が、英語で通訳され、あたしたちも落ち着きを取り戻す。
どうやら、開始前に、受賞者たちに一言だけ挨拶しに来たらしいわね。
あたしはやっぱりどうしてもこの場では引っ込み思案なので、やや影になるところで目立たなく振る舞った。
最後に、「授賞式を楽しみにしています」という一言と共に、部屋は静寂を取り戻した。

「優子さん、あまり取り乱し過ぎるのはよくないぞ」
蓬莱教授があたしに「落ち着け」と注意する。
「そんなこと言っても、いきなり王様が部屋に入ってくるなんて思わなかったわよ」
スウェーデンの現国王陛下は、温厚で親しみやすく気さくな方と聞いている。
でもどんなに向こうがフレンドリーでも、やはり「王」という絶対的な立場が、嫌でもあたしたちを緊張させてしまう。
やっぱり「国王」とか「王族」という権威は別格で、「ノーベル賞」も「世界一の資産家」も、「蓬莱カンパニー」だって陳腐になっちゃうほどの威力があるわよね。
「何のこれしき。本番では、国王陛下が直々にメダルと賞金を渡してくれるんだぞ。あれで緊張してたら身が持たんぞ」
蓬莱教授があたしに忠告する。
「言われてみればそうだったわ」
そう、今蓬莱教授が掲げているノーベル賞のメダルは、１５年前にスウェーデンの国王陛下から直々に手渡されたもの。
もちろんあたしたちも、これから授賞式でメダルを手渡されることになるのよね。
「うえー、やっぱり本物の王様が目の前に来るってやべえわー」
浩介くんも、いきなりの国王登場に圧倒されてしまっていた。
周囲を見渡しても、やはり動揺が隠しきれていない様子で、かなり緊張した様子の受賞者もいた。
「パンフレット、読もうぜ」
「うん」
あたしたちは気晴らしと、授賞式本番の流れの最終確認もあって、パンフレットの中身を見た。
大まかな流れは昨日リハーサルでの確認通り、メダルを授与するときに、あたしたち受賞者の紹介をスウェーデン語で行うことになっている。
アナウンスや司会進行が全てスウェーデン語なので、このパンフ

レットにはいちいち英訳が載っている。

あたしたちの紹介文は……あったわね。

うーん、蓬莱教授はやっぱり2回目のノーベル賞、かつ生理学・医学賞としては史上初ということと、不老研究の業績はとても偉大であることが紹介されているわね。

浩介くんは、「蓬莱カンパニー社長」という顔がやや強調されていて、またあたしと夫婦でのノーベル賞というのも注目されている。

更にあたしの部分、「あどけなささえ残る幼い少女」という一文もあり、浩介くん共々「身をもって不老というものを思い知らせてくれる存在」ともあるわね。

まあいいわ。この辺りは斜め読みで。

授賞式には、スウェーデンが世界に誇るオーケストラチームの演奏が繰り広げられることになっている。

演奏にしたがって、最初に王族の方々が、そして最後にあたしたちが入場することになっている。

あたしは、膝に置いたくまさんのぬいぐるみを抱き締める力を強めた。

本番が刻一刻と迫るにつれて、あたしの心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。

受賞者たちや、他の関係者の口数も少なくなっていく。

何分経ったかも分からない。まるで1時間にも1分にも感じられるような図りきれない体感時間の中、ノックの音とともに扉が開けられた。

そして、「舞台裏まで来てください」という財団の人の声が聞こえ、あたしたちは立ち上がって3列になってホールに向けて移動し始めた。

舞台裏までの道のりにもカメラマンさんたちが待ち構えていた。

白い少女性を強調したドレスに、くまさんのぬいぐるみを持ったあたしは、他の女性よりもよりいっそう目立った。

くまさんのぬいぐるみや、胸が大きいだけじゃなく、服装も見られ

ているのかもしれないわね。
「――」
突如、会場のスピーカーからスウェーデン語と思われる言語の放送が入った。
放送では「ノーベル」らしき単語も聞こえ、どうやらとうとう授賞式の本番が近付いたみたいね。

## ２０２７年１２月１０日　荘厳な空間

あたしたちが舞台裏の控え室に入ったのとほぼ同時に、オーケストラから荘厳な生演奏が流れ、割れんばかりの拍手が開場に鳴り響いた。

漏れ出る光から、どうやら王族の人々が入場したのが分かる。

僅かに見える視界からも、昨日とは全く違う熱気に包まれているのがひしひしと伝わってくる。

ドキドキドキドキ

浩介くんへの恋愛感情以外で、ここまで緊張したことはない。

まだ舞台裏だというのに、あたしは雰囲気に圧倒されそうになる。

何度も参加しているはずの過去の受賞者や、研究所や財団の人でさえ、やはりかなり緊張しているのが分かる。

「――」

次の集団が呼ばれた。

まずはノーベル財団の人、次にノーベル賞受賞者を選考する研究所や学界の人たちが中に入っていく。

その度に、オーケストラは短い演奏をしていて、会場からは拍手が沸き起こる。

ちなみに、曲名はあたしにはよく分からない。

また入場者には、1人1人の紹介があるみたいで、それにかなりの時間がかかっている。

他の人たちが舞台裏から出ていく度に、ここの空気は張り詰めたものになっていく。

あたしたち、あの舞台の主役なのよね。大丈夫かしら？

「優子ちゃん、大丈夫だよ。俺がついてるから」

浩介くんが、空元気という感じであたしをなだめてくれた。

「あなたも、緊張しているの？」

浩介くんも、いつもの頼りになる感じが全くしない。

「ああ、もちろんだ」

浩介くんは必死に言葉を絞り出すように言う。

「ふー、やっぱり、2回目といっても緊張するもんだ。いや、15年前の1回目より緊張しているかもしれん」
どうやら、蓬莱教授に至っては一度経験したわけだもの。当たり前よね。
「――」
パンフレットを見て進行を確認すると、ついにあたしたちの入場の時間になった。
財団の人がジェスチャーするのが見えたので、あたしたちは一斉に立ち上がる。
ぬいぐるみさんを右手で握りしめ、あたしは何度も息を吐きながら、前を歩く浩介くんについていく。
カーテンを潜り抜けると、急に視界が明るくなった。
「あー」
あたしは、思わず周囲を見渡し、声にならない声をあげた。
それは昨日と同じ場所とはまるで思えないほどの荘厳で、かつ熱狂溢れる場所だった。
左側にはさっきまでいたノーベル財団の人々や、過去の受賞者たちがずらりと並び、左上を見上げるとオーケストラの人々が音楽を演奏していて、右上には空席1つない観客席に、びっしりとお客さんが埋まっていて、あたしたちを祝福してくれる。
観客たちの注目は、やっぱり女の子のあたしに向いていて、あたしは目立つ服だったのもあり、特に視線を集めてしまっていた。
青い絨毯の踏み心地は心なしか昨日よりよく、真正面にはさっきあたしたちの控え室に入ってきた国王陛下と、王妃や王族と思われる方々が座っていた。
あたしたちは、奥から詰める形で、赤い椅子に座った。
「ふー」
少し時間が経ち、椅子に腰かけるとやや落ち着くことができた。
ともかく、座って一旦安息できるというのは大きいわね。
観客席で、小さな人影が手を振っているのが見えた。
よく見なくても、それは母さんたちだった。

あたしは小さく手を出して答えると、母さんたちにも伝わったのか、母さんたちも手を振らなくなった。
この雰囲気でも娘のノーベル賞にはしゃげるって、ある意味では才能よね。
「――」
次に、スウェーデン国歌を斉唱することになっている。
あたしたちはもちろんメロディーくらいしか予習していないけど、日本人のあたしたちのために、パンフレットにはご丁寧に歌詞がカタカナで和訳まで載っていたので、ありがたくそれを使わせてもらう。
「――」
オーケストラの演奏と共に、スウェーデン国歌が流れ、あたしたちもぎこちないながらも歌った。
スウェーデンの学生も多いけど、ノーベル賞受賞者自体はスウェーデン人ではないので、あたしの回りの受賞者たちの歌はちょっと拙かった。
まあ、こういうのは気持ちよね気持ち。うん。ノーベル賞を作ったスウェーデンに感謝しなきゃね。
「――」
あたしたちは、司会の人に従って着席すると、次はいよいよ、この授賞式のメインでもあり、あたしたちがわざわざストックホルムまで来た最大の目的でもある、「メダルと賞金の小切手の授与」が行われる。
多数のメダルと小切手、そして賞状を抱えた国王陛下が椅子から立ち上がる。
さっきでも十分に威厳を放っていたのに、今の国王陛下はもっと凄まじい。
まるで国王陛下の周りに結界があって、誰も入れない。そんな気さえ、してくる場所だった。
「――Ｄｒ．――」
受賞者の名前が呼ばれ、簡単な自己紹介と業績が司会者よりなされる。

ちなみにこの紹介、なるべくノーベル賞に絡めたユニークな自己紹介になっているらしい。
それが終わって司会者さんが手で促すと、最初の受賞者さんが緊張した面持ちで立ち上がり、そのまま1メートル、1センチと国王陛下に近付いていく。
そして、国王陛下がメダルを取り、小切手と賞状を確認すると、まずは賞金の小切手と賞状が受賞者さんに渡された。
受賞者さんはそれらをタキシードにしまっていく。
パチパチパチパチパチ
一通り渡し終わると、小気味いい拍手が、静かな会場に流れていく。
拍手が鳴り止むと、国王陛下がメダルを確認し、首を曲げた丁寧に受賞者さんの首にかけていく。
そして国王陛下が、がっしりと受賞者さんの腕と握手し、その瞬間マスコミのカメラが一斉に向けられた。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ（おめでとう）」
「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．（ありがとうございます陛下）」
パチパチパチパチパチ!!!
国王陛下と受賞者さんが、簡単な会話を交わし、今まで以上に大きな拍手とともに、緊張から解放された受賞者さんが元の位置に戻っていく。
「――Ｄｒ．――」
そして、また同じ物理学賞の別の教授が紹介され、さっきと同じように、物理学賞のメダルと、賞金の小切手、賞状が渡される。
1人目と、全く同じ流れになっている。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ．」
「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．」
そしてこれまたさっきと全く同じ会話が交わされた。
小切手と賞状とメダルを受け取り終わった受賞者さんは、2人とも緊張の糸がほぐれたのか、かなり疲れた表情をしている。
それでも、この場の雰囲気が、まだ彼らを縛り付けている。

まあ、そりゃあ至近距離から国王陛下と対面したら、圧倒されちゃうものね。
ましてや、直接手に触れて握手だなんて、改めてノーベル賞って凄いんだわ。大変そうだわ。
って、あたしも他人事じゃないわよね。
「――Ｄｒ．――」
物理学賞の最後の１人も、同じような流れでやり取りが終わった。
もちろん、それぞれの受賞者に、祝福している人がいるので、拍手は鳴りやまない。
一方で、もうすぐあたしたちの出番だということを意識していくにつれて、緊張が高まっていく。
心臓はもうドキドキを通りすぎてバクバクという感じの鳴り方で、その音があたしの体内を伝って直接脳にまで響いてくる。
「――Ｄｒ．――」
物理学賞の次に授与されるのは化学賞の２人で、これもまた共同研究で受賞した。
１人目の人は、一昨日博物館からの帰りで会った人で、温厚そうな顔つきのおじいさんでも、実はすごいことをしてのけていたそうだ。
ちなみに、この大学の名誉教授としては、初めてのノーベル賞受賞ともなったらしい。
ノーベル化学賞の２人も、国王陛下から投げ掛けられる言葉は同じ。
そして――
「――Ｄｒ．　Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ．」
赤い椅子に座っている受賞者の中で、蓬莱教授は唯一ノーベル賞メダルを首から下げている。
このメダルはもちろん、１５年前に受賞した１回目のもの。
あのメダルは、文化祭の時に一般公開されているものだった。
蓬莱教授の紹介については、「恐らく、人類の歴史上でも、もっとも偉大な学者といってもいいかもしれません。彼は『人は老いて死ぬ』という、有史以前からの常識をひっくり返し、今や多くの人々が老い

の苦しみから解放されています。彼は１５年前にも、偉大な万能細胞発見の業績で、ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。蓬莱教授にとって、このノーベル賞は２回目ということになります。２回目の受賞は非常に珍しいものとなっており、また生理学・医学賞の複数回受賞も史上初の快挙となります」というものだった。

司会者さんに促され、蓬莱教授もこれまでの受賞者ほどではないものの、やや緊張した面持ちで前に進む。

でもその緊張のベクトルは、どこか今までの受賞者とはずれている気もした。

蓬莱教授は、これまでの受賞者以上にゆっくりと進んでいる。

ノーベル賞のメダルが、これまで以上に輝いて見える。

蓬莱教授が直立不動のまま、国王陛下の正面へと立った。

国王陛下は、自分がかつて送った蓬莱教授のノーベル賞メダルを見つつ、ゆっくりと賞金の小切手とノーベル賞の賞状を渡すと、蓬莱教授はそれをタキシードにしまった。

そして、国王陛下が既にあるメダルに配慮しながら、蓬莱教授の首にメダルをかけ始めた。

パチパチパチパチパチ!!!

これまでとは比較にならないほどの大きな大きな拍手が会場を包み込む。

それは、ノーベル賞の授与式でも見られない極めて稀な光景だった。

蓬莱教授が、ノーベル賞のメダルを２つぶら下げている。

そして、国王陛下が、蓬莱教授に握手の手を出すと、蓬莱教授もゆっくりとそれに応じた。

「Ａｆｔｅｒ　ａ　ｌｏｎｇ　ａｂｓｅｎｃｅ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ…　１５　ｙｅａｒｓ．　Ｉ　ｋｅｐｔ　ｍｙ　ｐｒｏｍｉｓｅ．（久しぶりです陛下。１５年の月日が流れました。私は、約束を果たしました）」

一瞬、会場が騒然となった。

蓬莱教授の方から、国王陛下に話しかけたのだった。

蓬莱教授の言う約束というのは、もちろん、「ノーベル賞受賞者としてまたここに戻ってくる」ということ。

「Ｙｏｕ ａｒｅ ｏｎｅ ｏｆ ｔｈｅ ｍｏｓｔ ｇｒｅａｔｓｃｈｏｌａｒ ｉｎ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ’ｓ ｈｉｓｔｏｒｙ．（あなたは世界の歴史の中でも、特に偉大な学者です）」

「Ｔｈｅ ｈｏｎｏｒ ｉｓ ｍｏｒｅ Ｉ ｄｅｓｅｒｖｅ．（身に余る光栄です）」

握手しながら、国王陛下と蓬莱教授の会話が続く。

それは、２回目のノーベル賞受賞者だからなのか、他の受賞者さんが簡単なやり取りで済ませていたのに、蓬莱教授は違った。

それ自体が、蓬莱教授の特別さを意味していた。

パチパチパチパチ!!!

２人の間での長い握手が終わると、会場の盛り上がりは最高潮に達した。

いつの間にか観客全員が立ち上がって拍手をしていた。

蓬莱教授の首から、２つのメダルが誇らしげに輝いていた。

そして、「俺は違うんだ」と言わんばかりの蓬莱教授の満足そうな表情、これほど喜んだ表情の蓬莱教授は、あたしも見たことはなかった。

蓬莱教授は、名誉などの興味はほとんどない。

でも、ノーベル賞にはとても愛着を持っていた。

その理由を、あたしは今以上に痛感する時はない。

雰囲気から何から、あまりにも「格」が違いすぎるもの。

「よっと」

蓬莱教授はいかにも「成し遂げた」という表情で椅子に腰かけた。

他の受賞者さんとは明らかに違うリラックスしきった表情だった。

「――Ｄｒ．　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ――」

次に司会者さんが呼ばれたのは、予定通り浩介くんだった。

浩介くんの紹介は、「蓬莱教授の研究室で、蓬莱教授と共に大学院生の立場から研究し、大きな発見を成し遂げた。彼のお陰で不老の薬は量産され、多くの人が恩恵に預かることができるようになった。現在は蓬莱の薬を生産、販売する『蓬莱カンパニー』の社長をしています。

蓬莱カンパニーは現在世界最大の企業になろうとしています」というものだった。
そして、司会者さんに促され、浩介くんは思い出したかのように立ち上がる。
さっきよりも、緊張の色は少ない。あたしも、ちょっとだけ緊張がほぐれた。
蓬莱教授、もしかしてそこまで考えたのかしら？
それでも、浩介くんが立ち上がり、一歩一歩前へと進むに連れて、歩みが鈍くなっていく。
顔を見なくても、身体から緊張が伝わってくる。
国王陛下は、そんな浩介くんを優しく見つめている。
そして浩介くんは、国王陛下の前に立った。
国王陛下は、まず小切手と賞状を浩介くんに渡し、蓬莱教授よりもややぎこちなく受け取ってタキシードにしまいこんだ。
パチパチパチ
国王陛下がメダルを渡し、浩介くんの首に掲げると、また拍手が沸き起こった。
「Ｉ ｄｏｎ☒ｔ ｋｎｏｗ ｗｈｙ Ｉ ｗａｓ Ｎｏｂｅｌ Ｐｒｉｚｅ ｌａｕｒｅａｔｅ，ｙｏｕｒ Ｍａｊｅｓｔｙ…Ｉ ｃａｎ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ ｔｈａｔ ｍｙ ｗｉｆｅ ａｗａｒｄｅｄ．（私は、何故自分がノーベル賞を取ったのか理解できません、陛下。私の妻ならば、まだ理解できるのですが）」
浩介くんが、握手を交わす前に、蓬莱教授と同じように国王陛下に話しかけた。
すると会場が、少し沈黙した。
あたしは、浩介くんの話にとても驚いた。
何故なら、あたしは逆に、浩介くんのノーベル賞の方がまだ理解できていたから。
うーん、お互い謙虚すぎるのも考えものかしらね。
それに、蓬莱教授と同じように国王陛下に話しかけていくとも思っていなかった。

うーん、これだと何かあたしも話しかけなきゃいけない雰囲気っぽいわね。

「Ｈｕｍｍ…Ｔｈｉｓ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ，　ｙｏｕ　ｓｈｏｕｌｄ　ｆｉｎｄ　ｔｈｅ　ａｎｓｗｅｒ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ．（ふーむ、その問題は、あなた自身が答えを見つけるべきでしょう）」

「Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．　Ｉ　ｄｏｎ☒ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｅｎ　ｉｔ　ｗｉｌｌ　ｂｅ，　ｂｕｔ　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｆｉｎｄ　ｍｙｓｅｌｆ　ｓｏｍｅｄａｙ．（分かりました。いつになるか分かりませんが、いつか自分で見つけてみます）」

「Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｔｈａｔ　ｉｓ　ｇｏｏｄ．（それがいいと思います）」

浩介くんに対する国王陛下の答えは、あっけないものだった。

結局、そうとしか言えないものね。

あたしも、あたし自身で見つけていくしか無い。

「Ａｎｙｗａｙ…Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ．（ともあれ……おめでとうございます）」

そして、国王陛下は、握手の手を握り、浩介くんの手を握った。

「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．（ありがとうございます陛下）」

パチパチパチパチパチ!!!

浩介くんと国王陛下がガッチリと握手し、会場の盛り上がりもよりいっそう高まった。

そして、浩介くんは国王陛下に一礼して、ゆっくりと戻ってきた。

「ふひーっ」

椅子に座ると、浩介くんが心底疲れた表情で腰掛けた。

肉体的というよりも、精神的に疲れたという感じね。

まあ、外国とは言え王様と相対するわけだもの。少しでも教養のある人なら、緊張するに決まっているわね。

浩介くんの首には、ノーベル賞のメダルが、掲げられていた。

そして、浩介くんの授与が終わったということは、次はもちろん―

「――Ｄｒ．Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ」

ノーベル財団の人が、淡々とした表情で、あたしの名前を読み上げた。

# ２０２７年１２月１０日　永遠の美少女になって永遠の栄誉を得た件

「――Ｄｒ．Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ」
淡々とした声で、あたしの名前が呼ばれた。
あたしに対する紹介はとても長くなっていた。
あたしの紹介は、「篠原優子は２０００年に元々は男性として生まれた。１７歳になる少し前に、ＴＳ病として倒れ女性として生まれ変わった。それ以降、彼女の人生が変わった。彼女の学校の先生も同じ病気であり、また早くから同じＴＳ病患者を支援する活動を開始した。あどけなささえ残る幼い少女のような容姿だが、彼女はもう老いることはない。彼女の学校の先生は、クリスチャン2世の時代から生きている。ＴＳ病は老化がなくなるため、当時の恋人、今の旦那である篠原浩介博士との死に別れを回避するために、蓬莱教授との研究に協力し、そこで不老を司る仕組みの最後のピースを当てはめた。彼女の研究によって、不老の仕組みは解明され、それが実用化された。夫ともども、身をもって不老というものを思い知らせてくれる存在」というものだった。
どうやら、スウェーデンを始め欧米ではあたしのノーベル賞が特に注目されていたらしいわね。
後、何気に永原先生の注目度も高いらしいわね。
「んっ……」
あたしは、全てが終わり、恐る恐るという感じで立ち上がる。
うー、たかが立ち上がるだけでこんなに緊張するなんて。
会場中の視線があたしに注がれる中、意を決して立ち上がると、一旦椅子の方に身体を向け、持っていた熊さんのぬいぐるみを椅子に置いて座らせてあげる。
「待っててね。あたし、ちょっと重要なことしてくるから」
お人形さんに目線を合わせ、小さな声でそう呟く。
会場が少しだけざわつく。

あたしにはそれが何を意味しているかは分からないけど、困惑の声であることは間違いない。
あたしは、お人形さんから視線をそらして立ち上がると、右足を軸に体とくるりと一回転させる。
そうすることで、黒く長い髪がサラサラと宙を舞い、足元では膝も見えない程度に、スカートがほんの少しだけ舞い上がる。国王陛下に背を向ける状況から脱しあたしの視界には、さっきとは比べ物にならないくらいの威厳を持ったスウェーデン国王が立っていた。
国王陛下を待たせるわけにはいかないという気持ちと、あんなに威圧感のある場所に本当に行けるのかという、相反した感情があたしの中で張り巡らせていく。
浩介くんや、他のノーベル賞受賞者の様子を、傍から見ただけでは決して分からないその様子に、あたしもたじろいでしまう。
「ふー」
足を一歩踏み出しただけで、心臓の鼓動が更に上がっていく。
普段は「アウトロー」を自認していて、「王様だの関係ない」何て思っている人でさえ、いや、普段そういう風に思っている人ほど、いざこの場を目にしたら、恐怖で足がすくんでしまうこと間違いなしだ。
国王陛下は、確かに温厚で親しみやすく、庶民的なおじいさんと評判な人だ。
だけど、普段そうだからこそ、この場で放つ威厳はよりいっそう強くなっているのよね。
これまであたしは、5年前から自国の総理大臣と対面し、そして話し合って政治を動かしたことさえあった。
でもそんな経験は、スウェーデン国王というあまりにも大きな存在の前では、何の意味もない。
どれだけの資産を持っていても、どれだけの名誉を持っていても、どれだけの実績を積み重ねても、絶対に越えることのできない権威がそこにあった。
外国人、それも遠い異国の日本人であるあたしでさえ、こうして国王陛下が放つ無意識の威圧に圧倒されそうになる。

もちろん、スウェーデン人のノーベル賞受賞者もいるわけで、そんな人がここに立ったら卒倒するんじゃないかとさえ思えてくる。
「大丈夫、大丈夫」
あたしは自分にそう言い聞かせながら、一歩一歩、少しずつ前に進んでいく。
あたしが歩みを進める度に、人々の話し声は小さくなり、すぐに会場が不気味なほど静まり返る。
近付くにつれて徐々に大きくなっていく国王陛下は、優しく温厚そうな表情で、少女を待っている。
「ふー」
息をゆっくり吐き、更に近付いていく。
うー、お人形さん持ってくれれば良かったかしら？
トントン……
あたしの足音だけが、広い会場に鳴り響いている。会場のみんなも、あたしの様子を固唾を呑んで見守っている。
でも、近付けばやがていつかは近くに来る。
あたしは、いつの間にか国王陛下のすぐそばまで来ていた。
すると、国王陛下がにこやかな表情で、懐から小切手を渡してくれた。
「Ｔａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．」
あたしは、無意識にほぼ近い感覚で、その言葉を口にした。
国王陛下は笑って頷くと、小切手の次に、あたしに賞状を渡してくれる。あたしはそれを、ドレスの中のポケットに丁寧にしまう。
そして、国王陛下が持っていたメダルの１つを持って、あたしの首にかけてくれる。
あたしは、心持ち頭を斜め前に下げる。
他の男性陣と違い、あたしは胸が大きいので、メダル本体が空中に浮かんでいるようになっている。
パチパチパチパチパチ!!!
会場が割れんばかりの拍手に包まれた。
「Ｙｏｕ，ｒｅａｃｈｏｏｓｅｎｏｎｅ．（あなたは選ばれた

人です)」
あたしは驚いた。今度は国王陛下の方から、あたしに話しかけてきたのだった。
国王陛下は、あたしの顔をまっすぐに見つめていた。
「Ｉ ａｍ ａ Ｎｏｂｅｌ ｐｒｉｚｅ ｌａｕｒｅａｔｅ.(ノーベル賞ですから)」
国王陛下のおっしゃりたいことはそういう意味ではないと分かっていながらも、反射的にその言葉が出てしまった。
案の定、国王陛下は静かに首を優しく横に振った。
「Ｙｏｕ ｃｈａｎｇｅｄ ｗｏｒｌｄ. Ｎｏｔ ｏｎｌｙ ｓｃｉｅｎｃｅ. Ｙｏｕ ｃｈａｎｇｅｄ ｓｏｃｉａｌ, ｐｏｌｉｔｉｃａｌ, ｔｈｏｕｇｈｔ, ｅｃｏｎｏｍｙ, ｌｉｆｅ, ｃｕｌｔｕｒｅ, ａｎｄ ｏｔｈｅｒ ｔｈｉｎｇｓ.(あなたは世界を変えたんです。それは決して科学だけではありません。社会、政治、思想、経済、生活、文化……他にも様々なことを、あなたは変えました)」
国王陛下は、まるで小さな孫に教える祖父のように、ゆっくりとした英語であたしに話しかけてくれる。
優しい声だけれども、あたしは内心ではとても緊張してしまっている。
「Ｉｆ １０ ｙｅａｒｓ ａｇｏ, ｙｏｕ ｗｅｒｅ ｎｏｔ ｐｅｒｆｅｃｔ ｔｒａｎｓ ｓｅｘｕａｌ ｓｙｎｄｒｏｍｅ, ｐｅｏｐｌｅ ｔｒａｐｐｅｄ ａｇｉｎｇ ｌｉｆｅｓｐａｎ ｐｒｉｓｏｎ. Ｆｏｒｅｖｅｒ.(もし、１０年前にあなたがあそこで完全性転換症候群にならなかったら、人々は老化寿命という名前の牢獄に閉じ込められていたでしょう。永遠に)」
それは、国王陛下からあたしへの最大の誉め言葉だった。
あたしは、これに異論がある。
だけど、反論する勇気が出てこない。でも、しなければいけない。
「すーっ。ふー」
あたしが一旦深呼吸する。

会場も、次のあたしの一言を待っているみたいだわ。
うん、国王陛下に言わなきゃ。
「I don't think so. If I doesn't join no aging research, Dr. Horai will discovery no aging too. Of course, more delayed than historical fact.（あたしはそうは思いません。もしあたしが研究に参加しなくても、蓬莱教授は不老を発見していたと思います。もちろん、史実よりは遅くなるでしょうが）」
あたしのその反論に、会場もややざわついた。
国王陛下も、まさか反論されるとは思っていなかったらしく、一瞬だけ、これまで見せなかった動揺の表情を見せてくれた。
しかし国王陛下はあたしに向き直ると、すぐににこやかな表情に戻して、あたしに再反論をする姿勢を見せてくれた。
「If, It's delay 1 years, you saved hundred million people, if 10 years, it is 1 billion people. You are qualified as a sufficient condition of Nobel prize.（もしそれで遅れたのが1年なら、あなたは1億人の人々を救ったことになるし、10年ならば、それは10億人ということになる。あなたは、ノーベル賞に値するには十分な資格を持っているよ）」
「…」
国王陛下の再反論は、もっともなものだった。
あたしがした貢献、いつかは解決できるとしても、それを早めただけでも多くの命を救ったと。
そして蓬莱の薬の重大さを考えれば、それだけでもノーベル賞に値するほどの偉業だと。
「You, re a Nobel prize laureate. It is nothing to exclude you from Stockholm.（あなたはノーベル賞だ。あなたを

ストックホルムから排除するものは何もない）」
結局、浩介くんがノーベル賞になったのも、あたしと同じ理由だったんだと思う。
この研究は、「あまりにも偉大」であり、例え「従」の立場が明確でも、貢献をしただけでノーベル賞に値すること。
蓬莱教授が、「特例で１０人くらいにあげるべきだ」と言ったのを、今になって深く理解できた。
まさか、自分の教官の蓬莱教授ではなく、専門外のはずの国王陛下に教わるとは思わなかったわ。
「Ｉ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．（分かりました）」
だから、あたしはこう答えるしかなかった。
「Ｉ ｗａｎｔ ｔｏ ｐｒｅｓｅｎｔ ａ ｓｅｎｔｅｎｃｅ．Ｐｌｅａｓｅ ｒｅａｄ ｓｅｎｔｅｎｃｅ ｗｒｉｔｔｅｎ ｉｎ ｙｏｕｒ ｍｅｄａｌ．（あなたに是非送りたい文があります。メダルにある文をもう一度読み返してください）」
確か、意味は蓬莱教授が教えてくれたっけ？
あの時は、「まさしく俺にぴったりの言葉だろう？」って笑ってたけど、もう一度見直してみようかしら？
ともあれ、あたしと国王陛下の対面もそろそろ終わりそうね。
「Ｏｈ ！ Ｉ ｆｏｒｇｏｔ ｓｈａｋｅ ｈａｎｄｓ！（おっと、握手するのを忘れてた！）」
ワハハハハハ
あたしが身体を翻そうとしたのとほぼ同時に、国王陛下が突然、「握手するのを忘れていた」と言って手を出すと、今まで緊張が張り詰めていた会場が一気に盛り上がって笑いに包まれた。
あたしもそのことを忘れていて、あたしは、国王陛下の手を取って確かにがっしりと握手した。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ，ｆｏｒｅｖｅｒ ｌｉｔｔｌｅ ｇｉｒｌ． Ｙｏｕｒ ｙｏｕｔｈ ｉｓ ｆｏｒｅｖｅｒ，ｙｏｕｒ ｈｏｎｏｒ ｔｏｏ． （おめでとう、永遠の少女よ。あなたの若さが永遠であると共に、あなたの栄誉も永遠です）」

「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．　Ｔｏｄａｙ’ｓ　ｍｅｍｏｒｙ　ｉｓ　ｆｏｒｅｖｅｒ　ｔｏｏ．　（ありがとうございます陛下、今日のことも、永遠でしょう）」

「Ｙｅｓ．（ええ）」

パチパチパチパチ！

国王陛下と共に最後の会話をすると、会場から拍手が沸き起こる。

不思議なものだわ。

椅子から立って、まだ２分も経っていない。

国王陛下の元に行くまでは、あそこに行くのがあんなに大変だったのに、今は椅子に戻ることが惜しいとさえ思えてくる。

でも、まだ文学賞の人と、経済学賞の人が残っている。

あたしは名残惜しい気持ちを抑え、さっきよりもゆっくりとしたスピードで、体をくるりと回転させ、熊さんのぬいぐるみが置いてある椅子を目指す。

さっきとは逆の理由で、まるでさっきとは反比例するように歩く速度が上がっていく。

椅子の手前まで来たら熊さんのぬいぐるみを持ち、ゆっくりと体を回転させて椅子に座った。

その瞬間、あたしは、押さえ込んでいたものがすべて流れ込んだような感覚を受けた。

「あー、終わったー」

ぜえーっと息を思いっきり吐き出す。

「――Ｍｒ．――」

もちろん式典は続いていて、今は文学賞受賞者の紹介をやっている。

しかし、さっきまでの受賞者と同じく、あまりにも精神疲労が激しくて、いまいちあたしは集中しきれなかった。

自分の首に掲げられたそのメダルを持ち、眺めてみる。

そこには、あの時に見たのと同じ、「ＡＬＦＲ　ＮＯＢＥＬ」という文字と、生没年が書かれたローマ数字、そしてノーベルの横顔だった。

メダルを裏返すと、そこには１組の男女が描かれていて、女性が男

性の肩に寄りかかりつつも、男性は女性の方を見ずに、お椀らしきもので上から流れてくる水を収集している。
これは、病気の少女のために水を汲む医者の姿を表している。
あの時ガラス越しにしか見えなかったメダルが、今目の前に、しかも蓬莱教授のメダルではなく、あたしのメダルとしてある。
そして、メダルの縁の部分に書かれている文字、「ＩＮＶＥＮＴＡＳ・ＶＩＴＡＭ・ＩＵＶＡＴ・ＥＸＣＯＬＵＩＳＳＥ・ＰＥＲ・ＡＲＴＥＳ」……確か、「見いだされた技術を通じて、人々の生活を高めたことが喜びとなる」という意味だったわね。
あたしの隣りに座っていた文学賞の受賞者が立ち上がる。一番注目されていたあたしたちが終わったためか、あたしたちと比べるとかなりリラックスした様子だった。
まあ、今年のノーベル賞の注目度はあたしたちに注目が集中していたし、心理的にも楽なのかもしれないわね。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ．」
「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．」
いつものやり取りをしながら、文学賞の受賞者が賞金の小切手と賞状、そしてメダルを受け取りながらリラックスした表情で戻った。うーん、もしかしたらこの人がメンタル強いだけなのかしら？
最後に、経済学賞の受賞者で、これはちょっと特殊で、狭義には「ノーベル賞」には含まれないらしく、「ノーベル経済学賞」という名前も厳密には誤りとなっている。
それはノーベルの遺言になかった賞というのもあるし、賞金も「ノーベル財団」とは別の組織が出しているらしい。
とはいえ、ノーベル博物館にも受賞者が称えられていたし、事実上ノーベル賞の分野という扱いを受けている。
経済学賞の受賞者たちも、あたしたちと同じように賞金の小切手と賞状、そしてノーベル賞のメダルを受け取る。
うーん、あたしから見ると、経済学賞がノーベル賞に含まれないとも思えないのよね。
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ．」

「Ｔｈａｎｋｓ　ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．　」
　パチパチパチパチパチ!!!
最後の受賞者がメダルを受け取り終わる。これで全ての予定が終了した。
すると、国王陛下が元の席に戻る。
オーケストラが荘厳な音楽を流しながら、「授与がすべて終了した」ことを伝えてくれる。
何だかんだで１人１人の紹介や、ノーベル財団などの紹介や演説などで、相応の時間が経っていると思う。
まず王族の方々が、次に財団や研究期間の関係者、次に過去の受賞者たちが、それぞれ椅子から立ち上がって、拍手の元に去っていく。
そして最後に、あたしたち受賞者が退場する。
あたしたちには、更に大きな拍手が向けられた。
蓬莱教授とあたしが、その中でも特に目立っていた。
蓬莱教授が立ち上がり、歩く度にメダルが「チンチン」と軽く接触する音が聞こえてくる。
だけど、会場の視線を見るに、蓬莱教授以上に目立っていたのがあたしだった。
あたしはノーベル賞のメダルを持ちながら、同時に熊さんのぬいぐるみを持っている。
大人を越えた大人、それこそよっぽどに偉大な学者でもない限り手に入れることのできないノーベル賞のメダルと、幼い女の子が遊ぶ熊さんのぬいぐるみを同時に持つ少女。
見た目は、日本人からでも、その巨大な胸がなければ幼く見えるだろうというくらいで、ましてや今ここにいるスウェーデン人から見たら、それこそ小学生に見えても不思議じゃない。
もちろん欧米人の基準でも、あたしの胸は超がつくであろう巨乳に分類されるけど、それでも顔の幼さを考えれば、まさに少女、「Ｌｉｔｔｌｅ　ｇｉｒｌ」にしか見えなかった。
その老けない小さな少女が、ノーベル賞、それも科学３部門のノーベル賞を取ってしまった。

入場する時は右手に持っていた熊さんのぬいぐるみを、今度は左手に持って退場する。

オーケストラの演奏が終わる頃には、あたしたちは会場の外に出ていた。

夢のような授賞式は終わりを告げた。

でもまだ、これで終わりではない。むしろ、始まったばかりだった。

## ２０２７年１２月１０日　晩餐会へ

「あー疲れたぜ！」
会場を出るなり、浩介くんが延びをする。
あたしも、これから晩餐会があるのに、もうかなり疲れてしまっている。
「うむ、さすがにあの場は緊張するもんだ」
蓬莱教授も、少しお疲れ気味だった。
しかし、首から掲げた２つのメダルを見ているだけでも、あたしは「蓬莱教授よりはマシ」と思えてくるのだから不思議だわ。
「だが、もっと疲れるのはむしろこれからだ。俺たちはもう少し時間がある」
予定では、一般の入場者たちが会場を去り、専用のバスでストックホルム市庁舎へと先回りすることになっている。
あたしたちは、その後しばらくして、再び財団の専用バスでストックホルム市庁舎に行き、晩餐会開始の運びとなる。
とはいえ、晩餐会の参加者は１３００人、もちろん晩餐会からの参加者もいるとはいえ、授賞式からの参加者が大半なので、専用のバスで移動するにも相応の時間がかかる。
あたしたちは賞を実際に受け取るという大役を受けたため、あたしたちには休憩が与えられている。
彼らが休む暇なく忙しくバスに行く間に、あたしたちは控え室で悠々と休みながら待つことができるんだけど――
「浩介くん、あたし、ちょっとお花積みに行ってくるわね」
「あーうん、分かった」
あたしは、浩介くんにくまさんのぬいぐるみを押し付け、代わりに控え室で預かってもらっていた手荷物を持って、一旦控え室を出てトイレを探す。
ちょっとだけコンサートホールの出口を見てみると、バスを目指して人々が長く列を作っていた。
予定時刻に余裕があるとはいえ、急ぐに越したことはないわね。

「うっ」
女性用トイレは、少し行列が並んでいた。
といっても、別の場所にもトイレがあるのか、１３００人という人数を考慮すれば、そこまで多くないと言えるかもしれない。
実際、あたしの前には２人だけで、今１人出てきたので、後２人出てくれれば大丈夫だし。
「Ｏｈ！　Ｄｒ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ　！」
「あっ……」
真面目に並んでいると、メダルを掲げたままだったあたしを見て、女性が驚きの声を出す。
すると、あたしを見てすぐに周りが騒ぎ始めてしまった。
「Ａｆｔｅｒ　ｙｏｕ，ｍｕｍ．（お先にどうぞ）」
さっき入ろうとした女性が、あたしに先を譲ってくれる。
「Ａｈ…　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．（あー、ありがとうね）」
お着替えなので断ろうかとも思ったけど、控え室に待つ人達のことも考えて、あたしはありがたく厚意を受け取って、先に通してもらった。
ガチャンと鍵をしっかり閉めて、まずは賞金の小切手とノーベル賞のメダルを、バッグの側面にある収納スペースに丁寧に入れる。
次に、あたしは背中に手を回してドレスを脱ぐ。
このドレスは、着るのは１人では難しいけど、脱ぐだけなら何とか自分１人でもできるようになっている。
背中のホックを外し、衣服を擦る音をなるべく立てないようにしながら、ドレスをゆっくりと床に下ろしていく。
寒いストックホルムのことを考えて、上はかなり暖かいインナーを着込んでいるけど、これも、これから着る服のことを考えて、少しだけ薄着になる。
そのためにこのインナーも脱いで一旦下着姿になると、あたしはバッグからさっきよりは少しだけ薄いインナーシャツを取り出して着込む。
次に赤いトップスをその上に着て、頭の白いリボンの位置を少しだ

け上にずらす。
スカートを穿く前に、アリバイ作りもかねてトイレに座り、パンツを下ろす。
そのまま着ていたドレスをバッグの中に仕舞い、時間が経って全て終わると、最後に赤い巻きスカートを穿いてクリップで止める。
この間に、何度かトイレに入っている人が入れ替わっているのを感じた。
あたしは、忘れ物が無いかもう一度確認してから、ノーベル賞のメダルを取り出して掲げ、賞状と賞金の小切手を服の内側のポケットに入れて、途中で落ちないようにチャックを閉めた。
「よし」
あたしは、トイレを流して外に出て、手を洗いながら鏡を見る。
うん、あのドレスよりも更に幼く、かわいさを強調できていいわね。
スカート丈も、膝が見える程度ではあるけど、女子高生のような短さではなく、幼い子供でも違和感がない感じに仕上がっているわね。
隣の女性はかなり驚いた顔をしているけど、気にしないでおこう。
あたしは、気持ち早足で控え室へと戻った。
コンコン
「はーい」
扉をノックすると、浩介くんの声が聞こえた。
まあ、あたしだけいないなら、「あたしが帰ってきた」と考えるのが自然よね。
ガチャッ……
「おーかわいい」
あたしが扉を開くと、浩介くんが開口一番に感心した声をあげている。
いや、それだけじゃない。
蓬莱教授と浩介くん以外の全員が、幼さを強調したあたしの格好を見て目を丸くしている。
「Ａｈ…　Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ，　ｄｏ　ｙｏｕ　ｒｅａｌｌｙ　ｊｏｉｎ　ｄｉｎｎｅｒ　ｐａｒｔｙ　ｔｈｉｓ

ｄｒｅｓｓ？（あー、篠原優子博士、本当にその服装で晩餐会に参加するのかい？）」
化学賞を受賞した、最年長の受賞者が、いたたまれなくなったのかあたしを問い詰めてくる。
ふふ、ここは堂々とした方がいいわね。
「Ｙｅｓ，ａｍ Ｉ ｃｕｔｅ？（えへへ、そうよ。かわいいでしょ？）」
あたしはスカートの両横を摘んで広げて腰をひねる。
ふふ、男受け最高のポーズなのよねこれが。
「Ｙｅｓ ｙｅｓ．」
ややうんざりした感じで応対される。
ま、このくらいは想定内よね。
ふふ、どれだけ否定しても、男はこういう女の子が本能的に好きなことは知っているから問題ないわね。
「へへ、やっぱりこの服があたしにとっての思い出よ」
「うー、優子ちゃんってすごいよね。それ来て晩餐会って、ある意味で授賞式の時より勇気要るぜ」
浩介くんがかなり驚いた風に言う。
やっぱり目立つためか、ここにいる女性があたしだけだからか、ノーベル賞受賞者たちもあたしのことをじろじろ見ている。
ふふ、この視線がまた、たまらなく心地いいのよね。
浩介くんが嫉妬しちゃうのが難点だけど。
「ふう、しかしやっぱり、優子さんはすげえよな」
蓬莱教授が、そう話しかけてくれる。
「うん？　そうかしら？」
「欧米ではさ、自立した強い女がモテるって言われてるだろ？　でもそれは嘘なんだぜ。古今東西問わず、男は本能的には『弱くて守れそうな女性』を好むものなんだ。だけどそういうのを言ったり、そう言う風に振る舞うのは勇気のいることなんだぜ」
そう、だからか弱くて幼そうな女性は、それだけでどこに行ってもとてもモテる。

例えば、恋愛や結婚をしたい女性がいたとして、自分より強い男しか魅力を感じない性格であるとすれば、選択肢を広げるという意味では、自分を徹底的に弱い存在にするのが最善の行動になる。

実は、出世したくないという女性の中には、本能的に「自分の恋愛対象を狭めたくない」という自制心がかかっていることが多いのだという。

しかし、そういう女性は、同じ女性からは嫌われてしまうらしい。

その理由は、プライドを簡単に捨ててしまっているにも関わらず、男子からモテることへの妬みだという。

あたしは幸い恵まれた高校・大学・そして社会人生活をしてきたので、同性から嫌われるということはなかった。

「まさにチキンレースだね。だからこそ、強い女性側も『こういう女性が魅力』と思わせる戦略を立てたって訳なんだな」

浩介くんがそのように分析する。そういった印象操作を流すことも、要は戦略の1つであるというわけだ。もちろん、本当に男子受けを狙った女性が現れたら、たちまち瓦解しちゃうわけだけど。

日本語の会話なので、当然他の受賞者には理解できないので、思う存分話すことが出来る。

「だったら、みんなあたしみたいにすればいいのにね」

「ところがそうもいかねえらしいんだ。だから優子さんみたいな女性は、一部の女性からは猛烈に嫌われるだろうな」

蓬莱教授が言うことは、あたしも痛いほど分かっている。

忘年会での新入社員でも、大学でフェミニストの講師をやっつけた時もそうだった。

更に言えば、あたしがカウンセラーとして指導した幸子さんや歩美さん、弘子さんも、特に「ブスグループ」や「体育会系女子」から、親の仇のように嫌われたらしい。

もちろん、彼女たちも最初は戸惑ったけど、すぐに「ブスに嫌われて男に好かれるのは快感」だということを覚え始めた。

永原先生によれば、弘子さんはそれで、自分を嫌うクラスのモテない女子を徹底的に論破した挙げ句、泣かせたこともあったとか。

その時、男子はもちろん、全員が弘子さんの味方になったそうだ。
女の子だから、男にモテる方が快感なのは、あたしたちには当然のことだった。
永原先生でさえ、「レズビアンでもない女性たちが、何故男性より女性に好かれることを優先するのか？」という問いに答えを導き出せていない。
「うーん、そこがよく分からないのよねえー。浩介くんは、小谷学園で、高月くんとあたしで予定が重なった時はどうしてたの？」
「ん？　もちろん全部優子ちゃん優先だよ。むしろ高月に彼女がいて、俺を優先するなんて言ってきたら、俺の方が止めるくれえだ」
浩介くんは、「そんなこと当たり前だろう？」と言わんばかりの表情で話しかけてきた。
そう、対して男の場合、異性優先なのは当たり前の話だった。男は、「女に媚びる」ことは当然のことで、それをとやかく言う人は殆ど居ない。
あたしにとっては、この服が一番男子に好かれやすいことを知っていた。
だから、大勢の人が出席し、授賞式よりも身近になる晩餐会には、この服で出席するのだ。
ガチャッ……
ほどなくして、ノーベル財団の人が、「まもなく出発します」と、あたしたちに準備を促してきた。
ノーベル財団の人も、「その服で本当に参加するのか？」と聞いてきたので、「そうよ。かわいいでしょ？」と返しておいた。
財団の人はあたしのスピーチの内容を知っているからか、それ以上は追求せず、あたしたちはコンサートホールの廊下を進んでいく。
廊下は既に人払いされていたのか、シーンと静まり返っていた。
「うー寒いわー」
外に出ると、ドレスの時よりもやっぱり寒い。
冬のストックホルムだから当たり前ではあるけど、あたしは大急ぎ

で暖房の効いたバスの奥へと進んだ。
「ふー」
暖房の効いた暖かい大型バスの中には、あたしたち受賞者と財団の人、通訳さんが数名乗り込むだけなので、それこそ1人1列というレベルで空いている。
そんな空間でも、あたしたち受賞者は固まって行動する。
「ねえあなた、晩餐会は何が出るのかしら？」
「うーん、よく分からんな」
一応、受賞者の好みも反映されるとは聞いている。
それでも、食材調達との兼ね合いもあるから、晩餐会のメニューは予測不可能だわ。
「――」
「まもなく発車しますので、シートベルトをお締め下さい」
通訳さんが合流してくれたので、あたしたちは日本語で彼らの言葉を理解することができた。
もしかしたら、あたしも浩介くんも、国王陛下の前で慣れない英語を使ったせいかもしれないわね。
このノーベル財団のバスには、露払いなどで車列を組んでくれるので、比較的危険と言われる道路も安心できる。
チュオオオオ!!!
バスのエンジンの音がし、バスが発車した。
あたしは、お人形さんを抱えながら、バスの窓の外を見た。
ワーワー！
そこには、大勢の人がいた。
マスコミのカメラの他にも、沿道からの歓迎の声が、車内まで聞こえてきた。
「すげえな、みんな俺たちのために集まってくれたんだろ？」
浩介くんが、驚きながら話す。
あたしたちが受賞したノーベル賞は、もちろんそれこそ小学生の時から「すごい賞」の代名詞として有名で、「それができたらノーベル賞を貰える」と言えば、極めて困難だったり、不可能またはそれに近い

物事に対する例えにもなっている。
今のあたしはどうだろう？　その、「ノーベル賞を貰える」という状況が現実に起きている。
バスの隣には、夫になった浩介くんがいて、彼もまた、首からノーベル賞のメダルを掲げている。
外の風景から目をそらし、あたしはもう一度、ノーベル賞メダルの裏面を見る。
「見出だされた技術を通じて、人々の生活を高めたことが喜びとなる……」
ノーベル賞のメダルに書かれたその標語を、あたしはまた反芻する。
「お、優子さん、その言葉、覚えていたんだな」
すると、蓬莱教授があたしに話しかけてきた。
この言葉、確かに今のあたしにとっては、学者としてのあたしというよりも、蓬莱カンパニーに所属するあたしの方が似合っている言葉にも聞こえた。

「Ｔｈｉｓ　Ｌａｔｉｎ　ｍｅａｎｓ　”Ｉｔ　ｉｓ　ｊｏｙ　ｔｈａｔ　ｐｅｏｐｌｅ　ｌｉｆｅ　ｅｎｖｉｒｏｎｍｅｎｔ　ｉｍｐｒｏｖｅｍｅｎｔ　ｂｙ　ｄｉｓｃｏｖｅｒｅｄ　ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ”．（このラテン語の意味は、『発見された技術で、人々の生活環境が改善させることは喜びだ』って意味なんだ）」
「Ｙｅｓ，　Ｉ　ｋｎｅｗ．（ああ、知っていたよ）」
どうやら、他の賞のメダルにも、あたしたちと同じ標語が並んでいるらしいわね。
「メダルのデザインは、物理学賞と化学賞で同じ、残りの賞はそれぞれに違ったデザインらしいな。ま、俺には物理学賞も化学賞も、縁がないだろうがね」
蓬莱教授といえども、今から別の賞を取るのは不可能だと思っているらしい。
まあ、生理学・医学賞を2回受賞したのは蓬莱教授が初めてだし、今

後もちょっとやそっとでは出てこないことだけはわかる。
そもそも、別分野かつ科学部門のノーベル賞を受賞したのだって、ノーベル賞黎明期の学者であるキューリー夫人ただ1人だけだ。
その時代とは、今は専門化の進み具合がまるで違うから、比較にならないものね。
ピー！　ピッピー！
笛を吹く音が聞こえる。どうやら、交差点でもあたしたちのバスは最優先で移動できるように配慮されているらしい。
本当に、どおにいってもあたしたちはＶＩＰそのものね。
沿道には、あたしたちを見る見物人の姿が途絶えない。
あたしたちからはその姿は見えるけど、既に太陽が落ちきってるこの時間に、彼らからはあたしたちが見えるのかしら？
「――」
「間もなく到着いたします」
しばらくすると、バスがゆっくりと停車した。
路上駐車はおそらくスウェーデンの法律でも駐車違反になると思うけど、ノーベル財団には関係ない。
……あんまり、こうしたことを意識しない方がいいわね。
あたしたち受賞者が、最後にバスを降りる。
外からの冷気は凄まじいけど、すぐに市庁舎の中に入れたので、１０秒程度の我慢で済んだ。
「ふー、暖かいわ」
「ああ、やっぱ１２月のストックホルムはきついな」
あたしと浩介くんは、中に入るなり「活き返った」という感じになる。
他の参加者たちは、受付でＩＤを見せて身分証明をしなければいけないけれども、あたしたちは、もちろんそんな煩わしいことはしないでいい。
「――」
「青の間はこちらになります」
あたしたちは、財団の人に導かれ、いよいよメインの晩餐会が行わ

れる「青の間」へとやって来た。
大きな扉の前には、男性が2人いた。
あたしたちが入場するイベントは、ノーベル賞晩餐会の中でも、特に重要になる。
授賞式の時は遠い壇上だったけど、この晩餐会ではまさに近くで接することになる。
あたしたちは1列に並び直す。
あたしは緊張が強くなって、くまさんのぬいぐるみを持つ右手の握力が強くなった。
扉の向こうのざわつく声が聞こえたかと思うと、扉の横に立っていた男性2人が扉を開けた。

## ２０２７年１２月１０日　晩餐会が始まる

扉が開かれると、一瞬扉の先が光に包まれ、すぐに緩和されて会場の様子が見える。

あたしたちは財団の人に促され、前方にある壇上まで進む。

よく見ると国王陛下夫妻も席に座っていて、あたしたちは完全に注目の的だった。

ガヤガヤ……

「Ｗｈｙ　Ｄｒ．　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ　ｌｏｏｋｓ　ｃｈｉｌｄｉｓｈ．（どうして篠原優子博士はあんなに子供っぽいの？）」

「Ｂｅｃａｕｓｅ　ｙｏｕ　ｄｏｎ’ｔ　ｋｎｏｗ　ｔｈａｔ　ｓｈｅ☒ｓ　ｎｏ　ａｇｉｎｇ　ｆｒｏｍ　１０　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ．（何故なら、君が彼女が１０年前から不老だということを知らないからよ）」

「Ｂｕｔ，　ｓｈｅ　ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｄｏ　ｓｕｃｈ　ａｎ　ｅｍｐｈａｓｉｓ…（でも、あんなに強調しなくったっていいのに）」

見知らぬ２人の女性、おそらく地元ストックホルムの学生さんが、あたしを見ながらヒソヒソと話している。

今年のノーベル賞受賞者の中でも、女性はあたしだけ。

しかも、予想通り、あたしの格好は「子供っぽい」「幼稚」と思われているらしいわね。

ふふ、一般女性ならばともかく、あたしがこの格好をするということから、大分困惑しているみたいね。

でも、どこの国でも、男は本能的にはこういう女の子が好きなのよね。

「ふっふーん」

あたしは、どうしても肩凝りや重さなどから猫背になりがちな姿勢をやめて、ピンと胸を張ってそれを見せつけるように歩く。

すると、会場の男達の目線が一気にあたしに集中する。

いや、エロい目で見ている男だけじゃない、女性たちも、羨ましさと嫉妬を混ぜた視線で、あたしを見てくる。

今、あたしは、メダルを２つぶら下げている蓬莱教授よりも目立っている。
ふふ、思い通り。思い通り思い通り思い通り！
あー、何て気持ちいいのかしら！
巨乳美女に生まれて本当によかったわ！
あたしたちは、奥の壇上に行くと、ノーベル財団の人がマイクを取る。
「――」
あたしたちは、再びパンフレットを取って進行を確認する。
これから、ノーベル賞受賞者の紹介が行われる。
「Ｄｒ．――」
順序は、授賞式と同じく、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、文学賞、経済学賞の順番になっている。
物理学賞の学者さんの名前が紹介され、頭を下げていく。
化学賞も同じ。
「Ｄｒ．　Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ．」
パチパチパチパチパチ!!!
蓬莱教授が紹介されて頭を下げると、会場内の熱気は更に盛り上がった。
「Ｄｒ．　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」
パチパチパチパチパチ!!!
浩介くんの注目度も、蓬莱教授程ではなくとも高い。
何分、あたしほどでなくても、浩介くんだってかなり若く見られているからね。
「Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　」
パチパチパチパチパチ!!!
あたしはぬいぐるみさんに気を付けながら頭を下げる。
そして、ぬいぐるみさんの手を握り、右手でぶらんとぶら下げる。
やっぱり、「小さな少女のノーベル賞」は、スウェーデンでは特に目立つらしい。

「――」
「えーそれでは、各自席の方に移ってください。座席はパンフレットにあります」
文学賞と経済学賞の人の紹介が終わると、いよいよ本格的に晩餐会が始まった。
あたしはパンフレットと会場の席を見ながら、指定されている席に移動する。
ちなみに、晩餐会でも、隣の席は浩介くんだった。
「ここかな？」
「うん、そうみたい」
同じテーブルはともかく隣のテーブルは皆、知らない人だった。
王族の方々とも離れているし、この人たちは他の受賞者、経済学賞の人の友人の子供や孫たちらしい。
「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ．」
「Ｎ…　ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ．」
浩介くんが「はじめまして」を言うと、青年がぎこちなく答える。
ノーベル賞学者の孫ということもあって、かなり年を取っていて、男女共に……多分３０歳くらいかしら？
あたしは、晩餐会の食事に手をつける。
晩餐会の食事は、驚いたことに日本料理……いわゆる和食だった。
ご丁寧に箸も置いてあって、ほとんどの人は使ってないけど、あたしたちは日本人なので遠慮なく箸を使う。
「浩介くん」
「ああ、まさかスウェーデンに来て祖国の料理をパーティーで食べるとは思わなかったぜ」
それだけ、あたしたちのノーベル賞が注目されているってことよね。
「Ｔｈａｔ，ｓ　ｇｒｅａｔ，ｈｏｗ　ｕｓｅ　ｃｈｏｐｓｔｉｃｋｓ　？（すげえな、箸なんてどう使うんだ？）」
「Ｌｅｔ，ｓ　ｔｒｙ．（やってみろって）」
どうやら、あたしたちが箸を使っているのを見て、羨ましがってい

るらしい。
「Ｏｈ…!!!」
　コロコロ……
　とりあえず挑戦してみた青年だけど、掴むこともできずに落としてしまう。
　落ちた箸が、あたしの方に転がってしまう。
　和食を食べる上で、箸は重要だけど、使ったこと無い人には難しいのよね。
「はい」
　あたしは、箸を拾って青年に渡す。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」
「Ｃｈｏｐｓｔｉｃｋｓ　ｉｓ――」
　あたしが、箸を見せて実演して見せる。
　力を抜くのが本来のやり方だけど、いきなりそれは難しいので、まずは箸を落とさないように気を付けさせる。
「Ｈｕｍｍ…　ＯＫ！」
　少しずつ、やり方を覚えていく。
　それと同時に、あたしもあたしで食事を食べていく。
　うーん、こんなに食べられるかしら？　この後デザートもあるのに。
「Ｎｏｎｏ…　Ｙｅｓｙｅｓ！」
　ふふ、上達したみたいだけど、あたしの胸に注目がいっちゃってるわね。
　よし、ここは――
「Ｙｅｓ，ｙｏｕ，ｒｅ　ｍａｋｉｎｇ　ｒａｐｉｄ．　Ｂｕｔ，ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｎｏｔ　ｓｔａｒｅ　ａｔ　ｍｙ　ｂｒｅａｓｔ．（上達が早いわね。でもあたしの胸をじろじろ見ちゃいけないわよ）」
　ワハハハハハ!!!
　あたしがそう言うと、会場の周辺が笑いに包まれた。
「Ｉｔ，ｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ！　Ｉｔ，ｓ　ｍａｎ，ｓ　ｉｎ

ｓｔｉｎｃｔ！（無理だって、男の本能だから！）」
「Ｉ ｋｎｅｗ． Ｉ ｗａｓ ｓｔａｒｅｄ ｍｙ ｂｒｅａｓｔ，ｂｙ ａｌｍｏｓｔ ｍｅｎ ｉｎ ｔｈｉｓ ｄｉｎｎｅｒ．（知ってるわ。あたし、ここの会場のほとんどの男性から胸をじろじろ見られていたし）」
あたしがにっこりとそう言うと、男性たちはばつが悪そうにあたしの胸から顔をそらし始めた。
と同時に、あたしたちの顛末を注目していた一部の女性から笑い声が漏れると共に、別の一部の女性からはあたしの胸を恨めしそうに見つめている。
ふふ、その視線がたまらなく気持ちいいのよね。
男たちは、女性に嫌われるのを恐れてか、意識してあたしの胸を見ないようにしている。
あたしの胸を相変わらずちらちらと見ているのは、旦那の浩介くんくらいになった。
ちなみに、あたしの胸をじろじろ見なかった紳士のほとんどが、王族の方々だった。
「優子ちゃん、一旦食べ終わったら、雑談タイムだってさ」
「あ、うん、分かったわ」
あたしは、箸の指導もそこそこに、残りの和食を食べ始める。
やはり多くて食べきれないので、少しだけ浩介くんに食べてもらう。
うん、こんな美味しい料理、残すわけにはいかないものね。
「ふう、優子ちゃん、どうする？」
「うーん、とりあえず近くを回ろうよ」
「そうだな」
あたしは立ち上がり、くまさんのぬいぐるみを手に持つ。
赤い服と相まって、この晩餐会でも一際目立つ。
他の女性たちが優雅なドレスで着飾っているけど、そうした装飾品で努力しても、あたしを越えることができないみたいね。
あたしは、すぐ近くで雑談していた集団と出くわす。

うーん、見たところ、さっきの人たちと同じくらいかしら？
「Ｈｅｌｌｏ．」
「Ｏｈ，Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」
あたしが声をかけると、そこの集団がやや驚きながらあたしの方を見つめてくる。
メダルが邪魔にならないように気を付けながら、座っている人に合わせるためにあたしは体を前屈みにする。
ふふ、さっきあんなことがあったばかりなのに、もうあたしの胸に視線がいってるわね。
本当、男ってバカで単純だわ。まあ、それがいいんだけど。
「Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ，ｗｈｙ　ｔｈｉｓ　ｄｒｅｓｓ？（篠原優子博士、何故その服で？）」
「Ａｎｄ…ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｃａｒｒｙ　ｔｅｄｄｙ　ｂｅａｒ？（それに、どうして熊のぬいぐるみなんて持っているんだ？）」
立て続けに違う人から注文が入る。
やっぱり、あたしの今の服装は、かなり気になるらしいわね。
「Ｂｅｃａｕｓｅ　ｔｅｄｄｙ　ｂｅａｒ　ｈａｖｅ　ａｎ　ｅｆｆｅｃｔ　ｃａｌｍ　ｍｙ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ．（くまさんのぬいぐるみはね、あたしの心を落ち着かせてくれるのよ）」
「Ｗｈｙ　ｄｏｎ，ｔ　ｙｏｕ　ｆｅａｒ　ｃｈｉｌｄｉｓｈ？（子供っぽく見られることをどうして恐れないんだ？）」
「Ｈｕｍｍ…Ｉ，ｌｌ　ｅｘｐｌａｉｎ　ｔｈｅ　ｓｐｅｅｃｈ．（うーん、スピーチの時に説明するわ）」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．（分かった）」
あたしは、実は「子供っぽい」と思われることに、どうしようもない嬉しさを感じてもいる。
文字通り「幼い少女」という経験が欠落したあたしが、幼い女の子のように振る舞えていると周囲に言って貰えるのは、「無くしたものを取り戻せている」という満足感になって、あたしに返ってくる。
あたしは、不老であることが原因だと思うけど、老化することにどうしようもないくらい嫌悪感を感じている。

多分、他の女性だってそうだと思う。
でもあたしの場合、「若くありたい」という希望が、人一倍強い。
だからあたしは、地声でも十分に高い声だけど、意識して更に声のトーンを高くする。
「I am no aging. I am forever young cute girl. You shouldn't forget it.（あたしは老いないの。あたしは永遠の美少女よ、そのことを忘れないでね）」
普通、自分で自分を「かわいい」というのはよくないことと言われている。
でも、あたしは別格。
あたしくらいにかわいくて美人なら、謙遜は全て嫌みになっちゃうもの。
「Loud voice is childish. I have no idea.（高い声って子供っぽいわ。そんなことするなんて考えられない）」
近くにいた女性があたしに反論する。
あたしよりずいぶん低い声で、まるで高い声の男みたいだわ。
「Men like young girl. This is men's instinct.（男は若い女の子が好きなのよ。これは男の本能だわ）」
「I can't understand.（理解できないわ）」
「If you can't understand it, you can't be popular with men.（理解出来ないと、男にモテないわよ）」
あたしが左手薬指にはめている指輪を見せつけながら話す。
「It's unjust! You're older than me!（理不尽だわ！　あなた、私より年上なのに）」
ふふ、本音が出たわね。
よし、ここは――
「Oh, I think that you're older

ｔｈａｎ　ｍｅ．（あら、あたしはあなたの方が年上とばっかり）」
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　２７!?　Ｉ　ａｍ　ｙｏｕｎｇｅｒ　ｔｈａｎ　ｙｏｕ　ｂｙ　８　ｙｅａｒｓ！（あなた２７歳でしょ!?　私、あなたより８つも年下よ）」
釣れちゃったわ。
あたしの中で、意地悪したい気分が支配していく。
うーん、こういうことは「優子」らしくないんだけど、あたしのコンプレックスを紛らわせるための行動をあれこれ言われちゃうと、どうしてもこうなっちゃうのよね。
「Ｉ　ｓｅｅ，ｙｏｕ　ｌｏｏｋｓ　３５　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ．（あたしには、あなたのこと３５歳に見えたわ）」
だから、こんなセリフがすらすらと出てきてしまう。
「Ｈｏｌｙ　ｓｈｉｔ！（何てこったい！）」
思わず周囲の男たちからも笑い声が漏れる。
完全に赤っ恥をかかされたその女子学生は、捨て台詞を吐いて悔しがっていた。
「Ｗｈｙ?」
その女性の近くにいた別の男性が、あたしに聞いてくる。
「Ｉｓ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｌｏｏｋｓ　ｙｏｕｎｇｅｒ　ｔｈａｎ　ｒｅａｌ　ａｇｅ?　Ｓｏ，ｈｏｗ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｌｏｏｋ　ｙｏｕ　ａｌｌ?（日本人は若く見えるのよね?　じゃあ、日本人はあなた達のこと、どう見えると思うかしら?）」
「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ．」
そう、立場を入れ換えちゃえば、そんなことは簡単に分かる。
それに気付いた彼らは、どうしても重くなってしまう。
「Ｎｅｖｅｒ　ｍｉｎｄ，Ｈｏｒａｉ　ｍｅｄｉｃｉｎｅ　ｅｍａｎｃｉｐａｔｉｏｎｓ　ａｇｉｎｇ．（心配する必要はないわ。蓬莱の薬が、老化から解放してくれるわ）」
「Ｉｔ，ｓ　１００　ｙｅａｒｓ　ｌａｔｅｒ．（１００年後にな）」
うー、やっぱりそうよね。
「Ａｈ…　Ｉｔ　ｉｓ…　Ｉ，ｍ　ｓｏｒｒｙ．（そのことについて

は……あー申し訳ないと思っているわ)」

「Ｄｏｎ’ｔ　ｗｏｒｒｙ，ｉｔ　ｃａｎ’ｔ　ｂｅ　ｈｅｌｐｅｄ．(気にしないで。それはやむを得ないことだよ)」

気まずそうな雰囲気も、すぐにフォローしてくれる。

あたしは、その学生集団から離れる時に、少し疑問に思った。

「若く振る舞うのをバカにするなら、どうして老けて見られるのに怒るのかしらね？　大人っぽく振る舞うってそういうことなのに」

日本語で呟いた独り言は、当然彼らには通じない。

でも、あのやり取りで分かったことがある。

つまり、彼女らとあたしたちには何の違いもない。表面的な文化の違いは、生物学的本能には何の影響もないということ。

「ふふ、楽しみだわ」

浩介くんは、別の集団に捕まっていた。

男の集団で、もしかしたらあたしに関することかもしれないわね。

あたしは、また別の集団と出会う。

あたしたちは、王族や財団の人、過去の受賞者の人たちが座っている真ん中の一番長いテーブルにいるため、外側に行けば行くほど、招待客が増える。

「あら？」

「おお、篠原先生」

あたしは、その集団の中で見知った顔を見た。

それは、あたしたちの佐和山大学で数学を教えてくれていた河毛教授だった。

隣には瀬田准教授が、蓬莱教授と話していた。

「いらしていたんですね」

あたしたち全く気付かなかったわ。

「ああうん、佐和山の教授たちは皆ここに呼ばれたんだ。篠原先生と蓬莱教授がノーベル賞になって、大学の日程が急遽変更になってね。ほら、うちの学生たちも来ていますよ」

あたしが視線をテーブルにやると、知らない顔の学生たちが、あたしの胸とメダルを凝視していた。

男子学生は皆タキシードで、女子学生は振袖姿が多い。
うーん、いつも以上に胸への視線がすごいけど、胸の谷間にメダルの紐が挟まる形なのがよくないのかしら？
「篠原先生、授賞式でも特に注目されてましたよ」
「あはは、無理もないですね」
あたしへの呼び方は、どうやら変わりそうにない。
英語での会話では、あたしは「博士」と呼ばれているけど、これだって本来なら来年の3月に貰うはずのものを、ノーベル賞を受けて前倒しでもらったものにすぎない。
「篠原先生は、時にとても勇敢で大胆な人です。普通、王族の方々も参加するノーベル賞の晩餐会を、その服装で参加するなんて思い付きもしないものですよ」
「あ、あはは……」
やっぱり、この服目立つものね。
普段着として佐和山大学に行った時でさえ目立つんだから、ノーベル賞の晩餐会ともなれば尚更だ。
「それに、篠原さんみたいに、わざと幼く振る舞うのはもっと抵抗があるはずです」
「あーうん、それは、ね……スピーチで話すわ」
河毛教授は、あたしが持っているコンプレックスのことは知らない。
あたしも、その事は隠しておくことにする。
「それでは、よい晩餐会をお楽しみください」
「はい」
あたしは、河毛教授と別れ、テーブルを移動しようとする。
「篠原先生、ノーベル賞おめでとうございます」
「あ、瀬田准教授」
瀬田准教授が、あたしに呼び掛けてきた。
あたしは、瀬田准教授に関しては、少し複雑な思いがある。
蓬莱教授の研究を長年支えてきたのは瀬田准教授で、あたしたちは大学に入ってからの新参者だった。

「ノーベル賞のことですか？」
「はい、あたしたちが瀬田准教授を差し置いてノーベル賞というのが、少し納得できないというか……申し訳ないんです」
確かに、重要なきっかけを見つけたはあたしと浩介くんだったかもしれない。
でも、蓬莱教授を最も助けたのは、瀬田准教授のはずだった。
「……いいんですよ。私は、別に何の発見もしてないんです。ただ蓬莱教授に言われたことや、蓬莱教授の想定内のことしかしてないんです」
「え？」
いや、そういうことはないんじゃないか、とあたしは思う。
だって、研究には多くのメンバーが必要だもの。
「篠原先生たちは、蓬莱教授がいずれもあの時想定していなかった部分に手を出して、それで成功したんです」
「あっ！」
あたしは、ハッとなった。
そう言われてみればそうだった。
あたしの発見は、蓬莱教授が想定していなかった部分を突いたために、成功した。
浩介くんの発見は、歩留まりの改善、今までしたことのなかった分野に蓬莱教授が苦戦していたところを、うまく成し遂げた。
「だから、これは謙遜なんかじゃないんです。カロリンスカ研究所は、よく調べられていますよ」
瀬田准教授の一言が、あたしに響く。
そうだわ。ノーベル賞何て大それた賞を決めるわけだもの。選考機関には、特に多大な調査が必要になる。
ましてや、それを大学院生だったあたしに決めたわけだから、並の調査では無いわよね。
「それに、いかに不老研究が偉大とはいえ、わずか2年での受賞……蓬莱教授が1回目に取ったノーベル賞でさえ、もう少し時間がかかったものですよ」

そうだった。普通、ノーベル賞を取るにしても、発見から１０年以上して取るのが普通の話。
一応、自然科学分野に限定しても、あたしたちよりも早いノーベル賞受賞の例はあるという。
それでも、あたしたちがノーベル賞１２８年の歴史でも、異例と言える早さで受賞したことには代わりはなかった。
「ええ」
「私は、蓬莱教授の助手ですから、彼以上のことはできません。篠原先生は、一度だけかもしれませんが、あの時確かに、蓬莱教授を越えたんですよ。そのメダルに、誇りを持ってください」
「……はい」
さっきの国王陛下とのやり取りとも併せて、あたしは自分のノーベル賞受賞に対する負い目が取れていくのを感じた。
ノーベル賞をあたしが取ったのは、決して妥当ではないというわけではない。
そして、この賞を受賞するには、運だけでは無理な話だった。
だって、あたしの想定は、実際に成功するずっと以前からしていたことだもの。
あたしは、瀬田准教授に一礼し、佐和山大学の学生さんたちとも話し込む。
それにしても、やっぱり「先生」と呼ばれるのは慣れないわね。
特に、ついこの間までは、あたしたちが「先生」と呼ぶべき人たちからそう呼ばれるのは、特にむず痒いわ。

## ２０２７年１２月１０日　盛り上がる晩餐会

あたしは、テーブルの更に別の場所に行く。
デザートの時間まではまだ余裕があるので、どんどん交流を深めていきたい。
佐和山大学のテーブルを抜けて次に来たのは、あたしたちにとっても特に身近な人のテーブルだった。
「優子」
「母さん」
次にあたしたちが見たのは、あたしたちの家族、更に蓬莱教授の家族と思われる人達が座っているテーブルだった。
「優子、その格好。勇気あるわね」
「えへへ、これが一番男にモテるからね」
あたしは、男の扱いにとても慣れている。
それは、共学女子というだけでは決してない。
「もう、浩介くん、また嫉妬しちゃうわよ」
母さんが、あたしに忠告をしてくれる。
うん、確かに、浩介くんは嫉妬深いし、嫉妬しちゃったら、ご機嫌を直すにはすっごく恥ずかしい思いをしないといけない。
それでも、あたしはやめることができない。
「あはは、うん、気を付けるわ」
あたしには、もう１つ、このノーベル賞晩餐会の目的がある。
あたしがくまさんのぬいぐるみを持っている姿は、まさしく子供そのもので、「２７歳がこんな子供になれて、しかもノーベル賞まで取れるのが蓬莱の薬」ということを世に示す目的もある。
「ま、優子は浩介くんを嫉妬させちゃっても、ちゃんとフォローしているんでしょ？」
「うん、それに、あたしだって嫉妬深いもの。お互い様だわ」
「そう、まあ、優子を嫁に貰って浮気するわけないとは私も思ってるけど」
「当たり前よ」

母さんも、あたしのことは自慢の娘だと思ってくれている。
そのことが分かってよかった。
父さんはというと、お義父さんと、おそらく蓬莱教授の親戚と思われる人と話していた。
会話内容を聞く限りでは、どうやら「たかる親族」が怖いらしい。
父さんもお義父さんも、会社はやめていない。
もちろんやめることも考えていたが、息子夫婦、娘夫婦に完全に寄生するのは気が引けたのに加え、給料が全て自分たちのお金になって、事実上家賃や光熱費などの心配がなくなったため、趣味のお金を調達する目的もあるみたいね。
「そうそう優子、このノーベル賞が一段落したら、そろそろ孫の顔見せてよね」
「えっ!? う、うん……」
うー、今日が一番の危険日だってことを意識してしまったわ。
ホテルに帰ってからと思ったのに。
「あらその反応……いつもなら『はいはい』って感じで流すのに」
「うー、知らないっ!」
「あらあらまあまあ」
逃げるようにその場から離れると、母さんからの不適な笑みが帰ってきた。
ノーベル賞を取ったからといって、近しい人たちとの関係が劇的に変わるわけではない。
だから、あたしは相変わらず母さんのペースには簡単に飲まれてしまう。
ふう、日本語の会話で助かったわ。
これが中央のテーブルの人に意味を理解されていたら大変だったもの。
そして、それらのテーブルの隣には――
「優子おめでとう!」
「え、恵美ちゃん!」
恵美ちゃんがドレスで思いっきりおめかししていた。

全く飾らない恵美ちゃんでも、こういう場ではなるべくかわいく見えるように頑張っている。
普段が普段なので、絶対評価以上にかわいく見える。
「いやー、あたいもニュース聞いたときは驚いたぜ。まさか世界2位の資産家になった挙げ句ノーベル賞ってさー」
恵美ちゃんは、様々なテニス大会で優勝していて、現在でも世界ランキングは1位、恵美ちゃんが蓬莱の薬を飲んでいたことは既に周知の事実にはなっているけれど、もちろんあたしたち蓬莱カンパニーの圧力もあって、恵美ちゃんの蓬莱の薬使用による処分は何ら無いことが発表されている。
「うん、あたしもビックリしてるわ。あの時電話がかかってきてから、本当に大変よ」
「ねえ、メダル見してよ」
「うん」
恵美ちゃんが、うきうきした顔であたしのメダルを取る。
恵美ちゃんの方が多分この手のメダルや賞状を貰っていると思うけど、やっぱり学術的なノーベル賞ともなると違うらしい。
「この顔、本当にあちこちで見るよなー」
「まあそりゃあ、こんな時期だし」
ノーベルの横顔を見て、恵美ちゃんも少し食傷気味らしい。
「で、裏面は……この絵は何だ？」
恵美ちゃんがメダルをひっくり返し、覗き込んでいる。
すると、知らない間に、女子たちが集まってきた。
よくよく見ると、それはみんな小谷学園時代のクラスメイトだった。
「へえ、不思議な絵ですねー男女が寄り添ってるけど、男は何してるんでしょうか？」
「龍香ちゃん！」
「いやー、スウェーデンはあっという間に夜ですよねー。これはダーリンとの時間も長くとれますねーぎゅふふ」
龍香ちゃん、相変わらず旦那に夢中らしい。

まあ、変わらないみたいでよかったわ。
「あの……おめでとう……ございます……」
さくらちゃんが、あたしをお祝いしてくれる。
蓬莱の薬をまだ飲んでいないのか、あたしや恵美ちゃんなどと比べると、かなり大人びた女性になっている。
口調や性格は、そこまで変わってないみたいだけどね。
「さくらちゃんもうまくいってるかしら？」
「はい」
どうやら問題ないわね。
「ところで、ここにあるよく分からない文字列は何語何ですか？」
恵美ちゃんと一緒にメダルを鑑賞していた龍香ちゃんがお決まりの質問をしてくる。
「これはラテン語で『見出だされた技術を通じて人々の生活を高めることが喜びとなる』って言う意味で、この絵は病気の少女と医者の絵なんだって」
「ほえー、まさに生理学・医学賞何だな」
メダルの意味を説明すると、恵美ちゃんも納得した様子になる。
蓬莱教授は以前、この言葉を「まさに自分にふさわしい」と言っていた。
「まさに、優子ちゃんにふさわしい言葉ね」
突然の声に、あたしは頭を上にあげ、恵美ちゃんたちが後ろを振り向く。
「桂子ちゃん」
そこにいたのは桂子ちゃんだった。
左手薬指の指輪が、とても眩しい。
「やっほー、ビックリしたわ。優子ちゃんがノーベル賞だなんて」
それ、あたしたちが世界一の資産家ファミリーになった時にも同じことといってたわよね。
あーでも、どっちもそりゃあ驚くに決まってるか。
「あたしは、皆がここにいることの方がビックリだわ」
「あーうん、先生が手を回してくれたのよ」

どうやら、永原先生を通じて、ノーベル財団に招待してもらったらしい。
もちろん、ここにいるクラスメイトは一部で、例えば高月くんは、博士医学のための論文で忙しくて参加できなかったとか。
「メダル、見せてくれる？」
「うん」
あたしは、桂子ちゃんにノーベル賞のメダルを見せてあげる。恵美ちゃんや龍香ちゃんと違い、かなり憧れの色の強い印象を、あたしは何となく受けた。
「いいなー。私も物理学賞とか受けてみたいわね。まあ、修士じゃ無理だとは思うけど」
「桂子ちゃん、蓬莱教授と同じこと言うのね」
以前蓬莱教授は、「ノーベル賞は極めて受賞困難で、『才能と学歴は関係ないと言っても、最低限博士号が必要』だと思う」と言っていた。
その上で、学士の学位でノーベル化学賞を取った日本人男性について、「俺の理解を越えた存在」とも話していた。
やはり桂子ちゃんも同じ感想なのか、「修士ではノーベル賞なんて無理」と思っている。
でも逆に言えば、博士ならノーベル賞のための最低限の力量を身に付けられたかもしれないという意味にもとれた。
「ま、仮に博士でも絶対無理と断言していいようなレベルだけどね。優子ちゃんや浩介とはレベルが違うのよあたしたちは」
桂子ちゃんは、頭脳の出来について、あたしたちと大きな、埋めがたい開きがあると思っている。
まあ、こんなメダルを貰っちゃったら、そう思うのは無理もないことよね。
「だな、しっかし優子、高校の成績はそんなに上位って感じでも無かったよな。真ん中よりはかなり上だったけど」
「あーうん、よく覚えてないわ」
高校での勉強は、博士号を取った今振り替えると、子供の遊びのようなものにしか感じない。

さすがに、大学の学部レベルの授業は、皆難しい大人の学問だとは思っているけどね。
「まあ、もう１０年も前のことだものね」
「うんうん」
桂子ちゃんが言うように、あたしたちも随分と長い時間を過ごした。
またいつか、あたしたちで同窓会を開きたい。
その時は、あたしたちと恵美ちゃん、どっちが注目されるのか見物よね。
「私も、ＪＡＸＡ頑張らなきゃ」
桂子ちゃんが参加している宇宙移民計画も、あたしたちのノーベル賞受賞で奮起してくれると嬉しいんだけど。
「桂子ちゃんも、頑張ってね」
「うん」
あたしは、クラスのみんなに一通りメダルを見せると、テーブルの端に到着した。
そしてそこには――
「あら、篠原さんいらっしゃい」
永原先生が、笑顔で歓迎してくれた。
そして、ノーベル賞受賞者と同じくらいか、いや下手をするとそれ以上の数のマスコミが殺到している。
「Ｄｏ ｙｏｕ ｂｅｌｉｅｖｅ？ Ｓｈｅ ｗａｓ ｂｏｒｎ ｉｎ １８３３！ Ｓｈｅ☒ｓ １９４ ｙｅａｒｓ ｏｌｄ． Ｉｔ’ｓ ｓａｍｅ ａｇｅ ｔｏ Ｎｏｂｅｌ！（信じられますか？彼女が生まれたのは１８３３年、１９４歳です。これはノーベルと同い年なのです）」
あたしが、テレビの方を見ると、困惑した表情の余呉さんと、懸命に通訳する通訳さんに、テレビカメラが向けられていた。
「今は余呉さんが取材を受けているみたいです」
よく見ると、そこは協会の正会員たちが座っていて、みんな美女揃いというのもあって凄まじい取材攻勢を受けている。

「永原先生なんてもっと大変じゃないの？」
「ええそうよ。江戸時代の話とか暮らしぶりとか、本当によく聞かれたわ。この着物のこともね――」
永原先生は、吉良上野介の着物を着ていて、この着物が「３００年前のもの」と答えたら現地のメディアに仰天されたらしい。
ちなみに、今朝のテレビの取材依頼に至っては、現地入りする前から調整していたものらしい。
「アメリカのメディアに取ってみれば、ジョージ・ワシントン建国以前から残っている着物ってことだもの。私本人だけではなく、着物よりも年下ってことになるもの」
「永原先生のお宝なんて、多くはそうでしょうに」
「まあね」
永原先生がにっこりと笑いながらそう答える。
永原先生の家宝は、国宝や重要文化財への指定が相次いでいる。
経済的負担についても、株式のお陰で莫大な富を得たことで、特に問題はなくなったとか。
「Ｔｈｅｙ ａｒｅ ｏｖｅｒ ８０％ Ｊａｐａｎｅｓｅ．（彼女たちは８０％以上が日本人だと言います）」
「Ｔｈｅｙ ａｒｅ ｎｏ ａｇｉｎｇ． Ｂｕｔ，ｔｈｉｓ ｓｙｎｄｒｏｍｅ ｗａｓ ｏｆｔｅｎ ｓｕｉｃｉｄｅ． Ｂｅｃａｕｓｅ ｔｈｉｓ ｓｙｎｄｒｏｍｅ ｉｓ ｂｉｇ ｍｅｎｔａｌ ｂｌｏｗ．（彼女たちは老化しませんが、この病気はしばしば自殺者を出していたと言います。何故なら、とても精神的負担が大きいからです）」
キャスターたちが、カメラに向かって話す。
「Ｉ ｔｈｉｎｋ ｔｈａｔ ｔｈｅｉｒ ｉｓｓｕｅ ｉｓ ｔｈｅｉｒ ｅｄｕｃａｔｉｏｎａｌ ｓｙｓｔｅｍ．（私が思うに、彼女達の教育方法に問題があると思います）」
あら？ また好き勝手言っているわね。
「Ｗｈｅｒｅ ｉｓｓｕｅ？ Ｗｈｙ？（どこに問題があるのかしら？）」

ノーベル賞なので、あたしは遠慮なくテレビカメラに乱入する。
「Ａｈ…Ｉ ｔｈｉｎｋ ｔｈａｔ ｙｏｕｒ ｅｄｕｃａｔｉｏｎａｌ ｓｙｓｔｅｍ ｉｓ ｔｏｏ ｄｒａｓｔｉｃａｌｌｙ．（あー、私が思うに、協会の教育方法は急激すぎないかと）」
あら、どうやらフェミニズムイデオロギーではないみたいね。
「１０ ｙｅａｒｓ ａｇｏ，Ｉ ｒｅｆｏｒｍｅｄ ｅｄｕｃａｔｉｏｎａｌ ｓｙｓｔｅｍ．Ｅｖｅｒ ｓｉｎｃｅ，ｓｕｉｃｉｄｅ ｗａｓ ｄｅｃｒｅａｓｅｄ ｓｈａｒｐｌｙ．（１０年前、あたしが教育方法を改革しました。それから、自殺者は急激に減り続けています）」
そう、今の教育法の原点は幸子さんから始まっている。
今は子育てに奮闘するママとして活躍している。
ちなみに、会員たちは協会の持つ蓬莱カンパニー株式の配当金で、相応のお金を得ることができるようになった。
会費も無料になったので、今まで払っていた分も戻ってきた。
まあ、株の配当金なので、いくら蓬莱カンパニーでも、信用しすぎはいけないけど。
「Ｏｈ…１０ ｙｅａｒｓ ａｇｏ，ｙｏｕ ｗｅｒｅ １７ ｙｅａｒｓ ｏｌｄ．Ｄｉｄ ｙｏｕ ｒｅｆｏｒｍ ｒｅａｌｌｙ？（おー、１０年前と言うと１７歳ですよね。本当にあなたが改革したんですか？）」
驚いたようにキャスターさんが話す。
そう、何を隠そうＴＳ病患者への教育プランを改革したのも、このあたしなのよね。
「Ｙｅｓ，ｎｏｗ ｅｄｕｃａｔｉｏｎａｌ ｓｙｓｔｅｍ ｗａｓ ｄｅｓｉｇｎｅｄ ｂｙ ｈｅｒ．（そうよ。今の教育システムをデザインしたのは篠原さんなのよ）」
あたしが言う前に、今度は近くにいた永原先生が乱入してきた。
永原先生の英語は、あたしや浩介くんと同じでかなり怪しい。
まあ、日本人には英語って難しいものね。
「Ｉ ｗａｓ ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ．Ｓｈｅ ｉｓ ｇｅｎｉｕｓ．

（驚いた。やっぱり彼女は天才だ）」
キャスターの人が、やや大袈裟気味に驚く。
いくらあたしでも、17歳でそういうことをするというのは、驚かれるらしい。
「If she is not genius, she is not come here.（篠原さんが天才じゃなかったら、今ここにいないわよ）」
「Hum…」
あたしそっちのけで、永原先生が込んでいる。
どうやら、フェミニストたちも、さすがにTS病患者に喧嘩を売る気はないみたいね。
さて、あたしは別のところに行かなきゃ。
「はぁ……はぁ……ほら、篠原さん来ましたよ」
余呉さんが、疲れた顔であたしを指差していた。
「余呉さん、どうしたんですか？」
「どうしたもこうしたも、私がノーベルと同い年だって分かってから、テレビの取材がとんでもなく多くて――」
余呉さんが、かなりうんざりした表情で話している。
どうやら、かなりの取材攻勢に遭ってるみたいね。
「あ、あはは……」
「Dr. Yuko Shinohara, why TS syndrome is no aging?（篠原優子博士、TS病はどうして不老なんですか？）」
「I don't know.（知らないわよ）」
TS病が何故不老になるのか？　という疑問の答えは、どちらかというと哲学に属すると思う。
身も蓋もない言い方をすれば、「TS病の過程で不老遺伝子が作られるから」ということになるけど、その言い方じゃ納得してもらえないだろうし、「何故不老遺伝子が作られるのか？」と質問されるに決まっている。
「What do you think your future

ｌｉｆｅ？（これからの人生についてはどう考えていますか？）」
「Ｆｏｒ　ａ　ｗｈｉｌｅ　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　Ｈｏｒａｉ　ｃｏｍｐａｎｙ，ｓ　ｄｉｒｅｃｔｏｒ．（ひとまず、蓬莱カンパニーの取締役を続けたいと思っています）」
最も、浩介くんとの赤ちゃんを作ったら、その限りではないかもしれないけどね。
何だかんだで、主婦にも憧れがあるし。
「篠原さん、ノーベル賞おめでとうございます」
「あら、歩美さん」
今度は歩美さんが話しかけてきた。
「これ、幸子さんから」
歩美さんは、ドレスのポケットから手紙を出してきた。
幸子さんは育児があるので、ここにはいないけど、どうやらあたしにメッセージがあるのね

「篠原優子さん、ノーベル賞おめでとうございます。私も、篠原さんに教わった身として、ノーベル賞の受賞は嬉しいです。私は今、育児に奮闘中です。直哉との赤ちゃんはとってもかわいくて、手のかかる子ですが、いつも癒されています。初めて赤ちゃんを産んだ時、怖いくらいかわいくて、命を懸けてもこの子を守ろうと、今でも強く思っています。篠原さん、私は今、篠原さんのようにお金持ちでも、ノーベル賞のような名誉もありません。でも、赤ちゃんがいるだけで、とても幸せな気持ちになれました。この幸せを、是非篠原さんにも味わってほしいと思います」

手紙には、そのように書かれていた。
そしてもう一枚の写真には、あの時と変わらない幸子さんと直哉さん、そして赤ちゃんが写った写真が同封されていた。
幸子さんは、とても幸せな顔をしていた。
「歩美さん、ありがとうね」
「いえいえ、同門として、後輩として、当然のことですよ」

歩美さんはかわいらしい笑顔でにっこりと笑った。
歩美さんの左手薬指に嵌められた指輪が、あたしの指輪に負けないくらい、強く輝いていた。

## ２０２７年１２月１０日　少女に歯向かう者

「Ｈｅｙ！　Ｈｅｙ！　Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ？（ねえねえ、あなたが篠原優子博士？）」

あたしが、弘子さんを見つけたのでそっちに行こうと思った矢先、今度は別のおばさんがあたしに話しかけてきた。

ともあれ、記者さんの取材ならまあ受けて置くかしら？

「Ｙｅｓ，Ｉ　ａｍ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」

「Ｉ　ａｍ　ｆｅｍｉｎｉｓｔ．（私はフェミニストよ）」

あちゃー、絡まれちゃったわ。

また、あの時みたいになるかしら？

「Ｏｕｒ　ｃａｍｐａｉｇｎ　ｗａｓ　ｄｅａｄｌｙ　ｂｌｏｗ！　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｔｏ　ｂｌａｍｅ！　Ｗｅ　ｈａｔｅ　ａｎｄ　ｃｕｒｓｅ　ｙｏｕ！（私たちの運動は壊滅的な打撃を受けた！　あんたのせいだ！　私たちはあんたを憎む！　そして呪ってやる！）」

ガヤガヤ……Ｗｈａｔ，ｓ　ｈａｐｐｅｎｅｄ？

とんでもない捨てぜりふと、この場にふさわしくない暴言に、周囲も騒然となる。

見ると、やはり記者の腕章をつけているので、そういう関係の人らしいわね。うーん、どうしてこう攻撃的なのかしらね？

あたしは、くまさんのぬいぐるみを見せつけるように胸元で抱き締めると、息を吸って、思いっきり高く、男性が喜びそうな最大限の演技を込める。

「Ｈｅｌｐ　ｍｅｅｅ！　Ｓｈｅ　ｉｓ　ｂｕｌｌｙｉｎｇ　ｍｅ！（助けてー！　この人、あたしをいじめるのー！）」

すると、近くにいた男性が、すぐに立ち上がってあたしとの間に立つ。

もちろん、この晩餐会に来るくらいの人だし、みんな教養のある男性だけど、そうは言ってももちろん男なので、あたしの演技には気付けない。

男たちの本能が、助けを求めている女を守らなくてはいけないとい

う意思表示に変わる。
「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｒｅｌｙ　ｏｎ　ｍｅｎ　ｆｏｒ　ｈｅｌｐ!?（どうしてそうやって男に頼るのよ!?）」
おばさんが、殺意に満ちた眼差しをあたしに向けてくる。
「Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ａｍ　ａ　ｇｉｒｌ．（だってあたし、女の子だもん）」
あたしの高くてかわいらしさを強調した声は、本能的に男の脳を刺激するらしい。
いつの間にか、あたしを守る集団は大きくなっていて、その中には浩介くんも当然含まれていた。
「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｓｈａｍｅ　ｏｆ　ｆｅｍａｌｅ！（あんたは女の恥だ！）」
どうやら、女の子が男の子に守ってもらうのは恥ずかしいことらしいわね。
あたしには理解できない感情だわ。
「Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｓｏ，ｙｏｕ　ｌｏｓｅ　ｍｅ　ｉｎ　ｅｖｅｒｙ　ｗａｙ．（あたしに言わせれば、あなたはあたしに何一つ勝てないわよ）」
あたしが口元をやや上げて、不適な笑みを浮かべて挑発すると、その女の顔がみるみるうちに赤くなっていく。
ふふ、今必死にあたしに勝ってるところを探しているのね。
よしここは――
「Ｉ　ａｍ　Ｎｏｂｅｌ　ｐｒｉｚｅ　ｌａｕｒｅａｔｅ，Ｉ　ａｍ　ｗｏｒｌｄ’ｓ　ｒｉｃｈｅｓｔ　ｗｏｍａｎ，Ｉ　ｍａｒｒｉｅｄ　１８　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ，ａｎｄ…Ｉ　ａｍ　ｓｅｘｉｅｒ　ｔｈａｎ　ｙｏｕ．（あたしはノーベル賞を取ったし、あたしは世界一の資産を持つ女性だし、あたしは１８歳で結婚したし……あなたよりも魅力的だわ）」
最後の「Ｉ　ａｍ　ｓｅｘｉｅｒ　ｔｈａｎ　ｙｏｕ．」の部分は、ぬいぐるみさんをどかして、ぴんと胸を強調させながら言う。
すると、周囲の男性たちからも笑いの声が漏れ、おばさんの顔は

真っ赤になっている。
「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｐｌａｙ　ｔｈｅ　ｃｏｑｕｅｔｔｅ!?
Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｍａｎｙ　ｓｔｒｏｎｇ!（何であんたは媚びるのよ！　あなたは多くの強さを持っているのに！）」
「Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ａｍ　ａ　ｇｉｒｌ.（そりゃあ、あたしが女の子だからよ）」
　パチパチパチパチ
　あたしが即答で断言すると、周囲の男性たちが拍手喝采をあたしに浴びせてくれた。
　ほら見なさい、ノーベル生理学・医学賞のあたしが言うまでもなく、どれだけ文化で覆ったって生物学的な本能には勝てないのよ。
　結局男って言うのはこういう女の子が好きなのよ。
「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｖｅｒｙ　ｍｉｓｅｒａｂｌｅ.　Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｈａｔｅ　ｗｏｍａｎ　ｗｈｏ　ｉｓ　ｌｏｖｅｄ　ｍａｎ?（あなたはとても惨めだわ。どうして男から好かれる女が嫌いなのかしら?）」
「Ｙｏｕ　ａｒｅ…　ｙｏｕ，ｒｅ…」
　あたしが挑発的な笑みを浮かべながら質問をすると、おばさんがはあはあし始めて、言葉に詰まる。
　よし、ここは止めを刺そうかしら?
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａ　ｌｅｓｂｉａｎ?（あなたってレズかしら?）」
　いつの日か、桂子ちゃんが男好きな女の子を嫌う女性、まだ仲が悪かった時の恵美ちゃんと喧嘩した時に使った言葉が、あたしに受け継がれ、そしてこうしてまた使われた。
　その言葉を聞いたとたん、おばさんの赤かった顔がますます赤くなっていく。
「Ｗｈｙ!?　Ｗｈｙ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｔｈｉｎｋ　Ｉ　ａｍ　ｌｅｓｂｉａｎ!?（どうして!?　どうして私がレズビアンだなんて言えるのよ！）」
　そして案の定、必死に否定された。

うーん、「Ｙｅｓ」って答えてくれたほうがまだ分かり合えると思うんだけどね。

「Ｂｅｃａｕｓｅ，Ｉ ｔｈｉｎｋ ｔｈａｔ ｙｏｕ ｈａｔｅ ｍｅｎ．（だって、あなた男嫌いじゃないの）」

少なくとも、あたしにはそうにしか見えないわ。

「Ｎｏ！ Ｉ ｄｏｎ，ｔ ｈａｔｅ ｍｅｎ！ Ｉ ｌｉｋｅ ｍｅｎ ｗｈｏ ａｃｋｎｏｗｌｅｄｇｅ ｓｔｒｏｎｇ ｍｅ！ Ｈｅ ａｃｋｎｏｗｌｅｄｇｅｓ ｎｏ ｃｏｑｕｅｔｔｅ ｗｏｍａｎ！（違う！ 私は男が嫌いじゃない！ 強い私を認めてくれる、媚びない女を認めてくれる彼が！）」

またこれだわ。随分と虫のいい話ね。

要するに努力もしないで自分に都合のいい男を探しているだけじゃないの。

「Ｉ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ ｙｏｕ ｗａｎｔ ｇｒｅａｔ ｍａｎ ｉｎ ｓｐｉｔｅ ｏｆ ｅｆｆｏｒｔ．Ｙｏｕ ｔｈｉｎｋ ｏｎｌｙ ｏｆ ｙｏｕｒ ｏｗｎ ｃｏｎｖｅｎｉｅｎｔ．Ｔｈｉｓ ｉｓ ｆｏｏｌｅｒｙ．（あなたが努力もせずにいい男が欲しいと思っていることは分かったわ。でもそれって、自分の都合しか考えてないわね。とても愚かなことだわ）」

「Ｎｏ！ Ｎｏ！ Ｉｔ，ｓ ｍｉｓｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ！（違う！ 違う！ 誤解だ！）」

おばさんは、必死にあたしの言っていることを否定しようとする。

ふふ、もっと追撃してあげなきゃいけないわね。

「Ｉ ａｍ Ｎｏｂｅｌ ｐｒｉｚｅ ｌａｕｒｅａｔｅ．Ｉ ａｍ ｗｏｒｌｄ，ｓ ｒｉｃｈｅｓｔ ｗｏｍａｎ．Ｉ ａｍ ｎｏ ａｇｉｎｇ ｇｉｒｌ．Ｉ ａｍ ｓｅｘｙ ａｎｄ ｃｕｔｅ ｇｉｒｌ．Ｓｔｉｌｌ Ｉ ｍｕｓｔ ｍａｋｅ ｍａｎｙ ｅｆｆｏｒｔ．Ｉ ｔｈｉｎｋ ｈｏｗ ｂｅｈａｖｅ ｍｙ ｈｕｓｂａｎｄ ｇｌａｄ（あたしはノーベル賞が取れて世界一金持ちの女で、とってもかわいくてセクシーな女の子よ。それでも、多くの努力が必要よ。どうすれば旦那が喜んでくれるか？ あた

しは考えているわ）」

「…」

「Ｉｆ　Ｉ　ｂｅｈａｖｅｄ　ｌｉｋｅ　ｙｏｕ，　Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｍａｒｒｙ　ｆｏｒｅｖｅｒ．　Ｓｏ，　ｙｏｕ　ｃａｎ’ｔ　ｍａｒｒｙ　ｆｏｒｅｖｅｒ　ｔｏｏ．　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｍｏｒｅ　ｓｔｕｐｉｄ　ｔｈａｎ　ｍｅ．　Ａｎｄ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｎｏｔ　ｒｉｃｈｅｒ　ｔｈａｎ　ｍｅ．　Ｙｏｕ　ｃａｎｎｏｔ　ｔｕｒｎ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｒｍ．　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌｏｓｅｒ！　ＨＡＨＡＨＡ！（もし、あたしがあなたみたいな行動を取ったら、一生結婚できないわ。つまり、あなたも一生結婚できないと言うことよ。あなたはあたしよりもバカだし、お金も持ってないし、魅力的に振る舞うこともできないものね。あなたって、負け組だわ。あはははは）」

ワハハハハ

あたしが笑うと、あたしを守ってた男たちも笑ってくれる。おばさんに味方する人は、誰もいない。

「…」

あたしはぬいぐるみさんを持ったままにっこりと笑う。

これは、「優子」にはふさわしくないのかもしれない。

でも、あたしにも、やっぱり女の子としてのプライドがある。

女の子として、男から好かれたいという本能を曲げることはできない。

だから、それを非難する人は、叩きのめしたくてたまらなくなってしまう。

これはもう、しょうがないことなのかもしれないわね。

「Ｎｏｂｏｄｙ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ！　Ｉｆ　ｙｏｕ　ｗｉｌｌ　ｎｏｔ　ｃｈａｎｇｅ，Ｈｏｒａｉ　ｍｅｄｉｃｉｎｅ　ｉｓ　ｍｅａｎｉｎｇｌｅｓｓ　ｆｏｒ　ｙｏｕ．（誰もあなたを助けてくれないわ。あなたが変わらないなら、蓬莱の薬も意味をなさないわね）」

あたしがぷくくと笑いながら更に挑発を強める。

それに比例するように、おばさんの顔が赤くなっていく。

「Ｙｏｕ ｌｏｏｋｓ ｃｈｉｌｄｉｓｈ！ Ｙｏｕ，ｌｌ ｌｏｓｅ ｌａｓｔ！ Ｉ ｗｉｌｌ ｗｉｎ！ Ｉ ｂｅｈａｖｉｎｇ ａｄｕｌｔ！（あなたは幼稚だわ！ そんなあんたは最後には負けるのよ！ そして大人の振る舞いをする私が勝つんだ！）」

もはや、晩餐会の会場のほとんどが、あたしたちの口論に注目している。

「Ｗｈａｔ ａ ｂａｓｅ？ Ｙｏｕ ｌｏｏｋｓ ｏｌｄ ｆｏｒ ｙｏｕｒ ａｇｅ． Ｉ ｔｈｉｎｋ ａｂｏｕｔ ４０ ｙｅａｒｓ ｏｌｄ．（根拠は何かしら？ あなた、実年齢より更けて見えるわ。そう、４０歳くらいかしら？）」

「Ｎｏ！ Ｉ ｗａｓ ｂｏｒｎｅｄ ２００２！ Ｙｏｕ ａｒｅ ｖｅｒｙ ｒｕｄｅ！（違うわよ！ 私、２００２年生まれよ！ 失礼ね！）」

ふふ、引っ掛かったわね。

この勝負、あたしの勝ちだわ。

「Ｗｈｙ ｒｕｄｅ？ Ｙｏｕ ｈａｔｅ ｃｈｉｌｄｉｓｈ ａｎｄ ｙｏｕ ｂｅｈａｖｉｎｇ ａｄｕｌｔ． Ｓｏ ｙｏｕ ａｒｅ ｐｒａｉｓｅｄ． Ｙｏｕ ｓｈｏｕｌｄ ｂｅ ｇｌａｄ．（どうして失礼なのかしら？ 子供っぽいのが嫌いで大人っぽく振る舞うんでしょ？ あなた誉められてるのよ。喜ぶべきだわ）」

それにしても、このおばさんもあたしより年下とは驚いたわ。

どんな人生送ってきたらこんな年齢でここまでこじれるのかしら？

「Ｎｏ！ Ｎｏ… Ｎｏｏｏｏｏ！ Ｎｏ ｎｏ ｎｏ ｎｏ ｎｏ ｎｏ ｎｏ!!!（違う！ 違う！ 違うのよお！ いやあああああ!!!）」

あたしより年下のおばさんが、激しく狼狽している。

それでも、浩介くんを含めたあたしの親衛隊は、守りを解かない。

彼女も分かっているんだろう。直接殴りあえば勝てても、男に守られてて手が出せないことに。

「Ｈｅｌｐ ｍｅ！ Ｓｈｅ ｉｓ ｂｕｌｌｙｉｎｇ ｍｅ！（助

けて！　この人、私をいじめてくる！）」
さっきあたしが言った言葉を、恥も外聞もなく繰り返す。
しかし、会場は沈黙するだけで、誰も助けには来なかった。
それを見て、会場からは男性を中心として、笑い声が漏れていた。
誰も、助けに入る人はいなかった。
あたしは更に、追い打ちをかける。
「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｃｅ　ｂｅｔｗｅｅｎ　ｙｏｕ　ａｎｄ　ｍｅ．　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌｏｎｅｌｙ　ａｎｄ　ｃａｎ　ｎｏｔ　ｄｅｐｅｎｄ　ｏｎ　ａｎｙｏｎｅ．（これがあなたとあたしの差よ。あなたは孤独で誰に頼ることも出来ないの）」
あたしは、にっこりと「優子」の笑顔で、えげつない言葉を浴びせる。
「Ｎｏ！　Ｎｏ！　Ｎｏｏｏ！　Ｎｏ　ｎｏ　ｎｏ　ｎｏ　ｎｏ　ｎｏ!!!（違う！　違う！　違うの！　そんなわけ、無い！　無い！　無い！　いやああ!!!）」
明らかに、動揺が高まっている。
「Ｉ　ａｍ　ｈｏｎｅｓｔ．　Ｉ　ｃａｎ　ｈｅｌｐ　ｍｅｎ．　Ｈｏｗｅｖｅｒ　ｙｏｕ⊠ｒｅ　ｆｅｍｉｎｉｓｔ　ｗｈｏ　ｓｅｌｆ－ａｓｓｅｒｔ　ｔｈｅｍｓｅｌｖｅｓ　ａｒｅ　ａｂａｎｄｏｎｅｄ　ｂｙ　ｍｅｎ．（あたしは素直だから、こうして男性に頼れるの。でも、あなたはフェミニストで自己主張ばかりするから、男性から見捨てられるのよ）」
「Ｎｏ！　Ｆｉｎａｌｌｙ　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｗｉｎ！（違う！　最後に、私が勝つのよ！）」
本当に、往生際が悪いわね。
よしここは――
「Ｗｈｅｎ　ｉｓ　ｆｉｎａｌｌｙ？　Ｐｒｏｂａｂｌｙ　Ｉ　ａｍ　ｓｔｉｌｌ　ａｌｉｖｅ　１００　ｙｅａｒｓ　ｌａｔｅｒ．　Ｐｒｏｂａｂｌｙ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｎｏｔ　ｓｔｉｌｌ　ａｌｉｖｅ　１００　ｙｅａｒｓ　ｌａｔｅｒ．（最後っていつかしら？

あたしはおそらく１００年後も生きていると思うけど、あなたは多分１００年後は生きていないわよね？）」

「Ｉｆ　Ｉ⊠ｌｌ　ｂｅ　ｄｅａｄ，　ｆｅｍｉｎｉｓｍ　ｉｓ　ｉｍｍｏｒｔａｌ．（私が死んだとしても、フェミニズムは絶対に無くならないわ）」

ふふ、そろそろ潮時かしら？

いい加減あたしたちの言い争いにも飽きてきただろうし。

「Ｉ　ａｍ　ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓ　ｓｅｘｕａｌ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ．　Ｉ⊠ｍ　ｅｘｐｅｒｉｅｎｃｉｎｇ　ｂｏｔｈ　ｓｅｘｅｓ．Ｉ　ｗａｓ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ．　Ｆｅｍｉｎｉｓｍ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｍｏｓｔ　ｓｔｕｐｉｄ　ｍｏｓｔ　ｈａｒｍｆｕｌ　ａｎｄ　ｍｏｓｔ　ｗｒｏｎｇ　ｔｈｏｕｇｈｔ　ＩＮ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ！（私はＴＳ病なのよ。両方の性別を経験しているわ。それで分かったことがあるの。フェミニズムは「世界で最も」愚かで、有害で、間違った思想だってことをね！）」

「Ｉ　ｈａｔｅ　ｙｏｕ！（あんたが憎いー！）」

随分と直球的ね。

「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｐａｔｈｅｔｉｃ．　Ｙｏｕ　ｃａｎ　ｎｏｔ　ｒｅｐｌｙ　ａｎｙｔｈｉｎｇ，　ｙｏｕ　ｃａｎ　ｏｎｌｙ　ａｂｕｓｅ．（哀れだわ。何も反論できずに、罵倒することしか出来ないものね）」

あたしの指摘に、おばさんは何も具体的に言い返せない。ただ狼狽し、たまに中身のない暴言しか浴びせてこない。

いい加減に周囲の注目も大きくなってきたし、あたしとしてもこれ以上楽しい晩餐会を滅茶苦茶にされたくないので、退場を促すことにした。

「Ｂｙ　ｔｈｅ　ｗａｙ，　ｅｖｅｒｙｏｎｅ　ｉｓ　ｐａｙｉｎｇ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　ｕｓ．　Ｇｏ　ｏｕｔ　ｂｅｆｏｒｅ　ｉｔ　ｇｅｔｓ　ｍｏｒｅ　ｔｒｏｕｂｌｅ．（ところで、皆さんあたしたちに釘付けになってますよ。これ以上迷惑になる前に出て行ってくれるかしら）」

「っ……」
あたしのその言葉で、フェミニストのマスコミおばさんは涙目になりながら晩餐会から退場していく。
「Ｂｏｏｏ!!　Ｂｏｏｏ!!」
他の参加者たちは、ノーベル賞のあたしに喧嘩を売ったということで、容赦なくブーイングを浴びせていた。
「やーいやーい！『４０歳の』行き遅れおばさーん！」
「半端者ー！　二度と来るな女の敵！　あんたみたいなのが女の敵は女なのよ！」
とりわけ、桂子ちゃんと永原先生は、日本語で野次を浴びせていた。
通訳さんがこれらの罵詈雑言を通訳していないため、日本人以外の参加者には、何を言っているのかは理解できないのが不幸中の幸いだった。
桂子ちゃんも永原先生も、普段お淑やかな女の子らしい女の子って感じだけど、さすがにこの時はかなり怒っていたみたいね。
まあ、あたしに言いがかりつけてきたんだから当たり前かしら？
「先生、桂子、いくら何でも言いすぎだぞ！」
いたたまれなくなったのか、恵美ちゃんが永原先生と桂子ちゃんを止めていた。
それにしても、「女の敵は女」って、言われてみればその通りかもしれないわね。
ブーイングをしていないのは、国王陛下と王族の方々くらいだった。
「ふう、ひどい目に遭ったわ……Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ.」
あたしも、疲れちゃったわ。そもそも、こんなに英語で口論したことも、初めてのことで、我ながらよくうまく行ったものだと感心する。
ふう、火事場の馬鹿力って怖いわね。
あたしは、守ってくれた男の人たちにお礼を言って、何事もなかったかのように晩餐会を再開することにした。

## ２０２７年１２月１０日　全部は救えない

「いやー、優子凄かったよー！　まさかあんなに英語がうまくなっているなんて」

迷惑記者が退場し、あたしに拍手が送られ、ほとぼりが覚めた一番に話しかけてきたのは、虎姫ちゃんだった。

「あーうん、大学院にもなると英語の論文とか読むからね。でも、自分でも驚きだったりするわ」

何分、研究者の英語というのは、基本的に「読む」ことに特化しているから、こうした英会話というのは、あたしも苦手だったりする。

「いやいや、それでもああやって口喧嘩に勝つってのはすごいわ。日本人は英語は特に大変なのに」

桂子ちゃんもＪＡＸＡ務めだし、大学でも大学院でも、「英語が大変」って言ってたわね。

まあ、「ノーベル賞学者でも、日本人だし口喧嘩なら負けない」と思ったのかしら？

だとしたら御愁傷様ね。

「えへへ、あたしも驚いているわ」

実際、自分でもびっくりするくらい英語が出てきた。

「でも、ああいう人って声だけは大きいし何故か力だけはあるからねえ。注意した方がいいかもしれないわ」

桂子ちゃんと一緒に野次を飛ばしていた永原先生が、あたしに対する不安を述べてきた。永原先生も、注意した方がいいとは思うけど。

そう、何故か声も大きく力だけは持っているらしい。

日本ではもう絶滅危惧種となったけど、他の国ではフェミニストが大きな圧力団体になっている。

あたしたちＴＳ病患者ほど、フェミニストに都合の悪い存在はおらず、現にあたしたちはこうやって何度も何度もフェミニズムを論破してきて叩き潰してきたけど、いまだにこうやってゾンビのように復活してくる。

でもこうやって、マスコミを含めた周囲も、あたしが迷惑なフェミ

ニスト記者を追っ払った所を見せれば、もう安易に喧嘩は売れなくなるわね。
まあ、そもそも喧嘩売ってくるのがおかしな話なんだけど。
「本当に、どうしてこんなに復活しやすいのかしらね？」
あたしは、半ば呆れ気味になる。
もう何年も何年も叩き潰しているはずなのに、それしか拠り所がない人っていうのがいるのかしら？
「篠原さんの服装や格好を見て、我慢しきれなかったんじゃないかしら？」
永原先生があたしの服を見て話す。
どうも、そうやって美人が男に媚びると、自分たちはますますモテなくなるために、潰したくなるのだとか。
「ふうん、かわいい服が気に入らないって、もう重症だわ」
あたしは、呆れたように引き離して言う。
ともあれ、小谷学園と協会の人たちは日本でも会えるので、あたしは別のテーブルに行くことにした。
あたしは、先程の記者もいたと思われるマスコミのテーブルへと差し掛かる。
「あ、高島さん」
そこには、ブライト桜の記者腕章をつけた高島さんと、カメラマンさんがいた。
高島さんも、１０年来の付き合いになっていて、今は経営役員まで昇進している。
今はもう経営に忙しくて記者活動は殆どしていないけど、あたしたち協会が関わる取材では、相変わらず高島さんが取材を担当している。
「篠原さん、ノーベル賞おめでとうございます。私も驚きましたよ」
高島さんも、最初に取材した時には、まさかこの少女がノーベル賞とは夢にも思わなかったと思う。
まあ、あたしもあたしで電話がかかってくるまで全く想定していなかったことだけど。

「あはは、関係者はみんな同じことを言うんですよ……蓬莱教授を除いてですけど」
あたしと浩介くんがノーベル賞になったというニュースに驚かなかったのは、蓬莱教授だけだった。
蓬莱教授は、あたしたちのノーベル賞受賞を、ずっと前から予言していた。
でも、他の人はもちろん、あたしのノーベル賞なんて予想していなかった。
記者会見で蓬莱教授が、あたしたちを重要な発見者と位置付けてからも、だ。
「蓬莱教授は、そういうところも含めて凄いですよね」
実際、ノーベル賞の功績を蓬莱教授で独占することはできたし、仮にそうなっていてもあたしたちは何の違和感も抱かなかったとは思う。
でも、蓬莱教授はそれをよしとせず、あたしと浩介くんを評価するように求めた。
「まあ、蓬莱の薬何てものを作っちゃったら、ノーベル賞の功績割合何てどうでもいいんだと思いますよ」
「そうかもしれないわね」
いずれにしても、あたしはノーベル賞学者として、ここにいる。
蓬莱教授のおかげと言えばそうだけど、あの発見をしたのは、紛れもなくあたしだった。
蓬莱教授が言うように、ノーベル賞はあくまで「おまけ」であって「ゴール」ではない。
あたしの場合は実業家が本職なので、「ゴール」という感じが強いけど、そういう研究者はむしろ例外的とも言えるだろう。
「Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ，ｙｏｕ，ｒｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ　ｗｈｉｌｅ　ａｇｏ．（篠原優子博士、さっきは見事でした！）」
あたしと高島さんが話していると、別の記者さんがあたしに話しかけてきた。

英語を聞くと少しだけ身構えてしまう。
記者の腕章を見る限り、アメリカの報道機関みたいね。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」
ひとまず、お礼だけでも述べておく。
「Ｉ，ｍ　ｄｉｓｓａｔｉｓｆｉｅｄ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅｉｒ　ｈｉｇｈ－ｈａｎｄｅｄ　ｔｏｏ．　Ｉ　ｆｅｌｔ　ｒｅｌｉｅｖｅｄ　Ｄｒ，ｓ　ｒｅｆｕｔｅ．（私も彼女たちの横暴な振る舞いに不満を持ってたんです。博士の論破で胸がスッとしました）」
笑顔で記者さんがあたしを労ってくれる。
「Ｔｈａｔ，ｓ　ｓｏ　ｇｏｏｄ．（それはよかったわ）」
どうやら、ああいった勢力に不満を持っている人は多かったらしい。
「Ｔｈｅｙ　ｎｅｖｅｒ　ｇｉｖｅ　ｕｐ　ｆｅｍｉｎｉｓｍ．　Ｉ　ｅｎｖｙ　Ｊａｐａｎ　ｄｅｓｔｒｏｙｅｄ　ｆｅｍｉｎｉｓｍ　ｂｙ　ｊａｐａｎｅｓｅ　ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓ　ｓｅｘｕａｌ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ　ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ．（彼女たちはフェミニズムを絶対に諦めない。日本では、日本性転換症候群協会がフェミニズムを壊滅させたそうで、羨ましい限りです）」
どうやら、彼らもかなり鬱憤がたまっているらしい。
うーん、あたしが女の子になる直前に就任した大統領も、そういう不満で当選したはずなんだけど、どうやらまだ勢力を保っているらしいわね。
「Ｉ　ｗｏｎｄｅｒ，ｗｈｙ　ｔｈｅｙ　ｎｅｖｅｒ　ｇｉｖｅ　ｕｐ．　Ｔｈｅ　ｃｈａｎｃｅｓ　ａｒｅ　ａｇａｉｎｓｔ　ｔｈｅｍ．（私からすれば、彼女たちが諦めないのが不思議だわ。勝ち目何てあるわけないのに）」
あたしからすれば、さっさと見切りをつけてしまうしかないと思うのに。
「Ｐｒｏｂａｂｌｙ，ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓ　ｓｅｘｕａｌ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ　ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ　ｅｘｉｓｔ　ｏｎｌｙ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ．（恐らく、協会が日本にしかないからだと

思います)」

うーん、そう言われても困るのよね。

さてどうしたものか……

「Humm… ah… This syndrome is little patients outside Japan.(うーん、あー、そうは言っても、この病気は日本以外の患者は殆どいませんから)」

結局、そこに行き着いちゃうのよね

「But not zero. Except Japanese patients is exist. Their suicide rate is still high. Your association need support except japanese patients. Your association is no longer poor.(しかし0ではない。日本人以外の患者もいる。彼女たちの自殺率は高いままだ。協会は日本人以外の患者のサポートもするべきではないかな?もう協会は貧乏ではないはずだ)」

うわあ、痛いところを突かれちゃったわね。

うーん、そうは言っても人とノウハウがないからなあ。

えっと……

「Ah… but we, re short of hands. This syndrome must be especially education. We suffered trial and error, how to teach Japanese patients.(うーん、人手が足りないわ。この病気は特別な教育が必要不可欠です。あたしたちは同じ日本人の教育方法の試行錯誤にも大変な苦労をしてきました)」

つまり、現実には今すぐには難しいということ。

また、非常に特殊な病気で、それに関する教育に関しても、同じTS病患者が習慣などで共通する日本人相手でさえ、かなりの苦労を伴う。

「Ｕｍｍ…」
「Ｉｔ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｓａｖｅ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ．（全部は救えないんです）」
その記者さんも、「中々難しい」「全部は救えない」というあたしの言葉にうーんと腕を組んでしまった。
そう、同じ日本人の、ありふれた患者さんの自殺を食い止めるだけでも難しい（それでも最近は自殺率は急減したけど）のに、海外の珍しい患者さんをケアするだけの人材はいない上に、全く投資の費用対効果に合わないばかりか、下手をすれば日本人の患者のケアが後手に回って共倒れの恐れもある。
そうした理由から、あたしたち協会は、今もあまり外国人の患者への支援には本格的に打ち出せないでいる。
この辺りは、もう少し時が進んで、ＴＳ病の患者そのものが増えるのを待たない限り、どうしようもないと思う。
それはまた、気の遠くなるような未来だとは思う。
でも仕方ない。あたしたちだって万能じゃない。
全部を救うことができるのは漫画や小説の世界まで。現実はそうもいかないってことよね。
ノーベル賞のあたしだって神ではない。だから堂々と、「全ては救えない」と宣言することが出来る。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」
記者さんがあたしにお礼を言うと、あたしの元を去って別のノーベル賞学者のもとに行った。
「全部は救えない……か」
あたしは、大学生の頃にあった「明日の会」のことを思い出す。
あの時も、間違った教育法を掲げ、しかも運の悪いことに明日の会に１人の患者の親がなびいてしまった。
あの時は、あたしたちは「最善策」としてその患者を「早くに自殺に追い込むこと」を目指した。
結果的にこれが項を奏し、二度と明日の会は患者を診ることはなかった。

今はもう、ホームページも完全に消えていて、その面影をうかがい知るのは困難になっている。
そして、以前から協会や蓬莱教授に対する敵対勢力のリーダーでもあり、明日の会の代表だった牧師は海外の「国際反蓬莱連合」の活動に合流したのを最後に、完全に消息不明になってしまった。
そしてその「国際反蓬莱連合」も、既にもう活動を停止していて、ホームページも、蓬莱カンパニーによる制裁を恐れた現地の当局によって閉鎖させられている。
各国支部と本部の代表たちも「降伏宣言」をした後、名前などを変えて今は過去を隠しながらひっそりと暮らしているという。
彼らの消息については、もう興味もないから興信所も頼んでいないけど、もしかしたら誰かはどこかで死んでいるのかもしれない。
そうだとしたら同情はできないけど、もし他の誰かが生きていたら、今のあたしたちの栄華をどう見ているかしらね？
「まあ、いっか」
あたしは、考えるのをやめ、元の席につく。
他の晩餐会のメンバーも、一旦自分の席に戻っていく。
何故ならそう、これからは美味しいデザートが待っている。
ノーベル博物館では食べられなかったデザートを、給士さんたちが持ってきて1人1人の机にもっていく。
「お、美味しそうだなー」
隣に座っていた浩介くんが舌鼓をしている。
運ばれてきたのは、きれいな緑色の抹茶アイスだった。
「うん、美味しそうだわ」
ふふ、余呉さんは特に喜んでそうね。
「ああ、博物館で食べるよりもずっとうまいだろうな」
浩介くんも、特別甘いものが好きというわけではないが、やはり絶品のデザートは好きだ。
「うん」
ここの晩餐会の料理は、滞在していたホテルの食材と同等以上の美味しさを誇っていて、さすがにノーベル賞の晩餐会のシェフを名乗る

だけあった。
　あたしの前にもアイスが並べられ、とにかく食べたくてたまらないわ。
「よし、食うか」
「うん……もぐっ」
　あたしは、他のテーブルにもアイスが配られたのを見計らって、アイスを一口食べる。
「んー！　美味しいわー！」
　ひんやりと口のなかでとろける甘味と抹茶の味がほどよくブレンドされている。
　溶けないようにきちんと固められ、それでいて冷たすぎず、甘さをきちんとアピールした出来映えになっている。
「もう一口……んー！　幸せー！」
　もう一口食べると、あまりの甘さとその美味しさに、脳が蕩けそうになる。
　舌で感じるこの甘さは、あたしにとってはとても重要なエネルギー源になる。
　スプーンで、更に2口3口と食べていき、あたしはデザートを間食した。
「うーん、お腹一杯で幸せー！」
「優子ちゃん変わらないね」
　隣で見ていた浩介くんも、あたしが甘いものを美味しそうに食べているのを見るのは大好き。
　あたしも、甘いものを食べるのは好き。ふふ、いい関係になってるわね。
「うん、甘いもの大好きだわ」
「うーん、余呉さんとかも見てわかるけど、女子って本当に甘いもの好きだよね。特にＴＳ病の人何て、嫌いな人いねえんじゃねーかって思えてくるよ」
　浩介くんは、「女の子＝甘いもの大好き」という等式を信じている。
　もちろん、探せばそうじゃない女の子もいるだろうけど、少なくと

もあたしたちの回りには甘いもの大好きな女の子ばかりだった。
「あーうん、実はＴＳ病になる前に甘いもの苦手だった人がいたんだけど、彼女も女の子になってからは『スイーツ大好き』になっちゃってたわね」
　最近の患者さんに、そのパターンの患者さんもいて、実際過去にも似たような事例はあった。
　そのため、現在はカリキュラムを改良して「男時代に甘いものが苦手だった患者さんには、甘いものを食べさせてあげる」というノウハウが作られた。
「へーそんなこともあったんだ」
「そうよ。その子も驚いてたわ。結構最近の事例だけど、そのお陰でカリキュラムも変わったのよ」
　ＴＳ病患者支援の歴史は長いけど、絶対数が少ないのもあって、時折こうして新しい経験則が見つかることも多い。
　ともあれ、現在は、「ＴＳ病になっても味覚はあまり変わらないが、唯一甘いものだけはみんな大好物になる」というのが患者の間で共有された。
　女の子らしいかわいくておいしいスイーツ、食べたいものね。
「へー」
　浩介くんは、上手に聞き手をこなしてくれている。
　あたしもあたしで、浩介くんが話し込んでいる時には、よい聞き手になれるように頑張ることにしている。
　こういうところで、夫婦生活長続きできるものね。
「さて優子ちゃん、そろそろだな」
「うん」
　浩介くんが、あたしに注意を促す。
　そう、この後は、晩餐会の締めくくりである英語でのスピーチが待っている。
　あたしにとっては、一番の関門といってもいい。
「――」
「これより、ノーベル賞受賞者によるスピーチを始めます」

「さ、優子ちゃん」
「うん」
一番真ん中の、広いテーブルに座っていたあたしたちが立ち上がり、前の壇上へと移動する。
王族の方々と、他のノーベル賞受賞者たちも、一斉に壇上へと進んでいった。
大丈夫、原稿はあるし、財団の人からも「ＯＫ」もらったものね。

## ２０２７年１２月１０日　ノーベル・レクチャー　蓬莱教授の場合

１３００人の晩餐会の参加者たちの視線が、一斉にあたしたちに注がれる。

スピーチは長丁場なので、あたしたちは椅子に座りながらスピーチを聞くことになる。

ストックホルムに来てからというもの、あたしたちはまるで人気芸能人になってしまったかのような錯覚に襲われた。

「Ｂｅｇａｎ ｔｏ ｓｐｅｅｃｈ ｎｏｗ．Ｎｏｂｅｌ ｐｒｉｚｅ ｐｈｙｓｉｃｓ…（ただいまより、スピーチを始めます。始めにノーベル物理学賞――）」

国王陛下の宣言と共に、まずはノーベル物理学賞受賞者の１人が一番高い壇上へ上がる。

ちなみに、さっきの授賞式でも最初に上がったのはこの人だった。

パチパチパチパチパチパチ

拍手と共に、さっきまでの喧騒が信じられないような静けさが、晩餐会を包み込む。

「Ｈｅｌｌｏ ｅｖｅｒｙｏｎｅ，ｍｙ ｎａｍｅ ｉｓ――」

スピーチは、簡単な挨拶と、関係者へのお礼で始まった。

そして物理学賞の人のすピーチは、やはり身の上話だった。

このスピーチは「ノーベル・レクチャー」というけど、専門的な話をする人は殆どいないという。

「Ｉ ｗａｓ ｌｉｋｉｎｇ ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ ｉｎ ｍｙ ｃｈｉｌｄ．Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ ｈａｓ ｉｎｆｉｎｉｔｙ ｍｙｓｔｅｒｙ．（私は子供の頃から宇宙が好きでした。宇宙は無限の謎があります）」

宇宙が好きだった少年。

そんな人は多分、世界にありふれている。

あたしも、高校大学は天文部だった。桂子ちゃんに至っては、それ

が高じてＪＡＸＡの職員にまでなった。
でも、この人の話にあるような「好き」の度合いは、それこそ格が違った。
だからこそ、彼はノーベル賞になった。
彼はスピーチで、「宇宙の謎の究明こそが、私の研究の宿命」とも言っていた。

「Ｍｙ ｓｔｕｄｙ ｉｓ ｎｅｖｅｒ ｏｖｅｒ． Ｂｅｃａｕｓｅ ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ ｈａｓ ｉｎｆｉｎｉｔｙ ｍｙｓｔｅｒｙ．（私の研究は決して終わらない。何故なら、宇宙の謎は無限だから）」
何だかんだでそれなりの時間にスピーチが費やされ、最後はその言葉でスピーチが終わった。
「Ｍｙ ｓｐｅｅｃｈ ｉｓ ｏｖｅｒ． Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｆｏｒ ｙｏｕｒ ｋｉｎｄ ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．（スピーチは以上です。ご清聴ありがとうございました）」
パチパチパチパチパチ!!!
そして最後の定形挨拶でスピーチが終わると、始める前以上の大きな拍手が、受賞者に浴びせられた。
受賞者はやや照れ顔で頭を下げると、安堵の表情で壇上を降りた。
うー、あたしも無事に終われるかしら？
「――Ｄｒ．――」
次に、共同受賞したノーベル物理学賞の学者さんに声をかける。
ちなみに、スピーチの順番は授賞式の時と同じ。
なので、物理学賞の３人と、化学賞の２人、そして蓬莱教授と浩介くんがスピーチした後にあたしの番になる。
「Ｆｉｒｓｔ Ｉ ｓａｙ ａ ｆｅｗ ｗｏｒｄｓ ｏｆ ｔｈａｎｋｓ ｔｏ――」
こちらは、まず感謝の言葉から始まった。
ノーベル財団や指導教官、あるいは助手や研究チーム、更には家族への謝意が多く、その辺りはあたしたちと変わりはない。

そして、さっきの人と同じように身の上話が始まり、ノーベル賞受賞までの道のりを述べて終わりだった。
どうやら、あたしのスピーチは、ここでも大きな注目を浴びそうだった。
「Ｍｙ ｓｐｅｅｃｈ ｉｓ ｏｖｅｒ． Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｆｏｒ ｙｏｕｒ ｋｉｎｄ ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．」
パチパチパチパチパチ!!!
先程と全く同じ締めの文言で、観衆も同じように拍手をする。
その後も、英語でのスピーチは続いていく。
英語の内容は、スウェーデン人など英語を母語としない人の参加者が多いためか、あたしでも分かる程度にはかなり平易な表現が使われている他、かなりゆっくりと話しているなどの配慮がなされている。
そのあたり、あたしのスピーチも大丈夫そうでよかったわ。
物理学賞の３人が終わると、続いて化学賞の２人がそれぞれ壇上に上がった。
こちらは物理学賞とは研究テーマも違うけど、こちらも将来的に実用化すればかなりの利便性をあたしたちは手に入れられると目されているものだった。
そして――
「――Ｄｒ． Ｓｈｉｎｇｏ Ｈｏｒａｉ．」
パチパチパチパチパチ!!!
国王陛下から呼ばれ、２個のメダルを掲げた蓬莱教授が立ち上がって、ゆっくりと壇上に上がり、原稿の紙を敷いた。
群衆の拍手も、これまで以上に大きなものになっていく。
群衆の視線はやはりメダルを２個持っているためか胸元に集中にしている。
ノーベル賞を複数回受賞した人が現れたのは１９８０年以来４７年ぶり、もちろん生きているのは蓬莱教授だけという快挙だ。
「Ｉｔ’ｓ ｎｏ ｎｅｅｄ ｅｘｐｌａｉｎ ａｂｏｕｔ ｍｅ．
Ｉ ａｍ ２ ｔｉｍｅｓ Ｎｏｂｅｌｉｓｔ． Ｉ ａｍ ｏｎｌｙ ｌｉｖｉｎｇ ２ ｔｉｍｅｓ Ｎｏｂｅｌｉｓｔ ａｎ

d only 2 times Nobel Prize in Physiology or Medicine. I omit my introduction.（俺のことについては説明不要だろう。何せ2回目だからな。俺は2回の受賞者では唯一生きているし、生理学・医学賞を複数回は史上初だ。というわけで、自己紹介は省略させてもらおう）」

蓬莱教授は、いきなりそんな言葉から入った。

確かに2回目だけど、最初に受賞したのはもう15年前、あたしたちも含めてここの学生さんたちはみんな子供だったのに。

まあ、蓬莱教授だからこそってのもあるけど。

「I shall talk since 15 years ago. When I won 1st Nobel prize. But I am dissatisfied. Because it is not my favorite research. My favorite research is this times Nobel prize.（15年前のところから話そう。あの時、俺は1回目のノーベル賞を取った。しかし、俺は不満だった。何せ本命の研究ではなかったからな。俺の本命の研究は今回のノーベル賞のものだ）」

蓬莱教授が、静かに語り始めた。蓬莱教授の英語は、これまでとは違う、やや威圧的な喋り方だった。

みんな、凍りついたように蓬莱教授のスピーチを聞き入っている。

「I met a cooperater before. She, s Miss. Makino Nagahara. She is perfect trans sexual syndrome and she is the oldest person in the world. She was born in 1518. At first she distrusted my research. But private life is so good.（私は以前から協力者と出会っていた。それがミス・永原マキノだ。永原先生は完全性転換症候群にして、世界

で最も年上の人だ。そう、１５１８年生まれだな。最初、永原先生は俺の研究に不信感を持っていた。しかし私生活の関係は良好だった)」

蓬莱教授が、永原先生のことを話し始めた。

協会の関係者がいるテーブルを見ると、永原先生は「予想通り」という顔をしていて、他の会員たちは永原先生の方に一瞬だけ振り向いた。

他の人は永原先生の顔を知らないのか顔は動いていなかった。

「Ｏｎｅ ｄａｙ，ｓｈｅ ａｓｓｕｍｅｄ ｏｆｆｉｃｅ ａｓ ｈｉｇｈ ｓｃｈｏｏｌ ｔｅａｃｈｅｒ ｎｅａｒ ｍｙ ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ．Ｔｈｅ ｈｉｇｈ ｓｃｈｏｏｌ ｎａｍｅｄ ”Ｏｄａｎｉ ｈｉｇｈ ｓｃｈｏｏｌ”．(ある日、永原先生が俺の大学の近くの高校の先生になった。それが「小谷学園」という高校だ)」

永原先生は、あたしが高校生だった時は新任扱いだったことを思い出す。

永原先生自体、数年で他の学校に移動することが多かったんだけど、今では不老のことが広く知られるようになったため、小谷学園に居続けることになった。

もちろん、ベテランというにはあまりにもベテラン過ぎるけれども、協会やあるいはたまにだけど蓬莱カンパニーでの仕事もあって、教頭や教務主任などの幹部職にはついていないらしい。

「Ａ ｆｅｗ ｙｅａｒｓ ｌａｔｅｒ，ｔｈｅ ｓｃｈｏｏｌ，ｓｏ ａ ｓｔｕｄｅｎｔ ｂｅ ｐｅｒｆｅｃｔ ｔｒａｎｓｓｅｘｕａｌ ｓｙｎｄｒｏｍｅ． Ａｈ… Ｔｈｉｓ ｄａｔｅ ｉｓ Ｍａｙ ８ ２０１７． Ｓｈｅ ｉｓ Ｙｕｋｏ Ｓｈｉｎｏｈａｒａ… Ｔｈｅｎ Ｙｕｋｏ Ｉｓｈｉｙａｍａ．(２、３年後のことだ。その学校で１人の生徒がＴＳ病になった。あれはそう、確か２０１７年５月８日のことだったな。その人こそ篠原優子……当時の石山優子だ)」

あたしのことが言及されると、周囲の視線も一瞬あたしの方に移

る。

今回のノーベル賞は同じ研究所の教官と教え子の3人による受賞なので、どうしても相互の情報が出てきやすいのよね。

「My first contact her is July. Miss Nagahara requested to me. Then Yuko Ishiyama anxious about school's inappropriate care. I helped them. On that occasion I contacted Kousuke Shinohara.（優子さんと俺が初めて接触したのは7月のことだ。永原先生に呼ばれたんだ。その時、優子さんは学校側の不適切な対応に悩まされていた。俺は優子さんと永原先生を助けた。その時に、篠原浩介さんとも初めて会ったんだ）」

懐かしいわね。

確か体育の授業の時の更衣室問題と、林間学校の時だったわね。

教頭先生に小野先生、今は何をしているのかしら？　多分もう定年だとは思うけど。

今思えば2人共かわいそうだったわよね。相手が悪すぎたというか。

永原先生だって蓬莱教授の半分とは言え、世界的にも大変な資産家には違いない上に、ね。

「My research must cooperate perfect trans sexual syndrome association Japan. This association's president is Miss Makino Nagahara. In December 2017, I successed life 120 medicine.（俺の研究には、日本性転換症候群協会の協力が必要だ。この協会の会長は永原先生だ。2017年12月、俺は120歳の薬を開発することに成功した）」

うん、あれは確か、クリスマスでの家デートの時だったわよね？

「I wanted to build friendly relations with it. Therefore it is decision to joined my research Yuko Ishiyama and her fiance Kousuke Shinohara. Yuko Ishiyama was already had a good reputation in this association. She already saved a patient's life.（俺は協会との友好関係を築きたかった。そこで、俺の研究に優子さんと、婚約者だった浩介さんを迎え入れた。優子さんはその時既に協会内でも評判がよく、既に1人の患者の命を救っていたんだ）」

蓬莱教授がそう言うと、また周囲の注目があたしに注がれる。

10年前既にあたしが1人の患者の命を救ったという事実は、嫌でも周りをまた注目させてしまう。

命を救われた患者というのはもちろん幸子さんのことで、彼女が救われるきっかけの大元は、小谷学園での林間学校実行委員を決めるくじの結果からだった。

「She and her husband entered my university. 4 years later, they joined my research institute. Since they discovered about my research. Both were very important. So Dr. Yuko Shinohara and Dr. Kousuke Shinohara, if they didn't join my research possibly my research failed hundreds of years.（篠原夫妻が俺の大学に入ってくれた。そして4年後に、俺たちの研究に参加してくれた。2人は俺の研究に関する発見をしてくれた、どちらもとても重要なものだった。篠原優子博士と篠原浩介博士、もし2人が俺の研究に参加してくれな

かったら、もしかしたら俺の研究は数百年間失敗し続けたかもしれない）」

蓬莱教授のスピーチは、あたしたちへの賛美になる。

蓬莱教授の視線が紙の下端に行く。

どうやら蓬莱教授のスピーチは短めで、そろそろ終わりに入りそうだった。

「Thanks to Dr. Kousuke Shinohara and Dr. Yuko Shinohara. Thanks to Miss Makino Nagahara and perfect trans sexual syndrome association Japan. Thanks to all persons to make a contribution my research.（篠原浩介博士と篠原優子博士、永原先生と日本性転換症候群協会、そして俺の研究に寄付してくれた全ての人に感謝します）」

そして蓬莱教授も、感謝の言葉を述べた。

恐らく、このスピーチも終わりが近いわね。

「My research is never end. From now on, I shall research to solution incalculable malignants no effect Horai medicine.（しかし俺の研究に終わりはない。今後は、蓬莱の薬の効果がない難病について研究していきたいと思っている）」

蓬莱教授が、以前言っていたことと同じことを繰り返す。

蓬莱の薬が完成した後も、蓬莱教授はその効果も及ばない、言うなればTS病患者や蓬莱の薬を飲んだ人が持っている不老遺伝子でも治しきれないような難病の治療法を開発したいと思っていると話していた。もちろんそれらが完成したら、またノーベル賞になる気もしていたけど、蓬莱教授は3回目のノーベル賞については一切言及していない。

このスピーチでも、それが繰り返された形になるわね。

「Ｍｙ ｓｐｅｅｃｈ ｉｓ ｏｖｅｒ． Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｆｏｒ ｙｏｕｒ ｋｉｎｄ ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．（俺のスピーチはここまで。ご清聴ありがとうございました）」

パチパチパチパチ!!!

ヒュー！

一段と大きな拍手が、蓬莱教授に浴びせられる。

蓬莱教授が軽く一礼すると、更に会場が盛り上がる。

今までの受賞者と比べると、スピーチは格段に短かった。にも拘らず、この盛り上がりなのは、蓬莱教授がいかに人望の厚い人かを表していた。

蓬莱教授は盛大な拍手に包まれながら、堂々とした態度で椅子へと向かい、そこへ座った。

何度となく見てきた何気ない所作でも、今日は一段と威厳が違った。

蓬莱教授自身が言っていたように、この技術が完成し、２回目のノーベル賞になることは、「凡百のノーベル賞」を超越することだって。

そう言う意味では、あたしたちは殆ど「凡百のノーベル賞」に近い。研究内容ノーベル賞の中でも偉大だとしても、貢献度は最低の１／４だもの。

さて、蓬莱教授の次にスピーチをするのが――

「Ｄｒ． Ｋｏｕｓｕｋｅ Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」

## ２０２７年１２月１０日　ノーベル・レクチャー　浩介くんの場合

「Ｄｒ．　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　」

パチパチパチパチパチ

国王陛下から名前を呼ばれた浩介くんが、紙を持ちながら緊張した面持ちで壇上へと進む。

浩介くんは、あたしや蓬莱教授と比べるとノーベル賞の注目度は薄い。

それでも、長期的な観点で見れば、蓬莱カンパニー社長として、常務のあたしに比べて更に多くの人から注目を浴びることは間違いないのよね。

浩介くんが、蓬莱教授や他の受賞者さんと同じように紙を広げ、観衆に向かって一礼する。

「Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ．　Ｉ　ａｍ　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　Ｆｉｒｓｔ，　ｔｈａｎｋｓ　ｔｏ　Ｎｏｂｅｌ　ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ．　Ｔｈａｎｋｓ　ｔｏ　ｍｙ　ｉｎｓｔｒｕｃｔｏｒ　Ｄｒ．　Ｈｏｒａｉ．　Ａｎｄ　ａｌｗａｙｓ　ｃｕｒｅ　ｍｅ，　ｍｙ　ｗｉｆｅ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｈｅｒ．（こんばんわ皆さん。私が篠原浩介です。まずノーベル財団の方々、指導教官の蓬莱さん、そしていつも俺を癒してくれる妻の優子ちゃんに感謝します。優子ちゃんを愛してます）」

「キャー!!!」

わはははは

「あ……」

あたしは、浩介くんからいきなりの愛の告白に、いきなり大声をあげてしまった。

浩介くんも含めて、全員の痛い視線があたしに注がれる。

会場からは、やらかしてしまったあたしに対する笑いの声で包まれ

てしまう。

「I am very sorry.」

あうー、浩介くんからエッチなセクハラされた時より恥ずかしいわ。

多分、浩介くんはそこまで重い感じで入れたんじゃないとは思うけど。

「Ah I, ll continue.（あー続けるぞ）」

浩介くんが群衆にそう呼び掛けると、ざわつきはピタッと収まった。

「Today's speech is the course with my wife.（今日のスピーチは、妻との歩みについて話したいと思います）」

うー、やっぱりあたしとの歩みについてなのね。

「10 years ago my wife was still a boy. My wife's the first first name is Yuichi. He was a rowdy short-tempered. He often resorted to violent measures. I was one of the most frequent victim（10年前、妻はまだ男性でした。妻の最初の名前は「優一」といいました。優一は乱暴で短気でした。優一はよく乱暴な手段に訴えていました。私は最も大きな被害者の一人でした）」

浩介くんが、遠い遠い昔のことを話す。

忘れもしない、あたしの原罪の話だった。

あの頃のことがあったから、今があるんだと思う。

「One day… ah… May 2017 Yuichi Ishiyama became girl. She changed name to Yuko. She exert to become feminine girl. She hate his personality. A week late her she returned our school as a

ｇｉｒｌ．（ある日、あー２０１７年５月、石山優一は女の子になった。彼女は名前を優子に変えて、一生懸命に女の子らしい女の子になるために頑張った。優子ちゃんは、優一の性格が嫌いだった。１週間後に、優子ちゃんは女子として学校に戻ってきた）」

うん、あのカリキュラムは、今は更に改良されていて、女の子らしさを身に付けやすいようになっている。

あたしのとっては、あのときのカリキュラムの日々は、人生の中で最も濃い日々だったと思う。

「Ｂｕｔ ｗｅ ｄｉｄ ｎｏｔ ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ ｈｅｒ．Ｂｏｙｓ ｂｕｌｌｉｅｄ ｈｅｒ．Ｉ ｗａｓ ｔｈｅ ｐｒｉｎｃｉｐａｌ ｏｆｆｅｎｄｅｒ．Ｏｎｅ ｄａｙ ｓｈｅ ｃｏｕｌｄ ｎｏｔ ｓｔａｎｄ ｏｕｒ ｂｕｌｌｙ．Ｓｈｅ ｃｒｉｅｄ ａｎｄ Ｉ ｉｎｖｉｔｅｄ ｃｒｉｔｉｃｉｓｍ ｆｒｏｍ ｇｉｒｌｓ．Ｉ ｄｉｄ ｎｏｔ ｎｏｔｉｃｅ ｈｅｒ ｗｈｏ ｂｅｃａｍｅ ａ ｃｒｙｂａｂｙ ａｎｄ ｗｅａｋ．（しかし、俺たちは優子ちゃんを理解できなかった。男子たちは優子ちゃんをいじめ始め、俺はその主導者だった。ある日、優子ちゃんはとうとういじめに耐えられなくなって泣き出してしまった。俺はさんざんに女子から非難された。俺は、優子ちゃんが泣き虫で弱くなったことに気付かなかった）」

女の子になってからは、楽しく幸せな日々が殆どだけど、唯一辛い日々が続いたとすれば、復学当初の日々だったと思う。

でも、今はあの日々も必要だったと思う。何分、既に１０年前のことで、今となっては浩介くんがあたしをいじめていたという事実さえ、知識の中に押し込まれつつある。

「Ｉ ｗａｓ ｎｏｔｉｃｅｄ ｅｐｉｓｏｄｅ ｉｓ ｓｃｈｏｏｌ ｅｖｅｎｔ ａ ｂａｌｌ ｇａｍｅ ｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ．Ｉｎ Ｊｕｎｅ，Ｙｕｋｏ ｐｌａｙｅｄ ｄｏｄｇｅ ｂａｌｌ．Ｓｈｅ ｗａｓ ｔｈｒｏｗｎ ａ ｂａｌｌ．Ｓｈｅ ｃｒｉｅｄ ｂｙ ｐａｉｎ．Ｉ ｓａｗ ｉｔ．Ｉ ｃｏｕｌｄ ｎｏｔ ｓｔａｎｄ ａ ｓｅｎｓｅ ｏｆ ｇｕｉｌｔ．

Ｂｕｔ ｓｈｅ ｆｏｒｇａｖｅ ｍｅ．（俺がその事に気づかされたのは、学校行事、６月の球技大会でのことだった。優子ちゃんはドッジボールをしていて、ボールを当てられた。その時に優子ちゃんは痛みに耐えきれずに泣いてしまった。俺はそれを見て、いじめていた罪悪感に堪えられなくなった。でも、優子ちゃんは許してくれた）」

球技大会は、あたしと浩介くんの関係を変えた一番の出来事だった。

それは、浩介くんがあたしを好きになった瞬間でもあったから。

ボールをぶつけてくれたその子も、今となっては感謝の対象ですらあるわよね。

あ、でも、幸子さんはもっと感謝しなきゃいけないかしら？

「Ｉ ｌｏｖｅｄ ｓｉｎｃｅ ｔｈｅｎ． Ｓｉｔｕａｔｉｏｎ ｖｉｃｉｓｓｉｔｕｄｅ ｗａｓ Ｊｕｌｙ ｓｃｈｏｏｌ ｅｖｅｎｔ． Ｉｔ ｗａｓ ａ ｃａｍｐｉｎｇ ｓｃｈｏｏｌ． Ｉ ａｎｄ ｓｈｅ ｗｅｒｅ ｃｈｏｏｓｅｎ ａｎ ｅｘｅｃｕｔｉｖｅ ｃｏｍｍｉｔｔｅｅ ｍｅｍｂｅｒ． Ｌａｓｔ ｄａｙ ｓｈｅ ｗａｓ ａｔｔｅｍｐｔｅｄ ｖｉｏｌｅｎｃｅ． Ｉ ｈｅｌｐｅｄ ｔｏ ｄｅｆｅｎｄ ｈｅｒ． Ｓｈｅ ｗａｓ ｆｒｉｇｈｔｅｎｅｄ ａｎｄ ｃｒｙｉｎｇ ｍｅ． Ｔｈｅｎ ｓｈｅ ｌｏｖｅｄ ｍｅ．（俺はその時、優子ちゃんが好きになった。事態が変わったのは７月の林間学校でのことだった。俺と優子ちゃんは林間学校実行委員に選ばれた。最後の日、優子ちゃんが乱暴されかけた。俺は優子ちゃんを助けて守った。優子ちゃんは恐怖のあまり、俺に泣きついてきた。その時に、優子ちゃんは俺に恋をしてくれた）」

今思い出しても、はっきりと覚えている林間学校のイベント。

あたしは、浩介くんに恋をして、それ以来、今もずっと覚めない恋を続けている。

浩介くんのスピーチに、観衆もとても強く聞き入っている。

「Ｓｈｅ ｈａｄ ｓｔｉｌｌ ｐｒｏｂｌｅｍ． Ｉｔ ｉｓ ２

ｓｈｏｒｔ ｍｏｎｔｈｓ ｓｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｇｉｒｌ ｕｎｔｉｌ ｓｈｅ ｌｏｖｅｄ ｍｅ． Ｓｈｅ ｌｉｎｇｅｒｄ ｏｎ ｍａｎ’ｓ ｉｎｓｔｉｎｃｔ． Ｂｕｔ ｗｅ ｏｖｅｒｃａｍｅ ｉｔ ｌｉｔｔｌｅ ｂｙ ｌｉｔｔｌｅ． Ｗｅ ｏｖｅｒｃａｍｅ ｔｈｅ ｐａｓｔ．（優子ちゃんには問題がまだ残っていた。優子ちゃんが女の子になってから、恋をするまでたった2ヶ月だった。優子ちゃんにはまだ男の本能が残っていたんだ。でも、俺たちは少しずつそれを克服していった。俺たちは過去を乗り越えた）」

もしかしたら、あの時の辛さはいじめられていた時以上だったかもしれない。

女の子として好きになっても、あたしたちはすぐには触れ合えなかった。

それでも、浩介くんが我慢をしてくれたのはとても嬉しかった。

もしかしたら、このときのエピソードがあったからこそ、あたしは浩介くんにセクハラされても、ますます恋が深まるようになったんだと思う。

あのときは辛くても、今思い返せば貴重な経験だったというのは往々にしてあるけど、これは典型的よね。

「Ｓｃｈｏｏｌ ｃｕｌｔｕｒａｌ ｆｅｓｔｉｖａｌ ｉｎ Ｏｃｔｏｂｅｒ Ｉ ｓａｉｄ “Ｉ ｌｏｖｅ ｙｏｕ” ｔｏ ｈｅｒ． Ｎｅｘｔ ｙｅａｒ’ｓ ｆｅｓｔｉｖａｌ Ｉ ｐｒｏｐｏｓｅｄ ｍａｒｒｉａｇｅ ｔｏ ｈｅｒ ｉｎ ａｌｌ ｓｃｈｏｏｌ ｓｔｕｄｅｎｔｓ ａｎｄ ｔｅａｃｈｅｒｓ ｐｒｅｓｅｎｃｅ． Ｅｖｅｒｙｏｎｅ ｂｌｅｓｓｅｄ ｕｓ．（10月の文化祭で、俺は告白した。そして翌年の文化祭で俺は学校の全校生徒と先生の前でプロポーズをした。みんな祝福してくれた）」

浩介くんのエピソードで、またあたしに注目の視線が移る。

全校の前でプロポーズされたあのエピソードは、もちろんあたしにとって最高の思い出として残っている。

でも最近は、あまり思い出すことも少なくなったイベントでもあった。

「But we had still a problem. She is no aging and I was aging then. Life span problem was very serious. Dr. Horai invited to join his research before we entered Sawayama university. It produced very good results. I really thanks to him.（しかし、俺たちにはまだ問題が残っていた。彼女は不老で、俺はそうじゃなかった。寿命の問題はとても重大だった。蓬莱さんが俺たちを佐和山大学に入る前から研究に勧誘してくれた。それはとてもいい結果をもたらした。蓬莱さんには本当に感謝している）」

浩介くんが、蓬莱教授が行った研究の勧誘について感謝の言葉をのべている。

そしてもちろん、それはあたしも同感なことだった。

「Horai medicine is very suddenly change to social. I had a hard time to negotiation government.（蓬莱の薬は社会にとても急激な変化をもたらす。政府との交渉も大変だった）」

政府との交渉では、あたしたちは実際に総理大臣を含む閣僚をも召集した会合を何度も行った。

今思えば、あたしたちが日本の中枢に一番近かったのはあの時かもしれないわね。

「I was spending no rest life until now. But, today I consider myself the luckiest man on the face of the earth.（私は、休まることのない人生を、今まで歩んできました。しかし、今日、私は地球上で最も

幸せな男だと思っています)」

あたしは、思わず泣き出しそうになるのをぐっとこらえた。

浩介くんが、自分のことを「地球上で一番幸せな男」だと言った。

「I have many happy. My family is the richest family. I have a lot of money. And my wife is very cute sexy girl and very good housekeeping. What is still good I won the world's most honorable prize. (俺には多くの幸せがある。俺たち篠原家は世界一裕福な一家になった。俺は多くのお金を持っている。そして、かわいくてエロくて、おまけに家事が上手な妻もいる。更にいいことに、俺は世界一名誉ある賞にも輝いた)」

浩介くんが、今自分が世界一の幸せ者だと言っている。

浩介くんには、お金も力も名誉も家族もある。

あたしだって、浩介くんが言うように「最高の良物件」だと思う。

でもあたしは、満ち足りつつある浩介くんと比べて、まだ何かを追っていた。

「Maybe, a man or woman says "I am luckier than you" to me. If the person exist, I want to say "How your money? How your family? How your mind?" to he or she.(もしかしたら、ある男性もしくは女性は、『自分の方があなたより幸せだ』と言う人もいるかもしれない。もし、そんな人がいるなら私はその人に言いたい、『あなたのお金は? 家族は? 名誉は? 心は?』とね)」

浩介くんは自信満々に答える。

周囲の空気は、「そりゃあそうだろうなあ」という感じがひしひしと伝わってくる。

元々、「私はこの世で最も幸せな男です」というのは、難病に犯され

て引退を余儀なくされ、間もなく世を去った野球選手が、自分に対して「かわいそうだ」「突然病気になって野球ができなくなりとても不幸だ」と哀れんだファンに向けて引退試合で言ったセリフだったという。

もう100年は昔のそのスピーチを、今の浩介くんが使うのはあまりにも歴史的な皮肉だった。

同じセリフでも、立場や置かれている状況が違うだけで、こうも印象が変わるのよね。

「Most rich most warm—hearted family and most honorable… There are not always connected happy. But what do you think if you come there all event together? You must think I am the luckiest man.（最も裕福であること、最も暖かい家族がいることそして最大の名誉を持つこと……これらは確かにいつも幸福と結び付くとは限りません。しかし、もしあなたにこれらの全てが与えられたらどうでしょう？　あなたは必ずや、自分こそが世界一の幸福を味わっていると思うことでしょう）」

浩介くんの言っていることは、完全に正論だった。

あたしが受け入れにくいのは、どう考えてもあたしがおかしいからに他ならない。

「My regular occasion is a businessman. So I cannot research like Dr. Horai. But I am carta in that our business… Horai company's business is the most important in the world. My business is the most people to bring happy in the world. I think it is a natural result to bec

ｏｍｅ　ｔｈｅ　ｌｕｃｋｉｅｓｔ　ｍａｎ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ．（私の本業は実業家です。ですから、私は蓬莱さんのような研究はできません。ですが、我々のビジネス……蓬莱カンパニーのビジネスは世界で最も重要で、世界で最も多くの人に幸福をもたらします。私は思うんです。私が世界で最も幸福な男になったのは、当然の成り行きなのではないかとね）」

浩介くんのその言葉に、今まで「自慢話」だと思って冷めた視線を送っていた人々の顔が変わる。

世界一人々に幸福をもたらすであろう蓬莱カンパニーの社長である浩介くんが世界一幸福な人になれたのは、ある意味では当然かもしれないという話が出てきた。

あたしも、「言われてみれば確かにその通りかもしれない」と思う。

「Ｉ　ｗｉｌｌ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　ｍｙ　ｂｕｓｉｎｅｓｓ．　Ｄｅｓｔｒｏｙｅｄ　ｃｏｕｎｔｅｒｉｎｆｌｕｅｎｃｅ．　Ｏｕｒ　ｆｕｔｕｒｅ　ｏｕｔｌｏｏｋ　ｉｓ　ｆａｖｏｒａｂｌｅ．　Ｈｕｍａｎ　ｉｓ　ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　ｍａｋｅ　ａ　ｆｒｅｓｈ　ｓｔａｒｔ．（私はビジネスを続けます。反対勢力はいなくなりました。我々の未来は明るいのです。人類は、新しいスタートを切るでしょう）」

浩介くんが、未来に言及する。

そう、この研究は、これからの未来が大きく関わってくると思うから。

「Ｍｙ　ｓｐｅｅｃｈ　ｉｓ　ｏｖｅｒ．　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｋｉｎｄ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．」

パチパチパチパチパチ!!!

そして、締めの言葉を言って、浩介くんの演説が終わった。

浩介くんはこっちに向き直ると、とても疲れた顔をしてぐったりと椅子に座ってしまった。

あれだけ大勢の前で、日本人の拙い英語で話さなきゃいけないのは、心理的な負担はとても大きいわよね。

うーん、あたしも「Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓ

h.」で逃げちゃった方がよかったかしら？　最初恥ずかしいだけだっただろうし。

２０２７年１２月１０日　ノーベル・レクチャー　優子の場合　前編

「Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」

国王陛下の声に、一瞬ビクッとしてしまう。

そう、浩介くんのスピーチが終われば次はもちろんあたしの番になる。

あたしはぬいぐるみさんを強めに抱き締め、椅子から立ち上がると、ゆっくりと壇上へと歩を進める。

右手にはぬいぐるみさん、左手には原稿を持ち、あたしは原稿の紙を広げて余白部分にくまさんのぬいぐるみを置いた。

その所作に、一部の人が眉を潜めるように見つめ、怪訝そうな会話をしている集団もいる。

あの記者を追い出しても、やはり子供っぽいあたしに嫌悪感を感じてしまう人はいるみたいね。

「Ｉｔ　ｉｓ　ｕｎｎｅｃｅｓｓａｒｙ　ｔｏ　ｅｘｐｌａｉｎ　ａｂｏｕｔ　ｍｅ．　Ｉ　ａｍ　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　Ｍｙ　ｕｓｕａｌｌｙ　ｗｏｒｋ　ｉｓ　ａ　ｍａｎａｇｉｎｇ　ｄｉｒｅｃｔｏｒ　ｉｎ　Ｈｏｒａｉ　ｃｏｍｐａｎｙ．　Ｉ　ａｍ　ｐｅｒｆｅｃｔ　ｔｒａｎｓ　ｓｅｘｕａｌ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ．（あたしについての説明はもう必要無いでしょう。あたしは篠原優子、普段は蓬莱カンパニーで常務取締役をしています。あたしはＴＳ病患者です）」

あたしがスピーチを始めると、怪訝そうな会話をしていた集団もピタッと会話が止んだ。

やっぱり、スピーチはキチンと聞いてくれるみたいでよかったわ。

「Ｉ　ｗａｓ　ｔｒａｉｎｅｄ　ｆｅｍｉｎｉｎｅ．　Ｔｈｉｓ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ　ｐａｔｉｅｎｔ　ｍｕｓｔ　ｂｅ　ｆｅｍｉｎｉｎｅ．　Ｉｆ　ｓｈｅ　ｒｅｆｕｓａｌ　ｇｉｒｌ，ｓ　ｌｉｆｅ　ｓｈｅ　ｍｕｓｔ　ｂｅ　ｍｅｎｔａｌ　ｄｅｒａｎｇｅｍｅｎ

t．Ｓｈｅｍｕｓｔｋｉｌｌｈｅｒｓｅｌｆ．Ｉｆｓｈｅｗａｎｔｔｏｌｉｖｅｌｏｎｇｉｔｉｓａｎｉｎｄｉｓｐｅｎｓａｂｌｅｃｏｎｄｉｔｉｏｎｔｏｍａｓｔｅｒｆｅｍｉｎｉｎｅｐｅｒｓｏｎａｌｉｔｙ．ＨｉｓｔｏｒｙｈａｖｅｎｏｔＡＮＹＥＸＣＥＰＴＩＯＮ．（あたしは、女の子らしくなるために訓練を受けました。この病気の患者は、女の子らしくならなければいけないのです。もし、患者がそれを拒絶したならば、彼女は必ず精神的打撃を受けます。そして、必ず自殺へと向かうのです。もし、患者が長生きしたいならば、女の子らしい性格を得ることは必須条件なのです。ＴＳ病の歴史としても、例外は『１つも』ありません）」

１つもないということを強調してあたしは演説を始める。

協会のテーブルのところや、小谷学園のテーブルの人たちは「うんうん」と頷いていたけど、他のテーブルは疑い深い視線のままだ。

例外が全くないというのは事実だけど、やっぱり人間だからどうしても「１つくらい例外あるでしょ？」って思ってしまうのかもしれないわね。

「Ｗｅｋｎｏｗｄｉｆｆｅｒｅｎｃｅｂｅｔｗｅｅｎｍａｎａｎｄｗｏｍａｎ．Ｙｏｕｄｏｎ’ｔｋｎｏｗｔｈｅｄｉｆｆｅｒｅｎｃｅ．１０ｙｅａｒｓａｇｏＩｂｅｃａｍｅｇｉｒｌｆｒｏｍｂｏｙ．ＦｉｒｓｔｔｉｍｅＩｗａｓｔｏｒｍｅｎｔｅｄａｌｏｔｏｆｄｉｆｆｅｒｅｎｃｅｂｅｔｗｅｅｎｍａｎａｎｄｗｏｍａｎ．Ｔｈｉｓｓｙｎｄｒｏｍｅｐａｔｉｅｎｔｉｓｌｅａｒｎｈｅｒｌｅｓｓｏｎａｂｏｕｔｆｅｍｉｎｉｓｔｉｓｄｒｅａｍｅｒ．Ｔｈｉｓｓｙｎｄｒｏｍｅｐａｔｉｅｎｔｓａｒｅｎｅｖｅｒｔｏｂｅｃｏｍｅｆｅｍｉｎｉｓｔ．ＨｉｓｔｏｒｙｈａｖｅｎｏｔＡＮＹＥＸＣＥＰＴＩＯＮ．（あたしたちは、男女の間の違いというものを知っています。あなたたちは、それを知らないのです。１０年前、あたしは男から女になりました。最初、あたしは多くの男女の違いに戸惑いましたこの病

気になった患者は、フェミニストが夢想家であることを思い知らされるのです。この病気の患者は、絶対にフェミニストにはなりませんＴＳ病の歴史としても、例外は『１つも』ありません）」

あたしは、さっきと同じ文章で締め括る。

そう、１つ足りとも例外がないということを、あたしたちは強調する。

それを受け入れられないのは、それだけ男女の違いの大きさを、みんな過小評価しているため。

「ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｓｈｏｒｔｅｎ ｍｙ ｈｅｉｇｈｔ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｔｏｉｌｅｔ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｓｋｉｒｔ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｂａｔｈ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｍｅａｌ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｍｅｎｓｔｒｕａｌ ｐａｉｎ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｇｉｒｌ’ｓ ｃｕｓｔｏｍ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｔｏ ｂｅ ｗｅａｋ ｐｈｙｓｉｃａｌ．Ｉ ｔｏｒｍｅｎｔｅｄ ｏｔｈｅｒ ｔｈｉｎｇｓ．Ｍｙ ｃｈｏｉｃｅ ｉｓ ｏｎｌｙ ｔｏ ａｃｃｅｐｔ ｍｙ ｆａｔｅ．（あたしは、自分の縮んだ身長に戸惑いました。あたしはトイレで戸惑いました。あたしはスカートに戸惑いました。あたしはお風呂に戸惑いました。あたしは食事に戸惑いました。あたしは生理に戸惑いました。あたしは女の子の習慣に戸惑いました。あたしは、弱くなった身体能力に戸惑いました。あたしは、他にも色々なことに戸惑いました。あたしの選択肢は、自分の運命を受け入れる以外になかったのです）」

この辺りの文章は、ほぼ同じことの繰り返し。英語は繰り返しを嫌う言語だけど、あえて繰り返すことにここは意味がある。

とにかく女の子になるとこれだけのことに戸惑うという意味でもある。

あたしに向けられた視線が、少しずつ変わっていくのを感じる。

でももちろん、これでは終わらない。

「Ｉ ｕｎｄｅｒｇｏ ｃｕｒｒｉｃｕｌｕｍ ｂｙ ｍｙ ｍｏｔｈｅｒ ａｎｄ ｍｙ ｔｅａｃｈｅｒ Ｍｉｓｓ Ｍａｋｉｎｏ

Nagahara. This curriculum is strict. If I act unwomanly or said unwomanly spoken I was disciplined without mercy. But I acted womanly, I was praised by my mother. My mother said "Yuko, you are very cute girl. You are very feminine." I was very glad to praise.（あたしは、母さんと永原先生から厳しいカリキュラムを受けました。もし、あたしが女の子らしくない行動や言葉遣いをしたら、あたしは母さんや永原先生から容赦のないおしおきをされました。ですが、あたしが女の子らしい行動をすると、とても誉めてくれました。母さんが、『優子、とってもかわいいわ。優子は女の子らしいわね』って言ってくれました。誉められるのは、とても嬉しかったです）」

スピーチをしながら、母さんの方をちらりと見ると、母さんは全く動揺した様子はなかった。

一方で永原先生の方も、全く動じずにあたしの方を見つめ続けていた。

「I was educated about behavior in school girl. I failed many subject. So I was disciplined to many. My discipline was up skirt and I was coerced to be shy.（あたしは、女子高生としての訓練も受けました。あたしは多くの失敗をしてしまって、いっぱいおしおきをされてしまいました。おしおきというのは、スカートをめくられて、恥ずかしがるように強要されたことです）」

ガヤガヤガヤ

あたしが当時のカリキュラムの様子をスピーチすると、会場が一気にざわつき始めた。

うん、まあ予想通りではあるよね。普通に考えなくても、セクハラ、パワハラそのものだもの。

でも、それくらいしないと、女の子にはなれないということでもあるのよ。命には代えられないということよ。

「But I was disciplined. I was more feminine than before. I was very glad to be feminine. If I rejected I dead many years ago. We cannot substitute for life. When I am a boy I am very rowdy. My name when a boy Yuichi means the first gentle and tender person. I had a sense of guilt. My girls name is decision by myself. Yuko means gentle and tender person from the beginning until the last. I determined about to became tender for this once.（でも、あたしがおしおきされたら、あたしはさっきよりも女の子らしくなれました。女の子らしくなれたのはとても嬉しかったです。拒絶していたら、何年も前に死んでいました。命には代えられません。あたしが男だったときはとても乱暴でした。男の頃の名前、『優一』は、『一番優しい人になって欲しい』という意味でした。あたしは、罪悪感を抱えていました。女の子の名前は自分で決めました。『優子』というのは、はじめから終わりまで優しい人でありますようにという意味があります。あたしは、今度は優しい子になりたいと決心しました）」

あたしが決心した10年前の決意は、今も揺らぐことがない。

優しい子になれたのか？　という問いには、正直に言ってまだまだ至らない所はあると思う。

それでも、あの暗い男時代のことを思えば、十分合格点をあげたい

のも確かだった。

「This syndrome patients want to be treated girl. I am first Japanese woman Nobel prize laureate. But I knew dispute that Yuko Shinohara really woman. I am very hurt. I am a girl. It is no doubt. We have menstrual pain. We can birth to baby! I cannot understand why didn't acknowledge about we are women. （この病気の患者たちは、女の子になりたがっているんです。あたしは、女性としては日本人初のノーベル賞受賞者です。ですが、『篠原優子は本当に女性なのか』という論争を知りました。これにあたしはとても傷ついています。あたしは女の子です。疑う余地もありません。あたしたちは生理痛が来ます。赤ちゃんだって産めます！ どうして、あたしたちを女性として認めてもらえないのか、理解できません）」

あたしが必死に訴えるように言うと、周囲の目付きも真剣になる。

あたしは、それだけ女の子らしい女の子になりたかったから、女の子として扱われないことには他の患者以上に敏感になってしまう。

「I think who cannot acknowledge about perfect trans sexual syndrome patients are women, they cannot understand difference between man and woman. （あたしが思うに、あたしたちTS病患者を女性と認められない人は、男女の大きな違いを認められないからだと思います）」

あたしがそう高らかに宣言すると、やはり周囲は動揺に包まれた。

冷静なのは、永原先生たちくらいね。

「We are not trans gender. We ar

e trans sexual. We want to joi
n woman. If one person said th
at "you birthed boy so you are
a man" it is easy to acknowle
dge him or her. Because he or
she can understand about men c
annot birth baby. It's impossi
ble.(あたしたちは、トランスジェンダーではありません。トラ
ンスセクシャルです。あたしたちは女性の集団に入りたいんです。
もしある人が、『あなたは男として生まれたんだから男だ』というな
ら、彼、彼女を納得させるのは容易でしょう。何故なら、その人は男
が子供を産むことはできないことを知っていますから。ええ、不可能
です)」

あたしがそう宣言すると、会場は納得したように頷く人と、そうで
ない人とに別れた。

でも、ここまで噛み砕いても納得できない人を納得させるのが困難
なことは、10年前から知っている。

日本語で理解させるのも難しいのに、母語でない英語で相手に伝え
るのはほぼ不可能よね。

だからこれは仕方ないと、あたしも心の中で納得させる。

「In Stockholm I am thunk strang
e. I looks very childish. But
I have an inferiority complex.
Really I am a girl now. But i
t is 16 years old to became a
girl. I have no experience inf
ant girl! You madams, you lady
s, you must have experience inf
ant girl. (ここストックホルムでは、あたしはとても子
供っぽく、不審に見られているそうです。ですが、あたしにはコンプ
レックスがあるんです。確かにあたしは今は女の子ですが、女の子に

なったのは１６歳の時です。あたしには、幼い少女としての体験が無いのです！　ご婦人の皆様、女性の皆さん、あなた方も幼い少女を体験しているはずです）」

あたしのスピーチに、協会の女性たちがいる一角を除いた女性たちがウンウンと小さく頷いている。

もちろん、普通の女性なら、そんなことは当たり前の話だ。

「Ｉ ｈａｖｅ ｎｏｔ ｉｎｆａｎｔ ｇｉｒｌ，ｓ ｍｅｍｏｒｙ．Ｕｓｕａｌｌｙ ｉｔ ｈａｖｅ．Ｏｔｈｅｒ ｗｏｍｅｎ ｈａｖｅ ｉｎｆａｎｔ ｇｉａｌ，ｓ ｍｅｍｏｒｙ．Ｉｔ ｉｓ ｎａｔｕｒａｌ．Ｂｕｔ Ｉ ｈａｖｅ ｎｏｔ ａｎｙ ｍｅｍｏｒｙ！ Ｃａｎ ｙｏｕ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ ｔｈｅ ｉｎｆｅｒｉｏｒｉｔｙ ｃｏｍｐｌｅｘ？（あたしには、幼い少女としての記憶がありません。他の女性は当たり前に持っているのに、あたしには何もない！　あなたたちに、あたしのこのコンプレックスが理解できますか!?）」

少しだけ涙声になって、あたしは訴えてしまう。

もちろん一方では「モテない女のひがみ」という余裕もあった。

でも実際には分かってもらえないあたしの劣等感への苛立ちも、多分に含まれていた。

「Ｔｉｍｅ ｃａｎｎｏｔ ｂａｃｋ．Ｉｔ ｉｓ ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ．Ｉ ｃａｎｎｏｔ ｔａｋｅ ｂａｃｋ．（時間は戻らない。戻すことはできない。あたしは、取り返すことはできない）」

あたしがそのように訴えると、周囲の視線ががらりと変わった。

「Ｗｅ ｈａｖｅ ｃｈｉｌｄ ｃｏｍｐｌｅｘ．Ｉ ｌｉｋｅ ｃｈｉｌｄｉｓｈ ｇｏｏｄｓ．Ｃｈｉｌｄｉｓｈ ｉｓ ｓｏ ｇｏｏｄ，ｔｏ ｂｅ ｌｉｋｅｄ ｍｅｎ ｉｓ ｇｌａｄ．（あたしは幼少期にコンプレックスを持っている。だから、子供っぽいものが好き。男に持てると嬉しいわ）」

あたしの正面からのこの宣言は、やっぱり衝撃的だったのか、主に女子学生のスペースで動揺が見受けられる。

そして、ここからあたしの更なる追い込みが続くことになってい

る。

## 2027年12月10日　ノーベル・レクチャー　優子の場合　後編

「Why don’t girl play the coquette men? I am very very weak physical. When I was high school student I was often cried by other student in physical education. I must play many handicaps. But students naver hated me. Rather I was pitied, everyone kind to me.（どうして女の子は男に媚びてはいけないんでしょうか？　あたしは、とてもとても体が弱いです。高校生の時は、体育の授業でよく泣かされていました。競技するには、数多くのハンデが必要になるほどです。でも、誰もあたしのことをそれで嫌いにはなりませんでした。むしろ、あたしは同情されました。みんなあたしに、優しくしてくれました）」

小谷学園のテーブルが、少しだけ動く。

そう、あたしは体育の授業で何度も弱い所を見せた。

浩介くんのスピーチにもあったように、球技大会で泣かされたのが、そもそものきっかけにもなった。

もちろん、あたしに優しくしてくれたのも、最初のいじめがあったからかもしれないけれど。

「My husband reverse me. He is very strong physical. I was always defended by him. I don’t consider it is shameful. Because I am a very weak girl. It is natural that husband defend me. So I must effort to be love

d him. It is natural that I set his taste by myself.（あたしの旦那はあたしと正反対に、とても力の強い人です。あたしは、いつも彼に守ってもらっています。あたしはそれを恥ずかしいと思ったことは一度もありません。何故なら、あたしはか弱い女の子で、旦那があたしを守るのが自然だからです。だから、あたしは彼に好かれるように努力しなければいけないんです。彼の好みに合わせるのは自然のなり行きです）」

あたしのこの態度は、桂子ちゃんや小谷学園の女子たちには理解されるし、恵美ちゃんでさえも「弱い女の子なら仕方ない」という態度だけど、現地の学生たちはまだ納得しきれていないらしい。

あくまでも、女子も強くなくてはいけないという強固な価値観がある。もしそうなら、ノーベル賞を取ったあたしは、この国でははは野垂れ死んでしまう。

それは恐らく、この国の徴兵制と無関係ではないように思えた。

この次の節は、本当に言っていいのか迷ったけど、結果的に削らないでおいた。

「If a military conscriptions me, I must be a good—for—nothings. But I can birth. I can glad men. I know men's taste. I cannot understand that why women conscription. I think that Sweden is not corner so crisis.（もし軍隊があたしを兵士に徴兵したら、あたしは間違いなく『何の役にも立たない』と言われるでしょう。しかし、あたしは子供を作れます。男を喜ばせることができます。男の好みも知っています。どうして女性は徴兵されなければいけないんでしょうか？　あたしには理解できません。あたしには、スウェーデンはそこまで追い込まれているようには見えないのですが）」

現地の学生のテーブルから、少し大きめのどよめき声が聞こえた。

それもそうだ。よそ者のあたしがこんなことを言うのは、国際的な常識から言えばあまりにも失礼な行動だもの。

それでも、海外でいまだに蔓延している男女平等という幻想を打ち砕くには、もうこれしかない。

あたしたちの経験や教訓が何一つ生かされず、一時的なものにとどまっている現状は、そろそろ終わりにしないといけないと思っている。

だからこそ、あたしがノーベル賞になった今は、千載一遇のチャンスだわ。

「Ｉｔ ｉｓ ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ ｔｏ ｒｅａｌｉｚａｔｉｏｎ ｅｑｕａｌｉｔｙ ｍａｎ ａｎｄ ｗｏｍａｎ．Ｙｅｓ，ｉｆ ｔｈｅ ｓｕｎ ｗｅｒｅ ｔｏ ｒｉｓｅ ｆｒｏｍ ｔｈｅ ｗｅｓｔ，ｉｆ ｔｈｅ Ｐｔｏｌｅｍａｉｃ ｓｙｓｔｅｍ ｉｓ ｔｒｕｅ，ｉｆ ｃｒｏｗｓ ｂｅｃｏｍｅ ｗｈｉｔｅ，ｉｆ ｐｅｒｆｅｃｔ ｔｒａｎｓｓｅｘｕａｌ ｓｙｎｄｒｏｍｅ ｐａｔｉｅｎｔ ｉｓ ｄｅａｄ ｏｆ ｓｅｎｉｌｉｔｙ，ｉｆ ｓａｒｉｎ ｉｓ ｈａｒｍｌｅｓｓ，ｉｆ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ，ｓ ｈｅａｖｅｎ ａｎｄ ｅａｒｔｈ ｉｓ ｒｅｖｅｒｓｅｄ，ｔｈａｔ ｉｓ ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ．（男女平等は、絶対に不可能です。ええ、例え太陽が西から昇っても、天動説が正しかったとしても、カラスが白くなっても、ＴＳ病患者が老衰で死んでも、サリンが無害だったとしても、天と地が逆さまになっても、絶対に不可能なのです）」

あたしの演説に、熱がこもる。

あり得ない事象を次々に挙げ、不可能だということを強調に強調を重ねる。男女両方の性別を経験したからこそ、あたしにはこのことが言える。

ノーベル賞研究の過程で得られたものではなく、多くのＴＳ病患者が得られた経験が、あたしのスピーチの中心になっていた。

「Ｉ ｈａｖｅ ａ ｍｏｔｔｏ．〝Ｉ ｍａｙ ｃｒｙ． Ｉ

ｍａｙ ｇｒｏｗ ｗｅａｋ． Ｉ ｍａｙ ｔｈａｔ Ｉ ａｍ ｎｏｔ ｃｏｏｌ． Ｂｅｃａｕｓｅ Ｉ ａｍ ａｌｒｅａｄｙ ｇｉｒｌ．”（あたしにはモットーがあります、『泣いてもいい、弱くてもいい、カッコ悪くたっていい。だってあたしはもう、女の子なんだから』）」

あたしが、女の子として生きている中で、一番の心の支えになった言葉を話す。

ありのままの女の子らしさを、あたしはこれからも追求していく。

どよめいていた学生たちのテーブルは、まだ動揺の表情を色濃く残しながらも、あたしの話に耳を傾けてもらった。

「Ｉ ｏｆｔｅｎ ｒｅｌｙ ｏｎ ｍｅｎ ｆｏｒ ｈｅｌｐ． Ｆｏｒ ｅｘａｍｐｌｅ， Ｉ ｒｅｌｙ ｏｎ ｍｙ ｈｕｓｂａｎｄ ｔｏ ｃａｒｒｙ ｈｅａｖｙ ｔｈｉｎｇ． Ｉ ｓｅｅ ｆａｌｌ ｆｏｒ ｓｔｒｏｎｇ ｈｉｍ ｓｏ ｅａｓｙ．（あたしはよく、男性に助けを求めます。例えば、重たいものを、旦那に運んでもらいます。あたしは、力持ちな浩介くんに簡単に惚れてしまいます）」

自分にない力で、浩介くんが助けてくれた時、あたしは浩介くんに惚れ込んでしまう。

それはあたしにはない力が、浩介くんにあるから。

代わりに浩介くんにないことを、あたしがする。こうやって、夫婦の信頼関係が成り立っていく。

「Ｉ ａｍ ｌｅａｒｎｅｄ ｍｙ ｌｅｓｓｏｎ ａｂｏｕｔ ｄｉｆｆｅｒｅｎｃｅ ｏｆ ｐｏｗｅｒ ｂｅｔｗｅｅｎ ｍａｎ ａｎｄ ｗｏｍａｎ， ｅｓｐｅｃｉａｌｌｙ Ｉ ｒｅｍｅｍｂｅｒ ９ ｙｅａｒｓ ａｇｏ． （あたしは、男女の間にある力の差というものを、よく思い知らされています。特に９年前のことを、あたしはよく覚えています）」

もう１つ、あたしはこのエピソードを紹介するか迷った。

日本では有名なエピソードだけど、海外では殆ど知られていない、学生時代の恵美ちゃんのことについて話すことにした。

「9 years ago, Emi Tamura and my husband Kousuke Shinohara played tennis in my alma mater Odani high school. Yes, Emi Tamura is now top tennis player she was our class mate.（9年前、あたしたちの母校の小谷学園で、田村恵美とあたしの夫、篠原浩介がテニスで対戦をしたことがあります。ええ、田村恵美というのは、トップテニスプレイヤーの恵美ちゃんです。恵美ちゃんはあたしたちのクラスメイトでした）」

突然、あたしが恵美ちゃんの名前を言い出すと、スウェーデンの学生たちがまたどよめき始めた。

そう、日本語のインターネットで調べれば、実はあたしたちと恵美ちゃんがクラスメイトだったことは簡単に突き止められるし、さらに複数の情報をたどれば、桂子ちゃんともクラスメイトだったことも分かる。

ただ、日本でさえ、そんなことはあまり意識されず、話題にはならないので「知る人ぞ知る」という感じなのだから、現地で知られてないのは言うまでもないだろう。

スピーチの中で恵美ちゃんの登場に対し、当の本人はのほほんとしていた。

まあ、さすがに話題になるのに慣れているだけあるわね。

「My school's ball game tournament in 2018. My husband practiced only 1 month. In spite of he won her. Of course, Emi Tamura was already strong.（2018年に行われた球技大会でのことです。あたしの旦那はたった1ヶ月練習しただけにもかかわらず、恵美ちゃんに勝利しました。もちろん、その時の恵美ちゃんはすでにテニスのトップ選手でした）」

あたしが当時のエピソードを話すと、更に学生たちの喧騒が激しく

なった。

そりゃあ驚くだろう。世界のトップ選手、もう何年もほぼ世界ランキング1位に君臨し続けている恵美ちゃんが、高校生時代にほんの少しだけ練習した浩介くんにテニスで負けたことがあるなんて、衝撃の事実だものね。

でも、実際インターネットで検索するとこれも出てくるエピソードで、でもマスコミが都合が悪くて報道しないせいか、まことしやかに「都市伝説化」してしまってもいる。

「This tennis was 5 set match. The game's set count is 2—6, 7—6, 6—1, 6—0. The early stage, she overwhelmed him. However her physical was more weak than him. The last stage, she is difficult to return his serve.（そのテニスは5セットマッチで行われました。ゲームカウントは2—6，7—6，6—1，6—0です。序盤は、恵美ちゃんが浩介くんを圧倒していました。でも、恵美ちゃんの身体能力は浩介くんよりも低かったんです。終盤には、恵美ちゃんは浩介くんのサーブを返すことさえ困難になってしまいました）」

このエピソードは、とても大きな意味を持つ。

いかに浩介くんが日頃から鍛えていたとしても、世界的なプレイヤーでさえ、その辺の男子が鍛え上げれば勝ってしまうこともあるということを意味しているから。

恵美ちゃんはあの試合を大きな糧にしていて、小谷学園での恵美ちゃんの銅像も、あの試合がモデルになっている。

しかし、恵美ちゃんのドキュメンタリーなどでも、尽くこのエピソードは黙殺されている。

だけど今回、浩介くんがノーベル賞になったのをきっかけに、恵美ちゃんとの対戦エピソードについて世間にも知ってほしいとあたしは思っている。

「I think women don't have to oppose men. Impossible is impossible. （あたしは、女性たちが男に対抗する必要はないと思っています。不可能なことは不可能なのです）」

あたしは、無理なものは無理だと思っている。

恵美ちゃんのエピソードは、あたし自身の体験以外のエピソードを交えていて、より説得力が高まってくれると信じている。

もしこれでも男女平等を信じ続けるなら、もはやそれは宗教だと考える他無いわね。

あたしは、研究についての内容に移る。

「I joined Dr. Horai's research to solution of life span problem. No aging society is much richer than conventional society. But, if society seeks for impossible it decline. （あたしは寿命問題の解決のために蓬莱教授の研究に参加しました。不老社会は、これまでの社会よりも遥かに豊かになるでしょう。しかし、不可能を求める社会は、衰退します）」

あたしの動機は、結局浩介くんとの寿命問題を解決することだった。それ以外は、全て「おまけ」のようなもの。

あたしのスピーチも、ようやく終わりに差し掛かる。

「You must acknowledge about difference between man and woman. I seek femininne I married 18 years old. He is the most great man in the world. （あなたたちは男女の違いを認めるべきなのです。女の子らしさを追求し、あたしは18歳で世界一素敵な男性と結婚できました）」

あたしは、最後の仕上げに取りかかる。

「I was a boy. But I am a girl n

ｏｗ．　Ｉｔ　ｉｓ　ｐａｉｎｆｕｌ　ｔｏ　ｈａｔｅ　ｍｅ　ｂｙ　ｍｅｎ．　Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ａｍ　ａ　ｇｉｒｌ．　Ｄｏ　ｙｏｕ　ｔｈｉｎｋ　ｗｒｏｎｇ　ａｂｏｕｔ　ｇｉｒｌ　ｂｅ　ｈａｖｅ　ｆｅｍｉｎｉｎｅ？（あたしは男の子だったわ。でも、今は確かに女の子なの。あたしにとって、男に嫌われるのが一番辛いわ。だってあたしは、女の子だから。あなたたちは、女の子が女の子らしく振る舞うことは間違ってるって、思いますか？）」

もちろん、これはあたしのスピーチなので、観客側から答えは帰ってこない。

女子学生たちは、いまだにあたしのスピーチに困惑しているけど、男子学生はおおむねあたしに共感してくれていた。

あたしは、シンプルなことしか言っていない。

あたしは女の子として弱くなった。でも、強い旦那がいるから彼に守ってもらう。

これで、あたしのスピーチは全て終わった。

最後の一言を口にするために息を吸う。

「Ｍｙ　ｓｐｅｅｃｈ　ｉｓ　ｏｖｅｒ．　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｋｉｎｄ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．（あたしのスピーチはここまで。ご清聴ありがとうございました）」

パチパチパチパチ!!!

ワー!!!

あたしがスピーチを終えると、これまでにないほどの大きな拍手が沸き起こった。

誰かが椅子から立ち上がり、やがて全員があたしに向けて拍手していた。

もしかしたら、サイレントマジョリティに訴えかけたのかもしれない。

あたしは万雷の拍手を浴びながら、原稿用紙とくまさんのぬいぐるみを取る。

ぬいぐるみさんをぎゅっと抱き締めると、あたしに対する拍手が更に増した。

「ふう」
あたしは、少しずつ、歩みを進めていく。
どうやら、あたしのコンプレックスについても、少し理解してくれたのかもしれないわね。
あたしは、元の椅子に座り直すと、浩介くんと同じように押さえ込んでいた疲れが一気に出てきた。
「優子ちゃんお疲れ」
椅子に戻ると、浩介くんがあたしを労ってくれた。
「うん、疲れたわ」
とにかく今は、文学賞の人のスピーチを聞きながら、静かに過ごしたい。
蓬莱教授もあたしも浩介くんも、それぞれ違う視点からスピーチができてよかったわ。

## ２０２７年１２月１０日　舞踏会

文学賞の人のスピーチが終わり、最後に経済学賞の人のスピーチを聞く。
文学賞の人は、この物語を書いたきっかけについて話していた。
経済学賞の人のスピーチは、何と3人とも蓬莱カンパニーに言及していた。
曰く、蓬莱カンパニーのやり口は巧妙で、今後永遠に篠原家と蓬莱家は世界トップの資産家として君臨し続けるだろうとか何とか。
確かに予想していなかったと言えば嘘になるけれど、改めて蓬莱カンパニーの影響力を思い知ることになった。
「さあ2人とも、最後にイベントがあるぞ」
「え!?」
あたしたちが蓬莱教授の言葉に困惑していると、座っていた人たちが急に立ち上がった。
あたしたちも慌てて椅子から立ち上がる。
「「おー」」
ピョンピョンピョン!!!
突然、群衆が蛙跳びをし始めた。
受賞者たちも王族の方々も同じことをしていて、あたしもスカートに気を付けながら見よう見まねで軽く跳んでみる。
うー、全然飛べてないわ。仕方ないといえば仕方ないんだけど。
「これはな。更なる躍進を願って行うノーベル賞の恒例行事なんだ」
蛙跳びが終わってから、蓬莱教授が解説してくれた。
どうやら、蛙跳びは躍進の象徴らしいわね。よく分からないけど。
「――」
「晩餐会はこれにて終了です。続いては、舞踏会になります」
国王陛下の宣言と共に、まず王族の方々が奥の階段に向かって歩いていく。
そして、あたしたちノーベル賞受賞者もそれに続く。
これから、上の階にある「黄金の間」において舞踏会が行われるこ

とになっている。
一歩一歩、階段を進んでいく。
そこまでふんわりしている訳じゃないけど、くまさんのぬいぐるみで後ろに組んで、スカートを覗かれないように注意する。
ふふ、こういうしぐさはもう何度もしてきたけど、今日はことのほか女の子らしく振る舞えてる気分だわ。
「優子ちゃん、見てみろよ」
「え!?」
浩介くんが、階段の下を見るように言った。
あたしがそこを見ると、部屋にぎっしりと並んだ食器類や、人々の小さな頭が見えた。
それは、まさに「屋内の絶景」と言うべき光景だった。
「あそこで晩餐会してたのよね」
一番真ん中のテーブルの空席が、あたしたちのエリアね。
「ああ」
あたしたちは、青の間を上から見るのもそこそこに、前を向いて階段を登りきり、黄金の間へとたどり着いた。
「ふう。ついたわね」
気が早い受賞者さんの一部には、既に踊り始めようとしている人もいる。
「優子ちゃんは……踊れないか」
浩介くんが一瞬考えた後、すぐに「踊れない」という結論を出した。
もちろん、あたしも同意見。今あたしが着ているスカートは、ちょうど膝が見えるくらい短いから、激しく動いたら間違いなく見えちゃうだろうし、そうじゃなくてゆっくりだとしても、あたしの身体能力ではガクガクしたぎこちないダンスしか踊れないものね。
さっきのスピーチで別にかっこ悪くてもいいとは言ったけど、わざと見せつける必要性はどこにもない。
「まあそれでも、他の人の躍りを見ているだけでも楽しいわよ」
「だろうな」
ともあれ、あたしたちが舞踏会の会場に到着してから、今度は過去

の受賞者やノーベル賞の選考機関に財団の人々、最後に晩餐会の参加者の一部がこっちに来た。
「蓬莱教授はどうするんです？」
「あー俺はメダル２つも抱えてるからなぁ……あー、１回目の時は参加したんだが、今回は家族と傍観するよ」
どうやら、蓬莱教授も参加はしない意向みたいね。
「お、続々と集まってきたな」
一般参加者の多くは、改まったパーティードレスで、日本人女性だけは、振り袖が多い。
とにかく今年はあたしたちの注目度が高く、今年唯一の女性受賞者で、少女性を強調したあたしのこの格好は嫌でも目立った。
「――」
「それでは、舞踏会を開始いたします！」
国王陛下のその言葉と共に、多くの人々が手を組み、音楽に合わせてダンスを踊り始めた。
もちろん受賞者本人を含め、高齢だったりする場合には、傍観に徹することも可能だ。
受賞者の場合、この後地元ストックホルムの大学で後援会が行われ、先程と同じスピーチをしなければならない。
これは、晩餐会は限られた人しか参加できないが、ノーベル賞学者の叡智を特定の人しか見られないのはよくないからという理由で、実際にこの後のスピーチには大勢の学生が出席するらしい。
「優子ちゃん、あれ」
「あら」
浩介くんが指差す先を見ると、永原先生が不規則な躍りをし始めていた。
恐らく、江戸時代からある盆踊りの真似事で、よく見ると比良さん余呉さんも、同じ動きをしていた。
うーん、あの３人も結構な資産家と考えると、なかなかシュールで面白い光景よね。
「完全に音楽にあってねえな」

「ええ」
浩介くんが小さく笑いながら話す。
永原先生たちの躍りは滅茶苦茶で、しかも振袖姿の目立ち方からも、永原先生は周囲から視線を浴びている。
他の参加者を見てみると、恵美ちゃんと桂子ちゃんが踊っていた。
よく見なくても恵美ちゃんが主導していて、この辺りはテニス選手として国際的に活躍しているのが役に立っているわね。
他にも、ドレス姿の歩美さんも踊っていたり、あるいは河毛教授と瀬田准教授という組み合わせでは、何故かおばさんの人だかりができていた。
オーケストラの演奏する音楽が変わる。
やや日本の盆踊りを混ぜた感じになっていて、さっきまで完全に明後日の方向だった永原先生たちの躍りが、少しはマシになる。
「なあ優子ちゃん」
「ん？」
浩介くんが、こっちに向き直った。
「少し、ほんの少しでいいから、踊ろうぜ。ゆっくり、ゆっくりだけど」
「うん」
浩介くんから、ダンスのお誘いが来た。
やっぱり、踊りたいみたいだった。それはあたしも同じ。
よく見ると、パートナーのいない「手持ち無沙汰」の参加者に、多くの人が声をかけている。
蓬莱教授はともかく、ここまで来たら少し参加しないと行けなさそうね。
「優子ちゃん、ほら」
浩介くんの優しい声が、あたしの脳に響いていく。
「うん」
大学の文化祭で、ダンスサークルの躍りを見たことはあるけど、あれは完全に専門的な動きで、もちろんあたしたちは基礎から出来ていない。
浩介くんがもちろんリードしてくれるけどもちろん周囲からすれ

ば半分以下のスローモーションだ。
浩介くんに手をとられ、ゆっくりと体を同調させる。
腕を上に上げられたら、あたしはほんの少しくるりと一回転する。
「きゃっ」
すると突然背中を後ろから押され、あたしの胸が浩介くんと密着する。
「優子ちゃん、かわいい。愛してるよ」
「あうっ」
不意打ちの「愛している」に、あたしは胸がきゅんとなって、心臓がドキドキしてしまう。
あたしの恋が、覚めやまない。
あたしの背中を持っていた浩介くんの手が、ゆっくり下に進んでいく。
いつもならここで場所も考えずにすぐにお尻を撫でられるのに、その寸前で思いだしたかのように元の位置に戻った。
「優子ちゃん、今夜、な」
「うん」
そうだった。
浩介くんは、ずっと今夜のために我慢してくれていた。
あたしの今夜は、1ヶ月1番の危険日で、前後の日も合わせてそんな日が続くと知っておきながら、あたしはその手の道具を全く持ってこなかった。
浩介くんの腕が再び動き、凍りついたように止まっていた時が再び動き出した。
周囲には、お姫様だっこをする強者もいたけど今のあたしのスカート丈だとそれはできない。
浩介くんは、「お姫様だっこはいつでもできる」と言っていた。
「結婚式でも、されたわよね」
他にも、あたしが浩介くんに恋したばかりの時にも、生理痛がひどくて保健室に行かなきゃ行けなくなった時に、お姫様抱っこをされたことがあった。

制服のスカートは今のスカートよりも格段に短くて、あの時はパンツ見えないようにするのが大変だったけど、それ以上に浩介くんの近い顔が、あたしの理性を狂わせていた。
「ああ、優子ちゃん、きちんと重くて好きだよ」
「……もうっ!!!」
あたしが重い体重を全くコンプレックスにしていないことを知ってって言うんだから本当に始末に終えないわ。
世間では、ＢＭＩで「痩せすぎ」の基準まで痩せようとする女性が多く、実際に女性誌でもそうした記述がとても多い。
でもあたしは、この巨大な胸やお腹にもぽっこりと健康的についたお肉の分もあって、相変わらず体重も５０後半と６０近くで、体脂肪率も３０％ある。
今のあたしは、ダイエットするのではなく、逆に少食の身でどうやってこの体重をなるべく維持できるかに努めている。
よくよく考えると、痩せたい痩せたいとダイエットに勤しんでいる女性からすると、あたしってものすごい妬まれそうだわ。
「いやいや、重要なことだぞ。優子ちゃん、きちんと栄養蓄えてくれないと」
「あーうん、そうよね」
浩介くんの言うこともっともだった。
赤ちゃんを産むということは、お腹の中で赤ちゃんを育てなければいけない。
そのためには、母親がきちんと栄養を取らないといけないのよね。
「優子ちゃんがダイエットに洗脳されなくてよかったぜ」
浩介くんも、あたしのむっちりとした体格をとても気に入ってくれている。
そりゃあまあ、男から見た女の子の魅力って、結局「健康そうな赤ちゃんを育てられそうなこと」に勝るものはないものね。家事の能力だって、結局はそこに帰結すると思う。
「あはは、うん、頑張るわ」
あたしたちの日本語の会話は、もちろん周囲は理解できない。

もし動画共有サイトにアップロードされて、どこかであたしたちの会話が拾われたらアウトだけどね。
「ふう、疲れたわ」
殆ど動いてなくて、浩介くんにリードされっぱなしだけど、あたしはものの数分で息が上がってしまう。
うん、スッゴい虚弱だわあたし。
「優子ちゃん、終わろうか？」
「うん、お疲れ」
「ああ」
再び、ダンサーたちの輪から抜け、奥の踊らない人たちの所へと歩を進める。
一際目立つところで、国王夫妻も踊っていて、受賞者以上に注目の的になる。
「しっかし、予想していた以上にノーベル賞って大変だよな」
浩介くんがふとつぶやく。
「うん、そうよね。賞金は……今のあたしたちからすると少ないし」
「だなあ。税金かからないっってもなあー」
あたしたちには、世界最大の資産の原動力になっている蓬莱カンパニー株の配当金が大量にあって、1日8時間労働で年間２４０日働いたとしたら、ノーベル賞の賞金は今年の配当金の時給程度にしかならない。
おまけに貢献度はあたしと浩介くんは４分の1なので、賞金額を蓬莱教授と折半することになっている。
だから、ノーベル賞の賞金は、一般人からすれば巨額でも、今のあたしたちにははした金でしかない。
最も、株の配当金は一般所得より安いとはいえ税金がかかるしあたしたちの稼ぎだけで、政府の所得税はともかく、住民税の税収が自治体にとってとてつもないことになった。
この賞金は、所得税法の中で課税免除になる「ノーベル基金からノーベル賞として出される金品」に該当するので、全く税金がかからない。

「ま、金より名誉でしょ？　最も、ノーベル賞の賞金は他の学術賞よりは高額らしいけど」
その高額な賞金が、ノーベル賞の名誉を維持しているという見方もできる。
財団側の懐も良好らしく、資産運用がうまいわよね。
「みたいだなあ」
最も、あたしたちは世界一の金持ち一家なのだから、ノーベル賞の賞金が「はした金」に見えてしまうのは致し方ないことではある。
だからこそ、ノーベル賞が持つ名誉というものを大事にしたい。
「おお、優子さんに浩介さん、戻ったか」
「あ、うん」
ずっとボーッとしていた蓬莱教授が、あたしたちに話しかけてきた。
舞踏会を見ると、躍り疲れて休んでいる人もいつの間にか多くなっていた。
「体力の使いすぎに注意しろよ。これからバスにまた乗るんだ」
「うん、分かってるわ」
あたしたちは母さんたちを発見する。
義両親と最初は踊っていたけど、今は休んで何やら雑談に講じていた。
「さ、そろそろお開きの時間だ」
「はい」
あたしたちは、舞踏会でのダンスを見ながら、残りの時間をゆったりと過ごした。
ノーベル賞受賞者たちは、やはり体力的な問題からか休んでいる人が多かった。
「――」
「それでは、全てのイベントを終了いたします」
財団の人の宣言により、舞踏会が終わった。
まず、国王陛下と王族の方々をあたしたちは総出で見送る。
ちなみに、蓬莱教授が最後に国王陛下ともう一度だけ握手してい

た。
そして、過去の受賞者や財団の他の人、選考委員会の人々が、それぞれ解散になる。
次に一般の人たちが解散になり、母さんたちから「気を付けてね」という言葉を貰った。
人によっては、また大学に行ってもう一度スピーチを聞いたり、あるいはホテルに戻ったり、もしくは他の地を観光したりするらしい。
最後に、財団の人と通訳さん、そしてあたしたち受賞者だけが残された。
あたしたちはこれから、ストックホルムの大学でのスピーチのために、彼らとは別行動になる。
今日という1日も徐々に終わりが近付いてきた。
女の子になってから、一番濃い1日だったかもしれないわね。
「――」
「それではこちらに参ります」
財団の人のスウェーデン語が、あたしたちの言葉に通訳され、あたしたちは他の人とは違う出口から、お馴染みノーベル財団の専用タクシーに乗り込んだ。
それにしてもこの車、何台あるのかしら？
「ふう」
「さ、もう少しだ」
蓬莱教授は、あまり疲れた表情をしていない。
でも他の受賞者さんたちは、あたしたちも含めみんな疲れた顔をしている。
それもそのはずで、午後に入ってから、授賞式に晩餐会と、殆ど休息の時間がない。
肉体的な疲れというよりは、精神的な疲れがとても大きい。
「Ｄｒ．　Ｈｏｒａｉ　ｗｈｙ　ｄｏｎ，ｔ　ｙｏｕ　ｂｅ　ｔｉｒｅｄ？（蓬莱博士、あなたはどうして疲れていないんだい？）」
物理学賞の受賞者さんの1人が、タクシーの中でも余裕の表情の蓬莱教授に話しかける。

「Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ａｍ　２　ｔｉｍｅｓ．（何故って、そりゃあ２回目だからなあ）」
「Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｔｈａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｒｅｌｅｖａｎｃｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ．（回数の問題ではないと思うんですけど）」
「Ｕｍｍ．．．」
蓬莱教授が唸っていた。
いずれにしても、あたしたちはこれから市役所から市街地を進んで、大学へと到着した。
「広いわね」
「まあ、学術都市だしなストックホルムは」
あたしたちが到着した大学の、一番大きなホールでスピーチを行う。
といっても、あたしたちの心理はとても楽で、国王陛下やその他要人や来賓はおらず、学生さんと教授陣だけがいるとのことだった。
「あ、ちなみに、最後に蛙跳びするのはさっきと同じだからな」
「はーい」
「分かったぜ」
どうやら、あの蛙跳びをまたするらしい。
あれもあれで、この服だと結構大変なのよね。
永原先生も、多分やりにくかったと思うし。
「――」
「こちらです」
あたしたちは、ホールの裏口、教授陣たちが入るところに案内される。
授賞式でのコンサートホールとは違い、あたしたちは１人ずつ壇上に上がり、スピーチの原稿用紙を持ちながらスピーチすることになっている。
ちなみに、ノーベル財団のホームページでは、通常こちらの動画が公開されるらしい。
なので、決してこっちも気が抜けないわね。

２０２７年１２月１０日　式典の後

「――」

財団の人の放送が始まり、最初に物理学賞の受賞者さんが呼ばれた。

物理学賞の人が壇上へと歩を進めると、生徒さんたちの拍手が聞こえた。

物理学賞、化学賞、あたしたち生理学・医学賞、文学賞、経済学賞という順番は授賞式や晩餐会でのスピーチと同じ。

さっきは国王陛下や要人との間でスピーチしたとあって、あたしも浩介くんも、さっきよりも格段にリラックスできた。

物理学賞の人が、先程と同じように、「宇宙への他探究心」をテーマにスピーチを開始した。

あたしと浩介くんのスピーチは、あたしたち自身の英語力のなさもあって、蓬莱教授は２回目ということで、スピーチの内容を大幅に短縮したために、あたしたちのスピーチは、全受賞者の中でもかなり短いものだった。

「Ｍｙ　ｓｐｅｅｃｈ　ｉｓ　ｏｖｅｒ．　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｋｉｎｄ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．（私のスピーチはここまで。ご清聴ありがとうございました）」

パチパチパチパチパチ!!!

最初の物理学賞の人が、スピーチを終えた。

同じ原稿だから当たり前だけど、スピーチの内容は一語一句同じ内容だった。

もちろん、授賞式に出席できなかった人が多いので、真剣にスピーチしていた。

「Ｄｒ．　Ｓｈｉｎｇｏ　Ｈｏｒａｉ．」

「よしっ」

蓬莱教授が呼ばれると、「よしっ」と一言話し、立ち上がって向こう

へと消えていった。
　さっきまでの精神的疲労もみんな取れたのか、代わりに肉体的疲労を感じている人もいて、経済学賞の人の１人は疲れて寝てさえいた。
「あのスピーチさ、優子ちゃん」
「うん？」
　浩介くんが、思い出したかのように話す。
「ここの女子学生の受けはどうなのかなって……さっきの晩餐会でも、女子学生の反応はあまりよくなかったし」
「大丈夫よ。あたしは堂々とするわ」
　浩介くんが心配そうに言うので、あたしは浩介くんを落ち着かせるために、あえて元気に言った。
　最も、仮に白い目で見られても、あたしはどうも思わないけどね。
「うん、それでこそ優子ちゃんだよね。男受けってことは、結局は俺に好かれたいってことなんだろ？」
「もちろんよ」
　あたしが結婚しても男受けを狙い続けるのは、もちろん浩介くんが男の子だからというのがある。
　結果的に他の男を引き寄せちゃって、それはそれで浩介くんが嫉妬しちゃうけど、そういう時はあたしなりのやり方で、嫉妬をやめさせることもできる。
「優子ちゃんらしいぜ。女の子はやっぱり、健気だけど必要以上に強がらない、弱さを受け入れた素直な子が一番だよ」
　浩介くんが笑顔で好みを話す。
　うん、あたしも、そんな女の子らしい女の子でいたいわ。
「Ｍｙ　ｓｐｅｅｃｈ　ｉｓ　ｏｖｅｒ．　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｋｉｎｄ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．」
　パチパチパチパチ!!!
　蓬莱教授が、スピーチの終わりの一文を話し、会場からの万雷の拍手が聞こえてきた。
　そして――

「Ｄｒ．　Ｋｏｕｓｕｋｅ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．」
「行ってくる」
浩介くんが呼ばれ、即座に立ち上がる。
「うん、行ってらっしゃい」
あたしが浩介くんを見送り、浩介くんのスピーチが始まった。
ちなみに、スピーチの様子はここからでは見えない。
「優子さん、明日には帰るんだが、お土産はどうする？　俺はノーベルチョコレートで十分だが、空港でなにか買うか？」
「うーん……あたしは遠慮しようかしら？」
もちろん、専用飛行機にもダイヤはあるし、予定では明日の正午出発と決まっている。
とはいえ、ギリギリまでホテルにいるか、あるいは飛行機の中に入って待つか、あるいは待ち合い時間を利用して空港の中でお土産を買うかは自由になっている。
「うーむ、確かに報道陣が凄そうだもんなあ。できれば疲れたしそういうのは遠慮したい」
あたしたちにある懸念と言えば、昨日一昨日と嫌というほどに見せつけられたあたしたちへの「追っかけ」だ。
ホテルをチェックアウトし、ノーベル財団の車で空港に直接向かい、そのままプライベートジェットの専用スペースに逃げ込んでしまえば、全てがうまくいく。
とはいえ、チョコレートだけがお土産というのも、なんだか寂しいのも事実だわ。
どうしたものかしら？
「まあ、いざとなれば家族の方に買わせるってのでいいだろう」
「そうね」
結局、それに落ち着くのよね。最終的には。
「Ｄｒ．　Ｙｕｋｏ　Ｓｈｉｎｏｈａｒａ．　」
あたしは、名前を呼ばれたらすぐに立ち上がって無言で前へと進む。

国王陛下の存在の偉大性を認識しつつ、あたしはホールの中に進んだ。
そこは、人の数こそ多いものの、やや薄暗くて落ち着いた空間だった。
あたしたち佐和山大学にもある講義ホールで、満員の学生に立ち見までいる。
普段は教授陣が使う壇上のマイクの後ろに立ち、ぬいぐるみさんを横に置いた。
まるで大学の先生になったような気分で、他の学者さんたちは何度となく経験していることでも、あたしにとってははじめてのこと。
でも、あたしは全然緊張感はない。
記者会見で慣れているのも、あるかもしれないけどね。
「――」
あたしは、あのときと同じ内容のスピーチを続けた。
途中、あたしが自分のコンプレックスについて語る場面では、晩餐会の時と同じように、やや涙声という感じになってしまった。
それでも、あたしのスピーチに対して、みんな話し声の１つもなく真剣に聞いてくれていた。
まあ、こんな夜遅い時間に聞きに行くくらいだから、もしかしたら晩餐会の人達以上にモチベーションは高いのかもしれないけども。
「Ｍｙ ｓｐｅｅｃｈ ｉｓ ｏｖｅｒ．Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｆｏｒ ｙｏｕｒ ｋｉｎｄ ａｔｔｅｎｔｉｏｎ．」
パチパチパチパチ!!!
あたしは、女の子らしい女の子でいたいということを、ここでも訴えることができた。
晩餐会での記者とのエピソードがなかったけど、それでもあたしがスピーチを終えると今まで以上に大きな拍手が沸き起こった。
あたしは、何回か頭を下げながら、壇上を後にした。
ふう、これであたしがここストックホルムでするべきことは、全て終わったわね。
って、今夜まだひとつだけ残ってたかしら？

「はー疲れたー」
「優子ちゃんお疲れ様」
真っ先に声をかけてくれたのは、浩介くんだった。
「うんありがとう浩介くん」
「さ、残りの人のスピーチも聞いてやろう」
蓬莱教授と浩介くんは、いつの間にかメダルを外していた。
あたしも、先に入れておいた小切手と賞状も含め、メダルもバッグにしまうことにした。

「それでさー、優子ちゃんはどう思う？」
「うーん、やっぱりわがままを自立と勘違いするとモテないと思うわ」
あたしたちは、いつの間にか雑談に講じていて、他のノーベル賞受賞者たちも、同じように雑談をしていた。
こうなると、学者ではない文学賞の人がちょっとかわいそうよね。
あ、でも賞金全取り出来るのよね。科学3分野より評価低くても。
「――」
「ではこれで解散です。各自のタクシーにご乗車ください」
最後の人のスピーチが終わると、あたしたちは解散となった。
ここからは、日本語の通訳兼ガイドさんが、あたしたちをホテルまで案内してくれる。
解散した学生さんたちと重ならないように、あたしたちは少し迂回しながら駐車場へと向かった。
「Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ．Ｉ，ｍ　ｖｅｒｙ　ｇｌａｄ　ｔｏ　ｓｅｅ　ｙｏｕ．（皆様さようなら。お会いできてとても嬉しいです）」
蓬莱教授が、最後に受賞者さんたち全員に向けてそう話す。
そう、受賞者が一手に集まる一日は、終わったのである。
これからはまた、それぞれの人生、それぞれの研究に向かって進んでいくことになる。
「Ｍｅ　ｔｏｏ．（私もです）」
「Ｍｅ　ｔｏｏ．　」

「Ｍｅ　ｔｏｏ．　」
他の受賞者さんたちもそれに続く。
「Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ．（幸運を祈る）」
文学賞の人がそう言うと、あたしたちは最後の別れを済ませ、タクシーに乗り込んだ。

「ふう、名残惜しいなやっぱり」
タクシーが出発し、他のタクシーと散り散りになったタイミングで、蓬莱教授が小さく呟く。
「１５年前も何ですか？」
「ああ、あの挨拶が今生の別れになった人もいたよ。何せ、過去の受賞者としては、ここには来てなかったからね」
蓬莱教授が、軽い口調でそう話す。
でも、あたしたちにはその気持ちはよく分かる。
多分あたしたちも、日常に戻ったら、あの人たちに会う機会は多分もう来ないと思う。
短い間だったし、殆ど話すこともなかったけど、今こうして思えば、あたしたちは強い絆で結ばれていたことが分かる。
いわゆる、「失って初めて気付く」という感じのものなのかもしれないわね。
「さ、もうそろそろだ」
ストックホルムの街は意外と狭い。そのため、タクシーがスピードを出すと、意外とあっという間にホテルについてしまうらしい。
あたしたちは、「ノーベル賞受賞者を歓迎する」と書かれたボードを見つめつつ、ホテルの中に入った。

「戻ったわー」
「あ、優子ちゃん、浩介くん、お帰りなさい。お風呂沸いているわ。あ、それから私たちはもう寝るわね」
「うん」
パジャマ姿のお義母さんは、そう言うとすぐに寝室へと向かって

いった。
お義父さんももう寝てしまったらしく、この部屋にはあたしたちだけになった。
無理もないわ。もうすぐ日付変わるものね。
「一緒にお風呂入る？」
「うーん、後にする」
今は、そういう気分ではない。
むしろ直前まで溜めていたかった。
「そう？　じゃあ先に入ってるな」
「うん」
お風呂場へ向かう浩介くん。
うーん、思い出に一緒に入ってもよかったけど、そうなると確実にお風呂でしちゃいそうだし。
「ふう」
あたしは、まだ一回も使ってない部屋への扉を開ける。
といっても、この部屋はいわゆる和室で、扉ではなく襖というのが正しい。
あたしは開けっ放しにしつつ、暖房をつけ、お布団を敷き始めた。
そう、今日の舞台はここ。
こんな遠くに来てまで和室にいる必要はないと思ったので使わなかったけど、今日だけはここで寝ることにした。

「優子ちゃん、出たよ」
「はーい」
しばらくすると、浩介くんがお風呂から出てきた。
しかし、パジャマではなく、さっきまで着ていたタキシードだった。
しかも、ノーベル賞のメダルまで掲げていた。
「優子ちゃんも、ね」
「うん」
浩介くんの意思は、よく分かったわ。
あたしは浩介くんと入れ替わるようにお風呂場へと向かうことに

なった。
「ふう」
あたしは、シャワーと慣れない西洋式のお風呂に浸かる。
これも今回でおしまいだと思うと、とたんに名残惜しいものがある。
ううん、今はそんなことより、これからのことを考えなきゃ。
あたしはそう思い、浩介くんを待たせ過ぎないように、しかし体力を回復させるように十分考えながら、お風呂を満喫した。
そう言えば、北欧と言えばサウナのイメージだったけど、今回は一回も行かなっかったわね。
あたしは、お風呂から出て体を拭き、パンツとブラも取り替えずにそのまま同じ服を着込む。
浩介くんがメダルを掲げていたのを見て、あたしもメダルを掲げることにした。
うー、こういうのって初めてで、これも普段着のはずなのに何だかコスプレ気分だわ。
あたしは、慎重に和室への襖を開けた。
サー
「お待たせ、あなた」
浩介くんは、タキシード姿。
首からは、さっき見たときと同じ、ノーベル賞のメダルを掲げていた。
最高の頭脳が持つ人だけが受け取れる名誉を受け取ったあたしたちが今からすることはとてもじゃないけど言い表すことが出来ない。
「おいで、優子ちゃん」
「はい」
あたしはゆっくりと浩介くんに近づいていく。
暖房の効いた和室に隣り合った布団が2枚敷かれている。
部屋の片隅にはパジャマも置かれている。
「ねえ優子ちゃん、本当に今日でいいんだよな？」
「うん、そうよ」

部屋にある時計を見ると、既に日付を過ぎていた。
でもあたしたちにとっては、これからが重要な事になる。
むしろ、授賞式や晩餐会よりも重要な事がなされるかもしれないのだ。
「優子ちゃん、あの、さ」
「うん？」
浩介くんが、言いにくそうに言う。
また何か、企んでいるわね。
「その、スカート……自分でめくって欲しいんだ」
「え!?」
自分からスカートをめくるように言われたのは、これまでにも何度かあった。
でもあたしには、単にめくられるよりもずっと恥ずかしいシチュエーションで、我慢できずに拒否しちゃうことも多いものだった。
カリキュラムの時に、ヘマをしちゃって、母さんからおしおきされたあの場面を、嫌でも思い出させるからかもしれない。
「ほら、優子ちゃん」
「は、はい……」
ファサー
あたしは、恥ずかしさを必死にこらえながら、スカートの裾を掴んでめくり上げて、浩介くんにパンツを見せる。
「うひょー、エロいエロい、特にこのノーベル賞のメダルをつけてるのがたまらねえな」
浩介くんが、あたしを言葉責めして煽ってくる。
あたしは、否が応でもそれに反応してしまう。
「うおっ、優子ちゃん興奮してる？　ふひっ、ノーベル賞受賞者ともあろう人が、こんなにみっともない姿晒して喜んでる変態だなんてみんなが知ったらどう思うかな？」
「うわーん、言わないでえー！」
浩介くんの言ったことに反応してしまい、あたしも顔が赤くなる。
みんなにはあたしと浩介くんの本性を知られたくない。

義両親や実両親には、既に幾つかのことは知られているけど、それでもあたしにとっては恥ずかしいことには変わりはないから。
「ふふ、優子ちゃん、俺だってお相子だよ」
浩介くんが元気いっぱいになっている。
あたしはそれを見て、理性が急激に剥ぎ取られていく。
「う、うん……あなた……もう我慢出来ないわ」
その言葉とともに、あたしたちはノーベル賞を投げ捨てた。

「ねえあなた……」
全てが終わったら、あたしと浩介くんはパジャマに着替えなおしてそのまま和室の布団で眠ることになった。
これまで以上にあたしは蹂躙と被征服感でいっぱいになっていた。
「ああ」
「今日ノーベル賞を貰った大学者がさ、世界一愚かな獣に退化した何て、世間が知ったらどう思うかしら？」
さっき浩介くんに言われた、「ノーベル賞受賞者ともあろうものが」という言葉がそっくりそのまま返ってくる。
最も、あたしもあたしで完全に我を忘れていたけどね。
「あはは……どうだろうね。でもさ、俺思ったんだよ」
天井を見ながら、浩介くんとあたしはお互い顔を見せず話し合う。
何だか、とっても不思議な気分だわ。
「うん？」
「俺達だって人間だからさ、男の本能には勝てんよ」
浩介くんは、いつもの言葉を話していた。
「そう？」
「うん、実はさ、俺、殆どさっき理性が全く無かったんだ。ただ、すげえ本能がむき出しになったっていうか」
浩介くんが意外な話をする。
でも、あたしにはその気持はわかると思う。
今日は今までとは違う、文字通りの「本来の目的」のためだから。
「もしかして？」

「うん、完全にオスの本能がむき出しになったの、初めてだったよ。今まではその、理性とかがあったんだけど、今日は完全に吹き飛んじゃって……目の前にいるのが優子ちゃんというより、一匹のメスというか……」
浩介くんの声が、動物、特に猿の鳴き声に似ているように聞こえた気がしたのは、そう言う理由かしら？
あたしもあたしで完全に抑え込まれちゃったものね。
「浩介くんがそうなるのも無理も無いわよ。だって、本当に本能的にすることだもの」
「だな。ノーベル賞の夜がこれというのも面白いけど……ともあれ、寝るか」
「うん」
あたしたちはそれっきり会話がなくなり、暗闇の中で眠りについた。

## ２０２７年１２月１１日　嵐の後の静けさ

「ん……」

朝起きると、外はまだ暗い。

和室のたたずまいを見て、一瞬、「随分と早起きしちゃったわ」と思ったけど、その後、あたしたちがストックホルムにいたことを思い出す。

起きて暗い部屋で光る時計を見ると、午前７時１４分だった。昨日はあれだけ忙しかったのに、意外と寝る時間が短かったわね。

日本なら１２月でも明るい時間だけど、ストックホルムでは９時頃に日の出になる。

「あれ？」

浩介くんはまだ寝ていたので、あたしは手荷物を持って部屋を移動することにした。

特にノーベル賞のメダル、賞状、小切手を紛失したら目も当てられないので、特に慎重に確認する。

うー、暗い中での確認は大変だわ。

「あら、優子ちゃんおはよう」

一旦大きな部屋に行くと、義両親が既に起きていた。

どうやら、今日は帰る時間ということで、みんないつもよりも早く起きてしまったらしい。

「うん、おはよう」

「ねえ優子ちゃん、メダル見せて？」

お義母さんは、予想通りのお願いをしてきた。

「うん」

あたしは、手荷物からノーベル賞のメダルを取り出した。

それは、昨夜の出来事が夢ではないことも意味していた。

この期に及んで、まだ夢のように感じてしまうほど、ノーベル賞は雲の上の存在だった。

でも今のあたしは、そのノーベル賞を目の前に持っている。

「うわあ、すごい、ねえあなた」

お義母さんが、お義父さんを呼ぶと、お義父さんもメダルを見にやって来た。
「おー、これが噂の……こっちは博物館で見たまんまだな」
あー、そう言えば義両親もノーベル博物館に行ったんだっけ？
ノーベル賞メダルのこっち側は、よく知られているものね。
「優子ちゃん、裏はどうなってるの？」
「えっとね……」
あたしは、お義母さんたちのために、メダルの裏側を見せてあげる。
そこには、1組の男女、水を汲む医者と病気の少女の絵が掘られていて、外縁部にはラテン語が刻まれていた。
「へえ、こうなってるのねえ」
「やっぱ実物は違うなあ」
義両親は、とても興味津々だった。
やはり、ノーベル賞のメダルは特別なものがある。
義両親にしても、実両親にしても、自分の子供夫婦が、世界一権威のあるノーベル賞に輝いたということを考えれば、近所付き合いとかも変わっちゃうわよね。
「優子ちゃん、この外側に書いてある文字の意味は分かる？」
ふう、やっぱり来たわね。
あたしは、これまで通り、メダルに書いてあるラテン語の意味を解説する。
お義母さんもお義父さんも、「優子ちゃんだけじゃなくて、ノーベル賞を受賞した人全員にぴったりの言葉」だと言っていた。
物理学賞や化学賞にも、同じ言葉が掘られているけど、生理学・医学賞の場合、よりその性質が強いようにも見受けられるわね。
ふふ、人々を幸福にっか……浩介くんのスピーチも、かっこよかったわ。
トントン
部屋のどこからか、足音が聞こえてきた。
「ふええ、おはよう」
「あら浩介、おはよう」

既に普段着に着替えていた浩介くんが、登場した。
「うん、みんなおはよう」
パジャマ姿のままなのは、いつの間にかあたしだけになっていた。
「じゃあ、あたし着替えてくるから」
あたしはノーベル賞のメダルをバックにしまいつつ、別の部屋に移動する。
部屋に移動するまでの道のりで、浩介くんもまた、メダルを見せてくれるように頼み込まれていた。
うー、もしかしたら、これから先しばらくこういうの続くのかしら？
盗まれたらいけないし、本物は厳重に金庫にしまっておいて、普段見せるためのものとして、財団に連絡してレプリカを作ってもらわないといけないわね。
あたしは、今日の服を決める。
今日は東京の自宅に戻ることになっている。
もちろん、12月の東京も、ストックホルムと比べれば遥かにマシだけど、それでも寒いのは寒い。
なので、今日も少しだけ厚着をすることにした。
もちろん上着は、ホテルから出る時だけど。
あたしが着替え終わると、ホテルの外がほんのり薄明かるくなってきていた。
「あ、優子ちゃん、忘れ物ないか、確認してね」
「はーい」
もうすぐ朝食の時間で、それまでにはいつでも帰れるように準備しておかないといけない。
飛行機はチャーター便、というよりも、蓬莱教授が個人所有している飛行機だけど、パイロットやクルーたちの予定もあるものね。
あたしは、この広いホテルの部屋を隅々まで散策し、忘れ物がないかどうか確認し終わった。
ちなみに、賞金の小切手と賞状は大きな荷物の中に、ノーベル賞のメダルは手荷物に入れておく。

飛行機の人たちも、メダルを見たがると思うからね。

コンコン

「はい」

「チョウショクオモチシマシタ」

ホテルのスタッフさんが、最後の朝食を持ってきてくれた。

あたしたちはテーブルにつき、最後の食事に勤しむことにした。

外はどんどんと明るくなり、短い昼間が始まっていた。

「うん、やっぱ美味しいな」

「そうね」

ここのホテルは、元々高級ホテル、ノーベル財団が色々とお金を負担してくれたけど、正直今のあたしたちなら、この手の式典全て自己負担しても大丈夫そうにも見える。

最も、あんまりにも浪費してたら、あたしたちも持たないけどね。

「「ごちそうさまでした」」

あたしたちは、最後に食べたスウェーデン料理を食べ終わり、手荷物と大きな荷物を持つ。

最終確認も終え、いよいよホテルから出る。

エレベーターの前には誰もおらず、あたしたちは1階まで降りてきた。

「お、優子さんたちも来たか」

エレベーターから降りると、蓬莱教授に永原先生たち、そして父さん母さんに5日間お世話になった通訳さんたちもいた。

ちなみに、蓬莱教授の家族は例によって別行動で、これからイギリスの方に観光してから帰るとか。

「うん」

「よし、それじゃあチェックアウトだな。鍵をくれ」

「はい」

蓬莱教授が、あたしたちのお部屋の鍵を集めてから、ホテルのフロントに行く。

ホテルのフロントの人がにっこりと笑いながら、鍵を回収してくれ

る。
　ちなみに、宿泊代などはノーベル財団が負担してくれるので、あたしたちは特に何も支払う必要はない。
「よし、行こうぜ」
「うん」
　蓬莱教授を先頭に、あたしたちはホテルの出口に行く。
　ちなみに、帰りの手続きは行きよりもかなり短くなっている。出発予定時刻は午前9時だ。
「ねえ篠原さん」
「うん？」
　あたしの近くにいた永原先生が話しかけてくる。
　何の話か、あたしには分かってしまう。
「ノーベル賞メダル、私たちにも見せてくれる？」
「うん、いいわよ」
　永原先生の頼みは、やっぱり予想通りだった。
　まあ、当たり前よね。
「ありがとう、インターネットで画像は見たけど、やっぱり本物も見たいもの」
「えへへ、今朝、義両親にも同じこと頼まれちゃったわ」
　あたしは、やや苦々しい笑いを作る。
　実際、これから何度も同じことを繰り返すことを考えると、少しだけ気が重いのも確かだった。
「じゃあ、私たちにも同じことしてくれるかしら優子？」
　そして今度は、横から母さんが乱入してきた。
「あーうん、いいわよ。飛行機の中で見せてあげるわ」
　ともあれ、近しい人については、今のうちに見せてあげておいた方がいいわね。
　多分日本に帰ったら、もっと大勢の人からせがまれるのは火を見るよりも明らかだし、少しでも負担を減らさないといけないわね。
「ほら、乗るぞ」
「はーい」

蓬莱教授を待たせていたみたいなので、あたしたちも急いで黒いノーベル財団の専用リムジンに乗り込んだ。
「――」
通訳さんの言葉と共に、リムジンが発車する。
あたしは自動車の窓から外を見る。
ノーベル賞の授賞式は昨日に終わってしまったけど、もちろんまだまだ余韻はある。
街のいたるところにはノーベルの横顔が掲げられているし、あたしや浩介くん、そして蓬莱教授を含め、受賞者たちを歓迎する横断幕やのぼりはあちこちに残っている。
流れる風景を見て思う。昨日は素晴らしい一日だった。
今までも、思い出に残る1日を何度も経験してきた。
結婚式の日、浩介くんにプロポーズされた日、初めてのデートの時、浩介くんに恋した日、そして何より、あたしが女の子のなった日、でも昨日は、それら以上に、あたしにとって忘れられない1日となった。
あたしは鞄を開け、特に意味もなくメダルを見つめ返す。
「……」
「どうした優子さん？　まだ自覚が出ないか？」
メダルを見つめていたあたしを見て、蓬莱教授が気にかけてくる。
「ああいえ、そうではないんです。ただ、今後このメダルを持つ人として、どうすればいいのかなって」
ノーベル賞なんてものを取ってしまった以上、受賞者に相応しい振る舞いというのも、世間から当然に求められると思う。
しかもあたしたちの場合、世界一の資産家ファミリーなわけで、それも合わせれば、２７歳の夫婦にとってはあまりにも重たいことだわ。
「あはは、あんまり気にすることないさ。来年にもなれば、新しい受賞者に注目が集まって、俺たちのことはみんな忘れてくれるよ」
それが嘘だということは、何より蓬莱教授が一番知っているはず。
それでも、あたしを元気付けようという意思は感じられた。
「だといいんですけど。ノーベル賞ですから、人々の注目は高まると

思いますよ」
「まあな。優子さんの場合は、特に、だろうな」
蓬莱教授が、「あたしは特に」と言っていた。
確かに、初めての日本人女性のノーベル賞受賞者であるあたしには、他の受賞者以上に注目が集まると思う。
とはいえ、あたしたちにはもう1つの顔がある。
「会社に支障がでなければいいんですけど」
あたしは多分、浩介くんとのこともあるから、産休育休に入る必要が出てくると思う。
でも、妊娠が確定するまでは引き続き蓬莱カンパニーで働くことになる。
ちなみに、あたしが休んでいる間は、余呉さんに常務の業務を代行してもらい、余呉さんの業務は、役員ではなく労働者側が行う予定になっている。
浩介くんの赤ちゃんのことは、まだ考えられない。
あたしたちの車は、ストックホルムに別れを告げるべく空港へと向かい続けた。

「――」
「到着しました」
しばらくして、空港前のタクシーが集まる場所に、あたしたちは到着した。
ここはプライベートジェット専用のターミナルの近くであるため、一般の大衆は来ない。
あたしたちは、空港の中に入ると、そこはとても空いていた。
興味本意であたしたちを見たり、写真を撮ったりするマナーの悪い人はいない。
「じゃあ母さんたちお土産買ってくるからね」
「うん、気を付けてね」
歩いていたら注目されかねないあたしたちと違って、母さんや永原先生たちは自由に動くことが出きる。

余呉さんは何故かまたランドセルを背負っていて、普通の格好の永原先生や比良さんと比べてもかなり幼く見える。
あたしたちはまた、受賞者3人組だけ、待合室に取り残された。
これから日本への帰国手続きなどがあり、また相応の時間を待たないといけない。最も、行きと比べるとかなり短いけどね。
とにかく、まずは大きな荷物を預かってもらう。
「優子さん、浩介さん、今回のノーベル賞の式典、どうだった？」
この時間を利用して、蓬莱教授はあたしたちに反省会みたいなことをするらしい。
「うん、とってもよかったわ」
「ああ、どれもこれもきらびやかだったぜ」
あたしも浩介くんも、今回のノーベル賞は満足だった。
何にも代えがたい栄誉を受けられたことは、とてもじゃないけど言葉では言い表せない感動をあたしたちに与えてくれた。
「ああ、得られる賞金も今の俺たちからしたら少ないし、色々とやらなきゃいけないことも多いから、もしかしたら俺が余計なことを言ったために受賞となったために、面倒なことが多くて内心不満に思ってるんじゃねえかって、気が気でなかったんだ」
蓬莱教授から出たのは意外な言葉だった。
もちろん、そんなことはあるはずもない。ノーベル賞ほど栄誉な賞なんてない。
そんな賞に、単独でも受賞できるところをあたしたちにも分けてくれた蓬莱教授には感謝してもしきれない。
「とんでもないです」
「滅相もないとはこの時のためにある言葉だぜ」
あたしと浩介くんは、やや大袈裟気味に否定する。
今回のノーベル賞、確かに慣れない英語でスピーチをしたり、会話をしなきゃいけなかったのは大変だったけれども、それ以上に「ノーベル賞」の雰囲気を、何より受賞者として味わえたことは大きかった。
確かに蓬莱教授の助けがなければ、あたしたちがノーベル賞を得ることは不可能だった。

それでも、国王陛下の昨日の言葉通り、あたしも浩介くんも、十分にノーベル賞に値する業績だったのは確かだった。
「そう言ってもらえてよかった。まあ、仮に優子さんたちが嫌がったとしても、俺は業績を横取りしたくはなかったからね」
蓬莱教授が、にっこりと笑う。
やっぱり、相当な潔癖であることは確かだった。
「ま、後はゆっくりと研究に勤しむことにするよ。研究には膨大な予算が必要だが、幸いなことに、金は有り余ってるからな」
蓬莱教授は、経済誌での世界長者番付であたしたちを抑えて1位になっている。
今後も、蓬莱教授はこれまで通り、国からの支援はなしで研究を進めることが出来る。
しかも、膨大な資金と有り余る寿命のため、最近では基礎研究に特に重点を置いている。
基礎研究は、すぐに結果が出ず、忍耐力を要求されるため、どこの国でも応用研究よりも予算が削られがちだった。
しかし、蓬莱の薬によって国全体が資金に著しい余裕ができたこと、そして人間の寿命も格段に伸びたことで、基礎研究にかかる「長い時間」も、今や十分に「短い時間」になっていた。
ただ、諸外国はそうもいかない。
もしかしたら、不老人間とそうではない人間との最大の違い、そして大差がつく運命を決定付けているのはここのところにあるのかもしれないわね。
「色々な研究が、進んでいますよね」
「ああ、今後は寿命を伸ばすために、様々な取り組みが行われているな」
特に、あたしたち不老人間の大敵である「不慮の事故」として多い「自動車」は、現在自動運転が現在急速に推し進められていて、将来的には全ての車が自動運転となる予定になっていて、議員の一部からは、不必要な手動運転を違法とする案まで出されている。
また、自動運転技術は現在自転車にも応用され始めている。

一方で、飛行機や鉄道は自動操縦や自動運転が普及しつつも、パイロットは無くならない模様で、やはり専門に訓練を受けた人間が、「最後の砦」としての機能を持ち続ける模様になっている。
鉄道の場合、運転士は置かないということもあるけどね。幸子さんと東京に行った時とか、今年開業したリニアとか。
機械やＡＩは便利だけど、特に日本人は過信しがちなので、注意が必要ではあるとあたしは思う。
そのあたり、難しい問題なのよね。
「来るべき総不老社会、楽しみだわ」
「１００年後の未来、楽しみだな」
あたしたちは、理想の未来を描く。
かつて飛行機を発明したライト兄弟は、後年には後発の飛行機技術者に技術力で劣るようにはなったが、開祖としてその名前を歴史にとどめている。
そしてあたしたちは、ライト兄弟よりもよっぽど恵まれている。
早い段階から政府首脳に掛け合って、政治的なパイプと財力をもって、ライバル不在を作り上げたから。だから、篠原夫妻はライト兄弟と違って、ライバルに脅かされることはない。
もちろんこれにも意味はあるけど、あたしたちは常に「不老産業」を独占し続けることが出来る。
あたしたち不老産業に直接参入を試みずとも、不老産業に伴う新たな新天地の可能性は無限に広がっている。
新たなフロンティアの改革に向け、今周囲は動き出している。
「ただいまー」
「お疲れ」
母さんたちが、お土産を持って戻ってきた。
これらは全て、飛行機の収納庫の中に入るため、改めて窓口で手続きをしてもらう。
といっても、荷物検査自体はすぐに終わるので、あたしたちは全員で待合室に向かう。
多くの国の飛行機が、この空港を行き交っている。

中には中型機や大型機もあれば小型機もあり、多種多様な飛行機を空港で見ることが出来る。
そんな中で、一際目立つ飛行機がこちらに現れた。
そう、行きにあたしたちを運んだ、「蓬莱カンパニー」の飛行機だった。

２０２７年１２月１１日　さらばスウェーデン

「ねえ、あの飛行機」
浩介くんが、行きに乗ったボーイング７８７型の飛行機を指差す。
その飛行機には、白い塗装の上に「蓬莱カンパニー株式会社」と書かれていた。
白い塗装がかえって目立つ、蓬莱教授のビジネスジェットだった。
「ああ、あれだな」
蓬莱教授は澄ました顔で話す。何だか、とても懐かしい感じを受ける。
ノーベル賞を取ってからというもの、色々なことがいっぺんに起きすぎた。
ともあれ、あたしたちはこのボーイング７８７型機を使って成田空港に戻ることになっている。
「お客様、準備が出来ました」
日本人のスタッフさんが呼び掛けて、あたしたちは立ち上がってゲートを進む。
廊下を進んでいくと、既にあたしたちの飛行機は目の前に迫っていた。
チケットを入れてゲートを潜ると、そのまま廊下と飛行機のドアが直接つながっているため、アップダウンなしに直接機内へと入ることができた。
「うわー、懐かしいわー」
機内は、５日前と変わらない権勢を誇っていた。
１列を贅沢に使った大きな長いふかふかのソファー、更に機体後方にはドリンクバーや歓談スペース、最後方には離着陸時用にファーストクラスと思われる仕様の椅子がある。
飛行機のファーストクラスは、特別な値段と雰囲気だけど、この飛行機を見ると、ファーストクラスでさえ貧相に見えてしまう。
まあ、普通数百人が乗る飛行機に最高でも２０人だもの当たり前よね。

「お待ちしておりました。当機の総機長です。帰りは私が総機長を務めさせていただきます」
行きと同じように、あたしたちをパイロットさんとキャビンアテンダントさんが、出迎えてくれる。
これもまた、素晴らしいサービスだと思う。
行きと同じ人が、総機長というわけではなく、別の機長さんが今回の機長になっていた。
「機長さん、お久しぶりです。あれ？　総機長さん、行きとは違うんですね」
最初にこの疑問を呈したのは、比良さんだった。
「ええ、よくあることです。パイロットが例えば往復飛ぶときに２人とも機長資格をもっていた場合、１人は副操縦士役になるわけですけど、行きと帰りで入れ換えることはよくありますよ」
機長さんが、懇切丁寧に説明してくれる。
まあこのあたりは、人事的な問題もあるのかしら？
ずっとリーダーというのもあれなのかもしれないわね。
「ありがとうございます」
「さあ、当機は間もなく離陸いたします。ご準備ください」
「あいよ」
総機長さんの号令と共に、あたしたちは一番後ろにあるファーストクラス仕様の席へと移り、シートベルトを着用する。
クルーたちもそれぞれ、所定の位置についた。
ちなみに、定員が２０あるので、あたしたちで１０人とキャビンアテンダントさんたちでちょうど２０人なので、キャビンアテンダントさんもあたしたちと同じ座席に座っている。
このあたりは、ビジネスジェットならではの「緩さ」と言っていいだろう。
ウィーン
飛行機の、よく分からない音が聞こえてくる。
「さようならストックホルム」
あたしは周囲に聞こえない程度に、外の風景に向けてそう呟いた。

しばらくして、ボーイング７８７のエンジンが灯る音がした。
そしてゆっくりと、飛行機が動き出した。
いよいよ帰るんだという思いが、強くなっていく。
しばらく誘導路を走行すると、飛行機がくるりと向きを変える。
そして、一気にエンジンがうなり音を上げ、後ろへと押される感覚を受けた。
窓の外の景色がゆっくりと速まっていき、そして飛行機が優しくふわりと浮き上がった。
その後、上空で少々旋回しながら、窓の外から見える、海に浮かぶストックホルムの町並みが少しずつ小さくなっていく。
次にここに戻ってくることは……もしかしたら二度とないかもしれないわね。
あーでも、過去の受賞者として招かれることはあるかしら？
長生きしたとしても、未来のことは分からないわね。
「帰ったらどうしようかしら？」
「んー家のこともあるしなー、しばらくはノーベル賞の余波が続きそうだぜ。でもま、きちんと家がちゃんと整っているかが今は心配かな」
これだけ長い間家を留守にしていたのも初めてのことで、あたしたちは庭師さんを始め、みんなちゃんとやってくれているか、おばあさんの面倒を見てくれているか心配になる。
まあ、彼らもプロなので、大丈夫だとは思っているけどね。
ポーン
しばらくすると、前方に灯っていたシートベルトサインが消えた。
あたしたちは窮屈な（といっても、他の民間飛行機ならファーストクラスだけど）この座席から離れ思い思いの列のソファーに陣取る。
冬の強烈な偏西風の関係で、帰りは行きよりも2時間以上飛行時間が短い。そのため食事も昼と夜だけで、睡眠時間は短い。
ちなみに、通常の旅客機よりも人数が遥かに少ないので、飛行機も高高度でかなりのスピードを出すことが出来るとか。

「どうしようかしら？」
離陸から1時間、空の宮殿は居心地がいいけど、それでも暇なことには代わりはない。
そこであたしは目の前のモニター画面を見ながら、アニメを見ることにした。
ちょうど1クールほど見れば、暇潰しにはもってこいのはずだわ。
あたしが見たアニメは、１０年程前に大ブレイクを果たしたアニメで、いわゆる「懐かしのアニメ」とか「古典アニメ」というジャンルに入る。
主人公は大きな鞄を背負った記憶喪失の少女で、色々な動物の特徴を持ったキャラクターと交流しつつ、自分の記憶について時に困難を乗り越えつつ目的地を目指すというお話だ。
あたしがちょうど優一から優子に変わるか変わらないかという時のアニメでもある。確か優子になってからだっけ？　そこまで覚えてはいないや。
飛行機はバルト海上空からサーレマー島に差し掛かる付近を飛行中で、なおも高度を上げているが、一旦３１０００フィートで巡航に入った。
「当機の機長です。間もなく昼食の時間となります。ご準備ください」
一時停止を挟んで休みつつ、ちょうど2話目を見終わった矢先、機長さんのアナウンスが入った。
間もなく昼食ということで、あたしたちは一斉に寝転がっていたソファーから起き上がって後ろの歓談スペースに移動した。
歓談スペースには、既にキャビンアテンダントさんに交代パイロットさんも座っていた。
「何が出るかしら？」
あたしは、料理を楽しみにしていた。
「最近高級品ばかり食べている気がするなあ」
父さんが頭をひねりながら言う。
「あなた、それはいつものことよ」

母さんが身も蓋もない突っ込みをする。
そう言えば、母さんたちから見たあたしたちってどんな感じだったのかしら？
「ねえ母さん」
「何かしら優子？」
母さんがあたしの方に向き直る。
「あっちの席から見たあたしたちってどんな感じだったかしら？」
「うーん、優子、すっごい緊張してたわよ」
母さんの回答は、予想通りだった。
まあ、あたしでも動きに出てるって分かったもの。
でも緊張が表に出てなかった人なんて蓬莱教授くらいだったわよね。それがかえって目立ってたし。
「でも、雰囲気はすごかったわ。内容はよく分からなかったけど、優子ちゃん、国王陛下に反論してたじゃない」
ここで、飲み物を取りに行っていたお義母さんから横槍が入る。
確かに、あたしにもその記憶がある。
国王陛下は、あたしのノーベル賞を認めてくれたけどね。
「うん、篠原さんには驚いたわ。まさか篠原さんが国王に自己主張しちゃうなんて」
そして今度は、他の列から声がかかる。
見ると永原先生たちだった。
「ええ、英語はわかりませんけど、会場の雰囲気で分かりました」
「私も」
永原先生が続くと、更に比良さんと余呉さんもそれに続いた。
あたし自身、「優子」を心がけるために控えめで穏やかを意識し、自己主張は殆どしてこなかったのに、まさかよりによって一国の国王陛下相手に自己主張しちゃうなんて思わなかったわ。
まあ、主張の内容は思いっきり後ろ向きだったってのが大きいとは思うけど、それにしたって珍しい光景だと自分でも思うわ。
「でも、あれはほら、謙虚だから自己主張とは言わんよ」
蓬莱教授が、すかさずあたしへフォローなのか追い討ちなのか分か

らない持論を述べる。
「あー、そう言えばそうだな、後ろ向きな内容だったもんなー」
父さんは、あたしのつたない英語を理解していたらしい。
「さ、食事の準備が出来ましたー」
「おー、うまそうだなー」
運ばれてきたのは、イタリア料理だった。
あたしたちは全くイタリアとは縁がないけど、このあたりはマンネリ防止かしら？
それも日本でよくある「なんちゃってイタリアン」ではなく、正真正銘のイタリア人シェフが作ったイタリアンピッツァになっている。
既にきちんと切り分けられていて、あたしたちはそれぞれ均等に小皿に分けていく。
「どれ……はむはむ……へー、本場はこんななのね。おいしいわ」
真っ先に食べ始めた永原先生が感心する。
「そう言えば、永原先生って」
「うん、あんまり洋食は食べないわよ。もちろんたまには食べるけど、やっぱり馴染みがあるからね、特に白米は本当に美味しくなったわよ」
永原先生は、やはり和食派らしい。
白米の味の向上については、感慨深いものがあると永原先生は話す。
まあ、人生の大半を和食しかない状況で過ごして来たのだから当たり前と言えば当たり前よね。
「私は洋食派だわ」
比良さんはどうやら逆らしいわね。
「私は特に派閥はないわね」
余呉さんはあたしたちと同じで、特に和洋中にこだわりはない。
三長老も三者三様で面白いわね。
さて、あたしも一口。
パクッ
「うーん、おいしいわー」

やっぱり、本場のシェフが作った料理は物が違うわね。
それにしても、わざわざスウェーデンまでシェフを呼んだのかしら？　それはそれで忙しいことだわ。
あたしたちは、ゆっくりと食事を味わってごちそうさまをした。

「そうそう、それで優子、ノーベル賞のメダル、見せてくれるかしら？」
ご飯を食べ終わってすぐに、母さんがそう切り出してきた。
むしろ、すぐにこれが来なかったのが意外だと思う。
「うん、分かったわ」
あたしたちは、自分の手荷物のあるソファーへと戻り、手荷物の中からノーベル賞のメダルを取り出した。
「いよっ、待ってました!!」
「「ワハハハハ」」
あたしたちが戻るなり、いきなり交代の一番若い副操縦士さんが大きな声を出すと、機内は笑いに包み込まれた。
ノーベル賞のメダルを見るのを楽しみにしていたのは、あたしたちの家族や永原先生たちだけではなく、この飛行機の乗組員たちも同じだった。
むしろ、この仕事はクルーにとっても楽だし、それにノーベル賞の人を乗せるとあって、人気は高まっていたと思う。
あたしは、金色に光るメダルを机の上に置いた。
浩介くんと蓬莱教授は、手荷物のカバンを持って、そこから直接メダルを取り出して机に置いていた。
「「これです」」
「「おー」」
あたしたちが、ほぼ同時にメダルを机に出して手を離すと、群衆からは「おー」という声がかかった。
ちなみに、既にメダルを見ていた義両親のみ、ソファーに戻ってくつろいでいた。
「これ、生没年？　１８３３年かあ……」
交代操縦士にキャビンアテンダントさん全員があたしたちの３つ

のメダルを変わりばんこに見ていた。
そして、裏面のことにも当然言及されたので、それについても受け答えする。
裏面の言葉については、「蓬莱教授らしい」といった感じではなく、「ノーベル賞らしい」という反応が殆どだった。
まあ、実際ノーベル賞受賞者にはみんなこの言葉が贈られているものね。
……平和賞と文学賞は知らないけど。
「夕食では今乗務してる機長と副操縦士がここに参加するから、きちんと見せてあげてくれ」
交代乗務員さんが、そう話す。
「はい」
ノーベル賞の権威が高いことは知っていたけど、まさかこれほどとは思わなかった。
昼食から戻ると、ロシアのモスクワ上空を飛行中で、飛行機の高度がさっきより上昇して３３０００フィートになっていた。
しかし驚くべきはその対地速度で、時速が１１００キロとなっていたことだった。
行きの飛行機では８００キロを上回った場面も殆どなく、改めて冬のロシアに吹き付ける偏西風のすさまじさを思い知った。
あたしは飛行情報もそこそこに、さっきまで見ていたアニメの続きを見る。
「ふう」
ヘッドフォンから、声優さんたちの熱演が聞こえてくる。
かわいらしいタッチでありながらも、どこか緩やかなその雰囲気に、あたしの心は癒されていく。
「最近はずっと大変だったものね」
日常系アニメと言えば、現代でもアニメのジャンルとしては一大勢力を誇る人気ジャンルだ。
既に２０年も前に放送された、埼玉県在住の女子高生たちの物語が中興の祖とも言われている。

もちろん、もっと以前からこの手のアニメが放映はされていたけれど、今ではすっかりあのアニメが基礎だと思われている。
最も、あたしはアニメにはそこまで詳しくはないけれどもね。
どこか和やかな日常系アニメ、あたしは女の子になってからそういうのを全く見なくなったけど、優一の頃は少しだけそうしたアニメやライトノベルを嗜んでいた。
１０年前の知識になっちゃうけど、あの時の緩やかなアニメを少しだけ思い出しながら見る。
概ね、女子高生たちの日常という意味では、とてもいいものだった。
あたしは、あのような日常を経験できていない。
あえて言うなら、あたしが女の子になって復学直後のいざこざが収まってから、浩介くんに恋するまでの間が、一番それに近かったかもしれない。
でもその間も、体育の授業や林間学校でのトラブルはあったし、こうした緩い日常というのは、なかなか味わえないものなんだろうと思う。
あたしは、この記憶喪失の女の子よりも、ずっと波乱の人生を歩んできた。
特に大学に入ってから、あたしたちは蓬莱教授に振り回され続けた。もちろん、蓬莱教授のお陰で、あたしは莫大な財産と、最高の名誉を得ることが出来たから、感謝してもしきれない。
その代わり、多分、平凡だけど平穏な人生は二度と訪れない。
１０年、いや１００年、１０００年経っても。
ノーベル賞は、最高の賞だけど、この賞を受け取れば、平凡な人生は二度と訪れない。
会社の上級役員になって、しかも世界一の資産を持つ一族ともなれば、それはなおのこと強まっていく。
「ふう」
飛行機にとって重要な対気速度はほぼ同じだけど、偏西風に乗って猛烈なスピードで進むため、行き以上に帰りは時差ボケが強くなる。
帰ったらまた、睡眠について考えないといけないわね。

あたしは、アニメの続きを見ていく。
アニメに集中しているため、周辺のことはよく分からない。
行きの状況を考えると、これから燃料が少なくなるにつれて、また高度が上がって行くと思われる。
あたしは、ロシア上空をひたすらに飛び続ける飛行機の中で、アニメをひたすらに見続けていた。
ノーベル賞を取った帰りの、豪華な飛行機の中で、あたしはのんびりとした時間を過ごせていた。

２０２７年１２月１２日　時代と言語

「当機の機長です。まもなく夕食になります。お支度ください」
さっきの昼食の時には一緒に食べていた機長さんの放送が入る。
アニメも既に１０話目を見終わっていて、シベリアも既に東部に差し掛かっていた。
飛行機は現在３９０００フィートを巡航中、燃料を消費して機体が軽くなったことを考えれば、恐らくこの後更に上空を飛びそうね。
外側の窓を見てみると、行きの時とは違い、まだ青い空で体勢を寝転ばせて下から見ると、ほんのり薄黒い色が見える程度だった。
行きの時は４３０００フィートと７８７型機のほぼ性能限界まで登ったけど、今回はどうなるのかしら？
あたしは、体を起こして後ろの方へ向かう。
「優子ちゃん、こっちこっち」
浩介くんが手招きしている。
あたしたちに向けられた夕食は、完全な純和食だった。
白米と藁で包んだ納豆にお吸い物、そしてそばに焼き魚に漬け物のたくあんに小さな梅干しと、和食派でも滅多に食べないような純粋な伝統料理だった。
まさに、日本に帰国するには打ってつけのメニューだわ。
「最後の料理、日本へ帰る訳ですからこうした形にさせてもらいました」
食材も、別途貨物機のスペースを用意してそちらで運んでもらい、わざわざあたしたちのために国産品を取り寄せてくれたらしい。
何だかいくらＶＩＰ待遇でもここまでされちゃうと驚きだわ。
「すごいわ。まるで江戸城にいた時みたい」
永原先生も、その徹底ぶりに感激していた。
それにしても、永原先生って何を食べていたのかしら？
「永原会長って、何を食べてたのかしら？」
疑問になって聞いてみる。
「あら？　うーん、江戸城だと、各大名からの領分……あーごめん、今

は藩って言うんだっけ？　そこの殿様方が献上してくださった旬の特産食材と……えっと、今で言う天領、つまり幕府直轄領からの年貢米を食べていたわ。衣食住は城で面倒を見てくれたから、仕事を探して、お金を貯めて、それで浮世絵とか本を買ったのよ」

へえ、永原先生、意外といい生活していたのね。

まあ、江戸住みならともかく、地方は地方でかなり大変だったらしいけど、永原先生は明治維新まで江戸から出てないからそのことは知らないわね。

「へえ、他には何か食べてるんですか？」

今は休憩中の機長さんが、話に加わってくる。

確かに、江戸城だけで食事をしていたという感じではなさそうだものね。

「後は江戸前寿司……といっても今の寿司とは味も落ちるし似ても似つかないんだけど、今で言う東京湾から取り寄せたお魚がよく食べられていたわ。その前は……仕事をしながら店でお米を買ったりしたわ。当時はお米はお金の代わりにもなったから、仕事の報酬がお米だったなんてこともあったわね」

永原先生は江戸時代はほぼ変わらない生活を続けていた。

永原先生の人生の半分が、江戸時代でできている。生まれた時代である戦国時代と同じか、それ以上に永原先生の人格形成に大きく寄与したのが江戸時代だった。

江戸時代は変化のない時代と言われるが実際には全く違っていて、西暦で言うところの１８世紀から１９世紀に入ると、江戸も活気付いて色々な技術が発展したんだとか。

特に花火や浮世絵のように、「色の芸術」の発展は著しかったそうだ。

「色々な食べ物があったんですね」

「ええ、お米が中心でしたけど、それだけじゃまずいことは当時からも知られていましたから」

永原先生の江戸時代での生活は、既に「柳ケ瀬日記」によってかなり解析が進んでいる。

とはいえ、やはり本人の口から直接聞くことで、学べることも多くある。
「ズズ……それにしても塩分が多いわねこの食事」
母さんが、お吸い物を飲みながら、少し不安そうな表情をする。
「なあに、蓬莱の薬を飲んでいるんだ。それこそよっぽどじゃねえかぎり大丈夫だって。例えばビタミンC皆無の食事を取り続けて壊血病とかな」
母さんの不安そうな声に対して蓬莱教授が笑い飛ばす。
そう、蓬莱の薬を飲めば、食生活に関する制約も大幅に解ける。
もちろん、食べ物を食べすぎれば太るし、あまりに太りすぎれば若くても死んでしまうから、節制は必要だけどね。
「それにしても、お吸い物にこの焼き魚も塩がまぶしてあって、だめ押しと言わんばかりに梅干しに漬け物でしょ？　いくらなんでもねえ……」
母さんは、まだ納得がいかないみたいね。
「別に普通じゃない。そのくらいの塩分。今はそうでもないけど、江戸の私……あの時は『俺』って言ってたけど、とにかくあの当時の私だったら、『この料理味が薄い』って言ってたわ」
「「え⁉」」
永原先生のその言葉に、比良さんと余呉さんを除いた全員が驚愕の声をあげる。
「そうでしょうね」
「ええ」
比良さんと余呉さんも、永原先生に同調している。
あたしとしても、純和食だからというのを差し引いても、この塩分の多さはちょっとどうかと思うのに。
うー、まさにジェネレーションギャップを体現しているわね。
そしてもう1つ、永原先生が江戸時代には俺と言う一人称を使っていたことを暴露していた。
「永原会長、塩分のことはいいんですけど、俺ってなんですか俺って……」

あたしが、思わず突っ込んでしまった。
「あら……そう言えば言い忘れていたかしら？」
永原先生が、「そう言えば」という表情になる。
それにしても、江戸時代は一人称俺だったなんてちょっと信じられないわね。
だって、女の子が使っちゃいけない言葉の中でもトップに入る言葉だもん。
「……江戸時代までは私も使ってたのよ。江戸時代では、『俺』というのは将軍や大名、下級武士や農民、町民、商人や僧侶まで、老若男女身分問わず誰もが使える一人称だったのよ。明治になって言葉が変わって、私も修正に苦労したのよ」
「私たちもです」
「ええ」
比良さんと余呉さんも、それぞれ長い時間での言語の変化に適応している。
永原先生は、今でもたまに昔由来と思われる聞き慣れない単語や発音を、無意識のうちに出してしまうことがある。
特にあいうえおの「え」に関しては、や行の音が混じった「いぇ」のような発音をすることが度々ある。
「そう言えば、永原会長ってたまに『え』の発音がおかしいですよね。佐衛門佐が『さいぇもんのすけ』ってなってるところを何度か聞きましたし」
「あーうん、実は『え』の発音が今の発音になってから、今の日本語と同じ発音体系ができたのよ。逆に言うと、一番最後に変化したのが『え』なのよ。私が生まれた戦乱の時代の日本語は、文法そのものは高校で習う平安時代の中古日本語よりはずっと現代語に近いから、タイムスリップしても意志疎通にはそこまで苦労しないわ。でも、発音は随分となまっているから、その違いには苦労するわよ」
「これについては、私たちも分からない、会長独自の悩みなのよ」
余呉さんが、補足してくれて、あたしたちもやや真剣な表情で永原先生の話に聞き入る。

江戸後期生まれならば、外来語などを除けば、もう殆ど今の日本語と全く同じといっていい言葉が話されていた訳だけど、永原先生の時代はそうではない。
この辺りは、２００年未満と５００年以上の大きな違いとも言っていい。
「私が子供の頃、戦乱の時代で各地に流行していたなぞなぞがあるのよ、『母には2度会うが、父には会わぬものは？』っていうなぞなぞよ。戦乱の時代なら小さな子供でも解けたけど、江戸時代以降の人には古典の専門知識がないと全く解けないなぞなぞよ」
もちろん、なぞなぞというからには、理屈っぽい話でもなく、話の流れからすると、発音系統のなぞなぞなんだろうけど……
「私もはじめて正解を聞いた時にはビックリしたわ」
「あなた、分かるかしら？」
あたしが、浩介くんに振ってみる。
「俺はノーベル賞だけども、古典は専門外なんだ。高校で永原先生に習ってからからっきしだ」
浩介くんも見当がつかないらしい。
うーん、でも当時は子供にも解けたって言うわよね？
何かを見落としているんだろうけど。
「俺は正解を永原先生から以前に聞いたことあるから、話さねえぜ」
蓬莱教授が非協力の意を示す。
「うーん、難しいなあ……検討もつかん」
「昔の人は子供でもわかったっていっても、我々は現代人だもんなあ」
父さんと、パイロットの交代機長さんが同時に唸る。
キャビンアテンダントさんたちも、腕を組んで考えていたけど、誰も回答を知らない様子だった。
「じゃあ、戦乱の時代の日本語で発音するわね、『母（ふぁふぁ）には2度会うが、父には会わぬものは？』」
「「あ！」」
永原先生が昔の発音で言ってくれたので、あたしたちには一発で分かった。

そう、答えは「くちびる」ということ。
永原先生のなまった発音に、「え」ほどではないけれども、単語の頭の「は行音」が含まれていたことをあたしは思い出した。
他にも確か、「せ」や「を」の発音もなまっていたわね。
「は行の音はね、日本語の中でも特に大きく変わったのよ。江戸時代になって、それまで頭だけ『ふぁふぃふふぇふぉ』って発音してたのが、頭も含めて『はひふへほ』になったわ。でも、私が生まれる前の平安時代は『は行』は全部『ふぁ』行だったし、もっと前の上代は『ぱぴぷぺぽ』だったって言われているわ。今でこそ『藤原』は『ふじわら』だけども、平安末期までは『ふじふぁら』だし、それより前の奈良時代、中臣が藤原になったばかりの時代は『ぷじぱら』って言ってたはずだわ」
永原先生によれば、今使われている五十音図だって、戦乱の時代以前から存在はしていたが、今のようになったのは明治以降にようやく大々的に整理されたものだと言う。
もちろん寺子屋のこともあるし、そもそも地方の農村ならともかく、大都会だった江戸で娯楽を楽しむには識字は必要不可欠で、当時から「国語」や「文法」に関しては様々な教育がなされていたものの、流派が多くて江戸の子供も難儀していたと言う。
「私が持ってる『え』の訛りはね、平安初期に、あ行にあった『え』とや行の『え』と発音が混同されて、や行の方が残ったために生じたって言われているの。そして約１０００年後の江戸時代後期になって、今度は音の変化で『え』になったのよ。実は『え』というのは日本語の発音の中で、最後に変化した発音なのよ」
永原先生が、日本語の発音の変化について、様々に解説をしてくれる。
もちろん永原先生自身、後から知ったことが大半だろうけど、永原先生が古典を教えるようになったのは、何も長生きであるからだけではなさそうね。
永原先生ほど長生きしていれば、言語がいかに不安定なのかを知ることができる。

そしてそれは、あたしたちも決して他人事ではない。
だから、コックピットのクルーたちも、蓬莱の薬を飲んだあたしたちも、永原先生の話に真剣に耳を傾ける。
今後も、あたしたち日本人や、あるいは世界の人々が不老となる過程で、こうした言語の変化に対する適応は、大きな問題になりそうだわ。
特に複数の言語を話そうと思う人にとっては、それだけ長生きをすれば言語に対する適応力の負担も大きくなることを意味している。
ほぼ日本語のみで生活している永原先生でさえ、５００年間の間で訛りを完全には克服できていない。
更に言えば、動詞の活用方法や、助詞助動詞、形容詞の使い方の変化も絶えず起こっている。
今後は、蓬莱の薬によって、人間の数千年単位での生存も考えられるけど、そうなると同じ日本語でも別物に近くなっていても全く不思議ではない。
時代の変化に適用するといっても、日本語の変化に対応するのは意外と難しいんだと言うのが永原先生の話。
軽い問題だと思う人もいるかもしれないけど、昔の表現で誤解を与えることもあるし、最悪の場合、年代ごとに集団での意志疎通に支障をきたしたり、国家国民の分断要因にもなりかねないから、この問題は今のうちに対策を考えておいた方がいいわね。
「さて、私の話はこの辺にして、みんな戻ろうかしら？」
一通り話し終わった永原先生が打ちきりを提案してきた。
まあ確かに、この手の問題は話し出すと止まらないものね。
「ああ、いい勉強になったよ」
「うん」
コックピットのクルーたちは、満足した表情になっていた。
あたしも、ソファーに戻って、アニメの続きを見ることにした。
さて、あの続きはどうなっているのかしら？
「ふう、終わったわね」

昼食と夕食の時間、その後の長い歓談の時間などもあってか、アニメを見終わったのは飛行機が徐々にロシアを南下し始めてからだった。

あたしはふと他の乗客の様子を見てみると、みんな一様にリラックスをしていた。

また、永原先生とお義父さんは、仮眠を取っているようにも見えた。

正面の飛行機に記された情報、一事は対地速度が１３００キロ近くになっていたものの、今は進路が南東になったので１０００キロ程度に落ち着いている。

もちろん、対気速度では音速の壁は越えていない。

そして高度の方は、行きが４３０００フィートまで昇ったのに対して、今回は４１０００フィートだった。

もちろん、この高度でも十分に高いわけで、窓の外は濃紺色の空を見せていた。

行きよりも2時間短いといっても、やはりスウェーデンから日本に戻るには相応の時間が必要になる。

あたしは、アニメや少女漫画などを見終わった時に感じる独特の喪失感の余韻を味わいながら、機体前方にある飛行機の運行情報に釘付けになっていた。

飛行機は、もうまもなくロシアを抜けて日本海に入る。

もちろん家につくのはまだだけど、何故か既に「帰宅」したかのような錯覚も受けた。

もちろん、成田空港での手続きに、場合によってはマスコミ応対、そしてスカイライナーと山手線を使った帰宅も必要になってくる。

ちなみに、蓬莱教授たちとは、行きと同じように日暮里駅で解散することになっている。

スウェーデンはともかく、日本で固まっての行動は目立つので、あえて日暮里駅で時間差行動を取ることになっている。

あたしたちも、永原先生たちが乗る一本後ろの電車で帰宅することになっている。

あたしは、意味もなくドリンクバーでオレンジジュースなどを飲

み、時折トイレのために立ち上がる。
こうした行動を何往復も繰り返す。
「うちの優子、今まで以上に女の子になったわ」
「ええ、でも現地のメディアはどう報じたかしら？」
「何、問題ないですよ。私たち協会にとっても、篠原さんは広報部長ですから」
母さんとお義母さん、そして永原先生の3人が同じソファーに座って話をしていた。
永原先生に言われるまで殆ど意識していなかったけど、あたしは今でも日本性転換症候群協会で広報部長を勤めている。
これはあたしが大学生になってからの役職だけど、今は殆ど蓬莱カンパニーでの活動が主になったことや、社会の理解も進んだお陰で、殆ど広報は不要になってしまった。
それでも、永原先生は、あたしを平の正会員に降格はさせず、引き続き広報部長の座に留めてくれている。
いや、もしかしたら、あの時のあたしも、無意識のうちに広報部長を意識したのかもしれないし、あるいはこうした世界に向けての広報として、蓬莱カンパニーの役員を勤めていることそのものが、協会にとっての「広報」になっているのかもしれないわね。
「ふう」
あたしは、飛行機が新潟上空に入り、高度を徐々に落とし始めたのを見た。
もうすぐ、飛行機は着陸体制に入る。
そう言えばこの辺の新潟にも、家族で旅行したっけ？
富山も、大学生の時浩介くんと2人で旅行したわよね。懐かしいわ。
「ご搭乗の皆様、当機の機長です。当機は間もなく着陸体制に入ります」
「さ、準備するぞ」

「はい」
蓬莱教授の掛け声と共に、あたしたちは荷物をまとめ、入念に忘れ物がないか確認する。
特にノーベル賞の賞状と賞金の小切手、メダルは厳重に確認した。
これを無くしたら、何のためにスウェーデンまで遠征したのか分からないものね。
あたしたちは全てを終えると、荷物を持って機体後方の座席の方に移動した。
「ふう」
ランプはまだ灯っていないけれど、あたしたちはシートベルトを締める。
成田空港の滑走路の関係上、飛行機は一旦空港を通りすぎて銚子沖に出る。
そこからくるりと回転して向かい風になるように着陸する。
窓の外には、日本の都市の様子が写っていて、あたしたちに「帰ってきた」という安心感を与えてくれた。
飛行機が一旦海の上の青い風景を見せつつ旋回し、あたしたちは他の飛行機に続いて滑走路に着陸する準備に入った。
「間もなく着陸いたします。ご注意ください」
機長さんがそう言うと、飛行機の高度がどんどんと下がっていく。
エンジン音を吹かせながら、機体が地上に接触し、エンジン音が逆噴射に変わる。
しばらく減速した後に一旦飛行機は停止し、そのまま誘導路へと向かう。
目的地はもちろん、行きに行ったときと同じプライベートジェット専用のターミナルになると思う。
やがて飛行機が完全に停止し、あたしたちは機長さんの指示にしたがって前の出口から降りることになった。

２０２７年１２月１２日　逃避行　～見捨てられた遺産駅～

「「ありがとうございました」」
乗務員さんが総出で、あたしたちに頭を下げて出迎えてくれる。
あたしたちはもう夜更かししたような感覚なのに、成田空港の現在時刻は１２月１２日の午後３時２０分、ストックホルムではもう真っ暗になっていた時間帯だけど、成田の外は完全に明るかった。
ほんの小さな違いだけど、それでもあたしたちに「帰った」ことを自覚させるには十分だった。

タラップを降りて、あたしたちは日本の地を再び踏んだ。
そして、５日前と変わらないプライベートジェット専用の控え室に通された。
「懐かしいわね」
「ああ」
浩介くんが眠そうにそう答える。
今この時も、多くの飛行機が離陸し、着陸している。
あの中には大勢の乗客が乗っている。
あたしたちはノーベル賞受賞者として帰国したわけだけど、こうしてたくさんの飛行機を目にすると、あたしたちも小さな蟻のようにちっぽけな存在に見えてならないわね。
蓬莱教授や永原先生たちも、さすがに疲れたのか口数が少ない。
特に永原先生にとっては、初めて祖国を離れた経験で、同じ「初めての海外」でも、２７歳と５０９歳では感じるものが違うと思う。
「お待たせいたしました。荷物を運び終わりましたのでこちらへどうぞ」
行きとは打って変わってボーッとしていると、あたしたちが預けていた荷物が置かれているスペースに案内された。

あたしたちはそれぞれ自分のキャリーバックを手にいれ、手荷物をその中に入れる。
そして、順路通りに空港第2ビル駅への道を進もうとしたところで蓬莱教授がストップをかけた。
「向こうには報道のカメラが大勢いる。どうやら俺たちのことを狙っているらしい。俺たちはまだいいがご両親や永原先生たち、特にご両親は純粋な私人だ」
どうやら、この先にテレビのカメラなどが待ち構えているらしい。
うーん、事前に断っといたはずなんだけど、伝達ミスかしら？
「インターネットの情報によれば、どうやら空港第2ビル駅にいく道まで続いているらしい。どうも並んでいるのはきちんとした記者クラブの報道機関ではなくて海外のフリーランスのパパラッチどもが多いらしい」
蓬莱教授がスマホを取り出して悩む。
おそらく、外国人のパパラッチはマスコミが糸を引いているに違いないわね。
まあ、どちらにしてもあたしたちを出し抜けると思ったら大間違いよ。
「蓬莱先生、大きく迂回して一般の旅客に紛れて空港内を歩くはどうかしら？　もしくは一旦別の国内線に乗り換えて、羽田から帰るというのは？」
永原先生が代案を出す。
「いや、おそらくそっちにも報道陣を待機させているはずだし、どちらにしても俺達は人目につきすぎる。困ったなあ……人払いをしてもらうかしかし……」
マスコミのカメラのフラッシュ、あたしたちはいいとしても、特にあたしたちの両親をマスコミと接触させてしまうのはまずい。
完全な私人で、しかもサラリーマンでしかないから、肖像権が大きな問題になってくる。
「蓬莱先生、私に考えがあります」
永原先生がそう言うと、何やら窓口の人に許可を求めている。

窓口の人が、恐らく空港内電話を掛けている。
やり取りが数分続いた。
「こちらにご案内いたします」
空港の人はそう言うと、もと来た道と逆の方に足を伸ばした。
あたしたちは訳もわからずそっちへと進む。
途中、「ＳＴＡＦＦ　ＯＮＬＹ」と書かれた扉の中に入る。中は廊下でオフィスも入っていた。あたしたちは気まずい雰囲気でそこを抜ける。
そして、そのまま空港第２ビル駅より一番遠い社員用の出口から屋外に出た。
その後、あたしたちは停めてあった３台の社用車へとへと乗り込んだ。
ちなみに、あたしたちのグループ、永原先生のグループ、そして両親のグループなのは今までと同じ。
マスコミの報道陣は、空港の屋外出口にも数人待機しているが、まだこちらに気付いていない。
「本来は先程の通路は業務用スペースですし、これは社用車ですけれども、今回は特に篠原夫妻ご両親の肖像権のこともありますので特例です」
「ええ、助かります」
そして、そのまま大きく空港第２ビル駅と反対方向に進んだ。
「どこへ向かうんです？」
浩介くんが心配そうに言う。
「別の駅だとさ」
蓬莱教授が代わりに答える。
別の駅ってどう言うことかしら？
ちなみに、撹乱のためなのかあたしたち３台はそれぞれ別の経路を辿っていて、あたしたちはかなり周囲をぐるぐる回っている印象を受けた。
そして、とある小さな建物の前で車は止まった。
「ふう、良かったわ。ここには誰もいないみたいね」

車が止まり、あたしたちは周囲を見て、誰もいないことを確認したら車から降りた。
「ありがとうございます」
「いいってことよ。報道陣逃れは今まで何度もあったんだぜ」
おじさんがにっこりとそう答える。
永原先生からのメールで、「下で待っている」というメールを受け取っていた。
「ほう、ここか」
あたしたちは、建物にあった「東成田駅」という看板が見てとれた。
辺りを見回すと、どこからどう見ても成田空港という感じの場所だった。
「ともかく、降りるか」
「うん」
あたしたちは、無駄に広くて立派な階段を降りていく。
成田空港はあれだけの人だかりがあるのに、ここは人っこ一人いなくて、不自然なほど静まり返っていてとても不気味である。
まるで、時代に取り残されたような、そんな感じがしていた。
「あ、3人とも、無事で良かったわ」
ウグイスの鳴き声が聞こえる静かな空間で、母さんの声が響く。
「もー、母さん大袈裟だわ。あれ？」
あたしたちは、すぐに違和感に気付いた。
というのも、荷物が人数より1つ多い。
そして、お義母さんの姿が見えない。
「あれ？　俺のお袋は？」
「今偵察に行ってるわ、ほら」
母さんが向こうの方を指差すと、「空港第2ビル駅　連絡通路」とあった。
また近くには、この寂れた空間に似つかわしくない、優雅で立派な絵画が飾られていた。
平安時代の貴族の遊びである「曲水の宴」を再現したもので、１９８０年5月２１日だから今から４７年も前のものだ。

「もしかしてここって？」
「ええ、東成田駅は元成田空港駅なのよ。でも、遠くて不便ということで、ここは空港連絡駅としての役目は終わったわ。京成線が初めて成田空港に乗り入れた時にはね、ここが京成線で一番多い駅だったこともあるのよ。今は最下位に近いけどね」
永原先生がそう説明してくれる。
今はここに近いところで働く空港職員などが、わずかに利用しているにすぎないという。
ここから空港第２ビル駅への連絡通路があり、そちらに迂回すれば、報道陣を交わせるのではないかという算段だ。
あたしたちの両親は、ノーベル賞に決まった後もマスコミの取材を受けなかった。
父親陣は、それでも悪質なメディアに追い回されていたけど、お義母さんはほぼメディアには無名で通っている。
トン……トン……トン……ホーホケキョ！
「あ、帰ってきたわ」
母さんがそう言うと、連絡通路を小走りで進むお義母さんがいた。
「どうだった？」
余呉さんの問いに、お義母さんが頭の上で×をつける。
どうやら、無理みたいね。
「ダメ、改札前にも報道陣がいて、もう空港第２ビル駅は使えないわ」
「……仕方ないわね。出来れば使いたくなかったんだけど、ここ東成田駅から脱出しましょう」
永原先生が言っている言葉とは裏腹に、ちょっとだけ嬉しそうな表情でそう話す。
あたしたちは、ＩＣカードを取り出して券売機で残高を確認する。
「とりあえず、残高不足なら後でチャージして。とにかくここから早めに、なるべく遠くに逃げた方がいいわ」
「分かったわ」
あたしは、改札機にＩＣカードをかざす。

「ありがとうございます」
駅員さんが1人立っていて、あたしたちに挨拶をしてくれる。
この時間帯は需要はほぼ無いはずよね。
「あの、もし報道陣が来ても『誰も来ていなかった』って言ってくれるかしら？」
永原先生が駅員さんに念を押す。
「ああ、空港の方からこちらに連絡が入ってますよ。大丈夫です。私も、蓬莱教授を支持していますから」
「ありがとうございます」
駅員さんの方にも、話は回っていた。
やっぱり、蓬莱カンパニーがなせる業なのかもしれないわね。
とにかくこの駅、無駄に広い。
だけど時が止まっているのか、まるで廃墟にも見えてしまう。
「永原先生、ここって」
「ええ、確かに現役の駅よ」
永原先生は、少しだけわくわくしていた。
駅構内の広さは確かなもので、かつての面影が忍ばれる。
しかし今は、むなしくひたすらウグイスの鳴き声だけが漂っている。
あたしたちは、ホームに出た。
そこにも明かりが点っていて、エスカレーターも動いていた。
駅名標は新しかったけど、ベンチの広告は、どこか古い雰囲気がした。
「不気味な場所ね」
乗客はもちろんあたしたちしかいない。
どこに行っても「ホーホケキョ」という音が一定感覚で流れてくる。
ほ、本当にここに電車が来るのかしら？
「ええ、皆さん、あちらのホームを見て見て？」
「え？」
永原先生が指差した先、あっちのホームは、暗くなっているけど、明かりがちらついている。

「ほら、あそこの駅名標」
永原先生がカメラを取り出し、パシャリと写真を撮る。
あたしたちは、永原先生のカメラの画面を覗き込む。
「「え!? こ、これって……」」
見間違うはずもない。
そこの駅名標には「なりたくうこう」と書かれていた。
更に奥には広告も見えている。
「この駅が東成田駅になったのは今から35年前の1992年、篠原さんたちが生まれる前ね。こっちのホームは今は留置線として使われているわけだけど、客扱いをしないから、当時のままの駅名標と広告が残っているのよ」
「何それ……廃墟そのものじゃない」
母さんが、驚いた口調でそう話す。
もう30年以上前に、この駅は空港駅としての役目を終えた。
第1ターミナルと第2ターミナルの間にある、打ち捨てられた駅。
今はひたすらに、ウグイスの声が響き渡る。
「さて、ともあれここはかくまってもらったけど、この人数でまとまって行動していたら、いずれインターネット経由でマスコミが嗅ぎ付けて、先回りされてしまうわ」
永原先生がまた、指揮官になる。
この辺は、鉄道に詳しい永原先生の腕の見せ所だわ。
「グループを3手に分けるわ。まず、石山さん夫婦と篠原くん、そして余呉さんのチーム」
「はい」
指名された4人が横に並ぶ。
「4人は適当に偽名を考えて、家族を装ってもらうわ。余呉さんは悪いんだけど篠原くんの妹になってくれるかしら?」
余呉さんは幸い、荷物が小さい。
確かに兄妹とするには似てないけど、撹乱するにはちょうどいいわね。
「分かったわ……お兄ちゃんっ!」

余呉さんが渾身の演技で浩介くんに抱きつく。
「うー」
余呉さんの演技力が凄すぎて、あたしはまた嫉妬してしまう。
やっぱり、あたしも独占欲って強いわよね。
「篠原さん、少し我慢して。次のグループは篠原くんの両親と比良さんの組み合わせで行くわ。比良さんは篠原さんの妹設定よ」
「……分かりました。姉さん、よろしくお願いいたします」
あたしよりずっと年上の比良さんが、あたしに頭を下げて来る。
こっちは礼儀正しい妹という感じね。
「あーうん、よろしく」
「3つ目は私と蓬莱先生、ただし電車内ではそれぞれ距離を離して、別人を装うわ」
当然、最後に残るのは永原先生と蓬莱教授の組み合わせで、この組み合わせで歩くと嫌でも目につく。
そこで、微妙に距離を取って別人を装うことになった。
「ああ。分かった」
「じゃあ指針を発表するわね。ここから京成成田駅までは共通行動を取るわ。京成成田駅からは特急に乗るけど、乗る車両はそれぞれ別々にするわ。余呉さんグループは京成線の特急を使って、まず『青砥』っていう駅で『京成押上線』に乗り換えてくれるかしら？　そこから更に『押上駅』で『半蔵門線』に乗り換えて、渋谷駅で解散するのよ」
「「はい」」
「浩介くん、分かっているとは思うけど、井の頭線で渋谷の喧騒は避けた方が無難だわ」
電車が混んでいるなら問題ないけど、混んだ路上はとても大変なことになる。
特に渋谷の駅前は何故か外国人観光客が多数たむろしている。
最初に出発した時にそうだったように、井の頭線から神泉駅を使わないのは大変なことになる。
「比良さんグループは『京成津田沼』で降りて、そのまま徒歩もしくは『新京成線』を使ってＪＲに乗り換えてくれるかしら？　そのまま品

川駅で乗り換えて、渋谷駅で解散するのよ。船橋の方が便利だけど、そのルートは素直すぎるから今回は使わないわ」
「「はい」」
「あ、そうだわ」
あたしが、パッと変装を思い付いた。
あたしは、手荷物から髪留めを取り出すと、長い髪をそれぞれ両サイドで縛ってツインテールにして、トレードマークの頭の白いリボンを鞄にしまう。
うー、鏡で見るとこの髪型、始めてやったけどかなり幼く見えるわね。
今まではストレートロングが男受けが一番だと思ってたし、実際それで浩介くんも射止めたわけだけど、これも悪くないわね。
「お、優子ちゃんかわいいな。でも、ストレートロングこそ優子ちゃんって感じだから、優子ちゃんって感じが全然しねえぜ」
浩介くんが最もらしい解説をする。
そう、あたしと言えば超がつくとてつもない巨乳に、どんなアイドルよりもかわいい顔、そして黒髪のきれいなストレートロングに頭の白いリボン、この内髪型はいつも同じ髪型をしていたので、これを崩しちゃうと案外別人に見えてしまう。
あたしを見て、比良さん余呉さんも、それぞれ簡単な変装をしていた。
永原先生も、いつの間にか制服姿の時にしかしないツーサイドアップになっていた。
一方で、男性陣、浩介くんと蓬莱教授は、全く変装をしていなかった。
「その辺でいいわよ。最後に私と蓬莱先生だけど、私たちは特に狙われると思うから、行かなそうなルートを選ぶわ。まず、『勝田台』という駅で乗り換えて、そこから『東葉高速線』というのに乗り換えるわ。そこから直通先の地下鉄に乗って、そのまま『高田馬場』で解散するわ。このルートは東葉高速線の運賃も高い上に時間もかかるルートだから、まず選ばれないルートよ。各自目的地についたらメールで連

絡してね」
「了解した」
蓬莱教授も、覚悟を決めていた。
あたしたちは、待ち時間を利用して、メールの雛形を作る。
あたしたちのメールアドレス全員がＣＣに入った仕様のメールだ。
「それじゃあ一旦、京成成田行きの電車を待ちましょう」
「そう言えば、芝山千代田駅ってのもあるんだな。芝山って何だ？」
蓬莱教授が、駅名標を見て反対方向を気にしている。
「ああ、芝山鉄道線のことよ。日本一短い鉄道なのよ。色々な理由があって別会社になったの。延伸計画もあるっちゃあるけどね。あ、テロ防止のために警察のおまわりさんが巡回していることはあるけど、特に気にしないで大丈夫よ。おそらくだけど、ここの駅員さんと同じように空港から話はつけてあると思うから」
ともあれ、複雑な事情が絡んでそうだけど、今は深く追求する余裕はない。
ホーホケキョ
相変わらず、物静かで不気味な空間に、ウグイスの鳴き声が響き渡る。
ホームやベンチなども、所々整備が行き届いていないように見えるのも、廃墟感を加速させている。
「もうすぐね」
永原先生が、もうすぐ電車が来ることを予見した。
既にこの駅に来てから、結構な時間が経っている。
「あ、来たわ！」
左側を覗き混んでいた永原先生が、電車が来たことを言うと、すぐに「ガタンゴトン」という電車の音がしてきた。
って、アナウンスも何もないって、凄いわね。
地方の路線でも、あんまり無い光景だと思う。
短編成の電車の中は、殆どお客さんがいない。
芝山鉄道線から来たと思われるお客さんがポツンポツンと乗っているだけ。

そのわずかな乗客たちも、あたしたちを見てやや怪訝な表情をしている。
「じゃあみんな、無事を祈るわ」
「ええ」
電車が止まる直前、永原先生が左隣の車両に移動する。
あたしたちは、浩介くんのグループと離れて、それぞれ車両の違うドアから入る。
扉が開かれ、特にアナウンスもなく、あたしたちは電車に乗り込み座席に座る。
電車はピカピカで真新しく、電光掲示板もあって、そこにはきちんと「京成成田行き」と書かれていた。
大きなサイレント、笛のような音が鳴ったと思えば、すぐに扉は閉じられて発車する。
トンネルの中を進みながら、電車の自動音声は次で終点であることを案内していた。
ちなみに、警察の人は今回いなかった。
電車はしばらくするとトンネルを抜け、やがて明るい地上が見えてきた。
それを見てあたしは、「やっぱり廃墟から生還した」という感覚を受けた。
次は終点なので、他のわずかな乗客と共に、あたしたちは扉を降りる。
不審な目では見られたけど、特にスマホをいじってる人もおらず、あたしが変装していることもあってか、特に気付かれなかった。
京成成田駅のホームには、一般のお客さんと思われるお客さんが数多くいた。
この時間帯は、京成成田駅には特急しか来ないらしい。
これに乗って、まず永原先生たちが勝田台で、あたしたちが京成津田沼で、浩介くんたちは青砥で乗り換える。
あたしたちは、お互いに意識しながら、別の離れた車両に行くように心がけた。

「間もなく――」
「来たわね」
幸い、他の乗客たちはあたしたちに気付いていない。
せいぜい、わざわざ東成田駅を使う物好きな家族連れとしか思っていないみたいだわ。
よし、ここからが本格的な「逃避行」の始まりになるわね。

## ２０２７年１２月１２日　逃避行　～戻ってきた家～

空港第２ビル駅から来た特急電車が、ホームに入線する。
見た感じでは、大きなキャリーバッグを持った旅行客もそれ相応に乗っている。
まあ、京成本線の沿線から成田空港使う人だって多いものね。
ドアが開かれ、あたしたちも乗り込む。
あたしたちはうまくスペースを工夫し、一部の荷物をお義父さんの手で網棚に上げてもらって迷惑になら無いようにする。
車内は外国人観光客が多かった。
「それにしても、何だかわくわくしますわ」
比良さんが、思いもよらないことを言った。
あたしは、不安の方が大きいのに。
「比良さんはそう思うんですか？」
「ええ、ＴＳ病になって女の子にされた時に、仲間にばれないように、幕末の時は必死で逃げたんですよ。あのときと比べればどうってこと無いですけど、こういう逃避行って楽しいじゃない」
「あはは……」
あたしたちは、近隣住民の迷惑になるということで、松濤に住むセレブな人たちの力も借りつつ、一帯を恒久的に取材禁止にしてある。
もちろん、比良さん余呉さんや、永原先生の家、更に小谷学園も同様だ。
まあ、蓬莱教授関係だけは、出禁にはできなかったけどね。
まあ、本来なら事前に成田空港もそうするべきだったんだけど、「他の取材」のこともあって、テレビ局を出入り禁止にはできなかった。
それでも、あたしたち蓬莱カンパニーなら、自粛してくれると思ったんだけど……詰めが甘かったわね。
列車は、京成佐倉駅までは各駅停車で、そこからは特急の停車駅に止まる。

特急と言っても、それなりに停車駅があるらしく、また案内を見る限りでは、「快速特急」が走る時間もあるらしい。
途中の駅では少しずつお客さんが乗ってくる。
昼間の時間帯でも、それなりに人はいて、でも、あたしたちのことは誰も気にも止めていない。
……いや、あたしの胸は、相変わらず男性の視線を釘付けにしているわね。

「――間もなく、東葉勝田台です」
あたしたちは、比良さんと姉妹ごっこ、義両親と実両親ごっこをしながら、電車で暇潰しをする。
ボロが出る危険性もあるけど、全く無言でいるとそれもそれで問題だ。
たまにお義母さんが「静かにしなさい桂子、恵美」と言ってくる。
ふふ、桂子ちゃん恵美ちゃんごめんね。
電車は東葉勝田台駅に無事に到着する。
あたしたちは、ホームの方を見ると、永原先生と蓬莱教授が、離れて歩いていた。
永原先生があたしたちの方を見ると、軽く手を振ってくれていた。
あたしたちも、周囲に怪しまれない範囲で軽く会釈を返すことにした。
「姉さん、津田沼から先のことですが」
「え、ええ」
そうだった。今の比良さんは妹だったわね。
あたしは、髪の両側が縛られて、ツインテールにしてあったことを思い出す。
「新京成線にします？　それとも、歩きますか？」
「うーん、ここは新京成線を使いましょう」
1駅の短い区間とは言え、街中を歩くのは神泉まで避けておいた方がいい。
あたしはそう判断し、新京成線に乗ることにした。

既に空港に着陸してから1時間以上が経過している。
そろそろ、マスコミも梯子を外されたと思って諦める頃合いよね。
ま、そうは言っても家に帰るまでが遠足だから、最後まで警戒は解かないけど。
電車は更に西へ西へと進む。
やはり行きに使った「スカイアクセス」と比べると、カーブや徐行も多くて、かなり遅い印象はぬぐえない。
昔は、ここにスカイライナーが走っていたということだから所要時間の長さがうかがえるわね。

「次は、津田沼、津田沼です」
「降りるわ」
「ええ」
案内放送が流れ、あたしたちは荷物の準備に取りかかる。
周囲の人も、あたしたちのためにスペースを作ってくれていた。
それにしても、ストレートに髪を下ろしたロングヘアーと、頭の白いリボンが無いだけで、これだけ気付かれないものなのね。
ふふ、これは今後も使えそうだわ。
「ふう」
あたしたちは、キャリーバッグをそれぞれ引いて、駅の案内を便りに、「新京成線」の乗り場へと乗り込んだ。
ちなみに、アップダウンがある時は、階段は無論のこと、エスカレーターも使わずに極力エレベーターを使うことになった。
その方が目立たないし、体力も消費しないからだ。
松戸行きの電車が、既にホームには止まっていて、あたしたちは1駅だけなので、開いていた扉の反対側の奥に立って陣取る。
「間もなく発車いたします、次は新津田沼です。総武線ご利用のお客様は次の新津田沼でお乗り換えください」
そして、昼間のやや空いた時間帯のため、座席もまばらな電車が発車した。
新京成線での1駅はとても近かったけど、それでも降りるお客さん

はそれなりにいて、あたしたちは悪目立ちしなかった。
津田沼からは、ＪＲの総武快速に乗り換えて、そのまま品川駅に行くことになっている。
「あんまりぐずぐずするわけにもいかないわね」
眠気は、既に吹き飛んでいた。
最後に寝たのが１８時間近く前で、本来ならとんでもなく眠いはずの起床時間なのに、あたしはこの逃避行を、まるで駆け落ちするカップルのような楽しさがあった。
でもそうじゃなくても、あんまりゆっくりしていると、夕方ラッシュにぶつかる危険性もあった。
もちろんそれだけは避けたいので、あたしたちも早め早めの移動を心がけたい。
そういう意味でも、今回の新京成線利用は英断だったと我ながら思う。
「こっちね」
「ああ」
あたしたちは、快速電車のホームへと進む。
ちなみに、ＩＣカードをチャージしたのはお義父さんだけだった。
「グリーン車は足元の数字――」
ホームの真ん中付近にはグリーン車の列車がついている。
大きな荷物を持っていることや、また防犯上からも、あたしたちは考えるまでもなくＩＣカードにグリーン券を入れていく。
残り時間が短いので、他のメンバーも次々グリーン券を買う。
比良さんとあたしが見た限りでは、あたしたちに向けてスマホやカメラを向けている人はいないみたいだった。
「間もなく――」
聞きなれた駅の案内放送を通じて、電車が入線する。
車内は空いていて、グリーン車ももっと空いていた。
「どこにする？」
お義父さんが訪ねてきた。
「平屋がいいわ。荷物も大きいし」

「だな」
あたしたちは、グリーン車の端にある平屋部分へと進む。
ここには誰もおらず、あたしたちが事実上貸切状態となった。
「ふう」
あたしは、ようやく肩の荷が下りたという感じがした。
後は品川まで乗って、山手線に乗り換え、渋谷で井の頭線に乗り換えれば全てが終わる。
もちろん、それで終わりではないだろうけど、とにかくようやく睡眠につけるのは事実だった。
電車のドアが閉まり、電車が動き出す。
次の停車駅が船橋であることを伝える放送が流れる。
太陽は既に西日で、日没が近いけれど、電車が西に向かって進んでいるので、眩しくはない。
あーでも運転士さんはやりにくいかしら？
快速電車は快調に飛ばしつつ東船橋駅を通過し、そして船橋駅に停車した。
ここでも、グリーン車に乗ってくる人はそれなりにいたけど、あたしたちの平屋に来る人はいなかった。
その後、市川、新小岩、錦糸町と進み、外も徐々に暗くなっていった。
電車は地下に入って、東京駅を経由しながら、降りる駅である品川駅へと向かっていった。
「次は、品川、品川です」
新橋駅に停車し、その次の駅が品川駅、あたしたちは棚の上に上げていたキャリーバッグを床に下ろす。
結局、ここに来たのはグリーン車のアテンダントさんだけだった。
外はいつの間にか、暗くなり始めていた。とはいえ、まだ会社が終わる時間ではないから問題ない。
平穏無事に電車を降り、あたしたちは一目散にエレベーターへと向かう。
あたしたちの荷物が大きいため、エレベーターの使用は特に気にさ

れなかった。
品川駅の駅構内は比較的単純で、あたしたちは緑色の山手線ホームへ向かい、渋谷、新宿方面の電車へ乗り換える。
電車内はまだ比較的空いていて、あたしたちも座ることができた。
とにかく、海外旅行の帰りだし、ここまで来たら本当に早く家に帰りたいという気持ちが先行してくる。
電車は特にトラブルなく渋谷駅に到着した。
「比良さん、私たちはこれで失礼します」
「ええ、お疲れ様でした」
比良さんは更に山手線を使って、向こう側に家があるとのことなので、あたしたちとは渋谷駅で別れる。
後は毎日の通勤ルートで馴染みの深い井の頭線との乗り換えルートを利用し、各駅停車で1駅、神泉駅に行くだけ。
「目立たないように、さりげなく、ね」
「ええ」
あたしたちは、再び3人になっていつもの道を歩く。
既に「帰ってきた」も同然な、身近で安心感のある場所だけど、一番の危険地帯もここ。
もし観光客やマスコミに見つかったら大変なのであたしたちも一番ピリピリする。
幸いにして、渋谷駅のこのルートにマスコミはいない。
もちろん、隠し撮りする不遜な記者も、これまでの制裁警告からいるはずもなく、あたしたちは無事に井の頭線の改札口に来ることができた。
「ふー」
あたしたちは、はりつめていた神経を一気にほどく。
さすがに、ここまでは追って来られない。
始発駅が渋谷というのもあって、車内はそれなりに混んでいて、あたしたちも座ることはしなかった。
電車は、あたしたちがスウェーデンから帰ってきたことなど全く気にも止めず、いつも通り発車し、いつも通り神泉に到着した。

「ふー」
あたしは、改札を降りて駅前に着くと同時に、髪留めをほどいてツインテールからいつものストレートロングに戻る。
そして、あたしはキャリーバッグを引きながら、やや小走りで家に向かった。
交差点を曲がり、家が視界に見えてきた。
この辺は「超富裕層」と呼ばれる人々が多く住む高級住宅街で、その中でもあたしたちの家は一際大きい３２０坪という広さを誇っている。
今は庭師さんや、家政婦さんなどが、家を維持してくれている。
あたしは、家の正面に立ち、もう一度周囲に誰もいないことを確認してから、財布の中から家の鍵を取り出して、扉を開ける。
まずは義両親を先に通し、あたしが最後にもう一度鍵をかけ直す。
浩介くんたちや、永原先生たちからメールはまだない。
「開けるわね」
「ええ」
鍵をもう一度取り出し、上下の扉を開ける。
ガチャ！
「ただいまー！」
あたしの言葉と共に、どこからか声が聞こえて、大きな足音が聞こえてきた。
「あ、お帰りなさいませ……あれ？　石山様と、旦那様はどちらですか？」
家政婦さんに、庭師さんも集まってきて、あたしたちを総出で出迎えてくれる。
その中でも、代表の人が一人、あたしに当然の疑問を述べてきた。
ちなみに、介護の人はおばあさん専属なのでここにはいない。
「えっとその……実は面倒な事態になりまして、別行動を取っています」
「分かりました。私たちは深く詮索する権利はありませんので。ではえっと……」

みんな、これからどうすればいいのか悩んでいた。
「来客用のお部屋で待機してくださるかしら？」
「分かりました」
あたしの指示に従って、来客用のお部屋に全員が入っていった。
みんなは誰一人として、「ノーベル賞のメダルを見せて欲しい」とは言わなかった。
さすがに、プロだわ。
彼らが全員部屋に入り終わると、嘘のような静寂に、家が包み込まれた。
懐かしい空間、とても強い安心感が、あたしを包み込む。
ここにさえいれば、ひとまず大丈夫という確信があった。
後は、残りのメンバーが無事に戻って来られるかどうかね。
「ふー、とりあえず、各自の部屋に行こうかしら？」
お義母さんが疲れた顔で話す。
「そうね。メールはあたしが出しておくわ」
あたしはキャリーバッグを自室まで持っていき、義両親もそれぞれ自分の部屋に行く。
ちなみに、寝る時間は午後８時を目標にしてある。
あたしは、他のグループに向けて、「篠原優子グループ、無事に渋谷駅で比良さんと別れ、私たちは自宅に無事到着、現在の所神泉駅から自宅までマスコミなし」というメールを送信した。
ブーブーブー！
１分も経たないうちに、「篠原浩介グループ了解」「蓬莱了解」「永原了解」「比良了解、こちらも間もなく自宅に到着予定」という返信が立て続けに寄せられてきた。
「ふう」
あたしは、疲れを一気に取るため、お風呂を沸かすことにした。
家の中は、清潔に保たれていてあたしたち不在の間の苦労が忍ばれるわね。
「ただいまー」

そして、数分間ベッドで横になった後、今回のノーベル賞の賞品を金庫に仕舞い終わった矢先に、家の扉が空けられ、浩介くんたちが帰ってきた。
それとほぼ同時に、比良さんと余呉さんがそれぞれ無事に追っ手を交わして自宅へ逃走に成功したとのメールと、永原先生と蓬莱教授が高田馬場駅で解散し、永原先生が無事に逃げ切ったというメールが届いた。
最後の蓬莱教授も、いよいよ沿線に入ったということで、どうやら問題は無さそうね。
「あなた、お帰りなさい」
「ああ、とりあえず全員無事だな」
あたしたちは総出で出迎え、家政婦さんたちもこちらへと来た。
「では、我々の役目は終わりましたので、これで失礼いたします」
「何かございましたら、またご利用くだされ」
「ええ、助かったわ」
みんなとても礼儀正しくて、秩序よく玄関から家の外へと出ていく。
「ふう、あなた、今風呂を沸かしているわ」
「おう、そうか。とにかく今は荷物整理して、そっからだな」
浩介くんも実両親も、かなり疲れた表情で家に上がった。
あたしはもう一度自室に戻り、お風呂が沸くまでの暇潰しとして、テレビをつけることにした。
「えー速報です。今年のノーベル生理学・医学賞を受賞した蓬莱伸吾氏、篠原浩介氏、篠原優子氏の３名や、人類最高齢として知られる永原マキノ氏を含む男女併せて計１０名が、今日午後３時過ぎに、搭乗していた飛行機が成田空港に無事着陸したのを最後に、行方が分からなくなっております」
「え!?」
あたしたちは、どうやらとんでもないことになっていたらしい。
「各テレビメディアによりますと、蓬莱教授、篠原夫妻を含めた１０名は日本時間の昨日午後５時頃に、自家用のボーイング７８７でストッ

クホルムを出立、日本時間の今日午後3時過ぎに無事に成田空港に着陸しております。報道陣カメラは、ビジネスジェット専用ターミナルの全ての出入り口に待機しておりましたが、えー現在も蓬莱教授らの姿は見えず、先ほど記者の一人が中に入ったものの、既にもぬけの殻であったと言います」

うえー、とにかく、会社のみんなにメール送らなきゃ。それから記者クラブにも電話しないと。

ブーブーブー！

再び携帯電話が鳴る。そこには、「こちら蓬莱、無事に自宅に到着した。これで全員無事にミッションをコンプリートした。マスコミ関係については、全て俺の方で済ませておくので、優子さん浩介さんは休んでて欲しい」とのメールがあった。

「行方不明となっていますのは、今年のノーベル生理学・医学賞受賞者でありまして、蓬莱カンパニー株式会社会長にして世界一の資産家でもあります蓬莱伸吾氏、同賞受賞者で同社社長、世界第2位の資産家でもあります篠原浩介氏、同賞受賞者で同社常務、同じく世界第2位の資産家で篠原浩介さんの妻の優子氏、及び両氏の両親、更に同社相談役で、また日本性転換症候群協会会長でもあります人類最高齢の永原マキノ氏、同社専務取締役兼同協会副会長の――」

この豪邸で堂々とくつろいでいるあたしたちが、「行方不明者」として扱われるシチュエーションが、まさに「してやったり」で、堪らなく面白い。

あたしは、そのメールを見て、踊らされているマスコミたちのことが、ほほえましく思えた。

ピンポーン

すると、あたしたちの家の呼び鈴が鳴った。

「はーい！」

あたしが代表して、玄関へと向かう。

玄関を降りて入り口の門まで行くと、近所の人が心配そうにあたしを見ていた。

「あの篠原さん、テレビで行方不明って――」

「あーうん、全員無事よ。ちょっと報道陣を避けようとしたら大騒ぎになっちゃったみたい。今は蓬莱教授が話をつけていますわ」
あたしが、近所のおばさんにそう説明する。
「そう？　マスコミ嫌いもいいですけど、いくら蓬莱カンパニーとはいえ、やり過ぎには注意してください。やつらは何をしでかすか分からないですから」
「ええ、ご忠告感謝いたします」
あたしは、それだけ言うと、完全に日没になったのもあって、寒いのですぐに家の中に戻った。
あたしたちは、お風呂に入ってこれまでの疲れを癒しつつ、ご飯は食べずにそのまま寝た。
5日ぶりに寝た我が家のベッドはとても寝心地がよく、部屋やお風呂の広さもあいまってあのスイートルーム以上の居心地だと実感できた。

翌日、インターネットでは、「マスゴミ、またもや蓬莱カンパニーに一杯食わされる」「取材避けのために迂回したら行方不明と騒がれた件」「蓬莱カンパニー及び成田空港側は篠原夫妻の両親の肖像権に配慮」「ノーベル賞祝賀モードに水を刺したマスゴミ、なおコントの模様」といった反応が返ってきた。
また、あたしたちが東成田駅から逃げたため、東成田駅に関しての話題も多く上がるようになった。
あたしたちのノーベル賞受賞に、最高のオチがつけられた。
明後日からは、あたしたちも蓬莱カンパニーに復帰した。
ほぼ本社を孤軍奮闘で回してくれていた和邇先輩には、あたしたち全員で感謝した。
こうした騒ぎもあって、蓬莱カンパニーに対する注文は増加した。
みんな、結構意外と値下げを待てないらしいわね。

## 兆候

「はぁ……はぁ……はぁ……」

目が霞ながら、あたしは天井を見つめる。

ひ孫の顔を見たい１００歳を越えたおばあさんのために、あたしたちは全力を尽くしていた。

おばあさんはさすがに老衰が激しくなってきて、数年前のような元気さもなくなっていた。

生活も一段落していて、また家も現状広すぎるくらいに広いので、そろそろ本格的にあたしたちも考えることにした。

「うー」

浩介くんも、理性が完全に吹き飛んでしまっている。

あの時からそうだったけど、やっぱり理性をつなぎとめる要素がなくなると、簡単にこうなっちゃうのね。

「あなた、また明日ね」

「ああ」

あたしたちは、何とかパジャマを着て、それぞれの部屋に戻った。

とにかくよく寝て、明日以降の仕事に差し支えないようにしないといけないわね。

「うーん……」

１２月もクリスマスが終わって末の末になると、ようやくあたしたちのノーベル賞フィーバーも下火になった。

職場での扱いも、最初こそ物凄い歓迎ムードだったけど、１週間もすれば、あたしたちがノーベル賞に決まる前と同じになった。

これからは、年末調整にオフィスの大掃除など、様々なイベントが待っている。

話題が収まりかけた最初こそ、相変わらず熱しやすく冷めやすい、いわば飽きっぽい大衆に辟易したけど、今思えばそれも大事なことだと思えてくる。

「優子ちゃん、最近気分が乗らないね」

浩介くんがポロッとこぼすように言う。

「うん、どうもなんか違和感があるのよ」
浩介くんにはまだ言っていないけど、実は1週間前に生理の予定日だったのがまだ来ていない。
もちろん、これまでにもこうしたちょっとの生理不順はあったけど、それでも数日程度の誤差で、1週間となるとちょっと記憶にない。
あたしの中で、何とも複雑な、言葉に言い表せない気分が沸き起こる。
でも、今持っている感情の殆どが、「不安」に属するものだと思う。
「無理はするなよ。どうせいつか産休に入るんだから」
浩介くんが、あたしの体調を気遣って優しくしてくれる。
もう、夜とは大違いだわ。
最も、そういう所が、あたしの心を捉えて離さないんだけどね。
「ええ」
あたしも、妊娠中の過程はよく知っている。
確か妊娠初期って、「つわり」とかがあるのよね。
「うー」
仕事に戻る。
あたしも蓬莱カンパニーの常務取締役という大役を担っている。
もちろん、あたしの出産や産休に備えて、余呉さんという代役はもちろん存在している。
また、あたしの家には幸い「祖父母」が両方ともいるので、あたしが仮にすぐに会社に戻ったとしても、もちろん「保育園」何てものは必要ない。
というより、今でさえ部屋が余り気味なのに、保育園なんかに預けたらそれこそ究極の近所迷惑というものよね。
蓬莱カンパニーという名前の前には、無下に落選もさせられないだろうし。
もちろん、あたしたちはそんな理性の無いことはしない。
幼稚園に入るまでは、あたしたちや両両親のもとで、すくすくと育ててあげたいわね。
って、まず妊娠したかも分からないのに。変なあたし。

「うーん」
どうにも今日は仕事が捗らないわね。
生理中以外で、ここまで体がだるくなっちゃったのってあったかしら？　とはいえ、仕事をサボるわけにもいかないしきちんとやらなきゃいけないわね。
あたしは、自分の体をごまかしつつ、仕事を続けた。
今は蓬莱カンパニーも落ち着いていて、全国への支店展開がどんどん進んでいる。
スペースは大半が倉庫なので、セキュリティ系のことをしっかりすれば問題ない。
あたしたちのノーベル賞効果も、そろそろ薄れてきたお陰で、マスコミ対策に経営リソースを割かなくて良くなった。
思ったよりも他の経費が小さくて済みそうなので、蓬莱カンパニーの支店展開が思ったより早く進んでいる。
一方で、工場での薬の生産も、予定通り順調に進んでいる。
あたしの体調とは裏腹に、会社の経営はなおも順調だった。
あたしたち蓬莱カンパニーの株価は現在は落ち着いていて、日経平均株価やＴＯＰＩＸとよく連動している、安定性のある株として、投資家の魅力を集めている。
「ふう」
ダメだわ、全然仕事が捗らないわね。
あたしは、仕事を早めに切り替えて、家で安静にすることにした。
「お疲れさまでーす」
「常務、最近元気がないですよ」
女性社員の一人から、心配そうな顔で声をかけられた。
えっと確か、この人は去年の忘年会であたしからアドバイス受けた子だっけ？
あれから彼氏できたのかしら？
「あーうん、少し、ね」
周囲には何も言っていないけど、やっぱりこうして違和感はみんな

感じているみたいね。
「お体、気を付けてくださいね」
「うん、ありがとう」
ともあれ浩介くんにも、「体調が悪いので」と告げてから、今日は先に上がらせてもらうことにした。
うー、何だか少し、吐き気もするわね。生理不順、もしかしたら生理停止かもしれないけど、それと何か関係あるのかしら？
あたしは、息をやや切らせながら帰宅する。
うー、生理でもないのに体が重いわ。
「ただいまー」
あたしは家に帰り、自室に入る。
もちろん、あたしにもこの軽い体調不良に思い当たる節はある。
あたしは重いからだを引きずりながら、妊娠と出産に関する文献をインターネットで調べることにした。
「えっと、つわり、かしら？」
今恐らく、あたしがなっているのはこれ。
もしくは、それ以前の妊娠超初期段階で起こる体調不良だった。
……そうだわ。確か、母さんに妊娠検査器を貰ったんだっけ？
「えっと、確かこっちに」
あたしは、引っ越した時の記憶を便りに、妊娠検査の機器を取り出す。
うー、頭痛の腰痛が大分ひどくなってきたわね。
何とか寝れば我慢できるかしら？
「あったわ……ふー」
うー、ダメだわ。少し寝ないと。
あたしはそう思い、ベッドの上にレディースーツのまま横になった。
とにかく今は、休まないと。
ピピピピッ……ピピピピッ……ピピピピピピピピピピピピ――
「ん……」

少しだけいい気分で寝ていると、ピピピピッという小刻みな音の次に、連続的な高音が、あたしを起こしてきた。
誰かの呼び出しかしら？
「うー」
あたしは、ベッドの近くにあるボタンを押して音の発生源を止めると、壁のモニターにお義母さんがいた。
うー、気分悪いわね。
「優子ちゃん、ご飯よ。どうしたの？」
お義母さんが、かなり心配そうな表情であたしを見つめていた。
まあ、お義母さんからだと、あたしの顔が横に見えるはずだものね。
「うー、気分悪いから寝てたわ」
多分、顔色も良くないと思う。
「そう？　大丈夫？」
「ちょっと大丈夫じゃないかも」
「そう？　リビングまで行けそう？」
「無理」
「じゃあ、冷蔵庫に入れておくわね。何かあったら、きちんと相談するのよ」
「う、うん……」
そう言うと、モニター画面から映像が消えて、再び静寂が部屋を支配した。
あたしは再びベッドに倒れ込み、睡眠を再開した。

「はぁ……はぁ…」
翌朝、今年ももう後僅か数日という年末も迫る時期になって、あれから更に体調が悪化したあたしは、会社に行って仕事するどころか、ベッドからも起きられないでいた。
そしてベッドの隣には、お義母さんと浩介くんが看病をしてくれていた。
「じゃあ、私はお掃除してくるわ。浩介も、社長なんだから会社に遅れちゃダメよ」

「分かってるって」
資産家になっても、息子は息子らしく、お義母さんからは世話を焼かれる立場らしい。
あたしは、お義母さんが持ってきてくれた野菜たっぷりの食事を食べる。
多分、日にちからいっても、あたしはまだ妊娠初期段階、安定期にはまだほど遠い。
「いい？　妊娠初期は特に赤ちゃんにとっては大切な時期よ。お野菜、特にほうれん草に多く含まれる葉酸をたくさんとらなきゃダメよ」
お義母さんは、もう妊娠が決まったような顔をする。
そういえば、昨日妊娠検査をしようとしたんだっけ？
「うん、で、でもまだ決まった訳じゃ……」
まだ、妊娠検査薬を使った訳じゃない。
ただ、これまでにないくらいに予定日を過ぎても生理が来ていないと言うだけのこと。
「そうね。でも優子ちゃん、顔に出てるわよ」
お義母さんが意外なことを言う。
あたしの妊娠疑惑について思い当たる節があると言う。
「え⁉　に、妊娠が顔に出てるって――」
「優子ちゃん、思い詰めてたもの。落ち着いてないっていうか、それにスウェーデンから帰ってきてから、優子ちゃんよくお腹を気にしてたし」
お義母さんに、あたし自身でも気付いていなかったことを指摘される。
どうやら、あれ以来、ずっと無意識に子宮を気にしていたらしいわね。
コンコン
「はーい」
突然、ドアがノックされた。
ガチャッ

「あれ？　母さん」
　扉が開けられ、中に入ってきたのは母さんだった。
「優子、具合大丈夫？」
「えっと、ちょっとだけ頭が痛くて、肩こりもいつもより激しくて、気分も悪いわ」
　母さんの心配そうな表情に、あたしは素直に現況を説明することにした。
　今は吐き気も、ほんの少しだけある。
「そう……ねえ優子、会社、しばらく休んだ方がいいわ」
　母さんも、やっぱり考えていることは同じみたいだわ。
「うん、でもまだ決まった訳じゃないから」
「そうね。今日は体調不良でいいけど、きちんと妊娠検査薬で調べるのよ。恐らく来年になったら、妊娠初期の症状がもっと強まるわ」
　母さんもまた、あたしが妊娠をしているという前提で話す。
　どちらにしても、あたし自身も、浩介くんとの赤ちゃんが欲しかったのは事実だった。
　ここ数週間の夫婦生活をあたしは思い出した。
　浩介くんは、今までの責任感の強さも、あたしを思いやる優しさも、あの時は全て吹き飛んでいた。
　今までも浩介くんは時折そうした顔を見せていたことはあったけど、あの日あたしが「赤ちゃんが欲しい」と告げてから、露骨になっていた。
　ひたすらに、あたしを征服すると言う願望、性欲というものの最も本能的な部分が、むき出しになっていた。
　あたしもあたしで、浩介くんにレイプされたいと思ったことは何度もあった。
　でも、ここ数日の行動は、そうした今までの「お遊び」とは一線を画したものだった。
　多分、あたしは浩介くんにレイプされて、赤ちゃんを妊娠させられたんだと思う。
　もちろん世間一般の人は「そんなわけない」と言うと思う。でもそ

う、これは気持ちの持ちようだから。
「優子、ともあれ私たちも赤ちゃんを産んだことがあるから、もっと頼っていいのよ」
そう、あたしと浩介くんの産みの親、だものね。
本当、親と一緒に住んでいればこうして頼れることが出来るもの。
一人暮らしで生活費を詰めている人からすれば、あたしは恵まれに過ぎているわね。
……まあ、世界一の金持ち一家だし、それくらいなきゃ逆に夢も希望もないって世間から言われそうだけど。
「うん、ありがとう……」
「ふふ、孫が楽しみだわ。男の子かしら？　女の子かしら？」
お義母さんが微笑みを浮かべながら話す。
「そうねえ、優子は何となく男の子を産みそうだわ」
気の早いママ世代に、あたしは苦笑いを浮かべる。
ともあれ、少しずつ体調を良くしていかないといけないわね。
しばらく休むと体調がよくなった。
つわりの吐き気などは、もう少し経ってから起きることらしい。
ともあれ、この時間ならラッシュも終わっているので、あたしはベッドから立ち上がり、会社に行くことにした。
「優子、大丈夫？」
あたしが立ち上がったのを見て、母さんが心配そうに声をかけてきた。
「うん、もし妊娠してて産休に入るなら少しでもお仕事を片付けないと」
ひとまず、もしあたしが妊娠しているとすれば、今はいわゆる「妊娠超初期」から「妊娠初期」と呼ばれる段階に来ているらしい。
症状がないママもいるらしいけど、あたしみたく女性ホルモンが大量に出たのに伴って頭痛や腰痛、肩こりや気分の悪化といった症状を訴える人もいる。
「でも優子、来年以降の妊娠初期は特に無理をしないように気を付けてね。今とは比べ物にならないくらい辛い時間が来るわよ」

「ええ、分かってるわ」
もちろん、つわりに対する恐怖感はある。
でも、何故かあたしは少しだけワクワクもしていた。
自分の中で、新しい命が作られているんだと思うと、これまで以上に嬉しい気持ちにもなれた。
空いた電車で通勤中に、あたしは以前の永原先生の言葉を思い出す。
１０年前の夏、永原先生は「妊娠と出産を経験したＴＳ病患者の母性本能は、とても強い」と言っていた。
あたしには、まだよく分からないけど、今後どうなっていくかは知っておいた方が良さそうね。
コンコン
「あなたー、書類持ってきたわよ」
「あれ？　優子ちゃん、体大丈夫なの？」
社長室に入って、書類を浩介くんに提出する。
浩介くんは、あたしを心配そうに見つめている。
まあ、無理もないわよね。
でも、顔色はよくなっているはずだけど。
「うん、今は年末だし、もし本当なら来年から本格的にきつくなってくるから、今のうちにっていう感じ」
「そうか、無理するなよ。風邪とかも流行ってるからな」
浩介くんが、心配そうに言う。
ノーベル賞を取っても、体調管理ができない人はいるものね。
「大丈夫よ。分かってるわ」
あたしは、体のだるさを感じることはあったけど、何とか仕事を続けられた。
浩介くんも、社長の仕事は忙しい。
少しでも、あたしも助けないといけない。そのためには、今のうちにやれるだけのことをやってから余呉さんに引き継いで、産休に入らないと。
そのためにも、今のうちにできる仕事をなるべく多くこなす必要が

あった。
「えっと、これよね」
業務がキリの良いところで一段落し、あたしは鞄の中に隠してあった妊娠検査器を、服のポケットにし舞い込む。
女子トイレは空いていたのであたしは悠々と個室の中に入る。
えっと、これに尿を当てればいいのね。
あたしは、いつもと違う体制なのを考慮して、スカートと下着を脱ぐ形でトイレに腰かけて、検査器を取り出す。
「ふう……」
あたしは、一通り終わった後に、検査器を見てみた。
「あ……」
検査器は、陽性だった。
「んっ……」
それを見た瞬間に、あたしの目が急激に熱くなり、止めどなく涙が流れてきた。
「うっ……ひぐっ……ふえぇ……」
今までにない嬉し涙で、トイレから出ることができない
愛する浩介くんとの間の我が子が、あたしの体の中で、あたしが新しい命を育てているんだって。
そんな思いが続いていた。
あたしの中でも、どこか「本当に女の子としてふさわしいんだろうか？」っていう不安があったのかもしれない。
ノーベル賞の時にも、無理解な海外メディアが、ＴＳ病のあたしを「本当に女性と断言していいのか？　トランスジェンダー、あるいはそれとも違う第３の性として扱うべきだ」と書いたこともあった。
この検査器の結果は、あたしにとってみれば、そうした声を完全に否定してくれるものでもあった。
今になって、またあたしの中で「女性」という自覚が芽生えた瞬間でもあった。
あたしの中で「男性」が完全に消えたのは、浩介くんとの結婚式の夜でのことだったけど、あたしの中で「中性」が完全に消え、ほぼ全

て「女性」に染まったのは、多分この瞬間だと思う。

体調は安定していたのに、午後の方が仕事に集中できなかった。幸い、みんなあたしが本調子でないことは知っていたため、誰も何も言わなかった。

## 激動の1年が終わる

「ただいまー」
あたしと浩介くんが、時間通り家に帰る。
浩介くんもあたしも、年末の仕事を終えたら、家に帰って忘年会でのスピーチの内容を考えないといけない。
そして、あたしにはもう1つ、言わなくてはいけないことがある。
「ねえあなた」
「ん？」
あたしの部屋の前で、あたしは浩介くんを呼び止める。
お互い、まだ着替えはしていない。
「ちょっといいかしら？　あたしの部屋で」
「あ、ああ……」
浩介くんが、少し動揺しながらあたしについてきてくれる。
もしかしたら、浩介くんはまだ決めかねているかもしれない。
「あのね、あなた、聞いてくれる？」
「うん」
あたしの心臓もドキドキしている。
お腹の中に、赤ちゃんができているかもしれないということを、これから告白するんだから。
愛の告白やプロポーズは、男からでもできるけど、これは絶対に女の子にしかできない告白だった。
「あのね……実はもうずっと……来て……ないの」
あたしは、少女漫画でもよく出てきた言葉を、口に出す。
顔を下に向け、恥ずかしい感情を必死に抑えて、小声で呟く。
「うっ、も、もしかして来てないって……まさか!?」
浩介くんも、驚いた表情でそう話す。
それはそう、あたしが妊娠しているという告白そのもので。
「うん、これ、見てくれるかしら？」
あたしは、ポケットの中から、陽性を示した妊娠検査器での結果を見せる。

検査器だけでも陽性陰性は分かるようになっていて――
「これ、陽性……だよな、えっと、じゃあ……」
「ええ、あたしのお腹の中に、あなたの赤ちゃんがいるの。多分まだ、目にも見えない小さいサイズだと思うけど」
あたしがそう言うと、浩介くんの顔がパッと明るくなった。
嬉しさで一杯の浩介くんを見ていると、あたしも嬉しくなっちゃうわ。
「おお、そうか、なあ、家族に話しても？」
「ええ、いいわよ」
あたしがそう言うと、浩介くんが明るい顔で部屋から出ていった。
あたしは、そのままパジャマに着替える。
妊娠中にするべきことは何なのか？　それもきちんとあたし自身が自覚しないといけない。
あたしは、これから母親になる。
しばらくして、ご飯を知らせるランプが点灯した。
あたしはそれを見て部屋から出る。
テレビのニュースは相変わらず、新技術の成功や実用化、更に経済の好調のニュースをどんどんと流していた。
「優子ちゃん、浩介から聞いたわよ」
食卓につくと、お義母さんから早速妊娠の簡易検査で陽性が出た話題になる。
「うん」
実は、もうすぐ忘年会で、あたしもそれに出席しなければいけない。
でも、元旦以降は、体調とも相談する必要がある。
「妊娠には、初期と末期が重要になるけど、間に安定期もあるわ。ここでは少しくらいの運動なら大事になってくるわ。と言っても、浩介を産んだときの知識だから、きちんと産婦人科の先生の言うことに従うのよ」
「ええ」
ともあれ、あたしもあたしでやるべき準備をしておかないといけない。

明日は最後の会社全体での忘年会、みんなを不安にさせちゃいけないわね。
「さて、後は先天性異常や流産に気を付けるのよ。今はまだ大丈夫だけど、今後は『つわり』っていう現象も出てくるから覚悟するのよ」
それは聞いたことがある。
吐き気とかもするみたいだし、あたしも気を付けないと。
「う、うん……」
あたしたちがご飯を食べていると、途中、既にご飯を食べ終わった母さんが乱入してきた。
もちろん母さんの耳にも「陽性」の知らせは届いていたけど、「まだ厳密な検査をしていないから、早まりすぎるのもダメよ」と、母さんにしては珍しく冷静な意見を伝えてきた。
でも、あたしには、何故だか分からないし、はっきりした根拠もないけど、お腹の中に赤ちゃんがいるという確信があった。
どうして、ここまで無根拠にそんなことが言えるかは分からない。
今のところは、弱めの状況証拠だけ。
簡易検査で陽性が出たことや、妊娠超初期に見られる症状、そして来るはずだった生理が今までにない日数で来ていないこと。
もちろん、これらはいずれも別の可能性が考えられる。
だから、偶然が重なっただけということも言える。
本当にあたしの妊娠を確定させるためには、産婦人科で決定的な証拠を掴む必要がある。
そしてそれまでは、あたしは家族以外には妊娠の可能性は伏せておくことにした。
そして、おばあさんにも、この事は今は話さないことにしておいた。
おばあさんは最近、老衰で衰弱をしはじめている。
もちろん「ひ孫」というモチベーションから、かなり頑張ってはいるけど、やはり肉体的な衰えはどうしようもない。
ここでぬか喜びさせてしまうリスクは非常に高いため、来年の初頭に産婦人科で診てもらって、その結果で話そうと思う。
「ねえ優子、もし今回失敗しても、優子たちにはたっぷりの時間がある

わ」
　母さんが、少し真剣な顔で話しかけてくる。
「ええ」
「もし失敗しても2人目を決して諦めないで欲しいことよ。うまくいっても、できればその子にも弟や妹を作って欲しいの」
「うん」
　母さんも、お義母さんも、1人しか出産していない。
　もちろん、親世代にはそれぞれ兄弟姉妹がいるけど、父親母親として、兄弟姉妹を育児した経験はない。
「そうね、優子ちゃんたちは超がつが何個もつく……というより、文字通り世界一のお金持ちよ。赤ちゃんたくさん作っても、家計は圧迫しないわ」
「あーうん、そうよね」
　実際、今年の篠原家の家計の収支の大半が、この豪邸の購入費用に充てられている。
　しかし、１００億以上もしたこの豪邸の購入費をもってしても、あたしにとっても「月給」にもなってないし、来年度はもっと巨額の収入を得られる見込みとなっている。
　なるほど、富裕層たちがこぞって寄付したがるのも分かるわね。
「ただ、もっと将来、子孫が増えた時はどうするか、よね。これだけのお金があると、寄生する子孫は絶対に出てくると思うし、現に私たちだって、お父さんたち働いているけど、雀の涙にしかなってないわ」
「うー、もう子孫の話し？」
「そうよ。ギャンブルとかにはまったりしなきゃいいけど。子孫の数が増えるとそういったケースも出てくると思うわ」
　母さんが話している話は遠い将来のことだけど、実際にそれは起こり得る。
　この家は今でこそ広くて部屋などが余っているけど、子孫が増えれば当然あっという間に手狭になる。
「うーん、あたしたちの資産は絶対に守らないといけないものね」
「ええ」

あたしたちが持っている蓬莱カンパニー株式を勝手に借金の担保にされたりしたらたまったものじゃない。
もちろん、いざとなれば巨大権力を行使することも可能とはいえ、そうした行動は非常にリスクが高い。
そうしたことを避けるためには、社会人となった後に子供をどうするかということも、今のうちに計画的に考えておいてもいいかもしれないわね。
「ま、でもとりあえず今は妊娠中の赤ちゃんに全力を尽くさないといけないわ。子孫の問題は頭の片隅に置いておくといいわね」
「うん」
とはいえ、世界一の資産家夫妻の子供、ノーベル賞夫婦の子供ともなると、否が応でも色々と比べられたり、世間の注目を浴びちゃったりするのよね。
そうした時に親としてどうするべきなのかは、あたしたちが自分達で切り開かなきゃいけない問題なのには代わりはなかった。

「優子ちゃん、忘年会、そろそろ行くぞ」
「はい」
去年よりも距離は離れているけど、とても広い会場で忘年会は開かれる。
会社そのものが大きくなったのもあって、宴会場の物理的なスペースも必要になった他、全員参加のレクリエーションもやり辛く、参加希望者だけを集めたパフォーマンスでお茶を濁すことになった。
最も、その時間も短めで、代わりに歓談の時間がとても長い。
総じて去年に比べて忘年会の自由度が格段に高くなっていた。
あたしたちは、殆ど社員のいなくなった会場でギリギリまで仕事を行い、そして最後の方で会場へ向かった。
「常務。事業推進グループから、実業団クラブの創設についての話が改めて来ています」
あたしたちの隣にいた事業部の部長さんが、実業団の創設についてを語ってきた。

メジャーなスポーツには、プロリーグがあるけど、マイナーなスポーツだけどもオリンピックの種目になっていたりすると、社会人チームという形でそこの企業所属の選手がオリンピックに出たりする。

「いまいちメリットが見いだせないのよねー」

エレベーターで待つ傍ら、あたしが以前と同じ回答をする。

「しかし、当社は既に時価総額世界一の企業となっております。その当社が、スポーツクラブを一切持っていないのは不健全という批判もあります」

企業がこうしたスポーツクラブを持ったりするのは、社員の福利厚生という目的の他に、所属社員が大会で好成績を納めたりすることで、企業のイメージ向上にも繋がるというもの。

とはいえ、福利厚生目的ならば、わざわざ会社でトップダウンにしなくても、既に蓬莱カンパニーは多数の慰安施設を作って社員の待遇改善に勤めている。

もちろんその中には、あたしたち役員兼大株主が、配当金で得た私財をなげうって作られたものも多い。後はわざわざあたしたちが主導しなくても、社員が自主的にクラブを作ってくれているし、下手にトップダウンなのはそれこそイメージが悪化しかねない。

また、あたしたちは「不老技術の提供」という、究極の社会貢献も行っており、また１０００年にもわたる分割払いさえ認めるという販売方法からも、「社会的責任を十分に果たしていない」という非難を受ける謂れはないとあたしは思っている。

「いずれにしても、社員の自主性に任せるわ」

そういう「緩い」クラブなら、社員に対する福祉的交流の範囲で行うこともできるもの。

だから、あたしたちは箱だけ作ったので後は自由にして欲しいというのが本音だった。

確かに、７年前の東京五輪やそれ以前から続く好景気で、企業のスポーツクラブも、以前ほどではないけど行われるようになった。

野球部のようなメジャーなスポーツはともかく、プロリーグなどの

ないスポーツにとって、企業は頼みの綱でもある。
「では、スポンサーなどになってみてはどうでしょうか？」
いわゆるスポーツ大会に限らず、そうしたスポンサーをしてみてはどうかという提案も来た。
もちろん、あたしにはその気もない。
「うーん、あたしとしては、知名度向上にメリットを感じないのよね。この前のノーベル賞でこれ以上ないくらいの宣伝になったし」
テレビ番組のスポンサーになれば、テレビＣＭを入れることもできる。
どちらにしても、知名度やイメージをこれ以上向上させる必要性は、あたしには感じなかった。
インターネット動画共有サイトで、あたしがフェミニストを徹底的に論破する動画は、たちまち1億再生された。
もちろん高評価が圧倒的に多く、動画のコメント欄には、ここぞとばかりにフェミニストを罵倒する言葉が並べられていた。
あたしのノーベル賞スピーチも繰り返し再生されているみたいで、世界からの評価の強さがうかがえるわね。
「はい、ですが大きな企業ですから」
「と言っても、新しい商品を開発する訳じゃないですから」
蓬莱カンパニーが強いのは、全く新しい商品の開発に携わる必要がないこと。
なので、新規商品の開発部門が、蓬莱カンパニーには一切存在していない。
あるのは、浩介くんが考案した「歩留まり改善技術」を更に改善するべく研究する部門のみ。
基本的に、蓬莱の薬は需要としては無くならないし、ライバルが出現するわけでもない。
また新薬の開発に関しては、研究者として蓬莱教授が独自に別団体として研究機関を創設している。
蓬莱教授が1回目のノーベル賞を取ったきっかけになった万能細胞も、今後は更に深く研究が進められることになっている。

もちろん、将来的には蓬莱教授が、蓬莱の薬でも治らない病気に対する特効薬を開発し、それに基づく新商品を売り出す際には、ある程度の宣伝は必要だとは思う。
でも今は、その時じゃない。
「そうですか……」
「経営は黒字だけどね、お金をどぶに捨てちゃいけないもの。それなら、少しでも早く支店網の完成と、２２世紀に予定している世界解放に向けた準備に投資しなきゃ」
そう、とにかく今は生産に生産を重ね、１００年後に全世界同時発売ができるまでに在庫を確保しなければいけない。
そのためにも、液体を保管するための倉庫の確保が大きな課題にもなっている。
各支店も、倉庫確保のために建設するという意味合いが強くなっている。
「……分かりました」
これだけ大きな企業になったと言っても、蓬莱カンパニーはまだまだ黎明期でしかない。
これから起こることは、不老国日本の大繁栄と、世界への解放に伴う人類の更なる発展。
あたしと浩介くんがノーベル賞を取ったことで、後世の歴史家はあたしたちにどれ程の賛辞を与えてくれるか、今から楽しみだわ。
ふふ、だってあたしは、後世の歴史家が書くところも見届けるつもりだもの。
「優子ちゃん」
「ん？」
あたしたちの話を横で聞いていた浩介くんが話しかけて来た。
「日本向けにはこれまで通りでいいけど、問題は世界に向けて、１００年後にどう宣伝するか、だよな」
「うーん、そうよねえ……」
確かに、日本では蓬莱カンパニーを知らない人なんていない。
でも世界は違う。

蓬莱カンパニーを知らない人もいるだろうし、もしかしたら内心不老技術に抵抗感を持つ人も多いだろう。
日本が不老技術によって社会保障の楔から解き放たれた現在、世界は否応なしに不老人種たる日本人によって、あらゆる分野で席巻されることが決まっている。
現に、蓬莱の薬の普及率は低い現在でも、既にもうその兆候は現れ始めている。
そして、１００年後についた圧倒的な差を、他の国が今後１０００年以内に覆す確率は、最大限高く見積もって１０００万分の１とされている。
そうした状況になると、世界の国々は日本に対して強烈な悪感情を抱く恐れもある。
そうすると人間は不思議なもので、「蓬莱の薬はいらない」と言い始めるらしい。
「１００年後に、世界から向けられる俺たちへの憎悪は半端ないかも知れねえぜ。何せ恐ろしいくらいに一人勝ちするんだから」
「世界へのイメージ戦略かあ、今から考えても早すぎないわよね」
とにかく蓬莱カンパニーは何事も慎重に考えていくのがモットーだった。
有り余る寿命をもって、あたしたちは他の国の人々が考えないであろう先のことまで、考えながら経営をしていた。

ビルを抜け、地下通路経由でかなり歩いたところに、お目当ての会場があった。
今年の忘年会でも、あたしはスピーチをした。
あたしも浩介くんも、ノーベル賞のことや、世界最大の資産家になったことを述べた。
蓬莱教授は、レプリカのメダルを２個ぶら下げながら忘年会に参加して、あたしたちのテーブルには人だかりができていた。
ノーベル賞受賞者として困ったことがあったとすれば、講演の依頼が数多く舞い込んできたこと。

もちろんあたしたちは会社経営が本業なので、そうした講演の以来は基本的にお断りすることになっている。

もう1つ来年には大きなイベントがある。

あたしたちのノーベル賞、更に永原先生を記念して、小谷学園に「篠原夫妻記念棟」が作られることになった。

ここは、学生向け、あるいは一般向け、あるいは在校生向けの資料館ということで、永原先生が所持している家宝や、あたしたちの学生時代の歩みなどを展示することになっている。

記念棟の前には、あたしたち篠原夫妻と永原先生の銅像が建立されることになった。

永原先生は今も小谷学園で現役教師をしているし、あたしたちもこうして蓬莱カンパニーの経営者として健在ではあるものの、そのあまりに大きな功績から、小谷学園もそれをアピールしたい狙いがあった。

まあ、テニスコートの前には恵美ちゃんの銅像が既にあったし、銅像だけの恵美ちゃんと比べれば、あたしたちはすごく恵まれてるわよね。

ともあれ、今年も忘年会が無事に終わってよかったわ。

# 先輩たちの教え

いつもと変わらない冬の朝、広い部屋で目を覚ます。
暦の上では今日は元旦、怒濤の1年が終わって、２０２８年になった。
「うー」
忘年会が終わってからというもの、徐々に倦怠感を感じるようになった。
いわゆる、妊娠の初期症状と呼ばれるもの。
覚悟していたとはいえ、やっぱり辛いわね。
ピピピピッ……ピピピピ……
「優子ちゃん、体調どう？」
起きられないでいると、モニター越しにお義母さんが声をかけてきた。
よく見ると既に午前１１時近くまでなっていた。
あたし、そんなに寝ていたのね。
「ごめん、ちょっと辛いわ」
「うん、分かるわ。吐き気はすると思うけど、赤ちゃんのためにもきちんと食べなきゃダメよ」
「うん、わかっているわ」
そう、今のあたしは赤ちゃんの分の栄養も取らないといけない。
あたしは、自然とお腹に手を当てて、丸く円を描くように布団の中でさすってみた。
多分お腹の中の赤ちゃんは、まだ目に見えるか見えないかの、小さな小さな赤ちゃんだと思うけど、これが何ヵ月かすれば、あたしのお腹も膨らんで来るのよね。
あれから数回、妊娠検査薬で追試を行ったが、その全てで陽性反応が出た。もちろん正式な検査はまだだけど、あたしたちの中では事実上妊娠は確定したも同然だった。
「お正月、三が日が終わったら産婦人科にいきますからね」
「うん」

妊娠末期になれば、あたしも入院が必要になると思う。
あたし自身の体が弱いので、お医者さんについてもらった方がいいわよね。
「じゃあ優子ちゃん、来られるときに来てね。お義母さんたちはもう明治神宮に初詣にいったわ」
そういえば、ここ松濤からなら明治神宮まで歩いて行けないこともないわよね。
いや、もしかしたら一番近い最寄りの神社が明治神宮かもしれないわね。
「ええ」
そう言うと枕元の近くにあった小さなモニターが消えた。
この家は、とても広い。
あたしたちの財力を持ってすれば、毎日お医者さんに往診に来てもらう、いやそれこそ機材ごと貸し切りすることも訳ないけど、家が広すぎるのもあるし、やっぱり色々と出揃った病院で診てもらうのが一番いいと思う。
「ふう」
ともあれ、妊娠生活については、あたしはとても恵まれていることは確かだった。
旦那の浩介くんも無理解ではないし、もちろんあたしが産休に入ることも、会社の中で以前から想定されていたことでもあった。
普通、会社の常務取締役が産休で抜けるとなれば、少なからず社員からも不満が出てくるとは思う。
そうはならないのは、やっぱりあたしがかわいくて美人で、浩介くんと仲がいいせいだと思う。
あれから安静にして1時間、既に午後になっていてもまだ起きられず、テレビなども見ながら暇を潰していたけど、あたしの気分は悪いままだった。
うー、こんな元旦はじめてだわ。
「とにかく、起きないと……」
あたしは何とかベッドから起き上がると、普段着に着替えてリビン

グルームへと急いだ。
着替える途中、誰かお客さんが来たみたいだった。
「おはよー」
「優子おはよう」
あたしが1階リビングに行くとまた母さんがいた。
いや、それだけではない。
「篠原さん、おはようございます」
「優子さん、おはようございます」
何故か、比良さんと幸子さんがそこにいた。
てどうしてこの2人がここに？
「えっと、その……」
「気にしないでいいのよ優子。お二人とも今来たばかりよ」
母さんが、あたしにリラックスしてもらうように手で促す。
そういえば、さっきお客さんらしき人の足音がしたのはそのためだったのね。
「でもどうして？」
「優子さん、妊娠してるんでしょ？」
幸子さんが、あっさりとあたしの妊娠のことを話す。
おかしいわね、浩介くんと義両親にしかまだ妊娠のことは話してなかったはずなのに。
「え!?　どうしてそのことを!?」
「篠原さん、無意識かもしれないけど、会社の中でずっとお腹を気にしてたわよ。去年は歩いている時に妊娠検査薬も一瞬見えたし、トイレから帰ってきたときすごく喜んでたわ」
うー、あれ比良さんに見られていたのね。
「で、今回ＴＳ病患者向けに妊娠中についての講習をと思ってね」
「え!?　聞いてないわよ」
妊娠時に講習があるなんて、あたしは全く聞いていなかった。
もちろん、幸子さんも比良さんも、妊婦の経験があるから、あたしにとってはとても貴重な情報源にはなるけど。
「ええ、私たちが自主的に始めたものですから」

「そうそう、あたし、優子さんに恩返ししたいと思ったわ」
どうやら、あたしに色々な妊婦の心得を伝授してくれるらしいわね。
うん、ありがたく頂戴するわ。
「いい優子、分かっているとは思うけど、今の優子はお腹の中で新しい命を育てているのよ」
「ええ、分かっているわ」
でも、改めて言われると、あたしの中でも重いのろしがかかってくる。
今あたしは、命を育んでいるんだって。
「妊娠中はとにかく1にも2にも赤ちゃんのためを思うのよ。お酒やタバコはもちろん厳禁、激しい運動も、中の赤ちゃんを傷つけかねないから絶対にダメよ」
母さんが人差し指を立てながら、あたしに指導する。
ふふ、こうやって「女」を習うのって、何だか久しぶりだわ。
「分かってるわ」
「優子さんは知っていると思いますけど、とにかく赤ちゃんに対する母性がとても強いのが私たちＴＳ病の特徴です。そうでなくても、女性は我が子を慈しみ、守ろうとするのが本能です」
幸子さんが、一瞬心配そうな表情をした。
「もしかして幸子さんも？」
「ええ、私も今何とか頑張って赤ちゃんを育てているわ。産んだ直後はもう赤ちゃんしか見えなかったわ」
幸子さんは、出産を契機に会社を退職し、今は専業主婦になっている。
元々は育児休暇で数年後に復職するつもりだったけど、我が子から離れたくなくなってこの道を選んだんだという。
幸い、協会が持っている蓬莱カンパニーの株式の配当金分配のお陰も手伝って、直哉さんだけの稼ぎでも十分にやっていけることが判明している。
「赤ちゃんを産んだときの幸福感は言葉では言い表せないわ。私ね、

また産みたいの。痛みはもう、覚えてないわ」
幸子さんが、さらっととんでもないことを言う。
幸子さんは、出産をした時の痛みを覚えていないと言う。
「え!?　幸子さん、痛み覚えてないって――」
「もちろん覚えている人もいるわ。でも、あれだけ強烈な痛みなのに、忘れちゃう人もいるのよ」
お義母さんがあたしの疑問に答えてくれる。
どうやら、忘れちゃう人と忘れられない人といるらしいわね。
うーん、「忘れるなんて考えられない」って言うのは、男な考えかしら？
「信じられないわね……」
「それだけ、出産した時の喜びと、溢れ出る母性が凄まじいってことよ優子」
母さんが、あたしを優しくさとしてくれる。
あたしも、妊娠や出産で、赤ちゃんが育まれるように、母親の中でも母性が育まれることを知っていた。
でもそれは、あまりにも過小評価したものだった。
「今までも、『私はバリバリキャリアウーマンでやっていく、専業主婦何て考えられない』何て言ってた女性が、出産した途端に専業主婦になったとか、『子供ってうるさいし嫌い』何て言ってた女性が、旦那や家族の圧力で嫌々妊娠したのに、エコーを見た途端に赤ちゃんのことしか考えられないくらいに豹変した女性なんていくらでもいるわ。生まれながらの女性でもそうなってしまうのよ。私たちが出産したら、大抵の病院はその大きな母性に驚くわよ」
「うわー、スッゴいよく分かるわー」
比良さんの話を聞き、幸子さんが相槌を打つ。
あたしは、昔永原先生に聞いた話を思い出す。
ストーカーにレイプされて妊娠をしてしまった女の子が、彼氏と中絶のために病院で検査した。
ところが、赤ちゃんのエコーを見た途端に、女の子は母性のあまりに「おろしたくない！　産みたい！」と、レイプ犯の子供でも、自分

のお腹の中で育っていた赤ちゃんを殺すのは嫌だと涙ながらに訴えたこと。
　比良さんの話は、永原先生のその話にも似ていた。
「そういうわけだから、優子、これからは赤ちゃんのためにを第一に行動しなさい。ま、お母さんは心配してないけどね」
「うん、もちろんそのつもりよ」
「まず、食生活はいつもより多く食べるのはもちろんだけど、赤ちゃんにとって健康に悪い食べ物は絶対にダメよ。最悪の場合、赤ちゃんがすくすく育たなくなるわ」
　そして、母さんからは、お正月も含め、厳しい食事制限が課されることになった。
　更に食べる量も増やさないといけないから、少し大変だ。
「いい優子？　妊娠安定期でも油断しちゃダメよ。お腹を打つことだけは絶対にいけないわ」
「ええ、ですから、今後は階段は極力使わないこと、どうしても使わなければいけない時は手すりを必ず遣うこと。歩くときはいつもよりも遅く、転ばないように常に足元に気を遣うこと。仕事の緊急だからといって急に走ったりしないこと。優子さんは履いてないと思うけど、滑りやすい靴やヒールのある靴は絶対にダメよ。そして何かあったらまず第一にお腹の赤ちゃんを守ること。これらの決まりを守ってもらうわ。赤ちゃんを守れない妊婦は産む前からの虐待親で、母親失格よ」
　幸子さんが、あたしに厳しい戒律を課してきた。
　とはいえ、要するに赤ちゃんのダメージになりかねないような行動は慎めと言うだけで、妊婦としての意識や自覚があれば簡単に守れるものだ。
「ふふ、何だかカリキュラムの日々を思い出すわ」
　あの時は、あたしは女の子になったばかりで、女の子の言葉遣いや振る舞いを、母さんと永原先生からみっちりと教育指導されていた。
「ふふ、今でも思い出せるわ。あのかわいい優子が、外見は変わってないのに中身はすっかり変わっちゃって。優子、ノーベル賞を取っても

妊娠や出産は未経験なのよ」
幸い、妊娠や出産の経験者は、ＴＳ病の経験者よりもずっと多い。
もちろん、ＴＳ病の妊娠経験者は少なくなるけど、それでも、今のあたしの教育環境は恵まれていた。
「ええ、もちろん分かってるわ」
ノーベル賞を取っても、妊娠や出産に関しては実際に体験してみないと分からない。
そういう意味では、分かりきった話だったとしても、やはりきちんと指導を受けることで、赤ちゃんへの理解を深めていきたいわね。
その後も、あたしはさまざまな注意点を学んでいく。
とにかく、赤ちゃんより自分を優先させるような母親は妊婦として失格だと、幸子さんから繰り返し叩き込まれた。
うーん、幸子さんってあたしの教え子だったのに、いつの間にか立場が逆転してしまったわね。
「うー」
一通り指導を受けていると、またあたしの気分が悪くなってきた。
「優子、大丈夫？」
「はぁ……はぁ……うっ……」
あたしは席を立ち、トイレの方に向かう。
後ろからガタッと立ち上がる音が聞こえる。
比良さんと幸子さんが、あたしの肩を支えてくれる。
家が広いせいもあったけど、トイレに向かうまでに病状は悪化していた。
あたしは便器が視界に入ると、そのまま口を向ける。
「はぁ……はぁ……うっ……おえっ……」
もう午後だけど、寝たのも早く、昨晩から何も食べてないせいで、何も出てこない。
喉の奥が締め付けられ、僅かに苦く酸っぱい液体だけが出てきた。
「うっ……はぁ……んーっ……」
幸子さんが、あたしの背中をさすってくれる。
ものすごく、気分が悪い。

吐いたものは気持ち悪いけど、そもそも吐くものが胃の中に何もなくて、それはそれで異様な状況だった。
あたしはほとんど澄んだ色のままのトイレを流し、そのまま倒れ込んだ。
トイレの向こう側では、浩介くんと母さんの声がする。
どうやら、「男子禁制」ということらしい。
うん、そうしてもらえると助かるわ。
あたしは、便器にもたれ掛かり、幸子さんと比良さんとの2人がかりで、あたしの部屋に連れていって、ベッドで休んでもらった。
「お昼、ここまで持ってきてくれるって」
「ありがとう」
とにかく、お昼ご飯を食べたらすぐに寝たい。
さっきは何もなかったからよかったけど、食べ物を吐いてしまったら、赤ちゃんへの栄養という意味でも、大きなマイナスになってしまう。
うー、何だか赤ちゃんみたいにほとんど寝ている気がするわね。
「つわりは本当に大変よ。あたしも妊娠中はすっごく苦しめられてて、それでもお腹に赤ちゃんがいると思うと、何とか耐えられたわ」
これから母親が感じるそれらの辛さは、筆舌に尽くしがたいものがある。
実際に知らないと分からなくても、いざ知ってしまえば、もっと恐ろしいことになりそうだわ。
「でも、そうした辛い経験を経てもなお、赤ちゃんを産む喜びに比べれば、何てこともないのよ。あの瞬間に比べたら、こんな辛さはゴミみたいなものよ」
「ええ、私も同感ね」
幸子さんも比良さんの言葉を聞くと、今から赤ちゃんが楽しみになってくる。
男の子か女の子かは分からないけど、どっちにしても、あたしに似て優しく、浩介くんに似て頼りがいがあって責任感の強い子に育って欲しいわね。

「比良さんって確か、いつ頃でしたっけ？」
「出産したのはもう１５０年くらい前の話よ。子供たちはもう全員とっくの昔に亡くなったわ。でもそうね……みんなとってもかわいい我が子だったわ」
　比良さんは、子孫が死に続けていることにあまり感慨は感じていないけど、それでも子供たちに、それも老衰で先立たれた時にはとても辛かったという。
「まあそうね、でもこうして今も生きているわ」
　比良さんが悩んでいたのは寿命問題で、今は蓬莱の薬があるので寿命問題は解決できる。
　蓬莱の薬によって、あたしたちは数多くの子孫を見ることができることになる。
　コンコン
「はーい」
　この家で扉が直接ノックされるのは実は珍しい。
　扉が開けられると、お義母さんが、あたしのためのお昼ご飯を持ってきてくれた。
「はい優子、少しでも食べて元気になるのよ」
「う、うん……」
　どうしてもさっきのことが脳裏に浮かんでしまう。
　それでも、食べるのが赤ちゃんのため。それならさっきの吐き気何て何でもないと思えてくる。
　あたしは、自分でも信じられないくらい、自己犠牲に躊躇しなくなっていた。
　だって今までは、寿命を伸ばすことばかり考えていたもの。
「ぱくっ……」
　さっきのこともあってか、水をやや多目に飲まされた。
　そして食事も、量は多めで、あたしはお腹がかなり膨れる感覚を受けていた。
「赤ちゃんの栄養は、過程が進むにつれて多く必要になってくるわ。今は初期だから、辛くても安静にするのよ」

「はーい」
「じゃあ優子さん、私はこれで失礼するわね」
幸子さんが立ち上がる。
「あ、幸子さん、わざわざ元旦から遠いところに」
よく考えなくても、すごいことだと思う。
「あーいえ、今年は埼玉に住んでる本家筋の親戚の家に泊まっていたんでそのついでです」
「今後はテレビ電話で交流をするわ」
「はい」
そう言えば、あたしも幸子さんを指導した時にはテレビ電話を使っていたっけ？
あれも随分古くなったわよね。
幸子さんが部屋を去り、比良さんも「用事がある」ということでここには母さんとお義母さんが残った。
「それじゃあ優子、何かあったらすぐに私たちを呼ぶのよ」
「う、うん……」
ともあれ、あたしは、気分が悪いのもあって、仰向けで寝ることにした。
部屋のカーテンとシャッターをすべて閉めて、真っ暗な部屋で静かに目を閉じた。

# 本格始動

不思議な夢を見た。
オギャアアアア!!!
「元気な男の子ですよー」
「ああ、かわいいわ。やっと、会えたわね」
にっこり微笑む若い女性と赤ちゃんがそこにいた。
「名前はそうねえ……」
あたしではなく、母さんが元気な男の子を出産していた。
もちろん、あたしの中にはこんな記憶はない。
「あなたに似て優しそうだわ」
「一番優しく……優一ってのはどうだ!?」
父さんの声が、聞こえてきた。
「ええ、いいわね」
あたしは、とても嬉しかった。
あたしもそう、産まれた時には両親から、こんなにたっぷり愛されていたんだって。
「どんな子になるのかしらね？　優しい子になってくれるといいけど」
「あはは、どうだろうなあ？」
多分これらは、あたしの推測に基づく夢だと思う。
でも、両親もあたしには期待していたのは紛れもない事実だった。
こうして、お腹の中に我が子を宿して初めて、親の気持ちが分かるのかもしれない。
「桂子ちゃん、大きくなったら何になりたいの？」
「分かんない！　優一くんは？」
「うーん、俺も分かんないや！」
幼少期に、ほんの微かに残っている桂子ちゃんとの記憶、今思っても、あたしがどんな幼少期だったか思い出せない。
ただあるのは、女の子としての幼少期ではなかったということ。
夢に出てきたのは、両親の微笑む声ばかり。

幼い頃の、まだ男の子だった頃のあたしが、赤ちゃんを産んだ両親が、ごく普通の幸せな家庭として、登場していた。
優一として成長し、乱暴になった時の姿は一切登場しない。

「ん……」
夢から覚め、天井が見える。
本能的に、赤ちゃんがいるお腹をさする。
「またこの夢……」
普通、同じような夢を何度も見ることはない。
漫画やアニメ、小説の中では同じ悪夢を何度も何度も見続けてしまうキャラクターがいる。
でも、夢というのは似たような系統の夢はあれども基本的には一期一会なものだ。
でも、赤ちゃんの妊娠が分かってからというもの、あたしは似たような、いや殆ど同じ内容の夢を繰り返し見るようになった。
もちろん、これは作り話で、母さんにも既に「そういうのじゃなかったわ」という回答を得ているもの。
そうした回答を得ても、夢の内容は変わらなかった。
「ふう……」
今日も少しだけ、気分が悪い。
でも今日は、少し頑張らないといけない。
２０２８年のお正月の三が日も過ぎ、あたし都内の産婦人科に行くことになっている。
まだお腹は全く大きくなっていないけど、いずれ大きくなることは確実だった。

「おはよう……」
眠気を擦り、リビングに来ると、母さんとお義母さんがまたあたしを出迎えてくれた。
「あ、優子ちゃんおはよう」
「うん……」

「具合はどうかしら？」
母さんが毎朝同じ質問をしてくる。
「あんまりよくないわ」
そしてあたしも、毎朝同じ内容の回答をする。
こんな状況が、そろそろ1週間続いていることになる。
「妊娠初期は特に辛抱よ。間違った生活したら、赤ちゃんが大変なことになっちゃうもの」
「ええ、分かっているわ」
「そうそう、比良さんから手紙が届いているわよ」
え!?　比良さんからお手紙？
とにかく、お義母さんから手紙を受け取った。

篠原さんへ
妊娠おめでとうございます。
今後産婦人科で診察を受けた場合、母子手帳などを交付してもらえます。
この後、篠原さんは妊娠中期になると安定期に入ることにもなります。
その場合の心構えなどはこちらでも随時指導していきますが、医師の指示をあくまで優先してください。
ＴＳ病の患者やその赤ちゃんが、出産時に死亡したり、障害を負ったりした例はありません。
また、「危なかった」といったこともありません。帝王切開の前例もありません。
ＴＳ病患者は、みんなとても安産体質であることが医学的に分かっていますので、そこまで心配しなくても大丈夫です。
それでも、サンプル数はまだ少ないので、出産が命懸けであることには代わりはありません。
あなたの子供が、すくすく育ちますように。

「優子、どんな内容だった？」

「えっとその……ＴＳ病患者は安産だって書いてありました」
「ふふ、お母さんもそう思うわ。一目見ても優子は『安産型』よ」
確かに以前も、あたしは同じことを言われた。
お腹回り、特に下腹部には肉が程よくついていて、またお尻も大きくて赤ちゃんを産むには確かにいいのかもしれない。
これはあたしだけではなく、ＴＳ病患者全体が、安産なのだという。
「ええそうね。本当に理想の体型よ」
胸が大きいのだって、中身は脂肪ということを考えたら、赤ちゃんに与える栄養が豊富という意味でもある。
でも、あたしが安産だからといって、やりたい放題していい理由にはならない。
あたしが思うに、ＴＳ病患者が安産体質なのは、その母性が強いのにも、大きな理由があるんだと思う。
「ふふ、優子ちゃん、理想の女の子に本当に近いわよね」
「うんうん、自慢の娘に成長したわ」
母さんとお義母さんが盛り上がっている。
今日は産婦人科に行くために朝食はない。
そして、男たちは働きに出ている。
今この家には、おばあさんの介護の人を除けば、女性しかいないことになる。
「さ、優子ちゃん、そろそろ出掛けるわよ」
「はーい」
あたしは、母さんに連れられて家の近くの徒歩圏内にある病院へと向かう。
ちなみに、お義母さんは家で家事を担当する。
あれだけ広い家だと、どうしても専業主婦が必要になってくるのよね。
「こっちよ」
年が明け、あたしのノーベル賞の話題もすっかり下火になって、あたしもようやく、堂々と大手を振るって外に出ることができた。

もちろん、今度の3月に発表される「世界長者番付」で、また注目を浴びてしまう算段が大きいけどね。
ともあれ、今のあたしは妊娠中だし、メディアも滅多なことはしてこないはずだ。
「さ、ここよ」
この病院は産婦人科の他に、いくつかの医療を行っている病院で、それなりに実績のある病院になっている。
でも、あたしは既に、産む病院については決めてある。
あたしたちは、正面の入り口から病院の中に入った。
病院の正面に受付があるので、母さんが「予約した篠原です」と伝えると、すぐに「あちらでお待ちください」と言われ、番号札を渡される。
この番号札と、あちこちにある電光掲示板で、現在の状況を確認するということになっている。
あたしたちは、目立たない四隅の場所の椅子に、ゆったりと座り込んだ。
さて、これから問診票を書いて病院に提出しなきゃ。
「ねえ、母さん」
「ん？」
問診票を書き終わり、落ち着いたら、あたしは母さんに話しかけた。
「産みたい病院があるの」
「え!?　優子が、産みたい病院？」
あたしの言葉を聞くと、予想通り母さんが疑問符を投げ掛けてきた。
確かに病院は選ぶべきだけど、それは「まずい病院」「藪医者の病院」を避けるべきであって、特定の病院に対して思い入れがあるというのはあんまりないから。
「うん、あたしが女の子になって初めて目覚めたあの総合病院」
その病院は、もちろん今も元気に経営している。
小谷学園とも縁の深い病院で、あたしが倒れた時に最初に運び込まれた病院でもある。

「ああ、あそこね。確かにあそこは産婦人科もあったわよね」
あそこの病院は、それなりに大きな病院で、最近更に増床されている。
「うん」
臨月に近くなれば、当然あたしは入院することになる。
最近ではギリギリまで入院せずに、急遽駆け込むとか、自宅で出産してしまった何てこともあるけど、もちろんお金が豊富にあるあたしたちは、長めに入院することになっている。
「あの病院は、あたしの女の子としての原点なのよ。妊娠出産って、ある意味で究極的に女性的なことじゃない？　だからね、あたし、第２子以降はともかく、最初の子供はあそこで産みたいのよ」
あたしが母さんに、思いを伝える。
あの病院で目覚めたのが、女の子としての初めての記憶。あの時は、まだカリキュラムの存在そのものさえ知らなかった、ＴＳ病の具体的なことさえ知らなかった。
まさに、「これからどうすればいいのか」さえ分からなかった状態だった。
病院では、女の子になって戸惑ってばかりだった。
あれ以来一度も訪れてないその病院を、あたしはもう一度訪れて見たかったから。
「分かったわ。優子の意思を尊重するわ」
母さんが、あたしの意見に賛成してくれる。
今日は妊娠の確認だけなので、この病院でも問題はない。
やがて、電光掲示板にあたしたちの番号と、入るべきお医者さんの部屋が表示され、番号札が強く振動し始めた。
あたしたちは、急いでお医者さんの場所へと駆け込んだ。
「よろしくお願い致します」
「えっと、篠原さんですね、今日は妊娠の確認ということでよろしいでしょうか？」

お医者さんは、おばさんの先生だった。
「はい」
「分かりました、ではこちらに来てください。これから妊娠の検査をいたしますね。妊娠が判明いたしましたら、その後の検査等々はどうされますか？」
「うーん、ひとまず今日はしているかしていないかだけでお願いします。しているならばもっと色々な病院を調べてみたいので」
「分かりました」
実際の所、妊娠が判明したら判明したで、次からは例の総合病院に移ることになっている。
ここからは少し遠いけど、どうせ入院したら産むまで入院だし、何かあったらその時はその時よね。
第2子をもし産むことがあったら、それからはこっちのお世話になろうかしら？
あたしたちは、検査室のある場所へと案内された。
産婦人科ということもあってなのか、この部屋はかなり女性向けにデザインされていて、男子禁制の空気がピリピリしている。
「それじゃあ、いきますよ」
「お願いします」
妊娠をして、改めて自分の「女の子」を自覚することができた。
来る日も来る日も生理が来ないのが、ちょっと便利な反面、寂しくもあった。
お腹の中の赤ちゃんのエコーを撮ってもらう。
他にも、尿検査などで妊娠を総合的に判別するという。
「検査結果は明日郵送で送りますね」
「お願いします」
この都内の病院は有名人もよく来るのか、あたしが来ても全く驚く素振りも見せなかった。
まあ、あたしが有名人といっても、気にしない人も多いのかもしれないけど。
「で、もし決まっているようでしたら、私たちの診断書をもって役所に

ご提出ください」
そうすることで、各種福祉を受けることができる。
最も、そうした保険に入ってなくても何の問題も無いんだけど、保険料安いし、気にしなくていいものね。
「はい」
あたしたちは、保険証を見せて、とりあえず今日は解散になった。

「へー、いいじゃねえか。優子ちゃんが初めて目覚めた病院か。俺は賛成だぜ」
夜、仕事から帰ってきた浩介くんが、夕食の時間に早速賛成の意を示してくれた。
確かに距離的には遠いけど、交通事故にさえ気を付けていれば大丈夫だと思う。
「優子ちゃん、絶対に転んだりしたらダメよ」
「分かってるわ。万一転びそうになったら、極力背中を向けるわ」
実際そんな芸当ができるとは思えないけど。
「ダメよ。とにかく赤ちゃんの安静のためにも、振動は厳禁よ」
お義母さんにダメ出しされてしまった。
そうね、これからお腹が大きくなって赤ちゃんも重くなっていけば、いつもよりも体のバランスと重心も変わってくるわけだし、とにかく段差には特に注意しないといけないわね。

「優子ー！　手紙届いているわよー」
「はーい」
翌日、母さんから早速病院の検査結果が届いた。
あたしは、母さんから封筒を受け取ると、ゆっくりと丁寧に封筒をはがす。
乱暴に剥がすのは、女の子らしくないものね。
「それで、どう？」
あたしは、早速結果の欄を見る。
結果は、全部陽性だった。

「あっ……やったわ……ああ、このお腹の中に、赤ちゃんが……」
あたしは、またお腹の中をさすった。
朝起きた時も含めて、最近は毎日のようにこの動作を繰り返している。
そして、もう一枚、エコーの写真が同封されていた。
赤いペンで丸をつけないとわからないくらいに小さいけど、確かに赤ちゃんがそこにいた。
「ふふ、優子の赤ちゃんね」
「うん、うん……うっ……ひぐっ……」
母さんからそう言われると、あたしの目から急に涙が溢れてきた。
小さな、本当に小さな点のような赤ちゃんが、堪らなくいとおしくて、自分のお腹の中にもう1つの命があるんだって思うと、本当に涙が止まらなかった。
「よく頑張ったわね、優子」
「うんっ……ひぐっ……えぐっ……」
母さんが、背中をポンポンと叩いてくれる。
今のあたしには、永原先生が11年前に話してくれた女の子の気持ちが痛いほど分かった。
例え相手の父親がストーカーのレイプ犯だとしても、お腹の中にいる自分の子供を殺さなきゃいけないなんて、何より辛い。
ましてやあたしの場合、父親は最愛の浩介くんだもん。
我が子が死ぬことに比べれば、経済的な貧困だって、受け入れられる。
今のあたしはそう断言できる。
このお腹にいる小さな命、これを守らないといけないわ。
「あら、優子ちゃん、妊娠してたの？」
お掃除から戻ったお義母さんがあたしに話しかけてくる。
「うん」
「じゃあ、おばあさんの所にいかなくちゃね」
お義母さんがにっこりとそう言う。
「う、うん……」

今、おばあさんは弱りかけている。
１００歳を越えてきて、老衰が目立ち始めたのだった。
幸い、認知症はなくあたしたちのノーベル賞のこともはっきりと覚えていてくれたのは幸いだったけど。
でも、あたしが妊娠したと知れば、きっと元気になると思うから。
あたしたちは家の玄関のエレベーターに乗り込み、母さんは２階を、あたしは３階を押す。
ちなみに、他の家族にも、もちろん仕事帰りに話すことになっている。
ピンポーン
「３階です」
あたしとお義母さんが、おばあさんのいる３階に降り立つ。
「あ、お疲れ様です」
「はい」
介護の人が、忙しなく動いていた。
あたしたちは軽く礼をしつつ、おばあさんの部屋へと向かう。
「おばあさん」
「おう、２人か、今日はどうした……ひ孫か？」
おばあさんは、やや弱々しくそう語る。
あたしは、深呼吸をして、口を開く。
「はい、あたしのお腹に、赤ちゃんができました！」
耳の悪いおばあさん向けに、少し大きめの声で話す。
「ほ、本当かえ？　もう一度、もう一度言ってくれるかい優子ちゃん」
「あたしの――お腹の――中に――赤ちゃんが――できました！」
一語一語、ゆっくりと丁寧に大きな声で話す。
「おお、とうとうやったかい！　この年まで、この歳まで生きた甲斐があったわい!!!」
おばあさんの目が、急に輝き始め、喜びに満ちた表情になる。
おばあさんがガバッと起き上がる。
そしてあたしにおもむろに近付いてきた。
「優子ちゃん、どうか浩介との元気な子供を、早く生んでくれ。わし

も、ひ孫を見るまでは絶対に死なんと、約束するから」
「はい」
赤ちゃんが障害があるかもしれないとか、途中で流産してしまうかもしれないという懸念はある。
だけど、何故かあたしには、お腹の中の赤ちゃんは絶対にそんなことにはならないという確信があった。
根拠はない。正真正銘の「女の勘」というやつだった。
あたしは、元気になったおばあさんを見て、安堵する。
あれなら、ひ孫を見るまではきちんと生きてそうね。
ただ、ひ孫が産まれた後は、分からないけど。
「うー」
「どうしたの？」
下りのエレベーターに乗ると、また少し気分が悪くなってきた。
このつわりが安定するまでは、会社に行くことができない。どうも生理もそうだけど、人より少し重たいらしいわ。
「うん、またちょっと、次からはつわりが、ね」
「そう？　今月末までの辛抱よ。気分がよくなったら、区役所に行くからね」
「うん」
来週、あたしたちは今度は家の近くの総合病院で検査を受けることになる。
もちろん、妊娠の検査結果は分かっているので、赤ちゃんの育ち具合などを主に見てもらうことになっている。
あたしは、つわりを和らげるために自室に戻って休息を取ることにした。
このつわり地獄が収まれば、いわゆる「マタニティライフ」が始まることになる。
あたしが女の子になったばかりの頃は、マタニティっていう単語が流行ったけど、今はそうでもない。
あの頃は妊娠中の旅行だとかカラオケだとかを煽る女性誌がたくさんあった。

とはいえ、妊娠中は安定期といえど油断はできない。
医師たちがそうした「マタ旅」の危険性やリスクについて訴える声明を出してから、そうした煽り記事は急速に落ちついていった。
なので、あたしの場合は、やや安静にするとか、そういう感じにはなると思うけど。

## 母親

「優子、気分はどう？」
「うん、大分よくなったわ」
少し寝ていて、あたしは母さんの声で目を覚ます。
そう、あたしにはまだやることがある。
妊娠が証明されたので、これから区役所にいって「母子手帳」をもらわないといけない。
こうすることで、いくつか出来ることがある。
そしてもうひとつが――
「これ……」
起きて机を見ると、今までこの部屋に無かったキーホルダーが置いてあった。
優しそうなママと赤ん坊の絵が書かれ、「お腹に赤ちゃんがいます」という文字が書かれていた。
あたしも、電車の中など色々な場所で見たことがある。
「優子の診断書を見せたら、駅員さんがくれたわ。優子も、赤ちゃん産むまではこれを鞄につけるのよ」
要するにこれは妊娠中をアピールするもの。
これで電車の中の優先席の前に立てば、席を譲って貰いやすいというメリットも存在している。
最も、住まいが住まいなので、通勤時間は短いから座れない辛さは他の妊婦さんよりはいくらか小さくて済むとは思うけどね。
ともあれ、あたしは「お腹に赤ちゃんがいます」というキーホルダーを鞄につけてから、鞄を持つことにした。
ふふ、何だか気分が違うわ。
これから向かう先は渋谷区役所、もちろんここからは十分に徒歩圏内なので、あたしたちも歩いて向かうことにした。
ちなみに、週刊紙の記者などは、もちろんあたしたちのプライベートには触れない。
蓬莱カンパニーの関係者は、まず間違いなくあたしの妊娠を疑って

いるとは思うけど、誰もそうしたことを口には出さなかった。
まあ、本社はいい人材を集めたものね。当たり前だわ。
「いい？　優子、そのキーホルダーはね――」
区役所への道すがら、母さんはキーホルダーの話ばかりをしていた。
多くの人はこれを見て親切にしてくれるんだけど、一部嫉妬に狂った行き遅れおばさんが意地悪することもあるんだとか。
「でも、いくらなんでもそんな人はいないわよねー？」
確かに、どうしようもない行き遅れのおばさんや、フェミニストもいたし、あたしの場合はそういう「こじらせ女」から何度か喧嘩を売られていたけど、まさか妊婦のあたしを狙って意地悪する人なんていないわよね？
「本当に、優子は優しいわね。でも世の中には『優子』ばかりじゃないのよ。特に優子みたいな美人を嫌う醜いブスなおばさんがいたでしょ？」
「あー、うんそう言えば」
思い当たる節は、たくさんあった。
大学に入ったばかりの頃もそうだったし、この前のノーベル賞の晩餐会でもそうだった。
どうもあたしみたいに、自らの女性を全面に押し出して、男人気を得る女性を嫌う女性がいるらしいわね。
「いい、優子？　そういう人に出会ったら、まず赤ちゃんを守るのよ。そして、『結婚できなくてもいい』『赤ちゃんなんか産みたくない』何て言うのは全部強がりだから真に受けちゃダメよ。それは分かっているわよね？」
「もちろんよ」
女の子になった時のカリキュラムで、少女漫画や女性誌をたっぷり読まされたし、今でも定期的に読み続けている雑誌もある。
それらを読んで思い知らされるのは、女性向け雑誌の中身はとにかく「モテること」や、「恋愛」あるいは「結婚、出産」に比重がおかれていたこと。

そうした記事が書かれる頻度が高いということは、つまりそうしたコーナーを望む読者が多いということに他ならない。
素敵な男性と結ばれて、赤ちゃんを産みたいというのは、おおよそ「メスの本能」に属することだと思う。
「さ、優子、ついたわよ」
新住居のある渋谷区の区役所に来るのは転居に関する手続きをして以来だった。
今年からは渋谷区に住民税を納める必要がある訳だけど、そうした手続きは渋谷税務署でする必要がある。
あたしは区役所の建物の案内図から、妊娠や出産に関する担当窓口を探す。
「こっちね」
「ええ」
あたしたちは、エレベーターに乗り込む。
所定の階を押して、エレベーターを降り、案内表示を便りに進んだ。

「すみませーん」
「はいっ」
あたしが窓口の担当者さんに声をかける。
窓口の人も、すぐにあたしを見てこっちへと駆け寄ってくれる。
「えっと、妊娠をしましたので母子手帳の交付を申請しに来ました篠原です」
「あ、はい、篠原さんですね。ではこちらの書類に必要事項をお書きください。本日身分を証明できるものございますか？」
「はい」
あたしは、身分証明用に持っていたパスポートを取り出す。
するとやや驚いた表情で窓口の人があたしを見る。
それは、パスポートで身分証明する珍しい人に驚いたのか、目の前に立っている人が、例の「篠原優子」だと知って驚いたのかは分からない。
「はい、ありがとうございます。ではですね――」

でも、すぐに普通の表情に戻って、あたしに必要事項を案内してくれる。
母さんは、そばの椅子でのんびりと座っていた。
「はい、それではですね。母子手帳交付となりましたら改めて郵送とさせていただきます」
「分かりました」
ともあれ、これで手続きは完了したわね。
後は手帳を交付してもらい、定期的に病院で検査してもらう必要がある。
それについては、小谷学園の近くの総合病院で行うことにしよう。
ちなみに、母子手帳を交付してもらうと同時に、また例のキーホルダーが配布されるという。
母さんは「2つあったほうがいいと思って」と言っていた。

「ふふ、優子も様になってきたわね」
「え？」
帰り道、母さんがあたしに意味深なことを言ってきた。
「その歩き方、優一がお腹の中にいた頃の私にそっくりだわ」
母さんは、今のあたしに、昔の自分を重ねている。
母さんもまた、母性が強かったのかしら？
「え？　そうなの？」
初産婦なので、あたしはよく分からない。
「そうよそうよ。赤ちゃんを守ろうって、無意識に色々していたみたいでね。お父さんに言われて気付いたのよ」
「え？　例えばどんなところが？」
あたしは、全く自覚がなかった。
だから無意識って言うんだと思うけども。
「ほら、例えばお腹を車道から背けてやや斜めに歩いているとかね」
「そ、そうだったの……」
全く気がつかなかったけど、今こうして止まっていると、確かにや

や体を捻らせていた。
お腹の中にいる赤ちゃんを守ろうっていうのは、ほぼ無意識での行動だった。
あたしはふと、付けられていたキーホルダーを見る。
優しそうなママのお腹の中で安らかに眠る赤ちゃんの絵が、あたしの中でずしりと重くなる。
「えうっ……」
急に視界が水で埋め尽くされた。
赤ちゃんのことを思うと、自分の母性のことを思うと、涙が出てくる。
「優子は立派だわ。さ、気を取り直して、家に帰るわよ」
母さんは泣いているあたしを優しく見つめてくれていた。
「うん、うん！」
あたしはそのまま涙をこらえて、ゆっくりと家に帰った。
赤ちゃんを守れたことを、誇りに思いながら。

「それでね、優子ちゃん泣いちゃって」
「へえ、相変わらず優子ちゃんは泣き虫だなー」
「も、もうっ!!!!」
家に帰ると、家族はその話題で持ちきりになった。
確かに、赤ちゃんを無意識でも守れたというのは、あたしの中でも大きな誇りになっている。
しかし、それでも泣いてしまったのもあって話題にされるのは恥ずかしいことだった。
「母性ってすげえよなあー」
浩介くんはどこか寂しさ混じりの遠い目をする。
どうやら、妊娠中ずっとご無沙汰なのがいけないのかしら？
「あなた、浮気はダメよ」
妊娠中や出産直後は、どうしても赤ちゃんに気がいってしまって、赤ちゃんに嫉妬しちゃう旦那さんも多い。
そして、そういうのが続けば最悪の場合、不倫の原因にもなってし

まう。
だから、赤ちゃんのことを優先するとしても、旦那さんの機嫌を損ねないように何とかしないといけないわけだけど……
「へへん、大丈夫。こういうこともあろうかと、優子ちゃんの盗撮写真を一杯撮ってあるんだ！　これで毎日思い出しながら頑張っているから大丈夫だぜ」
浩介くんがにやけ笑いを浮かべながらあたしに逆さ撮りの写真を見せつけてくる。
「……ばかぁ!!!」
うー、写真に記録されちゃってて恥ずかしいよお……！
「あらあらまあまあ……浩介ったらー！」
「全く、とんでもない変態だな」
お義母さんは、まるで予想していたかのような笑みを浮かべ、お義父さんはやや呆れ気味に浩介くんを見つめていた。
「何とでも言え、優子ちゃんは俺の嫁だ！」
義両親の反応に対して、浩介くんが堂々と胸を張りながら答える。
あたしはというと、恥ずかしさに耐えきれず、顔を真っ赤にして手で顔を覆ってうつむいてしまった。
「ふう、でもま、これで浩介が浮気しそうにないことだけは分かったわ」
お義母さんが安心した声でそう話す。
そう、変態と言っても、対象が妻なうちは、むしろ華だと思ったほうがいいものね。
「だな」
でも、解禁日はとんでもないことになりそうだわ。
赤ちゃんの子育てに、家の家事に浩介くんの相手……うーん、きちんと職場に復帰できるのかしら？
もしかしたら、あたしは蓬莱カンパニーの常務には戻れないかもしれないわね。
まあ、株の配当金収入とかあるし、大丈夫だとは思うけど。
あたしは、ふともう一度、配られた母子手帳を見た。

そして、手帳の中に、役所の人に貰った、「お腹に赤ちゃんがいます」というキーホルダーも挟まっていた。
これは、「マタニティマーク」っていうらしい。
「お、優子ちゃん、これが有名な？」
浩介くんがキーホルダーを興味深そうに見つめている。
もちろん浩介くんも、「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーは何度も見てきた。
「うん」
優しそうに包み込む母親と、安らかに眠る赤ちゃんの絵は、あたしをとても癒してくれる。
もちろん、まだ赤ちゃんは出来たばかり。
それこそ体の基礎的な形成が始まったか否かでしかない。
「でさ、優子ちゃん」
「うん？」
浩介くんが、今度はさっきより真面目そうな表情で話しかけてきた。
「安定期に入ったら、また出勤するのか？」
そして、出てきた質問も同じだった。
今あたしの業務は、余呉さんに引き継いで貰っている。
安定期に復帰することができれば、それだけ余呉さんの負担も減るはずだわ。
「うん、このマークも貰ったし、つわりも徐々に収まってるから、明後日から会社に行く予定だわ。もちろん、時短にはなると思うけど、それでも休んじゃってるよりはマシだわ」
正直、今貰っている役員報酬は、株式の配当金からすると、無視できるくらいに少ない。
しかし蓬莱カンパニーには、和邇先輩のように、大株主ではない取締役もいて、彼らを満足させるくらいの報酬があれば十分なのだ。
だから、あたしが仮に寿退職したとしても、この家の収入にとっては殆ど変わらない。
あたしが株を持ち続けている限りは、収入はほぼ同じになる。

今年の篠原家も、株の配当金で数千億円単位の収入が入ってくる。もちろん、世界長者番付も、ＴＯＰ３は去年と同じ顔ぶれになるはずだわ。
とはいえ、あたしは創業者だしノーベル賞受賞者でもあるので、完全に退職してしまうのも、世間が騒いでまずいと思っている。
「そうか？　永原先生みたいに相談役や顧問に退くっていう手もあるから、覚えておいてな」
「うん」
その事は、あたしも想定はしている。
以前のように働けなく鳴ったとしても、だからといって完全に退職までする必要はないものね。
「今度の６月の株主総会、優子ちゃん大変だと思うけど、出てくれよな」
「うん、分かってるわ」
あたしが欠席すると、１５％弱の欠席になる。
もちろん、浩介くんや蓬莱教授、永原先生ら経営陣に、協会の取り分を合わせれば、まだ過半数は持っているけど、去年に比べれば格段に不安定な株主総会になってしまうことは避けられない。
とにかく、あたしたちの体制を覆されるのだけは、最低後９９年は、何としてでも避けなければいけない。
浩介くんに株を譲渡することもできるけど、色々と手続きが面倒だし、やめておくことにしよう。
「ま、安定期だとは思うし、大丈夫だろ」
「そうね」
妊娠したタイミングを考えると、たぶんあたしが赤ちゃんを産むのは９月頃になると思う。
その間に、色々な困難が待ち受けていると思う。
「ふふ、じゃあそろそろご飯作り始めるわね。優子ちゃんは、まだ休んでていいわよ」
「はーい」
お義母さんが、ご飯を作る。

最近では、2階の石山家とも調整し、ご飯の担当を分業制にしはじめることを始めていた。
そのため、頻繁にキッチンではエレベーターが行き来していた。
こういうあたり、二世帯住宅は便利よね。あ、でもこんな設備あるのは豪邸くらいよね。
「ねえあなた」
「うん？」
あたしは、ソファーで寝転がっていた浩介くんに話しかける。
浩介くんは、何もせずにボーッとしていた。
「赤ちゃんの名前、考えておいてね」
「うーん、今から？」
浩介くんは、悩ましい顔をしていた。
確かに、まだ気が早いとは思っている。多分、男の子か女の子かも分からない状態だから。
「だって、この後赤ちゃんお腹の中で動くのよ」
胎動のことはあたしもよく知っている。
赤ちゃんがお腹を蹴ったりするのは痛いけど、幸子さんによれば、母親としての母性が、これまで以上に沸いてくるのだという。
「うーん、そう言われてもなあ……男の子か女の子かって、産んだときに分かるのも嬉しいんじゃない？」
浩介くんが面白いことを話す。
男の子が産まれるか女の子が産まれるかは、最近では出産前から分かることだという。
でも、敢えてそれを告げないという手を取る親もいる。
「ま、それはほら、その時に赤ちゃんが大きくなってから考えた方がいいんじゃね？　今は男女も分からないんだし」
「う、うん……」
赤ちゃんのことを考えると、どうしても気が早くなって先へ先へとなってしまう。
どちらにしても、体が出来て、元気になってくれるといいわね。
「慌てすぎもよくねえぜ。お腹の中の赤ちゃんは、俺の赤ちゃんでも

あるんだから、さ」
「うん、そうよね」
浩介くんが何気なく言った一言、それはとっても大切な言葉だった。
「浩介くんの赤ちゃん……浩介くんの赤ちゃん……」
浩介くんが部屋を出た後、あたしはうわ言のように浩介くんが言っていたことを繰り返す。
今までは、赤ちゃんを守ろうとするあまり独りよがりになっていたこともあった。
それに気付かせてくれたのは、浩介くんの言葉だった。
あたしは、こうやってお腹の中で、つわりを経験したり、あるいはこれから実際にお腹が大きくなったり、赤ちゃんにお腹を蹴られたりする。
でも、浩介くんは、赤ちゃんを感じることができない。
本当に育っているのかどうか、見守ることしかできない。
よく考えたら、あたし以上に不安な気分を抱えていてもおかしくはない。
あたしが吐きそうになっても、気分が悪くなっても、あるいはお腹が大きくなって赤ちゃんをお腹の中で感じても、その喜びも、苦しみも分かち合うことはできない。
女性たちの多くが、女の子に産まれたことを喜んだ瞬間の筆頭に、出産の時の体験をあげている。
痛みなんてすぐに忘れてしまい、また産みたくなるという女性も多い。
それくらい、赤ちゃんを産んだ時の喜びと母性は大きい。
何カ月も妊娠を続けるため、「やっと会えた」という感情が特に大きくなるらしい。
赤ちゃんへの愛情、成長していく子供への愛情で押し潰されそうになる母親も多い。
まだ妊娠初期のあたしでさえ、母性が止めどなくあふれでてきている。

もちろん、あたしに母性が芽生え始めたのは今よりずっと昔、協会の正会員として、自殺寸前だった幸子さんを救ってから。

でも、あの時の母性が、いや、今まで母性だと思っていたエピソードが母性ではないと思えてくるくらいに、今は母性で満たされてきている。

あたしだけの赤ちゃんではない。

浩介くんと作った赤ちゃんだから、そういう意味でも、あたしは責任感を改めて感じるようになった。

さ、今日もたくさんいいものを食べて、赤ちゃんをすくすく元気に育てなきゃ。

# 小谷学園に残す遺産

「ふうっ」

あたしは1人で出掛ける準備をする。

今日は妊娠中ながらも中々にハードなスケジュールが待っている。

まず午前中に小谷学園に行き、「永原先生と篠原夫妻の記念館」の建設予定地に行くことになっている。

そこで実際に展示の仮案を見て調整をすることになっていて、問題がなければ後日正式に小谷学園の施設の1つとしてオープンすることになる。

浩介くんは多忙なので、あたしが浩介くんの代理も兼任することになっている。

そして午後は産婦人科に行って、定期検診などを始めることになっている。

何故このようなハードスケジュールにするかというと、育休に入る前に少しでも会社に貢献するため、無理のない範囲で会社に復帰できるかどうかの体力テストも兼ねているから。

もし問題なければ、明日には会社に復帰できるようにしていきたい。とにかく会社はまだ黎明期だし、あたしは取締役の立場なので、サボったら会社の士気にも悪い影響を与えてしまうだろう。

あたしは、寒さを和らげるためのいつものズボンとロングスカートの重ね穿きを考えたけど、その穿き方はお腹に少し負担がかかるので、ロングスカートにストッキングというスタイルに変えることにした。

「おはよー」

「優子ちゃん、おはよう。今日は小谷学園だっけ？」

スーツ姿の浩介くんが笑顔で挨拶してくれた。

浩介くんはもちろんこれから社長業をする。

蓬莱教授が、あたしを常務、浩介くんを社長という風にしてくれてよかったわ。

「うん」

今回の記念館は、小谷学園と蓬莱カンパニーの連携強化も兼ねている。
小谷学園は、蓬莱カンパニーによる買収計画こそまだ生きているものの、今は経営資源を世界解放に向けての準備に集中しているため、資本関係はまだない。
とはいえ、あたしたちを記念した記念館の視察は、当然蓬莱カンパニーの経営にも大きく影響するため、あたしによるこの視察が会社の蓬莱カンパニーの経費に当たるのかは微妙なところだったけど、「篠原家の財力から考えれば、そうしたことを考えている経費の方が高い」という結論で、あたしの自己負担になった。
「最近の会社はどうかしら？」
「ああ、少し支店の計画が遅れ気味だけど、まだまだ当初の予定よりは早いよ」
浩介くんは、こうやって経営状況についても正直に話してくれる。
まあ、あたしが名目上はまだ常務っていうのもあるけど。
今度の株主総会では、あたしは取締役にはとどまるものの、「顧問」もしくは「相談役」に退いて、代わりに余呉さんが常務になる予定で調整している。
あたしが産休育休と続けていくとブランクも長くなるし、第2子以降もあるので、そのまま顧問を続ける感じにはなるとは思うけどね。
幸い、永原先生が殆ど相談役の仕事が入ってない例もあって、顧問程度なら育児をしながらでもできないことはないし、ね。
ともあれ、子供が大きくなるまではあたしは子育てを優先したいわね。まあ、2人目以降を産むかもしれないけど。
「それはよかったわ。とにかくお店を早く開いて、一人でも多くの人を不老にしないといけないわね」
「ああ、だが一番緊急性の高い世代の売り上げが悪いんだよなー」
とにかく、今は1人でも多く不老契約を獲得したい。
不老が遅れれば遅れるほど、日本の超大国化も遅れることになる。
1人でも多く将来の老人を蓬莱の薬で生産人口に留める必要がある。

そのためにも、中高年世代の早急な不老が必要不可欠だ。
しかし、ここで1つだけ問題点が最近浮かび上がっている。
既に史上最大最長規模の経済成長を記録し、今後は更なる成長が見込まれている２０２８年の日本だけど、今の５０歳前後の中高年世代はちょうど「就職氷河期世代」と呼ばれる世代で、あたしたち平成中期生まれの世代からすると信じられない不景気を過ごしたらしい。
あたしたちの記憶だと、不景気と言えば小学生時代のニュースで見た記憶しかない。
中学生、高校生時代には、「実感の沸かない好景気」とさんざんに宣伝されていたけど、２０２０年代には蓬莱の薬の本格登場もあって、そんな声さえ消えてしまっていた。
ところが、こうした明るい時代が長く続くにつれ、この「就職氷河期世代」はかなり打ちひしがれてしまっているらしい。
既に蓬莱の薬を前提とした政策として高齢者向け福祉は全廃されており、今後生まれてくる老人は社会のお荷物として、文字通り「姥捨て山」に捨てられる運命にあると知っておきながら、あえて蓬莱の薬を拒否する人も多く、２０代のあたしたちはジェネレーションギャップをとても感じてしまう。
とはいえ、実際の所は何年も何年も人手不足が続いているお陰で、よっぽどの人格破綻者でもない限り、就職や転職に困ることはない。
更に言えば、蓬莱の薬で寿命を極限まで伸ばすことで、「一発逆転」のチャンスが増える。
宝くじの1等でさえ、もし寿命があれば試行回数を重ねればいつかは当たることになる。
そして、1等である必要もなく、ともあれそうした資金を元手に、例えば長期的な就職活動を続けるということも、今後は考えられるだろう。
企業にも寿命があると言われているが、恐らく蓬莱カンパニーは、現状のルールが続く限り、倒産は絶対に無いだろう。
しかし他の企業は違う。
そうなった場合、当然人間の寿命が企業の寿命を上回るケースは

多々出てくるだろう。
そうなれば、今以上に転職が当然という時代になる。
特に年齢が数百歳ともなれば、そうした人材を欲しがる企業も多いだろう。
このまま蓬莱カンパニーが牽引する好景気が長期的に続けば、「不景気な時代を知っている」ということそのものに、価値が出てくる。
あたしたちは、彼らへの宣伝活動が急務で、政府、特に厚生労働省と財務省が、あたしたちをせっついている。
「ともかく、何とかうまく行くといいけど」
「だなあ。今の時代、１０年の差は大きいし」
浩介くんは、腕を組んで唸っている。
とにかく今は時代の変化が激しい、特に蓬莱の薬がその原動力になることは間違いないわね。
「うんうん」
ともかく、あたしも宣伝方法についてはよく考えないといけない。
不老となる人間の割合が高ければ高いほど、経済もよくなり、それが次世代へも繋がっていくから。
あたしのお腹の子も、蓬莱の薬を飲み、いずれは子孫を作っていくことになりそうね。
「生きていても希望がないというのは、すぐに死ぬ命だからさ。すぐに死ななければ、確率の低いことに出会うことも増える」
浩介くんが面白いことを言う。
「そうねえ……ねえあたしたちのお金だけど」
「ああ、やっぱり交通安全系列の会社に投資しねえとなあ」
結局、今後人間の寿命を決めていくのは、治安面での犯罪の少なさと、不慮の事故や天災の頻度の低さ、そして自殺率の低さになると思う。
そのために、あたしたちは余ったお金をそうした会社に投資していくことに決めた。
寿命が延びる会社に勤めているのだから、やっぱり投資先は更なる長寿を期待できる所にしたいわね。

「んじゃ、行ってくる」
朝ごはんを食べ終わった浩介くんが席を立ち、あたしが見送る。
もちろんあたしも立ち上がって玄関まで送り迎えをすることになっている。
「うん、いってらっしゃい」
あたしは、妊娠してから、今まで以上に「家庭」を意識するようになったっと思う。
もちろん、今までも「家事ができなきゃダメ」と言われて過ごしてきたし、「優子ちゃんは家庭的」と言われたこともあった。
でも、妊娠してみたら、今まで以上に家庭を気にするようになったと思う。
「ふう、じゃあ、あたしも行ってくるわね」
浩介くんを送り迎えしたら、あたしも荷物をまとめて総合病院に向かうことになった。
「うん、優子ちゃん、気を付けてね」
「分かってるわ」
あたしは、電車を幾つか乗りかえて、駅から朝ラッシュとは逆方向の、小谷学園時代の懐かしい空いた電車に乗り込んだ。これなら、「お腹に赤ちゃんがいます」も要らないわね。
高校時代は、こうした空いた電車に何度も乗り込んでいたけど、佐和山大学時代以降は、ラッシュ時のそのままの方向に進んでいた。
車内をよく見ると、小谷学園の制服も見えた。
１０年前にあたしたちが在学していた時と同じ制服に、男女が身を包んでいた。
今や小谷学園は恵美ちゃんとあたしたちの出身高校ということで入学願書が殺到している。
更に、校則がほぼないに等しく、唯一の校則がとても重要な校則になっている高校だったのも、人気に拍車をかけているとか。
ここからいくつか乗り換えれば、あたしたちの懐かしい沿線へと躍り出る。
おかしいわね、懐かしいといっても、まだ引っ越ししてから半年く

らいしか経ってないはずなのに。
「次は――」
あたしの生まれた実家の最寄り駅、今は桂子ちゃんの家のみが最寄り駅になっている。
そういえば、以前までの家は売れたのかしら？
もしかしたら、２軒に分割されているかしら？
……まあ、今気にしても仕方ない話よね。
あたしたちはもう、あの頃には戻れないんだから。
でも、ここを通る度に思い出しそうではあるけれども。
「次は――」
電車はその数駅後に、小谷学園と佐和山大学の最寄り駅に到着した。
結局、あたしがこの駅に降りたのは、大学院の博士の授与式以来のことで３ヶ月ぶり程度だった。
蓬莱カンパニーと蓬莱の研究棟での絡みは、基本的に蓬莱教授の方がこっちに来てくれるため、この駅に行く機会も今後はどんどん減っていくと思う。
あたしが電車を降りると、小谷学園の制服を着ていた生徒たちも降りる。
そして、小谷学園側の出口へと向かっていく。
思い出の詰まった小谷学園の制服を見るだけでもあたしの中で色々な思いが込み上げてくる。
今にして振り返ってみると、あたしは、ＴＳ病の知名度や理解が低かった時代としては、最末期の患者だったことになるわね。
「こっちね」
長い間行ったことのない道でも、体は道のりを覚えている。
小谷学園の制服を見なくても、自然と歩みが進む。
そして、道の途中に、総合病院が見えてきた。
その向かいにあったはずのハンバーガー屋さんは、今はうどん屋さんになっていて、また小谷学園の頃の記憶にはない、別の牛丼屋さん

も視界に入った。
そして、病院の奥にあるリサイクルショップは、案内掲示板もろとも健在だった。
また、高そうなお寿司屋さんも軒を連ねていた。
「変わりもする。変わらないのもある。のね……」
あたしの独り言は、冬の寒い空気にかき消されてしまった。
あたしは、小谷学園への道を更に進めていく。
平日に来賓としてここに来るのは、初めての出来事になる。
卒業生としても、浩介くんと制服デートをして以来だから、６年ぶりということになる。
あたしは、来賓用の入り口に向かい、一旦職員と来賓用のトイレに向かう。
小谷学園の校内は、あたしたちの在学中と全く同じ。
もちろん、メンテナンスと補強工事はきちんとしてあるし、永原先生も資金援助しているみたいだけど。
トイレは誰もおらず、あたしは個室に入って鞄から制服を取り出す。
「ふふっ」
自然と笑みが浮かぶ。
やっぱり、この制服を見ると、あの頃を思い出してしまうわ。
それと同時に職員専用のトイレに勝手に入っているという背徳感と、来賓なのに生徒に扮しているという背徳感の２つが襲いかかってくる。
今着ている服を脱ぎ、下着姿になる。
そして、スカートとブレザーを着る。もちろん、リボンが曲がっていないかどうかも注意する。
そして、この冬の季節なので生足ではなくストッキングを履いていたので、今履いているストッキングはそのままの状態にする。
あれ？　ちょっとだけ胸がきついような？　もしかしてあたし、また巨乳になったかしら？　それとも妊娠したせい？　うーん、分からないわ。

ともあれ、着れない大きさではないので、あたしは全て着替え終わると、鏡で自分の顔を見る。
「うん、バッチリだわ」
あたしは、全て問題ないことを確認すると、何もしていないトイレを流さずに出る。
念のため大きな鏡でももう一度チェックし、トイレからこっそりと出る。
今は授業の時間で、あたしがここにいるのは変なんだけど、そんなことは気にしない。
コンコン
「はい」
職員室の扉をノックすると、中から永原先生の声が聞こえてきた。
ガララララ……
「あら、篠原さんいらっしゃい。これ、まだ取ってたの？」
永原先生は、あたしがいまだに制服を持っていたことに驚いていたらしい。
「あはは、うん、それに、あたし老けないからこの学校の中はこの服じゃないと落ち着かないのよ」
浩介くんとの夫婦生活でも、よく使うからとは言えないわ。
「あはは、篠原さんらしいわね」
永原先生も深くは突っ込んで来ない様子だった。
もう卒業して9年になるんだけどね。
「それでね、記念館なんだけど――」
「永原先生、その子――」
初老の男性の声がした。
その先生は――
「あれ？　体育の草津先生！　あたしですよ。篠原優子です」
そう、あたしのこともよく面倒見てくれた、温厚な体育の草津先生だった。
9年前の、あたしが在学中の時と比べて、少し白髪が増えていたけど、それでもあたしは顔をはっきりと覚えていた。

確かに、２年生の時に補講を受けたあの体育の草津先生だった。
「おあっ、本当だ。いやあ本当に、うちの出身の生徒がノーベル賞だと知った時には小谷学園はお祭り騒ぎだったよ」
草津先生は、あたしを見るなりとても驚いていた。
すると、空き時間と思われる先生方も騒ぎ始めた。
あたしの記憶にない先生も多く、大分職員が入れ替わっている様子だった。
「うーん、ノーベル賞と言っても、ここの生徒の頃とあまり変わってないはずなんだけども」
実際、あたしの容姿は、１０年前に女の子になった頃の写真と全く変わっていない。
「中身が変わりすぎているからなあ。あのときは高校生、今は世界一の金持ちのノーベル賞夫妻だもの」
「あはは、うん、そうですよね―」
草津先生が言っていることは最もだった。
ともかく、あたしはあの青春に戻ることは出来ないらしい。
まあ、今の方が幸せだけれどもね。
「さ、篠原さん行きましょう」
「ええ」
草津先生と別れ、あたしは永原先生と横に並んで廊下を歩く。
歩き出してすぐに、「相談室」の部屋が目に入る。
「懐かしいわね、篠原さん」
「ええ」
相談室に首を向けたあたしに、今度は永原先生が話しかけてきた。
５１０歳になった永原先生でさえ、１０年前を懐かしく思う。江戸時代の頃は１００年２００年でさえあっという間に感じたと言うのに。
それくらい、今は時代の流れが速まっている。
あの相談室は、あたしと永原先生との間で、いくつもの思い出を作ってきた場所だった。
永原先生にとっても、人生の転機になった相談室よね。

「こっちよ」
見慣れない出口から、在学中はほぼ記憶にないくらいの裏手に出る。
そして、その一角に、「永原先生と篠原夫妻の記念館」が見えてきた。
周囲を見る限り、記念館建設を契機にこっち側にも出入り口を作る予定らしい。
「あ、お疲れ様です」
永原先生が高年の男性に挨拶する。
「えっと、篠原優子さん、ですか？」
男性は、制服姿のあたしを見て困惑している。
無理もないわよね。
「はい」
「驚きました。不老というのは本当なんですね！」
男性は「合点」という感じでやや大きめの声で話す。
確かに、もう普通なら２８歳と名乗ったら逆サバを疑われること間違い無しになっている。
「近くにもっとそれを体現している人がいますけどね」
永原先生が冷静な表情で突っ込みをいれる。
「いやほら、永原先生はあんまりに長生きで現実感無いといいますか」
そしてそれに対して再び男性が弁解の声をあげる。
「あはは……あー、紹介が遅れたわ。こちら小谷学園の理事長先生の――」
「よろしくお願い致します」
「蓬莱カンパニーの篠原優子ですよろしくお願い致します」
永原先生の紹介と共にあたしたちは頭を下げあって名刺の交換を行う。
この「常務取締役」の名刺も、もうすぐ肩書きを変えなくちゃいけないかしら？
「それでは、ご案内いたします」
理事長先生の後についていき、あたしたちは中へと入った。

## 記念館のこと

記念館の中に入ると、外見に比べた印象としては中は意外と狭めだった。

中央の大きめの空のガラスケースが少し気になるけど、今は気にしないでおく。

ちなみに、生徒以外の来客にも常時公開した上で、入館料は結局無料にするらしい。

なるほど、入口の直ぐ側に建てたわけね。

「本校でも、篠原夫妻のことは特別授業を組もうと思っているんです」

「いえ、そこまでしていただかなくても――」

理事長先生の提案に対して、あたしはとっさに謙虚になる。

でも、一歩冷静に考えてみても、あたしたちのためだけに授業を組むというのは反対だった。

「いえいえ、篠原夫妻は当校の誇りです。お陰さまで我が校には入学願書が殺到し、偏差値もうなぎ登りなんですよ。学力のいい子供が、たくさん入ってきてくれて……そのお陰で佐和山大学の方も今や難関校になりつつありますから」

確かに、あたしたちが在学していた時の小谷学園と比べると、今はかなり偏差値が上がっている。

特に今年度は、あたしたちのノーベル賞のために既におびただしい願書が殺到していて、偏差値の急上昇が見込まれている。

ちなみに、スポーツ特待制度は今も小谷学園には存在しない。

あくまでも部活には力を入れる予定は小谷学園にはない。

そのあたりは、校則の緩さ、というよりなさといった方がいいかもしれないけど、とにかく小谷学園が変わってもそこら辺だけは変わらないみたいね。

「無理にとはいいませんがもう一度考えていただけないでしょうか？」

あたしが考え込んでいると思ったのか、理事長先生がもう一度促してきた。

もちろん、そう頼み込まれてもあたしの考えが変わるわけではない。
「それでも、いえそれだからこそ、あたしたちのためだけの授業はやめて欲しいんです」
今のあたしは、あたし自身であると同時に浩介くんの代理でもある。
つまりあたしのこの意思は篠原夫妻の総意ということになる。
それを踏まえても、ここまできっぱりと反対されるとは思っていなかったのか、理事長先生はかなり驚いた顔つきになった。
「失礼ですがその……理由はありますか？」
理事長先生はまだ諦めきれないのか、あたしに理由を問いてきた。
もちろん、通らないものは通らない。
「ここに記念館を作るだけで、学力と学校への帰属意識のある子供は自然とここに、自主的に足を運んでくれますよ。わざわざ授業や課題で強制するのは、よくないです」
あたしは、すぐに思い付いた理由をそのまま話す。
あたしたちも、永原先生も既に世間に広く知られた有名人なので、もしその生徒に興味が少しでもあるなら、この記念館に一度来てくれるだけでいい。
それだけで、興味を持ってくれている人なら、あたしたちのことを覚えていてくれるから。
あたしにとっては、それだけでも十分だった。
「そうね、篠原さんの言う通りよ。もちろん、紹介はする必要があるわ。でもその後のことまでは、生徒に好きな時間に見せるべきよ。その時興味なくても、別の時間に興味が湧くこともあるわ。卒業まで3年あるもの。同じ時間にクラス全員で見せる必要はないわよ」
永原先生が、更にあたしが言いたいことを補足してくれる。
そう、3年も生活していれば、「そういえば蓬莱の薬を作った夫婦の出身校だった」って思って記念館に一度は足を運んでくれると思うから。
「うむむ、やはり永原先生には叶いませんな」

理事長先生も、永原先生には中々頭が上がらないらしいわね。
まあ、今回はあたしもいるし仕方ないことだけど。
ともあれ、諦めてくれたみたいでよかったわ。
「では、中の展示に移らせていいですか？」
「ええ」
理事長先生の案内で中を詳しく見る。
展示には、あたしが女の子になったばかりの頃の写真がある。
やや緊張した真顔でこちらを見つめる少女。その写真はもう１１年近くも前のものだけど、今と全く変わらない容姿をしていた。
それは、あたしが不老だという何よりの証左だった。
「この写真……」
あたしには見覚えがある。
何を隠そう生徒手帳に貼ってあった写真だから。
確かカリキュラムの時に撮った写真よね。当たり前だけど今と全く同じだわ。
「ふふ、篠原さんが女の子になって初めて撮った写真よ」
永原先生がにっこり笑いながらそう話す。
「や、やっぱりそうなのね」
ＴＳ病で女の子になると、どういうカリキュラムを受けるかという内容も、ここでは簡単に紹介されている。
女の子らしくなるための訓練の内容として、あたしが作った訓練の内容も紹介されているわね。
「ＴＳ病の過酷な運命……ねえ」
そこには「ＴＳ病の過酷な運命」と題され、過去には女の子に成りきれなかった患者たちが次々と自殺していったことが書かれている。
もちろん、今はそうしたこともなくなったけど、いつ何時また自殺者が出ても不思議ではないことには代わりはない。
それでも、かなりの改善をしたのは事実だった。
言うなれば、今の教育法もそうした自殺者の屍の上に成り立っている。
「ええ」

ＴＳ病のもう１つの大きな要素として、不老というものがある。
こちらの方は、永原先生の展示コーナーで詳しく触れられることになる。
あたしの展示の続きは、女の子らしくなれたあたしが、ついに男の子の恋人が出来たことが書かれている。
それこそまさに、浩介くんだった。
写真の中の浩介くんは、今よりもほんのちょっぴりだけ、若く見えた。
館内の展示には、林間学校での写真や、その１年後の修学旅行での写真、そして、どこから手に入れたのか、後夜祭でのプロポーズの場面の写真まであった。
……みんなからはこう見えていたのね。
他にも、文化祭のミスコンで、あたしが優勝した時の写真もある。
永原先生と、やっぱり今よりもほんのちょっぴりだけ若い桂子ちゃんも写っていて、桂子ちゃんの部分には「木ノ本桂子さんは、現ＪＡＸＡ宇宙移民計画事業部員で、篠原優子氏の男性時代からの幼馴染み」と紹介されていた。
「桂子ちゃん、よく許可したわね」
あたしは意外だった。
また、やはり今よりちょっぴりだけ若い恵美ちゃんも所々に写っていて、「現女子テニス選手の田村恵美さん」と紹介されていた。
「ま、テレビ取材も何度か受けていますからね、あのクラスでは田村さんと篠原さんに次いで有名人ですよ」
あたしたちが２年間を共にしたそのクラスは、篠原夫妻と恵美ちゃんのクラスとして有名だったけど、今は桂子ちゃんの世間一般での知名度も上がっている。
それというのも、「宇宙移民計画」は、蓬莱カンパニーがもたらす懸念の１つとしてあがっている「人口問題」の抜本的解決法として有名で、美人の桂子ちゃんは、広告塔としてよく登場していたから。
宇宙開発に高額の予算をかけることができているし、しかも１００年に１人しか子供を産まなくても出生率が二桁になりかねないとい

う、不老による人口急増問題は一般人にもすぐに理解できるため、人々の宇宙開発への理解度がとても高い。
今や日本のＪＡＸＡに、世界中から優秀な技術者が集まることによって、ＮＡＳＡ以上の勢力になるのも時間の問題だと言われている。
そうなれば、桂子ちゃんは宇宙開発部門で相当な功績を残すことが出来ることになるだろう。
そういった所も見込んで、桂子ちゃんも写真に納めているのかもしれないわね。
それにしても、恵美ちゃんや桂子ちゃんとあのクラスで一緒になれたのは、他のクラスメイトたちはもちろん、あたしにとってもとてもいい思い出になったわね。
「うんうん、あら懐かしいわね。これ修学旅行かしら？」
永原先生が次の展示を見て感激している。
「ええ、どうやらそうみたい。京都の鉄道博物館よね」
修学旅行で見た鉄道博物館の展示を見るあたしたちが写っている。
ここは永原先生の記念館でもあるため、永原先生と鉄道についての記述も存在している。
それによれば、永原先生は、全国に鉄道が張り巡らされ始めたという情報と、鶴見で実際に動いていた機関車を目の当たりにして、放浪生活をやめたとある。
永原先生にとって、鉄道は人生を大きく変えた存在であることには違いはなかった。
あれ？　確かこのＤＤ５４と永原先生って合成だった記憶があるわね。文化祭でもそのあたりを突っ込んだ記憶があるわ。
うーん……まあいっか。
「では次に参りますね」
あたしの疑問をよそに、ひと通り見終わって特に問題が無いと確認したら次に向かう。
「あら？　これ……」
ここが小谷学園ということもあってか、大学時代の展示は軽く済ま

されていた。
代わりに、あたしの「日本性転換症候群協会」での実績が展示されていた。
そこには、あたしが変えたカリキュラムの変更についてが主で、また当時存在した「明日の会」への対処については、「協会側として対策を担当した」と書かれているにとどめてあった。
まあ、理屈ではそれが最善手だったとはいえ、「もう救いようがないので、周囲に被害が出る前に出来るだけ早くに自殺に追い込んだ」何て書いちゃったらまずいものね。
どちらにしても、今ではもう明日の会という存在も、あたしたちの研究に反対した例の牧師の存在も、歴史の闇に葬られていた。例の牧師は、インターネットの百科事典にも「消息不明となった人物」と書かれる有様だった。明日の会も、わずかに「協会の方針に反発し、患者を1人抱え込むことに成功したが、その患者は不適切な処置によりすぐに自殺してしまった」とあり、幸子さんと歩美さんはもちろん、あたしの存在もどこにもなかった。
そして、あたしたちの結婚式の写真も軽く存在した他、何と言ってもメインに添えられるのが不老技術によるノーベル賞受賞のことだった。
ノーベル賞を取ったきっかけは、あたしが、当時蓬莱教授が気付かなかった「完全不老の薬」の「製造法の発見」、浩介くんが、「完全不老の薬」の「効率的・安定的生産方法の発明」だった。
そのことは、写真下の展示にもあって、あたしはこれを間違いはないとして肯定した。
授賞式や、晩餐会での写真もあって、あたしが例の記者と口論する場面の写真まで飾ってあった。
ちなみに、展示の説明には、「フェミニストを論破した篠原優子博士」と書かれていた。
「どうですか？　写真の内容は？」
「ええ、問題ないわね」
国王陛下にメダルを受けとる場面や、ノーベル博物館の椅子にサイ

ンをするあたしも写っている。
問題は、それらの時系列がてんでバラバラな所だけど、まあそれは仕方ないわよね。見栄えもあるし、この辺は大目に見たほうがいいわね。
また、このあたりの展示にはノーベル賞と平行して、蓬莱カンパニーのことも書かれていた。
蓬莱カンパニーについても、もちろん肯定的に書かれている。
ただ、あたしたちが資産家になっているということは、「学校の記念館」という体裁上、あえて隠すことにしたという。
これについても、あたしは特に異議はない。
「で、このケースは何ですか？」
あたしは、あえて無視していた中央にある二重のガラスケースに目をやる。
「これですか？　実はですね、今日わざわざ来ていただいたのには訳がありまして。実はこのケースの中に、篠原夫妻のノーベル賞メダルを展示したいと思っているんです……あー、もちろんレプリカで構いませんよ」
「んー」
あたしは、かなり悩んだ。
実は、まだノーベル財団にはレプリカの製造を依頼していない。
もちろん、依頼はいつでも構わないし、２つまできちんと作ってくれる。
蓬莱教授のように、本物を学園祭で堂々と展示するのは珍しい。
その蓬莱教授自身も、当日の授賞式と晩餐会以外では、レプリカのメダルを持ち歩いていたように、うまく本物とレプリカを使い分ける。
ただ、蓬莱教授のこの使い方だってかなり豪胆なもので、普通はノーベル賞のメダルなんてレプリカでも大切に保管して、滅多なことでは他人に見せない。
ましてや本物に至っては、金庫にしまったまま死ぬまで再び見ることはなかった受賞者だって大勢いた。

あたしと浩介くんも、実際本物は賞状と一緒にずっと保管部屋の二重金庫にしまいっぱなしになっている。
「実は、あたしはまだノーベル財団にレプリカを製造依頼してもらってないんです。展示するにしても、まずそこからになりますね。ただ、セキュリティはこの通り、マルチシグといいまして3人で指紋認証と数値の認証両方でパスワードを決めて、全員が正しくないと開きません。更に二重に最高クラスの品質の防弾ガラスがありますので、これならロケット弾でも貫けません。もちろん、ガラスの前に警備員も常に立たせます」
理事長さんが、パスワードのマルチシグモードに防弾ガラスのブランドを説明してくれる。
防弾ガラスメーカーは、各国政府要人が使う車などにも採用されているほど強固だという。
また、永原先生の発案なのか、警備員同士も相互に監視させ、もし盗難計画について話し合っている人がいたらすぐに密告するようにも仕向けさせて、内部犯の存在も防止するという。
どちらにしても、この問題は重要なので、さすがに浩介くんに直接決めてもらわないといけない。

「すみません、ちょっと失礼します。さすがに、主人にも相談しないといけませんので」
「分かりました」
あたしは、一旦建物の展示室とは別の、トイレの中に入る。
もちろん、使っている人も誰もいない。
あたしは携帯から蓬莱カンパニーの社長室に電話をかける。
浩介くん、出てくれるといいけど。
プルルル……プルルル……
「もしもし優子ちゃん？」
「うん」
よかったー。浩介くん出てくれたわ。
「どうしたの？　何かまずいことでもあった？」

やっぱり、電話までしてくるとそう思っちゃうわよね。
「あーえっと、実は記念館の人がメダルのレプリカを展示したいって言ってきて」
「うーん、そう来たかー。実は俺、レプリカ作ってなくてさー」
浩介くんが電話越しでも分かるくらいに困った声色になる。
それにしても、レプリカを作ってない所まであたしと同じなのね。
「あはは、うん、あたしもなのよ。まあ、さすがに製造期間は待ってくれるみたいだけど」
「んー、セキュリティはどんな感じ？」
「マルチシグパスワードに二重防弾ガラスよ。一応最高品質の防弾ガラスみたいで、ブランド名は――」
「なるほどなあ。ま、俺たちの母校だ。それに永原先生の出資もあるし、何かあったら損害賠償請求すればいいだろう……金で返されても仕方ないかもしれねえけど」
そうなのよねーノーベル賞ってお金で買えないものの筆頭だもの。
世界一のお金持ちが世界で一番お金で買えないものまで持っているんだから本当に恵まれてるわよね。
「うん、分かったわ」
あたしは、電話を切ってトイレを出た。

「あ、どうでしたか？」
「うん、レプリカ製造に時間はかかるけど、大丈夫だって。ただし、なくしたら損害賠償請求とのことです」
あたしがそう言うと、理事長先生の顔がパット明るくなった。
まあ確かに、目玉と言えば目玉だものね。
「そうですか、いやはや、ありがとうございます」
「ただし、絶対に無くさないで下さいよ」
そのあたりは、あたしとしても十分に懸念材料だから、改めて念を押す。
「分かってるわよ篠原さん、それに、展示するのは開館して最初の1か月だけで、後は普通に写真だけの展示にするわ」

永原先生が、先に言うべきことを今言ってきた。
「永原先生、それを先に言ってくださいよー」
それなら、わざわざ電話をかけなくても良かったわ。
「あはは、ごめんごめん。さ、次の部屋は私の展示コーナーよ」
「はい」
永原先生の誘導で、あたしたちはもう1つの部屋に到着する。
中は、あたしたちのコーナーとほぼ同じ広さだった。

# 資産家たちの昼食

「何だか、博物館で自分自身の展示を見るって複雑な気分だわ」
永原先生が、自分に関する展示を見ながら、ふうとため息をつきながら話す。
実際の所、あたしとしてもあたし自身の展示はどこか複雑な気分でもあった。
確かに、博物館にしても記念館にしても、普通は昔のことを展示する。
あたしたちみたいに最近のことを展示するのはもちろんだけど、永原先生の場合博物館行きが当たり前の古い時代も生きているせいで、より複雑な気分になるみたいね。
「そう言えば、美術館で展示もありましたわね」
永原先生が、鑑定番組に出たために、周囲からお宝の数々に驚かれて、ついには美術展まで開かれることになったこともあった。
今でもたまに、永原先生の家宝の公開を求められることはあるけど、永原先生は応じていない。
「あれも結局行かずじまいだったわ」
永原先生がそう語る。
ここの展示品は、永原先生の人生の紹介や、永原先生所縁の品々が展示されている。
鑑定番組の画像も、あちこちに納められている。
「これって？」
内容は「柳ヶ瀬日記」とあるけど、美術館や鑑定番組で見たときと違って紙は茶色くなっていない。
あ、よく見ると「復元」とか書いてあるわね。
「あーうん、実は全部複製なのよ。本物は私が今も保管しているわ」
やっぱり、これもいわば「レプリカ」というわけね。
まあ、実際にあの日記は歴史的資料価値も高いし、誰かがこうして複製して印刷していても不思議ではないものね。
また、吉良の着物に関しては、それを着ていた永原先生の写真で代

用されている。
写真が撮られたのは最近で、ノーベル賞の授賞式だった。
他にも、真田家の歴史や、江戸時代の江戸城や、江戸の町での生活の様子なども紹介されていて、当日江戸城で永原先生が食べていた食事も再現されている。
「今からすると質素ですけど――」
「もちろん、江戸城の食事なので豪華よ。でも、案外下町にも江戸城に負けないくらいの絶品のお店は多かったわ」
また、戦乱の時代の食事や、江戸城で食べていた食事の変化なども伝わっていて、他にも江戸城に住み始めた頃と黒船来航直前との間の２１４年間での食事や生活の変化も展示されていた。
これを見ると、江戸時代が現代ほどでないにしても、様々な分野で発展した時代だったことを知ることが出来るわね。
「さ、一通り展示も見ましたので私はこれで失礼いたします。篠原さん、ノーベル賞メダルの件、改めて御礼申し上げます」
「お疲れ様でした」
理事長さんが頭を下げて記念館を出ていった。
「篠原さん、お昼はどうするの？」
永原先生はあたしに振り返って昼食の話をしてきた。
「この格好だけど学食……というわけにはいかないわね」
あの懐かしい味を楽しんでみたいという気分はあるけど。
「うーんそうよねえ……私たちが学食なんて食べたら経済学者に怒られちゃうわね」
永原先生は、お昼は毎日高級弁当や外食で昼食を済ましているらしい。
「そうね、学校もちょうどもうすぐ昼休みの時間ですし……町で食べましょうか」
「ええ、そうね」
あたしたちは、学校の門から外に出ることにした。
小谷学園の時も、たまにこうして学校の外で食べるという贅沢をしたことは何度かあった。

プロポーズしてからは、「予算の帳尻」という名目で、蓬莱教授からお金を押し付けられていたので、その時にも浩介くんとの外食はあった。
思えばあの頃から周りの同年代より贅沢な暮らしをしていたと思うけど、今の生活はそんな生活さえ問題にならないような贅沢な暮らしだった。
あたしは、浩介くんの「人々に最も幸福をもたらした人が、最も幸福になる」という持論を頭の中で思い浮かべていた。
「こっちよ」
小谷学園の通学路を歩いて数分のところに、お寿司屋さんがあった。
もちろん永原先生が誘うくらいなので、このお店は回転寿司何て言うものではない。
ガララララ……
「へいらっしゃーい!!! おや先生、今日は学生さん連れてるんかい？」
寿司屋の大将さんが、親しそうに話しかけている。
どうやら常連らしい。
「あはは、この子は卒業生なのよ。小谷学園に来るときはいつも制服でね」
永原先生も、親しそうに話していて、ずいぶん深い顔見知りだと分かる。
「へえ、珍しい……ってあれ？ この顔にこの体型……どっかで見たことあるような……」
大将さんが、あたしの顔を見つめて来た後、あたしの胸から目を離せなくなる。
さっきの理事長さんもだし、本当に男って単純よね。
「あはは、多分考えている人と同じ人よ」
そう、あたしが小谷学園出身なこともよく知られている。
「あたしは篠原優子といいます。ええ、大丈夫です。お金なら出せるわよ。何分永原先生よりもお金持ちですから！」
えっへんという表情であたしが胸を張ると、大将さんも驚いた顔を

した。
「これは驚いた。まさかよりにもよってあのノーベル賞の篠原さんのお出ましとは」
あたしについて、資産家としてよりも、蓬莱カンパニーの幹部としてよりも、ノーベル賞として語られることが多いのも、ノーベル賞の権威の高さを物語っているわよね。
小谷学園に出来た記念館もそんな感じだったし。
「ふふ」
回らないお寿司は、だいたい休日に気が向いた時に家族で振る舞っている。
親たちも生活費や光熱費などをあたしたちが払っているとあって、相当資金に余裕があるらしく、あたしたちが自炊する日にも、外食三昧をすることも珍しくない。
「大将、江戸湾セットの特上お願いね」
永原先生が早速一番高いものを注文する。
大トロや中トロ、他にも取れたてのネタばかりで1人前で4万円もする一品だ。
ちなみに、外には値段が書いてなかったけど、ここには値段が書いてあって、もちろん回転寿司とは比較にならないほど高い。もちろん、あたしにはどうってことないお金だけど。
「へい」
「篠原さんも注文したら？」
永原先生に促され、あたしも値札などを見ながら決める。
「えっと……築地セットの特上でお願いします」
江戸湾セットは、大トロや中トロは妊娠中にあまり良くない上に、さすがに量が多すぎると思ったので、築地セットを頼む。
こちらは赤ちゃんに悪そうな食材も入っていない感じで、こちらも３９０００円ほどの値段を誇る、この店で一番高いものだ。
「うーん、現金あるかしら？」
今のうちに財布の中身を確認して――
「篠原さん、レジの前にＡＴＭがありますので是非お使いください」

あたしが財布を漁っていると、大将さんにＡＴＭに誘導された。
まあ、こんな高いお店だし外には値段も書いてないものね。あっても不思議じゃないわ。
「あ、ありがとうございます」
どうやら、ＡＴＭがレジ前にあるらしく、そこで引き出せるらしい。
あたしは、銀行のカードを入れて財布の中身の現金を引き出す。
この口座にはお小遣いとして７億円しか入れてなくて、あたしが持っている残りの大半、数千億の日本円は、別のもっと厳重なブロックチェーンシステムで保管した特別な口座に入れてある。
「ふう」
ガララララ……
「へいらっしゃーい」
すると、お昼の時間なのか、スーツを着た若いサラリーマン２人組が入ってきた。
「おいおい、最近は学生までこんなお店で食べるのかよ」
制服姿のあたしを見て、若いサラリーマンたちがとても驚いた顔になる。
「いくら景気がいいからって、なあ」
もう、あなたたちも人のこと言えないわよ。
「大将、江戸湾セットの上２つ」
２人組は特上ではなく上を注文した。
特上と比べると結構安い。
「あいよ、前の２組が終わってからでええかい？」
「はい、それでお願いします」
様子を見るに、どうやらこのサラリーマンたちもある程度通い慣れているらしいわね。
「へい江戸湾セット特上と築地セットの特上な」
「ありがとうございます」
あたしたちは、豪華に並んだお寿司を目にする。
感覚は麻痺し始めているけど、昔を思い出しながら今日も高級品が

お腹一杯食べられることに感謝する。
とにかく、いくら世界でも最大級に資産を持っているからと言っても、本当に散財し尽くしたら破産まっしぐらだもの。

「おいおい、あの2人特上って……」
「あっちは蓬莱カンパニーの株で財を成した小谷学園の永原先生だろ？　生徒の方もすげえよなあ……」
「おごりってわけでも無さそうだしな」
ヒソヒソ話しつつも、2人ともあたしの胸から視線をはずせない様子ね。
「お二人さん、あの子が気になるかい？」
次の料理に取りかかっていた大将さんが2人に話しかける。
「あーもちろん」
「へへ、あの子は、お前さんたちよりもよっぽど金持ちだよ。隣の永原先生よりもな」
「え!?　まさかだって、永原先生って資産数十兆円だろ？」
男たちは、ものすごい顔で驚いている。
「お2人さん」
あたしは、お寿司を食べながら2人に話しかける。
「あたし、篠原優子っていうの。住まいは松濤に３２０坪、資産は旦那さんと合わせて４６兆円よ」
「うおっ本当だ！　おい、あのノーベル賞も取った篠原優子だよ」
サラリーマンも驚いている。
まあ、普通はそうよね。
その後は、あたしが食べているのもあって積極的には話しかけず、サラリーマンさんたちも別の話題に移っていった。

ガララララ……
「へいらっしゃーい！」
あたしたちが食べ終わる直前に、次に入ってきたのは、おじいさんとおばあさんの高齢者夫婦だった。

「最近ますます繁盛しているわね」
「ああ、本当だぜ、嬉しい悲鳴ってやつだ。へい、江戸湾セット上お待ち」
職人さんが腕によりをかけたとあって、とても美味しいお料理になった。
「じゃあ大将、これで」
「へい、永原先生は４００００円、篠原さんは３９８００円になります……お二人ともちょうどいただきました。毎度あり、またどうぞ！」
お寿司屋さんの大将さんに見送られ、あたしたちは出ていった。
「ふう、美味しかったわ。永原先生、ありがとうございます」
「いいのよ。ところで、篠原さんこれからは？」
あ、そう言えば永原先生にはまだ話してなかったっけ？
「あそこの総合病院で検査します」
「あら？　もしかして何かあったの？」
永原先生は、あたしの鞄にあった「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーには気付かなかったらしいわね。
「あの、実は……」
あたしは、永原先生にキーホルダーを見せる。
すると、永原先生が笑顔になった。
「あら、篠原さんおめでとう。頑張ってね」
「はい、がんばります」
永原先生と別れ、あたしは病院の方に向かう。
そこの病院は、あの時と変わらず、そこに佇んでいた。
ウィーン
自動ドアをくぐり抜けて病院の中に入る。
病院の中は、殆ど忘れていたはずなのに、所々で既視感を感じる。
まあ、実際見ているんだから当たり前だけども。
そしてあたしは、待合所の一角で暇そうにしていた浩介くんを見つけた。
「あ、あなた」
「よし、優子ちゃん、行こうか」

浩介くんは、待ちくたびれたのかすぐに立ち上がった。
ちなみに会社から直帰したのか、スーツ姿のままだった。
あたしたちは、総合受付に向け、歩き出した。
「本日はどのようなご用件でしょうか？」
受付の人が笑顔であたしに話しかける。
最も、向こうからも「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーが見えたとは思うけど。
「産婦人科を予約した篠原です」
「あ、はーい、しばらくお待ちください」
あたしは、総合受付から産婦人科を呼び出す。
受付の人が内線をかけ、産婦人科に予約の確認を取る。
「はい、ありがとうございます篠原様ですね。ではですねあちらのエレベーターから――」
あたしは、産婦人科の受付の場所を案内された。
エレベーターを使い、指示通りの階を押す。
他の人も何人か乗ってきている。
病院ということもあって、顔色が悪い人や、マスクをつけている人も多い。
エレベーターから降り、正面右手の産婦人科に向かう。
あたしが以前いたのは入院患者を収容していた棟なので、この辺りの空気は大分違うわね。
「すみません、予約した篠原です」
「はい、篠原様、お待ちしておりました。こちらの番号でお呼びいたしますのでお掛けになってお待ちください」
東京の病院と同じように、番号札を渡されるが、こっちは普通にプラスチックの板だった。
正面の電光掲示板には、番号とお医者さんの部屋番号が表示されていた。
あたしは、制服から着替えるため、浩介くんに荷物を任せ、トイレで私服に着替え直してから椅子に座る。
「ふう」

あたしが座ると、ちょうど何番か前のお客さんが
「病院は忙しいな」
「ええ、この順番は、お金では買えないわね」
もしかしたら買えるかもしれないけど。
「体調では買えるけどな、あはは」
浩介くんが面白い冗談を言う。
確かに、体調が極端に悪く、急を要する場合には、順番は買えるわよね。
まあ、そうまでしなきゃいけないくらいの緊急事態は困るけど。
「ふふっ」
周囲にいるママたちも、みんな「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーをつけていた。
あたしと同じく、新しい命を育んでいるのよね。

ピンポーン
「あ、優子ちゃん」
「うん」
何分かは分からないけど、いくらかの時間待っていると、電光掲示板に、あたしの番号が表示された。
指定されたお部屋に行き、扉をノックしてから入る。
「はーい、篠原さんですね？」
「はい」
中にいたのは、若い女性の先生だった。
「はい、赤ちゃんの妊娠ということで、はい……今のところですね異常はありません」
あたしたちは、今後の妊娠生活について、お医者さんからアドバイスを受ける。
「初産ということで何とも言えませんが、徐々につわりも収まってきていますので、明後日から職場復帰と言う形でよろしいでしょうか？」
「はい」

「では許可を出しておきます。あ、私これから篠原様の主治医を勤めさせていただきます―安土（あづち）と言います。よろしくお願い致します」
安土先生が名札を見せながらあたしたちに自己紹介をしてくれる。
ともあれ、職場復帰できそうでよかったわ。
「お願いします」
「安定期は確かに比較的安定してはいますが、決して油断しないでください。節制しすぎてストレスを溜めるのもよくないのですが……この報告書を見る限り、大丈夫そうですね」
安土先生は、あたしのこれまでの様子を印刷した紙を見ながら話す。
恐らく、あたしが赤ちゃんを守ったことを指摘されて泣いてしまったエピソードを見ているのね。
「あたし、赤ちゃんのためなら、どんな自己犠牲でも出きるような気がしているんです」
「ふふ、いい心がけね。でもちゃんと旦那さんにも構ってあげないとダメですよ」
安土先生がにっこりと微笑んで話す。
「あー大丈夫です。その……はい……」
「ええ、浮気も不倫もなしに、旦那さんはきちんとしてますわ。もちろん、赤ちゃんには負担をかけません」
あたしたちのこの回答は、暗に浩介くんが問題なくあたしで満たしていることを示していた。
それを察した安土先生は、それ以上は追求せずにあたしたちに微笑んでくれた。
「続いて注意点です。勤務は許可しますが、まだフルタイムは許可できません。もちろん残業は論外です。まず時短で、それから様子を見てフルタイムにします」
「はい」
とにかく、今は妊婦さんへの配慮が行き届いている。
これは、蓬莱の薬が出来る直前までは少子化が深刻だったこともあ

る。
「それでは本日はこれまでです。お疲れさまでした」
「ありがとうございました」
安土先生とは、これからしばらくお世話になる。
ともあれ、あたしは時短勤務から、仕事を再開することになった。

# 復職

翌日、会社に久々に出勤することになったあたしは久々のレディースーツに着替える。
もちろん、お腹を締め付けないように細心の注意を払う。
レディースーツは、「レディー」と名乗るだけあって妊娠中の人にも配慮した機能にはなっているみたいだけど。
昨日も含めて、つわりは来ていない。安定期に本格的に入ったのかしら？
「おはよー」
「優子ちゃん、おはよう、今日から復帰？」
いつものように、広いリビングでお義母さんが出迎えてくれる。
見渡す限りでは、浩介くんはまだ来ていないわね。
「うん」
「ちゃんと頑張るのよ。それから家事も少ししていかないとダメよ」
「はい」
ともかく、あたしは妊娠中だけども、安定期に入ったら少しは家事をしないといけない。
確かにあたしは仕事が忙しかったり、妊婦になってからは妊娠初期のつわりなんかもあって、満足に家事が出来ない状況が続いていた。
とは言え、何日もブランクを開けるのもよくないので、安定期には、赤ちゃんに気を付けながら家事をするつもりでもある。
ガチャッ……
背後から、誰かが部屋に入ってくる音が聞こえた。
「おはよう、お、優子ちゃん今日早速復帰か」
入ってきたのは、浩介くんだった。
「うん、安定期の間は会社に出勤できるのよ」
「良かった。優子ちゃんがいねえと、会社も少し寂しいからな」
最も、浩介くんとは出勤時間は違うけどね。
それでも、あたしが帰ってくるってだけでも雰囲気が変わるのかもしれないわね。

「浩介くん、生産状況はどうかしら？」
浩介くんが、あたしの服装をちらりと見ながら話す。
蓬莱の薬も、そろそろ値下げが終わる頃合いで、その時期になると注文が更に殺到し始めていた。
「ああ、生産性が上がってくれたおかげで、予約の状況と鑑みて、何とか品薄にはならずに済みそうだぜ」
浩介くんがにっこりと笑いながら話す。
とにかくこの「値下げ終わり」に伴う需要の急増は、９８年後に予定されている「世界同時解禁」に伴う大規模な需要急増への予行演習も兼ねている。
不老になったからといって、今の社員が９８年後もいるかと言うと怪しいけど、少なくともあたしたちは問題ないはずよね。
どちらにしても、しばらくはこの分割購入者たちの収入と、一括購入者たちによる内部留保などで、会社は生計を立てることになる。
「ふう、よかったわ」
とにかく、品薄になると様々な部分で弊害が出てきてしまうので、それを避けられたのは良かった。
品薄になると、高額で買おうとする客が出てくるし、企業なのでそれを優先させざるを得なくなると、蓬莱教授が一番恐れていた「一部の人だけが不老を享受できる社会」になってしまう恐れがある。
それは一番避けたい未来なので、それが回避される見込みなのは良さそうだわ。
「ああ、工場の効率化だけじゃなく、拡張工事も順調に進んでいるんだ。もちろん現場でトラブルが無いわけじゃないけど、トラブルを見越した余裕ある日程が組めているんだ。独占企業様々だぜ」
どちらにしても、世界同時解放の時にはありったけの在庫が必要になる。
その時までに何とか工場も拡張しないといけないわね。
どちらにしても、浩介くんが言う通り独占企業故の余裕というのはある。会社を作る前に政府にアプローチしておいたのも良かったのかもしれないわね。

「そう？　ともあれあたしもお仕事頑張らなきゃ」
浩介くんが、先に家を出る。
あたしは電車が空くのを待ってから出勤する。
会社へ持っていく通勤鞄にも、「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーがついている。
この絵は、何度見てもあたしを安らかな心にしてくれるわね。

「じゃあ、あたしも行くわね」
「行ってらっしゃーい」
浩介くんが会社に行ってからしばらく後で、あたしは自宅を出ていつもの神泉駅を目指す。
ラッシュ時は過ぎていたので、電車の中は空いていた。
そして、次の渋谷駅で乗り換えて蓬莱カンパニーのビルに向かう。
最近では、このビルのフロアに蓬莱カンパニーが占める割合が高くなっている。
もちろん、これだけ大きければ、さすがに蓬莱カンパニーでも半分も占めないけどね。
あたしは、蓬莱カンパニーのある最上層用のエレベーターに乗り込み、オフィスにあるあたしの席へと向かった。
「おはようございまーす」
「「おはようございます」」
あたしが登場すると、全員が笑顔で返してくれる。
やっぱり社員たちの視線は、少し大きくなり始めたお腹に向けられていた。
「常務、おはようございます」
「はい、おはようございます」
あたしの会社での地位は、まだ常務ということになっている。
とは言え、それも株主総会までのことで、それからは顧問に一旦退くことになる。子育てが終われば、また常務に復帰するかもしれないけど、そこまで遠い未来のことまでは、まだ考えていない。
あたしは、事実上常務業務を代行してくれている余呉さんのもとへ

向かった。
「余呉さん、おはようございます」
「篠原さん今日から職場復帰したのね。妊娠中なんだから無理しちゃダメよ。こっちは大丈夫ですから」
余呉さんにも「無理はしないように」言われた。
「ええ、ありがとうございます」
業界に復帰したあたしがすることは、主に余呉さんのサポートということになる。
余呉さんによれば、支店の展開は２０３５年までに全て終わらせる目処が立ったという。
ただその後も、支店が入っているビルとの兼ね合いもあって、ちょくちょく移転したり閉店や開店があるとのことだった。
また、地域の人口次第では、支店からの格下げや、逆に出張所からの格上げといった処置も必要になってくるという。
「その辺りの組織人材をどうしようかしら？」
余呉さんは今、世界解禁に向けての準備期間や、遠い未来の蓬莱カンパニーの組織図を考えている。
もちろん、コンビニのようにあちこちに大量にお店を作るわけではないけど、それでも全国くまなくカバーするためには、何段階かのＳＶに分ける必要がある。
つまり、小エリア中エリア大エリアといった感じになる。大きなエリアを統括するＳＶにはそれなりの権限を与えて、自由度の高い経営をしてもらわないといけない。
大所帯になるのでどうしても組織の階層が複雑になってしまう。
総支店長は部長相当で、取締役待遇だった余呉さんの役目になっていたけど、今は一般の古参社員が行っている。
「単純な年功序列もあれですけど、成果主義というのも会社の性質上難しいのよねえー」
年功序列、終身雇用、新卒主義と言えば、かなり昔に「崩壊」した過去のものとされていた。
しかし、統計的にはそれらの「崩壊の証拠」を示すデータは取れて

おらず、感覚的なものに依存していたということが分かっている。
　あたしたち蓬莱カンパニーの場合、そもそも独占企業で競争相手が存在せず、しかも大衆の余すところなく普及させるものという特殊な状況なので、社員、特に営業部の成績の相対化がとても難しく、成果主義を導入するのはとても難しい。
　そうすると、自然と年功序列のようなシステムになりがちだけど、これからの不老社会では、年功序列は成果主義以上に馴染まないのも事実だった。
「年功序列でも成果主義でもない、新しい評価方法が必要なのよねー」
「これからの時代にあった評価方法……もちろん、ハンデをつけるのは論外よね。学校じゃないんだし」
　不老人間は、そうでない人間よりも遥かに強い。
　そしてそれは、「不老になったばかりの人間」にも当てはまる。つまり、一人前の「不老人間」になるにはそれなりの時間が必要ということになる。それが何年になるかは、まだ分からない。
　どちらにしても、このまま行けば今はまだいいけど、例えば薬を世界に解禁する１００年後くらいの未来には、「会社が評価方法として成果主義を導入すると、結果的に年功序列、年齢主義になる」という現象が頻発する恐れもある。
　天才的な若手がいたとしても、熟練した凡人に勝てなくなってしまうという未来は、あまり健全とは思えない。
　現に、あたしが入ってくる前の協会がそんな感じだったらしい。
　あたしはＴＳ病という意味では、それこそ天才だったし、永原先生の見る目もあって正会員に大抜擢されたけど、最初は協会の会員たちからも怪訝な目で見られていた。
　もちろん天才なら凡人が決してたどり着けない場所へ行けるという人もいるけど、それは今までの人間の寿命スケールでの話であって、不老人間には当てはまらない可能性も高い。
　そうするとねずみ講で、後に生まれた人ほどずっと貧乏に押しやられる可能性が高くなる。
　それを避けるために、更に子供をたくさん作って後世にババを押し

付けるということになってしまう。
「でもそういうことを続けていると、蓬莱の薬をあえて飲まない人も出てきそうだわ」
あえて飲まない人が出てくるだけならまだいい。
頭を押さえつけられた人々の不満が、蓬莱カンパニーに向いたり、あるいは国そのものに向いたりすれば、暴動や、最悪革命何て言うことにもなりかねない。
そうした国の混乱は、当選人々の寿命を押し下げる効果が発生する。
そうはならなくても、こうした先送り戦術は、続ければ続けるほど、その後の傷口も深くなってしまう。
だからといって、プロスポーツによくありがちな、若くて才能があるというだけで、成績のいいベテランを押しのける訳にも行かない。
それはベテランの成績が加齢とともに下がることが前提になっているからでもある。
「悩ましいわね……」
そうならないためには、全く新しい事業を作っていくしかない。
しかしイノベーション創設は、とても難しいのも事実だ。
もちろん、有り余る金にものを言わせて、「とりあえずやってみる」の「数打ちゃ当たる」精神でもいいんだけど、それではあまりにもコスパが悪いのも事実。
今のあたしたちもベンチャーと言えばベンチャーだけど、既に時価総額世界一の企業でもある。
不老をもたらす独占企業の社会的責任としても、不老時代に備えた会社組織を、率先して実行してアピールする必要がある。
それに関する経営体勢の創設は、みんなとても苦労している。
「うーん、そうなるとローテーションするとかくじ引きで決めるとか、そういう方向性になっていってしまうわよね」
要するに、「運で決める」とか「当番制にする」ということである。
一番原始的で、手抜きな方法に回帰するということになる。
「でもそれだと、無能な人に当たると大変よね」

「そうなのよねえ」
蓬莱の薬は、無能でも時間をかければ足を引っ張らない程度にはすることが出来る。
とは言え、それはあまりにも非効率であった。
かといって、蓬莱カンパニーといえど硬直化もよくない。
となれば、やはりある程度人材そのものに流動性を持たせるしかないわけだけど、そうすると今度は機密情報の漏洩の危険性もある。
「総合的に事業を展開できればいいんだけど――」
旧財閥などのグループに入るという選択肢も思い浮かんだ。
たぶんそんなことを申し出れば向こうは泣いて喜ぶだろう。
しかし、あたしたちは「あまりにも大きくなりすぎた」というのも事実だった。
「そうねえ、やっぱり末端まで待遇をよくするしかなさろうね」
結局、出てきた結論は当たり障りのないものだった。
今後は、高収益も見込めるわけだし、社員たちを他社よりいい給料で繋ぎ止めておくことこそが肝要になるという結論に達した。
幸い、支店などの現場は、機密情報には触れられないようにはなっている。
そして本社社員も今のところ新しい採用はほぼないので、大丈夫だとは思う。
ともあれ、これらはすぐに結論が出せるものではないので、余呉さんとの話し合いは、今後も続けていかなければいけないわね。
まあ、実際に重要なのは、あたしたち役員勢がきちんと社員の耳に声を貸すことだけど。
会社の上層部は、自分達が儲かることしか考えていない人が多いけど、あたしたちの場合既に儲けすぎているくらい儲けているので、こうした余裕のある方針を取ることが出来るのよね。
「そうねえ……」
あたしたちは、他にもいくつかの仕事をしていく。
最近多いのが、様々な業種との業務提携案、何分ノーベル賞、世界一の資産家、蓬莱の薬、独占事業と、美味しいところをがっぽりと持っ

ているあたしたちなので、今年に入ってから様々な業種から業務提携の申し出が殺到しているという。
配送、流通業者からの提携依頼は無論のこと、ゲーム会社やアニメの会社から、「蓬莱の薬を作品に出したい」という申し出や、タクシー会社と連携してお客さんを運ぶサービス、他にもドリンク会社から「より美味しく飲める蓬莱の薬」といった企画文書やなど、中には「何でこの業界が!?」と思えるようなとんでもないこじつけでの業務提携依頼も多かった。
あたしたちとしては、確かにこの手の提携は魅力的ではあった。
好景気でリスクを取ることも必要だろうとも思う。
けれども結局、今は会社の資源はほぼ薬の増産で手一杯でもあった。
世界人口が９８年後にどれ程増えているかは分からないけど、それら全てが、お客さんになり得るんだから。
あたしは、午前午後の仕事を、これまでとは違う感覚で済ませた。
時短勤務とは言え、久々の出勤は、あたしを疲れさせるのに十分だった。
今後はフルタイムにもなるわけだし、色々と気を付けないといけないわね。

「ただいまー」
リビングに入ってからただいまをする。
「2人ともお帰りなさい、優子ちゃんはどうだった？」
やっぱり、お義母さんの疑問はそこだった。
「うん、やっぱり疲れたわ」
あたしの回答も、当たり障りのないと言えば当たり障りのないものだった。
「無理もないわ。久々の勤務だったものね」
お義母さんは優しそうな表情であたしを見守ってくれていた。
まだまだつわりもあるし、これからの生活は、少し慣れる必要があるわね。

「うん」
さて、今日の晩御飯は何かしら？

# 安定感のある所

月日はたち、完全につわりがなくなった3月中旬、妊娠４ヶ月に入って少しだけあたしのお腹は大きくなり始めた気がしていた。
また、生理が止まった生活というのも、結構違和感を感じるのも事実だった。
更に言えば、妊娠の影響でただでさえ巨大だった胸がまた大きくなったため、ちょっとブラジャーがきついのも気になるわね。
一方で、お腹の赤ちゃんは、あたしを栄養にすくすくと育っている。
今日は病院で、鮮明なエコー写真を撮ってもらうことになっている。
安土先生によれば、「そろそろ赤ちゃんの原型も出来て来ている」とのことだった。
男の子か女の子かはまだ分からない。
浩介くんは、「女の子なら優子ちゃんに似てかわいいだろうなあ」と言っていた。
やっぱり父親だからか、娘が欲しいという感じなのかしら？
でも、何だか男の子の赤ちゃんの方がかわいい気もしないでもないのよね。それはあたしがママだからかしら？
「ふふっ」
電車の中で、あたしは一人上機嫌になる。
まだ見ぬ赤ちゃん、あたしのお腹の中でどうなっているのかしら？

「失礼しまーす」
安土先生に呼ばれ、あたしは病院へと向かった。
今日は健康診断の代わりに赤ちゃんのエコー写真を撮ることになっている。
エコー写真は、妊婦のお腹に当てることになっている。
そうやって超音波で計測した結果を出力して、写真にするというのがこの写真の本質になっている。
もちろん、白黒写真だ。

「こちらで計りますね」
「はい、お願いします」
安土先生に促され、計測器のあるベッドに横たわる。
「じゃあですね、シャツを上げて、お腹を見せてください」
「はい」
言われるがままに、お腹を見せる。
少し膨らんでいるわね。
「あら、膨らんでますね。では……」
「んっ……！」
機械に繋がれている計測器材が少し冷たいわ。
何だか、変な感じだわ。
「はい、見えましたよ。こちらをご覧ください」
安土先生の言葉を聞き、あたしは首を傾けて画面を見つめる。
「あっ……」
白黒の画面がゆらゆらと揺れている。
その中で、はっきりと分かる赤ちゃんの姿。
あたしは、頭を鈍器で殴られたような、そんな衝撃を受けた。
この子が、この子があたしの赤ちゃん、浩介くんの赤ちゃん、こんなに、こんなにかわいかったなんて！
「これが赤ちゃんですよ。かわいいですねー！」
「うん、うん……！」
あたしは、にっこりと笑う。
また、涙が溢れてきた。
あんなに小さかった赤ちゃんが、もうこんなにすくすくと育っていて。
でも、まだかなり小さい。
これからも、どんどんとあたしのお腹で成長してくれる。
「赤ちゃんの血液が、これからどんどんと作られていきます」
「はい」
「きちんと、食べてくださいね」
「はい……はいっ！」

超音波越しだけど、ようやく赤ちゃんの姿を捉えて、そして見ることができた。
あたしの中で、どんどん大きくなる赤ちゃん。もう、いとおしくてたまらないわ。
早くこの子に会いたいという気持ちと、いつまでもあたしの中にいて欲しい気持ち。
二律背反の2つの感情が、あたしを包み込む。
あたしが泣いていることに、安土先生は全く気に留めていない。
もしかしたら、赤ちゃんを見てないてしまう母親は、珍しくないことなのかもしれないわね。
「篠原さん、あなたは本格的な安定期には入りましたけど、これから赤ちゃんはどんどん大きくなります。つわりから解放されて、身体は軽くなりましたけど、決して無理をしないように気を付けてくださいね」
「はい」
幸子さんにも、「安定期に入りたてこそ油断をしちゃいけない」「赤ちゃんのためにも、この時こそしっかりと栄養を与えないといけない」と、きつく言われている。
安土先生も同じことを言っていたので、もちろんあたしは旅行なんて言うことはしない。

「ほー、これが大きくなるんだろう？　不思議だよなあ」
家に帰り、もらったエコー写真を浩介くんに見せてみた。
浩介くんは、あたしよりもどちらかと言えば感心した感じで話していた。
確かに、男性からすると、妊娠は不思議なことだとも思う。
あたしだって、よく分からない。
ただ、あたしにとって、赤ちゃんはとても大事だから。
「あなた、愛情が変わらないように注意しなくちゃね」
「あ、ああ……」
妊娠、出産、育児といった過程で、いわゆる「産後レス」という状

況に陥ることがある。
愛情の形も、「家族愛」に片寄りすぎるとよくない。
そのためにも、「慣れない」ことが大事になってくる。
「あたしも、浩介くんの前では恥じらいを忘れないわ」
「忘れられないの間違いだろ？」
浩介くんが、ニヤニヤしながら話す。
「ばかあ!!!」
あたしは色々なことを思い出して顔が赤くなってしまう。
「あらあらまあまあうふふ……」
あたしが照れ隠しをすると、お義母さんが微笑ましく笑っていた。
本当に、浩介くんはあたしの心を捉えて離さないわね。
「ま、とにかく今の俺は会社で稼ぎつつ、静かに優子ちゃんを支え続けるだけさ。男が下手に首を突っ込むべきことでもねえしな」
浩介くん、やっぱりかっこいいわね。
こういう「女性の領域」に口を出さないのも浩介くんのいいところよね。
「ふふっ、確かに男子禁制って感じもあるものね。産んだ後は育児の情報交換も大事よ」
お義母さんがふふっと笑う。
「もしかすると、他の子供も？」
「ええ、ママ友問題はあるわよ」
赤ちゃんが産まれれば、今度は「ママ友」という問題もあるわけね。
やっぱり女の子の修行は終わらないわね。
「うー難しいわ」
「優子ちゃんは大丈夫よ。いくらここが上流階級の地域でも、優子ちゃんほどに完璧な女性なら、みんな高嶺の花になるわ」
確かに、そうかもしれないけど、でもより強く嫉妬されちゃう危険性もあるのよね。
「ああ、俺もそう思う。女性社会はよく分からないけど、優子ちゃんレベルなら、みんなそう思うんじゃねえの？　うちのお袋だって姑だぞ」

お義母さんの意見に、浩介くんも賛同する。
確かに、あたしが結婚する前から、お義母さんは「優子ちゃんくらいに完璧だと、姑として嫉妬する気にもなれない」と言っていた。
ならば、今のあたしなんてもっとすごいわけだものね。
今はまだ、ママ友の問題などはよく分からない。
そんな未来のことよりも、とにかく今はこの子をきちんと育てていかないといけないからね。

「幸子さんは、赤ちゃんはどうだったの？」
食事が終わり、あたしは自室にあるテレビ電話で幸子さんと今後について相談していた。
「うん、健康だったわ」
赤ちゃんが障害を持って生まれて来ないかは、母親としてどうしても心配になる。
だけど幸子さんによれば、ＴＳ病患者ではそうした例はまだないらしい。
とは言え、サンプル数が少ないので何とも言えないというのが実際のところよね。
「そう……分かったわ」
ひとまず、あたしは聞きたいことは聞くことができた。
「ところで優子さんに聞いておきたいことがあるんです」
「ん？」
幸子さんがあたしに聞いておきたいこと？
何かしら？
「優子さん、胸大きくなってません？」
「え!?」
あたしは、図星を突かれてしまう。
確かに、その通りだった。でも、元々が物凄く大きいので、浩介くんも気に留めていなかった。
なのにまさか幸子さんに見抜かれてしまうとは思わなかった。
「やっぱり、妊娠中は女性ホルモンが強くなるんですよ。それが母性

にも繋がるんです。特に今は赤ちゃんへあげるミルクも作らないといけないんですから」
あー、あったわね母乳、何で忘れていたのかしら？
ともかく、そういうこともあって、胸が大きくなっていたのね。
うー、胸が大きいのはいいんだけど、さすがにこれ以上大きくなっちゃうとブラジャーのサイズも、大きい専門店にもなさそうなサイズになっちゃいそうだわ。
「今のうちに、妊娠中のためのブラジャーも買っておいてくださいね。あたしも、実は1サイズ大きくなったのよ」
幸子さんがぴんと胸を張る。
確かに、以前から幸子さんはあたしほどでないにしても胸はかなり大きい方だった。
今もこうしてみると、確かに出産する前よりも大きくなっていたことが分かった。
「あはは、気を付けておくわ。サイズあるかしら……」
最近は大きいサイズでもかわいらしいデザインが多いけど、あたしのレベルで大きいとさすがにこれ以上はきついと言う感じがするのよね。
「あー、優子さんですとそうなりますよねー」
幸子さんは、少しだけばつの悪そうな顔をしていた。
「ともあれ、あたしからは以上よ」
「うん、ありがとう」
幸子さんとの電話を切り、あたしはベッドに向かうことにした。

日々の妊娠生活が進むにつれて、あたしへの講習も多くなった。
とにかく赤ちゃんのために制約が多い。
また、幸子さんや比良さんだけでなく、妊娠出産を経験した会社の社員さんたちとも、話ながら意見交換をした。
「それで、そんな感じなんです」
「えー!?　常務そんなんでストレスにならないんですか？」
昼下がり、あたしは会社の子持ち女性社員たちと妊娠中の生活につ

いて話していた。
　あたしの妊娠生活は、ガチガチに固められた節制だらけの生活に写ったらしい。
「お腹の子のことが一番ですから。むしろお腹の子に影響しかねないことをする方が嫌だわ」
　今はもう、お腹の子のためなら、どんな自己犠牲さえ払えると言う自信もあった。
「へー！　常務ってやっぱり母性が半端ないよねー」
「うんうん、私は産んで見て、少しずつ母性を覚えていったのに」
　妊娠初期段階からそう考えられるあたしは、どうやら結構なレアケースらしい。
　うーん、やっぱりＴＳ病患者って母性強い見たいね。男だった反動なのかしら？
「旅行とかカラオケとか遊園地とか、そういうのには行かないの？息抜きによかったよ」
　どうやら、この女性は結構リスクの高いことをしていたらしい。
「とんでもないわよ！　財産取られても行きたくないわ！」
　体に負担のかかることを、妊娠中にするなんて考えられない。
　もちろん、妊娠中期や妊娠後期には、赤ちゃんを産む際のことを考えて運動も必要だけど、それだって軽いストレッチとかにとどめておかないといけない。
　ましてや旅行やカラオケ、遊園地なんて問題外だわ。
「そんなに堅実過ぎると、ストレスで大変なことになるよ」
　うーん、どうも根本的なところでずれているみたいだわ。
「あたしからすれば、赤ちゃんの負担になりかねないかどうかの方がよっぽどストレスだわ」
　大人は、子供のために我慢しなければいけない。ましてや、自分のお腹の中に赤ちゃんがいるならなおのことだ。
　自己中心的な考えは、結局子供を滅ぼす。
　あたしは、赤ちゃんがかわいくて仕方ない。母性があるからこそ、赤ちゃんのためを思える。

「ほんと、女性の理想そのもので、篠原常務って羨ましいわー」
彼女たちも、赤ちゃんのことを第一に考えて、苦を苦とも思わないあたしのことが羨ましかった。
他のママだと、そうもいかないらしい。
あたしからすれば、赤ちゃんへの愛情が足りないだけにも思えてしまう。
そうなってしまうのは、やっぱり旦那さんとの関係もあるんじゃないかとも思えてならない。
ある意味で、あたしが恵まれているからこそなのかもしれないわね。
「常務くらい思いきった女性になりたいものね」
「でもなかなか難しいよ」
「うんうん、大変そうだものねー」
やっぱり、あたしは「理想の女性」に近くなっている。
おかしな思想に染まった女性でなければ、赤ちゃんを慈しむ心を持つことは正常な感情ということをきちんと知っている。
既婚の女性たちは、またあたしを違った目で見てくれてもいた。
「何もかもあたしを目指すとなると大変かもしれないわよ。あたしは、自分の性別が変わるなんて言う大きな子とがあったからよかったけど」
「うん、そうよねー」
「難しいよねえ」
「ま、今からでもやれることはやらんとなあ」
「ふふ、男性に受けるようになると本当に人生変わるわ」
あたしが、いつものことをアドバイスする。
赤ちゃんを育てて産むことは、女性にとって大きな喜びだけど、その喜びを得るためには、きちんとまずは男性に好かれるようにならないといけないのよね。
「そうねえー、自分勝手はよくないわよねえー」
「変なプライドで損しちゃいけないわ」
やっぱり、人生経験を積み、きちんと結婚できていた女性は違って

いた。
あたしは、お義母さんや母さんの例を見て、更に自分の考えを深めていくことができた。
モテない女や、ブスな女は、性格もひどくなっていって、更にドツボに嵌まるんだと、そう思い知った。
「さて、あたしは仕事に戻るわね」
「はい常務」
お腹の赤ちゃんは、今もこうしてどんどんと成長してくれている。
もしかしたら、次の検査ではそろそろ男の子か女の子か分かるかもしれないわね。
「ふう、さて」
蓬莱カンパニーでは、２月を持って値下げが終了し、また分割払いの制度が始まった。
分割払いの年数も、１年１２回から１０００年１２０００回まで幅広く選ぶことができる。
あたしの仕事は、相変わらず今後に向けた販売戦略や、また顧客の満足度の分析などに焦点を当てている。
顧客への満足度については、やはりまだ大半が「実感が湧かない」といったものだった。
とは言え、この薬の本質は「変化しない」所にある訳なので、薬を飲んだ人も、「長い目で見るべき」ということは分かっているので、あたしは特に問題視はしていない。
ただ、分割払いが始まって分かったのは、意外にも滞納が１％未満の僅かとはいえ、存在していると言うこと。
これについては、もちろん強制執行を容赦なく下すことができるため、滞納者も次の月には支払ってくれるだろうと楽観視している。
まあ、たかが２０００円だし、破産してもなくならないお金になっているから、特に心配はしていない。
「問題は、働く意思のない無収入無一文になった人間ですよね」
余呉さんが懸念の声をあげる。
「ええ」

暴力団ならば、拉致して強制労働させて返させるとか、借金を強要することで返させるといったことも可能にはなるけど、もちろんあたしたちはそんなことはできない。
とはいえ、返して貰わないことにはこっちも困る。
そのためにも、徹底的に連座制を採用することで、地の果てまで追うことになっている。
まあ、月２０００円で切れる縁ならその程度だろうし、生憎蓬莱カンパニーには「絶縁したから関係ない」は通じないけどね。
いずれにしても、契約前にそうした注意点を念入りに説明するだけではなく、滞納した時にもそうした説明をする必要もあるわよね。
「最低賃金でも、２時間とかからない時間で返済できるわけだし、そうした日払いのアルバイトを紹介する部門を作ってもいいかもしれないですわね」
「うーん、コスパに合うかしら？」
正直に言って、滞納は極めてレアケースだし。
「この辺りは税金と同じです。つまり、逃げ得をなくすことで『公平性の担保』を確保するわけです。幸い、延滞金が火だるまのように膨れ上がる税金と違って蓬莱の薬のお金は月２０００円相当に固定ですから」
もちろん、５年ごとに物価の変動を考慮した値段の調整は存在するけど、それでも滞納することでかかる延滞料金はものすごく安くなっている。
この辺りは、奨学金と同じで、良心的な値段で貸す代わりに、取り立ては厳しめになっている。
「そうねえ、食費をちょっと切り詰めれば問題なさそうですものね」
「ええ」
いずれにしても、蓬莱カンパニーへの批判の声はインターネットでも聞こえてこない。
まあ普通に考えれば、２０００万円相当の商品を、１０００年も分割払いにして、しかも１０００年で２割りと言う金利にしてもらえるだけでも良心的すぎるくらいよね。

とはいえ、1%に満たないような極めて少数でも、数が増えればリスクになる。
あたしたちは、滞納者に対する対策を立てる部門を作ることで一致した。
そうなるとまた人手が不足しそうなので、何人か雇わないといけない。
あたしたち蓬莱カンパニーは、本社勤務は中途採用が中心の会社なので、また求職者や転職希望者を集める必要がある。
業務提携を求めてきた会社もあったので、その辺りの会社にも、アドバイスを貰うことになりそうね。

# 初めてのメッセージ

「ただいまー」
「優子ちゃん、お帰りなさい」
家に帰ると、妊娠前よりも多い量のご飯が待ち構えている。
知っての通り、赤ちゃんはママからへその緒を伝って栄養を分けて貰っている。
最初は結構苦しかったけど、ゆっくりと何度かに分割して食べると、よく食べられることが分かった。
妊娠の過程が進むにつれて、赤ちゃんも大きくなって「大食い」になっていく。
妊婦であるあたしも、出産時に向けて、赤ちゃんに負担をかけずに体力をつけるためにも、「食べる」ことは重要になってくる。
食品の質も変わってきて、これは安土先生のアドバイスでもある。
「いただきまーす」
今は赤ちゃんへの栄養ということで、特にバランスが考えられた食事になっている。
「育児についても、そろそろ相談しないといけないわね。ここはお世辞にも『普通の家庭』とは言えないもの」
つい去年までは、『普通の家』に住んでいたけどね。
本当、世の中って分からないわね。
「ええ、でも今は産むことで精一杯だわ」
「やっぱり？　でも、産まれたらすぐに育児が始まるのよ」
「分かってるわ」
あたしは何となく、育児についての不安は感じていなかった。
今後、「妊娠前検査」も盛んになってくる。
これは、ダウン症やその他の「異常な赤ちゃん」の事前検査を行うというもので、特にダウン症が判明すると9割以上の母親が中絶を選択すると言う。
一時期は高齢出産の増加で問題になっていたけど、蓬莱の薬のお陰でそうしたことは減少していくと予想されている。

特にあたしたちＴＳ病の場合、実年例はともかく、肉体的な年齢はＴＳ病になった年齢のままなので、あたしとしては１６―７歳で妊娠しているようなもの。
生物学的には、とても健康な赤ちゃんを産むことができるのよね。
「とにかく、頑張りなさい。私たちの頃よりも、医学はずっと進歩しているわ」
「ええ」
あたしは、赤ちゃんの分と自分の分をきちんと考えながら食事を進めた。

「それでは事前の検査をしますね」
安土先生や病院側の都合もあって、検査は４月の始めになった。
新しい年度ということもあって結構忙しい時期だったけど仕方ないわね。
あたしが今日する検査は、事前に赤ちゃんに遺伝子異常が無いかどうか調べる検査で、エコー写真などだけでは分からない検査もある。
主に、あたしの血液で検査するとか。

「はーい、これが今の赤ちゃんですよ、かわいいですねー！」
また、より鮮明な写真を撮るためには、直接カメラを入れて赤ちゃんの様子を計測することもできる。
この体制は恥ずかしいけど、医療機器の画面から鮮明に分かる赤ちゃんに、頭がくらくらしそうなくらいにかわいくてたまらなくなった。
あたしの中で、着実に赤ちゃんが育っている。
そう思うだけで、この子へのいとおしさが込み上げてくる。恥ずかしさなんてすぐに吹き飛んじゃう。毎日でも見ていたいわ。
まだ顔は、しわくちゃでつぶれたような感じだけど、そうした未成熟なものに対するいとおしさはとても大きかった。

「ところで篠原さん、ここの病院には麻酔科医がいますので、『無痛分

娩』を選択することもできます」
検査が一通り終わると、今度は安土先生が聞き慣れない言葉を話してきた。
確か、あたしが女の子になったばかりの頃に頻繁に聞いた言葉だったけど、あんまりいい報道のされ方じゃなかった気がするわ。
「うーん、昔聞いたことはあるんですけど、何だかあまりよくない印象だけ持っているわ」
麻酔で痛みを軽減して産むことができるというものだけど、もちろんそうしたことをすると言うことはリスクだって当然あるということ。
「ええ、ですが医学は進歩していますから……高齢出産の方にはいいですけど、篠原さんは肉体的には１０代後半ですからね」
「ええそうですね」
しかも、ＴＳ病患者はとても安産の体質で知られている。
つまり、わざわざ新しいことをするメリットは殆どない。
「選択は篠原さんの判断ですけど、事故のリスクもあるということを肝に命じておいてください」
「はい」
これについては、幸子さんや比良さんと相談しようと思う。
まあ、多分「やめておいた方がいい」って言われると思うけど。
「ああ、やめておいた方がいいわ」
テレビ電話で、幸子さんが即答した。
元々は、普通に産んでも色々とリスクの高い高齢出産の妊婦さん向けのもので、更に言えば脊髄を傷つける危険性などもあってＴＳ病患者には元々推奨されていないらしい。
ＴＳ病患者の場合、肉体年齢が若いことやみんなかなりの安産体質なのも大きいという。
「ものすごく単純に言えば、普通の出産にリスクのある過程を１つ増やすわけだもの。リスクがないわけないわ。重い障害を負ったり、母子ともに死んじゃったりもするわ」
幸子さんが少し深刻そうな顔をする。

あたしの場合、ＴＳ病患者たちの中でも特にその特徴が強い体質なので、特にしなくても良さそうね。
「うん、やめておくわ」
ＴＳ病患者が出産時に死亡したりしたことはないし、ヒヤリハットの気配すらない。
それだけ安産型なのだから、わざわざ新しいことをする必要性も薄いということ。
「うん、それがいいわ。お金もかかるし……って、優子さんには関係ないわね」
「あはは……」
といっても、幸子さんも協会の正会員で、今は協会が持っている蓬莱カンパニーの株式から巨額の配当金を貰っているので、それを会員たちで分配してそれなりにお金には余裕があるんだけどね。
「それに」
幸子さんが、にっこりと優しそうな目であたしを見つめてきた。
やっぱりこうしてみると穏やかなお人形さんみたいよね。
「赤ちゃんを産んじゃえば、痛みなんてすぐに忘れちゃうわ。赤ちゃんがいとおしくなって、また産みたいって思えてくるの。女の子の本能よ」
「うん」
痛みなんて忘れてしまう。
あたしにはまだ完全に信じられない。母さんやお義母さんには、痛みの記憶はあるみたいだし。
でも何故だろう？　幸子さんの言っているように、痛みを忘れてしまう人も一定数いるような気がしていた。
多分、母性で溢れちゃうんだと思う。
「ありがとう幸子さん」
「うん」
あたしはテレビ電話を切ると、赤ちゃんに負担をかけないようにゆっくりとベッドに腰をかけて横になって安静にする。
お腹が少しずつ少しずつ膨らんでいく。

出産前になれば、お腹回りはあたしの胸くらいに膨らむ場合もあるという。
どのくらい大きくなるかはまだ分からないけど、あたしにとっては怖くない。
それよりも不安と期待があるのは、赤ちゃんがお腹を蹴る、いわゆる「胎動」だった。
あたしのお腹の中で赤ちゃんが動いているのを感じた時に、ただでさえ押し潰されそうなくらいに溢れている母性がどうなっちゃうのか心配だった。
幸子さんも、初めて赤ちゃんがお腹を蹴ったときには涙が出たという。
何度も何度もお腹を蹴られると痛いけど、「生きた命なんだ」って知ることが出来るから、とても母性が育まれるとのことだった。
赤ちゃんがエコーの中で、上下に回転したり、指をしゃぶっていたりしていたのは、エコーでも見た。
でもこれからは、もっと激しく赤ちゃんがお腹を蹴ったりする見たいで、今から期待と不安が入り交じっているのよね。
「ふう」
意味もなく、手を天井に持ち上げて開く。
しばらくぶら下げると、自然と腕がだらりと下がってくる。
あたしの中で、別のことを考えるようになった。
最近、ちょっとだけお腹がぐるぐるすることがある。
胎動なのかは分からないけど、3月になってそろそろ動き出す時なのかもしれないわ。
後日あたしは、安土先生に「普通分娩」を選択すると伝えた。

妊娠して初めての結婚記念日は、とても楽しかった。
新しい豪邸になって初めての結婚記念日で、でもいつものように、妊婦として赤ちゃんを第一に考えることを心がけた。
いつもはろうそくを燃やしながら、思い思いにちょっと贅沢なお料理を振る舞うんだけど、もう普段から食事は贅沢なものになっちゃっ

てたし(だからたまに食べる大衆向けのジャンクフードはとても美味しい)、おばあさんも含め赤ちゃんの話題で盛り上がった。
もはやあたしにとって、赤ちゃんのことが完全に第一になった。
会社の社員からは、「ストレスになってない?」と聞かれることもあったけど、今のあたしなら自信をもって、「赤ちゃんの負担になることをする方がストレスになる」と言いきれるわ。
まだ顔も、姿形も分からない赤ちゃんへの愛情は、ますます強くなるばかりだった。
おばあさんもおばあさんで、妊娠発覚前が嘘のように元気になっていった。
特にエコー写真を見た時には、あたしを除けば、家族でも一番興奮している様子だった。
お義母さんたちは「おばあさんに元気が戻ってよかったわ」と安堵の声をあげていたけど、あたしは何となく、おばあさんはこの赤ちゃんが産まれるまでの命なんじゃないかと思えてくる。
何故かは分からない。でも、この新しい命が誕生するまでの時間は、古い命が死ぬまでの時間にも感じていた。
もちろん、産まれたその日に死んじゃうってことはないとは思うけどね。

4月の土曜日、あたしはいつものように朝起きて歯を磨く。
妊娠中はお風呂にも気を付けないといけない。
特に滑りやすそうな部分は近付くのも厳禁で、湯船に入ることさえ今後は難しくなっていく。
お腹が大きくなり、赤ちゃんが成長することで、妊婦も体の重心が変わってバランス感覚も通用しなくなるからだ。
ふとお腹を見る。
胸が邪魔で、あたしのお腹がよく見えないわ。
もちろん鏡越しには、もうすっかり目で分かる位に大きくなったのが分かるし、仰向けになって胸を少し動かせば見えるけど、あたしは生まれて初めて、自分のとても大きな胸を恨めしく思ってしまった。

あたしは、今日の自分の担当家事である「洗濯物」を取り出し、それぞれの人別に分けて部屋の前の小さな机に置いておく。
あたし自身の服は、あたしが部屋に持ち帰ってクローゼットや箪笥に入れていく。
妊婦になったことで、これからお腹回りの大きな服を着ないと行けなくなる。
あたしの場合は特に胸も巨大なので、ワンピースを着るときには前後でスカート丈の異なるものを着ておかないといけない。
その他にも、お腹が大きくなってきた妊婦向けの服があるので、今のうちに追加で購入しておく必要がありそうね。
あたしは、今日の服を選ぶ。
昨日から着ていたパジャマと下着を脱いで鏡の前に立つ。
やっぱり、お腹が膨らんでいた。少しずつだけど、着実に赤ちゃんが大きく成長していくのが見てとれた。
あたしは、そのまま服を選んで、いつものようにお義母さんからの呼び出しと共に、朝食を食べにリビングルームへと向かった。

「おはよう」
「あら？　優子ちゃんおはよう。ご飯できているわよ」
お義母さんが、今日も妊婦のあたしにだけ、別の食事を提供してくれている。
あたしも本当はもっと家事をするつもりなんだけど、出産を控えてあたしの担当分は減らされている。
軽い運動という意味で、妊娠中も家事が無くなることはないとはいえ、減らされているため、休日には暇な時間がどうしても増えてしまうのよね。
「うん、ありがとう……浩介くんもおはよう」
「おう、おはよう」
浩介くんも、にっこりと優しそうな表情であたしを見つめていた。
浩介くんは、毎日のようにあの部屋に通っている。
妊娠中はもちろん、赤ちゃんのことを考えてご無沙汰になるわけだ

けど、浩介くんにとってはちょっと憂鬱な気分もある。
それでも、浩介くんはこの間をずっとあたしで乗りきっているみたいでよかったわ。
「それでね、あなた――」
トンッ
「んっ……！」
あたしのお腹が、内側から打ち付けられたような鈍い痛みを感じた。
「優子ちゃんどうしたの？」
真っ先に反応したのがお義母さんだった。
「うん、今ちょっと、お腹が蹴られたような……」
「赤ちゃんが動いているのよ」
「うん、そうよね」
コンコン
そして今度は、お腹の赤ちゃんの手が、あたしのお腹をノックするように叩いてくる。
あたしの視界が急速に潤んで、前が見えなくなった。
「あ……れ……？」
「優子ちゃん……」
また、まただわ。あたし、涙が止まらないわ。
初めてお医者さんに行ったときは、まだほんの小さな小さな命だったのに、今はこうして動いて、あたしにも分かるくらいはっきりと動くのが分かって――
「うっ……」
ゴシゴシ
何とか涙を拭き、家族と向き合う。
お腹の中の赤ちゃんは、この家族の赤ちゃんでもある。
あたしだけの赤ちゃんじゃないと、理屈では分かっていても、なかなか止められない。
また母性に押し潰されそうになる。
お腹の赤ちゃんが、かわいくてかわいくて仕方がない。

小さな命が、あたしの中にもう1つの命があるんだって。
母親の気持ちが、母性本能がいやというほど溢れていく。
「優子ちゃん、これからどんどん赤ちゃんは大きく、活発になっていくわ。これからは赤ちゃんも耳が聞こえるようになって、優子ちゃんの生活音や話し声を聞くようになるわよ」
「お腹の中だと、みんな聞こえちゃうわよね」
「そうよ？　泣いてばかりいると、赤ちゃんにも影響を及ぼす可能性があるわ」
お義母さんがあたしに警告してくれる。
あたしたちの会話や話し声を聞くことで、日本語を覚えたりもするし、赤ちゃんの鋭い感受性から、ママの今の心を読んだりもできちゃうらしい。
つまるあたしにできることは――
「このかわいい赤ちゃんに、ありったけの愛情を注いであげないといけないわね」
「ええ、そういうことよ」
トンッ
「あいたっ、もーかわいいわね」
また赤ちゃんが、あたしのお腹を蹴ってきた。
「痛そうだなー」
浩介くんも、そんなあたしの様子を見て、優しそうに微笑んでいた。
でも、浩介くんだって不安に違いない。
妊娠に伴う痛みも喜びも、何も分からないのだから。
「元気があっていいわよ。苦しかったからこそ、この喜びも大きいわ」
「ふふ、優子ちゃんの言う通りね」
お義母さんも、きっとこんな感じで浩介くんを産んでくれたんだと思う。
「うー、俺たち男には全く分からん」
「うんうん」
一方で、浩介くんとお義父さんは、ちょっと浮かない顔をしていた。
よく、「自分達が苦しんだのだからお前たちも苦しめ」という理論

は、巷で溢れる思想の中でも最悪の部類だといわれる。
この思想のせいで悪習を断ち切れず、何の生産性もないものだと。
もちろん、無意味にこうしたことを言うのは問題だろうけど、一方で浩介くんは「何も苦しむことができない」、つまり誰かが感じている苦しみを全く分かち合えず、完全に苦しみや痛みを覚えられないのも、また健全とは言えないのじゃないかとあたしは思えてくる。
妊娠や出産が「女性の最大の特権」と言われている理由は、これらを全て独占できることにあるとあたしは思う。
今こうして赤ちゃんがあたしの中で動き、自分の中に生命の息吹を感じられるのも、浩介くんはあたし越しにしか知ることはできない。
妊婦に辛く当たる人は今でもいる。
でももしかしたら、それは「無理解」ではなく、「妬み」からなんじゃないかとさえ、今は思う。
あたしには、母親のことは分かっても、父親のことは分からない。
女の子になった時に、父性というものに全く鈍感だったせいだと思う。
父性が芽生えないまま女の子になったことで、あたしには母性だけが残った。
もし父性があって、その知識を持ったまま優子になっていたら、「優一の知識」は、この赤ちゃんをどう思ったんだろう？
その答えは、永遠に分かる日は来ないだろう。
「さ、優子ちゃん、胎動を感じたこと、きちんと記録しておくのよ」
「分かってるわ」
食事をし終わったら、あたしはまた自分の部屋へ。
安土先生に持っていくためにも、今日初めてお腹の赤ちゃんに蹴られたことを記録しないといけない。
トンッ
「いたっ……もう、やんちゃね」
元気一杯な赤ちゃんが生まれてくれれば、あたしはとっても嬉しいと思う。
この後もっと赤ちゃんは大きくなっていき、出産に至ることにな

る。
結局、妊娠の推定日は１２月１１日、これは日本時間なので、つまりあの授賞式の夜と言われた。
妊娠から出産の日までを考えると、そろそろ折り返し地点に来たという感じかしら？
「ふう」
リクライニングの効いた椅子に安静に腰かける。
そして、あたしは穏やかな癒し系の音楽を聞くことにした。
心が、洗われていく。
赤ちゃんは相変わらずたまに動いていて、よくよく考えると、数日前から胎動のようなものがあったことに気付かされた。
これから数ヶ月の間は、赤ちゃんが動き、また母親を通して会話なども赤ちゃんに聞こえてしまう。
だから今は、より一層赤ちゃんを気遣ってあげないといけない。
お腹の外の世界は厳しいことばかりだ。
あたしは幸せな生活を遅れているけど、そんな人ばかりではない。
この子だって、生まれてからは色々な困難にぶち当たると思う。
だからせめて今だけ、あたしのお腹の中のゆりかごにいるときくらいは、幸せに暮らして欲しかった。

# 自然の中の安らぎ

コンコン
「はーい」
「優子ちゃん、俺だけど」
赤ちゃんに癒やされていると、扉がノックされる音がした。
そして部屋の中に入ってきたのは、浩介くんだった。
「あら、あなた、どうしたの？」
「あの、ね。嫌だったら嫌でいいんだけど」
「うん」
どうしたのかしら？　改まっちゃって。
「お腹の中の音、ちょっと聞かせてくれるかな？」
「え!?」
それは、意外な申し出だった。
確かに、浩介くんも赤ちゃんのことを知りたいのは当然だった。
だからあたしは――
「いいわよ」
ちょうど椅子をリクライニングしてかけていたので、あたしは服を少しめくりあげて、浩介くんにお腹を見せてあげる。
「うわー、大きいなあー」
浩介くんのこの言葉は、いつも胸やお尻に向けられるものだったけど、今は違う。
もちろん、これからどんどんと大きくなっていく。
「えへへ」
浩介くんがゆっくり近付いていく。
あたしのお腹に、ゆっくりと、やりすぎなんじゃないかと思えるくらいに慎重に耳を当ててくる。
あたしの中でも、ゆっくりと赤ちゃんが動いているのが分かる。
「んっ……」
浩介くんは耳を当てているので、あたしからは浩介くんの表情をうかがい知ることはできない。

「どう？　あなた」
「んー」
あたしの問いかけに、浩介くんは「んー」とうなるばかりだった。
どうやら、あまりよく聞こえてないみたいね。
浩介くんが顔を離すと、ゆっくりと立ち上がった。
「よくわかんねえ、内蔵が動いているようにしか聞こえねえや」
浩介くんが、お手上げと言う表情で言う。
だからあたしも、フォローしてあげないといけないわね。
「あなた、それが胎動よ。今日気付いたものだけど、あたしは以前からそんな風に内蔵が動いている感じはしていたのよ。今思えば、それが胎動だったんだって」
「なるほどなあ」
事前の調べでは、今は妊娠5ヶ月目で、これから2か月後には、胎動がピークを迎えると言う。
一方で、産まれる直前の妊娠末期になると、赤ちゃんもお腹の中から出る準備をするため、胎動の「質」も変わってくるのだという。
「これから赤ちゃんが元気に動く時期なんだって」
「うー、大変そうだけど、妊娠してからの優子ちゃんを見てると、優子ちゃんって強いなあって思うよ」
浩介くんが、あたしを誉めてくれる。
でもあたしは、素直に受け止められなくて。
「ううん、あたしは弱いわよ」
やっぱり、こう言ってしまう。
「確かに、体は弱いかもしれないけど、優子ちゃんは心がとても強いんだよ。強がっている人なんかより、よっぽど、さ」
浩介くんの物言いは、どこか懐かしかった。
「……遠い昔、そんなことを言われたわね。そうあれは……11年前の」
「ああ、俺が優子ちゃんとデートし始めた。あの懐かしい日々のことだな」
「ううん、それよりもう少し前、あたしがあなたの虜になっちゃう前の

林間学校でね、恵美ちゃんと虎姫ちゃんが、あたしに浩介くんと同じことを言ったの」
そう、小谷学園の2年生だった時に、林間学校で同室だった恵美ちゃんと虎姫ちゃんが、あたしのことをそんな風に評していた。
浩介くんも、似たような言葉をあたしに投げ掛けていた。
「安曇川や田村……あー、安曇川は旧姓だっけ？　まあともかくあいつらが言った心の強さ、ともまた違うんじゃねえかな。こう、母親特有の強さって言うのかな？」
浩介くんが、要領の得ない言葉を話す。
「言葉では言い表しにくいんだけど、赤ちゃんを想う気持ち、今でも児童虐待するような親っているじゃん？　優子ちゃんは母親として涙脆いところで素直に泣けるって、とっても強いことだと俺は思う」
浩介くんは、あたしをじっと見つめながら話す。
確かに、赤ちゃんのために素直になれるのは、いいことなのかもしれないわね。
「うん、もしかしたら、女の子の『本当の強さ』って、違うのかもね」
それは、まず間違いなく結婚も出産も出来ない行き遅れたフェミニストが語る「強さ」ではない。
結局、浩介くんや、あるいは昔の小谷学園のみんなに言われたことを、今ようやく理解しつつあった。
男性にはない、女性の、母親の価値観を受け入れること、そしてそのように振る舞えることが、男からは弱く見えていても、女性にとっては真の強さなんだって。
「ああ、当たり前だ。ありがとう、俺の子供、ちゃんと産んでくれよな」
「分かってるわ」
浩介くんがそう言うと、あたしの部屋を出ていった。
部屋には再び、静寂が流れた。
そして音楽が、あたしを包み込んでくれていた。
「そろそろ、外も暖かいわね」
お昼が近づいた午前中、あたしは庭を散歩して日本庭園の安らぎを抜け、小さな小さな森林の中に入っていった。

数本の木が生い茂るこの場所に腰を掛けると、赤ちゃんも安らかに、すくすくと成長してくれている気がした。
ふと、1羽の鳥が木の中に降りてきた。
すると突然、ピーピーという甲高い音が聞こえてきた。
鳥は巣を作っていて、母親が雛鳥たちに餌をあげていた。
東京の町中にも、こんな自然がある。
母親が、子供を育てるのは、鳥だって同じ。
今はああやって雛鳥が巣の中にいるけど、巣立ちの時だっていつか来る。
もっと前は、雛鳥は卵の中にいた。
人間は鳥とは違ってお腹の中で子供を育てる。
雛鳥は何羽もいて、無事に成長するのはごくわずか。
人間だって、少し昔までは子供のうちに死んでしまう例は多かった。
もちろん、一度にたくさん産まなければいけない動物に比べれば、双子以上が珍しい人間は恵まれているとは思うけどね。
この子も、無事に健康でいさえしてくれれば、きっと蓬莱の薬で長生きをしてくれる。
そう思うと、あの鳥の親子よりは、報われているのかもしれないわね。
「鳥に餌をあげたくなる人の気持ち、分かるわね」
親鳥も雛も、多分あたしが産む赤ちゃんよりも小さいと思う。
都会の中でも、こうして独特の自然が築かれていく。
あたしが新しい命を育てるのも、こうした自然の一環なのよね。
「ずいぶんと、あたしって小さいわね」
鳥の親子を見ながら、あたしはまた独り言が出る。
あたしが小さな存在な訳はない。
蓬莱の薬の開発に関わって、世界の歴史をひっくり返して、世界一の資産家になって、こんな豪勢な家に住んで、おまけにノーベル賞まで貰ってしまったあたしが、小さな存在なはずはない。
そんなことを言っちゃったら、あの鳥たちにも、この木々にも、い

や、この辺に浮かぶ微生物たちにも申し訳ない。
それでも、あたしは自分を小さく感じてしまう。
お腹の中の小さな命が、母親も小さくしているのかもしれない。
「ふふ」
赤ちゃんがまた、ゆらゆらと揺れるように動いた。
ふふ、ずっとここにいられる気がするわね。

トン……トン……トン……
何分経ったか分からない時間を無意識に過ごしていると、ふと小さな足音が聞こえてきた。
「ここにいたのね、優子ちゃん、お昼出来ているわよ」
ふと振り向くと、そこにはお義母さんがいた。
お昼、もうそんな時間なのね。
「うん、ありがとう」
あたしは立ち上がり、ふと鳥の巣を見てみた。
親鳥が巣にいて見張りをし、雛鳥たちは眠っていて、鳴き声は聞こえてこない。
「あら？　鳥？」
「うん、鳥が巣を作ってたの」
お義母さんも、あたしが振り向いた方向を見てきた。
「あらあら。優子ももしかして？」
「うん、小さな空間だけど、何だか心が暖まってね」
「そうねえ……近くの公園にいくのも、いいかもしれないわね」
「うん、この近くにも公園があるものね。もしかしたら、そこから来たのかもしれないけど」
遠出は危ないけど、近場なら、自然とふれあうのも大事だと思う。
赤ちゃんにとっても、都会の喧騒やオフィスの喧騒ばかりは不健全だものね。
「さ、行くわよ」
「うん」
あたしは、庭を進んで、お義母さんが用意した昼食にありつくこと

になった。
「それでね、庭に鳥が巣を作ってたのよ」
「へー、まあこんだけ広い家だものな」
お義父さんは、あくまでも冷静だった。
鳥だけではなく、色々な動植物が来てもおかしくない。
あの池にも、きっとカエルなどが住み始めたりするかもしれないものね。
「ふむふむ、でもよ。東京のど真ん中でも、生き物はたくましく生きてんだな」
「そうよ。このお腹の子も、ね」
浩介くんの話に、また赤ちゃんを絡めて話す。
あの木々の中で胎動を感じてから、あたしはますます赤ちゃんがかわいくてたまらなくなっていた。
そして、「早く会いたい」という気持ちも強くなっていく。
この安らぎを手放すのは惜しいけど、でも赤ちゃんに会ったらどんな感じなのかしら？　という気持ちもある。
「赤ちゃんは、不思議だよな。出産を経験すると、宗教を信じやすいっていうのも頷けるぜ」
「ええ」
もちろん、出産に関しては様々なことが医学的に分かっている。
それでも、やはり何かを信じたくなる人が多くなるんだと思う。
最も、あたしのこの母性は、宗教的なものではないことくらいは、分かるけどね。
「優子ちゃん、足元を気を付けてな」
「うん」
浩介くんが、あたしに注意を促してくれる。
あたしはこれからエレベーターに乗って、オーディオルームに向かう。
オーディオルームは、あたしは今まであまり使っていなかったけど、これからは使う機会が増えそうだわ。

「お、優子か」
オーディオルームには先客がいた。
それは父さんだった。
「赤ちゃんに、音楽聞かせてあげようと思って」
「赤ちゃんに？　赤ちゃんも耳が聞こえるのか？」
「うん、そうみたいよ。だから言葉を覚えるのも早いって」
「なるほどなあ」
あたしは、オーディオルームに入っているＰＣ画面を開いて、何を聞こうか考える。
「ん？」
あたしは、奇妙な音楽を見つけた。
曲名は、「川のせせらぎと鳥の鳴き声」というものだった。
気になってクリックしてみると、曲名の紹介には「川のせせらぎの音と小鳥のさえずり声を収録、自然の中にいるような気分に、あなたをさせてくれます」とあった。
あたしは、さっきの小さな森の中を思い出す。
あそこでは、鳥が巣を作っていて、親鳥が雛鳥に餌を与えていた。
川のせせらぎがこの家にあるわけではないけど、何となく似た感じを受ける。
これがいわゆる「音楽」かというとちょっと疑問な所もあるけれど、今は何となくこれが聞きたい気分だった。
ガラガラガラガラ……チュン……チュンチュン！
マウスをクリックし再生してみると、部屋一面から音楽が流れてきた。
「お、『川のせせらぎと鳥の鳴き声』か」
父さんは、以前かけたことがあるような顔をする。
「以前にもかけたの？」
あたしが聞いてみる。
「ああ」
あたしが、部屋の床に座り込む。
このまま、眠っていてもいいかもしれないわね。

「川の音、きれいね」
「うん、この曲は同じ音源がずっと流れているんだ」
「へえ、やっぱりループなのね」
父さんは、以前より書斎に籠ることが多く、２０畳に広がった部屋も、石山家の物置にあった本などを移すと、父さんの書斎は本で一杯のなってしまった。
それでも、母さんとの関係は良好で、おそらくお互い過干渉にならないからうまくいっているという側面もあると思う。
「こうやって、優子と二人きりってのも珍しいよな」
「うん、そうよね」
石山家にいた時は、優一の時は色々な知識で盛り上がったりしていたが、優子になってからは女の子になるためのことや、浩介くんとの恋愛もあって、以前より関係は薄くなった。
蓬莱カンパニーの株を上場したために、あたしたちが資産家になってここ松濤に移住し、父さん母さんともまた一緒に住み始めた時も、この豪邸は二世帯住宅という建前なので、どうしても石山家のフロアに行く機会は少ない。
むしろ、トレーニング機材のある部屋がある分、浩介くんの方が石山家との関係が深いくらいだわ。
「とうとう、孫の誕生か。優子は、変わったよなあ」
父さんがにっこりと笑いながら、懐かしそうに話す。
「えへへ」
「優一だった時は、将来あの家は優一と、あるいは優一とその家族が相続してくれるものとばっかり思ってた」
うん、普通はそう思うわよね。
石山家は東京からも通勤圏にある家なので、わざわざ独り暮らしする必要性はなかった。
それは、石山家より東京から遠い篠原家からも会社に通勤していた事実からも明らかだった。
つまり、あたしはあのままＴＳ病にもならなければいれば、あの家でひっそりと暮らし続けていたんだと思う。

「うん」
「優一が優子になって、お嫁に行った後は、喪失感が大きかったよ。娘が嫁に行くよりも、ずっとね」
「あたしに兄弟姉妹はいないわよ」
　だから、父さんも、生まれつきの娘が嫁に行く感覚は知らないはずだわ。
「あーそうだったな。ただそれよりも不安だったのは、あの家がどうなるか。だったんだ。蓬莱の薬のお陰で、しばらくはその心配も要らなくなったがね」
「そうよねえ……」
　今では蓬莱の薬が広く普及し始めている。
　あたしたちも、殺到するお客さんへの対応に追われている最中だ。
「ま、とりあえず今はこうして一緒に住むことができたんだ。恵まれているだろうな」
「ええ」
　父さんも母さんも、あたしが女の子になった後は、動揺しつつもきちんと娘として扱ってくれた。
　特に母さんは、あたしを時に優しく時に厳しく、あたしを女の子らしい女の子にしてくれた。
　父さんはあまりあたしに深く干渉はしてこなかったが、見守るという姿勢が重要だと知っていた。
　そういう意味でも、間違った善意で不適切な対応をしたために、一時は自殺寸前に追い込まれた幸子さんよりも恵まれていると思う。
　恵まれた女の子の生活が、今の充実に繋がっていると思う。
「優子は、男として生まれて、今はこうしてお腹の中に子供がいるんだろ？」
「ええ」
「想像もつかないよな普通は。ＴＳ病は珍しい病気だしさ」
「うん、でも、まだ発生原因さえ分かってないのよね」
　今でも、新しいＴＳ病患者は生まれ続けている。
　あたしの新しいカリキュラムが、自殺者をほぼなくしてくれたもの

の、稀に少し危ない例はある。
去年の患者には、女湯に入れても男の人格が揺らがなかった患者さんがいて、さすがに担当のカウンセラーさんも冷や汗をかいた。
カリキュラムでも、最近は滅多に見られなかった成績不良者の行動パターンに陥っていて、かなりの問題患者になってしまった。
その子は今でも言葉遣いが治らない。
ただ、男に戻ることはとりあえず諦めてくれていたようなので経過観察中になっている。
今後は男言葉に怒るのではなく、女言葉が出た時に大袈裟気味に褒め称えるように指導を出している。
ＴＳ病患者は、精神的な負担は大きいけど、それでも「蓬莱の薬を購入しなくていい」というのと、「蓬莱カンパニーの主要株主である『日本性転換症候群協会』の会員になれる」というメリットが生まれた。
最も、それでも女の子に変わる精神的負担は大きく、「なりたい」と思う人は昔も今も少ない。
それに、倒れて女の子になった時の激痛はとんでもないものね。
「不思議だよなあ、ＴＳ病って」
川の流れる音と、小鳥の優しいさえずり声が、オーディオルームに響き渡る。
これはまた、本物の音とは違う臨場感を、あたしたちにもたらしてくれていた。
「うん、あたしもそう思うわ」
何故ＴＳ病だけ不老になるのかはよく分かっていない。
結局、蓬莱教授が突き止めてくれるのを待つしかないのかもしれないわね。
「父さんは今でも思うよ。優一のままの人生を、ね」
「うん、でも多分、いや間違いなく、今よりもよくない人生になったと思うわ」
もしかしたら、桂子ちゃんと結婚していたかもしれない。
小谷学園での卒業間際の桂子ちゃんの話、桂子ちゃんは嘘だと言っ

てからかってたけど、もしかしたら、あのまま恋愛に発展したかもしれない。
そうなれば、学校一の美少女と交際した優一はますますクラスの男子からも嫌われただろうし、浩介くんも、もしかしたらどこかでぐれてしまった可能性だってある。
優一と桂子ちゃんのカップルになった場合、もちろん蓬莱教授とのパイプは築けない。
蓬莱の薬の開発も遅れていただろうし、下手をすれば優一たちが生きている間には、完成の目はなかったかもしれない。
「でもさ、今の人生は、ちょっと出来すぎている気もするんだよね」
「そうかしら？　蓬莱教授に随分と引っ張ってもらったもの。むしろもっとうまくいっていた可能性もあったんじゃないかしら？」
実際、蓬莱教授の研究に違和感を感じて、すぐに実験を実行に移していれば、あたしたちの蓬莱カンパニー設立や、ノーベル賞の受賞も早まった可能性はある。
最終的には女の子として好きになれたけど、浩介くんとの和解も、もう少しいい手段があったんじゃないかと、今にしては思えてくる。
「……なるほどなあ」
父さんも、唸っていた。
自分の中では最善と思って行った手も、実はよくない手だった何てことは往々にしてある。
あるいは、短期的には後悔する選択肢でも、長期的には正しい選択だったことは多く存在する。
幸子さんの命を救った時にできたカリキュラムのお陰で、自殺率が急減し、間接的に多くの人が救われている。
野洲さん、あたしに乱暴したお陰で、あんなにも多くの命を救っちゃったのよね。
実際、彼にとっては欲望のままに行動した最悪中の最悪の行動なのに、社会全般からすればものすごいことをしでかしたことにもなる。
こういうのを、「バタフライ効果」って言うのよね。
「ふう、じゃあ父さんは書斎に戻るよ」

父さんが立ち上がる。
「うん、あたしもう少し聞いていくね」
あたしは、そのまま一人でゆっくりと音楽を聴く。
また少し、眠くなってきた。
「うーん……」
自然の中で心地よく休み、ストレスを軽減すれば、きっと赤ちゃんも元気になってくれるから。

トンッ……！
「んっ……」
朦朧とした意識でぼけーっとしていると、突然お腹の中に痛みを感じ、あたしは起き上がる。
うー、これ、胎動が激しくなっちゃったら夜眠れるのかしら？
ともあれ、もうすぐ詳細な検査をすることになっている。
今度のエコー写真では性別も分かるため、浩介くんも同行することになっている。

# 新たな悩み

ピンポーン

病院の待ち時間、電光掲示板にあたしの番号が点灯し、あたしは再び安土先生のもとを訪れた。

もちろん、赤ちゃんがお腹を蹴り始めたことはきちんと話すつもりだ。

「はーい篠原さん、まずは体調等に代わりはありませんか？」

「えっとその……いたっ……こんな風に、赤ちゃんにお腹蹴られちゃってます」

安土先生と話している間にも、赤ちゃんがあたしのお腹を蹴ってくる。

痛いのは痛いけど、蹴られる度に、あたしの中でいとおしさが溢れても来る。

母性が、どんどんと強くなっていくのを、感じていく。

「痛いところを蹴られている場合はですね。まず蹴られた所を叩いてみてください。そうすると、赤ちゃんが真似してそこを蹴返してきます」

安土先生が、膨れていない自分のお腹を叩きながらお手本を見せてくれる。

「ええ」

「何回か繰り返して学習させて、その後に比較的痛くないところを叩いてください。すると、赤ちゃんはそこを蹴るようになります。逆子になりそうな時にも、使えますよ」

へえ、赤ちゃんにそんな習性があるのね。

特に逆子は結構危ないこともあるので、今の話しは覚えておいて損はないわね。

「そうですか……あ、また蹴ったわ」

赤ちゃんが起きている時は、こうやってあたしのお腹をどんどん叩いてくる。

「よく蹴る子です？」

「ええ、とっても元気でかわいいわ」
赤ちゃんの胎動を感じることが、こんなに嬉しいことだなんて思わなかった。
今でさえこんなにかわいいのに、産んじゃったらどうなっちゃうのかしら？
でも、蹴り過ぎちゃうと良くないかしら？
「心配しなくて大丈夫ですよ。基本的には胎動で破水したりといったことは起こりません」
胎動が無いとそれはそれで問題だけど、元気な分には基本的に大丈夫だという。
浩介くんも、少しホッとしていた。
「では、エコー検査に入りますね。ご主人もどうぞこちらへ」
「はい」
あたしたちは、いつものエコー検査の部屋に入る。
お腹はもう、厚着しても分かるくらいには膨れていた。
これならもう、「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーが無くても、すぐに妊婦と分かる格好にはなっているけど、実際の所、目立たない妊娠初期の方がつわりもひどくて辛かったのよね。
今度大変になるのは妊娠末期だけれども、それについては8月末から9月が出産予定日になっている。
その時のことはその時考えるとして、今は安定期を油断せずに過ごすことが大事だと思う。
「じゃあ検査しますね」
あたしがベッドに寝転ぶ間に、安土先生が機材の準備を完了させる。
このやり取りもいつものことで、あたしたちには「阿吽の呼吸」のようなものが出来ていた。
「はい」
お腹を上げて、いつものようにお腹に機材を当ててもらう。
画面には、白黒でくっきりと赤ちゃんが写し出されていた。
出生前検査でも、今のところは異常はない。

健康な赤ちゃんとして、すくすく育っている。
「かわいらしい赤ちゃんですねー」
安土先生のいつものセリフ、それを聞く度に、あたしの目頭は熱くなっていく。
すくすくと、大きく育つ赤ちゃんが、ますます愛おしくなっていく。
「はい」
エコー検査機の映像から、赤ちゃんが動いているのが確認できる。
手でお腹を赤ちゃんパンチする様子も見えて、涙をこらえるのに必死だった。
安土先生が、男の子か女の子か、エコーの位置をずらしながら確認してくれる。
色々な角度から赤ちゃんを見るに連れ、かわいさのあまりまた涙が出てきた。
「篠原さんは涙もろいですか?」
安土先生が、初めてあたしの涙について語ってきた。
「ええ、母性に押し潰されそうで」
あたしも、正直に母性について話すことにした。
「母性があることはいいことですけど、気負いすぎないでくださいね。出産の時は今までとは比較になりませんから」
「分かってます」
ともかく、あたしはお腹の中で動く我が子から目を離せなくなる。
決して鮮明とは言えない映像だけど、それでも元気よく動くその姿に、あたしは見とれ続けていた。
「あらあら」
赤ちゃんが体制を変えるために足を広げると、少しだけ映像が変化した。
あたしにも、浩介くんにも分かった。
「どうやら、男の子の赤ちゃんみたいですねー」
安土先生に言われなくても、はっきり分かることだった。
「あっ……」
そう言われた途端、あたしはにっこりと顔がほころんだ。

もちろん、「女の子」と言われても同じように顔がほころんだと思う。
我が子、男の子か女の子かも分からない状態だったかわいらしい我が子の性別が、やっと分かるようになった。
それだけで、感激は大きかった。
「男の子かあ……」
浩介くんも、にっこりとした表情でそう呟いた。
元気一杯な胎動でも、女の子のことはよくある。
それでも、やっぱり男の子は元気が大事なのよね。
「ふふ、赤ちゃんに嫉妬なんかしないでねあなた」
赤ちゃんと同性になった浩介くんにとっては、本能的にどうしても「ライバル」と見えてしまうことは、あたしにも分かる。
ＴＳ病じゃないと、もしかしたら浩介くんの気持ちは分からないのかもしれないけどね。
「あらあら」
あたしと安土先生が、浩介くんに微笑みかけている。
それは多分に「無言の圧力」が含まれていた。
「分かってるって。お腹の子は、俺の子供何だから」
あたしと安土先生の視線に対して浩介くんがきっぱりと断言した。
そう、お腹の子は浩介くんの赤ちゃん、あたしと浩介くんから遺伝子を受け継いで出来た赤ちゃんだ。
そう思うと、浩介くんへの愛情もまた、深まり続ける一方だった。
浩介くんも、自分の赤ちゃんについて考える切っ掛けになってくれるといいわね。

ガタンゴトン……ガタンゴトン……
「男の子……名前、どうしよう？」
帰りの電車、浩介くんが赤ちゃんの名前について悩んでいる様子だった。
赤ちゃんの性別が分かったら、やっぱり最初に考えるのは、赤ちゃんの名前なのかしら？

「うーん、確かにそろそろ2人だけの秘密としても考えておきたいわよね」
もちろん、家族も含め他の人には内緒にするけど。
「優一……はいくらなんでもまずいし……俺と優子ちゃんで優介……うーん……優子ちゃんはどう思う？」
浩介くんが出す名前は、どれも悪い名前ではない。
世間も変わったのか、おかしな名前が流行った十数年前とは違って、今は名付けも落ち着いてきている。
あたしたちの場合ノーベル賞学者で世界一の大富豪夫妻の子供なので、世間体は半端なく大きい。
おかしな名前をつけたらそれこそ針のむしろにされてしまう危険性もあるので、慎重に考えないといけないわね。
「女の子としての自分の名前はすぐに決まったけど、新しく男の子としての子供の名前……考えるの難しいわね」
もしあたしが妊娠していたのが女の子だったら、もしかしたらここまで悩んだりとかはなかったのかもしれないけど、改めて女の子として、母親として自分の息子の名前を考えるのは難しいわ。
「ああ、俺も娘の名前だったらすぐに思いつきそうな気がするんだよなあ」
浩介くんも、女性としての名前なら、すぐに思いつきそうだと話していた。
最も、ＴＳ病患者の場合は、何の前触れもなく女の子になるので、結構適当なノリで決まってしまうことが多く、昔の人が多いということを差し引いても、「子」のつく名前の人が圧倒的に多い。
かく言うあたしも「優子」だし、他のＴＳ病患者にも「優子」と名乗っている人がいる。
友子、京子あたりも複数いるため、永原先生や歩美さんのような存在は圧倒的に少数派になっている。
「優太……浩一……一郎……うーん……」
浩介くんが、お腹の赤ちゃんの名前で悩んでいる様子が、あたしの耳にも聞こえてくる。

あたしも、いくつか候補を頭に浮かべては消していく。
もしかしたら、こんなことを繰り返す過程で、親が変な名前をつけちゃうのかもしれないわね。
あたしたちは、電車で帰るまで、ずっと我が子の名前で頭が一杯になった。
もしかしたら、周囲のお客さんたちもあたしたちの赤ちゃんについてなにか思っているのかもしれないわね。

「それで、赤ちゃんはどうだった？　男の子だった？　女の子だった？」
家に帰って夕食の時間、今日は赤ちゃんの性別か分かると言うことで、久々におばあさんも含めて同居している7人が一同に介しての食事となっている。
その冒頭、母さんが待ちきれずにうずうずした感じであたしを問いただしてきた。
「えっとその……男の子……だったわ」
「あら、やっぱり？」
お義母さんがにっこりと笑いながら話す。
やっぱりってどういうことかしら？
確かに確率は2分の1だけど……
「どうして？」
「あーうん、何となくよ。優子ちゃん、かなり胎動を感じてたみたいだから何となく、ね」
どうやら、殆ど根拠のない当てずっぽうだったらしいわね。
でも、胎動が激しいと男の子……かあ。
確かに、男女はともかく、元気な赤ちゃんほど、胎動は強そうだものね。
こうして、あたしの赤ちゃんは、無事に生まれてすくすく育つという確信が、またひとつ高まった。
「あら？　でも浩介くんってすごいテクニック持ってるんでしょ？　うちの優子がされるがままなら、あり得るわよ」

「もう、母さんったら!!」
妊娠や出産、あるいはその前の行動などによって、こうだと男の子、こうだと女の子みたいな迷信は数多い。
こうした「産み分け」には、一定の傾向はあって目安にはなるけど反例の多いものから、殆ど根拠もない迷信そのものまで、とにかく種類が多く、全てを把握している人はだれも居ないと思う。
そして、そうした産み分けの迷信の中の１つに、「激しく翻弄され続けると男の子」というのがある。
もちろん、これは例外が多くあまり当てにならない迷信のはずなんだけど、専門家のあたしから見たら突っ込みどころ満載とはいえ、一応科学っぽい根拠だけはあるから厄介な代物でもあるのよね。
「あはは、ごめんなさいねー」
「おー、男の子かあ！　元気なひ孫でいてくれよ！　ちゃんとすくすく育てるんじゃぞ！」
おばあさん、少し前までは、介護の人がいないと全く歩けなかったのに、今はもう殆ど自主的に歩き回るくらいに回復している。
食欲も、前より、そしてますます旺盛になっている。１００歳を過ぎた老人と考えると、これは異例のことだった。
だけど、おばあさんの命のろうそくは、つきかけている。
最後の灯火を激しく燃やすかのように、頑張り続けている。
母さんもお義母さんも、もちろん父親世代も浩介くんも、多分当のおばあさん本人も気付いていないと思う。
あたしがこれに気付けたのは、赤ちゃんを身籠っているせいかもしれないわね。
新しい命を中に宿しているからこそ、おばあさんのことも、きっと分かるんだわ。
「新しい名前は？　まだ決まってないかしら？」
母さんが今度は名前について聞いてきた。
うん、これも簡単に予想できることよね。
「ええ、まだ決まってないわ」
あたしは、まだ決まっていないことを正直に伝える。

「そう？　生まれたら出生届を出さなきゃいけないのよ。そのときまでには決めておきなさい」
「はーい」
　母さんはいくつになっても、あたしの世話を焼きたがるのね。
　とはいえ、言っていることはその通りなので、早めに生まれた時の名前を決めるのも重要だと思う。
　赤ちゃんには、外の声が聞こえているので、名前で呼びかければ、きっといいことがあるから。
「でも、なるべく早いうちに決めた方がいいわよ。お腹の赤ちゃんに語りかける必要もあるからね」
　そんな風に考えていると、母さんが早く決めた方がいいと念を押してきた。
「うーん、確かに。ところで、優一と浩介って言うのはいつ頃決めたのかしら？」
　あたしは、母さんとお義母さんに、名前を決めたタイミングを聞いてみた。
「私は……男の子だと分かってから、お父さんと相談して3日後に決めたわ。一番優しい子に育って欲しいって、『優一』ってね」
　優一の名前は、もうない。
　でも、両親の願いは、あたしの中に残り続けている。
「私たちは……妊娠末期にようやく決まった感じだったわ。中々悩んだのよ」
　一方で、浩介くんの方は結構悩みに悩みぬいたって感じだった。
「へー、その割には変な名前にならなくてよかったよ」
　浩介くんが、お義母さんにやや感謝の念を込めてそう話す。
「そうよ？　候補の中には画数がやたら多い『こうすけ』もあったし、読みがおかしいのもあったわ。でもやっぱり、同じ病院にいたママ友たちからもそういう名前をつけられて苦しんでいる人も多いって聞いて、無難に『浩介』を選んだのよ」
　そういえば、そう言うママ友っていうのも、病院ではいるのかしら？

さすがに、個室よね。
「それはよかったぜ」
浩介くんも、もう大人だから、平凡な名前の方が色々とやり易いことは知っている。
浩介と優子の夫婦のノーベル賞は、またしても「こった名前」にしなくていいというメッセージになっている。
あたしたちも、赤ちゃんの名前を決める必要がある。
平凡な名前なら、もちろん先達たちが考えた「名付けの意味」があるので、それを踏襲すればいいということにもなるわね。
「ええ、今も名付けには全く後悔してないわ」
「私も、よ。優一が優子って名前を変えるって決意したときには、母さん少し嬉しかったわ。名前に込められた意味のこと、意識していたんだってね」
「う、うん……」
乱暴だった優一にも、良心はあった。ということなんだと思う。
名は体を表すし、表さなくても結局その人を縛り続けるのかもしれない。
あたしの場合は、特にそんなタイプだったと思う。
だからこそ、優子に変わった時にうまくいったとも言えるけどね。
「いいかい、男の子に生まれたら――」
おばあさんの、よく分からない説教が始まった。
多分、これも古い迷信なんだろうとは何となく思う。
あたしたちは、真面目にご飯を食べつつ、明日以降に備えることにした。
そしてあたしは、浩介くんと相談しつつも本格的に「息子の名前」を考える必要に迫られた。
「ねえ、お腹の中のあたしの赤ちゃん」
ご飯を食べ終わり、お風呂から出て、マッサージ機で肩を揉んでから自室に戻る。
あたしは寝る前に、お腹の赤ちゃんに話しかける。

「名前、何がいい？」
「……」
もちろん、返答は返ってこない。
赤ちゃんは眠っているのか、今は胎動を感じない。
でも、寂しさはない。
「分からない……わよね」
それは赤ちゃんだから仕方のないこと。
人間の言葉を理解するには、長い時間が必要で、小中高と国語の授業があるのもそのためだ。
「どうしようかしら？」
あたしは、全く見当もつかないまま、ゆっくりと眠りについた。
今日は多分、いくら考えても出てこないと思うから。

## １１回目の記念日

「篠原さん、ここなんですけど」

「はい」

今日は5月9日であたしの「女の子記念日」だった。

女の子になって１１年の時が流れ、今のあたしは、もう立派な妊婦になっていた。

女の子の年齢で考えれば、まだあたしは小学５年生でしかない。

いや、むしろあの日から、もうそれだけの月日が流れたと考えるべきかもしれないわね。

この頃になると、一目で分かるそのお腹の膨らみのお陰で、電車内では席を譲られるケースが増えた。

実は、本当に譲ってほしかったのは妊娠初期の頃だったりもするんだけどね。そのあたりは仕方ないわね。

「支店別の営業成績なんですが、特に需要の小さな出張所を多く抱えている店を中心に、赤字のところも多くなっています」

「その辺りは仕方ないわ。地域で格差を生んじゃいけないもの」

また、そうした場所の支店は、安い土地代と固定資産税を利用して、倉庫機能も一部兼ねている。

赤字だから廃止というわけにもいかないのよね。

「ええですが、株主総会の時に突かれたらどうします？」

余呉さんは、株主のことを気にしている。

経営陣だけで株式の大半を持っているとはいえ、株主たちの意向は株価にも影響する。

企業が赤字を減らせば、それだけ配当金が増えることを期待できるからだ。

でも、蓬莱カンパニーは独占企業だから、利用者からすれば「他に逃げ道がない」という意味でもある。

「大丈夫よ。一部の人に薬の恩恵を与えないのは一番まずいって、株主も分かっているわ」

特に、独占を崩す大義名分になったら一番厄介だもの。

「うーん、そうだといいんですけどね」
日本人の株主は、案外営利史上主義ではなく、海外の株主と一線を画している。
その昔、とある鉄道会社を中核とした企業グループの筆頭株主になった外資系ファンドが、「鉄道の不採算路線を廃止にすれば、利益が出る」と言い放ち、ＴＯＢ、いわゆる公開買付を行ったところ、日本人投資家から大顰蹙を買ってしまって公開買付は失敗し、そのファンドは大損を被って撤退する羽目になったこともあった。
その事件は、そもそも他の株主たちがその不採算路線の沿線住民だったということもあって大きな教訓になっている。
これに限らず、鉄道会社では、「赤字が予想され、株主の理解は得られにくい」と考えていたやり方が、株主総会において当の株主の方から提案されることが何度もあった。
それは、それだけ災害の多い日本では、鉄道が重視されているという意味でもある。
だから、実の所、あたしはむしろ「もっと過疎地にも積極的に出張所を作っていくべきではないか？」という提案さえ出ることを想定していた。
それはもちろん、独占企業だからというのも、多分に含まれているとは思うけどね。

「篠原さん、余呉さん、先ほど政府のアドバイザーの方と永原相談役が会談しました」
広報部の部長さんが面会の情報をあたしたちに持ってきてくれた。
「あら？　珍しいわね」
政府との交渉で、蓬莱カンパニーにも政府官僚が「アドバイザー」として、あたしたちに助言してくれるシステムがある。
これは、天下りポストを得たい官僚側と、政治的影響力が出ると外圧の懸念が出るというあたしたちと一部外務省官僚の主張との妥協策として誕生していて、相談役を勤めている永原先生が蓬莱カンパニーで長期的に受け持っている数少ない、いや事実上唯一の仕事と

いっていい。
　もちろん、アドバイザーが来るのは不定期で、最近はめっきり減っていたんだけどね。
「はい、政府側は『少し普及を急ぎすぎてはいないか？』と気を揉んでいるみたいです」
「うーん、そうですかあ……」
　急ぎすぎを政府が懸念するというのは、あたしとしては予想外のことだった。
「地方向け事業は、特に赤字の所もありまして、株主総会から、もちろん廃止は論外にしても、『赤字の圧縮』を要求される可能性はある、とのことです」
「ええ、それはもちろんあるわよね」
　確かに、そのくらいなら日本人投資家もじゃんじゃん要求が飛んでくることは容易に想像ができる。
　となると、やはりある程度の工夫が求められるのも確かだった。
　言うまでもなく、機密保護のためのセキュリティは損なわない範囲でだけどね。
　ともあれ、アドバイザーあくまでも「意見を言う」という立場でしかない。
　影響力はほぼないし、永原先生も株主としてはともかく、相談役としての実権はほぼない。
　会長の蓬莱教授は、「君臨すれども統治せず」な口を出さない会長だけど、それでも社長の浩介くんよりも序列が上なのには違いない。
　だからこそ、政府との癒着という外部からの指摘を交わすために、取締役の地位にない相談役の永原先生が政府とのパイプ役になっているのだ。
「それで、政府は何て？」
「今後は外資の息のかかった社員が内部から崩そうとしたり、産業スパイを仕掛けてくる可能性があるって」
　部長さんの返答は予想通りのものだった。
「やっぱり、そうなのね」

蓬莱カンパニーの企業財産を考えれば、確かにファンドがリスクを犯してくる可能性はある。
諜報機関が糸を引くかどうかは分からないけど、いずれにしても会社内で警戒を呼び掛けるようにはしておかないといけないわね。
現在、２１００年を目処に国際条約上でも、蓬莱カンパニー以外の会社が蓬莱の薬を作ることを禁止し、更に「規制緩和を求めるようなロビー活動そのものも違法化する」「それに疑問を持ち、条約を変えたりそれをどこかの国が提案することそのものも禁止する」という計画が出されている。
もちろん、違反した国への制裁は蓬莱の薬の禁輸、あるいは別の製品も巻き込んだ経済制裁ということになる。
この計画は、あたしたち取締役の中でも大株主のあたしたちと蓬莱教授、そして比良さん余呉さんに相談役の永原先生しか今のところは知られていない。
盗聴を警戒し、あたしたちの家、それも離れの茶室で会議したものだから当然と言えば当然だった。
現在の経済産業省の試算では、不老の恩恵を独占した２２世紀初頭の日本のＧＤＰは世界全体の７５％を占めると考えられていて、これだけの経済力とそれに支えられた軍事力があれば、こうした横暴を通せると予想している。
でも、２０２８年現在の段階で、もしこの計画が外部に漏れれば、今でも日本は一人勝ち状態になってるとはいえ、まだまだ他の国の影響力も強く、外交的圧力を全世界からかけられたら大変なことになる。
だから、これは絶対に漏洩する訳にはいかないわね。
「ええですから、社外から何か声がけがあったら、すぐに上司に報告するように通達を出しておいた方がいいわね。もちろん、報告しない社員がいた場合にも密告を奨励してですが」
結局、最大限効果的なのはこれくらいしかない。
あんまりいいものではないことは知りつつも、やはりどうしても密告制度に頼らざるを得ない一面はある。
まあ、金に転ばせないためには、「金に転んだら死ぬ」くらいの恐怖

を与えるしかないせいだけども。
「そうね、特にあたしが産休育休で抜けるともなると、向こうもチャンスと思うかもしれませんし」
あたしの存在は、蓬莱カンパニーではとても大きい。
そうでなくたって、あたしは蓬莱教授と浩介くんに次ぐ、世界３位の資産家だから、そのあたしが会社から育児で抜けるとなるとやはり手薄感は否めない。
経済誌での世界長者番付ではあたしは浩介くんと同率２位だけど、実際には社長と常務の報酬の差で、わずかに浩介くんの方が資産が多い。
ま、普通の人、というよりも去年の春くらいまでのあたしたちからするとその「僅か」でもとんでもないお金だけどね。
「問題は、株価の下落懸念ですよね。ノーベル賞の優子さんが会社を抜けるともなると」
蓬莱カンパニーは、今は株価こそ落ち着いているものの、それまでの暴騰に次ぐ暴騰、買いが買いを呼ぶ展開もあって、大株主たちの資産がみんな兆単位になっている。
あたしたち篠原家だけで、富裕層が集まる渋谷区の税収の３割を納めている。
株式の配当金であっても、納税額があまりにも高額なので、元いた自治体と渋谷区とで住民税で揉めてしまったらしい。
浩介くんによれば、株主による株式購入での収入は多く、このまま株価が順調なら、今年の株主総会での配当金は１株辺り１５０円を考えているとのことだった。
株式分割があったので、あたしたちの年収は去年とほぼ変わらず、夫婦で併せて４５００億円近い収入が入ってくる。
住民税は一律１割、所得税２割とすれば住民税４５０億円、所得税９００億円として、篠原家は１３５０億円の納税額になる。ちなみに、「納税ビリオネア」もあたしたちが地球の歴史上初でもある。
最も、他にも固定資産税とかも納めているから、納税額はもっとすさまじい金額にはなっている。

もちろん、これらは合法的に節税することはできるけど、これ以上金にがめつくなるのも嫌だし、世論の反感も買いそうなので、渋谷税務署長直々に家に来てもらって、納税額を算出してもらった。
今はもう、高額納税者ランキングがあるわけではないけど、もしあったら蓬莱教授とあたしたちで間違いなく表彰台を独占しそうだわ。
「その辺りは来年度の決算で相殺したいわね」
既に投資家は折り込み済みとはいえ、今年から蓬莱カンパニーの売り上げは急上昇することが確定的となっている。
値下げが終わるのを待った一般大衆たちが、こぞって薬を買いに来ている。
一方で、蓬莱の薬目当てに日本人と結婚しようとする外国人が日本に殺到していて、しかし不老というアドバンテージがない人が恋愛市場で勝てるはずもなく、色々としっちゃかめっちゃかになっているらしい。
「どこまで相殺できるかしら？」
「分からないわ……いたっ！」
赤ちゃんに、お腹をまた蹴られちゃったわ。
「また赤ちゃん？」
「うん……あ、また蹴ったわ」
浩介くんに似たのか、お腹の中の赤ちゃんはとても元気になっている。
日を追うごとに赤ちゃんがお腹の中で活発に動いてきている。
それはつまり、赤ちゃんがまだ成長しているという証拠でもある。
「そう言えば、男の子なの女の子なの？　そろそろ分かる頃ですよね？」
そう言えば、性別はまだ会社には話していなかったんだっけ？
「うん、男の子よ」
「へー、でもそんな感じがするわ」
最近では、町で小さな赤ちゃんや子供を見るだけでも心を打たれることがある。

特に、性別が男の子と分かってからは、男の子の赤ちゃんや、男の子の子供をとてもいとおしく感じるようになっていた。
「さ、仕事に戻りまして、相殺できるという判断についてですけれど――」
あたしたちの業務は続いていた。

「ただいまー」
「優子ちゃんおかえりなさい。今日、優子ちゃんの女の子記念日よね？」
「うん、そうよ」
やっぱり、みんなこの日のことを覚えてくれていた。
女の子になった日は、あたしの「もうひとつの誕生日」といった位置付けだったけど、今ではすっかり誕生日以上の価値を持つ日になった。
「もう11年も前になるのよねー」
「うん」
これからの人生を考えると、あたしもいつか、永原先生みたいに「男だったのは遠い昔」という日が来る。
後6年経てば、優子としての人生が、優一としての人生を上回る。
いや、幼稚園の時や小学低学年の記憶も、殆ど無くなっているし、小学生としてのあたしの記憶も、桂子ちゃんとの記憶が多い。
優子になったばかりの記憶は今もとても多い、そういう意味では、既に記憶の量は優子としての記憶が多いかもしれないわね。
「浩介も、優子ちゃんも、まさか11年で外見は全く変わらないのに、中身がここまで変わるとは思わなかったわ」
「ああ、俺も荒れていたものな」
浩介くんにとっても、あたしにとっても、あの日々を忘れることはない。
でも、前を見るとまだまだ果てしない道が続いているから、もう振り替えることも、殆どなくなった。
「でも、浩介くんの中身、一部は変わってないわよ」

「え？　例えば？」
　あたしの言葉に、浩介くんがキョトンとする。
　もちろん、浩介くんが変わってないところと言えば――
「スケベな所とか、変態さんな所とか」
「うぐっ……」
「そうよねえー、わざわざ優子ちゃんとえっちなことするための部屋とか作っちゃうくらいには変態よねー」
　お義母さんの爆弾発言に、あたしと浩介くんが一瞬で固まってしまった。
「あら？　やっぱり？　あの部屋やっぱりそういう部屋だったのねー」
　あうー、バレちゃってたのね。
「ど、どうして分かったんだ⁉」
「そりゃあ、私たちが決して入れない部屋に夜な夜な2人きりで入って行くし、部屋から出ると2人ともすごくからだ重そうに、だけど満足そうな顔してるんだもの。中は見てないけど、そういう部屋だってバレバレよ」
　うー、確かに、この家は廊下も見通しよくて広いから、知らない間にばれてしまっても不思議ではないわよね。
　親世代との同居は、金銭や育児、あるいは緊急時などに莫大なメリットがある一方で、こうしたリスクもあることも自覚しておかないといけないわね。
「まあ、しょうがねえか。俺たち夫婦だし」
　浩介くんが身もふたもないことを言ってしまう。
「で、浩介も優子ちゃんの妊娠中はあそこで発散してるのよね？」
　浩介くんの白状に、お義母さんが悪のりする。
「あ、うん。色々と記録しているからね。優子ちゃん、記録される時が一番恥ずかしそうにしててかわいいんだよ。それを思い出しながらなら、いくらでも行けるぜ！」
　そして浩介くんが、また調子に乗ってニヤニヤしながら話している。

「もうっ!!!　お義母さんも浩介くんもやめて！」
どうしてうちの家族は、こうもこういう所に緩いのかしら？
それもこれも、「早くやれ」とうるさいおばあさんの影響な気がするけど。
「おっとごめん。そうだったな。赤ちゃんにも聞こえちゃうし」
うー、あたしが恥ずかしいからとは言わないのね。
でも確かに、既に耳が聞こえる赤ちゃんに悪影響が出ちゃう方が問題だというのも、ぐうの音も出ないほどの正論なので、あたしはぐっと言葉を飲み込んだ。
「そうよ、あたしが恥ずかしいだけじゃなくて、赤ちゃんにもよくないのよ。いえ、むしろそっちが問題だわ」
今、赤ちゃんがおそらく睡眠時間に入っているのは、不幸中の幸いだわ。
「そうねえ、優子ちゃん、本当に赤ちゃん思いのママよね」
あたしのことより赤ちゃんのことを優先すると、お義母さんが誉めてくれた。
妊娠中、あたしは何度も赤ちゃん思いと言われた。
初産のうちからそんな風に言われるのは、とても嬉しいことだった。
「そうだよな。普通自分が恥ずかしいことしか言わないもの」
「ふふ、それを言うなら、浩介もよ。やっぱり、子供は親を変えるわね」
お義母さんのにっこりと柔らかい表情が目に見えた。
あたしは、何となく昔の話を思い出した。
永原先生や、クラスの他の女子たちが言った「恋は女を変える」という言葉。
あれは、もちろんあたしにも思い当たる。
今にして思えば、恋と並んで女を変えるのが、この「新しい命を育む」ということなんだろうと思う。
あたしの中で、徐々に幸せの形が見えてきた。
１１年前に永原先生が、ＴＳ病患者を一気に女性にしてしまうのは、妊娠と出産だと言っていた。

幸せの形はたくさんあるというのは、実はもっともらしい偽善なんじゃないかとあたしは思う。
今の生活を省みれば、こうして家庭を作り、赤ちゃんを産むことに勝る幸せ何て何もないと断言できる。
確かにあたしは、幸福追求の過程で、あたしは浩介くんと結婚し、蓬莱教授の研究に参加して、会社を作り、世界最上位の資産家になって、おまけにノーベル賞の栄誉までもらった。
今年の雑誌でも、「去年世界に影響を与えた女性」のランキングで、あたしは圧倒的な1位を手にした。
これ以上無いというくらいの名誉と財産を、あたしは得た。
でも、あたしの中で満たされない気持ちがどこかにあった。
あれだけ底無しだった欲望が、今はこんなにも落ち着いていて、とても晴れやかな気分になっていた。
これで出産に至れば、あたしの中で「解答」が得られると思う。
解答への道は、もうすぐゴールだと、そうあたしは確信していた。

# 夏の過ごし方

「うー、暑いわー、うっ……また蹴ったわね」

梅雨の時期を過ぎて、世間はすっかり夏になった。

夏場では、服の露出も増えるけど、それでも赤ちゃんのいるお腹は守らないといけない。

お医者さんに言われた通り、7月のこの時期は、赤ちゃんが最も活発に動く時で、特に静かな夜に激しく蹴られると、結構痛みが脳に伝わってくるのよね。

あたしは通勤中、特に外が暑いと感じるようになった。

「あは、また蹴ったわ」

誰にも聞こえないくらい小さな声で、電車の中で独り言を話す。

浩介くんとは別々の通勤で、帰りは一緒に帰ることが多い。

その時には、今みたいにちょっとだけ「蹴った」何て言う話をすることもあるし、通勤中に赤ちゃんが寝ていれば、特に何もない。

赤ちゃんは、一日の半分以上を寝て過ごすって言われているけど、子供や大人のように、長い時間起きて長い時間寝るというものではなく、短い時間で寝たり起きたりする。

そのため、産まれたばかりの赤ちゃんは、とても手がかかると言われた。

実際母さんもお義母さんも、赤ちゃんだった時の優一や浩介くんのお世話には苦労したと言っていた。

実際、この赤ちゃんも苦労すると思う。

胎動が激しいからそうだとは言い切れないけど、活発でやんちゃな子になりそうな気がしていた。

「……気がする……かあ」

もちろん、根拠なんて無い。

でも、妊娠が女を変えると言われるように、あたしはどうも最近、無根拠な予想を立ててしまうことが多くなった。

それはこれまでのあたしからすれば、到底考えられないことだった。

「ホルモンバランスの変化かしら？」
安土先生からも、妊娠や出産で、女性ホルモンが多く出るからホルモンバランスに注意してと言われている。
更に、「特に篠原さんは見るからに女性ホルモンが多そうだから」とも言っていた。
実際に、母性本能も、この女性ホルモンが支えているところに大きいと言う。
「女性ホルモンかあ……やっぱり妊娠すると違うのかしら？」
よく考えてみれば、あたしは女性ホルモンだらけの女性だった。
まず女性ホルモンで大きくなったと思えるくらいのとても大きな胸、街中でもあたしより大きな女性は未だに見た記憶がない。
最近ではブラジャーのサイズがますますきつくなってきて、そろそろ更に大きいサイズを買う必要性に迫られていた。
このかわいくて美人な顔と白い肌、潤いと張りのあるこの無駄毛が全く生えない肌も、女性ホルモンのおかげで保っているようなもの。
そしてこの真っ黒な長いさらさらのストレートヘア、更に大きなお尻に安産体型、「優子」を支える緩やかな性格に、今は止まっている重めの生理に壊滅的な運動神経だって、普通の人よりも女性ホルモンが強いせいなのかもしれないわね。
そしてそれは、多少に個人差があるにしても、ＴＳ病患者全員に、おおむね共通することだった。
「ＴＳ病って不思議よね」
男性から女性に変わるだけではなく、女性らしい女性に大きく変わっていくのがＴＳ病の特徴だった。
もしかしたら、女として生きていかないと患者の精神が崩壊しちゃうのも、これが原因なのかもしれないわね。
まあ、男性ホルモンが多い女性になったとしても、結果は同じ気がするけど。
「優子ちゃん、少し休んだ方がいいんじゃないかな？」
休み時間、あたしは浩介くんからそんな提案を受ける。

「え？　どうしてかしら？」
「優子ちゃん、赤ちゃんがお腹蹴った時に、少し判断が鈍っているんだ。今は一番胎動が激しいだろ？　あくまでも仕事は二の次なんだし、赤ちゃんのことを絶対優先で頼むよ」
「うん、分かってるわ」
　ともあれ、仕事に支障こそきたしてはいないものの、仕事の邪魔になっちゃっているのも確かではあった。
　もちろん、蹴られることでの反射的な反応もあるけど、何より愛しい気持ちばかりが溢れてしまって少し仕事が鈍ってしまってもいた。
「あーもちろん、出産に際して危険だと言うなら、俺もさすがに母体優先を選ぶがね。優子ちゃんが死んじゃったら、俺が一番辛いし、蓬莱の薬があるんだから将来また産まれてくる子供も産まれなくなっちまう」
　浩介くんが、悲しく真剣そうな表情で話す。
　出産は命がけだから、決して大げさな物言いではない。
「うん、それくらいは分かるわ」
　子供を失う悲しみは大きいけど、あたしが死んじゃったら、家族の悲しみはもっと深くなると思う。
　赤ちゃんの方が、死ぬ可能性は高いというのもあるけれどね。
「ふう、ならよかった。最近の優子ちゃん、赤ちゃん守るためなら人も自分も平気で殺すくらいの勢いがあったからさ」
「うー、否定できないわ」
　母性がそれだけ強いということでもあるんだろうけど。
「それにしても、夏でも少し息抜きしたいよなあー、優子ちゃんも赤ちゃんのためとはいえあんまり『あれもダメこれもダメ』じゃストレス高すぎていけないだろうし」
「うん」
　屋上にプールはあるけど、お腹を冷やすと赤ちゃんにダイレクトに悪影響が出るので、もちろん妊娠中のあたしは使えない。
　それだけではなく、仮に赤ちゃんが大丈夫でも、冷たいプールに入る以上準備体操する必要があるけど、準備体操中に万が一転んで事故

になったら怖いというのが浩介くんの見解だった。
同様の理由で、「視界が悪い」という名目で、露天風呂もあたしは使用禁止になっている。
日々の運動という意味では、この仕事も十分に役立っているのもまた事実だった。
「旅行もリスクあるし……うーん、意外と妊婦にリスクかけない息抜きって難しいなあ」
浩介くんが腕を組んで悩んでいる。
あたし自身だけではなく、お腹の赤ちゃんにも配慮しないといけないのが、この問題の難点だ。
実際、観光地での救急トラブルの多くが妊婦絡みという話もある。
一時期は「マタニティライフ」と称して女性誌が様々な危険行為を煽ったこともあったけど、もちろんそれらに書いていない危険行為も多々ある。
「うーん、降参！　安土先生に相談してくれ！」
浩介くんが白旗を上げて振るポーズをする。
「うん、分かったわ」
まあ、ここで井戸端会議するよりもずっといいものね。

「そうですね、赤ちゃんも大分育って来ていますので、外食はどうでしょう？　もちろん、極端な食事はダメですが、それは妊娠していなくても一緒ですから」
安土先生の答えは明瞭だった。
最近では、「妊婦のための食事」として、家の中でばかり食べていた。
気分転換し、ストレスを解消するためには、確かに外食はいいことだと思う。
よくよく考えれば、永原先生と一緒にお寿司屋さんにも入ったものね。
「外食ねえ……この季節だと何があるかしら？」
お義母さんが唸っている。

「あー、高級料亭に久々に行くか？」
「うーん、何となくそういう気分じゃ無いのよねえ」
確かに、落ち着いた空間は貴重だし、高級料理はどれも美味しく魅力的だ。
蓬莱カンパニーの夫妻が予約するとなると、何故かキャンセルが入ってそこに滑り込めることが多い。
やっぱり、どうもあたしたちは遠慮される立場らしいわね。
「えっと……でも大衆的なお店もちょっとねえ……」
そういうお店だと、あたしたちはすぐに注目されてしまう。
ノーベル賞が決まった直後に、たまにはあたしと浩介くんでお昼にハンバーガー屋さんに行こうとなった時に、インターネットの呟きサイトで「篠原夫妻がいる」と大騒ぎになってしまったことがあった。
あたしたちを囲む野次馬がひどくなって、店員さんも、何らマナー違反もしていないあたしたちに退店を命じるわけにもいかず困り果てていた。
お陰様で、「次からは店を貸しきるか出前を頼んでください。場合によってはその場で調理しますので」との申し出を受けてしまった。
というか、店を貸しきる方がよっぽど迷惑な気もしないでもないんだけど。
「仕切りがあるお店がいいわよね。そうするとやっぱりある程度高級で――」
「ここなんてどうかしら？」
お義母さんが、ノートＰＣの画面を見せてくれる。
そこは香川県の名店で修行を受けた料理長の打つ「高級手打ちうどん」のお店だった。
お１人様１食あたり２０００円が目安で、味もよいと大繁盛している。
「ここいいわね」
ざるうどんとかにすれば、妊婦のあたしにもそこまで負担の大きな食事にはならないわね。
天ぷらは少し油が多そうな感じだから、控えた方がいいとは思うけ

ど。
「讃岐うどんはベタだけどおいしいわよね」
讃岐うどんは、本来は一般大衆が安い値段で気軽に食べられる料理で、セルフサービス制度など経費削減の工夫がなされているのだけど、もちろん「高級うどん」も存在する。
このお店のモットーは、「安くてもおいしい讃岐うどんが、お金をかけて高級になればこうなります」というものだった。
最近の流行りは、こうした「安い食べ物」や「庶民の食べ物」を、お金をかけて美味しく高級にしたというものが多い。
「優子ちゃんや浩介が生まれる前や小さい頃からすれば隔世の感があるな」
お義父さんも、こうした風潮には驚きを持って話している。
あたしたちが小学生の頃までは、日本はとても暗く、特に当時の政権の失政と、追い討ちをかけるような巨大地震が絶望を加速させた。
あたしはもうほとんど覚えていないけど、その時の企業たちは値下げ競争をし、人々は中身よりも価格の安さばかりを求め、コスト削減のために労働環境は悪化の一途をたどり、そうして労働者がストレスを溜めてそれを発散するためにモンスター消費者となり、お金持ちもお金をためるばかりで更に不況に拍車がかかるという悪循環だった。
今では、それらは全て幻のような好景気が続いていた。
不老社会の到来によって、人々は値段よりも中身と品質、特に持続性を求め、企業たちは高級嗜好の競争をし、コストに余裕が出て労働環境は改善の一途をたどり、そうして余裕の出た労働者がお金を使い、お金持ちたちがお金を使うことの価値が理解されて更に好景気に拍車がかかっていた。
もちろん、実際には不老社会が本格到来する前から、あたしたちへの期待を持って、好景気が続いていたのも、また大きいとは思うけどね。
「そうねえー、でも今の景気も、浩介の会社が動かしているようなものだものね」
「ああ」

蓬莱教授は、現在も再生医療の研究に戻り、またひとつ、難病を解決させようとしている。
不老となったことで、また前人未到の3回目以降のノーベル賞にも期待がかかっている。
あたしたちは……1回でも十分すぎるくらい満足だわ。
「よし、それでこの店は……表参道か」
「頑張れば歩いても行けるわね」
お義母さんたちには楽でも、妊婦のあたしにはきついわ。
というか、妊娠前でもここから表参道なんて歩いたらバテちゃうわよ。
「うーん、歩くのは渋谷まででお願い」
出来れば神泉駅を使ってほしいけど、表参道なら渋谷駅での乗り換えを加味すれば渋谷まで歩いた方がいい可能性が高い。
「そうねえ……」
「ま、優子の負担になったら本末転倒だ。ここは渋谷から電車を使おうか」
「うん、そうね」
帰りはともかく、行きは渋谷まで下り坂なのでそこまで大きな負担にはならない。
そこまで距離は長くないし、渋谷なら人混みに紛れるのも簡単なので、あたしは渋谷まで徒歩で行き、そこから地下鉄で表参道に向かう案を採用した。

「それじゃあ、あたしたちは外食してくるわね」
「気を付けてねー」
母さんに見送られ、あたしたちは家を出る。
そしてしばらく歩くと、閑静な高級住宅街から、人々が集まる繁華街へと出た。
こういう場所から近いのが、松濤の利便性に繋がっているとは思う。
最も、庶民感覚が抜けていない成金のあたしたちはともかく、他の

松濤の住人たちがここをどれくらい使うのかは、未知数ではあるけどね。
渋谷のスクランブル交差点は、駅前だけではない。
あまり知られていない小さめの、それでも人の多いスクランブル交差点を抜け、更に向かうと大きなスクランブル交差点が見える。
また、ここに観光客が多く集まっていて、観光客たちはあたしたちには目もくれず、交差点の人だかりに夢中になっている。
あたしたちは、交差点はわたらずに、そのまま半蔵門線に繋がる入り口へと降りていった。
ＩＣカードを改札機にかざし、あたしたちはホームへと出る。
ホームでは、仕事帰りのサラリーマンたちの姿が多く見られた。
もしかしたら、蓬莱カンパニーの社員も、この中にいるかもしれない。
恐らく、帰りの電車はちょうど帰宅ラッシュにぶつかるとは思うけど、行きの電車は、渋谷で降りるお客さんも多く、逆方向で空いていた。
「次は、表参道、表参道です。乗り換えのご案内です、銀座線――」
僅かな時間だけ座り、お義母さんが地図を出してきた。
「えっと、こっちの出口みたいね」
東京の地下鉄はとにかく出口の数が多く、ここ表参道駅も、それなりの利用者数がいる駅とあって出口の数も多い。
お義母さんが、店舗までの地図から、適切な出口を探していく。
そしてあたしたちはそれについて行き、地上へと出てからも、出口の前にある地図と照合しながら進む。
スマホなどでの道案内は普及しているけど、電池要らずのこの方法も、簡便で需要はまだまだ多い。
電子書籍は普及したけど、紙の本が全く無くなっていないのと同じだわ。
「あったわ。ここよ」
飲食店が多数入っているビルの１階に、そのうどん屋さんはあった。

ビルの外観からして高級感があり、「さすがは表参道」という雰囲気ね。
「よし、入るか」
チリリーン
小気味よい風鈴の音が、あたしを涼しく癒やしてくれる。
「いらっしゃいませー何名様ですか？」
「あー、４人で」
「かしこまりました。お席空いていますのでこちらへどうぞ」
幸い、まだ席は空いていたので、あたしたちも待たずにすぐに行くことが出来た。
讃岐うどんは、あたしはざるうどんを、浩介くんは肉うどん、お義母さんがカレーうどんでお義父さんが冷たい天ぷらうどんと、見事にバラバラな注文になった。
家族が４人いると、こういう「バラバラ注文」は、実は結構珍しかったりするのよね。
「では少々お待ちください」
うどん屋さんは、内装もとても高級感溢れていて、和楽器による演奏が、常に流れていた。
雰囲気としては、あんまり覚えていないけど、小谷学園の修学旅行で入った京都のお寿司屋さんに近いかしら？
「お待たせいたしましたー」
４種類のうどんがそれぞれ机に置かれていく。
そして、注文のレシートが置かれ、「ごゆっくりどうぞ」という言葉とともに、店内は再び静かな雰囲気となった。
「「いただきます」」
あたしたちはいただきますをしてから、うどんを食べ始めることにした。
うどんは、とても美味しかった。
店内の雰囲気もよく、あたしたちは篠原夫妻ともばれずに、高級料亭同様、静かに食べることが出来た。

「おいしかったわ」
「ああ……あいたっ、あはっまた蹴った」
あたしたちは、会計を済ませてまた電車に乗り込んだ。
電車は混んでいたけど、お腹のすっかり大きくなったあたしは、見知らぬ人に席を譲って貰った。
あたしの鞄にあった「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーが、あたしには輝いて見えた。
安土先生の定期検診も全て異常はなく、赤ちゃんはすくすくと成長してくれていると思う。
もうすぐ、赤ちゃんを産む日が来る。あたしが、母親としての優子が、もうすぐ来る。
赤ちゃんの名付けも、すでに候補は絞られている。
出産の予定日が近付いたら、入院することになる。
そうなったら、どうなるかしら？

# 始まりの場所

「じゃあ、行ってくるわね」
「気を付けてねー」
いよいよ歴も8月になって、あたしはついに出産直前の「臨月」と呼ばれる状態になった。
胎動は少なくなって、いよいよ赤ちゃんも出産に備えていることが分かる。
そしてあたしは、安土先生のいる総合病院へと向かった。
小谷学園の最寄り駅で、あたしが女の子になった時に初めて目が覚めた場所でもある。
電車はいつものように動いていて、あたしも空いた座席に座る。
「この電車は――」
あたしは、口では言い表せない複雑な感情があった。
女の子としてのあたしは、あの病院で「産まれた」ようなものだった。
もちろん、男としての人生経験もあるから、完全に1からスタートというわけではなかったけど……何だろう、まるで親元に成長して戻ったような気もするし、それこそ「女としての優子」の人生はむしろこれから始まるような、そんな気もしていた。
もちろん、車内の乗客は、あたしのことは気にも止めない。
普段からテレビに出ている芸能人や有名政治家というわけではなくなったので、世間はあたしのことをすっかり忘れていた。
ただ、目につくのは相変わらずの男たちの胸への視線と、更に出産直前の妊婦だからか、お腹への視線もすごい。
臨月ということで、もういつ産まれてもおかしくない状況ではあるけど、まだ臨月になったばかりなので、今生まれたら早産になることも確かだった。
「間もなく発車いたします。閉まるドアにご注意ください」
ピンポーンピンポーン！
車内放送とともに、電車が発車する。あたしは、懐かしくも11年

前より少しだけ変わった風景を見ながら、昔の日々をまた思い出した。
妊娠をしてから、あたしは本当に変わってしまった。
最近では、昔を思い出すことが増えた。後ろ向きになったと言えば聞こえが悪いけど、でも実際、そんな風に見られても仕方ない状態だとは思う。
優一時代と比べて変わったとはよく言われるけど、今ではもう、ノーベル賞を受賞したあの時でさえ、あたしによく似た別人だったんじゃないかと思う。
電車はまた、かつて実家があった場所の最寄り駅に到着した。
降りてみたい衝動に掻き立てられる。今の石山家と木ノ本家はどうなっているのかも気になるわ。
いや、今は桂子ちゃんもＪＡＸＡに勤務してて、達也さんと結婚して別の家にいることは分かっている。
石山家のあった土地も、建物はそのままに、今は別の家族が中古物件として家に使っている。
篠原家のあった場所も、同じようなことになっている。
だからもう、あの駅付近には、あたしたちの痕跡はほとんど無くなってしまっているのよね。
「変わるわよね……」
時が経てば景色が変わるなんて、当たり前と言えば当たり前のことだった。東京だって、他の街だって、みんなそう。永原先生が生きてた時代にあった建物なんて、もう歴史的建造物でもない限り残っていない。
このあたりの街だって、変わっていないのは、小谷学園と佐和山大学くらいで、小谷学園にはあたしたちの記念館と、数年前には恵美ちゃんの銅像が新しくできているし、あたしが知らないだけで、学校内のいくつかの建物は補修されているかもしれない。
「次は――」
あたしは、小谷学園の最寄り駅に向かい、そこから懐かしい通学路を進んで病院へと向かった。

「すみません、予約した篠原です」
「はい」
最上階にある一番高い個室に、あたしは入ることになっている。
そこは整備も行き届いているし、富裕層向けなので他の患者さんと鉢合わせになることも基本的には無いように工夫されている。
あたしはお金持ちなので、入院期間も長い。
そして――
「お待ちしておりました。さ、篠原さん行きますよ」
「はい、今日からお世話になります」
安土先生が、あたしを直接迎えてくれた。
病院の構造は、建物はともかく、内装などの間取りやサービスはあたしが女の子になったばかりの頃とほとんど変わっていない。
連絡通路やスカイブリッジで、入院棟は分けられている。こっちに入るのは、あたしも女の子になった最初の日以来だった。
確かあたしがあの時入院していたのは４階だったかしら？
うーん、そういうことまで覚えてなくてもいいわよね。
エレベーターに乗り込むと、安土先生が「R」の下にある一番高い階の数字を押した。
「ドアが締まります」
機械音声とともにドアが締まり、エレベーターがゆっくりと上り始めた。
このエレベーターは病院のもので広く、急患にも対応できるようになっている。ちなみに、非常時には患者優先となっている。
「そういえば、篠原さんって、この病院で女性になったんですって？」
エレベーターが閉まると、安土先生がいきなりあたしの過去のことを話してきた。
「え？　安土先生がどうして!?」
年齢的にも、またこの病院の規模からしても、安土先生があたしのことを知っているとは思わなかったのに。
「あら？　噂は本当だったのね」
「え？」

会話中にエレベーターのドアが開き、あたしたちは一旦会話を中断してドアから降りることに専念する。
「いやあね、院内でひっそりと語り継がれている噂なのよ。１１年前のあの日、後にノーベル賞学者になる篠原優子さんがここに運ばれてきたって。そしてあなた、黙っていましたけどやっぱり『あの』篠原優子さんなのですね」
篠原も優子も、よくある名字と名前だから、同姓同名だと思っても不思議ではない。
それでも、この頭の白いリボンや、大きな胸と長い黒髪で、とっくに気付かれていると思っていた。
「こちらです」
安土先生が病院の部屋の鍵を取り出して開け、中へと通してくれる。
「おー」
中は結構豪華だった。
ベッドはあたしが普段使っているのと同じくらいの広さで、日当たりもよくまた分娩台も置かれている。
更に個室のトイレに個室のお風呂、洗面台に小さなキッチンもあって、ベッドには机つきでノートパソコンも完備されていた。
少なくとも、１１年前にあたしが最初に入院した時の部屋と比べれば、比べるまでもない。
「では、本日から入院手続きに入りますね。今はまだ臨月といっても安定してますけど、数日後にはすぐに妊娠末期の症状が出ますので覚悟しておいてください」
一通り見終わってあたしがベッドに腰掛けると安土先生も近くの椅子に腰掛けてあたしに注意をしてくれる。
「はい」
「それでは、私はこれで失礼いたします。何かございましたらいつでも『ナースコール』をお呼びください。ＶＩＰルームは２４時間最優先で駆けつけます。もし急ぎでない場合はこちらのボタンです」
どうやら、ナースコールにも２種類あるみたいね。

「ありがとうございます」
安土先生が部屋の外に出ていき、この部屋にはあたし1人となった。
「あら？」
ベッドに向かい、壁を見ると、そこにはあたしが着ていた小谷学園の女子制服と、そしてあたしが貰ったノーベル賞メダルのレプリカが掲げられていた。
机をよく見ると、置き手紙と思われる1枚の手紙と、小谷学園の卒業証書と卒業アルバム、佐和山大学と大学院での学位証が、それぞれ置いてあった。
「優子ちゃんへ
思い出の品を優子ちゃんの病室に送りました。
思い出の写真も、パソコンの中にあるよ。
入院生活、出産、俺は見守ることしかできないけど、優子ちゃんの助けになると思って、辛いと思ったらこの『始まりの場所』で思い出をめぐってみてね。
愛する夫、篠原浩介より」
「ふふっ」
どうやら、これらは浩介くんが送ったものらしい。
あたしは早速ベッドに入るとパソコンを立ち上げることにした。
「……これ……」
パソコンの中には、「思い出写真」のフォルダがあった。
ダブルクリックして開いてみると、何枚もの写真があった。
「これは……」
忘れかけていることもあった。
そのフォルダはあたしが女の子になったばかりの時に生徒手帳に張ってあった、女の子としてのあたしを記録した一番古い写真から始まっていた。
そして、学校行事の写真、最初の球技大会での様子も、撮影されていた。
そして、林間学校でのあたしの姿もあった。懐かしいクラスメイト

たちの顔が浮かんでくる。
あたしが浩介くんにおんぶして貰った山登り、頂上でにっこりとお弁当を食べるあたしの姿もあった。
写真を見て、あたしは長く記憶の奥底に眠っていたあの時の山の絶景、そしてあの時のかっこいい浩介くんを思い出した。
「もしかしたら、恋心を抱いたのって、この時だったのかしら？　あーん、素敵だわ」
浩介くんも写っていて、あたしはまた、浩介くんに恋をした。
最近は赤ちゃんのことも多く、浩介くんまで手が回らないこともあった。
でも、浩介くんは責任感が強くて、だから自分で処理する時も、あたしを選んでくれた。
「ふふっ」
林間学校でのバーベキューに、小さな花火大会、そして帰りのバス。
永原先生と3人で行った史跡巡りは、残念ながら写真には残っていなかった。
代わりに、別の場所から持ってきたと思われるあの場所の写真が入れられていた。
「あははっ」
浩介くんが「真田幸村像」の写真のタイトルを「永原先生お怒りの銅像」と名前をつけていて、深くにもちょっと笑ってしまった。
新幹線の写真には浩介くんのコメントが添えられていて、「この新幹線で、優子ちゃんと俺は初めてグランクラスに乗った」と書かれていた。
あの時に永原先生が話してくれた秘密も、今は世間みんなが知っていた。
林間学校の思い出の写真の次は夏の海と夏祭りの写真、海での写真は残っていなかったのか、あたしたちは写っておらず、やっぱり「イメージ」になっていた。
夏祭りの方は、お化け屋敷は外観のみで、盆踊りの写真もあたしたちはうっすらと写っているだけだった。

でも、永原先生が着ていた「吉良の着物」の写真もあって、あたしたちがその出来事を思い出すのには十分だった。

11年前の夏の頃と言えば、あたしが心と身体の解離で悩んだ時でもある。

今思えば、先を急ぎすぎたと思えるけど、あの時の辛い日々は、今はもうない。

秋のあたしたちのデートや、水族館でのことは写真にはなく、その次にあったのは文化祭での写真だった。

そこには制服姿の永原先生や、メイド服姿の永原先生、メイド服姿のあたしに、更に多かったのはミスコンでの写真だった。

あたしはミスコンで優勝していて、浩介くんによれば、「この時俺は優子ちゃんの彼氏になりたいという気持ちが、よりいっそう強くなり、そしてそのまま結婚も意識し始めた」とのことだった。

後夜祭での告白の写真は、もちろん残っていない。だから夜の無人の中庭の写真で代用されている。でも、それを見なくても、あの時の記憶はあたしの中で今も眠り続けている。

そして文化祭の次の体育祭の思い出の写真があった。その中には玉入れの写真があって、あたしが大泣きしちゃったことを思い出して恥ずかしくなった。

浩介くんが活躍する場面も、しっかり写っていた。

一方で、直接な関係はなかったのか、幸子さんとの思い出に関しては写真はなかった。

クリスマスでの天体観測の写真も入っていた。

坂田部長も、今は蓬莱カンパニーの顧客になっている。そう言えばこの日の蓬莱教授の発表が、全てを変えたのよね。

そして1月の新年の最初の初詣は、神社の画像になっていた。

住居が変わり、初詣の神社が明治神宮になったことで、あの神社にはご無沙汰することになった。

そう言えば、あの場には蓬莱教授もいたんだっけ？

スキー合宿では、永原先生とあたしたちが子供たちと一緒に初心者向けのスキー教室に通ったり、浩介くんが上級者コースから滑る様子

も写っていた。
あのホテルは、今は新しくリニューアル開業していて、久しく、この写真も今となっては貴重な写真よね。
最後の家族風呂に入ったのが、あたしと浩介くんが初めて一緒にお風呂に入った時でもあるのよね。
今思えば、終わりかけのホテルに泊まれたのも、いい思い出よね。
もちろん、思い出の遊園地デートも写真にはない。
あたしたちは、あまり写真に残さないタイプで、今思うとちょっとだけ勿体無かったかもしれないわ。
ただ、浩介くんにスマホで撮った遊園地の写真はいくつか残っていて、お化け屋敷や観覧車からの眺めを撮った写真だけでも、あの時を思い出すのには苦労しなかった。
「懐かしいわ」
あの時の浩介くんの言葉は今でも思い出す。
今、その約束は果たせている。
あたしが女の子になって1周年のパーティーの写真には、クラスの女子や浩介くんのみならず、幸子さんの写真もあった。
「クラスのみんなはどうしているかしら？」
あたしの調べだと、今年で小谷学園のクラスメイトたちは全員が蓬莱の薬を飲めたことは確認している。
何故なら、全員が「高校時代に同級生だった」と名乗ったから。
でも、どんな仕事をして、どんな風になっているかは分からない。
例のＳＮＳは残ってはいるけど、1年以上誰も書き込んでいなかった。
更に、6月に行われた球技大会の写真は、たくさん残っていた。
浩介くんと恵美ちゃんのテニスの試合、恵美ちゃんが泣いているところは、省かれていた。
あの試合は、今ではあたしのスピーチもあってよく知られている。
結果的には、フェミニストにとってかなり都合に悪い試合なのか、あの試合の存在が世界に知られるようになってからは、海外でもようやくフェミニズムの欺瞞に気付き始めたらしい。

そして次にあったのは修学旅行の写真、ここでも浩介くんと2人きりの時の写真はほぼなく、鉄道博物館の写真が中心だった。
ただ浩介くんは、「思い出は、はっきり残っている」として、当時の様子を記録していた。
それはあたしの記憶とも、完全に一致していた。
そして、一番忘れられないのが、あたしたちが恋人から婚約者になったあの文化祭、桂子ちゃんのミスコンの写真も含め、色々あったけど、特に多かったのがあたしたちにの公開プロポーズの様子だった。
全校生徒と先生たちがあたしたちを歓迎してくれた。
記念館にもそのことは展示されていて、あたしたちの幸せの象徴になっていた。
また、あたしたちは知らなかったけど、小谷学園では、あたしたちを記念して後夜祭で好きな女の子に告白するイベントができたんだとか。
さすがに、「元祖」のあたしたちのように「プロポーズ」までしたカップルはまだいないみたいだけど。
そして、3年の体育祭の写真は、やっぱり浩介くんの活躍が中心に撮影されていた。
更に卒業間際に永原先生が生徒になったのも、制服姿の永原先生の写真で代用されていた。
そして忘れもしない卒業式の写真、卒業証書を校長先生から受けとるあたしの姿が、石山優子としての最後の写真だった。
卒業式と同じ日に、結婚式があって、そちらの写真はさすがに数が多かった。
「きれいね」
自分でもそう思ってしまうくらい、花嫁はきれいだった。
出席者との間での集合写真や、また新婚旅行に向かうあたしたちの後ろ姿を写した写真もあった。
撮影者は……多分母さんね。
新婚旅行は、あたしたちよりもやはり風景が多くて、それでも当時

の情景の想像には支障はない。
これも、姿が変わっていないあたしたちならではなのかもしれないわね。
そして、あたしたちが結婚してからの思い出の写真が続いていく。
ゴールデンウィークの写真や、家族旅行、東京オリンピックでの写真に、浩介くんと2人で富山に行った写真もあった。
でも、どれも小谷学園の思い出写真よりは重点はおかれていなかった。
それはやはり、あたしに「原点」に戻ってほしいという浩介くんの配慮からかもしれない。
それでも、あたしたちが会社を立ち上げた時や、初めての株式上場日、そしてノーベル賞の授賞式や晩餐会は、写真豊富だった。
ノーベル賞の晩餐会でさえ、今は遠い昔のようだった。
「あ……」
そして最後の一枚は、あたしの赤ちゃんのエコー写真だった。
「あたしの思い出……かあ」
これまでにあったこと、そしてこれから起きること、あたしはもう一度、フォルダの最初の写真に戻る。
相変わらず、生徒手帳にやや真顔で写るあたしの顔が入っていた。
「ふふ、変わらないわね」
こうして11年も経つと、クラスメイトだって顔つきや体型など様々に変わっている。
蓬莱の薬を早めに飲んだ桂子ちゃんや恵美ちゃん、あるいは浩介くんでさえ、「完全不老の薬」が出来る前にほんの僅かに老化が進行していたために少し変わっているのに、この写真に写っているＴＳ病の人たちはそんな気配が全くない。
永原先生たちはもちろん、幸子さんも、歩美さんもだった。
「でも」
あたしは、お腹がすっかり大きくなって、外からでも目で見て分かる位に激しく動く赤ちゃんを見る。
「本当に、元気になったわよね」

そろそろ、赤ちゃんもお腹から出る練習をし始めている。
いつまでも、お腹の中では育てるわけにはいかない。
また、早く会いたいという気持ちと、ずっとこのままがいいという気持ちでせめぎあう。
出産した後も、子供はどんどんと大きくなる。
そしていつかは、巣立つ時がくるんだと思う。
「何だかなあー」
遠い過去のことを振り返ったかと思えば、お腹の赤ちゃんが巣立つような、そんな遠い未来のことまで考えてしまう。
妊娠中は、色々と性格が変わったりする人も多いという。
あたしも、性格はともかく、色々なことが、妊娠をきっかけに変わっていったと思う。
お腹の赤ちゃんのことが、もっと気になっていく。
「無事に、生まれてくれるかしら?」
ともあれ今は、その心配だけしていきたいと思う。

# 入院生活

コンコン
「はーい」
パソコンでインターネットを巡回していたら、突然扉がノックされた。
「失礼しまーす」
ガチャッ
「あ、安土先生」
入ってきたのは、安土先生だった。
どうやら、随分と時間が経っていたわね。
「えっと、篠原さん、入院生活についてですけれども。いくつか注意点を述べさせていただきますね」
「はい」
本来、まだこの時期は多くの妊婦さんは入院していない。
場合によっては、破水などによって病院に駆け混んで、その場で産む場合も多く、運が悪い人は病院で産むことができないケースもある。
もちろん、それそのものがリスクの高い行動であるため、あたしはこうして大分早い時期から入院することになっている。
「まだそこまで急ぐこともないですから、しばらく食事等も自由に取ってもらいます。もちろん、希望されれば病院食も提供いたします」
「はい」
病院食の味は、あまりにも薄すぎたのを思い出す。１１年前の食事の味を覚えているというのだからよっぽどよね。
あたしにとっては、女の子になってから入院するのは１１年ぶりのことだった。つまり、あの「始まりの時」以来の出来事だから分からないことや忘れていることも多い。
健康診断と病院食の印象が強いだけかもしれないけど。
しかもあの時は、朝起きて午後には退院してしまったので、１泊２

日というけど意識を失ってた時間が大半なので実質は半日程度でしかない。
でも今回は、よほど早く産まれない限りはかなりの長期に渡る入院生活の予定になっている。
もちろん、浩介くんや家族の人、協会の人もお見舞いに来てくれるし、産まれそうということになれば、もちろん浩介くんたちも駆けつけてくれる。
「出産当日ですが、注意点と致しまして、まず予兆についてですが――」
安土先生の口から、出産時の兆候についての説明と、その後の出産時のリスクのお話や、また分娩台の使用などについても注意点が述べられる。
もちろん、あたしもとっくの昔に承知した内容がほとんどだったけど、中には知らなかったこともあって驚いた。
「ＴＳ病の方ということもありまして、篠原さんはとても母性の強い人です」
あたしの母性の強さは、主治医の安土先生も認めるところだった。
「ええ」
「ですから、出産後には少し神経過敏になると思いますので、どうか頭の片隅にお入れください」
あたしも、出産後にはいわゆる「ガルガル期」というのがあるのは知っていて、あたしの場合特にそれが強烈になることが予想されている。
今ではすっかり慣れちゃったばかりか、ちょっと痛すぎるという印象さえ受ける「胎動」だけど、それ以前にも赤ちゃんのことで度々泣き出すことが多くなった。
「――以上により、出産してすぐに退院できる訳ではありませんのでご了承ください」
「はい」
最後に、産後の入院生活について安土先生より注意を受ける。
出産後も母体の健康確認の他、母子同室の場合は育児もしないとい

けない。
安土先生から、入院中に関する説明はすべて終わった。
そして今日は病院食を希望するか聞いてきたので、あたしは遠慮することにした。
ちなみに、ここは特別室なので、自己負担で出前を頼むことができるとのことだった。
安土先生が退室すると、ちょうど時間的にも昼食の時間になっていた。
あたしは早速、昼食のために、この前永原先生と食べたお寿司屋さんに繰り出すことにした。
病院服は明日からの予定でまだ着ていないので、そのまま病室を出る。
明日以降は外食する時は着替えなきゃいけない。妊娠も末期になるとお腹が大きくなった妊婦用の服を着る必要があって、初めて見た時は「やっぱり随分とお腹大きいわね」と思った。
でもこうして着て見ると、結構ギリギリなのがわかった。特にあたしは規格外の巨乳なので、ブラジャーを探すのだけでも一苦労で、渋谷中を探しても見つからず、未だにあの区役所のデパートにあったのが謎だった。
ましてや、妊婦用の服ともなるとなおさらのことで、結局呉服メーカーに特注してもらうハメになった。
まあ、財産的には一般庶民には痛いけど、今のあたしはお世辞にも一般庶民を名乗れる身分じゃないものね。
あたしはゆっくりと元来た道を戻るように病院を出て、そのまま永原先生との記憶を頼りにお寿司屋さんへと向かった。

ガララララ
「いらっしゃい！　おや、篠原さんですかな!?」
寿司屋さんの大将が、出迎えてくれる。
「ええ、あたしを覚えていたのですね」
いくら芸能人でも政治家でもないといっても、やはりこれだけ世間

に注目されちゃえば、嫌でも有名税を納めなきゃいけなくなるわね。
まあ、有名税の税務署が来ても、蓬莱カンパニーの重役という立場なので、周囲は勝手に配慮してくれるけどね。
「もちろんだとも！　にしても、ずいぶんとお腹が大きくなったもんだなー。こう言っちゃ何だが、もうすぐなのかい？」
今日は、まだ店内には誰もいない。
昼食の時間とは、少しずれているものね。
「はい、9月に産まれる予定です。今日からあそこの総合病院に入院するんです」
お寿司屋さんの大将さんは、とても親しみやすそうな人なのも相変わらずだった。
親しげな人なので、あたしはすぐに打ち解けてしまう。
ふふ、浩介くんがいなくてよかったわ。
「おう、そうか。で、どうする？」
「日本橋の特上セットで」
あたしは、このお店にある江戸湾セットと同額の高いメニューを注文した。
どうやら、新しく出来たメニューと言うよりは、旬に合わせて食材を変えているらしいわね。
「あいよ。昨日の夜は永原先生もこれを頼んでたぜ。夏が旬の魚を、今朝築地で取り寄せたんだぜ。ふう、景気が良すぎて怖いくらいだな」
永原先生の話をしながら、寿司屋の大将さんが、お寿司を作り始めた。
お客さんが少なくても、このお店は利益が出ている。
いやむしろ、お客さんが少ないことが売りになっているのかもしれないわね。
「あい、できたよ」
「はい」
あたしは、美味しいお寿司を食べる。

最近は妊娠した時以来の癖で、少しご飯を多めに食べる癖がついている。
もちろん、今は赤ちゃんの分も食べなきゃいけないけど、出産後には食べ過ぎに注意しないといけないわね。
後、マグロ類ってあまり良くないみたいなのでその辺も気をつけないといけない。
妊娠生活は我慢の連続だけど、少しも辛いとは思わなかった。
「はむはむ……うん、美味しいわ」
あたしは成り上がりの超富裕層だからいいけど、あんまり高級品ばかり食べさせすぎちゃうと、赤ちゃんがグルメになっちゃうかしら？
うーん、赤ちゃんの栄養はへその緒を伝っていくわけだし、そこまで考えなくてもいいかしら？
産まれた後は、もちろん食育も大事だけれども。そのあたりは安土先生と産後に相談しながら決めたいわね。
「出産、頑張ってくれよ。俺は応援しかできねえが、食べたくなったらまたいつでも来てくれ」
お寿司屋さんの大将さんは、仕事柄病院関係の人ともお付き合いがあるのかもしれないわね。
「はい」
あたしは、食べ終わるとお寿司屋さんの大将さんに現金を支払う。
お寿司屋さんを出ると、あたしはすぐに病院へ戻る。
安定期の感覚は、もう通用しない。
出産に耐え得るように少しの運動メニューは用意されているけど、それでも赤ちゃんに負担がかかるような運動は避けるように指導されている。
「ふう」
あたしは、病院に戻る前にこの辺りを散策することにした。
病院はともかく、こうした飲食店は移り変わりが激しい。
小谷学園在学中にはよく食べていて、あたしが女の子になって初めて取った外食でもあった思い出のハンバーガー店はなくなっている

し、逆に今みたいなお寿司屋さんや、ステーキ屋さん、更には洋食店といった新しいお店もできている。
「今夜は何を食べようかしら？」
病院食は、なるべく使いたくない。出産当日とか、出産翌日とかは仕方無いにしても、やはりなるべく飽きないように外食や出前のローテーションを考えないといけない。
お腹いっぱい食べた後だと言うのに、もう今夜のご飯を考えているのだから、よっぽど病院食が嫌なんだなと我ながら思ってしまった。
最近は、若い時代が続く蓬莱の薬のお陰で、「健康食」という概念は衰退しつつあった。
それでも、妊娠中の母親や、蓬莱の薬を服用する前の子供にとっては、食生活に気を使わないといけないのは確かだった。
今は赤ちゃんだから大丈夫だけど、赤ちゃんとして産まれた後は、「食育」にも気を遣わないといけないのよね。
「本当に、母さんたちがいてくれてよかったわ」
これが核家族になっていたら、手探りの子育てになっていた。
そしたら、子育てについても相談する相手もおらず、失敗に気付くことさえ困難になっていた。
本当に、いいことないわよね。
あたしはそんなことを思いながら病室に戻る。
病室には、新しくパンフレットが置かれていて、病室の位置や非常口、更に出前の提携店も紹介されていた。
「あら、お寿司屋さんの出前もあるのね」
あのお店は、出前のサービスもしていた。
最も、届けるのはアルバイトの人だと思うけど。
ともあれ、あたしは食生活には支障はなさそうでよかったわ。
コンコン
「はい」
ガチャ
「篠原さん、検診のお時間です」
安土先生とは違う、別の看護婦さんが入ってきた。

おそらく助産師の人で、あたしもこれからお世話になりそうだわ。
「はい」
ともあれ、あたしはまず入院に際して身体検査と健康診断を受ける必要がある。
健康診断の中には、もちろん赤ちゃんの検査がある。
あたしは入院患者のいる棟から、検査棟に移動し、そこでいつも以上に念入りな健康診断を受けた。
内容は、あたしが女の子になったばかりの頃に受けた健康診断と同じくらいの厳重さで、会社や学校でやっているそれとは大きく違うわね。
特に、赤ちゃんに対する健康診断はエコー写真でだけではなく、今回は機材を差し入れて赤ちゃんの鮮明な写真と映像を撮るという。
「はーいこちらが赤ちゃんです。かわいいでちゅねー」
「うあっ……」
雷に打たれたような衝撃だった。
赤ちゃんは、目を閉じて眠っていた。鮮明な、カラーの写真が、あたしの中の赤ちゃんをより近しくしてくれる。
もうほとんど、産まれた赤ちゃんと変わらない状態になっている。
愛らしい顔と小さな手と足、この足が、あたしのお腹をずっと蹴ってたのね。
「うっ……」
溢れる涙を、抑えることはできなかった。
あたしのお腹の中に宿る命が、もっともっと近くなっていく。
大きくなっていくお腹と共に、この赤ちゃんも成長していく。
この鮮明な映像のお陰で、この子が男の子だということも、はっきり分かった。
男の子だって分かると、あたしの中でもっと母性が強くなる、赤ちゃんのことが、もっと知りたくなる。
もう何度目かも分からないくらい、赤ちゃんを思って涙を流す。
あまりの愛おしさに、生来泣き虫だったあたしの性分も加わって、涙がどんどん止まらなくなってしまう。

かわいくてかわいくて、泣き止むのに、とても時間がかかった。
「ふふ、赤ちゃんを見て泣いてしまう母親は多いですけど、篠原さんほどの人は初めてよ」
「あら？　じゃああたしが母性優勝ね」
ちょっとだけ、誇らしくなる。
母性が強いと、女の子らしいって、そんな気がしたから。
女の子らしさを褒めてもらえて、嬉しく思うのも久しぶりの感覚だった。
始まりの場所に来たことで、あたし自身も、ある種昔に戻ったのかもしれないわね。
「ええ、ですが母性の強すぎもリスクがありますよ。赤ちゃんに依存してしまう人も多いですから」
看護婦さんが、あたしに忠告するように話す。
「そ、そう……」
あたしは少しだけ、意外だった。
今までは母性の強さを誉められてばかりだったから。
でも、少し考えれば、そうしたリスクもあることは分かる話だった。
「ええ、子離れできない親の多くが、強い母性によるものって話もあるわ」
「うん、気を付けておくわ」
あたしは、母性のリスクについても考える。
もちろん、どうしてそんな母親がいるのか理解できないけど、母性のない親は最悪だと思う。
妊娠中の経験を通じて、この世でもし「人でなし」がいるとすれば、赤ちゃんを省みない母親、母性を感じず、赤ちゃんよりも自分を優先するような母親だと思うようになった。
でも逆に、母性が強すぎるための弊害もあるとすれば、あたしは特に注意しないといけないわね。
あたしにとっては、赤ちゃんのためなら母親は無限に自己犠牲するのが当然だとさえ思ってしまうもの。
いくら何でも、それは行き過ぎなのかもしれないわね。

「では、次の検査に参りますね」
「はい分かりました」
といっても、本格的な健康診断は明日で、明日は朝ご飯抜きになる。
今日は主に赤ちゃんの健康診断で、明日が母体への健康診断という風に別れている。
赤ちゃんの方は特に何の問題もなく、「今のところは健康に生まれてくる」とのことだった。
でも、「今のところは」というのがみそで、要するにこれから先はまだ分からないことが多い。
例えば聴力であったり視力であったり、あるいは普通に生まれてきても赤ちゃんの成長や発育に問題があったりもする場合もあるし、出生時の時に何らかの事故があって障害が出たりしてしまうこともある。
あるいは一旦妊娠しても致命的な遺伝子異常ですぐに流産してしまったりして、場合によっては本人が流産に気付かない状態で、赤ちゃんが死んでしまうこともある。
これだけ聞くと、健常児として産まれるのって難しいと思っちゃうけど、一つ一つの確率が低いため、全体的にも健常児として生まれてくる可能性は高くなる。
特にあたしの場合は、実質的には１０代後半としての妊娠なので、ダウン症をはじめとする障害児への妊娠リスクが３０代後半の妊婦と比べて格段に低い。
実は、蓬莱の薬による不老の効果としてボディーブローのように効いてくるのが、この「実質的な１０代２０代での妊娠」だという。
つまり、実年齢は高齢でも、不老となったことでそうした障害児を妊娠するリスクが小さくなる。
昔は１０代での妊娠出産がとても多かったが、それは生物学的な面がとても強い。
それだけ、健康な赤ちゃんを産むことは重要になってくる。
初期には、蓬莱の薬は「優生学の台頭に繋がる」と批判した人もいたが、結局結果が出てしまえば、それはそれが正しかったことにしか

ならないし、そもそも蓬莱の薬と優生学は何の関係もない。
「ふう」
ともあれ、あたしの赤ちゃんは、今も健康だということが分かっただけでも大きな一歩だわ。

# 今日の夕食

トンッ
「いたっ」
「あら？　大丈夫ですか？」
病室に入り解散しようとした矢先、あたしが突然赤ちゃんに蹴られた痛みを訴えたため、付き添ってくれた病院の人があたしに声をかけてくれる。
とはいえ、よくあることだと思うので、さほど深刻そうな顔はしていない。
「ええ……んもうっ本当に暴れん坊だわこの子」
こうやって話している間にも、赤ちゃんがまたあたしのお腹を蹴った。
一時期よりは少なくなったとは言え、それでもやっぱりまだまだ蹴られることは多い。
「ふふ、赤ちゃんはお外に出たときのために色々と準備をしているのよ」
「ええ、分かってるわ」
他にも、赤ちゃんはお腹の中でおしっこもしていることも習った。
お腹の中は羊水で満たされていて、口から羊水を飲み込み、胃も羊水で満たされ、おしっことなって出ていく。
おしっこはまた成分が分解されて新しく羊水になっていく。
そして赤ちゃんがこうしてお腹を蹴るのも、手足を動かす運動の一環になっている。
お腹の中の赤ちゃんは、十分に体が出来た後は兎にも角にも新しい生活に向けての準備をしなきゃいけない。
「ふふ、赤ちゃんが元気すぎると、夜は眠れないですよね」
「はい、早く会いたくもあるような、そうでないような」
確かに、最近は「かわいい」というより、ちょっと暴れすぎって思うことも多い。
それでも、あたしの中の赤ちゃんへの母性は揺るがない。

入院前の一時期に比べれば胎動も減っているし、あたしがもうすぐ出産なことには代わりはない。
ただ、こうして胎動を感じる度に、「早く会いたい」という気持ちと、「ずっとお腹の中にいて欲しい」という二律背反の気持ちが強まっていく。
「篠原さん、とても母性が強い方ですね」
「ええ」
あたしの母性が強いという話は、あたしも何度となく受けてきた。
「篠原さんには信じられないかもしれないですけど、お母さんの中には母性が無い、赤ちゃんがかわいくない、産まれてきても『あらぶちゃいく』って思っちゃう人もいるのよ」
その話は以前にも聞いたことがあるし、母性について調べていくとどうしても話題に出てくる。
でもあたしには、どうしてもそれは理解できなかった。
今のあたしには、あたしのお腹の中から産まれた赤ちゃんには、無限の愛を無条件に注ぎ込むのが当然としか思えて来ない。
児童を虐待する母親がなぜ存在するのかという問いに答えるのは、あたしにとってはノーベル賞を取るより難しいと思うわ。
「あたし、そんな人を同じ女性と認めたくありません」
だからあたしはこう言うことを言ってしまう。
もしかしたら、一部の女性には物凄く残酷な物言いになってしまっていると知りながらも。言わずにはいられない。
「そうね。でも、あなたみたいに母性の強いママだけじゃないのよ。産まれてから少しずつ、母性を育むママもいるのよ」
病院の人の、諭すような物言いだった。
独りよがりになってしまっているという自覚はあった。
それでも、あたしは自分の思いを制御できない。こんなのは、産まれてはじめてのことだわ。
「そうなのね」
もしかしたら、そうした母性が無い母親が、我の強い母親が、虐待を起こすのかもしれないのかもしれないわ。

赤ちゃんを妊娠して、あたしはとてもよく分かった。
子供のために、大人は我慢するべきなんだって。
大人のために子供が我慢するようでは、子供も大人になってわがままになり、次世代がどんどんと堕落していくから。
もちろん浩介くんとも離婚はしないし、赤ちゃんを絶対に不幸にはしたくないわ。
「本当にひどい家庭で育つと、子供もひどくなっていくのよ。篠原さんは恵まれて、いえ恵まれ過ぎているわ」
病院の人の視界の先には、あたしが貰ったノーベル賞のメダルのレプリカがあった。
更にその隣には、今年の世界長者番付のコピーも貼ってある。２位と３位の所にあたしと浩介くんの名前、そして日本円で２０兆を超す資産額が記されていた。
その２つを病院の壁に貼り付けたのも、あたしが富と名声に恵まれすぎているのを自覚してほしいからだと思う。
そこには、蓬莱教授とあたしたち夫婦の名前、更に永原先生の所にもマーカーがしてあった。
小谷学園の制服も飾ってあって、それは「あたしの人生がとても満ち足りたものである」ことを示していた。
「満ち足りた人生は、子供にもいい影響を与えるわ。でも、それは時に他者に残酷になることもあるの。そしてそれは、自覚の無いものだわ」
「はい」
あたしは、その言葉を聞いてハッとなった。
そう、病院の人の言う通り、それはとても残酷なことだった。
あたしは、「悪事を悪事と分かって悪事を働く悪党のすることなどたかが知れている。問題は悪事を善と思って自覚なく悪事をする悪」だという永原先生の言葉を思い出した。
今あたしは、「残酷な女」になっていた。
あたしは、ＴＳ病故の母性の強さに加え、恵まれた人生を背景に、大きな母性を感じるようになっている。

でも、世の中はそんな幸せな人ばかりではない。
両親が離婚した家の子供は、離婚が連鎖したり、あるいは逆に強く家族に依存するようになるという。
自我ばかりが肥大化した人、どうしても赤ちゃんを可愛がれない人、あたしは彼女たちをどうしても「人でなし」としか見ることができない。母性の強さのあまり、母性の弱い人や無い人という存在を認識できなくなっていた。
あたしは今、永原先生の言う「最も質の悪い悪」になっていたのかもしれないわ。
「もちろん、母性が強いのはいいことよ。それでも、注意しなくちゃいけないときはあるの。特にこの病院には他の妊婦さんもいるわ。くれぐれも気を付けてください」
そう、大事なのは他の妊婦さんへの配慮だった。
「ええ、分かっているわ」
もしかしたら、こうしたノーベル賞のメダルや小谷学園からの思い出の写真などを見せた目的は、あたしに自覚を促すためなのかもしれないわ。
今でも、テレビはセレブの特集をしている。特に海外のセレブの豪遊ぶりはよく日本でも紹介されている。
そして、あたしたちがそうしたセレブたちでさえ全く追い付けないような莫大な富を持っていることが未だに信じられなかった。
当事者意識が、あまりにも低かった。それは、こうした他のお金持ちの人との交流が少ないせいなのかもしれないわね。
「じゃあ篠原さん、今夜の夕食はどうしますか？」
「とりあえず、外で食べます」
「分かりました。それでは失礼いたします」
病院の人が部屋を出て、あたしはまた、ここに1人になった。
ともあれ、入院中は外食が中心にはなると思う。
今は妊娠末期なので、食べるものも注意しなきゃいけないけどね。
「ふう」
あたしは、もう一度パソコンと向き合う。

見るのは妊娠末期の心得の一覧だった。
出産は母子ともに命がけであり、現代医学では非常に確率が低くなったとはいえ、母親の死亡、子供の死亡、最悪両者死亡というケースもある。
もちろん誰も自分がそうなるとは考えていないものの、不安は当然ある。
それでも、痛みを忘れて、あるいは痛みを経験してもなお、また産みたいと思ってしまう程度には、女性には母性があるという。
まあ、よく考えれば当たり前ね。
1人産んでもう嫌だと思うような女性ばかりなら、人類なんてとっくの昔に絶滅しているわ。
「陣痛っかあ……」
出産の中でも、特に痛いと言われるのが陣痛だという。
赤ちゃんが、あたしの体の外に出てくる。
もちろん赤ちゃんは普段のあたしの状態よりも大きいので、お腹が引きちぎられるような痛みを伴うという。
よく、「鼻からスイカを出す」っていうけど、赤ちゃんの大きさとの比率を考えると、さすがにオーバーな表現ではある。
「痛み……かあ」
幸子さんと比良さんには、無痛分娩をやめるように勧められたので、あたしもそれに倣った。
体力的負担が軽減されるため、身体能力が衰えてくる３０代以上の肉体年齢ならば威力を発揮するものの、あたしのように１７歳の「産み盛り」の肉体年齢で停止しているならば、行程が増える分どうしてもリスクが増えてしまう。
ましてや、脊髄に注射して鎮痛剤を入れるわけだから、当然何かの表紙に医療ミスになったら、あたしの人生も一巻の終わりになってしまう。
「それに、何故だか分からないけど」
あたしは、パソコンに向けて独り言を言う。
「赤ちゃんのことを考えると、痛みは乗り越えられる気がするわ」

お腹の大きくなった我が子を見つめる。
さっきの映像が、脳裏に焼き付いて離れない。
もうすぐ産まれるその子は、今にも飛び出してきそうな位に成熟していた。
体つきはうん、浩介くんにそっくりだったわ。
でも中身はどうかしら？
あたしに似て優しいかしら？　それとも浩介くんに似て責任感が強いかしら？
優一に似ちゃうのは嫌だけど、そうならないための教育法なら、あたしたちの両親が持っているはずだわ。
「もう、まずは産むことでしょ優子」
あたしはそう声に出して自分に言い聞かせる。
問題は産後のこと、あたしには少しだけ不安に思う所がある。
母子と病院の対応についてだ。
赤ちゃんが産まれて母子対面となるけど、初日はその後新しく産まれた赤ちゃんは検査のために一旦いなくなるという。
母親も母親で、その日はゆっくり休む必要がある。だから、一旦母子は別行動になり、翌日から共同生活が始まることになっている。
もちろん、理屈の上では赤ちゃんの健康のためにはそれが一番いいことは分かっているわ。
でも、どうしても、不安が隠せなかった。あたしのあまりにも強い母性が、そうさせているんだって分かる。
「どうしよう……」
今のあたしには、一度赤ちゃんから離れたら、二度と戻れないんじゃないかという恐怖感がある。
子供はいつか親元を離れるもの。いや、長男だしあの家にずっといるのかもしれないけど、それでも何から何まで母親が世話しなくてはいけないという状態は、すぐになくなっていく。
「まただわ……」
あたしはまた、自己嫌悪に陥る。
赤ちゃんがずっと赤ちゃんのままでいたらいいなんて、そんなの自

分勝手なこと、全然「優子」じゃないわよ。
赤ちゃんは、いつか成長するものだもの。
でも、どうしたらいいのかしら？
「何もかも世話を焼いてたら、赤ちゃんにも怒られちゃうわね」
それだけは避けないといけない。
自分の子供に嫌われるのは、浩介くんに嫌われるのと同じくらい、いやそれ以上に辛い。
あたしはその後も、妊娠中の心得を読みながら日が落ちるのを待った。
日が落ちて、あたしは小谷学園の生徒たちが下校したのを見計らって病院を出る。
「ありがとうございましたー」
ふと見ると、「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーを掲げた妊婦さんが受付を済ませ出口に進んでいた。
お腹も少し膨らんでいて、妊娠中期に入ったという感じの妊婦さんだった。
そういえば、自分以外の妊婦をあまり見ていなかったわね。
あたしは、興味本位で何となくその後ろ姿を追う。
病院の目の前にはうどん屋さんがあり、その隣には牛丼屋さん、そしてその隣は居酒屋のチェーン店になっていた。
病院からも、こうした外食店に行く人も多いと思われる。
「あっ！」
その妊婦さんは、あろうことか居酒屋に入っていった。
あたしは、ショックで一瞬固まってしまう。
妊娠中の飲酒は、本来厳禁のはずだ。
あたしは普段からお酒は飲まなかったけど、それでも赤ちゃんが害を受けるくらいなら、お酒なんて、いやこの世で一番依存性の強い麻薬だって、完全にやめてやれる自信があった。
「……人でなし」
誰にも聞こえない声で、でもはっきりと自分には聞こえる声で、あたしは彼女を罵倒した。

そして、言葉が出た後で、また後悔をする。
まただった。母親は母性が強くて当たり前、赤ちゃんには無限の奉仕をするべきだ。
そうした価値観で、どうしても突き動かされてしまう。
あたしは、気を取り直して炭水化物とたんぱく質をバランスよく取れる牛丼を食べることで、今後のエネルギー源とした。
他にお肉屋さんとしてステーキ店もあるけど、こちらはもちろんレアなどは厳禁で、必ずじっくり中まで焼くものを食べるようにしている。
妊娠中に特に禁止されたのがチーズなどの乳製品で、これらは赤ちゃんにも非常によくないものと幸子さんにもお医者さんにも言われた。
あたしは、特に「大好物」はあっても、「どうしても定期的に食べたい料理」は無いので良かったわ。
「ふう、ごちそうさまでした」
あたしは、病室に戻る。
最上階のＶＩＰ環境はとても嬉しい。
あたしは、お風呂に入るためお湯を沸かすことにした。
お風呂のパネルは、前の自宅のものに近かった。浴槽の広さも、改めて見ると「狭い」と思ってしまうけど、よく記憶をたどると、前の家のものとほぼ同じくらいの広さだと分かった。
言うまでもなく、異常なのは浴室に２０畳も割いている今の豪邸の方だ。
本当に、慣れって怖いわね。浩介くんとのえっちなことに慣れないのが奇跡なくらいだわ。
ピピッ「お風呂を、沸かします」
お風呂のお湯を沸かし始めると、ナースコールでナースステーションにその旨が伝えられる。
そのため、勤務中の看護婦さんが、あたしに付き添ってくれることになる。
何かまるで寝たきり老人みたいだけど、これも赤ちゃんのため。下

らないプライドなんて捨ててしまいましょう。
もしかしたらさっきの妊婦だったら……いややめておくわ。
コンコン
「はーい」
もうすぐお風呂が沸くかしら？　と思ったところで、部屋の扉がノックされ、看護婦さんが部屋にやって来てくれた。
「入浴介助のサービスをいたしますね」
「ありがとうございます」
あたしは、恥ずかしいけど、服を脱いだら看護婦さんの力を借りて、体を支えてもらいながら入浴する。
体も、殆ど看護婦さんが介助してくれていた。
うー、色々な意味で恥ずかしいわ。胸もなんだかじろじろ見られていたし。
「篠原さん、結構恥ずかしがるタイプなんですね。予想通りです」
入浴後、看護婦さんがあたしにいたずらっぽく笑っていた。
未だに、人前で裸になることはもちろんのこと、下着姿を見せるのだって慣れていない。
こういうところに慣れてしまうと、いずれ浩介くんの前でも堕落してしまうという危機感があったのも大きい。
「はい……やっぱり慣れないと言いますか恥ずかしいと言いますか」
「ふふ、私は女子校女子大女子の職場と来てますから信じられないんですけど、その分だとご主人にはもっと恥ずかしいんでしょう？」
看護婦さんが少しだけニッコリと羨ましそうに笑っていた。
「はい……顔が赤くなって、体が熱くなっちゃいます」
って何言ってるのよあたし。
「あらあらまあまあ、初々しいのはとってもいいことよ」
「あうあう」
うー、完全に女子会のペースに飲まれちゃったわ。
でもともかく、この気持ちだけは忘れないようにしないといけないわね。
特に家族が増えてからは、ね。

「おっとすみません。失礼いたしますね」
「はい」
看護婦さんは、部屋から出ていった。
パジャマに着替えたあたしは、ベッドで意味もなく横になる。
まだ睡眠時間の関係から、眠れるわけがないのに、電気も消して目をつぶり始めた。
トン……トンッ……
赤ちゃんが、あたしのお腹を蹴っていく。
少し減った胎動だけど、それでもこうして時折お腹を蹴る仕草は見せてくれる。
これから臨月が進めば、もういつ産まれてもおかしくない状態になる。
妊婦としての最後の生活が、終わりかけていた。

# 健康診断

チュン……チュン……

小鳥の小さなさえずり声が聞こえてくる。

ここは病院の病室で、あたしは出産を間近に控えた妊婦。

今日のあたしは健康診断のため、朝食は食べないことになっていて、明日以降の朝食については看護婦さんが個人的に料理を作ってくれることになった。

お見舞いに来てくれる人が差し入れてくれればいいけど、毎日そう言うわけにもいかないものね。

「ふう」

今日は昼夜出前で済ませる予定で、健康診断の時間も加味すると、じっとしていた方が良さそうね。

あたしは、ベッドを傾けて椅子のようにすると、そのままテレビをつけて今日のニュースを見ることにした。

テレビのアナウンサーが、時間通りニュースを始めた。

「昨日午後2時頃、埼玉県の関越自動車道――」

最初にやっていたのは、夏の交通事故のニュースだった。

正直に言えば、２０２０年代になって自動運転の普及がほぼ進み、この手の事故は激減しているが、現在でも起こり得る事故だから注意しないといけない。

むしろ、こうした事故が珍しくなっているからこそ、ニュースにも流れるのよね。

とはいえ、こうした一昔前ならなんの変哲もない事故さえニュースになるくらいには、ここの所マスコミもすっかり大人しくなってしまった。

蓬莱カンパニーという絶対的な存在が出現したために、マスコミも蛮勇性がなくなり、随分と丸くなったとされている。

「ふふ」

世の中を変える。変えるのは政治家だけじゃない。

まさにあたしはそんな存在だった。蓬莱の薬を生み出し、そして

人々に恩恵を与えたのは紛れもない事実で、普通ならそれだけでも後世の歴史に残る英雄だった。
でも、あたしには世の中を変えたことに満足感はなかった。
一時期に比べれば、ニュースも穏やかになった。
穏やかなニュースを見るにつれ、あたしも穏やかになれる。
もうすっかり、「お腹に赤ちゃんがいます」のキーホルダーに描かれた穏やかそうな赤ちゃんと違って、元気一杯な暴れん坊さんになっちゃったけど、それでも元気一杯に起きていても、寝ている時はとても穏やかに寝ていることは、この前の映像でもよく分かった。
赤ちゃんは真ん丸なお目目を持っていた。昨日の時点での赤ちゃんの推定体重は2．8キロだった。
もう後は、お腹の中でもう少し成長してから体重3キロ前後で産まれることになる。
「すくすく育ってね。でも今日は少し、我慢してね」
あたしは、もちろん最後まで気は抜かないし、子育ても全力で頑張りたいと思う。
今日の健康診断は、どうしても午前中は空腹にならないといけないので、赤ちゃんにも少し負担がかかってしまう。
でも、母体の健康は赤ちゃんの健康にも繋がるので、今日は例外的に1日2食ということになる。
「んー」
あたしは、意味もなく自分の胸を掬い上げてみた。
手の中に、柔らかいマシュマロのような弾力性を感じた。
この中身は脂肪の塊だけど、男はみんなこれが大好きで、男たちの視線は釘付けにするし、浩介くんも、そして優一も好きなものだった。
特に、浩介くんはここに執着することも多い。
一説によれば、男の子は赤ちゃんの時にママのミルクを吸うことで、最初の性的快感を感じ、おっぱいが大好きになっていくという。
そして、この経験が、「母性」を男が渇望する原動力になる。こうして、本能的に男はおっぱいが大好きになっていくという。
幼少期の記憶は、普通はほぼない。

しかしそれでも、幼少期の体験はその子の体に強く植え付けられる。これはその典型的な例だと思う。
「この大きなおっぱいが、ねえー」
「特集です、夏の風物詩と言えば――」
テレビでは、夏の特集をしていて、海で遊ぶ若者たちが写っていた。
もちろん、水着姿の若い女性も写っていて、胸は皆あたしよりは小さい。
あたしは海でも注目の的だったし、胸が大きいことで何かと得することが出来たわね。
「蓬莱の薬でもう老けなくて安心だわ！」
「そうね、若いってサイコー！」
そしてテレビでは、３０代女性の次に水着姿の女子高生たちを写し出していた。
彼女たちは蓬莱の薬を服用し、不老状態になったので、毎年若いままでこの世界にとどまることができたため、これからもいつまでもこの海で楽しく遊べることに感謝していた。
確かに、こうした露出度の高いビキニは若いうちだけだし、老化しないのはやっぱり素晴らしいわね。
「ふふ」
蓬莱の薬の値下げが本格的に始まり、テレビ番組もすっかり蓬莱カンパニーの宣伝をしてくれるようになった。
こんな風に、何かとニュースでは「蓬莱の薬」に絡めた内容盛り沢山に増えた。
あたしたちは特に何も言ってないから、おそらくテレビ局の判断になるわね。
蓬莱の薬を日々宣伝することで、あたしたちは更なる売り上げの増加が見込めることになっている。
それに伴って、株価も大きく上がってくれるはずだわ。
そうすれば、あたしもまた、資産が吹き上がるという仕掛けになっている。
やはりライバル不在は、とても大きいとあたしは思う。

あたしは安心しながら、その後を過ごした。

コンコン

「はい」

ニュースを一通り見終わり、暇を持て余していると、扉を叩く音がした。

「篠原さん、検査の時間です」

「はい、今行きます」

あたしはすぐにベッドから立ち上がる。

もちろん、腰を曲げる時は赤ちゃんの負担にならないように、十分に気をつけないといけない。

「特に不健康でもないなら、寝たきりはあまりよくないですよ。出産は体力を使いますからね」

検査の場所に移動する間、看護婦さんに注意されてしまう。

病院だからといって寝てばかりにしていてはいけないということみたいね。

「はい、気を付けます」

そう、赤ちゃんを産むのは命がけなので、体力をつける必要もある。

しかし妊娠中は赤ちゃんに負担をかけてもいけない。

そのバランスはとても難しい。

「ふふ、今日からは篠原さんのために特別な運動メニューも用意できますけれど、よろしいですか？」

「ええ、お願いするわ」

どうやら、あたしはＶＩＰということで、今の段階から既に至れり尽くせりらしい。

世界一の資産家ファミリーに産まれてくる息子ということもあって、普段のＶＩＰ待遇よりも更に手厚くしていても不思議ではないものね。

「分かりました」

あたしたちは、検査室に入る。

昨日の検査と違い、まずはあたしの血液検査を行い、次に様々な検

査を行う。
検査の数は昨日と合わせると、女の子になったばかりの時よりも多い。
「本当は他の患者様方はここまではやらないんですけど、とにかく篠原様は特別ですから」
「本当に、お姫様ね」
どうしても、あたしはそういう感想を抱かざるを得なかった。
まさに王子様の出産を控えたお姫様というのが、この病院でのあたしの立ち位置だった。
最初に来た時は、単なる1入院患者だったのを思えば、隔世の感があるわね。
「ええ、ですから、お代も高いですよ。あ、篠原さんにとっては安いかもしれませんけど」
看護婦さんが少しいたずらっぽく笑う。
昨日今日としか入院してないけど、看護婦さんも性格が様々で、多種多様だということに気付かされる。
かつては、「不老の人間だけになり、老人がいなくなる未来の日本では、多様性が著しく損なわれるのではないか」と言った人もいた。
でも、多様性が叫ばれたのは、優一時代から既に疑問の声かけられていて、あたしが佐和山大学を卒業する頃までだった。その頃には、もはや過度の多様性による弊害は隠しきれず、最終的には「多様性になりようがない」協会に対して難癖を付けたことで完全に信用が失墜した。
現に、日本でも既に多様性は最低限確保されていた。それ以上は必要がなかったということになる。
「ええ、安いですわ」
あたしも、ついこんな返事をしてしまう。
でも嘘は言っていない。巨額の資産を得る前なら、もちろん目玉が飛び出るような値段だけどもね。
「さて、では次に参りますね」
「はい」

看護婦さんと適度に雑談しつつ、検査は順調に進んでいた。
赤ちゃんは、静かだった。
「はい、健康診断は終わりです。母体の結果については後日お知らせいたしますね」
妊娠中ということで、レントゲン検査をはじめ、放射性物質を使う検査は一切無かった。
あたしたちは不老遺伝子があるからいいけど、赤ちゃんは１０代後半になるまでは蓬莱の薬は飲まない、生身の人間ということになる。
だから、赤ちゃんの健康は特に気をつけないといけないのよね。
「ええ」
とはいえ、ＴＳ病の不老遺伝子があるので、あたし自身はそこまで健康を考慮しなくてもいいのが幸いね。
そして、健康診断が終わったということは――
「ふー、お腹空いたわーさて、どうしようかしら？」
あたしは病室に戻った。今日は出前を頼む予定になっている。
朝食を抜いているので、特に昼食に気を付けたい。
「そうするとうーん……」
あたしは、病室にあるパンフレットから出前のメニューを探す。
提携先のお店の中には、「妊娠中のママにおすすめ」と書かれているメニューがあって、中には「葉酸たっぷり」を唄うものもある。
葉酸たっぷりの食事は、いわば妊娠初期に推奨されるもので、赤ちゃんの先天異常を減らす効果がある。
もちろん妊娠末期にも葉酸は重要だけど、初期ほどじゃない。
「これにしようかしら？」
お昼ご飯に食べる「野菜サラダ」、もちろん出前なので店頭よりも高いけれど、もちろんこのくらいの値段なら誤差だし、そうでなくても妊婦に必要な栄養素がたくさんある。
あたしは、すぐに病室にあった電話を取り出す。
プルルル……プルルル……
「はい」
「もしもし、こちら……はい……野菜サラダをお願いします……はい、

はいありがとうございます」
あたしは病院と部屋の号室を伝えると、ＶＩＰルームだとすぐに分かったのか、すぐに作って持っていくとのことだった。
あたしは、サラダが来るまでパソコンと向き合うことにした。
「ふう」
パソコンのニュースやインターネットの声は、比較的人々の本音が書かれているという。
しかし、一部のコミュニティでは、世の中の大勢の方向と逆に進んでいる印象を受けることがある。
特に有名なのは、「犯罪が減っているのに治安が悪化していたかのような錯覚」だ。
むしろ、犯罪が少ないからこそ、０にはならない大きな犯罪が目立ち、体感が悪化するんだという。
昔は犯罪がありふれていたため、凶悪事件もすぐに流されてしまい、印象にも残らないのだという。そのため、どういうわけか治安も悪く、破綻している国の人間ほど楽天的な傾向さえ見られるという。
その最たる例が、永原先生が人生の始まりを過ごした室町時代末期、要するに戦国時代だった。
戦国時代は、後の時代からすればろくでもない時代だったが、それでも当時の人々は戦争を楽しんでさえいた。永原先生によれば、江戸時代初期はそうした時代を潜り抜けていた世代が大勢生きていて、戦乱を懐かしむような人間がたくさんいたというし、永原先生自身もそんなことを思ったことが何度もあったという。
そのために治安の悪さは相変わらずだったという話を聞いたことがある。
翻って今の時代は犯罪も殆どない。街や建物、電車の中などの至るところに監視カメラが置かれ、完全にプライベートが保たれるのは家の中やトイレくらいになった。
あたしたちの家も、監視カメラが至るところに設置されていて、日々サーバーに映像を送っている。
「ふう」

あたしが女の子になってから大学生辺りまで、実際には売り手市場の長期化によって、労働環境が改善傾向に向かっていたにも関わらず、インターネットの一部空間などではまるで悪化しているような印象を受けた人が続出していた。
これは、昔の悪い時代にありふれていた環境が改善され、改善が遅れている場所が目立ったために、取り上げられるようになったという。逆に言えば、そうした声が大きくなっているということは、改善している証拠だという人もいたくらいだった。
今思えば、あたしや浩介くんの家も含めて、不満がなく、改善に向かっていると思う人は声をあげないという一面もあっただろうと思うわね。
「今はもう、そうした声も聞こえてこないけどね」
とはいえ、人々の実感が伴えば、それは崩壊の予兆だという人もいる。
しかし、それを強引に止めたのが蓬莱の薬なのかもしれないわね。
政府は好景気の長期化に伴って、少しずつ金融の引き締めをはじめることにしているけど、今はそれを跳ね返している状況と言っていい。
「反動は怖いけど、仕方ないわね」
コンコン
「はい」
そう思ってインターネットを眺めていると、扉をノックする音に起こされる。
どうやら、サラダの出前が届いたらしい。
ベッドから起き上がり、あたしは病室の扉を開けた。
「こんにちはーサラダの出前に参りました」
いかにもという感じの、白い服の出前の人だった。
「ありがとうございます」
あたしは、出前の人から、頼んでおいた野菜サラダを受け取り、ベッドの机に置く。
「食べ終わりましたらこちらの机に置いておいてください」

出前の人が、病室の外側にある机を指差す。
ちなみに、ここには新聞も置いてある。
「はい」
「では失礼いたします」
あたしは、まだ他に配達が残っている出前の人を見送ると、一旦サラダをベッドの机の上に乗せ、その後新聞も取って中に入れた。

「いただきます」
1人でいただきますをして、ご飯を食べる。
1人だけでご飯を食べるのは、よくよく考えると久しぶりの出来事だった。
「うーん、そういえばいつ以来かしら？」
あの家に引っ越してからは……って、昨日も1人で食べたじゃないの。
とすると、やっぱり記憶にないだけで、実際には何度もあった話よね。
「もぐもぐ……美味しいわ」
野菜の味が、とてもよく出ているけど、ドレッシングもきちんとかけられている。
妊婦さん向けの、栄養がとても考えられているメニューで、病院と提携するだけのことはあるわね。
あたしは、野菜たっぷりのメニューを食べ尽くした。
妊娠中は、赤ちゃんを大きく育てるためにも、野菜ばかりでなくお肉も食べないといけない。
タンパク質は、特に人体の育成に大切なので、その点も踏まえる必要があるわね。
とにかく、妊婦の食事は難しい。
取らないといけないものもあるし、取ることを推奨されるけど取りすぎは絶対ダメという食事もある。
あたしは浩介くんや家族がいるからいいけど、そうした厳しい食事節制に耐えられないと、出産後に反動が出てしまうことがあり、極端

な場合、昨日のろくでなし妊婦みたいに妊娠中から居酒屋に行ったりしてしまうこともある。
そうならないための一番大事なのは、「知識として」こうした反動のあることを知っておくことや、何よりも赤ちゃんを慈しみ、旦那を愛する心だと思う。
どれだけ物事が発展しても、最後に必要になるのは人間の精神なんだってことを、あたしはこの妊婦生活で強く学んだ。
「ごちそうさま」
食べ終わったお皿は、出前の人に言われた通り部屋の外の机に置いておく。
監視カメラもあるので、盗んでもすぐに犯人が分かる仕組みになっている。
さて、届いた新聞でも読むかしら？

## お見舞い、そして意外な鉢合わせ

新聞は、相変わらず下らない無名芸能人のスキャンダルのニュースを繰り返していた。

蓬莱カンパニーに関するニュースはほぼなく、経済コーナーにあるように「株価」として東証一部に記されているだけだ。

「1万6159円ねえ……」

電卓を叩くと、あたし個人で株式だけで資産は24兆2223億円、浩介くんの分やこれまでの配当金、家の資産額などを合わせれば50兆円近くの資産になっていた。

ちなみに、「ノーベル相場」の時は一時2002１円をつけていて、その時には、篠原家は一瞬だけとはいえ、資産が60兆円と、もはや大抵の国の国家予算を上回る額に膨れ上がっていた。

永原先生も、経済誌のリアルタイムによれば、その時にはあたしたちと蓬莱教授の次ぐ、世界第4位の資産家になっていた。今でも、常に一桁順位を維持している。

蓬莱カンパニーの株は、不老事業の独占という地位にあるため、全国の企業の中でもとても安定していて、他の日経225などとの連動性が強い株になっている。

日本の公的機関やファンドなどもよく買っていて、いわゆる「優良株」という評価を受けるに至った。

特に株式市場で一際目立つ大きな鯨が、蓬莱の薬によって役目を終えた年金機構を発展的解消した国営のファンド会社で、この会社は人々に払っていた年金を全て返した後に残った膨大な余剰金を元手に投資を行っており、蓬莱カンパニーが牽引した株高や、暗号通貨の高騰に伴ってこの会社は莫大な運用益を得ている。

ちなみに、この会社は非上場だけど、上場したら蓬莱カンパニーの時価総額1位を脅かす何て言われている程に巨大な組織になっている。

さて、この投資ファンドの運用益に関しては、一部を毎年所得水準の低い人々に一定額給付したり、すっからかんの無一文になって、税

金や損害賠償などをどうしても払えなくなってしまった人の滞納金を肩代わりしたりすることで、セーフティーネットの拡充に役立っている。

その他、優秀な技術者が金に転んで海外の企業に引き抜かれそうになった場合に、この会社の運用益を活用して引き留めを図る援助も行うことになっている。

これについては、あたしたち蓬莱カンパニーの大株主の配当金の余剰で、そうした行き場を失った技術者たちに、低予算ながらも極めて自由度の高い研究が出来る研究所を作る計画も始動している。

こうした国ぐるみの一人勝ち誘導行為にも、諸外国からは批判は出なかった。

そんな中で、この会社が最も投資しているのが、蓬莱カンパニーだった。

蓬莱カンパニーが出来てまだ日は短いにもかかわらず、既に国際社会の力関係は一気に傾いてしまっていた。

「ふう、こんなものかしら?」

とはいえ、この蓬莱カンパニー株式会社は、株式の7割をあたしたち経営陣と協会で持ち回りしていて、そのために、市場で株価が高騰しているという批判も一部ではある。

実際、一番最初に上場した時の1株は既に今では実質１００株になっていて、初値で買った投資家は、上場から1年強で実質４０倍の含み益になっている。

でも、株には空売りとかショートと呼ばれる存在もおり、彼らはノーベル相場で大損をしてしまったという。

また、損失こそ出さなかったものの、「売らなかった方が得した」という投資家もたくさん存在している。

「怖いわね」

投資に安易に手を出すと、あたしたちの資産でもあっという間に溶けてしまう気がしていた。

でも一方で、日本は長らく「あまりにも投資をしなさすぎていた」と言われていた。

今は結構風向きが変わってきたけど、以前の日本経済は過度な消費依存、貯蓄依存と言われていた。
いや、今でもその傾向は変わっていないけど、それでも昔よりはマシになっている。
だから、あたしが貰った株の配当金も、何かに投資した方がいいのも確かなのよね。
今は一応、安全性の向上を目指す企業の株式に投資して、これは人類の更なる長寿命化を後押ししてくれるはずだ。
「あたしたちの配当金がこのままなら、あたしたち個人で小谷学園に投資してもいいわね」
佐和山大学では、現在よりいっそうの蓬莱教授による投資が盛んになり、研究所は拡張が続けられ、ついに従来の理化学研究所を飲み込む勢いになっている。
折からの好景気もあって、企業の研究開発に対する投資金額も膨らんでいる。
あたしたちも、会社のお金を使わずとも、個人が持っている株式の配当金を使って、小谷学園を買収し、提携を強化するのも有りだと思っている。
幸い、小谷学園は今や人気難関校で、あたしたち篠原夫妻に永原先生、恵美ちゃん桂子ちゃん、更に新鋭の2代目整形外科医として密かに注目を集めている高月くんの出身校ということで、受験生が殺到している。
来春には中等部や小学部もオープンする予定で、場合によっては佐和山大学とも付属し、小学校から大学までのエスカレーター教育を行う構想を考えている。
「ま、実現するとしても大分後よね」
今はとにかく、このお腹の中の子供のことを考えないと。
暇をもて余すと、ついつい遠い未来のことを見据えがちになるけど、将来のことを考えるのはいいけど、巨視的過ぎるのはとてもよくないものね。
あたしは新聞を全て読み終わり、再びテレビをつけた。

出産の日まで、同じような日々が続く。
あたしは、それも辛くはない。
ただ少し、お腹の赤ちゃんの胎動が小さくなっていくのが気がかりだった。
もちろん理屈の上では、出産が近いからと分かっているけど、それでも、あんなに痛くてしつこかった胎動が少なくなるだけで、こんなにも寂しいんだって思えてならない。
「また……泣いちゃいそうだわ……うっ……」
広い空間に1人の病室の中で、あたしはまた、赤ちゃんのことで泣いてしまう。
赤ちゃん、あたしの赤ちゃん、赤ちゃん赤ちゃん赤ちゃん……やっぱり、早く会いたいわ。今はそう思う。
「……ふう」
ようやく落ち着いたわ。
少し、寝ようかしら？　まだ日は落ちてないけど、何だか、眠いわ。
コンコン
「はーい」
うとうとして、どれくらいの時間が経ったか、突然の扉のノックで、それまで朦朧としていた意識がすぐに回復した。
外はいつの間にか、暗くなっていた。
ガチャッ
「優子ちゃん、俺」
そこにいたのは、浩介くんだった。
あたしはベッドから起き上がってちょうど足を伸ばして座るような格好になる。
「あら、あなた。今日は大丈夫だったの？」
最近浩介くんは忙しいから、見舞いに来られる日は多くないって言ってたけど。
「やっぱり、毎日来ないと寂しいなって思って……うわあ、もうこんなに大きくなってるんだな」
以前にも増してお腹の大きくなったあたしを見て、浩介くんが一瞬

後ろにたじろいでいた。
まあ、びっくりしないわけ無いわよね。
「うん、歩くのも一苦労だわ」
体の重心も変わってるから、そこが一番難しい。
でも、実際には少しずつ大きくなっている妊娠中とは違い、一気に産む出産後が大変らしいのよね。
「でも、お腹の赤ちゃんが成長しているって訳だしな」
浩介くんは楽天的だけど、どこか寂しげだった。
もしかしたら、妊娠と出産に憧れているのかもしれないわね。
「うん」
「でさ、赤ちゃんの名前のことなんだけど」
「うん」
浩介くんがここに来たのは、赤ちゃんの名前のことだった。
「結局、俺と優子ちゃんの2人で決めようってことになったんだ。ばあちゃんや親たちはみんな、『優子と浩介で決めな』ってさ」
「あはは、うん、やっぱりそうよね」
そうなると、やっぱり名前を決める必要がある。
いくつかの候補には絞ってあるけど、最後の1つを決めないといけない。
「会社なんだけど、出産が近くなったらいつでも駆けつけられるように予定を調整できたから、俺のことは心配要らねえぞ」
「うん、ありがとう……いたっ！」
久々に、赤ちゃんに強めにお腹を蹴られた。
「うおっ、動いてるのがはっきりわかったぞ」
浩介くんからも、はっきりと見えたらしいわね。
「もうこの子も大分成長しているのよ」
「ああ、ちょっといいか？」
「うん」
浩介くんが、あたしのお腹に耳を当ててくる。
トンッ
さっきよりは弱く、赤ちゃんが今度はパンチをして来た。

「おおっ！」
浩介くんの顔が笑顔になる。
「すげえな、やっぱり生きているんだな」
男の人からすれば、人間の中にもう1人の人間がいることが不思議なのかもしれない。
「そうよ。赤ちゃんは生きているのよ。あたしね、今になって思うことがあるの」
胎児何て言い方もするけど、これは本当に生きている命だということが分かる。
「え？」
「あたしが女の子になって最初の年の夏にね、浩介くんにちょっと迷惑をかけちゃったでしょ？」
今となっては、いい思い出になっちゃったけど。
「あー、あったな」
「前にも話したかしら？　永原先生が教えてくれたのよ。あるカップルの女の子がストーカーにレイプされて望まぬ妊娠をしちゃって、病院で中絶するつもりで診断を受けたら、赤ちゃんのエコーを見た途端に、女の子が涙ながらに『赤ちゃんを下ろしたくない。産みたい』って訴えるようになっちゃったってお話」
赤ちゃんを妊娠してからというもの、永原先生の話を、あたしは何度も思い出すようになっていた。
「男の俺でも、今のを聞いたら、その女の子の気持ちは痛いほど分かるよ。こんな小さな命、しかも自分の体の中にいる命だもの」
妊娠できない男の人でも、こうして外側から小さな胎動を聞くだけでも、やっぱり赤ちゃんのかわいさが身に染みてくる。
「あたしも、もしその女の子みたいな境遇に置かれたとしても、絶対に下ろしたくはないわ。下ろせという位なら、あたしは自分を殺してと言うわ」
今ならもう、自信を持ってそう言えるわ。
そう思った時、あたし自信の母性も、妊娠中に成長していたことに気付かされた。

「ああ、分かってる。でも優子ちゃんにそんなことはさせねえよ。俺は優子ちゃんの夫だからな。か弱い優子ちゃんを守れるのは俺以外には誰もいねえんだ」
また、浩介くんのかっこいい言葉が浮かび上がる。
「うん……ねえあなた」
「ん？」
あたしは、時計を見て浩介くんを夕食に誘い出すことを考えた。
「夕食、食べたかしら？」
「あーいや、実は食べてねえんだ」
よかったわ。
「2人で食べましょ」
「ああ、そうするか」
今考えれば、浩介くんの浮気リスクは今が一番高い。
男を知っているあたしは、どうしても不安がぬぐいきれない。
「でもその前に、浮気はしてないわよね？」
「え？　言っただろ？　俺は優子ちゃんでしか抜いてねえぞ。ほれ」
浩介くんが、ロックを外してスマホの待受画面を見せてくれる。
そこには、あたしの胸が全部写っていて――
「もうっ、浩介くんのえっち！」
「でも優子ちゃんだけが対象だぜ？」
そう言うと、浩介くんはスマホの中のフォルダを見せてくれる。
中はどれもあたしのえっちな画像や動画だらけで、あたしはすっごく恥ずかしいわ。
特にコスプレでのえっちの記録が多くて、見ただけで顔が真っ赤になってしまう。
「ふふ、でも安心したわ」
「だろう？　第一、俺と優子ちゃんがお互い嫉妬深いのは会社でも有名なんだぞ」
「あーうん、そうだったわね」
結局、浩介くんが言っていたように、あたしほどの優良物件は何処にもいない。

他の女性たちも、浩介くんには手を出さないみたいなので安心したわ。
浩介くんのよれば、「探偵くらい雇ってそう」って思われているらしい。
「さ、食事しようぜ」
「うん」
浩介くんと一緒に、病院を歩く。
「そういえば、ハンバーガー屋さんがなくなって、色んな店出来たな」
浩介くんも、この辺りの変わりように驚いていた。
「うん、まだまだ人口は下落局面なのに、よくやるわよね」
まあ、蓬莱カンパニーのこともあるから、将来的には正解なんだろうけど。
「本当にな」
あたしたちは、病院を出る。目ぼしいお店を見つけようとする過程で、リサイクルショップを見つけた。
「あらこのお店」
このお店の両隣の風景も、また変わっていた。
変わる前の風景は殆ど思い出せないのに、何故か風景が変わったことだけははっきりと分かった。
「リサイクルショップだな。俺は入ったことあったかなあー？」
「あたしは、そうここで、優一だった時の制服と体操着を売ったのよ」
制服と体操着を売ったために、あたしは、とりあえず「一人前の女の子」として認められ、優子としての生徒手帳を貰うことができた。
「あー、そういえばそんなカリキュラムだったんだっけ？」
「ええ」
浩介くんは、カリキュラムのことはそんなに深く知らない。
ただ、女の子のなるための訓練が厳しいことだけは知っていた。
そして、リサイクルショップの隣にあったのが――
「焼肉屋さんね」
「ああ、でも妊娠中は焼き肉は制限メニューだろ？」
「うん」

あたしは、ユッケなどの生肉は論外として、レバー肉をはじめとした内臓肉もダメといわれている。
ただし、赤ちゃんをすくすく育てるには動物性たんぱく質も必要で、それを採るのに最も効率がいいのもお肉だった。
つまり、「決められたお肉をきちんと食べる」ということが、妊婦のあたしに求められていた。
だけども――
「あたし、昨日も牛丼だったのよ」
「あーなるほど、じゃああっちの中華料理屋さんはどうだ？」
浩介くんが、少し遠い中華料理屋さんを指差す。
もちろん、入ったことはない。
「うん賛成」
あたしもすんなり賛成し、中華料理屋さんに入っていく。
ガララララ……
「いらしゃいませー」
明らかに「中華訛りです」と言わんばかりの女性店員の声がする。
中もかなり凝っていて、このお店の本気度が伺える。
入ってすぐのところには、「料理長挨拶」として、日本語と中国語両方で挨拶が載っていた。
名前を見て分かるように、向こうの出身だった。
このように、日本の中華料理店は本格的なお店が多く、おかしな「日本要素」が混じらないように料理人もわざわざ現地の料理人を呼ぶことが多い。
「あら？　２人とも奇遇ね」
「あれ？　永原先生」
そこにいたのは、永原先生だった。
永原先生は１人で、恐らく仕事が終わっての夕食なのね。
「お２人は待ち合わせですか？」
店員さん、あたしたちに気付いていないみたいね。
「あーうん、３人で」
「ではテーブル席にご案内いたします」

あたしたちは、なしくずし的に3人でテーブルへと進んでいった。
こんな偶然も、世の中にはあっていいわよね。うん。
幸い、他の人達もあたしたちには気付いていないみたいだし、良かったわ。

テーブルはもちろん、中華料理店の象徴とも言える回転テーブルだった。
最も、あたしたちはこのテーブルを見慣れているけどね。
「お、やっぱこのテーブルか」
浩介くんも、見慣れたテーブルとはいえ、やはりこれで食べるのは中々興奮するらしい。
「そうそう、このテーブルって、日本の料理店が使い出したものらしいわよ」
「え!?」
永原先生が、驚きの事実を言い出してきた。
これって、中華料理店でしか見かけないし、当然大陸で発明されたものだとばかり思っていたわ。
「今から100年前にね、目黒の料理店のオーナーが考案したのよ。大きなお皿で大まかに取り分ける時に、テーブルを回転させれば便利だろうって。私も戦前に一度だけ、お金を貯めていったことがあったわ。美味しかったのを覚えているわね」
「へぇー」
永原先生は、その目黒のお店に入ったことがあるらしい。
目黒なら、渋谷からも近いし、機会があったら行ってみようかしら？
もしかしたら、既に行ったことのあるお店かもしれないけど。
「日本に滞在していた人が、これを見て現地に持ち帰り、一気に広がったのよ。起源は日本と言っても、そのお店も中華料理を出していたから、実質中華料理文化と言ってもいいわね」
「なるほどねぇ……」
あたしは、メニューを見ながら永原先生の話を聞いていく。

それにしても、このテーブルが日本人が最初に考案したというのは驚きだわ。
しかもたった１００年前のことだったなんて。
「１００年前かあ、意外と新しいんだな。俺なんか、それこそ唐とか明とか、そう言う時代からあるものとばっかり思ってたぜ」
あたしも、浩介くんと同じ誤解を何となく抱いていた。
「あはは、私もこれを知ったのは最近よ。まさかあのお店が起源とは思わなかったわ。でもさすがに、明の時代って……私が生まれた頃がちょうど明よ。結構精巧な作りだから、そこまでは古くはないわよ」
「そうかあ、確かになあ……」
浩介くんが、意味もなく何も乗っていないテーブルを回転させた。
中華料理も、時代と共に変わっているものね、新しくても不思議じゃないわね。
「料理って言うのは、意外と新しいものなのよ。以前にも話したと思うけど、今の食べ物を戦乱の時代の人が食べたら、まず間違いなく『天道のごとし』と答えるわ」
そう言えば、ノーベル賞の帰りの飛行機でも似た話があったわね。
永原先生の言葉には、重みがあった。
昔の食べ物を、知っている人の顔だった。
あたしたちは、メニューの物色に戻った。

## 永原先生との中華料理

「えっと、唐揚げとかもあるのね」
中華料理はとにかく種類が豊富で、食べることに関しては妥協しない人が多い。
「そうよ。あ、クラゲにしよう」
真ん中のテーブルで全員で食べる分だけではなく、あたしたちが個人で食べる分も必要だ。
ミニチャーハンと、小さなラーメンスープつきのメニューが多い。
「これなら大丈夫そうね」
頼みすぎもよくないので、あたしたちはいくらか自重しつつ品目を決めていく。
「よし、全部決まったわね。じゃあこれ押して」
「はい」
あたしがテーブルの真ん中にあった「呼び出しボタン」を押すと、厨房の方から小さな音が聞こえてきた。
おそらく、このボタンと連動して反応したのね。
「ご注文お伺いいたします」
店員さんがすぐにこちらへとたどり着く。
永原先生が代表して注文を話し続け、店員さんが機械を動かしていく。
どこのレストランでも、普遍的に見られる光景ね。
「ふう」
注文が終わり、こうして待つ時間は、どうも長く感じてしまうことが多い。
「優子ちゃん、お疲れ？」
背伸びをしたあたしを見て、浩介くんが少し心配そうに声をかけてきた。
「うん、もう臨月だから、いつ産まれてもおかしくないのよ」
多分、今週は大丈夫だと思うけど、来週からは大変になってくるのよね。

「あー、そうだろうなあ」
「赤ちゃんっかあ……」
永原先生が、少し寂しそうに話す。
永原先生は出産も結婚も、経験がない。
「永原先生は、赤ちゃんとかいないものね」
「ええ、女の子になる前に両親が死んで、兄弟姉妹もいたけど私以外はみんな成人する前に死んだわ」
「そう言えば、昔は子供が死にやすかったんだっけ？」
だから多産でも人口が増えなかったというわけね。
確か、江戸時代の人口が４０００万人程度だっけ？　戦乱の時代はもっと少ないはずよね。
「そうよ。幼名の習慣も、子供のうちに死んでしまう例がとても多かったからよ。当時は大名や公家の子供でも死にやすかったもの。私の家みたいな足軽と農民の家は言うに及ばずよ」
永原先生によれば、農民の家の場合、３人４人５人と子供を産んでも、疫病などで誰一人成人せずに途絶えてしまった家も珍しくなかったという。
そうでなくても、戦乱の時代は人々の心も大いに乱れ、些細なことで人が死んでいたから、人口の維持は難しかった。
「血で血を洗う報復の連鎖、軽い命に重い面目の時代がずっと続いて出口の見えない中で、戦乱の時代は特に末法思想が流行したわ。末法に突入したのは戦乱の時代とちょうど重なってしまったの。そしてそれがますます人々を荒廃させたのよ、『どうせこの世で生きていても仕方ない。来世にこそ救いがある』って私達の世代や、その上の鎌倉殿の世の人は考えていてね。そうした荒廃と絶望の連鎖の行き着く果てが戦乱の時代というわけよ」
皮肉なことに、仏教の思想が曲解され、人々の心を更に荒廃させてしまった。
それは、永原先生自身も例外ではなかった。
今になって思えば、些細なことで怒っていたと、永原先生は述懐していた。

喧嘩両成敗は、普通に考えれば極めて乱暴な考えだが、戦乱の時代においては、人々の心があまりにも荒んでいたため、ああ言った乱暴な法を作らざるを得ず、江戸時代になるとすぐに批判されるようになったという。

ちなみに、喧嘩両成敗には続きがあって、「ただし喧嘩を仕掛けられても応戦せずに我慢し、とりあえず穏便に済ませた場合は罰しない」という所が重要で、その意味からも吉良は何も悪くないことが分かる。

「最終的に、江戸時代の中期になって、ようやく人々の心に余裕もできてきたのよ。生類憐れみの令で、ようやく止まったけどね」

永原先生が生類憐れみの令を評価しているのは、まさに戦乱の時代の荒廃ぶりをつぶさに見てきたからだと思う。

「本当に、今は恵まれているわ。でも分かるの、遠い未来から見れば、今の時代も惨めに見えるってね」

「ええ、あたしもそう思うわ」

何故なら、これからの時代は、蓬莱カンパニーの時代だから。

遠い未来の人が今の時代、あるいは蓬莱の薬が普及する前の「ちょっと昔」を見たら、「すぐに死んでしまう弱い人」に見えることは間違いないわね。

「これからの時代、人々の寿命はどんどん延びていくわ。戦乱の時代だったら、人々が不老になっても、１００年生きられる人は稀になってたわね」

「そんなにひどかったのね」

永原先生は、戦乱の時代のひどさをよく話してくれる。

何より、当時はそのことに何の疑問も持たなかったという。

「よく時代劇のドラマで『戦は嫌い』何て言う俳優がいるけど、私に言わせれば、それを当時の私自身を含めて当時の人が聞いたら『無礼者！』って切り捨てられるわよ。私も含めて、戦乱の時代の人はみんな戦が大好きだったわ。略奪、強姦、人身売買、山賊行為をしたり、逆に山に入り込んで山賊狩りをしたり、戦が開かれたとあれば戦見物に乗り出して、戦が終われば落武者狩りをして、兵の死体からも金目の

物を徹底的に略奪、それどころか死体の肉を食べる人だってざらにいたわよ。一通り略奪し終わったら、今度は略奪品をめぐって村を巻き込んで殺し合い、老若男女武士農民僧侶浮浪者問わず、私も含めて皆心踊ったものよ。だから戦乱の時代なのよ」

永原先生は、直接には言及していないが、間違いなく何人もの人を殺してきた。

でもあの時代からすれば、むしろ殺していない人間を探す方が難しいんじゃないかとさえ思えてくる。

江戸時代に入ってからも、徳川綱吉の時代までは、「辻斬り」何てものさえ横行していたのだから。

殺人の時効が廃止されて久しいけど、もしあの時代から時効がなくなってたらどうするつもりなのかしら？

まあ、事件性を問いようがないけども。

「私は、テレビ局がやっている時代劇の反戦描写については不愉快に思っているわ。今年抗議文書も送ったんだけど相手にされなかったわね」

永原先生は、歴史とともに生きてきたからか、そうした都合の良い歴史は嫌いらしい。

「まあ、視聴者の見たいものを見せるものだからね」

実際、永原先生が時代考証を担当してドラマを作る企画が存在しないのは、「リアリティー」が強すぎるからかもしれない。

もちろん、インターネットでは、「永原先生による徹底的な時代考証をした初見お断り」の大河ドラマが欲しいという声はあるものの、あまりにも生々しくなってしまうので声がかからないんじゃないかしら？

「そうねえ……」

それにしても、レストランでする会話じゃないわよねこれ……

「お待たせいたしましたこちら――」

「お、来たわね」

店員さんが、中華料理を運んでくれた。

あたしも、チャーハンなどを食べることにした。

「もぐもぐ……美味しいわね」
「うん」
永原先生がよく行くお店とあって、味の方はかなりいい。
料理人もきちんとした人らしく、統制が取れている。
「この味になったのも、いつからなのかしら？」
「さあねえー」
ここは、いわゆる中華街というわけではない。
それでも、中華料理店はあちこちにある。
「中華街にも出せそうな味よねえ」
「ああ。値段が高いとやっぱり美味しいもんだ。こんないい店が、どうしてこんな立地なんだろうなあ。小谷学園があると言っても、お世辞にも大きな街じゃねえし」
あたしも浩介くんも、このお店が中華街にあったらいいのにとも思う。
「中華街も中華街で大変なのよ。華僑の皆さんも一枚岩じゃないってことよ」
「へえ、でも確かにそんなイメージはあるわね」
永原先生が言うには、そうした在日中国人の内部にも、様々な対立があり、中華街内部は特にそうしたことが多いという。
「特に中華料理店何てそう言うのが多いわ。歴史がある高級店を営業している2世3世の料理人と、『安かろう悪かろう』のニューカマーと対立していたりとかね」
特に日本生まれ日本育ちだと、中華街に住んでいても、どうしても日本文化に染まりがちになってしまうという。
その辺りでもずれがあったりするのだとか。
このあたりは、日本に来た日系人とのトラブルもよく知られている。
「安易な異文化の流入は避けた方がいいわ。戦乱の時代は家族、本家、分家、村、寺、領地、港、商店、主家や主君、大名に室町幕府に朝廷、他にも様々な共同体があって、共同体ごとに法律やしきたりがあったのよ。江戸幕府が出来るまでは、それらが複雑にしがらみ合っていて

ね、多様性という意味では今とは比較にならないくらい多様性に満ちていたわ。だからしょっちゅう衝突して、簡単に殺し合いに発展して、戦乱の時代になったのよ」

今でこそすっかり聞かれなくなったが、あたしが女の子になったばかりの頃は、とにかく「多様性」が叫ばれていた。

あたしたち協会にさえ押し付けられるくらいそれを異様に信仰している人もいた。

永原先生は、戦乱の時代の教訓から、それを拒否していた。

人間は個人個人でかなりの違いがって、それだけでも十分に多様性は確保できるし、それ以上を無理に推し進めるのは弊害が多いというのが、永原先生の見解だった。

「なるほどねえ……中華料理も、こうしてこういうところで楽しむくらいにして、深入りはしない方が良さそうね」

「ええ、私も鉄道に深入りはしちゃったけど、何事も深入りしすぎると闇が深いわよ。もちろん、誰かがやらなくちゃいけないことなのは厳然たる事実だけどね」

永原先生の忠告は、いつもためになる。

「永原先生は、やっぱりそう言う人を？」

「ええ、何人も見てきたわ。江戸時代は特に、平和になって色々な研究がなされるようになったのよ」

「へえ、それってもしかして？」

江戸時代は、皆が思っている以上に変化の激しい時代だったというのは、以前にも聞いたことがある。

「そう、古事記伝やその他様々な古典の注釈書も出回ったし、和算も盛んだったわ。江戸の寺社の絵馬には、今の大学生でも難しい数学の問題がいくつもあったわ」

江戸は、そうした知識と知恵の集まった都市だったという。

特に国学は隆盛を極め、学問が多いに発展した。

古事記伝を始めとする、古文書の注釈書も盛んになり、その過程で古典文法も甦った。

その代わり、火事もとても多く、時に大火となることも頻発してい

た。
「江戸時代は、日本語が急速に今の言葉に近付いた時代でもあったのよ。学校の古典の授業、私以外の先生に習っちゃうと、まるで明治維新で古典がいきなり現代文になった錯覚を受ける人も多いわ。でもそれは大間違いよ」
その話は、あたしも分かる。
冷静に考えたら、そんなわけ無いことは小学生でも理解できるけど、それでも今の古典教育ではそうした錯覚を発生させやすいのは事実だった。
学校教育での古典は、平安時代の日本語がベースになっているので、現代語と比べると遠すぎて、古い日本語なのは何となく分かっても、いまいち繋がりが見いだしにくい。
上二段下二段やラ変ナ変はいつ頃今のような形になったのかという問題、永原先生の答えは、「江戸時代」だった。
「それにしても、まさか私のつけてた日記で、古典文法の変換が研究されるとは思っても見なかったわ」
江戸城での生活の日記は、当時の江戸時代の江戸の町の生活を知る上での超一級資料であると同時に、江戸時代の日本語が、どんどんと現代語に近づく様子も克明に記されていた。
「当時は、言葉が変わってるとは?」
浩介くんがチャーハンの最後の一口を頬張り終えてから話す。
「もちろん気付いたわ。最初に気になったのが、以前から言われていた『せ』の発音よ。戦乱の時代の末期に、関東を訪れた公家が『関東の田舎者はせの発音がおかしい』ってばかにした記録もあるわ」
それがいつの間にか、江戸の文化が大きくなって、やがて京都でもせの発音が変わってしまったのだという。
特に、参勤交代の制度が、江戸の文化や言葉を全国に広める役割を果たしたのだという。
「幕府が大名の財力を削るために参勤交代を実施したというのは嘘よ。むしろ見栄を張り続ける大名に対して『質素にやれ』って歴代の将軍様が命令したことが、江戸時代を通じて何度もあったわ」

「知らなかったわ」
「私も後悔することがよくあるわ。もう少し、歴史学者や世の中に介入するべきだったんじゃないかってね。佐衛門佐殿に対する誤った名前……幸村だって、架空の軍記物が出た時にそれを糺す立て札を立てて貰うように幕府に訴えることだって出来たわ」
歴代の将軍は、皆永原先生に敬意をもって接してくれていた。
だから、時期を見計らって「真田幸村なるは誤りなり」というお触れを出して、庶民に注意喚起していればよかったと後悔しているという。
「明治維新の時も、戦後の時も、私はいくらでも歴史の誤りを糺す機会はあったけどそれをしなかった。私の日記も、ずっと倉庫の奥で眠らせ続けた。そのせいで、日本の歴史研究は大幅に遅れてしまったの。私からすればとんでもない嘘っぱちな説も、あまりにも当時の価値観を無視した無茶な仮定も、大幅に出回ったものだわ。私には、不作為責任があるのよ」
永原先生の話は興味深いものだった。
不作為責任がある。大昔からずっと生きているのは、永原先生ただ一人だった。
もしかしたら、それが永原先生から、一歩踏み出す勇気を奪ったのかもしれないわね。
「なるほどねえ……でも、仕方ないわよ。いくら何百年と生きていても、1人の力は小さいわ。あたしたちもね。大勢の人の支えがあってここまで来られたのよ」
永原先生に並び立つ、せめて江戸初期か安土桃山時代から生きているＴＳ病患者がいれば、もしかしたら状況は違っていたのかもしれないわね。
「ええ、そうよね」
こうして話している間にも、中華料理は次々と減っていき、あたしたちのお腹も膨れていく。
テーブルは回転を続けていて、とても使いやすい。
「あれ？　優子ちゃん、食べる量減った？」

「え!?」
浩介くんが、意外な指摘をしてきた。
あたしの食べる量が減ったという。
全く自覚のないことだった。
「あーうん、多分妊娠末期だから、膨らんだお腹に臓器が圧迫されているのよ」
永原先生の話しは、あたしも聞いたことがある。
確かに、ここまで赤ちゃんとお腹が大きくなれば、それは無理もないことだった。
「うん、確かに安土先生もそんなこと言ってたわね」
「うん、赤ちゃんも栄養が必要だから、食事の回数を増やすといいわよ」
「分かってるわ」
永原先生は、妊娠の経験はないと言っても、もちろん後輩の患者たちがにんしんやしゅっさんをする様子を何度も見届けて来ている。
でもやっぱり、どうしてもあたしが優越感を感じてしまうのも事実だった。
あたしたちは食事を続け、最終的に全てを間食し終えた。

「ごちそうさまでしたー」
食事代は、別にどうってことはないからと、浩介くんが全部おごってくれた。
ふふ、相変わらずよね浩介くんも。でもここではきちんと浩介くんのためにもおごらせてあげないといけないのも、あたしも永原先生も重々に承知していた。
「あー食った食ったー」
「じゃあ私、帰るわね。お疲れ様」
「「お疲れ様でした」」
永原先生が、駅の方へ去っていく。
あたしたちはゆっくりと歩きながら、病院へと向かった。
「優子ちゃん、くれぐれも気を付けてな」

「うん」
浩介くんが病院内であたしを気遣ってくれる。
人前でも2人きりでも優しいけど、人前の時は特にアピールが強いわね。
「入院生活で何かあったら、連絡するんだぞ」
「大丈夫よ」
「そっか、それはよかった」
あたしたちは、部屋の前へと戻った。
「じゃあ、また。無事に産んでくれよな」
「うん、大丈夫よ」
あたしは、無事に産める自信だけは、強かった。
確かに今までＴＳ病患者が出産中にトラブルが起きたことはなかったけど、それが「過信」に変わらないように十分に注意しないといけないわね。
浩介くんが、名残惜しそうな表情を見せてから、病室の廊下を歩き出した。
出産の日までの辛抱が続くわね。
「ふう」
あたしも、ノートパソコンを開き、インターネットを巡回することにした。
２日目の入院生活も、無事に終わった。

# 赤ちゃんの名前

臨月の入院生活は、順調に進んでいた。
予定日が1日1日と近づくにつれ、今度はお腹に、今までとは別の痛みも感じるようになってきた。
お腹が張るような感覚はどうしても馴れることが出来ず、いつ破水や陣痛が発生するのか分かったものじゃない。
そんな中で、あたしの心の支えだったのが、浩介くんと義両親に実両親、そしてお腹の中の赤ちゃんだった。
「もうすぐよ。もうすぐ産まれてきてね」
毎日、あたしは赤ちゃんに声をかけ、浩介くんも、両家両親も、そしてすっかり元気を取り戻したおばあさんまでもが、赤ちゃんに優しく声をかけ続けた。
日が経つにつれて病院での検査の間隔も短くなっていく。赤ちゃんの様子を日々観察するに連れ、愛おしさが溢れ、あたしの目にも涙が浮かんでいく。もうすぐ、もうすぐこの子を抱けるんだって。
看護師さんによれば、「後はもう、産まれてくるのを待つだけ」とのことだった。
出産予定日通りに出産できる妊婦は意外に少なく、ある程度早くなったり遅くなったりをする。
その場合も、通常通りの出産の手続きを踏むことになっている。
そんな、予定日を間近に控えたある日だった。
「優子ちゃん、この書類」
「うん」
浩介くんが持ってきたのは、「出生届」と呼ばれる書類だった。
産まれた赤ちゃんの名前や日にちなどを書いて、所定の役所に提出しなければならないことになっている。
赤ちゃんの名前と、産まれた日付以外の部分は、既に書かれている。
「優子ちゃん、ここに」
浩介くんが、あたしに出生届を出してくれた。
「ええ」

浩介くんから万年筆を渡され、あたしは手の震えを必死に抑えながら、書類に書き込んでいく。
新しい赤ちゃんの名前は、あたしの手で書く。
篠原浩介と篠原優子夫妻の長男の名前、「優輝（ゆうき）」くんの名前を書く。
名前が間違っていないか、そしておかしな所がないかを、あたしたちは何度も確認した。
「よし、これでいいな」
浩介くんが、問題ないことを確認してから、安堵の表情を浮かべた。
昨日の時点で既に決めていたけど、こうして出生届に名前を書いて、初めてこの子は優輝になれたと思う。
「うん」
この名前は、「優しく、だけど皆の中心になって輝いて欲しい」という意味が込められている。
当初あたしは、家族とは特に何も関係ない文字を使おうと思ったけど、浩介くんが、最初の子供は「優」という漢字をどうしても入れたいと言って来た。
あたしも、その思いを是非とも尊重したいと思ったので、色々と2文字目で悩み抜いた末、最終的には浩介くんの熟考の末、「優輝」という名前に決まった。
浩介くんがこの名前を出してきた時、「『優輝』は『勇気』ともかかっているんだ。優しく、そして勇敢にって意味さ」と笑っていた。
そう、あたしからは優しさを、浩介くんからは勇敢さを受け継いで欲しいという、あたしたちの願いの込められた名前になっていた。
あたしは、ＴＳ病になって初めて名前を取り戻せたけど、優輝はそうならないように、きちんと育ててあげないといけないわね。
「優輝、もういつ産まれてもいいのよ。ママは準備が出来ているわ」
あたしは、もう一度念には念を入れて、記入漏れが無いかどうか出生届を確認する。
うん、問題ないわね。
「だってさ、あーでも今は書類チェック中だから遠慮して欲しいかな」
「あはははは」

浩介くんの軽い冗談にあたしも笑みがこぼれていく。
あたしは、まだ書くことのできない産まれた日の部分を除き、全てを書き終えていることを確認してから浩介くんに返す。
「大丈夫よ」
お腹の中の優輝が、喜んでいる気がした。
名前がないなんて、かわいそうなこと。優輝はもう、そんなかわいそうな存在ではない。
「よかった。じゃあ、また今度な」
面会時間が終わった浩介くんが、病室の出口に戻る。
「うん、帰り道気を付けてね」
「ああ。絶対に死ぬわけにはいかねえもんな」
浩介くんが、にっこり笑いながら言う。
そうやって注意をしてくれているうちなら、大丈夫だとあたしも思う。
とにかく、無理な横断は絶対にしないで欲しいわね。
あたしは、安心しながら眠りについた。

出産が近くなっても、家族以外の人がお見舞いに来てくれるケースが多い。
情報を共有していた会社の人や、永原先生に幸子さん、歩美さんや弘子さんの他、小谷学園や佐和山大学の後輩たちも、代わる代わるあたしの病室にお見舞いしてくれた。
特に蓬莱教授と河毛教授、瀬田准教授を始め、佐和山大学の教授陣がエールを送ってくれたのは大きな励みになった。
最も、破水とか見られちゃうとあれなので、そろそろ家族以外は面会謝絶にしないといけないかもしれないけどね。
「じゃあ優子ちゃん、頑張ってね。子作りも、先を越されちゃったわね」
そして今日は、桂子ちゃんが入院中のあたしをお見舞いしてくれていた。
桂子ちゃんは、まだ子供は作っていない。

「あはは、蓬莱の薬があるのよ、焦ること無いわ」
「あーうん、そうなんだけど、やっぱりどうしても女子の性でね」
桂子ちゃんは、やや顔をそらし、「やれやれ」といった感じで話す。
「女性の性ねえ……分かる気がするわ」
女の子は恋愛や結婚の話が好きだけど、それは他の女の子に対して優越感を感じたいという気持ちも大きい。
「あら？　優子ちゃん、分かるの？」
桂子ちゃんは、驚いた表情をしていた。
どうやら、あたしの女の子としての成長に驚いているらしいわね。
「うん、女の子が恋愛話好きなのは、自分や他人との比較の側面もあるってね」
妊娠を経験して、あたしはもうどんどんと女性に染まっていっている。
多分だけど、もう永原先生よりも深いところにたどり着いた気がするわ。
「あはは、優子ちゃん大正解よ。女子力高すぎるわ」
「桂子ちゃん……」
桂子ちゃんから純粋に女子力で誉められたのは初めてのことだった。
今まではあたしは桂子ちゃんからは、女子力の低さや女の子らしくない行動を注意されることが多かった。
「もう、私から優子ちゃんに女の子について教えることは何もなさそうね」
桂子ちゃんは、どこか安堵しつつも、寂しそうな表情もしていた。
あたしは、桂子ちゃんや永原先生、クラスの他の女子たちから「女子力低い」「女の子らしくない」とお説教されていた日々を思い出す。
お説教してきた女子は1人また1人と減っていき、最終的には桂子ちゃんと母さん、永原先生といった限られた人になっていた。
「桂子ちゃん、やっぱり赤ちゃんを身ごもって変わるのかな？」
「ええ、母親としての女性が、強くなると思うわ。母性よ母性」
桂子ちゃんは、にっこりと笑いながら話す。

母性については、あたしも最近は強く感じている。
「うん」
「女の子らしいということは多々あるし、モテない女を中心に、女の子らしさを捨てようとする人もいるわ。でも、妊娠と出産は、究極に女の子らしい行動なのよ。おしゃれしたり、スカート穿いたり、色々出来るけど、出産ほどに女の子らしい行動はないわ」
「桂子ちゃん、あたしもね、心からそう思うわ」
ＴＳ病患者が、今後を生きていくには、女の子らしい女の子になる必要がある。
元男のＴＳ病患者が女の子らしくなるためには、様々な課題がある。
今までも、そのことで色々なことがあった。
言葉遣いや振る舞いに始まり、浩介くんとの恋愛や結婚生活での日々。あたしの修行は、１１年経っても終わらなかった。
もしかしたら、この妊娠と出産が、本当の意味での「最終試験」なのかもしれないわね。
「あーあ、私も赤ちゃん欲しいなあー、でも仕事もあるのよねー」
桂子ちゃんは、ＪＡＸＡの宇宙移民プロジェクトのために、子供を作ったり育てたりする暇がないのだという。
でも、周囲を見ると、桂子ちゃんも早く出産をしたいのはひしひしと感じ取れた。
「蓬莱の薬があるから、焦らなくてもいいんじゃない？」
あたしが、桂子ちゃんを励ます。
「うん、それが救いよね」
蓬莱の薬のお陰で、人々は恋愛に余裕が出来た。
今までのように、「行き遅れ」の心配もなくなった。
そのため、特に若い女性の間で、蓬莱の薬の使用率が高い。
「この薬が出来たからこそ、女性が婚期を焦らなくてもよくなったのよね。お陰で女性も婚期を意識せずに働けるわ」
「そうね」
桂子ちゃんの指摘は当たっていた。

不老になったことで、女性にとって大事な「若さ」をいつまでも保つことが出来るようになった。
「寿退社って言う言葉もあるけど、これからの時代なら例えば子供が大きくなってからまた再就職何て言うことも容易になったのよね」
「うん」
妊娠して身に染みたことがもう1つあった。
それが、赤ちゃんを産んで育てること。特に愛する人の赤ちゃんを身ごもることほどの幸せは、何にも代えがたいものだった。
あたしの部屋にあるノーベル賞のメダルのレプリカを見て分かるように、幸せの形は他にもある。
それでも、妊娠と出産に関しては、女性にしか味わえない幸せという意味で、大きく違っていた。
「優子ちゃんのノーベル賞、やっぱり私も、受賞は当たり前だと思うのよ」
「桂子ちゃんも、そう思うのね」
篠原夫妻が自分のノーベル賞について疑問に思っていることはよく知られていて、お見舞いの人が壁に掲げられているノーベル賞のメダルを見て、あたしにそう話してくれる人が多い。
今はあたしも、自分のノーベル賞に自信が持てるようになった。
「ええ」
桂子ちゃんとあたしは、その日は昔話を続けた。
優一だった頃の話も出てきて、少し懐かしそうに語ってもいた。
もちろん優一の記憶は、あたしの中に残り続けている。でも、あたしはすっかり女の子そのものになって、男と女と曖昧な部分だった人格も、完全に女に染め上げられている。
優一の面影はもちろん、「優一だった頃の名残の痕跡」さえ、あたしの中から消えようとしていた。
「優一が優子になったのはよかったことだし、優一はもう二度と出てこない方がいいって言うのも分かるわ。優一の高校時代の荒れ具合と、正反対になった今の優子ちゃんを見れば一目瞭然よ。でも、たまには会ってみたいって、すっかり優子になったのを見て、優一はどう

思うんだろうって気になることがあるのよ」
桂子ちゃんの話を聞くと、やっぱり悪い人間だったとしても、いなくなると寂しくなるものなのかもしれないわね。
「それじゃあ、私はここで」
「うん、またね……うっ、痛いわ」
桂子ちゃんが病室を出ると同時に、また陣痛が始まった。
これは「前駆陣痛」といわれていて、出産の時の「本陣痛」の前段階だと安土先生は言っていた。
これでもそれなりに痛いけど、本陣痛の痛みはこんなものじゃないと脅されている。本当に妊婦は大変だわ。
最近はお漏らしをしてしまうことも多いけど、これは尿とは違っていて、これもいわば「破水」の前段階なのだという。
妊娠の週もどんどん重ね、あたしは既に早産と呼ばれる状況を過ぎた。
これからは、陣痛や破水といった、出産の兆候を確認する作業に入る。
また、予定日を過ぎて何日経っても産まれてこない場合は、陣痛を促すかどうかが決められる。
あまりにも遅いと、子供が大きくなりすぎて、母体が危険に晒されるという。
浩介くんは、必ず母体優先を選択するし、あたしもそうして欲しいとは思う。
でももしかしたら、優輝がそれで死んじゃってたら、あたしは絶望のあまり病院の屋上から飛び降りてしまうんじゃないかという恐怖もあった。
正気なうちに、もしそうなったら、自殺防止のためにすぐに精神科の閉鎖病棟に入院させるように手紙で書いてある。
出産に向けての体力作りの運動も、一層軽いものになっていく。
安静にしている時間は、どんどん長くなっていく。
月日が経つにつれ、暑い夏が、少しずつ和らいでいく。
８月が終わり、９月に入ると、いよいよ出産予定日になる。

優輝も、そろそろ慣れ親しんだ母体と分かれなければいけない日が来る。
あたしも、この大きなお腹との分かれも近くなることが予想された。
ベッドの近くにある分娩台は、入院してからいつでも使えるように準備されていた。
それはつまり、いつ産まれてもおかしくない状況が、更に克明に迫ってきたことを意味する。
助産師さんや安土先生も、出産に立ち会うことになる。
当日は、助産師さんたちの協力の下で優輝を産み、その後2時間ほど休憩を取って、その間に優輝を軽く濡れタオルで拭いたりしつつ、母子対面となる。
優輝も優輝で、産まれた後は大忙しになる。
まず産まれて産声をあげて泣いた後は、産まれた疲れもあってすぐに寝てしまうことも多いというし、あるいは母乳を欲しがるかもしれないと言われた。
病院では、安土先生から優輝への母乳のあげ方の講座も受けた。
でも、習わなくても、何となく本能で分かるような気がした。
優輝も優輝で、母乳の飲み方は習わなくても本能的に分かっているから教える必要はないと言っていた。
ちなみに、この講習でむしろあたしが感心したのは、「胸が大きいからと言って母乳がたくさん出るわけではありません」という、明らかにあたしを意識した安土先生の言葉だった。
また、母乳が固まってしまって優輝が飲めなくなってしまうこともあり、その場合は旦那さん、つまり浩介くんにおっぱいを噛まれて吸われることで、出てくることもあるという。
確かに、こんなことになったら頼めるのは浩介くんだけとはいえ、あたしは想像して顔が真っ赤になってしまい恥をかいてしまったわ。
ちなみに、母乳は優輝を育てるために栄養価が濃縮されていて、浩介くんみたいな大人が飲むと、逆にお腹を壊しちゃう可能性もあると言われた。

それでも、安土先生によれば、母性を求める男性を中心に、母乳を飲むことに興味を持つ人はいるので、あらかじめお腹を壊す危険性や、味も大人の味覚にはあまりいいものではないということを話し、それでも吸いたいと言ってきたら、優輝の分まで吸い尽くさない程度には飲ませてあげるといいと言われた。

このことは、浩介くん次第なので、今は保留にしておこう。

いずれにしても、出産時や出産後のことは人生の一大イベントとあって大変大忙しになる。

特に産まれたばかりの優輝の生活リズムにきちんとついていけるかは、あたしも不安だった。

たまに、あまり母乳などを取らずに、また泣くことも少なく寝てばかりというパターンもあるけど、その場合も基本的にはそこまで悲観する必要はないとのことだった。

「ふふ、今日は生まれてこなかったけど、明日はどうかしら？」

優輝がいつ行動に移すのかが、あたしの楽しみになっていた。

# 最後のシグナル

「ふう……」

目を開けて、意識が戻る。ずきずきとお腹が痛い。うー、もしかしたら痛みで目が覚めちゃったのかもしれないわ。まだ眠気がかなり残っている。

2度寝したいあたしの意識を、また痛みが遮ってきた。

「ん……あっ……」

そんな一進一退の攻防を続けていると、やがて意識もはっきりし、あたしの視界にはすっかり慣れ親しんだ病室の天井が入ってきた。

病室は太陽光が降り注いでいて、今が日の出後の時刻であることを示していた。

真っ白な病院服も、随分と着慣れたものだった。

あたしは、いつものように洗面台で顔を洗って歯磨きをする。

髪を整えてから、あたしのトレードマークになっている頭の白リボンをつける。

この白いリボンと、優輝がいる大きなお腹が無ければ、あたしの姿格好は女の子として最初に目覚めた時と同じものになっていた。

あの時に姿見で見たその姿と、重なって見えた。

次に、冷蔵庫を開けて朝御飯を物色する。

病院が妊婦用に作ったオリジナル弁当で、病院食より高いけど、味が美味しいのであたしはいつもこれを食べている。

電子レンジでチンをすれば完成で、家にあった強力レンジが使えないのが不便に思った。

「うっ……」

痛みは徐々に強く、心なしか規則的になってきている。優輝は、今にも出たくて仕方無さそうだった。

昨日はそうした痛みが続いたために、安土先生たちも臨戦態勢だったけど、結局赤ちゃんは産まれてこなかった。

もちろん、そうした痛みが続くということは、出産が近い証拠で、今日のあたしも、臨戦態勢ということになる。

痛みのために、夜も眠るのは大変だけど、どうやら陣痛といえども眠気には勝てないらしいわね。
「はぁ……はぁ……普通のレンジでよかったわ」
痛みが引いてから、電子レンジの食べ物を出す。
人間とは贅沢なもので、あの豪邸に住むまでは、電子レンジはこれくらい時間がかかるのが普通だったのに、もう普通のレンジと強力レンジの2台体制が当たり前に染み付いてしまっていた。
でも、今回とばかりは、その所要時間の間で、痛みを引かせることが出来たので良かったわ。
「ふう、いただきます」
出産間際になると、胃の圧迫もなくなって、あたしは食事量はいつもの通りになった。
出産後も、母乳を優輝にあげなければいけないので、引き続き食事制限が必要になる。
今日は9月3日日曜日で、いわゆる予定日を1日過ぎた日だった。
昨日は「おしるし」と呼ばれる粘膜と血液が混じった分泌液が出て、いよいよ出産になると思って、かなり緊張しながら準備した1日だったけど、実際予定日通りに出産できる妊婦は少ないとのことだった。
そして――
コンコン
「はい」
ガララララ……
「優子ちゃん、来たよ」
あたしがご飯を食べ終わって、痛みに耐えながらお弁当箱を洗い終わり、また痛み出したのでベッドに横になっていると、浩介くんに義両親、実両親がお見舞いに来てくれた。
「うん、ありがとう……いたた……」
優輝が、あたしのお腹をグイグイと圧迫してくる。
あたしも、すぐに解放させてあげたい気分もあった。
「優子ちゃん、大丈夫？」
痛みを堪えていると、浩介くんも心配そうに声をかけてくれる。

女の子になって、もしかしたら少し痛みに強くなったかもしれないわね。
「うん、さっきになってから急に痛みが出てきて」
もちろん昨日も痛かったけど、今日のほうがより大きい痛みになったと思う。
9月になったとはいえ、今日はまだ残暑も厳しく、あたしは布団をかけずにそのまま横になった。
「規則的かしら？」
「うん」
次の痛みがいつ来るか、だいたい事前に予想できるようになってきたわ。
「それならお産も近いと思うわ」
「今日産まれるといいな。明日は月曜日だし」
そう、明日は月曜日で、浩介くんは世界最大の時価総額を持つ「蓬莱カンパニー」の社長ということで、ただでさえ常務のあたしが長期的に抜ける状況で、そうそう会社を休むのは難しい。
昨日産まれなかったことで、今日の出産の確率は上がっている。
「うん、そうね」
あたしは、痛みが引いたので、そのまま安静になる。
妊娠中の運動は、もう完全になくなり、こうして安静にして一日を過ごすおとが多い。
「優子も、色々あったわよね」
「だなあ」
母さんと父さんが、感慨深く話す。
視線の先には小谷学園の制服と、ノーベル賞のメダルがあった。
女の子になって最大のイベントは色々あれども、ノーベル賞を取ったのがやはり大きなきっかけだと思う。
「はぁ……はぁ……」
また、少しだけ気分が悪いわ。
昨日は、優輝の頭が、下腹部を圧迫しているためか、トイレも近くなった。

体が思うように動かず、漏らしそうになったこともあったので、トイレは早め早めを心がけてきた。
「優子ちゃん、辛そうだな」
あたしの様子を見て、浩介くんが心配そうに話しかけてくる。
「あなた、あのね」
あたしは、勇気を出してまだ言うに言えないことを言うことにした。
昨日言えずじまいだったことを。
「ん？」
「あたしが優輝を産むところ、見られたくないの」
「えっ!? どうして？」
あたしが、立ち会って欲しくないと言うと、浩介くんがとても驚いていた。
無理もないと思う。出産に立ち会う旦那さんは多いし、旦那さんに立ち会って欲しいというママは多いけど、どうしてもあたしは恥ずかしくて見て欲しくないという気持ちが先行してしまっていた。
「あたしも気持ちの整理はできてないの。ただ、浩介くんには、愛しているからこそ、特に見られたくないのよ」
正直、この気持ちは言葉ではっきりと言い表せないわ。
本当はきちんと分かりやすく説明したほうがいいんだけど、そうも行かないのよね。
「優子の気持ち、よく分かるわ。お母さんに生き写しよ」
浩介くんが固まっていると、突然母さんから援護射撃が入った。
「母さん。それってもしかして？」
「お母さんもね。優一を産むとき、お父さんには見せたくないって。何故かは分からないんだけどね、愛していて、好きな人には、自分の出産って見られたくないのよ」
「あー、でも確かに、苦しい訳だし、分からなくもないな」
浩介くんも、顎に手を当ててうんうんと唸る。
どうやら、浩介くんにも思うところがあるらしい。
古事記や日本書紀にある日本神話にも、似たような話があるみたい

だし。
「そういうことよ。ふふ、浩介も成長したわね。好きで愛してるからこそ、恥ずかしいっていう女心を分かるなんて」
お義母さんが、浩介くんを誉めている。
とはいえ、あたしがそういう場面を何度も見せたからだと思うけど。
「で、優子ちゃん」
「うん」
浩介くんがあたしの方に向き直る。
「今日の予定だけど、ずっと安静って感じ？」
「うんそうよ……きゃあ！」
突如、下半身が急激に濡れたのを感じた。
力も何も入れず、ただあっけない感覚だけがあった。

「うっ……冷た……な……に……え？」
体を起こし、その場所を見ると、白い病院服を大量の無色透明の液体が濡らしていて、小さな小さな水溜まりさえ作られていた。
あまりの出来事に呆然とし、何が起こったかわからない。
「こらっ!!!　男子禁制!!!　見ちゃダメ!!!　3人とも早く出てく!!!　ほらっ!!!」
母さんが、大きな声をあげ、お義母さんが浩介くんの背中を押すと、浩介くんたちがあわてて病室の外に出ていった。
母さんが、有無も言わさずナースコールを押す。
「優子、いよいよ始まったわ。あなたの女性として、もっとも大事なことをこれからするのよ」
ここまで言われて、ようやくあたしにも今の状況が分かった。
これは、破水なんだって。優輝が、いよいよ意を決してあたしの外に出ていくことを決めた瞬間でもある。
「うん、分かってる。赤ちゃんが欲しいって思ってから、心に決めているわ」
「私たちもできる限りのことはするわ。でも優子ちゃん、絶対に負け

ないでね」
「うん」
突然、これまでのお腹の痛みとは比較にならないような痛みが、あたしを襲って来た。
あたしは、あの倒れた日の痛みのことを、強く思い出した。
母さんが、あたしの下半身に新鮮なタオルをかけてくれる。
「まず、羊水か検査が来るわ」
「うん」
タッタッタッタッ、コンコン
「はーい」
誰かが走る音が徐々に大きくなり、止まったかと思えば、すぐに扉がノックされる音が聞こえた。
「失礼します」
中に入ってきたのが安土先生だった。
「どうされまし……あら？　分かりました。今から検査の機材を持って参りますね」
一瞬で、破水だと安土先生は悟っていた。
安土先生はすぐに元来た道を引き返し、走る音が聞こえてきた。
「優子、これから何時間かすると陣痛が始まるわ」
母さんの話は、あたしも安土先生から聞いている。
「ええ分かっているわ」

「おまたせしました。今からすぐに検査いたします」
安土先生と、助産師の先生が駆けつけ、母さんとお義母さんが横に退いて場を譲る。
そして、破水した場所で、安土先生が本当に羊水かどうかの検査をしてくれた。
「どうやら羊水で間違いないようです。破水から陣痛までは個人差がありますから。基本安静にしてください。ただし、出産に向けて先にトイレは済まされた方がいいでしょう」
ここからのあたしは、安静に突入する。

「はい」
安土先生と助産師さんに身体を担がれて、一旦分娩台の所に寝かされ、羊水で濡れたベッドの布団の交換が行われる。
そして、病院服のズボンも交換され、あたしはそうした着替えも、助産師さんや安土先生、あるいは母さんとお義母さんからしてもらう。
全ては、あたしと優輝のためだった。
「ふう……」
何とかもう一度、ベッドで寝ることが出来た。
ここから、いつとも分からない長い戦いが始まることになる。
「それでは、陣痛が始まったら教えてください」
「分かりました」
母さんとお義母さんがいて、またナースステーションには常に２４時間体勢で誰かが居るので、特に問題はない。
破水から陣痛までの時間、あるいは破水と陣痛の順番は個人差があり、あんまりに陣痛が来ない場合は、細菌感染を防ぐためにも陣痛促進剤を打たれることになる。
それから、母さんに今のうちに徹底的にトイレを済ますように、おしりとビデを使って全部出しなさいと言われたので念入りに行うことにした。
もちろん、悪いことにならないようにするのが理想的だけど、優輝の状態にもよるから、まだ分からないのよね。
場合によっては、食事の直後に陣痛というケースもあるもの。
「浩介くんたち、呼んでもいいかしら？」
「う、うん……」
母さんは、外で待っている浩介くんを呼んでもいいかと訪ねてきたので、あたしもうんとＯＫする。
そして、母さんは外に控えていた浩介くんたちを呼び戻した。
ガララララ……
「お、優子ちゃん大丈夫か？」
先頭を歩き、開口一番に口を発したのも、やっぱり浩介くんだった。
「う、うん。これから何時間かしたらいよいよ本陣痛だって」

「そうか、ついに始まるんだな」
父さんが意味深そうに考え込んでいる。
あたしが女性として、真の旅立ちの時も近いということでもある。
「でも、個人差があるから。もしかしたら明日にもつれ込むかもしれないわよ」
そうなったら、多分陣痛促進剤を打たれると思うけど。
「分かってるって。今日は休日だから1日中いられるぜ」
「ありがとう」
あたしは、天井をじーっと見つめる。
長いようで短いようで、長い時間が始まる。
あたしの中で不安と期待とが、激しく心の中で交錯している。
「ふう……ふう……」
お腹の痛みは、まだ続いている。
でも、本当に痛くなるのはこれからだという。
「優子ちゃん、頑張ってよ」
「うん」
あたしは、ずっと応援されてきた。
数時間安静にしていると、昼食が配られた。
陣痛は相変わらず、規則的な変化を遂げていた。
でも、優輝のことを思えば、何のことはなかった。
破水は、優輝を包み込んでいた羊水の膜が破れたこと、お腹の中はゆりかごであると同時に、出口のない海でもある。
そこから抜けるのも、優輝にとっては最初の自立ということなのかもしれないわね。
病院からは、長期戦もあり得るため、食事も通常通り取るという。
あたしは、ここに入院してからは主に外食や出前で済ませてきたが、今回とばかりはきちんとした病院食を食べるように言われた。
最も、味には一応配慮するとのことだった。

コンコン
そして、病院食が到着した。これだけの期間入院しておいて、病院

食を初めて食べたというのも珍しいかもしれないわね。
ちなみに、心配性の浩介くんが食べさせようとしてくれたんだけど、さすがに恥ずかしいので拒否して自分で食べることにした。
お義母さんが、「浩介、いくら何でも過保護すぎよ」と浩介くんをたしなめていた。
食品の見た目を見ても、11年前の記憶と比べても、変な薄味にはなってないことが分かった。
もしもの時に取っておいた醤油は、どうやら使う必要がないことがわかった。
もしかしたら、あの時異常な薄味だったのも、女の子になったばかりで大事を取ったのかもしれないわね。
「ふう、ごちそうさまでした」
「お椀は俺が運んどくよ」
浩介くんが優しい声で、トレイを持ってくれる。
「うん、ありがとうあなた」
刻一刻と、その時は近付いている。
あたしは、ふとまたノートパソコンの写真を見ることにした。
そこに詰まった思い出を見ながら、優輝を待つことにした。
「無事に、産まれてきてね優輝」
お腹を擦りながら、あたしはまた、これまでの11年間の思い出に浸ることにした。
「優子ちゃん、本当に色々なことがあったよな」
いつの間にか、隣に浩介くんが立っていた。
そう、この思い出は浩介くんとの思い出でもあるものね。
「結婚式、今ではもう、遠い昔みたいだわ」
「そうだなあ」
壁に掲げられている、あたしが着ていた小谷学園の制服と、そしてノーベル賞のメダルに、2位と3位に浩介くんとあたしの名前が書いてある世界長者番付のコピー。
今に思えば、小谷学園の制服は原点を、ノーベル賞のメダルと世界長者番付は1つの到達点を表していた。

浩介くんと併せてながらも、世界一の資産か伴って、これからのあたしは、ややもすれば燃え尽き症候群になりかねなかったが、今はもう新しい目標が出来たわ。
「優子ちゃんはどれだけ変わっても、変わらねえんだって。俺は言いたかったんだ」
浩介くんが壁を見ながら、これを掲示した意図を説明してくれる。
「ふふ、そうよね」
このパソコンにある最初の写真、あたしが優子になってはじめての記録。
生徒手帳にあるあたしの写真と、今のあたし、お腹が大きくなっていたりしたりはいるけど、顔は何も変わってなかった。
「んっ……」
「優子ちゃん!?」
まただわ、このちょっとした痛みが、短時間ごとに３０秒くらい続く。
「ん……大丈夫……まだ、本陣痛じゃないみたい」
破水から陣痛まで、時間はかなりある。
母さんが、少女漫画をあたしに渡してくれた。
それは、あたしがカリキュラムの時に初めて読んだ少女漫画だった。
庶民的な女の子の主人公と、主人公をいじめる許嫁の悪役のお嬢様、そしてヒーローのおぼっちゃまの短い物語だった。
「ふふっ」
またあたしは、原点に戻る。まるでそれは、ママのゆりかごに戻るかのように、時計の針が戻っていくということでもあった。
新しい命を産む間際の女性は、もしかしたらそう言う心境なのかもしれない。
でも、あたしはＴＳ病だから、１１年よりも前を振り返ることが出来ない。
それより前は、優一の人生だったから。
幼い日々を追体験して、振り返ることが出来ないのは悲しいけど、

そのことを思ったら、きっと優輝も悲しむから。
だからあたしは、出来る限りの範囲で、原点への回帰を楽しむことにした。

## やっと見つけた　最高の幸せ

「優子ちゃん、おやつ食べる？」
「え？」
　長く短い時間が刻一刻と過ぎた午後３時頃、浩介くんが、いきなり面白い提案をしてきた。
　おやつはもちろん入院中に食べたことはない。
「お菓子ってわけじゃねえけどさ、これから長期戦になるわけだし」
「あーうん……っ!!!」
　あたしが「それもいいわね」と言おうと思った次の瞬間だった。
　お腹の下、下腹部が突如これまで体験したことのないような激痛に襲われた。
「優子!?」
「優子ちゃん!?」
　女性２人の声が、明らかに動揺に変わる。
　長く忘れていたその痛み、そう……これはあたしが１１年前に……痛い！
「痛い、痛い！」
　優輝が突然、あたしの中で暴れ始めた。
　強引に、あたしから出たいと、訴えているようだった。
「ほら、３人とも出てく!!　見ちゃダメ!!!」
　母さんが、浩介くんたち男衆を追い立て、お義母さんが躊躇なくナースコールのボタンを押したのが見えた。
　ボタンを押した音が、あたしの耳に小さくこだまする。
　聴覚と痛覚は違うのに、あたしの中ではもう、混ざってしまっていた。
「んー!!!　んー!!!」
　痛くて、ろくに声も出せない。
　何の前触れもない突然の痛みで、いつもよりもとても痛く感じている。
「せーの！」

突如、あたしの身体が空中に浮き上がった。
視界が目まぐるしく変わり、また落ち着いたけど、痛みは落ち着かない。
母さんとお義母さんが、あたしを分娩台に乗せると、一気に病院服のズボンを下着ごと下ろされる。
ガララララ……
「んっ……ひぎいいい!!!」
痛みと戦っていると、また、別の音が聞こえてきた。
「どうされました？」
「陣痛が始まったわ！」
入ってきた安土先生に、母さんが短くそう伝える。
「うぐっ、うあああああ!!! ああ、ああ、ああああ!!!」
首を左右に降りながら、痛みから必死に逃れようとする。
無駄な抵抗なのは明らかで、優輝がお構いなしに進むので、痛みが増すばかりだった。
優輝が、あたしの中でグルっと回っているのが分かる。
でも心なしか、痛いのは確かとしても、これまで散々に脅された例えのようなほどの痛みとも思えなかった。
「篠原さん、失礼します」
両足が持ち上げられ、分娩台に固定させられる。
痛みに混じり、そうした音が僅かに聞こえ、赤ちゃんが出てくるために、足が拡げられていく。
「んー！ んー！」
ガララララ……
扉が開く音が聞こえ、数人の人が入ってくるのが見えた。
お義母さんが、台所で何かをしている。
「今水道からお湯を出しているわ。優子頑張って」
「うん、うーんっ」
あたしは、本能的にいきむ。
「あ、まだいきまないでください！」
安土先生の大きな声が、あたしの耳に響いた。

まだ、いきんじゃだめと言われても、この痛みは無理よ！
「はぁはぁ……うぁっ……んー」
顔をしかめる。
この痛みの中でも分かるくらい、あたしは醜い顔になっていた。
もしかしたら、浩介くんにはこれを見られたくなかったのかもしれないわ。
羊水が、ほぼ出きっていた。
「うちの家族たちはどこにいます？」
「扉の外で呆然とした様子で立っていますけど」
「何してるんですか！　優子の声が聞こえないところに誘導して来ます!!!」
ぼんやりと、母さんと助産師さんの会話が聞こえて来たけど、あたしは何を言っているのか分からない。
ただ優輝は、乱暴にあたしのお腹を進んでいく。
「んあああああああ!!!」
下腹部が、下腹部が裂けちゃう！
優輝、お願い！　もう少し優しく……痛いっ！
「あ、あ、無理、無理い!!!」
痛い、痛い痛い痛い！　痛い痛い痛い痛い！
痛い痛い痛い痛い

あたしの中の優輝が容赦なく、あたしの痛覚を刺激してくる。
お義母さんと母さんはいつの間にかいなくなっていて、うっすらとぼやけた視界に見えたのは安土先生だった。
「はい、いきんでいきんで！　いちにのさんですよ！」
「んー！　んー！　んー！」
安土先生の言う通りに、あたしはいきむ。
死の危険が、あたしの脳裏を一瞬掠め、すぐに消える。
下半身に力を入れると、少しずつ少しずつ、優輝があたしの中を通っていくのが身をもって分かる。
「あー！　んあー！　ああ！」
優輝が、強引に進もうとする。
出口に向かって、ゆっくりと、しかし確実に。
「赤ちゃんの動きに合わせてください！　はいもう少しいきんで！」
分娩台の向こうで、あたしを覗き込んでいる助産師さんと安土先生が、あたしに的確に指導を与えてくれる。
両足の感覚が麻痺している。
まるで、自分の体から取れてしまったような、そんな錯覚を覚えた。
視界が、またぼやけてくる。
痛みのあまり、あたしはそれ以外の情報が疎かになる。
「はい頑張って！　もう少しいきんでください！」
安土先生たちの声は、それでもよく聞こえた。
「んんんんんーーーーー!!!」
先生の言う通りに、思いっきりあたしがいきむ。
優輝は、もうすぐそこまで来ているのが分かる。
もうすぐ、もうすぐ会える！　優輝っ！　もうすぐよ！　優輝！
頑張って！
「あー！　あー！　んっ……優輝……優輝ぃ！」
「あんた！　今子供の名前を！」
突然、おばあさんの声が聞こえた。
隣に首を振り向かせると、全く気付かないうちにおばあさんがここにいた。

でもすぐに、あたしは出産の仕事に戻った。
「んっ……ゆう、きー!!!」
もう、あたしはいい。優輝、出てきていいよ！
「母性の強いお母さんですね」
お医者さんの誉める声が、聞こえてくる。
「はい、あともう数回ですよ、いきんでください！」
「んー！　あーっ！」
優輝が、どんどんとこちらに向かっていく。
外の世界を早く見たくて、優輝があたしを押してくる。
早く、優輝を、優輝を解放してあげたい。
「優輝！　優輝頑張って！　うあああーーーー!!!」
痛みと共に、優輝のことが脳裏に浮かんでくる。
さっきよりもずっと痛いのに、苦しみはなかった。
優輝を産むことだけが、あたしの存在意義だから。
「はいもう一度いきんでください！」
助産師さんが、優輝の様子を観察している。
「もうすぐよ！　優子もうちょっと！」
「優子ちゃん、無事に赤ちゃん産んで！」
「行けるぞ！　もうすぐひ孫が見られる！」
母さん、お義母さん、そしておばあさんがあたしを励ましてくれる。
どれだけの時間が経ったかは分からない。
骨盤の中を、小さな命が辿っていく。
「はいもう一度！」
「んー！　うーんっ!!!」
助産師さんの声が、微かに聞こえてきた。
本能的に、またいきむ。
助産師さんの手が、あたしの体を支えてくれていた。
スポッ
「オギャア!!!」
何か大きな物が取れたと思ったら、病室中に泣き声がこだました。
「オギャアアアア!!!　オギャアアアア!!!」

「ああっ……」
耳から聞こえてきたその音は、優輝の、元気な産声だった。
さっきまでと違い、今度は目からの水が、あたしの視界を奪っていた。
優輝が、元気に泣いていた。
ああ、やっと、やっと会えたのね。こんなに健やかに……すっかり大きくなって――
チョキ
「優輝、優輝！」
「オギャアアアア!!」
へその緒が切られ、お湯で濡らされたタオルで軽く赤ちゃんが拭かれた。
あたしは、優輝に向かって手を伸ばす。
あたしの子、あたしが産んだかわいい男の子！
「篠原さん、洗いますね」
助産師さんの声が聞こえない。
何を言っているのか分からない。
「優輝、優輝！」
あたしには、もう優輝しか見えない。
「はい」
「オギャアアアア……コテン」
「ああ！　優輝!!」
目の前に、優輝がいた。
あたしの隣でさっきまでの元気が嘘のように、静かに、優しい顔で眠っていた。
「ああっ……うああっ……」
嬉しさのあまり、涙が止まらないわ。
あたしの、あたしの子供、小さな小さな、新しい命。
「優子ちゃんおめでとう」
「優子、よくやったわ。これで優子も、本当の意味で女性になれたわね」

「おおやった！　やったのじゃ！」
おばあさんが、母さんが、お義母さんが喜んでいた。
あたしは、ようやく助産師さんたちが出産の後処理をしてくれていたことを見つけた。
清潔に洗浄され、分娩台が閉じられると、もう一度病院服を着せてもらった。
でも優輝を見たら、もうそんなことはどうでもいいわね。
「ああ……かわいい……優輝、優輝……!!」
「しばらく分娩台で安静にするのですけれど、篠原さんは今回かなりの安産でしたので、ベッドの方に戻られます？」
「優輝、かわいい……優輝ぃ」
すくすくと寝ている優輝が、いとおしくてたまらないわ。
ああ、もうこのまま時間が止まってしまえばいいのに。
「優子ちゃん、優子ちゃん！」
突然、体が軽く揺すられた。
お義母さんだった。
「ふえ？」
「篠原さん、今回篠原さん安産でしたので、ベッドの方に戻られますか？」
あたしはようやく我に帰る。
そして、助産師さんに優輝と共にベッドに戻ることになった。
「「せーの！」」
時計を見ると、午後４時を少し過ぎた位だった。
とても長く感じたけど、１時間も経っていなかった。
「まだこんな時間……」
あたしが時計を見ていると、隣には寝ている優輝があたしのそばに置かれた。
「ええ、篠原さんは稀に見る安産ですよ。普通は数時間とか１０時間かかりますし、人によっては数日間の難産もあるんですよ」
うげえ、あんな痛いのがそんなに続く人もいるのね。
でも、優輝のためなら全く怖くないけども。

ガララララ
「優子ちゃん！」
部屋の扉から、浩介くんが入ってきた。
その後ろには、父さんとお義父さんもいた。
「あなた！」
「よかった！　無事で！　それで、この子が？」
「うん、優輝よ。今は安らかに眠ってるから起こさないでね」
優輝のぷにぷにで可愛らしいお肌をちょっとだけ触ってみる。
優輝は、すやすや寝ていた。
「Ｚｚｚ……」
あーん、もう、ずっと一緒にいたいわ！
また、泣く声が聞きたい。安らかに眠る優輝が見たい。頭が、おかしくなりそうだわ。
「すげえよな、女の子って。お腹の中でもう1つの命を作るんだから。その深層は、ノーベル賞でも分からなさそうだ」
浩介くんが、ノーベル賞に絡めた。
ふと、優輝から目を逸らし、あたしが取ったノーベル賞のメダルレプリカが目に入る。
「篠原さん、私たち女性医師の誇りでもありますの。女性初のノーベル賞ですもの」
「ええ」
「そうですわね」
安土先生がそんな風にあたしを評してくれる。周囲の助産師さんも、同調していた。
でも、今はもう、あのメダルには何の価値も見いだせなかった。
「こんなもの、何の価値も無いわ」
「「え!?」」
自然と、ポロっと、ごくあっさりとそんな台詞が出てきた。
その場にいた全員が、驚いた目であたしを見てきた。
でももう、あたしには何十兆円という資産も、何千億円という年収にも、蓬莱カンパニーの常務取締役という地位にも、ノーベル賞でさ

え、何の魅力にも感じなかった。
優輝を見たら、ノーベル賞のメダルはあまりにも陳腐な代物でしかないわ。
「こんなもの、ただの金属の塊よ。でもこの子は……優輝は生きているの。ノーベル賞何てもうどうでもいいわ」
あたしは、優輝の方に向き直ってから、優輝の頭をまた撫でる。
優輝は、気持ち良さそうに夢の世界へと入り込んでいる。
あたしも、少しだけ眠くなる。
周囲は凍りついているようだったけど、もうあたしにはどうでもいいことだわ。
このまま優輝と一緒に、ずっと一緒にいたいわ。
かわいらしい優輝の顔、あたしの赤ちゃんのことがもう、たまらなかった。
パッ
「あはっ」
優輝の目が開いた。
「うえええええんんんんんん!!!」
「おおよちよち、おっぱい欲しいの？」
優輝の愛らしい泣き声と共に、あたしは本能的に病院服を軽く緩め、優輝の目の前に全身を持っていく。
「ちゅうちゅう」
「んっ……」
優輝は、生まれてはじめての食事を取った。
そして数分後、優輝はあたしから口を離すと、今度は起きたまま手足を動かして幸せそうにニコニコしていた。
そしてすぐに、また眠りについた。
「篠原さん、お子さんですけれども」
「はい？」
横から、安土先生が声をかけてきた。
一体何かしら？
「赤ちゃんに異常がないか、検査させていただきますね」

そう言われると、優輝が取り上げられ、あたしの視界から消えてしまった。
「やっ、やだ！　優輝、行かないで!!!」
優輝が、優輝がいなくなっちゃう！
もう、もう二度と会えないなんて嫌だ！
「篠原さん、落ち着いてください。赤ちゃんの――」
「嫌だあああああああ!!!　優輝を返してえええええええ!!!　うあああああああ

「あ……なた……」
浩介くんが、慌てた表情をしていた。
病室には、優輝が泣く声が響いていた。
「何て母性……！」
「優子ちゃん、赤ちゃんの検査だよ」
浩介くんがゆっくりと優しい口調をしていた。
「検査……？」
呆然とした表情で、あたしは浩介くんを見つめ返した。
「赤ちゃんの健康診断だよ」
「う、うん……」
やっと、今から何が始まるのかを、理解できた。
あたしは、そのまま、ベッドから立ち上がろうとする。
「篠原さん、まだ休んでいた方が――」
「嫌です！　優輝から離れるくらいなら死にたいです！　せめて、退院するまでは、我慢できません」
優輝が、目の見えない場所にいることは、今のあたしはどうしても耐えられなかった。
「……分かりました」
あたしは、赤ちゃんの検査のために、新生児室へと向かった。
浩介くんも、ついてくると言った。
「優子、今はいいけど、子供はいつか巣立つものよ。分かってる？　子離れも、いつかはしないといけないのよ」
母さんが、いつもより厳しく、真面目な口調であたしに注意してくれる。
それは、あたしの母親としてよりも、子を持つ親の先輩としての忠告だった。
「ええ」
「それにしても驚いたわ。優子ちゃんの母性」
「だなあ、女性って赤ちゃん産むとああまで変わるんだな」
義両親が何か会話していて、あたしと浩介くん、安土先生の３人で検査のお部屋へと入った。

優輝の体重は３０２１グラムだった。
新生児としては平均的な体重で、次に聴覚や触覚などの感覚器官の検査に、内臓の具合の検査も行われた。
「異常は無さそうですね」
「ふう、よかったな」
「ええ」
母子ともに、安産だった。
優輝には何の異常もなく、健康に過ごしてくれそうだった。
「俺さ、ちょっとだけだけど、優子ちゃんの悲鳴を聞いちゃったんだ」
検査も終盤の時、浩介くんがそんな話をしてくれた。
確かに、聞こえちゃったのは無理も無いわね。
「うん、すっごく恥ずかしいわ」
「優子ちゃん、とっても苦しそうでさ。痛み、もう本当に大丈夫なのか？　すっげえ痛いんだろ？」
浩介くんは、あたしのことをまた心配してくれている。
あたしは痛みを思い出そうとして――
「あ……れ……？」
「ん？　優子ちゃんどうしたの？」
「痛み……思い出せないわ」
どんな感じの痛みだったのか、一生懸命記憶を手繰り寄せても、一切出てこない。
いや、痛かったのは覚えているけど、どんな、どれくらいの痛みなのか、完全に忘れてしまった。
「え!?」
「よくあることですよ。でも、こんなすぐに忘れちゃう人は珍しいですよ。多分、この子を見てすぐに忘れたんだと思います」
助産師さんが、そう助言してくれた。
「そうなのね」
痛みを覚えていたら、２人目を産めないからかしら？
もしかしたら、出生の時の母性で忘れるのかもしれないわね。

「以上で終了です。うちは母子同室と母子別室が選択制ですけど、篠原さんは聞くまでもないですね」
「ええ」
　もちろん、母子同室に決まっているし、赤ちゃんとも添い寝することになっている。
「これから、母子同室での注意点や、赤ちゃんへの沐浴の仕方などを教えますね」
「はい」
　あたしたちは、病室へと戻る。
　産むまでよりも、産んでからのほうがずっと長い。この子もきっと、蓬莱の薬で長生きするはずだから。
「ねえあなた」
「ん？　どうした？」
　寝たり泣いたり忙しい優輝を抱きながら、病室の廊下で浩介くんに話しかける。
　浩介くんは、いつもよりかっこよく見えた。
「あたしね。ずっと満たされなかったの。浩介くんに恋をして、浩介くんと幸せなデートをして、幸せな結婚生活を送って」
「うん」
「蓬莱カンパニーを作って、浩介くんとずっと一緒にいられて、人々が幸せになって、世界一たくさんのお金をもらって、世界一名誉のあるノーベル賞をもらって、あんなに立派な家に住んで……それでもあたし、満足できなかったの」
「ああ、そうだろうな。俺でさえ、今までの幸せは何だったんだって思うもの」
　浩介くんが、笑っていた。
　産後で育児が一段落したら、浩介くんのお相手もしてあげないといけないわね。
「あたしね。女の子になったこのはじまりの病院で、はじまりの服を着て、やっと答えを見つけられたわ。あたし、ようやくこのＴＳ病に区切りをつけられたわ」

「優輝なのか？」
「うん、浩介くんと本当に愛し合えたから、優輝はいい子に育ってくれるわ。男の子は、やんちゃで手もかかると思うけど、それでも、よ」
「だろうな」
あたしは、随分と遠回りをしてしまったと思う。
女の子が思う一番の幸せとは何か？
その問題への回答は、今ようやく示すことができた。
「あたしが満足できなかったのは、人間の欲深さのせいじゃなかったの。本当はこんなに近いところに幸せはあったのに、あたしは見当違いの幸福ばかり追求していたわ。今こうして、優輝を産んで、あたしははっきり分かったわ」
「ああ、俺も」
あたしたちは、病室の前へと到着した。あたしが先頭に立ち、扉の取っ手に手をかける。
あたしはもう、迷うことはない。
これからの人生が、何よりも大きな幸せが待っているから。
「さ、開けるわね」

永遠の美少女になって永遠の闘病生活に入った件　完

# エピローグ
# エピローグ

――西暦２４８８年――

「浩介くん、手紙、届いているわよ」

元旦のこの日、あたしたち篠原家の元に１通の手紙が届いたのを、ロボットが知らせてくれた。

「お、ついに今年か。中を見ようぜ」

「うん」

今時珍しいこの手書きの手紙の送り主は、永原マキノ。

あたしたちの遠い昔の高校時代の恩師で、あたしと浩介くんが経営している「蓬莱カンパニー株式会社」の相談役にして、世界４位の大富豪、そして人類最高齢の女性でもあった。

「新年会の招待状だわ」

「にしても、人が悪いよなあ。永原先生も」

浩介くんが、やや呆れた口調で話す。

「うん、そうよね」

永原先生とは、かれこれ４７０年の付き合いになるけど、未だにつかみどころが分からない。

あたしたちも今年で４８８歳になり、後１１年もすれば永原先生と最初に会った時の年齢と同じになる。

でも、永原先生が経験した５００年とは、また濃さが違っていると思う。

それでも、ここ最近は宇宙開発がどんどん進んでいて、また１年を長く感じるようになった。

「あら？　手紙？　珍しいわね」

お義母さんが、手紙を後ろから覗き込んできた。

「うん、永原先生からよ」

「あー、そういえば、聖書の登場人物より長生きになったんだっけ？」

「うん、そんな感じよ。あたしたち招待されたわ」
もちろん、今日がパーティーの日ではない。
とはいえ、もちろん欠席するわけにもいかないので、あたしは「出席」の方にマルを付けてロボットに返した。
「あいつら、どうしてるかね？」
「さあ？　そもそも誰が来るのかしら？」
「さあ？」

あれから、随分と月日がたった。
長男の優輝を始め、あたしたちには２５人の息子と娘がいる。
一番したの子は、今は7歳で、一方で今では子会社の社長をしてくれている優輝の家を始め、子孫も数多くいる。
あたしたちでも、下の方の子孫は全員を把握するのは難しくなっている。
比良さんに至っては、もう子孫が万単位だし、あたしたちの知らないところで、親戚関係になっていてもおかしくはないわね。
蓬莱カンパニーは、世界に蓬莱の薬を解放し、名実ともに世界一の企業になった。
あたしたちは世界最大の大富豪集団として有名になり、経済紙が発表する世界長者番付も、あたしたちと蓬莱教授のＴＯＰ３は、もう４６０年以上も動いていない。
様々な大富豪が台頭しては没落する中で、あたしたちは唯一無二の存在だった。
でも、あたしたちはそのことには価値をあまり見いだせない。
「ママー」
一番下の娘が、あたしに抱きついてくる。
この子がいること。結婚と子供、それが何よりも幸せだった。

「よし、じゃあ行こうか」
「うん。いい？　ちゃんとお留守番するのよ」
「はーい！」

娘の元気いい返事に、あたしたちは安堵する。
何度もリフォームした豪邸を出て、あたしたちは完全自動運転車に乗り込む。
そのドサクサに紛れて、浩介くんにお尻を触られちゃったわね。
「行き先を教えてください」
「私立小谷学園」
あたしがそう口にすると、自動車はひとりでに動き出す。
もう、手動運転車は道路には存在しない。
歩行者も、赤信号を渡ろうとすることは物理的に不可能になっている。
これらの交通安全システムは、あたしたちが投資した会社の作ったものだった。
車のスピードはとても速く、高速道路も使いながら小谷学園へ向かう。
外の景色は、きれいな高層ビルが立ち並び、その中央には宇宙空間まで伸びる軌道エレベーターが設置されていた。
車はやがて、佐和山大学を過ぎ、あたしの原点でもある病院を越え、小谷学園への駐車場へと停車した。
「到着しました」
あたしたちは、複雑なシートベルトを手解き、目的地へと向かう。
目的地は、あたしと浩介くん、そして永原先生の記念館の2階だった。
「緊張するわね」
「ああ」
ピピッ
「ご用件をどうぞ」
モニターに搭載されたＡＩが、あたしたちに要件を聞いてくる。
「こちらです」
あたしは、永原先生からの招待状を見せる。
「……確認しました。篠原様、どうぞこちらへ」
認識した人工知能が、扉を開けてくれた。

「おー！　優子ー！　久しぶりだなあ！」
部屋に入るなり、開口一番にあたしに声をかけたのは恵美ちゃんだった。
「恵美ちゃん。久しぶり」
「おう、元気にしてたか」
浩介くんが恵美ちゃんと話す。
「おうよっ」
恵美ちゃんは今でも女子プロテニス選手世界ランキング１位に君臨する絶対女王だ。
女子テニスの神様としても知られていて、今はオフシーズンなので日本へと戻っている。
「優子さん。お久しぶりです！　１００年ぶりですか！」
「うん、龍香ちゃんも、久しぶり」
龍香ちゃんは、赤ちゃんを抱いての参加になった。
龍香ちゃんは、今も愛する旦那との子作りに勤しんでいる。
あたしたちにも２５人いるけど、２０世紀終盤から２１世紀初頭の間に生まれた、いわゆる「蓬莱の薬の第一世代」としては、それほど目立つ多さではない。
一方で、龍香ちゃんはこれで１０２人目の子供で、いわゆる世界記録ではないものの、それでもかなり多い方だ。
「あ、あの……お２人とも、とてもとても、お久しぶり……です」
「さくらちゃんも、相変わらずね」
さくらちゃんは、やっぱり４８８年生きても、その引っ込み思案な性格は変わってなかった。
今では趣味の時代劇を見ながら、パートタイムで働いている。
「あ、お２人とも、よく来てくれました」
「あら、歩美さんも来ていたのね」
「あたしも忘れないで」
「幸子さん、それに弘子さん、みんなも！」
協会の会員たちが、多くこのパーティーに参加してくれていた。

特に、あたしがカウンセラーを勤めた患者さんはみんな来てくれた。
女の子の会話の中で、京子さんが、笑いながら手を叩いて盛り上がっていた。
幸子さんは、子育ての時にもとてもお世話になった。
優輝は、元気な男の子で、正義感も強いけど、少し融通が効かない一面もあって、そのあたりの子育てで色々と助言をもらったわね。
「篠原さん、おはようございます」
「おはようございます」
「比良さん、余呉さん、おはようございます」
比良さんと余呉さんが、近くに座っていた。
よく見れば、江戸時代生まれの生き残りや、明治大正時代の生き残りたちも、たくさんいた。
既に2人とも600歳を大きく越えていて、永原先生ほどでなくても、長い人生を感じさせている。
「篠原さん、変わったわね」
「そうかしら？」
「ええ。若さは変わらなくても、中身は変わるんですよ」
比良さんの話は、時に深い意味を持つことがある。
「それを言ったら、今日の主役なんて一番そうじゃないかしら？」
「あー、会長は……はい」
比良さんも余呉さんも、「永遠の美少女」を思い、幼さを強調した格好になっている。
栄養状態もよくなった今の社会では、江戸時代の人である比良さんと余呉さんはとりわけ幼く見えてしまう。
そこをあえて伸ばすところが、ＴＳ病患者の特徴でもある。
一方で、あたしの胸の大きさは、相変わらず目立っちゃってるけど。
「お、浩介に優子ちゃん、2年ぶりだな」
「あ、高月くん」
「へっへーん」
あたしたちに気付いて次に話しかけてきたのは、高月クリニック院

長で高校時代のクラスメイトの高月章三郎くんだった。
高月くんも、とても羽振りがいい。
不老による容姿の安定が来れば、次は美容整形になるのは自然のことだったからだ。
「にしても、うちのクラスは本当にすげえよな。優子ちゃんと浩介が中心とはいえ、こうして記念館もできちまってるんだからよ」
「ああ、今思えば、な」
プロテニス選手の恵美ちゃんに、あたしたち篠原夫妻、そして高月くんに、ＪＡＸＡに勤務して宇宙移民の技術開発に貢献した桂子ちゃん、何よりも今日のパーティーの主役でもある人類最高齢の永原先生が担任を勤めていた。
平成３０年度卒業の小谷学園３年１組は今でも世間に語り継がれる伝説のクラスとなった。
「まあ、そういうクラスは結構あるだろ？　小中高とあるんだし、実はあの人とあの人が同じクラス何てよくあることだろ」
確かに、その通りかもしれないわ。
高月くんは、かなり多忙だし、他のクラスメイトにも、各自時間があるはずだけど、蓬莱カンパニーの名前を使うと、こんなに人を集めやすいのよね。
「蓬莱カンパニー様々だぜ。今や新人もあんまし入ってこねえし、あたいらの技術はどんどん増してくしなー」
恵美ちゃんが、ジュースを飲みながら豪胆に話していた。
恵美ちゃんの性格は相変わらずで、女子受けはいいけど、男子受けはあまりよくないままらしい。
でも、恵美ちゃんの顔には余裕がある。
それは、蓬莱の薬のお陰で、何歳になっても恋愛できるようになったからだと思う。
「それで、今度の巨大人工衛星コミュニティの開発計画はどうなってるんだ？」
「ええ、順調です。今後は実験を繰り返して、宇宙の延命や、場合に

よってはトンネル効果を作り出して宇宙の創造などを考えていきたいと思っています」
「夢のある話だが、まずは太陽系からの脱出が鍵だろう？　太陽系外移民には間に合うのか？」
「恒星たちは常に動いています。近付く恒星を狙うのも有りでしょう。このコミュニティができれば、惑星改造すれば住めるような星でも大丈夫になります」
別の一室で、２人の男女が会話していた。
１人は、あたしたちの両親と同様、人口が増えた今では珍しくなった古参世代の象徴である中年風の男性で、もう１人は若い少女だった。
「桂子ちゃん、それに蓬莱教授！」
「おお、優子さんと浩介さんも来ていたか」
「俺たちが来なきゃ、いかんでしょ」
桂子ちゃんと蓬莱教授は、２２世紀になってから急速に連携を強めている。
あたしたちも株主に名を連ねていて、２００年前に民営化を達成した大きな会社がある。
それが、「宇宙運輸株式会社」と「宇宙不動産株式会社」で、これらは桂子ちゃんが事実上の創業者である。
桂子ちゃんは、あくまで国営時代の創業者で、今でも身分はＪＡＸＡの職員だけど、それでも創業者としてかなりの株式を保持している。
これらの宇宙開発会社によって、人類は活動範囲とキャパシティを大きく広げ、不老に伴う人口爆発にも耐えられるようになった。
また、宇宙線による放射線問題も、蓬莱の薬が解決によく機能してくれていて、宇宙開発と蓬莱の薬は、切っても切れない関係になっていた。
お陰で、あたしたちは株式の配当金で出資したこれらの宇宙開発産業で大きな成功を納めて、今でも世界最大の資産家の地位を維持し続けている。

「桂子ちゃんに感謝しないとね」
「そうねえ、でも、私も夢を叶えられてよかったわ。もちろん、まだまだこんなところでは終わらないけどね」
桂子ちゃんは、次なる宇宙開発に目を向けている。
宇宙開発は、最初の１００年のアドバンテージがあまりにも大きいとはいえ、蓬莱の薬と違い、基本的に他の国の会社とも競争しなくてはいけない。
「桂子ちゃん、本当にすごいわよね。あたしたちは、少し燃え尽きちゃってる所もあるのに」
黙っていても、もう蓬莱カンパニーの地位は揺るぎがない。
もちろん、世界解放になった前後は苦労も多かった。
特に厄介だったのが、「不老にならない権利を保証しろ」という海外の声だった。
もちろん、そんなことを日本が応じる必要もなく、あの当時の日本は今と同じく、世界の超大国としての地位を維持しており、結果的に「不老にならない権利」をうたった高福祉国は、悉く国家破綻の憂き目に遭った。
世界一の資産家として、本業をしつつもこうした政治的根回しもしなきゃいけなかったので当時はかなり忙しかったわね。
テーブルでは、小谷学園の教師や現在の生徒たちが忙しく料理の準備をしていた。
今回のパーティーは、永原先生曰く「神への勝利記念」でもあるという。
「でも驚いたのは、私たちが作ったあのジオラマ、今でも修復されながら使われているんだってね」
「そうよね」
あたしと桂子ちゃんが小谷学園を卒業したのは４６９年前の春のことで、今も続く天文部に保存されている。
毎年当時の写真を見ながら、学生たちが補修作業をしてくれている。
「あ、おばあちゃん」

聞き覚えのある女の子の声が聞こえてきた。
「うっ、こらあ！　おばあちゃんって呼ぶの辞めなさいっていつもいってるでしょ!?」
この子には悪気はないんだけど、あたしたちの世代で「おばあさん」というと、老人女性一般を指す言葉になる。
あたしたちにとって、おばあさんは、優輝を産んで2年後に１０６歳でこの世を去った浩介くんのおばあさんのことを指す。
あの時は命は短いと思ったけど、意外と長生きしていて驚いたわ。
今のあたしたちは、そのおばあさんの４倍以上長生きになっちゃったけどね。
「だってー！　祖母は祖母だしー私孫の中では下の方よ」
孫娘が、駄々をこねる。
この子は、あたしの２２番目の子供の孫で、小谷学園の生徒だった。
もちろん、あたしたちが最後に産んだ子供より年上ということになるけど、これでも孫たちの中ではかなり年下の方になる。
具体的には、あたしたちは初孫が７０歳の時に出来たので、年の差は４００歳ほどになる。
子孫がもう１７代目までいることを考えれば、もはや遠い子孫は把握をしたくもないけど、孫と言えばまだまだ近いのでこうしたことが起きる。
「あー、オールド世代は辛いわねえー！」
「ジェネレーションギャップって言うのかしら？」
「まあ、そんなもんだろ。俺よりかマシだって２人とも」
蓬莱教授が笑いながら話す。
あたしたちやここのクラスのみんな、瀬田教授や優輝も含め、蓬莱の薬が世界解禁される１００年ほど前に不老化したために、外国人の誰よりも年上になった日本人を「オールド世代」と言う。
更にその中でも、２０世紀の産まれ、つまりギリギリあたしたちまでの生まれは、「古の世代」、更に、この世に生きる男性で一番年上で、５３０歳を越えた蓬莱教授より年上のＴＳ病の女性たちを「ＴＳ病の世代」と呼ぶ。

特にその中でも１９世紀の生まれは特に貴重な存在で、更に１８世紀産まれと１７世紀産まれを飛び越し、１６世紀産まれの永原先生は、昔から「人類の長老」と呼ばれている。
蓬莱教授も蓬莱教授で、たくさんの苦労をしてきた。
貧乏人に妬まれることも多かったし、研究者仲間でも、どうしても嫉妬の的になってしまうことはあった。
それでも、既に5回受賞しているノーベル賞の中でも、あたしたちと共に受賞した2回目の業績は圧倒的であった。
「へえー直哉さんいい人ねえー！」
「直哉はあげないわよ」
「分かってるわ幸子さん。あたしにも旦那いるもの」
幸子さんと歩美さんが、仲良さそうに話している。
あたしが最初期に面倒を見た子達で、あたしがカウンセラーとして担当した子達の間でも一目置かれているみたいでよかったわ。
宇宙開発が進むことで雇用が満たされてはいるとはいえ、基本的には今の時代はやや人口が過剰気味になっている。
このあたりの対策は、各自待たれるものであるけど、基本的には今後も宇宙開発で新しい雇用が産まれ続けてくれるはずで、今では月人金星人火星人宇宙ステーション人は珍しくない。
月や金星、火星を領土に持つ国はまだなく、大半が「世界非解放時代」に開発されたために日本領になっていて、このアドバンテージが、特に今でも大きく作用している。
「それにしても、遅いですわね」
「ええ」
比良さんと余呉さんが、主役の永原先生が来ていないことに気を揉んでいた。
ピピッ
すると、突然扉が開かれ、女性が部屋に入ってきた。
低い身長に、比良さんと余呉さんに負けないきれいな童顔、あたしほどに真っ黒じゃないけど、そ美しい肩まで伸びる大和撫子のさらさらな黒髪の美少女は、レディーススーツに身を包んでいた。

「ごめんなさい、職員会議に遅れました！」
「お、真打ちの登場だ！」
浩介くんが、興奮した。
それは紛れもなく、永原先生だった。
「みんな、今日は私のためにありがとうね」
永正１５年、西暦１５１８年に産まれた永原先生は、今年で９７０歳になった。
小谷学園の教師として、既に人生の半分を、小谷学園に費やしてきた。
「神を越えた日っかあ、永原先生もついにそこまで来たんだよな」
「ええ」
永原先生が、自分の席へと向かう。
あたしたちが現役の高校生だった時と同じく、美人な永原先生は生徒にもとても人気で、だけど実年齢もあって告白する人はいなかった。
永原先生は、少なくとも、あたしたちが知る限りでは彼氏はいなかった。
「でもよ、何で３０年後じゃなくて今なんだ？」
高月くんは、「神を越えた日」の意味を知らないのか、永原先生に疑問を持っていた。
「あーうん、旧約聖書の人の中で一番年上の人が９６９歳で死んだことになってるのよ」
確か名前はメトシェラだっけ？
「あーそういえば、永原先生はキリスト嫌いだったか」
高月くんは、永原先生がキリスト教を嫌っていることを思い出し、納得してくれた。
「うんそうよ。２０年くらい前からちょくちょくキリスト教の過激派に狙われそうになってねー、まあそれで警護とかつけてもらってたんだけど、多分後３年もしたら大丈夫だと思うわ」
「３年かあ、結構長いなー」
浩介くんが、ため息をつく。

今でも、宗教の過激派は結構いるらしい。
それでも、永原先生の所に来そうになったのは、蓬莱の薬を飲む前段階の一部のごく若い過激派で、蓬莱教授の予言通り、宗教は衰退の一途を辿っている。
「まあ、常に私にはベテランの警護がついているから大丈夫よ」
永原先生は、けろりと話す。
この神経の図太さが、永原先生の真骨頂なのかもしれないわね。
最も、そうした人を殺傷しそうな武器は、強く監視されているけども。
「ふう、じゃあそろそろ時間だから」
「うん」
永原先生が、立ち上がる。
「皆さん、今日は私の９７０歳の『神を越えた』記念パーティーにお越しいただき、誠にありがとうございます。皆さんには、今年も、来年も、そのまた来年も、ずっとずっと健やかに無事に過ごして下さいますことをお祈りいたします」
永原先生の口上に、全員が注目する。
「それからですね……皆さんにお知らせしたいことがあります……私に……彼氏が出来ました！」
「「「えー!?」」」
会場の全員が、驚きにどよめいた。
あたしは、特に驚きが強かった。
永原先生は、「孤高の人」という印象があまりにも強い。
もちろん、永原先生くらいに美人なら、なり手はいくらでもいるだろうけども。
「私も、いい加減江戸時代のことを根に持つのはよくないし、伊豆守殿も４代様も、それは不本意だと考えました。幸い、彼氏はすぐに見つかったわ。もちろん、結婚できるかは分からないけど、それでも頑張ってみるわ」
永原先生も、恋愛を始めるという。
今の時代は、いわゆる古い言葉で言う「できちゃった結婚」がとて

も多い。
それは、蓬莱の薬で結婚を焦る必要性もなく、さりとて子供が産まれれば現実問題シングルマザーや事実婚のままでは厳しいので、結婚ということになる。
そして、蓬莱の薬で長生きになったため、昔より結婚には慎重なカップルが多く、子作りをすることがプロポーズの代わりにもなっている。
でも、まさか永原先生が、また恋愛を始めるなんて思わなかったわ。
「私からは以上よ。乾杯!!!」
「「「乾杯!!!」」」
変わらないものもあれば、変わるものもある。
この５００年で、地球は、人類は大きな変化をいくつも経験した。
その度に大きく乗り越え、そして更なる躍進へと繋がった。
あたしたちは、蓬莱教授は、桂子ちゃんは、そして永原先生は、その中心にいた。
永原先生という、「古さの象徴」にも、「新たな始まり」が芽生える。
あたしたちも、これから子供たち子孫たちと、「新たな始まり」を経験するだろう。
思えば４７１年前のあの日もそうだった。「石山優一」の終わりは、「石山優子」の新たな始まりでもあり、「石山優子」の終わりは、「篠原優子」の新たな始まりにすぎなかった。
あたしの中で残っていた「男」の終わりは、「女」の新たな始まりだった。
絶えず変化する中で、１つだけ、変わらないことがある。
「ねえ、浩介くん」
「うん？　どうした優子ちゃん」
「愛してるわ」
「何だよいきなり。いつものことじゃん」
「言ってみたくなったのよ、ふふっ」

おしまい

# 編集後記

## 登場人物まとめ

皆様、長らくのお付き合い誠にありがとうございました。

連載中は感想欄などに様々な叱咤激励の数々、誠にありがとうございました。

この物語、「永遠の美少女になって永遠の闘病生活に入った件」は、途中トラブル等もございましたが、連載から1年3ヶ月で完結の運びとなりました。

こちらの編集後期では、登場人物の紹介や、物語の構想が出来た経緯などを話していきたいと思います。

ちなみに、登場人物の体格やスリーサイズなどは、あくまで作者側の想定となっておりまして、厳密に詳しくは決めていません。あくまで作者個人の想像ですので、もしかしたら「優子ちゃんのおっぱいはもっと大きいと思うぞ」といった感想が来るかもしれません（笑）

ちなみに、登場人物の命名法則ですが、滋賀県と福井県、更に京都府の鉄道駅から来ています。

米原駅と近江塩津駅、山科駅を囲った東海道本線、湖西線、北陸本線の駅と、近江塩津駅から敦賀駅までの間、更に昭和に廃止になった旧北陸本線の柳ヶ瀬線の駅で由来が統一されています。これらの線路を囲った内側には琵琶湖があります。

この地域から選ばれた特段の理由はありません。また、物語にも滋賀県は登場していません。

石山優一／石山優子／篠原優子

優一：１７８ｃｍ　７３ｋｇ

優子：１５８ｃｍ　５８ｋｇ　１０７（Ｋ）／６５／９１　体脂肪率３０％（胸込み）　妊娠臨月時　１５８ｃｍ　６１ｋｇ　１１１（Ｌ）／１０３／９２（赤ちゃん込み）　黒髪（深い漆黒）背中まで伸びるロングストレート、肩こりが激しい　ＴＳ病遺伝子型α型

石山は、東海道本線石山駅より。
優子はこの物語の主人公で、一人称視点における語り手も兼ねています。
私作者が最初にＴＳものを書くに当たって構想したキャラクターです。
最初は、自分の中での理想の女の子を思い浮かべた時に、おっぱいが大きくそのために体脂肪率は高め、髪は黒髪ロングの正統派で、また痩せすぎておらずお腹にも適度にお肉がついていて、お尻も大きく安産型で、それらの体型をコンプレックスには思わず自信にしている。
更に顔は幼さの残るやや童顔で、美少女たちの中でも飛び抜けてかわいく、甘いものと少女趣味が大好きで、優しく包容力があって穏やかだけど、２人きりの時は物凄くエロく、家事が得意で母性が強く、だけど身体能力はなくて涙もろく気弱で守りがいがあり、ＴＳ娘なので男の子の気持ちも理解してくれる。
そんな女の子を思い浮かべたのが、この物語を書いた最初のきっかけでした。物語終盤にもありますように、これらは女性ホルモンの多い女性の特徴でもあります。
作者の妄想の世界ですから、それなら理想の女の子は劣化するの悲しいし永遠の美少女がいいよねという軽い気持ちで「不老」の設定を入れました（物語がここまで長編化した原因になるとは、この時は知る由もなかったです）
また、超巨乳キャラということで、肩こり描写や、ＴＳものなので生理描写も数度入れました。生理周期については、適当に、しかしあまりにも不規則にならないように大まかに計算しています。優子以外のキャラクターも、永原先生を含めて設定上は生理がありますが、特に周期は決めてません。
さて、ＴＳ娘ということは、元となる男性が必要です。
そこで、優一は、優子と正反対を意識し、乱暴な性格で、体格は大きく、身体能力は高くてまた髪の毛は同年代よりやや薄いけど、ひげを始め体毛は全身濃く、顔もやや悪人顔という、こちらは男性ホルモ

ンの強い男性の特徴を盛り付けた設定になりました。
次に考えるのが「じゃあどうしてそんな男が女の子になったら女の子らしい女の子になったのか？」という部分で、「自分の名前に反した振る舞いを続けたことに、内心罪悪感を感じているけど、どうしてもやめることができない」「女の子になって、弱くなり、いじめられたことも重なって、徹底的に女の子らしい女の子になろうとするようになった」といった設定ができました。
この時に、「優子」という名前を思い付きました。これまた作者の好みですが、作者はいわゆるＤＱＮネームが嫌いなので、ＴＳものということで主人公は「子」のつく名前の女の子がいいと思っていたので、優しい子で優子となりました。
一方で男時代の「優一」の名付けには苦労しましたが、最終的に優子との変化も少なく、いい名前になったと思います。
その後、この物語の大筋が完成しました。
当初の大筋での構想は、「優子は、過去の自分への償いから、頑張って女の子になろうとするも、クラスで当初受け入れられずいじめに発展、その後クラスの女子たちの支えがあって、やがていじめっ子だった男の子に守られたことをきっかけに恋愛をスタートさせ、成就し、寿命問題も解決する。最後は赤ちゃんを産んで終わり」といったもので、当初は大学在学中に出産をさせる計画もありましたが、寿命問題の解決において初期構想の段階でノーベル賞受賞は決めてあったので、整合性や不自然さを考えて（作中にもありましたが、物語時点での優子たちの年齢よりも年下で、ノーベル物理学賞を受賞した人はいます）、結果的に大学院まで物語が引っ張られました。
物語を書いていて、当初はかわいらしくて超巨乳だけど、普通の女の子として研究に貢献した後は平凡で平穏な生活を送る構想でしたが、物語が進むにつれて、すっかりチートキャラになってしまいました。
まあ、不老研究に貢献なんてしたら平穏な生活なんて難しいのは当たり前だったんですけどね……
実は優子は蓬莱教授と並ぶチートキャラでもあります。大学編以

降は言うに及ばず、高校時代も、ＴＳ病患者として、誰よりも一生懸命に女の子になり、協会でも１００歳を超えている人も多い中で１７歳でカウンセラーとして頭角を現したりしていますので十分にチートキャラでしょう。身体能力は逆チートですけど。

ちなみに、主人公たちが世界最大の資産家になるという設定は、大学の上級生編思い付き導入したものです。なのでメインはノーベル賞です。

優子ちゃんは、恋人との寿命問題を解決させただけでなく、不老社会の到来によって、世間に莫大な益をもたらし、ノーベル賞の栄誉と、世界最大級の資産を得ますが、真に満たされることはありません。

最終章後半に顕著に現れた、ノーベル賞の名誉や巨額の資産、使っても使い切れないような莫大な収入、大企業の幹部（蓬莱カンパニー常務取締役）の地位、豪邸での優雅な生活での贅沢描写は、実はある意味で「噛ませ」としての登場です。

つまり、物語のクライマックスにおいて新しい命を産むことの喜びのための引き立て役でもあるのです。

出産後に、ノーベル賞のメダルに対して「こんなものに価値はない」と言い放ち、赤ちゃんを持っていかれると、大声で泣き叫び激しく狼狽するシーンは、第一章執筆時に、既に結末として決めていました。

物語の終わりを出産としたのも、ここからの子育てを書いてはさすがに果てしないことに加え、やはり１つの区切りになると思ったので、早い段階でハッピーエンドが決まりました。

個人的には、やっぱり気に入っているキャラです。

序盤は、主人公が積極的に女の子になろうとする点を除けば、ＴＳものとしてはややテンプレ的な展開ですが、やはり反射的な抵抗感がありながらも少しずつ女の子に近付く主人公と、ノリノリで「女の子らしくしなさい」と教育する母親の描写は、現代ＴＳ小説にはありふれていますが書いてて楽しかったです。

第一章では、主人公の口調や服装の変化や、教育の成果などをどう表現するかが、書いてて難しかったところです。

一人称も、とある場面でピタッと変化させるのではなく、徐々に

「俺」→「自分」→「私」→「あたし」と、混ぜながら変化させ、最初に会話文、次に地の文が変化するように工夫しました。最も、設定上では言葉遣い、特に一人称は早くに直るものなので、物語の大部分は一人称としゃべり方がすっかり女の子になってしまった段階を占めてしまい、特に大学編以降は作者もほぼ「ＴＳ設定のある女主人公」のつもりで書いていたので結果的に中終盤はＴＳの設定を上手く生かしきれず、不老設定ばかりに頼りがちになったのも反省点かもしれません。

言葉遣い以外の面でも、第二章以降も主人公はどんどん女性に近付くんですけど、最初に言葉遣い、服装、次に女の子の思考回路などの「深い所」や「母性」、更には「女の子としてのプライド」、「女の勘」など、どうしても変化が地味になってしまった所が反省点です。

優子のコンプレックスは、女の子としての人格が出来たことに伴って、またそれ以外は女性としての不便が少なかったこともあり、「幼い日々」に対するコンプレックスは、非常に強く書きました。

作者にも全く別の分野であるんですが、他の人たちが当たり前に持っているのを持っていないのは、その人たちからは下らないものでも、当人にとっては、しばしばとても大きなコンプレックスになりがちです(永原先生の持つ青春コンプレックスと同根の問題です)、幼女コンプについては、女児向けの遊びやアニメ、おもちゃを楽しんだり、結婚後もおままごとで遊ぶといった描写をちょくちょく入れました。

結婚式の夜に男性が抜け、妊娠と出産を機に中性も消えたということにはなっていますが、消える前から大部分が女性だったのであまり意味がなかったかもしれません。

また、やはり物語を繋げるに当たって、シリアスなシーンが多目になってしまった第二章も、できれば避けて第三章以降に進めたかったのですが、作者が無能だったためにこれを経由しないと次の章に進めませんでした。

恋愛や、それに伴うエロ描写も、書いてて楽しいのですが、ついついしつこい描写やマニアックな性癖の描写になっちゃったりして、麻薬のような怖さもありました。

特に胸やお尻を触られたり、スカートをめくられるといったセクハラされるシーンは、どうしても書いてて興奮するのもあって、筆が止まらなくなって、後で削ることも多かったです。

また、「どんよりバレンタイン」の所では、生理中の優子が浩介にセクハラされる描写がありますが、当初のバージョンでは、篠原浩介の行動は、「優子ちゃんのおいしい調味料と称して生理の経血をバレンタインチョコに混ぜて、優子に見せつけながら食べる」というシーンだったのですが、読者の方から、「さすがにやりすぎだ」とのお叱りを受けて修正しました。

このあたりの自制は、無能な自分にとってはかなり難しいというのが本音のところです。

一方で、家事の描写や女子の会話、少女漫画やお人形さん遊びやおままごと、服装の描写や、女子の気持ちやガールズトークに関する描写、最後の妊娠出産描写は、男性作者にとってはかなりの難関でした。

特に家事と妊娠出産については、Ｇｏｏｇｌｅという名の参考文献にかなりお世話になっています。

優子の両親

優子の母親は、序盤を中心に、「女性の先輩」として、また「母親」として娘の教育役としての出場でした。

物語序中盤は、優子もまだ女の子としては全く出来上がっていないので、所々で男っぽい行動や振る舞いが見られます。母親はそれを咎めて直させる役目も負っています。

いわゆる、ＴＳものでは、よく「お母さん本当は娘が欲しかったのよ」というのがありますが、この物語では特にそうした描写はありません。

ですが、娘になった息子を、やや暴走した愛で受け止める。というのは変わってません。

一方で、父親はやや扱いに困りましたので、書斎で読書して篭りがちだけど、家族との仲は悪くない。という無難な設定に落ち着きました。

当初は不老の薬は飲まずにそのまま寿命で死ぬ予定になってましたが、「融通を図る方がむしろ自然じゃね？」と思い、このような描写になりました。

蓬莱の薬を先取りしたのもあって、もしかしたら世界一長続きしている夫婦になっているかもしれませんね。

鳩原刀根之助／柳ヶ瀬まつ／北小松貴子／永原マキノ

１４８ｃｍ　４５ｋｇ　８１（Ｅ）／５４／７６　黒髪、セミロングストレート（生徒モードの時はツーサイドアップ）　遺伝子型α型

永原先生は、いわゆる「生きている長さはチートだけど、他はそうではない」というキャラクターです。

体は小さいですけど、胸は大きめです。ちなみに、室町時代から江戸時代にかけての女性の平均身長は１４０ｃｍ半ば程度ですので、「今でこそ小柄な女性だが、当時としてはむしろ大柄な部類に入る女性だった」というのは間違っていません。実際、一人の身になり、戦国時代、安土桃山時代を女の身で流浪しながら生き延びたこともあって優子とは違い身体能力は非常に高くなっています。

「鳩原」は、柳ヶ瀬線と北陸本線の合流、分岐点に設けられた旧「鳩原信号場」に、「刀根」は柳ヶ瀬線の旧刀根駅（現在は高速道路のパーキングエリアです）に、柳ヶ瀬は旧柳ヶ瀬線の旧柳ヶ瀬駅に、「北小松」は湖西線の北小松駅に、「永原マキノ」は、湖西線の「永原駅」「マキノ駅」にそれぞれ由来しています。

永原駅とマキノ駅は隣の駅で、いわば法則に気付きやすいように名前をつけました。

永原は、永い原と書き、どこまでも続くような人生の長さを、また永原駅とマキノ駅の駅間距離は、命名法則のある路線の中では最も長い駅間となっていて、こちらも長い人生を表現しているように見えますが、これに気付いたのは高校卒業の頃を書いていた時で、当初は作者にその意図はなく、これは偶然です。

ＴＳものでよくありがちな、いわゆる「先輩ＴＳ娘として、主人公を指導する」という役割の人として構想しました。

当初この役目のキャラクターは、クラスメイトないしは別のクラスの人、あるいは学校の先輩といったベタな内容で考えていました。
しかし、不老設定との整合性も考えて、思いきって学校の担任の先生をＴＳ娘の先輩とし、更に人類最高齢という立場として生まれました。
キャラクター構想としては、優子、浩介、桂子の次に出来た登場人物です。
また、名前を決めるのに苦労したキャラクターでもあります。
最初は永原先生の名前を決め、次に男時代の名前を、古い時代の人ということで廃線になっていた柳ヶ瀬線から取りました。
「北小松貴子」は、小野先生が正体に気付かない理由付けのためと、「柳ヶ瀬まつ」と「永原マキノ」との間の緩衝材として、「柳ヶ瀬まつ」は、当時はひらがな二文字が多かった戦国時代の女性の名乗りとしてあまり違和感がないように作りました。
永原先生の大まかな人生は、書きはじめまで決まっておらず、当初は武田信虎や武田信玄、その家臣の春日虎綱の足軽とする設定も考えていましたが、最終的に、３００歳程度では若すぎるし、６００歳以上だと戦国生まれにならない、更に信長秀吉家康の、いわゆる戦国三英傑よりも歳上の方がインパクトが強いと思い、５００歳に近い４００歳代にしようと考えて、適当に生年と違和感がなさそうだったのが、真田家の真田幸綱（幸隆）でしたので、彼の足軽になってもらいました。
構想は２０１６年の年末からでしたので、ちょうど大河ドラマで真田家をやっていたのも追い風でした。
当初は、指南役としてのみ登場し、日本性転換症候群協会といった組織も軽く触れるにとどめておく予定でしたので、大まかな人生の詳細などもあまり触れない予定でした。
典型的な、「書くにつれて設定が膨らんでいくキャラクター」で、作者も扱いに苦労しました。
ひどい初恋を経験したとか、吉良上野介から恩義を受けていたとか、江戸の庶民文化に親しんでいたとか、鉄道マニアになったとか、太

平の世を終わらせた上に江戸城を追い出されたために西洋文化西洋文明を恨んでいるとか、貴重な家宝を大量所持しているといった設定は、当初は全くなかったものです。

ただ、長い人生と江戸城生活といった立ち位置がよかったので、どんどんと設定が増えました。

ちなみに、作中ではほとんど言及されていませんでしたが、本来の永原先生はとても短気な性格で、面目が非常に重く、戦争と略奪行為が大好きで、恥と思ったり軽い気持ちで人を殺すことも厭わないほどに人の命を極めて軽視するというハチャメチャなもので、これは室町時代当時の日本人としては標準的な性格でした。室町時代や鎌倉時代は人心が極めて乱れており、世紀末の様相を示していました（ある人曰く、「福本漫画とか闇金ウシジマくんあたりの同情の余地のないクズ人間と、北斗の拳のモヒカンと、虎眼流門弟しかいない世界」と評しました。戦国時代の永原先生はこの3者を融合させたような性格です）

こうした性格は、「真田幸村」に対する不寛容さや吉良上野介への悪評に対して怒鳴り付けるといった反応に名残が現れています。それでも戦国時代なら殺し合いになってもおかしくないので、大人しくなった方ではありますが（笑）

永原先生生来の短気で破綻した性格は江戸時代になると鳴りを潜め、やがて人生の大部分が江戸時代になった幕末には、「江戸幕府が永遠に続き、平和が永遠に保たれることこそ至高である」という考えになっていました。

明治の諸国流浪は、鉄道開通によって止められ、それ以降は鉄道の魅力に取りつかれるという設定は、初期からありました。

その後も、設定の使いやすさもあって、蓬莱教授と並んで万能なお助けキャラとなっていますが、私の中では、その生存能力の高さを除けば、特に大きな能力を持っているわけではありませんでした。

実際、作中でも、特に赤穂浪士や戦時中のことなどで、自らの無力性を嘆く描写が多くなっています。

とはいえ、価値のある家宝の長期保存や、協会会長として責務を1

００年以上果たしていることや、それが縁で蓬莱教授とも良好な関係を築き、最終的には主人公たちや蓬莱教授ほどでないものの、世界有数の資産家に上り詰めたので、人生経験の長さそのものが、彼女をチートキャラ染みた感じにしたかもしれません。

また、随所に戦国時代の人間や、江戸時代の江戸っ子を思わせる言動が現れることがあります。例えば、永原先生は会話中（特に興奮した場合）に、「えがや行混じりのいぇ」「せがしぇ」「おがわ行混じりのうぉ」「語頭のは行がふぁふぃふふぇふぉ」という癖があるというのは、いずれも戦国時代に話されていた後期中世日本語の特徴になっています、その中でも「え」の発音は江戸時代前期まで残っていて、特に頻繁にそう発音してしまいます。

また、当初は上一段、下一段活用の動詞を二段活用に使ってしまう癖を入れる予定もありましたが、当時既に一段化がかなり進んでいた（二段化そのものは平安時代から見られるが、鎌倉時代より顕著になる）のに加え、単純に知識もなく、色々と面倒なのでやめました。

個人的にもお気に入りのキャラで、学校の先生でありながら生徒の経験がなく、その事が大きなコンプレックスになっている描写を入れました。当初は、永原先生が文化祭で生徒になるのは、本人の遊び心という設定でしたが、最終的には「大きなコンプレックス」に変更し、卒業間際に生徒になるエピソードを入れました（作者的にもお気に入りのエピソードです）

当初は大学編以降には登場させない予定でしたが、協会という組織を通じて主人公とも関係を持ち続けたことで、高校卒業後もちょくちょく活躍の機会が巡ってきました。

次回作も、彼女を主人公にしたスピンオフにしようとも思いましたが、昔の言葉がよくわからないので悪戦苦闘中です。

木ノ本桂子／中庄桂子

１５６ｃｍ　５２ｋｇ　８８（Ｅ）／５６／８５　黄色髪、ショート

「木ノ本」は北陸本線「木ノ本駅」より。

主人公の幼馴染みの女の子の桂子は、いわゆる「生まれつきの女子としての指南役」という立ち位置です。
ＴＳ娘にとっては、母親や先輩ＴＳ娘と並んで、何かとお世話になる立ち位置になっています。
プロローグから登場している通り、最初期の構想段階で、登場が決まっていました。
小学校からの幼馴染みということもあって、学校生活では優子と絡めやすかったです。
学校一の美少女ということもあって高嶺の花ながら男子人気が高く、そのことが男子に更に嫌われる要因としても機能しています。
主人公にとっては最初の理解者でもあり、女の子になってからも、度々「女子力が低い」として、永原先生やお母さんと共に、いわゆる「小姑役」になってもらいました。直接には描写がありませんが、かなり女子力に気を使っているため、大学時代になっても優子に時折お説教をしていました。
かわいらしさとスタイルの良さでは優子に一歩譲るものの、「学校一の美少女」という名前を重荷に感じていたことや、元々美人で男子受け狙いだったのもあって広い心で優子と仲良くなりました。
実は桂子はそうした嫉妬は自分をますますブスにするということを本能的に知っていました。美人の余裕とも言えるでしょう。
天文部の設定は、人類不老化の展開に持っていった時に人口問題が避けて通れないので作りました。
その縁もあって、脳内設定が紆余曲折しつつも、天文部の後輩と恋愛、結婚し、ＪＡＸＡへの就職と宇宙開発への参加という結果になりました。
当初は大学編からは登場せず、別のキャラクターを桂子ちゃんポジションに持っていく予定でしたが、元ネタ名字の枯渇問題もあって彼女に引き続き登場してもらいました。
ちなみに、当初の名前は東海道本線山崎駅に由来する「山崎桂子」または同「桂川駅」に由来する「桂川桂子」という名前の予定でした。
永原先生の名前も決めていなかった当初は、米原から大阪までの東

海道本線を命名法則にしようと思っていましたが、三文字名字キャラクターを1人くらいいれた方がいいかなと考え、また永原先生や蓬莱教授の名前の提供場所に湖西線と北陸本線などを追加することを考え、逆に京都以西をオミットし、「木ノ本桂子」になりました。

主人公が名前を優子にするきっかけにするため、彼女が「子」の名前になったのは割合すぐにでした。

キャラクターの下の名前は優子以外はあまり大きな意味を持たせていないので、いわゆる「読めない」ようなＤＱＮネームにならないようにのみ気を付けました。

田村恵美

１７５ｃｍ　６４ｋｇ　７１（ＡＡ）／６５／７２　髪型設定特になし

田村は北陸本線の田村駅より

恵美ちゃんこと田村恵美は、いわゆる「がさつ女で元男に女で負けていること」「身体能力と引き換えに女をやめてしまった人」を意識したキャラクターです。

背が高い割には胸は小さく、桂子と違って髪の手入れなどにも疎いという設定です。桂子と並ぶクラスの女子の中心ですが、優一が優子になってからは、優子中心で回っています。

言葉遣いも乱暴めで、スタイルも悪く、我が強くて気が強くて身体能力が高くスポーツは得意ということで、「女性受けはいいけど男受けが悪い」という設定になりました。

これは、男性受けを重視する桂子とで、対立グループを作るための設定でもありました。

一方で、和解後は、あまりにも女性としての側面に無頓着だったのを少し悩む、おしゃれしようと思っても長続きしないという設定になりました。

テニスがとても強く、天才的ながらも現実的で、部活の弱い小谷学園の中では例外的な女子テニス部を形作っていました（小谷学園の詳細な設定がこれより後に出来たというのもありますが（笑））

恋愛などにも疎く、女として成長を続ける優子との対比役も勤めました。
大学以降はプロに進んだのもあって、桂子と比べると登場回数は格段に少なくなりました。
球技大会のイベントも、実は恵美の登場が少なすぎるので書いたものでした。
テニスが強くても、男にはモテないという感じです。

河瀬龍香
１６１ｃｍ　５２ｋｇ　８３（Ｃ）／５７／８２　茶髪ボブ
河瀬は東海道本線河瀬駅より
龍香ちゃんは、平均の上の美人であると同時に、「エロ担当」の位置付けも兼任しています。
彼氏を自分より美人の桂子や優子には決して直接的に紹介しないというしたたかさもあります。
また、「ちょっとかわいい女の子」の立場から、優子を裏やましがるという立ち位置も確保しています。
口調はですます調であると同時に、淫乱さも持ち合わせています。丁寧な口調とのギャップの演出でもあります。
彼女の登場当初決まっていた彼女の役目は、「彼氏に受けると思っていたのに機嫌が悪くなった」という恋愛相談を、優子が活躍して優子が名声を上げるというシーンのみで、その後は殆どがエロトークに費やされてしまいました。
最初の夏でも、水着姿で彼氏にお尻を触られる所を優子と浩介に見られるシーンなど、結婚式も含めて、エロ関係ばかりなのはあまりよくなかったかもです。
最も、デート中や優子が結婚した後の大学編以降は、「どっちもどっち」のような感じになってしまいましたが。
かわいくて美人な彼女や嫁がいたら、男は必然的にエロくなっちゃいますからね。

志賀さくら

１５７ｃｍ　４６ｋｇ　８１（Ｂ）／５５／７９　髪型設定特になし

志賀は湖西線志賀駅より

さくらちゃんはいわゆる「引っ込み思案な地味子」のポジションです。

運動は苦手で、また性格も優子以上に大人しく引っ込み思案で近寄りにくい。

彼女は、生粋の女の子の中では、唯一優子に引っ張られる形で成長するキャラクターでもあります。

野球部の先輩に密かに想いを寄せていて、野球部のマネージャーに就任してからは、「魔性の女」へと変貌を遂げ、野球部を崩壊させてしまいました。

しかし、彼女は自分の想い人を手に入れられたことでにっこりと悪魔の笑みを浮かべるわけです。

彼女は自分の好きな男と恋人になれたことのみならず、自分をめぐって争っている野球部員と、崩れていくコミュニティを見てたまらない快感を覚えました。

その昔、無人島に大人数の男性に女性が１人だけという状況で遭難したことがありましたが、その時も男性たちはその女性を巡ってひたすらに殺しあいを続け、その女性も男たちの殺しあいを止めるどころか、逆に色仕掛けを使い殺しあいを煽っていたと言われています（諸説あり）

また、祖父の影響で時代劇が好きというのも、永原先生のために作った設定になっています。

永原先生は、忠臣蔵で悪役とされている吉良上野介から多大な恩義を受けており、大きな恩だけ受けておきながら、世論を動かせず、顔に泥を塗られ続けている現実に直面し、自分の無力感を日々嘆いていました。

あの場面で、さくらは無意識に永原先生のトラウマを抉ってしまったのです。

時代劇は好きであるものの、史実は詳しくないことも災いしてしまいした。

安曇川虎姫

１６２ｃｍ　４９ｋｇ　７９（Ａ）／５９／８０　髪型設定特になし

安曇川は湖西線安曇川駅より、虎姫は北陸本線虎姫駅より

虎姫ちゃんは、「がさつさが少し目立つ、普通の運動部女性」という位置付けになりました。

田村グループの女子としての登場で、リーダーがややチート気味なので、（テニスで世界1位になるだけでも結構なチートキャラですけど、個人的には蓬莱教授と優子よりはチート度は低いと思います）その辺りのバランスも考慮しつつ、登場させました。

初期には優子の女子力の低さを咎めることもありましたが、すぐに女子力で抜かれてしまい、優子を「体は弱いけど心は強い」と評しました。

優子は、自分が泣き虫なのもあってこれを否定してきますが、後にさまざまな立場の人から、同じ言葉を投げ掛けられるんです。

優子と接した人たちは、世間で思われている「強い女」は、実は違うんじゃないか？　という疑念を抱き始めています。

ちなみに、サッカー部ということもあって貧乳担当も兼任しています。

龍香たちから見ると、優子はもちろんのこと、永原先生と桂子も、「かなりうらやましい」と思われています。

ちなみに、作中では、貧乳の女子高生でも優子レベルの巨乳になると、肩こりが大変そうなのは理解できるみたいで、嫉妬はしますが嫉妬心はそこまで大きくないみたいです。

作中では大学編以降すっかり空気化してしまいましたが、個人的には「安曇川虎姫」というキャラクター名は気に入ってます。

永原マキノともども、読者に命名法則に気付いてもらうためのネーミングでもあります。

篠原浩介
１７４ｃｍ　７６ｋｇ　体脂肪率８％　髪型設定特になし
篠原は東海道本線篠原駅より
いわゆる「ヒーロー役」「恋人役」「旦那役」の男の子です。
物語のいきさつとしては、「ＴＳ娘は男と結ばれる」というのは最初から決めていたので、構想段階では優子の次に出来たキャラクターです。
本人もノーベル賞のスピーチで話した通り、この物語では、「世界一幸福な男」でもあります。
作中では性格が優一、優子によって頻繁に書き換えられています。
本来は責任感の強い性格で大人しかったものが、高校に入り乱暴者の石山優一に、大人しい性格などもあって頻繁に怒鳴り込まれて、性格が歪み始めてしまいます。
その裏では、「いつかぶちのめす」という負の感情から筋トレをはじめとした身体トレーニングを行い始めました。
しかし、優一をぶちのめすことは叶わず、優一は優子になって帰ってきます。
同じくいじめられ仲間だった高月章三郎と共に、他の男子なども巻き込んで、優子をいじめ始めてしまいます。
この時には、復讐心でかなりひどい精神状態になっていました。
その様子を見て、女子たちも優子の理解者が徐々に増え始め、形勢は不利になっていきますが、構わずにいじめを続行し続け、最終的には優子を大泣きさせてしまいます。
その後は、優子を殴ろうとしたところで、優子の泣く声と許しを乞う声に罪悪感を取り戻しますが、今度は罪悪感に囚われすぎてしまいます。
優子に許され、償いの心も克服し、最終的には優子を暴漢から守ったことで、優子が恋に落ち、その後文化祭で彼氏彼女となります。
この林間学校の実行委員は、女子は話し合いで、男子はくじ引きで、２人が選ばれ、ここから関係が本格的に進展します。

責任感の強い性格は戻りましたが、一方で優子という恋人が出来たことで性欲が爆発しました。
また、筋トレなども、「優一をぶちのめす」といった動機から、「優子ちゃんを守る」というものに代わり、浩介はそのたくましさですっかりメスになった優子ちゃんの心を捕らえていきます。
一方で、ＴＳ病の恋愛は大きな問題にもなっていて、いわゆる不老が故の「寿命問題」が存在しました。
彼は優子ほど成績もよくありませんでしたが、それでも新しい発見に貢献し、「大量生産」という意味で蓬莱の薬に貢献し、ノーベル賞に輝きました。
また、新しい蓬莱カンパニー社長という地位を手に入れ、莫大な資産を有するようになりました。
しかし、浩介は運が良かっただけというわけではなく、「優子ちゃんと一緒にいたい」という愛の力が、浩介を成功に導きました。
昼は頼もしく女の子を守ってくれて、夜はその身体能力も合わさって凄まじい性欲を見せてきます。
なので、昼は淑女夜は娼婦の優子とは、とても相性がよくなっています。
また、男特有の単純さも持ち合わせていて、優子の手で簡単に転がされてしまいます。ＴＳ娘ということで、男を転がすのも、とてもうまいのが優子です。
総じて、性欲が強めである点も含め、優子が女の子らしくなるにつれて、彼も男らしさを磨いていきました。
永原先生が看破したように、例え林間学校の実行委員に選ばれていなくても、優子はいずれ浩介に惚れて、結婚をしていたでしょう。
しかし、その場合は物語よりも、結婚や協会入りが遅れていた可能性があり、幸子の生存の目が消えてしまいます。
恋人同士になってからは、責任感の強さから、「一線は越えない」ものの、その範囲で性欲を見せつけて、役得になり、高月らクラスの男子からは嫉妬されてもいました。
行動力もあり、告白、プロポーズは、浩介の方から行いました。

後夜祭でのプロポーズシーンは、恋愛パートでは作者のお気に入りです。

ちなみに、エロパートは高3夏でのプールとキャンプ場に行く間のセクハラ三昧と、家事手伝いの見返りとしてのスカートめくりシーンがお気に入りです（笑）

ちなみに、常時登場している主人公の優子の次に登場回数、呼ばれた回数が多いのが篠原浩介でもあります。

浩介の両親

篠原浩介の両親で、作中では優子視点で、浩介くんのお母さん（お父さん）→「お義母（義父）さん」→お義母（義父）さんと呼び方が変わります。

優子との結婚後は、そのまま石山家両親の立場を引き継ぐ形になりました。

しかし、義母は実母に比べて「家事が下手で、初期は優子に料理のうでで負けてしまっていた」「母さんのような暴走傾向はなく、また優子があまりにも出来すぎていたのもあって、姑のいびりはない」といった特徴があります。

料理については、優子に習うことで、優子と遜色ない腕前に成長しています。

ちなみに、家事の上手さで勝てたことは、優子にとって女としてのプライドをより一層高めることになり、小谷学園のミスコンと並んで、優子の自尊心の原動力にもなっています。

高月章三郎

身長体重髪型設定なし。ただし篠原浩介より小柄

高月は北陸本線高月駅より

父親が整形外科位の跡継ぎ長男です。

恋愛ものでよくある「モテない悪友」ポジションで、もし浩介がTSしていたら、彼もしくは優一が彼氏ポジションだったでしょう。

主人公は優子でしたが、役割はほぼ変わらずで、優子と浩介がい

ちゃつくのを恨めしそうに、そして悲しそうに見つめつつ、優子を独占している浩介への嫉妬を押さえきれずに発狂してしまうまでがほぼパターン化してました。

最終的には、浩介の後夜祭でのプロポーズ劇で考えを改めた訳ですが、ある意味で彼が一番かわいそうなキャラクターかもしれません。

浩介と並んで優子をいじめ、あの時は場合によっては優子からは浩介以上に嫌われていたにもかかわらず(実際、女子に殴られた回数は、彼が2回、浩介が1回でした)、優子は浩介を選び、その後はモテない男のひがみを連発してしまい、ものの見事に2人の踏み台になってしまいました。

もちろん、林間学校のくじ引きで実行委員に選ばれたとしても、彼では優子は惚れなかったと思います。

結局、元の性格の差が、2人の運命を分けたでしょう。

とはいえ、彼も「カリスマ整形外科医」の名声を得ているため、いいお嫁さんが来たことは想像に難くないのが救いでしょう。

坂田舞子

１６５ｃｍ　８６（Ｄ）／６１／８３　ピンク髪　優子ほど長くはないやや癖のあるロング

坂田は北陸本線坂田駅より、舞子は湖西線近江舞子駅より

天文部の部長さんです。

いわゆる「温厚で育ちのいいお嬢様キャラクター」です。

蓬莱の薬の開発による不老化で、寿命問題を解決させるというエンディングを考えた時に生じるのが、「人口急増問題」です。

そしてその解決法は、安直ですが宇宙開発です。

そこで、木ノ本桂子を天文系のキャラクターにし、天文部を作ることで、部長として坂田舞子というキャラクターが出来ました。

言うなれば、エンディングの時に残る「不安感」を解消させるためのメタとして、また設定のインパクトが極めて強い永原先生を大きく見せすぎないためのメタとしても、天文部や宇宙の描写は書き初めの頃には既に大まかに出来上がっていました。

ただし、3年生になって、更に大学に入ってからの天文部の状況はほぼ考えていませんでした。

小谷学園卒業後にも、ちょくちょく登場機会を設けましたが、1年先輩という立場上、なかなか絡めるのは難しかったです。

ちなみに、坂田舞子という名前も、永原マキノや安曇川虎姫と同様、命名法則に気付いてもらうためのネーミングでもあります。

守山会長

身長体重髪型設定なし

守山は東海道本線守山駅より

いわゆる生徒会長さんですが、お仕事は多くなく、ほぼ「第2文化祭実行委員」と化しています。

ミスコンの時には優子もお世話になりましたが、それ以降は殆ど登場機会がありませんでした。

まあ、無理に作る必要もないでしょうし。

唐崎裕太

身長体重設定なし　髪型、丸刈り

唐崎は湖西線唐崎駅より

志賀さくらの恋人で、小谷学園弱小野球部のエースも勤める。

野球の腕は弱小部相応で、他の部員からは「唐川裕児」というあだ名で呼ばれています。元ネタは言うまでもないでしょう。

ちなみに、志賀さくらとは「歴史好き」で馬が合い、また彼自身も悪口を言う部員のことを快く思っておらず、さくらによる野球部破壊を黙認してしまっていました。

他の部員は軽い自虐ネタとしてのいじりのつもりでも、彼は本気で嫌がっていた節があります。

こういう雰囲気は、まさに弱小という感じですね。

とはいえ、彼も男ですから、仮に野球部の雰囲気がよくてなおかつさくらのためにコミュニティが崩壊したとしても、彼女のままでいる限り、独占の優越感に負けて、最終的にはさくらを優先させたとは思

いますが。

能登川明美

身長体重髪型設定なし

能登川は東海道本線能登川駅より

姉の麻美と共に、いわゆる「ミスコンに出てるそこまではかわいくない女の子」のポジションです。

言うまでもなくちょい役で、セリフ上必要になったモブキャラクターです。

もちろん、優子、桂子、永原先生といった美少女たちになすすべもなく蹂躙されてしまいます。

自己顕示欲は強いですが報われません。可哀想ですが。

中庄達也

身長体重髪型設定なし

中庄は湖西線近江中庄駅より

天文部の後輩で次期部長であり桂子の彼氏、当初は下心満載で天文の世界に入り込み、やがて夢中になってしまうという黄金パターンです。

物語自体が長編になったので、カップルの数も多く、それぞれに物語が作れそうな感じがします（ただし、作れるというだけで、実際にこの物語より面白い物語になるかは可能性として低いですが）

最終的に、桂子が優子の指導もあってよく男心を理解したため、そのまま結婚まで長続きしました。

案外、優子を始めＴＳ病患者がもたらした恩恵は、こうした破局カップルの激減にあるのかもしれません。

小野先生

身長体重髪型設定なし　物語開始の２０１７年時点で５０代　ただし蓬莱教授より年上、教頭先生より年下

小野は湖西線小野駅より

名前としては優一、桂子の次に出てくるキャラクターです。
学年主任の先生で担当科目は数学、やや頭が固く頑固な傾向があるとされていますが、優子への間違った配慮は、むしろ「中途半端に頭が柔らかくて災難になってしまった」という方が正確かもしれません。永原先生が看破したように、もし彼が性別を男か女かしか認めない頭の固い人間だったなら、むしろ優子を女性扱いしたでしょう。
また、数学の授業も生徒からは分かりにくいという不評があるものの、優一からは擁護されていました。
災難な先生で、自身の授業中に優一がＴＳ病に倒れて授業をめちゃくちゃにされたり、よかれと思って行った体育の着替えの配慮も、結果的には悪手で、意思を曲げなかったことで散々な目に遭ってしまいます。
「新任の若輩者」と思っていた永原先生が、実は小学校時代の恩師であったため、優子のクラスの女子生徒の前で黒歴史を暴露されたあげく弱みを握られて実権も奪われ、体よく利用される名ばかり学年主任になってしまいます。
挙げ句の果てには永原先生と教頭先生の板挟みになってしまい、ここでも脅迫されたり、ミスコンでも永原先生に投票するように活動させられるなど、とにかく運がない中間管理職の悲哀を体現したような人物になりました。
３年の後夜祭の時に、永原先生自身からの反省の弁もあり、ようやく解放されました。
その後も、卒業生となった優子たちと、昔を懐かしめる程度には回復したようである。
蓬莱の薬が発売された時には既に６０代で保証対象外なので、エピローグ時点では寿命死したものと思われます。

草津先生
身長体重髪型設定なし
草津は東海道本線草津駅より
前半は「体育の先生」という名前で登場していましたが、物語の都

合上後半に「草津先生」の名前を与えました。
厳格なイメージのある体育教師ですが、非体育会系の小谷学園では、体育の先生も温厚な性格をしています。
体育が大の苦手になった石山優子を支えると共に、石山優一を懐かしんだ数少ない人物でもあります。

教頭先生
身長体重髪型設定なし　２０１７年の物語開始時点で５０代
教頭先生は、「中途半端に頭が柔らかくて災難を起こしてしまった」というキャラクターになりました。
林間学校で、優子を男子とも女子とも離して教師の部屋に入れるという判断は、小野先生もですが、優子の女の子としてのアイデンティティーを深く傷つけるものでした。
小野先生のように大きな弱みがあるわけではないので、永原先生は彼の朱子学を好んで「長幼の序」を重んじた性格を利用し、全校へ自分の正体をばらした上で蓬莱教授や校長先生にまで応援を頼むという多大な犠牲を払って勝利を納めました。
永原先生は自身の正体を殆ど話すことはなく、「教え子が同じ病気になったのも初めて」だったため、何としてでも救おうとこのような形になりました。
最終的には少しずつですが、永原先生は自分の秘密を世間に話すようになりました。
これも、優子が永原先生の心を開いたという証拠です。

校長先生
身長体重髪型設定なし　２０１７年物語開始時点で６０代
校長先生は、生徒から見ると遠い存在で、優子や永原先生を気にかけていつつも、影から見守るというスタンスを取っています。
非常に温厚で、人間を大事にする性格で、３代目の校長先生です。
小野先生と同様に永原先生の元教え子で、永原先生と北小松貴子が同一人物であることを感づいて起きながらも、なかなか一歩踏み出せ

ずにいました。
彼の最大の見せ場は、永原先生の「青春」「学園」といったコンプレックス救済のために、永原先生に生徒体験をさせてあげたところです。
ちなみに、物語の最終盤に出てきた理事長先生とは親戚です。

理事長先生
身長体重髪型設定なし
最終章終盤に登場した学校法人小谷学園の理事長先生です。
この頃の小谷学園は、ノーベル賞受賞者の篠原夫妻と、プロテニス選手の田村恵美、ＪＡＸＡで宇宙開発を行う木ノ本桂子などを輩出していて、人気が集中して難関校化しています。
特にノーベル賞を受賞し、不老技術を作って会社をおこし、世界一の資産家ファミリーになった篠原家と、永原先生の人気すさまじく、篠原夫妻と永原先生との記念館が出来てその交渉役として学園代表として登場しています。
永原先生には頭が上がらない様子です。
この記念館描写は、いわば「優子たちの世間体」を示しています。
つまり、若いうちから母校に記念館ができるほどの人物というわけです。
こうした地位や名誉も全て、優輝を産んでからの幸せへの踏み台としての役割を背負っています。

稲枝弘子
１５３ｃｍ　５２ｋｇ　８９（Ｆ）／６０／８１　髪型設定なし
遺伝子型設定なし
稲枝は東海道本線稲枝駅より
優子の後輩患者で、２０２２年度小谷学園入学の２００６年生まれです。また、彼女は優子後に永原先生がカウンセラーをしています。大きな問題がないもののカウンセラーが変わるのは異例ですが、小谷学園に入ったのでそれもまた当然でしょう。
また、永原先生にとっては２人目のＴＳ病の教え子でもあります。

弘子さんは、優子と浩介との制服デートイベントを起こすために考案されたキャラクターで、いわば「使い捨て」に近いキャラクターです。

それでも、物語内世界では彼氏が出来たりしつつ、悠々自適な生活を送っています。

よくも悪くも、ノウハウが完成された後の、女の子として生きたＴＳ娘でした。

ちなみに、元々は「稲枝喜美枝」という、大学編からの女の子ポジションキャラクターがプロットに存在しましたが、桂子に吸収されてオミットされたので、稲枝の名字は彼女に使われました。

塩津悟／塩津幸子

幸子：１５９ｃｍ　５６ｋｇ　９２（Ｇ）／６０／８９　水色髪、ショート　遺伝子型α型

塩津は北陸本線、湖西線近江塩津駅より

幸子さんは、日本性転換症候群協会のエピソードを採用してから作られたキャラクターになります。構想時には影も形もありませんでした。優子の２歳年上の大学生です。

優子とは違い、当初は「俺は男だ」と息巻いている典型的なＴＳ娘で、ある意味で優子よりもＴＳものとしては主人公らしいかもしれません。

なので、当初のプロットに存在しないキャラとしては、作者一番のお気に入りで、特に夏の海辺で、２度告白してゲットした彼氏の膨れた股間に興奮したり、暴漢から身を守った彼氏にメロメロになるところは、書いてて感慨深かったです。

幸子が作られた経緯は、ＴＳ娘として成熟し、彼氏ができた優子が、今度は後身の指導に当たるという流れを書きたくなったからです。

直接に都市名は出てきませんが、幸子は仙台市に住んでいます。

ＴＳものではありますが、母親が暴走気味ではなく、「悟の意思を尊重する」という名目で、ジャージや男時代の服を着続けることを黙認してしまいました。

これによって、ドツボにはまり、東北を担当していた余呉さんからも匙を投げられるという有様でした。

カウンセラーが優子に変わると、汚い言葉を吐き続け、性別適合手術を口走るまでに状況が悪化し、最終的には優子にひっぱたかれてしまいました。

最後は弟と喧嘩になり、優子に言いつけられた通りに、サッカーで鍛えていたためにいつも喧嘩で勝っていた弟にボコボコにされ、痛みに耐えきれず泣き出して、優子に優しく包容された時に、彼女の中に初めて「幸子」が生まれました。

その後は、服選びに連れていかれ、下着や服を選ばされました。

ちょうど、序盤に優子も体験した女の子の服のエピソードを、今度は母さんのポジションから体験したものです。

女の子の下着を穿いていないとして試着室に戻されて、「穿くまで出してあげない」と言われて、いざ穿いて見ると女の子のパンツの穿き心地がとてもいいことに気付き、結果的にそこから男を捨てる第一歩になるのも、優子とほぼ同様です。

その後は、しばらくまた母親の間違った良心で一旦状況が悪化するも、東京で優子と一緒に遊び、最終的には漫画喫茶の女性専用スペースや、共同浴場の女湯に入れられても女性から何も叫ばれないのを体験し、本格的に女の子としてのアイデンティティーが出来た。

地味な格好で来たときに、通行人からも、おしゃれしている優子と比べ、「センスがない」などと陰口を叩かれたのを悔しく思うようになり、ここから女性の人格が確固たるものとなりました。

そして、カリキュラムを、今度はカウンセラーの立場で見ることになりました。

一般的な「成績優秀」な子の状況を見て、自分がどれだけ恵まれていたかを優子も自覚します。

その後も、小谷学園の球技大会での恵美と浩介のテニス対決を提案したり、優子や歩美と共に広報部で活動したりもします。

優子ほど急でなくても、女の子として着実に成長した彼女は、女の子になって2年でついに好きな男の子が出来ます。

ＴＳ娘の彼氏としてはとても多い、旧友への恋で、１回目の告白の時は、「悟を思い出す」として断られてしまい、優子に相談して、２回目には手を取って胸を触らせる色仕掛けで見事落とし、これをきっかけに男の体、特に下半身を見て興奮するようになり、彼女の中で女が強くなりました。

夏場の海では、勃起した直哉を見て甲高い声をあげ興奮したり、ナンパ師から身を守った直哉に対してメロメロに心を奪われる所を見て、最終試験の紙を手渡され、合格しました。

その後も、優子が育てた最初のＴＳ娘として、在住地は遠いものの、出番の数は多くなりました。

大学卒業後はＯＬ後に専業主婦、結婚こそ優子より遅かったですが、出産は優子より早く、物語最終盤では、先輩ＴＳママとして、優子を指導する立場になりました。

優子同様にＴＳ病患者の例に漏れず母性が強く、赤ちゃんを産んで、赤ちゃんから離れたくない一心でそのまま専業主婦になりました。

髪は水色髪ショートで、女性化が進んだ後は、私服もかなり派手でおしゃれなものを着るようになりました。

お人形さんのような美少女で、優子からは、その気になればあたしをも脅かす容姿と評価されていますが、世間の評価ははっきりと優子が上と認識されています。

直哉さん

身長体重髪型設定なし

幸子の悟時代からの親友で、サッカー部のチームメイト。

幸子とは高校からのサッカー仲間で、特に親しい相手でした。

女の子になった幸子との関係も、なるべく以前と変わらないように勤めましたが、これも幸子が当初追い込まれた原因のひとつになっています。

その後も、幸子をサッカー部に入れてあげて、友人付き合いを継続しますが、女として恋をし始めた幸子に告白されます。

最初こそ、「悟を思い出す」と拒否しますが、２回目に胸を障らされて興奮してしまい、また幸子の女の子としての魅力にも気付き、カップルとしての付き合いがスタートします。
男心を分かるＴＳ病患者なので、やはり付き合いは安定し、結婚、出産となって夫として幸子を支える日々を送っています。

塩津徹
身長体重髪型設定なし
幸子の弟として登場します。
彼は物語の舞台装置として、「喧嘩でいつも勝っていた弟に完膚なきまでに叩きのめされる」という幸子の体験のために作られたキャラクターです。
この体験で、弟に泣かされた経験は、彼女を女性として生きていこうと思わせる大きなきっかけになりました。

山科歩美
１６６ｃｍ　６０ｋｇ　９９（Ｈ）／６５／９０　薄紫髪、セミロング　遺伝子型β型
山科は東海道本線、湖西線山科駅より
歩美さんは、優子にとっては２人目のカウンセラーを勤めた患者で、高校３年生の部から登場します。
山科の名字は、元々は蓬莱教授の名字でしたが、湖西線を命名法則に加えたことで蓬莱教授が蓬莱の名字を得て、代わりに空位となっていた山科に、やはり元々構想に存在しなかった彼女を入れました。
協会の知名度が上がり始めた時期なので、優子と同じ更衣室問題も入れました。
修学旅行で出てくる京子さんも含め、幸子さんのエピソードを書いてから、「ＴＳ病患者の様々な反応」を書きたかったので書きました。
幸子さんが一番危険なパターンで、他にも「女の子として生きるしかないという理屈が先行している人」や、「自殺への恐怖が強い」といった歩美さんのパターン、更には間違った指導を試みて患者を自殺

に追い込んだ明日の会も登場します。
大学編以降は、幸子さんと共に協会の広報部長になった優子を支え、また「不老への興味」から、佐和山大学にも入学します。
そしてこれがＴＳ病の遺伝子メカニズムの解明に大きく貢献するのです。
β型遺伝子の発見から、更にはγ型を優子が解明し、そこから歩留まりを浩介が改善させたことで、優子たちのノーベル賞受賞を大きく後押しする結果になりました。
その後も、居住地の遠い幸子さんに代わって、「後輩ＴＳ娘」の立場として役割を勤めあげてくれました。
大学の上級生編では、夏に海にいく場面があり、結婚して処女も旦那に奪われ、すっかり女の子になりきったけどまだ女の子歴は短い優子と、彼氏もできてこれからどんどん女の子になり始める幸子、そしてまだ彼氏もおらず恋愛も分からない、男がまだ大分残っている歩美に加え、女の子歴の長いが恋愛歴はほぼ皆無の永原先生、女の子歴も長く恋愛、結婚、死別経験もあり子孫が多数いる比良さんに、詳細は不明の余呉さんと、色々な立場のＴＳ娘が出てきて、差別化が大変になってきました。
そんな歩美さんは、大学の演劇部でアレンジされた浦島太郎で助っ人を勤めあげ、その時に好きでもない人に告白する演技の辛さを思い知り、思いを寄せていた大智くんに告白します。
歩美さんは、大学卒業と共に卒業し、以降は出場機会が激減してしまいましたが、ある意味仕方ないと思っています。

健太さん／京子さん
身長体重髪型設定なし　遺伝子型設定なし
修学旅行が関西だったので、ちょうど関西で新しい患者が現れたとのことでついでのような形で面談しました。
ＴＳ病になった患者の反応ということで、殆ど使い捨てに近いようなキャラクターになってしまいましたが、カウンセラーも関西支部の正会員がすることや、「遠方在住」の患者という意味では余呉さんや幸

子さんと重なるという悪条件もありました。

比良道子

１４５ｃｍ　４１ｋｇ　７８（Ｄ）／５３／７６　深緑髪、ポニーテール　遺伝子型β型

比良は湖西線比良駅より

比良さんは、協会を物語として出す際に生まれました。

柔らかい物言いの副会長さんですが、過去には水戸藩では尊皇攘夷運動を行っていました。

ちなみに、藩という呼称は江戸時代には用いられずに領分と呼ばれていましたが、比良さんは「元水戸藩士」を名乗っています。

永原先生の流儀では「徳川中納言殿家来」や「水戸中納言殿家臣」といった言い方になるわけですが、幕末期には藩や藩士の呼称が広まり始め、明治に正式名称になりました。

この辺りは、永原先生とのジェネレーションギャップがあるでしょう。

江戸時代後期生まれの比良さん余呉さんと、戦国時代前期生まれの永原先生とは、度々ジェネレーションギャップを引き起こしていまして、本小説の名物にもなっています。

ちなみに、身長はほぼ江戸時代女性の平均ですが、胸は相変わらず大きいです（ＴＳ病患者の中では小さい方ですが、当時の栄養状態を考えれば物凄い巨乳でしょう）

余呉さん、永原先生と共に「三長老」とも呼ばれていますが、自らの魅力に気づいているため、幼い格好をすることも多いです。

優子が自分のコンプレックスから幼さを強調するのに対し、比良さんは男の本能に訴えるためにあえて幼い格好をしています。

ＴＳ病患者は、男の好みが分かり、またそれに基づいた行動を平気で取れるため、一部の女性からかなり妬まれてしまうそうです。

ところが、彼女たちはそうした妬みも非モテ女の妬みだと簡単に見抜いてしまうのでノーダメージになってしまいます。

結果的に、ブスをますますブスにしてしまうのもＴＳ病患者の特徴

です。

余呉さん

１４１ｃｍ　３７ｋｇ　７７（Ｄ）／５３／７８　銀髪、縦ロール

遺伝子型α型

余呉は北陸本線余呉駅より

余呉さんは協会の東北支部長兼統括支部長ということで、協会では事実上のナンバー3です。

副会長の比良さんの7つ上で、アルフレッド・ノーベルと同い年なのは例によって偶然です。ただし、生まれた月から歴換算すると、ノーベルより余呉さんの方が先に生まれています。

農民の生まれで、武士だった比良さんと比べ教養がやや劣っていたのもあって、副会長は譲ることになりました。

余呉さんは、「単純に2番目に年上の人が副会長はつまらない」という思いから生まれました。

ただ、幕末で日本が混乱する前にＴＳ病になるのも不自然なので、年齢差は7歳となりました。

江戸時代は、1年から数年に1人の割合で新しい患者が発生してましたが、例によって生き残っているのは幕末生まればかりです。

比良さんや余呉さん、その他の江戸生まれのＴＳ病患者は、幕末明治の混乱に乗じて生き延びた人たちでした。

翻って戦国以前の生まれで長命なのが永原先生だけなので、戦国時代以前よりは治安はマシだったということでしょう。

余呉さんは、比良さん以上に小柄な体格で、これは江戸時代当時の女性としても小柄な部類になります。

もちろん優子からは「外見年齢１８歳」と評されてはいるものの、顔も幼めで、比良さん以上にロリコン狙いが強いキャラクターです。

また、女性向けの極甘スイーツの上に砂糖をまぶすほどの甘党で、甘党だらけのＴＳ病患者の中でも特に甘いものに目がありません。

蓬莱伸吾

１７４ｃｍ　６５ｋｇ　ほんの少しだけ白みがかった黒髪、短髪
蓬莱は湖西線蓬莱駅より
蓬莱教授は、不老設定を導入したとほぼ同時に作り上げたキャラクターです。
主人公とヒーローとの死に別れを解消することが、彼の役目でした。
要するに、「創作物までバッドエンドを見たくない」「一流の悲劇より三流の喜劇」という風潮の強いインターネットで、受けの悪いバッドエンドを回避するのが、蓬莱教授に与えられた役目でもあります。
プロットの最初期から存在するキャラクターで、京都某ＩＰＳの人を１０歳若くしてダークサイドを強調したイメージです。
物語開始時点で５０代、蓬莱の薬で完全不老になったのは６０代で、保証年齢を過ぎていたため、彼は遠い未来で「世界最高齢の男性」の称号も得ました。逆に言えば蓬莱教授よりも年上の人はＴＳ病の女性しかいないということです。
当初は、「山科伸吾」というキャラクター名の予定でしたが、あまりにも露骨なので別の名字を考えて路線図を眺め、京都以西を命名法則から外し、代わりに湖西線と北陸本線を命名法則に入れて、説明不要の不老不死伝説がある「蓬莱」という名字を着けました。
ちなみに、現実の蓬莱駅の近くには、蓬莱山という山が実在していますが、仙人はいませんし、ここの玉枝を取ってもかぐや姫と結婚はできません（笑）
序盤は典型的な「味方のマッドサイエンティスト」のイメージですが、彼の場合はそうした研究が人々の支持を集め、恩恵を与えているので、やや生命倫理を無視する傾向にあるとしても、「マッドサイエンティスト」の評価は多いに異論があるでしょう。
口調がやや乱暴で、実績を伴いつつその上で尊大というキャラクターなので、誤解を集めやすいという側面もあったと思います。
一方でカリスマ性も強く、寄付だけでビリオネアになってしまう程に人々、特に富裕層からの熱狂も集めています。
作者も、蓬莱教授はいわゆる「お助けキャラクター」として設計し

たため、予定通りチートキャラになりました。

ただ、終わってみれば優子の方がチート度は上だったかもしれません。

高校編では顔見せ程度に出演させ、大学、大学院では永原先生に代わって出場機会が増えました。

優子や浩介の「内面が」成長したため、先生役も、「高校の親しみやすい先生」から、「偉大な大学教授」に変わりました。

名誉や栄典には興味はほぼないものの、ノーベル賞だけは愛着を持っています。

また、自尊心の高さから反対者に対しては、時に容赦のない対応をすることもあります。

特に研究を妨害する同業の学者や、宗教から否定する牧師等には、容赦ない制裁を加え、また死刑よりも残酷な報復措置を加えました。

この辺りは、永原先生と意気投合した影響もあります。永原先生は戦国時代を経験しているため、こうした「一番嫌がる苛烈な処置」を知っているのでしょう。そうした措置を躊躇なく実行できるところが蓬莱教授らしさかもしれません。

蓬莱教授の天才性に永原先生の人生経験が入り込むと、まさに手がつけられない状況になるのは、想像に難くありません。

宗教感は科学者らしく典型的な無神論無宗教であり、更に踏み込んだ「積極的アンチ宗教」でもあります（倫理を無視する傾向も、ここから来ています）

これは、キリスト教嫌いではあるものの、神道寄りながらも神仏衆合の伝統的宗教感を持つ永原先生とも一線を画しています。

蓬莱カンパニーを設立し、個人では世界一という莫大な資産を築きつつも、それに溺れることなく次なる研究を進めました。

結果的に、彼を批判していた人々も、次から次へと蓬莱教授の軍門に下ることになります。

瀬田博

身長体重髪型設定なし

瀬田は東海道本線瀬田駅より
瀬田助教は、いわゆる「偉大な学者に心酔する助手」のポジションで設計されましたが、物語を書いてみると意外に登場機会は少なくなってしまいました。
佐和山大学の関係者は、蓬莱教授を除き高校編ほど時系列が濃くないのもあって想定より出場機会が少なくなりました。
とはいえ、直接出てないだけで、色々なところで活躍はしているんですよ。助教から准教授、そして教授になっていますから学者としてもそれなりに優秀な人なんです。描写がないだけで。

河毛教授
身長体重髪型設定なし
河毛は北陸本線河毛駅より
応用数学を専門とする教授です。
蓬莱教授と交流がある大学教授で、蓬莱教授のような飛び抜けた業績はないものの、学者としての業績はきちんと持っています。
彼もまた、普通の大学教授と偉大な大学教授との対比として出しましたが、出場機会には恵まれませんでした。

和邇友蔵
身長体重髪型設定なし
和邇は湖西線和邇駅より
通称和邇先輩で、大学の先輩役です。
成績はよかったため、最終的には蓬莱カンパニーで取締役に就任しました。
ミスコンの審査の他、大学の先輩というポジションで優子たちをアドバイスしてくれる立場です。
こちらは、それなりに出場機会に恵まれたと思います。
大株主にはなれずとも、取締役として、若くして相当な収入を得ています。

野州康平
身長体重髪型設定なし
野州は東海道本線野洲駅より
林間学校のバスガイドの野州康平は、文字通り物語を動かすための使い捨てキャラクターです。
胸が大きくかわいらしい優子を強引にナンパして、優子に恐怖を与え、助けた浩介に優子が恋をするという目的で作られました。
結果的に、この行動が仙台の大学生の命を救ったことになるわけですが、もちろん無能な作者は当初この事実に気付いていませんでした。

安土先生
身長体重髪型設定なし。優子よりは年下
安土は東海道本線安土駅より
最後の妊娠編での登場になります。
妊婦となった優子を助産師さんと共にサポートしてくれるキャラクターです。
決してやぶ医者ではないが、世界一の資産家でＶＩＰ客たる優子の主治医を任される程度には優秀と思われます。

高島さん
身長体重髪型設定なし
高島は湖西線近江高島駅から
新鋭のインターネットメディア、「ニュースブライト桜」の記者で、協会の独占取材に成功させ、知名度を押し上げた立役者。
マスコミ嫌いだった永原先生が、「この条件ならどこも取材しないだろう」と突きつけた取材条件を全て受け入れる度量の持ち主で、作中でも数少ない、永原先生を完全に出し抜いた人物です。
作者も個人的にはマスゴミが嫌いなので、物語では悪役として登場し、蓬莱教授の支持率が上がると途端に絶賛報道する、成田空港で優子たちに出し抜かれるなど卑しい面が強調されています。

ただし、この高島さんについては、一貫して協会と蓬莱教授を擁護し続ける報道姿勢を見せて男を上げました。

総理大臣、官房長官、官房副長官

優子や蓬莱教授たちが会談した政府与党の関係者で、２０２０年代の時系列で、名前は特に出てきませんが、総理大臣のイメージモデルはＡ氏、官房長官のイメージモデルはＳ氏です（笑）

当初は言うまでもなく、荒れやすい政府や関係省庁など出す予定はなかったのですが、反対派の勢力を出したためになし崩し的に出さざるを得なくなりました。

作者の無計画ぶりが、彼らを物語に引き寄せたということでしょう。

霞ヶ関の官僚たち

色々な省庁の関係者が、それぞれの省庁の利害と国益などを練り合わせています。

蓬莱の薬が社会にもたらす影響は甚大なため、関係省庁のほぼ全てが、政府と蓬莱教授、更には日本性転換症候群協会と意見の擦り合わせを行いました。

言うまでもなく蓬莱の薬は架空の存在であり、また作者は国家公務員でもないので、もしこの薬が実現しそうになったからといって、本当にこんな感じに各省庁が動くかは分かりません。

牧師

反対勢力のリーダーとして出しました。

軽めの小説とはいえ、蓬莱の薬に世論が賛成一辺倒なのはさすがによくないだろうという軽い気持ちで登場させました（決まった名字がないのもちょい役の予定だったせいです）が、これのために大学編以降も物語が肥大化したと言えるでしょう。

いわゆる「ウリスト教」のような、教義を都合のいいように解釈する人物をモデルにしています。

いわゆる「パヨク」と呼ばれる人々をモデルにしていますので、協

会や蓬莱教授に対しても否定的で、特に協会に対しては、「おばあさんの集団」「多様性がない」などの言いがかりをつけるなど完全な悪役になりました。

協会、蓬莱教授への反対運動として、反対活動を続けつつ、まずは日本性転換症候群協会のＴＳ病教育として、「協会に多様性をもたらす」という独善的な目的で、「明日のＴＳ病患者を救う会」を設立し、協会が「やってはいけない」とされる、「男とも女ともつかない存在」として教育させ、更に優子の策略もあってクラスからも孤立し、「トランスジェンダーとして、性別適合手術を受けさせる」という最大限の禁忌を犯した。

案の定患者はすぐに自殺してしまい、世間の信頼を失ったばかりか、その歳にも協会へ責任転嫁したため、信用は徹底的に失墜、蓬莱教授の研究への反対デモも返り討ちにされ、国外逃亡を余儀なくされた挙句、国際反蓬莱連合での活動も、既に世論の大勢は決しており、ついには消息不明となってしまいました。

とにかく、やることなすこと全てが裏目裏目で、最終的にはフェードアウトという末路になりました。

どこかで引いて、自らの過ちを認めて謝罪していれば、まだ違ったのかもしれませんが。

マスコミ

メディア、報道陣の勢力も、頻繁に登場します。

作者はいわゆるマスゴミが嫌いなので、基本的には「悪役」としての登場です。

偏向報道を当たり前に行うため、協会は徹底的に取材拒否し、また蓬莱教授も、怖いもの知らずの週刊誌を罠に嵌め、更に蓬莱の薬そのものも、非融通の脅しをかけて力関係は逆転、一転して蓬莱教授や日本性転換症候群協会を絶賛する報道に終始する。

しかし、「あえて無能な味方を演じる」など、最後までそのいやがらせ精神は治らなかったですし、おそらくこれからもそうでしょうね。

モテない女たち

主人公たちに悪意を持つ女性たちで、いわゆる「女の敵は女」を体現した存在です。

少しでも自分を磨けばいいんですが、優子を見て嫉妬しかできないかわいそうな存在です。

優子は、「男が女の気を引くために当たり前のように女に媚びているんだから、女だって男の好みに合わせ、男に媚びるのは当然のこと」と考えていて、これがどうやらモテない女にとっては気にくわない模様です。

ただし、優子が絶世の巨乳美少女なのも手伝って、モテない女が優子に喧嘩を売ったり、否定的な感情を持っても、優子に返り討ちにされてしまいます。

協会のＴＳ病患者たち

日本性転換協会には、ＴＳ病患者の大半が所属しています。江戸時代以前の生まれから平成の生まれまで幅広く存在し、最も多いのは昭和生まれで、会員数は３００人未満。

自殺への道を免れた患者さんなので、成績が優秀な人が多く、大抵の人は女性としての人格を既に完成させています。

女性として生きる道以外の道を選んでしまった人は、全て自殺の結末をたどったことや、発病例の８割が日本人のため、「多様になりようがない」組織で、その事を牧師に「多様性がない」と言われてしまいます。

これは、不可能要求といってもいいでしょう。

そのため、恋愛話や甘いものなどが大好きで、優子からは「女子会」と称されています。

ＴＳ病患者は、巨乳の美少女が多く、また生理は重めで甘党で、安産の傾向があります。

優子のクラスメイトたち

小谷学園での優子たちのモブクラスメイトです。

元々男女共に１６人でしたが、優一が優子になったので、男子１５

人女子１７人のクラスになっています。
優子の置かれた状況を鑑みて、３年生に進級した後も、同じクラス編成になりました。
女子は木ノ本桂子をリーダーとするグループと、田村恵美をリーダーとするグループに別れていて、優子は桂子寄りになりつつもどちらのグループにも属さず、やがてグループは和解への道を進みました。

篠原優輝
優子と浩介との間に産まれた長男、ノーベル賞授賞式の夜に受精し、優子のお腹の中で育ち、２０２８年９月３日に出生したという設定になっています。
ちなみに、子供を産むための行為は、浩介くんの理性を吹き飛ばし、本能をむき出しにしてしまいました。
産まれた日には特に意味はありません。授賞式の夜に妊娠が始まったため、そこから常識的な出生日を割り出しました。
ＴＳ病患者の出産の母性愛は凄まじいものがあり、優子もその例に漏れませんでした。
優輝は、男の子の赤ちゃんで、「優しく、輝くような男の子になってほしい」という願いが込められています。
また、「優輝」は「勇気」にもかけられていて、浩介くんのように責任感と勇敢さを備えた男の子になって欲しいという願いもあります。
妊娠が進むにつれ、優子は優輝への思いを募らせていき、出産の時は陣痛に耐えながら、優輝の名前を叫ぶまでに、母性が強くなっていました。
長男が生まれたことで、優子は「幸福」への解答を得る事が出来、物語が終わりました。

# 世界観紹介

ここでは、本作「永遠の美少女になって永遠の闘病生活に入った件」の世界観紹介となります。

物語の部隊や用語などの中で、主要なものを紹介していきます。

## 基本的な世界観

本小説、「永遠の美少女になって永遠の闘病生活に入った件」は、主に現実世界の日本が土台の舞台になっています。

本小説は主に２０１７年５月から２０２８年９月という時系列で運用されました。物語の半分は２０１７年と２０１８年で構成されています。

例えば大学２年の２０２０年には、優子たちが東京五輪を観戦したり、完成した八ッ場ダムを見物したり、鉄道車両の引退や登場など、様々な実在、あるいは予定された出来事が登場しています。

基本的には、数年前の政権交代を機に、長引く不況から脱出し、好景気が続く明るい世界観で書かれております。

また、蓬莱の薬が存在し、それに優子たちが積極介入するため、物語序中盤は「現実の日本にＴＳ病が存在する」程度の違いしかなかった世界観が、時代が下るにつれて、現実世界との時系列差も大きくなり、大きな違いが出始めています。

それはとにもかくにも、一介の女子高生に過ぎなかった優子が、大きな存在になり、世の中に影響を与えるようになったからと言えるでしょう。

高校編では、「人手不足」という言葉でのみ語られていた景気も、大学編に入ると、「好景気を実感できないのは感性がおかしい」といった描写や、「高級ラーメン」と称する値段の高い屋台に人々が行列を作るなど、随所に好景気の描写が挟まれています。

優子たちは、物語最終盤に渋谷区松濤に引っ越すまでは、首都圏の政令指定都市の一軒家に住んでいました。小谷学園や佐和山大学もここにあります。

つまり、優子たちはさいたま市、千葉市、川崎市、横浜市、相模原市のいずれかの都市に在住しています。ただし、セリフ周りから、さいたま市は除外されます。

蓬莱教授が不老の薬を世に売り出し、なおかつ１００年間海外には販売しなかったために、不老国家として世界の頂点に立ちました。

エピローグ時点では、完全に未来として、宇宙進出が始まっています。

私立小谷学園

優子たちが通う高校です。

当初は、普通の共学校として考えましたが、後に校則がかなり緩い学校になりました。

というのも、校則があれこれ厳しいと、物語を作りにくいという作者的な都合もありました。

制服は男子学ランに、女子はリボンと大きめのボタン付きのブレザーに紺チェックスカートで、自由な校風からか丈の長さは簡単に調節できます。実際には制服を着なくても怒られないのだが、生徒側が要望する形で残っています。

現実の学校でも、学校側が制服を廃止しようとして、制服の存続を訴える生徒と対立することはあるそうです。

小谷学園の制服は、シンプルながらも優子や桂子が着るとかわいさがアップします。

学校行事は始業式に6月の球技大会、夏は1、2年が林間学校、3年生は修学旅行で、１０月に学園祭、１１月に体育祭、そして2月に1、2年がスキー合宿となっています。

前後期制で中間、期末試験あり。

偏差値の設定は特にないですが、佐和山大学よりは相対的に高めです。

ただし、田村恵美が女子のトッププロになったり、不老技術の立役者としてノーベル賞を受賞した篠原夫妻を輩出し、また人類最高齢の永原先生が教師を勤めているという話題性もあって受験生が殺到し、一気に難関校化しました。

この辺りは、蓬莱教授擁する佐和山大学とも似ています。
佐和山大学とは立地が近いので、小谷学園から佐和山大学に進学する生徒が非常に多く、両校の結び付きは強化されています。
優子たちが卒業した後も、度々舞台として登場していて、優子は小谷学園に行く度に制服に着替えています。
自分が面倒を見たＴＳ病患者である稲枝弘子との面談の際にも、文化祭で１年生を装って進入していました。
優子は不老なので、制服に着替えると現役の女子高生にしか見えなくなります。なので、結婚後も、浩介とはしばしば制服プレイを行っています。
球技大会や体育祭はあるものの、部活にはあまり力を入れておらず、運動部は田村恵美のいるテニス部と、女子サッカー部以外はほぼ弱小です。
田村恵美が小谷学園のテニス部に入ったのは、元々彼女はプロになるつもりはなく、安定志向のために家から近い所を選んだためです。
自由な学校という描写が多くなされていますが、「他人に迷惑をかけるな」という校則が存在し、このために、創設者は「世界一校則が厳しい学校」と評していた。
文化祭は、浩介と優子の関係が大きく変わるきっかけを産み出しており、2年生の文化祭の時は、優子は浩介の嫉妬を直すという名目で、初めてスカートをめくられたり、パンツを触られるなどの経験をした。
その時に反射的な嫌悪感が出なかったため、後夜祭で浩介は優子に告白を決意し、正式に彼氏彼女の関係になりました。
また、永原先生や桂子と、ミスコンで３つ巴の争いを演じ、結果的に優子が僅差で優勝した。
この時、優子はライバルとして立ちはだかった永原先生と桂子が悔し泣きしているのを見て、「もっと泣かせたい」「もっと辱しめたい」と思うようになってしまい、永原先生からは、「女性としての自尊心が芽生えた証拠」と評されるも、「優子」らしくないと悩むようになる。
以降も、優子は自らの女性としての人格確立に伴う自尊心と、「優

子」という名前に秘めた思いとの間で板挟みになることが増えた。

2回目の文化祭では、既に婚約は成立したも同然ながら、周囲にはほぼ漏らしておらず、後夜祭で浩介が全校生徒、教師の前で優子に婚約指輪を渡してプロポーズし、語り継がれる伝説となった。

これ以降、小谷学園の後夜祭では、想い人に告白するという習慣ができる。なお、プロポーズしたのは、未だに元祖のみ。

球技大会のイベントでは、1回目はフットサル、バスケ、ドッチボールを行い、優子は身体能力の弱さからハンデ戦となった。

最後の種目のドッチボールで、優子は転んでしまい、相手にぶつけられたことで痛みに耐えきれず泣き出してしまい、女の子の弱さから「守りたい」という感情が浩介に芽生え、これが恋へと繋がった。

2回目の球技大会は、優子はテニスを選択し、尋常じゃないハンデを課されて何とか勝利し、周囲から哀れみの目で見られてしまう。

一方で、田村恵美と篠原浩介が、グランドスラムさながらに5セットマッチでテニスを行い、序盤は技術力で勝る恵美が圧倒するものの、体力を削る持久戦法を浩介が採用すると、徐々に押され初め、最終セットは1ゲームも取れずに終了し、この試合もまた、小谷学園の伝説となっていて、恵美はプロとして華々しい活躍をしても、天狗にならないよう戒めるために、この試合のことを思い出すようになった。

体育祭は、いずれも日本性転換症候群協会の仕事と並行して行っており、この体育祭でも、優子はハンデをつけられた上に、最後の球拾いでは他の選手と接触しまたもや号泣、浩介にお姫様だっこで保健室に連れていかれたのもあって、ますます浩介に惚れる原因となった。

佐和山大学

物語後半の舞台は、主に佐和山大学となります。

佐和山大学は、ノーベル賞になった蓬莱教授がいる大学ですが、偏差値はあまり高くありません。

蓬莱教授を疎ましく思う学界関係者と、影で目立たなく研究を続けたい蓬莱教授との利害が一致し、蓬莱教授は他の教授とは別格の扱いを受けていて、蓬莱教授のいる学科を卒業した場合は、一流大卒並の

待遇を受けることができます。
モデルの大学は小谷学園と同様特にありません。
蓬莱教授の王国と化していて、蓬莱教授は研究室ではなく、広い研究棟を持っています。
ここで不老の薬を研究したり、反対勢力と宣伝戦を戦いました。
研究棟は、誰でも入れるスペースや、蓬莱教授の業績を宣伝するプロパガンダ用のエリア、があり、上層階は大学院博士課程以上の人のみが入れる機密エリアになっていて、蓬莱教授の厚意により、優子たちは4年目に研究室に配属されてから、すぐに立ち入りが許されました。
大学生活は、イベントが高校よりも少ないので、どうしても簡易なものになり勝ちでした。
蓬莱教授や高島さんと協力しての宣伝戦やデモ活動、大学院以降も研究の成功後は会社経営に話が進みました。
ちなみに、蓬莱の薬の評判が上がるにつれ、佐和山大学の再生医療学科は志願者が殺到し、難易度に大きな格差が生じるようになりました。
蓬莱カンパニー
物語最終盤の舞台で、蓬莱教授が、これまで受けていた莫大な寄付金を元手に設立した株式会社。
代表取締役会長に蓬莱教授、代表取締役社長に浩介、専務取締役に比良道子、常務取締役に篠原優子、また相談役に永原先生を起き、平の取締役として、和邇先輩と余呉さんが登場します。
会社の目的は蓬莱の薬の独占販売で、長期間に渡る詐欺が容易になるなどの理由で、政府へのロビー活動を通じ、唯一無二の「不老販売業者」となった。
黙っていればとても労働環境がいいが、欲をかいて他社に機密情報を売ったり、あるいは新規参入を求めたりといった「秩序を乱す」ことには徹底的に容赦がない。
薬の非融通は死刑宣告に等しく、永原先生の提案により、密告制度と連座制の適用を行うことになった。

蓬莱カンパニーは、工場を建設し、雇用を多く産み出し、更に大きな売り上げをもたらした。
当初は非上場でしたが、証券会社の要望もあって上場し、結果的にはこれが優子たちを世界一の資産家一家にすることになりました。
巨額の資産に、世界一の時価総額の会社の常務取締役という地位を手に入れ、ノーベル賞の栄誉も賜り、それでも母親になれたことに勝る幸せは、優子にはありませんでした。
つまり、妊娠、出産に至るまでにこうした富裕描写は、全ては出産の引き立て役になっています。
物語の最後に、優子は、「幸せは身近にあったのに、検討違いの幸せばかり追い求めていたから、満足が出来なかった」と言っています。つまり、今までの幸せには価値がないということです。出産後の優子は極自然に、ノーベル賞のメダルに向かって、「こんなものに価値はない」と言いきっています。
一介の足軽から天下を統一し、黄金の茶室を作るなど豪勢を極めたものの、子宝に恵まれず、晩年になってようやく秀頼を授かった豊臣秀吉にも似た逸話になっています。
最終的には、未来永劫に蓬莱カンパニーは人々に不老を与え続け、また難病患者の人々にも、大きな希望を与えています。
蓬莱の薬が製品化され、更に１００年は日本国内のみの販売となった。
蓬莱教授のポリシーから、「一部の特権階級のみが薬の恩恵を享受するのは避けたい」というものと、「しかし全世界の同時発売は現実的ではない」とする現実との妥協案のもとに生まれた。
これは、結果的に日本の覇権を引き出し、日本経済の更なる躍進へと繋がった。
日本性転換症候群協会
１９１７年に、永原先生を初めとするＴＳ病患者たちで設立された団体。
正会員、普通会員、賛助会員、一般会員、家族会員、メール会員、幽霊会員がある。

患者の当事者がなるのは普通会員で、正会員は普通会員の中から特に優秀と認められた人が就任する

会長の永原先生を含め、役職についたり、新しい患者さんのカウンセラーを務めるのは正会員のみで、優子のカウンセラーは永原先生。

過去の患者対応におけるノウハウを独占しており、病院にもある程度顔が利く。

いきなり正会員に任命された優子は、皆が諦めかけていた幸子を救ったことで協会内部でも頭角を表した。

佐和山大学入学後は、そのＴＳ病患者の中でさえ抜群の美少女だったため、広報部長となり宣伝を担当しました。

会の方針としては、「私たちは女性であるから、トランスジェンダーや第三の性としての扱いは屈辱であり、女の子として扱って欲しい、見た目の第一印象そのままで、考えて欲しい」というもので、元々「性転換症候群」という名前だった病名を、「完全性転換症候群」に変えさせたこともあります。

そのため、いわゆる「ＬＧＢＴ」の運動とは一線を画しており、誘いなどもきっぱり断ったが、これが牧師より恨まれる要因となりました。

一方で、美少女の多さからインターネット上では人気が出て、アイドル視する人も出ました。

完全性転換症候群

通称ＴＳ病、または性転換病で物語内では専らＴＳ病が使われる。この物語の根幹をなす病気で、当然ながら、現実世界には存在しない架空の病気。

この病気は、１０代から２０代前半までの若い男性のみが発病する病気で、原因遺伝子は不明、ＴＳ病はある日突然発病し、発病すると初めお腹に軽い痛みと違和感を覚える。

そこからしばらく時間が経つと、子宮形成に伴い下腹部が猛烈な痛みに教われ、立つどころか座ってもいられなくなる。

倒れると血を吐き出し、その後は痛みは引くものの、聴覚以外の全

ての感覚を喪失し、更にしばらくすると、男性因子消滅に伴い精巣が完全に空になるまで射精が続く。
その後は意識を失い、その間に女性としての器官や、体つきが出来上がり、目が覚めると女の子になる。
ＴＳ病患者は、胸とお尻が大きく安産型で、母性本能も強く、また例外なく目を引くような美少女であるため、特に女性を強調した女性になりやすく、これが精神的負担を大きくしています。
なお、男に戻ることは医学的に絶対不可能で、患者たちはこれまでの男性としての人格を捨て、女性として生きることが求められる。
そのため、まず患者は、協会から派遣された正会員の指導のもと、母親などとも併せて患者の指導、教育を行う。
女性としての人生を始めるため、女の子の服装や振る舞いを学び、また家事の教育や、女の子の感性を学ぶために、男時代の本や服装は、全て中古品売り場に売却させられ、代わりに女の子向けの少女漫画や女性誌などを読んで感想文を書かされるといった教育を受け、女の子らしくない言葉遣いも矯正の対象になります。
協会では、これまでも「男に戻りたい」と思ってしまったり、男女中間や第三の性を模索した人々の記録もあって、これらの人々はことごとく自らの現実を受け入れられずに自殺に追い込まれている。
肉体的には完全に女性になるため、他の女性と変わらず生理が来る他、妊娠、出産も可能となっていて、作中でも子孫のいる比良さんや、出産を報告した幸子さん、そして優子も、最終話で男の子を産みます。
ＴＳ　病患者は、赤ちゃんを妊娠し、出産をした際の母性は凄まじく、優子に至っては、赤ちゃんから引き剥がすだけでも激しく狼狽した挙げ句に大泣きしてしまっています。
そしてもうひとつの特徴が不老となることで、この病気になると老化が完全に止まり、理論上は数千年数万年あるいはそれ以上に生き続けることが可能になっています。
しかし、昔はこの病気は全世界で不吉とされており、発病した者はすぐに殺されてしまうか、村や町を追い出されるため、すぐに死亡してしまい、また極めて強力な疫病が蔓延した場合、ＴＳ病の遺伝子で

も対処しきれずに死んでしまうこともあった。
室町時代後期、戦国時代前期生まれの永原先生が現代まで生きているのは、本人も認める通り「奇跡」であり、永原先生の次に年上の人は、江戸後期の天保生まれまで存在せず、いずれも幕末のどさくさに紛れて生き残った人々であり、永原先生の生存能力の高さが伺えます。
またこの病気になると、男女の違いが重くのし掛かってきて、身体能力の低下や、男たちの性的な視線、生理などに悩まされます。
また、スカートを穿いたり、女性の文化なども学ぶため、この病気になった人々は、男女平等の非現実性を思い知らされるため、誰一人としてフェミニストにならない。
更に精神の女性化が進むと、男時代の知識をふんだんに生かして、男子にモテるようにもなるため、フェミニストにとっては極めて都合の悪い存在になっています。
不老遺伝子のメカニズムは3つあり、患者はそのうち2つのうちのどちらかをメインで動かしており、それぞれα型とβ型で別れています。患者数はα型が多いものの、どちらも本質的には不老に代わりはなく、サブのγ型ともども、バックアップ体制で患者たちの不老を支えています。
なおここで注意しなければいけないのは、不老でありながらも様々な要因で生存率が低いように、不老であっても不死ではないということです。
不慮の事故に巻き込まれれば死ぬため、これらを乗り越えた患者は、今度は交通事故を警戒しなければならないことになっていて、協会でも、女の子になりきったと判断した患者を対象に、「安全講習」という講習が設けられています。
発病者は有史以来１３００人という極めて少数ながらも、日本人の患者がその８割を占める。
また、女性を受け入れない限り自殺に追い込まれることからも、現在の協会の会員が３００人いないことも踏まえて、優子が協会に入るまでは、患者の長期生存率はとても低かった。

明治の日清戦争期以降は不吉の風潮がなくなったものの、男女の違いに適応できない自殺者は多く、大正時代に協会による支援が開始、昭和後期の時代にはノウハウが確立され、自殺率は概ね４割で推移するも、フェミニズムや男女差を過小評価する風潮が出始め、またＴＳ病患者には禁忌とされる性別適合手術が普及した平成期に自殺率が急上昇し、ここ最近の自殺率は過半数で高止まりしていた。

優子が会員となり、プログラムに変更を加え、またフェミニズムの愚かさの発信や、ＴＳ病への正しい理解に勤めた結果、自殺率はほぼ０になった。

ちなみに、希少な病気ながら日本人ばかりがなる病気は実在し、その病気はこのＴＳ病とは逆に、若くして老化が始まるために、早死してしまう病気である。

明日のＴＳ病患者を救う会

通称「明日の会」、もちろん架空の組織であり、言うまでもなく実在する全国の「明日の会」とは一切無関係です。

１００年のノウハウを持つ日本性転換症候群協会の教育方針に、例の牧師が反発して設立されました。

ここでは、「間違った教育方法をするとどういうことになるか?」という実例が示されています。

牧師は、安易に間違った個人主義イデオロギーをＴＳ病患者に持ち込み、また「日本人女性の、それも女性らしい女性になろうとする人ばかりが集まる協会に多様性をもたらす」などという名目で、患者に早々性別適合手術を受けさせた。

優子たちの工作もあって、学校のクラスメイトはそれを止めたものの、かえって意固地になり手術を決行、しかし、元のような男には決して戻れない事実に絶望し、性別適合手術を受けてすぐにその患者は自殺に追い込まれてしまった。

世間の非難が集まる中、牧師は責任転嫁に終始して信用が失墜、「患者自殺へのお詫び」の文章の記録を最後に、実質的活動停止に追い込まれました。

その後は、ホームページの更新も停止の後、牧師の行方不明もあって自然消滅しました。

優子の居住地

優子の住む家は、石山家、篠原家、そして渋谷区松濤にある３２０坪の豪邸と変わります。

石山家は実両親との３人暮らし、篠原家では義両親と夫の浩介との４人家族になります。

いずれも、家の面積はほぼ同じで、ごく普通の一軒家という位置付けになっています。

浩介と結婚してからは、「優子ちゃんのかわいい声が寝室まで響くことがある」と言われていて、浩介の技術に翻弄され、大声をあげさせられることに悩んでいます。

優子の部屋は、初期には優一の面影を残した殺風景な散らかり気味の部屋だったが、浩介に恋をし、また女の子を磨くため、カーテンやベッドなどを女の子らしい部屋にリフォーム、以降このデザインは篠原家にも持ち込まれました。

物語最終章で、優子たちは資産家となったため、渋谷区に引っ越します。

移住計画に出てきた松濤、元麻布、高輪、田園調布といった候補地は、いずれも都内にある高級住宅街で、その中でも渋谷駅とも程近い松濤は超高級住宅街で有名です。

松濤は敷地面積が広い家が多いですが、それでも３２０坪は非常に広く、土地代だけでも数十億が飛んでいます。

家の面積が広めで、１階は２０畳の部屋多数を含めた１６ＬＤＫ、２階も１３ＬＤＫの間取りを実両親に与えています。

優子の部屋も２０畳となり、テレビも大型になるなど部屋に余裕が生まれましたが、基本的なデザインは変わっていません。

３階は浩介の祖母とその介助士のための空間で、屋上はプール兼露天風呂で、また庭は茶室と倉庫の離れや、池と橋のある日本庭園に、また木が数本ある小さな森もあります。

この豪邸も、「世界一の資産家にしては質素だ」と評されています。

物語最終話で優子が優輝を産み、総勢８人の大家族となっています。
数年後におばあさんが亡くなり、優子たちは更に何人かの子供を産みます。エピローグ時点では２５人いましたが、同居している人は少ない模様で、また子孫も把握しきれなくなってきています。
また、本人よりも年下の叔父、叔母、大叔父、大叔母といった存在も珍しくなくなっており、エピローグでも７歳の優子の末っ子と、高校生の孫が登場しており、初孫の年齢を考えると、かなり複雑な家系図となっていると思われます。
林間学校、スキー合宿、修学旅行
小谷学園の学校行事のイベント空間で、いずれも３泊４日に渡る長丁場になっています。
林間学校は、優子の女の子が形成されていく時なので、女の子としての成長も見られます。
初めて女湯に入ったり、バーベキューでは家庭的と評されたり、どんどんと女の子になっていきます。
優子は、林間学校で浩介との交流を深め、特に登山の時におんぶしてもらって山に登れてから、また重いものを運んでもらうなど、男の子のかっこいい面を見た浩介へと想いを寄せていきます。
優子の中で、女の子としての男への恋を知るようになると、どんどんと女の子らしさが自然と身に付いていきます。
帰りの途中で、暴漢にナンパされ乱暴されそうになった時に、浩介に守られ、恐怖と痛みから大泣きしてしまい、浩介に頭を撫でられてから完全に陥落し、女の子としての恋心を完全に開花させた。
ちなみに、初めて浩介にパンツを見られたのがこの場面で、色は水玉だった。
スキー合宿では、閉館間際のホテルが使われ、部屋の都合などもあって、通常男女別の部屋を浩介と２人で使用した他、家族風呂の最後の客にもなりました。
初めて一緒にお風呂に入り、また同じ部屋で寝るといった行動は、後の花嫁修業の時と同様に、夫婦生活の予行演習にもなりました。

特にお風呂では、最初はお互いタオルを巻きながらなのが、最終的にはお互い裸を見られ合い、見せ合いごっこをするまでになっていました。

一方で、スキー合宿そのものは、優子はスキーが極度に苦手な永原先生と共に、地元の小学生のグループに参加して、一番優しいグループに入りました。

一方で、スキーが大の得意だった浩介は、上級者クラスの中でも優秀だったので、スキーでは最後に独演を行い、優子がメロメロになりました。

修学旅行は新幹線で京都に行くものの、京都の寺社巡りは最終日のみで、2日目と3日目は自由時間になっており、優子は2日目には永原先生の引率のもと京都の鉄道博物館に行きました（ちなみに、筆者はまだここには行ったことがありません）、この時に、永原先生は明治になって衝撃を受けたことがきっかけで、鉄道にのめり込むようになったことが明かされます。

また、朝のお風呂では「胸の格差」や、「江戸時代の痴漢」などが話題に上がりました。

古い町ということもあって、永原先生の長い人生とよく対比になっています。

3日目は、最初に永原先生と新しい患者の面談に行き、その後は浩介とデートのような形で、大阪駅や道頓堀、そして阪神なんば線経由での神戸ビーフ堪能といった楽しみをしました。

小谷学園の修学旅行は自由時間なので、門限を守ればどこに行ってもよく、過去には福岡まで行った猛者もいる。

もちろん、高校の修学旅行でこんなことは言うまでもなくあり得ないが、小谷学園の自由の象徴として、続けられている。

ちなみに、この修学旅行中も、浩介は優子にスカートめくりなどのセクハラをしていて、徐々に性欲を押さえるのが難しくなってきています。

夏場は服の露出も増えるため、優子のような女の子は一気にエロさが増すことになる訳です。

海水浴場

優子たちが夏に行く海水浴場で、近くには水族館も併設されています。

林間学校終了後、永原先生が「クラス交流」を名目に、クラスの男女を海に誘います。

最もこれは、浩介と優子の距離を近付けるのが目的で、いわゆる「水着回」ということになります。

最初に海に行った時は、案の定優子の水着は人々の目を釘付けにし、また好きになった浩介と関係を深めようとして、日焼け止めクリームを濡らせたりしていました。

なお、最初の海では、肉体的、反射的にはまだ男が残っており、浩介が下半身を大きくしたときに、肉体的な嫌悪感と精神的な喜びとの解離に悩んでいました。

この辺りは、優子に降りかかった困難でもあり、「女の子になりたい」という気持ちが先行し続けた優子ならではの悩みとも言えます。

2回目の海は大学生の時に協会の会員たちと行った海で、幸子さんがすっかり女の子になって登場します。

優子も、結婚後ということもあって、浩介相手に積極的になっていました。

優子は、水着を2着持っていて、1着目は可愛く露出度も高めで、エロくあどけなくをイメージし、上下白のビキニに、バラ売りしてあった水色の超ミニスカートをつけています。

2着目は、1着目よりも更に露出度が高く、セクシーさを強調した黒ビキニで、こちらは「肉食系女子」の気分を高めたい時に使います。

ちなみに、水着に着替えると優子も積極的になって、浩介を襲うことも多く、「優子ちゃんに食べられちゃう」という言葉の後、食べられた後に優子が「ごちそうさまでした」と言うのがお約束になっている。

海水浴場に併設された水族館もデートの舞台になっていて、優子たちはここで蓬莱教授と偶然出会い、「君は佐和山大学で偉大なことを成し遂げる」「俺の研究に反対していた連中も、いずれひれ伏す時が来る」という予言を受けました。

蓬莱の薬

ＴＳ病患者が持っている不老遺伝子を応用し、万人に不老を提供する薬で、毎日１回、５日間飲むと、繁殖、伝搬性の強い不老遺伝子が全身に回り、服用者は不老となる。

実は２、３日で効果は十分で、残り２回は予備になります。

薬の名前は実は特になく、蓬莱伸吾教授が開発したため、蓬莱の薬と呼ばれています。

この物語では、これの開発、販売が重要な鍵となっていきます。

蓬莱の薬を開発することで、ＴＳ病患者の積年の課題であった「恋人や旦那、子孫との死別」の問題が解決されることが期待されており、当初は実験に懐疑心を持っていた永原先生も、蓬莱教授が結果を出すことで信頼を獲得し、以降協会と強調路線になる。

当初は遺伝子提供が永原先生のみであり、その後優子が実験に協力するも、薬は不完全なままで数百年の寿命しかなかった。

大学３年になり山科歩美が佐和山大学に入学、歩美の遺伝子を借り受けたところ、ＴＳ病遺伝子のβ型が発見され、ブレイクスルーを達成する。

しかしながら、理論上では完全不老になるはずなのに、まだ有限寿命の薬しか開発できず、第三の型であるγ型の捜索が開始されます。

結果的に協会会員全員の遺伝子を分析したものの、α型とβ型しか発見できず、蓬莱教授は手詰まりに陥る。

しかしながら、大学院生になった優子が、これまでとは違った視点から蓬莱教授の盲点をつき、γ型を発見します。

そして、そのままの勢いで完全不老の薬を開発、この功績によって、優子は２０２７年のノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

優子の発見により、浩介との寿命問題は解決したものの、薬を大量生産する上で、当初は歩留まりが悪くなっていました。

これを解決したのが篠原浩介による方法で、この功績を持って、篠原浩介は２０２７年のノーベル生理学・医学賞に輝きました。

更に蓬莱の薬を世界で唯一販売できる蓬莱カンパニーが設立され、

蓬莱教授の策略もあって優子と浩介が常務と社長となり、また株式をそれぞれ１４．９９％持つ、２０％の蓬莱教授に次ぐ大株主となり、この株の資産が暴騰した結果、篠原家は夫婦併せて世界一の資産家一家に、また個人でも蓬莱教授に次ぐ世界第２位の資産家となり、株式配当だけで数千億円の収入が入るようになりました。

このように、蓬莱の薬は優子と浩介の永遠の愛を決めただけではなく、その栄誉と富をも決定付けた存在になりました。

総合病院

優一がＴＳ病となった時に担ぎ込まれた総合病院で、物語の初めと最後に登場する、いわばこの物語の「始まりの地」でもあります。

いずれも個室に入院しており、最初は病室で目覚めたら、慌ただしくＴＳ病と診断後、健康診断を受けさせるという忙しさで、目覚めて半日で退院しており、扱いは相応という感じになっています。

しかし、物語最終盤にはＶＩＰルームで広々とした個室で至れり尽くせりのサービスになっており、優子の１１年間での変わりようが分かります。

基本的にはあらゆる科に対応している大きな病院で、入院患者の棟と通院患者の棟に別れていて、両棟はスカイブリッジで結ばれています。

小谷学園とも提携していて、健康診断を担当する（優子が受けた健康診断は学校のものより多め）他、部活の怪我や教職員、生徒の体調不良にも対応しています。

初めての赤ちゃんを産むときに、優子がここを選択したのには、やはり女の子の原点があるからでしょう。

ノーベル財団

ノーベル賞を司る実在の財団、優子たちがノーベル賞になってから、様々にお世話になった団体で、もちろん実在です。

ノーベル財団は、優子たちのノーベル賞を決定した際に、蓬莱教授の意見を取り入れました。

ちなみに、作中での受賞者たちの行動は、ほぼ妄想で補われていますが、ノーベル博物館にある椅子にサインをしたり、授賞式で受賞者が英語でスピーチしたり、授賞式の様子、晩餐会や舞踏会に蛙跳びといったイベントは実在のものです。

物語内では、2回目の受賞となった蓬莱教授が、優子と浩介を引率してくれています。

永原先生の家宝類

永原先生は、その長い人生に反映して、数多くの貴重な歴史的書物や絵画を所持しています。

ここでは、実際に出てこなかった永原先生の所持家宝についても紹介します。

ちなみに、大半が架空のものです。

吉良上野介の着物

元禄年間に、吉良上野介より与えられた着物、京都の呉服屋のもので、実際の費用は幕府側が用意した。

当時は着物は、着られなくなるとそのまま雑巾などに再利用されており、江戸中期の着物が残っているのは極めて稀。

実際にはそのようにして消失した着物も多く、特に立派な服を永原先生は温存しており、「国宝か重要文化財でもおかしくない」と鑑定士に評された。

現在も大切に保存してある着物は、皮肉にも浅野による吉良への刃傷沙汰の際にも宮中行事のため着ていた。

永原先生にとっては、自らが受けた恩義の証拠であると同時に、歴史学的にも、吉良上野介本来の人柄を忍ばせる貴重品になっています。

鑑定額は億を越えており、学術的にも極めて貴重な品となっている。

歌川広重の肉筆画

歌川広重が、永原先生のために描いた肉筆画。

不老の娘の噂を聞いた歌川が、永原先生を自宅に呼び出して「俺の

絵画を後世に伝えて欲しい」と話し、永原先生のためだけに製作された絵画。

こちらは世界に2枚とない国宝級で、鑑定番組の鑑定額２０００万円の数倍は下らない価値があり、億の値段がついてもおかしくない一品。

徳川吉宗の茶器

江戸幕府８代将軍徳川吉宗が永原先生に寄贈した茶器。

葵の御紋に徳川吉宗直筆の署名入りで、当時の茶の湯文化を知る文化財としても極めて貴重。

柳ヶ瀬まつ一代記

第三者の視点から、永原先生の人生を記した書物で、歴代の老中や側用人が永原先生の人生を記録している。

最初の1巻のみ永原先生本人が出生から江戸城に入るまで、以降は１０年ごとに将軍の側近が記録していった。全巻原本現存。

日本語の移り変わりが記されていて、例えば「二段活用の一段化」や、ナ行、ラ行変格活用の四段活用化を知ることもできる。

永原先生が江戸城を退去することになった所で打ち切りとなっているが、永原先生の人柄や当時の様子、老中側用人の筆跡や考え方などが分かる貴重な資料である。

赤穂事件の部分が博物館で公開されており、水戸黄門や忠臣蔵で悪役となっていた柳沢吉保が、浅野側に傾いた世論から肩身の狭い思いをするだろう永原先生を気遣う基準があり、彼の本来の人柄がうかがえる内容もありました。

柳ヶ瀬日記

江戸城にいた永原先生の日記、娯楽の少なかった当時において、日記はほぼ永原先生の日課になっていた。

１６５３年より１８６７年までの２１４年間は、江戸城に住んでいて、江戸の街からも出ることはなかった。

内容は、その日起きたことや事件、事故や祭りの記録などで、明暦の大火でも、運よく永原先生の居住区は燃えなかったため、全巻が原本現存。

江戸時代における日本語の変化も随所に記録されており、古典学としても貴重な資料になっており、また消息不明だった歴史上の人物のその後も記されるなど、歴史学的にも第一級資料となっている。

永原先生は、江戸城で働いたり、大名や旗本に戦国時代の話、特に関ヶ原の合戦の見物談を話したり、大名旗本から家宝を贈られたりしていた。

江戸城での仕事が無い場合や、街での仕事の方が稼げそうな日は、街に繰り出して仕事を見つけてはお金を稼いでいた。

また、祭りや娯楽イベントがある際にも積極的に参加し、その日の終わりには銭湯に入った。

永原先生は江戸時代の日本人らしく、痴漢されることにおおらかであるばかりか、むしろ「女として魅力的だと思われて嬉しい」という感情さえ持っており、この日記でも、１９世紀の文政年間には「江戸一番の美女」と自称する女に嫉妬し、祭りの時に痴漢された回数を競いあうという行動を行った。

この時、痴漢された回数で負けたことで悔しさのあまり路上で号泣し、相手の女に指を指されて嘲笑われるという屈辱を味わっている。

このエピソードについては、「痴女担当」の河瀬龍香でさえ「さすがに引く」と言わしめた。

江戸時代当時は、基本的に痴漢は無罪であり、江戸の街は７…３の男余りだったのでなおのこと激しかった。

特に混浴の銭湯や人が集まる花火大会、川などを渡る渡し船では、日常的に痴漢がありふれており、通りがかりに胸や尻を触られることもしょっちゅうだった。

それどころか、女性の側も、「痴漢されるのは女としての魅力が高いから」と、自らの自信にする有り様であった。永原先生のこの感情は、江戸時代以前の日本人にはごくありふれた価値観であった。

こうした牧歌的な雰囲気は、幕末以降の欧米人に拒絶されてしまい、明治以降急速に鳴りを潜めてしまったが、現在でも随所にこの時代の名残が見受けられる。

初版東海道五十三次

永原先生が趣味で買い集めた浮世絵コレクションの1つ。
説明不要の歌川広重の代表作で、永原先生はこうした絵画などを数多く所有していて、状態もよく鑑定士を驚かせた。
初版富嶽三十六景
葛飾北斎の代表作でこちらも実在。
海外からも評価の高い浮世絵で、永原先生は個人的に北斎のファンだった。
ただし、江戸城を出る時には持ちきれないとして、いくつかの絵画を捨ててしまっている。
これについては鑑定士からは「余りにも罰当たり」と批判されたが、当時の価値観では、そこまで値打ちのあるものではなかった。
以上の7作品を、美術館側は「永原マキノの7大家宝」と言ったが、本人は余り気にしていない様子だった。
奥村文角の墨摺絵
江戸時代中期で、初期浮世絵の名画家奥村文角の作品で、白黒の墨摺絵。
当時の値段は２０文で現在の価値でも3―４００円程度の値段で、下級武士や庶民といった大衆娯楽だった。
永原先生は鑑定番組で本人評価額を４００円とし、４００万円の値段を付けた鑑定士に呆れられている。
実際に、文角の絵画は高値で取引され、状態によっては重要文化財となってもおかしくないものである。
永原先生は、その他にも鈴木春信、歌川貞秀、菱川師宣といった当時の名画家たちの絵画を大量に所持している。
徳川綱吉の扇子
江戸幕府5代将軍徳川綱吉より永原先生に贈られた扇子。
特に4代目と5代目の将軍は永原先生を尊敬しており、また5代将軍に倣った8代将軍も、永原先生に寄贈品を送っている。どれも架空のものだが、実在すれば国宝に指定されてもおかしくないものである。
葵の御紋が入っており、永原先生は仰いだことがほぼない。

島津斉彬の薩摩切子

幕末の薩摩藩主、島津斉彬が永原先生に寄贈した薩摩切子で、薩摩切子は技術的にも断絶があり、数百万円で取引されている。

当時はこうした大名や旗本が永原先生に大量に寄贈品を送っており、それらだけでも数十億円の資産価値があると見積もられている。

鳩原家の食器

永原先生がまだ鳩原刀根之助だった頃から存在する当時の庶民の食器で、永原先生の持つ家宝で唯一、永原先生の産まれる以前から存在している。

死別した両親の形見でもあり、状態は悪く価値は現代でも１０００円と低いが、お金では買えない価値があり、現在でも大切に扱っている。

徳川家綱の食器

江戸城に行った時に、粗末な食器しかなかったために、食事に支障がないようにと徳川家綱が永原先生に贈った葵の御紋入りの食器。

ただ、服に関しては幕府の財政の都合からも融通することはなく、永原先生も、この当時は街に繰り出すことも少なかったため、金銭的にはあまり余裕はなかった。

陰口が激しくなるのは、次代将軍徳川綱吉の時代で、吉良上野介の執り成しで陰口が止んだ。

曲亭馬琴の小説

江戸時代の小説家、曲亭馬琴の小説を、永原先生は愛読していた。

永原先生は「椿説弓張月」を鑑定に出し、「南総里見八犬伝よりも当時は人気だった」などとし、また葛飾北斎の挿絵も紹介している。

江戸城に住んでいた当時は暇を持て余すことも多く、小説はそうした暇つぶしにはもってこいだった。

東海道中膝栗毛

十返舎一九が書いた、化政文化の代表的小説で、弥次郎兵衛と喜多八が、道中を旅し色々な失敗をする滑稽本だが、実際の２人はいわゆるエロオヤジで、失敗というのは、女を手篭めにしようとして失敗するという意味である。

永原先生は、はまぐり屋で女中のお尻を触ろうとする弥次喜多のエピソードを紹介している。

大ヒットしたため、東海道だけではなく他にも続編が書かれ、最終的に作者死去までこれが続いたため、十返舎一九は「もうネタ切れなんだけどやめさせてもらえない」と愚痴っている。

古事記伝

本居宣長による、古事記の注釈書。

永原先生は、水戸黄門の影響からかこうした国学にも通じており、古事記伝も現存。

明治時代の鉄道切符

永原先生が所持する、明治時代の鉄道切符、いわゆる日本における鉄道コレクションの中では最古のもので、こうしたマニアが喉から手が出るほど欲しい一品を、永原先生は大量に所持している。

# この小説に出てくる歴史上の人物

本小説には歴史上の実在人物が永原先生の回想として多数登場します。

永原先生のキャラクター、歴史とともに行きてきた彼女のキャラ付けのために、これらの人物が永原先生の口から語られていきます。

永原先生は、彼らが産まれ、あるいは共に生き、あるいは死ぬ所をずっと見てきたことになります。

特に江戸時代は、４代将軍家綱に見出されて以降、幕末まで江戸城や江戸の街で働いており、常に政治の中枢を見て記録に残していました。

戦国時代の人なのか、死に別れを特に悲惨で悲しいとは思っておらず、永原先生が不老となってから人の死を本気で悲しんだのは、たった1度という設定です。

こうした歴史上の人物との接触や、受けた影響は、しかして歴史にはほぼ影響せず（本編開始までは、実在の日本と全く同じ史実をたどっています）、自らの無力を感じると共に、永原先生が５００年に渡る人生の中で形成された人格に大きく影響を及ぼしています。

そして物語本編でも、優子や蓬莱教授などが、永原先生に大きな影響を及ぼしています。

真田幸綱／真田幸隆／真田源太左衛門／真田弾正忠（１５１３～１５７４）

永原先生が鳩原刀根之助と名乗っていた時代の主君に当たる人物。信濃の小豪族で海野氏の支流とされている。永原先生の５歳年上で弟の矢沢頼綱は永原先生と同い年。

永原先生は、元々天文２年（１５３３年）より５年間真田家に仕えており、役割は伝令役の足軽だった。また、小さな小規模争いにも参加していた。

天文７年（１５３８年）、永原先生はＴＳ病に倒れ村より逃亡、天文１０年（１５４１年）には武田信虎が諏訪頼重・村上義清と同盟を組

んで海野氏を滅ぼすために侵攻を開始。
これを海野平野戦いといい、この時真田幸綱も上野の長野業正を頼って逃亡、永原先生がほとぼりが冷めて領地に戻った時には、既に主君は村上義清に代わっており、永原先生がＴＳ病に起因する最初の罪悪を抱くきっかけとなってしまう。
その後、武田信虎が息子の武田晴信に追放されると、真田幸綱は武田に仕えるようになり、村上義清への調略に参加、一時は砥石崩れによる大敗も遭ったものの、天文２０年（１５５１年）には村上義清より旧領を奪還し、義清は長尾景虎を頼って越後へと逃れている。
当時ＴＳ病は不吉とされてすぐに殺されてしまっていたため、永原先生は真田家へ帰参できず、「柳ヶ瀬まつ」と名乗って村娘の一人になっていた。
永原先生は武田家に仕える以前の真田家に仕えており、「弾正忠」ではなく通称の「源太左衛門」の方を用いている。
永原先生にとって、真田家は自らの罪の象徴であるとともに、心の拠り所でもあり、物語内でも「私は真田家の人間」と度々言及している。

村上義清／村上佐渡守／村上左近衛少将（１５０１～１５７３）
真田家のほど近くを領地に持っている北信濃の豪族。
武勇に長け、小領主ながら守護大名の武田信虎とも互角にやりあっていた他、上杉氏の後ろ盾を得ていた小豪族とも争っている。
佐久郡を武田信虎に奪われるが、やがて和解し、天文１０年（１５４１年）の海野平の戦いで海野氏を攻める。この時真田の村も連合軍に襲われることになり、真田幸綱は海野家共々隣国に逃亡、真田の村は村上義清のものとなり、真田本城の支城だった砥石城を拠点とする。
その後武田信虎が息子の武田晴信に追放されてしまい再び武田氏と対立、天文１７年（１５４８年）の上田原の戦いで武田軍を破ると、天文１９年（１５５０年）には砥石崩れで大勝を収めた。
しかし真田幸綱が武田家に仕え始めると状況がいっぺん、天文２０

年（１５５１年）には真田幸綱によって砥石城が攻略され、調略によって村上側の諸将が武田型に寝返り、最終的には越後の長尾景虎（上杉謙信）を頼って逃亡した。これが後に川中島の戦いの導火線となる。

永原先生はこの戦いの時に別の村の住人となっていたために難を逃れ、故郷に帰ってきてから真田幸綱に再び放逐されるまでの間に主君として年貢を納めていた。

武田晴信／武田信玄／武田太郎／武田大膳大夫（１５２１～１５７３）

ご存知武田信玄。父晴信を追放後、川中島の戦いで上杉謙信と死闘を演じ、三方ヶ原の戦いでは徳川家康を破るなどの活躍をしたものの、志半ばで病死した。

「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という言葉は有名。

父を追放した他、嫡男に謀反の疑いをかけて切腹させる、北条・今川と結んだ三国同盟やその後に結んだ徳川家との大井川同盟や、織田家との同盟も破るなど、不義理な人物でもあり、上杉謙信にはかなり嫌われていたらしい。

武田信虎／武田信直／武田左京大夫／武田陸奥守（１４９４～１５７４）

武田信玄の父、当時としては長生きで息子信玄の死後まで生きていた。

彼が生まれた時は、甲斐国内で祖父・叔父・父が相続争いをしており、最終的に祖父・父が相次いで死去して家督を継ぎ、挙兵した叔父を倒し、その後甲斐国衆や今川氏とも闘って甲斐を統一、富士山にも登り御鉢廻りを巡っている。

その後は信濃の諏訪氏、村上氏、関東北条氏や駿河の今川氏などと戦いつつ、最終的にはこれらと和睦、諏訪氏村上氏と共に海野平の戦いで真田氏と海野氏の駆逐に成功、同盟関係にあった今川義元の領地に向かう帰路、息子である武田晴信によって街道封鎖によって強制隠

居させられてしまった。
その後は駿河の今川義元の元に身を寄せ、出家した上で隠居生活を送り、京都や奈良などに何度か上洛、京都と駿河を往復する生活を送りつつ、桶狭間の戦い以降は今川と武田が手切れとなり、在京奉公を開始、信玄死後は三男が居城とする信濃高遠城に身を寄せそこで死去した。
永原先生からは海野平の戦いで言及されている。主君を一時的に追い出したことには特段恨み等は感じておらず、「戦乱の時代によくあること」という認識を持っている。

真田信綱／真田左衛門尉（１５３７～１５７５）、真田昌輝／真田兵部丞（１５４３～１５７５）
直接には言及されていないが、長篠の戦いで戦死した真田昌幸の兄２人。
永原先生はこの時にも、何もできなかった自らを嘆いている。武勇に優れ、将来を期待されていた。
長篠の戦いの頃、永原先生は自らを不老ではないかと疑い始めた。

織田信長／織田上総守／織田上総介／織田弾正忠／織田右府／織田前右府（１５３４～１５８２）
ご存知織田信長、あまりにも有名な人物なので事績は記さない。
永原先生の生まれ年を聞いた時に真っ先に「織田信長より年上」と生徒が言及していた他、永原先生も本能寺の変の時には「織田前右府」と称しており、明智光秀は「明智日向守」と称しており、このことは優子が桂子、龍香と３人で遊んだ時のクイズゲームで役に立った。
一方で、永原先生自身は織田信長については深く言及していない。

木下藤吉郎／木下秀吉／羽柴筑前守／羽柴秀吉／豊臣秀吉／関白殿下／太閤殿下／豊太閤／豊国大明神（１５３７～１５９８）
ご存知豊臣秀吉、こちらもあまりにも有名な人物なので事績は記さない。

永原先生からは天下人として度々言及されていて、主に「太閤殿下」と呼んでいる。
天下人として、永原先生は多大な敬意を払っているが、江戸城暮らしが長いためか、長い泰平の世を築いた徳川家康ほどには尊敬していない様子が見て取れる。

松平蔵人佐／松平元信／松平元康／松平家康／徳川家康／徳川次郎三郎／徳川内府／徳川右府／征夷大将軍／上様／大御所／神君／東照大権現（１５４３～１６１６）
ご存知徳川家康。上記の呼び方はごく一部。
やはりこちらも説明不要の人物で、永原先生は関ヶ原の戦いを公家とともに遠目で見物した時に一度だけ姿を見たことがある。
徳川家康について、永原先生は基本的に「東照大権現」と呼んでおり、関ヶ原の見物談を話すときのみ当時の呼び方であった「徳川内府」と呼んでいる。太平の世を築いた偉人として敬意を示している。
ちなみに、体育祭の騎馬戦の時には、２年２組男子の戦法を「島津の退き口」になぞらえている他、小早川秀秋の裏切りや大谷吉継隊の壊滅のことも話している。
また、方広寺鐘銘事件でも言及されており、永原先生は「諱を犯すことは極めて無礼」として、「徳川方の言い分は言いがかりではない」として擁護している。

木下辰之助／羽柴秀俊／小早川中納言／小早川秀秋／小早川秀詮（１５８２～１６０２）
豊臣秀吉の正室の甥で、豊臣家親族として、重きをなした。
小早川隆景と養子縁組をなし、１８歳ながら豊臣家の重鎮となっていた。
関ヶ原の戦いでも、大軍を率いて松尾山に陣をはり西軍として参加するが、既に徳川方に内応しており、戦闘には参加せず傍観する。
徳川方の催促もあって小早川秀秋は東軍に寝返り、以降明智光秀と並んで「裏切り者」の代名詞的存在になる。

１６０２年に２１歳の若さで急死し、跡継ぎもなく小早川家は断絶となった。
永原先生は、「小早川中納言殿の裏切り」として、関ヶ原の戦いの目撃談の時には必ず登場する。

大谷吉継／大谷紀之介／大谷刑部（１５６５～１６００）
大谷吉継の名で知られる武将。病のため失明していた。
関ヶ原の戦いでは西軍に属し、小早川秀秋の裏切りを受ける。圧倒的な兵力差でも奮戦し、数度小早川隊を押し返すも、山の麓に小早川の裏切りに備えていた４将が連鎖的に寝返ったこともあって衆寡敵せず。
大谷吉継は家臣の介錯で切腹して果て、小早川秀秋に対して「人面獣心なり、３年の間祟りをなさん」として死んだとされている。小早川秀秋はこの２年後に死亡している。
石田三成の無地の親友であるが、東軍諸将とも交流が深く、また関ヶ原の戦いでも西軍必敗を見抜き石田三成を止めたが、三成の熱意に押されて西軍に属するなど義理堅い人物で、その死は多くの人から惜しまれた。
永原先生は、小早川秀秋の裏切りによって大谷吉継の軍が壊滅する様子を見物している。

島津義弘／維新斎／島津兵庫頭／島津侍従／島津宰相／鬼石曼子（１５３５～１６１９）
戦闘民族と称される島津家の１７代当主。
慶長の役では明朝鮮連合軍５万人をわずか７０００の兵で破るなど伝説的な戦いを何度も演じてきた。
関ヶ原の戦いでは東軍に参加しようとして伏見城に馳せ参じたが、鳥居元忠が援軍を拒否したためにやむなく西軍に参加。
石田三成にも軽んじられたため、関ヶ原本戦では兵を動かさなかった。
そのうちに小早川秀秋の裏切りで西軍が壊滅し、島津隊は退路を断

たれ完全に孤立してしまう。
島津義弘はここで、東軍が一番多く集まる所に突撃しながら退却するという捨て身の戦法を取った。
多数の東軍諸将が動揺し、３００人のうち僅か８０人のみが薩摩に帰れたとされている。
永原先生は関ヶ原の戦いの一部始終を見物しているため、当然島津の退き口も目撃しており、体育祭での騎馬戦で、浩介らが取った戦法をこれになぞらえている。

真田昌幸／真田安房守（１５４７～１６１１）
真田家の２代目、永原先生とは面識はないが、領民として接している。
長篠の戦いの後、真田家の家督を継ぐ。
織田信長による武田征伐で自主独立、最初は織田信長に仕えて滝川一益の与力となるものの、すぐに本能寺の変が発生。
その後は独立勢力として上杉、北条、徳川、上杉と次々に主君を変え、「表裏比興」と言われながらも生き残る。
この頃の永原先生は村人からも不老を疑われており、本能寺の変を機に再び村を逃亡。その後に待ち受けていた真田家の苦難を知っておきながら、凶事を恐れて大坂の陣後まで村へと戻ることは出来なかった。
豊臣秀吉が没し、関ヶ原の戦いが起きると真田家は分裂、真田昌幸は西軍につき、徳川軍を苦しめるものの結果的に破れ九度山に配流され、そこで病死した。
永原先生からは「安房守殿」と呼ばれており、主君であった父とともに謀略に長けたその智謀に尊敬の念を抱いており、林間学校で優子の部屋を男女から引き離そうとしていた教頭先生を謀略にはめた時には「我が主真田源太左衛門様や真田安房守殿が今の私をご覧になれば、さぞお褒めになってくださると思いますわ」との言葉を残している。
永原先生の謀略を好む性格は、真田幸綱及び真田昌幸、真田信繁の

影響が強い。

真田源三郎／真田信幸／真田信之／真田伊豆守（１５６６～１６５８）

真田昌幸の嫡男で真田家を継ぐ。永原先生からは「伊豆守殿」と呼ばれており、恩人にして罪悪感の象徴であるとともに、２人の初恋の相手の１人でもある。

関ヶ原の戦いでは父、弟と袂を分かち東軍に付く、これが結果的に真田家の存続となる。

関ヶ原の戦いの後、父と弟の助命懇願を行い、大坂の陣後は信濃松代藩となる。

一方、永原先生は大坂の陣後に江戸に住むようになったが、人口の多い江戸ではすぐに不老の噂が流れ、再逃亡を考えていた矢先の承応２年（１６５３年）に当時の４代将軍徳川家綱への拝謁が許された。

信之は当時８８歳であったものの健在で、永原先生の話を聞き、それがすぐに所領で噂になっていた「不老の娘」と同一人物であることを理解し、出奔したことを許し、そればかりか長年の苦難に耐えたことを労った。

永原先生はこの寛大な処置に感極まって大泣きしてしまった。既に１３６歳になっていた永原先生は、ろくに恋愛などもしておらず、優しくされただけで恋に落ちてしまった。

鑑定番組では、大まかな内容は紹介されたものの、恋に落ちたことは伏せられていた。

それ以来「大恩人に対して恩を仇で返した」として、自らの回想録でも「私は自分が憎い。私がしたことは許せない。命惜しさに自己断罪するような勇気さえもないことも含めて」と記している。

真田源二郎／真田信繁／真田左衛門佐（１５６７～１６１５）

真田昌幸の次男、兄は源三郎で弟は源二郎であるが、この時代にはよくあることである。

関ヶ原の戦いで東軍に付いた兄と袂を分かち、父とともに西軍に付

く。徳川秀忠の軍勢を苦しめ、遅参に追い込むものの、関ヶ原本戦で西軍が敗れ、兄の助命懇願もあって九度山で配流の日々を過ごす。

ちなみに、兄の仕送りが家計の頼りでもあった。

その後、大坂の陣が勃発、真田信繁は密かに逃亡し大坂城に入ると冬の陣では真田丸を築き徳川方を苦しめた。

また、夏の陣でも徳川本陣間際まで追い詰めるも、一歩及ばず戦死。

永原先生からは「主君の跡継ぎの、偉大な息子」として尊敬されている。

また、真田信繁は真田幸村の名でも知られるが、永原先生はこの名で広められることを極めて嫌っており、上田駅前の「真田幸村像」に向かって悪態をついた挙句、なだめにかかった篠原浩介に怒鳴り込んだり、真田氏を記念した公園でも、「真田幸村」に対して「恐れ多くも安房守殿の次男、真田左衛門佐殿の名を勝手に剽窃して作り上げた架空の人物」と称している。

現在の記録では、真田信繁は少なくとも死の前日まで「真田信繁」と名乗っていたことが確認されており、徳川光圀もわざわざ「幸村というのはあやまりなり」と記していることからも、「真田幸村」は作られた存在である。

諱を曲げて伝えるというのは、永原先生の価値観では到底あってはならないことなのである。一方で、永原先生自身は諱を直接口にすることは憚って、当時の呼ばれ方である「左衛門佐殿」と呼んでいる。

また、真田十勇士の逸話についても「デタラメ」として極めて嫌っている。

京都の龍安寺に真田信繁とその妻の墓があり、普段は非公開ということになっているが、永原先生は真田家関係者のため、優子達も特別に墓参りすることができた。

徳川家綱／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４１～１６８０）

江戸幕府４代将軍、父は３代将軍徳川家光。

永原先生が後年「大恩人」と評するとともに２人の初恋の相手の１

人でもあり、また「罪悪の象徴」でもある。
１６５１年にわずか１１歳で征夷大将軍となる。江戸幕府が開かれ５０年目の節目の年に「江戸の街の不老娘」の噂を聞き、永原先生を江戸城へと呼び寄せる。
永原先生に生まれ年を聞き「永正１５年、１３６歳」との答えを得る。また、真田家への仕官を証言したため、真田信之を呼び、その後、永原先生が自分の目の前で大泣きする事件が起きる。
この時、そばにいた家老は「無礼者！」と永原先生を怒鳴りつけるが、すぐに「よい、泣かせてやれ」と制止して事なきを得る。
永原先生が一通り泣き止んだの地、真田信之を下がらせ、ねぎらいの言葉を述べると、永原先生はまた大泣きしてしまう。
その様子を見て「辛かったろう、気の済むまで存分に泣け」と言って江戸城に泊まるように申し付ける。
これをきっかけに、真田信之とともに永原先生の初恋の相手になった。
永原先生はこのことに多大な罪悪感を感じており、後年には「時折藩主や旗本たちに戦乱の話を聞かせ伝え、毎晩毎晩罪を懺悔する日々だった。２人の恩人はあの世から今も私を許してはくれないだろう」と述懐している。
永原先生は徳川家綱より江戸城に常駐するように命じられ、以降代々の将軍に引き継がれた。
その後明暦の大火が発生し、この時は永原先生は徳川家綱から真っ先に逃されており、また将軍ながら真田信之に敬意を払うなど、彼の立場を超えた年長者への敬意が伺える。ＴＳ病がバレても殺されなかったのも、父家光による儒学教育の影響とも言われている。また、地位が不明瞭だった永原先生に武士の身分を与えている。
後年、永原先生からは「幼少にして立派な人だった」と、後世の印象とは違った評価を下している。
徳川光圀／徳川中納言／水戸光圀／水戸中納言／水戸黄門（１６２８～１７０１）

ご存知水戸黄門。永原先生は江戸城で何度か面識があり、水戸藩が勧めていた「大日本史」の編纂の時には、直接話を伝えている。永原先生は「徳川中納言」や「水戸中納言」と呼んでいる。

ちなみに、時代劇でよくある「諸国漫遊」についても永原先生は「嘘」と断じている。

史実の光圀は江戸に常駐していて、諸国漫遊どころか、関東からもほぼ出たことがなく、実際に諸国漫遊をしていたのは彼の家臣である。

吉良義央／吉良上野介（１６４１～１７０３）

吉良家出身の高家旗本。吉良家は名門の家柄で、領地に黄金堤を築くなど領民をよくいたわり、安定した治世をしていたとされる。

永原先生にとっては大恩ある人として、「３人目の恩人」とも呼んでいるが、一方で「またも恩を返せず」として、自らの無力と罪悪の象徴でもある。

当時の永原先生は、江戸城内で住んでいながらも、城内では町娘としての服を使用しており、他の大名や旗本、江戸城内で働く人々は、表向きは「不老の町娘」として敬意を払うものの、裏で陰口を叩かれ続けて耐え忍ぶ日々を送っていた。

これを不憫に思ったのが吉良義央であり、徳川綱吉とも掛け合って立派な服を与えた他、上方の作法を教え込むなどした他、徳川綱吉にも陰口を辞めさせるように進言し、綱吉もこれを採用。

徳川綱吉は江戸城内や大名・旗本に向けて「遠き戦乱の世の時代を知る柳ヶ瀬殿に陰口を叩かず、心から敬意を払うように」と命じ、陰口は途端に止んだ。

この一件以降、永原先生は吉良義央及び吉良家に対して強い恩義を感じるようになるが、元禄１４年（１７０１年）に江戸城内で朝廷の使者を迎え入れる儀式の準備中に浅野長矩から斬りつけられる事件が発生。

この時に徳川綱吉より「無抵抗だったのは寧ろ殊勝である」としてお咎めなしとなり、一方で浅野長矩は即日切腹・赤穂藩も改易となっ

た。

しかし元禄１５年（１７０３年）、大石良雄を中心とする赤穂浪士が吉良邸に討ち入りに入り、非業の死を遂げた。

この時、吉良義央が討たれたという報を聞いた永原先生の嘆き悲しみは深く、柳沢吉保の記録では「数刻にも渡り柳ヶ瀬殿の嘆き悲しむ声が江戸城中に響き渡っていた」と記されている。

永原先生はこの一件以来、浅野家や赤穂浪士に対して、極めて無礼と知っておきながら故意に諱を呼び捨てるほどに強い敵意を持っている。ただし浅野長矩の弟浅野長広については「大学殿」と呼んでおり、特に敵意はない。

また、忠臣蔵の物語についても「吉良殿にいわれなき汚名を着せた」として、永原先生は赤穂浪士を連合赤軍やオウム真理教と同列に置くほどに嫌っている。

後年の永原先生の述懐でも、「温厚で優しい方」「恩義に手厚い人」と言った絶賛を受けている。

一方で、吉良上野介に対して、「あれだけの恩を受けておきながら何もできなかった」と後悔していて、「きっとあの世で恨んでいるに違いない」と考えていたものの、後に優子の手により罪悪感から解放された。

自身が持つ多くの家宝を鑑定番組へ出すことを了承したのも、最終的には吉良の汚名を削ぐことが大きな動機になっている。

浅野長矩／浅野内匠頭（１６６７～１７０１）

江戸時代の大名で赤穂藩主、忠臣蔵で有名。

元々癇癪持ちな上に精神病のきらいがあったらしく、母方の叔父も同様の刀傷事件に及んで切腹・改易となっている。

吉良の「いじめ」について、永原先生によれば、「無理矢理吉良殿を悪人に仕立て上げるための創作」だという。また、永原先生は「かけがえのない恩人にいわれなき汚名を着せる行為」として、このような話をすると誰彼構わず怒り出してしまい、忠臣蔵の話を真に受けていた教え子の志賀さくらに対して、「吉良殿はそんな御方ではない」など

として、我を忘れて怒鳴りつけている。
ちなみに、江戸城での刀傷事件については、一般的には勅使に対する礼儀作法の指南役だった吉良に授業料を出さなかった（賄賂とされているが、現在の価値観では授業料という意味に近い）ことを咎められて逆恨みした上での犯行という説が根強い。
永原先生は、吉良側に落ち度は存在せず、単に浅野が精神病だったとしており、浅野の動機がどれも決定打に欠けるのは、「そもそも浅野は単なる精神病でまともな動機が存在しないから」という説も有力な説の一つ。
斬りつけられた後の取り調べても、吉良は「何ら身に覚えがない、乱心としか言いようがない」と答えていた。
これは、乱心ならば罪が軽くなるとしての配慮だったが、浅野は単に「恨みがある」とのみ繰り返していて、具体的には何も語らなかった。
一方で朝廷との重要な儀式を台無しにされた将軍綱吉は、永原先生が「あの時の怒りの形相は今も目に焼き付いている」と称するほどに激怒し、浅野長矩に即日切腹を言い渡した。
永原先生は、本来の流儀ならば「内匠頭殿」と呼ぶべき所を「長矩」と諱を故意に呼び捨てにしている他、「キチガイ」「狂人」とも言っており、評価は散々である。
このことは、鑑定番組内でも江戸城の日記を鑑定した鑑定人から、「浅野家に対する恨みが見て取れる」と評されている。

大石良雄／大石内蔵助（１６５９～１７０３）
赤穂事件の中心人物。浅野長広を当主としてのお家再興に向けて尽力していたが、それが叶わないと知ると、吉良家に討ち入りを決定する。
吉良の首を泉岳寺にある浅野長矩の墓前に供え、その後は他の赤穂浪士とともに切腹を命じられた。
永原先生はこの行為を「逆恨み」だとして、また恩人を殺害しただけでなく、吉良家の取り潰しのきっかけを作ったとして、赤穂浪士に

対しても「大石良雄」と諱を呼び捨てにするほどに強い敵意を抱いており、同情の余地がないとしてオウム真理教や連合赤軍と同列に置くほどに嫌っている。

赤穂浪士を絶賛する世論もあってか、討ち入りのあった日の夜の永原先生の嘆き悲しみは深く、柳沢吉保は、「数刻にも渡り泣き叫ぶ声が江戸城（当時は江城といった）中に響き渡っていた」と書き残している（ただし、これはさすがに誇張である）

徳川綱吉／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６４６～１７０９）

江戸幕府５代将軍、徳川家綱の弟で、兄の死と共に将軍となる。

戦国時代の気風を一掃し、文治政治を推進した。勤皇家でもあり、朝廷との関係を重視した。

後年の永原先生の述懐では「実直な人」「誠実な人柄」と肯定的な評価を下しており、「天下の悪法」とよばれた「生類憐れみの令」についても、「やりすぎな面もあったが、戦乱の時代の荒廃を一掃した」として肯定的な評価を示している。

永原先生にとっては、徳川綱吉に対しても吉良上野介の進言を受け入れたため、恩義を感じていて、後年の否定的な評価にはいい顔をしていない。

赤穂事件の時の処分について、永原先生は「喧嘩両成敗は時代遅れであり、生類憐れみの令の精神にも反する」と進言したものの、「柳ヶ瀬殿の言うことは最もではあるが、征夷大将軍といえど世論には勝てない」と却下されてしまった。この判断については、永原先生も一定の理解を示している。

一方で、刀傷事件における浅野家取り潰し、吉良お咎めなしの裁定にはほぼ全肯定的な態度を取っている。

柳沢十三郎／柳沢出羽守／柳沢左近衛少将／柳沢美濃守／柳沢保明／柳沢吉保（１６５９～１７１４）

江戸時代の譜代大名で、徳川綱吉の側用人として重用されるが、綱

吉死去後には新井白石に実権を奪われ、やがて隠居となった。
幕政を手動しつつ、水戸黄門や忠臣蔵では悪役を割り当てられてしまっているかわいそうな人物でもある。
物語内では、永原先生の江戸城での人生を記録した「柳ケ瀬まつ一代記」の著者の一人で、吉良上野介が徳川綱吉と掛け合って「柳ケ瀬殿に陰口はやめ、敬意を払うように」という所を「全くもってその通り」とした他、赤穂事件の時には永原先生の嘆き悲しみを表現し、また「世論が浅野側に傾く様子を見るに、柳ケ瀬殿の心痛察するに余りある」とも評しているなど、他人を思いやる心を持った情け深い人物として書かれている。

新井与五郎／新井白石／新井筑後守／新井君美（１６５７～１７２５）
江戸時代の旗本・学者。旗本でありつつも、６代将軍徳川家宣の元で幕政を主導するも、徳川吉宗の代に失脚した。
学者として、また詩人としても優れた人物で、後世「正徳の治」と讃えられている。
この時代、ローマ教皇の命でキリスト教布教のために密入国して捕えられたジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティと対話し、彼の学識に感銘を受け、本来「西洋諸国の日本侵略の尖兵である」キリスト教は、見つけ次第転ばせるか殺すかだった所を、幕府に異例とも言える上申を行った結果、切支丹屋敷への幽閉された。
切支丹屋敷でも、異例の破格待遇で処されたが、監視役兼世話係の老夫婦が彼に感化され、洗礼を授けた。このことから地下牢に移され間もなく衰弱死した。
また、新井白石はキリスト教については「幼稚な戯言」「仏教の焼き直し」として、自著西洋紀聞で批判している。
永原先生は赤穂事件終了の１０年くらい後に、新井白石と対面、戦国時代の宣教師のおかしさについて指摘し、宣教師が言い返せなくなったエピソードを新井白石に話した所、白石は「柳ケ瀬殿誠に聡明なり」と、永原先生を絶賛していた。

徳川吉宗／征夷大将軍／上様／公方／大樹公（１６８４～１７５１）

江戸幕府８代将軍、享保の改革でも知られる。

米将軍と呼ばれた他、暴れん坊将軍のモデルとしても有名。

永原先生は徳川吉宗より葵の御紋と本人の署名がついた茶器を贈られており、これは後世の鑑定番組では２５００万円という値段がついた。

奥村源八／奥村政信／奥村文角（１６８６～１７６４）

江戸時代前期の浮世絵師で、浮世絵の歴史の中でも重要人物の一人。永原先生は彼の墨摺絵を持っている。

浮世絵の様々な分野を開拓し、錦絵以前の浮世絵文化洗練に果たした役割は大きかった。

永原先生は享保１０年（１７２５年）に彼の浮世絵を当時の値段にして２０文で購入している。これは現在の３００円から４００円である。

鑑定番組に出演した時には、本人評価額を「買った時の値段を現代の価値に直して４００円」としてしまったため、４００万円と鑑定した鑑定士からは「こんなの前代未聞ですよ」「失礼ながら神を畏れぬ所業としか思えない」とたしなめられている。

中島八右衛門／葛飾北斎（１７６０～１８４９）

江戸時代後期の浮世絵師。世界的に有名な浮世絵師で、高齢ながらも様々な創作活動を行っていた。

一方で、奇行も目立つ変人で、典型的な天才型だった。

「蛸と海女」などの春画にも積極的に取り組むマルチタレントで、永原先生も「富嶽三十六景」を初版で全てきれいに所持しているが、幾つかの浮世絵は「持ちきれない」として江戸城を出る時に捨ててしまっており、このことを鑑定士からは「罰当たり」と評された。

滝沢左七郎／滝沢興邦／曲亭馬琴（１７６７～１８４８）
江戸時代の作家、『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』で知られている。
永原先生も曲亭馬琴の小説を愛読していて、当時書店で買った『椿説弓張月』を鑑定番組に持ち込んでいる。
また、葛飾北斎とも親しかったとされている。

安藤重右衛門／歌川広重（１７９７～１８５８）
江戸時代末期の浮世絵師。東海道五十三次で世界的にも有名で、西洋画家にも影響を与えた巨匠。
永原先生は東海道五十三次を全て良い保存状態で初版ものを全て所持している他、広重本人とも面識がある。歌川広重は「不老の娘」の噂を聞きつけ、永原先生を直接自宅に呼び出した後、「是非俺の作品を後世に伝えて欲しい」として、永原先生のためだけに書いた肉筆画を託されている。

島津斉彬／島津又三郎／島津薩摩守／島津左近衛中将／照国大明神（１８０９～１８５８）
幕末の大名、永原先生の正体は当然に知っており、薩摩切子を送っている。
吉良上野介の一件以降、永原先生は特に大名や旗本から敬意を持たれるようになり、こうした大名旗本からの寄贈品を数多く所持している。
織田信長、徳川家康、伊達政宗の血を引いており、薩摩藩の富国強兵に成功し、明治維新の礎を築いた。
この功績により、死後正一位を追贈された上、鹿児島市照国町照国神社の祭神となって「照国大明神」と言われるようになった。

昭和天皇（１９０１～１９８９）
ご存知昭和天皇、あまりにも有名なので事績は記さない。
永原先生にとっては戦時中に裏切った相手として罪悪感を持って

いる。
永原先生は教師として、戦時中は田舎に疎開しており、「久々の大戦争に血湧き肉躍る」と振り返りつつも、「真田家や吉良家に恩を返せていないからまだ死ねない」と思いこんでしまい、米軍が襲来した際には当時の教え子を囮に一人山へ逃げる計画を立てていた。
この計画は未遂に終わるものの「よりにもよって天皇陛下を裏切ってしまった」として後に「私は最低の女」とまで考えるようになってしまった。
戦国時代の動乱から江戸時代の長期平和、黒船来航による混乱、その後の人種差別やアメリカによる戦争といった歴史やキリスト教に対する悪印象を全て見てきた永原先生は、西洋文化・西洋文明に対する印象は極めて悪い。

島安次郎（１８７０～１９４６）
明治から昭和にかけての鉄道人。
特に明治期は後藤新平、十河信二と共に国鉄広軌化に邁進、また蒸気機関車の設計に数多く関わり、永原先生からはその優れた技量から、木下淑夫、結城弘毅と並び３人の神様、「車両の神様」として讃えられている。
一方で、永原先生は連結器交換の功績については詳しく話してはいないが、日本の鉄道が世界を驚かせた最初の事例とも言われている。
原敬内閣により、広軌化の夢を絶たれ鉄道省を下野し、満鉄に転身、そこでは筆頭理事などを勤め上げ、また新幹線のプロトタイプだった弾丸列車計画に、息子の島秀雄と共に関わるが、戦局悪化によって計画は頓挫し、終戦直後に間もなく亡くなった。

結城弘毅（１８７８～１９５６）
鉄道省の運転士、当初は山陽鉄道に入社し、国有化に伴って国鉄職員となった。
彼の機関士の技術は随一と言われ、また投炭の名人でもあった。
彼は「時間に正確な鉄道の重要性」を世界で初めて認識し、それを

実際に実行に移した。
彼の技量は当時他の職員を圧倒していて並び立つものはいなかったが、その卓越した指導力で彼の技量は他の職員にも受け継がれていった。
彼は今日の時間に正確な日本の鉄道を文字通り1人で作り上げた人物でもあり、速度計もない時代から時間に正確な鉄道を目指した。
永原先生からは「運転の神様」として、木下淑夫、島安次郎と共に3人の神様と讃えられ、特に結城弘毅は「3人の神様の中でも最も偉大な人物」としてその筆頭に上げている。
その後、鉄道省では「超特急燕」の運転を開始し、指導に加わるが、間もなく鉄道職員の減俸問題に抗議するために辞表を提出、2度と鉄道省に戻ることはなかった。

木下淑夫（１８７４～１９２３）
明治・大正期の鉄道官僚、訪日外国人向け旅行ガイドブックの先駆けとなるものを作ったり、また観光と鉄道の融合を思いついた人物。
その手腕は「営業の神様」と呼ばれ島安次郎、結城弘毅と並び称され「3人の神様」と呼ばれた。
鉄道博物館での会話ということで、永原先生の口からは軽く出てくるだけだが、実際には現在の日本の鉄道における手厚いサービスの基礎を作った偉大な鉄道人である。

十河信二（１８８４～１９８１）
東海道新幹線建設時の国鉄総裁、頑固一徹な性格で人情深く、情熱が凄まじいという、良くも悪くも昭和の力強いおじいさん的な性格の人だった。
戦前から師匠の後藤新平のもとで広軌論者として活躍、その後しばらく隠居生活をしていたが、東海道新幹線開発のため１９５５年より７１歳にして国鉄総裁に就任する。
既に「古びた老機関車」と揶揄されるが、その強い政治力で東海道新幹線の開発を強く推し進めた。

永原先生からもその手腕は高く評価されており、東海道新幹線に初めて乗ったときには鉄道開業時以上の衝撃を受けた。
永原先生の時代は2週間以上かかった距離を3時間で到着できることは同時代人以上に衝撃を受けていたことは想像に難くない。
東海道新幹線に反対する勢力に対抗するためにあらゆる手段を講じるが、東海道新幹線開業直前に予算の過少申告が発覚、１９６３年に総裁に再任されなかったが結局歴代総裁で一番長い８年を国鉄総裁として仕事をこなした。
新幹線は翌年１０月に開業するが、開会式には正体されず、「新幹線の父」と言われた男を招待しなかったことは後年罪悪感が残ったのか、東海道新幹線東京駅のホームには十河を記念したレリーフがあり、１９７３年にこれが出来た時、十河はたった一言「似とらん」と言ったとされている。

朝倉希一（１８８３～１９７８）
明治から昭和にかけての鉄道人で、京都の鉄道博物館の蒸気機関車を解説する際に永原先生の口からその存在が語られる。
島安次郎に師事し、また師の息子である島秀雄を指導した。
鉄道技師として多くの著書を執筆しており、９６００やＣ５１蒸気機関車の設計に関わり、その後も蒸気機関車の設計に携わる。
昭和１１（１９３６）年に一旦鉄道省を退官するが、戦後は十河信二、島秀雄と共に東海道新幹線の調査委員に就任し、また日本鉄道技術協会の会長も務めるなど、９５歳で亡くなるまで重鎮として活躍した。

島秀雄（１９０１～１９９８）
島安次郎の長男で鉄道技師、朝倉希一の弟子で、蒸気機関車から新幹線までの開発まで関わった。
永原先生をして「車両の神様」と呼ばれた父安次郎を上回る日本最高の鉄道人と絶賛されており、実際に彼が日本の鉄道に与えた影響は大きく、ＪＲや大手私鉄の鉄道会社の社長から、現場に携わる人、一

介の鉄道マニアや鉄道に触れ合う子供に至るまで、おおよそ日本で鉄道に係る人間のほぼ全員が、島秀雄に何らかの影響を受けているとさえ言われており、彼と並び称されるのは、日本の鉄道に「正確さ」の概念を創造した「結城弘毅」のみとされている。

劇中ではＣ１１やＤ５１、またＣ５３からＣ６２までの各蒸気機関車の設計に携わったとして永原先生からはＣ５４を除いて高く評価されている。

弾丸列車計画では父の島安次郎と共に深く関わり、機関車の試作などをしていたが結局実現しなかった。

戦後は鉄道技術者や旧陸海軍の技術者などを集めて基礎研究を続け、「電車」の重要性を見抜き、戦後は中距離電車の先駆けとなった湘南電車の開発に関わった。

ところが桜木町事故で一旦国鉄を辞職し民間に転身したが、東海道新幹線を作る際に十河信二の熱意に押されて技師長として復帰する。

その後は１５１系こだまや０系新幹線電車の設計の責任者になった。

最終的に予算超過の問題の際に十河信二ともども辞職してしまい、開業式は自宅のテレビで見ていたという。

彼の末弟はＹＳ―１１の設計に加わり、また次男も鉄道技術者として東海道新幹線の開発に携わった他、台湾新幹線の建設にも大きく関わっている。

その後、島秀雄は現在のＪＡＸＡの前身の１つ宇宙開発事業団が創設されると初代理事長に就任し、６８歳にして新天地に旅立ち、日本の宇宙開発の基礎を作り上げた人物でもある。

細川泉一郎（１９０８～２０００）

鉄道技師、島秀雄の弟子として永原先生から紹介されている。

Ｃ５７やＣ５８、Ｄ５２の開発やＤ５１の改良に携わった他、戦後は１５１系こだま電車の設計にも深く携わっており、永原先生からも「とても優秀な人」とやはり高い評価を受けている。

本人は生前「島さんが常に大将で僕は生徒」と言っていたそうであ

る。

２０００年５月に亡くなったため、優子が生まれる１ヶ月前まで生きていたことになる。

# 当時の古典

永原先生の話していた言葉は、いわゆる室町時代にあたる後期中世日本語と呼ばれる言語になります。

江戸時代の永原先生は近世日本語を話し、幕末以降は現代日本語を話していますが、時折古語の名残が出てきます。

いわゆる学校で習う古典は、平安時代の中古日本語が中心で、その当時の言語に比べると、遥かに現代語に近い言語となっております。

大まかには、奈良時代までを上代日本語（飛鳥時代、古墳時代以前を古代日本語とも）、平安時代を中古日本語（前後期あり）、平安末期、鎌倉時代～室町・安土桃山時代までを中世日本語（院政期及び鎌倉時代を前期中世日本語、室町以降を後期中世日本語）、江戸時代を近世日本語（前後期で前期近世日本語、後期近世日本語に別れる、後期近世日本語とされる江戸後期は外来語や新しい明治以降の造語を除けば、現在と話し言葉がほぼ同一で、現代日本語に含める場合もある）、幕末または明治以降を現代日本語に分けます。

永原先生が生まれた当時に話されていた言語については諸説あり、この物語では、以下の説を採用しています。

・え、おの発音が、それぞれや行混じりの「いぇ」、わ行混じりの「を」だった。これは「～へ」や「～を」も同様。なお、うぉの発音は江戸時代初期に「お」に、「え」の発音も江戸後期には現在のものになった。

・は行音は語頭のみ「ふぁ、ふぃ、ふ、ふぇ、ふぉ」でそれ以外は「はひふへほ」、そのため、江戸時代より前の永原先生は、「花」を「ふぁな」、「人」を「ふぃと」と発音していた。また、語中のは行音は大半が「わ行」の発音に合流しています。

・本編中の永原先生の話にあったように、元々は「ぱぴぷぺぽ」が「は行」だった。奈良時代、もしくは平安時代初期に「ふぁ」行になり、室町時代までに語頭のみ「ふぁ」行となって他は「わ行」に合流、江戸時代に現在と同じ「はひふへほ」の発音になった。「ぱぴぷぺぽ」がつく和語や語頭以外に「は行」がつく和語がほぼ皆無なのはこのため。

・せの発音が「しぇ」、なので「切腹」は「しぇっぷく」、「ぜ」も「じぇ」

と発音していた。ただし関東方言では永原先生が生まれる以前より「せ」「ぜ」で、関東方言が共通語となった。江戸後期には近畿地方でも「せ」となり、「しぇ」は西日本九州に方言として残る。「支倉六右衛門常長(はせくらろくえもんつねなが)」は、「ふぁしぇくらろくいぇもんつねなが」となる。

・さ行の発音には謎が多い、主に「つぁ行」説、「ちゃ行」説、「しゃ行」説の3説あり、また現在日本人が苦手とする「ｔｓ」「ｔｈ」系の発音だったという説もある。また、いつ頃に「さしすしぇそ」となったかもはっきり分かっていない(遅くとも鎌倉時代にはこう発音されていた)

・あ行とや行の「えの区別」及びあ行とわ行の「ゐ」、「ゑ」の発音の区別はなし。「ゑ」もまた「いぇ」と発音されていた。「ゐ」は現在と同様「い」と発音、これらの発音も、古くは「うい」「うぇ」で、平安後期から鎌倉時代にかけてあ行に合流した。あ行とや行の「え」の区別は平安時代前期に消滅し、や行の「いぇ」に統一され、江戸時代後期に「え」となった。ちなみに、「え」の発音が現在のものになったのを最後に、ひらがなの五十音の発音が現代語と同じとなった。永原先生が時折出してしまう古語訛りの中でも、「え」の発音が頻出なのはこのため。

・か行、た行、な行、ま行、ら行、またぜを除く濁点の音は現在とほぼ同一。

・ただし、た行に関しては、永原先生が産まれる少し前までは「た、てぃ、とぅ、て、と」で、「じ」と「ぢ」、「す」と「づ」の発音の区別が明確であった。永原先生が生まれた戦国時代には、すでにた行の音が現在のものに変化し、この両者の区別は曖昧になっていた。

・江戸時代には、完全にこれらが一致した。なお九州を中心に一部地方ではこれらの区別が残っている他、東北地方を中心に、「じ」「ぢ」「ず」「づ」全てが統合してしまった地域もあり、これが「ズーズー弁」の起源。

・なお、現在の日本語は外来語の流入で江戸時代と比べると発音が複雑化しており、単純化する言語変化においてやや異質である。ま

た、「を」の発音も、「うぉ」への先祖帰りが起こりつつある。
・係り結びは完全に消滅し、また平安時代には通じなかった言葉も多く通じるようになっている（火事、大切、返事、返上など）、いわゆる武士の影響が強い
・終止形と連体形の統合に伴い、ら行、な行の変格活用は、それぞれ四段活用に既にほぼ合流（江戸時代後期に合流との説もある）
・命令形の語尾の「ろ」は、江戸時代以降標準的になった。それまでは関東方言
・下一段、上一段活用が、上二段、下二段とほぼ同数で、両方に活用できる動詞も多い。上代には下一段活用はなく（蹴るは下二段活用だった）、平安時代には十数語に上一段活用で、下一段は蹴るのみ。平安末期より上二段、下二段活用が上一段、下一段活用になり始め、永原先生の時代はほぼ同数（一段化の進捗具合は諸説あり）、江戸時代には一段化がより一層進み、また蹴るが四段活用化。遅くとも幕末までには「得る（うる）」の一語が現在も下二段活用に残ったのを除き一段化が完了した。
・・余談ではあるが、未来の日本語は一段活用が五段活用に合流すると考えている人もいる。また、サ行変格活用の五段化が現在進行中との研究もあり、最終的には全ての動詞が五段活用に一本化するという予想を立てている人もいる。本編エピローグは２５世紀に時間が飛んでいるが、その当時の日本語は、もしかしたらそうなっているかもしれない。
・「～です」の表現は江戸時代以降に、ややぞんざいな表現として登場、明治以降に丁寧語化した。なお、永原先生は当時の話し言葉として「～でござる」を多用していた。江戸城住みなので、べらんめえ口調の下町言葉ではなく、当時の武士や大奥が使用していた「山の手言葉」を使っていた。
・「候」は書き言葉として多用されていたが、話し言葉としては既に廃れていた。
・永原先生の一人称は、幕末まで「俺」、明治以降に「私」に矯正した。「俺」の一人称は鎌倉時代に二人称だった「おのれ」が一人称化す

ると共に詰まって登場した。戦国時代や室町、鎌倉時代は戦国時代以前から戦乱や私闘が多く、人心が乱れており、平安時代に京で発達した女性語が京でも廃れ、全国的に女性も乱暴な男言葉を使っていた。平和な江戸時代になると男女のみならず様々な身分や職業の人々の役割言葉が発達し、日本語が非常に豊かになった。そんな中で、室町・江戸時代には「俺」の一人称は士農工商老若男女を問わず将軍から町人の子供まで幅広く用いられた。八百屋のお七も一人称は「俺」だった。なお、かしこまった場では、武士は「それがし」「拙者」が使われていた。また、戦国時代より「私」の一人称が使われていた。

・・明治以降に、「俺」よりも影の薄かった「私」が大々的に登場、また「僕」は「下僕」の略語で幕末の武士の一部が一人称として使用したのが一般化したもの。俺は鎌倉時代でも通じるが、僕は明治以降にしか通じない言葉になる。

・・ちなみに、上代には「あ」「わ」が一人称で、現在も津軽地方に方言として残っている。その後は「我」「まろ」を始め様々な一人称が登場した。

# 番外編1　ＴＳ娘、塩津幸子の物語
## 俺こと塩津悟が女の子になった日

それは、突然の出来事だった。
俺こと塩津悟は、この日死んだ。
俺は何でもない、1人の大学生だった。
高校時代から仲のいい手原直哉（てはらなおや）や、大学に入って友人になった大谷光男（おおたにみつお）、そしてその他の仲間たちと共に、サッカーサークルでサッカーに打ち込んでいた。まだ1年生だけど、このサークルはあまり先輩後輩を気にしないらしい。

「おう、なんか今日キレなかったな、大丈夫だったか塩津？」
帰り道のバスでのこと。いつもというわけではないが、時たま途中まで3人で帰る所、手原の方が、俺を心配して声をかけてくれる。
「ああうん、少しお腹痛くて……明日には良くなるといいけど」
「そうか、無理すんなよ」
大谷も、俺を心配してくれていた。
本当にいい友人に恵まれたものだ。
「分かってるって。サッカーは逃げねえよ」
「だな、ま、体調良ければ明日も練習しようぜ」
今思えば、これが悟として交わした最後の言葉になるとは、この時はまだ微塵も思っていなかった。

俺が住んでいる町は東北地方の仙台市で、生活には不便していない。
手原たちと別れて俺は自分の家に戻る。
「ただいまー」
「悟、お帰り」
「ああ、お母さんただいま」
家に帰ると、こうしてお母さんが出迎えてくれる。

俺の家は、父母に加え弟の徹と４人暮らし。
運動部だけど恋愛には疎く、彼女はいない。サッカーにばかり打ち込んでいたというのもある。
手原の奴も同じで、「来年までには彼女ほしい」と言っていた。
大学生活にもすっかり慣れ、大学初の文化祭も終わり、世間も秋の兆しが見え隠れした１０月末、俺はいつもの通り階段を上がり、部屋に横になってその日の疲れを取る。
今日は練習中、少しお腹が痛くなることもあった。それ故に、少し気をつけないといけない。
「ふう」
さっき少しだけお腹が痛いのを感じたが、どうやら杞憂だったらしいな。今は少し引いている。
そう思い、俺は、いつものように暇つぶしと情報収集を兼ねてサッカー誌を見ることにした。
しかし、その５分後くらいだった。

「んんっ……」
痛い、お腹が……くそっ！
な、何だこれは……！　さっきの比じゃねえぞ!!
「うあああああああ!!」
かつてない痛みが、俺を襲う。
思わず大きな声が出た。確実に徹たちにも聞こえたはず。
俺は、お腹を抑え、大きな声を我慢する。
視界が、どんどんとぼやけていく。
突如、喉の奥で何かが逆流した。
タッタッタ……
「悟!?」
「うっ……おえっ!!?」
「キャー!!!」
俺が何かを吐くと同時に、お母さんの甲高い悲鳴が聞こえた。
俺の目の前には、赤い液体が見えた。

知っている。これはそう、血の色で――
「おい、どうしたんだ!?　って、悟！」
視界が、ポツリと途切れた。
真っ暗で何も見えず、何も動かせない。
「兄貴！　おい、大丈夫か兄貴！」
お父さんと徹が駆けつけてきた。
布団に横になっている感覚も、目の感覚もない。
ただ音だけが聞こえる真っ暗な常闇だった。
ピッピッピッ……！
「もしもし、長男が突然倒れて……はい、血を吐いて意識がありません！　今すぐ来てください！」
逼迫したお母さんの声が聞こえる。
間違いなく、１１９番された証拠だった。
「息はしているな。うん、脈もあるぜ」
「おい兄貴！　しっかりしろ！　どうしたんだ!?」
「おい、返事してくれ！　悟！　悟うううう!!!」
俺の体の行方が、よく分からない。
ただひたすら、両親と弟が俺を呼びかけ続けている。
それに答えたいのに、答えられない。
もしかしたら、俺は死んだのかもしれない。
死後の世界は、こうなっていたのかな!?　ちょろい人生だったなあ。本当に。

ドンドンドン
「塩津さーん！」
しばらく時間がたった。それが5分なのか1時間なのかは分からない。
突如、別の男性の声が、聞こえた。
誰かが階段を降り、玄関を開ける音がした。
救急車が、到着したらしい。
「あの、意識がないんです」

「……とにかく、すぐに病院へ」
全く、今ごろ来ても遅いのに。
「呼吸、脈拍正常……吐血があるだけだな。でも意識がない」
あれ？　俺、まだ息してるのか。
じゃあ生きてるってことか。
「せーの！」
階段を降りる音と、家族の話す音が聞こえ、そして担架に乗せられる音がした。
「はい、はい……塩津悟１９歳男性、呼吸脈拍は正常も意識なく、吐血あり」
俺の感覚が、少しだけ戻ってきた。音からも、救急車に乗せられていることは分かった。
でも、体は一切動かせない。とても、もどかしい。
ピーポーピーポー！
救急車のサイレンが鳴った。
な、何だ!?
救急車のサイレンが聞こえる中、俺の下半身が、急に膨張し始めた。
今までなかった触覚も、下半身だけ驚くほど敏感になっている。
今までにない膨張ぶりと快感に、強い恐怖を覚える。
もう無理！　破裂する！
そう思った次の瞬間、信じられないような快感と共に、精力が出ていく。
あーーーーー!!!
どこまでも、永遠に続くとさえ思えるくらいに長い「それ」の後、規則的に響く救急車のサイレンと、道を開けるように促す救急隊員さんの声が、どんどんと遠くなっていく。
今度こそ、俺は自分の死を覚悟した。
それにしても、死ぬのって案外、気持ちいいんだな。

どうすんだよこれ！

「……」

目が、覚めた。

頭が少しだけ、痛い。

あの後俺は、確か……そうだ、死ぬほど酷い目に遭って……

違うそうじゃない。大学から帰ってきて、突然謎の腹痛と吐血、それから射精で……うん、あれで確か死んだんだったよな？

ってことは、ここは三途の川か？　真っ暗でよく分からんが、どうやら今俺は布団を被せられて寝ているらしい。

辺りを見渡すと誰もいない。

よく見ると、あちこちに光があって、左腕に違和感を感じた。

輪郭だけでも、それが点滴であることが分かった。

死後の世界ではなさそうだ。

「生きてる……あれ？」

言葉が漏れて、大きな違和感を覚える。

俺の声、こんなに高かったっけ？　いや、これじゃまるで女の子の声だ。

もしかしたら、病気の一環なのか？

生きていると言ってもとんでもないことをしでかした後だ、後遺症が残って、サッカーに影響しなければいいが……

意識がはっきりするにつれて、俺は胸に異常な違和感を感じた。

病室には誰もいない。

とにかく、電気をつけたいが、点滴のための針が邪魔だ。取れねえように気をつけねえと。

「……うー」

思わず唸ると、やっぱり、耳からは女の子の声にしか聞こえない。

いや、もしかしたら、俺の耳がいかれただけかもしれん。

お、これが電気つきそうだな。

カチッ

「うっ！」

眩しいのをこらえ、目をつぶり、更に布団を目に当てて少しずつ目を慣らしていく。
俺の予想通り、そこはどこかの病院の病室だった。
時計があり、時間は翌日の午前８時だった。
今日が土曜日で助かったぜ。
「随分長く寝てたみてえだな」
声に似つかわしくない、男口調が聞こえる。
いや、俺は男だから、ともかくそうしなきゃならんだろう。
視界を得た俺は、ベッドを立つ。
この部屋は狭い個室でベッドが部屋の面積の半分を占めている、入り口にかけての通路は狭く、おそらくあそこにトイレがあるんだろう。
「よし、トイレで考えよう」
相変わらず女の子の声なのはスルーし、点滴の器具を慎重に動かしつつ、ベッドを出る。
「あれ？」
着ている服が、無茶苦茶ぶかぶかになっていた。
起き上がって床に立つと、ズボンの裾が大きく床に付着していて、どうあがいても引き摺るしかなくなってしまっている。
要するにこれ、寝たまま体が縮んだってことだよな!?　ったく、どうなってやがるんだ!?
いやそれだけじゃない、上の方もぶかぶかだし、更に言えば何だか上半身が重たい。
俺は転ばないように警戒しながら、トイレの部屋の前に到着する。
「ん？」
下を向いて、ようやく気付いた。
俺の胸が膨らんでいた。それもかなり。
そういえば、少し胸が擦れていたよな？
一体、どうなってやがる？　声が高くなったのといい、体が小さくなったのといい、まさか「女の子になっちゃったー」とか言わんでくれよ。

ガララララ……
扉を開けると洗面所になっていて、コップが置いてあった。
そして左に扉があって――
「だ、誰だお前!?」
部屋に入り、右側の鏡を見ると、見たこともない少女が驚いた様子でこちらを見つめていた。
少女は滅茶苦茶かわいい顔で、アイドルをやっても十分にやっていける素質がある。どこか儚さと幼さを感じさせる、美少女の中から選りすぐったような、そんなかわいい女の子だった。
水色の首までのショートカットの髪は、何でも似合いそうで、しかし着ている服はぶかぶかで、あまりにも似合いがない。
そして、やはりというかなんというか、胸の大きさはかなりのもので、いわゆる巨乳を売りにするグラビアアイドルやＡＶ女優が、こういった大きさだよな？
外見はともかく、どこからどう見ても女の子としか言いようがない。
俺は、無意識のうちに逃避していた下半身に目を向ける。そして、意を決してパンツごと下ろしてみた。
「……うっ！」
思わず、後ずさりしてしまった。
よく見なくても、俺の人生の相棒は、跡形もなくいなくなっていた。
そしてこれは、つまり……やっぱり、女の子になってしまったらしい。下半身がこれでは、もう、何も言い訳ができない。
「よし」
俺は、興味本意で上の服も脱いでみた。
「うわっ!!!!」
かわいい女の子が、俺の前で恥ずかしげもなくヌードをご開帳していた。
いや、これは紛れもなく俺自身で、俺は俺に興奮しているのか？
俺ってナルシストだったっけ？　あーもうわけがわからないよ！
と、とにかく、服を着直してベッドに戻ろう。

ぶかぶかでも裸よりはマシだろ。な。

「どーすりゃいんだよ……」

もう一度横になり、俺はこれからが不安になった。

女の子になってしまう病気、そんなものにかかってしまうなんて……

まず、手原と大谷を始め、サッカーサークルの連中にどう話せばいいか？

大学をどうするか、家族に何と説明しようか、そして何よりこれから男としてこんな体でどうすりゃいいのか？　いや女、だよなこれ？

ってことは、ともかく男に戻らないといけないってことか。

でもどうやって？　というか、そもそも女が男になれるのか？

いやいや、男が女になったんだし、なれるだろ。

コンコン

「わっ！」

扉がノックされる音に、俺は驚く。

突然のことに、俺は一瞬飛び上がってしまった。

ガララララ

「悟！」

「兄貴……って、誰だお前!?」

入ってきたのは、両親と弟の徹、更に白衣を着たお医者さんだった。

「誰だお前とは失礼だな」

ぶっきらぼうな言葉は、この女の子の声に合っていなくて、なんかちぐはぐな不格好になってしまっている。

「いやいや、声を聞いたらますます『誰だお前』何だけど」

徹からのツッコミごもっとも。

「あー、無理もねえか」

女の子にふさわしくない乱暴な口調で話す。

いや、意識してやらねえと、俺が俺でなくなっちまいそうだぜ。

「それで先生、悟はどうなったんですか？」

お母さんが、心配そうな目で見てくる。

ともあれ、お医者さんの話を聞きたい。
「いわゆる、完全性転換症候群、通称ＴＳ病と呼ばれる病気です」
お医者さんから告げられた病名は、俺も名前しか知らない病気だった。
男が、女になってしまう病気というのは実在するらしい。
つまり、これは夢ではねえということだった。
「１つだけ聞きたい。俺はこのまま女なのか？」
「はい、そうなります。男には、戻れません」
お医者さんの申告は、容赦の無いものだった。
もう、男に戻ることはできないみたいだ。
「特殊な病気ですから、しばらくしたらＴＳ病を専門にしているカウンセラーの方が見えられます。午後は健康診断になりますので、それまで食事抜きでゆっくり休んでてください。あ、点滴は取りますね」
「あ、ああ……」
お医者さんがそう言うと、俺に刺さっていた点滴の針をゆっくり抜き、絆創膏を張り付けて押さえるように言った後、部屋から出て、俺たち家族だけが取り残されてしまった。
「な、なあ兄貴」
「ん？」
徹は、困惑した表情で俺を見つめてきた。
男兄弟が、今は姉と弟みたいな絵面になってしまっている。
「これから、どうするつもりなんだ？」
「どうするも何も、まずは大学の勉強のこととか、手原や大谷たちのことを考えねえと」
幸い、大学は高校と違って「クラス」何て言うものはない。
だから、今の俺なら手原たちにとって、「塩津は行方不明」ということになるし……いや、音信不通はまずい。最寄りのバス停は彼らに知られているから、いくら仙台市は広いとは言え最悪家に突撃されるかもしれないし、正直にＴＳ病になったって言うべきだろうか。
「でも、とにかくまずは悟がどうしたいか。だな」
お父さんがここで初めて口を開く。

「うむ、とにかく寝てても仕方ねえ。少し歩かねえと」
とにかく、サッカーをしてえしな。
「な、なあ兄貴」
俺がベッドから立ち上がると、徹が違和感を口にした。
俺も、ようやく違和感に気付いた。
目線が、やけに低い。
「あ、ああ……やっぱり小さくなったみてえだ」
徹と俺は、同じくらいの身長なのに、今の俺の目線は、徹の顎程度の高さになっている。
他の家族の身長の関係を見れば分かるように、俺の体が女になったことを考える間でもなく、俺が小さくなったことがよく分かる。
「悟、大丈夫なの？」
「分からん。だが、何とかしねえとな」
お医者さんからは、男に戻ることは出来無いと告げられたが、まだ諦めるには早い。
戻れないとすればこの体で生きていくしかねえ訳だけど、どこかに逃げ道があるはずだ。
とにかく、今はそれを信じるしかねえな。
「ああ」
俺たちは、少し重い雰囲気で過ごす。
誰も一言もしゃべらないけど、その方が、かえってよかったかもしれないな。

# 訪問者の宣告

コンコン
「はいどうぞ」
突然のノックに、一瞬ビックリしながらも、お母さんが対処する。
ガララララ
「失礼します」
「わあ……」
徹は、口をあんぐりと開けていた。
そこには、さっき鏡で見た俺に負けない位のかわいい女の子が立っていた。
髪はとても清潔感があり、銀色の見事な縦ロールがまた、幼さを引き立てている。
顔はとても童顔で、何より小学生位の身長しかなく、その歩き方や振る舞い、そして自己主張している大きめのおっぱいが無ければ、小さなかわいらしい女子小学生にしか見えなかった。
服装も、いかにも小さな女の子という感じのピンクのデザインをしたミニスカートだった。
少女が、空いていた椅子に座り、面談のような形になる。
「あなたが……塩津悟さんですね？」
「あ、ああ……確かに俺が塩津悟だ」
「ふふ、今はそれでもいいわね。申し遅れました。私、余呉（よご）と申します。長い付き合いになると思いますので、よろしくお願いいたします」
余呉と名乗った少女は、その外見からは信じられないほどに所作が洗練されていた。
「今日お伺いしましたのはＴＳ病について……ええ、私もＴＳ病ですから、同じ病気の仲間として、あなたを導きに来ました。事は急を要しますから、突然訪問となりました」
そして、わざわざ突然来たということからも、どうやら俺の状態は悪いのだろう。

「その、いくつか聞きたいんだが……俺は男に戻れるのか？」
お医者さんとは違う回答を期待して、俺は少女に話しかける。
「そうですね……結論から言ってもいいですか？」
「ああ」
余呉と名乗ったその少女は、口元に指を当て、僅かにロールの髪を揺らす。その幼い外見から想像もつかないほどに淫靡な雰囲気を醸し出す。
それはまるで、魔性の女のようで――
「男に戻ることは、医学的にも絶対に不可能ですし、男に戻りたいと思ってもいけません。あなたに残されている道は、女として、精一杯女の子らしく生きていくことだけです」
「な!?」
俺に告げられた現実は、余りにも無慈悲なものだった。
男に戻ることは絶対に不可能、だから女として生きていけ。それが余呉と名乗った少女の言葉だった。
「私は、長い間この病気の患者を見てきましたわ。ただ、1つだけ断言できるのは、男に戻りたいと願って、実行しようともがいた人は、1人の例外もなく、必ず自殺に追い込まれている。ということだけです」
「な!?」
余呉さんから次に発せられた言葉は、余りにも救いようの無い話だった。
俺のやりたいことをやれば、自殺しかないと言われているようなものだった。
「そんな！　悟は……この子はずっと男の子として生まれて、男として育ってきたのに！」
お母さんが居たたまれなくなって、余呉さんに詰め寄った。
「そんなことを言われましても、無い袖は触れませんわ」
「でも！　できないと言われても……女の子として育て直すなんて！
支援機関の人でしょう!?　何とかできないのか!?」
お父さんも、また余呉さんを問いただす。

「ふー……いいですか？　私は何も意地悪したくて言っているんじゃないんですよ。逃げ道は無いんです。無い袖は振れないんです。どうすることもできないんです。ただ、もし女性として生きることができれば、あなたは何年だって生きていけるんですよ？」
「ど、どういうことだ？　何年でも生きていけるって？　人間は死ぬものだろ？」
　今度は徹が疑問を呈した。
「ええ、そうですね。確かに私もそうです。ですが、このＴＳ病になった女性は、老化が止まるんです。ところで、あー悟さん？」
「ああ、俺は悟だ」
　老化が止まるとか言う非現実的な言葉よりも、いきなり俺に振られたことに驚いてしまった。
「今はまだいいですけど、新しい名前を考えてくださいね。で、悟さん、私、いくつに見えるかしら？」
　わざわざこんなことを言うということは、もちろん相当な年齢であることは間違いない。
　余呉という名前だって、もしかしたら本当の名前ではないのかもしれない。
「あー、大体察しはつくが、知らない人が見たら小中学生って感じだな」
　特に胸の膨らみに気付かなければ、誰だってそう言う回答をするだろう。
「そうね。でも、私の年齢はあなたたち４人の年齢を足しても、全然足りないわよ」
　少女は、にわかに信じがたい話をする。
　実際、この少女がそんな年齢には見えない。
　恐らく、この少女も元は男だったというわけか。
「ええ!?　じゃあ、１００歳越えてるってか？　明治とか記憶にあったりするんか？」
　俺は思わず、ちょっとした計算をした果に、反射的にそう叫んだ。
　俺たち４人家族の年齢を合計したら、１００歳を優に越えてしま

う。
俺と徹はともかく、両親はこの年齢の子供を持つ親だから、当然年齢を合計すればとんでもない数字が出てくる。
それでも全然足りないとはどういうことなのだろう？
「ええ、でも女性に年齢を聞くのは失礼よ」
「うぐっ」
少女は、にっこりと微笑んでいた。
でも、１００歳を越えているのは間違いなさそうで、少なくとも明治時代の記憶があるってことは、下手したら江戸時代の産まれかもしれねえな。
いずれにしても、ＴＳ病にはそういった可能性もあるということだ。
「さて、あなたも、私のように、１００年以上若く過ごす資格が出来たのよ」
「……」
全く現実感の無いことばかりが次々に襲いかかってくる。
いきなり激痛とともに女にされて、目が覚めたらすぐに、「もう男に戻れないから女として生きていけ」と言われて、すぐに「はいそうですか」何て頷くのは土台無理な注文だ。
「私たちは日本性転換症候群協会という、ＴＳ病の患者で作る団体からの支援をしていて、私はその中であなたの担当カウンセラーとしてここにいるわ。患者の数が少ないから、私１人で東北地方全ての患者を管轄しているの」
そう言って名刺を見せてきた。
そこには「日本性転換症候群協会東北支部長」とあり、また余呉さんの下の名前は、俺たちのおじいちゃんおばあちゃんでも名乗らなさそうな、そんないかにもという古い感じの名前になっていた。
「もしかして、余呉さんにも男だった頃があったのか？」
「ええそうよ、ずっとずっと昔のことだけどね。外見はこんなでも、私は遠い昔に男だった。ええ、私より長生きの人もいるわよ」
余呉さんは、にっこりと微笑んでそう話した。

そのしぐさ、言葉遣い、どれを取っても女の子そのものにしか見えない。
とてもこの少女が、男として生まれたなんて誰も信じないだろう。
いや、そりゃあ何１０年、下手したら１００年以上女性をやっているんだから当たり前か。
「道は１つしかないと言っても、すぐに進む決断しなくてもいいわ。でもいつまでも立ち止まることはできない。まず心を落ち着けて、逃げ道を探さず冷静にじっと前を見て、覚悟ができたら、カリキュラムを受けて欲しいの」
「カリキュラム？」
まあ、名前からもだいたいは想像がつくな。
「ええ、女性として生きることが、あなたに残された道よ。そのために、私たちは女性としての生き方をまとめたカリキュラムを作っているんです」
「うー、そうは言ったってよおー」
俺、男だし、やはりいきなり女として生きろって言われても。
「もちろん、カリキュラムをしないで生きていっている人もいますよ。私もそうでしたから」
「お、そうなのか！」
ちょっとだけ、希望が沸いてきたぞ！
どうやらカリキュラムなしでも、今後の人生の道は開けるらしい。
「いえですが、その場合は自然と少しずつ女性としての生き方を学ぶようになります。この場合も、男に戻ることを意識したらダメなことには変わらないわ」
しかし、次に出てきたのは非情な現実だった。
要するに、道は一本だけ、カリキュラムは、いわば険しいその道を進むための手助けをしてくれるに過ぎないものだった。
「んだよ。俺、男だったのに、いきなりそんなこと言われても――」
「ええですから、少しだけ考えてください。道は１つしかなくても、すぐに歩く必要はないわ。道を誤りさえしなければ、あなたには時間は文字通りたっぷりありますわ。でも、問題を先送りにしすぎると、最

悪の結末になるかもしれません。1週間以内には決めてください」
宣告は、一方的なものだった。
最悪の結末、つまり精神を病んだ末に自殺をしてしまうという結末。
余呉さんはおそらく、そんな患者を何人も見てきた。だから俺にもこうして辛く当たるのだろう。
しかし俺も俺で、女として生きて行けと言われても、できれば今までの人生を考えればそれは避けたい。
だがどう説得する？　悔しいが相手はプロでしかも外見に似合わず人生経験豊富と来ている。
「……なあ、カリキュラムって、具体的に何をやるんだ？」
少し脇道から、攻めていく。とにかく、どこかに道を開かないことにはしょうがない。
「女性としての感性を学ぶための少女漫画や女性誌の読書、更に家事の手法の他にも、スカートを穿いての外出訓練や、女子トイレへの訓練、男時代の服などを捨てたり、後は言葉遣いの教育もあるわね。いい？　今後は女にモテるかじゃなくて、いかにして男に好かれるかを考えなさい。最終的には、あなたも彼氏を作ってお嫁さんになるのよ」
「お、お嫁さん!?　俺が、俺が男と!?」
あまりのことに、俺は仰天してしまう。
いや確かに肉体は女だけど、それにしたって、彼氏作って結婚って

---

いやそれだけじゃねえぞ、スカートとか女子トイレって単語も聞こえたような？
「おっとごめんなさい。最後のは言い過ぎだったわ。男と恋愛ができない患者さんもいて、そういう人はレズビアンとして生きる道もあるわ。ただ、今までは誰も成功していないんです。何故かみんな、途中で普通に男が好きってなっちゃうのよ」
余呉さんの宣告は、更に恐ろしいものだった。
女の子として生きていく以外に道はなく、そうした人生を歩めば、

彼氏を作り、男に魅力を感じるようになるという。
俺はもちろん、同性愛の趣味はなかったいわゆるノンケであり、さながら強制的に同性愛行為を強要されているような、そんな悪寒を覚えた。
「ま、まさか俺も……」
「もちろん、女として生きるなら、あなたも好きな男の子を作れるわ。でも、あなたも分かってると思うけど、男に好かれるには、女の子らしい女の子にならないといけないわよ」
男時代の俺のシルエットで、手原と大谷に迫る俺を思い浮かべてしまい、頭の中がげんなりする。
「うげえ、嫌だあ……」
俺が、俺が男とって、無茶苦茶なことを断言されてしまった。
しかも、そうしなきゃ自殺しかないとまで言われている。
現実逃避したところで、結局意味がないということか。
その後、協会としての支援についてや、保険のことなども教えてくれたが、俺には重すぎて、そういったことはどうでも良かった。
とにかく、俺の人生は無茶苦茶に狂ってしまったことだけはよく分かった。

「じゃあ、私は失礼いたします。ご自宅に東北支部の連絡先を書いた手紙を郵送しておきました。必ずご確認ください。こちらでも、塩津さんのサポートは全力でして参りますので、どうかよろしくお願いいたします」
余呉さんが頭を下げて、ゆっくりと部屋から出ていった。
「な、なあ兄貴……いや、今は姉――」
「徹、やめてくれ」
さっきから、女性の声に似つかわしくない言葉遣いばかり出るが、慣れてしまえばどうってことはない。
つまり、あの余呉っていう女の子の言うことも、全て鵜呑みにはできねえってことか。
言葉遣いを改めるように言われたが、おそらくそれをやってしまえ

ば何かが崩壊しそうな気がする。
徹にも、「姉」と思われることだけは避けねばなるまい。
「ああ、まあ、兄貴は兄貴だもんな」
「ええ」
ともあれ、家族が賛成してくれたのはよかったぜ。
男には戻れねえと言っていたが、もしかしたらなるべく「男に近付ける」ことなら出来るかもしれねえ。
余呉さんは端から否定していたが、やってみる価値はありそうだ。

その後、やったらめったら無駄に種類の多い健康診断をやらされた後、家族がコンビニで買ってきてくれた弁当で遅く軽い昼食を食べ、夕方にはお医者さんから退院を言い渡された。
この体で始めて食事を取ってみたが、あんまり味覚は違わないみたいだ。よかったよかった。
服はぶかぶかだったので、おふくろの服を借りる手もあり、わざわざ一旦家に戻って男性でも着られるジーンズを持ってきてくれた。
外見からすると余りにも野暮な女子力０の女だけど、俺の知ったことじゃねえな。
とにかく、女の子として生きていくのは最後の手段だ。自殺だって言っているが、どうせ脅しに違いない。

## 最初の日の終り

「な、なあ兄貴」

「ん？」

帰り道、車の中で徹がびくびくとした様子で話しかけてきた。

やはり、まだこの少女が俺と受け入れるには抵抗があるらしく、どこか「他人」という印象を与えてしまっているようだ。

「兄貴は、『せっかく女になったんだし、少しスカート穿いてみよう』とか考えたりしたのか？」

徹の質問は、結構核心をえぐっている。

男が通常穿けないスカート、その感触に興味のない男はいない。

無論俺も例外ではない。単純に以前の姿でスカート穿いたら気持ち悪いだけになる。だからやらない。

しかしだ、今の姿格好ならスカート姿をどこに出しても恥ずかしくない。いやそれどころか道行く人は「どこかのアイドルかな？」って思っても不思議じゃないだろう。

そう言う意味では、間違いなく俺は人気者になれると断言できる。今の自分の姿のかわいさは、むしろ男だからこそ分かってしまうというものだ。

実際、余呉さんの姿格好も男の好みをよく突いていた。生まれつきの女の子にはまずできないような至難の業だということが分かるのも、俺が男だからこそだ。

だが、それをやってしまえば、今から俺がしていることを根底から諦めなきゃならないことになってしまう気がした。

「……俺も男だから、スカートの穿き心地とか興味がない訳ねえよ。でも、あくまでも俺は男の俺を大事にしてえんだ」

だから、一線は守りたい。

「分かったぜ。ま、兄貴の思う通りにしたらいいと思うよ」

とにかく、月曜日に手原たちに事情を説明してサッカー練習をしてみたい。

さすがにこの体で男子更衣室はまずいかもしれねえが、その辺り考

えねえとな。
「さ、ついたわよー」
お母さんの声と共に、俺達は車を降りて家の中に入り、自分の部屋に戻る。
「ただいまー」
部屋の中は、以前と変わらず、サッカー関連の雑誌やポスターが貼ってあった。
サッカー仲間への連絡は、ともあれ俺自身でする必要がありそうだ。
「でもどうしよう……」
この声、この姿でどうやって「塩津悟」だと信じてもらえるのだろうか、男だった頃の面影が何一つなく、八方塞がりの状況になってしまっている。
鏡に写った俺は、不安と不満の入り交じった表情をしている。
とにかく、女の子になって背が縮んでいた。目線が低くなり、部屋の印象も変わっている。
部屋のレイアウトも、否が応でもこの体格に合わせないといけないだろう。
胸はかなり大きめで、いかにも肩がこりそうな重さを感じている。
というか、こんなに大きくて激しく動けるのだろうか？
「にしても、何でこんなにかわいく生まれてきたんだ俺」
いかにも弱々しそうで、腕も足も細い。
足についてた筋肉は、脂肪となって全て胸とお尻にいってしまったようだった。
男から見れば、胸に脂肪がたくさん蓄えられてる女の子は魅力的だけど、俺はそうもいかない。
特に、この大きなおっぱいは結構深刻だと思う。
サッカーでは、空中で受けたロングパスを胸でトラップするわけだけど、この胸では間違いなくイレギュラーしてしまう。
女子サッカーの選手を見ても、こんなにおっぱいの大きな選手はい

ない。
女子スポーツ選手の中には、貧乳化手術をしてしまう選手さえいるくらい、スポーツには邪魔になる。
「もちろん、俺も男だからこのおっぱいは魅力だとは思うけどよー」
創作物では、胸の大きなスポーツ少女や女騎士などが、「胸なんて邪魔」といい、男子から不評を買うシーンが多い。
更に言えば単純に重たいから体力の消耗も早そうだ。
確かに、胸を小さくすれば、ある程度はサッカーに打ち込めるとは思うけど、そもそも貧乳化手術を受けたとして、いくらかかるんだろ？
整形手術じゃ保険も効かねえだろうしよ。うちじゃそんな高額をおいそれと払えないだろう。
服は保険が下りるとは言うけど、女の子の服じゃないとダメと言っていた。こういうところでも外堀を埋めていくのか。
「はぁー、憂鬱だ……」
やっぱり、憂鬱な気分になってしまう。
同じ境遇の人からは、「女として生きていくしかない」と言われた。
もしかしたら、無駄なあがきかもしれねえ。
もしそうだとしても、女子サッカーとしての道はあるはずだ。そうすれば手原たちとはできずとも、サッカーを続けていくことはできるかもしれない。
うん、ネガティブにばかり考えてたら、あいつが言ってたように本当にすぐ自殺になっちまうだろうし、そう言う可能性も考えとかんとな。
そう思い、もう一度鏡を見る。
「やっぱよく見なくてもかわいいし、サッカー何てやめてアイドルにでも……」
って、いかんいかん。そっちの方向はまずい。
いや、まずくねえのかもしれねえが、いずれにしてもよくない道だ。
俺は俺、塩津悟だもんな。
ともあれ、俺は今ある服の中で、着られそうな服を探してみる。

「んー……」
どれも大きい、大きすぎる。
お腹回りが小さく、逆に胸が大きくなったから、会う服が全く無い。
体格が男と女であまりにも違いすぎるんだ。
特にズボンはどうしようもないくらい大きく、ベルトや紐で何とかなるレベルではなかった。
くそっ！　何か無いか何か!?　ゆったり出来る服装は!?
何とか棚を見て、ようやく1つの服を見つけた。
「これかなあ……」
ふと、今よりも小さかった中学時代のジャージが目に入る。
俺はそれを取り、穿いてみた。
「お」
上の方は工夫は必要だが、これなら大丈夫そうだな。
鏡で見る。服装で印象が大きく変わる。ぶっきらぼうな表情や言葉遣いとあいまって、素材はいいのにかわいげのねえ女って感じだが、まあ、俺だしな。ともあれ、家で過ごすにはこれでいっか。
後は、まあ母親の服の中で男が着ても大丈夫そうなのを選ぶとするか。
……とりあえず、ご飯まではサッカーの試合でも見るか。
そう思って、インターネットを開くことにした。

「悟ー！　ご飯よー！」
「はーい」
この地域の10月はやや寒く、温かいものが食べたくなってくる。
そんな中で、今日の夕食はお鍋だった。
パソコンに向かっていたから良かったけど、いざ歩くと食卓につくまで、とにかく胸が擦れて痛かった。
歩くだけでこれって、サッカーできんのかな？
女性用の下着をつけたら何かヤバそうだし、本格的に詰まっている気もするが、まあいいや。

「悟、ご飯あんまり食べてないだろうし、少し多めに作ったわ」
「ありがとう」
とにかく、今は食欲を満たしたい。
食べれば、この憂鬱も忘れられそうだから。
そう思って、俺は食卓へと急ぐことにした。

「うっぷ……」
な、何だこの腹は!?
まだいつもの半分も食ってねえぞ。
何でこんなに、これじゃ体力がつかねえじゃねえか！
「？　あ、兄貴どうしたんだ？　食欲ねえのか？」
明らかにいつもよりもペースも遅く食べる量も少ない俺に対して、徹が心配そうにしていた。
「いや、何て言うかその……お腹一杯って言うかよ」
「え!?　いつも俺よりも食ってるじゃねえか」
徹がとても驚いていた。
実際今日の量も、いつも俺達家族が食っている量とほぼ同じ分だけ盛り付けられていたが、俺はいつもの半分も食べられていない。
「あーそうかー」
親父が、納得いった表情になる。
そう、言うまでもなく、女の子になって食が細くなっちまったんだ。
こんな所でも、女の体の違いを突きつけられる。
「うーん、そうよねえ。無理に食べるのもよくないし、明日からは食事の量を調整しないといけないわね」
母親のその言葉が、俺に重くのしかかってきた。
否が応でも、肉体が変わってしまえば、様々な変化をもたらしてしまう。
病院でもそうだった。象徴的なものがなくなるだけでも、喪失感はとても大きい。
新しいものができるだけで、違和感はとても大きい。
結局、残った食事は明日の朝食に回してくれるという。いつもは

「これだけじゃ足りない」という勢いだったのに、思った以上に食が細くなることへのショックが大きかった。
「はあー」
こうしたことがある度に、「いい加減現実を見ろよ」と余呉さんが言っているような気がした。
恐らく、余呉さんも、あの協会の他のメンバーも、同じような経験を何度もして、壁にぶつかってそれを乗り越えて今があるんだとは思う。
でもよ、まだ起きて半日と少ししか経ってないわけで、これから大学に通い直すとか、サッカーを再開するとなれば、今日の比じゃないくらい男女の差を見せつけられることは目に見えていた。
余呉さんは「逃げ道は最初から無い」とも言っていた。そして、「最初から無いものは無いと言うしか無い。無い袖は振れない」とも言っていた。
余呉さんの言うことは、あまりにも完璧な正論だった。
男女平等何て、絶対に無理なこと。男と女が極めて違う生き物であるということは、今日一日でも十分すぎるほどに俺に思い知らさせてくれた。
この距離を知ってもなお、男を取り戻そうとする何て、無茶もいいところだった。
ましてや、サッカーなんて男女ではあまりにもレベルが違いすぎる。俺もバカではない、女子に混じってのサッカーをしたところで、以前の感覚でプレーしてフラストレーションを貯めかねないことも、いやもっと基礎体力から言っても前後半４５分なんて絶対無理だろう。
そう言う意味では、余呉さんが言うように、今後は女の子として、女の子らしい生き方を模索しつつ、新しい人生を歩んだ方がいいのは、俺にも分かってしまっていた。
「うー」
それでも、感情的に納得ができないでいる。
もちろん、俺だって大学生だ。だから、感情的に納得ができない何

てのは自分が悪いことくらい分かる。
それでも、この体が不便なことはよく知っている。
サッカーができないにしても、こんな不便な体でこれから過ごすことへの抵抗感はあった。
それも余呉さんの話では、江戸時代から生きている人もいるという。
そんな想像を絶するほど長い時間を、男を捨てて生きていかなければいけない。
途方も無いというのが、俺の素直な感想だった。
ろくに食事も取れずに、俺はひたすら出口のない自問自答を続けていた。
いや、出口なら見えている、ただ見たくないだけだ。それが分かってしまえば更なる自己嫌悪に陥る。
「とりあえず、鍋を分けて明日の朝食にも回すから、無理して食べちゃダメよ」
母親……おふくろの忠告が身にしみる。
「ああ、分かってる」
「それから、今朝言ってた余呉さんからの手紙、後で部屋に持って来るから必ず読んでね」
「うん」
結局、食事を早めに切り上げた俺は、さっさと自分の部屋に戻り、またサッカー関連のネット記事を見ることにした。
試合だけではなく、何らかのサッカーを見ることで、現実逃避ができる気がした。
もちろん、これが先伸ばしによる更なる状況の悪化であることは俺も気付いていた。
余呉さんが言っていたように、現実から逃げたところで状況はよくならないし、男に戻るだなんて言ったら自殺だと、そう言う可能性も十分にあるくらい、自分が危険な状況だという認識から目を背けていいはずはない。
それでも、やはり逃げたいと思う。

もしかしたらこれは夢で、明日には普通に「塩津悟」としての人生が続いているかもしれねえから。

余呉さんからの手紙は、結局あまり真剣に読まずじまいだった。どっちにしても、協会の人に反対されることは目に見えているから、相談しないで物事を進めてしまったほうがいいと、俺も判断したからだ。

# 再びの忠告

「……」

目が、覚めた。

視界に広がるのはいつもの俺の部屋、今日は日曜日、はてさて、どうしたものか……

ベッドから起きる。

結局、パジャマの類は、辛うじて残っていた小学生時代の服を再利用することになった。

視界に入った自らの細い腕に大きなおっぱい、そして――

「あー、あー！　夢じゃねえ……」

変わらない現実にやや失望を禁じ得ない。

心の何処かで「これは夢だ」と思いたいところがあったのだろう。とは言っても現実は変わらない。

服を着替え、鏡を見ると、そこには以前までの俺とは似ても似つかない、お人形さんのような美少女がいた。

黙っていると、我ながらとてもかわいい女の子だと思うし、何だかんだで男は見た目重視なのも知っている。

だから、何度も何度も、俺の心の中の悪魔が「女の子の人生も悪くないぞ」と呼び掛けてくる。

ともかく、母親は「悟の意思を尊重する」とも言っていた。

１９年間男として過ごしておいて、今から女を勉強するのはとても難しい。

「あーあ、どうするんだよこれ……この格好……」

がっかりした声が出る。

ともかく、もはやこれは夢ではないことだけは確かになった。

じゃあ、どうしよう？

ともかく、今日一日で決めた方がいいかもしれねえな。

俺は一応ぶかぶかにはなっていない母親の古い服を着る。

上に関しては胸がきついから、男時代の服を着る。

これでも胸の膨らみのせいで色々と変な感じだけど仕方ねえよな。

「おはよー」
「悟、おはよう」
食卓には、既に他の家族もいた。
おはようとは言うものの、既に午前１０時になっていた。
「悟、たった今余呉さんから電話があったわよ」
「あーうん、それで？」
どうやら、連絡先を交換することになったらしい。
まあ、カウンセラーだし仕方ないか。
「女性として生きていく上で、今後どうするか相談するって言ってたわ」
「うげえー」
そうだった。相手からすれば、俺は男を捨てねえと生きていけない存在だと見られていたんだった。
「女性として生きていくという方法以外に道はないって、また念を押されたわ。『悟は嫌がっている』と言っても『無理なものは無理です』と」
余呉さんは、口ぶりからしても１００歳は優に越えている。外見はあんなでも、中身はガチガチに頭が固くてもおかしくない。
容姿に惑わされてはいけねえな。
「まあとにかく、話は受けてみるか」
確かに、あらゆる部分で男女の差は大きいと俺は思う。
まだ殆ど女として過ごしたわけではねえが、それでも様々に男女の差を思い知ることはできた。
それでも、まだ埋め合わせできねえ訳じゃないと信じたい。
問題は、余呉さんがそれを納得してくれるかどうか？　だな。
難しいかもしれないが、ともあれ余呉さんの来訪を待つことにしよう。

ピンポーン、ピンポーン！
「はーい！」
お、来たな。

おふくろが玄関に向かう。
会話を聞く限りは、どうやら予想通り余呉さんみたく、「悟ー！　来たわよー！」とのことだった。
「うまく行ってますか？」
余呉さんの服装は、子供服のようなデザインのシンプルな服だった。
縦ロールの髪型が昨日以上にくるくるしていて、まるで「お使いをする小さな女の子」という印象だ。
「えっと、その……」
「女性として生きていく覚悟を、決めてください。今日はそのために来たんですよ」
その幼い容姿に反して、ぐいと迫るような口調で話す。どうやら、譲歩は望めそうもない。
「どうしても男は無理と？」
「ええ、男に戻ろうとした人は、全員が数年以内に自殺に追い込まれています。無理なものは、無理としか言えないんです……ですが、そうですね……少し視点を変えて、塩津さんにいくつか質問しましょうか？」
まるで、「例外など全く無い」とでも言いたそうなほど、とりつく島もない言いようだった。
でも、視点を変えてってどう言うことだ？
「塩津さんは、大学に通われていますよね？　サークルはどうしてます？　友人はいますか？」
「ああ、サッカーサークルで、手原や大谷といった仲間がいるな」
「サッカー……ですか……」
サッカーという単語を聞いた途端、余呉さんの表情がとても厳しいものになる。
それは、言わずとも「これまでのようなプレーは不可能」ということで――
「塩津さん、サッカー、今までみたいに男に混ざるのは、身体能力的にもう無理だってこと……女子サッカーを見ていたら、そのくらいは、

分かりますよね？」
　予想通りの質問が飛んできた。
「あ、ああ。間違いなく、女子サッカーなら、世界一強いチームと戦っても、俺たちのチームは圧勝できる自信はある。いや、ある程度以上のレベルなら、大学どころか高校のサッカー部だって同じことを言うだろうよ」
　俺だって、伊達に何年もサッカーをやっていない。
　自分達のプレーを映像で確認することはあるし、動きを見れば、女子サッカーよりは遥かにレベルが高いことは知っている。
「そう、よく分かっているわね。男女の違い、身体能力の違いは、もうどうやっても埋め合わせはできないわよ。男性ホルモンを増やしても、それこそドーピング剤のような禁止薬物を使ったって無駄よ」
「うぐっ……」
　余呉さんの言葉が突き刺さる。
　そう、世界的に、それこそ何千万何億に1人レベルで優れた女子選手ですら、男と比べればその有り様なのだ。世界一サッカーの才能があったとしても、男時代以上の能力を出すことはできそうにない。
　ましてやこの体がそうした逸材である確率は確率相応に低いだろうし、ましてや手原たちのいるサッカーサークルに混ざってプレー何て、女子のバロンドールでさえ、一方的に蹂躙されるだけだろう。
　何せ、うちのサッカーサークルは、高校時代にも都道府県や全国レベルの大会に出た実績のある選手が多いし、特に俺と手原は中学高校時代からのサッカー仲間で、プロにはなる気はなかったが、共に1回戦大差敗けで敗退ながらも、全国大会に出たは出た。
「二度と、男子に混じってサッカーすることなんてできないし、仮にできたとして、大学生にもなってサッカーを続けているあなたなら、それは周囲が気を使ってるからってことくらい分かりますよね？」
「ああ、もちろんだ」
　俺は躊躇なく頷く。いや経験者として頷かざるを得ない。
「重ねて強調するけど、私は何も、あなたを逃げ道をなくして追い込んでる訳じゃないの。そもそも逃げ道は最初から存在しないのだから、

塞ぎようがないのよ。行き止まりの道の壁を背にとおせんぼしても、何の意味もないですから」
余呉さんの言うことは、ぐうの音も出ない程の正論だった。
俺も来年には２０歳になる。
出来ることと出来ないことの分別や割り切りくらいできるし、感情任せに無い物ねだりを繰り返して駄々をこねるほど子供じゃない。
だからこそ、余呉さんの言葉は余計に突き刺さる。それは、余呉さんが俺を大人として扱っている証拠でもある。
だが、子供はある日突然大人になるわけではない。
少しずつ子供が大人になっていく。だから、俺の心の中に残った「子供」が、この現実に対して全力で抵抗してくるのだ。
「俺も……俺も分かってはいるんです」
「女の子が、『俺』何てことを言っちゃいけないことかしら？」
「うぐっ」
余呉さんが、柔らかな笑顔を見せる。
ものすごくかわいい笑顔だけど、俺はどこかに威圧感を感じ取ってしまう。
「元男が女の子として生きていくには、当然他の女の子よりも女の子らしい女の子を意識しないといけないわ。今の私みたいに、きちんとおしゃれを覚えて、おしとやかさとかわいらしさと愛嬌、そしていざというときのエロさも身に付けないといけないわよ。塩津さんも、女子力の無い女子は、魅力的とは言えないことは分かるわよね？」
「あ、ああ……」
俺も男だから、その理屈は十分に理解できてしまう。
そして余呉さんも、元男だからこその強力な説得力を持っている。
生まれつきの女の子ならいざ知らず、男としての人生を歩んできたからこそ、多大なる説得力を感じてしまうのだ。
「今の塩津さんみたいなだらしない格好と乱暴な言葉遣いの女の子と、私みたいに服装と振る舞い、言葉遣いに気を遣う女の子、もしあなたがまだ男だったとして、ここにいる２人のうちどちらを選ぶかしら？」

余呉さんが、椅子から立ち上がって、スカートを両手でちょいとつまんで横に広げてにっこりとウインクをした。
元男とは思えないくらい、女の子らしく、また脚をちらちら見せることで、男受けを全力で意識した仕草に、否応なしにドキッとしてしまう。
「えっと、そりゃあもう、余呉さん」
「そうでしょう？　でも、あなたも私みたいにおしゃれしたらどうかしら？　顔のかわいさはともかく、悔しいけど私はあなたにスタイルでは負けてるわ。これでも女の子になったばかりの時は規格外だったんだけど……まあいいわ。つまりあなたには、男としての人生がなくても、女の子としての幸せをつかめるチャンスがあるのよ」
余呉さんは一貫して、「女の子になりなさい」と警告している。
女の子になれなければ、破滅する。
どうやらその事は確かだし、余呉さんの言う通り、今の俺はその気になれば魅力的な女の子になれるのも確かだった。
「で、でも女の子としての幸せって言われても――」
何をいうのかは、俺には分からなかった。
「でしょう？　だからカリキュラムがあるのよ。カリキュラムでは少女漫画や女性誌を読んで女性の幸せを勉強するのもあるわ」
「うー、でも、それを受け入れられるのかな？」
まだ俺は、懐疑的だ。
「大丈夫よ。時間はたっぷりあるのよ、『現実を受け入れ、女の子として生きる』その方向性さえ間違えなければ、ゆっくりで大丈夫よ。ええ、江戸時代に生まれた患者さんでも、たまに『男』が出ることがあるわ」
余呉さんの言葉が、身に染みてくる。
でも、時間があるならなおのこと、別の道を試してもいい。そんな風に感じてしまう。
ましてや、もう１５０年以上前の江戸時代生まれ、つまり１００年以上女性をやってても男が出ることがあるならなおのことだ。
「でも、時間があるなら――」

「ダメよ。別の道は、全て断崖絶壁よ」
少しでも他の道を模索しようとすると、即座に「有無を言わせない」という強烈な意思表示が飛んできた。
「……とりあえず、その様子ではまだこのカリキュラムを受けさせるわけにはいきません。もちろん、カリキュラムを受けずに少しずつ身に付ける方法もありますが、両側が崖の道を盲目で進むようなものですわ」
「それを受けるしかねえってことか」
「ええ。それから、カリキュラムを受けたら今の言葉遣いは矯正の対象よ。『これを受けるしか無いってことかしら？』って言わなきゃダメよ。カリキュラムは厳しいから、半端な覚悟では受けちゃいけないけど、女の子を身に付ける以外に、あなたの命を助ける方法はないわ」
つまり、余呉さんは最初から議論をするつもりはないということだった。
ただ俺の女として生きる覚悟を見極め、諾否の回答のみを聞きに来たということ。
「俺は、もう少し抗ってみたい」
「ダメよ。絶対ダメよ。あなたの、あなたの命のために、私は言ってるのよ」
俺が拒絶すると、更に余呉さんの目が厳しくなる。
「分かってる。分かってるけど」
「あの、悟もこう言ってますので、もう少し待っていただけますか？」
いたたまれなくなったのか、おふくろの方が助け舟を出して来た。
「……待つのは構いません。ですが、『別の道を探す』ことだけは絶対に賛成しません。これは、人命、それも塩津家の長女の命に関わることなんです」
「んな!?」
余呉さんの言葉に、俺は固まる。
この家に、「長女」はいないはずだった。
でも、今の俺が肉体的に紛れもない女であることは確かで、つまり余呉さんは俺を女扱いしているということだった。

「どうしても、というなら、まずはその場に立ち止まって、道に立ち尽くしてください。明日から大学があるということですから、大学に戻ってみてはどうでしょう？」
「あ、ああ、そうする」
余呉さんが、譲歩案を出してきた。
その場に立ち止まる。
それはつまり、問題を先送りにするということでもある。
いつか歩きださなければならないが、立ち止まっていれば転落することはない。そういうことだろう。
「大学のサッカーサークルの人には顧問の教授を通して私が伝えておきましょうか？」
「ああいや、自分で伝えとく」
余呉さんの提案を断る。
「そう？　ただ、大学には連絡しておきますね」
「ああ、頼む」
幸い、俺は読み上げて出席を取る講義を履修していない。
明日手原たちに事情を話すにしても、まずは信じてもらうしかない。
もちろん、信じてもらえるかどうか？
手原も大谷も、ＴＳ病だと言えば最終的には納得してもらえるはずだ。
この病気を知識として知っているかもしれないし、知らなかったとしても、手元のスマホで調べさせればいいだけだ。
「どうします？　私の本業とも擦り合わせる必要はありますが……私が立ち会いますか？」
「ああいや、問題ない」
余呉さん、働いているらしい。
見た目は若いとはいえ年齢は年齢だ。年金生活しているとばっかり思っていた。
「ふふ、きちんと女の子として生きていけば、税金は社会保障費分がまるごと免除ですから、それはもうお金がたまるわよ」

「あ、あはは……」
その代わり、不老だから定年に当たるものはないと。
まあ、老人を見てると女より不便そうだし、色々ボケたり酷いことになるらしいから、それがねえってのはいいかもな。
「では、今日は私もここで引き上げましょう。ですがこれだけはもう一度言っておきます。大学の人が、サッカーサークルの人が何と言っても、『男に戻る』何て思っちゃいけないわ。そう思ったところで、あなたは妊娠能力と引き換えに、男性としての機能は永遠に失われたのですから」
「え!?」
男性の機能が喪失はいい。
だが、もうひとつ聞き捨てなら無い言葉が聞こえた。
「に、妊娠って……!」
「塩津さん、この病気は正式には『完全性転換症候群』よ。女性にできて男性には絶対に不可能なこと。その究極が、妊娠と出産なの。ＴＳ病の患者さんでも、赤ちゃんを産んだ例はいくつもあるわ」
余呉さんの冷静なその物言いは、俺にとってはとてつもなく残酷なものだった。
妊娠、出産……女性にとってそれは、「お腹を痛める」と言われるように、とてつもなく凄まじい苦痛を伴う。
しかし一方で、赤ちゃんを産んだ時のその幸福感は何物にも代えがたく、だからこそ何人も子供を産むお母さんが出てくる。
「まさか俺も?」
「ええ、妊娠出産、女性らしさを表現する方法はたくさんあるけど、赤ちゃんを産むのは究極的に女性らしい行動よ。まあでも、仮にそうなるにしても、それは何年も先の話よ」
男性は、体の構造上妊娠出産は絶対に不可能である。女性しかできないことは誰でも知っている。
そういう意味で、余呉さんが言うように、妊娠と出産は女性らしさを一番に感じられるイベントだと思う。
だけど、問題はそこじゃない。

「本当に、男に戻ることは無理なのか……」
その妊娠が、理論上は今の俺でも可能だと言われれば、「二度と戻れない」という事実の提示に対してこれ以上無いほど強烈なものだった。
「ええ、何回も強調してもしたり無いわ。内心、まだ諦められないかもしれないけど不可能なことは不可能で、無い物ねだりはできないということ。明日から大学に戻る時に、よく考えておくのよ」
「……」
「そうそう、先送りにするといっても、女の子として生きることを決めた場合のことも考えておいてください。新しい女の子としての名前、後は大学に行く以上今の女性の体型にあった服を買ってください。それから、この病気は特殊ですから、協会の人以外のアドバイスには余り従わない方がいいですよ」
余呉さんはそれだけを言い、両親にも挨拶してから玄関を出た。

# 大学へ戻った日　前編

「ねえ、悟？」
「ん？」
「悟は、もし男に戻れるのが可能だとしたら、戻りたい？」
　余呉さんが去ってすぐ、おふくろが俺に声をかけてきた。
「そりゃあ可能なら戻りてえけどよお……」
　俺だってもう子供じゃない。
　お医者さんにも、そして同じような患者を何人も見てきた余呉さんだって、不可能だと言っている。
「これから、医学も変わっていくわ。今までがそうだからといってこれからもそうとは限らないよ」
「……」
「悟がどうしたいか。余呉さんはああ言っているけど、自由に考えればいいのよ」
　おふくろの言葉は、余呉さんの言葉よりもより大きく響いた。

「んー」
　大学にいく服をどうするかで俺は悩む。
　おふくろの服で、男が着ても違和感が無さそうな服でも、やはりいざ見てみると女っぽさが強調されてしまっている。
　俺の体は、かなり女性を強調したものらしく、どうも中性的になることさえ不可能だと言う現実にうちひしがれる。
　ズボンのベルトを魔改造し、上も袖を何重にもめくりあげて、シャツの余り丈を強引にズボンの中にぶちこんでいく。
　ただでさえ美少女なのに、ぶかぶかな服で格好がおかしいが、俺の男としての意地がそうさせている。
　男っぽく見せることは不可能にしても、こんな地味な感じなら痴漢とも無縁なはずだ。
「おはよう」
「悟おはよう、本当に大学に行くの？」

おふくろが、心配そうな口調で話す。
「大丈夫だって、大学なら変な格好でも誰も気にもとめねえって」
俺は俺だし、人は人、それが大学ってもんだ。高校までとは訳が違う。
ただ、手原たちに関しては別だろう。
「手原さんたちはどうするの？」
痛い所をついてくるが想定内。当然それについても考えてある。
「何とか説明しとくよ」
幸い、このＴＳ病は知名度は高いしなんとかなるはずだ。
俺はそう思い、バスに乗り込んで大学へと向かうことにした。
「うー、いてて……」
胸が大きいがブラジャーをしていないせいか、さっきから胸が擦れてうざったいことこの上無い。歩くだけでこれだから、走ることを考えるだけで憂鬱な気分になる。
それに心なしか、周囲の視線も注目を集めている気がする。
バス停には誰もおらず、１人で寂しく腰かける。
バスが来るまではまだ時間があるので、スマホを立ち上げてサッカーの情報を見る。
……お、勝ってるな。

そうこうしているうちにバスが来た。
ピピッ
大学までは通学定期券があるので、所定の場所にタッチする。
名義は塩津悟で、俺の名前だ。
ひとまず、バスの空いている席に座ることにした。

「ねえねえ、あの女、あんなかわいい女いたっけ？」
「うーん、記憶にねえなあ」
「ま、知ったこっちゃねえか」

うぐぐ、予想していたとはいえ、やはり好奇の目線や噂話はされて

しまうものだ。
うーん、胸も隠したいところだけど、この大きさじゃどうすることもできねえよなあ。
やっぱり、この外見で、「ＴＳ病で不本意に女になっちゃいましたから男として見てください」何て通じるわけがねえよな。
多分、手原や大谷にも無理な話だ。
ぺったんこで貧相でデブでブスならともかく、こんなエロい体つきじゃ無理だろう。
うーん、ブスに生まれるのもきついけど、こっちとどっちがよかったんだろ？
最初から女として生まれるなら巨乳美人がいいけど、男から変わるわけだしなあ……
「間もなく――」
バスの案内と共に、俺も席を立つ。
同じ大学の学生たちも、一斉に降りていった。
「ふう」
俺は、いつものように月曜日の講義へと向かうことにした。
「はぁ……はぁ……」
やべえ、結構ギリギリだった。
いつもはかなり余裕を持って着くのに……そうか、この体のせいで脚力が悪くなってるのか。
「あー」
女の体のことを考えるだけで気が滅入る。
「だから、女の子として生きた方がいいのよ」
頭の中で、余呉と名乗った「永遠の美少女」が微笑んでくる。
そうだ、うじうじ悩むくらいなら、いっそ現実を受け入れちゃった方がいい。
幸い、超がつく美少女に生まれ変わっている。それこそ男なんていくらでも……ああ、男かあ……
俺はふと気付いてしまった。
そうだ、これは同性愛の問題もあるんだった。

ん？　そうではないか、今の俺は女だから、俺が男と付き合うのは別におかしくなくて……いやいや、そうじゃねえだろ。
あー、もうよくわかんねえや。
ガララララ……
おっと、教授が入ってきた。
そうだ、講義に集中しよう。

大学の講義は、よく眠くなると評判である。
俺も実際、眠気との戦いになったことはよくあった。
しかし、１コマ目の９０分はこれまでにないくらいに集中できた。
この現実から目をそらすために、講義に集中できたのかも知れねえな。
うーむ、現実から逃げても状況は悪化すると言うのは、悔しいが俺も賛成せざるを得ない。
ひとまず、俺は２コマ目の講義に向けて、教室を移動することにした。
幸いにして、バスのような閉鎖的な空間でもないため、俺のことをヒソヒソ話す人はほぼいない。
ただ、やはり隠しきれない胸への視線は健在で、これとばかりはどうすることもできねえと諦めるしかなかった。
さて、大学に行く時に問題になるのがトイレだ。家では男女の区別はないが、大学といった公共の場では当然それらの区別がつく。
これについては事前に考えをまとめてあって、「多目的トイレ」に入ることにした。一応、「どなたでもご利用ください」ということになっているので、ありがたく使わせてもらうことにする。
心の中では、俺は男だという感情があるものの、理性的には今の俺は女以外の何者でもないということも分かっている。
そこで、政治的な妥協案として浮上したのがこの多目的トイレ、幸いこの大学は、どこも男女のトイレに多目的トイレで１セットになっている。
多目的トイレは広いし、色々と便利だろうというのは変わらないは

ずだ。
……ふう。
昨日一昨日もそうだったが、女の体でのトイレはとても不便だ。
余呉さん曰く、女の子には生理があるので、それとも付き合わないといけないことになる。
それについては考えたくもないが、ともあれ今は後回しにし、何とか余呉さんが提示した「女として生きるしか無い」以外の道を模索するしか無い。
「よし」
今の俺はぶかぶかの服を強引にごまかしているため、それを直すのに鏡が欲しいというのも、多目的トイレ使用を決断する大きな決め手になった。
気持ち的には男子トイレを使いたいものの、この姿形でそんなわがままが通ると考えるほど俺も幼稚ではない。
きっと、余呉さんならば「女の子何だから女子トイレを使いなさい」と口酸っぱく言うんだろうけど。
も、もちろん、男だから女子トイレという甘美な響きに興味は沸くし、中がどういう空間なのかも気になる所はある。
案外汚い何て話もあるけど、男子たるもの興味はつきない。
だから、実のことを言うと、別の意味で女子トイレに入ることが絶対嫌だというわけでもなかった。
しかし、入ったらなにか不味い気がするのも確かだった。故に、こんなことになったのだ。
「ふう……」
昼食は、大学にあるコンビニのお弁当を食べることにした。
食べるのはもちろん1人で、さっきから男の性的な視線と女の嫉妬の視線が露骨なことに気付いている。うーむ、胸の大きい女性は毎日毎日これに晒されているわけか。
俺もさすがに数日間いて学習しているので、普段の半分程度の量で済ますことにした。

食費も半分とはいかないが、それでも安くなったのは事実で、まあともかく鍛えねばならないのだから当然と言えば当然だ。
「ごちそうさま」
計算通り、ちょうどいい量に調整できた自分を誉めてやりたい。何せご飯の食べ過ぎがいけないのは事実だからだ。
周囲の席では、あれがこうだこれがそうだなど、他愛もない話が次々と繰り広げられていた。
「ふう……さて」
これからの午後の講義が終われば、いよいよサッカーサークルになる。
大学の講義で、自分の名前と学籍番号に名前を書くときは緊張したけど、慣れてしまえばどうってことねえな。

「なあ、今日塩津の奴見ねえな」
「体調悪かったんじゃね？」
「いやでも、さっきの出席簿にはマルしてたし」
「んー、まあいいんじゃね？」

サークルのある部屋に来た。
更衣室は1つだけで、もちろん部員は男子だけ。
だから、多分今の俺はすごく浮いていると思う。
手原も大谷も、俺のことは俺と認識しておらず、俺がいないことをいぶかしんでいた。
ここで立ち止まっている俺は、傍目から見たら不審者以外の何物でもないだろう。
「すーはー」
意味もなく深呼吸をする。
俺としても、この姿で果たしてみんなに信じてもらえるかは、極めて疑わしかった。
「あ、あの……！」
近くにいたサークル仲間の1人に話しかける。

「ん？　どうしたんだい？　俺たちに用？」
「えっとその……手原と大谷に用があって」
努めて、ぶっきらぼうに話す。
俺たちは身長がほぼ変わらなかったが、俺が女になったことで、２人を見上げるような形になってしまっていた。
「ん？　俺たちに用かい？」
どうやら聞いていたらしい手原と大谷がすぐに近付いてきた。
これから話さなきゃならないことを考えると、どきっと緊張してしまう。
「実は俺……塩津なんだよ。土曜日に、女になっちまってよ。ＴＳ病って言うんだけどよ」
何とか、真実を単刀直入に話すことが出来た。
「「え!?」」
２人とも、とても驚いていた。
当たり前だ。
「おいおい、冗談きついだろ!?　そりゃあ、俺もそういう病気があるのは知識としてちらっと聞いたことはあるけどよ」
最初に驚いたのは大谷の方だった。
「じゃあよ、好きなチームと選手の名前は？　生年月日は、俺と塩津はいつ頃からの付き合い？」
手原に言われた質問は、どれも簡単だが、塩津悟でなければ答えられないもので、俺はそれらの質問１つ１つに対して、丁寧かつ正確に答えていった。
それと共に、手原と大谷の表情も変わっていく。
「うおお、塩津だぜこいつ」
「どうしたんだよ？　そんなかわいくなっちまって」
２人共、やはり驚きの表情は隠せない。
「ＴＳ病だ」
あえてぶっきらぼうに、乱暴に話す。
こいつらとの関係を、壊したくなかった。
無論２人もＴＳ病のことは知識としては知っているみたいだが、あ

まりにも稀な病気だからか、まさか身近な人が当事者になるとは夢にも思っていなかったという感じである。
「うげえ……とにかく、部長や他の連中にも連絡しておくわ。あー、ユニフォームは無理だよな。とりあえず、悪いけど今日は見学ってことでいいか？」
手原がそう確認してくる。
女になってしまった以上、男に混じってのサッカーの練習は難しい。
「うん、それで頼む」
今日1日を大学で過ごしてみて、女の体では不便が余りにも多いことを俺は嫌でも思い知った。
だから、まず間違いなく、前みたいに練習や試合についていけないことは分かりきっていた。
それに、この服だと、多分走ったら胸が擦れてしょうがないと思うし。というか、ずっと立ってるだけでも胸の重量と重力で肩が重たい感じがするし。
あー、どうして女ってこんな不便なんだ。
そう思うと同時に、「男は女を守らなくてはいけない」という言葉を、身を持って、痛いほど思い知らされた。
こんなに弱かったら、そりゃあ力仕事だって男に頼まなきゃだよな。
「なあ塩津」
「ん？」
部長に連絡しに行った手原を残し、大谷が俺に話しかけてくる。
「これからはさ、俺たちも……その、塩津のこと、女の子として扱った方がいいかな？」
やはり、この質問は来た。
「あーいや、いいよ。今はとりあえず……完全には無理でも、なるべくこれまで通りで」
もちろんこれも事前に想定しているから、まずは慌てず騒がず落ち着くことにする。

「よし分かった」
どうやら、大谷ももの分かりがいいみたいだ、この分なら手原も問題ないだろう。
ふう、とりあえず、これで当面のことは大丈夫そうだ。
もちろん、将来的にどうするべきかは、今は後回しだ。余呉さんはそれじゃダメって言うだろうけど。
「塩津さん！」
そうこうしているうちに、サッカーサークルの部長が、こっちに向かってきた。
「あーえっと、その……」
「な⁉　この女の子が、し、塩津さんなのか⁉」
部長も、そして他の人も、一様に驚いていた。
それもそのはずで、周囲から見れば美少女が塩津悟を名乗っていたからだ。
「うん……俺は塩津悟……不本意だけど」
その後、様々な質問で本人確認が行われ、改めて俺が塩津悟であることを周囲にも納得してもらうことに成功した。
そして、やはり一先ず今日は見学ということになった。
もちろん、これまでも体調が悪い時は見学などもあった。
でも、今は以前よりも低い目線から、やや疎外感を持って練習風景を眺めていた。女の子になったということ以外、身体が悪いわけではないのに、見学しなきゃいけないのが、俺をより一層憂鬱な気分にさせていた。

# 大学へ戻った日　後編

「で、塩津さん」
「はい」
　部活のウォーミングアップが終わると、部長さんが話しかけてきた。
「その、ＴＳ病について何だが、治る見込みはあるんです？」
　やはり、その質問をしてきた。
「あーいや、その……お医者さんと、ＴＳ病の人曰く、『男には絶対に戻れない』とのことでした」
「分かりました……んー、そうすると……どうしたものか……」
　やはり、部長さんも困っている様子だった。
　しかも余呉さんからは、単に戻れないというだけに及ばず、「戻ろうとすれば精神をすり減らし、待っているのは自殺」とまで言われている。
　余呉さんも口ぶりからして１２０歳は優に越えているだろうから、ＴＳ病患者が珍しいといっても、相応に事例は見てきたはずだ。
　だけど、珍しい病気ということは、サンプルが少ない可能性だって十分にある。
「ともかく、今はなるべく外見にとらわれず、これまで通り接するように通達しますね」
「はい、ありがとうございます」
　部長さんも他の部員も、みんな俺のことを好奇の目で見てきた。
　とはいえ、そりゃあそうだろう。
　今は努めて地味で魅力無いように振る舞っているが、その気になればものすごいかわいらしい女の子にだってなれるはずで、それはつまり、男っぽく振る舞うのがそれだけ難しいということだった。
　女の子らしく振る舞うほうが遥かに楽、というのは事実だ。実際、男だった頃の知識から、男に受けるように、女の子らしくすることは恐らく生まれつきの女の子に比べてはるかに容易い。
　だからこそ、余呉さんはそういったアドバイスをしたんだと思う

し、でも実際にそれをやったら一気に奈落の底に叩き落される、そんな気がしたのもまた事実だった。
「でも、やらねばな」
俺の呟きは、誰にも聞こえなかった。
他のみんなは、俺のことから一旦目を逸らし、サッカーのための準備運動をし始めた。
柔軟体操の様子をじっくりと見学する。今の俺でも、もしかしたらこれだけはできるかもしれない。
だけど、怪我防止のための柔軟体操が終われば、次にするウォーミングアップにはついていけないだろう。
さて、準備体操・柔軟体操が終われば次にウォーミングアップ、走ったり軽くパス回しをしたりして体の感覚を取り戻していくことになる。
どっちにしても、サッカーの生命線である「足」を使う。パスで蹴る力を
今日は、まず軽く走ることで、足を慣らす運動から始めることになっていた。

「なあ塩津、試しに走って見てよ」
ただボーッと眺めていたら、大谷が近付いて俺に注文をつけてきた。
「あーうん、分かった」
確かに現状の俺の身体能力を知るためにも、これはいい機会だ。
そう思い、俺は立ち上がった。
「おー」
俺が走るともなると、やはりみんな注目している。
というか、胸に視線行きすぎだろ。
無理もないとは思うけど。
ともあれ、俺はみんなと同じ場所の列に行き、一斉に走るのを再開した。
くそー胸が痛てえ……!!
!!

「んー！」
タッタッタ……
「はぁ……はぁ……あれ？」
胸が擦れて痛いという以上に、全然スピード感がない。軽く走っているはずのサークル仲間の集団から、あっという間に引き離されてしまう。
瞬発力以上にもっと驚くのはそのスタミナのなさで、ピッチの端から端まで、横の長さを走っただけで息が上がってしまった。
「うー、はぁ……はぁ……」
「おいおいおい……」
ピッチに倒れ込んで息をする。
塩津悟とはかけ離れた、あまりの体力の無さに、周囲の男達もあっけにとられてしまっていたのだ。
何よりも悔しかった。体力自慢だったこの俺は、何とピッチの横一列も走れなくなっていた。
こんなんじゃ前後半４５分あるサッカーなんて望むべくもない。
「うー、全然、全然ダメだ……」
女子の体に慣れていないから、何て言う言い訳は当然通用しない。
というか、仮に慣れたところで、大学生男子に追い付けるような日は絶対に来ないことは重々承知だった。
いや、それを差し引いたって、これはひどい……それが俺の感想だったし、サークル仲間も、みんな同じことを思っていたようである。

さて、ある日突然女の子になってしまった元男というと、周囲は当然好奇の目で見るわけだけど、「胸触らせて」などといったセクハラは一切無かった。
特に今は変わったばかりだし、そういったことがあると別の意味で嫌な気分になりそうだ。
ひとまず今日はほぼ見学だけで、柔軟体操をしたり、一応全力疾走をしてみたものの、胸が擦れて余りにも痛く、すぐにやめてしまった他、周囲からも「女性相応」「いや、女性だとしてもちょっとまずい」

などと言われてしまった。
それは、俺にとって、「もう二度と彼らと同じピッチには立てない」という意味でもあった。
女性の体では、例えどれほどの天才であったとしても、高校生に勝つことは至難の業だから、大学生のサークルで男に混じるなんて無謀もいい所だ。
「身体能力が下がってるのは覚悟してたけど、まさかこれほどとはなあ……」
帰り道、手原と大谷が俺にそう話す。
やはり、急激な変化にショックを隠せないようだ。
「うん、女子ってこんなにひ弱だったなんて、思いもしなかったよ」
自分が改めて女子になって、男と女の大きな差を、思い知らされる一日だった。
「塩津さ、これからどうするんだ？　サークルはやめるのか？　一応女子のサッカーもあるけどよ」
そして勧められたのは、当然女子のサッカーサークルだった。
「うーん、俺としてはそっちに混ざるのもなあ……」
一応男（見た目は女の子そのものだけど）の俺が女子に混ざるというのも気が引けるというよりも、1から鍛え直しなことを考えると、女子に混ざっても活躍できないことに変わりないのは分かっていた。
というよりも、もし女子の中でもダメだったら……と思うとその恐怖感は半端ない。
男だからこそ、レベルの高い環境でサッカーが出来たわけで、今女の子になって、そこでも活躍できないとなれば、もはやサッカーを恨みかねない。
ともかく、男子のサークルで全然ダメだったから、活躍できないのは何より怖いのだ。
「部長さんがさ、とりあえず『見学はいつでもいい』って言ってたし、場合によってはマネージャーにしてくれるってさ」
部長さんも、当然、突然にして選手生命を絶たれた俺に対して、救済措置を用意してくれていた。

まあ、ここでポイしたらあまりにも非情というものだ。
「うー、マネージャーかあ」
もちろん、これに関しては心からありがたい配慮なのは分かっていたが、それでも「女子の仕事」というイメージがあることを鑑みれば、どこか憂鬱な気分でもある。
だって男なら、少なくとも今の俺ほどにひどい動きにはならないだろうから。
部長さんは、なるべくこれまで通り接するようにはしてくれたといっても、性別が変わって、しかもかつての面影は全くないような美少女になってしまった以上、完全に以前と同じ扱いは不可能だった。
当然そうなれば人間関係も大きく変化するわけで、やはりサッカーがもう出来なくなるのではないかという恐怖は同じだった。
貧乳女子ならまだしも、ここまで立派に育った胸を持ったら、当然運動することも難しいわけで。
そんなこんなを感じながら、手原と大谷と共に、いつものように家路についた。
ここの所だけ以前と変わらなかったのは、不幸中の幸いだったのかもしれない。

「ただいまー」
「悟、お帰りなさい。大丈夫だった？」
帰宅の挨拶をした直後、おふくろが心配そうに話しかけてくる。
「兄貴の友達たちは何だって？」
徹も、さすがに気が気でないようだった。
２人共、すぐに玄関に走っていったから。
「あーうん、サッカー仲間の連中は、なるべくこれまで通り接してくれるって。ただ……」
ここまで言って、俺は言葉に詰まってしまう。
「もしかして、その体？」
女の子になった以上、当然運動神経が落ちることはみんなも理解している。

「ああ、俺の運動神経の低下は致命的だ。もう二度と、手原たちと同じ日々には戻れねえ……」
「兄貴……」
「悟……」
悲壮感を醸し出した俺におふくろも徹も何も言い返せない。
サークルの人達と同じようにプレーは出来ない。以前と同じようにサッカーが出来ない。
俺はもう、みんなと同じラインに立つことは出来ない。
これはもう、確定事項だった。
「お風呂沸いているわよ」
おふくろは、「いつものように」を心がけて、そんな話をしてくれていた。
「ああ……」
お風呂場は、鬼門だ。女の体というのを嫌でも思い知らされる。
俺は、かごにおいてあったパジャマを確認する。
どれもこれもぶかぶかなのを強引にゴムなどで縛って着ているからとにかく不釣り合いだ。
「はぁ……」
お風呂に入るということは、当然服を全て脱がなくてはならない。
鏡の前に立つ少女は、憂鬱な顔になっていた。
水色のショートヘアーと、お人形さんのように整った幼めな顔、そしてまるで収穫期の果物のように実りを迎えた丸くて大きな胸、そして下半身の男性とは決定的に違う様子を見なければならない。
「俺はもう……男には……」
鏡を見ながら、そんな声が出てしまう。
ドーピングという方法もある。
スポーツ選手にはタブーだが、男性ホルモンを注射し、あるいはさまざまな運動能力向上薬を使うことで、髭が濃くなったりするといった男性化と引き換えに圧倒的な記録を作り出すことが可能になっている。
でも、それで男を取り戻せるわけではない。

「はぁ……」
憂鬱な気分で、俺は体を洗ってお風呂に浸かる。
この体は物凄く繊細で、力を入れすぎないように注意しないといけない。
こうしたことを見て体験する度に、女として生きるということが、どうしても許容できない。
女に生まれれば、また違ったのだとは思うけど。

「悟が生きたいように生きればいいのよ」
だから、おふくろのこの言葉になびいた。
更に徹が、こうした運動能力向上薬の話を持ちかけてきた。
もちろん、こんなんで男女差が埋まる訳じゃない。
現に、ドーピング疑惑の強い、ずっと破られていない陸上競技の世界記録だって、男子から見れば日本の高校生の記録と大差ないからだ。
それでも、全くやらないよりはマシに見えた。しかも都合のいいことに、俺の体は不老だし、少しくらいの無茶は許される雰囲気があった。
男を取り戻す、どうあがいても不可能だと、余呉さんに口酸っぱく言われたが、それも何だか嘘臭く見えた。
「今の時代なら、男女差を埋めることだってそこまでおかしくないわよ」
おふくろのこの言葉には賛成はできなかった。
それでも、埋めることへの誘惑は、着実に俺を蝕んでいった。

## 感情のもつれ

翌日の昼休み、大学の掲示板に、「次の者は４コマ目に事務室に来てください」と、ご丁寧に俺の学籍番号が掲載されていた。

今日はサークルが休みで、講義も４コマ目がちょうど空きコマなので、おそらく余呉さんの呼び出しだろうということがすぐに分かった。

ちょうどいい機会だと思い、俺は早速事務室に入ることにした。

「こんにちは塩津さん」

中に入ると、既に余呉さんが座っていて、ご丁寧に挨拶をしてくれた。

「あ、えっと、お久しぶりです」

最後に余呉さんと会ったのが、昔のことに感じられる。

といっても、数日会ってないだけで、大昔に感じてしまうのはここ数日色々と「濃い」からだろう。

「大学の方にいくらか事情は聞きました。サッカーサークルはどうですか？」

余呉さんは、最近の俺のことから聞き始めた。

「えっと、その――」

どこから話すべきか、俺は迷う。

「躊躇しなくていいわ。私はあなたの担当カウンセラーよ。もちろん、返答次第では厳しい言葉もあるわ」

「は、はい……」

ともあれ、沈黙していても始まらない。

そう思い、俺は昨日起きたことを全て話した。

ついでに、家族とのことも、ただ、話を聞く余呉さんの表情は険しいものだった。

「塩津さん、結論から言いますね」

「はい」

余呉さんの表情は、幼い顔からは想像がつかないほどに険しい。

「あなたの置かれている状況は、悪化してます」
「な!?」
ど真ん中直球を、放ってきた。
無論、予想はついていたが。
「本来なら、あなたはサークルの人に、『女性として扱ってほしい』というべきです。それに、服装も、できればスカートを穿きなさいとまでは言わないけど、せめてサイズの合った服を身に付けてください」
無理やりサイズ合わせしているのも、すぐに見抜かれてしまった。
しかも、スカートに付いて言及してきた。
男に生まれたからには必ず興味があると言ってもいい「スカートの穿き心地」、余呉さんはそれに巧妙に訴えてくる。
「うぐっ」
「もしかしたら、ホルモン注射や整形手術を模索しているかもしれませんが、それはＴＳ病患者にとって重大なタブーなのよ」
余呉さんは、容赦がない。
俺が思っていた希望的な事案を、「重大なタブー」とまで言って切り捨てた。
１つ１つ、外堀を埋めてくるのが余呉さんのやり方だった。
「いい？　塩津さん、あなたもＴＳ病になったから、理屈ではわかっているはずよ。女の子になっちゃった以上、今後は女の子らしく、おしゃれしてかわいく振る舞うべきだって」
「っ……!!」
図星だった。
ここ数日間だけでも、どうして男は男らしく、女は女らしくという考えができたのか痛いほど分かった。
だから、余呉さんの言っていることは非の打ち所がないほどに正論で、俺には反論が思い付かなかった。
「塩津さん、女の子を拒否した患者さんは、みんな悲惨な末路を辿ってきたの。私だって、女の子になったばかりの頃は大変だったわ」
「……」
もう何も、言い返すことが出来なかった。

「サッカーのことは、もうどうしようもないわ。女子サッカーに混ざるなら、もちろんありだけど、そうなったらなったで、やっぱり女子の作法や感性を学ばないといじめられるわよ。つまり、どっちにしても性別からは逃げられないの」
余呉さんのカウンセリングは、異例だ。
逃げ道が、塞がれている。いや、逃げ道と思われている場所は全て断崖絶壁で、踏み外すと転落してしまうのだろう。
だけど、それでも、それでもこんな、こんな何もかも諦めたような考えには、賛同ができなかった。
「俺は……俺は抵抗します」
「ダメよ！」
俺の言葉は即座に、否定された。
「自殺するから？　ですか？」
「そうよ。本来なら、何百年何千年と生きていけるのに、すぐに死ぬだなんて悲惨すぎるわ」
女の子として生きる道しか、彼女たちには見えないのだろう。
余呉さんからは、「男の面影」がなにも見えない。
「俺は、俺は変えて見せる」
「自分だけが例外だと、そう思って自殺した患者は、もう飽きるほど見てきたわ。塩津さん、ＴＳ病患者が５年間生存する確率って、５割を切っているのよ」
「半分が？」
もちろん、そのほぼ全員が自殺だろう。
こんな若いまま、老けないのだから。
「そう、半分以上の患者が、今のあなたみたいに振る舞って、そして自殺していったの。あなたに、ありふれた悲劇を演じてほしくないの。５年以上生存した患者さんはね、みんな紆余曲折と、色々なものを捨てながらも、現実を受け入れて女の子として生きていったのよ」
俺のような人は、ありふれているとまで言ってきた。
もう、何をどうしていいのかさえ、分からない。
「でも俺は、俺には――」

「サッカーがあるんでしょ？　でもそれって、命よりも大切なことなのかしら？」
余呉さんは、今度は優しく諭すように言う。
飴と鞭が分かってしまうと、俺も途端に白けてしまう。
俺もそこまで、バカではない。でもそこまでバカだと思われてしまっていたのだ。
「俺には……俺には今まで生きてきて、築き上げてきた１９年がある。それらを捨てるなんて――」
「生きてきた１９年間の男の人生は決して無駄にはならないわよ」
余呉さんが、遮った風に言う。
「……何故だ？」
余呉さんは、にっこりと微笑んだ。
これだけ見れば、幼くあどけなさが色濃い美少女にしか見えない。
でも心の中で考えていることは、幼さとは正反対だ。
「男としての人生の経験が、女としての人生に活きるからよ。男の気持ちが分かれば、とてもいい恋愛を送れるし、そうでなくても１９年間学んだ一般教養は役に立つわ」
「んっ……」
結局、今までの男の人生でさえ、女として、女らしく生きることを前提としたものだった。
「俺は、『男としての』１９年があるんだ」
「男なら、確かに『男として』は大事よ。でも、何も知らない人があなたを見て、『男として』何て受け入れられるかしら？」
余呉さんの反論は、まるでマニュアルに書かれているかのようなものだった。
そして、余呉さんが言っていることは、やはり正論だった。
男として生きていくことはもはや不可能だということは、どうしても動かすことは出来なかった。
「それは、その時に説明すればい。現にサークルの仲間は――」
「それは特別親しいからよ。これから例えば社会人になった時に、『俺は男です。なのでトイレもお風呂も男性用使います』何て通じるかし

ら？」
余呉さんが、また非の打ち所がないほどに清々しい正論を述べる。
明らかに、間違っているのは俺だった。
それなのに、認めたくなかった。
「うっ、俺にだって、プライドが――」
「面子のために命を投げ捨てるの？　戦国時代じゃあるまいし」
また、まるでマニュアルで決まっているかのような即答だった。
相手は、明治以前の生まれで、しかも知り尽くしたプロ、論戦で勝てるはずもなかった。
「俺は……俺には……」
感情がどんどんと、もつれていくのを感じた。
頭の中でも、これじゃダメだと言われた気がしたが、すぐに頭の中から消えていった。
「女性としての人生は決して悲観的なことばかりじゃないわ。それに、今のあなたを見てみれば分かるわ。すっごくかわいくて美人で、きちんと女の子らしく振る舞えば、サークルのみんなにも好かれるわよ」
「うっ……!!!」
余呉さんの言葉で、手原と大谷に迫られる自分を、一瞬想像してしまった。
はっきり言って物凄く気持ち悪かった。
「俺は、同性愛の趣味なんて無い！」
思わず、反射的にそう言った。
「……性癖は人それぞれだけど、少なくとも今のあなたが男と恋愛するのは、同性愛とは言わないわよ」
余呉さんは、あくまでも俺は女だという前提を絶対に崩さない。
「だって俺は、俺は男で――」
「いいえ、あなたは女の子よ。これからはずっとずっと、もう男に戻る道はないわ。そしてこれだけは言えるわ。現実逃避を続けていると、そのうち必ず、この世からも逃避することになるってね」
余呉さんの話し方はそれまでとは変わらなかった。

とても幼く見えるけど、どこか聡明な雰囲気で、俺を必死に救おうとしている様子が見て取れた。
なのに、俺にはものすごい挑発的に聞こえた。
理性の中では、余呉さんの言っていることは全く正しくて、俺の考えは何もかも間違いで、このまま突き進めば生命の危険にもなりかねないことは分かっていた。
「う、うるさい……！」
それは、さりげなく出た言葉だった。
しかしそれと同時に、余呉さんの目が哀れみの色に染まっていた。
「……」
ついに、超えてはいけない一線を越えてしまった。
そんな感じだった。
「俺は、俺なんだ。俺は塩津悟、１９歳男性なんだ！」
挑戦的に、俺はそう宣言する。
余呉さんは、何も言い返してこない。
嫌な沈黙が、続いた。
「……残念だわ。ええ、私は自分が無力だってまた思い知ったわ」
長い間の沈黙が続いた後、はじめに口を開いたのは余呉さんだった。
それはまるで、俺に向けてというより、自分に言い聞かせているような感じだった。
「どう言うことだ？」
あまりに以外な言葉に、つい聞き返した。
「あなたのような考えに陥って、不適切な方法を選び、女を捨てて、かわいらしい美少女が台無しになって、それでも男に戻れないことを知って絶望して、悲惨な死体になって、嘆き悲しんだ果てに、感情のままに私たちを無責任に糾弾する遺族……塩津家もまた、その方向に向かいつつあるということよ」
「っ……俺は……俺は……！」
「いい？　これはあなたの命のためよ」
余呉さんの優しい声が響く。

命がかかっているんだから選択肢はない。
俺は、何て言い返せばいい？
命よりも意地やサッカーの方が大事かと言えばそれは明確にノーだ。
サッカーだって、死んじゃえばできねえことくらい分かる。
それでも、それでも、選択肢が一切無いということを受け入れることができなかった。
「俺は、受け入れることができねえ！」
どうしても、平行線だった。
「……ふう、困りましたわね……いいわ、ともあれ、今日はこのへんにしましょう。ですが、あなたもいつか、きちんと女性としての振る舞いを覚えてくださいね」
余呉さんは、それだけ言うと、この場から立ち去った。
余呉さんがいなくなると共に、彼女の忠告が、耳から抜けていくのを感じた。
「今更、無理だ……」
俺は空しくそう呟いた。

## 希望の光

「なあ塩津、ＴＳ病で男に戻れた前例はねえらしいんだ」
手原が、スマホを見ながらそう伝えてくれる。
手原曰く、ＴＳ病の原因やメカニズムは現代医学でも依然未解明だが、生物学的理論でも、「男から女に変わる」よりも「女から男に変わる」方が遥かに難易度が高いことなのだという。
どちらにしても、男から女は一方通行だという。
「実際、ＴＳ病は日本人の若い男性の風土病……ああ、固有のものと言って差し支えない病気なんだ」
手原曰く、この病気になった人は人類の歴史上でも１３００人程度という極めて稀な病気である上に、その患者の８割を日本人で占めている。
そして完全性転換症候群ことＴＳ病において、女が男に変わるという事例はない。
だから奇跡的にまたＴＳ病になる、何ていうことはあり得ないのだという。
不老の遺伝子はあるものの、明治初期までは、この病気は「極めて強力な不吉をもたらす」と全世界で恐れられており、発病したものはすぐに殺されていたし、そうでなくても、前近代は衛生環境も治安も悪く、共同体から追い出されれば死に一直線だった。
そのため、１００歳を越えている人は意外と少ないのだという。余呉さんは希少種だ。
いやそれどころか、現在でも性別が変わる苦悩に耐えられず自殺者が半数以上いることからも、外れ値を考慮しても平均寿命は普通の人よりかなり短いという。
「塩津が出会った余呉って人、相当な長命だぜあれ」
大谷は、腕を組ながら話す。
余呉さんは、俺たちの両親に、俺たち一家全員の年齢全てを足しても全然足りないと言っていた。
「その人の言うことが本当だとしたら、最低でも１３０とか１４０と

かになるよな、でも、今までの人間で一番長生きしたのが１２２歳の女性って話だし」
　おそらく、それはＴＳ病患者は考慮されていないんだろう。
「だよなあ……」
　ともあれ、余呉さんの振る舞いを見ても、ＴＳ病が不老なのは疑いようがない。
　明治初期以前の生まれが全滅していたとしても、そもそも日清戦争の頃から生きていればとっくに１２２歳をオーバーしているはずだ。
「まあ、普通に考えれば、１２２歳が一番長生きってのが間違いなんだろうな」
「うむ、その時と今じゃ価値観も大きく違ってるしな」
　手原と大谷の言葉が、俺に深く刻み込まれていく。
　またひとつ、余呉さんの話から目が逸れる。
　自分に都合のいい情報ばかり集めている感覚もどこかであったが、俺は強引にそれを圧し殺した。
「あの協会も、長生きの人が多いんだろうな」
　だから、今この時代のＴＳ病になったばかりの人の気持ちが分からないんだ。
　手原はそう言いたいのだろう。
「なるほどね」
　また、俺は余呉さんに不信感を募らせていく。
　つまり、協会とは言うが、あの外見でも実年齢がばばあもばばあだから、古い価値観にばかり凝り固まっているのだろうと。
　ほんの一瞬だけ、「それは論理の飛躍だ」という声が頭に響いた。
　でもそれを、俺は無視した。
「まあ、過去の患者も前例がない言われて騙されてただけかもよ。俺たちも、男に戻る方法を探してみるよ」
「うん、ありがとう」
　勝算が低いかもしれない。
　勝てるかではなく勝つ。それが俺が好きなサッカーという競技においてとても大切で、ある意味で、これも似たようなものに見えた。

「何、俺たちも、今のままじゃ塩津とどう接していいかいまいち分からねえしな……ここまで見た目が変わっちまうと以前のまま接すると言っても難しいんだよどうしても」
手原の言うことも、もっともだった。
手原たちだって、いきなり性別が変わった俺とどう接するかで困っているに違いない。
だったら、俺が男に戻り、「あの頃は一時の悪い夢」のような状態になった方がいいに決まっている。
「ああ、よし、決心がついたぜ」
もしかしたら、余呉さんはまた怒るかもしれねえ。
でも、説得すれば、何とか諦めてくれるかもしれない。
いや、これは悪い道かもしれない。
でも、「認めたくない」ということだった。
……「たくない」……かあ、仕方ねえよな。
でも、何もせずに駄々をこねるよりはいい。「やらずに後悔する前にやって後悔しろ」だ。

翌日、手原からひとつのニュースが飛び込んできた。
どうやら、男に戻れないこともないというのだ。
「手原、いったいそれってどういうものなんだ？」
「ああ、性同一性障害の患者さんの治療に使われる『性別適合手術』ってのがあるらしいぜ」
「ほう」
手原が、自慢気にスマホの画面を見せてくれた。
性同一性障害、つまり心の性別や性自認と身体的な性別との解離で起きる障害、それを埋め合わせるための手術なのだという。
「男性ホルモンを注射して、胸を摘出したり、体毛を生やしたり……更には『あれ』も作り出せるらしいぜ」
俺は、手原に希望を見いだした。
俺はそのことばかり考えるようになった。余呉さんは全力で止めるだろうが、もう関係ねえだろう。

あれから、怒濤の数日間が過ぎた、俺のぶかぶか服も大分大学では有名になり、男子学生がＴＳ病になったことも学校中に広まった。
そんな中での金曜日、余呉さんが家を訪問してきた。
「塩津さん、あなたに残された時間も刻一刻と無くなって来ています」
余呉さんの説得は、同じようなものだった。
性同一性障害に陥る患者が多く、元々この障害は自殺率が高いが、後天的なＴＳ病患者がそれに陥ったまま抜け出せない場合、自殺率は１００％になるという。
「……あなたは、自分が特別と思っていますか？」
「そりゃあ、こんな病気になったくれえだからな」
日本人に多いとはいえ、このＴＳ病が珍しい病気であることだけは確かだ。
「違和感は感じないのですか？」
余呉さんは、あくまで冷静な姿勢を崩さない。
「何がだ？」
「その言葉遣い、自分で言ってて、おかしいと思わないのかしら？　私はどう？」
「……」
この声質にこの言葉遣いは、確かに違和感はある。
だけど、無理にでもこう振る舞わねえと、俺の全てが吹き飛んでいってしまう気がするのだ。
「努めてこうしねえと、俺が俺でなくなっちまう。俺という存在が、吹き飛びそうで――」
「それは、吹き飛ばさないといけないものよ。今のあなたはまるで猛毒の水銀を不老不死の薬と思い込んでいる始皇帝みたいだわ」
余呉さんが、有無を言わせない勢いで口を挟んできた。
秦の始皇帝……ずっと遥か昔の人だが、確かに彼は不老不死を追い求めた。
水銀がそのための薬になるのではと思って服用したが、言うまでもなく水銀は毒性のあるものだ。

始皇帝が死んでから、秦はまるで坂道を転げ落ちるように滅んでいった。
「永遠を望み叶わなかった始皇帝の死と共に、あれだけ長い戦乱を終わらせた秦帝国はすぐに滅んだわ。でもあなた始皇帝とは違うの。何もせず、女性を受け入れて、女として生きていけば、あなたはいつまでも生き続けることができる。もちろん、不老であって不死にはなって無いけども」
俺が必死に男としての矜持を残そうとしているのは、寿命をかえって縮めるということだった。
余呉さんは、何度でも、「女の世界に来なさい。そこは楽しいよ」と言ってくれている。
実際、美少女としての人生も魅力だと思う。
それでも、感情が許さなかった。
「俺には、男としての意地がある。あんたも昔男だったなら、譲れねえことがあるって分かるだろ？」
らちがあかないと思い、俺は別の搦め手を試すことにした。
「そうね、私も確かに、ＴＳ病だからその事は分かるわ。でもね、ダメなのよそれは。禁忌なのよ」
余呉さんは、相変わらず冷静に、しかし鋭く俺の前に立ちはだかってきた。
「あの、悟にも、悟としての人生があるんです」
そして、俺が言い返せないでいると、またおふくろが口を挟んできた。
「……ええ、確かにこれまでの男性の人生はあるわ。それは私だって同じよ。遠い昔、東京がまだ江戸と呼ばれていたような時代の頃のことでも、決して消えないわ。うちの会長なんて私から見ても想像を絶する時代の記憶を持っているわ、それでも男の記憶・感性は消えないの。でも、女の子として生きていけば分かるわ。女の子として生きる上で、男だった頃の人生はこれ以上無いくらい役に立つわよ」
その話は、以前にも聞いた。
だけど、そういう問題じゃない。

「そういう問題じゃねえんだ。とにかく、男を取り戻さねえことには……」
「……塩津さん？　あなたが好むと好まざるとに関わらず、今のあなたは女性なのよ。そのためには、女性として生きていくしかないの。あなたはもう、赤ちゃんを産むことができる所まで、女性なのよ。外見だけ男に似せても、無駄よ」
余呉さんはあくまで、無慈悲な宣告を崩さなかった。
そして、直接名前を出さなかったものの、性別適合手術も、否定していた。
恐らく、同じようなところに行き着いた人を見てきた経験があるのかもしれない。
「俺は……俺は……男として」
「ダメよ。私は今日こそはあなたに、女として生きていくことを決めてもらうために来たのよ」
「ぐっ……も、もういいです！」
思わず、声を荒げてしまう。
「俺の人生だ。あんたが何歳生きたかは分からねえけど、俺にだって……俺にだって今まで積み上げたものがあんだよ！」
意識して乱暴な言葉遣いを心がける。
女っぽいことは、したくはない。
「積み上げたものは崩れないわ。確かにきちんと、残るわ。ただ、その上に積み上げるものが、今のままだと崩れちゃうのよ」
俺がいくら感情的になろうと、余呉さんは、冷静だった。
「どうして、どうしてそんなことが言えるんだ！　こんな体にされてもう、崩れかけてるっていうのに！」
「ふう……仮に崩れたとしても、また積み上げればいいわ。あなたが女の子として生きていけば、これまでよりもずっと高く高く、素晴らしい塔が完成するわ」
余呉さんは、怒りに震える俺に、一切動じなかった。それどころか、哀れみの表情さえ見せていた。
ただ冷静に、そして母性溢れる優しさの声で、俺の反論を、徹底的

に封じ込めてくる。
むしろ、怒ってくれた方がまだましだった。
「俺は、俺には意地があるんだ！」
銃で脅されていたら、もしかしたら従ったかもしれない。
「……どうしても、女性としては生きていけないのですか？」
「ああ、そういうことだ。あんたは長生きしているから、諦めているだけだ」
余呉さんは、悲しそうな表情をした。
俺の将来をすべて見透かしたような目付きになる。
「私も協会の人間です。あなたが自ら命を絶つまで、面倒を見ましょう。ですが、その日も近いとだけ、言っておきます。お母様」
余呉さんが諦めようという気持ちと、それでも諦めきれないという気持ちが戦っている様子で、椅子から立ち上がると、おふくろに顔を向けた。
「はい」
「お宅のお子様、相当危機的な状況です。それから、新しい名前、そろそろ考えてくださいね」
それだけ言うと、余呉さんが外に出ていった。
恐らく、俺が死ぬまで、これが続くのだろう。いや、性別適合手術を受けてくれれば諦めてくれるかもしれない。

「なあ兄貴」
「ん？」
おふくろはあの後、「悟の意思を尊重するわ」と言って家事に戻った。
そして今、俺は徹の部屋で今後を相談することにした。
兄弟2人で相談することも大事だ。
「兄貴は、それでいいのか？　女としては、生きられないと」
「ああ、やっぱり、サッカーできねえのは、辛いし」
もちろん手術を受けたとして、どこまでプレーできるかは未知数だが。

「でもよ、そんな体からどうやって男に戻るんだ!?」
徹は、当然その事を疑問に感じている。
「へへん、手原の奴がいいものを調べてきてくれたんだ」
俺は、徹に手原が教えてくれたスマートフォンの画面を見せる。
そこには、「性別適合手術」の画面だった。
「へえ、こんな手術があんだな」
ご丁寧に、この手術を受けた人の「ｂｅｆｏｒｅ　ａｎｄ　ａｆｔｅｒ」まである。
これを見たら、同一人物だなんて思いもしないことだろう。
「すっげえなーこれ。じゃあ兄貴も、元の姿に?」
「ああ、多分な。生命保険の対象にはなるし、幸い俺が悟の時代の写真を見せれば大丈夫だろ」
まず胸を切除しホルモンを男にし、更には「生やす」作業を行うことになる。
そして顔を整形してしまえば完成だ。
「なるほどな。完全に元通りとはいかねえだろうけど、少なくとも女の子の格好よりはましか」
徹の視線が、胸にいく。
大学で地味にうざかったのが、この男どもの胸への凝視だった。
いくら隠そうとしても無駄なくらい、大抵の女より膨らんだそれはうざったくてたまらないものだった。
まあ、俺も男だから、気持ちが分かっちゃうのが素直に怒れねえところだ。
この手術を受ければ、そういうのともおさらばできるってわけだ。
「なるほどねえ、お父さんたちには?」
「まだ話してねえ。いい病院を見つけて、それで相談しようと思う。悪いが秘密にしてくれよな」
「ああ、兄と弟の約束だ」
徹は、俺が女の体になってから、随分と温厚になった。
まあ、気を使ってはくれているんだろうが、以前のように喧嘩もするけどもう少し開放的な感じがいいとも思い始めていた。

きっと、俺が男に戻ればそういう関係に戻れるはずだ。

「2人ともーご飯よー！」

「はーい！」

手術に関する調べものの途中、俺たちは親にも内緒で、性別適合手術の下調べに取りかかることにした。

「悟、次のカウンセリングだけど」

「いやもういい。会いたくねえんだ」

もう、余呉さんに会うことはねえな。

「悟……」

俺は、敢えて退路を絶つことにした。

何、成功すれば、きっと余呉さんも認めてくれるだろうよ。

# 運命の訪問者

「なあ兄貴」
「ん？」
おふくろはあの後、「悟の意思を尊重するわ」と言って家事に戻った。
そして今、俺は徹の部屋で今後を相談することにした。
「兄貴は、それでいいのか？　女としては、生きられないと」
徹が、もう一度確認する。
「ああ、やっぱり、サッカーできねえのは、辛いし」
女として生きていくことに興味がないわけじゃない。
だけど、大変なことは分かっている。
「でも、どうやって男に戻るんだ!?」
徹は、当然その事を疑問に感じている。
「へへん、手原の奴がいいものを調べてきてくれたんだ」
俺は、徹にスマートフォンの画面を見せる。
そこには、「性別適合手術」の画面だった。
「へえ、こんな手術があんだな」
ご丁寧に、この手術を受けた人の「ｂｅｆｏｒｅ　ａｎｄ　ａｆｔｅｒ」まである。
これを見たら、同一人物だなんて思いもしないことだろう。
「すっげえなーこれ。じゃあ兄貴も、元の姿に？」
徹も、この手術について食い入るように見つめている。
「ああ、多分な。生命保険の対象にはなるし、幸い俺が悟の時代の写真を見せれば大丈夫だろ」
まず胸を切除しホルモンを男にし、更には「生やす」作業を行うことになる。
そして顔を元の「悟」の姿に整形してしまえば完成だ。
「なるほどな。完全に元通りとはいかねえだろうけど、少なくとも女の子の格好よりはましか」
徹の視線が、胸にいく。

大学で地味にうざかったのが、この男どもの胸への凝視だった。
まあ、俺も男だから、気持ちが分かっちゃうのが素直に怒れねえところだ。
この手術を受ければ、そういうのともおさらばできるってわけだ。
「なるほどねえ、お父さんたちには？」
「まだ話してねえ。先にいい病院を見つけて、それで相談しようと思う。悪いが秘密にしてくれよな」
もし余呉さんに漏れたら、絶対に妨害されるだろうし。
「ああ、兄と弟の約束だ」
徹は、俺が女になってから、随分と温厚になった。
まあ、気を使ってはくれているんだろうが、以前のように喧嘩もするけどもう少し開放的な感じがいいとも思い始めていた。

「2人ともーご飯よー！」
「はーい！」
手術に関する調べものの途中、俺たちは親にも内緒で、性別適合手術の下調べに取りかかることにした。
「悟、次のカウンセリングだけど」
「いやもういい。会いたくねえんだ」
もう、余呉さんに会うことはねえな。
少しでもこの計画について悟られたら厄介だし。
「悟……」
俺は、敢えて退路を絶つことにした。
何、成功すれば、きっと余呉さんも認めてくれるだろうよ。

「ねえ悟」
「何だ？」
翌日土曜日、おふくろが神妙な面持ちで話しかけてきた。
「今協会から電話がかかってきたわ。余呉さん、カウンセラーを降りることになったって」
「へえ、もう協会には興味ねえよ」

そう言いつつも、内心では「いい気味だ」と思わなくもない。
「悟、悟の気持ちも分かるけど、同じ境遇の人は貴重よ。だから話だけでも――」
「いいってんの！」
俺はおふくろにも、当たってしまった。
恐らく形だけでも支援を受けたほうがいいと考えているのだろう。
それじゃダメだ。
「でも、今度の人は関東から来るらしいから――」
「会わねえよ。どうせ同じこと言われるだけだ」
俺は、機嫌が悪くなる。
しかも関東から来るって、どんな人かはわからないが余呉さんよりたち悪い可能性だってある。
部屋にあったノートパソコンを起動し、この近くにある性別適合手術のできる病院を探す。
幸い、戸籍は男のままで、また名前も変わっていない。
そのため、あれこれ面倒な手続きも少しは簡略化しそうだ。
「さて、問題は病院だよなあ……」
これが意外と少ない。
もちろん、性同一性障害の診断などは、今の俺には余裕なはずだけど、協会が医学界に根回しして、ＴＳ病患者に受けさせねえようにしていたアウトだ。
いや、あの人達も馬鹿ではない、いや、人生経験を考えれば、並の大人なんかよりも遥かに謀略家だから、有名な病院には協会の手が回っていると考えるのが自然か。
でも、それの従うお医者さんばかりとも限らない。
根気強く根回ししていれば、いつか光明が見えるはずだ。
「うーむ、この病院は……ふむふむ」
今の俺は１９歳で、「成人」という問題がある。
それでも、ＴＳ病なら、もしかしたら特例を引き出せるかもしれねえし、そうじゃなくても来年まで待てばいいだけだ。
「よし」

ともかく明日、病院に電話してみるか。
協会に計画が漏れる前に、ケリを付けねえと。
そのためには、どの順番で電話するかも大事だろう。

「ん……」
ゆっくりと意識を回復する。
俺が女の体にされ、８日目になった。
「うー」
悪夢のような日々だった。
確かに、この女の子はかわいいし胸も大きいし、多分その気になればものすごくモテると思う。
でも、それは俺の望むことじゃねえ。
日曜日特有の「寝溜め」により、起床時間は午前１１時、台所に降りるとおふくろが昼食を作ってくれていた。
「悟、今日協会の新しいカウンセラーさんが来るわ」
「んっ……！」
また、この話題だった。
もう、会いたくねえのに。
「会いたく……ねえ」
「気持ちは分かるわ。でも、相手に諦めさせるためにも――」
「いい！　俺は、俺はもう、あいつらの言葉なんか聞きたくねえ!!!」
おふくろは、あくまで協会の人を説得させるべきという姿勢だ。
だけど俺も我慢はできない。
昼食を持ち、部屋へと戻り、１人で食べる。
そして、食べながらノートパソコンの画面に集中する。
そこには、無事に変身を果たして、本来の姿を取り戻せたことに喜びを見いだす書き込みで溢れていた。
「やっぱ、これだよな」
昼食を食べ終え、変身後の男性の姿形を選ぶコーナーを見る。
医療費は高いけど、幸いうちは奨学金を払っていない。
だから、これくらいなら出世払いでもいいだろう。

男に戻った日々を、今からよくイメージトレーニングしておく。
「おっ！」
ふむふむ、大きさも選べるのか。
従来のやり方では、あのサイズがかなり小さいらしい。
もちろん、そんなのは男の尊厳にか変わるので、なるべく大きいプランを選びたいと思う。
さてそうすると――
「悟ー！　カウンセラーの人、新しい人が来たわよー！」
「何だよ！　会いたくねえつってんだろ！」
調べ物をしていたら、突然、水を差すおふくろの言葉が耳に入る。
俺はもう、協会には返答もせず無視することにした。
床下の動きを聞くに、どうやら向こうは複数人で押し寄せてきたらしい。
……全く、いい迷惑だ。
気が散った俺は、性別適合手術の画面を消して、気晴らしにサッカー関連のニュースを見ることにした。
階下では、徹やおふくろ、それに親父が話している様子が聞こえた。
「どうやらどうしても会いたいくないようです。お引き取り願いますか？」
「仕方ありませんね。行きましょうか、会長、浩介くん」
とうとう、おふくろも諦めてくれたようだ。
「そうですね」
「ああ」
トントントン
どうやら、協会の人も諦めてくれたようだぜ。
関東から来たのに追い返されるのは気の毒だが、まあ、俺の知ったことじゃねえな。
「悟ー！　会の人はとりあえず帰ったわ！　おやつを出すから開けてちょうだい！」
「おうわかったぜ」
俺は、安堵の表情でドアの取っ手に手をかけて手前に引こうとし

た。
「今です！」
「「突撃！」」
突然、「バアン」という音と共に、人が雪崩れ込んできた。
「う、うわっ！」
俺は押された咄嗟にそのまま激しく後ろに後退する。
「な、はめやがったな！　この野郎！」
両親、徹、そして知らない男１人と女が２人いた。
騙されたことはすぐに分かった。
「あなたが塩津悟さんですね」
「この……帰れ！」
「そういうわけにも行きません。私は日本性転換症候群協会からあなたの担当カウンセラーとして派遣されているのよ」
俺を遥かに上回る巨乳の少女が冷静に話す。
ただでさえ騙されていたところに、それは俺をイラつかせるには十分だった。
「余計なお世話だ！　俺はこれから性別適合手術で男を取り戻すんだ！」
怒りに任せ、俺は徹との秘密をばらしてしまった。
もう知ったことか。
「……塩津さん、その手術を受けたＴＳ病患者が３年以内に死ぬ確率は１００％ですよ」
この女の言動も、余呉さんと同じだった。
「うるせえ、過去のことなんかどうでもいい！」
なるべく、大きな声を出す。
「まがい物の体を手に入れてどうする気かしら？　そんなことをしても、性染色体はＸＸのままよ」
もう一人の、余呉さんほどではないが小柄な美少女が挑発的に話す。
俺はますます怒りで震える。
「なっ……お前らには、関係ねえだろ!?」

新しいカウンセラーの少女も、そして一番小柄で一番年下と思しき少女も、協会の人間は結局全員余呉さんと同じだった。
「石山さんはともかく、私は日本性転換症候群協会の会長として、１３０年以上ＴＳ病の患者を見てきたのよ。塩津さんはどうして女の子として生きていくことを嫌がるの？」
いや、その小柄な少女は、どうやら一番年上で、しかも会長という重職まで出てきたらしい。
「だって、俺は……俺は男だからだ！」
そんなに俺が気に入らねえか！
「いいえ、あなたは女よ」
また、最初のおっぱいの大きな少女が言う。
「っ！　それは……だって……」
「お姉ちゃん、諦めてくれ。もう、お姉ちゃんは戻れないんだ」
一瞬、耳を疑った。
徹が俺のことを「お姉ちゃん」と呼んだのだった。
「っ！　おい徹！　こいつらに、何を吹き込まれたんだ!?」
『幸子』、そうよ……今日からあなたは幸子よ」
しかし、徹の次におふくろが発した言葉はもっと耳を疑うものだった。
「なっ……俺は悟だ！　幸子って誰だよ!?」
おふくろと徹が、この小柄で胸の大きい少女と、物凄く胸の大きな少女に脅されたのは間違いねえ。
「あら、幸せな子で幸子、とってもいい名前じゃない。でも今のあなたの態度じゃ幸せな子にはなれないわよ」
美少女が、哀れむような目付きで俺を見つめる。
俺は侮蔑にしか感じ取れなかった。
「っこの、てめえ大きなお世話だって言ってんだろ！」
「こら幸子！　お前のためを思ってみんな言ってんだぞ！」
そしてやはり、父親も籠絡されていた。
「親父まで……！　この野郎……！　てめえ！」
俺は我慢できず、この女に向けて拳を振り上げる。

「っ！」
「おいこらっ！」
しかし、側にいた男に拳を素手で取られると、そのまま押し倒されて尻餅をついてしまう。
さっきまで一言も話していなかったが、おそらく用心棒か。
「なっ！　てめっ！」
俺は怒りに任せてその男に向かっていく。
「俺の優子ちゃんに手を出すんじゃねえぞ！」
「このおっ!!!」
しかし、無残にも男に払いのけられてしまう。
ああっ！　くそっ！　女の体のせいだ！
この体が憎い。女になったせいでこんな――
トコトコ
先程の「優子ちゃん」と呼ばれた少女が、ゆっくりと俺の前に近づいて――
ペチッ！
「「わあ！」」
左頬に強烈な痛みが走り、俺は思わず頬を抑える。
「いつまで現実から逃げているのよ！　あなたはもう、1人の女の子なのよ！」
心の底から怒った、でもどこかに優しさも感じる声が、俺に響く。
俺の心に、あまりにも大きな傷をつけたものだから――
「うるせえ！　俺が男だといったら俺は――」
ペチッ！
反発し、次の言葉を言い切る前に、また頬をビンタされる。
ヒリヒリとした痛みが顔に満ちていく。
泣いてたまるものか!!!
「女の子が俺なんて言葉遣いしないの！　あたしはこの病気になってから半年よ。でもあたしが女の子の言葉になったのは一週間よ。あなたはまだ、そんな言葉を使うの!?」
叩かれたのとあわさって、少女の怒った顔がものすごく怖い。

ヒリヒリと痛みながらのその言葉は、ますます俺の中に深くえぐるように刺さる。
これは、普段温厚な証拠だよね。
「な、何だよ……言葉遣いなんて……俺……の勝手だろ!?」
そしてまた、反発した。
「そう……じゃあ勝手にしなさい」
意外にも、今度は軽く突き放すように言われた。
周囲も、動揺の声を発しているのがわかる。
「でも、あなたの取った行動で、お父さんもお母さんも、徹さんもみんな嫌な思いしているわよ」
そして、「優子ちゃん」と呼ばれた女の子の、お説教が始まった。
「せっかく、あなたを長女として迎えようって、女の子としての幸せを感じて欲しいって、あなたに一生に1回しかさせてもらえない名付けを……2回目までしてあげたのにね」
余呉さんよりも、更に厳しい口調だった。
「お、俺は嫌な思いしてないから!」
それは、苦し紛れの一言だった。
「幸子!　何てこと言うんだ!」
親父に、大きな声で怒られてしまう。
「そうよ、一番ひどい言葉よ!」
「お姉ちゃん!　俺はお姉ちゃんに死んで欲しくねえんだ!」
俺の家族は、あの短時間にここまで洗脳されていた。
一体、何をどうすればこうなるんだ。
「お姉ちゃんって言うのやめろ!」
徹に怒鳴る。
「そうはいかねえんだ!」
しかし徹は毅然としていて、俺は頭に血が昇った。
「徹!　この野郎!」
数年ぶりに、俺は徹に殴りかかる。
ゴッ!
「あぐっ!!!」

しかしすぐに、左頬に強烈な痛みを覚え、その場に倒れ込む。
さっきの「優子」と呼ばれた少女の痛みとは比べ物にならない。
出てきそうな涙を、俺は必死にこらえる。
「おりゃ！」
ドゲシッ！
背中を、蹴られた。
「うっ……うわあああああああ

必死に、抵抗をする。
「幸子さん、女々しいって言うのは『女女(おんなおんな)』って書くでしょ。女の子が女の子らしいのは普通のことよ」
しかし彼女はずっと、俺を優しく包み込んでくれた。
背中をさすり、「女の子は意地を張らなくていい」と言ってくれた。
いつも喧嘩で勝っていた徹相手にボコボコにされ、泣いてしまったことへの屈辱感が、柔げられた。
優子という少女によって、俺の運命が急速に変わるような、そんな思いが頭の中でぐるぐるしながら、ただひたすら痛みに耐えられずに、泣き続けた。

## 壮絶な人生

「落ち着いたら、あたしの話を聞いてくれるかな？」
「うぐっ……う、うん……！」
とにかく、話し合いだけはしないといけない。
幸い、落ち着くまで待ってくれるみたいなので、ゆっくりと落ち着くことに専念することにした。
涙を拭き、部屋に座り直した。
「ごめんなさい……それで、話というのは？　その前にあなたたちは？」
床に座ると、その少女の大きな胸が更に間近に見えた。
男の体だったら、間違いなく下半身が大変なことになっている。
余呉さんや、隣の幼そうな会長と呼ばれた少女も、その体格からしたら大きいけど、この少女のそれは別格だ。
「あたしは石山優子（いしやまゆうこ）です……あなたの担当カウンセラーとなります。あなたとは永い付き合いになることを祈っています。あなたは？」
「お、俺……ううん、私、塩津……幸子……」
俺は、一歩一歩迷うような形で、そう答えた。
もう、意地を張る気力は残っていないし、また怒られるかもしれないと思ったからだ。
「ふふっ、まるで女の子になりたてのあたしみたい」
少女が懐かしそうに話す。
にっこりと、笑っていた。
「え!?」
女の子になりたての時、この人も、そんな感じだったのか。
「あたしも女の子になって最初の日はこんな感じだったわよ」
落ち着いて前にいる少女の顔を見れば、それはもうこの世の人とは思えないくらいのかわいらしい美少女だった。
やや幼めの、にっこりと包容力のある癒し系の顔で、頭から背中まで伸びる直線的で深い黒髪は流れる川のように美しくさらりとしていて、胸は相当大きい俺でも分かるくらい、それこそあらゆるものを

包み込めそうな超巨乳で、それでいてお腹や下半身の肉がデブにならない程度に出ていて、その健康ぶりを誇示している。
肌も白くて無駄毛の一本なく、声は透き通るくらいに高く、男の庇護欲を存分に煽っていた。
立ち居振舞い、話し方もかわいい女の子そのもので、余呉さん以上に元男とは信じられない人だった。
一言で言えば「孕ませたい」と本能に訴えかけるような、そんな女の子だった。
「と、ところでそちらの2人は？」
男の方はともかく、会長を名乗った少女もまた、驚くほど美少女で、石山さんほどではないけど黒めのセミロング黒髪で、レディースーツ姿がよく着こなされていた。
「俺は、一応維持会員で、こいつの……彼氏だ」
これだけかわいければ「高嶺の花」かと思いけや、現実は非情だった。
「やっぱり彼氏持ちだったのかよ……」
徹が残念そうにそう話す。
「ふふっ、幸子さん、あなたは女の子だから、残念だけどあたしにとって恋愛対象にはなり得ないわよ」
石山さんからはっきりと拒絶された。
つまりそれは――
「うっ……もしかして、お……私も男を……」
「ええ、いずれはそうなりますよ。もっとも、あなたの様子だとそれは何年も先のことよ。私みたいに半年でクリアできるものじゃないわ」
石山さんから発せられた言葉は、極めてショッキングなものだった。
俺が彼氏？　確かに体は女だけど、だからといって彼氏って――
「私は日本性転換症候群協会会長の永原マキノです。普段は小谷学園で教師をしてます」
俺が動揺していると、隣の少女が自己紹介をしてくれた。
小谷学園、首都圏において自由で有名な学校だ。

「へえ、小谷学園って、あの自由で有名な？」
反応したのは父だった。
「え、ええ……まさかこんな所まで噂が広まっているとは……」
永原さんも困惑していた。
あんたらが思うよりも、小谷学園って有名だぞ。
「全国的に有名ですから」
「そうですか」
「ところで、永原さんって会の『長老』って言ってたけど本当にいくつなんだろう？　この病気って不老なんだろ？」
少しの沈黙の後に発したのは徹だった。
「あらあ、女性に年齢を聞くのは失礼ですよね……と言いたいところだけど……幸子さんのために教えておこうかしら？」
永原さんの言葉は、確かにその通りで、徹は不躾だ。
「ただし、会長の話はいささか信じがたいものがあると思います。口外するなとはいいませんけど無闇に外に話さないほうがいいですよ」
石山さんがわざわざ釘を刺すということは、かなり信じがたい話なのだろう。
「そんなとんでもないことなんですか？」
今度はおふくろだ。
「ええ」
石山さんがうなずく。一体どんな話が始まるんだろうか？
「ではお話しましょう。私は元々鳩原刀根之助という名前でした……生まれは……永正１５年です。誕生日を覚えていなくて、１月１日ということにしています」
永正？　聞き慣れない元号にキョトンとする。
当然明治より前だろうけど、一体いつだ!?
「えっと、西暦では？」
徹が当然に話す。明治以前の元号なんて、大化と承久と応仁くらいしか覚えてない。
「１５１８年です。ですから２０１７から引くと４９９です」
「お、おい……冗談だよ、な!?」

俺が思わず顔が引きつる。
余呉さんが「東京が江戸と呼ばれていた時代を生きていた私でさえ想像もつかない昔を生きている」と言っていたが、まさにその通りだ。
江戸幕府だって開かれていない。っていうか信長秀吉家康生まれてたんか？
周囲もみんな、あまりにも突拍子のない話に絶句している。
「冗談じゃないわよ。生まれは……ええ覚えてますとも今の地名では長野県上田市ですが、当時は信濃国で真田源太左衛門様の治める真田本城を持つ真田の村でした。ええそこで農作業したり足軽をしたり、してました。主とも、１５歳から５年間、ＴＳ病で倒れるまで仕えていました」
真田といえば、戦国武将だが、真田幸村とはまた違う人なのだろうか？
「真田って、あの幸村の？」
「真田家に幸村という人はいません」
徹の言葉を、永原さんはかなり強い口調で遮った。
「あ、すいません、うちの会長、実際は存在しなかった幸村という呼び方はどうしても許せない人なので。あ、ちなみに、会長が仕えてたのは幸村とされた人の祖父です」
石山さんがフォローしてくれる。
まあ、実際に家来として仕えたわけだから、気持ちはわからなくもない。
「ＴＳ病になって、私は隣の村に逃げたわ。数年後に戻ってきた時には源太左衛門様は雲隠れしていたわ。上野国の長野殿の元に逃れていたことはずっと後で知ったわ、でも、それもしばらくの辛抱だった、それでも、女の身になったことで再び仕えることはできなかったわ」
そうだ、恐らく男の頃とは違う体つきになったから、言っても信じてもらえないだろう。
その後は、普通に村人として過ごしていた。
川中島の戦いでは最前線に近く、戦国時代の女の苦労が分かりそうだ。

「それでも戦乱の時代、男か女かと言われれば、女を選ぶわ。ええ、どうせ日常的に餓死者が出て些細なことでも平気で殺し合いをするもの。何か気に入らないことがあればとりあえず略奪して殺す時代よ。それなら女ならまだ体を差し出せば生き残れる可能性があるもの……結局今もしたことはないけれども」

永原さんの言葉は狂っていた。

確かに「最悪な時代」というイメージはあるが、想像以上にひどい時代だったのだろう。

だが、その後はもっと信じられない話があった。

「私は自分が不老だとは知らなかった。ええ、ですから本当に不老を疑ったのは天正3年、当時の真田当主であらせられた左衛門尉殿も戦死なされた長篠の戦いの時よ。その7年後には本能寺で天下人と言われていた織田前右府殿が明智日向守に討ち取られた事件が起きたでしょ？」

本能寺の変、織田信長と明智光秀のことだ。

この人、随分と特殊な言い方をする。昔の人の流儀なのだろうか？

「その時には、村の人にも『あの女子（おなご）は怪しき』と。当時真田家は武田家滅亡を生き延びて織田家に仕えていた。織田殿のおかげで戦乱が終わると思っていた矢先のことだったから、みんなここから大戦乱になると思って、私も信濃を脱出して宛もなく旅を続けたわ」

永原さんは主に京都を拠点にしつつ、商家に仕えたりして食いつないだらしい。

そして、関ヶ原の戦いを京都の公家と一緒に北の山から観戦したという。

関ヶ原の戦い、あの天下分け目の合戦をこの女性は生の目で見たというのだ。歴史の、生き証人だ。

「松尾山……そう、そこから小早川中納言殿の大谷刑部殿の人を攻めた。突然の裏切りだったわ。包囲したかに見えた石田治部殿率いる西軍も、全ては内府殿の手のひらの上で、ああでも島津宰相殿の退き口も恐ろしかったわ――」

「な、なあ永原さん」
徹が見かねてさっきから気になっていることを話そうとする。
「何でしょう？」
「その、小早川中納言とかって小早川秀秋のことか？　石田は石田三成として、内府って誰だよ？」
「……ふうっ、東軍の総大将ですよ。それ以上は、私の口からは言わせないで下さい」
永原さんは、微笑みながら話す。
「あー、永原さんはそういう人なんです。家康とか信長とか、そういうのを言うのは極めて無礼だって。明治に終わった習慣を未だに引きずってるんですよ」
今度は石山さんの彼氏の男性が補足してくれる。
「篠原君……ええ、私達にとって名前とはもっと重要なものなんですよ……まあいいでしょう。ともかく、関ヶ原の戦いの後、私が放浪生活を辞めようと思ったのは事実だわ。江戸に住もうと、これからは京よりも江戸だと思って、大坂の陣が起きる時に思い切って江戸に引っ越したわ」
そして、永原さんは、小さな村から大都会に成長する江戸を見て育ってきた。
１６５３年には、江戸の街でも不老が疑われた時に、その噂を聞きつけた時の将軍の仲裁で、かつての主君の孫が、９０代ながらも存命で、再会することができたという。
「再開した時は……ええとっても感激したものよ。４代様はその後も、私に不自由ないようにと、江戸城に住み続けることを命じられたわ。そうして、ええ、長い年月をあの城で過ごしたわ」
こうして、永原先生は、江戸時代の大半を江戸城で過ごした。人生が５００年としても、彼女は人生の半分を、あの城の中で過ごしたことになる。
それまでの人生とは比較にならないほど、穏やかに過ごす中で、転機が訪れたのはやはり幕末だった。
「明治になって、ええ。戊辰戦争の時に、私は城の退去を余儀なくされ

たわ。私は今でも、ペリーを恨んでるわ。私は明治時代、また放浪を重ねたわ。だけどある日、鉄道を見たの。そしてそれが全国津々浦々に張り巡らされると。逃げ隠れをして、隠れて過ごすのを諦めて、私は教師の道に進み、やがて同じ仲間を集めて今に至る……というのが私の人生です。今の名前になったのは３０年前です」

しばらく、永原さんの話を聞いた後、気になっていたことを投げかけてみることにした。

「ところでこの前の余呉さんというのも……」

「ああ、余呉さん？　２番目に年上の人でも永原会長の半分も生きてないですよ。まあ、その２番目に年上っていうのは余呉さんのことなんですけど」

石山さんが、教えてくれた。

「え!?　そんなんですか？」

どうやら、あの人も、２番目に長生きらしい。

「そうねえ……余呉さんは２００歳になっていないということだけ言っておこうかしら？」

「いやでもさ、１２０年だろ？　人間の限界って」

永原さんの人生を聞かされても、やはりあまりにも壮大過ぎて理解が追いつかない。

「塩津さん、あなたはちゃんと生きれば５００年後には今の私の年齢を追い越すわよ」

永原さんが言うことは確かにそうだ。

だけど２０年も生きてない俺がいきなりそんな事言われたって分からない。

「実感がわかない……」

だから、そうつぶやくしかなかった。

「そりゃああたしだってまだ実感がわかないわよ」

そして、石山さんもまた、実感がわかないらしい。

「そういえば、石山さんは？」

やはり、石山さんのことも気になる。

会長の永原さんの話も衝撃的だが、おそらく石山さんもカウンセ

ラーをやるくらいだ。
　ＴＳ病になって半年とはいえそれ相応に生きているはず。
「ふふっ。秘密、女性には年齢は聞かないのよ」
「あっ、はい……でも、この病気になって半年でしょ？」
「あっ……」
　さり気なく突っ込んだら、石山さんが固まってしまった。
　うーん、まずかったか？
「もしかして、俺達とあまり年齢変わらないんじゃ」
　徹が、更に突っ込む。
「そうよね、彼氏さんも若いし……」
　そしておふくろも、追い打ちをかけてきた。
　やはり、石山さん、俺とそこまで変わらないらしい。
「実はですね……塩津さんは状況的にはかなりまずい状態だったんです」
　ここで口を開いたのが永原さんだった。
「ええ、この書類を見ればわかります」
　そして、おふくろが書類を見せてきた。
　どうやら、急に家族が豹変したのは、この資料のためらしい。
　まあ、本当の本当に我が子が死にそうだと異口同音に言われれば従わざるを得ないのも確かだ。
「定期会合ではもう半ばあきらめモードだったんです。もう自殺一直線だろうって」
　永原さんが言う。
　自殺一直線だなんて、そこまで評価悪かったのか。
「お姉ちゃん、そんなにひどかったんですか？」
　徹も、疑問に思っているらしい。
「ええ、今はなんとか最悪の事態を脱したってだけでまだ予断を許さないですよ」
　うげー、改めて言われるとなんだか癪だな。
「そうですか……」
「でもやっぱ若そうだよなあ……」

徹は、まだ石山さんの年齢が気になるらしい。
「ふふっ、とにかくあたしの年齢は秘密よ。年下だとしても、ＴＳ病患者としては先輩よ」
石山さんが余呉さんのような色気のある動作をする。
俺の中はほとんど男だから、そういうの１つ１つでもドキッとしてしまう。
元が男だったからというのもあるけど、あまりにも男への訴え方がうますぎる。
いや、俺だってやろうと思えばできるってことか。
「あ、ああ……」
ともあれ、女性への年齢ネタはやめたほうが良さそうだ。
石山さんがどういう人であれ、これから俺の将来について、真剣に考えてくれることには違いない。
女として生きていくしか無いと言っても、男っぽい女なんていくらでもいるし、そういった方面で生きていくことまでは否定しては来ないはずだ。
そういう思いが、まだ俺にはあった。

# 石山優子という少女

「さて、それじゃあ改めて。余呉さんにも言われたと思ったけどこの病気になって絶対に考えちゃいけないのは『男に戻ろう』ってことよ」
結局、言われたことは余呉さんと同じことで――
「でも、やっぱ俺……」
「こーら！『俺』なんて使わないの！」
石山さんが、優しく叱るような口調で言う。
さっきひっぱたかれたときとは大違いだ。
とにかく、女の子にしたいという心理が働いている。
「……」
「ほら、言い直してみて？　大丈夫よ、今のあなたの声なら、俺なんて使うより、よっぽど自然に聞こえるわよ」
石山さんの、優しさという名の圧力が凄まじい。
ともあれ、やらないことには前に進まないようだ。
「でも……やっぱり私……一週間前まで男だったから……」
あうー、思った以上に女っぽい……当たり前だけど。
「じゃあいつ変えるのよ？」
そして、石山さんが鋭い口調をして話す。
「そ、その……！」
俺はつい口ごもってしまう。
「あたしだって、つい半年前まで石山優一っていう男だったのよ。永原会長だって、４８０年前までは、男だったわよ」
「で、でも……」
確かに、石山さんはうまくいったけど、俺とは全然違うはずだ。
「明日があるからまだいい、時期尚早という人は１００年後も同じことを言っているわよ」
石山さんが、いきなり１００年後という話をしてきた。
「ひゃっ１００年って……」
確かに、余呉さんとかはそれくらい余裕で生きているだろうけど。
「塩津さん、あなたはこれから、悠久の命が約束されているわ。でも、

もし対処を誤れば、あなたの精神は崩壊してしまうわ。そしたら自殺に一直線よ」
そして、更に横から槍を入れてきたのが永原さんだった。
石山さんはともかく、余呉さんでさえ「想像を絶する」と評した、戦国時代から生きているらしい永原さんに言われると威圧感がたまらない。
くぐり抜けてきた修羅場の数も、きっと俺では想像がつかないものなんだろう。
「……」
「今のあなたはさっきよりは落ち着いているけど、崖っぷちには変わりないわよ」
危機的状況には変わりないと、そう忠告される。
「それを回避したい、死にたくないなら、あたしたちの言うことを聞いてね」
石山さんの口調がきつめになった。
逆らったら、またひっぱたかれるんじゃないかと、そういう恐怖心が一瞬沸き起こる。
ともかく優しそうな女の子に怒られるのは思った以上に怖い。
「わ、分かった。それで俺……私はどうすればいいんだ？　さっきのカリキュラムとやらを受ければいいのか？」
危ない危ない、ここで「俺」と言ったら、またビンタ制裁が待ってそうだ。
直前で慌てて修正すれば、多分許してくれるはず。
「うーん、でもあたしの経験だとそれはまだ早いかも……」
まだ不十分なのか……
「あーうん、幸子さん。カリキュラムを受ける時は、もう二度と男を求めないって誓ってもらうわよ」
「あ、ああ……」
とにかく、服従するしか無い。
男を求めたら自殺、もうそれは認めるしか無い。
「言葉遣いも直してもらうわよ。それから服も、カリキュラムではス

カート着用での外出もあるわよ」
やっぱり、スカートを避けることはできないらしい。
「やっぱり、内容は多いのか？」
「うん、あたしもカリキュラムではいっぱい失敗しちゃったわよ」
こんなに女性らしい石山さんがいっぱい失敗した。
その事実が俺に重くのしかかる。
「……」
多分、厳しい石山さんのことだ。失敗したらその都度かなりビンタとかされそうだ。
「心配しないで、カリキュラムは訓練よ。訓練のうちにいっぱい失敗して、恥ずかしい思いすればするほど、幸子さんも女の子らしさを身に着けられるわよ」
石山さんが落ち着いて言う。
失敗することが前提と聞いて少し安心した。
「そ、そうか。じゃあ頑張るぜ」
「……ダメダメ、女の子らしく『頑張るわよ』って言わなきゃ」
石山さんは、粗暴な言葉遣いを見逃してくれない。
「が、頑張るわ……よ」
少しぎこちないけど、自分の耳でもわかるくらい、女の子らしくかわいい言葉遣い。
かわいく聞こえる言葉遣い、それをするだけでも印象が違う。
多分、容姿から考えればこれが通常なのだろう。
とはいえ、やっぱり今の感覚では不格好だ。
「ふふっ、もし言葉遣いを間違えたら『私は女の子……私は女の子……』って、頭の中で暗示かけるのよ。もちろん声に出しちゃってもいいわよ」
暗示？　どういうことだろう？
「そうするとどうなるんだ？」
「自然と徐々に女の子らしくなっていくわよ」
石山さんがニッコリと笑う。
「正直そうは思えねえな……」

正直、全く信用ができなかった。
「あたしも最初は半信半疑だったけど、後でボディーブローのように聞いてくるわよ……あっ！　今の言葉遣いもだめよ」
うー、見逃してくれなかった。
「しょ、正直そうは、思えない、わよ？」
また、言い直しをさせられる。
「うん、ぎこちないけど今はそれでもいいわよ。じゃあ暗示かけてみて？」
うー、暗示かけなきゃいけねえのか。
しょうがねえ。やらないと先に進めなさそうだし。
「わ、私は女の子……私は女の子……」
聞こえるか聞こえないかくらいの、小さな声で下を向きながら暗示をかける。
正直、何も変わった気がしない。
「か、かけたよ」
とりあえず、報告する。
回数重ねれば変わるのだろうか？　あまりそうにも思えねえけど。
「ふふっ、ご両親にお願いするわ。今のを必ず続けてくれるかしら？」
石山さんがまた笑っていた。
「はい、分かりました」
ともあれ、女性化の効果はなさそうな気がする。
「懐かしいわね。あたしもいっぱいかけさせられたわよ」
「へえ、永原会長に？」
正直、結構興味がある。
見た目的には、会長のほうがロリだし。
「ううん、あたしは永原会長もだけど、母さんが教育してくれたのよ」
「へえ……」
おふくろが感心している。
ある意味で、そういう母親の元に生まれたのも、この人がすんなり女の子になった理由かもしれない。
「ふふっ、だめですよ。お母さんもカリキュラムをしてもらいますか

らね。そのためにも、本をちゃんと読んでその通りにしてくださいね」
「……はい」
おふくろが石山さんに気圧されて頷く。
どうも、女性だけが女性に感じる「威圧感」があるらしい。
俺にはまだよく分からないが。
「なあ、一つ質問なんだが」
ここで徹がまた手を上げた。
「ん？」
「本当に、これを積み重ねていけば大丈夫なのか？」
そこんところは俺も疑問で、徹も同意見だったらしい。
代わりに質問してくれるのはありがたい。
「うん、言葉遣いだけじゃなくて、態度や仕草、そして服だって、最終的にはミニスカートも着こなせるようになるわよ」
「うっ、す、スカートって……！」
やっぱり、改めてスカートって言われると動揺してしまう。慣れろと言われても難しい。
だってあれ、うん、女子はよくあんなの穿くよなって思ってたし。
「大丈夫よ、あたしだって、最初は心許なかったわ。でもスカートのメリットを実感できるプログラムもあるわよ」
「え!?　それってどういう？」
正直、真夏に涼しいくらいしか思いつかない。
「受けてのお楽しみよ」
石山さんはニッコリと笑う。
やっぱり余呉さんと同じで、こういった仕草はうまい。
「そ、そうか……！」
カリキュラムを受けさせようと言う誘惑が襲いかかる。
男が穿けないスカートに興味がないわけがない。
当然その服装や穿き心地、コーディネートのコツとか、中身とか、男なら絶対に興味がある。
「ところで、石山優子さんだっけ？」

そしてまた徹だ。
「あんたも、半年前まで男だったんだろ？　どうして、男を好きになれたんだ？」
確かに、そのあたりは気になる。
「どうしてって言われても……女の子だからとしか言いようがないわよ」
うーん、それが普通の女の子ならそうなんだろうけど、こっちはＴＳ病で男を好きになるということを知りたいのだ。
どちらにしても、女の子には変わりはない。
「うむむ、人間ってこうも変われるんだな……」
徹も驚愕していた。
「ああいや、優子ちゃんは特別早いんだよ」
とここで、石山さんの彼氏らしき男が発言した。
今まで殆ど黙っていたが、いざ発言されると驚く。
慌てた感じを見ると、フォローしたい感じだったのだろう。
「うん、ちょっと生き急いでいる位にね」
永原さんの指摘通りたった半年は生き急ぎ過ぎだろう。
とはいえ、彼女たちの視点からすれば「すごいこと」には違いない。
「な、なあ！」
よし、ちょっと聞いてみよう。
そう思い口を開く。
「そこの会長さんだけじゃなくて、石山さんについても詳しく教えてほしい。俺……あっ、あたしよりも、年下でもいいから！」
石山さんのことについて、もう少し話して欲しい。
「……仕方ないわね。そうよ、あたしと浩介くんは永原会長、いえ、永原先生が担任の先生を務めている小谷学園２年２組所属よ」
あまり驚いた感じはしない。
やはり、目の前の少女は高校生だった。
「じゃあさっき言っていた半年前まで石山優一だったというのも？」
「ええ、５月８日まで、あたしは男だったわ。幸子さんも感じたでしょ？　激しい腹痛で倒れて血を吐いて、耳だけ聞こえている状態になっ

て、最後は精力を出し尽くして、気が付いたら女の子よ」
俺がその時に受けた症状と同じだった。
思わずウンウンと頷きながら話に聞き入る。
「あたしね、元々は乱暴な性格だったのよ。些細なことで怒るし、優一の頃は浩介くんには本当によく怒鳴り散らしていたわ」
どうやら、かなり乱暴だったらしく、そこの男は被害者だったらしい。
女の子にされ、カリキュラムを受けた当初は、男時代のこともあって、石山さんはいじめの対象になったらしい。
とはいえ、外見は無論のこと、中身も今の俺とは比較にならないくらい女子になっていたこともあって、女子が早めに味方になってくれたことが大きかった。
俺と決定的に違うのは、男としての自分に嫌気が差していたということ。
多分、彼女が「優秀」になれたのも、そこが決定打ではないかと俺は思う。
その後彼女を変えたのは、夏の林間学校の時だったという。
男子女子の実行委員に、この2人は選ばれた。
「その、ナンパされちゃって……」
「ああ、それで俺が助けたんだ。本格的に仲良くなったのはそこからだな」
いかにもという感じの恋の落ち方。
でもその後も、また一悶着あったけど、永原さんによれば、「石山さん特有の問題」とのことで、俺にはあまり縁がなさそうな話だった。
「――そして、日本性転換症候群協会の正会員の推薦されて、今に至るのよ」
「大変だったんだな」
とはいえ、石山さんも石山さんなりで苦労しているのが分かっただけでも、いい収穫になったことは事実だった。
「ううん、あたしは女の子になれてよかったと思うわ。これは救いなんだって」

「救い!?」
しかし、次の石山さんのあまりに突拍子もない発言に、俺が驚く。
ＴＳ病が救いとは、どうしても思えなかった。
「あたし……いや、俺にはやっぱり呪いでしかない。体もうまく動かせなくて、サッカーができねえ……今までの練習が……ほとんど使えなくなっちまった！」
あえてここでは、一人称を変える。
怒られるかもしれないけど、知ったことではない。
「幸子さん、昔のことはもう忘れた方がいいわ」
「うっ……！」
昔のことは忘れろ、過去を振り返ってはいけない。
それが石山さんの、協会の一貫した主張だった。
「これまでのことよりも今のこと、そしてこれからの幸子さんを考えて、あたしはここにいるのよ。あたしだって、浩介くんとの寿命問題に悩むことはあるわ。でも、女の子になれれば、少なくとも今を、将来を楽しめるわ」
「……」
女の子の人生は楽しいよと、優しい誘惑が襲いかかる。
確かに、女性の方が人生が楽とも思える。
「決心がつかないなら、流れに身を任せるのもありよ」
永原さんがそう言った。
多分、永原さんはそうやって適応したんだと思う。
「……というわけで、早速女の子の服を買いましょう。保険が降りますから」
石山さんが、こんどは女の子の服を買いに行くと言い出した。
やっぱり、避けては通れないみたいだ。
うー、スカートかあ……どうしよう……

# 新しい装い　前編

一通り会話し終わった俺たちは、石山さん、永原さん、そしておふくろと併せて４人で、女としての服を買うことになった。
石山さんが何やらヒソヒソ話している間に考える。ひとまず、男に戻ることは諦めると手原たちには言っておくことにしよう。ただ、それでも女として生きていくのにも抵抗がある。
何とか方法がないか、家族会議で相談したいが、ここの協会の人は、「女以外選択肢はない」ということに代わりはない。
ここまでの見立てでは、石山さんはとても温厚で、名前の通り「優しい人」だけど、優しいからこそ厳しい時にはとても厳しく、総合的には余呉さんよりも遥かにスパルタ教育になりそうと言う印象を持った。
「ああ、徹さん、浩介くんとお父さんとで留守番してくれる？」
「男は留守番か」
徹が残念そうに言う。
ついていきたいのかよ！　……まあ気持ちはわかるけど。
「当たり前よ、下着売り場にも行くんだから！」
「え!?　し、下着売り場!?」
石山さんの衝撃的な発言がまた出た。
下着売り場に、いきなり行かせるという。
「そうよ、女の子には女の子の下着を買ってあげないとダメでしょ」
石山さんがまた俺にややため息を付きながら言う。
「そ、そうだけど……」
「あたしと、永原会長と、お母さんと、幸子さんで行くわよ。じゃあ、みんな留守番してくれますか？」
石山さんはとても乗り気だ。
「分かりました」
何も反論できないまま、また流されてしまった。
しかしそれにしても、下着売り場まで行くとは……石山さんは、「女の子には女の子の下着を買ってあげないとダメでしょ」と言っていた

けど……うー刺激が強そうだ。とにかく、俺はまだまだ中身は男何だよ勘弁してくれよと言いたい。
だから、下着売り場は後日でも良さそうな気もするけど、永原さん曰く「むしろ、あまり遅いと期限切れちゃってかえって損しますよ。すぐに死にたいなら話は別ですけど」とのことだった。
今の俺はブカブカの男の時から使ってたジャージで、女の子らしさとは対局にある姿だ。
そして場所も、例の名取のショッピングモールに決まった。仙台市民なら誰でも知っている、便利なショッピングモールだ。

「あ！　ちょっと待って！」
ともあれ、前に進むしか無いのかなあなんて考えていると、石山さんがいきなり俺を抱き締めてきた。
「ちょ、ちょっと近い近い！　何するんだ？」
あまりにも突然で、腕から背中にかけて、おっぱいの柔らかみを感じてドキッとしてしまう。
女の子の魅力であるおっぱいをむにんと押し付けられるのは興奮するけど、やっぱり反射的に逃れようともがく。
「暴れないで！　大丈夫。サイズ測るだけだから」
石山さんの手から、巻き尺のようなものが見える。
「なっ……ちょっと……」
俺のおっぱいに巻き尺が絡みついている。
自分のバストを、知られてしまう。いや俺もよく知らないけど絶対９０超えてるって！
「女の子同士でしょ!?　別に変じゃないわよ」
石山さんのその大きな胸が、思いっきり背中に当たりながら、胸だけではなくスリーサイズを余すとこなく計測されてしまう。
女の子同士と言っても、胸の感触にどぎまぎしてしまう。
ちなみに、胸はまるでマシュマロのようにふわふわと柔らかかった。俺も石山さんも……
「やっぱりノーブラじゃないの。ダメよ」

一通り図り終わった後、俺の胸を見ながら下着をつけてないことに対して怒られた。
「いやその、こすれるのは嫌だったけどさ……」
「もう！　形も崩れるし、ちゃんと付けなさい」
また石山さんに怒られてしまう。
体が女である以上、ブラジャーをつけなきゃいけないというのはいや全くその通りであって反論できないし、反論したらまた怒られそうだ。
「はーい……」
ともあれ、無関係を装っていたおふくろが車庫から車を出していて、永原さんも車庫の入り口の柵を開けるのを手伝っている。
そしておふくろが車をそこから出して、俺たちも乗り込む。俺が助手席で、石山さんと永原さんが後方の座席だ。
車に乗る時、石山さんが少し勝ち誇った顔をしていた。
重ねて言うが石山さんが規格外なだけで、俺だって十分芸能界やＡＶ界隈を巨乳で売り出せる位の実力はある。
うー、半年でここまで変わる人は珍しいというけど、俺が将来ああいった女性になると言うイメージさえも湧かない。
いや、これ以上胸大きくならなさそうだし。そこで負けるのが悔しいわけじゃない。うん、断じて。ってか、そんなこと言ったら女性の大半に殺される。
「ほぼ１５分くらいで付きます」
名取のショッピングセンターまではほぼ単純な経路を進むから、車でもそこまで時間はかからない。
カーナビゲーションも、もちろん不要だ。

住宅街を進みつつ、その後も道路は特に渋滞もなく、また駐車場も休日のこの時間なので、ある程度混んではいたが、そこまでの待ち時間はなかった。
名取のショッピングモールが見えてきた。ここでは色々なお店が集合しているので、大抵のことはここで事足りてしまう。

最も、専門店の全てを網羅しているわけではないから、そうした場合はこのショッピングモールもお手上げだけど、洋服類なら問題ない。
「すごい大きいわね」
駐車場に並ぶ時、その大きさに石山さんが驚いていた。
何でも、首都圏の都心部は無論のこと、住宅の多い郊外でもこんな大きな総合ショッピングモールは殆ど無いらしい。
まあ、東京は土地代が「何かの冗談かよ」ってレベルで高いし、人も多いから色々な場所に店を作った方が集約型よりも高効率なのだろう。
……東京には行ったことないけど。どれだけ大きいんだろうか？

「じゃあ行こうか」
駐車場に空きスペースを見つけ、車を止めたら、俺たちは車を降りて、おふくろと石山さんと永原さんについていく。
やっぱり、新しいのを買うのに、まだ抵抗感があって、歩くのは最後尾だ。
「服のコーナーはこっちです」
２人が店内の地図を見てエレベーターに行き、エレベーターから出ると、おふくろの案内によって、一直線に婦人服売り場のコーナーに向かっていった。
「それじゃあまずここからね」
石山さんが指差した先を見て、俺は呆然とした。
男にとって一番ハードルが高い場所だ。
「え!?　いきなりここ？」
そこは、女性の下着が売ってあるランジェリーショップだった。
もちろん、俺だって女物の下着に興味はあるけど、それにしたって、うー。
「あら？　あたしもそうだったわよ。それに、今ノーブラで下も男物なんか着てるんでしょ？　そこは大至急変えないとダメよ」
うっ、石山さんが鋭い……って当たり前か。

「そうだね。私も石山さんと同意見ね」
そして、永原さんも、下着コーナーに行かせたくてウズウズしているみたいだ。
うー、逃げ場がない……
「そうよ、こういうところから幸子の意識を変えないといけないんだから」
「は、はい……」
おふくろも急に乗り気だし、俺はもう破れかぶれと言う感じで下着コーナーに向かった。
「はい、幸子さんのサイズはここ」
石山さんが指差したのは、ブラジャーが所狭しと並んでいた空間だった。
でかいサイズになることは予想していたとは言え、どうしても足が出ない。
「ほら行くわよ！」
そして、永原さんに強引に引っ張られた。

「このブラジャーが似合ってるんじゃない？」
「うーん、じゃあこっちはどう？」
おふくろが持ってきた下着、おいおい、完全に悪ふざけだろ。
「うーん、大胆過ぎない？」
「そうかなあ？」
おふくろが持ってくたのは、濃い紫色の布面積が少ない、いかにもな感じのエロ下着だった。
やんわり言うけど、俺は正直反対だ。ってか、そんなのやだよ！
「うーん、それはよくないわね」
「うんうん」
「え!?」
何と意外な所から助け船が入った。
協会の２人が俺に味方したのだ。
「ふふっ、男の子が喜びそうなのはこれだよね？」

「う、うん……」
てっきり四面楚歌かと思われたので驚くと同時に、2人は純白の下着を勧めてきた。
さすが元男という感じの選び方で、白は男ウケ万年1位だ。
「さ、まずはこの下着から買うわよ」
正直、女物は嫌だけど、おふくろが持ってきたのよりは遥かにマシだ。
女物を拒否することはどうせ不可能だろうし。あーもう知らん。
「後で保険が下りるから、心配しないでいいのよ」
その後も、悪のりをするおふくろとそれを制止する石山さんと永原さんという構図が定まった。
そして2人はさすがに元男と言うべきか、男の好みを熟知し、おふくろを巧みに追い込んでいった。
サイズは既に図られていて、ブラジャーはこのショッピングモールでも一番大きなサイズだった。
……石山さんとか、特注何だろうな。
そうこうしているうちに、下着だけでもとんでもない数になった。
更にこれからずっと女だということで、季節外れの夏用の下着も買わなければならず、保険は偉大だった。
「さ、普段着を買うわよ」
そして、永原さんにつれられて、さっきよりはまだマシな婦人服コーナーへと進んだ。
「それじゃあまずこれ」
永原さんは、落ち着いたロングスカートを勧めてくれた。
どうやら、永原さんの場合は、服装選びについては石山さんほど厳しくはないみたい。
「うん、それならまあ……」
「あら、今の幸子にはこれも似合うんじゃない？」
そして、おふくろはやっぱり露出度の高いミニスカートを勧めてきた。
あまりにも短くて、真夏でも滅多に見ない感じ。

「ちょ、ちょっとこれは嫌だよ！」
自分がこんなの穿く何て想像もしたくない。
悟だったからこそ分かる。これを穿いてしまえば男からどれだけ気持ち悪い視線が来るか……痴漢だってされるだろうし。
「あらあらつれないわねえ……」
すかさず拒絶する。
しかし石山さんも「いきなりは無理でも将来的に」ということで、ここでは殆どの服が買い物かごに入れられていく。どうやらさっきの下着とは一転し、劣勢の模様だった。
……まあ、そもそも保険降りるし、嫌なら着なきゃいいし。
「じゃあこれなんてどう？　こっちと合わせてさ？」
石山さんが手に取ったのは、茶色の膝丈のスカートだった。
「え？　ちょっと短いような……」
石山さんが提示してきたのは確かにさっきよりは落ち着いているけど、それでも短いと思う。
確かに石山さんや永原さんはこれくらいなら何てこと無いんだろうけど。
「カリキュラムではもっと短いスカートになるわよ。今のうちに女の子の服に慣れとかなきゃ」
どうやら断れる雰囲気じゃなさそうだ。
ミニスカートは、女の子として生きていくのに必須だというのが、石山さんの考えだろう。
「わ、分かったよ……」
うー、予想していたとは言え、こんな形で人生初のスカートとは……
「というわけで、私のこれと一緒に試着してみて？」
永原さんにも、青いブラウスと一緒に試着を勧められた。
「あ、永原会長、ちょっと待って？　まずこっちを渡さなきゃ」
石山さんが、さっき買った下着類をあさり始め、そこから白いパンツとブラのセットを出してきた。
「え!?　そ、それも？」

どうやら、全部取り替えないといけないらしい。
「当たり前でしょ？　ほら、試着して」
石山さんが凄むと、後ろに回ってくる。
今にも「押すわよ」と言わんばかりだ。
やはり女の子らしさについては厳しい人たちだ。
「う、うん……」
そして俺は、石山さんたちに押されて試着室の中に押し込められてしまった。
ご丁寧に、下着まで押し付けられていたから、どうやら覚悟を決めるしかないみたいだ。
俺はまず服を脱いでパンツだけになる。
トランクスを穿いただけの鏡の少女は不格好だけど仕方ない。
「うー」
白いブラジャーを、恨めしく思う。
石山さんはノーブラはダメって言ってたし、これをつけないと後でまた怒られちゃいそうだ。素直に従うしか無い。
実際、これまでの生活では、ブラジャー無しで来たため、おっぱいが擦れたり色々と不便もあった。女の子にとって必要だということはよく分かっていた。
それを思って、俺はブラジャーについていた説明書を見る。
このブラジャーは、「フロントホック」といって、どうやら前の方で留める仕様らしい。後ろよりはまだ良さそうだ。
この狭い試着室では、３人の助けは望めまい。
自力で着替えるしか無い。
「んー」
ブラジャーをつけた俺は次に上の花がプリントされた青い服を着てみる。
「はー」
そして、残ったのは女物のパンツとスカートだった。
ブラジャーだけでもあれなのに、とうとう残っているのは女の象徴という服だけ。

でも、これを穿かないと怒られるし……よしっパンツだけは男物でスカートだけにしよう。
覚悟を決めて、俺はスカートに手を伸ばし、足を突っ込んでそのまま引き上げる。
そして、引っ張った手を離すと、スカートが上手く腰にフィットした。
「うー」
膝が半分程度隠れるくらいの落ち着いた丈のスカートなのにこんなにスースーして心もとない。
店内の空気が、そのままトランクスに流れ込んでいく。
確かに、鏡の前のスカート姿の少女、つまり俺は、これまでに見たことないくらいかわいらしい格好になっている。
でも、いざ自分が穿くともなると話は別だった。
「よく短くできるよな……」
俺はため息をつく。
ともあれ、見た目着こなしていれば合格にはなるはずだ。
とにかく、石山さんたちに気に入ってもらうためにも、すぐにでもここから出ることにしよう。

# 新しい装い　後編

サー

「ど、どうかな……？」

「まあかわいい！」

恐る恐る、スカート姿で試着室から出ると、おふくろが、感激していた。

「幸子さん、怖がらなくて大丈夫よ」

石山さんは落ち着いていた。

「でもこれ、なんかスースーして落ち着かない！」

試着室から出るために、ちょっと歩くだけでも、億劫になってしまう。

「大丈夫よ、あたしも最初はそんな感じだったから」

「で、でも……！」

確かにかわいいけど、無防備にすぎる。

穿いてみて分かったけど、やっぱり、まだスカートは俺には早いと思う。

「永原会長、今です！」

「ええ！」

「なっ！」

突如、女性２人に胸を揉まれ、下からスカートを覗かれた。

「石山さん、こっちは大丈夫みたい」

「こら塩津さん！　なんでトランクスのままなの？」

うあー、下着チェックまでするのかよ！

「だ、だって、は、穿きたくない！」

スカートだけでもかなり抵抗感あるのに……！

「何言ってるの？　あなたは女の子なんだから、ちゃんと女の子の体に合った下着を穿きなさい！」

うえーまた怒られちゃった！

石山さん、やっぱり怒ると怖い……

「や、やだって。ブラつけるだけでも大変だったのに！」
しかし、２人に半ば強引に試着室に押し戻されてしまう。
外に出ようとすると、また２人がかりで押し込まれてしまう。
それでも、何とか出ようと抵抗するが……
「女の子のパンツを穿くまでここから出してあげないわよ！」
「そんなー」
再び押し戻され、カーテンを閉められ、そして、出されたのは死刑宣告だった。
「ほーら、観念しなさい」
「はーい……」
永原さんも、味方はしてくれない。
俺は、素直に余呉さんの忠告を聞いておけばよかったと後悔し始めていた。
とはいえ、時間は戻せない。もうやるしかない。
破れかぶれ気味にトランクスを脱いでノーパン状態になり、俺は女物のパンツを手にとってその形態を見てみる。
男だったから、女の子の下着にはとても興味があった。
しかし、こうして手にとって近くで見てみると、トランクスと比べると布が遥かに少なくて防御力が無さそうだった。
意を決して、足にかけて穿いてみる。
そして、恐る恐る上まで引き上げてつけてみると、意に反してその穿き心地はよかった。
「おー」
圧倒的にトランクスより穿きやすかった。
女物のパンツは、女の子の体に併せて作られているのもあって、優しく肌にフィットしててとても落ち着くものだった。
――完全敗北を、認めざるを得なかった。
俺は、脱いだ男物の服を持ってもう一度試着室から出る。
今度は脱いだトランクスがあったので、同じようなことにはならなかったが、おふくろにこれらの服を没収されてしまい、しかも「買い取り」になった。

つまり、俺は強制的にこの服でいることになってしまった。
「幸子さん、穿いて見てどうだった？」
石山さんが、穿き心地を聞いてくる。
正直かなり恥ずかしいぞ。
「そ、その……」
「ふふっ、付け心地いいでしょ？　ゆったりフィットしてて」
石山さんが笑っていた。
いかにも「勝った」と思ってる顔だ。
多分、石山さんもなりたての頃は、同じように思ったのだろう。
「う、うん……残念だけど、俺、負けたよ……」
「こーら！　俺はダメでしょ？」
また石山さんに訂正させられる。
うーやっぱり余呉さんより厳しい人だなあ。
「すみません……残念だけど、私の負けです……」
「うんうんＯＫ」
「石山さん、暗示かけさせ忘れてるよ」
前言撤回、もっと厳しい人いた。この人、自分から見たら師匠の師匠だもんなあ……。
「あ、すいません会長」
「わ、私は女の子……私は女の子……」
声に出し、自分は女の子であると刷り込んでいく。
「さ、服選びを続けるわよ。保険があるからどーんとたくさん買うわよ！」
「「おー！」」
その後も、女物の服や、例えばジーパンのようにややラフな格好でも、自分のサイズに合ったものを買わされた。
靴もそうだし、とにかく俺を女にするために、ビシバシとされていくらしい。
おふくろはかなりハイになっていて、途中俺も「着せかえ人形じゃ

ない」と怒ってしまった。
特におふくろが着せようとしているのは、明らかに「特殊用途」って感じで、男ウケが悪い服も多い上に、よしんば男ウケ全般は良くても、彼氏とかそういう人がいたら絶対して欲しくない格好ばかりだ。
特に「ヒョウ柄」とか絶対男ウケ悪くて、俺もまっぴらごめんだったわけだけど、こういう時だけ石山さんも永原さんも一丸となって支持してくれるのは有り難かった。
永原さんをそう言っていいのかはともかく、外見という意味ではおふくろ以外は完全に「若い女の子」になっている。
である上、ＴＳ病というのもあって、男の気持ちや男ウケが手に取るように分かる……永原さんもそうなんだから俺としては驚きだ。
だって戦国時代でしょ？　その時代の男の価値観って絶対今と全然違うはずだしでも合ってるんだよなあ……いつの時代も案外男が女に求めるものって同じなのかも。
「あ、ごめん。あたしも買いたいものあるからちょっとだけ抜けていい？」
買い物中盤、石山さんが突如そんなことを言ってきた。
ちょっと離脱するらしい。
「ああ、うんどうぞ」
永原さんの承諾を得て、石山さんがちょっと抜ける。
その間にも買い物が進む、とにかく保険が降りるということで、恐ろしい量の服を買っていく。
まあ、性別が変わった以上、こうはなるんだろうなーＴＳ病って珍しいから保険会社からすればこれだけ買われてもほとんど「無視できる」といっていいレベルなんだろう。
そして、夏冬の私服の後はパジャマ選びに入る。
これも、男のパジャマと違ってあまりにも数が多い。
スカートタイプのものもあって、明らかに「流石に寝る時はやばいだろ」と言いたい。
しかし、これについても永原さんの支持で、かなり多様性のあるパジャマが選ばれていく。

永原さんによれば、「女の子の人格が出来てからの好みを考えて」とのこと。
同じように男から女に変わっても、その女性としての人格は色々と変わるらしい。石山さんと永原さんも、確かに結構違うみたいだし。
最も、生粋の女の子に比べれば遥かに画一的でもあるらしいけど……まあそれは男を知っているせいだという。

「お待たせー！」
しばらくすると、石山さんが戻ってきた。
よく見なくても、石山さんのスカートの下の生足がストッキングになっていた。
「あ、石山さん、おかえりなさい。ストッキングにしたんだ？」
永原さんがそう話す。永原さんは生足のままだ。
「うん、寒くなってきたからね」
どうやら、石山さんは寒さを気にしてストッキングにしたらしい。
さすがに、東京の人にこの季節の夕方の仙台で生足はきついだろう。日が落ちてくれば寒さも厳しくなる。
一方で、永原さんは長野の出身だし昔はもっと寒かったことも考えればこのくらいの寒さはどうってこと無いんだろう。
服選びが終わったら靴選びで、抵抗感があり気になっていたロングスカートは、まだぎこちない。
「さ、こんなものかしら？」
買い物が一段落すると、おふくろが一声かける。
買った衣服の量は物凄く多く、台車が複数必要になっている。性別が変わることは、本当に凄まじい影響があるけど、この「衣服まるごと買い替え」は、その最たるものだと思う。
「うん、これだけあれば今のところは大丈夫よ」
そうはいっても、台車が４台もあるからかなり大きい。
「そうだね。じゃあみんなで手分けして運ぼうか？」
「「はーい！」」
永原さんの掛け声と共に、１人１台で台車を押し、車に服を押し込

んでいく。
買い物が終わると、家に戻ることになった。
車に乗る時に、石山さんがスカートに注意するようにしつこく言ってきた。
とにかく、女としてはしたない言葉遣いも、スカートを気にしないふるまいも、怒られる対象らしい。
石山さんは俺よりも2歳若いけど、3桁年齢の余呉さんと比べても厳しい人という印象はぬぐえない。
間違いなく、あの時にひっぱたかれたのが印象に残っているせいだと思う。
「うー」
徹にこの格好を見せなきゃいけなくなることに気付いてから、俺も気が重くなる。
さすがに「男に戻る」ことは諦めざるを得ないとしても、だからといってすぐに「女として生きていかなきゃいけない」ともならない。
石山さんによれば、言葉遣いの矯正が一番簡単で、これはやろうと思えば男でも可能らしい。
カリキュラムではそうした言葉遣いの矯正と並行して、女性の感性や習慣を身に付けていくという。
車が家につき、俺は最後尾に並ぶ。
11月という寒い時期なのもだけど、とにかくスカートは心許ない。
「ただいまー！」
「お、お姉ちゃんスカートか！」
俺の姿を見て、徹がかなり驚愕した声を出す。
お姉ちゃんって呼ばれることについては、もうあれこれ言わないことにしよう。
というか、お姉ちゃん呼びを拒絶したなんて知ったら、また石山さんに怒られそうだし。
「あ、ああ……ちょっと、不本意だ」
でもやっぱり、まだぶっきらぼうになる。

「でも見違えたな。今の幸子、どこからどう見ても女の子だ」
父親まで力になっている。
「うんうん、お姉ちゃん結構かわいいじゃん！」
「か、かわっ……！」
徹が言った言葉に、俺は詰まる。
確かに、第三者目に見たらかわいいんだろうけど、いざ自分が言われるのは御免被りたい。
「あら、女の子にかわいいって、最高の褒め言葉じゃない」
すると石山さん、全く反論できないド直球の正論に、更に窮地に追い込まれる。
「むむむ……」
石山さんに、「女の子なんだからかわいいって言われたら喜びなさい」って言われそうだ。
「ま、ともかくこれを部屋に運んでくれるかな？」
石山さんが、男衆にそう呼びかける。俺も、運ぶのを手伝う。
「おう！」
石山さんの言葉に男衆が気合を入れる。
服を持ちながら、家の階段を登り、俺の部屋に入ったら、今日買った服を、空になっている箪笥に服を入れる。
……ん？　空に？　空に???
おいおい、待て、待て待て待て！　何で箪笥が空になってるんだ!?
「な、なあ……さっきまでの服はどこに行ったんだ？」
ま、まさか買い物中に……
「ふふっ、あれはもう、服としては使わないわよ」
石山さんが「当然」と言った感じで話す。
「なっ……勝手に捨てないでよ！」
どうやら、男たちが買い物中にしていたらしい。
『服としては』、よ。もう女の子なんだから男物の服なんていらないのよ。これからは早く女の子になるためにも、常日頃から女の子の服を着なさい。いいね!?」
石山さんがまた威圧感を出す。

女の子らしくないと叱られる時、どうしても、ひっぱたかれた時のことを思い出す。
「は、はい……」
ともあれ、この箪笥は、女の子の服しかない。
明日以降も、強制的に女物になるということだ。
「じゃあ私たちはそろそろ出ます。もし何かありましたら支給のテレビ電話でお呼びください。ただし各々の都合もありますから、出られない場合は別の人が代理になります」
ともあれ、服を仕舞い終わったら、石山さんたちが今日のところは引き上げてくれるというので、俺たちは見届けることにした。
石山さんたちが、家を後にする。
ようやく肩の荷が下りたと思いつつ、こうして、俺の人生で最も長い時間が、終わった。

# せめぎあい

「ふー」
俺は、3人がいなくなったために、ほっとしてリビングに座り込んだ。
とにかく、今は羽を伸ばそう。
「お、お姉ちゃんその……」
「何だ？」
徹が、ややドギマギしながら俺に話しかけてきた。
「パンツ見えてるからさ……もう少し……足閉じてよ」
「うぐっ……」
あわてて苦虫を噛み潰した表情で足を閉じる。これだけ長くても油断していればすぐに見えてしまう。
とにかくスカートってのは面倒くさい服だと思った。
「幸子、今はいいけど、カリキュラムのこと、ちゃんと考えてね」
おふくろがそう言う。
「でも俺……まだそこまで」
「うん、お母さんも、男に戻ることはダメなのはわかったわ。それにしたって石山さんは厳しすぎるわ」
「どう厳しいんだ？」
徹が疑問符を投げ掛ける。
徹は、石山さんがひっぱたいた所は見たけど、服を選ぶ所は見ていない。
「徹も見たでしょ？　幸子が女物の下着になってるの」
「あ、ああ」
徹がまた、少しドキドキしている。
まあ、全くの別人になっちゃったら血の繋がった兄弟という自覚は持ちにくいとは思うが。
「実は幸子は最初男物で試着室を出たのよ。そしたら石山さんがスカートの中覗いて、『女の子のパンツ穿くまで出してあげません』って」

案外穿き心地がいいわけだけど。
「うげえ、スパルタだなあ……逆に言えば、そこまでしなきゃいけないくらいヤバかったってことか」
徹も、やはりこのエピソードには「うげえ」という反応だ。
「うん、でも、お母さんはやっぱり急激なのはよくないと思って」
「あーうん、俺もそう思うんだが……」
徹が、言いにくそうにしている。
そういえば、留守番中に何をしたんだろう？
「徹、どうしたんだ？」
「あーうん、実はお姉ちゃん……いや、兄貴の服を全部隠すようにって」
「え!?」
わざわざ徹が「兄貴」と言い直すということは、悟時代の服が隠されたということで。
「女の子の服をきちんと着ないと、女の子になれないからってね。どうも本来はカリキュラムで自主的に捨てなきゃいけないものらしいんだ」
「うぐぅ」
徹によれば、女の子になるためには、男を捨てるしかないらしい。
石山さんも、男だった時の本と服は、全て古本屋と古着屋に売り払うという課題をさせられたらしく、しかもその時には必ずミニスカートで外出しながらしなきゃいけないという決まりまであったという。
「厳しいわね」
おふくろの言葉は、重かった。
とにかく、絶対に男に戻る気を持ってはいけないために、カリキュラムも引くに引けない状況に追い込むようなものが多いことは容易に想像がついた。
しかも石山さんの場合、高校生だったから、男子制服も売られたわけで……
「うー」
でも、ＴＳ病になった以上、やらなきゃいけないのかと思うと、気

が重い。自殺すれば、うちの家族も、そして手原たちも苦悩するのはすぐに分かった。
俺は重い気持ちで夕食を採った。そしておふくろは「少しずつでいいと思う。悟を尊重する」と言ってくれた。
一瞬「それはよくない」という声が脳に響いた気がしたが、俺はおふくろの言うことに引き込まれていった。

翌日、今日から月曜日で、箪笥には男物の服が元に戻っていた。
俺はもう一度トランクスを穿いてみたが、どうにも体にフィットしないことから、すぐに女物のパンツに穿きかえた。
いくら否定したところで、肉体的には女性なのは動かしようがない。
ブラジャーも、比較的つけやすい「フロントホック」というのがあったので、それを選んでつけることにした。
あの後過ごして分かったが、ブラジャーをつけないのも、さすがにあり得ないことだった。とにかく「摩擦」がひどかったのだ。
というわけで、下着に関しては、完全に俺の敗北を認めざるを得なかった。
しかし、上の服は違う。
俺は、下はユニセックスなジーパンにし、上は男時代のシンプルな色の服にした。
これなら格好は男でもできるし、問題はないはずだ。
「おはよー」
「幸子おはよう」
「お姉ちゃん、上が少しぶかぶかだね」
「ああ、悟の服だからな」
南東北の11月は、既に東京の真冬より寒い。それを鑑みればスカートは論外だ。
「そう？　ま、幸子がしたいようにすればいいわ」
ともあれ、おふくろもそう言っているし、ユニセックスな服装も悪くないだろう。

元がいいから、これでも十分に女の子女の子していつと俺は思う。
悟時代の服を、隠されなかったのはよかったぜ。
俺は朝を過ごすと、大学へ向けていつもの行路を進んだ。
手原たちにも、この事を話さねえとな。

「おや、塩津、ズボン新しくしたのか？」
「あーうん、そうだよ」
放課後、サークルへ行く時に、手原に声をかけられた。
まあ、さすがに気付くよな。
「やっぱサイズ合わないときついもんな」
大谷が少し緩そうに笑っている。
「あ、そうそう」
「ん？」
ともあれ、手原には言わなくちゃいけないことがある。
「手原には悪いんだけどよ。俺、性別適合手術、やっぱやめるわ」
手原は、表情を変えなかった。
もしかしたら、そんな雰囲気が漂っていたのかもしれない。
「……そうか、塩津の意思は詮索しねえし、尊重もするぜ」
「ありがとよ。もちろん、急に女になるとか、そう言う訳じゃねえけどな。でも、名前は『幸子』に変わっんだ」
厳密には、手続きはまだだけど。
「なあ、塩津はどうして急にそんな風に思ったんだ？」
大谷が、不思議そうな顔をする。
確かに、先週までの俺は「男に戻りたい」全開だったもんな。
「ああ実は、協会のカウンセラーが変わって――」
俺は、土日、特に日曜日に起きた出来事を話す。
俺についた新しいカウンセラーは、２歳年下の女子高生で、しかも関東在住の人ということや、そのカウンセラーが、余呉さんと比べてもかなり厳しいスパルタ教育の人ということ、そしてやはり「性別適合手術」はＴＳ病患者としては禁断の手段となっていることも説明した。

「生まれつきの性同一性障害でも自殺率が高いんだ。ＴＳ病患者がこれを受けても、以前の男の体と比較して絶望しちまうんだと」
「なるほどなあ……」
「不妊って訳だもんな」
　整形手術はどこまでいっても整形手術でしかない。
　精巣や精子といった、もっとも重要な男の部分までは再現してくれない。
　確かに、女性の体として産まれたならばまだ我慢はできようが、男としての自分を知っている人には、あまりにも不完全になるのは当然だった。
　冷静さを欠き、そのことさえ思い至らなかったのは、大きく反省しなきゃいけない所だろう。
「つまり、俺が好むと好まざるとに関わらず、俺にはもう、女性として生きるしか道はねえってんだ」
「……」
　俺の言葉を聞き、２人とも複雑な顔をしている。
　その表情から思惑はうかがい知れねえが、恐らく、男としての人生が断たれたことへの同情と、不老の美少女として生きることへの羨ましさとが複雑に交錯しているんだと思う。
「ま、まあ、こんなこと軽々しく言っていいのか分からん。でも、気を悪くしないでほしい」
　手原が、重い空気を払拭した。
「ん？」
「せっかくさ、かわいい女の子になったんだし、女を楽しむのも、有りなんじゃねえか？」
　確かに、励ますには、それがいいのかもしれない。
　とはいえ、ちょっと軽い気もする。
「不便なんだよ。女ってよ」
　正直、この病気になって分かったけど、女子ってすげえと思う。
「だろうな。それでも、だよ」
「まあ、過ぎたもんはしょうがねえもんな」

当人からすると、「ふざけるなよ！」と言いたくなる言葉Ｎｏ．１とも言える言葉が、その当人の口から漏れ出た。
つまりそれほど、俺は当事者意識が薄いのかもしれない。
ある意味で、余呉さん以外の同じ病気の人が、ことごとくみんな女性そのものだったせいもあるかもしれない。
ともあれ、当分はおふくろが色々融通してくれるし、これまで通りの生活を続けて、気が向いたらカリキュラムを受ける程度でいいだろう。
サッカーサークルは、相変わらず俺は見学したり女子マネの真似事をしている。
部長さんも、俺についてはやはり色々配慮してくれていて、性別適合手術の中止についても、特になにも言わなかった。
やはり、みんな大学生ということもあって落ち着いた大人だと思う。
俺も俺で、年下の高校生が指導者になったことに特に不快感もないし。
「ま、焦らずゆっくりでいいんじゃないの？」
「ああ、うん」
ともあれ、俺は当分、同じような感じで過ごすことになった。
変わったのは、「とりあえず男には戻らない」ということと、「下着と一部の服だけ新しくなった」ということくらいだった。

「ただいまー」
「おかえりー、幸子ー、今夜協会の人が来るわよ」
幸子という名前も、すっかり既成事実化してしまった。
「え!?」
おふくろから、協会の人が来ると言われた。
今日は月曜日で、何でも、余呉さんが仕事の帰りに寄って来るとか。
「何で余呉さんが？」
「ほら、石山さんは関東在住で、それも高校生でしょ？　だから、普段の軽い相談とかは、引き続き余呉さんがしてくれるのよ。あ、ここに

直接来る訳じゃないわ」
そう言えば、テレビ電話もくれたっけ？
「んー、わかった。とりあえず休むぜ」
「ええ」
俺は自室に戻り、ベッドに横になる。
男には戻れないにしても、何から何まで急に変えるのは無理だ。
カリキュラムにしても、「今のままじゃダメ」ってことになっているし、とにかくこの体で過ごしていれば自然と身に付くでしょ。
「ふう」
楽天的になりながら、俺は呼吸を繰り返した。

「幸子ー！　余呉さんが呼んでるわよー」
「はーい」
おっと、どうやら来たようだ。
俺はベッドから飛び起きると、すぐにリビングへと駆け降りた。
「はい」
「塩津さん、新しいカウンセラーの人、どうだった？」
余呉さんは、やや落胆した表情を一瞬見せつつ、すぐに普通の顔に戻った。
多分、おふくろとの面談のことだろう。
「えっとその……厳しい人で」
「そうねえ、でも、石山さんなら、私と違って歳も近いし、女の子になってからの日も浅いから、分かりあえることもきっとあるわよ」
余呉さんによれば、石山さんは協会に入ったばかりで、本来ならカウンセラーができる正会員には早いけど、会長だった永原さんの特別な計らいで正会員になったという。
「私たちにとって見れば、石山さんはいわば天才なのよ。でも、その分どうすればあなたが女の子になれるかを私よりも適切に指導してくれるわ」
「そ、そうですか……」
「塩津さん？　カリキュラムを受ける目処は経ちました？」

「えっとその……俺は……」
余呉さんの表情が落胆に変わった。
やはり、言葉遣いがいけねえのかな？
「ふう、やはりその様子だと、まだ無理みたいですね。本当はもうあまり時間もないんですが……ともあれ、私が言うとよくないでしょうから、石山さんに報告しておきますね」
「えー」
正直、石山さんは外見は余呉さんよりも更にかわいくて、それでいて穏やかそうだから、怒られた時の怖さが半端ねえんだよな。
「さっきも言ったように、あなたのカウンセラーは石山さんですから、どの道石山さんに報告します」
「うぐ……」
どっちにしても、石山さんの指導を受けねえといけないって訳か。
「石山さんは、今は体育祭が近くてそれに追われていますが、それが終わったらまた、石山さんの指導が入りますよ」
場合によっては、また直接会うことにもなるという。
うー、またひっぱたかれそうだ。
その後、再びおふくろと「三者面談」し、「女の子らしくなるように、きちんと目を光らせる」よう再三指導された。
女の子として生きることにのみ、この病気で救われる。というのは、会の共通認識で、そのためには、他の女性以上に女性的にならないといけないとのことだった。
その後、おふくろが俺に対して、余呉さんと何を話したかを教えてくれた。
それによれば、おふくろは「まだ女性に慣れていないから」と繰り返し訴えたらしい。
「協会は、やりすぎよ」
おふくろのその言葉に、俺はまた甘い誘惑を感じたのだった。
その後も、石山さんとの関係に不安を感じつつも、大学では平穏に過ごすことが出来た。

服についても、完全にぶかぶかだったのがそうではなくなっただけで、以前と比べて大きく違う訳ではなかった。
そんな時だった。
余呉さんからテレビ電話で思わぬ提案を受けた。
というのも、俺は知らされていなかったが、どうもおふくろに対して石山さんが「男時代の服を全て隠させて、またなるべくスカートを穿かせる」ように強く圧力をかけていたらしく、おふくろがそれをできないでいることに石山さんが非常に怒っていたのだ。
石山さんからの圧力も高まる中で、思わぬ提案を受けた。
何と、今度の休日を利用して、また石山さんと直接会わないかということだった。
しかも、今回は前回と逆に、俺1人で石山さんのいる関東に向かうということになった。
更に交通費その他経費は、協会が持ってくれるという。いわば「タダで東京に遊びに行ける」という願ってもない提案で、女の子の教育とか抜きにも魅力的だ。
「東京かあ……行ったことねえな」
北海道や新潟、そして沖縄は以前経験があるが、実は東京に行ったという経験はない。
この仙台に住む人からすると、とてつもない大都市だと聞いているけど、もちろん想像はつかない。
もちろん、日本人なので、実際にニュースで見る映像は見ているが、それでも実際に行って見ないと想像つかないことは多い。
単純に興味もあったので、俺は2つ返事で了承することにしたのだ。
「幸子、それで、服はどうするの？」
「うーん、スカートなら石山さんが喜びそうだけど」
あの日以来、まだ1度もスカートを穿いていない。弟にパンツ見せちゃったという事件もあった上に、やっぱりスカートというのは今まで思った以上に女の子らしさが出ていて苦手なのだ。
あの時に買った私服は、殆どがスカートなので、箪笥の肥やしと化

している服が多い。
それに、せっかくスカート穿いても無防備だったら石山さんに怒られちゃうだろうし。
「お姉ちゃん、スカートは早いと思うぜ」
「そうよねえ、あの日だって足広げてたし」
そして、親族からも信用がない。
それに、いくら暖かい東京とはいえ11月はかなり寒い。
それも鑑みて、上下共にシンプルな色で目立たない服にすることにした。
「それからこれ。お母さんの鞄、男性にも使いやすいから、ここに少し荷物入れていきなさい」
「う、うん」
ともあれ、こうして俺の準備は整った。
ちなみに、日程に関しては、俺の方から「新幹線の1番列車」にすると発表した。
休日と言っても、特に繁忙期ではないため、指定券は余裕で取れた。
ちなみに、帰りについては分からないので、当日買うことにする。
まあいざとなれば「やまびこ」の自由席でいいだろう……そうならないことを祈りたいが。
ともあれ、俺は東京行きを楽しみにしている。
石山さんは、名前の通り「優しい子」って言うし、きっと大丈夫、俺はそう楽観していた。

# いざ、東京へ

翻って、今日は優子さんと会う日になった。
俺はいつもより早い目覚ましで起きる。
パジャマと下着を脱ぐと、全裸の自分が鏡に写る。
「やっぱかわいいよなあ……」
冷静に見ると、やはり「物凄いかわいい」というのがわかる。
ここ最近、余呉さんに永原さん、石山さんといった「かわいい女の子」と立て続けに遭遇してきたから麻痺しているけど、俺だって彼女たちに負けねえくらいの容姿は持っているんだった。
以前より打ち合わせた通り、俺はシンプルな色の服に、ジーパンといった極めてラフな格好に着替え、バッグと財布、スマホを持って、昨日作り置きしておいた朝食を食べると、家を出て鍵を閉める。
「うー、寒い……」
外に出ると、寒気が襲いかかってきた。
女の体になってからというもの、とにかく寒いのに弱くなった。
もちろん、「冷え性」というものがあることは知っていたけど、それにしたって中々ひどい。
「真冬とかどうすんだよ……」
駅につくまで、俺はそんなことを考えていた。
自分としてはこれから厳しくなる冬で、寒さに弱い女性の体でどうすればいいか考えなければならない。
仙台行きの早朝の電車に乗り、俺は仙台駅に到着する。たった1駅だから在来線はすぐだ。
そして、広い構内に対して朝早くで人もまばらな状況を見ながら、人生でも殆ど足を踏み入れたことのない「新幹線ホーム」へと向かう。
新幹線は無論のこと、朝早くの仙台駅もほぼ体験がなかった。
在来線のホームとはやや離れたところにあり、ホームに停まっている「東京行き」の「はやぶさ」を目指して改札口からエスカレーターを登る。
この列車は当駅始発で、永原さんによれば、「大宮駅」で「湘南新宿

ライン」に乗り換え、新宿駅で降りて「A」出口へ向かえばいい。
迷いやすいので、地図をよく見て冷静に行動する必要があるという。地図の画像は予め送ってくれていたとはいえ、このあたりは注意だ。
そして、その出口から見てすぐのビルの1階で、石山さんが待っていてくれる。
ピンポーン
「14番線の電車は、6時36分発、はやぶさ2号、東京行きです」
駅の機械的なアナウンスが、俺を高揚感に包み込む。
大学生とはいえ、この新幹線のホームに1人でいると、「冒険」のような気分になる。
そして見える黄緑色の近未来的なデザインも、これからの俺を暗示しているような、そんな気もした。
「ふう」
空いた新幹線車内に入り、チケットを見て慎重に座席を選ぶ。
号車番号、そして数字の番号にアルファベットで座席の位置を特定できる。
「よし、ここだな」
この緑色タイプの電車に乗り、はるばる東京に行く。窓側の、普通車指定席だった。
その期待感は言い表せないものだった。
休日とはいえ、朝早い列車ともあって、発車時刻直前でも車内は空いていた。
正面の扉の上にある電光掲示板では、列車名と行き先、停車駅の案内と、号車名、そして指定席の文字も見えた。
静かな空間に、少しずつお客さんも入るが、おじさんおばさんが多く、俺のような若い女性はいないみたいだ。
「ご案内いたします。この電車は、はやぶさ号東京行きです、途中の止まります駅は、大宮、終点東京です。この電車は――」
案内の音声と共に、高揚感が増してくる。行ったことのない街に行くドキドキもある。

石山さんのいる東京という街で、様々に観光したりして、俺に自覚を促してくれるという。
女性としての自覚が持ててなければ、結局は自殺に突き進むと諭されたのだった。
「東京行き間もなく発車いたします」
電車が発車するというアナウンスと共に、かすかに「ドアが閉まります」という女性のアナウンスがしたかと思えば、「うぃーん」というわずかな音と、注意しないと分からないほどに小さな衝撃で、窓の外の景色が動き出した。
初めて向かう東京への高揚感を感じていると、新幹線ではよく聞くと言われるメロディが流れた。
「――この電車は、東北新幹線、はやぶさ号、東京行きです。全車、指定席で、自由席は、ございません。次は、大宮に止まります。車内は、デッキ、トイレを含めまして、全て、禁煙です。お客様にお願いいたします。携帯電話をご使用の際は、デッキをご利用下さい。Ｌａｄｙｓ　ａｎｄ　ｇｅｎｔｌｅｍａｎ――」
非日常の空間が流れていた。
俺が住む仙台の町が、どんどんと遠ざかっていく。
景色がどんどん、早く流れていく。それと同時に、轟音が車内に響いていく。
俺は、隣の大宮駅で乗り換えることになる。
景色の流れは早い。速度計のアプリでも、３２０キロを指すらしいけど、それについては分からない。
「ふう」
大宮駅から乗り換えた在来線は、いわゆる「朝ラッシュ」というものに、平日ならぶち当たることになる。
もちろん今日は休日なので、そういったことはないと思いたい。いや、東京ならあり得るかもしれないかな？
ともあれ、始発の仙台を過ぎて案内放送が終わり、正面の電光掲示板を見てみると、ＪＲの関連会社と思われる観光案内やＰＲ、そして天気予報と新聞社提供のニュースが流れ始めた。

新幹線に乗るのも久しぶりでよく覚えてなかったが、どうやら同じ表示を2回繰り返すらしい。
様々なニュースを見ながら、俺は外の田園風景を見る。
仙台を新幹線で出ると、あっという間にこうした風景になるが、東京はそうもいかないらしい。
東京というのは、たとえ新幹線であっても、まるでどこまでも都市が続いているような、そんな錯覚さえ覚えるのだという。
車掌さんが巡回し、また駅を高速で通過すると、正面の電光掲示板には、「ただいま白石蔵王駅付近を通過中です」という文字が見える。
小学校の社会科で習ったように、一仙台から東京に行くには、宮城県から福島県に入り、そこから栃木県と埼玉県を経て東京都に至ることになる$実際には茨城県もかすめる$。
ゴーという音は激しく、また、窓が風圧に叩きつけられている音もする。空気抵抗だって凄そうだ。
この車両はかなりの高速のため、やはり最高速度付近はパワーを使うのかもしれないな。
車内は、朝の早い時間帯で空いているのもあって、走る時に生じる音以外はとても静かで快適だった。
俺は外の景色を見たり、電光掲示板のニュースを見たりして悠々と過ごす。
電光掲示板のニュースが一巡した時には、やや遅めのスピードで「宇都宮駅」を通過していた。
ここからは、首都圏に入ったのか、急速に都会感が溢れ始めていた。
「すげえ……」
新幹線が進むごとに、どんどんと周囲も都市化していく。
やがてスピードが更に落ちてきた。
おっとそうだ、トイレを先に済ませた方がいいな。
新幹線のトイレ個室はもちろん男女共用だから、心置きなく使うことができる。
個室の中は在来線のそれと比べても広く、使いやすい。
そう言えば、東京とかだと電車の中にトイレがないこともしばしば

らしいから、気をつけておいたほうがいいな。
特に女の体は、どうもそのあたりが弱いらしいから、飲み物には特に注意しないといけなさそうだ。
そんなことを考えながら、トイレを済ます。
流すボタンを押し、「プシュッ」という、列車のトイレ独特の音がする。ここら辺は在来線ともあまり大差ないようだ。

「間もなく、大宮です。お出口は――」
席についてしばらくすると、放送が流れてきた。
おっと、降りなきゃ行けねえな。特急券は大宮までなので、小さな鞄を持って再び座席を立つ。
車掌さんの乗り換え案内を聞きながら、俺は新幹線を降りる準備をする。
「Ｌａｄｙｓ ａｎｄ ｇｅｎｔｌｅｍａｎ，ｗｅ ｗｉｌｌ ｓｏｏｎ ｍａｋｅ ａ ｂｒｉｅｆ ｓｔｏｐ ａｔ Ｏｍｉｙａ．」
降りる準備といっても、やることは小さな鞄を持ってドアの前に立つだけだった。
「ふう」
大宮の時点で、既にとてつもない大都会に目がくらくらする。
ドアが開いたと同時に俺は新幹線を降り、ホームを歩く。
「えっと、乗り換えは……」
事前の話では、乗り換えの改札と、下車する改札で別なのでよく注意しなきゃいけない。
といっても、この乗車券は東京都区内までの乗車券になっていて、大宮駅でなら途中下車が可能なので、一応間違えてもリカバリーは効くと永原さんに言われた。
永原さんは、鉄道にも詳しいらしい。
「よしっ」
ともあれ、切符を取り出して改札に通す。
そして俺は、かねての予想通り、「湘南新宿ライン」を目指す。

「えっと、ここが――」
意外とホームの位置は分かりやすく、次の列車のホーム時間を見ることが出来た。
それにしても、列車の本数がものすごく多く（いや仙台だって昼間でもそれ相応の本数はあるが）、しかも編成両数が１５両とか１０両のようなにわかに信じがたい数字が並んでいた。
仙台の場合、ＪＲは大体は２両編成が１単位で、長くてもせいぜい６両だし、もちろん本数だってこんなに多くないし、路線図も複雑ではない。駅の間の距離だってもっと長い。
「それでいて朝は満員なんだろ……」
そう考えると、この東京という都市は、狂っているとしか思えなかった。
「間もなく――」
やがて、湘南新宿ラインの電車が到着するというアナウンスが流れ、俺は見よう見まねで並んでいる人の後ろに並び、電車の方を見る。
まるで蛇のようなどこまでも続いていきそうな、そんな気さえする長い電車の中に入る。
並んだのは電車の中央付近の所で、隣は２階建て車両だった。
どうもこれは、「グリーン車」と呼ばれるもので、特別料金が必要になるから注意しろというお達しがあった。
「ふう」
車内は意外と空いていて、俺は余裕で着席にありつくことが出来た。
電車は発車メロディと共にすぐに発車した。
車掌さんによれば、これから先は浦和、赤羽、池袋、新宿、渋谷、恵比寿、大崎、西大井、武蔵小杉、新川崎、横浜の順に停まっていくらしい。
車窓を見ると、線路の本数がとても多い。
しかも、一番奥の線路を見ていると、そこにだけホームがある駅があることに気付いた。
そして、よく見ると、青い電車がそこに止まっていた。もちろん自

分たちの乗ってる列車にはホームそのものがないため、あっさりと通過してしまう。
要するに、この電車は「普通」と言っているが、実質的には「快速」の役目を果たしていることが分かる。
やがて、電車が高架に上がると、「浦和」に到着、そこから更に数駅を通過すると、途中何度か青い電車を追い抜きつつ「赤羽」へ、更に曲がりくねってゆっくりした速度で、今度は並行する電車が緑色に変わりつつ、「池袋」へ到着。ここまでは通過駅も結構あって、意外と次の駅までは長かった。
しかし、「池袋」からはわずかな時間で目的地の「新宿」へとたどり着いた。
降りる人も乗る人もホームにいる人も物凄い量で、その凄まじさに圧倒されてしまう。
「何なんだここは……」
俺はここで、圧倒的な孤独感を感じた。
新幹線の中でも、どこかそんな感じもしたが、「遠い場所に行くんだ」という高揚感もあった。
だがここは凄まじい。
田舎の人間は都会に憧れ、都会に行くと開放的になって節操が無くなるというイメージがあったが、俺は「仙台」という「東北では一番の都会」で育ったため、その仙台をも遥かに凌駕する「東京」に、ひたすら圧倒されるばかりだった。
この新宿駅を見て、俺の中で、「仙台に住み続けよう」という誓いができた。
幸い、―13歳の時に大きな地震$東日本大震災$があってからというもの、周囲の不幸でのし上がったという状況とは言え、仙台の景気は物凄いよくなったし、ここ最近でも、人手不足は続いている。
わざわざ東京に出る必要も、無いだろう。
新宿駅の中は、至るところで人で溢れていた。仙台駅の比ではない。
さっきの池袋もとんでもないところだったが、新宿はそれ以上だっ

た。
俺は、スマホのメモを便りに、恐る恐る改札を出て、道なりに進む。
「えっと、こっちだから……」
口の悪い人は「新宿ダンジョン」何て言う言い方をするため、俺はあまりにも身構えすぎていた。
確かに、迷宮のように入り汲んでいるのは確かだが、そこかしこに案内図があるので、冷静に分析をしていけば、何度か後戻りはしたものの、「どうしようもなく迷子になる」などということは無かった。
永原さんが、出口までの道のりを、かなり詳細に案内してくれた図を書いてくれたことも大きい。
「よしここだな」
出口案内と、石山さんの指定した出口が会っていることを確認して、俺はエスカレーターに足をのせる。
そして、俺は地上に出た。
「すー、ふー」
意外なことに、仙台とは空気は対して変わらなかった。
もちろん、気温としては東京の方が遥かに暖かいが、空気の済み具合は同じくらい。
ともあれ、俺は正面に見える、頂上が見えないほどの高いビルに入っていった。
ビルの中は、休日ともあって人がまばらで、たまにサラリーマンが歩いている。
彼らの視線は、分かりやすいほどに俺の胸へと集中していた。新宿駅よりも人数が少ない分、余計に視線は目立った。
うー、胸の大きい女子の宿命だよなあこれ……
広いビルのロビーを一通り見渡すと、目的の人はすぐに見つかった。
緑色のワンピースを着て、黒い髪に白いリボンの女の子が、俺を見つめていた。

# 都会の2人旅　幸子サイド　前編

「すみません、待ちましたか？」
「あらおはよう」
待ったかどうかの言葉には返答していない。多分気にしていないのだろう。
そして、目の前にいる石山さんはやっぱり、眩しいようにかわいらしい女の子で、半年前まで男とは、とても思えなかった。
「もう、そんな服で来たの？　まあいいけど」
石山さんはやや呆れ気味に言う。
「いやその……だって……」
スカートとか、やっぱ怖い。
「幸子さん、今日は女の子の生活を知るために、あたしの特別講習ということになっているからちゃんとするのよ」
石山さんから、服装を注意されてお説教を受ける。
うー、やっぱりかあ……
「お、おう……」
「あと、まだ来ていないという報告ですけれど、そろそろ女の子の日も来ますからね」
「うげっ……」
石山さんから、生理の話が飛んできた。
うーやっぱり来るのか、今までの知らないことの中でも、最も男女の違いを見せつけられる出来事とも言える。
すごく気分悪くなって、痛いんだろうなあ……想像したくもない。
「生理用品の使い方は習った？　習わないとダメよ」
「いや、習っていない」
正直にここは言わないと、後で大変なことになりそうだ。
「はぁ……そういうことだろうと思ったわ。あなたのお母さんに連絡して、大至急講習するように言っておきます」
「……」
俺は思わず、苦笑いをしてしまう。

正直、考えたくもない。だからもう、笑ってごまかすしか無い。
「幸子さん、これは笑い事じゃないわよ。これを超えられないで自殺する患者も多いのよ」
優子さんは相変わらず、「自殺するぞ」と脅してくる。
「う、うん……」
曖昧に、返答するしか無い。
とにかく情報量が違いすぎる。
「幸子さん？　死にたくないなら、あたしたちの言うことを、お願いだから聞いてね」
「は、はい……」
とにかく、ここは表面的にでも従っておかないといけないだろう。
「それから、今日は大目に見るけど、服装も、飾りっ気も何もなしはダメよ」
「だ、だって……」
うぐっ、また話を蒸し返された。よっぽど単色服とジーパン、装飾品一切なしのこのスタイルが気に入らないらしい。
でも遠く東京までスカートで行く何て無理だよお……
「いい？　女の子はオシャレして、見られることで可愛くなっていくのよ」
石山さんは、あくまで「女の子らしく」のスタンスを崩さない。
「でも……まだわからない」
オシャレコーディネート、そんなのは男時代からあまり興味がないから分からないというのが本音。
「……じゃあ、あたしの服はどう？」
そう言うと、石山さんはワンピースのスカートの裾を摘まんで広げるポーズをしてきた。
その動作は、「男の知識」がなくても、「世界一かわいいんじゃないか？」と思えるくらいかわいらしくて――
「そ、その……似合ってると思うぞ！」
「こら！　言葉遣いに注意してって言ったでしょ？」
素直な感想が漏れたと同時に、石山さんからお叱りの声が上がる。

気を抜くとすぐにダメになる。
「に、似合ってるわよ」
すかさず、訂正する。
「よろしい。さ、言葉遣いを間違えたら『私は女の子』でしょ？」
あうっ、とにかく暗示かけなきゃ。
私は女の子……私は女の子……
「さ、ともあれ、大都会は初めて？」
石山さんが話題を変えてくれた。
「うん、すごい街並みだ。俺の……」
「ギロッ！」
石山さんの眼光が突き刺さる。
うえーやっちゃったー。
「わ、私の街だって、あの地方じゃ一番大きいのに、やっぱり格が違う……わ」
慌てて訂正する。
「ふふっ、じゃあ行きましょうか」
ふー、どうやら、見逃してくれたみたいだ。あぶねー
「さ、幸子さん。まずはあたしたちの協会の本部に行きますか？」
「え？　じゃ、じゃあ折角だから」
ともあれ、協会の本部というのには興味がある。
「うん分かった。ついてきて？」
「はい」
石山さんはまず、エレベータのボタンを押して呼び出すと、先に俺を中へ入れてくれる。
そして「４９」のボタンが押された。
すると恐ろしい勢いで階数の数字が上がっていく。
「うわー速いよこれ」
「でしょ？」
４９階という上層部まで行くわけだから、速度が必要なのは分かるけど。
「４９階です。　４９ｔｈ　ｆｌｏｏｒ．」

「４９階のさらに一室なんだ」
どうやら、階の全てを借りているわけではないらしい。
「意外に小さいな」
「うん、珍しい病気だもんね」
そして、とある扉の前に到着した。
どうやら、鍵がかかっているらしい。右側のカードキーだろうか？
「ちょっと待っててね」
石山さんがポーチの中からカードを出してきた。
どうやらやっぱりこれがないと開かないらしい。
ピピッ、ガチャッ
タッチする音とともに鍵が開く音がする。
「はい、どうぞ」
「お、お邪魔します」
少し緊張しつつも、石山さんについていく。
しかし中は、そう凝った感じではない。
オフィスがどんな感じかはわからないけど、あんまり大差がなさそうだ。
「意外と普通ですね」
協会の中で女の子を強調するのだから、もっとそういう感じかと思ったんだけど。
「オフィスビルのテナントだからね」
石山さんについていき、扉をくぐって部屋を変える。
すると、さっきよりも大きな部屋に、また若い「少女」としか言えない外見の女性が何人か見えた。
彼女たちは、書類の整理をしているようだった。
「あら、石山さんいらっしゃい……この子は？」
そのうちの１人がこちらへと話しかけてくれた。
「うん、この人が塩津幸子さんです」
「あら、はじめまして。私は比良道子です。僭越ながら、ここで副会長をさせていただいております」
どうやら、またお偉いさんの登場みたいだ。

副会長ということは、見た目にそぐわず相当な年齢なのだろう。
「えっと……おっ……私が塩津幸子です」
危ない危ない、石山さんに怒られちゃう。
「余呉さんと石山さんから話を聞いているわよ。成績不良何だって？」
比良さんが、にっこりと笑いながら話す。
俺は頭に血が上ってしまい……
「なっ……！　なんで俺がそんなこと……しまった！」
「幸子さん。ちょっとこっちに向いてくれるかしら？」
またしても言葉遣いを間違えたことに気付いたときには、背後からただならぬオーラが漂っているのに気付いた。
「は、はい……」
向くのは怖い。でも、向かないことには進まない。
俺は、ひっぱたかれる覚悟で恐る恐る体をこちらに回転させた。
「こら!!!　そういう言葉遣いをしているから、あなたは成績不良なのよ!!!」
石山さんに、大きな声で、思いっきり怒られた。
予想していたこととはいえ、立て続けに3回目ともなるとやはりこうなっちゃうのは当たり前のことだった。
「そもそも女の子というのはですね……かわいくておしとやかで優しくて穏やかで清楚で清潔できれいにおしゃれで、清く正しく美しく、家事をこなせてきちんと一歩引いて男性を立てて、恥じらいの心を持ち、柔らかくて気品があって優しくて、包容力で包み込んで人を癒して、日々女性を磨きながら、やがて素敵な旦那様を見つけて家庭に入って、家庭に入ったら今度は慈しみの心を持って旦那様に寄り添って男を立ててあげて、そして子供たちにも母性を持って接するものよ。そういう女の子になれれば、あなたは真に『幸子』になれるのよ」
石山さんは人差し指を口の前に立ててお説教の姿勢を見せる。
石山さんが言う「女の子」は、確かに「女の子」としての目標だと思う。
「でも幸子さん、今のあなたのその服装、身だしなみ、振る舞い、歩き

方、言葉遣い、態度、どれを取っても下品だわ。女の子として失格よ。そんな乱暴でぶっきらぼうな態度とがさつな言動で、本当に女の子として大成できると思ってるの？　今のあなたみたいに、容姿だけで女子力ゼロの下品な女の子が、男性から好かれると思ってるの？　生まれつきの女の子ならともかく、あたしたちＴＳ病の女の子は女の子らしい女の子を徹底的に目指すくらいでちょうどいいのよ!?　ねえ幸子さん、あなた女の子としてちゃんと自覚あるのかしら？　ちゃんと女の子らしく生まれ変わらなきゃいけないって覚悟があるの!?　いつまでもうじうじしてちゃダメでしょ!!!」

俺は、弾幕のように浴びせられる正論に、何も言い返すことができなかった。

「あら、石山さんってスパルタなのね。報告書にもビンタしたってあるし」

いたたまれなくなった様子で、比良さんが助け船を出してくれた。

ようやく、石山さんからの矢のようなお説教が収まってくれた。

「あはは、あの時の幸子さんは本当に取りつく島もなかったから仕方なくね」

「そう……」

石山さんも、やはり上司には強くは出られない。

うー、それにしても、さっきのお説教の内容から言っても、やっぱり後天的な女性だからこそ、「女性らしさ」は大事になってくるのかな？

そうじゃなきゃここまでいかにもな「女の子らしくしなさい」何てお説教されないと思うし。

「幸子さん、次からはもう、私たちにはっきり聞こえるように声に出して暗示しなさい。心がこもってないと、いつまでも女の子になれないわよ」

ついに石山さんから、「声に出しなさい」と言われてしまった。

「わ、私は女の子……私は女の子……」

「うんいいわよ。言葉遣いを間違えたら、『女の子の言葉を使わなければいけない』とか、『女の子なんだから女の子らしくならなきゃいけな

い』というのも効果あるわよ」
うー、暗示が増えちゃった。
「は、はい……女の子は女の子の言葉を使わなければいけない……女の子は女の子の言葉を使わなければいけない……」
言われるがままに、声に出す。うー、結構恥ずかしい……
「ふふっ、かわいいわね」
「うんうん」
比良さんの「かわいい」という言葉に石山さんがうなずいている。2人とも笑顔だ。
うー、顔が赤くなりそうだよ……
にしてもこれ、恥ずかしいだけで意味あるのかなあ？
何か騙されてる気がする・・
「それで、会というのは？」
ともあれ、せっかく本部まで来たんだし、協会についてもう一度おさらいしなきゃいけないよなあ・・こと言わない
「あたしたちＴＳ病の患者で作る団体よ」
「ええ、それは分かってるけど、具体的な会の主張とかは？」
「あたしたち日本性転換症候群協会はね、大きな主張は一個だけよ」
どうやら、そこまで大きなことを主張するつもりはないらしい。
「うん、それって？」
「あたしたちの扱いについてよ。知らない？」
「う、うん……」
具体的には、まだよく分からない。
協会の活動というからには、社会に理解を広めるってことだろうけど。
「じゃああてずっぽうでいいわ。どんな主張をしてると思う？」
「そ、その……やっぱり元男として理解してほしいとか？」
というか、特定の属性で団体組むってそれくらいだろうし。
「ふふっ、残念ながら不正解よ。今のは模範解答ならぬ模範誤答よ」
石山さんはいたずらっぽい笑みで優しく語りかける。
「え!?　じゃあ模範解答は!?」

どうやら、一番都合のいい誤答を俺がしたらしい。
比良さんもニヤニヤしている。
うー、何か変な感じがする。
「あたしたちを、一人の女性として扱ってほしいということよ」
「え!? ど、どうしてそんな……」
「幸子さん、それはね、さっきも言ったように、私達ＴＳ病患者は、女の子として生きていかないと、あたしたちは立場を失って最終的には精神的に崩壊しちゃうのよ。幸子さんみたいな生き方をする人を応援していた時代もあったわ。でも、全くうまく行かなかった。今でもうまくいった例はないのだ。だからまず、女の子として生きていく以外の道はないことを分かってもらうために、経緯を知っている人も含めて、周囲の人が意識改革して、それと並行して本人も変わっていく。そうすることで、女性としての人生を歩み続けるの。そうすればあたしたちは、初めて長生きのスタートラインに立てるのよ」
石山さんが、また基本から丁寧に教えてくれる。
このあたりは、本当によく復習しておいたほうが良さそうだ。
「それでね、幸子さん、あなたのことを、何も知らない人が見たら、あなたのことを男だなんて思うかしら?」
ＴＳ病患者は、女性として生きていく以外には自殺の道しか残されていない。
その時に周囲の理解として必要なのは、第一印象の見た目通りの扱いなのだという。
この辺りが、他の性的少数者と一線を画する所だと俺は思った。
「それは、思わないと思う」
外見だけ見て、俺を男なんて思う人がいたら、それはそれで病気だと思う。
「でしょ? 今のあなたは女の子そのものよ。だからね、もしＴＳ病だと知ったとしても、第一印象そのままに、あたしたちを見て欲しいのよ」
「そ、そうなんですか……」
とはいえ、その事実を知ったら第一印象そのまんまに見てもらうの

も難しいと思うけど。
「幸子さん、ここの協会の普通会員は、ＴＳ病の女の子なら誰でもなれるわ。入会資格はさっきのあたしが述べた協会の方針に賛成できるか。のみよ」
「……まだ、おれ……わ、私にはよく分からない」
正直な、感想だ。
「そうね、その様子じゃ、入会は時期尚早よね」
比良さんは、「まだまだだね」と言わんばかりに頷きながら話していた。
「うん、あたしもそう思う。言葉遣いも服装も、入会までに矯正しないとね」
比良さんの言葉に石山さんも賛成した。
「は、はい……」
俺もまた、同意見だった。
「じゃあ、今日はもう失礼しますね」
「お疲れ様でしたー」
石山さんと比良さんが、話をまとめる。
比良さんも、別の仕事があるらしい。俺がいても迷惑だろう。
「失礼します」
最後に俺が頭を下げて挨拶し、部屋を出る。

「さ、幸子さん、東京に行くわよ」
俺たちはビルの屋内を進みつつ、エレベーターに戻ってきた。
比良さんも恐らく、相当な年齢なことは想像が出来た。
永原さんが４９９歳で、永原さんの次に年上の人が半分も生きていないということは２５０にはなっていない。
とはいえ、副会長と言っていたし、江戸時代の生まれで間違いないだろう。
またエレベーターがものすごい勢いで下っていき、気付いたら地上にいた。

「次はどこに行くの？」
エレベーターを降り、俺は聞いてみる。
「近くの漫画喫茶よ」
「え!?　それくらいうちの町にも――」
正直、東京まで来てそんな所行ってもという感じではある。
「ふふっ、ただの漫画喫茶じゃないわ」
「え!?　それって……？」
ただの漫画喫茶じゃないって？　どういうことだろう？
「ふふっ、そこの女性専用スペースよ」
「じょ、女性専用……!?」
石山さんから出てきた甘美な響きに、思わず俺は唾を飲み込んだ。
確かに、女子トイレとか女湯とか、この世の中には女性専用の空間は数多い。
でも、今まで俺はそれから逃げてきた。そう、「男として」そうした場所に興味があるからこそ、避けてきたのだ。
だけど今回はもう、逃げられそうにないみたいだ。
「当たり前でしょ。あたしたち女の子なんだから。女の子が女性専用スペースを使って何がおかしいの？」
石山さんの口調が、また少しだけ強くなった。
「うっ……た、確かにそうだけど……」
「じゃあ決まり。予約までしてあるんだから、行きましょう」
石山さんに腕を掴まれ、ビルを出て、最寄りの女性専用スペースのある漫画喫茶の方向に進むことになった。
うー、女性専用、男だったら絶対に知り得ない場所に、今から行く。
女性専用……女性専用……うー、考えるだけで胸がどきどきしちゃうよお……

# 都会の2人旅　幸子サイド　中編

「ねえねえあの二人組」
「うん、二人ともすごい美人だよね。特に緑の服の子」
「うんうん、でももう一人はセンスないよね」
「ねー緑の子は凄い似合ってるのに」
センスがないと、通りすがりの人にも言われてしまった。
確かに、女の子らしさという意味では、俺は石山さんに数段負けている。
きちんと女の子をしている石山さんと俺とが並ぶと、やはり目立ってしまうのだろう。
ただ、女としてどうこうという感情は、まだ湧かなかった。
石山さんも、聞いて聞かぬふりをしつつ、歩いている。
女性専用という響きとともに、より一層気分が重くなった。
「いらっしゃいませー」
「予約していた石山です」
店員さんは、あまり美人とは言えない人だった。
「あ、はーい、石山様ですね。今日はツインルームで女性専用スペース、3時間パックでお間違いないですか？」
「はい」
それよりも、中にはいったその場所は、至って普通だ。
周りを見る限り、特に変わった所はない。
「それでは、こちらへどうぞ」
石山さんについていき、漫画喫茶へと入る。
うー女性専用、女性専用……
「どうしたの？　いくわよ」
「あ、うん……」
石山さんにも声をかけられ、おどおどしくついていく。
男だった頃には絶対に入れなかった場所にこれから堂々と正面から入る。緊張しないわけがない。
「あの、もしかして」

「うん？」
店員さんが、こちらを振り向く、かなり警戒心に満ちた表情だ。
「まさか女装とかじゃないですよね？」
おいおい、それは無理があるだろ。
「はぁ!? 何言ってんのよ、あたし女の子よ！」
信じられないくらい大きな声を石山さんが出した。
どうやら、かなり神経を逆なでする言動だったらしい。
「で、ですが挙動不審というか……」
石山さんが女性の店員さんの腕をとって自らの下半身に誘導する。
「わっお客様……!?」
あの時ひっぱたかれた時の石山さんの怒りとは、全く違った性質のものだった。
正直、俺はあっけにとられてしまった。石山さんのした行為そのものは無論のこと、あの石山さんがあそこまでするということ自体が、全く想定できなかった。
「これでもあたしを男だと疑うの!? ねえ!?」
自分が男だと思われることが、どうしても許せない。
店中に響き渡るような大きな声を出している所からも、それが伺える。
俺にはまだ、理解が難しい段階だ。
「も、申し訳ありません！ 今すぐ案内します！」
そう言うと、案内が再開される。
まあ、疑う店員さんが悪いといえばそれまでだよな……
うー、女と扱われないだけでここまで怒る、俺とは大違いだ。

「おいおい、やべえもん見ちまったぜ」
「うんうん、いくら怒っていると言ってもなあ……」
「でもたしかに手っ取り早いというのはそうだよね……」

周囲も、ヒソヒソと話している。
どうやら、あまりにも美しすぎたために、あるいは「センスの無い」

俺との対比なのか、店員さんは女装を疑ったらしい。
　でも、疑うとするなら石山さんじゃなくて俺の方じゃないかと思うんだけども、いや女装だとそういうわけでもないのか、俺も石山さんも、声はどう考えても女の子だけど、店員さんもそこまで頭がまわらないのかなあ？
「こちらへどうぞ、先程は申し訳ありません」
「はい」
　ともあれ、無事に中に入る。壁の色以外、殆ど違いはない。
「じょ、女性専用と言っても、あんまり変わらないな……」
「ふふっ、じゃあいくつか話したいことがあるけど……漫画読みながらでいいわ。取ってくるからここで待っててね」
「え、そんな――」
「移動で疲れたでしょ？　ゆっくり休みながら話しましょ」
　石山さんがそう告げ、部屋には俺一人が取り残された。
　うー、電光石火の早業だ。
　いかにも女性という感じのピンク色の空間に、俺は1人で取り残されてしまった。
「はぁー」
　まだ東京に来て殆ど時間は経ってないのに、石山さんには、怒られっぱなしだった。
　とにかく、女の子らしくないようなことは、出来なかった。
「カリキュラム、受けられるのかな……」
　カリキュラムは、間違いなく今よりも厳しいものが待っている。
　特に家事やスカートでの立ち居振舞いという課題が、俺に強くのし掛かってくる。
　今まで家事何て殆んどしたことがない俺が、「主婦のように」家事ができないといけなくなるのだ。
　それどころかおしとやかで清く正しく美しく、優しくて穏やかでうー……確かに女の子としてはそれが理想の理想なんだろうけど……
　果たして、女の子の言葉遣いも満足に出来てない俺には、そんなこ

とは夢のまた夢にしか見えなかった。
そして、男だった頃の経験があるから、石山さんのお説教に対する代案は、全く思い浮かぶことがなかった。

「おまたせ」
深く思慮していると、石山さんが戻ってきた。
そのかごに握られていたのは、大量の少女漫画だった。
「おかえりなさい……な、なあ……」
あまりにも少女向けに偏ったそのラインナップには、いくらなんでも「おいおい」と思ってしまう。
「うん？」
石山さんは、首を傾げていた。
どうも不思議らしい。

「少女漫画ばかりじゃねえか」
俺は、少女漫画など読んだこともない。
女の子向けの漫画に、一体何で付き合う必要があるのか分からない。
「当たり前ですわ。あたしもあなたも女の子、それも少女なのよ。少女が少女漫画読むのは普通でしょ？　それから、少女がそんな乱暴な言葉遣いするんじゃありませんわ！」
石山さんがお嬢様口調になる。
うー、やっぱり、女の子を理解するためには少女漫画が必要なのか。
それにしたって、ギラギラし過ぎてて俺は苦手だ。
石山さんの緑のワンピースも、特徴的なキラキラした模様があるみたいだけど。
そして、また言葉遣いを注意された。
「す、すみません……私は女の子……私は女の子……女の子の言葉を使わなければいけない……」
数秒後、また、恥ずかしい暗示をかけさせられる。
この部屋に2人しかいないのが余計に心臓の鼓動を激しくする。

「幸子さんはこれを読んでみて」
石山さんが、俺に3冊の少女漫画を渡してきた。
聞くところによれば、この少女漫画は、石山さんが女の子になって初めて読んだ少女漫画らしい。
俺は、やれやれという感じでやや慎重に最初のページを開いた。絵柄からして「いかにも」という感じの女の子がいる。
そして石山さんも、別の少女漫画を読んでいる。
どうやら、この部屋を徹底的に少女漫画で埋め尽くすらしい。
……まあ、腐女子ＢＬ系を読まされるよりはマシか。
最初の方を読んで分かったのは、主人公はかわいらしいけど、学校一のお金持ちの男の子に恋心を抱いている。
しかし、彼には許嫁の女子がいて、そちらもお金持ちということになっている。
それでもめげずに、男の子にアタックするわけだけど、当然許嫁の女の子にしてみれば面白くない。
そんなこんなで、主人公に様々な陰湿いじめを遂行するというのが筋書きになっている。
いじめの描写は生々しく、主人公が傷つく様子もとても痛々しく書かれている。
「うーん」
主人公の女の子の、心理的な描写がとても多い様に感じる。
心の中で「私は恋を諦められない」と言っている。
男の子も優柔不断で、許嫁からの訴えにも耳を貸していないみたいだ。
あれこれ見て1巻を読み終わり、次へと進む。
「読みながら聞いてくれる？　幸子さんさっき歩いていた時通行人から『センスない』って言われてたわよ」
石山さんが、また何かを語りかけてきた。
女性として生きる覚悟が足りないと、俺に訴えかける。
「うっ……だって、まだ1ヶ月も――」
漫画から目を離し、石山さんにそう訴える。

「あたしが女の子になって1ヶ月の時にはあたしはもうこの白いリボンも付けてたし私服はほとんどスカートを穿いていたわよ。あたしが初めてスカートで1日を過ごしたのは女の子になって3日目の日よ」
石山さんは、自己の体験で反論している。
「そ、そりゃあ、石山さんは――」
「幸子さん、女の子がスカートを穿いちゃダメなんてこと無いんだから。もっとポジティブに、女の子を楽しみなよ。ほら、幸子さん、あなたの顔、もう一度よく見てみて？」
石山さんは、やはり有無を言わせなかった。
そして、手鏡を取り出すと俺の顔を写してきた。
うん、美少女だ。
「どう？」
「そ、そりゃあかわいいとは思うけど……」
素直な感想を口にする。
石山さんも、自分のことは「かわいい」と思っている。その点については共通だ。
「じゃあいいじゃない。あなたには、かわいく、女の子らしくする権利があるのよ。まだ数週間じゃないわよ、もう数週間よ」
「でもやっぱり、まだ中身が伴ってないから……」
さっきの石山さんのお説教にもあったように、今の俺はお世辞にも中身が女の子とは言えない。
だから、こういったことに抵抗が出てしまう。
「これは男の女装じゃないのよ？　女の子が女装して何が悪いのよ？」
石山さんのさっきのやり取りを見て、嫌でも思い出してしまう。
「う、ううっ……」
徐々に反論の道が塞がれて、言葉に窮するのは、さっきと同じだった。
「いい？　女の子らしくするためには、形から入らないとダメよ。あたしがいる時だけ大人しくしててもばれるのよ。そのために、幸子さ

んの家の人にも協力してもらうわよ」
やはり、家族にも俺の味方はいないようだ。
いや、もちろん将来的には女の子として生きていくにしても、このやり方はあまりにも急だという意見に賛同してくれる人はいないってことだ。
「じゃあ、お母さんが服がないって言ってたのも……！」
「あたしが徹さんを通して別の場所に送ったわよ」
うげー、やっぱりかー。どうしても女の子の格好をしないといけない時が来ると言うのは分かっていたけど、それにしたって心の準備が出来てない。
「な、何でそんな……」
いや、準備をろくにしてなかったせいか
「幸子さん、もう一度聞くわ。あなたはもう男に戻ることは出来ないわ。それを踏まえて、あなたは本当に、女の子として生きていくつもり？」
石山さんが、ぐいと顔を近付けてくる。
顔を近付けられると、どうしても呼吸が1段激しくなってしまう。
「いや、その……真ん中に……」
とっさに、思っても見ないことを言う。
「あなたのどこが『真ん中』なのよ？　あなたはやろうと思えば赤ちゃんも産めるのよ」
分かってる、「真ん中」とかいう明らかに変なことを言ったのも、その場しのぎにさえなってない苦し紛れだと。
「で、でも……！」
その後に続く言葉なんて無いと分かっておきながら、「でも」何て言葉を言ってしまう。
我ながらあまりにもバカだ。
「さっきも言ったでしょ？　あたしたちＴＳ病患者が目指すのは一人の人格を持った女性だって。それ以外の道は、精神崩壊とその果ての自殺しか無いわよ。現実逃避しちゃダメよ」
「いやだって……その……」

反論の模索は無意味だと分かっているのに、無駄だと分かってるのに、あらゆる意味で腹立たしくなってくる。
やっぱり、女の子女の子してしまうのがいいのかもしれない。
「いい？　男か女かで言えばもうあなたは女よ。人間男か女かななんて小学校でやったでしょ？」
「確かにそうだけど――」
一旦、肯定の言葉を言う。
そうするしか無い。
「あなたは『女性の特権』を持っているのよ……赤ちゃんを産むとかね」
そして、石山さんがくり出したのが「男女の絶対の壁」と言っていい「妊娠と出産」だ。
「いや別に、子供なんて作る気は……」
女の子らしく生きていくことでさえ未だに抵抗あるのに、「妊娠出産をする自分」を考えるなんて、無茶もいいところだ。
もちろん、不老である以上いつかはそういう行為をするのかもしれないけど。
「だいたい、今のあなただって、『女性の特権』を行使中でしょ？」
そして石山さんが、思ってもいなかった言葉を言う。
「え!?　『女性の特権』って何を!?」
驚いて、素っ頓狂な反応をしてしまった。
石山んからの意外な一撃に一瞬硬直してしまった上で――
「幸子さん……ここ、女性専用スペースでしょ!?」
「あ、そっか」
当たり前のことを言われてしまった。
そうだった、ここは、女性でないと入れない空間で、そこに俺がいるというのは、俺が女性だから以外に理由はなかった。
「男がこんな所入れるわけ無いでしょ」
石山さんが「大丈夫かしらあなた？」と言いたげな口調で言う。
「う、うん……」

俺は、少女漫画に視線を戻す。
その後も、許嫁からのいじめやいたずらはエスカレートしていく。
その度に主人公は心を折られ、また立ち上がるを繰り返す。その間の心理描写は、女同士で物凄くドロドロとしたものだった。
「ねえ……石山さん」
「ん？　どうしたの？」
お説教モードからそらすためには、少女漫画の話題をするのが良さそうだ。
「この漫画、結構生々しいよね」
正直、やりすぎだろうと思う。
あまりにもドロドロした世界だ。
「そうだね。少女漫画だと結構そういうシーン多いわよ。ちなみに、これがあたしが最初に読んだ少女漫画だよ」
「へえ、これがねえ……」
ということは、やっぱり課題にもあるのだろうか？
「それから、主人公の女の子はどう？」
石山さんが聞いてくる。
主人公の女の子は、とにかくひたすらに許嫁から酷い目に遭わされている。
「何かひどい目にあってばかりって感じ。そりゃあいじめっ子も許嫁で嫌な気分なのはわかるけど、それにしたって陰湿すぎると思う」
「ふふっ、最終巻を読んでみて」
石山さんが、最終巻を促してきた。たしかに、ちょうど2巻目を読み終わったところだ。
「う、うん……」
そして、そんな状況が続いた終盤だった。
許嫁の女子が、主人公の女の子のスカートをまくりあげ、「攻略対象」以外の全男子にパンツを見せびらかし、その上で「人の男に手を出す売女」と罵倒し、とうとう主人公が泣き崩れてしまう。
「うわーこれは……」

いくらなんでも、これはひどい。というか、パンツ見られているシーンも男向けのエロよりも深く、そして生々しすぎる。
ところが、その男の子がいないのを入念に確認したにも拘らず、その様子を例の男の子に目撃されてしまった。
途端に、男の方から許嫁の子が糾弾され、最終的には「許嫁の話を考え直させてもらう」と言われてしまった。
「ほほう、やっぱり……」
あー、何だか予想できたことだけど、主人公とお坊っちゃんが急にいい雰囲気になってるな。
場面が代わり、許嫁のお嬢様の企業は経営が傾いて莫大な借金を抱えて倒産し、急に転校して学校側も行方不明、そして主人公は庶民の身ながらも、健気で献身的な性格を買われて晴れて結婚となったわけか。
悪役の子、これ明らかに「売られた」よな。
「あら、全部読み終わったみたいね。どうだったかしら？」
「何か、悪役の女の子はお風呂に沈められたって感じがする」
石山さんが、俺の言葉にキョトンとした表情になった。
「？　お風呂に沈る？」
どうやら、意味が分からないらしい。
まあ、元男と言っても女子高生な訳だし、あまり深く突っ込まない方がいいな。
それに、確証があるわけじゃないし。
「ああいやその……知らないならいいんだ。知らないなら……」
無知な石山さんを尻目に、俺は慌ててごまかす。
うむ、大学生と高校生とはいえ、やられっぱなしだった俺が知識で勝つと何だか気持ちいいな。

# 都会の2人旅　幸子サイド　中編―2

「で、物語一つ読了したところでさっきの話に戻るけど……幸子さんは、まだスカートで外出したことはないの？」
石山さんが、またスカートの話をしてくる。
「あ、ああ……普段着もまだ……こんな感じだ」
まだスカートには、早いと思う。
色々な意味で、自分にはまだまだなのだ。
「幸子さん、意地を張っちゃだめよ。それに、スカート、それも膝より上の短いのでで一日過ごしてみて？」
しかし、こちらの事情はどうあれ、石山さんはまた促してくる。
どうやら、スカートの中でも短いものを穿かせたいらしく、さすがにしつこいと思う。
「な、なんでそんな執拗に……スカートはかない女だっているだろ!?」
思わず、強く言ってしまう。
「そりゃあおばさんのミニスカートとか痛いわよ。でも、あたしたちはおばさんになる事はないのよ。かわいい女の子は相応にかわいく振舞わないといけないのよ」
石山さんが、また同じような話をする。
かわいい女の子はかわいく振る舞うべきだという、
たしかにその通りだと思うけど、それでも当事者としては話は別だ。
「だからどうして？」
だからもう一度、俺は問い詰める。
石山さんも、少しだけ考え込んでいる。
「それはね……変質者が寄ってくるからよ！」
石山さんが、意外な返答を出してきた。
スカートじゃないと変質者が寄ってくるってどういうことだろう？
「え!?　どうして!?　普通狙われるのは派手な格好する人でしょ？」
もちろん、とっさに思いつく反論をする。

しかし、石山さんは静かに首を横に振ってきた。
「もし満員電車にあなたとあたしが乗ったら、痴漢常習犯の１００人中９９人はあなたの方を痴漢しようと思うわよ」
いや、そうじゃない。
「だからどうしてそんなことが言えんだよ!?」
質問に一切答えていないせいで、思わず雑な声が出てしまう。
「こら！　言葉遣いちゃんとしなさい！」
「ど、どうしてそんなことが言えるのよ!?」
石山さんに怒られて、とっさに言葉遣いを治す。
うー、すっかり癖になっちゃった。
「よろしい、じゃあ暗示をかけてね」
「わ、私は女の子……私は女の子……女の子らしい言葉遣いをしなければならない……」
ちゃんと声に出して暗示をかける。こんなのを続ければ状況が改善するのかな？
あーでもちょっと改善してるのかも、気付かないだけで。
「うんいいわよ。じゃあ話の続きをするわね……痴漢はね、叫ばなさそうな女の子を狙うの。地味な格好でおとなしく、化粧もしていない人を狙うのよ。自己主張が弱いと見られるから、漬け込まれるわよ」
石山さんが、痴漢されやすいタイプについて話す。
「じゃあ逆に、ミニスカートで髪染めて、厚化粧なら痴漢されないのか!?」
石山さんの話が正しいとすると、当然の疑問。
「ええそうよ。あたしも一回、制服のスカートを短くし忘れて、しかも運が悪いことに電車が遅れてて混んでいたものだから……やられたわ」
うええ、石山さんも痴漢された経験があるのかよ。
まあ、仙台は東京みたいに人だらけってわけじゃない
「で、でも……痴漢なんて……！」
もちろん痴漢があるのは知っているけど、現実感がなかった。
「女の子なんだから、常にそういうのを警戒しないとダメよ。それと

も痴漢されたいの？」
石山さんは体験者だからか、やはり痴漢についてはうるさい。
「ああいや、その……は、はい……気をつけます……」
とりあえず、ここはうなずいておかないといけない。
実際、かわいいのに気が弱いとか、「痴漢してください」って言っているようなものというのは、分かる。
「もし改まらないようなら、スカート以外の服も隠してもらうわよ」
石山さんに脅される。
どうやら、服装に関しては更に厳しくなったらしい。うー、怖い。
「わ、分かったよ……」
「さ、ほかにも漫画を読みましょ。少女趣味は楽しいわよ」
そう言うと、石山さんが席を立った。
そして、しばらくすると石山さんが、また少女漫画を持ってきた。
「はーい！　新しいの持ってきたわよー」
そして、石山さんに渡された
少女漫画の女の子は、健気でかわいらしく、儚げな女の子で、一方でヒーロー役の男の子はかっこよく凛々しく書かれている。
そして思ったのは、女の子の心情描写がとても多く、また、恋する乙女は顔を真っ赤にしがちということだった。
「これも恋愛もの……」
最初の話を見ただけで、恋愛ものだと分かった。
石山さんも、黙々と少女漫画を読んでいる。
それにしても、恋愛物が多い。
単行本の後ろのあらすじを見ても、恋愛者ばかりになっている。
「ねえ石山さん」
「ん？　どうしたの？」
自分と同じように少女漫画を読んでいた石山さんに声をかける。
石山さんは本から目をそらしてこちらに目を向けてきた。
いちいち仕草がかわいい。
「少女漫画って、どうしてこんなどれもこれも恋愛ものばっかり何だ!?」

「うーん……」
石山さんは顎に人差し指を当てて天井を見つめながら考えている。
どうやら、石山さんはだいぶ悩んでいて、どうやらかなり難しい問題らしい。
まあ確かに、石山さんはＴＳ病になってそこまで日が深いわけでもないし。
「そうねえ……女の子は色恋沙汰が大好きなのよ。少女漫画だけじゃないわ。女性誌でも彼氏に好かれる服装とか、芸能人の恋愛スキャンダルとかばかりよ」
確かに、そんな感じがしないでもない。
でも、まだ実感が沸かない。
「そ、そうか……石山さんは？」
石山さんについても、よく知りたい。
余呉さんと違って、女の子になったばかりだし。
「うん、浩介くんと恋愛するのも楽しいし、クラスの女の子の恋の話も大好きよ」
石山さんもやっぱり、恋愛が好きらしい。
うーむ、女の子度が高まると、そうなるんだろうか？
「そ、そうなのか……ともかく続きを読んで見る」
とりあえず、漫画の続きを読めば何かが分かるはずだ。
恋愛のムードもよく進み、そろそろ終盤というところだけど……
な、なんか雰囲気があっち方面に向かってる！
「うっ……！」
思わず、声を上げてしまった。
そこには、明らかに「しています」という絵が描かれていたからだ。
明らかに、「少女」と呼ばれる年齢の女の子が読むようなものではない。
「な、なあ……これ……本当に少女向けなのか？」
石山さんに思わず訴える。
「うん、女の子向けの漫画だよ」
石山さんは、ニッコリと笑っている。

どこか「してやったり」と言った感じも含まれている気がする。
「でもこれ……少女漫画の方が過激な気がする……」
少年向けでこんなのを描いたら問題になりそうだ。
確かに際どいシーンが多い少年漫画もあるけど、この少女漫画ほどではないことだけは分かる。
「でも意外とあっさりしてるのも少女漫画の特徴よ」
石山さんはあっけらかんとしている。
「た、確かにそうだけど……」
確かに、ページ数だけで言えばそこまで多くない。
「女の子の恋愛とエロを知るのも大切なことよ」
石山さんの真意は分からないけど、ともかく女性の感性を叩き込むことが、今の自分達にとって極めて重要な課題になっているのもまた、事実だった。
少女漫画の単行本を読み続けて分かったのは、1巻を読む時間が明らかに少年漫画よりも長いということ。
まあこれは、週刊誌の連載との違いもありそうだけど。
「それにしても、少女漫画は読むのに時間がかかるなあ……」
「ふふっ、女の子の心情描写が多いものね」
確かに、言われてみれば、主人公の女の子の「心の声」の描写が多い。
それを読むために、必然的に「読書」する割合が高まる。
「さ、楽しい時間だけど、そろそろ時間も意識してね」
「あ、ああ……」
ともあれ、少女漫画の読書を続ける。
そうこうしていると、石山さんが席を立った。
どうやら、そろそろ時間らしい。
少女漫画を読んだこともなく、ゆっくりと読んでいたため、時間が経つのは意外と早かった。
短編の少女漫画を中心に読んだためか、どれもこれも恋愛ものばかりだった。
女の子がかっこいい男の子に恋をする。

恋愛対象の男の子はかっこいいだけではなく、強く凛々しく、それでいてお金持ちのケースが圧倒的に多い。
よく言われる、「男は女を守るもの」というのも、この少女漫画からは容易に想像が出来た。
その後も、少女漫画を読み終わると、石山さんが「そろそろ」と言うので、漫画喫茶から出ることになった。
「さて、次は東池袋に行くわよ」
「い、池袋？　何で？」
「あたしたち女の子だよ。秋葉原の電気街もいいけど行くなら乙女ロードでしょ？」
「あ、ああ……」
石山さんが示したのは、またしても女性向けという色合いの強い場所だった。
女子の多い空間は、もちろん未経験だった。
「心配しないで、あたしも初めてだからね」
「余計に不安な気がする」

「幸子さん、こっち」
「うん」
やっぱり、石山さんはすごい。
緑色のきれいなワンピース姿と、きれいで長い黒髪に頭の白いリボン、俺にはこんなおしゃれは、真似できそうになかった。
俺たちは、切符を買って今度は「山手線」に乗った。
ここからは池袋まで４駅で、そのまま東に進むことになった。
池袋には他にも様々な観光地があるけれど、今回は乙女ロードに絞るという。
石山さんが地図を見ながら、俺を案内してくれる。
とにかく、東京というのはその規模に圧倒されっぱなしだ。
「さ、ここからが乙女ロードよ。うん、あたしも来るのは初めてだわ」
とにかく女性の人通りが多い。
ただ、何故か俺たちはかなりの注目を浴びているような気がした。

「色々なお店があるね」
「すげえよ、お……あたしの地元じゃそういうのあんまなくて」
　というよりも、ここまで女性に寄った場所というのも全国的には珍しいんじゃないかな？
　ともあれ、石山さんいついていき、女性向けのものがたくさんありそうなお店へと入っていく。
「ねえあの２人……」
「うん、あそこまで服が違うのって珍しいよね」
「緑の人は気合入ってるよね」
「というか、かわいいし胸でかいし絶対彼氏いそうじゃん？　何でこんな所にいるのよ」
　また噂になる。そして内容はさっきと同じ。
　石山さんがお洒落でかわいく、俺の方はセンスがない。
「ほら幸子さん、服のセンスであれこれ言われてますよ」
「ううう……」
　こう何度も言われると、さすがに落ち込む。
　うーん、正直そこまで言われてもノーダメージなはずなんだけど……
「女子は正直だからね。さ、エレベータに行くわよ」
「う、うん……」
　石山さんの案内で、４階へと向かった。
　そこは少女漫画とかＢＬ系の漫画とかが大量にあった。さっきのネットカフェと全く同じだ。
「ねえ、この男同士って……」
「あーうん、ＢＬはあたしもよく分からないんだよ」
　石山さんも、どうやらそこまでは行ってないらしい。
　少しだけ安心した。
「でも、ホモが嫌いな女子なんていないって話もあるけど」
　昔、そんな話を聞いたことがある。
　本当かは知らないけど。
「うーん、好き嫌い以前に判断できないって感じかな」

石山さんも、何やら考え込んでいる様子だった。
それよりも、館内の人の男女比を見てみると、店員さんを除けば……いや店員さんも含めて、ほぼ全員が女性だった。
さっきの場所は、女性専用以外には男性もいて、ここも特に「女性専用」というわけでもないのに、こっちの方が「女性だけ」という雰囲気が強かった。
「見事に女性ばかりだね」
「そりゃあそういう場所だし」
石山さんも、それを意図してここに来たことは知っているため、意外とあっさりとしていた。
ここでは色々なコミックが売っていて、石山さんは少女漫画を買い物かごに入れていた。
「幸子さんは何か買わないの？」
石山さんが、何も買おうとしない俺に声をかけてきた。
いや特に必要なものないからねえ……
「ああいや、その……まだよく分からないというか」
「ふふっ、しょうがないわね。でもこういうのを買えるようになると世界が変わるわよ」
石山さんの言葉の一つ一つ、私をなんとかしようという思いは伝わってくる。
だけど言う慣れば、それまでということもできる。
ともあれ、石山さんがレジで会計を終えると、この階では用無しになった。
うーんそれにしても、何だか女性の視線がひどく突き刺さる気がする。
おそらくだけど、彼女たちとしても、噂話まではしなくても、石山さんとの服装の差が、何か良からぬことを連想しているのかもしれないよなあ……
４階での買い物を終え、再び１階へ。そこにはガチャガチャがある。
「今日の記念に何かプレゼントしてあげるよ」

石山さんが、突然そんなことを言いだした。
「ああ、うんありがとう……」
突然のことで対処できなかったが、どうやらガチャを回してくれるらしい。
うーん、何だかよくわからないや。
「はいこれ。よく分からないけど」
って、石山さんもかよ!!!
「あ、ありがとう……」
どうやらストラップらしい。
うーん、つけていてもなあ……家の中で肥やしになりそうだ。
「さて、もう少し楽しもうか」
ともあれ、石山さんの言われたとおりにここを探検してみることにしよう。
「う、うん……」
「幸子さん、どこ行きたいとかあったら言ってね」
「は、はい……」
と言われても、全くわからない。
石山さんも手探りだし、しばらく手探りが続きそうだ。

# 都会の2人旅　幸子サイド　後編

石山さんが少女漫画を数冊買い、鞄に入れると、このビルから出て、乙女ロード探検になった。
「石山さん、これって？」
写真の中でタキシードを着た男性が数人、いかにもなポーズを決めていた。
「どうやら、執事喫茶みたいね。あたしもよく分からないし……彼氏もいるからやめておくわ」
「ああ、そうだな」
石山さんは彼氏持ちだ。
俺も元男だから分かるが、男は自分の女について他の男に敏感だ。
そうした臭いをつけると、男は嫉妬に狂ってしまう危険性がある。
もちろん、石山さんの彼氏さんがそこまで見抜くとは思えないものの、関係維持には、こうしたことは関わらないのが鉄則なのは俺にはよく分かった。
「幸子さん、あたしたちは女の子になると言っても『元男』という事実は消えないわ。うちの会長だってそうよ。だから、そのことはメリットはメリットとして、存分に活用するといいわよ」
「はい」
石山さんが言うことはもっともだった。
そう、男心がわかるというのは、女になってからの恋愛では、逆に強力なアドバンテージになる。
「さ、次に進むわ。次はいよいよ女湯よ」
「……はい」
とうとう、この時がやって来たと俺は思った。
女湯に入るのは、もちろん俺が石山さんと一緒に東京に来る大きな目的でもある。
「さ、地下鉄に進むわよ」
「はい」
東京の地下鉄は複雑だ。

仙台は南北線と、最近開業した東西線の２路線だけだし、後はＪＲは東北本線と利府支線と呼ばれる短い路線に、震災から復旧した石巻に向かう仙石線、山形までの連絡線として仙山線、後は仙台空港に鉄道が延びているくらいだ。
バスは市内を縦横無尽に走ってはいるが、それは東京とて同じこと。
それを鑑みれば、この東京という街は異様極まる。
新宿駅も池袋駅はもちろんのこと、さっき新幹線を降りた大宮駅でさえ、仙台駅よりも人が多いとさえ思う。
石山さんに導かれ、俺は再びＩＣカードをタッチして地下鉄へと向かう。
「ふえー、東京の地下鉄って凄いな」
見るからに圧倒される駅と路線の数、しかもそこにはＪＲが入っていないし、更に東京周辺の鉄道まで入れたら、把握している人がいるのかどうかさえ怪しいレベルになってくる。
それだけ、東京の人の数は仙台とは比較にならない。ということだろう。
「あはは、この路線図覚えている人なんてほとんどいないわよ」
「お……私の地元は最近『東西線』が出来ただけで後は『南北線』があるだけよ」
まだ、言葉遣いはぎこちない。
「随分とシンプルだよね」
大都会というのは、どうにも好かないものだ。
「というか、首都圏が異常なだけでしょ？」
「あはは……」
電車は順調に路線を走る、面白いのは、東京の地下鉄は中心にある「皇居」を避けている。
恐らく、「通らない」というよりは「通れない」というのが正解に近い印象を受けた。
「へえ、幸子さんはそっちをよく使うんだ」
俺たちは、バスや車といったのが多い。

もちろん、地下鉄もよく使うけど。
「そそ、車は必須だしバスも便利だよ」
「次は、新橋、新橋です。乗り換えのご案内です――」
「幸子さん、乗り換えるよ」
石山さんがそう指示し、俺は石山さんの後ろについていく。
石山さんも石山さんで、駅構内の案内図を見ながら、進んでいく。
うーむ、やはり東京レベルの複雑さは当地の人でも中々把握しきれないらしい。
それでも、俺に比べれば遥かに人混みには慣れている感じだった。
地下鉄を乗り換えて次の駅でまた乗り換えるという。
今度は地下鉄ではなく、「新交通システムゆりかもめ」という路線に乗るらしい。
「こっちね」
駅から少し外れた場所で、俺たちは「ゆりかもめ」の乗り場に到着する。
駅は見た感じ無人駅で、これだけの人でごった返す東京には、あまり似合わない空気を感じた。
「石山さん、これってモノレール？」
石山さんに質問してみると、石山さんも首を傾げていた。
まあ、首都圏に住んでいるから東京住みってわけでもないだろうし。
「うーん、あたしもモノレールって生ではほとんど見たことないからわからないや」
ホームへ進むと、タイミングが悪いことに、俺たちがホームに到着すると同時に、電車が発車していた。
そして見てみると、車両の後方には誰もいなかった。
つまり、俺達の地元や地方だけではなく、東京にもワンマン運転があるらしい。
「ねえ、さっきの車両、車掌が見えなかったけど、東京でもワンマンってあるの？」

「え!? ワンマンって何のこと?」
石山さんは、意味が分からなかったらしい。
無理もない。
「ああうん、車掌がいなくて運転士一人で運転する列車のことを言うんだよ」
「うーん、あったようななかったような……」
まあ、石山さんはそもそもワンマンの意味も分からないわけだから、質問に答えようとしても意味ないっぽいけど。
俺の住む仙台市では、東北本線の、特に小牛田方面を中心に、ワンマン運転の列車が運行されている。
さっきの地下鉄といい、地方都市と東京にギャップを感じるなあ。
まあ、お互い若いし、そんなもんかも知れねえな。
「うーん……まいっか」
ともあれ、記載の電光掲示板の案内にある次の普通列車の豊洲行きを待つことにした。
他の案内を見た感じでは、特に快速や特急といった列車は走ってなさそうだ。

そうこう待っているうちに、次の列車が来た。
やはり、東京は来るのが早すぎる。
それだけ乗る人が多いということだ。
「!?」
俺たちは、2人して驚かされた。
何せワンマンどころか、運転士さえも乗ってない様子だったからだ。
「びっくりしたよ。まさか運転士さんまでいないなんて、東京はハイテクだね」
いくら人件費がきついと言っても、運転士までいないような列車は地方にもない。
「あーいや、うん。多分ここだけだと思うよ」
やって来た電車の、一番前を陣取ることが出来た。

レールは特殊な形で、高架というよりは「浮いている」という感覚に近かった。
やがて電車が発車するという自動アナウンスと共に、扉が閉まり、ひとりでに動き始めた。
「次は、汐留――」
アナウンスも自動で、乗組員は0、駅も無人という徹底ぶりで、俺は緊急時が不安になる。
本当に、大丈夫なのだろうか？
「でもここ、高所恐怖症には厳しいよね」
「うんうん」
石山さんと離しながら、やがて幾つかの駅を通りすぎると、目の前に海と共に、巨大なカーブが見えてきた。
「ねえ石山さん、これって……？」
「何だろう……わあ！」
恐らく、勾配を緩やかにするための工夫だろう。
大きく270度回転するパノラマはとても優雅で、そしてそのまま橋の下へと差し掛かった。
「あ、ここに出るのね！」
「え!?」
石山さんは、「あの場所」と言った感じ。最も俺にはよくわからない。
「レインボーブリッジだよ」
その名前は、俺にも聞き覚えがある。
確か――
「あー、昔何かで封鎖せよとかやってた!?」
「???」
また、通じなかった。
石山さんは俺よりも2歳年下な訳だけど、実際古いネタなので、2歳の差は大きいのかもしれない。
「あー知らないならいいよ。わ、私も子供のころだったし」
何とか女の子っぽい言葉を維持しながら、慌ててごまかすことにし

た。
　そのまま、海の見える場所を通る。
　ここがお台場だというのは、いくら東京に疎い俺でも分かった。
　その後、数駅過ぎて、石山さんが降りると言ってきた。
「ふー着いたね」
「よし、行こうか」
　ここまで来てしまった以上どうしようもない。
　それに、俺が東京に来たのも、もっと俺に女として生きていく覚悟を求めていたからだった。
「あ、見て！　あれじゃない？」
　少し先に、大きな建物が見える。
　多分あれが、温泉施設だろう。
「うん、じゃあ行こうか」
「ね、ねえ石山さん」
　うー、やっぱり近くになると、二の足を踏んじゃうよなあ……
「ん？」
「どうしても、風呂に入らなきゃダメ？」
　最後のあがきを試みてみる。
「当たり前でしょ。ここに来なかったら、何のためにあなたを東京まで呼んだのか分からないわよ」
　石山さんは、即答だった。
「でも、お、女湯なんて……！」
　女湯、裸の女性がそこかしこに跋扈している中に、これから放り込まれるのだ。
　不安だらけだ。
「もう！　女の子が女湯に入って何が悪いのよ!?　それともその体で男湯に入るつもり!?」
　また石山さんに怒られてしまう。
「ああいやその……」
　実際の所、私の行動を不審に思われないか心配でもあって……
「そんなことしたら通報されるか、はたまた男たちに囲まれて、レイプ

されるわよ」
しかし、この姿で男湯はもっとヤバいことくらいは分かる。
「うぐぐ……！」
なので結局、こうやって言い負かされてしまうのだ。
「さ、入るわよ」
石山さんはまた迫ってきた。
「はーい……」
でもやっぱり、まだ決心がつかないのは事実だ。
俺たちは、温泉施設の中に入っていった。
「そうだったわ、まさかとは思うけど男物の下着とか穿いてないわよね!?」
石山さんが、いきなりぐいっと言ってきた。
「当たり前だろ！　全部隠されちゃったし、それに、穿き心地がいいし……」
もちろん、そんなことしたらひっぱたかれると分かっているし、第一あの日以来男の下着は穿かなくなってしまった。
「うん、よろしい。じゃあ行こうか」
下着については、結局負けを認めざるを得なかった。
「う、うん……」
そして次に行うのが――
「いらっしゃいませー！」
「学生２枚」
また、石山さんが払ってくれた。
「学生２枚ですね。料金はこちらになります。ご利用の際にはチケット裏面の利用規約をよくお読みください」
「まずはあちらの更衣室でお靴をお預けになって、お好きな館内着にお着替えください」
「はい」
ついに、女子更衣室の目の前に来てしまった。
というか、女湯の前にこの難関が、いや女湯よりはマシだけどうぐぐぐぐ。

「どうしたの？　入らないの？」
「え!?　あ、うん……」
石山さんに、腕を引っ張られる。
うー、結局拒否権はない。
「さ、レンタルの浴衣よ」
石山さんが押し付けてきたのは「当然でしょ？」と言わんばかりのピンクの、これでもかと女の子を強調した浴衣。
「うっ……ちょっと派手すぎない？」
「あたしもおしゃれするんだからつり合い取らないとだめよ」
少しだけ抵抗したが、結局押しきられるがままだった。
そしてその次の部屋が、女子更衣室になっている。
「っ!!」
ごくりと唾を飲み込んだ。
女子更衣室は、当然女子が服を脱ぐ。
この温泉は若い女性にも人気で、女の子たちが下着姿になり、雑談しながら浴衣を着ていた。
俺には、刺激があまりにも強すぎた。
「さ、幸子さん行くわよ」
なるべく石山さんを見るようにしながら、指定されたロッカーの前に進む。
「えっと――」
「はいこれ」
石山さんが白い布を出してきた。
石山さん曰く「襦袢」という和風用の伝統的な下着になるという。
どうやら「パンツやブラジャーは使えない」らしい。
「え!?　ノーパンノーブラなのかよ！」
正直、女物下着より厳しい条件だ。
「しーっ声が大きいわよ。ともかく、これに着替えること」
石山さんが事も無げに言う。
「えー」
「着替えないと楽しめないわよ」

だけど、周りの女子を見ると、そんなことはない。
うー、刺激が強い。
「だって、周りはそんなの気にしてないよ」
「だめよ、はしたない人に合わせちゃいけません」
石山さんがピシャリ。
「うー」
「いい？　まずこうやって……！」
洋服前提の下着を穿くと、体のラインが浮き出てみっともないと言う。
石山さんは、細い紐を取り出してブラジャーを脱ぐ。
「い、石山さん、すげえ大きい……」
「ふふん、あたしの自慢なのよ。でも今は、和服だからこうやって封印するの。幸子さんはなくてもいいわよ」
晒で胸を潰しながら、石山さんが説明してくれる。
「そ、そうなんだ……」
「ほら、幸子さんも着替えないと、余計に恥ずかしくなるわよ」

「うー、でも……女物穿いてるとこ見られたくない」
「何を言っているのよ。この後は素っ裸になって温泉入るのよ」
「うー」
「とにかく、着替えないといつまでも先に進めないわよ」
「は、はい……分かりました……」
俺も意を決して、下着姿から服も全部脱ぎ、そこから襦袢と浴衣の順番に着ていく。
「ふう」
石山さんは、少し厳しい目で俺を見ていた。
そして案の定、「着替え方がはしたない」とお説教されてしまった。
「女子力は面倒くさいものよ。でも、だからと言ってだらけてたら、女の子としてドンドン堕落していくわよ。そんなことになったら、せっかくのかわいい顔が台無しになるわよ」
「女子力ねえ……女って大変だなあ……」

正直、気が重くなる。
「幸子さん、決して他人事じゃないわよ！　あなたも女子なんだから女子力高くないとダメでしょ……あたしもそこまで人の事言えないけどね」
「え!?　石山さんでも？」
石山さんのいつもの説教の後、意外な言葉を口にして、俺も驚いてしまう。
正直石山さんほど女子力高い女子っていないと思うけど。
「ええ、今は落ち着いたけど、特に８月の林間学校くらいまではよく『優子ちゃんは女子力低い』ってクラスの女子にお説教されたわ」
まあ、生まれつきの女の子というわけではないから、そのあたりはまだまだなのだろうか？
「でもよ、もうすぐ１２月だろ？　やっぱそれだけ時間経てば違うんだろ？」
とりあえず聞いてみる。
「ま、まあね……それから、暗示かけなさいとは言わないけど『だろ』じゃなくて『よね』を使うとより良いわよ」
うー、こんなに目ざといのに……
「う、うん……まだまだ修行が足りないなあ……」
「お、幸子さん今すごくいいこと言ったわよ」
石山さんが、急に強く反応してきた。
「え!?　何？」
思わず聞き返す。
「今、『まだまだ修行が足りない』って言ったでしょ？　幸子さんの中で、女として生きることに気持ちが傾いている証拠よ」
さりげなく、無意識に言った言葉に、石山さんは大きく反応していた。
「あ、うん……やっぱり、戻れないんじゃしょうがないかなって……」
その場を、泥縄的に何とか取り繕う。
「ふふっ、どっちにしても、今のはとても大きな一歩よ。その気持ち、

女の子として修行していくって気持ち、絶対忘れないでね」
褒められたのは確かだ。
「あ、うん……分かった、わ」
ともあれ、きちんと応答しておこう。
「ふふっ、じゃあ次の修行に行こうか？」
石山さんが張り切っている。
「え!?　次の修行!?」
もちろん女湯のことだ。
うー、気が重い。
「うん、女湯に入るわよ！」

## 芽生え

「さ、幸子さん、もう覚悟はいいわよね？　今のあなたが男湯に入ったら通報されるか集団で囲まれてレイプされるわよ」
石山さんは、俺を女湯に入れたくてうずうずしている。
うー、さっきの女子更衣室でさえ緊張したのに、女湯にまで入れられるのはやはり心臓に悪いぜ。
「えっとその前に、休憩」
「え？」
石山さんがちょっと面を食らったような表情になる。
「いやその……単純に疲れちゃって」
そう言うと、石山さんの緊張が一気にほぐれた。
安堵の表情を浮かべながら、洋風と和風の休憩所があったので、今回は和風を選択した。
「ふう、そうよね。確かに疲れたもの」
石山さんは、うまく足を工夫しながら伸ばして休む。
俺も、丈が長いとはいえ、はだけやすい浴衣なので、特に注意をする。
実際、今の感じだと、運が悪ければ中身まで見えてしまう恐れがある。

「ねえねえ、あの2人組かわいくない？」
「本当だよな。あ、でも黒髪の子は男慣れしてそう。青い髪の子は原石だよな」

原石、かあ。
今は女の子っぽい感じの浴衣を着ているからいいけど、さっきみたいな地味な格好じゃあ、この評価は得られねえよな。
男たちの品定めの会話を聞きながら、疲れをとりつつ、なおもさっきの陰口を思い出す。
俺のあの服は、センスがないのだと言う。

こうして浴衣で揃えれば、俺の評価も悪くはない。
永原さんや余呉さん、そして今日会った比良さんを見ても、ＴＳ病はかなりの美少女として生まれ変われることは確かだった。
それを思うと、ますますさっきの「センス無い」が胸に響く。
どうして、胸が響くのか、どうしてこんなに心臓が痛いのか、その理由は俺も分からなかった。

「幸子さん、そろそろ行こうかしら？」
「う、うん……」
しばらく休憩した後、俺たちは立ち上がり、「大浴場」のある場所を目指す。
男湯と女湯に別れていて、男湯の場所には、大勢の男性が中に入っていくのが見えた。
不思議なものだ、ついこの間までにはあそこに当たり前に入り、そしてここは絶対に入れない神聖な場所だった。
でも今は、入っていい場所と行けない場所が逆転して――
「幸子さん、もうあなたがそこに入ることは無いわ」
石山さんの無慈悲な宣告のみが、そこに響いていた。
「は、はい……」
他数人の女性と共に、俺は脱衣場の中に入っていく。
最初、「なんだ男湯と変わらねえじゃん」と思った。
だが次の瞬間、女性たちの笑い声や雑談する声が、俺を急激に現実に引き伸ばしていく。
下を向いていると、裸の女性が前を堂々と横切った。
元男の俺に、何の違和感も感じていなかった。
「さ、こっちよ」
石山さんの誘導で、ロッカーへと向かっていく。
ロッカーの前につけば、少しは落ち着くことが出来た。
女湯に必須な、裸の女性というものを、見なくて済むからだった。
「さ、タオルを巻いて、きちんと隠すのよ」
……隠していない人もいたという反論は無意味だろう。

ＴＳ病になったら、大袈裟なくらい女の子を意識しないといけないから。
「さ、脱がないと温泉に入れないわよ」
石山さんが、服を脱ぐようにせがんでくる。
石山さんを見れば、晒しを取り、バスタオルを既に巻いていた。
俺も意を決して浴衣を脱ぎ、襦袢を脱ぎつつ見えないようにバスタオルを巻いてみた。
途中、俺たちを噂していた声も聞こえたが無視することにした。
そして、ついに大浴場に向けての扉に進むことになった。
「っ……」
石山さんに悟られないように、俺は必死で平静を装った。
年齢がいっている女性も多いが、「裸の女性」というだけで、どうしても興奮してしまう。
隣りにいる石山さんの体つきは凄まじく、特に胸のナイスバディぶりは、見ていて清々しくなる。
いや、俺だって胸は大きいんだけど、石山さんと並ぶとそこそこって感じになるんだから恐ろしい。
「さ、ここよ」
かけ湯に足を踏み入れる。
どうやら、前の人が終わり、俺たちの番らしい。
石山さんが、慣れた手つきで体を洗う。
すると、俺の方に渡してきたので、俺も平静を装って体を洗ってみる。
「さ、幸子さん、あたしは髪を洗うのに時間がかかるから、自由行動よ」
そう言うは早く、石山さんはそのまま洗面台とシャワーのある場所へ進んでいった。
「うー」
俺は女湯に取り残されてしまった。
周囲の女性が俺を見ている。そこには願望の眼差しを向ける人や、嫉妬や殺意を向ける人もいた。
しかし、元男の俺を見て、不審者がったり、叫んだりといったこと

はない。
俺は、タオルなどを持って洗面台まで進む。
女性たちの裸は、最初こそ刺激的だったが、あまりの大盤振る舞いに、すっかり目も慣れてしまった。
人間の適応力は怖い。
それにしても、うー、女性の裸に興奮しないって、おばさんとかばかりならともかく、若い女性の多い温泉施設なのに。
俺は色々なことを考えながら、居心地の悪さをごまかしつつ、何とか洗面台の前に到着し、座ってみる。
鏡の中の俺が、複雑な表情で俺を見つめていた。
「ああ……」
水色のショートヘアーに、この世の人とは思えないくらいのかわいらしい顔は、まさに美少女アイドルで、肌は色白ながらも健康的なエロスを感じさせる体型で、石山さんには負けるとはいえ、胸を売りにしたグラビアアイドルに十分なれるくらいに大きな胸、体を洗うために、巻いていたタオルを脱ぐと、タオルの上からでも分かるくらいに魅力的な女体のすべてが鏡に映った。
何度となく、お風呂場で見てきた自分の女体、蛇口を捻ってお湯を出し、タオルにつけて、ボディーソープを染み込ませ、泡立てて丁寧に柔らかい肌を清潔に保っていく。
その所作一つ一つが、まるで絵画のように美しく、全身が泡立ったところで、シャワーの蛇口を捻って洗い落としていく。
泡が全て落ちたら、今度は髪の手入れをする。
髪を洗う時、女の子の髪は男に比べて遥かに丁寧である必要があることが分かった。
俺が思うに、ショートヘアーでも男よりはずっと髪が多くて長く、それだけでも手入れが大変だと思った。
俺でさえそうなのだから、同じＴＳ病でしかも背中まで延びている石山さんはもっと大変だと思う。
最近は少し延び始めていて、おふくろが理髪店に連れていってくれるという。

髪を濡らし、シャンプーを手にとってごしごしと地肌を洗う。この地肌への洗い方が俺には難関だ。
後ろからは、多くの女性が通っているのが見える。
俺が女湯にいても、誰も違和感を感じていない。鏡を見ればそれが当たり前だということが分かる。
俺は、俺は本当に、女しかないのだろうか？　大学生にもなってこうして女湯にまで入れられて、でもって見知らぬ女性でさえ、俺のことをごく当たり前に受け入れている。
髪を流しながら自問自答する。そして最後にボディーソープを泡立てた小さなタオルを洗い流し、次の人のために座った椅子をお湯でさっと流す。この辺りは、男と同じだ。
違うのは、バスタオルで隠しつつ進むこと。
女湯の女性は、隠している人とそうでない人が半々くらいだった。
「ふー」
とりあえず、俺は一番近くにあった「薬湯」に入ることにした。
あまり人気がないのか、そこには誰もおらず、俺は一人だった。
でも今は、その方が都合がいい。とにかく、今の状況をゆっくり整理したかった。
バスタオルを脱いで全裸になってから湯船にゆっくりと浸かる。
どこからか、女性たちが、かしましく世間話をしている声が聞こえた。
目の前を通る裸の女性たちは、俺をごく自然に受け入れている。あたり前のことなのに、心に強く響いてしまう。
俺がここに受け入れられているという事実をもう一度考える。
「ああ、やっぱり、やっぱり、女、なんだよな……」
漫画喫茶の時よりも遥かに強烈に、俺は「女」を刻み付けられている。
女になったら、もう二度と戻れないというのがＴＳ病の鉄則だった。
「それに引き換え、あっちの人はセンス無いわよね……」

脳内に突然、さっきの女性たちの声が響き渡る。
ジーパンとトレーナーだけの、あまりにもラフで女らしさの欠片もない服装の俺と、緑のワンピースに前頭部にちょこんと添えられた白いリボンでおしゃれに決めた石山さんが横に並んでいる姿。

「センス無いわよね」

また頭に響く。気にする必要無いじゃないか。
俺は、俺は本当は男として生きたいんだろ？
……今更のような理論で、さっきの女の声を封じようとする。

「センス無いわよね」

しかし、俺の意に反して、頭の中で声はますます大きくなっていく。
女性たちは、相変わらず俺の存在を気に止めず、たまに俺の大きな胸とかわいらしい顔を見て、羨ましさと嫉妬の視線を浴びせていく。
服を着ていたときにはそんなことは無かったのに、こうして「裸」という「平等」になった途端、女性たちの目付きが変わっていった。

「それに引き換え、あっちの人はセンス無いわよね」

「〜〜〜!!!」
バシャーン!!!
声になら無い声が上がり、俺は腕を振り上げ、湯船に叩きつけて込み上げてくる感情を強引に発散させた。
一瞬、周囲の視線が俺に向けられて、すぐに収まる。
その視線は、俺が男だからではないことは明らかだった。
すぐに、俺に込み上げてきた感情を理解できた。
……そう、これは「悔しさ」だった。
悔しくて、堪らない。何故？　それは「かわいいのにセンスがない」

と言われたから。
石山さんのことを、改めて思い出す。
かわいらしい顔に、女の子らしい言葉遣いに、優子の名前の通り穏やかな女の子で、でも母親としての厳しさも持っていて、おしゃれがとても上手で胸も大きくて。
俺は、石山さんに何もかも負けていた。
スタイルは仕方ないとしても、かわいさも、性格も、魅力も、何もかも負けていた。
もしかしたら、運動神経では勝っているかもしれないが、そんなものにもう、意味を見いだせない。あれほどサッカーに打ち込んでいた日々がもう、夢幻のようで。
この2週間で、「男」という圧倒的な存在を自覚させられ、石山さんに運動神経で勝ったとしても何の意味もないことを痛いほど思い知らされた。
さっきの鏡の中に映った俺を思い出す。
「うぁあああああああああ!!!」
周囲に聞こえない位小さな声だけど、俺は確かに慟哭した。
悔しい、悔しくて堪らない！　あれだけのかわいらしさと魅力を兼ね備えているのに、「センスがない」せいで、彼女に何もかも負けているという事実。自分がブスであることを受け入れることができなかった。
あんなにかわいくてきれいで、そんな自分がブスな訳無い、なのに、あのキラキラ輝く石山さんの前では、救いようの無いくらい惨めな女だった。
もう一度、裸の俺を思い浮かべる。そして、似合う服を着ておしゃれをした俺をイメージする。
……ダメだ。おしゃれを、本格的なおしゃれをした俺がいない。
また悔しさが、込み上げてくる。
それは紛れもない、俺の中で眠っていた「女として」の悔しさ。
女の人格が、自分の中でも芽生えているということに気付いた瞬間だった。

「はぁー」
ため息が、一息混み上がってくる。
俺だって、ううん、私だって、おしゃれすれば、石山さんにも負けないはずなのに。
改めて、あのような格好で来た自分に後悔する。
そして、俺は今の混沌とした気持ちをごまかすために、湯船を立って別の場所に行こうとする。
バスタオルを持ちながら、うまく隠す。お尻は仕方ないにしても、大分様になっている。
相変わらず、胸への視線が凄い。
憧れと嫉妬の視線が、俺に突き刺さる。その度に俺は石山さんを思い出し、また心に悔しさを蓄えていく。
「……」
女として生きること、そのために何をするべきなのか、いくつものお風呂で休みながら、今日一日を振り替える。
石山さんには、女の子らしくないと、色々と説教されてしまった。
男としての自分を振り返る。果たして、今から男に戻れるのだろうか？
いや、医学的にはもう絶対に不可能だ。それだけではない、今こうして、俺は女湯を我が物顔で歩いている。
この状況で、「実は俺は男なんだ」何て周囲に表明して、理解されるわけがない。
「もう、後戻り、出来ねえよな……」
俺の近くでは、若い女性2人組がキャハハと笑い声を出しながら雑談に講じていた。
もちろん、裸の俺がいることには、何の気にも止めていない。全員が俺を、女扱いしていた。
「あ、幸子さん」
突如、石山さんが視界に入った。
そして、俺に声をかけてきた。
「どう？　ここは？」

「うん、気持ちいいね」
「幸子さん、露天風呂行こうか？」
石山さんが、露天風呂に首を向ける。
「あ、ああ……」
二重扉を開ければ、露天風呂に繋がっている。
石山さんの後に自分が続き、冬の冷気をもろに受ける。
俺にとっても、この季節の東京に全裸で屋外にいるのは寒い、でも、俺よりもずっと寒そうにしている石山さんの震えぶりを見て、少し余裕が生まれた。
「きれいね」
「ああ」
西の空にオレンジ色の太陽が沈んでいく。
永原さんは、この夕日を何万回、いや、下手したら何十万回と見てきた。
たぶん俺も、女として生きれば、そういう人生を生きるんだと思う。
「うー」
石山さんが、右肩を押さえている。
どうやら、肩がこるらしい。
確かに、こんなに胸が大きいと、肩がこっても不思議じゃない。
俺は石山さんの肩に指を伸ばし、肩をもいでみる。
「あー、そこ。うーん気持ちいいわー」
石山さんが、やや色っぽい声を出してきた。
石山さんの肩は恐ろしいくらいに固く、頑固だった。
そして、こりを押しているうちにある部分を押すと、まるで肩の中に石が入っているみたいだった。
そこを刺激すると、石山さんは気持ち良さそうにしていた。
やはり、石山さんほどに大きいと、どうやってもこってしまうのだろう。
しばらくし、お風呂から出ることになった。
俺は体を拭き、慎重に服を着直す。石山さんも、晒しを巻くのに苦

戦をしていた。どうやら着慣れてはいないらしい。
石山さん曰く、「晒しは自慢の胸を潰さないといけないし、かといって巻かないとみっともない」と言っていて、和服がやや苦手な様子だった。
「ふう、幸子さん、これであなたはもう男に戻れないわね。女湯まで入っちゃって今更男には戻れないわよ」
俺が決意を話そうと思った矢先に、石山さんがそう切り出してきた。
うじもじしていたが、俺にも俺で言わなきゃいけないことがある。
「ね、ねえ石山さん、そのことで話があるんだけど」
「うん？」
「わ、私！　その……女として、女の子として生きていきたい！」
想いを、伝えた。
石山さんが、とても嬉しそうな顔をした。
「うん、でもどうして幸子さんはそう決意したのかしら？」
当然の質問をしてきた。
もちろん、答えは決まっている。
「お風呂に入っていて、疑問に思った。今の自分が何者なのか？　もし男なら、女湯に入った途端叫ばれて逮捕されているはず」
「うんうん」
石山さんは、優しそうな表情で俺を見つめていた。
「そしたら、あの時センス無いって陰口を叩かれたのが急に悔しくなった。自分だって、おしゃれすれば負けないって思ったのに」
石山さんが、これ以上無いほどに柔らかく、天使のような笑顔になった。
それはもう、素晴らしい程にきれいだった。
「それで？」
「だから私、どうせもう戻れないなら、女として、女の子として生きていくから」
「幸子さん、その気持ちを忘れなければ、最後にあなたは救われるわ」
その後は、お寿司を食べ、またクレーンゲームで記念品をまたも

らった。お菓子は、一部はその場で食べたけど、残りは帰りの電車で食べよう。
それにしても、甘いものってこんなに美味しかったんだな。
「さて、帰りの新幹線もあるし」
「うん、そろそろよね」
石山さんとの遊びも、これでおしまい。
俺はまた、元に戻らないといけない。
今はもう、あんな地味な服装で来たことを心の底から後悔していた。

## 本来の姿

「ねえ幸子さん」
「ん？」
　石山さんが、自分にふと声をかけてきた。
「着替える前に、さっきの決意のことでちょっといいかな？」
「え!?」
「幸子さん、女の子になってくれるって言ったでしょ？　実はね、幸子さんの服、1セットだけあたしが預かっておいたのよ。はいこれ、帰りはこれを着ていって？」
　石山さんがロッカーからもう1つ服を出してきた。
　石山さんが渡してくれた服は、青い色のワンピースのスカートだった。
　その上には、大小2つのリボンがあって、小さな赤いリボンが胸に、大きな黄色寄りの黄緑色のリボンは、頭部につけると良さそうな感じだった。
「え!?　これ!?」
「そうよ、ロッカーの中にあるのじゃまた『センス無い』って陰口叩かれるでしょ？」
「う、うん……！」
「じゃあ着替えるわよ」
　ついさっきまで、スカートを嫌がっていたことが信じられない。
　今はもう、このかわいらしいスカートを穿きたくて穿きたくて堪らない。
　まず浴衣を脱ぎ、襦袢だけになる。さっきのお説教を思いだし、裸を見せないように注意する。
　ワンピースのスカートに足を通す。そして服の中でもぞもぞしながらじばんを脱ぎ、まずパンツ、続いてブラジャーを服の中でつける。うー、面倒くさいけど、無闇に見せちゃうのはもっと不味いもんなー
　ブラジャーをつけたら、防寒も兼ねたインナーシャツとその上にワイシャツを着こんで、ワンピースの背中の小さなファスナーをゆっく

りと引き上げる。この辺りは、ブラジャーの付け替えで大分慣れた。
そして、小さな赤いリボン、ワンピースのポケットに入っていた紙によれば胸元に蝶々結びにするとあって、ワンピースにもリボン用と思われる部分があったので、そこに通しつつ、蝶々結びを完成させる。
もう1つの大きなリボンは髪の毛に挟むようなヘアピンが中にあったので、それを使いながら、ロッカーにあった小さな鏡を参考にしつつ、何とかまっすぐに揃えた。
スカートはすごくスースーする。でも、今の自分はとっても晴れ晴れと、開放的な気分だった。
元の服は、荷物の中に押し込めることにした。
もう、こんな地味な格好はしないと思う。
「うん、まだちょっとぎこちないけど、今はそれでもいいわよ」
石山さんの目は、まるで母親のようにどこまでも優しかった。
「は、はい……！」
緑のワンピースに着替え終わった石山さんは、相変わらずきれいだった。
「終わったよ。行こうか」
「うん」
少し動くと、やっぱり足元がぎこちなくなってしまう。
「どう……かな？」
自分からは、相手の全身は見えない。
「うん、すごくかわいいわよ。ほら、あそこに鏡があるから見て見てよ？」
「う、うん……」
石山さんに体を掴まれ、備え付けの大きな鏡の前に移動させられる。
見るもの全てを奪いそうなくらいにかわいらしく美しい、青と緑の少女が2人、緑の少女が、鏡から外れた。
「これが……お……れ!?」
鏡の少女は、自分自身の姿に呆気にとられていた。

「俺じゃないわよ。幸子さん、あなたよ」
石山さんの優しい声が聞こえてくる。
青い色のワンピースに目立つ胸元の赤いリボン、青い服装によく似合う青い色のショートヘアー、更に後頭部につけてあった大リボンに、幼さと美しさとかわいらしさが、この上なく絶妙に配合された顔とをあわせて、まるで妖精みたいだった。
「あ、うん。これ、私だよね……うん、私は女の子……私は女の子……」
心から念じ続ける。
女の子が喜びになっていく。
もう一度石山さんを見る。
やっぱりまだまだ、石山さんには叶わないと思っている。石山さんほど、女の子になった日数は長くないから。

「ねえねえあの2人」
「うん、すごいよね、モデルか芸能人じゃない？」
「でもあんな顔テレビで見たっけ？」
「見かけないわよね。特に緑の子は胸もすごいし」
「あんだけ大きければ目立つけど……やっぱり普通の人じゃない？」
「うーん、そうだよねえ。街でスカウトとかされないのかな？」
「しょっちゅうナンパとかされてそう」
「うんうん、ああいう美人は美人で大変なのよね」

別の女性たちの会話が聞こえてくる。
さっきとは対照的に、俺は石山さんと共に誉められている。
心の奥底で、強い強い自尊心が涌き出てくるのを感じた。
つい今朝までは、「かわいい」と言われてもちっとも嬉しくなかったのに、今はもう「そうでしょう？　かわいいでしょう私？」って、周囲に言いふらしたくてたまらなくなっていた。
「石山さん、その……私達……」
「うん、幸子さんもあたしと並んでも恥ずかしくないでしょ？」
正直それはまだ、自信がない。

「う、うん……でも、普通の人って……」
「あはは、あたしたち、確かに普通じゃないわよね」
「じゃあ行こうか」
「うん」
石山さんに導かれ、外に出る。
外は暗くなっていて、足元が寒く、一瞬だけさっきの服に戻りたくなったけど、石山さんの緑色のワンピースを見て思い止まった。
帰りのゆりかもめがやって来て、車窓を眺めるとそこには東京の夜景が彩られていた。
お台場ということもあって観光客も多く、外国語も聞こえてきた。
石山さんは気付いていたかは分からないけど、外国人の何人かは、あたしたちの胸に釘付けになっていた。
また、自尊心が込み上げてくる。それも、さっきの女性2人組に誉められた時とは比べ物になら無いくらいに。
「うわー、すごいねえ東京は」
「うん、さすが日本の首都って感じだよね」
石山さんと、他愛もない話をする。
今まで押さえつけられていたためか、私の中の自尊心は急激に込み上げて来て、今にも噴火しそうな勢いを見せている。
「やっぱりこれって坂道の都合なのかな?」
「うーんよく分からない」
再び、レインボーブリッジのループ線に向かい、やがて列車は新橋駅に到着した。
車内は、混んでいた。
「ふう、結構疲れたね」
「そうだね。温泉でちょっと疲れは取れたんだけどねえ」
「立ちっぱなしかあ……」
やっぱり、結構揺れるし疲れる。
「でも、この長さだから良かったけど、短いスカートでいきなり座るのはちょっとハードル高いかも」
「ああうん、そうだよね」

そういう意味でも、これで良かったのかも。
俺は、予定されていたように、新橋駅の券売機で、上野駅からの新幹線指定席を買う。
どうして東京からじゃないのか聞いた所、「東京から乗ると高い」らしい。行きも行きで大宮で降りていたし、そういうものなのだろう。
うん、日曜日の混む時間帯だけど、空いていてよかったわ。
「じゃあ、ここで解散だね。今日はありがとう」
きっとこれからもお世話になる石山さんに、お礼を言う。
「ねえ幸子さん」
「ん？」
石山さんも、言いたいことがあるらしい。
「お母さんがもしあれこれ言ってきたとしても、絶対に決意を曲げないでね」
「もといそのつもりだよ」
うまく行けば、ちゃんとやれる。
それにもう、やっぱり聖域に入ったら、もう戻れないという思いが強い。
「うん、だからその服を、幸子さんに渡したの。お母さんには必ず、カリキュラムの教育係になって欲しいから」
「うん、じゃあ」
「またね」
石山さんと別れ、別の電車へと乗る。
私は、遊び疲れた人たちが駅に向かう中、俺も群衆に紛れ、「上野方面」のホームへと向かうことにした。
男性たちの視線が、一手に集まるのを感じた。
石山さんに分散されていた胸への視線、よく見ると周りの女性よりもずっとおしゃれに決まっていて、男たちの注目を集め続けていた。
「ああ、気持ちいい」
独り言が、つい漏れてしまう。
自尊心が更に満たされ、優越感が込み上げてくる。
女性の一部から、きつい嫉妬の視線を浴びせられるが、それさえ快

感に感じてしまう。
自分の中に眠っていた「女」が、急速かつ大胆に顔を出してくる。
男性からの注目により快感を感じているという事実は、俺を容赦なく女へと引きずり込んでいく。
電車の中でも「うわー、あの子、どこのグループだろ?」という声が聞こえてくる。
完全に、アイドル同然だった。
……アイドル、悪くないよな。
そう、今や自分はどのグループでアイドルをしても、絶対にセンターを取れるという確信さえあった。
そこまで考えて、ようやく「いくらなんでもうぬぼれすぎだ」と、心の中で制することができた。
「間もなく、上野、上野です――」
「おっと」
そんなことを考えていると、時間はあっという間に過ぎてしまう。
上野駅からはエスカレーターで地下へと向かい、仙台駅まで新幹線に乗ることになっている。

「ふう」
エスカレーターを降りて、いくらか冷静になれた。
確かに今の自分は外見もおしゃれになったけど、言葉遣いや振る舞いではまだまだな所も多い、だから明日から行われるカリキュラムには真剣に挑まないといけないな。
エスカレーターから降りると、青い色の服がゆらゆら揺れる。
指定席券と乗車券を持って改札口を通り、目的の新幹線に乗る。
新幹線の時刻表を見ると「やまびこ・つばさ」が先だが、こちらは途中駅で後続の「はやぶさ」に抜かされることが分かっている。
もちろん、自分が買った切符もこの「はやぶさ」であるから、「やまびこ・つばさ」はそのまま見送ることになった。
やがて、行きと同じ緑色の「はやぶさ」が姿を表した。

俺は列に並びながら、ドアが開いたと同時に、指定された座席に座ることとなった。
「ふう」
車掌さんの「間もなく発車いたします」の声と共に、新幹線がゆっくりと動き出した。
ようやく一段落し、俺は夜の暗い車窓に目を向ける。
新幹線は一向にスピードアップせず、ゆったりとしたスピードで走る。並行の在来線よりは速いものの、それでもかなり遅い印象はぬぐえなかった。
石山さんが、行きを大宮で降ろしたのも納得の行く遅さで、そんな中で俺は上のニュースを眺めながら今日の総括に入った。
「女の子……」
結論から言えば、俺の完敗だった。
石山さんは、俺が女に目覚めた時を想定して、この服まで準備していた。それくらい、石山さんの思惑通りに、俺は動かされた。
でも、それは俺にとってもいいことだった。
おそらく、「体が女の子になった時点で」女の子の人格が芽生えるように出来ていて、そのために、一度ＴＳ病になったら男に戻ることを考えてはいけないし、戻ろうとすれば精神に変調をきたして自殺に至るんだと思う。
そのことに気付かせてくれた石山さんは、自分にとっては正真正銘の「命の恩人」だ。
石山さんの仕掛けた罠はとても巧妙だった。
男としての人格が残っているからこそ、「女性専用」に興味を示すし、ましてや「女子更衣室」「女湯」と言えば、間違いなく「男が覗きたいもの」の筆頭格だ。
それも影からこっそりとか、あるいは盗撮動画とかではなく、「女の体だから正面玄関口から堂々と見ることができる」何てなれば、それはもう食いつかない男なんていないだろう。
しかし、一旦そこに入ってしまえば、「これだけ堂々と女湯に入っておいて、今更男に戻るの？」と言われて「はい」とは言えない。

そうすれば、もう女として生きていく以外の選択肢はないし、それに女湯の女性たちが自分を見て何の反応も示さないのを見たら嫌でも女を自覚する。
俺の場合は、無理矢理女の人格を押さえ込んできたため、一気に噴出した。
今でも、さっきあの時薬湯で感じた屈辱感はとても色濃く残っている。
これから俺は何百年という時を生きていくことになると思うけど、多分今日のこの日を忘れる日は来ないと、俺は思った。
電車が轟音を立てて小山駅を通過する。
今頃、石山さんは協会の本部で協議をしているのだろうか？
石山さんはまだ高校生というのも、もしかしたら俺に火をつけたのかもしれない。
もちろん、ＴＳ病歴では石山さんが先輩だけれども。
「女の子として生きていくのも、楽しそうだよなあ」
今、サッカーサークルは、もちろん女子は俺だけ。
今は「悟」が前面に出ているけど、もし「女の子宣言」をして、女の子らしく振る舞うようになれば、当然周囲は俺をめぐる争いになることは間違いなしだった。
「あーでも、あんまりやたらとアピールするのはよくないかなあ……」
男が大人数に女が少数の空間は実はとても脆い。
女をめぐって、男たちが争いあう可能性も高いからで、これとばかりは男の本能なのでどうしようもない。
「……」
周囲に聞こえない声で、あれこれと将来像を浮かばせ、その度に消していく。
結局、将来的なことは分からない。
女の子になりきってから、その後のことを考えた方がいいのかもしれない。
スカートで歩くことも、人前に出ることも、何の抵抗感もない。
隣の席には誰も座っていないが、歩いている男性乗客の大半が、自

分の胸へと視線が集まっていた。
電車はやがて減速し、仙台へと到着した。
新幹線から降りると、晩秋の風が吹き付け、スカートの中に少しだけ入り込んだ。
「……」
ゆらゆらと小刻みに揺れる青いスカートを気にしながら、改札口を通り在来線に乗り換え、そのまま列車を出た。
家までの馴染みの道のりも、スカートで歩くだけでも全然印象が違って見えた。
家の前に立ち、俺は鍵を取り出してドアを開けた。
「ただいまー！」
ドンドン
「あ、お姉ちゃんおかえ……！」
「ん？　どうした徹？」
徹が、固まっていた。
「ど、どうしたもこうしたも……お姉ちゃん、何でそんなスカートなんか……」
「幸子お帰り……ってあら！　幸子どうしたのそんなかわいくなって」
母親まで驚いていた。
「えへへ、石山さんに渡されたのよ」
「あー、そういえば、一着だけスカートを送るように言われてたっけ？」
徹も、思い出したらしい。
「うん、東京から仙台まで、おしゃれして帰ってきたんだー」
今までの服もあるから、着替えようと思えば石山さんと別れた後に着替えることもできた。
その意味でも、これは自分の意思の強さの証拠でもあった。
「そう、幸子、もう私も、覚悟を決めるわ」
「ああ、それにしたって、お姉ちゃんかわいすぎるよ」

まだ、かわいいと言われるのはちょっと慣れない。
でも、少しずつ覚えていけば大丈夫、俺はそう思うことにした。
「ふう、お風呂も東京で入ったからもう寝るね」
「うん、お休み」
夜ももう遅いので、俺は早めにパジャマに着替えて寝ることにした。
「うーん」
寝る時のパジャマはどれもゆったり感が勝負で、今までは男が着ても問題なさそうな感じのばかりを選んで、それでも女が強調されるのが嫌だったけど、今日はせっかくなので「女の子らしい」パジャマを着てみたい。
「よし、これ」
ワンピースタイプのパジャマで、寝ていたら間違いなくめくれあがってしまう。
それを考えると論外にも思えるが、でもかわいさならパジャマの中でも随一で、しかも女の子らしいピンク色だった。
「女の子らしくなってみよう」
そう言い聞かせ、後頭部のリボンを取り、服を脱いでパジャマに着替えた。
「ふふっ」
鏡の前にたったかわいい自分を見て自然と笑みがこぼれる。
今日は東京で、さまざまな女性ともすれ違ったけど、今のこの自分よりかわいい女の子はいなかったと、断言できる。
自分で自分もことをかわいいと思う女は痛々しいというけど、今の自分はどうだろう？
他の女性に向けて、「別にかわいいとか美人とか思っていない」何て言ったら、かえってひどいと思う。いやそれくらい、今のこの塩津幸子はかわいらしい女の子になっている。
「ふう」
電気を消してもう寝よう。
とにかく今日は、1日で何もかもが目まぐるしく変わりすぎた。

それに、さすがにだるい。

# ついに来てしまった

「うー」
瞼が、重たい。
昨日遊び疲れたせいだ。
日帰りで東京まで行ったのだから当たり前だけど、とにかく辛い。
「はぁ……はぁ……」
目を開けるのが億劫になってきた。
とりあえず、起きないことにはどうしようもない。だけど起きるのが、とっても億劫だ。
「幸子ー！　大学は大丈夫？」
母親が、ドアをノックしている。
「あうー」
俺は目をゆっくり開けて、渋々布団から出る。
「わあああ!!!」
起きて見たらあまりに驚いた。
布団が血だまりで、赤く染まっていたからだ。
これはどう見ても血液じゃないか。
「幸子!?」
ガチャ……
母さんが、突撃してきた。
「あらま大変！」
そして、驚いたのは向こうも同じ。
「ね、ねえ。これってもしかして？」
「ええ、持ってくるわ！」
どうやら、昨日石山さんに言われていた日が来てしまったらしい。
とにかく貧血で食欲が出ない。だるい。うえー
「はぁー」
立っているのも疲れてしまい、俺はまたベッドに座る。
パンツが何やら濡れている感覚がする。
無論犯人は明確に判明している。

脱いでみたら、やっぱり一部が真っ赤になっていた。
そう、これは言うまでもなく「血液」だった。
「来ちまったか……」
女になって不便なことだらけで嫌にはなっていたが、昨日の石山さんとの旅で、「美少女はちやほやしてもらえる」というメリットを覚えた矢先に、いや、矢先だったからこそ乗り越えられる気もした。
「運がよかったよな」
もし、石山さんと東京で遊ぶより前に生理が来てたら、間違いなく性別適合手術と共に、自殺に一直線だった。
そういう意味で、滑り込みのギリギリセーフだったと言えるだろう。

バタン！
「はい、幸子これ。生理用のパンツと生理用のナプキンよ。いくつか鞄にいれておくから、きちんと管理するのよ。説明書も中にあるから、ちゃんと確認してね」
お母さんが、生理の時のための用具を出してくれている。
どう使えばいいのか分からない。
「はーい」
ともあれ、説明書が中にあるということだから、体で覚える方が手っ取り早いだろう。
「さ、ご飯出来ているわよ」
うー、気分が悪くてあんまり食欲が湧かない……血が、血が足りない……
ともあれ、食べないことには血液が回復しなさそうだし。
「ごちそうさま……」
うー、ほとんど食べられねえ。
ただでさえ男の時より少食なのに、今日は輪をかけてひどい。これじゃ餓死するだろ……
「お姉ちゃん具合悪そうだな。どうしたんだ？」

徹が、心配そうに聞いてきた。
「あーうん、実は――」
「だあああああ!!! ダメ幸子!」
「わあ!」
突然、母さんが大きな声で自分を制止してきた。
言われてみてようやく、自分が異性に安易に生理の話をしてしまっていたことを思い出した。
私も、生理の話をやたらするのはダメなことは分かっている。
とは言え、ついしてしまったのは今後の反省点にしないといけないな。
「ん？　どうしたんだ慌てて？」
徹は、顔に？マークを乗せて、困惑していた。
まあ、男に生理は理解不能だしな。
「あー、忘れてくれ。頼む」
ともかく、次からは気を付けないと。
今はまだ右も左も分からないとは言え、今後は女の子らしい女の子になっていく必要があるから、こういうことは一つ一つ覚えていかないと。
うー、生理だからっていても、大学は続くから出ないといけない。
うえー女子って難しい。

「行ってきまーす」
重い体を引きずりながら、いつもの大学への道を目指す。
ちなみに、今日は大学でスカートデビューしようと思ったけど、「生理中は冷やしちゃ絶対ダメ」とのことで、下着の上にタイツ、更にその上にスパッツを履いてから厚手のズボンという重装備になった。
東京ならまだしも、仙台の冬にスカートはあまりにも寒い、なのに女子高生はどうなっているんだか。特に今みたいな時。高校生の時にＴＳ病にならなくてよかったよ、本当。
歩く速度も遅い、無論早めに出たとは言え、バスに間に合わなく慣れば悲惨なことになる。

手原たちに何て言えばいいんだろうか……昨日考えていたこの悩みは、別の方向にずれてしまった。
大学行きのバスに座席を見つけ、崩れるように座る。
眠って乗り過ごさないようにだけは、気を付けねえと。
「はぁ……はぁ……」
座っていて、やはり貧血を感じた。
生理の仕組みは俺もついこの間まで男だったから詳しくは知らないが、あんな感じで股から血が出て、そのために女の子はこれが近くなると「生理用ナプキン」をつけないといけないことくらいは知っている。
だけどそれくらいしか知らないんだという現実も、改めて突きつけられた。
これだけの短い間、実際に女になってみて、実は女というものをろくに知らないんだということも気付かされた。
「女って大変だよな」
これじゃ、女の子に力仕事何てなおのこと無理だ。
女子の体がいかに弱いか、ああ、悟だった時にもっと女の子には優しくしておくべきだった。
……今更後悔しても遅いけど。
「次は――」
おっと、降りなきゃ。
「とっと」
そう思い、立ち上がる。やはり少しフラフラしてしまう。
「塩津、どうしたんだ？」
バスから降りると、異変に気づいた大谷が、ぐったりしている自分に話しかけてくれる。
「うん、気分悪いんだ」
ここは素直に話す。
もちろんストレートに「生理中」とまでは言わないけど。
「風邪でも引いたか？　慣れない体だし、大事にしろよ」

大谷は、俺が生理とは気付かなかったらしい。
一方で、女子学生たちは心配そうな目付きをして俺を見ていた。
「ああ」
何とか、助けを借りて進む。
うえー、女子学生にはやっぱ見破られちゃうのか。まあ、そりゃあそうだよなあと。
「……」
手原は、まだ来ていなかった。
ともあれ、講義を休むわけにはいかないから、なるべく頭に入れねえと。

昼、相変わらず食欲は出ないものの、カレーを学食で何とか食べきった。
とにかく何も食べないのは良くない。そう思いつつ、普段よりも重い学食だった。

「ふう」
午後の講義の前に、トイレに行きたい。
学食最寄りのトイレを見たら、女子トイレに行列が出来ていた。
女子たちは雑談に講じていたが、どっちにしてもなかなかこれは収まりそうな気配がない。
「うえー」
あそこに並ぶのは億劫になったので、次の講義がある講義棟に行き、そこのトイレを見ると、行列は出来ていなかった。
ふう、冷静な判断ができてよかったよ。
「あー」
そう言えば、女子トイレに入るのは産まれて初めてのことだった。
新幹線は男女共用だし、石山さんとの2人旅の時も、石山さんがいないのをいいことに多目的トイレを使っていた。
「でも、入らねえとな」
未だに心理的には抵抗感がある。

でも、既に女湯にまで足を踏み入れてしまった以上、女子トイレに入るしかないのも事実だった。
「うー」
中に入ると、体験したことのない、何とも言葉では形容しがたい独特の臭いが立ち込めてきた。
それは、これまで嗅いだことのない感じで、アロマな香りと、戦場のような血の臭いとが混じった混沌としたものだった。
「とにかく、取り替えねえと……」
自分は、一直線に空いている個室に向かい、鍵を閉める。
そのまま便座に腰を下ろすと、ちょうど血がまた出てきた。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
頭が、目が回る。
貧血になっちゃうのは仕方ない。
ともあれ、使用済みのナプキンは、近くにあった三角形の箱の中に入れればよさそうな気がした。
予想は的中したが、中はあんまり見ない方がよさそうだ。とにかくエグい。
うー、あんなのを毎月なのか。女子って大変だな本当に。
それと同時に、女子にグロ耐性がある理由がよく分かった気がする。
俺は鞄の中から新しいナプキンを取り出して生理用のパンツに当て、今度こそ落ち着いたのを確認してから服を戻し、トイレを流した。
うー、やっぱり血が出ててヤバい。
「ふうっ……ふぅ……」
自分は何とかしてトイレから出ると、人気が更に少ない所にあった椅子を見つけてそこで少しだけ横になることにした。
午後の講義、大丈夫かなあ……
「塩津、今日のサークルは休んだ方がよくないか？」
放課後、手原が見かねたのか、俺に「休んだ方がいい」と言ってきてくれた。

何気に、こいつは結構人の気遣いが出来る奴なんだよな。
「あーうん、そうさせてくれると助かる」
「お大事にな」
放課後に入ると、実は気分は少しだけ良くなったのだが、それでも大事を取って今日は先に帰宅させて貰うこととなった。
ともあれ、少しでも横になっていたいというのもまた事実だった。

「ぜはー」
ここから家に帰るまでに、もう一度座れる場所で横になる。
いつも座れていることが多いとはいえ、バスの席が空いていて本当に良かった。
「ふー」
一息つくことができれば、後は楽だった。
「でもどっかで動かなきゃいかんのよな……」
気は重いが、致し方ない。
どうせバスはしばらく来ない。時計を見ながらだけど、きちんと休んでいかないと。

「ただいまー」
「幸子ー！　お帰りなさーい」
いつもより早い帰宅だけど、うちの家族は気にしていない様子だった。
「ふあー！」
ふかふかのベッドに横になれたことで、安心感があり、急速に眠気が襲いかかってくるのを感じた。
とにかくあらゆる意味で疲れた。早く寝たい。とにかく寝たい。
「幸子ー！　ご飯よー！」
「ん……」
眠気がまだ十分とれていないのに、ご飯だと急かす声が聞こえてくる。

「んあー、もう少し寝かせてくれー！」
「ダメよ！　今日は幸子が主役なのよ！」
お母さんの張り切った声が聞こえてくる。
うーん、確かに食べた方がいいんだろうけど。
「頼む、もう少し」
もう少しだけ寝ていれば、起きることもできるだろう。
「もー、ちゃんと来てよね」
扉がしまる音がしたのを確認し、ゆっくり目を開く。
乗り気ではないが、そのままベッドから降りて立ち上がる。
ふう、いくらか寝て気分が良くなったな。

「あ、幸子。こっちこっち」
起きると、早速お母さんが手招きしてくれた。
「おや、今日はお赤飯か」
それに随分と俺の所に山盛りになっている。
「ええそうよ」
母親のにっこり顔に対して、徹と父親の男衆は、ものすごい気まずそうな表情をしている。
「でも今日って何かあったっけ？」
思わず口に出すと、母親が手を合わせて更に笑顔になった。
「やーね！　お赤飯は赤いご飯よ！　赤は血の色、今日は幸子が初めて生理になった日でしょ？　こうやってお祝いするのよ！」
「うげえ！」
思いっきりセクハラじゃないかこれ！
何なんだよ、世の中の女の子ってこんなことさせられるのか!?
徹も父親も、物凄く気まずそうにしている。
それもそのはず、「今日は生理中」って事実を知ってしまったわけで。
そもそもニッコリしている母親がある意味怖い。
「な、なあお姉ちゃん」
徹が、恐る恐る口を開く。

「ああ」
「やっぱり、痛いものなんか？」
やっぱり、男子は生理に興味あるよなあ。当事者は笑えないけど。
「うっ、めっちゃ痛いよ。それに気分も悪いし体も重いし……てそんな質問すんなー！」
「さあさ、今日はお祝いよ！　乾杯ー！」
コップに注ぎ込まれたジュースは、リンゴジュースだった。
それだけじゃない、おかずもニンジンにトマトに赤いピーマンの野菜盛り、焼き魚が出ているがこれも鮭、更にお肉までそのまま食べられる赤いベーコンという徹底ぶりだった。
「ここまで徹底しているって」
「ええ、どれもこれも、幸子の初めての生理のお祝いよ」
「あーうん、知ってた」
もうセクハラなのは仕方ない。
逆に言えば、こうして生理を祝うことで、今後は生理の時に「助け合い」も出来るようになる。
悪い方向にばかり考えても仕方なかろう。
「ふう、いただきます」
あ、ちなみに、ご飯は美味しかったです。

# 一歩一歩、女の子へ

生理のハプニングもあって、カリキュラムは来週の月曜日に延期になった。

結局生理の痛みは水曜日まで徐々に弱まりつつも続いた。

それで、今日はもうナプキンも不要になった木曜日だけど……

「やっぱりスカートにしようかな？」

本当は、月曜日をスカートデビューの日にしたかったんだけど、ちょうど生理のこともあったし、今日のスカートデビューは結果的により良いものとなった。

でも、肝心のスカートをどれにするのかってことだけど……

「今は寒いし、この暖かそうなスカートでいいよね？　うん」

長さも膝丈で落ち着いているし、今はもう冬に近い。だから初めてにはちょうどいいかな？

「足を見せるのもあれかなあ……」

本当は、そういうのは少しだけ見せるのがいいけど、季節を考えて自重することにした。

春には多分、皆も受け入れてくれるし、ミニスカートはその時になってからでも遅くはないと思う。

靴下も温かく長いのを採用し、またおしゃれとして石山さんとの２人旅でつけた後頭部の黄緑色の大きなリボンもつけて準備万端になった。

「よし」

「おはよー」

「おはよー幸子、今日はスカートなのね」

スカート姿はこれで３回目で、石山さんとの２人旅の時の教訓が上手く生きていた。

母親も母親で、さすがに３回目ともなればそこまで驚いた感じではなかった。

今日いきなりだったら、着こなすのはまあ無理だろう。

とにかく、男の服とは違いすぎる。
「うん、わ、私だって女の子だもの」
リボンについては、あまり言及されなかった。
「お姉ちゃんやっぱかわいいよなあー」
徹も、まだ他人事感が抜けていなかった。
もちろん、長い目で見た理想は、手原や大谷たちが俺を女として意識するということ。
とはいえ、俺も男の経験が色濃く残っているので、それが進めば、最悪手原たちに無理やり犯されるということもシナリオとして想定しなければいけない。
だけど、それはそれで、女として成長するために必要なことかもしれない……何て考えてしまっているうちは、まだまだ当事者としての自覚は薄いのかもしれない。
ともあれ、少しだけ寒くなった足元を気にしつつ、いつもの大学への道を進んでいった。

「おはよー」
「おはよ……って塩津！　どうしたんだその格好？」
手原と大谷が、口をあんぐりしていた。
それもそのはずで、今まで縁がなかった姿だったからなおのことだ。
やっぱり、スカートを穿いたのはかなり衝撃的らしい。
「あーうん、だってこれからは女として生きていくんだよ」
「いやそ、そうだけどさ」
手原はやっぱり、男時代の自分を引きずっているみたいだ。
確かに、一時期は「性別適合手術」の話まで出たことを考えれば隔世の感はあるよな。
「あの塩津がスカートって」
大谷の一言にちょっとだけカチンと来る。
「むっ、大谷、女の子がスカート穿いちゃいけないのか？」
確かに、悟の体でこんな服装したらキモいだろうけど。

でも今は違うんだ。とやかく言われる筋合いはない。
「いやさ、ほら。確かにかわいいんだけどさ」
手原はまだ納得しきれていないらしい。
かわいいと言ってもらえたのは良かったけど。
「かわいいんだけど？」
「いやほら、うん、やっぱり初めて見る時はどうしてもビックリしちゃうって言うか」
「うんうん」
まあ、確かに分からないでもないけど。
「そうそう、２人に言っておかなきゃいけないことがあって」
いけないいけない。この事話さないと。
本題を忘れちゃいけないよね。
「「え？」」
「来週からサークル１週間休みになるんだ」
２人はさっきほど驚いた様子はなかった。
「そりゃまたどうして？」
「えっとその……協会のカリキュラム、女の子らしい女の子になるためのトレーニング受けることになったんだ」
２人共、それを聞いて納得したような表情となった。
「あー、塩津もしかして今日のスカートも？」
「いや、これは自主的に。やっぱりさ、女として生きていくんなら、きちんと女の子らしい女の子になりたいって思って。この前も、ほら……あんなことがあったばかりだし」
そこまで言うと、２人は腕を組ながら唸って何かを思慮していた。
手原も大谷も大学生、生理があるからこそ女の子が赤ちゃんを作り産めることを知っている。
同時に、生理というのは男が絶対に知り得ない女の子のトップシークレットで、その後の損害さえ省みなければ、知ろうと思えば知ることが出来る女湯や女子トイレとも一線を画するものだ。
恐らく、これに並び立つものはそれこそ妊娠・出産しか無いだろう。
この前の出来事により、周りの人も「覚悟」が伝わってくれたのだ

ろう。
「分かった。俺たちも、出来る限りのことはするよ」
「ああ、今日からは、名実ともに『幸子』だな」
やっぱり、手原も大谷も大人だった。
体で理解できずとも、ある程度理屈で知ることが出来る。
いや、むしろこの問題は感覚的になった方が理解しやすい案件ですらある。
だって、今の自分の見た目を見たら、あの時の女湯の時と同じように扱われるのが普通だもの。
「しっかし、いくら何でも豹変しすぎだろ」
「ああ、土日に何かあったのか？」
手原と大谷が訝しむ。
うーむ、確かにそれはその通りだ。不審に思うのも無理はない。
「うん、その事なんだけど……昼休みにまた、いいかな？」
「「ああ」」

昼休み、ご飯を食べ終わったら、２人に日曜日にあった出来事を詳しく説明した。
石山さんという女子高生のＴＳ病患者
そして予想通りと言うか、女湯に入らされたということは物凄い羨ましがられた。
手原は、「まあそりゃあ女湯になるんだろうけど……」と歯切れが悪く、大谷の方は「くそー、うらやましいぜ」と言っていた。
女湯に入れられたことで、自分のアイデンティティを考えることになり、そして「悔しい」という女としての感情が芽生えたことも話した。
「悔しい……かあ」
手原が、教室の天井を見上げて話した。
どうやらかなり深く思念しているようだ。
「確かに、それは『女の人格』だよなあ」
男だったら、石山さんと会う前の俺だったら、別に「センス無い」と

言われてもどうとも思わなかった。
　でも今は違う。女として、かわいくなりたいという思いが、今は確実に芽生えている。
「うん」
「にしても東京ってすげえとこなんだな」
「だなあ。行ったのは1回だけだけどとにかく熱気が違うんだ」
　手原と大谷は、俺のことはそっちのけで、東京に関する話題にシフトしていた。
「ああ、よく分かるぜ」
　そして、話題は東京での具体的な部分にシフトする。
　2人も、東京での様子などにシフトしていった。
「まあ仙台ぐらいがちょうどいい町だよ。東京は人多すぎる」
　最近では、仙台にも外国人観光客が押し寄せるケースも増えたけど、東京のそれは仙台なんかの比ではなかった。
　そもそも、電車の長さからいって頭おかしかったしその長い電車がものすごい本数来るわけで、仙台って田舎なんだなあって思ったくらいだ。
　そんなことを考えながら、俺たちは昼間を過ごした。

「うお、塩津どうしたんだ!?」
「おいおい、塩津お前、スカート穿いたのか」
　放課後、案の定サッカーサークルの連中に蜂の巣にされた。
　うー、女の子だからスカートになったってそんなにおかしなことじゃないはずなのに、やっぱり塩津悟の存在感はでかいよなあ。
「ああ、そりゃあ女なんだしスカート位いいだろ？　お前らが穿いたらキモいだろうけど」
　サッカーサークルの人はみんな鍛えてる「男らしい男」が多いので、ますます似合わない。
「うっ、まあそうなんだろうけど」
「思ったより似合いまくりだもんなあ」
　サッカーサークルの仲間たちが、なめ回すように自分を見つめてく

る。
正直、今まで地味で目立たない服装ばかりしてきた紅一点の女子がいきなりスカートに後頭部のリボンまでつけてやってきたらギャップのあまり注目しちゃう気持ちが痛いほど分かってしまうのが辛い。
これが生まれながらの女の子なら、「何じろじろ見てるのよ！」で済むと思うけど。
「まあほら、元々素材は超一級だったし」
「だなあ」
とは言え、自分で言うのも何だが、自分自身の見た目はかわいい女の子なので、すぐにみんな慣れてくれると楽観している。
手原や大谷みたいに深い関係でもないし、女として生きていく決意をした詳しい経緯まで詮索はしてこないだろう。
「ま、この暑苦しい世界にはちょうどよさそうだぜ」
「だな」
誰かが「ここにはちょうどいい」と言うと、全員がうなずいた。
自分がこのサークルですべきことはこれまでと一緒で、今後はますます「女子マネージャー」の性格を強めていくだろう。
といっても、ここは大会に出るようなガチのサークルではない。だからマネージャーの仕事なんてほとんどなく、せいぜい水を渡すことくらいになっている。
バリバリにプレイヤーをして来た時代から見れば物足りないけど、それでも、このサークルにいさせてくれるだけでもありがたいというものだ。
石山さんも言ってたように、もう女の子なのだから、女の子に出来ることをしていかないといけないな。
「ふう、さ、始めようか」
部長さんの号令と共に男たちも散り散りになった。
今日もいつも通り、サークル活動が始まった。

「おりゃー！」
「させるかー！」

「おおー！」
心なしか、今日はみんな気合いが入っている気がした。
うーん、やっぱり自分のお陰かな？
「ふー」
「はいお疲れ様」
いつもよりも、心なしか高めの声で水を手渡した。
思った通りで、女の子らしくなった俺を見てみんなやる気になったのだ。
サッカー場にしても野球場にしても、チアガールやレースクイーン、またビール販売の売り子の女の子がたくさんいるわけだけど、やっぱり男だらけの暑苦しい男子スポーツの世界だからこそ、こういう女の子が清涼剤として必要何だと今になって思い知らされた。
女の子になってからというもの、男女の間に横たわる様々な差を思い知らされてきている。
ＴＳ病は、いわば記憶や経験だけを引き継いで全く別の生き物になるのと同じで、自殺率が高くなるのも当然と言えば当然だった。
それに何より、ちやほやされてちょっとだけ「いい気分」になっている自分を感じて、「心の進行」が進んでいるなあとしみじみと思うようになった。
「塩津さん」
「うん？」
部長さんが話しかけてきた。
「言いにくいんだけどさ、スカート穿いてきたってことは、もう男には？」
「うん、男の人生は、もう諦めることにした。だから、女として生きていくよ」
涼しく、なるべく明るい声で話す。
「そうか……まあ、同じ病気の人も、みんなそう言っているんだっけ？」
部長さんも、ＴＳ病のことについて少しだけ調べていたらしい。
もちろん、５０％を超える高い自殺率のことも頭に入っているんだ

と思う。
「ああ、今自分を担当している人は特にな」
「そうかあ、でもトランスジェンダー路線は自殺何だっけ？」
「うん、みんなすぐに死んでったって」
部長さんは腕を組んで深慮している。
その仕草は、手原とも似ていた。
何とか、理屈を飲み込んでいるという感じのものだった。
「まあ、俺も専門家じゃないからね。で、新しいカウンセラーの人はどんな感じ何だ？」
「実は2個下の高校生何だけど、正直江戸生まれの余呉さんより厳しいよ」
「ほえ、意外だな。高校生がカウンセラーかあ」
部長さんも、この意外な人事に驚いている様子だった。
ＴＳ病は珍しいと言っても、もっと人材はいるはずで、高校生の石山さんが選ばれたのも、特例という感じが見受けられた。
特に、かなり歳をとってる人も多い中で、自分より年下がカウンセラーになるのは、とても珍しいことだろう。
「うん、月曜日から本格的に『女の子の講習』が始まるんだ」
「講習？」
「ああ、今日スカートなのはその予行演習も兼ねているんだ」
「あーなるほどな。スカート穿かなきゃいけねえってこともあるだろうしな」
女性として生きていくということを決めた以上、今後就職活動する時もだろうし、他にもおしゃれをしなきゃいけない場面だって十分起こり得る。
そうなった時のためにも「スカート慣れ」は女の子にとって必須になる。
ヒートアイランド現象のある都会とは言え、東北の冬は寒いので、最近ではズボン制服を取り入れている学校もあるのだが、得てしてズボンの人気は悪く、穿いているのもブスばかりだというのが男子の専らの評判だった。

「ま、あまりいいアドバイスもできないですけど、頑張ってください」
「はい」
これだけかわいいしおっぱいもでかいので当たり前と言えば当たり前だけど、今日のスカートお披露目は概ね好評だった。
俺にとってもまた、それは女の子としての自信にも繋がっていく。
帰り道、ふとバスの窓から見えた自分の顔が目に入る。
「やっぱり、かわいいな」
これだけの容姿があれば、自分のことがかわいく見えるのは当然のことだった。
自分はかわいくないと思ってしまった時は、後にも先にもあのお風呂での時だけ。
女の子には自信も必要で、特にこれだけかわいい自分なら、自信を持たないとかわいさを維持できないとも思っている。
自分のことかわいいと思っている女の子、ブスなら痛いけど、ある程度以上にかわいい子が自分のことをかわいいと思うのは、俺としては「あり」だと思う。
「うーん」
それでも、石山さんは無論のこと、余呉さんに永原さんと、立て続けに絶世の美少女と出会い続けたので、少しその自信も揺らいでいる。
いや、自分だって彼女たちに混じっても、「どうしても勝てない」と思えるのは石山さん位で、永原さんと余呉さんには、胸を含めて多く勝機があると思っている。
「次は――」
いずれにしても、今度の講習では間違いなく「おしゃれ」についても学ぶつもりなので、その時に質問をすればいいだろう。
「ただいまー」
「あ、お姉ちゃんお帰り」
徹も徹で、姉扱いが板について来た。
最初は拒絶していた女の人生だけれど、美少女に生まれ変われれば、それなりに楽しい人生になるのだと思った。

「女の子は見た目だよなあ」
お風呂で自分の裸を見ながら呟く。
もしこれが、ブスだったら間違いなく自殺だった。
女の子は、男以上に見た目重視になる。
ＴＳ病が美少女に生まれ変われる病気で本当によかったよな。
美少女だからこそ、自殺率がこれで抑えられているのかもしれない。
ともあれ、いくら見た目重視でも、内面が今のままじゃダメなのも事実、とにかく、頑張って女の子らしい女の子を心がけないと。
「言葉遣いかあ……」
出来るのかな？　女の子らしい言葉遣い。
余呉さんによれば、実は言葉遣いが一番簡単らしいけど。
「わよ……だわ……うーん……」
語尾だけ言ってもそれっぽさは出ない。
ま、とにかくカリキュラムになってから考えても遅くはないか。
今日はともあれスカートを体験できたのは大きかった。それで良しとしよう。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　1日目

「うーん……」
また次の週の月曜日、先週は大学の皆にスカート姿を見せたけど、今日からはカリキュラムが行われる。
今日は少し早起きし、まず朝のカリキュラムと夕方のカリキュラムを行うことになっている。
カリキュラムは今週と、それから土日に続けられることになっている。
大学への通学も考慮されて、石山さんよりも長い時間が取られていて、石山さんは学校を休んでいたため、その分短い日数になった。
ともあれ、朝を起きたらまずやること。
もちろん、今日の服装を何にするかと言うのはほぼ決まっている。
問題なのは――
「どのスカートにしよう？」
スカートはどれもロングで落ち着いた感じになっている。
もちろん、それは、もう11月も半ばに入っているという理由が大きいのだけれど。
「よし、これにしよう」
選んだのは、石山さんと初めて着た時と同じ青いワンピースで、これまでのよりもおしゃれ度も増している。
そしてもう1つ大事なのが、この服は後頭部にも大きなリボンをつけること。
これによって、ますますおしゃれ度もアップする。
「ふふ」
目立つリボンをつけるだけで、印象が全く違う。こんなのでも大きく変身したように感じるのだから、女性というのはすごいなあと思う。いや自分も女性だけど。
少しだけ上機嫌で、階段を降りる。
「おはよー」
「幸子おはよう、今日からカリキュラムね」

今日の服装を見たお母さんも上機嫌だった。
やっぱり何だかんだ言って、娘が女の子らしくなっていくのは母親としても嬉しいのだろう。
「うん」
「じゃあ早速、朝ごはんを作っていくわよ」
「はい」
まずは、お母さんから朝御飯の作り方とメニューの決め方を習う。
カリキュラムの本によれば、「家事ができなければ女の子として失格」と書いてあり、また容姿面では既に生まれつきの女の子を大きくリードしているため、家事や男受けする振る舞いや性格といったものを磨いていかないといけないという。
確かに、容姿面が大きくリードしていて家事が下手だと余計下手に見えたりしちゃうんだろうなあとは思うし、覚えておくのはより重要だろう。
「幸子、美人は性格も美人じゃないといけないのよ。家事を覚えることで、思いやりを覚えることも出来るわ」
「はい」
生まれつき美人の女の子は、ちやほやしてもらえるため、自ずと優しさを始めとした女の子らしい振る舞いを身に付けることも多いが、TS病の女の子の場合、男として育ってきたため、そうしたことは自分で覚えないといけない。
そのためには、まずはやっぱり家事の力が必要になってくるみたいで、単にスキルを磨くだけではなく、家庭的になることで性格面にも良い作用が働くのだ。
「うちの家族の好みは知っているわよね？」
「うん」
俺は、一つ一つ、お母さんに言われた通りにご飯を炊いて味噌汁を作る。
うーん、改めて料理なんて作ったことないから、「朝ごはんを作っていく」と言われても分からないことだらけだ。
はじめはできなくて当たり前だし、とりあえずお母さんに聞けばい

いだろう。
「ねえ、これどうすりゃいいんだ？」
「あ、ダメダメ」
お母さんから待ったが入る。
何かまずったか？
「え!?」
「言葉遣いよ。『これどうすればいいのかしら？』ほら、やってみて」
「こ、これどうすればいいのかしら？」
言われるがままに復唱してみたら、自分でも信じられないくらい、かわいらしく柔らかい声が流れた。
印象が、全く違う。
「ええ、すごいかわいいわ」
「うん、わ、私は女の子……私は女の子……女の子らしく話さないといけない……」
女の子として、暗示をかける。
これ1つ1つが、将来の自分の材料になっていく。
女の子らしい格好で、女の子らしい言葉を使うだけで、周囲の印象も、そして自己評価も全く変わってくる。石山さんなんか典型的だった。
「ふう」
「さ、続けるわよ」
「はいっ！」
その後も、何度か言葉遣いを注意された。
だけれども、まだまだぎこちないけど、少しずつ女の子になれそうな気がしてきた。
何より修正後の声の印象はこれでもかというほど女の子らしさに溢れている。
つい先日まで男として過ごしてきたからこそ、その貴重さもよく分かる。
ともあれ、食事ができたら男たちを呼んで食べて、大学へ行く時間へとなった。

一旦カリキュラムはお休みで、学生生活へと入る。

「お、塩津おはよ……って今日はすげえな！」

「手原さん、大谷さん、おはよう」

にっこりと笑い、愛嬌満点に２人に挨拶をする。

「あ、ああおはよう、それよりもさ、来年のワールドカップはどうなるかね？」

どうやらサッカーの話題をしたいらしい。よしここは……

「うーん、今の監督のままだと、グループリーグ敗退しそうだわ」

よし、言えた！

「わ？」

「え!?　塩津、どうしたんだよその言葉遣い」

案の定、２人が驚いていた。

「え？　今の言葉遣い、変だったかしら？」

一呼吸間を置くだけで、全然違った。

少し意識するだけで、簡単に女の子の言葉が出てくる。もちろん、無意識はまだまだ無理だと思うけど。

２人は一瞬凍りつき、そして納得した風の表情になった。

「あーそっか、塩津も女の子だもんなー……」

「だなあ」

女の子だから女の子の言葉遣いなのはむしろ当たり前のこと。

ということで、こちらから説明せずとも、手原も大谷も十分に納得してくれた。

「ふふっ」

とは言え、まだ彼氏彼女だとか、恋愛についてはよく分からない。

女の子として成長すれば、サッカーサークルの誰かか、またはこの大学の誰かか、あるいは就職後に恋愛をするかもしれない。

でもやっぱりまだ、女の子としての男の魅力についてはよく分からないし、それについてはかなり長い年月が必要になる予感もする。

石山さんは半年で彼氏ができたし、優秀な人なら2、３年で彼氏が出来るけど、もちろん俺はその何倍もの時間をかけないといけないは

ずだ。
その時まで、手原と大谷が手持ちぶさたでいてくれる保証なんてどこにもない。
「うーむ」
「でも、塩津なんだよな。あのしぐさとか」
自分でも気付いていない仕草から、やはり悟と結びつけられてしまう。
悟としての自分を完全に捨てるというわけではないから、別にしょうがないとは思うけれども。
それにまあ、ちょっとした癖くらい、誰にだってあるわけだし。
「なあ、あの塩津に彼氏とか出来たりすんのかな？」
「さあ？　分かんね」
俺にも分からない。
とにかく今は、カリキュラムを進め、女の子を身に着けていかないと。
「さて、講義の準備だな」
２人の会話を聞きながら、俺は大学の講義の支度をした。
もちろん、まだまだ女の子に成りたてなので、女言葉が出てくる時の方が少ない。
もし家の中でカリキュラム中だったなら、お母さんに怒られてしまうところもあったと思う。

一方で、サークル仲間たちがそうであるように、女言葉が出ると驚かれて、その後に「違和感がない」と言われることも多かった。
確かに中身はまだまだ男と言っちゃっていい身分だし、これから女にならなきゃいけないわけだけど、見た目も声も完全に女の子なので、内面を変えていくのは、時間さえかければ難しいことではないと思う。
実際、「悟だった」という知識さえなければ、女の子らしい言葉遣いや仕草をすれば、違和感なく女性として受け入れてくれるはずだ。何せ黙っていても女湯に堂々と入れるわけだし。

大学の生活自体は、以前とそこまで変わらなかった。
もちろん、振る舞いや言葉遣い、お母さんがいないからと言ってハメを外してはいけないこともわかっていたため、今まで以上に気を遣うようになって、そのあたりが少し変わっていた。
というか、外でもちゃんとした言葉遣いをする癖をつけないと、カリキュラム中に怒られるのは火を見るよりも明らかだしな。

「あの塩津に彼氏とか出来たりすんのかな？」
大学が終わった帰り道で、手原の言った話を考える。
「彼氏……」
男は、女が大好きだ。それは「悟の記憶」にも激しく染み付いている。
そして、少女漫画の恋愛ものの多さを見ても、女の子の男好きはそれ以上とさえ思える。
男が好きなのは、女の子のからだの中でも、例えばおっぱいとか下半身などになる。男に無い魅力こそ、女に惹かれる理由としては十分だ。
もしこれから女の子に成りきるとして、女の子が好きな部位と言えば……
「うぐっ」
当然、女に無いものということになる。悟として暮らした１９年間、今は亡き相棒のことを思い浮かべてしまう。
それは当然、未来の彼氏の「それ」が好きになるということで……
「想像できない」
確かに、自分と同じ容姿のかわいい女の子が、いとおしそうにうっとりする姿は想像できる。
でもその中身が自分自身という所まで、どうしても思考回路が回らなかった。
一歩一歩前に進んでいるのは分かるんだけど、少しでも遠くを見ようとすると、途端に果てしない道のりだと錯覚してしまう。
今大事なのは、それを見て悲観的になって、絶望したりしないこと

だ。
後ろを振り返れば、男への道は、遥かに困難で、帰ることは決して叶わない死への道なのだから。
「ただいまー」
「幸子お帰りー！」
「お姉ちゃんお帰りなさい」
皆が挨拶してくれた所で、今日もカリキュラムの続きを学ぶ。
まだまだ始まったばかりだ。
そして、午後は夕食作りの訓練になった。
これからは掃除や洗濯といった家事の基本を学ぶことになっている。

「さ、幸子、明日もきちんと家事をするのよ。じゃあちょっと待っててね」
家事の部分は比較的うまくいった。
でも、実際に緊張するのはこれからだ。
「う、うん……」
今日のカリキュラムの成果は、全てテレビ電話で関東にいる石山さんに報告することになっている。
明日以降のアドバイスも、貰うことが出来る。
まず、お母さんがテレビ電話に出て、それから俺の方が石山さんと応対することになっている。
明日以降どうするのか、それについても考えていかねばなるまい。

「幸子ー！」
「はーい！」
何分か経ってお母さんの呼ぶ声に反応し、テレビ電話に出る。
テレビの画面の向こう側で、石山さんがにっこりと微笑んでいた。
「聞いたわよ」
「うん」
石山さんと一緒に、カリキュラムの様子について話し合う。

石山さんからは、いくつもアドバイスを貰えた。
まだ「かわいい」と言われて嬉しいといった感情は芽生えていないけど、成長すれば、「かわいい」と言われて嬉しくなるし、「私ってかわいい」って、もっと積極的にアピールもできると、石山さんにアドバイスしてもらった。

「ふう」
石山さんも、実際には女の子になったばかりで、まだまだ分からないことも多いという。
それでも、自分の中にある女の子を深めていくことが、幸せな人生の近道だという。
少女漫画にも、素敵な男性との恋を実らせるものがとても多い。
後日談では、ヒーロー役の男の子と結婚し、子供が生まれ、家庭を持っていることが多い。
少女漫画の恋愛像は、多くの女の子が求めている恋愛像ということ。
女の子らしい女の子がどういうものか、石山さんも、学びの途中なのかもしれない。
「明日以降も、頑張らないと」
言葉遣いは、特に気を付けないと。
そう思いながら、眠りについた。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　２～４日目

翌日、大学から帰ってきた俺に課せられたのが洗濯だった。
母直伝の洗濯方法や、部屋干しのコツといったものを一つ一つ丁寧に学んでいく。
そうした中で分かったのが、家電の進化だった。
何でも、お母さんのお母さん、つまり俺のおばあさんは、手押し式の洗濯機で、更に先祖になると洗濯板と桶で洗う必要があったという。
専業主婦の時間が増えたのもこうした家具による発展の功績が大きいという。
そういう意味で、昔の女性に比べれば、家事という「女の子の魅力」を磨くためのハードルは格段に下がっているとも言えるわけだ。
石山さんは特に家事に重点を置きたいとも言っていて、石山さんによれば「あたしもカリキュラムを受けていた時は『優子は美人だけど、家事ができないと立派なお嫁さんになれない』と母さんから言われたわ」とのことで、ＴＳ病のカリキュラムでは家事というのは特に重要視されている事項らしい。
「ふふ、幸子もスカートが板についてきたわね」
トイレから出ると、お母さんが声をかけてきた。
「あ、ああうん」
「ところで幸子、トイレはどうしたかしら？」
「え!?　えっとその……」
母さんが、急にトイレの話をしてきた。
いったい行きなり、どうしてなのか？
そういえば、さっき水を飲まされたっけ？　もしかしてこれも訓練なのかなあ？
「いい？　まさかと思うけど、スカートを脱いで床に落としたりしてないわよね？」
「ギクッ」
実は、今までスカートをわざわざ脱いだりしていたのだ。

もちろん、大学に行っていた時も、女子トイレの中ではそのような脱ぎ方をしていた。理由は何となくだ。
この辺り、まだ穿いたことはないけど、ミニのスカートならやりようがありそうなことはわかっているけど。
「はあ……そんなことだろうと思ったわ」
母さんに呆れられてしまった。うー、でも女の子としてのトイレの流儀なんてわかりようがないんだし、教えてくれてもいいような気が……うー、これも教育の一環ってことかな？
「うー、床につけちゃいけねえのは分かってたけど」
「こら幸子！　女の子がそういう言葉遣いしちゃダメでしょ？」
すかさず怒られる。
「うっ……床につけちゃいけないのは……分かってたわよ」
そして、怒られたら都度「言葉遣い」を訂正しないといけない。
「うん、よろしい」
「わ、私は女の子……私は女の子……女の子らしくかわいらしい言葉遣いをしなきゃいけない……」
石山さんの言いつけ通り、暗示をかけ続ける。
女の子になるためには、小さな積み重ねが必要で、堕落が最大の敵になる。
そう思い、これも積み重ねの1つと自分に言い聞かせる。
「いい？　スカートはトイレが楽なのよ。覚えておいてね？」
「は、はい……」
そして、トイレのやり方について、詳しく指導を受ける。
うーむ、でもよく考えたらソッチのほうが楽だよな。うん、めくった方が。
「それから、最後に下着を元に戻すときに、スカート巻き込まないように注意してね。もし気づかないまま巻き込んじゃったら丸見えになっちゃうわよ」
「ああ、うん」
悟の時なら「ラッキー」って所だけど、自分が当事者になったら洒落にならない大惨事だ。

もちろん、世の女性たちはそんなことは滅多に引き起こさないだろうし、実際自分もそんな場面を見たことがない。だけど、今の自分は女の子としては体が大きいだけで「幼い女の子」と殆ど変わらないんだし。

とにかく、こういう女の子の作法は覚えておかないといけない。

実際に女としての生活もスタートしたけど、今は大学の小さな空間だけで、今後は世界も広くなっていく訳だし。

「ふふ、幸子も訓練を積むのよ」

「うん」

カリキュラムは進んでいく。

そういえば、石山さんがカリキュラムを担当することもあるんだっけ？

そっちはどうなるんだろう？

翌水曜日は掃除、木曜日には買い物の極意を教わった。

買い物のは、カリキュラムというより「お母さん流の品物の選び方」っていう感じではあったけど。実際、カリキュラムになさそうな節約術なんかもついでに教わったりしていて、オトクな気分も味わえる。

水曜日木曜日は平日なので、大学に通いながら、きちんと課題もこなしていくことができた。石山さんと違い、大学に通いながらなので、行う課題も格段に少なくなっている。

お母さんもお母さんで、負担が減っているのは確かだろう。

そして金曜日に行われるのが、ついに戸籍の変更だという。いつもの通り、大学が終わってすぐに課題に取り掛かることになる。

また、膝上の、少し短いスカートを穿くように言われたので、この寒い季節のことも考慮しストッキング着用にしてみた。

うー、女子高生ってすごいよなあ。この季節でも生足なんだし。

「いい幸子？　これは幸子の手で提出すべき書類よ」

「うん、わ、分かってる……わ」

ともあれ、水を飲んでから区役所に行くことになった。水を飲ませるというのは以前にもあったから、きっとトイレ関係の課題がまたあるのだろうなあと思いながら役所に向かっていった。
住んでいる区の窓口に、名前と性別の変更届を出す。
本来なら家庭裁判所の許可が必要ではあるのだが、ＴＳ病だけは例外で、「裁判で争う余地もない」として区役所への提出で事足りることになっている。
「さこっちよ」
母親が運転する車に乗る。
ちなみに、俺の免許も早めに更新しなきゃいけない。悟の免許はもう、使い物にならないからだし、協会の支援があるとは言え、体がガラッと変わったのである程度の講習をまた受けないといけないそうだ。
ともかく、塩津悟の痕跡を消していくのが今後の自分の役目になる。
車に乗せられると、区役所まで一直線だった。
「えっと、こっちよ」
区役所のある一角に、所定の書類を渡す窓口があり、書類は必ず自分の手で渡す必要がある。
手続きが完了すれば、正式に塩津幸子になれる。
「幸子……かあ……」
母親が、とっさに思い付いた名前が幸子だった。
その名の通り、「幸せな子」という願いが込められている。
女性としての人格が芽生えた後も、この名前を変えようと思ったことはない。
確かに、考慮した時間は短いし、いかにもという感じな名前でもある。
でも、やっぱりかわいい名前だし、自分にもふさわしいかな？　何て思っている。
ＴＳ病の女の子たちは、名前は結構短い時間で決まるそうで、長い間使っていくはずなのにギャップが大きい。石山さんも１日で決め

たって言うし。
「すみません」
「はい」
　区役所の窓口の担当者に話しかけてみる。
「こちら、お願いできませんか？」
「……はい、分かりました」
　私の書類を受け取り中身を確認すると、窓口の人が大切に担当者に渡した。
　処置が終わったら郵便で届くことになっている。
　ともあれ処置が終わったので母さんのところに合流する。
「さ、今日のカリキュラムはこれで終わりよ幸子」
「ふう、でもその前にトイレにいってもいいかな？」
　そして、狙い通り、トイレに行きたくなってきた。
　女子トイレなら何度も入っているとは言え、やはりこういったカリキュラムでは「改めての復習」も大事なのだろう。
「ええ、その代わり、幸子が多目的トイレに入らないか監視するわね」
「はい……」
　うー、女子トイレ自体は既に大学で入り慣れているとはいえ、母親の監視があるとこれはまた入り辛い。
　やはりここも、女性特有の香水と血液を混ぜたような匂いが立ち込めていた。
　うーむ、男子の思う女子トイレとは大分違うよなこれ。
「ふう」
「正しい入り方するのよ」
「はーい」
　スカートを下ろしてはいけない。
　こんな状況で女子トイレに入ったら、もちろん対処法はこれだけになる。
　ペロン
　スカートをめくりあげ、ストッキングごとパンツを下ろし、便座に腰かける。

「ふう……」
うむ、既に何度か試しているとは言え、これなら確かに服が汚れないよな。
ともあれ、さっき警告されたように、事故に気を付けながら服を元に戻す。
うん、慣れはじめが一番危ないとも言うし、気を付けないといけねえな。
「よしっ」
トイレを出ると母親が待ち構えていた。
「幸子、どうやってトイレ入ったかしら？」
「え、えっとその……こう……めくって……」
うー、言葉で説明し辛い……
「ああうん、それで正解よ。そう、下ろす必要はないってことよ」
うん、ともあれ、これで大丈夫かな？
「女子トイレは並ぶことも多いから、余裕を持って行動するのよ」
「大丈夫、分かってるから」
女の子になったら女子トイレに入ることも多くなるし、気を付けないと。
男だった時は「随分並んでいる」という感じだったけど、自分が女子になったら他人事じゃない。
というか、以前にも何度か行列のできている女子トイレを見てうんざりしたこともあったし、それを避けるために大学の敷地内をあちこちと歩いたこともあった。おかげで普段行かないような場所にも行くことになった。
女性の場合、漏らしやすいとも言うし、気を付けねばならないだろう。
既に女の子になって3週間が経つとはいえ、本格的に女の子も生活を始めようと決心したのは最近のこと。
やはり、色々ありそうだ。
「じゃあ、帰るわよ」
「はーい」

駐車場に戻り、母さんの運転する車で自宅に戻り、その後は夕食を手伝った。
ともあれ、これで名実ともに「塩津幸子」として、私は歩むことになった。
「じゃあ幸子、少し休憩よ」
「はーい」
室内は暖房気味になっているし、ストッキングは圧迫感があるので、脱いで生足で休憩することにした。
ともあれ、今日は疲れたしゆっくり休みたい。
「ふう……」
ストッキングを洗濯機に放り込むと、早速休むことにした。とにかく、足を休めたい。
女の子としての人生にはまだ慣れない。
だから、もう少し気を張った生活が続く訳だけど、そればかりでも疲れちゃうから、少しゆっくり休まないと。
ガチャッ
「こらっ!!」
突如、ドアが開かれると、母さんの怒った声が聞こえてきた。
ぶわっ
走り出す音が聞こえると、スカートが浮遊感に襲われた。
「わっ!」
「もうっ! パンツ丸見えじゃないの!」
体を回転させて起こすと、母さんがお説教してきた。
「うー、休憩中なんだからいいじゃねえか」
「こらあ! 女の子がそんな言葉遣いしちゃいけません!」
反論すると、言葉遣いが悪かったせいでかえって怒らせてしまった。
うえー踏んだり蹴ったりだ。
「うっ、きゅ、休憩中くらいいいじゃないのよ」
「いけません! いい? 女の子はそういう風にだらしなくなると、すぐに女子力が無くなって、あっという間にダメな女になっちゃうの

よ。家の中だからって、パンツ見せちゃダメよ」
「はい」
母さんの言ってることは正論なので、一切反論ができない。
女の子は気が抜けない生き物だ。
「さ、幸子、パンツ見られたら、どう思う？」
「どうって、そりゃあ……恥ずかしいと思うけど」
まあ、さっきのは驚いた要素の方が大きいけど。
「ふふ、じゃあ、パンツ見られたら『恥ずかしい』って暗示をかけなさい」
「うぐっ……」
改めて言われると、急に恥ずかしさが込み上げてくる。
「ほら」
押し黙っていると、母さんに催促される。
「うっ……ぱ、パンツ見られて恥ずかしいよお……」
わざわざ口に出して告白しないといけない。
自分が悪いとは言え、結構きつい罰ゲームになっている。
「ふふっ、幸子、かわいいわよ。その心を大事にね」
「あうー」
恥ずかしがる女の子がかわいいのは、自分もよく知っているけど、やっぱりいざ当事者になると、その恥ずかしさは倍増するなあ。
「幸子、布団を被るといいわよ。それなら中がだらしなくても大丈夫だわ」
でもきちんと、次回からの改善点も話してくれるから、まあそれなりに親切だとは思う。うん。
「うん、次からそうするわ」
「ふふ、女の子になったわね、幸子も」
母さんがにっこりと笑いながら部屋を出ていく。
母さんが笑った理由は、本人が部屋を出てすぐに気付いた。
それは、私の口から女の子らしい言葉が出たことだった。
何気なくポロっと出たけど、とっても乙女になっていたことに気付かされた。

「……」
石山さんの場合、男だった頃の人生には嫌気もあった。
でも、私には男の人生に対する後ろめたい気持ちがあるわけではない。
だから、理屈では分かっていても、「悟」を捨てることには抵抗感がある。
今日はついに、町役場で性別と名前の変更届を提出した。
後戻りが出来なくなったこともまた、事実だった。
最初から後戻りすることはもうないと分かっていても、いざ本当に出来なくなるとかなりの覚悟が要求されるのもまた事実だった。
「一つ一つ、よね」
だから、大事なのは積み重ねだと私は思う。
少しずつ女の子としての成長を実感ができていて、石山さんとまた会う時、きっと大丈夫だろうと思えるようになった。
土曜日は、石山さんの地方に行き、そこで直々に色々なことを学ぶ。
何を学ぶのか、今から楽しみだ。
ともあれ、今は休もう。女の子としての慣れない振る舞いを身につけるためにも、今はゆっくり休まねば。
そう思い、私は布団をかぶせ、しばしの眠りにつくことにしたのであった。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　前編

ピピピピッ……ピピピピッ……

「ん……」

聞き慣れた目覚まし時計の音が、自分を起こしに来ていた。

今日はいよいよカリキュラムの中でも重要な日で、休日ではあるものの、石山さんの通う小谷学園に行くために早めに起きないといけない。

「ふう」

いつものように起きて、そして服装を決める。

服装についても、暖かい関東の活動を前提にしたものでいい。

「うーん」

今日の服選びはいつもよりとても悩む。

というのも、石山さんに誉められるためには当然スカートということになるわけだけど、どんなスカートがいいのか気になった。

あんまり短いと季節柄もよくないし、露出度の高い服はかえって叱られちゃう可能性だってある。

地味な格好、女の子らしくない格好は論外としても、「女性としてのコーディネート」をどうするかというのは、私には全く分からないし、もちろん母親に聞いていてはカリキュラムの意味がない。

自分で答えを見つけるというのは、やっぱり大変だけど……

「よしっ」

女の子と言えば、ピンク色。

そう思った私は、このピンクの、短いけどふんわりした暖かいスカートが目に入った。

うん、これなら大丈夫だと思う。

まずは服を脱いで裸になり、パンツとブラをつける。意識した訳じゃないけどこっちもピンク色。

女の子の下着にもすっかり慣れた。やっぱり女の体を強調した肉体になると、女性用の下着は欠かせなくなるよな。

更に服を着込み、後頭部につけるリボンは、今日は緑色にすること

にした。私の水色の髪色と合わせると結構カラフルに決まってると思う。
テレビ電話で見る石山さんは、いつも白いリボンだけど、私はリボンの色にこだわりはない。
「おはよー」
「幸子おはよう、朝ご飯出来てるわ。食事が終わったら出掛けるわよ」
「はーい」
新幹線は速いとは言え、東京と仙台はそれなりに離れている。
なので、朝食を食べて、比較的すぐに出発する必要がある。
小谷学園までの案内は母さんが持ってきてくれている。
「幸子、今日はカリキュラムの中でも特に大事だから」
「分かってる」
手原たちにも、「カリキュラムが終わったら、気遣いしなくていい」と言ってある。
つまり、このカリキュラムが終われば、もう完全に女の子としての扱いになる。
もちろん、無意識に気遣いをすることはあるだろうけど、いつまでもそのままでは俺のためにもならないから。

「ごちそうさまでした……ふう」
ご飯を食べ終わり、後は出発を待つだけである。
電車の切符を受けとると、財布の中に大事にしまう。
「幸子、その服、かわいいわね」
いきなり褒められた。
「え……あ、うん」
やっぱりまだぎこちない。
かわいいと言われることはいいことだと分かってても、感情的に納得がいくまでは時間がかかる。
いくら理屈で納得しても、それだけではダメということ。最も、男に戻れないことが頭でわかっているなら、自殺は防げそうだけども。
もちろん、これもいつかすれば、「かわいいって言ってもらえて嬉し

い」って思えるようになるんだろうとは思うけど、それはまだまだ先の話だ。

「幸子、今日は会長さんも立ち会うって」

行きの鉄道への道すがら、母さんが会長さんのことを話す。

石山さんにとっても、「ＴＳ病患者」への教育は初めてのこと。同じ学校の先生と生徒という関係からも、立ち会うにはうってつけだろう。

永原会長……今年で４９９年目の人生だというにわかに信じがたい人。

「会長さんかあ……」

永原会長とは、まだ一回しか会ったことはない。

普段は石山さんの通っている高校で担任の先生をしているのだという。

石山さんの話では、古典の先生だって言っていたけど、彼女の人生話が本当なら、これ以上に適格な科目はない。

「次は、仙台――」

「幸子」

「ああ」

ぼんやりと考えていると、母さんから声をかけられた。

仙台から新幹線に乗り換え、大宮駅で降りる。

そこからは、何度か乗り換えをして小谷学園に行くことになっている。

とにかく、大宮を出たら油断はできない。

「新幹線はこっちだぜ」

「言葉遣い」

「新幹線はこっちよ……私は女の子……私は女の子……女の子何だから女の子らしくしないといけない……」

今でもまだ、言葉遣いを間違えてしまうことは往々にしてある。

母さんが逆方向に進もうとして慌てて引き留めるというやや急な状況だったので、間違ってしまった。

「ふふ、幸子も成長したけど、まだまだよね」
「うー」
もしかしたら、母さんの謀略だったのかも。
よく分からないけど。
切符を自動改札機に遠し、指定のはやぶさを見かけたのでそちらに乗車する。
「えっと、普通車……5号車の2番の……」
切符と、座席上に表示されている番号とをよく確かめてから乗る。
以前石山さんと会った時にも使ったけど、やっぱり座席の確認は大変だ。
「ここね」
「ええ」
私たちが乗ってしばらくすると、ドアが閉まる音がして、新幹線がゆっくりと走り始めた。
電車内で母さんと雑談しつつ、女の子の言葉遣いを心がける。
それでも、アウトとまではいかないものの完全に女の子らしい言葉遣いかと言えばそうでもないような言葉遣いが多い。
石山さんは、完全に「わよ」って言えるのに、やっぱり修行を怠っちゃいけないんだな。
「幸子、少女漫画読んで見て、どうだったかしら？」
カリキュラムの途中には、少女漫画を読むことで、少女の感性を学ぶ課程があり、自分も感想文を提出することになっている。
読書感想文なんて小学生の時以来だけど、読んだこともない少女漫画の感想文ということもあって、思ったより苦ではなかった。
「うん、感想文は書けたけど……どういう評価になるかは……」
石山さんと2人で東京を旅した時と同じで、恋愛ものばかりであるということを第一に上げた。
それは当然、女の子がそういった話を好むこと。
そしてヒーロー役の男の子も、先輩だったり同じクラス同学年のお金持ちだったり、あるいは学校の先生ということが圧倒的に多く、またそんな「憧れの存在」に対する恋愛の障害も、様式美が多いといっ

た印象だった。
恋愛を全面に押し出さない少女漫画でも、恋愛要素皆無な少女漫画は、自分が読んだ限りでは限りなく0に近かった。
彼氏として結ばれたり、場合によっては結婚して家庭に入って子供を産むというエンディングもある。
結局、女の子が望む幸せの形について知るには、売り上げを出さなければいけない少女漫画は最適の教材だった。
単行本だけではなく、幾つかの少女漫画雑誌も読んだ。
少年漫画と比べると、ダイナミックな絵で訴える場面は少なく、代わりに主人公の女の子が顔を赤くしたり、あるいは地の文での心情描写がとても多い。
恋愛ものが多いといっても、中身はかなりの変化に富んでいる。少女漫画を読んで見て、まさか恋愛ものがこんなに奥深いとは思わなかった。
「ふふ、幸子、少女漫画は恋愛ばかり。でもその中身は？」
「うん、バリエーションは多い」
母さんと少女漫画について話す。
少女漫画特有の画風も多く、いわゆる「萌え絵」とも違う。
「そうそう、女の子の望みを叶えるのが少女漫画なのよ」
そういう意味で言えば、こうやって家庭に入って主婦をして、子供が2人いる母さんは今幸せなのかな？
「うん」
少女漫画も売り上げが大事だから、女の子の気持ちに寄り添ったものが多い。
だからきっと、こういう男の子と結婚したいというのが本音なんだと思う。
新幹線がどんどんスピードを上げていく。
相変わらず窓に吹き付ける轟音を聞きながら、一路南へ南へと進む。
そして、前回同様大宮駅で降りて、更に路線図と案内を頼りに、在来線を乗り継いで小谷学園の最寄り駅に着いた。

「こっちね」
幸いにして、駅構内には地図があって、小谷学園側の出口と道のりはすぐにわかった。
まあ、母さんが地図持ってるけど。
「ふう」
雰囲気は落ち着いているけど、通りはそれなりに賑やかで、ハンバーガー店や大きな病院も見えた。
郊外という感じではあるが、それでも仙台市民からすれば「栄えている」という印象だ。
やや小高い丘のところに、小谷学園の建物が見えた。制服姿はまばらだった。
「少ないわね」
「うん」
それにしたって、部活とか休日練習ありそうなのに。
もしかしたら、小谷学園はこういうのにあまり力をいれていないのかもしれない。
それはそれで学校の特徴なのかもしれないけど。
「えっと、来賓は……こっちね」
「あ！」
ご来賓の方のために設けられた入り口を通ると、すぐに石山さんと永原さんに出くわした。
石山さんは制服姿で、永原さんもＯＬ風のレディースーツだった。いかにも「先生」という感じだけど、何だか子供が背伸びしているという感じもする。
スリッパに履き替えて準備をする。
「幸子さん、こんにちは」
「う、うん」
石山さんは、自分の服装を見て、笑顔になった。
「今日は、幸子さんに高校生に戻ってもらいます」
石山さんが言うには、こうした学園生活における「スカート慣れ」や「女の子としての振る舞い」が大事になってくるとのことだった。

自分は既にもう大学生な訳だけど、それでもＴＳ病患者には必要だという。
「こっちよ」
４人で、石山さんが普段使っている教室に向かう。
机の上に、石山さんが着ているのと同じ制服があった。
「幸子さん、今から制服に着替えてもらいます」
「はい」
「私が着付けを教えてあげるわね。スカートはむしろ短くていいわよ」
石山さんの目が、少し怪しく光った。
「いや、１人で出来るから！」
さすがに、１人で着替えられない何てことはない。
本能的に危険を感じた。
「あら？　じゃあ外にいってるわね。着付けに失敗したらおしおきよ」
石山さんは、不穏な言葉を残しつつ、永原さんと母さんを引き連れてドアの外に出てしまった。
おしおきって……まさかそんな言葉が生で聞けるとは思わなかった。
「ふう」
着替えくらい一人でできる。
といったものの、女子高生の制服を着たことはもちろん無い。
カーテンが閉められた誰もいない教室の中で、服を脱いで畳む。
まずはＹシャツを着る、次にリボンがある。
これはどうやら襟にかけるタイプらしいので適当に付ける。
そしてスカートだけど、これはおそらく折れば大丈夫なはずだ。
うー、やっぱり思ってたけど、女子高生のスカートは本当に心許ないなあ……石山さんとか、これより短いのに。
えっと、それで最後にこの制服の上着を着て……うん、多分完成ね。
「よし」
外で待っている３人をあまり待たせちゃいけないし、早めに報告し

ないと。
「できたよー」
「はーい」
石山さんたちが教室に入ってくる。
母さんが開口一番「まあかわいい」と言って来て、それに対して永原さんと石山さんはちょっとだけにこっとしている。
「うん、かわいいわね。でも……」
石山さんが、俺に近付いてくる。
「リボンが曲がっている！　ダメよ!!」
ぶわっ！
突然、スカートがめくれ上がってパンツ丸見えにされてしまった。
「なっ……てめっ……」
ぺろり
いつのまにか後ろに回っていた石山さんに、今度は後ろからスカートの両横を摘ままれぺろり。
永原さんが「あらピンク」と呟いた。
「リボンが曲がってるわ！　それと言葉遣い！」
石山さんが大きく厳しめの声を出す。
「や、やめて！」
「いい幸子さん、リボンが曲がってちゃダメ、それから、今日から女の子らしく無い言葉遣いしたり、間違えたりしたらスカートをめくるわよ。暗示も、『私は女の子……私は女の子……』だけじゃなくて『私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……』に変わるわよ」
石山さんが、スカートをめくると言い出した。
そして、それに対して恥ずかしがるように指示を出した。
「うーどうして？」
頭が混乱していたのが冴えてくると、急に恥ずかしさがこみ上げてくる。
「女の子として、はしたなく恥じらいがないのはいけません、今日はまだ訓練の日ですから、今のうちに恥ずかしい思いをした方がいいの

よ。さ、やってみて？」
「わ、私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
暗示を声に出すと、石山さんはとても誉めてくれた。
リボンをまっすぐに直すと、石山さんが「いいわよ」と言ってくれた。
「えっと、これでいいのかな？」
「残念だけど……」
ぶわっ！
また石山さんにめくられた。
「シャツ、ちゃんと入れなさい」
「は、はい……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
女の子のパンツというのもあるかもしれないけど、スカートの中を見られるのは実際にすごく恥ずかしい。
悟だった時にはついついスカートの中に視線が行っちゃってたけど、今思えば悪いことしたと思った。
「ふふ、かわいいわね」
永原さんと母さんも、不適な笑みを浮かべていた。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　中編

「ねえ、これって意味あるの？」
とにかく、このことは聞いておきたい。
女の子として生きていく上で、重要なことだと思うから。
「うん、恥ずかしい思いをすればするほど、幸子さんは女の子らしくなっていくわよ」
「いまいちよく分からない。確かに恥ずかしいことだけど」
正直、めくられるかどうかで自分が変わっていくという自覚があまりない。
「塩津さん、実はね、成績が悪い子はもっとスカートめくられるんだけど、めくられるのに慣れちゃって恥ずかしいと思わなくなっちゃうのよ」
すると、永原さんが成績不良者の行動を示してくれる。
だけど出てきた回答は予想外のものだった。

「そ、そうなんですか!?」
「うん、一番成績が良かった石山さんも、この日はいっぱいスカートめくりされて、いっぱい恥ずかしい思いをさせられて、今の石山さんがあるのよ」
「ちょ、ちょっと会長！」
永原さんの暴露は容赦がない。
石山さんの顔が赤くなってる。
まあそりゃあ誰が暴露されても恥ずかしい内容だとは思うけど。
「と、とにかく、次は座り方訓練です。あたしが教壇に立つので、あたしを先生に見立てて授業を受けているという前提で、椅子に座ってみて？」
そう言うと、石山さんが教壇に立ったので、私は適当に椅子の1つに何気なく腰かけた。
授業中という想定でリラックスを考える。
「幸子さん、立って見て？」

ガタッ
言われるままに立ち上がると、石山さんが近付いてきて……
ぴらりっ！
「はうっ！」
スカートをめくられた挙げ句、「直接座らない」と怒られてしまった。
そのままやり直しになったので、今度は席に座る時の女子高生の所作を思い出し、スカートの後ろを押さえながら椅子に座った。
うん、これでいいはずだ。
「はい立って」
う、間違いだったのかな？
「あ、あの……」
「うん、よくスカート揃えたね」
「は、はい……」
口では誉めているけど、表情は少し冷たい。
「でも……」
ぺろっ！
「うわあっ！」
反射的にスカートめくりが来ることを察知した自分は、石山さんがスカートを掴んで上げようとすると同時に、両手を下に突き出してスカートを押さえた。
それでも石山さんがめくるのが早く、一瞬見えてしまった。
「あら幸子さん」
「あ、あの……す、すみません」
逆らうような真似をしたため、思わず謝罪する。
うー、ますます怒られそう……
「ううん！　素晴らしいわよ今の！」
「え!?」
石山さんの次の言葉は、ひどく混乱させるものだった。
普通、こういったおしおきに抵抗するのはご法度のはずなのに
「今のはね、成績優秀な女の子がする行動よ。素晴らしいわ今の仕草、

女の子らしくて褒めても褒め足りないくらいよ。これからも、おしおきされた時には是非今のを心がけてね」
永原さんの補足説明が入る。
どうやら、これもカリキュラムとして身につけて欲しいことの一環だったらしい。
あくまでも「女の子らしくなる」ことがこのカリキュラムの目的という意味で、徹底さを感じる。
スカートをめくられた時には、抑えて抵抗するのが女の子らしさなんだとか。
とはいえ、暗示は免除にならなかった。
石山さんによれば、今度は足を広げすぎていてそれでパンツが見えてしまったらしい。
うー、やっぱりミニスカートってかわいいけど大変だよな。
暗示をかけさせられたら、今度は屋外での訓練だということで、別の場所に移動することになった。
私達は黙って永原さんと石山さんについていく。
しばらくして永原さんが向かった先は、頑丈そうな扉だった。
そしてそこを開けると屋外で……要するに非常口だった。
非常口を使っての訓練って、避難訓練ではないよね？　どういうことだろう？

「ここが非常階段よ、見ての通り、生徒たちにとって降りることが前提だからその短さだと、そのまま登るとパンツが見えてしまうわ」
それは分かる。今の自分も石山さんも、スカートはとても短いのに、こんな急階段では見えそうなのは容易に想像つく。
「そ、それで……うまく見えないようにここを登れって？」
「ふふっ、そゆこと。幸子さんの大学や、あるいは通学途中なんかでも、こういうシチュエーションはよくあることよ。幸子さんもＴＳ病だからわかってると思うけど、ミニスカートでは常に男性の目があると思うのよ」
石山さんがまた不敵な笑みを浮かべる。これはどう見ても「獲物を

狩る目」だ。
「う、うん……分かってる」
とはいえ、石山さんが言っていることはよく分かる。
男の頃の俺を考えても、それはすごいよく分かるからだ。
「あーうん、多分そのことは生粋の女の子よりわかっていると思うけど。とりあえずやってみて？」
「わ、分かった……」
とにかく、一歩一歩、普通よりも急峻な非常階段を登り始める。
おっと、後ろでスカートを隠してっと。
ミニスカートで階段を上がっている女子高生の見様見真似で登ってみる。
すぐに踊り場が見えたのでそのまま体を１８０度回転してみる。

「幸子さーん、降りてきてー」
すると、すかさず石山さんの声がかかる。
「はーい！」
どうやら終わったようだ。
おっと、こっちからでも見えるのは見えるから、えっと……こう……かな？
どうせまた何かめくられそうだし、ガード硬めに押さえておこう。

やや前かがみな姿勢にすれば、この短さでも見えないはずよね。
「あら、幸子さん、まだめくると決まったわけじゃないわよ」
私の様子を見て、石山さんが注意してくる。
「なっ……ど、どうせめくるんでしょ？」
そうはいっても信用できない。
すると石山さんの表情も柔らかくなった。
「ふふっ、幸子さん、ここは満点だから安心して。めくる隙がなかった完璧な動きだったわよ」
手放しで褒めてくれた。どうやら満点らしい。よかった。
「ふう、さすがに外は嫌だって言おうと思って」

外は誰の目があるか分かったものじゃない。
「塩津さん、凄いね。ここ、石山さんでも一回失敗した所なのよ」
「え!?　そうだったの？」
あの石山さんが失敗した場所を、ノーミスで乗り切れるなんて我ながら意外なことだ。
「うん、あたしは登り切ったのに安堵しちゃってその時点で手を離しちゃったのよ。手を離すすと抑えてたスカートが反動で広がるでしょ？　そうなっちゃうと、一瞬だけど抑えない時より見えやすくなるのよ」
石山さんの思い出話はとても興味深いとともに、確かにそこは気が抜けそうな場所でもある。
……自分は夢中だったから手を離し忘れていただけだけど。
「じゃ、じゃあ……」
「うん、あたしも今みたいに抑えて戻ったんだけど、うまく隙を突かれて、パンツ見せた罰として屋外でスカートをめくられたわ……一応誰もいないのは確認してくれたけどね」
うげっ、やっぱり屋外でやらされるのか。
回避できてよかったよ本当に。
「そしてその後は、顔を真っ赤にして恥ずかしそうに暗示をかけていたわよ」
また永原さんが煽ってる。
石山さんは必死で口をつぐんでるけど、まあそりゃあ恥ずかしいなんてもんじゃなさそうだ。
「へえ、苦労したんですね」
今まで沈黙していたお母さんが感心している。
「う、うん……でも、恥ずかしそうにするのが女の子らしさの証拠で、あたしはめくられるごとに女の子らしくなってるって言われたのは、嬉しかったわね」
嬉しい……か……
今の自分はどうだろう？
女の子らしいって言われて嬉しいと言う気持ちも、正直ある。多

分、あの日東京に行った時の気持ちと同じ。
「石山さんもそうやって女の子になったんだなあ……」
そしてそれは、実はそこまで短い時間じゃないという。
この短期間でここまで変わった石山さんは、やっぱりすごい人なのだろう。
「さ、次は全校集会をイメージするわよ。いったん教室に戻るわね」
どうやらここで、もう一度教室に戻るみたいだ。

「大学では無いと思うけど、高校の全校集会では制服で床に座るという機会もあります。その時にはどういう座り方をすると思う？　とりあえずやってみて？」
確かに、高校まででは制服で座ることもあるだろう。
「う、うん……」
う―やっぱり大学生でも覚えないといけないのか。
全校集会は、人がたくさん集まるから、なるべく足を閉じて曲げて……
「幸子さん……ダメよ、その座り方」
バッ！
「うわあ！」
石山さんに両ひざを掴まれ、ガバッと無理矢理広げられ、股を開脚する形でパンツを晒された。
何とかスカートを抑えようとするけど、短すぎてこの格好じゃどうしても見えちゃうよお……は、早く終わって……
……数秒後、ものすごく長く感じた時間が終わった。
うー、ダメな理由はわかったけど、物凄い恥ずかしい。
「いい？　床に座る時に、絶対にやっちゃいけないのが今の『体育座り』よ。スカートが重力で垂れ下がって、前から見られ放題になっちゃうわよ」
「は、はい……」
体育座り厳禁なのは、よく分かった。
「それじゃあ、絶対座っちゃいけない座り方しちゃったから、暗示かけ

てね」
石山さんが平然とした表情で迫る。うー、怒られるより恥ずかしい……
「わ、私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
あうー、顔が熱いよー。
「じゃあもう一回やってみて？　あ、ちなみに足伸ばすのはなしよ。スペース取っちゃうからね」
どうやら、正しい座り方を考えないといけないらしい。
「え、えっと……」
「ヒント、女の子にしかできない座り方をしてみて？」
どうしようもなく考えあぐねていると、石山さんがヒントを出してくれた。
女の子座りを思い浮かべる。
えっと、こうやって……できるわけ無いと思っていると、見事にお尻がペッタンと床に着いた。
石山さんから、「見えてなかったから今回はめくらないけど、今の体制だとちょっとしたことで見えちゃうから気をつけてね」と言われた。
「じゃあそこから立ってみて？」
そして今度は立ち上がる訓練。
「えっと……うん」
自然のままに、膝を立てながら立ち上がった。
うん、他の女子はこれでも見えなかったし大丈夫なはず。
「ど、どう……？」
「残念、またおしおき確定よ」
「んんっ……！」
その言葉を聞いたので、私はとっさにスカートを抑えて姿勢もくの字にすることで自衛を図る。
「ふふっ、女の子らしくてかわいいわよ」
石山さんは笑顔になっている。どうやら近づいては来ないけど

……
「それっ！」
　ぶわっ！
「わあ！」
　予想外の方向からスカートがめくれる感触がする。
　振り向いてみると、永原さんが私のスカートを思いっきりめくっていた。
「ふふっ、かわいいピンク色だね」
　うー、色まで言わなくてもいいのに!!!
　もー恥ずかしさ倍増だよー！
「あ、あのどうして？」
　少し涙目になりながら聞いてみる。
　こうやって恥じらいを煽ることで、女性らしい奥ゆかさが身にしみているような気がしてきた。
「片膝ついたときに見えたわよ。いい？　もう一つの女の子座りをまずやって、慎重に立ち上がってみて？　あ、でも暗示かけてね」
「う、うん……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……」
　あうあう、また失敗しちゃった。
　ともあれ、今度はもう一度床に女の子座りをして、足を横に投げ出してからゆっくりと立ち上がる。
　うん、確かにこれなら見えないよな。
「うん、いいわよ。今回はグッドよ」
　石山さんが許してくれた。
　それにしてもすごく面倒だ。スカートで地面に座るのはなるべくしないようにしよう。まあ、そんな機会滅多に無いだろうけど。
「は、はい……それにしても、石山さんもいちいちこんなことしてるの？」
「ええ、女子高生にとってスカートの中を見られないように、なおかつなるべくかわいいミニを穿くのは至上命題よ」
　石山さんが力説している。

「……大学生になってから発病してよかった……」
ポロッと本音が出た。
「そうでもないわよ。制服はかわいいし、あたしは学校行事のお陰で好きな男の子が出来て、学校行事でデート出来たのよ」
「でも、これ面倒じゃない？」
「確かに最初はそう思うわよ。でも女の子らしくなりたいという気持ちがあれば、結構簡単に吹き飛んじゃうものよ」
石山さんの言うことは分かるけど、まだ実感は沸かない。
「そう言うものですか……」
「ええ、女子力上げるのは面倒くさいものよ。でも、あなたも女子になったんだから、女子力は大事よ。あたしだって女子力は修業中よ」
石山さんでさえまだ修行中というのだから、先はまだまだ長そうだ。
「大変だね。私も頑張れるかな？」
正直、不安な気分も結構ある。
「大丈夫よ。幸子さんは女の子初心者なんだから、はじめから出来るわけないわよ。少しずつでいいわ」
「う、うん……」
ともあれ、どっちにしても今の課題をクリアしないと先へは進めなさそうだ。
「さ、じゃあ次の講習よ。こっちに来て？」
「はい」
石山さんと永原さんの先導で、学園を進む。
私立とあって設備はよく、自分の出身高校よりも充実しているのがわかった。
「こっちよ」
こうして、また永原さんと石山さんの誘導で移動を開始する。
どうも順番があるらしく、あっちこっち行ったり来たりだ。
もしかしたら「短いスカートでの歩き方」を指導するのも兼ねているのかも知れないけど。

そして、どうやら今度は生徒用の下駄箱で講習をするらしい。
下駄箱までの道ももちろん閑散としているけど、時折生徒とすれ違う。
自分の顔は見かけないはずだけど、それでも制服を着ていると違和感がないらしく、また石山さんと永原さんは生徒と先生なので、どちらかと言えばお母さんが目立つ格好になっている。
「大学生活では不要だと思うけど、ミニスカートに慣れるという意味では特に重要よ」
石山さんが声をかけたので来てみると、いつの間にか永原さんがいなくなっていた。
「はい。あれ、永原さんは？」
思わず聞いてみる。
「ああうん、ちょっと別行動取ってもらってるわ。さ、本題に行くわよ。本来ここはあたしの下駄箱だけど、今は仮に、幸子さんのだと仮定して、ローファーを取ってみて？」
どうやら、別の準備があるらしい。
「はい」
体を屈めても届かない可能性もあったので、まず膝を折ってしゃがんで見る。
うん、ロッカーに相対しているから大丈夫ね。
えっとロッカーはここだから――よしっ。
うーん、サイズは大丈夫かな？　とりあえず扉は空いたけど――
「あ、サイズ合わないと思うからふりでいいわよ。じゃあ、今度は上履きに履き替える想定で、ローファーを脱いだところから」
何とかローファーを取り出した所で石山さんが声をかけてきた。
どうやらふりでもいいらしい。
「は、はい……」
さて今度はロッカーにしまう番。
ここからもう一度体制を低くする必要があるわけだけど、とりあえず膝を折って……うん、多分大丈夫。
えっと……よし取れた、そしたら……

ぺろっ！
「うわあ！」
突然、スカートめくりの刑がまたも発動した。今回は後ろからだった上に両手がふさがっていてされ放題になってしまった。
「幸子さん、共学の学校は女子更衣室と女子トイレ以外のあらゆる場所で男子の目があると思いなさい。今みたいに角度をつけたらパンツ見えるわよ」
「は、はい……」
本当に、些細なことも見逃してくれないのが石山さんらしい。
「いい？　身体を傾けないように、パンツはロッカーにだけ見せなさい。じゃあやり直してからまた暗示よ」
「は、はい……」
ともあれ、やり直して今度はうまく取り出した上で立ち上がる。
「私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……私は女の子……パンツ見られて恥ずかしいよ……あうう、声に出すと余計に恥ずかしい……」
「あら、とってもいい傾向よ。乙女の恥じらいを身につけている証拠だから。さ、次で最後よ。もう一回教室に来てくれる？」
やっぱり、そういう気持ちの持ちようはとても大事だそうだ。
「うん……」
うー、こんなことなら、もっとパンティー選びに時間を割いた方がよかったかな？
そう思いつつも、何とか靴の出し入れの課題を終え、今度はもう一度教室に戻るという。
次の教室では一体何が始まるのか、期待２割不安８割と言った具合だ。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　5日目　後編

「あ、会長ありがとうございます。さ、次は体操着に着替える方法よ」
「え!?」
教室に入ると、水着と体操着が置いてあった。
体操着はともかく、水着は完全に季節外れだ。
「もしかしたら、高校生活前提のこの訓練の中では、一番役に立つかもしれないわよ。幸子さんは将来何回も女子更衣室に入ることになるんだから」
「え、ええ……」
確かに、その通りだよな。
「というわけで、制服から体操着に着替えてみて？」
「え!?　みんなの前で？」
いきなりのご注文。さっきと同じような……
「何言ってるの、これは女子更衣室の訓練よ。それに体操着とスク水の場合は着替えにも着替え方があるのよ。大丈夫、ここの着替えは失敗してもスカートめくりはないわよ」
どうやら、失敗でもお仕置き免除らしい。
「そ、そう……」
そこは安心だけど「失敗＝おしおき」みたいなものだものなあ……
「じゃあまず上の方だけど、こっちは普通に着替えて大丈夫よ。今の季節ならシャツ着てるからブラジャーは見えないわね。でも夏は仕方ないわ」
「あ、これはダメなんですか……」
「うん」
石山さんによれば、上の部分は季節によっては見えてしまうのは仕方ないという。
ただし、スカートなら、パンツ見えずに着替える方法があるという。それを自分で見つけなければならないというわけだ。
無論、これはノーヒントでもすぐに分かった。
要するに、着る時には体操着から着て、脱ぐときにスカートから着

ればいいはずだ。
　どうやら、石山さんのお眼鏡にもかなったみたいで、ニッコリと笑っていた。
「うん、いいわね。次の水着は、間違えてもめくらないけど――」
「うん、やってみる」
　水着の着方は、ゆっくり慎重に石山さんに教わり、こちらも無事に終わった。
　将来的に着るのかは分からないけど、女の子としてはこれらは必ず覚えなきゃいけないことだろう。
「これでいいかな？」
「うん、ちゃんと見えてなかったわよ。いい、カリキュラムはスタート地点よ。気が緩んでパンツ見えてしまうのはダメよ」
「うん、分かっているよ」
　そう、これは目標でもなんでも無い、自分の人生はこれからも続いていくものだから、「今課題をクリアできればそれでいい」とは決してならない。
　そのような意識で課題に挑んだら最期、せっかく美少女になったのに、女の子として魅力のないダメ女になってしまう。
「でも幸子さん、めくられる度に反応が女の子らしくなっているから、あなたは成績優秀よ」
　石山さんが微笑んだ。
「あ、ありがとうございます？」
　石山さんは褒めてくれるけど、私にはよく分からないから、困惑した反応しかできない。
「でも、これから女の子を続けると、スカートめくられたらもっとかわいい反応になると思うわよ」
　そんな風に言われても、全くわからない。
「でも、模範解答分からない」
「今はまだ知らなくていいわよ」
　石山さんが交わす。うーん……そうだっ！
「いや、その……知りたいんですけど、できれば石山さんが実践して欲

しい」
「え!?」
石山さんが動揺した隙に、一気に距離を詰めてスカートの裾を掴む。
「えいっ！」
ぶわっ！
「きゃあああああああああああああ!!!!!」
子供っぽい水玉模様が見えたと思ったら、石山さんが悲鳴をあげ、スカートを押さえた。
「あうう、は、恥ずかしいよお……!!!」
そして、地面にへたりこんで顔を真っ赤にしてしまった。
「う、うおお……石山さん、さすがですよ……」
思わず感心したくなるくらいの恥じらい方に、これが模範だと思い知らされた。
こ、この境地に達するには、まだまだ修業が必要だよね。うん。
「あうあう……もう、恥ずかしいよぉ……」
顔をうつむけている。これ、男子が見ていたら興奮するなんてもんじゃないだろうなあ……
「さっきまでノリノリでスカートめくってきたからね、ちょっと仕返しにって思ったけど……石山さん女の子だわ……」
「そうでしょ？　石山さんは優等生だもん」
恥ずかしくてへたり込んでいる石山さんに代わって、永原さんが説明してくれる。
「そうねえ、幸子もああいう風になりなさい」
そしてお母さんも「あれを模範としなさい」と言う。
正直まだまだ難しいよこの反応は。
「もうエッチなんだからあ……」
石山さんはまだ床にへたり込んでスカートを抑えている。
「数え切れないくらいめくられちゃったからね、1回位仕返しだよ」
私がニッコリと笑うと少しだけ気分がスッキリした気がする。
でももう一つ気になったのが、水玉模様だ。

「それにしても、石山さんって結構子供っぽい下着穿くんですね」
　正直そこが意外だった。
「え!?　いいじゃない、かわいいんだから」
「でも水玉ってないでしょ水玉って……私の部屋にもあるけどさ」
　女の子というよりは、もはや「女児」と言ってもいいかもしれない。
　見た目から言えばより幼く見える永原さんが穿くほうが、多分似合うくらいの。
「もう、結構お気に入りなのよこれ！」
「そ、そう……」
　石山さんが力説すると、思わず少し引いてしまう。
　石山さんによるとお気に入りだという。
「それに、子供っぽいと言っても、男の子はそれが好きだったりする人も多いのよ。幸子さんも将来好きな男の子が出来たら、ちゃんと好みに合わせないとダメよ。彼氏だって彼女に好かれるために必死なんだから」
　むむむっ……同じ元男として、これ以上無いほど説得力がある話だ……やっぱりこの手の論争だと石山さんはあまりにも強い。
「はーい……」
　そう返事すると、石山さんが立ち上がった。
「さて、とにかくこれで、学校でするべきカリキュラムは終わりよ。幸子さんの男時代の服の一部を持ってきてくれたと思うけど、帰りにこちらのリサイクルセンターに寄っていってください」
　石山さんは何事もなかったかのように振る舞っている。うーむ、まためくってみたいけどさすがに自重しておこう。
「分かってます」
　お母さんが言う。
　そう、今日のもう一つの目的は、もう着なくなった男時代の服を捨てるというもの。
　このリサイクルセンター、おそらく石山さんも同じように服を捨てた場所なのだろう。
「それでは、来賓出口まで見送りますね」

こうして、私達は無言で学校の廊下を進んで行き、いよいよ別れの時が来た。
「はい。今日はありがとうございました」
「ありがとうございました」
「いえいえ、お二人とも、明日がカリキュラム最終日ですし、今日もまだ残っていますのでこの先も気を引き締めてください」
そのような挨拶があった後、学校を後にする。

「はー、終わったー！」
石山さんたちに見送られ、小谷学園を出る。
そして、石山さんに貰った地図（といってもインターネットにあるものの印刷だけど）をたどってリサイクルセンターに入り、衣服を売ることになった。
ここで、お母さんは掘り出し物を見つけるというので別行動になった。
ちなみに、明日以降は男時代の本などを売ることになっている。どちらにしても、「男に戻るな」ということを強く意識させるためにこうしたカリキュラムを設けているのだろう。
しばらくしてリサイクルセンターの人から買取のお金を受け取ると、お母さんが既に買い物を終えたみたいだった。
ちなみに、買いたい物は何もなかったらしい。
次に、昼食の話になった。
結局、昼食はここで食べることになったので、仙台にもあるチェーン店か、オリジナルのお店かで迷ったけど、結局美味しそうな駅前のお店にすることになった。
仙台の中心部なら飲食店はたくさんあるけど、郊外となると相当少なくなる。
一方で首都圏は郊外だろうがお構いなしに大量の飲食店がある。
仙台の人間からするとまるで繁華街が延々と広がっているような印象さえ受ける。
「ふふ、幸子かわいかったわ」

石山さんや永原さんに似た、少し意地悪な笑いを浮かべている。
「うー、素直に喜べない」
服とか顔とかがかわいいならまだしも、恥ずかしい目に遭わされるシーンがかわいいと言われると、少し複雑な気分になる。
「ううん、それだけじゃないわよ。幸子、カリキュラムが進むごとに自然としぐさも女の子っぽくなっていたわ」
どうやらお母さんの目の付け方は別の部分にあったらしい。
「そ、そうかな？」
「うんうん、幸子はいい子になるわよ」
やはりこういう所はまだ、女の子にはなりきれていないらしく、自覚はなかった。
こういった、より女の子としての深みを極めるのには、長い年月がかかりそうだった。
幸いなことに、私にはそのための時間は有り余るほどに残されているけれども、それでも時間が解決してくれる気には、今はなれなかった。
永原さんや余呉さんくらい長生きすれば違うんだろうけど、まだ10代の今の自分にはあんな気の遠くなる年月の想像はできない。
「……」
「どうしたの幸子？」
「ああうん、遠い未来のこと考えてた」
「そうよね、幸子、徹やその子供たちが死んでも、ずっと生きているものね」
ここ数日、ずっと女の子としての生き方を学んでばかりだったし、その前も男女の違いに戸惑ったり抵抗したりしていて、すっかり影が薄くなったけど、このＴＳ病にはもう１つの大きな特徴として、「不老」というものがある。
永原さんが言っていたように、「不老」は「不死」を意味しない。
だから、交通事故に遇えば死ぬし、自殺してしまえばもう二度と生き返れない。
それでも、老化をしないということは、そういった不運に巻き込ま

れない限り大丈夫ということでもある。
永原さんは、５００年近く生きてきたし、余呉さんも既に１８０歳を越えている。
自分も、いつか何百歳となった時、同じＴＳ病の仲間以外の人たちとうまくやれるのだろうかという不安が、どうしても付きまとってしまっていた。
「うん、今はまだ、女の子に適応するので手一杯だけど、いずれそういうのも考えないと」
「うん、そうよね」
今はまだ自覚はないけれど、将来的には石山さんと同じように彼氏を作ったりといったこともあり得ることになる。
けれども、そうなれば必ず寿命問題がつきまとう。
その時の気持ちの持ちようなども、石山さん、相談した方が……いや、これは永原さんや余呉さんの方がいいかな？
「ま、とにかく幸子は今はまだ女の子としての自覚を持つことからよ。今日だって、いっぱいおしおきされちゃったものね」
「う、うん……」
お母さんの嗜虐心が、最近ちょっと引っ掛かる。
確かに、教える側から見ると、がさつだった中身がどんどん女に近付くわけで、やっぱりそういう心を刺激しちゃう要素があるのかもしれないけど。
「でも幸子、本当に見違えるようになったわよ。カリキュラム始める前と比べても、ね」
女の子の体と、女の子になろうという気持ちの２つがあれば、意外と簡単に女の子になれるのかもしれないけど。
「う、うん……」
「お待たせいたしました――」
「お、来たわね」
私たちの会話も、店員さんが持ってきた食事によって、途切れた。
帰り道も同じように電車に乗り、はやぶさ号で仙台へと戻っていっ

た。
行きと比べると、リラックスした帰路になれたと思う。
「ただいまー」
「お姉ちゃんお帰り。どうだった？」
家に帰ると、徹が出迎えてくれた。
すっかり日常化したためか、私がスカートを穿いていることについては、もう徹も何も言ってこなくなった。
「ああうん、まあ……ちょっと、ね」
正直言いにくい。
「ふふ、幸子ったらいっぱい失敗しちゃって、石山さんにいっぱいおしおきされちゃったわよ」
「お、おしおきって……ごくりっ」
徹が思いっきり唾を飲み込んだ。
うー、知られたくないけど。
「まあ、幸子の名誉のためにも言わないでおくわ」
ふう、よかった。
それでも色々と妄想されそうだけど、まあそれは仕方ないかな。
「とにかく、関東まで行ってきたから疲れたよ」
「うん、ゆっくり休んできてね」
昨日みたいな失敗をしないために注意しつつ、ベッドで休むことにした。
カリキュラムは明日の日曜日で最後になる。
月曜日からは、また大学での日々に戻る。いや、カリキュラム中も大学はあったけど、それに専念できる形になる。
一年次は必修科目も多いし、これからのことも考えると留年する訳にはいかないもの。
「……」
部屋には、サッカー系の雑誌や男性向けの本が束ねられていた。
代わりに本棚を埋め尽くしているのは、協会から貰った少女漫画や女性誌だった。中身はおしゃれ系統や、スイーツを始め甘いもの、更には恋愛話の特集が多い。

明日、男だった時に着ていた服も含めて、これらを古本屋と古着屋に売りに行かないといけない。
この前の戸籍変更の提出もそうだけど、このカリキュラムは男を捨てることが求められている。
自分から男を捨てることを意識することで、より女という存在を染み込ませる効果がある。更に言えば、その時の服装は必ず「ミニスカート」と決まっている。
とにかく、徹底的に女を自分の中に刷り込ませる必要性がある。
今の自分は男ではない、もちろん「第3の性」でさえない。女を強調したような女だから。
「さようなら、悟……」
自然と出た言葉だった。
どうしても、未練は残ってしまう。
明日のカリキュラムにしても、男の未練を残さないための儀式でもあることに自分は気付いた。
そして今の言葉は、まるで悟が別人であったかのような口調になっていた。
少しずつだけど、やっぱり自分も変わりつつある。そう思わせる、時間だった。

# 塩津幸子、女の子へ向けて　６日目

冬が日に日に近づいている、そんな１１月日曜日の仙台市。
朝を起きて、今日がカリキュラムの最終日と気づく。
昨日石山さんがいる関東まで出向いたのもあって、かなり深く眠った感じだった。
「えっと、今日は……」
下着選びに服選び、今日はミニスカートの指定日で、悟だった頃の面影を捨てるための最後の試練を受ける。
ミニスカートといっても、実際にはかなりの種類がある。元々幸子の服も、スカートを多めに買っていて、これもまた女の子としての自覚を持たせるためにこうなっているという。
「うーん」
やっぱり、スカートはピンク色がいいかな？
それならきっと、女の子らしいって思えるし。
「あ、でもこっちもいいわね」
自分の髪の毛よりも濃い青い色のミニスカート。
でも、手に取ったら、さすがにこの季節で寒色系はよくないとも思い始めた。
「うーん、うーん……」
堂々巡りの結果は、白いＹシャツと黒いコートに淡いピンクのフレアミニだった。
飾りすぎないその様子は、いかにも男が考える「かわいい服」って感じだけど、石山さん曰く、「女の子は男の子にモテてこそ」ということで、こうした所は武器にしていいと言っていた。
「おはよー」
「あら幸子おはよう」
「お姉ちゃんおはよう」
徹はまだ、私の女の子らしい姿に慣れていないのか、ちらちらとスカートの揺れる裾と胸を見入っている。
多分、今後とも同じだと思う。

石山さんと東京で遊んだ時もそうだったけど、かわいい女の子へ向けられる周囲の視線はとても多い。
ここ最近の大学での周囲の視線も、まさに「アイドル」のような扱いで、気恥ずかしさと同時に、女性としての優越感を覚えていた。
「徹、台車を用意して？　悟の持ち物、今日売りに出すの」
「はーい！」
既に食べ終わっていた徹が勢いよく立ち上がる。
自分は、昨日の作法通りスカートの後ろを押さえながらゆっくりと座り、パンツが見えないように足も揃える。
「ふふ、たった一日でもうこんなに。カリキュラムはすごいわね」
「えへへ……」
女の子らしくなっていると誉められて、素直に嬉しいと思えるようになった。
かわいい女の子の自分を、受け入れることができている。
今は徹だけだけど、いずれはあの２人にも女の子として意識される自分になれると思う。
お母さんの笑みは、少しだけ違和感のある笑い方だった。
でも、あまり気にしない方がいいと自分に言い聞かせた。
それよりも、今日はカリキュラムの総仕上げに当たる日だから、頑張らないといけない。
「ふふ、幸子、知っているとは思うけど、今日は失敗したらスペシャルなおしおきが待っているわよ」
「す、スペシャルって……」
「さ、きちんと売ることよ」
お母さんの言葉を踏みしめつつ、私も荷物運びを手伝おうとする。
スペシャルなおしおきって……なんかもう嫌な予感しかしない。
「あ、幸子はいいのよ」
「え!?　でも……」
「徹が運んでくれるから大丈夫よ。それに、中でカート押さなきゃいけないんだから、今のうちに体力も温存しないと。幸子は女の子なのよ。力仕事くらい男の子に頼りなさい」

うーん、まあお母さんがそう言うなら。
「さ、まずは車の中に入って入って」
お母さんに促され、私と2人で車の中に入り、荷物入れは全て徹がしてくれた。
「じゃあお姉ちゃん、気を付けてな」
「うん」
少しだけ悪い気分もしつつ、私は徹に見送られながら出発した。

車はどんどんと加速し、着いたのはやはり名取にあるショッピングモールだった。
早速駐車場に車を停車し、外に降りる。
ちなみに、荷物を出す作業はお母さんも手伝ってくれた。
「じゃあ、お母さんも買い物があるから、ここで合流しましょう」
「はーい」
お母さんと同時に車を出て、重い台車を押している私がやや出遅れる。
お母さんと私はエレベーターを使い、目当ての階へと向かう。
「じゃあ幸子、女の子らしく頑張るのよ」
「うん、頑張るわっ！」
お母さんに笑顔で見送られ、更に1つ上の階へ。
古本に古着に古レコード、中古ならなんでも買い取ってくれるこのお店に行けば大丈夫、近くには休憩所もあるしそこでゆっくり休むといいだろう。
「すみませーん」
「はい、ご用件は……売却でよろしいでしょうか？」
店員さんも慣れているみたいだ。私の荷物を見てすぐに売却だと気づいてくれる。
「はい、こちらにある古着と古本全てで」
「かしこまりました。番号札でお呼びいたしますのでしばらくお待ちください」
店員さんに番号札を渡され、私は忘れずにスカートのポケットに仕

舞い込む。
うー、ミニスカートはスースーするけど、札の重みでちょっとスカートが下がってるから気を付けないと。
ちなみに、財布は胸ポケットにあって、やはり大きめの私にとってはどちらもセクシーポジションになっている。
「私もちょっとは誘惑しちゃってもいいよ、ね？」
ピンク色のかわいらしさを強調したスカートを眺めつつも、見えてきた中央の休憩所が目に入る。
うーん、誘惑する前にちょっと眠くなっちゃったな。
「ふあー！」
かなり疲れた上に、番号はまだ時間がかなりかかりそうだったので、休憩スペースが空いているのもあって、私は倒れ込むように座ると、ふかふか椅子にそのまま眠りについた。

「んー」
ショッピングモールは喧騒があるので、あまり深く眠ることができなかった。
「ふー」
起き上がってみると３０分も経ってなかったが、眠気はかなり落ちていた。
自然に立ち上がり、スカートのポケットに手を入れて札があることを確認する。
「よしっ」
どうやら、まだ私の番にはなってないみたいで、番号札はまだ余裕がある。
それを確認すると、私は暇潰しも兼ねてショッピングモールの別店舗を散策する。
うーん、あ、このおもちゃ屋さんがいいかな？
「えっと……女の子のおもちゃは……」
結構所狭しと並んでいて、迷ってしまう。
女の子向けのおもちゃのコーナーに行くと、あったのは人形とかお

ままごとセットとかだった。
うん、やっぱり女の子と言えばおままごとよねえ。
「えっと、これは……」
胸が大きいので足元があまりよく見えない。
しゃがむと石山さんのレッスンの時見たくなるので、体を前に屈めて……よしっ。
「へえーきせかえ人形セットって結構たくさんあるのねー」
でも、値段が高くて、大学生の私にはちょっと厳しい。
名残惜しい気もするけど、とりあえず元に戻す。
「ふう」
ともあれ、もう少しかかりそうなら、先にお昼ご飯を済ませてしまうのもありかも。
……お母さんにメールしてみよう。
題名：お昼ご飯について
本文：買い取り査定に時間がかかりそうです。お昼を先に済ませてもいいですか？
……送信っと。

ブーッ！　ブーッ！　ブーッ！
「お、早いわね」
買い取り査定が、まだ全然私の所まで進んでいないのを見てたら、お母さんから返信が来た。
題名：Ｒｅ：お昼ご飯について
本文：ええ、各自でバラバラにとりましょう。こちらも買い物が長引いてます。母より
うん、そうと決まれば最上階のレストランエリアに行こう。
私はそう決意し、エレベーターに乗って、最上階で降りる。
最上階と言ってもそこまで高い訳ではない。
並ぶお店はチェーン店ばかりだけど、品目は出揃っている。さてどうしよう？
「食が細くなったから……」

よしっ、ミニスカートで寒いし、ここはラーメン屋さんにしよっと。
あ、でもラーメン屋さんも複数あるのよねー、地名は違うみたいだけど……うーん、近い方でいっか。

「あ、お母さん！」
「幸子じゃない」
お母さんも同じことを考えていたのか、地図から目をそらすとばったりと目があった。
確かに、レストランエリアへ行く道は限られているので、こうなっても全然不思議ではない。
というわけで、お母さんと一緒にラーメン屋さんに行くことになった。

「いらっしゃいませー」
お昼ご飯の時間帯から外れているため、意外と空いている。
私は店舗の手前のカウンターに腰を掛け、母さんがあらかじめ聞いておいたメニューで食券を買う。
ちなみに、食べるのは2人ともオーソドックスにラーメンだ。
「ふう、やっと一息ね」
「うん、お母さんの方は？」
「もう少し時間がかかりそうだわ」
お母さんのレジ袋を見てみると、どうやら食材を買い込んでいるらしい。
チラッチラッ
ラーメン屋さんの男性店員の視線を見ると、ラーメンを作りながらもちらちらと私の胸を見てるのが分かった。
これまでもこうした男性の性欲まみれの視線は浴び続けていたけど、やっぱり女の子になりたてでどうにも慣れないというのが本音だったり。
「あら幸子、視線気にしてる？」
どうやら、お母さんも気付いていたらしい。

「う、うん……私も男だったから、魅力は嫌でも分かるし」
「ふふっ、幸子にはまだ早いかしらねこの判断……」
お母さんは胸が大きいというわけではない。
私と並ぶと、私がかわいくて美人なのもあって到底親子には見えない。
って、自分で言っちゃダメか、やっぱりまだ「自己」が確立されてないらしい。
「お待たせいたしましたー」
「あ、来たわね」
その後も、時折会話を交えつつ、ラーメンを食べ終わったらラーメン屋さんから出る。
そして、再びお母さんと別れると、いつの間にか査定が終わっていた。
私は、番号札を見せて店員さんから買い取り額を受けとる。
ちなみに、この買い取り額は全額私の小遣いになる。
一部売れなかったものは、お店の方で処分することになった。
「よしっ」
私は、そのままエレベーターに戻り、地下の駐車場前の待ち合わせ場所に行った。
どうやら、お母さんはまだ買い物中らしい。
そして、何度かエレベーターが開き、お母さんいるかな？　と、小さな期待と落胆を繰り返して、４回目にお母さんが乗っていた。
「幸子、待った？」
「ううん、別に」
「そう……じゃあ、帰るわね」
こうして、私達は車で元来た道を引き返す。
道すがらにお母さんから、「フィードバックをするから部屋にいて」と言われた。
「さ、部屋に行くわよ」
「はい」

何やら、怪しい雰囲気が漂ってきた。
でも、今日は殆ど別行動だったし、大丈夫だよね？
「ふふっ、幸子、今日のことだけど」
「うん」
「実はね、買い物は殆どしてないの。幸子のことを監視してたわ」
お母さんから衝撃の事実が発覚する。
「ええ!?」
「それでね幸子、休憩所で寝てたわね？」
どうやら、全部ばれていたらしい。
「うん、私疲れちゃって」
「はあ、こんなに短いスカートで寝たら、どうなるか分かってるかしら？」
そう言われると、私の顔が急に熱を帯びた。
あううー、恥ずかしい……
「幸子、今からあなたに罰を与えるわ」
「ば、罰って……」
「みっともなく、お行儀の悪いことを、カリキュラムの最終日にしてしまったのよ。当然、恥じらいの心を改めて身に刻み込むためにも、幸子にお仕置きしなきゃいけないわよ」
ごくりと唾をのみ込む。
これまでの経験から、ろくでもないお仕置きなのは簡単に推察できた。
「さあ幸子、スカート、めくりなさい」
「え？」
いきなりの発言に一瞬固まってしまう。
「恥じらいを捨てたら乙女じゃないわ。さ、それ植え付けるためにも、これは必要なことなの」
「は、はい……」
気迫に押され、私は恐る恐るスカートの裾を持つ。
そのままずるずる引き上げて……うー、想像以上に恥ずかしいよー。

「ほら、そんなんじゃダメよ」
「こ、これ以上めくったらパンツ見えちゃう！」
　正直、この格好でも恥ずかしいのに。
「ダメよ！　これはおしおきなの！　きちんと上までめくりなさい！」
「はは、はい……」
　お母さんの気迫に押され、私は更に上までめくっていく。
　うつむきながら、お母さんからの「まだ」の声に、鞭で打たれるような感じで、更にめくりあげていく。
　そして、もうこれ以上無理と言った所で、ようやく「ストップ」の声がかかる。
　ただし、下ろしてはいけない。
「さあ幸子、今日はどうしておしおきされているのか、謝罪の言葉も添えて言いなさい」
　こ、怖い……
「は、はい。えっと、私は、ショッピングモールの休憩所で、不注意にもスカートの中を、ふ、不特定多数に見られてしまいました。お、女の子としてふさわしくない、は、はしたない行為でした」
　パンツ見せながら反省させられる。
　す、すごく恥ずかしいよお……
「ふう、下ろしていいわよ」
「あうう……恥ずかしかったー」
　ようやくお許しが出てスカートから手を離す。
　重力に従ってスカートがすとんと落下し、元の状態に戻ると、私はようやく一呼吸置く。
　　ぐいっ
「うわあっ!!!」
　次の瞬間、お腹に腕を押し付けられる感覚に襲われ、急激に視界が低くなる。
　そのままベッドに座っていたお母さんの膝の上に載せられると、今度はスカートがめくれ上がっていき、今度は後ろのパンツを丸見えに

させられる。
「幸子、あなたは今日は2回もパンツを見せていたわ。あのおもちゃ売り場で、あんな風にかがんだら、背の低い子供でなくても見えるわよ」
「あうっ」
どうやら、あそこでも失敗したらしい。
「さ、おしおきよ」
あうー、これって明らかにお尻ペンペン――
さらりっ
「ひゃうっ!!!」
お尻を叩かれると思ったら、さらっと触られた。
さらりっ
「はううっ……」
パンツを触られる感触が、さっき以上に恥ずかしさがこみ上げてくる。
「ほら、反省の言葉は!?」
「はいっごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
半泣き状態で、反省させられ、しばらくしてようやく解放された。
「ふえええ」
恥ずかしさのあまり、そのまま座り込んでしまう。
お母さんからよく反省するようにだけ言われ、部屋に1人になった。
「女の子って大変だ」
常に周りに見られ続ける。
それがかわいくて美人な女性なら、なおのこと注目を集めてしまう。今日だってそうだ。
石山さんも、いや、あの可愛らしい石山さんは、私なんかよりももっとこうした体験をしているに違いない。
「はあー」
美人の人生ってイージーモードで、しかも不老ともあれば得ばっかり何て考えていた時もあったけど、美人も美人で大変なことがよくわ

かった。

「幸子ー！　夕食作るの手伝ってー！」

しばらくして、慌ただしくお母さんに呼ばれる。

家事はとにかくこのカリキュラムで重視されている。

「はーい！」

特に、家事の能力がカリキュラムでは重視されている。

家事が出来ない、性格悪い、美人じゃないといった欠点は、結婚する上でマイナスになる。

性格面はＴＳ病という特性上、男子の理想を再現しやすい。その上で家事が得意な美人となれば、女の子として引く手あまたよね。

だからこそ、家事の能力が重要ってことなのだろうけど。

「男子にモテるっか……」

「どうしたの幸子？」

家事の手伝い中も、私はいまいち集中できなかった。

カリキュラムの間でも、男子受けを徹底するように度々釘を刺された。

「その……今の自分……女の子になったばかりの私が男にモテるってどうなのかなって」

「あら？　いいんじゃないかしら？」

お母さんは、あくまでも気楽をイメージしている。

「幸子も女の子なのよ、男の子を好きになって何もおかしなことはないわよ」

確かにそれはその通りで、ということはつまり将来は男の子のあれを――

うー、何か気持ち悪い。やっぱりまだまだ女の子にはなれていないっぽいなあ。

石山さんとかは、とっくにそういうのが好きになるくらい女の子になってるのかな？

「さ、そろそろ火を止めて」

「はーい」

その後、石山さんと最後にテレビ電話をした。
石山さんによれば、あの時のおしおきは一番重いのだったとか。
うー、成績がいいといっても、今後が不安になるなあ……
カリキュラムが終われば、ある程度「独り立ち」ということになる。
しかし、言うまでもなく自分は全く女の子として「独り立ち」出来ておらず、「とりあえず自他共に認める女の子だけど」という、何ともふわっふわっとした状態なのだ。
女の子になったから、石山さんみたいに彼氏を作りたいと思う。
でも、女の子の恋愛観も、まだ少女漫画の世界でしか知らない。
女の自分という人格が、まだあちこちで「工事中」といった印象を受ける。
でも、いつかは完成させなきゃいけない。
本当に完成することが出来るかはともかく、今は今後に向けて頑張らないと。
「徹を呼んできて」
「うん」
お母さんに言われ、徹の部屋の前に立つ。
「徹ー！　ご飯だよー！」
「はーい！　お姉ちゃん今いくよー！」
徹が、部屋を出てきた。そして、２人で縦に並んで歩く。
その間、私も徹も、何も喋らなかった。
明日からはいよいよ、独り立ちしなきゃいけない。
カリキュラムが終わっても、その後も人生は続いていく。多分この後も、困難は多いんだろうと、私はそう直感している。
不安でいっぱいだけど、時は無情に過ぎていく。ベッドに入れば、心地よく眠ることが出来た。

# 本格復帰

「ん……」

徐々に覚醒が始まる。

朝の気持ちいいひととき。少しずつ体を慣らしながら、ゆっくりと起き上がる。

今日は月曜日、大学の始まる日で、私は女の子としてのカリキュラムを終えて初めて通うことになる。

「幸せな子……」

起きると、教材として貰った少女漫画が目に入る。

少女漫画の変わりに消えていたのはサッカー関係の本や雑誌、今では、大分この光景にも馴染んできた。

少女漫画は、恋愛ものばかりだった。

だからこそ、次の課題もよく分かっている。

「男の魅力かあ……」

女性から見た女性の魅力と、男性から見た女性の魅力が異なるように、男性の魅力も男女で異なる。

それは、いわゆる男性アイドルを見れば分かる。

問題なのは、女性から見た男性の魅力を「この私が」十分に理解するということ。

いや、好みは色々だし、もしかしたら男性視点の男性の魅力でもいいのかもしれない。

どちらにしても、「女として」好きにならないといけないのは同じこと。

そんなことを考えながら、着替え終わって朝食へと向かう。

「おはよー」

「幸子、おはよう」

お母さんの声と共に、ご飯が作られる。

もちろん、食事の量は細くなった私に対応しているが、今でも「作りすぎ」に注意する必要があるのは変わらない。

「いただきます」
女の子の食事量にも、大分慣れてきた。
ちなみに、ダイエットに勤しんでいる女の子は、これの半分くらいしか食べないとか。
勿論、私は男の好みを知っているので、そういったダイエットのやりすぎはよくないことも分かっている。
むちむちむっちりが、一番好まれるのは確かだものね。

「ごちそうさまでした」
朝ごはんを食べ終わると、大学に行くまでまだ時間が残っている。
その時間を利用して、私は部屋に戻る。
実は今、気になっているのがお化粧だった。
石山さんのカリキュラムでは、「ＴＳ病の女の子は化粧はいらない」とあったけど、やっぱりせっかく女に生まれ変わったのだから化粧もしてみたい。
「でも、どうしたらいいのかな？」
やはり、インターネットで調べるしかない。
今まで全く無縁だったから、かえって興味も湧いてくるというもの。

「うーん」
通学中のバス車内、スマホでお化粧の仕方を調べてみたけれど、どうにもしっくり来ない。
お化粧の仕方、作法は沢山あって、どれも難しそうだった。
でもそれ以上に――
「やっぱり、石山さんの言う通りなのね」
手鏡から覗く自分の顔は、水色のショートヘアーがとてもよく似合う、お人形さんのような幼くも愛くるしい美少女で、そうした幼さと可愛らしさを残しつつ、胸はとても大きい女の子。
自分のことをかわいいと思うと、痛い女の子に思われるけど、私の場合、「そう思わない方がどうかしている」レベルで美少女だった。

そんなかわいさ満点のこの女の子に、果たして化粧が必要なのかという根本的な疑問だった。
やっぱり、石山さんはお見通しだった。
あれで私より年下の、徹と同級生だって言うのだから驚きだ。永原さんが言うのであればまだ分かるけど、石山さんの達観ぶりには本当に驚かされる。
「それでも……」
もやもやした思いを抱えながら、私は大学へと向かった。
「おはよー」
「おう、塩津おはよう」
「あ、おはよう、元気か？」
手原と大谷が、いつものように挨拶をする。
大谷は慣れたという感じだが、手原はまだどこかよそよそしい感じもする。
ともかく、講義が終わり、サッカーサークルの仲間と過ごす。
心なしか、女子の視線が痛いような気もする。
確かに、絵面だけ見れば、大勢の男を侍らせている女王様って感じでもあるけど、そうはいってもこれは元々私も男だったせいだ。
「うん、女の子のカリキュラムも終わって今日から本格的に女として生きてくって感じ」
もちろん、これから女の子として生きていくにあたっては、そうも言ってられないのだろうけど。
男時代はあれだけ欲しかった女との付き合いについて、今はあんまり乗り気になれない。
「へえー、もう後戻りはしねえんだな」
手原は、とても名残惜しそうにしている。
高校時代からのサッカー仲間は、ついには戻らなかった。
「へえ、でも、こんなにでっかく産まれたのはよかったんじゃね？」
大谷は、恐らく軽い気持ちで言ったんだと思うし、まあそこに思考が向くのは当然だけど――
「こらあ！　もう、私は元男だから分かるけど、セクハラになるからダ

メだよ」
「わ、分かってるって！　ごめんごめん」
胸をガードして少し後ずさると、大谷が慌てて謝って来る。
最も、手原も含めて私の巨乳へ余計に視線が釘付けになってるけど。
ま、仕方ないかな。男は大きいの大好きだし。ましてやこんなにかわいい女の子がこの大きさだもの。
これが生まれつきの女の子だったら、不快感だけが残るんだろうけど、幸いにして自分は元男のＴＳ病なので、こういったことには理解があるのだ。
とはいえ、ずっとこのままでも嫌だけども。

そして、大学は私のことなど気にもとめずに講義が進んでいく。
大学での講義などは、男時代と変わらない。
変わることと変わらないこと、それぞれを噛み締めながら講義を受けた。

「やっぱさー塩津雰囲気変わったよな、先週と比べて」
「うんうん」
放課後、今日はサッカーサークルはお休みなのでそのまま帰る。
「え？　やっぱり？」
そりゃあもう、カリキュラムでしごかれたし。
「カリキュラムってさあ、結局何したの？」
「えっとその、女の子として生きていくために、少女趣味とか、家事とか学んだり、後は少女漫画読む課題とか」
私は、以前に言っていたことを繰り返す。
「あーうん、前と同じか」
実際、言われていたこととやったことは同じだった。まあそれが普通なんだろうけど。
「でもそれでここまで変わるんだからなあ……」
手原は、何か考えているような仕草を見せる。

「ああ、今まではこう、男と女の中間って感じだったけど、今はもう、完全に女の子っていうか」
「うん、姿勢なんかも悟だった時とは違うし」
「え!?　そう?」
　正直に言って、私には全く自覚はない。
　一人称が変わったとか、そういった所はもう女の子だけど。
「あー、そういうもんか」
「自分からは気づかねえもんかー」
　でも、無自覚に女の子っぽい仕草が身に付いているのかもしれない。
　やっぱり、肉体が、特に胸の大きな女の子になっていると、それに合わせて女性的な仕草が自然と身に付くのかも。
　特に背中とか無意識に丸まっているのかもしれないし。
　でも、ある日突然変わるから手探りでは適応が難しく、破綻する可能性があるので、カリキュラムという羅針盤が導いてくれる。そんなイメージだろう。
「ま、確かに塩津は塩津ってもな」
「ああ、女の子になってもう一ヶ月だもんな」

　手原も大谷も、そしてサッカーサークルの仲間たちも、私を女の子として歓迎してくれている。
　カリキュラムが落ち着いたら女子サッカーサークルに再挑戦してみることも勧められたけど、やっぱり止めることにした。
「でもよ、運動神経悪くたって、センスや経験ってもんもあるだろ?」
　どうも、部長は私がサッカーを完全にやめてしまうことに未練を感じていた。
「うーん、今まで出来たことがまるで出来なくなって、肉体が追い付かないって辛いんだ」
　サッカーでも何でも、年齢を重ねれば身体能力は衰える。
　そうして選手は引退していくわけだけど、それはあくまで３０代になってからの悩みでもある。

私の場合１８歳で性別が変わるという、年齢的な衰えを遥かに上回る劣化を経験したのだ。
「あー、何かおっさんみたいだな」
「もうっ」
汗をかいた部員たちにタオルや飲料水を渡すと、すっごく嬉しそうにしてくれている。

「それにしても、塩津かわいいよな」
「うん、俺にとっちゃ塩津は天使だよ」
「おいおい、皆の天使だろ？」
「分かってるって」

私を巡って、ちょっとした争いみたいになる。
でも大丈夫、このサークルには、私が男だった頃のことを知っている人ばかり。
「ま、俺たちは圏外だろ。理屈じゃないっつっても、あの塩津を見とるからな」
「だなあー」
いくら私がかわいくて美人な女の子になったとしても、ガンガンならした塩津悟を知っていると、恋愛とかにはもつれ込まないらしい。
「ふふっ」
つまるところ、私にとって今のサッカーサークルはとても居心地がいい場所なのだ。
女の子として扱って貰えて、おまけにかわいくて美人な私だから男たちは皆ちやほやお姫様。
でも、私の正体も知っているから本気の奪い合いにはならない。
あるいは、誰かが私と恋人になったとしても、今はこのサークルは崩れない。
何だろうか、こういったところから、より女の子にのめり込んでいく、そんな気がしてきた。

サッカーの試合は終盤に入っていて、手原が所属している赤組が1点リード。
石山さんの言葉が思い出される。
石山さんは、「女の子として、いつかは彼氏を作らないといけない」と。
サークルの人たちは、私に恋愛感情にはならないと言っていたけど、逆に私から見れば、男と積極的に触れあえるのもこのサークルくらいで、私の恋愛が原因でサークルが壊れたりもしない。
いやでも、私が誰かと付き合ってサークルが壊れるのも……
「だめっだめっ！」
ぶんっぶんっ！
「塩津どうした？」
「ああごめん、考え事してて」
慌ててごまかす。
「そ、そうか……」
思いっきり首を振ってしまい、隣にいた控えの部員に怪しまれてしまった。
でもさっき考えたこと。それ以上を考えるのは、私にとってずっと早いことだった。
それに、そんな邪悪なことを考えるのも、ゾッとしてしまう。
「ふー」
深呼吸をして、気分を落ち着かせる。
だけど、これもまた、自分の心が女に近づいていると思えた。
「塩津はさ、女になるってどういう感じだったんだ？」
サークル仲間がふと話しかけてくる。
大学ともなると、制服などもなく、先輩後輩の見分けもつかない。
名前を知っていても、それが何年次なのかお互い知らない。
「えっとその……すごく痛くて血を吐いて――」
「あーうん、そうじゃなくて、もっとこう……カリキュラムとかさ」
どうやらここ数日のことを知りたいらしい。
「うーん、実は、同じ病気になった人たちが皆、精神壊して自殺しない

ためには、女の子として生きていくしか道はないって、だから仕方なくって感じ」
「仕方なくっかあ……確かに、体が女の子になっちゃった以上そうなのかもなあー」
やはり、このことはＴＳ病の女の子にしか分からない感覚だと思う。
女の子よりも女の子らしく、女の子を意識しなければ、かつての自分のように、男に戻りたくなってしまうから。
「まあ確かに、男に戻れない以上、戻りたいと思っちゃいけねえってことか」
「そういうこと」
どうやら、納得してくれたらしい。
まあ男に戻れないということさえ知っていれば、納得するのは難しくないことなのかもしれないけれども。
「まあでも、サッカー選手の塩津がいなくなったのは痛いけど、代わりにサークルのアイドルが出来たよな」
「え、えへへ」
サークルのアイドル、私が人生でまさかアイドル扱いされるとは夢にも思っていなかった。
確かに、私の容姿は、下手なアイドルよりはかわいいと言う自負がある。
これは自分も自信によるものか、はたまた未だに変化に慣れずに、どこか外側から自分を見ているせいなのかは分からない。
だけど石山さんがそうであったように、せっかくかわいく生まれ変われたなら、新しい人生はそれを活かしたものにしたい。
「まあ、塩津が今後女として生きていくにしても、俺たちとは友達でいような」
「うん」
サークルでの日々がこうして、過ぎていった。
カリキュラム終了後は、変化も日に日に少なくなっていった。

「えーではですね、以上をまとめますと――」
大学での勉強も、順調に遅れを取り戻しつつある。
といっても、楽と評判の教科を中心に選んでいるので、そこまで悲観はしていない。
とはいえ、数多くの単位を受ける1年次でのＴＳ病が痛いことに代わりはない。何せ女の子としての振る舞いなんかも、この歳でまた1から覚えていかなければいけないのだから、単純にやるべき勉強量が増えてしまったということになる。
もちろん、受験が控えている去年になるよりはましだし、あんまり若すぎると今度は思春期ど真ん中で大変そうだ。
それらを勘案すると、石山さんみたいに高校2年生あたりが丁度いいのかもしれない。
仙台は、徐々に晩秋という季節に差し掛かり、気温もどんどん下がっていく。
寒く長い東北の冬が、今年もやって来る。
「うー」
「塩津、寒そうだな」
帰りのバスのバス停、手原と大谷と共に、私もバスで待つ。
「あうー凍えそう……」
今日はいつになく冷えている気がする。
「なあ塩津、お前そんなに寒がりだったか？」
「ああ」
手原も大谷も不思議そうだ。
「う、うん、女の子になってから、体がどうも冷えやすくって」
「あー、女性だと冷えやすいって言うよなあー」
こういった所でも、「女」を自覚することが多い。
自分は仙台生まれ仙台育ちで、寒さへの耐性は仙台人の平均だと思っていたけど、女性になってその考えも改めないといけない。
ふと、近くの女子に目がいった。
この寒さにもかかわらず、膝上のミニスカートを穿いていた。
それとほぼ同時にバスが来て、私たちは中に入る。

「ふー暖かい」
冷えやすい女の子の体にとって、バスの暖房は救世主だ。
さっきの女の子は、本当にすごい。
「だなあ」
手原と大谷も、同じように座ると寛ぐ。
ちなみに、さっきの女の子は、どこか妬んだような目線で私の胸を見ていた。
「それにしても、女の子ってすごいわ。この寒いのに――」
「ははは、塩津、無理するなよ」
実際、真冬の東北でも、女子高生何かはミニスカートが多い。
それはつまり、おしゃれに敏感な女の子が多いということ。
「うん」
女の子としては、私はまだまだひよっこでもあるのだ。
でも、寒さへの強さが変わるわけでもないしうーん――
あ、そうだ。余呉さんに相談しよう。
「ん？　どした塩津？」
一人で脳内盛り上がりをしていた私に大谷が疑問符を投げ掛ける。
「ああうん、今日のことは余呉さんに相談かなって」
「余呉さんって確か塩津のカウンセラーだっけ？」
手原もこの辺の記憶は曖昧みたい。
「あーうん、厳密には石山さん何だけど、石山さん関東住みで、普段相談する時は余呉さんにって」
「へえー」
余呉さんに相談すると言っても、まずは日本性転換症候群協会の東北支部に行かないといけない。
東北支部は、仙台郊外にある小さなプレハブ小屋の一室で、家や大学からも近い。
余呉さんにはあらかじめ予約をしておけば大丈夫だと思うけど、彼女も本業持ちなので土日のいずれかになるだろう。
「ともかく、相談しないことには仕方がないな」
「だなあ、餅は餅屋だぜ」

「うんうん」
手原たちと話しつつ、私は1人になって家に帰った。
カリキュラムが終わったとはいえ、やらなければならあいことは本当に数多い。
カリキュラムというのは、いわば女の子として入り口の入り口であることは、分かっていたこととはいえ、今後の苦難を想像するとやはりまだまだ気分が重いことには変わりがなかった。